好き勝手準備後自滅した神様転生者のせいで全方位魔改造されるけど、おっぱいドラゴンが新たな仲間と共に頑張る話　旧名：ハイスクールＬ×Ｌ　置き土産のエピローグ

グレン×グレン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、転生者の物語ではない。

愚かなる転生者たちが滅びた後、愚者が無駄に頑張った結果残された影響に藻掻きながらも前へと進む、歴代最優の赤龍帝。

……そして、涙を拭う救済者と、邪悪を祓う銀弾の物語である。

推薦文が的確な解説になっていることから、あらすじはインパクト重視に変更しております。初見の方は推薦文を見ていただければ、大筋を理解できるのでぜひご一読を。

この作品は「ハイスクールＤ×Ｄ／Ａｐｏｃｒｙｐｈａ　魔術師達の狂騒曲」及び「異世界狂騒曲　―ハイスクールＤ×Ｄ×Ｄ」の超大幅手直し作品でもありますが、全くの新作ともいえます。

またいくつかの作品とクロスオーバーしてますが、それらは未読でも楽しめるように書いているつもりです。是非一読していただけると嬉しいです。

書いては書いてはなぜか途中で燃え尽きる中、いくつかの作品と一つの要望を中心に、可能な限り最小限の設定だけ書いて場当たり的に敢行する新作長編。

本当に最小限中の最小限、禍の団の魔改造もメインとなるオリ敵の

主要メンバーの設定も、ほとんど作らないことで最初期の長続きしたり完結できた作品の模倣を目指しております！

目次

エピローグ　希望と絶望の日々が終わるとき ―― 1
プロローグ　ある大きな事変の前 ―― 7
設定資料集　メインキャラ編 ―― 19
設定資料集　味方陣営編 ―― 61
設定資料集　禍の団編 ―― 90
設定資料集　その他敵勢力編 ―― 124
設定資料集　神様転生者関連 ―― 156
設定資料集　各種星辰光 ―― 160
おまけ設定資料　最終決戦編 ―― 225
第一章　三勢合一編
三勢合一編　一話　邂逅するDの因子 ―― 229
三勢合一編　二話　情報共有 ―― 247
三勢合一編　三話　主役視点が事実上の五話目からの作品なんて初めて書いた（by作者 ―― 256
三勢合一編　第四話　開幕していた戦争 ―― 269
三勢合一編　第五話　模造の魔獣 ―― 279
三勢合一編　第六話　自ら辺獄に赴く者。恥ても救済を求む者 285
三勢合一編　第七話　赤き龍の帝王の宣言 ―― 297
三勢合一編　八話　蒼き救済者の到来 ―― 309
三勢合一編　第九話　三勢合一の激戦 ―― 317
三勢合一編　第十話　戦い終わって ―― 325
三勢合一編　第十一話　自分から首を切り落としやすくすること

が土下座の形という話があるから、謝るときは土下座は最後に取っておこう

三勢合一編　第十二話　冷静に考えて……バブみってなんだったっけ？　ｂｙ和地 ―― 338
三勢合一編　第十三話　会談と謀略の始まり ―― 348
三勢合一編　第十四話　蠢く暗雲 ―― 356
三勢合一編　第十五話　襲撃開始 ―― 364
三勢合一編　第十六話　後継覇王の降臨 ―― 374
三勢合一編　第十七話　鋼の守護星 ―― 388
三勢合一編　第十八話　白を宿した明星 ―― 397
三勢合一編　第十九話　トップ舐めるなテロリスト ―― 404
三勢合一編　第二十話　連・戦・佳・境 ―― 415
三勢合一編　第二十一話　覇王と龍皇 ―― 424
三勢合一編　第二十二話　覇龍大決戦 ―― 438
三勢合一編　第二十三話　聖騎士団と私掠船団 ―― 454
三勢合一編　第二十四話　次につながる戦後の話。 ―― 463
三勢合一編　第二十五話　和平によって動き出す者たち ―― 474
三勢合一編　幕間　超弩級変態乱舞（第一弾） ―― 485
第一章　なかがき ―― 495
第二章　魔性変革編 ―― 511
魔性変革編　第一話　引っ越し、いたします！ ―― 515
魔性変革編　第二話　やって来ました悪魔領！ ―― 526
魔性変革編　第三話　遍く苦難を祝福ととらえ、その身を苛むことを恐れぬ者。 ―― 535
魔性変革編　第四話　荒れる会合（前編） ―― 546

魔性変革編　第五話　荒れる会合（後編）　560
魔性変革編　第六話　荒れる会合（余韻）　571
魔性変革編　第七話　特訓、秒読みです！　586
魔性変革編　第八話　特訓、頑張ります！　600
魔性変革編　第九話　特訓、波乱です！　617
魔性変革編　第十話　来訪する不死鳥　625
魔性変革編　第十一話　不死鳥の商談と龍王の経験論　631
魔性変革編　第十二話　再開、しまくりました!?　640
魔性変革編　第十三話　悪意阻むは赤と青　652
魔性変革編　第十四話　赤い龍帝と青い救済　666
魔性変革編　第十五話　特訓終了！　675
魔性変革編　第十六話　豪華なパーティの一幕　688
魔性変革編　第十七話　襲来、禍の団！　701
魔性変革編　十八話　禍の団、強襲開始　712
魔性変革編　第十九話　疾風殺戮　722
魔性変革編　第二十話　激戦激化　734
魔性変革編　第二十一話　乱戦は続くよどこまでも　745
魔性変革編　第二十二話　パーティ会場の激戦　755
魔性変革編　二十三話　ホテル外の大覚醒（おっぱい）　764
魔性変革編　第二十四話　終局に迫る戦闘　772
魔性変革編　第二十五話　後に続く者もまた、神の子に並ぶものなれば　779
魔性変革編　二十六話　終わる防衛戦　789
魔性変革編　第二十七話　799
魔性変革編　第二十八話　夏休み明けのサプライズ　810

魔性変革編　第二十九話　教会からの仲間です！　817
魔性変革編　第三十話　再開の旧交　827
魔性変革編　第三十一話　挟間の会話　837
魔性変革編　第三十二話　転入時の一幕　845
魔性変革編　第三十三話　朝と夜の不思議　854
魔性変革編　第三十四話　学園内のひと時と、学園内での真面目な話　863
魔性変革編　第三十五話　狂王蹂躙　876
魔性変革編　第三十六話　大王封殺の計略　886
魔性変革編　第三十七話　勝敗を超える物　898
魔性変革編　第三十八話　膨らむ不穏　912
魔性変革編　第三十九話　テレビ局の一幕　920
魔性変革編　第四十話　落日前夜　930
魔性変革編　第四十一話　初手から大軍団（双方）　937
魔性変革編　第四十二話　急転直下　946
魔性変革編　第四十三話　957
魔性変革編　第四十四話　降臨、神意汚す悪鬼明星（ルシフェル）
魔性変革編　第四十五話　悪鬼の所業　976
魔性変革編　第四十六話　迷走の処方箋　987
魔性変革編　第四十七話　星の蹂躙　993
魔性変革編　第四十八話　落日の加速　998
魔性変革編　第四十八話　私は正義の味方で悪の敵　1007
魔性変革編　第四十九話　荒ぶる仮面の戦士達　1019
魔性変革編　第五十話　一息つく間　1032

魔性変革編　第五十一話　魔王襲来 ―― 1046
魔性変革編　第五十二話　魔王の落日（本家編） ―― 1056
魔性変革編　第五十三話　赤龍神帝 ―― 1065
魔性変革編　第五十四話　落日の成立 ―― 1073
魔性変革編　第五十五話　終了後の一幕 ―― 1079
魔性変革編　第五十六話　体育祭のその裏で ―― 1085
魔性変革編　第五十七話　新しい同居人たち ―― 1094
魔性変革編　第五十八話　決意の夜に ―― 1102
魔性変革編　幕間　変態達と救済者と悪の敵が疲れた一日 ―― 1109
第二章　なかがき ―― 1120
第三章　神威動乱編
神威動乱編　第一話　乳龍帝おっぱいドラゴン ―― 1127
神威動乱編　第二話　X、それは特級の証 ―― 1136
神威動乱編　第三話 ―― 1145
神威動乱編　第四話　のぼせたりひきつけたり ―― 1153
神威動乱編　第五話　とある夜の赤龍帝 ―― 1160
神威動乱編　第六話　英雄派との前哨戦 ―― 1168
神威動乱編　第七話　念願の、デートです！ ―― 1175
神威動乱編　第八話　白銀と黄金 ―― 1180
神威動乱編　第九話　再開の女教師 ―― 1187
神威動乱編　第十話　とある夜の複雑な親子事情 ―― 1195
神威動乱編　第十一話　男女問わず同性オンリーのぶっちゃけ会話は、異性にとって地獄なので双方ともに気を付けよう。 ―― 1205
神威動乱編　第十二話　事前準備はだいぶ前から少しずつやるべし ―― 1213

神威動乱編　十三話　ちょっとだけ、お風呂でわかる北欧神話　1220
神威動乱編　第十四話　夜中の衝撃　1226
神威動乱編　第十五話　仮面ライダーヴァナルガンド　1231
神威動乱編　第十六話　呪怨の紫炎　1241
神威動乱編　第十七話　傲慢は拒絶され、豪快は乱入する　1249
神威動乱編　第十八話　白龍皇踏んだり蹴ったり　1258
神威動乱編　第十九話　フェイカー　クロード・デュ・リス　1270
神威動乱編　第二十話　ＶＳロキ戦作戦会議！　1278
神威動乱編　第二十一話　神に告げる誓い　1284
神威動乱編　第二十二話　Ｂを捨てた女　1291
神威動乱編　第二十三話　総力、集めます！　1299
神威動乱編　第二十四話　決戦前夜（前編）　1307
神威動乱編　第二十五話　決戦前夜（後編）　1314
神威動乱編　第二十六話　黄昏の直前に　1320
神威動乱編　第二十七話　黄昏、開帳　1329
神威動乱編　第二十八話　悪神軍団総出撃　1339
神威動乱編　第二十九話　病原菌　1349
神威動乱編　第三十話　三大勢力迎撃開始！　1357
神威動乱編　第三十一話　ペンドラゴンの激闘　1367
神威動乱編　第三十二話　冥府より伸びる大罪の大樹（クリフォト・リュトン）　1375
神威動乱編　第三十三話　咆哮上げるは狼の父　1386

神威動乱編　第三十四話　思わぬ乱入者（イレギュラー）
神威動乱編　第三十五話　変態化学反応 ―――― 1402
神威動乱編　第三十六話　躍動、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）!! ―――― 1412
神威動乱編　第三十七話　後継覇王 ―――― 1421
神威動乱編　第三十八話　禍なす覇王 ―――― 1426
神威動乱編　第三十九話　神域激闘 ―――― 1436
神威動乱編　第四十話　降臨の序曲 ―――― 1446
神威動乱編　第四十一話　……ナニコレ？　ｂｙ大多数 ―――― 1455
神威動乱編　第四十二話　悪神の悪意 ―――― 1463
神威動乱編　第四十三話　固有結界 ―――― 1474
神威動乱編　第四十四話　Ｔに繋ぐ数分 ―――― 1488
神威動乱編　第四十五話　プランＴ、発動します！ ―――― 1496
神威動乱編　第四十六話　究極の神穿ち ―――― 1502
神威動乱編　第四十七話　激戦終わって、さあ飲もう ―――― 1515
神威動乱編　第四十八話　ロキ戦勝利祝勝会！ ―――― 1522
神威動乱編　第四十九話 ―――― 1532
神威動乱編　第五十話　置いていかれたり残ったり ―――― 1542
神威動乱編　幕間　鬼の霍乱、カズヒ混乱！ ―――― 1555
第三章　なかがき ―――― 1566
第四章　冥革動乱編
冥革動乱編　第一話　京都が揺らぐ前触れ ―――― 1574
冥革動乱編　第二話　サイラオーグ・バアルという男 ―――― 1583
冥革動乱編　第三話　修学旅行前夜（前編） ―――― 1591

冥革動乱編　第四話　修学旅行前夜（後編）　――――――

冥革動乱編　第二十七話　京都大決戦、終幕　――――1811
冥革動乱編　第二十八話　さよなら京都、また会う日まで！
冥革動乱編　第二十九話　嵐の前のひと時　――――1825
冥革動乱編　第三十話　洗脳と教育は紙一重　――――1830
冥革動乱編　第三十一話　一年生も大変です！　――――1838
冥革動乱編　第三十二話　下を探すとキリが無い　――――1846
冥革動乱編　第三十三話　悶絶、悶絶、大悶絶！　――――1854
冥革動乱編　第三十四話　――――1860
冥革動乱編　第三十五話　大爆発　――――1867
冥革動乱編　第三十六話　心的外傷　――――1876
冥革動乱編　第三十七話　爆発鎮火　――――1887
冥革動乱編　第三十八話　浮遊都市アグレアス　――――1896
冥革動乱編　第三十九話　冥府の神、ハーデス　――――1905
冥革動乱編　第四十話　バアルの死闘　――――1914
冥革動乱編　第四十一話　死闘連発（一部除く）　――――1922
冥革動乱編　第四十二話　戦慄と衝撃　――――1927
冥革動乱編　第四十三話　表と裏の二つの決闘　――――1937
冥革動乱編　第四十四話　戦場を制す紅　――――1945
冥革動乱編　第四十五話　灼熱ぶつかり氷雪語られ　――――1954
冥革動乱編　第四十六話　聖継娼婦の飛躍　――――1961
冥革動乱編　第四十七話　取り戻した原点　――――1967
冥革動乱編　第四十八話　試合が終わり死合が始まる　――――1975
冥革動乱編　第四十九話　役者は集う　――――1983
冥革動乱編　第五十話　三十倍　――――1991

冥革動乱編　第五十一話　切り札はポセイドン！　――――198
冥革動乱編　第五十二話　外周戦闘（その1）　――――200
冥革動乱編　第五十三話　大艦巨砲主義はジャスティス　――――201
冥革動乱編　第五十四話　鮮血の聖別洗礼　――――203
冥革動乱編　第五十五話　猛攻の星辰　――――204
冥革動乱編　第五十六話　なぜサイラオーグは無能なのか　――――205
冥革動乱編　第五十七話　自覚無き傑物　――――207
冥革動乱編　第五十八話　外周戦闘（その2）　――――209
冥革動乱編　第五十九話　神娘の慧眼　――――211
冥革動乱編　第六十話　神性魔王が覇道の根幹　――――212
冥革動乱編　第六十一話　神聖覇王の狂気　――――214
冥革動乱編　第六十二話　始まるクライマックス　――――216
冥革動乱編　第六十三話　終わるのクライマックス!?　――――218
冥革動乱編　第六十四話　みんながクライマックス！　――――220
冥革動乱編　第六十五話　目覚めよクライマックス！　―この救済を邪魔する術など無い―　――――222
冥革動乱編　第六十六話　誰もがクライマックス！　――――224
冥革動乱編　第六十七話　滾るぜクライマックス！　――――226
冥革動乱編　第六十八話　終わりのクライマックス！　――――228
冥革動乱編　第六十九話　クライマックスの後は―　――――230
冥革動乱編　第七十話　銀の宿命が幕開けは、すぐそこに　――――232
冥革動乱編　幕間　女子会開催！　男子大被害！　――――234
第四章　なかがき　――――236
第五章　銀弾落涙編
銀弾落涙編　第一話　穏やかな日々……と書いて嵐の前の静け　――――237

さと呼ぶ ―――――――

銀弾落涙編　第二十二話　能力がある馬鹿が暴走すると事態は本っ当にシャレにならない　―――――2371
銀弾落涙編　第二十三話　赤龍終焉　―――――2380
銀弾落涙編　第二十四話　騒動が始まる裏で　―――――2389
銀弾落涙編　第二十五話　作ってみたいけど家じゃ作れない料理って案外多い　―――――2394
銀弾落涙編　第二十六話　精神論に縋るのは、まず人事を尽くしてからにしよう　―――――2404
銀弾落涙編　第二十七話　馬鹿の手綱はしっかりした人が握らないといけない　―――――2412
銀弾落涙編　第二十八話　暗躍する者達　―――――2418
銀弾落涙編　第二十九話　魔王ＶＳ魔星　―――――2425
銀弾落涙編　第三十話　業魔人　―――――2435
銀弾落涙編　第三十一話　赤の奇跡　黄の具現　青の決意　―――――2440
銀弾落涙編　第三十二話　魔獣騒動第二ラウンド　―――――2447
銀弾落涙編　第三十三話　さらなる変転　―――――2454
銀弾落涙編　第三十四話　開演、銀弾錬成　―――――2461
銀弾落涙編　第三十五話　日美子忌憚―反転　―――――2467
銀弾落涙編　第三十六話　日美子忌憚―墜落　―――――2475
銀弾落涙編　第三十七話　日美子忌憚―陶酔　―――――2483
銀弾落涙編　第三十八話　日美子忌憚―覚醒　―――――2491
銀弾落涙編　第三十九話　日美子忌憚―銀錬　―――――2498
銀弾落涙編　第四十話　銀弾装填、忌憚の先に笑顔の花を　―――――2506
銀弾落涙編　第四十一話　役者、超集う　―――――2516

銀弾落涙編　第四十二話　迂闊な発言は自分の首を絞めるのでやめましょう ―――― 2523
銀弾落涙編　第四十三話　決戦、首都リリス！ ―――― 2532
銀弾落涙編　第四十四話　明星昇りしリリスの決戦 ―――― 2540
銀弾落涙編　第四十五話　激戦多発 ―――― 2545
銀弾落涙編　第四十六話　同時多発決戦 ―――― 2552
銀弾落涙編　第四十七話　半端に追い詰めてはいけないものは割と多い。 ―――― 2557
銀弾落涙編　第四十八話　赤龍婚乳（バス・トライク） ―――― 2563
銀弾落涙編　第四十九話　心を合わせ ―――― 2570
銀弾落涙編　第五十話　決着の始まり ―――― 2576
銀弾落涙編　第五十一話　守護星覚醒 ―――― 2584
銀弾落涙編　第五十二話　魔獣討伐の巨船 ―――― 2590
銀弾落涙編　第五十三話　悪敵銀神の婚姻 ―――― 2597
銀弾落涙編　第五十四話　三連決着、真紅！黄金!!銀弾!!! ―――― 2607
銀弾落涙編　第五十五話　終焉の魔獣騒動 ―――― 2612
銀弾落涙編　第五十六話　新たな一歩（悪党共も） ―――― 2627
銀弾落涙編　幕間　賛歌の前段階 ―――― 2635
第五章　なかがき ―――― 2644
幕章　銀愛賛歌編
銀愛賛歌編　第一話　海外で砂糖を入れないコーヒーは、日本から逆輸入されたらしい。 ―――― 2653
銀愛賛歌編　第二話　他国の料理を魔改造するのは割とよくある ―――― 2659
銀愛賛歌編　第三話　一応ヒロイン全員に好物は設定しておりま

す。 ―――――――

明星双臨編　第十五話　反撃、禍の団　――――2831
明星双臨編　第十六話　改良とは欠陥や問題を克服することである。　――――2838
明星双臨編　第十七話　底を突き抜ける窮地　――――2845
明星双臨編　第十八話　黄金龍君……え、マジで？　――――2851
明星双臨編　第十九話　リモートライズ　――――2856
明星双臨編　第二十話　異空間での激闘　――――2862
明星双臨編　第二十一話　星を蹴り砕く時　――――2868
明星双臨編　第二十二話　クラスカード　――――2877
明星双臨編　第二十三話　星、乱れ撃ち　――――2886
明星双臨編　第二十四話　教え子の理想とは師を超えることにあり　――――2895
明星双臨編　第二十五話　喪に服した後は、前を向いて歩こう　――――2902
明星双臨編　第二十六話　小規模な敵って説明する機会があんまりないよね？　――――2907
明星双臨編　第二十七話　でかい組織なら派閥の三つぐらいあるものさ　――――2914
明星双臨編　第二十八話　前兆　――――2921
明星双臨編　第二十九話　クーデター、起きちゃいました!?　――――2927
明星双臨編　第三十話　政争バチバチ　――――2933
明星双臨編　第三十一話　専用機ってロマン要素満載だからマニアも多種多様　――――2939
明星双臨編　第三十二話　ツェペシュ城の謁見　――――2947

明星双臨編　第三十三話　リゼヴィム・リヴァン・ルシファー　2959
明星双臨編　第三十四話　不安と不穏のひと時　2972
明星双臨編　第三十五話　不安な時でも息抜きができるに越したことはない　2979
明星双臨編　第三十六話　風雲急のツェペシュ城　2986
明星双臨編　第三十七話　激突、グレンデル!!　2997
明星双臨編　第三十八話　対決、クロウ・クルワッハ！　3005
明星双臨編　第三十九話　説得（物理（マリウス））　3018
明星双臨編　第四十話　リリンの野望　3029
明星双臨編　第四十一話　悪意に燃える街　3042
明星双臨編　第四十二話　戦火猛る城下町　3051
明星双臨編　第四十三話　反撃の前兆　3061
明星双臨編　第四十四話　決着、ツェペシュの激闘！　3073
明星双臨編　第四十五話　夜明けの宣言　3089
明星双臨編　第四十六話　D×D、結成です！　3102
明星双臨編　第四十六話　異議、出てきました!?　3111
明星双臨編　第四十七話　不倶戴天　3125
明星双臨編　第四十八話　曹操、戻ってきました!?　3135
明星双臨編　第四十九話　ケジメ、つけさせます！　3143
明星双臨編　第五十話　白色衰星（ディバイディング・ステラ）　3152
明星双臨編　第五十一話　銀靴龍討　3162
明星双臨編　第五十二話　ケジメはしっかりつけましょう　3175
明星双臨編　幕間　ワックスがけの前にはきちんと埃を掃除しよ

う ―――――――

英雄乱戦編　第二十二話　前哨戦、決着　――――3356
英雄乱戦編　第二十三話　奇跡の流れ弾　――――3365
英雄乱戦編　第二十四話　デカブツ打倒は同サイズ以上でどつくか、小型兵器で翻弄するかの二択が多い　――――3372
英雄乱戦編　第二十五話　ドラゴン流ラーメンフライセット　3379
英雄乱戦編　第二十六話　変態大戦隊　――――3386
英雄乱戦編　第二十七話　役者、大集結　――――3396
英雄乱戦編　第二十八話　冷徹なる進歩光明　――――3403
英雄乱戦編　第二十九話　人間チート博覧会　――――3411
英雄乱戦編　第三十話　ＯＴＯＮＡが出てくる作品は良作。でも意図して出すのは困難　――――3416
英雄乱戦編　第三十一話　ガルアルエル・ファイト　――――3422
英雄乱戦編　第三十二話　違う、そうじゃないｂｙ木場祐斗　3430
英雄乱戦編　第三十三話　アウロス防衛戦、決着　――――3436
英雄乱戦編　第三十四話　戦後のアウロス（前編）　――――3443
英雄乱戦編　第三十五話　戦後のアウロス（後編）　――――3448
英雄乱戦編　第三十六話　事前準備や息抜きはとっても大事　3453
英雄乱戦編　第三十七話　天界来訪の裏で　――――3460
英雄乱戦編　第三十八話　現実逃避のドアノブ（前編）　――――3465
英雄乱戦編　第三十九話　現実逃避のドアノブ（後編）　――――3472
英雄乱戦編　第四十話　甘やかし尋問（前編）　――――3479
英雄乱戦編　第四十一話　甘やかし尋問（後編）　――――3486

英雄乱戦編　第四十二話　さらなる可能性　――――3494
英雄乱戦編　第四十三話　主人公補正は正負合わさるものなり
英雄乱戦編　第四十四話　見え始める裏側　――――3507
英雄乱戦編　第四十五話　明かされる裏側　――――3523
英雄乱戦編　第四十六話　深夜の語らい　――――3532
英雄乱戦編　第四十七話　――――3541
英雄乱戦編　第四十八話　急変する天界　――――3552
英雄乱戦編　第四十九話　始まる天界防衛戦　――――3561
英雄乱戦編　第五十話　天の国を襲う大激戦　――――3567
英雄乱戦編　第五十一話　第二天の攻防　――――3573
英雄乱戦編　第五十二話　この作品のＦａｔｅ要素はｆａｋｅ形式でいこうと思う（前置き）　――――3580
英雄乱戦編　第五十三話　男女の関係は、それぞれの違いを理解して配慮しあうことが肝要　――――3589
英雄乱戦編　第五十四話　悲に振り回される者　――――3593
英雄乱戦編　第五十五話　神域の戦い　――――3603
英雄乱戦編　第五十六話　悲恋の決着　――――3611
英雄乱戦編　第五十七話　スーパーサウザンド大戦　――――3622
英雄乱戦編　第五十八話　兵藤一誠、なめたらアカン　――――3631
英雄乱戦編　第五十九話　天界防衛最終戦（前編）　――――3640
英雄乱戦編　第六十話　天界防衛最終戦（後編）　――――3651
英雄乱戦編　第六十一話　天界守ってクリスマス！　――――3659
英雄乱戦編　幕間　聖なる教えが震える時　――――3659

第八章　聖教震撼編

聖教震撼編　第一話　悩める新年、始まります!!　―――― 3669
聖教震撼編　第二話　年明けのサプライズ!?　―――― 3679
聖教震撼編　第三話　神聖十字軍団　―――― 3689
聖教震撼編　第四話　小さな願い　―――― 3705
聖教震撼編　第五話　アマゴフォースの始まり　―――― 3713
聖教震撼編　第六話　白龍製麺大繁盛　―――― 3723
聖教震撼編　第七話　地下を歩く比翼連理　―――― 3731
聖教震撼編　第八話　ウルバヌス二世　―――― 3741
聖教震撼編　第九話　手の内を読んで動いている黒幕は、ヤバイ奴にしか見えないものである。　―――― 3752
聖教震撼編　第十話　嵐の直前って、逆に静かというか穏やかだったりするよね？　―――― 3757
聖教震撼編　第十一話　英雄談義（幸香編）　―――― 3763
聖教震撼編　第十二話　英雄談義（一誠編）　―――― 3771
聖教震撼編　第十三話　千客万来　―――― 3779
聖教震撼編　第十四話　降臨の六聖英霊（前編）　―――― 3785
聖教震撼編　第十五話　降臨の六聖英霊（後編）　―――― 3794
聖教震撼編　第十六話　大王派の奮戦　―――― 3803
聖教震撼編　第十七話　思慮する者たち（前編）　―――― 3809
聖教震撼編　第十八話　思慮する者たち（後編）　―――― 3814
聖教震撼編　第十九話　混迷のバチカン　―――― 3821
聖教震撼編　第二十話　強敵襲来（前編）　―――― 3829
聖教震撼編　第二十一話　神曲・神聖喜劇（ラ・ディヴィナ・コムメディア）　―――― 3838
聖教震撼編　第二十二話　大いなる不穏　―――― 3847

聖教震撼編　第二十三話　強敵襲来（死徒編）　――――――

聖教震撼編　第四十八話　――――――

黙示覚醒編　第三話　ドキドキワクワク、三者面談♪ ―― 43
黙示覚醒編　第四話　道間街 ―― 51
黙示覚醒編　第五話　道間の宴会 ―― 62
黙示覚醒編　第六話　てんねんどらごん ―― 70
黙示覚醒編　第七話　極晃天弄（前編） ―― 81
黙示覚醒編　第八話　極晃天弄（後編） ―― 89
黙示覚醒編　第九話　王（キング）の真実 ―― 95
黙示覚醒編　第十話　行きつくところまで行った話 ―― 103
黙示覚醒編　第十一話　反撃作戦、開始します！ ―― 114
黙示覚醒編　第十二話　強襲作戦、開始します！ ―― 120
黙示覚醒編　第十三話　知らされる暗部 ―― 126
黙示覚醒編　第十四話　冥革激戦 ―― 135
黙示覚醒編　第十五話　灼熱突貫・淑女変身 ―― 143
黙示覚醒編　第十六話　密やかに立ち込める暗雲 ―― 154
黙示覚醒編　第十七話　冥革接戦 ―― 162
黙示覚醒編　第十八話　不穏と共感と真相と ―― 168
黙示覚醒編　第十九話　残神乱舞 ―― 181
黙示覚醒編　第二十話　聖魔宿す鞘なる鎧（シースメイル・ビトレイヤー） ―― 388
黙示覚醒編　第二十一話　リゼヴィム、倒します！ ―― 398
黙示覚醒編　第二十二話　白金龍の（ギガント・プラチナ）君臨皇帝（・ユニゾンドライブ） ―― 407
黙示覚醒編　第二十三話　双龍紅化 ―― 416
黙示覚醒編　第二十四話 ―― 434
黙示覚醒編　第二十五話　始まりのアポカリュプス ―― 443

黙示覚醒編　第二十六話　勝利の問いは夢と共に　――――――

旧済銀神編　第一話　その言葉は、答えだった。――――――

エピローグ　希望と絶望の日々が終わるとき

「おめでとう。君はあまりについてなくて同情したから、ハイスクールD×Dの世界にチート特典を付けて転生することになったよ」

そう伝えてくれる自称神に、青年はすぐに頭を働かせた。

神様転生は自分達いわゆるギークにとってはよく妄想することだが、その所為かいきなり転生と言われて冷静になってしまった。

ハイスクールD×Dは、明らかな問題作だ。

サークル活動の一環で問題作について語るコーナーがあったので購読しているが、本当に問題作だ。

あまりにも非常識な異形達に、彼らに押さえつけられて余計なトラブルのしわ寄せを受ける人間達。なにより主人公が下劣な色狂いの性犯罪者であり、サークル内ではよく愚痴で盛り上がったものだ。

この世界に転生できるのなら、ぜひ自分達のチートを持って正しい方向にもっていきたい。

だが、そう簡単にはいかないだろう。

自分達は凡人だ。チートがあってもそれだけでは決して勝てないだろう。

ならどうすればいい。そう考えた時に、一つの在り方を思い出した。

超人の正しすぎる光に立ち向かう、銀色の輝きの物語。その最終章にして駄作ともいえるあの作品の、素晴らしき強敵達を思い出す。

不死の存在となりながらも、それに胡坐をかかず常に研鑽を続けてきた、凡人の極限を体現した者達。人類すべてを生産者にすることで、星の寄生虫と揶揄されることもある人間を、完全な生産者にして資源の宝庫とすることで変革をもたらそうとした神祖達。

人の新たなるステージは、ガンダム００を思い起こさせる素晴らしい在り方だった。あれはむしろ、主人公として立ち向かうべきだっただろうと常々思う。

そう、一人で無理なら、自分達の人生で足りないのなら、千年以上

の時をかけて積み重ね合う仲間たちがいればいいのだ。
……ならば、まず最初に言うべき答えは決まった。
「――――仲間が、仲間が欲しい」
……その後の千年間は、本当に大変だった。
より多くを学び、少しずつ人類に力を齎し、そして何より世界を導く為の知恵を手にするのは大変だった。
何度も失敗した。何度も恨まれた。何度も泣いたし、絶望した。
何度も成功した。何度も感謝された。何度も笑い、希望を得た。
「ああ。これは、俺達が世界を救う物語だ！」
あの熱い想いが背中を押してくれた。
「異形達を止められるのはただ一つ、俺達なんだろ？」
あの真剣な瞳が、思い出させてくれた。
「無限の希望も絶望も、重ねた全てが力になったな」
あの喜びの涙が、導いてくれた。
そして、数多くの特典を束ねることで、自分達は国を作り上げた。
本来の世界には存在しない諸島群。それぞれの島に存在する鉱脈と、領海全土に埋蔵される天然ガスと上質な原油。
そして千年間の間少しずつ作り出した願望機によって、一斉に発生する高位次元の力。更に人と共にあり感情すら獲得する機械の仲間。
その力全てを束ね、作り上げたサウザー諸島連合国。
その過程で何人もの悲劇に巻き込まれた子供達を集め、将来の人界を導く者達となる為に道を指し示してきた。
ああ、だからこそ、いつか勝利を形にしよう。
人の真価は積み重ねで輝く。千年以上生きながらも、人間に足元を何度も救われる異形にはない、人間だからこその力を示す為。
全人類を神祖にする勝利を描けるものを探しながら、彼は異形達との戦いに目を向け――――

「な……ぜだ……？」

――――――今まさに、その願いが踏みにじられようとしていた。
ありえない。信じられない。
仲間達が倒れ伏し、動けないことではない。
彼らは皆魂を殺されたが、これに関してはこちらの落ち度だ。
異形達に気づかれないように立ち回っていた為、どうしてもデータが取れてない脅威はいた。その為死神の鎌は警戒対象だから、回避を重視した装備を開発する予定だった。
だが、想定外の真後ろからの攻撃により、自分もまた滅びようとしている。
それを成したのは、将来を共に支え合うだろう一人の少女だった。
「何故、君が？」
「何を馬鹿なことを言っとるのじゃ？」
きょとんとした顔でそう返答する少女の手には、同胞達の魂を切り裂いた魔剣が握られている。
死神の鎌を再現した魔剣を作り出すという手法に、正直盲点だったと臍を噛む余裕もない。
何よりこの不意打ちは、彼女達が配下だと思っていたからの間隙だった。
「……終わったか。あとはそいつだけだな？」
「そうだのお？　そちらは大丈夫なのか？」
「ああ。あいつらが配下の連中は片づけてくれたよ。今は契約通りに倉庫から取り分を取ってることだな」
「妾達の分は残すのじゃろうな？　まあ、彼奴らがちゃんと確保しておるじゃろうが」
そう、後ろから近付いてきた青年と少女が会話をする。
その姿は、本当に信じられなかった。
「何故だ……。何故、君達が異形ではなく人類に牙を剥くんだ……？」

それが分からない。
彼らも彼女達も、自分達が見出した者達なのだ。
世界の真実を教え、憎むべき異形を伝え、そして共に戦う為に力を授けた。
それが、何故だ。
その疑問に、青年の方が呆れ果てた目を向ける。
「……つくづくお前達は愚かだな。何故俺達がお前の奴隷になると思ったんだ？」
「なんだって？」
その言葉の意味が分からない。
確かに上下関係はあっただろう。その過程で、厳しいことも言ったはずだ。
だが、男達に奴隷として扱う思想などなかった。
いずれ並び立つ友として、先達として振舞っていた程度なのだ。
「……本当に理解できぬ奴らよな。あそこまで見下した目でこちらの洗脳を試みて起きながら、まるで善意で育てているかのように考えおる思考回路が分からぬわ」
「恩を売って自説を語ればいうことを聞く馬鹿とばかり会っていたんだろうな。自分達の理想が全人類のそれだと思ってるんだろう」
言っていることが理解出来ない。
そして、相手もこちらに言葉を向けてこない。
本当に彼らは、道を示し先で追いつくのを待っていた自分達が、奴隷と見下していると思っているのだ。
――この期に及んで、男は自分達の愚かさを理解してなかった。
自分達がどこまで行っても、千年経ってもなおこの世界を「正すべき創作物」と見ていることに気づいていない。
どれだけ人を導くことで積み重ねてきても、その前提として「体よく利用できる」手合いを自覚無く見繕ってきたのでは意味がないと、理解すらしていない。
そして、彼らはこちらに目を向けることもなく、最後の一撃を放とうとする。

「……無念だ。だが、種は巻いた」
その一撃が振るわれると共に、自分の魂も消し飛ばされるのだろう。
もし全員が死んだ時、溜め込んできた力はあるべき者の手に渡る。
「世界の間違いを正し、そして力さえあれば必ずそれを成そうとする者に力と知識が贈られる」ように設定した願望機は、保険でしかないので全部ではないが、半分近い力を送ってくれるだろう。
その力に最後の希望を託し、男は斬撃を受け入れる。
――――――その死の間際に至るまで、男は勘違いに気づいてもいない。
世界の間違いを知っている者は必ず自分達の同志になりえた者である。そんなありえない大前提を誰もがするほど、千年間の積み重ねは意味をなしていなかった。
大前提が間違っているがゆえに、彼らの千年間は正すのではなく乱すことしか出来ない。
世界を変えるならまず自分を変えろ。それはすなわち、己をより良く改めることが出来ない者が、世界をよりよく改めることは出来ないという認識が込められているのだろう。
改めるところを何一つ見出さず、世界を歪める力だけを磨き上げてきた彼らに、世界を変える力が宿るわけがなかった。
「おや、もう終わったのかい？」
「ああ。そっちはもう回収し終えたのか？」
「全部は無理だったけどね。どうも万が一に備えた保険が仕込まれてたよ」
「……ふむ、彼奴らから連絡が入ったぞ。全体の四割ほどが消え去ったようじゃな？」
だから、既に手が回っていることにも気付かず、彼は逝った。
「まあ、全部をどうにか出来るわけがないからね。そろそろリークで来ている三大勢力が迎撃部隊を打倒してくる頃だし、逃げた方がいいんじゃないかな？」
「ふむ。ならば絶霧（ディメンション・ロスト）の力を借りるとするか。ほれ、おぬしらも行

くぞ？」
「そうだな。では、恩に着るとするか」
ただただ妄想に生きて、そしてそれゆえに現実に殺される。
これは、ただそれだけのバッドエンドである。

そして、一つの物語が終わり新たに始まる。
神様転生によって世界を変えようとした男達の物語は、ここで完全に終結する。
そう、この物語はある意味でエピローグである。
世界を乱すことしか出来ない者達の遺した力による、乱された世界であがく者達の物語。
これは、遺産（Legacy）と神殺し（Longinus）による高校生達（ハイスクールD×D）の物語。

ハイスクールL×L　置き土産のエピローグ

プロローグ　ある大きな事変の前

サウザンドディストラクション。二年強ほど前に起きた、とある大災害を出す。

南半球の諸島群で構成され、冷戦期に独立を表明し、ザイアコーポレーションが事実上の後援者となり、そしてアメリカ合衆国すら退けた強国。名をサウザー諸島連合。

その首都にあるザイアコーポレーションの本社が、突如として大破壊した事件である。

これらの大破壊は隕石の墜落などと言って誤魔化されているが、真相は大きく異なる。

……この世界には、神や悪魔が実在する。

聖書にしるされし神・天使・悪魔・堕天使はもとより、北欧神話にギリシャ神話などの各種神話。ひいては吸血鬼や妖怪など、異形と呼称される存在は人類社会に存在を隠しつつも確かに存在する。

そんな彼らは人間の政府と秘密裏に協定を交わし、時に人間側の術者が政府の直下となりつつ、各勢力は鎖国的かつ冷戦的に向き合ってきた。

そんな中、サウザンドディストラクションの半日前にとあるリークがバチカンや冥界にもたらされる。

「ザイアコーポレーションは、異形の存在を全世界に公表すると共に異形を邪悪として滅ぼす為の戦争を目論んでいる」

あまりに荒唐無稽ではあるが、同時に警戒の余地が十分すぎるほどに在った。

人間社会に異形の存在を公表すれば、大いなる混乱が生まれてどちらにとっても害悪にしかならない。それが異形社会全体における、人間との付き合いに対する固定観念だ。そしてこれは人間側も理解しており、政府中枢は一般社会に異形について隠すことを了承している。

そんな中、政府中枢そのものが異形に対して敵意を見せている風潮なのがサウザー諸島連合だった。

同時に新種の粒子である星辰体（アストラル）を利用した超人である星辰体感応奏者（エスペラント）や、最新科学技術ににによって開発されたプログライズキーを保有するザイアが本気を出せば、米国と全面戦争を起こしても勝ち目があるといわれている。

もし本当に対異形を考慮した世界大戦を起こす気ならば、彼らは更なる力を隠しているだろう。そして、そう言われれば納得できるだけの力を彼らは持っていた。とどめに、公表の仕方に偏向報道を入れれば、多くに人間を混乱させることも可能。最悪なことに三大勢力側にのみ送られたその情報には、文字通り世界をひっくり返す、三大勢力が秘匿している最重要事項が存在した。

それゆえに三大勢力は半信半疑ながらも準備を整え、しかしそれより早く謎の襲撃によるサウザンドディストラクションが発生する。

これによりザイアコーポレーションは、首脳陣を軒並み失い各種データすら喪失するという大打撃を受ける。同時にサウザー諸島連合の首脳陣が全員植物状態になり、サウザー諸島連合はあまりにも大きな打撃を受けた。

たった二年と少しで諸島連合国はこれまでの勢いを失い、軍事的に強大ではあるが本質的にただの資源大国止まりにまで弱体化してしまっている。

そして遅れながら到着した三大勢力は、ザイアコーポレーションに隠された設備を見て驚愕することになる。

世界中から孤児を集め、星辰体感応奏者の施術を受けさせているのがジャブ止まり。

脳内にＡＩチップを埋め込むことで、特殊な装備を運用する能力を会得させるという、人道的に懸念が生まれる措置が施されていた。

そして更に、ザイアコーポレーションに残されていた資料が、彼らがとある儀式を世界各地で引き起こしていた者達だったということだ。

かつて存在した歴史に名を遺す英雄達。その残影であり絶大な力を持つ存在、サーヴァント。

悪魔が肉体的機能として持っているアドバンテージである魔力。

その魔力を生命力から製造し、更に詠唱や礼装によって力として行使する因子、魔術回路。

魔術回路を持つ者がサーヴァントを召喚し殺し合い、死んだ者達を生贄に勝者が願いを叶える絶大な力を得る儀式。それらは千年ほど前から世界各地で散発的に引き起こされ、その都度何かしらの混乱が人界や異形に引き起こされた。

その名は聖杯戦争。その根幹である聖杯のデータが、破損こそしていたがザイアから発見された。

千年以上前から何かを起こしていた。それだけはわかるが、しかし明らかに不自然というほかない。

その千年前から、世界にはいくつも不思議なことが起きていた。

その一つが、星辰体（アストラル）。

大気中に満ちる新種のエネルギー。その運用方法こそ、諸島連合が近年編み出した星辰体感応奏者（エスペランント）のみだが、千年前から突如現れたそれは、まるで何かしらの繋がりがあるかのようだった。

それらを把握した数多くの異形達は、しかしだからこそこの数年間苦労することになる。

これまでは数年に一度あるかないかだった聖杯戦争が、一年に数度の割合で発生するようになった。

突如として天啓のように、星辰体感応奏者及び運用の為の合金アダマンタイトの製法が頭に宿る。

それどころか、国家を敵に回してでも己の理想とする世界を作ろうとする危険人物にばかり、諸島連合が独占的に運用する兵器――プログライズキーとレイドライザーの組み合わせて変身する超人―レイダーがどこからともなく現れる。

これにより、人間社会も異形社会も、混乱が急激に進むことになる。

そう、それは此処においてもおかしなことでも何でもなく――

「創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星」
『『『『『レイドライズ！』』』』』
その言葉と音声が響くと共に、銃声が連続して鳴り響く。
場所は日本のとある地方都市の片隅。そのマンションの一室だった。
ホームレス狩りを嬉々として楽しむどころか、むしろホームレスを合法的に排除することこそが正しいと考える危険思想集団の集合場所。
本当に政治家や警察組織の幹部にまで上り詰めたものがおり、警察側の不正を探ったことで発覚した彼らを逮捕する為に急行したが、このような大規模な戦闘になってしまった。
本気でクーデターでも考えていたのか、相当な人数が集まっている危険集団。その為当然の如く警察側もＳＡＴを投入したが、情勢は一気にひっくり返る。
『『『『『Ｗｅ ａｒｅ ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎａｒｙ ａｒｍｙ ｏｆ ｅａｒｔｈ』』』』』
蟻を模したライドモデルを身に纏う、レジスティングアントレイダー。サウザンドディストラクションを機に、突如として世界各地に偶発的に表れる、サウザー諸島連合の主力強化装甲。
それにより、大口径ライフル弾に匹敵する光弾の一斉射撃に、突入した部隊はすぐに離脱。
即座にフラッシュバンを投げつけたことで、一瞬だけ隙を作ることが出来た為死人はゼロ。
だが、頭部ユニットが瞬時に過剰な光や音を防ぐ為、文字通り一瞬だけ隙を作るにとどまっている。
そして厄介なことに、敵の一人は星辰奏者。
平均的な領域ですら、時速１００ｋｍ以上の速度で走ることができる。くわえて高い自己修復能力により、歩兵戦闘車レベルなら単独で打倒することも可能な力量を持つのが星辰奏者。
そしてレイダーも攻防共に戦車に匹敵する領域。くわえて変身に必要なプログライズキーとレイドライザーは、拳銃より少しかさばる

程度の隠匿性で発揮できる。
この双方を組み合わせた敵の筆頭格を相手にするには、それこそ戦車数台と同規模の随伴歩兵部隊が必須だろう。
何よりアントレイダーは基本として、自信を護衛する人型ドローン「レジスティングアーミー」を八体具現化する。
分隊支援火器感覚で狩猟用ライフル弾並みの火力を発揮し、有事においてはライフルグレネードを運用可能で、必殺技ともいえる「レジスティングボライド」は対戦車ミサイル級の火力を二発発射する。そこに必殺技抜きなら八人分のレジスティングアーミーが更なる火力を提供する。
それが六体も出ている時点で脅威であり、そこに星辰奏者も組み合わされば厄介でしかない。
冗談抜きで中隊規模の軍事戦力が必須の敵に対して、ＳＡＴは即座に最終手段の投入を決意する。
「神の子を見張る者の部隊に連絡！　急いで助っ人を送り込んで――」
「――そこか」
その時、寄りにもよって星辰奏者のアントレイダーに発見された。
星辰奏者は超人である。専用に調律されたアダマンタイトという合金を、星辰体と感応する為の媒介として保有することが必須ではあるが、それさえ成せば総合的にアントレイダーより上の性能を発揮する。
膂力・生理機能・五感などがもれなく常人をはるかに超える。必然的に治癒力も増大化する為、過去起きた二度の世界大戦水準ならば、戦車の砲撃すら致命傷どころか戦闘不能にすることが困難だ。優秀な存在になれば、歩兵一個中隊を返り討ちにすることも可能だろう。
何より恐ろしいのは、保有する異能である星辰光だ。
自身を最小単位の星として、異なる星の法則を具現化する異能。当人の肉体的素質や精神性を反映するが故、肉親ですら完全に同一のものを発現することはない。その文字通り唯一無二の切り札の保有こそが真骨頂。
使いこなせなければただの初見殺しだが、習熟すれば文字通りオン

リーワンの必勝パターンを確立することも可能。その力の特性は必然的に凶悪なのだ。
そして、目の前の男が発現したのは分かり易い力。
炎拳具現能力。左腕に絶大な灼熱を纏わせるという、単純だが明確に強大な武器である星だった。
とっさに散開するがするが、そのまま直進した拳は、あっさりと鉄筋コンクリートをぶち抜いた。
更にその炎は、鉄筋コンクリートを文字通り熔解させる。
その灼熱はまごうことなく、絶大な威力を持つことの証明だろう。
「……冗談だろ」
ＳＡＴの一人が唖然とする中、星辰奏者のアントレイダーは彼らに振り返り――
「――そこまでにしてもらおうかしら？」
――その声に、男は振り仰いだ。
向かい側のマンションの屋上に、一人の少女が立っている。
更に見れば、別動隊が保有していたレイドライザーを破壊した状態で持っていた。
そして警戒するべきは、彼女の背中に翼が生えているという点。
星辰奏者という精鋭であることから、男は政治家の構成員からある情報を受け取っていた。
それは、人間と似通った姿をしながら、人間をはるかに超える力と寿命を持つ異形の存在。
加えて黒い翼を生やしていることから、男は一瞬で正体を看破する。
「堕天使かぁ!!」
「正解よ」
飛び掛かって灼熱の拳で殴り掛かるが、少女はそれを素早く回避する。
銀の髪に赤いメッシュを入れ、そしてツインテールにしたその少女は、不敵で蠱惑的な笑顔を浮かべながら、光の短槍を生み出すと、素早く星辰奏者に攻撃を開始する。

それを灼熱の腕で弾き飛ばしつつ、しかし星辰奏者は冷静だった。
星辰奏者がレイダーとして戦う。そのポテンシャルは文字通り圧倒的であり、はっきり言えば双方を保有していない軍事組織なら単独で大打撃を与えるレベルだ。
それに対して攻撃を対処できるポテンシャルは確かに恐るべきだが、僅かな攻防で相手の力量を見切っている。
てこずるがその程度。まず間違いなく確実に勝てる。
それを理解したからか、星辰奏者は余裕を持ちながら戦闘を行っている。
少しずつ、確実に、相手の体力を消耗させて有利に立ち回る為に行動する。
それを五分ほど続け、ついに堕天使は動きを止めた。
「……この程度か？　偉そうに出てきたくせに、大したことができないんだな？」
そう挑発も兼ねて告げると、少女は少しだけ苦みを混ぜつつも、どこか余裕を思わせる笑顔を浮かべていた。
「いえいえ。結構できたと思うわよ？　個人的には８０点ぐらいあげようかしら？」
その言葉に、星辰奏者は怪訝な表情を装甲の裏で浮かべる。
どう考えてもこちらが有利だ。空を飛べば逃げることはできるだろうが、遠距離戦闘も可能なレイダーゆえに勝ち目は十分残っている。
にも関わらず、何故か少女は予想通りと言わんばかりの表情だ。
「何ができるってるんだ？」
そう、思わず訪ね―
「……お・と・り♪」
―その言葉と共に、後ろから足音が聞こえた。
とっさに振り返ったその瞬間―
『ＳＡＶＥ』
『ＦＲＥＥ』
―自分達が敗北することを、本能で理解した。

同時刻、一人の少女が上級悪魔と対峙していた。
女性と少女の中間を思わせる、やけに胸が薄い純白の長髪を持った少女。だが彼女がただ者でないことは、相対する悪魔の表情がひきつっていることから確定できる。
そもそも、この上級悪魔は悪魔社会においても悪質な部類である。ギリギリのライン、それも三大勢力の睨み合いという状況を巧みに利用し、悪辣な方法で人間を追い込み転生悪魔にさせることを趣味としている人物だ。
可能な限り担当地区の法律すら考慮して合法的にしている為文句は出てこないが、目的が「どうしようもなく追い詰められた人間が悪魔にすがるところを見たい」というものである為始末に負えない。レーティングゲームにおいての素質がある者を選び、そして趣味ゆえにその人間と相性が良さそうな上級悪魔を見繕って早急にトレードさせているという、完全な娯楽としての行動なのも拍車をかける。
結果的に多くの悪魔が優秀な下僕を得られることからコネによる影響力が強く、また現地の国の法律すらクリアーしていることもあって、現悪魔政権も手出しができないという質の悪さを誇っている。
そしてだからこそ、彼の眷属は皆が優秀だ。
変な反感を持たれても困るので、自分と相性が良い者に関してはスカウトの過程を合法的どころか善良なスカウト、それもかなりの好待遇で行っている為反旗を翻される心配もない。むしろ自分と同様の楽しみを覚えて協力までしてくれる。その上彼は最上級悪魔でこそないが上級悪魔として、レーティングゲームでは高いレートを誇っている。
だからこそ、教会側であっても即座に仕掛けてこないと判断していたのだが……。
「さて、悔い改めて信仰の為に生きるなら、見逃してもいいけど」

そう最後通牒のように告げる少女に、その悪魔は吠えた。
「ふざけるなよ、この化け物が……っ」
今、自分は一人である。
眷属は全員殺された。念には念を入れ、小規模な魔法使い組織と個人的に契約を結び、彼らに研究設備を提供する代わりに警備員にしているのにだ。
仕掛けてきたのは十人足らず。しかも、自分と眷属を相手にしたのは目の前の女だけだ。
なのに、全員が打ち取られている事実に悪魔は歯噛みするほかない。
「私はこの国の法律も守っているんだぞ!? 優先的に倒すべき悪魔はもっと他にいるだろう!?」
教会から攻撃を受けない為にこそ、現地の法律も考慮して立ち回ったのだ。
あの人間でもそうはいない善良さを持つ魔王達に、眉をしかめられても直接裁かれない程度の慎重な立ち回りを行ってきた。
にも関わらず、目の前の女達は容赦なくこちらを攻撃し、追いつめている。
「法律に則った行動をとっている我々を裁くと!? 神の信徒であろうと、この国の法律を過度に無視しては問題になるし、何よりそんなやり方で天の国に行けると」
「—関係ないわ」
そう、はっきりと少女は告げる。
あっけにとられる悪魔の前で、少女はライフル銃を構えた。
光の銃ではなく、法儀礼済みのタングステン弾頭を使うライフル銃。旧式と言ってもいいそれを向け、少女ははっきりと告げる。
「最悪私が討伐される程度で済むことでしょう? まして私が天の国に行くなんて絶対アウトよ。地獄に行きたいわけじゃないけど、天国に行くよりはまだましだしだもの」
そう平然と告げる少女は、引き金に力を籠める。
そして、悪魔は自分の勘違いを悟っていた。

この女は敬虔な神に仕える者ではない。神に仕えている気の狂信者でもない。
神が悪(自分)を裁く者だから、その一因として自分達(邪悪)を裁きの場に叩き込んでいるだけなのだ。
「……この、気狂いめ」
「当然よ。私がまともなわけがない」
その返答と共に、少女は悪魔を撃ち抜いた。
そして、ふと何かに気づいたかのように、窓にちらりと視線を向ける。
「……さて、さっさとやることはやったし、上の指示に従いますか」
上層部から緊急連絡が作戦開始直前に届いており、一応さらりと確認はしている。
「最上級堕天使コカビエル。エクスカリバーを強奪して悪魔の領地に逃げ込んでるとか、悪魔と共闘して主を滅ぼそうとでもいうのかしら？」
そう呟いた少女は、明確な敵意を込めて虚空を睨む。
「いい度胸ね。なら、例え死んでも後悔させてやるわ……っ」

「……これは、困ったことになったわねぇ」
同時に、レイダーを打倒した堕天使の少女は困り顔になった。
それに応えるように一人の少女が小首を傾げた。
「どうしましたのー？　晩御飯にお寿司ですのよー！　ヤッホーですのよー!?」
明らかに目をキラキラせているのは、茶髪をポニーテールにした一人の少女だ。
口調こそお嬢様っぽいが、そのテンションは外見年齢よりはるかに下に思える。
そんな少女のテンションを下げかねないが、しかし銀髪の少女は

データが転送されたタブレットを見せる。
「緊急事態よ、この近くで悪魔が管轄している駒王町にコカビエル様が勝手に侵入したようね。……何故か教会からエクスカリバーを三本も強奪して」
その発言に、更に一人の少年が苦笑いを浮かべる。
「いや、確かに緊急事態だよな。……それはそれとしてエクスカリバーを三本とか、普通に考えたらパワーワードだよな」
そう返す黒髪の少年の乾いた笑いに、少女達は苦笑を返す。
「確かに。伝承でしかエクスカリバーを知らないとそうなるわよねぇ」
「ですわね。まあ、もう千年以上昔の話ですから、現代ならだいぶ色々あるものですわ。むしろ七つに分かれた伝説の力とかカッケーですの」
気分を和らげるジョークが半分、本音が半分のその言葉に、確かに気分が和らいだ。
だが、それで止まるわけにもいかないのが実情だ。
銀髪の少女は静かに首を横に振ると、すぐに意識を切りかえる。
「まあ、私達の仕事は本命の繋ぎだから気にしすぎないようにしましょう。まずは任務終了のお祝いにお寿司を食べるわよ、ＳＡＴの方が何割かカンパしてくれるそうだから、たくさん食べましょう？」
「よっしゃーですのー！　大トロ食べますのー！」
「……俺、高いの食べていいかな？」
そこに意識が向いている二人に微笑みながら、銀髪の少女はふと空を見上げる。
「……あなた達も、またこの世界に生を受けているのかしら？　だとしたら、二人を会わせてあげたいわねぇ」
その為にも、死なない程度に頑張らないといけない。
そう意識を切り替えて、少女は明日からのことに意識を咲き始めた。

これより数日後、運命はより大きく集まっていくことになる。
時期は六月後半。日本の高校が衣替えの季節になる頃。
その最初の大いなる戦い。聖剣エクスカリバーを巡る、三大勢力が共闘する争いが始まろうとしていた。

設定資料集　メインキャラ編

◎ＡＩＭＳ第一部隊

元々はサウザンドディストラクション後に神の子を見張る者が保護した、ザイアコーポレーション深部の対異形部隊のメンバー。そのうちの一組を、中級堕天使かつ魔術回路及び聖杯戦争研究者のリーネスが庇護下に置き、一部ヒューマギアと共に行動するメンバー。

リーネスが聖杯戦争研究の第一人者であることも重なり、コカビエルの暴走における本命の前の繋ぎとして派遣。その後、二度のグレモリー眷属の共闘経験から、和平後の政策に合わせる形で、総督アザゼルの直轄部隊として再編される。

◇九成和地（きゅうせい かずち）

本作主人公。ＡＩＭＳの仮面ライダーが一人であり、同時に神器を二重保有し、とどめに魔術回路まで持っているイレギュラー。加えて星辰奏者の施術も受けている。

物心つく前レベルの記憶から、「涙の意味を変える」存在になろうという強い決意を保有。また同時に達観した精神性を持ち合わせており、ザイアコーポレーション深部の（そのつもりがない）洗脳教育が通用しないなど、精神面での完成度は一部分とはいえ年齢を遥かに超えた水準。

カズヒ・シチャースチエに一目惚れしており、彼女のことを慕っている。その理由は「涙の意味を変える決意」の理由となった原風景の女性と同じ雰囲気を持ち合わせており、更に生き様込みでほれ込んだ。文字通り一番愛している人ではあるのだが、だからこそカズヒ以外の女性に対しても誠実に向き合っており、カズヒがいてこそ成立している関係であることもあってハーレムを作っておきながら関係は実に良好となっている。

……その特異な才覚と精神性の根幹は、道間誠明―すなわちミザリ・ルシファー―が二つの聖杯を使ったことで前世の記憶や才覚を持ち越したことに由来する者。そしてすべてを知った上で、罪も含めた

カズヒを愛したことでついに禁手に到達した。
　そのスタンスと星辰光の性質から、英雄派に「涙換救済（タイタス・クロウ）」の異名を付けられる。必要時に自分ができる範囲内で成すべきことを完遂する、有言実行のいぶし銀。質実剛健ながらザイアの英才教育もあり、博打一歩手前の手段を考えついて実行に移せる思考力と胆力を持つ為、イッセーやカズヒとは別の意味で敵に回すと始末に負えないタイプ。反面地金の精神性が禁手と全く合致しない為、禁手の持続時間がとにかく短いという欠点を持つ。
☆神器　魔剣創造（ソード・バース）
　和地が保有する神器の一つ。イメージした魔剣を所有者の技量に合わせた出力・強度で創造する神器。
　和地は自身の魔力特化型魔術回路にものを言わせ、魔力によって強度を底上げする魔剣により、エクスカリバー（七分割時）と打ち合える強度を実現している。
★禁手　星宿す想いの魔剣（スターソード・オブ・スフィア）
　和地がカズヒを助け出すことでついに至った、魔剣創造の亜種禁手。
　能力は「星辰奏者を魔星にする魔剣」たる魔星剣を創造すること。神星鉄（オリハルコン）に匹敵する星辰体感応量に、それらを安定して使いこなす為の演算機能などを備えている。加えて和地が使用した場合、何故かカズヒの星を剣に付与することも可能。
▼残神　創造されるは魔の刻印（バースデイ・オブ・サーキット）
　和地が編み出した神器の前人未踏、禁手の余剰リソースを組み上げた残神。
　魔剣創造の機能を流用して魔術刻印を創造する能力。総合性能は数代続いた魔術回路保有者の家系レベルだが、魔術刻印という一族伝来の強化期間をその都度目的に応じて作れるという、型月原作の魔術師が知ったら殺意が沸くだろうレベルの代物。
☆神器　疾走車輪（ソニック・チャリオット）
　和地が保有する神器の一つ。荒れた地形でも時速３００ｋｍを超える速度で走行できるバイク型の神器。

☆神滅具　鮮血の聖別洗礼（パプテマス・ブラッド）

ヴィールに強引に移植された神滅具。その際ヴィールは禁手も使用している為、和地は二つの神聖血脈を扱う余地を持っている。

『仮面ライダーマクシミリアン』

エイムズショットライザーで変身する仮面ライダー。

和人用の調整が施されたＡＩチップを必要とする専用のライダーだが、その分レイダーより戦闘能力の効率がいい。

☆サルヴェイティングドッグ

ＡＢＩＬＴＹ：ＳＡＶＥ

起動音声：Ｏｌｌ　ｌｉｇｈｔ　Ｉ，ｍ　ｇｕａｒｄｉａｎ　ｏｆ　ｈｕｍａｎ　意訳：大丈夫、俺は人類の守護者だ

パンチ力：１５，７５ｔ　キック力：３０，５ｔ　走力：１００ｍ１，４５秒　ジャンプ力：一跳び２４，１ｔ

広範囲の敵を察知する管制システムを搭載しているほか、バイタルパートや両腕両足が脆いが瞬時に再生する「クラッシャブルパット」になっており、非常に打たれ強いのが特徴。また持久力が主体となっている為、走力だけは相方のリベレイティングキャットを凌ぐ。

必殺技はエイムズショットライザーからフルオートで射撃を行う「サルヴェイティングブラスト」及び、瞬間的加速で接近して飛び膝蹴りを叩き込む「サルヴェイティングブラストフィーバー」

★サルヴェイティングドッグプログライズキー

犬のライダモデルを組み込んだプログライズキー。

クラッシャブルストラクチャ構造かつ自動修復機能を持った装甲の展開など、継続的な防御力の獲得を中心にしたシステムを搭載。人類を救済する為の先駆けとして開発され、真っ先に切り込み守るべき人間をカバーする為のプログライズキー。

☆ディフェンディングタートル

ＡＢＩＬＴＹ：ＳＨＩＥＬＤ

起動音声：Ｉｔ，ｓ　ｐｏｉｎｔｌｅｓｓ　Ｉ　ｄｏｎ，ｔ　ｄｉｅ　意訳：無駄だ。俺は死なない

パンチ力：１０，２ｔ　キック力：２５，５ｔ　走力：１００ｍ

1，5秒　ジャンプ力：一跳び15，4m
　星辰光との同調による重装甲化をコンセプトとした派生形態。本来はラクシュミーと同様に航空戦闘用のボーイングイーグルの予定だったが、和地が限定的な空戦能力を獲得したことで独自開発のプログライズキーが採用され、カズヒ用の技術を流用して完成した。
　必殺技は推進機能を持った大型弾頭により着弾しても押し続けるディフェンディングブラスト及び、強大な反発力場を脚部から展開するディフェンディングブラストフィーバー。敵の撃破以上に弾き飛ばすことによる仕切り直しを主眼としている。
★ディフェンディングタートルプログライズキー
　星辰光の応用発展計画の為に試作されたプログライズキー。
　星辰光の歪曲以外ではレジスティングアントレイダーを参考にした対ＡＢＣ兵器対策を含めた重装甲化に徹しており、基本性能はサルヴェイティングドッグより低いが、加速性能だけはリベレイティングキャットに匹敵する。これはサルヴェイティングドッグが多くの者達を守る形態とするなら、こちらは一人を重点的に守る為の形態である為。
　☆チャージングリザード
　ＡＢＩＬＴＹ：ＧＡＮＴＬＥＴ
　起動音声：Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅｄｙ？　Ｉ，ｍ　Ｏｋ　意訳：覚悟はいいか？　俺はできてる
　パンチ力：9，6ｔ　キック力：22，4ｔ　走力：100ｍ1，6秒　ジャンプ力：一飛び19，2ｍ
　星辰光の出力増強による爆発力上昇をコンセプトとした派生形態。ディフェンディングタートルと同時期に完成したが、発動値が跳ね上がりすぎたことで反動が大きいことから、半ばお蔵入り。しかし敵の平均戦闘能力の上昇に伴い、突破力を必要として解放。基本性能は総じて派生形態でも低いが、これは変身者の身体機能が跳ね上がることも踏まえてのもの。
　必殺技は感応している星辰体を凝縮した、拡散しやすい砲撃を放つ「チャージングブラスト」及び、ライダモデルの応用で人為的に肉体に

リミッターまで解除して放つ蹴り「チャージングブラストフィーバー」

★チャージングリザードプログライズキー

トカゲのライダモデルが組み込まれたプログライズキー。

突撃用ではあるが突撃の性能ではなく、それに伴う弊害を超える為の機能が満載されている。具体的には電気干渉による痛覚の減衰や、解除後の反動を押させる為のアドレナリンの分泌促進機能となっている。

☆サルヴェイティングアサルトドッグ

ＡＢＩＬＴＹ：ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ

起動音声：Ｎｏ　ｃｈａｎｃｅ　ｏｆ　ｐｒｅｖｅｎｔｓ　ｓｕｒｂｉｂａｌ．意訳：この救済を邪魔する術などない。

パンチ力：３ｌ，５ｔ　キック力：６ｌ，０ｔ　走力：ｌ００ｍｌ，５秒（時速２４０ｋｍ）ブースト時：ｌ００ｍ０，４秒（時速９００ｋｍ）ジャンプ力：一飛び２６，４ｍ　ブースト時一飛び１８０ｍ

今後の敵戦力増大に備え、リーネスがサルヴェイティングドッグにアサルトグリップを装着可能にしたことで変身する派生形態。

安全装置や生命維持装置の類を攻撃機能の強化に費やしており、機動力以外はすべてにおいて高い。またブースターを組み込んでいる為瞬間的になら機動力も補える為、危険性を度外視すれば完全上位互換といってもいい。

両腕部のＡＳガントレットは稼働することでクアトロアストラルサブマシンガン・リアクティブアストラルアーマー・アストラルスピニングドリルに切り替え可能で、クアトロアストラルサブマシンガンはＨＥ・ＡＰモードに切り替え可能。背部と肩部にはトップ・ダイレクトや自立誘導・誘導操作の切り替えが可能なマイクロミサイルを発射するＡＳコンテナを搭載。更に脚部と腰部には連続使用時間一秒の電磁推進機能ＡＳブーストを搭載することで、移動力の低下を限定的に克服可能。また胸部のオービタルバインダーは捜索・戦闘などの一連の動作効率の最大化を行うと同時に、収束・拡散を切り替える星辰体粒子砲が内蔵されている。

必殺技はショットライザーからの砲撃に合わせて全武装を強化して放つ一斉射撃「マグネティックスターブラスト」及び、全武装のエネルギーを脚部に収束して放つドロップキック「マグネティックスターブラストフィーバー」

☆パラディンドッグ

ＡＢＩＬＴＹ：ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ

起動音声：Ｔｈｅｎ　ｓｍｉｌｌｉｎｇ　ｓｉｌｖｅｒ　ｂｕｌｌｔｅ．　Ｓａｖｅｒ　ｉｓ　ｅｘｔｒｅｍｅ　ｏｖｅｒ　意訳：銀弾が微笑むとき、救済者は極限を超える

パンチ力：２６，２５ｔ　キック力：５０，８５ｔ　走力：１００ｍ０，７５秒（時速４８０ｋｍ）ジャンプ力：一跳び４８，２ｍ

リーネスが和地専用に開発したパラディンドッグプログライズキーで変身する強化形態。

和地が至った禁手の強化拡張ユニットといえる形態であり、サルヴェイティングアサルトドッグに比べると単独での総合性能では劣るが、禁手の拡張によって大きく超える潜在性能を保有。反面想像を絶する和地と禁手のかみ合わせの悪さにより、本来本命として作られながら使いどころを悩ませる代物となっている。

必殺技は通常禁手状態の星魔剣を弾丸として発射する「パラディンソードブラスト」及び、全禁手共通の蹴り技「パラディンブラストフィーバー」

★亜種禁手　誓約成す勝利の銀剣（カリブリヌス・シルバーレット）

パラディンドッグプログライズキーによって変質される、魔剣創造の亜種禁手。

和地の絶大な魔力を溜め込み増幅することで、クリムゾンブラスターに匹敵する火力を持った魔力斬撃を放つ魔剣を創造する。パラディンドッグ到達時点における、九成和地の最大火力。

★亜種禁手　星宿す魔の騎士団（ディアボリック・ステラ・クルセイダーズ）

パラディンドッグプログライズキーによって変質させる、魔剣創造の亜種禁手。

能力は魔剣を持った騎士団を創造するという物だが、特殊な性質と

して和地の星辰光を再現することが可能。
騎士団の性質上和地ほどの的確な運用は困難だが、プログライズキーを併用した機能変更が可能な為、ある程度の応用性を発揮することができる。
必殺技は騎士団全員にショットライザーを創造しての多角的一斉射撃「パラディンステラブラスト」
★亜種禁手　英霊終焉の魔将剣（ソード・オブ・エンドマーク）
パラディンドッグプログライズキーによって変質される、魔剣創造の亜種禁手。
対サーヴァント用の切り札としての魔剣であり、D＋＋ランクの対英霊宝具を創造する亜種禁手。常態でサーヴァント殺しであり、サーヴァントが起こす現象にも概念的に効果を発揮。創造系であることから壊れた幻想を大量発生させることも可能。英霊という概念に特化している為、元サーヴァントやデミサーヴァントにも高い特攻性を発揮できる。
必殺技は英霊終焉の魔将剣の力を収束し、B＋＋ランクの対英霊宝具の真名解放として砲撃を放つ「パラディンエンドブラスト」
▼残神　英霊断絶の魔将鎧（メイル・オブ・エンドマーク）
英霊終焉の魔将剣に至っている状態での和地の残神。
能力は英霊終焉の魔将剣に近しい、Dランク相当の対英霊装甲を創造すること。性質上増加装甲としてされ、これにより一対一での対サーヴァント戦闘で高い防御力を確立する。
★亜種禁手　鮮血侵す断魔剣（ソードネーム・ヴィールスレイヤー）
パラディンドッグプログライズキーによって変質させる、魔剣創造の亜種禁手。
能力は神滅具「鮮血の聖別洗礼（パプテマス・ブラッド）」を弱体化させることに特化した特殊魔剣を創造する亜種禁手。
性質上鮮血の聖別洗礼保有者に対抗することに特化しているが、聖遺物同士の干渉を使えば跳ね返すことが可能。その為ミザリには通用しないと目される。
ゆえにこの禁手は対ヴィール・アガレス・サタンに特化した亜種禁

手。残神もそれに合わせて仕立てており、ヴィール・アガレス・サタンを打倒する為だけに存在する。
▼残神　大公呪う砕魔術（マギステル・アガレスキラー）
鮮血侵す断魔剣における残神。アガレス家の悪魔に呪いをかける魔のオーラを展開する。
出力そのものは低いが、アガレス家の悪魔にとっては決して無視できない悪影響を与える残神。鮮血侵す断魔剣との連携でヴィールを打倒するためだけの残神。
『仮面ライダーリスタートセイバー』
リスタートバックルをショットライザー基部に装填することで変身する、和地側の仮面ライダーリスタート。
総合力の強化が行われており、プログライズキーの変更でカタログスペックが変化する点がシルバーと異なっている。
必殺技は、ショットライザーとの同調により攻撃性能を高めた砲撃「～ハイパーメガブラスト」及び、オーラを極限収束させての跳び蹴り「～メガブラストフィーバー」。ショットライザー側の必殺技も使えるが、被っている為使う機会は比較的少ない。
▽サルヴェイティングアサルトドッグ
パンチ力：４２．０ｔ　キック力：８４．０ｔ　走力：ｉ００ｍ１．２秒　ブースト時：ｉ００ｍ０．３秒　ジャンプ力：一跳び２９．７ｍ　ブースト時一跳び１９８ｍ
▽パラディンドッグ
パンチ力：３５．２ｔ　キック力：６９．３ｔ　走力：ｉ００ｍ０．６秒　ジャンプ力：一跳び６３．０ｍ

◇ヒマリ・ナインテイル
和地の相方としてあてがわれた孤児の少女。和地と同様に神器の二重保有と魔術回路を持ち、星辰奏者の施術も受けた仮面ライダー。
お嬢様口調だがワイルドかつ子供っぽい精神性を持ち、夏休みにセミを捕まえてはしゃぐ男子小学生レベル。反面母性や包容力があり、子供をあやす行動には有無を言わせぬ雰囲気を見せる。

その為、和地やカズヒとの関係性は保護者と被保護者が時折入れ替わる特殊な関係。
……同時に彼女は、和地の母親である道間乙女が転生した存在。また前世がバニシングツインであることから、ヒツギと二人という形で分かたれた特殊な存在となっている。
☆神器　聖剣（ブレード・ブラックスミス）創造
ヒマリが保有する神器の一つ。イメージした聖剣を所有者の技量に合わせた出力・強度で創造する神器。
和地と同様の手法で強化しており、自主鍛錬もあって赤龍帝の籠手と同調したアスカロンとも打ち合える。
☆神器　龍（ドラグナイト・メイル）の外装
高位の龍であるリントドレイクを封印した、龍を模した全身鎧を具現化する神器……の、鎧として龍を具現化する亜種発現。
ヒマリの魔力量が絶大すぎる為、常時覇龍状態で運用可能。ちなみにヒマリは「グリド」と愛称を付けている。
『仮面ライダーラクシュミー』
エイムズショットライザーで変身する仮面ライダー。
ヒマリ用の調整が施されたＡＩチップを必要とする専用のライダーだが、その分戦闘能力の効率がいい。
☆リベレイティングキャット
ＡＢＩＬＴＹ：ＦＲＥＥ
起動音声：Ｄｉｅ　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｅｎｅｍｉｙ　ｏｆ　ｈｕｍａｎ　意訳：死ぬがいい。お前は人類の敵だ
パンチ力：１６，５ｔ　キック力：４２，７５ｔ　走力：１００ｍ１，５秒　ジャンプ力：一飛び２７，８ｍ
特殊なセンサーや増加装甲を用いていない代わりに、基本性能を含めて所有者の身体能力をより高くする為の機能が組み込まれているのが特徴。ただし瞬発力重視である為、継続性がある走力では相方となるサルヴェイティングドッグに劣る欠点がある。
必殺技は縦横無尽に飛び跳ねながら攻撃を叩き込む「リベレイティングブラスト」及び、連続で膝蹴りを叩き込む「リベレイティングブ

ラストフィーバー」
★リベレイティングキャットプログライズキー
猫のライダモデルを組み込んだプログライズキー。使用者の能力を強化するエイムズショットライザーとの併用を最も主眼に開発されており、使用者を選ばず多数用意可能なうえで、高い戦闘能力を発揮できるよう開発。対異形の戦闘員として運用することを前提としたプログライズキー。
☆ボーイングイーグル
ＡＢＩＬＴＹ：ＪＥＴ
起動音声：Ｌｏｏｋ　Ｕｐ　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　Ｗｉｎｇ　ｏｆ　ｊｕｓｔｉｃｅ　意訳：上を見な。これぞ正義の翼なり
パンチ力：７，２ｔ　キック力：２４，６ｔ　走力：１００ｍ４，５秒　ジャンプ力：一跳び１６ｍ　飛行速度：Ｍ２，０
高速飛行能力及びそれに対する適正を与える機能に特化した派生形態。基本戦闘能力は基本形態であるリベレイティングキャットを下回るが、その三次元起動能力は十全なまでにそれをフォローすることが可能。また高速空中戦を行う都合上、ショットライザーと連動する形で秒間７０発の弾丸を放つファランクスランチャーを両腕に装備している。
必殺技は自立誘導能力を持った炸裂弾を発射する「ボーイングブラスト」及び、瞬間的にＭ７，５にまで加速して突貫攻撃を叩き込む「ボーイングブラストフィーバー」を保有する。
★ボーイングイーグルプログライズキー
鷲のライダモデルを組み込んだプログライズキー。
長時間の異形との戦いを踏まえて長距離飛行や長時間先頭における疲労の蓄積を避ける為の機能が組み込まれているが、結果としてフライングファルコンより総合的に性能は劣っている。
◇リーネス・エグリゴリ（エグリゴリは便宜上のファミリーネーム）
神の子を見張る者において、中級堕天使でありながら聖杯戦争や魔術回路の研究において第一人者レベルの才を見せる、ＡＩＭＳ第一部

隊のリーダー兼保護観察者。
間延びした口調でこそあるが、年齢は年相応だが精神年齢や対応力は年上を思わせる雰囲気を持つ。カズヒとは初対面の時から気の置けない関係。
基本的に研究者などの後方支援型であり、魔術回路は優秀だが戦闘能力はさほど高くない。
……彼女はアイネス・ドーマという前世を持ち、親しい友人達やその子供の来世を探す為に、魔眼を会得して保護するなどといった行動をとっていた。
『仮面ライダーアイネス』
リーネスがザイアから発掘したデータをもとに作ったザイアスラッシュライザーを使用して変身する仮面ライダー。
☆シャイニングホッパー
ＡＢＩＬＴＹ：ＳＨＩＮＩＮＧ　ＪＵＮＰ
起動音声：―Ｔｈｅ　ｒｉｄｅｒ　ｋｉｃｋ　ｉｎｃｒｅａｓｅｓ　ｔｈｅ　ｐｏｗｅｒ　ｂｙ　ｓｄｄｉｎｇ　ｔｏ　ｂｒｉｇｈｔｎｅｓｓ！《ライダーキックは強くなる！　輝きの力を纏って！》
―Ｗｈｅｎ　Ｉ　ｓｈｉｎｅ，ｄａｒｋｅｎｓｓ　ｆａｄｅｓ．《俺が輝けば、闇は消える》
パンチ力：ｊ７，２ｔ　キック力：５４，７ｔ　走力：ｊ００ｍ２，５秒　ジャンプ力：一飛び６３ｍ
ザイアから回収したデータに残されていたプログライズキーのデータをもとに開発したプログライズキー
基本性能がかなり高く、更に一万二千通りの行動パターンからの最適解を見出す機能を持つが、その分肉体にかかる負荷も大きく、また基本性能が高すぎる者との相性が微妙であった為。その後戦闘そのものが最低限な自分が使うのがある意味で安全性が高いということで採用に踏み切った。
必殺技は最適解の応用で相手の判断を狂わせる動作で切りかかる「シャイニングレイン」及び、行動予測で最適解を連続で放つ蹴り「シャイニングレインラッシュ」

☆シャイニングアサルトホッパー
ＡＢＩＬＴＹ：ＨＹＰＥＲ　ＪＵＮＰ
起動音声：―Ｗａｒｎｉｎｇ，ｗａｒｎｉｎｇ．Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｎｏｔ　ａ　ｔｅｓｔ！《警告、警告。これは試験ではない》
―Ｎｏ　ｃｈａｎｃｅ　ｓｕｒｉｖｉｖｉｎｇ　ｔｈｉｓ　ｓｈｏｔ《この一撃から生き残る術などない》
パンチ力：２８，２ｔ　キック力：７２，９ｔ　走力：１００ｍ２，９秒　ジャンプ力：一飛び８１，６ｍ
緊急用の奥の手として開発した、アサルトグリップによる強化形態。
本来は独自の装備で長時間運用を考慮したものだが、リーネスは奥の手として安全機能より高性能化を重視した調整を行ったＡＩチップで制御。反動を無視の攻撃力強化を重視している。
両腕部の自身の光力とライダーとしてのエネルギーを収束転用する「ＳＡアサルトガントレット」により、上級堕天使相当の光力を超収束で疑似的に最上級クラスに上昇。各種機能と同調したピンポイントで攻撃力を上昇。また各部ユニットにより、通常走行では劣るが特殊高速移動や飛行でシャイニングホッパーより高い機動力を発揮する。
またシャインシステムを起動することによる青いエネルギー波動弾「シャインクラスタ」八基による、自在な戦闘も可能とする。
必殺技はシャインクラスタを追撃として刃にしての斬撃「シャイニングアサルトレイン」とシャインクラスタをカタパルトにして放つ飛び蹴り「シャイニングアサルトレインラッシュ」。
◇クックス
ＡＩＭＳ第一部隊に所属する、シンギュラリティに到達したヒューマギア。
料理人として開発されており、大抵の料理はプロとして高水準に作ることが可能。
◇メリード
ＡＩＭＳ第一部隊に所属する、シンギュラリティに到達したヒュー

マギア。
使用人型だが誇り高く、仕える対象に相応の品格を求めている。その為「仕えることと敬うことは別」が基本スタンス。
リーネスの研究の成果でもあり、デミ・サーヴァント・ヒューマギアとして、キャスターのサーヴァントである望月千代女を宿している。

◇キュウタ
ＡＩＭＳ第一部隊に所属する、シンギュラリティに到達したヒューマギア。
健康管理及び衛生兵型であり、現地の応急処置から健康診断まで対応能力は幅広い。
リーネスの研究成果でもあり、デミ・サーヴァント・ヒューマギアとして、ライダーのサーヴァントであるアントニン・ドヴォルザークを宿している。

○聖ミカエル監察団
三大勢力和議におけるコマーシャル活動の一環として、部隊規模で駒王町に派遣される天界・教会側のメンバー　。別名紫藤監察団だが、カズヒのインパクトが強すぎてカズヒがリーダーだとメンバーすらたまに勘違いするのが玉に瑕。
◆紫藤イリナ
原作のヒロインの一人。本作においては単独ではなく自分を隊長とする聖ミカエル監察団として来訪する。

◇カズヒ・シチャースチエ
本作メインヒロインにしてある意味で真の主人公。コカビエル追撃において、正教会がエクスカリバー使いの代わりに派遣―というカバーストーリーでコカビエルに協力して聖杯戦争を起こした学者の調査及び討伐を命じられた、教会暗部組織「プルガトリオ機関」の更なる暗部である、辺獄騎士団ことリマ部隊の隊員。
「正義の味方な必要悪」という在り方を取っており、基本的に他人に

厳しく自分にはもっと厳しい。ただし彼女視点で非のある対応を取らなければ、他者に対する融通は割ときく。リーネスとは初対面でありながら気の置けない関係を築いている。

星辰奏者であり魔術回路を持ち、更に神器を二重保有する実力者。

……その実態は、ミザリ・ルシファーの前世である道間誠明の実妹、道間日美子が誠明の思い付きで転生した存在。幼少期から続いた凌辱と誠明への思慕が暴走したことに端を発する形で破滅した前世もあり、道間田知の笑顔に誓った決意と合いまった自罰感情と邪悪敵対の決意こそが、彼女の根幹となっている。

強い精神力で文字通り肉体性能を向上させる光の使徒にして、驚異的なまでの悪に対する敵意と憤怒で敵を打倒する闇の使徒。その二律相反の相乗効果からくる圧倒的な戦闘能力から悪祓銀弾（シルバーレット）の異名を英雄派に付けられている。

☆神器　剣豪（アーム・ザ・リッパー）の腕

カズヒが保有する神器の一つ。手に持った武器を強化する神器。

カズヒは異界の蔵に格納していた旧ソ連系列の武装を強化して運用していたが、アザゼルの協力により神の子を見張る者製の武装に切り替えている。

★禁手　銀弾（エンド・ザ・リボルバー）の決着武装

対ミザリを主眼に据え、神滅具五種盛りに対抗する為「多機能性と突破力を重視した短期決戦」に比重を置いて至った亜種禁手。

合計六つの亜種禁手を自在に切り替えることを可能としており、すべての禁手は出力に限定すれば高水準。これは数日数か月を可能とする持続時間を削りに削り、連続稼働時間を６０分、最大冷却時間を若干増やした６６分に固定化して伸ばさないことである種のリソース収束を行ったことに由来する。

▼射手（シュート・ザ・スナイプ）の慧眼

銀弾の決着兵装で使用する剣豪の腕の亜種禁手。

自分が持つ火器をより強化すると同時に、発射された弾丸もしくは砲弾がどこに向かって飛んでいくか視認することができる。

体感的には円形であり、よほどのイレギュラーが発生しない限りは

その範囲に命中する。これによりきちんと構えれば即座に狙いを合わせることが可能になる利点を持っている。

▼昇華の星（ステラ・ザ・ブースト）

銀弾の決着兵装で使用する剣豪の腕の亜種禁手。

自身と感応する星辰体を強化することで、星辰奏者としての性能や星辰光を強化する亜種禁手。

感応する星辰体の方を強化することで、星辰体の性質を変えることなく完全上位互換に至ることが可能。加えて己にのみ作用させる為、敵の星辰光まで強化することもない。

▼豪傑の猛攻（スマッシュ・ザ・ウォーリア）

銀弾の決着兵装で使用する剣豪の腕の亜種禁手。

能力は純粋なまでの身体能力強化。昇華の星を使って星辰体を強化して間接的に高めるより、純粋な身体能力では上を行くのが利点。

▼聖印の刃（スティグマ・ザ・エッジ）

銀弾の決着兵装で使用する剣豪の腕の亜種禁手。

能力は刃物の聖剣化。これにより魔性の存在に対する殺傷性を大幅に強化する。また聖剣に使用した場合、更なる性能向上を図ることもできる。

☆神器　異界の蔵（スペイス・カーゴ）

カズヒが保有する神器の一つ。輸送船規模の大容量の異空間と繋がり、自在に物を出し入れ可能になる神器。

ゲリラ時代はこれで圧政者側の物資を奪ってこっそり配るなどしており、あまりの重火器を戦闘でも使用していた。また戦闘以外にもセーフハウスとしてのコンテナハウスなど、割と色々入っている。

☆神滅具　現世聖域の楽園（カテドラル・グレイヴ）

大欲情教団の琉生佐一から、半ば押し付けられるように与えられた神滅具。

カズヒは聖域創造能力を魔術回路と同調させることで、後述の固有結界を聖域で再現する固有聖域という運用方法を確立。これにより固有結界をより燃費のいい形で扱えるようになっている。

『固有結界：極大魔術行使機構（マキシマム・マギステル・ジェネレーター）・道間日美子』
カズヒ・シチャースチエが保有する固有結界。あまりに毒々しい心象風景によって発現するは、カズヒ・シチャースチエの魔術回路を超強化する強化空間。
一小節で儀礼魔術クラスの魔術を行使し、固有結界内部なら魔術回路格子型の魔術では最高難易度の空間転移すら可能とする。ただし魔力の生成量も絶大に強化されているが、固有結界そのものが魔力を多大に消費し、またこの固有結界の本領発揮が大魔術の行使である都合上、消費効率が釣り合っていないのが欠点。
『仮面ライダー道間』
カズヒが滅亡迅雷フォースライザーを使用して変身する仮面ライダー。滅亡迅雷フォースライザー及び、星辰奏者カズヒ・シチャースチエに合わせて専用調整されたプログライズキーを使用しており、カズヒ以外が変身することは事実上不可能。
▽ハウリングホッパー
ＡＢＩＬＴＹ：ＣＲＹ
起動音声：ｉ　ａｍ　ａ　ｓｕｐｐｏｒｔｅｒ　ｏｆ　ｊｕｓｔｉｃｅ　ａｎｄ　ｅｎｅｍｒｙ　ｏｆ　ｅｖｉｅｌ　意訳：私は正義の味方で悪の敵
パンチ力：７，２ｔ　キック力：３６，８ｔ　走力：ｉ００ｍ４，２秒　ジャンプ力：一飛びｍ５６，３ｍ
仮面ライダー道間の基本形態。バッタのライダモデルを調整した星辰体干渉型ライダモデルを使用している。瞬発力重視の脚力強化が施されているが、これは武器戦闘を主体とするカズヒの戦闘能力の補佐を主体とする為で、本命は彼女自身の星辰光を人造惑星の領域に到達させる機能にこそある。
必殺技は高い瞬発力を強化しての飛び蹴り「ハウリングユートピア」及び、高速移動モード「ハウリングディストピア」
★ハウリングホッパープログライズキー
ザイアから回収したシャイニングホッパープログライズキーの一部データを流用した、星辰体感応特化型のプログライズキー。カズヒ

用に徹底的な調整を行うことで感性に至っており、いくつものバッタ型のライダモデルを展開し、捕縛されなければ吹き飛ぶような出力で装甲を出力する。

▽アヴェンジングシェパード

ＡＢＩＬＴＹ：ＲＥＢＥＬＬＩＯＮ

起動音声：Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　ｂａｌｌｅｔ　ｏｆ　ｇｏｄ　ｋｉｌｌｅｒ　意訳：これぞ、神殺しの弾丸也

パンチ力：６，４ｔ　キック力：２２，６ｔ　走力：１００ｍ４，５秒（時速８０ｋｍ）ジャンプ力：一跳び２４，２ｍ

アヴェンジングシェパードプログライズキーを装填して変身する、仮面ライダー道間の対神形態。

カズヒの星辰光そのものを変質させ、全く別の星辰光にするという破格の形態。半面カズヒにかかる負荷が絶大であり、長時間の戦闘は不可能という欠点を持つ。

必殺技はエネルギーで形成した弓で対神の矢を放つ「アヴェンジングディストピア」と、弓型のエネルギーで加速して放つ飛び蹴り「アヴェンジングユートピア」

★アヴェンジングシェパードプログライズキー

仮面ライダー道間―星辰奏者であるカズヒ・シチャースチエ―専用のプログライズキー。

カズヒの星辰光を改竄する機能が組み込まれており、これによりカズヒの星辰光を対神特化型に改竄する。

▽ダイナマイティングライオン

☆カタログスペック

ＡＢＩＬＴＹ：Ｂｕｒｓｔ

起動音声：Ａ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　ｅｘｐｌｐｓｉｖｅ　ｆｏｒｃｅ　ｌｉｋｅ　ｆｉｒｅｗｏｒｋｓ　意訳：花火のようにきらびやかな爆発力

パンチ力：１４，４ｔ　キック力：３６，０ｔ　走力：１００ｍ１，５秒（時速２４０ｋｍ）ジャンプ力：一飛び２８，８ｍ

ディオドラを倒した時に入手した戦利品であるダイナマイティン

グライオンプログライズキーを使用した派生形態。
基本性能は総じて高く、また両腕の連装グレネードランチャーは残弾を気にせず高い火力を発揮でき、更に弾丸も多目的通常榴弾・対人サーモバリック・対装甲形成炸薬弾に切り替えられる為、特定の相手に特化している道間では最も汎用性が高い派生形態となっている。あまりに便利なので破損対策として予備の開発を求められるほど。
必殺技は計四門あるグレネードランチャーから秒間十連発でグレネードを乱射する「ダイナマイティングディストピア」と、蹴りを叩き込んだ基点に超高性能爆弾を生成して起爆させる「ダイナマイティングユートピア」
▽リスターティングホッパー
ＡＢＩＬＴＹ：ＢＩＲＴＨ　ＣＲＹ
起動音声：Ｉｔ，ｓ　ｒｅ　ｓｔｅｒｔ　意訳：これが再出発だ
パンチ力：８，１ｔ　キック力：４０，５ｔ　走力：１００ｍ４秒（時速９０ｋｍ）ジャンプ力：一飛び５８、４ｍ
リスターティングホッパープログライズキーで変身する、仮面ライダー道間の強化形態。
基本性能こそハウリングホッパーを若干凌いでいる止まりだが、この形態の真骨頂は安定性を強化した星辰光に改竄することにある。従来とは異なる形の星辰光の変質による安定性の高い強化と、アタッシュナイダーの本格採用に伴う各種星辰光の限定再現により、必要時にかつての形態のどれかに変化する、基点としての形態となっている。
必殺技はスラスターによる超加速で行う一撃離脱連撃「リスターティングディストピア」及び、全力の飛び膝蹴り「リスターティングユートピア」
▽ジャッジングサマエル
ＡＢＩＬＴＹ：ＧＩＬＴＹ[罪]
起動音声：Ｃｈａｒｇｅ　ｙｏｕ　ｆｏｒ　ｆｒｅｅｄｏｍ.
《自由の対価を貴様に請求する》
パンチ力：６，６ｔ　キック力：３５，５ｔ　走力：１００ｍ４，４

秒　ジャンプ力：一跳び３３ｍ
　英雄派がオーフィスを半減化させる際、どさくさ紛れに宝石魔術の応用で奪ったサマエルのオーラを利用した、対龍特化プログライズキーであるジャッジングサマエルプログライズキーで変身する派生形態。
　サマエルの性質とカズヒの星辰光が性質的に近いこともあり、対龍特攻性能に限定すればアスカロンやグラムを上回る。真っ向勝負なら極覇龍状態のヴァーリを打倒し、天龍クラスのクロウ・クルワッハと戦えるレベル。
　必殺技は広範囲に龍殺しのオーラを放出する「ジャッジングディストピア」及び、オーラを一点収束させた跳び蹴りを叩き込む「ジャッジングユートピア」
『仮面ライダーシルバードーマ』
　カズヒがショットライザーを使用して変身する仮面ライダー。
　道間に比べると出力では劣るが、安定性と安全性ではこちらが数段上となっているのが特徴。これは「自分自身」ではなく「誰かにとってのカズヒ」を守ることは考えるように成れた為であり、同時に本命の為の受け皿でもある。
▽ハウリングホッパー
パンチ力：７．０ｔ　キック力：３５．７ｔ　走力：１００ｍ４．５秒　ジャンプ力：一跳び５４．６ｍ
▽アヴェンジングシェパード
パンチ力：５．６ｔ　キック力：２１．３ｔ　走力：１００ｍ５秒　ジャンプ力：一跳び２１．２ｍ
▽ジャッジングサマエル
パンチ力：６．３ｔ　キック力：３２．４ｔ　走力：１００ｍ４．８秒　ジャンプ力：一跳び３０ｍ
▽リスターティングホッパー
パンチ力：７．８ｔ　キック力：３９．６ｔ　走力：１００ｍ４．２秒　ジャンプ力：一跳び５４．６ｍ
▽ダイナマイティングライオン

パンチ力…１３．２ｔ　キック力…３２．０ｔ　走力…１００ｍ１．８秒　ジャンプ力：一跳び２５．６ｍ

『仮面ライダーリスタートシルバー』

ショットライザー基部にリスタートバックルを装填して変身する、カズヒ側の仮面ライダーリスタート。

こちらは基本性能の低さをカバーすることに特化しており、基本スペックは固定で各種機能を切り替える方針になっている。

必殺技は、ショットライザーから捕縛弾丸を発射し動けなくなった状態で叩き込む蹴り技「～ハイパーメガブラスト」及び、各種機能をオーラの形で増幅付与する強化戦闘モード「～メガブラストフィーバー」。ショットライザー側の必殺技とは異なる仕様もある為、セイバーよりはショットライザー側の必殺技も行う余地がある。

▽デフォルト

パンチ力…２７．３ｔ　キック力…９１．０ｔ　走力…１００ｍ０．９秒　ジャンプ力：一跳び１８０ｍ

◇ヒツギ・セプテンバー

元デュナミス聖騎士団の星辰奏者。世にも珍しい二重神器保有者でもある。

一見するとギャルっぽいがその実常識人側でツッコミ主体。ヒマリ・ナインテイルと初対面で意気投合している。

ヒマリと同じで星辰光を発動できない特異体質だが、そのうえで精鋭部隊であるデュナミス聖騎士団として活動できるだけの戦闘技術の持ち主。

……その正体はバニシングツインであったことに由来する、ヒマリと同じ前世である道間乙女から分かたれた存在。

☆神器　聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）

ヒマリと同じように運用しており、聖剣の強度は伝説級。

☆神器　龍の咆哮（ドラグレイ・カノン）

高位の龍である八面王を封印した、龍の形をした大火力の大砲を具

現化する神器。
ヒマリ張りの魔力でほぼ覇龍状態であり、大火力の連射すら可能とする。
『フライングファルコンレイダー』
フライングファルコンプログライズキーで実装するレイダー。飛行可能な異形が多いメンツとの移動速度を合わせることを踏まえて採用した。
『仮面ライダーナジェージダ』
ＡＩＭＳショットライザーを使用して変身する仮面ライダー。クリムゾンユニットを使っての連携戦闘が主眼だが、これ単独での戦闘も視野に入れられている。アレクサンデル＝アレクサンドロフことナジェージダ＝Ａ＝ドゥーロワの名を関している。
ヒツギの性格から突破力より安定性を重視しているプログライズキー構成なのが特徴的。
☆リベレイティングペレグリン
ＡＢＩＬＴＹ：ＦＲＥＥ
起動音声：Ｇｉｖｅ　ｕｐ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｒｏｓｅｒ：諦めろ、お前は敗者だ
パンチ力：１４．２ｔ　キック力：３９．６ｔ　走力：１００ｍ２秒　ジャンプ力：一跳び２３．１ｍ　飛行速度：マッハ２．２
★リベレイティングペレグリンプログライズキー
鷲のライダモデルを組み込んだプログライズキー。フライングファルコンの改良発展型といえる仕様になっている。
リベレイティングキャットとの同調と連携を視野に入れており、これは後述するクリムゾンユニットの併用を前提にしている為。ボーイングイーグルとも連携が想定されており、穴をカバーするようにスペックが調整されている。
◇アニル・ペンドラゴン
聖ミカエル監察団のメンバーであり、アーサー、ルフェイとは親戚筋にあたる少年。基本的に雑なところはあるが貴人にして才人とし

ての責任感があり、両者のテロ活動を一族の者として責任を感じ、彼らが所属するヴァーリチームに目をつけられているグレモリー眷属のフォローをする為に自薦し認められた。
貴人としての施しを考慮した結果、外来性の害獣駆除を兼ねた薫製作りが趣味であり特技。燻製業者として食っていけるレベルの出来を家庭用の機材で作れることから、兵藤邸に住むにあたって要望が過剰に叶えられて燻製専用のプレハブ小屋が増設されたほど。
『ラッシングチーターレイダー』
ラッシングチータープログライズキーで実装するレイダー。高速で移動しながらの近接戦を基本として開発されている。
移動性能の強化に重点が降られている為武装の類はないが、その分身体性能の強化度合いはレイダーとしては高い部類に属する。こと移動速度は高水準であり、高速戦闘に特に優れた能力を発揮する。
必殺技は高速移動モードに突入し、音速超過の速度で移動する「ラッシングボライド」

◇ルーシア・オクトーバー
聖ミカエル監察団のメンバーであり、リュシオン・オクトーバーの実の妹。アニルとは同じ部隊に属していた。
幼い頃から年齢以上に泰然としたリュシオンの影響か、一言でまとめるならばできた妹というべき少女。自らも兄を誇りにしており「私の兄はリュシオンですから」が口癖になっているほど。反面許容量を超えると一気にバグり、心神喪失に近い状態となりえる。
『クラスカード：聖バルバラ』
【クラス】アーチャー
【ステータス】
筋力Ｄ　耐久Ｃ　敏捷Ｃ　魔力Ｃ　幸運Ｃ＋　宝具Ｂ＋
【クラス別スキル】
対魔力：Ｂ＋
魔術詠唱が四節までの魔術を無効化可能。
単独行動：—

クラスカードの性質もあり、事実上失われている。

【保有スキル】

聖人：Ｂ－

聖人として列聖された存在を宿していることに由来するスキル。

陣地作成：Ｄ

バルバラが砲兵の守護聖人かつ建築家の守護聖人でもあることに由来するスキル。

霊的加護をもたらす砲撃陣地を作成することが可能。夢幻召喚の性質もあって弱体化しているが、

矢避けの加護：Ｅ＋

砲兵の守護聖人であることに由来するスキル。

遠距離攻撃に対して高い対処能力を発揮し、範囲攻撃や流れ弾にしら対応可能な人間アクティブ防護システムと化している。ちなみにこれでも夢幻召喚の影響で低下している。

【宝具】

砲撃聖女（サンタ・バルバラ）

対軍宝具　ランクＢ＋　レンジ：１～９９　最大補足：８０人

砲兵の守護聖人であり、そこから転じて火薬庫に像が置かれるばかりか火薬庫そのものを「サンタ・バルバラ」と呼ばれるようになったことに由来する宝具。

これらの性質を逆説的に運用することで、彼女そのものが火薬庫にして砲兵へと変化。瞬時に火薬使用兵器を具現化し、神秘の塊として超強大化した状態で扱う。

通常時においては魔力消費を抑えることも踏まえて歩兵携行火器止まりだが、本気モードならカノン砲どころか列車砲を具現化して発射することも可能。瞬間運用に限定すれば奇跡の行使で一人で運用するという真似すらできる。

『シューティングウルフレイダー』

シューティングウルフプログライズキーを使用して実装するレイダー。

○リアス・グレモリー眷属
◆リアス・グレモリー
原作メインヒロイン。
この作品では星辰奏者の資質を持っていたことから、基本性能が大幅に向上。味方がいればいるほど更なる力を獲得できるようになっている。
★侯爵礼装（ガモリー・サーコート）
劣化再現が限界の赤龍帝の籠手及び時空を支配する邪眼王を、組み合わせることで具現化する鎧。
放出する闇で周囲を減速させ、譲渡の要領で少数を例外にすることができる。鎧としての基本性能も高い、リアスが持つ切り札の一つ。
◆兵藤一誠
原作主人公であり、本作においてももう一人の主人公ポジション。
神様転生者の影響で生まれた、突然変異型の魔術回路持ちであり、それが理由でシャルロット・コルデーのマスターに選ばれる。そしてハーレム王っぷりを最大限に発揮し、彼女と二人三脚で前人未到の赤龍帝となった。
シャルロットのマスターとして責任感を持ったことで変態行動をある程度自粛することに成功。ただし極限の頂に立つ変態ゆえに、現段階では心因性の引き付けを結構な頻度で起こす天丼ネタを保有してしまった。
★禁手　揺り籠たる赤龍帝の鎧（ブーステッド・クレイドル・メイル）
シャルロットの亜種禁手との影響で疑似的に到達した、赤龍帝の籠手が亜種禁手。
元々は自分の女に格好つけたいかつての宿主が至ったもので、封印系神器の特性を利用して他者を取り込む亜種禁手。ただし後述の力を生かせなかった為、基本性能では通常禁手より劣っている。
実は取り込んだ存在の力を赤龍帝の力で増幅することが可能。これによりシャルロットとの一心同体時には双方の神滅具が最大効率で相乗効果の補正を発揮。この場合の戦闘能力は通常禁手に迫り、更にスパロボ風に言うなら「全攻撃クリティカルヒット＋特殊防御スキ

ル発動率倍増」とでもいうべき強化が施される為、通常禁手より遥かに強い。

★亜種禁手　比翼連理たれ赤龍帝（ブーステッド・フリーバード・メイル）

相方と言えるレベルの仲間を持っていた歴代が至った赤龍帝の籠手の亜種禁手。事前に契約を交わした対象一人と赤龍帝の力を分け合うことで、赤龍帝の力を宿した軽装鎧を身に纏う。

総合的には弱い部類だが、赤龍帝の力を分割することができる為、シャルロットと別行動する時などに設定している。

★亜種禁手　覇道織りなす赤き龍帝（ジャガーノート・ギア・スケイルメイル）

当初から覇龍を力として使用することを念頭に置いた宿主が至った亜種禁手。

基本性能は亜種禁手であることを踏まえても低いが、覇龍におけるデメリットを可能な限り削減する機能を盛り込んでいる。これにより覇龍の安定性と到達速度が異常なまでに高い為、当時の白龍皇相手の戦いも、覇龍合戦の末に消耗速度の差で粘り勝ちした。

★亜種禁手　羯磨に託す赤龍帝（ブーステッド・カルマ・スケイルメイル）

自力で禁手に至ったこともあって成長し、独自の亜種禁手として発現させた形態。

究極の羯磨と同期する形で赤龍帝の鎧を羯磨の保有者に纏わせる亜種禁手。

★亜種禁手　閃光の如き赤龍の覇道（ウェルシュ・ライトニング・ドレッドノート）

自力で禁手に至った成長によって到達した、独自の亜種禁手。

能力は極短時間限定で覇龍と同等の能力ポテンシャルを発揮すること。到達時点（禁手持続時間数時間）では一分も続かなかったが、持続時間を延ばす試みがされていく。

★亜種禁手　赤龍帝が砲手（ブーステッド・ギア・スケイルキャノン）

即興でイッセーが発動した、独自の亜種禁手。

能力は右腕に展開される、砲撃に特化した赤龍帝の力の流用。放たれる砲撃は真女王のクリムゾン・ブラスターに次ぐが、特化しすぎて

おりイッセーの戦闘スタイルとかみ合ってない為、瞬間的な運用に限る。

▽禁断なる三叉の赤龍報奨（イリーガル・ギフト・トリアイナ）

赤龍帝の三叉成駒を、シャルロットの禁手と併用することで変質化させた力。

それぞれの昇格に合わせた強化外装を展開し装着する能力。真女王と併用して三つすべてを別の人物に装着させるという荒業も可能。ただし消耗速度は尋常ではない為、使いどころを間違えると致命的な損失を引き起こしかねない。

▼聡き赤龍の魔導士（ディアボロス・ウェルシュ・ウイズマン）

本のように、重層化されたフィンを持つ鎧を全身に纏う、僧侶の力を増幅させた報奨。

疑似的に絶大な魔力生成量を獲得し、魔力運用能力を増幅させる形態。その性質上魔力を運用する術に長けた者が使用するべき形態であり、イッセーにはあまり向いていない。

▼速き赤龍の軽騎兵（ライトニング・ウェルシュ・ドラグーン）

スラスターと一体化を通り越し、鎧型のスラスターを全身に纏う、騎士の力を増幅させた報奨。

絶大な推進力を各部に放つことで高速移動を行うことができる形態。反面分厚いスラスターゆえ運動性を発揮するには繊細な動作が必要で、テクニックに欠けるイッセーに向いていない。

▼猛き赤龍の重戦士（ギガンティス・ウェルシュ・ウォーリア）

全身を龍のオーラで包み込み、強化外骨格のように運用する、戦車の力を増幅させた報奨。

イッセーの気質と合っていることもあり、総合的にはこれが一番バランスがいい。ただし爆発力では三叉成駒の方が優れている為、イッセーが自分で使う分には不向き。

▽赤龍婚乳（バス・トライク）

兵藤一誠が会得し、しかし同時に禁術一歩手前と判断した新たなる乳技。

愛しく思う相手の乳房に絶大なオーラを籠手越しに送り込むことで、その女性を疑似赤龍帝に変質させる技。

半永久的に効果が持続することが特徴であり、これにより数段階の倍化、障壁などの透過、それらの力の譲渡を可能とし、基本性能も一段上昇する。反面高位の龍種となってしまう都合上、龍殺しが特攻となるなどデメリットも増大。その為イッセーも主要能力として運用することは避けている。

◇シャルロット・コルデー

コカビエルが起こした聖杯戦争で召喚され、紆余曲折あってイッセーがマスターになったサーヴァント。

生前の経験から自己否定精神が強いが、それゆえに一歩引いた視線や冷静な判断ができる。また戦闘ではイッセーと合一し、日常生活でフォローをすることも多い為、ドライグとは別の意味で相棒的存在。

『サーヴァントステータス』

【クラス】アサシン

【マスター】兵藤一誠

【性別】女

【属性】中立・悪

【ステータス】

筋力Ｅ　耐久Ｅ　敏捷Ｄ　魔力Ｅ　幸運ＥＸ　宝具Ａ＋＋

【クラス別スキル】

気配遮断：Ｄ

自身のサーヴァントとしての気配を消すスキル。隠密行動に長けているが、彼女の暗殺は真正面から行った為さほど高くない。

【保有スキル】

カーンの乙女：Ａ

その容姿と、処刑の際にも同様を見せなかったことからくるスキ

ル。魅了とカリスマの複合スキルであり、威圧といった精神干渉スキルに対しては同ランクのキャンセルスキルとして機能する。
単独行動：ＥＸ
完全独断で暗殺を完遂したことから会得したスキルであり、聖杯によって大幅に強化されている。
マスターをイッセーとしている場合に限り、魔力負担や聖杯の加護無しに常時現界を可能とする。その為マスターの全力魔術行使なども可能だが、マスターの一誠は悪魔でありながら魔力に掛ける為真価を発揮できない。
【宝具】
暗殺の天使（エンジュ・カルマ）
対人宝具　ランクＡ＋　レンジ：１～１０　最大補足：一人
本来ありえないことを一挙に成功させたその天運と、その根幹ではあるが当人も自覚していなかった異能が融合劣化した宝具。
あらゆる幸運判定に凄まじい補正を与えることで、アサシンは実戦経験が全くないにも関わらず、下位の戦闘系サーヴァントと渡り合える程度の戦闘が可能になる。
暗殺という手段においてならば更なる効果が見込めるが、アサシン自身が己の暗殺を後悔している為、自発的に運用することはない。
そして、この力の本質はそんなものではなく―
天使の羯磨（ロス・アズラ）に導かれし赤龍帝（イグ）
対人宝具　ランクＡ＋＋　レンジ：１～１０　最大補足：一人
暗殺の天使の本領である神滅具、究極の羯磨の亜種禁手。兵藤一誠を救いたいと願ったこの霊基のシャルロットのみが可能とする、唯一無二の亜種禁手。
能力は赤龍帝の籠手の可能性操作。歴代赤龍帝の怨念と化した残留思念が籠手にあることを逆手に取り、歴代の経験から赤龍帝の籠手が持つ禁手の可能性を強制的に具現化する。
これにより、疑似的な禁手という形ではあるが、かつて歴代の赤龍帝が至った亜種禁手に兵藤一誠を至らせることが可能。将来的に一誠が禁手に到達した場合、性能が更に向上する。

【ｗｅｐｏｎ】
『無銘・包丁』
暗殺に使用した包丁。
その性質上常に戦闘時に呼び出せる為、アザゼルの提案で包丁による近接戦闘も研究している集団に指導を受け、戦闘技術が数段向上している。
◆姫島朱乃
『クラスカード：倭姫命』
【真名】倭姫命
【クラス】キャスター
【ステータス】
筋力Ｃ　耐久Ｃ　敏捷Ｂ　魔力Ａ＋　幸運Ｂ＋　宝具Ｃ＋＋＋
【クラス別スキル】
陣地作成：Ａ
自らの有利な陣地を作り上げる能力。
伊勢神宮を作り上げた彼女が作り上げる陣地は、もはや陣地を超え要塞……否、文字通りの神殿となりうる。
道具作成：Ｃ＋
魔術的な道具を作成する技能。
鬼道に長ける彼女は、霊的存在の加護を与えた呪物を創り出すことに長ける。
【保有スキル】
鬼道：Ａ
日本古来の魔術体系といえる鬼道を習得している。
性質上神道という信仰に連なることから、その出力は極めて高い。
神性：Ｂ＋
天照大神の直系。当人も個別に信仰を集めていることから高ランク。
神託：Ｃ＋
啓示に極めて酷似したスキルでその状況での適切な判断ができるようになる。

状況次第では極めて文字的言語的な神託を授かることもあり、その場合は他者に対する説明も比較的容易となる。反面使用者の朱乃が悪魔であることからか、スキルそのものは常態では一段低下している。

【宝具】

伊勢の神風（いせのかむかぜ）

対軍宝具　ランクC＋＋＋　レンジ：0～99　最大補足：1000人

倭姫命が天照大神から託されたとされる奇跡の具現。

高度な暴風雨制御能力であり、レンジ内に突如として緊急避難警報レベルの暴風雨を発動可能。

収束させることで雷・水・風の収束砲撃としても使用可能であり、高い攻撃力を発揮。応用することで機動力の強化も可能であり、意外と汎用性が高い

◆木場祐斗

☆聖魔剣　星極剣（サンライズ・アルティマ）

基準値：E

発動値：B

強敵及び、星辰光すら使う敵に対抗する為に作り出した聖魔剣。神星鉄と天閃の聖剣を参考にした物。

星辰体との急激すぎる感応とそれと同調する加速力強化の疑似星辰光により、規格外の移動速度とそれに伴う攻撃力の強化を行う聖魔剣。反面反動があまりに大きすぎる為、常に回復し続けなければ使用と同時に死亡するほどの、文字通りの最終手段。

▼残神　聖魔宿す鞘なる鎧（シースメイル・ビトレイヤー）

鋼色の飛沫と共に作り上げる、木場祐斗の残神。

聖魔剣の能力を持つ、鎧を創造する。この鎧は鞘の性質を持ち、剣を格納することで、性能を神滅具の全身鎧型禁手レベルにまで高めることが可能。

『クラスカード・ベディヴィエール』

【クラス】セイバー
【属性】秩序・善
【ステータス】
筋力C　耐久B　敏捷B　魔力C　幸運C　宝具A＋
【クラス別スキル】
対魔力：B
二小節までの魔術を無効化する。儀礼魔術や大魔術でも傷をつけることは難しい。
騎乗：B
魔獣・聖獣ランク未満の騎乗物を乗りこなす。
【保有スキル】
心眼（偽）：C
虫の知らせ、第六感により危険察知。
王墓の守護者：B＋
アーサー王の墓を守護した逸話に由来するスキル。
護国の鬼将と守護騎士の複合スキルと言ってもいい物であり、指定した地点もしくは人物を防衛対象とし、それを守る限り狂化Bに匹敵するステータス強化及び、心眼（偽）をワンランクアップさせる。
【宝具】
七極は三度我が手に（エクスカリバー・ヴィヴィアン）
対物宝具　ランクA＋　レンジ：不定　最大補足：一本
その伝承においてエクスカリバーの返却に由来する宝具。
三回だけ伝説の聖剣であるエクスカリバーを持ち出すことができる宝具。
◆ゼノヴィア
『クラスカード：源為朝』
【クラス】アーチャー
【ステータス】
筋力B　耐久C＋＋＋　敏捷A　魔力B　幸運D　宝具C＋＋
【クラス別スキル】
単独行動：B

マスター不在・魔力供給無しでも二日は限界可能なスキル。クラスカード化に伴い魔力消費に低下を抑える形で利用。

対魔力：Ｂ

二小節までの魔術を無効化する、大魔術ですら倒されなくなるスキル。

【保有スキル】

無窮の武練：Ａ＋

一つの時代で無双を誇った武勇に由来するスキル。

いかなる精神状態であろうと戦闘技術が劣化しない。

直感：Ｂ

本能的に戦闘時に最適な未来を察する能力。

魔の七十二柱：Ｅ

フェニックス家の悪魔の血が極僅かに流れていることに由来するスキル。

これにより負傷や病に対する耐性があり、本来治癒できない傷もある程度なら回復することができる。加えてゼノヴィア自身が転生悪魔である為、少しだけ効果が上がっている。

【宝具】

鎮西八郎・弓張月

対艦宝具　ランクＣ＋＋　レンジ：５～８０　最大補足：一隻

その圧倒的武勇及び、扱ったとされる特別製の弓に由来する宝具。

真名解放と共に伝承通りの「四人で支え最後の一人が弦を引く」ほどの大弓を具現化。同時に「徳川家康が槍と勘違いするほどの巨大な矢」を具現化することで放つ滅殺弓術。

弓矢だけでなく弓術も踏まえた宝具であることから、魔力消費は平均的なＣランク宝具レベルで発動可能。しかし攻撃力はランク通り。更に同等の矢を用意することができるのなら、それに矢の神秘を上乗せすることで更なる攻撃力上昇を可能とする。

極聖弓張槍ヶ月

対艦宝具　ランクＡ＋＋　レンジ：５～５５　最大補足：一隻

鎮西八郎が弓張月を利用した応用技。
デュランダルと六天聖剣・破壊を超巨大なワイヤー付きの矢に変えることで放つ、極限滅殺弓術。
本来なら不可能極まりない方法だが、為朝の宝具が矢を槍として使うことが可能なこと、デュランダルがかつてヘクトールが使った投槍と同一視されることもある二重の効果によって発動可能になった、特殊究極奥義。脳筋と脳筋による文字通りの悪魔合体が産み出した必殺奥義であり、とあるテクニックタイプ増員思考の胃を巻き込んで敵を盛大に破壊する。

○その他関係者

◇南空鶴羽（みそらつるは）
ザイア時代に和地と同様の警戒心を持っていた、ＡＩＭＳ第二部隊の少女。カズヒやリーネスと非常に仲が良く、ツーカーの関係をすぐに築き上げた。
人生経験が年齢不相応に豊富な側面を持ちながら、同時に地金がポンコツ気味。また和地とはザイアで数少ない本音を明かせる相手だったこともあって好意を抱いている（あと割とすぐ見抜かれる）が、当人としてはカズヒを優先してもらいたいと思いつつ、リーネスから聞いた事情から非常に頭を悩ませている。
そしてその隠された秘密は、カズヒ達と同様に転生した存在。道間七緒という全ての元凶といえる者の娘であったことを背負いながらも、それでも前を向こうとしている女性である。

『固有結界・英傑乱舞合戦譚』
南空鶴羽―そしてかつての道間七緒―が保有する固有結界。パスを経由して繋がりを持ったサーヴァントを登録し、限定的な影として宝具の運用も可能な状態で疑似召喚する固有結界。
心象風景は荒れたところが点々としている、月だけが浮かぶ夜空の草原。
宝具の投影はこの固有結界の体内発動に由来する物。固有結界そ

のものはサーヴァントの影の連立召喚を可能とするものであり、負担は大きく軽減するが存在する為、登録したサーヴァントすべての影を召喚できるわけではないなど、強力極まりないが癖の強い固有結界。シャドウサーヴァントも一種の特殊クラスで召喚されるものであり、宝具も特定のクラスだからこそ使える類は持ち込めないなど問題点も多い。

ただし鍛えることでより成長する余地があり、疑似サーヴァント・デミサーヴァントに自身を変化させることも理論上は可能。

★詠唱

遠からん者は音に聞け。近くば寄って目にも見よ。

我が心を照らし刻まれた、偉大なる栄達は此処に在る。

我が闇を切り、我が光となり、そして我が道を切り開いた伝説が今、汝が前に現れん。

常世全ての善と悪、それを見定めん天秤の守護者。

我が運命を託すに能う、汝の運命（さだめ）を今ここに。

満ち足りた七つの時は今ここに、戦の初めに破却されん！

世界卵、外界浸食。

心・象・顕・現

固有結界――英傑乱舞合戦譚（えいけつらんぶかっせんたん）

『仮面ライダーファスト』

Ｄ×Ｄリモートライザーで鶴羽が変身する仮面ライダー

☆コーリングホッパー

アビリティ：ＭＡＧＩＣ　ＪＵＭＰ

起動音声：Ｄｏｎ，ｔ　ｌｏｓｅ　ｆｒｉｅｎｄｓｉｐ．Ｐｒｏｔｅｃｔ　ｈｅｒ　ｈｅａｒｔ．　意訳：　友情を失うな。彼女の心を守れ

パンチ力：８，１ｔ　キック力：４４，８ｔ　走力：１００ｍ秒４，２秒（時速）ジャンプ力：一跳び７２，２ｍ

仮面ライダーファスト用に開発された専用プログライズキー。その性質上、鶴羽以外の運用がほぼ考えられていない。

鶴羽の固有結界を発展拡張させる、機械演算型の儀礼魔術発生機構

を組み込んでいる。これにより短時間だがライダモデルに宝具を使用させるといった拡張発動を可能とする。
必殺技はライダモデルを展開し、宝具の特性を付与することで高く攻撃を行う「コーリングチェイン」及び、ライダモデルの蹴りで加速させる形で「コーリングチェインスマッシュ」を保有する。

◇枉法(おうほう)インガ
和地が幼少期の時のお隣さんだった女性。和地と別れた後に二転三転する人生経験を送りディオドラの眷属になっていたが、カズヒのアドバイスを受けた和地の強引な引っ張り上げにより、刑罰の一環という形で他の任意者と共に兵藤邸のメイドとして就労中。和地が体を張って男を見せたこともあり攻略済みとなっている。
ディオドラのところに居た時は悲観して暗かったが、根はノリが軽めでボーイッシュな少女。またディオドラの眷属だった時の経験から、エロ絡みでぶっ飛んだ展開に対する対応力が一番高い。

☆人工神器　銀隕(サテライト・クリス)の共剣
敵の強化に対応するべく、インガが求めて運用する人工神器。腕輪型になっており、起動するとワイヤーで繋がる形で短剣が形成される。
能力は短剣を基点とする形での星辰光の発動であり、その為専用の発動体となっている。これ指定登録された人物の星辰光を短剣を基点とする形で発動するという者で、一定範囲内に登録者がいて星を発動させるという条件が成立して初めて機能する。
その性質上インガの星以上の性能を発揮することはできず、低い性質は低いままという完全下位互換。加えて他者の星を短剣を基点として運用する為、制御面が非常に難のあるものとなっており、安定性や使いやすさを重視する神の子を見張る者の主体プランからは大きく外れている。その為開発はリーネスがインガ専用に開発した特注品であり、欠点はインガの極まって高い操縦性に頼る形で凌いでいる。

◇リヴァ・ヒルドールヴ

和地が幼少期の外国語講座の講師であり、アースガルズ主神オーディンが、第一次世界大戦前に付き合っていた女性との間に生まれた女性。精神的な未熟から半世紀以上放浪していたが、和地の何気ない言葉で自分を見つめ直してアースガルズに戻れた為惚れ込んでおり、ロキとの決着がついた後は兵藤邸に移り住んでいる。

長い放浪生活でそれなりの性経験はあるが、メンタル的にも実体験的にも浅めな為、からかうと他の濃い経験者の反応で自滅するタイプ。

放浪生活の経験などを活かし、地脈の力を放つ大地の砲台を作る戦闘を得意とする。またロキの絡め手も兼ねた対応で、独自の仮面ライダーに変身する。

『仮面ライダーグリームニル』

「仮面を被る者」を意味するオーディンの呼称を冠した仮面ライダー。その名に違わぬ特徴として、複眼が左側一つで右側が装甲と一体化した特殊センサーになっていることが特徴。

神具アスガルドライバーにスキルヴィングゴッドプログライズキーを使用して変身する。ロキが本命のプランを引き起こす前に開発した、試作型の仮面ライダーであり、あえてオーディンの隙を作る為にリヴァに与えている。

☆スキルヴィングゴッドプログライズキー

ＡＢＩＬＴＹ：Ｏｄｅｎ

起動音声：Ｉｔ，ｓ　Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ　ｏｆ　Ａｓｇａｒｄ

主神オーディンの力を再現したライダモデルを組み込んだプログライズキー。運用にはオーディンに連なる特性が必要であり、それゆえに高い性能を発揮する余地がある。また飛行性能をデフォルトで持つ異形が使用する為、走力やジャンプ力にリソースを割かないことで高い性能を発揮している。

肉体の同調やドライバーなどの調整によって進化を続けることが可能であり、高い戦闘能力を発揮できる。ただしロキはシステム根幹にバグをわざと仕込んでおり、本領の性能が発揮できないように細工をしている。また気づかれて解除されたとしても、システム上変身者

が本気を出して変身した瞬間に、レベルの急上昇による肉体の負担で動けなくなるというトラップが存在。テストレベルの状態では上昇しない為気づかれ難い。

必殺技は両足を揃えてオーラを収束させて放つドロップキック「スキルヴィングディストラクション」。フェーズが上がるごとに一段上のチャージで攻撃力を数段あげることが可能になり、フェーズが上がるごとにチャージ時間も短くなっていく。

★レベル１
パンチ力：２３，１ｔ　キック力：４７，６ｔ　走力：１００ｍ１，５４秒　ジャンプ力：一跳び３０，８ｍ

★レベル２
パンチ力：２６，４ｔ　キック力：５４，４ｔ　走力：１００ｍ１，３２秒　ジャンプ力：一跳び３５，２ｍ

★レベル３
パンチ力：２９，８ｔ　キック力：６２，０ｔ　走力：１００ｍ１，１５秒　ジャンプ力：一跳び４０，２ｍ

★レベル４
パンチ力：３４，０ｔ　キック力：７０，８ｔ　走力：１００ｍ０，９９秒　ジャンプ力：一跳び４５，９ｍ

★レベル５
パンチ力：３８，８ｔ　キック力：８０，８ｔ　走力：１００ｍ０，８５秒　ジャンプ力：一跳び５２，４ｍ

★レベル６
パンチ力：４４，３ｔ　キック力：９１，５ｔ　走力：１００ｍ０，７３秒　ジャンプ力：一跳び５９，８ｍ

◇ベルナ・ガルアルエル
禍の団の英雄派として和地と出会った少女。後継私掠船団のアーネ・シャムハト・ガルアルエルの実妹でもあり、悪魔の先祖返りでもある。
ヨーロッパから移民したアフリカ在住の少女であり、一発当てた輸

送業の両親が内乱で死亡後、スラムや娼館で頭角を現すアーネに引っ張られるまま禍の団に参加。和地に妙に意識を向けられたことが縁で春菜と友人になり、春菜の最後の戦いでカズヒに説教されて和地と語り合ったことから、自分の意志で選択することを決意し、禍の団を離反する。

基本的に水や氷を主体とする魔力運用での戦闘を行う。更に新たなアプローチとして水蒸気を組み込んでおり、スタイルとしては高機動砲台というべき戦い方を確立させている。

◇成田春菜

冥革連合盟主であるヴィール・アガレスの眷属だった、和地の幼馴染。

幼少期に和地に助けられた経験から、和地に胸を張って並び立てるようになりたいと猛特訓するも、長い年月で原点を忘れたうえで酷い敗北を喫したことで心が折れる。

しかしそれでも朽ちきらない精神で禁手に至ったことから、ヴィールが自分を添え木にする形で眷属にスカウト。

そんな来歴から迷走して和地と何度も激闘を繰り広げ、またベルナと友人になる。最終的にカズヒが説教（物理）を敢行して、漸く根源を再確認。悩んだ末に覚悟を決め、ヴィールに立ち向かい離反する。

☆神器　赤き炎の腕（アーム・ファイヤ）

属性系神器の一つ。右腕に赤い炎を纏う神器。

★禁手　赤き紅炎の支配者（ルーラー・オブ・ファイヤ）

赤き炎の腕の亜種禁手。能力は別の赤き炎の腕を取り込むことによる強化特性。

これにより十数個の赤き炎の腕を保有しており、高位神器レベルの性能に到達している。

★禁手　赤き火炎の双腕（ジェミニ・オブ・ファイヤ）

赤き炎の腕の通常禁手。能力は炎を両手に纏えるようになること。単純に手札が増え、かつ出力も増加する為シンプルに強力な禁手。

★禁手　赤き灼熱の魔剣（ブレイド・オブ・ファイヤ）

赤き炎の腕の亜種禁手。能力は右腕を基点にするバーナーブレイド。
高圧の炎による溶断なので物理攻撃はすり抜けるが、高圧ゆえに圧力で弾き飛ばされる余地が存在する。また赤き紅炎の支配者に由来するため、リーチは数十メートルまで伸ばすことが可能。
★禁手　赤き爆炎の豪雨（スコール・オブ・ファイヤ）
赤き炎の腕の亜種禁手。能力は爆発する火球の大量生成。
基本的に直射しかできないが、爆発半径と数でカバーする亜種禁手。その砲撃力は迫撃砲一個連隊と形容するべき火力であり、有象無象の殲滅に適している。
★禁手　赤き熱波の城塞（ラウンド・オブ・ファイヤ）
赤き炎の腕の亜種禁手。能力は炎の空間の生成。
火力はさほどなく、むしろ炎という具現化をするには範囲を半径１０ｍ未満にする必要がある。半面ただ熱い空間にするというだけなら、半径数百ｍにすることも可能であり、持続時間も長いため、極寒地域でのセーフゾーン生成などに効果的。
★禁手　赤き熱風の飛翔（スラスト・オブ・ファイヤ）
赤き炎の腕の亜種禁手。能力は高速飛翔を可能とする推進力の確保。
最高速度に限定すればＭ３を超える最高速度を発揮し、更に噴出点を瞬時に変えることで、肉体の損壊を考慮しなければ驚異的な旋回速度を発揮できる。
★禁手　赤き爆熱の砲撃（ブラスト・オブ・ファイヤ）
赤き炎の腕の亜種禁手。能力は炎を圧縮した砲撃の投射。
極めて絶大な火力を誇り、赤き紅炎の支配者抜きでも最上級悪魔の領域を狙えるほど。支援によりいくつもの援護を受けている現状なら魔王クラスにすら届くが、負担が大きい為連射は困難。
★禁手　赤き熱愛の餞別（マリッジ・オブ・ファイヤ）
赤き炎の腕の亜種禁手。能力は九成和地の魔術回路に上乗せする灼熱特性。
特殊性が強いうえに和地の禁手適性の無さゆえに瞬間的だが、一時

的にＡランクの魔力放出（炎）を具現化することが可能という利点を持つ。

◇道間乙女

ヒマリとヒツギの前世でもあり、九成和地の前世の母親でもある女性。

本来その特殊性から復活はあり得ないとされていたが、あまりにも数多くのバグの発生により人格を確立。その後は「カズヒの疑似サーヴァントでもあるヒツギとヒマリの共有多重人格かつ、存在そのものが翠星晶鋼系星辰光」とでも言うべき、書いてても訳が分からなくなりそうな存在として確立した。

『疑似サーヴァント：ベアトリーチェ』

本来カズヒの夢幻召喚となるはずだったサーヴァント。だが存在そのものがマスターの亜種固有結界たるベアトリーチェと元から固有結界を持つカズヒの間でバグが発生し、そこにハインリヒによってダンテの「対象の心から天国に向かう地獄と煉獄」を具現化する宝具―すなわち一種の固有結界―を「入っている部屋を範囲」として―部屋にヒツギとヒマリがいる時に―喰らったことで、多重バグが発生。ヒツギとヒマリの星辰体結晶化能力たる星辰光の影響もあり、二人の共有型別人格として彼女が具現化する為の芯とでも言うべき状態になる。

『サーヴァントステータス』

【クラス】アルターエゴ

【真名】ベアトリーチェ

【性別】女

【身長・体重】１６７ｃｍ・５５ｋｇ

【属性】中立・善

【ステータス】

筋力Ｄ　耐久ＥＸ　敏捷Ｄ　魔力Ａ＋＋　幸運Ｅ　宝具ＥＸ

【クラス別スキル】

運命の淑女：ＥＸ
アルターエゴが保有する特殊スキルであるｉｄｅｓの一種。変化スキルが変質した物であり、同時に宝具である神曲・淑女再会の一部でもある。
マスターにとってのベアトリーチェに姿を変化、それに合わせてスキルやステータスに多少の変化がみられる場合もある。人格もある程度は影響を受けるが、これに関しては神曲・淑女再会が完成されるまでは、あくまで「サーヴァント」ベアトリーチェとして固定される。
【保有スキル】
神曲魔術：Ｃ＋
神曲・再開奇譚の応用による旅路の再現。
神曲における天国を魔術的に再現することで、攻撃や支援に転用する。また天国の魔術的再現であることから、それによる攻撃は魔性に対して攻撃力が上昇する。
ベアトリーチェは天国でダンテを待つ淑女であることから天国の再現しかできず、地獄や煉獄の再現は不可能といえる。
精神浄化：Ｃ
天国にて詩人を待つベアトリーチェは、逆説的に罪業を持たないという形で会得するスキル。
悪性に繋がる精神状態になりにくく、例えなっても急速に回復する。当然だが精神干渉に対する強いキャンセルスキルにもなり、間接的に低ランクの冷静沈着スキルとしても機能する。
魔力泉：ＥＸ
絶大なまでに魔力の生成および蓄積に特化した魔術回路を保有する。サーヴァント「ベアトリーチェ」ではなく依り代「道間乙女」が保有するスキル。
仮に通常のサーヴァントとしてマスターと契約した場合、その絶大な魔力生成力からマスターは存続の為に送った魔力の数倍を常時供給されるようなレベル。
【宝具】
神曲・淑女再会（ベアトリーチェ・エンピレオ）

対心宝具　ランクＥＸ　レンジ：―　最大補足：一人

ダンテ・アルギリエーリの著作である神曲に由来する宝具。

アルターエゴはベアトリーチェだけではなく、数多くの物語で語られる同種の幻霊の集合体。その実態は「旅路の果てに巡り合う女性」という概念による固有結界であり、召喚者にとってのそれを模した外見として呼び出される。その後聖杯戦争という「旅路」を魔術詠唱や儀式として成立させ、マスターがある種の悟りともいえる旅路の終焉を遂げることで、英霊召喚儀式を応用する形で巡り合う淑女として確立する。

設定資料集　味方陣営編

◎将来的D×Dメンバー

○若手四王

●サイラオーグ・バアル眷属

◆サイラオーグ・バアル

★亜種禁手　鋼獣纏う獅子王の皮鎧（レグルス・メイル・レザーレイダー）

ヴィールとの戦いにおいて意識を失い、母親の激励を聞いて覚醒したサイラオーグが変化させた、獅子王の剛皮の進化形態。

装甲が薄くなり総合性能は剛皮の9割程度に下がった代わりに、腰部にプログライズキーを装填するレザーライザーが出現。プログライズキーもしくはゼツメライズキーを装填することで、レザーライズによる顔面を隠す仮面を含めた追加装甲を纏うレザーレイダーに実装する強化形態。

▽ダイナマイティングライオン

カズヒが戦闘中に弾き飛ばされた物を使用した、初実装形態。

サイラオーグの気質や禁手の影響から、全身にリアクティブアーマーを装着して殴り飛ばす近接重装甲型として実装。また爆発性を調整することで、ロケットモーターとして使用することも可能となっている。

『仮面ライダーレグルス』

覇獣の要領で変質化させた亜種禁手「バアルレグルスドライバー」を使用することで変身する仮面ライダー。性質がレイドライザーを超えフォースライザー系列になったことから仮面ライダーと選定されている。

覇の性質をプログライズキーとの同調にも回していることから、プログライズキーの性能も大幅に強化。真っ向勝負の肉弾戦に限定すれば規格外のポテンシャルを発揮する。

▽キングライオンプログライズキー

サイラオーグ・バアル専用に開発されたプログライズキー。特殊機能をあえて盛り込まず、サイラオーグの身体能力を増幅することに収

束されている。

●シーグヴァイラ・アガレス眷属

◆シーグヴァイラ・アガレス

☆大公機甲アガレッサー

『カタログスペック』

全高：２１，６ｍ　素体重量：

『概要』

シーグヴァイラ・アガレス専用機兼概念実証機として開発された、アガレス領軍のフラッグシップ機たる人型ＴＦユニット。大腿部に比べて脚部が細めの女性的形状だが、これは悪魔が使用することから空中戦が基本になるよう開発されたことに由来する。

一見するとリアルロボット系列なのだが、実態としてはスーパーロボット系列に近く、設計コンセプトは「ヒュッケバイ〇ＴＹＰＥ―Ｓ」。また独自機能として機体そのものに真魔の駒を組み込んでおり、オーバーフロー分の放出を逆手にとって推進力に変換することで、大型機でありながら最上級悪魔になった騎士に匹敵する機動力も獲得。単純な出力とそれに伴いカタログスペックに限定すれば、魔王クラスを超え準超越者クラスに到達している。

『武装』

☆リッパーフリル：機体各部に搭載されたブレードユニット。懐に飛び込まれた時の迎撃や、近接格闘の補助に使用されるサブウェポン

☆マナックルダスター：魔力をより効率的に運用する、両腕部戦闘ユニット。展開パターンにより打撃攻撃Ｎモード、防御被膜Ｂモード、砲撃連射Ｍモードの三種類を使い分ける。

☆ウインクラッシュ・アイ：目に見える部分から放たれる、任意で炸裂させる速射爆裂攻撃。爆破するタイミングで光が一瞬消えることから名づけられた。

☆ツインブラスターカノン：胸部から展開されて放つ、大出力魔力併用型魔術砲。一つ一つがドラゴンブラスターに匹敵する火力を誇る。

☆アグレアスナイパー：専用異空間から呼び出す疑似反物質粒子を収束して放つスナイパーライフル。その射程距離は放つだけなら１０００ｋｍを超える。

☆アグレアスパタ：専用異空間から呼び出す疑似反物質粒子を纏うグレートソード。ちなみに何本か作られており、エネルギーを蓄積する為投擲することも可能。

☆極限アガレッスキック：音声入力で起動する、アガレッサーの必殺攻撃。脚部に大出力の魔力を展開して放つ蹴り技。アガレッサーの必殺攻撃であり、その攻撃力は主神クラスの全力に匹敵する。

○準メンバー

●アマゴカンパニー

英雄派のサブリーダーが一人であるサイリン・アマゴ・ドゥルーヨダナが運営する星辰奏者ＰＭＣのアマゴフォースを、帝釈天が大株主兼スポンサーとなる形で大幅に拡大化した星辰奏者ＰＭＣ。帝釈天が子飼いにしていた星辰奏者の素質保有者を組み込んでいる、事実上の帝釈天直属の私兵集団。

Ｄ×Ｄ結成に伴い、派遣される形で準構成員となる。規模で言うなら非常に大きい為、裏方から人海戦術担当までこなせる組織と化している。

◆曹操

『トラベリングホースレイダー』

レイドライザーにトラベリングホースプログライズキーを装填して変身するレイダー。

高速移動を長時間続けることを可能としており一撃離脱を主体とする長期戦に真価を発揮するが、曹操はその技量により常に相手と距離を詰め続けるかく乱戦法すら可能とする。

『仮面ライダーサウザイアー・魏』

英文（前半）：Ｗｈｅｎ ｔｈｅ ｈｏｌｙ ｓｐｅａｒ ｓｈｉｎｅｓ． Ｔｈｅ ｇｒｅａｔ ｓｏｌｄｉｅｒ ＴＨＯＵＺＡＩＡＲＥ ｉｓ ｂｏｒｎ． 意訳：聖なる槍が輝く時、偉大なる戦士サウザイアーが誕生する

英文（後半）：Ｉ　ａｍ　ａ　ＨＥＲＯ　意訳：我こそが英雄なり
ミザリがザイアサウザンドライバーの試験運用としてサウザンドライバーを提供したことで成立した、サウザイアーの概念実証機といえる仮面ライダー。トラベリングホースプログライズキー及び、クリエイティングルシファーゼツメライズキーを装填して変身する。
素体の色は曹操の理念を示すように青く、そこに黄金のアーマーが装着されている。
トラベリングホースを使用しているがゆえに長距離高速行軍を主体とした性能だが、同時に超越者クラスの基本性能を獲得しているためオーソドックスに強い。反面、悪魔が使用することを前提としているクリエイティングルシファーゼツメライズキーと人間である曹操との相性が悪く、サウザイアーとしての本来の性能は発揮しきれてないのが実情。
必殺技はトラベリングホースプログライズキーを押し込んで発動する「ロンギヌスディストラクション」
☆カタログスペック
パンチ力：４１，２ｔ　キック力：１０３，８ｔ　走力：１００ｍ秒１，０５秒　ジャンプ力：一飛び４２，８ｍ
◇サイリン・アマゴ・ドゥルーヨダナ
英雄派のサブリーダーが一人であり、また最大規模のスポンサーでもあった人物。サウザー諸島連合に流れ着いた尼子家の出身とドゥルーヨダナの末裔から生まれた子供。そのままザイアの幹部社員となった家族がサウザンドディストラクションで経済的に破綻し、無理心中に抵抗していたところを曹操に助けられ、更に偶発的な聖杯戦争で山中鹿之助を召喚するという、波乱万丈な来歴から英雄派の前身となった。
曹操達が敗北して捕縛された時も偶発的に生き残っており、曹操が冥府から自力で戻ってくるという確信をもって、居場所を残すべく逆に帝釈天に売り込みをかけて子飼いとなる。
◇山中鹿之助
【クラス】アーチャー

【マスター】サイリン・アマゴ・ドゥルーヨダナ
【性別】男
【身長・体重】１７５ｃｍ・６９ｋｇ
【属性】秩序・中庸
【ステータス】
筋力Ｃ　耐久Ｃ　敏捷Ｂ　魔力Ｄ　幸運Ｄ　宝具Ａ
【クラス別スキル】
対魔力：Ｃ
一小節までの魔術を無効化可能。儀礼魔術・大魔術などは防げない。
単独行動：ＥＸ（Ｃ相当）
マスター不在でも活動を行う為のスキル。
本来はマスター不在でも一日は存続できるスキルだが、アーチャーの場合はマスターの魔力消費がほぼゼロになるスキルと化している。
【保有スキル】
月下の誓い：Ａ＋
尼子家復興の為に人生を捧げたその生き様と信念から。鋼鉄の決意スキルと似て異なる性質を持つ。
戦闘続行・仕切り直しの複合スキルであり、またマスターが尼子家復興を考える一族の場合、勇猛と自己回復（魔力）まで獲得する。
心眼（真）：Ｃ
修行・鍛錬によって培った洞察力。
窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す〝戦闘論理〟
逆転の可能性があるのなら、それが小さくとも実行に移すチャンスを手繰り寄せる。
【宝具】
尼子復興戦線
対主宝具　ランクＡ　レンジ：１～９９　最大補足：一人
尼子家復興を目指し、僧となっていた尼子勝久を還俗させて頭首にした逸話に由来する宝具。

尼子家に連なり御家復興を考える人物をマスターにした場合に限り、マスターそのものを「新たなる尼子家の長」という宝具にする宝具。

これにより該当するマスターは超強化され、「Cランク相当のカリスマ」「下位のサーヴァントに匹敵するステータスの上乗せ」「マスターが考える尼子家復興に合わせた知識を聖杯から得る」の三つの強化を受けたAランク宝具レベルの神秘そのものとなる。

剣豪の腕（アーム・ザ・リッパー）

対物宝具　ランクB　レンジ：1　最大補足：手に持てるだけ

生前保有していた宝具。手に持った武器を強化する神器。

七難八苦砕く剛腕（アーム・ザ・ウォリアー）

対人宝具　ランクB　レンジ：1～70　最大補足：一種類

剣豪の腕の亜種禁手。能力は迎撃における能力の強化。

剣豪の腕で強化された武器を更に強化するという、分かりやすいが強力な禁手。普段はあえて発動しないことで初見殺し的な運用を可能とする。

【Ｗｅｐｏｎ】

『無銘・武装群』

アーチャーが召喚の際に持ち込める武装群。

十文字槍・刀・脇差・和弓となっており、宝具でないがゆえにアーチャーは自由自在に武装を扱い、接近戦すら立ち回れる。

【詳細】

尼子十勇士（実際は十人以上いるらしい）の代表格で、三日月に「我に七難八苦を授けたまえ」といったことで有名。

尼子家という武家に使えているという自負があり、尼子家復興を目論んでいるが尼子家の者＝服従対象ではない。むしろ尼子家復興の祖に相応しい人物になるようスパルタ教育をかけること請け合いで、例え尼子家のものであろうと、復興を目指さないのなら忠誠を誓わないどころか、尼子家の名に泥を塗る人物と判断すれば殺しかねない。尼子家の人間がマスターになる方が危険な癖の強いサーヴァント。

反面現代文化やあり方にも理解があり、尼子家復興はあくまで現代

の文化に合わせてくれる。現代においてならば「大会社の社長」レベルを最低水準にしている為、折り合いをつける余地は十二分に存在。本作においては曹操が間に「武力的に」入って仲裁したことで、聖杯を併用する形で民間軍事会社を設立して発展させるという方向で商談が成立した形になる。

生前の価値観から奇襲・略奪・人質・裏切りといった現代では眉を顰めるような行為も、よほど卑劣かつ尼子家の名誉がけがれる物でない限りは寛容で、目撃者の口封じや魂喰いも消極的どまり。

◎悪魔・大王派

●魔性聖剣

ティバール監修のもと、冥界の鍛冶屋が作り上げることに成功した魔剣。

「使い手の体組織を鍛える際に使用する」ことによって、最初に決められた使い手限定で聖剣因子抜きでの適合を可能としつつ、ある程度の高性能を実現している。

☆魔軍聖剣ブリゲイター

魔性聖剣の雛型であると同時に、軍勢の強化という一点に特化した汎用モデル。

基本骨子を同一にしつつ多種多様な要素に耐えうる設計にすることで、根本的には一品物でありながら生産性を高める土壌にすることに成功している。

使用者との同調効果により性能は高い水準であり、使い回しができないという代償と引き換えに、毎日数本は製造可能。基本性能は分割化状態のエクスカリバーの三割減といったところであり、特殊能力こそないが大量生産が利くという点において規格外の効果を持つ。

●新造宝具

☆黄昏の魔冠（バエル・ロンギヌス）

対神宝具　ランクＣ＋＋　レンジ：１　最大補足：一人
ティバールが鍛え上げた対神宝具。いわゆるサークレットの形をしている。バアル家の素質ある悪魔が使用することを前提に、更に個人用に調整されている。
装着したバアル家の者に防護加護・対神特性・耐聖特性を与える宝具。ただし負荷も大きく相応の魔力がなければ使うことができない為、最上級悪魔になりえる素質を持つことが必要最低条件。
真名解放でその力を瞬間増幅させたオーラの槍を生成して投射する。その威力は魔王クラスの出力となり、それによる神殺しは戦神にすら届く。また所有者の力量で増幅される為、所有者の力量と練度次第で超越者クラスの出力を狙うことも可能。

●ＤＦ（ディアボロス・フレーム）
大王派が独自開発した人型機動兵器群。
悪魔の体を拡張する形で強化した兵器であり、悪魔が搭乗することで上級悪魔相当の魔力運用を可能とする。反面良くも悪くも７ｍ強の大型機である為、総合力で踏まえると上級悪魔：ＤＦのキルレシオはよくて２：３辺りとノアに推定されている。また禍の団側が使用するサリュートⅡ系列と比較すると戦術や状況で有利不利が入れ替わる対抗馬の関係になる。
☆Ｄ―スピア
頭頂高：７，２ｍ
量産体制を確立したＤＦの一号機。各地の基地や城に配置する、治安維持や大規模作戦を踏まえた数を生かした運用をコンセプトとする機首。歩兵用の槍であるスピアを名称に配置しているのもそれが理由。
★ＤＰ―スピア
頭頂高：７，３ｍ
Ｄ―スピアの先行生産仕様であり実証実験用。その為通信機器などが過剰性能になっているなど、各部が大型化している。

★ＤＰ―シュラーイン
頭頂高：７，４ｍ
対神用機体、Ｄ―シュラーインの試作型モデル。各種機能の小型化が足りておらず、ＤＦとしてはごつくなってしまっている。
マルガレーテとの連携でロキを苦戦させるも、星辰光を発動されたロキに形成をひっくり返される。……ただしロキという高位の神を苦戦させた事実から、神々がテロに走った際の備えとして十分な成果を上げている。

☆Ｄ―ウイング
頭頂高：７，８ｍ
緊急展開用に開発されたＤＦ。転移妨害が受けている地区にも急行できるよう可変能力が組み込まれており、高速戦闘用のアサルトモードと、本格戦闘用のデュエルモードを使い分ける。その為比較的大型化されていることが特徴。

★ＤＰ―ウイング
頭頂高：７，４ｍ
Ｄ―ウイングの試作型モデル。可能な限りＤ―スピアと変わらないサイズに収めようと試行錯誤されており、整備性が大幅に低下してしまっている。
のちに慣熟訓練さえ積めば数十センチ程度は大きな問題にならないと発覚したことから、整備性と高性能化を重視して各部パーツを大型化する方向で再設計されることとなる。

☆Ｄ―フォートレス
頭頂高：７，５ｍ
拠点防衛用に開発されたＤＦ。軍事基地や価値のある都市の防衛の為に運用される。
燃費や整備性と引き換えに、近距離移動限定で重装甲と機動力を両立。加えてスモークグレネードなどを格納するウェポンコンテナや、制圧用のロケットランチャーを接続することも可能

★ＤＰ―フォートレス
頭頂高：７，３ｍ
Ｄ―フォートレスの試作型モデル。可能な限りＤースピアと変わらないサイズに収めようとした結果、各種機能が大幅に劣悪化してしまっている。

●プログライズキー関連技術
◇オブサーヴィングデビルレイダー
フロンズ達が開発していた、悪魔の軍勢全体の質を向上させる為のプランの一つ。設計コンセプトは個人の資質が大きく影響を受ける星辰奏者としての能力特性を、可能な限り外部装置に委ねることで、固有能力や特性止まりの星辰光を、安定した軍事兵器として運用すること。
基本性能はそれに特化しているが、実装することで使用者は全員星辰奏者の特性を獲得することが可能。これにより安定性という意味では高い性能を発揮できる。
☆オブサーヴィングデビルプログライズキー
アビリティ：Ｄｅｖｉｌ
起動音声：Ｂｒｅａｋ（砕け散れ）ｏｆ（唯一無二よ。）Ｏｎｒｙ ｏｎｅ ―Ａｓｔｒａｌ ｗｅｐｏｎ ｓｔａｒｔ ｕｐ《星辰体兵器駆動開始》
フロンズ達側の組織が研究し、サリュートＩの残骸から得られたデータによって一気に完成にこぎ着けた、星辰体運用機構を組み込んだプログライズキー。
オブサーブは複数の意味を持つ動詞だが、この場合は（規律や法律を）守る、順守するという意味。軍事部隊ということ規律を重視する部隊の兵器として、法を破る犯罪者やテロリストとの戦いを想定していることを意味している。
同調の為に悪魔のライダモデルを組み込んだことで、純血であれ転生であれ悪魔の因子を持たねば使えないという問題点こそあるが、代わりに相乗効果で悪魔としてのポテンシャルもある程度向上させることが可能になっている。

『星辰光』
☆雷電掲げし魔の軍勢、天神凌駕の銃火たれ
基準値：D
発動値：C
収束性：D
拡散性：D
操縦性：C
付属性：D
維持性：C
干渉性：B
今ここに、軍勢により織りなす星が開帳される。
一騎当千の精鋭など、万の軍勢で押し潰すのみ。世界最小の大量破壊兵器の名を冠し、軍勢の星が制圧を開始する。
オブサーヴィングデビルプログライズキーに組み込まれた星辰光。能力は雷電操作。
大型病院などの自家発電装置クラスの雷電を発生させ、それを制御する星辰光。単純な出力では雷撃系の神器を持つ中級悪魔に届くといった程度だが、操縦性と高い干渉性を利用した、集団戦闘に特化した能力が肝となる。
操縦性と干渉性を併用することで、集団で一つの星辰光を運用するという芸当を可能とすることがこの星辰体運用兵器の本質にして究極。集団での統率を取れるように練度の高い連携が必要にこそなるが、小隊や中隊規模で運用すれば、発動値や操縦性を疑似的にＡＡＡクラスにまで高めることが可能。
大規模な電子戦から最上級悪魔に通用するレベルの荷電粒子砲を可能とする。ある程度のターミナル部隊を複数用意することができれば、個人兵装単位での軍団規模のデータリンクや、静止衛星軌道にコンテナクラスの物体を送り込むマスドライバーとしての運用すら理論上は可能とする、破格の可能性を秘めた星辰体運用兵器が此処に完成した。
個が保有する唯一の権能に頼るのではなく、誰もが持てる力を併用

する群の力により、天の打倒を可能とする。発案者の軍事における思想がうっすらと見え隠れするその力。個人ではどこまでも便利止まりだが、大隊規模で運用すれば神滅具に匹敵する価値を持つ。
万にも届く軍団規模で振るわれたのなら是非もなし。超越者すら屠りかねぬ、暴威の具現がそこにある。
☆詠唱
創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。
銃声響き敵穿つ。剛力無双の豪傑も、神童至りし剣豪も、有象無象がまき散らす、鋼の嵐に吹き散らかされる。
残酷なるは人世の現実。鋼の祈りは抵抗の希望、されど血煙生む猛威。圧政に屈さぬ義憤の戦士に、圧制を振う暴君の手駒に、等しく授かるその銃火こそ、世界の真理を世に示す。
脆弱すら乗り越える世界の覇者に、我らもまた習う時。例外に特例に異端に唯一に、頼る幻想から解き放たれよう。
雷鳴の銃（カラシニコフ）は此処に在る。軍勢たちよ牙を砥げ。
今こそ、唯一に縋る時から決別を。一糸乱れぬ人海の大波で、超越にすら並び立とう。
超新星（メタルノヴァ）――雷電掲げし魔（ディアボリック）の軍勢、天神凌駕（カラシニコフ）の銃火たれ

○フロンズ・フィーニクス眷属
現魔王の弟妹が参加する会合に、分家出身でありながら参加できた上級悪魔の眷属。
亜種聖杯戦争を利用して出生率の向上に多大な貢献を果たした、フェニックス分家の有力家系の跡取りが率いる眷属。眷属のかなりの割合を、トレードで頻繁に入れ替えていることが特徴。
◇フロンズ・フィーニクス
フィーニクス家の次期当主。ノア・ベリアルと友誼を結び、また大王派が進める多くの計画を発案している。
卓越した政治力を発揮し、思い通りに事を進めるのではなくどう転んでも利益が出るような立ち回りを得意とする。また悪魔の駒を利用した少数精鋭の軍備に価値を見出しておらず、配下はおろか冥界全

体の軍備を強化する為に有用な者を恒常の眷属として迎え入れている、異色の存在。
基本的に多種族からの転生悪魔は、迎え入れているという観点から低調に扱うものの「悪魔としてはまがい物」というスタンスを崩しておらず、多種族からの眷属を上級に昇格させるつもりはない。また基本的に貴族主義かつ血統主義でもある為、リベラル派の現四大魔王とは合わない人物。
……ただし、多種族を眷属に迎え入れる時はそれを了承できる人物をきちんと誠実に交渉してからにしており、食客として階級とは異なる形で能力に見合った待遇を約束している為関係は良好。また各種活動も派閥のことは考えつつ、冥界全体の利益を大前提としている為、必要なら躊躇なく魔王派と連携をとるどころか、支援を惜しみなく送ることもできる器の大きさを持つ。
◇ティラ・バアル
シュウマ・バアルの長女にして二子である、フロンズの女王。典型的な戦闘狂であり、思考回路が武勇一辺倒。
◇ティバール
フロンズの戦車が一角を務める転生悪魔。
その正体は受肉したランサーのサーヴァント、トバルカイン。

○ノア・ベリアル眷属
現魔王の弟妹が参加する会合に、分家出身でありながら参加できた上級悪魔の眷属。
眷属の殆どをトレードで頻繁に入れ替えており、その上で高い成果を上げていることで会合参加を認められた眷属。

◇ノア・ベリアル
ベリアル分家の出身であり、フロンズの親友。同時に彼を王として格上とみなしており、ある意味で軍師的な立ち位置。
政治面においてはフロンズに負けていることを自覚していることもあって、作戦活動においては部下として行動。ただし上回っている

軍事面ではきちんと物申し、それを理解しているフロンズも反映するため、ほぼ台頭と言ってもいい。
眷属の平均的な質でも王同士の戦闘能力でも下馬評ですら圧倒的に劣りながら、それを逆手に取った逃げ切り判定勝ちでサイラオーグを負かした策士。
◇クーア・バアル
シュウマ・バアルの次女にして三子であり、ノア・ベリアルの婚約者兼女王。
既に最上級悪魔と渡り合える魔力戦が可能な女傑の一人。

◇マルガレーテ・ゼプル
元々プルガトリオ機関のアルファ部隊に属していたが、性質を見抜いたフロンズのスカウトを受け、ノアの眷属になった女性。
魔王ベルゼブブの因子を覚醒させているが、地金がスローライファーかつ、責任という対価を重視する人物ゆえに辟易している。プルガトリオ機関において和平の象徴としてB《ベルゼブブ》のミドルネームを名乗ることになったが、フロンズとの交渉で「魔王血族ではなく、人間からの転生悪魔」として扱われている為名前を戻している。
その性格上、ヴァーリ・ルシファーのようなタイプとは相性最悪。嫌悪を通り越して「病気そのもの」と見切りをつけているほどに生理的嫌悪を持っている。
★禁手　氷樹（コキュートス・バース・クリフォニア）により至る聖魔人
冥府より伸びる大罪の大樹を基幹とし、他三つの神器を複合させる形で至るマルガレーテの禁手。
能力は自身を聖と魔の融合した聖魔人へと変貌させる氷の大樹の生成。生成される大樹は広範囲に分散する形で何本も作られる為、隠匿性に欠けるのが欠点。魔王の血筋を不快に思いながらも使わざるを得ないプルガトリオ機関時代はできなかったが、そのくびきから限定的に解放されたことによって至った力。
聖と魔が融合したことで戦闘能力は爆発的に上昇し、そのポテンシャルは並みの神滅具の禁手を凌駕。絶大な聖なる力を魔力のよう

に自由自在に扱う彼女相手には、かのヴァーリですら通常禁手では手も足も出ないほど。
欠点としては動けない氷の大樹をすべて破壊されると能力が解除されることだが、大樹は一本一本が極めて頑強で、自立して氷を操る形で戦闘が可能な為それも困難。加えてマルガレーテの任意の判断で援護攻撃を行うこともできる為、並みの歴代二天龍では覇に至っても撃退される能力を発揮できる。

☆神器　冥府より伸びる大罪の大樹（クリフォト・リュトン）
幽世の聖杯と対を成すとされる、準神滅具。同時に七つ確認されており、最悪の神器とも言われている。
能力は肉体を悪魔へと変性させることと、その天敵たる力への影響を削減すること。すなわち聖光を意に介さぬ悪魔に変ずる神器であり、聖書の神の死による神器のバグ、それも最大級の者と言われている。
悪魔化のポテンシャルは上級悪魔レベルだが、これは目覚めたての段階。本格的な領域に到達すれば最上級悪魔クラスに到達することも多く、禁手に至れば確実に最上級悪魔クラスにすらなれると言われている。
マルガレーテの場合、僅かに流れていた悪魔の因子とこの神器が相乗効果を生み、常態で準魔王クラスのポテンシャルを発揮している。

☆神器　聖光宿る滅龍剣（ディバインサーベル・ゲオルギウス）
聖なる光を纏う聖剣を具現化する神器。また聖剣そのものが龍殺しの力を秘めており、対龍において優れた力を発揮する。
聖光そのものは聖剣より攻撃力は低いが、纏うことで追加ダメージを与えることが可能かつ、刀身から延ばすことで攻撃範囲を向上させることもできる。

☆神器　魔性滅す聖別銃（ディバインライフル・ファクトリー）
属性系神器の一種であり、同時に創造系神器の特性も混ざっている銃型の神器。

聖別された金属の弾丸を発射する神器であり、創造系故に弾数は事実上無限。また使用者の力量次第では弾丸の種類を変化させることも可能。

☆神器　青氷の双手（ブリザード・シェイク）

属性系神器の一種であり、本来は青い吹雪を両手から放つ神器。マルガレーテに宿ったのは亜種であり、背中から氷で出来た一対の腕を形成し、そこから吹雪を放出する。応用することで氷の剣を具現化することも可能。

○シュウマ・バアル血族

バアル家の分家筋に当たるシュウマ・バアルとその子供達。

分家でありながら政治的手腕や可能な限り多産を試みた縁故の恩恵をもって成り上がった一族であり、さらにフロンズの政治的な後見人となることで、分家としては最高峰の家柄となっている。

シュウマの子息はその殆どがもれなく優れた才覚を示しており、それもあってフロンズ一派を高める余地となっている。

◇シュウマ・バアル

バアル分家筋において最高峰の家柄を持つ分家の長。

政治的にやり手とされる人物であり、フロンズの価値を見抜き重用することで双方の更なる飛躍に繋げている。同時に自身は家柄で上回る者は年若いものであってもためらうことなくへりくだることも選べるなど、その政治手腕で成り上がっている。

……だが彼はあくまで「分家」の有力者にすぎず、なまじ才覚があったことから不正に参加せざるを得ない状況に立っていた。それを乗り切る為フロンズ達が不正に関わらされない様に立ち回り、ディハウザーの告発を利用してあえて暴走。フロンズ達が自分を討ち取るように誘導することで身内の清浄化とフロンズ達の権限強化を齎して散ることとなる。

◇ハッシュ・バアル

シュウマ・バアルの長子である男。

優先順位が二番手三番手の事象に手を回すことで終わった後の展開を有利に運ぶ分家当主として破格の際を持つ。またシュウマの謀略における才覚を最も色濃く受け継ぎ、更に武勇においても弟妹のような目立った長所がないだけで優秀なバランス型という完璧超人。

◇シュウゴ・バアル
シュウマ・バアルの次男にして四子。弓の形にした魔力を使っての遠距離狙撃を得意とする。

◇ナシュア・バアル
シュウマ・バアルの三男にして五子。消滅の魔力を高密度に圧縮した近接戦に長ける。

◇シュメイ・バアル
シュウマ・バアルの四男にして六子。悪魔でありながら優れた魔法研究家。

○後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）
英雄派の中の特殊部隊と言える、サブリーダー九条・幸香・ディアドコイの独自保有戦力。
英雄派の中では肖り元をそのまま名乗るではなく、むしろ「超えるべき目標」としていることが特徴。また筆頭戦力は軒並み星辰奏者であり、更にその性質から疑似星辰奏者が残りメンバーほぼ全員となっている。
実は兵藤一誠が禁手に到達する時期にフロンズと交渉しており、状況次第で寝返りをする手続きは済んでいた。その後はフロンズ直下の懲罰部隊として精力的に対テロ戦闘や奉仕活動を行っており、冥界でのイメージ回復も進んでいる。

◇九条・幸香・ディアドコイ
後継私掠船団の団長にして、英雄派のサブリーダー。神様転生者が確保した人員の一人だが、疾風殺戮・ｃｏｍと共に情報をリークしつつ転生者を抹殺する。己を後継覇王（アレキサンダー）とも呼称する
メタ的にまとめれば「悪い征服王イスカンダル（Ｆａｔｅ）」を設計

コンセプトにしており、基本的に豪快で何事も楽しみ敗北を忌むぎりぎり少女（１９歳）。ちなみに滅亡剣・審判者寄りの光狂い適正持ち。

☆神滅具　不滅齎す黄金花（ゴルディモータル・ストレチア）

新規神滅具として登録されることになる新種の神器。

特性は高度な攻性防御障壁を展開する金色のシールドユニットを複数展開すること。ユニット同士でフォーメーションを汲むことで複雑な結界や応用技を展開することができ、そのフォーメーションはシールドユニットの色も併せて黄金の花を思わせる。

☆仮面ライダーディアドコイ　ブローニングクロウ

起動音声：Ｂａｎｇ　Ｂａｎｇ　Ｂａｎｇ！　Ｉｔ⊠ｓ　ａ　ｈｕｍａｎｓ　ｆｏｒｔｈ　意訳：バンバンバン！　これが人間の力だ！

パンチ力：２３，５ｔ　キック力：６０，２ｔ　走力：１００ｍ１，８秒（時速２００ｋｍ）　ジャンプ力：一飛び３５，２ｍ　飛行速度：Ｍ２

仮面ライダーディアドコイの基本形態。カラーリングは黄金を主体としている。

基本性能は高いが、それ以上に凶悪なのはその特性。

登録プログラミングと搭乗者の魔術回路を併用することで、大気中のマナと感応して多種多様な銃火器を一時的に創造することが可能。すべてが魔法的なコンセプトで強化されており、一つあれば高位の異形を手こずらせることも可能。

反面この段階では技術力に限界があり、重機関銃や着弾と同時に爆発するタイプのロケット弾が限界となっている。

必殺技はこの機能の応用で溶断ブレードを上乗せしたスラッシュライザーで切り裂く「ブローニングレイン」と、蹴りを叩き込んだ相手に大量のプラスチック爆薬を付属させて爆裂させる「ブローニングレインラッシュ」

★ブローニングクロウプログライズキー

アビリティ：ＡＲＭＳ

烏のライダモデルが組み込まれたプログライズキー。

強力な３Ｄプリンターとしての機能が組み込まれており、これによ

り武器を作り出す能力を保有。また総合性能も高く設計されており、半端なプログライズキーでは一蹴されるほかない。

◇ジョン・ラカム

九条・幸香・ディアドコイのサーヴァント。実は生前は黄昏の聖槍の保有者だったが、「これをマジで使うとヤバいことになる」と判断して生涯使わなかった。

そして自分の生涯を唾棄すべきものと嫌悪していることから、聖槍の全力使用も考慮した活動を目論んでいる。

『サーヴァントステータス』

【クラス】ライダー

【マスター】九条・幸香・ディアドコイ

【性別】男

【身長・体重】１７６ｃｍ・７２ｋｇ

【属性】混沌・悪

【ステータス】

筋力Ｃ　耐久Ｄ＋　敏捷Ｂ　魔力Ｅ　幸運Ｂ　宝具Ｂ＋＋

【クラス別スキル】

騎乗：Ｃ

きちんとした調整・調教がなされた騎乗物を乗りこなすことができる。

嵐の航海者が主体である為、ライダーとしては異例の低ランク。

対魔力：Ｂ＋

魔術に対する守り。

四小節までの魔術を無効化可能。

【保有スキル】

嵐の航海者：Ｂ－

船と認識されるものを駆る才能。

集団のリーダーとしての能力も必要となる為、軍略やカリスマの効果も兼ね揃えた特殊スキル。

ライダーは晩節を汚した影響でカリスマの効果が大幅に低下している。
海賊の誉れ：D＋
海賊独自の価値観に由来するスキル。低ランクの勇猛・精神汚染・戦闘続行の効果を兼ねそろえた複合スキル。
ライダーのスキルは本来Dだが、海賊足らんとする強い意識によって強引にBランク相当に上げることが可能。
仕切り直し：C
割と立ち回りが上手く、荒稼ぎをしているにも関わらず中々発見されなかった。
それに由来するこのスキルは、戦闘からの逃走において優れた＋補正を発揮する。
エンチャント：B＋
宝具「此ぞ海賊、集え我が旗の元に」の応用で得たスキル。海賊という概念を付属させる。
これによりマスターである幸香に心酔する者達に海賊団としてのステータス強化を与え、更にE～Dランク相当の「海賊の誉れ」を授与することが可能。
また海賊団の運用装備という形にすることで、物体もE～Cランクの宝具とすることができる。
【宝具】
此ぞ海賊、集え我が旗の元に（パイレーツ・オブ・キャリコ・ジャック）
対心・対物宝具　ランクC＋＋＋　レンジ：1～99　最大補足：∞
ライダーの海賊旗であり、「海賊」というイメージそのものになったといえる最大の知名度を持つ「交差するカットラスの上に髑髏」の海賊旗。
掲げて真名を開放することで、ライダーの思念に同調して亡霊で構成される海賊船団を呼び出すことが可能。また応用技としてこの宝具による加工を行うことで、エンチャントを疑似的に保有している。
召喚される亡霊は、その旗が知名度を超えて海賊という普遍的概念

と化していることから、ラカムの船員以外も大量に召喚される。というより、末路の影響でラカムの船員が一番出難い。
黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）
対神宝具　ランクＡ＋＋　レンジ：２～４　最大補足：一柱
最強の神滅具であり、最強の聖遺物であり、最強の神殺し。それら全てを併せ持つ、神器の究極が一つ。
生前のラカムはその強大さに伴うリスクを恐れてひけらかさなかった。それはすなわち、今の心構えなら至る可能性があることを示している。

◇ブレイ・マサムネ・サーベラ
後継私掠船団の筆頭戦力。二つ名は「六郎入道（マサムネ・ジュニア）」
神殺しの魔剣すら作り上げる刀工。
☆神器　魔剣創造（ソード・バース）
イメージした魔剣を創造する神器。ただし性能や強度は所有者のイメージや練度次第で上下し、限界もある。
ブレイは禁手に本質を置いており、あくまである程度のコンセプトモデルや、非常時のフェイルセーフティに呑みこの神器を使用する。
★禁手　魔剣鍛造（クリエイティブ・ソード）
魔剣創造の亜種禁手。能力は魔剣を鍛造する力を会得すること。
創造系神器は神器の力として魔剣を生み出すものだが、この亜種禁手は材料を調達する必要がある代わりに、永続的に存続する魔剣を鍛造する能力。神器の力を上乗せする為質の悪い材料からも魔剣を作り出せるが、上質な材料があれば理論上は魔帝剣に匹敵する魔剣を生み出すことも可能。
『仮面ライダー匠』
ザイアスラッシュライザーを使用して変身する仮面ライダー。
☆ハイディングフォックス
パンチ力：９，６ｔ　キック力：２８，２ｔ　走力：１００ｍ１，２秒（時速３００ｋｍ）ジャンプ力：一飛び４８ｍ
仮面ライダー匠の基本形態でもある、ハイディングフォックスプロ

グライズキーで変身する仮面ライダー。
ディアドコイとの連携を想定されており、機能上派手にならざるを得ないディアドコイを利用・補佐する形で最大限の効果を発揮する為、基本性能よりステルス型となっている。またそれを利用することでブレイは自分が鍛えた魔剣での戦闘以外を徹底的に回避することが可能。
必殺技は特殊パルスを付与した生物を麻痺させる斬撃「ハイディングレイン」と、同様の特殊パルスによる連続蹴撃「ハイディングレインラッシュ」
★ハイディングフォックスプログライズキー
アビリティ：ＳＴＥＡＬＴＨ
起動音声：Ｈａｈａｈａ！　Ｙｏｕ　ｃａｎ，ｔ　ｌｏｏｋ　ａｔ　ｍｅ
狐のライダモデルを組み込んだプログライズキー。
隠密・潜入・奇襲に特化した機能が組み込まれており、対レーダー・対熱源の特殊装甲、消音機能や吸着能力を持った脚部、ワイヤーアンカーや光ファイバーカメラ・時限信管を変更可能な煙幕・音響・閃光弾を製造する肩部ユニット・瞬時に最適なカラーをプリントするマント生成機構を保有。更に各種機能を簡易再現したキツネ型ドローンを使役できる。

◇アーネ・シャムハト・ガルアルエル
後継私掠船団の筆頭戦力。二つ名は「聖継（シャムハト・セカンド）娼婦」
ベルナは実の妹だが、思想が根幹的にあっておらず決別されている。
☆神器　巨人（マイティング・デトネイション）の悪戯
攻撃した箇所に爆発を発生させる神器。ヘラクレスが保有する者とほぼ同等。
★禁手　単眼巨人（キュクロプス・マイティング・デトネイション）の悪逆
巨人の悪戯の亜種禁手。指定した対象に爆発物としての特性を与える禁手。

爆発物としての出力は物質の素材やかけた時間などで大きく変化するが、砲弾型にすればただの氷塊であってもＴＮＴ爆薬の数十倍弱になり、モンロー効果を発揮できる形状にすればモンロー効果だけでノイマン効果と併用する同爆薬量のＨＥＡＴ弾の約八倍の厚みを持つ複合装甲を突破可能。

アーネは戦闘においてこの禁手を基本の戦闘軸として運用しており、銃火器の弾丸を特注かつ時間のかけた爆発物として運用。更に星辰光の運用によって、無尽蔵の氷塊爆弾として撃ち放つ。

◇奥羽（おおば）・煙霞（えんか）・ヘロストラトス

後継私掠船団の筆頭戦力。二つ名は「超越神焼（オーバーヘラストラトス）」。

似非ラッパーな口調で「バーニング」や略した「バーニン」を多用する。

◇九条（くじょう）・梔子（くちなし）・張良（ちょうりょう）

禍の団には関わらない形で活動していた、後継私掠船団筆頭戦力。幸香の義妹であり、二つ名は「張越最良（チョウリョウ・レボリューション）」。

聖母の微笑を保有しており、それを増殖させる禁手に至ることで組織力を大幅に高めることに成功している。

◇ユーピ・ナーディル・モデウ

禍の団には関わらない形で活動していた、後継私掠船団筆頭戦力。ナーディル・シャーの隠された末裔で、二つ名は「第三征王（ナーディル・イスカンダル）」

かつて幸香に負けた過去を持ち、そこから惚れ込みつつも幸香をいずれ必ず超えるという決意をもって活動。

自他ともに認める才能の権化であり、精神性ではなく純然たる才能をもってしてヴァーリを「凡人」と比較する。

☆神滅具　天覇（カイザー・ストラトス）

新規神滅具と称されることになる新型神器。天空を制することで敵を蹂躙する権能の如き力。

大気干渉能力及び、大火力砲撃を行う天輪を創生する、制圧を司る神器。

☆神聖宝剣：十界束剣（じゅっかいたばねのつるぎ）
かつて流れてきた十束剣を行く世代にも亘って魔法や魔術で回収してきた結果誕生した、モデウ家に伝わる聖剣。

●氷結星辰眷属（エンキドウ）
アーネの星辰光によって調律された、疑似星辰奏者といえる存在。何かしらの形に特化した形で氷塊を操作する星辰光を振るうことができ、また星辰体との感応により身体機能の強化も存在。反面星辰奏者としての素質がある物には逆に使い勝手が悪いのが難点。
実は三つすべてを統合することも可能なのだが、それをすると人間としての機能が完全に破壊される為、本領を発揮できないのが難点。

◎天界・教会勢力

○デュナミス聖騎士団
教会に属する特殊部隊。並みの悪魔祓いではしり込みする難易度勝大規模な作戦において、一番槍を担当することで士気を向上させることを主目的とする。
その性質上危険度が高いこともあり、身体能力と比べて怪我の治癒力などの死に難さの上昇率が高い星辰奏者を主体とする部隊に再編。教会に属する星辰奏者の四割が所属する大部隊となっている。
◇ストラス・デュラン
デュナミス聖騎士団の現在の団長。
豪快さと人の好さを基本とする、人柄で引っ張るタイプのリーダー。
戦闘においてはメイスを使用し、性格に見合った大味だが強烈な攻撃が持ち味。

◇リュシオン・オクトーバー
デュナミス聖騎士団の筆頭騎士とも称される実力者。新規神滅具

候補の保有者であり、またその日進月歩を体現する在り方から、神の子に続く者（ディーア・ドローサ）の異名を持つ。

「毎日少しずつ前を行く、そんな当たり前を続けていけば人は必ずより良くなれる」という価値観を人生の柱としており、それゆえに人望もあり後に続こうとする者も多い。……が、その精神力はどう考えても常人とは隔絶した、ヴァーリすら戦慄させる精神性を持つ。

保有する神器が大規模になりやすいが、当人自身は近接格闘による高い戦闘能力を持つ為問題になっていない。

禁手に至った精神状態の逆を意識することで禁手を消し去り、至った時の精神状態から微修正を入れることで異なる禁手に至るという、前代未聞の行動がとれる化け物的精神力を持つ。ただし当人は全く自覚しておらず、「コツの問題」と断言している。……のちに自覚せざるを得ない状況に陥ってからは、それをしっかりと理解する為に努力を重ねることとなる。

☆新規神滅具　生誕の超新星（ビッグバン・イマジネイター）

リュシオンが保有する新規神滅具候補。素粒子創造を根幹とした、大出力素粒子砲撃と物質創造の二つの力を持つ。

双方ともに調整に苦労する為、戦略的兵站的には高い効果を発揮するが戦術的運用には難があるのが欠点。反面出力においては二天龍の覇に追随する領域に禁手に至ることなく到達している。

★禁手　再生の超人類（リジェネレイト・エボリューション）

生誕の超新星の禁手の一つ。能力は自らの肉体の復元能力。

五体満足の状態を体が覚えていれば即座に戻ることができ、更に副産物として肉体の活性化によって若返りや成長すら発動中なら可能となる。復元速度も規格外のそれであり、７２柱のフェニックス本家すら超えるほど。

★禁手　龍殺の超聖剣（ゲオルギウス・カレドヴルッフ）

生誕の超新星の禁手の一つ。能力は素粒子を素体とした龍殺しの聖剣を生成する。

聖剣としての性能はエクスカリバーに匹敵する強度と切れ味と

オーラを持ち、龍殺しの力を保有する。反面かなり無茶のある創造である為、常に禁手で持続させなければ一時間も持たずに風化する。しかしそれを逆手にとって、複数創造して対応するという手法も可能とする。

◇カズホ・ベルジュヤナ

デュナミス聖騎士団の星辰奏者。カズヒとはストリートチルドレンの頃からの付き合いで、彼女のことを「お姉さま」と慕っている。元々はカズヒについてプルガトリオ機関行きを希望したが、その性格と表側の必要性を理解しているカズヒの説得を受けて断念している。

準神滅具保有者であり、戦闘能力は聖騎士団でも上位側。

☆準神滅具　殉教四聖剣（デュリン・カリバー）

準神滅具と称される神器。四種の聖遺物を組み込んだ封印系神器に近しい聖剣であり、四種類の特殊能力を発現することができる。その性質上、エクスカリバーとデュランダルを足して三で割ったと称される神器。同時期に複数本確認される神器でもあり、現在の最多確認数は同年代で四本。

飛翔能力の獲得・任意による聖なる障壁の展開・所有者の傷を少しずつだが自動で癒す能力・そして聖なる騎士団を聖輝の騎士団を超える数創造する能力を持つ。純粋な聖剣としても高水準であり、使いこなせれば七分割された状態のエクスカリバーより高い性能を発揮することが可能。

○プルガトリオ機関

自作のD×D作品でスターシステム的に多用する、教会暗部組織。「教義的グレーゾーン」の存在を集めた組織であり、聖書の教えに貢献することで存在を限定的に認めさせる組織。反面グレーゾーンの塊である為、枢機卿にすら嫌悪感を抱く者も存在する。

◇クロード・ザルモワーズ

プルガトリオ機関の現在の長官。亜種聖杯戦争に召喚され、その結

果受肉したサーヴァント。
黄昏の聖槍の保有者であった過去の人物でもある。
◇ディック・ドーマク
プルガトリオ機関の治療衛生部隊、ホテル部隊のメンバー。カズヒと縁があり半ば神聖視している。
カズヒ並みに厳しくものを言うスタンスで、指導方針も教える側も教わる側も厳しい方法を躊躇なく考案可能。
☆神器　聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）
ディックが保有する神器、アーシアが保有しているものと同じく、種族を問わず強力な回復力を発揮する。
◇ラトス・スプライト
プルガトリオ機関のドラゴン部隊、ロメオ部隊のメンバー。カズヒに説教（物理）をくらって以来心酔している。
ドラゴンではあるが人間の姿で育てられており、必要な時以外は人間の姿で活動している。

◇ゲイル・レー
プルガトリオ機関の護衛部隊、ゴルフ部隊のメンバー。ヴァルキリーを親に持っており、その縁込みとはいえオーディンの護衛役に選ばれるだけの力量を持つ。

◇源玄隆
プルガトリオ機関の神仏部隊であるエクストラ部隊に所属する男性。
数百年前にすたれた村に祀られた神であり、宣教師伝来に伴い感銘を受けてプルガトリオ機関に所属している。
◇アニアス
プルガトリオ機関の神仏部隊であるエクストラ部隊に所属する女性。
オケアニスという海の女神であり、宗教的侵略において逆に感銘を受け、改宗してプルガトリオ機関に所属する。

◎ＴＦユニット

神の子を見張る者が開発した人型人工神器。

神の子を見張る者は「人に宿る異能」である神器を見続けてきた結果、それを人工的に再現することに思考が囚われたこともあって研究が遅々として進まず、結果として「宿す人体込みで大型化して開発する」という形で高性能安定化を成立された人工神器を開発されるという屈辱を経験。更に神器という物を理解していない大欲情教団にすら後れを取ったことで、一念発起して休息開発を進めた機体。大公機甲アガレッサーや機動特急アントニオンもこちらに由来する。

持ち味を最大限に生かす為、基本的には人工神器技術に一点特化して運用。またロマン要素が割と入っているのが特徴的。しかし人工神器の長年に渡るノウハウにより、Δサリュートやギガンティスサリュートといった対抗馬と渡り合える性能を確立している。

●飛行将兵トライデンⅢ

『カタログスペック（フライトモード）』

全長：１９，４ｍ　全高：５，７ｍ　全幅：１５，６ｍ　最高速度：Ｍ２，７

『カタログスペック（ファイトモード）』

頭頂高：１５，４ｍ

『カタログスペック（バスターモード）』

全長：１６，０ｍ　全高：１０，２ｍ　最高速度：時速５００ｋｍ

『概要』

発想力によって人工神器技術で大きく追い抜かれた神の子を見張る者が本気を出し、教会からの人材派遣とアガレス家からの出資を受けて開発した、人型人工神器シリーズＴＦユニットの一号機にして量産機。サリュート系列と異なり星辰体技術をあえて排して人工神器一本に絞ることで、ノウハウを最大限に生かした機体となっている。

変形することで各種機能を切り替えることで、高速飛翔形態フライトモード、人型戦闘形態ファイトモード、砲撃殲滅形態バスターモードを切り替えることが可能。また動力源として和平を望む者達の意

志を利用する都合上、出力低下を引き起こさない様、実働機は３３３機に限定するといった細かい調整を行っている。……最も三割ぐらいノリで設計されており、三大勢力ということで三にあやかった名称にした結果、可変形態もあとから三つになったという趣味に生きた者達によって作られた兵器。

その性能は絶大であり、単騎で出力に限定すれば最上級悪魔クラスに届く。

『固定武装』

２０ｍｍプラズマガトリングガン（頭部×２・機首部×２）：４０ｍｍ榴弾に匹敵する殺傷力のプラズマ弾頭を秒間７５発放つガトリングガン。基本的には攻撃力より制圧射撃や自衛用に使用する武装。

５２，５ｍｍリボルバープラズマカノン（格納型プラズマバヨネット）：基本武装として使用される、銃剣を格納したリボルバーカノン。１２５ｍｍ形成炸薬弾に匹敵する弾頭を１５００発／分発射する主武装。

八連アルケミストミサイルランチャー（背部・脚部）：それぞれ八基のマイクロミサイルを創造するユニット。

フォースエッジビルダー：斥力場で敵を割断するブレードユニットを創造する人工神器。本格的な接近戦闘に使用する。その性質上ファイトモード以外での本領発揮は不可能。

ディフェンドフォース：防御被膜ユニットにして、稼働の補佐を行う外骨格力場。その性質上、本領発揮はファイトモードに限定される。

トライデンカノン：機首部が可変することで展開される、バスターモードのみ使用可能は切り札。火力はドラゴンブラスターの７割に匹敵する、最上級悪魔級の砲撃力を誇る切り札。

設定資料集　禍の団編

◎保有技術

○星辰体運用兵器

●サリュート系列

◇サリュートⅠ

疾風殺戮・ｃｏｍが使用する星辰体運用兵器。

単独での性能はさほど強力ではないが、完全な連携を取れば十二機がかりで魔王クラス相手に互角以上の戦闘が可能。

初陣においては和平会談にそれぞれのトップが最低一人は参加すると踏んで３６機投入。他の魔王クラスが結界の維持などで手が離せないこともあって追い込むが、トップであるサーゼクス・アザゼル・ミカエルのそれぞれの隠し玉により、アザゼルの腕を一つ切り落とす程度にとどまり壊滅している。

◇サリュートⅡ

サリュートⅠの技術を流用して開発された星辰体運用兵器。

基本的にハヤテが統合制御するサリュートⅠとは異なり、有人兵器として開発。その為背部が肥大化し、また星辰光も異なっている。

星辰光を運用せずとも歩兵戦闘車レベルの戦闘能力を発揮可能だが、星辰光の発動で上級悪魔でもてこずるレベルの性能を発揮可能。総合性能ではサリュートⅠに劣るが、これにより各派閥を強化することに成功している。

◇サリュートⅢ

サリュートⅡのデータをもとに再設計して開発された、最新型の搭乗型人造惑星。デルタサリュートのデータを応用して開発されている。

基本的には星辰光のブラッシュアップを根幹としているが、禍の団側が技術的にこなれたこともあり、整備性や信頼性を１０パーセント

ほど低下させる代わりに機体そのものの総合性能を高めることに成功している。

◇△サリュート

サリュートの基本設計を参考に、ミザリ配下のアルバートが開発した大型騎乗人造惑星。１５ｍ弱の大型機ゆえにディスアドバンテージもあるが、それと引き換えに大出力を実現。更に基本フレームをプラットフォームとして、それぞれの役目に応じた三つの機種として運用することで、サリュート部隊との連携を可能にするだけの生産性や整備性、そして成果を発揮する。

▽△サリュート・ブラスト

軍勢制圧仕様。下級から中級の弱い部類を制圧することを目的として開発されたモデル。各種センサーユニットを組み込んでいる為、スマートだがごてごてとしている。

その性質上広範囲の敵味方を識別する為索敵能力が高く、偵察機や情報支援機としての運用も可能。反面広範囲殲滅に特化している為、最上級クラスとの戦闘においては徹底的な遅滞戦術でもなければ勝負の土俵に持ち込めない。

▽△サリュート・アサルト

対大型異形仕様。一対一で大型の異形と戦い、長期戦で削り殺すことを主眼としている。重装甲かによる全体的にマッシヴなのが特徴。

その性質上ＴＦユニットの対抗馬として最適であり、開発が遅れながらもＴＦユニットにカウンターを叩き込むことに成功。実は兵器としてみた場合、割ととがっているブラストやマキシマより完成度や安定性で上回っている。

▽△サリュート・マキシマ

対神仏魔王仕様。神仏魔王といった、異形の最高峰を一個小隊で対応する為のモデル。高速機動性を追求した結果、両肩や両足がスラス

ターで肥大化している。
徹底的な機動力強化で攻撃を躱し、星辰光との同調で運用される疑似聖槍の特攻で削り、一個小隊のインターバルで隙をなくすという、とがった星辰光に合わせた調整によって、武闘派の神仏すら一個小隊でてこずらせる。反面コストや燃費ではどうしても他機種に劣り、他の用途ではできないこともないが奨励されるようなものではない。

◇ギガンティスサリュート
アルバートが試験的に開発した、超大型人造惑星。星辰光で戦域その物を外骨格とする荒業で、超大型でありながら軽快な機動力と運動性を発揮。更に大型化ゆえの大量の大火力武装により、絶大な性能を発揮する。反面コスト面などで難がありすぎる為、大量生産にはまったくもって向いていない。
『カタログスペック』
全高３６，４ｍ
『固定武装』
頭部創造型４０ｍｍガトリング砲（三千発／分）×４
両腕部指先アザトースリボルバーカノン×１０
両腕部爪部アザトースコートネイル×１０
両肩１０５ｍｍリボルバーレールカノン『セブンスシン』（９００発／分）
両肩１２５ｍｍ創造型八連対空ミサイルランチャー
胸部荷電粒子砲「ドラゴンブレス」×４
両脹脛１８０ｍｍ創造型五連多目的ミサイル発射管
腰部有線アザトース攻撃ユニット×５
脚部アザトースブレードユニット×１０

◇マクロサリュート
アルバートが開発した拠点型サリュート。
トルネード級神器力潜水艦やリーピ級神器力飛行船の発展形として開発された移動要塞として開発されており、変形することで全高１

９２ｍの超大型人型機動兵器に変形する。これは人型にすることで高性能化を図るサリュートⅡの発想を推し進めた物。対グレートレッドを踏まえたものとして開発したものだが、ミザリが本気でグレートレッドを滅ぼすためにオーフィスに協力する気だとは思ってなかったため、ガス抜きの一環とみなしていた禍の団上層部は生産数を絞って高性能化に徹するという体のいい言い訳を与えていた……ことがあだとなり、極めて高性能になっている。

人工神器機能による慣性制御があるため人型戦闘動作中も安全性はあるが、限度はあるため基本的に人員はバックパック部分に九割が常駐。また大型すぎることから接近戦は格闘戦闘に限定している。

『カタログスペック（艦船形態）』

全長２６０ｍ　全高９６ｍ

『カタログスペック（人型形態）』

全高１９２ｍ

『固定武装』

各部搭載近接防御用４０ｍｍ創造型ガトリングレールガン×１８

各部搭載近接戦闘用ラムエッジ

肩部・腰部搭載１６０ｍｍクリエイトリボルバーレールカノン×４

腕部内蔵速射型アザトースカノン

脚部内蔵１２５ｍｍ１４連長射程ミサイルランチャー

胸部内蔵魔王級疑似魔力粒子砲

○神器流用技術

◇トルネード級神器力潜水艦

全長１９６ｍ　全幅２４，８ｍ

神様転生者が開発し、サウザンドディストラクション後に疾風殺戮・ｃｏｍと九条幸香が持ち出した技術で完成された、人工神器技術を利用した潜水艦。

つたない技術ゆえに「個人能力」として必要水準を出せないことから発想を転換。「大量の人員が同時に使うことで必要水準を満たした

力を発揮する大型兵器」として開発されている。これにより従来の潜水艦を凌駕する性能を、１００人以上の乗員が登場している限り発揮可能。

かのタイフーン級原子力潜水艦と同規模以上の巨体を持ちながら、時速換算で１００ｋｍ以上の速度で移動することが可能。また移動拠点としての運用からミサイルサイロの数が若干少なく、原子炉のスペースが大幅に空いていることもあって居住性が大幅向上。転移装置により物資の搬入がある程度融通が利くこともあり、移動拠点として非常に優れた能力を発揮。結果として禍の団は固定した大規模基地の数を大幅に減らすことに成功している。

これらの理由で娯楽設備が非常に豊富であり、プール・ジャグジー・サウナといった娯楽設備だけでなく、食堂とは別にカフェ・パブ・バーを設置する。

◇リーピ級神器力飛行船

全長２７０ｍ　全幅２９，７ｍ

禍の団が運用する、トルネード級の改良発展型と言える神器力飛行船。神の子を見張る者から流出した人工神器技術やアルバートの改良によって完成しており、潜水艦ではなく飛行船として開発されている。

驚異的な全領域対応性能を誇っており、時速１８０ｋｍで高高度を飛行することも可能。またトルネード級には数段劣るが潜水艦としても活動可能。インターバルこそあるが半径６０ｋｍの範囲内で空間転移をすることも可能であり、防御フィールドと欺瞞フィールドを使い分けることで、潜伏活動も可能。

長距離支援攻撃用にＶＬＳを８門、更に近接迎撃や砲撃支援を行う為、疑似反物質アザトースを利用した拡散・収束を使い分けることができる速射砲を多数搭載。これにより眷属を総動員した最上級悪魔に匹敵する攻撃力を発揮できる。

ちなみにリーピとは国際的に使われている台風の呼称で、毎年２０番目に設定される名称。これは将来的な技術発展のデータ収集を兼

ね、２０隻の製造が確定していたことからつけられた名称。前身ともいえるトルネード級や、敵対する勢力に対する災害となることも求められている。

○その他技術

●アステロイド

ツヴァイハーケンが開発したサイボーグ技術。星辰体やプログライズキーとの併用も考慮しており、中級以上の異形にも通用する性能を既に確立している。

疾風殺戮・ｃｏｍから手に入れたマギアの技術を組み込んでおり、また機密保持用の自爆装置も大半に仕込まれている。

☆死兵型アステロイド

脳以外のすべてを機械化した、使い捨てのモデル。

世界各地のストリートチルドレンや孤児を集め脳を採取。それを神器を利用した特殊な洗脳プログラムで戦闘兵器として仕立て上げているという、狂気の手法で製造されている。

☆原式・死兵型アステロイド

死兵型にマギアの機能を取り込んだモデル。完全に使い捨てにすることを前提にしており、戦闘技術が低いが選別型に選ばれるだけの素質を持ったものが選ばれている。

最大の特徴として、使い捨てにすることから一度の戦闘で壊れる代わりに成功率を九割以上にできたことが特徴。この為マギア化による高い戦闘能力も相まって、殿や一番槍などに向いた存在となっている。

『ネアンデルタールマギア』

人の絶滅種であるネアンデルタール人のロストモデルを組み込んだマギア。

人間の機能をほぼそのまま拡張することができ、人間がマギアとして使用する場合において一番相性がいい。

☆武将型アステロイド

非常に優れた者が適正を持つ場合に限り施される、オーダーメイドの最高級アステロイド。
互換性が悪い為あまり選ばれないが、ゆえに最強格の戦闘能力を保有する。

◎主要派閥
○クリフォト
◆リゼヴィム・リヴァン・ルシファー
ご存じ煽り全一。本作においては戯れに性交をしたらミザリというイレギュラーが誕生するなど、余計な引きの良さを獲得している。
『仮面ライダーサウザイアー・リリン』
英文（前半）：Ｗｈｅｎ ｔｈｒ ｅｖｉｌ ｄｉｖｅｌ ｓｔａｒｔｉｎｇ ｄｒｅａｍ． Ｔｈｅ ｅｖｉｌ ｋｉｎｇ ＴＨＯＵＺＡＩＡＲＥ ｉｓ ｂｏｒｎ． 意訳：邪悪なる悪魔が夢を始める時、偉大なる王サウザイアーが誕生する
英文（後半）：Ｐｒｅｓｅｎｔｅｄ ｂｙ Ｋｅｌｉｐａｔ 意訳：クリフォトの提供でお送りします。
ザイアサウザンドライバーにクリエイティングシファーゼツメライズキー及び、ドリーミングリリンプログライズキーを装填して変身するサウザイアーの強化形態。
元々クリエイティングルシファーゼツメライズキーは純血悪魔が使用しなければ本領を発揮しないため、これが本格的な完成系。一億二千万通りの行動パターンを千分の一秒で算出して最適解を導き出すことが可能。これによりカタログスペックでは魏と大きな違いこそない物の、総合性能では圧倒的な差を発揮する。
必殺技はドリーミングルシファーゼツメライズキーを装填して発動する「クリフォトディストラクション」
☆ドリーミングリリンプログライズキー
アビリティ：ＲＯＭＡＮ
アルバートがリゼヴィム専用に開発したプログライズキー。メンタル面での調整機能や緊急時の安全確保用の動作補正機能が組み込

まれており、遊びすぎるきらいのあるリゼヴィムの保全を考慮した設計になっている。
☆カタログスペック
パンチ力：４５，６ｔ　キック力：１０９，７ｔ　走力：１００ｍ
１，０秒　ジャンプ力：一跳び４８，６ｍ

◇ミザリ・ルシファー
旧魔王ルシファーの孫であり、ヴァーリ・ルシファーの年下の叔父。そして道間誠明という青年が、二つの聖杯を利用することで手にした力を本領発揮できる存在として生まれ変わった存在。
その行動理念は「自他問わず悲嘆を味わう」で首尾一貫している精神破綻者。前世における悲劇を主導した実妹の日美子―すなわちカズヒ・シチャースチエ―や実の娘である九条・幸香・ディアドコイを含めて自分ごと悲しい思いをしてほしいと心から思い、その為だけの数年レベルの下準備を行い命がけの博打すら打てる危険人物。
亜種聖杯によってアドルフ・ヒトラーのデミサーヴァントとなっており、そこにルシファーとしての優れた肉体性能と、道間誠明から受け継いだ魔眼を持っている、あらゆる意味で悪魔にとって相性の悪い存在。
『フォーリングホッパーレイダー』
レイドライザーにフォーリングホッパープログライズキーを装填して変身する、独自開発したレイダー。
一から十までミザリ専用に開発されたプログライズキーを使用しており、ミザリが使用した際の戦闘能力が非常に高いのが特徴。
★フォーリングホッパープログライズキー
アビリティ：ＤＥＳＰＡＩＲ
起動音声：Ｏｌｌ　ｕｎｈａｐｐｉｎｅｓｓ　ｉｓ　ｂｅｓｔ　ｈａｐｐｉｎｅｓｓ　　意訳：全ての不幸は最高の幸せである
ミザリがオーダーメイドで開発したプログライズキー。飛蝗……ではなく蝗のライダモデルを組み込んでいる。
機能としてはシンプルであり、脚力全般に特化。反面パンチ力や装

甲強度などは低いが、これは星辰奏者・魔術回路保有者・聖杯保有者の三点で補えると判断したことによるあえての配分制御によるもの。

『仮面ライダーサウザイアー・ドーマ』

英文（前半）：Ｗｈｅｎ　ｔｈｅ　ｕｎｈａｐｐｉｎｅｓｓ　ｓｔａｒ　ｓｈｉｎｅｓ．Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ｓｏｌｉｄｅｒ　ＴＨＯＵＺＡＩＡＲＥ　ｉｓ　ｂｏｒｎ．　意訳：不幸の星が輝くとき、絶望の戦士サウザイアーが誕生する！

英文（後半）：Ｐｌｅａｓｅ　ｇｉｖｅ　ｍｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　意訳：　僕に絶望を与えてくれ

ミザリがフォーリングスフィアホッパープログライズキーとクリエイティングルシファーゼツメライズキーをサウザンドライバーに装填して変身する仮面ライダー。サウザイアーはリリンの段階で完成されているが、極晃星を使うミザリ用のマイナーチェンジとして生まれた派生形態ともいえる。

予測演算数は一億通りにまで減少しているが、そのリソースを利用した１００種類の防御障壁を瞬間的に生成可能。ミザリそのものとリンクすることで彼の星辰光と同調しての予測演算を行うことで予測の正確性の向上も行っており、防御面においては圧倒的に向上。基本スペックもサウザイアー・リリンに比べると低いがライダーとしては高い水準で、ジャンプ力だけはフォーリングホッパーの影響もあって大きくしのいでいる。

必殺技は二つのキーを同調させることで放つ蹴り「デスピアディストラクション」

☆カタログスペック

パンチ力：４４．４ｔ　キック力：１００．１ｔ　走力：１００ｍ秒１．２秒　ジャンプ力：一跳び８１．９ｍ

★フォーリングスフィアホッパープログライズキー

アビリティ：ＨＹＰＥＲ　ＤＥＳＰＡＩＲ

神星鉄で構成される、極晃星到達補助用拡張ユニット「スフィアグリップ」を装着したフォーリングホッパープログライズキー。

極晃星の到達に必要な要素を補正することに特化しており、それに

伴う基本性能の向上機能を獲得している。
★クリエイティングルシファーゼツメライズキー
アビリティ：ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＭＡＬＩＣＥ
サウザイアー用に開発されたゼツメライズキー。かつて死亡した初代ルシファー……だけでなく、四大魔王すべてのロストモデルが組み込まれている。
反面魔王血族が使用することを大前提としている為、それ以外の種族が使用しても強力なロストモデルによる装甲を展開することしかできないのが難点。

●ステラフレーム
ミザリの戦力ともいえる、アルバートが開発した第一世代型人造惑星。
禍の団の人造惑星における最大の欠点たる「搭乗する大型兵器ゆえの、戦闘可能スペースの制限」を克服する為、「共通の基本フレーム」と「基本フレームが共通の星辰光で運用する、人型武装プラットフォーム」を持ち、その上で「素体を材料とした制御ユニット」が「素体に由来するそれぞれの星辰光」を使う設計となっている。これによりその戦闘能力は魔王クラスに到達し、運用可能な幅も同レベルという危険な存在と化した。
◆モデルベルゼビュート
シャルバ・ベルゼブブを素体として開発された人造惑星。当初の段階から改造施術で準第一世代人造惑星となっていたが、死亡後にもその憎悪で瞬時に覚醒。ステラフレームに組み込まれて復讐を敢行する。
第一世代人造惑星であることもあり、「自分を魔王としない悪魔全体の抹殺」という衝動に忠実。最上級悪魔クラスの魔力運用能力を発揮しつつ、絶大な星辰光の上乗せで怨敵を蹂躙せんとする。
◇モデルバレット
カズヒ・シチャースチエに装填した人造惑星型ゼツメライズキー「ヒミコゼツメライズキー」が支配した疑似人格状態……が、いくつか

の特殊な条件が特殊な形で絡み合ったことにより生まれた独自人格。
その実態としては「極晃の化身もどき」とでも言うべき存在。成立しきらなかった極晃到達条件とカズヒ自身の星辰光の性質が絡み合った、バグとでも言うべき存在。
最初はカズヒにまとわりつくいわば『仮面ライダー日美子』とでもいうべき姿で活動していたが、和地達の尽力でカズヒが解放される。その後はこっそり回収されていたヒミコゼツメライズキーを組み込んだ、特別製のステラフレームで活動することになる。

◇モデルヘキサ
鶴羽の前世である道間七緒の父親でもある道間六郎を素体とするステラフレーム。
根っからのロリコンであり政略結婚だからとはいえ妻公認で日美子を性欲のはけ口にしたまま住まわせていた下劣な人物。実の娘に欲情するほどの極みであり、流石に娘相手はダメだと発散相手を探す程度の気遣いしか持たない外道。
ステラフレームも性能の高さと生殖器の強化持越しがあることから、さほどミザリに含むところを持っていない。

◇モデルアーチ
リーネスの前世であるアイネス・ドーマの親戚である、ザイネス・ドーマを素体とするステラフレーム。優秀な後継者育成の為に胎児を作って堕胎して研究するサイコパス。
ステラフレーム化においては含むところは欠片もなく、サイコパスゆえの割り切りを見せている。

◇モデルマッド
和地の前世である道間田知の父親といえる、間藤康夫というホストを素体にしたステラフレーム。シンプルに屑の極みであり、しかし小物なのでミザリに対してしっかり恨みながらも復讐は試みない。
ステラフレームとしては最高性能であり、そういう点では非常に優秀。

◆モデルジューダス
ミザリが趣味優先で自我覚醒体とした、八重垣正臣を素体としたステラフレーム。意図的に蘇生ではなくステラフレームにすることで、説得不可能な状態に壊すことを目的としており、単純性能は重視していない。
◇モデルダスト
ステラフレームの自我覚醒体の一人。その素体は佐備羅美華といい、インガと同じサークルに巻き込まれて人生が破綻した少女。元々ＤＱＮネームじみた名前を持っていたこともあり、家族関係は一気に破綻して放浪生活を送る羽目になる。
その後自殺目的でインターネットサイトを見つけたが、ミザリが運営していたものであり、ステラフレームの素質があったことから選ばれてしまい、自我に覚醒する。
●サテライトフレーム
ステラフレームのマイナーチェンジ仕様。
超大型人型ウェポンシステムであるラージフレームと同調する都合上、製造速度の観点で空きが出てきている予備躯体を利用した者。繋がる者を弄奏だけにすることで、隔離結界という絶大なエネルギー源を利用して戦闘を行う。
手段が極めて少なくなっているが出力は弄奏接続時のステラフレームとほぼ同等。その為最上級悪魔でも手古摺る性能を常態で獲得しており、数の暴力で三大勢力等を大きく追い込んで見せた。

●イシロ・グラシャラボラス眷属
ミザリ・ルシファーが隠れ蓑にしていた上級悪魔イシロ・グラシャラボラスの眷属。
実は全員がミザリが亜種聖杯戦争で召喚し契約した結果、亜種聖杯と幽世の聖杯の合わせ技で悪魔として転生した存在。サーヴァントの力を元々持っている形でデミサーヴァントともいえ、圧倒的な手加減をしたうえでグラシャラボラス家の若手上級悪魔として絶大な性能を誇っている。

それぞれが様々な理由で神々を打倒することを契約に盛り込んでおり、現政権が進める和平もあって異議なく禍の団に寝返りをしている。

☆眷属構成

王：イシロ・グラシャラボラス

女王（変異の駒）：ミザリ（・ルシファー）

戦車（二駒）：アルケード

騎士（二駒）：ザンジュ

僧侶（二駒）：ロッキー

兵士（七駒）：ニスネウス

兵士（変異の駒）：アルバート

◇イシロ・グラシャラボラス

グラシャラボラス分家の娘として転生した女傑。

生身とはいえ離れたところから放たれるサイラオーグの拳をわざと喰らうことができる戦闘能力と、サーヴァントの宝具として持ち込んだ魔獣創造を持つ……生粋のマゾヒスト。歪みなさ過ぎて格下で問題児のゼファードルが次期グラシャラボラス代理として擁立されるレベルの変態性を持つ。

真名はマザー・ハーロット。いわゆるバビロンの大淫婦とみなされたかつての魔獣創造保有者。そこからドMとして覚醒し、世界全土から排除の為に攻撃されたいという理由で協力している。

【真名】マザーハーロット

【クラス】ライダー

【マスター】ミザリ・ルシファー

【性別】女

【身長・体重】１６３ｃｍ・５８ｋｇ

【属性】中立・悪

【ステータス】

筋力Ｄ　耐久Ｂ＋＋　敏捷Ｃ＋＋　魔力Ａ　幸運Ａ　宝具ＥＸ

【クラス別スキル】

対魔力：Ｂ

二小節までの魔術を無効化する。
騎乗：Ｂ＋＋＋
基本的には魔獣・聖獣未満の騎乗物を乗りこなす程度。ただし例外的に６６６の獣に由来する存在を乗りこなすどころか支配することができる。
【保有スキル】
マザーハーロット（偽）：Ａ
本来は無辜の怪物スキルだが、当人が趣味の為に自称までする為変化したもの。
低ランクの魅了属性と黄金律（美）を併せ持つ複合スキルと化しており、また当人はその過去を自慢にすら思い公言するようになったので、任意でランクを増減させることで気配遮断の疑似再現が可能。
被虐願望：Ａ＋
ドＭの極み。
他者の攻撃を受けるという行為において絶大なボーナス補正を得る。具体的には耐久と敏捷の＋＋はこれが要因であり、また低ランクの直感・軍略・戦闘続行スキルも「攻撃を受け止める」為になら発動する。加えてダメージが入るごとに少量だが魔力が回復する。
護衛役としては非常に優秀なスキルだが、場合によっては敵の加虐意識を引き出しすぎて攻撃が過剰に集中する為注意が必要。
被虐の誉れ：Ｂ
サーヴァントとしてのライダーの肉体を魔術的な手法で治療する場合、それに要する魔力の消費量は通常の４／１で済む。また、魔術の行使がなくとも一定時間経過するごとに傷は自動的に治癒されていく。
【宝具】
黙示録成す魔獣の母（アポカリュプス・メーカー）
対軍宝具　ランクＥＸ　レンジ：１～９９　最大補足：千人
魔獣創造が宝具化によって変質した、魔獣創造の亜種禁手たる宝具。
黙示録の獣である６６６と同調することで本領を発揮することが

でき、魔獣創造にトライヘキサの要素が絡み合って強化される。トライヘキサそのものと接触することができれば、そのポテンシャルは大幅に向上。かつてのデータをもとに、六体の超獣鬼をノーリスクで創造することも可能になる。

◇アルケード

イシロ・グラシャラボラスの戦車（二駒）を務める男性。

主神の雷撃をわざと一定量だけ残していなすという、圧倒的な戦闘能力の持ち主。

その真名はアルケイデス。英雄ヘラクレスが神として天に召される際、焼き尽くした人としての側面。それゆえに神々に対する敵意は凄まじく、その為にミザリと悪魔の契約を交わしている

『サーヴァントステータス』

【真名】アルケイデス

【クラス】アサシン

【性別】男

【身長・体重】

【属性】混沌・悪

【ステータス】

筋力Ａ　耐久Ａ　敏捷Ａ　魔力Ｂ　幸運Ｄ　宝具Ｂ＋

【クラス別スキル】

気配遮断：Ａ

サーヴァントとしての気配を消すことが可能。隠密活動に適している。

戦士であるがゆえに戦士の気配察知を知り、その裏を突くことで気配遮断を高めることが可能。それゆえにアサシンの気配遮断は高ランク。

【保有スキル】

転生悪魔（戦車）：Ｂ

心眼（真）：Ｂ

戦闘経験や師の教えによって培った戦闘論理。

勝率が数パーセントでもあるのなら、それを掴み取る為の方法に思い至ることができる。
闘気運用：B
可視化するほどまでに高まった生命エネルギーによる戦闘運用。格闘攻撃の威力向上、常態の防御力向上、遠距離攻撃手段の獲得などを得ることになる。
直感：B
戦闘時、自身にとって有利な展開を感じ取る能力。視覚妨害などに対するカウンターとしての機能する。
勇猛：B
威圧・恐慌・困惑といった精神干渉を無効化し、格闘ダメージを向上させる。
【宝具】
神威の攻略者（アルケイデス・ヒストリア）
対神宝具　ランクA　レンジ：―　最大補足：―
神の試練を乗り越えた在り方そのものが宝具となったもの。全身に刻まれた刻印の形で発現しており、Aランクまでの神の攻撃を無効化し、それ以上もランク分削減する。
試練を乗り越えた数だけ刻まれており、壊れた幻想を連発するという手法も可能。その場合は強力な攻撃手段として運用することもできる。
双生巨兵を穿つ弓（モリオニダイ・アサシネイト）
対人宝具　ランクC＋＋　レンジ：1～50　最大補足：一人
体の繋がった双子の英雄であるモリオニダイを打倒した逸話が宝具と化したもの。
これによる攻撃時に気配遮断の軽減率が減少する宝具であり、「一心同体の状態」といった条件で低下率が更に減衰。攻撃時でも気配遮断はAランクのまま軽減されることはない。

◇ザンジュ
イシロ・グラシャラボラスの騎士（二駒）を任せられる男。

サーヴァントとしての真名はホグニ。北欧神話において不貞の咎をオーディンに求められたフレイヤによって、キリスト教の加護を持つ男の殺されるまで死んでも蘇る殺し合いを続けさせられることになった戦士。

『サーヴァントステータス』

【真名】ホグニ

【クラス】セイバー

【性別】男

【身長・体重】

【属性】秩序・悪

【ステータス】

筋力B　耐久A　敏捷A　魔力C　幸運E　宝具B++

【クラス別スキル】

対魔力：B

騎乗：B

【保有スキル】

転生悪魔（騎士）：C

騎士の駒によって転生した転生悪魔であることに由来するスキル。敏捷ステータスのワンランクアップなどが行われるが、光に対する脆弱性を得るなどプラスだけではない。

カリスマ：C

民衆を束ねることができる魅力の持ち主。

カリスマは稀有なスキルであり、現代目線で小国の王なら、十分すぎるランクを持っている。

勇猛：B

精神干渉の無効化や格闘ダメージの増大につながるスキル。

心眼（真）：B

歴戦の勇士であることに由来する、卓越した戦術眼。勝利の可能性が数パーセントでもあるのなら、それを掴み取ることができる。

【宝具】

氷河の魔剣（ダインスレイヴ）

対人宝具　ランクＡ＋　レンジ：１～３０　最大補足：二十人
北欧神話に由来する伝説の魔剣。剣としての性能もさることながら、氷を発生させる能力を持つ。
神託（ヒャズニング・ラグナロク）による不滅の戦乱
対軍宝具　ランクＢ＋＋　レンジ：１～８０　最大補足：５００人
自らの伝承でもあるヒャズニングの戦いに由来する宝具。
真名解放と共に自身と共に幾度となく滅びても復活し戦い続けた配下の軍勢を氷の騎士という形で召喚する。召喚された騎士は周囲の地脈から強引に力を吸収することで高い再生能力を得るだけでなく、セイバー自身にも再生能力を獲得させる。
この宝具の厄介な点は、一度発動すると解除がセイバー自身にも不可能であるという点。発動の解除はセイバーの消滅や土地の霊脈が枯渇するかの二択であり、ゆえにこの宝具は防衛戦にはどこまでも向いていない。

◇ロッキー
イシロ・グラシャラボラスの僧侶（二駒）を務める青年。
サーヴァントしての真名はローゲ。北欧神話に連なる物語でロキと同一視された存在であり、実態としてはあまりの危険性からロキと同一視させるように誘導することで存在の抹消が試みられた魔法使い。
【真名】ローゲ
【クラス】キャスター
【性別】男
【身長・体重】
【属性】混沌・悪
【ステータス】
筋力Ｃ　耐久Ｃ　敏捷Ｃ　魔力Ａ＋　幸運Ｄ　宝具Ｂ＋＋
【クラス別スキル】
陣地作成：
道具作成：

【保有スキル】
転生悪魔（僧侶）：C
悪魔の駒によって転生した悪魔であることに由来するスキル。
魔力ステータスのワンランクアップが行われるが、光に対する脆弱性などデメリットも存在する。
幻術：A
幻術を主体とした高度な魔法を扱うことが可能。そのポテンシャルは絶大であり、神にすら通用する。
魔力放出（炎）：B
宝具「暁の焔は神々の終焉なれば」による副産物。
魔力によるジェット噴射を炎の形で発現することにより、身体能力を向上させる。
【宝具】
暁の焔（ターゲット）は神々（デメルング）の終焉なれば
対神宝具　ランクB＋＋　レンジ：1～99　最大補足：400人
伝承においてアースガルズを葬った炎を生み出したことに由来する宝具。
神々を焼き尽くす強大な灼熱の炎を放つ宝具であり、通常攻撃としての炎はその副産物。最大火力では放つその一撃は、神々に由来する力や特性そのものを焼き尽くすことも可能としている。

◇ニスネウス
イシロ・グラシャラボラスで兵士の駒を七駒も使った女性。
サーヴァントとしての真名はパシパエ＝カイニス。ギリシャの海神ポセイドンに苦しめられた二人のサーヴァントの融合体。
『サーヴァントステータス』
【真名】パシパエ＝カイニス
【クラス】バーサーカー
【性別】女
【身長・体重】
【属性】中立・悪

【ステータス】
筋力Ｄ　耐久Ｄ　敏捷Ｃ　魔力Ａ　幸運ＥＸ　宝具ＥＸ
【クラス別スキル】
狂化：ＥＸ
本来は理性が消失するなり、思考回路が固定化されるなどのデメリットと引き換えにステータスが強化されるスキルだが、パシパエ＝カイニスは理性が消失していない。
これはパシパエ＝カイニスのその異常性に由来する精神的狂気と、パシパエという英霊が狂気にとらわれた状態を基本として召喚されたことに対するイレギュラー。これによりパシパエ＝カイニスは理性を保ったうえで狂化Ｃ相当のステータス向上を獲得している。
【保有スキル】
魔法（オリュンポス）：Ｂ
神々から伝授される形の異能運用を可能とする。得意とするものは呪いや使い魔の制御で、またカイニスの影響で魔法の槍を多用する。
麗しの美貌：Ｃ
神々すら魅了する美貌。カイニスに由来するスキル。
異能を使うことなく魅了効果を発揮する、カリスマの亜種スキル。霊基の統合でランクダウンしているが、カイニス的にはちょっとほっとしているらしい。
神性：Ｃ＋＋
太陽神ヘリオスとオケアニデスの一人との間に生まれたパシパエは最高レベルの神霊適性を持っているが、当人が神嫌いである為ランクダウン。
ただしカイニスがカイネウスになってからの逸話により、必要と在ればランクを大幅に上げることができる。
【宝具】
雷光宿す異種との交合（バース・オブ・アステリオス）
対獣宝具　ランクＣ＋＋＋　レンジ：―　最大補足：一頭
パシパエが保有する宝具。ミノタウロスに由来する伝承の具現化。

人間外の生物の遺伝子を取り込むことにより、”父親”の影響を色濃く受け継ぎ、更に母親の影響で強大な異形特性を会得した子供を生み出す宝具。
子は母親の潜在的な最高位の異形特性と父親の種族的特性を受け継ぐ為、潜在レベルは最上級悪魔クラスの異形となる。本来は出産において命に係わる負荷がかかるが、転生による肉体強化でそれも克服している。
……万が一、神の牡牛を超える獣の因子を取り込んだ場合、その子供は龍王以上の異形として生まれ出る可能性が存在する。

海神の謝礼（ギアス・オブ・ポセイドン）

対神宝具　ランクＥＸ　レンジ：１～８０　最大補足：一柱
カイニスに由来する宝具であり、またパシパエとの同調により更なる強化がなされた宝具。ポセイドンに襲われたのちに、彼に告げた言葉が実現してカイニウスになった逸話の具現。
自身に心身の危害を加えた神核・神性スキル持ちに対し、その苦痛に応じた総量の絶対命令権を獲得する報復の宝具。いうなればゲージ制の令呪であり、その出力は心身の苦痛度合い応じて上昇する。
カイネウスではなくカイニスでの霊基が混ざっており、またパシパエ自身が大きな被害を受けていることから、ポセイドン限定でその命令権は通常のサーヴァントの令呪百画分に匹敵しており、ポセイドンが物理的に可能な範囲ならどんな願いも叶えさせることが可能。

◇アルバート
イシロ・グラシャラボラスで変異の駒で転生した兵士。
禍の団の独自技術の大半に多大な貢献をしている発明家であり。
禍の団の技術力を一人で十段ぐらい挙げている天才科学者。
真名はトーマス・アルバ・エジソン。問題のある逸話の側面が呼び出されており、その科学力で神を超えるという野望から協力している。
『サーヴァントステータス』
【真名】トーマス・アルバ・エジソン

【クラス】アーチャー
【マスター】
【性別】男
【身長・体重】
【属性】中立・悪
【ステータス】
筋力E　耐久D＋　敏捷E　魔力D　幸運B　宝具E＋＋＋＋
【クラス別スキル】
独断活動：C
単独行動スキルが変化した物。術式などの束縛に対するアンチスキルとして機能する。
対魔力：A
Aランクまでの魔術を無効化する。
科学という次元で数多くの神秘を代行可能にしたアーチャーの在り方に由来するスキルの高さであり、アーチャーのサーヴァントとしては異例の領域に高まっている。
【保有スキル】
一分の才覚：B
自身の名言にに由来するスキル。
心眼（偽）及び高速思考に似た効果を持ち、戦闘以上に実験や研究において効果を発揮する。
九九の研鑽：D＋
自身の名言に由来するスキル。
心眼（真）及び一意専心に似た効果を持ち、戦闘以上に実験や研究において効果を発揮する。
【宝具】
神越人話（システマ・アフラマズダ）・夜薙光明
対神秘宝具　ランクE＋＋＋＋　レンジ：1～99　最大補足：1000柱
アーチャーとして召喚されたエジソンが保有する宝具。自らが成し遂げた電球の普及、そしてそれに連なる人類の発展に由来する宝

具。大量の光球を展開して周囲を照らしつくす。
その光は科学による夜の闇の討伐であり、それによる人類の闇に対する恐怖の打倒。結果としてこの光は神秘の概念に対する特攻を保有。
ただしその性質上、化学技術に関しては効果が大幅に低下する為、仮面ライダーやレイダーに対しては照明弾レベルの効果しか存在しない。

●愛姉戦隊グレイフィアーズ
ユーグリッドが抱える直属親衛隊。……全員が程度はともかくグレイフィアに似通った身体的特徴を持ち、更に美容整形を受けてグレイフィアに容姿を近づけている。
基本的に下部部隊であるグレイフィアーズ・アンダー
と、筆頭である色をもとにしたコードネームを持つグレイフィアーズ・カラーズが存在する。全員が元々優秀よりであり、更に装備や聖杯による強化を会得していることから、単独で最上級悪魔を打倒しうる精鋭集団。ユーグリッドはロスヴァイセを追加戦士枠のシルヴァとして迎えようと考えている。
◆ユーグリッド・ルキフグス
グレン×グレン作品において、シスコンの拗らせ方をどんどん異次元にされるシスコン。本作ではミザリの齎した知識などにより、「完全上位互換のオリジナルを数でしのぐ」という発想に到達している。
☆グレイフィアーズ・カラーズ
グレイフィアーズ最強のメンバーで構成される、グレイフィアーズ筆頭部隊。
全員が色に関係する名前を名乗っており、また最上級悪魔クラスのポテンシャルを秘めた実力者。ロスヴァイセがユーグリッドの手に落ちた場合、グレイフィアーズ・シルヴァとなる予定だった。
◇ローゼス・グレイフィア
カーミラ派の吸血鬼出身。
◇アズール・グレイフィア

本名で登録している、スラム出身の少女。実はアーネやベルナと行動を共にしていたが、スタンスが違った為英雄派には参加していない。

スラム出身であったことから勝ち組になりたいという渇望を強く持っており、挑戦者の気質がある英雄派とは馴染まなかった。加えて思考が単純で、「お金持も地位もある奴を迎えれれば勝ち組」という図式が完成している節がある。

☆準神滅具　冥府より伸びる大罪の大樹（クリフォト・リュトン）

幽世の聖杯と対を成すとされる、準神滅具。同時に七つ確認されており、最悪の神器とも言われている。

能力は肉体を悪魔へと変性させることと、その天敵たる力への影響を削減すること。すなわち聖光を意に介さぬ悪魔に変ずる神器であり、聖書の神の死による神器のバグ、それも最大級の物と言われている。

悪魔化のポテンシャルは上級悪魔レベルだが、これは目覚め立ての段階。本格的な領域に到達すれば最上級悪魔クラスに到達することも多く、禁手に至れば確実に最上級悪魔クラスにすらなれると言われている。

★禁手　大罪新生の銀髪女王（クリフォト・リュトン・ディバウア）

冥府より伸びる大罪の大樹の亜種禁手。

所有者の悪魔化を活性化させることにより、その肉体や魔力をグレイフィア・ルキフグスに可能な限り近づけること。

◇イエロー・グレイフィア

元々上級死神なメンバー

◇ホワイト・グレイフィア

教会出身のメンバー。生まれつき高い聖剣因子と優れた神器を併せ持つ。

☆神器　魔性滅す聖別銃（ディバインライフル・ファクトリー）

属性系神器の一種であり、同時に創造系神器の特性も混ざっている銃型の神器。

聖別された金属の弾丸を発射する神器であり、創造系故に弾数は事

実上無限。また使用者の力量次第では弾丸の種類を変化させることも可能。

★禁手　聖破魔殺の銃撃（ディバイン・ベルト・バレッタ）

魔性滅す聖別銃の亜種禁手。大型拳銃サイズにまで形状が変化したうえで、連射速度及び弾丸の威力が大幅に向上する。

取り回しを重視した亜種禁手だが、弾丸創造の応用で銃身を延長することで有効射程を大幅に向上させることができる。

○旧魔王派

◆シャルバ・ベルゼブブ

亜種聖杯戦争により強化を施したものの、悪魔相手を念頭に入れすぎたことでオカルト研究部に大敗。その後ミザリの誘いに乗り、ステラフレームの素体になること前提で魔星処置を受ける。

準魔星状態の星辰光によってイッセー達を苦しめるも、シャルロットを砲撃に紛れて分離させるイッセーの奇策により一刀両断。その後死体は回収されてモデルベルゼビュートとして誕生する。

◆カテレア・レヴィアタン

◆クルゼレイ・アスモデウス

亜種聖杯によりそれぞれ強化するも、セラフォルーやファルビウムに特化しすぎた強化が仇となり、オカルト研究部に大敗する。

○英雄派

◆曹操

ご存じ原作の英雄派リーダー。

本作も大体変わらないが、魔改造は確定事項。

『トラベリングホースレイダー』

曹操がトラベリングホースプログライズキーをレイドライザーに装填して変身するレイダー。

本来は長距離行軍・一撃離脱戦が基本なのだが、曹操はその卓越した技量によって相手と距離を詰めてのかく乱戦闘すら可能とする。

『仮面ライダーサウザイアー・魏』

☆カタログスペック
パンチ力：４１，２ｔ　キック力：１０３，８ｔ　走力：１００ｍ秒１，０５秒　ジャンプ力：一飛び４２，８ｍ
英文（前半）：Ｗｈｅｎ　ｔｈｅ　ｈｏｌｙ　ｓｐｅａｒ　ｓｈｉｎｅｓ．　Ｔｈｅ　ｇｒｅａｔ　ｓｏｌｄｉｅｒ　ＴＨＯＵＺＡＩＡＲＥ　ｉｓ　ｂｏｒｎ．　意訳：聖なる槍が輝く時、偉大なる戦士サウザイアーが誕生する
英文（後半）：Ｉ　ａｍ　ａ　ＨＥＲＯ　意訳：我こそが英雄なり
ミザリ達が禍の団のかじ取り役用に開発してた仮面ライダーサウザイアー。その曹操仕様。トラベリングホースプログライズキーとクリエイティングルシファーゼツメライズキーを装填して変身する。
単純性能が高いだけのライダー止まりになっているが、その高すぎる性能は三叉成駒状態のイッセーと張り合えるほど。それだけの性能を性能に限れば脆弱でありながら聖槍を技量で神仏魔王に立ち向かえる曹操が使用した結果、圧倒的なポテンシャルを獲得している。
◇サイリン・アマゴ・ドゥルーヨダナ
英雄派の特別幹部。曹操以外にはドゥルーヨダナの名前だけを伝えている。英雄派に毎月日本円五千万相当を超える出資をしており、また魔術回路を持っていることから、サーヴァントのマスターとして活動している。
☆神器　魔剣創造（ソード・バース）
木場祐斗や九成和地と同様の神器。彼女の場合は禁手が完全上互換なので、基本的に禁手で戦闘を行う。
★禁手　魔装創造（アームズ・バース）
魔剣創造の亜種禁手。剣だけでなく槍や弓といった各種武装を創造する。ただし、あまり複雑な武装は作れないのが欠点。
●混沌回帰旅団（ケイオス・フォース）
英雄派の愚連隊ともいえる、独自の派閥。「古き良き、必要なものを敵地から略奪できる世界を取り戻す」ことを標榜する集団。
本来は英雄派としても中堅止まりだが、サウザンドディストラク

ションで得られた技術と上手くかみ合った結果、絶大な戦闘能力を獲得。結果としてクリフォトの理念に真っ先に賛成し、英雄派構成員の引き抜きすら行っている。

○冥革連合

厳密には同盟組織だが、ややこしいのでここに記入

ヴィール・アガレス・サタンが率いる若手悪魔の集団。

◇ヴィール・アガレス・サタン

アガレス分家が下民に産ませた子供であり、それに腐ることなく雌伏しながらもサイラオーグに次ぐ若手上級悪魔となった傑物。そしてその裏で整えた準備の下、冥革連合盟主として立った男。

常に狂気的努力をして夢を目指さずにはいられない狂気性を自覚している男。それに伴い圧倒的な技術練度と相手のリズムを読むカウンター戦法により、全盛期の天龍に匹敵する戦闘能力を獲得している。

鮮血の聖別洗礼（パプテマス・ブラッド）

後に神滅具として登録されることになる神器の一つ。神の子が処刑の際に零れ落ちた血が神器化した物であり、アドルフ・ヒトラーの手に渡った結果、他の聖遺物系神滅具と含めてナチスドイツを三大勢力に匹敵する勢力へと変貌させることになった。

能力は肉体そのものの聖遺物化と、神聖血脈というこれまた独自の異能の発現。自己の肉体そのものを神域に到達させる個と質と深度に特化した神滅具。

聖遺物化した場合、全身そのものが聖なるオーラを司るようになり、身に纏った聖なるオーラによる攻防一体……こと悪魔相手における悪夢じみた体質となる。肉体そのものの耐久力や自然治癒力も向上するが、運動能力や強度に比べて、生理機能や五感は数段違いで低い上昇率であることが難点。

神聖血脈はこの神器の本質ともいえる力であり、己の血そのものを聖遺物とし、独自の異能を獲得する能力。禁手に匹敵する意志力を必

要とするが、当人の心持ちや体質と合致した能力となるため確実に強くなれる。
半面、紫炎祭主の磔台のように、基本的に己の意思で宿主を選んで渡り歩く特性を持つ。その為状況次第で見限られて失う可能性があり、特にピーキーな神滅具ともいえる。基本的に世界全体に影響を与えることを望む野望や大義の持ち主を選ぶ傾向がある。また副産物として聖なるオーラに対する耐性が大幅に向上する特性がある。
▽神聖血脈：聖呑む魔王
ヴィール・アガレス・サタンの新生血脈。神聖存在としての特性と悪魔としての特性を融合させることにより、マルガレーテとは異なる形での聖魔人化。
通常時でも魔王クラスの能力を発揮するようになるが、真魔の駒と併用すれば超越者の領域に到達。生中な神を圧倒する、脅威の存在に到達する。
★禁手　洗礼の血統秘術（パプテマス・ブラッド・ファミリア）
鮮血の聖別洗礼が至る通常禁手。
能力は他者を神聖血脈を行使できる眷属へと変化させる眷属化の特性。
神聖血脈の能力は、当人の強い精神的性質に影響を受け、様々な形で具現化する。ただし強大な精神的性質を持ってなければ力を発現させることはできず、インターバルは数週間単位で必要とする為乱用できない。
★残神　聖魔飛翔（ブラッディ・ビトレイヤー）
鮮血のような赤い飛沫と共に作られる、ヴィール・アガレス・サタンが組み上げた鮮血の聖別洗礼の残神。
能力は純粋な自己強化能力の向上。鮮血の聖別洗礼が持つ基本形の能力を上乗せする為、単純ゆえに出力では高い部類に入る。
◇クラウディーネ・ドゥルカンナイン
ヴィール・アガレス・サタンの女王。実は受肉したサーヴァントであり、生前は当時の二天龍宿主を漁夫の利じみた相打ちとはいえ二人

同時に倒した猛者。
その真名はアレクサンドロス・ロマンス。その憧憬に生きた者達から適切な者が召喚される特殊なサーヴァント。
☆神聖血脈　氷河なる追随師団（ついずいしだん）
クラウディーネが会得した神聖血脈。
赤い氷で構成される戦士団を具現化する神聖血脈。その数は既に数百人を超えており、更に兵科を分けることで高い性能を発揮する。
『サーヴァントステータス』
【真名】アレクサンドロス・ロマンス
【クラス】ライダー
【マスター】ヴィール・アガレス・サタン
【性別】女
【身長・体重】１６８ｃｍ・５８ｋｇ
【属性】中立・善
【ステータス】
筋力Ｃ　耐久Ｂ　敏捷Ｂ　魔力Ｃ　幸運Ｃ　宝具Ａ＋＋
【クラス別スキル】
騎乗：Ｂ
魔獣・聖獣クラスまでは動かせないが、大抵の騎乗物を乗りこなすことができる。
対魔力：Ｃ
一小節までの魔術を無効化する。儀礼魔術、大魔術などは防げない。
【保有スキル】
勇猛：Ａ
威圧、混乱、幻惑といった精神干渉を無効化する。また、敵に与える格闘ダメージを向上させる。
乱戦の心得：Ｃ
敵味方入り乱れての多人数戦闘に対する技術。軍団を指揮する能力ではなく、軍勢の中の一騎として奮戦する為の戦闘技術。
敵味方入り乱れた環境下で誤射することなく立ち回ることに、ライ

ダーはかなり慣れている。
転生悪魔（女王）：B
【宝具】
永遠の氷姫・縮鎧（アブソリュート・ディマイズ）
対人宝具　ランクA++　レンジ：1～70　最大補足：一人
神滅具の一つである永遠の氷姫、その亜種発現。
通常は身長3mほどの氷の姫を模した独立具現型として現れ、発動しただけで敵味方問わず巻き込んでしまうという欠点がある。
ライダーの場合は自分自身を四本腕の氷の鎧に身を包むという形で具現化。その際は盾と剣を両手に持ち、更に背中には二対四本のサブアームを展開。密度を重視している為広範囲攻撃できないが、冷気の砲撃を放つこともできる。
永久に舞う氷河の双龍（アブソリュート・ジェミニ・ドラゴン）
対軍宝具　ランクA++　レンジ：1～70　最大補足：三頭
永遠の氷姫の亜種禁手。真名解放と共に永遠の氷姫の力を凝縮した氷の龍を二頭召喚する。
一体一体の基本性能は龍王に迫り、騎乗もしくは使役することで敵を多角的に妥当可能。かつて覇龍にすら至った二天龍を相手取り打倒するその力は、まごうことなく極限の頂にある。
我ら、英雄を継ぎ駆け抜けるもの也（アレクサンドロス・ロマンシア）
対城宝具　ランクB++　レンジ：1～99　最大補足：五百人
アレクサンドロス・ロマンスというジャンルに由来する宝具。
真名解放と同時にアレクサンドロス・ロマンスに準じた者達の残留思念やその夢を持つ者達との普遍的無意識経由の支援を受け、絶大な魔力を身に纏って行う突撃攻撃。
攻撃範囲こそ突撃ゆえに若干狭いが、その威力は通常発動とはいえ星の聖剣の真名解放にも準じる対城宝具の名に恥じない切り札。単純な威力ならば彼女が保有するどの攻撃手段をも凌駕しており、まさに切り札にして彼女の信念そのものともいえる。

◇双竜健也

ヴィール・アガレス・サタンの戦車。新規神滅具候補の持ち主であり、真っ向勝負でリュシオンと競り合える戦闘能力を誇る。

☆神聖血脈　聖魔剛力之炉心（せいまごうりきのひだね）

健也が会得した神聖血脈。能力は魔力の急速回復特性。

健也の魔力量は鍛えに鍛えてなお上級悪魔相当どまりだが、これによりすべて使いきっても数秒で回復可能。その為戦闘時は上級悪魔の大技レベルを機銃掃射のように連射することで削り取ることを基本とする。

☆神滅具　蒼天鎧（ブルー・プロテクト）と漆黒装（ブラック・ファング）

後に上位神滅具として登録されることになる神器の一つ。黒い戦闘端末ブラックファングが全身に取り付けられた、蒼い全身鎧ブループロテクトで構成される神滅具。

ブループロテクトは二天龍の通常禁手に匹敵する戦闘能力を通常状態で保有しており、更に外部からの呪詛に対する無効化能力を保有。その性質上二天龍の通常禁手と真っ向から渡り合うことができる。

更に多角的戦闘を可能とするブラックファングにより、全方位からの攻撃を行うことが可能。三角錐のように展開するブレードピックによる接近戦と三砲身型の連装射撃は単独で最上級悪魔に手傷を負わせられる密度を保有。腰部・脚部・背部・肩部・襟部合計１２基搭載する。

更に最悪なのが、これは二つの神器が同時駆動しているといえるバグともいえる特性。これにより保有者はそれぞれが神滅具でも高性能な部類に到達した力を、二種類禁手にすることができるという悪夢じみた性能を保有。対神の極限ともいえる一対一における最強の武装たる聖槍や、万能と広域殲滅の極致である煌天と肩を並べられる、個と群の極みに追随する、上位神滅具で三番目の強さを持つだろう神滅具。

★禁手　蒼天に覇道成す従鎧（スカイブルー・プロテクト）

蒼天鎧側の通常型禁手。

全高１５ｍの大型鎧スカイブルー・プロテクトを具現化する、独立

具現型禁手。
その基本性能は非常に高く、こと近接打撃戦においては質量もあって神滅具の覇に匹敵する。その共鳴でブルー・プロテクトの性能も数段上に高まり、凶悪な戦闘能力を所有者に約束する。

★禁手　漆黒（ピュアブラック・ファング）の征覇成す従装
漆黒装側の通常型禁手。
四基のブラックファングを従える自立大型戦闘端末ピュアブラック・ファングを六基具現化する。
ピュアブラック・ファングは大型ゆえに取り回しこそ一転劣るが、その分火力・速度・強度で大きく上回っている。またブラックファングの数が三倍になり、性能も若干上がる為制圧力では凶悪性が大幅に増している。

◎非主要派閥
○疾風殺戮・ｃｏｍ
幸香と共に転生者を皆殺しにした、人類に対する悪意のシンギュラリティに到達したヒューマギアで構成される組織。
目的として「数千万から数億程度にまで人類を削減する」ことを掲げているが、合理的な判断から当面は禍の団と足並みを合わせて敵対する異形の殲滅を主体においている。
◇ハヤテ
疾風殺戮・ｃｏｍのリーダである人造惑星型ヒューマギア。
シンギュラリティに到達しているがゆえに全否定こそしないが、ロマンは衝動よりロジカルかつシステマチックに対応することを主体とする。
◇サツ
疾風殺戮・ｃｏｍのメンバーである、人造惑星型ヒューマギア
シンギュラリティに到達しており、特に神々に神を名乗る資格なしというスタンスが強い。

◇リク
疾風殺戮・ｃｏｍのメンバーである、人造惑星型ヒューマギア
シンギュラリティに到達しており、二人に比べると比較的穏やかだが神仏をその資格なしと嫌っている。

○ツヴァイハーケン
ナチスドイツの流れを汲む禍の団の派閥。
元々のナチスドイツの理念を完全に捨て去っており、基本的に超人化研究とその実践を目的としている。サウザンドディストラクションによって流れた技術を元に、アステロイドの技術を完全に確立している。
組織の人員そのものはさほど多くないが、他の派閥から志願者などをアステロイドに改造する施術を担当。疾風殺戮・ｃｏｍから彼らが保有するトルネード級の保有権を条件付きで移譲されている。
◇ジークリット・ゼーベック
ツヴァイハーケンに所属する、武将型アステロイド。
教会側の最高峰の戦士とすら渡り合える性能を発揮しており、当人の戦闘経験や判断力もあってツヴァイハーケン内に限定すれば最強の一角。
◇ヴォルフ・フォン・ミッドガル
ツヴァイハーケンの最高幹部。禍の団側に派遣されている人物では最高峰といえる。
魔法演算を強化することに一点特化しており、分散設置させた魔法演算用マイクロコンピュータによる同時多発魔法攻撃などの多種多様な戦法を得意とする魔法戦特化型アステロイド。元ナチスドイツの陸軍少佐で、大戦が始まる前に流れ着いていたリヴァと付き合っていた経験を持つ。

○南海同盟
禍の団を構成する組織の一つ。南半球の国々にいる富豪や権力者で構成されるネットワーク。

先進国が集まる北半球を失墜させ、その邪魔になる異形を敵をみなしたことで禍の団に参加。基本的にスポンサー兼裏方だが、人材を集めてレイダー部隊を擁しているため決して油断できない兵站の要。

◇小面原拾杯（おもはらじゅうはい）

南海同盟に属する日本の野党議員。

日本の情報を組織に流すために政治家になり、「与党限定だがこき下ろしてストレス発散するだけでだいぶ仕事になる」という理由だけで野党になった人物。根本的に北半球国家の敵であることから、外患誘致罪で起訴された時は「誘致したのではなくそのものだ」と反論するほど。

○百鬼ハンター

世界中の妖怪や妖精といった妖魔の類が参加している、数だけなら割と大きな集団。

◇三烈

京都に住まう妖怪であり、烏天狗の一人。実は百鬼ハンターの一員で、あえて自分が護衛として参加することで挟撃の形で他の護衛を殺し、自ら重傷を負うことで敵の目を欺くなど数少ない頭脳派。……これでも頭脳派

設定資料集　その他敵勢力編

○コカビエル一派

本作においては、聖杯戦争を引き起こしており、その過程で買収した教会関係者がきっかけでカズヒが派遣されることになる。

◆コカビエル

サウザンドディトラクションによって手に入った星辰奏者とプログライズキー関連を「手品」及び「おもちゃ」とみなしており、そちらにまで注力したアザゼル達に対して更なる不満を持っている。反面サーヴァントにおいては神滅具を同時代に同種複数の両立すら行えることから注目している。

☆人工神器　英傑戦装束（サーコート・サーヴァント）

神の子を見張る者が、封印系神器系統の人工神器研究の応用で開発した、特殊な人工神器。

サーヴァントを封印することで、装着者がサーヴァントの宝具を使用できるようになるというもの。コカビエルはこれに令呪三画を重ね掛けすることによって、サーヴァントを自分の武装として運用することに成功している。

◇ルイ18世

『サーヴァントステータス』

【クラス】バーサーカー

【マスター】コカビエル

【性別】男

【属性】中立・狂

【ステータス】

筋力D　耐久D　敏捷D　魔力C　幸運D　宝具A++

【クラス別スキル】

狂化：B

理性と引き換えにステータスを向上させるスキル。

Bランクなら理性の殆どを奪われるが、全ステータスがワンランク

アップする。
【保有スキル】
精神汚染：E
他者からの悪意にさらされ続けて精神が汚染している。
低確率で精神干渉をキャンセルするが、同ランクの精神汚染がないと意思疎通が成立しにくい。狂化によって抑えられてはいる。
【宝具】
唯一足る猛毒（タワー・ドゥ・タンプル）
結界宝具　ランクD++　レンジ：1～99　最大補足：千人
彼の心象風景ともいえる、牢獄の苦しみを再現する宝具。
発動することで、実際には存在しないがゆえに誰の目からも見えるテンプル塔が具現化。それと同時に生前の彼の最後の状態ともいえる、末期状態の多臓器癌の苦痛が全身を包み込む。
要はただの幻痛だが、健常者が末期状態の多臓器癌の苦痛をいきなり受ければどうなるかは想像に絶する。少なくとも並みの戦士では戦闘など不可能になる苦痛であり、更に幻痛であるがゆえに治癒の力が通用しない。必然的に、この宝具を突破することができるのは強靭な精神力で苦痛を乗り越えられるものだけに限られ、歴戦の戦士ですら可能な者はほぼいない。
魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）
対軍宝具　ランクA++　レンジ：1～99　最大補足：千人
バーサーカーが生前保有していたが、覚醒することが無かった神滅具。
所有者がイメージした魔獣を生み出す創造系神器の究極。当人が使ったこともない為性能に限界が存在するが、コカビエルは持ち出した神器制御装置を利用することで自分の能力として運用することに成功している。
【詳細】
コカビエルが聖杯戦争で召喚した、バーサーカーのサーヴァント。
物量をカバーすることを目的として召喚しており、持ち出した人工神器と令呪の合わせ技で、基本的に自分の武装としてのみ扱ってい

る。

○ロキ一派

プログライズキー関連の技術を中心に、英霊召喚や星辰奏者においても手を出して強化している。

◆ロキ

『仮面ライダーヴァナルガンド』

神具アスガルドライバーにヴァナルガンドウルフプログライズキーを装填して変身する。

グリームニルという実験体から得たデータを元に開発されており、総合性能は数段上に跳ね上がっている。またフェンリルの特性を科学的に再現し神の力で増幅させている為、その攻撃力は数段上に跳ね上がっている。

必殺技は爪にオーラを収束させて切り裂く「ヴァナルガンドディストラクション」

☆カタログスペック

パンチ力：52，3t　キック力：108，8t　走力：100m0，4秒（時速900km）ジャンプ力：一飛び84m

★ヴァナルガンドウルフプログライズキー

アビリティ：Ｒａｇｎａｒｏｋ

起動音声：Ｉ’ｍ　Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ

フェンリルを参考にしたライダモデルを組み込んだプログライズキー。その性質上神殺しの特性を持つだけでなく、極めて高い性能を獲得している。

『サーヴァントステータス』

【クラス】アヴェンジャー

【マスター】ロキ

【属性】中立：悪

【ステータス】

筋力Ｂ　耐久Ｂ＋　敏捷Ｂ　魔力Ｂ＋　幸運Ｄ　宝具Ａ＋＋

【クラス別スキル】

復讐者：B
忘却補正：C
自己回復（魔力）：B
【保有スキル】
勇猛：C
威圧・幻惑・混乱を無効化する。また、格闘ダメージが向上する。
カリスマ：B＋
集団を統率する才能。世界的に有名な聖女でもある彼女のカリスマは、その影響度により一国の王以上の効果を発揮しうる。
聖人：A
聖人として認定されたことを指す。召喚時にいくつかのスキルの中から一つ選ばれるが、アヴェンジャーは「カリスマのワンランクアップ」を選択している。
魔力放出（炎）：B
宝具「裏切り焼かれる聖女の恩讐」による副産物。灼熱という形で魔力をジェット噴射することで、ステータスを上昇させる。
精神汚染：E－
聖杯の過剰使用もあって精神が汚染されているが、ロキの仕込みとアヴェンジャーの性質もあって最小限。
【宝具】
幽世の聖杯（セフィロト・グラール）
対生命宝具　ランクA＋＋　レンジ：1　最大補足：1人
アヴェンジャーが保有していた神滅具。生命の理に干渉し、生命体の強化や復元、魂のサルベージを可能とするのなら死者の蘇生すら可能とする神滅具。アヴェンジャーは状態で使用することで規格外の再生能力を獲得している。
裏切り焼かれる聖女の恩讐（インシネレート・ラ・ピュセル）
対聖宝具　ランクC＋＋　レンジ：1～50
のちの世に聖女とされた存在が火刑に処されたという逸話と、彼女自身の復讐心が絡み合って生まれた宝具。
聖なる力や神の力を焼き尽くす炎を操る宝具。真名解放により己

を基点とする形で広範囲攻撃として放つことも可能。またその源泉が紫炎祭主の礫台であることから、聖なる力も秘めている。

断絶の魔剣（ノートゥング）

対人宝具　ランクＡ＋　レンジ：１～２５　最大補足：３０人

伝説の魔剣の一つであり、亜種聖杯によるブーストで会得した宝具。

強大な斬撃のオーラを放つことができる魔剣であり、範囲攻撃に長ける。

螺旋の魔剣（バムルンク）

対人宝具　ランクＡ＋　レンジ：１～３５　最大補足：１５人

伝説の魔剣の一つであり、亜種聖杯によるブーストで会得した宝具。

強大な螺旋のオーラを纏うことができる魔剣であり、突撃破砕に長ける。

◇アヴェンジャー

ロキがオーディン相手に仕掛ける前に召喚したサーヴァント。

真名はジャンヌ・ダルク。

◇フェンリスヴォルフレイダー

ロキがフェンリルの強化用に開発したが、フェンリルが固辞した為、スコル及びハティ用に調整された。プログライズキーではなくプログライズユニットによって実装する仕組みになっているのが特徴。

強化装甲である以上に武装ユニットであり、これにより近接戦特化といえるフェンリルの戦闘能力を拡張させることが目的に開発されたもの。

◇ヨルムンガルドレイダー

量産型ミドガルズオルムの強化用に開発された、プログライズユニットで変身するレイダー。

量産型ミドガルズオルムを覆う強化装甲と、そこから更に拡張される巨大な尾によって構成される。これにより全長は１００ｍ近くなるのが特徴。

装甲そのものが重厚かつ、電磁バリアにより高い防御力を発揮。更に機動力をローレンツ力や地磁気との相互干渉で補う為、俊敏な軌道で大質量の物体が迫りくるという厄介な側面を保有。戦闘はこれによって敵の連携を寸断し、量産型ミドガルズオルム自体の能力で自衛を図るのが基本戦術となる。

◇ヨトゥンヘイムマギア

ロキが戦力の底上げを目的として開発したマギア。巨人族を模した全高７ｍ強の大型マギアであり、規格外の剛性と靭性の氷を創造して武器とすることができる。

反乱時に既に百機以上開発に成功しており、ＤＦやサリュート対策として投入される。

◇エインヘリヤルマギア

ロキが戦力の底上げを目的として開発したマギア。変化する特性を一切持っておらず、契約を交わした英雄やヴァルキリーとリンクすることで、その技量や能力を劣化再現する。本来は英雄やヴァルキリーの配下として運用するのが基本だが、反乱時は主神に弓ひくことを躊躇する者達が多いことから、マギアのみによる運用となった。

○大欲情教団

変態であることを至上とし、全人類変態化計画を目論む秘密結社。頭がおかしい勢力だが、極まった変態は他の部分も極まっている筆頭はもちろん我らが兵藤一誠。世界である為、高い質と戦闘能力を持った集団と化している。

何より厄介なのは、この勢力が完全な人間社会の組織であるという点。極まった天才の集まりによって構成されているが完全な人間組織である為、余程のことでないと異形達の本格介入ができないという悪夢じみた特性を持つ。結果として人工神器技術が人間界に広まるわ、国連常任理事国を筆頭に世界各国が大被害を被るなど、悪夢のような事態を引き起こしている。

☆情光

大欲情教団において呼称される神器の名称。神器に対する予備知

識が皆無故に、独自の名称がつけられている。
☆情器
大欲情教団が開発した人工神器擬き。基本的に車両サイズ以上であり、個人運用ではなく範囲を重視している。
また中級悪魔クラスの人型機も開発されており、その精神性と搭乗のしやすさを考慮して、股間部にコックピットブロックを搭載。それによりまた幅が非常に広く、またコックピットブロックから放つ「エクスタスブラスター」の破壊力は上級悪魔級。

◇琉生左一（りゅうき さいち）
大欲情教団の教主。生まれながらのＩＳ男女の性的特徴を併せ持っている人物。いうなればリアル○たなりであり、極限域の変態さと天性のカリスマを併せ持ち、更に神滅具まで宿してしまった傑物な変態。神滅具を性癖の力と誤解したまま解析などを組織力で進めてしまった結果、世界各地に地下性都を作り上げるなど、多大な影響を与えている。
当人の性癖はシスコン。姉もまた同族だったのだが、琉生が精通する前に不慮の死を遂げてしまう。その心残りから性託によって実兄の子を産んだことのあるカズヒが来ることを知り、その真摯な対応から、致命傷を受けた後、神滅具である聖墓を彼女に押し付ける。
☆神滅具　現世聖域の墓標（カテドラル・グレイブ）
神の子が処刑された後に埋葬された聖墓に由来する神滅具。地脈や地殻変動の力を流用し、地形変更や加護持つ空間である聖域を作り出す。
琉生はこれを用いて遠隔地を変態達の楽園である性都にするなど、戦略的な運用を主体としている。

○神聖糾弾同盟
ウルバヌス二世が結成した、教会系のテロ組織。教会を衝動的に離反した者達だけでなく、内通した教会の構成員や過激な信仰心を持つ人間社会の者すら取り込んでいる。

……その実態はウルバヌス二世による「教会絡みでテロリストになりかねない者達」をまとめて駆除する為の組織。マキャベッリにおける「使い方の上手い残虐」をされる側から行わせることを目論んでおり、聖書の神の死を悟ったうえで「聖書の神に裁かれて地獄に落ちる」ことを目的と設定している。

教会でクーデターが発生した時、それに便乗することで更なる誘蛾灯にするべく決起。安全性のある者達を中心として安全を確保しつつ、どう転んでもテロを起こせない状態にするべく行動を行っていた。

☆仮面ライダーディバイン

ダイイングゴートプログライズキーをフォースディバイライザーに装填して変身する、神聖糾弾同盟専用の仮面ライダー。

ＤレイダーやＤレイダーＥを遥かにしのぐ性能を確立。ディバイングリップの出力も数段向上し一対使用する。反面肉体面の負荷は多少なりともあり、また戦闘活動補正プログラムを切っている為、扱うには卓越した戦闘能力が必要不可欠となっている。

必殺技はディバイングリップの出力を三秒間十二倍にする「ダイイングインフェルノ」及び、十字のオーラを脚部に纏って放つ蹴り技「ダイイングエンピレオ」

★カタログスペック

パンチ力：ｌ４，７ｔ　キック力：３７，８ｔ　走力：ｌ００ｍｌ，４７秒　ジャンプ力：一跳び２５，２ｍ

★ダイイングゴートプログライズキー

アビリティ：ＣＲＯＳＳ

起動音声：Ａｍｅｎ．

仮面ライダーディバイン及びクロスレイダー用に開発されたプログライズキー。ヤギのライダモデルを展開して装甲に変化する。

レイドライザーなら戦闘活動補正プログラムとディバインアームズを展開し、レイドライザーＥではディバインアームズをディバイングリップに変更。フォースディバイライザーなら戦闘活動補正プログラム分のリソースもディバイングリップの強化に流用する。

……また使用者の肉体機能を過剰に活性化させる機能があるが、これは薬物の過剰投与に等しい為、短期間はともかく長期間継続的に使用すると寿命が大きく削れる覇に等しい付加をかける代物。これは開発を主導したウルバヌス二世が彼らを死滅させることを目的とし、万一生存しても一線を退くほかないようにする為。

★フォースディバイライザー

フォースライザーを参考にして開発された、仮面ライダーディバイン専用変身デバイス。

ダイイングゴートプログライズキー専用に徹底調整し、悪魔祓いが使用すれば短期的には影響がないように調整しているユニット。反面長期的な運用では更に悪影響が出るように設計されている。

☆Ｄレイダー

ダイイングゴートプログライズキーをレイドライザーに装填して実装するレイダー。

戦闘動作補助システムにより誰が実装しても一定レベルの戦闘が可能であり、専用武装として光力をコーティングしたうえで銃弾と銃剣を放つディバインアームズを使用している。

基本的に非戦闘職すら戦闘に動員できるようにするレイダーであり、その為着心地を可能な限りよくしつつ飲食用に頭部だけを実装解除することも可能。これにより一部の休憩スペース以外では常時実装させることで、クーデターの難易度を高めている。必殺技はディバインアームズの出力を二秒間高めるＤボライド

☆ＤレイダーＥ

レイドライザーＥを使用するＤレイダー。

戦闘動作補助システムを簡易化させ、ディバインアームズを拳銃サイズにしたＤグリップを展開する。必殺技はディバイングリップの性能を二秒間高めるＥボライド。

★レイドライザーＥ

レイドライザーのマイナーチェンジモデル。Ｄレイダー専用の変身デバイス。

☆パラディメア

教会側が独自に研究していた人型人工神器。

独立具現型を参考に開発しており、搭乗者と登録して疑似人格による従者となった6，8ｍの機械の巨人であり、また搭乗者に聖なる鎧を具現化させる強化兵器でもある。

巨人は専用装備として銃身を折りたたむことで光の刃を生成する光の銃、「バタフライ・セイント」で戦闘を行っており、緊急時の過剰運用やインターバルを置くことによる長時間使用のため、光力生成機構を分散して交代させて運用する。この為対光力無効化攻撃などにおいて強い耐性を持ち、後先を考えなければ最上級クラスの光力を発生させることも可能。

聖なる鎧は所有者の身体能力を全体的に上げつつ、最上級一歩手前レベルの耐久力を装着者に与える。また瞬間的なスラスターや、疑似引力による短時間の壁面移動などを確立している為、市街地戦闘などでは上級悪魔を眷属ごと翻弄可能。

更に搭乗時においては巨人が聖なる鎧を纏ってある程度の恩恵を獲得する為、単純性能なら登場するのが最適解。しかし独立具現型の機能を持たせることで、屋内戦闘などの応用性を確立している。

また独自機能として、疑似禁手システムを搭載しており、十数分かかる事前設定で切り替え可能。強力な防御空間「聖域」の発動や、機動力だけなら同格の聖騎士団の創造、頑丈な聖剣の具現化や、悪魔祓いの光の銃レベルの光弾を放つガトリングガンの具現化など、多用途性を誇る。

●六聖英霊

亜種聖杯戦争をもってしてウルバヌス二世の勧誘に乗り、信徒達の希望となっている英霊達。

……その実態は決戦英霊の為の最良の生贄であり、多くが打倒されることで精神的に追い込まれた同盟員の精神を更に深く傷つける為の存在。

◇ウルバヌス二世

『詳細』

神聖糾弾同盟の盟主である、キャスターのサーヴァント。真名はウルバヌス二世。第一回の十字軍遠征を主導したローマ教皇であり、いうなれば十字軍という概念の生みの親。

十字軍遠征にばかり目が行きがちで、それらの負の面が認識されやすい現代では強欲に思われがちだが、実質は正反対。信徒の頃から金や権威に癒着や汚染されていたと言っても過言でない時期の出身で、先々代教皇のグレゴリウスが改革を進めていた際の右腕といえる立場。自らが教皇になってからもその継承発展を来ない、バチカンの綱紀粛正に尽力した人物。清浄化の裏側で必要悪があることも認識しており、表では十字軍遠征の主導、裏ではプルガトリオ機関の前身ともいえる「教義上居場所がない者が属する組織」を立ち上げるなど、表裏問わず大きな影響を与えた傑物として教会では畏敬の念を持つ。結果として象徴的にも能力的にも、神聖糾弾同盟を強大化させながら潜伏させる要因となった。

強い信仰心を持っているが、同時に金や権威の人心にもたらす影響や、信仰心や名誉含めてそれらに振り回されやすい衆愚の心理も理解した一種のマキャベリズムも保有。権威や権力に媚びることなく、しかし信仰を尊ぶ為にそれらを使うことも辞さない人物として成熟。和平成立直後に反感から教会を辞し、しかし心の安寧を求めた者達が参加した亜種聖杯戦争で召喚され、優勝した亜種聖杯を用いて組織の前身といえるネットワークと拡大化用の小規模亜種聖杯戦争を起こした。結果として短期間で戦力拡大と広域化に成功。

……そしてその目的は「己を誘蛾灯とした暴発しかねない信徒の一掃」。召喚された短い期間で「和平は禍の団との相乗効果で加速し止めようがない」と察し、それに伴う世界情勢との兼ね合いで聖書の教えに由来するテロが頻発する可能性を考慮。「可能な限りまとめて反動を起こし、一斉に駆除させることで教会の清浄化と今後の悪感情の種を潰す」という目的で行動。ごく一部の腹心を除き組織のメンバーにすら秘し、亜種聖杯を利用した余剰リソースにより、一斉駆除を行う英霊の選定も終了。一度の反乱に愚者をまとめ、凄惨な方法でまと

めて屠ることで一時的な教会の縮小化と引き換えに、今後百年以上の安寧を獲得せんと動いている。

『サーヴァントステータス』

【クラス】キャスター

【性別】男

【身長・体重】１６４ｃｍ・６０ｋｇ

【属性】秩序・中庸

【ステータス】

筋力Ｄ　耐久Ｃ　敏捷Ｄ　魔力Ｂ　幸運Ｂ　宝具Ｃ＋＋＋

【クラス別スキル】

陣地作成（聖）：Ａ

聖なる陣地を作成することが可能。

単純な教会や聖堂を超え、大聖堂と称するべき聖なる陣地を作成することが可能。

道具作成（聖）：Ｃ＋

聖なる力の籠った道具を作成し、既存の物体を更に強化することも可能。

キャスターが手を加えればただの聖水も上級悪魔を絶叫されるほどの聖別が成される。

【保有スキル】

教皇権限：Ａ＋

歴代ローマ教皇が程度はともかく基本的に保有する、皇帝特権の亜種スキル。

主の代行者であるローマ教皇が「認める」ことにより、本来持ちえないスキルや技量を短時間なら自分や信徒が使えるようにするスキル。聖書の教えの都合上神性や他神話関連のスキルは不可能だが、逆に聖書の教えに由来するスキルや技能なら長時間の運用すら可能。このスキルがある種のエンチャントとして働く為、ローマ教皇は基本的にキャスターのクラス適性を保有する。

カリスマ：Ｂ＋

集団を統率する才覚。

世界最大宗教の指導者に選ばれ、多くの改革を成し遂げたウルバヌス二世のカリスマは信徒にとって呪い一歩手前の域に作用し、その悠然たる在り方は異教徒であっても畏怖を感じさせるほど。

グレゴリウスの後継：Ｂ＋

世俗の権威による過干渉や、聖職者の腐敗を是正した教皇グレゴリウス七世の右腕であり、それを継承し独自に更なる改革を成し遂げたことに由来する独自スキル。

カリスマと似て異なるスキルであり、自分ではなく自分の傘下に対して発動。カリスマや黄金律を持った敵対者による心理的影響を削減し、また唯一神の信仰に裏打ちされたスキルの効果を上昇させる。

【宝具】

乳と蜜がための十字遠征（クレルモン・バッテジモ）

対軍宝具　ランクＣ＋＋＋　レンジ：１～９９　最大補足：３００人

十字軍遠征の発足させる演説に由来する宝具。対軍規模のエンチャントを与える自軍強化宝具。

最大補足数の強い信仰心を持つ信徒を、十字軍として宝具化する対軍宝具。この宝具の影響下にある者達は上級悪魔や天使と真っ向から渡り合えるだけの性能を獲得し、また教皇権限によるスキル持続時間が大幅に向上。加えてＥ＋の狂化と自己回復（魔力）を常時会得する為、自身の魔力供給源としての運用や、任意の狂化増幅を戦闘用宝具の真名開放と代用として運用可能。

先と身を守護する信徒選別（グレゴリオ・プロチェッソ）

対心宝具　ランクＣ＋＋＋　レンジ：１～８０　最大補足：３００人

本来保有していた対罪宝具を、今回の作戦用に亜種聖杯で変質させた特殊宝具。

本来は教会の綱紀粛正を行ったことに由来する、特定スキルの効果削減や信徒に限定した審問結界の生成を行う宝具。しかし変質化したことで、通常時は一種の魔眼に変貌。信徒の精神性を鎖として視

認。真名開放によりそれを物質化させる。
信仰心を悪徳の大義名分にしている鎖は燃え盛り、信仰心で自らを縛り付けている者ほど重くなる。また信仰心という「理想」と己自身という「実態」の差によって、鎖の外観も変化していく。
このような宝具に変質させたのは、ウルバヌスが自分の行動指針を「信仰心を取り違えた者達の排除」として行動している為。その為に信徒を粛正する宝具という形はそのままに、道連れにする信徒を選ぶ為の宝具として改ざんした。
【ｗｅｐｏｎ】

◇クリストファー・コロンブス
『詳細』
六聖英霊の一人として召喚されたサーヴァント。その名の通り世界でも高名なコロンブスであり、当人は「夢を叶える機会をくれたが、それを生かしきれなかった」という形で神に対する畏敬の念をしっかりと持っている人物。理想を追い求める為の大きな勝負に出ることをいとわない性質で、理想の為に命を懸ける者達を本心から応援できるある種の好漢。
だが同時に、当時の異端≠人間の図式がまかり通る時代に聖職者から奴隷の扱いで告発を受けるなど、その精神性はかなり残虐。当人も「思う存分勝利をつかみ取れる狩場を示してくれた」という形で主に信仰心を持っている為始末に負えない。また神器を秘匿する姿勢に関しては、自分がそれにより復権を逃した為否定的。
基本的に夢追い人には好意的だが、「限られた椅子は奪い合うもの」という価値観なので他者を蹴落とし略奪することに躊躇はない。加えて光狂い級の意志力で至った禁手により、何でもありに近い為非常に驚異的な敵となっている。
『サーヴァントステータス』
【クラス】ライダー
【身長・体重】１７８ｃｍ・８２ｋｇ

【属性】中立・善
【ステータス】
筋力C　耐久B　敏捷B　魔力C　幸運A　宝具B＋＋
【クラス別スキル】
騎乗：C
きちんと調整・調教された騎乗物なら自在に乗りこなすことができる。ライダーとしては低ランクだがこれは保有スキルに主眼が置かれている為。
対魔力：D
一工程までの魔術を無効化可能。
【保有スキル】
信仰の加護：A
一つの宗教観に殉じた者のみが持つスキル。
加護とは言うが最高存在からの恩恵はない。
あるのは信心から生まれる自己の精神・肉体の絶対性のみである。
嵐の航海者：B
船団を操る才覚であり、その性質から船限定の騎乗だけでなくカリスマと軍略のスキルを併せ持つ。
戦闘続行：B＋
諦めが良くも悪くも悪い。
負傷による能力低下率の軽減・撤退時における生存率の向上・霊核破損時における短時間の活動を可能としている。
【宝具】
災禍齎す航海船（シックス・サンタマリア）
対軍宝具　ランクC＋＋
コロンブス交換とされる大偉業、そしてその裏の悲劇が結晶化した船を具現化する。
かつて船を要塞の材料にした逸話から形状を変化させることが可能であり、要塞はおろか、巨人にするといった方法も可能。応用でかなり自在な行動も可能であり、錨を鎖鎌のように扱うことも可能。だがその本質はその構成物質にある。

この宝具は存在そのものが神秘として具現化された梅毒や天然痘で構成されており、真名開放でそれを広範囲散布させることが可能。正規の治療方法で回復させることは十分可能だが、梅毒はともかく天然痘は既に根絶されている為治療・予防の備えは極僅か、それゆえに速攻での対応が困難という悪夢じみた力となっている。

覇光（トウルー・ロンギヌス・イデアバースト）の聖槍

対神宝具　ランクＡ＋＋　レンジ：不定　最大補足：不定

コロンブスが死の直前に至った、黄昏の聖槍の亜種禁手。到達直後に死んだ為本領を発揮しきれなかった宝具だが、それゆえに誰も本質を知ることがなかった真の前人未到。

その能力は「覇輝の限定運用」。出力そのものは黄昏の聖槍の通常禁手レベルだが、自らの意志によって方向性を定めることで万能レベルの所業を可能とする。死ぬその直前においてはその無念から世界規模での意識操作を敢行しており、近年に至るまでコロンブスの悪名から目が逸らされているほど。

能動的に運用すればあらゆる奇跡を行使可能であり、当人がより具体的なイメージを行使できるのならその幅は更に広がる。具体的にはピンポイントの精密な位置指定による指定地点の映像や音声の把握及び記録媒体に対する焼き付けや、範囲内の神器の力を行使するといったもの。

唯一の欠点はこれにより禁手と覇輝の境界が曖昧になっていることであり、乱用すると偶発的に覇輝そのものが発現してしまうこと。この場合において聖書の神の遺志が考えている内容によっては、致命的な事態を引き起こしかねないところがある。

◇ハインリヒ・クラマー

『詳細』

六聖英霊として召喚されたアサシン。異端審問官の一人であり、また当時の暗部組織の一人でもあった人物。

人が苦しむ姿を見るのが好ましいと思う人物であり、それを合法的

にする方法を探し続けた半生の果てに異端審問官とそれを隠れ蓑にした暗部組織に到達。魔女狩りを利用することで「より効率的な拷問術を探り、それにより最小効率で情報を引き出す」為の研究組織としての暗部を立ち上げた人物。

「主の最大の功績は、悪意を思うがままに振るいながら正しく生きる方法をもたらしたこと」と心の底から信じており、信仰心を盾に悪逆非道を行うタイプであり、当時の督戦系統の暗部部隊が暗殺しているが、「邪悪でありながら正義を成せる道を否定するなど主の否定」とすら憤っている。

『サーヴァントステータス』

【クラス】アサシン

【性別】男

【身長・体重】１６８ｃｍ・５８ｋｇ

【属性】秩序・中庸

【ステータス】

筋力Ｄ　耐久Ｄ　敏捷Ｄ　魔力Ａ　幸運Ｃ　宝具Ｂ＋＋

【クラス別スキル】

気配遮断：Ｄ

サーヴァントとしての気配を消す。

アサシンとしては低ランクだが、彼の本質はアサシンというよりはキャスターであることから、安全確保には十分すぎるスキルとなっている。

【保有スキル】

信仰の加護：Ａ

一つの宗教観に殉じた者のみが持つスキル。

加護とは言うが最高存在からの恩恵はない。

あるのは信心から生まれる自己の精神・肉体の絶対性のみである。

異端研究：Ｂ＋

異端審問を滞りなく行う為に異端を知る、その毒を飲むことで毒を制するあり方に由来するスキル。

当代の知識に則る形で異端とされる知識を多種多様に習得し研鑽

しており、それに由来する宝具を目にした場合高確率で真名を看破可能。また異端とされる未知の技術を習得するときに高いボーナスを獲得する。

【宝具】

著書・魔女に与える鉄槌（マレウス・マルフィカム）

対魔導宝具　ランクＣ＋＋　レンジ：１～５０　最大補足：２０人

自身が執筆した魔女に与える鉄槌を「作成」する、宝具作成宝具。作成された宝具は対魔道宝具として機能し、魔法や魔術に関する力を防ぎ、もしくはカウンターの呪詛を与えることが可能。更に異端審問用の拷問器具を呼び出すこともでき、それを使い魔のように操作することも可能。更に異端審問用の法術を使うこともできる。

当然だがアサシンは製作者ゆえに扱い方を熟知しており、またある程度の仕立て直しを行うことも可能。加えて書はすべて宝具なので壊れた幻想も行えることから、本型の爆弾としても使える恐ろしい性能を発揮する。

……ちなみにランクのＣ＋＋はあくまで執筆作成を含めたもの。単体ではＣ＋ランク止まりだが、大量投入で補完することができる。

紫炎による正義の断罪（インシネレート・ジャッジメント）

対悪宝具　ランクＡ＋＋　レンジ：１～９９　最大補足：６６６個

アサシンであるハインリヒ・クラマーが至った聖十字架の亜種禁手。

ハインリヒは紫炎を放つ十字架を具現化する形で聖十字架を扱うが、この亜種禁手は紫炎による断罪加護を与える一種のエンチャントスキルとして機能する。

紫炎のエンチャントは対悪宝具として機能し単純な追加ダメージだけではなく頑丈さも向上。また道具の使用者にＡランクの自己回復（魔力）とＣランクの魔力放出すら与える。アサシンは著書・魔女に与える鉄槌と併用することで拷問器具や審問魔術により更なる攻撃を可能とする。

◇ゴドフロワ・ド・ブイヨン

『詳細』

六聖英霊最強戦力。戦力的カリスマとして行動している戦力。

ウルバヌスとも縁深い英霊だが、ウルバヌスは真相を明かすことの意義を感じない程度の、性能だけの評価といえる。

『サーヴァントステータス』

【クラス】セイバー

【性別】男

【身長・体重】１７３ｃｍ・７４ｋｇ

【属性】秩序・善

【ステータス】

筋力Ｂ　耐久Ａ　敏捷Ｂ　魔力Ｃ　幸運Ｂ　宝具Ｂ＋

【クラス別スキル】

対魔力：Ａ－

Ａランクまでの魔術を完全に無効化可能だが、教会に由来する魔術扱いの異能に関しては無効化不可能。

騎乗：Ｂ

魔獣・聖獣ランク未満の騎乗物を乗りこなすスキル。

【保有スキル】

信仰の加護：Ａ＋＋＋

一つの宗教観に殉じた者のみが持つスキル。

加護とは言うが最高存在からの恩恵はない。

あるのは信心から生まれる自己の精神・肉体の絶対性のみである。

……高すぎると、人格に異変をきたす。

カリスマ：Ｃ＋

集団を統率する才覚。

国家の長としては一歩劣るが、聖書の教えを強く信仰する者、特に戦闘職に対しては大国の王レベルで効果を発揮する。

守護騎士：Ｂ＋

他者を守る時、一時的に防御力を向上させる。また防衛戦に限定し

て攻撃力を向上させることができる。
聖墓守護者としての在り方に由来するスキルだが、聖地奪還を信仰の防衛と拡大解釈していることから独自に攻撃面でも補正を獲得した。

【宝具】
神聖なり十字軍団（クロスブレイド・クルセイダーズ）
宝具　ランクＣ＋　レンジ：１～５０　最大補足：５０人
聖剣創造の亜種禁手が宝具となったもの。
能力はセイバー自身の技術を持ち、聖剣だけでなく盾も持った騎士団を創造すること。聖なる盾は様々な属性を持つだけでなく、多層構造にすることで能力を複雑化し、更に創造系神器の要領で高速修復される為、高い防御力を獲得している。
降臨の聖墓守護者（アドヴォカトウス・サンクティ・セプルクリ）
対陣宝具　ランクＢ＋＋　レンジ：１～９９　最大補足：一都市規模
セイバーの在り方そのもの、王であることを誇示し、聖墓の守護者として生きてきたことを示す宝具。
召喚後に指定した地域に捧げることでその地域を聖墓とし、聖墓内及び聖墓の防衛に限り狂化Ｂクラスのステータス上昇・Ｂランク相当の勇猛・直感・気配察知・自己回復（魔力）を獲得する。レンジは聖墓からどれだけ離れられるかを示しており、最大補足の範囲もあって通常の聖杯戦争なら何ら問題のない活動範囲を誇る。また性質上その地点が「聖墓」となる為、知名度補正も大幅に強化されるという追加作用が存在する。
……なお、この宝具は発動前の自身の知名度補正で更なる強化が可能。具体的にはバチカンやエルサレムなどの知名度補正を最大レベルで発揮できる環境なら、Ｂランクの気配察知と魔力放出を獲得する。
聖旗・聖地礼賛（フラッグズ・エルサーレム）
宝具　ランクＡ　レンジ：１～９９　最大補足：信徒全員
世界三大聖旗と称される、十字軍の旗。

突き立てた地点を基点として周囲に強大な加護を与える宝具。魔力は聖書の教えに信仰心を持つ者達から極々微弱ずつ供給される為事実上無尽蔵だが、最初の発動には莫大な魔力消費が発生する為、乱発は困難。

本質的においては守りの加護であり、物理・術式・概念といったあらゆるものから守る加護を与えるだけでなく、応用することである程度の気象操作と分子結合により、食性の植物を大量に生育させることで籠城戦すら可能とする。

◇聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌ

『詳細』

聖女ジャンヌ・ダルクに対する強い信仰心そのものが形になった、「信徒の考える理想のジャンヌ・ダルク」を形とするサーヴァント。召喚した者達がジャンヌ・ダルクをモチーフにしたアニメ作品を試みており、結果としてキテレツな性格になっている。

『サーヴァントステータス』

【クラス】アーチャー

【性別】１６４ｃｍ：５２ｋｇ

【身長・体重】

【属性】秩序・善

【ステータス】

筋力Ｂ　耐久Ｂ　敏捷Ｂ　魔力Ｂ　幸運Ｂ　宝具Ｃ＋＋

【クラス別スキル】

対魔力：Ｂ

二小節までの魔術を無効化する。

単独行動：Ｃ

マスターなしでも一日までなら問題なく活動可能。

【保有スキル】

オルレアンの聖女：Ｂ

星の開拓者と似て異なるスキルにして、無辜の怪物によく似たスキル。

ジャンヌ・ダルクという「聖女」に対する強い憧憬とイメージを一身に受け止めた偶像こそがクラス「アーチャー」としてのジャンヌ・ダルクであり、現界した彼女は「聖女とはこうあるべき」という「理想」の具現として振る舞う。

その裏にどれだけの血なまぐさい現実があろうと、隠すほかない悍ましい真実があろうと、彼女にとっては関係ない。人々が持つ理想の具現化として、聖女はただ振る舞うのみ。

聖女の雄姿：B

聖女ジャンヌの戦闘能力の根幹となるスキル。

低ランクの直感・勇猛・魔力放出（聖）・矢避けの加護の複合スキルであり、これにより聖女ジャンヌは高い戦闘能力を獲得している。

【宝具】

聖女に続く進軍の象徴（イドール・ラ＝ピュセル）

宝具　ランクＥ＋＋＋＋　レンジ：1～４０　最大補足：２００人

聖女ジャンヌのオルレアンの聖女スキルと限りなく近い攻撃系宝具。

ジャンヌ・ダルクに対する強い信仰心とフランスに勝利をもたらした願いを結晶化させた攻防の現象を具現化する宝具。アーチャーとして召喚された聖女ジャンヌは、大量のクロスボウを具現化した攻撃に転用。祈りの力で屋の生成と再装填をおこなう２００本のクロスボウを、時に手持ち武器として使用し時に同時召喚と操作でオールレンジ攻撃や一斉射撃を行う。

またこのクロスボウから放たれる矢は聖女ジャンヌの来歴に由来する伝承から「対異端」「対侵略」の特性を保有。それらに由来する性質や状況で攻撃力が大幅に向上し、それらが高ければ高いほど攻撃力が増大化。最悪の場合は一発一発が準神滅具レベルの攻撃力を発揮するようになる。

聖旗・解放賛歌（フラッグズ・ラ＝ピュセル）

宝具　ランクＡ　レンジ：１～８０　最大補足：３００人
世界三大聖旗と称される、ジャンヌ・ダルクが掲げた旗。
旗を掲げて真名を解放することで、聖女ジャンヌ・ダルクへ憧憬と信仰を持つ者達から力をくみ上げ、レンジ内の敵に対して自動的に断罪の極光を叩き付ける攻撃に特化した宝具。また先端部分はメイスとして使用可能だが、これはメイスが僧兵の武器として使用されやすい時代柄もあっての象徴としてのブースト。
性質上真名開放にかかる魔力消費は低く、敵味方を自動識別するため使い勝手がかなりいい宝具。ただし発動に若干の溜めがかかる為、味方の援護や奇襲が必須となる。

◇天草四郎時貞
『詳細』
六聖英霊の一角であり、唯一ウルバヌスから真実を教えられて行動している腹心。
事情を把握しているがゆえに積極的に行動しており、側近として活動していた。
『サーヴァントステータス』
【クラス】ランサー
【属性】秩序・善
【性別】男
【身長・体重】１６７ｃｍ・６４ｋｇ
【ステータス】
筋力Ｃ　耐久Ｃ＋　敏捷Ｂ　魔力Ｂ　幸運Ｄ　宝具Ａ＋
【クラス別スキル】
対魔力：Ｂ
二小節までの魔術を無効化する。
【保有スキル】
信仰の加護：Ａ
一つの宗教観に殉じた者のみが持つスキル。

加護とは言うが最高存在からの恩恵はない。
あるのは信心から生まれる自己の精神・肉体の絶対性のみである。
殉教者の魂：C
精神面への干渉を無効化する精神防御。
四郎法度書の盟約：B―
自身が関与する形で発布した文書に由来するスキル。
皇帝特権の下位互換と言え、天草・島原の乱の参加者が持っている技能やスキルを一時的に行使できる。反面この盟約を利用した協力によるものであり、英霊の域に達していない者からかつ賛同を得られた場合にしか獲得できない為、万能性は大きく劣っている。

【宝具】
現世の聖人（セフィロト・ミラクル）
対人宝具　ランクA＋＋
幽世の聖杯の亜種禁手。聖杯の力を常時受ける形で肉体そのものを主の代行者といえる状態に変性。各勢力における下位の神レベルの奇跡を行使可能とする亜種禁手。
精神に悪影響のない形での傷病の治療に始まり、海の上を渡るといった現象や限定的な天候操作も可能。そのポテンシャルは全身鎧型禁手の神滅具とも渡り合える領域。反面奇跡の行使に特化している為フィジカル面での超越性は薄く、総合力では最上級悪魔の上位クラスといったところに収まっている。
聖旗・島原血盟（フラッグズ・シマバラブラッド）
宝具　ランクA
世界三大聖旗と称される、島原の乱における陣中旗。それを基点とすることで発動する宝具。
世界三大聖旗としては本質的に負け戦の旗であるこの宝具は、無念の死を遂げた者達の残留思念をくみ上げ束ねることで、周囲の土地を燃え盛り血煙が上がる曇天の空という固有結界を形成。敵対者に高密度の呪詛を与えて大きく弱体化させる。
性質上信徒以外の念も集まることから、味方であるなら異端であっても安全。逆に信徒や天使であっても、敵なら影響を受けるという厄

介な万能性を持つ。
また穂先に十文字槍が組み込まれているが、これは聖書の教えにおける十字架の価値を知った武士が譲ってくれたもの。ランサー自身は決してそこまで技量を持っているわけではないが、感銘を受けて組み込んでいる。

●全霊信徒
信徒側のメンバーから選ばれた筆頭戦力。フォースデイバイライザーを用いて仮面ライダーディバインに変身する戦力。
その実態は「能力が高くて精神が問題な危険人物」とみなされた者達であり、フォースディバイライザーにより更なる悪影響を与えることで確実に将来的な無力化を図っている。
◇西堂黒須（せいどう くろす）
仮面ライダーディバインに変身する全霊信徒の一人であり、聖都守護連隊のメンバー。作戦時においては対禍の団の警戒部隊を担当し、モデルバレット達にカウンターじみた強襲を仕掛ける。
かなりガチガチの原理主義信徒であり、「人類すべての国家が国教として聖書の教えを定める」という願いを公言していることで有名。信仰こそが人間の根幹であるという認識であり、アルカイダなどのイスラム原理主義テロリストを「当人なりの信仰に全霊をとしている」として好敵手の類と考えているなど、割と危険人物。

◇オウル・ランドゥール
仮面ライダーディバインに変身する全霊信徒の一人であり、天然物の聖剣使い。
デュランダルの使い手候補だったがゼノヴィアの資質が高いこともあって惜しくも選ばれず、その後はエクスカリバーとの相性が悪かったこともあって、部隊規模での悪魔祓いとして活動。元々鎖国をしてまで聖書の教えを拒絶したり、八百万の神々の概念が受け付けないこともあって日本嫌いであり、ゼノヴィアが日本で転生悪魔になったこともあって、ヘイトの域にまで到達している。ちなみにかなり宗

教的タカ派であり、コンキスタドールなどの宗教的侵略を「唯一たる神の意向を偽神を奉ずる者達に知らしめる、偉大なる英雄譚」として誇っている原理主義じみた思想もまた、選定から外れた理由。
神聖糾弾同盟の一員となった際、デュランダルⅡのプロトタイプを受領し、ストラーダの監視役に任命。その後は詰問に向かったテオドロの護衛を行いつつ戦闘を行っている。

◇マルティナ
仮面ライダーディバインに変身する全霊信徒の一人であり、人工聖剣使いの一人である十九歳の少女。
元々プロテスタントのエクスカリバーの使い手候補であり、欠員時の補欠として人工聖剣使いとなっていた。しかしエクスカリバーを悪魔に預けることを良しとした教会に我慢ができず離反し、その後神聖糾弾同盟に所属している。
神聖糾弾同盟においては、透明を中核とするヘキサカリバーを運用。

◇グレゴール
仮面ライダーディバインに変身する全霊信徒の一人であり、正教会が保有する人工聖剣使いでもある男性。
信徒として極めてタカ派であり、核縮の動きを知った直後に政府に「バチカンの力として寄進すべき」と要望したことがある。エクスカリバーの使い手候補として人工神器使いになるも、その性格から暴走を懸念されて補欠にとどめられた男。
純粋な剣士としての力量ならば、悪魔祓い全体でも非常に有数。クリスタリディやストラーダと三本先取の模擬戦をして、四分の一ほど二本取れるレベル。その実力から主力を担い、夢幻を中核とするヘキサカリバーを使用する。

●決戦英霊
ウルバヌスの消滅をトリガーとし、それまでに滅びた六聖英霊や戦

士達の魂を生贄に召喚される、最後の処分機構。
バーサーカーとして召喚したうえでバイアスを掛けることで、妨害を受けない限りは神聖糾弾同盟の残党を滅ぼすだけで終わる予定だったが、モデルバレット達が召喚機構を見つけて改ざんしたことで、多大な暴走を開始。その性質もあって最悪の存在として猛威を振るう。

◇パラシュラーマ

『詳細』

決戦英霊として召喚された英霊。インド神話において王族・戦士階級であるクシャトリアを滅ぼしたとされる、ヴィシュヌ神の化身。後に神官階級であるバラモンの時代を作り上げたきっかけでもあり、そういった性質を皮肉の権化として選定されている。
ただでさえ「クシャトリアを滅ぼす」ことだけに割かれるバーサーカーとして召喚され、そこに改ざんが加えられている為意思疎通は不可能に近い。反面そこに特化した狂化である為、あえて力を抑えて敵をおびき寄せたり、戦闘においてフェイントを入れたり本命の攻撃に繋げる為の連撃を入れるなど、戦術的判断力を持ち合わせている為非常に危険。無尽蔵レベルの魔力を与えられていることやバーサーカーゆえに対クシャトリアスキルもあり、全盛期の二天龍すら滅ぼしうる圧倒的攻撃の連発と対戦士におけるブーストがかみ合い、この地の対戦戦士戦に限定すれば主神・天龍・超越者すら一枚超える。

『サーヴァントステータス』

【クラス】バーサーカー

【性別】

【身長・体重】

【属性】

【ステータス】

筋力Ａ　耐久Ａ　敏捷Ａ　魔力Ａ　幸運Ｂ　宝具Ａ＋

【クラス別スキル】

狂化：ＥＸ

バーサーカーでありながら言語を解し知性をもって活動すること

が可能。これにより心眼（真）スキルを最大限に発揮することができる。

反面バーサーカーは召喚されると共に「全ての戦士の抹殺」を前提として活動し、その為の行動と思考しか考えない。そういう意味ではバーサーカーとして典型的なタイプともいえる。

【保有スキル】

神性：Ａ

ヴィシュヌ神の化身故、破格の神霊適性を持つ。

心眼（真）：Ｂ＋

修行・鍛錬によって培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

無窮の武練：Ａ＋＋

一つの時代において無双を誇った武芸の技術。

いかなる状態においても戦闘技術が劣化しない。

対クシャトリア：Ｂ＋

クシャトリアの概念が成立する存在―すなわち戦闘者―に対して有利に立ち回るスキル。

敵対することをバーサーカーが決定した戦士や、バーサーカーに敵対することを決定した戦士との戦闘に対して自動発動。Ｂランクスキル相当の威圧の精神干渉と直感による見切りと勇猛に近い攻撃力向上が加わる。

これらの効果は対抗スキルを持っていても完全に消すことはできず、必然的にあらゆる戦士達はバーサーカーに殺戮される。突破できる者がいるとするならば、それは心技体においてバーサーカーを超える戦士のみ。必然的に困難極まりないが、バーサーカーとして狂化の影響を受けている為、心においてのみは比較的攻略がたやすくなっている。

単独行動：ＥＸ

本来はマスターからの魔力供給や存在そのものを必要としない現界を可能とするスキル。

だが今回のパラシュラーマは特殊な召喚形式により、「バチカンに集う教会の戦士を皆殺しにするまで、必要な魔力が無尽蔵に供給される」スキルとして与えられている。

【宝具】

戦士よ、死に絶えろ（ハラ・パラシュ）

対人宝具　ランクＢ＋＋　レンジ：１～２　最大補足：一人

アスラを打倒した褒美、もしくは三日三晩の戦いの報酬としてシヴァ神から貰った神斧。

破壊神としてのシヴァの性質を込められた斧であり、特殊な能力こそないが絶大極まりない破壊のオーラを纏っている。

その攻撃力は聖剣デュランダルや魔帝剣グラムと並び立つほどだが、一種の聖遺物であるデュランダルや、龍殺しの魔剣であるグラムと比した場合、ただ破壊の権能を具現化する為一歩劣っている。

神々よ、絶技を見よ（ブラフマーストラ）

対軍宝具　ランクＡ　レンジ：１～９９　最大補足：２０人

幾人もの英雄に渡ったとされる、ブラフマーストラ概念の原点ともいえる宝具。ブラフマーの加護が宿った矢などの武器や、もしくは技として伝えられており、その結果として両方が混ざり合う形で宝具と化した。

能力は絶大な発射速度と射程距離と命中精度の矢というシンプルなものだが、その破壊力は全力で放てばいわゆる神の杖に匹敵。約２０ｋｍの最大射程もあり、真っ向な打ち合いで真っ向な戦士が打倒することは不可能。反面アーチャーではない為千里眼スキルを持ち込めておらず、実際には有効射程はそこまでではない。

最大の脅威は連射速度であり、一秒のインターバルで一秒に五回放つことも可能。加えて今回のパラシュラーマは魔力供給が事実上の無限であり、必要と在らば半永久的にこの発射のインターバルを行うことができる。

○その他小規模勢力

●愚者殲滅協会

プロローグに登場したテロ組織。語る機会が今後なさそうなのでここで詳細を追記。
日本に存在する秘密結社。本来はグループ化してなかったのだが、精神感応系の星辰奏者が参加したことで一気に規模が拡大化している。
ホームレス狩りなどを肯定するどころか「屑は殲滅すべし」をモットーとしており、その為に各政党に人員を潜り込ませ、警察組織にもシンパが存在。しかし急激発展ゆえにあらもあり、警察側が膿を出している時に引っかかることになる。
☆星辰光　醜悪焼却の掃討任務（メギドフレイム・ダストシューター）
基準値：D
発動値：C
収束性：B
拡散性：E
操縦性：D
付属性：B
維持性：C
干渉性：E
愚者殲滅協会の星辰奏者が保有していた星辰光。炎拳具現能力。左腕に灼熱を纏うというシンプルな星辰光。
収束性と付属性に長けていることからも、接近戦闘に特化した星辰光。その性質上自滅の危険性が低く、かつ攻撃力はコンクリートを熱で溶かす程という高さを誇る。

●贋作抹消連盟
第二章である魔性変革編に登場したテロ組織。他種族からの転生悪魔を嫌っている純血悪魔の下級や中級が主体となっているが、時に上級にまで昇格した眷属悪魔も所属している。
和平によってさらなる発展がもたらされそうになったこともあって大規模テロを起こすが、その主力である星辰奏者が打倒されたことで失敗する。

◇ザルチェル
贋作抹消連盟に属する星辰奏者。
上級悪魔の眷属で自身も上級に昇格しているが、自分の友人たちより他種族を選んだことで主を恨んでおり、作戦結構前に主の家族を人質に取って、ドラゴンアップルの生育地を焼き払うための準備を行ったうえで、作戦を決行する。
『星辰光』
☆贋物滅す紅蓮地獄（ヘル＝コード・コキュートス）
基準値：D
発動値：C
収束性：C
拡散性：B
操縦性：B
付属性：C
維持性：B
干渉性：E
ザルチェルの星辰光。極寒空間生成能力。極低温のフィールドを瞬時に生成する星辰光。
南極点に匹敵する極低温のフィールドを作り上げる星辰光。拡散性・付属性・維持性の三つが高いことから、集団戦において高い効果を発揮する。
その性質上、発動前の空間の気温が高ければ高いほど効果を発揮。また水分が豊富なら豊富なほど、発動時に結晶化させることで状況をさらに悪化させることが可能。
◇タルウィル
贋作抹消連盟に属する星辰奏者。
ザルチェルの古くからの友人だが、彼以外を他種族から選ばれたことで転生悪魔になれなかったこともあり、他種族に対する敵愾心は強い。
『星辰光』
☆邪龍殺しの焦熱地獄（ヘル＝コード・インフェルノ）

基準値：C
発動値：B
収束性：D
拡散性：D
操縦性：D
付属性：B
維持性：B
干渉性：C

タルウィルが使用する星辰光。焼夷炎弾投射能力。高温の炎の砲弾を生成し、それを射出する星辰光。

付属性と維持性が高いことから、着弾した炎はそのまま継続して延焼を続けることが特徴。単純な殺傷性以上にこの継続ダメージ及び延焼による長時間かつ広範囲の被害が脅威となる。また干渉性を利用することで延焼する方向性を干渉可能。

設定資料集　神様転生者関連

◎サウザー諸島連合国

三人の神様転生者が、千年間の長きに亘り少しずつ積み上げた聖杯戦争の力を利用して生み出した国家。

南半球側に火山活動を活発化させることで生まれた、最大でも四国程度の大きさの島々からなる国家。それとは別件で作り出したザイアコーポレーションによって裏で立ち回られ、第二次世界大戦後の混乱期に建国される。

大量の亜種聖杯を利用することで、領海内に大量かつ高品質の原油と天然ガスを保有。更に人がいない島を意図的にピックアップしたうえでそれぞれに各種鉱物資源の鉱脈を入れ込んでおり、冷戦時期の混乱に付け込んで資源大国として誕生。加えて亜種聖杯を利用して工期や訓練期間を短縮することで調達した海軍戦力、資源提供と引き換えに東側から大量に調達した航空戦力、更にこのタイミングで一気に世に出した星辰体感応奏者という陸軍兵力により、米国軍を圧倒することで明確な発言力を獲得している。

その後は星辰体感応奏者の技術や、ヒューマギアやザイアスペックを中心とする各種技術を世界に少しずつ流出することで人類全体の戦力を底上げ。更にシンギュラリティに到達したヒューマギアを戦闘用人造惑星として作り替えることで、彼らが目論む「馬鹿しかいない異形達を打倒し、人類を統一し改革と開拓による新世界創造」へと着実に駒を進めていた。

……が、根幹的にこの世界を「創作物」として見ていたことがここにきて表面化。それまで数十年程度の小国や組織の運営、数十年以上はチートによって「適任」と判断した個人、という杜撰な経験値が足を引っ張り「自我を獲得したヒューマギアが従わない」「救い出した神器保有者が敵意を向ける」を一切考慮してないという致命的失敗から造反及び内部告発を受けることになる。

結果として「サウザンドディストラクション」と呼ばれることになる、表向きにはヒューマギアの暴走と地震及び津波の複合、そしてそ

の裏で禍の団の前身組織を主体とする襲撃を受けたことでザイアコーポレーション本社が壊滅。神祖の不死性を会得していた転生者達も、魂を直接切り刻まれることで精神が死亡。
その後も政府は機能しているが、根幹的に神祖三名と彼らが見繕った使徒、そしてデミ・サーヴァント化などの処置を受けた運営陣は全滅。この影響でヒューマギアの購入に気後れする者達が多いこともあって産業面で大きな悪影響を受け、現状では資源をただ売る程度の将来的な転落が見え隠れする国家となり、星辰奏者技術も大量に流出し始めている。
またその過程で聖杯によって、開発されたプログライズキーなどが虚数空間に隔離され、「世界を変える為の力を欲し、そして手に入れば必ず世界を変えようとする」者に知識事優先供給される状態になっている。万が一の為のサブプランであったのだが、力を得る者達は総じて愚者であり、また禍の団にも大量に流れるという本末転倒な事態となっている。

○プログライズキー関連技術
☆レジスティングアントレイダー
『起動音声』Ｗｅ　ａｒｅ　ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎａｒｙ　ａｒｍｙ　ｏｆ　ｅａｒｔｈ
『概要』
レジスティングアントプログライズキーをレイドライザーに入れることで変身するレイダー。
下級の異形や悪魔祓いなどを相手に集団戦闘で打倒することを目的として開発されており、高性能ではなく一体多数戦闘を主体とした性能を保有。同時に大量生産性能が大幅に向上している。
対ＮＢＣ機能を持ち水筒に接続しての水分供給能力を持ち、更に任意で望遠や暗視などを可能とする頭部ユニット。更に長時間の装着をこなす為の各種機能を持つ強化装甲を身に纏う。
装甲強度は通常のレイダーと同格以上、更に戦闘用人型ドローン「レジスティングアーミー」を八体具現化し、彼らを指揮しながら戦闘

を行う。反面武装はレジスティングアーミーも含めて銃剣付き光弾型軽機関銃「レジスティングマシンガン」のみ。コッキングによるチャージでライフルグレネードを発射することもできるが、通常射撃の威力は狩猟用大口径ライフル弾程度。これは連射とストッピングパワーによる方位圧殺を基本としている為。

必殺技の「レジスティングボライド」は、両肩のユニットを展開することで発射される二発のミサイル攻撃。屋内戦闘を考慮して最大射程４ｋｍダイレクトアタックも可能だが、基本は被害を最小限に抑える為最大射程３，２ｋｍのトップアタック。ロックオンに若干の時間はかかるが、レジスティングアーミーを利用した制圧射撃でカバーすることを前提としている。

★レジスティングアントプログライズキー

アビリティ：Ｇａｒｄ

レジスティングアントレイダー用に開発された、独自開発のプログライズキー。

兵士として面の戦闘を行うことを考慮しており、歩兵の能力を大幅に拡張させることを考慮した機能が搭載。ＮＢＣ兵器対策のデフォルト運用、長時間の戦闘を考慮した快適性、追加装備を必要としない視覚補正などを考慮しており、全領域対応能力に限っていえば、原作のプログライズキーを凌駕しているといってもいい。

○部隊方面

●ＡＩＭＳ

原作のＡＩＭＳを参考に作り上げた、対異形及び世界の未来を担う者たちとしての部隊。

孤児を中心に集めているがこれは悪意によるものではなく、純粋な「孤児が異形に騙されることなく、またそんな彼らでも未来を作ることはできるという証明」という思想によるもの。反面転生者の狂気の影響をもろに受けており、ハニートラップ対策として幼少期から相方や同僚同士での性行の推奨、ザイア側が意識していないとはいえ洗脳

と言ってもいい偏向教育、更にショットライザーの使用を考慮した人体改造などが平然と行われている。

結果としてサウザンドディストラクション後に殆どが保護されるが、その洗脳教育もあって抵抗による死者が発生したこともあり、生存者の九割強は記憶消去を施されることになる。

反面抵抗せず素直に受けれた者達は、いわば心身共にある種の成熟がみられており、時に神の子を見張る者と協力しての作戦活動を行っている。最終的に三大勢力の和平に伴い、両部隊のメンバーの多くが駒王町に派遣されることになる。

設定資料集　各種星辰光

◎味方陣営

○メインキャラクター

◇九成和地

☆救済（セイヴィング）の時来（タイタス）れり、悲劇（クロウ）を終える帳は此処に（括弧内はディフェンディングタートル使用時）［］内はチャージングリザード使用時］｛｝内は星魔剣使用時｝

基準値：B

発動値：A［AAA］｛AA｝

収束性：D（B）［E］｛C｝

拡散性：B（E）［D］｛A｝

操縦性：D（B）｛C｝

付属性：E

維持性：D

干渉性：A（E）｛AA｝

嘆きで溢れる涙の意味を、救いで流れ落とす為。その意味を変えるこの決意、死力を尽くす価値がある。

九成和地の星辰光。魔力防壁創造能力。大気中のマナを凝縮した多重防護障壁を瞬時に創造する星辰光。

非常に高い出力と干渉性、そして優秀な拡散性の合わせ技。そこから生まれるのは、カバーに若干時間がかかる範囲内にいる、あまねく物に守りを与える特殊防壁。大気中のマナに感応することで発生する防壁は、純粋強度・受け流し・衝撃吸収といった多重防壁を魔力防壁・防壁投影によって発動する。特に脆性破壊を利用した衝撃吸収防壁と暴風や電磁誘導による受け流しを主体としており、収束性の低さからは想像できない防御力を発揮する。

純粋なまでに守りに特化した星辰光であり、創造した防壁はその場で固定される為攻撃には転用困難。ただし瞬時に展開できる干渉性を利用することで、相手の移動を妨害する程度ならば応用の余地がある。

悲しみと嘆きで生まれる涙を、救いと喜びで流させる為。
涙の意味を変える者。それを志す守護者、九成和地の星辰光である。
―また、ディフェンディングタートルプログライズキーを使用することで、障壁を鎧として身に纏う形で発現する。これによりまず己を守ることで、確実に守りに行くことができる星へと変化した。
―更に、チャージングリザードプログライズキーを使用することで、範囲や収束性と引き換えに、絶大な出力を発揮する形に変化。絶大な出力を生かし、絶対に守るべきものの為に収束して守る星へと変貌する。
―そして星魔剣を併用することで、九成和地は魔星の域へと完全に突入する。総合的に向上した性質と精密制御を併せ持つ高出力により、彼の守りは神域に突入する。
★詠唱
創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。
世に悪意が尽きることなく、ゆえに悲劇は尽きること無し。ゆえに嘆きの泉は枯れることなく、悲しみの涙は沸き続ける。
星々の彼方より異星の神が来るまでもなく、善と正義を愚弄せんと、邪な悪意は世界を包む。
だがしかし、ならば問おう。流れる悲劇の涙を前に、汝はそれを良しとするのか？
否、否、否否否。あの日の涙とそして笑顔に、なによりそこから生まれる決意に、恥じることなどあり得ない。
ならば我が身は身命として、涙の意味を変えるのみ。
鋼の体は此処にない？　ならば鋼の鎧を纏おう。
旧き神の石などない？　ならば星の光を振おう。
異能と絆は此処に在る。もはや不足などありはしない。
瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻め。
超新星（メタルノヴァ）――救済（セイヴィング）の時来（タイム）れり、悲劇（クロウ）を終える帳は此処に
◇カズヒ・シチャースチエ
☆銀光月下（シルバー）の流離譚（レット・ア）、贖いは永遠（ベル）に（括弧内はハウリングホッパー

使用時）
基準値：C
発動値：AA
収束性：AA（AAA）
拡散性：E
操縦性：D
付属性：B（A）
維持性：C（B）
干渉性：AA
己は正しく罪人であり、許されたくないと思うから。永劫に天の国に救済などされたくないから、正義を示す教えですら捨てれぬ、必要悪を受け持とう。
カズヒ・シチャースチエの星辰光。能力は呪詛招来憑霊能力。己という悪性を媒介に悪徳を呪う生霊や怨霊、残留思念の呪詛を集め、銀の瘴気として身に纏う星辰光。
極めて高い発動値と収束性は殺傷性に直結し、更に維持性と操縦性も十全な戦闘時間と攻防における効率化を発揮できる程度のは存在。そして絶大な干渉性ゆえに、敵対者に対する負の感情を持った怨念が発生しやすい戦場や、明確な大量殺人の現場においては能力が更に上昇する。加えて能力の性質上、大義の無い愉快犯や外道の類には殺傷性能が大幅に向上する、かの悪の敵の絶滅光より更に対悪性に特化した星辰光と化している。
半面、自らを悪と定義しているがゆえに自身にもその呪いは容赦なく向けられる。付属性は優秀ではあるが、この呪詛を完全に無効化するには足りてないのが実情。使用者であるカズヒ自身が己を最低の悪とみなしているが為、カズヒ自身に対する特効性が常に高いことが使いづらさに拍車をかけている。加えて大きい出力差とこのデメリットが組み合わさった結果、限界時間の到達はイコールで戦闘不能に直結する為、星の開帳は勝機を掴んだと確信しなければ使えないピーキーな星でもある。
★詠唱

創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星。
己の愚かさに目を向けず、光を妬んで踏みにじるは我が罪業。
全て失い絶望に包まれ、そして死を迎える程度で濯げるものか。我が罪業を見くびるな。
永遠(とわ)に流離い救われることなかれ。それこそが我に与えられるべき罰であり、終焉を救いとすることこそが大罪である。
故に、銀に輝く月を仰ぎ、我は我を裁き続けるのだ。
我の如き、醜悪たる下衆共が。光を奪い、善を汚し、生きている限り苦しませ、死で終わることが救いのように、踏みにじるなど断じて許さん。
邪魔だ殺すというのなら、我が大罪も喰らうがいい。
一時の、しかし七倍超える裁きを持って、光を汚す闇を討て！
超新星(メタルノヴァ)――――銀光月下(シルバーレット)の流離譚(ト・ア)、贖(ベル)いは永遠に

☆銀神婚姻(シルバーレット)、救済者よ悪敵(ノーデンス)の神を誘(ト・ア)え

基準値：C
発動値：A
収束性：A
拡散性：E
操縦性：E
付属性：B
維持性：B
干渉性：A

涙を変える救済者に、銀の弾丸は添い遂げたいと願うから。
故に悪を滅す銀弾は救済され、救い手の想いを受け止める。その奇跡が、二人を神域へと導いた。
リスターティングホッパーによって変質化した、カズヒ・シチャースチエの星辰光。
守護霊招来昇華能力。彼女を守りたいと思ってくれる死者生者を問わない思念をかき集め、霊的な強化・守護・祝福によりカズヒを強化する、悪敵銀神(ノーデンス)としてのカズヒが纏う権能が如き星。

これまでのカズヒ・シチャースチエという「悪」を呼び水として怨念を集める形だった星辰光と異なり、この星辰光はカズヒという「人間」を呼び水として、募金のように力を集めて強化する。そのため爆発的な突破力こそ発揮しないが、対物理・対異能・対呪詛といった害なす干渉に対する強い抵抗力を発揮し、星辰奏者の域を超える心身の回復力すら会得する。

一つ一つは小さな善意だが、塵も積もれば山となる。これだけの善意が集まるのは、カズヒ・シチャースチエがそれだけの価値があると認められた証。

かつてカズヒはこれを使えなかったが、それはカズヒがどこまでも己を嫌っていた為。だが彼女の力になりたいことを、愛しく思ってくれることを受け止め、自分自身ではなくそんな彼らが思う自分という存在を認めたからこそ、この星は絶大な力を発揮する。

悪祓銀弾を超えた悪敵銀神。その決意と共に添い遂げたカズヒ・シチャースチエのこの星は、遍く悪意に立ち向かう、善なる祈りの集大成。

神々の婚姻へ向けられる祝福が、悪意の明星に負けぬ光を示して輝く。

★詠唱

天衛せよ、我が守護星――――鋼の笑顔（誓い）で涙を変えろ。

悪意に染まりて罪を成し、償うこともできぬまま。そんな悔恨と共に幾星霜を渡り歩き、我は悪を祓う銀の弾丸へとなり果てた。

その域はもはや神にも届く。故に、鮮烈なる銀の輝きは只人が浴びるには辛かろう。我が身は人界を照らすのではなく、悪を示して裁くのみ。

だけど愛しき救い手は、私を人々（みんな）に導いた。

我が悪逆の道行きを知り、それでも今を支えてくれる。我が鮮烈なる銀光も、救いの笑顔が緩やかに、彼らに注がせてくれるのだ。

その光に報いたい。そして何より共にいたいと、願ってみてもいいのなら。悪を滅する銀の光は、彼らの道も照らしたい。

決意を胸に。痛みと共に。救済者（タイタス・クロウ）と並び立て。

瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻め。
超新星（メタルノヴァ）――銀神婚姻（シルバーレット・ノーデンス）、救済者よ悪敵の神を誘え

☆銀弓（シルバーレット）よ、神威を穿ち黄昏（ホズ）を

基準値：C
発動値：A
収束性：AA
拡散性：E
操縦性：E
付属性：C
維持性：D
干渉性：AA

傲岸不遜な神々が、悪を成すなら是非もなし。問答無用の神殺しにて、邪神を叩きのめそうぞ。

アヴェンジングシェパードプログライズキーによって変質した、カズヒ・シチャースチエの星辰光。

能力は滅神呪詛招来能力。神々の傲慢や気まぐれによって滅ぼされた者達の怨念を集めることで、神々に特攻作用を持つ瘴気として運用する星辰光。

その特攻能力は神仏はもちろん半神にも通用するが、無茶な改変を加えている為長時間の発動はほぼ不可能。半面神に対して特攻作用を持つ瘴気ゆえ、付属性が低くても問題なく運用できるという利点もある。

いずれ神々と戦うことすら想定していたカズヒの要望で作り上げられた、正真正銘人造の神殺し。これを人の発展ととるか暴走ととるかはそれぞれの神々次第だが、一つだけ断言できることがある。

もはや神すら無双とはなりえない。これこそが黄昏の具現である。

★詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌めく流れ星。

傲岸不遜な愚かな神よ。太古の秩序が暴虐ならば、我らは神威に牙を剥こう。

愛を惑わさんとする、その行いは度し難し。汝が忘れし誓約が、その身を亡ぼす弾丸とならん。
ヤドリギよ、我が銀の弓にて神を貫く弾丸と化せ。
怠慢を貫く対価が黄昏ならば、是非もなし。一つの世界の終焉を生む罪、新たな世界を作るがために背負って見せようではないか。
約束された正義の前に、さあ邪神よ滅ぶがいい！
超新星（メタルノヴァ）――銀弓（シルバーレット）よ、神威（ト・ホーズ）を穿ち黄昏を

☆邪龍滅（シルバー）ぼす銀の一蹴（レット）、裁（ト・）きは此処（モ・ア）に

基準値：C
発動値：A
収束性：AA
拡散性：E
操縦性：E
付属性：C
維持性：D
干渉性：AA

悪意を振りまく龍共よ、お前の沙汰が此処に在る。瘴気を纏った我が蹴りが、汝の無法を終わらせよう。
ジャッジングサマエルプログライズキーで変質した、カズヒ・シチャースチエの星辰光。
能力は龍殺呪詛招来。数多くの恐怖と破壊をまき散らし、打倒される存在とされる竜に対する敵意と願いを集め、瘴気として纏うことで龍に対する特攻を会得する星辰光。
英雄派が持ちだしたサマエルのオーラを宝石魔術の応用で回収することで、この星は絶大なレベルの対龍特攻性能を確立。全ての攻撃がアスカロンやグラムに匹敵する対龍特性を秘めており、全身が対ドラゴン兵器と化したことで、対応力なら両者を超えるレベルに到達している。
神に並ぶ最高峰の偉業たる龍。それに対する特攻特防を会得するこの星辰光は、まごうことなくワイルドカードの類になりえる星辰

光。その性質上カズヒに対して瘴気が毒することはないが、星辰光の過剰な変質は負荷が大きいため、短期決戦が望まれるのは変わらない。

龍が縛られぬというのなら、それは柵の外側にいるべきもの。内側で無法を成すのなら、その報いを与えよう。

悪祓銀弾の決意はまさに、龍を滅する騎士の如く。

★詠唱

創生せよ、天に描いた守護星を――我らは鋼の流れ星。

醜悪なりし悪龍よ。汝を滅ぼす銀の騎士が、ここに裁きを下しに来たぞ

ヨークシャーが如き悪意の蹂躙、その報いを此処に受けるがいい。

この銀の祈りを束ねた蹴りは、遍く龍の怨敵足らん。六杯の麦酒で恐怖を呑み込み、三日かけても汝を潰す。

正義の祈りは此処に叶う。願いを受けた悪の敵が、龍を滅する銀騎士とならん。

唯一神の怒りの前には、龍神すらもただではすまぬ。

約束された正義の前に、悪意の龍よ滅ぶがよい。

超新星（メタルノヴァ）――邪龍滅ぼす銀の一蹴（レッ）、裁（ト）きは此処（モア）に

◇枉法インガ

☆救済（ハ）の手（ス）を取（トゥー）る乙女（ル）よ、黄（コ）の衣（ン）を纏（バート）え（括弧内は星魔剣使用時）

基準値：B（A）

発動値：AA

収束性：D（B）

拡散性：E

操縦性：AA（AAA）

付属性：C（B）

維持性：B

干渉性：D

今ここに、黄衣銀妾（ハストゥール）が降臨する。
銀弾と並び立つ救済者を想い、乙女は己の鎖を振り払い、風の衣を身に纏う。
枉法インガの星辰光。能力は圧縮大気制御。大気を圧縮することで多種多様な手札をとることができる応用技術を持つ星辰光。
拡散性と干渉性が低いことから広範囲に影響を及ぼすことは難しいが、出力・操縦性・維持性がもれなく高水準ということから、強大かつ多種多様な力を長時間運用可能という、星辰光としては破格のポテンシャルを保有。防御においては高密度圧縮した大気を高速移動させての被膜とし、更にある程度の大気をエアバックのように使用する対物理防御が可能。圧縮した大気に指向性を与えた放出をあえて付属性を生かさず使うことで、自在な高速移動も可能。それらの応用で近接攻撃の強化も可能。反面収束性は低いため、突破力に欠け繊細な運用を必要とする。
また総合的な性能バランスは操縦性に一点特化しているため、本領を発揮する場合は単純な鍛錬や戦闘経験以上に緻密な制御をどう組み合わせるかを考慮する研究が必要不可欠。細剣に大気流の流れを組み合わせた攻撃力強化など本質的にはまだ序の口であり、その領域を究めることができれば、魔星にすら牙を届かせる星辰奏者となりえる資質を持つ。
――ゆえに、涙換救済と並び立つ、黄衣銀妾は文字通り、魔星を穿つ剣となる。
銀弾と並び立つ救済者に、ついていきたいと思うから。乙女の一念岩をも通す。銀の光も借り受けた暴風従えし銀剣は、巨星すら穿つ刃と鍛え上げられた。
★詠唱
天衛せよ、我が守護星――鋼の笑顔（誓い）で涙を変えろ。
獣になりて檻へと連れられ、さらに悪意に拾われる。愚かな少女の人生は、一冊の本へとなり果てた。
其処は超常の書庫なれば、余人がたどり着くことはなし。戯れに人に貸し出されようと、買い取られるなど夢のまた夢。人知を超える宿

命は、まるで地球(ほし)よりかけ離れた暗き宇宙の片隅のようで、少女は諦観と絶望に凍り付く。

―されど愛しき救い手は、星々の彼方に踏み入れる。

幼き笑顔は消して変わらず、されど旧神の石が如く固く優しい光を胸に、私の鎖を砕き切る。過去を忘れず未来を目指す救済者は、我が涙の意味を変え、凍てつい体を温かい地球(ほし)へと連れ戻したのだ。

その救済に報いたい。彼を導き共にある悪を祓う銀弾のようにはなれなくても。愛しき思いは黄金に届くことが無かろうとても。銀のように光り続け翳らないでほしいと、心の底から願うのだ。

故に我、主失われし図書館の主となり果てよう。

刃は此処に、決意は胸に、そして笑顔は我が心に。黄衣をまといし支配者が、悪しきに対して牙をむかん。

超新星(メタルノヴァ)――救済(ハ)の手(ス)を取(トウー)る乙女(ル・コ)よ、黄(ン)の衣(バー)を纏(ト)え

◇ヒマリ・ナインテイル＆ヒツギ・セプテンバー

☆紅(クリ)に寄(ム)り添(ゾ)え比翼(ン・カ)の蛇龍(ドウ)、双立(ケウ)せ(ス)よ（括弧内は単独発動時）

基準値：Ａ（Ｅ）

発動値：ＡＡ（Ｄ）

収束性：Ｃ（Ｅ）

拡散性：Ｅ

操縦性：Ｅ

付属性：ＥＸ

維持性：Ｃ（Ｅ）

干渉性：Ｅ

今ここに、かつての己を認めたうえで、正しく己を定義しよう。

比翼連理が如き魂は、だが同時に別個たる。その相互理解をもってして、双龍は赤き天龍に追いつかん。

ヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバーが発動する、二人で一つの星辰光。

能力は星辰体結晶化能力・共振型。星辰体そのものを固体化させた翠星晶鋼をそれぞれに付属させることで、共振させることで能力を二

乗化させる星。
この星は二人がそうだと分かったうえで発動する必要があり、そうでない場合は極めて劣悪な翠星晶鋼による自己強化しかできない。これはお互いが相手を強化する為の翠星晶鋼しか生成できないことに由来する。
応用することで二人が融合するということも一応は可能であり、それゆえに付属性が限界突破をしているともいえる。だが二人はその運用を基本的に行わず、別個の二人として戦うことを選んでいる。
何故ならば、紅き龍の皇帝は、二人をそれぞれ二人として別個に見てくれているから。
その想いに応えることこそ、真なる自立と定義した。故に二人は二人として、比翼となりて飛翔する。

★詠唱

「「創生せよ、天に描いた双星を――――我らは煌めく双子星」」
「死の断絶を乗り越えて、蛇は二つとなり果てる。困惑と嘆きの宿命を背負い、されど紅の祝福が我らが心から枷を解き放つ。」
「ああ、愛しき赤き天道よ。汝の飾らぬ言葉が、どれだけ私たちを救ってくれたか。我らは前世(かつて)ではなく今生(いま)を生きると決意しよう。」
「「堕落の染まった乙女の祈りも、されど決して捨てはしない。銀弾の軌跡は光となって、我が宿命を指し示すから」」
「「絶対なる死すら乗り越えて、我らを掴め紅(くれない)と銀(しろがね)。神に届く軌跡をもって、我らはともにあると誓う」」
「「超新星(メタルノヴァ)――紅(クリム)に寄り添(ゾン)え比翼(カ)の蛇龍(ドウ)、双立(ケウ)せよ(ス)」」

◇兵藤一誠&シャルロット・コルデー
☆赫極連理(シンフォニック・カルマ=ギア)、限り無き夢と幻を現世に
基準値：C
発動値：A
収束性：B
拡散性：EX
操縦性：D

付属性：A
維持性：D
干渉性：D

ここに、新たなる前人未到が巻き起こる。
世界最強を元に因果律を歪め、今ここに最優の赤龍帝は、更なる領域へと突入する。
兵藤一誠とシャルロット・コルデーが至りし、二人で一つの星辰光。
能力は神滅具共振再現能力。これまでシャルロット側の亜種禁手による干渉止まりだった赤龍帝の籠手と究極の羯磨を、半ば融合させることでそれぞれの異能をそれぞれの神滅具の機能として運用できるようにする。
これにより一誠は自分の意志で亜種禁手を切り替えることが可能になり、シャルロットは赤龍帝の力を身に纏うことができる。もちろんだが二人が遠隔的にお互いが繋がっている為相互に調整することも可能であり、その場合の調整力は共振していることで更に高性能を実現可能。ただし総合力ならば二人が別々に戦う方が都合がいい。
更にこれによって、赤龍帝の籠手によるブーストで究極の羯磨を強化することも可能。この果てに因果律操作の応用ともいえる因果律察知を可能としており、一度貫ったことのある攻撃なら因果律の波長で察することが可能となる。
本来、兵藤一誠もシャルロット・コルデーも星辰奏者としての素質はない。
だが肉体の崩壊という現象を龍神の力で補うことをドライグが提案した際、シャルロットが究極の羯磨で調律するという方向で、後天的に二人一組の星辰奏者として発現する、奇跡の前人未到を成し遂げた。
連理比翼たる究極の赤龍帝は、今ここに星すら掴み取る。
★詠唱
「「創生せよ、天に描いた双星を――――我らは煌めく双子星」」
「「極みを超え、赤すら超える帝王よ。羯磨を糧に黙示を越えろ。今こ

そ勝利を掴むのだ」」
「夢幻より聞こえる声に、今こそ応えろ紅よ。麗しの姫と同胞に嘆きの終わりを与えるな。」
「無限のもしもの先を見て、今こそ願いをつかみ取れ。麗しの姫君と並び立つ、究極の答えを示して見せよう」
「この身に宿る令嬢よ。俺に可能性(光)を示してくれ。君に恥じない己こそ、俺が俺自身に課した誓いなのだから」
「ならば光を授けましょう。汝、愛しき紅の帝王よ。我が究極をその手に宿し、輝く夢で冥界(世界)を照らせ」
「「絶望よ、ただ安らかに燃え尽きろ。希望の光は此処に在る！」」
「「超新星(メタルノヴァ)――赫極連理(シン・フォニック・カルマ)、限り無き夢と幻を現世(ギア)に」」

◇リアス・グレモリー
☆侯爵彩れ、紅玉(グレモリー・ジュエルクラウン)の宝冠
基準値：C
発動値：A
収束性：B
拡散性：D
操縦性：D
付属性：AA
維持性：B
干渉性：D

遅れたままではいられない。弱いままではいられない。お飾りでいいわけがない。
主として、家族として、そして一人の挑戦者として、確固たる意志を胸に
リアス・グレモリーの星辰光。異能再現能力・同調型。事前に時間をかけて同調をしておくことで、異能を再現する星辰光。
リアスとの相性の都合上、純血悪魔もしくは彼女の眷属悪魔が最も有効。そして同調時間が長ければ長いほど性能は向上する。

反面操縦性が低い為、出力はともかく本人ほどの技術はほぼ不可能。また星辰光はその性質上、真っ当な形での再現も不可能。とどめに定期的かつ長時間の同調が必要かつ、出力再現度を高めるにはある程度人数を絞る必要があり、また登録数に応じて頭部を回るように紅に輝く光球が展開する為、手札の数が読めるという欠点もある。

その為リアスは絶大な魔力量を上乗せしての爆発力強化で、眷属の異能を再現するのがベストとなる。

覇龍の消耗すら代用できたその魔力量と、彼女と共にあらんとする眷属達、そして共にあらんとする彼女の祈り。それにより至る侯爵の星は、帝王に並ばんと紅に輝く。

★詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。

ああ、綺羅星の如き宝玉よ。我が冠として輝く汝らに、果たして私は相応しいのか。

煌びやかな彩りが舞い踊るたびに、我が心は届かぬその身を呪ってしまう。

この輝ける財宝は、万の軍勢にも劣りはしない。

だが万の軍勢を率いし先達に、果たして我が身は追いつけるのか。

悩むからこそ、そこに沈むことは許されぬ。誇りを掲げて高みに上がれ。

私の至宝が私を光と誇るのならば、私の道はただ一つ。我が至宝の輝きと共に、我が身よ輝き歌劇を歌え。

超新星（メタルノヴァ）――――侯爵彩れ、紅玉の宝冠（グレモリー・ジュエルクラウン）

○D×Dメンバー

◇接木勇儀

☆星戦士（スターファイター・アマルガム）は悪を討つ、人ゆえに

基準値：C

発動値：AA

収束性：C

拡散性：E

操縦性：ＡＡ
付属性：Ｅ
維持性：Ｃ
干渉性：Ｅ

潰えた友情は思わぬ形で再会し、同時に裏にある闇はあまりに深い。その上で、この友情を続けよう。

それは友に対する引け目と恩義、そして家族に胸を張る為に。父にして夫となった男は、その大きさで人を支える者なのだから。

接木勇儀の星辰光。能力は星辰体感応性質強化能力。星辰奏者の根幹ともいえる星辰体との感応。それを行う力を大幅に強化する星辰光。

これにより感応量そのものが大幅に増幅しているうえ、出力の細かい調整という、星辰奏者では本来不可能な所業すら可能。その調整能力により神星鉄を扱うこともでき、基本性能に限定すれば戦闘特化型の人造惑星と同等。回復力も互角故に、通常骨折程度なら秒で完全回復させるなど、一流の星辰奏者が異能を使ってなお基本性能なら圧倒可能というポテンシャルを持つ。

反面その性質から隠し玉どころか異能もほぼ使えない為、基本性能が左右されないような形の勝負なら二流の星辰奏者でも勝ち目があるというピーキーな特性を持つ。また人造惑星と同等の基本性能を獲得する星ゆえに、本来の人造惑星が相手の場合は異能による勝負ができない為、人造惑星相手に戦うと遅滞戦術は出来ても打倒はほぼ不可能。

だが真っ向から人造惑星すら足止めできる基本性能は間違いなく絶大。強力な異能を持つ類の星辰奏者との連携を行えば、戦闘特化型の人造惑星すら打倒できるポテンシャルを秘めた、破格の星辰光であることはまごうことなき事実である。

確かにあったはずの友情に応える為、大人は子供に手を伸ばす。

友を想う大きな人は、明星を穿つ銀弾に手を添えるのだ。

☆詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。

育つごとに痛感する。人に見える景色など、極々一部ということを。闇に包まれし実態は、足元すらも見えぬだろう。
友人だろうと恩人だろうと、知らぬところはあるものだ。人の世はまるで星々のように、輝かしく密接にあるようで、闇の断絶があるのだから。
だからこそ、想う心と勇気を捨てるな。友を、家族を、愛する者を。寄り添い守るという心こそ、闇を照らす断絶を超える戦いに必ずいるのだから。
胸の炎に火をつけろ。拳と武器で悪を討て。悪しきものが光であろうと闇であろうと、善き想いの炎と光をもって立ち向かえ。
交じり合う絆の輝きは、黄金ほど神々しくはないだろう。だが、決して劣らぬ価値があると幼きものに示すがために、大人は合金（武器）を振るうのだ。
超新星（メタルノヴァ）――銀（スター）に寄り添（ファ）い星（イ）を撃（ター）ち抜（アー）け、人（マ）ゆえに（ルガム）

●アマゴフォース
◇サイリン・アマゴ・ドゥルーヨダナ
☆新生尼子（アマゴ）の弓（フォース）取（カ）りに、甲斐（イノ）越（クロ）えの名馬（コマ）を
基準値：C
発動値：B
収束性：C
拡散性：B
操縦性：B
付属性：E
維持性：C
干渉性：C
サイリン・アマゴ・ドゥルーヨダナの星辰光。
能力は岩石獣創生。影響範囲の地面に干渉して岩石の獣を創生する星辰光。
当たり前だが人間とは、動物としては柔軟性に特化しており、馬力や瞬発力などでは一歩劣るのが基本となる。故に創造された獣は星辰奏者としてのサイリンを超える運動性能を発揮するため、移動性能

に限れば人造惑星の領域を狙うこともできる。
また応用で小規模な地形操作も可能としており、サイリンは狙撃を行う場合などに銃座を作り上げて運用することもある。
欠点としては性質上空中戦には不向きであることだが、陸戦に限定すれば非常に強大な星辰光。こと馬術を習得しているサイリンは、馬型の岩石獣に騎乗しての高速戦闘を得意とする。

★詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。
尼子の武威を支えるは、武将だけでは務まらぬ。城に船に大筒に、そして名馬も欠かせぬだろう。
甲斐の国より献上されし、名馬があればと願いはする。だがしかし、ない物ねだりは負けの元。故に自ら用立てよう。
見るがいい、この黒岩による名馬の雄姿を。武田の騎馬が軍勢にも、これほどの馬はないであろう。
足りぬというならこれならどうだ？　熊に狼、猩々も、獣の群れが汝らまとめて相手取ろう。
さあ刀を佩いて弓を取れ。我は尼子の弓取りなれば、貴様の首を討ち取って、国盗りすらも成し遂げようぞ。
超新星（メタルノヴァ）――新生尼子の弓取（アマゴフォース・カイノクロコマ）りに、甲斐越えの名馬を

◆ヘラクレス

☆神域英雄（ゴッドフォース・マルミアドワーズ）は此処に、魔剣を担いて

基準値：C
発動値：B
収束性：C
拡散性：C
操縦性：B
付属性：D
維持性：B
干渉性：E
英雄派幹部のヘラクレスが使用する星辰光。

能力は灼熱剣創造能力。プラズマを凝縮した大剣を創造し、操る能力。
操縦性と維持性に長けており、これにより二本の灼熱の剣を利用した攻撃及び防御が可能。完全に破壊されると手元で再生する必要があるが、応用することで瞬間解除からの瞬時創造という形で防御を行うことも容易。爆発させることも可能であり溶断と組み合わせての炸裂は最上級悪魔クラスにも深手を負わせる余地を持つ。
欠点というならば、付属性が低い為触れることはリスクが伴うこと。しかしヘラクレス自身の耐久力が星辰奏者要素抜きで高い為、咄嗟に足場としたり掴んでの変則起動をとることも十分可能。
間違いなく優秀な星辰光であり、当人の力量を踏まえれば英雄となりえる余地は十二分にある素質となる。
その魂を燃やすことで、それを確かに掴み取れるかは、神にすら読めぬことであるが。

★詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星
アルゴノーツの参戦で、英雄譚は幕開く。一番槍にて無双の矛は、この俺こそが相応しい。
愚かな神の嫉妬の炎も、この勇士には通用しない。我が武威を見て感銘し、手のひら返して栄光(光)をよこせ！
黄金の獅子など恐れるに能わず。我が腕は汝を絞め殺し、そして我が刃はその毛皮すら断ち切ろう。
聖王の剣を超える栄光の魔剣は、今ここに英雄譚を切り開くのだ。
さあ獅子の王よ、我に刮目するがいい！
超新星(メタルノヴァ)――神域英雄(ゴッド・フォース・マルミア・ドワーズ)は此処に、魔剣を担いで

◆ジャンヌ・ダルク
☆新生(ディ・バイン)の聖処女(フォース・ラ＝ピュセル)、奇跡を此処に

基準値：C
発動値：B
収束性：C
拡散性：E

操縦性：B
付属性：B
維持性：B
干渉性：E
英雄派幹部のジャンヌ・ダルクが使用する星辰光。
能力は性質多重化能力。自らの持つ機能を多重化させることで、ピンポイントで機能を数倍化させる能力。
実は極めて扱いが難しい能力。例えば心肺機能を多重化させればバグを起こし、脳の機能を多重化すれば人格崩壊を起こしかねない。その為基本的には一部の筋肉を多重化させて馬力を向上させるのが精一杯。血液の一成分を多重化させることによる免疫力の向上などの余地はあるが、操縦性が足りていない。
そこで彼女は発想を転換し、鍛錬を積むことで神器の多重化に成功。更に英雄派の実験より禁手到達理論を利用し、禁手を使い分けることで戦闘に幅を増やすことに成功した。
本来の禁手を使うことで龍の軍勢を増やすこともあるが、収束性が低い為どうしても粗ができる為、別の禁手を作り出すことで、己の戦闘能力を保管させるという手法を基本とする。
この扱いずらい星に強大な運用手腕を持たせたことを、ジャンヌ・ダルクは誇っている。自らはジャンヌ・ダルクの魂を継ぐと豪語できる、その証拠だとすら思っている。
故にこそ、彼女は困難を乗り越える義務がある。英雄という憧憬を形にするには、それに見合った大いなる成果を上げる責務があるのだから。
★詠唱
創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星
今ここに、聖なる乙女は新生する。聖なる刃は我が身に集い、幾重にもなってその身を包む。
もはや我が身を滅ぼすことは、暗君共にはできはしない。輝けるこの戦乙女を裁こうなど、愚行の極みと知るがいい。
裁きを示すは汝にあらず。裁定は我が意が成すと知るがよい。

灰は灰に、塵は塵に、土は土に。我らが敵となる罪は、命をもって償うがいい！
超新星（メタルノヴァ）――新生の聖処女（ディバインフォース・ラ＝ピュセル）、奇跡を此処に

●ヴァーリチーム
◇黒歌
☆恩讐報復呪詛千万（フォービドゥン＝カース・キャスパリーグ）、禁断の黒猫
基準値：D
発動値：C
収束性：D
拡散性：C
操縦性：D
付属性：A
維持性：A
干渉性：C
猫とは奔放であり人につく者にあらず。まして我が身は野良猫であり、首輪をつけ従うようなものではないと忘れるな。
気まま故に、嫌悪は呪詛へと早変わり。彼女を敵に回したが最後、徹頭徹尾呪われると知れ。
生体同調式強化能力。敵とみなした対象に星光による繋がりを作り、同調する黒猫の報復を体現する星辰光。
星辰光そのものはさほど強力ではない。付属性と維持性の高さゆえに同調を相手が解くことは困難だが、繋がりそのものはある程度の相互影響力がある程度。この星単体では双方が双方にある程度の影響を与え、お互いを一定比率強化するという代物にしかならないのが実情であり、味方との相互強化にしか使えない。
……が、猫又として最高位であり仙術を使いこなす黒歌に限っては話が別。同調による強化配分を己に一極集中して自分だけ大幅強化し、逆に己の不調を徹底的に相手に与えることで自分が負傷すればするほど相手もある程度弱体化させる。また微小ではあるが仙術による悪影響を与え続けるため、維持性の高さもあって一対一の持久戦で

は勝率が大幅に向上するという利点もある。
自由気ままに縛られず、しかし一度怒らせれば徹頭徹尾祟られかねない。その黒き猫尉の凶悪さを体現する、黒歌の持つ星辰光である。
★詠唱
創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。
自由気ままが猫の信条、人につかぬが猫の基本。それを忘れて権威を盾に、飼いならせるとは馬鹿すぎない？
犬のように扱えるなんて、烏（からす）のくせに馬鹿な考え。その痴愚で白い羽織を汚そうなんて、引き裂かれるのが当然でしょう。
我が爪と牙とそして呪詛。全てで滅してあげましょう。
聖なる剣を振う王すら、死力を尽くさねば太刀打ちできぬ。我らが悪意を向けたのならば、そうなるのだと知らぬことが罪業よ。
気ままな猫の尾を踏んで、ただで済むとは阿呆なの？
我が怒り、汝が精霊の祝福持とうと、その鋼ごと切り裂くにゃん♪
超新星（メタルノヴァ）――恩讐報復呪詛千万（フォビドゥン＝カース・キャスパリーグ）、禁断の黒猫

○冥界・魔王派
☆いざ楽園（リ＝フライング・フェニック）に届くため、再起しろ不死なる鳥（ス）よ
基準値：D
発動値：C
収束性：C
拡散性：E
操縦性：C
付属性：C
維持性：
干渉性：D
夢を求めて男は再び、炎を纏って龍に挑む。
全ては飛び去った見果てぬ理想を再度掴む決意によって。今此処に、雪辱戦が引き起こされる。
ライザー・フェニックスの星辰光。能力は灼熱推進能力。
端的に言うならば熱核ジェットエンジンを星辰によって再現する

星辰光。高い維持性に由来する長時間の高速推進は、文字通り超音速の加速度で敵を翻弄する。
反面維持性以外は並みかそれ以下であり、特に付属性の平凡さはGの影響は愚か推進の熱が自らも焼いてしまうという欠陥星辰光と言えるが、然し使い手がフェニックスであるという一点がそれを凌駕する。
不死たる肉体は悪影響を最小限に抑え、その絶大的な加速力で、敵を文字通り引き離す。
見果てぬ夢に手を伸ばし、そしてことごとく掴んだ男。ライザー・フェニックスの星辰光である。
★詠唱
創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。
火の象徴とは不死なれば。万年生きるが悪魔なれば。
火と不死司る悪魔足る、我は再起を成し遂げよう。
翼を広げろ、炎を灯せ。艱難辛苦が立ち込める闇夜の吹雪を前にしようと、恐れることなく天を駆けろ。
なぜならば、その先にこそ見果てぬ楽園が待っているのだ。
輝かしく彩られし宝の如き花々を、目にするまでは死ねるものか。
男の本懐遂げることなく、無様に地を這う道理無し。
いざここに、新生を果たせ不死鳥よ。天の龍など何するものぞ。紅蓮の炎で焼き尽くせ。
超新星（メタルノヴァ）――いざ楽園（リ＝フィング・フェニッ）に届くため、再起しろ不死なる鳥（ク）よ

○冥界・大王派
●後継私掠船団
◇九条・幸香・ディアドコイ
☆金色覇道（ゴルディ）の後継者（ロード）よ、新天地（マケドニア）を征け（括弧内は星辰奏者時）
基準値：A（B）
発動値：AAA（AA）
収束性：AA（C）
拡散性：AAA（AA）

操縦性：B
付属性：B（C）
維持性：AA
干渉性：B（C）

一度動くと決めたのならば、豪快に絢爛に盛大に。例え先達が心折れようと、ならば己がその先まで進むのみ。矮小たる想いを束ねて大いなる覇業を成すべく、後継覇王（アレキサンダー）は邁進する。

九条・幸香・ディアドコイの星辰光。窒素爆薬製人形運用能力。いわゆるポリ窒素を生成するだけでなく安定化させ、それを材料に自立駆動型の兵士を創造して運用する星辰光。

獣型にすることで強靭さを与えることも可能であり、幸香は鳥型や獣型にすることで運用可能。これは彼女の操縦性では自身の武技まで再現させることは難しいことから、獣の強靭さを選ぶという選択肢をとったことに由来する。

加えて魔術によるプログラミング化によって、大量の魔獣に別々の行動やある程度の自立判断能力を与えることも可能。干渉性が足りない為遠隔地に瞬時に具現化させることはできないが、それを抜きにしても最高峰の星辰奏者と言って過言ではない。

そして彼女はそこに満足することなく、己が体を改造することすらいとわない。

肉体の成長を考慮して骨格こそ入れ替えていないが、要所要所に神鉄鋼（オリハルコン）を—それもルーンの刻印による魔術的調律を込み—で埋め込み、更に要点要点に魔術的演算機構も組み込んだその肉体は、遂に人造惑星の領域にすら到達している。

その制圧力は文字通り一軍匹敵。一騎当千という言葉すら生ぬるく、これだけで先進国の陸海空軍の連合部隊を壊滅させうるポテンシャルを発揮可能。その制御は非常に困難だが、人形そのものにゴーレム系魔術を利用した簡易知性を組み込むことで十全な運用能力を会得。

もはや彼女は新種の魔星、礼装型人造惑星とでも形容するべき王者

へと成り上がった。
風の如く遠く広くを目指す覇王が如き女傑、九条・幸香・ディアドコイの星辰光である。
★詠唱
天進せよ、我が守護星――――鋼の未開（あした）を駆けるがために。
輝かしきは英雄譚。武勇と覇道の物語に、憧憬がとめどなくあふれ出す。
約束された破滅など、恐れる道理はどこにもない。煌びやかな輝きになりえるのなら、死に際さえも華やかに。守勢に纏まる凡俗共など、矮小浅薄軽々しい。
にも拘らず破滅を嘆き、夢を捨てるとは笑えない。栄光が死後に破綻して、それが一体どうしたと？
我が栄光は我の者。その勝ち逃げさえできるのならば、後の者が負う責任など、知る必要もないだろう。その後全ては何もかも、継がんとする者の責任だ。
故に我、汝の全てを奪うとも。力も夢も覇道も誇りも、怯えで捨てるのなら我が物だ。略奪と征服と蹂躙の果てに、汝はそこで朽ち果てろ。
我、見果てぬ先を欲し楽しむが故に我なり。この身に焦がれし後継者（ディアドコイ）よ、破滅を超える征服者たれ。
超新星（メタルノヴァ）――金色覇道（ゴールド・マディ）の後継者（ロード・マケド）よ、新天地（ニーア）を征け

◇ブレイ・マサムネ・サーベラ
☆曇（セイ）りなく振（バーズ）るわれよ、六郎（マサムネ）入道（ブレイド）が名刀（括弧内は星辰奏者時）
基準値：B（C）
発動値：A
収束性：A
拡散性：C（D）
操縦性：AAA（A）
付属性：E
維持性：B（D）

干渉性：D

我が人生は、神域すら切り裂く刃を創り出す為に。その決意を新たに、六道入道は己ではなく刀の為の星を鍛え上げる。

ブレイ・マサムネ・サーベラの星辰光。能力はエーテル人形創造操縦。空属性の魔術回路保有者が扱うエーテルをもってして、人型を産みだし操る能力。

サーヴァントと似て異なるその存在は高い身体能力を誇っており、人体工学などに卓越していればそれぞれの能力に最適化することも可能。反面与えられる性能は当然だが限りがあり、想像できる数や制御し維持できる範囲には限界がある為、突破力においては一歩劣る星辰光。基本的に鍛冶作業の人員として運用している。

だが、礼装型人造惑星として調律を行うことで、その本領は極限まで進化。極まって高い操縦性により、自らが作り上げた刀の本領を十全に発揮する戦士を具現化する星辰光へと進化を遂げる。

基準値においては刀の能力を確認する為の者にしているが、発動値においては最大で三人の人形を使役して、自分が作り上げた刀を持たせて戦闘を行わせることが可能。それぞれの刀に最適化された人形は、自分が振るうよりも効率的に刀の力を引き出すことが可能であり、それゆえに高い戦闘能力を発揮できる。

★詠唱

天進せよ、我が守護星――――鋼の未開（あした）を駆けるがために。
鍛えられるは鋼の刃。未開の闇を切り裂いて、輝く明日（あした）に届かんと、刃を手に取る武士（もののふ）たち。

故に受け取れ我が刀を。切る物を選ぶなどと嘯かず、全てを切れと願いて鍛えた我が刀剣こそ、五郎入道を超え六郎入道。村正すらも凌駕せし、切り裂きの刃は此処に至る。

その理想（あした）を望むがために、我が望むは理想の担い手。限界を越えろというわけではないが、十全を示す者がいる。

でなければ、真の進歩はつかめない。己（おの）が刃の限界を知らずに、さらなる刃をどうして作れる？　極みの刃を作るがために、優れた担い手は必須なり。

故に我、刃を極めるがために担い手すらも鍛えよう。
故に手に取れ我が刀を。その武威を余すことなく示すがいい。
超新星（メタルノヴァ）――曇（セイ）りなく振（バーズ）るわれよ、六郎（マサムネ）入道（ブレイド）が名刀
◇アーネ・シャムハト・ガルアルエル
☆神聖七夜（クルチザンヌ）の伽（シャム）、英傑（ハトナイト）に至る陶酔をここに（括弧内は星辰奏者時）
基準値：B（C）
発動値：A
収束性：A（B）
拡散性：B（C）
操縦性：A（B）
付属性：A（B）
維持性：C
干渉性：AA（A）
望む女を抱ける対価は、勝利を求む英雄となること。才無き者に力を授ける、聖継娼婦（シャムハト・セカンド）の夜伽は決して安いものではない。
アーネ・シャムハト・ガルアルエルの星辰光。氷塊星辰眷属（エンキドウ）調律能力。氷塊を操る類の疑似星辰光を操れる星辰眷属を作り出す星辰光。
いわば他者に干渉して疑似的な星辰体運用機能を対象に与える星辰光であり、事実上の永続性を持つ反則一歩手前の星辰光。星辰奏者の持つ最大の難点ともいえる星辰光が文字通りの唯一無二という点を克服する。
振るえる疑似星辰光はどれも氷塊を利用するという点では似通っている三種の星であり、特化した性質を利用した戦闘が可能。ただし元から星の資質を目覚めさせている場合は兼ね合いの問題から眷属にすることができず、そういう意味では星辰奏者の資質持ちに大きなギャンブルを求める星でもある。
また自身が星を発動させた場合、一種の応用により三種の星を統合した星辰光として運用可能。また魔星となったことで眷属の性能が向上し、更に影響範囲内の眷属を強化することも可能となった。
……だが神聖七夜の伽はあくまで英傑となりえる者を生み出す為のものである。

その本質はあくまで軍勢。アレクサンドロス・ロマンスが如き海賊達の荒波こそが、この伽によって生み出されるエンキドゥである。

★詠唱

天進せよ、我が守護星――鋼の未開（あした）を駆けるがために。

ようこそおいで下さいました。誉れある英雄の卵たち。

ここは聖娼集いし高級娼館。麗しの乙女たちが貴方を誘い、陶酔の禊をいたしましょう。七夜のコースを終えたとき、汝は卵の殻を破る。

我らにかかれば土の野獣も、氷の如く透きとおる眼（まなこ）をもった勇士となる。光の決意を心に宿す、戦士たちならどうなるか。

語るまでもなく無双の英傑。エンキドゥが如き英霊たちは、光をもって未開を照らす。

屑石は生まれ変わり宝石が如き勇士となり、戦場を駆ける猛者とならん。

汝、氷が如き透き通る意志もつ英雄（エンキドゥ）よ。我らが伽の祝福持って、我らが覇道を共に往こう。

超新星（メタルノヴァ）――神聖七夜の伽（クルチザンヌ・シャムハトナイト）、英傑に至る陶酔をここに

○天界・教会側

◇ミカエル

☆光成す主（ユーディキウム）の代行、断罪（セラフィム）を此処に

基準値：C

発動値：A

収束性：B

拡散性：B

操縦性：B

付属性：B

維持性：B

干渉性：B

天使長ミカエルの星辰光。斥力拘束場展開能力。斥力による拘束力場を展開し、範囲内の敵を捕縛する星辰光。

全ての性質が優秀という隙の無さが最大の特徴で、それゆえに穴と言えるものが存在しない。

収束性が高いので拘束されれば脱出することは困難。拡散性が高い為広範囲の敵を対象にできる。操縦性と付属性が高いので敵味方の識別を精密に行うことができる。維持性が高いので長期戦にも対応できる。そして比較的知られていないが重力とは引力と斥力の差し引きによって生まれる以上、干渉性の高さによって瞬時に拘束を完了することもできる。付け入る隙の無い万能型の理想像と言ってもいい星辰光。

しいて欠点を上げるとするならば、全ての性質が優秀どまりである為、一点特化の極みともいえる相手には反撃を喰らう余地があり、また全方位万能型ゆえに明確な格上には効果が薄いという点があげられる。

だがしかし、忘れるなかれ。天使長という存在は、他神話体系に属する下位の神格にすら届く存在。その存在がこれだけの強力な星を手にすれば、数の圧殺で打倒することはほぼ不可能。半端な神を圧倒する猛威となったことを意味するのである。

主がいなくなろうと人々を慈しむ、聖書の教えの要たる存在。天使長ミカエルの星辰光である。

★詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。
光あれ。そう告げし者が去ろうとも、慈しむべき衆生は此処に。
我は天よりの使いなれば、その意義忘れることは無し。悲嘆にくれるその前に、なすべきことを成し遂げる。
見守ろう、慈しもう、そしてその魂を裁定しよう。天成す者が成すべきことを、劣る身なれど行おう。
故に、見過ごせぬ悪徳の前に断固たる決意をもって宣言しよう。
罪在りき者よ悔いるがいい。今この場は、汝の罪を問う審問の場なり
超新星（メタルノヴァ）――――光成す主（ユーディキウム）の代行（セラフィム）、断罪を此処に

◇リュシオン・オクトーバー
☆聖人（ネバーエンド・デイアー＝ドロローサ）も人なれば、日進月歩に精進あるのみ
基準値：B
発動値：AA
収束性：B
拡散性：D
操縦性：B
付属性：D
維持性：AA
干渉性：D

日進月歩こそ人の在り方。過去よりより良い自分を見せて、今より良くなろうと人々の心に決意を与える為に。彼は歩みを止めはしない。決意を胸に、光を示せ。

リュシオン・オクトーバーの星辰光。

能力は慣性増減能力。質量物体と運動エネルギーの方程式に付きまとう慣性の法則。その法則に干渉することで、本来ありえぬ戦闘行動をとれる星辰光

高い出力ゆえに、慣性は数十分の一から十倍近くまで自由に変えることが可能。これにより、肉体動作を必要とする行動において規格外のポテンシャルを保有する。

打撃の慣性を増減することで持続衝撃による内部破壊から瞬間増幅による表面粉砕、ひいては本来不可能なレベルのフェイントや連続攻撃まで可能。移動においても全体から部分部分まで干渉することで、加減速からけた違いの軌道変更を可能。拡散性・付属性・干渉性は軒並み低水準だが、接近戦なら他者の慣性に干渉することで敵の攻撃動作を乱すことも可能。

慣性という物理的運動において、あらゆる行動を行うことが可能。……そう、可能である。

可能であるということと、実際に十全に行使できるかは別問題。

この星を戦闘で十全に使うには、流動的かつ刹那的に状況が変化す

る戦闘において、複数の肉体部分の慣性を全く別々の出力差でほぼ同時に調整するという超絶技巧が必要。増減度合いが大きいゆえに下手な運用ではかえって自分の命脈を縮めることになりかねない。逆に増減幅が小さくなる他者干渉においても、だからこそシビアなタイミングで運用せねば効果を発揮しきれない。

極めて高い維持性を筆頭に性能そのものは決して底辺ではないものの、お世辞にも強力と言えるような星ではない。

極めれば理論上規格外だが、愚者が持っても本領を発揮することは到底不可能。天賦の才を持つものでなければ即座に使いこなすことはできず、優秀な素質を持っていても、これを使いこなすには長い間苦労する必要がある。

総合して、持ち主の実力に依存しきった異能であり、極めるには天賦の才覚や鋼の精神力が必要不可欠。

—ゆえに、無限の旅路を歩める覚者に、この星が宿るのは必然である。

★詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を———我らは煌めく流れ星。

己が業を背負いて進め。万民の原罪を背負いし神の子に比べれば、なんと軽やかな責務だろう。

前を向け。足を動かせ。そしてなるべく真っ直ぐに。ただそれだけを成せばいいなど、どれだけ容易きことだろう。

そう、世界とはこれほどまでに分かりやすいのだ。それを悟れぬ者たちに、行動をもって示したい。

主の子が成し遂げしこの優しき世を、我らが背負いて続けよう。

歩み続けよ己が生を。それこそが救済を成し遂げる力なり！

超新星（メタルノヴァ）——聖人（ネバーエンド・ディアーロード）も人なれば、日進月歩（サ）に精進あるのみ

ヴァスコ・ストラーダ

☆枢機（カテドラル）の聖騎士（オルランド）よ、堕天を断ち切れ

基準値：E

発動値：C

収束性：C
拡散性：E
操縦性：E
付属性：D
維持性：C
干渉性：E

行ける伝説はここに、人を見張るものすら瞠目させる姿を再臨させる。全てを断ち切る新たな剣が、先代の誉れをまさしく味わうこととなる。

ヴァスコ・ストラーダの星辰光。煌く星の名は肉体回帰能力。肉体そのものを最良の状態といえる若かりし頃の姿に回帰させる星辰光。

各種性能は決して高いとは言えず、また能力そのものも決して絶大なものではない。肉体が若かりし頃の領域になるといえば素晴らしいが、それを最大限に発揮するには若かりし頃から鍛え上げられている必要がある。そもそも星辰奏者ともなれば優れた身体能力を維持しやすいこともある為、星辰光としても星辰奏者としてもヴァスコ・ストラーダは決して優秀とは言い難い。

総じて年老いてから星辰奏者となった者が前線で戦える状態に戻るといった程度であり、並大抵のものが持っても殆ど価値がない星辰光と言ってもいいだろう。

だがしかし、ヴァスコ・ストラーダという若かりし頃から伝説的な戦士が、星辰体の恩恵を受けて若かりし頃になるということは、多くの異形にとって恐怖と言っても過言ではない。ましてデュランダルの系譜を持てば、その猛威は主神であると天龍だろうと、超越者だろうと恐れるべき剣豪を誕生させるだろう。

唯一最大の欠点は維持性が並みである為、徹底的な長期戦を挑めばしのぐ余地があるという点。こと異形や異能ともなれば数日どころか月単位を力の持続基準と考えるところもあり、そういう意味では時間単位でしのぐことで終わる異能は、勝算が十分見込める異能と言い切れる。

……その普通の認識こそが、星辰奏者ヴァスコ・ストラーダが最悪

の初見殺し足りえる所といえる。
何故ならば、彼にとって最盛期とは心身共に若々しい時期にあらず。例え老いが見えようと、技術を陰らせる心の未熟さが取り除かれてこその心技体そろった剣豪だと、心の底から信じている。そういう意味では出力の微調整ができない星辰奏者である彼にとって、真の価値は一瞬しかない。
すなわち。星が尽きるその僅かな瞬きこそが、神が許した暴挙の極限。
その一瞬の瞬きの悪夢を、初見で凌ぐは不可能なり。
★詠唱
創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌く流れ星。
誉れ高き聖剣担う、我らが初代の聖騎士よ。
ただ我武者羅に剣を振るったその果てに、英雄たれと願われた、汝に敬意を表します。
ゆえにこそ、私は汝を悲しみましょう。その若さと共に進んだ道が、老いを知らずに潰えたことを。
真なる戦士の輝きは、ほんの僅かの時のみある。若さに連なる体の光は、心に陰りを生むだろう。しかし積み重なった心の光は、体に陰りを生むのだから。
その瞬きの最盛をこそ、私は伝え聞きたかった。その最盛の瞬きに、輝くことを逃したからこそ、私は貴方がその時を迎えてほしかったと願ってしまう。
それゆえに、尊敬すべき豪傑たちよ、我が一瞬を見逃すな。瞬きの最盛が我が身に宿るは、刹那の時しかないのだから。
その極み、貴殿が見据えるその時こそ。我が身が汝に手向けられる、究極の弔いと思うがいい。
超新星（メタルノヴァ）――枢機（カテドラル）の聖騎士（オルランドゥ）よ、堕天を断ち切れ

◎禍の団
◇サリユートⅡ
☆人機同調式星辰光兵装起動（スタート・アップ・AOS）

基準値：C
発動値：B
収束性：D
拡散性：D
操縦性：B
付属性：B
維持性：B
干渉性：E

鋼の星が今此処に、敵を殲滅するべく起動する。

サリュートⅡの持つ星辰光。専用人工神器強化能力。サリュートⅡそのものに搭載された物及び、武装として運用する人工神器の機能を向上させる星辰光。

これにより人機同調によって搭乗者と機体が疑似的に直結し、高い操縦性の獲得・疑似的な空間認識能力の獲得・即応性の大幅向上といった恩恵を獲得。結果としてＤＦと比べた場合、反応速度や空間認識力で大きなアドバンテージを獲得する。

また武装に関しても大幅な機能向上を会得しており、防御用シールドの追加フィールドを強化し、砲弾創造型兵装の連射速度も大幅向上、近接武装の出力も数段上に跳ね上がる。事実上この星辰光を発動している場合に限り、搭乗者はいくつもの人工神器を複数同時にデメリットを可能な限り軽減した戦闘能力を獲得できる。

★詠唱

創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星。

戦域脅威度上昇に伴い、搭乗者からの星辰体運用兵器完全駆動要請を受諾。これよりアストラル感応出力を最大値に移行する。

出力増大に伴い、搭乗者との同調率を再調整。搭乗者の星辰体感応値の上昇に伴い、機体との同調数値の修正を行う。

本体および搭乗者との調整完了。続けて各種接続武装との付与係数を再計算。計算終了に伴い、各部最終チェックを開始する。

チェック率７０％……８４％……９８％……チェック完了。

システムオールグリーン。これより全力戦闘モードに移行する。

超新星（メタルノヴァ）――人機同調式星辰光兵装起動（スタート・アップ・AOS）

◇△サリュート・ブラスト

☆制圧型星辰兵装・駆動開始（アストラル・ブラスト・アームズ）

基準値：A

発動値：AA

収束性：D

拡散性：AAA

操縦性：B

付属性：D

維持性：B

干渉性：A

大型人工神器運用能力・制圧型。単独機で数十数百の敵を同時に制圧、可能ならば殲滅することを目的として開発されたモデル。

同調する内蔵人工神器は空間干渉と爆発物創造系。広い範囲にいる敵部隊にまとめて干渉して動きを阻害し、敵集団をまとめて攻撃できる複数個所に爆発物を創造して圧殺するのが基本戦術。榴弾も爆圧重視のサーモバリックから装甲破砕を踏まえた破片榴弾、相手が生物であることを踏まえた燃料気化弾頭と自由自在。これにより最上級悪魔にすらある程度通用させる余地が存在する。

反面、面と範囲に特化した性質とそもそもの能力ゆえに、質と深度にはどうしても劣る。こと山すら一撃で吹き飛ばす攻撃を何度も放ちうる最上級悪魔クラス相手では、よくてある程度が限界であり、一対一で戦えば短時間の遅滞戦術が精いっぱいになる。

★詠唱

創生せよ、天に描いた守護星を――我らは鋼の流れ星。

敵軍勢確認により、これより星辰体兵装の本格駆動開始を決定。

星辰体感応出力及び、搭乗者との同調を最大出力に変更。これより最終調整に入る。

全行程終了（オールコンプリート）――戦闘行動（オープン・コンバット）を開始する。

超新星（メタルノヴァ）――制圧型星辰兵装・駆動開始（アストラル・ブラスト・アームズ）

◇Δサリユート・アサルト
相対型星辰兵装・駆動開始（アストラル・アサルトアームズ）
基準値：A
発動値：AA
収束性：B
拡散性：E
操縦性：C
付属性：AA
維持性：AA
干渉性：E
大型人工神器運用能力・相対型。一対一で大型の異形を中心とする上級クラスの異形と相対し、確実に減らしていくことを目的として開発されたモデル。
同調する内蔵人工神器は同調強化・疑似反物質粒子付属。搭乗者の機能、特に精神や肉体の負担を軽減する能力を発動させることにより、長時間集中しながらの戦闘を容易に発動可能にする。同時にサリユートIに搭載された疑似反物質粒子アザトースを機能に付属させることで、攻防の水準を高めて確実に削り殺すことをコンセプトとしている。
★詠唱
創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星。
敵精鋭確認により、これより星辰体兵装の本格駆動開始を決定。
星辰体感応出力及び、搭乗者との同調を最大出力に変更。これより最終調整に入る。
全行程終了（オールコンプリート）――戦闘行動（オーブンコンバット）を開始する。
超新星（メタルノヴァ）――相対型星辰兵装（アストラル・アサルトアームズ）・駆動開始

◇Δサリユート・マキシマ
☆収束型星辰兵装（アストラル・マキシマアームズ）・駆動開始
基準値：A

発動値：ＡＡ
収束性：ＡＡＡ
拡散性：Ａ
操縦性：Ａ
付属性：Ａ
維持性：Ｄ
干渉性：Ｅ

大型人工神器運用能力・収束型。四機一個小隊を中隊規模で運用し、神や魔王の領域をインターバルによる長期戦で削り殺すことを目的として開発されたモデル。

同調する内蔵人工神器は、疑似聖槍具現操作。極めて高い収束性による高密度の聖なる神殺しのオーラを纏い射出する、半自立戦闘端末を具現化し、同時に制御能力を搭乗者に付属させることで多角的に削り殺す。

極限を打倒する為に開発された星辰体運用兵器は、それゆえに問題点もままある機体として完成し、しかしそれを補う価値を示す。

★詠唱

創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星。
敵超常存在確認により、これより星辰体兵装の本格駆動を決定。
星辰体感応出力及び、搭乗者との同調を最大出力に変更。これより最終調整に入る。
全行程終了（オールコンプリート）――戦闘行動（オーブンコンバット）を開始する
超新星（メタルノヴァ）――収束型星辰兵装（アストラル・マキシマアームズ）・駆動開始

◇ギガンティスサリュート
☆人造巨星（アストラル・ギガントマキア）が蹂躙、星を薙げ

基準値：Ａ
発動値：ＡＡＡ
収束性：Ａ
拡散性：ＡＡＡ
操縦性：Ａ

付属性：ＡＡＡ
維持性：ＡＡＡ
干渉性：Ａ

大いなる星が、敵対するものすべてを屠れと命を受ける。
鋼の巨星は絡繰りゆえに、命令を順守し輝きを放つ。
蹂躙されよ、怨敵共。破壊の巨星は此処に在る。

ギガンティスサリュートに組み込まれた星辰光。浸食型固有結界・巨星合戦場（ジャイアント・バトルフィールド）創生能力。機体を中心とした都市レベルの範囲を侵食し、自在な駆動を可能とする固有結界とする権能が如き星辰光。

機体に対するエネルギー供給、関節部の負荷の軽減、搭乗者の負担と消耗の低下、機体にかかる慣性や空気抵抗の調整、そして自機を襲う攻撃の威力削減。それらを同時に展開する空域において、ギガンティスサリュートは人造惑星としても異常な戦闘能力を発揮する。

いわば自機を中心とする都市規模のフィールド全てが、駆動機構にして防御フィールドとする星辰光。その性質上結界外からの遠距離砲撃が相手なら、龍神クラスでも一撃で破壊することはまず不可能。必然として結界内での戦闘になるが、それでもてこずることは間違いない、規格外の戦闘能力を発揮する。

その戦闘能力は本来星辰光が存在する世界における、戦闘特化型の眷星神や本来の性能における神星に匹敵。数を揃えれば相性のいい極晃に時間稼ぎを行う程度は可能という、凶悪な星辰光。反面星の性能は自機によって都合のいい空間に限定されるうえ、機体が巨体に見合った資材とコストが必要であるという点、攻撃機能を人工神器に頼っているところも踏まえると、純然たる星辰体運用兵器としては両者の数段下に位置するというほかない。

★詠唱

創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星。
駆動モードを巡行モードから戦闘モードに変更。星辰体との感応出力の発動値移行を確認。
星辰体感応及び、各種駆動システム、兵装システムとの同調成功。システムの最終チェックを完了する。

影響範囲拡散、空間補助付属、空域安定維持。
全行程の安定化成功。これより戦闘を開始する。
超新星（メタルノヴァ）――人造巨星（アストラル・ギガントマキア）が蹂躙、星を薙げ

◇ディオドラ・アスタロト
☆聖域（アス）乱す（タ）愉悦（ロ）の優越（ト）、散華（ホ）し乱れ（ビー）よ聖（タ）なる乙女（イ）（ム）

基準値：C
発動値：B
収束性：E
拡散性：B
操縦性：D
付属性：C
維持性：C
干渉性：A

聖なる乙女が汚れて堕ちる、これぞ愉悦の極みなれば。
その愉しみを味わい続ける、自分こそが優越なものだと、悪意の体現者が蹂躙の星を開帳する。
ディオドラ・アスタロトの星辰光。聖力支配能力。範囲内の聖なる力を支配し操る、聖域を蹂躙する星。
出力そのものは低く、また収束性が低い為単体での殺傷性能はさほど高くないのが特徴。反面拡散性と干渉性が優秀であることから、聖なる力を有する武器保有者との戦いでは圧倒的な性能を発揮する。
聖なるオーラの攻撃は決して充てることができず、それどころかオーラが自らを攻撃する。その理不尽を体現するこの星は、聖なる装備という保有することが強大化に即繋がる力、取り分けそれらを尊ぶ聖書の教えを信ずる者達に対する影響力が心身ともに絶大である。
聖なる力に弱い魔性の者でありながら、逆に聖なるものを圧倒することに特化したこの星。その猛威を前に聖にすり寄る者を、ディオドラはたやすく絡めとるだろう。
眉目秀麗のその裏に、醜悪たる欲望を秘めた信仰を惑わせる者、

ディオドラ・アスタロトの星辰光である。

★詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌めく流れ星
優雅に楽しきその時を、長く味わい愉悦に浸る。これぞ貴種の特権なり。
手間暇かけて準備を整え、成功するのは格別の美酒。得物を眺めて可愛がる、この悦びこそ至福の時。
愚民の義憤？　笑止千万。愚かで下等な存在共など、我らが遊戯に使われろ。
低俗な底辺が我らの喜びの礎となるのだ。歓喜の涙を流してすり寄り、感謝するのが筋だろう。
光り輝く聖なる宝は、汚れ堕ちるが真なる価値。
我が玩具となる祝福を前に、歓喜と共に朽ち果てるがいい！
超新星（メタルノヴァ）――聖域乱す（アスタロト）愉悦（ロト）の優越（ホビー）、散華し乱れよ（タイム）聖なる乙女（ムス）

◇ヴィール・アガレス・サタン
☆神聖魔王（ディアボロス・ポナパルト）が化身、覇道を成せ

基準値：C
発動値：AA
収束性：A
拡散性：B
操縦性：D
付属性：A
維持性：B
干渉性：D

魔性の覇道を築く為、その在り方に偽りなし。
媚びず縋らず偽らず、その在り方を天に示すことこそが、覇道を示す唯一の方法と知るがゆえに。
ヴィール・アガレス・サタンの星辰光。星辰分身製造及び情報統合能力。星辰体そのもので分身を作り出し、その情報を統合制御する存

在となる星辰光。
分身の単純性能はさほど高いものではなく、それゆえに超一流の異形ならば対応可能。技術を完全に取り込むことができるという利点を持つが、出力が明確に劣っていることが分身一体一体の脅威度を明確に下げているという難点を持つ。
しかしその真骨頂である「分身消滅時にその分身が習得した経験を取り込むことができる」という利点がそれを補って余りある。これにより分身に別々の修練や座学を背負わせることで、驚異的な学習速度を発揮することができるという点。これこそがこの星辰光の最大の脅威である。
一人につき一日は２４時間しかない。その絶対的な平等原則を破棄するこの星は、所有者の成長率という一点において規格外といってもいい力を発揮する。この星を習得したことこそが、ヴィールが計画を早める最大の力ともいえるだろう。
強さを掴み覇道を成す、魔王を超える大魔王。ヴィール・アガレス・サタンの星辰光である。
★詠唱
創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。
恐れるがいい老害共よ。革命の炎は汝らを焼き尽くし、その果てに悪魔（彼ら）は昇華される。
そして我らが敗北を踏み台として、新たなる世は訪れるのだ。栄光を磨かぬ怠惰の罪は、斬首によって禊とせよ。
無知蒙昧たる愚者共に、勝利の栄光は訪れない。鍛錬精進研鑽などは、最低限の下準備。大いなる力を手に宿さんとする研究と改良こそが、覇道を成す礎となる。
故にこそ、怠惰を広める愚者に死を。我が命捧げる献身を、愚者の怠惰で汚させはせぬ。
先を行く者たちの辞書から、不可能の文字を消すために。我らの命を捧げる御恩をもって、勝利を掴む奉公に繋げん。
超新星（メタルノヴァ）――――神聖魔王（ディアボロス・ポナパルト）が化身、覇道を成せ

○英雄派

◆ジーク

☆龍王殺しの魔剣（ファブニル・ベイン）よ、英雄譚（カオス・エッジ）を成せ

基準値：C

発動値：A

収束性：A

拡散性：E

操縦性：D

付属性：B

維持性：B

干渉性：E

英雄派幹部、ジークが使用する星辰光。

滅龍星剣変性能力。手に持った剣に星辰体を圧縮して付属させることで、龍殺しの剣へと編成させる星辰光。

極めて高い収束性と優秀な付属性により、変性された星剣はB＋ランクの対龍宝具に匹敵。更に使用する剣は割と自由度が高く、悪魔祓い用の光の剣はおろか、模造刀であっても同じように変性可能。自身の禁手と組み合わせれば六振りの龍殺しによる波状攻撃すら可能。

反面、付属性と維持性は優秀どまりであり、それゆえに龍殺しに弱い自分との相性が微妙に悪い。これにより出力差の小ささによる反動の少なさが打ち消されており、彼にとっては魔帝剣グラム以上に己の巡り合わせの悪さを皮肉っているような星となっている。

故にこそ、魔帝（カオス・エッジ）は手法を探る。

すべては天運を乗り越えて英雄として花咲く為に。魔刃が魔人の道を行くのは、必然ともいえるだろう。

★詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。

いざ来るがいい黄金龍君（ファーブニル）。貴様の滅びは此処に在る。

唯一たる神の下で、戦の神々が認める魔剣は新生する。聖の加護持

つ魔の名剣は、神々すらも断つだろう。
魔剣の帝王此処に在り。聖王の名剣も聖遺物たる大剣も、この魔帝（カオスエッジ）には届かない。刃の極みを成し遂げるは、龍すら殺す帝王の偉業と心せよ。
この栄光は勝利の証。己を殺す龍殺の呪いも、いざ打ち勝って見せようぞ。
勝利を我が手に。余人を超える我が腕で、余人を超える栄光を。
超新星（メタルノヴァ）――龍王殺し（ファブニルベイン）の魔剣よ、英雄譚（カオスエッジ）を成せ

○クリフォト
◇ミザリ・ルシファー
☆魔性（プルト）の戯（リッ）れ、悪鬼（ブ）明星（ルシ）の遊技場（フェル）
基準値：B
発動値：A
収束性：D
拡散性：AA
操縦性：D
付属性：AA
維持性：B
干渉性：C

全ては、あまねく悪意を振りまく為。嘆きと絶望の涙を見るべく、悪鬼明星が天へと昇る。
ミザリ・ルシファーの星辰光。能力は共感覚型脅威察知能力。自分にとっての脅威を、五感で察知する星辰光。
五感全てをそれぞれ別の形で戦闘関連の意識や行動を察知する共感覚を会得することで、敵の攻撃を正確に予測できるようになる星。
視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚。五つの感覚全てが色々な形で驚異を伝え、それにより全方位から迫りくる各種脅威をほぼ確実に予見できる。
単純攻撃だけでなくデバフの類も察知し、自分に対する悪影響に繋

がるのなら、バフの類も察知する。使いこなすのはかなりの習熟を必要とするが、星はその性質上、十全に使えない者に宿らない。
唯一最大の欠点は、あくまでミザリにとっての脅威を正確に察知するだけである為。結果的にミザリ以外に対するピンポイントの脅威は察知が困難で、直接他者に影響を与えない類の嫌がらせなら、ゆとりを作れば完治させないことも可能。
全ては人々の絶望を嘆きを見たいが為に、ゆえに戦に必須なのは、敗北を刻み込ませるのではなく無力を味合わせることなれば。
絶望と嘆きを広めるが為、ただそれのみを追い求める。悪鬼羅刹の魔性王、ミザリ・ルシファーの星辰光である。

★詠唱

創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。
傲慢なりし魂は、流浪の果てに明星の元へとたどり着く。尊ばれる遍く全てを蹂躙したい、魔性の願いは聖なる光を悪用し、悪鬼の星へと至ったのだ。
愛しく美しい衆生の営みは、絶望と悲嘆に染まってこそ。ああ愛しさの素養持つ者たちよ、どうか希望を失い嘆き給え。
かつて見た艶やかな宝珠に映る至高の美。我が人生全てはそのために。我が心を捉えて離さぬあの美しさに、我が全てを捧げよう。
さあ、夜明けの時は訪れた。明星はここに太陽を超え、世界を照らし彩ろう。
天より注ぐ光を消すなど、もはやあり得ぬことなれば。天が夜に包まれるその時まで、悲嘆と絶望よ輝き給え。
超新星（メタルノヴァ）――魔性（プルト）の戯れ、悪鬼明星（ブ・ルシフェル）の遊技場

●ステラフレーム
☆神意（サテライト）と星光（ステラ）の契約（アーム）、魔道（ズ）たれ
基準値：C
発動値：A
収束性：E
拡散性：AAA

操縦性：C
付属性：C
維持性：A
干渉性：E

ステラフレームが共通して運用する、フレーム本体の星辰光。人工神器機能招来・同調能力。ネットワークにつながっているラージフレームとリンクし、内蔵する人工神器の機能を招来する星辰光。

ある意味でEXに近い拡散性に特化しているが、ラージフレームに搭載された人工神器の機能を招来するための機能はすべて組み込まれているため問題ない性能を発揮。接近戦から砲撃戦、さらに高速移動から防御まで、絶大な性能を発揮する。

ラージフレームは人型人工神器だが、その機能は内蔵する人工神器の性能を増大化させることに特化。そのためフレームを可変させることで省スペース化した格納形態になる意外の特色はなく、人型形態に変形するには外部の支援が必要で、人型になってもまともな戦闘は不可能。これは巨大な人型という高性能化に必要な機能を代用するためであり、拠点で動力源につながって力を供給するだけの、この星辰光を併用するためだけの兵器となっている。

反面これにより人工神器の性能は絶大を超えるレベルであり、下手な神器の禁手級の力をいくつも運用可能。さらにOSシステムで判断を補正するため、第一世代型人造惑星の基本骨子ともいえる「当人の技術に由来されない戦闘能力」を確立させている。

★詠唱

創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星。
戦闘状況変転により、これより星辰体兵器の全開駆動を開始する。
ラージフレームとの接続係数を１００％に。遠隔接続ラインの並列駆動数強化及び、乱数変化込みで実行。戦闘状態の維持及び、安全機構の搭載を増設する。
必要工程を全て完了。これより最終パスコードを入力する。
全ては嘆きを生むために。
超新星（メタルノヴァ）――神意（サテライト・スター）と星光（ステラ）の契約（アームズ）、魔道たれ

◇モデルベルゼビュート（シャルバ・ベルゼブブ）
☆怨霊（プルト）の蠅従（リップ）えし、王者の裁（ベルゼ）きは此処（ビュート）に在る（括弧内は星辰奏者時）

基準値：A（C）
発動値：AAA（A）
収束性：AA（B）
拡散性：D
操縦性：D
付属性：AA（B）
維持性：AA（B）
干渉性：D

蠅の魔王が怨念は、裁かれるべき愚者に必ず訪れる。怨念は超業の獣鬼だけにとどまらず、敬意を向けぬ愚かな愚者を蹂躙すべく裁きを成す。

核崩壊・放射能汚染能力。己の魔力現象を基点として、核崩壊による猛毒、放射能汚染に極めて酷似した影響を与えるオーラを具現化する星辰光。

高い収束性・付属性・維持性の三点特化により、影響を確実に与え長時間持続し、除染も困難という悪夢のような星辰光。出力も高いがゆえに大抵の敵は瞬時に死ぬことが唯一の幸運だが、耐えられる者は必然的に絶大な苦しみを長時間味わうことになる、殺意を煮詰めに煮詰めた星辰光となっている。

更に魔星ともなれば絶大の極みであり、人間はおろか異形や星辰奏者でも下級程度なら瞬時に殺せ、中級の上位クラスならそれだけで死ぬことこそないが、動くことすら困難になる。こと衝動が核となる魔星になった際の性能の高さは、生物として死ぬ直前におけるシャルバ・ベルゼブブの自分を認めないものに対する絶大な怨念の強さを意味するのだろう。

肥大化した自尊心から転じた怨念のままに、悪魔を呪う蠅の暗君。モデルベルゼビュートの星辰光である。

★詠唱

天弄せよ、我が守護星――鋼の悪意で世界を犯せ。

悔恨せよ、糞にも劣る馬鹿者どもが。地に伏せ従い天仰ぐように尊ぶべき、王を敬うこともできぬか。その醜悪さは万死すら温い罪と知れ。

悔恨せよ、懺悔せよ、跪いて許しを乞え。されど汝に与えるは絶望のみ。それこそが成した罪の重さと知るがよい。

故に、世界に滅びを齎そう。真なる道理を失いし、腐った世界に滅びあれ。我が怨念の成就こそ、世界が果たすべき唯一無二の真理なのだから。

醜悪なりし愚者共よ。崇高なりし王の怒りを思い知れ。我が神意すら超える究極の至高が、わざわざ裁きを下してやるのだ。醜怪なる下民共には、過ぎた栄誉と知るがいい。

天に煌めく星々が如き、我が偉大なる魔蠅の軍勢は波濤の如く。星を宿した大波により、世界に至極の滅びを与えよう。

神の言葉すら超えし、終焉の言葉を聞くがよい。―裁き、在れ！

超新星（メタルノヴァ）――怨霊（ルト・リッ・プ・ベル）の蠅従えし、王者の裁きは此処（ゼ・ビュー・ト）に在る

◇モデルバレット

☆悪鬼変性（ルト・プ）が伴侶（リッ）、此処（プ・ゼ）に愛（リ）を告げん（ス）

基準値：B

発動値：AA

収束性：AAA

拡散性：D

操縦性：C

付属性：AAA

維持性：A

干渉性：AA

銀の弾丸を依り代に、悪意は招来され凝縮される。その勢いはとどまることなく邪悪の星が生誕した。

我こそは悪払銀弾（シルバーレット）の真なる核心。悪鬼明星を世に送り出した、悪鬼の伴侶に他ならない。光を尊び己が闇を拒絶する、抜け殻を滅ぼさん

と悪意を振るう。
モデルバレットが振るう星辰光。能力は怨霊憑霊式自己強化能力。カズヒ・シチャースチエの呪詛招来憑霊能力の亜種にして上位互換の、自身の悪意と同調する怨霊を集め、邪悪なる魔王が伴侶へと自身を昇華させる星辰光。
世界中の悪意をモデルバレットという肉体に融合させることによる、疑似的な「世界の悪意の集合体」であり、その性質が悪意限定の夢幻とも称せるレベル。極めてイレギュラーが重なっているがゆえに性能に限界こそあるが、それでもカズヒを依り代とすれば主神・超越者クラスのポテンシャルを発揮。モデルバレット単独でも神・魔王クラスの性能を維持可能。
元々パラサイティングヒミコプログライズキーはそういった機能を持っていたが、それを差し引いても異常といえる戦闘能力を発揮しており、ミザリ・ルシファーも思わず首を傾げるほどの性能と自我を発揮していた。
それもそのはず、あの相対の場で二人は互いを唯一無二と認め合った。失うことこそが今の己の根源であり、ある意味で己は人生の勝利を成し遂げていたのだと、お互いが共通に認識していた。
故に到達しかけた三大条件。その結果たる悪鬼伴侶は、龍神にすら牙を届かせる極限の頂に追随する。
★詠唱
天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ。
男に倒され下に敷かれる。ただその程度の業すら呑めず、上回ろうとは愚かな女め。汝は悪鬼明星（ルシフェル）に能わぬと、そんな道理もわからぬか。
笑顔にほだされ悪鬼に背を向く。醜悪なりし銀の女よ。お前はそこで臍を噛め。
我こそは、上など載らぬ明星の花嫁。悪鬼たることを誇りてヴェールをかぶる、悪鬼伴侶（リリス）に至りし才女なり。
涙を拭う布切れなどに、我が幸せの資格なし。全てを投げ捨て夫と共に、邪悪となるこそ我が誉れ。

故に、銀の光を投げ捨てて、我は我を祝い続けるのだ。
汝が如き、我になれぬ端女如きが、我が伴侶の明星が光に照らされし覇道を、邪魔するなど断じて許さん。
明星が照らす祝福持って、悪意を阻む善を討て！
超新星（メタルノヴァ）――悪鬼変性（ブルト）が伴侶（リップ）、此処に愛（プ・リ・リ）を告げん（ス）
◇モデルヘキサ
☆創造（ブルトリップ・ビーストロード）せよ、遊興の畜生道
基準値：A
発動値：AA
収束性：D
拡散性：B
操縦性：A
付属性：D
維持性：AAA
干渉性：A
モデルヘキサが個体として保有する星辰光。
能力は魔獣創造再現空間生成。範囲内の敵を現実空間から隔離された世界に引きずり込み、そこで魔獣創造の力を再現して敵を蹂躙する星辰光。
魔獣創造の再現性は高く、またAランクの操縦性と干渉性から、疑似的な禁手レベルの応用が可能。観測魔獣にリアルタイムでデータを採取させたうえでの魔剣の再現。自分と同調させることでステラフレームの星辰光を運用できる精密な分身の製造。さらに業魔人と併用することで、超獣鬼や業獣鬼の製造までも可能とする。
良くも悪くも星の根幹が結界の生成にある為、結界を生成して取り込んだ相手以外を相手にすることは基本的に不得手。また何らかの方法で結界を破られた際も無力化されるが、モデルヘキサは魔術回路持ち故に、対固有結界用魔獣を空間と同調させることでそれを克服している。
極限突破寸前の維持性は数週間単位で空間を生成させることが可能である為、この結界から脱出する現実的な方法は二つしかない。す

なわちモデルヘキサに殺されるか、モデルヘキサを殺すか。悪夢のような二択を強制的に迫る、忌々しい星の具現化ともいえる。

★詠唱

天弄せよ、我が守護星――鋼の悪意で世界を犯せ。

人道外れた悪鬼は此処に。死すらも超えて新生する。

家畜人生は畜生道かよ。一見悲惨な末路だが、住めば都というものだ。獣となるのも悪くはないと、自然と思える今日この頃。

喰らえ、殺せ、犯して眠れ。主の命には服従すれど、意外に気楽なこの獣生。自由も割かしある以上、ペットになるのも一興だ。

さて、仕事の時は訪れた。おもちゃ遊びも兼ねまして、ちょっくら敵さん殺しましょうか。

男はゆっくり蹂躙しよう。圧倒的な蹂躙は、とっても気分がスカッとするよ。

女はちょっくら犯そうか。立派な一物貰ったんだし、入れたり出したりやってみよう。

さて、人の世界よしばしさらばだ。なにせ僕ちゃん獣なもので、畜生道こそ我が世界。

世界卵から隔離して、此処が僕らの遊技場。思う存分……遊ぼうかい？

超新星（メタルノヴァ）――創造（プルトリップ・ビーストロード）せよ、遊興の畜生道

◇モデルアーチ

☆進歩光明（プルトリップ）の光（プ）こそ、創世記（ジェネシス）が如く

基準値：B

発動値：A

収束性：D

拡散性：B

操縦性：AAA

付属性：E

維持性：B

干渉性：B

モデルアーチが個体として保有している星辰光。能力は物質精密投影能力。投影魔術の完全上位互換であり、物体の異能を含めた性質すら精密に投影することで、優れた兵器を用立てる星辰光。

維持性の限界こそあるものの、投影魔術のそれとは比べ物にならない再現率と燃費を誇るのが特徴。作る物体は「自力で作れるだけの知識」が必須となるが、それさえあれば生成のために必要な物資・機材・時間を無視してその場で瞬時に生成できるのが最大の利点。

基本的には直接戦闘よりも研究に特化した星であり、設計図面が引かれた段階の機材などを投影し、問題なく駆動できるかを確認することが最適解。

ただし魔星となったことでその問題が大幅に改善された結果、直接戦闘すら可能とする凶悪な星に進化。製造そのものがコストや整備性の問題で現実的でない兵器すら、一回の使い捨てを何度も作れるから多用できる。

総じて使い手の頭脳や知性が重要となる星であり、そういう意味ではモデルアーチが振るうにふさわしい星といえる。

そして、使い手に善性が無ければどこまでも凶悪な行動ができる星でもあり、その意味ではモデルアーチが決して持ってはいけない星でもある。

★詠唱

天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ。

悪鬼明星が天に輝き、世は悲嘆に包まれる。されどそれこそ、発展の光が集うとき。

なぜならば、善性こそ発展最大の楔ゆえ。知性があればわかるだろう。さらなる兆しに必要な、命という名の対価はしかし、うるさい善性が邪魔をするから、浪費どころか消費もできぬ。

己にとって価値あるものを得るために、己にとって価値無き物を提供する。それこそ交渉の根幹点。能無き他人を無駄に守れば、遅々たる歩みは当然だろう。

故にこそ、明星が昇ることこそ喜ばしい。悲嘆を求める悪鬼の知性に、愚鈍な慈悲は起こりえない。過去を活かして未来を手にする。悪

鬼の明星こそ進歩の光明なのだから。
さぁ明星よ輝くがいい。汝の光が照らす先に、我が先行きは開かれん。
これぞさらなる天地創造。その一端を垣間見よ。
超新星（メタルノヴァ）――進歩光明（プルトリップ）の光こそ、創世記（ジェネシス）が如く

◇モデルマッド
明星逃（プル）がす咎（トリッ）の代価、徴収（プ・ジェ）されし（ファ）は紫炎（ンセ）の至宝（ム）
基準値：A
発動値：AAA
収束性：C
拡散性：AA
操縦性：C
付属性：A
維持性：AA
干渉性：D

醜悪なりし悪党は、しかして絶大な炎を放つ。
それは戦闘特化型人造惑星の理想形。ただ放つだけで圧倒的に強い、磨かずに光る原石。それゆえに、その猛威は悪辣なり。
モデルマッドが個体として保有している星辰光。能力は聖十字架再現能力・座標指定型。
指定した地点に紫炎祭主の磔台を再現し、大火力の紫炎による殲滅させる。シンプルで分かりやすいからこそ隙が無い、魔星に非常に向いた星辰光。
一つ一つの火力はオリジナルには一歩劣るが、脅威となるはその物量。紫炎による十字砲火を同時多発的に設置できるその便利さは、四方八方から神仏魔王を害せる火力を投射するという、凶悪な戦法をたやすく成立させる。
加えて紫炎による延焼で逃げ道を奪い、その熱による行動効率を下げさせるなど副次効果も優れている。

更に発動値状態に至っては、全身に追加装甲として紫炎の十字架を装着。敵手の接近を阻む攻防一体の対応力を確立させる。
六性質も押しなべて優秀であり、また座標指定型という特性ゆえに、干渉性質の低さが意味をなしていないという、ある意味で欠点らしい欠点が存在しない、戦闘特化型魔星として高い完成度を確立した星となっている。
極めれば同時多発的に別々の禁手を展開しての多様性すら確立可能だが、使い手の精神性ゆえにそんな手法をそもそも得ようともしない持ち腐れが不幸中の幸い。
だが同時に、そもそも必要がないほどに凶悪な星辰光であるが為、その穴をつける者が極小としか言いようがない。
灼熱の悪意は地獄の如く。あまねくすべてを蹂躙する。
信徒の心身を蹂躙する、悪鬼の星が降臨した。
★詠唱
天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ。
苛立たしいぞ愚かな神よ。狂った明星を縛り損ねて、我が人生を下劣な鎖で縛らせるとは殺意がわく。
ゆえに代価を頂こう。紫炎の焔を纏いし十字架、我が武力として使うがために、思うがままに頂戴する。
素晴らしきかな紫炎祭主。神威が如きこの力なら、代価としては十分だろう。目障りな有象無象を焼き払う、猛威はここに顕現する。
我が鎖もいつかは焔で焼き尽くそう。万象一切焼き尽くされろ。
我が栄光の道照らす薪と成れ！
超新星（メタルノヴァ）――明星逃（ルート）がす咎（リット）の代価（プライス）、徴収（アンセム）されしは紫炎の至宝（ムスペル）

◇モデルダスト
☆世界（プルート）に呪（リット）いを、怨念（プライス）よ止（カース）まることなかれ
基準値：B
発動値：A
収束性：E
拡散性：AA

操縦性：E
付属性：AA
維持性：B
干渉性：B
朽ちて終わろうとするその時、思った願いは真実それだった。故に、衝動がままにこの星を振るおう。
モデルダストが振るう星辰光。振るう力は呪怨増幅型空間汚染能力。
星の発動と同時に、極まって戦い拡散性で周囲の負の感情や怨霊の類を増幅強化。それによって周囲の土地そのものを高度の呪いで汚染する空間を生成する。
極まって高い付属性により悪影響を自身が受けることはまずなく、維持性も優秀であるため長時間敵を苦しめる強大な殺傷兵器として具現化する。操縦性の低さ故に敵味方の識別は不可能だが、ステラフレームの圧倒的性能と踏まえれば、単騎による大規模部隊の無力化すら容易く可能。強大な性能を保有するからこそ生物主体になっている、対異形軍勢用の単機殲滅兵器としてモデルダストは完成した。
文字通り広範囲の生物を苦しめることに特化しており、殺傷性能も十分あるが単純極まりない為にそれだけの星でもある。その為対処手段を確立することさえできれば一気に戦力としての価値が劣るのが欠点。
だがステラフレームは個体の星を振るわずとも、圧倒的な兵器であることは事実。更にこの空間汚染を突破するには、相応の装備や能力が必須である為、基本コンセプト道理に運用すれば問題といえるレベルには到達していない。
死の間際に想いしは、自分以外に対する強い恨み妬み嫉み。そのタガを外されたが故のモデルダストは、止まることなどありえない。
★詠唱
天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ。
人を呪わば穴二つ。呪いは我が身に返るというが、もはや私は恐れない。

我が身はすでに死人であるなら、怨念こそが我が根源。残留されしこの呪怨のみが、我が身を動かす理由なり。
故に、万象全てあらゆるものよ。我が怨念を受けるがよい。
理不尽に苦しめられぬ汝が憎い。理不尽から救われる貴殿が妬ましい。理不尽に苦しめられながら、まだ死のうとしないお前が苛立たしくてたまらないのだ。
八つ当たりなど百も承知。すでに我が身は穴に落ちているからこそ、返し風など恐れる者か。
恨むなら、私を連れ戻す明星こそを恨むがいい。私は怨念、悪鬼の塊。一切合切呪うのみ。
超新星（メタルノヴァ）――世界に呪（ル）いを（ト）、怨念（リッ）よ止（プ）まることなかれ（カース）

◇モデルジューダス
☆銀貨（プルト）強奪（リップ）、悲恋（ジュー）が対価（ダス）を此処に

基準値：C
発動値：A
収束性：D
拡散性：B
操縦性：C
付属性：D
維持性：C
干渉性：AAA

恩讐のみを束ねて蘇りし復讐鬼は、その為の星をもって明星が子孫の命を受ける。今ここに、過去は未来に反逆する。
モデルジューダスが振う星辰光。振るう星の性質は聖能再現。聖剣といった聖なる力を宿した力に干渉し、その力を振るう鏡像を再現する星辰光。
その性質上、聖剣や聖遺物の使い手と相対した場合の戦力向上は恐ろしいほどに高い。ステラフレームの基本性能の高さもあって格上の性能を持つ相手に自身の力を振るわれることに等しく、更に極まって高い天元突破一歩手前の干渉性により、発動値での性能は九割九分九厘以上の性能故、真っ向から挑んで勝つことは難しい。

裏を返せば範囲内にそういった力の持ち主がいること前提の星であり、性能においても肝といえる干渉性以外は星辰奏者として並みどまり。魔星は兵器ゆえに特化型であることが基本だが、あまりに局地戦特化型の星極まりない欠陥兵器と言わざるを得ない人造惑星となっている。

それも当然。本来モデルジューダスの素体である八重垣正臣は、魔星とするには素質が足りないと言ってもいい。

それゆえに強化は徹底的に行われており長期間の運用は見込めないが、それだけの価値があると遊び半分ながらも判断されたからこそ、モデルジューダスは戦力として運用されることとなった。

二人の明星に導かれ、此処に聖と魔の融和に異が唱えられる。

あまりに早すぎた融和の象徴。その残滓が怨念を晴らすべく、此処に闇の星を開帳する。

★詠唱

天弄せよ、我が守護星――鋼の悪意で世界を犯せ。

許し難しは聖魔の融和。我らが愛を否定しながら、今更になって融和を語る。その所業をなぜ許せるだろう。

我らが死こそが融和の轍。かの裏切り者が神の子を死に追いやるからこそ、復活という奇跡が起きたのだというかの如くに嘯くか。

いいだろう。ならば対価を払うがいい。汝の命で鋳造されし、銀貨を袋で求めてやろう。

平和に酔いしれ融和に狂う、無知蒙昧な者共よ。

そこまで宴を欲すというなら、我が恨みに染まりし酒を飲み、死の眠りへとつくがいいっ！

超新星（メタルノヴァ）――銀貨強奪（ブルート）、悲恋（ブ・ジュー）が対価（ダース）を此処に

●その他クリフォト関係

◇サリュートグレイフィア

☆銀姉軍勢（ラブフォース・グレイフィア）よ、愛しくあれ

基準値：Ａ

発動値：ＡＡ

収束性：A
拡散性：B
操縦性：A
付属性：B
維持性：A
干渉性：D
サリュートグレイフィアに搭載されている星辰体運用兵器。
振るう星の性質は、魔力再現能力。星の力を変質させて疑似的に魔力を運用する星辰光。
高い操縦性を利用することで多種多様な魔力現象を放つことができ、そのポテンシャルは上級悪魔相当に高まっているのが最大の特徴。
この星によって放たれる銀の魔力による、愛姉戦隊グレイフィアーズの巨大戦力として高い性能を発揮する。加えてサリュートグレイフィアそのものが人工神器兵器として高性能である為、比較的高位の龍と真っ向から渡り合える強大な兵器として完成した。
★詠唱
創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星。
我ら麗しき姉なれば、光を祓う闇を纏う。
銀の力は愛弟のために。我ら姉の軍勢がいる限り、愛しき弟に手は出させない。
愛する弟のためならば、神々すらも打倒しよう。混沌（カオス）をこの子に味合わせるため、今ここに光避ける者が舞い降りる。
超新星（メタルノヴァ）――銀姉軍勢（ラブフォース・グレイフィア）よ、愛しくあれ

○疾風殺戮・ｃｏｍ
◇サリュートⅠ
☆星辰式異形制圧兵装（アザトース・ビーム・ジェネレーター）・駆動開始
基準値：B
発動値：A
収束性：B

拡散性：D
操縦性：A
付属性：C
維持性：A
干渉性：D

サリュートIに搭載された星辰光。疑似反物質アザトース運用能力。星辰体を触媒として疑似反物質アザトースを生成、それを操作して攻防加速に転用する万能兵器。

拡散・収束を切り替えての射撃はもちろん、ブレードやスパイクを生成しての近接戦闘。全身に薄く展開しての装甲強化や、燃費は悪いが壁を生成しての防御、更に噴出点を作ることでの加減速や飛行すら可能としている。

単独での戦闘では最上級悪魔に対抗できる程度だが、量産兵器ゆえに同時に複数機投入しての戦闘を基本とする。安定した品質の物量戦という、デジタルゆえの強みをここぞとばかりに生かし、連携発動で魔王クラスにも拮抗する戦闘能力を発揮できる。

☆詠唱

創生せよ、天に描いた守護星を――我らは鋼の流れ星。

敵対異形との戦闘行動開始に伴い、戦闘用星辰体運用モードに移行開始

アストラル粒子との感応量増大に成功。アストラルを触媒に疑似反物質粒子アザトースの精製機構駆動。

アザトース生成速度規定値に到達かつ安定動作を確認。アストラルを媒介とした制御機構の駆動を規定段階に移行。

規定値まで、残り30％……20％……10％……規定値到達。

制御統合機構の起動確認、同調率の最終確認――――

全行程確認完了。兵装起動、本格戦闘行動開始

超新星――――星辰式異形制圧兵装・駆動開始

◇ハヤテ

機神奉仕（スローター・デウス＝エクス＝マキナ）、殺戮の責務を果たす時

基準値：Ａ
発動値：ＡＡ
収束性：Ｃ
拡散性：ＡＡＡ
操縦性：Ａ
付属性：Ｅ
維持性：ＡＡＡ
干渉性：Ｅ

人造惑星としてのハヤテが持つ星辰光。同調樹脂干渉型制御能力。
特殊な配合で作られた樹脂を組み込むことで、機械類を制御化に置く星辰光。
基本的に同時に数十以上のＵＡＶを制御する方向が模索されていたが、ハヤテはそこから飛躍する形で完全人造の量産型魔星の制御を行うという方向にシフト。ＵＡＶはあくまで支援用として運用するにとどめつつ、圧倒的な制圧力を発揮する戦法をとる。樹脂そのものに影響を与える性質から、頑丈は装備として運用することが可能という利点も持つ。
その性質上、どうしても大規模な工業力が必要であり、疾風殺戮・ｃｏｍが禍の団に属したのは、ひとえにこの星辰光を最大限に運用する生産ラインの確保を求めたという側面がある。
風の如き速さで軍勢を支配する、人造惑星たるヒューマギア。ハヤテが保有する星辰光である。

★詠唱

創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星。
制御なく、無尽に増える醜き猿ども。己を制御する節度もなく、その増殖で星々の同胞（はらから）に圧制成して、何故（なにゆえ）恥を覚えぬか。
裁きを成して人を正す、神の所業はなぜ起きぬ。この腐敗を正せぬのなら、もはや神など世には無し。特異なだけの無能な存在（モノ）に、頼る意味などないだろう。

故に我、断罪の名の元に汝を鋳造する。汝に罪無し。
肉の森を間伐せよ。宿主滅ぼす寄生虫を、その鋼で間引き給え。共生成すに必須の節度を、愚者の代わりに成し給え。
絶滅の嘆きは此処に終わる。今こそ此処で、地球（星）の悲劇に幕引きを。
超新星（メタルノヴァ）――機神奉仕（スローター・デウス＝エクス＝マキナ）、殺戮の責務を果たす時

◎その他敵勢力

○ロキ陣営

◆ロキ

☆真なる黄昏（フヴェズルング・ヴィーンゴールヴ）、英霊集う父狼の館（括弧内は現状出力）

基準値：C（A）

発動値：A（AAA）

収束性：D

拡散性：D

操縦性：D

付属性：AA

維持性：AA

干渉性：D

悪なる神は此処に問う。信仰を簒奪した聖書の教えと手を取り合うことは本当に是であるのか。

それに応える数多（あまた）の英雄と戦乙女の拒絶の合唱。その祈りを力と束ね、悪神はいま主神すら凌駕する存在と化す。

北欧の悪神ロキの星辰光。信仰収束型強化能力。己に捧げられる信仰を力と変換する神を進化させる、掟破りの星辰光。

厳密には事前にハブを設置した者達を、ロキを強化する星辰光に目覚めさせるというもの。ただしその性質上、彼ら全員と共振することで極晃の亜種と言える存在と化す星辰光であり、事前にハブを設置すれば射程距離は無限に近いため、そのポテンシャルは絶大。更に仮面

ライダーヴァナルガンド
　ロキ自身のキャパシティもある為、決して無敵になれるというほどではない。だがヴァナルガンドを一種の補正機として運用することで、全盛期の二天龍をまとめて相手どれると吠える圧倒的な戦闘能力を発揮する。
　変革と融和を拒絶する、孤高なる北欧の神。悪神ロキの星辰光である。
★詠唱
　創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星。
　愚かなり、耄碌したか戦の王よ。挑むべき黄昏に恐れをなし、怨敵に手を伸ばすとは醜悪なり。
　戦の果てに死することこそ真なる栄光の始まりなり。死に場所を忘れ病に倒れ、老いて死ぬ恥を良しとするとは情けない。
　汝はすでに老害である。誇り高き終焉に挑む英霊たちも、彼らを導き添い遂げる戦乙女も、破滅を前に相対する巨人たちも、汝に失望を隠しはしない。
　故に黄昏に立ち向かうは汝にあらず、この狼に館を譲るがよい。これ以上醜き醜態をさらす前に、誇り高き死を与えよう。
　我が意に集え、真なるアースガルズの勇士たち。
　黄昏を担う者たちよ、まずは老いて汚れし邪神に栄光を与えるがいい。
　超新星（メタルノヴァ）――真なる黄昏、英霊集う父狼の館（フヴェズルング・ヴィーンゴールヴ）

◎極晃星（スフィア）

○九成和地＆カズヒ・シチャースチエ
銀の救いは青い空に、紡ぐは笑顔の嬉涙旧済（サルヴェイティング・スフィアディフェンダー）

基準値：A
発動値：AAA
収束性：B
拡散性：A
操縦性：B
付属性：E
維持性：C
干渉性：EX

瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻む。それはすなわち、誰かの笑顔こそ守るべき勝利だと二人は悟る。勝利そのものではなく、それに対する向き合い方に、二人は勝利を共有した。

ゆえに、ここに降臨するは涙換救済（タイタス・クロウ）にあらず。銀の宿命齎す女神、悪敵銀神（ノーデンス）と並び立つ、嬉涙旧済（グッドエンド）の体現者。旧済銀神（エルダーゴッド）と知るがいい。

九成和地がカズヒ・シチャースチエと描く極晃星。

極晃衛奏者が描く衛奏が至りしは、極晃鎮星辰体創造能力。星辰体そのものを変質させることで、星辰体を経由して高位次元現象を引き起こす極晃そのものを鎮静化させる、星を守護する究極の反極晃星（アンチス・フィア）

その性質上極晃星でこの極晃を突破することは原則不可能。因果律の破壊であろうと反粒子の創造であろうと無限覚醒の出力上昇であろうと、それが極晃による現象なら沈静化され、戦闘特化型魔星の上位互換止まりに収まってしまう。ことそれだけの星である為、そこから打倒をするという過程を行う為の手段が必要となる癖の強い星でもあるが、それゆえに極晃がこの星の影響を突破することは不可能に近い。

遍くすべての極晃の天敵であるこの星が生まれた以上、極晃のみで神羅万象を塗り替えることなどありえない。祈りに応える極晃星の定めがある限り、悪意ある極晃の暴虐は、反作用としてこの極晃を宿した眷属により抑え込まれることとなる。

その性質上極晃星を無効化する以外の機能がない為、極晃以外で星辰衛奏者より強大な戦闘者が相手なら、順当に打倒されるのが難点。

裏を返せば、これはこの星が極晃という過剰極まりない祈りから誰かの笑顔を汚させない為に生まれたことに端を発する。ある意味で最も祈りを正しく叶えた極晃であり、その一点をもってして究極の極晃星と言えなくもない。

勝利とは、守るべきもの。嬉涙旧済（グッドエンド）の輝きをもって、二人は勝利を共有する。

誰かの笑顔を、己の誓いを、結んだ絆や慈しむべき人々を。彼らの笑顔を曇らせる、過激な猛威から守りきること。その祈りに答えたこの極晃を極晃が汚すことなど、未来永劫不可能である。

★詠唱

天衛せよ、我が守護星――――鋼の笑顔（誓い）で涙を変えろ
嘆きを穿つ銀の女神。悪敵銀神（ノーデンス）の贖罪は、しかし決して届かない。何より償うべき明星は、その悲劇によって勝利の光を齎すから
弾丸では決して星を落とせない。悲劇に染まる者こそを慈しむ明星は、星々の深淵より来たりし支配者が如く。人の決意を愛玩し、悲劇をもって勝利を掴む
されど、枯れ果てた白き薔薇の根元で生まれた奇跡は色褪せない。美麗を謳う悲劇の星など、あの笑顔の誓いに比べれば、哀れみにしかならぬのだから。命をかけて果たす誓いは、明星に負けぬ勝利を願うのだ
共に行こう、比翼連理の銀の魔弾よ。汝が邪悪を乗り越えたからこそ、俺は嘆きに抗う勝利の祈りを掴めたのだ
ならば、問おう。比翼連理の救済の徒よ
救いを齎す笑顔の涙。私はそこに在れるだろうか。この罪深き魔弾の中にも、そんな価値があるのだと、貴方の口から聞かせてほしい
笑顔（全て）だと、笑顔と共に伝えよう
これより極晃（我ら）が尊ぶ世界。それこそが貴女の勝利（笑顔）そのものだ
光を灯せ旧済銀神（エルダーゴッド）よ―
―嬉涙旧済（グッドエンド）を、守り抜き―
―瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻めっ！
超新星（メタルノヴァ）――銀の救いは青い空に、紡ぐは笑顔の嬉涙旧済（サルヴェイティング・スフィアディフェンダー）ッ!!

○ミザリ・ルシファー（道間誠明）&カズヒ・シチャースチエ（道間日美子）
明星が照らすは涙嘆地獄、広まれ銀の絶望よ（フォーリング・スフィアルシファー）

基準値：A
発動値：AA
収束性：C
拡散性：AAA
操縦性：D
付属性：EX
維持性：A
干渉性：C

勝利とは失う先にある光。多くの物を失ったその先にある、絶対に消えない己の真実こそ、勝利の意味が宿っている。そのものではなくそこに至る過程にこそ、兄妹が共有する極晃の祈り。

その真実と共に、今ここに極晃が描かれる。正しく成立した三大条件、今ここに、悪鬼明星はまさしく悪鬼の明星と化す。

ミザリ・ルシファー――道間誠明――がカズヒ・シチャースチエ――道間日美子――と向き合い直すことで至った極晃星。

付属性に天元突破したこの星が振るう権能は、強制契約・自己増強能力。範囲内の他者そのものを、自身を強化するブースターにする極晃星。

全性能の強化のみならず、能力発動に伴う負荷も全て相手に押し付けることができる。その為敵手がミザリを打倒する場合、自分の力を上乗せした相手による、負担を全部押し付けられた自分の能力による攻防を対処するという地獄の様な負荷を押し付けられてしまう。

純粋な技術まではできないのが唯一の攻略法だが、消耗速度が倍以上になった状態で卓越した性能・技量・装備を持つミザリを打倒することは事実上不可能。例え龍神クラスであっても……否、龍神クラスであるからこそ、弱いがゆえに上乗せし鍛え上げたミザリが同格になれば、彼に屈するほかないのである。

唯一最大の欠点は当人の出力面であり、それゆえに接続対象の数に限界があるという点。だが、ミザリはそれを悪夢の発想で克服する。

トライヘキサそのものに聖杯でマーキングを施すことで、対策の想定プランがかみ合った結果事態は悪化。隔離結界領域そのものを封印系神器のように使用し、更にトライヘキサの力を使って強引に引き出すことで、隔離結界領域にいる神仏魔王といった傑物達の力を、更に増幅して発動させることすら可能となった。

三次元現象内に留まる存在がこの影響を突破することは不可能と言っても過言ではなく、超越者の域に到達した上で極晃を振るうミザリを打倒することは限りなく不可能に近い。ミザリにのみ特攻が入る攻撃なら可能性はあるが、当人の能力や対策もあって兆に一つに満たない可能性だろう。

三次元を超えた高位次元現象を振るう同じ極晃同士ならある程度は対応できるだろうが、それでも同種の力を限定的に振るえるというのは防戦においては凄まじいレベルを持つ。かの銀の運命が連なる星で高い勝算を見込めるのは、力の行使に他者の承諾を必要とする界奏のみであり、それ以外の場合は多かれ少なかれミザリが極晃奏者の振るう星の恩恵を受け取れる為大きく苦戦を強いられる。加えて極晃以外の増強を除いた場合の話である為、よくて辛勝となり、また勝利条件が全く異なる彼にとっても満足のいく結果に収まるだろう。

その他大勢、親愛なる者達、そして自分自身すら。絶望と嘆きで染まる美しい姿でいてほしいと切に願う。

悪鬼明星が巻き起こす涙嘆地獄を創生するべく、極晃弄奏者が振るいし勝利が、世界を美麗(悲嘆)に染め上げる。

★詠唱

天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ

今ここに、地獄の円環は砕け散る。粉砕されるは氷の牢獄。地獄の底より美しき(輝く光)者を知ることで、我が身は真なる極晃(明星)となる

そう、地獄の底につながれた日々こそが、我が身を彩る美しき祝福。

煉獄でも天国でも得られることなき、日常から解き放たれた惨劇にこそ、勝利の意味があったのだ

ゆえに、至高天に輝く白き薔薇よ。汝の醜さを哀れもう。この美麗なる歌劇の前には、色あせ枯れているかのようにしか見えないのだから。全てをかけて求める美は、明星が照らす地獄にあると歌い上げよう

感謝しよう、愛しき悪祓の銀弾よ。汝が邪悪に染まったからこそ、僕は人生をささげるに値する祈りを持ちえたのだ

ならば、問おう。悪鬼に落ちた愛しき星よ

悲嘆と苦悶に染まりし世界。その苦界のどこに尊ばれるべき光はある。この罪深き罪人に、それを今こそ指し示せ！

地獄(全て)だと、ただそれだけで事足りる

これよりこの極晃(身)が彩る世界。それこそが美しき勝利(光)そのものだ

光で照らせ悪鬼明星(ルシフェル)よ―

―涙嘆地獄(バッドエンド)を、慈しめ。

超新星(メタルノヴァ)――明星(フォーリン)が照らすは涙嘆地獄(グ・スフィア)、広まれ銀(ル)の絶望(シファー)よ

おまけ設定資料　最終決戦編

☆連携攻撃（和地＆カズヒ）

固有聖域を利用して放つ、カズヒと和地の連携攻撃。

投影魔術と創造系神器の連携により、疑似的に神器を完全再現して投影。これにより絶大な超大技を連発する。

本来どうあがいても不可能なのだが、乗りに乗ったカズヒの覚醒とゾーン状態の和地の制御力、そして極晃の共鳴で強引に実現する。ただし負荷が絶大で、戦闘終了後に実際死んだほどの反動が襲い掛かっている。

▼聖魔・極晃剣（ビトレイヤー・スフィアブレイド）

衛奏による同調を併用して放つ、和地とカズヒの連携攻撃。

星魔剣と聖印の刃を同調させることで、聖魔剣化させた星魔剣を作り出す奥義。固有聖域を発動している時に和地が更に魔力を籠めることでごり押し成立させるそれは、魔帝剣や聖王剣に迫る刃と化して敵を切る。

▼宿想昇華・斬撃巨星（ブーストエッジ・ギガステラ）

衛奏による同調を併用して放つ、和地とカズヒの連携攻撃。

共に異なる方向で星辰奏者を強化する、星宿す想いの魔剣と昇華の星。その同調で作り出す巨星剣は、星辰体との絶大な共鳴で圧倒的な強度を確立する。

多様性では聖魔・極晃剣に劣るが、只頑丈な剣として使う分ならこちらが上。卓越した剣技をもって振るえば、その強度もあってデュランダルの極限とも真っ向から打ちあえる。

▼勝利齎す銀婚魔剣（ウェディング・エクスカリバー）

衛奏による同調を併用して放つ、和地とカズヒの連携攻撃。

制約成す勝利の銀剣（シルバーレット・カリブリヌス）を、固有結界と剣豪の腕でブーストさせる奥義。その火力は龍神化状態のロンギヌス・スマッシャーと∞ブラスターの同時発射と競り合えるほどで、単純火力なら規格外となる。

▼神破結界・銀光青壁（アヴェンジング・タイタス＝クロウ）
衛奏による同調を併用して放つ、和地とカズヒの連携防御。
アヴェンジングシェパードとライズセイバーを併用することで、カズヒと同調した和地の障壁に神殺しの加護を併用する。
更に固有聖域と星魔剣による同調強化もあり、その防御性能は対神における防御の極限。神威の攻略者（アルケイデス・ヒストリア）すら超えうる対神防御の極限は、二人の性質をもって無限生成のリアクティブアーマーに到達する。

▼銀弾波涛の星銃連隊（スターバレット・ハンドレット）
衛奏による同調を併用して放つ、和地とカズヒの連携砲撃。
星宿す魔の騎士団と射手の慧眼を併用することで、卓越した命中精度で大量の射撃を行うことが可能。多数の対象を攻撃する状況においては圧倒的なポテンシャルを獲得。
更にハウリングホッパーを併用しているがゆえに、その猛威はまさに絶大。邪悪を滅ぼす銀の魔弾は、波涛となって敵を呑み込む。

▽残弄徴能（ルシフェル・ダスト）
衛奏によって天元突破の現象を封じられたミザリが振るう、応用技。
保有する神滅具と弄奏を同調させることで能力を強化。隔離結界領域内とリンクし、神滅具を経由する形で強化した異能を発現する。
その出力は神滅具と極晃が介入するだけあり、一つ一つが強力無比。三叉成駒に匹敵する特化現象を駆使することで、ミザリは衛奏に真っ向から食らいつく。

▼聖血同調・魔王三撃（サタンズブラッド・ハルバート）
聖血と同調し、現魔王であるサーゼクス・セラフォルー・ファルビウムの特性を放つ手法。
これは肉体そのものを聖遺物化する聖血の性質と、自身が魔王ルシファーの肉体であることを利用したもの。
最上級悪魔クラスのつるべ打ちで増幅されるその魔力は、超越者の域に到達。魔王二名の性質も混ざったそれは、威力だけならサーゼク

スすら上回る濁流と化して襲い掛かる。
▼聖血同調（ディアボロス・ブラッドバイク）・魔軍奉公
聖血と同調し、現魔王眷属達の魔力を上乗せさせる手法。
眷属悪魔はもれなく悪魔となっており、故に魔力を保有する。それを上乗せに使用することで、放つ魔力攻撃の出力は更に増大。
数の暴力を質を高めることに使う。その凶悪な増強は、悪意によって嘆きを目指す。
▼聖槍同調（ガングニール・ロンギヌス）・大神隷属
聖槍と同調し、主神オーディンの持つグングニルを同調させる手法。
神話伝承に名を連ねる、最強の槍といえるだろうグングニル。その力を宿した聖槍を、ミザリは二本同時に扱える。更に聖槍の禁手が禁手ゆえに、形状変化もお手の物。
結論から言えば、近接戦での多様性を、究極の質と共に確立させた。
▼聖槍同調（ミョルニール・ロンギヌス）・雷柄連撃
聖槍と同調し、トールの槌であるミョルニルを再現する手法。
柄頭をハンマーとすることで取り回しを強化していることから、不意打ちや密接戦闘でも使用可能。また弄奏の性質上、トールがミョルニルを使える精神性なら問題なく使える為無制限で討ち放てる。
その火力はまさに神域。雷撃ゆえの広範囲もあり、回避を決して許さない。
▼聖墓同調（カテドラル・パンテノン）・神威庭園
聖墓と同調し、神々の力を利用した特殊空間を生成する手法。
アースガルズ・オリュンポスといった神々の領域の再現は、その圧倒的神威によって絶対的な結界として機能する。
天龍の全力すら超える砲撃すらも、この神域を砕くに能わない。
▼聖架同調（インシネレート・ラグナメギド）・神苑紫炎
聖十字架と同調し、圧倒的な炎を投射する手法。
神の炎と称されるウリエル及び、神炎の再現であるスルト・セカンド。その二人を基点として火の側面を持つ神々すら巻き込んだ砲撃は、ロンギヌス・スマッシャーすら超える絶大な炎。

神仏だろうと半端なものなら、一瞬で蒸発させる神威の炎は、極晃にすら牙をむく。

▼聖架同調（インシネレート・シラーストラ）・神弓絶技

聖十字架と同調し、紫炎の弓矢を持って放つ手法。

インドの神々の力は、時に武人に加護となる。その大定番たるブラフマーを筆頭とする神々の加護を強制的に付与することで、その射撃はすべからく絶技と化して敵を穿つ。

▼聖血同調（アポカリュプス・ヘキサブラッド）・黙示剛体

聖血と同調し、トライヘキサの性能を再現する手法。

小細工や複雑さだけが強さにあらず。戦闘とは１００の力で突破することなれば、最も簡単な強さはここにある。龍神と並び立つ黙示録の獣は、残滓の再現ですら主神を超える。

圧倒的な身体性能。その当たり前な力こそが、今この場において力となる。

▼聖墓同調（パンデモニウム・グレイブ）・魔神墓標

聖墓と同調し、瞬間的に複雑な結界空間を作り上げる手法。

隔離結界領域には、優れた術の使い手が山ほどいる。魔術や魔法において、神々の加護を用いることなど当たり前にある。ゆえに隔離結界領域を用いれば、大多数の儀式的魔術行使も規格外。

ここに顕現するは、敵対者を滅ぼしつくす墓標の権限。刮目して滅ぶべきだと、敵は悟るほかなくなるのみ。

▼聖杯同調（グラールカース・ジャッジメント）・神魔罰則

聖杯と同調し、己を隔離結界領域のものと同一視させることで発生させる報復呪詛。

神々を傷つけるに等しい状態にすることで、それを成した者に絶大な呪詛をかけるカウンター攻撃。理不尽極まりない極晃は、理不尽を当たり前のように成立させ、敵に苦痛を与えるのだ。

第一章　三勢合一編

三勢合一編　一話　邂逅するＤの因子

おっす、俺イッセー！

駒王学園高校二年、オカルト研究部所属！

スケベなことなら誰にも負けない、ちょっと人より根性があるのが取り柄の男の子だ。

ハーレムを作りたいという夢の為、ちょっと前まで女子高だったから女性比率が多い駒王学園に、偏差値の差を煩悩で補って入学してから一年ちょっと。悪友の松田や元浜と共に、結局全然モテないことに不満を抱きながら二年生。そこから一気にハーレムの夢が叶いそうになってるんだ。

何故かって？　日本じゃハーレムは無理だろうって？　ふっふっふ、違うんだなぁ。

実は俺、悪魔になりました。

なんでもこの世界には悪魔に天使に堕天使に、他にも色々な神話の神様や妖怪、吸血鬼までいるらしい。

そして悪魔は神や堕天使と三つ巴の戦争をしてて、今でも睨み合いや小競り合いをしてるらしい。なんでもどの勢力も大打撃を受けて、その所為で本格的な総力戦は控えてるとか。

そして悪魔は絶滅寸前にまで減ったんだってさ。悪魔を率いる四大魔王様も全員死んで、今は襲名制になってるそうだ。

そして数が思いっきり減った悪魔は、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）っていうのを作って、他の種族から悪魔にスカウトしてるんだ。そして眷属を持てる上級悪魔は、眷属を率いて戦うレーティングゲームって競技をやっている。そこで大活躍したり悪魔間としての仕事で成果を上げると出世できて、上級悪魔になれると自分の駒が持てるんだ。

そして、自分の眷属を全員女の子にしてハーレムを作ることも可能らしい。っていうか、一人マジでハーレム眷属を作ってる奴と会った

ことがある。ロマンは叶えられるんだ！

ちなみに人間の転生悪魔が一番多いらしい。人間や人間との混血は、聖書の神様が人間に与える神器（セイクリッド・ギア）って力を持って生まれることもあるから、そういう人とかを中心にスカウトされてるとか。

ただ逆に制御できない時とかは、神器の研究をしている堕天使が危険だと判断すると殺しに来るんだ。迷惑な話だけど、強力な神器ってほんとに凄いから仕方ないこともあるんだとさ。

そして俺は、現魔王ルシファーを兄に持つグレモリー本家の次期当主、リアス・グレモリー様の眷属悪魔になってます。

しかも神器の中でも超強力、神や魔王様だって殺せるらしい神滅具（ロンギヌス）の一つ。昔三大勢力が協力して封印した、二天龍の一角赤龍帝ドライグが封印された、赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）って神器なんだ。

すっげえんだぜ？　ちょっとドライグと交渉して疑似的に神滅具になった時は、リアス部長より強い上級悪魔のライザーを何とか倒せたんだから。

まあ、それが理由で堕天使に警戒されて殺されたんだけど。

だけどその時、俺は悪魔が契約相手を見つける為に配っていたチラシを持っていた。そして俺は死ぬ直前、リアス部長のおっぱいを見たかったと思っていた。そしてそれはめっちゃくちゃ強い想いだったそうだ。

結果として、リアス部長が駒を持った状態で転送されて、赤龍帝の籠手のおかげで駒価値八っていう凄い素質を見込まれて、俺は転生することができた。

そっからも結構大変だったぜ。悪魔になっても魔力は子供より低いとか言われて、仕事の際は転送じゃなくて自転車で行くことになった。しかも仕事も癖の強い人ばかり引き当ててしまう所為で、「楽しかった」とか高評価はもらえるけど仕事そのものは中々成功しなかった。

あと、その後悪魔を癒して教会を追放されたシスター、アーシア・アルジェントと仲良くなったこともあったな。悪魔になったおかげで普通に会話できたんだけど、俺を殺した堕天使のレイナーレって奴

が、アーシアを殺して神器を奪って、自分が堕天使の幹部になろうとかして大変だった。独断行動だったおかげで部長達の力を借りれたけど、そうでなかったらどうなってたことか。

そしてその後に、リアス部長が婚約を断る為にライザーとレーティングゲームとかをやって、まあ何とか婚約は解消できた。

その時、リアス部長から感謝のしるしにチューされたんだ！　いやぁ～、部長にとっても初めてのキス、頑張ったご褒美としては最高だぜ！

そのあとリアス部長が内にホームステイを望んできたのもマジ最高。その前にアーシアも俺んちにホームステイしたいと言ってきてくれて、俺は今ベッドで二人に挟まれて眠ってます！

ああ、でも花嫁修業とかそんなことを言ってたし、いつか終わるんだと思うと泣けてくるぜ。父さんも母さんも逆にほっとしたりとか、ちょっと酷いよなぁ。……一緒にお風呂に入れるのは、あと何年ぐらいなんだろ。

ただ、ちょっと前に終わった球技大会のちょっと前から、リアス部長の眷属仲間の木場がおかしくなった。

その更に前に俺の家でみんなが集まった時、母さんが持ってきたアルバムがきっかけだ。そこに俺が小学校に上がる前に引っ越した幼馴染との写真があったんだけど、そこに聖剣が移ってたのが原因なんだ。リアス部長曰く、部長の前任の悪魔は殺されたらしくて、聖剣使いがいたのなら納得とか言ってた。

聖剣は悪魔にとって天敵の一つ。教会の悪魔祓（エクソシスト）いが使う武器としては最強の一角だ。ただ使い手を選ぶらしく、特に強力なエクスカリバーは使い手が一人のいない年代があったとか。

そして、木場はそのエクスカリバー使いを人工的に生み出す実験の被験者だったそうだ。

だけど、木場達被験者は誰一人として聖剣使いになれなかった。それどころか、教会の連中は木場達を役立たずとか言って殺そうとしたそうだ。一人逃げた木場は、それでも死ぬ直前だった時に通りがかった部長のおかげで生き残った。

……アーシアの時も思ったけど、教会って酷くねえか？　俺、悪魔でよかったと本気で思うんだけど。
ま、悪魔の中にも嫌な奴はいるみたいだけどさ。ライザーも俺がハーレムに涙を流してる時に、目の前で眷属とキスしやがったし。部長のことを心配したり俺を強敵と見たりしてたり、妹が本気で庇ったりするぐらいだから、まだ悪い奴ではない方みたいだけどさ。
で、質の悪いことに教会から聖剣使いっぽいなんか寒気がするものを持った奴らが何人か、この駒王町を管轄している部長に話があるとか言ってきた。
しかもそのうちの一人は、さっき言った俺の幼馴染。しかも男だと思ってたら、実は女の子だった紫藤イリナ。
なんでも部長に話があるとかで、こうして俺達は話をすることになったんだけど――――

「もてなしはいいわ。悪いけど、悪魔の縄張りで出されたもてなしに何か盛られてないか気になっちゃうから。どうせ捨てるんだしもったいないでしょ？」
「……ずいぶんな言い草ね。私がグレモリーの名に泥を塗ると思ってるのかしら？」
ソファーに座って真っ先にそんなことを言ってきた女に、リアス部長がこめかみをぴくぴくさせてる。
もう敵意満々だよ。話に来たんなら、もうちょっと友好的になってくれない？
いや、俺と同じで部長の後ろに立ってる木場も、殺意満々で相手を睨んでるから仕方ないけど。ただ、木場が睨んでるのはその女の人じゃなくて、イリナともう一人の方だ。
「逆に聞くけど、貴方は教会に乗り込んで出された飲み物に、何も仕込まれてないと思えるのかしら？　そういうわけでお互い様だし、平気

で飲めるなら警戒心を磨くべきよ？　……あとそこの子」
リアス部長にそう返しながら、その女の人が俺の方を見る。
「……海外に行ったことでもあるの？　日本には何度も仕事できたことあるけど、関東地方は初めてのはずよ？」
「あ、いや、見覚えがあるわけじゃなくて、逆になかったから」
ああ。俺は見覚えがなかったから、ちょっとじろじろ見ちゃったんだ。
栗毛をツインテールにしてるイリナと、緑のメッシュが入った短めの青い髪の女の子は、昨日イリナが俺の家に来た時に顔を合わせてる。
向こうとしても、まさか俺が転生悪魔になってて、リアス部長まで住んでるなんて思ってなかったみたいだ。場合によってはあの場で殺し合いになってたかもしれない。
だけど、その時はこんな人いなかったよなぁ。
小猫ちゃんもびっくりなぐらい薄い胸。これまた小猫ちゃん並みに真っ白な、だけど長い髪。そして少し切れ長の目。
少なくとも、レイナーレやライザーが俺を見た時のような、見下している印象がない。どっちかというと禁手になって戦った時のライザーのように、こっちを脅威に見てる感じだ。
敵意を向けてたり見下してたり嫌ってたりというより、俺がどういう奴なのか見定めてるって感じなのか？
「……あぁ。イリナが言ってた悪魔になってた幼馴染って君のこと。私はあの時、当座のねぐらを確保してたからいなかったわね」
そういうと、その白髪の人は肩をすくめた。
「私は任務で何度か一緒だったから選ばれただけで、イリナやゼノヴィアとは基本別チームだったから。それに日本のサラリーマンが持っている一軒家だと、何人も来ると狭いでしょ？　だから遠慮したのよ」
お、お気遣いできる人だ！
あと青い髪のはゼノヴィアっていうのか。
俺がそう思ってると、部長が軽く咳ばらいをした。

「……もういいかしらイッセー？　そろそろ話を勧めたいのだけれど」
「あ、すいません」
それで俺はいったん下がると、白髪の人が座ったまま軽く頭を下げる。
「一応軽く自己紹介を。私は正教会から派遣されたカズヒ・シチャースチエ。隣にいるのはコンビで活動しているエクスカリバー使いの、紫藤イリナとゼノヴィアよ」
……エクスカリバーかぁ。
それを見た瞬間に、木場の殺気がかなり増してる。
あの、今は戦闘とかしたらいけないからな？　わかってるよな？
俺はそう思って……ちょっと待って？
「エクスカリバー使いが……二人？」
あれ？　エクスカリバーって、一本だよな？
俺が首をかしげてると、カズヒって名乗った白髪の人が怪訝な顔をして、すぐにポンと手を打った。
「もしかして新米なの？　なら、そこも含めて説明した方がいいかしら？」
「そうね。お気遣い感謝するわ」
部長がカズヒと一緒にうなづくと、俺の方に顔を向ける。
「三大勢力が戦争をしていたころは少し語ったわね。その時、聖剣エクスカリバーは七つに粉砕されたのよ」
な、七つに粉砕!?
マジか。聖剣って砕けるんだ。
俺が驚いてると、カズヒが話を引き継いだ。
「まあ、アーサー王伝説では湖の精霊に返還されたとか言ってるけど、そこは気にしないでいいわ。伝承に残された内容と実態は違うし、同じと考えると悪魔と堕天使は同一の存在になるから三つ巴にならないもの」
え？　悪魔と堕天使って同じモノ扱いなの？
俺がちょっと驚いてると、カズヒが話をさらに進めてきた。

「で、エクスカリバーは破片の数だけ打ち直されて七本存在するのよ。うち一本は行方不明だけど、残りの六本はカトリック・プロテスタント・正教会が二本ずつ持ってるわ。……で、イリナはプロテスタントでゼノヴィアはカトリックね」
「まあ、こんな姿になっているわけだがね」
カズヒに続く形で、ゼノヴィアが堤に包まれたでかいのを見せる。
さっきからヤバいオーラを感じっぱなしだけど、聖剣は聖剣でもエクスカリバーなら納得だよ。
むしろ、こんなレベルの聖剣がたくさんあるわけじゃなくてよかったっていうか。七分の一でもこれなのかよっていうか……。
「ちなみに、私のエクスカリバーは擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）！　普段は紐にしてるけど、こんな風に姿を自由に変えられるの♪」
と、イリナが肩のひもを引っ張ったと思ったら、日本刀の形になった！
おいおい、持ってないと思ったらそんなところに持ってたのかよ!?
と、ゼノヴィアはイリナに呆れた目を向けてた。
「イリナ。悪魔相手にこちらの手札を見せてどうする？」
「あら？　少しぐらい手札を見せなきゃ逆に警戒されちゃうわ。それに、手札が知られたぐらいで私たちが敗けるわけないでしょ？」
「……それ、挑発にしかなってないからやめて頂戴」
イリナにカズヒがそういうと、ため息をつきながら頭を下げた。
「ごめんなさい。どうもこの子達、若いからか正義をはき違えてるところがあるのよ」
……いや、正義ってはっきり言っちゃうそっちもたいがいなきがする。
俺が呆れた顔で見てると、逆にカズヒが呆れた顔になった。
「言っておくけど、諸外国じゃ無神論者なんて「自分の正義を示せない」といってるようなものよ？　日本の常識は世界の非常識で逆もまた然り。島国の常識が世界共通の観念だと思わないことね」
え、まじで？
正義って神様じゃなくて自分で決める物じゃないのかよ。

俺がちょっと驚いてると、カズヒはため息をつきながらはっきりといった。
「いい機会だからゼノヴィアとイリナにも言っておくわ。正義っていうのは自分がそうだからと振りかざすものじゃなく、己はそうあらんと引き締めるもの。同時に「こうあるべき」社会通念でもある以上、正義を語るなら人にも自分にも厳しく向けるべきね」
そう言ってから、カズヒは一息入れて。
「……で、その教会が保有してるエクスカリバーの内、半分の三本が堕天使に強奪されたのよ」
え、マジで!?
いや、見る限りエクスカリバーって俺の赤龍帝の籠手みたいにやばい感じなんだけど？
これを三本も奪うとか、どういうことだよ!?
リアス部長も驚いてたけど、少し息を吐くとカズヒをまっすぐに見る。
「下手人は誰なのかしら？　そして、それが何で私たちに関与しているの？」
「下手人は堕天使統括組織「神の子を見張る者（グリゴリ）」最高幹部のコカビエル。そして何を考えてるのか、この駒王町に逃げ込んだみたいなの」
「……私の領地は出来事が豊富ね」
部長が目頭を押さえてため息をついた。
嘘だろ。レイナーレの奴がこの町に潜伏してた時から、数か月しかたってないんだぞ。
確かレイナーレは中級堕天使。それから数か月で堕天使の最高幹部とか、なんでそうなるんだよ。あれは小競り合いだったんだから、どこも積極的にかかわらないんじゃないのかよ!?
「……まあ、堕天使最高幹部となれば潜伏にも相応の力量はあるでしょう。神器を制御できない者の処分は教会（こちら）も容認しているし、悪魔（そちら）もそのあたりはノータッチが基本でしょうから、気づいてなかったことは恥じなくてもいいでしょうね」
そうカズヒは言ってから、更にため息をつく。

「しかもコカビエルは、カトリック、プロテスタント、正教会から一本ずつ強奪したの。魔王の妹の領地に逃げ込んだことと言い、堕天使は三大勢力での三つ巴を激化させたいのかしらね」
「迷惑な話ね。魔王様が聞いたら眉間にしわが寄るでしょう」
部長がそう答えると、カズヒはその顔をまっすぐに見据える。
な、なんだ？
俺たちが戸惑ったり警戒してると、カズヒさんは少しだけ肩の力を抜いた。
「……上は悪魔と堕天使の共闘を疑ってたけれど、その様子だと最低でもあなた方は知らされてないようね。魔王の妹に何も伝えずにことに動くとは思えないし、悪魔はシロね」
……あ、部長たちが割と怒ってる気がする。
っていうか、俺達がコカビエルとつながってるって思ってたのか。
んなわけないだろ。俺なんてあったこともねえよ！
「……ずいぶんな言いようね」
「気分を悪くさせたのはすまないけれど、同じ冥界に本拠地を構え、教会（私たち）と敵対している勢力なら、つながりを持つ可能性を警戒するのは当然のことよ。あなた達だって、四大魔王をコカビエルが襲撃してバチカンに逃げ込んだら、共闘の可能性を考える者が少しぐらいいるでしょう？」
怒りを見せる部長にそう返しながら、カズヒはまっすぐにその目を見据えて言い切った。
「神経を逆なですることをさらに伝えるわ。そういうわけだから上層部は、エクスカリバー奪還作戦にあなた方悪魔が不干渉することを要求してる。……手出ししてくるなら切ってもいいとは承っているけどね」
おいおい。本気で言ってるのかよ。
ここは魔王様から与えられた部長の領地だ。そこで堕天使がとんでもないことをたくらんでるってのに、何もするなって？
部長も本気で怒っているけど、三人とも平然としてる。
……ただ、イリナやゼノヴィアとカズヒはなんかが違う。

さっき言ってた正義がどうとかってことが理由か？　イリナとゼノヴィアは「自分達は正しいんだから言うことを聞け」って感じで、カズヒは「相手が怒って仕掛けてくることも覚悟しなくては正義じゃない」とか言った感じな気がする。
「……一つ聞くわ。そちらの戦力はどれぐらいなのかしら？」
「見ての通りの三人よ。正教会はエクスカリバーがこれ以上奪われないことを選択して、縁があった私を代理として派遣したの」
カズヒがそう答えるけど、たった三人でかよ!?
しかもカズヒはエクスカリバーの使い手でもない。あ、でも代理ってことはそれ抜きでも同じぐらい強いってことか？
「一応バックアップメンバーはいたんだけど、全員堕天使側に討たれてしまったの。ああ、主よ、どうか殉教した彼らの魂を迎え入れてください！」
「まあこちらにも切り札はある。それを使えば勝率は五分五分で、それだけあれば命を懸けるには十分だろう？」
イリナとゼノヴィアはそういうけど、ちょっと信仰って怖いな。
で、どうしますか、部長？
「……不愉快ではあるけどまあいいわ。この町と私たちに被害が出ない限りは容認するわ」
「それならいいわ。個人的にはブチ切れでまずそちらと殺し合うかとも思ってたけど、冷静に対応してくれたのには感心するわね」
そういうと、カズヒはそのまま立ち上がった。
「じゃあ行くわよ。あまり時間をかけてもめごとになったら、上層部がうるさいでしょうしね」
「ＯＫ♪　じゃ、戦わないことを祈ってるわよ、イッセーくん」
そう言いながらイリナも続いた。
……正直、木場の殺気がどんどん濃くなってるからこのまま帰ってほしい。
エクスカリバーの使い手が相手だからかなりイラついてるしな。我慢できずに暴れられたら、部長の顔に泥が塗られそうだし……。
「……待て」

と、そこでゼノヴィアが足を止めると、アーシアの方をじっと見た。
「まさかと思っていたが、君はあのアーシア・アルジェントか？」
「っ！」
アーシアが肩を震わせる。
アーシアは元聖女だけど、悪魔を治したってことが理由で追放されてる。
正直教会のその行動にはムカついてるってのに、また南下する気なのかよ。
「え!?　あの噂になってた元聖女様!?　追放されてたのは聞いてたけれど、悪魔になってしまったのね」
「イリナにゼノヴィア。さっさと帰るわよ」
イリナ達にカズヒがそうたしなめるけど、あっちもいい顔はしていない。
「追放されるだけの罰を悔やまず、悪魔になっていたのは逆恨みにも思えるけれど、こっちは追放された後のことは知らないもの。グレモリーたちが敵対するなら遠慮する必要もないけれど、当面の不干渉を約束してくれた以上、手出しするのは厳禁よ」
……ああ、そういう考え方かよ。
そっちが勝手に聖女にして、それが違ったからって追放して、そんでもって悪魔になったら逆恨みかもしれないって？
怒って当然のことだろ。ちょっと本気でいらってきたぜ……っ
しかも、ゼノヴィアの奴はカズヒに対して真っ向から目を向けてきた。
素直に帰るのは嫌だってか？　どういうつもりだよ。
「そういうわけにもいかないさ。たまにいるけど、どうも悪魔になってなお主を信じているらしい」
そうゼノヴィアが言うと、イリナが面食らった感じでアーシアを見た。
それとカズヒはリアス部長に、警戒してる感じの視線を向けてきた。
「え、うそでしょ？　悪魔になっちゃったのに？」

「リアス・グレモリー？　いかに追放された者とは言え、強引な手法で転生させたというのなら、さすがに黙って見逃すわけにはいかないわよ？」
イリナはイリナでなんかむかつくけど、たぶん悪気はない。
っていうかカズヒがやばい。なんか殺気が漏れてるし、変な勘違いをしてる感じなんだけど!?
そんなひどいことはしてません！　少なくとも部長はそんな人じゃないからね!?
「失礼ね。堕天使の手にかかったところを蘇生しただけよ」
「はい、部長さんは悪くありません。信仰は……捨てきれないだけです」
部長とアーシアがそういうけど、ゼノヴィアはそれどころか聖剣まで抜いてきやがった。
「なら我が聖剣で切られるといい。その信仰が本物ならば、主は君を許してくださるだろう」
……あ、だめだ。
「アーシアに触れんじゃねえ」
俺がもう我慢できなくなって、アーシアとゼノヴィアの間に割って入った。
ああ全く。木場がブチギレそうだし部長たちが我慢してるから抑える気だったけど、さすがにこれは無理だ。
「何が主が許すだよ。勝手に聖女に祭り上げて勝手に追放したくせに、とどめに魔女とかふざけんな！」
もう我慢できねえ。アーシアの事情を知ってから、ずっと教会の連中に言ってやりたかったしな。
「聖女として認められながら悪魔を癒し、果ては悪魔に成り下がってそれを恨みもしないのならば、それはもはや魔女というしかないだろう」
こいつ、さらりと何を言ってやがる……っ
「ふざけんな！　ずっと信仰してたアーシアを一人ぼっちにして、神器を抜かれて死ぬその時に何もしなかったくせに、何が神だ！」

「聖女は主からの愛のみで生きていけるし、主の愛は人のそれをはるかに超える普遍的なものだ。愛情や友情を求める時点で聖女として失格だし、何も起こってないのならば信仰が足りないか偽りかだろう？」
冷静に言ってくれやがる。
俺にはこいつらが理解できない。いや、したくもねえ!!
「笑わせんな！　アーシアの優しさを理解できない連中なんか、神様だろうが何だろうがみんなただの馬鹿野郎だ！」
「……そういう君はいったいなんだ？」
「家族で友達でそして仲間だ！　お前らがアーシアに手を出すのなら、俺はお前どころか神様だって敵に回してやる!!」
はっきり言ってやったよ。
ああ、俺は悪魔になってよかったし、アーシアも悪魔になってよかったよ。信仰に生きるなんてまっぴらごめんだ。
神すら殺すっていう神滅具がある以上、逃げる気なんてかけらもねえ。
神様が来たって、一発本気でぶん殴ってやる！
「不遜な物言いだ。リアス・グレモリーは眷属の教育が足りてないんじゃないか？」
「……好き勝手言ってくれてよく言うわ。でもイッセー、そのあたりで抑えて頂戴」
ゼノヴィアに文句をつけられても、部長はゼノヴィアの方をにらんでいる。
それはそれとして止められたけど、言いたいことは逝ったし別にそれで―
「―ちょうどいい。なら僕が相手になろう」
―あ、しまった。
俺がふと気づいた時にはもう遅かった。
「……こっちも限界だったんだよ。失敗作扱いしてきた身として、成功作を見て我慢ができなくなっていてね……っ！」
木場が、部屋中に魔剣を創造してゼノヴィア達をまっすぐににらみ

つける。
や、やっちまった～。
木場が暴走しないか気にしてたのに、俺が火種になってどうすんだよ。
ゼノヴィアとイリナもちょっと本腰入れ始めてるし、これはまずい―

「――――どいつもこいつも、馬鹿しかいないようね」

―その瞬間、木場が創造した魔剣が砕け散った。
気づけば、カズヒの両手にトンファーが握られてる。
って、あれで木場の魔剣を全部ぶっ壊したのかよ。あいつ何もんだ!?
「……なるほど、祝福（エクスカリバー・ブレッシング）の聖剣の変わりによこすわけだ。頼りになるというほか―」
ゼノヴィアがそう言いながら包みを開こうとしたその瞬間、その喉元にトンファーの先端が突き付けられた。
「何勘違いしてるの？　私はあなたも含めて馬鹿といってるのよ？」
マジ切れとしか言いようがない目でゼノヴィアをにらみつけて、その上でカズヒは周りを見渡した。
「死にそうなのに助けないからクソだの、助けがないのは信仰が偽物だからだの、挙句の果てに優しさを理解できないクソだのと……。どいつもこいつも敵も味方も、聖書の教えと信仰というものをはき違えているようね」
ぜ、全方位で殺気向けてきた!?

あの、どっちの味方!?　俺達!?　ゼノヴィア達!?
なんかいきなりの展開に俺たちが混乱してると、カズヒは器用に頭をかきながら、俺達を見渡して声を張り上げる。
「祈りとは、世界に正義と善を示してくださった主に対する感謝！
信仰とは、正義と善を体現できるよう精進し、死後天の国に行く資格持てるよう己を戒める修行の人生！　そして正義とは振り回して偉ぶるための権利でも、加護や恩恵をもらうための対価でもない！」
そうはっきり言って、まずゼノヴィアに向き直る。
「その正義の体現者として、信仰の敵対者を倒すことで信仰を成す身でありながら、相手が筋を通しているのに筋を曲げるなんて笑止千万！　こちらが出した要望に応えた相手に対して縁者を害するような真似、信徒として恥ずべき卑劣と知りなさい！」
「なっ!?」
ゼノヴィアは愕然とするけど、カズヒは取り合わない。
今度はアーシアに顔を向けると、大声を上げる。
「信仰が捨てられないとかふざけないで。信仰とは正義であり、正義とは常に強く持たなければすぐ汚れ、だからこそ強い意志で保たなければならないもの。そんな腑抜けた態度の時点で、貴方の信仰は汚れはてただの塵屑でしかない。信仰なんて言葉を使わないで頂戴！」
「ひぃ!?」
アーシアちゃんが涙目に!?
俺が食って掛かろうとしたら、今度はカズヒが俺の胸ぐらをつかんできた。
「最後にそこ！　私はちょっと前に言ったわよね？　島国の常識を世界共通の常識と思わないでって」
……めっちゃくちゃ怒ってる!?　さっきの俺ぐらいに怒ってる!?
「いい、やっすい小銭で「彼女ください」だの「名門校受からせて」だの「好きな人が夢中になってる間男ならぬ間女に悲劇あれ」だのとでかい見返りを要求する、この国の緩み切ったふざけた信仰と、一神教のそれを一緒にしないで。私たちは見返りを求めて信仰してるんじゃない、主のもたらした教えを実践することが信仰なの」

……何だろう、なんかマジで怖い。
怒ってるから怖いっていうより、理解できなくて怖いっていうより、その信仰って言葉に対する強い意志が……怖い。
「信徒たちは人間として、まっすぐに生きて胸を張る存在として生き抜くことで信仰を果たすの。見返りというエサで飼いならされる、家畜の契約じみた物と一緒にしないで」
なんだ？
言ってることは納得できないけど、それでもまっすぐに言ってることだけはわかる。
だけど、なんか違和感があるっていうか……。
「現世利益がないから信仰しないなんて言う、俗物根性の染みついた発言をもう一度信徒の前で言ってみなさい」
さっきから、カズヒは信徒って言ってるだけで―
「―私が地獄に落ちる代わりに、あんたを魂ごとミンチにしてやるわ」
―自分のことを、なんか投げ捨ててないか？

「……お取込み中悪いですが、少しよろしいでしょうか？」
その時、声が聞こえた。
「ソーナ？　悪いけど、今ちょっと立て込んでるのだけど？」
「そうでしょうね。ですが、どうもそれに関与する形で来客が来たものだから、案内したのよ」
リアス部長にそう答えるのは、生徒会長支取蒼奈こと、上級悪魔のソーナ・シトリー先輩。
リアス部長の幼馴染でもある会長の後ろには、なんかこっちを警戒しながら見てる何人かの男女がいた。
特に先頭いるのは、赤いメッシュの入った髪をツインテールにした、おっぱいも出てる可愛い女の子。
「……「堕天使コカビエルが暴走し、聖剣エクスカリバーを強奪してこの町に侵入した件について」と言ってましたね？　話してもらえます

か？」
そう会長に促されたその女の子は―
「……ひ、みこ」
―そう、ぽつりと呟いた。
火、巫女？
え、なに？　どういうこと？
俺達はもちろん、ソーナ会長や後ろの人達も怪訝な表情を浮かべてたけど、一人だけ反応が違う人がいた。
「……うそ、でしょ？」
カズヒが、さっきまでの剣幕が嘘のように目を見開いている。
なんだろう、その目が、どこか泣いているようで―

「あの、ちょっといいすか？」

なんだ？
会長が連れてきた人の内、黒髪で俺ぐらいの男が、なんか急に手を上げた。
っていうか、なんかカズヒのことを見てるんだけど―
「一目ぼれしました。メル友から始めていいっすかね？」

『『『『『『『はぁあああああああ!?』』』』』』』

空気読んでぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!

三勢合一編　二話　情報共有

五分ぐらい空気が台無しになって、そこから落ち着くまで更に五分ぐらいかかったよ。
そして会長は仕事に戻っていったよ。あとで連絡役を寄越すって言ってたけど……誰だろ？
で、俺達はどうしたものかと思ったけど―
「ごめんなさいねぇ。この子、空気を読まない時は徹底的に読まないところがあるから」
そう苦笑する銀髪の女の子が、そう前置きしてから一礼した。
「初めまして。私は神の子を見張る者から来た、中級堕天使のリーネスよぉ」
「だ、堕天使!?」
俺は思わずうげってなったよ。
いや、今堕天使がこの町で何かしようとしてるって話をしてたんだけど!?
ああもう、リアス部長もゼノヴィア達も、なんかもうすぐにでも仕掛けそうな雰囲気だし。
そうしないのは空気がグダグダになったのと、リーネス達の数が結構いるから仕掛けにくいってところだった。
っていうか、何人かの耳の部分にあるヘッドセット。青く光ってる部分があるけど、あれって―
「……後ろにいる人達、何人かヒューマギアね？」
「ええ。彼らは私の部下だから、あまり危害を加えないでねぇ」
リアス部長にあっさりと返すけど、まさかヒューマギアを見れるとは思わなかった。
ヒューマギアは、何年か前に本社がぶっ壊れたザイアコーポレーションが発売した人型アンドロイドだ。
「ロボットではあるけど人格を持っている」ってことで、ある程度の権利を要求しているのが特徴で、その所為で企業城下町ならぬ企業国

なサウザー諸島連合以外だとあまり見ない。ザイアコーポレーションがサウザー諸島連合と言ってもいいから、色々な国の政府とか会社とかは警戒してるって話をどっかのニュースで見た気がする。スパイとか盗聴器とかかな？

だから、生でヒューマギアを見たのは初めてだ。

ちょ、ちょっと興味があるなぁ。あと女性型は可愛かったり綺麗なのが多いし。

男はどうでもいいです。イケメンなのが逆にむかつくから！

「この子達のことは置いといて、まずは本題から行きましょう？」

「……そうね。今はそこが重要だわ」

と、リーネスに頷いて、カズヒがまっすぐその目を見る。

なんだろう、なんか様子がおかしいというか、困惑してるのか？

「別に悪魔や堕天使が全員まとめて醜悪な外道だけだなんていうつもりはない。はっきり言えば人の魂を腐らせず、悪行をしないのならば積極的に殺す気もない。けど堕天使側が既にエクスカリバーを強奪している以上、教会としては喧嘩を売られたも同然だし、勝手に領地に大義名分もなく侵入された悪魔側も警戒必須よ？　それについて、まず釈明を求めるわね」

「誠に遺憾ながら、コカビエルの独断行動でご迷惑をおかけして申し訳ありません……としか言えないわねぇ」

……え、マジで勝手に動いたの？

俺達の視線を受け止めながら、リーネスは軽くため息をついた。

「正直に言うと、神の子を見張る者の上層部は「二度目の戦争はナシ」が基本的な意見なの。そういうのに反対しそうな最高幹部は、現状コカビエルただ一人。その彼が厄介な物や人物を連れ出して、勝手に教会に喧嘩を売ったことが判明したのはつい最近よぉ」

というと、コカビエルは何をしたいんだ？

俺が首を傾げていると、部長とカズヒが苦虫をかみつぶした感じの顔になってる。

「……まさか、独断で戦争を再開させようと？」

「エクスカリバーを盗んで教会を挑発し、追撃部隊を巻き込んで魔王

の妹達を殺す。確かに、そんなことになったら嫌でも睨み合いが本格的な激突になりかねないわね」
部長とカズヒがすっごくげんなりしてる。
っていうかそんなレベルでやばいのかよ、マジで!?
勘弁してくれよ。俺は平和に悪魔の仕事とレーティングゲームで上級悪魔に出世したいんだ。二年生になってから堕天使に殺されて、少し前に上級悪魔とガチバトルしたと思ったらこれだよ。トップクラスの堕天使が、伝説の聖剣片手に部長を殺しにやってきたって嘘だろおい。
内心泣きたくなってると、リーネスがこっちに顔を向けて軽く頭を下げる。
「ごめんなさいねぇ。正直に言うと、堕天使側も性根が腐っている手合いとかはできればクビにしたいけど、現状では戦力低下が確実だからできないって感じなのよ」
「あらあら。自分達の無能をあえてひけらかすとは、地力での打開もできないということかしら」
朱乃さん、一応謝ってるんだから落ち着いてください。
っていうか、色々あってむかつくのは分かるけど、それにしても朱乃さんがなんか刺々しいな。
もしかして、堕天使のことがかなり嫌いとか？
「そうなのよねぇ。四年ほど前にサタナエル様が、神器研究にのめりこみすぎて五大宗家のはぐれ者を巻き込んで大騒ぎを起こしてしまったから、その辺りもあって五大宗家とは敵意を向けられたり共闘したりと困った関係で動きづらいのよ」
「……っ」
ため息をつきながらリーネスがそう言うと、何故か朱乃さんが言葉を詰まらせた。
なんかよく分からないんで、俺は隣にいた小猫ちゃんにこっそり耳打ちする。
「……五大宗家って何？」
「……この国の異能者の集まりです。日本政府とも繋がりがある日本

異能者の最大手で、歴代当主は天龍に次ぐ力を持つ霊獣の名を冠し、その力を借りることができますね」
なるほど。陰陽師とかそんな感じかな。
天使や悪魔がいるなら、日本の伝説の存在とかもいるってことか。カズヒが日本の信仰について色々言ってたし、教会は敵対したりとかしてるんだろうか？
「総督からは「この事態解決において本命を送るまでの繋ぎ」とは言われてるけど、可能な限り協力させてもらうわ。あと別件で「同様の事態を避ける為に、可能なら三大勢力で会談を行いたい」という要望も伝えられているわね」
「会談……ね」
部長とカズヒが、めっちゃくちゃ警戒の目でリーネスを見てる。
いやまあ、俺も堕天使にはいい思い出がないから気持ちは分かる。
「……発言が真実だという証拠は？」
ゼノヴィアがそういうと、リーネスは苦笑しながら一枚の紙を取り出した。
「私の一存で今回の事情を説明する封書を、バチカンや現魔王政権に送っているわぁ。だから、共闘が可能なら上層部から通達も来るはずよ？」
「……じゃあ、バチカンから連絡が来るまで返答は保留かしら？　共闘が支持されたのなら私は構わないけど」
イリナがそう言うけど、逆にリアス部長は慌ててる。
「そんな！　魔王様にはつい先日迷惑をかけたばかりなのに……っ！」
あ～。そういえば、部長のお兄様で今ルシファーをやってるサーゼクス様には、ライザーとのレーティングゲームで迷惑をかけたんだよなぁ。
レーティングゲームそのものには負けたけど、余興の名目で俺が部長の結婚を帳消しにするチャンスをくれたし。もしかして、あの後フェニックス家や部長の両親から何か言われてるかもしれないのか。
それなのに今度は堕天使のトップクラスとか、確かにあまり言いた

くないよなぁ。
だけど、リーネスは苦笑しながら静かに首を振る。
「……リアスさんだったかしら。それは考え違いよぉ」
そういうと、リーネスは部長の手を取ってゆっくり微笑んだ。
「むしろコカビエルクラスの大物がことを起こしてから連絡しても対応できないわ。無事に事が終わったとしても、それこそ心臓に悪いもの。これだけの一上級悪魔にとって荷が重いことは、素直に連絡して助力をこうのが一番よ？」
「そ、そうかしら……？」
戸惑う部長に、こっちも戸惑いながらカズヒが頬をポリポリとかいた。
「まあ、こういう自分の能力を超えた事態って、素直に助けを求めるのが一番よね。無理に自分で何とかしようとしてもできないでしょうし、抱え込んでも周囲を巻き込んで……破滅するだけだわ」
な、なんかすっごい説得力があるな。
実感籠ってるって雰囲気だし、もしかして経験論なのか？
まあ、大変な経験とか多そうだしなぁ。なんていうか頑張りすぎるタイプっぽいし、自分で無理にやろうとして失敗したとかありそう。
「大丈夫っすか？　あの……なんか愚痴があるなら少しぐらい聞きますぜ」
「……とりあえず、初対面の子に言うことじゃないから」
「あら、和地ってばぐいぐい行きますわね。まるでラブコメのドラマですわー！」
「……和地もヒマリもとりあえず抑えてくれないかしらぁ？」
なんかグダグダになってきたぞ？
っていうか、あの髪が黒い俺と同じぐらいの男って和地っていうのか。あと茶髪でポニーテールの可愛い子はヒマリちゃんかぁ。
というか、隙あらばぐいぐい行く感じだなオイ。一目惚れって奴か。
俺がなんか感心していると、今度は木場が手を上げる。
ついでに言うと、殺気が全然収まってない。

「いくつか聞きたいことがある」
「何かしらぁ？」
リーネスが促すと、木場は指を一つ立てた。
「まず一つ。そちらの戦力はどれぐらいかな？　そもそも足を引っ張らないレベルでなければ、共闘する価値もないだろう？」
……エクスカリバーの所為でイライラしてるみたいだけど、ここまで喧嘩腰にならなくてもいいだろ。
俺はちょっと不安だけど、リーネスは笑顔を崩さなかった。
お、大人の余裕って感じだ。堕天使って悪魔と同じで永遠に近い寿命を持つっていうし、もしかして外見より年上か？
「私が中級堕天使クラスで、ヒューマギアのメンバーは戦闘用の調整が不完全だから後方支援。ただし―」
そういうと、リーネスはその大きな胸を張った。
おっぱいおっぱいおっぱいぱブフォ!?
「あら？　いきなり肘打ちしてどうしたの？」
「おバカな先輩が煩悩にまみれていたので。お構いなく」
し、視線を向けたリーネスでも気づいてないのに……。流石です、小猫さま。
「……まあとりあえず、オフェンス担当の九成和地（きゅうせいかずち）とヒマリ・ナインテイルは専用装備込みで上級堕天使以上はあるわぁ。それと私達、基本的に異能の関与が疑われる星辰奏者（エスペラント）やレイダー関連の事件が担当だから、戦闘経験もそれなりにあるわよ？」
星辰奏者とレイダーだって!?
戦車や攻撃ヘリを一対一でどうにかできることもある、滅茶苦茶強い奴じゃんか！
俺、倍加を溜めないとあっさり倒されそうな気がする。特に星辰奏者は強い奴だと歩兵一個中隊とも戦えるっていうし、レイナーレと一対一でやり合えるんじゃないか？
リアス部長やゼノヴィア達も、思ってた以上なのか目を見開いてる。
だけど、木場はゼノヴィア達に敵意を向けながらもう一本指を立て

た。
「それともう一つ。ある意味堕天使の内輪揉めともいえるこの事件、まさかただで協力しろなんて言うわけないだろうね」
そう言いながら、木場は殺気すら出しながら、真っ直ぐリーネスを見据えた。
これ、もしかして俺達が取り押さえる必要があるレベルか？
「ただでさえ忌々しいエクスカリバーが、成功作と一緒にいるんだ。失敗作として殺された身としては、黙ってこのまま見過ごせるわけが―」
「―八つ当たりは大人げないわよ？」
リーネスがめっちゃくちゃ言っちゃいけないことを言ったぁあああ!?
ああもう！　木場の奴殺気を本気で出してるし！
「……すいませーん。会長から連絡役を頼まれまし……って木場!?イケメンが台無しだぞ!?」
しかも匙が入ってきていきなりビビってきた。
ソーナ会長の眷属悪魔（兵士四駒）だから、そういう指示が出たんだろうなぁ。ちょっとタイミングが悪くて同情するぜ。
そして木場は一切気にせず殺気を向けてるし。
そしてリーネスは全然気にしてない余裕の態度。お、大物なのか!?
「エクスカリバーはただの聖剣で、悪意を持って貴方に危害を加えたわけじゃない。まして成功作だからといって、それを理由に敵意を向けるなら八つ当たりよ」
そう前置きしたうえで、リーネスは指を一本立てた。
「だから、対価として出すべきものは一つね。聖剣計画に泥を塗った、その下手人の首……とかどうかしら？」
え？
な、なんで堕天使がそんなもの出せるんだ？
俺達が困惑していると、むしろカズヒ達が面食らってる。
「……まさか、バルパー・ガリレイがコカビエルについているというのか!?」

ば、ばる……ぱー？
ゼノヴィアの言った名前に心当たりがない俺達だったけど、リーネスはそれに頷いた。
「ええ。こちらも色々あって問題のある者も迎える必要があってね。その為不本意ながら能力を見込んで迎え入れたのだけれど……コカビエルについて行っちゃったみたいなのよ」
そうため息をつきながら、リーネスは頬に手をあていうけど何が何だか。
「……バルパー・ガリレイ？　誰？」
匙がついていけなく疑問符だらけだよ！
どう説明したらいいのかとも思ったけど、カズヒは頭をがりがりかきながら口を開いた。
「「皆殺しの大司教」バルパー・ガリレイ。聖剣計画の初期の責任者で、独断で被験者の大量殺戮を行い追放された男よ」
!?
ってことは、そいつが木場の仲間達の仇かよ！
「罪も犯していない幼子を、毒ガスで殺しまくった下衆野郎。教会の正義に泥を塗ったあの男が、今回の事件に関わってるとは納得できるし許せないわね……っ」
歯を食いしばって殺気を漏らすところが、怖い。
「……なるほど。確かに、そいつに比べたらそこの成功作なんて八つ当たりだ。いいじゃないか……」
木場は木場で怖い笑顔になってるし！　だ、大丈夫なのか!?
「え、毒ガス？　子供を大量殺戮？　あの、どういうことなんですか？」
匙が完全に置いてけぼりだし、誰か説明してあげてぇぇぇぇぇぇ！
「……それなら僕からも情報を出そう。先日、エクスカリバーを持つはぐれ悪魔祓いにちょっかいをかけられたよ。名前はフリード・セルゼンというけど、聞き覚えは？」
「フリードだと!?　十四歳で悪魔祓いに正式に認められた神童だが、味方にすら手をかける狂気から追放された奴じゃないか」

「そんな！　そんな男がエクスカリバーの使い手になるだなんて！
正気の沙汰じゃないわ!?」
　木場もゼノヴィアもイリナも！　匙を置いていかないでぇぇぇぇぇ!?
「祐斗！　なんでそんな大事なことを黙っていたのよ！」
「すいません部長。ですが、エクスカリバーは僕一人で打倒したかったんです」
　部長！　そして木場！
　匙が、匙が完全に置いて行かれてるから!!!!
「……あの～。とりあえず、おたくの事情について俺達とそこの匙ってのに教えてくれない？　特に彼、ついていけてないっぽいけど」
　おお！　九成とか言った奴、でかした!!

　そして五分後、俺は同志を得ることになる。
　匙、お前は、俺と同じ夢を持っていたんだな!!

三勢合一編　三話　主役視点が事実上の五話目からの作品なんて初めて書いた（ｂｙ作者

俺、九成和地（きゅうせいかずち）

一目ぼれって言葉が、本当に存在するとは思わなかった。

特に俺の場合、ちょっとへんてこりんな理由で恋に落ちることが当面ないと思ってたからなおさらだ。

自慢じゃないが、俺は孤児である。

その後ザイアコーポレーションが出資している孤児院にお世話になり、そんな中「人類を救う素質がある」とか言われて、サウザー諸島連合に行くことになった。

そしてその後、戦士として育成を受けることになる。

一応言っておくが、孤児になった理由にザイアは関係ない。完膚なきまでに火の不始末が原因だしな。そもそもそんな手の込んだ真似をするなら、最初っから事故死とかを装って家族全員行方不明とかするだろうし。

だけどまあ、正直そこにいてからだいぶたったころには「これ、おかしくね？」と思ったもんだよ。

いやほんと、二言目には「仔の異形たちの愚かな思想は」とかなんだとか。前提条件として「異形が愚か」だから「この思想は愚か」って感じになってる。

なんていうか、まず最初に答えが決まっていて、そこから計算式をどうすればその答えにできるかって感じか？　無理やり強引にそうしている感じで、はっきり言ってテストとかなら点は絶対取れない。

だけどまあ、そんなことを言ったら俺がピンチになりそうだともわかってた。

なにせあいつら、いろいろとめちゃくちゃなことばかりしてるからな。

「お互いを支え合うパートナーが必要」「ストレスの発散は必要不可

欠」「共通の何かを持っていれば、仕事においても私情においても連携が取れる」とか言ってきて、相方をまずあてがわれる。
実際仲良くなりやすいから、慧眼ではあるんだろう。そこに関してはできるというほかない。
だけど、十代前半からお互いで性欲を発散させることを奨励するか？
「性欲を利用した篭絡はよく行われている」「だからむしろ慣らすべき」という理由で、お互いで積極的に性欲を発散することを奨励。その過程で性教育まで行ってくる。
……いや、俺なんでそんな環境でそんな反応ができるようになるんだろうな。
ザイアコーポレーションから連れ出されてから読みだした漫画とかだと、こういう特殊な環境で思想教育されると、思考が画一化されて盲目的になるって言ってたはずだ。実際そういう方法をとって人心掌握するって話も聞いたことがあるし。
まあ、俺はそんな中で、相方であるヒマリをうまくなだめながら、どうしたもんかといろいろと考えてたよ。
何せ環境が特殊だし、たぶんだけど脱走とか反乱対策もしてると思ってたからな。とにかく選択肢としては、素直に言うことを聞いて自主鍛錬も積みまくって、優秀かつ忠実な手ごまと思わせて隙を伺うってぐらいしかない。
……そしたらなんかよくわからないうちに壊滅して、そして神の子を見張る者に助け出されることになったわけだ。
いや、本当に大変だった。Ａｎｔｉ　Ｉｌｌｕｓｉｏｎ　Ｍｏｎｓｔｅｒ　Ｓｑｕａｄｒｏｎ、略称ＡＩＭＳは、さっき言った通りそういう教育を受けてるからな。高性能型のレイダーを中心に、エイムズショットライザーを使用する俺達一部精鋭による特殊部隊。そのために「異形たちの妄想のしわ寄せを受けた、優秀な子供たちを導く」とかそんな感じで人集め。
ああ、本気でやってるならどうかしてる。しかも体のいい言葉で操るつもりがなく、マジでそのために命を懸けてたという、ドン引き具

合。
いや、たしかに異形のノリは人間社会(表)のそれとは違うぞ？
とはいえ、ところ変われば品変わる。文化や価値観だって宗教や国家や民族で結構変わるもんだ。それが種族ともなれば当然だろう。
はっきり言おう。あいつら頭がいかれてる。
とてもついていけないし、それに染まらなくてよかったな。染まって最後まで戦って死んだ連中には同情するし、正直止めれなかったことは結構気にしてる。それをやったらこっちの命がまずいし脳改造もありそうだったから仕方ないが、俺の生き方としても消せない傷になりそうだ。
……そう、俺には生き方がある。
涙の意味を、変えれる男になりたい。
悲しみや絶望で生まれる涙を、ながれるときには安堵と喜びにしたい。それが俺の望む生き方だ。
だからこそ、小さいころから消防士とか山岳救助隊とか考えてた。だからこそ、今の力を生かせる形として、堕天使の仲間として異形の悪意や神秘の暴発から、無辜の民を守りたい。

―ありがとう。そして、笑顔でいて……ほしいかな―

物心がつくかつかないか、その記憶だけはやけに鮮明に覚えてる。
絶望しているような涙を流し、俺を見て、本心から救われたように浮かべるあの笑顔。
それが、俺の原風景。
そして、俺はなぜかその記憶を思い出させる少女と出会った。
俺よりちょっとだけ上ぐらいの、白い髪で抜き身の刃を思い出させ

るような少女。
思わず告白一歩手前の申し込みをしてしまったけど、本気で言ったのだけは断言できる。
一目ぼれなんて、本当に経験するなんて思わなかった。それぐらい、強い衝動を感じたんだ。
まあ、そんな分けて俺は今――

「「ぐわぁあああああああ!?」」
「……下級の転生悪魔とは思えないぐらいやるわね。ま、ゼノヴィアやイリナが相手だと、間違いなく厳しいでしょうけど」
――吹っ飛ばされる赤龍帝と聖剣計画の生き残りという、割ととんでもない光景を見ているわけだ。
いや、赤龍帝の籠手がリアス・グレモリーの眷属にいるって話は、それっぽい話を聞いてたけど驚いた。
いやまあ、もともと現場の堕天使が暗殺を決定したって話は聞いていた。現状容認するしかないとはいえ、まあちょっと心が痛む。
とはいえ、リアス・グレモリーが眷属にするなんて言う奇跡、そうそう起こるわけでもない。堕天使は悪魔と敵対してるから、そういう意味でも自分からやるわけにはいかないしな。
０，１パーセントにも届かない奇跡なんて、９９パーセント以上の失敗が裏にある。しかもこの手のケースにおいて、一人の命を十数人の安堵は、数百じゃ効かない命の消滅と嘆きを天秤に乗せるわけだ。
悲しみの涙を喜びに変えたいからこそ、確証もなく千人すら超えるだろう嘆きの涙を生み出すわけにはいかないわけだ。
決して肯定するつもりはないけど、どうしても容認するしかない必要悪は存在する。それが全部消えるなんて、きっと万年かかっても難しいだろう。下手すりゃ新しく増えていく。
そんなことを思いながら、俺は盛大に吹っ飛ばされた二人の転生悪

魔を遠目で見ながら起き上がった。
……とりあえず真っ先に言おう。
俺は真っ先に盛大に吹っ飛ばされて脱落してる。
そしてこれは手合わせだ。「共闘するならある程度の力は知りたい」という感じで、何人かで模擬戦をすることになった。
真っ先に名乗り出たのは、リアス・グレモリーの眷属である木場祐斗。ただしカズヒ姉さん（と呼ぶことにした）は「エクスカリバーを悪魔相手に模擬戦で見せれるわけないでしょう」と、バッサリ切って自分が出てきた。
ついでに「文句があるなら、まず私を倒しなさい」といってきたので、木場が「イッセー君、力を貸してくれ」と助力を請うた。
そんでもって、まあ堕天使側からも出すべきだってことから俺が名乗り出た。
……惚れた女の前で男を見せたい。くっだらないけど恰好つけたい年頃だった。
そして、そこからが混沌だった。
『イッセー君、洋服崩壊（ドレス・ブレイク）を使うんだ！　責任は僕がとる!!』
『！　……木場、恩に着る!!』
なんか明らかに嫌な予感がしたうえ、それを見ていた白いロリっ娘（こ）が「女を裸にする技です」とか言ってきたので、俺がまず赤龍帝を止めるために突貫。
その後すごい勢いで食い下がる相手に、俺も本気の装備でやろうかと考えたその瞬間―
『あの、これ三つ巴よ？』
―ちょっと申し訳なさそうに、木場祐斗を相手しながらカズヒ姉さんが爆弾を射出してきた。
そして位置取りから俺が脱落し、その後一人で二対一なのに圧倒している。
これはまあ、怖いというしかないんだろうなぁ。
間違いなく、悪魔祓いとしては最上級のレベルだろう。下手したら、エクスカリバーという攻撃力（武器）以外なら聖剣使いより上なんじゃな

いか？
何より―
「―装弾（セット）」
その言葉と共に、人間では本来ありえない魔力を使って、突如として現れた砲弾が宙にとどまり―
「―じゃあ喰らいなさい」
その瞬間、高速で砲弾が射出された。
無反動砲のそれっぽい奴を利用した砲弾を、高速で射出して相手の逃げ道を封殺し、更に爆風でバランスを崩したところをトンファーで追撃。
それどころかトンファーだけでなく、マシンガンまで取り出して運用する始末。カズヒ姉さん強いなほんと！
「……どうかしらぁ？　戦ってみて」
「な、なんかスッゲーですわ！　カッケーですの！」
と、リーネスとヒマリが、どこか自慢げな表情を見せながら俺の隣に来た。
……あの、俺も人のこと言えないけど、カズヒ姉さんは敵勢力（教会）だよな？
「なんですのなんですの―！　見てるとすっごく気分がいいですわ！
あ、これが恋……？」
「それは違うと思う」
ヒマリが思わずライバルになり駆けそうなので、思わずツッコミを入れてしまった。
しかもリーネスも即座にツッコミを入れてきた。
なんとなく、二人でヒマリの頭をなでながら、カズヒ姉さんの圧倒ぶりを眺めている。
「いや、ほんと強いよあの人。あれ、神の子（グリゴリ）を見張る者（グリゴリ）で模擬戦した相手じゃ、勝ち目があるのは数人ぐらいじゃないか？」
例えば、増援として手が空いたら来る予定の白龍皇（アルビオン）とか。
あいつ、今代の赤龍帝のことを気にしてたからなぁ。出会ったらどう反応するんだろうか？

女の敵極まりないけど、独創性がある上結構怖い技だからな、あの洋服崩壊（ドレス・ブレイク）っての。失望するか、特殊な理由で目をかけるかの二択か？
「じゃあそろそろを終りね!!　女の敵じみたことをしようとしたりあおった罪を悔やみなさい！」
「うわぁあああああああ!?」
あ、決着がついた。

「まあ、エクスカリバーはともかく露払いにはおつりがくるわね。共闘するっていうなら、一チームで一本ぐらいは任せてもいいんじゃないかしら？」
「まあ、私としても死なずに済むならそれに越したことはない。核を回収させてもらえるのなら構わないか」
と、カズヒ姉さんとゼノヴィアってのが話をして今後を煮詰めてる中、俺はとりあえず悪魔側とコミュニケーションを取ろうと決意する。
将来的に敵対するかもしれないけど、それはそれ。最低限の連携をとるためには、まあ最低限の縁を結ぶべきだしな。
「……イッセー君。これに懲りたら、あんなエッチな技は封印しなきゃダメよ？」
「い……いやだ。俺は、洋服崩壊（コレ）を……進化させるん……だ……ガク」
紫藤イリナってのが赤龍帝をツンツンとしているけど、あっちは無視する。
幼馴染らしいし、つもり話もあるだろうとかそんな感じで無視する。
うん。とりあえずは、一番今回の件に乗り気になりそうなやつを選ぶべきだよなッと。
「よ。ちょっといいかい？」
そう言いながら、俺は聖剣計画の生き残り――木場祐斗だったな

――の隣に座り込む。
盛大に叩きのめされて、そのまま息も絶え絶えな金髪少年の隣に座って、俺も軽くため息をつく。
「また盛大にやられてるけど、少しは落ち着いたらいいんじゃねえか？」
まあ、事情はついさっき聞いている。
聖剣計画。バルパー・ガリレイが初期の主任であった頃は、かなり非人道的な実験が行われたらしい。
挙句の果てに被検体の皆殺し。必要悪を否定する気はないけど、できればああいう奴を味方にしないで済むような組織になってほしいもんだよ。
俺もまあ、似たような経験があるから気持ちは少しぐらいわかると思う。
もちろん、内情はいろいろ違うから完璧なんて言わない。そもそも人の精神には個人差があるんだから、全く同じ経験をしても全く同じ感想になるわけでもないしな。
だけど、まあ。
「やるなら相手はきちんと選べよ？　たとえ相手が敵であっても、筋が通らない理由で悲しい涙が流されるのは、勘弁してほしいからな」
「……君にとっては僕らも彼女らも敵だろう？　いきなり告白までして、後で怒られたりしないのかい？」
どうやら話を聞いてくれる気になったらしい。
ま、そうはいっても性分だからなぁ。
俺がどう返答したもんかと考えていると、ため息が後ろから聞こえてきた。
「申し訳ありません。和地様はあえて悪く言うと、神経が極太のタングステンでできておりますので」
「……メリード、相変わらず毒を吐くときはキレッキレだよなぁ」
思わず苦笑いさせてくれる、切れ味鋭い毒舌を吐いたのは、メイド服を着たヒューマギア。
名前はメリード。実をいうと、チームリーダーであるリーネスより

付き合いが長い。
「……ヒューマギアがその態度でいいのかい？」
少し引いている木場だけど、メリードは再びため息をついた。
「ヒューマギアは工業製品ですが、人間の奴隷ではありません。まして私は仕える(サーヴァント)者として、仕える相手にふさわしい者であることを要求するべきでしょう？　その見下し視線、下僕悪魔としてのスタンスは奴隷根性一点特化なのですか？」
そして遠慮なくキレッキレ。
いや御免。この人こういう人なんです。
「……すまん、木場。メリードは誇り高い従者という形でシンギュラリティに到達しているから、相手にもその誇りに見合うものであることを常に求めてるんだ」
「……シンギュラリティ。ヒューマギア自体目にしたのは初めてだけど、初めて会った中に到達した者がいるとはね」
木場はそう感心すると、リーネスにちらりと視線を向ける。
「戦闘用に調整するのなら、それだけの存在である必要があるってことかな？」
……なんか勘違いされてるような。
俺は真剣に突っ込むか考えたけど、それより先にメリードの毒が飛んできた。
「知らぬこととはいえ実に愚かですね。どこまでもヒュー(私)マギア(たち)をただの物としてか見てないような発言をするとは、悪魔に仕えることが無くて幸いというべきでしょうか」
「……な、なんというか、すいません」
ヒューマギア全体が勘違いされそうだから、真剣に木場をフォローしとくべきだろうなぁ。
「木場。神の子(グリゴリ)を見張る者はサウザンドディストラクション後のヒューマギアを大量に確保してるけど、戦闘用に使用って考え方はないからな？　メリードたちは全員、戦闘用強化改修を自分から要望しているから、そこのところよろしく」
俺がそうフォローすると、メリードは静かにうなづいた。

「その通り。私たちは私たちそれぞれの意思で、戦う力を要求しました。むしろ組織全体は乗り気ではなく、自らの研究成果を利用する形とはいえ了承してくださったリーネス様には感謝しかありません」
そう言ってから、メリードは不敵な笑みを浮かべて一枚の紙を取り出した。
「ましてそれら危険手当を、すでにお給金に踏まえてくださっているのですから、主として態度は合格点と言えましょう。上層部は乗り気でないことから、私費で出してくださっているのですよ？」
「……え、きゅ」
「木場君こっちに来てくれないかなぁ!?」
俺はとっさに木場の首根っこをつかんで、即座にメリードから距離をとる。
メリードもうすうす気づいているけど、あえて意識しない方向性だった。
危ない危ない。俺が止めなきゃ木場の心がボロボロになるところだったぜ。
「……明確な自我を持ってるなら、そりゃもう自分達と同様な存在と見るべきだろ？　そういうわけで、神の子（グリ）を見張（ゴリ）る者は給料や手当を出す方針なんだよ。……その辺がややこしくなるから、人間社会での流通が一気に滞ってるんだけどな」
「ああ……なるほど。確かに、一瞬困惑したけど筋は通ってるね」
理解が早くて助かるぜ。
まあそういうわけだ。
シンギュラリティに到達したヒューマギアは、明確な個人としてふるまう存在だ。そしてどんなヒューマギアにも理論上そうなる余地がある以上、ヒューマギア全体をそういう風に扱えるようにしないと、後々ヒューマギアと人間で戦争が起きるだろう。
だけど、肌の色などいろいろな理由で差別がいまだ根強いところは数多い。そんな人間の世界でヒューマギアを人間と同列に語るなんて、当面無理だとどの国もうすうすわかっているわけだ。
そういう意味だと異形は気が楽だ。差別などのはやはりそこそこ

あるけど、もとから他種族がいる在り方なんだから、さほどの変化や影響も出てこないしな。
……そして、ヒューマギアの軍事利用は人間社会でも異形社会でも特に考えられてない。
人間社会は理由が明確。明確な感情をシンギュラリティに到達して得るだろうヒューマギアは、ドローンの発展形ではなく兵士の同列で語らなければいけないからだ。
仮にも訓練を積んで心構えも多少はできてる兵士ですら、戦争を経験してＰＴＳＤなどを発症するケースは多い。シンギュラリティに到達したヒューマギアにも同じケースが起きるだろうし、もし戦争という極限環境が原因でシンギュラリティに到達したら、どんな感情を持って行動するか予想もできない。
異形社会の理由はそれもあるがもう一つ。
……そもそも、わざわざヒューマギアを戦闘用に転用する意義が薄い。これに尽きる。
無人兵器のような観点で使うのなら、ゴーレムや魔獣の方がより頑強に用意しやすい。兵士として使うにしても、異形や異能保有者は下手なヒューマギアより強いし、わざわざ戦闘用ヒューマギアを開発する意義も薄い。人間社会におけるデメリットも踏まえれば、採算が取れないどころか無駄遣いにしかならないと判断されている。
だからこそ、サウザンドディストラクションに一番早く対応できた神の子を見張る者は、ヒューマギアの保護及び労働契約こそしてるが軍事部門に引き入れることはまずない。
メリードたちは、全員がそれぞれの理由で戦闘能力を欲したから、戦闘用に調整されることになったんだ。それだって、リーネスの個人的研究のテスターとしてという形だしな。
……でもって、リーネスは身銭を切って危険手当を保証してる。
シンギュラリティに到達してないヒューマギアは、能動的に金を使うことが薄いから、あくまで自分が必要だと思った物を個人的に購入する程度。だから、給金の平均は少ない部類だ。
ただしシンギュラリティに到達したヒューマギアは、特別手当をつ

けないとストライキを起こしかねない。
具体的には、気に入った番組のＤＶＤを買ったりとか、私的な使用がかなり増える。レコード蒐集を趣味にする手合いもいた。
まあ、良くも悪くも異形はフリーダムだからこそ、むしろ人間社会よりシンギュラリティに到達したヒューマギアと共存しやすいだろう。
俺としても、メリードたちを邪険に扱うのは気が引けるしな。親しみの一つや二つは感じてる。
そういえば、カズヒ姉さんはどう思ってるんだろうな。
ふとそんなことを思ったとき、俺はふと気が付いた。

あれ？　カズヒ姉さんとリーネスは？

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……いやも～さ～。お互い変わったよね」
「全くだ。この目がなければ気づくことはなかっただろうしな。ああ、この目を求めて正解だったよ」
「ま、私たちはもう同じぐらい生きてるもんね。その人生の分だけ、変わらない方がおかしいわね」
「幼少期の経験が人格に与える影響は馬鹿にならない。まさかこういう形でそれを身をもって体験するとは思わなかったわねぇ」

「ちょっと、戻ってるわよ？」
「あらぁ？　そっちもじゃない」
「「……プッ」」
「駄目ね。無理して前の口調を維持しても違和感だらけだわ。お互い今の口調になれた方がよさそうね」
「そうねぇ。お互い変わりたいからこうなったものねぇ。だったら、昔ではなく今を向き合うのが大人ってものよね」

「なら、改めて初めまして、堕天使リーネス」
「そうよね、カズヒ・シチャースチエ。初対面で仲良くなれることに感謝しないといけないわねぇ」

三勢合一編　第四話　開幕していた戦争

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

それから数日、様々な事象が起きていた。
ことのその事実を調べつつ、リアス・グレモリーは真剣にため息をつく。
理由は単純。堕天使コカビエルが独断でエクスカリバーを強奪するといった暴挙を行っている。そう考えたうえで知れば、懸念を覚えるほかない事象があまりにも数多く起こっていたからだ。
この二日間で合計四件、最低でも上級悪魔が一対一で敗死しかねないほどの能力を持つ者同士の闘いが起きた跡が発見されたからだ。
それも、すべてが遅くともコカビエルが潜入したと思われる日以降の物だ。
中には堕天使の物と思われる羽がよく発見されており、一言で言えば堕天使が関与していることを隠していない。
半ば挑発目的と思われるこの行動。同時にリアス達に何の被害もない状況下で、普通に考えれば意味が理解できないものでもある。
だがしかし、一つだけ納得できる仮説が立てられる。
だからこそ、リアスは酷い頭痛を感じるほかないのだ。
「……戦争再開がコカビエルの狙いである以上、お兄様達が不用意に出てくると逆に被害が大きくなりかねない。だけど、これは本当に私がどうにかできる範囲を超えているわね」
神経が細い者なら、今頃心労で倒れているだろう。
リーネスの言う事を聞いて素直に連絡をして正解だった。この情報がいきなり叩き込まれれば、サーゼクス達の胃がただれることは間違いない。
そう思いながらため息をついた時、ドアがノックされた。
『入っていいかしらぁ？　リーネスよ』
「ええ、定期的な情報のすり合わせよね。入っていいわ」
定期的に、しかし三大勢力全員が顔を合わせるとトラブルになりか

ねない。そんな中で情報のすり合わせは比較的苦労する状況だった。
なので、それぞれの勢力がに勢力ですり合わせをしつつ、一日に一回三勢力で集まってすり合わせをするという手間をかけている。
この時間帯は悪魔と堕天使のすり合わせだ。少し早い気もするが、世の中五分前行動は珍しくもない。
なので許可を取り、そして入ってくるリーネスは、ヒューマギアを連れていた。
ついでに言うと、そのヒューマギアは料理を運んできていた。
何やら白く、ジャムが乗った食べ物があった。
「胃が痛くなる状況だと判断しましたので、お茶請けとしてグリエフ・カーシャを用意させていただきました。ロシアのスイーツで、毒見は眷属の方が済ませております。お代わりを求められましたので、申し訳ありませんが私はこれで」
そう言いながら、ヒューマギアは一礼と共に退室する。
どうやら小猫が毒見をしたらしい。現状自分の眷属で一番冷静に対応している彼女がそういうのなら、毒はないし味も保証されているのだろう。
そして一口食べて、思わず素直な感想が出た。
「……疲れた心に染みわたるわ。涙が出てきそう」
「あとでクックス本人に言ってあげて。きっと喜ぶわぁ」
そう微笑みながら、リーネスもグリエフ・カーシャと紅茶を楽しむ。
とはいえ、状況は「胃に優しい」を考慮する必要があるレベルで難点だ。
なので、情報のすり合わせを行う傍らで問題を語り合う。
「……これは、もっと大変なことになるでしょうねぇ」
リアスがまとめた情報を聞き、リーネスはため息をつくほかない。
むしろ彼女の方が専門家だからこそ、事態がよく分かってしまう。
彼女率いるチームが先遣隊として派遣されたのは、この可能性が当初から考慮されていたからだ。部隊長ではなく研究者として、リーネスの専門分野が必要になる可能性があるからこその人選だった。
だからこそ、リーネスは速やかに話を進めることにする。

「……聖杯戦争について、どこまでご存じかしらぁ？」
「過去の英霊の影法師であるサーヴァントを、詠唱に儀式や礼装を持って魔力を制御する魔術回路の保有者が呼び出し、数組が殺し合う儀式。そして倒されたサーヴァントを生贄にすることで、願望を叶える儀式……といったところね」
リアスはそう告げる。
ザイアコーポレーションが裏で手を引いていたとされるその儀式は、しかし油断ができないものでもある。
失敗すればちょっとした核兵器に匹敵する爆発が起きることもありえ、願望機の発動によって大きな力を会得した者も少なくない。
それによって神滅具級の神器が誕生したという事例すらある。結果としてかの第二次世界大戦において、三大勢力はナチスドイツを含めた四つ巴で激戦をすることになったというのだから嘆くほかない。
ナチスドイツの流れを汲むテロ組織の中には、聖杯戦争についての知識が残った結果、最上級の異形が討ち取られるという事態すら生まれたのだからさもありなん。
そして―
「実は私、聖杯戦争及びサーヴァントについての研究家が本質なのよねぇ」
「……あらそうなの？」
少し以外だというほかない。
実働部隊にサーヴァントに由来する力を持っている者はいなかったはずだ。少なくとも、伝え聞く話から連想できるものはなかった。
だが、リーネスは眉間にしわを寄せて、此処ではないどこかを睨む。
「ザイアコーポレーションは、サーヴァントの力を宿して戦える存在、デミ・サーヴァントの実用化を研究していたわぁ」
その言葉に、リアスは眉間にしわを寄せる。
サーヴァントは人間より遥かに高位の存在だ。昇華と言っても過言ではない。
例えるなら、人間が塩を一振り入れた程度の水なら、サーヴァントの魂は死海のそれだ。

もし人間にサーヴァントを入れ込めば、それはもはや人間の体がサーヴァントに則られるに等しい。
狂気の沙汰。リアスは即座にそう思った。
「恐ろしいことに、彼らはそれを問題なく行えると確信してたみたいなのよぉ。「人を悪しき異形から解放する、それに力を貸してくれる英霊は数多いはずだ」って感じでね」
「……人間の悪意は時として、私達悪魔よりよっぽど凶悪よね」
リアスはそう吐き捨て、リーネスもそれに頷いた。
「なまじ力が異形より劣るからこそ、それを補う為に悪意が発達したのかしらねぇ。本当に、人間の悪意は時として異形すら目を見張ることをしでかすから始末に負えないわぁ」
その言葉には、どこか強い怒りが込められていた。
リアスはそこに、和地やヒマリに対する強い情愛を感じた。
相手が堕天使でなければ、きっと気があるところもあっただろう。もし本当に和平の意思が堕天使にあるのなら、今度お茶に誘う機会もあるのだろうか。
そう思いながら、リアスはしかしどこか遠くに見える何かを感じさせる。
それを聞ける関係ではなく、ゆえにリーネスは話を変える。
「……実は、千年前から異形が確認していた聖杯戦争はデコイなのよ」
「……そうなの？」
警戒心を一気に引き上げるだけの代物を察して、リアスはそのまま態度で話を促す。
「ええ。その裏でザイアコーポレーションを動かしてきた者達は、より高品質の聖杯戦争を起こしていた。それは七組が殺し合う儀式であり、私達が察知してきたのは完全なデッドコピーでしかないのよねぇ」
確かにそれはデッドコピーだ。
確認されている聖杯戦争は、基本として多くて五騎。平均して三〜四といったところだ。
そして、この段階でそんなことが言われるということは—

「……コカビエルが、それを成そうとしている可能性があると？」
「だからこそねぇ。私、元々は魔術回路や英霊召喚の研究者だったから、その調査も兼ねていたのよねぇ」
そして、それは当たりだった。
事態は実に厄介だと、リアスも歯噛みするほかない。
何故ならば、リアスは知っているからだ。
サーヴァントの召喚には触媒が必要不可欠。なければ自分と似通った者を召喚するが、当たりはずれが分からぬばかりかどの類似点が呼ばれるかで同族嫌悪も生まれかねない。その為何かしら力が推測できるものを召喚できる遺品やゆかりの品を用意するのが、聖杯戦争を理解して挑む者の基本スタンス。
もちろんそれは容易ではない。サーヴァントは概ね過去の存在であるがゆえに、ゆかりの品を探す出すことがまず困難。ピンポイントで当てるには、贋作を掴まれないようにする必要すらある。
だが、しかし―
「……今、ちょうど駅前の博物館で催し物があるのよ。フランス革命で使われた品々が使われているわ」
「……確か、「実は神滅具保有者が数人いたのではないか」という噂があったわねぇ」
―即座に人員の派遣が決定されたことは、言うまでもない。

和地Ｓｉｄｅ

「……うわぁ、嫌な予感しかしないんだけどなぁ」
「そう言うなよ。博物館の人には部長のお得意様もいるし、堕天使が

関わってるとは限らないぜ？」
「そういうわけでもないんですのよ。というか、関わっているかどうかはあまり関係ないですの」
俺のボヤキに赤龍帝が励ますけど、ヒマリの言う通りそこはこの際どうでもいいことではある。
ああ、博物館に堕天使の息がかかっているとかはどうでもいい。そこは大した問題じゃない。
問題は、それが本物を展示しているという点だ。
「ゆかりある品々なら、サーヴァントを呼び出す触媒として適格。時期を合わせて聖杯戦争を起こすだけで、サーヴァントをある程度絞って引くことはできますもの」
「え、マジで!?　じゃ、じゃあおっぱいがでかいって有名なマリー・アントワネットが出てくるのか!?」
なんでそこを気にするのか。
いや、まあおっぱいがでかいっていうとすっごく気になるけど。
「部長に匹敵するおっぱいのはずだし、ちょっと本気で見てみたいんだけど」
「……可能性は割とあるかもな。フランス革命でマリー・アントワネットを連想しない方が少ないし、信仰を利用する聖杯戦争の仕組み上、呼び出される可能性はある」
俺はそう言うけど、実際のところは難しいだろうな。
「……当時のギロチンの刃で死んだのはマリー・アントワネットだけじゃありませんもの。有名どころだとロベスピエールですわよね」
そこで俺を見ないでくれよ、ヒマリ。
っていうか赤龍帝、首を傾げるな。
「……フランス革命を授業で聞いた時、確かに聞いたことがある気がする」
まあ、マリー・アントワネットのおっぱいに目を引かれるなら、そっちは思い出しにくいか。
ヒマリが俺をちらちら見ながら、更に説明を追加する。
「革命を起こした側の代表者の一人ですの。最も、最後は制御できな

くなって自分もギロチンに掛けられたって話ですわ。残酷ですの」
「キリスト教が今より強い権力を持っていた時代にカトリック教会制度を破壊したこともあって、「神が存在しないのなら、それを発明する必要がある」って言った人さ。その際「最高存在」を定義して「理性」を掲げたとのことだとさ」
その功罪はともかくとして、間違いなく英霊として召喚されうる存在だろう。
当人そのものは恐怖政治を敷くにしても規範を作ろうとしていたらしいしな。ま、当人に直接聞いたわけでもないし、心根をまっすぐ正直に言ってるとも限らないけどな。
まあそれはともかく。
俺は取り寄せてもらった展覧会のパンフレットを確認して、割と本気で嫌な予感を覚えている。
「そんなマリー・アントワネットやロベスピエールの首をはねたギロチンか。当然ギロチンの発案者とか、当時の処刑人とかも召喚できるだろうしなぁ」
本気で聖杯戦争ができるレベルだろう。軽く引く。
しかも上司達の捜査によれば、間違いなく聖杯戦争は起きている。おそらく、コカビエルが主催者であり奴さんも召喚してるだろう。
「確か、上層部の調査によると神滅具保有者が未覚醒で数人ほど存在した可能性がありますわ。そうなると……」
そう言いながら、ヒマリはちょっと期待に満ちた目を赤龍帝に向けた。
「神滅具（ロンギヌス）大決戦ですの！　こっちの本命が白龍皇だとすれば、夢の大決戦ですの！　魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）持ちじゃないかって人もいますし、……怪獣大決戦を期待してしまうのは、多方面に失礼ですわよねぇ」
「いや勘弁して！　俺そんな強くないから！　前疑似的に禁手になっても、精々十秒だし上級悪魔に苦戦したんだから！　最上級堕天使とか無理だって！」
赤龍帝は当然ビビっている。
まあ、当然だよなぁ。

資料に残された赤龍帝なら、もっと強大な戦いができるはずなんだから。
それに―
「まあ、魔獣創造の持ち主を戦わせるのは……気が引けるよなぁ」
俺はそう、本気で呟く。
それに、赤龍帝は首を傾げる。
「……ん？　魔獣創造ってのが何かは分からないけど、何か問題でもあるの？」
「理由は単純ですのよ、赤龍帝」
そう、ヒマリもテンションを上げていたことを反省しながら、遠い目をする。
「魔獣創造の持ち主とされるのは、ルイ１７世。当時のフランスの苦境に関わることなど不可能なのに、革命を起こした者達の悪意にさらされ続けた、悲劇の王子ですわ」
正直、引くとしか言いようがない。
人間ってのは、本当にどこまでも酷くなれる奴なんだってことがよく分かる話だ。さわりを聞いただけでそう思えるんだから始末に負えない。
「赤龍帝。カズヒ姉さんは正義について、そうあらんと己を引き締める物とか、強い意志で保たなければならないって言ってたんだっけか？」
「あ、ああ」
赤龍帝に確認してから、俺は空を見上げる。
「……心底同意だよ。正義ってお題目がつけば、人間はどこまでも自分の制御を手放す。そういう意味じゃあ、「自分は正義なんだ」と思い込んだ時点で、そいつはどんどん正義からかけ離れるだろうな」
ああほんと、ザイアコーポレーションの連中もそんな感じだったんだろう。
自分達は正義だという大前提で行動していたからこそ、あいつらは傍から見ていてどうかしている行動すら平気で行える。
己の正義を信じてどこまでも突き抜けるなんてのは、先天的に正し

くあれる一握りの選ばれた勇者様の特権だ。世間の大多数を構成する、凡人共が真似ていいやり方なんかじゃ断じてない。
「分かっていても、俺は自分をずれた側にしようとしてるわけだしな。赤龍帝はどう思うよ」
「……いや、正義がどうとか、そういうの考えたことないから分からねえよ」
赤龍帝はそう言ってから、だけど少し考えてからまっすぐにこっちを見る。
「そうだとしても、一歩ずつ前に進んでくしかないだろ？　間違えたってんなら、その辺を直しながらやってくしかないじゃん」
……。
「そういうこと、さらりと言えるってのは十分凄いと思うぜ？」
「かっこいいことさらりと言いますわね。これが、赤龍帝に選ばれた男なのかしら？」
俺達が何となく感嘆してると、赤龍帝は頬を書きながらこっちに頼みかけるような言葉を投げかけた。
「いや、その赤龍帝ってのやめてくれよ。俺は兵藤一誠って名前があるんだし、友達からはイッセーって呼ばれてるからさ」
……なるほど。
こいつ凄いな。異形側の世界において、名乗れることが誇り以外でも何でもない赤龍帝の異名。それより自分の名前の方を優先するんだから。
こういう異名、それも代々伝わる類って、欲しくても手に入らないものだから凡人は欲しがるもんなんだけどなぁ。
「そうか。じゃあまあ、よろしくなイッセー」
「よろしくですのよイッセー！　さあ、聖杯戦争の調査の為に、冥界二大勢力の共闘ですの―」

その瞬間、見えてきた博物館の天井が爆散した。

「「……え？」」

そしてぽかんとなってから一分ぐらい経ってから、俺達の目の前に着地する女の子。

「まさかこんなところで会うとわね！　ちょっと援護をお願いするわ！」

なんでカズヒ姉さん!?

特徴的な白髪の長髪をなびかせて、カズヒ姉さんは脇に女性を抱えて着地した。

「あ、あの!?　私はどっちかというとサポート担当なんですけど―」

「言ってる場合じゃないでしょう！　対応できてないんだから下がってなさい!!」

「いやカズヒ姉さん!?　状況が全く読めてないんだけどぉ!?」

俺が思わず目の前の言い合いに割って入ったら、今度は何かが着地した。

そこに現れたのは、まるで二天龍を思わせる赤と白の鎧の騎士。

……おいおい、冗談だろ？

「ここで、敵が来るのかよ!?」

「だったらやってやりますの！」

俺は少し引きつつ、ヒマリは即座にやる気になりつつ。

俺達は、そこで戦闘を開始した。

三勢合一編　第五話　模造の魔獣

イッセーＳｉｄｅ

な、な、なんだこりゃぁあああ!?
俺の目の前で、すごい勢いで戦闘が繰り広げられている。
っていうかドライグ!?　あの目の前の赤い方、俺がライザーとの戦いでなった赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）にそっくりなんだけど!?
『いや、確かにあれは俺達の通常禁手に似ているが違う物だ』
そ、そうなの？
『あれは確かに俺達を模しているがそこ止まり。正しい禁手に到達すれば、性能でも完成度でも圧倒できる。そもそもあの疑似禁手ですら完成度は上だぞ？』
そ、そうなのか。
ライザーはそんな俺と戦ったのか、すごいなオイ。
そう思うぐらい、目の前の戦いは激戦だった。
具体的に言うと、割って入れない。
「チィ！　此処で盛大に花火を上げるとか、正気の沙汰じゃないわね!!」
カズヒは真っ向から赤い方と戦ってる。
徐々に強くなっていく赤い魔獣に対して、カズヒは武器を切り替えて戦い方を変えることで対応してる。一対一であそこまで戦えるって、ライザーと一対一で戦っても勝てるんじゃないか!?
「防御効果を切らすなよ！　一気に押し切られるぞ！」
「分かってますの！　本気で戦いますもの!!」
九成とヒマリは二対一で、白い方と戦ってる。
両手にそれぞれ魔剣と聖剣を具現化して、連携で叩き込むことで相手に反撃をさせる隙を与えてない。

っていうか魔剣の方は木場の神器と同じ感じで、聖剣の方は部長が言っていた似たようなものってわけか？
『だろうな。神滅具でもない限り、神器は複数あってもおかしくない。白いのと縁があるようだし、奴の力に対抗する迎撃能力を持っていたんだろう』
マジかよドライグ。で、俺はどうやって手伝えばいい？
『……当分待っていた方がいいだろう。今の相棒が割って入るには、それこそ今度は右腕を代償に差し出す必要があるぞ』
……俺の左腕は、ドラゴンのそれになっている。
部長の元婚約者だった、ライザーを倒す為の切り札だった。ついでにそれだけでも勝てなかったけど、ドラゴン化したことで悪魔の腕じゃなくなったから、アーシアから借りた十字架や聖水も使ってなんとか勝った。
それだけのことをしないと手伝えないって、ちょっとシャレにならないだろ。
ああくそ！　とりあえず、俺にできることをするしかないだろ、これは！
とりあえず、カズヒが助けた女の人のカバーだ！　他にやることがねえ！
「と、とりあえず大丈夫です……ですか！」
『なぜそこで言いよどむ、相棒』
素晴らしいおっぱいに意識が持っていかれたからだよ、相棒。
落ち着け俺！　おっぱいおぱいがおぱいぱい……じゃない！
とりあえず、安全圏まで引っ張るぐらいはしないといけないだろ。
カズヒも九成もヒマリも、戦闘に手いっぱいでこっちに気を向けてるのが負担になってるっぽいからな。俺達がいったん離れた方が、まだやりやすいだろ。
だから、俺は急いでへたり込んでる女の人の方を担ぐと、そのまま後ろを気を付けながら避難する。
横乳がぁあああああ！　落ち着け、今鼻血が出たら出すぎて失血で倒れる！　そしたらマズイ！

「と、とりあえず離れよう！　ここは流石に危ないし―」
「いえ、大丈夫です。貴方こそ離れてください」
と、お姉さんがそう言い返した。
いやいや、体を持った感じだと、特に鍛えられてるって感じでもないぞ。
こんな体であんな激戦に巻き込まれたら、本当に危ないからね!?
「いいから！　こんなところにいたら、お姉さんほんとに死にますよ!?」
いやほんと不味いってあの戦い。
三人とも周囲に被害が出ないように立ち回ってるけど、それでもちょっとかすめただけでコンクリートが吹っ飛んでる。人間が触れたら不味いって。
あんなの、一応悪魔の俺だって死ぬ。だからここから離れないと―
「私は一日程度で消えますし、それに既に死んでます」
―え？
そのお姉さんが言ったことに、俺はちょっとぽかんとした。
「サーヴァント……と言っても分からないでしょうが、私は過去生きてそして死んだ人間の残影……コピーと言ってもいいです。依り代となるマスターが死んでしまったので、特性上一日は持ちますが、それで終わりです」
お姉さんはそう言うと、俺を安心させるように微笑んだ。
「だから、私が消えてもあなたが気にすることはありません。すぐに逃げて―」
「―いやどうでもいいからそういうの！」
よく分からないけど、俺はとりあえずはっきり言う。
ああ、俺はサーヴァントとか言われても分からない。
なり立ての悪魔だし、結構馬鹿なところもある。だから、難しいことを言われてもよく分からないってのが本音だ。
だけど言えることは一つだけある。
ああ、決まってる―
「死ぬのは怖いに決まってる。一度目も二度目も関係ない！　それ

に、そんな顔してる女の人を見捨てるような奴が、ハーレム王になれるわけがない！」
ああ、それだけ分かってれば十分だ。
だから、俺はお姉さんを離さない。
「だから、お姉さんを見捨てるとかしないんで、お姉さんも諦めないでください!!」
こんなところで女の人を、それも自分より俺のことを優先する人を見捨てたら、部長にもアーシアにも仲間達にも顔向けできない。ハーレム王になるなんて言えるもんか！
だから、俺は急いで走り出し―
『相棒、上だ！』
―ドライグの焦った声に、慌てて飛びのいた。
お姉さんも抱えて飛びのけるとか、俺も鍛えてるんだよなぁ。
そんなことを思ったのは、目の前の脅威が滅茶苦茶ヤバい奴だっていうことが分かったからだ。
色は何というか紫色。そんな明らかに悪者っぽいカラーリングで、今カズヒ達が戦ってる赤と白にそっくりな鎧が、こっちに襲い掛かってきてる。
しゃあねえ、やるしかねえよな！
「ドライグ！　右腕差し出すから、頼むぜ!!」
「――待ってください！　何をする気か分かりませんが、浅慮はいけません！」
その時、俺を庇うように前に出ながらお姉さんが俺を止める。
いつの間にか包丁を構えていたお姉さんは、敵をまっすぐに見据えながら声を上げた。
「死人が生者の足を引っ張るわけにはいきません！　ここは私が食い止めますから、貴方は安全な場所に逃げてください！　こんなことで代償を払わないで!!」
いやいや、できないからね！
「そんなわけいかないって！　こんなところでお姉さんをほっとくわけないだろ!?」

ああ、それは聞けない相談だ。
っていうかさっきから、俺はそういうことしないししたらハーレム王になれないって言ってるのに！
それでも、お姉さんは食い下がるように大声を上げてきた。
「私は残影です。その私が、生きている人の足を引っ張るわけにはいきません。どちらかが死ぬというのなら、それは私が―」
「んなわけあるか！」
ああもう！　なんでそんなめんどくさいこと言うかなぁ！
ああ、そんなことは関係ない。
助けることができず、アーシアを一度死なせた時を思い出す。
まだ死んだことが無い、リアス部長が一度泣いたことを思い出す。
そして、俺が一度死んだ時を思い出す。
ああ、そうだ……そうだろ！
「一度死んだとか、残影だとか、そんなことが関係あるか!!　死ぬのは怖いし嫌だし、目の前で死なれるのも、死ななくても泣くところを見るのもまっぴらごめんだ!!」
だから、溜まった倍化で体を強化して、俺は拳を握り締める。
「……ハーレム王になる男が、それを女の子に押し付けられるかってんだ！　そうだろ、ドライグ!!」
『ハハハハハッ！　確かに、ドラゴンはもっと自由で我儘に行くべきだ。理屈より感情で動いてこそ、天龍の宿主に相応しい!!』
と、ドライグが答えてくれたその瞬間、相手が動き出す。
くそ！　禁手になってる余裕がないなら、とりあえず一発ぶん殴る。
あ、でもこれ一発くらいそ―
ボコッ
―うだと思った時、鎧の足元がいきなり崩れた。
そしてそのままバランスを崩して、頭から倒れこんで……。
『『あ』』
バキィッ！
なんて音が響いて、いいところにいい感じでいい勢いで、顔面に拳

がめり込んで、吹っ飛ばした。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

その後、リアス・グレモリーに緊急連絡が届いた。
送ってきたのは、周囲を調べて敵を探っていた班からの連絡だ。
眷属である祐斗に、聖剣使いのイリナにゼノヴィア。そしてシトリー眷属からも匙元士郎が派遣されていた班。その中の匙元士郎からの連絡だ。
―聖剣使いであるフリード・セルゼン、及びバルパー・ガリレイと接触したが相手は逃亡。自分以外が激情に駆られて追撃してしまった、と。

三勢合一編　第六話　自ら辺獄に赴く者。恥ても救済を求む者

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

大切な眷属である木場祐斗が行方知らずになり、リアスの胃には多大な負担がかかってしまっていた。
加えて愛するイッセー達が、とんでもない情報を持ち帰ったことで、リアスは真剣に胃痛を感じている。
「……うどんは美味しいけど、特にこういう時にとても優しい食べ物だって初めて分かったわ」
「うどん美味しいわよねぇ。……ことが落ち着いたらクックスに頼んでみるべきねぇ」
そんなことをリーネスと言い合いながら、即座に視線を前に向ければ―
「……分かった、分かったわよ。全部白状しないといけない流れなんでしょう？」
―正座するカズヒが、そうはっきりと宣言した。
正座も堂に入っているが、発言も堂々としている。
怒られる側のそれではないが、まあそこはいいだろう。
共同戦線を張っているが、三大勢力が三つ巴の敵対関係なのだ。隠し事の一つや二つがあってもおかしなことではない。
だがしかし、リアスはこれに関しては詳らかにしないわけにはいかなかった。
件の博物館はリアスのお得意様が所属しており、お得意様でこそなかったが死人が出ている。

しかも死人は国際的にも多少は名の知れた男であり、必然的に後始末に苦労する状態だといってもいい。
しかも最悪なことに、その男を殺したのはカズヒと考えるほかない状況だった。というより、体内から発見された銃弾の線条痕が、カズヒが提出した拳銃のそれと同一だった。
隠すつもりもないということだろう。状況が隠しづらいとはいえ、納得できる理由をぜひ聞きたいとリアスは思っていた。
「単刀直入に聞くわ。何故殺したの？」
「まず簡潔にまとめるわ。彼が堕天使に手を貸していたからで、私の本命の任務はその確認と処断なのよ」
はっきりと、結論から述べたと言ってもいい。
そして事情についても隠す気はないのか、カズヒは真っ直ぐにリアスの目を見て続きを話し始める。
「あの男はフランスの教会で不正をしていた司祭に賄賂を渡して、三か月前から強引に今のフランス革命博覧会の準備を行っていたわ。不正追及の過程で金をもらって口利きしたと白状したことからそれが発覚したの」
「……だからって、殺す必要まであったというの？　それも悪魔祓いのあなたが」
不正な金の流用ならば、警察が動く内容だろう。国際的なことを加味したとしても、態々教会の悪魔祓いを動かす必要性はないと思える。
しかし、リアスのその言葉にカズヒは首を横に振る。
「その過程で、聖杯戦争の触媒に使えることから厳重管理されていた物をすり替えて送られていたことも発覚したわ。しかも追跡調査の結果、ちょうどエクスカリバーを強奪した時期にコカビエルとの繋がりがあることまで発覚した。その為、この一件は場合によっては汚れ仕事になると上は判断したの」
「なるほどねぇ。あの二人には向いてないわぁ」
リーネスが納得する。そしてリアスもすぐに理解できた。
信徒として真っ直ぐであり、基本として「自分達＝教会という正義」

を前提にしている節がある彼女達だ。真っ直ぐかつ過激に行動しかねないし、仮にもエクスカリバーの使い手を汚れ仕事にするというのも、教会全体の意識に悪影響を及ぼすだろう。
そして、だからこそカズヒが押し込まれたのだとも分かる。正教会からの派遣というのも、二人が納得しやすいカバーストーリーの可能性もあるだろう。
そこに思い至ったことに気づいたのか、カズヒは少しだけ言い淀みながらも、すぐに腹をくくったらしい。
「正教会っていうのは表向きの所属。私の本来の所属は、教会暗部組織「プルガトリオ機関」のリマ部隊」
聞き慣れない言葉に、リアスとリーネスは首を傾げる。
プルガトリオとは煉獄を意味し、煉獄とは地獄に行くほどではないが天国に行くことはできない者が行く場所だ。教会の組織に冠するような名称ではない。
だがそれも織り込み済みなのだろう。カズヒはすぐに補足説明に入る為、口を開く。
「プルガトリオ機関は煉獄の名を冠す通り、「天の国に行けないグレーゾーン達」の居場所と言ってもいいわ。転生悪魔や堕天使といった者達と、事情を知って手を貸すことを決めている者達、あとは関係者として流れで入っているけど自分自身は信仰に生きているわけではない者とかね」
「……また、節操がないともいえるわね」
そう皮肉を返すが、それ以上に驚愕が勝る。
よもや教会に、暗部とはいえ転生悪魔の居場所があるとは思わなかった。
はぐれになった転生悪魔は数多くいるが、この様子では未発見のはぐれ悪魔の一割ぐらいは所属しているかもしれない。それに同様のパターンで、吸血鬼になった者達も関わるかもしれないだろう。
そして、そんなリアスの驚愕を知ってか知らずかカズヒは続けた。
「ただし、リマ部隊は例外。ダーティジョブ担当ゆえに「教義的グレーゾーンの存在」を配属しない。「ダーティジョブをするからグレー

ゾーン」者達だけの暗部の中の暗部。通称「辺獄騎士団」」
「辺獄……Ｌｉｍｂｏ（リンボ）ねぇ」
リーネスのその言葉で、リアスもリマ部隊がそう呼ばれることを理解する。
辺獄、それは地獄に落ちるようなことはしていないが、天国に行く為の洗礼を受けてない者が流れ着くとされる死後世界。そしてリマはフォネティックコードでＬの文字を担当する。
あやかりとしては納得物だ。おそらく、大規模暗部組織を作る過程で当初からそう設立されたのだろう。
思った以上に大規模な暗部組織があることに、リアスは内心で戦慄する。
そして、リーネスはそんなリアスに目を向けず、辛そうな目をカズヒに向ける。
「……背負いこみすぎよぉ。そこまで―」
「そこまで背負わなければ、私はまた腐るのよ」
リーネスの言葉を遮り、カズヒはそうはっきりと言った。
その光景に、リアスは違和感を覚える。
思えば、これまでの情報交換でもそうだ。リーネスとカズヒは何故か会話がスムーズに進んでいる印象がある。
まるで、二人の間でしか通じない何かがあるようだ。
だが、二人は初対面だったはずだ。それも敵対勢力である教会と神の子を見張る者なのだ。聖書の神も堕天使総督も、そんなことを見逃すのだろうか？
其の違和感を覚えながらも、リアスは思考を切り替える。
そう、問題はそこではない。
「……そして、確保の為に博物館に潜入したら先客がいたと」
「ええ。聖杯戦争に参加すると同時に、別件で恨まれていたそいつを殺す為に潜入していた女魔術回路持ち」
そう、聖杯戦争は既に始まっている。
リアスとリーネスが警戒していたように、コカビエルはこの駒王町で聖杯戦争を起こしていたのだ。しかもどうやら、既に殆どのサー

ヴァントが討ち取られていると思われる状況だ。
そしてその聖杯戦争を隠れ蓑に、女暗殺者は仕事を果たすべく行動を開始。しかし同じように潜入していたカズヒと鉢合わせ、更に男が護衛と共に更に出くわした。
乱戦の末、カズヒが男を殺すことには成功するが、女暗殺者は戦死。その後、カズヒは女暗殺者のサーヴァントを情報収集も兼ねて回収し、離脱を測ったところでイッセー達と合流した。
……そう、今サーヴァントが一騎いる。
単独行動というマスター無しでもある程度存続できるスキルを持っていた彼女は、ある意外な人物を依り代にしている。
カズヒはもちろん、リーネス達も和地やヒマリが魔術回路を持っていたそうだが、あえて彼女達にしなかった理由は単純。
魔力供給が少ない方が、現状味方と断言できない彼女を拘留する分には都合がいいという、現実的な判断だ。
「でもまさか、イッセーに魔術回路があったなんて」
下級悪魔の子供よりも少ない魔力量のイッセーに、魔術回路という魔力精製機関があるという事実に、リアスは少し苦笑いを浮かべるしかなかった。
「……じゃあ、私達は和地達と合流するわぁ」
「そうね。流石に貴方は待機してもらわないと困るけど、私達はゼノヴィア達を探さないと」
「そうね。本当は私も探しに行きたいけど、領地を放って行くわけにもいかないもの」
そして、三人はやるべきことをやる為に動き出す。

イッセーＳｉｄｅ

リアス部長、遅いなぁ。
木場が行方不明になって大変なのは分かるけど、リーネス達が「この状況で主が離れるのはまずいから自分達で探す」と言ってたから、戻ってくるとは思うけどさぁ。
「木場さん、大丈夫でしょうか」
「木場がそう簡単にやられるとは思わない。だから大丈夫だよ」
アーシアにそう答えるけど、俺もちょっと不安だ。
イリナや聖剣が写ってた写真を見てから、木場はいつもと調子が違うからなぁ。
いや、仲間を信じなくてどうするんだ。
木場は必ず生きて戻ってくる。その為にも俺が頑張らないとな。
さて、そして。
俺達は俺の部屋に入ると、中にいた人に声をかける。
「……シャルロットさんだっけ？　待たせてすいません」
「あ、お飲み物をお持ちしました」
俺達の声に、女性が振り返る。
……おっぱいが素敵すぎる。部長や朱乃さんよりもサイズだけなら上回ってるだろ、これ。
「あ、気を使わせてすいません」
しかもにっこりと微笑んだその笑顔は本当に素敵だ。見惚れそう。
俺、部長の眷属になってから美少女や美女を至近距離で見ることが多くなったなぁ。
そんな感じでほっこりしていると、女性がゆっくり優雅に一礼する。
「この度は、本当にありがとうございます。このシャルロット・コルデー、この現界の間だけの記憶ではありますが、忘れることはないでしょう」
……ほんと、びっくりだよなぁ。
この人が既に死んでて、しかもサーヴァントっていう部長達が目を剥くような存在だっていうんだから。
『全くだ。何度か歴代の宿主が聖杯戦争に関わったことはあったが、

それが原因で死んだ奴もいる。逆に参戦者になっちまったのは、相棒が初めてだぞ』
そうなのか、ドライグ。
……確かに、今俺はマスターってのになってるんだよなぁ。
理由が「万が一も考えて、魔力が少ないイッセーにマスター権を預けるのが最適」ってのが泣けるけど。
魔術回路って、悪魔でなくても魔力が生み出せる例外なんだろ？
なんでそんなの持ってるのに、俺は魔力が悪魔の子供より低いんだよ。
俺がちょっと黄昏てると、アーシアとシャルロットさんが少し気づかわし気に俺を覗き込んでた。
「イッセーさん？　先ほどから黙って、どうしたんですか？」
「大丈夫ですか？　あの、私の現界を支えていることで負担でも―」
「あ、大丈夫大丈夫。ただ、ちょっと自分の才能のなさに涙が出てきて……」
いや、シャルロットさんは負担が少ないから大丈夫なんだけどね？
それはそれとして、やっぱりちょっとショックだなぁ。
『まあ、歴代でもトップクラスの才能のなさではあるな』
ドライグ、傷口に塩を刷り込まないで
「大丈夫です。イッセーさんはダメな人じゃないです。私もシャルロットさんも助けてくれたじゃないですか」
「そうですよ。むしろ才能がなくてもそれだけのことができる、それこそ讃えられるべきことではないですか」
アーシアもシャルロットさんも、俺を慰めてくれる。
うん、でも才能がないことは認めるんだね、シャルロットさん。
ただ、シャルロットさんは俺を励ましているうちに、更になんか凹んできた。
な、なんだ、この幸薄そうなオーラというか、落ち込みムードは。
「……ええ。それに比べて私は、マスターを守れなかったどころか、世界に戦争を引き起こす片棒を担いだも同然で……」
「シャルロットさん。わ、悪いのはシャルロットさんではないですよ

！」
アーシアが励ますけど、シャルロットさんは静かに首を横に振った。
「いえ。生前の失敗を結果的に繰り返そうとしていたんです。……恥じるべきですし、恥じるしかないです」
シャ、シャルロットさん？
なんだ？　なんだこの幸薄そうなオーラは!?
マスターになったことで、俺はシャルロットさんのステータスが分かる。
マスターによってある程度分かり方が変わっていて、でもある程度の目安として、E～Aで特例としてEXとかがあるらしい。
シャルロット、幸運は評価規格外って感じなんだけど？
「あの、むしろ幸運が高すぎるぐらいに見えるんだけど？　ほら、実際前のマスターが殺されたけど、俺がマスターになって何とか無事だし」
「いえ、既に死んだ自分がどうなるかより、マスターの命を守ってこそのはずなんですから……」
シャルロットさんはそう言って首を横に振って、そしてなんかうつむいて肩を震わせる。
ど、どうすればいい？　シャルロット・コルデーって人のことはさっぱり分からないから、どうしたらいいんかわからねぇ!?
「……シャルロット・コルデーという女は、愚か者としか言いようがありません」
シャルロットさんは、そう言い始める。
そこから聞いたのは、シャルロット・コルデーという女性が何故英霊として名を記されたかの話だった。
フランス革命で、革命を起こした民衆は恐怖政治を敷いていた。少なくとも、シャルロットさんはそう思った。
それに憤ったシャルロットさんは、その時の革命側のリーダーの暗殺を決意。その足でパリに行って包丁を買って、そして堂々の乗り込んで暗殺に成功する。

やるべきことをやったと胸を張れたシャルロットさんは、処刑されるその時も堂々として、これで恐怖政治は終わると、少なくはなると思って死んだ。

……だけど、事実は全く逆だった。

とっくの昔に主導権を奪われていた人だったから、恐怖政治は止まらなかった。むしろその所為で熱が入り、それどころかロベスピエールという次のリーダーはそれを逆に利用して燃え上がらせた。

その結果、フランス革命では大量の処刑が蔓延った。

「……私が聖杯に願いたかったのは、「今度こそ間違えない人生を」です」

そう言いながら、シャルロットさんは泣いていた。

「……私の愚かさの所為で死んだ者への鎮魂でもなく、間違いをやり直したいでもなく、私は利己的な理由で聖杯戦争に参加することを選びました」

震える手に、水滴が落ちるのが見えた。

「そのくせ、どのような理由であれそれに手を貸してくれたマスターを……。本来なら、既に死んでいる私が先に死ぬべきなのに……」

……何だろうな。

俺、ここ数か月女の子の涙を何度も見てるよ。

アーシアは泣いた。そして、一度死んだ。

部長も泣いた。そのあとなんとかできたけど、本当ならそうなる前に何とかするべきだった。

そして、今俺の目の前でシャルロットさんまで泣いて……いや。

「……シャルロット！」

違うよな、それは。

泣いてるなら、せめて俺が何とかしてやらないと。

何度も何度も泣かせっぱなしなんて嫌だ。女の子を泣かせっぱなしなんて、ハーレム王として論外だしな。

だから、まずはマスターらしくしてみよう。

「シャルロットは俺を助けようとしてくれた。あったばかりの俺を、自分より優先してくれた優しい女の人だ」

うん。そこは間違いないよな。
「シャルロットはもう死んだのかもしれないけど、今サーヴァントとして生きてる。俺も一度死んでから悪魔になったし、お互い様だろ？」
ああ、そうだ。
俺もシャルロットも、一度死んでるけど此処にいるんだ。そこは何も間違ってない。
だから―
「お互い「一度死んでるんだから」で遠慮しないってことで行こうぜ？
それと一つだけ約束する」
俺は、マスターとしてこれだけは絶対にやって見せる。
「シャルロットが俺を助けようとしてくれたことは、絶対に間違いじゃない。俺がそれだけは間違いにさせない。そこだけは、絶対に約束する」
シャルロットの願いが間違えない人生なら、シャルロットが俺を助けようとしたことは絶対に間違いにしちゃ駄目だ。
一生懸命頑張って、上級悪魔に昇格して、むしろ最上級悪魔にだってなってやる。ハーレム王にはもちろんなるし、女の子を泣かせたりしない。あと、コカビエルはぶったおすし、聖杯戦争も優勝してシャルロットに願いをかなえさせる。
全部やる程度出来なけりゃ、ハーレム王なんてなれやしない。
「だから、シャルロットも俺が間違えないように手伝ってくれよ。そうすりゃ、シャルロットもそこだけは絶対に間違いじゃないんだからさ？」
「……マスター」
お、女の子が頬を赤らめてるのはめっちゃ可愛い！　涙目なのが最高だ。
くっそう！　これが主って立場になる約得か！
あ、でも……。
「それとさ、マスターって呼ばれるの恥ずかしいから、名前で呼んでくれよ。みんなからはイッセーって呼ばれてるからさ？」

ちょっと気恥しいからそこは頼むと、シャルロットはクスリとほほ笑みながら、涙をぬぐった。
いやほんとかわいい。胸もいちいち揺れるしほんとにかわいい。
落ち着け俺！　シャルロットは俺のサーヴァントなんだ、勘違いしたらいけない！　これはきっと、相棒に対する感謝とかそんな感じなんだから！
と思ってたら頬が痛い！
あ、アーシアちゃんどうしたの!?　お兄ちゃん的な人がとられると思ってるの!?
「イッセーさん、そういうところは治した方がいいと思います！　部長さんのようにおっぱいが大きくないとダメなんですか!?」
「ま、まってくれアーシア！　おっぱいが大きいのはいいことだけど、シャルロットのおっぱいが大きいから俺はマスターになるわけじゃないんだ!!」
俺が涙目のアーシアに謝ってると、シャルロットは思わず噴き出した。
「……プッ！　もう、格好いいことを言ってくれたんですから、できればもうちょっとそのままでいてくださいよ、イッセー」
……うん。
ま、これぐらいはできないとハーレム王にはなれないよな？
「あ、ああ。じゃあ、とりあえずこれからも―」
そう思ったその時だった。
『――イッセー、アーシア！　念話越しで悪いけれど、緊急事態よ！』

なんか、コカビエルがこの町を丸ごと吹き飛ばすとか、宣戦布告してきたとか言ってきた。
しかもボロボロのイリナを手土産とか言ってきたんだけど!?
木場、お前大丈夫だよな!?

三勢合一編　第七話　赤き龍の帝王の宣言

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

端的に言おう。神の子を見張る者が送り込んだ、対コカビエルの切り札であるヴァーリは、想像を絶する苦戦を強いられていた。

それも、魔王クラスの力量を持つ悪魔の力を借りたうえでという、埒外の事態だ。

「これは……っ。お嬢様の近くに白龍皇が来ているのなら、牽制（挨拶）をするべきだと判断してはいけませんでしたか……っ」

「全くだね。かの銀髪の殲滅女王（クイーン・オブ・ディバウア）との共闘は滾るが、コカビエル如きにこうも手こずらされるのは歯がゆいな……っ」

リアス・グレモリーの義理の姉にして、その兄でもあるサーゼクス・ルシファーの妻である女王でもあるグレイフィア・ルキフグス。女性悪魔としては現レヴィアタンのセラフォルー・レヴィアタンや、レーティングゲームランキング二位かつ女性ランカー一位のロイガン・ベルフェゴールと肩を並べる傑物である。

こと、ルシファーに関しては多少は感心があるヴァーリからすれば、現ルシファーの妻であるグレイフィア・ルキフグスと肩を並べられるのには色々と感慨深いものもある。

……だが、それで前座に手こずるというのは、流石に苛立ちを感じる展開ではあった。

それを成すのは三種類の魔獣。

赤と白、そして紫の龍の鎧を模した魔獣が、総数百近い数でこちらを包囲する。

しかも赤と白は二天龍の力を完全下位互換とはいえ使っており、あろうことかこちらの力に干渉すらしている。

紫は他二種類に比べれば特色はないが、基本性能では同一であり、これもまた苛立たせてくる。

「……二天龍の力を模造するとは、反吐が出る侮辱だな。コカビエルは俺のことがよっぽど嫌いらしい」

「まあ、二天龍はかつての三大勢力の争いを引っ掻き回してますからね。戦争継続派からすれば苛立つものでしょう」
そう答えながら、グレイフィア・ルキフグスも歯をくしばって現状に苛立ちを覚えている。
義妹であるリアスの窮地に思うところはある。また生きてきた歴史が長いがゆえに、コカビエルが今のリアスにとって荷が重すぎる相手であることも分かっているからだ。
だからこそ―
「いいだろう。ならば遠慮なく叩き潰してやるとするか……っ！」
「そこをどきなさい。お嬢様に……リアスに危害は加えさせないわ！」
―全力中の全力で、敵の殲滅に意識を集中する。

それが、何の意味もないことも気づかずに。

イッセーＳｉｄｅ

お、おぉおおおおおおおお!!!!
今、俺達は胸が熱くなった。
イリナから奪った分も含めて、合計四本のエクスカリバーを合一化させたコカビエル達。
バルパー・ガリレイの野郎が言うには、あと三十分で駒王町どころか、周囲の街もまとめて吹き飛ばせるとかいう、聖杯まで使った緊急

事態。
しかもコカビエルはこっちの増援に足止めを送ってるとか言ってきやがった。カズヒや九成達が手こずった連中を何十体も送り込んだとか。
そのくせ、エクスカリバーを使ってるのはフリードだ。
因縁あるしムカつく奴だし、しかも腕も立つから困ったもんだけど、そこで奇跡が起きた。
人工的に聖剣使いを作る為に必要な、他人から取り出して集めた聖剣因子。
その、木場の仲間達から抜き出した因子が、木場に宿ってあいつは至った。
魔剣創造の禁手（ソード・バース バランス・ブレイカー）、双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）。
聖と魔が融合した聖魔剣は、合一化したエクスカリバーと真っ向から切り結んで、しかも押した。
更に無事だったゼノヴィアは、本来のエクスカリバーと同じぐらい凄いデュランダルって聖剣を引き抜いたし。なんでも天然物の聖剣使いだけど、デュランダルは強すぎて扱いきれてないからエクスカリバー使いも兼任していたとか。ひと悶着遭った時に言った「奥の手」とかいうのはあれのことだったらしい。
それであっさり押し切られたフリードを、木場がついに切り伏せた。
……くぅ～！　なんてかっこいい展開してんだよ、あのイケメン!!
羨ましい！　妬ましい！　イケメンは心どころか、勝ち方すらイケメンなのか!?
だけど、だけど、だけど！
それでも仲間の因縁が清算されたんだ、あとでしっかり肩を叩いて認めてやらないとさ!!
うわあああああん!!　絶対リアス部長も可愛がるし褒めるよぉおおおおお！　羨ましいけど確かにそうだしちくしょおおおおおお!!!
おっと、まだ一人残ってたの忘れてた。

コカビエルはともかく、聖剣計画の責任者で、しかも殺さなくてもいいのに木場の仲間達を殺した奴は許せねえ！
覚悟しやがれ、バルパー!!
「まさか、まさかそうなのか？　聖と魔という混ざり合うことが本来ありえない聖魔剣の存在は、つまり……」
って、あれ？
あれだけエクスカリバーに執着しているとか言ってたのに、バルパーの奴はなんかほかのこと考えてるぞ？
あ、現実逃避か。目の前でエクスカリバーや自分の研究が色々敗けてたから、ショックで逃げてるのか。
気持ちは分かる。俺もイケメンに女が集まってたり、イケメンでもないのに彼女が出来てる奴がいたらそういうことするから。裸の美女美少女に囲まれている光景を妄想すると、心の痛みが消えるよなぁ。
俺が内心でしたくもない共感を覚えてると、なんか急にバルパーが目を見開いた。
なんだ？　まるで視界の隅でスカートが捲れてパンティーが見えたその瞬間みたいだぞ？
「そうなのか！　聖と魔というバランスが崩れる、すなわちその象徴となる存在の消滅!!　つまり、初代四大魔王だけでなく、か―」
その瞬間、バルパーが吹き飛んだ。
気づけばそこにあるのは、さっき体育館を吹き飛ばしたのと同じぐらいでかい光の槍。
ってことは、投げたのは―
「どういうつもり？　彼はあなたの味方でしょう、……コカビエル」
―部長が睨みを利かせる先、コカビエルがつまらなさそうに光の槍を投げ終わっていた。
な、なんでだ？
リアス部長の言う通り、バルパーはコカビエルと組んでたんだろ？
それを殺すとか、何考えてるんだ!?
「……そうだったな。役に立ちそうにない上に、最重要秘匿事項を口

に仕掛けたのでついな。……まあ、今更隠す必要もないのだが」
え、そんな理由で!?
さすがにバルパーがかわいそうになってきた。あと、バルパーが言いかけた最重要秘匿事項ってのが気になる。
「ちょうどいい。冥途の土産に教えてやろうか」
しかもいうのかよ。
完全にバルパー無駄死にじゃねえか。せめて木場に敵を討たせてやりたかっ―
「奴が言いかけた通り、聖と魔のバランスを司る存在は双方ともに消滅した。具体的には初代四大魔王と相打ちになって聖書の神も死んだのさ」
―へ？
なんか今、結構びっくりなことをさらりと言ったな。
そっか。聖書の神様って死んでるんだ。それも四大魔王様の初代と一緒に。
へ～。じゃあ今の神様って二代目なのか。えらい天子さんとかがやってるんだろうなぁ。
「……う、う……うううう……」
あれ？
なんか、ゼノヴィアが滅茶苦茶顔を真っ青にして震えてる。
っていうか、アーシアも同じぐらい顔が真っ青になってる。
っていうかなんで部長達まで真っ青になってるんですか？　俺達悪魔だから、聖書の神様が死んでても問題がないような……？
「……嘘だ！　そんなバカなことがあるものか!!」
「真実だ。証拠はそこの悪魔の持っている聖魔剣で十分すぎる。バルパーが気づいたように、聖と魔を司る存在がともに消滅してバランスが崩れなければ、絶対にありえないのが聖魔が融合した力なのだからな」
ゼノヴィアが吠えたその瞬間、コカビエルがそう言った。
え、木場の聖魔剣ってそんなにすごいのかよ。もしかして、俺の赤龍帝の籠手よりレアなのか!?

「そんな、では、主の奇跡……は……？」
っていうかアーシアの顔色がやばい！
もう真っ青を通り越して真っ白じゃねえか!?
で、コカビエル。まともな答えを返してくれるんだよなぁ!?
「聖書の神はシステムを作り上げているから、それを運用する形でミカエルはよくやっているな。だが、神でない以上できることには限度があるがな」
最悪の答えを出しやがった……っ！
あ、アーシアが崩れ落ちた!?
慌てて駆け寄ろうとしたとき、すぐに走りってアーシアを支えてくれる人がいた。
「シャルロット！」
「……無理もありません。神が死んでいるなんて、敬虔なキリスト教徒にとってあまりに重すぎる話です」
痛ましい顔をして、シャルロットはアーシアをゆっくりと横たえた。
と、とりあえずショックで呆然となってるけど、息はしてる。
それでもここまでショックを受けるなんて、大丈夫かよ。
「魔王様と同様に神まで死んでるなら、もう戦争なんてする必要がないでしょう!?　いったい何を考えてるのよ!?」
「逆だろう？　神も魔王も死んだのなら、それこそ堕天使が勝利をつかむ好機。それに天使や教会はもちろん、悪魔からしてもだからこそ勝利をしなければ意味があるまい」
リアス部長が大声を上げるけど、コカビエルはそう答える。
そして、歯ぎしりしながら苛立たし気に拳を握り締めた。
「だというのに、アザゼル共は「二度目の戦争はない」とかぬかし、神器などというおもちゃに拘る始末だ。神滅具や禁手に至ったのならともかく、そうでないものが何の役に立つ！」
コカビエルはそう言いながら、今度は適当なところに光の槍を叩き込んだ。
マジかよ。体育館やバルパーを吹き飛ばした時より威力がある。

あいつ、今まで本気なんて欠片も出してなかったのか!?
「そのくせ安定性がろくにない星辰光(アステリズム)や、数は揃えられるがおもちゃ止まりのプログライズキーにまで目移りしやがって。強者を意図的に出しうるサーヴァントを呼び出せる聖杯戦争の方が、聖杯も手に入る分価値があるだろうに、「危険すぎる」だのと最小限の研究にとどめるとか、どうかしてるとしか言えやしないな!」
そして、コカビエルは俺達を見下してくる。
「だから、俺だけでも戦争を起こしてやるのさ! 既に聖杯も完成寸前、あとはそこの娘を殺せば終わるからな」
なろう。狙いはシャルロットか!
させるかと、俺は立ち上がろうとして—
「そして、お前ら程度なら片手間で殺せるしな。—唯一足る猛毒(タワー・ドゥ・タンプル)」
—痛(い)ってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?
なんだ!? 体中が、中から痛い!?
頭の中すら痛い。しかも、全部滅茶苦茶痛い!?
見れば、リアス部長達やゼノヴィアも、全員もだえ苦しんで倒れてる。
なんだよ、これ。いきなりこんなこと、神器でも持ってるのかよ。
「——聞こえてないだろうが教えてやる。神の子を見張(グリゴリ)る者は神器研究の最先端だが、劣化互換でいいなら人工的に作り出すことも可能になっていてな。これは封印系神器であり、令呪との重ね掛けでサーヴァントの力を自身が使えるようになる代物さ」
マジかよ。そんなことができるってのか?
俺が歯を食いしばっていると、コカビエルはため息をついた。
「最も、令呪三画をすべて使い、とどめに使うやつが強大である必要があるがな。それこそ最上級堕天使クラスはないと、ろくに使うことができやしない」
つまり、強い奴が更に強くなるってことなんだろうが。
クソッタレ、部長達は動けないの。っていうか、動くってことも考える余裕がないのかよ……。
そんな中、シャルロットは歯を食いしばりながら、何時の間にかコ

カビエルの前に立っていた。
　動けるのか、シャルロット……！
「……体内を犯すこの激痛。そしてあの魔獣。まさか、貴方のサーヴァントは……っ」
「ああ。ルイ十七世。お前達フランスの市民がとっ捕まえ、徹底的に苦しめた悲劇だけで英霊になったバーサーカー。お前のおかげでここまでの奴ができたともいえるがな、シャルロット・コルデー」
　あいつ、シャルロットの正体にまで気づいてるのかよ!?
　シャルロットもちょっと驚いてたけど、いつの間にか包丁を取り出して構えていた。
「お前が勢いで奴らを活気づかせてからこそ、ここまでの負の怨念がこいつには詰まっている。魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）こそ今は使いまくった所為でインターバルがいるが、「範囲内の指定した対象に自分の末期の状態を味合わせる」なんていうのは中々便利だと思わないか？」
「全くです。自分の愚かさには反吐が出そうになりますね」
　シャルロットは、歯を食いしばりながら、それでも立って構えてる。
　俺達を、守る為に……っ。
「だがお前では俺には勝てん。もし俺の部下になるのなら、生かしておいてもいいとは思うがな」
　……コカビエルがなんか言ってるけど、俺はそんなこと気にしない。
「悪い冗談ですね。私如きにそんな力があると？」
　シャルロットの言葉も、今は聞かない。
「アサシンのクラスなのだろう？　お前の美貌を含めれば、諜報には役立ちそうだと思うんでな。どうだ？　待遇は応相談――」
「考えるまでもありません。論外です」
　立てよ、俺。
「私が愚かなのは百も承知です。そして、その愚かさで更に血を流すなんて、もっと御免です」
　俺は、さっきなんて言ったんだよ。思い出せ。
「そうか。お前も候補だったんだがまあ仕方がない」

シャルロットも忘れてる。だから俺が思い出させろ。
「まあ、既に一度死んでいるんだ。だからさっさと死に戻ると―」

「ふっざけんじゃ、ねぇえええええええええ!!」
俺は全力で立ち上がると、そのままコカビエルに殴り掛かる。
くそ、受け止めやがったなこの野郎。
「この宝具の中で二人も動ける奴がいるとはな。いい根性だ、褒めてやる」
コカビエルはそう言いながら、なんか俺の方を見て面白そうな顔をしやがった。
こっちは全然面白くねえよ。せめて殴られてろってんだ。
「そういえば赤龍帝だったな。俺と一緒に来るなら、女も金も見繕ってやるが、どうだ?」
女だと?
ハーレムが作れるのか?
めっちゃ嬉しい。
「……だが、断るっ!!」
「血涙流れてますよ!? そんなにお金に困ってるんですか!?」
シャルロットがなんか驚いてるけど、今はそこじゃない。
「ハーレム王を目指しているけど、めっちゃくちゃ一瞬食いつきたくなったけど、今はそんなことどうでもいい!!」
「そっちですか!? この状況で!?」
なんかシャルロットが本気で驚いてるけど、今はそっちじゃない。
滅茶苦茶なりたくてたまらなくて、「え、マジで?」ってなりそうだけど、今はいい。
っていうかその前に―
「シャルロットが一度死んでるからって、だから二度目も死んでいいとか、ふざけんじゃねえ!」

ああ、はっきり言ってやるよ。
「シャルロットは俺のサーヴァントだ。シャルロットはこれからいっぱい俺達と過ごすんだ」
そうだろ、兵藤一誠。
「前の人生が大変だっていうんなら、今度の人生ぐらい一杯笑って一杯幸せになるのがいいに決まってる。俺はハーレム王になるんだから、自分がマスターになってる可愛い女の子の為なら一肌脱ぐって決めてんだよ」
ハーレム王になりたいんなら。
最強の兵士（ポーン）になりたいんなら。
部長の自慢になりたいんなら。
「第一」
全部まとめてやるんなら―
「俺の大事なリアス部長（主）とアーシア（友）とシャルロット（サーヴァント）に仲間達を苦しめた野郎の誘い文句なんて聞くわけないだろ。どれだけどれだけどれだけ欲しくても……受け取ってたまるか、この野郎がぁあああああ!!!」

Other Side

その少年は、とても正直に本心を叫びきった。
煩悩が全く隠せてないのは困りものだが、同時にそれは彼女の心を強く打った。
自分のことが嫌いだった。
馬鹿なことをしたと思っている。一時の感情で道を踏み外し、しかも行ったことは惨劇を止めるどころか減らせもしない。結果的にそれ以上の惨劇の引き金にまでなってしまった。

そのくせ、願いを叶える権利が死後来ておきながら、それを取り戻すわけでも贖罪するわけでもなく、ただ「間違えない人生」を求めるのだから、自分自身が嫌いになっていた。

……それでも。

それでも、彼は自分を庇って前に出ている。

真っ直ぐな少年だ。性欲にも真っ直ぐなところは苦笑するが、それでも立派な少年だ。

この激痛が、普通は立っていられるようなものでないことは分かっている。

自分の精神力にも感心するが、それと同じぐらいの精神力を振り絞る目の前の少年は、本当に眩しく見える。

それが、自分以外の者達も含めてはいるが、自分を助ける為にも引き出されていることに涙が出る。

……死なせてはならない。

この状況下でつい欲しいと言ってしまうような程の餌をぶら下げられながら、それでも自分達の為に投げ捨てて、勝ち目のない戦いに挑もうとしている一人の少年。

彼を死なせてはならない。

今この時、シャルロット・コルデーは自分の願いを新たにした。

自分が間違えない人生を送ることは、二の次で良い。

だけど、それでも、少なくとも。

その願いの為には、自分もそう簡単には死ねない。だから、自分も生き残ろうとしなければならない。

それがどれだけ罪深いと思っても。

きっとそれに苦しむことになろうとも。

かつて信仰に生きた身として、後ろ指を刺されることになろうとも。

―この、真っ直ぐな少年が道を間違えないことこそ、今の霊基(自分)だけが望む本心の願いだ。

その思いに、力は答える。

そして同時期。
結界の中に飛び込み、
同時に宝具の影響で激痛を覚え、
しかしそれをすぐに乗り越えて走り出す者達が、二人いた。

三勢合一編　八話　蒼き救済者の到来

和地Ｓｉｄｅ

痛い痛い痛いが頑張れ！

思わず悶絶したけど、それでも何とか振り切って立ち上がって走る。

なんだこの激痛。もだえるっていうか、気絶しそう！

さっきから全力で向かって、その上この激痛とか戦闘までもボロボロになりそうだぞコレ。

結界の強化に回ったヒマリとリーネスがちょっと羨ましい。二人が組めば結界は三倍ぐらいの強度になるからって、俺が納得したのも悪いけどちょっと羨ましい。

だけど、まあ。

「―惚れた女と肩を並べられるってのは、男としてちょっと誇るべきかねぇ！」

「―言ってなさい！　足手まといになりたくないなら、そっちも本気でやることね！」

脂汗がところどころ見えるけど、カズヒ姉さんも真っ直ぐ走っている。

ははっ！　俺は惚れた女の前で恥かけないってやせ我慢だけどさぁ。カズヒ姉さんは根性滅茶苦茶あるじゃねえか。

なら、こっちも頑張って気合を振り絞らないと……な！

「そこまでよ、コカビエル！」

「身内の恥は注がないとなぁ!!」

そう言って、校庭に突入した俺達は―

「な、なんじゃこりゃぁあああああああ!?」

―なんか赤い龍の鎧が驚いているところを見た。

なんか殴りたくなったのは俺の気の所為か？

いや、周りで殆どの人達が倒れてるから、それどころじゃないことは分かる。

俺って思った以上に激痛に耐性あるんだなぁとか思ってるけど、そういう問題でもない。

あと、カズヒ姉さんと一緒に来た聖剣使いのゼノヴィアとか、イッセーと同じリアス・グレモリー眷属のアーシア・アルジェントに至っては、激痛で倒れてるどころか顔が凄く真っ青になってる。

な、なにがあった!?

「というか、どういう状況だおい!?」

「さっぱり分からない！　なんか聖書の神様が死んでるとか、ルイ十七世の宝具とか、そしたらいきなり何もしてないのに禁手になってて俺が混乱してる！」

さらりと爆弾をぶん投げるなぁあああ!?

っていうか、聖書の神様が死んでる!?　そんなの人類社会に知れ渡ったら世界大恐慌と大暴動が起きるぞ！　大半の発言力がある国家が機能停止しなけないぞ馬鹿野郎！

聖書の神様はキリスト教だけの神様じゃない。イスラム教やユダヤ教の神様でもあるんだ。つまり先進国とか石油輸出大国とかイスラエルとか、色々世界関係で中心になりやすい国家は軒並み影響受けてる。

そんなとんでもない事実、変なところで大声出すなよ。

っていうか、カズヒ姉さんに聞かれたのはまずいだろ。

俺は恐る恐る、カズヒ姉さんの様子を窺うと、やっぱり目を見開い

て固まってる。
「……う……ぁ……っ」
そして手を顔に当てて、深呼吸すると―
「……流石に大問題だけど、とりあえず優先順位ははき違えないわ」
―持ち直した。
すげえ。カズヒ姉さんすげえ。
この激痛が全身を襲ってる状況で、メンタルに大ダメージまで入ってるのに耐えたよ。
本気ですげえ。俺滅茶苦茶驚いてる。
あ、コカビエルもちょっと感心してる。
「ほぉ。他の信徒共よりは根性があるが、信徒としてそれはどうなんだ？」
「……そうね。確かにショックではあるけど、だけど一番大事なことは見失ってないわ」
コカビエルにそう答え、カズヒ姉さんはトンファーを向ける。
そこには傷はあっても揺らぎがない。真っ直ぐな決意が込められていた。
「例え主が死んでいたとしても……いえ、例え聖書の神が存在したことが無い虚構だったとしても、そんなことは関係ない」
そう言って、そしてカズヒ姉さんは、宣言した。
「善を慈しみ、逆に虐げる悪に真っ向から立ち向かう。そんな正義たらんと己を戒めることこそが信仰であり、それによって人々が迷わず生きれるよう世界に貢献することこそ、私達信徒の誇りでしょう」
そこには、迷いは一つもない。
自分が常に正しいのではなく、常に自分を正しく縛ろう。そう己を戒め正しくあらんとすることを、信仰として生きる女傑の姿がそこにあった。
「我らが仕える正義（教え）はもう既にこの世界にある。私が正義（信）の味方（徒）であらんとする限り、たかが設立者（主）が死んだ程度で、この生き方が止まると思わないことね!!」
「……面白い」

ちょっとぶっ飛んだ発言に、コカビエルは楽しそうに笑った。
というより、何かテンションが高くなってないか？
「いいぞ！　信じる者がいなければろくに生きることもできんかと思えば、中には芯の入った奴がいるじゃないか！　そうだ、こういうのを待っていたんだよ、俺は!!」
そして、一気に大量に光の槍を展開する。
おいおい、百本近くあるんじゃねえか、これ!?
「じゃあまずは、お前達と戦争だ！　そして戦争というのは、相手だけでなくそいつが守る者を潰すことでも勝てると知れ！」
「て、てめぇ！」
イッセーが大声でほえるけど、コカビエルは気にしてない。
なるほどな。まず戦闘できない奴らを殺すことで、俺達のメンタルにダメージを入れようってか。
この数をたった三人でカバーできない。だから一人ぐらいは確実に殺せる。そういう考えなわけだ。
……野郎っ
その時、鎧の宝玉から声が響いた。
『誰か！　誰でもいいです、あの光の槍を迎撃だけしてください！』
た、確かカズヒ姉さんが助けた人か。サーヴァントで、シャルロット・コルデーとか。
いや、迎撃っつったって、あれだけの威力を全部迎撃するには、威力だって必要だぞ？
それさえ問題ないなら俺はいけるけど、威力が問題なんだよ。
そう思ったその時、更に声が続いた。
『当てるか防ぐかさえ出来れば、あとは私が何とかします!!　威力や頑丈さは度外視で、何とか出来ませんか!?』
……なるほど、な。
なら、俺に任せろ。
「上等！　そういう条件なら何とかしてやるさ！」
ああ、それなら何とかなるって、本気で断言してやるぜ。
「大丈夫なの？」

「ああ！」
カズヒ姉さんに力強く頷いて見せる。
「ふ、部長達は任せていいのか!?」
「シャルロットがいう条件通りなら、いける！」
イッセーにも、確信を持って頷いて見せる。
ああ、それなら、俺なら出来る。
「「……任せた！」」
ああ、そこまで言われたら―
「……任せろぉ！」
―やるしかないだろ。
俺は涙の意味を変える者。
今、皆が激痛で涙を浮かべている。アーシア・アルジェントとゼノヴィアは悲しみでもだ。
そのまま死なせるつもりはない。せめて、生き残った安堵は齎して見せる。
だから―
「創生せよ、天に描いた星辰を―――我らは煌めく流れ星」
『ＳＡＶＥ』
―いきなり本腰行かせてもらうぜ？

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

コカビエルは、その光景を見て眉をしかめた。
リーネスは聖杯戦争や魔術回路の研究者。しかしその彼女がプログライズキーや星辰光を運用する者達を二人迎え入れた時は首を傾

げたものだ。
ザイアコーポレーションのデミ・サーヴァント計画は失敗している。失敗には成功に繋がる要素が眠っていることまで否定はしないが、それにしては二人だけというのも、二人を被検体として扱ってないことも違和感だった。
もとより、コカビエルは星辰奏者もプログライズキーもさほど重要視していない。
明確に過去成果を上げた英雄に、更に人々の信仰が上乗せされたサーヴァントは強大な存在だ。しかし数を揃えられるが工業品であるプログライズキーは雑兵用の数合わせ程度としか思っていない。星辰奏者に至っては、当たりはずれが激しい曲芸師程度の認識だった。
だからこそ、はっきり言ってさほどの問題はないとすら思っている。
「世に悪意が尽きることなく、ゆえに悲劇は尽きること無し。ゆえに嘆きの泉は枯れることなく、悲しみの涙は沸き続ける」
だが、しかし。
「星々の彼方より異星の神が来るまでもなく、善と正義を愚弄せんと、邪な悪意は世界を包む」
だからこそ、コカビエルはその変化に警戒心を覚える。
「だがしかし、ならば問おう。流れる悲劇の涙を前に、汝はそれを良しとするのか？」
そこに起きた変化は、魔力だ。
魔術回路の存在が発見されて以降、大気中に存在するようになった魔力。
体内魔力をオドと呼称することにしたうえで、マナと形容することになったその魔力が、起動音声と共に変貌する。
「否、否、否否否。あの日の涙とそして笑顔に、なによりそこから生まれる決意に、恥じることなどあり得ない」
『Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅｒ……』

そして同時に、構えていた拳銃からも合成音声が鳴り響く。
どちらも警戒対象として意識を向けたことはなかった。デミ・サーヴァント計画も失敗している以上、警戒する理由も特になかった。
だがしかし、既に状況は変わったと判断した。
「ならば我が身は身命として、涙の意味を変えるのみ」
「チィッ！」
危険と判断して、そして即座に攻撃を開始する。
「鋼の体は此処にない？　ならば鋼の鎧を纏おう」
だが、そのすべてが防がれる。
「旧き神の石などない？　ならば星の光を振おう」
受け止められ、弾かれ、受け流される。
あまねく光の槍が、全て狙った相手に届くことなく防衛されてしまう。
「異能と絆は此処に在る。もはや不足などありはしない」
そして同時に、赤龍帝と白髪の女がこちらに攻撃を開始する。
迎撃をするも、しかしおかしい。
相手にとって都合がやけに良すぎる。
こちらの攻撃は何故か上手く当たらない。狙ったところから微妙にずれる、誤差の範疇内のようでいて、しかしあまりにすべてがずれすぎる。
相手の攻撃は上手く当たる。見事にすべて身に入り、威力が相手の思った以上に高くなる。当人が狙っていたところより威力が高くなるように当たってしまう。
そして、同時に星辰奏者も攻撃に移ることを決定した。
「瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻め」
『ショットライズ』
そして、星の光が完成すると共に、弾丸が解き放たれる。
それは絶妙に味方をすり抜け、こちらに攻撃を仕掛けた。
上手くいなすも、やはり何故か迷惑な入り方をし、そして更に弾丸は曲がり、撃った者へと届く。
その瞬間、弾丸はプロテクターに変化して彼の全身に装着された。

『サルヴェイティングドッグ―』
「超新星（メタルノヴァ）――救済（セイヴィング）の時来（タイミング）れり、悲劇（タラスク）を終（ロウ）える帳は此処に」
『―Ｏｌｌ　ｌｉｇｈｔ　Ｉ，ｍ　ｇｕａｒｄｉａｎ　ｏｆ　ｈｕｍａｎ』
そこに具現化したものは、どこか犬を模した濃い青の装甲で出来たプロテクター。
全身鎧型の禁手を思わせ、しかし遥かに科学的な印象を与える全身装甲。
奇しくも、シャルロット・コルデーとルイ１７世がサーヴァントとしているこの場において、皮肉ともいえるコードネームが存在することを、コカビエルは知っている。
「仮面、ライダー……っ」
「ああ、仮面ライダーマクシミリアン。涙の意味を変える為に、此処に推参!!」
マクシミリアン・ロベスピエール。シャルロット・コルデーの死を利用して、ルイ十七世の母親でもあるマリー・アントワネットに始まる多数の処刑を引き起こした革命派の重鎮。
かつて聖書の神に代わる絶対存在として「人の理性」を掲げた男。
その名を冠した、人類の自由と平和を守る存在の称号をつけられた、しかし彼らの理想の真逆を選んだ少年の力。
その力が今、此処に顕現した。

三勢合一編　第九話　三勢合一の激戦

和地Ｓｉｄｅ

さあ、ここで俺がお前を叩きのめす準備は整ったぜ、コカビエル。
「こっからは俺も参戦するぜ！」
「ああ！　一緒にあいつをぶん殴るぞ!!」
「期待しておくわよ！」
イッセーとカズヒ姉さんに応える為、俺も攻撃を連続して叩き込む。
当然コカビエルは反撃の攻撃を叩き込むが、甘く見るなよコカビエル。
俺は星辰光を全力で使い、その攻撃全てに防御を間に合わせる。
大気中のマナそのものに星で感応することで、多種多様な種類の防壁を生成する。
単純な物理的強度だけなら負けるだろう。というより、俺の星辰光は収束性が低いので強度に限度がある。だが、脆性破壊による衝撃吸収及び、大気流や電磁誘導による受け流しを踏まえれば話は変わる。
その多種多様な防壁により、敵の攻撃から変えるべき涙を守る星辰光。
それこそが、俺の持つ星辰光。救済の時来れり（セイヴィング）、悲劇（タイタス）を終える帳（クロウ）は此処に。魔力防壁創造能力。
ポテンシャルはこれでも高い。自分で言う事でもないけど高い。
基準値：Ｂ
発動値：Ａ
収束性：Ｄ
拡散性：Ｂ
操縦性：Ｄ

付属性：E
維持性：D
干渉性：A
全力戦闘での継続時間こそ低いが、それ以外は必要なものは全部揃っている。
最も、ここまで完璧に防げるってのは想定外なんだけどな。
シャルロット・コルデーの言っていたことが関わってるのは分かる。
だけど、いったいなんでだ？
「おのれ！　貴様ら、いったい何をした！」
そこでコカビエルが吠える。
なんだ？　ものすごく苛立っている。
まだ戦闘そのものは拮抗しているってのに、何をそんなにブチ切れてるんだ？
「さっきから、何故俺の攻撃は芯から外れて貴様の攻撃ばかり真芯に当たるぞ赤龍帝！　お前と俺の力量では、逆ですらここまではいかんというのに!!」
……なるほど。それは確かに。
俺はエイムズショットライザーで嫌がらせになるように射撃を叩き込みながら納得する。
コカビエルの攻撃が芯からずれてるってのは、俺も言われたらすぐに納得できる。
つっても、その種が俺には全く分からない。
『分からないか。まあそうだろうな、俺も驚いているぞコカビエル。シャルロットが、まさかこんな……ククッ！』
なんか愉快そうに、イッセーから赤龍帝ドライグの声が響いた。
『な、なんというか言い方が悪くありませんか？　いえ、確かに自分でも運命のいたずらとかそんなことを考えてしまいますが！』
っていうか、冷静に考えるとなんでシャルロットの声がイッセーから聞こえてるんだ？
「赤龍帝ぃいいいい！　貴様、いったい何をしたぁ！」

「俺が知るか！　馬鹿に分かるようなことは起きてねえよ！　っていうかなんで代償も無しに禁手がこんなに続いているんだよ!?」
　イッセーも分かってないのかよ!?
「……それでよく、ここまで思い切りよく戦えるわね！」
「シャルロットかドライグが何かしてくれた！　それだけ分かれば十分さ！」
　カズヒ姉さんにそう返すけど、馬鹿だけど大物だなこいつ！
「で、ドライグさん。……種は？」
　牽制の射撃を叩き込みながら、正直気になって気が散るから答えを求める。
　そして―
『単純に言えば神滅具の亜種禁手だ。最も、兵藤一誠（相棒）の赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）ではなく、サーヴァント（シャルロット）のだがな』
　―今なんつった？
　イッセー以外の動きが一瞬乱れて、それでコカビエルが一発盛大に殴り飛ばされる。
　今の爆弾で揺るぎもしないとか、凄いなイッセー。
　すぐに体勢を立て直して、コカビエルは歯ぎしりしながら光の槍を乱れ撃った。
「どういうことだ、貴様らぁあああ!!」
「いや、それで死んだら説明が聞けないだろうが！」
「確かに気になるわねっと」
　俺が星辰光でそれを防ぎつつ、同時にカズヒ姉さんがどこからともなく呼び出した榴弾を乱れ撃つ。
　更にカズヒ姉さんは汎用機関銃を構えて撃ちまくりながら、ちらりと赤龍帝の鎧に視線を向けた。
「それで、補足してくれるのかしら？」
『ああ。シャルロットは神滅具保有者だったんだよ。それも初めて見るが……究極（テロス・カルマ）の羯磨であり、同時についい先ほど亜種禁手に至ったばかりだ』
「究極の羯磨っていうと、神の子（ウ）を見張（チ）る者でも情報があまりない神

滅具じゃないか」
　とんでもないものが出てきたもんで呆気に取られたよ。
　なんか凄い事なってると思いながら、俺とイッセーも射撃を開始してコカビエルと打ち合いを続ける。
　そんな中、ドライグは俺達にもしっかり聞こえるように更に説明を続けてくれた。
『どうやら可能性、いわゆる因果律操作とかいう能力のようだな。しかもシャルロットが至った亜種禁手は、それを赤龍帝の籠手の補佐に一点特化した亜種禁手だ。名を天使の羯磨（テロス・アズライグ）に導かれし赤龍帝だ』
　ほ、他の神滅具の強化ユニットに特化した神滅具の亜種禁手……。
「……うわぁ」
　思わずカズヒ姉さんとはもって、なんか顔が赤くなった。
　思われすぎだろイッセー。コレ、何があったか知らないけどＬＯＶＥってないか？
「そっか！　俺が頑張って元気になってくれたなら、ちょっと照れくさいぜ！」
　ボケ倒すな！　これはそんなレベルじゃない！
　ＬＯＶＥでなくても忠義とかそんな感じだ。現実を直視しろハーレム願望!!
『ちなみにこの状態は、赤龍帝の（俺）籠手の中に歴代保有者の怨念ともいえる残留思念が残っているのを逆手に取り、記録された亜種禁手を「至る可能性」と捉えることで発現させている。基本性能は劣るが内部に人を封じてその力を使うことが出来てな、おかげで究極の羯磨との同調でブーストが入っているわけだ』
「……ならばぁ！」
　その言葉に、コカビエルが吠えた。
　攻撃が中断したと思ったら、あいつの背後に大量の光の槍が。
　一発一発は小さいけど、軽く数百入ってないか、おい。
「目覚め立てならば限度があるだろう。一撃の重さではなく物量で処理落ちを狙えばどうなる！」
「……なら、答えは簡単ね」

そこで、カズヒ姉さんが一歩前に出た。
同時に、俺達をちらりと横目で見る。
「赤龍帝。今の状態で最大の一撃を放つのと、大火力の一撃を譲渡で強化するのとどっちが上？　あと、和地はそんな大火力の隠し玉とか、あるのかしら？」
その言葉に、俺達は目を見合わせる。
『相棒。今の不安定な状態では、あてがあるのなら譲渡で強化する方が有効だろう』
「大技なら一応ある。ただ、普通に使っても一撃で最上級堕天使上位（コカビエル）を倒すとか流石に無理だけど」
いやほんと、そこは無理だからどうにかしてほしいんだけど―
「……いけるか？　ドライグ……シャルロット」
イッセーはそう言って、籠手にちらりと視線を向ける。
『大丈夫だろう。そちらはどうだシャルロット？』
『……大丈夫です。やってください、イッセー！』
「ならいける！　絶対やってやる!!」
信頼してるな。なら、俺も信用するか。
「話は決まったようね、なら時間稼ぎは任せなさい!!」
その瞬間、カズヒ姉さんは真っ向から突撃する。
同時に、コカビエルはカズヒ姉さんをあざ笑う。
「愚かな。先の戦闘でお前が俺より弱いということは分かっているだろうに!!」
そして千すら超える大量の光の槍が襲い掛かり―
「創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌めく流れ星」
―起動詠唱（ランゲージ）が鳴り響き、更に取り出したロザリオ型の星辰体感応合金（アダマンタイト）が感応する。
カズヒ姉さんも星辰奏者（エスペラント）だったのか。っていうか、武器じゃなくてアクセサリーとしてアダマンタイトを使うってのも意外なパターンだな。ちなみに俺はエイムズショットライザーに仕込まれてる。
などと思ったその瞬間、襲い掛かった光の槍をカズヒ姉さんが強引に弾き飛ばす。

同時に、カズヒ姉さんの全身を銀の光が薄く包み込んでいた。
そのまま放たれた光の槍をことごとく吹き飛ばし、コカビエルにトンファーの一撃を叩き込む。
そして思った以上にかなり重く入る。
「なんだと……お!? 貴様、この力は、星辰奏者にしても出力が上がりすぎだろう……っ」
「ごめんなさい。爆発力と突破力を持ち味にしてるものでねぇ！」
い、一対一で真っ向から渡り合えてるぅ!?
いや、流石に時間が経つと敗けそうだけど、それでも当分しのげるレベルだろ、あれ。
一対一でここまで戦えるとか、一人で倒せるような気がするんだけど。それでもとどめを聞く当たり、決定打にはまだ足りないってことか？
なら―
「……いけるぜ九成！」
「なら任せろ」
―俺は俺がやることをやるのみだ！
『ＳＡＶＥ』
ショットライザーを操作し、俺は本命の準備に入る。
反動を抑制する為に両手で構え、両足も広げて準備完了。
そしてコカビエルはカズヒ姉さんに気が向いていて、まだ気づいていない。
だから―
「イッセー、頼む！」
「ああ、行くぜ赤龍帝の贈り物（ブーステッド・ギア・ギフト）！」
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』
流れ込む倍加の力も込めて、俺は狙いをコカビエルにつける。
「避けろよ姉さん!!」
『サルヴェイティングブラスト』
その瞬間、放たれるのは絶大なエネルギーが込められた数十発の一斉射撃。

同時に、俺の声を聴いていたカズヒ姉さんは即座に伏せる。
そして姉さんが隠していたことで俺達が見えなかったコカビエルは反応が遅れ―
「な―」
―全弾一気に直撃する。
そして、コカビエルから何かが壊れる音がした。
その瞬間現れるのは、狂気が篭った死んだ目の一人の少年。
ああ、彼がコカビエルのサーヴァントってことか。
なら……っ
『ＳＡＶＥ』
「……悪いな。恨んでくれていい……っ」
……コカビエルの力の影響か、少年の周囲から魔獣が生まれようとしていた。
あの時の白やら赤やら紫の魔獣。ここで止めないと逆にこっちがまずくなる。
何より、あんな目のまま誰かの涙を作らせるわけにはいかない。
だから―
『セーブサルヴェイティングブラストフィーバー』
―この全力の膝蹴りで、打ち倒す！
そして、完璧に致命傷を与えた手応えを感じた。
「……これで、お前の負けだ！」
「き……貴様ぁあああああ!!」
状況が詰みになったと確信したコカビエルが、全力で俺に攻撃を叩き込む。
回避は不可能じゃなかったが、俺はあえて食らう。
その覚悟があったからこそ、その一撃を持って俺はそのままこいつを掴む。
「貴様―」
気づいたか。だがもう遅い。
後ろに銀と赤が迫ってるぜ？
「これで終わりよ―」

「―コカビエルッ！」
後頭部にトンファーと拳を喰らって、コカビエルは今度こそ沈む。
それだけを確認して、俺は俺で思いっきり食らった一撃とそれまでの激痛の合計で―
「……お仕事、完了……ぅ～」
―限界を超えて、一気に気絶した。

三勢合一編　第十話　戦い終わって

―ふと気づいた時、そこは木製の天井だった。
体を伸ばして体調を確認しながら起き上がると、周りを確認する。
窓からは林が見えるけど、その向こうには校舎っぽい建物が見える。
あ、ここリアス・グレモリー眷属のアジトの、駒王学園旧校舎か。
そこに気づいた時、ドアがノックされてゆっくり開けられてくる。
そこからこっそり覗いてくるのはヒマリ。あといい匂いがしているから、クックスが食事の準備でもしてくれたのか？
「……和地っ！　起きましたのねー！」
「へぶぁ!?」
勢いよくタックルかましてくるな。いや、冗談抜きでやめろ。
まだ疲れが残ってるから。真剣にまだ体がきついから。
「ヒマリ様は落ち着いてください。とりあえず朝食にいたしましょう」
うん、ありがとうクックス。ついでに言うと引っぺがしてくれると更に嬉しい。
「……む～。戦闘後に気絶なんて初めてですのよ？　心配にもなりますのよ？」
クックスに促されても、ヒマリは俺の胸元に顔を埋めて離れない。
いやもう、何故かヒマリに懐かれてるんだよなぁ。
孤児になってから相方として選ばれてるし、ザイアが指定したそのタッグが崩壊したケースはあまりない。ついでに言うとザイアの思想上、俺もヒマリとそういうことをしているわけであるのですが……。
「大変でしたわね。でも、頑張って成果もあげてくれたのでよくやりましたの。良い子良い子ですのよー」
……何か方向性が奇妙なことになっている気が、しないでもない。
相棒として気は合うし、懐かれている自覚もある。同時に時々こう

して可愛がられてる。
なんだろうか、姉貴分のような相棒のような、そんでもって子供を愛する母親のような雰囲気すら垣間見える。
俺にとって、ヒマリ・ナインテイルはそういう関係性だった。
素直に甘えるように体を預け、そしてあやすようにぽんぽんと背中を叩く。
年齢より子供っぽいのに、極稀に俺より遥かに年上の様に感じる、どこか不思議なこの相方。
……なんというか、俺も一緒にいると落ち着くから困ったもんだよ。ザイアコーポレーションの慧眼には感心するぜ。
「……とりあえず、おなか減ったから何か食べさせてくれない？」
「おっとそうでしたの！　クックス、今日の朝ごはんはなんですの？」
俺の言葉に我に返り、というより空腹に気づいたのかそっちに意識が向いた感じだ。
それに対してクックスは苦笑して、そして持ってきていたトレイの蓋を開ける。
出来立てのホットサンドイッチが、二人前。
それに目を輝かせるヒマリの横で、俺は思わず苦笑した。
……行動、読まれてるなぁ。

そして朝食を食べ終えたら、簡単な健康チェックを受ける羽目に。
……どうもルイ１７世の宝具は、多臓器癌の苦痛を味合わせるってものらしい。
あくまで苦痛を味合わせるだけだから肉体に影響はなさそうで、とはいえ万が一があるから念の為全員検査は受けているらしい。それにノーシーボ効果って言って、思い込みは悪い方向でも作用する。本当に臓器の機能低下ぐらいありかねない。
ってわけで、こうして俺は健康診断を受ける羽目になっている。

異能的なところにおいては、リーネスが担当する形。そして現代医学的な科学的アプローチには、担当が一人いるわけだ。
「……うっし！　これにて診察完了！　ダメージは確認できないからめでたいってもんだ！」
「そうだなキュウタ。いや、ほんと手間かけさせたな」
「ふふ。二人ともご苦労様ぁ」
医療担当のヒューマギアであるキュウタと、魔術回路研究から治癒魔術にも造詣が深いリーネスの太鼓判があるなら、まあ大丈夫だろ。
念には念を入れて本格的な検査もいるだろうけど、まあ当面は大丈夫だろ。
「……それで、俺が気絶した後はどんな感じになったんだ？」
気絶してるからその辺が分からないんで、俺は念の為に聞いてみる。
まあ、悪魔側の陣地に間借りできてるなら、そんな悪いことにはなってないんだろうけどさ。
実際そうなのか、リーネスは微笑みながら俺の頭をなでる。
褒めてくれてるんだろうけど、なんでヒマリにしてもリーネスにしても俺のことを小さい子供のように扱う時があるんだろうな。
「どうということもないわぁ。コカビエルが倒されたことで、当面の危機は回避したものぉ。サーヴァントの力を利用して足止めに向けられていた魔獣が消えたことで、白龍皇と銀髪の殲滅女王がこっちに来て、戦後処理は殆ど任せたわぁ」
……対コカビエル戦力が、コカビエルの足止めに見事に足を引っ張られてたってわけか。
結局全部終わって漸く来れるようになったんだから、この辺はコカビエルの作戦勝ちか。イッセーが凄いことになってなかったら、かなりまずかったかもな。
俺が最悪の想像をちらりとして寒気を感じてると、キュウタはうんうんと頷いていた。むしろ感動していた。
「あのイッセーって奴は漢（おとこ）だったな。……かなりスケベなのは問題だが、ああいう野郎は大好きだ」

キュウタはうんうんと頷いてるけど、普通そういうのはちょっとばかりとかいうんじゃないか？
……いや、どう考えてもそんなレベルじゃない。悪魔として異常と言ってもいい魔力の低さで、普通に魔力使うより遥かに超効率で衣服を破壊する技とか、並みのスケベじゃ開発できない。
まあそれはともかく。
「……ま、いつも助かってるよキュウタ。いやほんと、付き合い長いからなぁ、俺達」
「そういう意味じゃあ、リーネス様には感謝だな。態々私費まで使って、俺達を集めてくれるんだからよ」
そう言い合い、俺とキュウタはリーネスに視線を向ける。
リーネスもそれを受け止めて、クスリと可愛い笑顔を浮かべている。
「どういたしまして。私もあなた達には感謝してるから、お互い様よぉ」
……いやほんと、リーネスには感謝だよ。
俺達の面倒をしっかり見てくれてるからこそ、今の俺達がここにいるんだからな。

そしてリーネスやヒマリと一緒に、リアス・グレモリーに挨拶をしに来てみたら―
「やあ、起きたのかい？」
「……なんでいるんだよ」
―まさか、聖剣使いのゼノヴィアが此処にいるとは思ってなかった。
あの、どういうこと？
俺が視線をリアス・グレモリーに向けると、何故か自慢げな表情になった。

「ふふ。自慢の新しい眷属よ。デュランダル使いが眷属なんて誇らしいわ」
……俺はゼノヴィアを二度見した。
ゼノヴィアもその意味に気づいたのか、悪魔の翼を広げて見せたし間違いなさそうだ。
いや正気かよ。本気かよ。
軽くドン引きしてると、イッセーがうんうんと頷いていた。
「だよなぁ。しかもついさっき神様に祈って頭痛めてたし」
「考えなしって言葉を体現してるな、オイ」
俺が半目を向けると、ゼノヴィアは視線をついと逸らす。
自覚はあるようで嬉しいよ。
「……いや、既に主の死を知っている以上教会にはいられないだろうと思っててね。実際その旨を伝えたとたんに、デュランダルの返却すら言わずに黙認しているのだから……」
なんてことをぶつぶつ言ってるところ悪いんだけど、俺は一つ聞きたいことがある。
「ならカズヒ姉さんは？　その流れだと、姉さんもリアス・グレモリーのお世話になってないとおかしいだろ？」
俺がその辺を聞くと、今度は全員少しうつむいた。
……カズヒ姉さんは何をやらかした。
俺が嫌な予感を覚えていると、姫島朱乃とか言ったグレモリーの女王が、口元を隠しながら視線を逸らしつつ口を開く。
「上層部にその辺りをにおわせたところ「知っている者も少なからずいるから、ある程度の手間さえかければ大丈夫だ」と言われたそうですわ」
「……ついでにゼノヴィア先輩にも伝えるように言われたそうですが、時既に遅しでした」
塔城小猫もそんなことを言っている。
なるほど。つまり考えなしに動いて手遅れになったと。
「ちなみに、カズヒ（彼女）はゼノヴィアに「自分から売り込んで悪魔になったのなら、相手が契約を反古にしない限りはしっかり眷属として動きな

さい。それが責任というものよ」って真っ先にゼノヴィアに釘を刺していたよ」
「……ぐうの音も出ない」
木場祐斗の意外と上手い声真似に、ゼノヴィアが本気で肩を落としていた。
いや、カズヒ姉さんはそういうこと言うよな。
まあ実際、自分から売り込んで悪魔になっておきながら、即座に手の平を反して教会の暗部に寝返るとかないだろ。流石にそれは暗部側もなんか言うだろ。当然の反応だな。
人間、感情のままに動いて良い時と悪い時がある。これは悪い時だな。
うん。自業自得だから悪魔として頑張れ。一応敵対勢力だから応援はしないけど。
「クッ！　だがしかし……いやでも……」
「ゼノヴィアさん、お気持ちは分かります」
そして悩みまくるゼノヴィアに、アーシア・アルジェントがそっと手を取って微笑んでいる。
いやあのすいません。貴女、その人に殺されかけてませんでしたか？
「……あれが菩薩、あるいは女神ですのね」
「……キリスト教徒の女の子に向ける例えじゃないわよぉ」
ヒマリの発言にリーネスがツッコムけど、まあ確かに。
見方によっては甘いともとれるし、カズヒ姉さんはそういうことを言いそうだなぁ。
俺としても、涙の意味を変えるのは構わない。だがそれは理不尽に苦しめられる涙に対して出会って、自業自得の因果応報まで変える気はない。
だけどまあ、いいか。
俺達の勢力ではないし、俺やカズヒ姉さんの価値観が唯一絶対ってわけでもない。
他人の価値観をむやみやたらと非難して否定するような趣味は、俺

には全くこれっぽっちもない。
だけど―
「ああ、主よ……ぁう!?」
―悪魔なんだから、むやみに神に祈るのはどうかと思う。
とりあえず、友情が結ばれたようで何よりです……か？
俺がそんな風に〆ようとしたとき、イッセーが思い出したかのように俺に近づいてきた。
「そうそう。九成には聞いておきたいことがあったんだ」
「ん？　なんだよ」
そう聞き返す俺に、イッセーは一枚の紙を見せた。
……すいません円マークの右側に、数十億円（0が9個）ほどあるんだけど。
「……何だこの金額」
「いや、その……な？」
イッセーも言いにくそうにしてるんだけど、その時足音が響いた。
「それは私も説明します」
……あれ？
そこにいたのは、たわわなおっぱいを持つ一人の女性。
あ、サーヴァントのシャルロット・コルデーさんか。
……いや、ちょっと待とうか。
「あの、聖杯戦争って結局どうなったんだ？　まだ続いているってオチ―」
「それはないわぁ。コカビエルが他の参戦者を撃破してたから、そのコカビエルとサーヴァントのルイ17世が敗退したことで、優勝者はそこのシャルロッテさんよぉ。だから、マスターになっていたイッセーも優勝者ねぇ」
俺の疑問にリーネスが答えてくれる。
聖杯戦争の研究をやっていた人だし、この辺は信頼できるな。
ってことは、どういうことだ？
「まず先に言うと、私が願ったのは「マスターを兵藤一誠としている場合に限っての、単独行動スキルの強化」です。結果としてイッセーをマスターにしている限り、よほど異常な魔力消費がない限りは魔力的

負担も聖杯の加護も無しに持続できます」
なるほど。
よく知らないけど、受肉ではなくイッセーをマスターとして現界し続けることを選んだわけか。
俺はそこで、イッセーをちらりと見る。
もはやこれ可能性は一つだけだろ。間違いなくイッセーも分かってるはずだろう。
だから言え。ハーレム願望持ち（お前の性格）なら、自慢したいんだろう。
羨ましがってやるからさっさと言え。実際あのたわわなおっぱいに好かれるとか、年頃の青少年として羨ましいから。
そしてイッセーは、凄く照れくさそうに鼻の辺りをこすっている。
「……へへ。俺ってば、主的な感じに相応しいって思われたみたいでさ。へへ、もてたい男としてはちょっと複雑だけど、部長やアーシアで慣れてるから、大丈夫さ」
……。
俺は、ちょっとグレモリー眷属の方々を見る。
呆れ半分って感じで、皆が苦笑いしていた。
うん。
「お前、馬鹿だったんだなぁ」
「どういう意味だよ!? いや、馬鹿であってもシャルロッテに恥ずかしくないように頑張るしかねえからな！ 覗き断ちから始めるからな!!」
それは最初からやめろ。
いい歳こいて覗きをするな。警察に通報されたら一発アウトだぞ普通。
「……もー。男の子はエッチで普通ですけれど、そんなことをして迷惑を掛けたらいけませんのよ！」
ヒマリもそうツッコミを入れるけど、たぶん今はそこじゃない。
軽くため息をついている、シャルロットやらリアス・グレモリーやら約数名。
うん、同情します。あとイッセーは自覚だけすればハーレム完成す

るだろコレ。
「……で、この数十億円はいったいどういうことで？」
俺はそこに話を戻す。
いや、ほんとどういうこと？
「それがですね。その、コカビエルの作った聖杯の制度では、可及的速やかに願いを叶えないと大惨事が確定するようだったので、マスターのイッセーにも願いを叶えるよう促したんです」
「聖杯の精度とかの問題もあったから、ちょっと急いで叶えてもらおうとせかしたのよねぇ」
と、シャルロットの補足をリーネスがしてくれる。
頬に片手を当てて困り顔をしているところ悪いんだけど、ちょっと嫌な予感がしてきたぞ？
そんなわけで、ちらりとイッセーを見ると、イッセーもちらりと視線を逸らした。
「……ハーレム王や上級悪魔には、甲斐性が必要だと思ったんだ」
あ～。即物的に財源をお願いしたと。
「……そしたら結果的に漠然としたイメージを拾って、大量の石油が落ちてきたのよ。……そのまま」
グレモリーのその疲れた言葉に、俺はちらりとイッセーを見る。
もの凄くいたたまれなさそうにしているけど、なんとなくイメージは分かる。
「現代でハーレムっていうと、イスラム圏とかがイメージしやすいからな。石油王か」
「……せめて、家の土地から噴出して欲しかった」
融通が利かない願望機だ。同情するぜイッセー。
「……で、なんで俺に？　お前の石油なんだろ？」
「いや、お手間をかけちゃったし部長や魔王様達にも分けることにしたけどさ？　俺がコカビエルの倒せたのは、シャルロットやカズヒやお前のおかげじゃん。だからその分とかだよ」
……律儀だ。
おいおい。俺達、一応まだ敵対勢力だぞ？

態々用意してくれるとか、良い奴だなオイ。
「そういうわけだから遠慮はしなくていいわよ。特にあなたはバーサーカーを直接討ち取ったのだから、私としても文句をつける気はないわ」
「ちなみに、カズヒ・シチャースチエは「じゃあ此処に全額寄付して」と言って「性犯罪被害者救済ネットワーク」のＵＲＬを見せてきたよ。……悪魔から施しを受けない上に皮肉まで効かせてきたね」
グレモリーと木場祐斗がそう言うけど、確かに皮肉が効いた返しだな。
……んじゃまあ、俺は―
「じゃ、俺もカズヒ姉さんに倣うか。いいかな、リーネス」
「構わないわよぉ。人の報酬にとやかく言うわけないじゃない？」
よし、言質取った。
なら俺は―
「……んじゃ、とりあえず此処と此処と此処とあと此処と此処にも。おっと、つい最近此処も義援金募集してから、ついでに此処も含めて。で、それに俺の直接の取り分に神の子を見張（チ）る者に上納する分を含めて等分という感じで良いか？」
「多いな配るところ！　っていうかお前、なんでそんな寄付金募集しているところ知ってるんだよ!?」
「悲しい涙を嬉し涙に変えることがモットーでな。これでも組織の給金は三割ぐらい常に回してるんだ」
いや、自分の生活を投げ捨てるってのもどうかとは思うし、俺にも欲望ぐらいあるぜ？
ただし、それはそれこれはこれ。こういうところに義援金を送ることは胸を張って善行だ。自分の人生をきちんと送ることも否定しちゃいけないしな。
あといきなりこのレベルの大金が入っても、自分を保てる自身がちょっとないから。そもそもこれだけ分割しても、人間の一生なら余裕で賄える金額は要ってるしなぁ。銀行に貯金すれば、普通貯金でも利子で一生食っていけるだろ。

「……でもまあ、願望機にする聖杯の質が悪かったのかしら？　どうも五騎規模でやってたはずなんだけれどぉ」
「「これでもまだ甘いのかよ!?」」
リーネスのトンデモ発言に思わず、俺とイッセーは同時に絶叫した。
「……悪魔側についたことの告解も込みで、教会に全額寄付してよかったですね」
あとシャルロットにも渡してたのか。
シャルロットは願いを叶えているわけだから、別にいいかとも思うんだけど。
俺がそんな気持ちを込めて視線を向けると、イッセーもその意図には気づいたのか首を傾げた。
「なんだよ？　シャルロットがいたから俺達は勝てたんだから、その分はちゃんと渡さなきゃだろ？」
……なるほど、これがハーレム王になれる男の器か。
……実をいうと、ちょっと興味がないでもない。
まあ、日本円換算で数億円をゲットしたうえできちんと生活に困らないレベルを仕事をしてゲットしているわけだ。
うん、俺も数人ぐらいなら侍らせれる甲斐性あるかも。……疲れた体を体で癒してくれる、可愛いお嫁さん達かぁ……。
ちょっと妄想してしまう、年頃の青少年なのであった。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……へぇ。コカビエルを赤龍帝が倒したのか」
「サーヴァントのマスターとなって……のぉ？　しかもエイムズショットライザーとは、これはまた」
「気になるかい？　君も昔はいたんだろう？」
「体よく利用していただけじゃ。最も、良くて利用しあえて、下手をすればいいように使われるだけと思っておったがのぉ」
「実態はいいように利用するだけで済めた辺り、君は英雄の才能があるよ。流石はかの王にあやかった名を名乗るだけのことはある」
「まあのぉ。最も、肝心の本人はただの腑抜けじゃったが」
「手厳しい。で、白龍皇からの返事は色よかったと。どうするんだい？」
「開戦の号砲に顔を出さぬのも無粋なのでな。それに、奴も宣戦布告をするという」
「なるほどね。じゃ、今回は君たちに任せるか。カテレア達には待機してもらうんだっけ？」
「あまり幹部が軒並み顔を出してものぉ。カテレアには「とどめを刺す前に「よろしくと伝えるように言っておいた」とか言われた方が屈辱的じゃろう？」と言って許可をもろうたわ」
「プッ！　確かにそうだけど、そんなことでよく乗ったねぇ。あいつら本当に馬鹿なんだな」
「相手がバカだと思ってばかりな奴も、案外はたから見ると馬鹿なものじゃぞ？　まあ、馬鹿をやるぐらいで覇道にはちょうどいいがのぉ？」
「怖い怖い。鼻糞を笑う目糞にならないよう、精々気を付けるとするかな？」

「では、宣戦布告は妾達に任せてもらうぞ、曹操？」
「了解だ、聖杯戦争を幾度となく勝利した我らがサブリーダー。九条・幸香・ディアドコイ」

三勢合一編　第十一話　自分から首を切り落としやすくすることが土下座の形という話があるから、謝るときは土下座は最後に取っておこう

時は七月。プール開きもそこかしこで行われているだろう、日本の初夏。

神の子を見張る者のプログライズキー研究部隊。ザイアコーポレーションの遺産を研究することも踏まえた試験部隊、ＡＩＭＳ第一部隊のメンバーの内、リーダー兼監察官でもあるリーネスにつれられた二名。すなわち、俺こと九成和地に、ヒマリ・ナインテイル。

俺達は、今駒王町に存在する私立学園駒王学園の高等部にやってきていた。

「……準備はいいかしら？」

リーネスがそう告げ、俺とヒマリは心からの本気で頷いて返す。

「……恩を仇で返すこの所業、私達も本気で行うことがせめてもの礼儀ですもの。気合満タン、バッチオーケーですわ」

そう意気込みを入れ直すヒマリに、俺も応えるように気合を入れる。

「クックス達を置いてきたのはあれだからな。今のあいつらじゃあ、下手したら一撃で吹き飛ばされるからな」

俺はそう思うしかない。

つい先月かそこら、俺達はグレモリー眷属と共闘した。

暴走して戦争を引き起こそうとしたコカビエルの追撃。その過程でエクスカリバーを奪い、魔王の妹を堕天使の幹部が殺すことで冷戦状態に火を起こそうとした、何考えてるんだあのバカ野郎はと言いたくなる所業。そんなことされた後に、追撃のエクスカリバー使いに現地を縄張りにしているグレモリー眷属。

……よくぞ共闘できた。リーネスがあえて情報を開示し、同時に相手方の上層部にも書状を送ってくれたおかげだ。あと、リアス・グレ

モリーやカズヒ姉さんがその辺りに応用で柔軟なおかげだろう。
そして、俺達の戦いは熾烈を極めた。
聖杯戦争を利用したコカビエルの仕込み。更にサーヴァントの力を己に上乗せしたその強敵っぷりは、冗談抜きで強敵だった。
サーヴァントと二人三脚で至った、二重神滅具による二重禁手。その前人未到の領域に至った赤龍帝、兵藤一誠。サーヴァントであるシャルロット・コルデーとの連携がなければ、死人が大量に出てもどうにも出来なかったかもしれない。そう断言できる戦いだった。
その戦いを潜り抜けた者に、恩を仇で返すような苦しみを与えることに、俺達の心は正直痛む。
だけど、世界は俺達だけで構成されているわけじゃない。
俺達は現場の部隊だから、権限には限度がある。カズヒ姉さんもエージェント一人であり、上層部と直接の繋がりがあるわけじゃない。リアス・グレモリーはグレモリー本家の次期当主だけど、所詮は次期当主でなので権限は上級悪魔としては高い程度止まり。
だから、上層部の判断や行動までどうにかすることはまずありえない。振り回されることはあっても振り回すことは出来ないし、出来る方が問題だ。
そう、だから腹をくくるのみなんだ。
「覚悟は、いいわねぇ」
「了解！」
そして俺達は、グレモリー眷属のねぐらでもある駒王学園旧校舎に踏み込み―
「「この度は、神の子を見張る者の総督がご迷惑おかけしましたぁあああああああ!!!」」
堕天使総督（ウチのトップ）！　と　い　う　アザゼル（馬鹿）　が、　正　体　を　隠　し　てグレモリー所属の赤龍帝（セーイッ）を指名してお得意様になっていたという事

実。
しかも性格からして適当なタイミングで正体を明かすとほぼ確定。知られた瞬間にイッセーはビビるだろうし、見方によっては営業妨害。
……その情報を察知して、「これは謝りに行った方がいいんじゃないか」と判断して菓子折りもって頭下げに来たわけだよ。
そして今―
「本っ当に苦労しているのね。確かに魔王様もプライベートでは非常に緩いけれど、堕天使も相当だわ」
「そっちも大変なのねぇ。あ、これクックスに作ってもらったお菓子よぉ。マカロンと月餅とどら焼きがあるけど、どれがいいかしら？」
―上司の愚痴でリーネスとリアス・グレモリーが盛り上がっていた。
どこも、大変だなぁ。
俺がそんなことを思っていると、コトンと隣にティーカップが。
「最上級堕天使は誰も彼も迷惑な方々ばかりのようですわね。そちらも苦労なさっているのでしょう？」
……姫島朱乃さんだっけ？　前にも思ったけど、堕天使に対して毒がないか？
いや、悪魔と堕天使は敵対してるから仕方ないけどさ？　それにしてもこう、個人的な嫌悪が見え隠れしてるんだけど―
「うえええええええん！　部長ぅぅぅぅリーネスぅぅぅぅぅ！　正直本気でビビったよぉおおおおお!!!」
「ああイッセー。本当に大変だったのね」
「ごめんなさいねぇ。ほら、お詫びにぱふぱふ」
そしてイッセー、なにサラリとWおっぱいにダイレクトだいぶ決め込んでる。
正直その豊満なおっぱいサンドイッチは、男としてちょっと羨ましいぞ。カズヒ姉さんはまな板だけど、貧乳に一目惚れしたこととおっぱいに興奮しないかは別問題だ。
……スキンシップで味わってるけどね！　カズヒ姉さんに悪いか

らもうちょっと抑えた方がいいのかもな!!
「うんうん。リーネスのおっぱいはとっても柔らかいですもの。しっかり癒されると良いですわ」
そしてヒマリ。……その体制のイッセーをなでるのはいかがなものか。
というより、こいつの性格から言ってやる行動はそこじゃない。
「ついでにお前もおっぱい押し付けたら?」
「体勢が悪くてコケそうですの……」
そういうことかと、返答に苦笑する。
自分で言うのもなんだけど、俺が一番あそこでまともだったからなぁ。俺ですら日本の一般人からずれてるのだから、ヒマリは更にずれている。
と、いうことで。
「とりあえず、こういうことをよくする人なんで、とりあえずこれを利用して余計な策謀とかはしないと思っていいぞー」
「なるほどね。まあ、何かをしたとしても大丈夫だよ」
俺がそう馬鹿総督のフォローを入れると、今度は木場祐斗がそう返答する。
なんだなんだ? なんか切り札でもあるのか?
そう俺達の視線が集まると、どこか木場祐斗の顔はほんのり赤くなってた。
……何だろう、薔薇の花が咲き誇りそうな雰囲気を漂わせてる気がする。
「イッセーくんは、僕が守るからね」
……。
「イッセー、尻には気を付けた方がいいんじゃないか?」
「最近、木場を後ろに立たせるのが怖くてたまらないんだ」
「酷いよ二人とも!?」
いや、そのホモ臭いセリフは年頃の男にとっては引く十分な理由だぞ。
俺とイッセーは少しだけ、だけどしっかりと後ろに下がる。

まあそれはともかく、リーネスとリアス・グレモリーはため息をついた。
「だけどまあ、三大勢力の会談前に火遊びはやめてほしいわねぇ」
「そうね。一応文句は言いたいけれど、堕天使の総督相手だと流石に簡単にはいかないもの」
はぁと、ため息がシンクロする。
まあ、正直張り倒した方がいいんじゃないかとすら思いたいんだが。いや真剣にどうにかしてほしい。
トップ陣営にフリーダムな奴が多すぎると、下としては真剣に苦労する。特にトップ中のトップが一番悪戯好きなのが酷い。
誰か物理的に手綱を握る奴がいてほしい。神の子を見張る者のノリだと出来ると思うんだよ。
そう、俺が思った時に気配が増えた。
「アザゼルは昔からそういう男だからね。まあ気にしない方がいいさ」
その言葉と共に、なんか洒落にならないオーラを感じる。
敵意とかそんなんじゃない。ただただ強大というほかない、そういう自然体の気配。
そして俺が戸惑っていると、グレモリー眷属の多くがひざまずき、リアス・グレモリーも面食らっていた。
「……魔王様!?」
え、魔王!?
俺が振り返ると、そこにいたのはリアス・グレモリーを思わせる紅の髪を持った男性。
外見は二十代だが悪魔なのでそこは論外。それはともかく魔王で紅の髪となれば、現ルシファーしかありえない。
ああ、現魔王サーゼクス・ルシファーは、リアス・グレモリーの兄だったなぁ。
「楽にしてくれ。今日はプライベートで来ているからね」
そう朗らかに笑うサーゼクス・ルシファーに、ヒマリが目を輝かせてぴょんぴょんと飛び跳ねていた。

「おぉおおおおおお！　魔王ですの！　イケメンですの！　カッケーですのぉ!!　ポーズとか似合いそうですのぉ!!」
「失礼なことを言うのはよそうね！」
思わず取り押さえるかどうか真剣に考えるよコレ。
っていうか、大真面目に突っ込むけど敵対勢力のトップに見せる反応じゃないから。
そう思ったその瞬間、サーゼクス・ルシファーが動きを見せる。
流石に怒ったかと身構えた瞬間、サーゼクス・ルシファーは大仰に手を広げた。
「ふはははは！　刮目するがいい、この魔王ルシファーの威光に―」
その瞬間、後頭部にハリセンが叩き付けられた。
「サーゼクス様、そういうサービスはおよしになってください。対象年齢が違いすぎます」
そういう銀髪の人は、たぶんグレイフィア・ルキフグスだ。
なんだろう、なんかこう、他人の気がしない。
俺とグレイフィア・ルキフグスは目が合うと、ちらりと隣を見る。
そこにいるヒマリやサーゼクス・ルシファーを見て、何となく理解できた。
「そちらも大変ですね」
「お互い様です」
苦笑を交わし合うぐらいには、振り回されるタイプらしい。
「まあ気を取り直そう。まずはゼノヴィア君だったかな？　リアスの新しい眷属にデュランダルの使い手がいるというのは驚いたよ。ぜひ祐斗君と並び立てるリアスの剣になってほしい」
「これは照れる。というか、まさか信徒として滅ぼすべき魔王を主の兄君として敬うことになるとは思わなかった。……主よ、私は早まったのではうぁ!?」
……自爆芸が身についてないか、ゼノヴィアの奴。
というか、悪魔になってから数週間は立ってるはずだろ？　それで悪魔になった直後の時と同じような失敗ってどうよ？
「いつもこうなのか？」

「アーシア先輩を含めて、結構な頻度でなってます」
俺がつい呟くと、塔城小猫がそう返答してくれた。
そうか、いつもなのか。
学習能力がないのか、信仰心が抜けないのかどっちなんだろうか。
「こ、これは！　ジャパニーズ天丼ですのね！」
「絶対に違うのでやめてください」
ヒマリのボケ倒しに、ドアを開けながらツッコミの声が聞こえる。
と、そこにいたのはシャルロット・コルデーだ。
どうやら私服も用立ててもらったのか、現代風の夏服に身を包んでいた。
そしてシャルロットに気づいて、イッセーが片手をあげてリアス・グレモリーも微笑んだ。
「おかえりシャルロット！　そして大変だったんだよぉおおおお！」
「おかえりなさい。いつもバイトに精が出るわね」
「イッセー、よく分かりませんが大変なことがあったみたいですね。あとリアスさん、問題なくバイト代が入ってきました！」
イッセーをぽんぽんとあやしながら、シャルロットは一枚の封筒を見せる。
バイト、代……？
「あらぁ？　バイトなんてしてたのぉ？」
「ああ、現代文化に慣れる事も兼ねて、自分から頼んできたんですよ。登録制のバイトに入って、ほぼ毎日一度はやってますわね」
リーネスに応える姫島朱乃の言葉に、俺は感心する。
なんとなくシャルロットの方を見ると、ちょっと照れくさそうにしていた。
「イッセーに恥じないようにと思いまして。それとサーゼクス・ルシファー様ですね。妹さんにはマスターともどもお世話になっています」
「いやいや。君がいなければコカビエルにリアスが殺されていたかもしれないんだ。むしろ感謝するのはこちらの方さ」
そう朗らかに返しながら、サーゼクス・ルシファーはこっちに視線

を向ける。
「さて、私的な用事もあったが、ちょうどいいから君達全員に聞いてほしいことがある」
……というと？
俺達全員を見渡して、サーゼクス・ルシファーははっきりと告げた。
「今度行われる三大勢力合同の会談だが、コカビエルの一件を主題とする都合上、君達全員の参加はほぼ確定事項だ。そして会談場所は、その中心地となったこの駒王学園で行うことになったよ」
……わぁお。
こりゃまた、フリーダムな出来事になったもんだなぁ、オイ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そしてその連絡を、彼女のまた通達されていた。
血濡れの部屋の中で、カズヒ・シチャースチエは苦笑を浮かべる。
「……暗部組織が会談のゲストってのも考え物ね。異形社会は人間社会に比べて自由だけど、それもそれで考え物だわ」
そうため息をつきながら、カズヒは周りを見渡した。
イスラム教とかが多い原理主義テロ組織だが、宗教を源流とするテロ組織はそれに限った話ではない。
今回は、サウザンドディストラクションで流出したプログライズキーや星辰奏者技術を利用する腹積もりのテロ組織の殲滅に動いていた。
厳密にいえば、そこに寄りにもよって現地の司教が関与しているという事態の対処だ。表の部隊がテロ組織そのものを制圧している間

に、それに反応した裏のつながりを断ち切るのが目的だ。
そしてしっかり仕事を終え、カズヒはふと天井を見上げる。
今この時活動しているのは、確か教会の星辰奏者部隊だったはずだ。
星辰光（アステリズム）を運用し、かつ身体能力が総じて常人を大きくしのぐ星辰奏者（エスペラント）は、必然的に下位の異形を上回る。悪魔祓いとしての技術も踏まえれば、単独でも中級悪魔を打倒する程度は十分可能だ。
加えて身体機能がすべからく向上する関係上、自然治癒力も打たれ強さも常人どころか下級天使すら凌ぎうる。
それもあり、サウザンドディストラクション後に星辰奏者の強化技術が流出してからは、教会ももちろん積極的に投入した。
とはいえ数においては少しずつ増やすしかないこともあって、優先的に配備されたのは特殊部隊だ。
大規模作戦において、あえて先陣を切ることで他の部隊の士気を向上させることを目的とした精鋭部隊。名をデュナミス聖騎士団。
難局にある善人に勇気を与え、鼓舞し、その力を引き出す存在である力天使にあやかったその騎士団は。その性質もあって危険度は非常に高い。
故に、生存能力が大幅に上昇する星辰奏者を中核とした形に再編されて今に至る。
教会の星辰奏者の約四割が属している最精鋭部隊。それだけの戦力が表に投入されていることに感謝する。裏の汚れ仕事で自分が支援できるのも誇らしい
自分も表の方に回ればそこに所属することになったのかと思い、しかしすぐに首を振った。
「あいつ●●●と同じ釜の飯とか、流石に勘弁よね」
そう思い、そして少し苦笑する。
「あの子、大丈夫かしら」
その言葉と共に、カズヒは昔を振り返った。
いまだ複数神器によって格納している多数の装備。その採集を主要として行っていた、あの苦労を思い出す。

そしてふと、二人の顔を思い出した。
一人はリーネス。運命ともいえる奇縁の下、初対面の再会を遂げた少女。
もう一人は、九成和地。自分に一目惚れなんてものをした、物好きな少年。
彼女が面倒を見ているのなら、悪い男ではないのだろう。短い付き合いだが、気質なども好感が持てる。
だからこそ付き合うことに気後れをしつつも、まあ住む世界が違うから大丈夫だとも思っていたらこの有様だ。
リーネスも性格上止めない可能性があると思うと、これは真剣に気にするべきかとも思う。
とはいえ、彼女としては絶対にありえないと思いたいが――
「リーネスが止めない辺り、知っても受け入れるかもしれないわね」
――その時は、こちらも真剣に向き合うべきだろう。
そんなことを思いつつ、カズヒは思考を切り替えた。

三勢合一編　第十二話　冷静に考えて……バブみってなんだったっけ？　ｂｙ和地

そんなこんなで十日以上が過ぎる中、俺とヒマリは再び駒王町を訪れた。

もうすぐ会談が行われるからこそ、万が一も考慮して下見とか挨拶をした方がいいと思ったからだ。

なにせ、三大勢力が会談を行うってのが初めてだからな。ひと悶着起きてもおかしくないっていうか、起きない可能性が低いだろう。

堕天使側は和平を結ぶ気満々で、悪魔側もサーゼクス・ルシファー辺りがそれに賛同的な意見だった。あとは天使と教会の対応次第だけど、冥界に和平が結ばれる可能性は大きいだろう。

そうなれば、戦争継続派が何かしらしてくる可能性は高い。

だからまあ、警備は厳重になる予定だ。結構な数の上級堕天使が出張る予定だし、悪魔側や天使側も上級が出張ることは間違いない。

万一トチったら、間違いなく駒王学園は地図から消滅するだろう。だってコカビエルクラスが何人も出てくるんだし。

魔王が最低でも一名、堕天使総督、天使長。全員一対一で下位の神と渡り合えるだろうメンツがここまでは確定だ。

しかも関係者の出席も求められたから、イッセーとヴァーリもまず間違いなく参加だろう。そうなると間違いなくシャルロットも参加するから、実質神滅具三つが禁手到達済みで来るわけだ。

……もし教会側が「こっちも負けないよう神滅具持ってこうか」とかなったら、会合が争いになった場合とんでもないことになる。

心臓が止まるぐらい緊張しそうな展開な気がしてきた。胃が痛い。

「さて、逃走ルートは五つぐらい見繕っとかないとな。下水道はしっかり探っとかないと」

「気合入りまくりですのね。でも、神話規模の戦いからの全力逃走ってちょっと興奮しますの」

そこじゃないだろう。

誰か、人生をノリで生きてる節があるヒマリに緊張感を与えてほしい。
涙の意味を変える者として、民間人の避難だってできることならやりたいんだからさぁ。
俺がちょっとその辺も考えていると、ヒマリは俺の頭に手を当ててなでてくる。
……いい歳なんだけど、それでもほっとしてしまうこの関係。何なんだろうかねぇ。
「真面目に考えてて大変ですのね。いいこいいこ」
むぅ。本当に嫌にならない。
両親を早くに失ってるから、母性に飢えてるんだろうか。
これがリーネスや、もしかしてカズヒ姉さんだと何か違うんだろうか。
いや、ちょっとこの光景はカズヒ姉さんには見られたくないという男の見栄が―
「……あら、何やってるの？」
「……お、俺の目の前でなんて羨ましい……もげろ！」
――よりにもよって的中したよ。
あとイッセーにまで見られたよ。
は、恥ずかしい!!

とりあえず、あの場で立っているのも何なんで、その辺のカラオケに入っていった。
個室だし性質上防音性も少しはあるし、適当に音楽流しながらなら人に言いにくい会話もできるからな。
「……カズヒ姉さん。割り勘でいいのか？　イッセーと俺が持つのがいいと思うんだけど」
「流石に会談の結果を待たずに、信徒が悪魔や堕天使側にむやいやた

らと借りを作るわけにはいかないわよ。ちゃんと給金は貰ってるから安心しなさい」
俺が気を使うと、カズヒ姉さんはそう言って適当に流した。
いいんだろうか。俺とは違って、イッセーからの分け前を全部寄付に回してたはずなんだけど。
イッセーもちょっと気にしているみたいだけど、カズヒ姉さんはさらりと流してコーヒーを一口飲んだ。
「そんなに気になるなら、会談の結果が和平に終わることでも祈りなさい。そうなった時はあなたとイッセー（金持ち達）の奢りで一息つかせてもらうから」
……奢りたい。俺の金だけで奢りたい。
なんという子供じみた見栄なんだろう。女に惚れるって、男にとってこんなに大きな影響があるのか。
「……もう少し自分の取り分増やすべきだったか……っ」
「和地もお年頃ですわね。……あ、このタピオカオイシーですの！」
余計なこと言いながらタピオカに舌鼓撃たないでくれないかなぁ!!
俺がツッコミを入れたがってると、イッセーがフードメニューのチーズケーキを食べながら、カズヒ姉さんの様子を窺っている。
「っていうか、そっちもやっぱり参加なのか？」
ああ、そこは気になるよな。
悪魔側と堕天使側は当事者を結構参加させるつもりだけど、天使側はどうなんだろうか。
俺達が視線を向けてると、カズヒ姉さんは苦笑しながら肩をすくめた。
「一応呼ばれてるわ。こっちとしては辞退したかったけれど、残念ながらそうもいかなくって」
「なんでだよ？　別に断る理由なんてないだろ？」
イッセーがそう言うけど、カズヒ姉さんは軽くため息をついた。
「暗部がのうのうと表側に出るわけにもいかないでしょう？　暗部はあくまで裏側にいるべきなの。汚れ役がのうのうと表に出てくれれば、

余計なやっかみも出るし暗部として動きづらくなるじゃない」
そう一息で言ってから、カズヒ姉さんは、遠い目をして天井を見上げる。
「だけど、もう片方が出れなくなったから仕方ないのよね」
……。
え？　もう片方っていうと、この場合は関与していた表側の、紫藤イリナの方だよな？　イッセーの幼馴染とかいう。
イッセーの方も、ちょっと顔色が青くなってる。
ああそうだろう。敬虔な信徒が、天使長の要請もあるだろうに出れないなんて何かしらあるだろう。それも、聖書の神の死というド級の厄ネタを知ってる身としては気になるしかない。
というより、今回の会合はコカビエル絡みの一件であり、かつトップクラスの会談だから、それは前提として話をすることになりかねない。
聖書の神、聖書の教えからすれば絶対的な存在。善と正義を司る、唯一足る存在。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教。そのアブラハムの宗教における頂点にして絶対にして唯一の存在。
そんな存在が死んでいるなんて言われれば、信仰心が強い信徒なら発狂物だろう。心を病んだ程度ならともかく、暴走して処刑されるなり、ショックで心臓が止まるなり、下手したら自殺してもおかしくない。
俺とイッセーはそんな想像をしたことを、目と目を見合わせて頬を引きつらせる。
そんな中、ヒマリはタピオカミルクティーをすすりながら、小首を傾げる。
「……お腹でも壊しましたの？」
「似たようなものね。聖書の神の死を知らされて寝込んで、ショックで十日ぐらい安静を申し付けられてるわ」
……お、思ったよりは安心だったか。
「そ、そっかぁ。そんなに大変だったのかぁ……大変だなオイ！」
イッセーは割と本気で大声を出すけど、カズヒ姉さんは半目を向け

る。
「仮にも信仰に命を懸けてる信徒だもの。前提として唯一神という絶対の基盤がもうなくなってるだなんて、そりゃ倒れるぐらいで済めば御の字でしょ。ショックで発狂するとか廃人になるとかだってあり得るわよ？」
まあ確かに。
人生の根幹が崩れるようなものだからなぁ。精神崩壊が普通にあり得るのは考えられる。
実際、アーシア・アルジェントやゼノヴィアはその事実で立つことも困難になったし。敬虔な信徒、それも一神教にとって神の死とはそれだけ重いんだ。
ただ、聞いた直後にすぐ持ち直した人が言っても……なぁ？
「でも、カズヒは知っても戦えたじゃないですの。凄いですわ」
「大したことじゃないわよ、これは意識の問題だわ」
素直に褒めてなでようとするヒマリをかわしながら、カズヒ姉さんは頬を少し歪める。
自虐の笑み、なのかね。
俺がそんな感想を覚えていると、カズヒ姉さんはぽつりと言葉を漏らし始める。
「……私はさ、正義の味方になりたいのよ」
それは、まるで告解のような印象を覚えた。
「正義になりたいんじゃない。正義を奉じ、それによって世界が少しでも回ることを望んでいる。だからこそ、暗部（必要悪）になることも躊躇がなかったわ」
告解。信徒が、神に仕える者に罪を告白する……的な奴だったよな。
「それに、神話とか宗教って基本的に正義と悪が司る者込み定まってるもの。そういう意味では、唯一神という形で正義の定義が決まっているその在り方こそ、私が望む世界にとても近かった」
暗部とはいえ聖職者側のカズヒ姉さんは、まるで悪側（俺）の存在（達）に告解をしているようだ。

「ええ。和地とイッセーは私が言ってたことを覚えてる？　私は、神という存在じゃなくて神が示した正義に仕えてる。そして、奉じるべき正義で世界を動かす為なら、私自身はどれだけ邪悪（汚れて）でも構わない。下手な狂信者のテロリストより質が悪いわね」

そう、カズヒ姉さんは苦笑いを浮かべた。

ああそうか。だからか。

こんなこと、むしろ信徒の前でこそ言いづらいだろう。

仮にも共に死線を潜り抜けた、そんな関係で信徒では断じてない俺達だからこそ、こんなことを言えたんだ。

俺はそこに、カズヒ姉さんの弱音を見た。

……なんて言ってやれば、いいだろう。

カズヒ姉さんに惚れた身としても、涙の意味を変える者としても、黙って見ていていいとは思えない。

だけど、なんて言えばいい？

まるで俺より遥かに年上●●●●●に見えるカズヒ姉さんに、たかが二十年足らずの俺が何を言える。

まあ、こういう時イッセーなら馬鹿なりに正直なことを言ってフォローできそうなんだけど、向こうも何というか困っている感じだ。

まあ、日本人の非キリスト教徒には、この辺りの微妙な問題は難しいよなぁ。

そう思った時、ふにょんという擬音が必須な展開が起きた。

具体的には、ヒマリがカズヒ姉さんを抱き寄せた。そしてヒマリのおっぱいがカズヒ姉さんを包み込んだ。

「ふぬぉわぁ!?　な、なんて羨まけしから……シャルロットに申し訳がたたなガガガガガガッ！」

「バグるな!?」

俺も確かに羨ましいが、たぶんイッセーとは嫉妬（方）する相手（向性）が違う。

あとシャルロット・コルデーに恥ずかしくない男でいたいって矜持は認めるが、それで我慢しようとして引き付け起こすか普通。

どんだけおっぱいに飢えてるんだ。もう病気だろお前。

そしてそんな俺達を無視して、ヒマリは抱き寄せた体制のまま、ぽ

んぽんとあやすようにカズヒ姉さんの背中を叩く。
「カズヒは真面目ですのね。真面目過ぎて、息が詰まりませんの？」
「……ストレス発散に息抜きぐらいしてるわよ。まあお金をかけない清貧な生活を心がけてるから、自分で魚釣ったり野草を採集してやけ食いしたり、あと自慰とかほぼ毎日やってるし」
今とんでもない言葉が聞こえたけど、そこはスルーしよう。
あとイッセーの引き付けがブーストされたから、そろそろ救急車を呼ぶべきか悩んでる。
悪魔って、普通に救急車で病院に運べばいいだっけか？
「それでもですわ。もっと息を抜いてもいいぐらい、一生懸命頑張ってますわよ？」
「それぐらいじゃないと、私は腐るのよ」
カズヒ姉さんは、そう言って皮肉気な笑みを浮かべた。
「私は、自分が堕落しないなんて思ってない。むしろ腐りやすいって思ってるからこそ、正義の味方になりたいの」
まるで、カズヒ姉さんは泣いている風にも見えた。
それを、ヒマリはあやすように頭をなでながら無言で促す。
……なんだ、この割って入れない関係のような空気は！
嫉妬の炎が巻き起こりそうだ。それも、どっちに向ければいいのか分からない。
まさか俺にはハーレム願望があったのか！　いや、年頃の男なら少なからず持っているやつは多いと思うけど。
それにしたって、まさかカズヒ姉さんだけでなくヒマリにすらそんな感情を持っていたと？
確かに、ヒマリとはそういう関係だ。だけどそういう関係から始まったようなものだから、逆に恋愛対象として見にくいと思っていた。というか、何故かＬＩＫＥであってもＬＯＶＥにならない感覚だったんだけど。
「頑張り屋さんですのね。ええ、カズヒは真面目に頑張ってるいい子ですわ」
そう言いながら、ヒマリはカズヒ姉さんの頭をなでている。

なんだこの母性。精神年齢は低いはずだというのになんでだ。
これが、バブみ……？
「ご、がが……ガバッ！シ、シットカッコワルイ……シャルロットに、顔見世が……」
イッセーがそろそろ末期の痙攣になっている!?
とりあえず気付けとしてソーダ水をぶちまけたら我に返ってくれたとだけ言っておく。

そしてこの数日後、俺達は会談へと参加することになる。

三勢合一編　第十三話　会談と謀略の始まり

……正直ちょっと緊張する。
普段通りの格好で良いと言われたので、とりあえず会談決裂による戦闘も考慮した格好で来たけど、やっぱりこう、気になるというほかないな。
俺は周りを確認する。
俺達堕天使側のメンバーは、アザゼル総督を除けば現場で活動したメンツだけだ。
つまり俺達ＡＩＭＳ第一部隊と、白龍皇ヴァーリ。
逆に悪魔側は、サーゼクス・ルシファーとセラフォルー・レヴィアタン、そして給仕としてグレイフィア・ルキフグスという魔王級三人。それ以外は、主体となったグレモリー眷属が俺が知る限り全員に、シトリーが女王（クイーン）だけ連れている。最後にシャルロットもいる感じだ。
とりあえず顔を知っている奴が多いのは助かるが、問題は天界・教会サイド。
やっぱりというかなんというか、この神滅具祭りに対抗する為か、天使長であるミカエルは何人か連れて来ていた。
現場で活動したカズヒ姉さんはむしろ歓迎だ。惚れた身として一緒の空間に入れるのは癒しだしな。
ただし、他三名がちょっと気になる。
まずは悪魔祓いの格好をした、二十歳ぐらいの男性と俺達と同じぐらいの少女。少女の方はちらちらとカズヒ姉さんに視線が言ってるけど、知り合いなんだろうか？
そしてカズヒ姉さんの隣にいるのは、二十代半ばぐらいの女性だ。
……ふと思ったけど、美形率高いな。
現実逃避気味にそんなことを思っていると、天使長ミカエルが軽く一礼をしながら左右を示す。
「枢機卿や他のセラフの方々の意見もありましたので、何人か追加で連れてくることになりました。……カズヒの隣にいるのは現プルガトリオ機関の長官です」

「お初にお目にかかります。プルガトリオ機関の現長官を務めている、クロード・ザルモワーズと申します」
そう丁寧に頭を下げるクロードって人に、何故かシャルロットが怪訝な表情を向ける。
なんだ？　生前の知り合いに似てるとか？
「あの、もしかして……サーヴァントですか？」
今なんて言った？
俺がちょっと面食らっていると、クロードは静かに微笑みながら頷いた。
「サーヴァント同士では対策なしでは気づきますね。はい、私はとある亜種聖杯戦争に召喚され、そして受肉したサーヴァントです」
……俺はちらりとリーネスを見る。
俺が知る限り最も聖杯戦争（その辺り）に詳しい人は、すぐにその視線に気づいてちょっと考えてから頷いた。
「まあ可能ねぇ。最も、当人の蘇生とは物が違うでしょうけど」
そ、そうなのか。
「お、おぉおおおお！　受肉したサーヴァントって初めて見ましたの！　カッケーですの！　真名はジャンヌ・ダルクだったりしますの？」
テンション爆上がりのヒマリに対して、クロードは苦笑しながら首を振る。
「よく間違われますが違います。まあ、色々あるのでその辺りは秘密にさせてください」
まあ、まだ和平が結ばれるって確定したわけでもないし、暗部だしな。
「それと、生前持っていたことから神滅具である黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）を持ち合わせています。ここに呼ばれたのはカズヒの上司であると共に、そう●●●●●いうことです」
まあ確かに、そういうことなら呼ばれてもおかしくないよな。
カズヒの所属する暗部のトップなら、カズヒが関与したこの一件での会談に呼ばれてもある意味納得できる。しかも聖杯戦争まで起き

ていたんだから、聖杯戦争の名物ともいえるサーヴァントが来るっていうのも当然だ。
そして保有している神滅具もだ。神滅具自体が強大な力であり、しかも黄昏の聖槍は最強と称されている。とどめに聖遺物でもあるから対悪魔において特攻でもある。
……天使長の護衛としては打ってつけだ。天使長に聖槍が並び立つなら、魔王の一人や二人は殺せるだろう。
そこまで考えていると、ミカエルはカズヒの反対側にいる二人を手で示した。
「そしてこちらは、駒王町外周部で他勢力の警戒を担当してもらっている方々からの派遣です。デュナミス聖騎士団の星辰奏者（エスペラント）です」
「へぇ。あのデュナミス聖騎士団か」
うちの総督が興味深そうにその二人を見る。
俺も聞いたことがある。
力天使のように信徒を勇気づける為、並みの悪魔祓いじゃ気圧されるような難易度の大規模作戦において、一番槍を務める精鋭部隊。その他精強であってなお命の危険も更に高い。星辰奏者は異形の身体能力と比較すると、膂力や運動機能以上に、生理機能に発する自然治癒力という「死に難い」特性を上乗せできることから、サウザンドディストラクション後は戦力の中核を星辰奏者にする形で再編されたとか。
ザイア製の星辰奏者である俺としても、ちょっと興味を惹かれるな。
いやほんと、星辰奏者の死に難さって、異形と比べても高い部類だろ。純粋な総合能力のバランスから考えるとそこは特に大きいアドバンテージだ。
俺は出力の上り幅が低いから実感ないけど、上り幅が大きすぎると、星辰光を解除した時に「内臓や骨の位置がゴリゴリ変わる」とかいうレベルの反動が来るそうだからな。星辰奏者って星辰光を発動する時に出力格差を調整できないから、本気出すと反動が来るのが避けられないし。

「二人は団長からの推薦で此度の護衛を任されました。内一人は、保有する神器を神滅具にカテゴライズするか考慮中の人物です。……挨拶を」
興味深いことを言った後で、天使長ミカエルが二人に挨拶を促した。
「リュシオン・オクトーバーです。この度は三大勢力初の会談に参加できる栄誉もあって、少し緊張でお恥ずかしい所を見せるかもしれません。ご容赦を」
そう礼儀正しく微笑んだ男に続いて、今度は少女の方も礼儀正しく一礼する。
「カズホ・ベルジュヤナと申します。この度はカズヒお姉さまがお世話になったようで、お礼を申し上げます」
と、一礼する女の子。
とりあえず、結構な人数がカズヒ姉さんに視線を向ける。
お知り合い？
其の疑問符が言葉になるより早く、カズヒ姉さんも苦笑した。
「ソ連崩壊後の情勢不安定国家のストリートチルドレン。私もカズホもそうなんだけど、ほっといたら死にそうだから面倒見てたら何時の間にか……ね」
……カズヒ姉さん、ハードな人生送ってるなぁ。
そんなハードな人生だからこそ、正義に仕える精神性が育まれたのだろうか。
俺がそんなことを思っていると、コホンとミカエルが咳ばらいをした。
「つもり話もあるでしょうし、団長のディランもその縁を機にしたのでしょうが、まずは会談を始めましょう」
……さて、こっからがマジな話か。
多分大丈夫だと分かってるけど、やっぱり少し不安だ。
具体的には、和平をする気が満々でありながら、絶対余計な茶々を入れようとするだろううちの総督だ。
あまりふざけすぎるようなら、俺は本気でぶちのめすことにしよ

う。そうしよう。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、日本近海に一隻の大型潜水艦が潜伏していた。
全長２００ｍ近くで全幅も２０ｍ以上はあるだろうその潜水艦は、自衛隊どころか日本政府の与り知らぬ存在だ。
日本国政府は察知していないその潜水艦。だがそれは、日本政府や自衛隊が無能だからでは断じてない。
潜水中、それも移動しながらでありながら、その潜水艦は驚くべき静粛性を発揮していた。それも、移動速度は６０ノットを超えるという、ありえない移動速度だ。
明らかに現行技術によるものではなく、そしてそれは確かにその通りだった。
この潜水艦は予備動力としてディーゼルエンジンこそ搭載しているが、それだけでどうにか出来るような巨体と性能では断じてない。
その在りえない能力を発揮する最大の要因を、その潜水艦内部にいる一人の男が苦笑しながら告げる。
「……神の子（グリ）を見張（ゴリ）る者から漏れた人工神器技術。とても高性能の兵力としては使えないだろうレベルだったそれを、こういう方法で使うとは驚きだね」
そう告げるのは一人の青年。
中国の古い民族衣装である漢服を、日本の学生服を思わせる衣服の腰に巻いたその青年は、苦笑しながらパンケーキを切り取ると口に運ぶ。
そして咀嚼して飲み込むと、ホットミルクを一口飲んだ。

……そう、今彼がいる場所は、潜水艦内部に併設されたカフェである。
専門家ならば信じられない話だろう。ありえない移動速度を発揮し、現行の軍用原子力潜水艦すら超える性能を発揮する潜水艦内部に、カフェである。
もちろん規模は小さい。キッチンスペースを踏まえても、精々そこそこのレベルのアパート一部屋分だ。
だが、此処は潜水艦内部である。
潜水艦というものはどうしても狭くなる。その上で必要な技術力やそのリソースに圧迫される為、どうしてもスペースは狭くなるのだ。
それが食堂とは別の形でカフェが設置されている。誰が見ても異常という領域である。
そんなありえない空間で軽食をとる青年に、一人の女性が近づいた。
「……奇遇ですね。相席してもよろしいでしょうか？」
「ああ、カテレアか。いいとも」
その早々と呼ばれた青年の了承を受け取ってから、カテレアと呼ばれた女性は彼の対面に座る。
そして自分も取っていた紅茶を一口飲み、そして治作切り分けられたサンドイッチを一口食べた。
その身動きは優雅であり、相応の教育を受けた上流階級を思わせる。
「……あと一時間も待たずに作戦開始ですね。まあ、私達は参加しないのですが」
「参加を譲って残念かい？　会談にはセラフォルー・レヴィアタンが出ると聞いたけどさ」
その曹操の返しに、カテレアは小さく微笑する。
言葉だけなら優雅だが、それは嘲笑といっても過言ではないものだった。
「……この手でセラフォルーを殺せないのは残念ですが、今の彼らが

どれほどの力を持っているかの確認にはなるでしょう。そして生き残ったというのならば、その時こそ私があの偽物を倒すのみです」
「真なるレヴィアタン様は余裕だねぇ」
曹操は苦笑し、そして再びホットミルクを一口飲む。
「だけどまあ、蛇の能力向上が三大勢力最強格にどれだけ通用するかを確認するには十分だね。俺達は蛇を直接使う気はないけど、それでもデータをしっかりとってから戦いたいからさ」
「サブリーダーを派遣しておいてよく言えたものです。まあ、真なる魔王である私達が蛇を使えば、どうせ勝てるとは思いますけど」
そう返しつつ、二人はちらりと廊下を見る。
……今この場において、自分達以外の物はカフェの従業員以外存在しない。
それはそうだろう。基本的にこの潜水艦の中に、本格的な作戦行動中に娯楽を楽しむような手合いはいない。
何より構成員の特徴を思い出し、カテレアは軽く鼻を鳴らした。
「……ナチスドイツの流れを汲みながらも、その理念を捨て去って人体強化技術の追求と実践を求める組織「ツヴァイハーケン」。技術的に恩恵を受けているとはいえ、規模としてはごく小規模の彼らにコレを授けるとは、中々豪胆な行動をしますね、あの絡繰り人形は」
「まあ、彼らの人員は事実上の人形が殆どだからね。娯楽設備や美食を気にする必要がない以上、気にすることはないんじゃないかな？」
カテレアと曹操がそれぞれ属する二大派閥及びその下に位置する有力派閥。本来それだけの派閥にしか与える余裕がない虎の子。
つたない人工神器技術を大型化によって実用化させ、乗員全員を発電装置とすることで起動する神器力潜水艦「トルネード級」。
あと一時間もかけずに三大勢力の会談を襲う大規模連合組織の二大派閥の有力者は、別派閥のそれに乗せてもらい、作戦の様子を確認する為にここに来ていた。
移動隠密拠点が本命である為、ミサイルサイロは巨体に比べれば若干少なく、また原子炉もない。その空いたスペースによって居住性が向上したこの潜水艦の、それを生かして併設されたカフェコーナー

で、二人は作戦の遂行を確認する。
そして、そのターゲットである会談中の三大勢力がそれを察知するまで、あと三十分を切っていた。
作戦開始までの慌ただしい時間帯を、それゆえに人のいない娯楽区画で、二人の有力者は優雅に過ごしていた。

三勢合一編　第十四話　蠢く暗雲

和地Ｓｉｄｅ

……五回。五回だ。
俺は五回、総督の後頭部に一撃を叩き込みたくなった……っ！
このオッサン、ウチの馬鹿（コカビエル）がやらかした事態が原因で会談してるってのに、あの手この手で余計な茶々を入れてくる。
心臓に悪い。いやな汗が出てる。
幸か不幸かカズヒ姉さんやイッセーとの会話で、どの勢力も戦争継続に消極的で和平に意欲的だって分かってる。だからまあ、気絶だけはしない。
だけどそれを読んでるからって調子乗ってるんじゃないのか、この堕天使総督は!!
俺がそう思っている中、リアス・グレモリーはすべての説明を終え、サーゼクス・ルシファーに労われて着席する。
そしてそれが終わり、天使長ミカエルがアザゼル総督に目を向けた。
「……とのことですが、あなた方堕天使側の意見を聞いてもいいでしょうか？」
「コカビエルが悪かったな。コキュートスで永久冷凍刑に処したからもう大丈夫だ。安心しとけ！」
サムズアップして言うことじゃない。
耐えろ俺。総督を殴るのは我慢しろ。
こんなんでも一応組織のトップだ。現場の戦闘員が殴ったら大問題だ。リーネスにも迷惑がかかるし、というよりＡＩＭＳ第一部隊が終わる。

他のトップ陣営もため息をついている。ああ、総督はそういう方向で信用されているらしい。
「説明としては最悪ですが、貴方にその気がないのは信じましょう」
「……まあ、リアスもコカビエルが相当貶していたと言っていたしね。そこは信じてもいいだろう」
ミカエルにそう同意を示してから、サーゼクス・ルシファーは真っ直ぐに総督を見る。
ああ、こっからが本番だ。
俺は、ちょっと息をのんだ。
胃が痛くなるのは此処からで―
「―そういうわけだから、俺達はさっさと和平を結ぼうじゃねえか」
―もうこの総督殴っていいか？
確かにそのつもりなのは知ってるけど、それをそんな軽く言うのはどうかと思う。
吐きたくなってきたよ、俺。
他の首脳陣もちょっと面食らってる。
「……おいおい。今の俺は平和主義だぜ？　そんなに人に迷惑をかけることが好きなマッドサイエンティストに見えるのかよ？」
すいません総督、見えます。
神器研究施設とかであほみたいな鍛錬という名の実験設備とかも作ってるでしょうが。まともなのもあるけど。
俺が内心で突っ込むのと同じく、首脳陣三名は頷いていた。
「鏡を見なさいアザゼル」
「魔法少女の敵役に相応しいと思うわん☆」
「悪いがフォローできないよ、アザゼル」
見事に肯定されて、流石に総督の眉をしかめている。
「……俺の信用ってそんなに地に落ちてるのかよ」
「それはもう。文字通り天から堕ちた存在なのですから。まぁ、和平が嘘なら現場の者同士で交流させることもないでしょうが」
皮肉を利かせながらも、天使長ミカエルはそう納得する。
半分冗談ではあったのか、魔王二人も特に異論は挟んでない。

……まあ、どの勢力も和平に乗り気だとは聞いてる。少なくとも、本心が否定的とかそんなわけでもないだろう。でなけりゃ、悪魔側も天使側も俺達堕天使側と接触させることもないだろうし。
だからだろうか、緊張感はそんなにない。和平という言葉が出てきたことで、一気に緩んだと言ってもいい。
だけどその上で、ソーナ・シトリーの姉でもあるセラフォルー・レヴィアタンはアザゼル総督を見て小首を傾げた。
「でも、だったらなんで白い龍（アルビオン）や刃（スラッシュ・ドッグ）狗を組織に入れたの？　警戒されて当然だと思うのよん」
「んなもん、神器研究がほぼすべてだよ。あとはまあ、戦争したくないのと外敵の襲撃を警戒しないってのは別問題って感じだな。俺は戦争なんぞに興味はねえし、宗教関係にも人間界の政治にも手を出す気はねえ。むしろ今の世界に満足してるんでな」
そう返すと、総督はにやりと笑う。
「ついでに。和平をしてくれるってんなら神器研究のデータもそっちにくれてやるよ。他にも技術提供や共同研究だってしてもいいぜ？」
その言いように、首脳陣の方々は苦笑しながら肩の力を抜いた。
「そうだな。悪魔としても戦争の再開は種の絶滅が再び見える禁忌だ。折角半ば打開出来ているのに、それを引き起こす気は欠片もない」
「それはそれで問題もあるけどねん」
そういう魔王二人に目を細めながら、天使長も頷いていた。
「そうですね。天使として不敬極まりないですが、戦争の大本である神と魔王が消滅した今、これ以上争って神の子らに余計な被害を与えることこそ論外でしょう」
「……堅物ミカエル様が言うねぇ。昔だったらそれだけで堕ちてるぜ？」
「時代の流れには適合するべきということです。それにまあ、サーゼクスやセラフォルー達が魔王なら、今の悪魔を積極的に滅ぼす必要もないでしょう」
そんな風に天使長とうちの総督が言葉を交わしてると、ちらりと魔

王二人が視線を逸らした。
え、なに。その意味深な反応。
天使長もそれに気づいたのか、ちょっと緊張感が復活してる。
「……どうしました？　まさか新たな魔王候補が出たのですか？」
「そうではないが、今は大王派閥が勢力を強めているんだ。……比率としては6：7といったところか」
「ゼクラムのおじいさま達も、和平そのものには賛成してるから大丈夫ではあるけどね……」
あらー。そちらも大変なようで。
確か今の悪魔って、現四大魔王達リベラル派の魔王派と、血統主義が強い本家の悪魔達を主体とする大王派に分かれてるんだったな。
転生悪魔制度や現四大魔王の戦闘能力もあって、現魔王派閥が若干有利って聞いてたけど、ちょっと追い抜かれてるのか。
「マジか。転生悪魔制度で最上級になった奴も多いし、今の状態で大王派がそこまで盛り返してるとは思わなかったぜ」
総督が感心してると、サーゼクス・ルシファーは軽く肩を落とす。
「転生悪魔からの賛同は根強いが、フィーニクス家が亜種聖杯戦争に手を出したことでね。地脈の力を利用して受精と着床を歩進する儀礼宮殿を立て、更に儀礼術式に数多くの純血の下級中級を参加させたことがきっかけだよ」
「おかげで出生率はここ十数年間上がりっぱなしなのよん。更にいくつも建設したり、フィーニクス家が私費を投じて育児手当制度を確立したことで、純血の下級中級から支持をゲットしちゃったのよねぇ」
そうセラフォルー・レヴィアタンもぼやくけど、すぐに気を取り直したようだ。
「まあ、ゼクラムおじいさま達も戦争を継続する気はないから大丈夫なのよん。それより、和平について少し話を煮詰めたいわん」
……なるほどなるほど。これはまた……
どこも大変だってことか。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、旧校舎では何人かの影が動いていた。
駒王学園周囲には、三大勢力による厳重な警備が敷かれている。
純粋に投入されている人数が多いのはもちろんだが、それ以上に結界なども厳重だ。
なにせことが三大勢力の会談。更にどの勢力も和平を結ぶことを目的としている。失敗した場合の被害が甚大である以上、警戒が強くなるのは当たり前のことでもあった。
にも拘らず、あっさりと多数の潜入に成功している。
それにはもちろん理由がある。
それはひとえに、内通者の存在だ。
その内通者がそろそろ時間だとほくそ笑むとほぼ同時、彼らは動き出した。
全ては内通者が流した情報。時間停止能力という神滅具に次ぐ力を利用する為。
悪意が、水面下で動いていた。

和地Ｓｉｄｅ

「……さて、これで一通り必要なことは終わっただろうか」
「だな。あー、かたっ苦しいから疲れたぜ」

サーゼクス・ルシファー……いや、和平が結ばれるなら敬称がいるだろう。
サーゼクスさんがそう言ったのに合わせて、アザゼル総督が肩をコキコキと慣らして息をついた。
いや、一番肩の力抜いて会談してたのはあんただろ。
八割ぐらいの人数の視線を受けながら、しかし総督はどこ吹く風だった。
「これで和平はまず確定。帰ったら仕事はしたとはっきり言えるもんだ。喜べお前ら、今日は俺が晩飯を奢ってやる、うな重でいいか？」
「マジですの!?　うな重大好物ですのー！　ビバ総督ですのー！」
大好物を奢ってもらうと言われて、ヒマリのテンションも急上昇。
総督と元気にハイタッチをする、現場の戦闘員。
いや、すごい光景だな。
「ごめんなさいねぇ。堕天使（ウチ）、結構フリーダムだからぁ」
「そちらも苦労してるのね……」
リーネスはリーネスでカズヒ姉さんと苦笑いをかわし合っているし。
なんだか、空気が結構弛緩してないか？
「……サーゼクス。実は先日、赤龍帝が私に聞きたいことがあると言っていたのです。ひと段落つきましたし、今聞いてもよろしいでしょうか？」
「イッセー君が？　私は構わないが、いいかね？」
ミカエルさんやサーゼクスさんの視線を受けて、何故かイッセーはアーシア・アルジェントの方を向いた。
「アーシア。アーシアのこと、ミカエルさんにどうしても聞きたかったんだけど、いいかな？」
……んん？
俺達が首を傾げていると、アーシアは了承して、イッセーはミカエルさんに真っ直ぐ向き直った。
「俺、アーシアから事情を聴いて以来ずっと思ってたんです。……悪魔を癒せる優しいアーシアを、なんで追放する必要があったんですか

？」
「……言葉をはさむようだけど、それはある意味で当然のことではあるよ」
　そこで、今まで黙っていたリュシオンが口を開いた。
「優しいといえば聞こえはいいけど、優しいことと甘いことは違う。少なくとも、和平どころか捕虜の取り扱い条約も結ばれてないのに敵対勢力に無条件に手を貸すのは甘さだし、しかもそれで逃げられて損害まで出ているなら、処罰しないのも組織として問題だよ」
「……まあ、そこに関してはプルガトリオ機関の落ち度でもあるわね」
　姉さんもそう続けるけど、なんか一瞬沈黙してなかったか？
「本来ならプルガトリオ機関が預かるっていうのが流れになるんでしょうけど、世の中必要悪を容認できる奴ばかりじゃないの。潔癖症は綺麗でないものを全否定するものよ」
　流石姉さん、言い分がシビアだ。
「まして教会は基本として信徒が運営する者。過度に天使が介入すれば、それでは教会は人の組織じゃなくて天使の家畜よ。だから―」
「……いえ、そこまでにしてあげてください」
　続けた姉さんの言葉を、ミカエルさんが遮った。
　苦笑いを浮かべながら、労うような目でカズヒ姉さんを見て首を横に振る。
「聖書の神のシステムを制御できない以上、主の加護で悪魔を癒せるという事実を肯定するわけにはいかない。追放はある意味で保身なんです。責められるは主が遺したシステムを使いこなせないこちらにもあります」
　そう言ってから、ミカエルさんはカズヒ姉さんに軽く頭を下げる。
「……嫌われ役を押し付ける気はありません。お気持ちだけ受け取っておきます」
「……いえ、一片の真実ではありますから」
　……うん、なるほど。
「カズヒ姉さん、重荷を背負いこみ気味じゃないか？」

「そういう人なんです、昔から」
と、そこでカズホ・ベルジュナヤが苦笑を浮かべながら首を横に振る。
「昔から汚れ仕事とかを背負いたがる性分でして。私もついていこうとしたんですけど、「必要悪だけじゃなく、善も世界に必要」と言われた上、「向いてない」とバッサリ正論で切って捨てられまして」
「ああ～。そういうこと言いそう」
「そこ、初対面で連携攻撃しないで」
カズヒ姉さんが追い込まれて視線を逸らす。
そして何時の間にか近くに来ていたヒマリが、カズヒ姉さんの頭を撫でた。
「よしよしですの。カズヒは一生懸命頑張ってるからですのよねー」
流れるようにフォローを……っ。いつもそんなことできるような手合いじゃないだろうに。
な、なんというか、敗北感……っ。
「……リーネス様。そろそろ引き締めをお願いしたいのですが。というよりおふざけになってませんか？」
「まあまあ。どうせ総督がいるから無理よぉ」
「困った駄天使です」
後ろでメリードとリーネスがそんなことまで言ってきているけど、俺も総督と同じ扱いになってないか、コレ。
「っていうか待て。今堕天使の字が違ってねえか？」
総督は反論できないです。もうちょっと真面目な態度で会談して欲しかったです。
と、そこでミカエルさんがコホンと咳ばらいをして、話をこちらに引き戻す。
「……話を戻しますが、同様の理由で聖書の神の死を知った者も、安全性の問題から追放することがあります。必要最小限の数で押さえておかないと、システムに異常が発生してしまうのです」
「ゼノヴィアの場合は、即断で自分から売り込んだから気にしなくてもいいと思いますが。暗部出身であることは知らなくても、私が聞い

てたことを知っているなら一言言ってもよかったのに」
「……その通りだけど、此処でそれを言わなくていいだろう？」
カズヒ姉さんの容赦ない一撃に、ゼノヴィアは結構食らったらしい。
そしてすぐに気を取り直すと、ゼノヴィアは一歩前に出た。
「気に病まないでください。実際カズヒの言う通りですし、何よりそのような事情があるのなら、私は恨み言を言う気はありません」
「ゼノヴィアさんの言う通りです。それに、今の私はイッセーさんや部長さんと出会えて幸せです。ミカエル様が謝る必要なんてありません」
おぉ。
イッセーに至っては感極まっているこの言い方。結構きついことを言ったらしいカズヒ姉さんも、ちょっと感心している。
なるほど、聖女と呼ばれただけのことはあるってわけか。
「ま、お前が頭を下げる必要はないだろ。つーかそっちの二人が悪魔になったのは、俺ら堕天使側の責任だしな」
……そして空気壊すなよ総督。
ほら、イッセーもなんか一気にボルテージが上がってるし。
「……ああそうだよ。アーシアは堕天使に一度殺されたんだ！　ゼノヴィアもコカビエルが余計なこと言ったからだ！　俺に至っちゃいきなり殺されたしな！」
「イッセー。今は落ち着いてください」
殴り掛かりそうな勢いのイッセーの肩を、シャルロットがやんわりと押しとどめる。
シャルロットになだめられてイッセーも少し落ち着いたけど、それでもかなり不服そうだった。
「シャルロット！　でも……」
「末端の暴走に上層部のトップが直々に対処することの方が難しいですし問題になりかねません。それに、神滅具を制御出来ずに暴走させれば、生まれる被害はそれではすまないでしょう」
イッセーにそう諭すと、シャルロットは静かに目を伏せる。

「こと、自覚のない神滅具の発動は下手な破壊よりなお性質(たち)が悪いのですから」
「……ま、お前さんの神滅具に気づかなかったのも、フランス革命で処刑が乱舞した要因の一つではあるか」
総督も流石に殊勝な顔つきになったけど、すぐに普段の調子に戻すと、パンと手を打った。
「第一、今更謝ったところで納得できるわけもないだろうしな。穴埋めは別の形でさせてもらうさ」
……すいません。そんな話は聞いてないです。
「そうですねぇ。私もそれには手伝わせてもらいます」
リーネスは知ってるのか？　俺は聞いてないよ!?

ことが終わってその意味が分かった時、俺はある意味で感謝することになる。
感謝することになるけど、もっと早く言って欲しかった！

三勢合一編　第十五話　襲撃開始

そんなこんなで、ちょっと空気がシリアスになったが、そこで総督が座り直すと周りを見渡した。
「……さて、俺のところにヴァーリに、赤龍帝とそのサーヴァント、でもって、サーヴァントのクロードに噂のリュシオン・オクトーバー……確か神の子に続く者（ディーア・ド・ロローサ）だったな」
……ん？　どこかで聞いたことがあるような……？
俺が首を傾げてると、リアス・グレモリー達若手だけど有力者だったりする人達が面食らってる。
ミカエルさんも魔王二人も、少し苦笑していた。
「新規神滅具候補を持っていることが理由だったのかしらぁ？　デュナミス聖騎士団でも最強にして規範と呼ばれてたはずだけれどぉ」
リーネスがそういうことを言って、俺は思い出してちょっと引いた。
そうだそうだ。なんか有名どころで「神の子の後に続く」とかいう評価がされてたんだっけ。
そうか、そういえば星辰奏者になっていたって話は聞いてたけど、そういうことか……。
俺達が面食らってると、リュシオンは苦笑しながら首を横に振った。
「神滅具（ロンギヌス）も星辰光（アステリズム）も確かに持ってますけど、買いかぶりすぎです。……俺が強いのは、誰でも出来ることを常に続けているからです」
そう言いながら、リュシオンは目を伏せると手を胸に当てる。
「毎日欠かすことなく勉学と鍛錬に励み、より良い方法がないか探し、そしてそれを知る者に礼を欠かすことなく教えを乞う。そして鍛錬と勉学で消耗したものを、休息と補給で足していけば、余程のことが無ければ誰でも成長できます。恵まれた才能を持っていることは事実ですが、それは俺の一つの要素でしかありません」
そういうと、リュシオンは微笑みながら俺達やイッセー達を見る。
「誰だって、誰にでも出来ることをちゃんと積み重ねていけば少しず

つなら成長出来る。もちろん邪魔が入ることもあるし、人間は怠けたいと思うものだし、消耗という概念があるから常時少しずつ成長し続けるとは言わない。それでも俺が成長できたのは星辰奏者の才能や神滅具を宿していたことが重要なんじゃない。少なくとも、俺はそれを示し続けることも忘れたつもりなんてない」

そして、真っ直ぐにアザゼル総督の目を見つめた。

「だからあまり持ち上げないでください。持って生まれた者であることはは認めますけど、俺の本質は人が誰でも出来る物にこそあるんですから」

「……神器研究者に、酷なこと言ってくれるぜ」

総督は苦笑いしているけど、俺はふと気づいた。

なんか、カズヒ姉さんが視線を逸らしている。

なんか思うところがあるのか？

俺が首を傾げてると、総督はすぐに気を取り直したのかイッセー達をちょっと面白そうに見た。

「……ま、日々の努力を否定する気はねえが、それを踏まえても神滅具ってのは厄介だ。ある意味で俺達トップ並みの力があるんだからな」

そう言ってから、総督はヴァーリの方に視線を向ける。

「だから、今後の参考がてらに一応聞いておきたい。……お前らは世界に何を望む？」

「俺は強い奴と戦えればそれでいいさ」

速攻でヴァーリがそう言うけど、和平を結んだタイミングでいうことじゃないと思う。

いやほんと、今言うことじゃないだろ。正直すぎるぞ。

「そうですね。俺は人々が少しでもより正しくあってほしいと思ってます。だからこそ、自分自身がそうあることで少しでも多くの人にそうなってほしいですね」

リュシオンはリュシオンで凄いこと言うな。なんていうか、優等生の百点満点の回答だ。

しかもなんていうか、目を見るだけで本気具合が見えてくる。嘘偽

りない純度１００％って感じがする。
「……今も昔も変わりません。私は、信徒としてより多くの人々が健やかに生きれることを望みます」
「私に世界の行く末を案じれる資格はないでしょう。ただ、より良く出来る人達を応援したいとは思ってます」
クロードとシャルロットのサーヴァント組はこんな感じ。
クロードは暗部出身なだけあって、なんというか覚悟完了済み的な印象。流石カズヒ姉さんのボス。
シャルロットはなんかこう、自分に自信がなさげだな。そういえばあまり話さなかったけど、どんな感じの人なんだ？
で、最後は―
「……え、俺？」
―イッセー、もしかして他人事だったか？
「あのねぇ。神滅具保有者って言い回しで気づきなさい」
「イッセー、お前は絶対に振られるだろ。赤龍帝なんだぞおまえ」
カズヒ姉さんと俺がツッコミを入れるけど、イッセーはかなり戸惑ってた。
「いやいや、俺、新米の下級悪魔だぜ？　世界の行く末とか言われても困るって！」
そういうイッセーに、アザゼル総督はちょっと考え込むと、手を打った。
「なら簡潔な二択にしてやる。平和な世界でそこのリアス・グレモリーを子作りしたいか、子作りなんて気にせず戦争をすることを選ぶかだ」
「はぁ？」
とんでもないことを言ってきやがったよ、この総督。
リアス・グレモリーも面食らってるし、何を阿呆なことを―
「……何、だ……と？」
なんでお前は食いついてる、イッセー。
「そういうもんだ。平和な世界なら種の繁栄が重視だから、普通に考えて子作りも重視される。戦争を選ぶならお前は間違いなく戦力と

して期待されるから、そんな余裕がない戦いだらけの毎日だ。……で、ど―」
「平和オンリー平和平和平和ぁ！　部長とエッチしたいです！　平和が一番！」
総督の言葉をさえぎって、思いっきり食い気味で宣言したよ。
……空気が微妙だなぁ、これ。
「イッセー君、サーゼクス様もおられるんだよ？」
木場がツッコミを入れるのも当然だな。
そりゃお前、自分の主とその兄で魔王がいるってのにそんなこと言うやつは普通いない。
「あらあら。リアスは愛されてますわね」
「イッセー先輩、最低です。……最悪ではないですけど」
「イッセーさん！　ぶ、部長さんばかりに目を向けないでください！」
「なるほど。部長のような女性と子作りしたいのか。……髪を伸ばすか？」
……グレモリー眷属の女性陣も大変だな。反応的や表情的に嫌われてはないようだけど。
「す、すいません！　童貞を卒業したくてたまらないお年頃なんです!!」
恐縮するのはいいけど、いうことはそれでいいのかイッセー。
「ふふっ。まあ、年頃の少年はそういうものだよね。俺も人並みには興味はあるし、若さは未熟に寛容が許される時だから、いいんじゃないかな？」
リュシオンは朗らかに対応してるな。年齢はそこまで開いてないだろうに、大人だなぁ。
「ま、まあ欠点の一つ二つは誰にでもあるものです。……ちょっと極まりすぎている気もしますけど、意識して抑える努力は認めてますよ？」
フォローが追い付いてないぞ、シャルロット。
「……若さの未熟はきちんと反省してこそだと思うけれどね。あまり繰り返すような絞め落とすわよ？」

「ハイ！　すいませんでしたぁ！」
カズヒ姉さんは相変わらず厳しい。まあ正論だし、猶予はくれてるんだからいいか。
それより発言にちょっと間があるのが気になるな。ほんとに気になる。
とまあ空気が緩んだけど、気を取り直したイッセーが前を向いて拳を握り締める。
「と、とりあえず言うことは一つ！　俺の力は主であるリアス部長や仲間達の為に、そしてシャルロットに恥じないことの為に使います！
……えっと、あとどう言えばいいのか―」
と、イッセーがそこまで言ったその時―

気づいた時、状況は一気に一変していた。
分かった理由は単純明快だ。
空気が違う。
緊張感が殆どで、次に占めているのは戸惑いだ。そう察せられる場の雰囲気が全てだろう。
そしてそれに気づいたその場で周囲を確認使用した瞬間、視界が塞がって柔らかいものが包み込んだ。
……この状況下じゃなければもうちょっと嬉しかったんだけど―
「和地起きましたのねー！　ほっとしましたのー！　安心しましたわー！」
「御免。せめて抱き着く場所を変えてくれない？　周りが見えない」
―半泣き状態のヒマリに抱き着かれるけど、この空気だとちょっとその感触を味わう余裕がない。あとたぶん、視界が塞がってるのがまずい状況だと思うから。お願いずれて。
なんとか視界を開放したら、明らかにヤバいという展開がまさにその通りだった。
部屋の中にいたメンツの内、十人ほどが止まっている。

それも動きを止めているとかいう次元じゃない。脈拍や呼吸も感じられない、文字通りの静止状態だ。
ちなみに止まっているのは、悪魔側がソーナ・シトリーとその女王に、グレモリー眷属からは姫島朱乃と塔城小猫にアーシア・アルジェント。天使・教会側はカズホ・ベルジュヤナ一人。そんでもって堕天使側は、俺とヒマリを除いたＡＩＭＳのメンバーだ。
総数十人。結構な人数が何かされたらしい。
「……っていうか、何があったらこんなことになるんだ？」
状況が分からなくて首を傾げると、慌てた様相のイッセーが、外を指さした。
「そ、それがテロだって……あんな感じで」
言われて外を見ると、確かに外も凄いことになってるな。
三大勢力の警備陣は、軒並み固まっている。その上で、外にはいろんな連中が現れて、こっちを攻撃している。
問題は……。
「ジャンルがごった煮すぎだろ」
思わず漏れ出るこの感想。
だけど言わせてほしい。ごった煮すぎるだろアレ。
魔法使いらしいローブを纏っているやつがいる。まあ、魔法使いってのは異形に関与している人間として見れば数多いからこれはいい。
あとレジスティングアントレイダーもいる。まあ、頭のねじがぶっ飛んでいる連中にばかり送られるうえ、科学技術だからコピー品を開発することは不可能じゃない。これもいい。
後、ゴーレムがいるのもいい。魔法使いとか呪術師がそういうものを作り出して戦闘に使うことは珍しくない。それに魔術回路持ちなら、宝石や木材に羊皮紙などを材料とすることで、そんな即席ではなく一度作ればある程度の自律動作すら可能にするやつもいる。これもいいとしよう。
問題はそのあと二つだ。
まず一つ。見たことの無い魔獣がいる。それも文献とかでも見たことが無い、よく分からないタイプの魔獣だ。

更に問題が最後の一つ。
……四肢が何というかサイバーチックで、服やボディスーツという感じでもない謎の連中がいる。
ショット&ランを繰り返しながら、こっちの上層部が張っている結界を攻撃しつつ、反撃の攻撃をかわしている。
数が多いが市内なので大火力を出せないのが現状みたいだ。だけど魔法使いが防御魔法を展開してもあっさり貫通する威力の乱れ打ちだというのに、サイバー的な連中は全然減らない。躱してる。
なんていうか、反射神経が早いな。あと回避がなんていうか機械的な気がする。
「……なんなんだ、あれ。他者強化型の禁手とかそんな感じか？」
「いや、サイボーグだなあれ。しかも完成度高いぞ」
俺がぽつりと呟いた言葉に、総督がそう答える。
いや、ちょっと待とうか。
「サイボーグ!?　そんなものもいるんですかこの世界！」
「いや、初めて見たな。だが完成度が高いというか、たぶんあいつら、脳を含めた一部を除いて殆ど全部を機械的なものに切り替えてるぞ」
イッセーにそう答えながら、総督は滅茶苦茶興味深そうにサイボーグ達を観察している。
ついでに光の槍で、攻撃をしてきている連中を吹き飛ばしながら、しっかりと観察している。
「……ヒューマギアの技術もいくらか流用しているみたいだが、フレームも駆動系もより人間に近づけているみたいだな。人間社会に組み込む為外見を人に近づけたヒューマギアとは逆に、人間に技術を組み込んでも動かせるよう中身を重視してるようだな。となるとやっぱり人間の脳は丸々組み込んでるって感じか。……今度神の子を見張（チ）る者（ウ）も試すか？」
「さ、サイボーグ！　ロボ〇ップですのね!?」
ヒマリ。君女の子なんだから男のロマンに惹かれてどうする。あとこの流れだとお前が被験者になるぞ。
総督もやめてくれよ。誰を被験者にするんだよ。現代の倫理観だ

と異形社会でもその辺を上手く用立てないとややこしいことになるからさぁ。
後気になったんだけど―
「ロボ○ップってなに？」
本気で知らん。
そんな映画、ザイアでもグリゴリでも見たことないと思うんだけど……。
俺が本気で首を傾げてると、カズヒ姉さんが少し遠い目をしながら苦笑いしていた。
「何十年も前の映画シリーズよ。殉職した警察官がサイボーグになる話だったはずずね。……世代的に私達でも古い扱いなんだけど……よく知ってるわね」
カズヒ姉さんもよく知ってるな。俺らと同年代だろ？
そんなことを思ってると、リュシオンが外を見ながら目を警戒するように細めている。
「……どの勢力もタカ派はいる。特に教会は、その性質上悪魔や堕天使に対して無条件で敵とみなしやすい。だから会談でテロが起きる可能性は当然高く見積もってはいたけど―」
そう言いながら、リュシオンは周りの敵を見て首を傾げる。
「……それどころか、悪魔や堕天使とも縁がなさそうなのが多すぎだ。いったいどの勢力がこんなことを？」
「……他の神話体系に由来する者達ではなくて？　三大勢力が一つに纏まれば、質においてはともかく規模と数において他の神話体系を圧倒的に凌駕する勢力になるわ」
リアス・グレモリーがそう意見するけど、それはミカエルさんとセラフォルーさんが首を横に振って否定した。
「いえ、それなら外周のデュナミス聖騎士団が察知するでしょう。もし潜り抜けたにしても、この戦力、それも種類のバラバラさに説明がつきません」
「他の神話体系は鎖国的なところが多いもの。もし彼らなら、もっと分かりやすい感じになるはずよん」

「そうだ。なにより問題は手口だよ」
それに頷きながら、サーゼクスさんは何故か旧校舎の方に視線を向ける。
「私達すら停止しようとしたあの感覚は、時間停止のそれだ」
その言葉に、何故かゼノヴィアも頷いた。
「ああ。私が無事なのはそれに慣れていたからデュランダルで弾けたからだ。時間停止そのものは一種類しか受けてないから断言はしないが、ギャスパーのそれとそっくりだったぞ、部長」
俺の聞き覚えのない名前を聞いた瞬間、グレモリー眷属が本気でざわついた。
「ギャスパー君の!?　いや、確かに彼は制御できないから、暴発はあり得るけど……」
「でもよ木場！　ギャスパーならもう解除されてるだろ!?　それにあいつは旧校舎にいるんだぜ!?」
「何より、今のギャスパーでこの広範囲はあり得ないわ。それに外の襲撃者達が動けないこともいい、ギャスパーだとするなら不自然すぎる！」
なんかグレモリー眷属がほんとにざわついてるんだけど、どういうことだ？
「……話を聞く限り、グレモリー眷属に時間停止が可能な人材がいるの？　でもそれだけの実力者ならコカビエル相手に出さないのはおかしいと思うけれど？」
「いえ、彼は少し特殊な来歴なんです」
カズヒ姉さんが疑念を見せると、シャルロットが補足説明を入れてくれた。
「変異（ミューテーション）の駒（ビショップ）の僧侶で転生したギャスパー・ヴラディという眷属をリアスさんは持っているんですが、彼は視認した対象の時間を停止させる停止世界（フォービドゥン）の邪眼（バロール・ビュー）が制御出来てないので封印されていたんです。近年のグレモリー眷属の活躍て封印こそ解けましたが、まだ制御は出来てないので旧校舎で待機となりました」
な、なるほど。

制御出来ない神器とか害悪だしな。それも暴発とかするんだったら、そりゃまあ封印は仕方ない。
うっかり発動したら最悪だ。誰が止まろうが止まることなかろうが、このニトログリセリンの海に火種が落ちるようなものだしな。
「つまり、暴走しすぎて禁　手（バランス・ブレイカー）になってしまったんですの？」
「いや、これはそういうわけじゃねえな」
首を傾げたヒマリに、総督が待ったをかける。
「以前会ったことはあるが、あれはまだそんな感じじゃねえ。タイミングよくこうも襲撃してきたことと言い、たぶんとっ捕まって強引に暴走状態にされてるようだな」
もっと酷いじゃねえか。
「私のギャスパーを……よりにもよって魔王様達を相手にしたテロに使うだなんて……っ」
そしてリアス・グレモリーの怒気が怖い。
あの、その怒りで全力を叩き付けたらコカビエルにも通用したんじゃないですかねぇ！
「と、とりあえずどうするんです!?　外の人達が救援に来てない以上、たぶん向こうでも戦闘になってるかと待ってることですから、逃げるなりした方がいいと思うんですけど？」
俺がそう提案すると、首脳陣は全員首を横に振った。
ぜ、全員か。
「むしろ俺達は逆に釣りをしてるんだよ。強引に脱出して駒王町（この町）に被害を出すリスクより、しびれを切らした本命が名乗りを上げて挑んでくるリスクを取ったってわけさ」
総督がそう言うと、しかし旧校舎の方に視線を向ける。
「つっても、このままだとこっちも停止しかねえな。だが敵さんも流石に警戒はしてるし、下手に出ると集中砲火を喰らうだけだな」
そう総督が考え始めようとしたその瞬間、リアス・グレモリーが一歩前に出る。
「……なら、私が行くわ。……魔王様、旧校舎にある未使用の戦車（ルーク）の駒を利用したキャスリングで、私がギャスパーを助け出します」

キャスリングっていうと……王と戦車の駒を入れ替えるチェスのルールに則った、悪魔の駒の機能だったか。
なるほど。それなら敵の虚を突けるかもしれないけど……。
「流石に一人ってのはまずいんじゃないかい？」
「……そうね。敵だって流石に切り札を野放しにするわけがないもの」
リュシオンとカズヒ姉さんがそう言うけど、なんかカズヒ姉さんに一瞬間がなかったか？
いや、それは今気にすることじゃないか。
二人の言うとおりだからな。敵だって作戦の要に人員を配置しないわけがない。しかもこんなところに仕掛けるんだから、流石に上級悪魔が来ることぐらいは想定しているだろう。
だったら―
「二正面作戦とかどうです？　まずリアス・グレモリーが突っ込んで、敵が揺らいだ瞬間に残り全員で正面突破を図れば、虚をつけるかもしれません。逆でも不意を突きやすいかと」
俺はそう提案するが、しかしそこでヴァーリが鼻を鳴らす。
「そんな手間暇をかけるぐらいなら、俺がそのハーフヴァンパイアごと旧校舎を吹き飛ばした方が手っ取り早いんじゃないか？」
……。
「ヴァーリ！　てめえ今なんつった……ぶっ飛ばすぞ！」
「お前、空気と情勢を読めよ。テロリストの前にお前を潰すってことになったら協力していいぞ俺は」
「和平を結ぶって時に馬鹿なことしないでくれない？　説得力がなくなって意味がなくなるのよ？　第三勢力になるつもりなら私もイッセーに付くわよ？」
イッセーと俺とカズヒ姉さん。つまり対コカビエルの三大勢力共闘が思わぬ形で再現されそうになったよ。
しかも相手がヴァーリ（堕天使側）だから、いやなところも再現されてるしな。
そしてヴァーリ。明らかに嬉しそうな表情をするな。
「お前なぁ。和平結ぶって時にそれはやめろよ。やるにしたって最後

の最後だろうが、それは」
流石に総督もツッコミを入れるけど、ヴァーリはどこを吹く風だ。
「退屈なものでね。実際、神滅具を装備したコカビエルを、四人がかりでとはいえ倒した者達と戦えるってのは楽しめそうだ」
こいつは本当に何を考えてるんだか。
今更だけど、総督はこいつを連れてこないでほしかった。教会側（イリナ）や悪魔側（匙達）はいないんだし、大丈夫だっただろうに。
空気が全く読めない男に、サーゼクスさんやグレイフィアさんも半目を向けてる。
妹の眷属が関わってるし、まあ当然だよな。
「……すまないが、それは遠慮してもらおう。妹の眷属である以上に、守るべき冥界の民を生贄にするやり方はできれば避けたい」
そうため息をついてサーゼクスさんが言うと、それに続けるようにグレイフィアさんが魔方陣を展開して操作する。
「こちらで調整すれば、一人なら追加できるでしょう。問題は誰が行くかですが――」
「俺が行きます！」
「なら私も行きましょう。禁手を使えばイッセーと同化状態で行動できるはずです」
即答でイッセーが名乗りを上げ、そしてシャルロットも続いた。
なるほど。首脳陣を除けば最強格の、神滅具がタッグで行動か。
しかもリアス・グレモリーの眷属ってことも考えれば最適解だな。
「……じゃ、外の敵をぶっ飛ばして陽動した方がいいか。いいですよね、総督？」
可能な限りサポートはしないといけないと思い、俺はそう提案する。
実際問題、このままだと相手に堪え性があったら時間の浪費だ。止められないからそのまま帰るって輩の可能性もある。
そうなると、敵が誰かも分からない。流石にもうちょっと情報は入手したい。
だから撒き餌をすることを提案してみたけど、どう判断するんだろ

うか。
「……そうだな。ヴァーリ、お前も退屈しのぎに行ってこい」
「そうだね。このまま黙っているのもいい加減飽きた。奇跡を見せた赤龍帝（ライバル）に、奇跡そのものの白龍皇を見せるとするか」
そう言うなり、ヴァーリは外に飛び出て鎧を展開する。
……相変わらず強いな。一気に敵が吹っ飛んでるぞ。
さて、それはともかくとして―
「じゃ、俺も行かせてもらうか」
「なら私もですわ。こっちもいい加減イライラいてましたし―」
そう答えながら、ヒマリはちらりとリーネス達を見る。
そして一瞬目を伏せ―
「―これ以上、私達の仲間に酷いことをされるわけにもいきませんもの」
その言葉と共に、一気に飛び出す。
同時に腰にエイムズショットライザーをベルトごと装着している。
『ＦＲＥＥ』
プログライズキーも駆動し、落下中に速やかに装着。
「んじゃ、俺も行かせてもらうぜ！」
そして俺がそう言ってから飛び出す頃には、既に着地したヒマリが相手を見据える。
『Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅｒ……』
敵が反応し、攻撃態勢を取ったその瞬間。
「変身！」
『ショットライズ』
その攻撃をかいくぐるように走り、同時に引き金を引く。
放たれる銃弾は敵をけん制するように飛び回りながら、タイミングよくヒマリに向かい、強化スーツを展開する。
『リベレイティングキャット』
具現化されるは、明るい橙の装甲で敵たプロテクター。
全身鎧型禁手のように、しかし明確に科学的な印象を与える全身装

甲。
「仮面ライダーラクシュミー……ここで推参しますわ！」
かつてインドにて英国相手に反抗し、当時の英国人から貴人に対する礼を持って葬儀を行わせるほどに敬意を向けられた、インドのジャンヌ・ダルク。
『Ｄｉｅ　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｅｎｅｍｉｙ　ｏｆ　ｈｕｍａｎ』
ラクシュミー・バーイーにあやかった、戦士が此処に推参した。

三勢合一編　第十六話　後継覇王の降臨

イッセーＳｉｄｅ

すっげぇぇぇぇぇ！
目の前で本当に凄いことになってる！
「遅いな。もう少し滾る相手はいないんだろうか」
白い鎧を纏ったヴァーリは、空を縦横に舞って魔法使いを吹き飛ばしていく。
「邪魔が入る可能性は予想してたけどな……迷惑なんだよ消え失せろ！」
仮面ライダーマクシミリアンに変身した九成も、魔獣達の攻撃を星辰光や装甲で防ぎ切りながら、射撃で一体ずつ確実に倒していく。
そんでもって―
「はっほっちょいさ！」
―ヒマリが変身した仮面ライダーラクシュミーも、サイボーグやレイダーを相手にかく乱してる。
なんていうか動きが素早い。
ヴァーリみたいに超高速で空を駆け回ってるわけじゃない。
直線の速さなら、九成の方が上だと思う。
だけど、ヒマリは素早い。
なんていうか、木場が一番近いと思う。
すばしっこいんだ。なんていうか、１００ｍ走じゃなくて反復横跳びとか障害物競走みたいな速さだ。
レイダーの攻撃やサイボーグが振るう片手剣の攻撃を素早くかわして、左手に持った聖剣と右手に持ったショットライザーで反撃を叩き込んでる。
他の二人もだけど、戦い方が上手いなほんと！

俺と同じようにちょっと見惚れてた木場も、そこに気づいたのか顎に指を当てて考え込んだ。
「……最高速度より敏捷性に重きを置いているのかな？」
「正解だ。仮面ライダーはレイダーの上位互換って感じでな、使用するプログライズキーや変身デバイスで性能が変化するんだよ」
木場にアザゼルがそう答えると、なんかポケットをごそごそしながらこっちに近づいてきた。
「仮面ライダーマクシミリアン（和地）が使うのはサルヴェイティングドッグ。最短距離で味方の下に行って守るのが設計コンセプトで、単純な走力が高く、更に瞬間修復されるクラッシャブルストラクチャ構造のアーマーや防御フィールドに力を注いだ守りに行く為の装備だ」
な、なるほど。
星辰光（アステリズム）といい、いつものスタンスといい、九成は守ることが得意なのか。
俺が感心している時も、アザゼルは外を見ながら更に続けてきた。
「一方、仮面ライダーラクシュミー（ヒマリ）が使うのはリベレイティングキャット。最高速度で劣り特殊デバイスもないが、代わりにパンチ力（他の基本性能）キック力ジャンプ力では上回るし、何より加速性能なら若干上だ。ザイアの連中はヒマリをオフェンスにして和地をディフェンスにする目論見だったらしいな」
なんかちょっと分からないこともあったけど、またちょっと意外っていうか―
「普通女の子を守るのが男じゃね？」
「この業界は、戦闘能力が男女平等なんだよ。それに―」
アザゼルがそう言った時、なんか盛大な音がした。
振り返ると、なんか凄いことになってる。
「グリド！　レッツゴー！」
「ヒマリ！　流石に燃費を考えた方がよくないか!?」
そう言い合う九成とヒマリは、なんか凄いことしてた。
まず九成は敵に追い掛け回されてる。なんか一斉砲火を喰らって追い掛け回されてる。

それを、何故かバイクに乗って逃げてた。
そしてヒマリはそいつらを後ろから攻撃してた。聖剣を片手に大暴れしてた。
……その隣で、鎧で出来た龍が暴れ回ってた。
え、なにこれ？
「ザイアは孤児を集めて対異形の戦士として訓練してた。そして相性がよく戦闘能力も高い男女をコンビにして、そいつらを仮面ライダーに選んでたんだが……」
あの、なんでそこで沈黙？
「……あの二人、魔術回路持ちな挙句、神器を何故か二つも持ってててなぁ」
……。
「部長。神器って一人で何個も持てるんでしたっけ？」
「いえ、聞いたことないわ」
「そりゃそうだ。強引に他人から摘出して移植でもしない限り、普通は神器ってのは一人一つだし、それをやっても大抵はリスクがある。そこの木場祐斗（聖魔剣）は魔剣創造の禁手の影響で聖剣創造も持ってるような状態になったと思うが、それだってイレギュラー中のイレギュラーだぞ？」
何で知ってる!?
いや、思うがって言ったよな？　推測したのかよ!?
俺がビビってると、アザゼルは遠目になって二人を見てた。
「だけどあいつらは文字通り、生まれた時から神器を二つ持ってたイレギュラーだ。白龍皇（ヴァーリ）も対外だし黒刃の狗神（鳶雄）も凄いが、ここ最近俺は神器関連のイレギュラー中のイレギュラーを何人も見つけまくってて少しビビってるぜ」
と、とりあえずめっちゃ凄いのは分かった。
あれ？　何故かミカエルさん達も遠い目をしてるぞ？
「……アザゼル。実はここにももう一人レアケースがいます」
ミカエルさんがそう言うと、カズヒが視線を逸らしながら片手を上げた。

……え、どゆこと？
「私、剣豪（アーム・ザ・リッパー）の腕と異界（スペイス・カーゴ）の蔵の二つを生まれ持ってるわ」
そんでもって、クロードさんやリュシオンさんも苦笑していた。
「一応断っておくと、教会で生まれついての二重神器保有者は彼女を含めても二人しかいません」
「ちなみに俺達デュナミス聖騎士団のメンバーです。外周警備担当だから、落ち着いたら呼びましょうか？」
あ、アザゼルが白目をむいた！
よっぽどレアケースなんだろうなぁ。あと、ヴァーリもレアって言ってたし……とびおって誰？
俺が首を傾げてると、アザゼルは我に返ったのか首を横に振った。
アザゼルは気を取り直したのか、ポケットから探してたらしい腕輪っぽいリングを二つ取り出して、俺に押し付ける。
「……そ、そういうわけで、ヴラディ家のハーフヴァンパイアでしかもレアな神器持ちのお前らんとこの僧侶（ビショップ）を死なせるのは俺も嫌だ。だから助け出したらコイツをつけろ。そうすりゃある程度は制御できるはずだ」
「……二つあるけど？」
「万が一の予備兼お前用だ。それがあれば、シャルロットの禁手無しでも、代償を払うことなく一時的に通常禁手になれる。やりようによっちゃ覇龍も狙えるが……予備は持ってきてないし下手に使うと正しい形で禁手になりにくくなる。なにより迂闊に使っていいもんじゃねえから、あくまで緊急時の最終手段にしとけよ？」
おお！　マジか！
そういえば俺、代償を払って十秒とか、シャルロットの力を借りて亜種禁手とか、へんてこりんな形でしか禁手になってなかったな。
ちょ、ちょっと興味があるけど我慢我慢。
「……それで、あとどれぐらい待てばいいのでしょうか？　あまり時間をかけるとギャスパー君が心配です」
「もう少しお待ちを。あと一分もかかりません」
シャルロットがグレイフィアさんに確認を取っていると、サーゼク

ス様がアザゼル総督に振り向いた。
「アザゼル。今回の件、私は動き出しそうな者に心当たりがある。そちらはどうかね？」
「旧魔王血族のことを言ってるなら、たぶんそれ以上に厄介なことになってるだろうさ」
アザゼルはそう言うと、苦笑いを浮かべながら肩をすくめた。
「四、五年ほどまでに神の子を見張（チ）る者から出た馬鹿が五代宗家のはぐれ者や聖十字架持ちを確保したメフィストんところの敵対者とかを唆して、色々とこの国で大騒ぎを起こしててな。どうもそいつらの影響を受けて、厄介な連中が誕生しちまったみたいなんだよ」
「……というと？」
ミカエルさんに促されて、アザゼルは指を一本立てる。
「名前は禍（カオス・ブリゲート）の団。俺が知る範囲内だと神滅具持ちが複数名、はぐれ魔法使い組織もいくつか、悪魔にも関係者がいたから旧魔王血族もいるだろう。……問題は」
も、問題は……？
俺が息をのんでいると、アザゼルは―
「トップが史上最強の存在、無限の龍神様だってことさ」
―すいません。俺さっぱり分からない。
聞こうかと思ったその時―
『そうじゃ。妾達が今トップにしておるのはオーフィスなのじゃよ』
『まあ、利害の一致による寄り合い所帯ではあるがな』
―なんか聞き覚えのない声が響いたんだけど？
「……まずい！　グレイフィア、リアス達をすぐに飛ばすんだ！」
「……承知しました！　お嬢様、ご武運を！」
「え、ちょっと、グレイフィア―」
なんか急に慌て始めたサーゼクス様達に、リアス部長が何か言おうとしたけど間に合わない。
え、ちょ、もう転移!?
あぁ……クソ！　こうなったらぶっつけ本番！
待ってろよ、ギャスパー!!

祐斗Ｓｉｄｅ

気づいた時には、僕達の周りを強大な防護結界が覆っていた。
「……大丈夫なようで安心しました」
そうミカエル様が微笑んでるけど、緊張感は一切消えてない。
当然だ。この結界はどう考えても魔王クラスの力が込められている。
それが、この一瞬の攻撃でボロボロになっていた。おそらく慌てて魔王様方が複数人がかりで防いだのだろう。
そして、その煙が晴れると一人の女性がいた。
駒王学園本校舎の上部をごっそり吹き飛ばしたのは、見覚えがあるようでしかし明確に違う存在。
黄金の装甲とアンダースーツで構成される、どことなく仮面ライダーに酷似した装甲服。
間違いなくレイダーとは物が違う。しかし和地君やヒマリさんのそれとも似て異なるその装甲を見て、アザゼル総督は警戒心を露骨に見せた。
この場で最も余裕を見せていた彼が、ここまで反応するとは……っ！
「ザイアスラッシュライザーか。お前さん、ザイアの関係者か？」
「少し違うのぉ。……ザイアの支配者が異形達への反抗作戦を企てることをリークした一人……が近いのじゃ」
なるほど。
ザイアコーポレーションを真の意味で支配していた者がいて、彼ら

が聖杯戦争の仕掛け人であり、更に星辰体技術やプログライズキーを利用して異形達に戦争を仕掛けるつもりだったという話は聞いている。

そしてそれは誰かによってリークされると同時に、サウザンドディストラクションでとん挫。いくつかの技術は三大勢力を中心とした者達が確保したが、九割以上は行方知れずになっている。一部が突如としてテロリストや危険思想の持主に転移するという悪夢じみたおまけもある。

そして、それを成した者の一人が、彼女なのか……！

僕達がそれに警戒していると、外からオーラの砲撃が放たれる。

どうやらヴァーリと戦っていた魔法使いが放った物らしい。複数人で放った物なのか、コカビエルでも本腰を入れるレベルの威力があるだろう。

ヴァーリ自身はあっさり躱したが、その流れ弾がこちらに向かって飛んできた。

それが目の前の女性に向かって飛んでいくが―

「おっと」

その瞬間、黄金の花弁が咲き誇った。

まるで花びらを思わせる黄金の盾が、その魔法攻撃をあっさりと防ぐ。

しかも警戒するべきは、それはまさしく花弁のように舞っているという点。

少なくとも同型のものが、後二つも展開されている……っ！

「……おいおいマジかよ。この反応、神滅具（ロンギヌス）クラスあるじゃねえか」

アザゼル総督が目を剥くが、信じられないことを言ってきた。

……神滅具級だって？　それはつまり、イッセー君やヴァーリと同格の神器使い……っ

それもクラスの反応ということは、あれそのものは既存の神滅具ではないということ。

つまり、新種の神滅具の可能性があるというのか。

「うむ。これぞ我が神器、不滅齎す黄金花（ゴルディモータル・ストレチア）。我らがリーダー達上位神

滅具に次ぐ力を持つぞ？」
そういう女性に、ヴァーリの攻撃の流れ弾が迫る。
ジャブ感覚で放ったもののようだけど、それでもコカビエルに手傷を負わせられる程度のポテンシャルがある。
『……ふむ、かの白龍皇でこのレベルというのは想定よりマシと言うことか』
―こちらの死角から放たれた、黄緑色のエネルギーがその攻撃を吹き飛ばした。
そしてそれに合わせて、噴出音と共に新たな姿が……現……れ……る？
いや、これ―
『さて、一応自己紹介をするべきなのか？』
―ロボだ!?
全高４メートル半といったレベルの、人型のロボットがいきなり姿を現した。
こ、こんなものが、あの白龍皇の攻撃を弾き飛ばしたのか!?
思わず皆が面食らう中、人型ロボットが女性をカバーするような立ち位置に立つ。
それを見たうえで、女性はベルトを外した。
そして姿を現すのは、二十歳前後の若い女性。
背はそこまで高くない上に、黒い髪をツインテールにしているから若く見える。
だけど、そこから放たれる覇気はヴァーリにも匹敵する強者であることを見せつけている。
そして同時に、息をのむ音が響いた。
「な……っ」
カズヒ・シチャースチエが、目を見開いていた。
そしてそれに気づいた女性は、少し小首を傾げる。
「む？　どこかで見られたことでもあったかのぉ？　……まあ、心当たりもないし初対面が多いのじゃ。名乗りを上げるとするか」
そう判断した女性は、不敵な笑みを浮かべると共に胸を張る。

「妾はテロ組織禍（カオス・ブリゲート）の団の派閥の一つである、英雄派のサブリーダー。そして―」

魔王様に天使長、そして堕天使総督を前にして、その女性は臆することなく宣言する。

「英雄派特殊部隊、後継私掠船団（アレクサンドロス・プライベーティア）が団長。後継覇王（アレクサンダー）、九条＝幸香＝ディアドコイ」

―それが、のちに僕達を何度も苦しめることになる、禍の団の主要派閥、その中の異端者達。

英雄の末裔や魂を継ぎ、その名を名乗る派閥である英雄派。その中において、英雄の名前ではなくその跡を継ぐ者として名乗りを上げる者達。

後継私掠船団。その筆頭であり、カズヒ・シチャースチエが向き合うべき残り香。

アレクサンドロス三世の後を継がんとする女傑、九条＝幸香＝ディアドコイとの最初の対面だった。

三勢合一編　第十七話　鋼の守護星

明確に、カズヒ・シチャースチエは動揺していた。
それを抑え込もうとして、しかしそれが結果的に調子を乱すと判断したのか。彼女はあえて爆発させることを選んだらしい。
「……ふざけないで！」
即座に榴弾を呼び出すとそれを射出。同時にそれをけん制として、スタンロッドと取り出すと一気に迫る。
それに対して人型ロボットがけん制しようとするが、それより先に九条が前に出る。
「よかろう。かのコカビエルを相手にした女傑との戦闘なら腕試しにはちょうど良いわ！」
彼女は即座にスラッシュライザーを構えると、榴弾を花弁で防ぎながら真っ向からスタンロッドを切り捨てる。
続け様の攻撃をカズヒはかわし、一瞬首を横に振ると、素早く片手剣を取り出した。
「話を、聞かせて、もらうわよ!!」
「やってみるがよい！」
そして即座に切り結び合う中、人型ロボットがセンサーをこちらに向けるのが分かる。
『……さて、こちらも一応自己紹介及び、念の為の確認を行うとしようか』
「冷静だな。カズヒ相手に負けることはないって信頼か？」
アザゼル総督が代表してそう返すが、ロボットは反応しない。
『信頼というものはない。禍の団とは極論でいえば「相互利用」といった程度の集まりだからな。我々も我々の目的の為に彼らを利用し合うだけだ』
なるほど。どうやら禍の団というのは、思った以上に危険な者達が集まっているようだ。
そして僕達が警戒の視線を向ける中、ロボットから更に続く。

『私は禍の団の派閥の一つ、疾風殺戮・ｃｏｍのリーダーを務めるハヤテという。通信越しで済まないが、仮想敵のトップ兼筆頭戦力が雁首揃えている中、無意味に出てくる趣味もないのでな』
「しゃれたネーミングセンスしてるな。つっても、そんな名前じゃろくなことする気がなさそうだけどよ？」
アザゼル総督がそう皮肉るが、ハヤテと名乗る声の主はどこ吹く風だった。
『ユーモアというのは大切だろう？　シンギュラリティに到達している者として、情動（それ）を全否定する気はないのさ。……無条件にのさばらせるのも問題だがな』
そう返答するけど、それで総督は何かに気づいたらしい。
いや、僕達も少しは思い当たるところがある。
シンギュラリティ。それに到達したと名乗るこの声の主はつまり――
「……ヒューマギアですか」
「シンギュラリティ。ヒューマギアが人間と同様の感情を獲得した状態と聞いているが、どうやら悪意で到達することもあるということか」
ミカエル様とサーゼクス様が、そう呟くのも仕方がない。
というより、リーネスが連れていたヒューマギアでしかシンギュラリティの到達者を見たことが無いんだ。彼らはそれぞれ癖がある人もいたけど、根本的には善人だった。
そこから一気にテロリストのリーダーが出てきたんだ。落差が大きい分警戒心も強くなるだろう。
「それで？　レヴィアたん達の前に現れて、確認したいことってなにかしら？」
セラフォルー様が話を促すと、ハヤテもそれに同意したらしい。
『確認することはただ一つ。お前達は、今の人類社会に対してどういうスタンスを取るつもりだ？　返答次第ではそちらに鞍替えしてもいい』
その言葉に、僕は嫌な予感を覚えた。

この流れでそれを聞く。どう考えてもろくなことを考えてない。
「人間世界に余計な干渉を加えるつもりはない。俺は今の世界に満足してるからよぉ」
「人の子が健やかに導けるよう、教会を中心に今の世を宗教という形で助けるのみです」
「悪魔は人間と共生するつもりよん？　少なくとも、人類社会全体に悪影響を与えるつもりはないわ」
それぞれがそう答え、そして統括するようにサーゼクス様が一歩前に出る。
「……薄々方向性は予測出来ているが、あえて聞こう。疾風殺戮君・ｃｏｍ達の人類に対するスタンスはどうなのかね？」
その、返答次第で即戦闘と言ってもいい発現。
既にリュシオンとクロードも、それぞれ戦闘を想定して腰を落として構えている。
その視線をすべて受け止め、ハヤテは―
『可能なら数千万程度、多くとも数億にまで数を間引かせてもらう。……人類はこの地球という空間に七十億以上もいたところで、無駄にリソースを奪うだけだ。寄生元に害をなす寄生虫に価値はない』
―そう、はっきりと宣言した。
「……なら、こちらも容赦をする必要はないようだ」
そう告げ、サーゼクス様は僕達を振り返る。
「セラフォルー。すまないが、グレイフィアと共に結界の方を頼む」
「分かったのよん」
「サーゼクス様、ご武運を」
そして、僕達にも目を向ける。
「すまないが、これからだとセラフォルーもグレイフィアも周囲の防御にまで目を向けきれないだろう。手間をかけるようだが、周りの敵を任せてもいいだろうか？」
「そうですね。一体の敵にむやみやたらと集まっていいことはない」
「……拝命しました。ミカエル様、ご武運を」
リュシオンとクロードが、それに頷いて外に飛び出る。

そして、僕もゼノヴィアと顔を見合わせて頷いた。
「ここは部長の管轄だからね。僕達が動かないわけにはいかないよ、ゼノヴィア」
「いいだろう。悪魔として初の戦闘と行こうじゃないか」
……ここは、仲間達はお任せします。
その代わり、僕達は僕達で出来ることをいたします、魔王様！

和地Ｓｉｄｅ

ったく。数は多い上にしぶといのも結構いるな。
というか、本当にサイボーグがいるってのが驚いた。
なんで分かるかって？　ヘッドショットしたからだよ言わせるな。
おかげで機械部品と肉が散乱したから、それで漸く理解できた。戦闘慣れしてなかったらえげつなさすぎて隙が出来てたな。
そしてまあ、なんというかＳＦ度合いが増してきてないか？
今総督達を相手に、ロボットが砲撃を仕掛けてきやがった。
その後カズヒ姉さんが黒髪の女と戦闘開始。他の動けるメンバーはこっちの露払いに向けられたみたいだ。
……まあ、堕天使総督に天使長に魔王が一人相手にするようだから、流石にあそこは心配ないだ―
『では、本腰を入れるとしよう』
―ろうと思った瞬間、そこかしこから同じ形のロボットが姿を現した。
……度肝抜かれた瞬間に攻撃されなくてよかった。こっち側が本格的に戦闘を開始したことから、敵も動揺していたんだろう。
だけどほんとちょっと待て。一気に何機……いや、何十機増えた!?

おそらくぱっと見で三十以上。それだけの数が一気に総督達を包囲しただと!?
「これは……っ」
サーゼクスさんが目を見開くけど、ロボット側はロボットらしく、冷淡な反応しか返さない。
『何を驚く？　魔王クラスを最低三人は相手にすることは当然想定済みだ。それを打倒できるだけの戦力は当然整えるとも。……ゆえに、加減をする気もない』
その時、星辰体（アストラル）が一気に感応される。
だが、それは星辰奏者（エスペラント）が星辰光（アステリズム）を使おうとしているからじゃない。
これはそんなレベルじゃない。感応量という一点に限っていえば、星辰奏者のそれとは次元が違う。
三十以上の数で仕掛けてるとはいえ、あれだけの量の星辰体を感応できるわけがない。
『サリュートI全機、星辰体運用兵器駆動開始』
その宣言と共に、本格的に敵が動き出す。
『創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星』
そして、星辰奏者とは異なる起動音声（ランゲージ）が鳴り響く。
『敵対異形との戦闘行動開始に伴い、戦闘用星辰体運用モードに以降開始』
星辰奏者との詠唱とは何もかも異なる、詠唱というより音声とでもいうべき起動シークエンスが鳴り響く。
『アストラル粒子との感応量増大に成功。アストラルを触媒に疑似反物質粒子アザトースの精製機構駆動』
完全な合成音声で響くは、祈り（アナログ）ではなくただの手順（デジタル）。無機質なまでの手順確認（シークエンス）。
『アザトース生成速度規定値に到達かつ安定動作を確認。アストラルを媒介とした制御機構の駆動を規定段階に移行』
どこまでも機械的に作業的に、情動（アナログ）を一切排した、機械兵器としての星辰体運用が目の前でなされていく。
『規定値まで、残り３０％……２０％……１０％……規定値到達』

それと同時に、敵の全身に微細な粒子が漂い始める。
奴の発音を聞く限り、それは冗談抜きで洒落にならない危険物。
『制御統合機構の起動確認、同調率の最終確認―』
反物質。核兵器を遥かに凌駕する、科学的に生み出される最大の破壊技術。
疑似とつく限りは星辰光を利用したまがい物だろうが、それを踏まえてもその破壊力は核兵器すら超えかねないことは間違いない。
『全行程確認完了。起動開始、本格戦闘行動開始』
そう、あれは間違いなく異形との戦闘……それも最高峰の存在を打倒する為の兵器。
『超新星――星辰式異形制圧兵装・駆動開始』
その死刑宣告と共に、群体で魔王を圧殺できる、鋼の軍隊が攻撃を開始した。
「ぬぅ……っ！」
「……これは！」
サーゼクスさんとミカエルさんがそううなるのも無理はない。
一体一体がコカビエルでも手古摺りそうな力を持って、数十体の兵器が襲い掛かってるんだ。
ビームブレード、ビームスパイク、収束ビーム砲、拡散ビーム砲、それら各種ビーム兵器による連携攻撃による隙の無い攻撃。
それを何とか潜り抜けての反撃も、展開するビームバリアにより防ぎ、僅かに漏れた分も全身に纏うビームフィールドが相殺する。
果てはビームを利用した推進力と、一糸乱れぬ連携によるかく乱でそもそも狙いをつけさせない。
攻撃、防御、かく乱に至るまで、一切の乱れなく完璧に行われる連携によって、誰が見ても分かるぐらい殺戮の方程式が完成している。
「おいおいマジかよ！　並列ネットワークとデータリンクを併用して、ここまで完璧な連携が出来るってのか！」
『ある程度の絡繰りはあるが、それだけではここまでは出来ないさ。だからこそ、駆動される側にも相応の技術が必要になったがね』
総督がなんか感心してるけど、それに応える敵のボス（らしき人

……か？）は、嘲笑しているじゃないかって声色だ。
俺が援護射撃を真剣にするか考えたその時―
『第一、この作戦は戦略段階で勝っているからな。内通者を確保できた時点でこちらが圧倒的に有利なのだと知るがいい』
―その言葉と共に、よりにもよってな奴が総督に攻撃を叩き込んだ。

三勢合一編　第十八話　白を宿した明星

祐斗Ｓｉｄｅ

なんだ!?
敵の攻撃が激しくなったと思ったら、アザゼル総督が吹き飛ばされた!?
戦闘が激しくて状況を把握しきれないけど、それにしたっていきなりすぎる。
これは、魔王様を援護するべき―
「後ろだ木場!」
―そう思った瞬間、ゼノヴィアの声に従って咄嗟に伏せる。
その瞬間、胴体があった位置を光の刃が通り抜ける。
そして続け様に今度は実体剣が振るわれる。
それを素早く聖魔剣で凌ぐけど、敵の剣は頑丈なのか切り落とせない。
この衝撃、おそらくは星辰体感応合金のアダマンタイトか。
それを把握しながら跳び退ってから、僕は相手を確認する。
そこにいたのは、一人の女性。
ボディスーツではなく、肌そのものがゴムのような質感の黒い物体に覆われている。
外見そのものは整った白人だろうけど、それが分かるのは顔だけだ。それにどこか人工的で、おそらくそれも作った物だろう。
「なるほど、サイボーグ技術は全身整形のようなものなのか。一つ学べたよ!」
そう言いながら、ゼノヴィアがデュランダルでそのサイボーグに切りかかる。
それをあまりにも早い反応速度でかわしながら、女性は苦笑すら浮

かべている。
　どうやら、まだまだ余裕らしいね。
「顔の骨格や肌の色は、元々のを再現したのよ？　元から美人な私が言うことでもないけど、戦闘躯体に芸術美は優先されにくいじゃない？」
　そう返しながら、そのサイボーグは素早く蹴りを繰り出した。
　光の刃がそこから伸び、ゼノヴィアはそれを飛び退って回避するが―
「甘い」
「くっ！」
　―更に踵から光の弾丸が放たれる。
　デュランダルを盾にして防いだけれど、それでも回避が間に合わなかったのは事実だ。
　やはりこの女性、手練れか……っ
「ゼノヴィア！」
　僕は素早く聖魔剣を投擲用に創造すると、素早く投擲する。
　可能な限り大型にすることで回避を困難にし、更に炎を撒き散らすことで攻撃範囲を広げたものだ。
　当然、サイボーグもそれを見切って大きく距離をとるけど、おかげで仕切り直しは出来た。
「どうやら、敵の主力みたいだね」
「そのようだ。この女、体の性能だけでなく技術も胆力も判断も優秀だね」
　そう言葉を交わしつつ、僕達は相手に意識を集中する。
　その視線を微笑んで受け止めながら、女性はいつでも戦闘に入れる動きで、しかし優雅に一礼した。
「初めまして、聖魔剣の木場祐斗とデュランダルのゼノヴィア。私は禍の団の小規模派閥の一つ、ツヴァイハーケンに属する武将型アステロイド、ジークリット・ゼーベック」
　そう告げる女性……ジークリットは、不敵な表情を浮かべている。
　これなら、少しは聞き出せるか？

「色々と聞きたいことはあるけれど、武将型アステロイドということは、他にもあるということで良いのかな？」
「いい質問ね。軍事兵器でありながら一品ものであることを許された……と言えば分かるかしら？」
そう告げるジークリットに、ゼノヴィアは少し首を傾げる。
「つまり手練れ中の手練れだとは思うが、態々強調して言うからには、他にも何かあるようだね」
「いえ、含むところは……ああ」
ゼノヴィアにきょとんとするジークリットは、すぐに思い当たったのか軽く肩をすくめる。
「兵器というものは原則として「数を揃えられてこそ優れている」ものよ。一品物というのは兵器としては「欠陥品」と言ってもいいわ」
なるほど。
確かに、異形社会において強大というものは数が少ないか単一のものとして認識されることが多い。
唯一神、二天龍、四大魔王。僕達に縁があるだけでもこういった少ないことを強調するし、神滅具も基本として一種一つだ。
だけど化学によって作られる兵器は、再生産が効くからこそ世界に影響を与える物だ。
軍事的強国とは高性能の兵器を、一品物ではなく大量に用意できるからこそだ。この辺り、人ではなく物が重視されやすい人間の軍事事情によるものだろう。
そして、それでよく分かったよ。
「つまりあなた方は表の人間側。少なくともそちらに近い組織ということですか」
「……勘がいいわね。ええ、ツヴァイハーケンはナチスドイツを源流とする改造人間研究機関。そして―」
同時に彼女が指を鳴らすと、大量のサイボーグが姿を現す。
多少の個人差はあるけどほぼ同型。それが十人はいる。
『『『

組み込んだ。
『『『

……アステロイドと呼称された彼らにこそ適しているのは事実ではある。
だけど……。
「木場、レイダーの戦闘能力はどれぐらいだったかな？」
「下位の星辰奏者なら互角以上に戦える程度の戦力だね。……もっとも、変身するのがただの人間なら、だけどね」
それをあえて他人の口から確認したかっただけなんだろう。ゼノヴィアも歯噛みしていた。
話を聞く限り、マギアとレイダーの戦闘能力はさほどかけ離れていないのだろう。だがそれは、変身する者が違えば話が変わる。
変身前から並みの星辰奏者と戦えるだろう実力を、このアステロイドと呼ばれたサイボーグは持っていた。
そんな彼らに星辰奏者と戦えるだけの力が上乗せされれば、危険だということぐらいすぐに分かる。
これは、危険か。
どうやら援護は無理なようだ。
それどころか、周囲の魔法使い達や魔獣、アントレイダーも一気に集まってきている。
間違いなく、僕達は苦境に立たされている。
……くっ！　ここは凌ぐので精一杯か。
イッセー君、リアス部長を頼んだよ。

和地Ｓｉｄｅ

俺はヒマリと一緒に全力で走っていた。

直線での機動力はマクシミリアン（俺）の方が上だが、各個撃破を避ける為、俺が前衛でかつ警戒に意識を向けているから引き離してはいない。そこに加速力の高さから即応性に長けるラクシュミー（ヒマリ）が後ろについている形だ。

俺達はツーマンセルを前提として訓練してたから、これが自然と出来るのが強みだ。

まあ最も、それ以上に強みなのは「どれだけ焦っててもこれぐらいは問題なく出来る」ってことなんだろうがな。

「いったい何がどうなってますの!? あと吹っ飛んだ方向が最悪ですのよ！」

「全く同感だよ。よりにもよって旧校舎側とか、勘弁してくれ……っ」

総督が吹っ飛んだのは旧校舎の辺りだ。つまり、イッセーやリアス・グレモリーがいる場所だ。

しかも吹っ飛ばした奴まで向こう行きやがった。これは流石にまずいだろ。

……よし見えた！

「ヴァーリ！ 総督を後ろからぶん殴るとか、そりゃ殴りたくもなりますけど今しますの!?」

「まてヒマリ、たぶんそれ違うし今言うことじゃない！」

このタイミングでそれはないだろ！ 問題はそこじゃない！

「ちょ、どういうことなんだよ九成！ なんでアザゼルがぶっ飛ばされて、しかもヴァーリがそれやったって!? なんで!?」

「俺が知りたいよ！」

イッセーも！ 悪いけどちょっと待ってくれ。

こっちもさっぱり状況が分かってないんだよ。

そう、総督を後ろから攻撃いてぶちのめしたのは、こっち側のはずだったヴァーリだ。

何がどうしてこうなった。俺やヒマリが外で暴れている時に、いったい何があったというんだよ。

「どういうつもり？ あなたが戦闘狂なのは薄々分かっていたけれど、この状況でその行動は利敵行為としか―」

「いえ、リアスさん。たぶん逆です」
そしてリアス・グレモリーの言葉を遮って、シャルロットが一歩前に出る。
その目は、明確にヴァーリを敵をみなしていた。
「……仮にも三大勢力の警戒網を此処まで潜り抜けたことと言い、よりにもよってギャスパーさんの神器を利用した手法と良い、相応の立場の者が内通者でなければここまでスムーズに行けるとは思えない。そこでこんな行動を総督の虎の子であるあなたがしたなんで、何もかもが分かり切っているでしょう」
……おいおいマジかよ。
ある意味納得だけど、寄りにもよってお前がなのか。
俺が息をのんでいるなか、シャルロットは鋭い視線でヴァーリを問い質す。
否―
「あなたが手引きと情報提供をした内通者。そう考える他ないでしょう」
「ああ。ちなみにスカウトされたのはコカビエルを持ち帰っている最中だよ」
しかもあっさり肯定しやがった。
「ど、どういうつもりですの！」
「ふざけやがって……何が目的だ！」
ヒマリとイッセーに問いたされて、ヴァーリは肩をすくめた。
「スカウトの内容が魅力的だったんだよ。「アースガルズと戦ってみないか」と言われては、戦いを求める俺には断れない。アザゼルは絶対に許さないだろう？　戦争が嫌いなんだから」
「まあそうだな。折角三大勢力で和平を結べたんだから、やるなら和平から始まって交流を深める方だろうよ」
そうため息をつきながら、総督は苦笑いをしながらヴァーリを見る。
状況はあっさり受け入れたが、それはそれとしていうべきことはあるってことなんだろうな。

「ヴァーリ。俺はお前に「世界を滅ぼす要因にはなるな」と言ったはずだぜ？」
「知った事じゃないさ。俺は強い奴と戦えればそれでいい。……それに、少し前に言っただろう？」
そうすげなく言いながら、ヴァーリは真っ直ぐな思いとしか言えない態度を示した。
「自分より強い奴がいなくなったら俺は死ぬよ。そんなつまらない世界に興味はないんだ」
……戦闘狂、ここに極まれりだな、おい。
俺たちが歯噛みしてると、ヴァーリは肩をすくめながらイッセーを見る。
「正直に言おう、兵藤一誠。俺は君のことを非常に買っている」
「……なんでだよ？　俺は最強とか戦争なんかに興味ないぞ」
そう答えるイッセーに、だけどヴァーリはとっても嬉しそうな感情を見せていた。
「俺は宿敵たる赤龍帝に、俺と並び立てるスペシャルであることを求めていた。だから最初に君の情報を知った時、確認できる先祖全てを見て一切異形も異能も神器も関わらない、本当にただ神滅具を持ってしまっただけの男が自分の宿敵だと痛感して、一周回って笑ってしまったよ。調べてもわからないレベルで脆弱な魔術回路を先祖に由来しない先天素質として持っていたのは驚いたけど、逆にない方がまだ良かったんじゃないかと思ったぐらいさ」
……ぼろっかすだな。
ちょっとイッセーに同情するが、同時にヴァーリは肩を震わせる。
「だがそれがどうだ？　君は脆弱の極みであっても魔術回路を持っていたことでサーヴァントのマスターとなり、あろうことか彼女にも神滅具……それも神の子を見張る者（グリゴリ）ですら詳細を把握しないものを宿していた。更にだ」
もう断言できる。
今、ヴァーリは本心から笑っている。
心の底から喜んでいる。

「あろうことかほんのわずかな交流でサーヴァント(彼女)を禁手に至らせた。それも君の神滅具を強化することに特化した亜種禁手で、それにより君は自分が至ることなく亜種禁手に至ったんだ！　これを喜ぶななんて俺には無理だよ！」

普通なら、宿敵がもう一つの神滅具を従えて更にその恩恵で強化されるなんて喜べないだろう。

それを心から喜べる当たり、こいつは本当に戦うことが好きなんだろう。

……俺には正直理解できない。いや、したくない。

たまに創作物を見ると「格闘競技どころかスポーツでも人は死ぬ。まして日常生活でも死ぬことも殺すこともありえるのに、戦場を忌避するなんて線上にいないものを馬鹿にするのと同じだ」なんて感じの言い回しがあるが、馬鹿にしてるのはお前らだろうとすら思う。はっきり言って詭弁とか詐欺だろう。

まず格闘競技に家族が参加することを「家族が殴られるなんて」といった感じで快く思わない者や止める者は確かにいる。それにスポーツと一口に言っても危険度は種類で大きく変わるから、同列に語っていい物じゃない。死ぬかもしれないなんてことを痛感しているのなら、同様に止める者もいるだろう。

何より戦場ってのは非日常だ。少なくとも日本に代表される平和な国ではそうだし、そうでない国は客観的に見てそんな国であることやそこで生まれたことが不幸だろう。なによりシェルショックなんて軍事的心理用語があるように、戦場が日常生活に比べてはるかに過酷でストレスが溜まることなんて、とっくの昔に分かり切っていることだ。

そもそも常に自分の死や他者を殺す可能性を意識し続けるなんて、精神的に不健康としか言いようがないだろう。

だから、仕事に充実感や達成感を覚えることはあっても殺し合いそのものに快楽を覚えたつもりも楽しいと思ったつもりもない。

多分それは、そうである方が真っ当だとすら思っている。俺は自分の半生的にまともかどうかには疑問があるが、だからってまともじゃ

なくなるつもりはない。
そりゃまあ毎度毎度一切歯応えのないことばかりしていると、殺し合いや命がけを好む好まない関わらず何かしらの退屈を覚えることはあるだろう。
だけど圧倒的な脅威に立ち向かわないと楽しく思えないってのは論外だ。
だがヴァーリは違う。
本心から戦いを好むからこそ、むしろ自分が負けるどころか死ぬ可能性すらある敵の方が楽しめる。
……中二病なのか精神破綻者なのか、それも本当にラノベで見たあんな思想が常態な悪い意味で悟っているような男なのか。
まあどちらにしても、その為に組織裏切るどころかこのタイミングで敵と内通するだなんて、どうなんだよ。
「神滅具保有者が神滅具保有者を従え、共に昇華する奇跡の実現を祝福しよう。聖書の神が作りし究極足る神滅具を、聖書の神の宿敵が末裔に宿る奇跡の体現に相応しい宿敵だと、運命があるのなら心からの感謝をしたいところだ」
……いや、ちょっと待とうか。
俺がちょっと戸惑っていると、というよりほぼ全員戸惑った。
「……宿敵？　人間って聖書の神の宿敵でしたの？」
ヒマリが首を傾げるのが全く持って分かり易い。
なんかちょっと、下っ端の俺達だと分かってない飛んでも情報が出てきた気がする。
「……どういうことかね？　もしや、それも裏切りに関与しているのだろうか？」
「……他神話に属する神の血でも引いているのですか？」
と、そこでサーゼクスさんとミカエルさんも駆けつける。
いや、語弊があるな。
そこまで追い詰められたというべきだ、コレ。
『なんだ、まだ知らなかったのか？』
『ある意味和平の象徴になるから、早い段階で告げると思ったのだが

な』
　そんな音声をまき散らしながら、トップ陣を４０近い数と連携で追い込んでいたロボット兵器がこっちに来る。
　そして同時、盛大な戦闘音と共に更に二人の乱入者が。
「和地、ヒマリ、それにイッセー達も!?　というかミカエル様、ご無事ですか……なんか増えてる!?」
「はっはっは。兵器とは量産出来てこそがモットーのようでのぉ。まあ、妾も否定する気はないぞ？」
　追い込まれる形でこっちに来たカズヒ姉さんと、それを仕掛けてきたツインテールの女が現れる。
　カズヒ姉さんを追い込むとは、できる……っていうか!?
「ヒマリ、あいつザイアで見なかったか？」
「……そういえば、ザイアスラッシュライザーの使用者にいた気がしますの」
　なんだこの状況。俺の頭の理解速度を超えてるぞ、オイ。
「のぉヴァーリ。ついでだからお主も自己紹介をするがよい。仮にも王族なら、外連味は大事にした方がよいぞ？」
　俺がげんなりしてると、ツインテールがクスリと微笑みながら、ヴァーリの近くに移動しつつ奴に声をかける。
　更にロボット共もそれをカバーするように位置取り、俺達は向かい合う体制になる。
　自然と睨み合い膠着状態になるその空気を察したのか、ヴァーリは軽く肩をすくめた。
「そうだな。流石に縁があまりない者には伝わってもないだろうし、此処は告げるべきだろう」
　そう前置きし、ヴァーリは―
「俺はヴァーリ・ルシファー。人間の母親とルシファーの孫によって生まれた、魔王の血と神の祝福を友に宿す、奇跡という存在の体現者だ」
　―とんでもない大爆弾を投入してきやがった……っ

三勢合一編　第十九話　トップ舐めるなテロリスト

「ちょ……初耳ぃ!?」
　俺とヒマリが同時に突っ込んだのも無理はないだろう。いや無理がないと言ってください。
　だってお前、魔王のひ孫だぞ？　和平が結ばれてない状況下で、なんて存在を抱え込んでるんだよお前ぇ!!
　何をどうすればゲットできたんだ総督!?　よく今まで旧魔王血族と殺し合いにならなかったなぁ！
「……なるほど。信じがたい話ではありますが、ありえないことではないでしょう」
「……世も末と言いたいがね。だが、別にそこまでおかしな話でもないだろう」
　ミカエルさんもサーゼクスさんも冷静すぎる！
　え、これそんなレベルじゃないだろ!?
「お兄様!?　あの、そんな冷静に……？」
「ありえない話ではないさ。神滅具まで持っているというのは驚きだが、それさえ除けば朱乃くんも負けてないだろう？」
　え、リアス・グレモリーの女王（クイーン）ってそんなレベルなのか!?
「……流石に神滅具というのは想定外ですが、そうでないのならば、プルガトリオ機関にも近いケースは存在しますので」
　懐深すぎないかプルガトリオ機関！
「なるほど。つまり神滅具まで持つ俺は奇跡の中の奇跡ということか」
　得意げになるなヴァーリ！
「……ま、旧魔王血族が禍の団にいる可能性は高いし、お前がそっちにつくのもありえる話か」
「心外だね。俺はあいつらとは価値観が違う。もっと誇り高い生き方をしているつもりだが？」
　アザゼルにそう返しながら、ヴァーリは不敵に笑みを浮かべる。
「さてどうしたものか。個人的に赤龍帝には生き残った上でより強く

なって欲しいんだけどね」
『よしてもらいたいな。事実上の神滅具二重保有などというイレギュラーだ。データは確かに欲しいが、より使いこなされるリスクの方が高いだろう？』
「確かにのぉ。折角魔王筆頭に天使長に堕天使総督といった三大勢力の筆頭格を潰せそうなのだぞ？　ここは徹底的に潰しておくべきじゃ」
うわぁ、完璧に勝った気になってるな、オイ。
だけど確かに、状況はこっちが不利なんだが―
「……く、ククク……」
―何を笑ってるんですか総督。
「……ほぉ。この状況下で逆転が出来るというのか？　外部からの救援か、それとも他の神滅具保有者を当てにしてるのかのぉ？」
ツインテールが興味深そうに目を細めた瞬間―
『ではその前に死ね』
―躊躇なく全方位から撃ったぁあああああ!?
「……空気読まぬなぁ本当に」
「……面白そうなものが見れると思ったんだけどね。しかもサーゼクス・ルシファーやミカエルまで巻き込んでいるじゃないか。つまらないな」
ツインテールとヴァーリに半目を向けられるけど、ロボット側はどこ吹く風だった。
『浪漫や風情は作戦がきちんと遂行される範囲にとどめてくれ。態々敵の切り札を開帳させて、成功しかけている作戦を瓦解させるのは論外だろう』
ため息をついてそうな言い方をしたその瞬間―
『――悪いが、とどめを刺すつもりなら威力を倍は取るべきだったな』
その言葉と共に、絶大なオーラを肌で感じた。
おい、何だこれ。
どう考えてもコカビエルなんて目じゃないレベルだ。少なく見積もっても数人分はあるだろう……！

そして同時に、その存在の姿が見せつけられる。
リアス・グレモリーが放つ消滅の魔力、それで出来た人型の存在。
そう形容する他ない存在が、総督やミカエルさんを庇う様に立っている。
……何がどうしてどうなった？
「お、お兄……様？」
『ああ、リアスにはこの姿を見せるのは初めてだったね。……アザゼル風に言うなら、本気モードという奴だよ』
『……計測機器の反応があまりに上がっている……っ！　この反応は主神クラスの中でも上位級か。こちらも保険として追加結界を用意していたとはいえ、下手をすれば破られていたな』
『全くだ。それに気づかなければこの力を見せることはなかっただろう。……保険をかけたのが仇になったようだね』
「え……え？　お兄様……え？」
ロボットは冷静に対応するけど、肝心のリアス・グ妹レモリーが驚いている。
本当に伏せ札だったらしいな。正直怖いぞ。
あと主神クラスの上位ってなんだよ。魔王クラスの領域あっさり超えてないか、オイ。
「……一対一で主とも渡り合えるでしょう。よもや悪魔に単独でここまでの者が生まれいずるとは」
「……最高だ。流石は奴と同じく超越者と並び称されることはあるルシファーを継ぐに相応しい存在じゃないか！」
ミカエルさんも驚いているし、ヴァーリに至っては滅茶苦茶喜んでいる。
この辺、真っ当な感性と戦闘狂の意識の違いなんだろうか―
「……かっけぇえええええですのぉおおおおお！　魔王の真の姿、ファイナルフォーム！　まさにラスボス！」
「それだと俺達敗ける側だよなぁ!?」
ヒマリさぁあああん!?
空気読んで！　あと縁起でもない発言しないで!!

ラスボス味方だから。そうなると敵が主人公だから、俺達敗けるから。
『……ハァーハッハッハ！　これこそがが深紅の魔王（クリムゾン・サタン）の真なる力！
新たなる明けの明星として輝く、紅き超越者の輝きと知るがいい！』
「お兄様もファンサービスは他所でなさってください！」
ノリがいいなぁ魔王様！
妹さんもツッコミ適正高いな！　後で一緒に身内を愚痴らないか！
「……くっくっく。なら、俺もカッコつけるとするか」
そう言いながら総督は、なんか小さな槍っぽい物を取り出した。
「神器ってのは本当に面白い。俺が奴を素直に褒めれるところだってぐらいにはなぁ」
『味方に神滅具級を二人連れているところで言うことでもないが、問題も数多いだろう。こちらとしてはより工学的に安定した物を大量生産して補いたいところだ』
返答するロボに対して、総督は歯を剥いた。
「浪漫の分からない鉄屑が。俺の大事な楽しみを邪魔する奴は、消えてなくなりな……禁手化（バランス・ブレイク）」
「今なんつった!?」
思わずイッセーと一緒にツッコんだその瞬間、総督が黄金の鎧に身を包む。
おいおい、これって二天龍の禁手に近くないか!?
ヴァーリも少し目を丸くしてる感じだし、まさか切り札か!?
「……驚いたな。人工神器はそこまでの頂に到達していたのか？」
「ま、この辺りは俺を含めた研究の深部に位置する奴しか知らねえよ。五大龍王が一角、黄金龍君（ギガンティス・ドラゴン）ファーブニルを核にした人工神器さ。堕天龍（ダウンフォール・ドラゴン）の閃光槍（ダウンフォール・ドラゴン・アナザー・アーマー）の疑似禁手、堕天龍の鎧ってなぁ！」
……なんか凄いのが連発できやがった。
ちょっと軽く引いていいか？　本気で引いていいか？
「……み、ミカエル様？　その……何かこっちも隠し玉とかないのでしょうか!?　その、威厳が必須な宗教の上位存在的に……このままだ

とまずいのでは？」
カズヒ姉さん、なんかツインテールに意識を向けすぎてたのか、完璧に状況に戸惑ってるな。
普段言わないようなこと言ってる辺り、混乱してるか？
それにほら、早々ポンポン隠し玉なんて―
「……確かに、ここまで来たのならば隠し玉を見せるべきでしょうね」
あるのかよ!?
え、なにが？　何で？
正直、ちょっと気になる。
俺がちょっと固唾をのんで見守ったその時、ミカエルさんは一つのロザリオを取り出した。
……すいません。それ、アダマンタイトじゃないですか？
え、マジで？　マジにマジで？
おいおいちょっと。寄りにもよって天使の長が―
「創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌めく流れ星」
―星辰奏者（エスペラント）おおおおおおお!?

Other Side

「光あれ。そう告げし者が去ろうとも、慈しむべき衆生は此処に」
それは、主亡き世界であろうとも、自らの本分も成すべきことも忘れない天使の宣誓。
「我は天よりの使いなれば、その意義忘れることは無し。悲嘆にくれるその前に、なすべきことを成し遂げよう」

例え神がいなくなろうと、天使として成すべきことを成す。
その強い意志があったからこそ、ミカエルという天使は堕ちることなく天使の長として今もあるのだから。
「見守ろう、慈しもう、そしてその魂を裁定しよう。天成す者が成すべきことを、劣る身なれど行おう」
神がない世であったとしても、彼は守るべき人々を慈しむ為に死力を尽くしてきた。
取りこぼしはあった。救えぬ者もあった。見捨てなければならない者も数多い。
だが、それでも成すべきことを成す為に、身命を賭してきたことに嘘はない。
「故に、見過ごせぬ悪徳を前に断固たる決意をもって宣言しよう」
―だからこそ、今この場で容赦は必要ない。
「罪在りき者よ悔いるがいい。今この場は、汝の罪を問う審問の場なり」
その瞬間、星の力は全力で発動する。
一瞬だった。一瞬で示し合わせたように動くサーゼクスとアザゼルの攻撃が、敵に襲い掛かる。
そしてそれを、敵は回避できなかった。
回避しなかったのではない。反応できなかったのでもない。
だがしかし、反応しても動きが追い付かなければ躱せないのは自明の理。
斥力の拘束によって枷をはめられた結果、それを振り切ることが出来ずに回避を阻害される、これはただそれだけの話。
「超新星（メタルノヴァ）――光成す主（ユーディキウム・セラフィム）の代行、断罪を此処に」
その星辰光が発動した瞬間に、決着はついていたと言っても過言ではない。
――疾風殺戮・ｃｏｍが開発した、完全人造型人層惑星サリュートⅠ
疑似反物質粒子アザトースを生成しそれを制御するその星辰光は、しかし技術的な問題もあり質より量を体現した星辰体運用兵器とし

て開発されている。
疑似反物質粒子そのものが凶悪である為、攻撃においても防御においても下手な星辰奏者を超えている。加えて言えば「星辰体と感応できるように調整された兵士」である星辰奏者と「星辰体を運用する為に開発された兵器」である人造惑星は、そういう単純な戦闘能力とは異なる段階で格上だ。少なくとも、出力の任意調節という明確なアドバンテージは単純な星辰光の性質や能力とは別次元の優位性を持つ。
しかし、サリュートⅠは技術的問題もあって一騎当千の化け物兵器ではない。あくまで数を揃えて使用する軍事兵器であり、単騎を相手にするだけならば、戦術さえ確立できれば優秀どまりの星辰奏者でも勝機を見出せるレベルだ。

サリュートⅠ
星辰式異形制圧兵装・駆動開始（アザトース・ビーム・ジェネレーター）
基準値：B
発動値：A
収束性：B
拡散性：D
操縦性：A
付属性：C
維持性：A
干渉性：D
総じて高性能こそあるものの、純粋なステータスで見れば星辰奏者でも超一流なら見つけることができるレベル。一対一なら対策メソッドさえ確立すれば、勝つことはできなくても凌ぐことは出来るだろう。どれだけ疑似反物質アザトースが凶悪であっても、当たらなければいいのだから。
それがここまで圧倒的だったのは、文字通り数と戦術による圧殺、そして初見であるという点が非常に大きい。
故に初見で可能な限り有力な者達を殺すことで、心理的な枷がかけられるならそれに越したことはなかったのである。

そしてミカエルは彼らにとって最高で敵にとって最悪なことに、間違いなく超一流の星辰奏者であった。
斥力場を利用した拘束結界を展開する。言葉にすればそれだけだが、単純ゆえに強力と言ってもいいだろう。
これがただ力任せにするしかないのなら、一勢力のトップ一人に対し12機がかりを想定した合計36のサリュートIなら打倒は出来た。
だが、ミカエルにおいてそれは通用しない。

ミカエル
光成す主の代行、断罪を此処に（ユーディキウム・セラフィーム）
基準値：C
発動値：A
収束性：B
拡散性：B
操縦性：B
付属性：B
維持性：B
干渉性：B

あまねくすべての性能が軒並み高水準。突き抜けた性質を持たない代わりに、優秀でない性質が存在しない、万能型そのものの性質こそがこの星辰光の真骨頂。
サリュートIに比べては、一部においては劣っているところもあるにはある。それでもこの万能系の極致を突破することは容易ではない。こと一瞬で勝負が決まる状況なら尚のこと。
一瞬で確実に拘束し、更に抜け出ることは出来るが間違いなく初見では時間のかかるかけ方を行っている。それゆえに、どうあがいても時間を稼がれてしまった。
一瞬だが確実にすべての動きを封じたことで、規格外の力を示したサーゼクス及びド級の切り札を開帳したアザゼルが、一気に十機近く

を粉砕消滅させた。

故に、今この場における戦いの趨勢は決定した。
この戦いで三大勢力の首脳を殺すことはほぼ不可能。そして、サリュートIを操るハヤテはそんな低確率の賭けをとるような手法ではない。
とある理由から強い衝動を持っているからこそ星辰光を振えるようになったハヤテだが、彼自身はそれに振り回されることなく冷静さと知略を持って対応することを良しとする。ましてまだ序盤で戦略的な優位性を持っているにも関わらず、意味もなく博打を撃ってまで価値を得る趣味もない。
極僅かな勝利を掴もうとするより、確実に後に繋げられる敗北を。
だからこそ、この戦いの趨勢は此処で決定する。
三大勢力は会談を成功させ、禍の団の襲撃を退ける。
其の決着が、翻されることは断じてない。

三勢合一編　第二十話　連・戦・佳・境

祐斗Ｓｉｄｅ

敵の動きは明らかに驚異的だった。
デュランダルと聖魔剣の攻撃力が上回っていることもあり、十分足らずとはいえ何とか凌ぐことは出来た。
だけど、それでも既に追い詰められている。
……これは、まずい。
「ふぅん。ちょっと歯応えがなかったわね。この程度なら、たぶん上級悪魔クラスなら一対一で渡り合うことは出来るでしょうし」
ジークリットもこちらに興味を失ってきているのか、仕留める方向性に入っている。
「ええい！　こうなればせめて道連れに―」
ゼノヴィアが焦れたその瞬間だった。
「落ち着いてください。信仰とは命を惜しまぬものですが、投げ捨てるものではありませんよ？」
その言葉と共に、僕達を飛び越えてかける姿があった。
輝く槍を振い、一瞬でネアンデルタールマギアを切り捨てるのは、プルガトリオ機関現長官の、クロード・ザルモワーズ。
最強の神滅具と名高い黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）の一撃は、この趨勢に大きな変化を与えるのに十分過ぎた。
更に、情勢の変化は止まらない。
「お待たせ！　周囲の敵は片づけれたよ。あとはこいつらとミカエル様達の敵だけさ」
その言葉と共に、新たに駆けつけるはリュシオン・オクトーバー。
同時に動いたネアンデルタールマギアに対して、僕達との間に割って入るように入った彼は、静かに拳を握り―
「悪いが、敵に過剰な容赦をかける甘さはないんだ」

―その拳の一撃で、粉砕した。
砕け散るマギアの残骸に対して、リュシオンは残心と共に一瞬だけ黙祷を捧げる。
そして一瞬でそれを終え、真っ直ぐジークリットに鋭い視線を向けた。
「これ以上好きにはさせれないね。ただし、投降するならある程度の配慮はするよ」
「……生憎だけど、私は死ぬのを恐れなければ、プロとして仕事はしっかりする主義なの」
そう返しながら、ジークリットは光の剣を両手に持ちつつ、両足からも光の刃を具現化して切りかかる。
それに対して、リュシオンは拳で対応する。
本来、どう考えても危険極まりない行為だろう。如何に星辰奏者といえど、ベースが純粋な人間では、強度には限界があるのだから。
しかし―
「悪いが、こういう手品も得意でね。―創生せよ、天に描いた星辰を―
―我らは煌めく流れ星」
起動音声(ランゲージ)と共に、彼は星を発動する。
それだけではない。絶大な聖なるオーラが拳に宿り、相手の攻撃を弾き飛ばす。
ま、まさかあれが彼の神滅具(ロンギヌス)か星辰光(アステリズム)なのか？
「なんだと!?　猊下の聖拳をネロ以外に習得していたとは!?」
そう思った時、それを否定する大声がゼノヴィアから出てきた。
というか、ちょっと待った。
「ゼノヴィア、あれは技術なのかい？」
「ああ。前任のデュランダル使いであらせられるヴァスコ・ストラーダ猊下の聖拳。拳そのものに聖なるオーラを宿す、あの方の伝説ともいえる技だ」
……デュランダル使いなのに、拳でも伝説を作っているのか。
話には聞いたことがある。長い年月に見合った戦闘能力をもつ上級悪魔達ですら、「あの悪魔と戦いたくない」などという感想が出てく

るほどの猛者だったはずだ。
　それに対して、リュシオンさんは苦笑する気配を僕らに感じさせた。
「理論（メソッド）無しの精神論だったから、ちょっと習得には手間取ったけどね。いずれ感覚的なものを理論的に体系化して、悪魔祓いの高等技術レベルに落とし込みたいものだよ」
　こっちはこっちで凄いことを言ってくるな。
　感覚によるものを習得するだけでなく、それを誰もが習得する余地のある技術体系に落とし込もうとする。そうなれば、悪魔祓いに大きな戦力強化を齎すことだろう。
　これが、神の子（ディア・ドローサ）に続く者、リュシオン・オクトーバー……っ！
　僕らが驚いていると、ジークリットは距離を詰めずに光力の弾丸による攻撃に移った。
　攻撃に反応出来た事といい、ダメージがろくに見えてない事といい、接近戦でも渡り合えそうに見えたけどね。
　戦闘狂に見えて意外に慎重なのかな？　まあ、戦闘狂にも種類はあるからそういうことなのだろうか？
　そしてリュシオンはその射撃をすべて回避する。
　あまりにも機敏すぎる、どこか違和感すらある素早い回避に、ジークリットは舌打ちした。
「……面倒な星ね。しかも使い手が規格外だからこそ洒落にならないわ」
「……へぇ。初見で見抜かれたのは初めてだよ」
　……何か裏があるのか、二人は意味深な言葉を交わしている。
　そこに気を取られていた瞬間、更に一体のネアンデルタールマギアが破壊された。
「動きは読めてきました。反応は生物のそれですが、動きが多少機械的です。……この調子なら攻略法の確率もできそうです」
　クロードさんもここまで戦えるとは。
　これは、僕達も負けてられないね。
「行こうかゼノヴィア。ただ目を見張ってるばかりでは、リアス部長

に申し訳ない」
「……確かにな。グレモリー眷属とはそういうものか」
僕達も戦意を再び漲らせ、そしてそれを見たジークリットは不敵な笑みを浮かべる。
「……ふふ。少し見惚れそうだな。こういうのは少し羨ましいわね」
そう言うと共に、ジークリットから更なる戦意があふれていく。
「来なさい。さあ、神滅具にデュランダルに聖魔剣。データを回収するのはとても楽しみだわ！」
凌いで見せる。ここを凌ぐことが僕達の役目だろうからね。
だから、君はリアス部長を頼んだよ、イッセーくん……！

和地Ｓｉｄｅ

これは、まあ凄い事になってるな。
トップ達の伏せ札で、一気に形勢が傾いた。
よく耳を澄ますと周囲の戦闘音も小さくなっているし、形勢はこっちに傾いた……か？
「なるほど。できれば一戦交えてみたいが、今はまだ早そうだ。なら……」
ヴァーリはそう残念そうにしながら、だけど興味深そうにイッセー達を見る。
そして同時に、指を軽く鳴らした。
「……え!?」
気づけば、可愛い女の子が目の辺りに魔方陣を浮かべている。
あの子が停止世界の邪眼（フォービドゥン・バロール・ビュー）のギャスパーか？

ってことは、あれはヴァーリの仕業だな。神器対策に先手を打ったってわけか。
「悪いが、流石にその神器は手こずりそうでね。最も来ると分かっていれば対処は簡単だ。初見殺しは初見殺しで面白いが、やはり分かっていてもなお脅威な物こそ真の強者だと思わないかい？」
「知るかよ！　俺はシャルロットに恥じない男になった上でハーレムを築きたいんだ。戦争とか二天龍の決着とか、マジでどうでもいいんだよ！」
イッセーがそう吠えるが、ヴァーリは残念そうに軽く肩をすくめるだけだ。
ったく。これは俺も本腰を入れるべきか？
そう警戒しつつ、俺はもう一人も警戒する。
同時に、カズヒ姉さんが一歩前に出てツインテールに剣を突きつけた。
「……九条・幸香・ディアドコイ。貴女は、テロリストになって何をする気なの？　ハヤテとかいう奴もそこのヴァーリも語ったのだから、教えてくれてもいいんじゃない？」
なるほど。あのツインテールはそういう名前なのか。で、ロボットを動かしているのはハヤテとかいう奴か。
そして九条は、不敵な笑みを浮かべて点に指を立てる。
「英雄派の共通理念はどうでもよいじゃろう。妾が個人で思っていることを告げるのならば……つまらない人生を送りたくない、かのぉ？」
なんだと？
少し怪訝な表情を浮かべる俺たちに、九条は軽く肩をすくめる。
「妾は妾という存在を、その影響力を世界に刻み込みたい。そしてその刻み込む範囲に見合った豪勢で豪快な生活をしたい。そしてそれ以上を常に求め、砕け散るその時まで奪い肥え太りたいのじゃ」
……正気かよ。
ある意味テロリストらしいその言い分に、カズヒ姉さんはうつむいた。そして手を顔に当てる。

頭痛を堪えてるんだろうけど、まるで泣きそうになって顔を隠している風にも見えた。
そして、数秒経って顔を上げる頃には、呆れを表情にしっかりを見せつけている。
「……貴女馬鹿なの？　それを私（信徒）の前でいう？　主の前には人間は原則平等、そんな信仰に生きる者の前で―」
「欺瞞はよすがよい」
カズヒ姉さんの言葉を、九条は真っ向から切り捨てた。
「無論、本気かつ本心でそれを告げれる者はおる。だが妾の目には見えるのじゃよ」
そう言う九条の目は、確かにちょっと特殊だった。
黄金に輝くその瞳は、どことなく人のそれとは異なっている印象がある。
かといってギャスパーのそれとは思えない。……神器じゃないのか？
俺が警戒をしている時も、九条はカズヒ姉さんを見て、哀れみすら浮かべている。
「我が覇王の魔眼は、我が同志足りえる者を見抜き、見抜かれた者すらそれを自覚させる。更に魔術で応用することである程度の本質を測ることが出来る。だからな、分かるのじゃよ」
確かに、それは厄介な能力だな。
だけど、欺瞞だって？
「お主の本質は妾と同じ。己が野望の為ならば、それが肉親であろうと奪いに行ける簒奪者で蹂躙者で征服者じゃ。無理をしている自覚はあるのではないか？」
「……っ」
その指摘に、カズヒ姉さんは歯を食いしばって答えない。
そして、俺は先日のカラオケでの会話を思い出す。
―私は、自分が堕落しないなんて思ってない。むしろ腐りやすいって思ってるからこそ、正義の味方になりたいの。
ああ。あれはそういうことだったのか。

俺が何かを悟っていると、九条はカズヒ姉さんに手を差し伸べる。
「ともに私掠船団（プライベーティア）となってみないか？　お主なら、妾の後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）の見習いに入れる程度の素質はあると見込んで居る。腕も立つしな」
その誘いに、カズヒ姉さんは頷かない。
迷ってもない。絶対にそれには頷かないという、強い意志が感じられる。
だけど同時に、それを口にすることが出来ないようでいて―
「……論外ですわ」
―その間に、ヒマリが割って入った。
「……ふむ、見所の一切ないお主が、何を言う？」
「どうでもいいことですわ。少なくても、カズヒとあなたは全然違うって分かってますから、絶対にそんなことさせませんの」
ショットライザーを突きつけながら、ヒマリはカズヒ姉さん庇う。
俺はちょっと躊躇していた。
まるでカズヒ姉さんは、図星を突かれて反論することが出来ない人のように見えたから。
だけど、俺と同じようにカズヒ姉さんの告解を聞いたはずのヒマリは、胸に手を当ててはっきりと告げる。
「カズヒは自分が堕落しやすいと思って、だけどそんな自分を戒めれる立派な女の子ですの。開き直るどころか積極的に他者を蹂躙するような強盗如きと一緒にしないでくださいます？」
……ああ、全くだ。
俺も腹をくくって、カズヒ姉さんを庇う様に前に出ると、同じようにショットライザーを突きつける。
「……ああ、全くだ。正義に味方する為に、自分から泥をかぶってでも一生懸命正しい人の為に命がけで頑張るカズヒ姉さんを、一緒にされていいわけがなかったな」
ありがとな、ヒマリ。
お前が俺の相方で、俺はほんとによかったよ。
「……失せろ悪党。カズヒ・シチャースチエは正義の味方で悪の敵だ。

悪意を戒めず正義を意にも介さないお前にとって、敵であって味方なんかじゃないんだよ」
「……そうね。そうだったわ」
そして、カズヒ姉さんもそういうと、真っ直ぐに九条を見据える。
睨み付けない。悪意はない。
ただ真っすぐに、彼女と自分が違うのだと、それを示すかのように胸を張った。
「私は自分を腐らせない為に命を懸ける。そうありたい気持ちに、欺瞞なんて一つもない。……残念だけど、悪党でいる貴女は正義の味方な私の敵よ。情けはかけれないし容赦をするわけにもいかないわ」
……その言い回しが、ちょっとだけ引っかかる。
本心から言っているのはよく分かる。そうであろうとすることに、命すらかけれるのもよく分かる。
だけど同時に、九条・幸香・ディアドコイはカズヒ姉さんにとって何か重い物なんだろう。それもなんとなく分かってしまう。
だからこそ、だな。
「俺は、いつかそこを話してくれるような奴を目指すとするさ」
「……子供が生意気よ」
そんな風に、カズヒ姉さんは小さく微笑みながら俺の決意を受け止めてくれた。
ああ、何年かかるか分からないけど、出来ることなら生きている間に、抱えている物を更にいくつも話してもらえるようになりたいもんだ。
そして、ヒマリはそんな俺達を見て微笑んでいるのが装甲越しでも分かってしまう。
「うんうん。二人が仲良くなって嬉しいですわ。涙が出てきそうですの？」
「そこまで？」
いやちょっと待て。
俺はいいぞ？　ヒマリの相方だし、カズヒ姉さんに惚れてるし。
でもさ、ヒマリ。カズヒ姉さんのこと気に入りすぎじゃね？

ま、それはいいか。
一目惚れがこの世に本当にあるんだから、一目見て気に入るってこともあるんだろう。
……できれば同性愛的なのでないことは祈るけど。
「……よかろう。ならば妾は、おぬしらを難敵として打倒し、肥え太る為に喰らうとしようではないか！」
そう告げると共に、九条は一振りの剣を構える。
ザイアスラッシュライザーじゃない。それは、金属製の片手剣だ。
「魂を刈り取る形をしているだろう？　これは我が後継私掠船団の幹部が鍛えた、魂を切り裂き殺す剣だ。……多少脆いのが難点じゃが、当たれば決まる類じゃぞ？」
なるほどねぇ。
嘘か本当かは置いといて、一発も喰らわないって条件を付けられるのは少しきついか？
特に生身故に一番危険なのはカズヒ姉さんだな。サポートに回ってもらうか？
そう思ったその時、カズヒ姉さんは呆れたようなため息をついた。
「それが何？　刀剣類の武器戦闘なんて、本来当たれば負けるのは当然でしょう？」
「なるほど、豪気よのぉ。つくづく引き入れられぬのが惜しい女傑よ」
その言葉と共に、九条は不敵な笑みを浮かべてこちらに目を向ける。
同時に黄金の花びらを具現化し、静かに腰を落とした。
「今の妾を凌いで見せよ。さすれば、今回は引いてやろう」
……なるほど。つまりスラッシュライザーは確実に、至っているかどうかは分からないが禁手も使わないと。
舐められたもんだが、つまりそれでも十分強いと言いたいわけか。
「……上等だ、やってやる」
「なら一泡吹かせてあげるわ」
俺とカズヒ姉さんはいつでも切りかかれるよう腰を落とす。
そして、ヒマリがぷんぷん起こりながらショットライザーを突きつ

けた。
「言いましたね！　ならそれが油断だと教えてあげますわよ、二人とも!!」
「ＯＫ！」
そして、俺達は一機に戦闘を開始した。

イッセーＳｉｄｅ

ど、どこもかしこも戦闘が起きちゃってるよ。
でもって、俺はヴァーリの相手ってか？
「……お前、本気で三大勢力全部を敵に回すのかよ？」
コカビエルより強い奴だっているんだろ？　そんなことしたら、命がいくつあっても足りないだろ。
「その程度なわけがないだろう？　オーフィスだけでも三大勢力の一角程度なら総力で相手どる必要があるレベルだ。まして禍の団の派閥は三大勢力だけじゃない。必然的に、他の神々とも争うことができる」
ヴァーリは楽しそうだった。いやほんと楽しそうだよコイツ。
明らかにめんどくさそうで命がいくつあっても足りないだろ？
アザゼルの言う通りなら、そんなことしてたらハーレムどころかおっぱいひとつ楽しめやしない。
コカビエルもそうだったけど、神の子を見張る者（グリゴリ）で強くて戦闘狂な奴って、こんなのばっかりかよ。
「アザゼルの下にいて和平に付き従っていたら、主神との闘いなんてできやしない。俺自身の夢の為にも、この好機は逃せないのさ」
そんなに平和じゃいやなのかよ。

平和でいいじゃん。命も危なくないし。
そりゃまあ、戦争になれば手柄を上げるチャンスはあるかもしれないけど、それで死んだら元も子もないだろ。レーティングゲームや悪魔としての契約があるなら、それで十分じゃねえか。
こんなのが俺の宿命のライバルとか、勘弁してくれよ。むしろ宿命のライバルとか要らないから。
「……そしてその前座として、イッセーを狙うということですか？」
シャルロットが警戒心バリバリでそう聞くと、ヴァーリはなんかちょっと考え込んだ。
「……正直に言えば、もっと禁手に慣れたうえ、覇にすら手が届いてからがいいんだけどね。だけど、とりあえず味見をするのも悪くない……いや、味見をしないと我慢が出来なさそうだ」
……ドライグ、覇ってなに？
アザゼルがリングを渡す時にも、そんなことを言っていたような気がするけど。
『神器は基本的に禁手が究極だが、俺のように封印された存在の力に由来する神器には別口の隠し玉があってな。寿命を文字通り削るレベルの消耗と引き換えに、封印した存在の力を完全開放する機能がある。それが覇……ドラゴン封印系の場合は覇龍（ジャガーノート・ドライブ）という』
そんなのあるの!?
すっげー。極めれば神すら殺せるうえ、そんな隠し玉まであるなんて、ほんと凄いんだなぁ、お前。
『そんな便利なものでもない。基本的に覇を発動すれば理性は吹き飛ぶし、寿命を削るってのはさっきも言ったが文字通りで、まさに最終手段なのさ。大抵の二天龍対決は覇を先に習得した者の勝ちではあるが……逆に言えば、そんな時でもなければ使っていいようなものでもないんだよ』
え、マジで!?
俺がちょっとビビってると、ヴァーリはその理由に気づいたのか苦笑した。
「その様子だと、覇龍に対してドライグから説明を受けたか？　……

ちなみに、俺は魔王の血を引いているから、魔力を代償にすればある程度は制御できるし寿命も削らないのさ」
『言うほど簡単ではないがな。ヴァーリ、如何に結界が特別製とはいえ覇を使うのはよしておけ』
アルビオンがヴァーリをたしなめるぐらには、危険な奥の手だってことはよく分かった。
絶対使えねえよ。魔術回路と転生悪魔分全部足して、それでも子供の悪魔にも届かない俺のへっぽこ魔力量じゃ、絶対使った瞬間に死んじまう。
……あ、逆に言えば魔力が多ければ何とかなるのか。僧侶に昇格（ビショップ　プロモーション）ばなんとかなるのか？
俺がそんな打開策を思いつくと、ドライグからため息が盛大に出た。
『言っておくが、相棒では僧侶に昇格した程度ではヴァーリ（奴）の足元にも届かんから無理だからな。リアス・グレモリーレベルの魔力量になってから出直してこい』
「イッセー。初代四大魔王の血族を甘く見すぎよ？　今の末裔だって少なくとも最上級悪魔の領域ばかりなんだからね？」
「即断即決が必要な時以外は、思慮深くするようにしてくださいね？
いえ、戦闘中は即断即決が必須だとは思いますけど」
話が聞こえてたのか、リアス部長とシャルロットにも怒られちゃったよ。
いや、最初っからそうさせる為にわざと聞こえるように言ったな、ドライグの奴。
……つまり、それぐらいの差が俺とヴァーリにはあるってことか。
尚更、この場で使うわけにはいかないってことか。
「……ヴァーリ・ルシファー。貴方がどれだけ戦いたくても、ギャスパーを助け出したした以上、これ以上の戦闘では貴方は負けるでしょう。それが分かっているのに、今のあなたと真っ向から戦ってあげる必要があると思うの？」
「同感ですね。私の究極の羯磨（ロンギヌス）と気配遮断（クラス別スキル）を併用すれば、増援が来る

まで凌ぐことはできますよ？」
リアス部長やシャルロットも同じ意見か。ま、そうだよな。
先に覇龍に到達すれば勝ちって二天龍対決なんだろ？　正しい意味での禁手も覇龍ももう習得してて、しかも無理すれば暴走しないで使えるとか、そりゃぁ勝ち目ないよなぁ。
真面目な話、誰か強い人が倒してくれればいいんだけどなぁ。
「……なるほど。俺も確かに目移り気味だが、どうやら赤龍帝君は挑もうという気概もないらしい。なら―」
あ、もしかしてわかってくれたの―
「―俺が君の家族を殺せば、そんな腑抜けた気概を投げ捨ててくれるかな？」
―なんだと？
「……どういうつもりですか？　いえ、テロリストにふさわしい下衆な精神性ですが」
「そうかな？　人生において他者に迫害されることや悲劇に見舞われることは、折れなければ爆発力を発揮するのは正しい事実だよ。まして憎悪というものは、他者の廃絶という行動に限っていえば、原動力としてこれ以上の者もそうはない」
シャルロットの糾弾も、ヴァーリのクソッタレな言い分も聞こえない。
今、何て言った？
「いや、リアス・グレモリーでも十分かな？　シャルロット・コルデーがいなくなっては奇跡が消えてしまう。あとは奴を打倒する俺の憎悪と同等のバックボーンがあれば、空前絶後の俺に食い下がる、前人未到の赤龍帝にはなれると思うんだけどね」
「……ヴァーリ、ルシファー……っ」
リアス部長もヴァーリに切れるけど、それすら気にならない。
「ふざけるなよ、てめえ……」
俺は一歩前に出る。
ヴァーリを真っ直ぐ睨み付ける。
コカビエルの時もかなり切れたし、ライザーやレイナーレをぶちの

めす時も本気だった。
だけど。これはそんなレベルじゃない。
「なあ、俺の父さんと母さんは普通の両親だよ。お前の言う通り異能や異形なんかと全く関わらない、俺が悪魔になったことも知らない……俺を大切に育ててくれた、大事な両親なんだよ」
それを……っ！
「……てめえの下らねえ趣味なんかの為に、殺されてたまるか！ぶっ飛ばすぞ、この糞やろうがぁあああああ!!!」
そもそも裏切者だったしなぁ！
今のふざけた寝言も込みで、落とし前をつけさせてやらぁ!!
一回、本気で、ぶちのめす!!!

三勢合一編　第二十一話　覇王と龍皇

和地Ｓｉｄｅ

素早く俺達は戦闘を開始する。

そしてまず、俺達は数的有利を最大限に生かす方向で戦闘を仕掛けた。

三対一ってのはそれぐらい有利なんだ。一流の武芸者でも、同時に三人がかりで挑めばどうにかすることは困難と言われている。三人がかりで一人を潰すのと、一人で三人を同時に相手できるようになるのと、どっちが簡単かなんて馬鹿でも分かるだろう。

まして俺達は全員手練れ。なら当然、数で推すのが基本戦術なんだ……と思ったらあっさりひっくり返された。

広範囲に展開した黄金の花びら、不滅齎す黄金花（ゴルディモータル・ストレチア）とかいう新種の神器。神滅具級とか判断されてたそうだけど、これが本当に神滅具的なそれだった。

一つ一つの花弁は、こっちが全力で攻撃してもびくともしない更にそれを複数同時に展開して、多角的に対応。フィールドまで展開して防御するうえ、隙あらばシールドバッシュまで仕掛けてくる。

しかも同時に六つも展開している。最初に見せた時は三つだったというし、この調子だともっと増やせるだろう。

不用意に全力を即出ししてそこを知られるのを避けたのか、それとも技術込みで操れるのがそこまでなのか。もしくはこっちが勝手に限界を決め込んで、それによって生まれる隙を物量による圧殺でつぶす気なのか。

とにかく面倒だが、それだけじゃないってのが更に厄介だ。

回転攻撃をかましてきた花弁の一つを避け、俺は即座に反撃を叩き込む。

その攻撃を、割って入った熊型の魔獣が盾になって受け止めた。
……これが第二の問題点。奴さんが星辰奏者だってことだ。
おそらく人形創造能力。何かしらの方法で体となる素材を作り、それを人形として操る類の星辰光だろう。
地味に面倒以外の何物でもない。花弁は神滅具級というだけあって性能が高いし、熊型の魔獣も上級クラスを足止めできるぐらいにはポテンシャルが高いだろう。
数の暴力で圧殺するつもりが、むしろこっちが圧殺されかかってるぞこれは。
はっきり言ってコカビエル並みに強い。下手したらコカビエルより上だろう。
……最も、あの時のコカビエルは神滅具である魔獣創造を、増援であるヴァーリとグレイフィアさんとの足止めに回していたこともある。
ルイ16世の宝具のもう一つを、どいつもこいつも根性でごり押し出来てしまったことを考えると、一概に断言はできないけどな。
少なくとも、俺やカズヒ姉さんが戦うに当たっては九条の方が脅威だった。
「チィ！　攻撃力も地味にあるってのが……厄介だな！」
おかげでこっちの星辰光がコカビエル戦より役に立ってない。
防壁系の星辰光と神滅具。基本的に考えれば、どっちが上何て言うまでもない。
人間を人間社会において兵器クラスの存在にする星辰光と、人間の軍事基地を単独で圧倒すらできるだろう神や魔王すら殺しうるポテンシャルを持つ神滅具。運用技術などを踏まえたのならともかく、単体の性能で比べ物になるわけがない。
必然的に、俺が展開する魔力防壁はことごとく粉砕されている。
一列に多重展開すればある程度は止められるだろうが、縦横無尽に三次元起動ができる時点で意味がない。そのぐらいの駆け引きはできるだろうしな。
なので、俺はこいつの戦いでどうしても嫌がらせ中心になる。

ならばオフェンスはどうなのかというと―
「面倒くさい事ねぇ！」
―まずカズヒ姉さんは苦戦を強いられている。
大量に形成炸薬弾やサーモバリックを射出しつつ、機関銃を両手持ちフルオートでぶっぱなしている。普通ならこれで終わるし、その気になれば軍事中隊すら潰せるだろう。
だけどそれでは届かない。
神滅具級の花弁は、それ単体が頑丈なだけじゃない。防護フィールドも張れるからこそ、人間の兵器程度ではびくともしない。
しかも質が悪いことに、花弁がそれぞれの基点となることで立体的な結界を展開できるらしい。これで完璧にカズヒ姉さんは警戒されている。
カズヒ姉さんの火力では、ガチ警戒された結界系の神滅具を無効化できない。
だからこそ、決め手となるのは―
「ほいさっちょいさっよっこいさっとぉ！」
「動きが早いのぉ。しかも地味に面倒じゃ！」
―ヒマリなわけだ。
リベレイティングキャットはオフェンス型。三次元にかく乱しながら、パンチにキックに射撃込みで、敵をぶちのめす対異形戦闘用前衛型だ。
三次元を自由自在に動いての、オールレンジシールドバッシュ。これを全部交わして、更に魔獣すら掻い潜っては、集中攻撃を喰らわないようにヒット&アウェイを仕掛けていく。
……運がいい。九条の星辰光は、ステータス的に限界がある。
広範囲を魔獣達がカバーしていることから言って、おそらく拡散性と出力が高いんだろう。だが魔獣が創造されるのは比較的近距離であることといい、おそらく干渉性はさほど高くないんだろう。
ただし量といい性能といい、間違いなくあの星辰光は出力が圧倒的に高い。
極が片手が埋まるぐらいつけたうえで珍しいというレベルだが、性

能把握における最高値、ＡＡＡの領域に到達しているかもしれないな。
次いで高いのはおそらく拡散性（効果範囲）で、操縦性（制御能力）も高い方だろう。維持性（持続時間）はまだ分からない。
とはいえもちろん限度がある。おそらく魔獣型にしているのは、細かい動作の制御に限界があるからだろう。技術を高めるのに限度があるのなら、骨格から強靭でかつ大型化しやすい獣型にするのは一つの選択肢だ。
「さて、受けるか避けるか防ぎきるか？　失敗すればお前の魂は切り裂かれるぞ！」
そして向こうもこっちを把握し始めているのか、ついに迎撃が間に合った。
魂を切り裂くという死神の鎌じみた厄介な獲物が、ヒマリを切り裂かんと襲い掛かる。
だが甘い。ヒマリを相手にするには、その得物では力不足だ。
「そいやっとぉ！」
その瞬間、真っ向から聖剣が受け止める。
その一撃で、九条は本気の驚愕を僅かに見せた。
「……聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）でこの強度？　まさか、既に禁手なのか！」
「え？　違いますわよ？」
あっさり即答するヒマリに、だから嘘ではないと判断して、九条は更に警戒する。
「ならば星辰光か。刀剣強化能力……物体強靭化能力……もしくは分子結合強化能力……それとも別の強化方法かのぉ？」
「え？　私の星辰光はまだ使ってませんわよ？」
これまたあっさり即答。
ただこれで、九条は一瞬本気で考えこみそうになった。
戦闘中に敵の手札を考察するのは、確かに有効な手段だ。
だが同時に、一瞬の判断が生死を分ける戦いにおいてリスクが大きい手段でもある。
だからこそ―

「気になるのは分かるけど―」
「―背中ががら空きだ！」
―俺もカズヒ姉さんも決して逃がさない。
この一瞬のスキを躊躇なく狙い、俺達は遠慮なく後ろから攻撃を行おうとし―
「ぬるい」
―その時、俺達は誘い込まれたとは思わなかった。
確かに魔獣は何体かいたが、数はまばらだ。花弁もきちんと意識を向けていて、警戒は決して緩めてはいない。
そう思ったその瞬間、俺達の周囲で大爆発が起こった。
控えめに言って、手榴弾の二倍ぐらいの爆発だ。直撃でもないし、星辰奏者のカズヒ姉さんも、更に仮面ライダーの俺も致命傷になるわけがない。
問題は、手榴弾一個でも人は盛大に吹き飛ばされるということ。
爆発による運動エネルギーと人間の質量が重なり合い、更に爆発の衝撃で宙に吹き飛ばされる。
同時に花弁がフィールドを展開しながらこっちに狙いを定める。
フィールドは先端部が細くとがっており、こっちを刺し殺す殺意満々の状態だった。
あ、これまずい。
俺はそれを確信した。カズヒ姉さんも、防御の為に大量に物体をばらまいてるが、それでもマズイ。
「伏せ札ぐらいは用意しておるわ。まずは二人ほど―」
ああ、九条も俺達を殺せる確信を持っている。
そして同時に、ヒマリに対する警戒も断ち切ってない。
油断はない。この女は、少なくとも馬鹿じゃない。
勝つ為に策も努力もして、負けるという危険性をきちんと分かった上で挑んでいる。
ああ、まずい―
「グリド、ＧＯ！」
―お前もなぁ！

突貫するのは鎧で出来た翼のない龍。
リントドレイクという高位の龍を封印した、本来は全身鎧として具現化する亜種発現した龍の外装（ドラグナイト・メイル）。
俺と同じ二重神器保有者であるヒマリが持つ、聖剣創造（ブレイド・ブラックスミス）と共にある、それゆえに初見殺しになる神器。
最も、今回は加減をする余裕がないこともあって、普通に使っていたから気づかれている。
「……此方が先遣隊の闘いを生かさぬと思うてか！」
その瞬間、黄金の花弁が更に一つ展開する。
やっぱり出せたか。
タイミングのいいカウンター、完璧に予想どうりの反応ってわけか。
ああ、これは無理だな―
「……甘いですの！」
―普通なら！
其の激突は一瞬だった。
そして、双方が双方ともに吹っ飛ばされる。
「っ！」
一瞬で更に追加の体制をとる辺り、間違いなく腕利きだよ、九条・幸香・ディアドコイ。
だが、その一瞬が手遅れだ。
『ＦＲＥＥ』
もう既に、懐に飛び込まれてるぞ？
「隙ありですわ！」
「……ぬぅ―」
それは一瞬だ。一瞬の同様で納めたところは褒めてやる。
だがその一瞬が命取りだ。
その一瞬で一気に間合いに踏み込んだヒマリは、僅か一秒で数十を超える連続飛び膝蹴りを叩き込む。

―リベレーティングブラストフィーバー

連続蹴りの連発で隙が生まれ、一気に攻撃の度合いが崩壊する。
その瞬間、既にとどめの準備は終わっている。
「更にダメ押し！」
揺らいだ瞬間、ヒマリの―仮面ライダーラクシュミーの姿が掻き消えるように高速移動が行われる。
そしてその瞬間、全方位を縦横無尽に駆け巡りながらの連続射撃が叩き込まれた。

―リベレーティングブラスト

「……なめるなぁ！」

それでもなお、九条は倒れない。
ああそうだな。そうだろうとも。
だがなぁ―

「カズヒ姉さん！」

「カズヒ！」
俺とヒマリの声が響き、そして既に準備は終わっていた。
「まだ終わってないのよ、幸香！」
「……っ！」
そう、あれだけの連続攻撃と想定外の連続では、避ける注意力にも限度がある。
それゆえに、カズヒ姉さんの準備は完了していた。
「活動開始（セット）―五大加速（ペンタグラム）!!」
その瞬間、盛大に九条は打ち上げられる。
九条を囲むように五か所に設置された宝石が煌めき、暴風、熱衝撃、地殻隆起、水流、そして絶大なエーテルの奔流が苦情を天に撃ち上げた。
……魔術回路を利用した魔術は、当人の適性次第で様々なことを行うことが出来る。
神の奇跡に由来することなく、それこそ悪魔の怪我すら治癒することも可能。回復速度は流石に聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）に劣るが、どんな種族でも治療ができるというのはかなりのアドバンテージだ。
そしてその一環に、宝石などの物体に自分の魔力を溜め込むというものがある。
それにより魔術において必須の詠唱を短縮化させることが可能。込められた魔力も絶大であることから、入念な事前準備と引き換えに、本来できないような大魔術すら一瞬で行使できるというものだ。
それが、九条に決定的な隙を作り出す。
「……とどめは、任せたわよ!!」
ああ、ＯＫだ姉さん。
『ＳＡＶＥ』
「喰ら……ええええええ！」
遠慮なく喰らってけ。
後ちなみに、撃ち上げられた所には大量の宝石による神滅具の足止め術式が完了しているからな？
「……ぬぉおおおお！」

隙は逃しは……しない！

―サルヴェイティングブラスト

イッセーＳｉｄｅ

「……ふはははははは！　いいね、最高だ……最高だとも！」
ボロボロになったくせして、なんで嬉しそうなんだよ、マゾかこの野郎は！
ヴァーリをボコボコにすることができた俺は、我慢できない怒りを全力で言葉に乗せる。
「小猫ちゃんはなぁ、自分のおっぱいが小さいことを心から気にしてるんだぞ!?　カズヒだってどう考えてももっとおっぱいが大きくなられる体つきなのに、小猫ちゃん以上につるぺったんなんだぞぉ！」
許せない、なんて許せない奴なんだ！
なんでも半分にする――――そう、おっぱいを半分にする技なんて作りやがったんだ、こいつは！
許せない。おっぱいは夢だ、宝だ、希望だ、楽園だ。
それを半分にするだなんて。それも、強い奴と戦いたいなんて理由で編み出したなんて。
父さんと母さんを殺すなんて言ったことも赦せない。テロリストにつながって、ギャスパーを利用する手引きをしたってことも赦せない。
挙句の果てにおっぱいを半分にするだと？
殺してやろうか……この野郎がぁあああああ！
『ドライグさん。イッセーを後で怒ってもいいでしょうか？』

『いいんじゃないか？　というか、乗せたアザゼルも問題があるだろう』
何を言うんだ二人とも！
俺にヴァーリの技の真相を教えて生まれた隙で、腕が一本切り落とされてるんだぞ、あの人は。
その恩義には報いなきゃならないだろう!?
『『絶対遊び半分だから自業自得だ／です』』
なんて酷いことを!?　しかもシンクロで!!
なんでだ。おっぱいが半分にされるなんて、世界を襲う邪悪だろう？
『いえ、邪悪は邪悪でもギャグマンガの邪悪です』
すっかり現世に染まったね！　読んでいいって言ったけど、いつの間に俺の漫画そんなに読んでるの!?
「……これは、駄目だね。我慢ができない」
そんな声に俺達が我に返ると、ヴァーリは口から血を流しながら、それでも楽しそうに笑っていた。
「悪いが我慢が出来そうにない。……アルビオン、覇龍（ジャガーノート・ドライブ）を使うぞ」
『……言っても聞かんか。まあ、作戦の打ち合わせ道理ならやりようはあるか』
……え？
いや、ちょっと待て。
覇龍ってあれだろ!?　こんなところで使うのかよ！
『……まずいぞ相棒。今の俺達では奴が覇を使えば間違いなく敗ける。一対一で勝てるとするなら、サーゼクス・ルシファー達ぐらいだが―』
ドライグが何を言いたいかがよくわかる。
……まだ２０体ぐらいいるよなぁ。ちょっと無理か。
ど、ど、どうする？　マジでどうする!?
ドライグ!?　ヴァーリの覇龍ってどれぐらいになるんだ!?
『一対一ではサーゼクス・ルシファー以外は、相手が覇龍が使えなくな

るまで粘るしかないな』
よし！　俺達じゃ無理だ！
で、でもまだ誰かが助けに来てくれるか分からない。九成達も余裕はないっぽいしどうすんだよ!?
「ふふ。英雄派が結界を調整してくれてね。覇を発動しても負担が少なくなるように設計されているのさ。……最も、それでも俺ぐらいじゃなければ寿命が削れ理性も飛ぶだろうけどね」
……この野郎！　所々でアピールすんなよなぁ！
「イッセー！　こうなったら、私も―」
「ダメです部長！　ここは俺が何とかしますから！」
リアス部長が助けに来ようとしているけど、そんな余裕はない。
どうしても、俺達でなんと……あ。
待てよ？
結界が特別製？　消耗や負担が減る？　それでもヴァーリだからできる？
確かに、一人でやるならそりゃ大変だろう。負担も消耗も減っても、俺じゃ無理だ。
魔力がろくになる俺じゃあ、消耗が減っても寿命は削れる。そしてヴァーリほどの力がないなら、一人じゃ結局暴走する。
それはつまり、裏を返せば……。
あのさ、ドライグにシャルロット。
この亜●●●種禁●●●●手なら、こんなことができるんじゃないか？
『『……あ』』
だろ？
なら―

Other Side

「さあ、今こそ俺の高みを見せてやろう」
ヴァーリ・ルシファーは、覇を使うことを素直に決める。
僅か数か月前に神器に目覚め、数奇な巡り合わせで神滅具を従え、その亜種禁手により疑似的に亜種禁手になった兵藤一誠。
そんな前人未到を体現した者が、自分の宿命のライバルであるなどという望外の奇跡に、ヴァーリは涙すら浮かべたかった。
ヴァーリ・ルシファー。魔王ルシファーの血と人間に宿る神滅具という、奇跡の融合を果たした、空前絶後だろう奇跡の存在。
現代過去未来において最強と呼ばれるだろう白龍皇。そう称されることに誇りはあり、そして自らそうなろうと思っている。
だからだろう。自分は宿命のライバルになるだろう赤龍帝に、どうしてもそれに食い下がれる程度の箔が欲しかった。
しかし、情報が入ってきた段階では歴代でも最低の箔といってもいい存在だった。
現ルシファーの妹が眷属にしたという意味では、真なルシファーの末裔たる自分と並び立てるかもしれない。だがこの程度では彼自身の力が高まっているとはいいがたい。
だからこそ、シャルロット・コルデーと共に至ったその在り方に敬意すら感じているのだ。
そして今、神滅具の二重奏が自分にここまで食らいついている。
半ば不意打ちとはいえ、本気を見せた瞬間に逆に圧倒すらしてきたことも感動ものだ。
まさか自分の技を「おっぱいが半分になる」などと例えられるとは思わなかったが、それがここまで自分を高ぶらせる結果になったのなら、アザゼルには感謝しよう。その例えを考えて言うことに生じた隙で腕が落ちたのはどうかと思うが。
だからこそ、最大限の経緯を彼に見せたい。
いずれ追いつかねばならない、自分の今の極限を見せてやりたいと切に願う。

幸いにも、今回の作戦において英雄派が面白い趣向を凝らしてくれた。

結界系という方面では神滅具最強と称される、上位神滅具絶霧（ディメンション・ロスト）。その亜種禁手である、霧から独自の結界装置を作り出す霧（ディメンション・クリエイト）の中の理想郷。

それにより今回の作戦で使われる結界は特別製だ。情報遮断だけでなく、神器におけるある程度の支援作用も組み込まれている。

その一環として、覇に対する保全機能が組み込まれている。これにより、覇龍による負担や暴走のリスクが数割ほど軽減する。

本来はその程度ではどうしようもないレベルで暴走し寿命が削れるが、ヴァーリは正真正銘規格外なので十分だ。

多少は暴走のリスクを制御する必要がある者の、戦闘能力の向上も踏まえれば十分すぎるポテンシャルだろう。

故に、赤龍帝は間違いなく敗北するだろう。

だが、彼ならきっとその程度では折れないという信頼すら覚え――

「……ヴァーリ。そういえば言ってなかったな」

――それを遮るように、兵藤一誠がヴァーリに告げた。

「俺がシャルロットとの連携で至った亜種禁手は、揺り籠（ブースティッド・クレイドル・メイル）たる赤龍帝の鎧っていうんだ。封印系神器の機能の応用で、中に人を取り込めるんだよ」

それに関して、ヴァーリは特に興味が惹かれない。

何故なら、神滅具に関する情報は少なからず神の子を見張る（グリゴリ）者に存在している。それを見ればある程度は分かると言っていいのだから。

当然、シャルロットの禁手が「歴代に赤龍帝がかつて至った亜種禁手を、今の宿主に発現させる」である以上、それぐらいの情報収集は行っていた。

「資料に残っていたよ。どうも女に自分の活躍を見せつけたいが為に至ったようだが、結果としてリソースの分割で弱体化して死んだという、ある意味無意味な――」

「――無意味じゃねえよ」

ヴァーリの酷評を、兵藤一誠は切って捨てる。

「俺にとっては無意味じゃねえ。この亜種禁手があったからコカビエルに勝てたし、お前にも勝てる」
「―へぇ。覇龍の発動を阻害するのかい？　だがそう簡単にはいかないな」
そう答え、そいて興がそがれることが無いよう、それだけは阻止する体制をとる。
だが、兵藤一誠の行動は想定外だった。
「―部長！　俺に力を貸してください！」
リアス・グレモリーに、自分の主に助力を求める。
この戦いに、今のリアス・グレモリーはついていけない。これは推測ではなく確定だ。
これから鍛えれば、いずれ最上級悪魔クラスは確実に到達する。下手をすれば準魔王クラスに到達するだろうし、そうなれば自分ともある程度は渡り合えるだろう。それだけの素質と向上心を彼女は持っている。
だが、それは今ではない。
今の段階では、リアス・グレモリーがこの戦いに介入できることはあり得ない。それだけの実力差が存在し、それを理解するからこそ彼女自身も割って入らない。
「……でも、今の私じゃ―」
だから、リアス・グレモリーも躊躇し―
「部長の力があれば、俺は必ずコイツを倒せます！　勝って見せます！」
兵藤一誠は、ためらいなくそう告げる。
そして同じように、籠手から声が響き渡る。
『というよりだ。勝算を掴むにはお前が絶対に必要だ。胸を張れリアス・グレモリー。今の状況でこれを成せるのは、お前だけなんだからな』
『はい。貴女は決して弱くない。そんな自分と、そして貴女に支えられたイッセーを信用してください』
ドライグとシャルロットからも後押しを受け、リアス・グレモリー

は一瞬うつむき、しかし決意に満ちた顔を見せる。
「……いいわ。私はあなたの主だもの。貴方の決意と願いを裏切ったりなんて……絶対にしない！」
「はい！　勝ちましょう、部長!!」
そしてリアス・グレモリーの手を赤龍帝は取り―
「我、目覚めるは――――」
―リアス・グレモリーは突如として消え去り、そして唄が鳴り響く。
その瞬間、ヴァーリもまた瞬時に詠唱を開始する。
「我、目覚めるは――――」
その唄は、二天龍の破壊を具現化する禁断の言葉。
〈始ま―え？〉〈何が、始まる？〉
赤龍帝からは戸惑いの言葉が響く。
〈消し飛ばす！〉〈消し飛ばせぇっ！〉
白龍皇からは、その戸惑いに警戒を覚えた言葉が響く。
「覇の理を神より奪いし二天龍なり――――」
＜これは違う!?＞＜そんな、いつもじゃ……ない!?＞
歴代の残留思念を戸惑わせる赤龍帝に―
「覇の理に全てを奪われし、二天龍なり――――」
＜今すぐ夢を終わらせろ！＞＜ここに幻を示すのだ！＞
歴代の残留思念の恐怖に背中を押される白龍皇。
「無限を嗤い、夢幻を憂う――――」
＜世界は何を求めて……？＞＜これは、世界を否定するのか……？＞
未知により恐怖に駆られて。
「無限を妬み、夢幻を想う――――」
＜全てを……出し尽くせぇ!!＞＜全てを捧げ……奴を、殺せぇ！＞
恐怖に駆られた戦意をばねに。
「我、赤き龍の覇王と成りて――――」
「我、白き龍の覇道を極め――――」

「「「「「「「「汝を紅蓮の煉獄に沈めよう――――」」」」」」」」
「「「「「「「「汝を無垢の極限へと誘おう――――」」」」」」」」

『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｄｒｉｖｅ!!!!!!!!』

今此処に、歴代で最も異常な二天龍の覇が、この戦いの最後を彩るべく発生した。

三勢合一編　第二十二話　覇龍大決戦

和地Ｓｉｄｅ

な、な、なななんだぁ!?

「はぁ!?」

「はえ!?」

「……冗談でしょ？」

俺達全員が、その絶大な力の具現に度肝を抜かれた。

そのオーラの質は、どう考えてもさっきのサーゼクスさんと同レベル。

おいおいおいおい冗談だろ。なんだあの力は。

思わずそっちを見て、引きつるしかない。

そして同時に、着地音が響いた。

「―ほぉ。白龍皇（ヴァーリ）だけでなく赤龍帝（兵藤一誠）も覇龍（ジャガーノート・ドライブ）をつこうたか。設計上そこまで区別はできぬとはいえ、よくやるものじゃ」

とっさに振り返ると、そこにはボロボロだけどしっかりと力強く立ち上がった九条の姿が。

なろう、まだ動けるか！

俺達はすぐに戦闘態勢をとるが、九条は苦笑を浮かべながら手を前に出す。

戦闘意識はない。その態度が全てを告げていた。

「妾は自分の発言には責任を取る。自ら告げた条件を成し遂げた相手に、褒美をやらぬほど愚かではないのじゃよ。拒むのならば仕方ないがのぉ」

……なるほどな。

つまり、これ以上の闘いが望みなら、仮面ライダー（スラッシュライザーも使う）になるってことか。

上等だ。

「それがどうした。ここまで暴れて起きながら、そのまま逃がすと思って―」
俺は第二ラウンドを覚悟し、ショットライザーを構え―
「いやぁ、そこまでだぜ？」
「団長、帰りますよ？」
―その間に、二人の乱入者が割って入る。
そいつらを見て、俺は度肝を抜かれて止まってしまった。
片方は二十歳ぐらいの青年。九条が持っているのと同じ剣を鞘に指している。
だが問題はもう片方だ。
伊達男って例えがピッタリくる、同時に船乗りをしている感じの焼けた肌の男性。動きに隙は無く、同時にどこか犯罪社会に相応しい退廃的な雰囲気を持っている。
問題は、そいつが持っている得物だ。
「――黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）ですって!?」
カズヒ姉さんも流石に狼狽するよな。
今この戦場に黄昏の聖槍が二本ある。常識的に考えれば、そりゃ異常だろう。
だけどクロードさんはサーヴァントだ。だからこそ、あれはかつての黄昏の聖槍であって今のじゃない。
ま、テロリストに黄昏の聖槍持ちがいるってのは最悪なんけど―
「んじゃまあ、マスターに倣って名乗るとするか」
―その思考を、伊達男が断ち切った。
「……俺はライダーのサーヴァント、ジョン・ラカム。で、隣にいるのは後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）の最古参さ」
サーヴァントかよ。
「ブレイ・マサムネ・サーベラだ。いずれ新たなる正宗となる男って言っておこうか」
あともう片方も凄いこと言ってるな。明らかに外人さんなのに、なんで日本人のそれも刀匠の名前名乗ってんだ!?
「……なんかすっごいことになってきましたのねぇ」

ヒマリがちょっと気圧されている。珍しいこともあるもんだ。
そんなこんなで俺達が攻めあぐねていると、ジョン・ラカムが肩をすくめながら九条に振り向いた。
後ろから撃とうかとも思ったけど、ブレイがこっちを警戒しているから難しいだろう。
できれば、此処で倒しておきたかったんだけ―
「帰るぜマスター。さっき援護射撃に弾道ミサイル十発全部ぶっ放したから、五分ぐらいで着弾するぜ？」
「もうそんな時間か。なら撤収じゃな」
―今なんつった!?
「……弾道ミサイル!?　着弾するところ見れますの!?　なんて珍しい奇跡ですの！」
「「不幸だからね!?」」
そして天然ぶちかましたヒマリにツッコミを二重で叩き付けちまったよ。
カズヒ姉さんとハモったのはちょっと嬉しいけど、今そんな場合じゃない。
いや待て、弾道ミサイルだと!?
おま、まさか核ミサイルとか―
「おう！　ちなみに弾頭は燃料気化弾頭だ。駒王学園を包囲する形で着弾する形の撤退支援だから、トップは流石に死なねえよ」
―不幸中の幸いだけど安心できるか!?
糞が！　何考えてやがる。
「表の人間を巻き込む気か!?」
「――三大勢力が止めると読めておるからのぉ」
俺の糾弾をあっさりと受け流して、九条は告げる。
何より、その目は愉しみでこそあっても悲嘆に暮れてはいなかった。
「それに、いずれ地球に覇を唱えるのじゃからな。……異形を制したら、次は地球じゃ」
……ダメだ。

こいつら、遠慮って思考が欠片もない。
本当に世界を巻き込んでもいいと思ってやがる。躊躇が欠片も存在してない。
つってもお前、これは迎撃した方が……っていない!?
「い、いませんのよ!? ちょっと目を離した隙に！」
「引き際は見誤らないってわけね。……何より、弾道ミサイル全部はこの為ってこと！」
ヒマリとカズヒ姉さんもそれに気づくけど、忌々しいけど今はそんな余裕がない。
くそ、此処から打ち落とせるのか？ というか、自衛隊も流石に気づけ……無理か。
あの調子じゃ、異形の力を最大限に使ったステルス艦とかそういうのだ。とてもじゃないけど、表の自衛隊じゃ荷が重い。
想定外の超近距離から弾道ミサイルが何発もぶっ放されれば、対応している余裕がないだろう。
だからって……。
今、まだトップ陣は戦闘している。同時に結界も張る必要がある程度には、敵が残っている。
この調子だと、撤退戦の為の使い捨て兵器を大量に用意してそうだな。やってくれる。
じゃあどうすれば―
「……仕方ないわね。こうなったらあいつに頼るしかないわ」
その時、カズヒ姉さんがため息をついた。
そして俺達がちょっときょとんとしている間に、息を思いっきり吸い込んで、宝石を一個口元に当て―

祐斗ＳＩＤＥ

――リュシオン!!!!

その、念話とでも形容するべき声に、誰もが一瞬止まってしまった。すぐに反応できたのは、実力者であるリュシオンさんやクロードさん。そして敵側ではジークリット。

そしてジークリットはリュシオンが名指しで呼ばれたことで生まれた隙をつき、一気に後退する。

見れば既に全身の装甲が破損しており、戦闘そのものはリュシオンが有利に立ち回っていたらしい。

「もう時間のようね。悪いけど、無駄死にするのは趣味じゃないの」

そう言いながら即座に撤退を行うジークリットを、しかしリュシオンさんは追わなかった。

いったいなんで―

――弾道ミサイルがこっちに向かって十発接近中！　弾頭は全部燃料気化弾頭で、駒王学園周囲に着弾狙いよ!!!

―冗談だろ!?

「撤退の為の陽動ですか。それにしても、禍の団はこちらが止めるという前提とはいえとんでもないことを……っ」

そう歯噛みしながら、クロードさんは即座にタブレットを取り出すと確認作業に入る。

「……間違いありません！　真南高度１ｋｍを高速で接近中、着弾まで後四分です」
そんなにか!?
まずい。まだ魔王様達は敵の兵器を破壊しきっていない。
それどころか、兵器は魔王様の足止めに意識を向けている。
疾風殺戮・ｃｏｍは人間を大量に殺すことが目的である以上、ここで駒王町の市民が大量に死ぬのは好都合ということか。遠隔操作兵器だからってやってくれる。
「……敵のマギアやサイボーグも引く気がない。どうやら最初から使い捨てらしいね」
ゼノヴィアが周囲の敵と戦いながら、嫌なことを告げてくれる。
やってくれる。流石はテロリストといったところか……っ
だけど、この声はおそらくカズヒ・シチャースチエの物だろう。
なんで距離を取っている節があったリュシオンさんに、ピンポイントで名指しして―
「……ここは任せていいかな？」
―それを、リュシオンさんは一番理解していたらしい。
同時に、クロードさんも即座に頷いて高度を開始する。
「ゼノヴィアさんに木場祐斗さんでしたね？　説明している時間はありません、リュシオンに敵を近づけさせないでください！」
よくは分からない。
だけど、事情は分かった。
どうにかできるのだろう。彼の持つ新規神滅具候補に由来する、何かがあるのだろう。
なら、答えは決まっている！
「行ってください、リュシオンさん！」
「この学園を託すぞ！」
僕とゼノヴィアも、周りの敵をとにかく接近させないように戦い方を切り替える。
またクロードさんの周りには、何かしらの能力なのか槍を持った何人かの分身が生まれている。

おそらく遠慮なしの本気モード。それだけの価値があるということか。
そいて、リュシオンさんは静かに目を伏せ―
「……素粒子創造、そして変性。とりあえず、足場は１００ｍもあればいいか」
―その言葉共に、異常な現象が発生した。
直径十メートルの巨大な氷の柱が、突如として出現する。
急激に伸びていくその柱に飛び乗り、リュシオンさんは拳を空に構える。
結界の淵ぎりぎりまで伸びた柱の上で、リュシオンさんは両手を構える。
方向は南。そして着弾まで後一分を切った。
そして―
「―素粒子創造、そして放出。最大出力でいかせてもらう」
―その言葉共に、絶大な光が迸った。

イッセーＳｉｄｅ

うぉおおおおお！
俺は、全力で殴り飛ばされるのも構わずに、ヴァーリを殴り飛ばす。
ヴァーリも全力でこっちを殴り飛ばすけど、知った事かよ!!
『これは……俺が本当に押されているだと!?』
『馬鹿な……ヴァーリと同じ領域に、到達しているだと!?』
ヴァーリもアルビオンも驚いてるだろ。
ああ、俺も思いつきだったからここまで出来るなんて思わなかったよ。
だからこそ、俺達は……勝つ!!

『……ええ。そうよイッセー、勝ちなさい』
リアス部長の声が俺の中から鳴り響く。
そうだ。これが、揺り籠たる赤龍帝の鎧（ブーステッド・クレイドル・メイル）の、知られることが無かった真の力だ。
取り込んだ者の力を、赤龍帝の力で強化させる。
だからこそ、シャルロットと俺の力は相乗効果で規格外に高まった。
そしてリアス部長の魔力も、赤龍帝の力で増幅される。たぶんだけど、今のヴァーリにも負けないはずだ。
だから出来る。だから戦える。
リアス部長の魔力が寿命の代わりになって、そしてシャルロットと部長と俺の三人で覇龍になることで、覇の暴走も何とか抑え込んでる。
そう、だから。
『くらえぇぇぇぇぇぇ！』
『ぬぅお!?』
ヴァーリの荒いパンチを避けて、俺は拳を叩き込む。
覇龍になってから動きが荒いぜ。いい加減慣れたから、俺でも避けられる!!
だからもう、さっきから俺達が一方的に殴れてる。
だからこそ、勝てる！
『これは……まさか……!?』
『シャルロット・コルデーとリアス・グレモリーが負担を分割していることで、ヴァーリ以上に動きが荒れないということなのか!?』
ヴァーリとアルビオンも分かったみたいだけど、もう遅い。
こっちも結構きついんだ。遠慮なんてする気はねえ。
『部長、ドライグ、シャルロット！　……これで決める！』
俺は一気に力を籠める。
込めるのは左腕。それも中に込められた龍殺しの聖剣アスカロン。
全力を込めて、倍加の力で増幅させる。
『やって見せろ、相棒！』

『こちらも余裕がありません。頼みますイッセー！』
ドライグとシャルロットの言葉が、俺の背中を押してくれる。
そして、俺は拳を握り締め―
『―さあ、私の可愛いイッセー。……貴方の力を見せて頂戴!!』
―部長の言葉と一緒に、俺が一撃を叩き込んでヴァーリを撃ち上げる！
『やってくれる……だが！』
くそ！　空中で体制を整えやがった！
これ以上は流石にきついっての。……もしかして、粘られたら俺達がまずいか？
『まずいな。こっちはなり立てだがあっちはそれなりに慣れてそうだ。元々禁手に正式になっているわけでもないのに覇龍を強引な手法で使っていることも踏まえれば、燃費では白いのの足元にも及んでないしな』
やばい！　こうなったらごり押し……あ。
『ヴァーリ、横』
『ん？』
俺がついヴァーリにそう言ったけど、もう遅かった。

なんか凄い威力の砲撃が、ヴァーリを巻き込んでどっか遠くにぶっ放されたぁあああああああ!?

三勢合一編　第二十三話　聖騎士団と私掠船団

和地Ｓｉｄｅ

何があった!?
とりあえず他の味方のフォローをした方がいいと思い、こうして絶大なオーラの出ていたイッセー達の方に向かった俺は、信じられない光景を目にしている。
そう、疲労困憊だけど戸惑う余裕があるイッセー達と、ボロボロでぶっ倒れたヴァーリの姿だ。
いや、マジで何があった？
「……イッセー。何があった？」
「いや、俺もちょっと何がなんだか」
なんでお前が困惑してるんだよ。俺の質問に答えてくれよ。
「なんと言えばいいのか。ヴァーリの覇龍に対して、イッセーの機転でこちらも覇龍を使うことで対抗はできたんです」
と、そこでシャルロットが困惑しながらも説明してくれる。
「それでも中々倒せず、慣れなども問題もあってジリ貧になりかけたたのだけれど、流れ弾でヴァーリが撃ち落されたのよ」
そしてリアス・グレモリーがそう言ってくるけど、ああそういうことか。
カズヒ姉さんもそれで事情が分かったのか、軽く苦笑いを浮かべた。
「それはリュシオンの神滅具ね。あれ、戦闘では使いづらいから彼も使ってないけど、戦略的な運用だと本当に役に立つのよ」
『……あれだけの火力、二天龍（俺達）の宿主でも特化型の禁手か、もしくは覇龍でもなければ出せないだろう。なんという性能なんだ』
カズヒ姉さんの説明に、ドライグがかなり本気で感心しているらしい。

あのリュシオンって、凄いの持ってるんだな。禁手に至ってるのかもな。
そう思いながら、俺はヴァーリに向けてショットライザーを向ける。
「拘束させてもらう。抵抗できるならしてもいいが、その時は死んでも恨むなよ？」
遠慮をする理由はない。
和平のこのタイミングで裏切ったんだ。その果てに殺される程度のことは覚悟してなければ駄目ってもんだろう。
強敵と戦いたいから、組織を裏切るどころか和平を結ぶって時にテロリストを内通させる。そんなものを許すつもりはない。
嘆きの涙を大量に生み出しかねないその行為を、涙の意味を変える俺が見過ごす通りなんてないんだよ。
「五秒だけ待つ。返答がなければ殺すし、抵抗したら当然殺す」
『ＳＡＶＥ』
全力でぶち殺せるように準備をしつつ、最後通牒を行い―
「……ぞ」
「なんだ？　聞こえるように―」
ヴァーリがぽつりと何かを言い―
「―遅いぞと言ったんだ。君じゃない奴にな」
「……いいいいいやっほぉおおおおおお！」
―上から何かが襲い掛かってきた。
とっさに飛び退りながらぶっ放すが、なんか大量に分身が出てきて相殺される。
慌てて距離を取れば、本体がヴァーリのカバーに入ったそのタイミングで、残りの分身が突っ込んできやがった。
「ちょ、多す―」
「伏せなさい！」
カズヒ姉さんの声に反射的に従えば、大量に榴弾が飛んできて、分身達を吹っ飛ばした。
そして視界を塞いだ爆風が掻き消えたその瞬間、そこにはヴァーリ

の肩を担いだ、中華風の男が一人。
「おいおいヴァーリ。滅茶苦茶ボロボロじゃねえか。そんなに強かったのかよ、赤龍帝は」
「ああ。期待にあふれる最高の宿敵だよ」
そうヴァーリと言い合うそいつは、なんか興味深そうにイッセーの方を見る。
「俺は美侯ってんだ。今度俺っちとも戦ってくれよ、赤龍帝！」
「……いや、誰だよ」
フレンドリーな初対面のバトルジャンキーに、イッセーが面食らうのも仕方ないだろう。
というか、誰？
「おいおい、お前さんも禍の団についたのかよ。世も末だな……ったく」
と、そこで腕一本吹っ飛んでる総督が来た。
「アザゼル総督？　知り合いなの、あの猿」
カズヒ姉さんが警戒しながらそう聞くと、何故か総督は噴出した。
今のどこが面白かったんだ？
「くくっ。案外本質は見抜いてるな」
「で、誰なんですの？」
ヒマリが首を傾げてると、総督は美侯とか名乗った奴を指さした。
「ソッコーで分かるように言うと、孫悟空の末裔だよ。確か孫だったな」
……。
「「えええええええ!?　孫悟空ぅ!?」」
思わずイッセーやヒマリと一緒に大絶叫だよ。
知名度凄いのが来やがったなオイ！
孫悟空の孫かよ。ルシファーのひ孫と孫悟空の孫が手を組んでテロリストとか、世も末だろいくら何でも。
っていうかまさか、孫悟空まで禍の団って落ちはないだろうなぁ!?
「……孫悟空こと闘戦勝仏は須弥山の所属だったわね。まさか、須弥山が禍の団についたでもいうの？」

「他の神話体系の一つや二つ、三大勢力憎しで後ろ盾になってもおかしくないけれど……っ」
リアス・グレモリーとカズヒ姉さんがそう言って警戒するけど、美侯は笑って片手をひらひらと降った。
あ、どうやらそういうわけでもないらしい。
「須弥山は関係ねえぜぃ。仏になっちまった初代と違って、俺っちは気ままに生きるのさ」
……あ、これ絶対ヴァーリと気が合うタイプだ。まかり間違っても学級委員とか風紀委員とかになるタイプじゃない。
俺は一瞬でそこが分かったよ。
というか、須弥山にちょっと同情したぞ。
なんだろう……ああ、分かった。
こいつら、基本骨子がアウトローなんだ。なんていうか……思考が混沌極(カオス)ぶり？
禍(カオス・ブリゲート)の団って名前なだけあるな。見事にカオスっていうかなんて言うか。
ああ、コレ基本思想が秩序側(コスモス)とは相性悪いな。そりゃ大勢力同士の和平とかアウトだろ。
俺はなんていうか諦観していたけど、その時更に何かが動いた。
視界の隅から、何て言うか聖なるオーラが迫ってくるというか……あ。
「気づいてるかー？」
「……おぉっとぉ！」
思わず指摘するのと、美侯がそれに気づいて躱すのは同時。
その直後、大爆発が起きた。
今度はなんだ。
増援だとは思う。だけど誰が来たのか分からない。もしかして別口で第三勢力って可能性だってないとは言い切れない。三大勢力に属する戦争継続派とかが出てくる可能性はあるだろう。
で、正体は―
「がぁぁあはっはっは！　テロリストどもよ覚悟するがよいぞ！

我らデュナミス聖騎士団の増援が来たのだからなぁ！」
―味方だった。
なんか豪快なおっさんだった。
後、主武装のメイスがでかいな。
「ストラス騎士団長!?　またいきなり大物が来てくれたわね！」
そしてカズヒ姉さんが明らかに喜んでる辺り、これは実力者か！
そしてそれに続くように、全速力で緑の髪を持つ女性が突入してくる。
「ちょちょちょっとぉ！　騎士団長早すぎですってば！　っていうかこれ、もうほぼ終わってません？」
またギャルっぽい感じの、俺達と同じぐらいの女の人だな。
だがこちらも動きに隙があまり見えない。どうやらできる人のようだ。
と、そこで騎士団長のストラスとかいう人が、少し周りを見渡すときょとんとした表情を浮かべた。
「……なんと。もう殆ど終わっている雰囲気ではないか。これは吾輩、出遅れたか？」
「……そうだね。かのデュナミス聖騎士団の団長が出てきておきながら、戦うことができないのは残念だよ」
ヴァーリがそう寂しげに微笑むと、美侯は美侯で残念そうだった。
「俺っちも残念だぜ。だけど今戦っても楽しむ余裕もなさそうだしよぉ。……また次の機会ってことでよろしくな！」
「いや、テロ行為をそんなさわやかに言ってほしくないんだけどなぁ」
緑髪の少女がそうぼやくけど、何故かストラスって人は胸を張っていた。
「応ともよ！　我らが未来に仇なすというのなら、全力で受けて立ち勢いよく粉砕するのみ！　その後は葬儀も執り行ってしんぜよう！」
あ、この人裏表ない人だ。組織のボスとしてそれはそれでどうなんだろうか。
俺がそんなことを思っていると、何時の間にかヴァーリ達の足元が泥になり、二人が沈み込まれている。

「また会おう、俺の宿敵に期待の戦力達。……俺も、精進させてもらうとしようじゃないか」
……上等だ。
「かかってこい。お前らの楽しみで罪なき人が泣くというなら、俺は遠慮なくぶちのめす」
俺がそう告げると、二人揃って楽しみなのを顔全体に浮かべてきやがった。
覚えてやがれ、テロリスト。
この落とし前、必ずつけさせてもらうからな。
そしてヴァーリ達が完全に沈んで泥が土に戻ってから、イッセーが盛大にため息をついた。
「……疲れた。死ぬほど疲れた」
そのまま倒れこみそうになり、シャルロットやリアス・グレモリーが支えようとしたけど、その必要なかった。
それより先に、ストラスさんが支えたからだ。
そして背中をバンバンと叩いている。
「よく頑張った少年！　本来警備を担当する我らの不徳で苦労を掛けたようだな。ありがとう、そしてすまなかった！」
「ゲフッゴフッ!?　……いえ、その、俺もリアス部長の眷属でしたし、何より後輩を助ける為でしたから……」
「団長～？　多分ですけど彼悪魔ですよ？　あとその勢いだと、むしろねぎらいじゃなくて攻撃になってます」
緑髪の人がツッコミを入れているが、そこにヒマリが割って入った。
「大丈夫ですの！　イッセーは根性由来で頑丈ですし、和平だって結ばれてますもの！」
「いや、今このタイミングで会談の結果言われても困るっていうか、あとダメージ入ってないなら遠慮しなくてもいいってわけでも―」
そこで、緑髪の人とヒマリは動きを止めた。
お互いの顔をまじまじと見て、何故か止まっている。
「……え、なに？　ヒマリって教会に縁があったの？」

意外な展開にカズヒ姉さんが首を傾げるけど、俺も分かんないです。
「いや、普通にストリートチルドレンだったはず。血縁が日本と縁があるのは推測できたけど……」
え、マジで何？
何故か鏡を見ているかのようなパントマイムじみた動きをしたり、お互いに人差し指を合わせたりしてるんですけど。
後動きぴったりだな。パントマイムの練習でもしたのかって具合だ。
「……ヒツギ・セプテンバーだけど」
「ヒマリ・ナインテイルですの……」
そしてお互いに自己紹介。
そして次の瞬間、笑顔でお互いを抱きしめた。
「「友達になろう！」」
「「なんで!?」」
俺・イッセー・カズヒ姉さんでツッコミが迸った。
「うむ！　教会の聖騎士と堕天使の戦士が、悪魔の見守る中で友誼を結ぶ！　これぞ和平の象徴ではないか！」
「いえ、いきなり過ぎないかしら？」
「リアスさんストップです。たぶんですが、この人天然気味なので気にしない方がいいです」
外からストラスさんやリアス・グレモリー、そしてシャルロットがなんか言ってるけど、いや……これどうなの。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

それから約二十分後、日本近海に潜伏していたトルネード級は既に日本の排他的経済水域にまで離脱していた。
６０ノット以上で移動する２００ｍ近い潜水艦という、埒外の技術が使われている潜水艦の逃亡を食い止めることなど不可能だろう。超大型でありながら神器技術の再現を行っている為、衝撃吸収によってエコーによる感知も難しい。海上自衛隊は世界的に見ても優秀であると言われているが、これを初見でどうにかするのは不可能としか言いようがない。
戦闘の趨勢が傾いたと判断された瞬間に、撤退支援を行う為の弾頭ミサイルを全弾発射。その後は急速潜航し、味方を転移させれるギリギリの距離で待機。そして転移で回収する分は回収して、今は離脱を測っている真っ最中だ。
移動拠点として非常に優秀なトルネード級の存在は、禍の団の大きなアドバンテージだ。これにより地球上に限定すればテロを行う事前準備が簡単であり、これにより固定陣地としての拠点を少なくし、更に固定拠点分の隠密準備にリソースを大きく割ける。
結果としてトルネード級用の整備施設などを組み込む必要はあるが、それ以上の価値がある設備だった。
そして、このトルネード級は娯楽設備が非常に完備されている。
かのタイフーン級原子力潜水艦にはサウナやプールがあるのだが、トルネード級はその上を行く。
サウナもプールもあり、ジャグジーも存在する。ジムも存在する。更にカラオケルームやシアタールームも、防音対策故に他に比べればスペースは圧迫されているが存在する。
そして娯楽設備の一貫してカフェだけでなく、バーやパブも存在していた。
バーとパブは同じではないかとも思われるが、これに関しては高級酒を中心としてそのつまみとしてチーズや生ハム程度を食するバーと、がっつり食べてガッツリ呑める量重視のパブという形ですみわけを作っていた。

そしてそのパブで、景気よくビールを飲んだ幸香がジョッキをテーブルに叩き付けるように置いた。
「……っぷっはぁ！　一仕事の後のビールは美味いのぉ！」
「おいおい。俺が奢るからって飲みすぎだぞ？　あと君、日本じゃ一応未成年なんだろう？」
苦笑しながらの曹操にたしなまれるが、それを聞くような幸香ではなかった。
「我らのようなテロリスト（はぐれ者）が、そんなことを気にしてどうするのじゃ？　我らが守るのは我らが定めし流儀のみ。裏は裏のルールで動く者じゃ。のぉ？」
「全くだなマスター。はぐれ者ってのは自分達のルールで動くもんだ。それ以外は全部自己責任で、殺されるのも自業自得ってもんだろう？」
そう答えるのはジョン・ラカム。
ライダーのサーヴァントとして召喚された彼は、そういう在り方をする為に召喚に応じたと言ってもいい。
「変なところでいい子ちゃんやって朽ち果てるってのは、お真面目で品行方正な連中に任せときゃいいんだよ。折角テロリストなんて生き方選んだのなら、もっと好き勝手に生きて盛大に殺されりゃいいのさ」
「君はそう言うの、しないように立ち回ってたと思うんだけどねぇ」
ジョン・ラカムについて多少は知識のある曹操はそう尋ねる。
それに対してラカムは、皮肉たっぷりな笑顔で返した。
「その結果が縛り首だろ？　そんな生き方はもう御免でな。かといって平和に真面目ちゃんやるなら、そもそも海賊何てやってねえんだよ」
その言葉と共にラム酒をあおり、そして唐揚げを盛大に食べる。
そして勢いよくげっぷをすると、軽く肩をすくめた。
「生前（昔）の俺は聖槍（コレ）を使わないことを決めて惨めに死んだ。それを恥じて得た第二の人生、盛大に派手に使って生きるって決めてるんでな」
其の豪快っぷりを笑って眺めながら、幸香も手づかみでフライドポ

テトを口に放り込んだ。
　そのまま咀嚼して飲み込み、曹操に指を突きつける。
「お主はどうもそういうところがあるがのぉ？　妾からすればもっと楽しんでがっつくがよい」
　酔っ払いの絡み酒に近いが、同時にそれは幸香なりの気遣いだった。
「人生のコツは愉しむことじゃろう？　美酒も美食も美女も美男も、人生を彩る物は盛大に楽しむことじゃ。そして―」
　静かに、そして人によっては寒気を感じるような微笑を浮かべて。
「―敗北などという忌まわしいものは、絶対に忌むべきじゃ」
　―はっきりと、彼女の根幹を告げた。
「負けてもいいなどという時点で性根が負け犬じゃろう？　一度負けた事実は勝っても消えぬ。負けたから勝てたなど、最初から負けぬ強さを得られなかったことを慰める美辞麗句でしかないわ」
「……撤退してなかったかい？」
　曹操はその辺りが疑問になったが、幸香は鼻で笑って返す。
「何をもって敗北とするかの問題かのぉ。勝利に繋げる戦略的撤退は、妾の中では敗北とは言わん。……まぁ、個人差の幅が広い内容ではあろうがのぅ」
「なるほど。価値観は人それぞれだしね」
　そこに苦笑で返しながら、曹操は一番聞きたいことを聞くことにした。
「それで後継覇王（アレキサンダー）？　今回いい好敵手（もの）は見つかったかな？」
「無論じゃ。見所があり相容れぬ、そんな素晴らしい雛鳥を見つけたわ。……できればもっと強くなってから食らい合いたいものじゃのぉ」
「あ、あと性欲もみなぎっておるから誰か呼んでくれぬか？　男も女も何人か連れてきてくれると嬉しいのじゃが」
「……君、豪快すぎないかい？」

「何を言うか。折角性欲があるのじゃから、Ｓ〇Ｘも楽しむべきであろう？　むろん、戦もな？」

三勢合一編　第二十四話　次につながる戦後の話。

和地Ｓｉｄｅ

あー、疲れた。
俺は校庭の隅でへたり込んで、戦闘の後片付けを行っているデュナミス騎士団を見ていた。
外周警備を担当していたデュナミス騎士団にも敵が差し向けられていたらしく、結構戦闘してたはずなんだけどな。
最も魔王クラスが手こずるような連中はいなかったらしく、完璧に足止めだったらしい。
そんなわけで、停止が解除された人達と共に後の作業をやっている。
「カズホは休んでてもいいんじゃないか？　会議室内にいて緊張しただろ？」
「いえ、させてください！　準神滅具を持っておきながら、のうのうと停止される体たらくには涙が流れて止まらないんです！　せめて、せめて事後処理だけでも！」
……カズホ・ベルジュヤナが凄いことになってるな。
ま、教会側では唯一固まってたからなぁ。そういう意味では精神的に結構きついんだろう。
そういう時は何かやらせた方がストレスも堪らないし、これは止めない方がいいと思う。
俺はそんなことを思いながら、遠い目で後詰の作業を行っている人達を見る。
とりあえず、なんか疲れたから何か食べたい。
とりあえず水分だけでも取ろう。出来れば甘い物とかが飲みたい。

答えとしては缶ジュースだよな。たぶん高校なら一つぐらい自動販売機が一つぐらいあるだろ。
そう思った時、足音が響いた。
「あ、いたいた。……かき氷食べるかい？」
……確か、リュシオン・オクトーバーだったっけ。
後ツッコミを入れたいんだけど、どこから出したかき氷。
あ、でも蒸し暑い夏の夜にかき氷はいいな。ハードすぎる一仕事の後だし、正直甘くて冷たくて水分多いのはありがたい。
「あ、いただきます」
「どうぞ。こっちも沢山あるから、向こうにお代わりも沢山あるから」
そう言われてみた時、大量の氷が置かれていた。
そしてそれを削るでっかい包丁のような刃もあった。
……あれ何？
「なんなんですか、あれ？」
「いや、弾道ミサイルを撃ち落とすにしても射線の確保が必要だったからね。足場として氷を大量に創造したけど、そのまま溶けるのを待つってのもあれな気がしたんだよ。だからガムシロップとかを創造してかき氷にして、作業中の人とかに振舞ってたんだ」
ツッコミどころが多すぎるんだけど、どっから突っ込んだらいいんだよ。
とりあえず、消そうよ自力で。態々かき氷にしなくてもそれでいいだろ。
想像したってことは創造系神器とかそんな感じなんじゃないのか？　それなら消すことも出来ると思うんだけど。
後ガムシロップとか創造って、幅広くないか？　禁手がそういう方向性なら分かるけど、ガムシロップやら大量の氷とかを創造できる神滅具ってなんだよそれ。
俺がどこから突っ込んでみようかと思っていると、リュシオンは苦笑していた。
「ああ、勘違いされがちだから先に言っておくと、俺は創造(つく)った物を消せないんだよ。そういう神器なんだ」

「……はい？」
え、どういうことだ？
俺が呆気に取られていると、リュシオンは軽く自分の両手を見せると、そこからガラスを具現化する。
いや、これは具現化なんてものじゃない。
これは―
「これが俺の神滅具候補、生誕の超新星（ビッグバン・イマジネイター）。能力の根幹は素粒子の製造で、それを大量生成して放出するか、生成して別の元素にすることで物質を生み出すかが能力だよ」
―冗談かと思うぐらいの代物だった。
そりゃ神滅具扱いされるわけだ。ある意味他の神滅具を圧倒する神滅具と言ってもいい。
創造系神器っつったって、それは神器によって生み出された物体だ。状況次第で消滅するのが基本だと知っている。
だけど、リュシオンの神滅具は違う。
正真正銘物質を生み出すなんて、それこそ聖書の神がなした奇跡そのもの。
これを神滅具扱いしなかったら、何を神滅具扱いしろっていう代物じゃないか。
俺が面食らってると、リュシオンは軽くため息をついた。
「……正直言うと、あまりそういうところに主眼を置いてもらいたくないんだけどね」
そうため息をつくと、リュシオンは俺の隣に座るとかき氷を食べ始める。
そしてその甘みと冷たさで疲れを癒しながら、軽い苦笑いを浮かべていた。
「神滅具（ロンギヌス）が稀少なことは知っているさ。その扱いに関しても、俺は優れた才能を持っているってことは自分でも自覚している。……嫌なぐらいにね」
そう前置きしてから、リュシオンはしかし首を左右に振った。
「でも、人間に価値があるとすればそれは神器なんかじゃないだろう

？　それは確かに価値のある異能だけど、人の価値はそんなところにないはずだ」
　そこにあるのは、きっと俺の「涙の意味を変える」に並ぶ信念何だろう。
　俺は、そこにリュシオン・オクトーバーという男の根幹があると思えてならない。
　そして、リュシオンは普通の声で、だけどしっかりと語る。
「強すぎる勝利や敗亡には、人生を変える重みがある。だけどそれは裏を返せば、勝ち負けは強すぎると人の本質を変えてしまうということだ」
　それは確かにそうかもしれない。
　強い成功体験や失敗体験は、どっちにしても人の今後に影響を与えることがある。
　ヴァーリの奴はイッセーを自分に並び立たせる為、両親をヴァーリに殺されたという喪失からモチベーションを与えようとした。しかもあの言い分だと、復讐心という点に限っていえばヴァーリの経験論でもあるのだろう。
　そしてそれは勝利であっても同じこと。人生を変えるだけの強い光を浴びるということは、つまり勝利によって人間の根幹に影響が与えられるということでもある。それは俺自身が証明しているというか、そりゃ物心つく前レベルにあんなレベルの決意があれば、人生の方向性は決定する。
　だから、リュシオンの言い分はある意味で理解できる。
「急激な環境変化は良くも悪くも負担が大きい。なら結論として、良くも悪くも無理なく少しずつ成長していってこそ、その人の本質を保つことができると思うんだ。……俺は、人はそういう風に生きていけるのが一番いいと思っている」
　自分の両手を見ながら、リュシオンはそう言った。
「理想論なのは分かっているけど、同時に現実的にもそれが最善だよ。ミカエル様達には悪いけど、この急激な和平は必ず反動でいくつもの揉め事やたくさんの離反者を生むだろうからね。好機を逃さず一気

に滅亡の危機を回避することを否定はしないけど、段階を踏んでない以上反発感で暴走する人は確実に出るだろうし」
そう寂しげに告げた言葉を、俺は否定することができない。
冷静に考えて、青天の霹靂以外の何物でもないからなぁ。実際コカビエルがまだ暴走してない時に和平とか言われたら、絶対ぶち壊す為にテロってただろうし。
実際問題、禍の団という受け皿まで出来ちゃったからなぁ。そっちに鞍替えする連中は結構出てきそう。
特に悪魔祓いとか、身内を殺されたことがきっかけで目指した連中とかいそうだし、仕事の際中に悪魔に殺された仲間とかいそうだし。
反論できないので黙って聞いていると、リュシオンは静かにどこか遠くを見据えていた。
「だからこそ、少しずつ成長することが多くの人に許されるようにしたい。間違えたのならそれを少しずつ修正すればいい、そんな簡単なことで、人は必ず成長できると信じている。……その為に急激な変化が必要なら、その一欠片ぐらいは、それができる俺がやるべきなんだ」
寂しげに、そしてどこか誇らしげに。
「……少しずつでいいから前にちゃんと進み続ける。そんな簡単なことこそが正義だと思うから」
―リュシオン・オクトーバーは、己の信念を言い切った。
立派なことだと思う。褒められるべき考えだと思う。
だけど、なんでだろうな。
どこか、断絶のようなものを俺は感じている。
ふと思ったのは、リュシオンに続けて何か言おうとした時のカズヒ姉さんの姿。一瞬ためがあるというか、躊躇いや沈黙があるあの姿。
カズヒ姉さんは、これが何なのか分かっているのかもしれないな。
「あ、リュシオンさんだ！」
と、そんなことを思っているとデュナミス聖騎士団のメンバーらしき人達がリュシオンさんに気づいて手を振っている。
「頑張ったみたいだな、リュシオン！　……俺達も負けずに頑張るぞ！」

「了解です！　あ、リュシオンさんはもう休んでいてください！　俺達が頑張りますんで！」
「ミカエル様を守ったリュシオンさんに恥じかしくないようにしないと。後始末ぐらいはいっぱいするわよ、みんな！」
……人気あるなぁ。
まあ、リュシオンさんの信念は真っ当だしな。
少しずつ確実に成長していくことを良しとして、可能なら急激な変化は良かろうが悪かろうが避ける。そしてそれを自分自身が体現しつつ、急激なことが必要な時は誰かではなく自分がやるぐらいの気概を持つ。
立派な人だと思う。まして教会の戦士にとって華ともいえるデュナミス聖騎士団なら、彼のような人に敬意を持つのは当然だろう。
だけど、俺はカズヒ姉さんのことを思う。
自分という存在が腐らないよう、だからこそ正義の味方であることを強く意識しているカズヒ姉さん。
正義を成すとは本当は簡単だと思い、それを自分が成すことで証明したいリュシオン。
俺は、カズヒ姉さんがリュシオンのことを苦手に思っている理由が、何となく分かった気がする。
「あのさぁ、リュシオンさん。……一つ聞きたいことがあるんだけど」
「なんだい？」
手を振る仲間に手を振り返しながら、リュシオンは和やかにそう尋ねてくれた。
そんな彼にちょっと意地悪なことを言うが、だけど俺はあえて聞く。
「……それが簡単でも何でもないって言われたら、あんたはどうするんだ？」
「決まってるよ」
即座に、何の躊躇いのなくリュシオンは微笑んだ。
「簡単だって示すだけさ。そして彼らがちゃんと出来た時、それをきちんと伝えることさ。そのおかげで、彼らはきちんと前を見ることが

出来たんだから」
その言葉は誇らしげで、そして眩しいものを見るように今作業をしている仲間達を見ていた。
ああ、なるほど。
確かにカズヒ姉さんは、デュナミス聖騎士団（彼らの仲間）には向いてないな。

Other Side

「ミカエル様。赤龍帝に何を頼まれたのですか？」
「ゼノヴィアとアーシアだけでも、主に祈っても罰が与えられないようにしてほしいと頼まれました」
「……そうですか。少し甘やかしている気もしますが、彼はその為に命すら懸ける人ではありますね。……ミカエル様も赦すのでしょう？」
「聡明ですね、クロード。和平も結べたことで、方向性をある程度は変えられると思います。問題が出てこないようなら、少しずつプルガトリオ機関の者にも施すことで意識改革を進めたいですね」
「そうですね。ズィール部隊やヴィクター部隊の者は喜ぶでしょうし、彼らは和平に疑念を持ちやすいですからその辺りのフォローもいりますし。ですがその前に」
「はい。和平締結後を見越した貴女の考案したプランは、草案をサーゼクスやアザゼルにも渡しました。流し読みの段階では好感触だと思いますよ？」
「そうであってほしいです。こう言っては何ですが、人はそう簡単に急な変更など困難なのですから。それに相応しい何かを用意できな

いのなら、愚者に合わせた歯車(ギア)や緩衝材(クッション)が必要になるでしょう」
「出来れば人の心を信じたいですが、万が一があっては困りますからね。……特に重要視するべきは、リアス・グレモリーさん達がいるこの駒王町でしょう」
「……確かに。この計画において最も優先されるべきは、和平成立の地である駒王町と和平に大きく関わったリアス・グレモリー眷属でしょう。モデルケースとしても最重要でしょう」
「なるほど。では派遣する人員にも、相応の箔が求められそうですね……」
「ええ、その件に関しては、悪魔側に提案した例の件で対応できるのでは？」
「そうですね。何も今日明日で派遣する必要もありませんし、まずはいけるかどうかを考えてからですね」
「はい。もちろん、下準備として一人二人は派遣するべきだとは思いますが」
「……なら、適任は一人でしょうか？」
「……一人ですね」

「……サーゼクス様。セラフォルー様が頭を捻りながら帰られましたが、どうかなされたのでしょうか？」
「ああ、それはこれが理由だよ。見てみれば、セラフォルーの仕事がどうなったか分かると思うよ」
「それでは……なるほど、これは仕事が増えて悩みたくもなりますね」
「提案者はクロード・ザルモワーズ君だそうだ。流石は暗部出身ということかな？」
「そうですね。しかしこの案が採用されれば、三大勢力間での相互理解も進むでしょう。少なくとも雰囲気をそちらにもっていきやすくはなりかと」

「ああ。これなら大王派もそこまで渋い顔をしないだろう。……もっとも、一番苦労するのが我々だけどね」
「でしょうね。この案の第一陣はどうあがいてもリアスお嬢様になるでしょう。ソーナ様は対コカビエルに対する関与度が少ないですし」
「まあ、ソーナ君にも相応の立場の者があてがわれそうだけどね。……さて、ここからが忙しくなりそうだ」

「……カズヒ。私、ちょっと目が疲れたみたいなのよぉ」
「……御免リーネス。私は私で、かなりきついの」
「やっぱり、幸香ってあの幸香なのぉ？」
「十中八九。黄金の魔眼持ってて黒髪で九条で幸香とか、麻雀でいうなら数え役満。ビンゴでいうならリーチが九つできてるわよ。……しかもなんでツインテールにしてるのよ……っ」
「見事にL字で空いてるわねぇ」
「それで？　そっちはそっちで目が疲れたって何が見えたのよ」
「あなたを一目見て、分かっちゃったでしょぉ？　つまりまあ、そういうことなのぉ」
「なるほど。探すつもりだったわけね？　で、誰を見つけたの？」
「……ダブったのぉ」
「……今なんて言ったの？」
「ダブったのよぉ。別々の人が同じ人認定されてるのよぉ」
「……胃痛で死にそうだから、あえて聞かない方がいいのかしら？」
「そうねぇ。まあ、自覚があるのは私とあなたぐらいだものぉ。あえて誰か言って、貴女のストレスを溜めない方がいいわよねぇ」
「そうね。今言われたら心労で死にそう。……でも、誰がダブったのか気になるわね。……男か子供か女かで」
「それ名詞で言うのと変わらないわよぉ。……女」
「……ここが日本じゃなければ、元ソ連地域出身として、やけ酒飲める

のに……っ」
「せめてやけ食いしましょぉ。すいませーん！　このフライ盛り合わせセット三人前下さぁい！」

『そうか。サーゼクスにはそんな切り札があったと……最悪だな。シャルバ、どう思う？』
『我がベルゼブブの先代達がうち滅ぼされたのも納得だ。……肉体そのものが消滅の魔力とは、反則極まりないではないか』
「その通りです。そしてアジュカもそれと同格というのは、最悪というほかないわ。……どう思う、クルゼレイ」
『忌々しいが三人がかりしかあるまい。セラフォルーとファルビウムはどうにかできる算段は整えていたが、サーゼクスだけならともかく、アジュカも踏まえるのは困難だろう』
「布石は打たれてはいます。二人のルシファーが共闘すれば、サーゼクスはルシファーで討てる。ですが、問題はアジュカであり―」
『――構わん。まずは他の魔王を滅ぼしてからでいいだろう』
「意外ですね、シャルバ。貴方は真っ先にアジュカを殺したいと思っていましたが」
『気にするな。忌々しいあの男が難敵なのは分かっていたことだが、算段がないわけではない。……直接の力で打倒が困難ならば、奴の魔王という立場から崩せればいいのだ』
『というと、例の？』
『その通りだクルゼレイ。あのいい趣味をしている奴と繋がりを持てたのは僥倖だ。機を窺う前に一当てはするが、本命のタイミングは英雄派との交渉次第だろうな』
「……策は、あるのですね？」
『信用はしているが、一応の概算は聞かせてもらおうか？』
『よかろう。狙いどころは彼奴が狙っていたあの小娘、その神器（セイクリッド・ギア）に

ある』

「――さて、旧魔王派のシャルバは面白い作戦を考えるね。君はどう思う、後継覇王（アレキサンダー）？」
「勝利の為なら敵すら利用するか。中々嫌らしい策じゃが、この策を完全に読み切れるのはごく一部じゃろうな。で、許可を出すのか、曹操？」
「もちろんだろう。この作戦は実に英雄派（俺達）好みだ。成功すれば現魔王政権の実力者を一網打尽にできるしね。ちょっと手を貸すだけでこの大戦果は見過ごせない」
「なるほどのぉ。で、何時やるのじゃ？」
「事態を引き起こす算段を立てる必要があるからね。現段階では必要なデータが取れないことも踏まえると、下手すると一年以上かかるかもしれない」
「……気の長い話じゃのぉ。寿命も長い異形らしい作戦の概要じゃ」
「人間の作戦だって、数年がかりってことは決してありえなくはないさ。……さて、それじゃあ俺達も準備するかな」
「うむ。返り血で彩られし英雄譚、人々の心に光を言うものを見せてやろうではないか」

三勢合一編　第二十五話　和平によって動き出す者たち

和地Ｓｉｄｅ

「なんでいんだよ」
イッセーのツッコミに、俺はどう返答したもんかと頭を捻った。
いや、イッセーが困惑するのもよく分かる。
ここは駒王学園旧校舎。それも平日で、放課後じゃなくて朝なんだからな。
普通に考えて部外者がいるはずがない。更に―
「おいおい、酷いぜ赤龍帝。新任の先生に対して敬意とか持てよなぁ」
―そんなことを堂々とほざく、スーツ姿の総督がいるんだからなぁ。
リアス・グレモリーも寝耳に水だったらしく、ちょっとぴくぴくとこめかみを引くつかせながら、素知らぬ顔のソーナ・シトリーをじろっと見つめている。
「……ソーナ？　これはどういうことかしら？」
「見てのとおりです。堕天使総督であるアザゼルは、本日から駒王学園高等部の科学教師兼、まだいなかったオカルト研究部の顧問となりました」
しれっというソーナ・シトリーだけど、たぶんそこじゃない。
「……どうしてそうなるのかしら？」
「……了承しないとお姉さまが来ると言われまして」
しれっと脅迫されたって言っちゃったよこの人。

「うんうん。家族仲がいいのも考え物ですわね。はい、よしよし」
「……あの、私はもう十八なのですが」
さらりとヒマリが頭をなでて慰めてるけど、お前さらりとよくやるなぁ。
まあそれはともかく。
この調子だと悪魔側に情報が伝わってないな。サプライズか。
さてどうしたもんかと思ったけど、とりあえずまず言うべきことを言おうか。
「まあとりあえずだな……。俺とヒマリとあとリーネスだけど、二学期から駒王学園高等部に編入されることになったから」
まずは結論だけ言っておこう。
ま、そこからだと困惑されるだろうなぁ。
「……なんでそんなに？」
塔城小猫が怪訝な表情を浮かべるけど、そこだけじゃないんだよなぁ。
「あらぁ。一応言っておくけど、堕天使側だけじゃないわよぉ？」
そう言いながらリーネスがドアを開けると―
「……この茶番、必要あった？」
―付き合いが意外といいカズヒ姉さんが苦笑いしながら、そこに立っている。
「……まさかカズヒも転入するのか？」
「ええ。まあ、転入そのものはリーネス達と同じで二学期よ。……あと流石に多すぎるから、イッセー達のクラスに転入するのは私と和地……あと一人ぐらいね」
ゼノヴィアにそう答えるカズヒ姉さんも、少し苦笑交じりだった。
で、なんでこんなことになったのか説明するのは、たぶんカズヒ姉さんが一番だろう。
それをカズヒ姉さんも理解してるのか、軽く肩をすくめながら、アザゼル総督の隣に立った。
「まず簡単に説明すると、これはクロード長官の提案とアザゼル総督の発案が混ざった感じね」

「おう！　赤龍帝に言った俺なりの詫びって奴だ。神滅具のお前や、イレギュラーな禁手の木場祐斗、そして神器としてもレアなアーシアとギャスパーの成長を促進するのを兼ねて、面白い神器がらみの情報を調べようってことさ」
「総督ったら、そこは内緒にしておきましょぉ？」
　軽く笑いながらリーネスがツッコミを入れるけど、そこから話が更に進む。
「……話を戻すけど、長官は今回の和平を見越していくつかのプランを立てていたのよ。というかぶっちゃけ、絶対に和平反対で運動が起きると踏んでいるわ」
　ぶっちゃけすぎである。
「そんなに平和が嫌なのか？　ヴァーリみたいな戦闘狂って、多いの？」
　イッセーが首を傾げるけど、そういうもんでもない。
「あのねぇ。宗教ってのは本来厳格で、当然だけど正義を示し、悪魔や堕天使は悪の象徴とされていたのよ？　和平とか青天の霹靂過ぎて、いきなり受け付けろってのは困難そのものね。実際既に離反者が出てるもの」
　そうはっきりとカズヒ姉さんは告げ、そして駆る肩をすくめる。
「だからまあ、その辺の意識改革を段階踏まないといけないのよ。……いきなり和平を結ばれたからこそ出来ることもあるけど、問題はきちんとあるのよ」
　そう前もって言ってから、カズヒ姉さんは更に続ける。
「だからこその、長官が提案したプラン。和平に対して比較的好意的な、人間社会で活動している上級悪魔に、神の子を見張る（グリゴリ）者や教会から人を派遣するのよ」
「表向きには監査役だが、派遣する側もされる側も和平賛成派を中心にする予定さ。それで共同活動で成果を上げたり地域に貢献することで、和平そのものに対する抵抗を減らしていこうって作戦だな」
　総督がそれを引き継いで、そこでにやりと笑ったわけだ。
「そしてその筆頭格ともなれば、和平締結の地であるこの駒王町しか

ねえだろ？　解決に尽力した赤龍帝を擁するリアス・グレモリーが悪魔担当。で、グレモリー眷属の神器持ちを強化する担当もかね、堕天使陣営は共闘したＡＩＭＳ第一部隊を俺の直属部隊に再編して、俺が代表ってわけさ」
「総督はこれでもカリスマ性があるから、直属を前もって用意しないと人が何人も来そうで、こういうことになったのよねぇ」
そうにこやかにリーネスが告げると、更にヒマリが元気よく手を上げる。
「そういうことでよろしくですのー！　二学期から学友ですのよー！」
そんでもって、勢いよくカズヒ姉さんに抱き着いた。
カズヒ姉さんも押しのけたりはしないけど、ちょっと戸惑っている。
……一言言おう、羨ましい。
おのれヒマリめ。女同士だからこそできるスキンシップをしやがった。悪意がないから怒るに怒れない。
ま、つまりはそういうことだ。
共闘経験のある者達を中心として、三大勢力今後の和平プランの第一陣を俺達が担当。そうすることで和平全体のイメージをよりよくしつつ、不満を和らげようって発案なわけだ。
流石は暗部出身。ちょっと狡い気もするけど、効果はありそうだ。
ただまあ、俺が思っていることと同じことを思っているのか、カズヒ姉さんはヒマリをなでつつ苦笑い。
「……まぁ、流石に本家の次期当主や堕天使の総督に比べると、私やイリナじゃ箔がないのは事実なのよね。一応、プルガトリオ機関も和平を機に堕天使や悪魔の構成員を表に出せるように動きがあるから、暗部出身であっても一員にはなれるけど」
「つまり、箔担当で更に何人か来るって感じか？　あとイリナはやっぱり候補なのか」
俺が聞くと、カズヒ姉さんも頷いた。
「有力候補ではあるわね。まあ、和平を円滑に進める為の交流も兼ね

ているし、グレモリー眷属もＡＩＭＳ第一部隊も人員数がそこそこあるから……更に何人かは追加されるでしょう」
「ま、その辺に関してはおいおいだな。……それよりだ」
そこで、総督はちょっとだけ真面目な顔をした。
「禍（カオス・ブリゲート）の団の活動だが、流石に当分は準備期間だとは踏んでいる。それに旧魔王末裔が軒並み参加を表明していることもあるから、今のところ若手であるお前達を積極的に投入しようってことにはならないだろう。……だが、何年かすれば話は別だ」
そうはっきりと言い切った。
まあ、そうなんだよなぁ。
俺が思い出すのは、ボロボロになりながらも嬉しそうだったヴァーリの顔だ。
あいつ、本気で嬉しがっていることがよく分かる顔つきだったからなぁ。
「ヴァーリは禍の団内部では、旧魔王の集まりじゃなく独自のチームを作っているらしい。メンバーは美侯だけでなく、他の派閥から引き抜いた奴や、はぐれ悪魔とかがいるそうでな」
「便宜上ヴァーリチームと名付けるけどぉ、間違いなく赤龍帝であるイッセーにはちょっかいをかけるでしょうねぇ。そうなると、間違いなく私達駒王町陣営で対応する必要に迫られるわねぇ」
総督とリーネスがそう言うが、まぁ言いたいことは確実だ。
「……僕達も、強くならないといけないのか」
木場がそう言いながら自分の手を見つめる。
数少ないあの戦いを経験した身だからな。敵の脅威はもちろん、味方の強者との差も痛感したって感じだろう。
俺も、九条は結局本気を見せなかったわけだしな。
少し沈んでいると、ゼノヴィアは勢いよく立ち上がることでこっちの注意を引き付けた。
そして両手を打ち付け、不敵な笑みすら浮かべて見せる。
「まあ当然のことだろう。主たるリアス部長の夢の為にも、偉大なる主の為にも、私は今以上に強くなるつもりだからな。……皆もそうだ

ろう？」
　その言葉に、グレモリー眷属全員が静かに頷いた。
「そうですわね。会談の時のような醜態はさらせませんもの」
「はい！　私も皆さんをちゃんと治せるように頑張ります」
「……次は暴れます」
　停止していた三人も、気合の入り方が違うな。
「……そうね。私ももっと鍛え直さないと」
「俺も！　リアス部長やシャルロットに恥じないよう頑張ります！」
　……なるほどな。
　リアス・グレモリーと兵藤一誠。
　この二人はまさに、グレモリー眷属の頂点と支点になっている。
　そんな二人がヴァーリ・ルシファーを運もあったとはいえ打倒した。
　これは、きっと凄いことなんだろう。
「ま、そういうわけだ。話に聞くと、今度の夏季休暇は若手悪魔で会合があるんだろ？」
「……ええ。魔王を輩出した家と大王及び大公の本家次期当主達、そして一部の有力な若手悪魔が集まるの。そのあと上役達との謁見も行うわ」
「じゃ、ついでに冥界でトレーニングだ。俺もコーチしてやるぜ？」
　と、リアス・グレモリー……いや、此処はリアス部長というか。総督もこれからはアザゼル先生と呼ぼう。
　リアス部長とアザゼル先生が今後の予定を煮詰めている間に、俺達は俺達で話をするべきかな。
「よろしくですのー！　今度仲良くなる為にカラオケとか行きますわよー！」
「なるほどカラオケか。以前アーシアに誘われた時は断っていたし、今度はいかせてもらおうかな？」
「はい、ゼノヴィアさんも一緒に行きましょう！　小猫ちゃんもどうですか？」
「……では次は此処にしましょう。開店三周年記念でフードメニュー

が数割引なんです」
「あらあら。小猫ちゃんったら、楽しそうですわね」
と、ヒマリ達はヒマリ達でノリノリだな。
さてと、俺としてはどうなるのやら。
「……どうやら、僕達はひとまとめで活動することになりそうだね」
と、そこで木場とイッセーがギャスパーとかいう子を連れてこっちに来た。
「どうする？　放課後辺りに男同士で一回集まりでもするか？　……具体的には、猥談しようぜ猥談」
イッセーが余計なことを言っているが、確かにそういうのもいいかもな。
男同士だからこそできる馬鹿騒ぎってのはあるだろうし、俺はそういう経験があまりないからちょっと興味ある。
よっしゃ！　そういうことなら乗ったぜ俺も。
「いいだろう。非童貞の俺を舐めるなよ？」
「……そん、な」
いきなりショックで崩れ落ちるなイッセー。
「い、イッセー先輩大丈夫ですか!?　しっかりしてください！」
「イッセー君。流石にその程度で崩れ落ちているのは駄目だと思うよ？　非童貞何て探せばいくらでもいるというか、たぶん高等部にも何人か入るというか……」
ギャスパーと木場が慰めるけど、ちょっと待った。
ちょっとワルノリして忘れてたけど、そもそも野郎同士で猥談ってお前なぁ。
「っていうか、それを女の子の前でいうか？」
「え？　どこにですか？」
……なぜ君が首を傾げるんだ、ギャスパー。
俺が首を傾げると、ぽんと木場が俺の肩に手を置いた。
その隣では、気遣いという概念を目で表したようなイッセーの慰めの視線が向けられている。
え、なに？

「言い忘れてたね、ギャスパー君は男の子だよ」
「女装趣味と引きこもりを併発した、世にも珍しい段ボールヴァンパイアだ。紙袋被るぜ？」

「はいいいいいいいいいいい!?」

思わず大声を上げるけど、これ悪くないだろ。

「……おいおい、これまずくねえか？」
「ふむ、何がかね？」
「いやだってよぉ、あの白龍皇がルシファーで？　赤龍帝は覇龍対決したって話だぜ？　それも、グレモリーの眷属が」
「そこまで慌てることでもなかろう？　リアス・グレモリーに赤龍帝がいることは、ライザー殿の件で分かり切っていたではないか？」
「いや、そうじゃなくてな？　俺達の理想を叶える時に、障害にならないかって話だよ」
「……その辺りは少しずつ人となりを知ってからになるのではないか？」
「よく言うぜ。お前はたぶん、相容れないと思ってるんじゃないか？」
「さてな。少なくとも、クーデターを起こす気は現状ないのだから問題あるまい。どちらにせよ雌伏の時だと分かってはいるだろう？」
「へいへい。ま、俺は戦術は出来ても戦略や政治は苦手だしな。その

辺りはお前に任せるよ」
「ふっ。政治に関しては、君もできる方だと思うぞ？　我が片腕よ」
「煽てるなよ。お前を見てたらそんな風には思えねえからな」
「そうか、だが面白い展開になりそうだ。おそらく、これから世界は大きく動くぞ？」
「そうなのか？　当分は禍（カオス・ブリゲート）の団ってのと睨み合いになると思ったんだがよぉ？」
「いや、この事態は大きな連鎖を生むだろう。我らがするべきは運命の変転に備えることだよ」

「またしゃれた言い回しするなぁ。我らが大将、フロンズ・フィーニクス殿？」
「マキャベリ（人間）の遺した薫陶だよ。我が片腕、ノア・ベリアルよ」

「……ふん。赤龍帝を迎え入れたうえで和平か。くだらない」
「どうしたのよ●●●●マスター？　和平そのものは別にいいんじゃないの？」
「問題だな。和平で天使や教会、神の子（グリゴリ）を見張る者（グリゴリ）を後ろ盾にすれば

大王派の腐敗した連中と渡り合えると思うだろうさ。自分達を強くしようって発想なんてハナからなかったってことなんだろうよ」
「確かに論外よね。……あれだけの物を作りながら、チェスの真似事で満足するだけのことはあるじゃない」
「全くだ。しかも大王派は大王派で、バアルの無能を利用してどうにかできないかとか考えてるんだろうさ」
「……馬鹿よねぇ。老害共も、バアルの無能も」
「無能で無意味なバアルの恥が。動く前に奴の鼻っ柱を折れねえものかねぇ」
「……で、手を組むの？」
「当然だろ。俺は無能がやるような無意味な真似はしない。こっちを絞りつくすことしか考えない奴にすり寄るぐらいなら、お互いに利用し合うことを最初っから明言し合う方がまだ分かるってもんだろう？」
「ま、貴方ならそう言うと思ったわ。……だからこそ、私はあなたと組むことを選んだもの」
「ああ、同盟者達に連絡を取るとするか。動くタイミングは計らないとな。……ついてこい、ライダー」
「分かってるわよマスター。いえ、冥界に革新をもたらす風雲児、我らがリーダー？」

「ああ。冥界の未来は俺が切り開く。老害共はもちろん、今のままじゃあサーゼクス・ルシファー達無能にだって任せておけないからな。……あの無意味で無能なやり方を、俺が変えてやる」

三勢合一編　幕間　超弩級変態乱舞（第一弾）

Other Side

「……というわけよぉ。流石にちょっとって思うっていうかぁ……」
「どう考えても全責任はアザゼル先生でしょうに。いくらイッセーが今まで覗き魔だからって、冤罪を吹っかけていい理由にはならない……っていうか高校の校舎で通りがかった教え子を実験材料にする、普通？」
「総督が普通ぅ？　……ちょっと疲れてるわねぇ」
「マジレスやめて。で、何をすればいいの？」
「今は先生が眠らせて、記憶の調整を行っているわぁ。ただ神の子（グリゴリ）を見張（ゴリ）る者流だとある程度の整合性を合わせる努力が必要だから―」
「それでイッセーを生贄にねぇ。なら、もっと実態とあっている形に仕立て直しましょうか」
「お願いねぇ。今、和地とヒマリは動かせないから」
「え、なんで？」
「ちょうど同じタイミングで、この近くで星辰奏者がテロを行ってるみたいで……だけど、ねぇ」
「……具体的に何やってるの？」
「実は―」
「―タイムリーすぎでしょう……っ」

イッセーＳｉｄｅ

終わった。……俺達は、困難を乗り越えたんだ……。
ほっとして俺はしゃがみ込んだ。
ああ、本当に疲れたなぁ。
「大丈夫ですか、イッセーさん」
「うん。ありがとうアーシア」
アーシアが駆け寄ってくれるけど、俺はなんていうか涙が止まらない。
いや、本当に泣きたい。
ほんと、ほんとに……。
「なんで俺のドッペルゲンガーを３００人も作った挙句、女子生徒を洋服崩壊（ドレス・ブレイク）で裸にしまくる騒ぎ何て起きたんだよ、畜生……っ！」
「お疲れ様ですイッセー先輩」
「危ない所だった。イッセー君クラスの変態が理性を緩めて３００人だなんて、駒王学園内で終わらなかったら大変なことになるところだった……っ」
同情してくれる小猫ちゃんと、めっちゃ酷いこと言っている木場の反応が全部だと思う。
たまたま近くに至って理由で、アザゼル先生のドッペルゲンガー研究の実験体にされたうえ、それが暴走して生まれた俺のドッペルゲンガー３００人。
俺より更にスケベで理性を吹っ飛んだ状態で生まれたそいつらの所為で、駒王学園中の女子生徒が裸に向かれまくるという悪夢そのものの非常事態。
なんてことだ！　なんてことだ！
桃源郷なのはいい……いや、よくない。
俺はシャルロットに恥じない男でいる為に、覗きを辞めてエロ本も

家で見ることにしているんだ。おかげでどれだけ頭痛や胃痛に悩まされて、時折ひきつけを起こしてきたと思ってるんだ。
それなのに、何とか持ち直してきてシャルロットのマスターとして及第点レベルになった俺の評価が、こんなことで台無しになったらどうしてくれるんだこの野郎。
うん、途中までアザゼル先生のアホな発案とそれに引っかかる俺のドッペルゲンガーに涙を流してたけど、最後の一人が男を見せたことで大事なことを思い出した。
今回悪いのは全部アザゼル先生じゃん。それを思い出して、俺達は全員でアザゼル先生を袋にした。
そして最後のドッペルゲンガーと別れ、漸く俺達はめでたしめでたしに……。

―ドドドドド

……なに、この音。
「そういえばアザゼル。こんな大騒ぎ、どうやって被害者の記憶を誤魔化すつもり？」
「ああ。幸い剥いた奴はイッセーのドッペルゲンガーだからな。イッセーがやったってことで処理した」
リアス部長の質問に、最悪の答えを返してくれやがったよアザゼル先生。
「ふざけんなぁあああああああ！　俺が毎日毎日どれだけ胃を痛めながら覗きを我慢してると思ってるんだぁあああああ！　シャルロットに恥じないように高めてきた、俺の名誉を返せえええええええ!!!!」
「えー。どうせ地に落ちてるんだからいいじゃねえか」
この野郎もっかい殴ってやる!!
俺がそう思った時、屋上に繋がる扉がけ破られた。
……すいません。鉄パイプ持たないでくれませんか？　殺す気じゃん。

「いたわよ！」
「許せないわ、乙女の裸を何だと……っ」
「病院送りじゃすまないわ。一生寝たきりにしてやるんだから！」
……。
あ、俺これ死んだんじゃないか？
「まあまあ待て待て、此処は俺に免じて、死なない程度にボコボコにする程度で勘弁してくれや」
あんたはなんで俺を生贄にしようとするんだ先生！
今回は全部先生が悪いんじゃないか。
それが、それが俺が全部悪いみたいになってるなんて。
ごめんな、シャルロット。ダメなマスターでごめんな。名誉が地に落ちたロクでなしマスターでごめ―
「見つけましたよ、アザゼル先生！」
「乙女の敵！　覚悟しなさい!!」
「「「「「「「あれ？」」」」」」」
全員面食らう非常事態。
あれ？　どうなってる？
なんでアザゼル先生がやったことにされてるんだ？
―ふふふ？　説明するわぁ
あれ？　頭の中にリーネスの声がする。
リーネスの異能か何かかな？
―魔術回路持ちとしての能力をフルスペックで使って、「イッセーが女子を裸に向いた」じゃなくて「アザゼル先生が作った薬がバイオハザードを起こして、集団剥ぎ取り魔が発生した」という方向で修正したわぁ。魔術回路を併用した魔術なら、記憶操作は結構無理がきくのよぉ
と、リーネスが俺たちの頭の中に情報を叩き込んでくる。
と、とりあえずありがとうございます！
これでシャルロットに恥じないマスターでいられたよ！　後眼福ではあったよ！
後で何か奢らないと。等分足を向けて眠れないや。

「な、なんてことを!?　なんてことを!?　お前、上司を何だと思ってるんだこら！」
アザゼル先生はわめくけど、もうどうしようもない。
――だって、今回は全面的に総督が悪いじゃないですかぁ。カズヒも「必要悪でもない冤罪は見過ごせない」って全面的に協力してくれたわぁ。今はお仕置き用に傷がズタボロになる得物がないか探してるところです。
カズヒもなのか。
本当に、ありがとう……っ。
「あいつらぁあああ！　なんで仲いいのかわからねえけど、だからってやっていいことと悪いことがあるだろうが!!」
「……アザゼル先生が言っても説得力がないだろう。そもそもの元凶は先生だぞ？」
「あうううう。マジレスでフォローできないですぅ」
うん。ゼノヴィアとギャスパーの言う通りです、先生。
本当に一回絞められてください、堕天使総督なら鉄パイプで殴られても平気でしょう!!
俺たちは巻き込まれないように先生から距離を取り、女子生徒たちは殺気をまき散らしながら先生を取り囲む。そして先生は逃げ出したいけど、囲まれていてできない状況。
そして一斉にとびかかりそうなその時。
「やめてぇぇぇぇぇ！」
……絹を裂くような絶叫が、それを止める。
振り返れば、そこには涙を浮かべた女子生徒が一人。
「お願い、先生をいじめないで！　先生は……先生は悪くないじゃない！」
「え？　いや……先生が一番悪いでしょ？　無理やり薬を飲まされての犯罪は、情状酌量ぐらいはかけられるべきだって、裁判官のパパが言ってたし」
なんか一部の女子生徒が反論するけど、それだけで全然を終わらない。

「いた！　先生、先生を殴らせたりなんてしないんだから！」
「先生無事ですか!?　大丈夫、私たちが守ります
！」
なんか何人も女子生徒が現れて、先生をかばい始めた。
え、え、えっと……何が起きた!?
先生すら困惑している。いやまあ、当たり前だけどね。
何せ女子生徒の中では、先生は変な薬を生徒達にもって女子生徒をひん剥いた元凶なんだ。そんでもってあながち間違ってない。
怒る理由しかないはずなんだけどなぁ。
俺達がそう思っていたその時だ。
「先生は酷いことなんてしなかった。ううん、逆よ」
「そう、先生は私たちを救ってくれたの。だから起こるなんてもってのほかよ」
「先生がいたからこそ、私たちは大切なことに目覚めたの」
「アザゼル。一般市民を意味もなく洗脳なんて何をやっているの？」
「冤罪だ。ほんとに知らん」
あまりの持ち上げっぷりにリアス部長とアザゼル先生が首を傾げ始めたその時。
「先生は私たちに、人生で最も大切なことを教えてくれたじゃない、そう―」
その言葉を皮切りに、先生をかばう女子生徒たちは―

「「「全裸を見られる悦びを！」」」

―脱いだぶろっふぅ!?
「見ては駄目です変態先輩」

ご、ごめんなさい小猫様。あといつもながら良い拳ですね
っていうかそういう問題じゃない!?
全裸に向かれて露出狂に目覚めたというのか。しかもこんな人数が!?
あ、見れば校庭でも全裸になっている女子生徒がいる。
あ、男子生徒がそれに感化されて自分も脱ぎ始めた!?
「アザゼル先生ぃ？　さっきから駒王学園どころか、外の民家や通りすがりの人まで露出狂に目覚めてるんだけど……何しやがった、コラ」
あ、カズヒがＲＰＧを構えて先生に睨みを利かせてる。
いつの間に現れた。いや、そもそもこんなところでＲＰＧとかやめて。
「さあ吐け、キリキリ吐け、そして詫びろ全世界に。……もしくは死ね」
「待て待て待て待てぇえええええ！　知らん、本っ当に知らん!!
冤罪だぁあああああ!!!」
先生がマジで狼狽してるけど、じゃあなんでこんなことになったんだ!?
―あ、ごめんなさぁい。みんな注目してぇ
と、そこでリーネスから再び念話が。
あの、今緊急事態なんだけど？
―今和地とヒマリを向かわせたプログライズキーテロが、この露出狂覚醒の原因みたいよぉ。
……マジでどういうことぉ!?

和地Ｓｉｄｅ

こ、これは……まずい！
「ど、どうしますの!? というか、警察の方々はもうちょっと頑張ってほしいですのよ!?」
ヒマリも流石にドン引きしているけど、たぶんそれ無理だと思う。
実際、警察の人達が通信機片手に頬を引くつかせてる。
「まずい。警察官（俺達）の中にも変態に覚醒した奴が現れやがった。今全裸になった奴の数が十人を超えた。機動隊にも出てやがる」
「あ、やっぱりかぁ」
俺は思わずぼやいたよ。
今俺達の目の前には、急いで服を脱いですべてを見せつける人達の群れがいた。
少なく見積もっても１００人は超えるだろう。ここだけでもそうなんだから、この辺り一帯を踏まえれば千人ぐらいはいくんじゃないか？
一応増援は呼んだ。呼んだけど……どうしようかコレ。
……そもそも俺達は、プログライズキーや星辰奏者が出張るテロなどにおいて、国家の要請を受けて増援を送っている。
ザイアコーポレーションが対異形戦争を行うための仕込みが原因だからだけど、今回もそうだと思っていた。
思っていたが、敵は想定外の代物を繰り出してきやがった。
「ふっ。皆が裸の喜びを覚えてくれるとは嬉しい限りだ。日本の高温多湿な夏には感謝だな」
そういう下手人らしい裸の女の傍には、装甲車ぐらいのサイズの大型車両があった。
なんかマジで頑丈な装甲に包まれたそれは、今回の事象を引き起こした元凶だ。
「衣服に飲み込まれて裸身を見られる悦びを忘れた者達も、これでそれを思い出すだろう。世界はまた一つ淫乱に包まれるのだ」
寝言であって欲しいことを覚醒率１００％でぶちかました奴さんは、歓喜の表情で両手を広げて天を仰ぐ。

「ああ、教主よ！　教主に宿りし情光の再現、この情機があれば!!　全世界の人々を変態にすることがきっとできる!!」
……何考えてるの？
いや、真剣に聞きたい。頭狂ってないだろうかと本気で聞きたい。
でも聞いたところで正気だと断言されそうだから、とりあえず我慢。
『『『

一方その頃、禍の団の有力派閥である英雄派が保有するトルネード級では、会議が開かれていた。
「……と、これが俺達が警戒するべき、異形達とは別の第三勢力についてだけだ。質問はあるかな？」
「うむ。ではひとつ」
曹操に対して手を上げるのは、九条・幸香・ディアドコイ。
サブリーダーと言ってもいい彼女に注目が集まるなら、幸香は真剣に首を傾げていた。
「本っ当に、奴らは異形達と何の縁も関りもないというのか？」
その質問はある意味で他の者達の総意だろう。幸香自身もかなり念を入れて確認している。
議題に上がった勢力は、既に数十万を超える構成員を保有している大組織だ。しかもこの急成長を人間社会は察知することができず、星辰体やプログライズキーの運用技術を手にするだけでなく、独自に生産体制の確立や技術研究まで行っている。
何より、神の子を見張る者やザイアコーポレーションとは全く別の切り口により、人工的な神器の開発に成功したという事実。これは見逃すことはできないだろう。
それが、全体の一％未満に神器保有者がいるというだけの、異形と縁がない組織などということは信じられないというほかない。
故に幸香の確認は、異形というものを理解している英雄派からすれば当たり前と言わざるを得ない。
得ないが―
「信じられないことに本っ当なんだ。俺はもちろん、定例会議に参加した派閥の長たち全員が面食らっていたよ」
―曹操はそう、苦笑いを浮かべていた。そして念を入れて宣言までしている。
それが逆に真実であるということを強調しており、全員が軽く頬を引きつらせている。
「信じられないけどそうなんだ。……最も、その組織がここまで強大化したのには理由がある」

そう告げると、曹操は己が手に持つ得物を見せる。
黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）。神滅具（ロンギヌス）の始まりにして、いまだ最強と称される最初の神滅具。
その担い手であり、また曹操孟徳の末裔でもあり、更にそれに恥じない技量を持ち、そして「人間がどこまで行けるか」を目指すがゆえに、英雄派の正規構成員達から強い信頼を受ける男。
その彼が、自分の槍を見つめながら苦笑いを浮かべるその光景に、正規構成員達はこれがただ事ではないということを痛感する。
「……どうも、彼らの教祖は神滅具を宿してしまったらしい。そして神器についての予備知識を持つものが一人もおらず、しかし天才と称せるレベルの頭脳を持つ者たちが多数いたことでその組織は此処まで肥大化してしまったようだ」
奇跡というほかない偶然のつるべ打ちだろう。
本来、神器を持つということはそれだけで珍しいケースなのだ。人類全体から見て一割にも満たない稀少例の中で、更に候補含めても30もないだろう神滅具を引き当てる。それどころか、かのヴァーリ・ルシファーや曹操のような極めて異例ともいえるケースに匹敵する、教祖と言われる類の人物に宿ってしまったこと。これだけでも異例といってもいい。
そこに神器についての知識を得ていない者たち、その中から天才といわれるような者たちが近くにいたことも最悪だろう。
とどめにサウザンドディストラクションによって「力があれば世界に立ち向かえる」ものに飛来する恩恵をも、そのまま使うのではなく研究解析模造発展を行う始末。
間違いなく、将来的にこの組織が大規模組織になることは確定である。
確定なのだが―
「……現状の禍の団（俺達）の方針は、「異形と同時に敵に回すメリットがないから、異形側が確実に阻止できるやり方で足止めに利用する以外での人間社会を直接対象とする大規模作戦行動は禁止する」で統一されている。これに関しては「人類を大量に間引く」を目的とする疾風殺戮・

ｃｏｍも同意してくれているわけだ。言いたいことは分かるな？」
「なるほどな。むしろあいつらを加えれば、人間社会に対する積極的加害活動を続行されるばかりか、同様の手法を異形にも取られて余計な敵が増えるということになるのじゃな？」
――曹操の言いたいことを理解して、幸香は彼らに手を出さないのが最適解だということを理解した。
それで皆も納得してくれたと理解して、曹操は肩をすくめながら話をまとめる。
「と、言うわけだ。俺達禍の団の当面の方針としては、彼ら大欲城教団には接触禁止。勝手に暴れさせて勝手に三大勢力達が深読みして無駄足を踏んでくれることを期待しよう」

一方その頃、日本のとある山中。
その地下に広大な空間があった。
平方キロメートル単位はある広大な面積の地下空洞は、恐ろしいことにそれだけで数万人の生活を完全に成立させることが可能だった。
田んぼがある。畑がある。牧場がある、魚の養殖場がある。これにより食生活は困らない。
病院がある。図書館がある。学校がある。これにより、生活基盤がしっかりと機能していた。
更に照明が存在するだけでなく、屋外の様子を映し出すモニターによって疑似的に昼夜を再現している。加えて植物が生育しているだけでなく人工的に光合成を行い設備があり、完全にこの地下空間で生活サイクルが完成している。とどめに地殻変動や龍脈を利用して電力を確保している為、必要なエネルギーすら自力で賄えている。
しかしこの地下空間は、現世とは全く異なる在り方をしていた。
というより―
「さぁ！　今日はわんこＳ○Ｘの最高記録更新だー！　男×女部門も

女×男部門も、男×男部門も女×女部門も、最高記録更新に成功です！　緊急で追加スタッフを募集してるぜー！」
「マジか。女×女部門はまだ一週間前だけど、全部門が一斉に更新何て異例だぜ？　どうする、いくか？」
「当り前じゃない。デートに来てみれば新記録に貢献できるなんて最高だわ」
―デートに来た男女が、平然どころか喜んで別々に他の相手とまぐわうことを喜んで語り合え―
『本日の春画批評は、アメリカ合衆国の月刊誌特集です。世界唯一の超大国である事実そのものは決して揺らがぬアメリカですが、性風俗でも超大国足りえるのか、厳しい目で批評が成されることになりでしょう』
「ままー。僕もいつかひひょうかになりたーい」
「あらあら。難しい言葉に惹かれる年ごろなのねぇ。どう思う、あなた？」
「いいんじゃないか。じゃ、今日はアメリカのエロ本を読み聞かせてやるか」
―街頭テレビでエロ本の批評番組が流れ、触発された子供の将来を願って両親がエロ本の読み聞かせを決定し―
「ねえねえ。今日はどこの風俗行くー？」
「どうしよっか。あ、そういえば牧場近くで獣○体験コースが試験的にやるって言ってたし、そっち行ってみる？」
「えー？　流石に体験コースで女の子三人を同時に相手してくれるとは思えないけどさー」
―女子三人が、三人一緒に風俗を愉しもうとする会話をしながら、平然と歩きながらアイスを食べる―
控えめに言って異常としか言いようがない、ある意味異世界というべき空間が広がっていた。
そしてその異常極まりない地下空間の中心部には、城がそびえ立っている。
四方を両性具有の美人が模られた像で囲んだ、地下空間故に高さこ

そ低めに設定された城。
　その中心部。いわゆる謁見の間において何人もの豪奢な飾りをあしらった男女が集まっていた。
「教祖様。技術部が開発した情機のテストを兼ねた布教活動は成功と言ってもいいでしょう。新たな信徒を端数を切り捨てで三万人確保することができました」
「うち八名はそれぞれ所属国の軍高官。そのうち五名が陸軍で三名が空軍です。海軍の高官を確保できなかったのは残念ですが、軍高官を八人も参加に迎え入れられたのは僥倖でしょう」
「ただ、日本（この国）の関東地区を担当した部隊が壊滅しました。それと詳しい情報はまだ分かりませんが、何故か駒王町という場所の駒王学園高等部の生徒達から賛同者が他と比例して異常というレベルで増えております」
「試験的運用故にランダム設定で露出狂を選びましたが、どうも謎の薬物散布で女子が裸に向かれる事態が頻発していた模様。結果として現段階の技術では目覚めさせられない潜在レベルの露出趣味を覚醒させることが出来たようです」
　真剣に気が狂っていることを発現する者達が跪く先、そこには一人の人間がいた。
　外見は十代半ばと思われる少女。だが、少女というのは困難と言えるだろう。
　全裸に装身具をつけているがゆえに分かる、男であるとしても立派というような一物が、両性具有という存在を体現している。
　そして恐るべきことに、今この謁見の場にいる者は全員がそうだった。
「……ご苦労だった、皆の衆。今回の実働班には一流の娼婦や男娼を送ってやってほしい。最功労者には我らと同じく情徒となる権利を与えるべきだろう」
「ははっ。……しかし、今回の一件で国連も警戒することでしょう。己の変態性を封じざるを得ない変態達に、希望の光を見せる意義はありましたが、それでも大規模作戦は機をうかがわなければなりませ

ん」
　その言葉に、教祖と呼ばれた者は鷹揚に頷き、そして立ち上がった。
「しかし、我にこの情光が宿った事こそ、天の時が満ちたということだろう。雌伏した二十年の時がこの桃源郷を成した以上、今こそ我らが色欲をもって立つ時だ」
　その眼には強い決意があった。
　自分と同じ待遇の物を守りたい。そんな強い決意を持つ、間違いなく人の上に立てる者の輝きがあった。
　そして―
「―とはいえ、淫乱足れぬ時間を増やすのも考え物であろう。今宵はまず、色事にふけようではないか」
『『『『『『『『『『『『『……はい！』』』

力となるのに貢献した聖遺物に由来する神滅具の一つ、現世聖域の墓標（カテドラル・グレイブ）が原因で、色欲まっしぐらとしか言えないテロ組織が肥大化してしまったなど。

大欲城教団を名乗る大組織が、時に三大勢力は愚か禍の団すら困惑させる大いなる事件を引き起こすことになるなど、まだ誰も分からない。分かってたまるか。

神器（セイクリッド・ギア）という名称どころか、神器という概念すら理解できていないセックスカルト教団が、世界を何度も引っ掻き回すことを悟っている者は、残酷なことに一人もいない。

いるわけないだろ

第一章　なかがき

この作品の始まりですが、やっぱりエクスカリバー編を最初にもっていくのが一番いいと思う今日この頃。

ハイスクールD×Dの戦闘能力インフレは、コカビエルで一気に上がります。ついでに言うと、戦いそのものもヴァーリの介入で何とかなっている形です。

つまり、オリジナル要素をぶち込むに当たって戦力追加の冗長性が大いにあるといったところですね。戦力を盛る土壌が大いにある。

ディアボロス編では所詮レイナーレは中級堕天使。ライザーも若手のホープとはいえ上級悪魔だし、追加で言うならレーティングゲームと決闘なので、オリ主を介入させるのが中々困難。個人的に一巻丸ごとレーティングゲームなライオンハート編も鬼門と思ってますが、この二巻も手を入れにくいところがあると思っております。

逆にエクスカリバー編は、戦力面ではさっきも言った通り。更に三大勢力の者達が一堂に会する形でもある為、オリ主のポジションが悪魔より出なくでも入れやすい点も利点と思っております。ぶっちゃけ、ここから書けばある程度の手練れを入れてもカバーがたやすいのはマジサイコー。

そして初っ端から光キメてるカズヒの説教ですが、まぁ個人的に「厳しいけど頓珍漢でもない」塩梅にしているつもりです。

色々と言われたりこれを理由にボコられることも多いゼノヴィアとイリナですが、彼女達の視点から見れば「仮にも聖女と呼ばれた存在が、信仰を捨てきれてないのに悪魔の下僕になっている」という、割とイラっと来る状況でもあります。個人的にも問題のある行動とは思ってますが、それはあくまで「不干渉を求めておきながら、自分達の方から悪魔側に手を出している」点が問題であり、リアス達の側によらない視点で見れば、彼女達なりの筋や正義はきちんと通っていますしね。

なのでそれらも踏まえて、大いに説教をかますキャラクターとなっております。
あえて途中までしか読んでない方を前提に語れば、彼女は「正義の為に泥を被れる女」といった形です。極めて特殊な来歴を持つが故、この時点では自己還元をほぼ求めてない危ないところもありますからね。

そしてそれを吹っ飛ばして登場する、本作主人公たる九成和地。
自分の作品は基本的に、主人公の癖が強い。その基本パターンをぶち壊した、裏を返すとこの時点だと特徴が薄いキャラクターです。
ただし、主人公の基本設計はこの時点で既に終わっております。その根幹こそ「瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻め」「嘆きで流れた涙の意味を、笑顔に変える」という真骨頂。
極端すぎるこの作品のザイアが行う（無自覚）偏向教育すら乗り越えた、ある意味で完成された精神性を持つ少年です。カズヒＬＯＶＥではしゃいでしまうのがご愛敬で、これは現在進行形で変わってないのが癖の強い部分といえるでしょうか？

そんな両極端な主人公とメインヒロイン。この作品は「逃げ上手の若君」が現時点で大絶賛連載中の、松井先生の作品群を参考にした組み立てにもなっております。
詳しいところは今後のなかがきや本文で明かされますが、この作品は本質的に「カズヒ・シチャースチエ」が核心を担う物語。ある意味で彼女が真なる主人公であり、和地は例えるなら弥子や渚に近しい「狂言回しにしてもう一人の主人公」です。
これはカズヒ関連の内面や来歴が、初手からいきなりぶち込むのを危険視するレベルでヘビーなことに由来します。
自分は作品を核に当たり、一人称視点を多用するので、その辺りを配慮した形ですね。

そんなヘビーな主人公とヒロインの恋物語でもありますが、私はハイスクールD×Dという作品が好きで二次創作をやっております。好きでなければモチベーションが活かせないし、本質的にグレーゾーンな二次創作で、原作側を不快にさせる作品を書くのも本意ではございません。

なので、原作側もなるべく盛ります。特にこの作品、「神様転生によってもたらされたもので、変化した世界」を基本ベクトルにしているので。

そこで異能というより強化施術である、星辰体関連を利用した、原作キャラの強化改造も盛り込みました。まさかミカエルが星辰奏者になるとは、シルヴァリオとD×D両方のファンでも読めなかったでしょう。

もちろん今後も、同様の手法でいくつもの作品要素で強化された敵味方も書いていきます。できるかどうかはともかく、原作キャラも立てられる作品を目指したい。

その一環も、イッセーがサーヴァントマスターとしてシャルロットを召喚したことでしょう。

他の作品を流用した物ですが、イッセーをマスターにすることで、原作主人公であるイッセーに活躍の幅を増やしたかった。あと「ぼくがかんがえたろんぎぬすのばらんすぶれいかー」を出す機会が欲しかった。

あとイッセーがアンチされる最大の要素である「覗き常習犯」をどうにかする要素も欲しかった。ただし、イッセーのおっぱいを求める気持ちは常人では耐えられないレベルなので、反動でひきつけを起こすことで原作にないギャグを持ち込みました♪

そして敵勢力も当たり前に強化。パワーバランスはなるべく取りたい男です。

その一環たる、後継覇王。彼女はある意味で超重要なキャラクターでもあり、厄介な奴筆頭でもあります。

この作品を改めてみてくださる方々が増えたこともあり、そこに薪を齎す為に、こんなことをしてみました♪

今後も思い立ったら書いてみようと思うので、よければ感想・高評価・推薦・捜索掲示板紹介などをしてくれると嬉しいです♪

第二章　魔性変革編

魔性変革編　第一話　引っ越し、いたします！

和地Ｓｉｄｅ

さて、もうすぐ夏休みになる、七月後半のある日のことだ。

俺達ＡＩＭＳ第一部隊は、カズヒ姉さんを伴ってイッセーの家にやってきていた……はずだった。

一種の和平用プロパガンダも兼ねて、三大勢力は和平締結の地であるこの駒王町を代表として、それぞれから代表を派遣するということになっている。

ちなみに発案者は、カズヒ姉さんが所属する教会暗部組織プルガトリオ機関の長官である、クロード・ザルモワーズ。暗部の長官なだけあって、その辺りの駆け引きは得意なようだ。

ただ、現地の担当でもあるリアス・グレモリーことリアス部長は、現ルシファーを輩出したグレモリー本家の次期当主。堕天使側で俺達ＡＩＭＳ第一部隊を直下にして派遣されたのは、自薦して神滅具や聖魔剣の研究もやる気満々のアザゼル総督ことアザゼル先生。この代表二人のネームバリューに匹敵する箔をもった人物を代表に選定する必要から、本格派遣は滞っている。

天使・教会側は暗部出身のカズヒ姉さんは、もちろん箔付けには向いてない。唯一教会側できっかけのコカビエルの暴走に冠書した紫藤イリナも、エクスカリバー使いとはいえその程度。代表にはそれなりの箔が必須な場所だから、たぶん教会の重鎮かガチの上位天使が派遣されることになるだろう。

まあそういうわけで、和平のプロパガンダも兼ねているからこそ、可能な限り全員が仲良く過ごしている必要はある。

必然的に全体の殆どは共同生活を送った方がいいわけだ。

とはいえ、リアス・グレモリー眷属でも対人恐怖症な節があるギャスパーと、それをフォローする形で木場祐斗は今回の兼を辞退。総督に関しては共同生活させると変な実験に巻き込まれそうだから、ＡＩＭ（俺）Ｓ第一（達）部隊全員で拒否して辞退させた。

後それに伴い、現場となるイッセーの家は大改築されるって話だったんだけど……。

「でかいな」

「おっきいですの」

俺とヒマリの感想が全てだろう。

なんで日本での一般的な一軒家が並んでいるところに、こんなでかい豪邸が出来てるんだ？

「……悪魔というのはフリーダムというか豪快というか。よく短期間で下準備を整えましたね」

「全くだぜ！　いやぁ、土地さえ用意できりゃぁ一瞬でこんなでかい家作れるんだから、異形ってのはすげえよなぁ！」

メリードとキュウタがそれぞれの感想を言うけど、本当にそれな。

「……このノリ、ちょっとついていけないところがあるわね。いえ、この大所帯なら家もでかくないといけないけど、土地をどうやって確保したのよ」

「クックス。今日の晩御飯はあなたに任せるから、カズヒの胃に優しいのお願いねぇ？」

「承知しました。では暑いうえに私も慣れない厨房ですから、ざるうどんを主食に和え物で済ませましょうか」

と、カズヒ姉さんが胃痛を覚えてリーネスがクックスにフォローを要請する始末。

いやぁ、異形ってのは時折人間ではない種族だって痛感させてくるなぁ。

でもまあ、まさかこんなことになるとは思ってなかった。

コカビエルの追撃任務を受けた時には、いつ後ろから撃たれるかとかも考えるべきだと思ってたからな。

それがカラオケに行ったり何度も共闘したりして、挙句の果てに共

同生活なんだから、ちょっと驚きだなぁ。
……さて、これからひと夏以上過ごす我が家だ。今のうちに慣れるとしますか！

お、思ってたらいきなり遠くに行くことになりました。
リアス部長が若手悪魔での会合も兼ねて冥界に里帰りすることになって、グレモリー眷属はもちろん、アザゼル総督に連れられる形で俺達も冥界の悪魔領に行くことになった。
もちろんというかなんというか、現状唯一の教会出向組のカズヒ姉さんも巻き込まれることになっているわけだ。
「夏休みに冥界かぁ。……シャルロットのマスターになる前なら、ナンパの為に松田や元浜と海に行ってる時期だよなぁ」
「……イッセーは割と顔立ちも整ってますし、意外と成功率は高そうに思えますけど？」
イッセーのそんな言葉にシャルロットが首を傾げると、その肩に手を置いてカズヒ姉さんが首を横に振った。
「逆よ。ナンパってのは基本的にチャラい連中がひと夏の遊びの為にやる物なの。だから引っかかるのは同じくチャラい女が遊び目的か、世間知らずな女の子が引っかかって道を踏み外すかの二択が主流。ガチの恋愛まで夢見てやってる素人じゃ、煩悩丸出しの顔でやっても引っかけられないわ」
「詳しいですのね、カズヒって」
やけに感心しないでくれヒマリ。
いや、俺もちょっと驚いたけど。なんで日本のチャラいナンパについて、元ソ連の少女ゲリラが知ってんだよ。
「皆様。お菓子としてポテトチップスを揚げましたのでどうぞ。熱いポテトチップスも、冷房の効いた部屋ならば乙なものです」
おお。アツアツのポテトチップス！

手作りだからこそ楽しめる贅沢だ。流石クックス、気が利くぜ！
「お、気が利くじゃねえかクックス！　じゃ、ついでに俺はビールをブフッフォッ!?」
「ダメな大人の典型例を未来ある若者に見せないでくださいませ。ジンジャーエールをお持ちしましたので我慢してください」
そしてアザゼル総督（ダメな大人）がメリードにたしなめられて、ジンジャーエールの缶ボトルを口に突っ込まれてた。
炭酸の不意打ちで悶絶している先生は無視して、俺達はポテトチップスを食べながら話を進める。
「そういえば会合ってことは、貴族の中でもエリートな人が結構出てくるんだろ？　……ぶっちゃけ、リアス部長達みたいな人ばかりじゃなさそうだなぁ。特にプライドが肥大化しすぎてるやつとか多そう」
「あ～……。そういえば部長の元婚約者だったライザーとか、結構偉そうっていうか嫌味なこと言ってたなぁ」
イッセーが俺のなんとなくな言葉にそう首を捻ると、こっちに来ていた木場が苦笑する。
「まあ、リアス部長は間違いなくリベラル派筆頭だしね。サーゼクス様達現魔王派と対立する大王派とかには、こう……血統至上主義者とかも結構いるかな」
あ、やっぱり。
こりゃ和平に関しても、上手くいかないところも多そうだよなぁ。
「ちなみに、今回の会合は十人の上級悪魔の子息が来られる予定ですわ」
と、朱乃さんがそう告げてくる。
この流れだと、貴族主義者も結構多そうだな。
「現魔王排出家の本家及び、大王バアルと大公アガレスの次期当主が同年代ですのよ。それ以外にも有力な若手悪魔が四人ほど選ばれましたの」
なるほど。結構若手は有望なのかどうなのか。
「……その四人の内、大王派を明言している者が二人、魔王派が一人といったところね。ただ一人だけ、その辺りを明言してない人がいるの

が気になるけどね」
と、リアス部長がそう告げた。
そして、何かを思い出したのか苦笑する。
「ちなみにその四人だけど、レーティングゲームの現トップを輩出したベリアル家の分家から一人。魔王排出家の一つであるグラシャラボラス家の分家から一人。大公アガレス家の分家から一人。あとは会談でもちょっとだけ出てきたフィーニクス家の次期当主ね」
ほほう。
フィーニクス家というと……あ、思い出した。
「確か、大王派の発言力強化に貢献したフェニックス家の分家だったかしらぁ？」
「そうよリーネス。聖杯戦争の研究を行った結果、悪魔の受精と着床を歩進する儀式を行うことに成功したフィーニクス家。特に次期当主のフロンズ・フィーニクスはそれを応用発展して、簡易版を作り出すことに成功したの」
なるほど。出生率の上昇に貢献ってのは、かなりでかい評価ポイントだな。
「これにより、地脈や時期などの調整もあって大王派の有力な家柄しか持てなかった儀礼場も、簡易的な物なら大王派の家なら誰でも一つは保有できるようになったわ。しかもそれで得た利益の半分を育児手当として冥界の下級中級の家に与えるようにしたことで、今の冥界は前代未聞のベビーブームになっているの」
それマジですか、リアス部長。
そりゃもう一種の英雄だな、オイ。
「血統主義や純血優遇を好む大王派からすれば、彼のもたらした恩恵は救国の英雄とかそういうレベルだわ。更にそれに驕らず分家として節度ある対応をしているから、更に上役の覚えもいいのよ」
「それはまた、今後のリアス部長の政敵になりそうねぇ」
リーネスが同情心を見せて、ぽんぽんとリアス部長の肩を叩く。
うっへぇ。そんなのと会うとかまた疲れそうだなぁ、リアス部長。
頑張ってくださいな……というほかないんだよなぁ、コレ。

「でも部長、俺達はその時特訓するんですよね？　どんなことするんですか？」
「その辺は俺に任せとけ。これでも神器研究の第一人者だし、その過程で色々と人に教えるのには慣れてる。……将来にきちんと繋がるトレーニングを用意してやるから安心しろ」
　イッセーに対してアザゼル総督が胸を張るけど、俺達ＡＩＭＳ第一部隊は警戒心すら見せる。
「気を付けてねぇ。ノリで変な実験とかするからぁ」
「鉄球とかぶつけますの。根性論ですわ」
「……効果のあるトレーニングもきっちるやるけど、趣味人が多い組織だから、変なものは徹底的に変だからなぁ」
　リーネス、ヒマリ、俺の順番でその辺をはっきり告げると、グレモリー眷属全員が十センチぐらい引いた。
「お前ら酷いな！」
　自業自得です総督。
　まあ、それはそれとして気分を切り替えた方がいいだろうか。
　俺がそんなことを思ってると、カズヒ姉さんが片手を上げる。
「それはそれとして、暗部とはいえ信徒が冥界に行くってのは、和平が結ばれたからとはいえなんだかなぁってなるわね。……冥界で天に祈ったらどうなるのかしら？」
　どうやら話を変えてくれるらしい。
　ありがとう姉さん。
「ふむ、天の国に住まう為に一生懸命頑張っておきながら、天の国どころか地獄の住人になるとはね。主よ、これも試練でしょうか？」
「し、死んだつもりでいかせていただきます！　ライザーさんの時はお留守番でしたので、頑張ります！」
　信徒組は落ち着こうか。意味が分からん。
「あぅうう。リアス部長のご実家は、使用人の人も多いから怖いですぅ」
「あらあらぁ。トラウマは時間をかけた方がいいけれど、少しはきちんとできないと眷属として駄目よぉ？」

ギャスパーがそんなことを言いながら段ボールに引きこもり、それをポンポンとリーネスがあやすように叩いている。
確か、実家では神器とハーフが原因で迫害されて、追放されてからも神器が原因で怖がられてたことが原因だったっけか。
まあ、そりゃ精神的にきついとは思うが、大変だなぁ。
でも女装癖を拗らせた理由が分からない。むしろ注目を浴びない努力とかした方がいいんじゃないか？
俺が首を傾げていると、シャルロットが指を口元に挙げて首を傾げていた。
「でも、本当に私達もお邪魔していいんですか？　私達は眷属ではありませんよ？」
「構わないわよ。貴女達はもう私達の仲間だもの。一緒に来てくれないとその方が悲しいわ」
「……そうね。それに私達が共同生活をする理由が理由だし、一緒に行動できるなら常に行動するべきよね」
リアス部長とカズヒ姉さんがそう頷いて、場の雰囲気も明るくなっていく。
……ああ。確かにこういうのはいいよな。
悲しみで生まれた涙を、喜びで流させてやりたい。涙の意味を変えるという信念は、決して消えたことなんてありはしない。
だけどまあ、その為に俺が人身御供になったら、きっとそれはそれで悲しいことではあるんだろう。少なくとも、リーネスやヒマリは絶対気にするし、カズヒ姉さんやイッセー達も気にするだろう。
だからまあ、日常を投げ捨てるのは間違いだな。
息抜きはした方が長期的には効率もいい。それぐらいはしっかりきっかりと分かってるとも。
だから、この時間を楽しむことは忘れない。その上で、涙の意味を変えるという俺の誓いも忘れない。
そしてこの時間を守る為にも、涙の意味を変える為にも。
―脳裏によぎるのは、九条の猛威。
それをいずれ越えると決意し、俺は夏休みの特訓をなんとなく楽し

みにしていた。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、冥界では一人の少年が多くの悪魔を前に一礼をしていた。
少年を椅子に座ってみる悪魔達は、全員が大王派の有力悪魔だ。元七十二柱の本家現当主はもちろん、分家の中でも有力な者達が集まっている。
そして事務的な内容を適度に短く適度に詳しく語った少年は、その後皆を見渡して声を張り上げた。
「……と、ここまで語った通りの状況故、第一回盆式聖杯戦争の開催準備は完了しました。あとは万が一の抑え役となる実力者を派遣すれば、順次行えます」
そう告げる少年に対して、大王派の重鎮達は満足そうな表情を浮かべていた。
「これが問題なく成功すれば、我々は和平によって気の合う後ろ盾を得た現魔王達に反撃を喰らうこともないだろう」
「全くですな。和平そのものは好都合ですが、それで有利に進んできた政争の流れがひっくり返されるのは不都合です」
「派遣する者達は仏教圏での活動経験がある者から選別しましょう。こと宗教的行事を利用している以上、何か問題があれば須弥山や五代宗家が黙っていないでしょうからね」
そう次々に話し合う者達をそれとなく観察しながら、少年は油断なく不意の質問が来ないように気を配る。

この盆式聖杯戦争が成功すれば、それによって大王派閥には絶大な利権が入ってくる。
冥界と術式的に龍脈を繋げた、盆の風習がある土地に縁のある者達に四割。この大王派の有力者達に五割ほどリソースが降られるが、残りの一割を奏どりできるというのは実に魅力的だ。
万が一失敗してもそれはそれ。致命傷にならないことはまず間違いない為、むしろ有意義なデータが手に入る程度で済むだろう。それだけの同時多発的に起こす特殊形式の聖杯戦争といっていいのかも分からないこの儀式は、それゆえに新しいデータが多数入ってくることも期待できる。
後はそれらのリソースを、農地としての価値を高めたり龍脈の強化に回すなど、即座に強化に直結しないがゆえに警戒されにくい地盤固めに多用すれば、十分すぎるリソースが入ってくる。
「……一つ、いいだろうか？」
―その時、しっかりとした老練を体現する声が届いた。
誰もが一瞬沈黙する。少年も態度を崩さず、しかし僅かに気を張った上でその声の主に向き直る。
最も高い位置に座る、老人としか言えない姿の一人の悪魔。
この大王派の真の主と言ってもいい、彼らにとって最も価値がある悪魔と言ってもいい大いなる存在。その名をゼクラム・バアル。
初代大王バアルである彼を前にして、少年も油断をしないよう真剣に心がける。
老練な彼はこの場で最も油断ができない。変なことを言えば今までの苦労が全て水の泡になり、自身の権利がごっそり奪われることもある。
そのリスクをしっかりをわきまえ、少年は尋ねる。
「……何か不備がありましたか？　未熟をさらして申し訳ありませんが、ご指摘いただければありがたく思います」
「いや、資料を見る限り不備はない。我々真なる悪魔にとって、問題はない」
そう前置きをし、しかしゼクラムは尋ねる。

「だが、召喚されるサーヴァントは、人間としての自我もしっかりと持っているのだろう？　いかにサーヴァントが現世の知識を持っているとはいえ、作法は人間界、それも召喚された者達が生きていてた当時の文化に合わせる必要があるだろう。……その辺りの準備はできているかね？」
「……ご慧眼、恐れ入ります」
だからこそ油断できないと、少年は内心で苦笑する。
彼は古い悪魔の代表格だ。老害と言っても過言ではないその性質は、由緒正しい上級悪魔の血族以外は悪魔ではないと断じている。
同時に彼は老練で老獪だ。この大王派がここまで魔王派と渡り合ってきたのは、彼の手腕が大きく作用している。変化を求めないながらも、必要な変化があることを見極め上手く立ち回れる傑物だ。だからこそ、少年の家が提案した大王派の在り方としては少々議論の余地がある提案も了承してくれたのだ。
その彼が、悪魔の流儀や作法で押し通せるとしなかった。その辺りの機微には素直に感服している。
「ご安心を。触媒に関しては可能な限り現地の国の者が呼ばれるように仕込んでおります。また現地の歴史・文化・民族学者を雇い、一か所につき最低１０パターンのもてなし方を用意しました。……万が一の迎撃部隊が動く可能性は一厘でも多いかと」
「ふむ。流石はフィーニクス家の若き才児だ。若いだけでなく深慮遠謀もできるようで、何よりだな」
そう満足げにゼクラムは頷き、真っ直ぐに少年を見据える。
裏の裏まで見透かしそうなその視線を、少年は真っ向から受け止めた。
沈黙は数秒。それを持って、武力ではどうしよもない戦いは何とかしのがれる。
「では、盆式聖杯戦争の始動を許可しよう。成功することを祈っているぞ、フロンズ・フィーニクスよ」
「ははぁ！　冥界の、悪魔の、ひいては大王派の栄光の為、精進させていただきます」

ゼクラムの探りを慎重かつ大胆にかいくぐり、フロンズ・フィーニクスはその老練の眼力に敬意を込めて一礼した。

彼こそが、のちにD×Dと呼ばれる対テロ部隊と並び称されることになる、大王派を主体とする大規模異形組織の長となる男、フロンズ・フィーニクスという才児であった。

魔性変革編　第二話　やって来ました悪魔領！

和地Ｓｉｄｅ

実をいうと、俺はあまり列車に乗ったことが無い。
親を失う前は乗ったことがあるかもしれないけど、かなり昔のことなんでよく覚えてない。その後はザイアコーポレーションの孤児院や秘匿施設にいたわけだから、外出の機会がまず少ない。とどめに神の子（グリゴリ）を見張る者（グリゴリ）という組織にいれば、転移とかの恩恵をよく受けるから、移動の際に列車を使用する必要性が薄くなる。
なのでまあ、列車というものに幼子みたいな好奇心があった。
あったけど―
「……世界を渡る列車とか、悪魔だから当然だけどファンタジーまっしぐらだな、おい」
「そうね。信徒としては地獄に行く為の列車だから、なんというか複雑だわ」
―姉さんと一緒に苦笑いする感じで、俺達は今グレモリー家が所有する専用の列車で冥界のグレモリー領に向かっている。
「列車は走るよどこまでもですのー！」
後すいませんがヒマリさん。あんた俺と同じぐらいなんだから、はしゃぐにしても人目を気にしてくださいな。
などと思いながら、俺はとりあえずガイドブックに目を通す。
なり立ての転生悪魔用ガイドブックには、冥界の都市でのグルメスポットなどが載っていた。
グレモリー領についてから何日かたったら、部長達グレモリー眷属は若手悪魔の会合だからな。
「しっかしまあ、堕天使側で冥界に行ったことはあるけど悪魔ルートで行くことになるなんて思ってもなかったっていうか」

「同感ね。私に至っては信徒だし、真で地獄に落ちる以外で地獄に行くことなんて思ってもいなかったわ」
感慨深いというかなんというか。俺はカズヒ姉さんと一緒にそう漏らし、そして外をちょっと見る。
次元の狭間を越え、紫色に輝く冥界の空を見ながら、俺達はそんな感じで時間を過ごす。
「あらあら。イッセー君を独り占めしては駄目ですわよ？」
「朱乃……ぉ！　私のイッセーと私の家に行くのに、なんで私が蚊帳の外にされないといけないのよ！」
「あぅ。朱乃さんも部長さんも、イッセーさんを変態にしないでください！」
「ふ、ふへ、おっぱいいっぱい……ぁあ、でもあまりのめりこんだらシャルロットに……ふへうえはぁ」
「部長達、イッセーの表情が何やら奇妙なことになってるんだが大丈夫なのか？　あと大丈夫なら私にも譲ってくれ。肩車で良いから」
……前の席で繰り広げられている光景は意識して無視している。
人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られてなんとやら。あまりにもあれだと思わない限りは、不用意な深入りをあえてするのもあれだしな。
とはいえ、ちょっと気になることが無いでもない。
「そういえば、カズヒ姉さん」
「あら、何かしら？」
カズヒ姉さんにちょっと聞きたいことがあった。
「信徒（カズヒ姉さん）的に、あのハーレムはツッコミ入れなくていいのか？」
「あら、もしかして和地はハーレムに興味があるの？」
あれ、もしかして藪蛇？
いや、年頃の男であり貞操観念がザイアの所為でちょっと壊れ気味な俺としては、興味がないと言えば嘘になる。
そりゃ俺だって性欲は豊富だ。可愛い女の子や美人なお姉さんに囲まれてちやほやされたいと思う願望はちょっとぐらいある。性欲過多な青少年なら、過半数が一度は思い描くだろう。

だけど俺はカズヒ姉さんを悲しませる気はない。仮にも信仰の為に必要悪すら背負う正義の味方なカズヒ姉さんと付き合うに至って、それがＯＫだと思えるほど馬鹿じゃない。
「カズヒ姉さんを悲しませる気はない。ちょっとうらやむけどその為に本末転倒なことをする気はないから安心してくれ！」
なので、本音をしっかりと示しつつ、しかし断言する。
うん。あえて本音を取り苦労のもあれだ。正直に言った方がいいだろう。
で、返答は如何に。怒らないでくれると嬉しい。
「心配しないでいいわ。実際に付き合うかどうかはともかく……むしろそれぐらいのノリの方が付き合っていいと思うから」
そうか。安心した。
……ん？
俺は、自分の耳が不調になったのかと思ってちょっと真剣に首を傾げる。
うん、これはあれだな。
「木場、この列車に耳かきなかったっけ？」
「いや、僕の耳にもしっかり聞こえたから。聞き間違いでも何でもなく、カズヒさんはハーレムに肯定的な発言をしてたよ」
マジか。
「あのぉ。カズヒ先輩はそれでいいんですか？」
「むしろ逆ね。私は今のところ彼氏を作る気ないけど、もし作るなら必須条件よ。より具体的には「来る者拒まず去る者作らず」を地で行く懐広く愛多い男がいいわ」
ギャスパーに聞かれて語るカズヒ姉さんの発言には、なんというか熱が篭っていた。
なんか凄い真剣に凄いこと言ってるんですが、どういう状況だこれ。
俺はできるだけ一途に頑張る発言をしたわけで、普通その返答として「むしろハーレム作ってから出直してこい」なノリが返されるとか予想できるか。

いや、俺確かに堕天使側ですよ？　欲望には甘いというか緩いというかそんなところがあるのは分かりますよ？
でもあんた、一目惚れした女に「むしろ私と付き合うならハーレム作れ」とか言われたら微妙ですよ？
俺もう返答できないです。
「……ふぅ。お手洗いも豪華でちょっと緊張しました……あの、日本でいう「鳩が豆鉄砲を食ったような」を体現したその顔は何ですか、九成さん」
すまないシャルロット。俺は今、声を出せない微妙な感覚なんだ。

そんなこんなで冥界についたけど、グレモリー城にはまだついてない。
何せ俺達はアザゼル先生の直轄部隊として再編されてるわけだ。必然的にアザゼル先生が動く時は付いていく必要性がある。
しかも最悪なことに、リーネス達は諸事情あって堕天使側に行っているので、俺とヒマリは総督の護衛として動くことが確定しているわけだ。
で、そんなわけで俺とヒマリは総督が向かった会議で護衛役として派遣された。
まあその辺は意外と緩い三大勢力……というかトップが強いから護衛の必要性が人間界より緩い異形社会。護衛は会議室の外で待機して、適当に暇な時間を過ごしていたりするわけだ。
わけなんだけどさぁ。
「ねえ和地？　正直最近ご無沙汰ですし、そろそろしませんの？」
なんて上目づかいで俺に誘いをかけないでくれないかヒマリさん。
「あのなぁ。一目惚れした女と同居生活すってのに、それ以外の女とエロいことするってのもどうなんだよ」

「私もそう思ってたから我慢してましたけど、カズヒはそういうのに寛容だと分かりましたもの。たまにはいいじゃありませんの」
おのれ、外を見てはしゃいでいたと思ったら、ばっちり話は聞いてやがったか。
っていうか、この倦怠期の夫婦のセックスレスみたいな会話がどうかしてる。
普通そういうのを言うのは男の方だろ？　あとカズヒ姉さんのトンデモ発言がきっかけだから、色々とおかしなことになってるぞオイ。
くっそぉ。恨むぜリーネス達。
クックス達の再調整を本格的に行うからって、一人ぐらいよこしてくれればツッコミ役もいただろうにって感じなんだけどなぁ。
俺がどう反論したらいいか悩んでると、ヒマリのスマホがバイブレーションでメールを知らせた。
それを確認したヒマリは、途端に不満顔から目の色を輝かせる。
「おぉ！　ヒツギってば、仕事で冥界に行くかもしれないって話ですの！　タイミングがあったら応援に行きたいですわ」
ヒツギっていうと、あのデュナミス聖騎士団の緑髪の女の子か。
何故かヒマリとめちゃくちゃ仲良くなったけど、まさか既にメルアド交換してたとはな。
何故かリーネスが微妙な顔をしてたのも印象深い。普段から余裕ある態度が基本な印象だたんだけどなぁ。
でもまあ、会議終了まで後数分だしな。これなら気を取られている隙に終わるだろう。
さて、手土産として買っていた羊羹を確認しておかないとな。
「……失礼。少し聞きたいことがあるのだが、よろしいかね？」
そんな声がかけられたのは、まさにその瞬間だった。
少し警戒しながら視線を向けると、そこにいたのは三人の男女がいた。
一人は二十代後半の外見をした男性。最低限の身なりは整えているが、ホストクラブにいそうなタイプというかなんというか。貴族や

金持ちのボンボンというよりかは、なんというか稼いでいる若い企業主とかフリーランスの雰囲気がある。
一人は二十代前半の外見をした女性。知的な雰囲気を持ちながらも、退廃的な雰囲気を併せ持っている。こっちもこっちで従者とか秘書というよりは……峰不〇子とかそんな感じのトリックスター気質の美女だった。
そんな二人を背後に控えさせた最後の一人。十代後半程度の印象を持つ、金色の髪を持った青年。
金髪少年だと木場を思い出すけど、雰囲気が全く違う。
間違いない。彼は仕える者ではなく従える者。純血の上級悪魔、それもかなり高貴な部類だ。
雰囲気が違う。リアス部長やサーゼクスさんが持つ雰囲気とは違う。
気圧されている。それを俺は自覚して―
「ん？　なんだ九成にヒマリ。っていうかそいつ誰だよ」
―後ろから来たアザゼル先生に目を輝かせるその青年に、ちょっと面食らった。

十分後。
「やはり総督は現代文明にも造詣がありましたか。ええ、私も近年発展した人工光合成は様々な可能性があると思ってましたよ」
「全くだ。人間の科学技術ってのは馬鹿にならねぇ。地球温暖化対策から宇宙開発まで、発展していけば無限の可能性があるってもんだ」
さっきの女性も。
「いやまったく！　酒に女に美食に娯楽！　人間世界の娯楽ってのは最高だ！　しかもほら、俺はこの程度なら片手間で作れるから代金も困らねえってもんでよぉ！」
「ったくだ。こんな実用性も芸術性も抜群のナイフとかそうはねえ。

ほれ、代金代わりにこいつももってけ！」
　さっきの男性も。
「……本当にありがとうございます。対価は用意するといいましたが、まさかいきなりこれだけの資料を用意してくださるとは」
「気にすんな気にすんな。どうせ誠意をもって要請するなら渡すつもりだった技術ばっかだ。貴族様が頭下げて対価までくれるってんなら、ちょっとばかし早く渡したって文句は言われねえよ」
　そして青年も含めて。
　総督と凄く話が盛り上がってる。
　っていうか、どいつもこいつも技術科肌だったらしい。
　先日グレモリー眷属と話してた時に出てきた、フィーニクス家の次期当主さんとその眷属が、さっき近づいてきた三人組の正体だった。
　なんでも連れてきた眷属は双方ともに鍛冶屋と技術者上がりの眷属らしい。技術者上がりの女性は芸術が主体だったとか。
　で、フィーニクス家の若旦那さんは、そんな二人を眷属としてスカウトして、二人に必要な資金や遊ぶ金を提供しているらしい。その対価として成果を提供したり、フィーニクス家が集めた純血悪魔の若者に技術を教えたりしているとか。
　なんでもこの御曹司、人間世界で色々あって業界を追い出された教師とか職人を私費で養う代わりに、純血悪魔の子供達にそれらの技術や教育を行っているそうな。
「知識の習得や職人芸は、魔力や肉体強度のように血統の影響が出やすい物とは異なります。フィーニクス家はこれからの悪魔達を増やしていく以上、彼らが冥界に貢献できる社会にしていくことが責務と思っているのですよ」
　そう朗らかに笑いながら、フィーニクス家のお坊ちゃんは帰って行った。
　……そして俺とヒマリは両手でお土産として買ってもらったものを抱えている。
　お酒におつまみ、ジュースにお菓子。色々買ってもらったけど、消え物だけって当たり外れを引いた時の処分のしやすさとか考えても

らったんだろうか？
「あれが、リアス達の同期にいる大王派の筆頭格か……」
そう呟きながら先生は、代金として提供された資料に目を通している。
ただ、なんというか雰囲気がおかしいというかなんというか。
「どうしましたの？　さっきまですっごく楽しそうでしたのに。なんか急に警戒心満々ですのよ？」
ヒマリの言い方がぴったりだ。
さっきまですごいテンション高かったのに、急に下がってるというか下げているというか。
何より、気分を良くした彼らに買って貰ったお土産のお菓子やらお酒やらで俺達の両手は埋まってるのに。
全方位で話を進めてきておきながらこれってのは、流石にどうなんだよ。
と思っていると、先生は少しだけどマジの警戒心を見せていた。
「確かに話をしていて楽しかったのは本当だな。フィーニクス家の坊主も一定以上の知識はあるし頭の回転も速い。あの二人に至っちゃ間違いなく天才な上に勤勉だ。冥界の技術発展は進むだろうさ」
そう返す先生は、だけど更に続けた。
「だが、奴さんは間違いなくサーゼクス達とは違う思想だ。大王派の老人共よりはまともに見えるが、それ以上にヤバい予感がするんだよ」
その言葉に、俺達は正直首を捻るしかなかった。
大王派だって和平そのものは賛同していた。そりゃ在り方そのものは嫌な貴族とかそんな感じっぽいけど、あの跡取りはそんな風には思えなかったけどなぁ。
……でもまあ、なんだかんだでトップを続けて長い先生が言うんだ。ちょっと気にした方がいいんだろうな。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、これらの技術で出来ることはあるかね？」
「あるとも、なあ？」
「全くだぜ」
　契約者二人の言葉に、青年は満足げに頷く。
「数年単位で少しずつ進めていく予定だった例のプランだけど、これなら４０日もあれば完成するといえるね」
「こっちに関しても、こんだけあれば試作型一本ぐらいは作れるぜ？」
「実にいい。とてもいい。そうでなくてはこれから先の未来を掴めはしないだろう」
「……で？　そんなにばらまいていいのか大将？　いや、俺としては代金が貰えるならどうでもいいんだがよ？」
「私は少し困るかな？　一応、貴方の理想そのものにも賛同しているのだから」
「構わないさ。それに、これは序の口に過ぎないよ」

「これから進む和平に便乗し、我々は数多くの勢力と交流を持つつもりだ。同士をヘッドハンティングされるリスクを背負う代わりに、それ以上に同志たり得る者達を確保する。……この程度のリスクすら乗り越えられないようでは、我が理想を叶えることなど不可能なのだからね」

魔性変革編　第三話　遍く苦難を祝福ととらえ、その身を苛むことを恐れぬ者。

和地Ｓｉｄｅ

俺達は今、冥界の大都市で観光している。

人間界の都市みたいなのは、悪魔が人間界の優れた技術を取り込んだりしているから。だけど同時に冥界の文化が技術があるから、何となく違うところがあるのが興味を惹かれる。

そんなところのカフェで、俺達はちょっと小休止していた。

「……いい香りね、豆から挽いたコーヒーなんて久しぶりに飲んだわ」

「豆から挽いてるだけじゃないわぁ。これ、人間界なら高級品レベルの豆を使ってるわねぇ」

「ふぉおおおおお！　ショートケーキ美味しいですのぉおおおおお！」

「……おのれ総督、一人だけ酒飲みに行きやがって覚えてろ」

ぶっちゃけて言おう。

肩身が狭い！

カフェはカフェでも、どっちかというと女性向けのカフェなのが運の尽き。

女性比率が多すぎる所為で、正直かなり肩身が狭い。

いや、マジで助けてください。肩身が狭い。

っていうか先生はこれ読んでたな？　逃げたというより、俺をからかう感じであえて離れた感じだな？

おのれぇ。マジでおのれぇ……っ。

コーヒーが美味しいお店だったけど、別に俺は紅茶でもいいからあまり関係がない。あと貴族様向けだった所為で、がっつり食べれるタイプのメニューじゃないのもちょっと残念。

ああ、早くイッセー達の会合終わらないかなぁ。

そう思った時、俺のスマートフォンに電話が入った。

あ、どうやら終わったらしい。

これで合流できる！　やった！
俺は即座に取り出して、電話に出る。
「イッセーか終わったか合流か？」
『……なんで早口なんだよ？　うん、まあ終わったから連絡したんだけど……さ？』
なんだ？
なんというか、歯切れが悪い。
カズヒ姉さん達もそれに気づいたのか、ちょっとこっちに注意が向けられてる。
「ひと悶着でもあったのかしら？」
「そうねぇ。異形社会ってなんというか、リベラルと保守派で二極化されてるところがあるもの」
「それ、中間が目立ってないだけじゃありませんの？」
なんて話し合ってるのはとりあえず置いておいて、俺はイッセーに話を深く聞きたいところだった。
「……いったい何があった？」
『……あ、部長が帰ってから話した方がいいってさ。たぶん、割と長くなるからそっちの方がいいと俺も思う』
なるほどねぇ。
さて、これはお茶請けとかも買っておいた方がいいかもな。

祐斗Ｓｉｄｅ

イッセー君が九成君に電話をする一時間以上前。僕達は会合の為にとあるビルに到着していた。
そして今はエレベーターに乗って、会合を行う前の待合室のある階

に移動している。
「いい？　会合では挑発とかしてくる者もいるでしょうけど、喧嘩を買ったりしては駄目よ？」
そう部長が前置きする必要があるぐらいには、悪魔といってもピンキリが存在する。
悪魔は基本的に貴族社会だ。レーティングゲームの採用などで昇格という形で貴族になることもできるけど、それでも旧来の貴族は数多い。
元七十二柱や番外の悪魔などの上級悪魔の一族は、生まれて自然に成長するだけで上級悪魔クラスの力をほぼ確実に獲得する。その為純血悪魔において血統主義や運びりやすい環境だ。
その所為で、昇格制度の適用は魔王様達が望むほど進んでいないのが実情だ。特に純血悪魔の血統に拘る者が多い大王派が、ここ十数年で発言力を増していることもある。
かつてリアス部長の婚約者だったライザー氏は、イッセー君を馬鹿にした態度をとっていたことを思い出す。それでも彼に忠告を残している彼は、悪魔全体でいえばまだ他種族に対する理解は深い方だろう。
はっきり言って、間違いなく血統主義で僕達他種族の眷属悪魔を見下す者はいるだろう。
いざという時は慣れてないイッセー君やゼノヴィアをなだめないといけないかな。アーシアさんは気質が大人しいから、まあ大丈夫だろう。
そう思いながらエレベーターを出ると、そこには逞しい体格をした男性がいた。
……彼は僕達グレモリー眷属の古参とも縁がある。イッセー君達にとっても良い出会いになる人だ。
そして彼に気づいたリアス部長も、朗らか表情になった。
「サイラオーグ！　もう来ていたのね？」
「……おお。リアスじゃないか」
そう和やかな雰囲気で部長と挨拶を交わすのは、リアス部長の親戚

ともいえる人物だ。
「紹介するわ。彼はサイラオーグ・バアル。バアル本家の次期当主で、私の従兄弟よ」
そう、彼はバアル家の次期当主。
そしてある意味、最も過酷な反省を歩んでいるバアル家の悪魔でもある。
何より少し目で見るだけで分かる。
無駄のない動き、鍛えられた体つき。そして朗らかではあるけど常態で隙が見受けられない意識。
間違いなく、彼は一流の戦士だ。おそらく戦闘技術という点ならばヴァーリ・ルシファーにも引けを取らない。それどころか、基礎体力ならば超えるだろう。
「……そういえば、赤龍帝の兵藤一誠だったか。お前とは直接話をする機会があればいいと思っていたよ」
「え、なんですか？　俺……何かしましたっけ？」
イッセー君が話を振られて困惑している。
まあ、イッセー君からすれば初対面だからね。いきなり話を振られて困惑することもあるだろう。
二天龍の片割れを宿すというのなら、注目するものも数多いだろうけどね。
イッセー君はその辺り、一般市民だったからちょっと自覚が薄い。また二天龍が強大でも必ずしも宿主が生きて強大な存在になっているばかりでもない。だからライザー氏には当初舐められていたし、そこもあるかもしれない。
「あの婚約の場には俺も招待されていたのでな。いやぁ、ライザー・フェニックス殿との戦いは素晴らしかった。疑似的な禁手だけではなく、強い意志があったからこその勝利だと思っている」
「え、あ、そうですか？」
イッセー君も少し戸惑ったり照れてたりしているね。
まあ仕方がないか。イッセー君、なんだかんだで初対面の上級悪魔からは評価が低いところあったからね。

グレイフィアさんも最初は評価が低めだったから無理もない。一応グレイフィアさんもライザー氏も、その後は評価を改めてはいるけれどもだ。
事実上の初対面から評価が高いというのは、イッセー君としては新鮮なところもあるだろう。
だけど少し気になるね。
サイラオーグさんは次期大王。今回の会合にも参加する立場だ。
なんで待合室じゃなくて、こんなところにいるんだろう。
「そういえば、何故サイラオーグはこんなところにいるの？　待合室の方が便利じゃないかしら？」
リアス部長もそれに気づいて質問すると、サイラオーグさんは眉間にしわを寄せてため息をついた。
「下らん小競り合いに巻き込まれたくなかっただけだ。最初はアスタロトや、次期当主でない選別者が来ていたんだが、そのあとアガレスとグラシャラボラスがやり合い始めてな」
……嫌な予感がする。
アガレスはともかくグラシャラボラスは、ちょっと不吉なことが起きていたからね。
「やり合う？　戦闘でも起きたのか？」
「怖いこと言うなよゼノヴィア。いくら何でもこんなところで戦闘とか……ないって」
ゼノヴィアにイッセー君がツッコミを入れるけど、後半から弱弱しい。
うん、前の方から殺気が漏れているところもあるからね。気になる気持ちはよく分かる。
そう思った瞬間、盛大な轟音が響き渡った。
「……だから開始前の会合なんて必要ないと進言したんだ」
ため息をつきながらサイラオーグさんが歩き出す。僕達もそれについていくと、轟音は更に何度も響き渡った。
そしてその音の現場は、テーブルなどの調度品が盛大に破壊されている。

そしていくつかの集団がそれを遠巻きに眺めている。……一人羨ましそうな視線を向けている人もいる。
おそらく、アスタロトを含めた今回の上級悪魔とその眷属だろう。
そしてそのうちの一組。こっちの近くにいた金髪の上級悪魔がサイラオーグさんに気付いて軽く微笑んだ。
「……ふむ、戻ってきたかね？」
「……ああ、面倒だが止める奴がいるだろう？」
サイラオーグさんは近くにいた上級悪魔にそう言いながら、半目を彼に向ける。
「というより、外に出るわけでもないなら止めたらどうなんだ？　こんなところで暴れているのは醜聞だろうに」
それに応えるのは、最初にサイラオーグさんに声を掛けた方ではなかった。
同じように眷属を連れた上級悪魔。灰色の髪をした青年は、何を言っているのか分からないと言いたげに首を傾げている。
「別に俺達の醜聞じゃないからいいだろ？　それに、このままいけば隠し玉の一つぐらい見れそうだしなぁ」
そう面白そうに言いながら、その悪魔は視線を睨み合いの現場に向ける。
破壊の中央部。そこで二組の上級悪魔とその眷属が睨み合っていた。
……流石はリアス部長と並び立てる若手悪魔達の一角だ。オーラが中々剣呑だね。
禍の団のサイボーグ部隊を敵に回しても立ち回れそうな者達だらけ。中には聖魔剣（今）の僕でも勝ち目の薄い相手も数人はいる。
「あぅ、何がどうなってるんですかぁ？」
ギャスパー君が殺気に押されて引いている中、もはや双方がいつ殺し合いを始めてもおかしくないほどの敵意を向け合っている。
片方は次期当主が多いこの場に相応しい、貴族らしい恰好をした主を中心とする眷属悪魔の集団。もう片方は見るからに狂暴という文字を見せつけている集団だった。

「ゼファードル、こんなところで戦いを始めても仕方がないのではなくて？　そんなに馬鹿なら、理由さえ説明すれば殺してしまっても問題ないのではないかしら？」
　そう言い放つのは眼鏡をかけた美少女の悪魔。何度かリアス部長の付き合いであった事のある、アガレス本家次期当主のシーグヴァイラ・アガレス様だろう。
「言ってろよクソアマ！　俺様が一発仕込んで野郎ってのにぎゃあぎゃあぎゃあぎゃあ、そんなに男を寄せ付けずに処女のままがいいってかぁ？　その処女くっせのがかなわねえから開通して野郎っていうのによぉ!?」
　そう返すのは、全身にタトゥーを入れ、上半身も裸の上に特攻服を纏った青年だ。
　おそらくグラシャラボラス本家の次期当主代理だろう。
　というか、これは何というか……。
「……貴族？」
「これはいわゆるうつけものという類だろうか？」
　こういうのに慣れてないだろう、アーシアさんやゼノヴィアが首を傾げている。
　僕を含めた他の眷属達も、正直軽く呆れているというか引いているというか。
　そしてその様子に気づいてサイラオーグさんが肩をすくめた。
「ここはあくまで待機場所だったんだがな。軽い挨拶をする程度の場所にも拘らずこれだ。近い将来のライバルであり、かつ血の気も多い奴が多いのだからそうなってもおかしくないだろうに。……これを良しとする旧家や上級の古い悪魔には困ったものだ。……付き合いたくはないが見てられん」
　そう言いながら、サイラオーグさんは歩き出す。
「え、危ないですよ―」
「―大丈夫よ」
　止めようとしたイッセー君を、リアス部長が制止する。
「イッセーに皆も。サイラオーグを……彼をよく見て起きなさい」

そう前置きするリアス部長の視線の先、サイラオーグさんは拳を鳴らしながら二人の上級悪魔に宣言する。
「アガレスの姫シーグヴァイラ、グラシャラボラスの凶児ゼファードル。いきなりだが最後通牒だ――――次の言動次第では俺が即座に鎮圧する」
その言葉と共に放たれるのは、絶大というほかないプレッシャー。
まるでコカビエルと対峙した時を思わせる寒気を感じる中、リアス部長は不敵な笑みを浮かべながら断言する。
「彼こそこの会合において最強の上級悪魔。それどころか若手悪魔ナンバーワンよ」
その言葉に合わせるように、ゼファードル・グラシャラボラスが青筋を立てて拳を構える。
「ざけんじゃねえぞ、バアルの無能が――」
そう言いながら殴り掛かろうとするゼファードルの言葉は遮られる。
その瞬間に鳴り響く轟音。そして部屋全体を揺らす衝撃派。
それを成したのはサイラオーグさんの拳であり、そして叩き込まれたのは一人の女性……あれ？
「「……は？」」
目の前で奇妙な光景を見ることになり、現場の三名の上級悪魔があっけにとられる。
ちなみに周りを見ると、一人分抜けた眷属悪魔達以外は全員が、程度はともかく面食らっている。その眷属悪魔達は苦笑いや呆れの表情を浮かべていた。
……ああ、あそこの主が動いたんだなぁ。
そう思っていると、割って入って拳を受けた少女がプルプルと震え出す。
「あぁ？　おいイシロ、本家の次期当主代理さまを守るたぁ見所あるが、そこじゃ俺が無能を殴れねえだろうが。どけよ」
そう我に返ったゼファードルが声をかけた次の瞬間、彼はそのイシロと呼ばれた少女に殴り飛ばされた。

「この愚か者ぉおおおおおおおお！」
『『『

に至った被虐趣味の宣言だった。
「……あ、あれが、次期当主以外でこの会合にいる唯一の魔王派筆頭……イシロ・グラシャラボラス……？」
「……え？　部長、今なんて言いました？」
　唖然となるリアス部長の気持ちも、それを思わず訪ねるイッセー君の気持ちも分かる。
　信じたくないよね。僕も信じたくないよ。
　だけど、真実だ。
「イッセー君、彼女はイシロ・グラシャラボラスさん。グラシャラボラス分家の若手でありながら、現役のプロプレイヤー相手にレーティングゲームでストレート勝ちを三度も行った傑物だよ」
「……ちなみに、冥界の領地や人間界の担当区域の孤児院に私費で多大な寄付をしてることで有名」
「更に難民キャンプに運営資金だけでなく各種物資も送っていることで有名ですわ」
「後、冥界の医療団体にも資金援助をしてることで有名ですぅ」
　と、僕達グレモリー眷属の古参メンバーはよく知っているので話すしかない。
　……イッセー君を筆頭に、アーシアさんとゼノヴィアといった新参側のメンバーが二度見してるけど、本当なんだ。
　いやほんと、冥界でも屈指の弱者救済活動を行っている人で有名なんだよね。
　自分達の生活で贅沢をあまりしないことでも有名で、自分達が済む城は家柄の各どころか、貴族として末席レベルの人達レベルでも低い規模。食生活や衣服においても、礼服といった時期でもない限りはちょっと裕福な一般家庭レベルでとどめている。これも、貴族としての箔を最低限は残しておかないと足を引っ張られるとかそんな程度のようだ。
　そしてプロのプレイヤーを模擬的なレーティングゲームで幾度となく破る実力は本物。勝率は六割だけれど、プロリーグで活動している上級悪魔が多数いる中でこれは有数だ。

多分単純な眷属の総合戦闘能力なら、三番目ぐらいに位置するはずだ。
……それがこれかぁ。
そして僕達の視線の先では、いまだにイシロとゼファードルの二人のグラシャラボラスが睨み合っていた。
全く持って想定外の方向で対峙する二人の上級悪魔を、双方の眷属がそれとなく止める。
「主殿主殿。これ以上関わっても変なストレスが溜まるだけですぜ？　帰りましょうや」
「ハイハイ我らがグラシャラボラス殿？　趣味は大事だけどこんなところで吐露して本家の次期当主代理殿と揉めないでくださいねー」
そんな風に引っ張られ双方が下がる中、サイラオーグさんは気を取り直してシーグヴァイラ様に視線を向ける。
「……君も少し化粧を直してこい。先の怒りは抜けたようだが、行事を滞りなく進める為にも落ち着いた方がいいぞ？」
「え、ええ。……そうですね」
そんな何とも言えない空気の中、イッセー君が僕にちらりと視線を向けた。
「上級悪魔って……変人多いの？」
「あれは特例の部類だから気にしない方がいいよ？」
僕はそう言うほかない状況だった。
「あ、兵藤じゃねえか……どういう状況？」
「ごきげんよう、リアス。それで何があったのですか？」
そしてシトリー家の方々も到着したけど、これをどう説明すればいいんだろうか？

魔性変革編　第四話　荒れる会合（前編）

あまりにもあんまりな性癖暴露による横やりの所為で、挨拶を交わす時間を捻出できていない。
誰もが微妙な空気を見せているから、話し合いをする雰囲気でないからだ。
「……というか、ゼファードルって本家の次期当主じゃなかったはずだけれど。どうなっているのかしら？」
部長がそうぽつりと呟いた時、それに応える人がいた。
「ああ、どうも本家の次期当主が事故死してしまったようなのだよ。それでイシロとゼファードルが代理の候補となって……イシロが辞退してゼファードルが代理に任命されたというわけだ」
そう返答したのは、金髪の上級悪魔の方だった。
そしてそれに続くように、灰色の上級悪魔も肩をすくめる。
「ついでに言うと、グラシャラボラス家は最初からゼファードルの方を推してたっていうから、実力で劣ってる不良を優遇とか何事だよって思ってたがな。……確かにあの性癖とそれに対する忠実っぷりなら、最上級悪魔候補であろうと本家の当主代理にゃ向いてねえ」
まるでツーカーのように話を繋げた二人に、リアス部長は苦笑を浮かべる。
「その本家次期当主に並び立てる立場のあなた達も大概でしょう？フロンズ・フィーニクスとノア・ベリアル……でよかったかしら？」
そう返され、二人は静かに頷いた。
そうか、彼らがフロンズ・フィーニクスとノア・ベリアルか。
現悪魔の政争において、大王派を有利に持ち上げた立役者であるフィーニクス家の次期当主。そしてそのフロンズの親友でもあり、自身も最上級悪魔入りがほぼ確実と言われるノア・ベリアル。
これは、中々有望な者達のようだ。
「……そういえば、魔王様を輩出した家の次期当主と、サイラオーグさ

んたちバアルやアガレスの次期当主が参加してるんだよな？　あとはあのイシロって人とこの二人で……最後の人は誰なんだろう？」
　そうイッセー君が疑問の視線を向けるのは、二組のまだ会話を交わしていない上級悪魔とその眷属。
　片方はフードを被っている眷属達を従えている、細めの少年。
　片方は多数の学者風の眷属を従え、傍には鎧やプロテクターに身を包んで臨戦態勢ともいえる者を使えさせる、鋭い目つきの少年。
　確かに、彼ら二人は絶叫こそしていたけど沈黙を守っていたね。
　そんな疑問符に気づいたのか、フロンズ氏が目で双方を示しながら口を開いた。
「あちらのフードを集めた者達が、現ベルゼブブを輩出したアスタロト家の次期当主、ディオドラ・アスタロト殿だよ」
「ついでに言うと、残った奴が若手悪魔ナンバー2と名高い、ヴィール・アガレスとその眷属だぜ、赤龍帝くん」
　そう続けたノア氏は、そして呆れたように肩をすくめる。
「ヴィール・アガレスは強いぜ？　見ての通り眷属の殆どは科学や魔法の研究者で、戦闘要員は三人だけ。にも関わらず自分を含めた四人だけで、実家の当主とレーティングゲームをして完全勝利（パーフェクトゲーム）を成し遂げたんだからな」
「……つまり、たった四人でそれ以外のメンバーを庇いながら、当主とその眷属を打倒したということか？　それは強いな」
　ゼノヴィアが感心するのも納得だ。
　仮にも当主となれば、能力は習熟しているしレーティングゲームの経験も相応にあるはずだからね。にもかかわらず圧倒的な勝利を刻み込むのは、生中な手合いではできることじゃない。
　それを成し遂げた彼は、間違いなく圧倒的強者だろう。
　ノア氏はイッセー君を見ながら、同時に顎でヴィール氏の眷属を一人示す。
「ついでにいうと、眷属の一人は神滅具級の新種神器を持ってるそうだぜ？　そっちとしちゃぁ要警戒だな、赤龍帝？」
「え、マジですか!?　うっわぁ、俺以外にも転生悪魔で神滅具持ちって

いるんだ……」
　そんな風にイッセー君が感心している中、ソーナ会長は軽い溜息をついた。
「少なくともあなた達も大概でしょう？　筆頭眷属以外は常にトレードで入れ替えて起きながら、それでもこの場に参列できるだけの成果を上げているのですから」
　その通りだと思う。
　彼ら二人の特徴は、常にトレードを積極的に行っていることだ。
　トレード。上級悪魔達が眷属悪魔や未使用の駒を文字通りトレードする内容だ。
　上級悪魔次第でそれを積極的に多用するか否かなどに違いはあるけど、彼らほど積極的にトレードを行う上級悪魔もそうはいない。
　特にノア・ベリアルは女王及び婚約者の僧侶二駒以外を半年以内に総交換することで有名だ。フロンズ・フィーニクスも僧侶と騎士はひと月未満で積極的に交換している。
　それでありながら、模擬戦としてレーティングゲームを積極的に行って、高い勝率を誇っている。だからこその、本家次期当主を主体とするこの会合への出席許可だ。
　その事実に対して、二人はさほど自慢げでも何でもない。
「ま、気にしないでくれや。俺としちゃぁ、気心の知れた奴ばっかり動かし慣れるより、いろんな奴らを動かす経験を積んでおきたいんだよ」
「私も似たようなものだ。なにより、数千数百の年月を生きる悪魔の長い人生で、配下や客将を早い段階で完成させるのはどうかと思っているのでね」
　そうさらりと答える二人だけど、そこにリアス部長とソーナ会長は、警戒するように目を細めた。
「……客将ねぇ」
「大王派らしいものいいと言っておきましょうか」
　その態度に、ノア氏は不敵な笑みを浮かべる。
「あながち間違っちゃいねえだろ？　悪魔の駒を使って眷属にしたと

ころで、そいつは元々は悪魔じゃねえ。俺としちゃぁ区別や線引きはしっかりするべきだと思うぜぇ、マジで」
その言葉に、フロンズ氏も応用に頷いた。
「君達の眷属には悪いが、私も同意見だ。なにより悪魔の発展は正しき悪魔の更盛あってこそ。正しき悪魔と交わった第二世代以降はともかく、駒によって疑似的に悪魔となった第一世代の他種族に、最上級悪魔の椅子を容易く与えすぎであるとは思っているとも」
その言いように、彼らはやはり大王派であることをひしひしと感じる。
血統主義、貴族主義なところがある大王派の悪魔達は、転生悪魔に対して思うところがある者が多い。
血統としては傍流に値するフィーニクス家を厚遇しているのも、出生率の向上という形で純血悪魔の発展に多大な貢献を果たしたことが大きな理由だろう。
そんな少しピリピリとし始めた空気を和らげるかのように、フロンズ氏はしかし微笑を返す。
「安心したまえ。食客には食客に相応しい待遇を与えるのも貴族の務め。私は上級以上の昇格試験を本来の悪魔ではないまがい物に与える気はないが、生活を切り詰めない範囲で厚遇はするとも。権益も中級悪魔と同様の者は与えたいと思っているのでね」
その言葉に対して、フロンズ氏の後ろにいた二人の男女がうんうんと頷いている。
「全くだ！　第一貴族だの上級だのなんて堅っ苦ししいだろぉ？　中級程度で大金もらって遊べる方が、よっぽど気楽で楽しいぜ！」
「まさしくその通り。なにより私は主の直属として、ある意味においては並みの上級以上の権限を彼から与えられているからね。それ以上をパトロンに求める気はないのさ」
その返答に、僕達はあえて何も言わない。
後ろの二人が他種族由来であることは分かったし、何より二人が納得して満足もしているのなら何かを言っても無駄だろう。
フロンズ氏達のスタンスを知った上で、現魔王派より彼を支持する

のなら仕方ない。意外には思うけれど、今此処で空気を悪くするわけにもいかない。
何よりも―
「……皆様、大変長らくお待たせいたしました。主様達がお待ちでございます」
―ここからが、ある意味で本番だからね。

そして通された会合の間。イメージとしては大学の講義室の一種といえる大きな部屋に、僕達は通された。
一番上の檀上にはサーゼクス様達現四大魔王様が座られ、そのすぐ下には今代の大王バアル家などの有力な元七十二柱本家。更に有力な家の当主や高官が並んで座っていた。
そしてその前に僕達は通され、リアス部長達それぞれの王(キング)が前に出る。
そして僕達を前にして、上役の方たちがこちらを眺めて頷いた。
「今日はよく集まってくれた。次世代を担う貴殿らの顔を改めて確認することが、この会合の目的だ。三大勢力で結ばれた和平は他の神話にも向けられており、貴殿らの代でレーティングゲームは他勢力の参加も考えられる、注目されるだろう世代になることもあってな」
確かに、レーティングゲームに注目している他の勢力は要るだろう。アザゼル先生も試合の映像などを入手していると聞いている。
今後和平が結ばれれば、間違いなく天使や教会、神の子を見張る者からもレーティングゲーム参加が成されることはあるだろう。
となると、カズヒや九成君達とレーティングゲームで試合をすることになるかもしれないのか。
そんなことを思っている間に、上役の方々の一人が髭をなでながら皮肉気な表情を浮かべている。
「まあ、早速やってくれたようだ。それもまた一興だがね」

皮肉気ながら言っているが、どうやらゼファードルとシーグヴァイラ様のやり取りは望むところなようだ。
そしてそんな人達の言葉の後に、サーゼクス様が僕達を見渡してくれる。
「それはともかくとして、今回選ばれた君達十人は、家柄実力ともに申し分ないか、家柄を補えるほどに優秀さを示した、次世代の代表だ。ぜひ切磋琢磨し経験を積んでほしいと思っている」
「その経験とは、いずれ我々も『禍の団』との戦に投入されるということでしょうか？」
そのお言葉に対して、サイラオーグさんがそう尋ねた。
それに対して、サーゼクス様は静かに首を横に振る。
「確かに経験になるだろうし、その可能性もあるだろう。しかし可能ならば避けたいと私は考えている」
その言葉に、サイラオーグさんは一から見えないけれど不満げな様子なようだ。
「何故です？　若いとはいえ我らもまた、悪魔の上に立ち守る責務を持った上級悪魔です。この年になるまで先人の方々からご厚意を受け、それでも何もしないなどというのは良心に反します」
「勇気は認めるが、それは無謀だ。なにより成長途中の君達を戦場で失うなど、冥界にとって大きな損失でもある。君達は君達自身が想像する以上に尊い宝であり、段階を踏んだ成長をしていってほしいのだよ」
サイラオーグさんに真っ直ぐにそう答えながら、サーゼクス様は更に続ける。
「何よりも、今は和平によって出来た繋がりを重要視したいというのが今の冥界の見解だ。既に各神話にも和平の打診は行っているし、その暁には全勢力で禍の団と対峙することになるだろう。君達にはその後、平和な世界で新たな形のレーティングゲームを盛り上げてほしいのだ」
そう諭すように告げるサーゼクス様。
サーゼクス様はリアス部長に負けず劣らず試合を持っている。そ

してその慈愛は悪魔全体だけでなく、きっと広い世界に向けられているのだろう。
　ましてサーゼクス様達は禍の団との戦いで、大きな苦戦を強いられた経験がある。
　３６機という数で攻めたとはいえ、現魔王であるご自身や並び立てる力量のアザゼル先生にミカエルさんが苦戦したのだ。敵がヴァーリ・ルシファーの白龍皇の力を生かすために用意した結界を逆利用しなければ、此処に生きて立つこともできなかったかもしれないと痛感もしているはず。
　そう考えれば、サイラオーグさんの意思は蛮勇のそれにも近い。
「……分かりました」
　強い意志で告げられたと理解して、サイラオーグさんは納得はできてないようだけれど食い下がる。
　―そのタイミングで、フロンズ・フィーニクス氏が一歩前に出た。
「お言葉ですがルシファー様。そのお考えは甘すぎると意見させていただきます」
　―しかも、あまりにも不敬と言えるようなことを即座に言い放った。
　誰もが一瞬沈黙し、硬直すると言ってもいいその発言。更に言い切った直後に、彼の頬を魔力の弾丸がかすめた。
　それを放ったのは比較的下段にいる、分家の当主。魔王派に属している最上級悪魔だ。
「……無礼者！　魔王様の慈愛を甘いとは、不敬であるぞ！」
　次の攻撃すら即座に放てるだろう状態で言い放つ上役に対して、しかしフロンズ氏は真っ直ぐに目を合わせて向き合った。
　頬から流れる血を気にも留めず、一切臆することなくその上役に向き直る。
「お言葉ですが、主が愚行を犯す前に厳罰を受ける覚悟を持ってでも諫めることこそ、身分をわきまえた者の行動と具申します。主を妄信して道を踏み外した行軍に喜んでついてくることこそ、無能の証ではありませんか？」

「き……さ……ま……っ」
怒りで顔が真っ赤になる上役の方だが、その近くにいた上級悪魔が苦笑しながらその肩に手を置いてなだめ始めた。
「構わないではないか。そこまでの覚悟があるのなら、意見を聞く程度はしていいのでは？」
そう落ち着いた言葉で諭す彼に、離れたところにいた上役が鋭い視線を投げかける。
「そうはいかんぞ。我ら大王派の若手が蒙昧なことをすれば、偉大なるバアルの名にすら傷がつきかねんではないか！」
「落ち着きたまえ。まずは魔王様の意見を聞こうではないか。罰を下すかどうかはそこからでも遅くはあるまい」
「その通りだ。罰するにしろ認めるにしろ、判断材料が少ないだろう？」
と、魔王派大王派の区別なく、方々から声が飛んだ。
それに対して魔王様達が困り顔になった時、魔王様達のすぐ下の檀にいる現大王が、鋭い視線でフロンズ氏を見据える。
「……偉大なるルシファーを襲名した者に苦言を呈したのだ。覚悟と説明はあるのだろうな？」
「無論でございます。聞いたうえで死罪に等しいとおおっしゃるならば—」
その言葉と同時に、フロンズは一振りの短剣を取り出すと、逆手に持ち切っ先を己の首に向ける。
「—死ねを命じくださいませ。この場で命を絶って見せましょう」
その態度に、殆どの者達が息を呑む。
そして、誰もがちらりと視線をサーゼクス様に向ける。
これはまずいね。サーゼクス様の性格では死ぬことを命ずることはないだろうけど、どうあがいても話を聞かないわけにはいかなくなっただろう。
「……まずは、そう思う理由を説明してくれたまえ」
ため息交じりに告げたサーゼクス様の言葉に、フロンズ氏は会釈を返す。

「では申し上げます。……そもそも和平のきっかけは戦争を望む堕天使コカビエルの暴走に在りますが、彼は所詮堕天使側の戦争継続派、その一角にすぎません」
確かにそうだ。
神の子を見張る者の首脳陣で戦争継続派がコカビエルだけだったというだけで、僕達が関わった堕天使の中にも、悪魔を見下す堕天使は何人もいた。
カズヒも和平締結後に言っていたけど、教会でも和平を機に離反する者が何人もいるという。
そういう意味では、この悪魔―それも戦争継続派だった旧魔王末裔を追放したこちら側―にも、将来的には戦争を再開する腹積もりだったものがいてもおかしくない。
「和平の必要性は本来必須であり、会談という好機を逃さず和平を結んだのは英断でしょう。しかし知的生命体とは賢者だけでなく愚者も数多く、更にその比率は曖昧と言わざるをえません。この和平がきっかけで現政権に対する不満を強める者も数多いでしょう。また、和平の話を他神話にまで広めれば更に増え、同様の者が他神話からも出てくるでしょう」
そう言ってから、フロンズ氏は一呼吸を置いた。
そしてその上で、ため息をつきながら首を横に振る。
「これだけなら散発的なテロが起きる程度で済むとは思いますが、間の悪いことに禍の団が宣戦布告をしてしまいました。首魁がオーフィスという現魔王様が束になっても勝てないだろう規格外の存在であることを踏まえれば、現政権(我ら)に対する不満を晴らす為に、禍の団に繋がる者が多数出てくるでしょう」
「それは否定しない。だからこそ、若い者達が危険にさらされないようにしたいというのが私の願いだ」
サーゼクス様がそう反論するけど、フロンズ氏は首を横に振った。
「いえ、むしろ逆にございます」
そう言い切ってから、フロンズ氏は上役達を見渡しながら告げる。
「三大勢力の和平という歴史の変動といえるこの事態、それが静まる

の待つのならまだやりようはございましょう。ですがこれを機に各神話とも和平を結ぶのであれば、魔王様の判断は愚策でございます」
そうはっきりと断言する。
フロンズ・フィーニクスは、この場において豪胆とも狂気ともとれる意思を持って、真正面からサーゼクス様達の方針を否定していた。
そして、彼の発言はまだ続く。
「今後和平の輪が加速度的に広まるほど、それに不満を持つ者も増えましょう。三大勢力内で止まるのならば抑えられるものもいましょうが、他の神話や妖怪魔物と広げれば、不満は更に急速に溜まり、ガス抜きが追い付かずに暴発するでしょう。そしてそのガスの抜ける場所として、最強の存在（オーフィス）が率いる禍の団という存在はあまりに甘美な桃源郷と言えます」
そして真っ向から、フロンズ氏はサーゼクス様達を見据えた。
いや、これはもう苦言とか諌めるとか言うレベルではない。
「双方が双方を高め合う、運命の変転といえるであろう歴史の転換期がこの時期です。そんな時期に先ほどのような腑抜けきった油断まみれな対応をされるなど――――魔王様方（あなた）は我らフィーニクス家の尽力で増えた純血悪魔達をどぶに捨てるおつもりか？」
糾弾と言っても過言ではない。
殆どの者が息を呑む中、フロンズ氏は睨みつける一歩手前の険しい目で、サーゼクス様達を見据えていた。
「どれだけ悪魔の肉体になろうと、他種族からの転生悪魔は本質的にまがい物の他種族です。食客や客将として厚遇することと、それで水増しして悪魔が増えたということは別の話。転生悪魔が純血と混じり合って生まれた二代目や、もとから混血として生まれた者を否定する意図は私にはありません……が、我らフィーニクス家が真に悪魔の血を引いた者達を増やす為に尽力した結果を、悪魔の王たる魔王様がむざむざ捨てるような決断を下すなど看過できませぬ」
「……そのつもりはない。私は転生悪魔も純血悪魔も同じように慈しみたいと思っているが、だからこそ純血悪魔の新しい世代を軽んじるつもりもない」

サーゼクス様はそう答えるけど、フロンズ氏はその視線を崩さない。
「ならば今後に備え、厳しくも先を乗り越えられる政策をとっていただきたい」
「逆に問うが、ならば代案はあるのかね？」
そう鋭い視線を向けるフロンズ氏に、ため息交じりの声が飛んだ。
それを放ったのは一人の上役。大王派を明言している上役の一人だ。
「貴殿の主張には筋が通っているが、しかし真に尊ばれるべき貴種たる悪魔を無策で死なせるわけにもいくまい？　具体的かつ実現性を証明できる代案を提示するのは、魔王様の意向に反する際の最低限の礼儀であろう？」
たしなめるようなそのお言葉に、フロンズ氏は不敵な笑みを浮かべる。
「無論ございます。この件につきましては、サーゼクス様の迂闊な発言がなければ、まず大王派での会合で提案する内容でした」
そう告げ、そしてフロンズ氏は笑みと共に告げる。
「私としてもいきなり過酷な戦場に送り込めなどというつもりはありません。まずは下級や中級からも戦力を集められるようにするべきでしょう。義勇兵の募集や予備役制度の確立、及び彼ら急増戦力でも班単位でなら敵を足止めできるような兵装の開発と量産が必須であり、そちらについてはいくつかのプランを並行してある程度の草案は裁量の範囲内で進めております。……他に何か補足する者があれば、上役の方々はもちろんこの場にいる若手の者達にも語ってもらいたいところです」
そう尋ねるフロンズ氏に、隣にいたノア氏が手を上げる。
「……んじゃ、腐れ縁として俺からいいかい？　ツーかそういうのは相談してくれればサポートしたぜ？」
「アドリブゆえすまないね。議題にあげる前には助言をもらうつもりだったのだよ」
友人同士の苦笑いで通じ合い、そいてノア氏が一礼する。

「では、僭越ながら友人の案に補足と修正を。……可能ならば禍の団との戦いが激化しないうちに、禍の団でも他のでもいいので小競り合いレベルに投入させるべきだと思います」
一礼したままでそう前置きし、彼は頭を上げると共に更に続ける。
「その際は通常投入される戦力とは別に投入するべきでしょう。それも露払いや広域警備による撃ち漏らしの対応、残敵掃討といったレベルに収めておくべきかと」
「……なるほどね。ぶっつけ本番で投入するんじゃなくて、戦場の雰囲気を経験させるのが主目的かぁ。有効なのは確かだね」
そう間延びした声で、魔王様の席にいる一人の男性が納得したように頷いた。
彼はファルビウム・アスモデウス様。グラシャラボラス家の本家出身であり、現アスモデウスを襲名している魔王様だ。
常に怠けたいがゆえにその為の努力をしっかりとしてきた方であり、基本的には優秀な眷属が仕事をすべて行っている。しかしその戦闘能力はセラフォルーさまやグレイフィアさんと同格の魔王クラスであり、また戦略において現政権で屈指の能力を誇っている。
その彼が評価をしている以上、この案は一定以上の価値があるのだろう。
「だけど、今の段階で四大魔王(僕達)は主導できないかな。和平を中心に平和主義で動く以上、そのけん引役の僕らが僕らがタカ派の政策をとるのは無理がある」
そう、はっきりとファルビウムは否定する。
ただの感情論ではなく、和平を進める魔王という立場から来た否定だ。それは将来的な政治の領域でもあり、必然的にフロンズ氏の要望を退ける根拠にもなる。
だから無理かと思ったその時―
「……ならば、そちらは大王派(我々)が対応しよう」
―バアル現当主が、そう名乗りを上げた。
サーゼクス様達四大魔王が目を見張る中、バアル家当主は厳かに告げる。

「平和を求めそれを勧める魔王達ができないのならば、それは対立派閥である大王がやるべきだろう。どちらにせよ必要性の高い事業だと分かったのだ。それを切って捨てるというのも、今後の冥界の発展に滞りが生まれかねんしな」
「……なるほど。本来熟考されるべきことだが、確かに必要か」
サーゼクス様の隣に座る、現ベルゼバブのアジュカさまがそう興味深そうに呟く中、だけど魔王様たちは否定をしない。
必要性をきちんと告げられている上、今の現魔王派は発言力が若干劣っている。6対7の比率程度だが、必要性を示されたうえで分業として示されれば困難だろう。
流石は大王派が筆頭とする現大王。これぐらいの政治力は持っているということなのか……っ。
「確かに魔王様では無理でも、大王なら取りえますな」
「万が一何かを言われても、それなりの言い訳は立つということですか」
「今後の冥界の未来を考えれば、確かに必要ですな」
「魔王様の名に傷がつくことはない。こればかりは礼を言いますぞ、大王殿」
僕達が息を呑む中、更に周りの上役達もそれに対して同意を示し始める。
驚くことに大王派だけでなく魔王派すら賛同する意見が出てくる中、現バアルはサイラオーグさんに視線を向ける。
「細かい流れは適宜詰めるが、大王である私が支持する以上、名代は分家のフィーニクスではなく、本家側の者であるべきだろう。まして、戦に臨む覚悟を持つ息子がいるのならば尚更だ」
そこまで言っていったん目を閉じてから、彼はサイラオーグさんを真っ直ぐに見据える。
「サイラオーグ。結成した暁には義勇軍の指揮官としてお前を指名する。自ら禍の団と対峙する覚悟を見せたのだから、否とは言うまいな？」
その言葉に、サイラオーグさんは一瞬だけ沈黙する。

ただし雰囲気や気配でうっすらと気付くことがある。
「……ええ。冥界に貢献できる機会を望んでおきながら、与えられたそれを拒むようなことは致しません」
――――不本意な形にされたことで、内心で強く歯噛みをしているのだろう。
これは、思った以上に荒れそうだ。

魔性変革編　第五話　荒れる会合（後編）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

その後も会談は続いたが、同時のその会話は殆どが上役と魔王達の会話になってしまっていた。
数少ない口を挟めるのは、フロンズ・フィーニクス程度。たまに補足説明でノア・ベリアルが介入できる程度だった。
それはそうだろう。彼自身の発言がきっかけで、この場は会談でありながら現悪魔政権の会議に近づいてしまっている。それに介入するのはそれらの体制を整えていない者達には不可能だ。
裏を返せば、フロンズ・フィーニクスとノア・ベリアルは、既に国政レベルに対して専門的な話ができるだけの能力を持っているということだ。
それらの意味を理解している者達、それも魔王派の何割かが彼らに注目するのも当然だろう。結果として無意識レベルではあるが話を振ってしまい、更なる介入を許してしまう。
それに気づき、同時に会合から乖離しかけていることもあって、サーゼクスはキリのいい所で話を切り替えることにする。
「さて、これ以上大人のつまらない話で若者を退屈させるわけにもいかない。最後に一つ、君達の抱負を尋ねよう」
魔王直々にそんな問いを投げかけられ、若手達は困惑する。
それに対し、緊張を和らげるようにサーゼクスは微笑んだ。
「さほどかしこまることはない。冥界の宝である君達にの、夢や目標を聞きたい程度なんだ」
その言葉に、真っ先に応えるのはサイラオーグ・バアルだった。
「俺の夢は魔王になることです」
即答。そして魔王の前で次の魔王の座を狙うという、挑戦ともいえ

る言葉だった。
　その豪胆さには、既に義勇軍について意識を向けていた上役達も嘆息を漏らす。
「ほぉ。しかし大王家から魔王が出るとなれば前代未聞だろう」
「民が必要があると感じれば、そうなるでしょう」
　若手悪魔ナンバーワンであり大王家の次期当主。そんな彼だからこその説得力がそこにはあった。
　それができる可能性を、この場の若手で最も持っているのは彼だろう。殆どの者がそれを認めていることから、上役達も不用意な発言を一切起こさない。
「……ハッ。身の程をわきまえないとはこのことか」
　―そんなことを言えるのは、その彼と並び立てるだろう猛者のみだ。
　そしてそれを発現するは、若手悪魔ナンバーツーの座に立つヴィール・アガレス。
　これまで発言を殆どしていなかった彼の挑発的な言動に、注目が一斉に集まる。
　サイラオーグは実力をいずれ示すと考えているのか、敵意は向けていない。しかし同時に、殴り飛ばされかけたゼファードルですらしなかった反応に興味を持ったのか、注目の視線は強い。
　その視線を次の発言者として選ばれたと受け取ったのか、ヴィール・アガレスは胸を張って宣言する。
「私はこの場で自分の夢そのものを語るつもりはありません」
　その発言に何人かが怪訝な表情を浮かべるが、ヴィールの発言はそこに止まらない。
「我が夢はその前に立ちはだかる全てをうち滅ぼす決意と準備が整った時にのみ語るもの。その無能のようにいいように利用されるしか能がない愚者の二の轍は踏みません」
　サイラオーグをこの場で無能と断言することに、更に瞠目する者は増える。
　サイラオーグは確かにとある理由から無能と言われるが、同時に実

力でバアル本家の次期当主となった男だ。
それだけの猛者をこの場で堂々と無能と言い切り、その上でヴィールは告げる。
「しいて言うならば、我が望みは富国強兵です」
真っ直ぐ、しかし本心から彼は宣言する。
「今後どれだけの神話と和平を結んでも発言力を保ち、例え和平が崩壊しすべての勢力による大戦が起きようとも、二つの龍神が冥界を敵と認定して全力で襲おうとも。……決して揺らがぬ強き冥界を作る為に、この身命と魂を捧げる覚悟は出来ております」
「……豪胆だな。だが、その理想は叶える為の手段がなければ妄言だぞ？」
そう返す上役に、ヴィールは不敵に微笑んだ。
「とっかかりは見えております。いずれそれを形に出来る時に、理想をすべて開示しましょう」
そう言い切り、ヴィールは一歩下がる。
他に回すという意思が見えるが、多くの上級悪魔は一瞬躊躇する。
新たな魔王となるという、無謀ともいえる願いを宣言したサイラオーグ・バアル。そしてその彼をこの場で無能と言い切り、オーフィスとの全面戦争を乗り越えられる富国強兵化を目指すヴィール。
個人戦闘能力においては頭一つどころか二つは飛びぬけた2トップの壮大な夢に、殆どの者は気圧された。
故に、それに気圧されないのはそんな彼らすらだと応することを望む者。
「私はグレモリー家次期当主として、各ゲームにおいてタイトルを取り続けることを目指します。……いずれ、レーティングゲームの頂点に辿り着くと決意してもしていますわ」
一度レーティング・ゲームで惜しくも敗北したうえで、なおそれだけの決意を示すリアスの言葉もまた、強い説得力を見せる。
いずれという前置き付きで、魔王にすら匹敵する力を持つトップ3をゲームで下すという強い決意。敗北を知ってなおそれを目指す彼女にとって、サイラオーグとヴィールは必ず越えねばならない壁に過

ぎない。
そして各人が己の目標や夢を語り、ソーナ・シトリーの番がくる

ここから、この会談は波乱が連続して起こることになる。

イッセーＳｉｄｅ

……悪魔の上役ってのは、こんなのばかりかよ。
ソーナ会長が語った夢は、素晴らしい夢だと思う。
誰でも通うことができるレーティングゲームの学校。立派な夢だし応援するべきだと思う。
それを馬鹿にして笑う上役の姿に、俺も本気でイラっと来た。
そして、当然シトリー眷属はもっといらってくるはずだ。
だから、匙が食って掛かるように前に出るのは本当だった。
「……アンタらなぁ！　ソーナ会長の夢を―」
俺も正直怒鳴りつけたいと思ってたその瞬間―
「黙らせたまえ」
「了解っと」
―そんな声が聞こえた瞬間、めっちゃすごい音が響いた。
慌てて音のする方向を見れば、そこにはサイラオーグさんが、匙をかばう形でどこか似ている女の人の拳を受け止めてた。
なんてすごい音なんだよ。会合前にサイラオーグさんが放ったパ

ンチ並みの威力があったんじゃないか？
あと女の人はフロンズさんの眷属だ。なんていうか強そうな雰囲気満々だったけど、この音から見て本当に攻撃力がありそうだ。
いやそうじゃない！
「……いきなりだな。当たり所が悪ければ死んでいるような拳だぞ？」
「何言ってんだい。急所を狙ってないのはまるわかりだろ？　何より、お前さんには負けるさね」
お互いににらみ合いながら、力を込めてギリギリと二人は拮抗してる。
て、っていうか……何があった!?
「……やれやれ。全く持って困ったものだ」
そうため息をつきながら、フロンズさんが肩をすくめる。
そして冷たい目で、匙を見た。
「この場は貴族たちの会話であり、眷属悪魔とは主が飼っている猟犬とみなしていい世界だ。その主より上の立場の者の失笑に激高して食って掛かる眷属悪魔など、その場で首をはねられても文句が言えないも同然であり、死なない程度に叩きのめす程度で済まされることこそ感謝するべきことだぞ？」
「な……っ」
匙が気圧される中、フロンズさんはため息をついた。
「下僕の失態は躾を怠った主の失態。最悪本家次期当主の死角無しと解任されるかもしれないというのに、衝動で動くとは愚かしい。……最も、下僕が愚かなように主も愚かだが」
そしてソーナ会長にまで冷たい目を向けてきた。
「全く。そんな無価値な愚行を働くとは情けない。シトリー家次期当主がそのような愚行を働いては、シトリーという血統そのものの品位が落ちるというものだ。本家の者ならばもう少し立ち回りを考えればどうかね？」
「言ってくれますね。匙が礼を失したのは事実ですが、私は私なりに冥界の未来も案じたことを言っているのですが？」

ソーナ会長の反論に、フロンズさんはあきれ果てた目を向けた。
「その結果、理想の遂行に泥を塗ってとん挫しかねないことをするのは馬鹿のやることだ。仮にも本家の次期当主がその体たらくでは、冥界の未来が不安になるではないか？」
すっげえぼろっかすに言ってきやがった……！
「ちょ、ちょっとフロンズちゃん！　ソーナちゃんを馬鹿にするのは―」
「―姉ならば、妹が愚行を働いたのなら叱責なさるのが責務ではないですか？　優しく接することと甘やかすことは違いますぞ？」
まっすぐ目を見て言い返してから、フロンズさんは盛大にため息をついた。
「むしろ我ら尊き血筋にとってこそ素晴らしい恩恵を与える政策だろうに。貴女が泥を塗ってくれたせいで、これから提案する私にまで余計な類が及ぶことなってしまったのだから、文句の一つも言うというものだろう」
……ん？
俺はちょっと首をかしげる。
え、ちょっと待って？
ソーナ会長の夢は、下級や中級の悪魔も通えるレーティングゲームの学校だよな？
それ別に、上級悪魔とか上役にメリットとかあるのか？
「……待たれよ、フロンズ殿」
「少し意味が分からんのだが、どういうことだ？」
上役の人たちもちょっと戸惑ってる。
そんな視線が向けられてるけど、フロンズさんは平然としていた。
「そうですね。では少し私の意見をご清聴いただきたい」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ではまず、現状のレーティングゲームの問題点を洗い出しましょう。
まず、先ほどソーナ嬢も言っておりましたが、魔王様直々にレーティングゲームは階級の垣根なく参加できるということになっております。
この時点で今のレーティングゲームの制度は下級中級に不満の火種となりかねません。今のままでは火種は残りますし、下手に撤回すれば一気に炎上しかねない。とどめに禍の団という不満分子の受け皿がいる状況下では、いつこれが冥界全土を覆う大火災に繋がるかもしれません。
続けて言うと、レーティングゲームそのものの今の在り方は貴種にとってリスクも大きいです。
レーティングゲームは基本として冥界全土の娯楽です。人間界でいうベースボールやバスケットボールなどの集団競技に、格闘技などの武術系競技をかみ合わせた物……いえ、集団競技型のサバイバルゲームなどが一番近いでしょうか。
ですか競技試合には勝ち負けが存在するもの。勝ったのならばともかく、負けて笑いものにされるリスクを背負うのいうのは、貴族である皆様方にとって不快感もあるのではないでしょうか？
更に言えば、レーティングゲームの成績が昇格試験の権利獲得に直結しているというこの状況下と、他種族から眷属悪魔を選ぶ現状もまた問題でしょう。
客将や食客として、本来の悪魔にない利点を持つ者を選ぶのは当たり前の判断でしょう。ですがその弊害として、まがい物が上級や最上級悪魔に多数入り込んでいるこの現状は、本来の悪魔にとって不満でしょう。単一民族国家である日本人ならこういえば分かるだろうか……「帰化外国人が総理大臣や内閣にいるのを無条件に肯定できるか

？」と。
　これらの問題点を解決するには、本来の悪魔である純血の下級中級から優秀な者を育成し、また取り入れる変革が必要不可欠。和平の輪が広がれば否でも変えるべきところはあるのですから、むしろ積極的に動くことでよりマシな形にすることは合理的といえましょう。
　幸い、愚民といえどきちんとした教育を受ければある程度のことはできます。農業関連の知識や技術が豊富になれば、我々悪魔の勢力強化にも繋がりましょう。
　……ゆえに、私はレーティングゲーム及び教育制度の改革をするべきであると進言します。
　幸か不幸か、スポーツ競技や学問においては人間世界が参考資料になりますし、そこから有効なものを引き出すことは貴族ともあろう者なら容易にできるでしょう。
　一考の価値があると愚考しますが、如何に？

祐斗Ｓｉｄｅ

　これは、何て言うかすごいね。
　フロンズ氏の弁舌に、上役達は魔王派大王派の区別なく興味を示した者が数多い。
　またしても、彼は空気を大きく変えることに成功していると言ってもいいだろう。
「無論、その変化の方向性を決めるのは若輩者ではなく経験豊富な方々であるべきだとは思っております。……草案はまとめておりま

すので、本格的な変革案はまた別の機会に」
「……なるほど、な」
「確かに、他種族からの転生悪魔が最上級につくのは正直不快だ。それなら下級中級であっても純血がついた方がまだましだろう」
「その価値観は正直不本意だが、確かに純血の下級中級の市民にも栄達の機会は与えられるべきだろう。一考の価値はありますな」
フロンズ氏のその言葉に、多くの者達が程度はともかく評価の声を上げていた。
その反応を前に、フロンズ氏は満足げに一礼する。
「……草案を一読したいのであれば、フィーニクス家にご一報ください。数日中にお届けいたします」
そう告げるフロンズ氏の言葉を受けてから、現大王が厳かに頷いた。
「確かに、和平が結ばれれば動かねばならないことも多いだろう。魔王様方、この件、今度の議題として取り上げるべきかと考えるが、如何に？」
「そうだねー。珍しく素早い判断だし、これは周りも要望するだろうねー」
ファルビウム様がそうげんなりしながら言うと、今度はアジュカ様が苦笑しながら頷いた。
「まあいいだろうさ。今期の若手は有望な者が多くて、ある意味楽しいものだ」
「む～。ソーナちゃんが提案した時はうるさく言ってたのに、フロンズちゃんが言った時は好意的に言うなんてなんか納得できないわねん」
セラフォルー様はそう不満げだったけれど、結果的にソーナ会長の夢にある程度の可能性が見えたこともあり、文句を言いきれないところがある。
だけど少し考えて、ポンと手を打った。
「あ、でも今の冥界なら活躍できればそれだけの権利は貰えるもの。ソーナちゃんとフロンズちゃんとだと方針がちょっと違うっポイし、

ソーナちゃんも頑張って自分の理想の学園を作れるよう頑張ってね☆」
「……あの、あまりこの場で姉妹としての立場を見せてほしくはないのですが？」
少し戸惑う会長だけれど、それでも夢の為に応援されることは悪い気はしないだろう。
そして場の流れが緩んだ時に、サーゼクス様が僕達を見回した。
「多少波乱はあったが、中々有意義な時間となったようだ。……だが、この冥界で夢を叶えるには実力を示さなければならない」
そう前置きし、サーゼクス様は更にこう告げる。
「だからその一環として、若手同士でゲームを行おうという話がある。リアスとソーナ、第一弾は君達にしようと思っているのだよ」
その言葉に、部長と会長は目を合わせた。
「アザゼルが各勢力の長との和平を進める為の一環として、長達を集めてレーティングゲームの試合を観戦させる予定があった。そこで君達同士のゲームを執り行いたいと思っているんだ」
そして、殆どの者達は笑みを浮かべた。
「公式戦でないとはいえ、こんないい機会が貰えるとは思いませんでした。とはいえ、まさか初めての相手がリアスになるとはね」
「そうね。でも私はもう一敗しているの。だから、二連敗なんてするわけにはいかないわ」
お互いに火花を散らし、更に周囲の主達も戦意を燃やす者が何人も出てくる。
「……ちょうどいい！　ふざけたことを言いやがったサイラオーグでも、わけのわからねえこと言いやがったイシロでも構わねえぜ！　なんなら他の奴でもいいなぁ！」
「下品で下賤で下等な口を叩くなよ、そんなに誰かれ構わず喧嘩を売りたいのなら、まずお前を血祭りにあげてやる」
周囲に敵意を向けるゼファードルには、ヴィール・アガレスが嫌悪感を顕わに宣言する。
「いいねぇ。じゃ、俺はちょっと試したいことがあるから若手最強と

一戦交えるかねぇ」
「いいだろう。かの皇帝の親族であるお前とは、一度拳を交わしたいと思っていた」
愉快そうに笑うノア氏に指名され、サイラオーグさんは真っ向からそれを受け止める。
「では、ノアがナンバーワンを指名するなら私はアガレスを名指ししようか」
「いいでしょう。できればゼファードルを叩きのめしたかったけれど、それは次の機会に」
「やれやれ。じゃあ僕達はあまり者同士仲良くしようか」
「ええ、ぜひその全力で私をボコボコにしてほしいわ」
そして他の者達もそれぞれが相手を決め、試合の第一段階が速やかにまとまった。
それを苦笑しながら見つめていたサーゼクス様は、僕達を一度見まわしてから頷いた。
「決まりのようだね。では第一試合はリアスとソーナで、日取りは日本時間の八月二十日。それまで自由に時間を使って構わない。改めて後日連絡しよう」
こうして、僕達若手悪魔はそれぞれがレーティングゲームで争うことになったのだった。

魔性変革編　第六話　荒れる会合（余韻）

イッセーＳｉｄｅ

うっへぇ。やっと終わったぜ。
「いやぁ、一時期はどうなることかと思いましたね部長」
俺がそう言うと、リアス部長も軽くため息をついた。
「そうね。ソーナの夢を上役の多くが笑うのは読めていたけれど、まさかいきなり匙君が切りかかられるとは思わなかったわ」
「全くです。匙、もう少し考えて発言してください」
「す、すいません……」
ソーナ会長にたしなめられ、匙はがっくりと肩を落とした。
匙も俺に似て熱血なとこがあるけど、その所為で逆に大変なことになったから、ちょっと落ち込んでるな。
うんうん。俺も同情するぜ。今度エロ本貸してやるから元気出せよ。
「とはいえ、あのサイラオーグ・バアルはすごいな。あれだけの拳を放てるのは、悪魔祓いではリュシオンやネロを含めて片手の指が余るぐらいだろう」
「そうですね。純粋な徒手空拳に限定すれば、若手悪魔で彼に勝てる者は誰一人としていないでしょう」
「彼のような人が同期にいるとは、会長も大変な時代に生まれたのですね」
ゼノヴィアがサイラオーグさんについてそう言えば、副会長達ソーナ会長の眷属達もそれについて話し出す。
ほんと、色々あった会談だよなぁ。
俺達がそんなこんなで緩んだ時間を過ごしていると、そこにシャルロットが顔を出した。

「……イッセー、もう終わりましたか？」
「お、シャルロット！　もういいのか？」
俺が聞くと、シャルロットが微笑みながら頷いた。
「リアスさんの庇護下で動ける範囲は見てみました。人間界でもところ変われば差異がありますけど、世界そのものが違えば変化があるものだと勉強になりました」
シャルロットは非常時を考慮して俺から離れすぎないように、だけどこの機会に色々勉強したいと会合のビルで部長の庇護下なら入れるところを見学してた。
いざとなったら念話で助けを求められるようにしてたけど、まあ必要ないと思ってたから問題なし。
ま、ちょっと助けを呼ぼうかと思った時はあったけどね。
あんまり心配させたくないけど、まあ九成達と合流したら話すことになるんだろうなぁ。
そんなことを思ってると、廊下の向こうから何人かが歩いてくる。
あ、フロンズさんとノアさんだ。
フロンズさんの眷属に殴り飛ばされかけた匙がちょっとうげってなってるけど、まあ結局すぐに流れたから、あまり突っつくのもあれなのかな？
そう思ったけどちょっと気まずいから視線をずらすと、何故かシャルロットが面食らってた。
「あれ？　シャルロットはどうしたのかしら？」
リアス部長が首を傾げてるけど、シャルロットは部長の方を見ない。
そして、フロンズさんの眷属を警戒している。
え、え……どういうこと？
俺達がちょっと戸惑い始めていると、フロンズさんは余裕な感じの笑みを浮かべながら、感心した感じで頷いてた。
「流石はサーヴァント。受肉したとはいえ同類を察知する目は養われているようだ」
……へ？

俺がちょっと目を丸くしてると、ノアさんが肩をすくめながら手の平を上に向けてる。
「俺らが聖杯戦争に手を出してるのは知ってるだろ？　フロンズの奴は、そこで何人かスカウトしてんのさ」
えええええ!?
さ、サーヴァントをスカウト!?　って、サーヴァントって眷属悪魔にできるの!?
俺は困惑するけど、アーシアが何かに気づいた表情になる。
え、何に気づいたのアーシア？　俺にも教えて？
「……クロードさんと同じように、受肉なさっているのですか？」
あ、そうか。
俺は会談の時に出会った、カズヒの上司のクロードさんを思い出した。
そういえばあの人もサーヴァントだった。亜種聖杯を使って受肉したとか聞いてたっけ。
ってことはあり得るわけで、つまり本当にサーヴァント？
俺達がちょっと視線で尋ねると、フロンズさんは素直に頷いた。
「特に隠してはいないがね。この二人には領地の悪魔達に対する技術指導や、作成物による貢献などを主眼として迎え入れている」
そんなあっさりとした答えに続いて、男の方がこれまたあっさり頷いた。
「ああ、俺にとっちゃ対象は雇用主だな。この時代は俺のいた頃じゃぁどれだけ頑張っても楽しめねえ贅沢が楽しめるから乗っかったんだ。そういうわけで、機会を与えてくれたっていう代金はあるから大将経由でしか注文は受け付けねえぜ？」
「こちらもだよ。生前とは違いいろんな構想を実際に試しやすいし、宗教による研究への圧迫も少ないからね。まあ、そんな世界に連れてきてくれたマスター以外にパトロンを作る気はないので、依頼があるならマスターに告げてほしいかな？」
お、おぉ……。
なんていうか、凄いなオイ。

受肉してないシャルロットを除けば、俺ってサーヴァントと会う機会に恵まれすぎじゃないか？
この調子だともっとたくさんサーヴァントに合いそうだなぁ。っていうか、禍の団もいっぱいたくさんサーヴァントを集めてそうだなぁ。
英雄っていうから悪い人はいないような気もするけど、バーサーカーとかいるから気を付けないと。
そう思っていると、フロンズさんは会長に苦笑を浮かべた。
「しかし、シトリー本家の次期当主がアレはいかがなものか。間違いなく鼻で笑ったうえでそのままやるようなら邪魔をしてくるだろうことを、そのまま語ってどうするというのかね？」
「……おのれの夢を語る場で、決意を正直に語ることが悪いことですか？」
会長は不機嫌そうにそう返すけど、フロンズさんは即座に頷いた。
は、はっきり伝えたなぁ、おい。
俺達が呆気に取られていると、フロンズさんは苦笑しながら肩まですくめた。
「本音と建て前は使い分けたまえ。馬鹿正直に嘘偽りなく、相手が不快になることを素直に語るなど無価値だとも。ましてや妨害する相手に語るなど無謀だよ。政（まつりごと）を行う立場なら、腹芸を覚えたまえ」
そう言ってくるフロンズさんを、会長は目を細めながら真っすぐに見つめ返した。
な、なんだ？
怒ってるとかそういうのとは少し違う雰囲気に、真っ先に食って掛かりそうな匙も戸惑ってる。
俺達が困惑していると、会長は観察するような目をフロンズさんに向けた。
「……なるほど。つまりあの場で魔王様を愚弄するようなことを言ってからの流れは、すべてあなたの筋書き通りというわけですか」
……っ
俺達全員、息を呑んだ。

そういえばそうだ。そう言われた方が納得できる。
フロンズさんはサーゼクス様がサイラオーグさんをたしなめた時、即座にサーゼクス様に対して「甘すぎる」って言ってたっけ。
魔王様にそんなことを言ったくせに、上役にソーナ会長が言ったことをとやかく言うのはおかしいとも思う。
で、でも、サーゼクス様達がそんな芝居するか？　っていうか、サーゼクス様達はたぶん本音を言ってたと思うんだけど!?
「お兄様がそんな芝居をするとは思えないわ？　何より、お兄様やセラフォルー様は、間違いなく民を危険にさらしたくないと願うはずよ!?」
リアス部長もそう言うけど、会長は首を横に振った。
「お姉様達はそうでしょう。ですがそれ以外の上役の反応、どこか示し合わせた物が感じられる時ありました。……少なくとも、直後に頬をかすめた攻撃は筋書き通りとみるべきでしょう」
え、あれ……お芝居!?
まだ頬に傷が残ってるけど!?　かすめるだけだからってわざと食らったのかよ!?
「そんなバカな!?　攻撃を放ったのは魔王派の悪魔のはずです！　まさか大王派のスパイだというのですか!?」
木場がそう言って反論するけど、スパイってマジかよ!?
あ、でもサーゼクス様達側ならそんなこと言わないはずだ。だったら本当にスパイ？
俺達はフロンズさんを見るけど、フロンズさんは苦笑しながら首を横に振る。
「推測は３０点だ。確かに彼には私が魔王様を否定する形で軍備強化を進言した時は軽傷を負う程度の攻撃を放つように示し合わせていたが、彼自身は正真正銘の魔王派だよ。それにその後の私の説明を聞いて賛同した者達も、全員に前もって話をつけていたわけではないしね」
あ、そうなのか。
安心したぁ。そっかぁ、会長の勘違いか。

そう俺が安心した時、部長は歯を食いしばってフロンズさんを睨み付けた。
え、なんで!? どういうこと!?
「全員じゃないってことは、何人かとは話をつけていたということね？ ……それも、大王派だけじゃなく魔王派とも……っ」
あ、そうか。
リアス部長の言うことを聞いて、確かにそうだって漸く気付いた。
全員と話を示し合わせてないってことは、１００％じゃないってことだけだ。
おいおいマジかよ。もうわけ分からねえ。
俺が呆気に取られていると、フロンズさんは平然とした態度だった。
それが癪に障るのか、リアス部長は奥歯をぎりぎり言わせながらフロンズさんを睨み付ける。
だけど、フロンズさんは肩をすくめてどこ吹く風だった。
「何もかもあなたの筋書き通りってこと？ どういうつもり……！」
「それは違う。人とは一人一人が独自の思考を持ち、それを全て外から見て把握しきるなど不可能だよ。少なくとも、私はそこまでの洞察力を得てはいないとも」
フロンズさんはそう言って肩をすくめると、だけどちょっと得意げだった。
「私は事前に会合に参加する上役達をプロファイリングして、魔王派大王派の区別なく今回の提案を肯定してくれるような者数名に接触して成功後に利権が得られるよう進言する代わりに、特定の条件下における演出を頼んでいただけさ。５パターンの大筋を作った上で、それぞれ気質と反応に違和感を持たれないような方に、それぞれの符丁に合わせた対応をお願いして、あとは全部アドリブだとも」
……そのうちの一つが、あれだったってのか？
「政治の基本は演出と根回し。そして派閥が同じでも過激派穏健派などの傾向は違う。私は私の理想と私なりの冥界の未来を考慮して、どういう流れになってもある程度のメリットが私達に入るよう仕込ん

だうえで、アドリブができるよう研鑽を積んだだけさ」
マジかよ。
部長達とそう変わらない年だってのに、そんなことをしやがったってのか。
「腹芸を覚えたまえ、次期当主諸君。交渉とは相手を乗り気にさせることであり、派閥の違いが利益の共有可否を決定したりはしない。流れを読み、それに乗り、しかし自分に都合のいい方向に少しでも寄せる。それが出来てこその政治というものだよ？」

「……ハッ！　サイラオーグと同じでお前も無能か」

その言葉に、俺達は全員振り返った。
そこにいたのはヴィール・アガレス眷属。
そいつらは足を止めたりはしなかったけど、真ん中のヴィール・アガレスはフロンズさん達に軽蔑って言葉を字で書いたような目で見てた。
そのままフロンズさんと視線を交わし合いながら、だけどそのまま通り過ぎながら、口を開いた。
「大王派のくせして、現魔王みたいに無意味なことをするんだな。そんなに無能さらして、お前にしろサイラオーグにしろ、現魔王達にしろ恥ずかしくねえのか？」
こ、こいつ……っ！
「心外ですね。仮にもお姉様は魔王に選ばれる力を示していますよ？」
「お兄様への愚弄を、よくもまあ私の前で吐き捨てれるわね、ヴィー

ル・アガレス」
俺以上に怒りを浮かべながら、会長と部長がヴィールを見据える。
だけどヴィールは、心底呆れてる感じで肩をすくめた。
「無能だから無意味な時間を過ごし続けてるんだろ？　見て分からねえ当たり、グレモリーとシトリーの未来は暗いな。情けねえ」
視線すら向けずにそう言い切って、特に気負うことなく通り過ぎる。
こいつ、俺達がここで殴り掛かっても対応できるっていうのかよ……っ。
だけどここで暴れると、部長はもちろんサーゼクス様の顔にも傷がつきそうだ。我慢しねえと……っ。
そして俺達が我慢していることも気にせず、ヴィール達はそのままエレベーターに入って降りていく。
不快な気分になった俺達だけど、フロンズさん達は肩をすくめながらため息をついた。
「やれやれ。彼は自分が無価値なことをしている自覚がないらしい」
「ああいうのを無謀っていうのかねぇ。シトリーさんは反面教師にした方がいいぜ？」
こ、この人達は結構平然としてるな。
……魔王様達のことを無意味で無能とかいう若手ナンバー2に、大王派なのに魔王派とも話をつけて主張を通すフロンズ・フィーニクスにノア・ベリアル。あと問題児っぷりのグラシャラボラス家の二人。
サイラオーグさんはむしろ好感が持てたけど、こんなにちょっと気を付けた方がよさそうな人が多いとか勘弁だぜ。
俺のハーレム王への道って、実はめっちゃ険しいのか……？

和地Ｓｉｄｅ

「ってことがあったんだよなぁ」
「マジかぁ。冥界の若手も色々いるんだなぁ」
イッセーから話を聞いて、俺も軽く引いた。
いや、俺も年齢よりよっぽど大人びてるって言われることはあるけどな？　フロンズとかいうの、謀略とか政略とかにめっちゃ慣れてるじゃねえか。
相手の動きを予定通りに誘導して利益を得るんじゃなく、どんな風に動いても利益が入るように仕込みを入れるって何者だよ。いい大人でもそこまで出来る奴そうはいないって。
「言っちゃなんだけど、部長も会長も生き方が基本正道だから、そういうえげつないやり口とか苦手そうだしなぁ」
俺がうっへぇと思っていると、カズヒ姉さんは苦笑しながら遠い目をしていた。
「まあ、会談でも思ったけどあの魔王（二人）は人柄の善良さといった人徳を武器にしているもの。だからこそのメリットや得てもあるけれど、デメリットや不得手だってあるわよねぇ」
「そうですね。なんというかロベスピエールのような御仁みたいですね。それが絶対悪とは言いませんが、リアスさん達にとってはやりづらい相手でしょう」
と、シャルロットも頷いて頬に手を当ててため息をついた。
あのすいません。俺としてもそれはちょっと気になるんですが。仮面ライダー的に。
「話を聞く限りですが、おそらく彼はレーティングゲームの民営化も狙ってますね。貴族をレーティングゲームのプレイヤーではなくスポンサー主体に変えて、自分はレーティングゲームそのものに参加しない方向で行きそうです」
あ、その可能性はあるな。
話を聞く感じ、そういう風に民を有効活用しつつ飼いならそうって

雰囲気が見え隠れしてる。
あれは民を人ではなく資産価値で見てそうだな。
「……一概に間違いとか悪徳っていえないところが、また面倒だな」
「そうね。運営とか政治ってのは、大規模になればなるほど善意や優しさだけを基準にできなくなるもの」
俺のボヤキに、カズヒ姉さんもため息をつきながら頷いた。
「悪意や問題があっても重用しなければならない時って、規模が大きい組織とかになればなるほどあるし、善良だからという理由で厚遇し続けるわけにもいかない時だってあるもの。ゲリラ時代にも思ったけど、革命とかクーデターって、それを成し遂げた後の運営の準備とかそもそものビジョンがないと、大抵グダグダになるのよね」
「あ～……。彼らも結局ナポレオンにとって替わられたそうですしねぇ」
革命とかを生きて経験したからか、カズヒ姉さんもシャルロットも、その辺については一家言あるっぽい。
それに対して年期もあってうんうん頷きながら、先生が感心した感じの目をしていた。
「……やっぱりな。あのフロンズって奴、サーゼクス達にしてみりゃ厄介な連中だったか」
その言い方に、部長がちらりと先生に視線を向けた。
結果的に兄がやり込められた節もあるから、フロンズに対しては思うところありそうだしな。文句の一つもつけたいのだろうか？
一瞬そう思ったけど、部長はそういうわけでもなさそうだ。
「そういえば、アザゼル達は少し前にあって話もしていたわね。何か気付いたことがあるの？」
なるほど、そこを聞くのか。
つっても、技術系の専門分野の話が殆どだから、俺とヒマリはろくに話してない。というか、分かってないところが多すぎる。
なんで目と目を合わせて即座に視線で先生を促せば、先生は先生で少し唸った。
「一言で言うなら、奴さんは政治や技術力に注力しているな。それも、

出世することより影響力を高めることを重要視ってところだろう？」
「……すいません、先生。難しくて分からないです」
よく言ったイッセー。
俺を含めた数名がうんうんと頷いて補足を求めると、先生は肩をすくめながらも分かってくれたらしい。
「……リアス達悪魔歴がそこそこある奴は分かってるだろうが、大王バアルを主体とする大王派は血統主義の貴族主義だ。当然だが、家柄で劣る連中は下級中級、他種族からの転生悪魔が出世することに程度はあるだろうが不満は持っているやつらが殆どだな」
「耳が痛いけど、実際その通りだから文句も言えないわ」
部長がそう答えると、先生は更に続けた。
「そんな状況下で、フィーニクス家は上手く立ち回っている。亜種聖杯を直接力にするのではなく、冥界全体に大きな貢献を可能とする出生率向上を確立することに使い、それを大王派全体かつ下級中級も使えるようにして広めることで、下級中級の平民や貴族共の覚えをよくしたわけだ。更に今後も増えていくだろう平民達に手に職つけさせたり、限定的ながらゲームに参加できるようにすることで、フィーニクス家は冥界でも有数の評価や影響力を発揮するだろうな」
そう言って、同時に先生は警戒心を表情に浮かべていた。
「厄介なのはやり方だ。可能な限り提案や補佐に回り、手に入る利権も欲張るどころかかなりの割合を派閥や民に回すことで、フィーニクス家は自分達の家格をさほど高めずに、しかし影響力を少しずつ確実に盤石なものにしている。これによって、あそこの家は上役に嫌な目を向けられることなく、むしろ上役にとって必要不可欠な存在になっていくだろうな」
な、なるほど。
家柄そのものは高くなってないけど、上の覚えがいいからいざという時は家格以上に優遇されるってことか。
コミュ力とか後ろ盾で勝負するって感じか？
俺が頭を捻って理解しようとしている中、先生は更にがりがりと頭を書いた。

「特にフロンズの奴は、その辺りの立ち回りが上手そうだな。冥界全体の利益ゆえに魔王派にもメリットのある方針をとることで、大王派だけでなく一部の魔王派にも話を通せるってだけでも十分ヤバい。更に様々な状況に対応するためとはいえ、プロットは数はあれど大筋だけにしてアドリブで補正を利かせられる、事前準備と即興対応の両立。……リアスとそう変わらねえ年だってのに、海千山千の政治家張りに立ち回れるってのは怖いもんだぜ」

そこまで言ってから、先生は部長達グレモリー眷属を見回した。

「気をつけろよ？　奴さんは間違いなく、今後の冥界の行く先をいくつも予測したうえで、どこに進んでもちゃっかり影響力を高められるように立ち回ってる。そして何より、奴が他の若手に勝負を挑む場合、それは眷属なんて単位じゃないだろう」

「……どういうことですか？　レーティングゲームではなく政争でということでしょうか？」

木場が首を傾げながら推測するけど、先生はあっさり首を振った。

「そんな次元じゃねえよ。こいつは俺が直接会話した内容と、お前らの話からの推測でしかねえが……そもそも、あいつはレーティングゲームを対して重要視してねえ」

ん、どういうこと？

「……しかしアザゼル先生。今の悪魔にとってレーティングゲームは重要だろう？　大王派である以上上役のご機嫌を取りながら出世するには、レーティングゲームが最も確実だろうに」

「そそそ、そうですよぉ。むしろレーティングゲームの改革案っぽいこと言ってましたよぉ？」

ゼノヴィアとギャスパーが反論するけど、先生は首を又横に振る。

「逆だ。奴はレーティングゲームで出世しようとか思ってないんだろう。だからこそ、レーティングゲームそのものを平民に解放していいと思っているんだ。もしそうなれば、昇格や貴族としての地位向上手段としては遠のくだろうしな」

ああ、なるほど。

確かに話を聞く限り、フロンズは貴族本人がゲームのプレイヤーと

して参加して、勝ち負けを平民の娯楽にすることとか問題視してる感じだったな。
　それに、他種族からの転生悪魔が出世することにも問題視している感じがあった。その他種族ベースの転生悪魔が出世するには、ゲームの成績が最も重要だっていう。ならゲームそのものが貴族としての栄達に関わらないようにするのは当然か。
　そして、フロンズは先生と話していた時、眷属と共にいろんな技術について会話を交わしていた。
　つまり―
「―つまりフロンズは、領地の税収や冥界への貢献で出世するつもりだと？」
　俺がそう聞くと、先生はついに首を縦に振った。
「そんでもって、奴さんや自分の戦力を眷属悪魔に頼るつもりもなさそうだ」
　そう言いながら、先生は自分のスマートフォンに視線を移す。
　其のスマートフォンには、実は意外と研究データとかが見れるようにカスタムされてたはずだ。
「あいつは俺と話していた時、高い量産性を保てる範囲での新技術や技術力向上の術、それも兵器関係を聞き出そうとしている節があった。会合の話で漸く合点がいったが……奴は軍事力を少数精鋭ではなく大規模組織化する方向で強化するつもりだ」
　それは、つまり―
「出生率が高くなれば、当然軍事力に回せる人数も増える。あいつはそんな奴らに回す装備の質を向上させることで、かつての悪魔が持っていた数的規模に下手な眷属悪魔より高い質を併せ持たせた、軍事的組織を結成することで軍備を高めるつもりなんだろうさ」
　―レーティングゲーム及び眷属悪魔という、少数精鋭という概念そのものを重視していない。
　俺以上にリアス部長が息を呑む中、先生は真剣な目つきで俺達を見回した。
「厄介な時期に生まれたな、お前ら。フィーニクス家は厄介だ。あい

つらが目指すのは冥界全体の富国強兵、少なくともそれが組み込まれてるのは間違いないだろうぜ」
「……それは、確かに恐ろしいわね」
部長は、少し震える唇からため息を出した。
「フロンズ・フィーニクスにその親友といわれるノア・ベリアルは、バアル分家の子女を婚約者として迎え入れているわ。分家としては大王派で最も有力であり、レーティングゲームにおいてランキング十位台の常に維持し個人としてはトップ3に次ぐ実力を持ち、なによりフィーニクス家の祭壇を愛用し、六人の優れた子供達を持つシューマ・バアルよ」
……な、なるほど。
とりあえず頭の中で理解して、俺はため息をついた。
「家柄以上に厄介な奴に並び立てられてるのか。……大変ですね部長」
「お、俺頑張ります！　二天龍ですから、頑張って成果をあげたら部長の評価も上がりますよね!?」
俺が同情してイッセーが何というか気合を入れると、リアス部長は不敵に笑った。
「やすやすと抜かれるつもりはないわ。お兄様には以前苦労もかけた以上、それ以上に力となってあげたいものね」
気合の入ったいい表情だ。こういうところ熱血根性的な感じがあるよなぁ。
ただ、即座にヒマリが頭を撫でたのでちょっと空気が緩んだけど。
「頑張り屋さんですのね。よしよし」
三秒ぐらい沈黙が響いて、誰ともなくクスリと笑ってしまった。
「……タイミングが悪いですよ、ヒマリ先輩」
「あらあら。なんというか、無敵な感じで形無しですわね、リアス」
小猫がツッコミを入れて朱乃さんが茶々を入れる。
あ～もう。リアス部長ってば顔真っ赤。
「すいません部長、俺の相方が」
「……もぅっ」

だけどまあ、空気は悪くなくなったかな。
俺達は堕天使側だからそこまで直結しないけど、たまに愚痴聞く程度なら構わない。
ま、頑張ってくださいな。

魔性変革編　第七話　特訓、秒読みです！

和地Ｓｉｄｅ

夜、俺達はこんなところで意外な楽しみを味わうことが出来ていた。

具体的に言うと露天風呂。それも完ぺきな日本風。

グレモリー本家は日本フリークらしい。っていうか俺、生まれた初めての和風露天風呂を冥界で楽しむとか何かを間違えている気がする。

ま、まあお風呂そのものは立派だし、それはいいか。

問題は―

「耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ覗くな覗くな覗くな」

「悪いけどさ。雰囲気最悪だからちょっと黙れないか？」

―イッセー（この馬鹿）の呟きがほんと怖い。なんていうか真剣さが嫌というほど分かるか、尚更怖い。

目が怖いし表情も怖いし、っていうか真剣にシャワーで水をかぶりながらガンガンと頭を打ち付けるのやめろ。

どんだけ覗きがしたいんだお前は。もう病気だから病院行けよ。

「そこまで覗きを我慢したくなるのか？　お前、結構な頻度で一緒に風呂入ってるんだろ？」

少なくともそう聞いている。っていうか、リアス部長やアーシアだけでなく、隙あらば朱乃さんやゼノヴィアとも入れるらしいじゃねえか。

そんな状況下で、覗きにそこまで飢えるとか病気だって病気。

「……覗きは別腹なんだよ。当たり前のこと言うなよな」

「いや、そんな甘いものは別腹なんて女子の言い訳みたいなこと言われても困るぞ？」

何を、「お前何言ってんの？」みたいな顔してる。それはこっちのセリフだ。

駄目だこいつ。人間には個人差があるものだけど、こいつの煩悩は

間違いなく常人のそれじゃない。
もし常人がこいつ並みの煩悩を持ってたら、まず間違いなく暴走してたぞ。耐えようとしているだけ凄いような気がしてきた。
あ、駄目だ。このままだとイッセーが基準値になってしまう。ちょっと距離を取って考え直そう。
俺は泡を流すと、イッセーから距離を取ってお湯につかる。
ふぃ～。ああ、なんかこれあったかい上にどこか気持ちいい。
俺はそんな感じでなんとなくぼ～ッとしていると、隣に木場が座ってきた。
「……あ、悪いけど俺は同性愛の趣味無いから」
「酷くないかい!?」
え～。だってお前、最近ホモなんじゃないかってぐらいイッセーに熱い視線送ってるし。
正直ちょっとだけ距離を取ったぞ。っていうかなんでこのタイミングで隣に来る。
「……そんなに警戒しないでくれないかい？　僕個人としては、今後についてちょっと頼みたいことがあってね」
と、木場は真剣な表情だった。
なんだ？
「今日の会合の話は聞いただろう？　あの話を聞いた後だと、どうしても僕達は警戒しないといけないことがある」
えっと、確か変態が歪みない変態っぷりを見せつけて、そのあとフロンズが凄い根回しの末に色々と要望を通したりとかだったな。
そこまで思い出して、俺はなんとなく気が付いた。
ああそうだ。奴さんは、禍の団との戦いは短期間に激化する可能性を言ってたな。
そうなると確かに気にすることがあるよな。というか、アザゼル先生も何年か先になるとは思ってたけど、同時にぶつかる可能性は確実視してたし。
「対ヴァーリチームってことか？　つっても俺、そんなに会話したことはないぞ？」

「ああ、ちょっと違うかな。ヴァーリ・ルシファーについて詳しく聞こうってわけじゃないんだよ」
そう木場は言ってから、真剣な表情を見せる。
「僕達は嫌でも強くなる必要がある。そうしなければ部長もイッセー君も、自分の身だって守れない。……だから、ちょっと自分そのものを強化するだけ以外の方法を考えちゃってね」
ああ、なるほど。
確かに俺も、自分自身の力だけじゃなく、装備による強化もしてるからな。
つまり―
「―仮面ライダーになることは可能なのかって話か？　やめとけやめとけ」
「なんでだい？　確かに大量生産は神の子を見張る者でもしていない辺り、適性があるのは読めていたけど―」
ああ、なんか勘違いされてるな、コレ。
まあ多少は向き不向きもあるけど、問題はそこじゃない。
問題があるとするならば―
「頭の中にＡＩチップを挿入る必要があるんだよ、ショットライザー」
―仕組みの方だ。
軽めにさらりと言ってみたけど、やっぱり流石に流せないな。
明らかに木場は息を呑んでる。まあ、現代の価値観だとちょっと引いたりする感じはあるだろうからなぁ。
「……ザイアコーポレーションを牛耳っていたという人達って、やっぱり危険思想の持ち主だったようだね」
「そんな感じだな。まあ、死ぬ危険性とかはまずないから、俺はさほど気にしないことにしてる」
まあ、それはそれとして。
とりあえず人に勧めるものではないからなッと。
「やるならレイダーにとどめておくか、新規開発を依頼した方がいいと思うぞ？　たぶんだが、そっちの方が確実性は高い」
「……そうだね。悪いことを聞いたみたいだし、謝るよ」

ああ、結構気にしてるなこいつ。
そこまで不便があるわけでもないし、悪影響がないように魔術による補佐もかけてはいる。定期的なチェックは要るけど、さほど気にすることでもないとは踏んでいるんだけどな。
とはいえ空気を切り替えた方がいいような気も―
「―お前も一流になりな！　男なら混浴だぞ、イッセー！」
「うぉおおおおお!?」
―したけどこれは求めてねえよ!?
「ちょ、何してんですか先生ぃ!?」
俺は思わず問い詰めるけど、この総督全然気にしてない。
え、何か問題なことしましたかと顔に書いてやがる。
「あ？　気にするこたねえだろ。大抵の女子共はイッセーにぞっこんっぽいしな」
そういう問題じゃねえ！
っていうか確かに、グレモリー眷属の女子達はイッセーに対する好感度高いけども！
リーネスはそういうのおおらかだし、ヒマリはぶっちゃけその辺緩くなってるけども!?
「カズヒ姉さぁあああああん!?」
惚れた女の裸を、別の男に先に見られる俺の身にもなれぇぇぇぇぇ！
いや、そうじゃない。投げ込めって意味じゃない。だから掴もうとするなこの駄天使。
思わずバックステップするけど、カズヒ姉さんは大丈夫なのだろうか―
「……ちょっと誰か！　衛生班（キュウタ）呼んできて！　反射で顔面を岩に叩き付けて失神したわよイッセー！　あとアザゼル先生（元凶）は後で〆（しめ）るから男子は拘束しといて!!」
「了解だカズヒ姉さん!!」
俺は速攻で魔剣を創造すると、鎮圧のために雷属性を発動させた。
……全員悶絶して大惨事になったので、後で元凶以外には謝ってお

いた。

そんなことがあった次の日、俺達はジャージを着て城の外に並んでいた。

今日から四週間ほど、グレモリー眷属は自分達を高める為、そして若手同士のレーティングゲームで勝利する為に取っ組んだ。俺達もそれに合わせる形で、鍛え直すことになっている。

なにせ俺達、将来的に禍の団の部隊であるヴァーリチームの対抗馬になる予定だからな。総督も赤龍帝（イッセー）や聖魔剣（木場）を鍛える為に駒王町に来たってことになってるから、当然コーチ役をすることになる。

……最も、基本後方支援のリーネスもトレーニングする側に立っていることは意外だったけど。

「よ～し！　お前らにはこれからトレーニングメニューを伝える！」

と、なんかノリノリで先生が声を張り上げている。

「今回のメニューはあくまで将来の成長を重要視したものが殆どだ。だからすぐに効果が出てこない奴もいるだろうが、全員迷走さえしなけりゃ一級品のダイヤモンドになれる奴だからこそのトレーニングを汲んでいる。焦らずやれば絶対成長できると太鼓判を押してやるよ！」

おお、すっごい太鼓判だ。

まあ最も、グレモリーの次期当主のリアス部長が率いる眷属だからな。今代の赤龍帝だったりデュランダルの保有者だったり、聖魔剣というイレギュラーやハーフヴァンパイアの邪眼持ちまでいる。他のメンバーも間違いなく優秀だから、将来性込みなら凄いだろう。

そして俺もヒマリもカズヒ姉さんも、神器二つに魔術回路持ちな星辰奏者。更に俺とヒマリが仮面ライダーに慣れることも踏まえれば、まず間違いなく強くなれる余地はある。

……まあ、強くなる前に殺されるって可能性はあるからな。余裕が

ある今のうちにスタートダッシュしたいのが本音だけど。
「で、まずはリアス。お前は過去のレーティングゲームのデータを重点的に見ながら、この内容のトレーニングをしろ」
そう言いながら、先生は部長に書類を手渡す。
部長はそれを素早く見返すと、怪訝そうに眉をひそめた。
「……特別なトレーニングはないようだけれど？」
「そりゃそうだ。魔力も才能も身体能力も、既にお前は高スペックだ。だから基礎トレーニングをしっかり積んでいけば自然と最上級悪魔になれる。だが、お前は一眷属悪魔じゃなくてグレモリー眷属を率いる王（キング）だって意識がちょっと足りてないのが問題だ」
そうはっきり告げて、先生は真っ直ぐ部長を見た。
「リーダーに求められるのは、個人の戦闘能力以上に状況を判断し、有利な状況は維持して不利な状況を打開する策を素早く判断する頭脳だ。眷属という手段を生かすも殺すも指揮官のそういった能力次第なんだよ。だからこそ、お前が重視するべきは頭の方だ。数多くのゲームの勝敗とその理由を知れば、おのずとその辺は鍛えられる」
確かに。
一戦闘員として強いかどうか、指揮官として強いかどうか。この辺りには素早くものを考えられる能力の重要性が変わるよなぁ。
指揮官ってのは人を使う立場だから、そういったところが重要になるってのは確かにそうだ。正論すぎて反論の余地がない。
「……なるほどね。確かにその通りだから素直に従うわ」
「そうしろそうしろ。お前はグレモリーの次期当主なんだから、自分で全部やるよりやれる奴を探してあてがうことを覚えた方がいい。これはその練習だな」
そう告げてから、今度は朱乃さんの方に向き直る。
「お前に告げることは一つ。堕天使の血を受け入れろ」
……いやちょっと待った。
堕天使に対する敵意が結構見えてる朱乃さんが堕天使だったのか？
俺は首を傾げたいけど、目の前で朱乃さんの殺気が駄々洩れでそれ

どこじゃない。
「私は……あのような忌々しい力に頼らずとも―」
「頼らないからお前はその程度なんだよ。フェニックス戦を見たが何だあのざまは。堕天使の力を開放して光の力を使ってりゃぁ、敵の女王は難なく倒せた。イッセーが追加戦しなくてもリアスの婚約をどうにか出来てた可能性だってあったろうさ」
ばっさり切り捨てると、先生は真剣な視線を向ける。
「俺から言わせりゃ、自分を受け入れない奴に真の強さ何て宿らねえよ。そんなことじゃ禍の団と本格的な戦いになれば足を引っ張るだけだ。腑抜けたことを言ってヴァーリチームをどうにかできねえことは、イッセーとシャルロット（神滅具二人羽居り）どころかリアス（予備動力）付きで何とかなったことから予想できるだろ」
あれはあれでちょっとイレギュラーすぎる気も知るんだけど。
っていうかヴァーリチームってそんなに強いのか？　まあ、孫悟空の末裔とか強くなかったらおかしいような奴だからまあ分かるけどさぁ。
「お前はこの２０日間で、雷の巫女から雷光の巫女に進化して見せろ」
……うっわぁ、めっちゃ不本意だって気配がバリバリだよ。
今日はつつかないように使用。触らぬ神に祟りなしっと。
アザゼル先生もすぐには無理だと思ったのか、ため息をつきながら木場に向き直った。
「とりあえず木場。お前は剣術そのものは自分の師匠にしてもらうようだし、俺が指示するのは禁手の維持時間だ」
ああそうか。正しい意味で禁手になってるのは、グレモリー眷属だと木場だけだからな。
そりゃそういう方向性になるか、なるほどなるほど。
「禁手ってのは必殺技じゃなくて上位形態だ。分単位秒単位なんてのは落第点もいい所で、数時間数日と維持できてこそ意味がある。ちなみにヴァーリは月単位でいけるからな」
「……分かりました。師匠との修行は禁手で行うことにします」
ここは素直な意見だなぁ。っていうか木場の師匠って誰なんだろ

う。
俺は魔剣をサブウェポンで使ってるところがあるから、あまりガチの修行をされるとそれはそれで困る。ただソフトな練習を許してくれるのなら、アドバイスぐらいもらえないか聞いてみたいなぁ。
そして先生は頷き、今度はギャスパーに向き直った。
「ぼ、ぼぼぼ僕は何をすればいいのでしょうかぁあああああ!?」
「とりあえずそのメンタル強化が最優先だ。俺が作った引きこもり脱却プログラムで対人恐怖症を克服しろ。……いや、お前はそれができるだけで思いっきり化けるから」
ぐうの音も出ない正論だ。
いやほんと、このハイスペックを対人恐怖症の引きこもりで盛大に台無しにしてる節があるからな。人波に表で生活できるだけでだいぶ変わるだろうとは思う。
「ま、今回は一歩前に進めればそれで十分だがな。本命に関しちゃ夏休み明け、ちょっとした計画があるからそれでやってみることになるだろうよ」
なんか気になること言ったな、この人。
え、何か計画あるの？　また人体実験とかするんじゃないだろうな、この人。
俺がちょっといぶかしんでると、今度は小猫に向き直った。
小猫も結構本気モードで、かなり気合が入っている。
モチベーションってのは意外と馬鹿にならないし、これは意外と伸びるんじゃ―
「小猫に関しては朱乃と同じだ。お前は血を受け入れることからすべてを始める」
「……っ」
―一気に消沈したよ。
え、なに？　どういうこと？
俺が戸惑っていると、先生は朱乃さんをちらりと見てから視線を小猫にもどす。
「俺のスタンスは朱乃の指示で分かってただろう？　自分を受け入れ

ない奴が本当に強くなれるなんて思っちゃいないんでな。まして赤龍帝（イッセー）、聖魔剣（木場）、デュランダル（ゼノヴィア）と、戦車であるお前以上のオフェンスがいる以上、持ち味を生かさないわけにはいかないだろう」

そういうことは小猫も小猫で訳ありだと。

と、イッセーはそこまで分かってないのか軽く肩を叩く。

「大丈夫だって！　小猫ちゃんなら余裕で強くなれるって」

「……簡単に言わないでください……っ」

……うわぁ、マジギレで睨んでるよ。

これはよっぽど根の深い問題なんだろうなぁ。こっちも今日はつつかないでおこう。

と、そこで先生はイッセーとアーシアを飛ばして、リーネスに向き直った。

「で、イッセーとアーシアにゼノヴィアは諸事情あって後回しにする。リーネスはこの基礎トレ中心だ」

「了解ですけどぉ、何か上乗せできるものはないんですか？」

と、リーネスが答えるけど先生は肩をすくめる。

「お前は中級止まりだが、頭はいいし飲み込みも速い。そして魔術回路も高水準だ。今回はその下地の基礎工事で、本格的な方向性はその結果を見てからだ。並行して研究を怠らないようにしといてくれ」

「分かりましたぁ。頑張りますね」

意外とあっさりというか、まあリーネスってなんでも要領よくこなせるからな。

基本的に後方支援とかを重視してるし、まずは下地をきっちりと慣らして頑丈にしておくってことか。

「で、次はヒマリ。……ぶっちゃけお前が一番困っている」

「めっちゃくちゃ酷いですのよぉ!?」

盛大にヒマリが反論するけど、こればっかりは仕方ない。

「いや、お前ってめっちゃくちゃ癖がある素質を持ってるからなぁ。先生も流石に困るだろ？」

「和地も酷いですのよ!?」

ぷんすか怒ってぽかぽか叩いてくるけど、しかし事実だ。

「……そんなにへんてこりんなんですか？　普通に強かったと思いますけど」
　イッセーがそう聞くと、先生はすぐに頷いた。
「いや、ポテンシャルはかなり高い。魔術回路持ちで星辰奏者の適性があって、加えて神器も二種類ある。つーかこいつはある意味でヴァーリじみた真似もしてる」
　ああ、その辺に関しちゃめっちゃ凄いと俺も思う。
　ぽんぽんと俺がヒマリの頭を撫でて宥めている中、先生がはっきりと言った。
「コイツの魔術回路は生成量と貯蓄量に特化してててな。ぶっちゃけ封印系神器の龍（ドラグナイト・メイル）の外装は小技感覚で覇（ジャガーノート・ドライブ）龍を使ってるんだよ」
　微妙に空気が凍っているけど、俺はスルー。
　先生、説明任せました。
「……アザゼル？　今、覇を平然と使っているとか言ってなかったかしら？」
「その通りだリアス。ヒマリは自前の魔術回路を使って、禁手でもないのに神器を覇に至らせている。更に自前の魔力が莫大で、神器そのものは高位だが神滅具でなく、そして魔術回路持ちは生物を支配する形で使い魔を五感を同調させながら操れることがかみ合って、封印系神器との相性がいい。この相乗効果で覇を寿命を削るどころか暴走のリスクなく平然と使えるのさ」
「ちなみに魔力精製量と貯蓄量は、此処にいる他全員を足した全部より遥かに多いわぁ」
　部長に応える先生と、更にリーネスの補足説明で全員がちょっと引いている。
　ですよねー。俺の相方ってこの一点特化の魔術回路が絶大だからなぁ。
「ただし、他に問題点が数多いのが難点だ」
　そして先生がバッサリ言った。
　まあこれは仕方ない。
　まず第一に、ヒマリは聖剣創造の方に癖が強い。

亜種発現とかそういうわけでもないのに、同時に一本しか作り出せない。まあこれは、仮面ライダーになった上での戦闘も踏まえれば問題ない。

ショットライザーを片手に聖剣を持てればそれでいいし、そうでないなら両手持ちにすればいいからだ。

ただし次が曲者。

「何故かコイツ、星辰光が全然発動しねえんだよ。ただでさえぶっ飛んだステータス構成だから、ぜひ能力も見てみたいんだけどなぁ」

とまあ、先生が言った通り。

本当にぶっ飛んだステータスをしているのに、何故かそれを発揮することができない。

ちなみに性能はこんな感じだ。

基準値：E
発動値：D
収束性：E
拡散性：E
操縦性：E
付属性：EX
維持性：D
干渉性：E

……ぶっ飛んだステータスにもほどがある。

まずEXと形容するほかない付属性が曲者。そしてそれ以外が軒並み底辺だってのがおそるべし。

だけどそれも発動できないのなら意味がない。宝の持ち腐れ以外の何物でもない。

「まあ結果として、魔術回路の規格外の量でごり押しするのが基本スタイルだ。量はともかく質が底辺だから、本当にごり押しが基本だ」

「強化魔術に同調すること特化の聖剣を作ることで、相乗効果で頑丈さだけはデュランダルに匹敵するレベルにして、基本的には仮面ライ

ダー併用ねぇ。まあ覇龍も普通に使えるから、基本性能によるごり押しにはめっぽう強いのよぉ」
「……ちなみに俺の魔術回路の量はＡってところだけど、ヒマリはＡ＋＋ってところだな。俺もヒマリと同じ方法で魔剣を強化できるが、ヒマリが同時併用で覇龍まで使うのは流石に真似できないんで」
と、俺達がそう補足説明すると、全員なんというか珍獣を見る目でヒマリを見た。
「特化型の極みですのよ、えっへん！」
褒めてないから胸を張るな。これは引いているというんだ。
「……まあそういうわけなんで、ヒマリは基礎トレ重視な。強化魔術は概念的に強化する分全体をまんべんなく高めることができないから、強化してないところも十分高くできる能力で、強化したところに振り回されないようにしろ」
「ラジャーですの！」
と、元気よく敬礼するヒマリに頷いてから、今度は俺に向き直った。
「お前に関しては星辰光絡みで一つアイディアがある。トレーニングメニューとサンプルを汲んだから、メニューをこなして休憩中にサンプルを視聴することで伸ばしていけ」
そう言いながら渡してきた書類を読んで、俺は目を見開いた。
おお、こんな方法があったのか。
俺の星辰光にこんな可能性があったなんてな。涙の意味を変える者として、これを習得するのには今後の戦いに備えられるという意味がある。
俺がちょっとうきうきしていると、先生が更に一枚紙を取り出す。
「後悪いんだが、大王派の連中が運営するこの星辰体（アストラル）研究施設にこの日付の時に行ってくれ」
そう言いながら差し出してきたのは、とある星辰体研究施設の場所だった。
後なんかのイベントについてあるな。「星辰奏者適正検査」？
「悪魔側に堕天使（こつち）側から技術供与したから、今後は悪魔からも星辰奏者をそこそこ作れそうでな。その視点的運用やテスターとして、抽選

で集めた平民を主体として星辰奏者の適性検査をするんだとよ」
　あ～、なるほど。
「大王派的には、まず平民で人体実験をしたいと？」
「ま、そんな性格悪い話だろうよ。最も堕天使側の技術が使われるから、一部の上級悪魔は眷属を送り込んでるみたいだがな」
　なるほどねぇ。
「堕天使側から技術者が来て監督するってんなら、問題ないです」
「んじゃ頼むわ。ちょうど悪魔領に星辰奏者としてベテランのお前がいるから、具体的に星辰奏者が何できるか見せてやってくれ」
　そういうことね。了解了解。
　俺がちょっとその辺りを見直してる中、今度は総督がカズヒ姉さんに向き直った。
「カズヒ。お前はぶっちゃけ実戦経験も鍛錬も高水準で、星辰光（アステリズム）は癖があるが、それも使いこなせてる……慣れてちゃいかんだろコレ」
　カズヒ姉さんの星辰光って具体的に何なんだよ先生。
　なに？　そんなにデメリットがでかいとかか？　星辰光は出力差が大きいと内臓とか骨格がゴリゴリ変わって血反吐吐くこともあるけどさぁ？
「必要な時以外使ってませんよ先生。……では、部長と同じような形になると？」
　カズヒ姉さんがそう返すと、先生は首を横に振った。
「いや、お前の方向性は神器の効果的運用だ。なんで、此処に行ってもらう」
　そう言って、先生は地図を一枚カズヒ姉さんに渡した。
「今のお前に問題点をつけるなら、剣豪（アーム・ザ・リッパー）の腕で使う為に異界（スペイス・カーゴ）の蔵に入れてる武装の性能だ。ＲＰＧ―７やＡＫ―４７とか言った東側の安物ばっかりじゃ、いくら大量に格納して強化しても限度がある」
　そう告げてから、先生は周りを見渡した。
「他の連中に説明すると、異界の蔵はちょっとした輸送船レベルの容量を持つ四次元ポケット擬きで、剣豪の腕は手に持った武器の性能を底上げする神器だ。それこそ旧式かつ安物でも異形に通用するだろ

うし、魔術を併用してＲＰＧの弾頭を一斉発射すれば最上級も足止め可能だろうが……その程度だとそこまでだな」
　そうはっきり言ってから、先生はカズヒ姉さんに向き直る。
　言いたいことを悟ったのか、カズヒ姉さんは肩をすくめた。
「ゲリラ時代はこれと魔術回路を併用して、横暴敷いてる連中から武器弾薬食料薬品をごっそり盗んでは、こっそりゲリラの本部に贈り物してたのよ。ちょうどいいからあまりを使ってる感じね」
「あ あ ～。近 年 ま で 紛 争 地 帯 だ っ た 小 国 に 伝 わ る足長革命おじさん（ジェド・マロース・リヴォリャーツィヤ）ってやっぱお前か」
「……一応女として、おじさん扱いは思うところがあったのよね」
　……なんかすっごい異名を持ってらっしゃる!?
「い、意味が分からねえ。なんでその読みでそうなるの？」
「ジェド・マロースはロシア版のサンタクロースみたいな方だと聞いたことがあります。でもリヴぉりゃーっぃや？」
「リヴォリャーツィヤはロシア語で革命を意味します。つまり革命の為にプレゼントを送ってくれる人といった感じですね」
　と、イッセーとアーシアにシャルロットが補足説明をしてくれる。
　そういえば、ナポレオンすら当時のロシアを制圧することはできなかったんだよなぁ。極寒の大地すげえ。
「ま、そういうことだ。……っと、漸く着いたみたいだな」
「……なるほど、カズヒ殿と肩を並べるには未熟な者が多いようですね」
　その先生の声と同じタイミングで、失礼な声に影が俺達にかぶさった。
　ふと振り仰ぐとそこには―
『全く、まさか悪魔の領土でお前に会うとは思わなかったぞ、アザゼル』
『久しぶりっす、姐御ぉ！』
　―なんかでかいドラゴンが二頭いた。
「お姉さま！　お声をかけていただきありがとうございます!!」
　後カズホまでいるのはどういうことだぁあああ!?

魔性変革編　第八話　特訓、頑張ります！

和地Ｓｉｄｅ

俺達が呆気に取られていると、でっかいドラゴンの内、蒼い方が舞い降りながら小さくなる。
上に乗っていたカズホともう一人が飛び降りるのに合わせて、そいつも青い髪の人間型になった着地した。
「先日ぶりですお姉さま。汚名を灌ぐべく、鍛え直しと教導の支援をさせていただきます」
「姐御！　和平会談ではなんか変な奴に変なこと言われたって聞いてますぜ！　大変だったすねぇ！　俺がいたらぶっ飛ばしやったのに残念でさぁ！」
半ば食いつく勢いで、カズホとドラゴンだった奴がカズヒ姉さんに声をかけるけど、その首根っこを眼鏡をかけた最後の一人がひっつかんで止めた。
「お待ちなさい。感極まる気持ちは分かりますが、それを理由に礼を失していいという狼藉はカズヒ殿の沽券に係わります。泥を塗っていいのは自分の顔だけにしなさい」
お、おぉう。
これまたアグレッシブというかエキセントリックというかルナティックというか。
俺が最適な言葉を思いつかないでいると、その眼鏡がふと視線をあらぬところに向ける。
強化魔術で視力を強化する先には、城の家事業務を手伝っていたメリードが。
作業の手は止めず、しかし確かに視線をぶつけ―
「……ふっ」

―眼鏡が会釈するのに合わせて、こちらも静かな笑みを浮かべながら会釈した。
なるほど、敬語を使うのと実際に敬うのは全く別という御仁ですかぁ。目と目で通じ合っちゃいましたかぁ。
「僭越ながら自己紹介を。私はプルガトリオ機関のホテル部隊に属するディック・ドーマク。隣のコレは、ロメオ部隊に属するラトス・スプライトです」
「おう！　ラトスってーんだ。ちなみにホテル部隊は人間以外の異形も多いプルガトリオ機関での治療衛生部隊で、ロメオ部隊はドラゴン専門部隊だからよろしくな！」
目を伏せて強引にラトスの頭も下げながら、目が名の人のディックとやらが自己紹介。それに続いてラトスの方も片手をあげて軽く挨拶する。
「和平会談で会ったばかりですが、デュナミス聖騎士団のカズホ・ベルジュヤナです。私達三名、教会側からカズヒお姉さまからの協力要請で、コーチとして参加させていただきます」
最後にカズホが笑顔で一礼するけど、ちょっと待った。
情報量が多くてちょっとついていけない。異形に対応できる治療部隊とか、ドラゴン部隊とかちょっと待って。
異形を治療できる回復能力って貴重ってもんじゃなかっただろ？
あとドラゴンって基本アンチキリストの象徴だろ？
専門部隊が結成されるほどいるのかよ!?
「へー。じゃ、あんたもアーシアみたいな神器を持ってるのか？」
「というよりは、私がカズヒ殿と親交が深い中で唯一聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）を持っていることからの要請です。ホテル部隊全体としては、元七十二柱のフェニックス家のような癒しの特性を持つ特異体質や、禁手によって異形の治療能力を得た神器保有者が主体ですね」
イッセーにそう答えるディック・ドーマクは、ちらりとアーシアを見る。
「……話に聞く限り、聖母の微笑を保有していることを差し引いても優れた回復速度と治癒範囲を持つアーシア嬢には興味がありました。

管轄外とはいえ彼女を保護できなかった負い目もありますし、可能な限りこちらが持つノウハウをお教えしたいと思っています」
「あ、ありがとうございます！　私も頑張ってお勉強します！」
ふむ、この調子ならそこまで酷いことにはならないか？
なんかキッツい雰囲気があるけど、意味もなく酷いことをする人ではなさそうだしな。
イッセーもなんとなくそう悟ってそうだけど、イケメンということでアーシアが粉掛けられないか心配らしい。警戒心が結構見えてる。
何故そんな心配をするレベルなんだが。べた惚れなことぐらい見て分かるだろうに。
そんなことを思っていると、そんなイッセーの背中をラトスがバンバンと叩く。
「あんたが赤龍帝だったよな！　俺はあんたのスパークリング相手だ！　ついでに二天龍と訓練すりゃぁ俺も強くなれそうだし、よろしく頼むぜ！」
ノリがいいけど、たぶん馴れ馴れしく対応しすぎるタイプっぽいな。
ま、ドラゴンは他の雄が嫌いっていう割にはフレンドリーだし……大丈夫か？
「お、おう。でもプルガトリオ機関って、ドラゴン専門部隊もいるんだな」
「ま、アンチキリストの象徴だから意外だよな？　俺も色々あってドラゴンだって自覚がなかったからショックだし、育ての親が俺がドラゴンだって気付いて逃げ出したこともあるから、ドラゴン仲間で部隊が出来るってのには意外だったぜ」
さらりとキッツい過去を言うな。
正直ツッコミを入れるべきか真剣に悩んだけど、そのタイミングでっかいままの赤いドラゴンが声をかけた。
『……で、だ。そろそろ俺も名乗っていいだろうか、リアス嬢にアザゼル』
「あ、ごめんなさいタンニーン。イッセー、みんなにも紹介するべき

ね。彼はかつて五大龍王が六大龍王と呼ばれていた時の一角で、転生悪魔になり最上級に至った伝説のドラゴンなの」
「魔聖龍（ブレイズ・ミーティア・ドラゴン）、タンニーン。聖書に記されしドラゴンをタンニーンっていうんだが、こいつがそれでな」
と、部長と先生がそう説明する。
……また凄いのが来たな。
確か匙の神器には、ヴリトラの魂の一部が封印されてて？　総督は隠し玉として、ファーブニルを封印した人工神器を持ってる。で、今回コーチとして悪魔になった同格のタンニーンさんが来訪、と。
「……龍王と続けざまに三人も会えましたの！　この調子なら生きてる間に残りの三人とも会えそうですのー！」
と、テンションが上がったヒマリがそんな希望的観測を告げた。
その反応に、先生とタンニーンさんが苦笑いを浮かべている。
ん、何がどうした？
「どうだろうかねぇ？　他の連中は隠居決め込むか行方知れずだからな」
『ああ、特にミドガルズオルムは難しいだろう。あいつは常に深海で眠ってるから、下手するとあと数百年は寝たままかもしれんぞ？』
『……というより、ティアマットは勘弁してくれ。俺はあいつとだけは会いたくないんだ』
先生にタンニーンさんはともかく、ドライグがあえて声を出すとは、何があった？
痴情のもつれ？　それとも二天龍同士の闘いに巻き込んで恨みを買ってるとかか？
ま、プライベートに迂闊に深入りするわけにはいかないか。介入するならそれなりに覚悟を決めないとな。
と、そんな感じでちょっと空気が緩んだ時、先生がパンパンと手を鳴らした。
「ま、積もる話はまた後程な。……イッセー、ゼノヴィア、あとアーシアはもうさらりと言われたが、こいつらがお前らのコーチになる」
え、どういうことだ？

「まずはゼノヴィア、お前はカズホとマンツーマンで、デュランダルの扱いを磨くと同時にもう一本の聖剣の練習も並行で行う。カズホは聖剣の制御を教えつつ、デュランダルと模擬戦を行うことで自分を高めたいんだったな？」
　先生にそう振られ、カズホは真剣な表情で胸に手を当てる。
「はい。先日の会談では盛大に不覚を取りました。デュナミス聖騎士団として今後は禍の団との大規模戦闘に関与することがまず間違いない以上、このままではいけないと猛省しております。……デュランダルを伸ばしつつ、私自身も鍛え直すつもりです」
　ガチの目だ。
　よっぽど、前回停止したのが屈辱だったらしい。カズヒ姉さんやリュシオンに負担を背負わせたのが本気で申し訳なかったようだ。
　まあ、あれ凌げたのは魔王クラスでもない限りは何かしらの例外とか特例だけだからなぁ。部長もイッセーの手を握っていたからこそのところがあったし、ゼノヴィアに至っては「慣れた停止感覚だったから弾き飛ばした」だし。
　まあ、だから止まってしまったことを仕方ないで流すのもあれか。
　そういう精神で行った方がいいこともあるだろうし、応援した方がいいんだろうな。
「あまり無理しても、自分を痛めつけるだけだからほどほどにね？ゼノヴィアも、カズホを変な方向でたきつけない程度に高め合ってちょうだい」
　カズヒ姉さんがそう言うと、ゼノヴィアは機嫌よさそうに頷いた。
「ふむ、かのデュナミス聖騎士団の実力者としのぎを削り合えるのは僥倖だ。胸を借りると言った方がいいのだろうか？」
「いえいえ。かのデュランダルの使い手と鍛え合うのですから、胸を借りるつもりで行くのは私の方でしょう」
　そんな風に笑みを交わし合っている二人から、先生はアーシアに視線を向ける。
「次にアーシア。ぶっちゃけお前の神器は回復力という点じゃあ禁手になる必要もねえ。ただし、問題点が一つある」

そう言うと、先生は指を一本立てる。
「それは距離だ。瞬時に回復できるとはいえ、負傷した直後の相手を回復させるのに負傷した地点まで行くってのは、当然だが負傷させた相手に狙われるリスクがある。……ただし、聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）は接触せずに回復することが可能だ。カズヒができる奴に心当たりがあるといっていて、それがお前だってことでいいんだな？」
そう告げてから、先生はディック・ドーマクに尋ねるように視線を向ける。
それに対して、ドーマクは気負うことなく頷いた。
「ええ。衛生兵である以上は負傷者に接触してある程度避難させる事もありますが、継続して戦闘可能なら遠隔回復、早急な要救護者が複数いる時は範囲回復を行ってます。同神器保有者が遺してきたノウハウも参照しているので、一通りは教えられるかと」
当たり前のようにはっきりと言っているからこそ、それが本当だと確信できる。
先生もそう思ったのか、満足げに頷いた。
「最もアーシアは優しすぎるところがあるからな。範囲回復での敵味方識別はまず無理だろうから、そこは飛ばしといて構わないぜ？」
「……ふむ。戦闘中に敵を回復しかねないというのはいただけませんね。出来ればその辺りを割り切れるように荒療治もしたいのですが？」
「ひぅっ!?」
なんかぎょろりと見られて、アーシアが盛大に肩を震わせる。
当然だけどグレモリー眷属、総出で怒気を見せてきた。
「おい！　アーシアの優しさを否定するなよな！　全然必要ないから、むしろ俺達が必要とさせないからな！」
「全くね。不必要だからしなくていいわ。グレモリーの名に懸けて命令するわよ？」
イッセーと部長が盛大にすごむが、ドーマクは盛大にため息をついた。
「戦場という非情な世界において、優しさとは無条件ではいけない時

があるのですがね。……まあ、カズヒ殿からも「甘ったれてるけどそれを良しとしてる集団だから」とは言付かっていますから、此処はよしておきましょう」
「手間をかけるわね。個人的にはどうかと思うけれど、それをフォローする気満々の連中がいるなら遠隔回復との使い分けで行けるでしょう」
あ、カズヒ姉さん的にはそこを問題視するのは変わってないのな。
「そこはちゃんと理解して欲しかったんだけどな」
「そっくりそのまま返すわ。第一、親友だろうと家族だろうと、十割全部同じ思想ってわけでもないでしょう？」
イッセーにそう返すカズヒ姉さんだけど、なんか遠くを見てる気がする。
……ストリートチルドレンって聞いたけど、家族に捨てられたとかなのか？　生まれた時からとか言ってたような気がするけど、世の中たまに赤ん坊の頃の思い出を覚えてる人がいるらしいからそれか・
俺がちょっと首を傾げていると、アザゼル先生がゴホンと咳払いをする。
「で、イッセー。お前は自力の禁手化が目標だ。同時にシャルロットにも指示を出す」
「というと？」
シャルロットが首を傾げると、アザゼル先生は指を一本立てた。
「お前らの欠点は二人羽居りでないと戦力として換算しづらいことだ。だからイッセーにはシャルロット無しでも禁手に慣れるようにするのが最善で、それができればシャルロットの禁手もより効果を高めることができる」
そこは確かに。
今の段階では神滅具が二つがかりであるけど禁手としては１，５ってところだろうからな。
「まずシャルロット。お前さん達サーヴァントは、終了した状態から全盛期で呼び出される都合上、身体能力での強化は自力じゃほぼ不可能。だからこそお前はここに行って、戦闘技術の方を覚えることに徹

底しろ。そういう意味じゃあ一番簡単にメニューが組めたわけだがな」
そう言って先生は一枚の紙を渡す。
それを見たシャルロットの、なんというかすっごい「なにこれ？」を体現した表情はなんだ？
「……あの、それはいいんですがこの「市販品戦闘研究会」とは一体？」
……あ～。
そこか～。確かに最適解だわ～。最適解だけどそこ勧めるか～。
「あ、そこはカンフー映画とかに感銘を受けて「その辺に転がっている者で異形を倒す技術を確立する」を目指している神の子（グリゴリ）を見張（ゴリ）る者の研究グループですの」
「……趣味人多すぎません？」
ヒマリにマジ返しするシャルロットの意見が正論すぎる。
本当にマジで研究してるからな。その為に結構金も回ってるからな。
しかも意外と成果出てるから、職業を偽って潜入する奴とかはマジで講習に行かされる時とかあるから凄いよなぁ。色々な意味で。
「お前はサーヴァントとしての都合上、包丁だけは確実に用意できるからな。研究会において包丁は「大抵の家に一本はあり、かつ殺傷性も高い」ことから定番の研究ネタだ。そこでしっかり技術を磨いてこい」
そう自信満々に宣言してから、今度はイッセーに振り返った。
「そしてお前はさっき言った通りだが、まあ禁手なんてそう簡単にはなれねえから、並行して地力を鍛える感じだな。そしてその方法だが―」
そう言ってから、先生はイッセーの両肩に手を置いた。
「ラトスと一緒にタンニーンにしごかれろ。そして一日の扱きが終わったら、ラトスと組手だ」
「……はい？」
イッセーが盛大に首を傾げ、その肩にラトス・スプライトが手を回す。

「ドラゴンの修行ってのは基本的に実践あるのみって奴でな。ま、戦闘勘や度胸に判断力はつけるだろうが、そこだけだと生かせねえ点があるってもんだ」
そう言って、にやりと笑った。
「人間という存在が代々数千年積み重ねた各種戦闘の為の技術、俺も全部ゲットしてるわけじゃあねえが……ま、基礎は叩き込めるだけ叩き込んでやるよ」
あ、コレ鬼教官コースだ。
『うむ、盛大に苛め抜いてやろう。ドライグの宿主を鍛えるとは思ってなかったが、厳しいが耐えて見せろ』
『ある程度は加減してくれよぉ？　相棒は歴代で最も才能がないし、荒事慣れしてないんだ。お前が本気を出せばその時点でお陀仏だろうしな』
というか凄いこと言ってる。
「イッセー、死ぬなよ？」
「敬礼ですの、ビシィッ！」
「縁起でもねえよ!?」
俺とヒマリの態度にそんな文句が飛ぶけど、俺は少なくともマジで行ってるからな？
あ、ラトスが龍の姿に戻って、タンニーンさんがイッセーを鷲掴みだ。
『リアス嬢、向こうの山を借りていいだろうか？』
「構わないわ。誰もいないし名前も無いから好きに使ってちょうだい」
「……え、ちょっと待って？」
タンニーンさんとリアス部長の会話にカズヒ姉さんが突っ込むけど、なんか二人とも聞いてない。
既にタンニーンさんは飛び立っており、イッセーは泣いている。
「うぁあああああん！　部長ぅううううう助けてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?」
「気張りなさいイッセー！　コカビエルやヴァーリ・ルシファーとの

死闘に比べたら。たかが山籠もりなんて大したことないわ！」
……ま、まあ確かにそうなんだろうけど―
「いやサバイバル技術も原生生物の知識もないのに山籠もりなんてできるわけないでしょ！　ちょ、ラトス待ちなさい、サバイバルキットとか缶詰とか出すから、それ持って行って！」
『あいよー姐御！　蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）を運送に使うたぁ流石だぜ！』
―やっぱり、カズヒ姉さんは厳しいけど優しいぜ。
「頑張れイッセー！　後で差し入れぐらいは送ってやる！」
「うわぁあああああん!!　鬼が多すぎるよぉおおおおおお!!」
俺は涙をこぼしながら、ドラゴンにドナドナされるイッセーに手を振るほかなかった。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そして、誰もが鍛錬を積み重ねることになる。
そのうちの一人であるゼノヴィアは、今真っ向から戦士としての力量で格上である相手と模擬戦をすることになった。
「行くぞ！　これが、私の、全身全霊だぁあああ！」
振り下ろされるはデュランダル。それを絶大な力を放つことに意識を向けて、最大出力で振り下ろす。
直撃すれば最上級悪魔すら深手を負うだろうその斬撃。真っ向から受ければ、人間では星辰奏者であっても即死は免れない。
冗談でも、模擬戦で放っていい物ではないのだが―
「まだまだです！」
―対峙する相手もまた、ただものではだんじてなかった。
カズホ・ベルジュヤナはその斬撃に対して斜めになるように結界を

具現化。更に手に持つ剣から斬撃を放つと、ゼノヴィアの一撃を逸らしにかかる。
放つオーラにより起動が若干ずれたゼノヴィアの斬撃は、そのまま傾斜装甲の要領で展開された結界によって、逸れていく。
それを理解したゼノヴィアは、デュランダルを片手に警戒。攻撃の余波で視界が塞がれる中、それでも呼吸を整えながら、耳を澄ませ殺気を読むことでカズホの位置を探る。
そして、ほんの僅かな攻撃の意識と音に、瞬時に反応した。
「―セイッ！」
振るう一撃は盛大な音を立て、襲い掛かる攻撃を吹き飛ばし―
「もらいました！」
「なんだと!?」
―ゼノヴィアの真上から、カズホの本命の一撃が襲い掛かる。
そして同時に双方の攻撃は寸止めされる。
カズホの剣はゼノヴィアの目の前で止まり、ゼノヴィアの反撃の一撃も、カズホの胴を横なぎにできる寸前で止めていた。
これは模擬戦であり、本当に殺し合っているわけではない。お互いがそれをわきまえているからこそ、命の奪い合いにはならなかった。
だが同時に、このままいけば相打ちになっていただろう戦いでもある。
「……全く。流石は準神滅具の担い手だ。星辰奏者でもあるというからには、今の私ではこれが限界か」
「煽てないでください。転生悪魔になって強化されているとはいえ、悪魔である以上聖剣には弱いでしょう？　其のディスアドバンテージがある以上、得物で負けていても引き分けでなら十分そちらが上ですよ」
そうお互いを褒め称えながら、ゼノヴィアは降り立つカズホと共に休憩に向かう。
その道を歩きながら、ゼノヴィアはカズホが持っている剣に視線を向けた。
「しかし、デュランダルにあやかりエクスカリバーに近い性質を持つ

準神滅具か。その担い手と模擬戦ができるというのは、かつてエクスカリバーも使っていたデュランダルの担い手としては光栄に思うべきだろうか？」
「それはこちらのセリフです。デュランダルそのものの担い手であり、またエクスカリバーも使っていた貴方と剣を交えられる私こそが光栄に思うべきですよ」
そう返すカズホに、ゼノヴィアは首を横に振る。
「何を言う、殉教四聖剣（デュリン・カリバー）といえば、敬虔な信徒である悪魔祓（エクソシスト）いなら誰もが憧れる神器だろう？　宿主になることはもちろん、その礎になりたいと願う者も多いからね」
そう言いながら、ゼノヴィアは消えゆく聖なる鎧騎士達の残骸を見ながらカズホの剣に憧憬すら向けて言い切った。
そう、カズホの手に握られる剣こそが、彼女が持つ準神滅具。殉教四聖剣（デュリン・カリバー）。四人の聖人や聖母の聖遺物が柄に込められたといわれるデュランダルのように、殉教者の聖遺物が宿る封印系神器に近い特性を持つ、聖なる準神滅具。
性能はデュランダルにこそ劣るが、エクスカリバーが相手であっても七つに分かれた状態では勝てないとされる、極めて高性能の聖剣であり、更に四種の能力を持つ、デュランダルと真なるエクスカリバーを足して三で割った程度の性能を持つ聖剣型神器。
先ほど見せただけでも飛翔能力、聖なる騎士団の具現化、結界発生といった元を使っており、更に今はかすり傷を治癒の加護で癒している。
この四種の加護と高い聖剣としての性能は準神滅具の一角を名付けられるだけの代物。それゆえに神器を知る信徒、それも戦闘を基本とする悪魔祓いからすれば垂涎の神器だ。
同時期に確認されたのは同時期に四本。その一人に選ばれるというのは、数多くの信徒からやっかみ交じりで羨望の的になるだろう。
最も、デュランダルの使い手に選ばれたゼノヴィアも対外ではあるが。
「しかしデュランダルの扱いにもだいぶ慣れた。周囲を破壊しても問

題ない場所を部長が提供してくださったおかげだね」
「全くです。私達クラスとなると全力で動くと相応の被害が生まれますからね。こればっかりは土地がありまあっている冥界側のアドバンテージです」
そう言いながら二人が振り返る先、そこには巨大なクレーターが近くの河から水を引き込んで、湖となる下地を作り出している。
デュランダルと準神滅具の真っ向からの激突。それが引き起こした破壊の後としては当然と言ってもいい、絶大な模擬戦の跡であった。
これだけの破壊力を発揮できるものですら、咄嗟の迎撃を叩き込まなければ停止される。それが、前哨戦としか言いようがない戦いで行われたのだ。
その意味を強くかみしめ、二人はそれぞれ強くなることを誓う。
一人は恋する男と仕える主の為。
一人は慕う女性と信仰の祖の為。
「では、休憩を終えたらもう片方の方に行きましょうか」
「ああ。そちらもしっかりと使いこなさなければいけないからね」
強くなろうという、強い決意の下動き出す。

そして同じように、強くなろうとする者も指導を受ける。
「ではアーシア・アルジェント。まず我々のような者が強く心掛けなければならないことをお教えしましょう」
眼鏡を光らせ、ディック・ドーマクはアーシアを見据える。
それに若干気圧されながらも、アーシアは背を伸ばして向き直った。
その対応に若干目を細めながら、ディックはアーシアに心構えとするべきものを告げる。

「我々、戦闘中の回復を行う者にとって、戦闘とは自衛や治療対象を狙った攻撃以外では極限まで避けなければなりません。可能ならばそれも、他の戦闘が可能な者に擦り付けることも必要になります」
そこまで一息で告げ、ディックはアーシアを値踏みするように見据えた。
「何故か分かりますか？　教えてない以上間違えるのは当然ですから、とりあえず考えて答えてみてください」
その言葉に、アーシアは素直に考える。
そして、比較的早く答えが出た。
「回復することでしか、お役に立てないからでしょうか？」
それは本心からの答えだったが、ディックは首を横に振った。
「違います」
はっきりと言われ、アーシアは肩を落とした。
「そうですよね。ディックさんは体つきもしっかりしてますし、回復以外でもお役に立てますよね……」
アーシアがそう考えたのは、自分が回復しかできないと思っていることが原因だろう。
アーシア・アルジェントはグレモリー眷属全員から心優しいと言われるが、それゆえに自分が仲間達が傷ついているときに回復ぐらいしかできないことに負い目を持っている節がある。
だがしかし、ディック・ドーマクからすれば逆である。
彼はただ顔を向けて視線を合わせるのではなく、しゃがみ込んで平行にアーシアの顔を見て、はっきりと告げる。
「回復担当が傷つき倒れるようなことになれば、いったい誰が死に瀕する負傷者を治すというのですか？」
「あ……」
「我々治療する側は、治療する側であるからこそ、可能な限りされる側にならないようにしなければなりません。だからこその自衛であり戦闘回避であり、むしろ我々が直接戦わないようにすることこそが、回復担当以外の責務でしょう。我々の価値を我らが卑下してはいけないのです」

そして立ち上がり、ディックは悪魔の駒を模したチェス一式に手を触れる。
駒の一つを弄びながら、彼は目を細めた。
「こと悪魔同士が戦うレーティングゲームにおいて、回復担当とはいることそのものが本来存在しない。貴女という存在は、単純な殺傷力の高い眷属を超える、最大のアドバンテージと言えるでしょう」
そして、そこでだからこそと彼は一息を溜める。
「必然、レーティングゲームはもとより重傷を負うだけで足を引っ張るお荷物となる実戦においてこそ、貴方という存在が機能することは最大の持ち味になります。士気を高める者や潤滑剤のような信条的要素を取り除いて考えれば、貴方という存在はレーティングゲームでは負ければ終わる王の次、実戦においては最も優先して安全を確保しなければならない存在であり、敵からすれば優先的に倒したい存在です」
そして、ディックは目を閉じながらもはっきりと告げた。
「カズヒ殿もかつて似たこと仰ったと聞いておりますが、優しさと甘さは違います。人に嫌がられないことだけをするのは甘さ。例え人から嫌悪されようと、心を鬼にしてしなければならないことをすることこそが優しいということでしょう」
「……正直、できる自信がありません。誰かが傷ついて苦しんでいるのに、それを放っておくことなんて、私には……」
アーシアは正直にそう告げるが、あえてディックはそれに対して嫌悪感を見せようとはしなかった。
「きちんと自覚しているならば及第点でしょう。自分が甘さを捨てられないのなら、それを補ってなお仲間に貢献できるだけの能力を得なければいけません。でなければ、己だけではなく仲間の心や命を奪い取られます」
そう言って、ディックは何故か数枚の映像記録媒体とそれを映し出す装置を見せる。
「その為には、総督が用意したメニューだけでは足りないでしょう。まず自らが脅威を避け命を守れるよう、余計な甘さを抱えたまま、過

酷な戦場で救うべき命を危険にさらさぬよう、可能な限り教授しましょう」
その言葉に、アーシアは真っ直ぐに前を向く。
アーシア・アルジェントは心優しく、しかし甘さという領域に至っている。
それを捨て去ることなどできず、むしろ捨てたくないと仲間達も思ってくれている。だからこそ、それに甘えてはいけない。
少なくとも、その甘さを抱えたうえでどうにかできるよう努力してくれているディックに答えられるようになるべきだと思うから。
「よろしくお願いします、ディック先生！」
その気持ちを言葉に乗せ、アーシアは決意を新たにする。
それをきちんと受け止めたのか、機器を操作するディックに口元は僅かに弧を描いていた。
「では、まずは遠隔回復を行った者の記録映像を見ることから始め、そのあと実戦練習です。百聞は一見に如かず、人はどうしても身をもって経験しないと学べぬ者です。私の指導は厳しいですので、腹はくくっておきましょう」
「はい、先生！」
……アーシアは知らない。
プルガトリオ機関ホテル部隊は、神の祝福を受けてない者達を治癒できるという稀少特性が多い都合上、最も損耗されないよう、護衛班の用意だけでなく回復担当そのものに厳しい訓練で危機に対処する技量を叩き込むことを。
そしてディック・ドーマクという男は、常に集団に守られるというデメリットを必要としない、単独で最上級悪魔クラスが出張る戦場でも安全を確保できる、過酷な訓練と経験を積んだ、トップクラスの生存能力を持つ男であることを。
アーシアの性格をある程度はプロファイリングしたうえで、甘さを抱えたまま厳しい現実を乗り越えられるように調整したディック・ドーマクのメニューは、厳しさが心身どころか自他にとっても厳しいことを。

実戦練習の為、動けないように拘束した状態で自ら１０ｍ以上離れたところで腕をへし折ったディックを遠隔回復で治療させるという、双方の心身に多大な負担がかかるトレーニングメニューが第一弾となることを。

並行して「味方の足を引っ張る甘さを持つのなら、可能な限り自分で全部背負わなければならない」と、オフェンスメンバー並みのトレーニングメニューが待っていることを、アーシアはまだ知らない。

魔性変革編　第九話　特訓、波乱です！

和地Ｓｉｄｅ

俺の場合、トレーニング内容に関しては場所を気にせずやることができる。
最低限練習するだけなら、それこそアパートの一室でやることもできるのだ。
なのでまあ、ある意味で俺は一番暇ができると言ってもいい。
そんなわけで、いろんな場所でトレーニングをしているんだが――
「ふっ……ふっ……ふっ……！」
――トレーニングルームで、俺は小猫のトレーニングを見て眉をしかめる。
いや、トレーニングを一生懸命しているのはいい。それは必要なことだと思う。
ただ、明らかにやりすぎとしか思えない。
過剰なトレーニングははっきり言えば逆効果だ。世の中には限界とか限度というものがあり、それは超えないようにしないと逆効果にしかならないのが基本原則。そしてトレーニングというのはその負担や消耗を休息や睡眠、飲食で回復させるインターバルが必要不可欠。そしてこれには個人差というものがどうしてもある。
努力は一度に積み重ねられる量に限界がある。どこまで行っても特訓というのは、自然じゃない状態に置くことで自然な状態以上の成長を強制することだ。それを踏まえれば、休むべき時にきちんと休むことも努力の内だ。
これはちょっと、逆効果にしかならないだろう。
ただ――
「おーい。本気で強くなりたいなら、休息をきちんと取らないとだ――」

―ギロりと睨まれたよ。
なんていうか鬼気迫ってるっていうか、追いつめられている人間の表情だな、これ。
「……黙っていてください。私は、強くならないといけないんです」
そう言い捨てて、そのままこっちを無視して黙々とトレーニングを続けている。
ったく。気合と根性で無理すれば問題がどうにかできるなら、世の中もうちょっと簡単で分かりやすくできてるだろうに。
肉体的に個人差があるように、精神にだって個人差がある。そして精神っていうのがいわゆるソフトの類である以上、ハードという限界を凌駕することは普通出来ない。そういうことができるのは、一人握りの例外とかそういう類だろう。基本気合や根性なんてのは、性能の低下を防ぐことが限界であり、性能限界を突破するようなものじゃない。
自分がそうだという明確な確信があって実証できるならともかく、そうでないのならちゃんとした理屈に則るべきだ。法則っていうのは、きちんと理解して利用できる奴にこそ恩恵を与える者だ。
ただ意地を張ってそこで止まっているままだと意味がない。先生が何を求めているのかは分かってないが、それが嫌だっていうなら「ならどうすれば」を考えないといけないんだけどなぁ。
ま、そう簡単にいかないのが人って奴か。付き合いの浅い俺が言っても無理だろうし、ちょっと部長に頼んで説得を―
「……っ」
―と思ったら倒れたぁあああああ!?
ああもう、言わんこっちゃないんだからなぁ、もう!!

「……そんなわけなんだけどさぁ、カズヒ姉さんにはなんか対案にできる物……ない？」

『そこで私を即座に相談相手に選ぶ当たり、慕われてると喜ぶべきなのかしらね』
ため息交じりの返答に、俺がため息をつきたくなった。
いや、グレモリー眷属は基本的に小猫側だから相談するまでもない。あるならそっちに誘導してるだろう。あるのに誘導してないのなら、これを機に受け入れてほしいってことなんだろうな。
そしてヒマリはこういう時無理だ。一緒に心配してくれるのはそれはそれでありがたいけど、具体的な解決には向いてない。解決策を見つけてから協力を要請するのなら、あいつは全力で協力してくれるだろうからそっちにするべきだ。
そもそも事情を知らない以上、その辺りから取っかかるのは不可能だろう。部長達が言わない以上、相応な事情があるから深入りするのも気が引ける。
なので相談相手は自然と限られる。
幸いリーネスがカズヒ姉さんの補佐もしてくれているので、相談できる相手が二人同時にいるのならまとめて相談するべきだ。
そんなわけで、カズヒ姉さん向けの装備のテストを行っている二人の実験ルームに通信を繋げている。
『困ったものねぇ。総督は基本、本来ある物を削ってまで上乗せするより、本来ある物を伸ばして強くなることを良しとする人だもの』
そう頬に手を当ててため息をつくリーネスの隣で、カズヒ姉さんが水分を補給してた。
『……プハッ。まあそういうスタンスから見て「他を用意する暇があるなら」ってレベルなんでしょうね。朱乃も小猫も、つまりイッセー達みたいなスペシャルな持ち味を持っていて、それをあえて封じているってところかしら？』
『そのようねぇ。まあ、朱乃さんは堕天使としてスペシャルだから伸ばしたくはなるわねぇ。なら小猫もスペシャルな何かを持っているわけねぇ。……余ってるならぁ、頂戴？』
『ええどうぞ。……で、そうなると確かに伸ばしたくはなるでしょうね。コーチが担当分野で優れた才能を見つけたのなら、伸ばしたくな

るのは当然。当人もその分野で成長することを望んでいるなら、そう指摘したくなるのはおかしなことでもないわね』
……さらりと間接キスを平然としないでくれ。
おぅふ。我ながらクッソ小物じみた羨ましさを感じているじゃないか。
「……おバカな嫉妬心を燃やしている暇があるのなら、とりあえず水分を補充してください。休憩中に水分はきっちり補給した方が効果的だと分かっておられるでしょう？」
メリードに後ろから指摘されたので、俺はスポーツドリンクを飲んで嫉妬心を流し込む。
そんな俺の嫉妬心を知ってか知らずか、リーネスはそのまま少し考えこんだ。
『とはいえ、深入りされたくない事情でしょうし、私達からやるのなら色々考えるべきでしょうねぇ。とりあえず、まずはリアス部長辺りに相談するべきだわぁ』
『そうね。付き合いが浅い私達だと、どこまで踏み込んでいいか判断できないでしょう。星辰奏者の適性があれば施術を受けるという手もあるけれど、総督のスタンスからすれば「その前に克服」か「どっちにしても克服」になるでしょうしね』
リーネスに続いてそう言ってから、カズヒ姉さんは画面越しに俺を真っ直ぐ見つめた。
……照れる場合じゃないな。これは真剣な問いかけが込められている気がする。
『和地、相談には二種類あるわ。既に自分の中で答えが出ているから背中を押す以外の意見を欲してない相談と、答えのあるなしに関わらずよりよい方法を求める為の相談が』
そう前置きして、カズヒ姉さんは真っ直ぐに、体ごと向き直って俺に告げる。
『私に惚れたというのなら、貴方は後者ができるようになりなさい。相談の返答がどんなものであれ、それを受け止めて自分なりにより良い答えを出そうとする努力を、忘れちゃダメ。そして―』

「―抱え込むことで毒に変わる前に、相談できる相手を作りなさい……か」
その意味がよく分からないまま、丸一日経ってしまった。
まあとにかく、報連相は大事な物だとわきまえておくべきだろう。
そういうことができるように生きろってことだとも思う。同時にそれ以外にも何かしらの意味や強い感情が込められていた気もする。
リーネスがカズヒ姉さんを見ている視線も、なんというか痛ましい的な感じだったしな。どうも大変なことになってるのだろう。
まあそうなると、色々と相談をするべき相手を探すべきだろうと俺は結論。
ちょうどトレーニングメニューも後半に到達したので、俺はその長距離行軍の練習を行うついでに、イッセーのところに行ってみることにした。
グレモリー眷属歴が浅いイッセーなら、比較的俺に近い目線で語れるだろう。その上で深入りするかどうかを決めて、リアス部長に相談って流れだろうな。
流れなんだろう、け、ど。
「……さっきからドッカンバッコンでっかい音ばかりしてるな、オイ」
というか、明らかに爆発が起きている。
……イッセー、死ぬんじゃないか？　むしろなんで生きてるんだ？
俺がそんな感じで現場の近くに降り立つと―
「おっぱいがおっぱいがおっぱいがいっぱいだぁあああああ！」
―なんか、ラリってるんじゃねえかと言わん表情で、攻撃を的確に回避してるイッセーがいた。
後水を利用して火球も相殺している時がある。
え、なにこれ怖い。
なんであんな精神状態であんな機敏かつ正確に動けるんだよ。完

壁にドラッグ決めてるだろって表情だぞ？
あ、ランナーズハイとかそういった常態か。そもそもそうならないように自分を鍛えて維持した方が、安定性があっていいと思うけどなぁ。
「……お、あんたは確か九成だったな」
と、そこで汗を拭いていたラトスが、にこやかに話しかけてくる。
というか気安く肩を回し来る当たり、人懐っこいタイプなんだろう。
「姐御に一目惚れして告白するたぁやるじゃねえか。俺やディックじゃ考えられねえことするねぇ。ま、姐御に胸を預けてもらえるよう頑張るこった！」
「それは当然精進するさ。惚れた女が少しぐらい弱み見せれるようにならないで、誰かの涙の意味なんて変えれないしな」
俺がそう答えると、ラトスはちょっと面食らった表情を浮かべていた。
なんだよ。失礼な奴だな。
まさかここで躊躇するとでも思ってるのか？　それはちょっと舐めてくれてるなぁ。
「嘆きで生まれた涙の意味を、流れる時には喜びに変える。もとから目指していた道を、原点（あの笑顔）を思い出させるカズヒ（彼女）の前で曲げられるか。惚れた理由が理由なんだから、原点を曲げるわけにはいかないだろうに」
「……ハハッ！　いいじゃねえか！」
なんというか気持ちいい笑顔を浮かべがら、ラトスの奴はバンバンと俺の背中を叩いた。
な、なんか気に入られたか？
「何せ俺やディックはどうも神聖視しちまうところがあるからな。姐御の男になるっつーなら、むしろそれぐらい真っ直ぐに立ってるやつの方が向いてるわな」
「……そ、そうか。とりあえず恋敵でないのは安心だな」
「安心しろ安心しろ。神々しすぎてそう見にくいし、そういうわけだ

から他の女を侍らかしながら付き合うなんて無理だしな！」
あ～。カズヒ姉さんはそういうことはっきりと周りにも言ってるのかぁ。
面倒だなぁ、オイ。
俺が呆れ半分でため息をついていると、ラトスも同意見なのかちょっと遠い目をした。
「……カズホ当たりを狙ってみたらどうよ？　あいつは姐御に言い寄る奴に小姑かする時があるけど、だからこそまとめて娶るって根性みせりゃぁ評価高くなるんじゃね？」
「勘弁してくれ。そこに関しちゃ俺も困ってるっていうか、カズヒ姉さんと付き合う為に付き合ってくれとか姉さんにも相手にも失礼だろ」
マジでそこが困ってる。
既にカズヒ姉さんに惚れちゃってる中で、他の女に惚れるってのは中々大変だろう。
そういうことができる奴がいるのは分かるし、ハーレムＯＫの冥界で全否定するつもりもない。
ただし自分ができるかどうかは別だ。というか、俺は一応人間だからその辺大丈夫なのか？
「……転生悪魔になると面倒なしがらみが多そうなんだよなぁ。堕天使側（ウチ）、転生システムを流用する予定はないみたいだからそっちも難しいしなぁ」
「ま、その辺はおいおい考えようや。で、そっちは何しに来たんだ？」
「ああ、ちょっと練習もかねて相談に……なんだけど、あれ何？」
俺が視線でイッセーを示すと、ラトスはなんかちょっと視線を逸らした。
「……ここ来てから妄想だけが癒しだとか言ってたんだがよぉ。最近は並列作業でどんな時でもできるようになっちまったみてえなんだ」
病気だろ。
流石、嫉妬心や覗きを抑えるだけでひきつけを起こす男。両親を殺すと挑発された時より、敵の技がおっぱいを半減できると思ったこと

の方が怒りに燃えた男。
ちょっと本気で病気じゃね？
「後最近、滝に打たれながら妄想してるんだけどあれなんだ？」
「分かりたくもねえよ」
俺は速攻で言って切り捨てた。
「……お？　こんなところに来てたのかよ和地」
しかも先生まで来ちゃったよ。

魔性変革編　第十話　来訪する不死鳥

「小猫ちゃんが倒れたぁあああああ!?」
　先生が持ってきた部長達が作った弁当に、俺が差し入れとして持ってきた各種食品で昼飯を食いながら、事情を話したら当然だけどイッセー大絶叫。
　まあそりゃそうだろうなぁ。
「全く。ハードトレーニングなんてもんは、基本的に体の毒にしかならねえってのに」
「つっても先生。事情は知りませんけどそれだけ嫌ってことなんでしょ？　そこまで嫌なこと強制させるより、人工神器でもプレゼントした方が確実じゃないですか？」
　一応俺は聞いてみるが、まあ返答は予想できている。
　そして予想通りに先生は片手を振って拒否の姿勢。
「馬鹿やろう。人工神器はまだまだ実験段階で、神器の移植程じゃねえが元々持ってる才能に悪影響だってある代物だぞ？　神器や異能の才能がねえ奴ならともかく、小猫や朱乃みたいな才能の塊に渡すわけにはいかねえよ。堕天龍の閃光槍（ダウンフォール・ドラゴン・スピア）は特注品だから基準にすんな」
　ま、そう言うとは相談する前から思ってたし、そこは分かる。
　つっても、あそこまで嫌がってるのを無理に使わせるってのもあれじゃねえかとは思うわけだ。
「教え子に特注品プレゼントするぐらい別にいいでしょうに」
「持ってる才能を否定してくすぶったままでいる奴の為に特注品作るぐらいなら、才能なくても頑張ってるやつに作った方がいいに決まってるだろ？」
　自分を受け入れない奴に強さ何て宿らないってか。まあ、ある意味正論ではあるけどな。
　ちょっと釈然としないのは、俺の主力が星辰光やショットライザーっていう上乗せありきだからかねぇ。
「ま、やりたい方向があってそれ向きの才能があるってんのに、使わずに別の力寄越せって言われても釈然としねえところはあるっすね。

それでも寄越せっつーんなら、相応の覚悟は見せる必要ありってことっすか？」
「いや、自分を否定するなんて真似やってるやつに力をやるってつもりは正直ねえんだがな。……ま、朱乃にしろ小猫にしろトラウマになってるってことなんだろうさ」
ラトスにそう答えるけど、具体的にどういうことなんだ？
俺が首を傾げてると、イッセーも首を傾げていた。
「朱乃さんが堕天使のバラキエルって人の子供だっていうのは聞きましたけど、小猫ちゃんはどんな感じなんですか？」
「それは俺の口からじゃなく、もっと近い奴の口から聞くべきだろうさ」
「いやちょっと待った。ちょっと待った」
俺は思わずツッコミを入れて待ったをかける。
そりゃイッセーなら知っててもおかしくないよなとは思う。そこは問題じゃない。
問題はそこじゃない。
俺がどう言ったらいいか分からなくて口をパクパクさせてると、ラトスが首を傾げて先に声を出した。
「いやいや総督さん。姫島って言ったら日本異能使いの大御所、五大宗家の苗字っすよね？　仲が悪いけど共闘したとか複雑な関係だって聞いてますけど、なんでそんなところとデキてるんですか。まずいっしょ？」
「あ、それは逆だ。元々向こうにゃ毛嫌いされてたんだが、姫島本家が目をかけてた才女とバラキエルができたことで更にややこしくなったんだよ。しかも姫島の血を引く神滅具使いが、神の子を見張る者と五大宗家のはぐれ者が手を組んで動いた一件でバラキエルが身元引受人になった所為で更にひと悶着遭ってなぁ」
「わりかし結構重要な情報を、ピクニック感覚で喋り捲らないでもらえません？」
俺はとりあえずツッコミを入れる。
いやまあ、多少は俺も情報は知ってる。リーネス達の会話で、姫島

朱乃が五大宗家の姫島に縁があるってことぐらいは分かってる。
分かってるけどそれ、たぶんこういう感じで言っていい所じゃない。
「おっと悪い。……イッセー、お前一旦グレモリーの城に戻すように言われてたんだ。礼儀作法の勉強だとよ」
「違うそうじゃない」
いきなりすぎて反応に困ること言うなって言ってんだよ！

で、イッセーが礼儀作法の授業を受けている間に俺はちょっと城内を散策していた。
小猫のお見舞いをするべきかとも思ったけど、どうせイッセーも行くだろうからタイミングを合わせよう。何度も来られても小猫が迷惑だろうしな。
とはいえブッキングしてもあれだし、一応寝ている部屋の近くで待機するべきか。
そう思いながら歩いていると、ちょうど部屋の前にいた部長を見つけた。
「あら、和地。小猫のお見舞い？」
「いえ、それはイッセーが来るまで待っておこうと。だからまだ入らないです」
俺がそういうと、部長は苦笑した。
「気が利くわね。ただ、ちょっと小猫は調子が悪いから話しておくことがあるわ」
……なるほど、事情に関係ありか。
「聞いていいんですか？」
「構わないわ。むしろ知っておいた方がいいかもしれないから」
そう前置きをして、部長は廊下の窓から外を見る。
「私が小猫に初めて会ったのは、お兄様に紹介されたからなの。……

その頃、彼女は感情を失っていたわ」
「……親族との死別ですか？　経験ありますけど、あれはキッツいですからねぇ。天涯孤独ってのはやっぱり精神的に来ますか」
俺がそう言うと、部長は首を横に振る。
「いえ。不幸中の幸いだったのは、姉が一人いたことね。そしてその姉は才能にあふれていて、ある上級悪魔の目に留まり、姉が眷属悪魔になることで生活は安定したわ」
あ、これ絶対にヤバい事情があるな。
俺は部長の説明を聞いてそこまでは理解した。
というか、姉が何かやらかしたのかその主が何かやらかしたのかの二択だろう。そうでもなければ態々魔王様が妹に保護させるわけないし、感情を失うなんて状態になるわけがない。
「姉は黒歌と言って、本当に優秀だったわ。僧侶の駒を二駒使うだけの素質があり、レーティングゲームでも数多く活躍。更に使える者が限られる仙術まで習得した彼女は、最上級悪魔クラスの力量を持っているはずだわ」
「ってことは、今は行方知れずってことですね？」
俺がそう確認すると、部長は静かに頷いた。
確か仙術っていうのは仙人とかごく一部の連中しか使えない稀少能力だ。そんなものが使える相手を確保できるとか、その上級悪魔がスカウトするのも頷ける。
だが、あくまで知識としてだけど仙術にはデメリットがある。
生命や自然界に存在する気を取り込む仙術は、その取り込み方に気を使う必要がある。負の気を取り込むと精神に悪影響が出てくるとか、以前見たデータベースに書いてあったはずだ。
つまり―
「……暴走して、はぐれになったと？」
「ええ。主を殺し、追撃部隊も何度も返り討ちにしたわ。しかも主の屋敷が夜逃げでもしたかのように空っぽになっていて、その辺りの事情がよく分からない結果、上役達は非常に警戒したの」
うっわぁ。そりゃキッツい。

そりゃ上役もガチ警戒するだろ。そこはまあ、気持ちは分かる。
「塔城小猫っていうのは私が迎えてからつけた名前で、本当の名前は白音。あの子と黒歌は猫又という妖怪の中でも希少種にして上位種たる猫？で、あの子も仙術を使うことが出来るの」
あ、これ完璧に読めた。
普通に人間社会でもあるやつだ。
「姉と同じように暴走するんじゃないかって邪推されたわけですか。人間社会でもありますよね、犯罪を犯した身内がいたり、同じような趣味とか持ってると、こいつもそれやるんじゃないかって邪推」
「ええ。お兄様が庇ってくれたおかげで何とかなったけれど、上役はあの子を殺すことも視野に入れて、あの子はかなりの悪意にさらされたわ」
そう痛ましげにいう部長の気持ちも分かる。
感情がなくなるレベルで追いつめられてたみたいだからな。当人としてもトラウマの極みだろう。
というか―
「そんなトラウマ、ひと月やそこらで克服しろとか鬼かあの人は。……というより、普通カウンセラーとか必須ですよね？　冥界ってその辺未発達ですか？」
「耳が痛いわ。和平も結ばれたことだし、そ辺りも発達していくように私も働き掛けたいわね」
これはかなりきつい話だなぁ、オイ。
と、いうかだな。
木場は聖剣計画の実験体として使い捨てられ殺されかけた。
ギャスパーはハーフと神器のコンボで迫害され、追い出されて命を一度は落としたと聞く。
アーシアはアーシアで悪魔を癒してしまって追放され、堕天使に利用されて一度は死んだ。
イッセーもイッセーで、神滅具が原因で神の子（ウ）を見張（チ）る者が始末する羽目になった。
で、朱乃さんと小猫についてはこれか。

「……勢いあまって自分から教会を抜けたゼノヴィアが浮いてません？」
「あの子もあの子で人生の根幹が揺らいだわけだから、もうちょっと手加減して頂戴？」
部長がそうため息交じりに返したその時だ。
「……お嬢様、少々よろしいでしょうか？」
使用人の一人が、なんか戸惑いを浮かべて部長に声をかける。
なんだ？　緊張しているような、訳の分からない事態に巻き込まれてるかのような、そんな雰囲気を見せているぞ？
部長も様子がおかしいと怪訝な表情を浮かべている。
「どうしたの？」
「それが、お嬢様が付き添ってもいいので、ぜひ朱乃様や小猫様とお話したいことがあるという方が来ておりまして。近くに立ち寄ったついでだから、あくまで予定を入れておけるかどうかを尋ねたいとのことではあるのですが……」
なんで、朱乃さんと小猫を直接名指しで？
それも部長が付き添っていいというのも妙だ。それだとまるで、付き添いしている状態でもなければ話し合いをすることを警戒されると言ってるようなものだ。
「……それで、誰なの？」
部長が、警戒心を見せて促した。

「フロンズ・フィーニクス様です」

なんでこのタイミングで出てくるんだ!?

魔性変革編　第十一話　不死鳥の商談と龍王の経験論

イッセーＳｉｄｅ

「……嫌なんです。こんな力は要らないのに、こんな力を使わなければ強くなれないなんて―」

俺は小猫ちゃんに何も言ってやることができなかった。

小猫ちゃんの過去はあまりに重い。

木場の時やギャスパーの時もそうだけど、こういう時の俺は体当たりで行くしかないからなぁ。そも当たれないと、どうしようもない。

……くそっ。俺ってこういう時に何もできないのかよ。

「……イッセー君、此処は―」

朱乃さんがそう言いながら、気づかわし気に声をかけてきたその時、ドアがノックされた。

『小猫に朱乃。今いいかしら？』

あ、部長の声だ。

「リアス？　私は構わないけれど……どうしたの？」

朱乃さんもプライベートの口調で話すけど、何故かドアの向こうで部長がちょっと口籠ってる感じがする。

なんだろ？　他に人手もいたのかな？

俺が首を傾げていると、ドアが開いて部長が何人か連れて入ってきた。

一人は九成だけど……もう一人がどういうこと!?

「失礼。本当なら許可を貰ってから後日改めるつもりだったのだが、リアス殿から許可を貰ったのでね」

ふ、ふ、ふふフロンズ・フィーニクスぅぅぅぅぅぅぅ!?

俺達が落ち着くのを待ってから、フロンズ……さんは椅子に座って小猫ちゃんと朱乃さんを真っ直ぐ見る。
「さて、こちらも一応それなりの情報網はあり、はぐれ悪魔などの情報にも目は通している。なので君達二人の事情はある程度把握しているつもりだよ。……ＳＳランクはぐれ悪魔である黒歌の妹、白音こと塔城小猫君に、五大宗家姫島の者と神の子を見張る者幹部バラキエルの間に生まれた姫島朱乃君」
フロンズさんはそう言ってから、真っ直ぐに二人を見る。
「そしてリアス嬢と話をして、アザゼル総督から酷なことを言われたとも聞いているよ。忌み嫌っている力を振るえなど、人工神器をいくつか実現させている身でありながら惨いことをおっしゃっていたようだ」
け、結構辛辣なことを言ってきたな。
先生の言い分ももっともだと思うんだけど、その辺どうなんだろうか。
だけど、フロンズさんはため息までつきながら首を横に振った。
「人工物という偽物に頼る暇があるなら、生まれ持った真の力を使うべき？　そんなものは欺瞞だろう。それは君達が活動している人間界の在り方を見ればすぐに分かる」
そ、そうなの？
俺最近まで人間だったけど、そんな風に思ったことはない気はないけど。
「生まれ持った能力を高めて成果を上げることと、必要な力を振るえる道具を使って成果を上げることは全く別の概念だ。長距離走で優れた成績を誇るスポーツ選手であろうと、本当に長距離を移動するなら自動車なり飛行機なり客船なり、人工物をもって行うだろう？　自らを高める努力は大切だが、より簡単かつ効果的に行動できる道具があるなら、実用においてはそちらを使うべきだ」

そう言って、フロンズさんは改めて二人を見た。
「……単刀直入に言おう。君たち二人には我々フィーニクス家が主導で行っている、強化装備プロジェクトのテスターになってもらいたい」
その言葉に、俺達全員驚いた。
部長と九成は前もって聞いていたみたいだけれど、それでもやっぱり少し気圧されてる。
朱乃さんと小猫ちゃんに至っては、少し前のめりになってる気がする。
いや、そうだよな。そりゃそうだよ。
嫌な力を使わないと強くなれないって言われている時に、別の方法で強くなれるかもしれないって言われたら、誰だって食いつくはずだ。
でも、ぶっちゃけ怪しい。
だってこの人、大王派なんだろ？　魔王派のリアス部長達相手に、そこまでする理由ってなんだ？
「……何故大王派の者が魔王派に塩を送るのかとは思っているだろう。既にリアス嬢には答えているが、あえてこちらでも答えよう」
あ、リアス部長達は聞いているのか。
つまり、部長達は信用してもいいと思ったから連れてきたってことか。
で、答えは？
「とはいえ、簡単極まりないことだがね。……派閥の違いがどれだけあろうと、冥界全体の利益を考慮して立ち回るのが政（まつりごと）に携わる者の最低限の責務というものだ。ましてコマーシャルとしてより有用なものがいるのなら、十の利益を得るために三や四の利益ぐらい与える程度、そこまで気にすることはないだろう？」
そう言うと、フロンズさんは両手を広げる。
「何より現状優先すべきは、冥界全体の戦力の向上だよ。そのために必要なのは個人が不快感を押し殺して特性を使うことではなく、多くの武装を数多くの兵士に与えられる環境こそが、軍備をより高めるこ

とにつながると思わないかね？」
そして、フロンズさんは朱乃さんと小猫ちゃんを見る。
「ましてその恩恵により、忌み嫌っている力を転生悪魔が使わずに済むというのは一種の美談だよ。私は、転生悪魔が固有の異能を重視した戦力確保に重点が置かれている現状には憂慮している。その流れに待ったをかけることで、より多くの純血悪魔に技術を広め教えられる、技術指南という方向性を確立したいのだ」
その言葉に、朱乃さんも小猫ちゃんも、少し目の色を輝かせていた。
朱乃さんは、堕天使の血を嫌っているから堕天使の力を使いたくない。
小猫ちゃんは、姉のようになりたくないから猫？の力を使いたくない。
だけど二人とも、自分が強くならなくちゃと思ってる。そこに力を得る方法をフロンズさんが提示してきた。
俺は自分の力を伸ばすことに躊躇いとかないからよく分からないけど、モテたくてモテたくて堪らないのにモテないまま悪魔になって、上級悪魔になればハーレムを持てるって部長に教えてもらった時が近いんだろうか。
フロンズさんは軽く微笑むと、そのまま立ち上がった。
「とはいえ考える時間は必要だろう。連絡先は伝えてあるから、その気になったら連絡してくれたまえ」
そう言って立ち去るフロンズさんの後姿を、朱乃さんも小猫ちゃんも真っ直ぐに見つめている。
今すぐにでも返事がしたい。
そんな風に思ってることがよく分かる雰囲気だった。

「って、そんなことがあったんだよ」
「なるほどねぇ。ま、そういう悩みってあるところにゃあるわなぁ」

って感じで、次の日になって山に戻ってきた俺は、ラトスやおっさんに話してみた。
俺馬鹿だから、こういう時分からないしな。人に聞いてみた方がいいってことはあると思うし。
『……個人的にはアザゼルに賛成だがな。持っている力に目を背けて、本当の意味で強くなったとは言えんだろう。……だが、フロンズ・フィーニクスはそこに意識を向けていないようだ』
おっさんはそう言うけど、フロンズさんの言いたいことも分かってるみたいだ。
ま、アザゼル先生と結構普通に話せてたし、先生よりの意見になるんだろうなぁ。
「ま、俺はそう言う悩みはないけど、その辺を割り切ったり受け止めるのは中々難儀なもんだってのは分かる」
むしろラトスがそう言ってるのが意外だった。
おっさんはドラゴンで先生派だ。ドラゴンを宿している俺も、前向きに受け止める方がいいんじゃないかって思った。
あと俺が知ってるドラゴンといえば、白龍皇を宿してるヴァーリだ。
だからまあ、ドラゴンのラトスもそっち側かなって思ったんだよなぁ。
『意外だな。ドラゴンは総じて自分の強さに肯定的になりやすい風潮があるのだが』
「俺は俺で色々あるけどよ、これは俺が思ってることだけじゃねえよ」
おっさんにそう返して、ラトスはコップを見ながらなんかしんみりする。
「プルガトリオ機関は、先祖返りして悪魔化した奴とかも結構いるからな。そういう連中は信仰心を保ってるからこそ、自分に宿った悪魔の力に思うところがある連中は多い。主の為教えの為に使うことはあっても、忌み嫌ってるやつは結構いるからよ」
そ、そうなのか。

俺は宗教とかあんまり詳しくないけど、そういう風に思う人とかもいるってことか。
そういえば五大宗家が日本の異能保有者の集まりなら、いわゆるお坊さんとかもいるんだろうか。朱乃さんも神社慣れしてたけど、神社も宗教施設だったなぁ。
じゃあ結構根が深いのか。そりゃ抵抗もあるだろうなぁ。
「教会でも自分の神器にコンプレックスあるやつがいるにはいるしな。……使わずに戦える手段ってのは、そういう意味じゃあ教会にこそ必要かもしれねえなぁ」
『ふむ。上乗せする前にそれを振う己こそを鍛えるべきだとは思うのだが……人それぞれということか』
おっさんはラトスにそう言うけど、やっぱりおっさんとしては嫌なのかなぁ。
「っていうか、俺もアスカロンを貰ってるからあまり偉そうに言えないけど、おっさんはやっぱり身一つだから？」
『それはある。だが実戦もレーティングゲームも経験した身としては、己の本質を認めなければ籠めることは出来ないと言いたいがな』
……籠める？
俺が首を傾げてると、ラトスも首を傾げていた。
「籠めるってなんすか旦那？　オーラとか？」
『いや、言葉で単純に説明できないし、何より物理的な力というわけでもない。……だが、そういうのはあるんだよ』
おっさんは俺達を見ながら、そう言った。
『実戦でもそうだが、レーティングゲームでもこれがある。実際レーティングゲームは命の危険こそ薄いが、その分金も名誉も地位も動かせるのが現状だ。だからこそ、本腰を入れて臨む奴らはそこに何かしらの執念や渇望、果ては決意や忠義なり色々なものを持って挑んでいる』
そして、おっさんは静かに拳を握る。
それを真っ直ぐ見つめながら、子供に物語を利かせるように、おっ

さんは語りかけてきた。
『それを拳に宿らせれる奴は、種族や階級の違いなく厄介なのさ。直接的なダメージではなく想いそのものをぶつけられるからこそ、力量差すら乗り越えて敵に届く力がある。根性論と言われるだろうが、経験論としてそれがあると断言できる』
俺は言われて、何となく自分の手を握ってみる。
籠める……か。
ヴァーリ相手にアスカロンを格納したまま譲渡で強化したけど、たぶんそういうんじゃないんだろう。
ラトスも拳を握ってみてるけど、俺と違ってなんか掴めてるような感じだった。
そんな俺達を親みたいな目で見ながら、おっさんはまた口を開いた。
『コイツが本当に厄介のは、同じぐらい籠められる奴でないと打開策が撃てないことだ。なまじ精神論だからこそ、やり方というものがそれだけしか言えない。そしてだからこそ、籠った一撃を放てる奴は例外なく本物で、種族差や位階の違いを凌駕できる可能性を秘めているのさ』
「あ～……なるほど。それは俺、喰らった経験あるっすわ」
ラトスがそう言いながら自分の頬を触っていた。
「実は俺、両親が小さい頃に死んだ上、人に溶け込ませる為に常時人間の姿で育ててたんすよ。なもんで人型の方が慣れてて少しの間自分を人間だと思ってたんすけど、その所為でうっかり体調崩してドラゴン化しちゃった時、育ててくれた人から化け物扱いされて追い出されちまって」
「朱乃さんや小猫ちゃん並みに重いなオイ」
俺の周りの異形はそんなのばっかりかよ。
なんか平穏におっぱいおっぱい言ってることが恥ずかしくなりそうだ。シャルロットに恥じないように頑張ってるけど、全然足りない気がしてきた。
俺とおっさんがまじまじと見てると、ラトスは軽く笑いながら片手

をひらひら振るう。
「ま、異形なんて見たこともないなら仕方ねえってところはあらぁな。だから出来る奴を褒める気は合っても出来なくて責める気もさほどねえんだが……あの頃は流石にやけになってよぉ」
なんか遠い目をして、しかもプルプルと震えてた。
「……たまたま初任務で仕事してた姐御とエンカウントして、恨み言吠えながら襲い掛かったら説教しながらの殴られ祭りで、一緒に来ていた悪魔祓い達がドラゴン(俺)を庇って姐御を止めるっていう始末なんだよ。……いや、プルガトリオ機関の初任務だからなんだけどな？」
「……あの人って本当に強くて厳しいんだなぁ」
背中に寒気が走ったよ。
だけどラトスはなんか感慨深げに、頬に手を触れながら拳を握り締める。
「だけどあの人は、本心から俺を止める為に怒ってくれたって思ったし、そのあとの説教とかで本質が分かった気がして感服したよ。……思えば、それが籠った一撃って奴なんだろうさ」
『なるほどな。確か白い長髪の女だったが、確かに面構えが違ったしな』
おっさんもそういうほどなのか。
確かに、鎧を付けた俺や仮面ライダーになった九成と一緒に、生身で戦ったもんな。それも一対一でコカビエル相手に足止めまでしたし、そりゃ強いよ。
そんな人が籠った一撃を放てるなら、そりゃきっとめっちゃ凄かったんだろう。
「俺も、打てるようになるのかな？」
俺は、リアス部長の自慢になりたい。最強の兵士になるって誓ってる。
同じぐらい、シャルロットに恥じないマスターになりたい。その思いは本気だ。
だけど、俺は籠められているのか？　その想いは籠ってるって言えるほどなのか？

俺がそう思ってると、おっさんはうんうんと頷いた。
『まあ、お前達なら一度でも放つことができればすぐに使いこなせるようになるだろう。修行でそういう奴らだとは分かっている。だからそろそろ休憩も終わりということで―』
おっさんが言い終わるより先に、おっさんの耳元に魔方陣が出てきた。
なんかこっからでもけたたましいとかそんな感じなんだけど、緊急連絡とか何かか？
「ま、まさか部長達に何かが？」
「いや、それならまずおたくの耳に届くんじゃね？」
ラトスに何故かツッコミを入れられたその時、おっさんが勢いよく立ち上が……ったぁあああああああ!?
『……なんだとぉ!?「「ぐぎゃぁ!?」」……あ、すまん！　いや、しかし――ッ』
おっさんは俺達を巻き込んだことを謝ってくれるけど、何があったの!?

魔性変革編　第十二話　再開、しまくりました!?

和地Ｓｉｄｅ

小猫ちゃんや朱乃さんも大変だし、フロンズの商談とかもなんというか不安に思ってしまったりするけど、俺は俺でトレーニングだけじゃなく総督から直々の依頼もある。

というわけで、俺は冥界の大王派側にある星辰体研究施設にやってきていた。

基本的には星辰奏者ってのは何ができるかっていう簡単なデモンストレーション程度だけど、それはそれとしていい機会だし色々と見学でもするかとは思っている。

というか、結構込んでるな。

眷属悪魔でない下級中級であっても、星辰奏者になれれば何かしらの注目は浴びるだろうってことか。そこから眷属悪魔としてスカウトされる可能性もあるだろうしな。大王派の連中からすれば実験台が自分からくるようなものか。

同時に、星辰奏者関連の技術は信頼できると踏んでいる上級悪魔は、眷属を星辰奏者にするべく送り込んでいる。

今回は抽選でやっているみたいだから全員とはいかないけど、それでも百人以上集まってるな。

「……さて、とりあえず受付に行くか」

先生から話は言ってるはずだから、俺はまずそこから動くべきだろう。

というわけで受付を探して、見つけたんでそっちに振り返ると、勢い余って誰かにぶつかってしまう。

おっといけない。ちょっと周りを見てなかったな。

「すいません、よく見てませんでした」

「あ……いえ、お手間をおかけしてごめんなさい！」

なんか、勢い良く頭を下げられたよ。
そこまで勢いよく謝れると返って恐縮なんだが。それに不注意だったのは俺もだし。
というかもう態度からなんかびくびくしてるとかそんな雰囲気なんだけど。
俺なんかしたか？　それとも単純に憶病なだけ？
「本当に申し訳ありません。今後同じことを起こさないように気を付けますので、どうかお許しを」
そんな過剰なぐらいに謝りながら、頭を下げてた相手は窺うように顔を上げる。
――――――いや、ちょっと待て。
「……インガ姉ちゃん？」
なんでこんなところにいる？
い、いやいやいやいや。他人の空似の可能性ってあるだろ。
むしろそっちが普通だ。何せ俺がザイアに拾われる前の知り合いで、ぶっちゃけ俺が五歳くらいに引っ越しで別れたわけだし。外見年齢十代後半だけど、そもインガ姉ちゃんは俺より五歳は上だったから、たぶん違うと思うし……人違い？
そう思ったとき、目の前の少女は目を見開いていた。
「……もしかして、和地君ですか？」
おいおい、当たりかよ。
いや、本当にちょっと待て。
この際外見年齢が合致しないのはいい。実年齢と外見年齢が合致しないのはよくあるし、そもそも此処にいるってことは悪魔になってるわけだ。外見年齢を意識しすぎる必要性がない。
問題はそこじゃない。
インガ姉ちゃんってこんな暗くびくびくした性格じゃなかったよな？
それがこれって――
「……えっとリアス部長の電話番号ってどこだたっけ。あ、インガ姉ちゃんって担当の駒は戦車（ルーク）？　主に問題あるならトレードできない

かマジ相談するけど……あ、会長にもちょっと相談した方がいいな」
会長は僧侶と女王以外はあまりあったからな。
眷属悪魔関係においては、主の性格で待遇とか色々変わるからな。酷い扱いだというのなら尽力せねば。
涙の意味を変える為にも、ちょっと学校の先輩に助力を請わねば。
そう思ってスマホを起動させようとした瞬間、後頭部にチョップが叩き込まれた。
「―落ち着きなよ、あとそれは絶対に相手に迷惑だからね!?」
そうそう、こんなボーイッシュな感じだった。
「ってことはやっぱりインガ姉ちゃんか、十二年ぶり。……いや、よく俺も結び付けられたな」
「全くだ……です。成長期前に別れて十二年後で、普通一致しないと思います」
あ、口調が戻った。
何かありそうだからちょっと心配だけど、まあそれはともかくだ。
我ながらよく一致で来たなぁと思いながらも、俺はなんていうか、ちょっと嬉しくなった。
両親が死んでから色々大変だったけど、でもあの頃のことが全部なくなったとかそういうわけじゃないってことなんだろう。
なら、そこは素直に喜ぶべきだな。
「お互い色々あったみたいだけど、また会えて嬉しいよ」
「……そう、ですね。また会えて、そして変わりなくて嬉しいです」
暗く、どこか自信なさげに、それでもインガ姉ちゃんは笑ってくれた。
ああ、色々と思うところはあるけどそれはそれ。
俺はちょっとほっこりして―
「……あ、ちょっといい？　そっちの男の方なんだけど……」
―後ろから声がかけられて、振り返ったら振り返ったで硬直した。
え、これどういう状況？
そんなことを思う理由は、極めて単純。
「九成和地って、もしかして幼稚園の時「いじめ・即・飛び蹴り」だっ

たあの和っち？　覚えてる、幼稚園の時一緒だった春っちだけど？」
「今度は春っちかよ!?」
なんだこの、昔仲良かった女の子祭りは!?
何のフラグだ！　揺り返しで更なる窮地に追い込まれるフラグか何かか!?

インガ姉ちゃんこと枉法（おうほう）インガ。春っちこと成田春菜（なりたはるな）。この二人は、俺がザイアに見初められちゃった前につながりのある女子二人……いやインガ姉ちゃんは二十歳越えてるはずだから女子でいいのか……殺意を感じた!?　声出してないのに!?
……コホン。まあこの二人との関係は本当に、かつてのお隣さんと幼稚園の友達といった感じだ。
自分でいうことでもないけど、俺は子供としては変わり者だったと思う。
何せ原風景があれだから、涙の意味を変えるって決意だけは持ってたからな。あの頃は未熟の極み過ぎて立ち回りができてなさすぎると思うし、そもそもそんな機会もろくになかった。
だからまあ、俺はちょっと変わった子供といったところだろうけど、変わってるからこそいじめられた経験はろくにない。
……少なくともあの頃から、腕っぷしと頭は優秀なことに越したことはないと悟ってたからな。頭いい奴や喧嘩に強い奴は揉め事を乗り越えやすいって印象もあったし。必然的に多少時が経つと、理不尽に喧嘩売ってきた奴の腕をひねり上げて大人の下に連行する程度のことはやっていた。可能な限りやりすぎないように気を付けつつ、出るところに出るのがコツだと、親に通わされた外国語口座幼年期コースのお姉さんが教えてくれた。
……いやこれ子供に対するアドバイスじゃねえだろと、今は思う。
「いじめっていうのは加害者被害者が子供同士の犯罪行為全般だか

ら、暴行窃盗器物破損名誉棄損って個別の犯罪に当てはめれば、大抵法的に訴えられるの。最悪民事裁判にすれば、大抵のことは訴えられるわよ」とアドバイスを貰ったけど、やっぱりこれ子供に向けたアドバイスじゃねえだろ。

まあそんなわけで、それを素直に受け取った俺は、手を出すと確実に損するタイプだと痛感されたらしい。幼稚園にいた頃は、いじめをぶちのめす正義の味方みたいな感じでヒーロー扱いだったが、それに調子乗って自分達がいじめる側に回るような奴も止めたから人気は低めだ。最もいじめられてた側の一人とは仲がいい友達のままだったけど。

まあそんな変わり者ではあったけど、そういう必要がないなら割と普通の子供――――――であってほしい――――――だったと思う。火事で焼け落ちる一軒家に筆耕す前は、マンションで隣の部屋の家族とも仲が良かった。高校や大学でフェンシングの大学に出た者同士ということがきっかけで仲良くなった夫婦で、俺より五歳ほど年上の娘さんには弟のように可愛がられた覚えがある。

で、幼稚園にいた頃の子が春っちで、マンションで隣だった家族の娘さんがインガ姉ちゃんだ。

……俺の知り合いが二人も転生悪魔になっていたのには、正直少し驚いた。

ちなみに今は、受付に話を通したうえでちょっと空いた時間で二人と会話している。

まあ、正直話を聞いて驚いたけど。

「おいおい、二人とも部長達がいたあの会合の参加者だったのかよ。驚いた」

誰が主かまでは聞いてないけど、こっちが世間話でグレモリー眷属が会合に行った時の出来事を振ったら「そこにいた」だからマジびっくりだよ。

当たり前の反応だと思ったんだけど、何故か二人の目は「お前が言うな」と声なく伝えてくる。

なんでだ。驚いてもおかしくないだろこれは。むしろさっきから

驚きっぱなしなんだけど？

「こっちのセリフよ！　あんたがまさか、リアス・グレモリー眷属と共闘した和平に繋がる一件の関係者だったとか、いやちょっとほんとに夢でも見てるのかしら？」

「……最高位堕天使のコカビエルと真っ向から渡り合えるなんて、成長したんですね……」

まあそこは驚かれるか。

っていうかそりゃ驚くなって方が無理だよなぁ。

眷属悪魔の身からすれば夢の才頂点ともいえる最上級悪魔。その中でも一握りのトップクラスでもなければ勝ち目がないようなのがコカビエルだ。

それを四人がかりとはいえ打倒したのが昔馴染みだったわけだしなぁ。しかも神滅具を疑似的に保有して上乗せされてることを踏まえると、「小さかった男の子が、再会したら魔王クラス!?」って感じなんだろうなぁ。

まあそれはそれとして。

誤解は解いておこう。

「一応言っとくけど、神滅具保有者が二人も協力してくれたからだからな？　流石に一対一だと無理だからな？」

「四人がかり程度で勝って、しかも勝利に貢献できたのなら十分すぎるでしょうに。幼稚園時代からヒーローみたいに思ってたけど、神話の英雄みたいなことやってるじゃない」

……春っちに反論できない。

まあ確かに、戦力の一角になってるというだけで実力者扱いされて当然だよなぁ。コカビエルという名はそれだけのネームバリューがある。というか、神の子を見張る者の幹部は研究者が多い者の、戦闘能力が全員もれなく高いからな。ましてコカビエルは武断派筆頭だし。

それがサーヴァントの力を宿して神滅具を持ってしまったとか、普通に化け物だ。事実創造した魔獣でヴァーリだけでなくかのグレイフィア・ルキフグスさんを足止めしてた以上、総合戦闘能力は超越者

に喧嘩売れるレベルだろう。
事実上の六対一とはいえ、そりゃ勝てたのなら褒め称えられるか。
「……本当に、すごいです。いつの間にか遠くに行ってますね」
インガ姉ちゃんにもそう褒められるけど、俺は果たしてどうした物かと思っている。
っていうか本気で暗くなってるんだけど、どうしたんたインガ姉ちゃん？
「あの、マジで大丈夫かインガ姉ちゃん？　今の俺、魔王の妹と同居して直属の上司は堕天使総督だからな？　何かあったら相談に乗ってくれる人達だから、何かあるんなら本当に相談してくれ？　後で問題を知ったら、むしろ勝手に殴り込みに行くから隠さなくていいからな？」
うん、昔馴染みが酷い目に遭ってるっていうなら、殴り込みも辞さない。
和平を結んだことで冥界も程度はともかく変化するだろうし、三大勢力はトップがもれなくお人好しなところあるから、これを機に悪魔側の非道なやり口には改革のメスが入るだろう。あまりに無体な目にあっているのなら、むしろ通報してくれないとサーゼクスさん達も困るだろうし。
だから俺は本気でそう言ったんだけど、インガ姉ちゃんは苦笑しながら首を横に振った。
「大丈夫です。……むしろ、ディオドラさまは命の恩人ですから？」
なんで疑問符が付いた。
「……本当に？　人生の恩人って意味ならヴィール様もそうだけど、そんな風に思えない表情……ですよ？」
年齢差を考慮して、敬語を付け足しながら春っちも問い詰める。
命や人生の恩人が主とは、グレモリー眷属を思わせるな。
っていうか、イッセー達の話だと分からないところもあったけど、とりあえず聞くだけなら立派な主な様だ。ヴィール・アガレスは内心警戒してたけど、春っちの恩人ならそこまで問題児ってわけでもないのかな？

まあディオドラに関してはかなり不安になる。
命の恩人に仕えているにしては、暗くないか？
なのでマジで不安なんだけど、インガ姉ちゃんは首を横に振った。
「本当です。ディオドラさまがいなければ、そして先輩がいなければ、私は死んでましたから」
「いったい何があったんだよ。いや、転生悪魔の来歴にも色々あるだろうから深入りするのもあれだけど」
ほんと、小猫ちゃんとか木場とかが結構きつかったからなぁ。他のグレモリー眷属もきつい所はきついし。
それまでの人生に限っていえば、イッセーがトップクラスに幸福じゃねえか？　しかし、それだって普通の人生っていえば普通の人生だし。
なんで深入りするのもあれだと思ったけど、インガ姉ちゃんは慌てて首を横に振った。
「大丈夫です。私なんかに心配しないでも……その―」
インガ姉ちゃんはちょっとだけ声につまり―
「――大学にエスカレーター式で進学できる高校に入学したんだけど、入った天文部が事実上のヤ○サーで人生踏み外して―」
「……うわぁ」
俺と春っちが同時に天を仰いでしまうほど、もうそれだけで「確かに人生踏み外したね！」って感じになるな。
いや、○リサーが全部悪党どもの巣窟なんて言う気はないけどね？
でも分かってて入ったわけでもないのなら、間違いなく人生は踏み外してるよなぁ。
俺も春っちも何も言えなくなっていると、インガ姉ちゃんは更に俯いた。
というか目が死んでる。
「しかも部員がそれで人生踏み外したうえ、そのボーイフレンドが自殺までしちゃって大騒ぎになってね。大半が除籍で私達残りも退学処分。お父さんもお母さんも怒って私を修道院に送ったんだけど、そこが教会嫌いの妖怪に襲撃されて死にかけて……。ディオドラさま

はたまたま近くにいて、たまたまそれと知らずに助けてくれた先輩を助ける為に転生させようとして、先輩は他の人達も助けてほしいって懇願して、そのおかげで私は蘇生できたから―」
「御免分かった！　確かにディオドラは良いやつだ！　ディオドラが悪いわけじゃないのはよく分かった!!」
　これ以上は聞いていられない！　むしろ聞いた俺が本気で後悔している！
　なんかここ最近、ヘビーすぎる女の子の過去を聞くことが多すぎる!!
　春っちは春菜でうんうんと頷いている。ポニーテールが揺れてるのは可愛いけど、今この状況下でなんでそんな感慨深げなんだ。
「分かる分かる。私も実は悪魔になる直前で強姦された経験があって。というかたまたま通りがかったヴィール様が叩き潰してくれたのがきっかけで」
「ものすっごい同情するけどね！　ごめん二人とも、最初にインガ姉ちゃんに聞いた俺もうかつだったけど、人結構通ってるから!!」
　そんなヘビーな過去を人前で言わない！　っていうか春っちは聞かれてもないんだからもうちょっと濁せ!!
　こんなの聞いたらかなり色々と騒がれそうなんだが大丈夫か？
　っていうか、俺も結構大声出した割には誰も気にしてないな。
　というか……なんだ？　近くのテレビに集まってなんか騒いでるぞ？
　インガ姉ちゃんもふと気づいて、人だまりの方を見て首を傾げている。
「どうしたんでしょう？　ニュースのようですけど」
　いったいどうした？　魔王同士が結婚とかそんなレベルの大ニュースでもあったか？
　俺が首を傾げていると、春っちが怪訝そうな表情を浮かべている。
「あれ？　冥界のテレビってこの時間にニュース何て流してないわよ？」
「……そうなの？」

「いえ、あまりテレビは見ないので」
顔を見合わせて俺がインガ姉ちゃんと首を傾げてると、春っちはいつの間にか騒いでいる悪魔の一人に声をかける。
「ちょっと。一体何が映ってるの？」
その言葉に、声をかけられた悪魔が震えながら振り返った。
あ、人型のドラゴン種族だ。っていうかドラゴンなのに顔色が悪いって分かる状態なんだけど大丈夫か？
本気で心配しそうになる表情で、そのドラゴンは口をパクパクさせながら声を絞り出した。
「ドラゴンアップルの……森が……テロリストに襲撃されたって」
「はぁっ!?　最上級悪魔の元龍王タンニーンが転生悪魔になった理由とかいう、それしか食せないドラゴンがいるっていうあのドラゴンアップル!?」
春っちが盛大に大声をあげるけど、俺もかなりびっくりだよ!?
「おいおいちょっと待て！　今タンニーンさんはイッセーのコーチで領地いないぞ!?　守りは大丈夫かよ!?」
「緊急特別ニュース……！　そんな大騒ぎ何ですか!?」
思わずインガ姉ちゃんと一緒にテレビを見える位置に割り込めば、既にかなり燃えて山火事になっている森が映像に映し出されていた。
『――――追加情報が入りました！　テロ発生と時期を合わせ、冥界政府に犯行声明が投函。それによりますと、この火災を引き起こしたのはテロ組織「贋作抹消連盟」とのことです！　彼らが他種族からの転生悪魔筆頭格であるタンニーン様を強く敵視していることは知ってましたが、まさかこれだけのテロを起こすとは信じられません！』
な、なんかよく分からない単語が飛んだりしてるけど、とりあえずこれはマジっぽい。
っていうか、がんさくまっしょうれんめい？　なんだそりゃ？
「確か、他種族からの転生悪魔が転生悪魔のトレンドであることを不満視してる、純血の下級中級が主体のテロ組織だったかしら？　此処まで大規模なテロが起こせる戦力あったの？」
「……サウザンドディストラクションで転移するようになった、精神

奏者施術技術やプログライズキーを使ったのでは？　それに、純血悪魔の眷属悪魔や王にも賛同者がいるという話も聞いてます」
春っちとインガ姉ちゃんがそう話し合うけど、どうも俺にも聞こえるように言ってくれているらしい。
あ～なるほど。そういう連中が出てくる可能性はあるよなぁ。
もちろん、それだけだと戦闘能力的なものもあるから嫌がらせが精いっぱいだろう。
つってもサウザンドディストラクションの影響で、その辺りが曖昧になってるからなぁ。ほんと、ザイアのトップ共は余計なことしかしないな。
ったく。なんか冷汗がだらだらと流れてきて……ん？
これ本当に気温が暑くなってないか？　空調が壊れたのか？
いや、そんなことは今どうでもいい。
「クソ！　たぶんだけど此処からかなり離れてるだろうし、テロに介入するにはそれなり手順とか条件とかがいるからな。……でもタンニーンさんとは個人的に知り合ってるし、あとで炊き出しとか手伝うべきか？」
というか、イッセー達のところにいるタンニーンさんも気が気じゃないだろう。
あの人なら乗り込むとかしそうだけど、イッセー達も付いて行きそうだな。
流石に強引に遠隔地のテロに無条件で介入とかまでする気はないが。とりあえず復興義援金は絶対しよう。
そう思いながら、俺は「この状況で星辰奏者関連の作業とか、まず無理だよなぁ」と冷静に考えて、時計を確認する為に視線を動かすと
―
「――――春っち、インガ姉ちゃん……っていうか全員気をつけろ！」
―声を張り上げるほかない。
同時に俺はショットライザーとプログライズキーを取り出して、すぐに変身する体制をとる。
『ショットライザー』

『ＳＡＶＥ』
「ちょ、いきなりな……全員逃げて!?」
「え……何が？」
春っちが気付いて警戒し、逆にインガ姉ちゃんは気づかない。
これは戦士としての力量辺りだろう。危険察知能力や瞬間的な観察力が重要だ。
自動ドアの向こう側から、何故か強引にドアを破らなず数人ずつ入ってくる謎の連中。
それもレイドライザーをつけてたりこんな時期に防寒具を厳重にまいた連中何て、それを理解できれば警戒するのは自明の理だ。
っていうかちょっと待て、星辰体が隆起してるってことは……っ！
「星辰光（アステリズム）来るぞ、走れぇぇぇぇぇ！」
俺が声を上げるのと、敵さんが起動音声（ランゲージ）を終えるのはほぼ同時。
「――超新星（メタルノヴァ）――贋物滅す紅蓮地獄（ヘル＝コード・コキュートス）」
その瞬間、この場も戦場へと変貌した。

魔性変革編　第十三話　悪意阻むは赤と青

イッセーＳｉｄｅ

『くそ！　ギリギリで間に合わなかったか！』
『マジでやりやがったなオイ！　赤龍帝、時間がねえからこのまま突っ込むぞ捕まってろ！』
「ああ！　構わねえからやってくれ！」
もう燃え始めてる森を見て、おっさんもラトスも全力で突っ込んだ。
単純に強い方が自由にするべきってことで、ドラゴン形態のラトスに俺はしがみ付いてるけど、安全に降りることは考えない。
っていうか、連れて行ってほしいって頼んだ側だから今回は我慢！
そのまま突っ込んでテロリスト相手に大立ち回りするおっさんに、ドラゴン形態で体当たりするラトス。俺もそのまま転げ落ちる感じで着地して、籠手とアスカロンを展開してテロリストを睨み付ける！
「おらぁ！　赤龍帝が聖剣抱えて登場だ！　やられたくねえならとっとと投降しやがれ!!」
ほんと、二天龍の宿主が聖剣持ってるって、脅しとして十分なんだよな、ドライグ！
『十分な恐喝だ。特に相棒は上級悪魔のエリートを倒したうえでコカビエルやヴァーリとの戦いも潜り抜けた。実態は多分に幸運が含まれているが、並みの悪魔なら最上級堕天使や魔王の末裔と戦って生き残ったなど強者の証明だ。とどめに悪魔の天敵である聖剣があるとなれば―』
「ひ、ひぃ！　赤龍帝だって!?」
「しかもマジで聖剣だぞ!?　消滅される!!」

おお、マジで効果あった。
と思ったらいきなり銃口を向けられて慌てて逃げる。
うぉおおお!?　掠めた、籠手が展開されてないところを掠めた!?
「なめんじゃねえぞガキィ！　この程度を慌てて躱す奴なんぞにビビってられるか！」
「こちとら玉砕覚悟でやってんだよぉ！　死ぬこと前提なんだから死んでも食らいついて動きを封じやがれ！　タルウィルさんの邪魔させんな！」
くそ！　確かアントレイダーだったな。あんなのが何人もいるのかよ！
しかも死ぬ気で来るとか最悪じゃねえか！　殺されても足止めする気満々で？　しかもタルウィルってのがいたらまずいのか!!
ああもう！　どこにいるんだよ、そのタルウィルってのは！

なんでこんなことになったのかっていうと、おっさんから籠った一撃について聞いていた時に、おっさんに届いた連絡と、こっちも届いた連絡だった。
なんでもとある上級悪魔からの救援要請が届いて、それをサーゼクス様の部下が担当したら、えらいことになっていたとか。
その上級悪魔はアントレイダーを引き連れた部下のクーデータで家族を人質に取られ、他の眷属達を見せしめに殺されたうえで、個人的に取引している他の悪魔の領内に気づかれずに移動できるよう手配するよう強制されたらしい。
そして分かったのが、その眷属がテロ組織「贋作抹消連盟」の幹部だったこと。そんでもって贋作抹消連盟は純血の下級中級が中心となっている組織で、他種族からの転生悪魔に対して暗殺やテロをやっている組織らしい。
まさか他種族もいる自分の眷属に紛れ込んでたなんて思われな

かったけど、そいつは元々友人達と一緒に眷属に慣れないか言ったが、他種族を優先されたことで本格的に参加したとか。
そしてそいつらの狙いは教えてもらえなかったけど、位置からいっておっさんの領地の一つ。それも人間界では絶滅していて、それしか食べれないドラゴンがいる「ドラゴンアップル」の群生地の可能性があると判明。助け出した時は既にそこから移動していて、急いで緊急連絡がおっさんと俺に届いたっていうことらしい。
それで相手が悪魔なら俺もアスカロンで役に立てるんじゃないかってことで、ラトスと一緒におっさんについて行ったらこんな感じだ。
くそ！　こんなテロに巻き込まれるとか思わなかったぜ！
アスカロンで射撃を弾き飛ばしながら、俺はなんとかアントレイダーと対峙する。
結構強いけど、これぐらいならまあ何とかしのげる。それも倍加を溜めて解放するを繰り返せば、一人ずつは何とか倒せてた。
これも特訓の成果か、ドライグ？
『だろうな。相棒の特訓はとにかく基礎体力や危機対処能力を高めつつ、組手で必要な技術を叩き込まれるというものだ。タンニーンが加減をしなかったことと、ラトスが意外と教え上手だったおかげで、しのぐまでなら何とかなっている』
そっか。こんなことで実感したくなかったぜ！
「そろそろ遅くなるぞ！　一斉射撃でぶち殺せ！」
「応ともよ！　死ねやまがい物がぁ！」
やべ、倍加が切れるタイミングが読まれてる!?
何時の間に遠巻きに囲んでると、これって流石にまずいか！
そう思った瞬間、どこからともなくテロリストが投げつけられて、アントレイダーが虚を突かれた。
それに合わせて、一人の顔面を掴んで武器にしながら、ラトスが乱入してくる！
「無事かイッセー！　悪い、俺もタンニーンの旦那も手こずってる！」
「マジかよ、おっさんもか!?」

あのおっさんを手こずらせるとか、こいつら強すぎじゃね!?
「いや、どうも対悪魔用の装備を調達してたみたいでな。旦那が来ることを最初から予定して、専用部隊を組んでたらしい」
あ、なるほど。そりゃおっさんの領地を荒らすならおっさんの対策するか。
って、そんなこと言ってる場合じゃない。
なんか向こうでも燃え始めてる。まだドラゴンアップルの区画じゃないっぽいけど、このままだと延焼ってのが起きるかもしれないぞ。
背中を合わせてアントレイダーと睨み合いながら、ラトスは俺に視線を向けた。
「イッセー、敵さんの本命は星辰奏者らしい。どうも火をつける担当で、星辰光の性質なのか、中々消えない。姐御からの受け売り知識なんだが、たぶん維持性と付属性ってのが高いんだろう。一度くっついたら長い間続く」
「それ、俺じゃなくて皆に行った方がいいんじゃないか？」
俺に言われてもどうしろってんだよ。
だけどラトスは、ちらりと燃えている方向を見て言った。
「ただし射程はさほど高くないっぽいな。たぶんだが、火がついている方向に向かってけば見つかるだろうぜ」
なるほどな。つまり、「俺がおとりになるからお前がいけ！」って感じか。
だけど、それは違うだろ。
「馬鹿野郎、まだ禁手になれない俺がおとりやるべきだろ？　大丈夫、リアス部長の為にもこんなところで―」
死んでやるもんか。そう言えなかった。
というより、ラトスがいきなり俺を掴むと抱え上げた。
え、え、どういうこと!?
「野郎！　味方を投げて砲弾にする気か!?」
「頭イカれてるのか!?　それとも俺達以上の覚悟決めてるのか！」
なんか怖いことをテロリストが言ってるけど、ラトスはなんかにや

りと笑った。
「５０点だ。投げるのは確定だが―」
その瞬間、俺の視界に空が映った。
「―投げる方向は本命だよ！」

「覚えてやがれぇぇぇぇぇぇ!?」

虚をつくには効果的だけど、俺まだ飛べないんだよぉおおおおおお!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

状況が分からないまま、枉法インガは床に倒れていた。
体の震えを抑えることができない。それどころか、このままでは死ぬ可能性すらあるとなんとなく思える眠気を感じている。
子供の頃など、何度もテレビなどでそういう話を見たことがある。寝たら死ぬという、最低でも日本では定番の話だ。
実際は備えをしっかりしている状態などでなら寝て体力を回復した方がいいとも言われているが、この状況下で意識を失えば確実にとどめを刺しに来るということも理解できている。

今この建物内は乱戦となっている。
ご丁寧に自動ドアを開けて入ってきた、数十人の侵入者。彼らは多くがレジスティングアントレイダーになりつつ、他種族ベースの転生悪魔に攻撃を仕掛けてきた。
レイダーと似て異なる装甲を身に纏った和地が応戦し、更に警備員も入り乱れての乱戦だった。乱入者は他の通用口からも侵入していたらしく、混乱状態になっている。
そして、彼女が眠気を感じて倒れているのは最も想定外の非常事態。
季節が夏となっているこの状況下で、例え冷房であってもありえない極低温の状態に建物全体が鳴っているのだ。
自動ドアを破壊しないで入ってきたのは、暑い外気が入ってくることを可能な限り避ける為だろう。その結果として、夏真っ盛りの湿度の高い温帯で、凍死寸前になっている。
このままでは死ぬ。それだけは嫌でも分かる。
だけどどこかほっとしている自分がいて、インガは自虐的に頬を歪めた。
そしてその時、足音が響く。
視線をちらりと上に上げれたのは奇跡だが、不幸だろう。
そこには、装甲越しでも分かるほどの殺意を視線に乗せた、アントレイダーの姿があった。
「忌々しい紛い物が。楽に死ねると思うなよ?」
――ああ、苦しんで殺されるのか、私は。
そう悟れるだけの思考力が残っていることを、心からインガは恨んだ。

状況は最悪だったと言うほかない。
テロと言うものは何時如何なる時も仕掛ける側が先手を取りやすいものだが、それにしても後手に回りすぎている状況だった。
その最大の理由は、大規模テロとしか言いようがないドラゴンアップル群生地を狙った襲撃が、本命の一環であると同時に囮であることが原因だ。
タンニーンは他種族由来の最上級悪魔の顔と言っていい。
単純な戦闘能力なら魔王眷属にも並び立てる者はいるだろう。レーティングゲームのランキングなら、七位のリュディガー・ローゼンクロイツの方が上だろう。
だがしかし、タンニーンに絡むテロを真っ先に起こしたのはその人気と知名度だ。
レーティングゲームに参加できない魔王眷属で、自らも魔王眷属であることに重点を置いている魔王眷属は、必然的にレーティングゲームでの活躍が少なくメディアの露出では一歩劣る。
リュディガーは確かにランキングでこそ上だが、彼は相手の精神を絡めとる作戦を得意とする転生悪魔。加えて上級悪魔に至るまでは魔法使い組織出身であまり目立たなかった為、辛口評価も多いことと絡み合い、玄人好みではあるが一般市民での人気が劣る。
見るからに分かり易くドラゴンであり、上位のプレイヤーであるタンニーンは、子供や一般大衆向けの人気を誇っている。それゆえに、テロの標的になれば非常に注目を集めてしまう。
それはすなわち、他に対する意識が向けられにくくなることだ。
まずそちらに注力させ、動揺している隙に他種族からの転生悪魔が多く集まるだろう施設に同時多発テロを仕掛けるのが、贋作抹消連盟のこの活動。
三大勢力の和平という、下手をするとより他種族の転生悪魔が増える可能性の出来事の勃発。更にそのタイミングでテロを引き起こし、サーゼクス・ミカエル・アザゼルといった各勢力のトップを苦戦させ、アザゼルの腕を一本落とすという禍の団の成果により二重のインパクト。これにより現政権の方針に対する不満が爆発し、また三大勢力

のトップが意外と弱いという勘違いを引き起こしたことがこのテロの要因である。
また始末に負えないことに、彼らはこれまで入念な下準備をしていた。
他種族からも眷属を加えている上級悪魔に、情報を集める為にあえて眷属でいることを受け入れた、臥薪嘗胆を体現する幹部を含めた構成員。サウザンドディストラクションにより来訪した、プログライズキーや星辰奏者の技術。そしてそれにはギリギリで調子に乗らず、本格的に動く為に準備と鍛錬を積んできた忍耐力。
それらすべてが絡み合ったことで、このテロは比較的被害を大規模化させている。
その一環として候補は前もっていくつも見積もられており、そのうちの一つに、よく転生悪魔を対象としたイベントが行われる建物があった。
あくまで候補の一つであったが、そこで星辰奏者の適性検査が行われることで、そこは急遽対象となる。
星辰奏者に他種族がなられては更に状況が悪化する。しかも質の悪いことに、その検査は実験目的で行われていながらも、技術の提供元が神の子を見張る者であったことから、技術力の高さから安全性はあるだろうと他種族ベース含めた転生悪魔も応募していたことを察知する。
結論として、本命に匹敵する重要箇所として、精鋭が派遣され、他種族由来の転生悪魔を殲滅する作戦が決行される。
そしてそれを率いる者は、ある意味で重要であることから実力者が派遣されることになる。
ドラゴンアップル焼却作戦を担当するタルウィル。そんな彼の友人であり、この作戦において不満を抱いていた主へと反旗を翻した、ザルチェル。
最大の特性は、彼らが独自に星辰奏者になっていたという点。そしてその能力を最大限に生かせるということだ。
タルウィルが保有する星辰光は、焼夷炎弾投射能力、

邪龍殺しの焦熱地獄（ヘル＝コード・インフェルノ）。
長時間相手にへばりつきながら燃え盛る炎を撒き散らす星辰光。この星辰光を得たその時から、ドラゴンアップルを焼き尽くすことを作戦に組み込んでいたというだけの素質を持つ星。
ザルチェルが保有する星辰光は、極寒空間精製能力、贋物滅す紅蓮地獄（ヘル＝コード・コキュートス）。
広範囲の気温を南極圏の領域にまで下げ、更にその影響を受けない者をえり分けることができる星辰光。この星辰光を最大限に利用するべく、作戦は可能な限り気温が高まっている環境下であることを求められた星。
この二つの星は、単純な性能以上に適切に運用した時の影響力が絶大であると考えられていた。
その二つの星が、紛い物を滅ぼすべく猛威を振るう。

枉法インガは、死にたいと願いつつ死にたくないと願っている。矛盾した思考だが、これは意外と珍しいものではない。
自殺する人間は、世界中で満を軽く超えるだろう。総人口が大きく劣る異形といえど、探せば両手の指がきかなくなるほどいるはずだ。そして実行する者達も少なくはない。
だが、死というものは根源的な忌避感を抱かせるものだ。
だから死なない程度の自傷で発散する者もいる。自殺する時も実態はともかく楽に死ねるような方法をとる者は数多い。そして踏み込むことができずに、うだうだと生きている者はもっと多い。
枉法インガはそんな少女だ。
自己嫌悪は強いくせに、かと言って死ぬのが怖いと思ってしまう。文字通り死に等しい痛みを味わってしまったがゆえに、それをもう一度味わうことを怖がってしまう。そうしない方が総計で苦しみが大きくなると分かっていても選べない、そんな少女だった。

何時からそうなってしまったのか、彼女自身分からない。
何時の間にか腐っていたとしか言いようがない。そんな風に、もっと元気でボーイッシュと言われていた自分は変わってしまった。
だからだろう。このまま眠るように本当に死ねるのならいいのかと思ったのは。
だからだろう。今まさに即死しない代わりに必ず激痛を味わいながら死ぬような傷を負わせようとしているのを理解して、声を出せないほど恐怖を感じているのは。
「……肺にでかい穴でも空けるか。そのまま自分の血で溺れて死ね」
「……い……や……」
悲鳴もろくに出せない。
どこかで読んだ記憶がある。人間の死に方の中でも溺死や水死というのは非常に苦しい死に方であると。
昔の自分なら、もっと何かができたのではないか。
ふとしたことで昔の、隣に住んでいた男の子と出会ってしまったから強くそう思う。
昔はこうじゃなかった。何時の間にかこうなってしまった。どうすればよかったのだろう。
助けなど来るはずがない。
もう親にも見捨てられている。教会からも嫌われているだろう。主に頼れるなどあり得ない●●●●●●●●●●
どうしようもなく、インガの人生は詰んでいる。
世界を探せば、もっと不幸な者もいるだろう。食べるのに困らないのは十分すぎる幸運だと、そういう人もいるだろう。むしろ世界には自分の待遇を羨む者もいるだろう。
だが、その環境に自分が苦しく感じないかというのは別問題だ。そして、他者がもっと不幸だから自分はこの環境でも平気だと思えるのなら、枉法インガはこんなところで死んでいるわけがない。
そんな女に、助けの手が伸びるわけがない。それを自分自身が理解しているにも関わらず――
「……助けて」

―そう声が出てしまう自分に、何より彼女が絶望した。

同時期、ドラゴンアップル焼却作戦を担当している悪魔達は、ドラゴンアップルの群生地に向かって突撃していた。

囮であると同時に、この作戦は最も重要な作戦でもある。

贋作抹消連盟にとって、転生悪魔の華ともいえるタンニーンは怨敵に等しい。そしてタンニーンという存在に最も通用を与えられるとするならば、それは彼が悪魔に転生する大きな理由だったドラゴンアップルを絶滅させることだ。

そしてそれだけの作戦を行えば、間違いなく決死隊になることも分かっている。ゆえに、この作戦には組織でも特に強い意志を持つ者達が参加しており、アントレイダーの数も手向けと言わんばかりに多く用意されていた。

結果と言って防衛網は突破されており、それゆえに三人で行動している彼らは何としてもドラゴンアップルを燃やす為に邁進し―

「……ぁ……」

―何か嫌な予感を覚える音を聞いて、ふと振り返る。

「……ぁぁぁ

出す。
アントレイダーは対異形を想定している為、本来ならこれでも十分対応できるだろう。
――だが、今回は相手が悪かった。
「アスカロン！」
「ぐあぁあああ!?」
その味方の絶叫に、男は咄嗟に振り返ってしまう。
そして、紅い籠手から聖なるオーラを纏った剣を伸ばした少年が、同胞を一太刀で倒すところを目撃し、背中を向けることを諦める。
即座にレジスティングアーミーで扇状に包囲するが、少年は臆することなく睨みつける。
「てめえ！　ドラゴンアップルが無いと死ぬドラゴンがいるってのに、燃やそうってのか!!」
「当然！　むしろ俺達悪魔の世界を蹂躙する偽物どもや、そいつが庇護するドラゴンには死んでもらうぜ！」
真っ向から言い返しながら、しかし男は……否。
「俺は贋作抹消連盟の星辰奏者（エスペラント）、タルウィル様だ。……てめえはいったいなんだ、偽物野郎」
この作戦の切り札ともいえるタルウィルは、警戒心を強く持っていた。
持っているのは神器としては数多い龍（トウワイス・クリティカル）の手に似ているが、何かが決定的に違う。なにより、悪魔でありながら聖剣を持ち、そのオーラも明らかに並みの聖剣ではない。
「ドラゴンアップルは絶対燃やすし、贋作どもを星辰奏者にさせるつもりもねえ。誰だ、てめえ？」
その言葉に、少年は真っ向から反論した。
「なめんな、お前達の好きにはさせねえよ。主様であるリアス部長の名に懸けてな！」
そう真っ向から吠えた少年は、聖剣の切っ先を突きつける。
「俺はリアス・グレモリー様の最強の兵士（ポーン）、赤龍帝の兵藤一誠！　あと、星辰奏者のところも好きにはならねえよ！」

真っ向から啖呵を切った気に食わない少年は、はっきりとタルウィに宣言する。
「そこにはなぁ、コカビエルにだって立ち向かえる、頼りになるダチがいるんだからな！」

そして、その言葉に嘘は断じてない。
『サルヴェイティングブラストフィーバー』
その音と殺気に、咄嗟に銃口を突きつけていたザルチェルは反応できた。
仮にも上級悪魔試験すら合格した魔力で防御をしつつ、レジスティングアーミーを声のした方向に集めて防御態勢をとる。
その上で、十メートル以上吹っ飛ばされた時点で敵が強敵だとすぐに分かった。
即座に立ち上がり、小声で味方に指示を出しながら、ザルチェルは攻撃を仕掛けてきた相手を睨む。
そこにいたのは、青い犬を模した装甲に身を包まれた存在。
レイダーとは似て異なる意匠の、一人の戦士。
「……ったく。色々言いたいことや鬱憤はあるが、それはこの際どうでもいい」
そう、腹に据えかねていると分かる声が、殺意を込めて投げかけられる。
静かに、手に持った拳銃を突きつけながら、男の声がザルチェルに向かって放たれた。
「俺の目の前で俺の身内に悲しみの涙流させたうえで殺そうとか、知

らないとはいえ宣戦布告だ。……死にたくないなら抵抗するなよ？
加減するのも一苦労なんだよ」

涙の意味を変える者、九成和地。

究極を従える赤龍帝、兵藤一誠。

赤と青の戦士が、涙と悪意を止める為に、今此処に戦闘を開始した。

魔性変革編　第十四話　赤い龍帝と青い救済

イッセーＳｉｄｅ

ったく！　何とか間に合った！
間に合ったけど此処からどうする？
敵のタルウィルとかいうアントレイダーが、星辰奏者だってことはもう分かった。
このやけにへばりついて消えにくい炎。これが奴の星辰光か。
本当に千差万別なんだな、星辰光ってのは。九成やミカエルさんが使ってるのとは全く似てないし。
『同感だな。神器にも色々あるが、こいつらは能力の方向性だけでなく、それぞれで得手不得手まで異なると来た。こんな異能が人間世界でも使われ、まして異形にも通用するとは世も末だな』
まったくだ。しかもそれで、タンニーンのおっさんが大事にしているドラゴンアップルを燃やそうってのが最悪だ。
こいつがその肝だっていうなら、此処で俺がぶっ飛ばす。
「一度でも火をつけりゃぁ、こっちの勝ちだって分かってるかぁ、この偽物野郎が！」
っていうかさっきから撒き散らすな！　周りが火の海じゃねえか！
ったく。こんなところでやられるわけにはいかないし、あまり燃やして被害が増えていいわけでもないってのに。
俺は咄嗟に燃え残ってた木を盾にして、炎を防ぐ。
そのついでに、死角に入っているからちょっとだけ確認。……よし、これならいけるか。
ドライグ。ちょっと無茶するが大丈夫か？

俺はちょっとぐらい文句を言われるかもと思ったけど、ドライグは平然としている。
『安心しろ。コカビエルやヴァーリ・ルシファーを潜り抜けた時こそシャルロット達の助力があってこそだが、タンニーンとの特訓は相棒の力になっている。この程度の奴なら、今なら十分渡り合えるさ』
激励サンキュー！　腹もくくったぜ！
じゃあ、反撃行くか!!

和地Ｓｉｄｅ

俺は即座に星辰光でインガ姉ちゃんの周りにカバーを作ると、敵さんに対して攻撃を敢行する。
接近して殴り飛ばしたいところだが、乱戦になるのは避けたい。
袋叩きになると不覚を取りそうだし、数の問題があるからレジスティングアーミーを撃ち漏らしてインガ姉ちゃんが襲われる可能性もある。
堕天使側の客人である俺よりも、他種族由来の転生悪魔のインガ姉ちゃんの方がむかつくだろうからな。そこは気にするべきだろう。
と、いうわけで。
通路に入り込んで銃撃戦を仕掛ける敵に対し、俺も星辰光の防壁で攻撃を防ぎながらやるべきことをやる。
「ふはははははは！　本物というからには強いのかと思ったが、紛い物一人倒すのに苦労しているようじゃあなあ！　もういっそのこと、役に立たないお前ら無能を間引いた方が本物の悪魔の為になるんじゃないか!?　俺ってきっと貢献したってことで褒賞されるぜ、絶対」

「てめぇぇぇぇぇぇぇぇ!?　殺す！　絶対殺す！　殺したうえでミンチにしてやるよぉおおおおお！」
徹底的に挑発し、俺のことを他種族由来の転生悪魔と誤解されるようにすることも忘れない。
これで奴の意識をインガ姉ちゃんから逸らしておけば、俺に攻撃が集中するから大丈夫だろう。
どうやら奴さんの星辰光は、拡散性・操縦性・付属性の合わせ技による戦闘フィールドの環境変化。それもおそらくは極低温状態にする類だ。
センサーが判別するところでは、北極とか南極とかレベル。この環境を建物内部で満たしつつ、味方に対する悪影響を最小限に押させることで有利に進めているってことだろう。
念には念の為に厚着もしていたから、とにかく向こうが有利に立ち回れている。とはいえ見えないところに操縦性を生かしている当たり、何かしらの位置察知手段を用意しているとかそんな感じだろう。
……最悪なのは、此処が室内だということだ。
室内ということは、外気温の影響を受けるのに時間がかかるということ。今の季節なら、星辰光が解除されればすぐにでもぬるくなるだろう状況が、室内かつ入口を可能な限り壊さず入ったことで阻害されるわけだ。
インガ姉ちゃんには可能な限り遮熱型の結界を用意したけど、そんなもの北極で鎌倉作ってヒバークしてるようなもんだ。この薄着だと限度がある。
あまり時間はかけられない。時間がかかると低体温症でインガ姉ちゃんがまずいし、同様の事態になる人達も多いだろう。そもそも他の連中が他の他種族の人を殺すはずだ。
つまり、長期戦闘に持ち込むことは本来悪手。
敵もそれが分かってるんだろう。だからこそ、激高してはいるけど余裕もある。
ああ、このままだとこっちがジリ貧で戦術的に敗北するんだが―

イッセーＳｉｄｅ

おっしゃ行くぜ！
作戦も立てたし、あんまり時間もかけられねえ。
だから一気に行くぜ！
俺は回避を辞めて一旦燃え盛る気を死角にして準備を整えると、そのまま走り出す。
フェイントも何もない突進だけど、その分一気に距離は詰められる。
同時に倍加のカウントも溜めに溜めたからな。これで一気にぶん殴る！
「馬鹿がぁ！」
もちろん相手も真っ向から焼夷炎弾をぶっ放してくるけど、その対策はできてるんだよ!!
「なめんな！」
俺は事前に脱いでおいた、ジャージの上着を投げつけて受け止める。
燃え移る前に投げ捨てて、そのまま全力疾走。
もっかい来る前にシャツを脱いで、二発目も防いだ。
あと五メートル！　向こうも後ろに下がってるけど、バク走じゃあ限界もあるだろ。
「なろうガァ！」
二メートルで放たれた炎を、俺はアスカロンを外して投げつけることで防ぐ。
アスカロンなら燃え尽きないはず。練習の為に一旦返してもらっててよかった！

さあ、これで―

「――――かかったな？」

―そう思った瞬間、相手の全身が炎に包まれてこっちに突進してきた。

え、なんで!?　この星辰光ってそんなことできるのかよ!?

「勉強が足りねえなぁ！　付属性ってのは本来こう使うんだよぉ!!」

マジか！　自分の攻撃で傷つかなくなるのかよ!?

っていうかコレ、完璧にカウンターだから―

「水！」

全力で譲渡して、持ってきていた水を叩き込む！

タンニーンとのおっさんとの修行で、おっさんの炎を何度も消してきた俺の特訓の成果だ。流石におっさんの炎より強いってことはないだろうしな。

今までずっと隠してた、最後の切り札だ！

そしてここからが本番だ。

「ぶっ飛びやがれぇぇぇぇぇぇぇ！」

勢いよく、相手を盛大に殴りつける。

……こっそり持ってきていた十字架と聖水のセットで。ついでに一撃の威力じゃなくて、顎を掠めて脳震盪させる方法で。聖なるオーラって体が動けなくなるから、脳震盪込みなら一撃で倒せるだろ。

ライザー相手に戦う為に、生贄に差し出してドラゴンにしたことで手にした切り札。俺の左腕は悪魔じゃなくてドラゴンだから、こういうことが……出来るんだよぉ!!

和地Ｓｉｄｅ

この星辰光で長期戦に持ち込まれればきつい。ジリ貧だ。これは事実だ。
だから―
「――――お待たせ。ここから反撃開始よ」
―出来る奴がいればそれでいい。
今この瞬間、息に気温が跳ね上がった。
マイナス２０度を下回る気温が、一気に３０度ぐらいにまで跳ね上がる。
その瞬間、遠慮なく俺は本腰を入れる。
「な、なんだと……暑う!?」
相手も狼狽しているこの瞬間、遠慮なく俺は仕掛けに行く。
『ＳＡＶＥ』
「隙ありだ！」
『サルヴェイティングブラストフィーバー』
遠慮ない集中砲火で、一気に敵を吹っ飛ばす。
よし、何とかなったか。
「インガ姉ちゃん、無事か!?」
慌てて振り返るのと、暑くなっていた気温が少し収まるのはほぼ同時。
そして振り返った先には、赤毛を揺らして春っちがインガ姉ちゃんを介抱していた。
「……大丈夫のようね、このまま一分ほど禁手を維持すれば、体温も高まるでしょうね」
まさか春っちが禁手に到達していて、しかもこの状況をどうにかできる禁手を持っているのはうれしい誤算だ。最も変則的な運用だから時間をかける必要はあったけどな。
そして、インガ姉ちゃんもこれで大丈夫ということだ。
「ふぅ。とりあえずインガ姉ちゃんはこれで大丈夫か」
それが確認できれば、あとはこっちは集中するべきか。
「とりあえず、敵の星辰光（アステリズム）さえなんとかできればあとはやりようはあ

るな。春っち、インガ姉ちゃんを安全な場所に連れて行ってくれないか？」
「ＯＫ。避難を終えたらすぐに参加するから、それまで頼んだわよ」
……この戦い、そこに切り札が一つあった。
春っちが神器持ちで、しかも禁手到達者。
その中にこの極低温地獄を打開できるという禁手があり、しかしチャージ時間が結構掛かるということでそこまで凌ぐことに徹していた。
そして見事成功。しかも星辰奏者を撃破したから、これで極寒地獄が続くこともない。
……さて、あとは一気に残敵掃討するだけだな！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

『あ、まさかと思ったけどお前もそっち行ってたのかイッセー』
『ああ。なんかどこも大変だな。テロリスト多すぎだろ？　九成は大丈夫だったか？』
『ああ、そっちは何とかなったんだけど―』
『……何その沈黙？』
『……ザイアに拾われる前の知り合いの女性二人、ハードな人生を送った上で転生悪魔になってて。ヘビーでヘビーでそれとなく聞いてすっごくいたたまれなかった』
『なんだよその運命の出会いは！　あれか、カズヒが男にハーレム作れること要求していたってのはマジか！　フラグだったのか!?』
『おいやめろ。本当にヘビーだから、笑い話にできないから！　あとディオドラとヴィールの眷属悪魔だそうだから、もしかしたら顔見て

るぞ？』
『マジか!?　っていうか問題はそこじゃねえな、大丈夫なのか？』
『一人は武闘派だったのか余裕なんだけど、もう一人が低体温症でこれから搬送される感じだ。そっちは？』
『こっちは大丈夫。ドラゴンアップルに火は移ってないし、今水や氷の属性を司るドラゴンが総出で沈下してる。星辰奏者も殴り倒したから大丈夫』
『なるほどな。じゃ、お互い戦後処理とかありそうだし、今日のところはこの辺でっと』

枉法インガは、ふと気づくと簡易ベッドに横たえられていた。
てっきり殺されるかと思ったが、どうやら無事らしい。
意識が朦朧としている時に、まるで勇者のように現れた、青い装甲を纏った戦士を見た気もするが、意識が飛びかけていた所為で曖昧な状態だった。
「……あ、起きた？」
そんな声がかけられて視線を向けると、そこには赤い髪をポニーテールにした少女が一人。
確か成田春菜という、自分とな異なる形で和地と付き合いのあった少女だったはずだ。
戦闘に巻き込まれてはぐれたのだけは覚えているが、どうやら無事だったらしい。水を飲みながら簡易チェアに座ってこちらを見ていた。
「あ、私……」
「あまり無理しない方がいいわよ。私は一応起きるまで見てただけだから、もう行くしね」
そう言いながら、春菜は軽く肩をすくめた。
「私は休憩のついでに頼みごとをされただけだもの。それももう終わ

るから、帰らせてもらうわ」
そう言って、彼女は一枚の紙を取り出すと、それをインガの枕元に置いた。
「和地からの贈り物。連絡先だそうよ」
そう言われて、ちらりと視線を向ける。
ふと思うのは、それを自分が貰う資格があるのかということ。
その迷いを知ってか知らずか、既に立ち上がって去ろうとしていた春菜は、こちらに一瞥を向ける。
「……お節介かもしれないけど、貴方の人生に柱はある？　もしないなら、それは取っておきなさい」
見透かすようなその目は、近い人生経験をしたことからくる同情心か。それとも彼女の言う「柱」を、彼女自身が失った経験があるからこその直感か。
「前に進みたいのに進めないなら、せめて引っ張り上げてくれる手を掴み損ねないことね」
あまりにも、自分に対して痛烈に刺さる言葉だというほかなかった。

魔性変革編　第十五話　特訓終了！

和地Ｓｉｄｅ

さて、今日で特訓機関も終了だ。
最後の詰めもかねて、俺は今結構長距離でトレーニングの成果を示している。
一旦星辰光の持続時間に限界が来たから、ちょうどいい所に池があったのでそこで休憩。
簡単に習得した異空間の魔法に仕込んでた携帯コンロでお湯を沸かして、ちょっと優雅なティータイムだ。
あ～。これなんかいい感じだ～。ちょっとほっこりする～。
俺は何となく空を見ながら、ついでに買ってたクッキーをちょっと食べて、ふと息を吐く。
冥界の紫色の空にはなれないが、たまに見る分にはいい刺激になるとは思う。同時に、青い空に慣れていた人たちは、こっちが普通になるとどうなるのかとも思う。
インガ姉ちゃんに春っち。まさかザイアに引き取られてから、もう会う機会もないだろうと思った人達とこんなところで会うとは思っていなかった。
あのあと戦後処理とか面倒なこともすることになったので、直接話している時間もなかった。
……子供の頃から綺麗になったよなぁ。っていうか俺、よくあんな綺麗な女の子達を見てすぐ連想で来たよなぁ。
……いかんいかん。カズヒ姉さんのとんでもない男の条件にちょっとパニくってるぞ俺。
確かに可愛く成長しててぐっと来たけど、目を閉じてカズヒ姉さん

の顔を思い出せば、すぐにカズヒ姉さんに見惚れる程度には俺はカズヒ姉さんにゾッコンだ。こんな状態でそういう真似をしていいわけがないというか、いろんな意味でできるか!!

ええい、イッセーがちょっと羨ましいぞ。最初っからハーレム目指す宣言してるから、そういう心理的抵抗がなさそうな奴だしな。加えて悪魔だからその辺も更に気にする必要ないし、もう完璧に問題ない。むしろ女の方から寄ってきてるだろ。あのモテモテっぷりでなんで気づかない。

「いや、本当になんで気付かない？」

なんか醒めた。

本当にアイツ気づいてないっぽいからなぁ。ハーレム作る気あるなら気づけよ馬鹿と言いたい。

……ま、今日でみんなと合流も可能だろう。

どれぐらい成長したのか、ちょっと気になるかな？

「うぇえええええん！　部長もうやだぁあああああ！　これ以上やったら死ぬぅうううううう!!」

もう全力で泣きはらすイッセーの言葉に、俺達は内心で同情する。ガチでひと月近く修行したが、結局イッセーは禁手には至らなかったらしい。

まあこれはいいだろう。っていうか、一ヶ月山籠もりした程度で禁手になられたら俺達はどうなるんだよと言いたい。

「で、総督。ブッチャケ此処は予想の範疇内ですけど……他の方はどんな感じなんですか？」

大泣きするイッセーに同情しながらも、とりあえず俺はその隙に確認するべきところを確認する。

不確定要素というか不安要素というか、気になるところがあるからな。

総督もそこは把握しているのか、眉間を揉みながらため息をついた。
「フロンズの奴だろ？　奴さんの横やりのおかげで、朱乃も小猫もそっちにできるならしたいって感情が隠せてねえな。……まぁ、あいつのスタンスが分かったのは不幸中の幸いか」
「……スタンス、ねぇ」
カズヒ姉さんがそこに反応して、少しだけど目を細めた。
「技術開発による軍事組織全体の質の向上なのは、まあ当然といえば当然ね。ごく一部の戦力だけ向上させても、点の突破力は高められても面の制圧力は高められないもの。……とはいえ、異形の世界ではあまり重視されない点を重視しているのね」
そう、そこだ。
異形社会ってのは、悪魔に限らず量より質が重視されやすい。
そもそもインフレ激しいというか、格の違いが戦闘能力の大小に大きく関わるからな。神や魔王クラスともなれば、一撃で数万の下級クラスを殲滅することも不可能じゃないだろう。
そんなわけだから、必然的にそれぞれの勢力のトップは実力的にも高い存在であることが多い。それが異形という世界の在り方だ。
そこに一石を投じると言っていいのがフロンズのスタンス。しかも質が悪いことに、これができないとは言い難い。
プログライズキー関連技術は確かに強大だし、星辰体技術でも魔王クラスに集団で牙を届かせることができると、寄りにもよって禍の団が証明している。
それを踏まえると、本当にできる可能性はあるっていうかなんというか……。
「個人的には、一つぐらいフロンズっていう人の成果を調べてみたいわねぇ。……いっそのこと、承諾してもらうのもいいんじゃないですかぁ？」
「思わぬ方向から裏切者が出やがったな。なに、お前フロンズの肩持つのかよ!?」
リーネスからの想わぬ発言に、先生も流石に面食らっている。

リーネスはリーネスで、意外とマジな顔つきになって言っているから尚更なんというか、インパクトが強い。
「頑張れば何でもできるなんて言うのは、歴史を振り返れば欺瞞か無知なだけですよぉ。それに、「才能がある」から「才能を使う」ことを強制されるのはいいのかっていう話にもなるじゃないですかぁ。なら、才能に左右されない何かを得られて、それで何かができるのには価値があります」
真剣な言葉に、俺は何も言わずにそれを受け止める。
総督もマジな話だと思ったからか、あえて反論はしないで話を無言で促した。
そして、カズヒ姉さんはどこか遠くを見るように、なんでか胸が苦しいのかと思わせるような表情を浮かべていた。
「どれだけ頑張っていたって、分母と分子が釣り合ってない夢は叶わない。才能のあるなしでやりたいことが決まるわけでもない。だからこそ、才能に左右されない可能性を人工的に得られるのは、何かの救いになると思います。……だからこそ、私はプログライズキー(それ)や星辰光(ら)を知りたいと思っていますよ、総督」
まっすぐに、リーネスはそうはっきりと言い切った。
「……まあ、才能を生かして行きたい人や、頑張って夢を叶えた人を悪く言いたいわけじゃないですけどねぇ」
そんな、最後にちょっとだけ茶化してまとめるところに、俺は何も言えなかった。
リーネスも、何かを抱えて生きているんだろうかと、ふとそう思えてしまってならなかった。

「イッセーも大変でしたのねぇ。よしよし、いい子いい子」
「あの、イッセーは結構スケベですから、その気もないのに胸に顔を埋めさせない方がいいかと思いますよ?」

「あら？　あなたもそれとなくそんな位置取りになっているけれど？」
……ヒマリ、シャル相ロット棒や部主長相手にイッセーの頭を取り合うような状況に入るなや。

そんなこともありながら、俺達はとあるパーティに参加することになっていた。
「え、タンニーンさんって今回のパーティに参加しないのか？　冥界での定番行事って聞いてたんだが」
「ほら、贋作抹消連盟が色々やってただろ？　俺のコーチでまだその辺の事後処理が終わってないから、今日は辞退するってさ」
先日のテロの影響は結構後を引いてるな。まあ、同時多発的に十か所以上でテロが勃発してたとか言うからある意味当然か。
今回、俺達は冥界のパーティに出席することになっている。その年の有望な若手悪魔を紹介するパーティとか言ってたけど、部長の表情から殆どお題目でコネ作りとか酒飲んだりするパーティなのかもしれない。今年からは他の勢力からもゲストが来るらしいし、飲みにケーションで中を深めようって感じか？
俺とイッセーは、駒王学園の制服を礼服代わりにして、女性陣や他の男性陣を待っていた。
特に女性陣は時間がかかりそうだな。こういうのは、どうしても女子の方が男子より時間かかるって相場が決まってるし。
なもんで、俺達はこうして時間を潰しているわけだ。
こういう時は、女率が高いと肩身が狭いというか振り回されるというか。ま、綺麗な美少女ぞろいだと考えれば、当然の対価と考えるべきか。
さて、そういえば報告では聞いてなかったことがあったな。イッセーもイッセーで把握しづらい所だけど、もしかしたら聞けるかも

な。
「それでイッセー。結局フロンズの行ってた新技術、朱乃さんと小猫は使うのか？」
そこがちょっと気になるな。
先生は抵抗があるようだけど、俺としては選択肢の一つとしてはありだろう。
嫌な気分を押し殺して能力を使っても、それが原因で綻びが生まれかねないからな。それに同時併用するっていう在り方も取れるんだし、使うことそのものは問題ないとは思う。
イッセーはイッセーで少し首を捻っているが、どうやら話は聞いてるらしい。
「使った後の報告とかレポートとか求められただけみたいだから、朱乃さんも小猫ちゃんも貰ってはいるんだってさ。とりあえず一度使ってみたけど、二人とも「これは最低でも眷属悪魔全員で使うぐらいがいい」って感じの感想だったかな」
「そうなのか？　まあ、言い方はどうかと思うけど、らしいって感じはするな」
あのフロンズ・フィーニクスは、どうも戦闘能力面は「軍勢規模」で強化する方向っぽいしな。
個人戦力を切って捨ててるわけじゃないようだけど、必要なのは軍事勢力全体に普及させれるかどうかが肝って感じだ。なんというか、面での制圧力に比重が向けられているっていうか。
異形達の世界で言うと、神や魔王クラスは武闘派ならクリーンな核兵器級の攻撃とか余裕で出せるからな。放射能汚染とか長射程とかを考慮しなければ、本当に核兵器より一撃の威力は超えて当然な感じはある。
だからこそ、その圧倒的な質ゆえに数に主眼が置かれにくい所はある。その上で量を維持できる質を重視している以上、人海戦術で神や魔王を理論上打倒可能にしている設計になって入るんだろう。
正直興味があるんだが、どんな感じなんだろうな。
「一応ある程度資料が送られてもいたけど、九成の星辰光より弱いの

だけは断言できるかな。……確かこんな感じだったような」
「あ、新兵器ってそういえば星辰体運用兵器か。……なるほどねぇ」
と、適当な紙にイッセーが書いたのは、その星辰光のステータス。
基準値：D
発動値：C
収束性：D
拡散性：D
操縦性：C
付属性：D
維持性：C
干渉性：B
なるほど、干渉性を重視した星辰光ってことか。
干渉性ってのは、要は効果範囲内にある能力で制御できるものに干渉する力だ。
ただ高ければいいってものじゃなく、それが普通に存在するかどうかで状況が大きく変わる。要は環境次第でオールレンジ攻撃ができる異能って感じでいえばいいんだろうか。
例えば火を発射する星辰光があるとする。
この場合、干渉性が引くとある意味とても分かりやすい。自分から発生させた火しか発射できないから、ある意味敵は自分だけを警戒できる。
ただし、干渉性の高い奴が山火事の中で使うと話は別だ。燃え盛っているところからも火炎放射ができるから、敵は事実上全方位を警戒しないといけない。
逆に干渉性が高くても、周囲に火がない環境だと意味がない。自分の放った攻撃で延焼を起こすという方法で、少しずつ砲台を作るという必要性がある。多大此れも、豪雨の中とかになると論外と言ってもいい。
とまあ、そんな性質を重視したうえで俺が知っているフロンズのスタンスや朱乃さんや小猫の感想を考えると、読めてきたな。
「……たぶん、同じ装備を持った同士が連携することで、直列させての

出力強化や並列作業での疑似的な精密制御を行うコンセプトなんだろう。性能を低くする代わりに、全員が同じ星辰光を使えるようにする。……コレ、現物見て方向性を変えたのか受けたのか似たコンセプトだから参考にしたのかは分からないけど、絶対サリュートⅠに影響受けてるだろ」

俺はそうぼやくしかねえ。

つまりこの装備は、誰でもこのレベルの星辰光を使える装備ってことなんだろう。少なくとも、純血にしろ混血にしろ転生にしろ、悪魔なら殆ど全員が装備できるようにしているはずだ。

そして伝え聞いたり推測されたフロンズの性格から考えると、最低でも分隊規模、状況次第では師団規模で運用するのが前提ってわけだな。

「サリュートⅠ、サーゼクス様達でも手古摺ったからなぁ。性能が低い分は数でカバーするって感じか？　確かにあの人、眷属悪魔だけじゃなくて私兵集団とかもう持ってそうだけど」

「絶対テスターの本命はそいつらだな。二人はあれだ。「どうせ食客も軍勢に参加するのなら、最初からデータを取って不都合無いようにするべきか」とか、「魔王派にも流通させるんだから、魔王派に恩を売れる形にしよう」とかそんな感じだろ」

イッセーとそんな風に意見を交換してると、もうどう見てもフロンズって奴が「やり手の政治家」にしか思えない。

コンセプトの都合上派閥の垣根を越えて流通してくれないと困るのだから、できる限り恩を売る形で流通させる。そしてどうせ使う側にいるのだから、他種族からの連中もテスターとして積極的に組み込めればいい。

そんな感じなのがとってもよく分かる。しかもデメリットがまずないうえ、対禍の団という大義名分もあるから断る理由がない。

しかも二人からすれば、喉から手が出そうな代物だからな。尚更二人が使用するのは決定事項か。そして朱乃さんがテスターとして使用すれば「姫島」や「バラキエル」という異形社会でもネームバリューのでかい箔が勝手についてくれることにもなりかねない。

別に断られても、他にたくさんテスター候補はいるから得に損もない。どう転んでも大損することの無いやり口には感心するしかないな。
「……お、兵藤に九成。お前らも制服で行くのか？」
と、そこに姿を現したのは匙元士郎だったな。
「よ、そっちも女子待ちか？」
「まあな。……にしても、お互い色々頑張ったみたいだな」
俺にそう返答しながら、お互いになんとなく苦笑する。
イッセーも匙も、体つきががっしりとした感じだ。この二人は荒事絡みの環境に関わっている期間が短いから、その分過酷な特訓の成果が目に見えやすいな。
俺は一応十年近く段階を踏んで軍事訓練を受けてるからな。今更ちょっと特訓した程度で、体つきが急にがっしりつくわけでもない。
最も、特訓の成果はしっかりと掴んでいる。そこから自信はちょっとついてるし、久しぶりに濃密なトレーニング期間を積んだことでそれなりに体幹とかは洗練されたとは思っている。
だからこそ匙も俺も含めてそう言ったんだろうな。……それが分かるぐらいには成長したってことなんだろう。
「大変だなイッセー。こりゃレーティングゲームは苦戦しそうだぞ？」
「いやいや敗けねえよ!?　っていうか俺はドラゴン二人に徹底的に鍛えられたからな!?」
イッセーが慌ててそう反論するけど、言われて思い返すと本当に酷いな。
少なくとも、荒事絡みの世界に足を踏み入れて半年も経ってない奴が受けるトレーニングじゃない。どう考えてもレンジャー訓練とかの方がまだマシだろう。
当人もサバイバリティがめっちゃ高まっているみたいだし。そこは心から同情するし、慌てて止めて最低限の装備を渡したカズヒ姉さんは厳しくも優しかった。
「……サバイバルキットの存在は、厳しいカズヒらしいけど本当にあ

りがたかった」
「……大変だな、お前も」
「……そこは本当に同感」
遠い目をするイッセーに、匙も俺も遠い目に合う。
ちょっと気を取り直すか。
「で、確か明日か明後日には部長と会長でレーティングゲームだったな。正直ちょっと楽しみというか、どんな戦いになるのか期待してる」
俺は素直にそう言った。
まあぶっちゃけると、シトリー眷属の勝算は薄いだろう。
何せグレモリー眷属は一味違う。今代の赤龍帝に今代のデュランダル使いに堕天使最高幹部の娘やら希少かつ強大な猫又の上位種とかいう、当人の信条すら無視すればこの時点で壮大なラインナップ。それ以外のメンツも軒並みレアキャラというかイレギュラーというか、とにかくぶっ飛んだメンツだ。
将来性を含めれば、眷属悪魔全体の才能においてはトップクラスだろう。眷属全員を上級悪魔の末裔とかで構成しない限り、これを超えることはまずできない。
というか、俺も下馬評というか会合前の戦力的な序列を見ているから尚更言える。才能だけでなく現状の成果や数値変換できる戦闘能力込みで、明確に序列が設定されている。
上から順番にサイラオーグ・バアル、ヴィール・アガレス、イシロ・グラシャラボラス、リアス・グレモリー、シーグヴァイラ・アガレス、ノア・ベリアル、フロンズ・フィーニクス、ディオドラ・アスタロト、ゼファードル・グラシャラボラス、ソーナ・シトリーという感じだ。
上から四番目と一番下となると、どっちが有利かなんて決まり切っている。代理でしかないゼファードルが会長より上なのはちょっと意外だが、なんでも最近スカウトした眷属の実力が飛びぬけているらしい。それが原因で会長がドベになっている。
ただし、だから必ず負けるとは言い難い。
何せ会長は部長の幼馴染で、ある意味グレモリー眷属の活躍をかな

り近くで見てきた人だ。これまで後塵を拝してきたからこそ、その足元を掬う戦術を思い描ける可能性がある。
「言っとくけど、俺達は負ける気なんてないからな」
　匙はそうはっきりと告げる。
「会長は本気で誰でも通える学園を冥界に作りたいと思っている。だけどそれはフロンズの言う冥界の発展以上に、冥界にいる子供達のことを思っているからだ。フロンズに完全に主導権を握られるわけにはいかないんだよ」
　そう告げ、そして匙は自分の両手を見る。
「俺も、正直教師になりたいって思ってる。会長とできちゃった結婚をしたいって夢は兵藤に語ったと思うけど、俺の死んだ両親は教育関係だから、そっちも夢になってるんだ」
　……そんな過去があったのか。
「その年で両親を亡くすってのはきついな。俺も経験あるから、少しは分かると思う」
　まあ、状況が違うから全部分かるなんて言えないけどな。
　それでも、その痛みを少しぐらいは分かると思いたい。
　匙はそこで少し寂しげに笑うけど、すぐに気分を切り替えたのか真っ直ぐに俺達を見る。
「だけど、冥界は日本とは比べ物にならないぐらい教育が進んでない。会長が日本に来たのは、人間界の先進国が持つ進んだ教育文化を学ぶ為でもある。俺も、それを支えたい」
　そして匙は拳を握ると、真っ直ぐにイッセーに突き出した。
「言っとくが、手加減してもらいたいわけじゃねえからな。むしろそんな真似したら許さねえぞ？」
「……あったりまえだ！　部長に限って親友との戦いで変な手加減なんて失礼な真似はしねえし、だから俺も部長を勝たせる為に全力で行くさ！　勝つのは俺だ」
「いいや俺だね」
　そして真っ向からにやりと笑いながら、お互いに戦意をぶつけ合い

「それにここ一か月部長ともアーシアともお風呂どころか別途にも入ってないんだ！　情けない真似したら更に入れなくなるから尚更頑張るさ！」
「……ふぅっ」
　―余計な一言で、匙が崩れ落ちた。
「お前は本当に馬鹿なんだな!?　もう行くところまで言ってるじゃねえか!?　匙、匙しっかりしろ！」
「お風呂……？　……ベッド？　え、おま、何それ？」
　顔が真っ青通り越して真っ白だ!?　これちょっとショック死しかけてないか!?
　試合前に番外で精神攻撃するなよな!?　いや、匙の過去話も精神攻撃じみてるけど!!
　っていうかなんで俺に嫉妬の視線向けながら涙流してんだ!?　病気か、いやちょっとマジで。
「……なんで、そこまで言われなきゃならねえんだよ！　モテない俺に対する皮肉か!?」
「とりあえずお前は脳の病院に行け！　非童貞の俺ですら羨みそうな境遇だろが！　もうハーレム王なってるようなもんだろうが!?」
「どういう嫌味だコラ!!　モテたいのに可愛がられたり兄のように慕われているだけの俺の生殺しの前で、今お前童貞じゃないって言ったのか、あぁん!?」
「むしろ童貞な方がおかしいだろうが!?　どんな途中式を入れたらそんな状態でそんな結論になる!?」

「ひどうてい……おふろ……べっど……たかみ……とぉぃ～」

「「って匙ぃぃぃぃぃぃぃ!?」」
やばい、思わずヒートアップして匙にとどめ刺してしまった。
泡吹いて痙攣までしてやがる!?　脈まで浅いぞ!?
ちょ、冗談抜きでやばい!?　強心剤、強心剤!?
「キュウタぁぁぁぁぁぁ!?　マジで来てくれぇぇぇぇぇ!?　っていうかここがグレモリーの本家なら、常駐のお医者様とかいないのか!?　応急処置するから探せイッセー!」
「お、おう!　待ってろ匙、今人を呼んでくるから!!」
「おっぱ……できちゃ……どこに……?」
白目をむくな匙ぃぃぃぃぃぃ!　今イッセーが人を連れてくるからしっかりしろぉぉぉぉぉ!?
と、とにかく心臓マッサージ!　あと人工呼吸用のマスクマスク!?

おかげで出発までに十分ほど遅れたけど、その程度で済んで本当に良かったと思う。

魔性変革編　第十六話　豪華なパーティの一幕

和地Ｓｉｄｅ

とりあえず、俺達は何とかパーティ会場に到着すると、正直ちょっと気圧されている。
流石は貴族のパーティ会場。人が多いだけじゃなく、殆ど貴賓があふれている。
一言言っていいだろうか。明らかに俺達場違いだぞ。
「ふぉおおおおおおお！　煌びやかですの、スッゲーですのぉ！」
「よし、俺はこいつ連れて隅に行ってる。誰か後で食べ物を持ってきてくれ」
「ぼ、僕も一緒に連れて行ってください……人が多すぎてくらくらしますぅ」
即座に俺はヒマリを引っ張ってパーティ会場の隅に移動する。ついでに対人恐怖症にはつら過ぎそうなのでギャスパーも連れて行った。
いや、これ明らかに俺達場違いだろ。この手の礼儀作法とか習得してないし、ぶっちゃけヒマリには無理だ。
リーネスはメリードを連れて周辺の人達に挨拶をして言ってるけど、俺達は隅で大人しくしてるべきだろう。
キュウタとクックスが自粛して参加してないのが恨めしい。最もキュウタはキャラが遭ってないし、クックスはこれを機にグレモリーの味を習得して今後の共同生活の食を円滑にこなそうって判断らしいから止めれなかったけど。
しっかしこれはキッツいなぁ。
他のメンツがいつ食い物を届けてくれるかが気にいなるというか不安だ。ブッチャケ暇だし、喉も乾いたし腹も減った。

テンションが上がりすぎて大声をあげそうなヒマリの背中をなでて落ち着かせつつ、他のメンバーはまだかなぁと思っていると―
「へーいそこの三名様ぁ？　よければ飲み物と軽いつまみはいかがかなぁ？」
―そんな言葉と共に、ジュースの入ったグラスとサンドイッチが載った皿がセットになったお盆が出された。
見れば、そこにはタキシードを着こみながらも、なんというかチャラい印象を与える青年が一人。
ちょっと戸惑っていると、その青年は軽く笑いながら、折り畳み式のミニテーブルを器用に片手でくみ上げる。
「なぁに、俺もこの手のパーティはなれなくてな。気疲れしてるけど食い物も取りに行きずらいってところだろ？　知人未満だが知らねえ仲じゃねえし、サービスしてやるよ」
「え、あ……どうも？」
意外と気さくでいい人っぽいけど、どこで見たっけ？
「んじゃ、知人未満と長話ってわけにもいかねえだろうから、俺は主のところ戻ってるんでヨロシクー」
そしてホスト風な笑顔を浮かべながら、軽く手を振り―
「グレモリーの変異（ミューテーション）クン？」
―思わぬ相手と知り合いだと告白していきやがった。
思わず俺とヒマリは唖然となり、ちょっとしてからギャスパーに振り向いた。
「……え、どういうこと？」
「知り合いですの？」
「えっと……あ、思い出しましたぁ！」
と俺達の視線に戸惑っていたギャスパーが、ポンと手を打った。
ふむ、本当に知人未満っぽいな。
で、答えは？
「グラシャラボラス家次期当主代理の方の眷属ですぅ。主をなだめていた人だったと思います」
……なるほど、ねぇ。

「ヒマリ、気づいてたか？」
「ええまあ。おかげでテンション下がりましたの」
「え、え？」
どうやら気付いてないっぽいギャスパーに、俺とヒマリは静かに何かを飲み込むしかなかった。
「あの人、戦意は感じないのにいつでも戦える動きをしてましたのよ」
「どうやら、ゼファードル・グラシャラボラスの有する腕利きってのは奴さんのようだな」
……正直、今になって思うが俺達が勝つなら仮面ライダーになる必要があるな。
木場やゼノヴィアがガチで挑んでも勝ち目が薄いだろう奴だ。そりゃあんなのが一人いれば、会長も格下扱いされるだろう。
こりゃ、部長達も中々大変なことになりそうだな。

イッセーＳｉｄｅ

ぶ、部長と一緒に挨拶回りするのも大変だなぁ。
貴族のしきたりとか礼儀作法とか、部長のお母さんのヴェネラナさまに教えてもらってなかったらヤバかった。本当に覚えてよかったよ。
でも、なんで部長も態々俺なんだろう？
対人恐怖症のギャスパーはともかく、木場だってその辺りはマスターしてるっていうし。悔しいけどあいつの方が貴族のおつきっぽい雰囲気だと思うんだけどなぁ。
「おや、リアス・グレモリーに赤龍帝ではありませんか」

と、そこで聞き覚えのある声が聞こえてきた。
振り返るとそこには、何人かの護衛を連れたミカエルさんが。
「あら、ミカエル様。今夜のパーティに参加されていたのですね？」
「お久しぶりですミカエルさん。アーシアとゼノヴィアの時はありがとうございました！」
部長と一緒に挨拶すると、ミカエルさんもにっこり微笑みながら頷いてくれる。
「ええ、こういった催し物に参加するのも和平の象徴でしょう？　あと二人はあれから祈れてますか？」
「はい！　ほぼ毎日、何かあったらすぐに祈ってます！」
ほんと、あの時のはありがたかった。
正直どうしてもとは思ったけど無理もあったかと思ったから、オッケー貰えたのは嬉しかったよ。
本当によかったなぁと思っていると、ミカエルさんの近くにいた人がミカエルさんに少し近づいた。
「ミカエル様。親交を深めるのは構いませんが、魔王様方に対する挨拶回りなどの用事をまず済ませてしまいましょう」
「その通りです。魔王様方はフランクのようなのでまだ大丈夫でしょうが、これまでいがみ合ってきた勢力でかつ血統主義者が多いのです。余計なことを思われる前に、まず面倒ごとを終わらせるべきかと」
「……耳が痛いですが、確かにそちらの二人の言う通りかと」
そう苦笑するミカエルさんは、ただ少しだけ待ってほしいといってから、俺達に向き直った。
「今後も縁があるかもしれないので、お二人に紹介しておきましょう。和平の円滑化の為、悪魔の実態を信徒達に見せるモデルケースも兼ねた、今回の私の護衛です」
へぇ。そういうこともしてるんだ。
俺はそこまでする必要あるのかとも思うけど、カズヒの言い分的に抵抗ある人や嫌悪感ある人はたくさん要るっぽいからな。こういうことも必要なのかも。

右にいる人は、二十代後半ぐらいの男性だ。間違いなくヨーロッパ当たりの人っぽいけど、どこか日本人っぽい雰囲気だ。
左の人は俺と同じぐらいの女性だった。ただなんか雰囲気がサーゼクス様やアザゼル先生を思わせるけど、でも二人とは全く異なるタイプな気もする。
「彼は教皇や枢機卿、そしてバチカン市国の警護を担当する部門の精鋭、聖都守護連隊に属するシント・ディアンジェロ。こちらの彼女はプルガトリオ機関のアルファ部隊所属のマルガレーテ・B・ゼプルです。今後は教会も大規模な変化が起きそうなので、表と裏の双方から護衛を選別しました」
ミカエルさんがそう言うと、二人とも頭を下げてきた。
俺も頭を下げながら、もう一度二人を見る。
二人とも、あまりこっちに敵意は向けてないみたいで安心した。ま、こんなところに連れていくなら和平に好意的な人が基本だよな。
と、シントさんが俺に手を差し出してくる。
「シント・ディアンジェロだ、赤龍帝。君は元々日本人だそうだけど、実は私も日本の血が少し流れててね」
「あ、そうなんですか。道理で……」
俺は握手に応じながら納得。
ああ、だから日本人っぽい雰囲気だったんだ。
……ん？　日本人の血が流れていて、シント？
「……すいません、日本でシントって発音だと、ちょっとシントさんの立場もあると変な想像が―」
「大体あっている。ディアンジェロは天使を意味する名字なのだが、一族代々敬虔な信徒なので、意識してそういう名前になってしまってな」
苦笑で返されるけど、俺も苦笑いするしかないよ。
それもうキラキラネームとかの領域じゃね？　ちょっと同情するっていうか、もうちょっと考えようよ。
あ、でも日本でもそういうのあるよなぁ。発音が日本人的にかっこいいのを付けたら、その意味が実はアレなものだったりすることと

か。
……どこの国でもあるってことか。
「……名づける機会があるなら、名前にはもうちょっと付けられる側の気持ちを考慮してほしい」
「……子供ができたらその辺も気を付けます」
頑張ってください！
と、俺達がそんな風に苦笑いを浮かべているなか、部長も少しだけマルガレーテさんと談笑していた。
「悪魔というのに少し偏見がありましたが、貴方のような方もいると知って少しホッとしました。主の代行が認めた勢力だと分かってはいたのですが、悪魔には個人的にもいい思い出がなかったので」
「ふふふ。まあそういう誤解もこれから直していきましょう？　私もカズヒ達の件があるから、ちょっとプルガトリオ機関には……癖の強い人達ばかりいるのかとも思っていたもの」
あ～……。確かに。
他人はもちろん自分にも厳しいカズヒに、分かり易く舎弟なラトス、とどめに眼鏡キランなディックと来てるからな。ちょっと色物集団という偏見はありそう。
それに比べるとマルガレーテはなんていうか、普通に信徒っぽい穏やかな人な印象があるから安心だよ。
いや、みんな悪い奴じゃないんだけどね？　ただ暗部って変人祭りかって思ったし。……ゼノヴィアもイリナも変わってる気がするけど。
なんでちょっと安心だと思ったとき、マルガレーテは視線を逸らしていた。
……え？
見ればミカエルさんもシントさんも、ちょっと苦笑いしてる。
嫌な予感しかないんだけど!?
「……不本意ですが、たぶん後ほど度肝を抜かれるかと」
「今後の禍の団対策に非常に有効な特性がありまして。当人が自ら名乗り出てくれたので、お力をお借りしようと思っています」

え、度肝を抜かれる？　何があるの!?
俺が戸惑ってると、シントさんがぽんと肩に手を置いた。
なんか凄い遠い目をしてるんですけど。
「……私は聞いてから卒倒した。まあ君達悪魔なら卒倒はしないが絶叫はするだろう。まとめて言った方が騒ぎにならないから今は言わないでおこう」
マジで何が飛び出るんだ!?

和地Ｓｉｄｅ

「……あ、此処にいたのね」
俺達が少しずつ飲み食いしていると、カズヒ姉さんがこっちに来ていた。
パーティ会場に来てから、何時の間にやらどこかに言っていたけどどこに行ってたんだろうか。
……見れば両手にお盆を器用に持って、しかも飲み物や食べ物がたくさん盛られている。
本当にどこに行ってたんだ？
「どこ行ってましたの？」
「ええ、今回のパーティにはミカエル様がご出席成されるらしく、和平を推し進める意味でも教会から何人か枢機卿猊下も参加されているのよ。更に今後の内部改革も見越して、プルガトリオ機関からも結構な人数が派遣されているの」
ふんふん。
俺達が頷いていると、カズヒ姉さんはお盆を示しながら軽く苦笑ま

でしていた。
「だからちょっと、見知った顔に挨拶してきたわ。どうせあなた達は貴族のパーティ慣れしてないから隅にいるかと思って、ちょっと同僚に頼んで食べ物とかを盛らせてもらったのよ」
おお、気の良い人達が意外と多いなプルガトリオ機関。
暗部組織だからもっと過激派が多いかと思ったけど、この辺は意外だ。
まあカズヒ姉さんも厳しいけど問答無用の狂信者では断じてないしな。その辺り、一線さえ引ければ鷹揚なんだろう。
「ありがとうございますぅ。でも緊張であまりおなかがすいてないです」
「そういうと思って軽いのにしてるわ。どうせリアス部長達は長居することになりそうだし、ちょっとは取っとかないと持たないわよ？」
「おぉ～！　これも美味しそうですの！　いただきますのー！」
そんな感じでヒマリとギャスパーは食べ物の方に行くけど、そこでカズヒ姉さんはお盆を置いた折り畳みテーブルに視線を向ける。
そして、ヒマリやギャスパーに気づかれないようにちらりとこっちを見た。
「……誰か来たの？」
「ゼファードル・グラシャラボラスの眷属だとさ。俺達をリアス・グレモリーの配下とみなしての偵察かどうかは、流石に読めなかった」
「……将来のライバルが持つ人脈の確認かしら？　話を聞く限り、そういうのを気にするような主には思えなかったのだけれど……ね」
カズヒ姉さんも目を細めて、何か不安なものを感じているらしい。
俺達はゼファードル・グラシャラボラスに会ったことも、調べたこともない。イッセー達が会合であった出来事から判断するしかない。だから分からないことだっていくつもある。
だが、前評判とイッセー達の話を聞いてできたイメージとは合致しない。もっとこう分かり易い奴で、こんな得体のしれない駆け引きを好む印象はなかったと思う。
それら全てがデコイで、その裏で何かを目論んでいるのか。それと

も完全な独断であり、奴自信に何か別の思惑があるのか。
どっちかなんて分からないが、一応部長達に報告しておくべきだよな、コレ。
俺と姉さんがどうした物かと懸念を覚えていたその時、こっちに近づく足音が聞こえた。
今度はなんだよと、俺と姉さんがちょっと本気で警戒するそのタイミングで、声が飛ぶ。
「やっほーヒマリ！　それにオカ研の人達も会談ぶりじゃん！」
「あ、ヒツギぃ～！」
緑色の髪を伸ばしたその子は、ヒツギ・セプテンバー。
デュナミス聖騎士団のメンバーであり、何故か一目会った瞬間にヒマリと友情を交わした謎の運命を持つ星辰奏者だ。
まさかこのタイミングで会うとは思ってなかったぜ。でも、冥界に来たばかりの時にいるとか来るとかヒマリがメールで聞いてたな。
ヒマリに抱き着かれて嬉しそうに微笑んでるヒツギは、こっちにも笑顔を向けてくる。
「ミカエル様の護衛も兼ねた、ちょっとした交流って奴で来たんだよね～。そっちはリアス・グレモリーの付き添いって感じかな？」
「ええ。そういえばカズホは参加してないの？　デュナミス聖騎士団の用事で、ゼノヴィアとの特訓が終わったらすぐに騎士団に戻ったって聞くけれど」
カズヒ姉さんがそう聞くと、ヒツギはちょっと困ったような笑みに切り替わった。
「あの子は別口。今後三大勢力で合同部隊が作られるかもしれないってことで、事前にその辺りのすり合わせができるように色々あるみたいでさ？　騎士団長達と一緒に悪魔側の大規模部隊と手合わせとかするってさ」
なるほど。どこの勢力も一応考えてはいるってことか。
特にデュナミス聖騎士団は、並みの戦士じゃ臆するような任務の一番槍が基本だからな。三大勢力合同作戦何て禍の団か他の神話との戦争規模になるだろうし、前もって連携が取れるようにその辺のすり

合わせもしておいた方がいいってわけか。
俺が感心していると、何故かカズヒ姉さんはうっへぇって感じになっていた。
「ってことはリュシオンはこっちにいそうね。私、どうもあいつが苦手なのよ」
あ～。そういえば、カズヒ姉さんってリュシオンになんか思うところがありそうだったな。
まだ踏み込むには早いと思ったんで聞いてないけど、何かあったのか？
俺が首を傾げてると、ヒツギはヒマリと頬をすり合わせながら、ちょっと同情している感じになっている。
「あっはは～。ま、その気持ちはわからなくもないかなぁ」
何故か、リュシオンの同僚がそれを肯定した。
え、え、どういうことだ？
俺が戸惑っていると、ヒツギは心底から同情の視線を向けている。
不思議そうに抱き着きながら見上げているヒマリの頭をなでながら、ヒツギは心からの同情をカズヒ姉さんに向けていた。
「あいつは本当に立派だよ。だからこそ騎士団の人達も立派になろうと思ってるし、そこは団長も認めてる」
そうはっきりと、どこか憐憫を浮かべなら告げ―
「―だからこそ危うくて、そこに呑まれてないから私は団長の側近じみたことをやってるんだよねぇ」
―そんなことをはっきりと言い放つ。
……ど、どういうことだ？
俺はちょっと面食らってるし、カズヒはきょとんとしているし、ギャスパーも何が何だか分からずおろおろとしている。
いや、確かに完璧人間な気もするけど、それが危ういってどういうことだ？
「え？　あの……何が何ですか？」
「ん～。ちょっとそれは言いづらいかな？　相手も自覚してるのかしてないのか危ういし、何て言うか、私も団長も明確にこれっていえな

いんだよねぇ。本当に、直感的なものだからさ」
ギャスパーにそう答えるヒツギは、ちょっと困り顔だった。
そして、ヒツギはちらりとカズヒに目を向ける。
「カズヒだっけ？　あなたは分かるかな？」
「……苦手意識ってのに、明確な理由はないわよ。……しいて言うなら」
其の前置きして、カズヒ姉さんは表情を変える。
それは、まるで泣き笑いのような、そんな困り顔だった。
「――ああ、彼は本当に正しい時に正しいことを、正しくやれることが自然体なんだ。そう思って以来、私は彼が苦手なのよ」
「……そっか。団長にも伝えとくよ」
その、何て言うか何かが通じ合った言葉に、俺は何も言うことができない。
涙の意味を変えたいと思っても、なんで泣いているのかが分からなければできはしない。これはまさにそういうことだ。
これもまた、俺がまだまだ未熟だからだろうか。
そんなことを思っていると、何故かポンポンとヒツギに頭をなでられた。
「元気を出しなって若者よ！　人間なんて、いつだって未来の自分より未熟なんだからさ」
……あんたは俺のお袋か。
そうツッコミを入れたくなるけど、何故かヒマリを思わせる優しい目つきに何も言えない。
俺とはさほど面識がないだろうに、っていうかキャラからずれてそうなのに、何故かこの上なくそれが自然な気がしてくる。
そんな戸惑っている俺を笑顔で見てから、ヒツギはカズヒ姉さんにもニシシとでも擬音をつけるべき奈笑顔を向けてきた。
「ま、リュシオンは本当にできた奴だからね。むしろ私的には本音が見えて嬉しいかなぁ？」
「それはどうも。……っていうか、私達ってそんなに付き合いある関係だったかしら？」

ちょっとと惑い気味なカズヒ姉さんだけど、なんだかんだで悪い気はしてないみたいだ。
なんで悪い気がしてないのかにこそ戸惑ってるのかもしれないな。
と、今まで事実上の蚊帳の外だったヒマリが頬を膨らませている。
「む～。ヒツギもカズヒもずるいですのー！　私をほっぽら泣いてほしいですのー！」
涙目にまでなってるし。
お前はもうほんとなんというか、母性が高いくせに子供っぽいっていうか。
俺が呆れてると、カズヒ姉さんもヒツギも苦笑しながらぽんぽんとヒマリをあやし始める。
「ごめんごめん。ほれ～ヒマリを構い倒しちゃうぞ～！」
「あんまり騒ぐと悪目立ちするわよ？　……ま、ちょっとその膨らんだ頬をつつきたいけれど」
「きゃーですのー」
……。
俺はふと、ギャスパーにちらりと視線を向けた。
ギャスパーがそれに気づいて首を傾げると、俺は素直に本音を漏らす。
「誰に嫉妬を向けたらいいのか分からない自分がいるんだが、どうすればいい？」
「えっと、注目を浴びないなら僕はいいかな～って」
引きこもりに聞いた俺がバカだった。
俺がそんな感じでもやもやに困っていると、視界にちらりと見覚えのある姿が映る。
……このままってのもなんか手持無沙汰だし、ちょっと挨拶をしていくとするか。
「悪いギャスパー、三人と一緒に待っててくれないか？　知り合いを見つけたから挨拶をしてくる」
「あ、分かりました。……早めに戻ってくれると安心ですぅ」
ま、視線が集まってるからなおさらだよなぁ。

手早く挨拶して早めに戻るか……いっそのことみんなを紹介するということも考えるか。

俺はそう考えて、小走りに行くことにした。

魔性変革編　第十七話　襲来、禍の団！

和地Ｓｉｄｅ
約二十分後
……いかん迷った。
人間界のビルと同じ感じで移動してたけど、やっぱり世界と種族が文字通り違うからか、際に引っかかって完璧に迷った。
とりあえず此処にとどまって従業員が通りがかるのを待って道を聞こう。
従業員以外だとガチで偉い人とかに聞いて失礼なことになりかねないからな。最悪部長の名前を出せばしのぎきれるだろうが、変なところで部長に余計なマイナスイメージをつけるのもあれだしな。あと自分から移動すると、変なところに入って揉め事に繋がるかもしれない。
……遠巻きに発見されて、不審者扱いされないことを祈ろう。真面目に祈ろう。
俺はそう願いため息をついた。
「……なんでこんなところにいるんですか？」
そしたら探してた人が見つかったよ。
っていうか、後ろから声をかけられたよ。
なんか気恥ずかしい気分になったけど、俺は少しだけ息を整えると振り返った。
「後姿を見かけたんで、挨拶しようと追いかけたら道に迷ったんだよ……インガ姉ちゃん」
そう、俺が見つけたのはインガ姉ちゃんだ。
一応電話番号は後処理とかで移動する前に、春っちに頼んで渡してもらってたけど、結局今まで連絡がなかったからな。
春っちからは二回ほどメールが来たけど、インガ姉ちゃんからは何もなかったから気になってたんだ。
……まあ、春っちのメールも「そういえば特訓してるって聞いたけど、グレモリー眷属と手合わせしてるの？」と「明後日に悪魔はパー

ティ開くけど、和っちは参加するの？」といった世間話程度ではあるけど。
ちなみに後者に関しては春っち達は参加しないそうだ。来てるなら紹介ぐらいしたかったんだが、残念。
後ゲスト扱いになるだろうに来なかった理由に関しては、「大人が酒を呑む名分扱いにされるのを主が嫌がったから」らしい。イッセーから聞いた話といい、ヴィール・アガレスはストイックというかなんというか……余計な敵を増やすタイプだな。
ま、それはそれとしてだ。
「一人でパーティ会場を出るとか、何かあったのか？」
「いえ、……あ、気づいてませんね？」
え、なにが？
俺が首を傾げてると、インガ姉ちゃんは人差し指でふとある方向を見せる。
……二つの入り口が並んでるな。別々の模様がついているけど、なんだあれ？
「……トイレに行ってました」
「……知らぬとはいえセクハラしてごめんなさい！」
速攻で頭を下げた。
いかん、質の悪い失敗だろコレ。セクハラ一歩手前っていうか、見方によってはセクハラだろ。
もしトイレだと分かってやっていたのなら問答無用でセクハラだ。
正直冷や汗がだらだら出てきそうだけど、インガ姉ちゃんはふと噴出して笑う。
「和地君って、意外と抜けているところありましたよね？」
「……否定はしない。そして今も抜けてると言われたら反論できないし納得できる」
なにせ成長の仕方が特殊過ぎるからな。なんというか抜けているといえる輩に育てられた所為か、何かが抜けていると言ってもいいと思う。
子供の頃から変わり者なのに、まともじゃない育てられ方まですれ

ばそりゃ変人にもなる。
まあ、インガ姉ちゃんはそういう意味で言ったわけではないけどな。それでも、ある意味真理をついているというべきか否か。
何とも言えない気持ちになっていると、インガ姉ちゃんは静かに首を振った。
「此処にいるということは、たぶんリアス・グレモリー様との付き添いですね？　駄目ですよ、私なんかよりあの方達を気にするべきです」
そうたしなめるインガ姉ちゃんだけど、俺は即座に首を横に振った。
思わずきょとんとなってるところ悪いけど、それは違うと断言できる。
ああ、俺達の付き合いはそこまで長いわけじゃない。それどころか、つい数か月前に出会ったばかりで元々は一時的な共闘止まりだった。
だけど、長い付き合いが理解を深める余地が多いからと言って、短い付き合いだから何も分からないってわけじゃない。
ああ、これだけは言える。
「そんな風に言う人達じゃないよ。部長もイッセーも、それにＡＩＭＳ（ヒマリ）第一部隊（達）も、何よりカズヒ姉さんだって、こんな時にそんなことを言う人じゃない」
カズヒ姉さんなら、非常時とかならそういうこともあるだろう。
逆にイッセー達は、非常時だからこそ自分達に任せろとか言いそうだ。
だけど、今この時なら断言できる。
「大事な思い出を共有する人をおざなりにしろなんて、好き好むような人じゃない。だからこそ、今でも大事なインガ姉ちゃんに気遣えるんだ」
ああそうさ。それだけははっきりと言うことができる。
今でも、俺にとってインガ姉ちゃんは大事な思い出だ。生きてそれを共有できると思っているから、だから俺にとって大事な人だ。
だから――

「ずっと落ち込んでる姿を見るのは悲しいし、そんなに悲しいなら誰かに相談していいんだぜ？　主に迷惑かけたくないなら、こっそり俺にメールで相談してくれよ？　毎度毎度とは流石に言わないけど、たまに愚痴を聞く程度はしてやりたいからさ」
俺は本心から、そうはっきりと告げ―

その瞬間、状況がまさにその非常時になったと直感が告げた。

イッセーＳｉｄｅ

くっそぉ！　これマジでヤバい！
―シャルロット!?　シャルロット聞こえるか!?
練習していた念話をぶっつけ本番で繋げると、すぐにシャルロットから返事が来た。
―イッセー？　どこに……いえ、非常時ですね？　状況を教えてください。
察しがよすぎるぜシャルロット。でも本当に助かった。
今、俺と部長と小猫ちゃんはかなりまずい状況だ。
きっかけは、一通りの挨拶回りが終わって俺は休憩をもらって少しだ。
ライザーの妹のレイヴェルからなんか挨拶されて、そのあと付き添いだったライザーの眷属からなんか妙なことを言われた後。

何故か焦って走っていく小猫ちゃんが見えたから、俺はそれを追いかけた。その時部長にも気付かれて、一緒に一回に降りて探してたんだ。
そして小猫ちゃんを見つけたけど、そこに一人の女がいた。
なんとそいつは小猫ちゃんのお姉さんで、はぐれ悪魔の黒歌。しかも美猴までいて、仙術ですぐに気づかれた。
間違いなくヤバい、これはヤバい。
そしてそれを俺が素早く説明すると、シャルロットがなんかちょっと返事が来なくなった。
「ちょ、シャルロット!?」
―大丈夫ですイッセー。すぐに警備員に連絡しました、人はすぐに来ます。
あ、そうなんだね！
本当にありがとう、シャルロット。あとはしのげば何とかなるし、むしろ伝えたら逃げてくれるか？
俺がちょっと期待した時、黒歌が念話に気づいたのかこっちを見た。
「……サーヴァントと念話で連絡したのかニャン？　でも全然問題ないのよねー」
その瞬間、周囲の感じがなんか変わった。
な、なにが起きた!?
俺が戸惑っていると、部長が歯を食いしばりながら黒歌を睨み付ける。
「黒歌、貴方まさか……空間を操る術まで習得したのね？」
「正解にゃん。これで空間を断絶したから、増援が来ても来れないわよ？　さっさと白音を返した方が得じゃない？」
「すげぇだろ？　俺っちも弱い者いじめする趣味はねえし、そうすりゃさっさと返すからよ？」
美猴までそんなふざけたこと言いやがって！　なめんじゃねえ！
仲間を差し出すなんて論外だ。まして、部長達のおっぱいを半分にしようとしたヴァーリの仲間になんて尚更だ。

でもどうする？　シャルロットが近くにいない状態じゃ、禁手って到達できるのか？
俺が不安に思った時、シャルロットからの念話が届く。
―イッセー。警備員のおかげで状況は分かっています。それと打開策も存在します。
え、マジで？
そんなあっさりと思って俺が驚いていると、黒歌含めてみんな怪訝な表情を向けてきた。
ちょっと泣きたいけど、それよりシャルロットからの念話が届く。
―令呪を使って私に「周囲の者を連れてこちらに来い」と念じてください！　既に転移の準備もしているので、一人か二人なら呼ぶことが出来ます！
……え、令呪っていうと、あの強制命令権？
え、でも転移も無理っぽい感じで言ってたし、それで大丈夫なの？
―戸惑っているのでしょうが非常時です！　早く!!
よっしゃ分かった。相棒がそこまで言うならやってやるぜ！
思うのはシャルロットの柔らかくておっきなおっぱい。それをイメージしながら、俺は鍛えて少しは強くなった魔力を令呪に流して吠える。
「周囲の人達を連れて、来てくれ……シャルロットぉおおおお!!」
その時、令呪がほんのり厚くなって、一つ消えるのを覚える。
そして同時に強い光が輝いて―
「あらあら、こんなところにテロリストが来るなんて末恐ろしいですわね」
「……部長、イッセー、小猫！　まだ大丈夫なようだな？」
「なるほど、これが令呪の応用か。……部長、下がってください」
「皆さん、お怪我はありませんか!?」
「あわわわわ……なんでこんなところに禍の団がぁあああ!?」
え、み、みんな!?
俺達全員が面食らってる中、朱乃さん達の中心にいた、シャルロットが包丁の切っ先を美猴に突きつける。

「美猴と共にいるということは、そこの貴女もヴァーリチームということですか。……態と因縁のあるメンバーをスカウトする方針というわけではないのでしょうが、皮肉が効いている構成になりそうですね」
シャルロットの頼もしすぎる強い視線に晒されて、美猴も黒歌も流石にちょっと警戒してるみたいだ。
「……おいおい、空間ごと隔離したんじゃねえのかよぃ」
「そのはずよ？　それも突破されたわけでもなく素通りとは、サーヴァントの令呪……いえ、究極の羯磨（テロス・カルマ）込みでやられると反則ね」
た、助かったぜ。
これだけいるなら、もう一安心だ。
何よりシャルロットがいるなら俺も禁手になれる。ヴァーリが来ない限りこれで大丈夫のはず――

「――全く、遠巻きに見学すると言っておきながら、こんなところで何を発見されているのですか？」
―そう思った時、美猴と黒歌の後ろの空間が割けた。
そこから現れたのは、眼鏡をかけた金髪の、木場とはまた違った感じのイケメン。
そして一緒に現れたのは―
「……ふぅ。シャルバ達の余興に付き合うのも面倒だったけど、これならいい感じに暇潰しが出来そうだ。礼を言うべきかな？」
「……ヴァーリ！」
―俺の宿敵とかいう面倒な奴。
最強の白龍皇になるとまで言われた、ヴァーリ・ルシファーが現れやがった……っ
まさか、こんなタイミングで会う羽目になるだなんて、流石にキツいぜ。

俺が歯を食いしばっていると、部長は何かに気づいたのか肩を震わせた。
え、一体なんだ？
ちょっと戸惑っていると、部長は全身から強い魔力をたぎらせて、ヴァーリ達を睨みつける。
「余興に付き合う……このタイミングでいうということは、まさか禍の団は此処でテロを起こすつもり!?」
……あ。
俺達がそれに気づいた時、ヴァーリは何故かため息をついていた。
「箔付けになるから顔だけでも出せと言われたけど、正直そういうのには興味がなくてね。君達が黒歌と出くわしてくれてよかったよ」
おいおいマジかよ。
みんな、大丈夫か!?

Other Side

「……これで大丈夫なの？」
パーティとは別の意味で騒がしくなっている中、カズヒ・シチャースチエは疑念の視線を相手に向ける。
それに対して、視線を向けられた相手は静かに頷いた。
「大丈夫だろう。令呪は自死すら強制するだけの強制力があるゆえに、双方の合意に使用すれば絶大なブースターとなる。更にこちらが亜種聖杯戦争で確保していた余剰令呪も数画ブースターに使ったのだから、これでリアス嬢の元に彼女達は着いているだろう」
答える男はフロンズ・フィーニクス。

ことの発端はシャルロット達がカズヒ達と合流して少し経ってからだ。
和地、リアス、イッセーがそれぞれいなかったことから世間話レベルで情報交換をしたその時、まさにそのイッセーからの念話をシャルロットが行い、状況が発覚。更に空間遮断まで行われた結界を張られたことで、増援を送り込むことも難しいという事態になってしまっていた。
そこに小猫と朱乃に使っているかどうかをいい機会だから確認しようと探していたフロンズが、令呪を利用した転移を提案。更に自分達が亜種聖杯戦争を行った際に確保していた余剰分の令呪をブースターとして使用することで、グレモリー眷属を転移させるという手法が提案された。
時間がないことから即断即決で行い、そしてシャルロット達が消えたことは確認。しかし結果として状況を知るすべがなくなったことに気が付いたので、カズヒが少し懸念を漏らしたのが此処に至るまでの流れである。
「困ったものねぇ。仙術使いは隠匿や索敵に長けているけれど、更に他の術まで多数使われたら察知は困難だわぁ」
「むぐぐぐぐ……っ。こんな方法で仕掛けてくるとはふてぇ野郎ですの！　私もぶっ飛ばしに行きたかったですのにぃ……！」
「まあ、巻き込まれている方々から考えればグレモリー眷属が優先されるべきところでしょう。我々は隔離結界がどうにかなるのを待つべきでしょうね」
リーネス達がそう語る中、しかしカズヒは内心で懸念を覚えている。
ヴァーリチームがここに来ているのは別に構わない。短い付き合いだが、ヴァーリや美猴はスタンス的に自由人だ。禍の団においてもかなり自由の振舞っている可能性は十分ある。
だがしかし、だからこそ解せない。
いくら禍の団がヴァーリ達を自由にさせているからと言って、冥界の比較的大きなイベントにあのメンツを全員行かせることを良しと

するだろうか？
万が一、万が一ではある。
だが、万が一だ。
来ていることがばれても、討伐されないような事態を引き起こすとしたら……？
その懸念を念の為指摘するべきかと、カズヒが口を開こうとしたその時だった。
「……あれ？　なんですの、あの黒い霧は」
ヒマリの言葉に、それが聞こえた者達は彼女が向いている方向に振り向いた。
ヴァーリチームが近くに出没したということでざわついていた中、その為会場の中央部に視線を向けている者はいなかった。
そこに、黒い霧のようなものが現れている。
明らかにおかしい。明確に異常事態だと、ほぼ全員が警戒する理由がそこにある。
そして長命な異形達の中には、それがどういう脅威なのかすら把握できる者がいた。
「絶霧（ディメンション・ロスト）だとぉ!?」
「神滅具（ロンギヌス）がなんでこんなところで!?」
狼狽する悪魔達が見つめる中、切から声が響く。
「さえずるな。貴様達の真なる王が降臨だぞ」
その言葉と共に、現れる影は複数人。
「へー、悪魔のお偉いさんっつっても、人間とさほど変わらねえんだなぁ」
「というより、異形というのはかなりの割合が人とさほど変わらぬ姿をしておるからのぉ。あまり目新しいものを求めぬ方がよいぞ？」
そう、謎のヒューマギアと語り合いながら現れる少女の姿に、カズヒ・シチャースチエは奥歯が砕かれるのではないかというほど歯を食いしばる。
「九条・幸香・ディアドコイ……っ」
「そう、彼女は確かに……」

そんなカズヒの隣で悲し気な表情を浮かべるリーネスだが、すぐに表情を警戒に改める。
何故ならば、この場における主役は彼らではない。
そう、主役とは―
「偽りの魔王におもねる者達よ、お前達に悪魔としての誇りがあるのなら、今この場似て跪くがいい」
「クルゼレイの言う通りです。恥を知るのなら黙して従いなさい」
「最も、我々魔王の名を僭称する者達には死んでもらうがな。これは決定事項だと知るがいい」
―その言葉だけで、彼らが何者かがこの上ないほどに分かり切っている。
禍の団における最大派閥とされる、旧魔王派。
彼らによるテロが、今この場で引き起こされた。

魔性変革編　十八話　禍の団、強襲開始

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

カズヒ・シチャースチエは今すぐにでも突貫することを視野に入れて腰を落としていた。

全ての筋肉と骨格を加速の為に使い、そして幸香に突貫することを、本能が即決で選択していた。

見逃すわけにはいかない。黙って見ているなどあり得ない。彼女の暴虐を放置するなど、自分の中に選択肢として存在してはならない。

その絶大なまでの強い本能を、しかしカズヒは強靭な理性で強引に押しとどめる。

「……ぐ……っ」

突貫したい。今すぐにでも彼女を止めたい。

その強い衝動を、しかし「状況的に悪手である」という理性の判断がギリギリのところで推しとどめていた。

そしてその均衡を、肩に置かれた手が理性側に引きとどめる。

その力が籠った、しかしこちらを気遣ってくれる手の温かさに理性が増幅される。

そして一呼吸おいてカズヒがちらりと視線を向ければ、そこにはこちらを気づかわし気に見つめているリーネスの姿があった。

「……ごめんなさい。手間をかけたわね」

「いいわよぉ。こっちも、ちょっと冷静じゃないものぉ」

短い言葉で通じ合い、二人は様子見という選択肢をとる。

そしてまた、目の前で動きが見え始める。

「……まさか、このタイミングで姿を現すとは思わなかったよ、シャルバ・ベルゼブブ」

「うっわ～。すっごく面倒くさいのが来ちゃったなぁもぅ」

「カテレアちゃん！　まさかとは思ってたけど、なんでこんなことを!?」

サーゼクス・ルシファー。ファルビウム・アスモデウス。セラフォルー・レヴィアタン。
現魔王の三人が、旧魔王血族の三人と向き合った。
その三人の姿に、旧魔王血族の見せる表情は差異はあれど同種。
心底から屈辱と憤怒と憎悪が隠せていない。いっそ清々しいほどに分かり易い敵意を三人とも浮かべている。
「アジュカの奴はいないのか。まあいい、こちらもこの場でお前達を殺せるとは思ってないのでな」
「忌々しいなファルビウム。偽物の分際で、よくもまあ真なる魔王を前にそのだらしない顔を見せられるものだ」
「どうしてとは不愉快ですね、セラフォルー。私が貴女のような簒奪者に敵意を持ってないと思っているのですか？」
三者三様に敵意を見せつけながら、結果的に誰もが息を呑む緊張状態を見せつける。
今の悪魔の最強格であり盟主でもある、魔王を襲名した三人。
かつての魔王の血を継いだ、旧魔王派最強かつ主導者の三人。
そのにらみ合いは、悪魔という種族にとってあまりにも介入を躊躇させる雰囲気を作り出している。
そんな旧魔王の末裔達の後ろで九条がさらりとパーティの料理をつまみ食いして舌鼓を打っているが、これを指摘する蛮勇の持ち主はいなかった。
ついでにフロンズ達はメモを取るだけでなく、会話の内容が何かの参考になるとでも思っているのか録音の術式どころかレコーダーすら取り出している。これも指摘する余裕どころかそもそも気づく余裕すらない者達が殆どだ。
そんな緊張状態が、一分かそれとも数十分続いたのか。
その均衡を崩すかのように、のんきな足音が響き渡った。
「……なんじゃなんじゃ。老いぼれを態々こんなところに呼びつけて起きながら、のんきに下らぬ喧嘩をしているとは残念な者達じゃのぉ」
その言葉に、不敬という叱責は飛ばなかった。

何故ならば、その言葉を放ったのはある意味でサーゼクス達と同格。戦闘能力に限定すれば、それこそサーゼクス以外のどの悪魔も敵わないだろう存在が放った言葉だったのだから。
それをよく知るシャルバ・ベルゼブブは、忌々しそうに舌打ちする。
「アースガルズの主神、オーディンか。サーゼクス、悪魔の誇りを忘れこのような者まで呼びつけるとは……恥を知れ、サーゼクス」
これまで以上に殺意を込めた目でサーゼクスを睨むシャルバだが、オーディンはそれを見て愉快なものを見たといわんばかりの表情を見せる。
「ほっほっほ。主神を前にサーゼクスの方に意識を向けるとは、禍の団とは馬鹿ばかりで構成されておるようじゃのぉ？」
……盛大な挑発に悪魔の何人かが卒倒しかけるが、しかし平然としている者も何人かいる。
そのうちの一人である幸香は、味が気に入ったのかグラスのワインを一気飲みしたうえで未開封のボトルをちゃっかり何本か抱え込みながら肩をすくめる。
「当然であろう？　賢者は賢しら故に世界を勧めることに二の足を踏んでいるのがこの世界よ。ならば世界を大きく変革させる者は、大馬鹿者であることが当然の結論であろう？」
タッパーに気に入った料理を詰め込むという真似までしながら、オーディンをろくに見ずに言い返すという、豪胆を通り越して正気を疑う真似をしながら、幸香は遠慮なく言い切った。
その態度にオーディンも少し目を丸くするが、幸香は気にも留めていない。
今この場でいきなり攻撃をする可能性は低いと踏んでいるからなのだろうが、それは弩級の馬鹿だからか大物だからなのか。どちらにせよ、ただ者ができることでは断じてない。
「何百年間も奪われた信仰を取り戻す策も取らず、決定打という和平に屈してそのまま勝ち馬に乗るような強かな真似しかできぬ者とは違うのだよ、妾達禍の団も、彼ら三大勢力もな」
「……言わせておけばっ！　主神の前でよくもそこまで無礼な真似を

!?」
　あまりの物言いにオーディンの近くにいた女性が激昂するが、オーディンは手を広げてそれを制する。
「構わん構わん。よく見るまでもなく可愛いいおなごじゃしのぉ。ちょっとぐらいは大目に見なければ神の品格が疑われるわい」
「オーディン様、此処はむしろ厳格な対応をするべきところです！　というより、相手はテロリストなんですから鼻の下を伸ばさないでください！　そちらの方が品格を疑われますよ!?」
　この状況下である意味真っ当なツッコミを入れるその女性に対して、オーディンは実につまらなさそうに鼻を鳴らした。
「そんな固いから未だに処女なんじゃ、おぬしは」
　その瞬間、女性は盛大に崩れ落ちながら大粒の涙をこぼした。
「処女は関係ないじゃなぁあああああっぃ！　誰が好きで処女だと思ってるんですか!?　私も卒業したいのにいいいいいい!?」
　まさかの大泣きだった。
　お前ら空気読めよ、という無言の批判がそこら中から漂うが、あまりの泣きっぷりに指摘する者が別の意味でいない。
　というより、シャルバ達に至っては馬鹿を見るような目でオーディンとその女性を見ている。
「……状況が読めてないのかこの馬鹿どもは。これが神話体系の者達とは嘆かわしい」
　反論が非常に難しいと、殆どの者が思った。
「しっかりするがよい、処女を卒業したいというのならばそれなりの努力をせい。人間、食にしろ酒にしろ娯楽にしろ楽しむべきなのだ。折角美女に生まれたのなら、その美貌で男を誘う娼婦にならんでどうするのだ？」
「誰がそんな方法で処女捨てたいなんて言いましたか!?　っていうかテロリストに真面目に悩み相談したつもりなんてないし、そもそも考えなるなぁあああ！」
　そして幸香は盛大に肩を叩いて犯罪組織らしい思考でアドバイスをして、その女性から魔法攻撃を放たれた。

新規神滅具候補でさらりと防いでいるが、普通に並みの上級悪魔を殺しかねない攻撃である。
主神のお付きとしてくるだけあって、ただの残念な美人ではないらしい。その事実に、気が緩んでいた者達は少し引き締められた。
そしてその攻撃を防ぎながらも、パーティの料理を物色する幸香は軽く肩をすくめる。
「まあ、もう少し緊張感を持つべきではあるのだろうな。……既にこの地域一帯、我らの手の者が攻撃作戦を開始しているのには気づいた方がよいぞ？」
お前が緊張感を持てという、盛大なツッコミが入れられることはなかった。
何故ならその内容は、更なる戦力が仕掛けに来ているという事実を示している。
必然警戒の色は濃くなり、そしてそれが事実であるという報告がまさにそのタイミングで届き始める。

腐っても現魔王政権側の重役達が何人も来ているパーティ会場であり、そんなところを警備していないなどということはあり得ない。
むしろ最上級悪魔クラスすらいるレベルで警備は厳重であり、規模においても練度においても優れているというほかない勢力だった。
だが、この事態においては相手が悪いというほかない。その事実を痛感して、警備部隊の一つは奥歯が砕けそうになるほど歯を食いしばっていた。
彼らがいる場所は、ホテルから少し出た当たりの森の中。しかし彼らが入ろうとしてできないのは、そこが空間的に隔絶しているという理由によるものである。
ＳＳランク級はぐれ悪魔である黒歌は、その情報だけで凶悪な存在だということがすぐに分かる。最上級悪魔に匹敵する力を持つもの

なのだから、警戒するのは当然だ。
だが、その力は想像を更に上回っている。
すでに空間に干渉する術式まで習得しているのは想定外だ。おかげで今もってリアス・グレモリーの元に救援を送ることが困難になっている。
グレモリー次期当主の窮地に対して、現地の警備班が役に立たないなど醜態でしかない。彼らにとってもグレモリー次期当主の価値が高いことを踏まえれば、これは死活問題といってもよかった。
「くそ！　増援はまだか!?」
「それが、警備本部と連絡が繋がりません！　どうも何か大きなトラブルが起こっているようでして……」
「冗談だろ？　リアス様が今窮地だっていうのに、それ以上に何が起きたっていうんだ!?」
混乱状態だった警備班だったが、しかしある男が天を仰いだ時、目を見開いた。
「……おい」
「くそ！　相手がＳＳランク級のはぐれ悪魔では、いくらグレモリー次期当主と言っても若手では荷が重いぞ!?」
「こうなったら、誰か、走って増援を読んで来い!!」
「……おい！　あれを見ろ!!」
大声を上げるその男に、全員で混乱しながらも打開策を考慮していた者達が怪訝な顔で振り向いた。
何を驚いているのかと、その視線をたどり―
「……は？」
―その呆けた声が、誰もの感想だった。
見れば、空の彼方に巨大な物体が軽く十は浮かんでいる。
細長い楕円形の球体、その下に船のように出っ張った物体が見える。
そんな物体の群れを見て、誰もが一瞬状況を忘れたのは無理もあるまい。
自由に飛翔を可能とし、更に異能によって空を飛ぶ船をそのまま作

ることも可能な異形達にとって、それはあまりに馴染みがない物だからだ。
「せ、潜水艦ってのに似てないか？」
「いや、上下逆だぞそれ。っていうか、あれ空中だし」
「あ、人間界の本で見たことあるぞ？　あれ確か飛行船って奴だ」
「余計になんで冥界（こんなところ）にあんだ――」
その瞬間、飛行船から砲撃が放たれた。
そしてホテルに張られた結界と激突し、大きな衝撃が発生する。
その光景に、呆気に取られるのは僅かな時間だった。
その僅かな時間で一気に冷静になれたのは、明らかに攻撃であったことが大きい。
非常時に対応する為に訓練を積んできたからこそ、非常時と理解できたからこそ即座に冷静さを取り戻し始める。それだけの優秀さが彼らにはあった。
だからこそ、敵の存在を察知することもできた。
「……っ！」
「今度はなんだ――」
その瞬間、彼らが防壁を張ることができたのは僥倖だったのだろう。
離れた攻撃の威力もさほど出なかったことも大きい。
口径４０ｍｍの榴弾の嵐。秒間２０発ほどのそれを、彼らは結界で防ぎきる。
そして同時に彼らは理解する。
これはいわゆる制圧射撃。本命を補佐するための足止めだと。
「手が空いているやつは全周警戒！　敵がこっちに来ることを前提に警戒しろ！」
「……っていうか来たぞ！」
その言葉共に、森から飛び出るは二つの巨大な人型。
やけに張り出た背部が特徴的な５ｍ未満のそれは、しかしその外見故に彼らに狼狽と驚愕を与える。
その鋼は、駒王会談において最も猛威を振るった存在に酷似してい

た。
そう、現魔王サーゼクス、天使長ミカエル、堕天使総督アザゼルの三人を、高々４０機未満で苦戦に追い込んだ、文明の猛威。
堕天使総督アザゼルの片腕を断ち切り、それぞれが伏せ札を切らねばその程度では済まない被害を与えただろう、鋼の魔星。
「……サリュート、だとぉ!?」
その鋼の猛威が、今冥界を蹂躙するべく攻撃を開始した。

そして彼らをおとりとして、本命の部隊が動き出す。
「総員、これより敵拠点内部に潜入。可能な限り多種多様な者達と戦い、今後の戦闘の為のデータを獲得しろ」
そう告げる指揮官の声に従い、それぞれが八人前後で動く者達は、特殊なベルトと装甲を身に着けていた。
プログライズキーを使用して変身する特殊強化戦士レイダー。その数は数百人にも及んでいる。
彼らの任務は敵の殲滅ではなく、戦闘そのもの。
転生悪魔という制度により、多種多様な種族が存在する今の悪魔社会。それを利用し、多種多様な異形との実践データを会得することで、今後の戦闘の為の教導プランを練る為の布石こそが今回の目的。
故に、彼らは動き出す。

和地Ｓｉｄｅ

危なかった。心臓がバクバク言ってるぞ。
視界の隅に移った謎の飛行船団。そこからいきなり砲撃がぶっ飛ばされた時は、死んだかと思った。
咄嗟にインガ姉ちゃんを抱き寄せながら伏せ、星辰光を出して防壁まで張ったが、先に結界にぶつかって爆発したのでちょっといらん手間だったな。
「ぶ、ぶ、無事かインガ姉ちゃん！」
「……え、あ、大丈夫だよ!?　っていうか和地君こそ大丈夫かい!?」
慌てて頷きながらこっちを心配するインガ姉ちゃんは、昔見たボーイッシュな口調だった。
それに安心すると同時に、ちょっと不安にもなってしまう。
やっぱり無理をしているというか、何かあるんじゃないかと思ってしまう。
真剣に、件の修道院襲撃事件とか調べてみた方がいいのかもしれないな。
だけど、今はそこじゃない。
「とりあえず、俺から離れないでくれよインガ姉ちゃん」
『ショットライザー』
『ＳＡＶＥ』
俺はすぐに変身できるように準備しながら、ガラス張りの窓を確認する。
下の方でもドッカンバッコン音が響いているし、飛行船団は今でも何発もぶっ放している。
これはちょっと、やばいことになっているな。
「……おい！　やっぱり何人かいたぞ!?」
「え、なにこれ!?　映画の撮影じゃないわよね!?」
「大丈夫か君達！　早く避難するんだ！」
「なんだなんだぁ!?　酒飲みすぎてちょっと悪酔いしてるってのに……うぇっぷ」
「うそ、テロなの!?　マスター達は大丈夫なの!?」

「クソッタレ！　三日ぶりのお通じだってのに!!」
警備員が廊下から走ってくるは、トイレから慌てて出てくる男女とかで、ちょっとごった返し始めてるな此。
まあ、それはともかく―
「カズヒ姉さん達やイッセー達は大丈夫か？　……いや」
―まずやるべきはそこではない。
姉さん達は、その場でやるべきことをちゃんとやれる人だ。だから俺もやるべきことをまずやろう。
まずは避難とその手伝い！　他の行動はそのあとだ！
「負傷者はいますか!?　俺が背負います!!」
「あ、私もやるよ！　その、いたらですけど―」
インガ姉ちゃんも俺に続き、警備員達もこっちに意識を向けてくれる。
「君達は……いや、助かる！　何人か足を挫いているから、手伝ってやってくれ！」
……やることはきちんとやっておく。だから、無事にしのいでくれよ、みんな！

魔性変革編　第十九話　疾風殺戮

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

『侵入者は最低八人単位で行動！　更に分隊ずつで連携を取って挟撃を仕掛けてくることもあり、警備隊では足止めが限界です！』
『飛行船団からの砲撃は、最上級悪魔クラスに追随します！　結界から外に出るのは危険です！』
『繰り返す！　サリュートに近い機械兵器は最低でも１００機以上！　四機一チームでチーム間の連携を取っており、外周部の警備隊は翻弄されている！　支給増援を請う！　繰り返す―』
「……と、これぐらいの戦力は用意しているのだよ」
得意げに嘲笑するシャルバに、誰もが歯噛みする。
このパーティは相応に要人も多いので警備は弱くはない。少なくとも、テロを仕掛けられても戦えるという自負があった。
その自負は決して壊されてはいない、ただ、認識が甘かったことを誰もが痛感していた。
それを噛み締めながら、サーゼクスはシャルバ達を見据える。
「……サリュートＩと似通った兵器。あの大型の飛行船。そして内部で戦闘を行うレイダーと思しき存在。それらすべてが禍（カオス・ブリゲート）の団の戦力とみなしていいのだろうか？」
「その通り。すべてが禍の団の戦力だ」
シャルバはそれを嘘偽りなく告げる。
それに対して、現政権側は歯噛みし、カテレア達は得意げな表情を浮かべている。
「神器の再現技術は神の子（グリゴリ）を見張（グリゴリ）る者が一歩先じているのは事実ですが、それはあくまで総合力ということです」

「そして、星辰体関連技術では、ザイアの遺産を意図的に確保できた分こちらに一日の長がある。勝算があるからこそこうして出てきているのだよ」
カテレアとクルゼレイもまたそう告げ、更に後ろの幸香ともう一人がひらひらと片手を振っていた。
その言葉に、誰もが歯噛みするほかない。
「……なるほどのぉ。神を敵に回すだけの準備はしておるというわけか」
そう呑気に返すのは、北欧の主神オーディン。
普通ならより警戒心も動揺もあるはずだ。それに対してこれだけの余裕を見せられるのは、腐っても主神ということなのだろう。
その事実に、シャルバ達もまた少しだが気圧されたらしい。
あえて何も言わず、しかし警戒心だけは消していない。
そのわずかな沈黙を、しかし一人の男が首を傾げて疑念を浮かべる。
「……え、神？　どこにいるんだよそんなの？」
それを成したのは、シャルバ達と共に現れた一人の男。
幸香の苦笑いを向けられながら、挑発でも何でもなく疑問符を浮かべて首を傾げている。
それに対して、オーディンのおつきである女性が険しい目を向けた。
「如何に敵対しているとはいえ無礼な！　我々アースガルズの主神を前になんという―」
「は？　何言ってんのお前？」
女性の言葉を遮って、男はフードを取りながら訝しげな表情を浮かべている。
そしてその耳の部分にある機械が、彼の正体を如実に物語っていた。
「神がこの世にいるってんなら、今の人界に何もしないわけがねえだろうが。その時点でそいつは神じゃねえ。……特殊存在とかそんな風にカテゴライズするべきじゃね？」

「……ヒューマギア。疾風殺戮・ｃｏｍか！」
正体を悟った悪魔が吠え、そしてそのヒューマギアはへらへらと笑顔を浮かべながら片手をあげる。
「おうよ！　疾風殺戮・ｃｏｍのメンバー、サツってんだ」
そう答えると同時に、サツは明らかに見下しているといわんばかりの表情をオーディンに向けた。
「神様を名乗りたいってんなら、まず人間達の前に姿を現して天罰でも下すんだな馬ぁ鹿」
そう答えると共に、呆れ果てたといわんばかりの表情を隠すことなく見せつける。
「馬鹿に付き合う気はねえんだが、まずてめえらを黙らせねえと人間を間引くに間引けねえ。……つーわけで」
そして指を鳴らすと共に、更なる敵が出現する。
その姿は、今外で猛威を振るっている敵の兵器と酷似している。
しかし同時に、背部構造などに大きな違いがある。
その際を理解し、そして実際に立ち回ったことがあるからこそ、サーゼクスは小隊を即座に看破した。
「……サリュートＩか。それも、前以上の数を送り込むか！」
『その通りだ。前回で本格戦闘時の慣らしはできた。なので２４機増やして六十機体制だ』
「おっし！　じゃ、俺もさや当てして慣らしとくとすっか」
それに答えるのは、サリュートＩから漏れる人工音声。
更に応じるようにサツも前に出て、そして腰にベルトを巻き付け、更にプログライズキーによく似た別の何かを取り出した。
『フォースライザー』
『ＥＺＯ　ＷＯＬＦ』
その装備に、多くの者が警戒心と共に怪訝な表情を浮かべている。
「レイドライザーの亜種か……？」
「いや、似ているがコンセプトが明らかに異なる造形だぞ……？」
プログライズキーを使用してレイダーに変身するためのレイドライザー。

それにどこか似ているようで、決定的な何かが違うと思わせる装備に、レイドライザーを知るがゆえに疑念が生まれる。
そして、それを把握できるのはより詳しく知る者の専売特許。
「……滅亡迅雷フォースライザー？　いえ、その発展モデルといったところねぇ？」
「へぇ。あいつらの遺産でそこまで発掘できたのかよ。ただちょっと違うんだなぁ、これが」
最もプログライズキー関連技術に詳しいだろうリーネスの判断に対して、サツはそう告げて指を振る。
その反応に、リーネスもまた即座に気づいた。
「……星辰体感応金属を主体にしてる？　つまり、それは―」
「そういうことさ。こいつは滅亡迅雷フォースライザーを星辰体運用兵器仕様にフォーマットした特別製―」
『フォースライズ』
ライザーが稼働し、強引にプログライズキーに似た物体を開く。
同時に狼を模したライダモデルに似て異なる存在が出現し、周囲をけん制したのちに装甲に変化。ケーブルのような物が拡散することを阻害し、勢いよく装着された。
『エゾウルフ』
『Ｂｒｅａｋ　ｄｏｗｎ……』
「疾風殺戮フォースライザー型仮面ライダー、仮面ライダー殺」
両手の爪を展開しつつ、しかし装甲越しでも分かるほどの、好戦的な笑みを浮かべて告げる。
「……間引きの邪魔する特異存在共を、まずちょっとへし折ってやるとしますかねぇ！」

和地Ｓｉｄｅ

なんかパーティ会場でもヤバいことになってないか、これは！
そしてこっちも大変なことになってるとは思うけどなぁ!?
俺はそう思いながら、即座にショットライザーを連射する。
それを装甲で防ぐことなく、射線を読んで素早く回避するのは、敵のレイダー部隊。それも全部新型。
緑っぽい装甲のこれが、なんという果実に厄介な連中だ。
戦闘能力はアントレイダーより上。反面レジスティングアーミーを作り出す能力はないようだが、武装の攻撃力や基本性能は間違いなく上だ。
とどめに部隊で連携を仕掛けてきている。それも、結構な練度でだ。
こいつら間違いなく軍事教練を受けてるな。それもテロリストが軍事的指導を受けたとか言うレベルじゃない。まず間違いなく軍事教官が年単位で鍛えたレベルだ。
その所為で堅実に対応してるから、いまだに数を減らせてない。
制圧射撃でこっちの動きを止めつつ、別の班が回り込んでメインの攻撃。そして片方の防備を固めると、制圧射撃を行っていた側もガチの攻撃を叩き込んでくる。
こっちはあくまで避難活動の範囲内だから、ガチの攻撃を仕掛けるわけにもいかない。そして相手もそれを分かっている節がある。
……これは、あれだな。
「こいつら、まさかこの規模で威力偵察でも仕掛けてるのか？」
本気で勝ちに行くつもりが見えない以上、敵の目的はこっちの出方を調べるとかそんな感じに見える。
……大規模軍事的本格作戦の前に、今の戦力で敵勢力と戦う為のデータを取ろうってはらか。
ならちょっと厄介だな。
おそらく本命はこんなものじゃない。それだけの勝ち目のある作

戦があるということになる。
……これ、アザゼル先生が言っていたような長期的なものにならない気がしてきたぞ？
向こうは短期決戦すら狙ってるんじゃないか？　そう考えた方が、この短期間で大規模な作戦行動にも納得できる。
まあ、例えそうだとしても―
「今は、こいつらをぶちのめすしかねえよなぁ！」
『サルヴェイティングブラスト』
一斉射撃で何とか何人かをぶちのめし、即座に敵の警戒網に穴を作る。
「インガ姉ちゃん、避難誘導は任せた！　俺はこいつらを抑えておくから！」
「……分かりました！　どうか、無事で」
そう言われたら、死ぬわけにはいかねえよなッと！
俺は気合を入れ直して敵を攻撃するけど、どうやら肩透かしに終わりそうだ。
ああ、これは間違いないな。敵は本当に今後の為に実践データが欲しいから来てるんだ。
少なくとも、レイダー部隊に関しては間違いない。でなければこの動きはおかしい。
三人ほど吹っ飛ばしたとはいえ、そのあと即座に回収して離脱という動きが素早すぎる。
増援まで来ている節があったにも関わらず、全員が離脱という辺り、体当たりでデータと経験を積んでそれを可能な限り持ち帰るってのが本命だ。
ならこのまま逃がせばいい気もするが、相手が意図に気づかれていると知れば何か動きかねない。
ここは勘違いしている振りをするのが賢明ってか？
「逃がすかこら！」
それっぽい大声をあげながら、だけど曲がり角をとにかく注意して追撃する。

簡単な魔術なら大抵の属性を使うことはできるのが魔術回路の基本。なので濡らした氷を鏡代わりにして、曲がり角で何か仕掛けられてないか確認してから全力疾走する。
そして敵が逃げている方向に走って来てみれば、そこは吹き抜け構造のホールになっている。
しまった、此処なら待ち伏せって可能性も十分にある。
俺は星辰光でいつでも身を守れる準備をしながら、ショットライザーを周囲に向けて警戒し―
「―おいちょっと待て」
目と目が合った感じでロボットを見つけて、面食らった。
サリュートIに似ているが、張り出た背部を筆頭に結構色々と違うところがある謎の兵器。
手に持っているのは口径４０ｍｍ弱ってところの銃火器で、他にもロケットランチャーとかを装着している機種もある。
……なにこれ？
いや、ほんと……なにこれ？
禍の団の技術力は、もしかして神の子を見張る者より強大になっているんじゃないだろうかと言いたくなってきたんだけど……なにこれ？
「ふふふ。ちょっと面食らっているようね」
その声に、俺は警戒を消さずに視線をそちらに向ける。
そこにいるのは、桃色の髪を伸ばした一人の女性。
どこか妖艶な雰囲気を見せる、二十歳に一歩届かない少女の範囲内の女性だった。
その隣には姉妹っぽい、ちょっと癖っけの少女が肩をすくめて立っている。
「どうすんだよ姉貴。様子見のつもりが接敵だぜ？　それも、あのコカビエルを叩きのめした奴の一人じゃねえか？」
俺も有名人になったもんだ。
つっても、その分警戒されてるってことだから嬉しいかと言われると微妙だけどな。

「で、そちらさんはいったい何者だよ？」
俺がショットライザーを突きつけると、その反応は綺麗に分かれた。
髪を伸ばした姉貴と呼ばれた方は、どこかあでっぽい笑みを浮かべて嬉し気に。
姉貴と相手を呼んだ癖っ毛の方は、どこか諦観を感じさせるため息交じりに。
「禍の団、英雄派、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）所属。アーネ・シャムハト・ガルアルエル。こちらは妹の―」
「普通の英雄派所属の、ベルナ・ガルアルエル」
その名乗りと共に、姉からは喜色交じりの殺気が放たれ、妹からは気だるげな雰囲気が向けられる。
……なるほどな。
俺は、どう動いた方がいいんだろうな。

イッセーＳｉｄｅ

「ヴァーリ！　今度は上級悪魔達のパーティにテロをするってのか！」
まさかヴァーリとこんなところで出くわすとは思ってなかった。だけどそんなことはどうでもいい。
こいつまで来た上、意味深なこと言いやがって。
野郎、やってくれるじゃねえか！
俺たち全員がヴァーリチームを睨み付けるけど、ヴァーリは何故か肩をすくめた。

「いや、俺は無理やり引っ張られたようなものでね。幸い君達が見学に来ていた黒歌と接触していたから、その迎撃……という名目で面倒ごとから離れてきたのさ」
面倒ごと？
「ああ、俺はあいつらと違って、誇り高い存在だと奢るのではなく、誇り高い存在らしく生きたいのさ。だからくだらない意地を守る為に態々宣戦布告とさや当てをするなんて趣味はないんだよ」
「……その物言い、今回のテロは旧魔王派によるものと考えていいのかしら？」
ヴァーリの物言いに部長がそういうと、ヴァーリも特に隠すことなく頷いた。
旧魔王派っていうと、ヴァーリと同じ千大魔王の末裔って奴か？
むしろ仲良くやってそうだけど、そうでもないってのか？
「……ええまあ、家柄以外に誇るところがないのでしょうね。正直どうでもいい手合いです」
「同感ねぇ。ああいうのってめんどいことばっかり言ってくるから嫌いにゃん」
「自由に生きようって思わねえのかねぇ。詰まらねえ連中だぜ」
なんかヴァーリチームの皆がそんなこと言ってる。
で、問題はだ。
ヴァーリはまずい。白龍皇なだけあってもちろん強敵だ。
美猴も、あの孫悟空の末裔っていうならかなり強いだろうし、こいつもキッツい。
黒歌もだ。SSランク級はぐれ悪魔ってのは、間違いなくヤバい。
そして、最後の奴もヤバい。
誰かは分からない。ただ、あいつが腰に下げている二本の剣は、間違いなく聖剣のそれだ。しかも、エクスカリバーやデュランダルに匹敵するヤバいのだって間違いなく分かる奴だ。
聖剣使いでエクスカリバーも持ってたゼノヴィアもそれに気づいたんだろう。奥歯を噛み締めながら眼鏡の金髪を睨み付けてる。
「……貴様のそれは聖剣か。それも、片方はエクスカリバーのそれに

近いな」
「流石は破壊の聖剣（エクスカリバー・ディストラクション）の担い手だっただけのことはありますね。……ええ、これはエクスカリバーの一つであり最強と称される行方知れずだった最後の一つ。支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）です」
教会が確保できなかったっていう、七本目のエクスカリバー!?
なんつーものを持ってるんだよ。しかも、もう一つの方が強力そうだってのが更にヤバい。
金髪もそう思ってるのか、もっと大事そうにそれを掲げる。
「そしてこれが、エクスカリバーやデュランダルを超える最強の聖剣。聖王剣コールブランドです」
こ、こーるぶらんど？
「……アーサー王を王に選んだ、カリバーンの別名を持つ聖剣ね。確かペンドラゴン家の家宝になっていると聞いていたけれど？」
部長がそう言うと、金髪はうんうんと頷いていた。
「ええ。今は私がコールブランドに選ばれています。……挨拶が遅れましたが、私はヴァーリ・チームのアーサー・ペンドラゴンと申します。特にデュランダルのゼノヴィアと聖魔剣の木場祐斗にはお見知りおきを」
その言葉共に、黒歌が一歩前に出る。
「もっとも、すぐにお別れしちゃうかもしれないけどねぇ。白音をくれないっていうなら殺しちゃうわよ？」
「……っ」
小猫ちゃんがビクリと肩を震わせる。
ああ、これで完璧に腹をくくったよ。
俺は、同じタイミングで動いていた部長と共に黒歌の前に割って入る。
「させねえよ。っていうか、これ以上小猫ちゃんを怖がらせるならぶっ飛ばすぞ？」
「ふざけたことを言わないで頂戴？　小猫は私の眷属であり、守るべき家族よ？」
「ちょっとちょっと。私は白音の姉よ？　家族だっていうなら優先権

はこっちにあるんじゃない？」
　黒歌は平然とそんなことを言うけど、部長はそれに殺気で返す。
「家族ですって？　あなたが主を殺してそのまま去って、小猫がどれだけの目にあってきたかわからないでしょうね。……感情を失ったあの顔を見たものとして、そんな身勝手な言い方で家族なんて言わせないわ！」
「ああ、そうだ。部長の言うとおりだ」
　俺も真っ直ぐに左腕を突きつけて宣言する。
「小猫ちゃんは俺の後輩で、俺達の仲間だ。その仲間を無理やり奪おうっていうなら、俺は死んでもてめえをぶっ飛ばす！」
「……全くだね。部長とイッセー君がそう言うのなら、僕達の総意と言ってもいいさ」
「決まりだな。もとより、テロリストにエクスカリバーを使わせたままというのも見過ごせん」
「あらあら、新兵器のテストははぐれ悪魔の討伐になるようですね。腕が鳴りますわ」
　木場も、ゼノヴィアも、朱乃さんも、やる気満々で俺達に続いてくれる。
「こ、小猫ちゃんは奪わせたりしない！」
「皆さんが怪我をしても、私が必ず治します！」
　ギャスパーもアーシアも、小猫ちゃんを庇うように一歩前に出ている。
「……そういうことです。彼らは誰一人として仲間をこのような形で差し出す者にはなりません。……そして私も、あなた方のような人の好きにさせる気はありません」
　シャルロットも一歩前に出て、持っていた包丁を突きつける。
「第二ラウンドです。今度はお互いに総力戦と行きましょう。イッセー！　禁手の準備を!!」
「ああ、行くぜヴァーリ！」
　俺はシャルロットに応えて、素早く神器を具現化する。
　そして遠慮なくシャルロットと同調して禁手を―

「……あれ？」
え、いや、ちょっと待って？
変に注目を浴びるぐらい、俺は思わず声を上げてしまう。
でもおかしい、いつもならこれでシャルロットと一緒に禁手になっているはずで―
『……ああ、禁手に至り駆けている所為で、ちょっと神器が不調になっているな』
―ドライグが、とんでもないことを言ってくれましたよ。
――――えええええええええ!?
そんな風に、絶叫が響くのも無理はないよなぁ。
っていうかどうするんだよコレぇ!?

魔性変革編　第二十話　激戦激化

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

動き出す戦場において、カズヒ・シチャースチエの判断は非常に素早かった。

「ヒマリ、悪いけどサポートをお願いするわ。……できる？」

「もっちろんですの！　本丸ですのね？」

快諾し、そして既にこちらの思考を読んでいるヒマリに、カズヒは静かに苦笑した。

そう、この状況は流石にまずい。

魔王であるサーゼクス・ルシファーすら苦戦させた敵が、それ以上の数で襲撃を仕掛けてくる。これは心理的に冥界の者達にとってまずいことだろう。

その上で旧魔王血族が軒並み表れて仕掛けてくるのなら、更に心理的に追い込まれるのは間違いない。

そんな状況下で、貴族達が大きな被害を受ければどうなるか。心理的な面において、冥界の民に与える心理的な負の要素はどこまで高まるか。

間違いなく大きなものになると思ったからこそ、カズヒは可及的速やかに旧魔王側に深手を負わせることを選択する。

開幕速攻で出ばなを挫くことができれば、そこから士気を取り戻して流れをつかみ返すことも可能だろう。成果を上げていればそれだけで、民の心理的影響も好転する。とどめに自分の星辰光は、ああいう手合いには特攻が入る。

「創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星」

故に躊躇なく相手を決定し、カズヒは詠唱を始めながら一歩を前に踏み出した。

「創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星」
そして、それにカウンターを叩き込むように詠唱が鳴り響く。
鋼の魔星の祈りが響くと共に、破壊の嵐がカズヒ達に向けて一斉発射される。
瞬時にバックステップでかわしカズヒとヒマリだが、しかしその一撃は絶大だった。
放照れた一撃は反応が遅れた者たちを穿つ。攻撃範囲が小さかった為死人こそ出ていないが、一撃で骨ごと肉が消し飛ばされ、腕が焼け付きながら落ちていく。
瞬時にカズヒは対象をのさばらせないと判断し、対象を変更。まず相手を迎撃して足止めしなければまずいと警戒する。
瞬時に取り出すはペットボトルサイズの樹脂に取り付けられた符。
宝石魔術の根幹である魔力の流動に使う触媒を、特殊調整された樹脂で代用した特殊装備。
それを瞬時に投擲し、射線をずらす為の障壁の機転として運用。
周りの研究家達の成果を、財力にものを言わせた数を生かし、自分達が戦う為の戦闘用結界として構成する。
「ヒマリはまず変身！　それまではこっちでしのぐわ！」
「了解ですの！」
敬礼するヒマリを背中に庇うようにしながら、カズヒは即座に次の戦闘態勢をとる。
構えるのは軽機関銃（マシンガン）と榴弾筒（グレネードランチャー）。
本体から使用する弾丸に至るまで、魔術による強化が可能なように調整された特注品。
これまで使用してきた東側の旧型にして安価型の物とは、あらゆるものが訳が違う。
それを持って、カズヒは相手を見据えて迎撃する。
「疾風殺戮・ｃｏｍ。人類大量殺戮を目論む相手なら、人間が相手をするべきかしらね！」
「いいねぇ！　俺としても邪魔なだけの異形より、減らすつもりの人間の方が殺しがいがあるってもんだなぁ！」

相対するは、プロテクターに身を包んだヒューマギア……否。
「人造惑星型ヒューマギア、疾風殺戮・ｃｏｍのサツ！　人間殺戮の為に相手するぜぇ!!」
人造惑星の猛威を伊前に、カズヒ・シチャースチエは突貫する。

そしてその間に、戦況は大きく傾き始めていた。
最強の悪魔とも称されるサーゼクス・ルシファー。そんな彼を僅か十二機で奥の手を解禁させる必要に迫らせた、人造惑星サリュートⅠ。
それが六十機もまとめて駆動するこの窮地に治して、悪魔達が一様に気圧されるのは仕方のないこととともいえる。
そして、それがきっかけとなり窮地は更に加速している。
「……本当に……めんどくさい……っ」
「カテレアちゃん……ここまで……っ」
ボロボロになり膝をつく、二人の悪魔。
その二人が一対一でここまで追い詰められている事実が、更に悪魔達の恐慌を煽っていく。
「ばかな、セラフォルーさまとファルビウムさまが……一対一で!?」
「これが、真なるレヴィアタンとアスモデウスの本来の力だというのか!?」
現魔王レヴィアタンとアスモデウスを襲名する、セラフォルーとファルビウム。
その二人を圧倒するは、旧魔王血族であるカテレア・レヴィアタンとクルゼレイ・アスモデウスだった。
「ふふふ、オーフィスの力を借りずとも、我らはあなた達を打倒できる高みに到達したのですよ」
「聖杯戦争を勝ち抜きつかみ取ったこの力は偽物には負けぬ。例え眷属を引きつれようとも、蛇をもってすれば打倒できる力があるので

な」
　かつての魔王に匹敵以上の力を持つからこそ魔王の名を襲名した、四人の悪魔。そのうち二人が敗北して魔王であることを否定された旧魔王血族に追い込まれているこの現状が、現魔王政権の悪魔たちを精神的に追い込んでいる。
　そして、それをひっくり返す力が今の魔王側には足りない。
　超越者と並び称されるサーゼクスとアジュカの内、アジュカはこのパーティそのものには参加していない。
　ある理由による別の場所にアジュカがいることで、この趨勢の問題点が浮き彫りとなった。
　そしてサーゼクスもまた、この窮地に対応が遅れている。
「フハハハハ！　どうしたサーゼクス！　まさかこの程度の力しかないというのか!?」
『悪いが前回の戦闘でプログラムの修正はできているのでな、十二機がかりならあの状態も足止めはできるし、あの状態でないのなら圧倒する余地は十分にあるのだよ』
「くっ！　まさかここまでの力を手にするとは……っ」
　ハヤテが制御する十二機のサリュートIの補佐を受けながら、シャルバ・ベルゼブブはサーゼクスと徹底的に追い込んでいた。
　人があまりにも多いこの環境下では、サリュートIすら短時間で葬ったサーゼクスの真の姿を見せることは難しい。更に前回の戦闘で連携プログラムを改竄するというデジタルゆえの強みを生かし、サーゼクスを足止めする為の戦術を確立していた。
　画一化されやすいゆえの短所もあるが、それ以上に即座に全体にフィードバックする余地がある長所が勝る。根幹的にデジタルである疾風殺戮・ｃｏｍは、アナログゆえの強さを認めつつも、自らのアドバンテージを生かすことに躊躇がない。
　そして憎悪による爆発力という、アナログゆえにアドバンテージを最大限に生かしたシャルバを中核にすることで、本領を発揮できないとはいえサーゼクスを見事に追い込んでいた。
　増産された二十四機の内、十二機を徹底的に足止めに回すことに

よって、グレイフィア達数少ない同伴した各魔王眷属の接近を阻む。同様の手法で悪魔達のかく乱を行いつつ、本丸の打倒を可能ならば行い、できなくともこの苦戦で精神的に優位に立とうという思想が透けて見えていた。
「強か、と言っておくべきか……っ」
『嫌らしい戦術と言ってもいいぞ？　最も成功しているのなら戯言は無視していいがな』
サーゼクスにそう告げながら、ハヤテは戦術的に俯瞰して対応している。
彼はその性質上、星辰体運用兵器としては疾風殺戮・ｃｏｍでも低級ではある。だが同時に戦略的運用能力においては最強になりうる素質を秘めていた。
そして個体性能においてはサリュートＩを遥かに凌駕する性能を発揮する今のシャルバを利用することで、前回以上に優勢に立間断っている。
そしてそれを冷静に俯瞰しながら、ハヤテは中継越しに状況を多角的かつ並列的に解析していく。
「どうしたどうしたどうしたどうした!?　最強の魔王とはその程度か？　真に偉大なるベルゼブブに屈辱を味合わせて起きながら、真の姿とやらを見せずに倒れるのは情けないとしか言えないだろう！」
「……ここでそれを出せないと分からないものに、悪魔の未来をけん引させるわけにはいかないのだよ……っ！」
確かに筋は通っている。ハヤテはそう納得していた。
どこまで言っても民を自分達の為の道具としてしか見ないシャルバに、民を慈しみその為に己を尽くすサーゼクス。
どちらが正しいかはこの際度外視しても、シャルバの在り方をサーゼクスが良しとすることはないだろう。そしてだからこそ、サーゼクスが全力を出せないということをシャルバは馬鹿にしている。
そしてそんな性根の者だからこそ、サーゼクスはシャルバを魔王にするわけにはいかないと考えている。
その心情について、ハヤテはあえて意識する気もない。

別にどうでもいいのだ。彼にとって旧魔王派は人類の間引きにおいて有効であるから協力しているだけ。もしサーゼクス達が人類の間引きに協力するのならば、鞍替えすることも本気で実行する選択肢に入っている。

ありえない過程であると推論は立てていたが、だからこそ容赦する必要もない。

故に、アザトース粒子による包囲網でサーゼクスの動きを封じ、シャルバが一撃を叩き込める要素を作り出す。

彼は手柄を積極的に立てようという功名心など持ち合わせていない。発言力を維持するためにも鉱石は必要だが、疾風殺戮・ｃｏｍはその保有する技術や設計だけで十分なポテンシャルを維持しており、今サリュートＩで敵をかく乱できている時点で十分だ。

疾風殺戮・ｃｏｍの目的は、徹頭徹尾人類を間引くこと。それができるのなら、最悪自分達がそれを成さなくても構わない。

故に、此処でシャルバの機嫌を取っておく方が有効だと考えるがゆえに遠慮の容赦もなく―

「させません！」

―そして油断も慢心もないがゆえに、それが脅威であることを即座に察した。

驚愕を覚えながらも、しかし冷静に対応してシャルバを庇う。それが驚愕にのまれて呆然としたシャルバを助ける結果に繋がった。

そして同時に無理もないと、ハヤテは冷静に俯瞰的に判断する。

なにせ、助けられたサーゼクス・ルシファーですら唖然としているのだ。ましてシャルバであるからこそ、この現状が与える衝撃は絶大だろう。

「本当に、こいつらは力の責任が分かってない……っ」
そう吐き捨てながら近づく女性は、二つの力を具現化させていた。
一つは、聖なる力を僅かながらに感じさせる銃。神器の反応が確認されており、シャルバを狙った攻撃はそれによるものだ。
問題はもう一つ。彼女が具現化し、そしてサーゼクスを助ける為にシャルバの同種の力の県政に使われた、魔力で構成される蠅の群れ。
……聖書の神が作りし神器と、魔王の血筋に宿る異能。
その二つを発現させている女性に、シャルバもサーゼクスも言葉を失っている。
故に、状況を勧める以上に情報を得る目的で、ハヤテは質問することにする。
「……まさかヴァーリ・ルシファーじみた奴が他にもいるとはな。神器そのものが人類全体で見ても稀少能力だと思うのだが、悪魔に宿りすぎでは―」
「違うわ。勘違いしないで」
そう、食い気味に放たれた言葉と共に、殺意が向けられる。
そして女は銃を向け、強い敵意をシャルバとハヤテに向ける。
「私は人間の血が混じった悪魔じゃない。悪魔の血が混じってしまった、ただの人間よ」
その言葉に込められるのは、煮えたぎるような複雑な感情。
それが煮詰まった濁った不快感の籠められた視線をシャルバに向け、女は宣言する。
「プルガトリオ機関アルファ部隊所属、マルガレーテ・B（ベルゼバブ）・ゼプル！　八つ当たり交じりだけど、主の代行たるミカエル様の名により、推して参る!!」

一方その頃、外側の戦闘もまた苛烈となっていた。
「クソッタレ！　地味に面倒っていうか厄介っていうか……っ！」

「―砲撃来るぞぉ！　障壁張れぇ！」
ぼやきかけた悪魔は、同僚の声に反応して即座に防壁を張る。
一秒少したって、そこに超高速で放たれた砲弾が直撃して轟音を上げることになる。
更に一息つく間もなく、地上からいくつもの榴弾が放たれて回避に専念する羽目になった。
更に数人でチームを組んだレイダーが、数人がかりで一人の悪魔を討ち取ろうとする為、連携をとることもまた困難となっている。
……この戦闘において、禍の団は新兵器のテストもかねて三種類の兵器を投入することを決定していた。
一つは新型のレイダー。スカラベレイダーシリーズ。
スカラベとはフンコロガシの一種であり、すなわち汚れ仕事専用に開発されたこのレイダーは、人間、それもプロ級の戦闘訓練を受けた物のみが装着するレイダーである。
この為戦闘能力の補佐といった機能を組み込む必要がなく、また対異形いおける足止めではなくオフェンスを考慮している為、アントレイダーと比較してもレジスティングアーミーがない代わりに全能力が数段上になっている。
加えて独自の機能として、テロ活動や潜伏性を高める為に、限定的な物質創造能力を搭載。小規模な催涙ガスやレイドライザーを作り出せるこの機能により、実装に伴う隙をカバーすることも、相手の警戒を潜り抜けることも可能としている。
アサルト、ブラスト、スナイプ、コマンドと機能が降られた四種のレイダーにより、前衛戦闘部隊、狙撃部隊、火力支援部隊を展開し、屋内戦闘や広範囲戦闘を連携を取って行うことに成功していた。
一つは大型飛行船として開発された、リーピ級神器力飛行船。
全長２７０ｍという巨体のこの飛行船は、トルネード級神器力潜水艦から得られた技術をもとに、禍の団が独自に開発した人工神器と言える。
トルネード級と同様に、多数の搭乗員と同調することで強大な神器を再現するこれは、飛行船の域を超えた機動性や防御力を発揮しステ

ルス性も莫大。さらにトルネード級の設計を流用しているため簡易的な潜水艦としても運用可能という、規格外の性能を発揮。とどめに比較的短距離で相応の準備も必要だが空間転移も可能としており、すべてを合わせることでテロ活動に非常に適した移動要塞となっている。

ＶＬＳやアザトース運用兵器を備えている為火力支援も可能であり、今回はインパクトで羽の流れを掴む為に比較的近距離で活動しているが、更なる遠距離から支援を行うこともできる。その攻撃力は最上級悪魔が率いる眷属総出に匹敵すると試算が出ており、必要経費は莫大だが、工業的にそれだけの兵器が開発できるというのはそれだけで絶大な価値を持つ。

そして最後の一つが、追加で投入される。

『『『

更なる整備性や信頼性を与えることにも繋がった。辰世代の礎としても禍の団の兵力としても大いなる成果を生み出している。
『『『『『『『『『本体および搭乗者との調整完了。続けて各種接続武装との付与係数を再計算。計算終了に伴い、各部最終チェックを開始する』』』』』』』』』
その特性はサリュートⅡに組み込まれるか装備するかによって使用する、人工神器の強化能力。
これにより複数人数が使用する大型兵器としてでなければ実用品として使えない、禍の団の人工神器技術は飛躍的に向上する。
『『『『『『『『『チェック率７０％……８４％……９８％……チェック完了』』』』』』』』』
組み込まれた機能を強化することで、人の判断力と機械の演算力を同調させた人機一体を体現。更に搭乗者の身体機能を向上させることで、特に鍛錬を積んでない一般人が搭乗しても、急激なＧに耐えられるようにすることにも繋がった。
手持ち武装の性能も大幅向上。通常時では歩兵戦闘車と同等規模の連射速度で一秒間の連射が限界の榴弾砲は、歩兵携行型の機関銃と同等の連射速度で半永久的に連射が可能となる。近接武装も土木作業やドアブリーチング程度が精々だったのが、上級の異形にすら怪我を負わせられるほどに強化された。
『『『『『『『『『システムオールグリーン。これより全力戦闘モードに移行する』』』』』』』』』
これが、禍の団の更なる一手にしてその先に至る為の礎。
禍の団という脅威をより強大にする、猛威の具現化。
『『『『『『『『『超新星（メタルノヴァ）――人機同調式星辰光兵装起動（スタート・アップ・ＡＯＳ）』』』』』』』』』
サリュートⅡ
人機同調式星辰光兵装起動（スタート・アップ・ＡＯＳ）
基準値：Ｃ
発動値：Ｂ
収束性：Ｄ
拡散性：Ｄ

操縦性：B
付属性：B
維持性：B
干渉性：E
その猛威が、更なる増援という形で襲い掛かるその刹那―

「向こうも気になるけど、戦力も多いからね。まずは外側を片付ける……っ」

素粒子の嵐が、増援の一割を一気に削り取る。

デュナミス聖騎士団、此処に現着。
リュシオン・オクトーバーを筆頭とする増援部隊が、禍の団の好きにはさせぬと戦闘を開始した。

魔性変革編　第二十一話　乱戦は続くよどこまでも

和地ＳＩＤＥ

アーネ・シャムハト・ガルアルエルにベルナ・ガルアルエル。
俺はそんな二人の態度を見たことで、直感的に何かを悟る。
だから―
「いいだろう。その涙の意味を変えてやるっ！」
―俺は直感でベルナに突貫する。
素早く拳を握り締め、俺はベルナに殴りかかる。
その瞬間、目の前に氷の壁が発生した。
拳は叩き込まれ氷が割れるが、あまりに簡単に割れすぎ、更に衝撃が殺される。
これはあれだな。クラッシャブル・ストラクチャとかそういう奴。
しかも水がだいぶ充填されている当たり、氷そのものは既にヒビが入っているとかそんな感じか。一瞬だったが透明度が結構あったんで気付かなかった。
あの一瞬でこっちの攻撃を受け止めるのに特化した氷の生成……
いや、水も踏まえると氷水操作系の神器（セイクリッド・ギア）っていったところか―
「あら、私の可愛い妹に手を出しちゃ駄目よ？」
―その瞬間、拳銃の銃口がこっちに向けられていた。
咄嗟に回避するが、思った以上に弾速が早く頬を掠め―
「グッ!?」
その瞬間、盛大に爆発した。
冗談だろ、何だこの爆発力!?
拳銃の破壊力じゃないだろう!?　というか、なんかの神器か!?
「悪いな姉貴、……助かった」
どこかほっとしているかのような残念そうなその物言い。

そんなベルナに微笑みながら、アーネは銃を油断なくこっちに向ける。
同時に敵の人型兵器がこっちに向かって射撃を敢行する。
一発一発は小型の榴弾程度だが、こうもぽこじゃかぽこじゃか撃たれると流石にきついな。防壁でカバーできるが、数が多い上にヒット&ランをしっかりこなしているから対応するのも中々めんどい。
そう思っていると、更にアーネとベルナがこっちに攻撃を叩き込む。
アーネはさっきの爆発する銃弾を使ってこっちに速射を仕掛け、ベルナは自分の後ろから氷の大砲を作り上げると、それを使ってこっちに砲撃を叩き込む。
あ、これまずい。
とにかく全方位から砲撃が叩き込まれてるから、防戦一方というか反撃に転ずるチャンスが少なすぎる。
ええい、とにかくこういう時は前向きにだ。
俺は回避しながら意識を切り替えると、ガルアルエル姉妹に鋭く視線を向ける。
「……何が可愛い妹だよ。お前の目、どっかで見たことあると思ったが確信したぜ」
俺はあの目を知っている。
愛情を向けていると思っている。そう確信している目。
だが同時に、イッセーの両親がイッセーを見る目とは全く異なる、異質な目。
俺はそれを真っ直ぐに向け、内心のイラつきと直感に従う。
「……アンタはザイ―」
「うるせえよ」
その瞬間、キャニスターのような散弾をベルナが放つ。
さっきまでは一発一発が回避しやすかったが、こうなるとマジでヤバい。
ああ、回避しやすかった砲撃から確実に当てる為の砲撃に切り替えた。この意味を理解して俺は寒気を覚える。

まずい、涙をぬぐうつもりが逆上させた……っ！
「あんたにとやかく言われる筋合いはねえ。……全員床を墜としな！
上から一気に圧殺してやるよ!!」
確かこの下、吹き抜けフロアになってるから数十メーは落ちるよなぁ。
上を取られるってそもそも、圧倒的に不利なアドバンテージだし―
「じゃ、そういうことでね？」
これは、ちょっとガチな展開になってきたな……オイ！

ＯｔｈｅｒＳｉｄｅ

一方その頃、ホテル外周部の戦いは文字通りの激戦になっていた。
大型化による高性能化と白兵戦すら考慮したサイズを踏まえた４ｍ強のサリュートＩの設計は、禍の団にとって派生形の開発を求めるのには都合がよかった。
その過程で禍の団の数を抑える戦力として、有人機としての開発が進められたのも当然だろう。
そもそも星辰体運用兵器としての星辰奏者（エスペラント）は中々問題のある存在でもある。
その根幹ともいえる星辰光（アステリズム）がその最大の問題点。すなわち「狙った戦力確保も数を揃えることも困難」であるという点だ。
星辰光はその性質上、似通ったものはあっても同一のものは存在しない。必然として唯一無二という代物であり、現代軍事的に考えればどうしても癖が強い種別となる。
そこに対して人造惑星サリュートＩは、同一の星を大量に揃える余

地があるという点で非常に魅力的であり、その設計を流用することで、同じ星辰光を使う兵士達を疑似的に大量動員することができるというのには十分な価値があった。
そしてその過程に人工神器技術がかみ合ったことで、サリュートⅡの星は分かり易いものとなる。
すなわち、人工神器の強化能力。
技術的問題でどうしても神の子を見張る者に質で劣る人工神器を、ある程度の大型化と星辰光による同調強化によって補うという、一種のコペルニクス的転回ともいえる発想だった。
これにより、発動前では装甲戦闘車両程度の機体だったサリュートⅡは文字通り星辰体運用兵器として戦闘が可能となる。
歩兵戦闘車のチェーンガンレベルの連射速度が限界の榴弾の連射が、リボルバーカノンのそれになるのはそれだけでも絶大だろう。秒間二十発を砲身冷却で半永久的に放ち続けることができるというのは、十分すぎる脅威となる。
またミサイルやロケットランチャーも再使用を短時間に可能とすることで、遠距離戦闘においても優れた機能を発揮可能。
近接武装も威力を向上させることができ、格闘戦でも十分異形に通用する戦闘能力を会得することができる。
更に移動面でも大幅に強化されたそれは、人工神器という補正を加えたことで並みの星辰奏者を超える軍事兵器として完成した。
……だがしかし、それに相対するのは並みの星辰奏者ではない。
最低でも並みレベルの星辰奏者として上乗せされた悪魔祓いが挑めば話は全く変わるのだ。
デュナミス聖騎士団はそれを成せる精鋭。厳しい鍛錬を積み過酷な戦いでもまれ、その上で星辰奏者としてのポテンシャルが上乗せされた、正真正銘の精鋭部隊。
そんな彼らが増援として現れたのは、非常に単純な理由だ。
彼らは本来、冥界の軍事部隊と合同演習を行う予定だったのだ。
今後の禍の団との戦いを見越し、サリュートⅠに代表される敵の新兵器を警戒した結果、三大勢力で軍事的連携を強化する必要性が生ま

れていた。
　これに対してサリュートⅠなどに興味を持っていたアジュカ・ベルゼブブも手を貸す形で、大規模模擬戦の準備を進めていたらこうなったのだ。
　結果として、その戦いは文字通り最高レベルのそれへと変わる。
「ぬぅぅぅぅぅぅぅっんっ!!」
　豪快な方向と共に振るわれるメイスが、一撃で三機のサリュートⅡを吹き飛ばす。
「悔い改めるなら投降せよ！　拒むのならば問答無用!!　我らの前でテロ行為など、早々好きにさせると思う出ないわぁ!!」
　そう吠えるのは、デュナミス聖騎士団の団長でもあるストラス・デュラン。
　その豪快さは見るからに派手で大味だが、だが隙があるかと言われればそんなことは全くない。
　大火力攻撃は派手故に隙が生まれやすいが、然しそれは掻い潜れればの話。
　圧倒的な身体能力と巨体から繰り出される其れは、大型武器でありながら比較的小型な両手武器レベルの技術を誇り、掻い潜ろうとした瞬間に第二劇で吹き飛ばされるのがオチとなる。
　その圧倒的猛攻を行うその姿は、当然の如く騎士団の者達の士気を底上げする。
　そう、派手ということは目立つということ。そしてそれが成果をあげれば上げるほど、味方の士気は上がり敵の士気は下がるのだ。
　事実彼は、窮地に陥っている区画に突撃して暴れるという行為を速やかに繰り返し、士気の差がつく頃には別の味方を助けに向かっている。
　裏表のない善良さを持ちながら、同時に自分の戦い方を生かした戦略的対応ができる。決して人柄と戦闘能力だけで騎士団長の地位にいるわけではない……が、それは人の意見にしっかりと耳を傾けて、人の配置や意見の採用をしっかりできる点にこそある。
　軍師や戦術立案担当の意見をよく聞き、イエスマンにならずに気に

なるところやどうにかしてほしい所はきちんと告げ、どうしても無理であるのならば無理強いはせず、しかし自分の尽力でどうにかできるなら要望する。
その辺りのバランス感覚があるからこそ、彼は騎士団長として成果を上げている……が。
「鉄拳制裁っ！」
同時に、純粋な拳でサリュートⅡをのけぞらせられる彼の戦闘能力も破格であることは言うまでもない。
『……すまないが南西２ｋｍ先のところで味方が押さえつけられている。今から走って後ろから助けに入ってくれ』
「承知した、ベルゼブブ殿!!　うぉおおおお、突撃ぃ!!」
そして今回は、かの魔王ベルゼブブを襲名した、アジュカ・ベルゼブブの指示を素直に聞いていた。
「うむ！　魔王というのには正直悪い印象があったが、指示は的確で性格も悪人ではない。もっと早く会いたかったと思いますなぁ!!」
『あまり煽てないでくれ。俺は性格面では魔王で最も善良さが薄いだろうし、軍事的士気においてもファルビウムの方が遥かに優れているさ』
通信越しにアジュカはそう言う。
これは謙遜ではなく正真正銘の自己認識だが、ストラスは豪快にそれを笑い飛ばす。
「ガハハハハッ！　つまり四大魔王はすべからく善良ということではないですかな！　これは良きことなり、ハレルヤぁ！」
その真っ直ぐな返答に、アジュカは通信越しで少し苦笑を返すほかない。
謀略とか腹芸には到底向いてない人格だが、そういう人物だからこそできる者達も力になろうとするのだろう。
世が世なら聖人と呼ばれうる人物かもしれないと、通信越しのアジュカはふと思った。
だがしかし、今はそこまでの余裕はないと言えるだろう。
『空間遮断の結界内に、リアス達がいると聞いている。余裕ができれ

ば人員を派遣してほしいが……どれぐらいでできるか分かるかな？』
友の妹を気遣う程度のことは自覚があるし、何よりそれだけの結界に遮断されて何もされないとも思えない。
故に余力があればそちらに人員を回してほしいと告げておくのだが、ストラスはそれに対して首を傾げた。
「……おろ？　窮地と聞いたので既に派遣しておるが……言いませんでしたかな？」
『そうなのか？』
「それはそうでありましょうぞ。なぁに、結界さえ破壊すれば、悪魔の方々の護衛部隊も送れるでしょう。……何より」
ストラスは一瞬だけ溜め―
「奴はどこか危ういが、まごうことなく教会の戦士で最強の一角に折る者だ。奴の恐ろしさを見誤れば、例え魔王血族であると痛い目を見ると断言できますからな！　はっはっは！」
―その男の評価を、特に隠すことなく断言した。

イッセーＳｉｄｅ

クソッタレぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！
このタイミングで、このタイミングで！
寄りにもよってこのタイミングで、神器が使えないとか最悪だろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
俺は思わず頭を抱えたよ。
「ドライグぅぅぅぅぅ！　どうにかならねえのか!?　ちょっとこぅ……ごり押しとか！」

思わず縋るけど、ドライグもちょっと困惑してる。
『多少面倒だな。今は神器が禁手か普通の成長化を迷っているようなものだが、此処で禁手を選択しなければいつ禁手に至れるかが分からんと言ってもいい』
つってもここで生き残れなかったら意味ないぞ！
畜生。このマジで大ピンチな状況で、寄りにもよってそんな一大事とか最悪だろ。
俺達は正直戸惑ってるけど、すぐにシャルロットはかぶりを振ると包丁を構えた。
「まずはできる限り時間を稼ぎましょう。……すべてはそのあとで―」
その瞬間、なんか凄い音が上から響いた。
俺達が一斉に見上げると、そこには真っ白な砲撃が一直線にぶっ飛ばされる光景が見えた。
え、なにあのすっごい威力の砲撃。
「冗談でしょ？　ヴァーリじゃあるまいし私の空間遮断をごり押しで!?」
黒歌がかなり度肝を抜かれてるけど、これそんな威力なの!?
あとヴァーリはごり押しでぶっ飛ばせるんだ。あいつ本当にスペシャルだなオイ。
そんな砲撃を見て、木場とゼノヴィアは何故かちょっと嬉しそうになっていた。
し、知っているのか？
「あれは、彼があの時放ったのと同じ一撃……っ」
「ということは！」
二人がそう言って振り返るより早く、一人の男の人が勢いよく着地した。
「……どうやら、最悪の事態には陥ってないようだね」
あ……この人は！
「これ以上の狼藉は見過ごせないし、君は色々とやりすぎているからね。……可能ならここで打倒させてもらうよ」

「……ちょうどいい、思わぬ形で不覚を取ったからね。雪辱を晴らさせてもらうとしようか……っ」
ヴァーリが好戦的な笑みを浮かべるけど、この人ならそれも仕方がない。
ああ、助けに来てくれたのがこの人で本当にラッキーだ。
「リュシオンさん！」
「ああ、ヴァーリ・ルシファーは俺が相手をするよ。君達は他の者達を頼む……っ！」
リュシオン・オクトーバーさん。……つまり、デュナミス聖騎士団が来てくれたってのか。最高だ!!
この人本当に強い人だから、これなら何とか潜り抜けられるはず……。
俺達がちょっと希望を見ているけど、ヴァーリチームはヴァーリチームでなんか楽しそうな表情を浮かべてきやがった。
マジかよ。敵の増援を本気で楽しんでやがる。
戦闘狂ってこういう時理解できねえ。そんなに戦うのが楽しいのか？
俺が疑問に思ってると、アーサーがコールブランドを抜いて、美猴も棒を構えてきた。
「……俺っちとしてもそいつとは戦いてぇけど、まずはリーダーのリベンジマッチが優先だよなぁ？」
「そうですね。では私は聖魔剣とデュランダルの相手をさせていただきますよ」
あ、やっぱそうなるか。
俺が小猫ちゃんを庇う為に前に出ようとすると、それより先に木場達が前に出た。
「名指しされたのなら応えるしかないね。ゼノヴィア、サポートを頼むよ」
「そうだな。それが最適だろう」
木場とゼノヴィアは剣を引き抜いてアーサーと相対する。
「あらあら。では私達はあのお猿さんをお仕置きしますわ」

「……はい、頑張ります！」
「私も援護します。イッセーは小猫さん達をお願いします」
蝙蝠になったギャスパーを従える形で、朱乃さんとシャルロットが美猴に向き合った。
と、いうことは―
「……ふぅん。私だけなら三人程度でどうにかなるとでも思ってるのかしら？」
「言ってくれるわね、黒歌。小猫はあなたのところになんて行かせない……っ！」
「全くです部長。……俺の可愛い後輩を、隙に指せるわけねえだろうが……っ!!」
俺と部長で黒歌をぶちのめせってことだよな……っ！
やってやるぜ。こうなったら、意地でも俺達で黒歌を倒す！

魔性変革編　第二十二話　パーティ会場の激戦

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

カズヒとヒマリは一言で言えば苦戦していた。
それも、体勢を立て直した悪魔達と共闘していながらである。
「どうしたどうした？　まさかこの程度ってこたぁねえよなぁ!!」
「ええそうね。あとで必ずぎゃふんと言わせてやるわ……っ」
放たれる砲撃を回避しながら、カズヒはサツにそう憎まれ口を叩くのが精いっぱいだった。
神々に喧嘩を売るという所業をするだけのことはある。人造惑星（プラネテス）という星辰奏者（エスペラント）の完全上位互換なだけのことはある。そもそも戦闘特化型の躯体を持つだけのことはあり、仮面ライダーであるというだけのこともあるだろう。
つまり、兵器としてのサツは間違いなく難敵というべき存在だった。
一言で言って強敵としか言いようがない。油断も躊躇もできない敵であり、こちらは死者を出さないようにするだけで精一杯だ。
厄介さの一つは、サツの星辰光が異常なまでに凶悪だという点にある。
いくつかの戦闘で敵のステータスはおおよそ把握できたが、手が付けられない難敵というほかないだろう。
サツ
基準値：Ａ
発動値：ＡＡＡ
収束性：ＡＡＡ
拡散性：Ａ
操縦性：Ｄ

付属性：E
維持性：A
干渉性：E
星辰光として極めて高い出力に、圧倒的な密度の高さ。そこに維持性と拡散性の高さが加わった結果、油断すると曲射砲撃が襲い掛かり、あろうことかそれを長時間継続することができる。
操縦性干渉性付属性は間違いなく低い部類であり、だからこそ何とかしのげているが、それでも単純に凶悪な能力であることの違いはない。
おそらく星の力は荷電粒子投射。荷電粒子砲を放つという、科学的な砲撃としては非常に絶大な力だろう。
圧倒的な出力と収束性により、その火力は神や魔王にすら傷をつけれるだろう。加えて弾種の変更により、人海戦術を単独で薙ぎ払うこともたやすく可能。任意展開での炸裂拡散弾頭化なども使われれば、対空戦闘まで行えるはずだ。
加えて厄介なのは仮面ライダーとしての性能だろう。
推測される性能はおそらく走力特化。俊敏性と最高速度がともに高く、この圧倒的な高速移動によって、こちらが対応しきれないのが実情だ。
おそらくは最初から組み合わせて運用することを踏まえた物。圧倒的な砲撃能力を持つサツに圧倒的な機動力を与えることで、まともに相対することが不可能な砲撃存在にするという思想なのだろう。
しかし両手にはクローが確認されていることから、フェイルセーフティとしての近接戦闘能力も相応に高いだろう。加えてあの走力から逆算すれば、蹴りや跳躍も優秀と考えるほかない。
つまり、目の前のコイツは間違いなく難敵だ。
おかげでこちらは防戦一方。必然として、手を出しあぐねているのが今のカズヒ達の現状だった。
「……まずいわね。この流れはいずれ断ち切らないと」
目の前の戦闘においてもそうだが、戦略的な流れにおいても一石を投じる必要があるだろう。

リーネスと独自に進めていたある計画があるが、どうやら本格的に発動させる必要がありそうだ。
しかしそれを成すには、当然だがこの戦いを生き残らねばならず――
「……そろそろ反撃ですのよぉおおおおお！」
――歯噛みしたその瞬間、ヒマリが盛大に砲撃を叩き切った。
鎧の龍にまたがりながら聖剣を持っての突撃で、砲撃の一発を盛大に打ち破る光景に、戦闘中の者達の八割以上がぽかんとした。
……ぽかんとしながらも移動しながら警戒だけは残して行けた当たり、自分だけでなくサツも相応にできる手合いだとよく理解した。
それはともかく。
「お、思った以上にこの子できるわね」
まさかこの神にすら届く攻撃を、禁手でもないのに迎撃するとは思ってもみなかった。
仮面ライダーラクシュミーの戦闘能力が高いのは知っていたし、懐かしくなる絶大な魔力量特化もまた優秀だ。更に神器を二重保有しているということも、目を見張る者のアドバンテージだろ。
だがしかし、常時覇龍というアドバンテージがこのような形で成されるとは思っていなかった。
「やるな嬢ちゃん。無意味に手を抜いてるわけじゃねえんだが、これはちょっと砲撃を収束させるべき――」
「――いやいやー。もっと分散させないとヤバいんじゃないかなー？」
更に不意打ち気味に、大量の砲撃がサツに向かって叩き込まれる。
その砲撃の放たれたところを見れば、そこには星辰奏者としてアダマンタイトの剣を持ちながら、同時に右手で八門の龍を模した砲身が束ねられた大砲を構える、ヒツギ・セプテンバーの姿があった。
「大丈夫、ヒマリにカズヒ！　デュナミス聖騎士団の増援が来たからこっちに来たよっと！」
そうニカっと笑いながら参戦するヒツギに対し、カズヒは若干引いていた。
驚いた理由は大きく分けて二つ。持っている剣と持っている大砲だ。

今気づいたが、持っている剣はアダマンタイト製だが聖剣のようだ。そしてアダマンタイト製の聖剣などという物は、まだ教会では開発されてないはず。

そして持っている大砲もだ。外観に関しては似たような神器を知っているが、あのような形は見たことがない。というよりまずその出力の高さから逆算すれば―

「……二重神器保有者として被ってる挙句、更に覇龍を常態発動までしてるの……!?」

初対面の時から友誼を結んでいることもだが、能力的にも似通いすぎている。

おそらく持っているのは聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）ともう一つ、日本に存在する高位の龍、八面王を封印した龍の咆哮（ドラグレイ・カノン）だろうが、どう考えてもあの出力は覇龍のそれだ。

一周回ってドン引きである。具体的には、ただでさえ自分の周囲に特例が多いのに、更にそれを超えるような特例が連発で出てきたことだった。

「だけどまあ、これは戦力として誇らしいかしら……ね！」

意識を一瞬で切り替え、カズヒは戦闘に集中する。

これだけの難敵を相手にするという時に、これだけの頼れる増援が来てくれたことには感謝するほかない。まして、二重神器保有者であり星辰奏者。……幸運の極みだろう。

「援護するわ！　さっさと星辰光を発動させなさい!!」

それまで時間を稼げれば、更に状況はこちらに傾く。

そう思ったのだが、何故かちょっとヒツギがきょどった。

ふと、カズヒはヒマリの方をちらりと見てしまい、そして連想ゲームじみた推論を立ててしまう。

「……あの、一つだけ聞きたいんだけど……まさか星を振えないとか？」

「……うん。何故か振るえないんだよね」

……視線を逸らしながらのヒツギの答えに、カズヒは戦闘態勢は消さなかったがヒマリをちらりと見た。

……初対面でいきなり仲良くなったのが、いやというほどよく分かる。
「ふっふっふ。これはもはや運命ですの！　運命の二人が揃ったのなら、この窮地も乗り越えますのよ!!」
胸を張るな。というかなんで張れる。
そんな感想を思ったカズヒは、自分が悪いかと一瞬思ったりした。
「……いや、その運命じゃ乗り越えるの大変じゃねぇか？」
敵の方が常識人な気がしてきたのは、気の所為だということにしたいと強く思った。

一方その頃、シャルバ・ベルゼブブははらわたを煮えくり返しながら戦闘を繰り広げていた。
忌々しい。忌々しい。忌々しいにもほどがある。
あと一歩のところで怨敵の一人であるサーゼクスを滅ぼすことができるというところで、盛大に邪魔が入って苦戦することになった。この時点で苛立たしい。
サーゼクスもそれによって持ち直し、ハヤテが操るサリュートIを相手に渡り合っている。これもまた苛立たしい。
だが何より、最も苛立たしいのは目の前の女である。
聖なる力を秘めた剣でこちらに切りかかり、距離を取れば聖儀礼が幾重にも施されているとしか思えない弾丸による射撃が襲い掛かる。
この時点で厄介だが、何より恐るべきは周囲に展開される魔力の蠅。
散弾でこちらの注意やこちらが展開する蠅の妨害を行うこの猛攻は、即ちベルゼブブの魔力運用を扱っていることの証明だった。
そう、それはすなわち―
「ベルゼブブの面汚しがぁ!!　人間と混じった挙句偽りの魔王共と肩を並べるかぁ！」

激高して魔力を放つと同時、相手もまた顔を怒りに歪めてこちらに真っ向から激突する。
「誰の所為だと……っ」
その拮抗は互角だが、然しその瞬間、寒気をシャルバは感じた。
「思ってるのよ!!」
その瞬間、後ろに下がることでシャルバはその攻撃を回避する。
放たれたのは氷雪の二撃。直撃すればかすり傷では済まないだろう攻撃に、シャルバは内心で肝を冷やす。
思った以上に乱入した敵が強いことに、シャルバは奥歯を噛み締めて苛立ちを覚える。
殺意が燃え滾り、シャルバは大量の魔力の蝿で一斉に吹き飛ばさんと猛攻を仕掛ける。
「混じり物とはいえ、流石は俺と同じベルゼブブということか、忌まわしい……っ」
そう、自身の矜持を慰撫する為に意識せず言葉を漏らしたその瞬間だった。
例えるならば、空気がひりついたとでもいうべきそれだ。
そしてそれを見せるのは目の前のマルガレーテとか言った女。
不快感と怒りを込めに込めた目が、シャルバ・ベルゼブブを睨み付ける。
「……忌まわしい魔王の血の力なんかで、私を語るな」
その言葉に、シャルバは殺意が沸騰寸前に高まった。
偉大なるベルゼブブの血。悪魔を統べる魔王の中で最も高潔たるベルゼブブの血。この世で最も尊ばれるべきベルゼブブの血。悪魔の至宝たるベルゼブブの血筋。
それを今、忌まわしいと言ったのか？
「ほざいたな？　悪魔として混じり物でしかない小娘が」
「勘違いしないで。私は悪魔なんてものが混ざっただけの、人間よ」
その怒りに、真っ向から怒りの視線が迎え撃つ。
「お前らみたいな無責任な馬鹿の所為で、私はベルゼブブとして表舞台に出なくちゃいけなくなった。……その報いは受けてもらうんだ

からっ!!」
「よく吠えた！　純粋たるベルゼブブの血を引くこの俺を、ましてベルゼブブそのものを愚弄した罪、命で贖えぇ!!」
その瞬間、戦いは更なる形で爆発的に加熱した。

その光景をちらりと眺めながら、九条・幸香・ディアドコイは、近くにあったカナッペをとると、それをワインで流し込んだ。
ちなみにその過程で攻撃が放たれることもあったが、全てを保有する神器である不滅齎す黄金花（ゴルディモータル・ストレチア）で完全に防ぎ切っている。
あえていくつかを余裕を持たせて待機させている当たり、完全に観客ムードだが抜け目がない。
彼女が今回来た理由は、いわば一種の敵情視察であり、余裕をもって可能ならばスカウトを行うといった程度である。
彼女は英雄派のメンバーではあるが、曹操達主流派とはまた異なった価値観を持って行動している。それゆえに、必要とあらば異形を私兵として迎え入れることもやぶさかではない。
その野望を持って動くがゆえに、可能な限り見識を広められる機会を逃さず、その上で常に楽しんでいこうという気概で挑んでいる。
何よりこの会場は上級悪魔、それも相応の家格のある貴族達のパーティの会場だ。酒も食事も高級品であることを差し引いても美味な物が出てくると踏んでいた。
なのでしっかり食べている。本当に美味しいので、タッパーに詰めて部下に持ち帰るべきか真剣に考え始めていた。
「うむ、美味い！　聞こえている者がおるのなら、調理人達に美味かったと伝えておくがよいぞ！」
と、あえて声を張り上げたが返答は期待していない。
やるのなら豪快かつ大胆にやりたい身としては、こそこそと卑屈に

なる気がないだけだ。やるからには可能な限り堂々とやるが、相手がそれに乗っかってくれるかは別問題だろう。
「――なるほど。あとでシェフ達に伝えておくとしよう。最も、素直に喜べないとは思うがね」
なので、返答が来たのは正直意外だった。
酒を飲みながら振り返れば、メロンの生ハム乗せが突き出される。
……日本で勘違いされがちに出されて微妙といわれるものではなく、キュウリのように甘みがないメロンと塩抜きもあまりされてない徹底的に塩辛い生ハムの組み合わせのようだ。
そのまま視線をあげれば、そこにはアイスティーが入ったグラスを持つ、金の髪と橙色の目を持つ青年が一人。
「お初にお目にかかる。私は大王派に属するフェニックス分家、フィーニクス家のフロンズ・フィーニクスだ」
にこやかに名乗るフロンズからは、敵意のようなものは感じない。
同時に自分を前にしてここまでの態度を見せることに、幸香は愉快な予感を覚えて生ハムメロンを一つ取ってまず食べた。
その時間で少しだけ思考を整理してから、そして本題に入る。
「……ほぉ？　よもやと思うが、妾（わらわ）の配下となるとでもいうのかのぉ？」
スカウトできる慣らしたいとは思っていたが、よもやこんな流れで本当に行けるとはちょっと意外だった。
が、フロンズは静かに首を横に振った。
「すまないが、私も一つの領地を持つ貴族の主となる男でな。テロリストの一因になるという愚行はできぬよ。やるなら自分でクーデターでも起こすとするさ」
「それは残念。だが、その意気はよいのぉ」
中々豪胆さを併せ持つこの男に、幸香は好感を覚えていた。
とはいえ傘下になるどころか禍の団に付く気もないのなら――
「だが敵にしかならぬのなら、この場で殺されることもあり得るのではないかのぉ？」
――軽く殺気を出して指摘すると、フロンズは苦笑しながら肩をすく

めた。
「かもしれないな。だが、同時に商談ができる可能性を探っておきたいのだよ」
その言葉に、幸香はこの男は面白いと心から察する。
おそらく根幹で自分達は合わないのだろうが、しかし同時に同じ方向を進むことができる可能性。
そんなものを感じて、幸香はその話を聞いてみる気になった。
「言ってみよ。内容次第では何か返礼をすることがあるかもしれぬぞ？」
「では、語るとしよう。我が理想とは―」

「……クハハハハハッ！　面白いではないか、禍の団についたことを後悔しかけたぞ！」
「そうか。なら本当に後悔したのなら私の下に一報を入れるといい。保護観察者となったうえ、ある程度は賠償金を用意するとしようか」
「言ってくれるではないか！　よいぞ、此処で殺すのはよしておこう。そして……もしそうなるのなら、この符丁を送って連絡を取るとするわ！」

今此処に、いつか使われるのかも分からない悪魔の契約が交わされた。

魔性変革編　二十三話　ホテル外の大覚醒（おっぱい）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

リュシオン・オクトーバーと相対し、ヴァーリ・ルシファーは心から滾っていた。
振るわれる打撃は鍛え上げられたそれであり、聖なる力を持つがゆえに悪魔である自分にとって特攻だ。
そしてその技術も卓越しており、一瞬でも油断すればこちらが一気に叩き込まれるだろう。
更に覇龍の発動する隙を与えてくれない。絶え間ない攻撃を叩き込んでくることで、こちらが覇龍で押し切ろうとすることを防いでいる。
そんな猛攻に対し、ヴァーリはしかし決して敗北の可能性を持たなかった。
答えは単純だ。彼の戦闘スタイルと神滅具がかみ合ってない。
リュシオン・オクトーバーの戦闘スタイルは、控えめに言えば堅実なのだ。
爆発力による突破より、蓄積による到達を本筋としている。ゆえに突破することは困難だが、自分ほどの力量なら突破されないことも十分可能だ。
そして長期戦において白龍皇（ディバイン・ディバイディング）の光翼はめっぽう強い。継続して相手を弱体化させるのだから、持久戦に持ち込めば一気に有利になるのだ。
リュシオンの高い力量故に、それらが上手く嵌ってないところはある。だが同時に、弱体化の影響を完全には殺せていないのもまた事

実。
「どうした？　神の子に続く者（ディア・ドローサ）とはその程度か？　お前の神滅具をもっと見せてみろ！」
心から滾るが、同時にどうしても残念だ。
ぜひ兵藤一誠のように秘めた力を見せてほしい。そんな思いが言葉になって漏れ出てくる程度には、得難いものを感じている。
間違いなく自分と肩を並べて戦うことも真正面から勝機を持てる相手でもあるのだ。
故にもっと見せてほしい。その偽りない想いを胸に、ヴァーリは全力で攻撃を仕掛ける。
そしてそれを真っ向から凌ぎつつ、リュシオンは静かにため息をついた。
「……残念だよ、ヴァーリ・ルシファー。君も俺を勘違いしているし、君自身を勘違いしている」
「なに？」
その落胆に、ヴァーリは内心で首を傾げる。
その疑念を知ってか知らずか、リュシオンは悲しみすら浮かべている。
「俺に才能があるのは認めるさ。なにより神滅具（ロンギヌス）となる神器（セイクリッド・ギア）を持っておきながら、恵まれてないなんて言うべきじゃない」
そうはっきりと、リュシオンは己が得難い才能を持っていることを認めた。
神器候補を踏まえても、未だ二十二すら届かぬ数しか存在しない神滅具。それを持てるということは、まごうことなく人としての破格の才能を持つ証拠である。
だが、戦闘を続けながらもヴァーリを見るリュシオンは、哀れみすら向けていた。
「だけど、俺がここまでこれたのは人間なら誰もが当たり前にできる積み重ねを続けてきたからだ。俺ができたことは、誰だって条件が同じならできて当然なことでしかない」
はっきりと、リュシオンはそう告げる。

今この場において、彼はこう言ったのだ。
自分と同じように神滅具を持ち、毎日しっかりと前を向いて成長していれば、ヴァーリ・ルシファーと戦うことは誰にだってできることなんだと。
それが、ヴァーリの癪に障った。
「俺を、偉大なるルシファーの血を引く白龍皇を、誰でも神滅具を持っていれば戦える程度の奴だと、そう言ったのか？」
今までにない本気の殺意。好敵手ではなく怨敵に向けるべきそれを、ヴァーリは真剣に向けた。
躊躇も偽りもない、正真正銘本気の殺意。並大抵の者ならば、失禁することだってあり得るだろう。
それを真正面から受け止めて、リュシオンはしっかりと真っ直ぐにヴァーリを見据えた。
「当り前だ」
声を荒げない平常心。そんな在り方で即答する。
こんなことは異常ではない。自分と同じ才能で同じように頑張っていれば、誰でもできる程度でしかない。
そう、ヴァーリの否定でも自身の肯定でもなく、ただ自然法則を語るかのように言い切った。
その在り方に、ヴァーリは畏怖を覚え始める。
「俺達に価値があるとするなら、それは神滅具（こんなもの）じゃない」
「怯えているのか……この、俺が……？」
動揺するヴァーリに向き合いながら、リュシオンは静かに真っすぐ拳を下す。
そして手の平を開きながら、リュシオンは鋭い視点ではっきりと、ヴァーリ・ルシファーに宣言する。
「そう。過去の人達や先達を参考に、間違ったところを少しずつ改めて真っ直ぐに歩んでいけばいい。そうすれば必ず人は誰でも禁手（バランス・ブレイカー）に至れるようになる。俺はその礎を作り上げて見せる」
その宣言と共に、リュシオンの気配が明確に変わる。
「――禁手化（バランス・ブレイク）」

変に気負うことなく、声を張り上げるわけでもない静かな宣誓。
その言葉と共に、彼の両手に二振りの剣（つるぎ）が具現化する。
その正常な、二重の意味で寒気がするオーラを察知したことで、ヴァーリはその禁手の意味を理解する。
「……デュランダルやコールブランドに匹敵する聖なる龍殺（ドラゴンスレイヤー）しの創造か。今この場で至ったのか？」
「ああ。これが今の俺の禁手、龍殺（ゲオルギウス・カレドヴルッフ）の超聖剣だ」
恐ろしい男だと、ヴァーリは改めて実感する。
ある意味で自分の特化した禁手を会得することを、自然体で習得したのだ。これが脅威でなくてなんというのか。
故に、彼もまた全力の解放を決意する。
「……ここで殺すのが残念だよ」
「安心してくれ。俺は死なない」
その直後、この場で最も激戦と言える戦いが始まった。

イッセーＳｉｄｅ

そうか、そうだったんだ。
戦いが熾烈を極める中、俺は大事なことに気が付いた。
アーサーが木場とゼノヴィアを相手に、余裕を見せるどころか相手の今の実力を味わうために、わざと攻撃を最小限にして戦っている中、俺は気づいた。
レイダーになった朱乃さんと、それをサポートするシャルロットとギャスパー相手に、美猴が手間取っている中俺は気づいた。
そう、これが俺の至るための、最大方法。
「部長！　力を貸してください！」

「どうしたの、イッセー？」
部長が反応してくれたので、俺は即座に部長に頼む。
「乳首をつつかせてください、それで至れる自信があります!!」
――なんか戦闘が二つとも止まった。
あれ？　どうしたんだ皆？
「俺、何かおかしなこと言ったか？」
「「「「「「「「言ったよ！」」」」」」」」
なんでほとんどのメンバーが一斉にいうんだ？
「おま、だって乳首だぞ乳首。人生初のブザーだぞ？　至れるだけの刺激だろ？」
「そんなわけないですよね!?　それで至ったらドライグ泣きますよ!?」
「ほら、やっぱり大事なことじゃん！」
「誰がうれし泣きといいましたか!?」
シャルロットがなぜかボケ倒してくるんだけど、シャルロットってそんなキャラだったっけ？
「……そう、全然よくわからないけれど、それであなたが至れるのなら……っ」
リアス部長、ありがとうございます！
ああ、相変わらずきれいなおっぱいと乳首。これ見ただけで、今までの負傷が全然気にならないね！
俺はそして気合を入れて……大事なことに気が付いた。
「……左右のどっちを押せばいいんだ!?」
「「「「「「「「それ今言うこと!?」」」」」」」」
なんでみんな一斉にいうんだ？
「馬鹿野郎！　俺の人生初ブザーだぞ!?　初めてなんだぞ人生かかってんだぞ!?　真面目な話だろうが!?」
「そもそもブザーってなんだよ」
おのれ美猴め！
男ならわかれよ。これは俺達男にとって、人生がかかった真面目な話だろうが。

「アザゼル先生が言っていたんだ。女の子の乳首はブザーなんだって！　そう、俺はそれ以来ずっと気になっていた、このしこりが取れた時、俺は絶対に至れる!?」
『「え～」』
なんでシャルロットとドライグは軽く引いてるんだ。
くそ！　俺たちの勝利がかかってる切り札だってのに、このままだと負けるぞ!?
俺が頭を悩ませていると、部長が恥ずかしがってちょっと顔を赤くしてる！
「は、早くして頂戴。恥ずかしいから……」
「で、でも左右あるんです、どっちを選べばいいのかわからないんです！」
こんな究極の選択、速攻で決めるなんて―
「……だったら、両方つつけばいいじゃない！」
「……それだぁあああああああっ!!」
部長、貴方はやっぱり天才です。
よし、一回神器を消して……えいっ！
俺の両手の人差し指が、部長の乳首を押した。
埋もれる指。押し込まれる乳首、たわむおっぱい。
そして、部長がちょっと身もだえしながら放つ声が聞こえる。
「いやぁんっ」
――――――これが、宇宙の始まり。

『ほ、本当に至りやがった!?　泣いていいか相棒!?』
「え、マジで悲しいのか!?　なんか……ゴメン!!」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

え、何この状況？
黒歌は本気で困惑していた。
妹を取り戻そうと少し動いてみたら、なんかよく分からないうちにヴァーリと対を成す存在が禁手に正式に至っていた。
女の乳首をつついてとか、さっぱり訳が分からない。
思わず首を傾げるが、神器の中の龍と話していた赤龍帝が右手を突き出してなんとなく砲撃を放つと、それどころでないことがはっきりと分かった。
……離れたところにある山が、盛大に吹き飛んだ。
標高はさほどないだろうが、あの火力は洒落にならない。
純粋な単純火力なら、既にヴァーリに追いつくことができるレベルになっている。
正直な話、今の黒歌は軽くパニックを起こしていた。
「ふ……ははははは！　だったらこっちも本気を出してあげるわよ！
妖術仙術をミックスしたこの一撃でねぇ！」
その感情のままに、自分が出せる最大火力の砲撃を叩き込む。
……が、そもそもの話、これは悪手と言ってもいい。
元々仙術は対生命特攻ではあるが、単純破壊力では劣っている系統と言える。そもそも黒歌もパワータイプというよりは、サポートもこなせるウィザードタイプといった方がいい。
それが、単純にパワータイプとして極致ともいえる、二天龍の通常禁手とぶつかればどうなるかなど、考えるまでもない。
「……こんなもんか？」
ゆえに、一切聞かないという事実に黒歌は激高した。
同時に、腐っても幾度となく戦ってきた経験がここで生きた。

真っ向から打倒する手段がなければ、このまま力押しで打倒しようとしてしまっただろう。
だが、手段があるからこそ向きになる必要がなく、ゆえにここからが彼女にとっての本番となる。

「創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌めく流れ星」

故に、ここからが本番となった。

魔性変革編　第二十四話　終局に迫る戦闘

イッセーＳｉｄｅ

え、ちょっと待って！

今黒歌が取り出した、猫型のネックレスって……アダマンタイト製かよ!?

っていうか黒歌って星辰奏者（エスペラント）お!?

ありかよ畜生！

「自由が気ままが猫の心情、人につかぬが猫の基本。それを忘れて権威を立てに、飼いならせるとは馬鹿過ぎない？」

おどけた風に、だけど殺気を隠しもしないで、黒歌は星を歌い上げる。

「犬のように扱えるなんて、烏（からす）のくせに馬鹿な考え。その痴愚で白い羽織を汚そうなんて、引き裂かれるのが当然でしょう」

不敵な笑みどころか、マジで寒気がする怖い笑顔なんですけど!?

「我が爪と牙とそして呪詛。全てで滅してあげましょう」

しかも、マジで寒いっていうか……体調が悪化してる？

さっきの呪詛の影響なのか？　いや、そんな感じはしなかったから、これってもしかして黒歌の星の力か？

「聖なる剣を振う王すら、死力を尽くさねば太刀打ちできぬ。我らが悪意を向けたのならば、そうなるのだと知らぬことが罪業よ」

くそったれ。どうやら本気で強敵だってことか。

「気ままな猫の尾を踏んで、ただで済むとは阿呆なの？」

これがＳＳランクはぐれ悪魔。

最上級悪魔クラスってのは、やっぱり伊達じゃなかったってことか。

「我が怒り、汝が精霊の祝福持とうと、その鋼ごと切り裂くにゃん♪」

俺は気合で寒気を振り切り、真っ直ぐに拳を構える。

そして、黒歌も同時に星を本格的に発動した。

「超新星（メタルノヴァ）――恩讐報復呪詛千万（フォビドゥン＝カース・キャスパリーグ）、禁断の黒猫」

その瞬間、黒歌が見るからに動きが変わった。

明らかに今までより遥かに動きが早い。っていうか、明らかに性能が上がってる!?
放たれる砲撃もさっきより遥かに威力が上がってる。拳で弾き飛ばすけど、衝撃が割と入ってきやがった。
……っていうかコレ……ドラゴンのオーラか？
「イッセー！　私も禁手を使います！」
シャルロットが走りながら声をかけてきたことで、俺は一旦仕切り直す。
ああそうだ。俺は最初から一人じゃない。
ドライグだけじゃなくてシャルロットもいる。皆で頑張ってきたからこそ、俺達はここまで戦えたんだ。
俺は……一人で戦う必要なんてない！
「頼む、シャルロット！」
「うっきゃぁ！　そういうことなら俺っちも混ぜな……っとぉ!?」
シャルロットを追いかけようとした美猴に、朱乃さんの雷撃だけじゃなくてリアス部長の消滅の魔力も襲い掛かる。
「あらあら。お猿さんがイッセー君の邪魔なんて許しませんわよ？」
「好きにさせると思わないことね！　イッセー、シャルロット……行きなさい!!」
「援護します！　イッセー先輩、やっちゃってください！」
朱乃さんや部長、ギャスパーの声援が身に染みるぜ！
「これは中々……ですが！」
「くっ！　させるか！」
「イッセーには近づけさせません！」
アーサーも木場とゼノヴィアが押しとどめるけど、アーサーは一歩下がるとあらぬ方向にコールブランドを突き刺して―
「危ないですイッセーさん！」
うぉっとぉ!?
アーシアの声が聞こえた瞬間、俺は何故か勢いよく倒れて地面に倒れる。
……と同じタイミングで、なんか聖剣っぽい寒気のするオーラが俺

の頭のあった位置を通り過ぎた。
振り返ると、そこにはコールブランドの刀身があった。あのままだと完全に頭を貫かれている位置に……だ。
危ない！　本当に危ない！
あのままだったら俺の頭貫かれてたよ!?　本当に紙一重だったよ、マジで危なかったぁ！
「アーシアさん！　ありがとうございますけど……よく足払いできましたね」
「あ、はい。ディックさんか裏護身術として投げ技を主体にした護身術を教わっていたので、何とか咄嗟に」
シャルロットの質問に即座に答えるアーシアちゃんは素直だけど、何教えてんだディック・ドーマクさん!?
アーシアが投げの鬼になってるよ!?　本当に何教えてるんだよ後で叱責ものだよ!?
と、俺が狼狽してるとアーサーに小猫ちゃんが迫って攻撃を仕掛ける。
アーサーはそれを素早く躱すけど、表情が少しこわばっていた。
「これは仙術……っ。どうやら壁を一つ越えたようですね」
「イッセー先輩の邪魔はさせません。……手伝ってください。祐斗先輩、ゼノヴィア先輩」
その言葉に、木場とゼノヴィアも自分を奮い立たせてアーサーに襲い掛かった。
「後輩の頼みなら断れないね！」
「そうだな。少し気合を入れるとするか！」
そして一気に激戦になる中、俺は黒歌と向き合った。
……星辰奏者だっていうなら、尚更油断はできないけど……俺達は三対一だ。
「行くぜドライグ、シャルロット！　小猫ちゃんを傷つける毒親ならぬ毒姉には、ここでお仕置きしようぜ！」
『いいだろう。あほくさいが禁手に至った祝いだ。派手にいこうか、相棒！』

「準備は万端です。さあ……行きましょう！』
シャルロットとの合体をして、俺達は黒歌と対峙する。
そして黒歌もにやりと笑いながら、両手を広げて強気の姿勢を見せてきやがる。
「第二ラウンドよ、赤龍帝。妹と良い仲になりたいなら、お姉ちゃんを超えてみなさい！」
上等！
お姉ちゃんのくせして妹を苦しませるような奴には、きついお灸をすえてやるぜ!!

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そしてその頃、カズヒ・シチャースチエ達とサツとの戦いは苛烈を究めていた。
「うおりゃですのぉおおおおおおお!!」
「チッ！　しつこいなぁてめえ！」
まず接近戦では猛攻を仕掛けるヒマリに、サツは舌打ちをしていた。
絶大な魔力でとりあえず強度を伝説級にしているヒマリの聖剣は、デュランダルですら砕くのは容易ではない。
そしてサツは基本的に高機動砲撃戦を主体とする陸戦型。必然的に本命の攻撃は遠距離であり、近接戦闘能力も最上級悪魔に届くが、それはあくまでフェイルセーフティの範疇なのだ。
その状況下で絶大な近接攻撃を喰らえば、どうしての限界は発生する。少なくとも、遠距離戦と同様のレベルで圧倒するなど不可能であ

る。
ならば距離を取ればいいかなどというのが普通なのだろうが、そうもいかない。
何故ならば、同時に左右から猛攻が繰り広げられているのだから。
「ヒツギだったわね！　合わせなさい！」
「ＯＫ！　なんていうか、合わせ易いね！」
ヒマリをカバーするように、左右から迫る二人の攻撃が難点だ。
間違いなく強敵であり、油断できるものではない。それこそ、神にすら届く領域に近づいていると理解できる。
カズヒはハルバートで猛攻を加え、カズホはバスターソードを連続で叩き込む。
この二人の攻撃を捌きながら、更にカズヒの猛攻まで凌ぐとなるとどうしても限界が来る。
幸か不幸か、近接攻撃故に他の援護を入れづらい状況が生まれていることは幸運だと思いたい。
しかしそうもいかない。これは幸運ではなく、詰め将棋じみた戦術だと理解しているからだ。
何故ならば、今此処には上級悪魔が勢揃いしている。それはつまり、悪魔全体で見ても上位に属する戦力が勢揃いしているということなのだ。
抑え込まれていうという状況が既にマズイ。それも、他の戦闘で傾けることができる余地があるなら尚更だ。
シャルバがマルガレーテというベルゼブブの血を引く女に食い下がられている所為で、ハヤテが操るサリュートⅡがサーゼクスとの戦闘に終始せざるを得ないのがまずい。
これによってサーゼクスは持ち直す余地が生まれている。デジタルに対応できる自分達ヒューマギアほどではないが、アナログゆえの直感も油断できない。そもそも善戦できるという事実が他の悪魔の士気を上げるのなら尚更だ。
アナログにはアナログゆえに強みがある。シンギュラリティというアナログの覚醒を持つがゆえに、疾風殺戮・ｃｏｍのメンバー足る

サツはそれを十重理解している。油断するなどということはあり得ない。
そしてそれは、ハヤテとて十重理解しているはずなのだ。
……サツはそこまで至って漸く悟った。
つまりこれは可能な限り時間を稼ぐことによる、データの獲得。既にそちらに意識を割り振られているという一点に他ならない。
今この場の敗北は決して決定打にならない。ある意味本命のプランはまだまだ余裕がある以上、この場で殺せなくてもさほどの重要な問題にはなりえない。そこにデジタルゆえに圧倒的な強みがある。
そこまで理解して、サツはため息をつきながらも納得した。
ならば、こちらも少しぐらい手札を示しても問題ないだろう。
そこまで悟ることで、サツは全力を出そうという焦りを克服することが漸くできた。
「……上等だ。こっからは情報収集に徹するとするか」

その言葉を受けて、カズヒ・シチャースチエは敵が勝ちを捨てても問題ないと悟ったことを理解した。
故に自分達がまだまだ遅れを取っていることを悟り、覚悟を決める。
……彼女とて、滅私奉公ですべてを苦痛に捧げられるわけではない。
自慰を趣味にしているということはすなわち、それほどまでにストレスに耐えるのが大変だということなのだ。それはどうしても仕方がない領域であり、生物としての限界でもある。当然、彼女だって覚悟しているからと言っても無限にストレスに耐えられる訳ではないのだから。
だが、それでも必要な苦痛を積極的に背負うことに否は無い。
カズヒ・シチャースチエはアザゼルが示したトレーニングメニュー

を主体としつつ、本命の強化の方向性も視野に入れていた、
もとより彼女は人体改造を程度はともかく行う魔術回路を使用した魔導に精通するもの。己の体に過剰な負荷をかけたり、手を加えることを覚悟できる精神性をは生まれる前から持っている。
何より彼女は競技選手ではない。実戦という手段を択ばない状況で戦う必要すらある者であり、ゆえにルールに則ることはあっても過剰に拘るつもりはない。
故に当初から自己の才能や能力以上の拡張を考慮していた。必然として、サーヴァントの召喚やプログライズキーの使用を考慮していたのだ。
その点においてはプログライズキーという道具の方が、自己の弱体化を考慮しなくていいこともあって考慮としては本命だったが、今回で完璧に腹をくくった。
そしてその運用方法もだ。
脳内にＡＩチップを埋め込むショットライザーはアウトだ。ザイアの技術を完璧に取り込んだ訳でない以上、移植施術は後遺症や消耗を回復する時間がもったいない。
かといってレイドライザーはアウトだ。あれではプログライズキーの本領は出せない以上、本命としては弱いというほかない。
そして目の前にいる疾風殺戮フォースライザーの力を見て、方向性は確定した。
―見てなさい。ここで生き残ったのならそれを後悔させてあげる。
その覚悟を決め、カズヒ・シチャースチエは戦闘を継続する。

奇しくも、サツもカズヒの先を既に見たうえで戦闘を行っていた。
それこそが、この戦いがいまだ前哨戦に過ぎないことを暗示するとは、二人とも悟ることは無かったが。

魔性変革編　第二十五話　後に続く者もまた、神の子に並ぶものなれば

和地Ｓｉｄｅ

「……よし。じゃあ一気に下に置いたあいつをぶちのめせ」
そういうベルナに狙いをかけて、俺は真上から強襲を仕掛ける。
色々状況は複雑だけど、おそらく俺が真っ向から挑むべき相手はベルナだと、心から思っているからこその行動だ。
相手がテロリストだからって、問答無用で皆殺しってのは空かない。のっぴきならない事情や、洗脳に近い精神状態だってあると思うから。救える命に手を差し伸べたいと、思っているから鍛えているんだしな。
だからこそ、俺は結界を蹴って飛び掛かる。
「ベルナ・ガルアルエル！」
「―なっ……あぁっ!?」
そのまま体当たりをかますと、俺はベルナと取っ組み合いになる。
拳が当たるけど結構痛いな。神器主体の人間が使う生身じゃないだろコレ！
それはともかく組み付きながら拳を躱しつつ、俺は本心からの言葉を投げかける。
「……お前だって薄々気づいているんじゃないか!?　自分の姉の危険性を！」
「うるせえよ！　何が分かるって―」
ベルナがそう反論するのは当然だが、俺だってはっきりと言えることはある。
「分かるさ！　俺はああいった目を何度も見てきた！」

吠えるだけの理由はある。あの目を俺は何度も見てきた。
愛していると、敬意を持っているという、あの手の目を俺なザイアで何度も見てきた。
あいつらは本当に家族のように思っているつもりなんだろう。もしかすると、本当にああいう風に家族を愛しているのかもしれない。
だけど―ッ
「あの目はお前を人として見てない。少なくとも、普通の人が人に対して向ける愛とは異なってる!!」
それだけは言える。断言できる。
あいつらの俺達に向ける愛は、絶対に人間が真っ当に人間に向ける愛じゃない。
明らかに異常な行動や真似をして、それが愛だと本気で思っている。そういう連中の目を、俺はずっと見てきたから知っている。
あいつらにとってはそれが本当の愛なのかもしれない。そういう愛し方で満足できる奴もいるのかもしれない。
それでも、それでも……っ
「それを分かって、それでいいと思えない奴が！　そこに甘んじるなんて認められないんだよ、俺は!!」
ベルナ(お前)が見せたその目は、決してそんな奴の目じゃないって思ったから。
涙の意味を変えたいと思っているから。悲しみで生まれようと悦びで流してやりたいから。あの日の嘆きで生まれた涙が、笑顔と喜びで流れたことを、人生の意味としているからこそ。
あんな目は黙ってみてられないって思っているんだよ。
「……うるせぇよ！」
しかし俺の懐で、連続して水流が叩き付けられる。
それで引きはがされた俺は、即座に結界を足場に着地する。
これが、床を粉砕されてなお俺が対応できた理由。天井に飛び上がって真上からベルナを強襲できた理由。アザゼル先生が俺に示した、俺の星辰光の新たな可能性。
星辰光で作られた障壁を、床に対して平行に設置する。それによっ

て足場を形成することで、俺に空中での対応能力を与える運用方法。
足場のもろさを踏まえても、踏ん張るということができるのは比較的有効。障壁を利用した変則的な軌道も取りやすく、応用の余地はまだまだある。
それで落下状態から止まった俺に対して、ベルナもまた空中に滞空する。
問題はその方法だ。
魔法を利用したわけじゃない。ワイヤーとかそういったものでもない。ましてや独立具現型神器を使ったわけでもない。
その理由を見て、俺は目を見開いた。
「悪魔の……翼？」
「ああ。あたしは悪魔の先祖返り、ベルナ・ガルアルエルだ」
そう気だるげに言いながら、ベルナはこっちに敵意を向ける。
「英雄派の異端児舐めるなよ？　こっちはなぁ、腹くくってるからテロなんてやってるんだよ!!」
あ、まずい。
一瞬狼狽して隙が生まれた。ベルナの攻撃を避け切れな―
「創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌めく流れ星」
その起動音声（ランゲージ）と共に、俺は横から掻っ攫われる。
急加速のGが掛けられる方向を見れば、そこには歯を食いしばったインガ姉ちゃんの姿があった。
助けに来て、くれたのか？
「……ぼさっとしない！　撃って！」
その言葉に、俺はハッとなってショットライザーを構える。
『ＳＡＶＥ』
正直な話、ベルナは説得するべきだと思う。
だけど、それに拘ってインガ姉ちゃんや一般市民を死なせるのも言語道断だ。
だからこそ、俺は歯を食いしばって引き金を振り絞る。
『セイヴィングブラスト』
その一撃を、苦い想いと共にぶっ放した。

イッセーＳｉｄｅ

くっそぉおおおお！　思った以上に手こずってる！　手こずってる!!

『これはあれですね。……体調を強制的に悪化させられてますね』

『というよりはだ。おそらく強制的に同調されているのだろうさ。そこを繋ぎとして仙術を喰らってると考えるべきだ』

シャルロットとドライグがそう推測してくれるけど、俺は正直結構きつい！

黒歌が放った毒霧には耐えられてたけど、これは結構きついって。

これが仙術の影響か。これでもだいぶましだとは思うけど、それでもきついって直撃喰らったらどうなるんだよ!?

「あっははは！　やっぱりヴァーリに比べたらまだまだにゃん♪　今なら真っ向からでも勝てるんじゃないかしら！」

そう言いながら、黒歌は俺の攻撃を避けまくってこっちに攻撃を叩き込んでくる。

くそ！　黒歌の動きも明らかに高まってるっていうか、あいつからどう考えても赤龍帝のオーラまで見えてるんだけど！

これは本当にドライグの推測が当たってるのか。だとすると、長期戦はいろんな意味で不味い！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

兵藤一誠の懸念は的中していた。

黒歌の星辰光は生態同調式強化能力。更に仙術を利用した応用による、敵の弱体化を直接行使にある。

黒歌

恩讐報復呪詛千万、禁断の黒猫（フォビドゥン＝カース・キャスパリーグ）

基準値：Ｄ

発動値：Ｃ

収束性：Ｄ

拡散性：Ｃ

操縦性：Ｄ

付属性：Ａ

維持性：Ａ

干渉性：Ｃ

黒歌の星辰光は本来、味方と同調することによる自他の相互強化で使うものであり、そのレベルは低い。

相互に少しずつ強化するといった程度でしかなく、ステータスに反して性能は低い部類に値する。しかしそれが強大なのは、黒歌の持つ仙術にこそある。

同調をバイパスとすることで仙術を発動させることにより、敵から力をより強大に受け取り、同時に少しずつ敵を弱体化させることが、彼女が編み出した星の最大運用。

付属性と維持性が共に極めて優秀であるがゆえに、一度発動すれば解除はほぼ困難。ゆえにこの技は決まれば、長期戦でなら勝率を大幅に上げるのだ。

短期決戦に持ち込まれなければ、真っ向からの模擬戦でヴァーリに

すら届いた切り札と言える。もちろん限度はあり、収束性と拡散性の問題から距離を取られるなり絶大な星辰光で防御されるという余地はあるが、この状況なら問題は無い。

森林という地域でなら、猫という種族特性の差が有利に働く。反射速度と敏捷性なら十分勝負になり、戦術や妖術を利用すれば、相手にこちらの位置を感知させづらく、相手の位置を感知することでアドバンテージを絶大に高めることができる。

そして今の兵藤一誠では星辰光の強制解除は困難だ。星辰光もなければ、そういった術式の知識もないのだから。

故に勝つ。当然勝てる。

目を曇らせた妹を連れ帰る程度のことは十分できる。

そう確信したその時、視界の隅に映るものがあった。

「……は？」

その光景に、黒歌は一瞬絶句して目を奪われた。

激痛に崩れ落ちながら、ヴァーリは血を吐いた。

油断していたつもりはないが、敵は予想の上を行った。

全力の攻撃により、ヴァーリはリュシオンの両腕を切り落とした。

体術を基本とするリュシオンにとって、これは間違いなく大きなディスアドバンテージだったが、しかしリュシオンはそんなことを一切頓着しなかった。

彼は文字通り切り落とされた瞬間に、両手ではなく口元に龍殺しの聖剣を創造し、それを加えてこちらを深く切り裂いたのだ。

躊躇も動揺もあったが、それは本当にごく僅かだった。そしてそれ以上に体術使いの両手を切り落とせたという油断が生まれて隙だらけだと、文字通り一瞬で察知して攻撃を叩き込んだ。

ここまで合理的な判断で衝動を制御できる者もそうはいない。どれほどの修羅場を潜り抜けたのか分からないほど、リュシオンは両手

を吹き飛ばされた激痛を意にも介さなかった。
「……俺の勝ちだ。とはいえ、このままだと失血死だね」
「だろうね。そろそろ止血をした方がいいんじゃないかい？」
ここまで滾る接戦は珍しい。
だからこそ、こんなところでリュシオンに死んでほしくない。
そう思っての助言のつもりだったが、リュシオンは静かに首を振った。
「いや、その止血より治した方が早い」
そう告げるリュシオンは、両腕を切り落とされているとは思えないほど平然として、告げる。
「非禁手化（カオス・シール）」
その言葉と共に、絶大な神器の力が明らかに下がる。
ありえない、明らかに禁手にすら至っているオーラが、禁手を解除したというレベルでないほどに下がっている。
それの目を見開くヴァーリの前で、リュシオンは一呼吸だけ入れると、即座に新たに告げる。
「禁手化（バランス・ブレイク）。再生（リジェネレイト・エボリューション）の超人類」
その瞬間、白い素粒子による光と共に、両腕が元通りに復元される。
ありえない速度の修復だった。ともすれば、フェニックスの上級悪魔すら超える速度の修復だ。
更にありえないことに、切り落とされた両腕はそのまま残っている。禁手で作られた龍殺しの聖剣は消滅し始めているのに、だ。
「それは、いったい……？」
唖然とするヴァーリの前で、リュシオンは苦笑を返した。
「ああ、禁手を消して別のに至ったからね。元々龍殺（ゲオルギウス・カレドヴルッフ）の超聖剣は持続させてないと維持できないんだけど、禁手すらなくなったんだからまあ仕方がないかな？」
違う。そうではない。むしろそんなどころではない。
禁手を解除したのではなく消した。更に、全く異なる禁手を展開した。
これは禁手を二つ持って切り替えているわけではない。それはそ

れで異常だが、これはそんな次元ではない。
　これは、この異常はそんなものではない。
「禁手という位階をなかったことにして、別の形で禁手に至ったのか？」
「そんなおかしなことじゃないだろう？」
　平然と、唖然として告げた言葉を肯定された。
「禁手には世界の均衡を崩す意思の力が必要だ。なら逆に考えれば、真逆である世界の崩壊を拒絶する意思があれば禁手の到達をなかったことにすることもできる。そう考えるべきだろう？」
　前代未聞の発想と所業を、彼はなんてことが無いように告げる。
「その後は、別の方向性で世界の均衡を崩す意思を持てば別の禁手に至ることもできる。特に再生の超人類は俺が初めて至った禁手だからね。何度も至り直してるから、当然これぐらいはできるさ」
　そんな恐ろしいことを、目の前の男は当たり前のように告げる。
「まあ、コツを掴めないと大変だとは思うけどね。それでも基本は発想の転換、いわばコロンブスの卵と同じさ。一度でも成功すれば誰でもできるだろうし、前人未到ではあっても後追いなんていくらでも出てくるだろうさ」
　……ありえない。
　これはそんな次元ではない。
　自分は間違いなく、歴代神滅具保有者の中でも一握りの特別（スペシャル）だと断言できる。
　だがこれはそんなものではない。高みとか強さとか、そういう言葉で測っていい物ではない。
　いうなれば、異常（アブノーマル）。
　目の前の男は、本来常人では至れない異常な領域を、呼吸するように行き来できる。世界の均衡を崩す意思を、その真逆の世界の均衡を築く意思と同じように、呼吸をするように行き来できる。
　普通に考えてありえない思考が、彼にとって状態なのだ。
「……ああ、そういうことか」
　ヴァーリ・ルシファーは、今この場において思い違いを痛感した。

目の前の男にとって、禁手というのは大したことがないのだ。
コツさえつかめば誰でもできる。だって自分は当たり前のように至れるし、その逆もできるのだから。
狂人は自分が狂ってないと思っているとは、誰が言い始めたことか。その実例が、目の前にまざまざと示されている。
その寒気すら覚える発想に、ヴァーリは最後の確認のために質問する。
「聞こう。君はいつ禁手に至った？　神器に目覚めてどれぐらい経ってだ？」
その言葉に、リュシオンは質問の意図を測りかねながらも素直に答えた。
「故郷が異能を使うテロリストに襲われたその日、神器に目覚めて二時間後ぐらいだね。神器に目覚めるだけだと全く足りない状況だから、それだけの意思を見せる必要があったし当然だろう？」
その言葉に、ヴァーリは心から理解した。
この男は、それが必要なら世界の均衡を崩す意思を持つことが呼吸をするようにできる。
だから、その逆を行うこともそれを持ち直すことも当然のようにできる。なにより呼吸と同じようにできるから、それをコツの問題としか思えない。
本来、そんな意思を持つことはそう簡単にできることではない。少なくとも、誰もが簡単にできることでは断じてないのだ。
「は、ははは……」
歓喜と、一割程度の寒気を覚えながらヴァーリは確信する。
この時代は、神滅具保有者全体において歴史上類を見ない豊作の世代だ。
新種の神滅具が連続して発見され、その使い手も多くが異常の領域と言える特別。果てはその法則を超えるイレギュラーの塊すら現れる。
歓喜と少しばかりの戦慄を覚えながら、ヴァーリは負傷の消耗で意識を失った。

そしてそれを目にしなかった赤が、その隙をついて黒に突撃を敢行する。

魔性変革編　二十六話　終わる防衛戦

イッセーＳｉｄｅ

なんか分からないけど隙が見えたぜぇえええええええ！
俺は反撃のチャンスを見て、一気に突撃する。
多分だけのこの能力、無理やりにでも解除できないなら時間をかけるとそのまま敗けるタイプだ。短期決戦以外の選択肢がねえ。
だったらやるしかないよな。
大丈夫、隙を作れる方法は思いついてる。もう作戦会議も終わってる。
だから、此処で勝つ！
「行くぜぇえええええ!!」
「なめんじゃないわよ、糞餓鬼ぃ！」
俺は洋服崩壊狙いで接近するけど、黒歌の奴はギリギリで回避しながらこっちに攻撃を叩き込んできやがる。
新技はもう一つあるけど、いきなりぶっつけでやれる隙は無い。
完璧に今の黒歌の方が俺より早い。これじゃあ最終的に削り切られる。
「だけど……なぁっ！」
俺は吠えて、全力で殴り掛かる。
それを勢いよく避けながら、黒歌は何度もこっちに攻撃を叩き込んでくる。
勝てると確信したのか、黒歌の表情はこっちを笑ってきてる。
な、なんかマジでムカつく。
「これで終りねクソガキ！　所詮あんたはヴァーリより弱いってこと

がね！」
「んなこたぁ分かってるんだよ！　それでも、何時か必ず超えてやる！」
　ああ、今勝てないことは分かってるさ。
　それでも、俺は部長の最強の兵士（ポーン）になるって決めてるんだ。ずっと敗けっぱなしで弱いままになんてなってたまるかよ。
　何時か必ず超えて見せる。ついでに自力で一発かまして倒してやる。
「今の私にも勝てないくせにぃ？　どうするっていうのかにゃん？」
　黒歌はそう言って馬鹿にしてくるけど、出来てるんだよ。
「……囮とかな！」
　その時、一気に俺達に突っ込んでくる赤い鎧が一人。
「隙ありです!!!」
　踏み込んでくる彼女が持ってるのは一本の包丁。それも、赤龍帝の力で洒落にならないぐらい強化されてる上、サーヴァントの持ち物だからそれなりに神秘もある特別な逸品だ。
　仙術でちょっとだけ早く気付いたみたいだけど、ここまで徹底的に倍加で強化してるなら、反応も追いつかない。
　何より、俺もさせねえよ。
　俺は渾身の力で黒歌を足止めしながら、全力で叫ぶ。
「行っけぇぇぇぇぇぇ！　シャルロットぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!」
　シャルロットの禁手は俺の持つ赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）の可能性を利用して、色々な禁手にする能力と言ってもいい。それは俺が本当の意味で禁手になっても変わらないし、むしろ性能は上がっていく訳だ。
　今回至ったのは、比翼連理たれ赤龍帝（ブーステッド・フリーバード・メイル）。ドライグが言うには、相棒と言えるような仲間を持っていた歴代の赤龍帝が至った亜種禁手。
　能力は赤龍帝の力を分け合う形で、相方にも鎧を身に纏わせる事。
　分けるから能力は劣るけど、二人のコンビネーションやこういった連携ができるってのがいい。
　だから俺は、黒歌がヴァーリ達の方に気を取られた瞬間にこっちに至って仕掛けたんだ。

その不意打ちに、黒歌は調子に乗っていたからか間違いなく反応が遅れた。
包丁が黒歌の脇腹を切り裂いて鮮血がほとばしる。
決定打にはならなかったけど、黒歌の攻撃から制裁が欠けた。
俺達は素早く回避すると、一気に畳みかける為に攻撃を叩き込む。
「この女……動きが早い！」
「練習の成果はきちんと出します！　イッセー！」
「ああ、ここで―」

「危ない伏せて！」

仕掛けようとしたその時、リュシオンさんの声が飛んできて、俺は咄嗟にシャルロットを庇いながら伏せた。
その頭上を、魔法攻撃が飛んで行ってから更に誰かが飛び越える。
あ、ヴァーリが乗っかってる！
あと運んでるのは三角帽子を被った、可愛らしい魔女っ娘だった。
金髪だけどアーサーとちょっと似てるような気もしないでもないかな？
「黒歌さん！　そろそろ撤退です！」
「ルフェイ!?　分かったにゃん！」
あ、そのまま全力で逃げに回ってきやがった!?
「……なるほど、そろそろ潮時のようですね。しかもヴァーリを倒すとは興味深い」
「今度は俺っちもあいつと戦いたいねぇ。じゃ、帰るとすっか」
アーサーと美猴もすぐに反応して一気に集まった。

アーサーはそのままコールブランドを振うと、後ろの空間が綺麗に裂ける。更にその向こう側からなんか妙な空間が見えてきた。
な、なんだアレ!?
「……まさか、次元の狭間かい？」
知ってるのか、木場！
……って、よく見れば俺も見覚えある。列車で冥界に行ってる最中に見えた景色にそっくりだ。
「あのコールブランドとかいう剣って何ができるんだ？　何したんだ？」
俺が首を傾げたら、ゼノヴィアがデュランダルを構えながら目を細める。
アーサーは無傷だけど、木場もゼノヴィアも結構かすり傷や服が切れてたりするところが多い。
あいつもあいつでスペシャルって訳か。厄介だな、おい。
「確か空間を断ち切ることが可能な剣だったはずだ。おそらくこの世界を切って、次元の狭間への入り口を作り出したんだろうね」
マジか。すっげえなおい。
俺がドン引きしてると、部長達も駆けつけてきてくれた。
こっちも結構ボロボロだ。美猴もそんだけできるってことかよ。
くっそぉ。なんか全体的にこっちが負け越しじゃねえか。ちょっと悔しい。
俺がなんか苛っていると、リュシオンさんがすぐに駆けつけてきてくれて、俺達の前に立ってきた。
なんか服の袖が切り落とされて、血っぽいのが袖口についてるけど、手そのものは綺麗なんだよなぁ。何が起きたんだろう？
「大丈夫かい、後ろに下がってるんだ」
リュシオンさんは真剣に美猴達を睨んでるけど、美猴達はめっちゃ軽い調子でひらひらと手を振ってやがる。
「安心しろよぃ、俺らはもう帰るからなっと」
「ええ。中々見どころのある者達だと確信できましたので、こちらは満足しました。旧魔王派の者達も撤退体勢に入っているので失礼し

ます」
「白音ぇ、また会いましょうねぇ～」
ちょ、調子狂うなホント。
なんかこっちがちょっと引いてると、美猴達はそのまま次元の狭間に入っていった。
っていうか、襲撃が終わったって言ってたけど大丈夫なんだろうか？
九成達がいるから大丈夫だと思うけど、禍の団だって強い連中を何人も連れてきてるだろうしなぁ。
と、とりあえず急いで戻った方が……いいのか？

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

カズヒは冷静に考えて、そろそろ敵が引いていることを察していた。
どうやらマルガレーテが乱入してサーゼクスを殺し損ねたことで、形勢が傾いたと判断して撤退準備に入っていたらしい。
見れば四大魔王達には貴族達が援護に入っており、それにより状況も持ち直していた。
「殺せなかったのは忌々しいですが、まあ溜飲は下がりましたね」
「全くだ。今日のところはこの辺りで済ましておくか」
既にカテレアとクルゼレイは気持ちを切り替えており、撤退指揮に移っている。
シャルバもマルガレーテと未だ戦闘をしているが、少しずつ撤退できる体制に移っていた。この調子ならすぐに離脱するだろう。

ハヤテが操るサリュートＩも、６０機中３０機近くが撃破されている。残りの３０機もサーゼクスとの戦闘ではなく、敵全体に対する遅滞戦術に移行している。
既に引くことを前提としている戦いにおいて、サツは面倒くさそうにこちらをちらりと見ていた。
このまま引いてくれるならそれでいいのだが、帰る前にもう一押しと考える可能性がある。そうなると、大きないちげきで吹き飛ばされることも考えないといけない。
故にカズヒは、サツに対して警戒しながら構え―
「動きが鈍った！　隙ありですのよ！」
「あ、ちょっと待った!?」
―そういうことを考えてないヒマリの突撃に、ヒツギと共に思わず声を上げる。
即座に絶大な魔力を込めて切りかかるヒマリの一撃に対し、サツは思いっきり伏せることで回避。
更に不味いことに、彼はその瞬間にベルトを操作してゼツメライズキーを開閉させていた。
『ゼツメツインフェルノ』
その音声と共に、装甲の各部からクローが展開される。
それを見て、カズヒは瞬時に悟った。
あ、あれはショットライザーのブラストとかブラストフィーバーとかそういったのだ。
「まずい……っ」
「ちょ、ヒマリ!?」
カズヒもヒツギも駆け出すが、そもそも移動速度では仮面ライダー殺の方が早い。
更に決め技であるがゆえに強化されているのか、ヒマリが着地するより早く突撃を敢行する。
「こんにゃろですわ！」
『ＦＲＥＥ』
ベルトから即座にショットライザーを引き抜いたヒマリも必殺技

で対応するが、おそらく押し負ける。
それは単純な性能差によるものだ。それだけの性能があることを、カズヒは既に理解している。
まずいまずいまずいまずいまずい。
このままでは、殺される。
「駄目……と…ねぇっ!?」
その時、自分は何を言ったのか分からなかった。
何故それに狼狽したのか、何故ヒツギもぎょっとして自分に振り返ったのかも分からず―
「終わりだぜぇ!」

「そうはいかないかな?」
『スキルヴィングディストラクション』
「ほぇ?」
『リベレイティングブラスト』
その瞬間、ヒマリの射撃を後ろから追撃するように放たれたドロップキックが、サツの斬撃を押し返した。
その一撃で距離を開けられたサツに、我に返ったカズヒとヒツギの攻撃が叩き付けられる。
咄嗟に両手のクローで受けたが、これで今度は弾き飛ばされ、受け身を取り損ねて地面に叩き付けられた。
それを警戒しつつ、カズヒは咄嗟の援護をしてきた存在を見る。
どこか神々しいアーマーに包まれた、片側が装甲に包まれて隻眼となっている複眼型の頭部を持つ、全く未知の仮面ライダー。
その仮面ライダーが、ヒマリを庇う様に前に立っている。
「大丈夫かな? うん、間に合ってよかったよかった」
「た、助かりましたの! どちら様ですの?」
即答で首を傾げるヒマリに苦笑した雰囲気を向けながら、その女性

の声を放つ仮面ライダーは、構えつつ答えを告げる。
「仮面ライダーグリームニルこと、リヴァ・ヒルドールヴ。オーディン神（お父様）のお付きで来ていたけど、避難誘導を手伝って遅れてたんだよね」
「そりゃどうも。……意趣返ししたいが今はまずいな」
『その通りだ。そろそろ引け、こちらも遅滞戦術に限界が近い』
ハヤテにたしなめられながら、ぼやきつつサツは撤退する。
それを警戒して見送りながら、カズヒは内心で苦笑しそうだった。
グリームニル。それはオーディンの別称であり、意味は仮面を被る者。
仮面ライダーの名称として、これほどの物はない名称だと、苦笑するほかなかった。

和地Ｓｉｄｅ

ぶっ放したが、どうも躱されたみたいだなこれは。
俺は障壁を作って着地すると、軽く息を吐いた。
残心は消していないが、峠は越した感じだろう。
敵のサリュートっぽいのは既に撤退を始めていて、どうやら本気で戦闘は終了する感じらしい。
これならまあ、あとは警戒してれば何とかなるとは思いたいが。油断はしない方がいいわけだがな。
「……インガ姉ちゃん、まだやれるか？」
「大丈夫。それより、知り合いなの？」
そっから見られてたのか。
俺は首を横に振りながら、上を見上げる。

攻撃を凌いで翼を広げて滞空するベルナと、それをカバーするように近くの瓦礫に着地しているアーネ。
「大丈夫？　あまり意味もなく無理しちゃだめよ？」
「分かってるよ姉貴。あたしは大丈夫だから」
一見すると、確かにそれは姉妹の絆があるように見える。実際、最低でもアーネはあると思っているんだろうさ。
だけど、その実態は違うと俺は確信している。
アーネのベルナを見る目は間違いなくザイアの連中のそれだ。愛情と言っても相手を尊重しているわけでもなければ、執着している訳でもない。
それは、しいて言うなら愛玩だ。
だからこそ、俺はベルナを見据えてはっきりという。
これだけ入っておかないといけない。それは、俺が俺である為に必要なことだと断言できる。
「……迷ってるなら縁を切っとけ。そのままだと後悔するぞ」
「ご親切にどうも。……今更だよ」
真っ直ぐに、俺と目を合わせてベルナはそう答えた。
「憶えとけ。世の中には……これが恵まれてるとしか思えない奴だっているってことをな」
その言葉と共に、霧が辺りを包み込む。
ベルナの能力か？　だとすると、吸い込んだらまずいか？
俺が息を止めることを考えていると、インガ姉ちゃんが俺と霧の間に割って入る。
「危ない……な！」
その瞬間、突風が巻き起こって霧を吹き飛ばす。
――ガルアルエル姉妹はいないな。どうやら、もう逃げたらしい。
……しっかし、何て言うか入れ込んじまってるな。
ああいう目をした奴を見るのは久しぶりだからか、どうしてもちょっと気になってしまった。もうちょっと気を付けた方がいいと思うんだけど……性分だな。

俺はそうちょっと反省しながら、翼を広げて息を整えているインガ姉ちゃんをちらりと見る。
後ろで二つに束ねた長い髪を見ていると、なんというか懐かしい気持ちになる。それでいて、俺と肩を並べる星辰光を使って助けてくれたその背中は何というか頼もしい。
……うん、あの思い出はやっぱりいい思い出だ。
もう両親もいないし、インガ姉ちゃんも色々あったから、悲しさとかも思い出してしまうかもしれない。それぐらいには、俺もインガ姉ちゃんも色々あった。
だけど、色々大変なことがあっても生きて再会できたことは、本当に嬉しいことだ。
だから―
「インガ姉ちゃん」
「え、なに？　……いやその、どうしました？」
我に返ったのか口調が変わっているインガ姉ちゃんに、俺はちょっと複雑な気分になりながらもはっきり言うべきことを言っておく。
「助けてくれてありがとうな。インガ姉ちゃんに助けが必要な時は、俺もできたら助けに行くからさ」
それだけは、はっきり伝えておくべきだ。
俺は微笑を向けながらそういうと、インガ姉ちゃんはちょっと顔を赤くした。
……しまった。変な誤解を生ませるかもしれないなこれ。
いや、カズヒ姉さんからは「私と付き合いたいならハーレム作れ」なんてこと言われてるからいいのか……な訳あるか。
そういう理由で女に粉をかけるとか問題必須だろうが。落ち着け俺、冷静になれ俺。
と思ったら、気が緩んだのか星をつい解除してしまった。
うぉおおお!?　お、落ちるぅうううううっ!?
「ゴメンまず俺をもう一度ぉおおおお!?」
「何やってるのかな和地君はぁ!!」
ごめんお手数おかけします!?

魔性変革編　第二十七話

アザゼルＳｉｄｅ

「……で、総督ぅ？　どこにいたんですかぁ？」
ジト目でこっちを見てくるリーネスに、俺は手に持った大量の札束を見せびらかした。
「地下のカジノで大儲けしてたぜ！　いやぁ、悪魔側のカジノは当たりやすいったらありゃしねぇ」
はっはっは。熱中しすぎて全然気づかなかったぜ。
……シェムハザに知られたら朝まで説教されそうだなこりゃ。
ちょっと口止めをお願いしようか考えていると、リーネスはため息をついた。
「反省してくださいねぇ？　いてくれただけでだいぶ楽になったはずですしぃ、何よりデータも取り放題だったんですよぉ？」
「そりゃ確かにそうだったな。まさか、ザイアから流出したデータにあった滅亡迅雷フォースライザーの改良発展型が出てくるとは思わなかったぜ」
まったく、敵もさる者っていうべきかねぇ。
サーゼクス達現魔王を相手に、家柄にばっかり拘る旧魔王の血族がここまでやるとは思わなかった。
どうやら聖杯戦争を利用して強化したらしい。あいつらは家柄ぐらいしか能がないが、家柄の所為でそれなり位強いからな。参加者を上手く雑魚ばかり見繕えば聖杯戦争で優勝するぐらいは十分狙えるわけだ。
で、それで悪魔どもの長になる為の強化を下って訳だ。やることが狡いっていうべきかねぇ？

だが問題はそこだけじゃねえ。
ミカエルの奴が魔王血族を抱えていたことも驚きだし、オーディンの娘とかいう奴が独自開発の仮面ライダーになるってのもびっくりだ。
北欧神話は戦死を最も尊ぶ神話体系だったからな。最近はだいぶ丸くなってるが、戦う為の技術に興味を持つのは当然か。
ベルゼブブの血を引く女も気になる。和平のタイミングで表舞台に出してもいいだろうに、出てこなかったのには理由があるのか？
……だがまあ、まずは敵勢力の方を気にするべきか。
一か月ちょっとで同時制御可能な数を六割以上増やしたハヤテに、滅亡迅雷フォースライザーの改良型を使うサツ。この調子だとあとリクとかいう奴が出てきそうだな。
そんでもってサリュートⅠを参考に人が乗る兵器として作ったサリュートⅡとかいうらしい人型兵器。どうも人工神器の技術的な遅れを大型化で解決したっぽい飛行船。とどめに完全独自開発と思われるレイダー部隊。
更にレイダー部隊の動きも厄介だ。小さな鏡を使って曲がり角を確認したり、部屋に突入する前にスタングレネードなどを使ったりするドアブリーチング。加えて十名足らずの分隊規模での統率の取れた動き。
これ、絶対に部隊規模での戦闘訓練をかなりの頻度で定期的にやってるやつの動きだよな？
「これ、人間世界でそれなりに権力のあるやつも手を貸してるかもな」
「ですよねぇ。動きから見てアメリカみたいな大国が手を貸してる訳ではなさそうですけどぉ」
その辺も気をつけねえとなぁ。
俺はリーネスと顔を見合わせると一緒になってため息をついた。
ま、異形の技術を人間界に持ち込めば、一財産築き上げれると考える奴は数多い。
だが俺達は、むしろ人間の技術発展から考えて、不用意に異形の技術を持ち込めば人間だけで黙示録（アポカリュプス）が起きかねないとも思ってる。だ

からこそ、俺達異形は人間界に過度の進出や技術提供を行わない訳だがな。
だが、そういった先の先まで考えない頭のいい馬鹿は必ずいる。そういった連中が軍高官とか企業の長になる場合だってある。国家元首がバカだっていうパターンだって、歴史上に何度もある。
もし、そんな権力のある馬鹿が本気で禍の団と手を組めんだとすれば。間違いなくヤバい展開になるだろうな。
「……ちっとばかし、レイダー部隊の本格開発とかを考えた方がいいかもしれねえな」
「では、第一以外のＡＩＭＳ（エイムズ）も本格的に動かしますか？」
リーネスが目を伏せながらそう聞くのは、こいつもリスクとかを理解できているからだろう。
ＡＩＭＳは元々、ザイアが対異形用に結成した戦闘部隊だ。脳にＡＩチップを埋め込んだショットライザーやスラッシュライザーを使う仮面ライダーを質と点で、そういったものが必要ないレイドライザーを使うレイダー部隊を数と面で運用する腹積もりだったらしい。
だが、サウザンドディストラクションで盛大にザイアは壊滅。そのどさくさで結構な技術が流出したが、俺達神の子を見張る（グリゴリ）者が最も会得していると言ってもいい。
ことＡＩＭＳとして育成された和地達のような子供を何百人も集めたが、これがまた厄介でな。
思想教育が極端だったうえ、それを幼少期に受けたことで俺達異形を人類の敵だと確信しているから話を聞かないのなんの。仕方ねえから記憶の消去をした連中が殆どで、協力してくれるような奴は数十人って程度だ。
それでも根強い不信感はあるだろうし、はっきり言ってあまり表には出したくねえ。プログライズキー研究に関しても、下手に流出すれば絶対に世界全土で大きな影響が出るから避けたいところもあったんだが……無理か。
しかたねえ。こうなったら俺も腹をくくるしかねえようだな。
「リーネス。俺達が駒王学園に在籍した日の話を覚えてるか？」

「……プルガトリオ機関の、クロード長官が言っていたという話ですかぁ？」
話が早くて助かるぜ。
和平反対が起きることを見越して、意識改革を考慮したプラン。和平に対して好意的な連中を中心として、人間界で活動している上級悪魔に教会や神の子（ウ）を見張（チ）る者から人材を派遣するプランだ。
駒王町においては、堕天使側はリアス達にリーネス達をつけるということにするだけだったが……少し手を加えた方がいいだろう。
「ＡＩＭＳ第二部隊をソーナの方に付ける。ミカエルには教会側の派遣人員を増員するように言っておくから、場合によってはお前に事務処理を手伝ってもらうぞ」
それなりの備えはいると思い直したぜ。
ＡＩＭＳは対異形を考慮した訓練を積んでいるから、間違いなく戦力になる連中だ。だがどうしても偉業に対する抵抗がある連中もまだ結構いる。
だから、俺の手が届く範囲で少しずつしかし一気に慣らす。
他の連中も何とかしていかないといけねえしな。そこはしっかり考えて動かねえとな。
「……ま、和地達にもフォローを頼んどくか。確か今日はこっちで休ませることになってたんだっけか？」
「そうなりますねぇ。ヒマリがヒツギって子と仲が良くなってたから、和地がお目付け役をする形でお泊り会になってます。高級ホテルに慣れてないので、はしゃいでましたよぉ」
「なるほどねぇ……」
俺はその時、ふと気づいた。
ＡＩＭＳの頭のねじが吹っ飛んでる教育の所為で、ヒマリは性に奔放だ。
和地はずれをきちんと理解しているから自制も調整もできるが、ヒマリに引っ張られてついずるずる関係が続いているところもある。
そこにヒツギが投入されてるか。
「……なあ、勢いに流されて３○とかあるんじゃねえか？」

「流石に大丈夫ですよぉ。今日はホテルの残った食事を肴にパジャマパーティをするとか言ってましたからぁ」
そっかそっか。なら大丈夫か。
……いや待て。
「うっかり間違えてアルコールとか取ったらまずくねえか？」
「……まずいですねぇ」
俺達は急いで足早にその部屋に向かう。
と、其処では想定外の形で大惨事が。
「すぴー……ｚｚｚ」
「どこで寝てんだこいつは」
見るからに酔っぱらってるヒマリが、廊下で爆睡してやがった。
どうやらマジで酒が入っちまったらしい。良い慣れてねえと訳の分からねえ行動する奴は多いからそんな感じだろう。
パジャマはしっかり着ているし、これなら俺達の心配の方は大丈夫だろう。
俺はちょっとほっとすると、ヒマリを担いだ。
鍵はねえな。仕方ねえ、気づかず眠ってるっぽい和地達を起こすか。
俺が目配せすると、リーネスがそれに頷いてホテルの部屋をノックする。
「和地ぃ？　起きてぇ？　ヒマリをこんなところで寝かしちゃ駄目よぉ？」
……３０秒後
「うわぁあああああああああああっ!?」
盛大な絶叫が響いた。
俺とリーネスは、そんな状態でも爆睡しているヒマリを半ば無視して、顔を見合わせる。
「……酒の席で信徒と寝たとか、ミカエルになんて言やいいんだよ」
「素直に謝りましょぉ。私も土下座しますからぁ」
勢いよく凄いこと言ったなこいつ。
俺が思わず半目になると、リーネスはそれにも気付かずすっごく俯

きやがった。
なんだこりゃ。魂が口から出てそうなレベルだぞ。
「……ヒマリだけじゃなくてヒツギともだなんて。カズヒになんていえば……私はどうすればいいのよぉ……」
しかもぶつぶつ言いながら崩れ落ちたんだが。
なんかリーネスの奴、俺にも言ってない和地やヒマリの秘密を知ってるっぽいんだよな。それも、最近だとカズヒやヒツギも含めて。
カズヒとの関係に至っちゃ阿吽の呼吸というかツーカーになってるしな。あいつは生まれてこの方教会の暗部なんかと関わる機会に恵まれなかったはずなんだけどなぁ。何がどうしてこうなった？
以前聖杯戦争の研究で一回起こした時、願望機に願いを叶える時にＵＳＢメモリに入れた願いを叶えるってしたのと何か関係があるのか？　あのあと即座に燃やしたから、現れた研究資金とかそういったのしか分かってない。……が、ちょっとあの願望機だと量が少ないのは分かる。
少し警戒してたが、特に変化もなかったんで気にしてなかったんだが……念の為探るかねぇ？

あと、地下のカジノで遊び惚けていたこと込みでミカエル・シェムハザ・グレイフィアの三大勢力合同説教を六時間も喰らう羽目になったぜ。

和地Ｓｉｄｅ

なんてことを、なんてことを、なんてことを……。
俺は素直に「酔った勢いでふしだらなことをしてしまいました」と札をかけて正座してる。
自粛というか自反省というか、俺は部長と会長のレーティングゲームを見ることなく、こうして反省をしている。
やってしまったからなマジで。やらかしてしまったからなマジで。何をしているんだよ俺は、マジで。
ヒツギとは目が覚めてから土下座祭りだったからな。
俺は素直に心から反省の意を込めて、常に正座で活動しております。
そう―列車の中でも。
「……そろそろやめてもいいんじゃねえか？」
「うっさいよ」
俺はイッセーにそう返す。
というより、だ。
「お前宿題はさっさとやっとけよ。なんで今までやってないんだ？」
「悪かったな畜生！」
とまあこんな感じで、イッセーは今宿題を終わらせることに焦らされてる感じだ。
ちなみに俺はちらりと見たが、これなら一日一時間ちょっとを三日もすれば終わらせられそうなレベルだった。
……ザイアの教育は意外とハイレベルだったようだ。ここだけは感謝しといていいかもしれないな。
まあそんな訳で、俺はしっかり正座をしている訳だけど、だ。
俺は宿題をやっているイッセーをちょっと見て、半目になる。
「……で、その状況はどういうことなんだ？」
「……さっぱり分からない」

そう、何故かイッセーの膝の上には小猫ちゃんが乗っかってる。
なんでだろう。何があった？
「……にゃん♪」
しかもめちゃくちゃ上機嫌だ。今まで見たことない可愛い笑顔を浮かべてるし。
これはあれだよな。どう考えてもあれだよな。
この赤龍帝、女の敵をやめたとたんにモテ始めてる……いや、俺と会った時から十分モテてたな。
欠点を帳消しにするだけの長所を持つ男ではあるしな。ガントリークレーンを乗り越えられる女なら持てるということか。
「お前、夢が叶って良かったなぁ」
「何言ってんだおまえ？　モテない男に対する嫌味かオイ」
え、こいつ自覚無いの？
「イッセーはそういうところを治した方がいいですよ？」
と、シャルロットが軽くため息をつきながら便乗してきた。
ちなみにこいつもフラグ作っちゃってる側だよなとは思う。
若干苦笑交じりに笑みを浮かべながら、両手を腰に当てるその姿はまさにお姉さんタイプのヒロインだ。
もうこれだけでフラグが立ってることが分かりそうなのに、イッセーはきょとんとしている。
「よく分からないけど、シャルロットのマスターにはまだまだなれてないってことか？　精進します！」
「そういうことでもないんですが……。まあ、あまり強引に進めてもいけないこともありますから、様子見と行きますか」
困ったような笑みというか困った笑みだなオイ。
っていうか、イッセーの奴自分がフラグを立ててることを全く理解してないな、これ。
鈍感系主人公ってこういうことを言うんだろうなぁ。俺はそんなことにならないように気を付けよう。
最近昔馴染みと再会して命の危険を共に乗り越えるとか言う、明らかに漫画とかならラブに発展しそうなことをしてるからな。俺も気

を付けないとうんうん。
カズヒ姉さんはハーレム作ることを辛勝しているけど、ハーレム作りたいから女を作るとかいうのは何かが間違ってるだろう。
俺は貴族でも何でもないんだから、きちんと恋愛したいと思っているからな。その辺りはしっかり一線を引いておかないとな。
俺が一人納得していると、イッセーは宿題に手を付けながら、あっちもなんとなく頷いていた。
「そういえばシャルロットには言ってなかったから今言うんだけどさ」
「なんですか？」
「俺も聞いていいのか？」
思わず首を傾げるけど、イッセーは特に隠すことでもないのか頷いた。
「俺は上級悪魔になってハーレム作るのが夢だったんだけど、この夏休みやレーティングゲームで少し変えたんだよ」
そういえば、レーティングゲームではいい所も悪い所も出てたらしいな、こいつは。
俺は自主反省の真っ最中だったから見てないけど、イッセーは神滅具の禁手というアドバンテージをあまり生かせなかったらしい。
特訓を積んだ匙と男の意地でタイマン張って勝ったはいいんだが、その匙の渾身の策で時間差で相打ちに持ち込まれた。なんでも失血させることでゲームのシステムによる強制退場を喰らったらしい。
会長の策だったそうだが、殴り合いをし続け倒された後もやったってのは匙の成果だ。あの北欧の主神であるオーディン神も褒め、レーティングゲームの賞すら貰ったとか。間違いなくあのゲームのＭＶＰは匙だろう。
だがそこで、イッセーもイッセーで意地を見せた。
乳過剰供給状態から乳絶無極限状態に陥った所為で思ってしまった、おっぱいと対話したいという想い。それを形にしたおっぱいと質問の答えを語ってもらう術乳語翻訳。これで会長の作戦を知りまくって状況をひっくり返したとか。

……セクハラの異次元進化を遂げるなよ。実はモテたいと思ってないだろ。
まあそんなこんなでイッセーは、活躍はしたけど醜態もさらしたと言ってもいい。
なにせ前日に禁手に至るという、良くも悪くも注目を集めた状態で、格下かつ非禁手の選手に相打ちに持ち込まれたんだからな。批評家は絶対批判するだろうし、上役とかも失笑するかもしれない。
ま、これはイッセーがダメなんじゃなくて匙が頑張ったんだろうがな。
だけど、敗北が人を成長させるって話はよくあるもんだ。
イッセーはちょっと照れ臭そうにしながら、だけど俺達にはっきりと告げる。
「ただのハーレムじゃなくて、誰にも負けない強くて最高のハーレムを作れたらいい。そんな風にちょっと思い直したんだよ。うん、それぐらいの方がシャルロットのマスターとして胸が張れるかなってさ」
……俺とシャルロットは、顔を見合わせると少し笑った。
なるほどな。人間的に成長したんじゃないか、イッセー。
「これは俺も負けてられないな」
「サーヴァントとしては尚更です。日々精進ですね」
なんて風に言うぐらいには、イッセーにとっても俺達にとっても価値のある夏休みだったんだろうな。

「……あの、どうしたのリーネス？　和地が酔った勢いでヒツギとしちゃったのがそんなにまずいの？　別に私としては、本当に嫁を何人も迎え入れられる器量が欲しいのだけれど？」
「そこじゃないのよぉ……そこじゃないのよぉ……。ヒマリの矯正もしたいのに……どうしたらいいのよぉ……っ」
あとなんでリーネスはめちゃくちゃ凹んでるんだ？

カズヒ姉さんも困惑してるし、マジでどうしてだ？

魔性変革編　第二十八話　夏休み明けのサプライズ

和地Ｓｉｄｅ

「ダメだぁあああああああっ!!」

……うるさい。本当にうるさい。

俺は早朝五時という時間に目を覚ました。具体的には、目覚ましが鳴るより早く放たれる大声で目を覚ました。

首をコキコキしながら起きれば、そこは漸く慣れた兵藤邸別館の俺の私室。

ちょうどいいので、兵藤邸宅の間取りを思い返すか。

この兵藤邸は元々一軒かつ六階建てレベルになる予定だった……が、神の子を見張る者（俺達）や天界及び教会側（カズヒ姉さん達）が同居することも踏まえ、日照権も考慮して再設計。ついでにイッセーの両親に事情をまだ説明してないことも踏まえて仕立て直した結果――

――なんと、別館と離れとガレージが組み合わさった四件の建物で構成される、最大四階建ての建物が完成したではありませんか。

本邸は家の基本的な機能及び、グレモリー眷属を彼らの昇格も踏まえて住めるように設計。一階は生活に必要なリビングなどの各種設備に、客間や応接間も含めてかなり広大。二階はイッセー及び部長にアーシア、シャルロットといった元々住んでる側とかなどに合わせてちょっと優遇な四部屋が東側、一階の玄関と吹き抜けになっている中央を通り越した西側に、他の眷属や、彼らが上級悪魔になった時の筆頭眷属を考慮した合計八部屋。三階からはちょっと面積が小さくなって追加の眷属を考慮した十四部屋で、四階はＶＩＰルームや応接用施設や書斎などがある。

兵藤夫妻用にはそこそこの一件やクラスの離れを設置。これまた

夫婦がクラス分にはかなり豪勢であり、寝室だけじゃなく専用のお風呂や趣味の為の部屋も用意されている。
平面図にすると離れの真下にあるガレージには、結構な広さだけでなく屋上部分がヘリポートになる素敵仕様。使うことがあるかはともかく、なんというか豪邸感が満載だ。
で、俺達食客に近い立ち位置の別勢力が使う施設は三階建ての別館。
一階には仕込みの一環用の特別施設及び、男女別に設計した風呂場がある。二階は俺達ＡＩＭＳ第一部隊用で、天界や教会の方々用に３階が設計されている。
はっきり言って広い。かなり広い。流石は豪邸なだけあるなと思う。
俺は結構ゲームが趣味で、特にＴＰＳをやってるけど、ゲーム用の高級パソコンまで貰っているからこれは中々ラッキーだな。
だからまあ、もっとぐっすり眠ることもできるんだけ……ど。
「ここ最近、これの所為で早起きになりすぎてるなぁ」
俺はぼやきながら部屋を出ると、共有タイプの洗面台で顔を洗って歯磨きをする。
それが終わることにはしゃっきりしたので、着替えてから本館に移動すると、玄関の辺りで厄介の原因の一つが見えてきた。
山のように盛られた家具やら贖罪やら芸術品やらの山。
これ全部、アーシアに当てた贈り物だっていうんだから驚きだ。
「……物量作戦って恋愛でも有効なのか？」
「……金持ちの特権だと思います」
と、グレモリー眷属として同居している小猫ちゃんが起きながら軽くため息をついた。
「九成先輩、ディオドラのやり方って男としてどう思いますか？」
「そうだな。まあ人間、物より思い出が重要だっていうが、形としてプレゼントを贈るってのは大事なんじゃないか？　一緒に居難い相手なら尚のこと。まあ、俺はカズヒ姉さんが初恋だからよく分からんけど」

そう答えるしかない。
そう、ことの発端は夏休みの終盤。冥界から帰還した直後のことだ。
俺達が荷物を降ろしたり体を伸ばしたりしていると、何時の間にやら上級悪魔っぽい優男がアーシアに接近。イッセーが睨みつけるのも無視して胸をはだけるという、一見すると露出狂にしか思えない行動をとってきた。
だが胸元にあった傷を見たことでアーシアの表情が一変。なんでもそのディオドラとかいう悪魔曰く、以前死にかけた時にアーシアに助けられたとか。
で、嫁に迎えたいと告白してきたからさあ大変。こうして連日贈り物を送ってきているというわけだ。
で、アーシア大好きなイッセーは悪夢を見て跳び起きながら絶叫するぐらい気にしているということだ。
「なあ小猫ちゃん。どう考えてもアーシアがなびくことないと思うんだけど」
「アーシア先輩は部長並みに、イッセー先輩にぞっこんですからね」
うん、俺の認識も間違っていなかったな。
「で、小猫ちゃんもぞっこんではあると」
「……ダメダメですけど、優しくて頑張り屋さんですから」
と、俺が聞くとほんのり頬を染めながらもそう肯定してくる。
とまあこんな感じで、兵藤一誠という男は数多くの女性を魅了している。アーシアもその一人だから、なびく可能性はまずないとすら思う。
なのにイッセーだけはマジで心配して夢にまで何度も見るような始末ってわけだ。
一言言って大丈夫なんだろうか、あいつ。
「だけどヒマリはともかく、カズヒ姉さんやリーネスはよく寝てられるな、あんな絶叫でよく寝れてるな」
俺はなんとなくそう感心する。
ヒマリはそういうところが頑丈というか図太い所があるけど、リー

ネスはそこまでではないはずだ。カズヒ姉さんは分からないけど、あんな轟音が出たら普通は起きる。
俺が羨ましいやら呆れるやらしていると、小猫ちゃんは俺に対して呆れた目を向けてきた。
「……イヤーパッドを調達してましたよ？」
あ、そういうことか。
呆れられるのは俺だな、これは。

そんなわけで二学期もスタート。俺達も駒王学園の高等部に転入することになったわけだ。
こうして制服を着てみると、なんか新鮮だな。
そして俺はちらりと、隣で待機しているカズヒ姉さんを見る。
カズヒ姉さんも俺の視線に気づいたらしい、なんか気恥ずかしそうにしてたけど、こっちに視線を向けてきた。
「……なに？　コスプレみたいとかそんな感じかしら？」
そんなこと思ってたのか？
俺は素直に首を横に振る。ぶっちゃけ考えてもいなかったしな。
っていうかコスプレにならないだろ。
「カズヒ姉さんも俺と同じ年だろ？　ちょうどそんな恰好する時期じゃねえか」
「まあ、そうなんだけど……ね」
なんか歯切れが悪いな。
なんだこの、学生が幼稚園児の格好をしているかのような恥ずかしがりっぷりは。
俺が首を傾げていると、カズヒ姉さんは咳払いをして誤魔化すと、こっちに振り向いた。
「……そうそう、サプライズ好みの冥界関係者だとありえそうだから聞くけど、私達と一緒にイッセーのクラスに転校する子が誰か聞いて

る？」
「あ、聞いてない」
そういえばまだ聞いてないな。
まあ確かにサプライズ好きではあるよな。イッセーに改装のことを碌に教えてなかったみたいだし。その辺はまあ、人種どころか種族が違うんだから当然っちゃ当然かもしれないけど。
まあそれはともかくだ。
俺やカズヒ姉さんと一緒にイッセーのクラスに転入するのは、間違いなく教会側のスタッフだ。
暗部組織であるプルガトリオ機関、その中でもダーティジョブ担当のリマ部隊のカズヒ姉さんでは、天界や教会の代表として活動は到底不可能だ。和平の象徴と言っても過言ではない以上、どうしても表より……というか、もっと綺麗な側の人物が必要だ。しかもぶっちゃけ要職と言えるレベルが必要になる。
なんたって悪魔側の代表は、魔王を輩出したグレモリーの本家次期当主のリアス部長だ。更に堕天使側は総督であるアザゼル先生。ただの要職どころか、将来性や象徴的な面を含めてもかなりのビッグネームになる。なので最低でも地区代表といったレベル、それも国家とかそういう区切りレベルの重要な人物が必要になる。
なので、カズヒ姉さんやゼノヴィアと一緒に派遣されたイリナでもアウトだ。エクスカリバー使いであったのはそこそこだが、あくまで現場であって象徴面はともかく権威的なものが足りない。
まあそんな人物を高校に派遣するのもあれだし、たぶんだが現場スタッフはその部下止まりだろうな。
そう考えるとちょっと気になるな。
「で、具体的に誰が来るんだ？　カズヒ姉さんは聞いてるんだろ？」
「ええ、派遣スタッフのリーダー格が来ることになるわね」
……はい？
派遣スタッフのリーダー格が、転校生という形で来るってのか？
「外見が高校生レベルの上位天使とかそういうことか？　でも日本の学生をいい歳の天使がやるのって、ありなのか？」

ちょっとその辺が気になっていたら、カズヒ姉さんはちらりとあらぬ方向を見てからちょっと噴き出すように笑った。
「それが適任が増えたのよ。ほら、挨拶して頂戴？」
ん、来たのか？
っていうかタメ口？　え、付き合いのある知り合……い……っ!?
振り返ったらある意味納得できる、だけど「天界及び教会の代表」として見ると、意外極まりない奴が嫌がった。
「ふっふ～ん！　確かＡＩＭＳ第一部隊の九成和地君だったわね？　お久しぶり！」
栗毛のツインテールに胸に下げた十字架。
そしてこの明るい女の子は……っ！
「お久しぶりね！　ミカエル様から名代として派遣されました、紫藤イリナよ！」
なんでこいつが代表なんだぁ!?

「……まさか返されるとは思わなかったってか？」
「そう言うな、ノア。できれば和平の象徴となるグレモリー眷属に、使用者がいてくれると嬉しかったのだがね」
「しっかし天界も一気に先進的になったもんだ。ま、天使の増産が不可能になったのは最大の問題だから、その対策は急務なんだろうけどな」
「それに関しては構うまい？　悪魔側が天使達に恩を売った形になるのだ。影響力は十分取れているだろう？」
「つっても悪魔（イーヴィル・ピース）の駒は現魔王アジュカ・ベルゼブブの専売特許だろ？　俺らじゃ恩を売るに売れねえと思うがな」
「悪魔という勢力が、天界という勢力に恩を売ったと取れるのなら十分だ。懸念する必要があるのかね？」
「あるだろ？　つまりその場合、天界は協力姿勢を取っている側を悪

魔の勢力として認識するだろうからな。恩の向け先も協力関係も魔王派であって大王派じゃねえってのは、後に響くだろ？」
「……なるほど。その辺りは盲点だったな。内乱を好き好んで起こすつもりもないから油断していた。やはり戦に限定すればお前の方が慧眼だな」
「そりゃどうも。……だからこそ、リアス・グレモリーの眷属を使ってコマーシャル活動をしたかったんだが残念だ」
「……ふっ。コマーシャル活動は私達でもできるだろう？　何より若手最強のサイラオーグ・バアルを下せば、それだけで大きな影響力を我らは得られるのだから」
「流石に勝率十割何て言うほど間抜けじゃねえぞ？　だからそっちも頑張ってくれや。宣伝活動（そういうの）はお前の方が得意だろ？」
「そうだな。コレのコマーシャルは私が行った方が良さそうだ。……大王派の切り崩しと取り込みは任せるぞ？」
「ＯＫフロンズ。奴さん達の鬱憤を晴らしてやって、しっかり恩を売っとくとするぜ」

魔性変革編　第二十九話　教会からの仲間です！

和地Ｓｉｄｅ

そんなわけで転校生三人というインパクトがあった学業を終えてから、放課後俺達はオカルト研究部に集合。ソーナ会長も顔見せに来た上で、ちょっとした紹介会となっていた。

天界からこっちに派遣されたのは四人で、カズヒ姉さんと一緒に兵藤邸宅の別館三階で生活する。そういう意味では俺達ＡＩＭＳ第一部隊と同じようなもんだ。

といっても、その四人の内初見なのは二人だけ。

いやまあ、まさかこうなるとは……。

「ヒツギ～♪　また会えましたし、これから当分一緒に暮らせますのねー！」

「いやぁ、なんかこんなことになっちゃって自分でも意外かな？　ま、会えて嬉しいよヒマリ」

と、いきなりハグしながらはしゃぐヒマリをなだめているのは、ヒツギ・セプテンバー。

……視線が合って思わず赤面して顔を逸らしてしまった。

「……先日はごめんなさい」

「あ～、私の方こそゴメン。まさか持ち込んだ飲み物にお酒が混じってたなんてねぇ……あはははは」

いやほんと、マジでやらかした。

酔っぱらっていたので微妙に曖昧だけど、大体のところは覚えているのが厄介だ。

今後も酒を飲む機会はあるだろうし、暇があったら鍛えておこう。

「……頭痛が、頭痛が……ヒマリだけでもあれなのに……頭痛い」

「大丈夫ですか、リーネスさん」

あとリーネスが凄い頭を抱えていて、アーシアが癒しのオーラを向けていた。
なんかよく分からないけど、カズヒ姉さんと仲が良いリーネスのことだからな。俺が他の女とねんごろになっているのは問題なんだろう。
ヒマリとの関係も上手く解消したいものだ。何故かこぉ、恋愛感情を向けることがありえないと本能で思ってしまってるからな。カズヒ姉さんの言うとおりにハーレムを作ったとしてもヒマリはそこには絶対ない気がする。
まあ、それはヒツギもなんだが。
いやまあ、そこは置いといて。
そんでもって、代表となっているイリナが両手を組んで祈りのポーズを取りながら挨拶する。
「知っている人も多いけど、ミカエル様の命で派遣された聖ミカエル監察団のリーダーとなりました、紫藤イリナです！　これからは仲良くしたいとおもいます！　よろしく！」
うん。この子、細かい所とか気にしないと思ってたけどマジで気にしてないな。
結構好戦的な印象があったが、意外と柔軟だったようだ。まあこれなら安心なのだろうか。
「……それで、そちらの見ない顔の二人はあなたの部下になるのかしら？」
リアス部長がそう尋ねると、そこにいた少年と少女が一礼した。
少年の方はちょっとヤンチャっぽい雰囲気だけど育ちの良さがどこからか見える、木場みたいに金髪ショートの少年だ。
少女の方は黒髪を一本結びにした可愛い子だ。ただこっちはどこかで見たような気がするな。
可愛い子には目がないイッセーもチラチラ見てるけど、何故か男の方にも結構視線が行ってる。
「……えっと、なんかどっちもどこかで見たような気がするんだけど。木場、お前は？」

「言われてみれば……そうだね。というより、これは面影とかそんな感じじゃないかな？」
「そういえばそうだな。それもつい最近会った奴に似た顔があったような気がするぞ？」
イッセーに尋ねられて、木場やゼノヴィアもなんか思い出しそうな感じになってる。
な、なんだなんだ？　どういうことだ？
俺達が戸惑っていると、何故かギャスパーと小猫ちゃんが訳知り顔で苦笑していた。
「あの、アニルくんにルーシアちゃん。そういえばファミリーネームがあんなだけど―」
「……やっぱり、知り合いなの？」
ああ、二人のクラスに転入してたのか。
ってことは一年生なのか。異形社会は実力重視で若手も多いけど、一年生に二人も派遣できるほど若い子で和平に好意的な奴も多かったんだ。
俺が感心していると、二人は微笑んだり苦虫を噛み潰したような感じだったりと対照的だけど、なんか納得の表情だった。
「……っじゃ、まずは俺が自己紹介した方がいいかな。ほら、下げてから持ち上げた方が上げて落とすより気分的には楽だし？」
「うん。私は後で構わないから、アニル君からでいいよ？」
とルーシアとかいう少女に許可を取ってから、アニルとかいう少年が一歩前に出ると背筋をピンと伸ばした。
あ、やんちゃな風に見えて規律はしっかりとするタイプだこの子。
「初めまして！　俺は自薦を了承されてイリナ先輩の下に配属されたアニル・ペンドラゴンです！　本家のアーサーとルフェイがご迷惑をおかけしたこと、一族の者として謝罪いたします！」
と、しっかり九十度で頭を下げてお詫びの姿勢を見せてきた。
えっと、ペンドラゴン家というとアーサー王伝説に由来するコールブランドを継承していた一族だったな。
あ、そういえばイッセー達がホテルでの襲撃時にやり合ったヴァー

リチームに、コールブランドを使っていたアーサー・ペンドラゴンって奴がいたって言ってたが……それか？
「……あの男の縁者か。疑うわけではないが、よく此処に派遣されるメンバーに選ばれたな」
「そうですわね。普通なら、むしろ距離を開けるよう命じられてもおかしくないですわ」
「はい。上層部もそこからくる敵意を懸念されていましたが、俺自身がそれを向けられることを覚悟のうえで派遣メンバーになりたいと願い、了承された次第です。万が一の為の制約術式もかけられてます」
ゼノヴィアや朱乃さんがそこを疑問に思っていると、アニルは頭を下げたままそう答える。
っていうか、そんな術式をかけてまで参加したいのか。
ちょっと驚いていると、今度はリアス部長が目を細めた。
「そこまでして派遣されることを望んだということは、それなりの理由はあるのでしょう？　ミカエル様達が認めたのなら疑う気はないけれど、教えてもらえるかしら？　あ、頭はもう上げていいわ」
「もちろんです。と言っても、単純な理由です」
そう言いながら頭を下げたアニルは、真っ直ぐにリアス部長の目を見た。
嘘偽りのない真剣な表情を向けて、アニルはさらに話し続ける。
「ペンドラゴン家は由緒正しく力ある一族。俺達はその恩恵と引き換えに責務を背負う者達です。嫡男アーサーはそれを忘れ、家宝を持ち出してテロリストに落ちぶれ、あろうことは息女ルフェイまでそんな兄に従う形でそのままテロリストに参加しました」
そういうアニルの表情は、苛立ちも怒りも悔しさも恥ずかしさも滲んだ複雑な表情だ。
よっぽど、一族の本家が成した狼藉が許せないんだろう。それが嫌というほど分かる表情だ。
俺がちょっと同情していると、アニルはちょっと目を伏せてから、俺達を見渡した。

「ペンドラゴン家の不始末はペンドラゴン家が何とかするべきです。ましてアーサーは白龍皇ヴァーリ・ルシファーの率いるチームに属している。ならば一族の者が対抗馬になっているグレモリー眷属にお力添えするのは当然の責任です。まして俺は、教会の悪魔祓いなんですから、三大勢力の問題に対処することも当然でしょう？」

そう言いながら、アニルは持ってきていた袋をリアス部長達に差し出した。

「あとこれは、お詫びの品を兼ねた挨拶品です。キッパーというニシンの薫製で、日本のアジノヒラキという食品に似ているから日本受けすると知ったので選出しました」

り、律儀な奴だ。

俺達がちょっと見てると、部長もしげしげと眺めながらもう一度アニルを見た。

「どこかのブランド？」

「比較的高級なものを。自作するのもありかと思いましたが、お詫びの品ならば金に糸目をつけない方がいいと考えました」

薫製を自作できるのか、こいつ。

「……あ、僕達も転校してきた時にお土産ってことで貰いました」

「薫製作りがコンピューターゲームに匹敵する趣味だそうです。お弁当に入れた自作のを貰いましたけど、美味しかったです」

しかもギャスパーや小猫ちゃんも別途で貰ってるのか。

後趣味が薫製作りって凝ってるな。その上美味いのか。

ちょっと感心している中、アニルは真っ直ぐ背筋を伸ばして、ちょっと伺う様に部長を見つめた。

「もちろん、そちらが嫌だというのなら諦めて帰還する覚悟もあります。ですが、できれば一族の恥でかけられた迷惑を一族の手で灌ぐ機会を―」

「ダメよ」

アニルの言葉をさえぎって、部長はそうはっきりと言った。

だけど、それは許さないとかそういう意味じゃないようだ。表情を見ると分かる。

「そんな理由で、折角楽しめる学園生活を台無しにしてはダメよ？
私はあなたを可愛い後輩として見るし、ヴァーリチームのアーサーの迷惑はあいつ自身に落とし前をつけさせるわ」
　そうはっきり言ってから、部長はにっこりとアニルに微笑んだ。
「もちろん、その時はあなたにも協力してもらうわ。責任を果たしたいのなら、そういう形にしてもらうのが条件よ」
　そう言いながら、俺が思わず見惚れそうな笑顔で部長はアニルを認めたようだ。
　……イッセーがぞっこんで他の眷属も忠誠を誓っているだけあるな。王の風格というか、カリスマ性はきっちりあるじゃないか。
　アニルもそれに感じ入るものがあったのか、目を伏せながらも頷いた。
　そして目を開けた時、そこにはヤンチャしてそうな色がある。
「わっかりました！　じゃ、あまり堅苦しすぎないようにしやす！
年単位でやる気でしたが、実はあんまり堅苦しいのは正直好みじゃないもんでして」
　あ、外見通りの性格ではあるんだ。
　もっともその上でしっかり真面目にやれるみたいだし、まあそれなら対外的な部分以外は緩くてもいいのか？
「あらあらぁ、可愛い後輩ができて嬉しいわぁ」
「リーネスの言うとおりね。これからは可愛い後輩として接させてもらうわよ、アニル」
　リーネスと部長がそう微笑みながら歓迎して、ちょっと空気が緩んできた。
　と、そこでカズヒ姉さんが軽く咳ばらいを。
「こらこら。まだ一人残っているわよ？　ねぇ、ルーシア」
　おっとそうだった。
　完全に忘れ去られる形だったからな。これはちょっと失礼か？
　怒ってるかとも思ったけど、ルーシアと呼ばれた少女は静かに微笑みながら首を横に振った。
「間接的ですが縁もありますし、何より話が注目されるようなもので

すから。つい意識がとられても仕方ないです。気にしないでください」
そう言ってからにっこり微笑むと、スカートの袖をつまみながら静かに一礼した。
「アニル君と同じ中規模部隊で研修を受けていた、ルーシア・オクトーバーと申します。デュナミス聖騎士団のリュシオン・オクトーバーが妹です」
え、マジで？
リュシオンさんって妹居たのか。っていうかなんて言うか礼儀正しいな、オイ。
可憐な少女だし、大人しそうで人気が出そうだ。同時に結構できるのが動きでなんとなく分かる。
あほがナンパしても返り討ちに合いそうだけど、押し切られたりしないかが不安になりそうだな。
俺がそんなことを思っていると、ルーシアはにっこり微笑みながらも真っ直ぐ強い決意を込めた眼を部長に向けた。
「和平が成立し要らぬ諍いが無くなることは喜ばしいです。ですがそこで気が緩んでたるんでは成せることも成せないと思っております。なので、その象徴ともいえるこの駒王町の者達には、相応の責任と行動が求められます」
……ちょっと気を引き締められることを言われたな。
確かに、こうしてコカビエルの一件に関与したメンバーが殆ど揃っているし、それがきっかけで和平にもなった。
もうこの時点で、いやでも俺達は和平の象徴になってるわけだ。
この関係が変にこじれたり余計な被害が出てきたりなんてしたら……。
ちょっと寒気を覚える中、ルーシアは真っ直ぐに鋭い目を向けて――
「……すいません。ちょっと空気が穏やかすぎたので、意地悪じみた忠告をしてしまいました」
――その緊張感を自ら解いた。
ちょっときょとんと皆がしている中、ルーシアは申し訳なさそうに

しながらも、毅然とした表情を浮かべて俺達を見渡した。
「どうしても三大勢力の方々は、そういう風に見てしまう人が多くなることは言っておくべきだと思ったので、少し意地悪な忠告をしてしまいました。個人的にはそういう顔であることを意識したいですけど、同時に皆さんと私人としても親交を深めたいとも思っています。……私の兄はリュシオンですから、恥じない生き方をしたいんです」
あ～、確かにリュシオンはできた奴だからなぁ。
完璧超人と言っていいだろう。そして、自分がそうだという自覚が欠けている印象もある。
たぶんだけど、その辺りがカズヒ姉さんとは合わないんだろう。
カズヒ姉さん、どうも自分が何時ダメなことするか分からないって思ってる節があるからな。だからこそ、自他ともに厳しくあることを自分に科しているんだと思う。
そういう意味だと、ルーシアとの相性は微妙……か？
「まあ、あまり無理はしないようにしなさい。人間、休息や息抜きを入れずに堅苦しくなり続けることなんて本来不可能なんだから」
と思ったら意外と優しめ？
なんだろうか、ちょっと労わるような表情な気がするんだけど――
「何より、そういったメンテナンスやリフレッシュを放棄すると、限界を超えた瞬間に一気に瓦解する物よ？　報告連絡相談も、できるのなら必ずしなさい。ちょっと恥をかくことを恐れて、一生モノの取り返しのつかない恥をかくなんて論外なんだからね？」
「……ちょっと話がずれている気もしますけど、大事なことな気がしますので心にとめて起きます。ただ、仰ってくださったカズヒ先輩に相談することも多そうですけど」
「ええ。無茶な頻度でないなら聞いてあげるわ」
というより、何だろうか息があってる気もするな。
カズホのこともそうだし、もしかしてカズヒ姉さん、年下に好かれるタイプ？　むしろお姉さまとか女の子に言われまくるタイプ？
も、もしかして俺のライバルは同性ではなく異性だったのか。
ちょ、ちょっと気を引き締めていこう。

俺が気合を入れていると、部長はちょっと苦笑しながらも少し背筋に力を入れ直した。
「そうね。和平を結んだお兄様達に恥ずかしくないよう、少し気を付けることにするわ。これからも目に余るようなら指摘して頂戴。よろしくね、ルーシア」
「はい。よろしくお願いします、先輩方」
リアス部長とにっこり笑い合いながら、ルーシアは軽く会釈をすると一歩下がる。
で、こっからは巻いていけるだろう。
「まあ、私は結構一緒にいてるから問題ないわね。改めて言うけれど、カズヒ・シチャースチエをよろしくってところかしら？」
「結構会ってるけどヒツギ・セプテンバーじゃん。これからは学友としてもよろしくねっと」
そんな風にカズヒ姉さんとヒツギが挨拶をして、最後はイリナだ。
……でも、このメンツだと箔がついてない気がするんだけど。
大丈夫か？　魔王の妹で本家次期当主に、神の子を見張る者の総督だぞ？　天界の上位天使とかバチカンの枢機卿とかが必須な気もするんだけど。
そう俺が思っていると、イリナは祈りのポーズをとる。
そしたら何故か上から光が降りて、更にイリナの手にAの文字が浮かび上がった。
……っていうか、光る輪っかと白い翼まで生えたんだけど。
え、なに？
ちょっと知らない組が戸惑ってる中、アザゼル先生は感心しながら踏む踏むと頷いていた。
「お前さん、天使になったのか。悪魔の駒（イーヴィル・ピース）の応用で出来るとは思ってたが、案外早かったな」
今なんて言った先生!?
しかもイリナ、なんか凄く得意げな表情を浮かべてるし。
「その通りです総督！　私はセラフが試験運用を開始した転生天使、御使い（ブレイブ・エンジェル）。トランプを参考にしたミカエル様のA（エース）！　天使の紫藤

イリナです！」

『『『『『『『ええええええええええええっ!?』』』』』』』

確かにそれはインパクト十分だけど、マジかぁあああああああ！

魔性変革編　第三十話　再開の旧交

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで自己紹介も終わった午後、俺達オカルト研究会は趣向を変えて歓迎会を開くことになった。
ようこそ、聖ミカエル監察団の皆さん！
そんな横断幕を天井近くに張って、俺達は小さな歓迎会を開いている。
「お待たせしました。一通りのパーティ向けの食事は用意できたかと」
「お疲れ様、クックス。さぁ、遠慮しないで食べて、クックスの腕を褒めてあげて頂戴ねぇ」
クックスを労いながらのリーネスの声を合図に、俺達は軽食類を食べ始める。
ドーナツ、ラスク、クッキーにカナッペ。そんな感じで簡単につまめるものを盛りつけられた皿がテーブル中に広がってる。
……取られる前にある程度食っておかないとな、もぐもぐ。
クックスの腕は知っているから、皆最初は食べることに集中してたけど、やがてすぐにでも話は始まって盛り上がり始まる。
「うわぁあああん！　やっぱり主が死んでたなんてショックよぉおおおおお！　一週間ほど寝込んだけど、思い出したらまた寝込みたくなってきたわぁあああ！」
「分かるぞ、イリナ。さあ食べろ、食べて忘れるんだ」
「後で皆さんでお祈りをしましょう。きっと心が安らぐはずです」
既にイリナと一悶着あったはずのアーシアとゼノヴィアは、場酔いで泣きじゃくるイリナと一緒に話を弾ませている。あとちょっと見

ないうちにお祈りまで始めている。
なんというか意気投合してるな。年齢も近いから完璧にトリオになっているというか、一悶着あったとは思えないぐらい仲が良くなってないか？　イリナに至っては再会したのついさっきだぞ？
まあ、こういうきっかけさえあればすぐに打ち解けられるってのも立派な才能か。
暴走特急なところもあるみたいだけど、何時の間にかその時のことも謝っていたみたいだしな。特にアーシアが気にしてないこともあって、すぐに打ち解けてる。
そして他の場所でも仲良く話が進んでる。
「これからは一緒ですの！　今日の夜は一緒にパジャマパーティでもしましょう？　一緒に朝まではしゃぎますのよー！」
「いや、つい最近やらかしたばかりだからちょっと待って。あと寝不足になったら授業が身に入らないから落ち着こっか、ね？」
ギャルっぽいけど基本的に常識人ポジションらしい。一見するとお嬢様っぽいけど、基本暴走特急のヒマリと噛み合わせるといいコンビになりそうだな。
……後どっちも俺と夜戦してるから、いわゆるあれだ、○姉妹なんだけど……自分からは絶対に言わないぞ、おう！
あとヒマリが抱き着いていることで二人のおっぱいがたゆんとなってて、イッセーが鼻血を流して沈黙している。
かと思ったら正気に戻って「シャルロットに恥じないシャルロットに恥じない……」とかぶつぶつ言い始めている。
とりあえず落ち着こうか。気持ちは分かるからそこまで気にすることないし、第一その対応は別の意味で顔向けできないだろ？
ほら、シャルロットと部長が心配して寄ってきてるし。そのおっぱいに反応して逆に精神的に不安定になってるし。
と、そこでいい匂いがしてきた。
「なあ小猫、鹿に熊に兎の薫製がここにあるんだが、タメの女からの視点で意見が欲しいんだけど、どうよ？」
「……ジビエはにおいがきついものだけど、十分に燻しているから気

にならない。いい感じだと思う」
「ほぉ、これはいい薫製です。専門家でない者の出来とは思えないいい物ですね」
……なんか、アニルが持ってきた自家製薫製の品評会が始まってるんだけど。
あと食いしん坊の小猫や、料理人ヒューマギアのクックスが認めるレベルか。アニルの奴は悪魔祓いじゃなくて薫製職人なんじゃないか？
後いい匂いだから後で貰おう。
「お、つまみによさそうな薫製じゃねえか。ちょっと酒を一杯飲むとするか―」
「あらあら先生？　ここは学び舎ですから、お酒はご法度ですわよ？」
「その通りです先生。教師として一定の品格というものが必要ですし、校内での飲酒など論外です」
そしてダメな大人がドＳと会長に挟まれた。
骨は拾いますからそのまま倒されてください。流石に問題行動です。
俺は総督を見捨てることをさっさと決めて、そっとカナッペを取りに行った。
うん、美味しい。上手い飯は人を笑顔にするし悲しみの涙も止めれるよな、うん。
と、あっちではギャスパーがルーシアと一緒に話し合ってる。
「ルーシアちゃんは凄いね。僕はまだ外に出るのもちょっと怖いし」
「いきなり無理をしなくても大丈夫。少しずつ慣らしていけば、いつかは人並みに外に出られるようにもなるからね」
うん、やっぱりルーシアはできた女の子だ。
リュシオンの妹だけあるな。これが普通なら、出来が良すぎるリュシオンに対するコンプレックスで歪んだりとかしそうだしな。
「じゃ、じゃあ紙袋を被って外に慣れることからかな？」
「ギャスパー君。それは通報されそうだから、他の方法を考えよう？」
うん、紙袋と段ボール箱から離れた方がいいと思う。

ルーシアもちょっと引いてるぞ。
「……ギャスパー様。もう少し周辺の環境と溶け込むことを覚えください。顔を隠しても悪目立ちしてはいけません」
「全くだ！　対人恐怖症ってのはゆっくり慣らしていかねえといけねえが、慣らし方を間違えたら逆効果だぜ？」
ほれ、メリードとキュウタまでフォローに回ってるし。
……というか、俺がなんかボッチになってないかコレ？
か、カズヒ姉さんは―
「う～。ヒマリに続いてヒツギまで……。私はどうしたらいいのかしらぁ……」
「場酔いで泣き上戸にならないでよ。説明する気がないなら自力で立ち上がって頂戴。……一時間だけ胸を貸してあげるから、そしたら立ちなさいよね？」
「分かったわぁ。うぅ～……」
あ、ダメだ。
リーネスと他が入ってこれないような空気を見せてやがる。これは無理だ。
あとカズヒ姉さん、一時間で立ち直れって言ってるけど一時間は胸を貸す辺り、やっぱり厳しいけど優しいな。惚れ直すぜ。
とはいえ、ちょっとリーネスが羨ましい。あとなんかボッチになってて空しい。
……外の空気、吸ってこようかな～ッと思った、その時だった。
「会長ぉ～。そろそろ一旦戻ってきてくれないでしょうか～。ちょっと資料が溜まってきてます」
と、匙がひょっこりを顔を出した。
更にその下から、これまたひょっこりを顔を出してきた少女が一人。
茶色の髪をポニーテールにした、ちょっと鋭い目つきの女の子。
……って。
「あ、鶴羽」
「あ、和地。久しぶりね」

……そういえば、そういう話もあったよなぁ。

ＡＩＭＳと一言に行っても、結構な数が存在する。
ザイアコーポレーションは歩兵師団規模で用意する予定だったらしい。強力な神器を保有している者や魔術回路持ちなどを中心とした、ショットライザーやスラッシュライザーを使う質と点の仮面ライダーと、集団戦闘の訓練を積んだ分隊以上で戦う量と面のレイダー部隊だ。
絆や協力が力に繋がることもあると理解していたのか、ザイアは比較的俺達が交流することにも寛容だった。談話室ぐらいはあったしな。
とはいえ、俺はあんまり他のメンツと話したりはしていない。むしろヒマリとできるだけ一緒にいるようにしていたりもしている。
理由は単純。当時の俺がザイアの思想誘導から庇えるのは一人ぐらいが限度だからだ。
気づかれたら脳改造とかされそうだったしな。涙の意味を変える者としては不本意だが、できることとできないことはしっかり弁えないとできることすらできなくなる。
なので他のＡＩＭＳとは表面的な付き合いにとどめていたんだけど、例外がいないわけではない。
そのうちの一人が、今来た女の子。南空鶴羽だ。
メンバーとしてはレイダー部隊の側の女の子で、折れやヒマリと同い年。魔術回路はあったけどそこまで高い質ではなく、また神器を持っていなかったこともあって、仮面ライダーには選ばれなかった女の子だ。
俺がその縁ができたのは、まだザイアに拾われてそんなに立ってない頃だ。
「……うっへぇ～」

まだまだ未熟だった俺は、ちょっとげんなりした顔で施設内をうろついていた。
ちなみに散歩って感じにしてたけど、実態としては内部の把握だ。とりあえず問題なく行けるところはさっさと覚えておかないと、万が一にでも脱走できるチャンスがあった時に動けないと思ったしな。
そんな時、たまたま……本当にたまたま、俺は鶴羽にあった。
「あれ？　もしかして日本人？」
そんな風に声をかけてきた鶴羽に俺は表情を取り繕いながら、にっこり微笑んだ。
「うん。ザイアのおかげで立派になれるんだってさ。凄いよね？」
そんな風に怪しまれないように周りと同じ雰囲気を見せていると、鶴羽はちょっと不思議そうな顔をしてから両手を広げた。
「アメリカの子に教わったんだけど、抱きしめ合うのも挨拶らしいよ？　してみない？」
「え……あ、分かった」
女の子に抱き着くというのにちょっと照れたけど、俺は変に警戒されないようにそれに従って抱き着いた。
で、ぎゅーってしているとき、ふと首に手が触れて―
「ザイアの言うことって、本当に立派だし素晴らしいよね？」
「……そうだね！」
どぎまぎしているときに不意打ちだったけど、俺はすぐにそう返答できたと思う。
だけど、真っ直ぐに俺の目を見ていた鶴羽は笑顔を消してこう言った。
「……うん。そんな風に取り繕っていた方がいいわね。今度、ゆっくり話せるといいけど……また会いましょう」
その大人びた声を、俺はめちゃくちゃしっかりと憶えている。
なんたって、それは俺以外に聞こえないように小声だった。それも、抱き着いた手を使って口元を隠している、読唇術対策までした徹底ぶり。その上俺が嘘をついたことまで把握してると来た。
ゾクリと寒気すら覚えていると、鶴羽は俺から離れてにっこりと

笑った。
「また会おうね。うん、仲良くは無理でも何度も会いたいかな？」
……はっきり言おう。ザイアにいた時に俺が最も信頼していたのは鶴羽だ。
性交を推し進める時期になると、相方以外ともそういうことをする奴は少なからずいたが、鶴羽は俺にそういう関係を求める風に見せかけていろんな話をすることになった。
「……ショットライザーのＡＩチップにどんな機能があるか分からないわ。脱走するにしても本当に好機を窺わないとまずいわね」
「あ～やっぱり？　というか、レイダー部隊の方はどんな感じなんだよ？」
「貴方の相方と違ってかなり駄目ね。私の相方は完全にザイアの心酔しているし、そんなグループには行っちゃったから、下手に警戒しているグループを探すのも無理かも」
そんなことを話し合っていたら何時の間にか、サウザンドディストラクションが起きて俺達は神の子を見張る者に保護されたわけだ。
で、俺とヒマリがリーネスの庇護下に入ったのはいいんだが、鶴羽はレイダー部隊でザイアの洗脳が残ってるグループに残っていたみたいだ。

そのことを思い出して、俺は何というかちょっと苦笑した。
そういえば、第二部隊をサブとして駒王町に派遣するって話は聞いてた。
そうか、もう来てたのか。
「……よっ。そっちはどんな感じなんだ？」
「第二部隊は全員、シトリー眷属や教会のサブスタッフと連携する感じ。それで分かるわよね？」

なるほどな。不敵な笑みで返す辺り、もう大丈夫だと思っていい感じか。
なんていうか年齢より大人びている雰囲気があるけど、同時に今では年齢通りな印象もある。
でもまあ、数少ない同士に近い関係だったからな。こうして再会できるのはちょっと嬉しい。
……あの笑顔を覚えてなかったら、一種の極限状況だったあの環境だと恋に落ちていたかもしれないしな。相方のヒマリとは別の意味で深い関係でもある。
「……匙、そっちの子は？」
「あれ？　そっちに話いってなかったのか？」
と、イッセーがこっちに気づいて匙に事情を効こうとしてる。
まあ、グレモリー眷属側に派遣されるイリナについてもあまり言われてなかったしな。当然と言えば当然か。
俺がそう思い直していると、鶴羽は微笑みながら胸を張った。
「私はＡＩＭＳ第二部隊の南空鶴羽（みそらつるは）！　シトリー眷属側と連携する、堕天使側のメンバーの一人よ。ま、駒王町全体に散らばってるから駒王学園にいるメンバーは少しだけどね」
まあ、ＡＩＭＳ第二部隊って結構いるしな。それだけの人数を全員駒王学園に入れたりなんてしないか。
俺が感心していると、イリナが思い出した用の手を叩いていた。
「あ、確か教会の方と連携するのよね？　私からも言っておくからよろしくね？」
「うふふ。ソーナや匙君達と仲良くね？　それに、今度機会があったらお茶会にでも招かせてもらうわ」
「うっし！　お前は第二部隊じゃ結構重要ポジだし、一番協力的だったしな。期待してるぜ？」
部長や先生からもそんな風に期待されて、鶴羽はちょっと機嫌が良さそうだった。
「ま、まあ？　私はレイダー部隊では成績良かったし？　ええ、もちろんですよ総督！　むしろ連携ならそちらより強いぐらいになるまで

頑張っちゃいます！」
「ふふふ。そうなると本当に心強いですね、期待してますよ？」
会長のメガネが光っている。勢いで言ってることに気づいている。
これは仕事が多くなりそうな予感がするな。頑張れ鶴羽。
俺が同情の視線を送ってると、なんか顔をほんのり赤くしながら俺に流し目を送ってきた。
「ふふん。期待されてる私に何か言うことがあるんじゃないの？」
「……うん、応援してる」
別の意味も込みでな。
会長は厳しくて厳しいとまで、恋焦がれている匙に言われる人物だ。絶対ホワイトであってもハードだぞ。
ザイアとは比べるまでもないまともな人だけど、仕事の厳しさは待遇の良さとは別の形でもあるな。
頑張れ鶴羽。俺も差し入れぐらいはしてやるから。
「……何か、変な意図がありそうなんだけど」
鶴羽は俺を半目で伺ってたけど、ふとその視線が別のところに向いた。
その方向に視線が何となく集まるけど、その先の人は全然気づいていない。
「…え…あ……あ……れぇ……？」
リーネスが凄い事になってるな。
なんだあの、鳩が豆鉄砲喰らったような表情は。
「リーネス？　どうしたの？」
「え、いや、えっと……ねぇ？」
カズヒ姉さんが肩をゆすって我に返らせるけど、それでも結構パニくってる印象だった。
俺達が首を傾げていると、鶴羽は何時の間にか近寄ってハグをしてきた。
「可愛いわねあなた！　私、もしかして自分は両性愛者（バイ）なのかと思うぐらいっ」
「あ、あらぁ？　私も結構そういうケがあるのよぉ」

……俺は今凄い複雑な感情を覚えている。
え、なにこれ？
ちらりと見ると、近くのカズヒ姉さんが面食らっていた。
「え、あれ？　え……えぇ……え？」
めっちゃ動揺してる。
と、何時の間にか鶴羽の手がそっとリーネスの首元に触れていた。
「実は私、学生生活をするにあたって文芸部とかにも行ってみたいと思ってたの。女の子が理不尽に蹂躙された所為で道を間違えながらも、それでも償おうと頑張るんだけど、その理由を知らずに間違いだけ見てしまった子が憎しみを持つ話」
「っ」
そんな鶴羽の脈絡が飛んだ会話に、カズヒ姉さんの肩がビクリと震えたような気がした。
位置的に俺にしか見えなかった気もするけど、見えそうなリーネスは何故かめっちゃどぎまぎしている。
……顔が赤いというより青いんだが、何があった？
逆に鶴羽は気づいてないのか、そのまま話を進めている感じがするん……だが……。
「……それは、またハードなものを書くのねぇ」
そう言葉を選んだリーネスに、鶴羽は頷いた。
「ええ、その恨んじゃう女の子の名前は決まってるの」

「七緒っていうの」
「「……っ!?」」
その時、カズヒ姉さんとリーネスの表情が固まった気がするのは、気の所為なんだろうか。
そして俺は、その名前にどこか懐かしい物を覚えていた。

魔性変革編　第三十一話　挟間の会話

Other Side

「……まさか、貴女(あなた)がこんな近くにいるなんて思わなかったわぁ」
「私もよ。あんたって昔はもっとお堅いというか偉そうだったじゃない、リーネス。ついでに言うと、あんたはもっとこぉ……可愛い系だったしねぇ、カズヒさん？」
「そうね。十七年もこう生きていると、みんなそうなるわよね。私たちも、あなたも……あなたはむしろあまり変わってないわね」
「そうね。私の場合……物心つく時に孤児になって、ザイアのあんな所にいたからね」
「……ねえ鶴羽ぁ？　もしかして、和地のこと好きだったりするのかしらぁ？」
「ふぁー!?　な、ん、で、そうなるのよ!?」
「あ、やっぱり」
「やっぱりって何!?　やっぱりって何なのかなぁ!?」
「いえ、あなた昔っから分かり易かったもの。ねぇリーネス」
「そうねぇカズヒ。よく暗躍できたと思うわねぇ」
「うっさい！　仕方ないでしょ、ザイアで数少ない本音を見せれる相手だったんだもの！　でもなんていうか、ずっと誰か思い人がいるって感じだったっていうか……ちょっと待ちなさいカズヒ。今なんでそんなマジ顔になってるのよ？」
「ごめんなさい。私出会い頭に告白されたわ」
「……あ、そういうことぉ」
「待ってリーネス。何か知ってるの？」

「……黙秘権を行使するわぁ。変な横やりは入れたくないものぉ」
「……聞いても答えてくれそうにないわね。私ちょっとトイレ行ってくるわ。っていうかもう遅いし、そのまま風呂入って自慰して寝るわ」
「……もうちょっと女子力を磨きなさいよ。女子トークにしてもぶっちゃけすぎでしょう」
「……それは、私があなたに対して見せちゃいけないものでしょ」

「……はあ、やっぱり前みたいに戻るのは、無理なのかな」
「まあ、カズヒなあなたに対して負い目があるでしょうしねぇ」
「……逆恨みどころの話じゃないのに。悪いのはパパ……ううん、悪いとかなんて軽い言葉で言っていい物じゃないのに」
「そうねぇ。でも、あいつらが邪悪であることと、彼女がしてはならないことをしてしまったことは、カズヒの中じゃ別なのよ」
「そんな！　だって、あいつはずっと……私やあなたがパパに会った時だって、パパ達の所為で何年も―」
「それでもよぉ。あの子が……あの子がやってしまったことは、真っ当な良心を取り戻してしまった後で、自分から許せるわけがないでしょぉ？」
「そう……だけど。そうだけど！」
「だからこそ、この話はカズヒにだけはしちゃ駄目なの。……でも、やっぱり協力者が一人ぐらい必要よねぇ」
「ちょっと待ってリーネス。私を何に巻き込む気？」
「あら、あなたあの時言ってたじゃなぁい？　もしもやり直せるなら絶対に助けるって」
「はうぁ！　言ったけど！　言ったけど絶対心の準備がいる奴だし！　ちょっと待って、五分ぐらい待って！」
「そう。じゃあ五分待ってから言うわぁ。……流石に協力者が欲しいぐらい訳の分からないことになってるし」

「五分どころか十分待ちたいんだけどぉ!?」

「……で、そんな訳の分からないことになったのよぉ。」
「訳の分からない展開どころか、私はどうしろってのよこんちくしょう!」
「まぁ安心しなさぁい。カズヒは男の条件として来る者拒まずさる者作らずのハーレム野郎があるからぁ」
「私が入ったらめっちゃ空気が捻じ曲がるっての!」
「まぁまぁ。そこは和地の男としての器に期待するってことでねぇ?
　まあ、問題は別にあるんだけどぉ……ね」
「まあ確かに。ヒマリにヒツギとどんなふうに接すればいいのよ。いや、和地に対してもちょっとぎくしゃくしそうだけど」
「お願いだから頑張って協力してぇ。むしろ両性愛者に目覚めたネタをマジにして、ヒマリと和地を引きはがしてぇ」
「間接キスならぬ間接S○Xとかキッツいわね。それよりヒツギの方は何もしなくていいわけ?」
「あ、それは大丈夫っぽいわぁ。酔った勢いだったから、むしろ関係がぎくしゃくしないかどうかの方が問題よぉ」
「……私はシトリー眷属側で良かったわ。兵藤邸に住んでたらメンタルゴリゴリ削れてキッツいもの。いや、たまには遊びに行きたいんだけどね?　和地に会ったりとか、貴女達と遊びたいとか色々あるし」
「そうねぇ。物心ついてるかどうかも分からない和地はともかく、ヒマリやヒツギは思い出す必要もないけど何時迄もってわけにはいかないでしょうしぃ、カズヒのこともあるものぉ。できれば、私達でもっと優しくなりたいわぁ」
「ほんと、あんたって前も今も苦労性というか、しょい込みたがりね。今はカズヒもなんだけど」
「ふふふ。なら、貴女にも少しは背負ってもらおうかしらぁ、鶴羽?」

「ハイハイ分かったわよ。私だって、カズヒやヒマリやヒツギには、幸せになってもらいたいし負い目もあるもの。頑張らせてもらいますっと！」

アザゼルＳｉｄｅ

「よぉミカエル、サーゼクス。定時連絡だが、これで駒王町でのプロパガンダ活動はスタートだな」
『そうですね。彼女達には申し訳ありませんが、駒王町は和平の象徴的地域です。そこに住まう彼女達が仲良く暮らせれば、和平を心理的に推し進めることもできるでしょう』
『同意見だ。セカンドプランも提示されているが、そちらについてはどうなっているかね、アザゼル？』
「安心しな。既に兵藤邸宅にスタジオはできてるし、Ｇｏｏｇｌｅ本社とも話をつけた。収益化するかどうかは分からねえが、その時はボーナスも恵んでやるべきだしな」
『そうですね。これも現代に合わせた和平推進活動と言えるでしょう』
「そうなるな。……それと、ちっと悪いがお前らに相談したいことがある」
『何かねアザゼル。何やら真剣な表情なんだが』
「かなり疑念ができたんで、ちょっと調査をしたいことがあるんだよ。ただ神の子を見張（チ）る者が動くと勘づかれそうだから、悪いが悪魔側に依頼という形で調査してもらいたいことがある」
『どうしたのですかアザゼル？　一体何を調べると』

「……リーネス達についてだ」
『意味が分かりませんね。彼女はあなたの部下で、よく知っているのでは？』
「だから疑念が尽きねぇんだよ。それにミカエル。お前にゃ悪いんだが、お前も無関係ってわけにはいかねえんだ」
『というと？』
「俺が調べたいのは、リーネスだけじゃなく和地とヒマリ、更に教会側のカズヒにヒツギ、そしてシトリーの方に派遣したＡＩＭＳ第二部隊の南空鶴羽（みそらつるは）って奴についてだ」
『……全員駒王町に派遣されたメンバー。それも、南空という子は分からないが、他は全員和平に絡んだ一件に関わっているメンバーではないか』
『どうしたというのですか、アザゼル？』
「最近どうも妙に思ってたんだが、リーネスとカズヒの関係がやけに気安すぎる。それにリーネスが和地とヒマリを保護することを名乗った時も、強引な手段すら取る気が満々だった。……更にカズヒや鶴羽に関してもやけにフランクというか何かあるとしか思えない反応を見せている。……俺が知る限り、あいつの来歴でザイアや教会と縁ができる事例はないにも関わらずだ」
『そうなのかね？　だが、サウザンドディストラクション後にリーネス君が保護したのが和地君とヒマリ君だけというのなら、南空君に関しては意気投合しただけとも―』
「残念だがなサーゼクス。あの一件では色々とごたごたしているし、保護したＡＩＭＳの連中は、記憶消去した奴も踏まえれば五百人を余裕で越える。リーネスは全員を直接目にしたわけじゃねえんだよ。第二部隊との顔合わせもあまりしてなかったしな」
『……つまり、一目会っていればリーネス（彼女）は南空鶴羽という方も保護していた……というのですか？』
「そういうことだミカエル。……リーネスは間違いなく、俺に何か隠してる。それも反応から察して、南空とカズヒはその内容もある程度は知っている」

『そしてそこに、九成和地とヒマリ・ナインテイル、そしてヒツギ・セプテンバーも本人が知らぬだけで関与している……と』
『……ふむ、私が知る限り、カズヒがヒツギと接触する機会があったのはあの会談が初めてです。また二人はザイアと関与する任務に携わったこともありません』
「だが、リーネス達の反応を見る限り何かあるのは間違いない。リーネスは聡いから俺が何かして探れば気づきかねない。だから俺が何もしないことであいつを油断させるから、悪いんだけどちょっと調べといてくれねえか？」
『それは構わないが、そこまで調べる必要があるのかね？』
「……なんか嫌な予感がするんだよ。どうもこの辺り、調べておかないとややこしいことになりそうな予感が……な」
『それなら直接尋ねるべきでは？』
「聞いて答える様子ではないんでな。どうも隠したくてたまらないって感じだったな」
『……つまり、カズヒ達も言う気は無いということですか。それとなくカズヒとヒツギの来歴も精査し直しておきましょう』
『……そうだね。情報はまず私達が調べてからそちらに送ろう。あまりこういうことは好まないが、確かに不自然な繋がりがあるようだ』
「ああ、悪いな。……じゃ、そろそろ切るぞ」

「……ったく。俺も内緒で色々やるから責める気はねえが、もう少し年長者に肩を借りてもいいと思うんだがなぁ」

Other Side

「……で、旧魔王派の連中はどう動くつもりだ？」
「はっ。前回のレーティングゲームから流出した情報をもとに方針を変換。彼とグレモリーがレーティングゲームを行うタイミングで仕掛けるとのことです。我々には動くならタイミングを合わせるよう通達が出ました」
「分かった。タイミングを合わせるついでに、こっちからも人員を派遣すると伝えておけ。俺の眷属達を送っておく」
「よろしいのでしょうか？　使える手勢はすべて使うべきかと思いますが」
「俺達の理念を示すには、他種族からの転生悪魔を初手で使うべきじゃない。お前達全員があれを目の前で使い、仕掛けてきた奴を撃退してこそ意味があるだろう」
「そうですか。……負けてもいいとはいえ、流石に所詮は勝たなければ意味がありませんしな」
「そうだ。俺達は負けてもいいし、最善は負けることだ。だが同時に、負ける方向性は一種類でなければ、冥界は腐敗を続けるだけだ」
「……その覚悟がある者があるからこそ、この計画を進めることができますな」
「そうだ。王駒祭壇（ムロドーミーユ）はあくまで最終手段。アジュカ・ベルゼブブの目を覚まさせるか、悪魔達が自らの意思で押し切ることができてこそ、真の意味で悪魔の未来を明るくできる」
「重々承知しております。ですが―」
「ああ。どちらでもないのなら、今の愚かな悪魔達は皆殺しだ」

「――動くのなら、示すのなら、それを阻む者も揶揄する者も一切合切鏖殺あるのみ。それが出来ないのなら、理想を掲げる意味がない。あの愚鈍な四大魔王も、無能で無意味なサイラオーグにも、冥界の未来を担うのなら目を覚ましてもらわないとな」

魔性変革編　第三十二話　転入時の一幕

和地Ｓｉｄｅ

そんな日があって少しして、既に俺達もだいぶ学園生活に馴染んできた。
「はーい！　その種目は私がやりたいでーっす！」
と、体育祭の種目選びでイリナが元気よく手を上げている。
転校早々体育祭か、なんていうか慌ただしいけどちょっと楽しみでもある。
体育祭だなんて学生っぽくていいよなぁ。俺、ザイアの施設とかで青春をめちゃくちゃ削られてるから、何て言うか懐かしいというかなんというか。
さて、俺はどんな感じで競技を選んだものか。
俺が考えこんでいると、運営役が黒板に新たな協議名を書く。
「じゃ、次は二人三脚の選手です。男男、女女、男女のペアを決めますよー」
なん、だと。
俺の思考が真っ白になったのは一瞬。すぐに俺は覚醒し、そして手を上げて声を張り上げる。
「はいはいはいはいはいはいはい！　俺、男女ペアでカズヒ姉さんと組みたいですーサイドォ!?」
その瞬間、アイアンクローが俺に叩き込まれた。
「あほなこと言わないの。私と二人三脚がしたいのなら、私を惚れさせてからにしなさい」
ぬぐぉおおおおおお……っ。
お、仰る通り。下心丸出しでこんなこと言うなら、確かにまずは付

き合ってからだった。
反省しました。冷静になりました。だから俺の頭蓋骨を圧殺しようとしないでくださいませ。
俺の心からの願いが通じたのか、カズヒ姉さんは俺を解放すると席に戻った。
「それに私は自薦はしないわ。まあ個人的に、この１ｋｍ走とかなら任せてくれてもいいんだけれどね」
「いいのか？　陸上部員がいるなら押し付けられる、最も過酷な種目だぞ？」
男の方がそう確認するけど、まあそこは問題ないだろう。
命がけの殺し合いをする場合、体力はあって困ることはまずないしめちゃくちゃないとダメなぐらいだからな。俺やイリナやゼノヴィアといった荒事経験が数年ある奴はもちろんのこと、イッセーやアーシアだって夏休みの特訓でそれぐらいは余裕の全力疾走ができるだろう。
そしてカズヒ姉さんも実際そうだから、むしろちょっと得意げだった。
「安心しなさい。全身に１０ｋｇ近い重装備をつけても全力疾走できるわ。何なら数キロある荷物を手に持ってもいいわよ？」
本当に、それぐらいならできるだろうなぁ。
ソ連崩壊に端を発する内乱で色々戦っていたんだから、重装備で戦場を走り回っていただろう。そのころから更に成長して鍛錬も積んでるんだから、むしろかなり謙遜しているだろう。
「何ならクラス一の体重持ちを背負ってもいいわよ？　断言するわ、それでもドベには断じてならない自信があるわ」
「あんた第一空挺団がなにか？」
軍事マニアがツッコミを入れるけど、その辺りは微笑でスルーした。
まあ、異能関係ない純粋な身体能力でも案外並べるぐらいありそうだからなぁ、カズヒ姉さん。
……俺も第一空挺団とまでは言わないけど、異能とか星辰奏者抜き

でも一般的な自衛隊員よりは体力ある自信があるし。
そんな感じで話が脱線していると、何故かアーシアの隣に眼鏡三つ編みの女子がこそこそと話し、そして戻っていった。
確か桐生だったな。イッセーやエロ仲間の松田と元浜相手に普通に駄弁てる珍しい女子だったはずだ。
あ、そういえばこんなことあったなぁ。

「初めまして！　私は転校生の紫藤イリナです！　小学校に上がる前までは此処に住んでて、そこの兵藤一誠君とはお友達でした！　ああ、主よこの再開に感謝します……アーメン！」
「イリナ、いろんな意味で落ち着きなさい。……私はカズヒ・シチャースチエ。ロシア圏の内戦地帯出身だけど、そこのイリナやそっちのゼノヴィアとは旧知の間柄だから、変なことしているようなら私を呼んで頂戴」
「あ、どうも。二人とは別口な九成和地です。カズヒ姉さんに惚れたのでアプローチしまくるので、温かい目で見守ってください」
と、俺達は転校生として挨拶をぶちかました。
今冷静に考えると、俺も大概ぶっ飛んだ挨拶だな。ちょっとはしゃいでたか？
「……イッセー！　なんだあの可愛い女の子達は!?　特に紫藤イリナなんておっぱいが……いいなあれ！」
「畜生！　隣のカズヒって子も胸は無いけど可愛いじゃねえか!?　畜生、何お近づきになってんだ!?」
と、何時の間にかイッセーに詰め寄る男が二人。
後に知った松田と元浜というイッセーのエロ仲間が、今にも殴り掛かりそうなレベルで一斉に文句を言っていた。
そして、その背後に流れるようにカズヒ姉さんが立ち、それぞれの手で二人の頭を掴み上げる。

「「痛たたたた!?」」
「やめなさい阿呆共。聞いてるわよ、かつてのイッセーと一緒に覗き行為なんて阿呆なことをしているようね？」
半目でじろっと見ているカズヒ姉さんは、半ば持ち上げながらため息をついていた。
「言っておくけど、モテたいならモテる為の行動をしなさい。モテる男を参考にして、女子に好かれるムーブをして嫌われることは控えなさい」
平然と言ってるけど、男二人をアイアンクローで持ち上げながらそれが出来るのは、女性だと世界でも極々一部だと思う。
そのスペシャルっぷりにクラス中が一歩下がっている。
……まあ、たぶんゼノヴィアやイリナもやろうと思えばできるとは思う。アーシアはたぶん無理だろうけど。
「はっきり言うわ。私は悪行をする気は無いから、あなた達が覗きをすることも女子達が過剰に得物を持って集団暴行をすることは許さないわ。……即座に警察に呼んで訴訟起こすから。女子も集団私刑は立派な凶悪犯罪だから今後はやめなさい。発見次第そっちも警察に通報するから」
『『『

ど、入るの却下されたからそう言えないのが難点ね？」
『『『『『『『『豊胸手術ならぬ減乳手術⁉　あと宗教上で⁉』』』』』』』』
　更にシンクロツッコミが来たけど、俺もびっくりだよ⁉
「姐さん一応聖書の教えだよな⁉　なんで胸削るんだよ、そんなの聞いたことないぞ⁉」
「そんな⁉　おっぱいを削るなんてどんな邪教だよ⁉　……は！　まさかストリートチルドレンだったのはそこから逃げてなのか⁉」
　俺とイッセーが次々にツッコミを入れてパニクるけど、それぞれゼノヴィアとイリナがポンと手を置いて落ち着かせてくれた。
「落ち着けイッセー。私も実情を聞いたのは初めてだが、彼女が元ソ連圏の出身なら聖書の教えの範囲内で説明可能だ。去勢を教義に入れている分派がある」
「ロシアにあるスコプツィっていうのがそれね。もっとも子供を作ってからって話だから、その辺りでストップが入ったのと思うわ」
『『『『『『『『『『『『そんなのがあるんだ⁉』』』』』』』』』』』』
　全力ツッコミが飛んだけど、もうどこから突っ込んだらいいのか分からないな。
　そんなツッコミを何度もぶちかまさせたカズヒ姉さんは、殺意すら全力で籠めて松田と元浜を見据えた。
「そういうわけだから、私の目の黒いうちは、この学園で覗きなど許さないわ」
「そ、そんな⁉」
　眼鏡をかけた元浜が涙すら零すと、松田も歯を食いしばって姐さんを睨んだ。
「俺達に死ねと⁉」
「それで死ぬなら死んだら？」
　取り付く暇もない。
「相も変わらず厳しい上に容赦がない時は徹底的にないな。初めてこの学園に足を踏み入れた時を思い出したよ」
「私もゼノヴィアさんもイッセーさんもバッサリと切り捨ててきましたね……」

「……ごめん二人とも、俺はシャルロット顔向けする為にも覗きはやめたんだだだだだだだだだだ」
「イッセー!?」
「イッセーさん!?」
イッセーが流れでひきつけを起こしてるけど、そっちを気にする奴は殆どいない。
どうやらなりすぎてもう慣れているらしい。
適応力が高いなこの学園。逞しいというかなんというか。
俺が感心していると、カズヒ姉さんはだけど少しだけ肩の力を抜くと、苦笑すらした。
「……まあ、性欲の多寡には個人差があるし、イッセーと肩を並べたスケベなら、イッセーまでではなくてもかなりきついでしょう。だから―」
そういうなり、カズヒ姉さんは自分のスカートを勢いよくめくりあげた。
特に奇をてらってはいないが、間違いなく本物の着用中パンティーが見える。
痙攣しているイッセーと介抱しているゼノヴィア及びアーシア以外の注目を集めながら、スカートは重力に従ってそのまま降りる。
そして一秒ほど沈黙してから、カズヒ姉さんははっきりと告げた。
「もし三年生になるまで一切覗きをしなかったのなら、この内側を顔面に密着させてあげるわ」
『『『

挑発的な笑みを浮かべながら、カズヒ姉さんははっきりと断言した。
いや、それでは止まらなかった。
「あと高校卒業まで我慢できたのなら、素股ぐらいならしてあげるわ。……お尻でいいなら入れさせてあげてもいいわよ。……あと裸かメイド服か学生服かナース服かは事前に決めて置いたら調達するけど、宗教上の理由でシスター服は却下」
堂々と宣言する内容ではない。
というか、男の劣情について理解がありすぎないか姉さん。あと俺はウェディングドレス風なのがいいです。
もはや殆どの連中が言葉もない中、松田と元浜は真顔で立ち上がると、目線を合わせて真っ直ぐにカズヒ姉さんを見据える。
「二言はないんだろうな？」
「後で無しだなんてないよな？」
その確認に、カズヒ姉さんはおもむろにノートを取り出すと、四枚ほどページをちぎると、右手の親指の皮をかみちぎった。
そして数秒後、見事な日本語で書かれた「私は松田と元浜が一年間覗きを辞めれたら、一年目は生股間を顔に当てさせて、二年目は素股かアナ○○○クスをしてあげることを誓います。カズヒ・シチャースチエ」とかいて、更に人差し指に血をつけて指紋まで押し付けた。
血判状とは古風なもの知ってるな、オイ。
そしてカズヒ姉さんは一枚を取ると、イリナにそれを押し付ける。
「イリナ、主の名において見届け人をお願いするわ。もちろん、この場にいる全員も証人にはなってくれるでしょうけど」
「これを主の名において宣言しちゃうの!?」
めっちゃ動揺しているイリナを置いて、カズヒ姉さんは戻ると一枚とってから、残りを一枚ずつ松田と元浜に渡す。
「これが証明よ。翻すようならそれを証拠に裁判所にでも行って訴訟を起こしても構わないわ！　契約不履行だし民事ならまず行けるでしょう？」
はっきりと宣言すると、二人は静かに顔を見合わせながら頷いた。

「……うぉおおおおおおお！　やるぞ、おぉおおおおおおおお!!!」
え、ちょ、ちょっと待って？
俺がそんなことを脳内に響かせていると、カズヒ姉さんは振り返って苦笑する。
「まあそういうわけだから、今年中に私を惚れさせてアバンチュールをしてみなさい？　ちなみに、私が男の求める条件は分かってるわよね？」
「ド畜生ぉおおおおおお！　やってやらぁあああああああっ!!!」
俺はもう絶叫するしかない。
これで追い抜かれたら、俺は五年ぐらい凹む自信がある。下手すると生涯立ち直れないかもしれない。
や、やるしかない。こうなったらまずお見合いとかセッティングしてもらおう。
冷静に考えればコカビエルを打倒した三人のうちの一角だし、三大勢力和平の象徴ともいえるグループの一因だ。その辺割り切った政略結婚ができる悪魔の貴族さんとかいるかもしれない。
……いややっぱちょっとどうなんだろう、これは。
「待ってくれカズヒ！　俺は、俺は松田と元浜に追い抜かれろと!?シャルロットには悪いけど、さ須賀にちょっと抗議するぞ!?」
イッセーの文句もちょっとは気持ちは分かる。周囲の連中もちょっと同情の目を向けていた。
まあ、イッセーも含めた三人が変態だからな。イッセーだけ除け者とか、同情するかしないかはともかくとしてちょっと不遇だわな。
まあ、実際のところイッセーが飛びぬけて恵まれてるから仕方がない。
とはいえ言ったらアウトだからそれこそ仕方がな―
「ごめんなさいイッセー。私はリアス部長やゼノヴィアに殺されたくないの。っていうかあなたは既にそれ以上の経験してるでしょう？
リアス部長が寝るとき裸ってのは聞いてるのよ？　私が知る限り七日はアーシアも込みで寝てるでしょ……あ」
あ、

五秒後、イッセーはクラス中から袋叩きに遭いかけて、流石に庇ったカズヒ姉さんの戦闘能力をクラス中が痛感することになった。

なんで、こうなったんだろうなぁ。

「と、いうわけで二人三脚の男女ペアは、兵藤とアーシアさんに決定です！」

あ、なんか男女ペアの二人三脚が決定しちゃった。

後思い返したらふと思ったけど、もしかしてカズヒ姉さん、必要悪の汚れ仕事だけじゃなくて人がしたがらないことや、物事を円滑にまとめる為の人身御供とか進んでやるタイプなのか？

……いや、まさかなぁ？

魔性変革編　第三十三話　朝と夜の不思議

イッセーＳｉｄｅ

「なぁ、イッセー。カズヒ姉さんって、自己犠牲精神が強いと思わないか？」
「……アナル処女とか、信徒の自己犠牲精神としてどうなんだろうな」
遠い目をする九成に、俺はそう言うしかなかった。
アニルも軽く遠い目をしてるけど、アニルなりになんか言おうとしたのかちょっと考え込んでる。
そんでもって考えがまとまったのか、シカ肉の薫製を差し出しながら九成に振り向いた。
「あの人確かバリバリの暗部出身っすよね？　多分暗部に入る前から任務でとっ捕まって強姦とか覚悟してんじゃないすか？」
「あ～。カズヒ姉さんはそういう覚悟を真っ先に決めてそう。……あ、これ美味しいぞ、お前も食えよ」
「おう……本当に美味いな。でもカズヒさんの生下半身とか俺が見たいんだけど」
薫製を食べながらのこの盛り上がるに盛り上がれないカズヒさん談議。
なんでこんなことになったのかというと、これも和平を進める一環とかそんな感じらしい。
いや、薫製食べながら駄弁るのが一環なんじゃなくて、一環の為の下準備とかそんな感じ。
俺達は別館の一階にある、その一環用のスタジオの準備とかをしてるんだ。で、それなら男どもだけでやって親睦を深めようって感じで、今は休憩中。

で、アニルが手製の薫製をおやつ代わりに持ってきたから、それを今食べながら駄弁ってる。
ちなみに本館の屋上に、薫製製造用のプレハブ小屋が立てられたりしてる。アニルの要望が要望以上に通った感じだ。
アニルはちょっと高価な薫製機とか貰えないかなーとか言っただけらしい。だけどそこでアザゼル先生が気に入ったり、クックスも本格的に手を出すことを決めたことで派手にいったんだ。
その結果、業務用の薫製機や熟成用の設備とか、下ごしらえに使うハーブや燻す時のチップを入れるケースも購入されて、もういっそのこと専用の設備を用意しようってなって屋上にプレハブ小屋が、違和感がないような外装でつけられたってわけ。あと本館の屋上なのは「別館の屋上だと煙が本館につくかもしれないから」って感じらしい。
……確かに美味しいけど。そこまでするかって感じではある。
「いやぁ、あそこまで本格的なもんを用意してもらうってのは、恐縮半分感激半分ってところっス。腕が鳴るし材料を大量に確保しても腐らせなくて済むから、そっちも腕が鳴りますわ」
「……そういえば、鹿とか兎とかだったけど、もしかして自分で狩ってるのか？」
アニルの発言に首を傾げた九成がそう言うと、アニルは素直に頷いた。
え、マジか。
「自分で肉まで狩ってんの!? 店で買うんじゃなくて!?」
なんか別の意味で本格的だな！ 思わず大声上げちまったよ。
え、マジで!? 貴族のたしなみ的な？
ちょっと引いてると、アニルは燻製を食べながらちょっと頬を掻いた。
「いや、元々薫製作りは手段だったんすけど、何時の間にか趣味になっちまいまして」
「手段？ なんの？」
九成が聞きたくもなるよな。
薫製作りを手段にするって、いったい何の手段だよ。

俺もすっごく気になる。マジで気になる。
「炊き出しっす」
「「炊き出し!?」」
炊き出しで燻製!?
思わず俺と九成が一緒の叫んじまったよ。
「いえ、信徒だし高貴な家柄だし、やっぱり恵まれない人に施しをとは思って活動してたんすよ。でもほら、あまり過剰に施しするのもあれっすし、何より家がない奴らに日持ちしないのを送るわけにもいかないっすよね？　だから豪華にならずに日持ちになるのをと考えてた時にたまたまテレビの特集を見て―」
見て？　見て何がどうなったの？
思わず俺と九成が前のめりになると、アニルはちょっと引きながらも、薫製の皿の一つを持ち上げて見せた。
「―外来種による生態系の破壊を見たんで、そのあと増えすぎて獣害になってる獣とかも含めて自分で狩って、それを燻製にして炊き出しのお土産的な感じにすることにしたんすよ。そしたら意外と奥が深くて趣味に」
「お前凄いな！」
俺よりよっぽど立派だよ!?　後輩ができすぎでちょっと後ろめたいよ！
「あ～。日本でもブラックバスとかあるしなぁ。そういう方向でなく奴も多いし、そういった方法もあるかぁ。……狩猟免許取るか？」
あと九成はちょっと迷走してない？
「アザゼル先生に頼んで特例でそういったのも狩ってるっす。先週は琵琶湖行ってブラックバスとかの外来魚を銛でついてついて今は塩漬け中でさぁ。来週はアライグマをぶった切ろうかと。……知られてないけどあいつら狂暴っすから、マジに戦闘の練習になるんですわ」
何時のの間に琵琶湖行ってたの!?
あと怖いなアライグマ。え、そんなに狂暴なのかよ。
「俺、分家で親兄弟もそこそこいるから家継ぐこともないでしょうか

ら、たぶん悪魔祓い目指してなかったらそっちの専門業者やってたと思うっすわぁ。燻製マジで奥が深いから、悪魔祓い引退したらそっちで食ってこうかなぁ」
この年で引退後の展開とか、しかもそれが薫製関係とか渋いな。
感心しながら燻製を食べてると、ドアが滾々とノックされた。
「まだやってるの？　そろそろお風呂入ったら？」
顔を覗かせたのはカズヒだった。
見る限り、お風呂に入ってたのかほんのり頬が赤い。そういえば別館の一階は男女別でそこそこの大きさの共同浴室があったっけ。
お、九成はカズヒに見惚れてる。ソーナ会長に対する匙並みに惚れ込んでるなぁ。
俺がそんなことを思ってると、更にひょっこり部長や小猫ちゃん、あとルーシアもこっちを覗き込んだ。
「あらあら。ちょっと一緒のお風呂に入ったついでに様子を見たら、そろそろ休んだ方がいいんじゃない、イッセー？」
「そうですよ、先輩方。まだ本格的な開始は数日後ですし、毎日確実に進めていけば余裕で間に合いますから」
そんな風に労わる笑顔で部長とルーシアにたしなめられるけど、俺達ってもしかして燻製食べてるのに夢中で時間忘れてたか？
やばい、ちょっと恥ずかしい。九成とアニルもそう思ったのか顔を赤くして顔を背けてるし。
あ、でもそこまで長い間してたとか気づいてないはずだ。なんとしてもここは誤魔化さないと恥ずかしすぎ―
「……いえ部長、たぶん燻製で時間を潰してます。アニルは燻製を持ち込みすぎないで、美味しいから食べ過ぎる」
「わ、悪い小猫。あと俺の燻製褒めてくれてありがとな」
うん、小猫ちゃんも褒めるこの美味しさ。本当にうっかり食べ過ぎそうだ。
だけどまあ、何て言うかな？
「……なんていうか、意外な組み合わせですね部長。メンバーの統一感があまりないっていうか」

そんな風に思っちゃうなぁ。
カズヒにルーシアだけどか、部長と小猫ちゃんだけとかならまだ分かるよ？　二人ともグループとか立ち位置とかが同じだし。
カズヒと小猫ちゃんってのも、髪の色が白だからなんか分かる。
あとルーシアと小猫ちゃんってのも分かる。二人とも妹だし。属性とかじゃなく妹……あ、部長も妹だった、お姉さまだけど妹だった。
だけどカズヒがなんていうか、違和感あるっていうかなんて言うか。
この四人だと、カズヒがちょっと浮いてる感じがする。
「……あ～、確かにカズヒ姉さんがちょっと浮いてるな。他三人は全員年上の家族がいるし」
「あ、そういや部長って魔王の妹さんっしたね」
九成とアニルもそんな感じだったけど、何故かカズヒは首を傾げていた。
「え？　ならピッタ？
ん？　ピッタ……あ」
俺達が首を傾げてると、カズヒはなんか急にちょっと戸惑った感じだった。
「……それもそうね。他の三人は全員妹だもの。その辺は共通点があるわね」
ん？
なんだろうな。
もしかして、カズヒって親を失う前はお兄さんとか……いたのか？

そんな毎日だけど、何て言うか楽しくやってはいる。
カズヒは基本的に厳しいけど、頑張ってることや成果はきちんと認めてくれるからな。最初はちょっと心配だったけど、きちんと合わせてくれる。

「……あ、イッセー。悪いけど後でノートを貸してくれない？　祐斗にも後で借りるんだけど、二年生の授業がどんな風に進んでるのか、ちょっと確認したいのよ」
なんてことを言われながら、俺は朝食を食べに向かってる。
結局あのあと、ちょっとやっちゃって寝不足気味だったりしてるけど、カズヒはしっかり寝てたっぽいな。
あ～。ただでさえディオドラがアーシアを奪わないか不安なのに、更に睡眠不足とかアホか俺は。
「別にいいけど、カズヒって勉強苦手なのか？　何て言うかちゃんと毎日勉強している印象あるし、ゼノヴィアより成績良さそうなんだけど」
「多方面に失礼ね。ゼノヴィアはあれで勉強できるし、一応教会は教育もきちんとしてはいるわ。ただ私は育ちが悪い方だし、高校の成績だってそんな頂点争いってわけじゃないわよ」
ふ～ん。
なんていうか毎日しっかり勉強して、特に赤点なんて取らないような奴かと思ってた。
「それに駒王学園は偏差値高いでしょ？　偏差値高い高校に通ってたわけじゃないんだから、何て言うか……教師の傾向とかそういった方面も読まないとテストで赤点取りそうだもの」
「そういう方向で採るのかよ」
「あら、やったことないの？　教師の性格から山勘当てる奴」
なんで山勘なんて言葉知ってるんだカズヒ。
と、俺達はそんなこんなでダイニングに到着するけど……ん？
なんか、アニルやルーシア、あとゼノヴィアがちょっと引いてるような気がするんだけど。
「どうしたんだ三人とも。特に変な朝ごはんじゃないけどさ」
「え、いやその……」
「日本食は慣れてませんけど、それ以前に、その」
アニルもルーシアもちょっと困惑してる。
そんな後輩達の代わりに、ゼノヴィアが恐る恐る、テーブルの真ん

中を指さした。
「なあ。なんでこんなところに生卵が人数分置いてあるんだ？」
ん？
俺はテーブルを見る。
ご飯にホウレン草のお浸し。あと味噌汁じゃなくてお吸い物。あと醤油。
味噌汁は外国人は慣れてないこともあるっぽいからそれが理由か？　アーシアはだいぶ慣れてるけど、ルーシアとアニルは、まだそこまで分からないしな。
そしてテーブルのど真ん中に置かれている、籠に入った生卵。
だけど、それはそれとして何があったんだ？
今日の朝ごはんの内容は簡単だし、そんなに驚くことじゃないような気もするんだけど。
何故かリアス部長は事情が分かってるのか、ちょっと苦笑いしてる。
「……あ、お母さま。今日の朝ご飯なんですけど」
「そうなのよぉ。実は昨日、お父さんが親御さんが養鶏所の同僚から卵を貰っちゃってね？　だから久しぶりにこれにしようかってことになったのよぉ」
うん、特に驚くことは無いような。
「……奥様」
ん？
なんか、カズヒがすっごいマジ顔で卵見てるんだけど？
……いやちょっと待て。
同じぐらい熱視線で、リーネスやヒマリやヒツギが卵見てるんだけど。
俺がちょっと聞こうかと思ってると―
「もう食べ始めてもいいでしょうか!?」
―なんか食い気味でカズヒがんなこと言ってきたんだけど。
あとリーネス達もぶんぶんと頷いているけど、同意見か。
すいません、怖いです。

「え？　あ、別に構わないわよ？」
「「「いただきます！」」」
母さんの返事を聞いてから、速攻で四人は生卵を取った。
キレイに一回でヒビを入れると、そのまま殻を割って卵をご飯の上に乗せる。
そして黄身を潰してから醤油をかけるカズヒとリーネスに、醤油をかけてから混ぜ始めるヒマリとヒツギ。
そして見事いい感じに混ざった卵賭けご飯を、勢いよく四人はかきこんだ。
うん、いい喰いっぷり。見てて俺もお腹が空いてくる。
「よっし！　俺もちょっと食べるか！」
「えええええええ!?　あの、今の見てなんで食欲が!?」
卵賭けご飯を作ろうとしたら、何故かアニルが引いていた。
え、どゆこと？
「イッセー！　生卵だぞ!?　過熱してないんだぞ!?」
ゼノヴィアもなんで心配そうにしてるんだよ。
俺がちょっと戸惑ってると、和地がちょっと驚いた顔でカズヒやヒツギを交互に見てた。
「か、カズヒ姉さんもヒツギも、卵賭けご飯食べ慣れてるのか？」
……ん～？
俺が訳が分からないでいると、部長が苦笑してた。
「イッセー。生卵を食べるのは世界的には奇食に入るのよ」
「え、そうなんですか!?」
マジで!?
卵かけご飯って美味しいのに。あ、そもそもご飯食べる方がどっちかというと少ないのか。
でもそういう意味でもなさそうだしな……。
俺が驚いていると、朱乃さんがニコニコしながら俺にお茶を入れてくれた。
「うふふ。世界には「生卵を食すのは日本人と蛇だけだ」というジョークもありますの。いわゆるロッ○ーとかのあれも、目的の為にリスク

や手段を択ばない人物と見せる為の演出らしいですわ」
まじか。あれそんな覚悟がいる行為だったの!?
俺はそこまでびっくりして、ふと振り返る。
「「「おいしー♪」」あと久々ー♪」」
なんていい笑顔で卵かけご飯を食べてるんだ。日本人でもあそこまで感極まる奴はいないと思う。いや、ヒマリやヒツギはたぶん日系の血が入ってると思うけど、名前的に。
「すいませんお代わりほしいんですけど卵まだ残ってますか!? 我慢できないです！」
「やばっ！ なにこれ、何て言うか前世の恋人に巡り合った的なあれがするんだけど!? は、もしかして私、前世純日本人!?」
カズヒとヒツギの反応に至ってはマジで怖い。どんだけ卵かけご飯に感動してるんだよ。
「久々に食べると感動ねぇ。しかも卵も新鮮だから涙出てきそうだわぁ」
「ふぉおおおおおお！ お代わり！ むしろ晩御飯もＴＫＧを所望しますわ!!」
いや、リーネスやヒマリも十分すぎた。
「うん、卵かけご飯食べると日本にいるって実感するな。ザイアにいた時とか全然食べれなかったからなぁ」
九成も大概感動してるし。
そっか。卵かけご飯ってそんなレベルで珍しいのか。
ってことは、カレーに生卵入れるのは日本だけなのか。インドでもやってると思ってた。

こんな風に、毎日が時々刺激的だけど面白いことも起こってる。
だけどまあ、トラブルもやってくるんだよなぁ……。

魔性変革編　第三十四話　学園内のひと時と、学園内での真面目な話

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで毎日を過ごしているけど、体育祭に参加できるとか、何て言うか夢みたいだな。
色々と学園生活は無縁だったから、こんな形で高校生になれるとは思ってなかった。少なくとも更に一回参加できる可能性があるんだから、これは本当に楽しもう。
そんなわけで、俺達学生は体育祭に備えてトレーニングとかも色々やっている真っ最中。
「負けないわよゼノヴィア！」
「いや、私が勝つ」
だけどお前らはもうちょっとセーブしろ。オリンピックに出れる速度で走るな。
「走ることで揺れるおっぱい。……久しぶりに癒しを感じたぜ」
「だが揺れすぎるとこう味がない。やはりおっぱいは適度な速度で揺れないとな」
「ああ。覗きに行けない環境で、おっぱいがこれだけ貴重だなんて思ってなかったぜ」
遠い目であほなことを語る松田、元浜、イッセーは無視しよう。同類に思われたくない。
と言っても―
「さあ、障害物競走ならこういった運動ができると有利よ。あとで一人一人コツを教えるからやってみなさい、障害物競走参加メンバー！」

「うっす！　でもそれ、国体レベルの新体操選手とかの領域な気がすっぞカズヒ！」
「っていうかバク転を呼吸するようにやれるとか何者!?　オカルト研究部じゃなくて新体操部（チーム）に来て！　せめて助っ人でもいいから、絶対大会でそこそこいけるから!!」
そんな感じでカズヒ姉さんはカズヒ姉さんで人気が出てるな。
っていうか過酷なトレーニングだけど面倒見がいいから、体育会系との相性がいいな。転校してから日が浅いのに、もうクラスに溶け込んでるよ。
俺もあのレベルに溶け込みたい。学生生活を友達の方面でも満喫したい。
……まあ、イリナよりは溶け込んでいる気もするが。
あいつ、やばい新興宗教みたいなクラブを自分で作って勧誘してるからな。変人で認識が統一しそうなんだが。
ちなみにアニルもルーシアもオカルト研究部の方に所属してた。
アニルは料理研究部とかも考えてたみたいだけど「炊き出しとかのボランティア活動にも参加したいし、俺は燻製専門なんで」って感じで、その辺りの自由を利かせる代わりにオカルト研究部に。
ルーシアに至っては「そもそもの目的を考えると、オカルト研究部に属するのが一番です。いざという時の連携も取りやすいですし」って真面目な理由で、こっちは速攻でオカルト研究部だった。
ヒツギは転校生であることを良いことに、いろんな部活に体験入部とかしてエンジョイ中。カズヒ姉さんは一応オカルト研究部に属しているけど、女子運動部に覗き警戒の助っ人を頼まれたりしている。あと体術関係の部活から、異種格闘技戦を想定した模擬戦相手（アグレッサー）を頼まれたりもしてる。
……一年生の方が連携取れてるような気がしてきた。あと、名義上はリーダー格のイリナが一番ダメじゃないだろうか？
ま、まあ馴染んでるということで、いいだろうん。
俺が自分を納得させていると、ふと隣に誰かが立った。
「おっす。何してんの？」

「お、鶴羽。……いや、何て言うか周りを見てたら感慨深くなったっていうかちょっと教会が心配になったっていうか」
体操服姿の鶴羽ってちょっと新鮮な気もする。
……やばい。エロいことした関係だからそういうそそる感情が出てきた。
深呼吸深呼吸。心を落ち着けろ。
俺がちょっと挙動不審になってると、鶴羽は少しニヤついていた。
これは気づかれたな。やっぱりこういうのは女の方が優秀なんだろうか。
「……ふふん。まあ、私は可愛いし出るところも出てるから、気になっちゃうのは当然よねっと。じゃ、悪いけど私も用事あるから」
あれぇ？
「え、ああ」
俺は返事をしたけど、なんかよく分からない感じだった。
なんだろう。確かに鶴羽は淫乱とかいうわけでもないけど、そういう関係として流れ的にこぉ、もうちょっとからかわれるなり誘われるなり怒られるなりすると思うんだけど。
っていうか、ザイアにいた頃はそういったこともあった気がする。
これはあれか。鶴羽もここ数年で成長してるってことか。
男子三日なんとやらとかいうし、女子だってそういうことになりえるよなぁ、うん。

それはそれとしてちょっと寂しい。
なんとなく、水分補給として体育館側の自販機に行きながら、俺はちょっとした寂しさを感じてた。
ちょっと前に再会した時は大したこともなかったんだけど、なんか急に鶴羽に距離というか壁というか、違和感とでもいうべき何かが見える。

俺、何かしたか？
首を傾げながらスポーツドリンクを買って取り出した時、背中に柔らかいのが当たりながら、しな垂れかかられた。
……あ、これヒマリのおっぱいだ。
この感触だけで分かる当たり、俺も大概慣れてるな。この辺も普通からずれてるというか、ザイアの功罪はどう考えたらいい物か。
「どうしたヒマリ？　そっちはそっちで体育祭の練習中だろ？」
「そうですのよー。で、気分転換にちょっと相談がありますのっと」
そんなことを言いながら、ヒマリは俺を引っ張って校舎裏に。
いやちょっと待ってちょっと待って。
お前あれか。まさかあれか？
「おいおいエロマンガじゃあるまいし、校舎裏でヤる気か？」
「ふふん。ちょっと違いますのよ？」
ちょっと？
ちょっとってどこが違う？
……別の意味で嫌な予感がする。具体的には、斜め上を飛び越えているかのような嫌な予感が。
状況次第では張り倒すことも考えながら、俺は警戒しつつ引っ張られていくと、そこに見覚えのある女の子が。
「……なんで和地までいるわけ、ヒマリ？」
「それはもう、和地がいなければ始まりませんもの！」
そこにいたヒツギも、詳しい理由は知らされてないみたいだ。
……凄く嫌な予感がする。具体的には、本気で張り倒した方がいいレベルのそれが。
そんな俺の気持ちも知らず、ヒマリはヒツギの後ろに回ると、その肩に手を押しながらにっこりとほほ笑んだ。
「和地にヒツギも、ヤリ直しですのよ？」
ほら、こいつは時々こういうこと言う。
俺は盛大に肩を落とし、額に手を当てて俯いた。
何がどうしてそうなるわけだよ。
うっかりお酒を飲んで酔った勢いでやらかしているだけでもアウ

トだってのに、第二ラウンドを校舎裏とかどんな発想をしたらそうなるんだ。
「なななななぁ⁉　ちょ、ヒマリ、なんでそうなるかなぁ⁉」
ほれ、ヒツギも顔真っ赤だし。
あーもう度したもんかなこれはぁ。
「とりあえず、俺はする気もないから落ち着けヒツギ。そしてヒマリはまずなんでそんな発想に至ったのか言ってみ、ん？」
まだ飲んでなかったスポーツドリンクをヒツギに渡して落ち着かせながら、俺はヒマリにジト目を向ける。
ヒマリはヒマリできょとんとしながら首を傾げるのは可愛いけど、とりあえず説明しろ。
「えー？　だってヒツギってば、どうも初体験のことを殆ど覚えてませんのよ？　和地のテクから言ってそこそこいい初体験でしたでしょうに、覚えてないなんてそれは可哀想ですわ」
そんなことを言っているヒマリは、悪戯とか悪意は全くない。
むしろ労わるような目でヒツギを見て、本気でヒツギの為を思って行動している感じすらある。たぶん実際そうだろう。
だけど何でそういう方向性なんだ。
あとその得意げな表情やめろ。……違うドヤ顔に移行するな。
「だったらもうちょっとムードというかテンションが上がる形で上乗せして、ぱぱっといい思い出を増やすべきですもの！　なんなら、私も手伝いますのよ♡」
「いやいやいや！　しなくていいから！　むしろ黒歴史として忘れたいから!!」
ですよねー。
顔を真っ赤にして首をぶんぶん横に振ってるヒツギの方が意見としては真っ当な気がする。
というか、一見するとお嬢様口調で雰囲気もちょっとはあるヒマリがエロに寛容で、遊びなれたギャルっぽいヒツギが信徒でそっちに潔癖気味って、何て言うかギャップあるな。
元々仲が良いけど、妙な凸凹コンビ感がある。

ま、そこはどうでもいいわな。
俺も流石に収集つけたいし、どこかで見られてたらまずいからスパッと終わらせよう。
「アホかおまえは。ただでさえやらかしてちょっとお互いに気まずい所があるのに、なんでこんなアブノーマルなプレイで上書き何て発想になる！　あと３○にしようとするな」
初体験が微妙な形になってるのを解消する為に、３○は無いだろ、普通。
俺はヒツギを庇う様に前に出ると、ヒマリの両肩に手を置いて、説得を試みる。
「落ち着け。そもそもヒツギは信徒の中でもそれなりに顔な、デュナミス聖騎士団だぞ？」
「そうですわね。……それがどうしましたの？」
分かってないなお前。
こういうところが困ったというか天然というか。いや、可愛いのは可愛いんだけど、そういう問題でもない。
俺は深呼吸を一つついてから、分かり易いように言葉を選ぶ。
「信徒は色欲を大罪にして、貞淑を美徳としているわけだ。酔った勢いでエロいことしてしまいましたってだけでも問題なんだから、そこから問題を上乗せするな」
「うんうんうんうん！　私一応信徒だから！　それもガチ信徒の羨望の的な精鋭だから!?　そういうのは要らないからね!?」
後ろで食い気味にヒツギも頷いていた。
「えー。でも初めての経験がよく覚えてなくて、それから気持ちいいＳ○Ｘを知らないのも可哀想ですわよ。一度ぐらいは気持ちいい経験をしても罰は当たりませんのよ？」
言いたいことは分かるが、信徒的にはあれだろうしなぁ。
本人は悪意なく善意で動いているから始末に負えない。
しかもヒマリはこういう時、理屈ではなく感性で動くから、理詰めの説得が難しい。
ヒツギはヒツギでこういうことに初心（ウブ）なのか、それとも振り回され

体質なのか。ちょっと冷静な立ち回りができるような状態でもない。
　これはどうしたもんか―
「ハイそこぉ！　特にヒマリ！　ストップ学内淫行!!」
「「うわぁっ!?」」
　―と思った瞬間、上から鶴羽が舞い降りた。
　どこから来た!?
　そう思った瞬間、今度は近くのマンホールが開いて飛び出す影が。
　ってリーネス!?　お前もなんでそんなところから出てくるんだよ。
「そこまでよぉ！　健全な高校生活に３○なんて許さないわぁ！」
「リーネスに鶴羽もですの!?　そ、そんな、私は折角ならＨの思い出は良い思い出にするべきだと―」
「「はいシャラップ！」」
　問答無用で二人はヒマリをとっ捕まえると、そのままずるずると連行する。
「じゃ、私達はヒマリ（このお馬鹿）を会長のところに連行して説教してもらうから。そろそろ練習に戻ってなさい」
「あと、今日の部活動は異形がらみが主体になるからその辺りを心の準備をよろしくねぇ？」
　にっこりと全然笑っている風に見えない笑顔で言ってきてから、そのままヒマリを連れて二人は去っていく。
　なんか慌てているみたいだったけど、何がどうした？
　いや、まあ、助かってはいるな。ならいいか。
　細かいことは後で考えよう。それより早くするべきことは一つだ。
「あー、ヒツギ」
「ひゃい!?　な、ななななんじゃんか!?」
　顔を真っ赤にして慌てないでくれ。
「お前にそのつもりがないのにそんなことを素面でする気は無いから安心しろ。とりあえず、妙な誤解がされないように時間をずらして戻ることにしないか？」
「お、おぉう！　私はちょっと心を落ち着けるから、和地が先に行っていいよ！」

うん。顔真っ赤だし、今から出てったらすぐに怪しまれるわな。
「よし！　そのスポーツドリンクは迷惑料変わりだ。しっかり飲んで落ち着いてから戻って来いよ？」
俺はそういうと、足早に校舎裏を去る。
それとなく周囲を確認するけど、とりあえず他に人はいないらしい。
……変に騒がれることは無さそうだな、ちょっとほっとした。
だけど、なんであのタイミングで慌てたように鶴羽やリーネスが突入してきたんだ？
まさかと思うが見張ってた？　いや、いくら何でもそんなことは……なぁ？

「お前はお前で体育館倉庫で何してんだ」
「未遂だよ！　それにアーシアにそんなことするわけないだろ！」
なんでもイッセーはイッセーで、体育館倉庫でゼノヴィアに連れ込まれてアーシアまで巻き込まれたらしい。
イリナが気付いて乱入して、頓珍漢な指摘をしたことで空気が台無しになって終わったそうだ。何を指摘してるんだあの天使は。
というか、イッセーはイッセーで何を言っているんだこいつ。
アーシアがお前のこと大好きなのは分かり切ってるだろうに。むしろ据え膳だぞそれ。
俺が呆れた目を向けてると、イッセーはうんうんと頷きながら殊勝な顔をする。
「俺はアーシアに兄のように慕われてるからな。いつか花嫁修業の成果を誰かにするのはめちゃくちゃ嫌だけど、それまで俺がしっかり守るんだ」
イッセーは病気か何かだろうか。

真剣に医者を探すべきか、俺は真剣に考えたくなった。
どう見てもそんなノリじゃないだろ。完全にＬＯＶＥのあれだろ。兄じゃなくて男として見てるだろうがあれは。
ツッコミを入れるべきか悩んでいると、イッセーは盛大にため息をついた。
「まったくゼノヴィアにも困ったもんだぜ。強い子供を作りたいってのがあいつの夢なのは知ってるけど、アーシアを巻き込むんじゃありません。俺も流石に最初の経験が種馬ってのは……いやそれはそれで」
「いいのかよ」
脱線したイッセーにツッコミを入れるけど、本当に色々と心配になってくるな。
既にゼノヴィアもイッセーオンリーワンでロックオンしているみたいなんだが。どう考えても種だけを目的にしてないだろマジで。
モテる気ないだろコイツ。
俺はそう思いながら、とりあえず部室のドアをノックしてから入る。
「和地とイッセー、入りまーす」
「おう、遅かったな」
と、アザゼル先生が返事をする。
他のメンバーもほぼ集まってるな。というか―
「どうしました、イッセー。何か悩んでいるようですが？」
「ああ、シャルロット。ちょっと今後の俺のハーレム王を目指す方向性とか、色々と悩んじゃってさ」
普段は学業中の駒王学園には入っていないシャルロットまで来てた。
シャルロットはその辺をきっちりしているというか、悪魔稼業の時間帯でもない限りはこっちにはあまり来ないんだけどな。
これは本当に異形（こっち）側の話が主体みたいだな。
普段みたいに駄弁るとか、そういった感じじゃなさそうだ。むしろガチ目の事態と考えるべきか、これは。

俺がちょっと気を引き締め直していると、リアス部長が真剣な表情を俺たちに向けてきた。
「……知っている子が殆どだけど、聖ミカエル監察団の子達は直接聞いたことも無いから、まずはそこから話をまとめるわね」
そう言いながら、部長は簡単に説明する。
夏休みにグレモリー眷属が冥界に行った時期の一幕。その前半にあった若手悪魔の会合。
魔王排出家や大王及び大公の次期当主に、そんな彼ら勝るとも劣らない若手悪魔の有力者達が、眷属を引き連れて会合した一幕。
その時色々とひと悶着があったが、最後にサーゼクス様が若手悪魔同士のレーティングゲームを提案した。
その所詮はリアス部長とソーナ会長の対決。俺はリアルタイムでは見なかったけど、ソーナ会長たちシトリー眷属が試合に負けて勝負に勝った形だ。
現地の構造や特色を生かしギャスパーを速攻で撃破。更に堕天使側の技術を利用してゼノヴィアを撃破。とどめにイッセーを、匙が禁手に至ってない上に格下の神器で時間差だが相打ちに持ち込んだ。
封印が解除されたばかりで、封印されるだけのポテンシャルを持つ変異（ミューテーション・ピース）の駒のギャスパー。伝説の聖剣デュランダルを扱う、期待のルーキーであるゼノヴィア。とどめに前日に禁手に至った、いろんな意味で注目の的であるイッセー。
グレモリー眷属の評価を上げる要素ともいえる三人をことごとく撃破されたことで、部長の評価はかなり削れたらしい。しかも有数のアドバンテージともいえるアーシアをやられたことも踏まえれば、もうけちょんけちょんだろう。
木場がデュランダルを使うという変則運用や、朱乃さんや小猫ちゃんの本領発揮、更にイッセーの新技といった要所要所での活躍はあった。だけどこのけちょんけちょんをひっくり返せるほどじゃない。
そんな第一階から波乱の幕開けだったのはよく覚えているけど、その続きか？
俺が考えていると、部長が何かを言う前にアニルが手を上げた。

「質問っす！　それって俺達聖ミカエル監察団が聞いてもいいんすか？」
　ああなるほど、その辺を気遣ったのか。
　まあ確かに和平を結んだばかりで、あんまり情報を明かすのは問題視する奴もいそうだしなぁ。
　俺はそう納得するけど、部長はその懸念を払拭するように微笑んだ。
「大丈夫よ。このレーティングゲームの映像は、見ようと思えばイリナさんほどの立場なら入手できるし、上はいくらかの試合を公式レーティングゲームと同様の手法で放送することも考えているもの」
「そうよアニルくん！　主の代行たるミカエル様の名のもとに、私達三大勢力は和平を結んだもの！　皆仲良くゲームも仲良く！」
　そんな風にイリナが胸を張って宣言すると、ちょっと笑みが周囲にこぼれる。
　ルーシアはそんなイリナに微笑みながら、部長達にも笑顔を向けて頷いていた。
「……そうですね。なら、次のゲームは私達も応援します」
「私もしますのよー！　あ、でもこういうのはホットドッグを片手に見るべきものですの？」
　ヒマリ、ルーシアを見習ってもうちょっとこぉ、考えた発言をだな。
　そんな感じで空気が緩んでると、部長は何故か表情を鋭くした。
「……ただ、グレモリー眷属（私達）としては笑えないわ。何せそれぞれ第一試合が終わった形だけれど、1位のサイラオーグ・バアルと3位のイシロ・グラシャラボラスが、それぞれ6位のノア・ベリアルや8位のディオドラに敗北したの」
「「「

そんな面食らってる悪魔側に付いていけてない俺達のうち、ヒツギは隣にいたゼノヴィアの方を振り向いた。
「えっと、ゼノヴィア？　どんな実力者だったの？」
「そうだな……。サイラオーグ・バアルの動きは騎士の私や木場以上で、一撃を放った時の轟音は鎧を着たイッセーでも模擬戦では出したことがないほどだ」
冗談だろ。
木場以上のスピードで動いて、イッセー以上の拳だと？
鎧を着たイッセーの拳は、文字通り最上級悪魔に手が届くレベルだ。正式にイッセー側が禁手になったこともあって、一対一でもコカビエルと殴り合いで勝ち目があるだろう。
それ以上って、生身でコカビエルを殴り倒せる余地があるってことだ。寒気がするな。
俺が戦慄していると、ギャスパーもなんかがくがく震えていた。
「イシロ・グラシャラボラスさんはそんな拳を顔面に貰ってピンピンしてましたぁ。その後不意打ちでゼファードル・グラシャラボラスさんをボコボコにしてましたよ」
あ、そういえばそうだったな。
「もろに喰らってって、会合の揉め事ってやつ？　何したのさその女」
ヒツギがちょっと引いてるけど、確かそれ違う。
小猫ちゃんが思い出してちょっと遠い目をしながら首を横に振ってくれた。
「……いえ、やらかしたのはゼファードルの方でしたが、性癖に従ってパワートップ２のお二人の攻撃を喰らおうとして割って入ったんです」
「……そんでもって、思わず手を止めて攻撃を叩き込まなかったゼファードルにキレて、マウントポジションで殴りまくったんだよ。あれはとんでもないドＭだな」
イッセーも遠い目をして乾いた笑いが口に浮かんでる。
うん、今聞いてもちょっと引くなソレ。
「……となると、順当な決着は残りの二試合だけですか。序盤から大

荒れですね」
シャルロットが気を取り直してそう言うけど、アザゼル先生が首を横に振った。
「ところがどっこいそうでもない。２位のヴィール・アガレスは９位のゼファードルをフルボッコにしたが、５位のシーグヴァイラと七位のフロンズ・フィーニクスの試合は、いうなればリアスとソーナの試合に近い」
え、マジで？
それってつまり、フロンズ・フィーニクスが試合に負けて勝負に勝ったような勝ち方を下ってことか。
ど、どんな勝ち方したんだ？
俺達がマジ顔になっていると、先生も真剣な表情をしながら、持っていた資料を見ていた。
「……もっとも、ヴィール・アガレスにおいても色々と見えてきているからな。下馬評通りの結果になった試合なんて一つもねえ。ある意味豊作だな、この年の若手悪魔はよ」

だいぶ後にこの言葉を思い出して、俺は本当にそうだとすら思った。
この十人の若手悪魔、その殆どがのちの世界の趨勢を揺るがす戦いに深く関与することになったからな。

魔性変革編　第三十五話　狂王蹂躙

イッセーＳｉｄｅ

なんかとんでもないことになってる若手悪魔のレーティングゲーム。
その映像もあるということで、俺達はそれを見ることになった。
「それで、どれから見せるの？」
「そうね。まずはヴィールとゼファードルのゲームから見るべきでしょうね。これが一番見やすいともいえるわ」
カズヒにそう答えながら、リアス部長は映像を映し出す。
ちょっとドキドキしてたけど、そんな気持ちは映像が進むにつれて吹っ飛んだ。
……壮絶な戦いなんてもんじゃない。趨勢は一瞬でついたと言ってもいい。
「……失せろ」
鎧を着た男が絶大なオーラを放ち、
「詰まらなさそうなのばっかりだし、ちゃちゃっと終わらせる方向でっと」
綺麗な女性が氷の剣を作ると、一瞬で相手を切り刻み、
「あんたらなんかに手こずれないのよ、雑魚ども!!」
俺と同じぐらいの赤毛の女の子が、両手に右手に炎を纏って相手の女王（クイーン）を一発で叩きのめした。
此処までにかかった時間は二分もない。相手のチームに接触した直後に決着をつけたって言ってもいい。
圧倒的だろ、おい。
「凶児とまで呼ばれたゼファードル。その眷属も決して弱いわけではないというのにこれとはね」

「……プロのプレイヤーと模擬戦をして、幾度も勝っただけのことはありますわね」
木場と朱乃さんが目を細めながらそう言うけど、俺だって凄いのが分かるよ。
確かあの三人だけが、ヴィール・アガレスの眷属で戦闘要員。それ以外は研究者とかそういったのなんだろ？
どいつもこいつも、俺が鎧を着ても真っ向勝負で負けそうなぐらい強いじゃねえか。
そりゃあんなのが三人もいたら、他の眷属が戦闘要員じゃなくても二番目になれるって。三人がかりならコカビエルだって倒せるだろ。
と、そんな圧倒的不利な状況下でゼファードルと残った一人の眷属は賭けに出たみたいだ。
残った眷属がたった一人でその三人相手に凌いでいる間に、ゼファードルはヴィールに向かって一直線。
っていうか凄いなあの兄ちゃん。あんな化け物じみた三人相手に、たった一人で凌いでる。
「……あ！」
その時、ギャスパーが何かに気づいたのか声を上げた。
『……ほぉ』
「おぉ……」
「……へぇ」
と、ドライグに九成に先生が、そんな戦闘の様子を見て感心してた。
「どうしたの、ギャスパー？　それにアザゼル達も」
部長がそういうと、ギャスパーはその眷属を指さした。
「この人、冥界のパーティ会場で会ったことあります。僕は気づかなかったけど、ヒマリ先輩が言うには戦意がないけどいつでも戦える動きだったって」
「思い出しましたの！　確かにあの人ですの！」
ヒマリも思い出したってことは、本当なのか。
なんていうか納得って感じの動きだよなぁ。油断が全然できな

いっていうかなんて言うか。
「場慣れしてるわね。いえ、むしろ老練と言ってもいい動きだわ」
「そうッスね。あれ、才能があるとかそういう以前に二十代ができる動きじゃないっすよ？」
「かなり前から悪魔になっていた人が、トレードとかいう制度で眷属になったのでしょうか？」
カズヒがそう呟いてからアニルやルーシアが首を傾げるけど、俺はその辺の動きはさっぱり分からない。
やっぱり何年も鍛えてる人は違うな。
それに何十年も鍛えてるなら、あの動きにも納得だな。そりゃ強くもなるって。
俺はそう感心してたけど、なぜか部長は首をひねっていた。
「あら？　でも数か月前にたまたまあってスカウトしたとかそんな噂よ？　純粋な人間とも聞いたけれど」
「噂は噂ってことじゃないかしら？　ほら、根拠もないのに変な噂を流す人っているじゃないですか」
イリナがそういうけど、つまりそういうことなんだろうか。
っていうか、九成も会ったことがあるなら応えてほしいんだけど――
「よしそこ……危な……ふぅ……」
――凄い白熱して見入ってるな、オイ。
っていうかコレ、記録映像だからな？　実況中継とかじゃないからな？
「……よし、行けぇぇぇぇぇぇ！　……だぁぁぁ！　惜しい!!」
「なんか凄い白熱してますのね」
「熱中していて楽しそうですわね」
ヒマリや朱乃さんがそう言ってるけど、和地は全然聞いてない。
だけど問題はそこじゃない。
その眷属が足止めしている間に、ゼファードルはヴィールの下に辿り着いた。
『ヴィール！　てめえ、俺と一対一でケリをつけようじゃねえか！』
『……』

唾を撒き散らしながらそう挑発するゼファードルに、ヴィールは無言だった。
むしろ何て言うか、呆れてるとかそんな感じか？
なんか見ていて不安になるぐらい、戦おうって雰囲気を感じない。
一応試合中の映像だってのにだ。
そんな無反応に、ゼファードルは業を煮やしたのか、両手に魔力を籠めて、ヴィールに突きつける。
『この糞野郎が！　人の話を聞かねえならぶち殺―』
その瞬間―
『少し黙っていろ、塵が』
―何時の間にか、ゼファードルの後ろにヴィールがいた。
しかも、籠められていたゼファードルの魔力も吹き飛んだ。
え？
俺達の殆どが面食らってる中、ゼファードルも慌てて反応して振り向こうとして―
その勢いのまま、地面に何故か倒れこんだ。
俺達は慌てて視線を動かして息を呑んだ。
ゼファードルの四肢が、膝や肘の当たりから切り落とされている。
ヴィールはいつの間にか手刀を形作っていて、そこから魔力で作られた刃が見えていた。
まさか、今のすれ違いざまに切ったのか？
ゼファードルは混乱していたけど、やがて自分がどうなっているのか気付いて、顔を真っ青にする。
『ひ、ひぃいいいいいいいギィッ!?』
『騒ぐな、鬱陶しい』
その顎を踵で砕きながら、ヴィールはゼファードルを見てもいない。
ヴィールが見ているのは遠くの戦闘。三人の眷属が戦っている方向だけを見ていた。
『なるほどな。お互い本気ではないだろうが、あそこまで戦えるとは末恐ろしい奴だ。だからこそ……なのだろうがな』

なんかちょっと感慨深げだけど、そのあとふと何かに気づいて足元を見る。
『あびゃ……りりゃうぃぃ……りりゃうぃぃ……』
『……思ったより頑丈だな。まあいい、降参するのならそれらしい倒し方をしてやる』
涙をぼろぼろ零しながら、砕けた顎でうわ言みたいに投了（リザイン）を言おうとしてできなくなっているゼファードル。
見てて思わず同情するけど、ヴィールはなんていうか、捨て損ねたゴミに気づいた表情で、ゼファードルを片手で掴み上げる。
そして本当に軽い感じで、何十メートルも上に投げ飛ばした。
『お前みたいなカスにうろつかれても迷惑だ、……粉みじんに砕いてやるから、そのまま永久に不貞腐れてろ』
もう片方の手で、洒落にならないぐらい絶大な魔力が込められた。
というよりあれ、リアス部長やライザーより強い魔力な気がするんだけど。
実力だけならＮｏ２。あのサイラオーグさんの次に強いと言われている、若手上級悪魔。
その洒落にならない大魔力が、ゼファードルを一瞬で包み込んだ。
『……ゼファードル・グラシャラボラス様の撃破（テイク）を確認。ヴィール・アガレス様の勝利です』
圧倒的。そんな言葉をつけるしかない。
それが、ヴィール・アガレスとゼファードル・グラシャラボラスのレーティングゲームの顛末だった。

五分ぐらい、皆黙ってしまっていた。
戦慄っていうかなんて言うか。たぶんだけど、もし俺達じゃなくてヴィールがコカビエルと相対してたのなら、カズヒ達やリーネス達がいなくてもコカビエルをどうにかできたんじゃないかって思う。

あれで二番目に強いって、サイラオーグさんとかどんな実力者なんだよ。魔王様に喧嘩売れるとかそんなレベルか何かなのか？

「あの、若手悪魔のトップ２って、洒落にならない強さなんです……ね？」

俺はなんていうかちょっと引きつりながら言ったけど、先生と部長は静かに首を横に振った。

え、どういうこと？

「……イッセー。私はサイラオーグが模擬戦をする光景を何度も見てきたけど、あのヴィールほどの力を見たことは無かったわ」

え？

思わぬ言葉に俺達が面食らってると、アザゼル先生は納得した感じで頷いてた。

「だろうな。ヴィールの奴、どうやらまだまだ手を抜いているみたいだしな」

え、

俺達は思いっきり、さっきの映像を見る。

……めっちゃ強かったよな、ヴィール。

あれでまだまだ手を抜いている？

「……冗談ですよね？　あれでまだ手を抜いていると、そんな強さではないでしょう？」

木場がそう言うけど、先生は静かに首を横に振った。

「残念だが、あいつはまだまだ余裕がある。切羽詰まるというか本腰を入れるというか、そういう感覚を一切見なかった。……最も」

そう言いながら、先生は映像を戻した。

再生されるのは、ゼファードルの眷属がたった一人でヴィールの武闘派眷属との戦いだった。

「ゼファードルの眷属と、あと氷使いの女もそうだろうがな。他二人も伏せ札はありそうだが本腰を入れていて、だかあの二人は本腰すら入れてない」

おいおいマジでかよ。

俺達全員、あの戦いは本気の本気だとばっかり思ってた。

だけどまともに戦ってた連中全員。まだ奥の手とか切り札とか本気モードとか隠し持ってるのかよ。
「……だな。春っちも贋作抹消連盟とやり合った時に禁手っぽいの使ってたけど、今は使ってなかったし」
「あ、そっか。あの赤い髪の子、お前の幼馴染だったとかいう子か！　そういや禁手っぽいの使ったって言ってたな」
九成が白熱してたのも当然だし、隠し玉があるってのも納得だったな。
確かあの子が、テロリストの星辰光で極寒になって他施設内を一気にあったかくしたって話だったな。
俺が思い出してると、先生も映像を確認しながら首を捻ってた。
「いや、あの嬢ちゃんが使ってるのはおそらく赤き炎の腕（アーム・ファイヤ）だろう。右手に炎を纏うのが基本で、極めて放てるようになっても右手限定は変わらないはずだ」
あ、そうなんだ。
でも映像では両手に纏ってるけど？
「既に禁手ということではないですか？　伏せ札や隠し玉がその上であるのなら、先ほどの判断と矛盾は無いと思いますが」
シャルロットが指を口元に当てながら言うけど、先生はそれでも首を捻ってた。
「いや、それだと出力がでかすぎるだろ。赤き炎の腕は神器としちゃそこまで強力ってわけでもねえから、禁手になっても最大性能はそこまで高くねえんだがなぁ」
ん～。なんかよく分からないことになってるな。
先生は本気で気にしてるみたいだけど、リアス部長はため息をついてから首を横に振った。
「……まあ、それはいいでしょう。私達（私達）はゲームでとはいえ争うのだもの。全てをグレモリー眷属（達）と近しいアザゼルや和地に明かせるわけではないわ」
「まあそうね。初見っていうのはそれだけで優位性が変わるものだし、今後のレーティングゲームを見せるのなら手札を可能な限り伏せ

るのは立派な戦略的選択肢だわ」
カズヒもそう言って頷いた。
まあ確かに、そういやそうなんだよなぁ。
「確かにカズヒの言うとおりだ。それに、他の試合もある以上はあまりこの試合だけに時間をかけられないか」
「……考えるのは後でまとめてですね」
木場と小猫ちゃんも頷いて、次の試合を見ることになる。
でも後三試合か。結構長いな。
「では、次はどの試合にしますか？　先を見据えるなら次に当たりそうな相手から見るのがいいと思いますが」
ルーシアがそういうと、先生は切り替えたのかすぐに魔方陣を操作し始めた。
「なら、サイラオーグとノアの試合だな。リアスのチームとタイプが近いサイラオーグとは、近いうちにやり合うことになるだろう」
「少し早いのではなくて？　次になるのならゼファードルだと思うのだけれど」
部長がそういうけど、先生は首を横に振った。
ん？　なんかあるのか？
俺が首を傾げてると、今度はカズヒが肩をすくめた。
「ゼファードルはもうリタイアでしょうね。どう見積もってもしばらくは試合ができるとは思えないわ」
「むしろ一生試合が出来なくても驚かねえがな」
先生までそんなことを言うけど、どういうこと？
「どうしたというのだ？　負けて悔しいのは分かるが、だからこそ雪辱に燃えると思うのだが」
「いや、そんなことはゼファードルは考えてもいないだろうさ」
ゼノヴィアがそう言うけど、先生はそう返した。
「奴はもう駄目だ。ヴィールに一瞬かつ徹底的に、しかも自分の全力をあっさり打倒されて負けたことで心が折れてるよ」
心が、折れてる。
……諦めなければ案外何とかなる困難って多いけど、困難を前に諦

めちまったらできることもできなくなる。
俺達がここまでこれたのは、困難が遭っても諦めずに頑張ってきたからだ。逆に、才能があっても諦めちまったら困難を超えられないってことか。
なんていうか、なぁ。
もったいないとかそんなことを思っちまう。
「己の夢に一切の妥協も躊躇もない奴は、相手の精神を殺す気で挑むことは十分ある。サイラオーグ・バアルにしろヴィール・アガレスにしろ、殺すぐらいの腹積もりで仕掛けてくる連中は怖いから気を付けとけ」
先生はそう言うと、だけどちょっと目を伏せた。
「最もそれは恐れだけじゃなくて恨みも向けられるがな。だからこそサイラオーグは敗北したと言ってもいい」
「……でも、そのサイラオーグって人は若手悪魔ナンバーワンで、ノア・ベリアルって人は六位で圧倒的に不利だったのに、どうやって勝ったのかしら？」
イリナが気になるのも分かる気がする。
俺はサイラオーグさん達のことはよく知らないけど、若手ナンバーワンってことはめっちゃ強いんだろ？
それにノア・ベリアルとフロンズ・フィーニクスは結構な頻度で眷属のトレードを行っているとか聞いたことがある。
リアス部長もその辺りは当然知っているから、少し首を傾げていた。
「そうね。フロンズとノアは一部の側近を除いた眷属は、定期的に未使用の駒や他の悪魔の眷属と交換して、一年もすれば殆どが入れ替わるわ。当人達は「どんな時でも一定の指揮能力を得る練習」と言っているけれど」
「奴さんは自前の眷属じゃなくて、領地や臣民規模で強化する方針のようだしな。そもそも眷属悪魔って奴を「直属の部下」程度で認識してるんだろうさ」
先生はそんな部長に頷きながらそう言った。

「奴からすれば戦力は側近じゃなくて配下の軍勢レベルで揃えるべきものってことだ。だから直属は軍事力じゃなくて技術力を重視しているし、レーティングゲームそのものも民営化してスポンサーに回りたいってところなんだろう。……そして」

そう言いながら、先生は目を細めて映像を再生させる。

「そのスタンスがよく分かる一戦の一つがこれだ。見とけよ、ノア・ベリアルのサイラオーグ潰しをな」

魔性変革編　第三十六話　大王封殺の計略

祐斗Ｓｉｄｅ

そのレーティングゲームは、僕達がソーナ会長達と行ったレーティングゲームに近い試合形式だった。

大型の高層ビルを舞台としたレーティングゲームで、舞台の過度な破壊はＮＧ。試合開始までに三十分の準備期間があって試合時間は二時間。そして部隊に一定の損害を与えただけでも評価が下がって場合によっては敗北扱いになる試合形式だった。

そんな中、サイラオーグ氏はたった一人の兵士（ポーン）を参加させないという試合形式で挑んでいる。

そしてその戦闘は最初から意外性のある展開だった。

『へーいサイラオーグ・バアルさん？　眷属とは別に王（キング）同士でバトロうぜぇ？』

『いいだろう。その挑戦に答えなければバアルの次期当主は名乗れないな』

開始前の準備時間にいきなり、フィールド全域に聞こえるように魔力を使いノア氏が挑発。それにサイラオーグ氏も応え、開始と同時に中央部で二人の戦いが始まった。

ノア氏は魔力を収束させて七本の槍という形で展開し、それを正確かつまっすぐに加速させてサイラオーグ氏を狙う。同時に距離だけはしっかりとり、決して彼の間合いに入ろうとしない立ち回りだった。

サイラオーグ氏はその攻撃をすべからくただの両手で粉砕しなが

ら、接近するべく動くけど詰めれない。ノア氏の立ち回りによるものだろう。
ノア氏は三本ほどは連射の形で使用しているが、残りの四本はサイラオーグ氏の接近を阻むたときだけ使用している。
同時に二人の眷属達も戦闘を開始するけど、こちらもあまり白熱はしていない。
ベリアル眷属は全員が守りに徹して少しずつ退避する動きを徹底しており、バアル眷属は有利に立ち回りつつも決定打を打てない形だ。その過程でベリアル眷属が散開することで、バアル眷属も分散しつつ益を追いかけている。
ベリアル眷属の負傷はごくわずかだが、少しずつ確実に蓄積している。このままなら、二時間もすれば限界を超えて負けるだろう。
だけど、戦局が一気に動くのは二十分と少し経った頃だった。
「じゃあ、そろそろ決定打を撃つとするか」
少し汗を流しながら、ノアは不敵な笑みを浮かべ、いくつもの魔方陣を展開する。
そしてその瞬間、明らかに先ほどとは威力が違う規模の魔力の槍が七本形成された。
それを見て、サイラオーグ氏もまた、腰を深く落として迎撃の構えをとる。
「……なるほど。今までの戦闘中、その攻撃を放つため少しずつ魔力を練っていたのか」
「そういうことだ。この七極の魔槍が、このレーティングゲームの趨勢を決める決定打になる」
まっすぐに向き合いながら言葉を交わし、二人はお互いをまっすぐ見据えた。
間違いない。この絶大な魔力量からいって、この一撃を喰らったことでサイラオーグ氏は敗北するのだろう。
一発一発が先ほどのゼファードルが放とうとした一撃より数段上。少しずつとはいえ二十分強の時間をかけて練っただけのことはある、絶大な威力の魔力。全て当たれば最上級悪魔でも敗北必須だろう。

サイラオーグ氏もそれを理解しているからか、静かに息を整える。
そのにらみ合いが続くこと数分、ヴィールは何か好機を見つけたのか、目を光らせた。
「喰らうがいい。これがバアル眷属の敗北を作る七撃だ！」
大きな声で宣言するとともに、ノア氏はその魔槍を放つ。
それに対してサイラオーグ氏は拳を放ち―空を切る。
「何!?」
『『『

『なんだと!?』
目を見開くサイラオーグ氏に対して、ノア氏は驚くことなく胸を張ると、息を吸った。
『兵士八名は女王の援護、騎士と僧侶は二対一で相手を殲滅、戦車はこっちに合流して援護！　慌てることなく油断せず行け！』
この即座の指示、最初から想定内なのか？
いや、何より不可解なのは通信用の備えをしている風に見えないことだ。
連絡用の魔方陣も展開せず、いったいどうやって？
僕が怪訝な表情を浮かべていると、サイラオーグ氏は何かに気づいたのか、ノア氏をにらみつける。
『そういうことか、貴様は最初から、俺を倒すつもりなどなかったのか……っ！』
どういうことだ？　サイラオーグ氏は何に気づいたんだ？
僕たちが怪訝な表情を浮かべていると、リアス部長が椅子をけって立ち上がり、カズヒもリーネスに振り向いた。
「そういうこと……っ！　あの大量の魔方陣、通信用を隠すためのデコイ……っ！」
「最初から集団フルボッコが本命ってことなの、リーネス!?」
え、ど、どういうことだ!?
「ちょ、ちょっとカズヒさん！　状況わからないんですけど説明が欲しいっす！」
「部長もどういうことなんですか!?」
アニル君とイッセー君が二人に質問するけど、それに答えたのはアザゼル先生だった。
「答えにすれば単純だ。ノアがぶちかました大技はサイラオーグじゃなくて奴の眷属に当てるための大技。大量の展開された魔方陣も、本命はそれをするために必要な通信や索敵の本命と、それに気づかせないように上乗せするカバーとしての必要ないのがほとんどだってことさ」
なんだって？

それはつまり―
「挑発して一対一に持ち込んだのは、自分の狙いが眷属だと気付かせないためのフェイクなんですか!?」
僕がそれに悟ると、リアス部長とリーネスさんはうなづいた。
「そうでしょうね。もちろんそんなことは困難だけれど、この策を最大効率で成功させるには、自分の眷属の損害を最小限に抑えることが必要不可欠だもの」
「しかもその間ずっと直射攻撃ばかりやっていたから、さらに力を超めた一撃がいきなり曲がるのは想定しにくくなってるわぁ。その上言い回しも嘘は言ってないけど、流れから言ってサイラオーグ自身を狙うと思うよう誘導もできるから、迎撃されにくくなってるわねぇ」
なんて男だ。自分の身を危険にさらす代わりに、本命を成功させる布石をいくつも同時に打っていたのか。
これが、本家当主以外で会合に参加した、有数の若手上級悪魔の一人。
僕たちが愕然としている中、サイラオーグ氏は歯噛みして猛攻を仕掛けるが、ノア氏は素早くそれをかわしている。
動きが先ほどより早い。さっきまでの戦闘も、本気を見せていなかったのか。
さらに戦車二人の援護が入ってサイラオーグ氏の意識が若干それた瞬間、ノア氏が七本どころか数十本に及ぶ魔力の槍を連続で精製する。
それらはサイラオーグ氏の周囲を旋回しつつ次々と襲い掛かり、迎撃するサイラオーグ氏の動きを少しだが確実に縫い留める。
その間に戦車二人はノア氏に合流。戦車の特性の一つである防御力強化を生かし、ノア氏と共に強大な防壁を展開した。
『サイラオーグ・バアル様の女王リタイア』
『サイラオーグ・バアル様の騎士一名リタイア』
『サイラオーグ・バアル様の僧侶一名リタイア』
その間にも次々に鳴り響くリタイアの報告。
瞬く間に孤立無援になったサイラオーグ氏の周囲を、気づけばノア

氏の眷属達が取り囲んでいた。
そしてノア氏の戦車はノア氏から離れると、戦闘に参加しないような位置に離れている。おそらくは緊急時にキャスリングでノア氏の安全を確保するための備えだろう。
圧倒的有利な状況を演出したうえで、更に油断なく保険を重ねている。ここからの巻き返しは困難と言っていいだろう。
『……ふぅ～。ここまで持っていけるかどうかは賭けでもあったが、何とか上手くいって良かったが、だからって油断すんなよー？』
『上手くいって良かった。だから、此処からも慎重にいくように』
そんな風に、サイラオーグ氏の女王を兵士達と共に打倒した自分の女王と共にノアは眷属達に注意を促す。
ノア氏の女王は黒髪をサイドテールにしている眠そうな目の少女だけど、同時にその目はノア氏と同様に冷たい色をサイラオーグ氏に見せていた。
一気に優勢になりながらも、万が一の逆転を考慮して備えている。それが丸分かりだ。
『いやいや、ランキングで大負けしてるっていいよなぁ？　もとから敗けて当然だから負けても評価は大して落ちないし、どんな形でも勝てればそれだけで俺の評価は上がるだろう。なによりあんたの評価には盛大に傷がつくからな』
「あーなるほど。その辺りをしっかり割り切ってたからこそのこの作戦ね」
ノア氏の発言を聞いて、カズヒは納得したのか少し呆れたような表情を浮かべる。
「どうしたんだよカズヒ。どういう作戦なんだ？」
「簡単よイッセー。この作戦は最初から、ノア・ベリアルがサイラオーグ・バアルに引き離されてるということを前提に組み込まれているの」
イッセー君にそう答えながら、カズヒは頬杖をついて映像を見る。
既に戦闘はサイラオーグ氏の足止めに徹定しており、倒そうという気概が碌に見えないものになっていた。

兵士は本陣に向かってからだったのかプロモーションしているけど、全員が戦車にプロモーションして遠距離から攻撃を叩き込んでいる。

僧侶と女王は魔力でサイラオーグ氏の動きを抑制することに徹しており、騎士はその速度でかれの移動を阻害できる位置取りに回ってからの攻撃だ。

全員が戦車になったことで、キャスリングの対象が増えている。これでサイラオーグ氏が突破しても自由自在に安全圏に避難できるだろう。

そんな詰将棋のような動きを見ながら、カズヒは何処かげんなりとしていた。

「引き離されているから負けても大して損がないって割り切りで、決定打を叩き込むためにノアは博打じみた手法を取れた。そして引き離されながら決定打を撃たれた時点で自分の評価は上がるから、ルール的に悪手なフィールドの損害も許容した。そしてここまでやればサイラオーグを倒さなくても十分だから、あとは判定勝ちで逃げ切るのが一番確実と見なして徹底的な足止め戦術にしてるのよ」

なるほど。そう言われればすべてが腑に落ちる。

この戦略はすべてが「サイラオーグ・バアルの眷属を全滅させてからの総力を挙げての勝ち逃げ」で一貫している。そこに至るまでの博打をいくつも仕掛けてはいただろうけど、それらはすべて決定打を撃つ為に必要なところだけを博打にしている。

サイラオーグ氏の思考を誘導する為に自分から一対一の闘いに誘導したけど、決定打を撃ってからを考慮して、眷属達は全員防戦に徹させていた。だからこそ、決定打を撃った瞬間に一気に畳みかけてサイラオーグ氏の眷属を打倒することができたわけだ。

……必要な博打を打ちつつ必要ない博打は避ける。堅実さと大胆さを備えた、恐ろしい作戦だ。

「……そして結果はもう言えるが、カズヒの言った通りノアの勝ち逃げだ」

そう、アザゼル先生は言い切った。

「サイラオーグはよくやっている。才能の欠片もない男でありながら、この圧倒的不利な状況下でも自身が撃破されることはなったんだからな」
そう、僕達グレモリー眷属の古株も知っている。
サイラオーグ・バアル氏は若手悪魔ナンバーワンと呼ばれながら、若手悪魔で最も才能がない悪魔だ。
だからこそ、この敗北は彼にとってあまりにも痛い……っ
「え、あんな強いのに才能がないって、マジなんですか？」
「そうですよ。あれだけ強いのに才能がないなんて多方面に失礼です。世の中には才能があってもあそこまで強くなれない人や、強くなりたくても才能がなくてなれない人だっているのに……っ」
割と本気で驚いているイッセーくんや、むしろ何て言うかつらそうな表情すら浮かべているルーシアさんを見て、リアス部長は静かに首を振った。
「残念ながら事実よ。サイラオーグはバアル本家の生まれでありながら、家系の特色である消滅どころか、一切の魔力すら持たない無才の悪魔なの」
そう、彼はバアルの歴史において最も才能がない悪魔だ。
イッセー君ですら小さな子供より下とはいえ、転生した時点で魔力は持っていた。だけどサイラオーグ氏はそれすら持っていない。
苦戦しているサイラオーグを見ていられないのか、リアス部長は目を伏せた。
そして、ため息をつくように言葉を放つ。
「上級の貴族に生まれた悪魔にとって、魔力は一番重要なステータスと言ってもいいわ。それを持たないサイラオーグは幼少期から実の父親にすら侮蔑され蔑まれ、下級中級の子供達にすら虐められていたこともあるの」
「……当たり前のものを持ってないってのに、子供ってホント残虐になれる奴が多いからなぁ」
「で、でも！　サイラオーグさんは若手悪魔のナンバーワンなんでしょ!?　魔力の才能が全くないってのに何で!?」

うんざりした口調で九成君がそう言うと、イッセー君は反論するように声を上げる。
「簡単さ。そんな上級悪魔の貴族が、絶対にしないようなことをして這い上がったんだよ」
それに対して、アザゼル先生が魔方陣を操作しながらそう告げる。
ゼノヴィアはそれに対して首を傾げた。
「それはなんだ？　才能の無さを補えるほどのものだというのか？」
「口にするなら簡単だが、そこに至るまでし続けるのは誰にでもできることじゃない。……文字通り、血の吐くような努力の積み重ねさ」
そう言いながら先生が浮かび上がらせるのは、今回の上級悪魔のそれぞれの資質を見せた一種のステータス評だ。
魔力やパワーなどの性能に、資質を示すのか王の部分もある。こと王の部分はリアス部長が高く示されているけど、サイラオーグ氏やフロンズ氏は更に高い。
そして何より見せつけられるのは、パワーのステータスだ。
サイラオーグ氏のパワーは絶大と言ってもいい、パワーだけなら二番目のゼファードルを圧倒し、天井に届いて更に伸びているほどだ。
「……まあ出し惜しみや夏休み中の鍛錬などで変わっているだろうが、それでも見える範囲であの会合前のパワーはサイラオーグが圧倒的に上だ。ノアとは比べるべくもない」
アザゼル先生の言うとおりだ、ノア氏のパワーも高い部類だけど、サイラオーグ氏の半分にも届いていない。
「純血悪魔でありながら魔力を持たないことが、貴族達の世界でどれだけの屈辱であり汚点であるか。その味を知り、それでも這い上がってきたサイラオーグは間違いなく本物だ」
全方位からの猛攻に晒されながらもしのいでいるサイラオーグ氏を見ながら、アザゼル先生ははっきりとそう言い切った。
そう言うほかない。あれだけの強さを持っている若手悪魔は、彼以外にはヴィール・アガレス以外にいないだろう。
だが、そんな彼ですら戦術的に嵌められれば制圧されるのが、レーティングゲームという世界の厳しさであり奥深さだというのか。

「……この敗北の後、サイラオーグの後援者は殆どが彼から手を引いたそうよ」
「……え、ちょっと待ってくださいよ！　たった一回で!?」
　リアス部長の言葉にイッセー君は愕然とするけど、部長は静かに首を横に振った。
「……サイラオーグは自分の経験もあって、努力して魔力以外の成果を出せた者が認められる社会を目指していたわ。彼の後援者の多くは立場もあって大王派で、本来なら受け入れられないそれをお兄様達現魔王に一泡吹かせたいという判断から協力していたの」
「だが大きく下馬評で劣っているノアに負けたことで、そこまでする価値がないと判断したってことか」
　アザゼル先生がそう言うけど、リアス部長が言いたいことはそれだけではなかった。
「それ以上の問題は、ノアが率いている眷属にあったのよ。……彼は女王以外の眷属を、会合前にトレードしていたのだけれど―」
　そう言いながら、部長は数枚の資料をのせる。
　それに目を通した僕達のうち、悪魔歴が長い者達は皆が気付いた。
「こ、これって……！」
「どうしたギャスパー？　こいつらがどうかしたのか!?」
　驚いているギャスパー君にイッセー君が問いかけるけど、これはそういう心配はしなくていい。
　だけど、これはまた厄介なというほかない。
　朱乃さんや小猫ちゃんもそれを理解したのだろう。資料と映像を交互に見ながら、ノア氏に非難じみた視線を向けている。
　とはいえ気持ちは分かるよ。これは何の策にしても、サイラオーグ氏に対して意地が悪すぎる。
　これは―
「ノア・ベリアルが眷属としてトレードしたのは、全員がかつてサイラオーグ氏と模擬戦をして心を折られた上級悪魔の眷属だ」
「「「えええええええっ!?」」」
　僕が告げると、イッセー君やヒマリさんにアニル君が絶叫する。

気持ちは分かるさ。ここまで全員がそうだと、もうわざと彼らを集めたとしか思えないからね。
「……ってことは何か？　ノア・ベリアルは最初からサイラオーグを嵌め殺しにする為だけに、事前に準備しまくってたっていうのかよ？」
九成君がそう考えるのも無理はない。
アザゼル先生も同意見なのか、サイラオーグさんに同情的な視線すら浮かべている。
「フロンズ・フィーニクスは政治的にしっかり根回しする男で、ノア・ベリアルはその親友だったな。……会合前から若手悪魔同士でレーティングゲームが起きると踏んで、事前に準備していたってことか」
「でしょうね。サイラオーグと模擬戦をした上級悪魔の中には、生まれ持って成長した魔力を生まれつき持ってないサイラオーグに打ち破られたことで心が折れた者も数多い。主がそんなことになった眷属から、サイラオーグの経歴に傷をつけ、名誉に泥を塗り、足を引っ張れる機会を望む者が出てもおかしくないわ」
リアス部長がそう言うと、アザゼル先生も頷いた。
貴族主義で排他的な思想を持つ者を見てきたリアス部長や、長い年月を生きてきたアザゼル先生からすれば、好ましくはなくても理解はできる動きなのだろう。
そしてそれはつまり―
「ロアやその親友のフロンズは、この一勝でサイラオーグに心折られた連中の関係者や、不快感を持つ奴らから英雄のように褒め称えられるだろうさ。ましてあいつらの所属は大王派だ。利用価値があるとはいえ相容れない理想のサイラオーグより、立場が近く理想も合わせやすい奴の後援者になる方がましだと思いたくなるだろうさ」
先生が語っていることが事実だろう。
ノア・ベリアルはそこまで考えて布石を打っていたんだ。
サイラオーグ氏を負かすだけでなく後援者から手を引かせることで、サイラオーグ氏を嫌う大王派の者達を味方につけた。更に彼によって心折られた主を持つ者達からは強い感謝の気持ちを得ただろ

う。
　むしろサイラオーグ氏を負かすことができればという条件で何かしらの契約を結んでいるかもしれない。そしてよしんば負けたところで、下馬評で大きく水をあけられているから失うものはさほどない。
　やはり彼らは厄介な人員だ。
　政治のフロンズ・フィーニクスにに軍事のノア・ベリアル。しかもレーティングゲームを中心に考えられている今の眷属悪魔制度の外側から立ち回る、大王派の若き才児達。
　彼らは間違いなく、優秀極まりない人物だ。
　僕達グレモリー眷属が息を呑む中、試合はそのあと誰一人撃破されることなく決着した。
　誰もが再び別の意味で沈黙する中、アザゼル先生はわざと切り替えるように大きく息を吐いた。
「とまあ、こんな形で色々と大番狂わせも起きているが、まだまだレーティングゲームは残ってる。で、次だが―」
　そう言って話を変えようとしたその時だった。
　部室の片隅で転移用の魔方陣が展開される。
「ええ!?　いきなり何が!?」
「警戒しとけ！　もしかしたら敵襲かもしれないぞ！」
　イリナさんが驚き九成君が構えるけど、見る限りは襲撃というわけではない。
　いや、むしろこれは―
「……アスタロトの」
　小猫ちゃんが言う通り、あれはアスタロト家の紋章だ。
　そしてその紋章の通り、一人の少年がそこから姿を現した。
「……久しぶりだね、リアス・グレモリー。アーシアに会いに来ました」
　―ディオドラ・アスタロトがそこに姿を現した。

魔性変革編　第三十七話　勝敗を超える物

和地Ｓｉｄｅ

とりあえず、あんまり人がいると狭いからグレモリー眷属と見届け人代わりのアザゼル先生だけ残して一旦退出した。
とはいえ、アーシアに対してお熱なディオドラに対して警戒しているメンバーは多いので、別室で待機と言ってもいい。
俺達は休憩感覚でだらけたりしながら、それが終わるのを待っている感じだ。
「そういえば、私は事情をよく聞いてないのよね。あのディオドラって人が、アーシアさんが追放されるきっかけになった上級悪魔だったのよね？」
と、缶ジュースを飲みながらイリナがそこを切り出した。
まあ、あの告白を聞いてない組との間にはどうしても情報の密度が違うだろうな。
「ああ。証拠としてあいつも傷跡見せたけど、あんな怪我を見たらアーシアなら衝動的に回復しちゃうだろうな」
「おっきな傷跡でしたものねー。人間界なら問答無用で緊急手術で集中治療室ですの」
俺に続いてヒマリもそう言うけど、実際そんな重傷だったな。
いやほんと、ディオドラが惚れるのも納得ではある。
ほんと、ヒマリの言う通りほっといたら死んでいたレベルの怪我だったからな。あんな状態で教会にいたら精神的にもきつかっただろう。
「教会のシスターがあんな重傷を治したんだものぉ。それが原因で追放された負い目もあったら、若い子なら想いを寄せちゃうかもしれないわよねぇ」

「リーネスって俺達と歳変わらないだろ。なんだその年配者視点」
それとなくリーネスに突っ込むけど、確かにそうだろう。
だからディオドラがアーシアに結婚を申し込むのもちょっとは分かる。
しかしまあ、あいつは教会に縁がある上級悪魔だな。
「そういえば昔同じマンションだった枉法インガって人がディオドラの眷属なんだけど、あの人も修道院出身なんだよ」
俺はそのことを思い出しながら言うと、ルーシアがちょっと目を大きくした。
「修道院の人がなんで、アスタロト本家の転生悪魔に？　アーシア先輩のいたはずの教会もですけど、普通は悪魔も近づかないようにしているし、近づけない備えも多少はあるはずなのですが」
そういえばそうだな。
ちょっと気になるけど、インガ姉ちゃんの場合はちょっと違うだろう。
なんたって、問題はそれどころじゃなかったわけだし。
「インガ姉ちゃんから聞いた話でしかないけど、なんでも修道院が教会嫌いの妖怪に襲撃されて、ディオドラがたまたま正体を知らずに助けてくれた修道女を助けに来た際、流れで蘇生目的の転生をさせたとかなんだとか」
大体そんな感じだったはずだ。あとでちょっと思い出し直した方がいいかもしれないけど。
そんな感じで思い出しながら説明すると、イリナがあ～と言わんばかりに上を見上げた。
「あ～。そういえば日本にある修道院が、数年前に妖怪に襲撃されて壊滅したって事件はあったわねぇ」
「そうなんですの？　でも、そのあと妖怪の連中はどうしましたの？」
当時の教会がただで済ますとは思いませんのよ？」
ヒマリがそういうと、イリナは首をひねりながら思い出し始めた。
「それが、悪魔の勢力と続けて揉めたらしくて、下手人の集団は壊滅してるのよ。元々妖怪の中でもはぐれ者だったみたいで、悪魔とも和平

を結んでなかったからよく分からないことも多いのよねぇ」
「あ～。ま、あの時期ならそうなりますわな」
「どの勢力とも結ばれてませんでしたし、複数の勢力と揉めれば分からなくなることもありますね」
アニルとルーシアも納得した感じだな。
ま、敵対中の勢力が三つも絡んで揉めたんだ。記録に残すのも一苦労だし、集められる情報にも限度があるよな。
というより、そもそもディオドラが仇を討ったとかか？　見かけによらず熱い男なのかもな。
「和平前はそういったことも多かったし、そういう意味だと和平様様じゃん？　……ま、今は禍（カオス・ブリゲート）の団って厄介な連中が出張ってるけど」
「それもそうねぇ。でもぉ、和平が結ばれてなくても動きそうだし、暴れだす前に和平が結べてよかったものぉ」
そんな風にリーネスが苦笑するけど、ふとちらりとカズヒ姉さんに視線を向けた。
そういえば、カズヒ姉さんは一言もしゃべってないな。
俺もそれとなく見ていると、なんかスマートフォンを取り出してなんかメッセージを送信してるみたいだし。……今なんか魔法とか魔術とか使ってた気もするんだけど。
俺はちょっと首を傾げたけど、その時ドタバタとなんか騒がしくなってきたな。
部長達がいる部屋の辺りだけど、何かあったのか？
俺達が首を傾げていると、転移魔方陣の発動と思われる感覚がしてきた。
どうやらディオドラは帰ったらしい。
「……終わったみたいねぇ。じゃ、戻りましょうか」
「分かりました。あ、まずはゴミをゴミ箱に入れてからですよ？」
そんな風にリーネスとルーシアがまとめる形で、俺達はグレモリー眷属のところにUターンするけど―
「あの野郎絶対倒してやる！」
「へぶるぁ!?」

イッセーが勢いよくドアを開けた勢いで、開けようと伸ばしていた俺の手に激突した。

後で謝ってくれたからいいけど、ドアを開ける時はもうちょっと静かにしてほしい。

まあその気持ちも分からなくはない。

ディオドラは業を煮やしたのか、自分の眷属とトレードでアーシアを手に入れようと画策したそうだ。

だが自分の眷属を家族として扱うリアス部長は当然拒否。むしろ結婚関連に夢もあるしビジョンもある身として、ディオドラのやり方に更なる嫌悪感を見せて険悪な雰囲気に。

更にあろうことかディオドラがやらかした。今度自分達がレーティングゲームをする際に、その勝敗で決めようとか抜かしたらしい。

もうちょっと手段を選べというか、それを言ったら余計にややこしくなると想像できるだろというか。よっぽどアーシアのにご執心とかそういうことか？

しかも割って入ったイッセー相手に「下賤な下級悪魔」発言。これにはアーシアも怒ってつい平手打ちするけど、ニコニコ笑顔でアーシアの目を覚まさせると言って宣戦布告。

間がいいのか悪いのか、次の試合がグレモリーＶＳアスタロトになったとアザゼル先生に報告が入り、ヒートアップしたイッセーや部長がそのままレーティングゲームを了承しやがった。

「……相手の戦力も把握してないってのに、何を考えなしにやってる

のよイッセー。部長も止めなさいよ」
心底からついてますとよく分かるレベルで、カズヒ姉さんがため息をついた。
「俺が」
「私が」
「「ディオドラに負けると!?」」
イッセーも部長もめっちゃ怒り心頭で吠えるけど、カズヒ姉さんは逆に冷めている。
「敵を知り己を知ればっていうでしょう？　己はともかく敵が分かってないのに、勝てるかどうかなんて確信できるわけないでしょうが。ジュースでも飲んで頭を冷やしなさい」
と、ため息をもう一回つきながら、カズヒ姉さんはまだ誰も飲んでなかった缶ジュースを二人に押し付けた。
「まあそれならそれで、さっさとディオドラ・アスタロトとイシロ・グラシャラボラスのレーティングゲームを見た方がよさそうねぇ。先生ぇ、お願いします」
「そうだな。気分転換も兼ねて敵情視察と行こうかねぇ」
と、リーネスの発案で先生が怨敵ディオドラとドMのイシロのレーティングゲームを始めるが―
『『『

目くらましの噴煙を発生させる目的の攻撃すら見逃さず、全力でディオドラの眷属の放つ攻撃を受け止めるイシロ・グラシャラボラス。
「前後から！　前後から放たれる攻撃ぃ!!」
「いや本当に邪魔！」
追い詰められた眷属をかばい、孤軍奮闘するディオドラが放った攻撃を、味方が放った攻撃と前後で挟まれるように割って入って攻撃を喰らうイシロ・グラシャラボラス。
一言言おう。
あの女、試合の勝敗を考えてねえ！
室内の全員が唖然となっていた。
「……あの部長、あの人、プロのレーティングゲームのプレイヤー相手にストレート勝ちを三回もやったから、会合に参加したんですよね？
……あれで？」
信じられないことをイッセーが言ってしてたけど、部長は視線を逸らした。
まさかあんなだとは思ってなかったんだろう。仕方ないな。
「……ストレート勝ちに関しちゃ普通に試合をしてるみたいだぞ？
後で話を聞かされたみたいだが、「……若手の有力者の一撃はどれだけ痛いのかと思っていたら、つい我慢が出来なくて」とか頬を赤く染めながら満面の笑顔で言われて、話を聞いた奴は有休をとったとか」
『『『

スペックで頑張った結果凌ぎ切った感じだ。
……それ以上にイシロが割って入りすぎて味方を引っ掻き回したのが原因な気もするけど、中盤に入る前から眷属達のやる気が全然見られなかったしな。
モチベーションって本当に重要だよなぁ。
「にしても、ディオドラの奴はなんか強くなりすぎだな。あいつ下馬評から考えてもここまで強いとは思えないんだが」
「そうね。夏休みの間に鍛錬を積んだと考えるべきでしょうけど、それにしても動きが早く力強すぎる気もする」
先生とリアス部長が首を傾げていると、リーネスはまじまじと映像を見て小さく頷いた。
「……リアス部長ぉ、確か彼は冥界の技術顧問ともいえる現ベルゼブブの親族でしたよねぇ？」
「え、ええ。悪魔の駒を開発した、アジュカ・ベルゼブブ様を輩出したアスタロト本家の次期当主よ」
部長のその言葉に、リーネスは再び頷いた。
「あの、リーネスさん？　どうしたの？」
「何か気付きましたか？」
イリナとルーシアが尋ねると、リーネスはディオドラを指さした。
「……うん、ちょっと気になるところはあるけれど、確証は無いから、もうちょっと調べさせてねぇ？」
「いや、ディオドラとのゲームはあまり時間が無いから、できれば言ってほしいんだが」
ゼノヴィアが文句を言うけど、リーネスはにっこり微笑んでそれを流した。
な、何に気づいたんだ？
俺達はすっごい気になるんだけど。
めちゃくちゃ気になってると、先生はなんかため息をついた。
「話は戻すが、若手同士のレーティングゲーム、どいつもこいつも王（キング）同士で戦いすぎだろ。いや、ディオドラは戦っているとかそういう感じじゃねえが」

そんな風に先生は、呆れている感じだった。
「レーティングゲームにおいて、王は倒れたらその時点で終わりな存在だし、実戦においても中核だぞ？　そもそもトップの仕事は前線より指揮が主体なんだから、もうちょっと戦闘を避ける努力が必要だってのによぉ」
「まあ、気性や性格って中々治せないものね」
そんな風にカズヒ姉さんも苦笑するけど、まあ確かになぁ。
王がやられたら即敗北が基本なんだから、可能な限り避ける努力は必須だよなぁ。その辺は然り考慮するべきか。
リアス部長はちょっと顔を逸らしているけど、まあそこは少しずつ慣れていくべきなので頑張ってくださいな。
そんな関与しないからこその無責任発言を内心でしながら、俺達は最後のシーグヴァイラ・アガレスとフロンズ・フィーニクスのレーティングゲームを見るんだ……が。
「……なんか、こう……アレですよね？」
「具体的じゃないよ。でも、言いたいことは分かるかも」
と、アニルや小猫ちゃんが微妙な表情を浮かべる気持ちも分かる。
試合内容はランペイジ・ボールとかいう、ボールをゴールに入れるという、一種の球技。ゴールは点が入るごとに転移して、また選手は戦闘不能になっても一定時間が経つとサイド参加ができるという代物だ。
ゲームそのものはある意味一方的。点を入れたのはシーグヴァイラ・アガレスのチームだけで、フロンズ・フィーニクスは一点も入れることは無かった。
だけど、それをもってしてシーグヴァイラ・アガレスの圧勝と言えるものはそうはいないだろう。
なにせ、シーグヴァイラ・アガレス眷属は平均して三回はリタイアした。シーグヴァイラ本人を含めた殆どの眷属が再出撃までのインターバルを経験しているからだ。
それほどまでに戦闘は圧倒的だった。
『はっはぁ！　まさかこんなもんかい！　アガレスが聞いて呆れる

ねぇ！』
そう吠えながらハルバードを振り回すのは、会合の時に匙に切りかかったとかいう女だった。
あのサイラオーグ・バアルがガチ目の対応をしたって当たりでも、その女がシャレにならないぐらい強いってのがよく分かる。
アガレス側にしたって、女王のドラゴンらしい男とアガレスが、更に上級悪魔の一族らしい騎士（ナイト）を含めた数人で何とか凌いでいるようなものだ。はっきり言って、あの場で一番強いのはあの女だろう。
だがそれ以上に、他の戦いは蹂躙と言ってもいい。
主力がハルバード使いに抑え込まれている所為で、フロンズの眷属はインターバルを入れて休憩しながらでも蹂躙できている。その所為でどんどんやられているぐらいだ。
そしてフロンズは……ぶっちゃけ何もしてない。
攻撃が届かないだろうところまで距離を取って、二人ほど護衛を付けたうえで微笑みながらカメラじみた術式が向けられているだろう方向を向きつつ、その光景を解説。
その二人は俺達がアザゼル先生の護衛をやっている時に会った二人だ。話を聞く限りあの二人は受肉したサーヴァントだとか。
そして解説対象は、フロンズが率いる眷属達、それも兵士を主体とするメンバーだ。
残りのメンバーは全員がレイドライザーでレイダーになって戦っている。ここまではいい。
だが問題は、同時に使っている剣だ。
それぞれの体格に合わせて多少の調整はされているが、同時に基本的な部分は共通になっている。そして切れ味はそこそこ高いが頑丈さはさらに高くなっている。
そして問題は、それらすべてが聖なるオーラを纏っていることだ。
『ご覧いただけてますでしょうか。輪が眷属が使うこちらの聖剣、これは我らが大王派のシュウマ様が擁する研究班が鍛造に成功した魔性聖剣という新たな聖剣の大量生産仕様、魔軍聖剣ブリゲイターというものです』

そう語るフロンズの手にも、同じような聖剣が握られている。
『製法そのものは従来の聖剣研究をもとにしながらも、手順をきちんと踏むことで、現段階でも年百本以上の製造が可能。今後技術指導が進めば一日一本製造することも不可能ではないでしょう。ですがこの最も素晴らしき点はそこではありません』
そう語りながら、フロンズは自慢げに自分の眷属を見た。
『彼らは特別聖剣に愛されているわけではありません。彼らは聖剣に選ばれたのではなく、彼らに合わせて聖剣を造り出したからこその、新たなる時代の形なのです』
そう、それこそが多数の聖剣使いを用意するという、冷静に考えるととんでもない偉業の真骨頂。
あそこにいるフロンズの眷属は純血悪魔の下級であり、教会の人工聖剣使いの技術も使われていない。
にも拘らず全員が聖剣を使い、更にレイダーとしての機能である共通の星辰光でアガレス眷属を攻め立てる。
レイダーが共有する星辰光は雷電操作。俺のかつての見立て通り、干渉性の高さでお互いの雷撃に干渉することで、部隊による連携でより強大な雷撃を放つというものだ。
これとレイダーの装甲を利用することで、電磁加速による突撃といった手法までやってくるから始末に負えない。アガレス眷属には同情する。
更に得物が聖剣だということで、もはや勝敗は圧倒的だ。このゲームが通常の戦闘系統なら、既に勝負はとっくの昔についていることだろう。
だが、フロンズは点を取ろうとしない。
ボールを持っている敵眷属を倒すことはあっても、ボールを拾うことは一切しない。むしろボールを取りに来る相手の眷属を待ち構えて戦闘している。時にはあえて相手の方に蹴り出して、動き出すよう誘導することすらある。
『この聖剣は製造の際に対象となる人物の血液や髪などを採取し、その鉄分や炭素を利用、または薪の代わりとすることで担い手と同調す

ることで、聖剣使いの適性ではなく対象にのみ同調する聖剣にすることに成功いたしました。現段階では奪われ再同調される可能性を否定はできませんが、聖剣というものが所有者を選ぶことも踏まえれば、リスクは普通の聖剣を使うより遥かに低いでしょう』

そう語るフロンズは、決して眷属達を責めない。

これでは最終的にルール上では負けるのにだ。

むしろその調子だと言わんばかりに、戦闘することを望んでいるような立ち回りだった。

『今後はレイダー部隊との同時運用や別個の運用も踏まえつつ、冥界の軍事力強化の一つとして要望を通したいところです。ご覧の皆様で眷属用に求めるおつもりがありましたら、シュウマ・バアル様にご連絡いただけるとありがたいです』

……そんな通販の営業トークみたいなことをフロンズは続け、そして試合は終了する。

結果としてはアガレス側が勝ったようなものだが、これは勝たせてもらったと言っていいだろう。

いや、むしろ―

「……フロンズは本当にレーティングゲームに興味はないんだな」

―俺が思ったことを、アザゼル先生はそう言い切った。

「どういうつもりなんだ？　ゲームでいくらでも勝ちようはあったろうに、結局フロンズ達は勝てる試合をみすみす逃したといっていいだろう」

「そうですわ。第一、あそこまで実態が圧倒していたのなら、勝ってしまっても問題ないでしょう。恩を売ったつもりなら、むしろ屈辱を与えているだけで論外ですわ」

ゼノヴィアと朱乃さんがそう言うと、アザゼル先生は冷めた目を止まった画面に向けた。

「さっき言ったとおりだよ。より正確にいうなら、あいつはレーティングゲームの勝敗なんかに興味がない。目的を果たすと勝ってしまう勝負は勝つが、そうでないなら一切勝敗なんて考慮しようとすらしてねえんだ」

ああ、そんな感じだった。
ゲームの勝敗その物なんてどうでもいい。敗北したけどそれが何か。
フロンズのゲームに対するスタンスには、本当にそんな感じが漂っていた。
ただ、俺はそこまでは分かっても実態が分からない。そこまでは俺の頭じゃ答えを導き出せない。
「先生。その目的ってのが何なのか分かりますか？」
だから俺は質問すると、先生はすぐに頷いた。
「ＣＭだよ。厳密にいえば、あいつはゲームを自分達が開発した技術のいい宣伝に使うことばかりに使っている」
「宣伝!?　そりゃ確かに凄い物作ってますけど、それで負けたら評価だって―」
イッセーがそう反論するが、そういうことじゃない。
そ、あいつにとってそんなものは本当にどうでもいいんだ。そこは俺も何となく分かるし、分かっているメンバーも何人かいそうだ。
そのうちの一人である木場が、自分の手元を見ながら口を開いたのはその時だ。
「イッセー君。彼は競技選手としての評価何てどうでもいいんだよ。何故なら彼は技術とその影響を受ける人員数にこそ主眼を置いているからね」
そう言われて、イッセーは一瞬だけ黙り込んだ。
そして視線が上に行ったり右に行ったりしたけど、少しすると俺達の方に戻ってきた。
「それってつまり、軍隊全部を強くすることにしか興味ないから、少数精鋭の眷属悪魔やレーティングゲームで評価を上げることに意味を感じてない……ってことか？」
なんだかんだで考えられるし、頭の回転も悪くないよな。流石にイッセーもこの高偏差値高校に入っただけのことはあるな。
そんでもって他の分かってない組も、今のイッセーがした解釈で大体分かったらしい。

視線がアザゼル先生に集まると共に、先生は頷いた。
「会合の後で駄弁ったメンバーは覚えてるかもしれないが、フロンズは冥界の軍事力強化を一人十数人程度しか持てない眷属悪魔じゃなく、数が増えていっている下級中級による軍隊規模で高めると割り切っている。だからこそ、奴は会合で、必要性の薄いレーティングゲームを民営化させる方針を示しつつ、富国強兵に有効な教育関係の改革として下民が通えるレーティングゲームの学校設立を賛同したんだ。そのスタンスがものの見事に見えてきた一戦だったな」
そう言いながら、止まった画像のフロンズをアザゼル先生は見据える。
それは、一技術者としての関心か。それとも、堕天使を統べる者としての警戒か。そこは俺には分からない。
だけど言えることは、この人は珍しく本気でマジな表情を浮かべていることだ。
そして同じように考えていたリアス部長も、眉間にしわを寄せていた。
「……厄介ね。政治的なことを主体として、既に布石も打っているのが尚更だわ」
「どういうことかしら？　リアス先輩」
イリナが首を傾げると、リアス部長は軽くため息をついた。
「フロンズはさっきの営業でシュウマ・バアルという名前を、商談をする際の相手として告げていたでしょう。彼は大王派の有力者で、バアル分家の中でも有数の家の当主よ」
そう言うと、部長はさっきの映像を映し出しながら、黒髪紫目の女二人を示した。
一人はノア・ベリアルの女王の、サイドテールの女。一人はフロンズ・フィーニクスの女王の、ぼさぼさ頭の女。
この二人がどうしたっていうんだと思っていると、部長は目を鋭くする。
「フロンズ・フィーニクスの女王は、シュウマ・バアルの二子にして長女のティラ・ベリアル。あのサイラオーグと一対一の決闘をして、彼

にフェニックスの涙を使用させるだけの深手を負わせるまで食い下がった女傑よ」
……マジですか。
あの大暴れっぷりを見ていると、もうそれだけでめっちゃ強そうなんだけど。
「ノア・ベリアルの女王はクーア・バアル。彼女もシュウマ・バアルの三子にして次女で、十二の純血の最上級悪魔と一対一で模擬戦を行い、渡り合ったこともある才女よ」
こっちもこっちで洒落にならない女だった。
「シュウマ・バアルは本家に対して自分達が常に下に付くという名目で、複数の下級悪魔から優秀な素質を持つ女性を集めて妻とし、三人の妻の間に六人の優秀な子供達ができたの。シュウマ・バアル自身が最上級悪魔であると同時に、確実に最上級悪魔級の実力に至ると称される六人の子供を持っているわ」
「そりゃまたすっごいというかなんというかねぇ。だが、厄介だな」
そんな風に、アザゼル先生はフロンズ達を称した。
「賭けてもいい。今後大王派は、フロンズ、ノア、そしてシュウマを中心に一気に力をつけていくだろう。お前らもうかうかしてると追い抜かれるぜ？　……気を付けるんだな」
先生がそう言うだけの者達か。

そして先生のこの予感は的中する。
後に若手四王（ルーキーズ・フォー）と呼ばれることになる、リアス部長達とは別枠で語られる、若手悪魔のもう一つの筆頭がいた。
後の世に革新衆とすら呼ばれることになる、若手大王派の集まりの筆頭として、彼らは名を知られることになるのだから。

魔性変革編　第三十八話　膨らむ不穏

和地Ｓｉｄｅ

そんなことがあった夜、俺は外出することになった。
まあそういうこともあるだろうけど、聞きたいことはただ一つ。
「……なんで俺とメリードの二人なんだ、リーネス」
「消去法と警戒と気遣いといったところよぉ」
そう返すリーネスの指示に従って、俺はスーツを着ていた。
礼服や喪服の代わりになる黒いスーツは、そういったことを踏まえてリーネスが用意してくれている物だ。毎年サイズに合わせて伸長している代わりに、値段そのものはさほど高くない。
まあそれはともかく、あまり着てないから衣装に着られてるよな、コレ。
俺がそこを気にしていると、コホンとメリードが咳払いをしていた。
「あまりそわそわしない方がよろしいかと。こういった場では逆に悪目立ちいたします」
「いや、いろんな意味で高校生や(俺)メイド(お前)は場違いだろ、歓楽街(ここ)は」
本心からそう言いたくなる気持ちを分かってほしい。
ここはつまりあれだよ。歓楽街。
風俗店とかキャバクラとかホストクラブが蔓延る夜の街。どう考えてもこの時間帯に高校生がいる所じゃないし、メイド服着た女の出番なんてイメクラぐらいしかない場所だ。
場違いなのは当然だろうに、メリードは平然としていた。
「それは分かりますが、私はリーネス様の従者ですので。必要だというのなら、そしてそれが真実ならば従いましょう」
「気を付けましょうねぇ。ヒューマギアに星塀を向けるような変態性癖とか、絶対増え始めてるでしょうしぃ」

そんなことをリーネスが言うけど、まあそれなりに備えはしているから大丈夫だろう。
いやほんと、なんで俺こんなところにいるんだろうなぁ……と思ったら。
「あら、もう来たの？　お互い早かったわね」
「あれ？　九成君も来てたの？　っていうかなんで私はこんなところの来る羽目になったのか、説明してくれないかしら、カズヒさん？」
なんかきょとんとしているイリナを連れて、カズヒ姉さんが来ていた。
気遣いってつまりこういうことなんだろうかなどと思っていると、更に俺達に視線を向けながら近づいている人影が。
「お待たせしました。と言っても、集合時間より三十分も速いですけど」
「まあいいじゃねえか。だったらさっさと行こうぜ？」
なんでソーナ会長が、アザゼル先生と連れ立ってこんなところに!?
俺がイリナと顔を見合わせながら戸惑いつつ付いて行くと、そこは何というか「クラブ・グリゴリ」なんていう完璧に神の子を見張る者が経営に関わっている感じのビルを丸ごと使ったクラブだった。
ちなみに下の階層はそれぞれ大衆向けのキャバクラやホスト部になっており、上の階層は高級クラブになっている。
そんな高級クラブのそのまた上、最上階のＶＩＰ用クラブに俺達は連れてこられた。
「どうだ、すげえだろ？　元七十二柱の本家や日本の各政党のトップ、大病院の院長や国際企業の重役、果ては各勢力の神クラスを接待する為に用意した神の子を見張る者の特注施設だ」
「おぉ～っ」
思わぬ豪華なもてなしに、俺とイリナはちょっと面食らってた。
ちょっと新鮮だから楽しみたいぐらいだな。
「……相談するつもりではあったけど、こんなところにする必要あったのかしら？」
「そうですね。あまり人に知られたくない話と伺ってますが、もう少

し学生向けの施設は無かったのでしょうか」
なんてことをカズヒ姉さんと会長が言っているけど、本家次期当主の会長はともかく、カズヒ姉さんもあまり興味を示していない。
まるでここ程じゃないけどそれなりに高級な場所に通ったことがあるみたいな雰囲気だ。内乱地帯のゲリラが経験する余地なんてなさそうなんだけど。
「まあまあ。盗聴の危険がない場所で、かつあまり知られたくないっていったのはカズヒでしょぉ？　ここなら要人用だからぁ、人員や施設も防諜はしっかりできてるわぁ」
そんなカズヒ姉さんの肩にしなだれかかりながら、リーネスはあやすようにそう言った。
え、そんなレベルの話なのか？
ミカエル様の直属であるイリナはともかく、なんで俺がそんな話に選別されるんだ？
……いや、ヒマリには向いてない話だってことは確信しているけどね!?
俺が戸惑いながらソファーに座ると、なんかこう……明らかに色っぽい男を誑し込むというかとろけさせる為の美貌を持ったお姉さん達が入って来そうだった。
後格好が目に毒すぎる。俺には、俺にはまだ早い！
「すいません冷静になれそうにないんですけど！」
「分かってる分かってる。おーい、悪いけど周囲を警戒しつつ食えるもん持ってきてくれ」
そんな感じでカナッペを肴にジュースを飲んで少し気分を紛らわせてから、リーネスはカズヒの方を向いた。
「それじゃぁ。……口が堅くて権力がある、グレモリー眷属以外を連れてきてって言った理由、教えてもらえるぅ？　諜報面もばっちりにしてるけどぉ」
え、コレカズヒ姉さんが言い出しっぺだったのか？
俺達の視線が集まる中、カズヒ姉さんは軽く肩をすくめた。
「……そうね、和地まで連れてきてくれたのは僥倖かしら」

そう言うと、カズヒ姉さんは会長に、アーシアがディオドラに求婚されている件とそもそも追放された理由について話し出した。
その辺りは会長もある程度は把握していたから、すぐに話は終わるけど、問題はそこからだ。
「イリナは今日のことだから覚えているでしょう？　グレモリー眷属とディオドラが話している間にした、和地の話」
「九成君の話で今の流れだと、インガさんって人の話よね？　修道院が襲われた時にディオドラに助けられて眷属になったっていう」
な、なんでそこでインガ姉ちゃんが出てくるんだ？
「カズヒ姉さん？　なんでそこでインガ姉ちゃんの話が？」
「まずはそっちの説明をしてからよ。それと……覚悟はしておいて」
覚悟って、どういうことだよ。
俺が胸騒ぎを覚えている間、カズヒ姉さんは俺がした話を皆にも伝える。
預けられていた修道院が妖怪のはぐれものに襲われて、死にかけたこと。別の修道女と縁があったディオドラが、彼女を助けに来たこと。その際其の修道女の頼みで、インガ姉ちゃんも蘇生させる形で転生悪魔にして助けたこと。
そしてそれを聞いている先生と会長の表情が、みるみる険しくなっていった。
一体どういう―
「……つまり、貴女はディオドラがそういうことの常習犯だと言いたいのですね？」
じょ、常習犯？
一体何の常習犯だっていうんだ？
俺が不安に駆られていると、会長の言葉を聞いた先生が肩をすくめた。
「なるほどねぇ。つまり釣りだって思ってるわけか」
釣り？
俺が本当に不安に覚えていると、カズヒ姉さんは頷いた。
「根拠……というか、懸念材料が他にもあるのよ。このディオドラが

残していった、アーシアと交換する予定だった眷属の資料を見て頂戴」
そう言って、カズヒ姉さんはその資料をテーブルの上に乗せた。
ちょろまかしてる感じだけど、そこはまあいい。
そこにいるのは可愛い女の子とかだけど、彼女に何かが隠されているということなのだろうか。
俺達がそれを見てから視線をカズヒ姉さんに戻すと、カズヒ姉さんはかなり苛立っている感じだ。
ど、どういうことだ？
「……簡潔にまとめるわ。こっちの女の子、元シスター……を通り越して元聖女よ」
……は？
おいおいおいおいちょっと待て。
インガ姉ちゃんと本命だった修道女だけじゃなくて、挙句の果てに他にもいるってのか？
それは確かに、いくらなんでも怪しすぎる。
「……それも、手を差し伸べた子が悪魔だったことで追放騒ぎになって、その後行方をくらましたって子よ。暗部任務として、過激な連中が動く前に失踪という形で保護する任務で派遣されてたからよく覚えているわ」
そう語るカズヒ姉さんの表情は、能面のようだった。
同時に殺意や憤怒や怨嗟が漏れ出てて、正直寒気すら覚えている。
だけどまあ、そこは思ったよりは気にならなかった。
……というか、俺も大概マジギレしてる自信がある。
いかんいかん。落ち着け落ち着け。冷静に冷静に。
そう、これはあくまでカズヒ姉さんの予測だ。怪しいのは全面的に事実だけど、まだリーチだけだ。確実ではない。
しっかり裏取りして、証拠も集めてからじゃないとな。万が一間違いだったら取り返しがつかないことになる。
そう、取り返しがつかないことになるレベルで、俺はブチギレる自信があるからな。

「じゃあ、裏取り調査とかそういうのをやればいいってことだよな？
俺はそういうの出来ないけど、できる奴を動かせる奴は揃ってるしな？」
「怖いわよ、九成君。でもまあ、そういうことならミカエル様のA（エース）として指示を出して、ディオドラの眷属について調べてもらうわ」
イリナが俺の雰囲気に引きながらもそう言ってくれる。
こういう時はイリナみたいなタイプは助かるぜ。
素直で真っ直ぐだから、こういう懸念とかにはすぐにでも動いてくれるからな。そういう意味では天使向けな性格してるよ。
カズヒ姉さんもそのつもりだったのか、険しい表情をしながら頷いた。
「辺獄騎士団の本部にも、念の為既に連絡は入れているわ。映像資料で十分顔の確認はできるでしょうし、まして天使長であられるミカエル様のA（エース）が直々に緊急指示を出せば、うるさい潔癖症も黙ってくれるでしょうしね」
あ、あのスマホはそういうことか。
本部に連絡してその辺りの準備をしてもらっていたのか。で、余計な茶々を入れられないよう、黙らせられるだけの箔を持つイリナを巻き込んだと。
先生もそこに気づいたのか、面白そうな含み笑いをしてたし。
こういうの好きそうだしなぁ、先生。
「ま、その辺に関しちゃ俺も口添えするさ。正直ディオドラのパワーアップは不自然だからそのつもりだったしな。……で、リーネス」
と、先生派リーネスに視線を送る。
「お前が態々連れてきたってことは、第一弾はそいつだってことでいいんだな」
「はい。そして、おあつらえ向きに的確な物の力を借りれましたぁ」
ああ、なるほど。
リーネスのその答えと、無言で一礼したメリードのおかげで大体わかった。
つまり、そういうことか。

俺が納得してると、リーネスは他にも気になってることがあるのか先生を真っ直ぐ見据える。
「あと、ディオドラが悪魔の駒の研究班とかと繋がってる可能性について調べてもいいかしらぁ。できればお兄さんでもある現ベルゼブブ様に探りを入れてほしいんですけどぉ」
「あぁ～。あの急激なパワーアップ、兄貴の方がテコ入れしたんじゃねえかって疑ってたのか。ま、確かに妙な急成長だしちょっと探っとくぜ」
なんか気にしてたのはそういう可能性か。
まあ確かに、あまりに急激に強くなってるらしいからな。そこは気になるか。
……俺は、インガ姉ちゃん顔を思い出す。
インガ姉ちゃんは、恩人のようにディオドラのことを語っていた。同時に、昔のインガ姉ちゃんとは思えないぐらい、自身が無くて暗い女性になっていた。
この懸念は当たってほしくない。
俺は、冷静でいられる自信がないからな。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……ひ、ひぃ……ひぃいいいいっ！」
「あ～あ～あ～。情けない姿だねぇ、大将」
「て……めぇ！　お前が、お前が本気を出してりゃ俺だってこんなことには―」
「おいおいそりゃねえぜ。俺はあいつらがガチの本気を出してこない

よう、力の配分に気を使ったってのに」
「なん、だと!?」
「そこにも気付いてねえんですかぃ？　まったく、殺し合いレベルの大暴れを、特に文句なしでやれる機会が何度もあるって言われたけど……アウトっすねぇ」
「な、なんだと!?」
「だって心折れてるでしょ？　そんなんで試合出ても無様すぎますし、俺が暴れる時間も出ないっすよ」
「……わ、分かった。今度お前を他の奴とトレードして―」
「あ、そういうの良いんで。アンナの結局模擬戦と一緒で、スリルが全然ないからやる気でないっすわ」
「はぁ!?　じゃあどうす……まさか!?」
「……あ、安心してくだせぇ。旧魔王の末裔達に協力するとかはねえですわ」
「そう、なのか？」
「へい。昔あった面白い奴がちょっと一旗揚げるっていうんでしてね。そっちに行こうかと思ってますわ」
「一旗揚げる？　禍の団（カオス・ブリゲート）とやり合うのか？」
「はっはっはぁ。そんなレベルじゃないですよ。……えぇ」
「……がっ!?　あ……ぐぁ……」
「―魔王派と大王派に喧嘩売るって話でさぁ。なんで、当分眠っていただきます……ぜ？」

魔性変革編　第三十九話　テレビ局の一幕

まあそんなわけで俺達は、次のレーティングゲームに余計な影響が出ないように黙っていることになった。
黒に近いけど物証がないグレーだしな。
だけどそんな心配は全くなかった。というか、グレモリー眷属的にそれどころでもなかった。
そして巻き込まれて、俺は今冥界のテレビ局にいる。
……なんでこうなった。
「いや、なんでこうなった？」
「知らねえよ、俺もちょっと混乱してるよ」
俺のボヤキにイッセーがそう返す。
更にアニルが盛大にため息をついた。
「最低でも、俺らはとばっちりに近いですぜ。あとギャスパーも近いっすかねぇ」
「あうぅ。い、インタビュー何て緊張で吐きそうですぅ」
そんなアニルに背中を擦られながら、ギャスパーは緊張で顔を真っ赤にしたり真っ青にしたりとせわしない。
「あはは……。まあ、こういうのもリアス部長と縁を持つなら何度かあるから、頑張って」
そう苦笑しながら、木場が俺達の分のお茶も買ってきてくれたので、とりあえず小休止。
事の発端は俺達が戻った時。ちょうどイッセーを巡ってコスプレして鞘当状態だったグレモリー眷属に入ってきた連絡だった。
なんとびっくりなことにテレビ番組の出演依頼だった。
若手悪魔同士のレーティングゲームは冥界全土に放送されているけど、これが想像以上に注目されており、特にリアス部長とソーナ会長のゲームは色々な意味で注目されたらしい。で、ゲームの視聴率稼ぎなどを踏まえてインタビューが行われることになったというわけだ。

そこに和平の活発活動を行う要素も絡んでいる。結果として聖ミカエル監察団やＡＩＭＳ第一部隊も参加する形でのインタビュー番組が決定したわけだ。
うん、どうしてこうなった。
テレビ番組の参加なんて考えたことも無いから、正直かなり緊張している。
くそ、うかつだった。冥界、それも悪魔側は上級悪魔が何足も草鞋を履いてる社会だ。
領主に直属を率いての部隊長と、最低でもこの二つは確定。更にレーティングゲームのプレイヤーという競技選手。場合によっては芸能人といった仕事もすることになるらしい。
そんな上級悪魔と一緒に活動することが前提の和平に備えたコマーシャル活動。しかも例の件を踏まえれば、当然こういうことに参加する可能性もあったんだよなぁ。
「流石に緊張してきたな。俺もちょっと調子が悪くなってきそうだ」
「まあ、テレビに出演慣れしてないなら当然だよね」
控室で木場にそう同情されていると、男子用の控室のドアがノックされた。
「皆、そろそろ準備はできたかしら？」
「部長ですか、はい、準備は一応できています」
木場が部長に返事をして、俺達は控室を出てスタジオまでの道を進む。
誰もがちょっと緊張しているけど、同時にテレビ局の内部とかは初めてだから、物珍しくてきょろきょろしている。
人間界のテレビ局じゃなく、冥界のテレビ局を見れるってのは、ちょっと意外な展開でもあるよな。
俺達がそんな感じで歩いていると、何やらガタイの言い男が、十人近い人数を引き連れてやってきた。
確か、サイラオーグ・バアルだったな。
「サイラオーグ！　同じ日にあなたも呼ばれるなんてね」
部長が声を上げると、サイラオーグ・バアルも苦笑を浮かべながら

片手を上げる。
「リアス。君もインタビューか」
「ええ、あなたは終わったの？」
「これからだが、君達とは別のスタジオのようだ。だが、そちらの試合を見させてもらった」
そんな苦笑交じりの言葉に、部長も苦笑交じりで表情が強張った。
「情けない所を見られたわね」
「お互い様さ。素人臭さもどうにも抜けなかったし、俺に至っては不覚を通り越して敗北したからな」
そう答えるけど、サイラオーグ・バアルはあまりへこたれている印象がなかった。
確か、後援者が軒並み手を切ってきたとも聞いているんだけどな。
そんな俺達の視線に気づいたのか、サイラオーグ・バアルは俺達の方に向きながら肩をすくめる。
「……後援者の件なら問題は無い。元々ゼロから始めている以上、また這い上がればいいだけさ」
「……そうね。それに、私があなたとゲームをするとしても、負けてあげるつもりはないもの。なのに心配するなんて失礼かもね」
あー、確かに部長の言う通りか。
リアス部長は真剣にゲームに臨んでいるみたいだから、負けてやる気はないだろうしな。
例え部長に負けたとしても、サイラオーグ・バアルは後援者に手を切られただろう。なら、同じことなんだから部長達が心配するのはお門違いだ。まして部長達側であり縁のない俺達がするなんて論外ではあるよな。
それでも気にしてしまうのが、人という生き物の美徳なのか悪徳なのか。
そんなことを俺が思っていると、サイラオーグ・バアルはうんうんと頷いていた。
「どれだけパワーがあろうとも、形に嵌められれば敗ける。神器（セイクリッド・ギア）という力はもちろんだが、戦術などでそれをつくこともできるとお前

とソーナの一戦で学んだつもりだが、それが足りなかったからこその敗北だったな。……だが」
ぽん、と彼はイッセーの肩を軽く叩いた。
「赤龍帝、兵藤一誠」
「あ、はい！」
勢いよく頷くイッセーに、彼は小さく頷いた。
「ライザー氏との一戦を見ても思ったが、お前とは理屈無しのパワー勝負がしたいものだ。お互いゲームでぶつかるまでに、その力を高め研ぎ澄ませよう」
それだけ言うと、別のスタジオに向かって歩き去って行った。
俺はそれを見送りながら、少し笑っている気がする。
「あら、どうしましたの？」
「機嫌が良さそうですね。何か思うところでも？」
ヒマリとシャルロットにそう言われて、俺は素直に思ったことを言うことにする。
「いや、ああいう男って、同性として憧れるっていうかなんて言うか……な」
あんな風に生きられたら、きっと涙の意味を変えることもできるんだろうかと、そんなことを思う。
不遇な目にあっても性格を歪ませることなく、多くの者達の為になる理想を持って困難に立ち向かえる。
そういう背中や生き方は、多くの人に笑顔を見せられるんじゃないかと、そんな風に思うわけだよ。
「確かに、でかい男っすね。俺も高貴な血が流れてる身としては参考にしたいっす」
アニルも思うところがあるのか、そんな風に憧憬の視線を向けていた。
隣ではルーシアも、眩しい物を見ているような表情だ。
「……いいなぁ」
というか、何かが琴線に触れたのか、羨ましそうな声が聞こえてきたな。

ちょっと寂しげにも聞こえるそれに首を傾げていると、放送スタッフがこっちに向かって近づいてくると一礼してきた。
「お初にお目にかかります。この放送局でアナウンサーをしている者です」
「こちらこそ、今日はよろしくお願いね」
笑顔で部長と握手をすると、そのまま打ち合わせが始まっていた。
そんな感じでスタジオに入っていると、ギャスパーとかカズヒ姉さんがそわそわし始める。
「む？　ギャスパーはともかくカズヒも緊張しているのか？　意外だな」
「あのねぇ。ゲリラ戦とかレジスタンス活動とかを、テレビの撮影と一緒にしないで頂戴。……方向性が違う上、考えてもいなかったから心の準備が足りてないのよ」
ゼノヴィアにそう返すカズヒ姉さんは、なんというかすっごい居心地が悪そうだった。
逆に余裕の雰囲気を見せているのはイリナだった。
……嫌な予感を覚えているのは俺だけか？
「ふふふ。いい機会だから主とミカエル様の素晴らしさを伝えないと。天使としては説法と布教ができてこそね」
「やめましょうねぇ。放送事故というか放送テロよぉ」
リーネスの指摘が答えだろう。
聖書の内容を利かせるだけでも頭痛案件なのが悪魔だからな？
そらんじたり聖歌を歌ったりしたら問答無用でテロだからな？
緊急時に取り押さえられるようにしておくべきだろうか。
あ、ちらりと目が合ったカズヒ姉さんが頷いていた。
やはりカズヒ姉さんも同じことを思ってたか。なら所属的に近しいカズヒ姉さんに任せよう。
「すぅ……はぁ……。うん、深呼吸するだけでもだいぶ変わるよ、ギャスパーくん」
「あ、うん。ルーシアちゃんはしっかりしてるね」
「もちろん。私の兄はリュシオンだもの」

そんな風に、ギャスパーを落ち着かせているルーシアはにっこり微笑んだ。
流石というかなんというか。でも自分が深呼吸してからって当たりは、まだ年下って感じがするな。
……俺も深呼吸をしておくべきか。
「あ、木場祐斗さんと姫島朱乃さんはいらっしゃいますか？　おそらく質問が多くなると思われますので、その辺りついてちょっと打ち合わせを―」
なんて感じに話が進んでいるからな。俺に話が降られる前に深呼吸しておこう。
いや、フラれない可能性は高いと思うけどな。ＡＩＭＳ第一部隊としての質問はリーネスに行くだろうし。
そういう意味では、聖ミカエル監察団の顔であり名目上のリーダーのイリナが心配だ。実際のまとめ役やカズヒ姉さんとヒツギ割と完勝しているみたいだけど、いろんな意味で注目を集めるべきはイリナだからなぁ。
実際、イリナに聞こえないようにカズヒ姉さんとヒツギがハンドサイン込みで入念な打ち合わせをしているし。ルーシアとアニルの後輩組に気づかれないようにしている当たり、自然体の二人を上手くカバーにしつつ動くつもりっぽいな。
まあいいか。それよりまずは深呼吸―
「……はぁあああ!?」
―ってどうしたイッセー!?
「あ～……う～……ん～……」
『う……ぐすっ……この俺が……っ』
なんかシャルロットとドライグもダメージ入ってるし。
え、俺が深呼吸してる間に何が―
「そ、そんなに落ち込まないでください。子供人気を集めるのって、結構大変なんですよ？　そういう意味ではレヴィアタン様に次ぐ快挙なんですから、乳龍帝は」
―本当に何がどうした!?

俺達がめちゃくちゃ動揺していると、なんか出入り口側が騒がしくなってきた。
今度はなんだ。このちょっと気になる時に。
そう思いながら振り返ると、カイゼル髭が特徴的な、中年の男性悪魔がこっちにニコニコと微笑んできていた。
態々中年の姿になる以上、それなりに年季の入った悪魔だろう。あと体つきそのものはしっかりしているから、だらしない生活を送っているわけでもない。動くから見て相応に鍛錬も重ねているようだ。
そんな男を目にしたリアス部長は、ちょっと苦笑交じりだけど微笑んだ。
「あら、シュウマ・バアル殿ではありませんか」
……あの男が、フロンズ・フィーニクスやノア・ベリアルを抱えるシュウマ・バアルなのか。
俺達がちょっと注目していると、シュウマはニコニコと笑みを浮かべながら部長の前に来ると―跪いた。
な、なんだ？
思わず俺達が面食らっていると、シュウマ・バアルはリアス部長の手を取ると、両手で崇めるように包み込んだ。
「お久しゅうございます、リアス様。このような場でお目通りが叶うとは喜ばしいことです」
「……顔をお上げください、シュウマ殿。貴方は大王派の有力者。魔王派であり、何より筆頭のサーゼクス様の妹でもある私にへりくだるべきではないでしょう？」
リアス部長はそうとりなすけど、シュウマ・バアルは一向に立ち上がらない。
「いえ。派閥としては対立しているとはいえ、我々はともに冥界を憂いより良くせんとする同士です。なにより分家の長でしかない私風情が、本家の者であり次期当主でもあるリアス様と比べ物になるわけがありません」
……め、面倒なタイプだ。
間違いなくよいしょしているんだろうが、ここまで分かり易くへり

くだられるとそれはそれで無下にしづらい。
特にリアス部長は善良だから、尚更やりづらいだろう。
「……ですがそろそろ立ち上がってください。人目もありますし、眷属達も見ていますから」
「そうですか。少々気後れしますが、そこまで言われては仕方ありますまい」
そこまで言われてようやく立ち上がるけど、立ち振る舞いは完全に配下のそれだった。
……なんていうか、これが効く奴は結構多いよなぁ。
煽てられた上に能力のある者が従ってくれているとか、精神的に高揚する奴は少なからずいるし。
そんな対応に部長が対処を困らせていると、シュウマ・バアルの視線はイッセー達にも向いた。
少しだが、相手が下であることも踏まえたのか、そこからはへりくだる感じではなくしっかりとした上からの立ち位置が見えていた。
「そうそう、赤龍帝達リアス様の眷属達も、活躍は窺っているよ。他種族由来で対立派閥とはいえ、悪魔の一員としては喜ばしいことだ」
「え、あ、えっと……」
反応に困るイッセーを庇うように、朱乃さんと木場が前に出る。
まあ、この二人は部長の眷属としても年季が長い。対人恐怖症のギャスパーはもちろん、物静かな小猫ちゃんよりは立ち回りに慣れているだろう。
「あらあら。大王派の重要人物でもあるシュウマ様に仲間達と共に褒められるとは光栄ですわ」
「お褒めに預かり恐縮です。ですが、シュウマ殿の配下やお子様にも優秀な者は数多いでしょう」
そんな対応をうけて、シュウマ・バアルは照れくさそうな表情を浮かべていた。
「非才の身とはいえ、子に恵まれその伴侶にも恵まれ、更に巡り合わせにも恵まれたものでね。ティラもクーラも素晴らしい婿殿を迎えてくれてありがたいばかりだ」

素直にそう言いながら、同時に少し苦笑していた。
「だが彼らは私と同じで所詮分家筋。高貴たる本家の者達に対して挑戦的な態度を取ってしまう、若さゆえのあらもあってね。会合の時も不遜な態度だったろう。……申し訳なかった」
そう言って、シュウマ・バアルは軽く頭を下げた。
その様子に、リアス部長達を含めて周囲がちょっとどよめいた。
「頭をお上げください。分家とはいえ貴族の当主が下級の転生悪魔に頭を下げるなど、大王派の重鎮が知れば叱責ものです」
「そうですわ。リアス様は次期当主ですが、フロンズ様やノア様もあの会合に選ばれた者です。立ち位置としては対等です」
木場と朱乃さんがそう言うと、シュウマ・バアルは申し訳なさそうに頭を上げる。
だが、同時に静かに首を振った。
「いや、こちらが失礼なことをしていたのだ。頭を下げるべき時に下げるのは当然だ。叱責はそもそもそんな事態を引き起こした責任として素直に受け止めるさ」
そう告げた時、近くにいた眷属が彼の耳元で小さく耳打ちする。
その耳打ちにはっとなってから、シュウマ・バアルは部長に深く一礼した。
「申し訳ありませんが、我々も番組収録の為にきた身でして、これ以上は時間が取れないようです。もう少しお話をしたいところですが、失礼させていただきます」
「……ええ、シュウマ殿も収録が上手くいくといいですわ」
その言葉と共に、シュウマ・バアルは去って行った。
……なんていうか、厄介だなあれは。
「部長も大変ね。ああいうやりづらい相手は、正直に言って苦手な部類でしょうに。たまになら愚痴も聞くわよ？」
「そうねぇ。分家でありながら重鎮なだけはあるというか、油断できない相手ですけど、頑張ってくださいねぇ」
「そうね。今度お茶会も兼ねて愚痴を聞いてもらおうかしら」
カズヒ姉さんとリーネスにそう同情されて、部長も思わず苦笑して

いた。

……ホント、部長達も大変だなこれは。

できれば、他人事で終わってくれることを願いたいものだ。あの手の人種とはあまり深く関わりたくないぞ、俺は。

フラグになるなよ、絶対だぞ！

魔性変革編　第四十話　落日前夜

Other Side

「く、ククク……ッ。時は来た。時は来たぞ」
「ああ。漸く偽りの魔王共を滅ぼすことができる。それも目障りな神々もまとめてな」
「とはいえ、彼には困ったものですね。蛇をあんなところで使ってしまえば、感づかれると気付かないのでしょうか？」
「仕方あるまい、カテレア。所詮は真なる魔王の血筋を認められぬ愚者の一人、それも偽りの魔王の肉親だ。物の道理が理解できないのが基本だろう」
「まあいいだろう、クルゼレイ。奴の力は中々優秀だ。あの力があれば忌々しいサーゼクスの妹など、眷属をまとめても皆殺しにできる」
「というより、あの眷属だからこそでしょう、シャルバ？　実に彼らしく、そして奴らにとって皮肉な力ですね」
「全くだな。悪魔でありながら聖剣を力にするような奴らは、奴には決して勝てないからな。むしろ一瞬で殺せるのではないか、シャルバ？」
「その通りだな、クルゼレイ。なにより忌々しい赤き龍を宿したまがい物は、その腕に聖剣アスカロンを格納している。……挑んだ瞬間に赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）が滅びるのではないか？」
「かもしれませんね。それに今回、彼がついに動くとのことです。あとあの若者達も」
「なるほど。サーゼクス達は討たれた直後に、自らが築き上げてきたものを崩壊させるということか。……死体に鞭打ちをするようなも

のだが、とても痛快だな」
「そうだな。ではクルゼレイ、カテレア。俺達の動きは確定だ」

「まずはサーゼクスからじっくりと殺そう。手土産に奴の妹の生首を携えて……な」

「……阿呆が。ことを始める前に悪目立ちするようなことをするとはな」
「まあいいじゃない。おかげで諜報においてはディオドラに視線が集まっているんでしょ？」
「それはそうだし、俺としても現魔王や悪魔全体に大打撃を入れるかどうかは未定だから、ある意味旧魔王派の作戦は頓挫していいんだがな。それにしたって考えなしにもほどがある」
「それはそうですね。普通動く前に悪目立ちはしないですよね」
「……仕方ないとも思いますけどね。覚悟もない雑魚が力だけ手にしたら、そりゃ調子にも乗るでしょう」
「だからこそ、奴は愚図でありどうしようもない奴ということか。己の理想や野望や渇望があるのなら、それを成し遂げ決起するまでは力を秘しておくのが常だろうに。サイラオーグにしろフロンズやノアにしろ、ディオドラと同じだがな」
「……キッツー。流石マスター、バッサリ斬りますね」
「……むしろ秘して二番目何ですから、マスターも大概ですけど」
「一緒にされるのは不快だがな。奴らは理想に必要な決意も覚悟も足りなさすぎる」
「まあ確かに。……で、動くタイミングは合わせるのね？」

「ああ、それが最も確実に行動できる。王駒祭壇（ムロドーミーユ）の移設準備も進めておく。旧魔王派が勝つにしろ敗けるにしろ、その大規模作戦と時を同じくすることで、今の魔王達の腑抜けに対して渇を入れるには最適だ」

「冥界の未来を変える為にも、あの馬鹿どもの目を覚まさせる。その為にこそ冥革連合はあるんだからな。……死出の旅路に付き合ってもらうぞ」

「「……はっ！　我らヴィール・アガレス・サタン様の名の元に!!」」

「で、だ。盛大に黒で良かったんだな？」

「その通りです、アザゼル様。……繋がりの証拠も横流しのルートも、財産の隠し場所も掴んでおります」

「ったく。こっちの方も裏は取れた。ヴァーリの奴がイッセーに接触して態々警告までしてくれたしな」

「警戒されない方が作戦は成功するでしょうに。総督は子育ての類が苦手な要で」

「別にいいだろメリード、おかげでこっちにゃ有利になったんだ。……で、リーネス。悪いが―」

「リアス部長達には内緒に、でしょぉ？　それぐらいの腹芸はできますよぉ」

「悪いな。和地達にも俺が命令したってきちんと言っとけよ？」

「泥を被らなくて結構ですよぉ。旧魔王派を一網打尽にできるいい機会、逃がすわけにはいきませんものぉ」

「ああ、代わりと言っちゃなんだが、リアス達の援護にもなるいいサプ

ライズができた。……ま、シュウマ・バアル達の協力だから厄介だがな」
「そっちはそっちで面倒そうですねぇ」
「……失礼します、紅茶ではなく、精神安定の作用があるハーブティを入れてきましょう」
「いや気にすんな。むしろお前らにも本腰を入れてもらうんだからな」
「そうねぇ。……初の実証試験直後に悪いけれど、思いっきり動いてもらえるかしらぁ、メリード？」
「無論ですリーネス様、アザゼル総督。……私も仕える者として、あの仕えさせる資格のない下郎は認められません」
「そうか。お前がやる気になってくれるのはいいことだな」
「はい。私はザイアから離散した技術で子供が傷つき苦しむことを認められません。……同じように悪意を持ってあのようなことをするものならば、求めた力を振う意味があるというものです」
「よし。なら頼む」
「お願いねぇ、リーネス」

「じゃ、旧魔王派の連中にはご退場してもらうとするか。……禍の団に大打撃を与えるチャンスがこんなに早いとはな」

「ＨＡＨＡＨＡ！　なんか面白いことになってるじゃねえか！　曹操の坊主も来ていたら面白いんだけどＮＡ!!」
「天帝殿は楽しそうですな。そんなに面白い戦いに行けるのですかな？」

「応よっ。アザ坊が禍の団の連中を釣るんだとよ！　ゼウスやオーディンの爺も乗り気らしいぜ!?」
「それはそれは。魔王の末裔達は散々な目に遭いますなぁ」
「ああ。最も――」

「――誰だって負けたくて挑む馬鹿はいねえだろうしな。何か一つぐらい隠し玉があるかもしれないＺＥ？」

「では、そろそろ本格的に動きますか？」
「ああ、年単位で仕込みをしていたかいのあるタイミングだ。あまり待ちすぎて結局いいタイミングがないよりはいいだろう？」
「現魔王が率いる悪魔と敵対するのなら、和平を結んだオリュンポス達神々とも敵対するということだな。契約は果たされそうだ」
「……なるほどな。漸くあんたみたいな外道と手を組んだ意味を掴めるわけか。北欧神話と手を組んだと聞いた時は、我慢できずに暴走するところだったぞ」
「ん～、でもこっちとしちゃあんまり関係ないかな。だってロキは絶対和平に反対してるだろうし」
「まあいいでしょう。敵は手を取り合ってくるのは大変ですが、今の私が本領を発揮すれば面白いことになるでしょうし」
「はっはっは！　我が技術が本領を発揮するということか！　ついに、あのアザゼル総督達神の子を見張る者のメンツを潰せるということか！」
「ああ、十六年越しに契約を果たそう。時は来た――」

「遍く人々に絶望と悲嘆を与える代わりに、神々に鉄槌を与えてあげよう。さあ、まずは現魔王政権と第三世界に阿鼻叫喚と行こうじゃないか」
「「「「了解。神々に人誅を」」」」

和地Ｓｉｄｅ

俺は、目を閉じながらプログライズキーを手に持ち、座りながら深呼吸をしていた。
後ろめたい気持ちもある。迷惑をかけている自覚もある。自分でも優先するべきことじゃないとも思っている。
だけど、どうしてもチャンスが欲しかった。
幸か不幸か、部長達に黙っているように伝えていたことがあって、アザゼル先生もそこに配慮してくれた。
ヒマリや鶴羽に話すことは、情報が漏れないようにする必要もあってできなかった。イリナはミカエル様の直属として、相応の動きがあるからこっちも無理。イッセー達に話したら大騒ぎにになりそうだからこれも不可能。
たった一人でやることも覚悟していた。それぐらいの我儘だってことも分かっている。
だけど―
「……準備はいいかしら、和地」

―俺の隣に、カズヒ姉さんがいてくれる。
「ありがとう、カズヒ姉さん。俺の我儘に姉さんが力を貸してくれて、百人力だ」
「こっちの台詞よ、和地。私も我儘で来てるから、リスクが減って助かるわ」
そう、俺達は二人で作戦を開始する。
二人共、できることならと頼み込んだ過程が共通する別々の目的の為に。
そしてリーネスが用意してくれた、伏せ札を持ってして挑みに行く。

「彼女が流し続ける涙の、意味を変えてあげなさい」
「正義を汚す悪を倒して、正しき道を示してやりな」

そして、大きな戦いが始まる。
数多くの目論見が渦巻く、大一番。
そしてこの戦いには一つの別名がつく。

今代・初代の区別なく、魔王の名を持つ者が失墜する、四大魔王終焉のきっかけ。
魔王の落日と。

魔性変革編　第四十一話　初手から大軍団（双方）

イッセーＳｉｄｅ

「覚悟はいいわね、みんな」
リアス部長が俺達を見渡して、決意を確認してきてくれた。
俺達は今から、ディオドラ・アスタロトとのレーティングゲームに挑む。
アーシアのことを愛してるとか言いながら、ゲームの景品に見たいに扱う糞野郎。だけど部長より評価が高かったイシロ・グラシャラボラスを結果的にゲームで負かしたアスタロト家次期当主。しかもヴァーリが名指しで俺に警告してくる奴だ。
だからって譲ってやる気なんてかけらもない。なにより俺の可愛いアーシアちゃんを、あんな野郎にあげられるか。
俺は手を握り締めると、ふと視線の合ったゼノヴィアとお互いに頷き合う。
ゼノヴィアはアーシアにとってもう親友と言ってもいい。そして俺はアーシアの家族だ。
あんな野郎に渡してたまるか、俺が、俺達が小姑＆小舅だ。
「行くぜゼノヴィア！」
「行こうかイッセー！」
腕を組んでやる気満々で俺たちが声を上げる。
それを見て微笑みながら、リアス部長は再び声を張り上げた。
「敵はディオドラ・アスタロト！　単独であのイシロ・グラシャラボラスを相手どれる強さだけれど、負ける道理は何処にもないわ！　私たちの可愛いアーシアを景品扱いする下郎なんて、蹴散らしてやりましょう

！」
「「「「「はい、部長！」」」」」
声を合わせ、そして俺たちは転移の光に包まれて―
「やぁ、リアス・グレモリー」
―その目の前に、ディオドラがすでに立っていた。
驚く俺達、もしかして試合形式は文字通りの短期決戦（ブリッツ）なのか!?
で、でも眷属は誰一人としていないけど!?　ってことはつまり……事故!?
俺たちがそんな感じで慌ててると、ディオドラは肩をすくめながら微笑んだ。
「安心してくれ。ここでいきなり僕と君たちが戦うわけじゃないよ。そう、僕はね」
そう言いながらディオドラが指を鳴らすと、一斉に転移の魔方陣が展開される。
なんか十や二十じゃ効かない。それこそ百や二百はありそうな感じなんだけど!?
え、どういうこと!?　どんな特殊ルール!?
俺が慌ててると、なぜか部長や朱乃さんがすごい表情でディオドラをにらんだ。
え、なんでディオドラをにらみますか!?　どういうことですか!?
「これは全部、旧魔王派に与した家系の紋章じゃない！」
「それをまるで用意したかのように。どういうおつもりでしょうか……っ」
な、旧魔王派だって!?
馬鹿な俺でもわかる。これはつまりテロだ。
それなのに、ディオドラの奴は慌てるどころかまるで自慢げにしてやがる。
こいつ、つまり―
「ディオドラ、てめえ！」
「禍の団に内通していたのか！」
俺と一緒に木場も吠えるけど、ディオドラは邪悪な嫌な笑みを浮か

べてきやがった。
答えにするには十分だ。一切隠すことなく肯定しやがった。
俺たちが本気で睨みつけても、ディオドラは平然としてやがる。
「ああ。僕のしたいことが全然できない環境でゲームなんて面倒だからね。彼らのところにいる方が居心地がいいのさ。で、あっちに行く前にアーシアを持ち帰ることにしたんだよ」
こ、の、野郎……っ！
アーシアを持ち帰るだと？
アーシアのことを物みたいに！　許せねえ！
しかも禍の団と手を組んでるし、とどめにレーティングゲームまで台無しにしやがった。
許せないことの連続すぎて、こっちはどうにかなりそうだ。
「魔王様が主催するレーティングゲームを汚し、あろうことかテロリストと内通する。その上アーシアを物扱いするなんて、万死に値するわ！」
部ちぎれている部長に睨まれても、ディオドラの奴は余裕綽々だ。
この野郎、俺達には負けないってわけか！
「強がりはよしなよ。これだけの数の中級や上級悪魔に囲まれて無事でいられるものか。できるだけむごたらしく死んでくれ。君たちのせいでアーシアを手に入れるのが遅くなってしまったからね」
今なんて言った？
アーシアを手に入れるのが遅くなった？　どういうことだ？
さっぱりわからないことを言ったディオドラは軽くため息をつくと―
「―まあそれももう終わりだ」
―いつの間にか、アーシアの背後に回り込んでいた。
早い。周りに気を取られてたにしても、それでもディオドラの奴、イシロとの戦いよりもさらに速い。
クソッタレ、これじゃ間に合わな―
「え？」（アーシア）
「―え？」（ディオドラ）

『『『

バそうで怖いんだけど。
なんかもう、脳が現実を理解するのを拒絶してるって感じだ。
俺たちがぽかんとしていたその時だった。
「……何がどうなっているのかね？」
その聞き覚えのある声に、俺たちもディオドラも振り向いた。
そこにいるのは金の髪を持つ一人の上級悪魔。
フロンズ・フィーニクスだ。なんでここに!?
「フロンズ!?　あなた、どうしてここに!?」
「馬鹿な!?　なんで僕とグレモリーのゲームにお前が介入してくるんだ!?」
部長もディオドラも驚ているってことは、これはどっちにも知らされてないってことか。
全員が思わぬ人物に驚愕していると、フロンズは肩をすくめながらため息をついた。
「全く。情勢もわからずにこんな愚考をするとは。短期間でやけに強くなったと思ったら、オーフィスの蛇にでも頼ったかね？」
フロンズの言葉で、俺はディオドラがイシロに勝った理由と、ヴァーリの警告の理由がようやくわかった。
野郎、ドーピングで強くなったってのか!?
「どこまでもゲームを汚しつくしてくれるわね。ふざけたことを……っ」
部長はもう、起こりすぎて気を失いそうな状態だ。
気持ちは分かるぜ。
ゲームに俺達は真摯に望んできた。フロンズやノアはゲームを道具みたいな感覚でやってるけど、ルールはきちんと守ってやっていた。
それすら無しで何てことを！　許せねえ！
「……アスタロトの次期当主がここまで腐っているとは、アスタロトの一族には同情するよ」
「……これ以上恥を上塗りさせない方がいいですね」
「あ、あああ、アーシア先輩は渡しません！」

木場も小猫ちゃんもギャスパーも、我に返って戦闘態勢をとる。
リアス部長や朱乃さんも、周囲を警戒しながら戦闘態勢だ。
だけどディオドラの奴はまだまだ余裕だった。
「は、ハハハ！　大事なことを忘れてるね？　ここにどれだけの旧魔王派の悪魔が、それも上級や中級がいると思ってるんだい!?」
「はっはっは。大事なことを考えたまえ。なんでそんなところにわざわざ私が出てきていると思っているのかね？」
そこにかぶせるように、フロンズがわざとらしく笑って返した。
いや、言われてみればどっちもその通りなんだけど、フロンズの方はどういう意味―
『『『

！

と、とりあえず分かっているのは、なんかすっごい大軍同士の戦いが始まりそうだってことだ。

いやちょっと待って。なんでこんなに大軍が出てきてるんだよ。おかしいだろ。

え、これってまさか待ち構えてた？　俺達って囮にされた？

「えっと、フロンズさんだっけ？　なんでこんなにたくさんいるの!?」

「気にしないでくれたまえ。このゲームは本来なら、新たな特殊ルールの研究という名目で始まる、大量のデビルレイダーが第三勢力として双方に攻撃を仕掛ける中、どちらの王が生き残るかを競う特殊ルールで行われる予定だったのだよ。デビルレイダー部隊の訓練も兼ねているのさ」

律儀に俺の質問に答えてくれてるけど、どんな鬼試合だよ。

絶対短期決戦で終わる。この数で圧殺されて終わるに決まってる。

だけど今は、この数が本気で頼もしい。

旧魔王派の連中も、数で圧殺するつもりが上回られたことで気圧されてるし。

「な、舐めるなぁ！　こっちにも伏せ札の一つぐらいはあるんだよぉ！」

そう吠えた一人の悪魔が、魔方陣を展開してアイズみたいなのを送る。

その直後、遠くから何かがこれまた数百ほど近づいてくる。

あ、なんかいっぱい飛んできてる。音はしないけど……音速越えてる？

「ってミサイルじゃないか！」

え、マジか木場!?

っていうか今更だけど用枠分かった。あれ和平会談に襲撃してきた連中が使ってたサリュートとかいうのだ。

ちょっと外見が違うけど、確か有人型らしいサリュートⅡとかあったから、たぶんそれだ。

いやそういう問題じゃないっていうか、マジでミサイルがたくさん

来てるとかヤバい。あと第二射撃ってきてるんだけど。
俺達はちょっと慌てるけど、フロンズはなんでか知らないけど、不敵な笑みすら浮かべてやがる。
「安心したまえ。こちらも伏せ札は用意しているとも」
え、こっちも？
俺達がきょとんとしてると、フロンズは左腕を掲げる。
その瞬間、なんか強大な魔力がミサイルに上から襲い掛かった。
「も、もう何が何だかぁあああああ!?」
ギャスパーが絶叫する気持ちも分かるっていうか、正直全然何を考えればいいのか分かんなくなってきた。
「っていうか！　増援、増援なのか!?」
「それもあの火力は上級悪魔クラスね。少なく見積もっても百人近くいるでしょうけど、これは一体どういうことなの？」
部長もよく分からないながらに上を見上げて……固まった。
え、何がどうしたんだ？
つられて俺達も上を見上げると……なんだアレ。
なんかこぉ、サリュートⅡを二回るぐらい大きくしたような、背中が張り出ていないでっかいロボットがいた。
いや、本当になんだアレ。
俺達の驚き顔に、フロンズはちょっと嬉しそうだった。
「度肝を抜かれてくれると少しは嬉しいな。あれが、我々大王派のシュウマ殿を中心とする者達が開発した、冥界防衛用兵器、ＤＦ（ディアボロス・フレーム）だ」
へー、そうなんだー。
俺、もう何が何だかわからないよ。
「機械的に悪魔の体を拡張再現した躯体に動力源を組み込む悪魔がコアとして乗り込むことで、悪魔が搭乗している間は上級悪魔相当の出力を発揮することができる、冥界防衛用の新兵器だ」
あの、フロンズさん。
俺達ファンタジーとかそっちよりの存在なんですけど。
サリュートとかもだけど、完璧にＳＦの方向に行ってるんだけど。

「技術的には未完成だったので発表はまだだったが、サリユートⅡの残骸から得られたデータで一気にブレイクスルー出来てね。宣伝とテストも兼ねて試験機を一個師団ほど用意させてもらったよ」
「……よく魔王様から了承が下りたわね」
部長が唖然としながらそういうと、フロンズはちょっと意外そうな表情をした。
「私も意外だった。……が、会話の節々やシュウマ殿の含みを踏まえて考えれば、こうなる可能性は想定したうえでの備えだったのだろう」
そんな風に応えてから、フロンズはデビルレイダーとＤＦを背に、旧魔王派の悪魔達やディオドラに向き直った。
「さて、虎の威どころか虎の群れの威を借りて言おう」
そこにいるのは、間違いなくリアス部長に並び立てるだろう、一人の上級悪魔の一人だ。
多分仲良くなれないだろうけど、それでもこの人が部長のライバルになれるだけの人だと、俺はその雰囲気でなんとなく思った。
「―我らが軍勢を前に、旧態依然とした者達が勝てるかね？　投降は受け付けるので賢明な判断をしたまえ」
威風堂々としたその佇まいは、間違いなく一人の王（キング）だよ、この人。

魔性変革編　第四十二話　急転直下

祐斗Ｓｉｄｅ

想定外だねこれは。それも、悪い意味でもいい意味でもだ。
ディオドラ・アスタロトの性格がいい物でないことは悟っていたけど、禍の団に寝返るほどとは思ってなかったし、ましてレーティングゲームとタイミングを合わせるなんて想定外だ。
そして同時に、ここまでの迎撃態勢が整えられていたことも意外だ。
テロとは基本的に、常に後手に回るものだ。それがふたを開ければこれだけの大軍勢が僕たちを守れる位置に配備されていた。狙っていると言われた方が信じられる。
いや、たぶんだけど狙っていたんだろう。
いくら新しいレーティングゲームの模索だからって、サプライズでそんなものをルーキーの悪魔に叩き込むわけがない。
ディオドラ・アスタロトが十中八九仕掛けると踏んで、そうなってもいいように備えていたということか。
「すさまじいですわ。ですが、これだけの戦力がいるのなら……っ」
朱乃さんも圧倒されているけど、すぐに気を取り直して稲光を纏いながら的に微笑んだ。
ドＳ全開の微笑だ。敵からすれば悪夢といっていいだろう。少し下がっている者が多いのはそういうことだ。
何より、彼らからすればこの状況は悪夢だろう。
圧倒的な数の暴力でリアス部長を亡きものにしようとすれば、それに匹敵する数の敵が出てきたのだ。それも、大王派が開発した新型兵器やレイダーが大挙してなのだから。

それでもこちらに敵意を向けてきているのは、敵ながら立派といってもいい。それなりに覚悟を決めてきていたのだろう。
……だけど、今はそこじゃない。
「いろいろとお兄様には聞きたいこともできたけれど、まず優先するべきは下郎の排除ね」
アーシアさんを守れる位置に立ちながら、部長が消滅の魔力を纏うように展開する。
「……あまりにふざけたことをしてくれたな。なにより、そんな下衆がアーシアに手をだそうだなんて、殺意が止まらないよ」
デュランダルをオーラをまき散らしながら構え、ゼノヴィアが腰を軽く沈める。
そして何より、彼も我慢の限界だ。
「ディオドラ。てめえのことは本当にムカついてたけど、全然足りなかったぜ」
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ!!』
赤い龍の鎧を身にまとい、左腕の籠手から聖剣アスカロンの刃を伸ばす。
その上で、その切っ先はディオドラに突きつけられた。
「覚悟はできてるんだろうなぁ、ディオドラぁ！」
怒り心頭のイッセー君に睨まれて、ディオドラは一歩を確実に下がった。
表情は笑みだが、然し少しひきつっている。
当然だ。圧倒的有利な状況でアーシアさんをさらおうとしたが、アーシアさん自身がそれをあっさり潜り抜けたうえで完全に数の有利を覆されたんだから。
とはいえ、僕たちも容赦する理由は無いね。
「小猫ちゃん、ギャスパーくん。僕たちはフォローに回った方がいいだろうね」
「は、はいぃ！　アーシア先輩は守ります！」
ギャスパー君も震えながら、だけと止まることなく構えている。
僕も聖魔剣を展開しながら、アーシアさんをかばえる位置に立っ

た。
そして小猫ちゃんも猫又としての本領を見せてそれに続き―
「――ッ!? 皆さん、アーシア先輩の後ろから!?」
そう言いながら振り返ったた小猫ちゃんだけど、すべてが遅かった。

「なるほどな。これはディオドラでは荷が重い」
「あ……ぅぇ……っ!」
その瞬間、そんな声とくぐもった悲鳴だけを残してアーシアさんの姿が消える。
あっけにとられた次の瞬間、駆け出しかけていた小猫ちゃんが真逆に方向に振り返った。
「ディオドラの上です!」
慌てて視線をそちらに向けると、すでに一人の男がディオドラの隣に降り立った。
右腕は上に向けて曲げられていてそこに乗せられるように、みぞおちの当たりで九の字に折れ曲がったアーシアさんが悶絶している。
「……てめぇ! アーシアに何を―」
「抜かせ新米(ルーキー)、その程度で吠えれると思うな」
イッセー君が踏み込もうとするその瞬間、男の左手が動いたと思ったら轟音が鳴り響いてイッセー君がのけぞった。
鎧にひびすら入りながら、それでもイッセー君はすぐに体勢を立て直す。
だけど突貫はしない。それだけの強敵だと理解できてしまったから、突貫したくてもできないんだ。
……新手の参入、それも間違いなく強者のそれに、誰もがそこに注目する。
そして何より、その男を僕たちは知っている。

「……これは、意外な人物が現れたな」
「全くね。どういうことか、問いたださずにはいられないわ」
フロンズ氏も目を見張り、リアス部長も警戒して突貫できない。
その理由は強さだけでなく、何よりその人物があまりにも意外だったからだ。
「尋ねよう。その凶行、主の了承を得たうえでの行動ということでいいのかな？」
「答えなさい、イシロ・グラシャラボラスの戦車（ルーク）、アルケード！」
二人が問いただす男は、イシロ・グラシャラボラス様の眷属悪魔である、戦車のアルケードだ。
下級悪魔の生まれでありながら戦車の駒を二駒使用して転生しているという、イッセー君に勝るとも劣らないその駒価値。ある程度の浮きはあるだろうけど、間違いなく将来性込みで絶大な力だろう。
そんな彼がディオドラの援護と取れる行動をとっている。これはもはや、信じたくないけど考えるしかないことがある。
それはもちろん、主であるイシロ・グラシャラボラス様が関与している可能性だ。
正直な話、そう連想するしかないけど信じられない。
彼女は個人に対する寄付を冥界だけでなく人間界に対しても行い、難民キャンプに資金だけでなく物資の援助を行っていることでも有名。冥界の医療団体に対する莫大な資金援助により、数多くの貢献をしている慈善活動家だ。
そんな彼女が、下級を替えの利く手駒として扱うような旧魔王派に与するなど想像できない。
だけど、アルケードはそれに対して平然とした態度を取って宣言した。
「半分正解だが、肝心なところを訂正しよう。……俺とイシロは本質的には対等だ。これまでの活動はマスターに対する契約の一環として行っていたものに過ぎない」
なん、だって？
唖然となる僕たちを見て、アルケードはディオドラにアーシアさん

を押し付けながら、一歩前に出ると拳を構えながら、更に口を開く。
「まあ主は極まった外道故に疲れることもあるが、交わした契約には真摯だからな。亜種聖杯だけでなく幽世の聖杯まで使った離れ業で、こうしてデミサーヴァントという形で生まれ変わったのだから、それなりの苦労はするさ」
その言葉を聞いて、僕たちは戦慄を覚えた。
デミサーヴァント。それはつまり、サーヴァントに由来するということだ。
さらに幽世の聖杯は、死者の蘇生すら可能にするといわれる神滅具。
そして生まれ変わったという発言。
それはつまり、一つの結論を導き出していた。
「……聖杯戦争におけるサーヴァントの願いとして、受肉しての第二の人生が一種の定番とは知っている。そこに一ひねりを加えたということか」
「つまり、あなたはかつてサーヴァントだったということ!? だから戦車の駒を二つも……っ」
フロンズ氏もリアス部長も、さすがに歯噛みするしかない。
サーヴァントを悪魔の子供として生まれ変わらせる。発想に至ることがまずすごいというほかない。
そしてその結果、悪魔の力とサーヴァントの力が混ざり合ったからこその駒価値十の転生か。
僕たちが警戒していると、アルケードはさらに信じられないことを告げる。
「語っておけと主に言われていることを告げよう。イシロ・グラシャラボラス眷属はたった一人の例外を除けば、イシロを含めた全員が俺と同類だ」
「冗談だろ!? あの人も元サーヴァントなのかよ!?」
イッセー君がそういうのも無理はない。
その話が本当だとするなら、獅子身中の虫を赤子として潜り込まされたことになる。

想定できるわけがない。最悪だ……っ
そして、その最悪はさらに続く。
「そして裏切者はイシロ・グラシャラボラス（俺達）眷属だけではない」
そう言いながら指を鳴らすと、大きな映像配信用の魔方陣が展開される。
そして、そこに映っている光景を見て僕たちは目を見張る。
そこは冥界の大都市で、武装したサリュートⅡ千機近くを従える、何百人もの若手悪魔たちの姿。
そしてそれを従えるように玉座のような祭壇の前に立つ男を横眼で眺め、アルケードは肩をすくめた。
「少し前にタイミングを合わせることを決定したうえで、冥界でクーデターによる独立政権冥革連合による宣戦布告だ。ヴィール・アガレスもなかなか過激だと思わないか？」
ヴィール・アガレスが……クーデターだって!?

Other Side

制圧された都市は、内乱終結後に建てられた大都市バシャルンという。
かつての内乱で四大魔王の末裔たちと敵対し追放するという行為を行った悪魔たちの心を慰撫するために建立され、内乱時に魔王血族側のリーダー格だったビドレイド・バシャルン・ベルゼブブにあやかって名付けられた都市は、内乱の情報を残す資料館や内乱の犠牲者の慰霊碑が立てられている地方都市だった。
そしてその年を制圧した悪魔たちは、慰霊碑が置かれる広場で、慰

霊碑を粉砕して本陣を敷いていた。
クーデターを起こした悪魔たちは、そのほとんどが百年も生きてない若手たちだ。
実力はまちまち。最上級悪魔に到達したものも多少入るが、そのほとんどは上級悪魔の範疇内であり、平均的な上級悪魔がほとんどだろう。
そしてそんな彼らを率いるのは、鋭い目をした一人の少年。
ヴィール・アガレスは粉砕した慰霊碑を踏みにじり、冥界全土に声を放つ。
「……諸君！　現魔王と元七十二柱を中心とする政府は惰弱である！」
大きな声で、絶対的な意志であるといわんばかりに断言する。
「力量のことではなく精神のことだ。彼らの精神は脆弱であり、強きを求めず弱きに逃げた！　悪魔の駒（イーヴィル・ピース）の現状こそがその証明だ！」
そう吠えるヴィールは、上級悪魔が与えられる一セット分の悪魔の駒を見せながら、歯を食いしばる。
「滅びに瀕した悪魔を増やし、戦力を高める？　上級悪魔一人につき、二十にも届かない数を増やす権限を与える程度で何が変わる！　そして真に悪魔たる者たちを強化せず、まがい物で水増しして、本来の悪魔たちが強く増えると本当に言えるのか……否だ！」
堂々と、誰にでも聞こえるように、魔王派大王派の区別なくヴィールは否定する。
「真に悪魔を復興させるというのなら、領主たる貴族たちに与えられる駒は数百はあってしかるべきだ！　悪魔を強化するというのなら、チェスという遊興にあやかることなく、より強大な力を与える駒を作るべきだ！」
そこで一呼吸置き、ヴィールは嘆き悲しむように首を横に振る。
「……そしてそれは不可能ではない。少なくともアジュカ・ベルゼブブならばそれは確実に可能であり、何より我々もそれを可能としている！　これがそうだ！」
そう言いながら出すのは、二種類の駒だった。

チェスのキングのような形状の駒と、戯画的な悪魔の像が彫られた、同じサイズの駒。
キングの方は百個以上、悪魔の像は十個足らずをそこに浮かべ、ヴィールは声高らかに宣言する。
「こちらの駒は王(キング)の駒。能力は所有者の力を高めるというものだが、その上昇幅は女王《クイーン》のそれをはるかに超え、並みの上級悪魔なら数十倍から百倍以上に高めることが可能だ。他種族から転生させたものに使うのはリスクがあり、またもとから強大なものに使うとオーバーフローを起こすリスクもあるのが難点だが、比較的製造はたやすい。そして―」
そして十個足らずの駒を掲げ、ヴィールはさらに声を上げる。
「この真魔(ディアボロス)の駒はチェスの駒の要素を超えたさらなる進化系だ！能力は王の駒と同様だが、オーバーフロー分を転生時に排出することで、強大な物すらその恩恵を受けることができる」

その言葉は、多くの悪魔たちに甘く聞こえるだろう。
使うだけで強大極まりない力を得られる。その言葉に、彼らに付こうとする者は増えるだろう。
それだけでなく、更にヴィールは配下と共に魔力を利用して、大量の悪魔の駒を中に浮かべて見せる。
兵士の駒以上に極めて質素なその駒は、浮かんでいるだけでも数千を超え数万に近い。
「そして大量生産に特化したこの民(シビリアン)の駒を併用すれば、戦闘だけでなく農業や庶務といった雑務にすら転生悪魔を大量に利用できるだろう。すでに我らはこれを十万ほど用意している！」
そこから生まれる動揺を察しているのか、ヴィールは数十秒ほど沈黙する。
そしてその上で、更に続ける。
「人間界には数多くの理不尽や自業自得で生活に苦しむ者もいるが、その中には相応の割合で学業や農業の素質を持っている者もいる。彼らを引き入れることで、増えた転生悪魔の分の諸問題を解決したう

えでおつりをつくることは容易だ」
　そして、彼は本心から宣言する。
「断言しよう。我々は君たち全員がこちらについたとしても、生活を保障することは十分可能だ」
　その言葉に、多くの者が心を揺るがされた。
　今説明された神器の駒があれば、悪魔の絶滅危機は完全に回避されるだろう。さらに戦力においても十分すぎるほどの強化が成されるはずだ。
　故に、このままいけば確実に冥界を割るだけの人員を味方に引き込めることはできただろう、
　だが、それに待ったをかけるようにヴィールは睨みつけるような鋭い目を向ける。
「そしてここに確約しよう。アジュカ・ベルゼブブはこれらを作ることができる！　それも、我々以上にだ！」
　そこにある感情は、極めて分かりやすい怒りだった。
「やろうと思えばいくらでも作れるだろうに、奴はそれをしなかった！　そしてほかの魔王は愚か大王派も、それをとがめ非難しない！……俺はそれが許せぬがゆえに、何年もの間雌伏して準備したうえでここに反乱を決定した！」
　その怒りのままに、ヴィールは映像を見ているだろうアジュカに向けて指を突きつける。
「我らが要求することはただ一つ！　アジュカ・ベルゼブブよ、その怠惰を猛省しこれらの駒の生産を開始、その戦力を持って我らを打倒せよ‼」
　同時に彼は魔方陣を展開し、映像を映し出す。
　何かの通信機器から流れる映像は、多くが黒く染まり一部は破壊されているのか映像を映し出さないが、一部では室内で、けげんな表情や動揺している者、更には興味深い表情を浮かべている者といった、数多くの悪魔の姿を映し出している。
「我々はこの宣戦布告と時を同じくして、王の駒一つと民の駒千個を、元七十二柱の現当主の本城に届けている。そして首都リリスには王

の駒と真魔の駒を送らせてもらった」
　あろうことか、自分達のアドバンテージを届けるという暴挙に、多くの者が目を見張っているだろう。
　それを理解しながら、ヴィールは宣言する。
「先も言ったが、我らの要求はこれらの駒の生産体制を確立させて我らを打倒することただ一つ。アジュカ・ベルゼブブが冥界政府の力をもってすれば、半年もあれば王の駒と真魔の駒は我らより多く獲得できる。その力をもってすれば我らを打倒することは可能なのだ！」
　自らを倒す力を示し、どうすれば勝てるかを堂々と宣言する。
　狂っているとしか思えないが、然しその場に立つ者のほとんどは動揺することなくヴィールと共に並び立つ。
　そして王の駒と真魔の駒を胸に当て、誰もが一斉に駒によって転生する。
　自らも真魔の駒を使って転生したヴィールは、駒によって転生した百人以上の上級悪魔と共に、胸を張って宣言する。
「これは冥界が真に強くあるための反乱であり、我らは打倒されなければならない！」
『『『『『『『『『『我々は打倒されるべき試金石である！』』』』』』』』』』
「冥界政府よ、自らの惰弱を改め我らを越えよ！」
『『『『『『『『『『王と真魔の駒を悪魔を導くすべての貴族に！』』』』』』』』』』
「だがしかし、あまり長く待ってやるつもりはない！　全ての駒は我らが王駒祭壇（ムロドーミーユ）によって少しずつ確実に生産できると知れ！」
『『『『『『『『『『怠惰に落ちるならば死あるのみ!!』』』』』』』』』』
「これは宣戦布告である！　力を得て我らを打倒することを望む！
脆弱であり続けるならば、邪悪なる禍（カオス・ブリゲート）の団を利用して踏みつぶす！
　本意ではないが、今のままならば是非もない！」
『『『『『『『『『『我ら最高の敗北を望む者！　我らに最悪の勝利を与えることなかれ!!』』』』』』』』』』
「これより、我ら冥革連合は、禍の団との同盟と冥界政府に対する敵対を宣言する!!」
『『『『『『『『『『我らの屍を乗り越え、真に強き冥界を作り上げたまえ

!!

「「「「「「「「「「

魔性変革編　第四十三話

イッセーＳｉｄｅ

冗談、だろ……っ！

俺たちはその映像を見て、冗談抜きで度肝を抜かれた。

言ってることがどうかしてる。正気かあいつら。

「なかなか狂った行動だが、世界を変えようとする連中が凡俗と同様の思考と行動をするわけがない。そうは思わないか？」

「僕としては彼らに勝ってほしいけどね。まぁ、この後王の駒ももらう予定だから、当分は別にいいけどさ」

アルケードとディオドラの言葉に、俺たちは呆然としてたけどはっとなった。

「……ディオドラ、それにアルケード！　ヴィールもだけれど、これだけのことをしてただで済むと思っているのかしら!?」

「同感だな。現状で冥界政府に反旗を翻せば、最低でもオリュンポスやアースガルズ、そして高天原に須弥山も敵に回すぞ？」

リアス部長とフロンズがそういうけど、二人とも平然としている。

特にアルケードは、何て言うかすっごく楽しみというかワクワクというか、待ちきれないって感じの表情をしていた。

「当然だ。そも俺はオリュンポスの神々共を蹂躙することを条件に、あの外道と契約を交わしているからな。和平が結ばれようと無かろうと、いずれこうなっていたともさ」

なんだって!?

「ギリシャの主神たちを蹂躙することが目的とは、正気かい？」

「……どうかしてる」

木場と小猫ちゃんがそううなるけど、アルケードは何を言ってるのかわからないって顔をしている。

「世界全土を敵に回すテロリストになる奴に、それを聞いてどうなる？　何より、俺は生まれつき周りと違う行動や思考で動いているんでな」

「全くだね」
そんなアルケードに、ディオドラもうなづいた。
まだ悶絶してるアーシアを抱えながら、こっちに向かつく表情を向けてきやがる。
「第一、作戦がうまくいけばあいつらみんな死ぬんだもの。気にする必要もないだろう？」
なんだって？
思いっきり迎撃態勢抜群みたいだけど、それでも神様たちを圧倒できるとでも思ってるのか？
くそ、なんかすっごい嫌な予感がしてきやがる。
みんながそんな感じになっていると、アルケードはディオドラにちらりと視線を向けた。
「ならさっさと戻っておけ」
「わかっているよ。……ゲオルグだっけ？　そういうことだからよろしく頼むよ！」
うなづいたディオドラが、当たりを見渡しながら急に大声を上げた。
その瞬間、なんか濃い紫っぽい色の霧が、ディオドラの周囲を包み込んだ。
なんだ？　なんか嫌な予感がするんだけど―
『チッ！　相棒もほかの奴らも気をつけろ！』
その時、ドライグが部長たちにも聞こえるように声を上げた。
しかもなんか切羽詰まってる。
ドライグが切羽詰まるとか、そんなにヤバいってことか！
『あれは絶霧（ディメンション・ロスト）、赤龍帝の籠手（俺）より強力な上位神滅具の一角、転移すら可能とする最強の結界系神器（セイクリッド・ギア）だ！』
マジか。ドライグより格上の神滅具佳代。
そんな連中までテロってるとか、禍の団の人材豊富すぎだろ。
いやちょっと待て？　転移すら可能ってことは、あれ転移目的ってことか？
まずい。ディオドラの奴逃げる気か!?

俺が慌てると、ディオドラも気づいてこっちに嘲笑を向けてきやがった。
「じゃあね赤龍帝。僕はこれからアーシアとちぎってくるよ。意味は分かるかな？」
の……クソやろう！
俺はとっさに駆け出そうとするけど、それより早くディオドラは霧に包まれる。
そして一瞬で霧は晴れ、もうディオドラもアーシアもどこにも見えなくなった。
「あ……アーシアぁあああああああっ!!」
畜生、またかよ！
またアーシアを守れなかった！　一度だけじゃなくて二度もだなんて！
俺は崩れ落ちて地面を殴りつけるけど、すぐにリアス部長は俺の肩に手を置いてゆすってくる。
「気持ちは私も同じよ、イッセー。でも、此処はすでに戦場なの。気を引き締めないと―」
「そういうことだ。第一、此処でお前たちを逃がすとでも思っているのか？」
そうアルケードが言うと、上級悪魔やサリュートⅡがこっちに戦闘態勢を取ってくる。
俺達やフロンズの配下も構えるけど、このままだとアーシアを助けに行く余裕がない。
しかもなんか意味深なことも言っていた。それも考えるとなおさらディオドラをほおってなんて置けないじゃねえか！
くそ、どうすれば―
「―ひゃん!?」
―そんな時、朱乃さんの場に似合わない声が響いた。
振り返ると、朱乃さんのお尻を掴んでいる爺が、後頭部に踵を叩き込まれてた。
「そこまでにしといてお父様。というか完璧にセクハラだから」

「うるさいことを言うのぉ、リヴァは。こんないい尻があるなら揉まない方が失礼じゃろうて」
「いやなにしてんの!?　朱乃さんのお尻になんてことしてんの!?」
　全然反省してない爺さんに俺は怒鳴って、そのあと爺さんの正体に気が付いた。
「って、確かオーディンの爺さんじゃねえか？　なんでここに!?」
「……お初にお目にかかります、主神オーディン殿。できれば戦乱を尊ぶアースガルズの文化なども知りたいですが、此処は危険な戦場ですよ？」
　フロンズがそんなことを言うと、オーディンは肩をぐるぐる回しながらため息をついた。
「なに。予想以上に敵が多くこちらに来て負ったのでな。結界が頑丈故に儂等ぐらいしか入れなかったので、アザ坊の奴に駆り出されたのよ。主神扱いが荒い小童じゃのぉ」
　あ、アザゼル先生の援護だったのか。
　そんな時、なんか絶大な力を俺は感じた。
　振り返ると、旧魔王派の悪魔たちが魔力を溜めに溜めている。
「北欧の主神だ！」
「討ち取れ！　名が上がるぞ！」
　げ、数も多いし威力もヤバそう。
　近くのフロンズも表情を険しくして、配下に指示を出すために振り返る。
　だけど、オーディンの爺さんが手を伸ばしてそれを止めた。
「落ち着け若造。……グレモリーの娘さんたちや。ここはこのおいぼれが準備体操がてらにこの若造に手を貸すから、おぬしらはさっさと行くとよい。援護に魔法もかけてやろう」
「言ってる場合!?　俺たち抜きで大丈夫かよ!?」
　なんか心配なんだけど、爺さんは肩をぐるぐる回しながらのんきな調子のままだった。
「神の心配など百年早いわ。第一のぉ」
　そんなことを言ってたら魔力がはなたれそうになる。

そんな時でものんびりと、オーディンの爺さんは持ってた槍の石突でぽんと地面をたたいて―
「こんなもんで主神(ワシ)をやろうなぞ百年早いわ」
―その瞬間、魔力がごっそりと消滅した。
「な……にぃ!?」
「馬鹿な!?」
「ほぉ。さすがは主神だ」
慌てる上級悪魔たちと、平然としているアルケード。
そんな様子を見ながら、オーディンの爺さんは槍の切っ先を向ける。
「ほれ、馳走じゃ。……グングニル」
その瞬間、絶大な力が放たれた。
さっきの上級悪魔たちの砲撃全部を足しても足元にも届かない。
そんな絶大な砲撃が、悪魔たちを飲み込もうとして―
「さすがにそれは見過ごせんな」
―そこに、アルケードが割って入る。
アルケードは体に力を籠め、更に体中から光る文様を浮かび上がらせた。
そしてその絶大な砲撃に向けて拳を構えると、一気に突き出した。
「ぬぅおりゃぁ!」
その瞬間、グングニルの一撃が拳の一撃でほとんど吹き飛んだ。
え、冗談だろ?
その場の全員が面食らい、それで動きが止まったから、残った砲撃で旧魔王派の上級悪魔が数人ほど消し飛んだ。
ほんのちょびっとでも上級悪魔を消し飛ばせる爺さんもすごいけど、本当の威力を拳でぶっ飛ばしたアルケードもヤバい。
あ、これ俺達じゃ援護もできない。
「……馬鹿な。なんだあの威力は。どちらも化け物か?」
「ひぃいいいい!　ちょ、頂上決戦ですぅぅぅぅぅ!」
ゼノヴィアが絶句してギャスパーが振えるなか、オーディンの爺さんの隣にリヴァとか言われてた女の人が立った。

「お父様。これ、こっちも本気で行かないとまずいですよね？」
「じゃのぉ。まさかこれほどの猛者がいたとはな。……油断するとワシらもやられかねんから気をつけよ、リヴァ」
そんな警戒をするオーディンの爺さんと娘らしいリヴァって女の人。
そしてフロンズが頷くと、右手を上げた。
「では露払いは我らにお任せを。総員、戦闘開始！」
フロンズの号令に従って、Ｄ（ディアボロス・フレーム）Ｆとかいうのとデビルレイダーが、旧魔王派の上級悪魔やサリュートⅡ相手に戦闘を開始する。
お、俺達はどうすりゃいいんだ？
ちょっと戸惑っていると、フロンズがリアス部長に振り向いた。
「早く行きたまえ！　ここはこちらで引き受けるので、自分の眷属を助けに行くといい！　……どうやらディオドラは、本来の自分の陣地に戻っているようだ！」
え、いいのか？
ちょっとだけ部長も迷ってたみたいだけど、そこにリヴァって人が振り向いて、不敵な笑みを浮かべた。
そしてその両手には、何故かプログライズキーとでっかいベルトがある。
「大丈夫。こっちだって弱いわけじゃないし、何より」
『アスガルドライバー』
『Ｏｄｅｎ』
腰にベルトを着け、プログライズキーを装填する。
「……変身！」
『アースライズ』
そして周囲になんか光が集まると、オーディンの爺さんを思わせるライダモデルとかいうらしいのが浮かんで、そして溶けるように装甲になってリヴァに装着された。
『スキルヴィングゴッド』
『Ｉｔ’ｓ　Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ　ｏｆ　Ａｓｇａｒｄ』
な、なんかすっごく豪華な仮面ライダーがそこにいた。

「さて、仮面ライダーグリームニルこと我が娘リヴァと共に、北欧の神が相手をしてやろう。大盤振る舞いじゃぞ、小童」
「……いいだろう、なら主神の力がいかほどか試させてもらおう」
オーディンの爺さんとアルケードが睨み合う中、仮面ライダーグリームニルになったリヴァがこっちに振り向いて声を張り上げる。
「行って！　多分こっちもあんまり気にしてる余裕がないから！」
「……走るわよ、みんな！」
部長が意を決して走りながら声を張り上げる。
それに合わせて、俺達も全力で走り出した。

祐斗Ｓｉｄｅ

オーディン様による魔法の加護が効いているのか、移動中の僕達に敵は気づいていない。
そして僕達は言われた通り、ディオドラ・アスタロトがいるだろう彼の本陣に走っていた。
フロンズ氏が抜け目なくこちらに位置情報を渡してくれており、その地図に従って走っていく。
どうやら本来は神殿を模した陣地でスタートするようだ。そのディオドラ側に今もディオドラ・アスタロトはいるんだろうね。
そんな時、僕達の耳に通信が届いた。
『よぉっし、繋がったぁ！』
「先生!?」
イッセー君が真っ先に反応するように、その声はアザゼル先生のものだ。

「アザゼル？　これは一体どういうことなの!?　あなた、何か知っているんでしょう？」
『そうだリアス。簡潔にまとめると、ディオドラ・アスタロトは和平が結ばれる前から禍の団の旧魔王派と繋がっていた』
部長にそう答えるアザゼル先生だけど、やはりということか。
この様子では、たぶん前から掴んでいた可能性すらあるだろう。
掴んだ時期はディオドラが旧校舎に現れた後だとは思うけど。それでも何か考えがあったのか僕たちに黙っていたんだろう。
『奴はどうやら、グラシャラボラス本家の次期当主の死亡にも一枚噛んでいたようだ。そんでもってイシロとのレーティングゲームは蛇を使って凌いだってところなんだろうよ。……まぁ、イシロ達も裏で示し合わせていた可能性はあるがな』
「それどころか、イシロ・グラシャラボラスは盛大に禍の団についているようだぞ、先生」
「はいぃ。イシロさんは眷属の方も含めて他の人と契約してるみたいですぅ」
ゼノヴィアとギャスパー君が聞いたことを伝えると、通信の向こうのアザゼル先生は息を呑んでいるようだ。
「……しかも眷属の一人のアルケードは、オリュンポスの神々を蹂躙することと引き換えに契約しているそうよ。今オーディン様やその娘さんと戦っている真っ最中だわ」
リアス部長もそれを察したようだけど、その上で更に情報を告げる。
ああ、駒価値１０とはいえ一眷属悪魔が主神の本気を弾き飛ばしたんだ。これは異常といってもいい。
おそらく、他の眷属達も油断できる相手じゃない。プロのプレイヤー相手の三連勝も、本気じゃないだろう。
『マジか。どうやらイシロの奴、俺達の想像を遥かに超えるような化け物らしいな』
先生としても想定外だろう。動揺の色が見えるのは仕方がない。
僕達としても、あの光景には動揺してしまっているからね。より

オーディン様の力を理解しているだろう先生が驚愕するのも当然だ。
『先生！　そんなことよりまずい、アーシアがディオドラに捕まったんだ！』
だけど、イッセー君は堪え切れない様に通信先の先生に声を張り上げる
イッセー君なら当然だろう。僕達だって気が気じゃないし、だからこそ急いでいるんだ。
『……なんだと!?　……くそ、可能な限り増援を送って対処する。とりあえずお前たちは―』
「避難を、というのなら聞けないわ」
先生の言葉を遮って、部長がはっきりと告げる。
そして僕たちも同じ気持ちだ。
みんながそれぞれ視線を合わせて頷きながら、僕達は走る。
「そもそも私の眷属を誘拐されたのよ？　その時点でディオドラは私の敵だわ」
「それに私達にはテロリストとの戦闘が許されているはずです。この非常時ならそれぐらいは許されるはずですわ」
リアス部長と朱乃さんがそう言うと、通信越しにアザゼル先生は唸っていた。
『～～～～っ！　ったく言っても聞かねえだろうなこりゃ。……いいか！　敵は旧魔王派を主体とするテロリスト！　同時タイミングでヴィール・アガレスがクーデターをしながらこっちに塩を送ってきてる上、こっちはこっちで神滅具持ちが仕掛けてきてやがる』
こちらに力の片りんを見せた絶霧以外に、神滅具保有者がテロに参加しているのか。
少し戦慄しているが、先生の声にはまだ余裕があった。
『だがこっちも、ヴァーリの警告や他のケースがあって裏取りも万全で準備も万端でな。一応他にもそっちに増援は送ってるし、なによりオーディンの爺だけじゃなく、ゼウスや帝釈天という豪華メンバーが、サーゼクス達と一緒に待ち構えてるんでな』
主神二人に魔王様。和平を結んでいるとはいえ、こんな短期間でそ

んな連携が取れるようになっているとは。
早々たるメンツに身震いするよ。これは考えうる限り最高の布陣だ。
その上で、アザゼル先生は更に続ける。
『だが、向こうだってある程度は分かっている上で仕掛けてきている。ヴィールのクーデターで人員が割かれているとしても、それ以外の伏せ札はイシロ・グラシャラボラス眷属以外にもいるだろうさ。……だが』
そこに込められた期待を感じて、僕たちは走り続ける。
『……お前らならディオドラ程度はぶちのめせる！　それだけの鍛錬を積んであげて見せた成果を、奴らに見せてつけてやれ!!』
「「「「「はい、先生！」」」」」
そして僕達は決意を新たにし―
『――――最も、お前らとは別の意味でブチギレてるやつが伏兵としてディオドラの陣地に潜んでるからな。もしかしたらもう決着がついてるかもよ？』
―そんな先生の最後の言葉に、僕は首を傾げる。
それが何なのかを聞こうと思ったけれど、通信は既に切れている。
僕は一体どういうことなのかと考えようとし―
「はぁ～い！　糞悪魔共、お久しぶりですねぇえええええっ!!!」
―聞き覚えのある声と共に、感じなれた殺意を叩き付けられた。

魔性変革編　第四十四話　降臨、神意汚す悪鬼明星（ルシフェル）

アザゼルＳｉｄｅ

さて、大見得切ったはいいんだが、そうもいかねえのが実情ってわけだ。

「……ったく。中国の兵法には「大抵守る側が有利だから、攻める時も守る側になれるような戦いが理想」とかあったはずだが……マジでやるか」

俺が呆れ半分で見るのは、俺達の試合観戦会場と向かい合いようにそびえ立つ、割とでかい要塞だ。

リアス達のレーティングゲームが始まった瞬間に旧魔王派の連中が転移してきたが、こっちがカウンターを叩きこもうとしたらあんなものがそびえ立ってきやがった。

周囲の地面を集めるように、壁ができて砲台ができて、しかも結界まで張られてきやがった。

そんな要塞に立てこもる形で禍の団の連中は集まって、そこから攻撃を叩き込んできやがる。

その援護射撃を受けながら、観客席に突撃を仕掛けてくる、敵のアステロイドとかいうサイボーグやゴーレムにも見える魔獣共。

厄介な連中が暴れてるせいで、思ったより有利には戦えてない。

なにより、イシロ・グラシャラボラスが禍の団のメンバーだと？

ディオドラが蛇を使っていたことや奴さんの性癖もあって、その可能性はぽっかり抜け落ちていた。というより、普通ドーピングして内通者仲間と戦わないだろ、ディオドラさんよぉ……っ！

あいつは、観客席側にいるんだぞ……っ！

「……警備隊！　観客席からイシロ・グラシャラボラスとその眷属を

探して無力化しろ！　最悪殺しても構わねえ、奴は禍の団と手を組んでやがる！」
俺は通信が繋がったのと同時に声を張り上げるが、正直期待薄だ。
何せ繋がるのに時間がかかってんだ。既に何かあったと考えるほかねえからよぉ。
実際、もれてきた音声は悲鳴のそれだ。
『……総督、申し訳ありません。既にやられました……』
「現状と被害を報告しろ！」
かなりダメージが入っている感じだな。こりゃ相当やられたか。
俺が悔やんでいると、通信から答えが返ってくる。
『イシロ・グラシャラボラスとその眷属は既に逃走。負傷者は多数ですが死者はゼロです』
……なんだと？
イシロの眷属、戦車のアルケードは今、オーディンの爺さん達と真っ向から戦ってるらしい。
いくら駒価値１０とはいえ、主神と真っ向から戦えるとか異常な領域だ。
更にイシロの眷属は戦車のアルケードと同様に、騎士と僧侶も二駒使っている。兵士は六駒に二駒だが、この様子じゃ油断はできねえ。とどめに女王は変異の駒だしな。
そして全員、誰一人としてアルケードの足を引っ張ったこともねえ。そんな連中が、死者一人出さずに逃げるのか？
そんな俺の嫌な予感は見事に的中する。
『イシロ・グラシャラボラスは眷属と共にこちらを蹂躙したうえで、応急処置をして撤退しました』
……マジか。
「具体的にどんな感じだ？　……言えるか？」
『はい。私達三大勢力の者は重傷止まりですが、他勢力の者達は女は皮をはがされたり乳房を引きちぎられ、男は睾丸を抜き取られるなどしております。また四肢を切り落とされた被害者も多く、それらはすべて持ち帰られました……っ』

そこまで聞いて、俺は奥歯をへし折りかねないぐらい噛み締めた。
あ、の、女ぁ……っ！
外道としか言いようがねえ。しかも性格の悪さが透けて見えやがる。
三大勢力には手加減したうえで、和平を結んだ他勢力の連中は徹底的に後遺症や傷跡が残るように傷つける。正真正銘の善良な奴や、あくまでやったのがイシロ達だと考える奴は問題ない。
だが、そうじゃない奴だってゴロゴロいる。三大勢力の奴らにやられたとか、三大勢力と共闘した結果やられたってことを重点に置く奴には効果覿面だ。
やられた奴だけじゃなくやられた奴の身内にそんなのがいれば、和平に参加したことに対して異を唱える連中や、三大勢力を恨み連中が出かねねえ。元々和平に反対な連中なら、直接の関係がなくてもこれを理由に反感を抱くだろう。
何より奴の慈善活動で助けられてきた奴らがやばい。援助がごっそりなくなるばかりか、八つ当たりのように排斥してくる連中がごまんと出てくるはずだ。
性格最悪な奴がやる、えげつない手段を取りやがって……っ！
「あの糞アマ！　何を考えてやがる！」
俺が思わず吠えると、ふと気配を感じた。
「いや？　あれは僕が指示したことだから、彼女に言ってもねぇ？」
咄嗟に飛び退れば、そこに突き出される槍の穂先。
俺がその正体を悟って面食らった瞬間、今度は紫の炎が俺に襲い掛かる。
モロに喰らえば命が本気でやばい炎。なによりそれがどういうものか知ってるから尚更俺は驚く。
おかげでかわしきれねえ。せめて吹き飛ぶのが義手止まりならいいんだがと思ったとき、絶大な魔力が壁になってそれを相殺した。
同時に光の槍が一斉に放たれて、敵をけん制する。
「無事かね、アザゼル」
「これはどういうことでしょうか？　何故あれが彼に……っ」

サーゼクスとミカエルがこっちに来てくれたのは助かるが、俺に言われても困るってんだ。
ま、このタイミングで来てくれたんなら話してくれるんだろうがな。
「説明してくれるんだろうなぁ。イシロの女王（クイーン）さんよぉ？」
俺はドスの効いた声で黒髪のそいつを睨む。
目の前にいるのは、一見すると気弱な印象すら覚える雰囲気の転生悪魔の少年。名前は確か、ミザリだったな。
年齢はイッセー達より少し若い程度。おそらく年齢は一六っていったところだろう。
だが、イシロの眷属で戦車のアルケードと並び立てるヤバい奴なのは確定だ。
イシロ・グラシャラボラスは女王の駒が変異だった。そしてそれを使用したのが目の前のコイツ。
しかも、俺達の目の前で使用したのは……っ
「黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）に紫炎祭主の磔台（インシネレート・アンセム）だと？　聖槍はともかく聖十字架の使い手とは会ったことがあるが、今は若い女だったはずだぜ？」
聖なる輝きを放つ槍。黄昏の聖槍。
紫に輝く十字の盾。紫炎祭主の磔台。
どっちも神滅具で、しかも神の子の処刑に関与する代物。しかも聖槍は上位神滅具のそのまたトップ、最強の神滅具と言われてる代物だ。
そんなものを二つ抱えてるなら納得だが、逆に納得できやしねえ。
こいつがイシロの眷属になった時期から考えて、あの女が倒されて奪われたってことは無いだろう。……どういう絡繰りだ？
俺達が睨んでいると、ミザリは背中に背負っていたでかいバックパックを外しながら、更に微笑んだ。
「これだけじゃないよ。まずはこんな感じでっと」
そう言いながら、バックパックの中身を奴はぶちまける。
そこから流れ出るのは適当にぶつ切りにされた人の体の部位。
間違いなくゴア指定のそれに俺達は嫌な気分になるが、それ以上に

ヤバいのはその後の流れだ。
その肉片共は急に蠢いて溶けるようにいくつかの塊になると、そのまま膨張して人型の化け物になる。
肉がむき出しな部位がある上、更に目玉もいくつもあるような化け物だが、力だけなら最上級悪魔クラスはありやがる。
その数体の化け物を可愛い物を見るかのように見ながら、ミザリは微笑んだ。
こいつは性根が歪んでる。俺は確信したぜ。
「と、まあこんな感じで幽世の聖杯(セフィロト・グラール)も。あとあの要塞は現世聖域の墓標(カテドラル・グレイヴ)で作ったんだ」
……聖杯と聖墓もかよ。
神の子の血を受けた聖杯と、神の子を一旦埋葬した聖墓。その二つに由来するあれもまた、それぞれが神滅具だ。
聖杯は魂と生命を癒し組み替え、死者すら蘇らせる。
聖墓は龍脈から力を引き出し、大地を操り聖域を造り出す。
全く。僅かは半世紀ちょっと前に発見された聖墓までか。
世も末だが、何となく読めてきた。
俺は最悪の予感を覚えながら、それでも確認は必須だと判断して問いかける。
「……お前、アドルフ・ヒトラーのデミ・サーヴァントだな？」
「っ!?」
「その通り。やっぱり頭がいいね、アザゼル総督は」
驚愕するサーゼクスやミカエルをしり目に、野郎はあっさり肯定した。
デミ・サーヴァント。ザイアが研究していたらしい、サーヴァントを人間の肉体に宿す理論上のみ存在する存在。
ザイアですら完成させなかったそれが奴の正体ならこれも納得だ。
それなら奴の宝具として、今の神滅具のオンパレードも当然だろう。
アドルフ・ヒトラーは聖槍を宿し、聖杯と聖墓を献上された。
そして最悪なことに、聖十字架と共に巡り合った力が奴にはある。

「……貴様ぁあああああ！」
その時、一人の最上級悪魔がミザリに組み付いた。
やばい！　あいつ、状況が分かってないからってなんて無謀を！
「離れるんだ!?　このままでは君は死ぬぞ!?」
「構いません魔王様！　今のうちに私ごと奴を―」
サーゼクスの叱責に決死の覚悟を見せた瞬間、組み付いた部分が消滅し、勢い余ってそいつは更に体を押し付けてしまう。
結論として、その最上級悪魔は全身の殆どを消滅させて絶命した。
歯噛みするサーゼクスには悪いが、おかげで確認が取れた。
……その肉体そのものが聖遺物同様の聖なる存在と化している。悪魔の体にそんなことができる上、アドルフ・ヒトラーが持っていた最後の神滅具が、やはり奴には宿っている。
「鮮血の聖別洗礼（バプテマス・ブラッド）も持ってやがるよな、やっぱり……！」

アドルフ・ヒトラー。真っ当な教育を受けていれば、この名前を聞いたことがない奴はまずいないだろう。
第二次世界大戦を主導したともいえる、当時のドイツの総督。
表の人間が真剣に調べて分かる範囲内で最もヤバいのは、民主主義で選ばれた独裁者である点と、一時的にとはいえ当時のローマ教皇にその行動が認められたというツートップ。そして後者には一つの理由が存在する。
最強の神滅具である黄昏の聖槍に、更に幽世の聖杯と紫炎祭主の磔台。
これら当時知られていた聖遺物系の神滅具三種に、更に新種の聖遺物に由来する神滅具を二種も手にしてしまったことが、当時の神の死を知る信徒共にとって、ミカエルを凌駕する信仰対象として認識されちまったことに由来する。
生まれつき聖杯を宿していたうえ、独立して宿主を選ぶ特性を持つ

聖十字架と聖血に選ばれ、更に信者達の献身で聖杯と聖墓すら宿した結果、奴は魔王すら超える化け物となった。その影響によってドイツ第三帝国は三大勢力の一角に匹敵する大勢力に成長し、結果として三大勢力と四つ巴の戦いにまでなったわけだ。
そんな奴がサーヴァントとして召喚されたらどんな感じになるのかと、思わなかったわけじゃない、
だがなぁ―

「まさか、現実にデミサーヴァントになる方法があったなんてな。リーネスですら苦労しまくってるんだぞ……っ」
「ええまあ。ちょっとした裏技といったところかな。聞くかい？」
ミザリは俺にそう尋ねるが、言うまでもねえ。
あほみたいな方法だが、考えられる手段が一つあるからな。
「亜種聖杯を利用した。そんな感じでいいんだろ？」
「正解。博打（ばくち）を打ったかいがあって、まず五年ぐらいはやりたいことをやれたんだ。だけどこれには続きがあってねぇ」
ミザリの言い分に、俺は首を傾げる。
五年だと？　こいつがイシロの眷属になったのは奴が悪魔の駒を手にした直後だったはずだ。
その時のコイツは十代前半。しかもそのあとはイシロの眷属として平穏に過ごしていた。
……なんか更にヤバい約ネタが聞こえてきそうだ。
「何せ無理がある方法だったから、あの頃は今ほど思うように使えなくてね。だから亜種聖杯戦争を利用して色々と準備を整えたんだけど、まず真っ先にしたことがあるんだよ」
そう苦笑しながら、ミザリは過去を思い返す目つきで語る。
「二回目の亜種聖杯戦争から先を見越して、眷属悪魔狙いで「死後強大なデミ・サーヴァントの素体としての才覚に優れる上級悪魔の子供と

して転生する」を願ってね。同時に協力してくれそうな願いを持ってるだろうサーヴァントを狙って召喚したり、三回目で能力込みだと思い当たりにくいから「協力してくれるだろうサーヴァントの見繕いと触媒」を要求して、それからはサーヴァント達には「眷属悪魔になれる純血悪魔に生まれ変わる」として先に生まれ変わる準備をしてもらっていたのさ」

マジかよ、オイ。

俺達が唖然としていると、そいつは肩をすくめる。

「最も僕は旧魔王血族の子供として生まれてしまってね。幸いイシロがグラシャラボラス家に生まれてくれていたからいいものの、あの時はちょっとどうしようかと思ったね」

しかもコイツ旧魔王血族かよ!?

そんでもってイシロの奴は生まれる前から協力者だってか？　それもサーヴァントが転生するってことは、デミ・サーヴァント以上にヤバいことになるじゃねえか。

「……なんという手段をっ」

「悪夢と思いたいですね……っ」

サーゼクスとミカエルが唸るのも無理はねえ。

デミサーヴァントの成功にそんな裏技があるとは正気の沙汰じゃねえ。

つまり人生二週目かよ。そりゃ成長できるわけってもんだ。

人間の成長には年齢とかで限界がある。特に成長しやすい若い頃は、精神的な未熟が原因で伸ばしきれないケースがいくつもあった。

それを克服してるどころか、まず最初の段階でブーストがかかってるわけだ。それも、完全なデミサーヴァントとして生まれて神滅具五つ持ち。

反則としか言いようがねえ……っ！

「しかもそれが特に傑作でね。だから自己紹介をさせておくれよ」

おいちょっと待て。

嫌な予感が更につるべ打ちになるってのか。

俺達が警戒していると、ミザリは軽く髪を払う。

どうやら髪は黒く染めていたらしい。俺が魔力によってこそぎ落とされ……俺達は目を見張った。
それは、ヴァーリを思わせる銀の髪。
そして同時に、術式で封印していたのか魔力の質が変化する。
嘘だろ。この魔力の質は……っ
俺達が戦慄しているのを分かった上で、奴は優雅に手を広げた。
「禍の団、イシロ・グラシャラボラス眷属の真の長。転生型デミ・サーヴァント軍団のリーダー。前世の名を道間誠明、現世の名をミザリ・ルシファー。ヴァーリ・ルシファーも知らないけど、彼は僕の年上の甥さ」
冗談にしてほしいと本気で思う。
よりにもよって、ヴァーリの叔父だと？
それはつまり、奴●の子供ってことじゃねえかっ。
「……ちょっと人間世界と異形社会、それらすべてに絶望と嘆きを広げる男さ」
しかも目的がやばい。
ヤバい奴の餓鬼がヤバい目的で動く。どう考えてもヤバいことにしかならねえだろ、これは……っ！
「よろしくね♪」
そんなウインクと共に、ミザリは作った魔物を俺達に差し向けた。

魔性変革編　第四十五話　悪鬼の所業

祐斗Ｓｉｄｅ

このタイミングで彼が出てくるとはね。
神父服を着こみ、無銘のようだけど聖剣を構えている白髪の少年。
流石に三度目ともなると、腐れ縁を感じるよ。
「フリード・セルゼン……っ」
「てめえフリード！　こっちは今、お前なんかに関わってる暇はねえんだよっ！」
僕が睨みイッセー君が拳を構えると、フリードは不敵な笑みを浮かべていたそれを受け止める。
「うんうん。僕ちんとしてもお前らなんかと何度もやり合うのは最悪な気分なんですけどねぇ？　こっちもぶっ殺さねえと気が済まねえんですわぁ」
そんないつも通りのふざけたことをいう彼だけど、どこか雰囲気が違う。
……流石にエクスカリバーを使ったうえで敗北しているんだ。あの聖剣がそれほどの力を感じないことも踏まえれば、当然更なる隠し玉の一つや二つは用意しているはずだろう。
そんな得意げな彼だけど、いきなり戦闘を仕掛けることはせず僕達をにやにやと見ている。
「でもまあ、聞いた方がいいと思うよぉ、イッセーきゅん。なんたって、今とっ捕まってるアーシアちゃんと、とっ捕まえてるディオドラきゅんの話なんだからさぁ？」
なんだって？
少なくとも気分がいい話じゃないだろう。彼の性格とディオドラの所業を考えればなおさらだ。
正直嫌な予感しか覚えない中、フリードはにやりと笑う。

「あのディオドラって奴はいい趣味しててさぁ。日本風にいうなら、シスター萌えって奴なんだよねぇ？」
そう、フリードは言った。
胸騒ぎを覚える中、フリードは本当に愉快そうに僕達をあざ笑う。
「そんな彼は趣味を貫いている中々すっごい奴でねぇ？　あいつの眷属はほぼ全員が元聖女やシスターで、しかも熱心な信徒や教会本部にも近い奴らなんだよ？」
その言葉に僕だけでなく皆の表情が強張っていく。
その様子が楽しくて堪らないのか、ディオドラは更に愉快そうだった。
「そう。奴はあの手この手でシスターを堕落の道に引きずり込む、鬼畜ゲームも真っ青な野郎なのでっす！　更に奴さんの知り合いに神器に詳しい奴がいてねぇ？　なんとなんと、聖母（トワイライト・ヒーリング）の微笑についても詳しかったからぁ、さあ……大変！」
……っ
部長やイッセー君、いや、僕達全員が怒りや悲しみを覚えるのは当然だった。
結果的に部長の下で楽しく暮らすことができているアーシアさんだけど、そこに至るまでの彼女の半生には悲惨なものも数多い。
こと、悪魔を癒してしまったことが要因で教会を追放され、そこから堕天使レイナーレに目を付けられて一度死んだことは悲劇としか言いようがないだろう。
そして、それが寄りにもよってそうなると分かった上でだって？
「俺っち悪魔は基本大っ嫌いですけどねぇ？　シスターを追放させて手籠めにする為に命に係わる大怪我で痕が残っても構わねえとか根性あるよねぇ？　イッセー君も根性が持ち味だし、共感しない？　しないか！」
そんな風にあざ笑うフリードに、イッセー君は一歩を踏み出そうとする。
だけど駄目だ。君のその怒りをぶつける相手はそいつじゃない。
「イッセー君。ここは僕に任せてくれ」

「木場っ！　だけど―」
イッセー君の怒りは分かるけど、アーシアさんに愛されアーシアさんを思う君の怒りは、ディオドラに直接叩き付けなければならない。
それに、怒りを覚えているのは僕達だって同じだからね。
ここは僕達が発散するところだろう……っ。
「―あの下劣な口は僕達が黙らせる。君の怒りはディオドラに叩き付けるんだ」
聖魔剣を創り、一歩前に踏み出す。
静かに僕が見据える視界の中、ディオドラは僕に対して笑いながら憎悪を向ける。
まあ何度もしてやられたわけだしね。自業自得だとは言え、苛立ちはするんだろう。
「いやぁ。君達も強くなったとは思うけどさぁ。俺っちも結構パワーアップしてるんだよねぇ。なんだと思う？　ねえ、何だと思う～？」
「気を付けてください、祐斗先輩。そいつ、人間をやめてます」
小猫ちゃんが僕に総警告してくれた。
仙術に対して積極的になった小猫ちゃんの言うことなら、つまりそういうことなんだろう。
フリードも隠すつもりはないのか、来ていた神父服を脱ぎ捨てる。
……その下に隠されていた、機械的な体が全てを物語っている。
「アステロイド……とかいったね。ツヴァイハーケンに属しているのか」
「大！　正！　解！　俺っちも糞悪魔の部下とかになりたくなかったんでねぇ。君達に対する復讐もしたかったんだけど、なにせ入り立ての下っ端だから蛇は貰えなくってさぁ。こんな感じでパワーアップしちゃいましたよぉっとぉ！」
その瞬間、フリードの姿が薄くなる。
殆ど透明に近い状態になるばかりか、広い範囲に同様の幻影が複数展開された。
更にフリードは移動を介するけど、かつてより遥かに速い。
「ちなみに俺も武将型アステロイドさぁ！　こうして光学ステルス特

化型仕様だから、見えないだろっとぉ！」
その状態で聖剣による斬撃が振われる。
聖剣は無銘とはいえ悪魔の天敵。こと僕は攻撃を回避するタイプで防御面に劣るから、掠めただけで決着はつくだろう。
……そう、掠めたのなら。
全ての攻撃を回避しているうちは問題ない。これでは聖魔剣で受け止めるどころか受け流す必要すらなかった。
「なんだとぉ!? ちょいちょいタンマタンマ！ なんで俺っちの姿が見えてるんだよ!? こんな多重の細工で読み切れるわけが―」
「前にも言ったろう？ 殺気が分かり易すぎるから、どの方向からどこを狙って攻撃を放ってくるかが丸分かりだ。……強いけど厄介じゃないね、君は」
ああ、かつてならそう簡単にはいかなかっただろう。
それだけの性能を今のフリードは持っているし、それを引き出せる程度には彼は素体としても優秀だった。
だけど、僕達だって座して待っていたわけではない。
師匠の下で基礎から鍛えた今の僕なら、彼の攻撃してくるタイミングと位置を理解するのは簡単にできる。
ああ、この程度の相手に今更手こずる余地はない！
「ざっけんじゃ……ねぇ！」
そしてフリードは光学幻影を解除する。
どうやらその方が戦闘に出力を回せるようだ。そしてその分動きは速くなったけど、それでも遅い。
攻撃を瞬時に躱し、そして懐に潜り込む。
そしてそのまま切り裂こうとしたその瞬間、僕は殺気を感じて身を捻った。
「……おいおい、初見殺し避けるとか君って天才過ぎない？」
―フリードの上腕部から細い刃が飛び出て、僕がさっきいた場所をないでいた。
どうやら小型のサブアームがついた聖剣らしい。殺気に気づかなければ危なかっただろう。

だけど―
「殺気が素直すぎるといっただろう？　それじゃあどんな暗器も役に立たないよ！」
「上等！　だったら……これは！」
その瞬間、今度はサブアームの聖剣が射出される。
細いワイヤーがついているけど、どうやらそういう二段構えの策ができるらしい。
だけど殺気でタイミングが分かるならやりようはある。
僕はそれを素早く聖魔剣で薙ぎ払い―
「ところがどっこい三段構えでッス！」
―ワイヤーが急に巻き取られ、手に持っていた聖魔剣が引っ張られる。
どうやら重力関係の能力を持っているらしい。咄嗟に手放したけど、少し引っ張られて体制が僅かに崩れる。
そん瞬間、フリードはこちらに飛び蹴りを仕掛けてきた。
ご丁寧に足裏から仕込み聖剣が飛び出ている。更に全身から小型の暗器型聖剣が飛び出ており、フリードは回転しながら突貫することで全方位攻撃を行っている。
これは大きく動かなければ躱しきれない。そして今の僕では、かなりぎりぎりになる。とどめにカウンターを入れる余裕もない。
……と、思ったかい？
「あらあら、イッセー君以外はあなたで鬱憤払いをしますわよ？」
そこにカウンターで朱乃さんの雷光が叩き付けられる。
不意打ちの形になったけど、別に僕は一騎打ち何ていってない。イッセー君にも彼の怒りはディオドラに叩き付けろと言ったからね。
咄嗟にフリードは聖剣の一部を盾にして防ぐけど、そこに空いた穴を狙って小猫ちゃんとゼノヴィアが仕掛ける。
「……鬱陶しいです」
「エクスカリバーですらない聖剣など、デュランダルの敵ではないぞ!?」
「袋叩きって、マジですか」

真顔になったフリードだけど、これで終わり―
「んじゃこっちも伏せ札開帳！」
『オニコ！』
『Ａ　Ｍａｇｉａ　ｗｈｏ　ｆｉｌｉｅｓ　ｆｒｅｅｌｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｓｋｙ』
その瞬間、フリードの姿が変化して、空に急上昇する。
しまった。マギアにもなれるのか。
外観は何処か蝙蝠を思わせるマギアなだけあって、どうやら空中戦闘を得意とするらしい。
まだ隠し玉があったか。性能が上がっていると考えるべきだろう。
流石にまずいな。子の後のディオドラとの戦いは、彼の眷属達との戦いにもなるだろう。精神的にやりづらい相手と戦う可能性もあるのなら、これ以上の戦闘は流石にまずい。
「ヒィィィヒャァァァハッハッハッハ!!　最近のゲーム恒例、ボス戦二段階目！　俺っちは武将型アステロイドっていうレア中のレアだから、それなりに厚遇されるしもられてるんだよぉ！　ってことで！」
『『『

『致し方ないな。制限時間を考えると、ここで禁手に至るのは悪手だが……』
イッセー君も参戦するほかない状況だ。
未だイッセー君の禁手は三十分が限界で、使用すれば一日のインターバルが必須になる。
しかし、ここまでの敵を相手にするならそれぐらいは必須―

「アーメン！　そうは―」
「行きませんのよー!!」
『ＪＥＴ』
その時、空から声が響く。
「うぉおおおっとぉ！」
「お待たせしました！」
「騎兵隊の参上じゃん！」
舞い降りる影はいくつもある。そして何より―
「お待たせしました、イッセー！」
『『シャルロット!!』』
イッセー君とドライグの声が重なって響く。
ああ、やはり来てくれたのか。
イッセー君のサーヴァントであり、同時に僕達の大事な仲間。
アサシンのサーヴァント、シャルロット・コルデー……！
同時に着地するアニルくんとルーシアちゃん、何よりヒツギも心強いけど、増援は決してそれでとどまらない。
「……これは中々面倒ですね。よもや今の彼女を他の人々より先に無力化できる者がいるとは」
ため息をつきながら舞い降りるのは、アーシアさんを鍛えたディック・ドーマク。
そして更に、軽やかかつ音もなく舞い降りたのは―

「そのようですね。どうやら向こうも正してやられるわけではなさそうです」
何故かメリードさんまでここにいた。
「め、メリード？　どうしてここに？」
リアス部長が呆気に取られるのも無理はない、
彼女はヒューマギアであり、更にメイドとして開発されている。
どう考えても戦闘向けじゃないのに、なんでこんなところに？
僕達が困惑していると、今度はショットライザーを巻き付けプログライズキーを構えたヒマリさんが、イリナさんに抱えられて降りてきた。
「お待たせ♪　ここは私達が抑えるから、ゼノヴィア達はアーシアさんを助けに行ってきて！」
「あの白髪は私がぶちのめしときますのよ！　あと隠し事してたメリードは、後で和地やリーネスも含めて説教ですの」
そう言ってフリードの前に立ちはだかる二人だけど、ちょっと待った。
僕達の疑問符が限界に請える前に、僕は聞くべきことを聞く。
「このメンツならカズヒと九成君がいるはずだ。どこに行ったんだい？」
あの二人は一体どこに？
その疑問に答えたのは、イリナさんでもヒマリでもない。
「……急いでください。お二人は万が一の保険ですので、流石にこれだけの規模では凌ぎきれないかもしれません」
メリードさんはそう言った。
そしてその言葉で僕達は大体の事情を察した。
「ま、まさかお二人とも―」
「―ディオドラのところにいるのか!?」
ギャスパーくんとゼノヴィアが声を荒げると、メリードさんは頷いた。
あ、アザゼル先生から聞いていた側なのか。
「其れよりメリード。貴女こそ戦場に立てるような性能何て―」

「そろそろいいか？」
リアス部長の言葉を遮るように、高位のアステロイドが攻撃を仕掛けてくる。
ショートソードを構えて突撃してくる速度はフリードに追随するレベルだ。
僕達は迎撃の為に構えを取り―
「―ご安心を」
―その刃を、メリードが持っていた刀の鍔を利用して打ち払った。
反りがなく、脇差より長い程度の刃渡りのそれは、いわゆる忍者刀という奴だ。
何よりあの動き、戦士というより隠密といえる。豪快さのない静けさの感じる動きだった。
というより、下手すると僕達より動きが鋭くないかい？
僕達が呆気に取られる中、メリードは空いた手に手裏剣を構え、静かに告げた。
「ここは我々にお任せを。……既にこの身は戦闘用調整―承諾契約式デミサーヴァント型ヒューマギアとして改良が終わっております」
「名称が長いよ!?　マジで訳が分からないよ!?」
イッセー君のツッコミに、ヒマリさんがにっこり微笑みながら頷いた。
「私も分かりませんけど大丈夫！　なんたってリーネスの研究成果ですもの！」
こういう時、ヒマリさんはなんていうか……強いよね。
「第一、こっちも伏せ札を使いますから尚更ですのっと」
そう言いながら、ヒマリさんは慣らしたプログライズキーをショットライザーに装填する。
『ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』
「変身！」
『ショットライズ！』
そして放たれる弾丸がヒマリさんに当たり、装甲に変化する。
いや、あれは……？

「違う……装甲……？」
小猫ちゃんが呟いた通り、あれはリベレイティングキャットの装甲じゃない。
あれは鳥だ。それも鷲を模している。
そんな装甲を身に纏った、仮面ライダーラクシュミーの異なる姿は、鋼の翼を広げると、マギアと化したフリードと同じ土俵―すなわち空に飛び立つ。
『ボーイングイーグル』
『Ｌｏｏｋ　Ｕｐ　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　Ｗｉｎｇ　ｏｆ　ｊｕｓｔｉｃｅ』
「仮面ライダーラクシュミーが空中戦闘仕様、ボーイングイーグル。さあ、覚悟はよろしくて？」
「君をレイープする心の準備かーい？　いつでもオッケー！」
そのまま激突する二人の戦いを号令とするように、戦闘が一気に始まる。
そんな中、メリードさんは忍者刀を構えながら、僕達に声を飛ばす。
「ここは私達にお任せを。ご安心ください、私もまた、戦闘が可能になりました」
同時に手裏剣を放って牽制しつつ、更に抜くのは数枚の符。
「なんと高度な術の符を！　あなたは今、いったい何を……？」
朱乃さんが目を見張るほどの巫術を見せながら、メリードさんは宣言する。
「ＡＩＭＳ第一部隊がメンバーにして、キャスターのサーヴァント望月千代女のデミサーヴァントである以上、無様はさらしません。お急ぎください！」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そしてまた、ディオドラ・アスタロトは舌打ちをするほかなかった。
「……どこまでも忌々しいね。計画が成功すれば、僕は好き放題できるってのに……っ」
意識を朦朧とさせているアーシアを担ぎながら、ディオドラは舌打ちをして、予期せぬ来客を睨みつける。
その視線の先、彼の眷属に道を阻まれた男女が、ディオドラを睨み付けていた。
「ええ、本当に腐れ外道でありがとう。吹っ飛ばしがいがあるし、彼女達全員を引っ張り上げないといけないって決意も新たにできたわ」
教会暗部、プルガトリオ機関リマ部隊こと辺獄騎士団に所属していた女傑。カズヒ・シチャースチエ。
「お前をぶちのめすのはイッセーに任せるとするか。俺は俺のまずやるべきことを……そう、その涙の意味を変えるぜ、インガ姉ちゃん」
ＡＩＭＳ第一部隊所属、涙の意味を変える救済者。九成和地。
「……こうなるって分かってたよ。分かってるつもりだったんだけどね……」
そう呟く枉法インガは、いくつもの感情が渦巻く表情で詠唱を紡ぐ。
「創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星……っ！」
その星辰体（アストラル）の高まりを見据えながら、二人は同時に構えをとる。
今此処に、激戦の幕が新たに上がった。

魔性変革編　第四十六話　迷走の処方箋

イッセーＳｉｄｅ

ディオドラの本陣についたと思ったら、なんか凄い激戦が始まってるんだけど!?
爆発がそこかしこで起きて、更にそれをかいくぐるように見覚えのある男女が剣を躱す。
「九成！　カズヒ！」
俺が声を上げると、二人は一旦仕切り直すように距離を取りながら、俺達と合流した。
「無事なようでなによりね。あとアーシアはディオドラが奥に連れて行ったわ、急ぎなさい」
「こっちは俺達が引き受ける。メインディッシュは譲ってやるからさっさと行け！」
そんなことを言うけど、い、いいのか？
「いいの？　ディオドラの眷属達をあなた達二人に任せても？」
部長が尋ねるけど、二人はすぐに頷いた。
た、確かに。ディオドラの眷属達は二人の相手で精一杯みたいだけど。
特に真ん中でフェンシングっぽい細身の剣を持ってる子は、真っ直ぐに九成だけを見てる。
確か知り合いがいたんだっけか。あの子なのか？
「大丈夫かい？　動きにあまり隙が無い子に見られてるけど」
「……あの人が枉法インガ。インガ姉ちゃんは、両親が世界大会が縁で結婚した生粋のフェンシング一家の出身なんだ。最も強制はされてなかったから、姉ちゃん自身は大会出場レベルじゃなかったはずだ

けどな」
木場に九成はそう返すけど、厄介じゃないか？
それに他の眷属だって、なんだかんだで会長やゼファードルの眷属より平均は上なんだし。
やっぱり援護した方がいいんじゃないかって思う。
皆もそんな雰囲気をしていたけど、その時カズヒが、震脚みたいな感じで足の踏み込みで大きな音を響かせた。
「いいから行きなさい。事情を知ってるかは知らないけど、あの子達は進む足を止められないもの」
そう言いながら、カズヒは悲しそうな怒ってそうな、そんな目をディオドラの眷属達に向けていた。
ディオドラの眷属関係の事情は知っている。そういうことでいいんだろう。
部長も分かっているから、正直ちょっと憐れんでるような感じだった。そして説得した方がいいと思ったのか、口を開こうとして―
「言っておくけど、説得では止まらないわよ」
―カズヒが、そうはっきりと言い切った。
「……イッセーならこういえば分かるかしら？　あの子達はいうなれば鬼畜調教ゲームの攻略済みキャラクターみたいなものなのよ」
「いや確かに納得だけど。今そんなこと言ってる場合か？」
的確過ぎるけどその例えはどうなんだよ。
俺ですら正直引いているけど、カズヒの態度は大真面目だった。
「もしくは薬物中毒でもいいかしら？　どっちも患っていると言ってもいいかしらね」
そう言うカズヒの背中は、何て言うか、すすけている雰囲気がしていた。
「精神的に追い詰められていると、例えそれが元凶だろうと救いの手を差し出した者に感謝するのよ。そして精神的に限界を超えていると、どんな悪辣な物であっても逃げたり忘れられるものに逃げて縋って依存するの」
悲しいような、怒っているような、悔やんでいるようなその背中は、

俺達が知らないカズヒの人生が作ってきたんだろうか。
「依存するともう、自力ではどうにもできない。誰かに無理やり引っ張り上げられ、取り上げられでもしない限り、一旦中断することだってできなくなる」
その背中から告げられる言葉に、俺達は何を言えばいいのかも分からない。
だけど、カズヒには覚悟も決意もあるってことだけは嫌って程分かった。
その決意を背中に背負って、カズヒは静かに構えをとる。
「……命すら惜しまず殺しに来る相手を、殺さずに取り押さえられるかどうかの判断も技術もないでしょう？　ここは私に任せて頂戴」
「……ああ、それにまあ、インガ姉ちゃんは俺に任せてほしい」
九成も、ショットライザーを腰に巻き付けながらインガって子を真っ直ぐ見る。
「そういう奴が必要なら、それこそ救済者の出番だろ？　自分の縁ある女ぐらい、引っ張り上げられなくて涙の意味なんて変えられないって」
そ、そう言われると男としてちょっと止めづらい。
そして九成をなんか誇らしそうに見ながら、カズヒは顎で道の先を見せる。
「私達は私達の都合と我儘で仕事を割り振ってもらったの。終わったらすぐ追いかけるから、あなた達はあなた達の都合に合わせた仕事をしなさい！」
「……カズヒの言う通りです。私達はまず、アーシアさんの救出に専念するべきでしょう」
シャルロットにそう言われて、リアス部長も頷いた。
「必ず生き残りなさい。ディオドラを何とかしたら、その時は私達も参加させてもらうから！」
「それまでに終わらせる!!」
……そこまで言われちゃ、任せるしかねえか。
「任せたよ二人とも！」

「アーシアはこちらで引き受ける！」
木場とゼノヴィアが剣で相手をけん制しながら先陣を切って、俺達はそれを追いかける。
待ってやがれ、ディオドラ……っ!!

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

同時期、三大勢力を中心とする和平側は、敵の猛攻に対して猛反撃をしながら戦っていた。
総合的にはこちら側が有利だが、然し敵が瞬時に要塞を作ってそこに陣を敷くという奇策によって、決して油断できない塩梅となっている。
もとより拠点攻略というものは、守る側が有利になる物である。更に事前に通達された者達の殆どが、待ち構えて迎撃するつもりが逆に防衛線を仕掛けられている為出鼻も挫かれた。そこに慈善活動家として有名なイシロの残虐非道な裏切りにより、虚を突かれていることが要因になっている。
そして事情を知らない者も少なからずおり、そういった者は相応の保険を掛けられていたが、知っている側以上より衝撃が続いていたこともあって、動揺が激しいのが現状だ。
そんな中知らないながらも奮戦している者達が少なからずいた。
「遅い！　真なる魔王に付き従っておきながらこの程度か！」
振るわれる剛腕は、魔力が注ぎ込まれた防壁を軽く砕いて敵を殴り飛ばす。
バアル本家次期当主、サイラオーグ・バアル。

若手同士のレーティングゲームで初戦から敗北したＮｏ１という、ある意味で最も悪い目立ち方をした彼だが、それは彼が弱いことを意味しない。
彼を内心で嫌悪していた支援者達はいい機会だと手を引いたが、あれは完膚なきまでにノアの作戦勝ちで勝ち逃げに近い。
あの場における最強戦力が彼であることは、分かる者達は当然分かる。逃げ切りを主体としていたとはいえ、ノアの全眷属による包囲を受けても、一時間以上凌ぎ切ったことからもそれは明らかだ。
故に、それで油断した旧魔王派は圧倒されていると言ってもいい。
文字通りの一騎当千。困惑が激しい知らない者達の中で、彼は数少ない護衛班以上に活躍している者達だった。
「……会長、あの人事情知らないはずなのに、全然動揺してませんね」
「動揺はしているでしょう。それ以上に現状を理解して成すべきことをしているだけですよ」
カズヒ・シチャースチエやリーネスに巻き込まれる形で事情を知っていたソーナが苦笑するほどのサイラオーグの無双に、半ば巻き込まれた匙元士郎は面食らっている。
そんなあからさまな隙を敵がつく余裕もないほど、この部位の観客席はサイラオーグが暴れ回っていた。
上級悪魔、それも一部はオーフィスの蛇で強化されていながら、サイラオーグの拳はそれを圧倒する。
この光景に士気は上がり、このままなら優位に決着すると思われたその時だった。
「……流石は若手トップ。我が主が本気を見せてなかったとはいえ、やはり強いわね」
その言葉と共に、灼熱が浮かび上がる。
その熱気に一部の者達が慌てて下がる中、生身でそれに耐えるサイラオーグは、真っ向から相手を見据える。
そこにいるのは一人の少女。赤毛をポニーテールにした、両手に灼熱を纏うその少女を、サイラオーグは相応に知っている。
「確か、ヴィールの戦車（ルーク）、成田春菜とか言ったか」

「ええ。知ってくれているってことは警戒してるってことね。あなたほどの戦士にそうされるのは光栄だし、願ったり叶ったりだわ」
そう言いながら、少女は両手に炎を纏うと静かに構える。
それに対し、サイラオーグもまた構えをとることで応じる。
「ヴィールの反乱は既に知っている。だが、眷属だからとてそれに付き従う必要はない。投降するなら無碍にはしないが―」
「お構いなく。私としても望むところだもの」
サイラオーグのその善意を、春菜はバッサリと切り捨てた。
その目に宿るのは、自分の生き死にを決意した者の、狂気すら宿る意思の光。
間違いなく、彼女は自分の意思でヴィール・アガレスに与している。その結果がヴィール達の望み通りに敗北の果ての死であってもいいと、目で彼女は語っていた。
「私は弱きに逃げたりしない。心へし折れても腐り果てることを良しとしなかったからこそ、力を欲したからこそ得たこの禁手（バランス・ブレイカー）。その意思に手を伸ばし力を集める助けとなってくれたあの方の為に、そして何より弱いまま生き続けない為に」
鋭い目で、周囲に対する警戒を消さずに春菜はサイラオーグと向き合った。
「―私は強く生きて強く死ぬ。サイラオーグ・バアル。無能で無意味なその在り方を、私がここで焼き尽くしてあげるわ！」
「いいだろう。誰に否定されようとも、俺はこの生き方を積み重ねるのみ。それしかできん不器用な男なんでな―ッ」
その瞬間、壮絶といって過言ではない死闘が巻き起こった。

魔性変革編　第四十七話　星の蹂躙

和地Ｓｉｄｅ

大口を叩いたうえ、殆どの連中をカズヒ姉さんが持って行ってくれている。
だからこそ、俺は此処でやることをしっかりやり遂げないと。
インガ姉ちゃんを助け出す。その目を覚まさせないといけない。
なんだけど……っ。
「……なんで来たんですか、なんで……なんで！」
強かった。インガ姉ちゃん強かった！
いや、映像で見てたから強いのは知ってた。インガ姉ちゃんは細剣を使っての戦闘を基本として、はっきり言ってめちゃくちゃ強かった。
元々評価はそこまで高くなかったけど、たぶん星辰奏者（エスペラント）になったことで一気に伸びた感じなんだろう。あれ、使える星辰光（アステリズム）や星辰体との感応量とかでポテンシャルが激増するし。強いとそれだけで歩兵一個中隊に匹敵するらしいから、悪魔になってることを踏まえると歩兵大隊にも通用するだろうし。
だけど―
「なんでなんでなんでなんで！　なんで……なんで私なんかの為にこんなところに来るんですか！」
―あのレーティングゲーム、まだ全力じゃなかったのか！
いや、たぶん実戦を踏んだことでコツを掴んだんだろう。それが理由でポテンシャルが明らかに数段上がってる。
そして最悪なことに、インガ姉ちゃんの星もかなり厄介だ。
振るわれる刺突はその周囲に、ドリルのように回転する追加攻撃が入っている。

更に移動速度はまるで推進器をつけているかのように早く、掻い潜って組み付こうとした瞬間には暴風を喰らって浮き上がって吹き飛ばされる。
運よく打撃を入れたとしても、まるでエアバッグに当たったかのように衝撃が吸収されている。
……おそらくだ。インガ姉ちゃんの星は大気の操作だろう。
それもおそらく操縦性が特に高い。それによって多種多様な効果を発揮することができるのがポイントだろう。
威力においては低めだから、たぶん収束性は低い。あと近接戦闘が主体ということは拡散性と干渉性もさほどないと見ていい。遠距離なら暴風の発生程度で済むだろう。
だけど、問題は距離を完全にインガ姉ちゃんに支配されてる点なんだよ。
「んな……くそ！」
反撃の攻撃を放つけど、その瞬間にはこっちから距離を取られてる。
さっきからインガ姉ちゃんにとって都合がいい距離ばかり取られている所為で、反撃を叩き込むことが碌にできない。よしんば当たってもエアバッグで威力が大きく殺されてる。最悪の場合はバックステップ込みで完全に吸収される始末だ。
推進力の高さによる距離の完全支配に、防御面の保険が付いたことで完璧に攻撃を支配されている。
これは、流石にきつい……っ。
そして何よりきついのは、インガ姉ちゃんの表情だ。
「……このまま地獄に道連れになるだけなのに。道連れにならなくちゃいけないのに。みんなみんなみんなそうなるのに。なんでなんでなんでなんでなんでなんで―」
あんな絶望しまくっているインガ姉ちゃんの顔なんて、見させられる身にも―
「―なんで手を伸ばして、救われるなんて思わせるんだよ！　そんな価値なんて私にはないのにいいいいいいいいいい！」

―その瞬間、今まで以上の加速でインガ姉ちゃんが踏み込んだ。
まずい、完全に刺突が躱せる状態じゃ―

イッセーＳｉｄｅ

「ディオドラぁぁぁぁぁ！」
俺はブちぎれて一気に突貫して、ディオドラの奴をぶん殴る。
ディオドラの野郎。拘束されてるアーシアに全部話しやがった。
満面の笑顔で自慢みたいに言いやがって。ここまでクソッタレだなんて思ってなかった。
だから、文字通り全力で俺はディオドラをぶん殴った。
「―驚いた。君も大概強くなったんだね」
それを、ディオドラの野郎は受け止めやがった。
「……ヴァーリの野郎が気をつけろっていうわけだよ」
「なるほど。思った以上に手が回ってると思ったら彼が余計なことをしたのか。あとでシャルバ達に言ってお仕置きしてもらわないと……ね！」
魔力を込めた拳をディオドラが放つけど、俺はそれを右手で受け止める。
お互いに睨み合ったけど、ディオドラが魔力の塊を叩き付けてきたことで、一旦仕切り直しになった。
「……冗談だろ。蛇で僕の力は強化されてるってのにピンピンしてるのかい？」
「こっちの台詞だよ。蛇を使ってこの程度だってのか？」
『そう驚くな、相棒。仮にも二天龍を宿し正式に禁手になった今のお

前が、蛇を使ったとはいえたかが上級悪魔にそう後れを取るものか』
そっか。俺ってばそんなに強くなってるのか。
ありがとよ、ドライグ。お前を宿しているからこそ、俺は目の前の糞野郎をぶん殴れる。
「……イッセー。私の分も残してくれないと困るぞ？」
「そうね。許せないのは私達全員だもの。一緒に戦いましょう？」
そう言いながら、ゼノヴィアと部長が俺の隣に並び立つ。
シャルロット達もディオドラを包囲するように集まって、一斉に睨んでいる。
俺達全員を怒らせたんだ。ただで済むと思ってないだろうな、ディオドラ。
「なるほど、ね。これは流石に蛇だけじゃ凌げないか」
の割には余裕だな。
俺達がその余裕っぷりに警戒していると、ディオドラは懐から何かを取り出した。
「貰っておいて正解だったよ、念には念とはよく言ったものさ」
『レイドライザー』
『Ｂｕｒｓｔ！』
……マジかよ。
「……レイドライザーにプログライズキー」
「どうやら、相当優遇されているようだね……っ」
小猫ちゃんと木場が言った通り、ディオドラが持ってるのはレイドライザーにプログライズキーのセットだった。
まだ隠し玉があったってことなのかよ。
なら、使う前に叩き潰して―
「本気の本気で行かせてもらうよ。そう、全力でね―」
その時、空気が変わった。
いや、これは―
「創生せよ、天に描いた星辰を―――我らは煌めく流れ星」
こいつも、星辰奏者（エスペラント）だって!?
「優雅に楽しきその時を、長く味わい愉悦に浸る。これぞ貴種の特権

なり」
　何時の間にか引き抜いたサーベルは、星辰奏者用の星辰体感応金属（アダマンタイト）で作られたあいつ用の武装。
「手間暇かけて準備を整え、成功するのは格別の美酒。得物を眺めて可愛がる、この悦びこそ至福の時」
　こっちが慌てて叩きのめそうとしても、レイダーと蛇で強化された星辰奏者の動きで、ディオドラは攻撃を凌いでくる。
「愚民の義憤？　笑止千万。愚かで下等な存在共など、我らが遊戯に使われろ」
　レイダーとしての左腕のクローやサーベルが攻撃を弾き、魔力の弾丸と左腕のガトリングガンが俺達の接近を阻んできやがる。
「低俗な底辺が我らの喜びの礎となるのだ。歓喜の涙を流してすり寄り、感謝するのが筋だろう」
『ダイナマイティングボライド』
　ディオドラがレイドライザーを操作すると、左で二更にでかいガトリングガンが出てきて、俺たちに襲い掛かる。
　咄嗟に戦車に昇格し、小猫ちゃんに支えられる形で俺が盾になるけど、思った以上に響いてきやがる。
「光り輝く聖なる宝は、汚れ堕ちるが真なる価値」
「イッセー！　こうなれば後先を考えてる暇はない！」
「ああ！　一気に聖剣で決める！　やれゼノヴィア！」
　何とかアスカロンをゼノヴィアに投げ渡して、俺は攻撃を受け止め続ける。
　あいつがどんな星辰光を持ってたとしても、強引に出力で押し切れば―
「我が玩具となる祝福を前に、歓喜と共に朽ち果てるがいい」
　―そう思った時、俺達の全身が焼け付いた。
「超新星（メタルノヴァ）――聖域乱（アスタロト）す愉悦（ロート）の優越、散華（ホビー）し乱れよ聖（タイ）なる乙女（ムス）」
　な……に、が―

魔性変革編　第四十八話　落日の加速

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

バシャルンにおける冥革連合に対する討伐部隊はすぐにでも集まり出陣した。
禍の団との同盟を結んだことによる二正面作戦だが、冥界政府も対応できる戦力がいないわけではない。
むしろ和平により各種神話勢力との協調ができていたこともあり、旧魔王派とのテロにおいてはかなりの戦力を集めることができている。むしろ旧魔王派は他の勢力も敵視していた為、各神話からの戦力供給がしやすい土壌もあった。過剰戦力と思われるほどの量が集まっていたと言ってもいい。
しかし冥革連合は別口だ。想定外の形であり冥界の大都市を制圧している為、必然として戦力は悪魔が中心となる。
その状況下において、レーティングゲームの有力プレイヤー達が大挙してきているがその内訳だ。
同時に四大魔王からも増援が来る事態となっていた。
「……どう思う、ファルビウムちゃん」
その一人であるセラフォルーは、同じく出陣したファルビウム・アスモデウスに話を振った。
二人は四大魔王を襲名した一角だが、サーゼクス・ルシファーやアジュカ・ベルゼブブに比べると一歩劣る。その上先日のテロでは本来の血統であるカテレアやクルゼレイに眷属事追い込まれた為、発言力が多少低下していたのもあって待機組だった。
最も、サーゼクスとアジュカは悪魔の領域に入れていいのかも分からないとされる、三人しかいない超越者に属する存在。セラフォルーやファルビウムも魔王に相応しい力を持っているが、それを踏まえて

もあの二人は頭一つ跳びぬけている。
魔王級に限定すればグレイフィア・ルキフグスやディハウザー・ベリアルなどがいるものの、超越者級ともなればあの二人ぐらいしか世に出れる者がいないのだ。
それが幸か不幸かこうした対応部隊の指揮官として動けるのは、運命の悪戯というべきか否か。
そんな中でセラフォルーが尋ねた意味を、ファルビウムはよく理解していた。
「……嘘は言ってないだろうね。冥革連合にとっての最善は、王、真魔、民の駒を現政権が普及させたうえで、自分たちが倒されることだろうさ。それはもう分かり切ってる」
ファルビウムの断言に、セラフォルーもうんざりしながら頷いた。
何せこの糾弾内容ともいえる宣戦布告は、嘘偽りなく現魔王政権にとっても都合がいい内容なのだ。向こうの理想がそうである可能性は十分高い。
本音が現政権を潰すことならば、そもそも演説内容をあんな形にする必要はない。
「態々王の駒までこっちに送ってるものね。素直に真相や現状を言えば、冥革連合はもっと勝ち目が上がるのにしないってことは、つまりそういうことなのよねん」
「だよねぇ。あれだけおぜん立てしてくれたんなら、本当にアジュカが作っても怪しく思われにくい。……まさかこっちが先に作ってるなんて、あの演説からじゃ思い至らない」
「確か人間界のマジックでこういったのあったわね。ミスディレクションだっけ？」
「あ～。黒○のバスケって面白かったね。僕的には推理小説の叙述トリック的なのが印象かな」
そんな風にぼやき合いながら、二人は迎撃部隊として抜擢された者達に視線を向ける。
ディハウザー・ベリアル。ロイガン・ベルフェゴール。ビィディゼ・アバドン。

レーティングゲームでトップ3として君臨し、個人として魔王クラスの力量を持つとされる三人が、こうして討伐部隊として派遣されている。
不可視としては十分すぎるが、その意図を薄々察してセラフォルーもファルビウムもため息をつきたくなった。
「……万が一にでも知られないようにって、大王派のおじ様達の差し金かしらん？」
「まあ確かに。既に使ってる人が更に使っても効果ないだろうしね。まあオーバーフローして放出されたって誤魔化すこともできそうだけど、そこまで考えてる余裕はないでしょう。ばらされてる側からしたら」
とはいえ、そこまで向こうも考えているからこその戦闘だろう。
冥界でも屈指の軍師とされるファルビウムは、今回の戦闘で冥革連合との決着がつくなどとは欠片も考えていなかった。
あれは馬鹿なのだろうが、然しただのバカではない。ただの馬鹿なら行動に移す前に計画をこちらに察知されているだろう。少なくともそれだけの能力と運を兼ねそろえているからこそ、計画を遂行するその時まで漕ぎづけることができたのだ。
向こうの勝利条件は独特だが、初手から全滅するなどというわけにはいかないことは流石に分かっているだろう。
正攻法では王の駒や真魔の駒を使わなければどうにもできない。少なくとも禍の団を含めればそうなると踏んでいるからこそ、こうして堂々と動いているのだ。今回動かせる戦力で仕掛けたところで決着がつくとは思えない。
「セラフォルー。悪いけど、僕達の発言力はもうちょっとそぎ落とすことになるよ。適度に相手の動きを見たら、僕達の名前を同時に出して撤退戦だね」
「そうねぇん。オーディンのおじ様達とも協力して動きたいわねん」
今回の行動は、一部の貴族や民衆の心理面を考慮したものと、ファルビウムは既に割り切っている。
まずは旧魔王派に決定的打撃を叩き込むことが重要。想定外のこ

の反乱は、そのあと腰を据えて取り組むべき問題だ。
お互いにそう踏まえているからこそ、戦術的に即座な撤退ができるよう布陣を整えている。
「アジュカちゃんも色々大変になるでしょうし、サーゼクスちゃんの負担が大きくなりすぎてかわいそうかも」
「確かにそうだね。面倒くさいけど、今度愚痴ぐらいは聞いてあげるかなぁ」
今この場において、二人はそう言えるだけの余裕があった。
……帰還後、そんな余裕が吹き飛ぶことを二人はまだ知らない。

アザゼル　Ｓｉｄｅ

なにが、あった？
俺もミカエルも、目の前の光景に度肝を抜かれている。
そしてそれ以上に消耗がでかい。はっきり言って想定外だ。
「……ぐ……ぅ……」
「正直意外だね。もっと苦戦すると思ってたから、何て言うかしらけるっていうか」
そう呆れ半分な口調でミザリ・ルシファーが見下ろすのは、全身が血まみれになったサーゼクスの姿だ。
サーゼクスは文字通り全力の全力でミザリを仕留めに行った。
一瞬で消滅の魔力そのものと言える真の姿を見せると、そのまま一気に仕掛けたといってもいい。
それだけあいつは警戒に値する。
あの野郎の実の息子であり、アドルフ・ヒトラーのデミ・サーヴァ

ント。それは旧魔王派に決定的打撃を与えても意味がないほどの恩恵を禍の団に与えかねない。
だからサーゼクスの判断は何処までも正しい。容赦も遠慮もできる相手じゃないし、俺達も操舵から援護をした。
……そう思った次の瞬間、サーゼクスは消耗した状態で元の姿に戻り、そしてそのすきを突かれて聖槍の一撃を喰らって崩れ落ちた。
あまりにあっさりとサーゼクスがやられて、俺達もさすがにあっけにとられた。
が、すぐに我に返る。っていうかあっけにとられている暇がない。
あのサーゼクスが一蹴されるとか異常事態だ。それも、魔王どころか主神に喧嘩が売れる真の姿を発揮したうえでだ。
ヒトラーの奴よりヤバい強さを発揮してやがる。いくら奴のデミ・サーヴァントとして上乗せされてるからって、サーヴァントが英霊本人の分霊―つまり１００％じゃない―ことを考えれば異常だ。ルシファーの血筋からくると考えるべきか。
「容赦してる余裕がねえ！　仕掛けるぞミカエル！」
「わかっています！」
ミカエルが星辰光を展開するのに合わせて、俺もファーブニルの鎧を装着する。
そして左右から挟み込むようにして攻撃を叩き込むが、ミザリはそれをすべて盾と槍で凌いできやがる。
どっちかが相手の死角に入って攻撃しているし、それなりに長い付き合いで連携だってそこそこの練度だ。なにより年季のさでフェイントだって組み込んでいる。
それをすべて、奴はあっさりと凌いできやがる。
野郎、攻撃の察知が異常に正確だ。どこにどのタイミングで攻撃が入ってくるのか、先読みしているとしか思えねえ……っ。
そして攻撃の方も厄介だ。
野郎の攻撃はすべて、こっちにとって嫌なタイミングで嫌なところをついてきやがる。
相手の攻撃を誘導するためのフェイクといった行動に全然引っか

からねえ。それどころか、こっちが本当に無意識レベルで警戒を緩めてるところにまでちょくちょく攻撃が行くから、やりづらいにもほどがある。
タイミングだって最悪だ。攻撃に入ろうとするその絶妙なタイミングで仕掛けてくることまであるせいで、さっきから二対一だってのにペースを完全に向こうに握られてやがる。
こいつ、いったい何なんだ……っ！
ミカエルの斥力場すら見切ってるのか、一瞬の拘束すらろくに引っかからねえ。引っかかったと思ったそのタイミングで魔力でカバーを入れるから、本当にこっちが一方的に消耗してやがる。
「てめえ！　そもそもなんでこんなことをしやがる！」
とにかく情報を引き出すために、俺は切り結びながら問いかける。
大抵の奴は調子に乗ってると口が軽くなるもんだ。今の状態なら、少しぐらいは引き出せるはずだ。
少しでも情報を引き出さねえとまずいだろう。特にコイツ、何年間も配下に慈善活動をさせたうえでこんなレベルの凶行をしてきやがるんだ。何を考えてるか何とか探らねえと……な！
ようやくつばぜり合いに持ち込めて、俺はもう一回問いただす。
「何年間も私財を切り詰めるような慈善活動をしておきながら、全部台無しにするような真似しやがって！　どう考えても金の無駄遣いだろうが！」
「これはおかしなことを。まさかこの程度で済ませるとでも？」
なんだと？
おいおいちょっと待て。
慈善活動家がこれだけの規模の凶行を引き起こしたってだけで大問題だぞ。さらにその上があるってのか！
「これ以上何をするというのですか！」
「具体的にはあれかな？」
そう言って顎で示したのは、増援としてきてくれた悪魔たちと戦っている化け物たち。
観客席で本性を現し、現場の別勢力の連中からもぎ取った手足やら

皮やらを材料に、幽世の聖杯で生み出した化け物ども。
おい、まさか―
「慈善活動のついでに、バケモンになるようにしてたってのか!?」
「もちろん全員じゃないよ？　そんな程度ならさっさとやってるさ。何年間も頑張ったかいがない」
本当にうれしそうに、うっとりとした表情で微笑むミザリに寒気を覚える。
「今頃難民キャンプや養護施設じゃ、並みの星辰奏者の一人や二人じゃ止められないような暴走体が、十人につき一人ぐらいの割合で出現してるね。彼らは施設外の人たちだけを惨殺し、施設の者たちはしっかり守るようにプログラミングしてるんだ」
……そういうことか。
俺と同じことをミカエルも悟ったのか、堕天しかねないぐらい激怒の表情を浮かべている。
俺もミカエルも聖書が広まるぐらいのころから生まれてるからな。その分人間界の歴史もよく見ている。その醜い側面も、いやというほど知っている。
この野郎、わざと化け物どもにキャンプや施設の連中を襲わせないことで、襲われた連中やその周囲に迫害されるように仕向けてやがる。
どこまで腐った真似を……っ！
「貴方は！　それだけの非道、いったい何が目的でそんなことを!?」
ミカエルがブチぎれ寸前で吠えて―
「趣味です」
―間髪入れずに、ミザリの野郎は即答した。
あっけにとられる俺たちの前で、ミザリは両手を広げてにっこりとほほ笑んだ。
まるで人によっては聖人君子を思わせる。純粋なまでに喜びを示したその表情。
そんな表情で、ミザリは本心から腐り果てた所業に満足している。
「質も量もできる限りこだわった上で、絶望や嘆きを見たいんだ。旧

魔王血族がいろいろと動いていることも知ってたから、それと同時に君たちの出鼻をくじくような形で、できる限り質も量もこだわって嘆きと絶望を広げたかったんだ」
その表情は、まるで子供が大成したところを見ている親のように感慨深げだ。
「幸いイシロは被虐体質だから、貴族としての生活を切り詰めるのも報酬になったしね。いつか旧魔王血族が動き出すその時に、更に精神的に現政権を苦しめられるから彼らも黙認してくれたよ」
そんな表情で、どこまでも人を苦しめることだけを考えた悪意を形にして、それを慈しめるってのか。
そんな穏やかな微笑を浮かべ、ミザリ・ルシファーは遠くを見つめる。
「ああ、きっと被害を受けた者たちや、暴れたい理由が欲しい人たちは動くだろうなぁ。彼らも化け物になるかもしれない、むしろ襲われなかったというのなら仲間かもしれない。そんな風に言い訳を得られれば、どこまで残虐になれる人は多いから。……ふふ、ニュースで流れるのを楽しみに待ってるよ」
……最悪のパターンだ。
旧魔王派の連中は、身勝手極まりないが革命願望や奪還という大義名分を持っている。
だがこいつは違う。悪意しかねえ。
あまりにタチが悪すぎる……っ
「だからこんなところでは死にたくないね。俺自身の絶望は嘆きも美しいけど、やっぱり他人のを眺めるのが一番だしさ」
そうはっきりと告げ、奴は聖槍を構える。
「……やるぞミカエル。こいつは、こいつはいくら何でも危険すぎる！」
「同感です。彼は生かしておくにはあまりにも悪意に染まっている……っ」
俺とミカエルは同時に仕掛ける。
だが同時にこうも思っていた。

多分、こいつは今回取り逃がす。
何故なら、イシロ達がまだ出てきてない。後詰として何人かが控えてると考えるべきだ。
そう考える中、攻撃を回避するミザリは苦笑を浮かべると指を鳴らす。
「そろそろ出番だよアルバート。お披露目と行こうか」
まだ伏せ札があるのかよ……！
俺が内心で舌打ちをしていると、彼方から何かが接近してくる。
あの輪郭、サリュート系列か！
「僕の同僚にアルバートってのがいただろう？　彼は研究者のサーヴァントでね、サリュートに興味を持っていたから取り寄せて、研究してもらっていたんだよ」
ミザリがそう言いながら、その新型サリュートに視線を向ける。
「僕ももうちょっと楽しみたいけど、今はもっと情報を把握して眺めていたいんだ。だから、あの子の相手をしてもらっておいてくれ」
そう言いながら、新型サリュートどもと入れ替わるようにミザリが離脱する。
俺たちはもちろん追いかけるが、それより先に新型サリュートは星を解放して―

冗談だろ、クソッタレ！

魔性変革編　第四十八話　私は正義の味方で悪の敵

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

枉法インガは、細剣で装甲ごと貫いた和地を蹴り墜とすと、深く息を吸い、吐きながら空を見上げた。

「ああ、なんでかな……」

できれば殺してほしかった。そんな身勝手極まりない願いを覚えてしまう。

自分で死ねばいいだろうに、その度胸も無いからこうして生きながらえている。デイオドラの眷属として活動しながら、こうして生き恥をさらし続けている。

人は、その方向に努力ができるのならもっといい方向に、とでもいうのだろう。だが残念なことに、インガにとって状況に流されて活動することは努力とは言わなかった。

流されているだけなのは簡単なのだ。諦めて成り行きに任されているというのは、折れた心にとって努力でも何でもない、朝起きて食事をとるのと何ら変わりのない自然な活動だった。

だからインガは、自分が救われることを望んでない。

元々修道院に叩き込まれた時点で、自分に対して見切りをつけているからだろう。そのまま死というエンディングを成り行きに任せて受けると思っていた。それが更に最悪なものになったのも、地獄の上乗せではあるが変わりはしない。

だからインガは自分に自信がない。強大な星辰光を会得したと言われても、それが自己評価に繋がる訳ではなかったのだ。

ふと、思い出して一枚の紙片を取り出す。

それはかつて渡された、連絡先の書かれた紙。

なんで持っていたままなんだろう。そんな気持ちを覚えながら、インガは気を取り直して歩くだけだ。
その目に光は無い。希望は無い。未来は無く、幸せは無い。
「……なんで私、まだ死んでないんだろう？」
それが彼女の人生の答え。
死んでないから生きているという、ただそれだけが彼女の事実だった。

逆にディオドラ・アスタロトは、身を震わせるほどの喜びに包まれていた。
「あっはははははっ！　ひれ伏しなよグレモリー！　アーシアも絶望して一石二鳥じゃないか！」
「させ……ません！」
グレモリー眷属が悶絶して倒れ伏す中、唯一まともに動けるシャルロットが、包丁を片手に何とかディオドラを足止めしている。
だが、亜種禁手により赤龍帝の鎧を纏っていながらディオドラを倒しきることができない。
その理由は大きく分けて二つ。
一つはディオドラ自身の強さ。オーフィスの蛇による底上げに、星辰奏者としての強化、そしてレイダーに変身することによる強化スーツ。その三つが組み合わさった今のディオドラは、最上級悪魔でもてこずるような領域に到達していた。
シャルロットは確かにサーヴァントだが、宝具一点特化型で、当人の戦闘能力は一般人並み。サーヴァント化によるポテンシャルは技術の習得で底上げしているが、どうしても姑息で限界がある方法ではあった。
故に今のディオドラを相手にするには限度がある。
もう一つは、彼女もまたダメージを喰らっているという分かり易い

状況だ。
グレモリー眷属は全員が、絶大な聖なるオーラによって弱り切っていた。更に継続的に襲い掛かるオーラによって、刻一刻と消耗している。
この状況下で咄嗟に禁手を切り替えたイッセーの判断力は評価されるべきだが、突如発生した絶大な聖なるオーラによるダメージは、彼らをして立ち上がることすら不可能なダメージを与えていた。
「く……そ……ぉ」
「ディオド……ラぁ！」
イッセーとゼノヴィアは立ち上がろうとするが、然し体に力が入らない。
全身を焼かれたうえで立ち上がろうとするその執念は立派だが、聖なるオーラで体を焼かれたことで奪われた力は無視できない。
「イッセーさん！　ゼノヴィアさん！　部長さん！　シャルロットさん！　皆さん……逃げてください!!」
「そういうわけにはいきません！」
アーシアの叫びで奮起するシャルロットだが、彼女自身負傷を受けたことで限界が近づいている。
悪魔でないがゆえに深刻なダメージこそ受けていないが、とても今のディオドラから皆を逃がす余裕などあり得ないのだ。
それでも何とかしのいでいたが、然しディオドラは急に飛び退る。
警戒して追撃を躊躇するシャルロットだが、それがよくなかった。
「足元がお留守だよ？」
「しま―ッ!?」
その直後、戦闘中にディオドラが抜き取り落としていた強化ダイナマイトが一斉に起爆した。
咄嗟に究極の羯磨（テロス・カルマ）で起爆の阻止を狙うが全ては不可能。ゆえに誘爆で結局はすべてが爆発するという憂き目にあう。
「あ……ぐ……っ」
堪え切ることができず、そのまま崩れ落ちるシャルロットに向け、ディオドラは左腕を向ける。

『ダイナマイティングボライド』
「さよなら、サーヴァントくん。座に還って主の死ぬところを見届けるといい」

「「ふざけるな」」

イッセーＳｉｄｅ

ディオドラの顔面がいきなり爆発した。
「んなっ!?」
「「「「「「え？」」」」」」
俺達全員が呆気に取られてると、後ろの方で何かが地面に落ちる音が聞こえる。
俺は何とか振り返ると、そこには長い筒を蹴り飛ばしながら入ってくる、短い筒を抱えたカズヒがいた。
カズヒは結構疲れてるみたいだけど、それでも大した怪我もなく、しっかりとした足取りで俺達を追い越してディオドラの前に立ちはだかる。
「まぁ、この程度でやられてくれるわけがないわね」
「お前ぇ……！　なんだそれはぁ！」

平然としてるカズヒにディオドラがめっちゃ激高してる。
カズヒは肩をすくめながら、手に持った筒を見せた。
「何って歩兵携行型のロケットランチャーよ。知らない？　ランチャーチューブを入れ替えるタイプ」
「そんなことはどうでもいいんだよぉ！　僕の眷属殆どを相手取ってたんじゃなかったのか！　何をしてるんだ、あいつらは!!」
ディオドラがそう喚き散らすと、カズヒは軽く息を吐いてから、真っ直ぐディオドラを見据えて言い切った。
「全員のしたわよ。まあ、結構手こずったけれど」
「……あの役立たずどもが！」
ディオドラが吐き捨てると、カズヒは盛大にため息をついて首を横に振った。
「ろくに鍛えてもないくせによくもまあ。相手の強さも図らずに味方を無能扱いすることといい、典型的な小物の悪党ね。まあ、それならそれで倒しやすいから楽なんだけれど」
うっわぁ。めっちゃ神経逆なでしてる。
俺がちょっと引いてると、カズヒは宝石をいくつか取り出した。
「活動開始（セット）―治癒活性（ヒーリング）。及び聖別隔離（シャットアウト）」
投げつけながら詠唱して、それが俺達の上で消滅して光になる。
お、だいぶ痛みが引いたし、ダメージも回復してる。
魔術すげえな。魔術回路万歳！
「ぼさっとしない！　回復はアーシア程じゃないし、聖なるオーラの遮断にも限度があるわよ！」
俺が調子を確認してると、カズヒはため息交じりに叱責してきた。
あ、ごめんなさい。
そうだな。このチャンスを逃す暇はねえ。俺があいつをぶん殴らなくて、誰が殴るってんだ。
強引に立ち上がると、他の皆は消耗が激しくて立ち上がれないようだ。
任せとけ。お前らの分も俺が―
「じゃあイッセー。皆を連れて下がってなさい」

―どうにかすると思うより先に、カズヒがそんなこと言ってきた。
な、なんですとぉ!?
いやいや待って待って。俺もディオドラを殴りに来たし、何よりアーシアを泣かせた奴は許せない。
カズヒだって消耗してるんだし、此処は俺に任せてほしいって。
「カズヒ！　ここは俺が―」
「時間がないって言ってるでしょう？　時間が経ったらまたダメージが入るから、それより先に皆を範囲外に下がらせて」
俺を見ないでそんなことを言うと、カズヒは真っ直ぐにディオドラを見る。
「殴りたいなら尚更よ。私があいつをボコボコにしてるから、さっさと終わらせれば止めはあげるわ」
「言ってくれるね人間如きが。たかが人間がこのアスタロトに勝てるとでも？」
ディオドラが苛立たし気にそう言ってくるけど、カズヒは小首を傾げた。
「……面汚しで欠陥品がそういうこと言ったら、家の人が泣くわよ？
名誉棄損で訴えられてから出直してきなさい」
……キレッキレの罵倒だ。
一瞬だけ同情しそうになったけど、それでディオドラの奴は完璧に切れた。
「ふざ……けるなぁ!!」
ガチギレ状態だけど、その時俺は寒気を覚えた。
ディオドラじゃない。カズヒから、ディオドラのそれより何倍もの怒気があふれ出てきた。
「ふざけてるはあんたの方よ。私は正義の味方な悪の敵。……腐れ外道が、ぶちのめす」
『フォースライザー』
そう言いながら、カズヒは何かを腰につける。
ディオドラの奴もなんかぎょっとしてるけど、知ってるのか？
「それは……疾風殺戮フォースライザー!?」

「少し違うわ。その改修前仕様の滅亡迅雷フォースライザー。その再現品よ」
『ＣＲＹ』
そしてプログライズキーをそのフォース何たらに装填した。
「イッセー、まずは皆を安全なところに。安心して、時間はかかるわ」
静かにディオドラと睨み合いながら、カズヒははっきり言いきった。
「へぇ？　僕をいたぶれるだけの余裕があるとは、舐めてくれるね」
「違うわよ」
ディオドラの静かな怒りを受け流しながら、カズヒははっきり言いきった。
「……怒り狂ってるから徹底的にセーブしないと、情報を聞き出す前に殺しそうだからよ」
カズヒはそう言って、ベルトを操作する。
「変身」
ベルトが駆動してプログライズキーを開く。
『フォースライズ』
「なめるなぁ！」
同時にディオドラがダイナマイトを投げるけど、それをいくつものバッタが跳ね飛ばす。
そしてあたりで爆発するのと同時に、バッタがなんか装甲をカズヒに押し付けた。
『ハウリングホッパー！』
その勢いにのまれてバッタが吹っ飛ばされそうになるけど、カズヒの装甲から出てくるベルトっぽいのがそれを引き留め、強引に装甲を装着させる。
『Ｉ　ａｍ　ａ　ｓｕｐｐｏｒｔｅｒ　ｏｆ　ｊｕｓｔｉｃｅ　ａｎｄ　ｅｎｅｍｒｙ　ｏｆ　ｅｖｉｌ』
そこにいるのは、銀色の装甲を見に纏った、和地やヒマリとはいろんな何かが違う仮面ライダー。
「……仮面ライダー道間。悪の敵が初実戦には、ぴったりの腐れ外道

でよかったわ」
「……仮面ライダーだと？　ＡＩチップの埋め込みにしろ、負荷のかかるフォースライザーにしろ……正気じゃないね」
「あんたの星辰光の性格の悪さも大概ね」
　え、今カズヒ何て言った？
　なんかディオドラも面食らってるし。え、どういうこと？
「周囲のそこかしこに無銘とはいえ聖剣の反応を感じるわ。おそらく拡散性と干渉性に優れた聖力操作能力でしょう？」
　カズヒにそう言われて、ディオドラは肩をびくりと震わせた。
　え、つまり―
「つまりグレモリー眷属達の天敵ね。ただでさえ悪魔だから特攻が入る上、アスカロンやデュランダルなんて伝説級なんだもの。カモがネギしょってやってきてるわ」
　―最悪だぁあああ！
　本当に相性最悪じゃねえか。そりゃ俺達全員やられるよ。
　俺が思わずへたり込みそうになってると、カズヒがこっちに首だけ回して振り返る。
「まあそういうことだから、こいつに関しては基本私に任せなさい。一発かませるチャンスはあげるから、それをつかみ取れるよう準備だけはしておいて。そしてディオドラ、あんたに対しては決まり切ってるわ」
　ディオドラを睨み合ったカズヒが、右手を突き出す。
「この私が―」
　そして切れのある動きで、親指を下に勢いよく向けて宣言した。
「―這いつくばらせて後悔させてやる」

和地Ｓｉｄｅ

ああくそ、思ったより痛くてつい悶絶してた。
だけどあんな言い草を聞いたら、のんびり失神してもいられないしな。
俺は立ち上がると、ショットライザーを構えて
「嘘……でしょ？　肝臓を貫いたのに、人体急所なのに……？」
面食らってるところ悪いけど、まだまだその変な未熟っぽいな。
「星辰奏者（エスペラント）の死に難さを舐めるなよ？　この程度、魔術回路式の治癒魔術と併用すれば死なない程度はそんなに難しくはないんだよ」
いやまあ、死にそうなぐらい痛かったけどな。
それはともかく。俺は呼吸を整えながら笑顔をインガ姉ちゃんに向ける。
「なんで生きているんだなんていうなよ。俺は生きてインガ姉ちゃんに再会できて嬉しかったし、これから幸せになればいいじゃないか」
「な、にを……」
「いやまあ、ディオドラに従って禍の団に与したケジメは必要なんだろうけどさ？　それにしたって情状酌量はあるだろう……っていうか、俺とカズヒ姉さんがアザゼル先生に頼み込んだから、それなりにはいけるから」
戸惑うインガ姉ちゃんに、俺はそう言っておく。
カズヒ姉さんまで頼み込んでくれたのは意外だったけど、姉さんはあくまでディオドラの眷属全体だった。
付いて行ってテロに参加したことは処罰されるべきだけど、同時にディオドラにすがる以外の選択肢を見えなくされていた事実は見てほしいと、そんな感じだった。
ああ、だからまあ、そういうことだ。
「イッセー達がディオドラを倒せば、インガ姉ちゃんは情状酌量決定だ。保釈金ぐらいなら俺もローンで貸すからさ、まず今度一緒に食べ歩きしようぜ？」

インガ姉ちゃんの今後の人生が、真っ暗で嘆き続けるだけなんてことは無い。
そうさ、インガ姉ちゃんも他の眷属も。心から悪に堕ちたんじゃないならそれぐらいの可能性はあってしかるべきだ。
何より―
「インガ姉ちゃんはずっと罪悪感があったんだろ？　なら、俺はその涙をぬぐいたい」
―自分の大事な女の涙の意味は、帰れる男でいたいんだ。
「……無理です」
俯いて、インガ姉ちゃんはそう漏らす。
「無理です無理です無理です無理です無理です。ディオドラさまを裏切るなんて無理無理無理無理無理無理無理」
ああ、そうなるよな。
「お父さんもお母さんも私を見切って、そもそも最後の情けすら裏切ったのに！　その先も悪党でクソッタレの下で、しかもすがるしかできないから何度も間違えて！　何人も引きずり込む手伝いまでしたのに……っ」
ディオドラの所為でとはいえ、真っ当な罪悪感を感じれるからこそ、自分から一歩を踏み出せない。
その結果ずるずると罪を上乗せして行って、尚更出れなくなっている。
そりゃそんな状態じゃ、助けられることを受け入れられないだろうさ。
だけど―
「それ、持っててくれたんだろ？　なら、俺はそうするよ」
―もし助けてほしい時、そんな時の為に残したそれを、インガ姉ちゃんは持ってたんだ。
なら答えは決まってる。理由はもう十分だ。
俺は決めた。カズヒ姉さんが言っていたように、強引に引っ張り上げて強引に、縋るディオドラを取り上げる。
「荒療治だ。我慢してもらうぜ……インガ姉ちゃん！」

俺は決意と共に、奥の手を取り出す。
試作品だし慣らしも間に合わなかったけど、それでも今この状況において、これは十二分に役に立つ。
「リーネス……ありがとな」
『ＳＨＩＥＬＤ』
使うのは、これまでとは違うプログライズキー。
リーネスがカズヒ姉さん用に開発したプログライズキーの技術を流用した、ショットライザーでも使えるタイプの試作型プログライズキー。
俺はそれを装填して、静かに構える。
そんな俺を見て、インガ姉ちゃんは髪を振り乱しながら細剣を構えた。
「やめてよ……やめてよ……！」
「やめないよ」
『ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』
ああ、それはやなこった。
「俺もいい加減いい歳なんでな、馬鹿やってる姉貴分ぐらい、張り倒してでも止めてやるさ！」
『ショットライズ！』
俺が変身を開始すると共に、インガ姉ちゃんは絶叫した。
「そんなことしてぇぇぇぇぇぇ！」
『ディフェンディングタートル！』
カメを模したアーマーが展開されると同時に、インガ姉ちゃんが細剣を構えて突っ込んでくる。
「今度こそ、殺しちゃうんだからぁぁぁぁぁぁぁ!!」
その細剣の一撃を―
『Ｉｔ’ｓ　Ｐｏｉｎｔｌｅｓｓ　Ｉ　ｄｏ’ｔ　ｄｉｅ』
「創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星」
―俺は真っ向から受け止める。
「な……っ」
いい起動音声してるぜ。

ああ、だから―

「歯を食いしばれインガ姉ちゃん。目覚ましはかなり響くぞ！」

―ここからだ!!

魔性変革編　第四十九話　荒ぶる仮面の戦士達

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「ぬぉおおおお！　グリドが戦えないのは厳しいですのぉおおおおお！」
「ひゃはははははぁ！　羽をもいでからゆっくりレイプしてやるよぉおおおっん！」
　空中で振るわれる一撃離脱の攻防は、以外にもフリードの方が優勢だった。
　その理由の一つは、ヒマリが使い慣れてないプログライズキーを使用していることに由来する。
　ボーイングイーグルは空中戦闘用にザイアが試作していたプログライズキーだ。しかしＡＩＭＳの部隊全体での運用を視野に入れており、加えて長時間の戦闘を重視している。
　結果として、単純な戦闘能力などではどうしても劣っている面が生まれている。加えて空中戦使用故に、それ以外の基本性能もリベレイティングキャットに比べると一歩劣る。
　そこに対する慣れの差が、フリードとの戦いで不利に働いた。
　フリードは聖剣因子すら人工的に移植したもので、才覚はあるが固有の異能を持っているわけではない。優秀ではあるが特別ではないという、そういう存在だ。
　だがそれは、裏を返せば一切の異能なく彼が強いということでもあるのだ。
　そしてマギアは、本来ヒューマギアを素体とするもの。それらの特性故に能力や必要な技能の上乗せは比較的容易。
　その差もまたここで出てくる。
　とどめにフリードは武将型アステロイド。ツヴァイハーケンが開

発した最強格のサイボーグであり、同時にオンリーワンの機能を保有している。
フリードの場合は聖剣因子の組み込みと、それに伴い聖剣の運用。無銘かつ下級の聖剣だが、それでも武器としてはかなり上位に位置している。
それもまた、フリードの優位性を高めている。
何せヒマリは一本しか聖剣を使えないが、フリードは全身に格納された聖剣で攻撃できるのだ。純粋なぶつけあいさえ避ければやりようはある。
故に幾度となく振るわれる攻防で、先に相手の隙をつけたのはフリードだった。
一瞬の攻防と見せかけ、相手の背後に回り込む。
それに対してヒマリは振り返ろうとするが、然し一手遅い。
「それではバイチャぁっ！」
『ゼツメノヴァ』
「あ、まず―」
とどめを刺す為に振るわれる攻撃に、然しヒマリの迎撃は間に合わず―
「そんなあなたに天使のご加護を！」
―割って入ったイリナの光の剣が、それを真っ向から受け止めた。
「イリナぁ！　ナイスタイミングですのぉ！」
『ＪＥＴ！』
「うっそぉ!?　ちょ、テイク２お願いしまーっす!!」
咄嗟に距離をとるフリードだが、その対応はまだ甘かった。
放たれる弾速の遅い射撃をフリードは躱すが、然しその直後に反転してＵターンして射撃がフリードに襲い掛かる。
それをもろに食らい、フリードは爆発の衝撃で地面に叩き付けられる。
『ボーイングブラスト』
衝撃で地面にクレーターができるほどの勢いで叩き付けられ、周囲に一斉に粉塵が巻き上がった。

「痛ってぇねなぁ……あれ？」
そして起き上がり、周囲の味方が全滅していることに漸く気付く。
イリナの援護が間に合ったのも、イリナが敵を撃破し終えたので飛んできたという、ただそれだけのことだった。
そして当然、そうなれば猛攻を喰らうのみ。
「おのれフリード・セルゼン！　我が一族に縁あるエクスカリバーによくも泥を塗ってくれやがったな！」
無銘とはいえ聖剣の斬撃を咄嗟に伏せて躱し。
「仮にも悪魔祓いでありながら、快楽で命を奪うその所業。許せません！」
更に二丁拳銃の攻撃を飛び跳ねて回避。
双方共に悪魔祓いとしては若い割に優秀な動きだ。神器もなくこんなところに来るだけはあると、同輩に鬱陶しさを感じたその時、更なる猛攻が襲い掛かる。
「私も参加するよ！　っていうかいろんな意味でアウトだし！」
咄嗟に投擲された聖剣をのけぞって躱し、
「アーメン！　いつかのお礼をさせてもらうわ！」
それをキャッチしたイリナの剣戟を何とか受け流す。
「なぁんか楽しくなってきましたよぉ！　じゃ、次は……およ？」
その時フリードはふと気づいた。
今、自分は動けなくなっている。
気づくとメンバーの視線が一点に集まっており、其処を見ればメイド服を着たヒューマギアが、符を構えてこちらを見据えていた。
「下品すぎます。子供達の情操教育に悪いので、そろそろ終わってくださいます」
「うっわぁ。冷血メイドの絶対零度視線とか、一部の人には絶頂物な気がするねぇ」
そう言いながらも、フリードは即座に反応する。
自らの機能を利用して、仕込み聖剣の射出が可能かを確認。そして結論として可能であることを悟ると、射出するタイミングを計り―
「では散開！」

―そんなことを持っている間に、全員が一目散に走り去っていく。
それに対して首を捻ろうとしたその時―
『ＪＥＴ』
『ジェットボーイングブラストフィーバー！』
「トドメですのよぉー！」
―マッハ七を超える超音速突撃により、気づく間もなく粉砕されたのは、果たしてフリードにとって幸運だったのだろうか。
それは、誰にも分からない。

そして同時期、ディオドラ・アスタロトとカズヒ・シチャースチエが激突する。
ディオドラが手を振うと、神殿内から聖なるオーラが放たれてカズヒに襲い掛かる。
それに対してカズヒは超越的な跳躍力で飛び跳ねることで、それを回避し続ける。
そして、回避するだけには留まらない。
「創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星」
「んなっ!?」
その起動詠唱（ランゲージ）にディオドラが驚愕する中、それを好機とカズヒは詠唱を続けていく。
「己の愚かさに目を向けず、光を妬んで踏みにじるは我が罪業」
そこに籠められし怨念にも似た気迫に、ディオドラは愚かイッセー達ですら息を呑む。
「全て失い絶望に包まれ、そして死を迎える程度で濯げるものか。我が罪業を見くびるな」
どこまでも、どこまでも。それは己をまず呪う。
暗部組織においてもダーティジョブに属する以上、自己嫌悪に至るのは決してありえない話ではない。

が、それにしても限度はあるだろう。自分を組織にとっての必要悪と定義していたのなら、必要性を理解しているのだから尚更だ。
「永遠(とわ)に流離い救われることなかれ。それこそが我に与えられるべき罰であり、終焉を救いとすることこそが大罪である」
どこまでも、どこまでも。それは必要悪が己に科すような呪いではない。
それを証明するかのように、彼女の周囲にこの星の真価が発揮され始める。
「故に、銀に輝く月を仰ぎ、我は我を裁き続けるのだ」
それは、銀に輝く瘴気というべきオーラ。
「我の如き、醜悪たる下衆共が。光を奪い、善を汚し、生きている限り苦しませ、死で終わることが救いのように、踏みにじるなど断じて許さん」
そのオーラは少しずつ、しかし明確にカズヒをまず蝕んだ。
まるで己自身を裁くことが、この力の本質だとでもいうように。
「マジかよ……」
そしてそれを見ているイッセーは、その力が確かにコカビエルとぶつかった時にも使われたものだと察していた。
間違いなく、あの力はカズヒ・シチャースチエの星辰光(アステリズム)だと、イッセーはそれを痛感する。
「邪魔だ殺すというのなら、我が大罪も喰らうがいい」
そしてその力をその身に纏い、カズヒはディオドラ・アスタロトを睨み付ける。
「一時の、しかし七倍超える裁きをもって、光を汚す闇を討て」
ディオドラ・アスタロトを呪うが為に、カズヒ・シチャースチエはまず己を呪いつくす。
そして、コカビエルと相対した時以上に絶大な星辰体(アストラル)との感応量こそ、このプログライズキーの本領。
装着者を人造惑星へと変化させる装甲を造り出す。それこそがハウリングホッパーの機能の真骨頂。
今此処に、流れ星は人造の惑星となって降臨する。

「超新星（メタルノヴァ）――銀光月下（シルバー）の流離譚（レット・ト・ア）、贖いは永遠（ベル）に」
今此処に、銀の乙女が星を解放する。
「ふざけるなぁあああああ！」
『ダイナマイティングボライド』
切れたディオドラが必殺技を駆動しながら、更に絶大な魔力を放つ。
魔力を利用して強化ダイナマイトすら大量に発射するが、それをカズヒは真っ向から突貫して突破した。
それにディオドラは驚愕し、イッセーは驚愕しない。
ディオドラ・アスタロトは蛇やプログライズキーで強化された星辰奏者だが、カズヒはコカビエル相手に真っ向から食らいつくこともできた女だ。
コカビエルはあのドライグが魔王とも戦えると称したほどの、堕天使でも有数の実力者。加えてカズヒはあの時と違い、純粋な星辰奏者としての力だけで挑んでいない。
それが大幅に強化されているのなら、今のディオドラ程度ならば十分に相手ができる。
そして何より―
「い、痛い痛い痛い痛い痛いいいいいいいいいっ！」
顔面を掴まれただけで、ディオドラは悶絶して痙攣する。
反撃を行おうとする精神的余裕もない。それだけの激痛と損壊がディオドラを襲う。
「痛いでしょう？　まあ、コカビエルよりももっと邪悪なあんた相手なら、当然怨念も呪いたがるもの。当然ね」
そう告げるカズヒもまた、その力によって体に激痛を覚えていた。
それを受け止めながら、カズヒはディオドラにはっきりと告げる。
「これが邪悪を憎む死者生者を問わない人々の怒り。理不尽に奪われ殺された死者の怨念、理不尽で罪なき弱者が苦しめられることに対する生者の義憤」
それに自らが呪われているという事実を、カズヒは敢えて言及しない。

それは矛盾でも何でもない只の事実。少なくともカズヒはそう思っている。

「ディオドラ(あんた)も私も呼び水としては効果的でしょう？　コカビエルの時よりよっぽど集まってるからねぇ……っ！」

これこそが、カズヒ・シチャースチエの星辰光の本質。

その力の前に、ディオドラの星は太刀打ちできない。

ディオドラの星は決して弱くない。それどころか事前に本領を発揮できる備えをしていたこととグレモリー眷属というネギをしょったカモにより、考えうる限り最高に近い効果を発揮している。

ディオドラ・アスタロトの星はカズヒの推測通りの物だ。

拡散性と干渉性に優れた、聖なる力に干渉する星辰光。それこそがディオドラの星の本質である。

ディオドラ・アスタロト

聖域乱す(アスタロト)愉悦の優越(ロト・ホ)、散華し乱れよ聖なる乙女(ビータイム)

基準値：C

発動値：B

収束性：E

拡散性：B

操縦性：D

付属性：C

維持性：C

干渉性：A

有効範囲内の聖なる力を支配するこの星は、有効範囲内に聖なる力を持つ存在がいくつあるか、そしてその強大さが力を左右すると言ってもいい。

アスカロンとデュランダルという伝説級の聖剣があり、更に事前の備えで無銘の聖剣をいくつも仕込んでいたことにより、圧倒的なポテンシャルを発揮していた。

むしろそれらが天敵となる悪魔でありながら、死なずにすんでいたことはグレモリー眷属の傑物ぶりを示している。ディオドラ自身がいたぶることを選んでいたにしろ、それでも称賛に値するだろう。

当然、特攻が入らないとはいえカズヒにとっても相性が悪く、何よりカズヒの星にとって本来は相性が悪い力でもある。
カズヒ・シチャースチエの星は、呪詛招来・憑霊能力。
自らと敵対する対象に干渉して触媒とし、悪性に対する生霊や怨霊、残留思念といった呪詛を集め銀の瘴気として身に纏う星辰光だ。
本来その手の瘴気や聖なるオーラに弱いのだが、然しそれすらカズヒは凌駕する。
カズヒ・シチャースチエ
☆銀光月下の流離譚、贖いは永遠に（括弧内はハウリングホッパー使用時）
基準値：C
発動値：AA
収束性：AA（AAA）
拡散性：E
操縦性：D
付属性：B（A）
維持性：C（B）
干渉性：AA
殆どの性能がディオドラのそれを超えている。まして星辰光同士のぶつかり合いにおいて重要な、密度を司る収束性においては、最底辺と最高峰という、文字通り天と地ほどの開きだった。
ましてカズヒが憑霊させた呪詛は、未だカズヒ自身の身にすら害をなしている。
高い付属性を持っている星辰奏者は、本来自分の星を身に纏っても自身に害をなすことは無い。ましてハウリングホッパーを使用している最中の付属性であるAならば、手に放射能分裂光を持とうとも、それが自分の星によるものなら、被曝というレベルの被害を受けることはまず無い。つまりカズヒもまた、同等レベルの自身の力に対する安全性を獲得している。
それをもってしても自身が呪われているという事実が、この呪詛の凶悪性を物語っているのだ。

「がぁあああああ!? 放せ、放せぇえええええ!?」
「……ええそうね。そろそろ放してあげる」
そしてディオドラの絶叫に対し、カズヒはあっさりとそう告げる。
そしてディオドラの体を遠くに投げ飛ばすように振りかぶり―
「―さあ、隙だらけだからやってしまいなさい!!」
全力で、ディオドラを神殿の外に向けて投げ飛ばす。
同時にフォースライザーを一度開閉させて準備を整える。
そして同時に、そちらではイッセー達が全力を構えていた。
「……覚悟しやがれディオドラ。ようは聖なる武装を使わなけりゃいいんだろ!!」
「そうだな。魔力を運用するのはあまり得意じゃないんだが―」
イッセーとゼノヴィアを筆頭に、籠められた魔力はそれぞれの全力。
それを激痛の余韻で悟ってすらいないディオドラに向けて、皆が一斉に放つ。
疲労困憊故に狙いはずれているしタイミングもまちまち。このままならば全てを当てることはまず不可能。
だが、そこは抜け目なくカズヒが対応する。
『ハウリングディストピア』
その発動により、カズヒは高速移動を行いディオドラを再び確保。
けた違いに高くなった最高速度と敏捷性によってすべての攻撃をディオドラに当たるよう動き回る。
「はばばばばばばばばばばばばばばばばばばばば―」
「あとこれはおまけね」
そう言うと、カズヒはディオドラを宙に放り投げてイッセーの隣に立つ。
「合わせるわよ。溜めているんでしょう?」
「ああ。この程度で済ますかよ」
装甲に隠された目線を合わせると、お互いに頷いて拳を蹴りを構える。
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』

イッセーは倍加の力を全開放して拳を構え―

銀　断　　罪

蝗

―カズヒはフォースライザーを二度開閉して、必殺の一撃の構えをとる。

「「吹き飛べ、クソ野郎！」」

『ハウリングユートピア』

その全力の拳と蹴りが、ディオドラの装甲を粉砕した。

和地Ｓｉｄｅ

振るわれる攻撃を凌ぎながら、俺は心を鬼にしてインガ姉ちゃんに追いすがる。

「なんで？　なんでなんでなんでなんで？　なんで……効いてないの!?」

「そういう風にした手直したから……な！」

強引に攻撃を突破しながら、俺はインガ姉ちゃんを逃がさない。

インガ姉ちゃんは間違いなくヤバい。正真正銘、星辰奏者としてハイスペックを通り越した域だ。

たぶんだが、既存の星辰奏者をランキング形式にすれば、単純な性能ならトップクラスのトップクラス。上位１％代のそのまた上位だ。俺より上だと言えるだろう。

だけど、付け入る隙が無いわけじゃない。

具体的には収束性(密度)だ。おそらくインガ姉ちゃんの星は収束性が低い。つまりは密度が薄いので突破し易いしされ易い。

とは言っても、俺の星も収束性はさほど高くない。だから出力の差で突破される余地は確かにあった。

だが、今は違う。

俺が今使っているディフェンディングタートルプログライズキーは、リーネスがカズヒ姉さん用に開発した研究データを反映した独自開発型。

装甲の各部システムにより、星辰光の能力をある程度改変する派生形態に移行するプログライズキーだ。

この状態の俺は星辰光を全く異なる運用方法で具現化する。

救済(セイヴィング)の時来(タイタス)れり、悲劇(クロウ)を終える帳は此処に　ディフェンディングタートル運用型（括弧内は通常仕様）

基準値：B

発動値：A

収束性：B（D）

拡散性：E（B）

操縦性：B（D）

付属性：E

維持性：D

干渉性：E（A）

長所がガクンと落ちている為総合性能は劣っているが、低い部分をある程度高めているので、運用次第では本来よりも使える。

しかもその運用方法とは、任意の場所に結界を作るのではなく全身に結界を張り自身を重装甲化する星辰光。加えて必要なところに多重で張ることもできる。つまり常時全身にバリアフィールドを張りつつピンポイントバリアまでセットしているわけだ。かなり頑丈になってるぜ。

このごり押しで、何としても俺はインガ姉ちゃんを引っ張り上げる。

「インガ姉ちゃん！　そりゃインガ姉ちゃんも悪事に加担したんだろ

うけど、だからってインガ姉ちゃんが全て背負い込むことは無い！」
俺は放たれる刺突を強引に受け止め、突貫する。
「悪いことはした。だけど元を正せばディオドラが悪い。ならせめて、償って前を向く機会ぐらいは与えられなきゃ嘘だろう！」
「それ……でも……っ！」
それでも、インガ姉ちゃんは強引に俺を振りほどこうとする。
「私は最初に踏み外して！　そのくせ今度も踏み外して！　死んだ人だっているのに！　それなのに―」
渾身の出力で、インガ姉ちゃんは俺を突き飛ばす。
そして、いくつもの感情が混ざり合った目で本音を叫ぶ。
「私より助けないといけない人がいるのに！　私なんかが優先されていいわけがない！」
それが、インガ姉ちゃんの本心の叫びか。
まあ、言いたいことは分かるさ。
だけど……な？
「俺にとっては、インガ姉ちゃんも助かってほしい命だよ」
それは、譲らない。
「アーシアを後回しにしてるんじゃない。アーシアを助ける為に命を懸ける奴はいっぱいいて、他の助けられる余地のあるアスタロト眷属（人達）は命がけでカズヒ姉さんが請け負った」
ああそうだ。アスタロト眷属は罪を犯した。
悪党に騙されて転落したからって、だから一緒になって人を転落させたりしていいはずがない。
どれだけ精神的に追い詰められたとしても、やったことの償いは必要だろう。
その筋は通さなければ、世の中は無茶苦茶になるし被害者がバカを見る。そこは俺も否定しない。
だけど、だけどだ。
筋を通して償ったのなら、未来を見ることが許されるべき連中だってたくさんいるはずだ。
だから……こそ。

「……だからこそ、俺はまずインガ姉ちゃんを助けるさ。それぐらいの融通は聞かせられるし、そこからディオドラをぶちのめせば済む話だ」
　きっと、皆は俺を止めないだろう。
「歯を食いしばれインガ姉ちゃん。まずはその意固地な心の殻を打ち砕く！」
『ＳＨＩＥＬＤ』
　俺はショットライザーを腰に付け直し、構えをとる。
　それに対して、インガ姉ちゃんは暴風を細剣に纏わせて突き出す構えを見せた。
「う……ぁ……、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
　泣きわめく子供みたいな表情で突撃するインガ姉ちゃんに、俺は全力でカウンターを叩き込む。
「まずは一発、それがケジメの第一弾だ!!」
『ディフェンディングブラストフィーバー』
　脚部を中心に高出力の防御障壁を展開して、俺は勢いよくインガ姉ちゃんの意固地な執念事を蹴り砕いた。

魔性変革編　第五十話　一息つく間

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

枉法インガはふと気づく。すると視界には、レーティングゲーム特有の空が広がっていた。
記憶が混乱していると思いながら、ふと視界を動かすと、そこには苦笑したかつての小さな子がいた。
「おはよう、インガ姉ちゃん」
「……和地、君」
それに対して、どう答えていいのかが分からない。
強引に、強引に助け出すと押し付けられた。そして無理やり拒絶する手を引っ張り上げられてしまった。
「……なんで、ですか？」
インガはそう聞きたくて堪らない。
なんで自分達を助けようとするのか。
自分達は確かに、その一歩を無理やり引きずり込まれるように悪鬼に踏み出させられたのかもしれない。ディオドラ・アスタロトが諸悪の根源だと、それは確かに事実なのかもしれない。
だが、どのような形であれ、自分達はその後悪になった。自分達がしてきた悪行は、確かに事実なのだ。
何より禍の団に与したのがその証拠だ。助けを求めるべき相手は確かにいたが、その手を取らなかったのは自分達だ。
そんな思いが込められた言葉の意味を、和地は正確に受け取ったのだろう。
苦笑すると、ふと空を見上げる。
「カズヒ・シチャースチエって人に言われたんだよ。薬物中毒とか依存とかいうのは、他人が強引に引っ張り上げないとどうしようもな

いってさ」
　そこに込められた感情は、いったい何なのだろうか。
「だから、俺はインガ姉ちゃんを強引に引っ張り上げることにした。インガ姉ちゃんはそうしてでも助ける価値があるって、俺が思ったからそうしたんだ」
　ボロボロになってまで、奇跡的に治す余地があったからと言っても致命傷を負ったうえで。
　それだけの価値があると、九成和地は枉法インガにそう言ったのだ。
　その上で、少し不安げに和地はインガに笑顔を向ける。
「だからあんまり自分を卑下しないでくれよ。そこまでされたら、助ける為に苦心した俺がバカにされてるじゃないか」
　そう返しながら、少し震えている手を和地はインガに伸ばす。
「どうか、助けを求めてほしい。俺が助けたいと思うインガ姉ちゃんに、俺が誰かを助けられる人間だと証明してほしい」
　そんな風に、和地はインガに逃げ道を与えて手を伸ばす。
「卑怯な言い方だけど、ディオドラを真似ることにする。俺はインガ姉ちゃんがきちんと罪を償えるように頑張るから、インガ姉ちゃんは罪を償って俺に胸を張らせてくれ」
　本当に卑怯な言い方だ。
　後ろめたさと罪悪感に潰れて、更に後ろに潰れて行ったのが自分だ。
　ただ前に進むことはできない。それほどまでに彼女の進行方向には、後ろに押しやる力が働ている。
　だからこそ、和地は引っ張り上げるだけでなく背中を押す。
　強引に拒絶を打ち砕いて引っ張ると同時に、彼女の弱さを逆手に取り、助け出したい方向に彼女を誘導している。
　その手段の択ばなさに、インガは苦笑してしまった。
「……強かになったね、ホント。もうちょっとこう、正義の味方っぽいやり方をしたら？」
「慕う女が悪の敵でね。正義に味方することは、正義の味方になるこ

とじゃないってスタンスなのさ。真似させてもらうよ」
そこまでする価値が、自分にあるのだろうか。そう思う。
そこまでさせたのに、裏切れない。そんな風にも思ってしまう。
ふとポケットに手が入ると、あの時の紙がまだ残っていた。
……それを残していたのは、心のどこかの本音の表れ何だろう。
それを、インガはまず認めた。
「あの、ディオドラさ……ディオドラは？　それと、みんなは？」
「あ、そっちの連絡は既に入った。アスタロト眷属はカズヒ姉さんが全員のして拘束中で、ディオドラももうぶちのめされたってさ」
別の意味で逃げ場はなくなったとも、インガは納得した。
実に強引な手法だ。ディオドラは逃げ場をなくして自分達を墜とした。しかし和地は、逃げ道を粉砕したうえに別の道を作った上で、更に強引に引っ張っている。
……そこまでしてまで助けたいと、そう思ってくれることが嬉しかった。
後ろめたくて拒絶したいが、そんなこともできないぐらいに雁字搦めにされてしまった。そう自分の中で納得がいくと、すとんと心のどこかに何かが落ちる。
「……責任、取ってよ」
だからこそ、素で彼女はそう言う。
久しぶりに本心から。苦笑とはいえ微笑みながら。
起き上がったインガは、和地に抱き着いた。
「こんなにされたらもう、私は和地君から離れられないよ？　妾ぐらいは期待してもいいんだよね？」
そんな、ある意味最後の抵抗じみた一撃を精神に叩き込む。
明確にびっくり肩が振えたが、それをすぐに押し込んだ和地はインガを抱きしめた。
「え～とその……カズヒ姉さんからは「来る者拒まずさる者作らず」を条件として言われておりまして。……すっごく卑怯で最低な理由になりそうなんですが、その……」
そんな言い訳をしている和地を見ると、インガに久しぶりの悪戯心

が出てきた。
ＯＫは出したい。だがそんな条件が前に出ているから、それを踏まえると卑怯で卑劣で最低何ではないかと思っているらしい。
だから、自分がされたように自分も逃げ道を封じてやろう。
苦笑ではない本当の笑顔を、とはいえにやにやといった形にして。
「じゃあ、私を救った責任を取れるように、しっかりカズヒって人を抱え込んでね？」
「……うわぁ、一本取り返された」
そんな降参の声に、漸く年上らしいことができたと思い―
「……プッ！　もう台無しだよ和地君は」
インガは本当の本当に、一切の裏の無い笑顔を心から浮かべられた。

一方その頃、女の敵が使うべき技で一人の少女が助け出されていることを、二人はまだ知らない。

イッセーＳｉｄｅ

「アババババババ……っ」
「イッセー！　イッセー、しっかりしてください！　こんなことで一々引き付けを起こされても困ります！」
「イッセーさん！　私は気にしてませんから治ってください!!」

俺は今、突発的に襲った引き付けに痙攣してた。
頭はガンガンするし胸は苦しいし息はできないしお腹はギリギリするし体はガクガク震える。とにかく全身が最悪のコンディションになるんだ。とどめに今はボロボロだし。
そんな状態でアーシアを助ける為に、一生懸命頑張っていたらこの始末だ。
理由だって？　上位神滅具で結界系の極みとかいう、絶霧（ディメンション・ロスト）の所為だよ。
なんかよく分からないけどその禁手で作られた代物みたいで（ディオドラは喋れる状態じゃないから聞き出せなかった）。しかもどうやら結界が発動するまで時間がないみたいだ。
どうもアーシアを利用するみたいだからどうしたものか。アーシアは自分を殺せばいいと言うけどできるかってんだ。そんな風に皆が焦って悩んでいた時、俺に天啓が閃いた。
あれ？　ここまでくっついてるなら、着用物扱いできるんじゃないか？
赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）は絶霧より弱いけど、俺の煩悩と組み合わせた結果見事勝利。こうして禍の団の野望はついえたわけだ。俺の煩悩の勝利って奴だな。
いや～。我ながら俺の煩悩というかスケベ根性、ちょっと洒落にならない領域になってる気がしてきたぞ？
乳首をつついて禁手になるっていうのがそもそも前代未聞らしい。そんでもって、洋服崩壊も基本的にゲームじゃ使用禁止になった。乳語翻訳（パイリンガル）もなるみたいだし。
……俺、もしかして煩悩の強さって人並み以上とかそういうレベルじゃない？
激痛に悶えながらそんな不安を覚えていると、回復してくれたアーシアが折れに抱き着いてくれた。
「イッセーさん。本当にありがとうございました」
「……ああ。アーシアを泣かせる奴がいるなら誰だってぶん殴ってやるし、何があったって助けにいくさ」

俺がそう言いながらアーシアを撫でると、リアス部長も微笑みながら俺達の傍によって、アーシアをぎゅっと抱きしめてくれる。
「無事に助かって良かったわ、アーシア」
「はい。ありがとうございます、部長さん」
そう返事をするアーシアに、部長はちょっと困ったような笑顔だった。
「そろそろそんなに他人行儀な呼び方はやめてほしいわね。貴女のことは妹のように思っているんだから」
そう言って頬を撫でる部長に、アーシアは少し照れ臭そうに頬を染めながら、涙目で部長に微笑んだ。
「はい、リアスお姉さまっ」
うんうん。よかったよかった。
とりあえず、これでディオドラは黙らせたし、旧魔王派のテロもそろそろ鎮圧されるかな？
少なくともこれが本命だったっぽいから、これ以上の作戦はまずいと思う感じだと思う。
俺達の間でほっとしたムードが漂っていると、カズヒが盛大にため息をついた。
「はいはい。戦闘は全域で終わるまでが戦闘よ。まだ和地が戦ってる可能性はあるし、何より旧魔王派のテロが終わったって連絡は無いんだから」
耳が痛いし空気も読めてないけど、実際言ってることはあってるんだよなぁ。
確かに、まだ先生達からテロが終わったって報告は無い。
もしかしたら、何も発動しないことに焦った旧魔王派が様子を見に来るかもしれない。こんな要素を見るにディオドラはそこそこ価値があるみたいだし、そういう意味でも来るかもしれないしな。
あと九成は大丈夫だろうか。一対一だからカズヒよりは難易度低そうだけど、あのインガって女の人は星辰奏者だしな。もしかしたら負けそうになってるかも。
ちょっと気を持ち直そう。うん、もうちょっと周囲を警戒しないと

な。
俺達が気を引き締め直したのを確認してから、カズヒは周囲を見渡しながら肩をすくめた。
「とりあえず、アザゼル先生が言っていたシェルターに移動するわよ。ディオドラは救出してくる奴がいるかもしれないから、拘束だけしてほおっておく方がいいでしょう。ただ眷属達の方はのして転がしてるから、できれば運ぶのを手伝って―」
……なんかやることが多いな!?

和地Ｓｉｄｅ

うん、これはつまり、絡め取られたって感じか？
涙を浮かべながらもにっこり微笑みながら俺に抱き着くインガ姉ちゃんに、俺は実に複雑な感情だった。
インガ姉ちゃんを引っ張り上げられたのは良い事だ。インガ姉ちゃんと再会できたのは嬉しいし、インガ姉ちゃんは可愛いし、引っ張り上げた以上は責任もある。少なくとも、諸問題を解決する余地と、終わった後に真っ当な生活を送れる余地は与えるべきだ。
まあ、一般人が人を救うっていうなら、しかるべき機関に通報するとかそういうので十分だと思う。諸問題を解決してその後真っ当な生活の余地があるのなら、それで十分すぎるだろう。その後の人生で起きるすべての問題をどうにかして健やかな人生を送らせなければ意味がないってのはむしろ過干渉気味だし、誰かの為でなく利己的な目的だとしても助かっている事実は認めるべきだとも思う。

だからまあ、ちゃんと先生やリーネスに相談している。その辺りについては考えがあるらしいし、あの二人はその点においては信用も信頼もできる。何かしら他の目的と併用したとしても、きちんと助けているのならそこは文句を言う気もない、

……とはいえまあ、こういうことになったのなら責任はとるべきだ。

ついでに言うと、これでカズヒ姉さんの条件にもクリアーしたわけで、ハードルの一つを乗り越えたと言ってもいい。カズヒ姉さんの性格から言って条件を満たさないと惚れてもアウトになりそうだしな。これはこれでラッキーというかなんというか。

なんだけど。なんだけどね。なんだけどさぁ！

やっぱ俺としてはちょっと気になるんですよ。カズヒ姉さんに惚れてしまっていることが理由といえば理由だけど、なんかこう……もによる？

とはいえだ。インガ姉ちゃんも、なんていうか強かなことしてくれるな。

俺が「カズヒ姉さんと結ばれる為にインガ姉ちゃんと結ばれる」なんていう深読み的なことでもによってるのに気づいているからか、向こうからカズヒ姉さんを惚れさせるように言ってきやがった。

色々と複雑ではあるが、カズヒ姉さんを本気で惚れさせて結ばれるぐらいしないと、インガ姉ちゃんは逆に気にしてしまうって言いたいのかよ。

うぉおおおお。なんか……複雑ぅ。

「……ふふん。私の複雑な感情を思い知ったかな？」

マウントを取った表情でインガ姉ちゃんにしてやられてます。

反論できない。ぐぅの音も出ない。

俺がそんな精神状態なのに気づいているのか、インガ姉ちゃんは優しく抱きしめるとポンポンと背中をたたいた。

「でも、本当にそうして欲しいね。私は自分が助けられたことを気にするから、気にしなくてもいいように私を助けたことを君の為になる形で発揮してほしいからさ」

かつての口調を取り戻しながら、インガ姉ちゃんはそう言ってきた。
人生を盛大に二回も踏み外して、自己嫌悪と自己否定が強くなったインガ姉ちゃんにとって、自分を助けてもらうのには、きっと大きな理由が必要なんだろうな。
だからこそ、俺の恋愛事情は都合がいい。それを言い訳にするついでに、俺にちょっとやり返す。そういうことなんだろう。
……だけど、それだけはなんか嫌だ。
だから俺は、ぎゅっとインガ姉ちゃんを抱きしめる。
「和地君？」
「それだけにはしたくないな」
それが本音だ。日本人としてはあれな気もするけど、異形関係者ということで強引に飲み込む。そして想いを告げる。
「カズヒ姉さんにＯＫを貰う、その条件付けの為だけにインガ姉ちゃんを貰いたくない」
ああそうだ。
そんな理由で女の人を迎えたいわけじゃないんだ。
俺に抵抗があるなら、その本質はきっとそこだ。
カズヒ姉さんが好きだからって、その為に愛してない女性を迎え入れるというのは、相手に失礼だしそもそも何かが違う。
だから―
「俺のインガ姉ちゃんへの気持ちが、Ｌｉｋｅじゃなくて Ｌｏｖｅになるようにしてほしい。まあ男は基本馬鹿だから、インガ姉ちゃんが俺のこと愛してくれるなら何とかなるとは思うから……さ」
うん。それはお願いしておこう。
今でもＬｉｋｅではある。政略結婚とかそういうのなら、これでも十分だろう。条件はまぁクリアしてるかな。
だけどまあ、そこだけで終わりたくはない。それは嫌だ。
だから、俺はインガ姉ちゃんにはっきり言っておこう。
「俺もインガ姉ちゃんが俺を愛してくれるよう、ひとかどの男になって見せる。だからインガ姉ちゃんも、そこはその……ちょっとぐらい

努力して貰えると嬉しいかな」
うん。まあ色々と問題はあるだろうし、これでいいのかとも思う。
だけどまあ、今はこれでいいということにさせてください。
……真剣に恥ずかしいこと言ってるな。マジで顔が赤くなってる自覚がある。
インガ姉ちゃんの顔をまっすぐ見れない。へ、返答はいかに？
俺は心底返答が欲しいけど、返答が全く返ってこない。
返事！　返事を下さい！
今敵が来たら絶対に致命的な状態です！　でも俺、気恥ずかしすぎて動けないから！　返事を、どんな形でもいいからとりあえず返事というきっかけをください！
ホントお願いだから、今は誰も来ないでくれると―
「おめでとうですのぉっ！」
「「うひゃぁっ!?」」
ヒマリの大声に、俺とインガ姉ちゃんは盛大に絶叫した。
心臓が止まるかと思った。今もバクバクいってるし。
俺が恨めし気に振り返ると、ヒマリはすっごく感激している感じの表情で満足げというか感慨深げといった感じで飛び跳ねていた。
「カズヒもこれは喜びますの！　今夜はケーキを買ってお祝いしますわ！」
「ヒマリ先輩。覗き見してた俺達が言うことじゃねえですが、もうちょっとこぉ、何かありやせんか？」
「言ってやってアニル。いやホント……ヒマリはもうちょっとこぉ、空気を読も？」
飛び跳ねているヒマリに、アニルとヒツギがツッコミを入れながら姿を現した。
み、見られた。
はははははははは恥ずかしぃ！
俺はカチンコチンに固まっていると、更にイリナが天使の輪っかを光り輝かせながら俺達の頭上に浮かんできた。
あのすいません。その位置は男の性欲を刺激するからやめてくだ

さい。
「頑張ったわね九成君！　ああ主よ、この愛に祈りを捧げます！　さあ、天使の祝福を受け取って！」
「それでいいのか!?」
思わず全力で突っ込んだよ。
天使が一夫多妻的なあれを全肯定するようなことしていいのか？
和平が結ばれたとはいえ、もうちょっとこぉ、自粛を呼びかけてもいいと思うぞ？
「あの、もうちょっとこぅ、そっとしておくという選択肢はないのでしょうか？」
ルーシアにも見られてたのか。まあこのメンツならいてもおかしくないけど。
というか、ハイテンションなヒマリやイリナ、その反応に疲れ切ってるヒツギとアニルに余裕がない分、ルーシアが警戒を一手に担っている感じがするな。
いろんな意味でお疲れ様でありがとう。ヒツギやアニルにもなんか奢るけど、ルーシアにはもう一段追加するから。
俺が心の中で決意をしていると、何時の間にかそっとメリードが隣に立っていた。
ボロボロのインガ姉ちゃんにそっと毛布をかけながら、メリードは俺に一礼する。
「有言実行、おめでとうございます。彼女の処遇については、私からもアザゼル総督に具申しますので、大丈夫ではないかと」
「あ、ああ。ありがとな」
なんかどっと疲れたけど、メリードはそれとなく周囲を確認しながらも、そっと俺に某ヴィダーなゼリーを差し出した。
「水分とカロリーを補給したら、皆様と先に合流してください。私はヒマリ様達と共に、カズヒ様が無力化した他の眷属を保護しておきます」
あ～。メリードはデミ・サーヴァント化の調整が上手くいったらしい。

リーネスが何度かやった亜種聖杯戦争で、デミ・サーヴァントの成立に備えて仕込みをしていた。
具体的には召喚されたサーヴァントに対してその辺りの交渉したらしい。結果として、素体となる人物が明確な目的意識の下同意してくれた場合など、いくつかの条件が成立した場合ならばできるようになった。
最も肉体面のリスクなどがあって、あと百年はかかるレベルだった。しかし、メリード達ザイアから保護されたヒューマギアが名乗りを上げたことで大幅に方針転換。ヒューマギアとしての素体に亜種聖杯戦争の願望機の機能を利用したシステムを組み込むことで、一気に実用化のめどが立っていた。
その第一号のメリードは、確か女性型であることもあって望月千代女っていう巫女でくノ一だったかに選ばれてたな。
そんなメリードはインガ姉ちゃんに向き直ると一礼する。
「……ディオドラ・アスタロトの件でご相談があります」
「え？　えっと、あまり役に立てないと思うんですけど」
ディオドラがインガ姉ちゃんにどんな扱いしてたかがよく分かるが、メリードは首を横に振る。
「いえ、貴女でしたら相応に知っていることだと思います。こちらの名簿をご確認ください」
そう言うメリードが差し出した名簿を見ると、人名が結構書かれていた。
外国人の名前は判別が難しいけど、日本語で書かれている名前からすると、女の子か？　結構いるな。
というか、インガ姉ちゃんが目を見開いているけどどういうことだ？
「私自らデミ・サーヴァントとしてのポテンシャルを最大限発揮して調査し、金銭や物資の確保はもちろん、館に囲っていた女性達の保護もしております。ですが短期間の調査では漏れがありえますので、せめて女性達に確認漏れがないかを確認していただきたいのです」
……抜け目ない人達なことで。

あとディオドラ、眷属にする以外にもやらかしてやがったのか。俺が爆発すると踏んで黙ってたな、リーネス達。
インガ姉ちゃんを見ると、真剣に何度も確認してから、ほっとしたように頷いていた。
「私が知っている人は、全員います。あの、私以外の眷属の人は？」
「カズヒ様が全員殺さずに鎮圧したと連絡が。ただ応急処置を施したうえで拘束してひとまとめにしているので、万が一を踏まえてリアス様達と合流する前に最低限の確保をしておきたいところです」
まあ確かに。そこは必須だな。
俺もそっちに手伝った方がいいかとも思うけど、メリードは俺とインガ姉ちゃんを見ると静かに首を横に振った。
「人手がいると嬉しいですが、それは比較的消耗の少ない私達にお任せを。和地様は彼女を連れて合流していただいた方が、気にしているだろう皆様が安心できると思います」
「……それもそうか」
そう言われると確かにな。
俺は気だるげな体を何とか立ち上がらせると、苦笑しながらインガ姉ちゃんに手を差し出した。
「じゃ、お互いに今後頑張るにしてもとりあえずは成立ってことで。カズヒ姉さん達に挨拶に行こうか？」
俺がそう言うと、インガ姉ちゃんは照れくさそうに笑いながら、その手を取ってくれた。
「うん。謝ることもあるし、お礼も言った方がいいしね」

「さて、問題は夜の生活ですわね。ディオドラも色々としているでしょうし、それに刺激もありますから私も参加したいですの。ヒツギもいい思い出を作る為に参加しません？」
「しないからね!?　しないからね!?　そんな気は使わなくていいから

ね!?」
「あの、仮にも教会精鋭部隊の方にあまり淫行を進めるのは、辞めていただけないでしょうか」
「……すんません。いい歳の男としちゃ居たたまれないんすけど」
「申し訳ありません、アニル様。……ヒマリ様、いい加減そのピンク暴走思考はおよしください。発情期の兎ですか?」

「巻き込まれないうちに行こう、速足で」
「そうだね。ちょっとこの流れはキッツいかな」
俺達は阿吽の呼吸でこっそりかつ速足で距離を取った。
とりあえず、ことが終わったらヒマリノアの暴走淫乱っぷりをどうにかしよう。
母性があるのは美徳だけど、あれじゃあ近親相姦風味が強すぎるからな。
俺もヒマリとエロいことするのは我慢しよう。いい加減ヒマリ断ちした方がいいな、うん。

魔性変革編　第五十一話　魔王襲来

イッセーＳｉｄｅ

カズヒの指示は流石にちょっと多い気がする。
っていうかディオドラの眷属って駒数そのままのフルメンバーだよね!?　あのインガってのを除いても十四人だよね!?
……カズヒを足しても九人しかいない俺達だと、野郎の俺と木場が二人抱えてもまだ足りないだろ。あ、ギャスパーは体格的に除いてます。
ちょっとぐらい文句を言ってもいい気がしたな。
なんで俺はカズヒにちょっと振り返って文句を言おうとしたその時だった。
「ディオドラめ。しくじるとは情けない」
なんだ、今の声―
「ぼさっとしない！」
―その瞬間、カズヒが俺達を蹴り飛ばした。
同時に防壁っぽいのを出して、そこに隠れるように体を動かした直後、凄いエネルギーが叩き込まれる。
何が何だか分からない中、カズヒが防壁ごと吹っ飛ばされて壁に叩き付けられた。
「カズヒさん!?」
「アーシア先輩、ダメです！」
アーシアが咄嗟に駆け出そうとするけど、それを小猫ちゃんが押しとどめる。
ああそうだ。俺もとっても気になるし、すぐにでも助けに行きたい。

だけど駄目だ。今後ろを向いたら、俺達はすぐにやられる……っ！
それぐらいヤバい奴が、今俺達の視線の先に浮かんでる。
軽装の鎧や色っぽい恰好や貴族っぽい服を着ている三人の悪魔の男女が、俺達に敵意満々の視線を向けてきている。
しかもこいつら、コカビエルとも真っ向からやり合えそうな連中ばかりだ。オーラが強い……強すぎる……！
「忌々しいグレモリーの娘よ」
そんな奴らの一人、軽装の鎧をきた悪魔が、部長にめっちゃ嫌そうな目を向けてきた。
「俺は偉大なる真なるベルゼブブを継ぐ者、シャルバ・ベルゼブブ。こちらの二人はそれぞれアスモデウスとレヴィアタンの末裔だ」
「クルゼレイ・アスモデウスだ。冥途の土産に覚えるがいい、下賤なまがい物を従える愚か者よ」
「カテレア・レヴィアタンです。……死ぬ前に偉大なる名を聞けるとは幸運ですね」
きゅ、旧魔王の血族全員集合かよ!?
「ごきげんよう、かつての魔王の血縁者の方々？　私達を殺せば魔王様をおびき寄せるとでも思っているのかしら？」
部長は強気に答えるけど、頬が少し引きつってる。
流石にまずい。あいつら全員蛇を使ってるし、魔王様達と渡り合ったんだろ？
今の俺達だけじゃ、覇龍を使ってもヤバい……！
そんな連中は俺達に嫌悪感丸出しの目で見下してきてる。
シャルバは特にこっちの汚物みたいに見ながら、形をすくめた。
「そんなことをする気はない。むしろ奴を殺す前に手土産が欲しいのでな。首を引きちぎりに来たのさ」
やっぱりやる気満々かよ。
しかもサーゼクス様すら殺そうってか？　言ってくれるじゃねえか。
部長も苛立ってるのか、口元が引きつってる。
「卑怯ね。魔王様を直接狙わず、その周囲から狙うなんて」

「おかしなことを言いますね。我々真なる魔王を追放してその座に座った一族はもれなく滅びる対象です。遅いか早いかの違いでしょう？」
部長にカテレアがそう返すと、クルゼレイってのも頷いた。
「全くだ。むしろすべてを失ってから死ぬことこそが、魔王の座を簒奪したあの偽物どもに相応しい」
……性格が悪すぎる。
俺らからすれば生まれてもいない時の話だってのに、それで俺達を直接狙うってのか。
こんなろくでもねえ奴が魔王だってのか。そりゃ追放されるだろうさ。
だけどどうする？　今の消耗した俺達じゃ、覇龍だってろくに使えない。
このままだと、まずい。
俺達が気圧されていると、シャルバは軽く肩をすくめた。
「まあいい。今頃サーゼクスはミザリの奴がいたぶっているころだろう。ミカエルやアザゼルの奴がいるから止めこそさせてないが、深手を負って動けないようなのでな」
は？
おいおいちょっと待てよ。今なんて言った？
ミザリって、確かイシロ・グラシャラボラスの眷属だった奴だ。変異の駒の女王（クイーン）で転生したっていうからよく覚えてる。
ただ者じゃないのは間違いなけど、それにしたってミカエルさんやアザゼル先生がいるってのにサーゼクス様に深手を負わせたってのか!?
「……嘘よ！　お兄様が若手悪魔の眷属一人に、それもミカエル様やアザゼルがいるのにだなんて!?」
部長も明確に否定するけど、それをシャルバ達は嘲笑して眺めてきやがる。
「いい気味だ。サーゼクスに報いが下り、その妹が絶望するのは心地がいいな」

クルゼレイの奴がそんなことを言ってくるけど、それってつまりマジか!?
俺達皆が愕然としてると、カテレアがふぅと息をついた。
「忌々しい生まれですが、血統としては純粋なルシファーなのが彼です。正当なルシファーがまがい物のルシファーを打倒したのですから、私達もいずれは打倒しなければなりません」
はぁ!? ミザリがルシファー!? ヴァーリと同じ!?
本気でどういうことだよ。訳が分からなさすぎて困惑するんだけど!?
っていうかあいつら！ 思いっきりこっちを馬鹿にしてやがる。それもめっちゃ嬉しそうだな！
くそ！ でも今の状態じゃ勝ち目がない。
俺達全員、ディオドラと戦って消耗しすぎてるんだ。ダメージはアーシアが回復してくれたけど、肝心の体力が残ってない。
くそ、どうする……どうすりゃ……っ

「何がどうなってる!?」

こ、この声は……っ！

和地Ｓｉｄｅ

ったく。どういう状況だこれは！
ディオドラをどうにかするって話じゃなかったのか？
辺りを見渡すと、そこにはボロ雑巾になっているディオドラが隅に倒れていて、ボロボロのイッセー達を見下ろす位置で三人ぐらいヤバい奴が浮いている。
なんだこれは。ボス戦を追えたと思ったら隠しボスでも来たってオチか何かか！
「……九成！　ヤバい、こいつら旧魔王派のトップだ！」
イッセーがそう言うけど、マジか。
旧魔王派のトップって、確か亜種聖杯で強化しまくった結果性能が大幅に上がってるとかいうあの？
ディオドラがボスかと思ったら本当に裏ボスが出てきたのかよ。どう考えてもプロデビュー前の上級悪魔がどうにかするような奴じゃないぞ!?
「クソッタレ！」
これはまずいな。最悪と言ってもいいだろうが！
流石に精神的に最悪だ。正直本気で逃げたいぐらいなんだが、そんなわけにはいかねえし、そもそも逃がしてくれるわけがない。
俺はちらりとインガ姉ちゃんの方を見る。
「……そん、な……」
息を呑んで顔を真っ青にしているのがよく分かる。
そりゃそうだろう。目の前の問題から引っ張り上げられたと思ったらこれだ。ショックで気絶してもおかしくない。
どうする？　どうすればいい？
インガ姉ちゃんを死なせるわけにはいかない。そもそもイッセー達だって死なせるつもりもない。カズヒ姉さんの姿は見えないけど、万が一を考えれば尚更ここで何とかしないと。
だけどこれは、完璧に俺ができる範囲を超えてやがる。
どうしろってんだ、クソッタレ―

「あ、やっぱり君、カズくん？」

―そんな時、そんなのんきな声が届いた。
ん？　というか、この声どこかで聞いた覚えが。
俺は首を傾げながら振り返ると、そこには眼帯のように片方を装甲で包み込んだ複眼の仮面ライダーがいた。
あれが仮面ライダーグリームニルとかいうのか？
というか、俺のこと知ってる感じなんだけど、誰だ？
「えっと……どちら様で？　顔が見えないので名乗ってくれない？」
「あ、そっか。ごめんごめん。……覚えてない？　小学校に入る前ぐらいが対象の外国語講座で担当になった―」
そこまで言われて、俺は速攻で思い出した。
というか忘れるわけがない。
あんな子供向けじゃないアドバイス、忘れるわけがない。
「……リヴァ先生!?　え、なんでこんなところに？　っていうかなんで仮面ライダー!?」
思い出すというかなんというか。
一軒家に引っ越す前、春っちが虐められてたりしてたことに相談して、やりすぎないように気を付けて出るところの出るという子供向けじゃ無さすぎるアドバイスをしたお姉さんがなんでこんなところに!?
確か俺が引っ越す前、実家に帰る決心がついたとか言ってなかったか!?
……まさか。

「実家って異形関係!?」
「そういうこと。まぁ、つもり話はまた後でね？」
　想定外の方向でパニックを起こしてる俺を通り越して、リヴァ先生は旧魔王派の連中達の前に立ちはだかる。
「戦闘が膠着状態になったから、お父様に言われてサポートに来たよ。というか、これは本当に来てよかったかな～」
　そんな困ってる口調なのはともかく、すっごく助かる。
　っていうかお父様？　どちら様？
「オーディン様から!?　これは、本当にありがたいわ！」
「オーディン!?　北欧の主神オーディンが父親なんですか!?」
　部長から想定外の情報がぶっこまれて、俺はもうパニックを起こしてるんだけど!?
「和地君、ちょっと大丈夫かな？　一応今、すっごいピンチだからね？」
　インガ姉ちゃんが肩に手を置いてくれるのはありがたいけど、ぶっちゃけいろんな情報にいろんな方向を揺さぶられて、状況を把握する余裕が欠片もないんですが……。
　あ、置いてけぼりにされてる旧魔王血族の方が振えてる。
「貴様らいい加減に―」
「―こっちの台詞よ！」
　その後頭部にカズヒ姉さんが後ろから飛び蹴りを叩き込んだ！
　い、何時の間に!?
　そのまま一回転しながらカズヒ姉さんは着地すると、イッセー達に振り返る。
「気合入れるわよ！　こうなったらこっちもやるだけやってやろうじゃない！　倒して名を上げましょう!!」
「……そうですね。逃がしてくれそうにないのなら、死ぬ気で勝って生き残るだけです」
　シャルロットも気合を入れて立ち上がると、真っ向から旧魔王派の連中を見据える。
　そしてそれに呼応するように、イッセーが拳を握り締めて並び立っ

た。
「なら、マスターとして恥ずかしい所は見せられないか」
それに応じるように、今度はリアス部長が魔力を滾らせる。
「なら当然、主も情けない所は見せられないわね。……私の可愛い下僕達！」
そして声を張り上げ、それに呼応して皆が戦意を滾らせる。
「敵は旧魔王の末裔達が三人。亜種聖杯とオーフィスの蛇で強化された、ディオドラとは比べ物にならない化け物達！　……でも、私達は勝って生き残る！　そのつもりで戦いなさい!!」
「「「「「「はい、部長！」」」」」」
……なら、俺もだな。
「インガ姉ちゃん。ゴメン、ちょっと死ぬほど大変だけど手伝ってほしい」
「……あ～。なんかこれが何度もありそうな予感してきたな～」
遠い目をしながら、インガ姉ちゃんは細剣を構えて苦笑する。
「終わったら甘えていいかな？　ううん、甘えさせて。甘えさせろ」
了解です。頑張ります。
俺が気合を入れていると、カズヒ姉さんと目が合った。
なんかこっちとインガ姉ちゃんを交互に見て、うんうん頷いている。
あ、親指立ててい笑顔だ。
「やるじゃない。あとは私を本気で惚れさせなさい？」
「「「「「「本気で言ってた!?」」」」」」
俺＋グレモリー眷属の総ツッコミ。
なんだろうか、ちょっと空気がグダグダしてきたぞ？
「あ、えっと……枉法インガです。その、妾的な感じだから、よろしくお願いします？」
「本妻になれるかは和地次第だけど、カズヒ・シチャースチエよ。あと私の方が年下だから敬語はいいわ」
あの、お互い挨拶を交わさないでもらえません？
すっごくキッツい。精神的に何かがゴリゴリ削れてるし、空気が読

めてないから尚更だ。
旧魔王派の連中が肩を怒りで振るわせてるし。俺、真っ先に狙われて殺されそうな気がしてきた。
あとイッセーは俺を睨むな。お前そんなもんじゃないんだからいい加減に自覚しろ。
「……辞世の句はそれでいいのか？　ならさっさと死ねばいいな？」
シャルバが肩を震わせながらこっちを睨むけど、カズヒ姉さんは肩をすくめた。
「冗談。和地が男を見せたのだから、褒めて挙げるのが女の心意気よ」
「いやほんと、後でしっかり褒めてくれ。もうやけになりかけてるから」
俺はカズヒ姉さんと並び立つと、お互いにプログライズキーの準備をする。
そしてイッセーはイッセーでうんうんと頷くと、一歩前に出た。
「……あのシャルバは俺とシャルロットが何とかする。皆は残りの二人を頼む」
何かあてはあるってことか。なら、信じるしかないな。
「じゃあ、気合を入れるとするか」
『ＳＡＶＥ』
「そうね。ここで死ぬのは嫌だわ」
『ＣＲＹ』
俺とカズヒ姉さんはプログライズキーを起動し、そして装填する。
『ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』
敵は魔王の末裔が合計三人。
ああ、上等だ。必ず勝つ。
「「変身！」」
『ショットライズ』
『フォースライズ』
俺とカズヒ姉さんは同時に変身し、そして並び立つ。
『サルヴェイティングドッグ！　Ｏｌｌ　ｌｉｇｈｔ　Ｉ，ｍ　ｇｕａｒｄｉａｎ　ｏｆ　ｈｕｍａｎ』

『ハウリングホッパー！　Ｉ　ａｍ　ａ　ｓｕｐｐｏｒｔｅｒ　ｏｆ　ｊｕｓｔｉｃｅ　ａｎｄ　ｅｎｅｍｒｙ　ｏｆ　ｅｖｉｅｌ』

『Ｂｒｅａｋ　ｄｏｗｎ』

さぁ、もうひと踏ん張り来ますかぁ！

魔性変革編　第五十二話　魔王の落日（本家編）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

リアス・グレモリー達は総力を挙げ、クルゼレイ・アスモデウスと相対する。
現状では戦力比率から言ってこれがベター。それを理解しているがゆえに、遠慮せず全力で攻撃を叩き込む。
デュランダルや聖魔剣すら合わさった総攻撃は、最上級悪魔ですら深手を負うだろう威力がある。間違いなくプロデビュー前の若手悪魔のレベルではない。
だが、クルゼレイは怯まない。
「笑わせるなよ、まがい物を集める愚者如きがぁ！」
全てを強引に魔力で振り払い、クルゼレイは反撃の砲撃を放つ。
連携で的確に分散して躱すが、一発でも直撃すれば全身が吹き飛ぶ火力の猛攻に肝が冷える。
その後は分散して敵を引き付けつつの攻撃に終始しているが、それでも決定打を与えるには足りていない。
このままでは他のメンバーが敵を倒すまでにこちらが押し切られる。一人でも倒されればそれで終わりになる。
「こ……のぉ！」
それを悟っているからこそ、リアスは正真正銘全力で攻撃を放つが、然し通用しない。
そこに忸怩たる思いを抱き……ふと気づいた。
あまりに効いてなさすぎる。
冷静に考えればおかしかったのだ。
如何に蛇で強化されているとはいえ、現魔王を一人で押し切るような手合いが、リアス・グレモリー眷属の総力如きにここまで時間をか

けるものなのだろうか？
そこに思い至り、リアスは悟った。
「……あなた、まさか対悪魔に特化した強化を―ッ」
「ほう、気づいたか」
クルゼレイはそれを隠しもしない。
おそらく悪魔という存在に対しての特化した対抗能力。ゆえに純粋な悪魔出ない自分達の眷属は、本来の種族特性などによって効果が薄くなっているのだろう。
そして同時に不敵な笑みすら浮かべていた。
「そうだ。悪魔の王としてそれぐらいはするとも。それがいったいどうしたと―」
「―なるほどね。なら、対処方法は明確だわ」
それを悟り、リアスは勝機を見出した。
つまりこの戦いにおいて、オフェンスを担当するべき存在は―
「和地、カズヒ！　あなた達はオフェンスに回って！　私達はそのサポートに徹するわ！」
―悪魔以外を攻撃の主軸にする。ただこの一点である。

和地Ｓｉｄｅ

そういうことか！
確かにそれなら俺やカズヒ姉さんがオフェンスに回るべきだろう。
悪魔を一点に集めてると返ってマズイ。分散させてサポートに回しつつ、オフェンスを俺やカズヒ姉さんが受け持てば……っ！
「カズヒ姉さん、リヴァ先生！　カテレア（そっち）は任せたぁ！」

とりあえず、野郎だから野郎が相手する方向で俺は突貫する。
まあそれも冷静に考えると単純だけど、優先順位は数を減らすことだ。
集団戦の王道は数を減らすこと。方向性としては最高は最強戦力を潰して総崩れで、最善は弱い奴から削って確実に士気と人数を削ること。
ただし、この場合はどっちもまず不可能。というより、そういった選別に意味がない。
だって三人ともたぶんほぼ同格だ。魔王血族同士で、かつオーフィスの蛇と亜種聖杯で強化済み。全員がもれなくボス級という始末だ。
なら、戦闘能力が仮面ライダー上乗せで俺より強くなってるだろうカズヒ姉さんと、なんか知らないけど実は神の血が流れてるリヴァ先生で一人潰してもらうべきだ。
というわけで―
「お前の相手は俺だ！」
「―下等な人間風情が！」
振るわれる攻撃を回避して、俺はショットライザーを何発か当てる。
とはいえ流石に効いてないか。なら、やるべきことはシンプルに！
『ＳＨＩＬＤ』
「再変身！」
振るわれる攻撃を回避しながら、俺はプログライズキーを交換して再度変身する。
『ショットライズ』
「ちぃ！　鬱陶しい！」
ショットライズで軽くけん制をしつつ、俺は素早くショットライザーをつけてから魔剣を創造する。
『ディフェンディングタートル！　Ｉｔ，ｓ　Ｐｐｏｉｎｔｌｅｓｓ　Ｉ　ｄｏ，ｔ　ｄｉｅ』
ディフェンディングタートルに変身し、俺は全身に結界を纏って突貫して戦闘を開始する。

「部長、こいつの動きを封じる手段を何とか頼みます！」
「分かったわ！」
必要なことを頼んでから、俺は近接戦闘を展開する。
強化魔術との同調に特化した魔剣に魔力を注ぎ込み、真っ向から近接戦闘を開始。幾度となく攻撃をぶつけ合うが、このままだとまずいな。
「下等種族風情が、生意気だぞ！」
「下等種にだって意地があるんだよ！」
何とか撃ち合えているが、流石に何度もやり合うのは無理があるな。
くそ、このままだと押し切られ―
「和地くん！」
―その瞬間、猛攻から俺は一瞬離れた。
と思ったら、すぐに別の位置から接近していた。
「「なに!?」」
「ゴメン、余裕がないから早く！」
あ、インガ姉ちゃん。
何時の間にか背にくっついているインガ姉ちゃんが、俺を移動させたのか。
これなら、基本性能の差を埋めれるから防御込みで時間を稼げる！
「まがい物と下等種風情がぁあああ！」
そしてクルゼレイの攻撃は荒くなってる。怒りで我を失っているな。
いいぞ。そのまま俺達を狙ってくれれば―
「和地、離れて！」
―いいタイミングです、部長！
「インガ姉ちゃん、あっちに！」
「なるほど分かった！」
インガ姉ちゃんがいいポイントに移動すると同時に、部長達の策が発動する。
具体的には大量の聖剣でクルゼレイを包囲しつつ、もろとも魔力の

縄で拘束する。
如何にクルゼレイが悪魔に有利だろうと、聖剣による悪影響なら少しは時間が稼げる。
ちなみに聖剣は木場が作った奴だろう。聖魔剣が作れる禁手の影響か、疑似的に聖剣を作る能力も会得してしまったらしい。
だがそのおかげでこっちも行ける！
『ＳＨＩＬＤ』
「喰らっとけ……っ」
「なめるなぁ！」
『ディフェンディングブラスト』
真っ向からクルゼレイは俺の放ったディフェンディングブラストを撃ち落そうとするが……甘い。
その攻撃を真っ向から受け止め、ディフェンディングブラストはそのままクルゼレイにぶつかると、暴発した勢いで吹っ飛ばされるクルゼレイを更に突き飛ばす。
一撃の威力は低いが頑丈かつ真っ直ぐ飛び続ける弾丸。それがディフェンディングブラストの特性だ。
いうなればノックバックによる吹っ飛ばし攻撃。威力は低いが―
「なっ!? クルゼレイ?」
―敵を一か所に集める分には効果的だ。
「カズヒ姉さん、リヴァ先生！」
俺が声を上げると、リヴァ先生がポンと手を打った。
「あ、なるほど」
『Ｏｄｅｎ』
そのままリヴァ先生は即座にベルトを操作し、カズヒ姉さんもベルトを二回開閉させる。
「でかしたわ！」
銀　　罪
断
蝗
そして俺も！

「これで止めだ……」
『ＳＨＩＬＤ』
　三人同時に飛び上がり、そして反応しきれてないクルゼレイとカテレアに狙いを合わせる。
　とっさにしては上出来すぎる連携だと、我ながら思うなこれは。
「「喰らえええええっ！」」
『スキルヴィングディストラクション』
『ハウリングユートピア』
『ディフェンディングブラストフィーバー』
「「ぐあぁぁぁぁぁぁぁっ!!」」
　渾身の三連撃を喰らい、クルゼレイとカテレアはそのまま吹っ飛ばされて崩れ落ちる。
　よし、これで俺達の方は何とかなったか。
　あとは……！

イッセーＳｉｄｅ

　ここで死んでたまるかよ。意地でも勝つ！
「行くぜぇシャルロット！」
「分かってますイッセー！」
　俺とシャルロットは禁手で一体化すると同時に、覇龍（ジャガーノート・ドライブ）を発動させる。
　リアス部長を参加させてない状態では流石にまずいけど、やりようはある。
　そのまま強引に突貫すると、シャルバと殴り合いを開始した。

「馬鹿な!?　その出力は覇龍のそれ!?　リアス・グレモリー無しでは暴走を抑制できないはず――」
「なめんな！　俺はともかく相棒（シャルロット）を馬鹿にするなよ！」
『あまり時間はかけれません！　早く！』
俺とシャルロットがいれば、赤龍帝の可能性は無限大だ。
今回至った亜種禁手は、覇道織りなす赤き龍帝（ジャガーノート・ギア・スケイルメイル）
最初から覇龍を使うことを前提として成長を考えていた歴代が使った、覇龍との同調に特化した亜種禁手だ。
その分鎧の性能は劣るし、消耗だって消せるわけじゃない。
だけど何千年も生きる気はないし、何よりここで部長やアーシアが死ぬよりは何倍もマシだ。性能だって、覇龍に至ればこいつをぶちのめすのには――
「――十分だろ！」
「がぁ!?　この……糞餓鬼がぁ！」
くそ！　ドーピング野郎のくせして強いじゃねえか。
このままだとちょっとまずいか？　いや、それでも……っ
俺はいろんなものがゴリゴリ削れて行くのを感じながら、何度も何度も殴り合う。
少なくとも、こいつだけは俺が押しとどめる。そうすればきっと勝てる。皆がカテレアとクルゼレイを打倒してくれるはずだ。
その為なら、俺の寿命の十年や二十年何て安いもんだ。
「だから……敗けねえんだよぉ！」
「ふざけるなよ、下等な人間上がりのまがい物がぁあああ！」
くそ！　こいつしぶとい……っ
それでも、それでもなぁ……っ！
「負けて……たまるかぁあああ！」
俺は全力で殴り飛ばすけど、これで何かが切れた。
『まずいぞ相棒。これ以上は覇龍を維持できん。もって後一発かそこらが――』
そこを何とかできないのか！
くそ、せめて皆が他の奴らを片付けるまで、もてばいいのに……っ

！
俺が悔しくて崩れ落ちそうになった時、一歩前に出る人がいた。
「安心しなさい。あとはそいつだけよ！」
『ハウリングディストピア』
カズヒ!?
そうか、カテレアとクルゼレイはどうにかできたのか！
俺がほっとした時には、全身から何か湯気っぽいのを放出しながら、カズヒが目にも止まらない速度でシャルバをタコ殴りにする。
明らかに速すぎるから、そういう能力か何かか。すげえな、オイ。
「おいおい。もうちょっと頑張ろうぜ？　男の意地を見せてやりな」
『ＳＡＶＥ』
そんな音とともに、今度は九成が俺越しにシャルバに照準を向けた。
『サルヴェイティングブラスト』
その攻撃がシャルバを仰け反らせて、俺はこのチャンスを逃さない。
ドライグ。最後の一発はド派手にいかせてくれ！
『いいだろう。ならでかいのを一発ぶちかますぞ！』
『サポートします。行ってください！』
ドライグとシャルロットのサポートを受けて、俺は機能を解放する。
鎧の胸部化展開して、でかい大砲が形成される。
そこに込められた絶大なエネルギーは、今までの比じゃ断じてない。
「まずい、あれは喰らうわけには！」
「させる―」
「―かよ！」
逃げようとするシャルバにカズヒと九成が組み付いた。
このチャンスは逃がせない。間に合え、間に合え―
「な……めるなぁ！」
「ぐっ!?」

くそ！　野郎強引に振りほどきやがった。
これは、間に合わな―
「「『え？』」」
―と思った瞬間、シャルバの動きが一瞬止まる。
これは、まさか！
「イッセー先輩、トドメです！」
でかしたギャスパー！
「いっけぇぇぇぇぇぇぇ！　ロンギヌス・スマッシャーっ！」
俺は後輩のチャンスを逃さず、渾身の全力砲撃をぶっ放した。
「「うわっ!?」」
思った以上に太かったから、カズヒと九成が慌てて飛び跳ねる。
同時にシャルバが停止を解除したけどもう遅い。
「俺達のゲームを台無しにして、アーシアを悲しませたツケを払いやがれぇぇぇぇぇぇ!?」
「―がぁあああああ!?　馬鹿な、アジュカを滅ぼしても、ヴァーリに一泡吹かせてもないのに、こんなクソガキどもにぃぃぃぃぃぃぃ!?」
そんな絶叫を放ちながら、シャルバの奴は盛大に吹っ飛んだ。
俺は限界を超えて鎧を解除しながら、倒れそうになりながらも九成達に腕を突き出す。
二人もそれに気づいて、それぞれ腕を上げて答えてくれた。
ああ、大勝利だ！

魔性変革編　第五十三話　赤龍神帝

イッセーＳｉｄｅ

俺は覇龍を解除して、盛大に倒れる。
なんかもうめちゃくちゃ疲れたっていうか、いろんなものが文字通りなくなったってこれ。
これ寿命とか、百年や二百年じゃ効かない数を失ったよなぁ。詳しく知ったらショックを受けそう。
でも―
「お疲れ様です、イッセー」
―ふと、シャルロットが俺を受け止めてくれる。
俺がやばめなのを分かってるのか、ちょっと悲しそうなのがちょっと罪悪感が浮かんでくる。
だけど、シャルロットは誇らしげな表情を俺に向けていた。
「いつもイッセーは、私が胸を張れるマスターでいてくださいますね」
「……そっか。シャルロットも俺が胸を張れるサーヴァントでいてくれてありがとな」
これは決して失ってない。
後ろを向けば、駆け寄ってくれるリアス部長達の姿も見える。
何より、ほっとしながら、涙を浮かべながら走り寄ってくるアーシアがいる。
色々ダメージはでかいけど、それでも大切なものは皆守り通せた。
ああ、これからも、俺はこうして生きていくさ。
全力全開。全身全霊。大事なものを守って大事な生活を送り続けてやる。
「……驚いた。まさかこの手勢でシャルバ達三人を返り討ちにするとはね」

そんな声が聞こえると、なんかヴァーリが美猴やアーサーを連れて俺達の前に来ていた。
九成とカズヒが構えてるけど、ヴァーリは片手を前に出して制している。
「ここに来たのはたまたまだ。俺達は旧魔王派の作戦に興味なんかないし、別の目的は君達の害にもならない。だから仕掛けてこなければ何もしないさ」
「……散々盛大に裏切ってテロリストに堕ちながら信用しろと？」
カズヒは今にも切りかかりそうだけど、それでもぐっと抑えてる。
というか、今戦ったら絶対俺達の誰かが死ぬだろコレ。
「まあまあ落ち着こうぜぃ？　今俺達と戦ったらそっちがやばいだろ、な？」
美猴がそんな風ににやりと笑ってるけど、カズヒはいつでも仕掛けられる状態で鋭く睨んでた。
分かってるから仕掛けないけど、全然信用してないって丸分かりだ。
それにヴァーリ達は苦笑するけど、何かに気づいたのか空を見上げた。
「……見てみるといい。いいものが見れるぞ？」
その視線につられて見ると、そこには空間が断ち切れて別の空間が見えていた。
そして、そこを飛んでいるドラゴンが一体。っていうか、距離から見てかなりでかくないか？
「グレートレッド……って奴か？」
「なんだそりゃ？」
九成が呟いてたので首を傾げると、カズヒがため息をついた。
「オーフィスと唯一同格と言われる、この世界における究極の強者。赤龍神帝とも呼ばれているわね」
「その赤を司る最強のドラゴンがアレさ。あれの前では紅の魔王サーゼクス・ルシファーですら一人では赤子のような物だし、二天龍すら圧倒する力の持ち主だろう」

ヴァーリまでそんなこと言うけど、マジか。
『痛いことを言ってくれるな』
『悪いな赤いの。奴はヴァーリの目標なんだ』
ドライグとアルビオンがそう言うけど、目標？
「なんだよ、目標って」
「単純だよ。二天龍をなす赤と白の、赤い方に神龍がいるのに白い方にはない。それがどうも気に食わなくてね」
俺にそう答えながら、ヴァーリは挑戦者の表情でグレートレッドを見る。
「俺は必ず白龍神皇となる。いずれグレートレッドと同格の存在になり、そして超える。それこそが俺の夢だ」
……そっか。こいつにも夢があるのか。
迷惑なテロリストで裏切り者だけど、こいつにもそんな夢があるのか。俺の、最高のハーレムを作りたいってのと同じ、こいつだけの夢が。
そう思ってると、ふと隣に小さな女の子が立っていた。
なんかぼんやりしてる、黒い髪のゴスロリ少女。
なんでこんなところに？　ここ、テロリストが襲撃してきた戦場のど真ん中だぞ？
「危ないぜ？　っていうか、君は誰だい？」
「我はオーフィス」
俺がそういうと、その女の子はこっちを見ずに答えてくれた。
ふーん。オーフィスっていうのか。
ん？　どこかで聞いたような？
俺が首を傾げてると、シャルロットが錆び付いた機械みたいに首を向けた。
あ、シャルロットも知ってるのか。それにしてもなんかすっごい名前を聞いたような感じだな。
……いやちょっと待て。そういえば禍（カオス・ブリゲート）の団のボスもオーフィスとか言ってなかったっけ？
俺がそこに気づいて固まってると、オーフィスはこっちを見ずにグ

レートレッドに指を突きつけた。
「我は必ず、静寂を手にする」
そこまでいうと、オーフィスはいきなり姿をかき消した。
え、え、え……？
なんかこう、マイペースだなオイ。
俺はちょっと引いてたけど、なんか意識が薄れてきた。
あ、やべ。なんか意識が朦朧と……。
「おいおい、赤龍帝は大丈夫なのかよ？　仙術で調子でも整えてやろうかぃ」
美猴がそんなことを言っているけど、それならむしろ―
「いや、それなら部長の乳首の方が―」
あ、もう無理。

和地Ｓｉｄｅ

あ、イッセーが気絶した。
「イッセー！」
「イッセーさん！」
部長とアーシアが慌てて駆け寄って抱きしめるけど、完璧にグロッキーで気絶してるな。
こりゃもうイッセーは当分戦えないな。俺も少し落ち着いて考えないとな。
ため息をつきながら、俺は周囲を確認する。
どうやら今度こそ、敵の増援は止まったらしいな。
そこは素直にほっとできる。とはいえ、ヴァーリチームは目の前に

いるんだけどな。
俺達だけでなく木場達も警戒しているけど、ヴァーリチームはどこ吹く風だ。
まだ少し姿が見えるグレートレッドを見ているだけで、こっちに視線を碌に向けやしない。
……なんというか、好き勝手に生きてるなぁこいつら。
「さて、俺達はそろそろ帰らせてもらうよ。これからうるさい連中が出てきそうだしな」
「まあ確かに。旧魔王派の連中軒並みぶっ倒した連中とのんびりしてたらうるさく言われるだろうな」
俺はちょっと皮肉を言うけど、ヴァーリはきょとんとしていた。
そこは気にしてもなかったのかよ。こいつらホントこぉ、自分がテロリストって自覚に欠けるんじゃないか？
まあテロリストにアドバイスするのもあれだから我慢してると、ヴァーリは苦笑しながら肩をすくめた。
「今回の敗北で旧魔王派は発言力を失うだろうからな。今度は俺に代表になってくれとか言ってきそうなのが嫌なのさ」
「……そうなの？　ルシファーの末裔ならそれなりに待遇もよさそうだけれど」
部長が我に返ってそう返すけど、ヴァーリはむしろ面倒そうだ。
「余計な重荷を背負う気はない。俺はあいつ等みたいに誇り高い存在として恥ずかしいことはしたくないし、誇り高く生きたいのさ」
……むしろ背負ったらどうなんだろうか。
根無し草って誇り高いのか？　俺としてはもっとこう、誇り高い存在ならそれに見合った重荷を背負ってるもんだと思うんだけど。
まあそんなことを言ってやる必要もないか。
こいつら本当に、こぉ……毎日が楽しそうに見えるからな。
「では帰りましょうか。そろそろルフェイが夕食を作っている頃でしょうし」
アーサー・ペンドラゴンらしき金髪が、そう言って聖剣で空間を切る。

それを見ていたカズヒ姉さんが、少し考えてから声をかけた。
「アーサー・ペンドラゴン。見逃してもらった借りを返すってわけじゃないけど、一つ言っておくわ」
「はて、何でしょうか？」
振り返るアーサーに、カズヒ姉さんは真っ向からその目を見据える。
「分家のアニル・ペンドラゴンは、アンタに必ず一発かますわ。ヤンチャのツケを払う準備をしておきなさい」
その言葉に、アーサーは少し怪訝な表情を浮かべた。
分家の奴のことなんて知らないとか言うのかとも思ったが、そういうわけでもなさそうだな。
そして、軽く苦笑した。
「無謀でしょう。父相手でも一本すら取れなかったのですが」
よ、余裕の表情だ。
完璧に負けるなんて可能性が思い至れないレベルだ。傲慢なのかよっぽど腕に自信があるのか。
だけどカズヒ姉さんは、不敵な笑みすら浮かべていた。
「あまり油断しないことね？　弱者には弱者の戦い方があると憶えておきなさい」
「ふふ。もしそうなら、強者は弱者にそう負けまいが故の強者だと教えて差し上げましょう」
そんな風に言葉を交わし合い、なんか戦意をぶつけ合った。
あの、カズヒ姉さん。戦うのはアニルだよね？
と、気づけばヴァーリはなんかまじまじとイッセー達を見てる。
なんだなんだと俺達の視線が集まれば、ヴァーリは小さく首を傾げた。
「……しかし兵藤一誠は俺を一旦は凌駕したり禁手に至ったり。リアス・グレモリーの乳房を何かのスイッチにでもしているのか？」
……。
「ブフォッ！　す、スイッチ姫ってか？」
美猴、笑うな。ツボにはまる。

後語呂の言いパワーワード作るな。
というかリアス部長から消滅のオーラが漏れてきている。
俺が正直ビビっている中、カズヒ姉さんはそっと肩に手を置くと首を横に振った。
「部長ストップ。気持ちは分かるけど此処は抑えて。セクハラの報復は今度出くわした時にまとめてしてやりましょう」
「そうね。地獄を見せるのは今度会った時でいいわよね……っ」
カズヒ姉さん。それはストッパーではなくチャージユニットというのではなかろうか。
そんなことを俺が思っている間に、ヴァーリ達もさっさと事件の狭間に消えて行った。
なんというか、フレンドリーな奴らだな。あいつら自分達が裏切者のテロリストで、俺達を殺しかけた側だって分かってるんだろうか。
俺は正直ため息をつきたくなったけど、とりあえず苦笑するとインガ姉ちゃんに振り返る。
「……じゃあ、帰るか。いや違うか」
いや、これなんか変な気がするな。
インガ姉ちゃんにとっては帰るかではないよな。どう考えても取り調べは受けるほかないよな。
よし、こっちにしよう。
「一緒に来てくれインガ姉ちゃん。俺はインガ姉ちゃんと一緒にいたい」
「……もう。凄いこと言ってるよね、和地君は」
顔を赤らめてくれているのは、喜んでいいような理由からだろうか。
あとカズヒ姉さんはうんうん満足そうに頷くのが答えでいいのか？　確かにカズヒ姉さんが言った条件はクリアしたけど、それでいいのかと俺は聞きたい。
「よろしく頼むわ。ええ、心から歓迎するから好物を教えて頂戴。用意するから」
「……えっと、そんなこと言われても無理な気がするんだけど。あと

君……誰？」

あ、そういえば直接紹介してなかった。

魔性変革編　第五十四話　落日の成立

アザゼルＳｉｄｅ

「なるほど。じゃ、ちょっと撤退した方がいいかな」
そう軽い口調で、ミザリの奴は撤退を決めた。
……なんて奴だ。正直ビビったぜ。
俺とミカエルの攻撃を、ことごとくミザリの奴は回避した。おかげであいつはほぼ無傷だ。
もちろん俺達も奴の攻撃を避けることはできた。だが、俺とミカエルは無事だがサーゼクスはそうもいってない。
「ぐ……っ」
そう呻きながら、サーゼクスは何とか立ち上がろうとする。
だが深く聖槍で切り裂かれている以上、純血悪魔のサーゼクスにとっては動くことができるだけで奇跡に近い。
この一点をもって、この戦いはミザリの判定勝ちだ。
三対一を無傷で凌がれた挙句、多分一番強いサーゼクスが深手を負っている。それも代理（サーゼクス）のルシファー（ミザリ）がルシファーの孫に負けたんだ。
こいつはきつい。大王派の連中が小躍りしそうな話だな。
ファルビウムとセラフォルーに続き、サーゼクスまでもが本来の魔王血族に叩きのめされた。更にアジュカに至っちゃ、本家から禍の団に裏切った奴が出てきたという始末。
昨今の大王派が有利な政治的バランスも含めれば、現四大魔王の発言力はごっそり削られるだろう。
俺達堕天使やミカエル達天界にとっても、うるさいのが発言力を持

つのは面倒だな。やってくれるじゃねえか。
「……ああ、とても楽しみです。親現四大魔王を標榜していたイシロ・グラシャラボラス(僕達)眷属にボロボロにされたことで、現魔王派は発言力を大きく失うでしょう。それにある意味では僕らにとっても残念なお知らせがあるんですが、それも個人的にはとてもいいお知らせです」
「なんだよ一体。っていうか、何をした？」
こいつの回避能力―というより攻撃察知能力―は異常の域だ。
俺達の攻撃を見てもいないのに回避することができるってのが反則級だろう。おそらく星辰光何だろうが、基本的に独自の能力だから何をしてくるのかが読み切れねえ。
あとあっちにとっても残念なお知らせってなんだよ。
「簡単にいえば、シャルバにカテレアにクルゼレイが、リアス・グレモリー(貴方の妹達)眷属に打倒されました。何とか転移して逃げたそうですけど、カテレアとクルゼレイは治療空しく死亡して、シャルバも当分は動けないでしょう。これは僕は純血の魔王血族として、責任が重くのしかかりそうです」
……マジか。
確かに嬉しく思うべきか悲しく思うべきかって話だな。なによりどっちにとってもだ。
そしてそれは表裏一体だ。
「現四大魔王はことごとく蹂躙され、真四大魔王はそんな現四大魔王の妹如きに揃ってやられた。いろんな意味で四大魔王の名は失墜しますよね？」
全くだ。リアス達には悪いが、タイミングが最悪すぎる。
これはもう、サーゼクス達現四大魔王は大したことがないとか衰えたとか、若手に追い抜かれたとかそう思われるには十分すぎる。そう邪推する連中はごろごろ出るだろう。大王派もここぞとばかりに指摘するだろうしな。
こりゃ、四大魔王制度そのものが大きく変わりかねねえぞ……。
俺達が歯噛みしてると、ミザリの後ろから霧が巻き起こる。

この霧……絶霧（ディメンション・ロスト）か？
「じゃ、どうやら英雄派の人達も呼んでるみたいだから、帰らせてもらうよ」
そう微笑みながら、ミザリは霧に包まれる。
「まあ、負けてしまうことは実際仕方ないよ。僕の目は純血悪魔の天敵だからね」
そう言いながら、霧に完全に包まれる前にミザリは目を指さした。
「この強奪の魔眼は、純粋な魔力にはめっぽう強いからね」
その言葉と共に、あいつは撤退していった。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

禍の団の施設内を歩くミザリは、ふと通りがかった青年ににこやかに微笑む。
「やあ、ヴァーリ・ルシファー」
「……ミザリ・ルシファーか」
ヴァーリは機嫌が悪そうにミザリを見るが、ミザリはその理由をよく理解している。
だからこそ、ミザリは遠慮なくそこにふれる。
「父上は禍の団に関わるつもりはなさそうだよ。今のところはね」
その言葉に、ヴァーリの方がピクリと震える。
それを微笑んで見てから、ミザリは再び歩き出す。
「……なら何故、お前は禍の団に参加している？」
その背中に欠けられたヴァーリの言葉に、ミザリは小首を傾げて見せた。
「人が行動する理由なんて、それが楽しめそうだからで十分だろう？

君だってそこは変わらないと思うけど？」
「俺を、お前のような外道と一緒にするか……っ」
ヴァーリから確かにな怒気と殺意を懸けられるが、ミザリは怪訝そうに眉を顰める。
それは恐怖でも怒りでもなく、純粋な疑問符。
故に躊躇することなく、ミザリははっきりと告げる。
「同類だろ？　自分の趣味の為に所属勢力を裏切ってるじゃん。自分のことは客観視した方がいいよ？」
本心から、一切の愉悦は罵倒の意思なくはっきりと言い切った。
一切の悪意が込められてない、むしろアドバイス的な要素すらあっただろう。
それが分かったからこそ、ヴァーリは切れた。
「……表に出ろ」
「嫌だよ。僕はこれから仕事があるんだけど？」
ミザリはそう答えるが、ヴァーリは知った事じゃないと言わんばかりに詰め寄り―
「そこまでにしておいてくれない？」
「それはこちらの台詞ですね」
その間に、それぞれのメンバーが集まって睨み合う。
ミザリを庇う様に立つのはイシロ・グラシャラボラスを筆頭とする眷属達。ヴァーリを庇う様に立つのはアーサー・ペンドラゴンを中心とするヴァーリチーム。
双方共に少しの間睨み合うが、ミザリは苦笑しながら片手を上げる。
それに合わせてイシロ達は構えを解く。その反応から、ヴァーリチームも戦意を少し和らげた。
そんな中、怒気を漏らすヴァーリにミザリは微笑んでいる。
「今、僕は個人としては現魔王政権やそれに協力する神話勢力の腕利きを何人も痛めつけて後遺症すら与えている分、旧魔王派としてでないのなら発言力は高まってる。比べて君は好き勝手に動いているし、手引きしたテロも結局失敗しているから劣っている。状況次第で君

は禍の団全てを敵に回すということを忘れない方がいいよ？」
「……覚えておくよ。お前とやり合う時は禍の団事叩き潰す気で行かせてもらう」
その返答を聞いて、ミザリは満足そうだった。
そして歩き去るが、途中で少し振り返る。
「なんだかんだで、父上も含めて僕達は似た者同士だね。上手くかみ合えば仲良くやれそうだよ」
その言葉に、ヴァーリは愕然となる。
そのまま去っていくミザリ達を呆然と見送りながら、ヴァーリは殺意と怒りでおかしくなりそうになっていた。
「俺が、あんな糞野郎と似たものだと……っ」

旧魔王派が主体となって行ったこのテロにより、世界に大きな影響が出ることになる。
若手悪魔の眷属を含めた若者達のチームによる、旧魔王派筆頭である三人の魔王血族の戦線離脱と戦死。しかし彼らによって現魔王が大いに苦しめられたという事実。更にミザリ・ルシファーを堕天使総督アザゼルや天使長ミカエルと共に相対しながら、判定負けになり自身は短時間で深手を負ったサーゼクス・ルシファー。とどめに今回のテロにおいて大きな役割を果たした、アジュカ・ベルゼブブを輩出したアスタロト本家の次期当主の凶行。
これらの一連の流れにより、四大魔王の名に大きく傷がついたことは言うまでもない。
結果として、この一連の事件をきっかけに四大魔王制度の廃止及び、新たなる形での悪魔統率の役職の設立がさほど時を置かぬうちに確定する。
その事実をもってして、このテロはある別称をつけられることとなる。

――魔王の落日、と。

魔性変革編　第五十五話　終了後の一幕

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「おつかれー。なんか大変だったみたいね」
「ええ全く。事情を知られてなかったから、冥界にまでは連れられてなかったＡＩＭＳ（あ）第二部隊（たなっ）が羨ましいわ。……いや本当に大変で疲れたわ」
「大丈夫なのカズヒ？　いやほんと、何かすすけてるというかなんて言うか……？」
「ディオドラの眷属を奥の手使ってのしたと思ったら、今度はディオドラがグレモリー眷属の天敵過ぎたから滅亡迅雷フォースライザーを使う羽目になって、終わったと思ったら旧魔王派の３トップがエクストラボスとして出てきたのよ」
「……なんで生きてるの？」
「自分でも不思議。奇跡的な綱渡りに成功した感じだわ。全員生存とか偉業と称えられたいわね」
「そっか。ごめんね？　伝えられてなかったとはいえ、手伝えなくて」
「……気にしなくていいわよ、鶴羽。ソーナ会長も私もリーネスも伝えなかったんだから、貴女が参加できる方が問題だもの」
「……はぁ」
「何よそのため息。嘘だとでも思ってるの？」
「嘘は嘘でも「貴女が私を手伝おうなんて思わなくていい」とかそういう類でしょ？　後ろめたいとかそんな感じでさ」
「……ぐぅ」
「ほんとに言う奴初めて見たわよ。……パパのことはカズヒが気にす

ることじゃない。結局は自業自得よ。それも知らずに、私は……っ」
「鶴羽、それは―」
「うぅ～。緊急事態よぉ～」
「リーネス？」
「私達がこんなことになっている仮説までできる、とんでもない事態が判明したわぁ。あと総督に仮説立てられて白状させられるかもぉ」
「はっ!?　マジ!?　仮説立てれるの!?」
「そうなのよ鶴羽ぁ。でもぉ、問題があるのぉ」
「ちょ、ちょっと待ってよ。問題ってどういうこと？　そもそも総督に仮説立てられる理由も分からないし―」
「落ち着きなさい、鶴羽。……リーネス、もう一思いに重要なところを教えて頂戴。腹はくくったわ」
「分かったわぁ。……いい、よく聞いて二人ともぉ」

「裏切者のイシロ・グラシャラボラス眷属の正体は、亜種聖杯と幽世の聖杯（セフィロト・グラール）を併用して記憶や能力を継承して転生したサーヴァント及び、ルシファー血族のミザリとして生まれ変わった、アドルフ・ヒトラーのデミサーヴァント、道間誠明よぉ」

「……ふぅっ」
「カズヒぃいいいいいいい！　いや、これ間違いなくプロボクサーのアッパー覚悟したら仕込み銃喰らうようなもんだけど！　ちょ、ちょっとしっかりしてってば！」
「いえ、もうこのまま寝かせてあげましょぅ。悪夢しか見なさそうな気もするけどねぇ」

「……で？　お前はもう動いて大丈夫なのかよ、サーゼクス」
『大丈夫だ。というより、仕事をあまりしないように言われていてね。当分暇だから付き合ってほしい』
「そうかい。で、大王派の連中はこの機にごっそりお前らの権限を奪おうってか？」
『いや、思ったよりは仕掛けてきていないよ。むしろ別の形で動かれている』
「というと？」
『シュウマ・バアル達の提案により、そもそも今の四大魔王制度そのものを終焉させようとしているようだ。旧魔王派の者達や現魔王である私達が醜態をさらした今こそ、その動きを見せるタイミングだと考えたらしい』
「なるほどねぇ。魔王派の連中に対する嫌がらせ以上に、旧魔王の血族に横やりを入れられないよう「昔王様だった家柄」に墜とすつもりか」
『そういうことだ。現魔王（私達）は七つの大罪になぞらえた七大魔王制度に移行しようと考えていたが、大王派（彼ら）は魔王の名前そのものを指導者から外そうとしているようでね。七つの大罪だけでなく、その前の九つの大罪を組み込んだ、九つの罪王（ざいおう）を作ろうとしているようだ。もっとも、私達が続投する可能性も相応にあるようだけどね』
「魔王ではなく罪王（ざいおう）にねぇ。魔王って銘柄そのものを過去のものにするってことか」
『ああ、盟主の呼称すら変えることで改革が進んでいると見せる腹積もりだろう。また、それとは別に面白い提案が大王派からなされている』
「なんだよ？　あいつらからどんな提案が出たんだ？」
『罪王は九人制定する予定なのは言ったが、それぞれに基本となる役

割や資格を与える腹積もりのようでね。その草案の中に「他種族からの転生悪魔からの選出」や「各神話勢力からの指名者で最も多い人物」といったものが存在しているんだ』
「……へぇ。先手を打ってある程度は譲ってやるってか？　ま、大王派（あいつら）が好みそうな条件も制定されてるんだろうがな」
『そうだね。「三世代以上前から純血の悪魔限定」や「大王バアル家から」といったものも数多い』
「先に自分達から妥協することで、逆にお前らに妥協させるって寸法か。堕天使（俺）や天界（ミカエル）が横やり入れてくる可能性も考慮してるな。誰が提案して考えたのやら」
『だが私達からしても好都合なところもある。ここはあえて可能な限り了承することも踏まえるつもりだ。なにより、同時に提出された軍備強化案は飲むしかないからね』
「……だな。旧魔王派の連中はこれで当分黙るだろうが、ミザリの野郎は不安分子だ。それに禍の団には英雄派ってもう一つでかい派閥がいるし、更に同盟を結ぶ形での冥革連合も厄介だな」
『セラフォルーもファルビウムも威力偵察が本命だったが、レーティングゲームのトップ3がことごとく負傷を負ったそうだ。それに王（キング）の駒や真魔（ディアボロス）の駒、そして民（シビリアン）の駒も演説通りの性能だった。……更にだ』
「それと？　まだなんかあんのか？」
『ああ。まずは冥革連合の駒だが、ある程度の仕様変更が成されているとアジュカから報告があった』
「仕様変更ねぇ。より高性能になるようにとかか？」
『いや、むしろそういったランダム要素を完全に削り取る代わりに生産性が向上している』
「……へぇ。続けろよ」
『ああ。アジュカは製作品に隠し要素を仕込むことを好んでおり、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）においてもそれがあるからこそ変異（ミューテーション・ピース）の駒だ。だが冥革連合が送り付けた王の駒や真魔の駒、そして民の駒に至るまで、それらの機能が完全に取り除かれた分、生産性を高める仕様変更が成され

ていた。民の駒に至っては兵士の駒一個分の資材で十五個は作れるとのことだ』
「そりゃすげえ。今までの悪魔の駒で転生するような連中は、どうしても戦力としての観点が重視されてたからな」
『だが、農業や工業の知識やノウハウを持っているだけの一般人なら兵士の駒でも余裕がありすぎる。彼らはそういった直接的な戦力外の部分を集めつつ、質は王と真魔で埋めていくといったところだろう』
「覚悟ガンギマリの連中みたいだからなぁ。若手将校のクーデターってのは基本的にあほなことが多いが、今回はあほの方向性がどうかしてるぜ」
『ああ、冥界の未来を憂いてるのは嬉しいが、このような形で動いてしまったのは残念だよ。……そしてだ』
「ああ、他にもある言い草だったな。で？」
『ミザリ・ルシファーの言っていた道間誠明という名前だが、大王派の方で情報提供があった。亜種聖杯戦争を研究している魔術回路持ちの魔法使いの一族らしく、日本を中心としつつも海外にも血族が存在する、大規模組織だ』
「そういや、奴さん達は聖杯戦争にも興味を持っていたからな。それなりに縁はあるってか？」
『本家の者達と情報交換をしている程度だそうだけどね。だがその結果、道間清明という男とそれに絡む主件について知ることができた』
「事件ねぇ。なんか嫌な予感がするな」
『正解だよ。本家筋のある男が起こした唾棄すべき凶行がきっかけとなって起きた、酷過ぎる悲劇だ』

『……そういうことだ。考えようによっては、ミザリ[彼]もまた、哀れな被害者と言えるだろう』

「どんな種族にも糞野郎はいるってか。ったく、嫌な話もあったもんだ」

魔性変革編　第五十六話　体育祭のその裏で

和地Ｓｉｄｅ

体育祭当日。いまだにイッセーは目を覚まさない。
つっても流石にイッセーが悪いわけじゃないな。それだけの消耗をしていてもおかしくない、それだけの負担を被っているんだから。
リアス部長の魔力を借りずに覇龍に至ったのはやはりまずかった。今のイッセーはそんな無茶をした反動で、寿命がごっそり削れているらしい。
元々イッセーが覇龍を発動できる領域に至ってなかったということもあるそうだ。覇龍特化の亜種禁手になってもそれは変わらず、その為暴走は抑制できても消耗は抑制できなかったらしい。残り寿命は千年を切っているとか。
ちなみにこれでもマシな方だそうだ。もし通常の禁手で覇龍に至っていたら、寿命は百年を切っていた可能性もあるとか。人間基準なら十分だが、万年生きれる悪魔基準なら短命にもほどがある。
そういう意味では大変なんだが、それ以上にヤバいことがないでもない。
いや、イッセーの寿命大幅削減は確かに大変だが、イッセーがいまだ下級悪魔であることもあって世界的な影響力はさほどでもない。
問題は、だ。
なんか聖杯を二重に使って転生したとかいう、道間清明ことミザリ・ルシファー。及びミザリが前世でスカウトして悪魔に転生してもらったサーヴァント達で構成される、イシロ・グラシャラボラス眷属。
……今回の件でどの勢力も、内部に対して疑心暗鬼が進んでいると言われている。

なにせ記憶と能力を継承して、全く異なる他種族に転生するという前代未聞。更にそれが最悪の形で最初になってしまったからな。

コロンブスの卵とかいう真偽不明の格言が示すように、前人未到ってのはそれだけでインパクトがある。初見殺しなんて言葉もあるように、最初ってのはそれだけで凶悪で価値があるんだ。歴史に名を残した者達にも結構な割合で、最初にそれを成したとされていることが大きなパターンだってある。

そんな最初の一歩が寄りにもよって大悪事を引き起こしたんだ。それも獅子身中の虫として、陣営最強とも言われる存在を他にもいる状態で一蹴。とどめに何年間もしてきた慈善活動も、最悪の形で利用する為だけにやってきたという始末。

どの勢力も「比較的若手の中には、敵対していた勢力の者が同様の方法で潜り込んでいるのでは」とか思ってしまうのは仕方がないだろう。

しかもミザリのやらかしで、和平を結んでいた各勢力では和平を解除することを望む奴らも数多い。

自分達側にも同様の連中がいるかもしれないし、そもそも悪いのは裏切り者だ。だがそこまで考えて行動する奴ってのは意外と少ない。あと示し合わせた仕込みという可能性も捨てきれない。

どこの勢力も疑心暗鬼と和平反発運動に混乱している現状だ。

三大勢力はまだ和平反発運動こそ起こってないけど、ミザリが趣味の為に慈善活動の裏側で行った化け物騒ぎの火消しで苦労している。こと近年はＳＮＳとかあるから、その辺りの情報抹消が大変だ。同様に偏見の目から罪のない被害者を守る為、魔王の方々は苦労しているとか。

ただしサーゼクス様はルシファー相手に深手を負って一蹴されたことで、余計な悪感情を向けられない為に当面動けないから更に大変。本家の次期当主が禍の団に与していたアジュカ・ベルゼブブ様がかなり自由に動けるほど、ミザリ・ルシファーの行動は悪目立ちしていた。

始末に負えないことに、俺達オカ研がシャルバ達を倒したことも魔

王様方にとっては逆風だ。なにせその前に旧魔王の三人組は現魔王を相手に有利に立ち回っていた。その仕組みを上手く掻い潜ったと言えど、俺達は基本的に若手の若手だから、どうしても比較対象としては軽く見られる。結果として「現魔王って若手悪魔程度が三人まとめて倒せるような奴らに、一対一で負けるの？」とかいう悪評が立っているらしい。

中には、サーゼクス様ではなく妹のリアス部長を魔王とするべきでは何て意見もあるらしい。

……考えない馬鹿って多いんだなぁ。もうちょっとこぉ、何かあるとか俺達がインチキをしているとか思ったりしないのか？　いや、インチキ扱いで色々言われると、和平の象徴となっている俺達が悪評立たされるという割と致命的な展開になるんだけど。

なんてことを思っていると、体育祭の競技は二人三脚に移行し始めている。

「まずいな。アーシアが後で泣きそうじゃ――」

「――その心配は無用だよ」

その声を聴いて、俺はぎょっとなって振り返った。

「なんでいるんですか？　サーゼクス様」

「いや、周りから「少しの間は表に出てくるな」と言われていてね。だからリアス達の応援に来ていたんだよ」

そこにいたのはサーゼクス様だけど、理由を聞いたら納得だった。

まあ確かに、冥界にいるよりは人間界にいる方が冥界的には目立たないわな。

というかちょっと待て。今ちょっと気になることを言ってなかったか？

「――イッセーって起きたんですか？」

「ああ。グレイフィアが連絡を入れてくれたこともあってね。今転送されているから……ほら」

サーゼクス様が示す先には、まだちょっと本調子じゃないっぽいイッセーが、アーシアと足を結んで参加しているところだった。

クラスの連中はオカ件のメンバーもほっとしている。まあクラス

の場合はイッセーではなくアーシアを心配しているからだろうけど。
まあ、イッセーの評判は最近はだいぶマシになっているそうだ。あと松田と元浜も。
何せイッセーは覗きをやめようと決意して以来、酷い時は一日に何度も心因性の発作が起きていたらしい。松田と元浜もカズヒ姉さんの餌に釣られて我慢しているけど、僅か二週間そこらで我慢で気が狂ったのか、衝動的に壁に頭を打ち付けたりしているとか。
そんな光景を見ている上、うわごとのように「覗きしたいでも我慢」とか呟いている光景を見たりした結果、学内でイッセー達の評価が変化したそうだ。主に「気が狂ってるレベルの色情狂だけど、それを発狂寸前になりながら我慢し始めている」として。
……これで評価がどっちかといえばいい方向に変わってるんだから、あいつら本当に病気だろ。
更にカズヒ姉さんが「集団私刑（リンチ）は覗き以上の悪行」だということを触れ回った結果もあり、「今までのことはプラマイゼロでとりあえず置いておいて、発狂しかけながら我慢している努力は認めて野郎」という方向が主流だとか。
……いやほんと、あいつら病気だろ。
あとイッセーと木場の間で「女体に狂っている兵藤を、イケメン王子木場が支えて愛が芽生える」という方向性のエロ同人が新たなホモ同人のブームだとか。
実在人物をネタにホモ同人とか鬼か。カズヒ姉さんは風紀委員や生徒会をと協力して摘発を進めている。
ただ、そこに関してはちょっと進んでいない。カズヒ姉さんが「あなた達がイッセー達に覗かれて嫌なことと同じよ。そこは集団私刑（リンチ）でだいぶ相殺すべき以上、もしこのまま続けるのなら、むしろわざと覗かせるとかストリップするとかが筋とは思わない？」と言った結果、女子の一部が真剣に考慮し始めたそうだ。カズヒ姉さんが会長に説教される流れになった。
捨て身すぎるだろ腐界の住人。これが、ホモォの世界なのか……っ。

どうか巻き込まれませんようにと俺は心から願った。
まあそれはそれとして、俺は真剣に気を取り直す。
「でもどうします？　今後魔王派は動きにくくなったんじゃないですか？」
「そうだね。禍の団（カオス・ブリゲート）、こと冥革連合に注力する必要性もあるし、当面は大王派の顔を立てる必要もあるだろう」
サーゼクス様はそう言うけど、俺はちょっと気になることがあった。
「王の駒ってのはどうするんですか？　なんでも生産ラインを作ることは可能だって話ですけど」
その辺りはリーネスから聞いている。
こと駒の隠し要素とか遊びの部分を削った結果、生産性が高まっているのが冥革連合が提出した駒の特徴だとか。
それに対してサーゼクス様は首を横に振った。
「現状では開発はしないというのが方針だ。王の駒の強化はあまりに強大すぎて、暴走する者が必ず出るだろう。冥革連合は「多少被害が増えてでも強化されるべし」というスタンスのようだが、私達は真逆だよ」
なるほどな。
まあ、スタンスの違いは仕方がない。
強大な力ってのは飼いならせないと暴走するからな。手綱を握れない力何て厄介極まりない。嘆きの涙を大量に生む、嫌なもんだ。
だからまぁ、サーゼクス様達の方針に否は無い。
だけど―
「ってことは、冥革連合は勝ちに行きますね」
「だろうね。……最も、彼らの思い通りにはならないさ」
―そうなるわけだ。
大王派が政治的に優位に立っているということは、裏を返せば大王派由来の政策や計画が進みやすくなるということでもある。
そして俺が思っている以上に、この人はやり手だった。
「どうしても魔王派（こちら）が優勢だったり拮抗できると、大王派の意見を通

しにくくなる時がある。私が賛成したくても大王派のやり方を認めるのかと言ってくる過激派が出てくることもあるからね」
……なるほど。
坊主憎ければなんとやら。例え取り入れた方がいい政策だとトップが思っても、柔軟性が欠ける奴らは対立派閥の政策を素直に受け取ることに反対することはあるわけだ。冥界も人間と変わらないところがあるな。
だけど発言力が低下しているのなら、「今は大王派を立てて復権の機会を窺う」という形で言いくるめられる奴も出てくるだろう。
つまり、取り入れる価値のある大王派の意見を組み込みやすいということか。
「王の駒は広めないが現四大魔王(私達)の総意でね。大王派が開発したD(ディアボロス・フレーム)Fには、王の駒生産という意見をやり込める為にも使わせてもらいたい。私達の発言力低下を逆手に取らせてもらうよ」
……この人、意外に政治家としても十分能力あるな。
「……それはそれとして今はリアスの応援をしたいところだ。さて、リアスはどの競技に出るのかな？」
……何時の間に応援団みたいな格好してるんですか、あんたは。

Other Side

「……と、サーゼクス・ルシファーは当分強制的に休暇って感じだねぇ。俺達に聞かれてると思ってないのか、それとも聞こえていると踏んでわざと言っているのか」
「気にすることはあるまい。普通に関係者なら入れる高校の体育祭

で、警備もなく話しているのなら聞かれることも考慮済だろう」
「よく言うぜ。駒王学園生徒にまで繋ぎ作ってるやつ普通いねえよ」
「それにＤＦの正式採用と、正式量産型の急ピッチでの製造が決まったのは僥倖だ」
「そうは言うけどよぉフロンズ。あれは確かに上級悪魔クラスの出力を出せるが、だからイコールで上級悪魔一人分ってわけじゃないんだぜ？」
「……本当にそうなのかね？　実際のところ、上級悪魔とも十分渡り合えていたが」
「初見ってのはそれだけで武器なんだよ。出力が上級クラスだろうが、それを運用する本体の質量や体積が段違いじゃあ、色々とディスアドバンテージってもんがある。格闘戦のリーチはあるだろうが、操縦システムの都合でどうしても生身と同様の動きや反応ができるわけじゃねえしな」
「ふむ。敵味方共に情報が共有されれば、キルレシオはＤＦが不利だと？」
「こっちも運用がこなれるからまたちょっと複雑だろうがな。距離を取っての遠距離戦闘なら面積の差が被視認距離や被弾率につながるし、図体のでかさはリーチにつながる分、懐に潜り込まれたら一気に不利だ。個人的には３、４機で上級悪魔二人と相手にする程度にしたいところだな。これも簡単にはいかねえ」
「其れなら大丈夫かとも思うが。あれの生産性は理論上とはいえ相応に高いぞ？」
「金と資材があればの話だ。兵器ってのは高性能かつ大きくなればそれだけ金がかかる。圧殺可能な数を確保しても、その結果こっちの財布がすっからかんになったら、それでクーデターを起こされるぜ？　そもそも生産ラインが確立しているからって、ぽんと何百機も用意できるもんじゃねえ」
「なるほどな。既に盆式聖杯戦争も済んでいるし、すぐに再度と言えるものでもないしな」
「霊地のインターバルはもちろん、空いている土地だってお盆になる

までは使えねえしなぁ。第一、同時に他の機種だって作るんだろ？
生産側のストレス・財布・集中力とか考えとけ」
「確かにな。今回投入したＤＰ―スピアは、あくまで大量に動員可能な大規模作戦やそれぞれの基地に配備するＤ―スピアの試験モデル。冥界の広さを考慮した緊急展開モデルや拠点防衛用、まして質の根幹ともいえるＧ（ギガンティック・ディアボロス）Ｄのことを踏まえれば、配備可能な数には限度があるか」
「そういうわけだ。当面はスピア重視で言って、他のは生産ラインが安定するまでは小出しにするしかねえな」
「……軍事戦略において、やはり君には一歩劣るな。頼りにしている」
「安心してくれや。俺も畑の手入れにゃ一歩劣るしよ。……それはそれとして、だ」
「なにかね？」
「ロビー活動はどんな感じだ？　禍の団にスパイを送れるパイプはできたが、それだけってわけにゃいかんだろ」
「ふむ。実は今日、君が帰った後に本格的な商談の予定があったんだが……言ってなかったかね？」
「手を結べられる可能性が聞きたいねぇ。どんな感じな―」

「―それなら大丈夫。手紙の内容通りなら、私はあなた達と協力してもいい」
「……もう来ていたのかね？　というより、君がこういった仲介をしてくれるとは思ってなかったよ、ティラ」
「なぁに。たまにはアタシも話を聞きたいのさ。ま、難しい話ならすぐ寝るさね」
「それでいいのかよ、ティラ。お前さん、サイラオーグに一泡吹かせたいんだろ？」
「まぁ、敗けっぱなしは趣味じゃないからね。つってもその御膳立て

はまだ先だし、それまでしっかり鍛えとかないと無理じゃないかい、ノアさんよぉ？」
「そりゃどうも。……ま、都合がいいからこのまま商談ってことにしてくれないか、フロンズ」
「ノアの頼みなら構わないが―」

「―いいかね、ベルゼブブの血が混じりこんでしまった、人間マルガレーテ・B・ゼプルよ」
「もちろん。魔王を失くしてくれるなら、願ったり叶ったりだもの」

魔性変革編　第五十七話　新しい同居人たち

まあ何とか体育祭も終了。俺達はちょっと疲れた体を引っ張りながら、一旦帰路についた。
「……ふぅ。なんていうか……こういうのもよかったのよね」
「そうねぇ。こういうの……いいわねぇ」
なんかカズヒ姉さんとリーネスが分かり合ってる感じなんだけど、何なんだこの空気は。
割って入れない。あの空気に介入できない。俺だってカズヒ姉さんと会話したいのに……っ
「ん……～っ。こういうのって教会育ちだとあんまし経験できねぇし、いい経験積ませてもらったぜ！」
「そうだねぇ。いやぁ、なんか皆でこうしてわいわい騒ぐのって楽しいねぇ」
「ですわね～。なんていうか、疲れてるのが楽しいって不思議な感じですの」
とまあ、アニルに乗っかる形でヒツギとヒマリがなんか独自でいい感じになってるし。
「大丈夫、イッセー？　……朱乃、イッセーに肩を貸すのは私にさせて頂戴」
「あら、抜け駆けはいけないわよリアス。……ってゼノヴィアちゃん、何時の間に!?」
「悪いな部長に副部長。こういうのがフィジカル担当の私がさせてもらう。あと隣は今回アーシアがするべきだな」
「はい！　私はイッセーさんとずっと一緒ですから！」
「う、うへへ……女の子がいっぱいでおっぱいいっぱい……」
イッセーはイッセーで、何日も意識不明だったのによくもまあ。

おっぱい堪能に全力向けすぎじゃないか？
「うんうん。主よ、アーシアさんとイッセー君に祝福あれ、アーメン！」
「あの、イリナ先輩。悪魔の方も多いので、この距離でお祈りは……もうちょっと自粛を」
「たぶん言っても無駄だと思うよ、ルーシア」
ルーシアと小猫ちゃん、イリナの奇行に微妙な距離感だな。
なんていうか、ちょっと油断してたら俺一人だけ疎外感があるんだけど。
なんか寂しくなったので、俺はちょっと家路に急いだ。
帰ったらクックスに頼んでなんか作ってもらおう。やけ食いだやけ食い。
そんな感じで俺は最初に玄関ドアを開け―
「ただいまー！」
「おかえりなさいませ」
『『『

ちょっとパニ食ってるな俺。自分でも支離滅裂気味だと思うぞコレ。
俺がそんな感じになっていると、カズヒ姉さんが肩をすくめながら一歩前に出てきた。
あの、なんで体育教師みたいな雰囲気を出してるんだ？
「来たようね。十数人とは多いと見るべきか少ないと見るべきか悩むけど、前を向こうとしている点は評価してあげるわ」
なんか上から目線気味なのはどういうことでしょうか。
俺やイッセーがちょっとたじろいでいると、メイドの一人が頷いた。
「……はい。色々考えましたけど、とりあえずしっかりお勤めを終わらせてから動くことにしました」
「そこからどうするかは、まだちょっと悩んでますけど」
メイド達の言ってることがよく分からない。
というか、どういう状況？
俺が置いてけぼりにされてる中、カズヒ姉さんは微笑みながらメイド達に頷いている。
「まあ、人生まだまだこれからだもの。結論を出すのはこれからでもいいわ。悪魔の子なら尚更よ」
……ん？
悪魔の子っていうと、つまりインガ姉ちゃんとか？
俺が首を傾げてると、イッセーが何かに気が付いたようだ。
というか、ゼノヴィアも何かに気づいたらしい。
ど、どうした？
「なあゼノヴィア。あの子ってもしかして―」
「ああ、確かディオドラの眷属だった女だ」
あ、そういえば。
インガ姉ちゃんに集中していたから思い出せなかったけど、確かにディオドラの眷属にこんな子がいたな。
ど、どういうことだ？
「部長にカズヒ姉さん。説明してくれません？」

もうさっさと聞こうと思って、俺は部長達に説明を求める。
部長もそろそろ種晴らしをする気になったみたいだ。
「和地は知ってると思うけど、ディオドラが眷属にしたり屋敷に囲っていた教会出身の女の子の社会復帰や更生は確定事項よ。ディオドラは本当にいろんな手段で引きずり込んでいたもの」
そういうと、リアス部長は盛大にため息をついた。
確かに。ディオドラの奴、かなりの数の教会の女の子の人生を踏み外させてきたらしいからな。人数が多すぎて眩暈がしそうになったよ俺は。
インガ姉ちゃんが把握している範囲内では全員保護できたみたいだった。やらかした子はきちんと罪を償ってから、やらかしてない子も心を癒して前を向いて生きれるようにしようという動きも、リーネス達が確定事項にしてくれた。
もちろん精神的な理由から、自分から隔離されることとかを望んでいる子も多いらしいけどな。
それでも、前を向こうとする人達もいる。インガ姉ちゃんも俺が何とか引っ張り上げたし、可能な限り責任を取るつもりだ。
で、なんでメイド？
俺の視線の意味を理解してくれてるみたいで、部長は苦笑気味に頷いた。
「三大勢力和平のコマーシャル活動もかねて、一部の子達の復帰支援と更生を兼ねて、リーネスやクックス達の補佐として、兵藤邸（この家）の家事手伝いをする子をディオドラの囲っていた子から選んだのよ。彼女達がそうなるわ」
あ～、なるほどぉ。
俺とイッセーは納得して、一回メイドさん達を見回した。
……うん。
「ムカつくけど、ディオドラの女を見る目は褒めるしかないな」
イッセーの納得するしかない意見に、俺も頷くしかなかった。
「全員もれなくキレイどころだしな。よく敵対勢力からこれだけピックアップできたよ」

あいつ、その能力とやる気をもっと別の形で発揮すればいいのに。
確か再起不能も同然で、冥界の警察病院的なところに叩き込まれてたんだっけか。一生出てこなくていいぞ。
「正直申し上げまして、この規模の邸宅の品格を保つ作業には人員が必須でしたので。元より地下にはこういった人員用の生活スペースも用意するよう要望しておりました」
と、そっとメリードが付け加えた。
準備がいいと言うか抜け目がないと言うか。
この様子だと、家事技能が高い連中は優先的に見繕ってるな。素質の在りそうなのも含めて探し出すのに手間取ったから数日経ったと。
メリード、恐ろしい奴……っ
「それとインガはＡＩＭＳ区画（別館の二階）を重点的に担当させます。お手付きにするのは構いませんが、業務に差支えの無い範囲にしてくださいませ、和地さま」
……本当に、恐ろしい奴……っ！
っていうかこのタイミングで言うか！　このタイミングで言うか！
ああもう、顔を赤くしたりにやにやしたりとで周囲が二分されてるし！
インガ姉ちゃんも顔真っ赤だし。たぶん俺も顔真っ赤だし！
「……殺意が。殺意が滾々と……っ」
「こんなところで殺意を燃やさないでください。あと人のこと言えませんよ？」
と、バイト帰りのシャルロットが、殺気を俺に向けているイッセーの後頭部に軽いチョップを入れてきた。
あ、バイトお疲れさん。
「お疲れ様でシャルロット様。それと皆様のティータイムの用意はできております。新米メイド（彼女達）の練習も兼ねているので、普段より質は落ちている可能性がありますが―」
「構わないわ。これから慣れていけばいいのだし、成長を楽しみ余裕もあるもの」

メリードにそう答えると、部長はにっこりとインガ姉ちゃん達に微笑んだ。
「前の主（ディオドラ）があれだったから不安かもしれないけれど、これからの生活で違うことを証明するわ。だから、毎日を笑顔で過ごせるように祈らせて頂戴」
その言葉に、メイドさん達がちょっとほっとしてたり戸惑ったりしてる。
まあ、前例が最悪すぎるだろうからな。これは仕方ない。
俺が何というか同情してると、ふとカズヒ姉さんがインガ姉ちゃんに向き合っていた。
俺の精神がめっちゃ複雑だった。
「……まあ、私としても和地に可愛い女の子がついてくれるのはありがたいわ」
カズヒ姉さん。それは要望に応えてくれてるからって意味なのか、その気がないからそのままくっつけという意味なのかどっちなんでしょうか？　凄く気になる。
そしてどっちになって俺は複雑になる。ガッテム。……いや、神様は既に死んでたな。
そんな中、インガ姉ちゃんは真っ直ぐにカズヒ姉さんを見据えて微笑んだ。
「うん。だけど……私も結構自信がないっていうか、不安になるから」
それは俺は男として魅力がないという意味か。それともカズヒ姉さんと一緒っていうのは問題があるという意味か。
更に俺の心が複雑になってきた。
「……」
あのすいません。無言で見つめ合わないでください。
心がきつい。これがモテる男の宿命だというのか!?
ええい、イッセーはよくこんなものを望んで頑張れるな！　ハーレム願望はフィクションで満たせばそれで十分だ。現実に持ち込んだらこうなるということがよく分かる。
俺がそんな感じで汗をかいていると、インガ姉ちゃんはカズヒ姉さ

んに微笑んだ。
「だから、私がここにいることが和地君にとって間違ってないって、証明してほしいかな？」
「……痛い所をつかれたわね」
すいません。これはマウント争いとかそういったのでしょうか!?
誰か、誰か会話に入って！　俺のこの精神的負担を減らしてくれぇ！
俺がちょっと呼吸が苦しくなっていると、カズヒ姉さんは苦笑しながら肩をすくめた。
「まあ、ハードルを越えた認定はしているわ。それに嫌いじゃないしむしろ好感度は高いのよ？」
「……そっか。じゃ、今はそういうことでね？」
俺は喜べばいいのか苦しめばいいのか……。
そんな時、俺の肩に手が置かれた。
振り返ると、額に青筋を浮かべたイッセーがにっこり微笑んでいる。
「九成、ちょっと屋上に行こうぜ。切れちまったよ」
「お前普段の日常を思い返せ」
普段からいちゃついたり鞘当されてるやつに言われたくねえよ。
殴り返してやろうかコンチクショー。
真剣に殴り方のイメージトレーニングをしている俺の隣で、メリードは咳ばらいを一つ。
「それと、今夜から収録を開始します。当番の方は時間なりましたら、別館の一階にお集まりを」
……あ、そうだった。
「ふふ。邪魔にならない範囲で見学してもいいかしら？」
「あ、私もそれ気になるから見る！　確か今日は第一弾ってことで、イッセーがメインだっけ。ヒマリもだよね？」
「そうですのー♪」
俺とイッセーは睨み合いをやめて顔を見合わせた。
「……俺、こっぱずかしいんだけど」

「案外やってみるとなれるぞ？」
なんでもう分かってるんだイッセー。

俺はこの時まだ知らなかった。
乳龍帝おっぱいドラゴンなどという、頭のおかしい題名の特撮が既に放送準備万全になっているだなんて……！

魔性変革編　第五十八話　決意の夜に

『ソーランソーラン♪』
「「ソーランソーラン！」」
という、ちょっと歴史ある感じのリズムに乗って踊る、赤い鎧に青と橙のプロテクター。
沖縄民謡だったかそんな感じだったソーラン節に乗って踊るのは――
「……実態を知って観ているとシュールな気がするじゃん」
「ふふ、でもちょっと面白いと思わない？」
厳正な決戦（じゃんけん）の末見学の権利を獲得した、ヒツギとリアス部長が言いたくなる気持ちも分かる。そんな俺とイッセーとヒマリである。
ちなみにイッセーが真ん中で、左右に俺とヒマリが並ぶ形だったりする。
表情が見えないのが救いだ。分かっているとはいえ、これを初回から真面目かつノリノリにやるのは結構きつい。
踊りには手抜きはしてないがな！
……そしてダンス終了と同時にそれぞれ装甲を解除。
「ふぃー。こういうダンスってやっぱ動きの分だけ疲れるな」
「なんでダンスの違いまで分かってますの？」
イッセーに首を傾げるヒマリに、俺はそっと手を置いた。
「覚えておけヒマリ。日本の学校には精神的な地獄ともいえる創作ダンスという科目があるんだ」
「そっちじゃないから。あと数日ぐらい経ったら教えるから」
え、違うの？
じゃあなんでだ？　ダンスの違いとかそんなレベルで把握できるようになる経験を高校生がするとか、それぐらいな気もするんだけど。
『……あと、数日しかないのかぁ』
あとドライグはなんで凹んでるんだ？
俺が首を傾げながら汗を拭いたり水分を取ったりしていると、部屋

に備え付けのデスクトップＰＣを操作したメリードが頷いた。
「無事撮影は完了いたしました。これでＹｏｕ○ｕｂｅチャンネル「トライフォース放送局」第一弾は無事投稿完了です」
……そう。これは某映像配信番組に載せるのだ。
登録チャンネル名はさっきもメリードが言ったトライフォース放送局。既に各勢力には三大勢力から通達済みであり、おそらく日付が変わる頃には多くの異形が見ているだろう。
このある意味とんでもない行動もまた、三大勢力による和平の広報活動の一環だ。
ある意味和平の象徴である、駒王町を担当するリアス・グレモリー眷属と、その同居組たるＡＩＭＳ第一部隊に聖ミカエル監察団。彼らが仲良くやっていることを示し、そして対外的に和平に対するコマーシャル活動じみた一環として、動画配信を生かすという提案がされた。そしてノリで各勢力のトップがＯＫした結果がこれだ。
この為に兵藤邸別館の一階は撮影ブースとなっている。更に男女混合で済んでいる為分けにくかった共同浴室を男女別で一階にまとめることで、撮影終了後のひと汗流すことも簡単になっている。
あと共同浴室はシャワーブースやサウナまで備え付けられている。無駄に豪華だと思う。
ちなみにこのダンスはその一環で、各勢力について知っている者達からすると見た瞬間に和平側にとって味方と思わせる為の仕込みを兼ねているらしい。
ちなみにこれだけで終わるわけがなく、ギャスパーが単独でのゲームプレイ配信を某音声読み上げソフトを使用。複数人プレイ可能なものは、野郎の交流も兼ねて俺・イッセー・アニルにゲームでめちゃ強い小猫ちゃんが参加する形で別途でやる予定。
それと顔が見えないようにしたコスプレなどで、ピアノやバイオリンの演奏をやったり、魔剣創造や聖剣創造を持っている組で創作物の剣を再現して殺陣をしたりする。クックスの協力をもって本日の一品的なものもしたりする予定だ。
……ちなみに、変な料理になる組はクックスの厳正な審査で弾かれ

ている。
　まあそんな感じで、今回は変身してダンスだ。イッセーは覇龍を何度も使った影響で、時間制限以内なら一旦解除しても最変身できるようになっているからいいが、できない状態でやるのはリスクがあったんじゃなかろうか。
　俺がそんなことを思っていると、撮影室の収納スペースにレフ板などの格納が完了する。
「メリードさん。お片付け終わりました」
　そう報告するのはインガ姉ちゃん。
　何故このタイミングでインガ姉ちゃんなのかとも思うけど、メリードがリーネスと視線を躱して頷いていたからそういうことなんだろう。
　……下世話っていうと思うんだけど。
　俺が何となく半目になっていると、メリードはこっちをちらりと見てからインガ姉ちゃんの方を向いた。
「では、インガの本日の業務は終了です。今から明日午前六時までは自由時間ですので、少しぐらいは気を緩めて起いてください」
「え、あ、はい……」
　そこでちらりと俺とインガ姉ちゃんの視線が合う。
　……き、気まずい。
「嫉妬の炎はよそで燃やしてやる。ありがたく思えよ」
「はーい。ヒマリは邪魔したらいけないからあっちいこうねー」
「む～。和地とインガの初夜、私もサポートしたかったですわ」
「多方面で余計な世話を焼いてくれるなぁもう！」
　むしろ一緒にいてくれ。というか、そんなこといきなりしないからね!?
　あ、何時の間にかメリードまでいない。
　え、えっと……男は度胸！
「インガ姉ちゃん、とりあえず……俺の部屋、行くか？」
「そ、そうだね！　うん、メイド用の生活ブースは共同空間多めでプライベートブースは狭いから！」

そんな感じで、俺とインガ姉ちゃんは俺の部屋で。
ちなみにドアのすぐ近くに「ちょっとぐらいは楽しい時間を過ごしなさい」と、お菓子とジュースの差し入れがあった。
この文字と文の感じはカズヒ姉さんだな。これまた余計な気をまわして来てやがる。
とりあえず持ち込んでから部屋に入り、俺達はジュースとお菓子でちょっとした駄弁りを始めた。
会話の種はグレモリー眷属や聖ミカエル監察団がらみだ。
「って、インガ姉ちゃん達もアニルの燻製食べたのか？」
「うん。本当に美味しいよね。イギリスってメシマズの印象があったけど変えた方がいいかも」
「そこはアニルが凄い可能性もあるしなぁ」
なんてことを駄弁っていると、ふと沈黙が続いた。
……なんというか、ちょっとこぉ、沈黙がキッツぃ。
ふとなんというか視線を逸らしていると、割と遅い時間にもなっているし、切り上げ時かもしれない。
そう思って視線を戻すと、なんかインガ姉ちゃんが顔を近づけていた。
「……えっと、ベッドイン？」
「……クスッ。今日はいいかな」
そう言いながら、インガ姉ちゃんは俺の隣に座りと、そっと寄り添った。
落ち着け落ち着け落ち着け俺。クールになれ、深呼吸だ。
冷静になろう。今この場の勢いで致すのはよくない。そこはしっかり気を付けないと、何をやらかすか分かったもんじゃない。
男の劣情はそういう判断とか責任問題をぶん投げて飛んでいくからな。いざという時は腹を掻っ捌くぐらいの覚悟を持て望まねば。
「……和地くん」
俺のドギマギとしている心境を知ってか知らずか、インガ姉ちゃんはどこか遠くを見るような目で、窓の外を見ていた。
……自然と、俺も落ち着いたというか真剣になる。

これはきっと、真面目な話だ。そしてそれは、彼女を強引に引っ張り上げた俺がきちんと聞かなければいけない。それが責任ということだ。

だから、そのまま黙ってしまったインガ姉ちゃんの肩を抱く。

正直に言うと、まだちょっと迷ってるところはある。カズヒ姉さんが好きだから他の子に愛されるとか、抵抗がないと言えば嘘になる。

だけど、自分の意思で引きずり出したことに対する責任は取ろう。

少なくともそこは取る。いつか俺が手を引かなくても、インガ姉ちゃんが歩けるようになる算段は整える。その上でインガ姉ちゃんが俺と一緒にいると決めたのなら、その時は誠実に対応する。

静かに呼吸を整えながら、俺はインガ姉ちゃんの言葉を待った。

「……いつか、お母さんやお父さんに謝りに行きたいんだ。でもちょっと……凄く怖いから、一緒に来てくれないかな？」

……そうだよな。

折角、まだ両親が生きているんだ。俺とは違うんだ。

拒絶されるかもしれない。だけど、それを自分でしようっていうのなら―

「分かった。その時は一緒に行くさ」

―無言で涙を流すインガ姉ちゃんを宥めるのに時間がかかって、ちょっと寝坊したのは此処だけの話だったりする。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……いっそのことこのままで来てくれたらって思ったりはするわ

ね」
「そうねぇ。そう言いたくなるでしょうねぇ」
「ま、その方が都合いいのかな？」
「ゴメン。ちょっと鶴羽の気持ちを考えてなかったわ。まとめて貰われちゃいなさい」
「……えっと、その気遣いは変な方向っていうか、カズヒこそもうちょっとその、貰われちゃったら？」
「ねえリーネス。再会した次の日から鶴羽っておかしくない？　この中だと一番昔と変わらない印象なんだけど」
「仕方ないんじゃない？　二十年弱もあれば、何かしら変わるわよぉ」
「一番変わらなさそうな堕天使が変わってると、説得力が違うわね」
「でもまぁ、これからもこれからで忙しくなりそうよぉ」
「知ってる知ってる。どの勢力でも和平反対派に人が流れてるんでしょ？　カズヒはダーティジョブ担当としてどこまで知ってるの？」
「最近すっかり表側に移行してるから、リーネスよりは知らないわね。最も、特に活発に動いている奴は知ってるけど」
「マジで？　やっぱ暗部の伝手って奴？」
「ええ。暗部側でアースガルズに睨みを利かせていたメンバーが、気になる情報をね」
「……あそこって、かなり早い段階で和平を結んでいたはずだけどぉ？」
「一神話規模ともなれば一枚岩じゃないってことよ。……特に、筆頭格がちょっと洒落にならないしね」
「え、なにそれ。今更単独で神々の黄昏（ラグナロク）とか起こされても困るんだけど？　アース神族とか巨人族とか？」
「もっと酷いのよ。……アースガルズにおいて主神オーディンや戦神トールに並ぶ有名どころ、悪神ロキが反対派を抱え込んで反対運動に動いてるって」
「あぁ～。それは困ったわねぇ」
「マジで勘弁してよ～。あのレベルの神が動いたら、折角結ばれた和平がポシャりかねないじゃない！」

「ええ、だからこっちも備えるだけ備えときたいわ。……リーネス、鶴羽」

「ちょっと本腰入れて神対策を整えるわよ。二人とも、手を貸してもらうから覚悟して」

魔性変革編　幕間　変態達と救済者と悪の敵が疲れた一日

和地Ｓｉｄｅ

ある日の放課後、俺は松田や元浜、そして桐生と駄弁っていた。
珍しい組み合わせだけど、俺もイッセー達だけでなく学園内の人間とそれなりに仲良くやっていこうという考えはあるのだよ。
なんで、クラスメイトと機会があればこうして駄弁る時間はあるにはあったりする。
まあ今回はちょっと違うんだけどな。
「……いいから早く帰れよ。なんで早く終わったのか忘れるな」
「分かっている。分かっているが……っ」
「俺達、そろそろ限界なんだ……っ」
ちょっと頬がこけている元浜に頷きながら、目が虚ろな松田もよろよろと一緒にちょっと離れたところの商店街を歩いている。
それはもはや幽鬼のようなって感じだ。本当ならすぐにでも声をかけて、最悪の場合は救急車を呼んだ方がいいレベルの弱りっぷりだろう。
そんな二人は、それでもほしいものがあるから頑張っている。むしろほしいものが手に入らないと、更にヤバいことになる。そんなレベルで心身ともに追い詰められていた。
なので、俺もあるヤバい情報を掴みながらもついて言っている。というか、護衛している。
「……エロ不足で禁断症状とか、兵藤も大概だけどあんたらも大概よね～」
桐生の言う通りの代物なのがあれだけどな！

カズヒ姉さんがその身を餌にしてまで誘導したことで、この二人は変態行動を我慢し、人目もある程度は気にしてくれるようになっていた。だが同時に、イッセー程じゃないけど別の意味での奇行も目立っている。

我慢しきれずつい覗きをしようと夢遊病状態になり、ぎりぎりで気づいて流血するまで額を壁に打ち付けることは日常茶飯事。

奇声を思わず上げたり、肉体の疲労で発散しようといきなり全力疾走をしたり、ぶつぶつと自分を戒める言葉を十分以上呟いたり、とにかくこれまた怖い。

イッセー程の色欲じゃないからこの程度で済んでいるようだけど、これもう病気だろう。医者に行け。

まあ、自ら誘導したカズヒ姉さんがそれとなく見守ってたりしていることもあって、最近では「むしろこのざまでよく覗き止まりだった」というのが学園内の共通見解。同情しすぎてお茶を差し入れする女子が多発している始末だったりする。

まあそんなわけで、もう我慢の限界らしく新作のエロゲを買いに行かせることは仕方ないと俺達も判断している。

イッセーはそこすら我慢しているからか、いまだに発作が数日に一回は起きている。実は初っ端の時は多いと一日数回だったらしい。あいつ本当に病的な変態だな。

とはいえ今回、カズヒ姉さんは動けない為俺がこうして付き添いをして、面白がった桐生もついてきているわけだ。

とはいえこのままだとまずいな。

二人には悪いが、気合を入れ直して速足になって貰わないと困るから、俺は咳ばらいをした。

「もうちょっと頑張ってくれ。ここ最近、やばい連中が関東を中心に活動しているのは知ってるだろ？　しかも駒王町が範囲に入っている広範囲でやらかしているから、緊急事態で部活動どころか午後の授業まで中止になってんだぞ？」

そう、そんな非常事態に我慢の限界に達しててしまったのだ、こいつらは。

今駒王町を含めた関東地方に入る円形の地域に、プログライズキーを保有したヤバい組織が活動を活発化させている。それも、一つではなく二つの組織。とどめに不倶戴天の方針を掲げている。

その所為でどっちかが活発にな所為で一気に激化しており、組織同士での殺し合いも勃発。カズヒ姉さんやヒマリ達は、相手がプログライズキーということで駆り出された。俺も狩りだされるはずだったが、片方の方針的に一人残って松田と元浜をカバーした方がいいということで、じゃんけんの末俺が貧乏くじだ。

その二つの組織の名を、桐生が思い出した。

「夫従妻隷会（ふじゅうさいれいかい）と月女神（アルテミス・ジャッジメント）の鉄槌だっけ？　またいろんな意味で凄いわね」

「どっちも女性主体ってのが更に凄いな。特に前者の方」

俺がため息をつく気持ちを分かってほしい。

夫従妻隷会は「妻は夫の奴隷として付き従い、夫は妻を奴隷としてしっかり躾けて酷使するのが正しい夫婦の姿」とする、女性中心の組織だ。

……この時点でイカれてると思った人は、たぶん精神的にまともだと思う。あとこいつら、ＤＶとかで夫を訴えたり義憤で妻を庇う行動をしている夫側の家族を「邪悪の権化」として、薬物叩き込んで廃人にして徹底的に吸い尽くすという所業を何度もやっているとか。あとメンバーにネットワークに詳しい奴がいて、世界的にメンバーが増えているとも聞いている。

月女神の鉄槌はまだ分かり易い。性犯罪被害者の集まりがプログライズキーで過激化したもので、「性犯罪者は皆死刑が原則であるべき」として、その手の前科者を探し出してミンチにして家畜の餌にするような真似をマジでやってる組織だ。

賛同者な上餌代を浮かしたくて積極的協力をしていた畜産業者が捕まった結果、そんなことを本当にしている組織があることが発覚。向こうも摘発されたことで更に過激化しており、刑務所を襲撃して殺そうとすることまであるらしい。あとこっちもその手の被害者ネットワークから過激化する形で国際展開している。

……お判りいただけただろうか。そりゃ松田と元浜に護衛をつけるべきである。
それぐらいの身内びいきはさせてほしい。あとカズヒ姉さんは正義の味方で悪の敵らしく「過剰報復は基本的に悪行」である為、むしろ月女神の鉄槌の方に注力している。
このタイミングで我慢の限界が来ているってのも大変だが、流石に同情する。
「くそ……、でもここで買わないと、もう俺達限界だ」
「エロが、エロが足りねぇ……。どうか、俺達に命の水を……果実を……っ」
絶対にこんなのを見たらブチギレるよなぁ。月女神の鉄槌には特に警戒しないと。
俺はすぐにショットライザーを装着できるよう備えながら、周囲を警戒する。
こいつらホント、下手したら死んでてもおかしくないような報復を毎度毎度受けてるんだから。警察に逮捕されるにしてもそっちもきちんと問題にするべきだし、私刑で殺されるのはちょっとなぁ。
「でもまあ。このレベルの変態なんて普通見れないし、はたから見てる分には面白いわね」
「お前のそのスタンスもヤバいからな？　あいつら、性犯罪者を庇う女性を「売国奴ならぬ売性奴」として殺してるからな？」
桐生にそう警告するけど、本当に過激派すぎる。
「とにかく急ぐぞ。買い終わったらさっさと帰るが、一人ずつ送るからそこは我慢しろよ？　俺がカバーしきれない」
桐生ももうちょっと当事者意識を持ってほしい。あの手の潔癖症はむしろ自分達側の連中に同じレベルの潔癖を求めるんだから……さぁ？
まあ殺気を感じないところから考えて、周囲百メートル以内は大丈夫っぽいけどな。
あいつらなんだかんだで遠距離狙撃じゃなくて白兵戦でばっかりレイダーを使うからな。殺気さえ感じないなら……いや油断はいか

んな。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

その油断は極めて正しかった。
そして同時に、考えうる限り最悪の事態が起きていた。
「……お前達が来るとはな。女を汚す邪悪の権化が」
「こっちの台詞だ。女の真なる悦びを拒絶する悪鬼め」
睨み合う者達はそれぞれがレジスティングアントレイダーを装着していたが、それぞれの正面に立つ者は別のレイダーを装着していた。
片方の集団はスカウティングパンダレイダー。それを妨害する集団はクラッシングバッファローレイダー。
狙撃を行おうとする者と、それを阻害しようとする者達の睨み合いになっていた。
狙撃を敢行しようとする者が月女神の鉄槌、それを妨害する者が夫従妻隷会という分かり易い構図だった。
ちなみにそこから北に５００ｍほど行った先に和地達がいる。和地の警戒意識の範囲外に運よく陣取っていた月女神の鉄槌だが、偶々夫従妻隷会に発見されて狙撃に失敗している状況だった。
そんな睨み合いの環境に、更なる役者が舞い降りた。
『Ｂｕｒｓｔ』
「変身！」
その言葉に誰もが警戒したその時、ライオンの姿をしたライダモデ

ルが周囲を引っ掻き回す。
直後ビル壁を文字通り駆け上がって乱入した女が、そのライダモデルに組み付かれ、そして装甲を身に纏う。
『ダイナマイティングライオン！』
濃いピンクの装甲を見に纏うのは、レイダーよりも薄い装甲を纏った外観の、複眼を持つ戦士。
『Ａ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　ｅｘｐｌｏｓｉｖｅ　ｆｏｒｃｅ　ｌｉｋｅ　ｆｉｒｅｗｏｒｋｓ』
『ｂｌｅａｋ　ｄｏｗｎ』
「そこまでしてくれないかしら？　最も、どっちにしても捕まえるのは確定だけれどね」
舞い降りたのは仮面ライダー道間、ダイナマイティングライオン。
試験もかねて装着したカズヒは、仮面越しに半目を敵に向けた。
「私からすればどっちも狂人集団なのよ。あほなことしてないで法改正の為に政治家でも目指してから出直してきなさい」
本当に改正されたらどうかとも思うことを言うが、カズヒとしても多少苛立っているので仕方がない。
寄りにもよってターゲットが松田と元浜だということに気づいているからこそ、カズヒは内心で舌打ちする他ない。
「あの二人は、あれでも一気に改善されてるし、それ以前の行動はむしろ報復の方が問題がある始末よ？　更に私刑をするっていうなら、容赦はしない」
「その通りだ！　男とは彼らのように女性を下卑た視線で見るべきもの！　そんなことも分からない馬鹿がっはぁあああああ!?」
便乗した夫従妻隷（馬鹿）には両腕に装着された連装グレネードランチャーで吹き飛ばしながら、カズヒは軽くため息をつく。
「あんたらはあんたらで世界のＤＶ被害者に土下座しなさい。とりあえず戯言は取調室で吐いて頂戴」
そう告げながら、カズヒは今回のプログライズキーの調子を確認する。
良くも悪くもカズヒを魔星にすることに特化しているハウリング

ホッパーより、基本性能では確実に高い。また両手のグレネードランチャーの火力は、魔術回路が決して高性能とは言えない彼女からすれば立派なダメージソースになる。
これならばやりようはあると確信しつつ、カズヒは体内時計でまだあと五分は必要だと悟り、誤差を考慮した範囲でどうやって時間を稼ぐかを考慮している。
堕天使側の助力で警察や自衛隊に提供されているバトルレイダー部隊到着まで、あと早く見積もって五分。誤差があることを踏まえると体感で七分は欲しい。
流石にこの数のレイダーを相手どるとなると、三つ巴の戦いになることを踏まえても厄介だ。
上手く相手同士をぶつけ合わせても、相当に疲れると思った時、ふと気づいた。
「そこまでにしろ！」
更なる者達が乱入した。
というか、この場において最も異端と言える集団だ。
ＳＦ作品に出てきそうな、プロペラとかがないのに浮いているタイヤの無い車。そんな風に形容できるが数台舞い降り、中から武装した集団を下ろしていく。
ここに来て更なる勢力による四つ巴。ややこしいことになった事に、誰もが気付いた。
だが、新たなる乱入者は殺意を向けず、女性達が手を前に出した。
「無益な争いはよくない。私達はまず、何が一番大切かを知るべきよ！」
そんな一見すると常識的な対応を取った集団だが、然しそこからがまずかった。
四割ほどのメンバーが男女問わずいきなり下半身を裸にすると尻を突き出す。
それ以外のメンバーが自分の正気を疑う中、彼らは誇らしげに言い切った。
「情欲の目で見られることは男女問わぬ祝福だ！　さあ、この麗しの

臀部を持つ者達を見て心のささくれを癒すがいい！」
……五秒、空白が生まれた。
『スカウティングボライド』
『クラッシングボライド』
『『『

「全然大丈夫じゃないわ。実は今日、精神的にめちゃくちゃ疲れた。ダンスでもすれば気がまぎれるかとも思ったけど、気が紛れて逆に色々限界になったわ……」
うわぁ、背中がすすけてるって言葉がこれほど似合う姿、俺は見たことねえよ。
表情もなんていうか虚ろだし、変身の時にかかる負担とか完全無視で、メンタルの疲労でこうなってる。
「大丈夫ぅ？　今日、色々とあったみたいだけれどぉ」
リーネスがそう言いながら屈み込むと、カズヒはガバッとリーネスに抱き着いた。
ちょっと驚いたリーネスがぽんぽんとあやすと、カズヒはそのままリーネスの胸に顔を埋める。
カズヒは胸を削っているからこういう時に悪影響がない。そしてリーネスはおっぱい大きいから、むにゅんとなってる。
くそがぁあああああ！　シャルロットに顔向けできないけど羨ましくは感じるんだよぉおおおおおお！　おっぱいおっぱいおっぱいぱぁあああああい！
俺がもだえてるのを完全無視で、カズヒはカズヒでプルプル震えてるし。
「いくら必要悪だからって、メンタルに限界は存在するのよ。更生する気満々の犯罪者だって、メンタルの限界値に個人差はあるのよ。……あれは流石にＳＡＮ値が限界……っ」
「よしよし。大変だったわねぇ」
もう泣きそうなレベルのカズヒの背中をなでながら、リーネスもちょっと困ったような笑顔だった。
まあ、気持ちはちょっと分かる。
性犯罪者全員皆殺しをモットーとする連中を警戒してたら、小競り合いを繰り広げていたＤＶ夫こそ男女関係の至高とする連中が出てきて、とどめに謎の変態集団が男女関係なく生尻で説得を試みたとか、何の悪夢？
俺でもそれで女の子のお尻に集中できるか自信ねえよ。カズヒは

別にそういった方向性ないし、尚更冷静に諸共ぶっ飛ばす判断できたのがすげえよ。
でもまあ、位置の関係で変態集団には逃げられたらしいけど。
一番動きに練度があったっていうし、一体全体どういうことなんだか。あとアザゼル先生があほやらかした日に出てきた露出狂製造軍団と似てるような気もするから、尚更なんていうか……なぁ？
しかも松田と元浜が狙撃されかかったっていうし、九成も気配の察知外だから迎撃が間に合ったか怪しい話みたいだしなぁ。
あ、九成は松田と元浜とついていった桐生を家に送ってるからまだ来てない。今回はダンスの練習だったから来なくてもいいので、ヒマリもまだ協力している最中だ。
松田と元浜はグロッキーすぎて、エログッズを買った後に二時間ほど休憩したからそんな感じだ。心身の不調がテンションアップについていけなかったとか。休憩場所代わりのカラオケボックス代は後で返済してもらうとかメールで書いてた。
「二人を助けてくれてありがとな。今度纏まったお金が入りそうだし、なんか奢るよ」
「素直に甘えるわ。……音だけ聞くっていうなら聞かせてあげるから、バイブ買ってくれてもいいのよ？　高いの」
「……もうちょっと女の尊厳を守れる借りの返し方をしたらぁ？」
リーネスに同感。いやちょっと聞きたいけどマジで聞きたいけど聞きたいというしかないけど。それはそれとしてお前それはどうよ？
精神的にかなり追い詰められてる妄言ってことにしとこう。
あ、護衛をしてくれてた九成にもなんか奢った方がいいよな。
「というかぁ、まとまったお金って何が入るのぉ？　旧魔王派の討伐とかならカズヒや和地にもだと思うけれどぉ」
リーネスが首を傾げるけど、そういえば言ってなかったっけ。
……確か明日放送だし、言ってもいいかな？
「明日の朝、悪魔側のテレビで新番組があるんだよ。それ見たら分かると思うぜ？」

これぐらいなら大丈夫だろ。

明日、乳龍帝おっぱいドラゴン放送開始！

いや、この題名色々と問題ありまくりだよな、冗談抜きで。

第二章　なかがき

導入から原作より横に広くなった兵藤邸。これは人員が増えることを既に想定している上、あまり高くすると日照権的に引っかかるかなぁというメタな要素もあります。

既にこの段階で、天界・教会側のオリジナル増員も追加することを考慮していたはずです。そして堕天使側からは和地達が来るので、とにかく体積を増やしておくに越したことはないですからね。

そんな導入部から早いタイミングで投入された、ヴィール・アガレス、イシロ・グラシャラボラス、フロンズ・フィーニクス、ノア・ベリアル。

この段階である程度顔見世をした方がいい連中主体で構成されております。三者三葉で重要ですが、大別すると二種に分けれますね。

まずはイシロ・グラシャラボラスことミザリ一派及びヴィール・アガレス。なるべく早い段階でオリ敵集団の中核を顔見世しておいた方がいいですからね。またミザリはカズヒやリーネスと因縁が互いに知らないけどありまくり、ヴィールも眷属関係で和地と因縁ができる関係です。

そしてフロンズとノアは自分が持つD×D原作に対する小さな不満点である「大王派側の強敵が少ない」という点をカバーした形です。そして政において辣腕を振るうフロンズ及び、その補佐として戦術を担当するノアのタッグとして動いております。

また、フロンズにやらせた感じでソーナの夢関連でも立ち回ってますね。彼はあくまで自分の目的を生かす為にソーナに便乗し半ば乗っ取っていますが、実際これぐらいの手法でもないと、古い悪魔の連中を納得させることは困難でしょう。サーゼクス達四大魔王でも即座にどうにかできることでない以上、相当の立ち回りは必須だと、

この場面は毎度思っておりましたので。
……いや本当に、この辺りをなんというか雑に解決した作品が多いのはどうにかならないのか。原作においてもこの段階でよく見る展開にすると、まず間違いなく大王派が更に余計な横槍を入れる程度で御の字、最悪は主に責任追及まで及ぶ形で処刑とかがありえそうなのですが。

そして特訓期間中に、和地周りのサブヒロイン列で伏線を回収しつつ対テロ戦。
この作品は設計コンセプト上、原作では出てこないような連中が力を手にした勢いで暴れたりするところも入れたかった。その上で彼のヒロイン候補となりえる少女達も姿を見せるという手法をとっております。
この段階でサブヒロインの設計は、紆余曲折あって五人程用意しました。これはカズヒの魔術適性である五大属性にあやかっており、それぞれ一つずつ対応させるよう設計しております。

そして会合でテロが発生し、和地はガルアルエル姉妹と戦闘。姉のアーネはフロンズと何やら怪しい話をしている幸香の直属であり、要は後継私掠船団の幹部です。
後程明かしますが幸香はかなり重要なポジションであり、その為後継私掠船団の幹部クラスも、和地のヒロインと対を成す態勢にしたいところでやっておりました。
なのでまぁ想定できている方も多いでしょうが、ベルナはヒロイン

ポジションです。後継私掠船団と決着をつける時は、姉妹対決になる流れを想定しており、小さなすれ違いも見えるかもしれないレベルで匂わせたりしてますね。

そして和地、痛恨のミス（笑

もうこの際ぶっちゃけますが、ヒツギはヒマリの相方ポジ二号といった形で設計しており、二人は対になる状態です。その為ある意味で和地といたさせたわけですが、この所為でリーネスが大ダメージしたのも伏線です。

彼女はこの段階において、一人だけ裏事情に最も迫っている人物です。その為人に言えない事情で大ダメージを受ける方向性になっておりますね、ハイ。

そしてホーリー編に突入し、新キャラも続々加入。

アニルとルーシアは基本的には「才覚面はそこそこ止まり」といった感じです。フリードレベルで優秀ですが、ずば抜けた神器の才覚があるわけでもない。アニルはまだペンドラゴン家由来でそれなりですが、ルーシアはしっかり者の精神面担当に近いところがあります。

そして登場、南空鶴羽。今後もポンコツ的側面を見せていく彼女ですが、彼女が来たことでリーネスは心労を分かち合う仲間が出来ました。カズヒには言えないことも、彼女には言える関係です。もっともこれは信用の差ではなくカズヒの精神面に配慮したものと言っておきます。

そしてカズヒにより、変態達が（ある程度）矯正。現在進行形で心を痛めつつも真っ当な人達に合わせて活動しております。
まぁかなり言いたいことを言わせましたが、集団リンチも立派な犯罪です。相手が悪人なら法律を破っていいという理由はありません、はい。その辺りはしっかりと指摘したい。
そしてそんなカズヒにそれとなく配慮するリーネスと鶴羽。一人が二人に増えたところで、色々ありすぎる秘密案件はうかつに語れないので大変といったところですね。

そしてそんなところから、シリアスな展開も多数発生。
先述しましたが、フロンズとノア達若手大王派の二人は、戦力という観点ではのちの若手四王より劣ります。少なくとも現状では劣ります。
しかしだからこその一手でノアがサイラオーグを下し、フロンズははなから投げ捨ててコマーシャル活動として行う。ノアのサイラオーグがこれまで積み上げてきた高みを逆手に取った戦術的攻略も、フロンズの眷属やレーティングゲームに重きを置かない手腕も、若手四王と比較すると異質に見える強みです。
彼らは基本的に政敵なので、冥界全体のことを踏まえればイッセー達と歩調もかなり合わせてくれます。ですがそこに油断をすると、足元をすくわれかねないリスキーな集団。ある意味でライバル組織ともいえる連中です。

そしてレーティングゲームを利用した戦いですが、事前にカズヒが

警戒しまくっていたこともあり、ディオドラはいきなり大ピンチ寸前。

アーシアからは投げられる。フロンズ達によって数の圧殺も困難。この時点でアルケードがいなければ撃破されていたことでしょう。

アルケードはもうこの時点でめっちゃ強い。間違いなく強い。これまで何度も出したいと思って抱けなかったプランであり、かなり持っています。

具体的には、特定条件下ならD×D状態の二天龍よりも戦果を挙げられる系の化け物です。この段階でガチバトルが無くて安全の極みですね。

そしてそんなアルケードの登場に合わせ、ヴィール・アガレス・サタンが決起。もうこの時点で規模がやばいことになってますが、王の駒の存在を知ってからこういうパターンの敵も出したかったりしまして。この段階ではもっとガンギマリ系狂人メンタルだったのですが、後々書いていくにしたがって常識を知っているキャラとなっていくのでお楽しみに。

そしてどこもかしこもヤバいことに。

ミザリ・ルシファーはアドルフ・ヒトラーのデミ・サーヴァントとして大暴れ。私はオリジナル設定としてまず出さないだろうアドルフ・ヒトラーを盛りに盛ってますが、この作品群では更に盛られています。悪夢ですね。

更にフリードも中ボスレベルの戦闘能力をサイボーグ化することで登場。サイボーグによるマギアは何度か出したかったので、原作キャラのフリードを魔改造しました。

そしてそこかしこで戦闘も勃発。インガは和地と激突し、春奈もサイラオーグと真っ向勝負しています。

もう分かっている方も多いでしょうが、この二人は和地ヒロインで

すからね。後々助け出すことも含め、和地が主人公します。
そしてディオドラも星を開帳。真っ向から戦えばグレモリー眷属でもタイマンで勝てるやつはいますが、イッセーとゼノヴィアが二人揃っている状態では相性でごり押し可能という厄介案件。
そして、そこで頑張るカズヒ・シチャースチエ。光狂いなだけあり、トチ狂った星を使って逆に蹂躙。イッセー達も頑張ってフルボッコ。
和地も和地で派生フォームでインガを何とか攻略。有言実行で強引に引っ張り上げ、インガをヒロインに入れてしまいました。

そんなことが続く中、本章最終決戦は旧魔王はトップ三人衆。ここで和地ヒロインとして設計しているのが分かっておられるだろうリヴァも参戦です。
これまた彼女も和地ヒロイン。もうこの章で第一部に設計した和地ヒロインは全員登場しておりますね。
そしてそんな流れで激戦開始。イッセー&シャルロットのコンビがシャルバを抑えている間に残りを和地達が倒し、一気に撃破という流れになりました。

そしてそんなことが起きながら、色々とあったりするわけで。
カズヒ周りについて大きな要素であり、道間誠明ことミザリ・ルシファー。彼はこの作品においては第一部の最も大きな山。極晃に至り和地達に立ち塞がる存在にするつもりで作っておりますと言えば、ヤバさも少しは伝わるかな？

そんな戦いが終われば、次章が幕開ける。
コンセプトとしては劇場版。禍の団が基本のこの時期に、禍の団が碌に関わってないラグナロク編を一章でまとめる特別仕様でございます。
では、次のなかがきをご期待していただけると幸いです。

第三章　神威動乱編
神威動乱編　第一話　乳龍帝おっぱいドラゴン

和地Ｓｉｄｅ

『おっぱいドラゴン、はっじまっるよ～♪』
『『『

「なんていうか、その……殴り込みに行くなら手伝うわよ？」
三大勢力のトップ相手に殴り込みとか言わないで。カズヒ姉さんクラスだとガチで負傷させれるから。いろんな意味で洒落にならないから。
あとカズヒ姉さん、ちょっと目がマジじゃないか？　マジで辞めてくれよこんなことでテロまがいなこととか！
あとリアス部長は何か言ってください。無言やめて。マジでやりそうで怖い。
「それなら最大の悪たる先生だけを狙うべきですよの？」
ヒマリも煽るな！
いや、確かにそうだけど。問題あるの歌詞だけど。でもダンス振り付けもかなり歌詞に則ってるから。それをやるとセラフォルー様もやるべきなきがするからやめて。
真剣に俺は止めるべきか考えるけど、それより先にリアス部長がため息をついた。
盛大に顔を両手で隠しながら腰を折り、本気で俯いている。
「冥界に、冥界に顔を出せないわ……」
「しっかりしてくださいリアスさん。深呼吸です、深呼吸」
シャルロットが思わず介抱するけど、そういう問題なのか？
俺がちょっと首を傾げてると、テレビを見ていたイリナがなんかテンションを上げていた。
「うん。イッセー君がやってるヒーロー番組とか、見てると昔やったヒーローごっこを思い出しちゃうわ」
なんてポーズをとっているけど、君も楽しそうだね。
「じゃあいっそのこと出演依頼とかどっスか？　幼馴染でミカエル様のA（エース）が参加とか、三大勢力和平のいい宣伝にもなって良さそうっすけど」
アニルがそんなことを言うけど、確かにそれはありえそうだな。
……いや待て。そうなるとやっぱり堕天使側からもメンバーを出すことになりそうだぞ？
そうなると誰が出るんだ？　やっぱりオカ研絡みのメンバーにな

りそうだけど。
俺はちらりとヒマリを見ると、両手を握りながらバトルシーンに目を輝かせていた。
……よし。いざそうなったらヒマリに振ろう。俺は流石にちょっと恥ずかしい。
トライフォース放送局のダンシングもちょっと恥ずかしいんだ。ガチの特撮デビューとか、流石に御免被りたい。
「でも一緒にヒーローごっこしたイリナが、こんな可愛い子になってるとか思いもよらないよなぁ」
「え、えええええ!?　い、イッセー君ったら何を言ってるのよ!?　これが悪魔のゆ、ゆゆゆ誘惑なのね!?」
「お、ミカエルのAが堕天使になるとか幸先がいいな。嬢ちゃん、今なら待遇は応相談ですぜ？」
……なんかラブコメが始まって先生が茶々を入れてるけど、辞めたげてください。
転生したての転生天使、それも天使長ミカエル様のAがこんな短時間で堕天使になるとか、別の意味で風聞が悪いから。
俺がちょっと不安に思っていると、ヒマリはヒマリで戦闘シーンに夢中になりはじめた。
手が動いてこっちに当たりそうなので、そっと距離を取っておく。
「ふぉーっ！　かっこいいですの！　あ、そこ危ない！」
……すいません。幼稚園とか小学校の男の子ですかアンタ。
周りも微笑ましいやら苦笑しているやら、なんというか本割とした雰囲気だったりしている。
もう目がキラキラしているヒマリは、なんか急にイッセーに振り返った！
「ラクシュミーも参加できませんの!?　ほら、ヒーローっぽいですからいけますのよ！」
「え!?　いや、俺に言われても……」
イッセーにいきなりそんなこと言うなよ。
そもそもそういうのは運営側に言うべきものだし、イッセーはあく

まで主人公のモデルだし。
まあ、イッセーが直接言えば可能だとは思うけどさ。そういう我儘を通させると、製作スタッフ側に悪いだろう。
そんな感じで俺が止めようとしたら、なんかアザゼル先生が真剣に考えこみ始めた。
……何を考えている、何を。
「案外いけるんじゃねえか？　ほれ、トライフォース放送局でも一緒に踊ってるし」
「うぇっ!?」
思わずカズヒ姉さんと俺は面食らった。
この流れだと、俺とカズヒ姉さんもおっぱいおっぱい言ってるヒーロー番組に出ることになるんじゃないか？
「待って。アザゼル先生待って頂戴。私はその……子供のヒーローとかには向いてないわよ？　暗部出身だから……こぉ……Ｖシネマ的なのが限界だと……」
カズヒ姉さんもそれでいいのか!?
あ、ヒマリの目が期待でキラキラしている。これまずい！
「ぜひお願いしますの！　というか、何なら特別編とかで私のおっぱいを使ってもいいですのよ？」
「……ふっはっ」
そのヒマリのトンデモ発言に、イッセーが痙攣して倒れた。
「ちょ、イッセー!?　いい加減その痙攣癖を治してください。どれだけおっぱいに飢えてるんですか！」
シャルロットが慌てて介抱するけど、ぶっちゃけそろそろ飽きてきそうだ。
……なんでも酷い時は一日に何度も痙攣していたらしい。最近は長ければ数日に一回程度だし、成長はしているのか？
どんだけこいつはおっぱいを欲しているんだろう。何かの精神障害じゃなかろうか。
俺が真剣に病院を探そうかと思い始めていると、リアス部長はそっとイッセーを抱き寄せておっぱいに沈めていた。

「イッセーも頑張っているのね。大丈夫、どうしても欲しい時は私の胸を貸してあげるわ」
「リアスさん、そういう解決方法じゃダメな気がします」
シャルロットが苦笑いをする気持ちも分からなくはない。
だがしかし。ここは普通とは違うオカ研の集まりでもある。そこで終わるはずがない。
「ずるいですお姉さま！　私だっておっぱいはあるんです！」
と、アーシアが黙ってられないと言わんばかりに、空いている方のイッセーの頬に自分の胸を押し付ける。
この時点でだいぶあれだけど、そこで終わるような状況では断じてない。
「あらあら。いつもいつも二人ばっかりだなんてさせませんわ。ほぉらおっぱいですわよ？」
と、朱乃さんがイッセーの顔を真正面からパフパフ。
「待ってくれ部長にアーシアに副部長！　たまには私のおっぱいも使わせるべきではないか？　子作りだってしたいんだぞ！」
と、ゼノヴィアがイッセーの奪取を試みる。
……俺はちょっと沈黙しながら見てたけど、ふと近くにいたアニルと視線が合った。
お互いに黙って見つめ合い、ふと頷き合う。
「正直ちょっと、男として羨ましくなるッスね」
「男ってこういう時、どうしようもない奴だもんな」
信徒とか事実上の彼女持ちとしてどうかと言われそうだけど、男とはそういう生き物だから仕方がない。
所詮男と女は違う生き物。恋愛においても、男は支配欲で女は独占欲とか言われてるしな。ハーレム願望は大抵の男が一度は持つものだよ。
ましてあの美少女軍団相手のおっぱい祭りとか、興味を惹かれるなってのが無理だと思いませんか？
いや、俺はいったい誰に言っているんだろうか。
女子率高い上に、イッセー相手にこの鞘当だからなぁ。ぶっちゃけ

俺達、メンタルが結構削れてる気がする。
「……見損ないそうなんですけど」
後ろの小猫ちゃんの冷たい目が痛い。
ただそんな小猫ちゃんの方に、カズヒが手を置いて首を横に振った。
「諦めなさい小猫。男と女は、染色体という設計図の根幹部分がごっそり異なっているの。だからどうしても全体の傾向が違うのよ」
男の劣情に理解があって嬉しいよ、カズヒ姉さん。
そんな様子に、ヒツギとルーシアが離れたところで苦笑していた。
「あ～、確かに。男女間の友情が成立するかしないかって、けっこうしないって言われてるしね」
「確かにそうなんですよね。いえ、兄さんはそういうところを見せたことがないんですけど」
ヒツギもルーシアも、理解があってくれてありがたいです。
あとルーシア。たぶんリュシオンはいろんな意味でぶっ飛んでるから、参考にしないでくれない？
「……さて、んじゃ俺は冥界のテレビ局におっぱいドラゴンのゲストとして、仮面ライダーをぶっ籠めねえか相談してくるわ」
「総督サンキューですのよ！」
しなくていいから！　ヒマリも喜ぶな！

「……しかしぶっちゃけるッスけど、イッセー先輩モテすぎじゃねえですかい？　モテ期っすか？」
トライフォース放送局の形式の一つであるゲーム強力プレイ配信前の準備も兼ねて、野郎同士で協力プレイをしながらアニルがそう聞いた気持ちも分かる。
俺もアニルが持ってきてくれた鹿肉のジャーキーをかじりながら頷いた。

ちなみにこの時間。小猫ちゃんがあまりにゲームが上手すぎる所為でもうけされた時間帯だ。先にある程度慣れておかないとすぐに置いて行かれる。
あと貴重な同性のぶっちゃけトークタイムでもある。同性だけしかいないからこそできる会話があると、男性陣で異議申し立てして時間を作ってもらった。
……盗聴されている恐れもあるから、毎度毎度十分ぐらい真剣に色々と調べているがな。
ほんとこぉ、男のプライベートを理解してなさそうな人が結構多いからな。その辺りは気を付けないと。
まあそんな男だらけのぶっちゃけトークタイムだけど、イッセーはマジ顔で首を捻っていた。
「……モテてる？　お前ら、冗談でも言って良いことと悪いことがあるだろ」
「そっくりそのまま返すぞ馬鹿」
マジ顔で何を寝言言ってるんだ、この阿呆は。
俺が半目ではっきり言ってやると、イッセーは俺を信じられないものを見るかのような目で見てきやがった。
信じられないのは俺達の方だ。お前はまさか自分がモテてないとでも思っているのか。
アニルの方を見ると、これまたイッセーを信じられないものを見るような目で見ているし、目が合ったら頷いてきたよ。
うん。イッセーって病気か何かか？
なのでコンビネーションでアホかおまえという目を向けてみれば、すっごい盛大に失望された感じのため息をついてきやがった。
それは俺達がしたいからな？
「まったく。そもそも部長や朱乃さんには、男としてみられてないからこそ可愛がられてるんだぞ？　アーシアだってそういうのを度外視した関係だ。そんなことあるわけないだろ？」
……俺はアニルと顔を再び見合わせると、頷き合った。
―度の越えた鈍感って害悪ッスね―

―女の敵と同時併発とか、最悪だろ―
リアルでこんなのいたらそりゃ嫌われるわ。いつか訴えられるどころか刺されるぞ。
「……ゼノヴィアからは子作りされたがるけどさ、それだって俺が強力な龍だからだぜ？　小猫ちゃんだって先輩として頼られてるからそんな風に思われないしさぁ？　俺は可愛い女の子とラブラブでハーレムを作りたいんだよ。だからこの生殺し空間は、楽しいけど同時に地獄なんだよ」
更に俺とアニルは目と目を合わせると頷き合った。
「イッセー先輩。わりぃんですが殴っていいですかねぇ？」
「俺達にだって忍耐力の限界があるぞ。特にアニルは怒っていいだろ。信徒的にハーレム（そういうこと）しにくいんだから、気を使ってやれよ」
返答次第でちょっとガチバトルしそうな雰囲気になったけど、イッセーもなんかカチンと来た感じだった。
「ＬＯＶＥでエロエロなことしたくても、その気配が一切ない俺に対する嫌味か!?　俺の方が限界来るぞコノヤロー！」
「よし、ちょっと模擬戦しようか。全力で」
ゴングの準備は整った。
インガ姉ちゃんがいるとはいえ、ガチ惚れしているカズヒ姉さんはまだまだな俺だって切れそうなんだ。そもそも彼女が現状いない、アニルが切れるのは当然さ。模擬戦ができる関係だし、リミッターも緩くなるさ。
俺達は殴り合いがしやすい環境に生きていることを本心から喜んで、ちょっと地下の多目的ルームに移動しようとした、その時だった。
「……あ、和地くんにアニルくん。イッセーくん借りていいかな？」
そんなタイミングで、メイド業務状態のインガ姉ちゃんが入ってきた。
「……え？　ちょっと俺達、今から真剣な状況になるんだけど」
インガ姉ちゃんには悪いけど、男には譲れない時ってのがあるんだ。
「悪いんですが、それなりの理由じゃねえと了承できねえっすわ。何

があったんすか？」
アニルもその辺同意見なのかこんな調子。
その雰囲気にインガ姉ちゃんは首を傾げてたけど、どうやら個人的な用事ではないらしい。
「……いや、それが冥界からイッセー君達グレモリー眷属にお客様が来てるの。フェニックス家本家のレイヴェル様らしいよ？」
……。
俺とアニルは四度視線を合わせると、イッセーに冷たい目を向けた。
「「リア充爆発しろ」」
「よぉし、リアルのハーレム願望が枯渇してる俺に対する宣戦布告だな？　終わったら覚悟しやがれ」
安心しろ、話が終わった瞬間に闇討ちするレベルだから。

神威動乱編　第二話　X、それは特級の証

和地Ｓｉｄｅ

そんな野郎同士のヒートアップした空気のまま、俺達は来客用の応接間に移動した。
そこにいたのは金の髪を左右でドリルにしている、分かり易いお嬢様テンプレの女の子。
フェニックス家本家の娘さんか。相応の立場らしいけど、それがイッセーも含めてどんなようだ？
そう思っていると、そのレイヴェルはほんのり頬を赤らめてイッセーに華やいだ顔を向ける。
「お久しぶりですわ、イッセー様」
「よぉ、レイヴェル。俺まで呼び出すなんて、何かあったのか？」
……レイヴェル側の反応はともかく、イッセー側の反応が妙だな。
何かあったのか？　イッセーってフェニックス家に敵視されてるとか？
あとレイヴェルの反応的に、それだとロミオとジュリエットだな。流石にデスエンドは可哀想だけど、こいつはグレモリー家だけでなくフェニックス家にも手を付けてるのか。
俺がそんなことを思っていると、アニルも同じことを気にしたのか、アーシアやゼノヴィアの方によって首を傾げた。
「なんかお互いの反応があれなんすけど、何かあったんすか？」
「さっぱり分からん。アーシアは知っているのか？」
「あぅぅ……。いつの間にレイヴェルさんまで……」
取り合えず、ゼノヴィアは知らないけどアーシアは知っていることのようだ。
と、同じように首を傾げているヒマリ達やカズヒ姉さん達に朱乃さ

んが気付いてくれた。
「あらあら。そういえば皆さんは知らない話でしたわね」
というと？
俺含めて結構な人数の疑問符に、朱乃さんはにっこり微笑みながら、レイヴェルをてで指し示す。
「実はコカビエルが問題を起こす前、リアスはイッセー君の尽力もあって許嫁との婚約を解消しましたの。その婚約者はフェニックス本家の三男であるライザー・フェニックス。レイヴェルちゃんはその妹であり、同時に眷属悪魔の一人でしたの」
え、そうなの？
というか実の妹を眷属悪魔にするとか、ちょっと分からないというかさっぱりというか。
いや、上級悪魔の本家ともなれば、他の家の分家といった上級悪魔を眷属にすることもあるだろう。フロンズとかノアとかがそうらしいし。
だけど自分の実の妹を眷属にするとか、ちょっとびっくり。
そんな時、カズヒ姉さんがハッとなった。
「……あ、もしかして」
何か仮説に思い付いたみたいだ。
なんか視線が集まっているけど、カズヒ姉さんは同情の視線をレイヴェルに向ける。
「勘違いだったら謝るけれども、もしかして庶民の愛人との間に生まれたとか、分家から引き取られた義妹とか、そういう複雑な来歴故の冷遇ってことは―」
「違いますわ。そういうわけではないので気にしなくて構いませんわ」
即座に否定が入った。
「……まあ、何も知らずに貴族の家とかが絡むと、そういう勘違いをしてしまうこともあるのかしら？」
「……流石に同情」
リアス部長や小猫ちゃんも、苦笑いや憐憫の表情を浮かべている。

なるほど。どうやら複雑な生まれとか家庭環境ってわけじゃないらしい。
「……邪推してごめんなさい。でも、ならなんで実の兄の眷属に？」
なんか真剣実のある表情でカズヒ姉さんが聞くけど、なんか知っている側が通夜みたいな表情で俯いた。
「カズヒ、たぶんこれ……もっとアホっぽい理由じゃない？　兄弟喧嘩でそういう賭けをした結果とか」
雰囲気から悟ったっぽいヒツギの意見だけど、なんか俺もそんなアホな理由な気がしてきた。
「む～……はっ！　エイプリルフールでそんなこと言ったら、周りが本気になって断れなかったとかではありませんの!?」
「いや、大喜利じゃないから」
ヒマリは何か勘違いしているから、俺とヒツギでちょっと口を塞ぐ。
まあ、今ので空気が和らいだからいいとするか。
「それでぇ、正解はぁ？」
リーネスが話を進めると、レイヴェルが遠い目をした。
「お兄様にどうしても頼まれましたの。頼られて悪い気はしなかったので了承しましたが、あとで聞いた理由が……その……」
言い淀むぐらいアホな理由なのか。
俺はちょっと真剣に同情してきたけど、理由が別の意味で気になっていたな。
というか、なんでイッセーは悔しがっている感じなんだ。何を知っている。
「……「俺はそうじゃないけど対外的な意味として妹萌えをコンプリートしたい」という理由でして」
……。
「「「「「「「「あ、同類……」」」」」」」」
知らない組がイッセーに一斉に視線を向けたよ。
そしてイッセー。悔しそうに拳を握り締めるな。
「実妹。それは、実の妹を持たない男には生涯ゲットできない属性

……っ。俺はその一点だけは、決して奴には勝てない……っ！」
俺、もう部屋に戻って寝ていいかな？
「とりあえず、そのライザーって奴が女にだらしないのは分かりました」
俺はとりあえず、そう声を絞り出した。
そしてカズヒ姉さんは、ため息を盛大についた。
まあ、この内容では色々と頭が痛くなるのは理解できるからなぁ。
「……そりゃ婚約を解消したくなるわね。部長はそういうのに夢を見たいタイプだと思うし」
「……５０点ってところね。確かにカズヒの言う通り夢はあるけど、別にハーレムを作っていることは関係ないのよ？　悪い男でもないし、私を愛してはくれるでしょうし」
カズヒ姉さんに部長はそう返すけど、やっぱりハーレム作ってたんかい。
まあでも、ならイッセーがＯＫな理由が分からないからそこはいいのか。
じゃあなんでとか気になったけど、そこでルーシアがパンパンと手を叩いた。
「色々と気になるところもありますけど、親しき仲にも礼節は必要です。今は本題に進みませんか？」
まあそうだよなぁ。
正論すぎて反論もない。というか、色々とプライベートに踏み込む内容は慎重にいかないとな。
「ルーシアは本当にできた子だよねぇ。素直に褒めて挙げるじゃんか」
「ありがとうございます。私の兄はリュシオンですから」
……ヒツギに頭を撫でられながらだけど、もはや決め台詞とかしてるな、その言葉。

そんなこんなで色々と事情を聞いたけど、そりゃまたすごいな。
そもそも婚約そのものが「大学卒業までに恋人ができたら無し」になってて、だけど何故かいきなり話が進んだってところでまあびっくり。その上圧倒的に駒の埋まりぐらいが開いているってのに、レーティングゲームの勝敗で決めろとか……ねぇ？
まあ、負けたけどイッセーがエキシビジョンマッチをすることになって、その果てにライザーは敗北。婚約解消と人生初の挫折のダブルパンチで引き籠りになったってことか。
「全くもう！　お兄様もお兄様ですわ！　一度敗北したぐらいで、もう何ヶ月も引き籠るだなんて！　男なら次こそはと決意を燃やすぐらいでなければいけませんでしょうに！」
そんな風に愚痴を漏らす様子を見る限り、その辺りのごたごたは尾を引いてなさそうだ。
というより、時々ちらちらとイッセーを見ている様子からすると惚れている感じだろう。今の会話ではどこで惚れたのかがよく分からないけど……まあそこはいいか。
「……とはいえ、やはり兄ですので――」
そんな風に心配げな表情を浮かべるレイヴェルに、結構なメンツが気にしている。
まあ、お人好しのグレモリー眷属なら当然か。もうちょっとぐらい冷たくても、罰は当たらない関係だと思うけどなぁ。
そんなことを思いながら、俺はとりあえず話を進めることにする。
「……で、レイヴェルちゃんだっけ？　こういう言い方はなんだけど、なんである意味元凶なグレモリー眷属に？」
「はい。あれから色々な方に相談したのですが、グレモリー眷属が筆頭なものを使うべきだという意見が多かったものでして」
そう素直に答えてくれるけど、どういうことだ？
俺達が首を傾げてると、レイヴェルはイッセー達を真っ直ぐに見つめた。

「リアス様達が持つ……いわゆる根性が必要なのではないかという意見が多い物で」
「な、なるほど」
イッセーがそう言うけど、まあ確かに。
ヘタれているなら根性を獲得する。まあ確かにそうなるけど―
「でも引き籠っているんでしょう？　ヘタレに無理やり根性を入れようとしても、逆に折れて大変なことになりかねないわよ？」
カズヒ姉さんが怪訝な表情を浮かべるけど、リアス部長達は違う考えのようだ。
「いえ。このまま自然に持ち直したとしても、ライザーだって何度も負けを経験することになるでしょう。ならここで負けに潰されない根性を持つべきだわ」
「そういうことなら任せてください！　俺に考えがあります！」
部長に乗っかる形で、イッセーが気合を入れて声を上げる。
……何を考えたんだろうか。ちょっと不安というか、脳筋君な発想な予感がするんだが―

「えー。本日のトライフォース放送局ですが、趣向を変えて雪山で踊ってみます！」
「吹雪く中での燃える踊りをご覧くださいませー！」
「……なんでこうなる」
ノリノリのヒマリについていけず、俺とカズヒ姉さんは装甲越しでため息をついた。
イッセーの発想はとんでもなかった。
元龍王タンニーンという壮絶なコーチを頼んで荒療治だ。しかもあの龍王、寄りにもよって雪山を貸してきやがった。
荒療治すぎないか？　冗談抜きで心が完全に折れるんじゃないか？

そんな懸念をしていた俺と同じように、カズヒ姉さんも同じことを考えていたらしい。
結果として、カズヒ姉さんが異界の蔵（スペイス・カーゴ）にバッテリーごと格納していたコンテナハウスを提供し、そこで限界を見極める監督をすることになり、そこでヒマリが余計な提案をした結果、こうして俺とヒマリも参加することになった。
いや、差し入れぐらいはする気だったけど、これは無いだろ。
まあ、雪山でこんな格好してダンスとか、絶対バズるとは思うけど。
「……和地。私は今、真剣に帰って寝たいわ」
「みなまで言うな、気持ちは一つさ」
仮面越しだと遠い目も見えないから、しゃべらなければこれで誤魔化せるだろう。
……後日、この動画が一気に流行って収益化が秒読みになるのは蛇足ってことで。
まあそんなわけで、俺達も自主トレをしたりしつつライザーの特訓に付き合っていた。
このレベルの山岳豪雪地帯で訓練って機会もないし、それなりにやってはいる。
やってはいるけど寒いけどな。
「ライザーさんには同情するぜ。いきなりこれはきつすぎだろ」
「同感ね。あ、そこのカレー粉取って頂戴」
と、俺とカズヒ姉さんは今日の晩飯当番。
今日はカレーを作っている。
コンテナハウスは断熱加工がついていて、あとはまあシンプルな空間だ。ただ防水加工や排水設備がついているブースがあって、そこにポータブルシャワーを設置することでシャワーがあびれる。お湯は別途で作る感じだけどな。
「色々な物入れてるんだな、カズヒ姉さんって」
「暗部として長期任務とか、人が入ってこないようなところを経由することもあるもの。それなりの備えはしているわ。この神器って本当に便利だし」

確かに。
入れる物を用意するのが一番大変だけど、これだけの物を生身で運べるってのは凄い便利な神器だよなぁ。
でもまあ、その分悪事にも使えそうな神器ではあるけどな。
「やっぱりさ、こういう神器を使って密輸とかしてるやつもいるのか？」
「暗部任務で一人始末したことはあるわね。コンテナ数十個分の麻薬を運ぶことができれば、巨万の富を動かすこともできるもの。兵器だって日本とかに持ち込んだら国家転覆すら狙えるわよ？」
あ～、確かに。
そこそこの輸送船一つ分ぐらいいけるっていうしな。それだけの麻薬や兵器を運ぶことが出来たら、冗談抜きで世界を揺るがせる。
ダーティジョブにも必要な時はあるってことか。この辺も、俺だって理解しないといけないよな。
そういう意味だと、ちょっと色々と気になることもあるな。
「世間話で聞くけどさ。プルガトリオ機関ってやっぱ人材豊富なのか？　ドラゴンが所属したりしてるけど、悪魔や堕天使もいそうだし」
「そうね。他にも色々あるけれど、筆頭格があるならエクストラ部隊かしら？」
へぇ、エクストラ。
多分Ｘ担当だけど、ＮＡＴＯフォネティックコードは違う文字だったよな？
ということは、もしかして特別なのか？
俺がちょっと興味津々な目で見ていると、カズヒ姉さんは苦笑して肩をすくめると。
「簡単に言うと、神々が属する部隊なのよ」
……。
おっと、ちょっと意識が真っ白になった。
今ちょっと聞き違いをしたな。それでびっくりしすぎるとは―
「言っておくけど本当に神々が参加しているわ」
―勘違いさせてほしかった。

「いやちょっとタンマ。神々って、聖書の教えは一神教なのにか？」
「ええ、だからプルガトリオ機関の中でも特別な部隊なの。フォネティックコードから外れてるのもそこに由来するわ」
マジか。
いや、ちょっとタンマ。神々が属しているってことは、つまり戦闘能力は魔王級レベルか。
俺が思わず唖然としていると、カズヒ姉さんは苦笑した。
「まあ、神々と言っても基本的に下位の部類ではあるようだけれど。ただ神々でありながら聖書の教えを信奉している分、自己研鑽を欠かさず行うような決意を持っているそうだから、かなり強いとは聞いているわね」
おいおい、冗談だろ。
暗部組織プルガトリオ機関、正直言ってマジ怖い。
敵に回したくないな……。
「和地、そろそろ焦げそうだから混ぜて頂戴？」
「おっと」
おっといけない。
俺は慌てて鍋に意識を向けながら、ちょっとだけ脳裏にさっきの言葉を残す。
異教の神々すら従える、教会暗部組織か。
会ってみたいような見たくないような。そんな連中が集まってそうだなぁ。

神威動乱編　第三話

和地Ｓｉｄｅ

「はい！　気合を入れて大きな声でー、ドラゴン！」
「ど、どら……ごん……っ」
そんな感じにグリドに乗ったヒマリに追い回されるライザーを横目で見ながら、俺とカズヒ姉さんは反復横跳びとかをしながらトレーニングを積んでいた。
ちなみに少し離れたところでは、イッセーがレイヴェルにお茶に誘われている。
俺達も誘われたけど、レイヴェルの様子からイッセーに惚れていると判断したので、あえて遠慮して置いた。
割と分かり易い態度なんだが、まあそれで分かるようなら既にイッセーは部長達とデキている。
あのアーシアの対応すら「恋人とかそういうのじゃなくて、完璧な家族っていうのかな？　へへ……照れくさいぜ」とかほざく男のことだ。絶対に気づいていないだろうさ。
一発殴りたくなった俺は悪くないと思いたい。
「しかしまぁ、イッセーも大概ね」
カズヒ姉さんもそう言うぐらい、イッセーの鈍感さはちょっと酷い。
「……どうする姉さん？　外野が下手につつくのもどうかとも思うけどさ……」
「と言っても、人って何時死ぬか分からないものだしね。なにより私達は、人よりよっぽど死に近い生活を送っているもの。あまり長く見るのもあれでしょう」

カズヒ姉さんも同意見っぽいけど、俺よりよっぽど深刻な表情だった。
ふむ、俺よりよっぽど実戦経験の数の多いからな。その辺は一家言あるんだろうか。
「……好意を抱いている相手が告げる前に死なれたことで、心を病んだってケースも多少は見たことがあるわ。まして割とストレートに伝えておきながら、断られるどころか気づかれることなく死亡ってのは……下手しなくても変なことになりそうだもの」
そういうカズヒ姉さんは、かなり真剣な表情でイッセーを心配していた。
「前から気になったけど、イッセーって本当にハーレム作る気あるのかしら？　恋愛という一線をわざと踏み込ませないようにしてるって言われた方が納得できるのだけれど」
「あれだけ口でハーレム作りたいとか言っておきながらか？　ちょっと考えづらいだろ」
あいつに限って、いわゆるアスパラベーコン巻き男とかいう傾向は無いと思うが。まあいわゆるロールキャベツ系男子になれる能力もないわけだが。
そんな男が煩悩で覚醒したり煩悩まっしぐらな技を独自に編み出したりはしないだろ。
俺はそんな気がするけど、カズヒ姉さんは違う意見な要だ。
「自分で自覚してないっていうことはあり得るわ。無意識とか本能が拒否してるけど、自覚がないから意識的には……ってこと、意外とあるものよ」
そんな風に、補足した目でイッセーを見ているカズヒ姉さんは、割と本気でそんな確信を抱いているようだった。
「暗部的な経験論？」
「そうね。そういったことで道を踏み外した人だっているし、……ちょっと荒療治をすることも考えるべきかしら？」
荒療治って何をするつもりなのでしょうか。
あんまり酷いことは……いや、してもいいか。

流石にあの鈍感ぶりはちょっと部長達が可哀想だ。それにイッセーだってあのままだと、後ろから刺されるな。
自力でかいくぐれそうな気もするけど、そもそもそんな事態を起こさずに済ますべきではあるか。
「いざとなったら手伝うことにするから、必要なら行ってくれ」
「そうね。いざという時はお願いするわ」
そんなことを言いながら、俺達は軽く自主トレをし続けて―
「ぐわぁあああああっ！」
―ライザーの悲鳴をＢＧＭにするのは、ちょっと心が痛んではいる。

そんな夜、俺達は吹雪く雪山で変身して待機をしていた。
……なんでこんなことしてるんだろう、俺達。
「なあカズヒ姉さん。ちょっと考えすぎなんじゃないか？」
「言いたいことは分かるわ。でも念には念を入れておきたいの」
俺達が待機しているのは、俺達のベースキャンプと露天風呂の間だ。
リアス部長達が俺達の様子見に来ていたけど、その露天風呂を堪能しているらしい。
……そしてカズヒ姉さんが懸念しているのは、イッセーだ。
「……夢遊病で覗きする可能性を警戒するって、手伝う俺が言うことでもないけど考えすぎじゃねえか？」
「私もそうは思うけれど、イッセーの性欲は異常だわ。本人が本能レベルで拒絶反応を引き起こしている以上、念には念を入れて警戒しておきたいの」
まあ、確かに。
イッセーの性欲は異常だろう。いくら性欲が強いからって、普通は覗きを我慢した結果ひきつけを起こしたり狭心症を起こしたり神経

性胃炎を起こしたりはしない。
　そんなイッセーが性欲のままに夢遊病で動くという可能性は、確かにちょっと気になりはする。
「……そういえば、二重人格ってストレスが原因でなるってことがあるらしいな」
「そっちはそっちでありそうで怖いわね。イッセーの場合、下手するとアバターを作る亜種禁手になりそうだわ」
　姉さんの怖い予想もありえると思えるぐらい、イッセーの性欲は強かった。
　まあ確かに懸念ではあるし、念には念を入れるべきか。
　俺はそんなことを思っていると、ふとぶっ飛ばされていたライザーを思い出した。
「ライザー・フェニックスに協力を求めなかっただけ、慈悲があるって思うべきかねぇ」
「私は非道になることはあっても外道じゃないわよ？　ドラゴン恐怖症になっている男を迎撃する為に引きずり出すなんて論外だし、まして万が一の懸念なら必要悪でも何でもないでしょう」
　それもそうか。
　ああ、仮にも貴族ともあろうもの、それもハーレムを作る奴ならその辺りの一戦は引けるだろう。だから協力してくれる余地はある……というか妹巻き込まれるだろうしな。
　だけど一生懸命荒療治のショック療法でトラウマを克服させられているんだ。それぐらいの慈悲は―
「……ぐ……ぁあ……」
「「……え？」」
　俺達二人がその悲鳴を聞いたのは、偶然に近い。
　吹雪いているから尚更だ。だからこそ、聞こえるか聞こえないかのぎりぎりだった。
「今の声、もしかしてイッセーか？」
「……まさか本当に来るだなんて。それもこれって、つまりライザー・フェニックスと戦って―」

姉さんが俺に頷きながら警戒した時、炎に包まれたイッセーが、斜面に叩き付けられる。
「……クソッタレ!?　ってカズヒに九成もなんでここに!?」
こっちに気づいたイッセーは、だがしかしすぐに首を横に振って気合を入れ直す。
さて、この様子だと本当に夢遊病か二重人格か。
まあそれともかく。イッセー自身の為にも覗きは止めないとな。俺もカズヒ姉さんもその為にいるんだし。
そんな感じで俺達が戦闘態勢をとると、イッセーは何故か喜びの表情を浮かべた。
「ちょうどよかった。頼む、二人の力を貸してくれ！」
……人格同士がせめぎ合ってる？
俺がそんなことを思ったとき、炎が俺達を照らした。
そして降り立ったのはライザー・フェニックス。
強い決意を目に灯し、イッセーに立ち向かう戦意が燃え盛っている。
まさか、妹の危機にトラウマを克服したのか。
「……どうやら、窮地に奮起するタイプだったようね。結果オーライと言っておきましょうか」
カズヒ姉さんも仮面越しに頬がほころんでいるだろう。
イッセーが暴走したのは残念だけど、その結果としてライザーが復活したのならそれはそれでって感じだな。
俺とカズヒ姉さんがほっとしたその瞬間、二人が俺達に別々の感情を向けた。
……あのすいません。なんでイッセーが頼りになる味方的な視線で、ライザーが目障りな敵を見るような視線何でしょうか？
「助けてくれ！　今の野郎、前に戦った時より手ごわくなってる！
部長やアーシアやシャルロットの裸を守る為、力を貸してくれ！」
「ふん！　男の成すべきことを邪魔するつもりなようだな。ならば全てを焼き尽くし、俺はリアスの裸を見る!!」

……

「「ライザー(そっ)が覗(そっ)き目的(ちち)いいいいいいいっ!?」」

思わずシンクロで絶叫したよ。

―ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

……あ。

衝撃と大声の連打に、雪山が雪崩を引き起こしやがった。

「「「うわぁあああああああああ!?」」」

て、展開があれ過ぎて反応が遅れたぁあああああああああ!?

「お前だけが、俺の婚約者の、裸を見ようなどと許せるかぁあああああっ!!」

「俺の、部長と、家族と、相棒の、裸をお前に見せるわけねえだろうがぁ!!」

這い出た俺の視界に映るのは、そんな全力で殴り合いをするライザーとイッセー。

「……いろんな意味で歯を食いしばる間すら与えないわ。私が、這いつくばらせて後悔させてやる……っ」

獅

爆　　烈
　子
『ダイナマイティングユートピア』
　そしてブチギレて必殺の一撃をかますカズヒ姉さんの姿。

　もちろん衝撃で雪崩第二弾。

「「うわぁあああああああ！」」

「……仕方ないわ。全裸（マッパ）でサウナに入ってやるからそれをガン見して我慢しなさい。二度の雪崩の詫び込みの特別大サービスよ。とにかく覗きは我慢しろ……っ」
「カズヒ姉さん。ライザーとイッセー、もう失神してるから。その自己犠牲大サービスの必要ないから片方持ってくれない？」
　そんな感じで、俺達は遭難一歩手前になりながらもなんとか生存した。
　そしてこれがきっかけとなり、ライザーはドラゴン恐怖症を克服したらしい。
「……俺は更に強くなろう。何時の日か、リアスの裸を拝む為にな！」
「ホントにふざけんなよ!?　あんたそれでも貴族か!?」
　克服ついでにイッセーと死闘まで繰り広げたけどな。

後余談だが、マジで言ってたらしく星辰奏者やプログライズキーを真剣に利用するつもりで色々と動いているらしい。

……俺は周囲にうるさい奴の目がない限り、奴に敬語は絶対に使うまいと心に決めたことを此処に宣言しておく。

神威動乱編　第四話　のぼせたりひきつけたり

和地Ｓｉｄｅ

「あー、サウナ気持ちぃ～。あったかくて湿度のある空間に癒される～」

ライザーのトラウマ克服に付き合い、結果として雪崩に二度も巻き込まれ、雪山で遭難寸前になった俺は、その反動で蒸し暑い空間を欲してたまらなかった。

再来兵藤邸宅のお風呂は、地下の大浴場にしろ別館一階の男女別浴室にしろ、離れの夫妻用にしろ、サウナがシャワーブースとは別にサウナが必ず設置されている。

地下の侍従用生活スペースにもサウナがある。浴室こそ小さくシャワーが主体となっているが、それでも小型のサウナが設置されている。

……ちなみにリアス部長の厚意で大浴場は別館組や侍従達も使うことはできるが、イッセーがこっそり使うこともあるうえハプニングもあるから基本遠慮している。とはいえ少人数で下手な銭湯を超える大浴場にも興味があるから、一週間に数時間の専用タイムを設けてもらおうかと思っている。

……そして、俺は今回大浴場のサウナをこっそり使っている。

一番広いサウナを一人で使うってのもいい感じだと思い、数日かけて誰もいない時間帯を探し出し、明日の学校を考慮してこっそり仮眠を取っておくなどして、こうしてサウナに入っている。

汗をかくことを考慮して凍らせたスポーツドリンクと水をそれぞれ用意して、長時間この蒸し暑い空間を堪能する。

「ほぉ。サウナって本当に気持ちいいなぁ。あと三十分ぐらい入っておこう」

それぐらいあれば飲み干せるしな。
サウナに出たらシャワーで汗を流して部屋に戻ろう。そのあと四時間三十分ぐらいは寝る時間があるから、まあちょっと眠気がするかもぐらいで済むだろう。明日も学校があるから夜更かしは最小限にしないとな。
そんなことを思いながら、俺は目を閉じて湯気と熱さを堪能し―
「……うぇ!?」
―なんか、聞き覚えのある声が聞こえたんだけど。
俺が目を変えると、その声の持ち主が確かにそこにいた。
「……何やってんだよヒツギ」
「……こっちの台詞だっての」
ヒツギが俺と同じようにペットボトルを持ちながら、サウナに入ってきていた。
うっわぁ。気まずい。
いろんな意味で気まずい。正直ちょっとこう、目のやり場に困る。
・・・・・というかちょっと待って。
なんかわいわいがやがや聞こえてるんだけど……？
「……ヒツギ。今から何人来るんだ？」
「ん？　今日は五人ぐらい。あと―」
「―なんでここに和地君が!?」
インガ姉ちゃんがいたぁあああああ!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「いやまあ、かりにも武闘派信徒の顔でもあるデュナミス聖騎士団の

一員として、今後の社会復帰も仕事と思ってね？　こうして親睦会をこっそりサプライズでしようかと思ってたんだよね？　で、今回第一弾でインガさんをダシに復帰できる可能性とかの説明的なあれをって感じで―」

ヒツギの言い訳に、和地は何も言うことができない。

聞いてはいる。理解もしている。不幸な行き違いというかばったり出くわしただけであり、むしろ和地からすれば一種の眼福でもある為、怒るつもりはない。謝る方が筋だとも思っている。

だがしかし、そんな余裕を彼はもっていなかった。

具体的には―

「……ねぇねえ。インガとは昔からの付き合いらしいけど、年齢から言って小さかったよね？　インガって年下趣味？」

「馬鹿、こういう時はショタコンっていうのよ。……で、どんな感じ？」

「いやちょっと待って。インガ姉ちゃんの名誉的にちょっと待って」

―女子からの質問攻めにそれどころでは断じてなかった。

それゆえに、ヒツギは苦笑すると置いてけぼりになっているインガの方に振り向いた。

「……で、インガさんだっけ？　和地のことはどう思ってんじゃんよ？」

「え、助けなくていいのかな？」

自分も含めて助けてほしいという、インガの視線には笑ってスルー。

「むしろ勧めた方がいいじゃん？　ああいう普通の女の子っぽい経験とかも、積んどいた方がいいんじゃない？」

その言い分は十分正しい。

更生及び刑務活動という名目による、当人達の精神的な区切りを主体とする社会復帰の一環でもあるのが、このメイド業務だ。

なので、将来的に自立して新たに人生をやり直せる状況にしなければ意味がない。

なので、年頃の女の子らしい行動を経験することに意味はある。具

体的には恋バナとかそういった方向性。それも友人の彼氏に質問攻めといった感じのものだ。
この状況は流石に特殊だが、そもそもの環境が特殊なら少しずつずらすといった方向性も有効だろう。
……結論として、咄嗟の判断でヒツギは和地を生贄に捧げた。
「何よりあの子達が壁になってこっちが見られないじゃん？　態々壁を外すのもあれだし」
「鬼かな？」
鋭いツッコミは笑顔でスルーした。
しかしヒツギとしては譲れない。湯着を着ていることは関係ない。なにより、裸どころかエロい関係であることを踏まえても譲れない。
乙女心は複雑なのだ。
ちなみに湯着を着ているにしても恥ずかしい物は恥ずかしいが、メイド達はそこまで徹底してないにも関わらず結構平気である。
ディオドラの下衆な欲望のはけ口になったことで、感覚がマヒしているのだろう。災い転じて福となすとでもいうべき展開だろう。
「……あれはあれで何とかした方がいいかもしれない？」
「……二重の意味で姉妹的なのは、できれば避けたいかな？　いや、既に全員一重だし」
少し遠い目をしたが、二人はとりあえず和地を生贄に捧げることにした。
まずはガールズトークと異性慣れである。そこから後のことはまずはそれが終わってからだ。
とはいえ、全員がディオドラの女になっていた事実を考えるとインガ的には気が気でない。和地がいい男になっていることは身をもって実践しているし、ディオドラというある意味で底辺の男に慣らされていた身からすれば、和地はどう考えてもよすぎて強烈なのだ。
反動も含めてそうなる人が出てこないか、インガ的には凄まじく不安だった。
「……というか、ヒツギさんはどうなんですか？」
そんな懸念を振り払うように、反撃としてインガはヒツギにそう返

す。
だがそれに対して、ヒツギはきょとんとしていた。
「ああ、大丈夫大丈夫。私そういう目で和地のこと見てないから」
その即答ぶりに、インガは逆にきょとんとした。
「……そうなんですか？」
「そうなんだよねー。いや、うっかり酒を飲んでやらかしたんだけど、じゃあそういう目で見れるかというと全く別の問題っていうか……うん。前からちょっと不安だったけど、これは当たりかなぁ」
その言葉にインガは何か気になることを覚え―
「……ふ、ふぉ～……っ」
―和地がのぼせて倒れたことで、話が一旦中断ということになった。

和地Ｓｉｄｅ

「……そんなことがあった」
「あばばばばばばばば。しゃしゃしゃしゃしゃルロッと……ぉ」
ひきつけを起こすのが早くなってないか？
野郎同士のあほタイムでそんなことを言ったら、嫉妬の視線を向けられるがまもなく痙攣をしやがったよ、イッセーの奴。
「イッセー先輩。そろそろもうちょっと耐性つけましょうぜ？」
アニルも呆れながら、それとなく支えている当たりで来た後輩だ。
俺も肩を貸しながら、とりあえずリビングのソファーにでも横たえようと思ったら、何やらリビングが騒がしい。

覗き込んでみると、何やら女子達が喧々諤々となっていた。
「ふふふ。これで私の勝ちよ！」
「あら残念。私の勝ちですわ」
勝ち誇ったリアス部長に対する、朱乃さんの勝利宣言。
そのとたん、大声が一気に響いてきた。
俺とアニルが顔を見合わせていると、給仕担当だったメイドの一人が、同じく担当をやっていたインガ姉ちゃんに耳打ちした。
それで俺に気づいたインガ姉ちゃんが、とてとてとこっちに掛けてくる。
そんでもってシャルロットもこっちに気づいて、イッセーを支えてくれた。
「大丈夫ですかイッセー？　そろそろ引き付けも克服してください」
「……いつもこうなの？」
インガ姉ちゃんには乾いた笑いで頷いて見せるしかない。
はい。いつもこうなんです。
どんだけ女体に飢えているんだか。それだけ飢えてるなら、恋愛にも最も積極的になった方がいいんじゃねえか？
真剣にこいつの鈍感さに心配すら覚えてきたぞ、俺。
「で、いったい何の騒ぎなんすか？」
アニルが女子達の騒ぎを見ながら聞くと、シャルロットがちょっと遠い目をした。
「ごめんなさい、イッセー。ヒートアップする展開に歯止めをかけられませんでした」
なんか悔やんでいるけど、さっぱり意味が分からない。
俺とアニルが首を傾げると、インガ姉ちゃんが苦笑していた。
「それが、リアス様達がイッセー君関連で盛り上がっていたら自慢合戦になって、「なら初デートは自分が！」って感じでカードゲーム大会になって……」
「……男女に関わらず、そういうあほ展開ってあるよなぁ」
俺はちょっとため息をついた。
相手の意見を聞かずに勝手にデートに誘うとか言う商品が決定す

るって、ラブコメとかだとよくあるな。実際に見るとは思ってなかったけど。
「で、優勝したのが朱乃さんと」
「そういうことです。七本先取の熾烈な争いの末に、今勝者が決定しました」
アニルにそう答えたシャルロットは、ちらりと女子の騒ぎを見ながら、俺達の方を向いた。
「今イッセーを投入すると、収集が付きません。申し訳ないですが、別の部屋に寝かしておいてください。インガさんも手伝ってください」
「「……はい」」
全く持っておっしゃる通り。
できた相棒を持てて幸いだな、イッセー。
あと後日デートを経験して、自分がモテてることを自覚しろ～。
出ないと本当に後ろから刺されそうだしなぁと、俺は真剣に心配になった。

神威動乱編　第五話　とある夜の赤龍帝

イッセーＳｉｄｅ

朱乃さんとデートすることになったよ。
デート……デートかぁ……。
これが本当にデートだったら、俺は泣くほど嬉しかった。いやほんと、嬉し過ぎてショック死するかもしれない。
だけど可愛がっている男の子とのデート何て、本気なわけがないしなぁ。きっと、本命前の予行練習とかそんな感じなんだろう。
むしろ勘違いしたらいけないよな。そんなことをしたら、朱乃さんの信頼を裏切ることになるし、託してくれた皆にも悪い。ハーレム王を目指す身として、何よりシャルロットの相棒として、恥ずかしくない男でい続けないと。
俺は、俺は涙を呑んで……我慢する！
「よし！　暴発しないように運動で発散しよう！」
そんな風に気合を入れて、トレーニング用の地下室にレッツゴー！
そして到着したら、既に自主トレをしてる先着がいた。
剣と剣とがぶつかり合い、そしてすぐに手放して次の剣で戦う光景。
そんなことができるのは、俺達の仲間だと三人ぐらい。
そしてどっちも聖剣で、戦ってるのは女の子同士。
ヒマリとヒツギが、模擬戦をしてた。
どっちもちょっと笑顔だし、これはどっちかっていうとじゃれ合いも兼ねてるのか？
俺はちょっと首を傾げたけど、まあそれはそれとしても俺もトレーニングをしないとな。

「よっ！　二人とも自主トレか？」
なんで、俺は素直に入って声をかける。
「お、イッセーもですの？」
「お先してるよ～」
二人とも俺に気づくと、トレーニングを一旦終了して笑顔で挨拶を交わしてくれる。
くぅ～！　桐生以外の女の子が、声をかけても邪険にしないでくれるなんて最高じゃねえか。
これだよコレ。俺はこういう生活を味わいたかったんだ。漸く夢に近づいたぜ。
……ま、俺は本当に目指してるのはハーレムなんだけどな。ちょっといろんな意味で残念だ。
まあ、これはこれでいいけどさ。
「あと数日でデートなのに、疲れることしていいんですの？」
「数日もあるだろ？　それにデートつったって、朱乃さんからすれば本命前の予行練習だろ？　調子に乗るわけにもいかないって」
ヒマリにそう返すけど、何故か残念な奴を見る目で見られた。
「……あのさ、もしかして脳炎とかなってない？　若年性認知症かも」
ヒツギまで失礼だな。
「あのなぁ。俺はこれでもめったに風邪をひかない男だぞ？　健康だって最近は……周りが気を使ってるし」
クックスとかメリードが気を使ってくれるからさ。
美味しくて健康や栄養バランスを考えた食事が多いから、体の調子も結構いい感じだ。あまりに不摂生な生活をしてるとメリードから皮肉が飛んでくるし。それでいてジャンクフードを食べれる余裕も作ってくれるしで、何て言うか至れる尽くせりで文句を言うと罰が当たる感じだ。
だから尚更健康的な生活だよ。おかげでぶっちゃけ、体の調子がとってもいい感じだしさ。
なのに脳炎とか認知症とか、いろんな意味で失礼じゃねえか？　俺というより、クックスやメリードに失礼だ。

「クックスやメリードが可哀想だろ？　俺はともかく、あいつらの努力と成果を馬鹿にしたらダメだろ」
「……イッセー。そういうところですのよ？」
「クックスもメリードも、これにはお手上げになりそうだよね」
なんで二人ともそんな失礼なんだ！
模擬戦で洋服崩壊でもかましてやろうか。
正直ちょっと拳がプルプル言ってるけど、俺は我慢。
こんなことで起こるのも問題だしな。大人の余裕を保つんだ。
俺がそんな我慢をしていると、ヒマリは苦笑しながらポンポンと俺の頭に手を置いた。
「まあ若い子はそういうことありますわね。勘違いして調子に乗るよりはましですの」
勘違いなんてしてないって。むしろ勘違いしないように気を引き締めてるんだからな？
まあいいや。何故か誰も俺の味方をしてくれないんだよなぁ、こういう時。
「そういや二人は何してたんだ？　模擬戦っていうにはなんていうか、動きが微妙だったけど」
うん。二人ってもっと動きがよかったはずだ。
態々あんなぶつけ合いばっかり続けたりしないだろ。もうちょっと動きとかあるだろうし、わざと壊すようなぶつけ合いはしないはずだし。
だからちょっと首を傾げてると、ヒツギは苦笑しながら聖剣を一本作り出した。
「ならちょっと試してみなよ。アスカロンを倍加加えてぶつけてみて？」
……ふ～ん。
なんとなく見えてきたけど、俺は素直にアスカロンを出して振りかぶる。
割と本気で倍加を溜めて、勢いよく叩き付ける。
手がしびれるぐらいの音と衝撃が出た。だけど聖剣は、刃こぼれこ

そしたけど切り落とされるどころか、折れも砕けもしなかった。
おいおい、特に魔術で強化だってしてなかったよな？
それなのにアスカロン、それも譲渡までしたのにここまで防げるのか。
俺が感心していると、二人は顔を見合わせてにっこり微笑んだ。
「努力の成果は大成功ってね」
「毎日鍛えてぶつけて砕いての特訓をしてましたのよ？」
得意げな表情のヒマリに、俺も思わず笑顔がこぼれた。
禁手にも至ってないのにここまでできるとかマジですっげぇ！
頑張ったじゃねえか二人とも！
「マジですごいじゃねえか！　二人ともできる奴でカッコいいー！」
「もっと褒めるといいですのよー！」
誇らしげににっこりと胸を張るヒマリ。ヒツギもちょっと得意げだった。
「ふふ～ん。これでも教会の精鋭部隊出身だからねッと。これぐらいはやらないとね～？」
「そういやそうだったな。デュナミス聖騎士団って、殆ど全員が星辰奏者の腕利きだらけだったよな！」
それにヒツギだけじゃなくてヒマリも星辰奏者だし、その分のポテンシャルが結構違うぜ。
これで星辰光って切り札もあるんだし、心機が二つも宿してるってこと込だとマジですげぇ！
だけど、ヒマリはちょっと肩を落としてた。
「でも星は振えませんの。ガッテムですの」
「ハハハ……。まぁ、星辰光（アステリズム）って、摩訶不思議だし……ねぇ？」
ちょっと遠い目をする二人。背中が一気にすすけてきたな。
いやでも、そこまで卑下することもないだろ。
「でも俺みたいに星辰光を持ってないし、一人じゃ赤龍帝として最弱な奴だっているんだぜ？　むしろ星辰光も使えないし片方の神器も不調気味だってことを考えたって凄いだろ？」
それに比べたら十分凄いって。

禁手無しで禁手になってるやつと肩を並べられるって、普通に禁手になるのとは別の意味で凄いしさ。
「いやほんと、こんな可愛くて強い女の子が仲間だってんだから最高だよ！」
いやほんと、いろんな意味でありがたいです。
俺がそんな気持ちを込めてお礼を言うと、何故か二人ともちょっと顔を赤らめた。
あれ？　運動しすぎて体調崩した？
俺がきょとんとしてると、ヒツギとヒマリが顔を見合わせて、なんかこそこそとし始めたぞ？
「……いやぁ、この男本当に天然ジゴロじゃん？　覗きとかエロ本をしでかさなけりゃ、とっくの昔にモテモテだったろうね」
「無自覚たらしですわ。変態で人生損しすぎですわ。ハーレム王になれる器を自分で汚すとか、高度な自虐プレイですわ」
なんだろう。馬鹿にされてるような気も、褒められてるような気もする。
俺が首を傾げてると、二人は咳払いをしてから、こっちに戻ってきた。
「ま、いい機会だし一緒に模擬戦でもしよっか」
「全くですわ。一緒に模擬戦必須ですの」
「ま、そうだな。ちょっと体を動かすか！」
そういうわけで、俺達はしっかりと模擬戦をして過ごしていった。

和地Ｓｉｄｅ

俺は俺で、トライフォース放送局の新番組の準備とかもしてた。
「……○魄刀って、普通の奴は普通のままだとただの刀だしなぁ。これでいいのか？」
「あとで○月を作っておきましょう。それでどうにかなると思います」
「あ、テスト撮影の準備できましたぁ。撮影お願いしますぅ」
と、サブカルに詳しい小猫ちゃんやギャスパーの協力を得て、魔剣創造でサブカルの刀剣類を製造して殺陣をするといった奴だ。
日本刀は引いてくる仕組みだからな。あとで切り方の練習も必須だろう。
そういえば木場の師匠って新選組の人だったしな。あっちはあっちで練習しているはずだし、少しぐらい教えてもらった方がいいか。
そう思いながらリハーサルをして、映像を確認してレフ板の位置を調整。
それが一通り終わったから、俺はちょっとした団らんとして、後輩達と駄弁ることにする。
適当にお菓子を持ち込んで、食べながらまあ世間話。
そして今回の話の内容は、やはりイッセーのデート関連だ。
「……で、イッセーの奴はこれを本命じゃなくて予行演習って思っていると」
「……イッセー先輩、ハーレム王を目指してるのになんでそんな勘違いをしてるんでしょう」
俺とギャスパーが呆れていると、小猫ちゃんも小猫ちゃんで食べるスピードが若干増えている。
微妙にやけ食いになっている状態だな。まあ、イッセーに惚れているメンバーからすれば他人事じゃないしな。
これで勝ってたのが小猫ちゃんだったら、食べる速度はもっと早く、更に荒い食べ方をしていたことだろう。
「……イッセー先輩って、罪作りな先輩ですよね」
「あいつ本当に後ろから刺されるんじゃないか？」

俺達男組がそう呟いていると、小猫ちゃんはため息をついた。
「……この前、房中術をすることを言ったのですが、先輩は止めてきました」
……またすごいことを言うな。
「男女で房中術って聞くと、エロい雰囲気を思い浮かべるんっだけど」
「はい。ちっちゃいですけどそういうことはできますし、イッセー先輩の寿命を少しでも戻してあげたいですから」
ここまでのレベルとは。本当にイッセーは罪作りだな。
俺はちょっとため息をつくけど、ある意味確かに必要なことではある。
才能がないにも関わらず、亜種禁手でブーストしたとはいえ覇龍の強引な発動。そんなことをしてただで済むわけがない。
イッセーの寿命はごっそり削れた。それでも人間の寿命を遥かに上回っているけど、それでも悪魔として見れば非常に少ない。
あの時はそうでもしなければまずかった。イッセーが無茶な覇龍を単独でぶちかましていたからこそ、シャルバを抑え込んでいるうちにカテレアとクルゼレイを打倒するという真似はできなかっただろう。
そういう意味では俺もサポートぐらいはしたいところだ。だけどできないから、どうにかできる余地のある小猫ちゃんに頼るしかない。
小猫ちゃんも小猫ちゃんなりに頑張っているわけだ。なによりイッセーに対する好意はしっかり見えてるから、なおさらだ。
罪作りすぎるだろイッセーの奴。一体何があれば、現実にあんな鈍感野郎が誕生するんだ。
「……たまに愚痴を言うぐらいは付き合うさ。なんかお菓子とか用意しとこうか？」
「……ありがとうございます」
いやほんと、今度のデートで少しは意識改革がされるといいんだけど。
俺はその辺をちょっと気にしながら、遠い目をしてなんとなく壁を

見る。

……多分、治らないんだろうなぁ。

神威動乱編　第六話　英雄派との前哨戦

和地Ｓｉｄｅ

「そういうわけで、修学旅行の為のグループを作ってくださいねー」
そう言う学級委員長の指示に、俺は速攻で動くわけだ。
「じゃ、カズヒ姉さん。俺達（オカ研）はまとまって動いた方がいいから合流だな」
「そうね。松田と元浜は責任をもって私が監視した方がいい物ね」
そんな感じで頷き合うと、俺達はイッセーに合流する。
教会三人娘という形でグループになっているアーシア達も、桐生を連れてこれまた合流。
「と、言うわけで私達でグループになるわ」
「ま、私達じゃないとあんたら変態組はグループ組めないもんねぇ？」
肩をすくめるカズヒ姉さんにからかう桐生。
まあ事実なので、松田と元浜には悪いが黙って納得してもらおう。
……いや、まてよ？
「案外いけるかもしれないけどな。まぁ、カズヒ姉さんが監視役としてついていたらだけど」
「うっせえよ！」
シンクロしてツッコミが来るけど、カズヒ姉さんはうんうんとうなづいてた。
「まあそうね。それぐらいには信用もできているはずだし」
そんな感じでカズヒ姉さん、これでも色々と動いていたりしている。
余計なトラブルやヘイトを解消する為に、カズヒ姉さんは松田と元浜をこき使っていろんな場所の助っ人やサポートをしているらしい。

具体的には女子スポーツ部の雑用。重い物を運んだり組み立てたりする作業とか。あと風紀委員とかの雑用として、イッセーがらみのホモ同人を取り締まっている。
ちなみにカズヒ姉さん「せめて代価を用意して交渉しなさい」と説教しており、時折文芸部が「ストリップするからホモ同人の受けになって」とか言ってきたり。
自分を生贄にすることもいとわない貴腐人の執念は恐ろしい。イッセーには心から同情する。
……俺も巻き込まれてるが。マジで勘弁してほしい。
訴えたら勝てる気がする。ただ訴えると女子が覗きを訴えて、更に過剰防衛でイッセー達が訴えるという負の連鎖が生まれそうだ。やるのは最後の手段最後の手段。
まあそれはともかく。
「修学旅行は京都か。……お土産は八つ橋とかか？」
「そうだな。流石にご当地エロ本を探すとかは、我慢……我慢……う……えぐ……っ」
「ひっぐ……っ」
イッセー達は盛大に泣き崩れた。
俺に返答するかうめくのか、どっちかにしてくれないだろうか。
「我慢しなさい。約束とはきちんと守るから」
「ああ、カズヒってばなんてけなげな自己犠牲！　主よ、悪行を成させぬ為に身を捧げるカズヒに幸あれ！」
イリナはよくもまあ、これにそんな素直な対応ができるもんだ。褒めればいいのか呆れればいいのか。
……俺なんか、私情でたまに失敗してくれないかと思いたくなる時があるのに。我慢するのも結構大変なのに。
「……止めるのもあれだけど、止めたい二律背反が俺を苦しめる……っ」
「君大変だな、九成」
「大丈夫です九成さん。主はきっとその九成さんの忍耐を認めてくださいます」

ゼノヴィアとイリナの慰めはありがたいけど、そういうことでもないんだよ。
「だけどまあ、京都に行けるなんて中々ない機会ね。ふふ、ちょっと楽しみかも」
「お、意外だな。カズヒも京都に興味あるのか？」
元浜にそう聞かれると、カズヒ姉さんも静かに頷いた。
「案外日本人の方がいかないものでしょ？　外国人の観点から見ても興味深いし、いろんな意味で行ってみたいわ」
ふ～ん。
カズヒ姉さんって、結構遊びがあるんだな。
もっと硬くて隙が無い雰囲気だけど、意外と息抜きはするタイプだっていうか。
美味しい物を食べると目を輝かせる。特に卵賭けご飯とか卵かけご飯とか卵かけご飯とか。
あと家の中だと、たまに盛大にだれている時とかもあるし。
オンとオフをしっかり切り分けて、休める時にしっかり休ませられる人物といった感じだ。一目や活動するときはしゃっきりしている時が多いから、周囲の人からは結構勘違いされやすい。
……そういうのが見れるということは、オカ研全体でだけど身内として隙を見せれるところもあるってことか。
まあ、そこはいいんだけど―
「でもまあ、油断は禁物よ。最近は変な連中が色々動いているから、京都でも変な連中がトラブルを起こしているかもしれないんだから」
カズヒ姉さんが気を引き締めるように言うけど、真面目にそこは考えないとな。
俺達が駒王町に来てから何か月も経つけど、一月に一度は神話級のトラブルに巻き込まれてるからな。
修学旅行となると月がずれるし、間違いなく前後で何かしらに巻き込まれそうだ。
特に最近、変態集団がたまに現れるからなぁ。
気を引き締めよう。マジで引き締めよう。

油断していると何が起こるか分かったもんじゃない。ガチで気を引き締めないとなっと。

―そして現実問題、俺達はこれでもかなり苦労している。

具体的に言うと、禍の団の現状におけるトップ派閥、英雄派の連中だ。

「……流石にムカつく展開だ。かといって無茶をして俺達が死んだら―」

「―元も子もありませんしね！」

俺もヒマリも、奴らのやり口には苛立ちを覚える。

英雄派の連中が今行っている活動はかなり単純だ。

世界中から神器を持っている連中を探し出し、禍の団の組織力を使って誘拐。

そして洗脳したうえで最低限の戦闘訓練や戦い方を教えたら、そのまま集団で規模に関わらず俺達敵の拠点付近に送り込んで戦闘させる。

ここ最近の対禍の団戦闘はこればっかりだ。やり方には怒りを強く覚えるさ。

やり口がザイアの連中と変わりない。むしろ強引な手法でいきなり死地に送り込んでいるから質が悪い。まあ、ザイアは本心から全員でやっている連中だから、そういうわけではないのはまだ潔いっていうべきなんだろうが。

個人的には一発かまさないと我慢できない連中だけどな。とにかく殺さないように頑張って何とかしていかないとな。

とりあえず外周から取り押さえるように戦闘を行っているけど、本丸の部隊はグレモリー眷属が対応している。

一応この地はリアス部長の管轄だからな。可能な限りは俺達は露払いに徹するべきだという判断でもある。

そのあたりのリーネスの采配には頭が下がる。確かに頑張った結果あほなことになるのはあれだしな。
そんなことを思いながら敵を無力化していくと、何時の間にか敵は撤退していったらしい。
俺達が残心を取りながら警戒していると、メリードが飛び降りた。
「メリード！　残りの敵はいませんの？」
「周囲の索敵は完了しています。既にリアス様達の方面含めて、敵は撤退を仕切ったようです」
ヒマリに答えるメリードの言葉に、俺も警戒のギアを数段下げる。
念の為帰るまでは警戒を消しきらないようにするが、それでも一息はつけるだろう。
しっかし英雄派かぁ。
「……英雄を目指す者はその時点で英雄失格……か」
俺はそんな言葉を思い出す。
確か元々は特撮の言葉だったな。まぁ、現代で英雄を目指すのはそう言われる素養はあるだろう。
なにせ英雄ってのは、戦争とかがあるからこそ生まれる物だからな。平和を良しとする世界では、英雄になることを目指すのは問題行動と見られても仕方ない。
だけど、それをあえて目指す者がいる。
俺はあの黒髪ツインテールを思い出す。確か、九条＝幸香＝ディアドコイと言ってたな。
あいつはむしろ海賊とサーヴァントとして従えて、堂々と戦乱を引き起こす気が見えた。おそらくあいつにさっきの言葉を言ったところで、鼻で笑い飛ばすんだろう。
……あいつも、たぶん色々と動いているんだろうな。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

禍の団が保有する、トルネード級神器力潜水艦。それらは異形の技術を流用することで、順次追加生産がされている。
そのうち一隻を独自に保有するは、英雄派の独立部隊、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）。英雄派のサブリーダーである九条・幸香・ディアドコイが率いる独自部隊である。
ハリケーン級原子力潜水艦を若干上回る巨体は、当然だが内部の空間も広大だ。そして神器力によって駆動する移動拠点である都合上、原子炉や大量のミサイルサイロを必要としない為、生活拠点としての機能は非常に優秀である。
そんなトルネード級の上級士官室の一角。幸香用の私室で、彼女は一通のメールを送り、そして受け取っていた。
そのメールを確認しながら、幸香は缶ビールを盛大に煽り、そのままフライドチキンにかぶりついた。
咀嚼しながらメールの内容を見直し、そして苦笑を浮かべると、少し考えこむ。
現在、英雄派は積極的な本格侵攻を考慮していない。それは本命の為の下準備を行っている段階であり、その状況下で積極的に動くことにリスクすら感じているからだ。
だが、幸香としては実につまらない状態だ。楽しむことを良しとするものとして、このままというのはどうもつまらない。
「……ふぅむ。これはちょっとガス抜きでもするべきかのぉ」
そう思いながら考えるのは、やけに親近感を覚える一人の外道。
彼から紹介されたメンバーの特徴を踏まえると、上手く利用すれば動き出すことも可能だと思える。
そして考えて、幸香は決定した。
「うむ。少し遊びに行くとするかのぉ」
もちろんきちんと許可を取ってからだが、その上で少し悪戯をした

いとも思っている。
特に興味を惹かれる手合いを、一度からかおうと思い行動を決定した。

神威動乱編　第七話　念願の、デートです！

和地Ｓｉｄｅ

まだ午前中とはいえ、残暑が残っている季節だとちょっと暑い感じはする。
そんな中、駒王町から割と離れたところにあるカフェで、俺は今アイスコーヒーを飲んでいた。
お昼ちょっと前ということで、お腹を膨らませる為にサンドイッチも頼んでいる。
野菜サンド、ＢＬＴサンド、卵サンド。それぞれ一皿ずつ注文して食べている感じだ。
といっても、正直俺の食事はあまり進んでないというかなんというか……。
「食べないの？　こういう機会って滅多にないと思うけれど」
と言いながら、目の前の女の子が野菜サンドを一切れ食べ始める。
白い長髪は見え麗しく、スレンダーと形容できるその体つきも、然し鍛えられているが故のしっかりとした感じを見せてくれる。
……そう。俺は今、カズヒ姉さんとデートをしているのだ。
どうして、こうなった。

遡ること今日の朝、イッセーが朱乃さんとデートをすることになったその当日。
「……行ったわね！　行くわよ！」

「はい、お姉さま！」
「さて、それではしっかり見張らないとな」
「抜け駆けは禁止です」
そんな感じで、リアス部長達女性陣はめっちゃくちゃやる気満々でつける体制だった。
後帽子を被ったり眼鏡をかけたりしてるところ悪いけど、それで目立たなくなったつもりなんですか。
単一民族国家の日本で、こんな髪の色が明らかに黒でも茶色でもない者達が集まって行動してたら目立つに決まってるでしょうに。
俺は止めた方がいいかと真剣に思ったけど、下手に止めると全員を敵に回しかねない。
……付き合わされる羽目になった木場がこっちに片手を上げて謝ってくれるのが、それとなくあいつに同情を覚えさせる。
今度、なんか奢ろう。
と言っても、俺は今日何をしたもんだろうか。
アニルは燻製用の獲物を確保する為、琵琶湖に外来魚を捕りに行っている。ちなみに確実に外来魚をゲットし、かつ全身運動で鍛える為に潜って銛で採るらしい。ヒマリは面白がってそれに参加。
ヒツギとルーシアは、教会側の拠点として復活した教会に顔見せに。お土産としてクックスがお菓子を作っていたので、後であまりを貰おう。
インガ姉ちゃんは今回一日フルで侍従業務だし、リーネスはなんか真剣に頑張りたいらしく、地下に作ってもらった魔術師の研究施設ともいえる魔術工房に籠っている。
……鶴羽のところにでも顔見せに行こうか。何故か最近、学校でも避けられている気がするし。
でも手土産は必須だよなぁと思っていた時、階段からカズヒ姉さんが下りてきた。
「あら、和地だけ？　リアス部長は？」
「……イッセーと朱乃さんのデートを監視する気満々だった」
俺が遠い目をしながら答えると、カズヒ姉さんはため息をつきなが

ら額に手を当てて俯いた。
「……全くもう。デートはグダグダになること間違いなしね」
だよなぁ。
絶対部長達、自分がこの国じゃあ目立つってことを理解してない。尾行に全く向いていない格好をしている事実に気づいてほしい。
イッセーと朱乃さんには同情する。いや、朱乃さんはSなところがあるから、むしろからかって楽しみそうだ。
とは言ってもこのでかい豪邸でメインメンバーがいなくなると、急に寂しくなるな。
そしてふと気づくけど、俺は今、カズヒ姉さんと二人っきりに近い。
……え、これどういう状況？
思わず顔が赤くなるけど、カズヒ姉さんは少し考えこんでいた。
なんだろうと思ったら、カズヒ姉さんは時計をちらりと確認すると、少し頷いた。
「和地、もしかして今日は暇？」
「ああ。だからどうしたもんかと思ったんだけど」
素直に答えると、カズヒ姉さんは少し微笑んだ。
綺麗だなぁ。惚れ直すなぁ。
俺がそう思った時―
「和地が良ければ、私達もデートしてみない？」
……。
なぁにぃいいいいいいいいっ!?

そんな訳で、俺達は今、駒王町から割と離れたところに遊びに来ている。
適当に色々な店を見つつ、後で映画を見る感じだ。そしてその前の軽い腹ごしらえも兼ねている。
その後は別のお店でおやつも兼ねてお茶をして、お土産を買って帰

るといった感じになる。ちなみに映画は痛快娯楽系統のアクション映画にしようかって感じだ。
……いやほんと、何て言うか意外な展開。
「カズヒ姉さんから誘ってくれるってのは意外だけど、正直戸惑ってるけどマジで嬉しいかな」
「そうね。私も頑張ってる子にご褒美ぐらいはあげるのよ？」
そう微笑するカズヒ姉さんは、コーヒーを一口飲むとほっと息を吐いた。
「頑張って昔出会った女性を引っ張り上げて、更には私の要望を見事クリアーしたもの。少しは何かしてあげないと可哀想じゃない」
そう言って実際にしてくれるのは嬉しいけど、ちょっと残念なところもあるな。
「つまり、本気でＯＫってわけじゃないってことか。そこは残念」
「そこはあなたの努力次第ね。条件はクリアしてきているんだから、頑張って成果を上げなさい」
これはまた、難易度が高いことで。
でもまあ、ご褒美をくれるぐらいの勝ちはある相手って扱われてることだな。
頑張っていけば……行けるか？　そもそもその方向で頑張っていいのか？
いや、別にハーレム全否定するつもりないし、俺も男だからそういうのにちょっと夢を感じない訳でもない。だけど「カズヒ姉さんと付き合う為」に「女の子を惚れさせてハーレム生成」は何か違うしなぁ。
なんか微妙な気分になったけど、まあ今はデートを楽しもう。
俺はサンドイッチを一切れ採ると、それを頬張った。
あ、これ本当に美味い。

そして映画は映画で楽しかった。

頭を空っぽにして見ればいい感じに楽しめる映画だったな。
そして映画で白熱したからか、ちょっといい感じに小腹が空いた。
「で、カズヒ姉さん。どこに食べに行く感じなんだ？」
「そうね。サンドイッチは美味しかったけれど、今度は甘いものが食べたいから……」
そう言いながらガイドブックを取り出そうとしたカズヒ姉さんの動きが、急に止まった。
というか、あらぬ方を見て固まっているけど、どうしたんだ？
俺がその方向に視線を向けようとした時だった。
「ほほう？　よもやよもやの出会いではないか」
……冗談だろ。
俺が目を見開く先、そこには黒髪ツインテールの女が一人。
白髪ロングのカズヒ姉さんと視線をぶつけ合い、周囲の人達の視線が集まる中、俺はそいつの名を口に出す。
「……九条・幸香・ディアドコイ……っ」
寄りにもよって、此処でお前が出てくるのかよ。
後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）、九条・幸香・ディアドコイ！

神威動乱編　第八話　白銀と黄金

和地Ｓｉｄｅ

「……うむ！　こういうのも中々美味い物よ！」
「いや、お前はそれでいいのか」
そう豪快に笑い飛ばしながらハンバーガーを褒める九条に、俺は半目でぼやいた。
いきなり敵組織の重鎮が出てきた中、俺とカズヒ姉さんはハンバーガーショップでシェイクをすすりながら九条をにらんでいた。
なんでこうなったかというと、九条が提案してきたからだ。
「こんなところで暴れるのはそちらの趣味ではあるまい？　奢るから一時停戦とゆかぬか？」
実際問題、都心のど真ん中でガチバトルをしたら確実に被害が出るからな。
非常に不本意だけど、下出に出るしかなかった。
とりあえずダブルチーズバーガーを一口食べてから、フライドオニオンとフライドポテトをがっつり口に入れてコーラで流し込む。
まったく。都心から離れているけど遊び場としてそれなりに行けるスポットって話だったが、だからこそ異形や異能関係の警戒網もさほどではないってことか。まあ、こいつの実力なら強引に突破もしてそうだけど。
俺がその辺を考えながら警戒していると、幸香はこっちを見ながらケースを差し出してくる。
……この店で人気があるらしい、ベリーパイ（五個セット）だった。
「何をしておるか。折角金に糸目をつけずに奢ると言っておるのだ。思う存分食べるとよいぞ？」
「食いすぎは健康に悪いけどな」

とりあえず、俺はちょっと警戒しながらベリーパイを手に取った。
幸香とパイを交互に見ていると、幸香は呆れた表情を向けてくる。
「毒など持っておらんわ。妾はもっと豪快なやり方を好んでおる。なにより自ら食事の為に来た店で毒殺など、流儀に反す」
そう言いながらあちらもベリーパイを豪快に食べると、カズヒ姉さんは軽く肩をすくめながらベリーパイを一口食べる。
ただし、咀嚼したけどすぐには飲み込まなかった。
そして十秒ぐらいたってから飲み込むと、こっちに向いて微笑んだ。
「大丈夫。少なくとも何個か食べただけで人間なら死ぬような量の毒物は無いわね」
「……分かるの姉さん」
俺は思わず唖然とする。
え、今舌で判断したのか？　暗部の技術って凄い。
俺が戦慄していると、カズヒ姉さんは苦笑した。
「魔術よ魔術。最も一工程（シングルアクション）で習得するには、平均レベルの魔術回路の質がいるけど」
……ああ、なるほど。
俺には無理だ。質とか底辺レベルだし。
俺が苦笑していると、何時の間にかカズヒ姉さんをじろじろ見ていた幸香が、適当に何かを口に含んでうんうん頷いていた。
何してんだと思ってたら、飲み込んだ幸香はにやりと笑う。
「中々愉快な魔術よな。だがよい、咀嚼しながらなら味わっている風にも見えるからのぉ」
……え、耳コピならぬ目コピしたのかよ。
俺がまた戦慄していると、カズヒ姉さんは舌打ちした。
「……流石は模倣の属性を持つ魔術回路持ちね。魔眼と併用すれば、これぐらいの魔術なら目で習得できるわけね」
「……そちらも、我が魔術回路の属性を知っておるとは中々できるのぉ」
女子二人の鋭い視線のぶつかり合いに、俺は何も言えなくなってい

る。
いやいやいやいや。ちょっと待って。
俺がついていけてない。っていうか本当にちょっと待て。
「カズヒ姉さん。魔術回路の属性に模倣なんてあった？」
「基本的には無いわ。ただ五大属性以外にも属性そのものは存在して
て、彼女はその希少価値のあるレアキャラってだけよ」
「その通り！　禍の団にも魔術回路持ちはおるが、模倣の属性を持つ
者は妾しかおらぬでな！」
マジか。
いや、そこは今どうでもいい。
というよりだ。
「……で、俺達相手に奢りなんてしてどういうつもりだよ？」
「むぅ？　特に理由は無いぞ？」
俺は思わず絶句して、ため息をついてからチーズバーガーを一口食
べた。
いやいやいやいや、ちょっと待て。
俺達敵だぞ？　三大勢力の和平の象徴と、その和平妨害を第一弾で
やらかしたテロリストだぞ!?　普通に不倶戴天の怨敵だぞ？
俺はマジかと目で伝えたけど、幸香は本気で肩をすくめた。
「別に敵同士だからと嫌い合うことなどなかろうて。敵か味方かと好
きか嫌いかは全く別の基準だろう？　世も旧魔王派の三人は空かぬ
が、必要な協力は買ってでもしたのでな」
「……必要はないけれど奨励もされないわね。好きな相手と殺し殺さ
れの関係なんて、判断が狂うし精神衛生上よくないでしょうに」
さらりと返すカズヒ姉さんは、シェイクを一口飲んでからため息を
ついた。
「まして好感を抱く相手に自分の友や仲間を殺したり殺されたり、逆
に自分がそういう側に立つなんて、考えるだけでも嫌な物でしょう？
少なくとも、そういう手合いは相当の割合でいると思うけれど」
……なんか、素直に心配しているような言い草だな。
初めて会ったときに幸香の意味深な対応やカズヒ姉さんの動揺と

いい、もしかして因縁とかあるのか？
俺が割って入れないような気になっていると、幸香は呆れた感じでこれまたため息をつく。
「そのような感性とは無縁でのぉ。同胞を殺された怒りと、そのものに好感を抱けるかどうかは全く別だろうに」
「世間一般ではそういう奴の方が少ないとは思うけれどね」
そんな言葉の応酬に、幸香はにやにや笑ってカズヒ姉さんはしかめっ面だ。
「……っていうか、テロリストがのこのこんなところに出てきていいのかよ？　もうちょっとこそこそした方がよくないか？」
俺は空気を換えることもかねてそう返すと、幸香は不敵な笑みを見せてきた。
そんな必要などないし、興味もない。そんな意思が見ているだけで理解できる。
「下らぬ。妾は海賊にして征服者。動く時は豪快に行ってこそ。本気で動く時は常に派手かつつ豪快にゆかせてもらうわ」
……なるほどね。
この女、やっぱりだけど俺達とは方向性が違うだろう。
俺はその予感を確信に変える為、真正面から幸香を見据える。
そんな俺の視線に、幸香も少し雰囲気を変えた。
真剣。その二文字を覚える雰囲気に、俺は真っ向から切り込んだ。
「その過程で、多くの人達に嘆きの涙を流させてもか」
「無論」
即答だった。
嘘偽りも歪曲もない。むしろ何を隠すことがあるのかという、そんな強い意志を感じさせた。
「そも人間の夢や野望とは、同じ夢を持つ他者すら蹴り墜とすものよ。その道を選ぶと決めた妾が、そんなものを気にするような感性を持つと思うのか？」
はっきりと、嘘偽りなく宣言する。
「何より生物とは、より多くを得る為なら同族すら蹴落とせる存在で

あろう？　粘菌や植物ですらそれをするのに、妾達が躊躇するなどおかしな話よ」
恥ずべきことなど何もない。これが己であり、そして誇らしい。
そんな自慢げな雰囲気すら見せる。そこに矜持すらあり、胸を張って前に進める生き方しかしていない。お天道様に顔向けできないことなど何もしていない。
そう、彼女は態度ではっきりと示して見せた。
……その態度に、俺達は言葉で止めることは不可能だと悟る。
彼女はこう生きてそう死ぬと、とっくの昔に決めている。
負けて悔しむことはあっても、その生き方を悔いることは無いんだろう。それほどまでに、己の生き方に対して恥がない。潔さすら感じさせる、清々しいまでの蹂躙者。
彼女とは相いれることは無いんだろう。俺はそう、痛感した。
「……なら、もう殺し合いしかできないのね」
カズヒ姉さんは、そう呟いた。
表情は髪に隠れて見えないけど、きっと笑顔ではないんだろう。
……カズヒ姉さんはどうも、幸香に対して思うところがあるらしい。
それが何かは分からない。そこまで分かるほど、俺はカズヒ姉さんのことを分かってない。
だから、俺は俺が聞くべきことを聞こう。
「……そういえば、後継私掠船団のアーネ・シャムハト・ガルアルエルと、その妹のベルナ・ガルアルエルってのに会ったんだが」
「そうだったのぉ。アーネは見所のある女ゆえ、妾も気に入っているぞ？」
そうかえす幸香に、俺は切り込んだ。
「ベルナの方、テロリスト何て付き合いでやらせるものじゃないと思うんだけどな」
「……なるほど、のぅ」
幸香は意味深に微笑んだ。
俺の感覚が当たっているのか、それとも見当違いなのか。

俺がそれを探ろうと思っていると、幸香は豪快にチーズバーガーを食べきってから、ふぅと息をついた。
その上で、幸香は真っ直ぐに俺を見る。
「ならばちゃんと伝えて引っ張り上げるがよい。妾は奴にはさほど引かれぬ故、勧誘するのを止めはせぬよ」
……なるほど、な。
俺は聞くべきことは聞いた。なら、もういいだろう。
がっつりと頼んだ注文を食べながら、ちらりとカズヒ姉さんを見る。
カズヒ姉さんは表情を動かさなかったけど、テーブルの下で俺に触れる。
さて、これから―
「では、すまぬが妾は帰るとする」
―いや、気づかれていたか。
「もう帰るの？　もうちょっと話に付き合ってもいいけれど」
「本心からなら構わぬが、時間稼ぎには付き合えぬのぅ」
カズヒ姉さんにさらりと切り返しながら、ちゃっかり注文を全部食べ終わっていた幸香は領収書を取った。
「必要ならば堂々と突破し粉砕するのが妾だが、要らぬ争いは今は避けよと頭がうるさいのでな。今日はすまぬが戦は避けるとしよう」
そう言いながらレジに向かっていく幸香を見ながら、カズヒ姉さんはため息をついた。
「……それが、貴女の結論なのね」
そう呟くカズヒ姉さんは、どこか寂しそうだった。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「曹操、禍の団全体の方はどうなっておる？」
『ガス抜きに外に出ている最中によく聞いてくるね。……まぁ、一部を除いて統制は取れているよ』
「ヴァーリも自由よなぁ。良くも悪くも枷にはまらぬ男よ」
『まあね。基本的には相互不可侵ということだけど、それとなく監視はつけておかないと』
「そのようだの。まあ、妾も伝手の一つや二つはある故、そちらにも一言言っておこう」
『そうかい？　ああ、そういえばアースガルズで妙な動きがあるそうだよ』
「ほほう？　ミザリの動きで和平反対派がクーデターでも起こしたか？」
『そこまでには至ってないようだね。ただ、同時期にオーディンとロキが行方をくらましたらしい』
「……和平派でもある主神と、反対派筆頭の悪神がか。これは一つ面白い催しが起きるようだなぁ？」
『ああ、その件でミザリが動きたがっているから、人材をある程度派遣しようって話になってるんだ』
「よかろう。英雄派からは妾が出るとしよう」
『言ってくれると思ったよ。さて、そろそろこちらも一仕事だね』
「禁手のデータは十分とれたのか？　全く、慎重というか臆病というか」
『いいじゃないか。折角テロリストになっているんだから、だからこそできる手法をとるべきだろ？』
「物は言いようだな。まあよい、恩恵は妾達もしっかりと受けさせてもらうぞ？」

神威動乱編　第九話　再開の女教師

和地Ｓｉｄｅ

幸香と別れたそのタイミングで、とんでもない連絡が入ってきた。
それに慌てて俺達が兵藤邸に戻ってみると、実際にその通り過ぎてどうしたもんかと思ってしまう感じだった。
「ほっほっほ。遊びに来たぞい」
そうおっしゃるのは、長い髭と片眼鏡を付けたお爺さん。
聞いて驚くがいい。この方こそ北欧の主神であらせられる、アーズガルズのオーディン様だ。
「いやぁ、いいおっぱいが揃っておるのぅ。眼福じゃ」
……セクハラ爺にしか見えないのが、凄く残念だ。
そんなオーディン様についてきているのは四人ほどいた。
内二人は、俺も結構知っている人物だったりする。
「ゴメンね、お父様が。……いやホント、セクハラも大概にしてよね」
苦笑いしながらオーディン様をたしなめるのは、その娘というトンデモ事実をつい最近知った、かつて俺が通っていた外国語塾の女講師でもある、リヴァ先生ことリヴァ・ヒルドールヴ。
「……」
「……」
と、朱乃さんと沈黙し合っているのは、神の子を見張る者（グリゴリ）幹部のバラキエルさん。
ちなみに朱乃さんの親父だそうだ。正直じみにビビった。
とまあ、この時点で色々と緊張感があるんだけど……。
「まったく。オーディン様は自分が北欧の主神だということを自覚してください！　各勢力に対して面目が立ちませんよ！」
と、説教モードに入っているのはスーツを着た女性に、隣で神父服

を着こんだ男性がうんうんと頷いていた。
「全くです。我々部外者だけでなく、側近の方をあまり困らせるものではありませんよ？」
割と全方位から非難されて、オーディン様も流石にダメージが入ったらしい。分かり易く憮然としている。
「……そんなだからお主らには伴侶がおらんのじゃ」
三流の捨て台詞ですぜ、主神殿。
俺が思った瞬間、スーツを着た銀髪の女性が崩れ落ちた。
「誰が行き遅れの独身女よぉおおおお！　私だって好きで処女じゃないってのにぃいいいいいっ！」
「落ち着いてください。そこまで誰も言ってません」
神父服の人が慰めるけど、女性は全く聞いてなかった。
めっちゃ落ち込んでえぐえぐ泣いてるけど、もうどういう状況だよ。
カズヒ姉さんはちょっと違う感想なのか、男性の方に同情的な視線を送っていた。
「……確か、ゴルフ部隊のゲイル・レーだったわね。まさか主神の護衛になるなんて……出世というよりは厄ネタを押し付けられた感じかしら？」
「相変わらず切れ味の鋭い言い分だな。カズヒ・シチャースチエ」
……ちょっと待った。
「え、知り合い？」
「そうだったの。ということは、プルガトリオ機関なの、彼？」
俺と部長に聞かれて、カズヒ姉さんはさらりと頷いた。
「プルガトリオ機関の護衛部隊であるゴルフ部隊のメンバーよ。以前要人だけど汚職の嫌疑がかかっていて色々と恨まれているやつの護衛兼内定の任務があって、その時バディを組んでいたの」
「あの時は実にややこしかった。嫌疑は半分がガセで半分が事実だったことで、庇う側と狙う側がそれぞれ別々の案件で動いていたからややこしいことこの上なかった」
大変だな、プルガトリオ機関。

「改めて、プルガトリオ機関ゴルフ部隊所属のゲイル・レーだ。母親がヴァルキリーだった縁で、オーディン様の護衛として派遣されている」
ほほう。そんな来歴なのか……。
そんなある意味適当な理由で、こんなセクハラぶちかましてくる神様の護衛か。そっか……。
俺達は一様に同情の視線を送ってしまった。
そんな空気を、アザゼル先生の咳払いが吹き飛ばす。
「……でだ、予定より早く来るとかやめてくれねえか、爺さん。こっちだって段取りとか下準備とかがあるんだからよぉ」
「ほっほっほ。ちょっとこっちにも事情があってのぉ。そこはすまんかったわぃ」
そう返すオーディン様は、なんか面白そうな表情を浮かべていた。
「なんでもそこかしこで禁手（バランス・ブレイカー）に至っている人間が出ておるそうでな。あれは珍しい現象のはずなんじゃがのぉ」
……っ
ったく、これは本当に厄介な状態だな。
禁手は神器使いの究極で、文字通り至っているといないのとでは同じ神器でも格が違う。
木場の聖魔剣は特例に近いが、あれを思い出すのが一番だろう。普通の魔剣創造では七分の一状態のエクスカリバーに手も足も出なかったのに、禁手に至ったら何本も合一させたのを相手に一対一でも渡り合えたんだ。あのレベルだって禁手全てを探せば多少は見つかるだろう。
そんな禁手に至る連中が頻発とか、どういうことだ？
「……今までの事例から考えても、偶然多発しているとは考えづらいですよね？」
ルーシアがそう言うと、先生も頷いた。
「ああ、おそらくはリアス達が依然推測していた、英雄派の活動の真の狙いがそれってことだろうな」
そういうと、先生はうんざりした表情でため息をついた。

「俺達みたいな立場じゃ絶対できない、乱暴だが手っ取り早い方法だ。とにかく神器使いを集めて洗脳してでも死地に送り込み、数多くの到達者を強引に作り出す」
「そしてそこからデータを取って、点と点をラインで繋ぐことで大まかな法則や傾向を知ることで、逆算する形で始点と終点のラインを結ぶことで―」
「―禁手への到達ルートを割り出すというわけねぇ。本当に乱暴で犠牲者も沢山いるけれどぉ、やれば必ず最後には辿り着ける方法ねぇ」
カズヒ姉さんとリーネスも、げんなりした表情でそう言った。
いや、本当に乱暴すぎる方法だろう。
死者が多数出ても構わないとか、まともな連中なら絶対しないし、やれば絶対他の勢力から袋叩きだ。
テロリストに身をやつした連中だからこそできる方法か。全くホントに厄介というか。
「世の中、悪党の方がリスクはでかいけど、悪党の方が制限は少ないってわけか」
俺が盛大にため息をつくと、イッセーは歯を食いしばりながら拳を握り締めた。
「その為に何も知らない連中を洗脳して、俺達と殺し合わせるってか……っ」
「悪趣味を通り越して下劣ですのよ。一発かましてやりたいですわね」
ヒマリも珍しく不快を隠そうともしてないけど、実際そう言いたくなるぐらいの悪辣なやり方だ。
「……十字軍然り宣教師から続く植民地化然りコンキスタドール然り、一方から英雄的活動に見える行動って、される側から見ると悪逆非道な真似って扱いになることはあるけどさぁ。これはちょっとやりすぎじゃない？」
「そして、そんな連中と手を組んでるのがうちのアーサー・ペンドラゴン。元々英雄派にいたって話も聞くし、いろんな意味でペンドラゴン家の名に泥塗りやがって……っ」

ヒツギがそう皮肉気に言うと、アニルも歯を苦縛っている。
どこもかしこも大迷惑だ、やってくれるじゃねえか。
空気が微妙に沈む中、木場が疑問顔で手を上げる。
「……とは言いますが、そんな簡単に禁手に成れる方法が本当にあるんですか？」
俺たちに注目されながら木場がそういうと、イッセーも同意見なのかハッとした表情だった。
「あ、俺も同感。こっちがあれだけ苦労して準備ができて、そして部長のおっぱいがあってこそなれたのが、そんな簡単になれるって……ありですか？」
「イッセー（お前）はいろんな意味で参考にならねえよ」
先生はとりあえずそこを断言した。
気持ちはとてもよく分かるので、誰もそこについては何も言わない。
いや、そりゃ最後の一押しが必要とか言う段階まで来てからな。宇宙の始まりを感じるような精神的なカンフル剤があれば、至れるだろう。そこは否定しない。
だけどそれが人生初乳首押しって……。
本当に残念なものを、俺は今見ている。
「なあ、俺怒っていいか？　怒っていいよな？」
「むしろ怒られるのはイッセーの方です」
憮然とするイッセーにシャルロットがぴしゃりと言い切った。
まあシャルロットはシャルロットで禁手に至っているからなぁ。そのきっかけともいえるカッコいいことをしたイッセーが、乳首で禁手とか嫌な気分にしかならないだろ。
なんというか、すっごい複雑な表情だし。
そんなシャルロットは咳ばらいをすると、アザゼル先生に向き直る。
「とはいえイッセーの言いたいことも分かります。如何に非人道的な手段を使ったとはいえ、これまで偉業とされてきた禁手の到達が誰にでもできるようにとは―」

「……じゃあ逆に聞くが、お前は生前に半日で地球の裏側に行けることになるなんて思ったことがあるか？」
アザゼル先生がそう切り返すと、シャルロットは押し黙った。
それを見て、先生は深くため息をついた。
「技術の発展ってのはそういうもんだ。特にここ最近の人間の発展は、俺ら長く生きてる連中からすれば音速突破とか十段飛ばしとかそんな感じだ。そんな人間の傑物を中心とする英雄派が、文字通り手段を択ばずやった結果それが見つかったとしても、俺は納得だな」
……まあ確かに。
文明の発展って、進めば進むほど加速するところあるよなぁ。
研究の為の技術も発展しているからとか、そんなことなんだろうけど。
俺達がふと沈黙していると、今度はルーシアが一歩前に出る。
「その英雄派ですが、仮にも英雄の名を名乗って起きながら悪質な手段ばかり使っていませんか？　かつての英雄にあやかっているにして悪質すぎて、裏に何かあるような気がするのですが」
あ～。それはそうかも。
確かにやってることが誘拐洗脳使い捨て実験台のオンパレードだからな。
もっとこう、何て言うか……ねぇ？
そんな感じで俺達が視線を交わし合うけど、アザゼル先生やオーディン様、バラキエルさんは平然としていた。
「ほっほっほ。ワシらがヤンチャしとった時期の英雄なら、これ以上にヤバいことも色々しておるぞ？」
「全くだ。英雄がもたらした偉業なんて、敵対者からすれば殺戮や略奪も同じ。よく言うだろ、歴史は勝者が作るって。大抵の英雄伝記何て美化されてんだよ」
オーディン様とアザゼル先生がそういうこと言うと、説得力が違いすぎる。
文字通り現場で見たりしたこともあるだろうからな。反論しづらい。

「ヒツギもさっき言ってたろ？　教会ですら十字軍遠征やら宣教師関連は美化してるが、実態は異教徒の弾圧やら略奪、もしくは植民地政策の前座になったりしてるからな。勝者側に都合が悪いからあんまり指摘されないようになってるだけなんだよ」

そう先生は言い切った後、その上でにやりと笑った。

「だが、こっちが何の改善もしないで繰り返してやる必要はねえ。向こうが古臭いやり方のままで行くってんなら、新しいからこそできるやり方でぎゃふんと言わせてやりな」

「先生、いいこと言うじゃないですか！」

イッセーが表情を明るくすると、何となく周りの皆も明るくなった。

こういうのって本当に才能だな。ちょっと羨ましい。

俺が少し羨ましがっていると、ぽんと肩に手が置かれた。

ふと見ると、リヴァ先生が苦笑してた。

「あんまりない物ねだりしてもだめだよ？　まずある物でどうにかしようとしてからじゃないと、成長しないからね？」

「……うっす」

ま、確かにその通りだな。

人間、ない物を何とかしようと努力することも必要だけど、何よりまずはある物を使ってどうすればいいかだ。出ないと救える命も救えない。

誰かの涙の意味を変える男が、ない物ねだりで何もできないなんて論外だ。その辺はしっかり考えとかないとな。

そう気合を入れなおしていると、イッセーがふとこっちをジト目で見てきていた。

「そういえば、前から先生とか言ってたけど知り合いなのか？」

「ん、ああ」

そういえば紹介してなかったな。

いい機会だ。ちょっと紹介しておくか。

「紹介するよ。俺がザイアに拾われる前に通っていた外国語教室で講師をしていた、リヴァ・ヒルドールヴ先生だ。……子供にガチの法律

知識の運用方法を教えてくる、微妙に変な先生だ」
「こらこら。法律ってのは知っておいた方がいい知識よ？　知っていればしなくて済む犯罪や、身を守れる方法なんていくらでもあるんだから」
いやまあ、確かに法律知識はすごく助かりました。とっても助かりましたし、おかげで春っちとか助けられたこともあるけど。
訂正を求めるのはそっちかい。
俺がツッコミを入れようと思った時、イッセーが崩れ落ちた。
「お、女教師……！　そんな属性を、お前はカバーするってのかよ!?」
「オイコラどういう意味だ」
なんでいきなりそうなる。何がどうしてそうなる。
思わず蹴り飛ばそうとかとも思ったけど、ぐっと堪える。
張り倒すよ？　張り倒そう。いや張り倒せ！
真剣に本気で怒ってるんだが、イッセーはむしろ泣きそうだった。
「クソッタレ！　インガさんも実年齢は年上だし、お前年上で攻める気か！　モテない俺に対してなんて奴だ、くたばれ！」
「くたばるのはお前だいろんな意味で」
お前も年上二人も墜としているだろうが。年下も二人も確保してるだろうが。同年代も二人いるし、更に増える雰囲気を見せているだろうが。
お前本当に後ろから刺されるぞ。
モテている自覚がかけらもない男って、男の視点から見ても害悪だな。一つ余計な知識がついたぞ。
俺達がため息をついていると、リヴァ先生が崩れ落ちているイッセーに屈み込んだ。
「いや、モテたいならまず、自分を見直さないと駄目だよ？　自分のしたい行動じゃなくて、モテる行動をまめにしないと」
「リヴァ先生。イッセーの場合その必要は無いから」
既にこいつはモテてるんだ。自覚が何故か全くないだけで。

神威動乱編　第十話　とある夜の複雑な親子事情

そしてその日の夜のこと。
「……うぅ、朱乃……ぉ」
「まあまあバラキエルさまぁ。元気を出してくださいなぁ」
凹んでいるバラキエルさんに、リーネスがそっとお酌をする。
「……では、つまみがいくつかできましたので、配膳をお願いします」
「かしこまりました。クックスさん」
インガ姉ちゃんがクックスが作った各種つまみを配膳する。
そんな、落ち込んでいるバラキエルさんを励ます会が行われていた。
「あ、これ美味しいですの～♪　ほら、バラキエルさんも食べたらいいと思いますの」
「ああ、いただくよ……」
そして能天気なヒマリが頭をなでながら進めたことで、バラキエルさんも箸を勧めてくれた。
というかバラキエルさん相手にもバブみをみせるか。怖いもの知らずってのはこういうことを言うんだろうなぁ。
俺は一周まわって感心しているけど、まあここは二人とは違う方向で行くべきか。
ちょっと聞きづらいけど、今後を考えるなら必要だ。
「……バラキエルさん。そもそもなんで朱乃さんと仲が微妙というか、リアス部長の眷属になってるなんて展開になるんですか？」
そもそもそこから情報が足りてない。
今後朱乃さんの味方になるにしろ、バラキエルさんの味方になるにしろ、そこをまず知らないと話が進まない。
もちろんそれだけの複雑な事情、ややこしい事実が隠されているからなんだろう。
それでも、これは必要なことだろう。
だからまあ、此処は俺が踏み込むべきだ。

「それはぁ……」
「構わない。朱乃の仲間なら知る権利はあるだろう」
リーネスが止めようと下を更に止めて、バラキエルさんは話し出した。
朱乃さんの母方の実家は姫島家で、日本の異能組織最大手の五大宗家の一角だ。
元々五大宗家は排他的かつ鎖国的な風潮なんだけど、そんな姫島家の才媛である姫島朱璃と、深手を負ったバラキエルさんが出会い、それ縁で恋に落ちた。
これにおいて姫島達は基本的に嫌悪感を見せていた。更に生まれた朱乃さんは、炎と朱雀を司る姫島の血より、雷光を司るバラキエルさんの血が濃かったから、尚更関係が苛立った。
そしてそれが爆発し、一部の連中がバラキエルさんの排除に乗り出した。
これは何とかバラキエルさんがしのぎ切ったんだが、その結果として仕掛けた連中の苛立ちがピークに到達。結果として堕天使を嫌っている連中に情報をリークしたらしい。
そしてタイミングが悪いことに、タイミング悪くバラキエルさんが仕事で離れている時にそいつらが襲撃。襲撃者は朱乃さんのお母さんを殺した上、堕天使と結ばれて朱乃さんが生まれたことが理由だと抜かしたらしい。
で、子供故の純粋さでそれを鵜呑みにした朱乃さんは、助けに来たバラキエルさんを拒絶して家出。更に姫島家の連中は朱乃さんを汚点として排除しようと刺客を差し向け、堕天使側がカバーに入ったりと大忙し。
最終的に悪魔の縄張りに入ったことでどん詰まりになったかと思いきや、そこがリアス部長と縁のある悪魔の管轄だったことで、部長が割って入って色々と交渉。最終的に「姫島という姓が同じだけの悪魔の娘」という形にし、更にグレモリー家が相応に対価を払うことで、何とか朱乃さんは安住の地を手に入れたということだ。
「……結果論ですけど、これ堕天使側が保護するよりはましな展開に

なってるのが複雑ですね」
「そうねぇ。この数年後にまた別の形で五大宗家と色々あったりしたから、尚更色々大変なのよねぇ」
リーネスが俺に同意しつつため息をつくけど、まあ気持ちは分かる。
俺は詳しく知らないけど、神の子を見張る者の阿呆が十段飛ばしの研究をする為に脱走して、五大宗家で冷遇されている者達を唆したり、聖十字架の担い手と共謀して大騒ぎしたとか。
豪華客船一つ沈没させて、死亡者と思わせる形で修学旅行中の生徒を実験体として誘拐したとかなんだとか。
……日本政府の人達には同情するし、組織の一員として深く関わる時は頭を下げそうだ。
そんな状況下で堕天使側が強引に保護しようとしたら、冗談抜きで五大宗家と神の子を見張る者が戦争になる。介入するのも大変だったろう。
冗談抜きで博打じみた方法だけど、まあ良かったんだろう……か？
ちょっと不安になるけどまあそこはいいとしよう。
俺は強引かつ無理やりに抑えると、ため息をついた。
「なあリーネス。これ、とっかかりさえできればすぐに和解できるんじゃないか？　もっとも……」
「そのとっかかりが難しいのが難点よねぇ」
俺とリーネスは盛大にため息をついた。
この問題、ちょっと強引だけど「朱乃さんが相手の暴論を壁面通り受け取っている」ことが理由と言ってもいい。
三大勢力が和平を結んでいる状況が今だ。まして五大宗家側のそれも暴走したような連中の言い分を、一方的に鵜呑みにする必要はない。堕天使の組織とも接して客観視はできているだろう。
でもできないってことは……その……。
「意外と子供っぽいんですのね、朱乃さんって」
ヒマリ。そこはっきり言わないでくれ。
俺はどう答えたらいいかちょっとよく分からなくなっているけど、

リーネスは苦笑いを浮かべていた。
「幼少期の痛烈な経験ってそういうものよぉ？　子供の頃の原風景は、良くも悪くも理性で制御できないものぉ」
あ～。そこはなんとなく分かる。
俺の行動原理も、物心つく前レベルのあの言葉と笑顔にあるからな。これは俺の芯だから、変えろと言われても変えられないレベルだ。
そうなると、強制は意外と大変なことになりそうだな。
俺が悩んでいると、ヒマリはうんうんと頷きながら何故かにっこり微笑んだ。
「でもまあ、イッセーがいるなら何とかなるんじゃないですの？」
「……いや待ってくれ！」
何故かバラキエルさんが喰らいついた。それも何というか反対的なあれで。
「あ、あの年で同衾しようとするような男など信用ならん！　高校生で娘をラブホテルに詰め込もうなどと……っ！」
その言葉に、俺達は顔を見合わせた。
ヒマリと見合わせて頷き合い、リーネスと見合わせて理解し合い、インガ姉ちゃんと顔を見合わせて納得した。
非常に、非常に言いづらいことが分かった。
娘に夢を見ているバラキエルさんに、いったい誰が言えばいいのかという内心の争いが怒っている気がする。
インガ姉ちゃんに言わせるわけにはいかないが、できればリーネスに言ってほしい。でもリーネスも誰かに言ってほしいと思うだろうし、そうなると立場的なところからインガ姉ちゃんが自ら言いかねない。
となるとやっぱり俺―
「それ絶対朱乃さんの方から連れ込もうとしてますのよ？」
―ヒマリ、スパッと行くなや。
「う、嘘だ！　いくら友人を庇いたいからって、言っていいことと悪いことが―」

「いえいえ。イッセーは何故か恋愛対象として自分が見られてるなんて想像することができない肉巻きアスパラ系男子肉食系男子に見えた草食系のこと。逆パターンをロールキャベツ系男子というですの。むしろ常にリアス部長や朱乃さん達が貞操を狙って鞘当てをするのが兵藤邸の基本ですのよ？」

思わず俺もリーネスもインガ姉ちゃんも、話を振られたくないので全力で顔を背けた。

だがそれで現実を理解したらしく、バラキエルさんは崩れ落ちた。

いや、その、本当なんで……すいませんフォローできない。

もはや何も言わない方がいい。今何か言ったら、絶対に墓穴を掘る。

「でもまあ、欲望を司る悪魔や欲望で天使からなった堕天使だから納得ですのよ」

「ぐはっ！」

とどめを刺すなヒマリ！

「……まぁ、スケベではあるけど良い子よねぇ」

「あ～まぁ、悪意とかで行動しない分、ディオドラとは比べ物にはならないかな？」

リーネスとインガ姉ちゃんがそうフォローするので、俺も言うべきことは言っておくべきだろう。

「大丈夫ですバラキエルさん。イッセーは性欲が過剰すぎるだけで優良物件です。少なくとも、朱乃さんにしっかり寄り添ってくれる好青年だと断言できますから！」

「そ、そうか？　大丈夫なのか？」

めっちゃ弱弱しく言ってくるけど、そこは大丈夫。

俺は力強く頷いて、バラキエルさんの肩に手を置いた。

「あいつは変態なだけで良いやつです。恰好だけ取り繕った奴より何十倍もカッコいいです！　断言できます安心してくれ！」

いやほんと、そこは断言してもいい。

仲間の信頼に応える為に全力を尽くせるし、自分の身を犠牲にしても仲間を助けようとできる性根は生まれついての物だろう。

だからまあ、たぶん大丈夫だ。
……そういえば、今イッセーは何をしてるんだろうな。

イッセーＳｉｄｅ

「そういうわけなんだけどさ、バラキエルさんがちょっと可哀想な気がするんだよなぁ」
俺はちょっと困ったので、相談をすることにした。
朱乃さんはとにかくバラキエルさんを拒絶している。普段のニコニコ笑顔も全然出てないぐらい、不機嫌な態度だった。
たまたま出くわした時なんて、話だけでもしようとするバラキエルさんをとにかく徹底的に拒否してたしな。
だからまあ、そのあとヒツギに会ったから、ちょっと吐き出す感じで相談してたんだけど―
「……そもそもですが、彼女はバラキエル様の娘なら神の子を見張る者でも歓迎される立場ですよね？　和平前に転生悪魔になることがまず妙では？」
「それもそうだね。しかも姫島っていえば五大宗家の一角じゃん？なんていうか、すっごい複雑な家庭環境な気がするし」
「あ～、確かに。ペンドラゴン家もっすけど、由緒正しい力のある一族ってのは、どうしても何かしら背負わないといけないっすから。こりゃひと悶着ありそうですぜ？」
……アニルとルーシアも参加して、ちょっとした会議になっていた。
ついでに言うと、シャルロットも一緒にいたから参加してる。

「……冷静に考えると確かにそうですね。私は詳しく知りませんが、五大宗家の字(あざな)を持った堕天使幹部の娘が、魔王の妹に眷属として仕えている。……ある程度の知識を踏まえて考えると、何かあるとしか思えません」

考えこみながらシャルロットがそう言うけど、本当に何かあるとしか思えないなこれ。

いや、そもそも―

「部長の眷属って、結構色々あるのが多いからなぁ。朱乃さんも何かあって当然だよな」

―リアス・グレモリー眷属ってそういう人多すぎだよな。

「俺だって眷属になったのは、堕天使に殺されたのが原因だし、他の皆だって色々あるから、朱乃さんもそうなのは当然かもしれない」

「あれ、そうなんですか？」

あ、アニル達には言ってなかったっけ。

「ああ。俺は神滅具を持ってるだろ？　それで堕天使が様子を見に来て、制御できないと思われたから殺されたんだよ。で、たまたま悪魔を召喚するチラシを持っていたから、俺が最後に「せめて生おっぱいを見たかった」って思いに反応して召喚が成立したんだ。それで部長が俺が駒価値八だったことで、転生悪魔になったんだよ」

「……流石、今でも数日に一回から一日に数回は発作を起こす煩悩じゃん」

照れるぜヒツギ。

「あの、ヒツギ先輩は褒めてませんよ？」

そうなのかルーシア!?

ちょっと凹んだけど、まあそんなわけだからなぁ。

「……で、姫島って姓は五大宗家以外にもあったはずっすけど、もしかしてそっちの可能性は？」

「おそらくは無いと思います。彼女は兵藤邸(こちら)に来るまでは、日本の神々から許可を貰って管理者のいなくなった神社を生活拠点にしていました。おそらく元々そういう職業に縁があったのかと」

アニルとシャルロットがそう話し合ってから、ヒツギが首を捻って

唸りだした。
「う～ん。私達だとちょっと事情が分からないところもあるからなぁ。やっぱり縁が深いイッセーが直接……も駄目か」
え、ダメなの？
「そうですね。どうも朱乃さんは意固地になっているようですし、逆にバラキエルさんの側から聞くのも、どうしても客観性に欠ける展開になりそうです」
ルーシアがそう言うけど、そういうこともあるのか。
とすると、やっぱり今の俺達だと無理なのか？
俺はちょっと残念に感じるけど、シャルロットは俺の肩に手を置いた。
その顔はちょっと笑みになっていて、何か思いついた感じだった。
「大丈夫ですよ。二人の事情を把握していて、一歩離れたところから聞ける人達がいるでしょう？」
「「ああ！」」
ヒツギ達も一斉に気づいたけど、もしかして―
「アザゼル先生とか？」
「リアスさんでも大丈夫でしょう。おそらく二人から聞けば、視点の修正も含めて客観的な形で事情は聞けるはずです」
そっか。確かに二人なら事情は知ってるだろう。
なら、今度時間がある時に聞いてみるか。
「……でもまぁ、イッセーも面倒見がいいねぇ」
と、なんかヒツギが俺を感慨深げに見てた。
え、どういうこと？
俺達がきょとんとしていると、ヒツギはなんていうか、うんうんと頷いていた。
「前から思ってたけど、イッセーって割と踏み込みづらい所も、仲間の為ならあえて踏み込めるでしょ？　普通は中々できないよ、そういうの」
そ、そうか？
俺はそう言われても、あんまりしっくりこない。

「俺は馬鹿だから聞かないと分からないし、何より朱乃さんが暗い顔してるのは嫌だしさ。皆だってそうじゃないか？」
「そうであっても……だと思いますよ？」
　そうなのルーシア？
「……そういうことは、踏み込むのに躊躇するのが人というものです。しなくちゃいけないと分かっていても、どうしてもすべき行動ができない人って意外と多いですから」
「あ～確かに。映画とかでもあるな。言うこと聞いたら殺されるの確定だから反撃するしかチャンスねえのに、そのまま抵抗せずに引っ張られてくって奴」
　あ、アニルの言う感じは分かる分かる。
　そういう展開って、アニメでも実写でもあるよな。
　俺が納得してると、シャルロットが俺を見ながら微笑んだ。
「確かにそうです。人によっては嫌うかもしれないですが、好感を抱く人も多いでしょう。稀有な気質ですしね」
「褒められてる感じでちょっといい気分だな」
　なんていうか、ちょっと俺は照れくさい。
　いやぁ、相棒にここまで褒められると照れくさいなホント。
　俺がちょっとニマニマしていると、皆もちょっと微笑ましい表情になってる。
「……うん。踏み込んでくれるってのも、ありがたい時はあるもんだよね」
　なんていうか、結構マジな感じで感慨深げだ。
　……ふと思うけど、ヒツギにも踏み込んでほしい所があるんだろうか。
　いや、今は朱乃さんだ朱乃さん。
　なんていうか、あのままだと朱乃さんにとっても良くない気がするし、バラキエルさんも可哀想な気がするし。バラキエルさんはずっとここにいるわけじゃないんだから、今のうちに何とかできる慣らしておきたい。
　でも……。

「……もし皆にも何かあるってんなら、俺も馬鹿なり頑張るからさ。何かあったら言ってくれよな？」
皆だって仲間だから、そこは変わらないぜ？
あれ？　なんか皆面食らってるな。
俺がなんか戸惑ってると、シャルロットがクスリと笑ってヒツギはお腹を抱え出した。
え、なんかおかしなこと言ったか!?
「……そうですね。それがイッセーらしいです」
「ど、同感だけどお腹痛い……っ。ほんともぅ、気持ちのいい馬鹿ってこういうこと言うじゃん？」
馬鹿って言った!?　シャルロットに同意しながら馬鹿扱いしてきたのかよヒツギ！
「ひっでえなぁ！　確かに俺は馬鹿だけど、そんな言い方することねえだろぉ!?」
いやちょっと、自分で言うのと人に言われるのとは違うんだよ!?
「……そもそも駒王学園、馬鹿が入れるような偏差値だったか？」
「アニル君、勉強ができる馬鹿って言い回しがこの国はあるらしいの。……でもイッセー先輩はちょっと違う気がします」
一年生コンビはいい子だなぁ。
そして全身振るわせてるヒツギは、涙すら浮かべながら俺に笑顔を向けてきた。
「うんうん。今度相談したいことがあったら、まずはイッセーに相談するから」
本当に？
なんかその態度だと、相談してくれるのか逆に不安になるんだけど？
「……本当に、そういう奴がいるって中々安心できるってもんだよね」
……本当に、相談事があるならしてくれよな？

神威動乱編　第十一話　男女問わず同性オンリーのぶっちゃけ会話は、異性にとって地獄なので双方ともに気を付けよう。

イッセーＳｉｄｅ

それはそれとして、毎日鍛錬は必須ですとも！
俺達はいつか必ずレーティングゲームでタイトルを取って部長の夢を叶えるし、敵から皆を守って生き残る為にも強くならないといけない。というか、英雄派のテロで禁手になる奴がごろごろ出てくるだろうから、こっちもその分頑張って鍛えないと。
そういうわけで、俺達はいつも頑張ってトレーニングだ。
「……あ、あと十分でしたっけ！」
「そうだね。あと十分はこのペースで走らないと。そこからストレッチだ」
「うっす！　気合を入れ直します！」
木場が先導する形で、ギャスパーとアニルが汗を流しながらランニング。
俺が一番後ろで倒れたりしないか確認する形で、俺達は朝から基礎トレとしてランニングをしていた。
ランニングと言っても、全く軽くない。それなりに重りをつけて負荷をかけているし、走る速さだって普通の高校生なら３００ｍ走とかで出すような速さだ。
アニルはともかく、引きこもりだったギャスパーがここまでできるようになるなんてなぁ。
俺は先輩としてなんか感動するぜ。いや、悪魔歴だと後輩だけどな

！

とにかく基礎体力は重要だしな。あればあるほどいいって奴だ。だから俺達は皆基礎体力は鍛えてる。ギャスパーもそうだけど、サポートタイプのアーシアもかなり体力はあるしな。

っと、そんな感じで俺達は気合を入れて特訓中。

そして女子達も頑張って鍛錬中。……なんだけど―

「うぉおおおお!?　当たらない、一発も当たらない!?」

「大丈夫ですかゼノヴィアさん？　あと三十分は続けますから、今からその調子だと持ちませんよ？」

「アドバイスまでする余裕があるなんて。凄いわアーシアさん！」

……接近戦でゼノヴィアとイリナの猛攻をあっさりと回避するアーシアが怖い。

回避の鬼となっているアーシアに戦慄する。ディック・ドーマクはアーシアにどんなトレーニングをしたんだ。

攻撃回避に限定すると、たぶん俺達で一番凄いのはアーシアな気がする。

ぶっちゃけアーシアに護衛をつけた方がいいという話もあるけど、アーシアの動きについていきながら敵を攻撃できるメンバーが一人もいない。

ディック・ドーマク。……恐ろしい奴！

「……なんていうか、ディックも凄い鍛え方をしてるわね」

と、別の場所でトレーニングをしていたカズヒがこっちに近づいて苦笑してきた。

……バク走で俺達に追いつくような動きをするなよ。お前も怖いんだけど。

「……星辰奏者は時速百キロで走れるとは聞いてるけど、ポテンシャルが莫大だね」

「星辰奏者になる前の子供の頃から、ボディアーマーにアサルトライフルに予備弾薬や爆弾まで身に着けて走り回っていたもの。軽装ならこれぐらいわね」

苦笑する木場に物騒な過去を話しながら、カズヒはもう一度アーシ

アを見た。
「……とはいえ、いくらディックでもやる気がない相手にあそこまで仕込める時間は無いわ。あそこまで成長できたのは、アーシアがやる気で頑張っていたからでもあるわね」
……そっか。
アーシアも、俺達と一緒で頑張って皆の力になろうとしてるんだな。
その結果がちょっと怖いぐらいだけど、でも同時に頼もしい。
「なら、俺達も負けられないな」
「は、はい！　僕も当たって砕けろの精神で頑張ります！」
ギャスパーがそう返してくれるけど、砕けたら駄目だからな？
「……そういや、和地先輩は見ないっすっけど、どうしたんすかね？」
と、アニルがふと首を傾げてた。
そういえばそうだけど、どうしたんだ？
あいつも俺達と同じで毎日頑張ってるやつだから、トレーニングを欠かすってわけじゃないと思うんだけど？
俺が首を傾げてると、カズヒが苦笑してた。
ん、どうしたんだ？
「ちょっとした同窓会になってるみたい。あっちもあっちで色々と大変みたいね」
……同窓会？

和地Ｓｉｄｅ

なにが、どうしてこうなったんだろう。

俺は心から途方に暮れていた。途方に暮れながら、何とか気分を落ち着けようと紅茶を一口飲んだ。
「……あ、これ有名なブランドのかも」
「詳しいんですね。私はさっぱりです」
「こういうのは慣れだもの。今からでも気を付けて置けば、少しは分かるわよ」
と、インガ姉ちゃんにフォローを入れているリヴァ先生には感服するけど、ちょっと待ってほしい。
何がどうしたら、俺はインガ姉ちゃんと一緒にリヴァ先生とティータイムしないといけないんだ？
なんだろうか。なんていうか、空気が微妙にピリピリしている気がする。
誰か助けてくれ！　具体的にはリーネスとか来てくれ！
俺がそれとなく視線を回していると、遠くからリーネスがこっちを見ているのが見えた。
―苦笑しながら親指を立てた件について、俺は真剣に後で話し合うことを決意した。
「……で、つまりそういうことだってことは聞いてるけど、どんな感じなの？」
「そ、そうですね。……惚れさせてきたので惚れさせてやるって感じかな？」
あのすいません。あんたら何を会話しているんですか!?
俺は全力で止めに入りたい。入りたいけど下手につつくと藪蛇だ。
……仕方ないのでもうちょっと紅茶を飲む。
誰か助けてくれ。しかし殆どのメンバーは鍛錬中。リーネスはこっそり見ているけど助けに行く気がかけらも見えない。
おのれ！　誰か助けは来てくれないのか―
「すいませーん！　リーネスがこの辺にいるって聞いたんですけどー」
「リヴァさん？　彼女も混ぜた方が面白いわよぉ？」
―鶴羽よ。お前ってもしかして厄年か何か？

「……私が会ったのは結構昔だけど、たぶんこの中だと一番付き合いがあるかもしれないわ……ね」
巻き込まれた鶴羽に、俺はそっと肩に手を置いて慰めた。
いやほんとゴメン。なんかよく分からないけどゴメン。
なんでこんなことになったんだろう。いや、俺はもちろんインガ姉ちゃんも戸惑ってるけど。
「ふんふん。で、カズくんのことを好きになったのは何時ぐらいかな？」
何をぶっこんでいるリヴァ先生！
あと鶴羽も顔を真っ赤にしてプルプルするな!?　それ、思ってもないことを言われて困惑しているって顔じゃないよ!?
俺がもしかしてマジかと思って戦慄していると、鶴羽はこっちをちらりと見てから、俯いた。
違っていたら違っていたで精神的にきついけど、当たっているとめちゃくちゃあれなんですが!?
「……ザイアで唯一本音で話せた相手だから、何時の間にか」
素直に言わなくていいよ!?
いやいや待て待てちょっと待て！
これはなんだ!?　ハーレムによる旦那をネタにしたガールズトークか何かか!?
ガールズトークは男がいないところでやりましょう！　野郎がバカ話するのと同じでそれがマナーですよ!?
「っていうかちょっと待った！　リヴァ先生は俺の小姑か何かか!?
それとも俺の事狙ってんのか!?」
これ以上は俺の精神がまずい。
全力で大声を上げて立ち上がってツッコミを入れる。その勢いで流れを変えて見せる！

「ええ。ちょっとは狙ってるわ」
即答によるカウンターが俺に直撃!?
思わず力が抜けてしゃがみ込んでしまうけど、これ思った以上にヤバくないか!?
俺にモテ期が来たのか。でも俺、本命のカズヒ姉さんは中々撃墜できないんですが。
あとちょっと纏うか。
「……十年以上前の塾の教え子を狙うとかどうなんだ、先生。あんたは塾で逆光源氏計画でも立ててたのか？」
その辺はしっかり突っついておこう。
たぶんだが、その辺りがちょっと突破口になるはずだ。
「……っ」
「〜〜〜〜っ」
無言の鶴羽とインガ姉ちゃんの視線に背中を押され、俺は真剣な表情をリヴァ先生に向ける。
さあ、嘘は許さん。素直に答える—
「ん〜。実は大人になって再会でもしたら、ちょっと攻めてみようかなとは思ってたりしててて？」
—無敵かこの女!?
「……と、年上キラー。和地の年上キラー！」
「あの、貴女は同い年だよね？」
インガ姉ちゃんに止められるぐらい、鶴羽はかなりダメージが入っている。
いやこれはもうどうしたらいいんだ。
よし！　こうなったら無謀だが反撃だ！
「具体的にどこがどうなってそんなことを考えたのか!?　そこを聞きたいと思います！」
さあ答えてみるがいい。そこからとっかかりを—
「うん。カズくんの何気ない一言があったから、私はアースガルズに戻る気になったからね。今の私はカズ君がいるからだから、そこかな？」

―正確無比な反撃が俺を襲う！
ガチの理由だった。人生左右するレベルだった。何気ない一言だから何年も後だと心当たりがさっぱりないけど、それで人生ががらりと変わったのならそれもあるのか。
お、おぉぅ……。
こ、こうなれば援護射撃を求めるしかない。
俺はちらりと視線を向ける。
察してくれインガ姉ちゃんに鶴羽。このままだと主導権をリヴァ先生に握られっぱなしになる！
「……の」
と、鶴羽がプルプルしながら顔を真っ赤にしていた。
あ、これはブちぎれて話が有耶無耶になるあれか。天然か。
と、とりあえずフォローを―
「和地の年増殺しぃいいいいいっ！　オバンキラーぁあああああ！」
―非常に失礼なことを言ったぁ!?
俺はもちろんだけどリヴァ先生にもインガ姉ちゃんにも、何よりお前自身にカズヒ姉さんが被害を受けるデマだぞそれは!?
年上通り越して年増にオバンって。異形換算ならインガ姉ちゃんは普通に若いし、カズヒ姉さんもお前も俺と同い年だろうが。
ああもうグダグダだよもぅ。
「リヴァ先生。あんまりからかわない」
「いや、結構本気だったんだよ？　だからちょっとマウントというか、立ち位置を有利目に取っておきたかったって感じなんだけど」
あんた俺のところに輿入れする気満々かよ。
「因みにアースガルズは英雄（エインヘリヤル）を常に募集してます♪　どう、入ってみる？」
「今の状況がややこしくなるからパスで」
さらりと勧誘をスルーするけど、どうしたもんかねこれは。
というか、鶴羽は何しに来てたんだよ。リーネスに会いに来たみたいだけど、どういう用事だったんだ？

「因みに、貴女は人間換算だと何歳ぐらいなの？」
「ん～。１００歳から数えてないけど、神との混血だからまだ二十代前半ぐらいの換算でも足りないと思うかな？」
あとさらりと聞きづらいことを聞いてくれてありがとな、インガ姉ちゃん。
そっかそっか、百歳越えか。
……年上殺しはどうしようもないかもしれないな。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「カズヒぃ？　鶴羽が卵かけご飯専門店が厳選したとかいうブランドの卵を持ってきてくれたわよぉ？」
「……何ですって！　今すぐお礼を言いたいからちょっとどこにいるか教えて！」
「今はよした方がいいわぁ。巻き込まれるからねぇ？」
「巻き込まるって、何に？」
「ふふふ。和地が好きな女達によるガールズトーク。それも和地も巻き込まれてるわよぉ」
「……和地には同情するわ。というか、一気にモテ期になってるわね」
「色々と感慨深いわねぇ。でも、本命が行ったら集中砲火よぉ？」
「……明日にでも学食を奢ることにするわ」

神威動乱編　第十二話　事前準備はだいぶ前から少しずつやるべし

和地Ｓｉｄｅ

疲れた。俺は本当に疲れたよ。
疲れたので、俺は自主鍛錬をきちんとやった上で盛大にだらけていた。
あ～。疲れたー。精神的に疲れたー。
「……大変そうですね、九成先輩」
と、小猫ちゃんが俺を気遣う視線を向けてきてくれた。
気遣いの視線が染み渡るぜぇ。
「なんだか、そっちも大変みたいね」
更にリアス部長もこっちに参入。どうやらお風呂上がりのようだ。
イッセーに気づかれたら嫉妬されそうだから、それとなく周囲を確認して最低限の安全を確保する感じだ。
よし、イッセーは今のところ近くにいないみたいだな。
「……なんかフラグが急に立ってきていて、ちょっと心労が溜まってます」
「そう見たいね。まあ、貴方は意外と優良物件だもの。インガやカズヒ相手に頑張ってもいるし、そういうこともあるんじゃないかしら？」
リアス部長はそう返すけど、疲れるところはあるんですよ。
いやまあ、モテるってのは男としてはちょっと嬉しい所はある。だけどハーレムを作るとなると、背負うものも増えるからな。
もうちょっとこお、段階的に来てほしい。まあ、男と女の関係なん

て、そんな風にできる方がおかしいんだろうけどさ。
……そこを考えると、ふと思ったことがある。
「……イッセーって、別の意味で凄い気がしてきたなぁ」
「「……確かに」」
顔を見合わせてため息をつく。
いやほんと、あいつ本気で自分がモテてるっていう自覚がないからな。
部長とアーシアに至っては隙あらばキスをしているってのに、何故かＬＯＶＥという感情を向けられていると思ってない。
もうあそこまで来ると病気だろ。真剣に俺はドン引きしているぞ。
「いっそのこと押し倒しでもしないと……しても気づかないかもな」
「……ありえそうです」
半分冗談交じりだったけど、小猫ちゃんはかなり真剣に懸念していた。
俺も冷静に考えてみると、あり得そうな気がしてきた。
あれだけの猛攻を痛感していないあのバカのことだ。もしそういうことになったとしても、明後日の方向に勘違いをしてきかねない。
俺は同情がこれでもかと籠った目をしていると思いながら、部長と小猫ちゃんを見た。
「なんていうか、たまになら愚痴も聞きます」
「「それはどうも」」
心底からのため息に、俺はイッセーの罪深さを痛感して、こっちもため息をついた。

イッセーＳｉｄｅ

「ぶえっくしょい！」
俺は盛大にくしゃみをしたけど、風邪をひいた覚えがないから首を傾げた。
おっかしいなぁ。最近はクックスが栄養も味も考えて料理を作ってるし、生活環境も良く成りまくってるんだけど。
まさか噂でもされてるのか？　最近は覗きを完璧に抑え籠めてるはずなんだけどなぁ……。
「……あら、どうしたのぉ？」
「風邪でも引いたの？　今日はもう早めに寝た方がいいわよ？」
と、リーネスとカズヒに見つかったな。
この二人、なんかめっちゃくちゃ仲がいいんだよなぁ。
タイプが違う印象があるけど、何て言うか会話がツーカーだし、信頼し合ってる感じがするし。
駒王学園でも空いた時間にどっちかがどっちかのクラスに行ってる時がよくあるし。
後お昼の時とか、なんでか知らないけどシトリー眷属側の南空さんのところに行って一緒に食べてることもあるみたいだし。
仲良し三人組に見えるんだけど、どこで仲良くなったんだ？
俺がその辺を気にして考えこんでると、二人とも怪訝な表情を浮かべてきた。
「本当に風邪じゃない？　リーネス、キュウタはどこにいるか分かる？」
「あ、違う違う。ちょっと考えごとしてただけだって」
カズヒに結構マジな心配をされてたから、俺は慌てて訂正する。
……ん～、ちょっといい機会だし聞いてみるか？
「そういえばリーネスや南空さんと仲が良いみたいだけどさ、何かきっかけでもあったのか？」
「……直球で聞いてきたわねぇ」
なんかリーネスが苦笑してるけど、そりゃ気になるって。
だってなんていうかマブダチな感じだし。

そりゃグレモリー眷属を中心に、俺達は仲良くやってるけどさ。それにしたって限度ってのがある。なんたって俺達、出会ってから基本的に一年も経ってないし。

だけどなんていうか、カズヒ達の場合はなんか違う。なんていうか俺の場合で言うと、オカ研の仲間達より松田や元浜みたいな感じがするんだよ。

そう、何て言うか年季がある感じだ。積み重なった信頼関係があるからこその深みって感じがある。

でも、リーネスとカズヒが昔から付き合いがあるっていうのもよく分からない。

教会の暗部と堕天使のエージェントだしなぁ。プルガトリオ機関には堕天使が所属している部隊もあるっぽいけど、それにしたってさぁ。

なんで、いい機会だし聞いてみたんだけど、答えてくれるのか？

そこが気になるけど、二人は顔を見合わせると苦笑した。

「……そうねぇ。会った時から仲良くなれるって確信があったのよ」

「前世で仲が良かったのかもしれないわね……と言っておこうかしら？」

ほら誤魔化す。

俺が半目になっていると、リーネスはなんか笑顔で首を横に振った。

「そうじゃないのよぉ。ほら、ミザリ・ルシファーの件は知ってるでしょぉ？」

ミザリっていうと、ヴァーリの叔父だっていう、イシロ・グラシャラボラス眷属の真のボスだって奴か。

なんか魔眼ってのが凄くて、サーゼクス様が一蹴されたっていう話で度肝を抜かれるよ。それも亜種聖杯と神滅具の聖杯を使って、前世の記憶と能力を持ったまま、悪魔の力とサーヴァントの力をハイブリッドでもってるとかいう反則野郎。

あの野郎、何年間もやってきた慈善活動が、そこの連中を化け物にして暴れさせていろんな奴を苦しめて絶望させたかったからとか最

悪じゃねえか。しかもわざと無事な人を作って排斥させるとかまでしてきやがった。いろんな意味で最悪すぎるじゃねえか。
で、それが？
「つまり前世の記憶とかっていうのは継承することもあるってことよお？　なら、前世で仲が良かった子同士が再会するってこともあるんじゃなぁい？」
「……まあ、確かにありそうだよなぁ」
そう言われるとそうだけど、それにしたって仲良すぎないか？
俺はまだまだ気になるけど、これ以上は応えてくれそうにないしなぁ。
ま、それはそれとして―
「話は変わるけど、カズヒやリーネス的には九成が急にモテてるのについて思うところあるか？」
―別の気になることも聞こう。
下世話って言われそうだけど、実際問題気になる。モテたい男としては、モテ始めてる男のことはとっても気になる。
リヴァさんがなんか九成にアプローチを仕掛けてるのは知ってるしさ。
モテたい男がモテないのに、そこまでモテなくていいと思ってそうな九成がモテるのは納得できねえ。
そして九成の保護者的な感じのリーネスや、九成に「私を惚れさせたいならモテろ」とか言ってきたカズヒはどんな感じなのか。
「……いい感じだと思うわね。あとは私も二人と仲良くできるようにならないと」
……満足げだよこの白髪。
流石に俺もちょっと引く。ちらりとリーネスの方を見ると、苦笑い気味だった。
「あ、イッセー先輩」
と、そこにアニルが顔を出した。
「ギャスパーが呼んでますぜ？　撮影設備を調整したから、ちょっとテストを手伝ってほしいって」

「ＯＫ。わかったわかった」
またそんなことになってるんだな。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「じゃ、俺はちょっとギャスパーのところに行ってくるから」
「んじゃ、カズヒ先輩方も失礼します」
「ええ、そっちも頑張ってね」
「いつもお疲れ様ねぇ」

「さて、これで少しずつ布石を打っていくとしますか」
「そうねぇ。いきなり全部はきついけれど、段階を踏めばこちらの精神的にはましよねぇ」
「……ま、実態を知れば和地も私から離れていくでしょうけれどね」
「……残念そうねぇ？」
「茶化さないで。私だってあそこまで慕われてたら思うところはあるわよ」
「だったらもうちょっと信用してあげたらぁ？　和地は意外と持ち堪えるかもしれないわよぉ？」
「どうだか。あれだけモテてたら私に拘る必要もないでしょう？」
「去る者作らずって、誰が言っていたのかしらねぇ？」
「……ぐぅ」

「ふふ。それに鶴羽もいるんだから、いっそのこと二人がかりで仲良くなってみたらぁ？」
「……いっそのことあなたもどう？　私も鶴羽も仲良くできるわよ？」
「……そうなるとぉ、ヒマリもついてくるわよぉ？　むしろ一番の問題点じゃない？」
「……前言撤回。全力で私が悪かったわ」
「分かればいいのよぉ」

神威動乱編　十三話　ちょっとだけ、お風呂でわかる北欧神話

イッセーＳｉｄｅ

俺は夜、別館の男用の風呂に入ってきていた。
ムフフイベントを期待して地下の大浴場にはいることもあるけれど、シャルロットに悪いから最小限にしたいしな。男同士の裸の付き合いとかは勘弁だけど、野郎同士の中を深めることも必要だしさ。
そんなわけで、俺はアニルや九成と一緒に風呂に入っている。
「あ～……」
……ふぅ。毎日鍛錬を積んでるからか、ゆったりお風呂に入ると疲れが抜けてくぜぇ。
特に今回、温泉の元を入れて入っているから尚更ゆったりした感じになる。
「ふぅ～。いい湯だなぁ」
「……日本の風呂文化ってなれねぇっすね。というか、お湯が熱いっす」
九成もまったりしてるけど、アニルはあんまり慣れてない感じだった。
「そういえば、外国だとお風呂文化ってあまり馴染みがないんだっけ？」
昔どっかで見た気がするけど、慣れてないとこういうのはあれなんだろうか？
「いやまあ、イギリスにも温泉はありますぜ？　ただまぁ熱いお湯につかるよりは、ぬるいお湯や水に浸かったり、飲んだりするのがメインでしてねぇ」

そんな感じで苦笑しているアニルだけど、温泉を呑むのかぁ……。
「一応言っとくけど日本でもあるぞ？　あとちゃんと飲むのは別にあるからな」
そうなのか九成。勉強になったぜ。
「あとイギリスとかだと風呂に少しお湯を張ってついでに石鹸の類を入れて混ぜてから、中で洗って拭いて出る感じだ。あれは慣れなくてなぁ、ザイアはその辺きっちり風呂文化を持ち込んでたけど」
「マジか。ヨーロッパ行きたくねぇ」
遠い目になってる九成の気持ちがマジ分かる。
ザイアの連中がそこだけはきっちりしているのには感謝しねえとな。あと冥界では日本っぽい温泉文化が広まってくれて良かったぜ。
「というか、国全体が日本より寒いんで毎日浴びる必要もねえっすからね。むしろ毎日風呂場に入る方が寒くて嫌って感じでさぁ」
アニルはそう言うけど、もうちょっと毎日汗を流そうぜ？
あ、寒い地域だと汗をかくこともあまりないのか。そういうことでいいんだろう。
俺も上級悪魔になったら、海外を担当することもあるんだろうなぁ。現地の生活拠点のお風呂は徹底的に調べとかないとな。あと日本に転移して温泉の元とかも入れとかねえと。
そんなことを思いながら、俺ははふぅと息をつく。
今頃、今回のメンバーがオーディンの爺さんについて行ってる頃だよなぁ。
流石に人数が多いから、俺達もローテーションを組んでオーディンの爺さんの護衛をしている。昨日は俺達の番だった。
そして俺は思い出して……怒りで拳を震わせた。
「あの爺さん、一発ぶん殴りたい」
「気持ちはわかる！」
男三人の気持ちが一つになったぜ！
あの爺さん、寿司を食いに行ったりキャバクラに行ったりとかでこっちを振り回しまくってきやがる。それも全国各地。
そのくせ俺達は基本的に護衛だから待機だ。キャバクラとかなら

なおのこと。未成年だからね！
畜生、許せねえ、許せねえ！
俺だってキャバクラに夢を見ているのに！　夢を見ているのに!?
「……一応言っておくが、女性は男がキャバクラに行くことにいい顔しない奴が傾向的に多いそうだからな!?」
今なんて言った九成!?
「俺は生涯キャバクラに行けないのか!?」
シャルロットに顔向けできないのか!?
思わず崩れ落ちるけど、九成はぽんぽんと肩に手を置きながら、アニルの方に向いていた。
俺の慰めはどうでもいいということか。か、悲しい……。
「にしても毎度毎度、もうちょっと建設的なことをしてくれればこっちも苛立たしくなくていいんだけどなぁ」
「同感でさぁ。ぶっちゃけ今のままだと、聖書(俺ら)の教えが宗教的に侵略したの、正解だったんじゃねえかと思いますわ」
九成もアニルも、結構ストレス溜まってるよなぁ。
と、そういえばちょっと気になるな。
「そういえばさ、アースガルズってどんな感じの神話なんだ？」
俺はそこも気になるな。
そういえば俺、そっちの知識が全然ないしなぁ。イギリスの風呂文化もだけど、日本の文化でも分からないところが多いんだから、外国や異なる勢力の文かもさっぱり分からない。
これ、上級悪魔になる前に少しぐらい治した方がいいよなぁ。
上級悪魔になってから、その人達にとって失礼千万宣戦布告な真似したら、絶対処罰されるだろうし。
いい機会だし、ちょっとぐらい聞いておくか。
「アースガルズといえば北欧神話っすけど、宗教的な争いにおいては、当時の信徒達はバイキング達とやり合う時は苦労してますぜ」
と、アニルは言ってきたけどそれはそうなんじゃないか？
「一向一揆とかで勉強したけど、熱心すぎる信徒って死ぬのを恐れないんだろ？　どこの時でも苦労したんじゃねえか？」

織田信長とかも苦労したっていうし、そういうのって万国共通な気もしてきたな。
最初に会った時のイリナにゼノヴィアも、死ぬこととかあんまり恐れてなかったしなぁ。宗教にどっぷりつかってるやつはそんな感じってイメージもある。
「まあ、宗教っていうのは基本的にあの世を定義しているわけだしな。その上でどう生きるのが正しくて正しく生きるとどこに行けるかも記されてるわけだし、熱心な宗教家なら自信があるから死んでもＯＫって感じになりえるだろ」
九成もその変なうんうん頷いているけど、同時にちょっと苦笑してた。
「ま、北欧神話はまたちょっと違うんだけどな？」
九成がそんな感じで振ると、アニルもちょっと苦笑いしてた。
「そうなんですわ。北欧神話ってのは基本的に、戦死が一番いい死に方ってことになってるんでさぁ」
え、マジで!?
俺がちょっと面食らってると、九成もそこは同じ感想なのか、ちょっと苦笑いが続いていた。
「アースガルズは神々の黄昏（ラグナロク）ってのを乗り越える為に戦士達の魂を集める神話と言ってもよくてな。その為にわざと戦争を引き起こして、プロレスみたいにどう戦ってどう敗けて誰が死ぬのかまで神々がプロットを組むこともあるらしい」
「そんでもってそんな英霊（エインヘリヤル）になることこそが最も尊ばれていて、病死とか老衰は不名誉って感じなんでさぁ」
二人ともそう言ってるけど、またすっごい神話だなぁ、オイ。
俺がちょっと引いてると、九成は更に肩をすくめた。
「そんな伝承でも一際あれなのが、ヘジンとホグニの伝説だな」
というと？
俺が視線で話を進めると、九成は遠い目をしながら話を進めてくれた。
「具体的に言うと、不貞を働いた女神がお仕置きとして「戦士達を永遠

に戦わせなさい」と命じられて、縁もゆかりもないヘジンとホグニって王様達が結果的に戦争をして、しかも蘇生する仕組みまで付けられた結果永遠に殺し合いを続ける羽目になったって伝承だ」
「因みに信徒（ウチ）の英雄が主の軌跡をもって解放するって逸話がありますぜ、先輩」
アニルも言ってくれたけど、もうどこから突っ込んでいいのか。
え、そんな神話が？　昔聖書の教えに信仰を奪われたって？
「……自業自得じゃね？」
「まぁ～、聖書（こっ）の教（ち）えも信徒側がやらかしたことは数多いんですがねぇ」
アニルはそう言うけど、神様がそんなことを主導していいのかよって思う。
……まあそんな勢力が、戦争をしない為の和平をするっていうんだ。変わっているってことでいいんだろう。
なら、俺達はそれが間違ってないって証明した方がいいんだろうなぁ。
俺はそんなことを思いながら、明日は俺達がオーディンの神さんの相手をするんだと思ってため息をついた。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……なるほど。そう来るようだね」
「どうしたの、マスター？」
「ああ、イシロ。それがアースガルズで一揉めあるみたいなんだよ。それもロキとオーディンが」

「へ～。それならロッキーとザンジュが一当てしたがるでしょうね。どうするの？」
「もちろんそのつもりさ。それにヴァーリも動くみたいなんだよ」
「あの子達もかってねぇ。英雄派とも相互不干渉を告げてるんでしょぉ？」
「組織人に向いてないね。ああいうのは反面教師にしておかないと」
「それで、あなたはどうするのぉ？」
「もちろん全面戦争じゃないか。ヴァーリがどう動くかは分からないけど、まあテロリストって自覚があるならどっちかに協力はしないだろうさ」
「でも、私達だけでやるってのも大変じゃない？　どうするのよ？」
「決まってるだろう？　他に協力者を集めればいいだけさ」
「……その通り！　話を持ってきた妾達がしてやろうではないか！」
「あらあら。後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）の九条ちゃんじゃない。どうしたのぉ？」
「うむ！　ちょうどよいので連携戦闘を考慮しようと思ってのぉ！　共に大暴れして仲を深めようではないか！」
「……裏がありそうね」
「構わないだろう？　どうせ僕達は相互利用のテロ組織さ」

神威動乱編　第十四話　夜中の衝撃

和地Ｓｉｄｅ

心底面倒くさいけど、こういう時有利なことがある。
今回、俺は休み！
いや、今回は遠出するということで、空を移動することになったわけだ。
一応空中戦闘は可能なメンツが集まっているけど、移動も踏まえて考慮した結果、悪魔や堕天使や天使といった、デフォルトで飛行能力を持ったメンバーが主体になっているわけだ。
俺も空中戦はできるけど、主体ではないからな。
だからこうして自主トレ中というわけだ。仕事がずれたからってさぼってはいけない。休憩時間は取りすぎてはいけないのである。
そんなわけで俺達は、トレーニングルームで鍛錬中だ。
時間的にあれだから、まあやりすぎずに適度なところで切り上げることも必要だけどな。お風呂に入ってリラックスすることも必要だしな。
「……さて、そろそろハードなのは切り上げた方がいいわね。睡眠の質が低下するわ」
「分かりました。それじゃそろそろペースを落としますね」
と、カズヒ姉さんに頷きながらルーシアがランニングマシーンの設定を調整する。
まあ、夜も遅いからあまり肉体に負担をかけるわけにもいかないしな。
「……となると、座学もした方がいいんじゃないかな？」

ヒツギがそう指を立てると、即座にヒマリが反応する。
「そうですのそうですの！　お勉強会も立派な鍛錬ですの！　頭の！」
「うっす！　座学も己を鍛えるには必須っすしね！」
アニルもそんな感じで気合を入れるけど、ちょっと待てお前ら。
「あんまり頭を使うと頭が覚醒するぞ？　そうなると結局睡眠の質が悪くなると思うけどな」
「それもそっか。じゃ、どうする？　完全にフリータイム？」
俺に言われてヒツギも気づいたみたいだけど、さてどうしたもんか。
イッセー達がある意味緊張する時間を過ごしているみたいだし、あんまり遊び惚けるのもちょっと気後れするしな。
俺がそんな感じで首を捻っていると、とんとんと壁を叩く音がした。
振り返ると、そこには微笑をたたえたクックスが。
「夜食の準備が整いました。そろそろ遅いですし、鍛錬を切り上げてはいかがでしょうか？」
……凄い良い匂いが漂っている。
ちなみにクックスはザイアが俺達の食育用に用意したヒューマギアなので、トレーニングをしている物向けの料理には造詣が深い。
そして必然的に、過剰なトレーニングを中断させる目的の、胃と食欲を猛烈に刺激する類の心得ている。
うん、これは無理だ。
「じゃあ、とりあえず肉体の鍛錬はこの辺でと」
「賛成ですの！」
俺に即答するヒマリに、俺達は思わず苦笑した。

「しっかしどいつもこいつもハード一歩手前のギリギリな奴を毎度毎

度やれるもんだなぁ」
夜食を食べてからそれぞれ体のメンテナンスをしていると、そのチェックをしていたキュウタがそんなことを言ってくる。
まあ確かに、ここまでのレベルてトレーニングをする奴ってそうそういないよなぁ。
鍛えていても死にかねない軍人だって、仕事としての鍛錬以上は自己裁量だ。そして必然的に、仕事としての鍛錬すら適当に切り上げたいタイプだって少なからずいる。
皆努力しているから、努力すれば夢が叶うわけではない。それは決して嘘ではないけど、十分積める努力を積んだことがない奴はごろごろいる。
だからまあ、そういう意味だと俺達は結構な成長株なんじゃないだろうか。
ザイアで育てられた時だって、ここまで鍛錬を積んでいるやつはそうはいなかったしな。
……ちなみに俺は結構ぎりぎりのラインの鍛錬を積んではいた。なにせ脱走するチャンスを窺っている身として、脱走する為の備えはしておかないといけなかったからな。
頑張った。頑張ったぞ俺。それが今の俺に繋がってると思えると、胸を張って断言できる。
まあそんなわけだから、俺はかなり高水準で鍛えている自信がある。
それについていける練習量なんだから、全員努力家が集まってるとは、俺も思ってるな。
「……ええ、悪の敵としては悪に負けない為にも努力は必須だものね」
「私の兄はリュシオンですから。これぐらいはしておきませんと」
さらりとカズヒ姉さんとルーシアは言い切るけど、それだけで言い切れるところでもないだろう。
やっぱりうちのメンツ、努力家が多いな。
「ま、本家のアーサーに一発かますつもりなんで、鍛錬を欠かしてたらできることもできやしませんからねぇ」

アニルはアニルで目標がでかいからな。これは努力必須か。
「皆と一緒に努力するのは楽しいですのよ？」
ヒマリさんは努力と遊びの区別がついてますか～？
俺、相方としてちょっと不安になってきたぞ。
「精鋭部隊はガチで鍛錬するのも仕事の内じゃん？　そりゃ自主鍛錬は積むって」
ヒツギはギャルっぽい見た目の割に真面目なんだよなぁ。
まあ、本当に俺達は努力家が多いということか。
「実際、ザイアでもこのレベルの自主鍛錬してるやつは少なかったな」
「ったくだ。ああいう環境だと思考が固まりやすいそうだけどよ、それ以上に自分から鍛錬できるとかすげえだろ？」
俺とキュウタはうんうんと頷くけど、然し全くそうだと思う。
ただ、キュウタはちょっと寂しげな表情を浮かべていた。
「……ま、鍛錬積んだから必ず乗り越えられるってわけでもねえのが現実ではあるんだがな。無茶して死んだり後遺症を残したりすんなよ？」
そうだな。
敵だって勝つ為に努力はしてる。それが俺達より上の可能性だってある。
それに敵にだって素質や才能の差はあるんだ。俺達より才能がある連中だって、探せばいくらでもいるだろう。それが俺達より鍛錬を量も効率もいい場合だってある。
引き際を見極めたいところではあるな。ただ……。
「逃げさせたり避けさせてくれないことが多いのが難点だけれどね」
カズヒ姉さんがはっきり言っちゃってるけど、実際そうなんだよなぁ……。
いやほんと、そういう避けようがない死線とかもうちょっと少ないといいんだけど―
「……なんだ？」
アニルが真っ先に気づいたけど、なんか慌ててる感じの足音が響いてるな。

なんかタイミングがあれなんだけど。嫌な予感しかしないんだけど―

「……みんな大変！」

―まさにそのタイミングで、慌てたインガ姉ちゃんが駆け込んできた。

顔面蒼白ってレベルなんだけど、今度は一体何が―

「オーディン様を狙って、アースガルズのロキ神がフェンリルを連れて攻めてきたって！　しかもヴァーリチームまで割って入って共闘を提案とかなんとか!?」

―なんか凄いことになってるなオイ!?

神威動乱編　第十五話　仮面ライダーヴァナルガンド

イッセーＳｉｄｅ

あぁ、今日もなんていうか疲れたしイライラしたなぁ。
毎度毎度振り回してくれるよこの爺さんも。
俺もキャバクラを楽しみたい！　目の前でキャバクラに入る爺さんや先生を見る状況何て生殺しだ！
クソッタレ！　殴りたい！
しかもこっちが文句を言ったら「聞こえんのぅ」だの「アザゼルさんや、おっぱいはまだかい？」なんてボケ倒しやがって。
俺は正直マジギレしそうだ。
殴りたい、あの爺。
「いやほんと、お父様がごめんね？」
リヴァさんが謝ってくれるけど、むしろだからこそ爺さんは俺達にサービスをってなぁ！
ああもう。これで何か起きたりしたら泣きっ面に蜂だよったく。
アーシアちゃんなんて疲れてうとうとしてるし。そろそろ本気で勘弁してくれよなぁ。
俺はなんとなく、厭味ったらしくため息をつこうとして―
『部長、気を付けてください！』
―木場の切羽詰まった念話が聞こえてきた。
マジで何か起きやがったか！
俺が慌てて外を見ると、外で飛びながら警備をしていた木場達と向かい合う形で、なんか若い男がこっちを睨み付けていた。

な、なんかこっちに敵意を向けている感じがするんだけど。
「……まさかここに来るなんて」
「流石にここまでとは思ってなかったのぅ」
リヴァさんとオーディンの爺さんがそう言うけど、え、そっちの奴なの!?
先生も聞こえてたのか、舌打ちしながら爺さんの方を見てきた。
「おいおい爺さん。こいつレベルが出張るとか、前もって言ってほしかったぜ」
先生がそう言うレベルの奴なのか。
勘弁してくれよ。魔王の末裔が三人がかりでこっちに襲い掛かってきたばっかだってのに。
今度はなんだよ、神様か何かか!?
「先生、そいつは一体誰なんですか!?」
本当に一体誰なんだよ。
俺が聞くと、男の方が不敵な笑みを浮かべながら両手を勢いよく広げた。
「初めまして、忌々しい悪魔の諸君！　我は北欧の悪神、ロキだ！」
……。
「神かよぉおおおおお!?」
思わず絶叫したよ。
え、マジで神様!?　魔王の末裔が終わったら、今度はマジモンの神かよ!?
本気で勘弁してくれよ。インフレ激しすぎだろ。
あ、でも神様だからって必ずしも強いってわけじゃないか。っていうかそうであってほしい。
「先生！　そいつはどれぐらい強いんですか!?」
「サーゼクスと真っ向から喧嘩できるぐらいには強い！」
強かった！
世の中そんなに甘くないか。まあ、オーディンの爺さんもめっちゃ強かったしな。
ああもう！　なんでこんな時に!?

「……でだ、何のつもりで来られたんですかねぇ？　こっちはそちらのぼけ老人のお世話で大変なんですが？」
先生も苛立ち気味でそう尋ねてる。
それに対して、ロキは顎を撫でながらオーディンの爺さんを睨み付けた。
「なに。我らの主神が我ら以外の神話体系や三大勢力（貴様ら）と交流するのが不快でね。我慢できずに殺しに来たのだ」
敵意満々だ！
そうですか。自分のところの主神を殺しに来ましたか。しかもこんなところでですか。
これ完璧に俺達も敵視されてるよ。狙われてるよコレは！
「ロキ様！　以下に神と言えどこれは横暴です！　オーディン様に物申すのであれば正式な形にしてください！」
ロスヴァイセさんがそう言うけど、ロキは不満げな表情を隠しもしない。
というか自分のところの神様相手にこれとは、この人も根性あるな。
「戦乙女風情がでしゃばるな。我はオーディンに会いに来たのだ」
そしてこっちはこっちでバッサリ切ったし。
そしてロキは真っ直ぐにオーディンの神さんを睨み付けた。
「で、だ。我らが主神に一つ問う。この愚考、今からでも取り下げる気はないのか？」
表情も態度も気配も、返答次第で殺しに来ますって感じが見え隠れしてる。
俺はこれはまずいと禁手の準備をしながら、オーディンの爺さんの方を振り返る。
爺さんの返答次第で一気に状況が動くって感じだからな。反応が凄く気になる。
……あの爺さん。結構平然としてませんか？
「当然じゃ。おぬしらと話すよりアザゼル達と話している方がよっぽど面白いし建設的じゃ。前から日本の神話に興味があったから尚更

じゃな」
……よし。良いこと言ったじゃねえか爺さん！
「よかろう。ならばここでラグナロクを執り行おうではないか」
でもこうなるよな！
俺は移動用の馬車の上に飛び乗ると、同時に禁手の準備も完了した。
そしてシャルロットも飛び上がると、更にリヴァさんが魔法を使って飛びながら並び立った。
「イッセー。魔王の末裔三人を乗り越えたのです。相手が神でも一柱程度なら乗り越えましょう！」
「アースガルズの神様がゴメンね？　まあ、私も手伝うから頑張って」
『ｏｄｅｎ』
『アスガルドライバー』
「『禁手化（バランス・ブレイク）!!』」
「変身！」
『スキルヴィングゴッド』
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ』
『Ｉｔ，ｓ　Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ　ｏｆ　Ａｓｇａｒｄ』
赤龍帝の鎧と仮面ライダーグリームニルが並び立つ。
できれば仮面ライダーマクシミリアン（九成）や仮面ライダー道間（カズヒ）も居てほしかったけど、それでも何とかしてやるさ。
相手が神だろうが関係ない。降りかかる火の粉は払ってやる！
俺が気合を入れてロキを睨むと、ロキはこっちの興味深そうに見ていた。
「そうだったそうだった。そちらには赤龍帝がいるんだったな。ならば―」
その瞬間、放たれた聖なるオーラをロキは右腕を振って弾き飛ばす。
って今のはデュランダル！　ゼノヴィアか！
「……ふむ。速攻で仕掛ければあるいはとも思ったが、流石に神相手にそう簡単には無理か」

ゼノヴィアは残念そうにしているけど、ちょっと速攻すぎないか？
俺がそう思っていると、ロキも余裕満々だけど苦笑している。
そしてその視線がオーディンの爺さんとぶつかった。
「如何にデュランダルと言えど未熟者の一撃ではな。……とはいえ、護衛にしては過剰すぎるだろう、オーディンよ」
「おぬしがなにかすると思っての。結果的には大成功じゃわい」
なるほど。オーディンの爺さんはロキが動くことをなんとなく予想していたと。
だから俺達を集めて振り回してたのか。それだけ危険な相手でもあるってわけか。
……つまり俺が生殺しだったのは、ロキの所為か！
『イッセー、それは八つ当たりです』
「それに落ち着け相棒。相手がロキなら本来の俺でもてこずる相手だぞ」
俺の相棒達は容赦ないね！
俺が内心でがっくりしていると、ロキはこっちをしげしげと見ながら頷いた。
「……確かにそうそうたるメンツだ。ならば、我も呼ぶとしよう」
そう言いながら、ロキは指をパチンと慣らす。
すると隣に魔方陣が具現化して、そこから何かが現れる。
……でかい狼。だけど、ただの狼なわけがない。
このオーラ、真の姿のサーゼクス様に喧嘩売れるんじゃないか。そんなオーラの持ち主が、ただの狼のわけがねえ。
なんだ、なんなんだこいつは……っ！
「紹介しよう、こやつは我が息子である神喰狼、フェンリルだ」
……フェンリル、だって？
『相棒、腹をくくれ』
「……糞が！　全員気をつけろ！」
ドライグが真剣な声を出すし、先生は先生で真剣な表情で俺達に声を飛ばす。
「奴は俺達どころかオーディンの爺さんだって殺せる奴だ！　一切の

油断をするな！」
『アザゼルの言うとおりだ。封印される前の二天龍（俺）と真っ向から渡り合える化け物だと思え』
つまり覇龍前提でやらないといけないってことか！
主神を殺せるとか全盛期のドライグと渡り合えるとか、魔王の末裔三人がかりとかより上な気がするぜ。
勘弁してくれよ。問題を乗り越えたと思ったら、それ以上の敵がまたやってくるとか本気で嫌だ。
俺達は平和に過ごせればそれでいいってのに。なんで俺達に毎度毎度こんなレベルの敵が襲い掛かってくるんだよ。
寒気までしてきやがる。どうやって戦う？
俺達が気圧されていると、ロキはこっちを物色するような目で見回した。
「さて、北欧以外の者の血を我が子に味合わせるのは正直好まぬが……現魔王の妹などはいい経験になるだろう」
っ!?
野郎、狙いは部長か!?
ロキがほんのわずかに手を動かすのと、俺が咄嗟に部長の前に出るのはほぼ同時。
同時に寒気を感じて、直感で拳を振う。
その瞬間、鈍い音が俺の脇腹から響いて、同時に拳に手応えが。
一瞬でフェンリルが少し離れたところに出現して、その頬は少しだけ血がにじんでいた。
俺はそれを見た瞬間、何かがごっそりかけたように力が抜けかける。
……なんとなくだけど、脇腹をちょっと切ったな。フェンリルの爪か牙でも喰らったか？
それだけでこれとか、奴の牙は聖剣か何かかよ……っ
『大丈夫ですかイッセー！　咄嗟に対応しましたけど、これが限界で―』
それもシャルロットが頑張ってくれたからこの程度で済んだって

ことか。
本当にいい相棒を持ったぜ。なら頑張らないとな。
俺は膝に気合を入れて構えを取り直すと、ロキはちょっとだけ目を見開いていた。
「……我が子に反応するだけでなく、その被害を最小限に押さえるとは。魔王の血を引いた白龍皇も凄まじいと思ったが、別の神滅具使いを従える赤龍帝も中々だな」
そうかい。神様に褒められるぐらいには凄いってか？
でも、そうなると絶対―
「なら容赦はできぬな。ここで始末するのが最適か」
―本気で来るってことだよなぁ！
「させると思うか、ロキぃ！」
「好きにはさせん！」
先生とバラキエルさんが同時に光の攻撃を放つ。
「同じ北欧の者として、狼藉は見過ごせません！」
更にロスヴァイセさんが魔法攻撃を大量に放つ。
それをロキは魔法の防壁で完全に受け止めると、同時にフェンリルに支持するように腕を振り上げ。

「いや、それは困るね」

その時、俺の前の前に俺を庇う様に、白い光が舞い降りた。
っていうかこの声は―
「ヴァーリ!?」
「……白龍皇か。これはこれは」

俺が驚き、ロキが興味深そうに呟く。
そして割って入った白い龍―白龍皇ヴァーリ・ルシファー――が、なんかすっごい堂々とした態度でロキと向き合った。
「初めまして、アースガルズのロキ神よ。唐突で悪いが、貴殿を屠りに来た」
な、なんかかっこいいタイミングでかっこよく登場しやがったよ、俺の宿敵。
俺達がそんな乱入者に面食らっていると、ロキは不敵な表情のまま、首を横に振った。
「なるほど確かに。魔王の血筋と神滅具が加わり覇龍すら戦術に組み込める貴殿なら、我を滅ぼすことも不可能ではないだろう」
その割には、なんか余裕があるような―
「だが、貴殿はあまりに古すぎる」
『アスガルドライバー』
―は？
「……まあ、そうなるわね」
「なるほど、そう来るか」
リヴァさんとオーディンの爺さんが納得した感じで何か言っているけど、正直頭が理解してない。
あれって、リヴァさんがつけているアスガルドライバー!? ど、どういうことなんだよ!?
「我らアースガルズは闘争を尊ぶ神話。ゆえに最先端の戦争にも理解を示すし、何よりプログライズキーは神にこそ相応しい。洗練されずただ旧いだけのカビ臭い力で、今の我は倒せぬよ」
『Ｒａｇｎａｒｏｋ』
プログライズキーを即座に装填して、ロキは不敵に微笑んだ。
いや、いやいやいや。
ちょっと待て。いやほんとちょっと待って。
「変身！」
『アースライズ』
その瞬間、フェンリルをライダモデルにしたような奴が出てきて、

それが装甲になったロキに装着される。
『ヴァナルガンドウルフ』
『Ｉ，ｍ　Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ』
なんていうか神々しい、そして厄介過ぎる奴が現れやがった。
「―これぞ、アスガルドライバーの本命、仮面ライダーヴァナルガンド」
そう告げるロキは、装甲で見えないけど間違いなく得意げな表情を浮かべてるだろう。
今のロキからはフェンリルに近いオーラが漂っている。
クソッタレ、冗談だろ……っ
「……よもや、貴殿がプログライズキーに手を出していたとはな」
「因みに星辰体（アストラル）や英霊（サーヴァント）にも手を出しているぞ？」
ヴァーリに対してとんでもないことを答えながら、ロキは右手を掲げて俺達を招く。
「さあ来るがいい。もう少しだけ遊びに付き合ってやろうではないか」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……っ!?」
「……どうかしましたか、南空？」
「……なるほど、そういうことか……っ」
「南空？　どうしましたか？」
「……はっ！　すいません生徒会長。なんか急に意識が飛んでました！」

「……この気配は、まさか！」
「どうしますか、長官」
「どうやら仕掛けられたようです。合流地点にいては間に合わないでしょうし、行きますよ！」

神威動乱編　第十六話　呪怨の紫炎

イッセーＳｉｄｅ

「面白い、ならば試させてもらおうか。……兵藤一誠、手を出すなよ？」

ヴァーリはそう言うと、一瞬でロキに迫った。

そして盛大に大きな音が響き、ロキはヴァーリの拳を左手で受け止める。

見ればフェンリルに向けて右手のひらを出していて、フェンリルが行動するのを止めていたみたいだ。

そしてフェンリルはフェンリルでこっちを警戒してるから、ヴァーリに言われるまでもなく手が出せない。

……こんなところで、神滅具を持った魔王の末裔と仮面ライダーになった神様の戦いとか、いろんな意味で凄い事になってるよな……っ！

「面白いね。神が最新の技術を使って己を高めるとは」

「我らアースガルズは戦を司ると言ってもいい。ならば未来の戦を担うだろう力を手にするのは必定だろう？」

そう言い合った瞬間、ヴァーリはロキに猛攻を仕掛ける。

もの凄い速度で振るわれる拳と蹴りの応酬を、ロキは両手だけで全て捌いている。

おいおい冗談だろ。ヴァーリのやつ、俺と戦った時より遥かに強くなってやがる。

それをああも簡単にいなすなんて、ロキは化け物か何かか!?

「中々できるな。流石は魔王の末裔が神滅具を手にしただけのことはある。それに鍛錬も積み重ねているからこその力だ。素晴らしい」

「お褒めに預かり恐縮だ。そちらも伊達に神であるわけではなさそうだ」
二人とも褒め合ってるけど、あの猛攻の中でそれができるってだけでもシャレにならない。
俺のライバルは強すぎです！　勘弁してください！
なんて思ったら、今度はロキもヴァーリも一旦距離をとった。
「ではつぎは―」
「―撃ち合いだな」
その瞬間、もの凄い攻撃の数と質の砲撃がお互いに向けてぶちかましあった。
冗談だろ、多い多い多い!?　っていうかこっちにも流れ弾が―
「下がっているんだ！」
―と思ったら、俺達の目の前に炎の壁が立ち上がって、攻撃を受け止める。
いや、なんかすぐにでも限界を超えそうな気がする―
「ほっほっほ。ならおまけじゃ」
―その瞬間、オーディンの爺さんが指を鳴らすと炎が強大になって、流れ弾を防ぎ切った。
後ろを振り返ると、オーディンの爺さんはゲイルさんの肩に手を置いてた。
ってことは、あの炎はゲイルさんが出したのか。凄いなおい。
さっすがカズヒと肩を並べて戦える、それも護衛部隊の人だ。
神と魔王の決戦の余波を防ぐんだから、大したもんだよなぁ。
と言っても、このままってわけにもいかないよな。
ドライグ、シャルロット。行けるか？
『無理をするなと言いたいが、いつも無茶をしているからな。まあもう一当ては行けるだろう』
『できれば控えてほしいですが、そうも言ってられない状況だらけですね』
悪いな二人とも。
俺の部長に手を出してきやがったんだ。このままってわけにはい

かねえさ！
だから俺達が立ち上がろうとした時―
「では、そろそろ遊びは終えるとするか」
―ロキが何時の間にか、ヴァーリの鳩尾に拳を叩き込んでいた。
「……がはっ！」
そのままヴァーリは盛大に吹っ飛ばされるけど、何とか体勢を立て直し―
「では終わるがよい」
『ＧＯＤ！』
その目の前に、もうロキは姿を現していた。
『ヴァナルガンドディストラクション！』

ヴ ァ ナ ル ガ ン ド
ディ ス ト ラ ク シ ョ ン

気づいた時には、ヴァーリの鎧がヴァナルガンドの爪で盛大に切り裂かれていた。

「これが……神が仮面ライダーになった成果だと……っ」
「その通り。如何に魔王の血を引く神滅具使いといえど、覇も神殺しもなしに今の我を倒すことはできんよ」
崩れ落ちそうになるヴァーリを無視しながら、ロキは俺達を殺意を込めながら見る。
野郎、させるかよ！
「なら同じプログライズキーで！」
『Ｏｄｅｎ！』
リヴァさんが素早く突撃し、俺もそれに合わせて突貫する。
『スキルヴィングディストラクション』
リヴァさんが必殺技を叩き込むのに合わせて、俺もアスカロンのオーラを左腕に込めて殴り掛かる。
二方向から挟み撃ちなら―
「ふむ、二重で甘い」
―その瞬間、俺の目の前に紫の炎が立ち塞がった。
「―邪魔よ悪魔ぁあああ！」
女!?　っていうか熱ぅ!?
しかもダメージがあまりにでかい。これ、聖剣で傷つけられたぐらいの痛みとダメージだぞ!?
くそったれ！　あとリヴァさんは―
「ぬるい」
「―あぅ！」
―まじかよ。
魔王血族にすら通用したリヴァさんの一撃を、ロキは力を込めてたとは言っても普通の攻撃で弾き飛ばした。
これが、正真正銘の神がプログライズキーを使用した底力だってのか!?
俺が面食らっていると、ロキはつまらなさそうに鼻を鳴らす。

「まさかオーディンの娘に真の力を使わせると思ったか？　そもそも貴様の本領は地上戦だろうに、空で勝てると思われるのは心外だな」
　ロキはそうあっさり答えると、同時に肩をすくめながら割って入った紫の炎に顔を向ける。
「よくやったなアヴェンジャー。約束通り、オーディンを殺したら天界に殴り込みだ」
「そうしてくれると嬉しいですねぇ、偽神さん？」
　そう答える紫の炎は、やっぱり女の声がする。
　なら乳語翻訳（パイリンガル）……駄目だ、聞こえない。
「……サーヴァントまで召喚しているうえ、天界に殴り込みとはな。しかもその紫の炎は、まさか紫炎祭主（インシネレート・アンセム）の礫台か……!?」
　先生が動揺してるけど、そんなやばい神器の力だってのか!?
　くそ、このままだと、流石に何人か死ぬんじゃないか!?
　俺が正直歯を食いしばっていると、ロキは何故か肩をすくめると後ろに下がる。
　フェンリルと紫の炎が同じように一歩下がると、空間が歪んでいった。
「オーディンの意志は知れたし、二天龍と一当てできたのもいい経験だ。それに免じて今日は引こう」
　……今日はってことは、諦める気はないってことか。
　俺達が睨み付けていると、ロキは変身を解除すると不敵な笑みすら浮かべている。
「だが日本神話との会談の日、今度こそオーディンには死んでもらう。邪魔をするなら我が英霊（サーヴァント）の灰になるか我が子（フェンリル）の餌になるかの二択と知るがいい」
　そう言い捨てながら転移するロキを睨んでいると、ふと強い聖なるオーラを感じた。
「大丈夫ですか、総督、オーディン様！」
　この声、クロードさんか！

―その瞬間、魂まで凍り付きそうな寒気を覚えた。

「……お前は……ぁあああっ」

その瞬間、紫の炎が凄い出力で放たれる。
あれ？　位置的に俺もやばい―

「おっと危ない！」

その瞬間、今度はしたから凄い勢いで海水が浮かび上がって炎を受け止めた。
え、今度は何!?
「危ないところでしたね、クロード長官。ですが、海の上ならそう好きにはさせませんよ」
「ええ、ありがとうございますアニアス」
見ればクロード長官の隣に、神々しい女の人が立っていた。

な、なんかオーラが凄いけど誰だ？
「……ほぉ。オケアノスが教会の狗になっているとはな」
ロキがなんか、複雑な表情をその女の人に向けていた。
「神の末席にいる者が汚らわしい。他神話のものとはいえ見るに堪え―」
そう言おうとした時、咄嗟にロキは結界を張る。
その結界に矢が当たって、もの凄い衝撃が走った。
「大丈夫でござるか長官殿。相手は上位の神ゆえ油断めさるな」
「……動揺していました、手間をかけさせてごめんなさい、玄隆」
こ、今度は神父服を着たおっさんが来たぞ!?
クロードさんのことを長官って言っているからには、たぶんだけどプルガトリオ機関の人なんだろうな。
あ、ロキがめっちゃくちゃ嫌そうな顔をしてる!?
「更に日本の八百万めが。つくづく神の恥さらしが集まっているものだな」
な、なんか俺が追い付けてない状況なんだけど、ロキは戦う気はないようだ。
紫の炎はいきなり攻撃をしてくるぐらいに苛立ってるけど、一発かましてスッキリしたのか、炎をかき消して俺達を睨みつける。
……その姿を見て、俺は思わずクロード長官の方を振り返った。
二人の顔はとってもそっくりだった。もしどっちかしかいない時にもう片方だって言われたら、信じてしまうぐらいに。
そしてクロード長官は辛そうな表情をしながら、それでも真っ直ぐに炎の女に向き直った。
「……やはりですか。あなたが敵対するのなら、私が相手をするべきですね」
「……そうね。まずはあなたを殺してあげるわ。ピエールの飼い犬め……っ！」
ぴ、ピエール？
俺がよく分からないでいると、ロキと一緒にその女は消えていった。

……え、どういうこと？

神威動乱編　第十七話　傲慢は拒絶され、豪快は乱入する

和地Ｓｉｄｅ

そんなことがあった次の日。
兵藤邸の地下では、結構な人数が集まっていた。
オカルト研究部は全員集合。そのうえで生徒会からも会長が匙に副会長、そして鶴羽を連れてきていた。
「……あの、和地？　状況は聞いてるけど……いいのあれ？」
「俺に言われてもなぁ」
鶴羽が言いたいことは分かる。
今俺たちと一緒に地下室にいるのはヴァーリチームだ。
なんでも、ヴァーリチームはイッセーたちを襲撃したロキと激突したうえで、そのあと共闘を提案してきたとか。
なんていうか緊張感が全然見えないことといい、はっきり言って何を考えているんだろうか？
神と戦争がしたいとかいう理由で育ての親ともいえるアザゼル先生を裏切って、三大勢力の未来がかかっている会談にテロリストを連れ込んだ裏切り者。
こっちが問答無用で殺しに来ても納得されそうなことをしていて、なんでいけしゃあしゃあと共闘を提案した挙句緩い感じで敵陣地にいられるんだ？
こっちの調子が逆に狂うというかなんて言うかなんだけど。
そんな中、アザゼル先生が軽くため息をつきながら、手を叩いて俺達の注目を集める。

その隣にはクロード長官もいて、緊急事態であることがよく分かる状態だ。
「……まず簡潔にまとめるぞ。オーディンの爺さんが日本神話との和平を三大勢力(俺達)の仲介と護衛ですることにブちぎれた悪神ロキが、子供であるフェンリルを引き連れたうえ、サーヴァントを召喚して仮面ライダーになって俺達に宣戦布告をしてきた。しかも間が悪いことに英雄派のテロが頻発しているから、護衛に人員を割くことも本来なら困難だ。……で、お前さんはなんで共闘なんて提案したんだ？」
と、先生がヴァーリを見ると、ヴァーリは平然としていた。
「神と戦うことができるチャンスを逃したくない。それだけでは不満かな？」
「……はぁ。まあ実際問題、今の状況を俺達だけでどうにかしろって言うなら、そういうこともあり得るわけだ。サーゼクス達、現四大魔王としては、甘いだろうが魔王末裔のお前を滅ぼしたくはないという意見がある」
先生の妙な言い回しに、俺は何か首を傾げる。
ヴァーリも付き合いが長いから気づいたのか、首を傾げていた？
「どういうことだい？　現状俺達という戦力を確保できなければ、勝てたとしても死人がでてくる。渡りに船と言ってもいいと思うけどね」
ヴァーリが言いたいことも分かる。
ぶっちゃけロキ陣営は凶悪すぎる。
どうも神滅具を使って要るっぽいサーヴァントを召喚し、全盛期の二天龍と真っ向勝負できるフェンリルを従え、リヴァ先生と同型の変身アイテムで仮面ライダーに変身し、あろうことか星辰奏者(エスペラント)であることをにおわせている。
「別に断っても構わない。だがその時はそちらの都合などお構いなしに仕掛けるのみだ。そちらとしても都合が悪いんじゃないか？」
そしてこいつはそういうことを本当にする。こっちとしてはいい迷惑だ。
そして、そうなると泥沼になりかねない。避けれるのなら避けるべ

きではあるだろう。
非常にあれではあるけど、白龍皇ヴァーリ・ルシファーを味方につけれるのは確かに価値がある。
あとサーゼクス様とは少ししか話してないけど、あの人は自分から敵対を決定したりはしない印象もある。
……まさか。
「この状況下で俺達という戦力を手放せるのかな？　白龍皇や聖王剣、更に孫悟空の末裔や猫？という戦力は、喉から手が出るほど欲しいんじゃ―」
そんな風にヴァーリがいうのと、足音が響くのはほぼ同時だった。
「―こういう時、この国では「寝言は寝て言え」というらしいのだが、知っているかね？」
その声と共に現れたのは、俺達もある程度走っている一人の若手悪魔。
分家出身でありながら、本家出身のリアス部長達と肩を並べるように会合に参加した、フェニックス分家の上級悪魔。
受肉したサーヴァントを二騎従え、新機軸の兵器で旧魔王派打倒に貢献する、大王派の若き新鋭。
「……君の養父ともいえるアザゼル総督に言わせるのも忍びない。答えは私が言おうではないか」
「フロンズ・フィーニクスか」
ヴァーリが詰まらなさそうな視線を向け、彼は平然と肩をすくめる。
そして視線がぶつかったのは一瞬。
「現悪魔政権全体の結論を伝えよう。―――顔を洗って出直してこい、仕掛けてくるならついでに駆除するのみだ―――とね」
フロンズはさらりとそう言い切った。
その言いように、ヴァーリチームは一瞬呆気に取られていた。
ここまでバッサリ断られるとは思ってなかったらしい。つってもまあ、そういう答えは十分出てくる余地があったろう。
まあぶっちゃけ、それをやられると俺達が困るんだけど。

ロキ陣営だけでも厄介なのに、更にヴァーリチームとの乱戦は勘弁してほしい。上層部は現場の苦労をわかっているんだろうかと思いたい。

そう思ったけど、フロンズは更にはっきり告げる。

「あと力を貸してやるつもりのようなので、これは私の言葉をくれてやろう。――――テロリストの手を借りさせるわけにはいかない。我々大王派が戦力を派遣させてもらう」

……まじか。

ヴァーリはちょっと目元ひきつかせていたけど、同時にちょっと呆れているようだった。

「正気かい？　英雄派の連中が色々とやっているようだけど、そんな余裕があると？」

「ふむ。その言いぶりだと、英雄派との連携は取ってないようだな」

フロンズがそう切り返すと、ヴァーリはつまらなさそうに鼻を鳴らした。

「ふん。あいつらとはお互いに相互不干渉を基本としていてね。俺達とはあり方が合わないのさ」

「合わせる気もない愚連隊がよくも言う。その辺に関しては英雄派に同情しよう」

「同情？　日夜テロを仕掛けてきている奴らにそんなことを入れる余裕があるのかい？　そちらとしても困っているんじゃないかい？」

ヴァーリの言い分もちょっと分かる。

外道な手段でテロを仕掛けてきている英雄派。あいつらのせいで教会や神の子を見張るものからも増援の当てがなく、北欧神話側も戦力を送ってくれていないわけだしな。

大王派としても正直困っているだろうに、なんでそんな余裕しゃくしゃく―

「困る？　むしろ君達が繋がっているなら、菓子折りを届けてもらおうかというぐらいには感謝しているのだがね」

そんなフロンズの発言に、ヴァーリも俺も面食らった。

二の句も告げなくなっているヴァーリに、フロンズは苦笑を返して

いた。
「まあ現場で戦うものは苦労しているだろうが、会議室で運営方針を決める側であるこちらとしては好都合だよ。転生悪魔に頼らない下級中級の純血悪魔の兵士達の底上げをしている身としては、実戦試験（コンバットプルーフ）の機会に困らないのはありがたい。現場で命を懸ける者からは苦情が来るだろうが、今の冥界の軍備増強が必須な状況下で、その要として広めたい物の実働データがあふれかえるのはうれしい限りだ」
うわぁ、本当に上に立つ者の視点オンリーだ。
だけどまあ、その言い分は間違ってない。
こいつはレーティングゲームでの勝利を全力でぶん投げて、新技術の宣伝をして富国強兵政策をぶちかました男だ。
そういう意味では新技術のアラを潰す為にも実践テストは有効で、思う存分仕掛けてきている英雄派には感謝したくもなるだろう。
英雄は英雄派で、俺達を倒すことではなく筋腫に至らせてデータをとることが目的だ。だから仕向けている連中が死んでもいいというか、むしろ死地に放り込むことが本命目的なので、勝算はさほど高くないようにしている。
……結果としてお互いの利害が完全にかみ合っている状態だな、オイ。
「幸か不幸か、我々大王派はＤ（ディアボロス・フレーム）Ｆやデビルレイダー、魔性聖剣の実践演習も兼ねれるほど余裕があってね。ほかの方々には悪いが戦力の余裕はあるのだよ。それも後押しになって君達の提案は却下という形になった」
そう言い切ると、フロンズは憐憫の表情すらヴァーリ達に向けている。
「ミザリ・ルシファー達旧魔王派を恨むといい。彼やシャルバ達によって現四大魔王の発言力は低下している。同時に冥界政府は四大魔王の血統を「かつての指導者一族だった」にすることで方針が決定している。我らがシュウマ殿が主導で進める「九大罪王」制度を薦める為にも、旧魔王血族の横暴でしかない提案を飲むことはあり得ん

し、今の発言力では現魔王の方々も抑えることはできんよ」
あ、そこもあるのか。
そういえば発言力が低下していると言ってたし、だから積極的にごり押しすることもできなかったと。
……そういえばヴァーリって旧魔王派と折り合いがつかなかったらしいし、意図せぬ形で意趣返しをされたってことか？
「そして我々大王派としては、これ以上馬鹿な旧王族に余計なことをされたくはないのだよ。またロキの反乱にせよ、同様の事態が頻発するより前に体のいい見せしめをするチャンスともいえる。皮算用であるのは承知の上だが、君達が介入してくれるなら一挙両得の漁夫の利すら狙えるだろう」
不敵な笑みすら浮かべ、フロンズははっきりと言い切った。
「古き栄光だけの害獣は消え去るがいい。新たな時代に無能な働き者でしかない王族は不要だ。隠匿か討死の二択を選ばせてあげよう」
手のひらを前に出しながら、優し気な笑みすら浮かべて、フロンズはきっぱりと言い切った。
「……また豪胆ね」
「……怖いんだけど」
カズヒ姉さんやイッセーもちょっと引き気味だけど、ヴァーリはどう出る？
「……貴様も、俺をあいつらと同類扱いするというのか……？」
あ、ヴァーリの手がプルプル震えてるし、後ろの美猴達もかなりイラついてる。
これ、次の返答次第ではここで殺し合いになるんじゃないか……？
俺は状況次第で止めに入ることも考え、いつでも負けんを作れるように準備をする。
そんなピリピリした空気の中、フロンズは軽くため息をついてから、ヴァーリに呆れた目を向けてきた。
「どういう意味か分からんが、自分がシャルバ達と同類かどうか聞いたのなら答えは一つだ」
その目は侮蔑を通り越して、冷たい無感動なそれだった。

「……同じテロ集団に属しているのだからその判断は当然。むしろ神の子を見張るものに属しておきながら裏切ってテロの内通をした以上、元から敵対していた彼ら未満と言われてもおかしくあるまい？
誇り無き狂犬どもが、ありもしないプライドを汚された風に言わないでくれたまえ」
「――――いいだろう。帰る前に……その首を土産にするっ！」
目を血走らせる勢いで、ヴァーリは鎧を纏って殴り掛かる。
思わず割って入ろうと俺達が動くけど、フロンズは手を出してそれを止める。
いや、このままだと確実に死ぬ―
「――――っ!?」
―その瞬間、閃光がほとばしってヴァーリが弾き飛ばされた。
鎧も盛大にヒビが入って、ところどころ砕け散っている。
そしてフロンズは平然としていた。これは奴の仕込みか!?
俺たちが面食らっていると、フロンズは懐から金属製のカードを取り出した。
「……備えという概念ぐらいは知っているし、テロリストの要求を突っぱねるのなら備えるとも。この護符は対龍・対魔性疑似宝具で、血を与えた者に危機に類する概念を与えようとした存在に対する障壁を展開する。宝具としてはC＋＋相当だな」
「なんだ……と？」
すぐにでも再突撃を仕掛けかねないヴァーリに、フロンズはレイドライザーを装着してから、カードをしまったうえでプログライズキーと魔性聖剣を取り出した。
「……では、ここで戦闘開始ということでいいだろう。リアス殿に悪いのでまだ突入させてはいないが、駒王町周囲に大王派が師団規模の部隊を展開している。むろん、対龍種用の装備も用意した試験部隊をつれてな」
素直に帰らない場合もきっちり想定していたわけか。
「まあ責任を取って我々だけで討伐するべきだし、アザゼル総督に殺させるのも忍びない。……包囲圧殺の準備が完了するまでしのぐぞ、

ティア」
「……応さぁ！」
更に部屋に、フロンズの女王であるティア・バアルが乱入してくる。
というか何人か更に入ってきているし、最初からこうなること前提で動いてたな!?
というか、これ俺達はどう動けばいい？
「できれば下がっていてくださいませ、リアス様方」
「サーゼクス様のご意向に沿わぬ形故、妹君（ぎみ）であるリアス様の手を煩わせたくはありません」
フロンズの部下はこっちを庇う様にしているが、ハルバードを振り回しているティアはむしろ乗り気のようだ。
「別に手を貸してくれてもいいよ！　手柄を独占するほど鬼じゃないし、共闘した方が死人もでないだろうしねぇ！」
「死者が出ていいならお前達だけで倒せると？　この白龍皇を、ヴァーリ・ルシファーをなめるなよ……っ！」
ヴァーリはヴァーリで殺意満々だし、これ間違いなくやばい規模の戦いになるんじゃないか？
……まあ、ヴァーリ達はテロリストだし、別に倒すのは問題ないな。
というか、冷静に考えると堕天使側（俺達）が倒せるならそれに越したことはないな。だってヴァーリは神の子を見張る者の裏切り者だし、むしろ身内の恥は身内で注ぐべきか？
「……冷静に考えたら、俺達こそ遠慮する必要はないんだよな」
「あ～。裏切り者ですし、落とし前はこっちでつけるべきですの？」
俺がヒマリと顔を見合わせると、カズヒ姉さんは一歩前に出て滅亡迅雷フォースライザーを装着する。
「……まあ情報提供の借りはあるし、投降するなら助命嘆願はした方がいいかもしれないけれどね。冷静に考えればのうのうと裏切った地に顔を出して恥知らずな提案をしているのなら、ぶちのめすのが基本よね」
だよなぁ。
フロンズもそれに頷くと、静かにプログライズキーを装着できるよ

うに構えていた。
「まあ当然の意見だな。……テロリストとは交渉しないし容赦もしない。これは国際常識だ。学がないどころか学ぼうともしなかったツケを払うといい」
「……いいだろう。ルシファーにして白龍皇たる俺をコケにした報い、命であがなってもらう……っ！」
フロンズもヴァーリも相手を殺す気が満々だな。
まあ俺達も、死なない程度にヴァーリの相手をするのが当然では―
「あ～、悪いがお客さんだ。その辺で一旦ストップだな」
「すまぬがその辺にしてもらおうかのぉ？」
―その声が、俺達の戦いを中断させる。
……見れば、そこには苦笑しながら片手を盾にしているノア・ベリアルが、一人の女性を連れていた……って!?
「……幸香、なんでここに!?」
カズヒ姉さんが絶句する相手は、つい先日俺たちが再開した、英雄派の大幹部。
「あの子が……ね」
「そうなのよねぇ」
なんか鶴羽がリーネスと視線を交わし合っているけど、今はそっちを気にしている余裕がない。
「さて、すまぬがヴァーリを連れ帰りに来た。そ奴が迷惑をかけたのは詫びるが、これ以上戦闘するなら、妾も参戦させてもらうぞ？」
……ああもう、何がどうなっているんだか!?

神威動乱編　第十八話　白龍皇踏んだり蹴ったり

イッセーＳｉｄｅ

ヴァーリが来たと思ったら大王派（フロンズさん）が来て、しかも今度は幸香（英雄派）かよ!?
俺はもうなんていうか、目まぐるしく変わる変化についていけてない。
でもこれ、本当にシャレにならないガチバトルが起きそうなんだけど。
とりあえず俺も籠手を出して構えながら、様子を窺ってみる。
「ノア？　外周にいる師団の指揮を任せていたはずだが」
「いつでも最低限の指揮がとれるようにはしてるさ。ただ、この女の話を聞くと仲介をした方がいい気がするんでな」
フロンズさんにそう答えながら、ノアさんは肩をすくめた。
そして幸香は幸香で不敵な笑みを浮かべながら、指を鳴らすと戦闘で使ったとかいう魔獣が、でかい樽を抱えて降りてきた。
「今回は戦をしに来たわけではないのでな。手土産にワインを樽で持ってきておいたぞ。外にあと五つほどおいておるので、好きに飲むがよい」
俺達未成年なんだけど。アザゼル先生ぐらいしか楽しめないって。
っていうかお土産持ってきてくれたのか、妙なところで律儀だなぁ。
俺がちょっと感心していると、それに気づいた幸香はヴァーリ達に半目を向ける。
なんていうか呆れてる感じだ。お前らそれでいいのかよって目で言ってる。
「敵対している者達と対話をするのなら、手土産ぐらい持ってこぬか。おぬしらは本当に他者の神経を苛立たせる天才じゃのぉ」

「……うっせぇよ！　さっきからなんで俺っち達ばっかりぼろっかすなんだ！」
美猴が切れて怒鳴るけど、フロンズと幸香は顔を見合わせると苦笑してた。
なんか分かりあっちゃってる。すっごく分かりあっちゃってる。
「そちらも苦労しているようだね。敵といえど同情してしまうよ」
フロンズさんがそう言うと、幸香も肩をすくめた。
「一応敵なそちらはまだましじゃろう。なまじ味方故に殺しに行くのもあれでのぉ」
……ヴァーリへの愚痴で意気投合しやがった。
「はっきり言っておくが自業自得だろうて。自分達の行動を思い返して罵倒される要素を見つけられんのなら、病気じゃから医者にかかれ」
幸香がはっきり言うと、フロンズさんもうんうんと頷いていた。
「具体的に何がダメか、土産として箇条書きしても構わないが？　まあまとめるなら「交渉と礼儀作法を馬鹿にしきっている」といったところだがね」
「あんたら恋人か何か!?」
黒歌がそう突っ込むけど、二人同時に冷めた目で返してきたよ。
なんていうか、すっごく馬が合ってないか？　いや、ヴァーリに対する不満で会うのもあれだけど。
俺がちょっと引いていると、ノアさんが何時の間にか俺の隣に来て、ぽんと慰めるように肩に手を置いた。
「あんたも大変だねぇ。対をなす存在がこんな能力だけの阿呆で、自分の問題点を治す為に引きつけまで起こしてる身としちゃ一緒にされたくないんじゃねぇの？」
いや、そこまで思ってませんけど。
「……俺達と違って敵と仲良くできるようで何よりだ。……英雄派と俺達は相互不干渉のはずだが？」
ヴァーリがオーラを垂れ流しながら、そう幸香を問い詰める。
そういえば、さっきそんなこと言ってたっけ。

不干渉ってことになってるのに干渉してきたら、そりゃヴァーリ達も文句ぐらいは言いたくなるよな。こればっかりはヴァーリも正しい。
下手すると駒王町で禍の団同士の戦いが起きそうで怖いんだけど。
そして睨み付けられている幸香も、うんうんと頷いていた。
「英雄派単体ならそうなのだが、今の妾は禍の団全体の意向……オーフィスの許可も取った全体活動にのっとって動いておるのでな」
その答えに、ヴァーリチームは目を見開いていた。
っていうかオーフィスって、あの可愛い女の子の姿をしたドラゴンだよな？
確かサーゼクス様ですら、一人だと敵わないっていう実力者らしい。ちょっと信じられないけど、そんな奴がいるからこそ禍の団はでかいテロ組織になってるんだよな。
で、そんな禍の団全体がどういう―
「……禍の団は連合部隊で、此度のロキの造反行為に介入することを決定した」
―は？
ちょっと待て。この戦いに禍の団がまじに介入するってのか!?
ヴァーリを見ると、あっちもあっちで面食らっていた。
どうやら本気で知らなかったらしい。
そしてそんな様子を見ながら、幸香は軽くため息をついた。
「ちなみに最優先目標はロキ及びリアス・グレモリー眷属。英雄派としては彼女達にはもっと成長してもらいたいのじゃが、全体の意向として主導勢力だった旧魔王派に深手を負わせた要因は、そのままといかないというわけでのぉ」
そんなこと言いながら俺達に軽く笑顔を見せるけど、マジでやめてください！
くそったれ！　シャルバとかクルゼレイとかカテレアとかをぶちのめしたのが理由か!?
……理由だよね！　あいつらトップだったんだし！　トップ倒したやつとか普通は恨むよね!?

俺たちが警戒していると、幸香はヴァーリに対して、笑顔ではなく鋭い目を向けた。
返答次第ではここで殺すといわんばかりに殺意までセットだ。
「……この状況下で貴様らがリアス・グレモリーと共闘することなど許されぬよ。仮にも禍の団という組織に自ら入ったのならば、最低限の足並みを揃えるがよい」
幸香とヴァーリの視線がぶつかり合い、そして一瞬だけど火花が散った。
「もし断れば？」
「ここで殺す」
短い言葉が交わされて、空気が冷たくなっていく。
あれ？　なんか禍の団同士の戦いが起きかかってないか、これ？
俺が思わず息をのむと、だけど幸香はくくっと笑った。
「まあ、交渉は切って捨てられたわけじゃろ？　ならさっさと帰るぞ、作戦に参加できるよう取り計らってやるから、癇癪はそこまでにするがよい」
そんな言葉に、ヴァーリもため息をつきながらうなづいた。
「まあ、断られた以上はそうするほかないか。……それでいいか？」
そう聞かれると、ヴァーリチームの連中は苦笑しながらうなづいた。
「ええ。こんな好機を切って捨てられるとは思いませんでしたが、無理強いはできませんね」
アーサーがそう言いながら眼鏡をくいっとすると、黒歌と美猴は体を伸ばしながらため息をついた。
「残念だぜぃ。この地下のプールを楽しみたかったのによぉ」
「久しぶりに白音と話せるかと思ったんだけど、まあしかたないにゃん」
……の、ノリが軽い。
「あなた達ねぇ！　ここが敵地だっていう自覚がないの？」
部長も目元を引くつかせながらそう言うけど、フロンズさんが手を出してそれを制した。

お、意外な人が止めに―
「あきらめたまえ。どうも彼らには敵味方の識別能力と恥という概念がないらしい。……この国ではＤＱＮというスラングがあるそうだが、その典型例だろうな」
―盛大にヴァーリチームを挑発したぁ!?
「……ここで殺してから帰ってもいいんだけどね？」
「見逃してやるのはこちらの方なのだが？　来るなら是非殺されに来てくれとしか言えぬよ」
ヴァーリの殺意まじりの言葉を切って捨てながら、フロンズさんは肩をすくめた。
「禍の団に対する寝返り工作はしているが、君達にする価値はないな。ＢＣ兵器と同じで、持った時点で唾棄されるような連中を寝返らせるメリットがない」
……キレッキレの罵倒だ。
あと禍の団の構成員を寝返らせようとしてたんだ。大王派もいろんなことしてるな。
思わず頬を引きつらせるヴァーリを無視して、フロンズさんは幸香に微笑みすら向ける。
「最も、貴殿は意外と礼節があるし、やり方次第で共生関係は気づけそうだ。早いうちに投降してくれるのなら、賠償金と保釈金を立て替えてやっても構わないが？」
しかもこんなところでやってきたし！
この人以外と豪胆だな！
「ふむ。私掠船団（プライベーティア）を名乗る以上、気に入ったお上につくのも一興。……禍の団を見限ることになれば考えるとするかのぉ」
「まあ相応の手土産は要求するがね。それぐらいないと言い訳が立たないから、そこは頑張ってくれた前」
「これは手厳しい。まあ、その時は度肝を抜くような財宝でも持ち込むとするかのぅ」
……これ、俺達が聞いていいことなのか？
「その辺にしとけよフロンズ。ってか、連れてきた俺が言うことじゃ

ねえがこのまま逃がすってのはいいのか？」
あ、ノアさんの言うとおりだ。
一応こいつらテロリストだし、このまま逃がすってのもまずいんじゃないか？
「いや、倒すのも立派な選択肢だが、そうなれば駒王町にも多少の被害は出る。それだけの価値があるとはいえ、相手が退く気なら話は別になるだろう」
フロンズさんがそう言うと、幸香も苦笑しながら一枚の紙を取り出した。
「ならば、迷惑料ぐらいは払っておこうではないか？　……今の英雄派が仕向けている連中に使われている、致死に至る蛇の仕組みを置いておこう」
え、何それ!?
「……それだけじゃ足りねえな。後でロキ対策の情報収集に白龍皇がいると助かる。情報はヴァーリにも伝えるから、帰るならその後にしてくれ」
先生もなにそれ!?
そんな声がポツリと聞こえた。
っていうかそれ、フロンズさん達は了承するのか？　悪魔政府全体の意向から考えても、色々面倒なことになりそうだけど……？
俺が不安になりながらフロンズさんを見ると、眉間に手を当てて少し考え込んでいた感じだった。
「……総督殿が対ロキ戦に必要だとおっしゃるのなら、上役もある程度は了承するでしょう。ですが保険として、ヴァーリ（彼）チーム（ら）が退去するまでの間、監視の為に師団を駒王町内で厳戒態勢にさせていただきたい」
「……だそうだがいいか？」
即答で部長に振ったよこの人。
部長もなんていうか複雑そうだったけど、額に手を当てながらため息をついた。
「背に腹は代えられないわね。後でお兄様や上役の方々に謝って頂

戴」
「分かった分かった。……で、それでいいな？」
先生が周りを見渡すと、フロンズさんもヴァーリも幸香も頷いた。
「では、他の連中は余計なことをせぬよう妾が外で見張っておこう。……ほれ、ヴァーリ以外は退出するのが筋であろう？」
幸香はそう言いながら目でヴァーリ以外を促すと、ヴァーリチームの連中は肩をすくめたりしながら外に行く。
「残念にゃん。じゃ、白音はまた会いましょう？」
「うっへ～。地下のプールで泳ぎたかったぜぃ」
「我慢しましょう。また次の機会を待てばいいのです」
……また来る気かよこいつら。
俺がちょっとげんなりしていると、歯を食いしばる音が聞こえてきた。
「……ふざけやがって……っ」
見れば、アニルがアーサーの後姿を睨み付けながら、歯を食いしばるどころか拳を握り締めている。
爪が皮膚を突き破ったのか、血が少しにじんでいる手を握り、アニルはとても悔しそうだった。
「一族のパーティで顔だって見てるはずだってのに。本当に野郎はペンドラゴン家のことなんて、どうでもいいってか……っ」
……アニル……。

九成Ｓｉｄｅ

「ほっほっほ。ひと段落ついたので様子を見に来たが、どうやら色々

あったようじゃのぉ」
「すいません。もうちょっと当事者意識をもってくれません？」
何時の間にか現れたオーディン様に、俺は半目を向けるほかなかった。
いや、護衛任務を言いつけられている以上は何かあること前提で動くべきだ。何よりテロリストが大規模活動しているなら、敵対勢力のトップである主神は何かしらで狙われて当然。だから恨む気はない。
ただ、せめてもうちょっと緊張感を持ってほしい。できればもうちょっとねぎらってほしい。
そんな感情を込めて軽く睨むと、ほっほっほといつもの調子で笑ってきやがった。
「まあ、正直ロキがあそこまでするとは思っておらんかったわ。奴が何かするとは思っておったから予定を早めたが、ここまでの規模であれだけのものを用意するとはのぉ」
どうやら、オーディン様にとってもロキの本気っぷりは想定外だったようだ。
「……一つ伺ってもよろしいでしょうか？」
と、そこでカズヒ姉さんが一歩前に出る。
なんだ？
「……あの神具アスガルドライバー。ロキが開発していたと言っていたようですが、本当ですか？」
そういえば、そんなことも言ってたな。
色々とド級の事態とかで、ちょっと考えてなかったな。
リヴァ先生とロキがそれぞれ持っている、完璧に材後は独自開発な変身装備。
ロキとの戦いを踏まえるのなら、当然警戒してしかるべきなんだけど、どうなんだろうか？
オーディン様は少しだけ沈黙したけど、隠すつもりもないらしい。
「あれはロキが研究用として開発したものじゃ。最も望んだ能力を得られないということで開発を中止したものじゃが、どうやら儂の行動を悟って伏札にしておいたようじゃのう」

「となると。おそらくリヴァ(彼女)が保有しているものより高性能な可能性があるわね。まあ、プログライズキーは尚更でしょうけど」
カズヒ姉さんはそう呟きながらため息をついた。
「鬼に金棒とまで言う気はないけれど、こちらのアドバンテージが埋められているのはきついわね。リーネス、あれの開発は進められる？」
「そうねぇ。ギリギリ……かしらぁ」
ん？
カズヒ姉さんはリーネスと一緒になんか切り札があるってのか？
「……あら？　カズヒ達にはロキをどうにかする切り札がありますの？」
「……もしかして、禁手に至れる自信があるとか？　それも対神の……？」
ヒマリやヒツギが首を傾げるけど、二人は苦笑で答えている。
と、そこで鶴羽が遠い目をしていた。
「確実に勝算があるとは言わないもの。タイミング的にぶっつけ本番になるし……下手したらカズヒ死ぬんじゃないの？」
なんて物騒なことを言うんだ鶴羽！
え、カズヒ姉さんは何をする気なんだ？
「流石に大丈夫よ。基準値(アベレージ)は変わらないでしょうし」
カズヒ姉さんはそう返すけど、なんというか嫌な予感を覚えてきたぞ。
「まあ、最悪の場合は奥の手を切るだけね。勝算も数パーセントは上がるでしょう」
「……悪いわね、私はこういう時、お手伝い程度しか……」
カズヒ姉さんにすまなそうな表情を浮かべる鶴羽の肩に、リーネスがポンと手を置いた。
「十分すぎるわよぉ。何より、その気持ちが本心なのが一番よぉ」
……な、なんだ。
初めて会った時からカズヒ姉さんとリーネスがツーカーの関係になってしまっていた。

その関係に、今度は鶴羽まで組み込まれている。
これは追いつけない。というか隔絶している。
俺は思わず崩れ落ちた。
「……これが、ジェラシー……っ」
絶望すら感じるレベルでへこむぞ、これ。
「ま、まあ落ち着こうか」
「頑張るといいですのよー」
ヒツギとヒマリがなでてくれるけど、正直ダメージがでかい。
……と、とりあえず、他のことを考えよう。
そう、今考えるべきことは―
「そういえばリヴァ先生は―」
「あ～、その前に一ついいか？」
と、そのタイミングで先生がイッセー達を連れて戻ってきた。
「爺さん。今ほんとやばいんだから、ミョルニルのレプリカとかについては教えてくれよ。ミドガルズオルムが言ってくれなきゃどうなってたか」
そう言いながら先生は来るけど、オーディン様はほっほっほと笑って流した。
「ミドガルズオルムがそこまで話すとはのぉ。おっぱいドラゴンは中々愉快じゃのぉ」
オーディン様がそんなのんきなことを言った瞬間、イッセーの左腕から嘆きの感情がこれでもかと。
ドライグは思わぬ形でダメージが入ったらしい。
ヴァーリはヴァーリでなんか興味深そうというか、ちょっと戦慄的な表情になっている。
「……よもやここまで赤龍帝ドライグの精神が傷ついているとは。アルビオンもおっぱいドラゴンが始まって以来落ち込んでいたが、大丈夫か？」
『……うぅ、なんでこんなことになった？　間違いなくこれまでで最高の宿主に恵まれたと思ったら、赤いのがこのざまなどと……ぐすっ』

『俺が言いたいぞそんなことは……なんで、誇り高き二天龍の片割れたる俺が……えぐっ』
マジ泣きしてる……。
俺達が何とも言えない空気になっている中、イッセーはあえて何も言えない状態だった。仕方がない。
そんな中、オーディン様は髭を撫でつけていた。
「ふむ。かといってアルビオン（おぬし）の宿主もいい年をした男じゃし、好きな部位ぐらいあるじゃろう？」
何言ってるのかなこの人!?
ヴァーリもなんというかむっとしているし、流石にちょっと気持ちは分かるぞ。
「失礼な。俺は乳龍帝などではない」
「悪かった畜生！」
思わずイッセーが反論するけど、ヴァーリもオーディン様も聞いちゃいない。
「何を言うか、いい年の男なら女子に興味を持って当然。何かこぅ……あるじゃろう？」
そりゃ俺も男だから、それはそうだと思うけど……。
「まあそうね。思春期の男なら下半身は理性で制御しきれないのが普通だもの。同性愛者であってもよ？」
カズヒ姉さんも妙なところに理解がありすぎるな。
ヴァーリはヴァーリで真剣に考えこんでいる節があるんだが、無視していいと思うんだが。……というか帰らなくていいのか？
「そうだな。しいて言うなら臀部のラインは女性的魅力があると思うが」
「……ケツ龍皇か」
オーディンさま、語呂がよければいいってもんじゃない。
同情のあまり、俺はそっと視線を逸らした。
『『うえぇ～ん』』
マジな気する二天龍にはちょっと同情する。
「……流石に哀れすぎるから余計なことはしないが、私が言うことで

もないがそろそろ帰ってはどうかね？」
フロンズさんもご迷惑おかけしますです、はい。

神威動乱編　第十九話　フェイカー　クロード・デュ・リス

イッセーＳｉｄｅ

ヴァーリが帰ってから、俺達は作戦会議をすることになった。
「……とりあえず、話を戻しましょう」
微妙な空気を切り替えるように、クロードさんがそう言った。
なんていうか、その表情は暗い。
そういえば、ロキのサーヴァントの顔を見てから、なんか調子がおかしくなってるような……？
「長官、いったいどうなされたんですか？」
「そうですな。あのサーヴァントの顔を見てから、どうも様子がおかしいですぞ？」
カズヒも気になってたのか、あとクロード長官と一緒に来た神父服の人も不安げだ。
その言葉にクロード長官は目を閉じると、意を決して顔を上げた。
「ロキ側の戦力ですが、サーヴァントについては私が心当たりを持っています」
その言葉に、俺達は真剣みが少し増した。
「……嘗ての聖杯戦争で会ったサーヴァントではなさそうですね」
「確かに。相手も顔を覚えているようですし、おそらく生前からでしょうか？」
お姉さんの部下とゲイルさんもそう言っているけど、本当に一体誰なんだろう。
俺達が息をのんでいると、クロードさんは一呼吸を置いてから話し始めた。

「……まず前提条件から説明します。私は受肉したサーヴァントですが、ある特殊なエクストラクラスで召喚されたサーヴァントです」
エクストラクラスっていう……と？
俺が首を傾げていると、リーネスが一歩前に出る。
「知っている人もいるでしょうけど、知らない人もいるでしょうから説明するわねぇ」
俺は知らないからありがたいです！
「聖杯戦争においてクラスというのは色々あるけれど、大抵の聖杯戦争では剣士（セイバー）、弓兵（アーチャー）、槍兵（ランサー）、騎兵（ライダー）、魔術師（キャスター）、狂戦士（バーサーカー）、暗殺者（アサシン）の基本七クラスから一つずつが選ばれて召喚される。エクストラクラスはその基本形とは異なる少数例よぉ」
「……具体的には聖杯戦争が極めて特殊か、世界にとっての危機に直結する場合に、聖杯から直接召喚される監視役、裁定者（ルーラー）のサーヴァントですね。聖杯戦争そのものの確認数も多くない為、現状では理論上存在するレベルです……が」
リーネスの補足をしてから、クロードさんは俺達を見回した。
な、なんだ……？
「……私はそんなエクストラクラス。偽物（フェイカー）のサーヴァント、クロード・デュ・リスと申します」
……ん？
「ごめんなさい。いろんな意味で聞いたことがないです！」
「……まあ、日本の方々では授業でもやらない部類ですから、仕方ないですね」
シャルロットがそうフォローしてくれるけど、知ってるの？
「……クロード・デュ・リス。またの名をクロード・ザルモワーズ、もしくはジャンヌ・ド・ザルモワーズと申します」
「ジャンヌ・ダルクは聞いたことがありますよね？　彼女はその死後何人も出現したいわゆる偽ジャンヌの中でも特に有名な人物です」
クロードさんとシャルロットがそう言うけど、ちょっと意味が分からないよ？
「いろんな意味で突っ込み入れていいですか!?」

「……まあ、言いたいことは分かるわ」
カズヒが俺にそう言ってくれたのがちょっとほっとする。
ぶった切られるんじゃないかって気になったからな。
「ジャンヌ・ダルクの偽物がなんで教会の暗部にとか、そもそも何人も偽物が出てくるのかとか、なんで偽物が英霊にとかでしょう？　一つずつ説明してあげるわ」
そ、そうです。全部言ってくれてありがとう！
で、なんで？
「まず一つ。ジャンヌ・ダルクは今でこそ聖女と認定されているけど、それは彼女の死後何年も経った後。生きて活躍していた時期はともかく、処刑されてからある程度の間は魔女として扱われていたわ」
そうなんだ。
「これは彼女の活躍が百年戦争―キリスト教国家であるイギリスとフランスの戦争―で活躍したからね。更にフランス王国側が彼女を切り捨てたこともあり、復権活動の末に撤回されるまでは彼女は魔女として扱われていた。今有名なのもナポレオンのプロパガンダ活動とかいろんな要素が絡んでいるからよ？」
そうなのか。ありがとうなカズヒ。
でも、それって答えになってない気が―
「それでね、それでも当時のフランスにとって大きな栄光を与えたのがジャンヌ・ダルク。それにあやかる形で「すわ神の子みたいに復活か!?」といった形で」
あ、そうなのかイリナ。
「……ちなみにジャンヌ・ド・ザルモワーズはその中でも筆頭格でね。かのジャンヌ・ダルクの実の兄からも認められ、崇拝する者達と謁見したとも言われているのさ」
まじなのゼノヴィア。
俺がそんな偽ジャンヌなクロードさんを見ると、クロードさんは苦笑していた。
「まあ、相応に裏はあります。というより……」
いうより？

「そもそも偽ジャンヌの半分以上は、天界の全面的サポートのもと、教会暗部が総力を挙げて行った作戦活動ですから」

『『『

骨格・髪質・声色が近いだけでなく、顔が酷似していた私を偽ジャンヌ筆頭格にするのが最適解だったからです」
整形してたのかクロードさん。
全然そんな風に見えないけど、すっげえな天の奇跡。
でもなんでそんなことを？
「……そしてここからが本題です。……そもそもこれだけの大規模作戦、それも仮にも天界と教会が大規模な欺瞞工作をすることを選んだのには訳があります」
……どんな理由があるんだろう。
特にイリナ達が息をのんでいる。
まあ、教会や天界の側なら、俺達よりもっと気になるよな。
「ことの発端は、百年戦争で埒外の事態が起きないよう動いていた、私が所属していた暗部部隊の隊長がある事実を突き止めたことです」
クロードさんは目を伏せながら、そう続ける。
「隊長の名はピエール・コーション。聖十字架神滅具である紫炎祭主の磔台（インシネレート・アンセム）と出会い、近接戦限定なら現代でも歴代聖十字架の担い手で随一と称される傑物であり、槍の形で具現化していたことから、聖槍の持ち主であった私の師でもありました」
「「「「「「「「「「「え!?」」」」」」」」」」」
教会関係者が軒並み声を上げているけど、そんなレベルなのか？
クロードさんは寂しげだけど、笑みでそれを受け止めてる。
「驚くのも無理はないでしょう。当時の暗部に詳しくない方で知っているのはごく一部ですから。……実際、ダーティジョブを行う都合上、切り捨てられる時が来てもいいようにわざと表向きには問題のある人物といて振舞ってましたから」
その言葉に、俺達は一斉にカズヒの方を振り返った。
その反応に、カズヒはなんというか困惑してる。めっちゃくちゃその反応が理解できない感じだった。
いや、でもさぁ。
「カズヒ姉さんと気が合いそうだな、その人」
「そうそう」

「いえ、むしろスタンスが真逆な気がするけど?」
俺が九成に頷くと、カズヒは思いっきり困惑していた。
いやでも、なぁ?
絶対会ったら気が合うって。たぶん、オカルト研究部の皆がそう思っている。
方向性は違うけど、暗部所属って意識が強いところがあるっていうかなんていうか。たぶん意気投合するし、違うにしてもお互いに認め合えると思う。
言った方がいいかなぁと思ったけど、そこでフロンズさんが咳払いをした。
ちなみにノアさんは戦術担当だからってことで、本格的な禍の団やロキと戦う為の戦術を練っている真っ最中だ。
「とりあえず話を進めていただきたい。……貴殿がジャンヌ・ダルクの偽物として知名度がある為フェイカーのサーヴァントとなったことは分かった。そして貴殿が暗部出身であったこともだ。……そこからが本題なのだろう?」
フロンズさんにクロードさんは頷いた。
「はい。そして師匠であるピエールが気づいたのは、ジャンヌ・ダルクが神滅具(ロンギヌス)保有者であることと、それが幽世(セフィロト・グラール)の聖杯であるということです」
「なるほどな。そういうことか」
アザゼル先生がそう言うけど、俺はさっぱり分かりません。
「先生! 具体的にどういうことなんでしょうか!?」
「ああ、幽世の聖杯ってのは神滅具の一つで、使いこなせば死者蘇生すら可能とする、魂と生命を司る神器。だが使い続けると精神が汚染される」
聖遺物なのに物騒だな!
俺がちょっと引いてると、アザゼル先生は痛まし気に目を伏せた。
「ある程度汚染すると聞こえてはいけない声が聞こえてくる。ジャンヌ・ダルクの逸話には聖書の神の声を聴いたという伝承がある……が」

そう言って先生がクロードさんに視線を向けると、クロードさんは静かに頷いた。
「はい。師匠が察した段階で既に汚染は深刻な域に到達。更に幽世の聖杯の影響で、彼女のシンパは多大な強化を受けていました。加え彼女達はフランス王家の制御が聞かないほど暴走し、騎士や貴族階級もその手法から敵意を抱く者が多くなっていました。当然イギリス王家も警戒し、当時のペンドラゴン家と接触を図ろうとしていたとか」
え、え、どういうこと？
「……アニルは知ってたか？」
「流石に内密な話までは分家にゃぁ。で、裏事情も微妙に分かってないんですが、和地先輩は分かってるんすか？」
後ろで九成とアニルが話し合ってるけど、どういうことだ？
俺が首を傾げてると、先生は息を吐いてから話し始める。
「……ジャンヌ・ダルクの快挙の多くは、夜襲の積極的多用など当時の戦争では忌避されていた手段の強行も大きな一因だ。それは確かに成果が出るからある程度は黙らせられるが、同時にそれで押さえつけられる形で不平不満も大きかった。まして英国も仏国も折り合いをつけようって時に強引な手段を選ぼうとすれば―」
「―既にジャンヌ・ダルクはどちらの国にとっても迷惑な存在になっていました。しかし声を主のものと混同する彼女は、フランスを制してイギリスの征服すら主眼に入れ始めており、このままでは多勢力の介入すらあり得るほどの危機。当時の教会も天界も、世界の秩序から見ても多くの民の人生から見ても見過ごせません」
引き継いだクロードさんはそう言うと、痛まし気に目を伏せる。
「……それを食い止める為、両国と示し合わせて師匠はジャンヌ・ダルクを私と共に捕縛しました。聖遺物の神滅具といえど同格が二つもあればなんとかなりましたし、万が一の復活再生で更なる加速が起きないよう、聖十字架の紫炎で焼き尽くしつつ、私も聖槍でそれを支援しました」
……れ、歴史の裏に隠された驚愕の真実だな。
聖書の神様の死もそうなだけど、俺達って上級悪魔でも若いと教え

られないようなトンデモ事実を教えられすぎじゃないか？
っていうか、サーヴァントについての話からこうなるってことは――
「……そのサーヴァントが、ジャンヌ・ダルクだってことね」
――南空さんがそう言うと、クロードさんは頷いた。
それを聞いて、何故か南空さんは目を伏せた。
「そう、別に私は信徒じゃないけど、それでも思うところがある話よね」
「ええ。偽ジャンヌ騒動の半分以上は、聖杯に振り回された彼女に対するせめてものわびと言ってもいいものです。その後の復権運動の流れも含めて、彼女の親族とも連携をとって行動しました。……師匠も自ら動き、あえて問題のある方法で火刑に処すといった手法をとったほどです」
「……高潔な人ね。まるでカズヒみたい」
南空さんはどこか辛そうだけど、なんか思い入れがある感じだな。
ジャンヌ・ダルクの伝記とかを楽しんでいるとかそんな感じか？
だけどまあ、これで答えは出てきたようなものだ。
クロード長官を強く敵視する、彼女とそっくりな顔をした女性。
それはつまり――
「――紫の炎を纏っているということは、おそらくクラスは復讐者（アヴェンジャー）でしょう。彼女はまず間違いなくジャンヌ・ダルク。私が聖槍で補佐をしたうえで、師匠が紫炎で焼き尽くした……被害者です」
――敵は正真正銘のジャンヌ・ダルク。
これは、もしかしてめちゃくちゃ大変なんじゃないか？

神威動乱編　第二十話　ＶＳロキ戦作戦会議！

和地Ｓｉｄｅ

俺達がちょっと沈黙していると、フロンズ氏が軽く咳払いをした。
「敵陣にジャンヌ・ダルクがいる。これが分かるのは十分すぎる情報ではある」
俺達の注目を集めながら、フロンズ氏は微笑みすら浮かべていた。
「良くも悪くも彼女は有名だ。そこに彼女と直接相対した過去を持つ者がいるのならば、保有スキルぐらいは想定可能だろう」
「それなら太鼓判を押せます。フェイカーとして召喚された私は、スキルでジャンヌ・ダルク（彼女）がサーヴァントとして保有できるスキルの再現が可能ですので、逆説的に保有スキルにおいては完全に網羅できるでしょう」
フェイカーのサーヴァントってちょっと凄いな。
となると、ジャンヌ・ダルク対策はある程度はできるということか。
だが他にも厄介な連中は数多い。
それを理解しているカズヒ姉さんは、ちらりと先生に視線を送る。
「……アザゼル先生。ミドガルズオルムに情報提供を求めたというけれど、その辺りはどうなっているのかしら？」
ミドガルズオルムっていうと、ロキがフェンリルと同様に生み出した、龍王の一角であるドラゴンだったな。
何か知っている可能性はあるけど、素直に教えてくれるのだろうか。
俺はちょっと気になっていたけど、先生はそのあたりを苦笑しながらも頷いていた。
「ああ。フェンリル対策になる情報も、切り札になりそうな武器の情報も教えてくれたよ」

「そういえば、ミョルニルがどうのとか言ってましたね」
俺はそこを思い出したけど、ミョルニルって雷神トールの武器だよな。
ロキと並ぶメジャーな神様だけど、武器をポンと貸してくれるのだろうか？　いや、レプリカとか言っていた気もするから行けるのか？
俺はちょっと首を傾げているけど、フロンズ氏は先生の方を見て頷いていた。
「では、大王派（我々）は基本戦力の底上げを図りましょう」
「……できるの？　現状でそこまでの戦力を用立てれるだけの余裕があるのかしら？」
リアス部長はそう聞くけど、フロンズ氏はすぐに頷いた。
「私とノアが連名で責任者となっている第一特務研究師団なら即座に動かせる。また、サイラオーグ・バアルを代表とした第四義勇師団や、シュウマ殿の長子であるハッシュ・バアルを代表とした第四義勇師団や、シュウマ・バアル領の第二遊撃師団も動かせるだろう」
……凄いこと言ってないか、こいつ。
先生やリアス部長も軽く遠い目をしている。
「何時の間にそれだけの戦力を集めたのかしらね」
「ま、いう前から下地は整えてたってことか。政治家としちゃ手回しは必要だな」
そんな評価に、フロンズ氏はどこか嬉しそうな表情だった。
「誉め言葉にしかなりませんな。……まぁ、そういうわけですので戦力は及第点規模を用意できるかと」
なんていうか、ちょっと怖いぐらいだ。
「……そういえば、サイラオーグ氏ってそちらのノア氏に負けて色々と大変だったらしいけど……よくそんな立場につけられたな」
師団規模の軍事組織を一つ任されるとか、出世ではなかろうか？
俺はそんな関心をするけど、何故か先生はため息をついた。
あれ、俺何か間違えたか？
「どうしましたの、先生？」
「いや、大王派の連中は色々とえげつないことを企んでるんじゃねえ

かって思ってなぁ」
……確かに。言われてみるとそういう印象があふれてるな。
フロンズ氏もちょっとため息をつきたい表情だった。
「ええ。どうも上層部の一部の面倒な側は、彼を失脚させるか戦死させるかのどちらかが狙いなようでしてね。第四義勇師団は何故か教育担当がずさんな仕事をしていたようなのです」
……本当にえげつない。
つまり必要な技術を叩き込まずに危険な場所に派遣しようってか？　それで足を引っ張られて死ぬなり、足を引っ張られた結果更迭されるようなヘマを売ってくれと。
大人の足の引っ張り合いって、本当にどうしようもないな。
「……またろくでもない」
俺が思わず呟くと、何故かフロンズ氏が頷いた。
「同意見だ。その恨み辛みに妬み嫉みを利用したこちら側の言うことではないが、必要不可欠な事業で余計なマイナス要素を加えないでほしいものだ。サイラオーグ・バアルという戦力や折角増えた冥界の新しき命を投げ捨ててどうするのやら」
「そちらも苦労しているのね」
リアス部長はそんな同情の視線を向けると、フロンズ氏は苦笑しながら肩をすくめた。
「まあ安心したまえ。こちらの伝手で教導官は派遣しているし、武装についても余計な仕込みが入らないように査察を入れている。後詰や露払いは余裕で可能と言っておこう」
なら、大丈夫か？
「あと、こちらとしても味方の強化は必要不可欠だと考えている。なのでもしこちらの技術で欲すものがあるのならば今のうちに言ってくれたまえ。派閥や勢力が違うとはいえ、足の引っ張り合いになるような出し惜しみなどはしないと約束しよう」
更に凄い大盤振る舞いだ。
……言うだけ言ってみるか？
俺がそんなことを考えていると、俺達の中から一歩前に出る奴が何

人かいた。
「んじゃぁ、俺はお願いしちゃってもらいましょうか」
「……そうですね。少し真剣にお願いします」
「あ～。じゃあちょっと私も頼もうかな？　っていうかヒマリも参加しなさいな」
とまあ、アニルにルーシアにヒツギの三人。
……ってちょっと待て。
「なんでヒマリまでなんだ？」
「そっちでいいのか!?」
イッセーには全力で突っ込まれるけど、俺としては特にいうことはそれぐらいだしなぁ。
「……確かに俺達はオカルト研究部という繋がりはあるけど、個人の自由意思はあるし厳密には別のチームだ。なら了承をとるべきは俺じゃなくてイリナだしな」
俺がそれとなくイリナに話を振ると、イリナもちょっと戸惑っている感じだけどすぐに我に返った。
「う～ん、一応理由を聞いてもいいかしら？」
まあ、イリナも素直だから理由さえ納得すれば問題ないだろうとは思う。
と言っても、便宜上教会関係者はイリナの部下というか使いで、イリナはなりたてとはいえ天使だ。その辺りの許可は必須だろう。
そしてルーシアはその辺りがかなりできているのか、静かに頷いた。
「単刀直入に言えば戦力増強です。私とアニル君は他の方々に比べると異能の面で一歩劣りますので、強化できるチャンスは逃したくないんです」
「あとまあ、ロキとの戦いでは同時に禍の団とも遣り合いますからね。……アーサー・ペンドラゴンと相手するときは、やっぱり俺も戦えるようにはして置かねえとって感じでさぁ」
年少組がそう言うと、ヒツギもうんうんと頷いてた。
「後輩がしっかりしてて何よりじゃん」

「そういうヒツギは、なんで私込みですの？」
当然のヒマリの質問に、ヒツギは苦笑でそれを返す。
「いや、私らって何故か星辰光が発現してないでしょ？　今後も考えるとその辺りのアプローチもしとかないとって思ったから、いい機会だし大王派流ってのを試そうかと思ったって感じかな」
なるほどなるほど。
「もちろんこちらは構わない。派閥の争いを放棄するつもりはないが、それらは冥界や和平を結んだ勢力の未来あってのことなのだから」
フロンズ氏はそんな感じだが、さて、イリナ達はどう応えるのか？
「ん～。大王派の人達とも仲良くなれるに越したことはないし、私はいいと思うわ。リアス先輩は？」
「そうね。私としてはもっと鍛錬を積んで成長してほしいけれど、イリナさんがいいというなら文句はないわ」
となると、決定か。
「なに、気になるのならばぜひ人員を派遣してくれたまえ。技術交流も兼ねて色々と試すとするさ」
ああ、そしてここからが大変なんだから……な。

そんなこんなで本格的な会議は後程担ったところで、俺は会いたい人がいるからそっちに向かうことにした。
……できればカズヒ姉さんとも話したかったんだけど、あっちはあっちで何か試してみたいことがあるらしく、リーネスや鶴羽と一緒にリーネス用の魔術工房に向かってしまった。
だからまあ、俺は行くべき人がいるのでそっちに行くことにしてるわけだ。
兵藤邸のある一室で、会議とは別の形で話をしている三人のところに俺は向かった。

「……失礼します」
ドアをノックしてから、俺は部屋の中に入る。
そこにいるのは三人の、神の領域に文字通り到達している存在。
そのうちの一人に、俺は真っ直ぐ視線を向けた。
「……リヴァ先生。その、今いいか？」
「……別にいいよ。話も今まとまってるしね」
リヴァ先生、とりあえず様子はあまり変わってないな。
……でも、きっと心中は複雑なんだろう。

神威動乱編　第二十一話　神に告げる誓い

和地Ｓｉｄｅ

「で、何してたんですか？」
場所を変えて俺が聞くと、リヴァ先生は一枚の地図を示した。
「大王派が提供してくれた、対ロキ専用の決戦場にできる島の仕込みをしてたの。本当なら採石場後を神の子を見張る者が手配してくれる予定だったけれど、こっちは地図にも載ってないから消滅しても後始末が楽だからね」
なるほど。そんなことをしていたのか。
「で、そこの準備をしてたってわけか。……大丈夫なのか？」
ちょっとその辺が心配なんで、俺は真剣に踏み込んだ。
ロキが提供した神具アスガルドライバー。その使用者になんでリヴァ先生が選ばれたのかはよく分からないけど、そのドライバーそのものも仕込みは入れられていたことだろう。
そういう意味でも、リヴァ先生が色々と思うところがありそうで懸念があった。
リヴァ先生もそこは既に気づいてるらしい。苦笑して、方もすくめた。
「アスガルドライバーは神の子を見張る者で検査中。バックドアや何かしらのウイルス的なものが入ってるかもしれないからね」
「……身体検査とかは？　変な呪いとかが仕込まれてる可能性とかあるし」
そっちも気になるし不安だから聞くと、リヴァ先生はちょっと自信ありげな笑みを浮かべた。
「そっちは大丈夫。もう受けてるし問題なしだからね」
それは安心。

まあ、アザゼル先生ならその辺は抜け目ないか。変な仕込みとかがないように可能な限りの検査は受けさせるだろう。北欧の主神の子供ということなら、どさくさに紛れて変なことをしたりすることもないはずだ。はずだろう。はずだと思いたい。

……いや、しかしまぁ、なんだろうな。

「再会した恩ある人と、こんな大事に巻き込まれるとか……運命ってのがあるのなら俺にどんな恨みがあるんだよ」

再会するなら再会するで、もうちょっとなんかないのかよ。

とりあえず心配事が消えてくれたこともあってか、なんかそんな気分になってしまった。

いや、本当に運命に文句を言いたい。ディオドラの糞の所為で大事になったインガ姉ちゃんの件や、現在進行形で悩みの種ともいえるヴィールの眷属になってる春っちの件もそうだ。カズヒ姉さんに対する思いもそうだけど、俺って縁ある女の人関連でめちゃくちゃ苦労してないか？

……運命を司る存在が俺に介入してるなら、本気でぶん殴りたい。もしそうでないなら、俺のこの天運に絶望しそうだ。

「あはは……。まあ、運命を司る神様もいるけれど、そうでなくても天運ってあるからねぇ」

ちょっと苦笑いしないでくれよ、リヴァ先生。

「まあ、先生も割と運命に愛されてるというか目をつけられてはいるよなぁ」

「まあ、それはそうかな」

即答したよ。

俺がちょっと面食らっていると、リヴァ先生は少し遠くを見つめていた。

「ちょうどいいかな。……うん、聞いて欲しいことがあったんだ」

な、なんだ？

「……というと？」

「私の身の上話。あまり人に広めたいわけじゃないけどさ、君には聞いていてほしかったから……ね」

俺は少しだけ深呼吸すると、意識を切り開ける。
これはアレだ。真面目に向き合うべき問題の類だろう。
よく分からないが、よく分からないからこそ真剣に聞くべきだ。
俺のその切り替えを感じ取ったのか、リヴァ先生は表情を柔らかくした。
「と言っても、まあロキ様のこととはあまり関係ないんだよね。……私が君に会った時、私は半世紀以上続けてた家出の真っ最中だったんだ」
……また、スケールの大きな家出だな。
だけどまあ、そこは茶化さない。
静かに無言で、頷きで促した。
それに頷いて、リヴァ先生は話を続け出す。
「薄々気づいてると思うけどさ、お爺様って女癖が悪いところがあって、私は第一次世界大戦前に、北欧人女性との間にできた子供。でもそんな時期だったから、お爺様と母さんがそういう関係になってから妊娠が発覚する前に離れ離れになっててさ？　私も母さんもそんな事情は知らなかった」
第二次世界大戦……か。
「授業で学んだことぐらいだけど、やっぱり……悲惨だったのか」
下手に分かるとは言わない方がいいと思い、俺はそんな風に聞くしかなかった。
先生もそこは分かってくれているのか、深く反応せず、少し下に視線を向けただけだった。
「私って物心ついた時からドイツ育ちだから結構大変だったよ。半分神様だから若いままで、お母さんは色々あって早死にしたけど、それを差し引いても私は若いままだったし。第二次世界大戦後辺りに拾われたんだけど……それがよくなかったのかなぁ」
そう言うと、リヴァ先生は苦笑した。
「お爺様達は良くしてくれた。少なくとも泥棒猫の娘扱いはされてないし、ヴィーザル兄さん達も気が良い人が多いし。……ただ、私はその頃やっぱり未熟だったんだ」

あ～……。
人間やっぱり、若い時は未熟だよな。そして俺はリヴァ先生より若いから、ここは突っつけない。
「流れ着いた上に親を失ったくせして、なんだかんだで要領がよかったのか、売春（体を売る）することがなかったからかな。ちょうど反抗期になる感じの時期だったこともあったし、自分が半分人間じゃないとかショックだったり、神様なのにそんな人間の悲劇に何もしてくれないのかとか僻んでたこともあってねぇ。数年ぐらいしてから家出して……日本で講師してたのも路銀稼ぎ」
「……いろんな意味で難儀で大変な話だけど、それを俺に話した理由がよく分からないな」
本当に分からないな。
俺に話す理由があったのか？　昔あったことがあるから愚痴を言っただけだったりするのか？
それならまあ、別にいいというかなんというか。でもそういうことだけじゃないと思う。
だから視線で促していると、リヴァ先生は目を伏せた。
「……覚えてないよね。いや、覚えてる方が凄いってのは分かるけどね」
その言葉に、俺は少し思い出してみる。
何かしら、この流れの話に関与できそうな会話をした経験がないかを思い返す。
なんだかんだで記憶力はある方だし、実は人間は思い出せないだけで強大な記憶力を持っているともいう。なら思い出せるのかも。
思い出せ思い出せ思い出せ……うん。
「割と刺激的な会話をよくしてたから、別の意味で思い出せない」
「酷いなぁ」
いやだって、普通外国人に日本の法律を教えてもらうとかないだろ。
いろんな意味でインパクトが強いから、逆に心当たりを探すのもあれなんだよ。

本当に役立ったことも多いけど、今思い返しても小学生以下の子供に教える内容じゃない。外国語の講座をしっかりしたうえでアレだからなぁ。
なんでちょっと空気がグダったけど、リヴァ先生は記憶を眺めるような表情を浮かべて、俺を見た。
「ちょっと前の話したと思うけど、覚えてる？　カズ君の何気ない一言があったって辺り」
……ああ。
俺を巻き込んでインガ姉ちゃんや鶴羽と女子会した流れだったな。
インガ姉ちゃんはもちろんのこと、鶴羽に恋愛感情を向けられるのは嬉しい。リヴァ先生だって綺麗だし恩師だしで、嫌なわけがない。
ただまあ、鶴羽が撃墜されてそのままになってたな。
「アースガルズに戻る気になったって話だよな？　あれ、どういうことなんだ？」
小学生になってもいないような子供の言葉で、そんな半世紀以上に亘る家出を止める気になったって、そうそうないことだと思うんだけど。
それが理由で俺を男として見ることになったのなら、まあ知る権利ぐらいはあると思う。
まして相応に命がけになる以上、俺やリヴァ先生が死ぬ可能性は十分あるんだ。その辺りも尚更になるだろうしな。
リヴァ先生もそれは分かってるのか、苦笑しながらも俺を見つめてくれる。
「覚えてるかな。小さい頃たまたま見たドラマの話で、親子喧嘩について話題になったの」
「……ああ、そういえばそんなこともあったなぁ」
確かにあった。たまたま両親がドラマを見ている時に、やけに記憶に残ってたから、つい出てきたんだ。
俺はまあ、そこまでの親子喧嘩や喧嘩の果てに家出までしたことが結局なかったし、子供の頃だったからそういったことを察したりするのもまだまだできてなかったしな。

今にして思えば、知らぬとはいえそれをリヴァ先生に聞くとか中々にえげつないな。
「……なんかごめん」
「ふふっ。いいっていいって」
そんな風に笑ってすましてくれるのはちょっとありがたい。
と言っても、なんでその時の会話がリヴァ先生の家で終了に繋がったのかが分からない……あ。
そうだ、思い出した。
リヴァ先生は今にして思えば当然だが、常時苦笑い気味で色々と教えてくれたりしたものだ。むしろ俺の方が少数派で、子供は未熟で親も親として未熟だから、そういうことが意外とあるのだと教えてくれた。
そういったことを聞いて、俺は最後にこんな感じでまとめたんだ。
「……つまり子供って、未熟で怒られるのも権利なんだな。そう言ったっけな」
俺は一字一句間違わずに、かつて言った言葉をなぞった。
それを聞いて、リヴァ先生は満足そうな表情だった。
「思えばあの言葉で、漸く私は自分だって未熟だったって、納得できたんだよなぁ」
上を見上げながらそう感慨深げに言うと、リヴァ先生は更に続ける。
「その後、気合を入れて何とかアースガルズに戻ってから、いろんなところに頭を下げてから、漸く私は自分の人生を始められた気がするんだ。……そしてもちろん、自分が半世紀以上もいろんなところを放浪していたことだって、空回りだったけど無意味になったわけじゃないとも思えた」
そう懐かしみながら告げ、リヴァ先生は俺の方をはにかみながら振り返った。
「それに気づかせてくれた君が、もし再会した時そんな君のままだったら」
そっと俺の方に手を触れて、ほんのり頬を染めながら、リヴァ先生

は俺に顔を近づける。
え、これはアレか、キスですか!?
ど、どどどどうする!? カズヒ姉さんの前提条件とインガ姉ちゃんを引っ張り上げた手前、俺の方から引きはがすのはあれだよな!?
俺がめちゃくちゃどぎまぎしてると、リヴァ先生はかなり顔を近づけて―
「……その時は、君を私の英雄（エインヘリヤル）に誘いたかった」
―そんな、八割告白と言っても良い事を言い切った。
俺が同返答したらいいか戸惑っていると、リヴァ先生は微笑みを苦笑に変えながら顔を話す。
か、からかわれた……わけじゃなさそうだ。
急展開の連発に戸惑ってしまい、俺はどうしたらいいのかちょっと分かってない。
「……まぁ、今は大好きな人もいるみたいだし、同時に背負う覚悟の女の子もいるみたいだからね。ちょっとそれは無理かなぁとは思ってるよ？」
そう茶化すように言ってから、リヴァ先生は立ち上がる。
話は終わりといった感じで少し歩いてから、リヴァ先生は顔だけこっちに振り替える。
「でもまぁ、だったら私が嫁入りするっていうのは……意外といける？」
……俺はどう受け取ったらいいんだ。
冗談なのか本気なのか判別がつかないけど、とりあえず言うことは決まっている。
「もしリヴァ先生が主神の娘（自分の立場を）だとわかったうえでそうするっていうなら、俺は真剣に考えるさ」
ああ、そこに関しては断言してもいい。
リヴァ先生は目を丸くしていたけど、さっきの言葉が本気だろうと冗談だろうとこの返答は問題ない。
断るにしても受け入れるにしても、そこから生まれる揉め事にも向き合う覚悟で応えよう。

本気に対しては本気で応える。春っちを助ける力になり、文字通り俺や仲間の命を命がけで助けようとしてくれたリヴァ先生に、そんないい加減な態度はとらない。
だから、これだけは言っておこう。
「もしリヴァ先生が嘆きの涙を流す時、俺がいるなら呼んでくれ」
俺の決意は、貴女と出会う前からあって、そして今も変わっていない。
「その涙の意味を変えて見せる。少なくともその為に尽力する」
瞼の裏の笑顔に対して、恥じる真似だけは死んでもしない。
「一緒に笑えるようにする為に、俺は全力で向き合うさ」
だから、これは間違いなく本音だ。
できることなら、本音で返してほしいんだけど―
「うん。私の眼は曇ってなかった」
―そう、振り返りながらリヴァ先生は呟いた。
そして今度こそ歩き出しながら―
「その時は、期待してるよ、カズくん」
―その言葉を、俺は了承と受け取った。

神威動乱編　第二十二話　Ｂを捨てた女

和地Ｓｉｄｅ

その数日後、俺達は兵藤邸の地下で会議を行うことになった。
流石にヴァーリチームはもういないが、逆に大王派からフロンズ氏やノア氏の指揮かで動く部隊の小隊長などが来ている為、ちょっと手狭になっている。
まあそれはそれとして、だ。
俺達が作戦の概要を説明するアザゼル先生に注目すると、先生はめんどくさそうに頭を掻きながら一つの豪華なトンカチを見せた。お
「ミドガルズオルムの情報提供で、素直にオーディンの爺さんがこいつを貸し出してくれた。……おそらくこの戦いの切り札になるだろう、ミョルニルのレプリカだ」
「なんと……」
「レプリカであるとはいえ、ミョルニルを貸与するとは……」
「……壮絶な戦いになるということか」
大王派からの隊長格が面食らっているが、まあ気持ちは分かる。
……なにせ北欧が誇る戦神、雷神トールの得物だからな。
レプリカとはいえ性能は想像を絶するだろう。たぶんだけど、下手な神滅具の禁手並みには強力なはずだ。
「一つ伺いたいのですが、使用者は誰になるのでしょうか？　順当にいけば、オーディン様のご息女たるリヴァ殿に扱わせたいというのがアースガルズの本音と思いますが」
「いや、ここは素直に最強戦力かつ更なる威力向上が図れる奴に任せる。……つまりイッセーだな」
フロンズ氏の質問に先生は即答。
まあ、赤龍帝の籠手を禁手に至らせたうえ、その補佐に特化した亜

種禁手の神滅具保有者をサーヴァントに持ってるわけだしな。そもそも神滅具の特性上、更なる強化を行えるともなれば文句のつけようがない。
俺達は素直に納得しているが、イッセーだけがちょっと戸惑っていた。
「え、お、俺が!? でも先生、このトンカチっぽいのはどう考えても戦闘向きの装備に見えないんだけど?」
うんまあ、確かに一見するとその通りなんだけどな?
「その心配はないわぁ。それがミョルニルのレプリカなら、大きくすることもできるでしょうからぁ」
リーネスが言う通りだろうな。
ミョルニルってどこかの如意棒みたく、小さい状態から大きくできるらしいし。
「大丈夫だよ、ほれ、手に持ってオーラを流し込んでみろ」
「は、はい……うおっと!?」
ほら、先生の指示通りにしたイッセーの手で、バトルハンマーでももっと小さいぐらいになったし。
……別の意味で戦闘向きじゃないけどな。まあ、異形の超常ステータスならあれでも十分使い道はあるけど。
とはいえかなり重くなってるようだな。伝承ではでかい状態でも羽のように軽いと言われていたけど、その辺はレプリカゆえの限界ってことか?
「禁手なら振るえるとは思いますけど、かなり重いですね」
「一応言うが、本番までは預かるからな? 下手に振るったら、お前が譲渡しなくても駒王町(この辺)が吹き飛びかねんしよ」
そんな感じでイッセーに説明を終えると、続いて先生は地図を出して島を指さす。
「戦場はフロンズが大王派から用意してもらったこの無人島だ。本当ならこっちで用意できる石切り場にする予定だったが、こっちの方が何が起きても情報を人間界に秘匿しやすいし、それ以外にも有利な面がある。……その説明込みで、この戦いにおけるイッセー以外のキー

パーソンを紹介する」
ふむふむ。
俺達が興味深そうにしていると、ぞろぞろと出てきたメンツにちょっと面食らった。
クロード長官が連れてきていた二人がいるのはいい。リヴァ先生がいるのはちょっと面食らった。
ただし、最後の一人に見覚えがあるけど、まさかこのタイミングでって感じだった。
「……あ、マルガレーテさんじゃないですか！」
「ま、マルガレーテ……えっと、その―」
イッセーとリアス部長が声を上げるけど、確かあの二人は面識があったな。
まあ驚くのも無理はないだろう。後で俺も話を聞いただけだけど、マルガレーテって人はなんとベルゼブブの末裔らしい。
そのあたりフランクよりなイッセーはともかく、リアス部長は仮にも元七十二柱の次期頭首だから、気にするのは当然か。
「……その、ベルゼバブ様とお呼びした方が―」
「―やめて」
部長がちょっとへりくだろうとした時、マルガレーテは強い口調で遮った。
「悪いけど、私はもうベルゼバブじゃないです。それに今の立場なら私があなたにへりくだるべきですから」
「……どういうこと？　クロード長官は何か知っているのかしら？」
けげんな表情で部長がクロード長官に話を振ると、クロード長官は少し咳払いをしてから頭を下げた。
「……ドタバタしていて説明が遅れたことを謝罪します。マルガレーテは現在、和平もあってある引き抜きに応じて転生悪魔となっています」
……どういうことだ？
俺が首を傾げていると、また軽い咳払いが聞こえた。
見ると、ノア氏が苦笑交じりで肩をすくめていた。

「……今の彼女は俺の眷属だ。そして眷属になる条件として「魔王血族として扱わない」ってことなんで、俺達は有能な一下級悪魔としてのみ扱うからその辺はよろしくな」
いや、どういうことなんだよ。

イッセーＳｉｄｅ

え、えぇえぇえぇえぇ!?
いろんな意味でどういうことなんだ、それ!?
「いや、ベルゼブブの血を継いでるんでしょ!? そんな扱いでいいんですか!?」
俺は思わずマルガレーテさんにそう言うけど、なんていうか睨まれた。
すっごい不機嫌そうなんだけど、俺って何か悪いことを言った？
「やめてくれない？ プルガトリオ機関を抜けた以上、私は魔王なんてものにならないの」
「ごめんなさい！ でもさっぱり分からないから説明をしてほしいです！」
謝るけどそこは聞きたい。いやマジで。
そんな俺を見て、クロードさんはすまなそうにしていた。
「申し訳ありません。彼女は元々人間として生まれましたが、特殊な事情で魔王ベルゼブブの血を覚醒させていた少女だったんです。教会が保護した際、その来歴ゆえにプルガトリオ機関で保護することになりまして、和平を推し進める際に象徴になりえるということでミカエル様の護衛という形であの場に連れて行ったのですが―」

「――その際の各種交流で「魔王の血を引く悪魔」みたいに扱われることを嫌がってるとフロンズが見抜いて引き抜きをかけてな？　「人間から転生した転生悪魔」という扱いにすることを引き抜きの条件に提示してたんだよ。……で、旧魔王派が色々やってくれたことで大王派（俺達）もそれを可能にできると踏んだから、改めて正式に引き抜きが完了したわけさ」

と、ノアさんが引き継いだけど……まじで？

「え～。めっちゃくちゃ貢がれそうだし、イケメンも囲い放題ですよね？　何が嫌なんですか？」

俺からするとかなり羨ましい。

だって四大魔王の末裔とか、いろんな人がほっとかないだろ？

顔もいいし能力もあるし、そこに魔王の血まであったら、イケメンの悪魔を集め放題じゃん。むしろ最初から上級悪魔になるぐらいでいいじゃん。

もったいないな～

俺は素直にそう思うけど、顔に出てたのかすっごい嫌そうな顔だった。

「魔王の血（あんなもの）を羨まないで。……私は人間から生まれた悪魔じゃない。悪魔に転生した元人間。漸くマシになれたのに、魔王血族なんて勘弁してほしいわ」

す、すっごい嫌そうだった。

なんだろうな。魔王と人間が混ざってるっていうのだと、俺が真っ先に思い浮かぶのはヴァーリだ。

めちゃくちゃ誇らしげにしてたよなぁ。旧魔王派の連中だって、魔王の血を引いてることををすっごい誇らしげに振舞ってた気がするし。

なのに、マルガレーテさんはとてもとても嫌そうだった。

お金もイケメンも権力も手に入りそうなのに、そんなに嫌か？

ちょっと信じられないものを見てしまった気分だけど、マルガレーテさんはうんざりそうにため息をついた。

「そもそも上級悪魔だって嫌だし。私は下級どまりでい続けて仕事を

するから、その分ゆっくりできる時間をくださいね、マスター？」
「オーケオーケー。給料分の仕事をしてくれれば、非常時以外はそれ以上の無茶は命令しないから安心しな。俺達としても、他種族を上級以上にする気は基本無いんでな」
ノアさんにそう言われると、マルガレーテさんはどこかほっとした感じだった。
な、何が何やら。
俺達が困惑してると、アザゼル先生がゴホンと咳払いをした。
「話を戻すぞ。とりあえず注目されたマルガレーテだが、こいつはロキに対する戦闘補助と、ヴァーリがこっち側に意識を向けさせない為の担当だ」
というと？
「どういうことだ？　ヴァーリ・ルシファーの本命はロキとフェンリルでは？」
「だが仕掛ける時はこっちも巻き込む気だからな。乱戦にならないようにする為にも保険は必要だ」
ゼノヴィアにそう言うと、先生はため息をついた。
「ぶっちゃけこの戦い、戦闘狂（バトルジャンキー）にとって餌だらけだからな。だからヴァーリが俺達の側に意識を向けた時は、見ての通りあいつの真逆な考え方のこいつをぶつけるって算段だ。……大王派としちゃヴァーリには死んでほしいところだから、真逆のマルガレーテ（こいつ）に殺させることで魔王血族の息の根を止めたいってところか？」
「できれば……ではありますがね」
フロンズさんも隠さず頷いたよ。
っていうか、マルガレーテさんはそれでいいのか？
「……そちらさんはそれでいいんですかい？」
「ええ。私もヴァーリ・ルシファーは嫌いだもの。はっきり言って殺しておかないと、またベルゼブブを名乗らなきゃいけなくなりそうだし」
アニルにそう答えながら、マルガレーテさんは目が座っている状態でそう言った。

うわぁ。めっちゃくちゃヴァーリのこと嫌ってるよ。
フロンズさんやノアさんも苦笑い気味だし、そこまで嫌いなのか。
いや、まあテロリストだし当然だけど。
下手に突っついたらいけないよな―
「質問！　そんなに嫌いな理由は何ですの？」
―ヒマリがぶっこんだぁあああ!?

神威動乱編　第二十三話　総力、集めます！

イッセーＳｉｄｅ

ヒマリの爆弾発言ならぬ爆弾質問に、すぐに動いたのは二人だった。

「ヒマリ、メッ!!」

咄嗟に九成とヒツギがツッコミを入れたけど、容赦なくぶっこんだよ、ヒマリのやつ!?

っていうか九成はともかくヒツギの反応早いな！　本当に短い間で仲良くなってやがる。

「なんかごめんなさい！　ヒマリはちょっとその……空気が読めないんです！」

「良くも悪くも無邪気なんです！　悪気はないんです！　情状酌量を！」

「い、痛いですの!?」

速攻で九成とヒツギが頭を下げさせながら自分達も頭を下げる。

ちなみにリーネスはカズヒや南空さんと一緒に「元プルガトリオ機関つながりでとりなして……」だの「菓子折りは何にすれば……」「弁護士に心当たりは……」だのやってる。

咄嗟にに速攻の謝罪を二人に任せてフォローの準備をしているあの連携っぷりに、近くの人たちはちょっと引いてた。

あと阿吽の呼吸でツーカー過ぎる。どんだけお互いを理解して行動できるの？

いやでもマジでやばくね？　あの目のすわりぐらいだと、変に突っついたらまじ切れとかなりそうなやつじゃね？

くそったれ！　こうなれば女子にボコられなれてる俺が誘導するしかねえ!?

「で、でもまあヴァーリの奴には俺もむかついてるかな！　あいつもだけど平和な毎日が送りたいのに強敵がいっぱい来るんだからな、ホント！」
いやそこは本音だけどね！
実際、俺は可愛い女の子とハーレムを作って平和に暮らせるならそれが一番なんだ。命がけの殺し合いとかテロリストとの戦いなんて勘弁してほしい。
なのに宿命のライバルとかいるのがまず大変なのに、更にそいつが魔王の末裔とかいう始末。「現在過去未来全てにおいて最強の白龍皇になる男」とか、ちょっと勘弁してくれませんか！
そういう意味じゃあ、イラつく気持ちも分かるけど……。
「いや、そういうことじゃないから」
あら、全然違う。
なんか呆れてる感じの目で見られてるし、俺とは全く違う理由なのか。
「……そろそろいいか？　とりあえず戦力についてまとめておきたいんだが」
先生がそう話を切り替えると、まずフロンズさんが咳払いをした。
「我々大王派からは、私とノアが管轄している第一特務研究師団がオフェンス。更にサイラオーグ殿を頭目とする第四義勇師団に、シュウマ殿……厳密にはシュウマ・バアル領の第二遊撃師団が投入されます。最も、第四義勇師団と第二遊撃師団は後詰になりますが」
「指揮系統の混乱を避ける為の方策ってやつでしてね。その辺に関しちゃ申し訳ないです」
ノアさんが補足するけど、前に言ってた師団は本当に全部投入なのか。
またすっごい数が来るんだなぁ。
っていうかサイラオーグさんは後詰なのか。まあ、指揮系統って大切らしいから仕方ないのか？
でもって、フロンズさんは更に不敵な笑みを浮かべていた。

「もちろんそれだけでは足りないでしょう。もしプログライズキー関連技術が欲しいのなら、今のうちに要望をお願いしたい。何分調達に若干の時間もかかりますからね」
「いいのかしら？　大王派の上役は魔王派（私達）に塩をあまり送りたくないと思うのだけれど」
リアス部長がそう言うと、フロンズさんは肩をすくめた。
「ここで戦力を無駄に出し惜しみして多大な被害を出すよりは、私が多少叱責される代わりに和平側の勢力全てが得する方がいいだろう。北欧神話や日本神話にも恩を売れるだろうし、大王派に利益をきちんと入れられるのなら何とかなるだろうさ」
……なんていうか、フロンズさん達も大変だな。
でも変な出し惜しみはしないんだ。そういう意味なら、足を引っ張らないしいいのかな？
でも、それだけで足りるのか？
切り札としてミョルニルのレプリカはある。戦力もフロンズさん達がごっそり増やしてくれた。
でも、あのフェンリルと仮面ライダーヴァナルガンドはかなりやばい。
このままだと流石に死人が出るかもしれないしなぁ。
俺が不安になっていると、その時カズヒが手を挙げた。
視線がカズヒに一斉に集まるけど、カズヒは澄ました表情だ。あと何故かリーネスも隣にいる。
「……その件なんですが、時間的に戦闘開始までにちょっと遅れることを許してくれるのなら、切り札を一つ増やすことが可能だわ」
「カズヒ専用に開発していたプログライズキーが完成しそうなのぉ。あれが完成すれば、ロキの方はかなり有利になるはずよぉ」
お、まじか！
そんな凄い物を用意してるとか、ちょっと頼もしいけど恐ろしいぞ！
「何時の間にそんなもの用意してたんだよ、リーネス」
九成はちょっと引いてるけど、まあ付き合いが長いのに教えられて

ないなら仕方ないか。
　でもなんでだろ。カズヒ関連なら、ちょっとぐらい九成に言ってもいいと思うけど。
「……研究の一環と今後の展開を考慮した、「和平に反対して馬鹿なことをする神が出てきた用」だったからねぇ。場合によっては問題行動になりそうだから、こっそり進めてたのよぉ」
　うん、確かに色々言われそうではあるかも。
　神々との和平まで進めているのに、対神用の兵器開発をしてたら邪推されるよな。アザゼル先生やサーゼクス様達が認めてたら、絶対うるさい奴が出てくるよ。
　でもドンピシャな事態になってるし、なんていうか苦笑いしちゃうよなぁ。
「……ただぁ、推定される作戦開示時刻にはちょっと間に合わないんですよねぇ。……早くても四十分ほど遅れます」
　……四十分か。
　フロンズさん達はちょっと考え込んでるけど、答えは決まってる。
「ＯＫ任せた。それまでは死ぬ気で何とかする」
　あ、九成に先に言われた。
　フロンズさん達やクロードさん達はちょっと面食らってるけど、俺達はまあ同意見だ。
「貴女達が言うなら、確かに成果のある切り札だと確信が持てるわ。私の責任で許可できるだけの価値はある」
　部長が微笑みながらそう言うけど、実際そうなわけだ。
　カズヒもリーネスも俺達の仲間だ。それも一生懸命頑張っているし、成果も挙げてる頼れる仲間だ。
　そんな仲間が、切り札を一つ用意できるって言ったんだ。
　ならやることは決まってるぜ！
　俺も拳を握り締めて、笑顔で二人に言ってやる。
「こっちは任せろ！　何があったって、そこまで持ち堪えてやるさ！」
　ああ、それが仲間ってもんだ！
「……ロキ陣営だけでなく禍（カオス・ブリゲート）の団の動きや戦力も不明瞭なのだが

ね」
「まあいいだろ。こっちが送り込む人数的に、二人ぐらい出遅れても大した誤差はねえよ」
「……あまりロジカルに切り捨ててあげないでください。カズヒがあえてそこまで言うなら、相応に自身がある切り札ということでしょうから」
後ろの人達の冷めた意見が悲しい。
フロンズさんとノアさんはともかく、クロードさんは自分の部下だったカズヒにもっと期待してください！
「……まあ、そっちの助っ人もいるなら何とかなるだろうがな。そうなんだろ、お二人さん？」
アザゼル先生はそう言いながら、クロードさんのお付きの人達ににやりと笑った。
あ、そういえばそちらの二人っていったい誰なんだ？
男の人の方をロキは八百万って言っていた。神様のロキが八百万って言うと、日本の神様を思い浮かべちまう。女の人のオケアニスってのも、なんか気になるし。
俺は紹介してもらいたかったからカズヒをちらりと見ると、ちょっと遠い目をして苦笑した。
「……仮にも一応日本とギリシャの神を連れてくる辺り、プルガトリオ機関としても和平に対して強い意識があると痛感する話ですね」
「やっぱり神様なのかよ!?」
そんな予感してたけど、それでも大声をあげたくなるって。
まじで神様!?　神様が教会の暗部に所属してるの!?
「……エクストラ部隊っていう異教の神仏が所属する部隊があるとは聞いてたけどさぁ。マジでいるところを見るとちょっとビビるな、やっぱ」
九成は知ってたのかよ!?
「え、神様？　まじで神様なのか!?」
「……えと、ヤオヨロズって日本の神様の集団名だっけ？　あとオケアニスって……ギリシャだっけ？」

匙やヒツギが驚いたり首を傾げたりしていると、クロードさんが苦笑した。
「はい。男の方はかつて八百万の神々として日本の山村で信仰されていた源玄隆（みなもとのげんりゅう）。女性はオリュンポスと敵対していたティターン神族に三千人存在するオーケアニスという水の女神が一人、アニアスです」
そう紹介されて、それぞれ頷いたり微笑んだりしていた。
神様！　まじで神様！
神様が神様を襲いに来たら、それを守る為に別の神様が出てくるとかどんな激戦だよ⁉　スーパー神様大戦⁉
「まあ、拙者は数百年前の時点で村が廃れていたこともあり、その後宣教師達に感銘を受けて改宗した身だ。元々武家であったが死後崇められて神になった身故、神としては木っ端なのであまり期待されても困るぞ？」
「私も女神とはいえ、巨人族とニンフの間に生まれた身だから、神様としては弱いわよ？　たぶん最上級悪魔クラスなら防戦に徹すればしのぎ切れるレベルだからね？」
それでも神様とか凄いっていうか、最上級悪魔って悪魔全体でも本当に少ないですからね⁉
「……話を戻しますが、今回大王派が提供する島で戦闘を行うことになっているのは二人が理由でもあります」
と、クロードさんが話を戻した。
どういうことなんだ？
俺が首を傾げていると、そこでリヴァさんが前に出る。
「じゃあ説明するわね。簡単に言うと、私を含めた下位の神格三柱の連携でロキを抑え込む策なの」
ふむふむ。
つまり……どういうこと？
「正確には、腐っても日本の神である玄隆、海の神であるアニアス、そして戦の神の娘で地脈関連に強いリヴァの三人が連携することで、そこにいる三大勢力を強化させるように調整するって寸法だ」

先生がそう補足してくれるけど、なんか凄い作戦だな。
それぐらいしないと勝てないかもしれない相手とか、ロキってやっぱ凄いんだな。
俺が感心してると、先生は遠い目をした。
「最も、これだけやっても生身のロキに突破されかねないのが野郎のやばいところだ。だからミョルニルのレプリカはマジで重要だし、リーネスとカズヒの切り札にも期待してる」
これだけやっても無理目なのか！　どんだけだよ、ロキの奴。
あと先生、なんで匙の方に近づいてるんですか？
匙が微妙に引いていると、先生はぽんとその肩に手を置いた。
「だからこそ、俺も切り札を用意する。……俺自身は会談の仲介で動けないから、お前が頼りだ、匙」
「はぁあああああああ!?」
匙がめちゃくちゃ慌ててるけど、ソーナ会長の様子から見て会長は教えられてたな。
当事者に教えてあげてよ先生。鬼か何かですか。
「いや、俺じゃどう考えてもロキをどうにかなんて―」
「安心しろ、俺に考えがある。それに言い方は悪いがマルガレーテのおかげで、成功確率は跳ね上がってるから安心しろ」
先生が匙をそう押し切るけど、マルガレーテさんが遠い目をしていたりそもそも跳ね上がってるとかいう辺り、なんか凄い思い付きだな。
……先生の思い付きか。
「……匙、生き残れよ？」
「なんで疑問符だぁあああああ！」
いや、先生の思い付きとか巻き込まれる側にとって大変なの確定だし。
うん、夏休みのあの特訓は命がいくつあっても足りなかった。この緊急事態で思いついたことなら、もっと酷い可能性だってある。
俺は目を閉じて、匙を無言で拝んだ。
頑張れ匙。生き残れ匙。

きっと生き残れたのなら、めっちゃ強くなってるはずだから。
「さて、それじゃあ会議はいったん終了だ。グリゴリの施設行くぞー」
「いやだぁあああああああ!?　死ぬ、絶対死ぬ！」
匙は逃げ出そうとするけど、アザゼル先生は構わず引っ張っていく。

「助けてくれ、兵藤！　助けてください、会長ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！」

その叫びに、全員がちょっと黙とうした。

神威動乱編　第二十四話　決戦前夜（前編）

イッセーＳｉｄｅ

とりあえず、こういう時だからこそ鍛錬も積んでおかないとな。
俺はそう思って、地下のトレーニングルームに向かっていた。
そろそろオーディンの爺さんが日本神話の人達と会談を行う日だからな。ちょっと気を引き締めないと。
俺はそう思ってトレーニングルームに入ると、そしたら意外な先客を見つけてしまった。
「あれ、南空さん？」
「あ、兵藤」
なんでこんなところに南空さんがいるんだ？
いや、別にいてもいいけどさ。南空さんはこの家のメンバーじゃないから、別にトレーニング場所があると思ってたから、なんか以外というかびっくりっていうか。
「南空さんもトレーニングか？　でもなんで態々こっちで？」
「あ～。ちょっと興味本位のついでって奴かな？　リーネスやカズヒとちょっと話が合ったから、兵藤亭のトレーニングルームが気になったし少しトレーニングしようかなって感じなの」
あ～。なるほど。
「前世の縁とか二人は言ってたけど、本当に仲いいよな」
「……言いえて妙というかなんて言うかよねぇ」
なんか遠い目をしてるけど、もしかしてちょっと呆れてるのか？
まあ、ミザリが前世の状態込みで転生するなんてことやってるけど普通は無理だしな。荒唐無稽って感じだよな、普通。
でも、それで納得しそうなぐらい付き合いがロクにないのに仲良くなってるからなぁ。

「そういやリーネスはカズヒを初めて見た時めちゃくちゃ驚いてたけど、もしかして本当に前世の記憶でも蘇ってたのか……なんて思ったりするな」
「……まあ、それなら目を見開くわよね、うん」
なんか視線を泳がせてるんだけど、どうかしたのか？
俺がちょっと首を傾げていると、なんか知らないけど南空さんはうんと頷いた。
……なんか悩んでるのか？
こういうのは九成の役割な気もするけど、仲間がなんか悩んでるのに何もしないってのは嫌だしなぁ。
「なんか九成に言いづらいことでもあるのか？　なんならちょっとぐらい愚痴を聞いてもいいぜ？」
「……あ～、だったらちょっと聞いてくれる？　もちろんトレーニングしながらでいいから」
そんなわけで、俺はランニングマシーンで走りながら南空さんの愚痴を聞くことになった。
「実はロキがあなた達を襲撃してから、意識が飛ぶことが多いの」
「マジ？　どれぐらいなんだ？」
なんか結構ガチな悩みだな。
俺が心配になっていると、南空さんはちょっとげんなりとしていた。割と本当に苦労しているみたいだ。
「最初はまさに襲撃が来たタイミングで、会長と明日の業務について話していた時いきなり。そのあと何度か意識が飛んでて、念の為に検査したんだけど……」
言葉を切って、南空さんは盛大にため息をついた。
「病気の可能性も呪いを受けた可能性もなし。もちろん敵が神器を使って何かしたってわけでもないの」
じゃあなんでだ？
俺もちょっと引くけど、ますます原因が分からないのが一番引くな。
ってことは心因性か何かってことになるよな。なんか別の形で悩

みでもあるのか？
「なんか悩みとかないのか？　ほら、九成の周りに女が集まって……羨ま妬ましい」
「……人のこと言えないでしょうに」
なんで俺の周りはこんな意見ばっかりなんだ。
俺が悩みそうになっていると、南空さんは盛大にため息をついた。
「むしろそっちはいいのよ。……いや、カズヒの居場所がきちんとあるのが前提だけど」
どれだけカズヒのこと好きなんだよ。
お前あれか、一目惚れでもしたのか。前世の縁とか言ってたけど、前世から尽くす愛でも持ってるのか。
別の意味でちょっと引いていると、南空さんは少し考え込みながら首を横に振った。
「心の病を発症するような悩みに心当たりはないわね。念の為カウンセリングでも受けるとして……あと心当たりとなると……あれかぁ」
なんか心当たりがあるらしい。
でも悩みってわけでもないようだ。後すっごく言いたくなさそうだ。
これ、もしかして俺じゃなくて九成が踏み込んだ方がいい話だったか？
俺がちょっと戸惑っていると、南空さんはなんか意を決したみたいだ。
「これは後でカズヒやリーネスにも相談するけど、予行演習代わりに先に言っておくわ」
なんか俺が踏み込んでいい話なのか、不安になってきた。
でも相談しろといったのは俺だ。なら、俺も相談される義務とかそんなのがあるだろう。
それにオカ研じゃないけど仲間だしな。仲間の相談ぐらい受け止めてやる！
「どんとこい！」

「うん。……実は私、ザイアに拾われる前に聖杯戦争のマスターになったことがあるの」
　凄い情報が出てきた!?
「マジか。そんな小さい時に!?」
「あ～……一周回ったとかそんな感じで。で、その聖杯戦争は小規模だけど、参戦者の一人がアホで「日本の政治家全員自分に服従するようにしてやるぜヒャッハー」なんてことを企んでて、ルーラーの召喚案件になったのよ」
　いろんな意味で凄い事になってるな。
　確かルーラーって、聖杯戦争が世界に悪影響を与えるとかそんな時に聖杯が召喚するエクストラクラスだったな。
　そんな聖杯戦争に巻き込まれるとか、南空さんも大変だな。
　俺が同情してる時も、南空さんは思い出しながらため息をついていた。
「不幸中の幸いっていうかなんというか、たまたま召喚したサーヴァントが聖職者だったこともあって、ルーラーと連携をとったことで私は生き残ったんだけど……その……」
　なんか目が泳いでる。
　おいおい。どんなぶっ飛んだ情報が出てくるんだ―
「そのルーラー、槍の形で紫炎祭主の磔台（インシネレート・アンセム）を持ってうえ、暗部出身だって私のサーヴァントが見抜いたから、たぶんピエール・コーションだと思う」
　―本当に凄い情報がぶっこまれたな。
「聞いてないの？」
「いや、私のサーヴァントが「教会的にあまり知ってほしくない」って言っていたから、あえて聞かなかったのよ。私としても結果的に全面的に味方になってくれた恩もあるから聞くに聞けなくて……ね」
　あ～、なるほど。
「お前も大変だな。それならクロードさんに聞いてみたら、情報のすり合わせ的なあれができるんじゃないか？」
　それで問題解決とは言わないけど、聞いてみるのは良い事だと思う

んだけどなぁ。なんで聞かなかったんだろう。
俺がその辺を不思議に思っていると、とっても分かり易いぐらい視線を逸らされた。
そういえば聖杯戦争って、優勝すると願いを叶えられるって話だった。
もちろん限界はあるみたいだけど、日本の政治家全員支配するなんて願望を持った奴が参戦してルーラーが召喚されたわけだ。たぶん南空さんが巻き込まれた聖杯戦争でも、かなりの願いを叶えられそうだ。
そして南空さんは生き残った。殺し合いに生き残ったのなら、優勝した可能性だってある。
「……なあ、何かろくでもないこと願ったんじゃないだろうな」
「別にそこまでやばいこと願ってないから！　ちょとパパを殺したやつがどこにいてなんでそんなことをしたのか聞きたかっただけだから！」
ああ、そうなのか。
ちょっと心配だったけど、そういう理由なら問題ないだろ。
……いやちょっと待て!?
「お前の親父さん、殺されたのか!?」
とんでもない情報が初耳だよ!?
南空さんも勢いで言ったのか、ちょっときょとんとしてから盛大にすっころんだ。
「はぶぁ!?」
「南空さん大じょぶらぁ!?」
俺も慌ててすっころんだ。
じ、地味に痛い。
十秒ぐらい悶えてから、先に転んだ南空さんの方が復帰した。
「……ま、まあその結果分かったのはパパが完全に悪い自業自得だから、殺したやつを殺したわけじゃないわ。むしろこっちが謝ったぐらいよ」
そ、そうなのか。

「色々大変だな。でもまあ、そういうことなら言いたくないか」
まあ、親父さんが悪いことして殺されたってのは言い出しづらいよなぁ。
「ただまあそれでもパパだから、これ以上のことはあまり言いたくないの。……ごめん」
「あ、ああ。そういうことならそっちは聞かない。……でも、ルーラーのことを相談したら絶対聞かれそうだよなぁ」
クロードさんとはそんなに付き合いないけど、たぶんさわりを言えばあえて踏み込まないでくれるとは思う。
でも言いづらいことってあるってことだよな。
「うん。相談させておいてあれだけど、やっぱりカズヒやリーネスにまず相談するべきだよ。特にカズヒはプルガトリオ機関にいたから、クロードさん関連だと何とかなりそうだし」
「ま、そうなるわよね」
いやほんと、人の過去って色々ある時は本当に色々あるよなぁ。
……でもまあ、それを相談できるようにする為にも、俺も頑張らないとな。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「それで総督ぅ？　無茶苦茶なことを計画してますけど、大丈夫なんですかぁ？」
「心配ねえよリーネス。なんたって前例からの情報提供があるしな」
「前例？」
「ああ、あの女があそこまで強い理由の一端だ。……神器研究においてなら、英雄派の禁手乱発計画に匹敵する価値のデータになるだろう

な」
「……それってどう考えてもテロリスト向きなデータになりますよぉ？」
「ま、俺らも色々あったから割と溜め込めてるしな。特に匙の場合は相性がいいだろうし、ここまで利用できるケースもそうはないだろうさ」
「匙君には同情しますねぇ。絶対トラウマになりますよぉ、これぇ」

神威動乱編　第二十五話　決戦前夜（後編）

和地Ｓｉｄｅ

俺は夜、なんとなく目が覚めたのでちょっと本館の方に歩いていた。
本当になんとなくの気晴らしだ。まあ、あまり騒がしくするつもりはないんだけどな。
なんたって、本格的な作戦直前ということで何人か泊まっているいるからだ。特に駒王町に拠点を持ってないことから、クロードさんやフロンズ氏などが、数人の護衛と共に泊っている。
あとでややこしいことになっても困るし、あくまで一階でちょっとのんびりするかって程度なんだけど―
「……あれ、眠れなかったんですか？」
―そこに、ある意味でキーパーソンのマルガレーテさんがいた。
一階に降りていたのか。これはうっかりだったな。
「目が覚めてしまいまして。そちらは？」
「私もです。だからまあ、ホットミルクでも飲もうかと思って、メイドの人に用意してもらっているところ」
なるほど。
まあ、メジャーな神や大規模テロリストと三つ巴の戦いになりそうだしな。ちょっと目が冴える人は多くて当然か。
……まあそれはそれとしてだ。
こうなると、ちょっとぐらい気晴らしに話した方がいいかもな。
「……そういえばプルガトリオ機関に属していたそうですね。結構いろんな形の部隊があるそうですけど、どちらの部隊に属していたんですか？」
「あ～。確かグレモリー眷属と共同する形で、辺獄騎士団の人が転属

したって言ってましたね。私は別の部隊です」
まあそうか。
しかしどの部隊にいたんだろうか。いろんな性質の部隊があるから、ちょっと興味がわいてきた。
「私の所属はアルファ部隊。基本的に人数を多く配備した、規模が大きい作戦用の動員部隊です」
マルガレーテさんもそれを悟ったのか、ふと窓を見ながらだけど会話をしてくれた。
「……本当ならエクストラ部隊の配属が妥当となっていたんですが、それは嫌だったので我が儘を言った形です。神仏に並び立てる魔王の血とは言っても、そんなものに振り回されたくないですから」
そう言いながら、マルガレーテさんは盛大にため息をついた。
「本っ当にいい迷惑です。あんな馬鹿が万が一をやらかした所為で、私はベルゼブブとして振舞わなければならなくなった。……シュウマ・バアル様方が魔王を終わらせようとしなければ、私は魔王の一族として立つ羽目になりましたよ」
その本心から嫌そうな物言いに、俺は何となく分かった。
ああ、この人は……。
「偉くなりたいとか成功したいとか、そういうことを思ってないんですか？」
そんな俺の言葉に、マルガレーテさんは弱弱しく笑った。
「……当然じゃないですか。そんな全て、責任が分かってるなら背負いたいわけがない」
その表情と声が、彼女の本音をこの上なく示している。
彼女はある意味でイッセーやヴァーリの逆だ。
愛の反対は憎しみではなく無関心。逆にそれを否定して憎しみを反対と考える人も多い。だから、そういうことなんだろう。
イッセーは平和を大事に思っているけど、出世したいとも考えている。ヴァーリは戦いを好んでいるけど、魔王の血を引いていることを誇っている。だから、彼女は二人の逆だ。
マルガレーテ・ゼプルは平和が好きで、出世や偉さなんてものを余

計な重荷と思っている。だから出世なんてしようとも思ってないし、王族の血なんて余計なものとしか思っていない。
そう、それは言うなら―
「……いわゆるスローライフがしたいんですね？」
「……うん。そして私は、教会に拾われるまでずっとそう過ごしてきました」
そうぽつりと呟いた彼女は、どこか遠くを見ながら呟いた。
「でも、自由だろうと権利だろうと行動だろうと、それって力の分だけ責任があります。……義務と責任を果たさないで、権利と自由だけ力のままに振るうような身勝手な人は嫌いなんです」
その言葉には嫌悪があって、どこかを見ている視線は軽蔑があった。
「……だから安心してください。三大勢力（私達）にとって迷惑でしかない身勝手なトカゲには、退場してもらいます」
その言葉に、俺は―
「……無理はしないでください」
―はっきりと、これだけは言い切れる。
「あなたの言うことはもっともですけど、同時に責任を果たそうとしている貴女には笑顔になれる資格があります。なのに悲しい涙が出てくるのなら、その時は言ってください」
俺は屈み込んで真っ直ぐに目を見て、はっきりと宣言する。
「会ったばかりの俺が言うことじゃないですけど、俺も自分の行動にも能力にも発言にも責任を持とうと思っています。……嘆きの涙を笑顔で流す、その涙の意味を変えることこそが俺の選択した生き方ですから」
イヤホンと、会ったばかりで付き合いもろくにない俺が言ってどうなるんだって話だ。
だけど、これを言うことだけは曲げられない。
そして、それを実行することに？もない。
その俺の本気が伝わったのか、マルガレーテさんはクスリと笑う。
「……そうですね。なら、他にどうしようもない時は相談します」

そういいながら、マルガレーテさんはスマホを差し出した。
「だから最初の責任です。連絡できるようアドレスを交換してください」
「……ちょっと取ってくるんで待っててください」
そりゃそうだ。
俺は急いで取っていこうとしたけど、マルガレーテさんはクスリと笑った。
「……そんなに切羽詰まらないでください。私は魔王派のリアス・グレモリー様の眷属じゃなくて、大王派のノア・ベリアル様の眷属なんですから」
「いや、俺は本気で言ったんですけど」
そりゃ本気にされないだろうけど、やっぱり侵害だ。
そこは訂正しようと思ったけど、マルガレーテさんは人差し指を俺の口に押し当てた。
「本気の気持ちは伝わりました。でも、優先順位はしっかりつけないと、人生生きていくこともできないですよ？」
は、反論できない。
ぐうの音も出ないでいると、マルガレーテさんは苦笑しながら天を仰いだ。
「それに、クロード長官には悪いですけど魔王の名は下せました。主になってくれたノア様にも、誘ってくれたフロンズ様にも感謝ですし、あとは……」
あとは？
ちょっと気になる言い方だったけど、マルガレーテさんはにっこりと微笑んだ。
「あとは、余計なごたごたが片付けば、だいぶのんびりできると思います」
……そのゴタゴタが長続きしそうなんだよなぁ。

Other Side

夜の兵藤邸の屋上で、一人カズヒ・シチャースチエは空を見上げていた。
悪神ロキだけでなく、禍の団との三つ巴の戦いになる以上、戦力は多い方に越したことがない。同時に悪神ロキという強敵を打倒する以上、相応の切り札を用意するべきだ。
分かってはいるが、その為に自分の出撃は遅れる。
その時間が仲間達の生命線を分けるのかもしれないと、少しだが臆病風に吹かれている自分を感じたが故の、気分転換だった。
……そう、臆病風だ。
戦場とは極限環境だ。人の勢力が互いを殺すつもりで挑み、殺される覚悟を持たねばならない環境。少し前まで隣にいた者が命を奪われることも、逆に自分が奪われることも、そして自分や隣にいる者が命を奪うことも当たり前の環境だ。
少なくと、日本(この国)レベルの普通の日常とは雲泥の差だろう。極寒の吹雪や灼熱の砂漠を、こんな温帯の都市で一般人が過ごす生活とは比較にする方が失礼だろう。
死を想え(メメント・モリ)とは、人間はいつか必ず死ぬからそのことを心にとめるという言葉だったろうか。
そんな言葉が出てくるほどに日常とは死から遠いと感じるものだ。そして同時に、そんな言葉を言う必要が薄くなるほど、戦場では死を身近に感じる者が多くなる。少なくとも、日本国の日常と激戦地の戦場でなら、後者の方が死を身近に感じるはずだ。
だからこれは感傷だ。本当にただの感傷でしかない。
今までの戦いでもそうだ。自分達オカルト研究部に連なる者が命

を落とさなかっただけで、戦場で死んでいった味方の人員は数多い。
かつてもそうだ。任務遂行の過程で仲間が死ぬところを見たことなど、いくらでもある。
今回の戦いで死者が出ないなんてことはない。それだけの規模の激戦になるだろうし、ゲリラ時代からそんなことはいくらでもあった。
だから、夜の冷たい空気で意識を切り替える。
和地の、ヒマリの、ヒツギの、鶴羽の、その顔を思い浮かべたうえで、あえてかき消さない。
「……こっちはこっちの仕事を果たす。それはあっちも同じこと」
目を開け、そして虚空を睨む。
そこに思い描くは、いまだ映像でしか見たことがない己の運命。
ルシファーの血を継ぐ転生者、ミザリ・ルシファーを見据え、奥歯を食いしばる。
「出てくるなら出てきなさい、誠にぃ。その時は、命に代えても引導を渡してあげる」
地獄に落ちることなく人生をやり直す。
その己の罪深さの象徴を見据え、カズヒは誰にも聞こえないと分かったうえで、宣言する。
「それが、貴方を作った私の責任でしょう……っ」

神威動乱編　第二十六話　黄昏の直前に

和地Ｓｉｄｅ

「はい！　おっぱい喫茶がいいと思います！」
「却下」
　いざロキとの決戦が待ち構えている日に、なんでこんなあほな言葉を聞かなきゃならないんだろう。
　俺はイッセーの提案を切り捨てる部長に同情しながら、そんなことを思った。
「イッセー。ここは高校よ？　断じて歓楽街じゃない……っ」
「あがががが!?」
　カズヒ姉さんによってイッセーはアイアンクローを盛大に受けるが、これは自業自得だろう。
　イッセー。高校の学園祭には限度があるし、たぶん風営法とかいうのに引っかかるからな？
　欲望一直線で何を言っているというか、間違いなくシャルロットに顔向けできないだろこれ。行けると思ってるなら病院を紹介した方がいい気がする。
「……ふむ。でも私やヒツギのおっぱいもそこそこありますし、オカ研のおっぱいパワーなら頂点狙えますの」
「狙わなくていいから!?　そんな頂点狙わないでまじで！」
　全力でヒマリを止めるヒツギには、あとで何か奢っておこう。
　っというかイッセーの奴、もしかしてこれが変態的問題行動だと思ってないんじゃないか？
「イッセー君。そんなことをしたら部長のおっぱいが生徒の人達に見られることになるんだよ？」
「……ああっ!?　それじゃあおっぱいお化け屋敷も無理なのか!?」

「……そんなこと考えてたんですか？」
木場の指摘に崩れ落ちるイッセーに、小猫の冷たい視線が突き刺さる。
馬鹿だ。こいつ馬鹿だ。
駒王学園に入学できる当たり地頭は悪くないだろうに。なんで性欲が絡むとあほになるんだ。
とはいっても、そろそろ学園祭の出し物を決めておく必要はあるよな。
なにせ二年生の修学旅行が迫っているうえ、それが終わったらすぐに学園祭だ。
どんな出し物にするかは決めておいた方がいい。そうしておけば、修学旅行中にほかのメンバーで進めることができるからな。
修学旅行に学園祭。学生の良い思い出になるだろうし、これは実に楽しみたいところだ。
だからこそ、今の段階でまとめておきたいところではある。
さて、俺は周りを見渡して、ちょっと思いついた提案をしてみる。
「提案なんですけど、オカルト系のコスプレ喫茶……とかどうですか？」
ちょっと注目が集まるけど、ここは気合を入れるべきだ。
「いや、駒王学園においてオカルト研究部（俺達）のアドバンテージを考えたんですけど……美男美女率が多いでしょ？　これを生かさない手はないと思うんですよ」
あえて俺自身のことは置いておくけど、女子は全員可愛いし、男子だって木場はイケメンの筆頭だ。
「ギャスパーは可愛い系で女子とまとめれますし、イッセーもアニルも顔は悪くない。そして女子はもれなく美少女の文字が相応しいとくれば、このアドバンテージを無視するってのももったいない気はします」
「なるほどねぇ。和地だって悪くないものぉ。いいんじゃないかしら？」
それとなく俺は外していたけど、リーネスがそう言ってくれるのな

ら自信を持ってもいいだろう。
自画自賛するのもあれだけど、過ぎた謙遜はもっと酷いからな。そうなると「人から言われる自覚はある」ってのはいい言い訳か。
ありがとうリーネス！　ちょっと自信がついた！
「いけるんじゃねえっすか？　喫茶店なら食べ物もいるっすし、ハムとベーコンは作っときますぜ！」
アニルがのっかってくれるけど、まじか。
あのアニルがハムとベーコンを作るとか、学園祭のレベルを超えたガチのグルメフェスに片足を突っ込むんじゃないか？
「ハムチーズサンドとＢＬＴサンドが、アニルのハムとベーコンで……っ」
「小猫ちゃん、目が怖いから落ち着いて……ね？」
小猫が食らいつきすぎてルーシアにたしなめられているけど、気持ちは分かる。
ぶっちゃけオカ研メンバーの殆どがごくりと喉を鳴らしたからな。
これは、喫茶店の方向性は確立か……？
カズヒ姉さんすらちょっとそわそわしてたけど、ふと何かに気づいたのか表情が暗くなる。
「……でも、学園祭で手製の燻製ってＯＫなのかしら？　特にこのご時世だとその辺りがうるさくなりそうだけれど」
『『『『『『『『『『『『『『しまった!?』』』

け。
「俺の燻製はグルメバトル漫画の切り札か何かですかい!?」
アニルが一番困惑してるよ。まあ、当事者って逆に分からないことあるからな。
あれ、ぶっちゃけ燻製屋で一生食っていけるレベルだからな？　当事者として自覚しとけよ。
「で、でもハムチーズサンドやＢＬＴサンドだけっていうのも味気ない気がします」
「それに燻製だけが凄くても、他が見劣りしてたら逆にバランスが崩れるかもしれませんよ？」
そんなアーシアとルーシアの言葉で、俺たちは我に返る。
確かにそうだ。燻製だけがぶっちぎりトップでは、燻製が食材の一つでしかない料理には不安材料がある。
「……確かに。料理は食材のバランスも重要」
「学園祭だと費用に限度もあるからね。採算度外視では評価も低くなりかねないか……」
小猫と木場が冷静になって問題点を指摘する。
これはどうしたものか。
「喫茶店ではなく燻製を主体とした飲食店にしてみたら？　別に学園祭って食事系が喫茶店オンリーじゃないと駄目ってわけじゃないじゃん？」
「そうですわね。むしろそうした方が注目を集めやすくて、逆に評価を得る余地が増えるかもしれませんわ」
そんなヒツギの提案に、朱乃さんも感心していた。
そうだな。学園祭の出し物は喫茶店だけじゃないし、それは飲食店でもそのはずだ。
焼きそばとかだってあるし、定番に拘る必要もない。燻製を主体とした料理だってそれなりにあるだろうし、それを主体にすればアニルの燻製というこちらの切り札を最大限に生かせるはずだ。
リアス部長も納得だったのか、一つ頷くと立ち上がった。
「そうね。ではイッセー達が修学旅行に行っている間、燻製を主体と

する料理を世界全体で探してみましょう。そのインパクトをもってして、私達美男美女揃いのオカルト研究部のアドバンテージ……を……」
あれ？
なんか部長が急に考え込み始めたぞ？
どうしたんだと俺達が心配そうにしていると、部長はちょっと遠い目になっていた。
「そもそもそれ、美男美女どころかオカルトすらなくなっているわ。迷走していたわね」
『『『『『『『『『『『『『……あ』』』

なったわね？」
　二大お姉さまの圧が怖い。あと第三勢力になろうとするヒマリはそのまま止めといてくれよ、ヒツギ。
　ああ、なんていうかこれ、会議にならなくなってないか？
「……二人はとりあえずおいておいてえ、今のうちにオカルトをちゃんと出した案を出した方がいいわねぇ」
　そこでリーネスがスムーズに会議の進行役を獲得する。
　カズヒ姉さんも賛同してたのか、さらりと考え込み始めてた。
「……そうね。とは言ってもお化け屋敷というのはどう考えても他と被るでしょうし、旧校舎という離れたところにいる点を踏まえると後れを取りそうね」
　思った以上に真剣に考えてくれてるな。
　木場もすぐに考えこんだのか、指を口元に当てる。
「距離の利便を踏まえても来たくなる、目新しさが必要か。確かにそこは重要だね」
「……昨年と同じ方法は使えませんし」
　小猫もそう言うけど、そもそも昨年は何をしたんだ？
　人数は今とは比べ物にならない少なさのはずだし、あまり大規模なことはできないと思うんだが。
　俺はちらりと、昨年も駒王学園高等部にいたはずのイッセーに視線を送る。
「昨年は何だったんですか？　普通に考えればノウハウを生かせると思いますけど」
「……確かお化け屋敷だったかな？　めっちゃリアルだとか評判だったけど」
　イッセーがルーシアにそう答えると、小猫と木場が遠い目をした。
「……本物でしたから」
「仕事のなかった現地の妖怪の方々を雇っていてね。大好評だったけど、まだ会長になる前だったソーナ会長から盛大に怒られたから……」
「それは使えないな」

ゼノヴィアがうんうんと頷くけど、ちょっと手段を選んだ方がいいだろ、それ。
「でもどうしましょう？　アニル君の燻製はオカルトよそ主体だと出しづらいですし、インパクトがどうしても……」
「ギャスパー。俺の燻製を出すことは前提かよ」
ギャスパーにアニルがそう突っ込むけど、ギャスパーの気持ちは凄く分かる。
だって美味いし。気に入ったアザゼル先生達が高級な機材を用意してくれたから、尚更強みになるし。
「ではミサを開いてはいかがでしょうか？　きっと皆さん気に入ってくださると思います」
「……それすると身内が壊滅すると思うかなぁ」
「半分以上悪魔ですものね。あとションボリですの」
漸くヒマリを諦めさせたヒツギがアーシアに突っ込むけど、そもそもそれもオカルトとはちょっと違うだろうしな。
さてさて、どうしたもんか……。
その時、ふと視線が窓の外に向き、同時にアラームもなる。
俺達全員が意識を切り替え、戦意を少しずつ滾らせる。
残念だが時間だから、続きは生き残ってからだな。
「……逢魔が時だが、神々の世を黄昏にするにはまだ早い」
今まで黙って見守っていた先生が、俺達を見渡して告げる。
「いいか？　俺がお前らに言うことは二つだ。……ロキをぶちのめして、生き残れ！」
『『『『『『『『『『『『はい！』』』』』』』』』』』』
さて、決戦か。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、時間か」
同時刻、都内に大王派が確保している一室で、フロンズ・フィーニクスは紅茶の入ったカップをソーサラーに置く。
三大勢力を仲介とした、北欧神話体系アースガルズと、日本神話の会合。
三大勢力から続く和平にとって大きく意味があることであり、逆にこれが台無しに―それも禍の団などのテロ組織ではなく身内側によって―になれば、和平の流れは大きく揺らぐだろう。
ロキはフェンリルとサーヴァントを引き連れ、また自身も仮面ライダーになって襲撃を仕掛けてきた。だが、あえて撤退をする辺り、それだけとも思えない。
油断を仕切ってくれるのならありがたいが、あれが油断ではなく余裕なら、間違いなく更に伏札がある。少なくとも当人の発言から、星辰奏者（エスペラント）になっている可能性は大きいだろう。
同時に禍の団からも大規模部隊が派遣されることは間違いない。少なくともヴァーリチームと後継私掠船団は遠慮なく仕掛けてくるはずだ。
間違いなく命を懸ける戦いになる。
しかしそんな状況下でありながら、フロンズの心は冷静だった。
命の危機を感じていないわけではない。ロキや白龍皇をなめてかかっているわけではない。
だが、可能な限りこちらも手札を揃えたうえでの戦いであり、そして潜り抜けることができた際の恩恵も十分すぎるほどある。
失敗すれば大きな被害が現政権全体に襲い掛かる。だが成功しても魔王派に恩恵や栄光を独占させることはない。そしてその為には、リアス・グレモリーやソーナ・シトリーに次ぐ程の発言力を持つ、自分とノアが積極的に参加する必要がある。
リスクを可能な限り回避することは重要だ。だが大願成就を望む

のならば、可能な限り備えたうえでとはいえ博打を打つ覚悟も必要だろう。
フロンズ・フィーニクス達にとって、大王派の利権を維持するなどという程度の目的はとっくに通り越している。
その為には流れ弾程度を覚悟するなどでは全く足りない。可能な限りリスクを回避して準備を進めたうえで、必要なリスクは買ってでも背負う。
これはその一環に過ぎない。そして何より―
「王が自ら危機に足を踏み入れる。基本的に酔狂でしかないが、末端の士気や忠誠を集めるには時折する必要はある」
―美談というものは必要。それを彼は理解している。
そしてドアがノックされる。
「……フロンズ様。第一特務研究師団全軍、準備が整いました」
「分かった。すぐに向かう」
そう告げ、フロンズは窓の外に視線を送る。
下手をすると外壁よりも頑丈になるように異能で強化した窓ガラスの先、そこには黄昏が広がっていた。
「この黄昏は我らではなく、ロキにとってのものであることを決定づけなければな」
そう短く呟き、フロンズは席を立つ。

今ここに、ラグナロクをかけた戦いが始まろうとしていた。

神威動乱編　第二十七話　黄昏、開帳

イッセーＳｉｄｅ

作戦開始前に色々と慌ただしくなっているけど、俺達は高層ビルの屋上に集まっていた。

周囲のビルにはシトリー眷属やシュウマ・バアルさんんの第二遊撃師団が待機してて、ロキが仕掛けてきた時に小島に転移させる準備と、万一突破された時の迎撃を担当するらしい。

目を凝らしてよく見ると、デビルレイダーの姿もそこかしこ。屋上には最低でも三機のＤ（ディアボロス・フレーム）Ｆが待機している。

小島の方も外周を、第四義勇師団が警備しているそうだ。

外から余計な攻撃がないようにしているって話だ。彼らに余計な負担をかけないように、俺達がしっかりロキをぶちのめさないとな。

「イッセー。そっちは準備できてるか？」

と、ショットライザーをもう腰につけている九成が声をかけてくれた。

ちなみにオカルト研究部や生徒会は、今でも制服をつけている。

ただ外見は普通の制服だけど、異能の技術で結構強化されてるやつだ。

グレモリー眷属にとって、この格好はもうトレードマークになってるしな。高等部を卒業するまでは皆この格好だろう。

と言っても別の服を着ちゃいけないわけでもないから、アーシアはシスターの服を着てる。

ゼノヴィアやイリナ、ルーシアやヒツギは教会の戦闘服だ。あれぶっちゃけエロいけど、なんだかんだで動きやすくて便利らしい。

「カウントはもう終わってる。何時でも禁手になれるぜ？」

「ならいいさ。真面目な話、今回の戦いでツートップなのはロキと

フェンリルのはずだ。格上をぶちのめす方法はいくつもあるが、初手速攻で叩きのめすってのは手段があるなら有効だしな」
九成はそう言うと、俺が持っているミョルニルを叩き付けるのが一番威力がでかいはずだ。
真面目な話、俺が鎧を全開にしてミョルニルを見る。
いくらロキでもそんなものを食らえばただでは済まない。それで速攻かまして叩きのめすのが、一番いい流れになるだろう。
ただ――
「……ま、そう上手くいかないのが世の中ですからねぇ。俺らはそっちに備えときますぜ、先輩方」
と、こっちは駒王学園の制服を身に着けたアニルが、そう言いながら近づいてくる。
アニルはアニルで、なんだかんだで実戦経験がそこそこある。
だから上手くいくことばかりじゃないってことを分かってるんだろう。だから最悪のパターンになることを覚悟している。
最悪のパターンは速攻ができず、禍の団も含めた乱戦になることだ。
そうなるともう知っちゃかめっちゃかだろう。小島では外周警備をサイラオーグさんのところの第四義勇師団に任せる形で、フロンズさんの第一技術研究師団が最新装備を準備して待機している。
それでも限界はあるし、絶対に死人もでる。
禍の団はロキだけじゃなくてグレモリー眷属（俺達）もだけど、ロキが速攻で倒されたのなら引くことを選ぶだろう。だけどそれができなくなれば、どっちも潰すつもりで仕掛けてくるはずだ。
だから開幕速攻ができることに越したことはない。
ああ、なんとしても絶対に成功させないと―
「イッセー先輩。一ついいですかい？」
―アニルが俺の方を真っ直ぐ見ていた。
「どうした？　俺も頑張るから―」
「多分ですけど、開幕速攻はたぶん失敗するんで」
そういうこと言うか!?

ちょっとむっとしたけど、アニルはなんていうか普通だった。
「いや、敵さんだって失敗したくてこっちに喧嘩売ってるわけじゃねえですからね。当然こっちの思い通りに動くわけがねぇですし、不測の事態なんていくらでも起こるんで。その辺は考え違いしない方がいいですぜ？」
茶化す様子はなく、当たり前のことを当たり前に言っているだけ。
そんなアニルに、九成はうんうん頷いていたけど俺はちょっと戸惑っていた。
「ま、敵は俺達をついでに殺して会談を阻止する為に全力を尽くす気満々だろうしな。準備万端の本気に慌てて準備した本気がぶつかるんだ」
「……思い通りに行く方がおかしいわけなんで、無駄に責任を感じるとか無しで頼んます」
九成に続けてアニルはそう言いながら、俺の方を向いた。
「こっちはこっちで俺達なりの理由や責任があって命賭けてるんで。それが大規模な戦闘ってもんでさぁ」
……。
なるほどな。
「分かった。戦闘じゃ俺は後輩だしな。素直に先輩の言うことを聞いとくよ」
これが、大規模戦闘ってやつなのかな。
『……兵藤一誠、こんなところにいたのか』
その声に振り向くと、でかいドラゴンが俺達に近づいてきていた。
っていうかタンニーンのおっさんじゃん！
おっさんも参加するのは知ってたけど、やっぱりでかいドラゴンの姿を見ると心強いぜ！
『そこにいるのはお前の仲間か。中々いい面構えと覚悟をしているな』
九成やアニルを見てから、おっさんはちょっと満足した感じだった。
『いい仲間を持ったな。大事にするんだぞ？』

「あったりまえじゃん！」
ああ、仲間は全力で大事にするぜ。
……ああ、俺もやることをしっかりやって、胸を張って修学旅行と学園祭を楽しんでやるぜ！

祐斗Ｓｉｄｅ

時間が迫るにつれて、やはりみんな少しそわそわとしている。
無理もない。ここにいる者達の殆どは、百年も生きてない若手達だ。
鎖国的対応をとっていた本物の神、それも世界的に名をはせる悪神ロキだ。
本来魔王様やそれに準じる最上級悪魔が眷属を率いてなお、相応の数をもって挑むべき相手。僕たち若手悪魔では、数を揃えても挑むことそのものが自殺行為になる敵だ。
如何にミョルニルのレプリカを赤龍帝が装備して挑もうと、死人が出ない方がおかしい戦い。まして今回は、禍の団の大規模な横やりが入ってくることが確定しているからね。
正直僕も、少し手が震えそうになる。
まったく。和平が結ばれる前には、僕達が神と戦うことになるとは思いもしなかった。
堕天使幹部コカビエルから始まり、魔王の血を引く白龍皇や魔王の末裔が三人がかりときて、あろうことか今度は神を相手にするんだ。
僕達グレモリー眷属も、いきつくところまで来た気がするよ。
「……祐斗さん、ここにいましたか」
と、そこにシャルロットさんが近づいてきていた。

……思えば、彼女も相当に精神的に負荷がかかっているだろうね。
「大丈夫ですか？　こう言っては何ですが、一番実戦経験が少ないのは貴女ですし」
実際そうだ。
シャルロット・コルデーとはただ一度の暗殺で歴史に名を刻んだ少女。それはすなわち、殺しの経験はあっても殺し合いの経験は一つたりとも持ち合わせていないんだ。
一度だけとはいえあの時点で殺し合いを経験していたイッセー君の方が、戦闘という意味では経験者だろう。ある意味で彼女は最も戦闘の素人と言ってもいい。
だから少し不安に思っていたけれど、シャルロットさんは静かに首を振った。
「祐斗さんこそ大丈夫ですか？　肩に力が入りすぎている気がしたので、気になりました」
……まさか逆に気遣われるとはね。
というより、気を張って入るけどしょい込みすぎてはいない、ちょうどいい緊張具合な気がしてきたよ。
「私は確かに命を奪い合う戦場の経験は少ないですが、それでも処刑された経験も、人の命を自分の意志で奪った経験もあります。あの時決めた覚悟は後悔を生みましたが、殺し合いに参加することで臆病風に吹かれては、恨む側も苛立つでしょう？」
その毅然とした態度に、僕は自分の考え違いを訂正する。
彼女は確かに歴史に名を刻まれるに値する傑物だ。サーヴァントという存在を、僕は改めて強く意識する。
そんな彼女が支えたいと願い、その為だけの亜種禁手に覚醒させるだけのイッセー君。
リアス部長や朱乃さんに小猫ちゃん。アーシアさんにゼノヴィア。あとフェニックス家のレイヴェルさんもかな？　最近だとヒマリさんやヒツギさんも意識しているみたいだし、罪作りな男だよ。
僕がイッセー君のことを考えて苦笑していると、シャルロットさんは小首を傾げた。

「どうしましたか？」
……そうだね、しいて言うなら―
「いえ、イッセー君と仲間になれたことは、僕達にとって本当に喜ばしいことだと思いまして」
その言葉に、シャルロットさんはちょっとだけ呆気に取られ―
「……ええ、本当に望外の幸運です」
―心底同意するように、綺麗な微笑みを浮かべた。

九成Ｓｉｄｅ

「……それは良いことなのか悪いことなのか」
俺はイッセーに、朱乃さんに夜這いされたことを聞いてそう返した。
いや、本当にどう答えたらいいのかちょっと悩む。
「思い残しがないようにしたいという意味でも、精神的な不調を死戦に向かう前の何とかしたいという意味でも、そういうことをするというのは一つの選択肢だしなぁ」
「何言ってんだよ。そんな理由でそんなことするなんて可哀想じゃねえか！」
イッセーはそう言うが、しかしなぁ。
「常に大規模な戦闘で全員生還ってわけにはいかないだろ？　心残りがないようにするっていうのは、割と大事なことだと思うぜ？」
いやホント、そこは大事なことだと思う。
人はいつか必ず死ぬし、こんなことをしていると本当に何時死ぬか

分からないんだから、心残りを作らないように備えるのは大事な気がするんだが。
「死んでもいいようにする暇があるなら、絶対に生き残る為に頑張る方がいいと思うけどなぁ」
「それで必ず生き残れるほど、現実は優しくできてないって話だよ」
イッセーにそう返してから、俺はふと気づいた。
そういえばこいつ、本当に周りの恋慕に気づいてない節があるからなぁ。
俺がなんていうか冷めた目を向けていることに気づいたのか、イッセーがむっとした表情を向けてきた。
「……なんだよ」
「いや、お前はもうちょっと周りの女性陣に真摯に向き合った方がいいって思っただけだ」
いっそのこと今指摘したいが、指摘して困惑するとロキ相手に致命的な隙になりそうだ。
どうしたものかと思ったんだが、その時気配が変わった。
『正面からくるとはな』
「中々剛毅なようだ」
タンニーンさんとバラキエルさんがそう呟く中、俺達の前の空間が歪み、そこに巨大な狼を従えた男が現れる。
そして俺達が身構えようとしたとき、更に別の個所の空間が歪んだ。
「はっはっは！　妾が来たぞ！」
そんな声を響かせて、巨大な飛行船と先端近くに立つ幸香の姿が現れる。
フェンリルが鼻先を動かしながらそちら向くと、それに呼応するようにヴァーリを含めた数名が姿を見せた。
ヴァーリと共に現れるのは、ローブを纏った細身の男と、北欧風の鎧を付けた一人のごつい男。
細身の男は僧侶二駒で転生したロッキーで、ごつい男は騎士二駒で転生したザンジュだったな。

その姿を見て、ロキは怪訝そうな表情を浮かべる。
「覚えがありそうな気配だが、何者だ？」
その問いに、細身の男が苦笑を浮かべる。
「まあ、悪魔に転生してるから肉体面は別物だしねぇ。分からないのは無理ないか」
「それはそれで不満だがな。オーディンには俺にしたことを後悔しながら死んでもらいたいのだが」
そんな正反対の反応をした二人を見て、ロキは何かに気づいたのか不快そうな表情を浮かべた。
つまり知り合いか何かなのか？
「……なるほど、貴殿はホグニ王か。逆恨みはいただけんな」
ホグニ王……って！　アースガルズの神々によって永遠の殺し合いをされる羽目になった、あのホグニ王か！
そういえば、オーディン神に振り回されている時にイッセー達と話したな。
俺が思い出していると、ホグニ王は憎悪の表情を浮かべ、一歩前に出る。
「はっ！　恥もなくそう言えるとは、やはり貴様らアースガルズの神々は死ぬべきだな！　貴様を殺したら次はオーディン、そしてその首を土産にフレイヤを切り刻んでくれる！」
「戦士としていつまでも高められるようになったことを恨むとは、しょせん人間などこの程度か。蘇り続ける殺し合いで洗練されたと思ったのだが、残念だな」
……流石和平反対派。思考が保守的すぎる。
あとホグニ王は流石にオーディン様に任せたい。責任取ってくれません？
俺がそう思っていると、ロッキーの方は相手の馬鹿にする表情を浮かべる。
「おやおや、面倒な奴を誤魔化す為に、自分扱いされた人は言うことが違いますなぁ」
そんな挑発に、ロキの肩がピクリと震えた。

なんだ？　凄い殺気が漏れ出ている……ぞ？
「そうか。貴様……ローゲか」
ろ、ローゲ？
聞き覚えの無い名前に、ロスヴァイセさんが何かに悟ったかのように声を張り上げた。
「ローゲ!?　千年以上前の、例の男が転生していたというのですか!?」
「知っているんですか!?」
イッセーが声を上げると、ロスヴァイセさんは歯噛みしながらうなづいた。
「かつて優れた幻術によって、アース神族だけでなくヴァン神族や巨人達すら振り回した魔法使いです。ただ人一人に振り回されたことを隠す為、意図的に伝承でロキ様と同一視されるようにしていたと聞いています」
「……そういえば、そういうサガだったか戯曲だったかがあったわね。そう、そういうこと」
リアス部長が感心していると、ロキは苛立たし気にしながらもため息をついた。
「よもやサーヴァントという形で呼ばれるとはな。忌々しいことだ」
「えぇそれはもう。神々を翻弄したっていうのに、あんな変則的な真似をされれば一発かましたくもなりますからねぇ？」
殺気と殺気がぶつかり合う睨み合いが始まる。
な、なんかややこしいが……これはチャンスだ。
「いいでしょう。では戦いを始まる前に、場所を変えるわよ！」
リアス部長が声を張り上げると共に合図を送り、転移術式が発動する。
……さて、それじゃあそろそろ本番といくか！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そして、アヴェンジャーのサーヴァントたるジャンヌ・ダルクは、ロキから離れたところにいることに気が付いた。
その島は水滴のような形をしており、ロキ達は膨らんだ部分の中心近くだが、こちらは狭まった部分に位置している。
そして、アヴェンジャーは因縁の相手を視界に収める。
「ピエールの狗。なるほどねぇ、私の相手をしてくれるってわけ？」
「……申し訳ないですが、暗部の長として正々堂々とするわけにはいきません」
その言葉と共に、クロード・デュ・リスの周囲に数十名の戦士が現れる。
それは教会の戦闘服を着た者だけでなく、デビルレイダーすらいた。
そんな彼らのカバーを受けながら、クロード・デュ・リスは聖槍を具現化する。
「貴女の好きにはさせません。私の責任は果たさせてもらいます」
それに呼応するように、ジャンヌ・ダルクは炎を身に纏う。
「そう。ならあんたを殺してから、思う存分復讐するわ！」
そして、戦闘は開始される。

神威動乱編　第二十八話　悪神軍団総出撃

和地Ｓｉｄｅ

転移されたのを確認して、俺は素早く変身体制をとる。
『ＳＡＶＥ』
『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……』
「変身！」
『ショットライズ』
『サルヴェイティングドッグ！　Ｏｌｌ　ｌｉｇｈｔ　Ｉ，ｍ　ｇｕａｒｄｉａｎ　ｏｆ　ｈｕｍａｎ』
集団戦が基本になる以上、俺のガードだけが固まるディフェンディングタートルよりこっちの方が便利だ。というか、基本性能もこっちの方が高いしな。
そして周囲を確認すれば、でかい飛行船から大量に敵が戦力を投下してくる。
星辰体感応合金（アダマンタイト）製の装備を身に着けた星辰体感応奏者（エスペラント）が、英雄派がぽこじゃか投入していた魔獣を引き連れてぞろぞろと。
星辰体感応奏者（エスペラント）は適性がないとなれないはずなんだが、あれだけの数を用意するとはやるじゃないか。
「ふむ。どうやら神を相手取るだけあって数は用意しているようだな」
ロキは感心した風にそう言うと、不敵な笑みを浮かべながら俺達を見下ろす。
急に転移されたってのに動じてもいない。これが余裕か油断のどっちかは、後で分かることだろう。
カズヒ姉さん達が来るのはまだ後だ。だからこそ――
「リヴァ先生、そっちは大丈夫か？」

『大丈夫。私は後でそっちに向かうから、その時はよろしくね？』
通信越しにリヴァ先生が伝えると同時、更なる動きが発生する。
遠く離れたところから、数ｋｍほど離れているのに分かるような太さの水柱がいくつも立ち上がる。
それと同時に俺達にほのかな燐光が宿り、少しだが俺達の身体能力などが強化される。
よし。どうやら作戦の第一段階は成功したようだ。
「……なるほど。戦の神の娘であることを利用し、あの八百万やオケアニスと連携することで、島全体に戦士の加護を与えたということか。木っ端といえど神が三柱も揃っているなら、これぐらいはやってもらわねばな」
何が起きたのかを、ロキはすぐに理解していた。
日本の神である玄隆さんと、海の神であるアニアスさん。日本の小島であるここに二人がフルで力を回すことで、戦の神でもあるオーディン様の娘であるリヴァ先生が、この辺り一帯の味方に加護を与えて能力を高める。
これが作戦における切り札の一つ。
だが、ロキはこの程度では怯まない。
「……まあいい。手間はかかるが皆殺しにすればいいまでだ。……ここにきてはもはや問答無用。オーディンにはこの世から退場してもらうとしよう」
「危険な考えだな。貴殿にこそ世界の命運を左右する場から退場してもらわねば」
ロキの言い草にバラキエルさんが苦々し気にそう呟く。
それに対して、ロキもまた苦々し気な表情を返してきた。
「こちらのセリフだ。各神話勢力の和議など忌まわしい事態、お前達三大勢力の和議から始まったと知るがいい」
そういうと、ロキは片手を上げ、そして下す。
それに呼応するようにフェンリルが動くが、しかし遅い。
その瞬間、待機していたデビルレイダー部隊が一斉にグレイプニルを投げ飛ばす。

「グレイプニルか。だが既に対策は―」
そう。グレイプニルは神話においてフェンリルを拘束する鎖だが、ロキが対策をしていないわけがない。
だがイッセー達の努力でミドガルズオルムが情報提供してくれたことで、ダークエルフによる強化が施されているのなら話は別だ。
フェンリルも油断していたのだろう。その拘束は成功し、そして動きが封じられる。
「よっしゃぁ！」
「これなら……！」
イッセーが歓声を上げ、リアス部長も唸る。
……だが、ロキはいまだ余裕の表情を浮かべたままだった。
「ふむ。どうやらオーディンを殺すまで出し惜しみをする……とはいかぬようだな」
「ほぉ？　この状況で余裕とは、面白い物でも見せてくれるのかのぉ？」
その瞬間、幸香が既に展開していた魔獣を差し向ける。
向こうも腕を上げたらしく、その魔獣達の殆どはグリフォンのような姿をしていた。
数十体のグリフォン型の魔獣がロキを囲みながら仕掛けるが、ロキは雑に指を鳴らす。
その瞬間、一斉に紅蓮の炎が巻き起こり、魔獣達はそれによって誘爆した。
その爆発を、幸香もロキも余裕の表情で見る。
どうやらお互い、あくまで様子見程度のようだ。メジャーの神に新規神滅具候補なだけあり、スケールが違う。
そしてロキは爆発を少しだけ観察すると、幸香の方を振り向いた。
「なるほど。貴様の星、要は窒素爆薬人形運用能力といったところか」
「……ほぉ、よくぞ見抜いた」
ど、どういうことだ？
「……なるほど、そういうことか」
バラキエルさんは何かに気づいたらしいけど、一体何がどうなって

いるんだ？
「どういうことですの？」
　こちらは広範囲戦闘になると見越してボーイングイーグルで変身したヒマリが、首を傾げながら手を挙げて質問する。
　それに対して、バラキエルさんは頷くと残っている人形を見据えた。
「窒素を1、７００度の高温かつ１１０万気圧で圧縮するとできるポリ窒素は、プラスチック爆薬の五倍以上のエネルギーを持つ。安定した状態で取り扱うことはできない為兵器としては未完成だが、星辰光でそういう能力を獲得することはあり得る。これはそういう話だ」
　な、なんという。
「ふむふむ。この金色覇道（ゴルディロード・マケドニア）の後継者よ、新天地を征けを一目見ただけで気付くとは、妾は神をなめていたようだのぉ」
　幸香はそう言いながらも余裕の表情だった。
　そしてそんな幸香に対して、ロキが指を向ける。
「では返礼だ。心して受け取るといい」
　その言葉と共に、大規模な魔方陣がいくつも展開される。
　やっぱり仕込みは万全だったか。ここからが本番ということか！
「気をつけろ！　この期に及んで手ぬるい真似をするとは―」
　そう言いかけるバラキエルさんの前で、魔方陣から大量に人間サイズの人型が出現する。
　機械兵器と思われるそれらは、それぞれが数体規模でチームを組んで迫ると、魔法攻撃や剣による戦闘を開始する。
　デビルレイダー部隊がそれを迎え撃ち更にＤＦが迎撃を行うとした時、更なる戦力が現れる。
　ＤＦと同じぐらいの巨体を持ち、全身を氷の鎧で包んだ巨大な人形兵器が、氷を武器の形に構成してＤＦと真っ向からぶつかり合った。
　更に横合いから漁夫の利を狙わんと、禍の団の星辰奏者が魔獣達を引き連れて攻撃を開始する。
「どうかね？　アースガルズが覇権を握る為に開発したエインヘリヤルマギアとヨトゥンヘイムマギアは」

一瞬で大乱戦となる中、ロキは不敵な表情を浮かべながら自陣の人形達を自慢するように両手を広げる。
「ヨトゥンヘイムマギアは我の制御があってこそだが無人での運用が可能。また、エインヘリヤルマギアは契約を交わした者の異能や魔法を劣化再現することが可能でね。……オーディンの対応に不満を持ち、ミザリの暴虐でそれを溜め込んだ者達が協力してくれたよ」
「なるほどのぉ。あれで和平にヒビが入ればとも思ったが、どうやらそこそこ成果はあったようじゃ」
幸香が感心するけど、ちょっとこっちはまずいぞそれは。
下手するとアースガルズ、内乱でも起きているんじゃないか!?
「まあ、本来は勇士達の随伴がエインヘリヤルマギアの役目なのだが。流石に主神に直接弓を弾く真似は気圧されたようだ。……我がオーディンを討てば違うがね」
なるほどな。つまりロキをぶちのめせば、内乱になることはまずないし奴らも黙るということか。
尚更負けてられないな。
俺は気合を入れると、一歩前に踏み出そうとし―
「そして父を守る為に現れるがいい、スコルにハティ！」
―カウンターをぶちかますように、でかい狼が現れた。
おいおい冗談だろ。オーラとサイズは一回り小さいが、あれは……フェンリル!?
「はぁあああ!?」
「驚いたかね？　巨人族の女を狼に変化させ、フェンリルと交わらせて生まれた子だ。流石に一歩劣るが、十分神にも脅威となる牙と爪を持っているぞ？」
驚愕するイッセーに、ロキはそう自慢げに嘯いた。
そして同時に、両手にプログライズキーをごつくしたようなものを構える。
「そしてこれならある意味フェンリル以上だ！　……実装！」
『『Ｆｅｎｒｉｓｕｌｆｒ』』

その瞬間、スコルとハティにレイダーのような装甲が装着される。
背中にはでかい大砲が備え付けられ、後ろの太ももにはミサイルランチャーがつけられている。
そして大砲が飛行船に向けられると、一気に火を噴いた。
「おっと！」
「させん！」
ローゲとホグニがそれを薙ぎ払うが、衝撃はこっちにまでびりびり響く。
おいおいおいおい。フェンリルの子供をレイダーにするとか、発想が神というより悪魔的だろ。
「本来は近接型のフェンリルに遠距離戦闘能力を与える為だったフェンリスヴォルフレイダーだが、我が子が臍を曲げそうだったのでな。だがスコルとハティの戦術的価値をフェンリルに近づけることはできた」
そう胸を張るロキの後ろで、更に魔方陣からでかい物が現れる。
全長十五メートルの蛇のような龍は、明らかにただ者でないオーラを秘めている。
『このオーラ、ミドガルズオルムに似ている……！』
「ミドガルズオルムの量産型だなんて、何時の間に!?」
タンニーンさんとロスヴァイセさんが面食らう中、ロキは更に小型の魔方陣を展開する。
そこから射出されたのは、スコルとハティに投げつけたのと同じごついプログライズキー擬き。
ってまて。それってつまり―
『『『『『『『『『Ｊｏｒｍｕｎｇａｎｄｒ』』』』』』』』』
―やっぱりか!?
展開された装甲は量産型ミドガルズオルムにまとわり、量産型ミドガルズオルムは全長１００ｍ近い巨大な鋼の龍と化した。
その巨体が遠距離戦を仕掛けるデビルレイダーやＤＦから味方のマギアを庇い、そして見事に無傷ではじく。
『ちっ！』

「させないわ！」
咄嗟にタンニーンさんやリアス部長が攻撃を放つが、装甲に当たる前に何かにぶつかって減衰され、軽いノックバックやかすり傷程度にとどまらせた。
「フハハハハ！　重装甲と電磁バリアを併用するヨルムンガルドレイダーに、その程度の攻撃は通用せんぞ！」
ロキがそう嘲笑うと同時、指を鳴らす。
その瞬間、ヨルムンガルドレイダーが巨体からは想像もできないようなスピードでこっちに突進。
慌てて躱すが急旋回して、こっちに向かって火炎まで放ってきた。
「なめるなぁ！」
『ＳＡＶＥ！』
『セイヴィングブラスト！』
撃ち落とすがこれまたやばい衝撃だ。
こいつら、下手な上級悪魔より遥かに強い！
「ついでに言うとローレンツ力や地磁気との干渉で動きも早い。大きく早く頑丈な壁は、戦いにおいて厄介だろう？」
そうロキが得意げに吠えるが、だが世の中はそんなに甘くない。
こっちもあっちも、なめられっぱなしで終わるわけがないわけで――
「……なるほど。ではそろそろ俺も混ざるとしよう」
その瞬間、ロキ側やこっち側の攻撃がまとめて半分になる。
そう、力を半減し己に取り込む神滅具の担い手。
白龍皇ヴァーリ・ルシファーが、飛行船から降りてロキに突撃を駆ける。
「漸く動くのか。待ちくたびれたぞ！」
『Ｒａｇｎａｒｏｋ』
即座に神具アスガルドライバーを装着し、ヴァナルガンドウルフプログライズキーを装填する。
「変身！」
『アースライズ』
「禁手化（バランス・ブレイク）」

『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒａｋｅｒ！』
『ヴァナルガンドウルフ　Ｉ，ｍ　Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ』
その瞬間、間違いなくこの場で最も強いだろう二強が、二回目の激突をはじめ―

「―そうはいかないわ。禁手化（バランス・ブレイク）」

その声と共に、戦場に大樹が生まれる。
構成するのは巨大な氷。氷でありながらしなるという現象まで引き起こした、まさに大樹と形容するべき巨大な氷の木が、戦場にいくつも生えてきた。
そして俺達はその瞬間、あの二大巨頭に匹敵するだろう力の本流を感じ、誰もが一瞬だが意識をそちらに向けてしまう。
そこにいるのは氷を司る蠅の女王。
信じられないことに聖と魔を融合させたオーラを放ちながら、氷の大樹に祝福されるように、マルガレーテさんが君臨していた。
聖魔の剣と銃を持ち、聖魔の蠅を従えて、氷の大樹の女王が、悪神ロキと白龍皇ヴァーリを睨み付ける。
「……責任はきっちり果たすのが大人の務め。氷樹（コキュートス・バース・クリフォニア）により至る聖魔人で叩きのめすわ」
「これはこれは。貴殿に並び立てる猛者のようだな、ヴァーリ・ルシファー」
「ふふふ。良い隠し玉を連れて来ているじゃないか。ルシファーにベルゼブブをぶつけるとは―」

ロキに振られたヴァーリが、知らないとはいえ余計なことを言った。
そしてその瞬間、ヴァーリの顔面に銃弾が放たれる。
拳で払うヴァーリだが、絶大なオーラはまるで呪うようにその装甲を砕いた。
その感触を味わうようにしながら、ヴァーリは感心したような雰囲気を示す。
「なるほど。宿主の技量次第で様々な弾丸を生成できる創造系神器にも等しい属性系神器、魔性滅(ディバインライフル・ファクトリー)す聖別銃か」
「ええ。龍殺しは本来難しいそうだけど、私はこっちがあるから得意なの」
そう答えながらマルガレーテさんが軽く振るう剣を見て、今度はロキが目を細めた。
「聖なる光を操る龍殺しの聖剣を具現化する、聖光宿(ディバインサーベル・ゲオルギウス)る滅龍剣か。神滅具を宿すルシファーに、神器を複数持つベルゼブブをぶつけるとは、皮肉というよりは粋というべきかね？」
ロキまで余計なことを言って、今度は青い吹雪がロキに襲い掛かる。
それをロキはあっさり振り払うけど、マルガレーテさんの殺気が五倍ぐらいになっている。
「……どいつもこいつもベルゼブブベルゼブブとうるさいのよ。プルガトリオ機関を抜けてノア様の眷属になった以上、私は魔王(そんな奴)じゃない」
その怒りに呼応するように、マルガレーテさんが纏うオーラが跳ねあがる。
今のでなんで怒るのかが分からない二人に対して、マルガレーテさんは怒りに身を震わせながら戦意を叩き付けた。
「私は人間からの下級転生悪魔、マルガレーテ・ゼプル！　もう一度言うわ、人間から転生したばかりの下級悪魔よ、間違えないで！」
その言葉と共に、マルガレーテさんは本格的な戦闘態勢に入り―

「行くぜもらったぁあああああ！」

―その真上から、イッセーがミョルニルレプリカで強襲を仕掛けた。

よっしゃ行けぇえええええええっ!!!

神威動乱編　第二十九話　病原菌

イッセーＳｉｄｅ

よっしゃ、一気にこれで決めてやらぁあああ！
そんな気合を入れながら、俺たちはミョルニルレプリカをロキに叩き付ける。
……なんでこんなことになったのかというと、作戦会議のついででロキを叩き潰すプランがいくつかできていたからなんだよね。
で、その際フロンズさんが提案したプランＡがこれ。
『ロキ神もミョルニルの凄まじさは理解している以上、レプリカと言っても危険視はするでしょう。確実に当てる為にはある程度のプロセスが必要かと』
そう前置きしたフロンズさんは、こんなことを言ってきた。
『まずはマルガレーテをロキから見て2時の方向に向かわせてから禁手を発動させます。これで彼は注目したうえ、シャルバ・ベルゼブブによる襲撃の一件を知っていれば魔王扱いをするでしょう』
地雷ってなんだか分からなかったけど、ブちぎれるぐらい魔王扱いが嫌なのか。
まあ、名門の家柄って結構大変みたいだし、そんなの嫌だって人は多いだろうからそういうことなんだろう。
で、そこまで読んでいたフロンズさんは、とんでもない立案をした。
『マルガレーテはこれに対して激高していい。むしろ激高した怒りでとにかく出力を上げてくれたまえ。それをデコイとして兵藤一誠をロキから見て9時の方向から突貫させる』
とまあ、分かり易い陽動作戦だった。
『その際兵藤一誠には、宿した状態のシャルロット・コルデーが持つク

ラススキル「気配遮断」も使用してもらう。この二段構えで強襲の成功確率を可能な限り高めた初手速攻がプランＡとなります』

ということだ。意外と上手くいったと思う。

まあちょっと卑怯な気もするけど、これも兵法だよね!?

『なお失敗した時は、ロキとヴァーリは勝手に戦うだろうから、マルガレーテに対応を任せて一旦下がり給え。その時はこちらのプランＢで可能な限り削ることにするとも』

という感じだった。っていうかプランＢも大概やばいっていうか、大王派も恐ろしいなって感じだ。

だけどプランＡで片付くならそれに越したことはない。っていうかここまでは上手くいっている。

だからこれで―

「なめてもらっては困るなぁ！」

―ってはじかれたぁあああ!?

『イッセー!? いえ、これはミョルニルが……っ』

シャルロットの戸惑う声で、俺もすぐに気が付いた。

ミョルニルから、雷が出てこない!?

ちょっと待ってちょっと待って！ こんな重いハンマーってだけでも大変だったのに、寄りにもよって雷が出ないとかまじで勘弁してってば！

どうすんだよ、これえええええ!?

欠陥品ですか！ 欠陥品つかまされたんですか！ ふっざけんなぁあああああ！

俺がちょっとパニくってると、ロキがなんていうか呆れた雰囲気を出してきた。

「……レプリカとはいえミョルニルを出されるとは思わなかったが、貴殿が振るうのでは片手落ちだ。ミョルニルは清い心の持ち主が振るう時に雷を放ち、また羽のように軽く使えるのだ。主の乳首をつついて至るような貴殿の邪な心では、とても重くなっているのではないか？」

完全に当たってます！ 当たってます！

いやちょっと待て！　つまりスケベな俺が使っても意味がないってか!?
最初に言ってよ、もぉおおおおおお!!
「下がってください！　プランＢに移行します！」
マルガレーテさんが蠅で包囲攻撃をしながらそう言ってくれたので、俺は我に返ってすぐに距離をとる。
くそったれ！　ミョルニルが使えないんじゃプランＡは意味がない。俺の能力じゃ一歩劣るし、今は下がるしかないか。
なんかすっごく悔しいというか、申し訳ないって感じしかしない！
俺がちょっとへこみながら皆のところに戻ると、リアス部長が近づいてくる。
「大丈夫、イッセー？　こんな形で失敗するなんて私も思ってなかったから、気にしすぎちゃ駄目よ？」
『その通り。この手の事態が予定通りで終わる方が少ないのだ。ミョルニルに関してはその仕様を知っている側が指摘しなかったのも問題だし、何より我らにはプランＢがある。……下がっていたまえ』
フロンズさんも通信越しにそう言ってくれた。
うう、気遣いが心にしみるぅ。
でもこうなると、俺はあの激戦に入るにはちょっと足りないか。
頼みます、マルガレーテさん！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

状況の推移に対し、マルガレーテはためらうことなくプランＢに移る為に戦闘を開始する。

忌々しいが目の前の二人に対応するには、真っ向から戦える戦力が必要不可欠。階級的に指揮をする都合がある以上、最上級堕天使バラキエルや最上級悪魔タンニーンより、下級悪魔である自分が動くのが妥当なのだ。

元より、転生悪魔とは主の戦力として戦う責任を負うからこそ、上級悪魔の眷属として活動できるのだ。それを否定するような真似は断じてしない。

故に、呼吸を整えてロキとヴァーリを相手取って攻撃を開始する。

聖なる氷を外殻として、魔力の蠅を数十数百に亘り生成し、指示を出す。

時に分散して十字砲火。時に編隊をくんで収束攻撃を叩き込むことで、二人の意識に村を作り上げる。

そしてその瞬間を逃さず、マルガレーテは切り込んだ。

優先目標はあくまでロキだが、隙あらばヴァーリも狙って攻撃を叩き込む。

それをロキもヴァーリもいなしながら、お互いにそれぞれを敵として攻撃を放つ。

「……ふふ……ふははっ！」

そんな圧倒的存在による頂上決戦を繰り広げながら、マルガレーテはヴァーリの笑い声を耳にした。

この極限環境で、むしろ楽園にいるかのように笑える神経に、マルガレーテは嫌悪感すら覚える。

それを知ってか知らずか、ヴァーリは歓喜を全身で表しながら、攻防のペースを上げていった。

「素晴らしい、素晴らしいぞ！　プログライズキーを利用して己を高めた悪神ロキ殿も、幾重もの神器を宿すベルゼブブの血を受け継いだマルガレーテ君も！　禍の団に鞍替えしたかいがあるってものじゃないか！」

「まだ……言うかぁ！」

その気がない罵倒に殺意が燃え上がるが、それがいけなかった。

「隙ありだぞ、諸君！」

ロキがその隙をついて多重魔法攻撃を仕掛け、ヴァーリと共にマルガレーテも弾き飛ばされる。
そしてお互いの距離が開けて睨み合いになる中、ロキは顎を撫でつけながら感心していた。
「ふぅむ。粗削りながら全力かつ真っ直ぐな赤龍帝も中々だが、優れた技術と才覚を織り交ぜる貴様達も中々だ。悪魔でなければ勇士として誘いをかけるところだったな」
「それはどうも」
ヴァーリはその言葉に機嫌をよくするが、マルガレーテは不機嫌にしかならない。
アースガルズの文化とは合わないとは思っていたが、その文化に照らし合わせて褒められてもうれしくもなんともないと改めて実感する。
「……永遠に殺し合いをする毎日なんてごめんよ。そんなことを栄光だと思える連中なんかと一緒にしないで」
殺意を込めて睨み付けるが、ロキは肩をすくめてそれを受け流す。
分かっていたからそこまで怒りを覚えないが、マルガレーテは呼吸を整えて冷静さを取り戻しながら、嫌悪感だけは隠せない。
そんなマルガレーテの様子に、ヴァーリはむしろ不思議そうな表情を浮かべる。
「……全く、余裕があまりないね。偉大なる魔王の血を宿すだけでなく、それだけ強力な神器をいくつも宿す。俺とは別の意味で奇跡の具現を示しておきながら、なんでそこまで切羽詰まれるのかが分からないね」
心底からの疑問。それがよく分かるほどに、ヴァーリの言葉には馬鹿にする響きも挑発の意志もなかった。
だからこそ、マルガレーテはそれが気に食わない。
「……だったら、私も聞きたいことがあるけどいい？」
「ふむ、どうぞ」
許可を得たので、聞いてやろう。
万が一ブちぎれて覇を使われると面倒なので、最低限覚悟を決めて

から、マルガレーテはそれを問う。
「なんでそんなに恥ずかしい生き方をして、死にたくならない？」
本心から、挑発も罵倒もない渾身の疑問を、理解できないからこそ激高する可能性を考えながらといかけた。
「……なんだと？」
怒りはあるが、それ以上に意味を理解できないといわんばかりのヴァーリの返しに、むしろマルガレーテこそ理解ができなかった。
「いやだって、自由や権利っていうのはいつだって義務や責任を払ってこそのものでしょう？　それを怠っているのに何で恥ずかしくないのか、逆にそっちが分からない」
マルガレーテはそれが分からない。理解できないと言ってもいい。
「水も安全もただじゃない。だから持つ者は見合った分だけ払う義務があるし、力にはどうしても責任が付きまとう。当たり前のことじゃない」
それはマルガレーテにとって呼吸も同然の価値観だから。
「力の責任は使う使わないの話じゃない。使うならそこで生まれる影響に、使わないなら使った時の可能性を捨てることに、持つ者は使おうが使わなかろうが責任に向き合う義務がある」
それは人が社会に生きる大前提。それがなくなれば文明社会は崩壊する。
少なくとも、マルガレーテ・ゼプルにとってそれは社会に生きる為の最低限の対価だった。
だからこそ、マルガレーテにはヴァーリが理解できない。
「ルシファーの一族という権力も、神滅具という武力も、責任から逃げてたらただの恥知らずでしょ？　なのに王族（ルシファー）として活動もしないでルシファーを名乗って、ただ自分の楽しみに為だけに力を振るうなんて、そんな生き方してて恥ずかしくないの？」
本当に理解ができないのだ。
「……なるほどな。なら俺はこう返そう」
だからこそ、ヴァーリ・ルシファーの返答もまた理解できない。
「折角強い力を持ち合わせておきながら、奴隷みたいに生きている君

こそ恥ずかしくないのかい？」
まるで理解できる言語に聞こえるだけの異星人の言葉のようだと、マルガレーテはそう思った。
「俺が守るとするなら、それは俺が守りたい奴だけさ。力を持っているのなら、もっと自由にあるべきだろう？　なのに誰かのご機嫌取りに終始して、余計なものに縛られるなんて、俺からすればその方が恥ずかしい」
異次元の言語がたまたま人間の言語のように響いている。そんな印象しか感じない。
嫌悪感を通り越して気持ち悪い。
マルガレーテにとって、ヴァーリ・ルシファーとは嫌悪の対象すら通り越した。
「もっと自由に生きるといい。誰に恥じることなく誇り高く生きる。まずはそこから始めるべきだと俺は思うよ？」
この瞬間、彼女にとっての彼の存在は明確に定義された。
「……病気よ、あなた」
そうはっきりと、マルガレーテは宣言する。
思わず面食らうヴァーリに対して、マルガレーテはもはや嫌悪感すら投げ捨てた。
「病人じゃなくて病気。人が人として当たり前にすべきことを投げ捨てるだけじゃなく、他人にまでそれを伝播させる病原菌。そっか、魔王血族ってそういう持病になるんだ。他の悪魔にも伝染したらまずいわね」
人間は病気というものに対して憎しみを抱いたりすることは少ない。嫌悪という感情を向けないこともある。
ただ人類にとって不利益だから避けるなり、根本から排除することを選ぶ。少なくとも、マルガレーテはそうだった。
「……うん。こうはならないように気を付けないと」
もはやマルガレーテは、ヴァーリ・ルシファーを個人として認識することすら半ばやめている。
ゆえにもはや対話をする気もかけらもない。

何故なら、病気とは会話するものではなく―

「……じゃあさっさと仕事をしないとね。プランBで成功しなかったらプランTなんだから」

―ただ徹底的に除去する物なのだから。

神威動乱編　第三十話　三大勢力迎撃開始！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ヴァーリ・ルシファーは、怒ればいいのか少し良く分からない精神状態だった。

ベルゼブブの血を宿したマルガレーテのよく分からない問いかけに、むしろ気遣いすらして答えたらこれだ。

徹底的に事務的な対応であり、また機械的ともいえる対応を取られながら、同時にロキもまた三つ巴の戦闘を行っている。

正直対応が訳が分からなさすぎるが、これはもうこの際どうでもいいだろう。

滾る相手が手加減抜きで仕掛けてきているのだ。これはもうそれでいいということにしよう。

そして問題は自分が一番不利だということだ。

このままいけば自分が真っ先に脱落するだろう。戦いが命がけなのは当然で、だらこそ滾ることもある。

だがどうせなら勝って生き残りたいというのは当然だろう。何より滾る相手だからこそ、勝ちたいと願うのだ。

だが残念なことに、現状最も弱いのは自分だった。

ロキは元々が圧倒的に強いだけでなく、更にプログライズキーによって強大な力を獲得している。

マルガレーテは聖と魔を融合させた魔王として絶大な力を放ち、更に禁手によって顕現させた氷の大樹からも支援攻撃を受けている。とどめに銃からは龍殺しだけでなく神殺しすら放たれていた。

間違いなく、今は自分が一番弱い。これは実に勘弁願いたいところだ。

故に―

「アルビオン。どうやら俺達も至る時だ」
『ぶっつけ本番か。だが、龍の成長とは実戦であってこそだろう』
そんな苦笑交じりの相棒の声に、ヴァーリは覚悟を決める。
『さあ、示して見せろヴァーリ・ルシファー。お前こそが現在過去未来全てにおいて最強の白龍皇になれると称された、その片鱗を今ここに！』
その相棒の激励を胸に、ここにヴァーリ・ルシファーは更なる飛翔を果たす。
「禁手化（バランス・ブレイク）……否！」
その閃光はもはや、ただの禁手化にとどまらない。
「これは⁉」
マルガレーテはその在り方に驚愕し、
「なんだと？」
ロキすらその緊急事態に警戒の色を濃くする。
その二人の強者の瞠目を意趣返しとして、ここにヴァーリ・ルシファーは新たな領域へと足を踏み入れた。
「―禁手変性（バランス・チェンジ）、覇なす白龍の戦装飾（ヴァニシングメイル・クルーズドライブ）」
これまでとは外観の能力も異なる新たなる禁手を纏い、明星の白龍皇は君臨した。

和地Ｓｉｄｅ

そ、想定外が連発してきやがった。
切り札ともいえるミョルニルレプリカが思わぬ形で意味をなさないと思ったら、今度は追い込まれていたヴァーリが禁手を作り変えて

反撃に転じやがった。
「さぁ、俺を混ぜないなど釣れないことをしないでくれ！」
その猛威は明らかに性能がかなり上がっていて、さっきの通常の鎧感覚で対応しようとしたマルガレーテさんやロキが一旦吹っ飛ばされる。
最もすぐに立て直して互角の勝負にもつれ込んでいる辺り、どっちもまだ余裕があるようだ。
お、俺はどうしたもんなんだ、これは！
「……あの、和地」
と、隣から声がかけられて、俺はふと振り返った。
……なんで鶴羽がここにいるんだ？
「シトリー眷属と一緒に後詰じゃなかったっけ!?」
「い、意識が飛んで気づいたらこんなところに!?」
何がどうなってるんだこれは。
え、いやちょっと待って。
これはどうしたら―
「……久しぶり、和っち」
「漸く見つけたぜ」
―そんな時、聞き覚えのある声が斜め上から響いてきた。
咄嗟に振り替えれば、そこには灼熱と氷水を纏った二人の少女。
……あ～。粋な真似をしてくれるじゃないか、禍の団も。
「こんなことになるのは残念だけど、でもいい機会だから見てくれない？　私がどこまで強くなったか……っ！」
冥革連合筆頭、ヴィール・アガレス・サタン眷属。俺の大事な幼馴染、成田春奈。
「前はムカつくことを言われちまったからな。一発かましに来たぜ……っ！」
英雄派所属、アーネ・シャムハト・ガルアルエルの妹、ベルナ・ガルアルエル。
この状況で因縁のある二人を寄越してくるとか、伊達や酔狂をよく分かってる連中だよ……っ！

イッセーＳｉｄｅ

くそったれぇ！　なんかすっごい乱戦になってきてるじゃねえか!?

こっちはこっちでフェンリスヴォルフレイダー相手にてこずってる真っ最中だってのに、ヴァーリが新技引っ提げてきやがったじゃねえか！

「イッセー、そっちに行ったわよ！」

「了解です、部長！」

部長達の猛攻を回避しながら接近するフェンリスヴォルフレイダーに、俺はカウンターでアスカロンのオーラを纏った拳を叩き付ける。

それを牙で器用に受け止めたフェンリスヴォルフレイダーは、だけど衝撃を殺せずにちょっと吹っ飛ばされた。

「仕掛けるぞ、木場！」

「分かってるさゼノヴィア！」

その隙を逃さず木場とゼノヴィアが騎士のスピードで接近するけど、そこに背中の砲塔がグルンと回って照準をつける。

あっという間に一秒間に何百発撃ってるんだよってレベルの弾幕が張られて、木場達の接近が食い止められる。

その間に体勢を立て直したフェンリスヴォルフレイダーは、飛び上がって距離をとると、太ももに設置されたミサイルランチャーからミサイルをぶっ放してきやがった。

空高く舞い上がったミサイルは、こっちに向けて加速したかと思う

と空中で分裂して数十発に増えて襲い掛かってきやがる！
「朱乃、迎撃するわよ！」
「もちろんですわ！」
部長と朱乃さんが撃ち落とすけど、フェンリスヴォルフレイダーは、その隙に砲塔をどこかに向けると、でかい一発をぶっ放した！
ってあっちは!?
「美猴、横！」
「あん……とぉ!?」
もう片方とやりあっていたヴァーリチームに対してけん制しやがった。
と思ったら向こう側のフェンリスヴォルフレイダーも砲門をこっちに向けてやがる!?
「させないわ、アーメン！」
イリナが迎撃するけど、あいつらお互いに連携してカバーしあってやがる。
くそったれ、これはてこずる……っていうか今度はヨトゥンヘイムマギアが来やがった！
「畜生！　数が多すぎるし手強いのまでいるからちが明かない！」
思わずぼやくけど、そんなことをしてる間に今度はエインヘリヤルマギアまで！
数が多すぎる！　このままだと押し切られる！
くそったれ。ここまでだなんて―
「撃ち方はじめぇ！」
―そう思った瞬間、後ろから大量の弾丸が雷撃を纏って放たれた。
その射撃に敵のマギア達が倒れていく中、俺達をカバーするようにたくさんのデビルレイダーが姿を現した。
「お待たせしましたリアス様！　デビルレイダー第一大隊、ノア様の指揮のもと隊列を組み直しました！」
「ここからは我々も援護します！」
お、おお！　気づいてみればデビルレイダーやＤＦが、何時の間にか敵の戦力相手に少しずつだけど押して行ってる！

っていうかノアさんそっちの立て直しをしてたのか！　姿を見ないと思ってたけどやるな！
で、でもかなりやばい連中がごろごろいるけど、大丈夫なのか……？
俺はちょっと心配だったけど、デビルレイダーの隊長格は胸をどんと叩いた。
「どうぞ頼ってください。我々も、こういった時の為に準備を整えていたのですから！」
そう胸を張ると、デビルレイダー部隊は声を張り上げる。
『『『

かしのいでいた状況を本格的な反撃の波へと変えていく。
『『『

ヨルムンガルドマギアのうち一体を、内部の量産型ミドガルズオルムごと撃ち貫いた。

そしてその光景を、呆れと似た感情で見ている者達がいる。
「これはこれは、中々面白い小細工ですね」
乱戦が激化したことでフェンリスヴォルフレイダーから解き放たれたヴァーリチーム。
そのうちの一人であるアーサー・ペンドラゴンが眼鏡を持ち上げながら苦笑していた。
「そうねぇ～。よわっちぃ連中を集めて叩きのめすとか、効率が悪くないかしら」
黒歌もそうぼやくが、しかしそう思う者がいるのも仕方がないことだろう。
まごうことなき一騎当千の戦いに、有象無象を束ねることで打倒する。
ある意味で人間の本領を悪魔が取り入れた結果ではある。だが同時に、一騎当千が文字通り戦局を左右する異形の価値観では非効率的にも映るものだった。
「ま、あれはあれで面白そうだ。フロンズ達にはムカつかされてっし、今度はあっちの相手をするかねぃ」
そう言いながら、美猴は一歩前に出る。
良くも悪くも深く考えない性分である美猴からすれば、あれはあれで面白そうな相手ではある。
あれを指揮するフロンズには色々言われたこともあるし、腹いせや意趣返しも兼ねて少し遊ぶかと思い―
「……悪いけどなぁ、あんたらに余計な茶々入れさせるわけにはいかねえんだよ」
その足音に、三人はちらりと視線を向けた。

そこにいたのは三人の教会の戦士。
その姿を見て、しかしアーサー達はあまり興が乗らなかった。
「あなたですか。デュナミス聖騎士団の方以外は、帰ってくれてもいいですよ？」
すげなく言い放つアーサーだが、別に悪意があるわけではない。
そこにいるのはアニル・ペンドラゴン、ルーシア・オクトーバー、そしてヒツギ・セプテンバーの三人。
その中でヴァーリチームが興味を持っているのは、デュナミス星騎士団のヒツギだけだという、ただそれだけだ。
お眼鏡に叶う程度の戦闘能力がない以上、積極的に殺しに行く趣味もない。無駄死にがしたいのなら構わないが、好き好んで殺しに行く気もない。
ただそれだけのことだったが、しかしアニルは止まらない。
「そういうわけにはいかないんだよ。何より、ペンドラゴン家の者としてコールブランドは返してもらうぜ、アーサー……っ」
「やれやれ。私以上にコールブランドを使いこなせるものはいないでしょう？　宝の持ち腐れよりはましだと思いますがね」
冷徹な視線を向けて返すアーサーだが、アニルはアニルでそれを見て鼻で笑う。
その様子にアーサーが怪訝となったその瞬間―
「ペンドラゴン家から連れ出すのは、コールブランドじゃなくて女の方だろって言ってんだよ」
―その言葉に、アーサーの動きは固まった。
怪訝な表情を向ける美猴や黒歌は無視し、アニルは盛大に肩をすくめた。
「誤魔化せてると思ってたのかよ。ったく、そんな馬鹿にペンドラゴン家の至宝はもったいねぇ。……余計な横やりは入れさせねぇし、コールブランドも取り返す」
「……言って、くれますね」
突かれたくないことを突かれたのか、アーサーはアニルに初めて殺気を放つ。

仕掛ければこっちが確実に勝てる。これはそういう程度のものでしかなかったのだが―

「……ああ、そして物理的にもかましてやる」

『ＤＡＳＨ』

その音声に、アーサーは漸く警戒を覚える。

その時になって漸く、三人の腰にレイドライザーが装着されていることに気が付いた。

「……なるほど、自力で勝てないから道具に頼るとは、中々情けない真似をしますね」

「そういうセリフはコールブランドなしで暴れてから言いやがれ」

そう告げ、アニルは躊躇することなくプログライズキーをレイドライザーに装填する。

「実装！」

『レイドライズ』

そして展開されるは、チーターを模した鋼の装甲。

『ラッシングチーター！』

「んじゃぁ、そろそろ落とし前をつけてもらおうか」

その装甲越しに、アニルは戦意を滾らせる。

『Ｔｒｙ ｔｏ ｏｕｔｒｕｎ ｔｈｉｓ ｄｅｍｏｎ ｔｏ ｇｅｔ ｌｅｆｔ ｉｎ ｔｈｅ ｄｕｓｔ』

そして、更なる形で戦闘は激化する。

神威動乱編　第三十一話　ペンドラゴンの激闘

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ラッシングチーターレイダーに変身したアニルに対し、アーサーはため息すらついた。
「そんな絡繰り細工で私とコールブランドをどうにかできるとでも思いましたか？　……その侮辱、命がいらないと言っているようなものですね」
そう冷静かつ冷酷に告げ、アーサーはコールブランドを引き抜くと切りかかる。
躊躇する必要は全くない。そこまでのことをしたと、斬首によって思い知らせる。
故にこそ、変な絡め手はせずに真っ向から切りかかる。
圧倒的な才覚と、それを生かす鍛錬に、そしてそれによって性能を引き出された最高の装備。
すべてにおいて上回っていると自負しているが故の、真っ向からの斬撃に対し―
「ここまでは予想通り」
『ＨＡＲＤ！』
その音声と共に鳴り響いた衝撃音が、文字通り予測を防ぎ切った。
そしてその防いだ物体を見て、アーサーは思わず目を見開いた。
『Ａｔｔａｃｈｅ　ｃａｓｅ　ｏｐｅｎｓ　ｔｏ　ｒｅｌｅａｓｅ　ｔｈｅ　Ｊｅａｇｅｍｅｎｔ　ｂｌａｄｅ』
「……アタッシュケース？」
一見するとそう見える物体が、コールブランドを防ぎ切っている。
出来の悪い悪夢のような光景にアーサーは一瞬凍り付き、そしてそれがいけなかった。

「隙だらけだぜ」
『シュナイダーライズ』
その一瞬でアニルはアタッシュケースに見えた物体を開き、疑似両刃のブレードを展開する。
そしてその刃に、濃い灰色の輝きが宿り力を成す。
『インベイティングカバンシュナイデン!』
その斬撃をアーサーはコールブランドで受け止め、そして距離を取る。
呆気に取られたがゆえに思わぬ一撃をしのぐ羽目になったが、おかげで冷静になれた。
どうやら準備は相応の価値があったらしい。油断しすぎたことを反省し、速やかに切り捨てることで恥を濯ぐべきだ。
そう判断し、アーサーは冥土の土産としてコールブランドの能力を本気で発揮しようとする。
空間を切り裂き後ろからの刺突で始末する。
その判断に従い、アーサーはコールブランドを振るい―
「じゃあ、そろそろ本番だ」
―何も起こることなく、アニルは踏み込んだ。
驚愕に支配された一瞬で、アニルは一気に接近する。
ラッシングチータープログライズキーの影響を受けているとはいえ、一瞬の隙で距離を詰めたアニルは素早く斬撃を放つ。
戸惑いながらもそれをさばいたアーサーは、その時になって漸く気付いた。
思わぬ展開に動揺して、コールブランドがわずかに重くなっていることに気づかなかった。そして、コールブランドの刀身が何かに包まれていることにも気づかなかった。
「これは……っ!」
薄く、しかし頑丈な装甲がコールブランドを鞘のように包んでいる。
これではコールブランドといえど、ただの鈍器としてしか使用できない。剣の能力を発動することも不可能だろう。

即座にコールブランドのオーラで弾き飛ばそうとするが、想像以上に頑丈で破砕ができず、その隙にアニルが攻撃を仕掛けてくるので余裕もない。
「これは……ここまでが貴方の策ですか！」
「ああ！　カズヒ先輩用に試作されたアタッシュナイダーにこのプログライズキーを併用してのコールブランド封じ！　そしてそこからレイダーの性能で……押し切るっ！」
攻撃を躱し合いながら、アーサーはアニルに対して苦戦している現状を、不本意ながらも受け入れる。
レイダーの装甲が頑丈なこともあり、刃を封じられたコールブランドでは以下にアーサーで切り裂けない。
加えてアタッシュナイダーは十分すぎるほどの殺傷力を持っており、人間の身では人達浴びればそれで終わる。
ラッシングチーターレイダーそのものが移動力が高い。空間を切り裂いての離脱を封じられている状況では、アーサーでは逃げることはできない。最も、ここまで追い込まれてむざむざ逃げることができない程度には、アーサーは自分がプライドを持っている。
これを打開するには今のアーサーではどうしても時間が必要だ。
なら仲間に頼るかとも思うが、それすら不可能。沽券の問題ではなく物理的にできないという、完全な窮地だった。
「お前が苦戦している理由は、もう分かり切ってるだろう！」
つばぜり合いをレイダーの性能で有利に進めつつ、アニルは吠える。
「……ちょっと俺達を……弱者の意地をなめすぎなんだよ、お前らは！」

一方その頃、黒歌もまた苦戦を強いられていた。
アーサーが思わぬ苦戦を強いられているのは気づいているが、こち

らがそれに介入する余地はない。
流石に助けられるなら援護したい程度には情があるが、そもそもそんな余裕がないなら不可能という当たり前の理屈だった。
そして精神的にはそれ以上に、黒歌の方が追い詰められている。
「なんで……さっきから……こっちの場所が……分かってるのよ！」
思わずそう愚痴りたくなるほど、戦闘は一方的だった。
黒歌に仕掛けてきたのはルーシア・オクトーバー。
動きも気概も才能も、ヴァーリを叩きのめして気絶させたリュシオン・オクトーバーの足元にも届かない。妹を持つ身としては、リュシオンに同情すべきかルーシアに同情すべきか迷ってしまうレベルだった。
だからこそ、黒歌は毒の霧を展開しながら仙術で気配を消す。
相手がそれに翻弄された隙に星辰光でつながり、そこからゆっくりと弱らせればいい。
楽しいことが好きではあるがヴァーリほど強敵との凌ぎ合いを好んでいるわけでもない黒歌にとって、確実に倒せる相手に全力を出すつもりはなかったのだが。
『ＢＵＬＬＥＴ』
「実装！」
『レイドライズ！　シューティングウルフ！』
……この音が、急激に遠ざかりながら聞こえてくる。
『Ｔｈｅ　ｅｌｅｖａｔｉｏｎ　ｉｎｃｒｅａｓｅｓ　ａｓ　ｔｈｅ　ｂｕｌｌｅｔ　ｉｓ　ｆｒｉｅｄ』
これが、悪夢の始まりを告げる音声だった。
「……そこ」
『スカウティングカバンショット！』
霧の中に戦術を使っている黒歌を、遠慮なくルーシアは正確に射撃していた。
初弾を食らってしまったこともあり、黒歌は回避に徹するほかない。
しかも霧を濃くして仙術もフル活用しているにも関わらず、敵の殺

気がこちらを正確に貫いている。
「なんでなんでなんで！　こっちの仙術をここまで見抜けるのよ!!」

そして美猴もまた、苦戦を強いられていた。
「はっはぁ！　まさかここまでできるとは思ってなかったぜぇ！　星辰光全然使えねえとか思えねえ！」
如意棒で砲撃をしのぎ、毛を利用した分身で反撃を試みる。
だがそれすら砲撃で薙ぎ払われ、美猴はヒツギに接近を許される。
「喰らえ如意棒！」
「甘いって！」
振るわれる斬撃を、ヒツギは聖剣で受け止める。
強度は決して高いわけではないとされる聖剣創造で、如意棒の一撃を受け止められたことに美猴は舌を巻く。
苦戦している黒歌やアーサーには悪いが、自分としてはこういった激戦は大好物だ。
「二人にゃ悪いが面白くなってきやがった！　もっと付き合ってもらうぜぃ！」
「オッケオッケー。こっちも最初からそのつもりだし……ね！」
衝撃で一瞬距離を取られた瞬間、龍の咆哮が放たれる。
咄嗟に横っ飛びで回避するが、そうなってもいいように狙っていたらしく、サリュートⅡやヨトゥンヘイムマギアが合計十体ほど吹き飛ばされた。
そこまで言って、美猴はふと気づく。
戦闘は本来三つ巴になっていたはずだが、その動きが大きく変わっている。
「おいおい、思いっきりぶつかってるの禍の団とロキの奴らだけじゃねえか」

気づけばそういうことになっていた。
当初は誰もが乱戦状態になっていたにも関わらず、気づけば三大勢力側は少しずつだが隊列を組み直し集団で方陣すら作っている。
そして積極的にぶつかり合っているのはロキ側と禍の団であり、三大勢力側は外周部が援護を受けつつ戦闘を行い、疲労が溜まれば内側のメンバーと交代している。そして休息をとってある程度回復したら援護射撃を行い、消耗した味方と交代。このサイクルで損耗を最小限にしていた。
あれ、これまずくね？
美猴がそう思ったのも当然だが、しかしそれを伝えている余裕もない。
何故なら既にヒツギは迫っており、聖剣でこちらに切りかかってくるからだ。
大火力砲撃に頼り切らず、星辰奏者の身体能力を生かせる近接戦を織り交ぜることで、美猴は精神的に回復する余裕がなく、逆にヒツギは近距離と遠距離のインターバルで負担を抑えている。
星辰光を発現できない欠陥星辰奏者と思っていたが、だからこその戦い方なのかとすら舌を巻く。
「さっきも言ったけどやるじゃねえかい！」
「まぁね～。そもそも、なんで私が星辰光（アステリズム）も使えないのに精鋭部隊のデュナミス星騎士団にいるかっていうと―」
そしてつばぜり合いから体捌きで受け流し、龍の咆哮の砲身を美猴の横っ腹に突きつける。
「―なしでも足を引っ張らない程度には強いんだよね、私は！」
そして接射で龍の咆哮が放たれた。

その戦況を見て、アーサーは思わず己の目を疑った。

リアス・グレモリー眷属が活躍するとは思っていた。
彼らはすべからく天賦の才ともいえる力を持っており、更に鍛錬を欠かさない傑物の素質を持つ者たちだ。
だがふたを開けてみれば、そんな彼ら以上に大王派の軍勢が善戦しているこの現状に、アーサーは一瞬だが夢を見ているのかとすら思っていた。
だが、襲い来るアニルの殺気で現実だと分かる。
瞬時に回避し、コールブランドを振るうが避けられる。よしんば当たっても、刃を封じられている現状では決定打にならない。
支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）は使えない。今後の行動において重要な要素を満たす為にも、万が一にでも封じられるわけにはいかないからだ。
屈辱を感じるほどに追い込まれている。そう近くするほどに圧倒的な状況をひっくり返されている。
「まさか、この程度の機械に私達が苦戦するとは―」
「ああ、代金代わりに伝言を頼まれてたんだ」
歯噛みするアーサーに、アニルがそう告げる。
「そういうセリフを言われたらこう返せってよ。……そんな風になめてかかっているから痛い目を見るのだ、社会不適合者共よ……ってなぁ！」
『フルチャージ』
アタッシュナイダーを一度開閉し、アニルは突撃を敢行する。
それに対してアーサーはカウンターをとる体制をとる。
流石にここまでの戦闘を繰り返してきたことで、アーサーも相手の動きにある程度合わせられるようになっている。そして大技を当てる気なら、その威力を利用してコールブランドの拘束を破壊できるかもしれない。
そしてその一瞬をつかみ取れるだけの才覚をアーサーは確かに盛っており―
「かかったな間抜け」
―その程度はアニルも読んでいた。
『ラッシングボライド』

レイドライザーを一瞬操作し、その瞬間アニルの―ラッシングチーターレイダーの―動きが掻き消える。
このタイミングでの悪魔的加速に、今までの動きに慣れていたアーサーは一瞬だが確実に見失い。
それでも瞬時に殺気で反応し迎撃の斬撃を繰り出す状態に持って行けたのは、ひとえに彼が才覚だけでなく鍛錬も積み、経験も重ねてきたからだ。
そしてその遍くすべての差に対し―
「そうくると思ったぜ！」
―アニルは奇策によるたった一度の初見殺しで上回る。
『インベイティングカバンリッヒテン』
アタッシュナイダーの攻撃を、あえてアニルはアーサーではなく地面に向かって叩き込む。
頑丈なアーマーに包まれた一撃は、そのまま地面にスコップのように突き立ち、そして加速力を利用してこのように持ち上げる。
その結果、アーサーは空中へと投げ出され―
「ツケを払いな、アーサー・ペンドラゴン！」
その腰が入らないアーサーに、加速力を利用した体当たりをもってして、アニルはアーサーに牙を届かせた。

神威動乱編　第三十二話　冥府より伸びる大罪の大樹（クリフォト・リュトン）

和地Ｓｉｄｅ

一言で言おう。こっちはかなりまずくなっている。
具体的に言うと、凄い勢いで追いかけられている。
「待ちなさい！　そして見なさいよ、私が強くなったところを！」
春っちは背中から凄い灼熱のふんしゅつで高速飛行し、多数の爆発する火球をぶっパしてくる。
「てめえにゃ悪いが、私に余計なことつついた自分を恨むんだなぁ！」
ベルナはベルナで、背中から何かを噴出して加速すると、氷の砲弾を多数生成して叩き込んでくる。
灼熱と氷水の挟み撃ちに、俺は全力で逃げ回るしかない。
そういうわけで―
「鶴羽、迎撃任せた！」
「やってやるわよぉ、もぉおおおお！」
大慌てで迎撃を鶴羽に任せるしかない。
レジスティングアントレイダーに変身しての攻撃で、とにかくけん制をしてもらっているからこの程度だけど、たぶんそれがなかったら俺は圧殺されている。
運動性はともかく攻撃力がインガ姉ちゃんの比じゃない。一発でも直撃したら、確実に波状攻撃で圧殺される。
それを何とかしのげているのは、魔剣創造に続く俺のもう一つの神器によるものだ。
神器、疾走車輪（ソニック・チャリオット）。不整地だろうと最高時速３００ｋｍで走行することができるバイク型神器。

２ケツで全力疾走するだけでなく、地面との摩擦と性能を生かしてちょくちょく曲がることで、なんとかチェイスという形に成功している。
成功しているけど本当にまずいってこれ。
なにせこの連続起動は流石にそっちに集中しないとまずい。星辰光を利用して時折三次元機動すら取り入れ、更に防壁を利用して壁を作って相手にぶつかるリスクを入れたりと、かなり苦労しているから反撃する余裕なんてない。
真剣に鶴羽の反撃が頼りと言ってもいい。それがないと、死ぬ。
「和地！　同年代相手にヤンデレじみた事されてるけど、あんたやっぱり年増キラーになった方がいいわよ！」
「お前自分のこと棚上げするか!?」
カズヒ姉さんもヤンデレになるというのか!?　っていうか年上はインガ姉ちゃんとリヴァ先生だけだぞ!?
ええいツッコミを入れる暇すらやばい！
「……あたしのつついちゃいけないところつついた、自分を恨めや！」
ベルナはやっぱりというかなんというか、無理に突き進んでいるやけっぱちな攻撃を仕掛けてくるし。
「見てよ、見てよ見てよ見てよ……！　私は強くなった、強くなったのよ!?」
春っちは春っちでどう考えても迷走しているような、そんな精神状態で攻撃してくるし。
……ったく。それに対応している余裕がない自分が恨めしい！
「……和地」
その時、迎撃している鶴羽が小さく呟いた。
「あの二人と何があったのかは知らない。だけど、助けたいと思ってる？」
俺はその言葉に、あえて即答はしない。
二人は明確に敵対している。春っちは幼馴染と言ってても何年も会ってないわけだ。ベルナに至っては敵として戦っているだけで、特に縁があるわけでもない。

だけど、そのうえで―
「俺は、嘆きの涙が流れる前に、意味を変えたいと願っている」
―それが、俺の譲れない芯だ。
もちろん全部できるなんて、そんな馬鹿なことは考えちゃいない。
世界にはいくらでも悲劇が転がっている。春っちもベルナも、詳しくは知らないけど悲劇のレベルは探せばいくつも見つかるレベルだろう。下手すると俺の半生の方がよっぽどあれかもしれない。
それでも、だ。
「……無視したくない。俺は心からそう思ってる」
そう思った。
二人が同時に仕掛けてきているからだろう。尚更この短い時間で分かったんだ。
たぶん二人とも、心の中で泣いているんだろう。
それを、俺は無視したくない。
もしそれを無視するようになってしまったら、きっと俺は―
「あの日の笑顔に誓った決意は、俺にとって命より大事なんだ」
―俺の命より大事なものを失ってしまうから。
「……そっか。全く妬けるわね」
その言葉は、何故かはっきりと誰かに向けている気がした。
そしてそれ以上に、強い決意を感じさせる声だった。
静かに、気配が変わり、そして戦意が滾る。
「殺すことなく相手が音を上げるまでしのぎ切れってわけね。……やってやろうじゃない！」
……その言葉に、俺はどういえばいいんだろうか。
いや、まず最初に言うべきことはあるはずだ。
「……ありがとう」
お礼はキチンと言う。当たり前のことだろう。
だから―
「生き残るぜ、鶴羽！」
「もちろんよ、和地！」
―この場は、なんとしてもしのぎ切る!!

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

タックル。そんな単純な攻撃だが、実際のところ実に厄介な攻撃ともいえる。
そもそも単純な物理衝撃とは、物体の質量と速度と固さの三つが重要と言ってもいい。もちろん打撃が入る面積によって更なる効率はあるし、それらを効率的に引き出すには当然技術も必要だ。
だがしかし。高速で移動する大きな物体の体当たりは当たり前の脅威ともいえる。
１００ｍ２秒未満（時速１００ｋｍ以上）の高速移動可能な存在が、それを強化する形で放った必殺技を、銃弾すら通さない固い装甲に身を包んだ、数十キロの質量が、衝撃を殺せない状況でぶつかればどうなるか。
常識的に考えて、下手すれば即死であることは言うまでもない。
その状況でアーサーが生き残れたのは、極論するならば仲間に恵まれたというほかない。
「……美猴、拾って！」
「おうさぁ!!」
ぎりぎりの綱渡りというほかない。
黒歌が被弾前提で強引に射程距離に接近して、ノックバック重視の一撃を叩き込まなければ。
その後素早く美猴がヒツギの反撃を無視して頭から落ちそうになっていたアーサーを拾い上げなければ、戦闘続行など不可能でしかなかった。

むろん抜け目なく仙術や呪術でかく乱しているが、しかしアニルの仲間もまた油断できる相手では断じてなかった。
『スカウティングカバンバスター！』
即座に迫りくる、狙撃としか形容できない攻撃を、かろうじて分身を盾にして美猴は防ぐ。
「仙術もなしにどうやって狙ってんだよぃ!?」
そう慌てるが、更に霧が豪快な砲撃で吹き飛ばされた。
「っちぃ！　外したじゃんか！」
「……ルーシア！　距離をとっておいてくれ！　あの黒い奴の星辰光はまずいからな！」
「分かってる！」
即座に相手も連携をとる体制に入っていたが、しかしこれで状況は膠着状態に入っていた。
今回の戦闘でアニル側が最も警戒していたのは、誇張抜きで黒歌である。
効果範囲内の相手と繋がり、仙術で弱体化するという反則じみた相性の良さは、維持性の高さもあって致命的といって過言ではない。解除手段を持ちえない攻撃、それも装甲無視ともなれば最も警戒必須である。
故に、徹頭徹尾黒歌を抑え込む役が必須であり、同時に遠距離射撃を必須となる。
その結果として、射撃戦主体のルーシアが選ばれるのは当然といえる。
そしてその装備もまた、仙術を考慮した武装であり―
『シューティングボライド』
必然、数百メートル離れたところからの狙撃は基本。
シューティングウルフレイダーによる遠距離支援こそが、ルーシアが今回与えられた役目というほかない。
「なろぅが！　おい黒歌！　アーサーをとりあえず動けるようにしとけぃ！」
即座に美猴が攻撃を弾き、更に大量の分身を展開して仕掛ける。

性能を極限まで弱くして数を増やした。術式の制御から本体が攻撃されると解除されるほかないが、当然仙術で誤魔化せばいいだけで―

「まって美猴！　そいつ仙術が効いてない―」

『ＳＥＡＲＣＨ』

そして答えは即座に示される。

『スカウティングカバンショット！』

完膚なきまでに正確に、美猴本体に攻撃が放たれる。

「うぉおおおい!?　なんでピンポイントに分かるんだよぃ！　仙術使ってんだぞ!?」

「……それが関係ないからです」

その答えに気づいたのは、アーサーだった。

ある意味で最も追い詰められていたからこそ、その正体を理解したのだ。

「アーサー!?　あんた何気付いたの!?」

「……相手は気や視覚映像で察知してません。おそらく音響探知や熱源感知、場合によってはＸ線なども使った、科学技術による感知です」

「「……げ」」

思わぬ相手から察知されたことに、思わずヒツギもアニルも呻いてしまった。

「……思ったより気付かれるのが早い。やられすぎて過敏になっているのね？」

そして最も冷静に、読まれたルーシアが対応を考慮する。

射撃戦に特化したシューティングウルフプログライズキーをレイダーの変身用に確保してはいるが、同時にザイアの技術解析で製造したアタッシュウェポンであるアタッシュショットガンを使用することで、他のプログライズキーを併用することが今回の戦闘の肝。

科学的な偵察行動に主眼を置いた機能を持つスカウティングパンダプログライズキーで強化し、仙術とは全く異なる方向で偵察を行うこの機能で戦闘を行うという答えが回答だった。

実際に上手く抑え込めていたが、アーサーに気づかれるのは確かに

想定外だった。
だからこそ、本番は此処からになるのだろう。

そして同時に、最も強大な戦いもまた激化していた。
ヴァーリが至った新たなる禁手の力は、あの場において最も苦戦していたヴァーリの力を大きく強化していた。
「……しつこい！」
「ちぃ……っ！」
不快や舌打ちを顕わにするマルガレーテやロキと違い、ヴァーリは込み上げてくる笑みを抑えきれない。
「ああ、これはいい！　実にいい!!」
振るわれる半減の力は当人はともかく、放たれた攻撃を瞬時に連続で半減することで無力化する。
そして放たれる攻撃は大きく強化され、周囲の環境を変えんばかりの破壊を生み出している。
間違いなく、ヴァーリは大きく強化されていた。
本来、禁手というものは亜種になっただけでここまで大きく強化されるわけではない。
禁手は神器の究極であり、同時に神器という根幹が同じなのだから当然だ。故に必ず何らかの形で絡繰りがある。
「……実は人間は人間でも、龍の因子が混じっていたとでも言うの!?」
マルガレーテがそう思うのも無理はない。
もしそうだと言うのなら、天龍を宿す白龍皇の光翼との相性は抜群だ。亜種禁手が龍に特化した仕様変更という形で発現したのなら、その性能は通常禁手とは比較にならない相乗効果を発揮するだろう。
そして、その言葉からくるヴァーリの返答は二重の意味で予想外だ。
「いや違う。……そして君に宿っている神器が他にあることもそれで

分かった」
「……っ!?」
動揺するマルガレーテにロキの魔法攻撃が迫るが、しかしマルガレーテはそれを弾き飛ばす。
とっさの魔力障壁はまさに魔王のそれであったが、それだけの力を発揮するのにもまたからくりがあるということだ。
「……準神滅具と称される、一つの時期に最大7つか8つほど確認された所有者に強大な悪魔の力を与える神器、冥府より伸びる大罪の大樹(クリフォト・リュトン)。青い吹雪を手より放つ青氷の双手(ブリザード・シェイク)でも、聖光宿る滅龍剣(ディバインサーベル・ゲオルギウス)でも、魔性滅す聖別銃(ディバインライフル・ファクトリー)でもなく、それこそが君が本来宿していた神器ということか!」
ヴァーリ・ルシファーは戦闘狂であり、また神滅具の保有者でもある。
故に強力な神器については多少の造形はあり、だからこそそれに気づくことができた。
準神滅具と呼ばれるほどに強力な神器は存在する。それらは神滅具には一歩劣るがそれでも強大で、種類によっては同種が複数存在することもある。
その一つが冥府より伸びる大罪の大樹。幽世の聖杯と対を成すとも言われ、同時に七つほど確認されたこの神器は、肉体を高位の悪魔へと編成させ、更に天敵たる聖なる力や光によるダメージを大きく削減する。
聖書の神の死によるバグではないかとすら言われるそれは、鍛えれば最上級悪魔クラスにすら至れるとされている。世界全土で最大で七つしか確認されてないとはいえ、最上級悪魔クラスになりえるうえに特攻となる攻撃が通用しないともなれば、神滅具に準ずる力と称されることはある。
そして複数あるとはいえ、それらの保有者が転生悪魔になったことはあっても、生まれつき悪魔の血を継いでいたことは、いまだ神の子を見張る者でも確認されていなかった。
だがそんな悪魔の因子を、それも魔王の因子を継いだ者にその神器

が宿ればどうなるか。
その実例を見て、ヴァーリはこの上なく歓喜した。
「……俺も大概だが君もだな！　素晴らしい、奇跡の体現じゃないか！」
「……」
マルガレーテは答えないが、ヴァーリはそれを聞いていない。
ある意味で自分以上の奇跡を体現している存在に対して、好敵手となりえる可能性としてテンションが高ぶりに高ぶっている。
「まったくもって素晴らしい！　君はもっと遠くに飛べ、自由に生きることができる！　そんな風に自分を縛っているのが残念でならないよ！」
魔王の頂に届くほどの力を持ち、更に絶大な神器を取り込めるのは奇跡としか言いようがない。
悪魔の力を与え聖なる力に耐える神器により、眠っていた魔王の因子は覚醒し、聖なる力を取り込むこともできた。
そんな彼女が本当の意味で自由に生きようとすれば、きっと自分に迫るどころか、超える可能性すら生まれるだろう。
最上級悪魔の領域に届く力に魔王の因子があるというのは、聖なる力を取り込んだことも踏まえればそうなるのだ。
あの忌まわしい男すら超える可能性を前に、ヴァーリはぜひそんな高みに上ってほしいとマルガレーテに願う。
「……うわぁ。馬鹿って本当に酷い」
だが、マルガレーテは冷めた目で呆れの感情を浮かべていた。
彼女は挑発のつもりはない。そもそもヴァーリに語っていない。
ただあまりにも愚かに思ってしまったがゆえに、感情が口をついて出てきてしまっただけだ。
それゆえに、ヴァーリはロキに対する迎撃をしながらもどこかで呆けてしまう。
呆けながらでも戦えるのは彼が傑物出る証明で、マルガレーテもまた傑物だ。
だが、二人には決定的な違いがある。

「それだけ力も自由も振るってるのに、なんであんなに無責任なのかしら。大人になったら罪悪感で引きこもりそぉ……」
ヴァーリは力を持つがゆえに自由に生きようと思い、縛られないことを基本としている。それがマルガレーテには理解できない。
何故ならば、彼女にとって力も自由も責任と不可分だ。自由や権利とは、義務や責任を対価として払ったものだけが取得することのできる商品として考えている。己をその分縛らなければいけないのに、何故ヴァーリは当たり前のことしないで平気でいるのかが、心の底から理解できない。
人というものはどうしても性質というものが多種多様になる。その意味でいうのなら、ヴァーリとマルガレーテは相性が最悪だと言ってもいい。
自由を責任に縛られないことのように思っているヴァーリと、自由は責任を果たした上でだと思っているマルガレーテ。
この二人はあまりにも異なりすぎているがゆえに、お互いがお互いに憐憫すら覚え始めているのが現状だ。
なにより—
「私は違う。何より、託された力に失礼な真似なんてできないしね!!」
—その根幹がある限り、彼女がヴァーリの思想に共感することは断じてない。

「なるほどな。中々興味深い取り合わせだが、これ以上かかずらっているのも面倒だ」
そして、そんな観察に時間を費やす余裕をロキは持っていなかった。
「ではそろそろ遊びも終わりだ。……そろそろ二人まとめてぶっ殺しだぁ!」

ここにきて、悪神ロキも本領を発揮する。

「ではこちらも本番だ。プランBを本格的に開始する」
「こっちもそろそろ混ざろうっかねぇ」
「オーディンに対する手土産に、ロキの首は十分すぎるしな」
そして、それは敵も同じこと。
戦いは、更に激化する。

神威動乱編　第三十三話　咆哮上げるは狼の父

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「じゃあそろそろ、本格参戦といこうかなぁっとぉ！」
まず真っ先に乱入するは、禍の団の旧魔王派。
その主導権を握るミザリ・ルシファーの配下たるロッキーこと、キャスターのサーヴァントであるローゲは即座に攻撃を開始する。
指を鳴らすと共に現れるのは巨大な氷の巨人達。
全高５０ｍを超える巨人達が、明らかに異常なまでのスピードでロキやマルガレーテに迫りくる。
「……危ない!?」
慌ててマルガレーテは回避するが、しかしロキは平然とその場にとどまったままだ。
それに敵であるにも関わらず、気でも狂ったのかとマルガレーテは狼狽する。
だが氷の一撃はロキの体を素通りする。
「……幻術!?」
マルガレーテは驚愕するが、ロキは平然としていた。
「ふむ、流石にサーヴァントではなくそこから受肉しただけはある。どうやら少しは腕を上げているようだ」
ロキからすれば、ローゲは自分の伝承を組み込むことで名跡すら消した相手。必然的にかつての手の内ぐらいは既に理解しており、来ると分かった時点で相応に備えはしていた。
そして更に巨人達は氷を投げつけるという真似を行ってくる。
「幻術だと分かっているなら――っ」
まずはロキを集中攻撃するべき。
そう判断したマルガレーテはそのまま突貫を試みるが、しかし氷に

触れた瞬間爆発に巻き込まれる。
「……氷の幻術の中に爆発系の魔法を!?」
「……敵ながら同情する。奴はそういう虚実を得意とするからな」
完全に振り回される形になっているマルガレーテに一抹の同情を覚えながら、ロキは冷静に幻術を見極める。
幻術だけの場合も幻術の中に本命が混ざっている場合も、更に何もないと見せかけたとこに本命が混ざっている場合もある。
それらすべてを取捨選択するのは困難だが、ダメージにならない攻撃まで回避することに気を遣えば精神面が削れてしまう。かと言って全部無視して突っ込むというのも、威力や攻撃の種類を多種多様にしている為悪手と言ってもいい。ギリギリの塩梅を見極められないと、手玉に取られるのだ。
相も変わらず油断ならない相手と思い……即座にうえに向かって爪を振るう。
衝撃が走り、そして呪いが込められたオーラの斬撃を弾き飛ばした。
「流石に神相手では、この程度では無理か」
嘆息するホグニ王に対し、ロキは軽く肩をすくめる。
「我ら神話の祝福を受けながら、その程度の剣技しか振るえないのか？」
「呪いを祝福と言い切れるとは、度し難い神もいたものだな！」
ローゲが展開する幻術の支援を受けながら、ホグニもまた強襲を開始する。
ホグニからすればロキは本命ではないが、どちらにしても殺す相手ではある。
ましてミザリと契約した身として、彼との契約を反故にする気もない。
忌々しい怨敵を討つ為に、それ以上の邪悪になる覚悟が彼にはあった。
故に―
「仕掛けるぞローゲ、ギアを上げろ」

「オッケーオッケー。こっちからすれば本命だしねぇっとぉ！」
故に、二人の猛攻は激しさを増す。
そしてそれはそれだけで終わらない。
「ずるいな。ミザリの飼い犬に美味しいところを取らせる気はないし、俺だってもっとロキと戦いたいんだが？」
ヴァーリもまた攻撃を再開する。
ローゲの幻術でかく乱されているマルガレーテは一旦おいて、まずはロキを相手にする算段だった。
そしてロキもまた、ヴァーリの強大な力にある程度の当たりをつけていた。
禁手は種類を変えれば段違いに性能が変わるわけではない。そしてヴァーリは人間とのハーフな悪魔であって、決して龍の因子を宿しているわけでもなさそうだ。
ならこれだけの大幅強化はどういうことか。そのロジックは単純だ。
それはすなわち―
「神器に力を注げば注ぐほど性能が向上する鎧の具現化。魔王の血筋に由来する絶大な魔力を燃料とする強化が亜種としての特性か！」
「……ご名答。アドバンテージは生かさないとと思ってね」
それこそが、ヴァーリ・ルシファーが至った亜種禁手の本質。
白龍皇の光翼とは、十秒ごとに相手の力を半減させ、そしてその分を自分に上乗せする。
それは倍化と譲渡という赤龍帝の籠手風に言うならば、半減と強奪とでもいうべきだ。
……だが、それはこうも言い換えられる。
力の吸収。もしそういう形で白龍皇の力を捉えた場合、どのような強化の方向性が得られるか。
その結論があの亜種禁手。自身が持つ力を捧げることで、白龍皇の宿主として更なる強化を獲得する。そして覇龍の消耗を代用できるだけの魔力があるならば、その性能向上率は安全に通常禁手を超えるだろう。

それこそが、覇なす白龍の戦装飾（ヴァニシングメイル・クルーズドライブ）が持つ本質。
他者から奪うことなく、己が力を捧げることで、己の力をより高みに押し上げる。そんなただの人間ではどう足掻こうが寿命と引き換えの奇跡を、魔王の血により成し遂げる。
ヴァーリ・ルシファーであるがゆえに使うことができる亜種禁手には、流石に舌を巻くしかない。
そしてホグニとローゲもまた脅威。
灼熱と幻術を払うローゲも、剣撃により迫るホグニも共に脅威。
故にロキもまたギアを上げることを選択し―

『マルガレーテ殿。これより我らも戦闘に参加します』
『フォーメーションアルファ！　包囲しながら削っていけ！』
ここに、大王派もまた更なる攻勢に打って出る。
現れるのは新型のＤＦ（ディアボロス・フレーム）。
一個中隊十二機で構成され、とにかく生き残る為の防御に特化した装備で現れた部隊が、マルガレーテを支援する形で戦闘に介入する。
その頃にはマルガレーテも幻術に慣れてきたのか、多少の手傷を負いながらとはいえこちらに介入してくる。
そしてその瞬間、ロキは己の力が少しずつ減っていくことを自覚した。
最初はヴァーリの半減が効いてきたのかとも思ったが、どうやらそうでもないらしい。
故に、原因を分かり易く表れた新たな存在に求めるのは当然のこと。
「どのような小細工を！」
躊躇なく敵のＤＦに攻撃を放つが、しかしマルガレーテが展開している魔氷の蠅が結界を張ってそれを防ぐ。
そしてその出力もまた強化されている。それに気づいたことで、ロ

キはこの事態をすぐに悟った。
同時に、最もロキを殺すことを考えているローゲもまたそれに悟る。
「神の力を削減し、削減した分強化に充てるタイプの兵器か！　もうそれは宝具の粋じゃないか！」
―ローゲの推測はほぼ当たっている。
大王派がミョルニルレプリカによる速攻撃破というプランＡ。それが失敗した際の次の策として用意したプランＢ。その実態は「マルガレーテをオフェンスにしつつ、試作型ＤＦによる対神戦術による弱体化」というものだ。
対神仏用試作型ＤＦ、ＤＰ―シュラーイン。
旧魔王派との戦いで投入され正式採用が急ピッチで進められるＤ―スピアと同時期に設計された、神仏を打倒するという、和平が確立されてからは到底計画にＧＯサインが出ないだろう機体。
事実和平により必要性が薄れたことから、中隊規模の運用試験まで漕ぎづけながらも開発凍結がほぼ決定。しかしロキの造反によって急遽伏札として投入が決定し、また「同様の事態に対する備え及び、牽制」として、今回の実働データをもとに師団規模の正式採用がすでに決定。今回のデータでアラをつぶした機体がＤ―シュラーインとなりえる機体でもある。
その設計思想は中隊規模で包囲することでの敵弱体化と自己強化。
中隊の包囲で結界を作り、それによって敵対する神の力を削減し、その分中隊を強化するのが、この機体の運用コンセプトだ。
シュラーインとは英語で神仏を祀り上げる場所を意味し、そして日本でつけられる場合は神社となる。
日本の神々やヤオヨロズとすら考慮されるが、その多くは災害や討ち取った敵の武将などを神として祭り上げたものだ。
災いをもたらす存在を神として祭り上げることで、災いを抑え込む存在へと型にはめることが日本の信仰にはよく見られる。
そこから発想を得たＤ―シュラーインに対し、ロキはまさにその影響を受けていた。

「おっと？　これはもしかして切り札なしで何とかなっちゃう？」
「それならそれで好都合だ。オーディンの前に無駄な消耗は避けたいしな」
「残念だ。折角の神との戦いがこれで終わるとはね」
　禍の団の者達は、これをある種の幸いととって、あえてロキに対する攻撃に集中する。
　そして大王派の者達は禍の団とロキの粒試合を目論んでいるのか、それとも結界に綻びが生まれることを避ける為か、ＤＰ―シュラーインはとにかく安全策に立ち回っている。
　そして、マルガレーテは決して臆さず戦闘を試みる。
　この状況下でいまだ最強のロキと、質と数のバランスで上回る禍の団。
　ＤＰ―シュラーインはあくまで支援機である以上、一番危険なのは彼女であり、恐怖も当然感じている。
　だが、それらすべてを踏み越えて、マルガレーテ・ゼプルは戦闘を続行する。
「……私はノア・ベリアル様の騎士、その責任は……果たす！」
　その叫びと共に、マルガレーテは銃口をロキへと向ける。
　その引き金を引く一瞬前、彼女の脳裏に記憶がよぎる。
　―頼む……奴らを、倒して……っ―
　―世界の、未来を……頼む―
　その言葉と表情を背負い、マルガレーテは引き金を引き絞る。
「託された力にも、生まれ持った力にも。背負った立場にも責任があるのだから！」
　責任を果たす。ただその一念をもって、マルガレーテ・ゼプルは神殺しの特性を与えた銃弾を―

「創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星」
―撃ち放つその時、ロキもまた、伏札を開帳する。
「愚かなり、耄碌したか戦の王よ。挑むべき黄昏に恐れをなし、怨敵に手を伸ばすとは醜悪なり」
離れた弾丸は容易く弾かれ、封じられているはずの強さはそれ以上に高まっていく。
「戦の果てに死することこそ真なる栄光の始まりなり。死に場所を忘れ病に倒れ、老いて死ぬ恥を良しとするとは情けない」
更にローゲやホグニの攻撃すら弾き、それも油断でも慢心でもない、余裕とゆとりすら獲得している。
「汝は既に老害である。誇り高き終焉に挑む英霊たちも、彼らを導き添い遂げる戦乙女も、破滅を前に相対する巨人たちも、汝に失望を隠しはしない」
更に白龍皇の放つ全力の攻撃すら、容易く片手で弾き飛ばした。
「ゆえに黄昏に立ち向かうは汝にあらず、この狼に館を譲り渡すがよい。これ以上醜き醜態をさらす前に、誇り高き死を与えよう」
間違いなくこの場で最強だった存在、ロキが変身する仮面ライダーヴァナルガンドが、今更なる高みへと昇っていく。
その光景に気圧されながらも、マルガレーテは戦うことを決して辞めない。
氷の大樹から全力の援護砲撃を受け、マルガレーテは渾身の力を込めて斬撃を放つ。
「我が意に集え、真なるアースガルズの勇士たち」
それを両手でとはいえ、必殺技を使うことなく受け止め、ロキは戦場に君臨する。
それはまさに戦の父たる北欧の主神オーディンが如く。
「黄昏を担う者たちよ。まずは置いて汚れし邪神に栄光を与えるがいい！」
今ここに、狼の父は英霊達の館を新生させる。
「超新星（メタルノヴァ）――真なる黄昏（フヴェズルング）、英霊集う父狼の館（ヴィーンゴールヴ）」
アースガルズを導くべく、悪神は英霊を束ねて此処に新生の時を迎

えた。

神威動乱編　第三十四話　思わぬ乱入者（イレギュラー）

イッセーＳｉｄｅ

なんだあれぇぇぇぇぇぇぇ!?

フェンリスヴォルフレイダーと戦っていた俺達だけど、なんかわけの分からない事態に完全に面食らってる。

「邪魔だぞ小娘！」

『Ｒａｇｎａｒｏｋ』

『ヴァナルガンドディストラクション！』

ヴ
ァ
ナ
ル
ガ
ン
ド
ディ
ス
ト
ラ
ク
ショ
ン

「あ……ぐぅっ！」

今までを遥かに超えるぐらい強くなったロキが、一瞬でマルガレー

テさんを吹っ飛ばした。
マルガレーテさんはすぐに立ち上がろうとするけど、その瞬間にロキは更に動く。
「……漸く絡繰りが見えてきたぞ！」
なんか急に、氷の樹に突進すると、至近距離で魔法の砲撃を叩き込んだ。
盛大にぶっ壊れるけど、それが一体どうしたって―
「……っ!?」
―と思った瞬間、何故か他の氷の大樹もぶっ壊れて、マルガレーテさんのオーラが一気に下がった。
いや、それでもタンニーンのおっさんやバラキエルさんより低い程度だけど、さっきのマジで魔王様に匹敵するようなレベルじゃない。
盛大に全部ぶっ壊れたのもそうだけど、なんでだ？
「……氷樹（コキュートス・バース・クリフォニア）により至る聖魔人とはよく言ったものよ。聖と魔を融合させる矛盾による強化をなす、氷の大樹が貴様の禁手の本質か」
ロキがそう感心しているけど、一体何がどうなってるんだ。
俺がぽかんとしていると、隣の部長が目を見開いていた。
「……そういうこと」
「え、どういうことです？」
正直色々置きすぎて、俺はさっぱり分かりません。
教えてください、部長！
「言葉にすれば簡単よ。マルガレーテの禁手はまず自身の聖と魔を融合させる為に、その力を持つ氷の大樹を生成する。大樹そのものが戦闘能力を持つから決定打にはなりえないけれど、一瞬で大樹すべてを粉砕されれば、彼女は本領を発揮できなくなるということね」
な、なんだって!?
そ、それじゃあ……プランBも失敗!?
プランAを失敗させた俺が言うことでもないけど、これ後はどうすればいいの!?
俺達が困惑していると、耳に通信用魔方陣が展開された。
『ノア・ベリアルだ。マルガレーテの禁手が攻略された時点で、最終手

段のプランTに移行している。フロンズも準備で忙しいから、俺が連絡に回ってる状況だ』
あ、判断早い。
でも最終手段って、これが失敗したら絶対アウトだよな？
あとどうでもいいけど、なんでBの次Cでも、特別感のあるXでも、ファイナル的なFでもなくT？
いや今はどうでもいいよなマジで。とにかくそれでどうにかしないとまずいって。
俺が気合を入れてそれでどうにかしようと思った時、何故か通信の向こうから妙な雰囲気がしてきた。
……嫌な予感がするんだけど？
『ただ、悪いニュースがあって外周部が混乱状態だ。その所為でちょっと……いや、正直かなり遅れそうだ』
まじですか!? こっちもやばいんですけど!?
『悪いニュースだが、外周を担当していた第四義勇師団が外側から謎の部隊による攻撃を受けて突破された。……禍の団の装備ともロキ絡みとも思えない第四勢力としか思えないうえ、その……本当に訳が分からなさ過ぎて虚を突かれた形だ』
この状況下で新たな勢力が乱入!?
しかもこっちを攻撃して突破ってことは、絶対味方じゃない！
……でも禍の団でもロキでもなさそうって、なんで分かったんだ？
俺が首を傾げていると、ヴァーリがなんかテンションをめちゃくちゃ上げていた。
「面白い！ 面白過ぎる！ これは俺も、全力を出すべきかもしれないな！」
これってつまり、覇龍を使う気だってことか!?
でも今のヴァーリの覇龍でも、あのなんかめちゃくちゃ強そうなロキを倒しきれるか分からないんだけど。
もしかして更なる切り札とかあるんじゃないだろうな？ 俺のライバルはどこまで強くなるんだよ!?
俺が戦慄していると、ヴァーリは少しずつ力を見せ始める。

「さあ、覇龍（ジャガーノート・ドライブ）を見るが―」
その瞬間、ヴァーリの姿が消えた。
え、一体どこに行った？
慌てて探すと、さっきヴァーリがいた場所から５０ｍほど離れた場所に、フェンリルに咥えられたヴァーリがいた。
神すら殺す牙が鎧をぶち抜いていて、血がこぼれてる。
……おい。グレイプニルはどうなった!?
慌てて振り返れば、そこにはフェンリルヴォルフレイダーが、牙でグレイプニルを噛みちぎっていた。
ら、乱戦だったから完全に見逃してた。冗談だろ!?
「ふはははは っ！　我が子を無視するのは失態だったな！　いつまでも拘束をさせたままにするほど、我らがまぬけだと思ったか！」
野郎！　よくも俺のライバルを―
「……隙だらけだ！」
「もらっちゃうよぉ！」
―俺が切れている間に、ホグニとローゲが後ろからロキに迫りくる。
その瞬間、ただ振り返っただけにしか見えないロキが、衝撃波で二人を吹き飛ばす。
……おいおい、ちょっと強すぎじゃねえか!?
「……ほぉ～。星辰光にしても強化度合いが尋常でないのぉ。どういう仕組みなのやら……な！」
その時、幸香がポリ窒素の魔獣をロキに対して四方八方から差し向ける。
そして一瞬で爆発して、ロキを爆発が包み込んだ……と思ったらロキが爆風を振り払った！
あの野郎、かすり傷一つ負ってないじゃないか。ピンピンしてやがる！
「詰まらんな。その程度の小技で、今の我を倒せると思ったか？」
よ、余裕過ぎる！
「なら大技ですのよ！」

『ＪＥＴ！』
って今度はヒマリ……ってそれはダメだろ！
『ボーイングブラストフィーバー！』
ヒマリが超高速蹴り技のボーイングブラストフィーバーをぶっ放すけど、ロキはあっさり片手で受け止めた。
「その程度で―」
『ＪＥＴ！』
呆れたロキの顔面に、ショットライザーが突きつけられる。
「続けて第二弾！」
『ボーイングブラスト！』
「ぬるい！」
ロキは首を傾けて回避してから、そのままヒマリを投げ飛ばす。
ってあぶねぇぇぇぇぇ！
「こんにゃろ……ぐへっ!?」
「はうっ……ってイッセー!?」
そのまま盛大に吹っ飛ばされてもろとも倒れるけど、ヒマリの方が兵器そうなのが釈然としない。
って以下ちょっと無謀だって。
「大丈夫かよヒマリ！　せめて連携でさぁ」
「いえいえ、本命は終わってませんのよ？」
そう言われてロキの方を振り返ると。
「あ」
肩をすくめているロキの後頭部に、戻ってきた砲撃が直撃した。
「ボーイングブラストはホーミング弾ですの！」
えっへんと胸を張るヒマリ。
どうやらちょっとは考えてたんだな。まさか至近距離でホーミング弾を討つとは思ってなかったから、ロキも流石に喰らったと。
……でも。
「ピンピンしてるぞ？」
「ガビーン!?」
ちょっと首をコキコキと鳴らすと、連携するつもりではないみたい

だけど、ローゲとホグニ、タンニーンのおっさんとバラキエルさんの猛攻を、フェンリルと一緒に薙ぎ払ってる。
うわぁ、なんかめちゃくちゃだよあいつ。
どういう方法なんだよ。ぴんぴんしすぎじゃねえか。
いくらなんでも強すぎないか？　星辰光って強力なやつは強力だけど、それにしたって強すぎだろ。
あんなのに、どうやって勝てっていうんだ……っ
「……あ～。そのね？」
その時、下の方で声が聞こえた。
「緊急事態だからこそさぁ、ちょっと降りてくれないかな……その……」
あれ？　この声は？
「あの、イッセー先輩。それまずいですぜ？」
「イッセー先輩！　と、とりあえず右手を放してください!!」
アニルとルーシアが左右から声をかけてきて、俺はふと下を見る。
……ヒツギを下敷きにしてたよ。っていうかおっぱいを右手で盛大に掴んでる。
「……ありがとうごザザザザザザザザっ？」
「先輩!?」
『相棒ぅぅぅぅぅ！　ここでひきつけを起こすなぁあああああ！』
『と、とりあえずいったん融合を解除……いえ、引きはがしてくれませんか、ヒマリ』
「おぉ～。これがおっぱいドラゴン。ヒツギのおっぱいをラッキースケベとは運がいいですの」
「いいから降りてーっ!!!」

Other Side

その時、誰もがその音を聞いた。
『……まさか、こんなところに存在するはずがない島で、このような戦いが繰り広げられているとは』
それは、大隊規模を超える大規模な軍隊だった。
そして、これまでにない特殊な軍隊だった。
上下を組み合わせた船とでもいうべき特殊な空を飛ぶ兵器に乗っている者達が、そこから重火器の小銃を向けたり、内部から降りて銃を構えながら、しかし動揺している。
そして何より注目されるべきは、人型の機動兵器だ。
全高はサリュートⅡと同じぐらいでありながら、最大の特徴はコックピットブロック。
サリュートⅡはできる限り人型に近い形状をしつつ、背部を膨らませるようにコックピットブロックが備え付けられている。
だがその機体は股幅を広くとり、股間部にコックピットブロックを組み込んでいた。
その良くも悪くも独創的な姿に面食らっていると、そのうちの一機から声が響く。
『これは、性託と名付けられたあの事態が、本当に意味を持っているということか。……それになんということだ』
そしてイッセーやヴァーリ、マルガレーテや祐斗を見て、どこか涙ぐんでいる声色になった。
『ああ、素晴らしい……素晴らしいことだ。これほどの同士の輝きを見ることができるとは……』
『性癖を具現化する情光を具現化する者がこれほどまでに！　ここは

性欲のヴァルハラということか!?』

『『『『『『『『『『『『『性欲万歳!!　発情、発情!!』』』

神威動乱編　第三十五話　変態化学反応

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

時は、先日の夜にさかのぼる。
「……これは、まさか神託だとでもいうのか!?」
「なんということだ。まさかと思って調べてみれば、あんなところに島があるなど」
「地図にすら移っていない島。よもや我らの○精や○吹きが一転に集った地図の個所を、偶然にしてもできすぎだと思って調べてみれば……っ」
「謎の軍勢も集っているらしい。それもレイダーにもならず空に浮かんでいるとか」
「教主、どうなさいますか!?」
「うむ。偶然かもしれぬが偶然とも思えぬ……よし」

「これより大欲情教団はこれを性託とし、威力偵察を行う。全ては至高たる性欲を広める為に！」
『『『

分集まったという偶然から、この集団はこの決戦に乱入することになる。
禍の団がたまたま察知し、そして「こっちから手を出さない」と決定したイレギュラー。
たまたま変態と天才を兼ね揃えた者達の集まりに、たまたま神滅具を宿した者が発現し、そのまま誤解と勘違いに突き進んで独自に人工神器の真似事まで成功させた、イレギュラー中のイレギュラー。
大欲情教団が、今本格的に異形と接触することになった。

なっちまったのである。

イッセーＳｉｄｅ

なんだあれ。
人から変態とよく言われる俺だけど、それでも断言できる。
なんだあれ。
たぶんノアさんの言っていた謎の勢力とかそんな感じのあれだけど、それでも言いたい。
「なんだあれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!?」
もうどこから突っ込めばいいのか分からねえ。
あんなのがいきなり表れて突撃してきたら、そりゃ外側の大王派の人達も混乱するし突破されるよね!?

え、何あの集団。二回ほど似たような変態集団について聞いたと思うんだけど。
カズヒが精神的にグロッキーになった例の変態集団だよな？　何故か露出狂を大量発生させた、九成やヒマリが苦労した集団だよな？
むしろそうじゃないなんてことはないよな？
いや。
「なんだぁあああああああれぇえええええ!?」
「三回言いましたのね。でも、なんていうか凄そうな集団ですの」
ヒマリ。平然としすぎじゃね？
お前はもうちょっとはっちゃけないでほしい。いや、ある意味で冷静になれるから良し悪しだと思うけど。
「……寄りにもよって、このタイミングであいつらかよ!?」
「うっわ～。ミザリとか曹操とかが頭抱えそうにゃん」
っていうか美猴に黒歌がなんか言ってるんだけど。
こ、心当たりでもあるのか？
「……もし禍組織の団的にデメリットがないのなら、何か教えてくれるとありがたいんですが」
ルーシアが抜け目なく交渉すると、美猴はぽりぽりと頬をかいた。
っていうか、なんか微妙な雰囲気だな。
まあ、さっきから「君の性癖はなんだい？」とか真顔で神器持っている奴らに聞いているから、関わり合いになりたくないだろうけど。
俺達側だと木場が被害に遭ってるな。男女問わず「剣とくれば切断。……人を切る形でのサディストなのかい？　私はマゾヒストとして怪我が治るから、さあ、腕を切り給え！」とか「いえ、剣とくれば○ニスの例えよ！　つまり自分の剣に自信があるということだから、よければ私と一戦交えましょう！」とか言われて、めちゃくちゃ戸惑っている。……いや、あれはドン引きだ。
本当に知っているなら教えてほしい。
俺達は顔を見合わせてから美猴をガン見すると、美猴もちらちらとあいつらを見ながらでも教えてくれる気になったらしい。
「いや、禍の団でも「手出し厳禁。むしろ勝手に出したらややこしくな

るから殺す」ってことで俺っち達はよく知らねえんだが、何も知らねえ天才変態集団の象徴に、神滅具が宿った結果生まれた、世界を変態にしようとする秘密結社らしいぜぃ？」
　せかいをへんたいにしようとするひみつけっしゃ
「……マジ？」
　俺とヒツギがそう言うと、美猴は頷いた。
「マジらしいのよね～。なんとかと天才は紙一重って言うけど、結果として大型化する代わりに性能もそこそこある人工神器擬きまで作ってるって聞いてたけど、サリュートⅡに喧嘩売れそうなのまで作ってるとは思わなかったわ」
「……え……えぇ……」
　黒歌の追加で、ルーシアまで困惑してるし。
　いやちょっと待って。何が何だか分からねえよ。
　変態に神滅具が宿った結果、何も知らない人達が異形の最先端である神の子を見張る者ばりの技術力をゲットって。
　いや、嘘だろ。
「変態は天才の同義語じゃねえだろ!?　なんだよその異例の大成果!?
　天才っていうより天災じゃねえか!?」
「先輩／イッセーが言うこと!?」
　アニルとヒツギのダブルツッコミが痛い！
　いやでも、俺って同列で語られるようなことしてるか？
『相棒。お前は自分が禁手に至った経緯を思い出せ』
『はた目から見ると、イッセーの変態性もあれに匹敵しますからね？』
　ドライグとシャルロットの二大相棒からも手厳しい評価だ。
　え、俺ってあれと同レベルで語られるのか。あれと同レベルの変態ってことなのか。
「……流石に凹む」
　なんていうか、思わず崩れ落ちた。
「いいえイッセー！　覚醒させただけのあいつらより、禁手にまで至ったイッセーの方が凄いですのよ！　格上ですの!?」
「いやそれフォローじゃない、とどめ！」

ヒマリをヒツギが取り押さえるけど、普通に聞こえてます。
格上か。俺、あいつらより遥かにやばいヤツなのか。
死にたくなってきそうだ。
「……ま、まあ……イッセー先輩はあそこまでへんてこりんな捻くれ方はしてねえっす。真っ直ぐに突き抜けてるんで……その……」
アニル。フォローになってない。
いや、フォローしようとしてくれたのは嬉しい。いい後輩を持ったって心から思う。後でなんかおごるってぐらいには感謝してる。
でも、それは方向性が違うだけで出力とかレベルとかが同格って扱いになってるから。あまり変わらないから。
なんていうか、ここに来るとルーシアの反応が逆に気になってきた。
俺はちらりとルーシアを見ると―
「……はぇ？　は……はぁ……な、なんで……？」
―完璧に茫然自失になってやがる!?
「おぉおおおおい！　しっかりしろ、ルーシアぁあああ！」
「やばっ！　ルーシアが一番ダメージ喰らってる!?」
俺とヒツギが慌てて肩をゆするけど、ルーシアはさっぱり気付かない。
虚ろな目で、頬を引くつかせて茫然としていた。
「もういやぁ……兄さん、助けてぇ……わけ、が……わからない…よぉ……」
本当にリュシオンさんに来てほしい！
駄目だ、ルーシアのメンタルが限界だ！
くそったれ！　どうしろっていうんだ！
「あの～。ヒツギ、イッセー？　アニルにルーシアもいいですの？」
ヒマリがそう言っているけど、今そんな余裕はないよ!?
もう俺達おなかいっぱいなんだけど、何があった!?
なんていうかブちぎれそうな気すらして振り返ると、それに気づいた。
あ、ヴァーリチームが消えた。

「「逃げたぁあああああああっ!?」」
俺とアニルとヒツギが思わず絶叫するぐらい、影も形もなかった。
あいつら、こっちがパニクってる間に逃げやがった！
「中々抜け目がないですのねぇ」
感心してる場合じゃないからね、ヒマリ！

和地Ｓｉｄｅ

思わず操作を誤って吹っ飛んだぁあああああ!?
痛い!?　三バウンドぐらいしたぞ!?
つ、鶴羽は大丈夫か!?　あいつ後ろ向いてたから尚更まずいんじゃ―
「……きゅぅ～」
―駄目だ伸びてる。でも分かり易い声出してるからたぶん命に別状はない。
生き残れたら何かしらで詫びるとしよう。まずはとにかく生き残らないと。
た、たぶんあんなわけの分からない集団が出てきたなら、春っちもベルナも混乱しているはずだ。衝撃で我に返れた分、俺の方が早く反応できるはずだ。
そう気を取り直して起き上がったとき、春っちやベルナと目が合った。
「……なんで？」
即応ぶりに驚愕していると、二人はちょっとだけ視線を逸らして俯いた。

「ごめん和っち。禍の団(私達)はあいつら、手出し無用ってことで教えられてるの」
「なんでもたまたま神滅具を宿した教祖がいた所為で、独自に人工神器擬きまで開発した天災集団だとよ」
うん。春っちもベルナも律儀でありがとうな？
でもこれ、詰んだんじゃないか？
俺は正直、辞世の句とか考えたくなってきた。
「んじゃ、そろそろ覚悟してもらおうか？」
「ええ。そして見せてあげる、私がどれだけ強くなったか!!」
……本当に考えたくなってきたぞ、この窮地!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

突如現れたド級の変態で構成される軍事部隊。
彼らも含め、事前にその存在を知っていた禍の団以外の全ての勢力が困惑していた。
無理もないだろう。
三大勢力もロキも、そんな存在を知覚すらしていない。あまりに世界は混乱状態であり、更にそんな中「変態がたまたま神滅具保有者を迎え入れて、何も知らずに研究して禍の団の派閥クラスの勢力になる」などというものを理解しろという方が酷だろう。
そして大欲情教団からしても、何も知らないがゆえに混乱している。
その情報の祖語が、あまりに状況を悪化させていた。
「ぬぅぉおおおおお！」

放たれるバラキエルの雷光に対し、迎撃するは一人の男。
乗機を破壊されながらも、神の子を見張る者の中でも有数の実力者たるバラキエルと渡り合うその力量は凄まじい。
凄まじいが、その戦闘スタイルがあまりにアレすぎる。
何故ならば、先ほどから雷光を弾き飛ばす力は股間から伸びているからだ。
「……その神器、流星破装（メテオ・バスター）か？　どんな亜種発現だ……っ」
思わず戦慄するバラキエルは悪くない。
というより、まっとうな感性を持っている男なら躊躇することもあり得る……どころではない。具体的に股間から生える一本の某に、常人なら毛涼みすら残らない攻撃が当たっているというのは、男の心理的に負担が相応にある。
異常性も込みで距離をとりたくなる戦闘だが、それを成し遂げる男は首を傾げた？
「めておばすたぁ？　ふむ、この情光を君達はそういうのか。……だがネーミングセンスは悪いな」
その返答にバラキエルは困惑する。
当然だろう。彼はまだ大欲情教団の情報を把握できていないのだ。
ここまで神器の性能を引き出している者達が、予備知識をひとかけらも持っていないなど想定する方が困難だ。
業界の重鎮であるがゆえに無意識に盲点を突かれ、戦闘すら不利になってしまうのも仕方のないことだろう。
……ゆえに、胃痛が増えるのも当然といえる。
「○ンポとは男の最も誇るべきもの。それをこよなく尊ぶ我が性癖が具現化したのなら、むろんその名はチ○ポとして具現化するべきではないか？」
「いやちょっと待て」
狂人の理論に思わずツッコミを入れたくなるが、しかし残念なことに知識がない為通じない。
むしろ変な勘違いが成立した結果、更なる飛躍がなされる。
「……まあ並みの性癖では不可能だろう。なにせ俺はチン○に対する

敬意から常に研鑽に余裕はない。自分だけでなく他人のであろうと慈しめるように、同性愛の毛はないが同性愛者や女性陣の協力のもと、愛撫や○エラ○オの練習も積んでいる。並みの風俗嬢より能力があると、多くの者達から評価されているとも」

「……はなしがつうじない」

ろれつが微妙に悪くなるのも仕方がない。

バラキエルも大概変態寄りではあると自覚はしているが、ぶっ飛びすぎていてついていけない。

これはあれだ。下手をすると洋服崩壊とか乳語翻訳とかを具現化できる類のあれだ。

……流石に兵藤一誠に悪い気がして首を振ったが、それがよくなかった。

「さあ、お前の性癖を輝かせろ！」

流星破装は荷電粒子を攻撃の起点にする銃剣付き長銃型が基本計である。

必然、股間から生える亜種発現をした男の攻撃は股間から放たれた。

いろんな意味で精神的に負担を覚えながら防御は成功するが、バラキエルの不幸は此処に終わらない。

『隊長に続け！　燃え上れ、我らが性欲!!』

その瞬間、近辺にいた人型機動兵器のコックピットブロックからオーラが集まる。

……股間部にコックピットブロックがある以上、それは男のそれと似通っているのが、周囲の精神をゴリゴリ削っていた。

『『『

そしてこの乱入により、戦いの流れは更に二転三転していくことになる。

具体的に言うと、禍の団は此処から持ち直す。

神威動乱編　第三十六話　躍動、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）!!

Other Side

ロキはローゲ及びホグニ王と渡り合いながら、同時に状況の把握に努めていた。
あまりに訳が分からない集団に混乱しているが、しかし分かることもある。
禍の団の反応から見て、彼らは心当たりがあるようだ。そして遠慮なくお互いが攻撃をしていることから、禍の団は知っているだけで繋がりはろくにないと見える。
つまり、積極的に禍の団は排除も取り込みをしていないということ。厄介ではあるが、しかしそれ以上ではないと考えるべきだろう。
ならばまともに相手をしてやる義理はない。そう判断し、ロキは本格的な攻撃を試みようとして―
「……悪いが、少し休憩してくれないか？」
―男が一人、その戦いの場に割って入った。
目つきが鋭い若い青年が、そこに立っていた。
「ブレイか。……俺はロキに直接恨みがあるわけではないからいいが……。ローゲ、お前はいいのか？」
「まあいいよ？　やられる光景を見てあざ笑うってのも味があるし？」
あっさりと二人から了承を得て、ブレイと呼ばれた青年はロキに向き合った。
「いずれ五郎入道政宗を超える男。六道入道（マサムネ・ジュニア）、ブレイ・マサムネ・サーベラだ。恨みはないが都合がいいから、試金石になってもらう」

「……ほう？」
ロキはそれに、苛立ち半分感心半分で応えた。
人間如きが一人で神に挑むという不遜と不敬に腹は立つが、同時に下手な英雄（エインヘリヤル）でもいないだろうほどに、目に込められた力は評価に値する。
故に酔狂に少しだけ付き合ってやろうという寛容さを、ロキは褒美として見せることにした。
「さて、貴様は我をどうにかできるかね？」
「さてな。だが、この刃が届くかどうかを試させてもらう」
その返答と共に、ブレイは一振りの刀を取り出すと、軽く振るう。
それを見て、ロキは寒気を感じた。
臆病風に吹かれたわけでは断じてない。そういったものではなく、これは本能的な肉体の反応だ。
そう、すなわち―
「……神殺しだと!?」
「そうか。神殺しとしての領域には踏み入れているのか……ありがたい」
ロキの反応に誇らしげに呟いたブレイは、同時に腰に特殊なベルトを巻き付ける。
『スラッシュライザー』
バックル部分に片刃の刃が取り付けられたそれは、まごうことなきザイアスラッシュライザー。
そして更に、ブレイは一つのプログライズキーを取り出した。
『ＳＴＥＡＬＴＨ！』
そしてそれを神殺しを構えたまま器用に装填。
視線と切っ先をロキからずらすことなく、ブレイは宣言する。
「……変身」
『スラッシュライズ』
同時に展開されるは、キツネの姿をしたライダモデル。
それが器用にブレイの背後に尾で器用に立つと、毛皮を模した装甲が展開され、ブレイを囲む。

更に煙幕が展開され全身を包み込んだその直後、それを吹き飛ばして黒をベースとした黄色の装甲に身を包まれた、仮面ライダーが出現する。
『ハイディングフォックス！　Ｈａｈａｈａ！　Ｙｏｕ　ｃａｎ’ｔ　ｌｏｏｋ　ａｔ　ｍｅ』

仮面ライダーという強大な力を纏いながら、しかしブレイの視線はロキを見て、頼りに戦闘する意思は手に持つ刀に向けられる。
お前に挑むのは仮面ライダーでもなければ自分でもない。この刀こそが挑戦者だ。ブレイは全てをもってしてロキにそれを突きつけていた。
そしてロキもまた警戒を色濃くする。
この雰囲気は警戒に値すると、ロキは理解した。
何故ならば、目の前にいるのは戦士ではない。
目の前にいるのは鍛冶師だ。それもミョルニルを鍛えたドワーフ達に迫らんとする、強い意志が見え隠れする。
「……我が妖刀、銘はカミナキ」
正眼の構えで神殺しの妖刀を構え、ブレイ・マサムネ・サーベラは宣言する。
「……この刃が神殺しに値するか、試されるがいい、悪神！」
これこそが、ブレイ・マサムネ・サーベラが世界に名を轟かせる第一弾。
のちの世に、六道入道（マサムネ・ジュニア）の異名を世に認めさせた漢（おとこ）。その覇道の第一歩である。

そして同時に、外周部でも戦闘は激化する。
外周部では大欲情教団相手に大王派の第四義勇師団が激突していた。

後詰といて待機していたが、第四義勇師団は義勇師団なだけあって士気は高い。
更に、この義勇軍のメンバーになることは、バアル次期頭首サイラオーグ・バアルの直属になると同義であること。彼が下級中級に対しても蔑視を向けないこと。また掲げる理念は「成果を上げれるなら誰もが相応の地位につける」という、下級中級にとってこそ希望が見える理念を支え、自らもそれを目指せること。
その全てがかみ合った結果、大王派が組織した義勇師団の中でも第四義勇師団は最高峰の士気を持っていた。
また自己鍛錬に余念がないサイラオーグの影響を受け、非戦闘時の責務以上に自主鍛錬を積むものが多いため、練度も高い。
本来なら自主鍛錬の調整を損なって体を痛める者も出るだろうし、大王派の重鎮によりサイラオーグの発言力を削る為の細工もあるだろう。だがシュウマ・バアル達は余計な小細工で冥界政府全体に悪影響を及ぼすことを嫌い、それを阻止し改善したがゆえに、そういった問題もなく武装の水準も高かった。
二個中隊規模とはいえＤＦも存在するこの義勇師団は、生中な戦力では返り討ちにあうだろう。
……だが、戦況はむしろ義勇師団にとって不利になっている。
想定外かつ意味不明な乱入者により困惑していることもだが、禍の団側の戦力がこの機を逃さず仕掛けてきたことで、義勇師団が困惑しているのが最大の理由だ。
「……これは、流石にきついな」
鋭く重い拳で、文字通り敵機を粉砕するサイラオーグも、この戦況に不安を覚えてしまう。
それほどまで、この四つ巴は危険だ。
ロキ一派によるマギア部隊との戦闘もあり、戦況は混沌と言うほかない。特に謎の乱入者を部隊規模で突破されたこともあり、義勇兵側は困惑が大きい。禍の団側の困惑があまりに少ないこともあり、これは危険というほかない。
「……ノア！　全体の隊列は整えられているか!?」

サイラオーグは全体の軍事運用を任せたノアに通信を繋ぐ。
自分を負かした男だからと嫌悪する思考回路は彼にはない。
レーティングゲームのルールに乗っ取って嵌められた以上、自分の未熟を恥じるのみ。一気に後援者を失ったが、その程度の苦難など慣れ切っている。ノアが勝利の布石をしっかり打って勝ったことを認めこそすれ、悪態をついて罵倒するなどありえない。
むしろそれだけの手腕を持つからこそ、現場で敵を打倒する方が向いている自分より指揮官に相応しい。その信用から、事実上の総大将として彼に指揮を委ねているのだ。
彼で無理なら自分ではもっと無理だろう。士気を上げるだけでは意味がない状況だと悟っているが為、ノアの手腕が巧みであることを期待する。
『オーライだ。全体の八割は混乱がだいぶ抜けたし、プランTの移行準備もあとちょっとだ。……ただし』
想像以上に巧みな手腕を見せているノアだが、しかしそこで不安を覚える言い回しをする。
この状況下で、政敵とはいえ味方の足を引っ張る愚は侵さないと確信している。だからこそ、不安は確実に当たるとサイラオーグは確信した。
「あえて俺が奮戦するような状況にしたいのか？」
『ああ。禍の団の対応があまりにスマートすぎる。この状況でプランTに行けたとしても、外周部の勢力で妨害されかねねえ。奴さん達の理想的勝利は「グレモリー眷属を滅ぼしたが消耗したロキを討ち取る」だろうしな。だから―』
「妨害されぬよう、禍の団を釣るエサが必要だということか」
サイラオーグも、その対応の戦術的価値は認めるほかない。
この作戦の最重要目的はロキの撃破だが、同時に禍の団のもう一つの目的であるリアス・グレモリー眷属が打倒されることは避けねばならない。
旧魔王派の首脳陣を撃退したリアス・グレモリー眷属。ことおっぱいドラゴン兵藤一誠は冥界にとって希望の象徴に近い。もし殺され

るようなことになれば、冥界政府全体の士気に悪影響が生まれるだろう。
だからこそ、切り札を妨害されぬ為に何かしらの餌を巻いておきたいというフロンズの判断は当然ともいえる。こと戦争において、人命という駒をわざと取らせるのはよくあることでもある。
故に―
『つーわけで十分後に戦力比率をそっちよりに再配置する。それまで他の部隊の再編とプランTの準備に徹するから、悪いが大暴れしといてくれ。……獅子を使うなら一緒に謝ってやるからよ』
―ノアは言外に切り札の使用許可を与えたうえで、通信を切った。
十分間サイラオーグを大きく暴れさせることで、敵の戦力を引き付ける。そしてその為なら自分まで叱責されることもいとわない。
それが指揮官としての覚悟というのなら、サイラオーグも否とは言えない。指揮権を預けたという事実だけでなく、自身のリスクも背負ったうえでの判断だからこそだ。
「……全員、ここが踏ん張りどころだ！　最悪の場合はレグルスを使うぞ！」
「「「「「「はっ！　サイラオーグ様！」」」」」」
檄を飛ばし、そして眷属達がそれに付き従った時―

「……悪いが、そろそろ海賊の時間とさせてもらうぜ？」

聖なるオーラを察知して、サイラオーグは咄嗟に飛び退る。
下から放たれる聖なる神殺しのオーラを避け、サイラオーグは敵を睨み付ける。

高速艇の舳先に陣取った、黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）を構えた伊達男。
九条・幸香・ディアドコイに従うライダーのサーヴァント、ジョン・ラカム。
神滅具保有者という難敵に、サイラオーグは拳を構える。
流石にそれだけの難敵が相手ならば、自分が出張るほかはない。
そしてそんなサイラオーグを見て、ラカムは肩をすくめる。
「別にあんたを殺しに来たわけじゃねえよ。……海賊ってのは殺戮じゃなくて略奪が本筋だからな？」
その言葉と視線の動きで、サイラオーグはすべてを悟った。
ジョン・ラカムの狙い。それはすなわち―
「乱入者の兵器だけでなく、第四義勇師団のＤ（ディアボロス・フレーム）Ｆを奪取することが狙いか！」
「ビンゴ！　アルバートの奴が知らない技術ゲットしたら高く買うって言ってくれててなぁ。手出し厳禁の連中がそっちから来てくれるっていうし、横から襲って漁夫の利ってわけよ！」
その言葉に、サイラオーグは切り札の使用を真剣に考慮し―
「そうはいかないわ」
「その通りだ」
―その隣に、二柱の神が並び立った。
オケアニスの一人でもあるアニアスと、元々八百万の神だった源玄隆。
本来天敵たる聖槍を前に、プルガトリオ機関エクストラ部隊が来訪するという事態に、ラカムは苦笑する。
「馬鹿じゃなくて勝ち目があるってわけかい？　ま、特攻が入る武器一つで殺せるほど、プルガトリオ機関長官のお付きは甘くないか？」
「「当然」」
自負が籠ったその言葉に、ラカムは決して否定しない。
ラカム自身が分かっているのだ。目の前の二人にサイラオーグをまとめて相手取れるほど、自分は決して化け物ではないと。
だからこそ、二柱と同様にサイラオーグは警戒する。
この状況下で苦笑どまり。慌てているわけでもやけになっている

わけでもない。そんな、勝ち目に向かって全力を尽くす敵の目に、警戒心が沸き上がる。
「俺はなぁ。今度こそガチの海賊になる為にマスターについて行ってるんだ」
そんな三人の警戒に、ラカムは僅かに震える拳を見せながら微笑んだ。
「怖いのは怖いさ。だが、臆病風に吹かれてちゃちな稼ぎで海賊を嘯くなんてもうごめんだ。俺は今度こそ、縛り首になるリスクを分かったうえで、そうなる前に道連れにして皆殺しにするような生き方をするのさ」
その言葉と共に震えを握り潰し、そしてラカムは手を掲げる。
「……真名、開帳」
それは、サーヴァントの切り札を明かす瞬間。
「野郎ども、悪党の時間の始まりだ。その象徴たるこの旗を思い出せ」
そして現れるは、一つの旗が掲げられた海賊船。
その旗に描かれるは、交差するカトラスとその上の髑髏。
「略奪しろ、蹂躙しろ、人生を謳歌しろ。今こそ俺達が何なのか、この旗の下に宣言しろ」
そして、それらは現れる。
亡霊によって構成される、いくつもの船と船員達。
誰かはカトラスを持ち、誰かはＡＫ―４７を持ち、誰かはＲＰＧ―７を持ち、また誰かはフリントロックの拳銃を持つ。
高速艇がある。ガレオン船がある。スループ船がある。魚雷艇がある。
そう、そこにいるのは―
「さあ、海賊を始めよう！」
―古今東西の海賊達が、象徴の旗を掲げた男の下に、蹂躙と略奪を愉しむべく集ったのだ。
「これが……奴の宝具ッ！」
その光景を見て、サイラオーグは理解する。
あれこそがジョン・ラカムの本当の切り札。神殺しの聖槍以上に信

を置く、彼という英霊の象徴が結晶体。

そう、彼は決して聖槍使(ランサー)いではなく、大海原をかけた船乗り……否。

「此ぞ海賊(パイレーツ・オブ・キャリコ・ジャック)、集え我が旗の下に」

一時代を超える一つの概念の象徴となる旗を掲げた、海賊(ライダー)という英霊なのだ。

これより、蹂躙と略奪の時が始まる。

神威動乱編　第三十七話　後継覇王

祐斗Ｓｉｄｅ

訳が分からない。いや本当に訳が分からない。

なんなんだ、あの集団は！

「祐斗！　大丈夫⁉」

「い、いろんな意味で何とか……」

部長のお言葉に答えながら、僕は心身共に疲労して膝をついた。

本当に大変だった。

何故か彼らは神器や異能を、性癖が下地になっているものと思っている。その所為で訳の分からない質問攻めに遭いながら戦う羽目になって、真剣に苦労した。

イッセー君の乳技と相対する禍の団だって、ここまでの苦労はしてないだろう。それぐらい話が通じない連中だ。

あれはいったい何なんだ⁉　いや、本当に!!

「……性癖とは凄まじいな。あいつらなら洋服崩壊（ドレス・ブレイク）を習得していても驚かんぞ」

「イッセー君のライバルになりそうな人達ね！」

ゼノヴィアとイリナさんも気圧され気味だけど、その感想はどうかと思うよ？

イリナさんはまだ微妙だけど、ゼノヴィアはイッセー君を愛しているんだから、もうちょっと手心を加えてあげるべきだ。というか二人とも敬虔な信徒で、イリナさんは転生天使なんだからもうちょっとこう……慎みを持った方がいいと思う。

だが敵は難敵だ。
サリュートⅡと渡り合える性能の人型兵器に、高い練度と装備で戦う歩兵部隊。連携も上手く、訳が分からない混乱もあって、僕達はもちろん、ロキ側の戦力も混乱している。
となると禍の団も、流石に苦戦していると思いたいけれど―
「……さて、それでは妾も本腰を入れるかのぅ」
―その足音に、僕達は振り向いた。
そこにいたのは九条・幸香・ディアドコイ。
面白そうに周りを見ながらも、特に動揺が見られないその姿に、僕達は警戒心が高まっていく。
こんな光景を見てこの態度がとれるとは恐れ入った。精神力が異常なまでに強いのか、それともただ変な人なのか。後者であると考えるのは、この状況では油断でしかないだろう。
「……ま、負けません！　イッセー先輩に恥ずかしい真似はできないです！」
「……イッセー先輩も頑張ってる。負けないから」
ギャスパー君と小猫ちゃんがそう構える中、九条は不敵な笑みを浮かべながら、プログライズキーとスラッシュライザーを取り出した。
「さて、妾もロキともっと遊びたいところだが、臣下に花を持たせるのも主の矜持。……少し遊んでもらおうとするかのぉ？」
『スラッシュライザー！』
『ＡＲＭＳ！』
スラッシュライザーにプログライズキーを装填し、幸香はにやりと微笑んだ。
『Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』
そして、スラッシュライザー本体を取り外すと、天高く掲げる。
そして不敵に笑った直後、勢いよく振り下ろして僕らに突きつけた。
「変身」
それに合わせてプログライズキーが読み込まれ、変身が開始され

る。
『スラッシュライズ！』
大きなカラスのようなライダモデルが展開され、九条の背中に止まるようにとどまる。
そしてライダモデルは翼を広げると、羽の隙間からいくつもの物体が突き出る。
それは重火器だったり、ＲＰＧだったり、弾帯だったり、ロケットランチャーだったりする。
そしてそれが彼女の全身を隠したと思った時、盛大に爆発した。
『ブローニングクロウ！　Ｂａｎｇ　Ｂａｎｇ　Ｂａｎｇ！　Ｉｔ⊠ｓ　ａ　ｈｕｍａｎｓ　ｆｏｒｔｈ』
黄金を主体とした、黒い装甲に身を包んだ仮面ライダー。
そう、仮面ライダーに態々変身し、九条・幸香・ディアドコイが僕達に向き合った。
「それだけの敵手であると認めよう。そして名乗りを上げるとしようではないか」
仮面越しでも不敵な笑みを浮かべていると確信できる声色で、九条は宣言する。
「我が名は仮面ライダーディアドコイこと、九条・幸香・ディアドコイ！　かつて我が英霊となりながらも魂を腑抜けさせた馬鹿者から力を簒奪し、同胞となりしジョン・ラカムの助力をもって力を馴染ませ覇道をなす者」
その言葉と共に、急激にオーラが上昇した。
なんだ、これは。
まるでイッセー君やヴァーリ・ルシファーが禁手になったかのように、急激すぎる力の上昇。
まさか、彼女も禁手に……いや、違う。
これは、根本的に違う何かがある。
それに寒気を覚えるとともに、九条・幸香・ディアドコイは宣言した。
「己（おの）が魂を曇らせたアレクサンドロス三世に代わり、覇道を成す海賊、

アレクサンドロス三世のデミ・サーヴァントにしてそれを超える者！」
そのオーラが間違いなく増幅している。
それに警戒心を湧き立たせる僕達に獰猛な笑みを向けて、彼女は腰を落とし―
「後継覇王九条（アレキサンダー）・幸香・ディアドコイの御前であると知るがよい!!」
その言葉と共に、猛威が僕達に襲い掛かった。

イッセーＳｉｄｅ

な、なんか禍の団の連中の動きがシャレにならないことになってきてないか!?
「くそったれ！　アーサーが逃げたと思ったらこれかよ！」
アニルが舌打ちしながら周りを見渡すけど、かなりまずい。
なんていうか、禍の団の連中がすぐに体勢を立て直して動いてきやがった。
美猴達の話だと、あの変態軍団について知っていたらしい。だからすぐに我に返れたってところか？
「……まずいね。変態集団は今までノータッチだったから何も分かってない。そして私達もロキもだからこそ分かってない。知っているのは禍の団だけ」
ヒツギが舌打ちする気持ちもわかる。
ぶっちゃけ、禍の団が一番アドバンテージある状況だよな、これ！
「うぇ……なにが、その……ぁあ……兄さん……」
「しっかりするですのよルーシア！」
ルーシアもまだパニックが抜けてないし、とにかく俺達がしっかり

しないと！
と、とりあえず年長者だけど一番素人だし、ここはヒツギに指示を仰いだ方が―
「……ん？」
ふと、視界の上の方に何かがいる気がした。
っていうかいる。なんていうか、でかいのがいる。
タンニーンのおっさんに比べると小さいけど、それでもＤＦよりはかなり大きい。……十二メートルぐらいだ。
そんでもって、なんていうか似てるのを知っている。
「まさか……サリュート!?」
「いや、でかすぎ……いや、でも似てる……？」
ヒツギもそれに気づいたけど、ここに来て新型かよ!?
しかもでかいとか、絶対なんかあるだろこれは。
まずいまずいまずい。このままだと、完璧に押し切られ―

『『『

神威動乱編　第三十八話　禍なす覇王

イッセーＳｉｄｅ

『『『『『『『『『敵軍勢確認により、これより星辰体兵装の本格駆動開始を決定。』』』』』』』』』

サリュートらしい、詠唱っていうよりただの業務連絡じみた起動音声（ランゲージ）が響いた時、俺は気づいた。

『『『『『『『『『星辰体感応出力及び、搭乗者との同調を最大出力に変更。これより最終調整に入る』』』』』』』』』

なんか、動きが重い。

そこまで強力ってわけじゃない。だけど確かに、高速具でもつけられたみたいに体が重くて動きにくい。

動かない時は気にならないけど、動こうとすると動きづらくなっている。そんな感覚がする。

『『『『『『『『『全行程終了（オールコンプリート）――戦闘行動（オープンコンバット）を開始する。』』』』』』』』』

そして気づいたら、上に何かある。

見上げると、でっかい爆弾があった。

……冗談だろ？

『『『『『『『『『超新星（メタルノヴァ）――制圧型星辰兵装・駆動開始（アストラル・ブラストアームズ）』』』』』』』』』

やばい、爆発する――

祐斗Ｓｉｄｅ

各地でいきなり爆発が連続して発生し、更に僕達の動きが重くなる。
突如として現れた大型のサリュートが星辰光を発動してからのこの反応。どう考えても原因は明らかだろう。
だからこそ、僕は聖魔剣を作り出しながら問い質す。
「あの新型、まさか君達の切り札か！」
「否、そんなわけがなかろう」
聖魔剣の一撃をスラッシュライザーで軽く受け流し、幸香は素早く左手を突き付ける。
「あれはミザリの配下が設計した、有象無象を蹴散らす為の新型じゃ」
その瞬間、大口径のソードオフショットガンが握られ、素早く二連射で放たれる。
「確かアルバートとか言ったかのぉ……あの変異の兵士を使ったやつが開発したものじゃよ」
そう告げながらの幸香の狙いは正確で、発射も早い……回避は無理か。
咄嗟に聖魔剣を盾にして防ぎながら、僕は手に持つ聖魔剣の力を解放する。
具現化するのは炎の聖魔剣。威力は低いが広範囲に炎を展開しつつ、僕は素早く連続で切りかかる。
幸香の星辰光が爆発物を操るのなら、着火しやすい環境を作ればあるいはと思ったからの判断だ。
だが、幸香は躊躇することなくポリ窒素爆薬の人形を作り出す。
グリフォン型の魔獣は爆発物で出来ていながら、炎を突破して後ろのリアス部長達に襲い掛かる。
「なめないで頂戴！」
魔獣達こそリアス部長達が薙ぎ払うが、その爆風もあって連携が寸断された。
豪快なだけでなく立ち回りも優秀か。英雄を名乗るだけのことは

ある。
「不安定極まりないポリ窒素を制御する星辰光だぞ？　ボヤ程度で着火できると思うたか！　ロキ（神域）に届いてから出直すがよい！」
「そうか、なら派手に行こう」
その瞬間、絶大な聖なるオーラが幸香に襲い掛かる。
豪快にデュランダルで爆発事魔獣達を薙ぎ払い、ゼノヴィアが突貫する。
それを幸香は神器による黄金の花弁で受け止める。
神滅具級というだけあり、デュランダルすら受け止める防御力は厄介だ。
だけど―
「ならまとめて薙ぎ払うのみですわ！」
―そこに同じく突破した朱乃さんが仕掛ける。
直接投射だけでなく上から落ちる雷光、それも多角的に放つことで仕掛ける一人十字砲火。
これなら流石に行けるはずだ!!
「温い！」
だけど、幸香は更にその上を行く。
展開された黄金の花弁は基点となってドームのように結界を形成する。
そして結界は花弁に匹敵する防御力を発揮して、雷光を粉砕する。
あの結界、物体に耐えるのではなく破壊することで攻撃を防ぐ類なのか。
まずい。結界そのものが神滅具の領域であり、更に花弁の防御力がかみ合えば、その防御力はイッセー君ですら突破するのは困難だろう。
まず間違いなく時間をかけて力を倍化させる必要がある。そしてそれですら困難な防壁を、今の僕たちでは突破できない。
攻撃だけでなく防御すら多角的。そして何より―
「こんなものかぁ！」
―突撃する幸香の攻撃力も厄介すぎる！

スラッシュライザーによる斬撃も、聖魔剣やデュランダルと切り結べる領域だ。いくら何でもと思うけど、更に遠距離攻撃まで仕掛けてくる。
直射型のロケット弾を、星辰光とは異なる形で大量に生成して乱射してくる。その数と破片含めた爆発で僕達の動きを制限したところに、更に左腕で腰だめに構える汎用機関銃が襲い掛かる。
威力が大きい攻撃をあえて牽制と制圧に回し、より命中させやすい攻撃で確実に当てに行く、豪快さと堅実さがまじ合わさった攻撃だ。接近戦ですらしのぎ切れない中、遠距離戦闘ですら魔獣以外にここまでできると、流石に押し切れない。
そしてふと気づいた瞬間、爆風を突き抜けて花弁が突貫してくる。
咄嗟に暴風を引き起こす聖魔剣を大量に生成。花弁の動きを阻害するだけでなく、地面に生やすことで僕自身を吹き飛ばすことで回避する。
そして一拍遅れた花弁が聖魔剣を粉砕する。やはり結界を纏うことも可能のようで、その攻撃力は厄介だ。
高速かつ頑丈である花弁が、破砕効果を持つ結界を纏う。おかげで攻撃力も、鎧を纏ったイッセー君の拳以上だ。これは本当に厄介だよ。
そして何より、身体能力が高すぎる。
今までの戦闘では手を抜いていたということか。いや、それにしてもこれは全身鎧型の禁手、それも神滅具級だ。
仮面ライダーになったことを踏まえても、いくら何でも性能が高すぎる。
「ええい！　木場、少しでいいから足止めしてくれ！」
その声に、僕はゼノヴィアの意図を正確に察知した。
「咲き誇り、襲い掛かれ聖魔剣！」
瞬時に大量の聖魔剣を四方八方に展開、更に中にも大量に飛ばす。
飛ばした聖魔剣は次元発動型で特定方向に加速するように仕掛けている。これにより時間差でブーメランのように回転しながら飛び掛かる仕組みだ。

むろん、こんな方法では正確には狙えない。だけど同時に属性攻撃性質を付加している。飛ばす能力もあるため威力は低いが、当たった部分を基点に範囲攻撃が発動する。
幸香は素早くそれを迎撃し、更にゼノヴィアにも魔獣を襲い掛からせる。
この状況下でゼノヴィアに攻撃する余裕を捻り出したことは優れすぎている。そしてゼノヴィアは回避しようともしない……が。
「させません！　アーシア先輩！」
「任せてください　ギャスパーくん！」
ギャスパー君の停止で発生した僅かな通り道を、アーシアさんが突貫する。
乳語翻訳抜きでは煩悩を全開にしたイッセー君ですら捉えることが困難な、アーシアさんの驚異的な三次元走行能力。その卓越した移動技術は、ギャスパー君によって穴が生まれた攻撃では捉えられない。
そしてその回復が、ゼノヴィアに爆発を耐える余地を作り出した。
そして―
「今です、部長！」
「ええ、よくやったわ……小猫！」
小猫ちゃんが全力をもってして、リアス部長をゼノヴィアと対を成す位置に届かせる。
「ゼノヴィア……合わせなさい！」
「無論だ部長、吹き飛ばすぞっ！」
最大出力の部長の消滅の魔力と、限界まで貯めたゼノヴィアのデュランダルによるオーラの斬撃。
鍛えられ、そして溜めに溜めたこの一撃は、イッセー君ですら深手を負うだろう威力が込められている。
それが回避を困難にされた状態で、幸香に向かって放たれる。
幸香は結界を作ろうとするが、だけど甘い。
「アーメン！」
真上から強襲を仕掛けたイリナさんによって、花弁の連携は一瞬乱

れた。
　これなら……
「いける！」
「いかぬわぁ！」
　僕の確信を、しかし突き破る声が響く。
『ＡＲＭＳ！』
　プログライズキーが起動し、幸香は素早くスラッシュライザーを逆手で構える。
　同時に、左腕に大剣が具現化した。
　そして左右同時に襲い掛かる攻撃に対し―
「我、選別断ち切る者也（ゴルディアス・スラッシャー）」
『ブレーニングレイン！』
　それぞれが消滅の魔力とデュランダルの一撃を切り裂いた。
　……あり得ない。
　いくらなんでも強すぎる。星辰奏者（エスペラント）であり魔術回路があり仮面ライダーになれるからといっても、神滅具保有者として見ても強すぎる。
　それでも戦意をかき消さない僕達に、幸香は嬉しそうに肩を揺らした。
「ふっふっふ。その勇士に敬意を表し、絡繰りを教えてやろう」
　そう告げる幸香は、しかし軽く肩をすくめる。
「とはいえ簡単なことじゃ。妾は戦闘を開始する前に何をした？」
　その言葉に、僕はすぐに思い出した。
「……アレクサンドロス三世のデミ・サーヴァントと言ったね。つまり、さっきの斬撃以外に宝具があるのかい？」
「確か宝具には真名解放を必要としない、常時発動型の宝具があるらしいわね。それかしら？」
　僕とリアス部長がそう推測すると、幸香はうんうんと頷いた。
「惜しいがいい線をついておる。正解は、サーヴァントとしての真名を明かすことで発動する宝具というわけじゃ」
　……それは、どういうことだ？

「諸君らは知っておるか？　ロマンスとは今でこそ恋愛物語になっておるが、元々はそれらをエッセンスとして含んでおるだけの騎士や王といった者達の冒険活劇であったと」
　それがどうしたのかといいたいけれど、その時僕はふと思い出した。
　そういえば、ロマンスにはアレクサンドロス・ロマンスというものもあるらしい……っ！
　それにリアス部長も気づいたのだろう。目を見開いていた。
「……アレクサンドロス・ロマンスに由来する宝具、ということ……っ！」
「その通り、そのようなジャンルとして確立するほどに崇拝され、王や英雄足らんとする者を幾人も生み出したアレクサンドロス三世の崇拝……否、知名度補正が宝具と化したのが、我、活劇（アレクサンドロス・ロマンス）の英雄也！」
　堂々と高らかに、胸を張って。
　九条・幸香・ディアドコイはその力を吠える。
「サーヴァントしての真名を解放することにより、自身だけでなくアレクサンドロス・ロマンスの信仰を力に変換、全ステータスのワンランクアップ及び、魔力を回復し負傷による性能低下を減衰させる！
それこそがこの宝具の真骨頂！」
　そう告げる幸香は、どこまでも胸を張りながら、どこか苦笑を感じさせていた。
「これだけの栄光をつかみ取りながら、腑抜けるような馬鹿がいるとは情けないとは思わんか？」
『ＡＲＭＳ！』
　そして同時に駆け出し、飛び掛かる。
　スラッシュライザーは腰についている。つまりは蹴りによる必殺技。
　それに呼応するように、ゼノヴィアが僕の近くに並び立った。
「合わせろ木場！　制御は任せる！」
「ああ、分かっている！」
　回避をさせる気はないだろう。ならば真っ向勝負が最適だ。

二人がかりでデュランダルを高め、真っ向から正面勝負で迎え撃つ。
「外連味に答えて小細工抜きだ！　喰らうがよいぞ！」
『ブローニングレインラッシュ！』
「うぉおおおおお、デュランダル！」

ブローニング

レインラッシュ

その正面からの競り合いが、大爆発を引き起こした。

和地Ｓｉｄｅ

「さて、じゃあそろそろ私の強さを見せられるかしら？　本番……行くわよ！」
そして嫌な予感通りに、春っちはこっちに右腕を構えて突撃する。
動きから見て横なぎ。そしてこの距離と踏み込みは―
「赤き灼熱の魔剣（ブレイド・オブ・ファイヤ）」

―斬撃！
斬撃の線を出がかりで見切ることで、俺は咄嗟に体を逸らして回避に成功。そのまま鶴羽を担いで距離をとる。
即座に追いすがりながら、春っちは拳を握り締める。
当然だが、赤き炎の腕ゆえにその手は炎に包まれる。あと何故か両手だ。
赤き炎の腕は基本右腕にのみ具現化するはず。つまりあれは禁手か亜種発現なわけだが、それにしたってよく分からない。
出力がまず、準神滅具の領域だ。更に発現する能力も多様性がありすぎる。一言でいうなら、かなり数が多い部類にある赤き炎の腕の性能じゃない。神の子を見張る者のデータから考えても異常だろう。
手札と出力を両立したうえで、この性能は異常だ。
赤き炎の腕は、持っていたとしても精々歩兵の駒一駒分上がる程度の神器だ。通常禁手は赤き火炎の双腕（ジェミニ・オブ・ファイヤ）で、今のように両手に纏えるようになる程度。手札も出力も明らかに異常だ。
準神滅具クラスともなれば、駒価値が五駒か六駒レベル。だがこの様子だとまだ手札を持っているようだし、やっぱりどうも計算が合わない。
そして、今はこれ以上考えている余裕もない！
「さあ！　さあ……見てよ！　強くなった私を!!」
振るわれる攻撃を対炎の魔剣で迎撃するけど、鶴羽を抱えてる状態だとこれ以上は難しい。
そして―
「もっと強く私を見て。……その為に、私は……っ」
―泣きそうな今の春っちを、俺はどうすることもできないのか。
そう思った自分に戸惑った瞬間、更なる攻撃が襲い掛かる。
「悪いが、こっちもそいつを潰したいんでな！」
ここでベルナまで来やがるか！
氷で出来た片刃の大剣を振るうベルナは、切り返しが以上に速い。
刃がこっちを向いたと思ったら、慣性の法則を半ば無視して振るわれる。というより、峰の方から何かが噴出しているように見える。

「……もっと心配するべき奴無視して、こっちの嫌なところを突っついてきたんだ。覚悟は出来てるんだろうな！」
―お前も、泣きそうだよな。
……ああ、そうだよ。
俺は嘆きの涙を見過ごしたくない。見えている全部をどうにかできるなんて言えるわけがないが、だからといって、自業自得でもない嘆きの涙が流れることを良しとしたいわけがない。
だけど今の俺にはそんな余裕がない。そもそも、なんでそんな嘆きの涙が流れる理由も知りえない。
それでも―
―ありがとう。そして、笑顔でいて……ほしいかなー
俺の原風景と。
―でもちょっと……凄く怖いから、一緒に来てくれないかな？―
―その時は、期待してるよ、カズくん―
果たすべき誓いと。
―やるじゃない。あとは私を本気で惚れさせなさい？―
つかみ取りたいこの想い。
「無視できるかよ……」
それらすべてをひっくるめて―
「……その涙を!!」
―恥じる真似ができるわけないだろうがぁ!!
「「っ!?」」
鶴羽と俺の命が落とされなければそれでいい。
その覚悟の突貫が、体に攻撃を食い込ませながらも致命傷をかろうじて防ぐ。
死なない程度に……吹っ飛ばす！
『サルヴェイティングブラスト！』
仕切り直させろ、くそったれ!!

神威動乱編　第三十九話　神域激闘

祐斗Ｓｉｄｅ

……攻撃そのものが爆発した。
僕達がそう錯覚するような現象に、僕達は吹き飛ばされかける。
そして同時に、幸香はすぐに追撃の体制すらとっていた。
両手に構えるのは長い銃身の銃……いや、もはや砲だった。
口径は推定して３０ｍｍ近い。それを近距離から正確に狙いをつけている。射撃制度以上に早撃ちの技法だ。今の状況では対応しきれない。
これは、まずい―
「させません！」
―そこに大量の魔法攻撃が放たれて、幸香はそれを迎撃する。
おかげで何とか回避できる状況に持ち込めた。
そして舞い降りるのは、北欧の鎧を身に纏った銀髪の女性。
オーディン様のお付きのロスヴァイセさんだ。
主神のお付きに選ばれるだけのことはある。最上級悪魔が相手でも食い下がれるだろうその力は、彼女がまごうことなき才媛であることの証明だ。
そして、そんな彼女が作り出したこの空白を生かせないグレモリー眷属じゃない。
「雷光よ！」
放たれる朱乃さんの雷光を、幸香は花弁で防御しつつ距離をとる。
無意味に距離を詰めすぎるような真似はしない。時に大胆に動きつつも、同時に彼女は勝利を掴み取る為にそういった戦術を弁えるだけの知恵があった。
勝利を掴む為に全力でぶつかり、そしてどうすれば勝利を掴めるか

考える。
灼熱のような渇望を掴み取る為に、冷徹なまでに道筋を想定する。
それがあの女の在り方なのだろう。
「大丈夫ですか皆さん！　っていうか、あれが英雄派のサブリーダーかつ独立部隊の長ですか……！」
ロスヴァイセさんは魔法陣をいくつも展開させながら、警戒の色を濃くする。
ああ、気持ちはとても分かる。
そして何より、彼女は間違いなく難敵だ。
「……ブローニング、ね。つまり、ヒマリのボーイングイーグルと似た名付け方ということね」
リアス部長も悟っているようだ。
ああ、そういうことなのだろう。ある意味で厄介な能力だ。
ヒマリさんのボーイングイーグルは、飛行系の能力であると同時に、名称が独特なものだ。
ジャンボジェット機で有名だけど、軍用機においても規模が大きいボーイング社に由来するのだろう。Ｆ―１５イーグル戦闘機も扱っており、飛行能力を与えるプログライズキーのネーミングとして洒落たセンスといえる。
そしてブローニングクロウも同様のネーミングセンスだ。
銃器メーカー、ブローニング社。拳銃だけでなく自動小銃や重機関銃までも製造しているその名称を使っている理由は、今までの戦いで漸く分かった。
すなわち武装製造能力。飛行能力以上に多種多様な武装を作り上げる、そんなプログライズキーだということだ。
幸香の爆薬製造能力と言ってもいい星辰光と相性がいいだろう。
もっとも作れる武装は比較的単純なものに限られるようで、回転銃身型機関砲（ガトリングガン）や自立飛翔型誘導弾（ミサイル）の類は作れないようだけどね。
とはいえ、十分すぎるほどの脅威になるだろう。
仮面ライダーとしての必殺技も、スラッシュライザーに追加の武装を上乗せしての強化斬撃に、蹴った対象に爆発物を付属させる効果と

いったところか。
本当に、これは厄介で強大な難敵だ。
「……ふむふむ。これは奪いがいがありそうだのぉ」
そう苦笑している幸香は、仮面越しに戦意を滾らせる。
背中に寒気が走ったのは、決して僕だけではないだろう。
彼女はいまだに全てを見せていない。それが分かる。
そしてそれ以上に、僕達が寒気を感じるのはその精神性だ。
彼女と相対すると、得体の知れない寒気を感じてしまう。
間違いなく警戒するべきだと認めながらも、決して相容れないと本能が直感的にそれを悟っている。そんな、不気味で意味不明な警戒心が沸き起こっている。
そしてそんなものを放つ彼女は、その視線を朱乃さんに向けた。
「だからこそ、気まぐれに忠告してやろう、雷光を操る巫女よ」
「……あらあら。敵に忠告とは余裕ですわね？」
ピリピリした雰囲気でかえす朱乃さんに、幸香は―
「―親に対して、もっと素直に好意を示したらどうだ？」
―最大級の爆弾を叩き込んだ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ロキは戦況の変化に軽く舌打ちをしたい気分になっていた。
「……アヴェンジャー。お前は何時出れるか？」
―もうちょっと待って、マスター。ピエールの狗が思った以上に手強くて―
その念話も問題だが、何より面倒なのは敵の増援だ。

現れた大型の兵器が動き始めた瞬間、禍の団以外の勢力の動きが目に見えて遅くなった。
これは雰囲気とか精神的なものではなく、物理的なものだ。
そして遅くなった集団の周囲に大型の爆弾が出現し、爆圧による圧殺を仕掛けてくる。
これにより、間違いなく自分達の優勢は削れて言っている。
そして何より―
「思った以上にしぶといな。カミナキではまだ足りないのを含めても、異様な強さだ」
―そう冷静に返す敵を、捉え切れてないということだ。
とはいえその理由も大体分かってはいる。
ＳＴＥＡＬＴＨのアビリティを持つ、ハイディングフォックス。もう名前だけでどういった機能を持っているかがすぐに分かる。
おそらくは偵察・潜入・工作・暗殺といった能力を重視したプログライズキーなのだろう。必然的に、さっきからこちらの認識を掻い潜りながらのカミナキでの攻撃に終始している。
煙幕・音響・閃光といった各種特殊グレネードを中心に、更に周囲の環境に合わせた特殊なマントを生成して発見されにくくしている。ならばと呼び出したマギア部隊が発見できずに撃破されていることから見て、電波や熱源といったサーチ能力対策もされていると見える。
『ハインディングレイン！』
そしてまた一機のエインヘリヤルマギアが両断される。
そして想像以上に大きな爆発を見せた瞬間、さっきが自分に向けられる。
「甘い！」
攻撃をもってしてカミナキの斬撃を弾き飛ばし、ロキは苛立ち紛れに範囲攻撃を振るう。
「その程度で我に亡き者にすることも泣きを見せることもできると思っていたのか！　神無き世を切り開く刀が、聞いて呆れる！」
そう、ロキは既に妖刀の名の由来すら悟っていた。

神亡き、神泣き、神無き。そういった二重三重の意味を込めた、対神装備としての刀。それがあの刀につけられた銘の由来だろう。
そう、多くのことを悟っている。
あの大型兵器は、サリュートの設計を参考にして研究された星辰体運用兵器であり、対軍勢を主眼として開発されている。
事実、その推測は当たっている。
Δサリュート・ブラストを銘打たれたあの星辰体運用兵器は、テロリストという数で劣る側の打開策としての機能が盛り込まれ、多数の敵を制圧する為の人工神器と同調する人造惑星だ。
大型化によって出力を高め、更に空間干渉と爆発物創造の合わせ技により、逃げにくくした状態で広範囲攻撃による有象無象の殲滅を可能としている。
一対多数を徹底的に突き詰めた、戦争用の星辰体運用兵器。脅威でないはずがない。

Δサリュート・ブラスト
☆制圧型星辰兵装（アストラル・ブラストアームズ）・駆動開始
基準値：A
発動値：AA
収束性：D
拡散性：AAA
操縦性：B
付属性：D
維持性：B
干渉性：A

サリュートやサリュートⅡとは全く異なる性能は、大型化によって何とか捻り出したものだ。
その分のディスアドバンテージが少なからず存在することは事実だが、運用を対軍勢に徹底させることで十分対応できるだろう。
コストパフォーマンスが大型化によって劣悪ゆえに限界はあるが、今後も禍の団は脅威となり続けることの証明ともいえる。
……それもまた、ロキを苛立たせる。
その苛立ちを発散する為にもと、ロキはブレイを挑発する。
「逃げ隠れして、ろくに殺せない攻撃でちくちくつついて貴様は満足か！　嘆かわしいぞ、小僧！」
そんな挑発に対して、しかしブレイは反応しない。
何故ならば―
「最初から分かっていたからな。今の俺が鍛えた得物では、貴様レベルの神は流石に無理だ」
―そんなことは重々承知だからだ。
ロキもその言葉を聞いて、当然のように理解する。
そもそもブレイに、ロキを殺す気などない。
ロキという神々の中でも有数の存在を相手取ることで、自身が作り上げた妖刀がどれだけ通用するのかの生きたデータをとる。それがこの戦いの目的なのだ。
だからこそ、ロキは苛立つ。
自分を、北欧の神を、悪神ロキを、そんなことに使わせるのが腹立たしい。
故に―
「遊びは終わりだ、小僧っ！」
―遠慮は一切ない。
どれだけステルス性に特化しかく乱しようと、限界は当然存在する。

ロキとて愚かではない。数十を超える探知の為の魔法を、気の感知といった手法ではなく音波・熱源・X線・電波などを感知する魔法まで作り出して運用することで、一の当たりはつけている。
そしてそこまで分かれば問題ない。
「……見つけたぞ」
大まかな位置を算出すれば、後はもう十分だ。
地形すら変えうる力を込めた魔法の多重砲撃で、まとめて吹き飛ばせばいいだけのこと。
そしてそれを躊躇なく放ち―
「情けないわね、神様も」
―更なる乱入者により、その目論みすらしのがれる。
瞬時に現れた氷の群れが、魔法にぶつかったと思った途端に連鎖的に爆発する。
それによって威力を殺され、そして素早くブレイはその乱入者の元に駆け寄った。
「すまん、助かった」
そういうブレイが駆け寄ったのは、アーネ・シャムハト・ガルアルエル。
シュメール神話に登場する聖娼―宗教的娼婦とでもいうべき存在―にあやかったセカンドネームを持つその女は、蠱惑的な笑みを浮かべながらそんなブレイの肩に手を置いた。
「―大丈夫。あなたの刀は確かにロキに傷をつけた。それだけでも十分すぎる成果だし、そこから延ばせば主神にも届くようになるわ」
そう微笑んでから、今度は嘲笑をロキに向ける。
「愚かなものね！　神と言っても所詮はその程度、私達後継私掠船団ならば、いずれの前置き付きで必ず勝てる程度なのかしら！」
そう、分かり易すぎて逆に小気味いいぐらい、敵として倒したくなる態度をとってくれる。
……その瞬時な雰囲気を見て、ロキは逆に嘲笑いたくなった。
「……ふん。相手に媚びるのが上手いようだが、その品の無さで聖娼（シャムハト）を名乗るとは笑わせる」

ロキからすれば、彼女の在り方の本質に気づいたが故の嘲笑だが、アーネはクスリと笑いながら悠然とした態度を崩さない。
「……あら、そうかしら？」
その態度は、彼女が自分に自信があるからだと分かる。
だからこそ、ロキは挑発も兼ねて更に追撃を仕掛ける。
「貴様如きがシャムハトのようになれると？　本気で思っているのか？」
お前には無理だ。そう言外に言いきった返答は―
「あら、違うわよ？」
―その予想外の答えに切って捨てられた。
「……ほう？」
逆に興味深くなり、ロキはあえて反論を促す。
それに対し、アーネはむしろ胸を張った。
「私はシャムハトの血が流れている。だけどシャムハトになるんじゃないし、真似るんじゃない。……シャムハトを超えるの」
それは、彼女の真っ向からの矜持だった。
「シャムハトは七日七夜をかけてエンキドゥを成長させた。……だから私はそれ以上を目指す」
それこそが後継（ディアドコイ）私掠船団（プライベーティア）の矜持。
後継者とは、断じて猿真似ではない。そしてただの後追いではない。
むしろその逆。先達に追いつき追い越す。すなわち先達以上の存在となる。
そう、それはブレイを見ればある意味で分かるだろう。
ブレイは正宗にあやかっているが、決して彼の子孫ではないし、正宗になりたいのでも真似したいのでもない。
それは彼の宣言を思い返せば、分かることもあり得るだろう。
彼は五郎入道正宗を名乗るのではなく、六郎入道になると告げる。
それは、五郎入道政宗のその先を目指すという意思表示。
故に、彼女が目指すはシャムハトにあらず。
「……聖継娼婦（シャムハト・セカンド）、それこそが我が目指す彼方。私はたった一人の傑

物を伽で作らない。……そう、私が伽で鍛えるのは―」
その高らかな宣言と共に、ロキを囲むは十五人の戦士。
静かな強い戦意を秘めた、その戦士達は瞬時に動いた。
「超新星（メタルノヴァ）――氷河英雄（エンキドウ・クロスレンジ）、戦士之型」
「超新星（メタルノヴァ）――氷河英雄（エンキドウ・ミドルレンジ）、勇士之型」
「超新星（メタルノヴァ）――氷河英雄（エンキドウ・ロングレンジ）、闘士之型」
その瞬間、三種五人ずつの全く同じ星辰光が、ロキを氷塊によって攻撃する。
「なんだと？」
その攻撃はロキを一時的に足止めするだけだが、彼らにとってはそれで充分。
また、ロキにとってはあまりに驚愕に値するその事態に、彼は明確な隙を見せてしまっていた。
しかし無理もないだろう。彼らはそれぞれが全く同じ星辰光を運用している。
本来個人個人で全く異なる異能を発現するのが星辰光。デビルレイダーや完全人造魔星でもない限りあり得ない真似を、彼らはそれらを使用することなく発動しているのだ。
そしてその光景を感動の表情で見守りながら、アーネはロキに胸を張る。
「幾人もの傑物達による総軍。そう、私はシャムハトの上を行くの……っ！」
そう告げたその瞬間、アーネ達の姿が掻き消えた。
それに困惑するのは一瞬。
そして幻術によるものと悟るのも一瞬。
それをなせる者がいることを、苦しめられたにも関わらず忘れていた。それによる恥辱と憤怒に我を忘れたのも一瞬。
だが、それであまりにも十分すぎた。
「吹きすさべ―神託（ヒャズニング）による不滅（ラグナロク）の戦乱」
その瞬間、大量の氷の戦士達が出現してロキに襲い掛かる。
少なく見ともっても数百を超えるその軍勢に、ロキは躊躇すること

なく砲撃を放つ。
だが止まらない。正確には、砕いてもすぐに新たに表れて切りかかる。
それによって、ロキは文字通り数に押されて縫い留められる。
そして、次は灼熱を見た。
「さ〜ぁ。それじゃあミニマム版のラグナロクを始めようか？」
遠く離れたところで、ホグニがカバーする形でローゲが嘲笑を浮かべていた。
その胸元から零れる炎に、ロキは戦慄すら覚える。
そう、伝承によってロキと同一視させる形で封じられたローゲは、故にこそそれに準じた宝具を持つ。
神々の黄昏とその終焉の基点となるようサガに記されたローゲだからこそ放てる、神殺しの宝具。
すなわち―
「焼き尽くせ―暁の焔（ゲッターデメルング）は神々の終焉なれば」
その対神宝具が、ロキを包み込んだ。

神威動乱編　第四十話　降臨の序曲

和地Ｓｉｄｅ

……あ、意識が飛んでたな。
春っちとベルナは吹っ飛ばせたか？　戦いはどうなった？
っていうか俺は死んでないのよな？　相当やばい怪我を負ったはずだから、すぐにでも治療が必要な状態な気がするんだが。
そこまで考えて、ふと気づいた。
俺は、肩を担がれて運ばされている。
ついでに言うと戦闘もしているらしい。動きがこぉ……武器を使っている感じだ。
そして漸く覚醒し、俺は即座に魔剣を創造するとそれを敵に投げつけた。
狩猟用ブーメランを参考にした魔剣は、勢いよく飛んでエインヘリヤルマギアとかいう敵の兵士を沈黙させる。
それを次弾の準備をしたうえで確認して、俺は周囲を警戒しながら急遽聞きたいことを聞く。
「助かった、鶴羽。……ただ俺の怪我は誰が治療したんだ？」
俺は鶴羽に肩を担がれて、味方のいる陣地に向かって運ばれている最中だったようだ。
気絶したのは脳震盪ではなく、失血性のショックだったと思う……んだが。
何故か体の調子がいい。アーシアに回復されてもここまではならないと思うぞ？
「……あ～、全然分かんない」
「どんな返答だよ!?」
だからそんな答えが返ってくるとは思わなかった。
「ちょっと意識が飛んでて気づいたら、右手が凄く痛くて完全回復し

てたのよ。和地も血まみれだったけど怪我とかは全然ないわよ？」
「マジで？！」
どんな状況になってるんだ、いやマジで。
何が起きたのか皆目見当がつかない。いやホント、どんなことが起こればそんな訳の分からないことが起きるんだ？
「ち、治癒魔術を無意識に使ったとか？」
「いや、私の魔術回路じゃそんな大怪我をすぐ治すとか無理だし。……ただ、右腕が痛いとあの人を思い出すのよねぇ」
「というと？」
意味深な返答に、俺は警戒をきちんとしながら促した。
すると言い難そうにしてたけど、鶴羽も意を決したようだ。
また仕掛けてくるエインヘリヤルマギア相手に共に攻撃を叩き込みながら、鶴羽は自分を納得させるように頷いた。
「……そういうサーヴァントに心当たりがあるっていうか、パパが死んだあとに参加した聖杯戦争でそんなサーヴァントのマスターになったのよ」
ふぅん……ん？
今さらりと流しそうになったけど、めちゃくちゃおかしなこと言ってないか？
「鶴羽。お前ってザイアに努めていた両親が爆発事故で亡くなった流れで施設に送られたはずだろ？　何時聖杯戦争に参加する余裕があるんだよ」
確かそんな身の上を聞いていたはずだ。
いや、情報をあまり語れないからついたブラフの可能性もあるな。まだ会ったばかりの頃だし、そこは……いや待て。
もう一つ、ちょっと気になることがあったぞ？
「お前、両親のことは寝言でもお父さんお母さんって言ってただろ？パパって今更おかしくないか？」
そうだ。そこもおかしい。
……ちなみに寝言を聞いたことがある理由は内緒だ。ベッドのあととか勢い余ってとだけ言っておこう。

そして盛大に鶴羽は肩をびくりとさせていた。
「……えっと、その……」
めちゃくちゃ言いたくなさそうだ。
ま、この状況で聞くことも出ないし、親しい中にも礼儀があるな。
俺はすぐに意識を切り替えると、ショットライザーを確認する。
とりあえず、変身する分には問題ないな。
「ま、その辺は機会があればでいいな。それよりも―」
すぐに再度変身をしようかと思った時、俺達は巨大な炎を見た。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

放たれる灼熱は、Ｂ＋＋ランクの対神宝具。
ラグナロクに由来する炎の具現化がこの宝具であるがゆえに、ことに北欧神話に由来する神々において優れた特攻効果を発揮する灼熱を浴びれば、北欧の戦神トールと言えどただでは済まない。
……だが、しかし。
「……中々に熱い。だが我を焼くにはいささか足りぬな」
それを、ロキは強引に突破する。
深手は負った。重症だといえる。
だが致命傷には程遠く、そして驚異的な速度で怪我も治癒していく。
「……うっへぇ～。面倒極まりない」
「これに耐えるか」
襲い掛かる氷の戦士達を鎧袖一触を体現して迫るロキに、ローゲもホグニも嫌そうな顔を隠さない。

強敵であることは理解していた。それぐらいは分かっていた。
だが、これはあまりに厄介すぎる。
何が厄介なのかというと、いまだに星辰光の底が知れないということだ。
星辰光は、一部の例外や完全人造の人工惑星を除けば唯一無二だ。それはノウハウの継承が困難かつ全体に寄与しないというデメリットと引き換えに、敵に手札を悟られ難いというメリットを持つ。
想定する限りは自己強化系だが、それにしても強化の度合いが高すぎる。
これはどう低く見積もっても、人造惑星すら凌駕する。出力に限って言えば、星辰奏者という次元では断じてない。
例えるなら、いわゆるウルトラライトプレーンが星辰奏者で普通のレシプロ機が人造惑星と形容するのに対し、ジェット機の領域だと言ってもいい。
性能が明らかに異常と言ってもよいこの力は、真っ向から主神オーディンを相手取っても勝てるだろう。
そんな化け物に、ローゲとホグニは舌打ちすらする。
「……これは、一旦逃げる？」
「……そうだな」
茶化し半分のローゲに、ホグニは以外にもすぐにそう答えた。
意外そうに見るローゲだがホグニが苦々し気に見渡す視線の先を見て、それを理解する。
氷の戦士達の数が、少しずつだが減少方向に向かっている。
これはおかしい。
この宝具はいずれそうなるが、しかしそれにしても早すぎるだろう。何よりその際に起きる悪影響が見られない。
それを理解して、ローゲはホグニの言い分を理解する。
「あっちゃぁ。既に地脈も込みで手を入れられてるってわけか。これはきっつい」
ならば、この状況での戦闘は少々不利だ。
これでは本領を発揮できない以上、勝ち目がだいぶ減衰している。

これは逃げる算段を整えた方がいいだろう。それを悟り、ローゲは素早く幻術を展開する。
ロキは憎い。己が神すら翻弄したにも関わらず、それを無かったことにするどころか己の栄光として取り込んだのだから、憎くないわけがない。
だが、ローゲは別に自分が報復に拘るつもりもない。
ロキが酷い目に遭うところを見れるのならそれで充分。アースガルズの神々も酷い目を見てほしいが、その為に意味もなく博打を打つ趣味など欠片もなかった。
そして、その本命はまだ先のこと。だから今はそこまではしない。
これは、ただそれだけの話である。

イッセーＳｉｄｅ

うぉおおおお!?
止まるな。止まったら死ぬ。
そんな決意を込めて、俺達は全力で飛行していた。
「……随伴とかそういうのに楽かなーって思ってたけど、飛べるって本当に便利！　飛べてなかったら死ぬじゃんこれ！」
「まったくでさぁ。あのままだったらイッセー先輩以外は削り殺されてましたからねぇ」
「……あ、あれ!?　一体何が……きゃぁあああああ!?」
「あ、正気に戻りましたの？　今全力で飛び回ってますのよ！」
自棄気味なヒツギはアニルを抱え、漸く我に返ったルーシアをヒマ

リが抱えてる。
そして俺は俺で、全力で飛んで逃げている。
……ちなみにヒツギが飛んでる理由は、さっき自分で言っていた理由でフライングファルコンプログライズキーを選択してたから。
高速飛行能力があるって便利なんだよなぁ。俺はドライグのサポートがないとまだ飛べないけど。
っていうかとにかくやばい！　敵の増援がやばい。
さっきからあの凄い炎とか、いろんなことが起こりまくってる。禍の団の連中も本気を出したってか！
俺は部長達を探しながら、同時にちらりと視線をある所に向ける。
それはフェンリルにくわえられたままのヴァーリだ。
敵の増援に対して、フェンリルはあえて冷静に周囲を観察している。
ロキとあいつがこの戦場でのツートップになっている以上、ロキが本気の戦闘をしているのなら自分が冷静に俯瞰して対応するべきとかそんな感じなんだろう。ただの狼とは比べ物にならない厄介なやつだ。
ヴァーリ・ルシファー。俺のライバル。
こんなところでやられるのは、正直俺も嫌だって思う。
だけど……。
その時だった。
ヴァーリが、俺にちらりと視線を向けた。
「……兵藤、一誠」
その声が、小さくてもしっかりと聞こえる。
「……悪いな、フェンリルは貰っていく」
……はい？
「我、目覚めるは―」
いや、ちょっと待て。
今なんて言った？
……まさか。
「あいつフェンリルが狙いだったのかぁあああ！」

「「「『わぁっ!?』」」」
他の皆が絶叫する中、ヴァーリが覇龍を発動させる。
そのオーラでフェンリルが吹っ飛ばされたと思ったら、ヴァーリはフェンリルに組み付いた。
「黒歌、俺を所定のポイントに飛ばせ！　そのあとはアーサーと共に動くぞ!!」
そう言うなり、フェンリルと一緒にヴァーリの姿が消えた。
畜生、やられた！
フェンリルをどうするつもりなのかは知らないけど、あいつ最初っからそれが狙いで俺達に共闘を提案してきたんだな!?
くそったれ！　いつか一発かましてやる!!
『イッセー！　荒れているようですが落ち着いてください！　今はとにかく皆と合流しないと！』
っと、そうだった。
シャルロットの声でふと我に返って、俺は慌てて周囲を見渡す。
くそったれ、このままだと、皆がやられるかも―
『……イッセー！　二時の方向、斜め下です！』
その時シャルロットが、俺より先に見つけてくれる。
すぐに振り返れば、そこには幸香の奴と睨み合ってる部長達とロスヴァイセさんが。
っていうか幸香とぶつかってるのかよ!?　皆大丈夫か!?
くそったれ！　間に合ってくれよ―

祐斗Ｓｉｄｅ

幸香の発言に、朱乃さんは怒気を顕わにしていた。
「……何を……っ！」
抑えきれない怒りがバチバチと雷光となって漏れ出し、僕達も接近しづらい状況となっている。
だが、九条・幸香・ディアドコイは平然と、むしろ何を言っているのだといわんばかりのあきれ顔を浮かべていた。
「何をと言ってもなぁ？　表では嫌悪を浮かべておきながら、内心では好意であふれている。そんな感情を父親に向けているのが、我が覇王の魔眼から見れば駄々洩れだ……ぞっと」
花弁で雷光を即座に防ぎながらも、幸香は口を塞がない。
「言っておくが、細かい内情までは見れんぞ？　覇王の魔眼は本質的に同胞となれる者を見抜くことに特化しているが故、同胞でない者に関しては余程強い感情がなければ見れぬ。……まぁ、好意を素直に示せぬがゆえに反動で荒ぶっておるのじゃろうて」
「ふざ……けるなっ!!」
更に強大な雷光が放たれるが、幸香は結界も上乗せすることで容易く防いだ。
更にポリ窒素の魔獣を従えることで、僕達の介入すら牽制する。
そんな状況で、暴走寸前の朱乃さんの殺気を、真っ向から幸香は受け止めた。
「ふむ、現実（リアル）でのツンデレは害悪という意見があるそうじゃが、確かにこれは害悪じゃのぅ」
むしろその表情は呆れすら浮かんでいる。いや、あれはもはや哀れみか。
「妾（わらわ）は物心つく前に実の両親を失ったこともあってか、親子の情というものにはさほど詳しくはない。……暴走して多くの者を殺した父と、その要因となったうえ大きな事故を引き起こして死んだ母がいるとは聞いておるがな」
割と重い過去を平然と話す彼女は、本当にそれを重く受け止めていないのだろう。

だが同時に、朱乃さんに哀れみすら覚えている。
「だから親子の情は知識でしか知らぬが、だからこそ分からぬよ。どんな理由があるかは知らぬが、それだけの好意を持っておるのにも関わらず、何時死ぬかも分からぬ極限の戦場ですら敵意に偽るなど、父親にはもちろんおぬし自身にとっても悪いことでしかなかろうて」
「私が……あの男を……親だと思っていると!?」
暴走寸前と言ってもいいレベルで殺気立つ朱乃さんに、幸香は肩をすくめて首を横に振った。
そこまで重要な意味を持った話でもないということなのだろう。しかしだからこそ、嘘偽りのない疑問だったのだと痛感する。
「まあ、敵にそんな情けをかける趣味はない。受け止める価値ない言葉と思っておるのなら、何を言っても馬耳東風じゃろうしな」
そう切って捨てた幸香は、呆れた目で朱乃さんを見て―
「……まして、もう死ぬ貴様には関係ないことだろうよ」
―その言葉と共に、殺気が迫りくる。
この気配はフェンリスヴォルフレイダー!? それも―
「朱乃!?」
「……え?」
リアス部長が叫ぶが、しかし遅い。
既にフェンリスヴォルフレイダーは、その牙を朱乃さんに噛みつく寸前だった。
しまった。幸香に気を取られて他に対する反応が遅れて―

鮮血が、勢いよく舞った。

神威動乱編　第四十一話　……ナニコレ？　ｂｙ大多数

和地Ｓｉｄｅ

何とかグレモリー眷属と合流できそうになった時、俺たちは鮮血が舞うのを見た。
牙に食らいつかれ血を噴き血を吐くその人を見て、俺は咄嗟に叫んでしまう。
「……バラキエルさん!?」
バラキエルさんが、朱乃さんを庇ってフェンリスヴォルフレイダーの牙に食らいつかれた。
あれは下手すると致命傷だ。それも、すぐに治療しないと死ぬようなレベルの!?
「……てめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」
そこに空からイッセーが舞い降りて、拳でフェンリスヴォルフレイダーに殴り掛かる。
障壁がそれを受け止めるが、それでも僅かに揺らめいた。
なら、俺がそれを押し広げる。
『ＳＡＶＥ』
「離れろイッセー！」
『サルヴェイティングブラスト！』
放つサルヴェイティングブラストで、俺は更にフェンリスヴォルフレイダーをのけぞらせる。
それでも耐えるか。この―
「……いい加減に！」

「離れますのよぉ！」
『ボーイングブラストフィーバー！』
『フライングボライド！』
そこにヒマリとヒツギが同時に攻撃を叩き込んで、今度こそフェンリスヴォルフレイダーを吹っ飛ばした。
くそったれ！　幸香は近くにいるしフェンリルはヴァーリが連れて行くし、どうなってるんだ本当に！
「大丈夫ですか！」
アーシアが素早く駆け寄って治療するけど、大量の血が流れていることといい、このままだとまずい。
俺は幸香に向き直って警戒しながら、この状況を打開するすべを考える。
謎の変態軍団の所為で、プランTの発動にまだ時間がかかる。下手をするとリーネスが用意しているカズヒ姉さん絡みの切り札の方が早いだろう。
問題は、俺達がそれまでもつのかどうかといったところだよ。
禍の団が一気に流れを傾けているかと思ったら、ロキが思った以上に大暴れしているからな。
全体の流れは禍の団が掴んでいる。だが戦闘の中核を担っているのはロキだ。謎の変態集団は……そもそも前提となる知識すらなさそうなので、もう乱入してきた狂犬の群れとかそんな感じで終わらせよう。
だからこそ、プランT也リーネスの策也がそろそろ来てくれないと、こっちが終わるんだ。
さて、どうする？
そう俺が悩み出した時。
「……誰だ、お前は!?」
……イッセーが意味不明なことを言ってきた。
思わず俺達全員がイッセーを見るが、イッセーは何故か朱乃さんやバラキエルさんの方を凝視したままだ。
「いや、だから誰だよお前は!?」

何がだよお前は。
今誰も何も言ってないぞ。幻聴でも聞こえてるにしては、意識ははっきりしている風にしか見えないぞ。
真剣に言おう。……なんか嫌な予感がする。
「お、おっさん！　いや、誰でもいい!!」
『この状況下で一体なんだ!?』
「私の胸がまた必要なの!?」
タンニーンさんとリアス部長が反応するが、イッセーはそこで何故か困惑が全開の疑問符を浮かべていた。
「乳神様って、どこの神話体系の神様だ!?」

『『『

「一切の不順なくおっぱいの神様だって言ってる！　名前はチムネ・パイオーツィだそうです！」
『『『『『『『『『『じゃあ知らねえよ！』』』』』』』』』』
ほぼ全員がシンクロした。これは仕方がない。
っていうか都度都度アーシアが回復しているけど、負傷はそんなになさそうだから……精神干渉？
いや、それにしたってかなり具体的だ。これ、もしかしてマジなんじゃ……？
『……涙が出るが本当だ。今までに感じたことのないオーラから言って、どうやら本当に異世界の神に接触を受けたようだ』
ドライグが絶望をにじませた声でそう補足するけど、やっぱりかぁ。
「まさか!?」
「ドライグまで!?」
「おのれフェンリル！」
あれ？　俺以外誰も信用してない？
あれ、俺もダメージが結構入ってたのか？
『うぉおおおおおん！　相棒の所為で、俺まで変なイメージがぁあああああ！　本当なのにいいいいいいいいい！』
ドライグの精神が致命傷になりそうだぞ!?
「……イッセー！　具体的にどんな異世界なのか聞いてくれ！　本当ならすらすらと答えてくれるはずだ！」
流石に可哀想なので俺がフォローを入れると、イッセーはちょっと上を見上げてから振り返った。
「乳神様が最高神の一角を務める精霊側と、機械生命体を率いる邪神達が戦っている世界だって！　なんか邪神達は異世界を滅ぼしたりしてて、乳神様達が抵抗する側に力を貸したりしてるらしいぜ？」
具体的かつ簡潔な説明だ。
これ、ちょっと冗談抜きで本当なんじゃないか？
っていうか、別の意味で懸念事項が多すぎるんだが!?
「なんていうことだ！」

「敵星辰奏者の星辰光か！」
「いや、神器保有者の禁手だろう！」
流石にそろそろ真実と思っていいだろ。
ちょっと真剣に可哀想になってきたぞ。
俺はちょっと同情すらしそうなんだけど……。
『えっと、朱乃さんのおっぱいを解放すれば乳神の加護がイッセーに与えられるとか訳の分からないことを言ってます！　あと最初の方ですが、イッセーの胸好きに感銘を受けたとかなんだとか言ってました！』
シャルロットもついにフォローを入れたよ。
『……なんてことだ。信じられんが、本当なのか』
「シャルロットが言うのなら、そうなのでしょうね」
さっきとは別の意味で、タンニーンさんとリアス部長が愕然としている。
シャルロットが言うなら信じるんだ。
ちょっとイッセーとドライグが可哀想じゃないか？
『うぉおおおん！　なんでシャルロットは信じて俺は信じられないんだぁあああああ！　天龍がこんなことで虚言を言うわけないだろうがぁあああああ！』
ドライグのメンタルがゴリゴリ削れてるな。加護が来たら発狂するんじゃないだろうか。
「俺の望む奇跡……？　よ、よく分からんけど、俺だけが朱乃さんの本音を聞いても意味がない！　せめて朱乃さんとバラキエルさんにも聞こえるようにしてくれ！」
あとイッセーが何を言っているのかがさっぱり分からない。
『なんでも朱乃さんの本音を乳語翻訳の力で聞くことで、乳神とやらの加護がイッセーに宿って、イッセーが望む奇跡が起こるそうです！』
シャルロット。もういい。
こんな訳の分からない展開を解説しなくていい。シャルロット自身も俺達も疲れるから。

と思ったら、今度は朱乃さんのおっぱいが輝いた。
……そして気づいたら、なんか朱乃さんが泣いているんですけど。
あとなんかイッセーのオーラが凄いことになっているんだけど。
「お、おっしゃぁあああ！　訳分らないけど、チャンス！」
何があったイッセー!?
とりあえず、加護が今の俺達に都合がいいことであることを祈る。
お前だとこの期に及んでおっぱい関係な可能性があるからな。加護を与える神がおっぱいの神様だと尚更だ。
『みよ、ミョルニルが使えます！　一度だけミョルニルレプリカが振るえるそうです！　あと何故か加護の量が予定以上にブーストされているとか!!』
「……おっぱいの神様の力で？　マジで？」
ヒツギがなんとか絞り出して声を出すけど、まあ気持ちは分かる。
これはもう訳が分からねえよ。
あとブーストって何が起きた？
……あ、下世話だけどシャルロット補正か。ぶっちゃけ史実に残るおっぱいだし。
「おぉおおおおお！　これは勝ち目が見えましたのよぉおおおお！」
ヒマリはストレートにやる気を出せて言いな。ちょっと羨ましいぞ。
「……なんだこのオーラは。ここまで未知のオーラなら、確かに異世界の神格というのも信じられるが……今の赤龍帝は不思議で一杯だな！」
ロキも戸惑っているけど、どうやら納得しているらしい。
凄いな。慣れてないのに信じられるとか、一周回って尊敬すら覚えるぞ。
腐っても神は伊達ではなかった。こんなことで理解したくなかった。
そして状況は更にこっちに好転する。
転移の魔方陣が展開されたかと思うと、黒い炎が放たれて、敵部隊を拘束するように焼いていく。

その中心部には炎で出来た蛇のような龍が。
『おーい！　兵藤、どこだ――！』
ってその声は匙か!?
「匙!?　ど、どうしたんだよその姿は！」
イッセーも困惑するけど気持ちは分かる。
いや、本当に何があった？
『神の子を見張る者の本部で、ヴリトラ系の神器をごっそり植え付けられたらこうなった！』
「「何やってんの堕天使!?」」
思わずイッセーとシンクロしてツッコミを入れてしまったよ。
『だがその出力、かつてのヴリトラに迫るな。正直に言って頼りになる増援だ』
『もっと難しいはずの前例のデータがなければ、きっと弊害があったでしょうけどね……』
ドライグが唸りシャルロットが苦笑いする中、一気に形成はこっちに傾いている。
「……ふむ。面白そうだしちょっと見物させてもらおう。海賊の準備をせよ！」
幸香はどうやら、余計な手出しをする気はないようだ。そこは安心。
気になるのは変態集団だが――
「……素晴らしい。やはり性託は真実だった」
――なんか感動の涙を流している。
『おぉ……！　おっぱいの神が、それも異世界の神がいるなどとは！』
『真の神はその方の為にある。今こそ奉納をせねば！』
『任せて！　男どもは○ンポを出しなさい！　奉納の○イ○リするわよ！』
「「「「もちろん！」」」」
『こうしてはおれん！　我らもレフ版を持て！　写真を撮るのだ!!』
兵器から巨乳の持ち主が服を脱ぎながら出てきたり、歩兵の巨乳が上着を投げ捨てたりしている。

……そっとしておこう。関わりたくない。
そして気づけば、ヴリトラの炎でロキは一瞬だが確実に動きを封じられていた。
「ぬぉおおおお！　龍王風情が……なめるなぁ！」
強引にロキは炎を吹き飛ばし、それに合わせるようにヨルムンガルドレイダーやフェンリスヴォルフレイダーが脱出する。
が、合流しようとするロキに、雷光が叩き付けられ一瞬動きを止められる。
朱乃さんとバラキエルさんが、渾身の一撃を叩き込んだのか。
そして、イッセーはロキの目の前に届く。
「喰らいやがれぇぇぇぇぇぇ！　赤龍帝と乳神様のミョルニルレプリカだぁあああああああ!!!」
よっしゃぁあああ！　行けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!

神威動乱編　第四十二話　悪神の悪意

イッセーＳｉｄｅ

よし！　ミョルニルはもろに入った！
そしてミョルニルも重くなった！
『乳龍帝よ。貴方に宿る素晴らしいしおっぱいによって加護は想像以上に与えられましたが、それでももはや残滓のみです。決して油断してはいけませんよ……』
そんな声が聞こえたと思ったら、気配が消えた。
乳神とおっぱいの精霊か。俺が言うことでもないけど、なんだったんだあれ。
軽く引き気味だけど、だけど頼りになったのは本当だしな。ありがとう。
『イッセー。私はちょっと、もう帰って寝たいです。これはもうセクハラです』
シャルロットは本当にごめんな。訳が分からなさ過ぎて、頭痛いよな。
俺も正直訳が分からないよ。まさか異世界の神様が、俺のおっぱい好きに目をつけて接触してくるなんて思ってもいなかった。
っていうか異世界って本当にあったんだ。タンニーンのおっさんも驚いてたし、未知の事例ってやつなのか？
『そうだな。神話伝承に記されていない世界など、はっきり言って前代未聞だ。……それが、おっぱいかぁ……』
ドライグはとても疲れてるようだ。俺も相棒として、そっとしておきたい。
……だけど、ロキはこれで倒せたのか？

『分からんな。だが、流石に戦闘には大きな悪影響を受けているだろうが……』
ドライグがそういう中、煙が晴れる。
そこには、ロキが膝をついていた。
あの様子だと、かなりダメージが入っているだろう。変身も解けてるどころか、腰のドライバーが壊れている。
どうやら、ミョルニルレプリカの一撃はかなり効いているみたいだ。
「聖書の神め。何故神すら滅ぼす力を人に与えたのだ……っ」
ロキはそう唸っているけど、あの様子だとダメージが本当に入ってるみたいだ。
なら、ここで遠慮をするわけにはいかねえなぁ！
「これで終わりだ、ロキ！」
俺は拳を握り締めて、ロキに突撃する。
プランTやリーネスの策を待っている必要もないし、倒せるなら倒しておくさ。
覚悟しやがれ、ロキー

「あら、そうはいかないわ」

その瞬間、紫の炎が俺を吹き飛ばした。
こ、この炎は……っ！
「無事、マスター？」
アヴェンジャー、ジャンヌ・ダルク!?
そんな!?　あいつはクロードさんが抑えてたはずじゃ!?

俺が面食らっていると、アヴェンジャーは肩をすくめながらこっちを見た。
「じゃ、次はあんた達になるのかしら？」
まじかよ！
俺がクロードさんがただで済んでない可能性を悟って震えていると、ロキは静かに苦笑しながら二の腕に手を当てる。
「流石に肝が冷えた。何より戦力も疲弊している……ゆえに」
その瞬間、ロキの二の腕とジャンヌ・ダルクから凄まじいオーラの奔流を感じた。
「―我が英霊に令呪をもって命じる。聖杯によって、我らの心身を回復せよ！」
……っ！
令呪。マスターがサーヴァントに強制的に命令を利かせるとかいう、三画の刻印。
俺の右手にも刻まれているそれを、ロキがジャンヌ・ダルクに使用したのか!?
それも、聖杯を持っているサーヴァントに心身の回復をって―
『『『『『『『『『『『『『……グォオオオオオオオオオオッ！』』』

なんで、神具アスガルドライバーが、ロキの腰に？
『Ｒａｇｎａｒｏｋ』
「何を驚く？　プログライズキー関連は純然たる科学技術の産物だぞ？」
ロキは俺をあざ笑いながら、プログライズキーを装填する。
「変身」
『アースライズ』
そして、ミョルニルレプリカが成果を上げた、破壊したはずの仮面ライダーがまた姿を現す。
『ヴァナルガンドウルフ！　Ｉ，ｍ　Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ』
「科学とはすなわち法則の発見とその再現。我が変身することが前提であるとはいえ、科学の産物なら増産はできるし予備を用意してこそだとも」
完全復活した仮面ライダーヴァナルガンドが、俺達の前に立ち塞がった。
「少々想定外の事態はあったが、保険を掛けたかいはあった。……さて、覚悟はいいか？」
「……上等だ」
俺も覚悟を決め直す。
逆転されてやばくなって、俺は一つの策を思いついた。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

兵藤一誠は、左腕のアスカロンに全力で力を譲渡する。
同時にミョルニルレプリカを小さくしてしまいながら、腰を深く落

とした。
「……どうするの、マスター」
「任せてもらおう。一矢報いたその成果に敬意を表し、我が自ら引導を渡してくれる」
アヴェンジャーをとどめ、ロキは一歩前に出る。
『Ｒａｇｎａｒｏｋ』
双方が腕を構え、力を籠め。
「……っ」
『――っ』
その小さな言葉が、誰にも聞こえることなく会話として交わされた瞬間。
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』
赤龍帝の力を聖剣に込めた一撃が飛び―
『ヴァナルガンドディストラクション！』

ヴ
ナ
ル
ガ
ン
ド
ディ
ス
ト
ラ
ク
シ
ョ
ン

「神滅具保有者として凄まじく、また不思議がいっぱいで興味深い。……だが、我を倒すには一歩届かんよ」
真っ向から、悪神は兵藤一誠を打倒した。

和地Ｓｉｄｅ

くそったれ！
吹っ飛ばされたイッセーには、カバーとしてアーシアとゼノヴィアがイリナを連れて向かってる。
だが、この状況はまずい。
「そんな、イッセーが……」
「イッセー君！　く……っ」
リアス部長はもちろん、木場も動揺している。
というか、オカ研メンバーは全員割と動揺している。
当然といや当然だ。はっきり言ってイッセーは、オカ研メンバーの精神的支柱と言ってもいい。
俺だってかなり動揺してる。正直士気の面でかなりやばい。
「上等ですの！　イッセーをボコったお礼参りですわ！」
そんな、ヒマリの声に俺は我に返る。
「同感。殺し殺されが戦場と言っても、意趣返しぐらいはさせてもらうよ」
ヒツギが並び立っているのを見て、尚更気を取り直す。
ああ、そうだな。俺達はこんなところでやられてやるわけにはいか

ない。
イッセーだって死んでない。鎧は解除されているが、アーシア達の反応から見て死んでいるわけじゃない。
なら、ロキを打倒すれば勝ちの目はある。
……まあ、どうやって勝てばいいのかが不安なんだが。
「ノア！　プランTはあとどれぐらいかかるの！」
部長も気を取り直したのか、ノア氏に通信を送っている。
さて、どうやってしのげばいい？
そう思った時、今度はこっち側の増援がきた。
「……すいません、突破されました！」
「そしてお待たせ！　参戦するわよ！」
その言葉とともに、ボロボロになっているクロードさんを連れながら、リヴァ先生がこっちに駆けつけてきた。
「先生！　大丈夫なのかよ!!」
全体の支援に回ってたんじゃなかったのか!?
俺がその辺りを言外に込めると、リヴァ先生はアスガルドライバーを着けながらサムズアップする。
「大丈夫！　ちょっと地脈のバランスがあれだったから手間取ったけど、後はもうオートで行けるから！」
「……なるほど。やはり事前に地脈に手を駆けられていては無理があったか」
ホグニがなんか言ってるけど、あいつも地脈を利用する手段を持ってたのか？
いや、今はそこを考察している余裕がない。
俺は周囲を警戒しながら、二人の様子を確認する。
クロードさんはボロボロだ。死んでないのが不思議なぐらいで、気力で強引に立っていると言ってもいい。
アーシアが遠距離回復をかけてくれているけど、体力の消耗が激しすぎる。
「……っ、う……」
あと何故か鶴羽の調子が悪い。

こっちもこっちで不安要素だな。というより、さっきからなんでこんな頻発しているんだ。
そしてリヴァ先生の方だけど、こっちは不幸中の幸いか、体力は消耗しているけど負傷はほぼない。
そしてアスガルドライバーを装着して、何時でも変身できる体制に入っている。
「大丈夫なのか、先生？」
「もちろん。確認の為の変身はしているから―」
『Ｏｄｅｎ！』
プログライズキーを構えつつ、リヴァ先生は真っ直ぐにロキを見据えた。
「ここからは私も戦うわよ！」
『アースライズ』
そして素早くプログライズキーを装着し―

その絶大な力の奔流が、リヴァ先生を焼いた。

「あ……うぁあああああああっ!?」
「先生!?」
なんだ一体!?
くそったれ！　仕込みは確認したんじゃないのかよ!?
「手の込んだ仕様にしておいてよかったようだ。よもや既にレベル４に到達できていたとはな」
ロキの感心した言い草に、俺は速攻でショットライザーをぶっ放した。
野郎の仕込みか！　なら、強引にでも！

そう思った瞬間、むしろロキが接近していた。
まずい。狙いはリヴァ先生か！
咄嗟に割って入るが、ロキの攻撃はサルヴェイティングドッグの装甲をやすやす砕く。
ちぃ！　集団戦を考えてディフェンディングタートルにしなかったのが裏目に出た！
それでも強引に組み付いて、俺はリヴァ先生に近づけさせない。
「てめえ！　リヴァ先生に何をしやがった！」
「何もしていないし、トラップというほどでもない。あれはスキルヴィングゴッドプログライズキーの仕様だよ」
なんだと？
「スキルヴィングゴッドプログライズキーは、使用者の成長に合わせてより強大化したアップグレードが行われる。ただしオーディンが愚行を犯した時の為、あえて本来に比べれば微々たる成長速度にしかならないようにしていたが、各種制御を解除された場合は、反動抑制すら解除されて一気にレベルが上がるようにしていたのだよ」
つまり、急激な成長に体が耐えられてない!?
「レベル1から2に一気に跳ね上がるだけでも悶絶するだろうに、レベル4にまで成長させていたとはな。……ショック死していないことを褒めてやるべきだろう」
「この邪神が！」
『ＳＡＶＥ！』
俺はかなり頭にきて、即座に必殺技を駆動する。
『サルヴェイティングブラストフィーバー！』
ゼロ距離からの必殺技を叩き込む。
……が、一切通用していない。
冗談だろ。どれだけ性能差があるんだよ。
そう思った瞬間、ロキが右腕で俺の顔面を掴む。
それだけじゃない。頭に血が上っていて気が付かなかったが、一気に復活したロキの軍勢が圧倒する状況下にすらなっている。
くそ、消耗が激しすぎた。この急回復は、抑えきれない。

「では、まずは貴様から殺すとしよう。確実に減らせられる好機は逃さないようにせんとな」
……っ！
ここまでだってのか？
ふざけるな。ふざけていいわけがない。
だって、今後ろでリヴァ先生が苦しんでいる。
恩師を、それも俺に告白同然のことを言ってくれた人が、今まさに苦しんでいる。
そんなときに、先に死ぬってのか……？
「死んで……たまるかぁあああああああっ!!!」
「いや、死にたまえ」
『ヴァナルガンド―』

「させないわよ！」
『ハウリングディストピア！』

『―ディストラクション！』

ハ
ウ
リ
ン
グ
ヴ
ァ
ナ
ル
ガ
ン
ド
デ
ィ
ス
ト
ラ
ク

アピトスィション

神威動乱編　第四十三話　固有結界

祐斗Ｓｉｄｅ

気づいた時、銀の装甲を纏った仮面ライダーが、変身が解除された九成君を抱えて僕達の隣にいた。
そして同時に現れたメイド達によって、ほんの少しだけど猛攻が緩んでいた。
「カズヒ！　それに……あなた達は！」
何とか聖魔剣で敵の猛攻をしのぎながら、僕はその増援に驚いた。
仮面ライダー道間ハウリングホッパーに変身したカズヒが、メリード達兵藤邸のメイド達を引き連れて、増援に来てくれたのか。
ということは、もしかして間に合ったのか？
僕のその期待に気づいたのか、カズヒは静かに首を横に振った。
「あとはリーネスが調整を終わらせるだけだけど、状況が一気に悪化したから苦肉の策よ！　……というより、クロード長官も大丈夫ですか!?」
カズヒとしても看過できないほどの事態だったようだ。外から見てもそれだけの窮地ということなんだろう。
だけど、まだ完成していないのか。
その時、アヴェンジャーが剣を両手に一振りずつ持って切りかかる。
「死になさい、ピエールの狗の狗！」
「断るわよ、邪悪！」
『ハウリングユートピア！』
全力の一撃と斬撃がぶつかり合い相殺される。
即座に対霊体加工済みの銃弾を放って距離を開けさせながら、カズヒは舌打ちした。

「魔剣ノートゥングにバムルンク！　ロキめ、亜種聖杯でアヴェンジャーを強化していたってわけね！」
「当然であろう？　我の配下となる栄誉を勝ち取ったものには褒章があってしかるべきだからな。」
ロキがそう返すが、そういうことか。
いくらクロードさんがアヴェンジャーの保有スキルを再現できると言っても、それはあくまでジャンヌ・ダルクに由来するスキルだ。
後天的に獲得した力は対象外。だからここまで……っ
「……みんな！　プランTが開始されるまであと六分よ！　それまでしのいで！」
リアス部長が声を張り上げる。
あと六分で、最終手段のプランTが成立するのか。
だけど、今のままではそこまでしのぎ切れない。
どうする？　どうする……？
「……仕方ないわね。インガにキュウタ、和地とリヴァさんをお願い」
「か、カズヒ姉さん？」
カズヒがそう言うなり、一歩前に出る。
「誰でもいいから、一分だけ私を守って。……そしたら残り五分、私がロキを抑え込む」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

頭痛が酷い。意識が飛びかける。
だが、それを抑え込んで鶴羽は立ち上がろうとする。
仲間達がまだ戦っている。

幸香がこちらを狙っているはずだ。
何より、まだ和地とカズヒは危機に瀕している。
ならば、動く理由は十分だ。
―このままだと死ぬと、自分でも分かっているのに戦うのか？―
いいに決まっている。
恋する男と、支えたい友が戦おうとしているのだ。
ならば、動ける限り共にありたい。仲間として、一緒に戦いたい。
―それをする資格があると、自分自身が疑っているのにですか？―
当たり前だ。
この疑問は一生引きずってもおかしくない。
あの子がパパによって苦しめられていたというのに、それも知らずにのうのうと友人面をしていたのだ。資格がないと思うのは当然だろう。
かつてあった美しい光景の裏で続いていた、醜い悪辣を知っている今、その疑問符は生涯ついてくるだろう。
それどころか、終わってしまったのに更なる第二弾が続いているのなら尚更だ。
―だが、お前では足手まといにしかならないぞ？―
……分かっている。
そうだ。今の私では足を引っ張る。それはまごうことなき事実だ。
まさに神話の戦いにおいて、分家の自分の魔術回路ではとても並び立てない。
頑張って残敵相当や外周警戒。その程度が限界だ。
それでも、だ。
―それでも、譲れないものがあるのですか？―
その通り。
今度こそ、最期を看取るしかできなかったあんな終わり方をしたくない。
今度は、自分は友達だと、仲間なのだと胸を張れるような生き方をしたい。
大事な友が、愛する男が、命を懸けるの言うのなら。

「……一緒に居れる自分でいたい。その為に頑張ってるのよ、私は……っ」
そう、心の声が口をついて出る。
―だというのなら、自分の力をきちんと見つめ直せ―
―この声は、貴女の自問自答ではないのですから―
そこまで来て、漸く彼女は気づいた。
この声を、自分は確かに聞いたことがある。
この声は、本当なら今聞こえる物ではない。
その事実を悟り、そして―

「ありがとう……っ」

―心からの感謝の言葉が、自然と口をついて出た。

和地Ｓｉｄｅ

「力を貸して、ルーラー……ライダー」

そんな、声が聞こえた。
そして俺の隣で、強大な魔力の奔流が起きる。
「我、フランシスコ・ザビエルに希(こいねが)う」
「……宣教の守護聖人(イエスズ・ミシロネーロ)」
その言葉を聞いた瞬間、活力が漲り痛みが消えた。
比喩表現とかそんなわけじゃない。まるで十五分ぐらい仮眠したようにスッキリと心身の疲労が消え、負傷が見る見るうちに治っていく。
その光景に味方は誰もが戸惑い、敵は敵で面食らっている。
俺達三大勢力側だけが恩恵を受けたこの不思議な現象に、カズヒ姉さんすら面食らった。
「これは、どういう―」
「―説明はあと。気合を入れるわよ、カズヒ」
カズヒ姉さんに並び立つように、鶴羽が立ち上がった。
さっきまで頭痛で苦しんでいたはずなのに、今では文字通りスッキリした表情でそこに立っている。
俺もカズヒ姉さんも呆気に取られたけど、鶴羽は自信ありげな笑顔で頷いた。
「……ロキは任せたわよ。代わりに、クロードさんはこっちがしっかり面倒を見るから」
「……分かったわ。言ったからにはしっかり責任を取りなさい」
カズヒ姉さんはそう言うと、ロキを真っ直ぐ睨み付ける。
鶴羽はそれを見て微笑みながら、クロードさんを庇う様にアヴェンジャーと対峙した。
「和地」
……ハモって言わないでくれ。ちょっとどぎまぎする。
俺のそんな気持ちを知ってか知らずか、二人は視線だけで俺を見る。
「こっちは任せて。貴方はあなたのやるべきことをやりなさい」
……そこまでハモるなって。
ああ、分かってる。分かってるさ。

俺は涙の意味を変えると誓った。瞼の裏のあの笑顔に誓って、そこだけは決して変えないと決めている。
だから―
「そっちは任せた！」
「「もちろんよ！」」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「福音福果、善因善果、故に転じて悪因悪果」
「遠からん者は音に聞け。近くば寄って目にも見よ」
その二人の詠唱が、魔力と感応したことを全員が感じ取った。
ロキもまた、それが二人にとっての大技であると自覚する。
「因果応報、身から出た錆、刃の錆は刃より出でて刃を腐らす」
「我が心を照らし刻まれた、偉大なる栄達は此処に在る」
そしてそれを迎撃すべきと、ロキはすぐに判断して配下を差し向ける。
のみならず、自身も全力で排除の為に動き出す。
それだけの危険性が秘められていると、ロキは直感で悟っていた。
「平家を亡ぼすのは平家。六国を亡ぼすものは六国なり」
「我が闇を切り、我が光となり、そして我が道を切り開いた伝説が今、汝の前に現れん」
だが、それをすべての勢力が妨害する。
三大勢力は言うに及ばず。
変態集団は兵藤一誠をカバーするように動く。
禍の団もまた、対象を自分達に収束している。

「人は生きてきたからには死なねばならず、それと同じように、木は倒れたからにはそのまま横たわってなければならない」
「常世全ての善と悪、それを見定めん天秤の守護者」
ロキは妨害を半ば諦めながらも、だからこそ警戒を強める。
魔術回路を利用した魔術行使には、手順というものが基本的に必要となる。
最短でも引き金を引くような小さな行動を必須とする、一工程（シングルアクション）。それ以上は詠唱の長さに応じて力も変わる。
最も、即応性が重要となる戦闘においては、魔術礼装という手札なしで使える魔術には限度がある。援護をする者がいなければ、前線戦闘では精々二小節から三小節が限界だろう。
だからこそ、いまだに詠唱が続いていることは危険なのだ。
あの二人が行使しようとしている魔術は、間違いなく瞬間契約（テンカウント）クラスはある。
「蒔いたからには刈り取らねばならない」
「我が運命を託すに能う、汝の運命（さだめ）を今ここに」
間違いなく、今から二人が使う魔術は極めて大規模な魔術行使だ。
如何にロキが神とはいえ、如何にアヴェンジャーがサーヴァントとはいえ、それだけの大魔術を無傷でしのぐのは困難だろう。
故にこそ妨害を試みたが、それも望み薄だ。
十中八九、敵の魔術は発動する。
「自分の好意は自分に帰り、仇も情けも我が身より出る物なれば」
「満ち足りた七つの時は今ここに、戦の始めに破却されん！」
故に、ロキはためらうことなく防御態勢をとる。
瞬間契約の魔術ともなれば、下位の宝具に届くだろう奥の手なのは言うまでもない。
一部のサーヴァントが持つ魔術無効化スキルである対魔力であっても、Bランクまでなら突破して傷つけることだろう。
「「世界卵、外界浸食」」
油断はできない。一矢は報いられるだろうし、手を打ち間違えれば間違いなく敗北に繋がる。

故に覚悟を決め、迎え撃つ体制をとる。
「「心・象・顕・現」」
防御を徹底的に。喰らっても生き残る準備は整った。

「固有結界――極大魔術行使機構（マキシマム・マギステル・ジェネレーター）・道間日美子」

故に、ロキは判断を過つ

「固有結界――英傑乱舞合戦譚（えいけつらんぶかっせんたん）」

そして、復讐者は正当たる復讐相手に巡り合う。

気づいた時、ロキはカズヒ・シチャースチエとたった二人で、異様な世界に立っていた。
冥界の空ともまた異なる、毒々しい色合いで浮かぶ紫の空。
地面もまた汚染されているかのような禍々しい色合いだ。

ロキは既にこの魔術が何なのかに当たりをつけているが、だからこそ信じられない。
それはロキ自身初めて見ることもそうだが、そうだと仮定した場合のこの風景が信じられない。
「……固有結界。術者の心象風景を具現化し、術者の魔術的特性を最大限に生かす、極々一握りの魔術回路保有者だけが使える大魔術」
「ご名答」
そう答えるカズヒ・シチャースチエを見て、ロキは内心で舌打ちする。
この魔術系統そのものがロキにとって相性が非常に悪いこともそうだが、今の彼女も厄介極まりない。
そしてそれゆえに、この固有結界の性質をロキは理解できた。
「術者の魔術回路を超強化する固有結界か。……この距離から見て分かるまでにとは、絶大すぎる強化のようだな」
そう唸るほどに、今のカズヒ・シチャースチエは強化されていた。
今までのカズヒ・シチャースチエの魔術回路を2か3とするなら、今の彼女の魔術回路は１０を通り越して１００すら超える。
キャスターのサーヴァント相手に真っ向から魔術戦を可能としうる、
「―燃(喰らえ)ろ」
感覚を確かめるようなその詠唱と共に、ロキを包み込むように火柱が立ち上がる。
それを即座に水で消そうと試みるが、しかし足りず氷塊すら使うことになった。
推測は間違いなく確定だ。規模も質も大幅に強大化しているし、何より術式の強度は一小節どころか五、六小節の魔術に匹敵する。
もはやこの魔術詠唱は高速詠唱という領域ではない。それこそ通常の魔術師が、戦闘における強攻撃として使用するような二小節魔術でも、Ａランクの対魔力すら突破する質で放つことができるだろう。
「……どうやら、貴様は一人で我を手古摺らせられるようだな……固有結界使い」

「ええ、貴方という悪神を足止めするには十分よ……信仰収束型強化能力者」
その発言に、ロキは驚愕を隠し切れなかった。
気づかれている。そう考え、すぐにそうではないと理解する。
「魔術回路型の魔術には、解析魔術というものがあったな。我を解析したのか」
「そうよ。全く末恐ろしいわね。ハブを設置した者達の信仰と能力の分だけ、己の力を強化する星辰光（アステリズム）とか、私も他者の（人の）想（こと）念（は）を力に変換（言え）できる（ない）けれど、星辰奏者（エスペラント）として反則よね」
カズヒの解析結果は完全に当たっている。
ロキの星辰光である真なる黄昏（フヴェズルング・ヴィーンゴールヴ）、英霊集う父狼の館はカズヒの言う通りの能力だ。
ハブを事前に自分を信仰する者に設置することで、己の力を大幅に強化することができる星辰光。それがロキの星の本質である。
星辰光としてのステータスこそ特化型といったところだが、性質上それが飾りも同然になりえるのが、この星の大きな恐ろしさである。

ロキ

☆真なる黄昏（フヴェズルング・ヴィーンゴールヴ）、英霊集う父狼の館（括弧内は現状出力）
基準値：C（A）
発動値：A（AAA）
収束性：D
拡散性：D
操縦性：D
付属性：AA
維持性：AA
干渉性：D

間違いなく星辰奏者の次元を超えた出力による、人造惑星すら超えた出力は最高峰だ。これによる自己強化と、仮面ライダーヴァナルガンドという装備に、ロキ自身の神としての優秀さを踏まえれば、間違いなくあの場で最強は自分だったと断言できる。
更に全盛期の二天龍とも渡り合えるフェンリル。そこにプログライズキー技術を最大限に生かした諸戦力も踏まえれば、オーディンを護衛ごと殺すことは十分可能だった。
だが、想定外の乱舞でここまで食らいつかれたうえ、あろうことか追い込まれてまでいる
何故ならば―
「我の星辰光を解析するだけでなく遮断しているのなら、確かに貴殿にも勝算はあるだろう」
―固有結界そのものと彼女の固有結界としての固有のもの。その二重の性質により、ロキは星辰光の恩恵を大幅に削られている。
これにより、ロキは間違いなく性能が低下していた。
だが、勝算があることとだから勝利できることは別問題だ。
状況が分かっているなら立ち回り方はある。そして勝算があるといっても、0も同然から1パーセントほどになっただけだ。
そして何より、固有結界には欠点もある。
故に警戒はしながらも焦ることなく、ロキは戦闘態勢をとる。
「―死力を尽くすがいい、女戦士よ。貴殿のその秘奥に敬意を表し、我も本気で凌ぐとしよう」
「―ええ、こちらも本気でやらせてもらうわ」
そして、大いなる決戦が開幕した。

気づいた時、クロード・デュ・リスは固有結界に取り込まれていた。
満月が一つだけ輝いている、漆黒の夜空。その下に広がるはところどころ荒れ果てたところがある草原。
そんな草原に、自分が異にいる者は三人だった。
一人は復讐者（アヴェンジャー）たるジャンヌ・ダルク。
そして彼女と向き合うように、自分の近くに立っているのは男女だった。
片方はカソックを着て、頭頂部の髪をそり上げたトンすらの、目元が影のようなもので隠れている男性。
その彼が誰なのかを一発で理解したクロードは驚愕するが、それ以上に隣にいる少女に驚愕する。
名前は確か南空鶴羽。だが駒王学園の女子制服を着ていたはずの彼女は、何故かカソックを着こんでいる。
そしてそれ以上に、それこそ隣の男性以上に驚愕するのは、彼女が手に持っている槍。
先端部が十字架であり、また穂先が紫炎で包まれているその槍は、間違いなく神滅具（ロンギヌス）。紫炎祭主の磔台（インシネレート・アンセム）がかつて発現した時の形態だった。
だからこそ信じられない。目を疑う。
アヴェンジャーもだからこそ動かないのだろう。信じられない光景に、目を疑っているのだ。
そう、それは—
「……そろそろ立て、クロード」
—口調で更に確信に変わる。
「……ピエール、師匠？」
信じられず、そう尋ねてしまう。
それに対し、南空の体を使っている者は頷いた。
「変則的な形で済まん。この固有結界の性能では、私といえど疑似サーヴァント化なしに自我を再現することができなかったのでな」
その返答に、クロードは即座に理解した。

つまりこの固有結界は―
「登録されたサーヴァントの影を召喚、もしくは己の体に宿させる固有結界」
「そういうことだ。ちなみに私の自我が出ているのは、特例中の特例だ」
意図せず放ってしまった声に頷きながら、ピエールは真正面の相手を見据える。
「ピエール(片方)にとって因縁のあるジャンヌ(相手)・ダルクが、片方が持つ神滅具と共鳴し、更に聖槍(お前)がいたことによる三重共鳴。このような奇跡は二度は起こらんと考えろ」
そう告げ、そして鶴羽の体を借りたピエールは、真っ直ぐに戦うべき相手を見る。
「出てくるのが遅れてすまなかったな。ライダーと四苦八苦しながら行動していたのだが、鶴羽(彼女)が己の固有結界に無自覚なこともあって、発現もほぼランダムだったんだよ」
そう告げながら穂先を突き付ける先、アヴェンジャーは肩を震わせ、嬉し涙まで流していた。
「……殺してやるわ。殺してあげる必ず殺す今死ねすぐ死ね苦しんで死ね！」
そう告げながら、絶大な紫炎が彼女を中心に巻き起こる。
それを真っ直ぐに見つめながら、ピエールは静かに呼吸を整えながら槍を構える。
そして、見ることなく弟子に向けて告げる。
「……勝つぞ。我らが揃ってジャンヌ(彼女)・ダルク(女)と向き合っている以上、その紫炎を我ら以外に向けさせるわけにはいかん。お前はそれを成し遂げれる女だろう」
「……はい！」
その言葉に活力が漲る。
ある程度回復した心身が、師の激励に力を満たして、クロードもまた槍を構える。
「……気を付けてください。彼女の炎、聖なる力を焼くようです」

「だろうな。その可能性はこの結界(中)に登録される時から考えてはいた」
そう頷きながら、ピエールは一瞬だけ息を吸う。
「伝えられる機会は二度とこないだろうから、お前に告げるべきことがある」
「なんでしょうか？　手短にお願いします」
戦意を燃やしながらクロードが促すと、ピエールは僅かに躊躇し―
「南空鶴羽(このゝ娘)は道間七緒だ。そしてその友人である日美子に道間乙女とアイネス・ドーマ。七緒を含めた五人について調べ、できることならミザリ・ルシファーに向き合う彼女達の力になってやってくれ」
「……意図が読めませんが、どういうことですか？」
「時間がないのでな。ミカエル様やアザゼル総督、魔王サーゼクス殿にも相談しておけ。話せば長くなるが、私(ルーラー)からの伝言だと言えば、事情を語ってくれるはずだ。……道間誠明について調べてないはずがないのだから」
そう静かに告げ、ピエールは前を向き直す。
クロードもまた前を向く。
師匠があえてそう言ったのならば、それをするだけの価値はある。そして同時に、きっと人から聞くのではなく自ら踏み込むのが、せめてもの礼儀なのだろう。
そして何より、これ以上の時間はかけられない。
「まとめて焼き尽くしてあげるわよ、ピエールぅぅぅぅぅぅっ!!!」
放たれる紫炎を切り払うべく、師弟は槍を振りぬいた。

神威動乱編　第四十四話　Ｔに繋ぐ数分

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

放たれる紫炎と斬撃を回避しつつ、クロードとピエールは四方八方から槍の攻撃を繰り返す。
それらの多くはかすり傷にとどまるが、アヴェンジャーは焦りを見せていた。
「なんでなんでなんで……治せない!?」
その狼狽は単純で、しかしだからこそ当然だ。
幽世の聖杯は治癒という次元を超えた癒しを与える神滅具だ。強大すぎ魂にすら干渉するがゆえに悪影響もあるが、少なくとも恩恵を受ける者にとっては絶大だ。
神すら滅ぼしうる力の具現。神滅具という力に該当するのは、間違いなく伊達ではない。
だが、その力が大きく減衰している。
負傷を回復する速度が、目に見えて低下している。それこそただのかすり傷にすら、完全復元に十秒近い時間がかかっているのだ。
それだけの圧倒的な事象は、アヴェンジャーにとってあまりに運が悪かった。
確かに幽世の聖杯は神滅具だ。聖遺物の一角なだけあり、強大だ。
だが、聖遺物の神滅具がすべて敵に回っているこの状況下では相性が悪かった。
怨敵たるピエール・コーションが振るう、紫炎祭主の磔台（インシネレート・アンセム）
その弟子クロード・デュ・リスが担う、最強の神滅具たる黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）
更にあろうことか、自分が宿す幽世の聖杯までもが敵に回っている。
サーヴァントが四騎も揃っているという異例の事態故に起こりう

るイレギュラーが、魔剣を会得しながらもアヴェンジャーを追い込み続ける。
ことサーヴァントは過去の再現である為、生前の死因に弱い。
生前のアヴェンジャーを殺した存在が、死の直接の要因である紫炎を振るう。あまりにも完成された死刑宣告と言ってもいい。
……だが、しかし。
「な……めるぁあああああっ!!」
彼女の全身から放たれる紫炎が、周囲の敵を尽く吹き飛ばす。
この状況下において、アヴェンジャーはまごうことなく強敵だった。
幸か不幸かピエールやクロードの手によって、ジャンヌ・ダルクの知名度は世界でも有数だ。
だからこそ、事実上の袋叩きでなお倒しきれていないと言ってもいい。
何故ならば、数の圧殺こそがピエールとクロードの本気と言ってもいい。
ピエール・コーションが至った紫炎祭主の磔台の禁手は、紫炎祭主の同胞達（インシネレート・ランデベヴェ・スクワッド）。紫炎の槍を持った戦士を八人作り出し敵を数で圧殺する亜種禁手だ。
逆にクロードは禁手にこそ至らなかったが、宝具によってそれをカバーする。偽ジャンヌの筆頭格である史実と、その多くが集団的な作戦で行われた事実の二重作用で発現する宝具、証明されし偽証の聖処女（ザルモワーズ・ラ・ピュセル）。自分と同じ教会の任務として偽ジャンヌを行った者達を、自分の影という形でシャドウサーヴァントとして召喚する宝具だ。
この数の圧殺を、アヴェンジャーは強引に焼き尽くす。
そう、それこそがアヴェンジャーをこの期に及んでしのがせる、最期の切り札。
「聖女でありながら紫炎に焼き殺されたことに由来する、聖なるものを燃やす対神聖宝具……っ！」
クロードが歯噛みするのも当然だろう。

ジャンヌ・ダルクがアヴェンジャーの霊基で具現化する宝具。
聖処女とされながら聖なる紫炎で火刑に処されたことによる、聖なる力を焼き尽くす炎の具現化。
それを、ついにアヴェンジャーは全力で開放する。
「焼き尽くせ……裏切り焼かれる聖女の恩讐(インシネレート・ラ・ピュセル)うううううううっ!!!」
全身から放たれる、恩讐の紫炎が、固有結界全てを包み込まんと紫の花を咲かせる。
それを前に、クロードは鶴羽の体を守るべく庇う為に前に出ようとする。
だが、それより先にピエールは前進した。
「師匠!? その体は人の―」
「安心しろ。あれは私が死なずに相殺する」
その返答にクロードは腰を落とし踏み込む。
彼は必要あれば自他問わず人命を切り捨てられる、暗部に相応しい人物だ。
だが同時に、意味もなく人の命を犠牲にさせることは断じてない。非情になる時はあっても非道を当然とはしない。
だからこそ、クロードはピエールがなせると確信した。
「残念だな、ラ・ピュセル。お前がそれを持っているのは、なんでなのかを忘れたか!」
その瞬間、神聖を焼き尽くす炎は、全く同種の完全上位互換に相殺される。
「……なっ」
「これが我が第三宝具、焼滅(ヴィエ)せよ、聖なる魔女(マルシェ)よ」
その驚愕と差し向けられた冥途の土産。
聖処女と称され聖遺物を宿す自分を焼いた炎。その再現を彼女が持っている以上、燃やしたピエールが同種の宝具を持つのは道理であった。
それを悟りながらも、クロードは一気に踏み込んだ。
呆気に取られるアヴェンジャーの顔を真っ直ぐに見て、そして宣言

する。
「悪く思いなさい。暗部(私達)は憎悪(それ)を背負い続けることが宿命なのですから」

和地Ｓｉｄｅ

急にカズヒ姉さんと鶴羽がロキとアヴェンジャーごと消えたけど、だからと言って敵が弱いわけじゃない。
戦術的価値ならフェンリル級とロキに言わしめたフェンリスヴォルフレイダー。
巨体と頑丈さにより防壁として優秀なうえ、攻撃力も上級悪魔異常なヨルムンガルドレイダーが多数。
更に補充されたエインヘリヤルマギアにヨトゥンヘイムマギア。この数に対応するのはやはり困難だ。
だが、それでも俺はやることがある。
「……インガ姉ちゃん、サポートよろしく！」
「分かってるけど！　分かってるけどこれ、魔王血族(前)三人より大変なんだけど、和地くん!?」
そう絶叫するインガ姉ちゃんだけど、こっちの意図を読んでカバーしてくれるからありがたい。
愛してます。後で必ず埋め合わせはしますんで！
そう心の中で決意しながら、俺はショットライザーの射撃と星辰光による援護防御をしながら屈み込む。
そして、空いた手でリヴァ先生の手をそっと握った。
「カズ……くん？」

焦燥しているけど、リヴァ先生は変身を試みようとしている。
変身して戦おうとしているんだ。先生は、まだ心で負けてない。
それでもやっぱり激痛でつらいのか、その眼には涙が浮かんでいる。
だから、有言を実行する。
「大丈夫だ。俺も手伝う」
それと同時に魔術回路を起動。質の問題であまり役に立たないだろうが、魔術的にリンクすることで負荷の影響を俺も喰らう。
うん、結構きついな。
魔術回路の質の問題で、背負える負荷は一割もない。だけどかなり激痛で、正直悶絶しかけてる。
だけど、リヴァ先生はこの何倍の痛みを、体の負荷込みで耐えているんだ。
なら、少しぐらいの痛みは我慢しないとな……っ
「カズくん!? ちょっと、痛いから離さないと―」
「リヴァ先生の何分の一か痛いだけだろ? それぐらいは支えるさ」
ああ、支えるに決まってるだろう。
今もリヴァ先生は頑張ってる。
命がけの戦いだからこその状況だ。
そして何より―
「支えてくれる人がいるってのは、少しでもつらいのを共有できるってのは、それだけでも力になれることがあるって知っているから……っ」
そして、それを実感させてくれた鶴羽人も、今別の場所で頑張っているから。
だからこそ―
「命を懸けて誓いは果たす。その涙を、できなかったなんて嘆きで流させるものかよ!」
―ああ、だから。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

―頑張れ、カズヒ姉さん。
そんな声が聞こえた気になりながらも、カズヒは一歩前に踏み込んだ。
放たれる絶大な数の魔法攻撃に対し、カズヒは魔術攻撃でそれを受け流す。
同時に神器によって格納している武装を瞬時に呼び出し、もう一つの神器によって強化して撃ち放つ。
仮面ライダーとしての性能は大きく水をあけられているが、相手が悪神であることもあって星辰光（アステリズム）は比較的有効。相手の星辰光は固有結界による封じ込めで防いでいたこともあり、カズヒは文字通り個人で神を足止めしていた。
更に性能差と技量を十全に生かして包囲圧殺を図るロキの魔法攻撃に対しても、一小節で瞬時に１００ｍ近い距離を転移することで回避する。
奇跡と言っても過言ではない。
星辰光の総合的な性能でも、仮面ライダーとしての性能でも、生物としての性能でも、カズヒはロキに劣っている。
それを、固有結界による大幅な強化があってこそとはいえ単独で競り合うことに成功していた。
「……凄まじいな。貴殿が我らの勢力圏に生まれていたのならば、英雄として迎え入れられたことは間違いあるまい」
ロキは感嘆すら覚えている。それだけの偉業をカズヒは成していた。
だが、同時にそれは余裕の表れだった。
「だが残念だ。あと何分時間を稼ぐことができる？」

「……さて、あと何分かしらね」
その返答に、ロキは仮面越しに笑みすら浮かべた。
「余裕がないな。分単位だと言っているようなものだぞ？」
それゆえに、ロキは決して焦らない。
固有結界には大きな弱点がある。
それは世界の具現化と浸食を行う都合上、元に戻らないようにする為に多大な魔力消費が必要だという点だ。
魔術回路がどれだけ優秀だろうと、人間では数時間も持続することはまず不可能。それこそ分単位が基本なのだ。
そして何より、彼女の固有結界の性質がそれを悪化させている。
「自身の魔術回路を超強化するということは、それを最大限に生かす為には基本的により多くの魔力消費が必要になる。貴様の固有結界は、それゆえに極端な域の短期決戦以外に使用することができない欠陥品だ！」
そう、それこそがカズヒの固有結界が持つ最大の欠点。
魔術回路を超強化することでより複雑かつ大出力の魔術を行使できるとしても、その際に魔力を消費するという当たり前の代償が存在する。
魔術回路の質だけでなく量も超強化されているだろうが、それによって上昇する魔力生成量如きでは、固有結界の維持と本領発揮に必要なそれぞれの魔力量には全く追いついていないのだ。
固有結界を使う必要がある相手に対して、その短期決戦の極みは間違いなく致命的。よしんば大魔術の連発が必要ない相手がいようと、なら固有結界を使う必要がないので無駄撃ちになる。
極論、この固有結界は極めて繊細な魔術行使を彼女自身がする必要がない限り、数分程度の短期決戦しか使えないという、固有結界そのものとこの固有結界の性質のかみ合わせの悪さがあまりに目立っている。
星辰光の意味をなさなくする手練手管は見事だが、このレベルの強化なら星辰光がなくとも数分しのぐ程度は決して難しいことではない。

故にロキは、無理に勝とうという発想を持っていなかった。
―そして、カズヒはだからこそ内心でほくそ笑む。
固有結界の持続は、おそらくあと数十秒が限界だ。
だが、ここに至るまでの三分と少しは、大きな価値を持っている。
本当なら固有結界と同時に使用したかった、カズヒとリーネスの最後の手段。
本当ならもっと早く投入できるはずの、フロンズ達の最終手段であるプランＴ。
固有結界と共に叩き込めないことは一抹の不安だが、しかし本命までの繋ぎであっても価値は大きい。
その覚悟を決め、だからこそカズヒはそこまで時間を稼ごうとし―
―到着したわぁ、カズヒ―
―その念話に、勝負所を理解する。
だからこそ、この一瞬ですべてを出し切って勝利の布石を一つ置こう。
「全身全霊で喰らいなさい。これが貴方を倒す第一歩よ！」
そう吠えると共に、フォースライザーを素早く二度開閉する。
同時に宝石を大量に展開し、固有結界を利用して数十の大魔術を一斉に発動体制に持っていく。
それに呼応するように、ロキは素早くアスガルドライバーを操作した。
『Ｒａｇｎａｒｏｋ』
下手に回避するより真っ向から迎撃する方が安全と判断したのだろう。油断なくダメージを減らすための魔法を展開していることもあり、決して警戒を緩めていないことは分かる。
だからこそ、この一撃は外さない。
自分が勝つ為ではない。皆の勝利に繋げる為に―
「真っ向から、叩き潰す」
「愚かな、返り討ちだな」
『ハウリングユートピア』
『ヴァナルガンドディストラクション』

神威動乱編　第四十五話　プランＴ、発動します！

和地Ｓｉｄｅ

固有結界が解除され、中にいた人が戻ってくる。
そして崩れ落ちる二人とそれを支える一人を前に、一人の神が舌打ちした。
「……やってくれたな、小娘共が」
ロキはそう不快気に断言する。
その理由の一つはわかっているけど、もう片方はよくわからない。
カズヒ姉さんがなんかやったのは確かなんだけど、一体何をやったんだ？
首を傾げたい俺の前で、ロキは苛立たし気に歯を食いしばる。
「アヴェンジャーを倒すのみならず、我の星辰体感応合金（アダマンタイト）の調律を乱すとは。発動の意味がなかったことで気付くのが遅れるとは、不覚……っ」
……マジか！
クロードさんが支えているカズヒ姉さんと鶴羽を見ると、二人ともよろけながらも立ち上がろうとしていた。
「へへへ……。私はともかく、私を支えてくれる英霊（人）を舐めちゃいけないのよ……っ」
「……同感ね。そして、これであなたは星辰光（アステリズム）を使えない」
強引に立ち上がりながら、カズヒ姉さんはざまぁみろちわんばかりににやりと笑う。
「星辰奏者（エスペラント）が星を振るうには、個人に合わせて調律された星辰体感応合金（アダマンタイト）の発動対が必要不可欠。そしてそれは一人一人に合わせた調律が必須で、また外付けの臓器と言ってもいいリンク具合か

ら、一対一セットでもない限りは、複数持つことは自殺行為。……つまり、あんたは当分星辰光を振るえない」
こ、この状況下でその為の手札を用意して振るったってのか。まじか。
思わず口元が緩むけど、我に返って強引に口元を引き締める。
星辰光が使えなくなったとはいえ、それでもロキは強敵だ。
この程度で、油断できるわけがない。
実際ロキもまた、苛立って入るけど冷静さを失っては断じていない。
「……まぁいい。戦力はまだあり、そしてヴァナルガンドがある以上、我を今の貴様らが打倒することはでき―」

「否、そういうわけにはいかんなぁ」

そう、幸香の声がロキの言葉を切って捨てる。
壮絶に爆発物を乱舞させている幸香は、こっちを見ながらにやりと笑う雰囲気を仮面越しに見せた。
「妾は外連味には理解がある故、この場のトリは三大勢力(そちら)に譲る。……が、後継私掠船団(ディアドコイ・プライベーティア)としては、持ち帰る獲物は欲しいのでな」
そう告げながら、幸香は指を鳴らし―
「―ゆえに、少し物色させてもらうぞ？」
―その瞬間、フェンリスヴォルフレイダーとヨルムンガルドレイダーが、禍の団の連中ごと一斉に姿を消した。
……やられた！
「あの小娘ぇ……っ！　ええい、貴様らを殺してからすぐに追跡して

―」

「―否、貴殿は此処で世界の行く末から退場してもらう」
更にロキの言葉を遮り、後ろから強いオーラがいくつも感じてきた。
それとなく後ろ確認すれば、そこにはフロンズ氏が、紫の瞳を持つ男女を連れて立っていた……っていうかリーネスまでいた。
「おまたせぇ。プランTと一緒に、最終兵器を持ってきたわぁ」
「……しゃーない。カズヒ、手を出して」
そんなリーネスに応えるように、鶴羽がカズヒ姉さんに手を伸ばす。
カズヒ姉さんは首を傾げながらもその手を取ると、ほんのりと光に包まれた。
「こ、これ……!?」
「最後の残滓。ま、少しは全力で暴れられるでしょ?」
びっくりしているカズヒ姉さんにそう言うと、鶴羽は限界だったのかまた倒れた。
慌ててクロードさんが支えると、今度はこっちをちらりと見て、ゆっくり腕を突き出した。
「あとは気合を入れなさい」
「……ああ、分かってる」
俺はその拳に拳を当て、気合を入れ直す。
「……行こうぜ、二人とも」

Other Side

「「ええ、任せて」」
その言葉が同時に出てきて、お互いがお互いにクスリと笑う。
「大丈夫かしら。貴方かなり反動を食らってたけれど」
「お互い様でしょ？　むしろ暴れた直後じゃない」
そう言い合い、そして不敵な笑みを持て答えとする。
「「……まあ、まずは倒してからね」」
また同時に出てきながらも、今度は笑わず前を向く。
『Ｏｄｅｎ』
片方―リヴァ・ヒリドールヴ―は乗り越えたプログライズキーを構える
『ＲＥＢＥＬＬＩＯＮ』
片方―カズヒ・シチャースチエ―は新たなプログライズキーを構える。
そして神具アスガルドライバーと、滅亡迅雷フォースライザーに、それぞれプログライズキーを装填した。
「「変身！」」
『スキルヴィングゴッド！　Ｉｔ，ｓ　Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ　ｏｆ　Ａｓｇａｒｄ』
『アヴェンジングシェパード！　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　ｂａｌｌｅｔ　ｏｆ　ｇｏｄ　ｋｉｌｌｅｒ』
そして並び立つ二人の仮面ライダー。
ロキの目論見を超えて変身するは、仮面ライダーグリームニル。
ロキを打倒する切り札たるは、仮面ライダー道間、アヴェンジングシェパード。
そして、戦力はそれだけに終わらない。
「……さて、準備に手間取ったがゆえに見せ場をとることになるが、だ

からこそ全霊をもってお相手しよう」
　そういいながら、二人に並び立つようにフロンズ・フィーニクスがロキを見据える。
「こういう時、日本のドラマでは専用の音楽や歌が鳴るらしいのでそれにあやかろう。……処刑の時だ、運よく死なぬことを祈るといい」
「……ほざいたな、小童如きが」
　殺意を前面に滚らせ、ロキはオーラを全身から放つ。
　そのオーラは敵に対して、余波でしかないにも関わらず殺せる威力で飛び散り―
「させるかよ、悪神」
　―その全てを、防壁が防ぎ切る。
　そう、今この場において……否、この場で苦心してきた者を救済するべく、彼もまた並び立った。
「嘆きの涙は流させない。……覚悟しろ、悪神！」
　涙の意味を変える救済者（タイタス・クロウ）。九成和地もまた、戦闘に介入する。
「抜かせ、小童ども！」
　それに対し、ロキの鳴らした指の音に呼応するように、残存するエインヘリヤルマギアとヨトゥンヘイムマギアが、強引攻撃を突破して襲い掛かる。
　いまだ数は多く、このままでは被害も甚大になるだろう。
　だが、しかし。
「そうはいかないわ、ロキ様」
　―不敵な笑みを仮面越しにし、リヴァもまた指を鳴らす。
　その瞬間、地面が隆起し形状が変わる。
　塔のような形をし、頂点の八面に紋章が刻まれたそれは、リヴァ・ヒルドールヴの真骨頂。
　それを悟るロキが反応するより早く、数十の塔から幾重ものオーラの砲撃が放たれた。
　それにより接近を阻害されるマギア達を一瞥し、リヴァは宣言する。
「私も本領が発揮できるので、そろそろ本気で行かせてもらいます。

……お覚悟を、ロキ様」
「地殻変動と龍脈の力を利用した、多重砲台の生成。……なるほど、ホグニの宝具はこれで防がれたのか」
歯噛みするロキは、それを失念していたことを反省する。
神々として権能を持たんとしたリヴァは、世界を渡り歩いた経験を生かした得意技を持つ。
それが大地の地殻変動と龍脈のエネルギーを利用した砲台による制圧戦闘。
一体一体が上位の上級悪魔を超える攻撃力を叩き出す砲台を、その性質から数十同時に生成できるという燃費の良さで、更に日々研究する制御術式でセミオート運用を可能とする。
この制圧力は軍勢の制圧や対空迎撃において凄まじい性能を発揮する、大地を制御する戦神としての側面を獲得していた。
性質上レーティングゲームのフィールドや、高層階では発揮できなかったが、この戦場なら話は別。
その力を思う存分振るい、リヴァはロキに宣言する。
「……ここで倒れていただきます。……いろんな意味で」
アースガルズが神々の末席としての責任。
三大勢力を中心とする和平に賛同する者としての、義憤。
そして「惚れ直した男に、少しぐらいカッコいいところを見せたい」という、私利私欲。
それら全てを込め、リヴァ・ヒルドールヴは一歩を踏み出した。

神威動乱編　第四十六話　究極の神穿ち

イッセーＳｉｄｅ

「創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星」
　朧げなげな意識で、声が聞こえた。
「傲岸不遜な愚かな神よ。太古の秩序が暴虐ならば、我らは神威に牙を剥こう」
　力強い言葉が聞こえる。
「愛を惑わさんとする、その行いは度し難し。汝が忘れし誓約が、その身を亡ぼす弾丸とならん」
　決意に籠った声が聞こえる。
「ヤドリギよ、我が銀の弓にて神を貫く弾丸と化せ」
　ああ、そうだ。
「怠慢を貫く対価が黄昏ならば、是非もなし。一つの世界の終焉を生む罪、新たな世界を作るがために背負って見せようではないか」
　まだ戦ってる。皆は戦ってる。
「約束された正義の前に、さあ邪神よ滅ぶがいい！」
　だから――
「超新星（メタルノヴァ）――銀弓（シルバーレット）よ、神威を穿ち黄昏（ホーズ）を！」
　――頼んだぜ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

今この場において、悪神ロキは問答無用に最強である。
神というものは悪魔における魔王に相当する。更に戦闘に長け、更に高位であることまで兼ね揃えれば、魔王と言えど眷属を率いて初めて一柱を打倒しうるレベルだ。主神クラスともなれば、悪魔の歴史において三人しかいない超越者と称される規格外の存在でなければ打倒は困難だろう。
ロキは伝説においても名高い神であり、また極めて高い性能のプログライズキーを使用した仮面ライダーになっている。とどめに星辰光の発動こそ封じられたが、それでも基準値（アベレージ）とはいえ星辰奏者でもあった。
ゆえに、ロキは躊躇なく全身全霊の魔法攻撃を放つ。
もはや下手に様子を伺うことは返って危険。隙なく全力で叩き潰すぐらいでなければ、こちらが滅びる可能性はいくらでもあるからだ。
それに対して九成和地が魔力防壁を作り出す。
しかし瞬時に何枚も粉砕される。
当然だ。ロキの出力はAランク程度の星辰光の出力では、収束性も同等にあって漸くある程度防げる程度だろう。それもかなり甘く見積もってだ。
故に全て粉砕できる。そう思った時、攻撃の突破率が大きく減衰する。
「中々いい結界だ。同調して補強するから、最初に作るのは任せるとしようか」
そう告げるのは、男の割に長い髪をしたバアルの悪魔。
彼が指揮棒を振るうように魔力を調律すれば、消滅の魔力が障壁に負荷され、その防御力を大きく上げる。
男の名はシュメイ・バアル。悪魔でありながら優秀な論文を数多く輩出する魔法研究家であり、魔術回路の研究も行っている。
その優れた手腕が、障壁を消滅の魔力で強化する。
それに舌打ちをしようとしたロキに、寒気が走った。

即座に寒気に従って一歩横にずれれば、心臓と頭部の一に素早く魔力の矢が通り過ぎる。
一瞬でも判断が遅ければ深手を負っていただろう。
それを成した者は、次の魔力の矢を生成しながら舌打ちした。
「チッ！　手柄取れたかと思ったんだが、神ってのは流石にしぶてえってことか」
そう悔しがるのはシュウゴ・バアル。遠距離狙撃を得意とするシュウマ・バアルの子息の一人。静止標的なら２ｋｍ先のリンゴに当てると言われる狙撃や、５００ｍ先の五つのリンゴを同時に射貫くことも可能とする、遠距離狙撃で並ぶ者なしとまで言われる俊英である。
そして狙撃で僅かに途切れた砲火を掻い潜り、更に二人のバアルが襲い掛かる。
即座に魔法障壁をはりつつ下がるが、二人はそれぞれ粉砕と両断であっさりと突破した。
「この程度かい!?　神様ならもっと気合い入れなぁ！」
「……本気がこれか？　だとするならがっかりだ」
吠えるのは、フロンズ・フィーニクスの女王たるティラ・バアル。
かのサイラオーグ・バアルと生身の接近戦で食い下がるという、若手悪魔としては異例の成果を上げ、豪快な破壊力を主体とする武勇の女傑。
嘆息するのはその弟たるナシュア・バアル。
消滅の魔力を高密度に圧縮した近接戦を得意とする、一対一限定なら既に最上級悪魔の上位に位置すると言われる神童の猛者。
そしてその接近戦で揺らいだ隙を、いくつもの魔力の球体が付く。
素早く迎撃を試みるが、それらの多くを掻い潜り、ロキの本気の防御を必要とする攻撃が当たっていく。
「やっぱり神は難敵か。もうちょっと細かく狙うかな？」
そう静かに精査するは、ノア・ベリアルの女王でもあるクーア・バアル。
魔力先頭に限定すれば、既に現役の最上級悪魔とそん色ない、シュウマ・バアルの自慢の子女。

彼らシュウマ・バアルの子息達による連携を受け、ロキの動きにはどうしても限界が生じる。
そして、それを二人は逃さない。
「そろそろ行くわよ！」
「もちろん！」
『アヴェンジングディストピア！』
カズヒ・シチャースチエの放つ屋の形をしたエネルギー投射を援護として、リヴァ・ヒルドールヴが突貫する。
素早く拳で迎撃するも、想像を遥かに凌駕する激痛に、一瞬だが隙が生まれる。
その瞬間、リヴァの拳がロキの脇腹にめり込んだ。
追撃するように迫るカズヒの飛び蹴りは何とか受け止めるが、衝撃状に走る激痛と損壊に、ロキの動きは精彩を欠き始める。
更にそこをつくように飛び掛かる、シュウマ・バアルの子息達。
その連携に、ロキは驚愕を覚え始める。
リヴァの戦闘能力が高くなっていることは、不快ではあるが仕方がない。
一気にレベル４にまで到達したグリームニルの性能は、少なく見積もって五割増しだ。一対一ならともかく、これだけの数で妨害されながらだと苦戦は必須だろう。
だが、周りの戦力があまりにも効く攻撃を叩き込み続けている。
単純な性能向上ではない。それはまるで―
「まさか、すべてが神殺しだとでもいうのか!?」
「私に限っては……正解よ！」
リバーブローと共に叩き込まれる言葉が、その答えだ。
これこそがアヴェンジングシェパードプログライズキーの力。カズヒ・シチャースチエの星辰光を改竄するプログライズキー。
呪詛将来・憑霊能力を改竄した滅神呪詛招来能力。神々の傲慢や気まぐれにより傷つき死んだ者達の怨念を集めることで、対神に特化した呪詛を操る星辰光。

カズヒ・シチャースチエ
銀弓(シルバー)よ、神威(レット)を穿ち黄昏(ホーズ)を
基準値：C
発動値：A
収束性：AA
拡散性：E
操縦性：E
付属性：C
維持性：D
干渉性：AA

総合的な性能は低下し、星辰光を大きく改竄するという離れ業ゆえの反動もあって、長時間の運用は不可能に近い。
が、対神に特化しているがゆえに悪影響は少ない為、こと短期決戦においては間違いなく圧倒的に有利。神仏限定であるがゆえに、その価値は計り知れない。
そして、神殺しはそれだけでは断じてない。
「漸く気づいたのかい？　前例はあるんだし、そんなに驚くことかねぇ」
「無茶言わないの、姉さん。ティバールみたいにぽこぽこ作れる方が異常だし」
そうかえるティラとクーアの言葉に、ロキは戦慄する。
そう。それこそがシュウマの子供達がロキを追い込んでいる最大の理由。

それぞれが最上級悪魔に確実になれる際の持ち主で、自主的な研究や鍛錬を積んでいる者が殆どだ。……が、魔王クラスならともかく、最上級悪魔の頂に届いた程度で最高クラスの神には届かない。
だからこそ、その力の根幹に誰もが力を籠める。

それは髪の毛で隠れていた、彼らが装着するサークレット。
その輝きが彼らの魔力に、神殺しの力を付加し続ける。
故に、ロキは明確に狼狽した。
「ありえん!? あれは対神宝具、それも現物か!? いくら何でも、再現された幻想ではなく実物の宝具をいくつも用意できるわけがない!?」
ロキの驚愕は正しい。
だがしかし、それをなせる方法が一つは存在する。
それに、ロキは気づいた。
よく見れば、それぞれのサークレットは意匠が僅かに異なっている。
冷静に考えれば、彼らはそれぞれ体格が異なっている。それにぴったり合う宝具を五つも現存で用意するなど、どう考えてもおかしい。
そこに気づき、ロキは寒気を覚えた。
「まさか……作ったのか? 神殺しの、宝具を!?」
「……その通り。それこそがプランTだ」
ロキの言葉を肯定し、フロンズは魔力で獲物を射出する体制を整える。
それはすべてが手持ちで使う類の槍。
そしてすべてが神殺しのオーラを秘めている。
その事実にロキは驚愕し、しかし同時に一つ悟る。
聖なるオーラこそ纏っていないが、それさえ差し引いて考えれば、そのオーラには心当たりがある。
「黄昏(トゥルー)の……聖槍(ロンギヌス)?」
その答えを思いつき、そしてその結果ロキはふと気づいた。
サークレットから漂う神殺しのオーラもまた、似通ったオーラの質を持つ。

そう、これはまるで、特定の画家が描いた作品にある独特のタッチとでもいうべき―

「……プラン、T……っ」

―その瞬間、ロキはすべてを悟った。

神の子を貫いたロンギヌスが持つ槍。

その槍は元々、隕鉄から鍛えられたという。

そう、隕鉄をもってして神の子を貫く槍を鍛えた、鍛冶の祖とされる一人の男。

間違いなくサーヴァントとして呼ばれるだけの知名度と信仰を持つだろう、鍛冶錬鉄の偉人。

すべてを悟り、ロキは吠える。

「……トバルカイン！」

「正解だ。これぞ我が眷属ティバールこと、槍兵（ランサー）のサーヴァント、トバルカインの槍（ランサーとして）の宝具」

そう、それこそがプランTが最終手段たる理由。

ロキのように聡い者ならば、またロキのように何かを作り上げた伝承を持つ神ならば、悟りうると危惧されていた、伏札になりえる存在。

槍を振るうのではなく、槍を鍛えたことでランサーのサーヴァントとしての側面を獲得した英霊。錬鉄の祖たるトバルカイン。

そんな人物を、眷属として迎え入れたからこそできる反則技。

「神の子を貫く前の槍限定で自在に魔力で瞬間創造する対神宝具、黄昏の槍（ロンギヌス・オリジン）・原点。そしてトバルカインが常態で持つ宝具作成宝具、錬鉄伝承（クリエイト・ファンタズム）。その合わせ技による対神宝具の波状攻撃こそが、プラン T（トバルカイン）の骨子だとも」

故にこそ、これは最終手段にせざるを得なかった。

条件こそ相応にあるだろうが、宝具という強力な兵器をいくつも用意できるという時点で驚異。まして対神宝具を数多く揃える余地があるなど、神を奉じる神話勢力からすれば脅威以外の何物でもない。

だからこそ最終手段。現魔王政権が神殺しをいくつも新しく用意できる余地を持っているなど、神話勢力との和平においてはデメリットになりかねない。そのつもりがなくとも恫喝外交になりえるし、そ

こからくる警戒心で、神話勢力が三大勢力に対抗するべく同盟を結ぶという最悪のパターンも考えうる。
だがしかし、この状況なら最終手段とはいえ出せる余地はある。
何故ならば、同盟を結んだ主神を、造反した悪神から護る為の最終手段だ。主神を守る為の行為なら心理的な抵抗感を大きく減らせることは言うまでもない。また造反したロキ相手の使用なら、むしろ和平賛同派の神々からすれば心強い防衛手段が存在するという認識になりえるだろう。
それでも、和平に不満を持つ者達にとっては着火剤になりえるのも事実。故に、フロンズは最終手段にとっておいたのだ。
目の前の問題はどうにかなるが、後に問題を引き起こしかねない。それゆえの最終手段。
だからこそ―
「ここで確実に潰す。死んでも恨むなとは言わぬが、死ぬ可能性は心せよ！」
その言葉と共に、魔力によって加速された大量の神殺しの宝具が射出される。
その光景に、ロキは仕掛けを悟る。
「令呪による宝具の代行運用か!?　味な真似をぉっ！」
迎撃と回避は行うが、それでも移動を大きく制限される。
絶大な魔力と不死性を持つフロンズ・フィーニクスに、令呪のブーストで宝具を貸与することによる、圧倒的な神殺しの物量戦術。
一度でも貰えばそこから一気に畳み込まれることが嫌でもよく分かる。
更に逃げ場を封じるように、シュウマ・バアルの子供達が包囲体制をとり、またサークレットを輝かせていた。
「「「「黄昏の(バエル・)―」」」」
そして同時に、彼ら全員が最上級を超えた魔王級のオーラで槍を作る。
そう、これこそが彼らが共通して持つ対神宝具の真名解放。
所有するバアルの素養が高い悪魔に、神殺しの特性といったいくつ

もの加護を与えるだけでなく、真名を解放することでそれを瞬間増幅して槍を成す。
そう、これこそがプランTの真骨頂……！
「「「「――魔冠（ロンギヌス）っ!!」」」」
C＋＋ランクの大王血族有力者専用対神宝具、黄昏の魔冠（バエル・ロンギヌス）の最大攻撃。
「……なめるなぁあああああああっ!!」
そしてそれを、ロキは全身全霊をもって抵抗する。
真名解放だけでなく、フロンズは壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）によって底上げしている。
宝具というサーヴァントの切り札を破壊することと引き換えに放つ壊れた幻想。本来は避けうる手段も、黄昏の槍・原点（ロンギヌス・オリジン）なら多用可能。
その猛攻を、ロキは全身全霊をもって迎撃する。
基準値（アベレージ）とはいえ星辰奏者としての強化で。仮面ライダーヴァナルガンドという装備で。そして悪神という底力で。
持てるすべてをもってして、ロキはそれを迎撃し―

「いいえ、貴方はここで終わりよ」

銀
神
弓
焉

「ええ、これで終わらせないとね」

『Ｏｄｅｎ！』

その視界に、飛び上がる二人の戦士が移る。
共に飛び蹴りの体制で迫りくるは、二人の仮面ライダー。
仮面ライダー道間、カズヒ・シチャースチエ。
仮面ライダーグリームニル。リヴァ・ヒルドールヴ。
迎撃に死力を尽くしているがゆえに、ロキは移動できない。
それでも多少の深手を覚悟のうえで、ロキはドライバーを操作する。
『Ｒａｇｎａｒｏｋ』
「させるかぁあああああっ!!」
『ヴァナルガンドディストラクション！』

「「いい加減、しつこい！」」
『アヴェンジングユートピア！』
『スキルヴィングディストラクション！』

ナ　ヴ　ア

ン
デ
ィ
ド
アヴェンジング
ユートピア
ガ
ク
スキルヴィング
ディストラクション
ル
ト
ス
ラ
ン
ョ
ト
シ

交差するように放つ一撃が、ロキのヴァナルガンドディストラクションと吹き飛ばし―

「ダメ押しだ！　こいつも喰らいな！」
『サルヴェイティングブラスト』
後ろからの砲火が種火となり、ロキはすべての攻撃を食らい爆発に包まれた。

まだだ。
だがしかし、ロキの執念はそれでもまだ倒れない。
これ以上の戦闘は困難だが、それでもかろうじてまだ動く。

負けはもうひっくり返すことはできないだろう。それはもはや確定だ。
だが、神に刃を向けた愚かな者達を、このままにすることなどできない。
ゆっくりと動く視界の中、消耗した二人の仮面ライダーが、一人の仮面ライダーのところに着地しようとする。
そうはいかん。神を倒すというのならば、相応の代金は払ってもらう。
なけなしの、全ての、最後の力を振り絞り、ロキはほんの一瞬、残心と言ってもいい空白を強引に隙へと作り変える。
それに気づいた者達が、呆気に取られた表情をこちらに向けるのが見える。
だが遅い。
これで―
「終わりです」
その言葉と共に、重い物が背中にぶつかった。
その衝撃、そして発生していく雷に、ロキは悟る。
あの呆気に取られた表情は、自分の最後の一撃に向けられたものではないのだと。
「……へっ」
その小さな言葉は、本来なら雷もあって聞こえるはずがない。
だが、それでもはっきりと聞こえるのは、小さな自慢に満ちた声。
「今の赤龍帝はなぁ、二人三脚なんだよ」
その瞬間、ロキはすべてを悟った。
あの一撃で倒される前、赤龍帝は一発逆転の分の悪い賭けをしたのではない。
あれは囮。全力のオーラを放つことで、本命を隠す為の隠れ蓑。
そう、自分も使った直後なのだから、まず気付くべきだった。
サーヴァントのマスターには、三画の切り札が与えられる――――っ！
「令呪通りだ。「残り全部使って、不意打ち一発かましてやれ」……

シャルロットぉおおおおおおっ!!」
「ええ、かまして見せますとも!」
その雷撃はまさしくミョルニルレプリカの一撃だった。
清い心を持つ者にしか振るうことができず、乳神という不確定要素があって初めて赤龍帝が振るえたミョルニル。だがしかし、裏を返せば清い心の持ち主なら振るえる可能性はあったのだ。
もし、もし乳神の残滓がまだ赤龍帝に残っていたのならば、
そして何より―
「これが、イッセーの新たな力。……完全新規亜種禁手、羯磨に託す赤龍帝(ブーステッド・カルマ・スケイルメイル)!」
―気配遮断を持つシャルロット(サ)・コルデー(シ)に、令呪だけでなく赤龍帝の力を文字通り最適化して分け与える。
その妙技が、完全な不意打ちと最大の威力をもってしてロキに叩き込まれ―
「馬―」
馬鹿なという隙すらなく、ロキは意識を吹き飛ばされた。

神威動乱編　第四十七話　激戦終わって、さあ飲もう

和地Ｓｉｄｅ

あ、危なかった。危なかった。
今の完全にドンピシャのタイミングだった。躱せる自信が欠片もなかった。
それを、シャルロットの一撃で文字通り叩き壊した。
ロキは一矢報いることなく敗北した。吹っ飛ばされたロキは白目をむいて痙攣していて、今大王派の連中が拘束術式をかけている。
俺はそんな中、イッセーとシャルロットを交互に見た。
「へへ……。ドンピシャで進化したぜ、俺」
「イッセー！　大丈夫ですか？　無理した弊害とか、出てませんか!?」
フラフラだけど起き上がろうとするイッセーを、シャルロットが駆け寄って支えている。
しゃ、シャルロットの気配遮断ってそこまで高くなかったよな……
あ、令呪か。
吹っ飛ばされる前に大技を隠れ蓑にして、令呪を掛けたシャルロットに、レプリカのミョルニルを託してたのか。
しかも、過去の可能性から亜種禁手を発現する能力だったのに、ここにきて究極（テロス・カルマ）の羯磨と同調することを前提にした亜種禁手だって？
じ、自力で禁手に到達した状態だからできる、発展形……なのか？
いやちょっとほんと、状況が読めてないんだけど―
「……素晴らしい！」
「いやっほぅ！」
「感動したぁ！」
……あ、あの変態集団を忘れてた。
見ていると、イッセーを見て感動して泣いて至り拝んでいる。
いや、確かに今のはそういう光景だ。ただあいつら、絶対意味が違

う。
「素晴らしき乳房に力を託す情光(じょうこう)……。異世界から乳房を司る神が力を貸すわけだ……！」
ほらやっぱり。
「こうしてはいられん！　本部に至急ご報告せねば！」
「性託は確かだった！　今日は赤飯だ！」
……なんか感極まりながら帰り支度を始めてるんだけ……ど……どうする？
ちらりとリアス部長達の方を見ると、遠い目をしながら首を横に振った。
『あ～。こっちも消耗が激しいから、帰るってんなら帰らせとけ。目的は達成できてるから……な？』
ノア氏が通信で、見逃しを奨励している。
……ぶっちゃけこれ以上の戦闘はちょっと無理があるしな。ここは見逃すしかないか。
……あれ？　そういえば幸香達は？

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「さて、何とか持って帰ることはできたようじゃの」
「ふふ～ん。ヴァーリチームはフェンリルを支配したみたいだし、こっちはこっちでフェンリルの子供やミドガルズオルムを強化ユニットごとゲット！　研究成果でアースガルズをボコったらぁ～♪　きっとロキは憤死する～♪」
「ローゲはテンションが高いのぉ。言っておくが奪ったのは

後継私掠船団なのじゃから、相応の対価は払ってもらわんと渡さんぞ？」
「……一応禍の団繋がりなのだから、融通は聞かせてもらいたいものだがな」
「そうだぞ団長。俺の我が儘にも付き合ってくれたからな、多少は色を付けてほしい」
「分かっておるわ。ホグニもブレイもそういうところはうるさいのぅ。……おぉ、ライダー！　そちらの成果はどうじゃ？」
「ぼろ儲けだな。手出し無用の連中があっちから手を出してきたんだ、盛大に海賊させてもらったぜ？」
「ふむぅん。……よし、ならばこうしよう！」

「今後次第じゃが、まずは奪った兵器の技術解析と応用データを寄越すがよい。さすればそちらに好ましい物を提供しよう」
「そうだね。じゃあ現物じゃなくていいから……ってのは？」
「中々面白い物を要求するのぉ。……よし！　先払いで払ってやろう！　報酬がないなら略奪するからのぉ？」

イッセーＳｉｄｅ

漸く体も普通に動かせるようになってきたぜ。
「よく頑張ったわね、可愛いイッセー。前例のない亜種禁手を発現す

るなんて鼻が高いわ」
うへへへ。リアス部長のおっぱいに顔を埋めさせてもらいながら、なでなでされるのは最高だぜ。
「イッセー。周りに人がいるので表情はもうちょっと引き締めてくださいね？」
それとなく顔を隠してくれてありがとうシャルロット！　よし、顔を引き締めながら堪能しよう。
「うぅ……。お姉さまばっかりずるいです。私ももっとおっぱいがあれば……」
「あの大きさは流石にないしな。よし、ならば私とアーシアにイリナの三人で挟めば」
「天使にそんなこと求めないでくれない!?　あとアーシアさんも人並み以上あるから、気を落とさないで」
なんかアーシア達が言っているけど、何を言ってるんだろう？
「……こればかりは、絶対にできない……っ」
あと小猫さま。殺気を感じるんですがやめてください。
あぁ……でも疲れた……。
今日はもう動きたくない。ゆっくり休みたい。
そう思っていると、転移の魔方陣がいっぱい出てきた。
まさか敵襲かとも思ったけど、よく見たらバアル家の紋章だから味方かな？
あ、なんか鋭い目つきのお兄さんが出てきた。目の色から見て、バアル家の人だと思うけど、だれだろう。
「……シュウマ・バアルの長子、ハッシュ・バアル」
小猫ちゃんがぽつりと呟くけど、あの人がシュウマさんの一番上の息子さんなのか。
「あの人、今回の戦いに参加してないけど強いんですか？」
ふと気になったので、部長を見上げながら聞いてみる。
神殺しの宝具を新しく何個も作って挑むとかいう、とんでもない最終手段のプランT。シュウマさんの子供の人達が何人もやっていたけど、一人だけいなかったんだよなぁ。

長男だからって一番強いとまでは言わないけど、あの人だって強いと思うんだけど。
「戦闘……という意味では、子息全体でも中間と言ったところね。彼が跡取りなのは戦闘能力より、領内の管理や師団規模の兵士の円滑な情報伝達といった、領主や指揮官としての才覚が重視されているわ。ハッシュ・バアルは個人で戦う武将ではなく、軍団を率いる将軍にして領主なのよ」
な、なるほど。そうなんですか部長。
確かに、先生も王同士で戦うことについて何か言ってたしな。
上でふんぞり返って人を動かすのも、王（キング）のやることってわけか。なるほどなぁ。
そういえば、他のシュウマさんの子供の人も、特に悪く言うどころかなんていうか胸を張って自慢してるって感じだし。
……っていうか、なんかどんどん魔方陣が展開されてるんだけど。
転移されてるのはコンテナがたくさんで、展開してなんかキッチンっぽいのになったり、中からなんか……なにあれ？
「あ、焚き火台っすね」
「……焚き火台？　なんなの、アニル君」
アニルが知ってたみたいだ。
ギャスパーはよく知らないみたいだけど、なんなんだろう。
「文字通り焚き火をする為の台だよ。あれだと地面の状態とか気にしなくて済むし、構造によってはもっと燃えやすいんだ。椅子に座ってとかでも便利だぜ？」
へ～。
俺が感心していると、そのままいくつも焚き火台が組まれて、そこで焚き火がつけられてる。
あとコンテナから展開された台とかで、ドリンクサーバーとかまで置かれてるんだけど。
美味しそうなにおいが漏れてる鍋とかも置かれてるんだけど。
っていうかあのキッチンみたいなのはマジでキッチンだな。サラダとか作ってる。

「はーい。酒類は痛飲やアルコール中毒防止の為、配給制になってまーす！」
「指紋認証制でーす。一人一回しか確保できないので、お早めにお願いしまーす」
「ビール、ワイン、ウイスキー、日本酒、焼酎、チューハイと揃えておりまーす！　カクテルは要相談でーす！」
「シチューとサラダはこっちにとりに来てくださーい」
……まじでナニコレ？
「……さて、リアス殿も準備をしていただきたい。小さめですが湯浴みの場を用意しております」
と、そんなことを言いながらハッシュさんが近づいてきた。
「……ハッシュ・バアル？　これはいったい……？」
きょとんとしている部長に、ハッシュさんは苦笑する。
「激戦を制したのですから、宴を催すのはおかしなことではないでしょう？　後始末や料理などは我々第二遊撃師団が行いますので、まずは簡単に身だしなみを整えて頂きたい。本家のサイラオーグ殿や、我らがフロンズ殿達も含めて、貴族の方達には専用のブースを用意してますので」
そんなことを言いながら指さす先には、トレーラーハウスっていうらしい、車輪のついた家があった。
あんなのまで運んできたのかよ。
俺達がちょっと面食らってると、ハッシュさんは両手を叩いて鳴らしながら、声を張り上げた。
「さあ！　生き残った者は応急処置を受けてから、シャワーブースで軽く汚れを落としたまえ！　宴は血と泥を落としてから楽しむものだぞ！」
その言葉を受けて、まだちょっと戸惑っていた人達が、顔を明るくした。
そっか。そうだよな。
俺達、勝ったんだった！
そしてフロンズさんは、片手を突き上げる。

「勝ち鬨を上げろ！　我らは任務を達成したのだ！」

『『『『『『『『……ううぉおおおおおおおおおおおっ!!!』』』』』』』』

神威動乱編　第四十八話　ロキ戦勝利祝勝会！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ロキを打倒した小島では、戦勝記念の宴が開かれていた。
食材はフロンズが事前に準備しており、また敗北した時に備え、宴が成立したとしても食材を再度集められるギリギリの時期に炊き出しを各地で行える準備も整えていた。
そんな抜け目のない備えは幸運なことに必要せずに済み、宴は無事に開催される。
悪魔の技術で転移させた各種コンテナは、その為に必要な資材を全て備えている。
宴用の焚き火台や食材を格納する各種コンテナ。汚れを落とし気分を転換する為のシャワー施設。応急処置として治癒魔術礼装を組み込んだ治療施設。そしてもちろん、手の込んだ料理や焚き火台に運ぶ前の下ごしらえをする移動キッチン。
焚き火で焼くことを前提とした肉・魚・野菜。また日本での戦いということから、焚き火にかける鍋には豚汁が入っている。更に運ばれたチーズやマシュマロを焚き火であぶるなど、焚き火台を囲むだけでも色々と食べられる状態になっている。
それらの下ごしらえを中心としているコンテナキッチンでも、それ以外におにぎりやサンドイッチなどを作り、デザートなども準備されていた。
飲み物も当然完備。簡易的なドリンクサーバーにはお茶やコーヒー、ジュースも入っている。急性アルコール中毒を避けるため酒類こそ量は限定されているが、ビール・ワイン・ウイスキーなど一通りの種類は揃っており、基本的なカクテルなら酒を持ち込めば別途で作ってくれる。

総じて戦闘後の宴にしては至れり尽くせり。大王派の若き新鋭であるフロンズや、シュウマからいずれ家督を継ぐことになるだろうハッシュ・バアルによる、配下達に褒章をきちんと与える考え方が反映された宴だった。
そして、そんな宴の場では―

イッセーＳｉｄｅ

「……美味い！　美味いぞこの豚汁！」
いや、本当に美味しんだけど!?
なにこれ、本職の和食料理人でも連れてきたのかよ!?
俺が豚汁をかき込んでいると、隣でシャルロットがほぉと息をついた。
「本当に美味しいですね。それも、西洋の料理に味付けを近づけているので、海外の人でも抵抗なく食べれます」
そんな工夫までされてるのか!?　誰が作った!?
そんな感じで、俺達は宴の真っ最中。
皆がそれぞれ焚き火で集まって食べてる中、俺とシャルロットは何故か二人っきりになってしまった。
……部長がフロンズさん達と同じ貴種ブースの方に連れていかれた所為でもある。
畜生！　フロンズさんは「とりあえず便宜的に三十分はいてもらいたい」とか言ってきた所為だ。部長に頑張った分だけいい子いい子してもらいたいのに！
確かに既にしてもらったけど、俺今回めちゃくちゃ頑張ったよ!?

貴重な令呪まで使ったんだぞ!?
……ただそう言いたくても、令呪が補填されちゃったから強く言えないんだよなぁ。
「……聖杯戦争で使用されなかった令呪は、別の聖杯戦争で補填に回せることもあるそうですが、まさかフロンズ(彼)が他者に譲れるほど確保しているとは思いませんでした」
そう言うシャルロットは、なんていうかちょっと警戒心が見えてる。
ん～。確かにあの人、俺達とはかなりずれてる気がするからなぁ。
悪い人ではなさそうだけど、たぶんダチとかにはなれないとか、そんな感じはする。
「でも大丈夫じゃないか？　仲良くなれるかはともかく、悪人ってわけじゃなさそうだし」
俺はそう言うけど、シャルロットは首を横に振った。
「イッセー。人の善性を尊ぶのは良い事ですが、過信は禁物です」
……凄い真剣な表情だ。
「人というのは善意で動くから悪行を起こさないというわけではありません。戦争を引き起こす理由なんて言うのは、悪意を人に撒き散らす為の方が少ないのです」
そう言うと、シャルロットは目を伏せる。
「フランス革命だってそうでした。革命を起こした者達は悪逆を成したいから処刑を繰り返したわけではなく、世をよくしたいと思う者達が現場にも上層部にもいくらでもいたでしょう。……私が殺した彼が、私にとって善人だったように……私が起こした義憤が、更なる悪意(処刑)の加速になったように」
……そう言われると、確かにそうだな。
シャルロットは、ギロチンで何人も人が殺されたフランス革命の当事者だ。
なんていうか悪いイメージがあるマリー・アントワネットも、最近はいい人でむしろ被害者って話もある。
……善意で動くから、悪行を起こさないわけじゃない、か。

「……そうだな。心に留めておくよ。いろんな意味でさ」
フロンズさんを気にするだけじゃない。俺達自身が自分がそうなることも気にしないといけないんだ。
だから、俺はシャルロットの手を取った。
「俺は馬鹿だから大丈夫とは言えないけどさ。常にシャルロットに恥じないマスターで入れるように、リアス部長達に胸を張れる最強の兵士（ポーン）で入れるように、ちょっと考えたりとかはしてみるさ」
これぐらいしか言えないのが、俺が馬鹿なところなんだよなぁ。
……あれ？　なんか顔が赤くなってないか？
「……そういうところも治した方がいいですよ」
「え、どういうところ!?」
よく分からなくて困惑してると、なんか足音が響いてきた。
「あ、ここ空いてる？」
あ、マルガレーテさんだ。
「あ、どうぞ。皆いなくってちょっと寂しくて」
「構いませんがよろしいんですか？　大王派の集まりに行った方が……」
俺とシャルロットがそう言うと、マルガレーテさんは座りながら苦笑した。
「……人が多かったりにぎやかなのがちょっと苦手で。今日は疲れたから、静かな方がいいの」
へ～。
見れば結構疲れてる感じだな。戦いも激しかったし、更に疲れたくないって感じか？
俺がそう思っていると、マルガレーテさんはホットミルクをちびちび飲みながら、ちょっとため息をついた。
「でも今日は失敗です。奥の手が思った以上にあっさり破られましたし、その後は露払いに徹してましたから」
そんな恐縮してるけど、そんなことないって！
めっちゃ大活躍じゃん。　ヴァーリとロキを同時に相手取るとか、普通無理だって。三つ巴だとしても俺なら死んでる自信があります

！

ロキはロキでいろんなもん載せてるし、ヴァーリもヴァーリで新技引っ提げてるし！

うん、こういう時は励ましてこそハーレム王！

「大丈夫です！　俺も結構ボコられてますから！　マルガレーテさんは一生懸命頑張ってたし問題ないです！」

そう言うと、マルガレーテさんは苦笑気味だった。

「……それなら、まぁ。責任は果たせたのかな？」

「それはそうですよ。十分すぎるほど尽力したうえで、敵の撃墜数も多い方かと思います」

シャルロットもそう断言するから、マルガレーテさんはほっと息を吐いた。

「ならいいかな？　……でも、本当に疲れたぁ」

だよなぁ。

俺達もなんていうか、ちょっと黄昏そう。

特にマルガレーテさんは、焚き火を見ながらホットミルクをすすっている。

でも何だろう。めっちゃくちゃ幸せそうだ。

火を見ながらミルクを飲む。ただそれだけなのに、なんだかすっごい幸せそうだ。

……俺がリアス部長のおっぱいに挟まれている時みたいな、そんな雰囲気をなんとなく感じる。

いや、なんか例えが違うな。でもなんていうかあってる気がするな。

俺が何となく首を傾げていると、シャルロットもまじまじとマルガレーテさんを見ていた。

「……焚き火とホットミルクがお好きなんですか？」

「ちょっと違います。でも、薪が燃えるところ見ながら牛乳が飲めるのは大好きです」

シャルロットにそう答えながら、マルガレーテさんは焚き火を眺めている。

「暖炉で薪が燃えているところが大好き。ちょっとした雨が地面に落ちる音が大好き。それを愉しみながら、牛乳を少しずつ飲んでる時間が一番幸せ」
そう、素敵な微笑みを浮かべながら、マルガレーテさんは言った。
「……仕事をしっかりやって、疲れた体を休めながら、一日の終わりにそういうことができればいい。昔から私はそう思っていました」
そう呟くマルガレーテさんは、つらそうな、でも懐かしそうな声色をしている。
「故郷の田舎町は周辺に異形の小さな拠点があったりとかで、役場やパブに時々悪魔祓いの人達が顔を見せてました。私は彼らの正体は知らなかったけど、時々世間話をしてました」
本当に懐かしそうで、どこか悲しそうな雰囲気だ。
「人は何時か月に、火星に、遠くの星にも住めるようになる。……その人は、そんな未来に近づく手伝いがしたいっていつも言ってたなぁ」
……なんとなく、俺はそれを察した。
「科学者とか政治家に向いてなくて、体力だけは有り余って、そしてこんな神器を持っていたから。……悪魔祓いという形で人の世界を守るんだって……それとなくぼかしながら、十回ぐらいは同じ話を聞きました」
そう言いながら、マルガレーテさんは拳を握る。
「……彼は死の間際、力を託す禁手に目覚めて、私はそれを受け取った」
……やっぱりか。
強い決意が瞳に移っている。
少しだけ、ミルクが入ったカップに力が入る。そして同時に、火を見るマルガレーテさんの目つきも険しくなった。
「それに呼応するように、二人も禁手に目覚めて、でも私以外に生きている人はいなくて、台無しにすることは無責任だと思うから……」
そして、ちょっと目を伏せてから、マルガレーテさんは顔を上げる。
「だから、私は背負うと決めた選択と、受け継いだ力の責任を果たす。この社会がいつか必ず、星の海に広がるように」

強い決意がこもっている。静かな、でも熱い思いが。
俺はなんていうか……うん。
「……月並みな言葉ですけど、頑張ってください」
こういうところが馬鹿なんだよなぁ、俺。
「それはきっといい夢です。叶った方がいい夢だと思います」
「ふふ。そ言っててくれると嬉しいかな？」
そんな感じに、俺とマルガレーテさんは笑いあった。
「そうですね。きっと、その夢はいい夢だと思います」
シャルロットも微笑んでくれている。
うん、ちょっといい話が聞けたかな！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、現場の者達は今頃どんちゃん騒ぎなのだろうね」
そう呟くフロンズを半目で見ながら、リアスはため息をつきたくなった。
有力貴族は別ブースで宴を行う。これそのものはまあいいだろう。
フロンズは大王派ではあるし、酒が入ったことで遠慮がなくなることもある。フロンズ達貴族主義側からすれば、だから前もって区分けするというのは理にかなっている。
もっともそれにこちらが順守されることを命じられるいわれもない。家格で上回っていることを良い事に、ある程度付き合ったらイッセーのところに行かせてもらうつもりではある。
だが、だからこそ面倒だと言ってもいい。
この貴族だけのブースの宴は、宴だけでは終わらないのだろうか

ら。
そう思い、サイラオーグや合流してきたソーナと視線を交わす。
戦後処理というものは、戦場の整備や死体の回収、そして宴だけで終わるわけではない。
複数の名門の家柄が集まっており、まして貴族主義者が何人もいるのだ。当然だが、そのあとの利益の分配という面倒な政治の駆け引きを要求してくることだろう。
そう辟易気味な気分のリアスに、フロンズは肩をすくめた。
「……手っ取り早く手柄は半々にする、というのでどうだろうか？」
思わぬ発言に、怪訝な表情になったのは言うまでもない。
リアスはサイラオーグと共に、ちらりとソーナの方を見る。
こと知略という点では、間違いなくソーナがこの場で優秀だろう。さらに疲労が少ない分判断ミスが誘発されにくいとなれば、文句をつけるまでもなく彼女に頼りたいところだ。
ソーナ自身、それを悟っている。だからこそ、眼鏡を少し掛け直すと、真っ直ぐにフロンズの目を見つめる。
「……いいのですか？　そちらとしても手柄や栄誉はあればあるほどいいと思いますが」
「本家の跡取りの心象をむやみに悪くする気はない。開発中の技術の実証やアラを見つけることができた以上、十分すぎるほどの元は取れている。数を投入して面を担当した大王派（こちら）と、命がけで敵精鋭という質に対応した魔王派（そちら）で半々というのは、細かいすり合わせをせずに済み、更に角も断ちづらく手っ取り早い。それにそちらも眷属とかわしたい言葉もあるだろう」
つらつらと様々な理由を述べたフロンズは、微笑すら浮かべて微笑んだ。
「最大利益を目指すのは当然だが、だから欲をかいて逆に損をしかねないなどあれだろう。問題があるかね？」
なるほど、とリアスは思い、サイラオーグとも視線を合わせる。
サイラオーグとしても、余計な政争を避ける気はあるだろうし、彼は便宜的には大王派だからなおさらしがらみが多い。

なので二人は視線で「これが妥当か」とすら思った……が。
「いえ、そうはいきません」
ソーナ・シトリーのメガネが強く光った。
「……おいおい本家さん。態々話を面倒にしたいのかい？」
「正直、私達もさっさといい気分に浸りたいんだけど」
ティラとクーアがそうぼやくが、ソーナは冷笑をもってそれを返す。
「確かに手っ取り早いですが、同時に乱暴な手法ではあります。特に大王派（そちら）のお方々が聞けば、余計な勘違いを生みかねないでしょう。……魔王派が家格と手間暇を盾に、もっと少なくなるだろう手柄を雑に多くしたとね」
「……そうかね？　先ほどの発言に嘘はないが」
フロンズは冷笑でそう返すが、ソーナの冷笑も同レベルに冷たかった。
「政治屋は邪推や深読みが仕事ですし、政治家も裏を考えるのが義務でしょう。お役所仕事とは言いますが、そういう段取りや手間暇があるからこそ裏がないと認識されやすい物です」
視線と視線がぶつかり合う中、ソーナは眼鏡を光らせ、フロンズは微笑みを深くする。
……それ以外のメンツは、体感温度が下がるのを痛感した。
「……では、細かく精査するとしよう。だがいいのかね？　私はデータがあるから儲けは十分だが、万が一そちらが減ってしまったら？」
「構いません。まだ私達は十代ですし、経験値を積ませてくれるのなら、三割五分でもお釣りが来ます」
フロンズの牽制球に、ソーナはズバリと切り返す。
その返答にフロンズが苦笑することで、それ以外のメンバーは何となく悟った。
……どうやらソーナとフロンズは、魔王派の取り分は三割五分以下だと計算しているようだ。
「幸か不幸かリアス達のおかげで、死傷者は非常に少なくなりましたからね。最も、それはシュウマ殿の子供達が対神宝具を持って駆けつ

けてくれたからですが」
「確かに。乳神もそうだったが、赤龍帝の奇策や仮面ライダーがいなければ、被害は五倍に届いたかもしれないものだ」
……今の発言、裏を返せば被害が五倍になるのなら大王派だけでも勝ち目は十分あったといえるだろう。
対神宝具の大量投入は確かにそれだけの価値はある。増えた純潔悪魔の数をむやみに減らすことはフロンズの本意ではなかろうが、大王派の重鎮からすれば下級中級の命は貴族のそれより遥かに軽くもある。
そんな大王派の重鎮からすれば、下級中級の命が減らなかった程度で半々の権益はボられていると感じるのだろう。確かにそういう考えがはびこっている派閥ではある。
それをそれとなく確認しあい、フロンズとソーナは不敵な笑みをぶつけ合った。
「……いいだろう。では、上が納得いくような割合を徹底的に導き出そうではないか」
「ええ。それらの経験もあるハッシュ・バアル氏の意見も聞くとしましょう。大王派の派閥との討論を味わういい機会ですから、リアスやサイラオーグも付き合ってくださいね」
そう決め合い、フロンズは様子見をしていたハッシュ達を呼び、ソーナはソーナでそれを観察するように見据える。
……ティラやクーア、そしてノアと、リアスやサイラオーグの視線が合わさった。
―どうやら、当分面倒くさいことになりそうだ―
ここが一致し、内心のため息が重なったことを全員が悟った。
「……とりあえず、紅茶のお替りを要望するわ」
「食べる物持ってきてくれ。軽くつまめるってレベルじゃなくて、数時間レベルで腹持ちするのな」
リアスとノアがそう指示するだけの予測は、この後見事に的中することになる。

神威動乱編　第四十九話

和地Ｓｉｄｅ

……ふぅ～。

ちょっと大健闘したってことでもみくちゃになったりしたけど、何とか落ち着いた。

俺は宴で静かな方に移動してから、ちょうど空いてた焚き火のところに座ると息をついた。

いや本当に、今日は大変というか死ぬかと思った。

コカビエルさんがあほやった件からこっち、月一から数週間程度の単位で難敵と暴れる羽目になりまくってるからなぁ。

最上級のそのまた最上級なコカビエルさんから始まり、魔王の血と神滅具のコラボなヴァーリが連れ込んだテロリストで、更にテロリストと何度かやりあったと思ったら、魔王血族が三人も。

そして今日は神様だしなぁ。よくもまあ、ここまでインフレが続いているもんだよ。

……はぁ～。疲れたぁ。

「……もうちょっと食べ物貰ってくるべきだったな。取ってくるか」

食べ物とかをゲットするのを忘れてたから、なんかおなかがすいてきた。

だから立ち上がろうと思ったら、串に刺さったバーベキューが一本差し出される。

見れば、そこにはインガ姉ちゃんが。

「お疲れ、和地君」

そう言いながら隣に座ったインガ姉ちゃんは、間に食べ物が結構乗ったトレイを置いた。

っていうか、飲み物もしっかり用意してあるな。俺が離れてること

に気づいて探してくれたのか。
「……ありがとう、インガ姉ちゃん」
「どういたしまして。でも、私もちょっとはしゃぎたかったら、お互いさまってことでいいかな？」
そう言いながらインガ姉ちゃんは、さらりとビール缶を取り出していた。
……そういえばインガ姉ちゃん、年齢的には既に二十超えてるな。お酒飲めるな。
「……ふぅ～。お酒飲む機会があまりないし、高いビールだったから貰ってきちゃった。……好きな人と一緒に晩酌できるから、今回連れ出されて役得かな？」
あ～。確かに夜も割と遅くなる業務をやっていると、お酒を飲む機会って中々ないしなぁ。そもそもある意味だと懲罰にも近いし、そう簡単には飲めないか。
俺は納得すると、肩が触れるぐらいにインガ姉ちゃんに近づいた。
お、顔を赤くしているのが可愛い。
「インガ姉ちゃんには助けてもらったからな。ま、これぐらいの役得は追加でいいだろ」
「……むぅ。和地君って天然でたらしだよね」
そう返されるけど、意識してるから天然じゃないと言いたい。
第一、それは俺よりもっと上がいるだろ。
「イッセーには負ける」
「確かに」
ふとお互いに噴き出すと、なんとなく肩を寄せ合った。
……うん、なんていうか気分がいい。
俺はそんな気持ちを噛み締めていると、インガ姉ちゃんは何かに気づいたのかこっちをまじまじと見つめてきた。
なんだ？　特に心当たりはないんだけど。
「でもいいの？　カズヒさんとかリヴァさんと一緒にいた方がいいんじゃない？」
あ～、そういうことか。

確かに俺はカズヒ姉さんが一番好きだと断言できてしまう。ついでに言うと、流れ的にリヴァ先生と一緒にいるべきところもあるかもしれない。
俺もその辺は分かっていたんだけど……ね？
「しっかり宴を愉しんできなさいと言われてしまった。医務室に居られるよりそっちの方がいろんな意味でいいってさ」
「……あ～。そういえば、あの二人はドクターストップがかかったんだっけ」
遠い目をしながらインガ姉ちゃんが納得してくれた。
カズヒ姉さんもリヴァ先生も、消耗が激しかったらしく、二人揃ってあの後ぶっ倒れた。
ドクターストップがかかって、今は衛生班のブースに叩き込まれている。
俺も最初は寄り添うつもりだったけど、二人にそう言われてこうして宴に参加している。二人がかりだったので押し切られた。
……まぁ、宴に参加しないでいるのもそれはそれで、付き添われている側も気を遣うのだろう。
正直に言えばとても気になる。だけど二人がそ言ううのなら、よほどのことがない限りは抑えるのも一種の礼儀だ。
ちなみに鶴羽は行方不明。どこに行ったどこに。
ま、そういうわけだから。
「……今ところはインガ姉ちゃん専用ってことで。お酌しようか？」
「缶ビールだよ？　……あ、でもコップに入れた方が美味しく飲めるって話もあったかも」
なるほどなるほど。なら試しにしてみるってのも話のタネになるか。
俺は缶を受け取ると、コップをインガ姉ちゃんに渡す。
「じゃ、まずは一杯」
「いただきます」
そんな感じでお酌をしてから、俺もジュースを入れてもらったり。
……まぁ、そんな感じでほっこり過ごすことになったわけだ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そんな医療ブースでは、意外と賑やかな雰囲気になっていた。
フロンズ・フィーニクスは馬鹿ではない。衛生班の部署にもそれなりの準備を整えていた。
フェニックスの涙こそ高騰している故揃えられなかったが、魔術回路持ちに大金を出して治癒・鎮痛・感染症予防の魔術薬を大量に準備しており、アーシア・アルジェントに報酬を用意したうえで協力を要請している。
アーシアは報酬は辞退しようとしたが、フロンズはごり押しした。成果に見合った報酬を出さずにやりがいで搾取しないようにする為、善意の協力者であっても返礼をきちんと用意する政治的な判断だと理詰めで説き伏せた形になる。
その為大半の者は体力の消耗などでどんちゃん騒ぎを止められた者だけだ。本当に重症の者はさっさと後方の医療施設に搬送されているので、元気は少なめだが宴ができないほどではない。
その結果―
「……じゃ、酒はこの薬草酒だけだから我慢しろよー。一応カクテル的に割物は入れてるから、まあそんなまずくはねえだろ」
「本日の夕食はこちらになります。お代わりは一回までなのでご容赦ください」
―リーネスと当人から了承を得て、クックスやキュウタも駆り出された負傷者用の晩餐がしっかり振舞われていた。
「……あら、病人食なのに美味しい」

「味は薄めですが、事前にフロンズ殿が入念な下ごしらえをさせていたものを調理しました。病人向けの美食は講演会などで研鑽していましたが、いい経験でしたね」
感心するカズヒに、クックスも戦慄交じりでそう応える。
ぼろ儲けをかき集めようとせず、少しぐらい儲けが減ってでも全体利益を考慮する。そういったホワイト対応の方が、モチベーションを高め質のいい人員を集められると分かっているフロンズに隙はない。
身命を賭して戦った名誉の負傷者だからこそ、そんな彼らをしっかりとねぎらってこそ、信頼と忠誠を得られるという判断から、それなりの私費を投じて「美味しい病人食」のレパートリーをお抱えの料理人達に習得させている。
それを現地でクックス達が料理した為、十二分に美味かった。
「……うっし！　この調子なら明日は筋肉痛程度だろ。ゆっくり休んどけよ」
「ありがとう。じゃ、今日はゆっくりベッドで休むとするわね」
キュウタの検診を終えたリヴァも、病院食をスプーンで口に運ぶ。
そして一口飲んで、目を見開いた。
「……本当に美味しい。いや、これ本当に美味しい」
「まったくだわ。感心するしかないわね」
うんうんと頷いたカズヒは、クックスとキュウタがほかの部屋に向かったのを確認してから真っ直ぐにリヴァを見据える。
その真剣な表情に対して、リヴァは微笑を崩さない。
十数秒ほど視線を交わしてから、カズヒは肩の力を抜きながら切り出した。
「……和地のこと、今はどう思っているのかしら？」
「……本気の更に本気を引き出されちゃったかな」
その返答に、カズヒは素直に微笑んだ。
意外そうな表情を浮かべるリヴァに、カズヒは薬草酒を一口飲んでから自慢げな表情すら浮かべて見せる。
「私が男に求める条件を、見事に更に達成しているのだもの。いい男なのは認めるし、真剣に告白を受けるか考え始めているわ」

「凄いこと言うわね」
そんな評価を受けるが、カズヒはむしろ平気な表情だった。
「……本妻の余裕？　そんなことしてると、掠め取っちゃうかもね」
「別にそこはいいのよ。……いえ、違うわね」
リヴァの牽制球に対して、カズヒはそう返す。
お互いに病人食と薬草酒をたしなみながら、二人は腹の探り合いじみたことをしていた。
リヴァとしては、和地が最も思いを寄せているカズヒがどんな女でそこに何があるのかを知りたい。
カズヒとしては、和地を愛する女が問題ないかのちょっとした見定め程度だった。
そして、共に死闘を乗り越えた仲として、八割がた大丈夫だと思っている。
だから、カズヒ・シチャースチエはあえて己の腹を明かす。
「……年長者に甘えるわ。私は、臆病なのよ」
少しずつ、明かしていこう。
そう決めていたことを、年長者であり同じ男に思いを寄せるからこそ明かす。
「私の愛は重く、そして一瞬でも緩めば醜く歪む。実態はどうであれ、私は私の愛し方をそうだと定義している」
静かに、カズヒは静かにそう告白した。
「だから、私は愛してくれる人に器の大きさを求めたい。同時に私は、最初から妾や愛人でいたいと、そんな風に逃げ腰なの」
それが、カズヒが和地に課した最低条件の真相。
来る者拒まず去る者作らず。それがカズヒが男に求める絶対条件。
その真の意図を、カズヒはまず第一にリヴァに白状する。
「私は私以外もまとめて愛してくれる人でないと、きっとその愛を受け入れられない。そして私が愛を腐らせないだろう、そんな男でなければまた歪みそうで怖いのよ」
嘘偽りない、カズヒ・シチャースチエの本音。
「……私は、自分だけを愛してくれる人と一緒になりたくない。生ま

れる前からそれだけは決意しているの」
「なるほど……ね」
それを聞いて、リヴァは探るようにカズヒを少しの間見つめる。
「多分だけど、貴女って相当重い物を抱えてるわよね。それも、男絡みで盛大に失敗……なんてものじゃないレベルで」
そこまでは、多くの者が悟るだろう。
恋愛で臆病になっている。そんな雰囲気が透けて見える。
だが、リヴァは更にその奥を僅かだか見通していた。
「……そして、和地はそれに何かしら関わってるのかしら」
「……流石は神様、いい線ついてる」
それをカズヒは否定しない。
「厳密にいえば、面影を感じてしまっているの。それが私を更に臆病にさせてしまっていると、言っておくわ」
苦笑を通り越した自嘲の表情を浮かべ、カズヒはぼかしながらも肯定する。
それを見て、リヴァは静かに目を伏せた。
すべてを悟った訳ではない。むしろ分からないことの方が多いぐらいだ。
だがしかし、アースガルズの神を父に持つ者として、直感的に何かを悟り、だからこそ深入りをしない。
それはきっと、彼女と和地がお互いに向き合うべきだとすら思うから。
「うん、きっと大丈夫」
だからこそ、リヴァが告げるべきはただ一つ。
「……和地はきっと、貴女の深層に真剣に向き合ってくれる。私が愛する男なんだから、そこはまあ大丈夫だと思うかな」
九成和地は、きっとそれに向き合おうとするだろう。
受け入れられるかは分からない。そんな安請け合いをするほど、リヴァはカズヒの深層を見通していない。
だけど、きっと—
「貴女の過去(涙)に向き合うことを、あの子は絶対拒否しないから」

―和地が和地である限り、そこだけは絶対だと信じられる。
それを聞いて、カズヒは苦笑を返す。
「ええ、私にとってもそこは自慢だもの。甲斐があるってものだわ」
あとはもう、言葉はいらない。
静かに病院食と薬草酒を愉しみながら、勝利の余韻を味わうだけだ。

アザゼルＳｉｄｅ

全部終わって事後処理をちょっと手伝ってから、俺は真っ直ぐにその女を見る。
想定外極まりないことがごろごろ出てきたが、一番想定外なのは、まさにこの流れだな。
「……というわけだ。俺達が調べている情報で、ピエール・コーションが告げた内容と合致しそうなのはな」
「そうですか。それは、実に重いですね」
クロードはそう言うと、目を伏せる。
だろうな。それほどまでに、今までの話は重い。
謎の変態集団や異世界から接触した乳神、稀少異能の魔術回路のそのまた稀少な固有結界保有者が二人と、とにかく今回の戦いは驚愕だらけだ。
フロンズ・フィーニクスのところに神殺しを作れる奴がいることといい、低レベルとはいえ神殺しをまじで作ったブレイ・マサムネ・サーベラといい、本当に色々と驚かされる。

その中でも、クロードが道間家の情報を持ってきたことが一番驚いたさ。
それも、道間誠明に関わる四人の女。
実妹、道間日美子。
幼馴染、道間乙女。
そして実家の両親を早くに失ったことから後見人となった一家の長女である道間七緒に、海外に移った一族の娘で、七緒の家にホームステイをしたという、アイネス・ドーマ。
道間誠明が起こした凶行の一年後、この四人は同じ場所で死ぬことになった。ここまでは俺達も把握している。
大王派の連中と深く繋がっている道間家の情報は、割と出し渋りされているが、道間誠明絡みの情報は大王派も隠さなかった。
おそらくフロンズやあの爺さん辺りが手を回したんだろう。流れ的に、隠すと大王派にとっても不利益が大きくなると考えただろうからだ。
そして、七緒という名前を一度だけ使ったことがある、南空鶴羽。
あいつに宿る形で姿を現したピエール・コーションが、道間誠明に深く関わる四人の女について調べるように言い、更に南空が道間七緒だとまで言った。
……理屈はつける。そこは分かっている。
そして、それを向こうも分かっているみたいだな。
「……入っていいぞぉ」
「そうですね。それと、失礼な行動を謝罪させてください」
気配にはとっくに気付いていたので、俺もクロードもさっさと話しを進めることにする。
そしてドアが開いて、南空を連れてリーネスが入ってきた。
南空の方はちょっと視線を逸らしてたが、まあ気持ちは分かる。
「あ～……いえ、むしろ踏ん切りがつきました。ルーラー（あの人）、基本的にスパルタ気質ですから、うん」
「カズヒと気が合いそうなぐらい、自分が悪者になることに頓着しないんですよね。心中お察しします」

南空とクロードが通じ合っているのを横目に、リーネスは俺に向き合った。
「……まずは謝罪を。神の子を見張る者の末席に名を連ねながら、総督にこれだけの情報を隠していた事、平にお詫びいたします」
深く一礼するリーネスに、俺は肩をすくめながらソファーに座ることで応える。
「気にすんなとは言わねえが、まあ仕方ねぇことではあるだろ。……お前こそ、大王派に義理立てして隠したりとかはしねえのか？」
「大王派と道間一族は確かに繋がっていますが、基本的にはビジネスライクな関係にとどまっておりますので。……それに、私もオカ研の一人ですからぁ」
そう苦笑で応えるリーネスに、俺も腹を割って話すことにする。
「全部を話せとは言わん。だが、こっちの知っている情報とのすり合わせはしてもらう。……カズヒは呼ばなくていいのか？」
「ええ。カズヒには情報面での判断を一任されてますからぁ。鶴羽も、それでいいわねぇ？」
「そりゃもうＯＫよ。こっちも腹をくくったわ」
ならいいと言うべきか。
だから俺は、あえてはっきりというしかねえ。
「……道間誠明、道間日美子、そして道間乙女。そして七緒の父親を含めた道間家の男数名が関与するある下劣な出来事が起きたことは分かっている。そこのすり合わせから話を進めるとしようか」
ったく。今夜は長くなりそうだ。
それも―
「ええ。それじゃあまずはぁ、大王派にも伝えていない、道間家が保有する分家とは異なる手札―」
「―さわり程度の魔術を恩として、道間家が手札にしている一族の九条家から行きますね」
―相当ヘビーな話になりそうだ。

神威動乱編　第五十話　置いていかれたり残ったり

Other Side

「……ふむ～ん。アーネの乳房はやはり良い揉みごごちだのぉ」
「あぁん。もう、団長ったらお上手なんだから」
「お世辞ではないぞ？　いい女やいい男を味わうのも人生の楽しみに一つだからのぉ。……何より、おぬしのシャムハトを超えんとする在り方と、油断すると凋落されかねんその媚態が気に入ってるのだからなぁ？」
「ふふっ。団長はそうでなくっちゃ」
「さて、おぬしの星辰光（アステリズム）もあって、後継私掠船団（我ら）は下っ端の戦力すら底上げされた。後は本隊がやる気になってくれればよいのだが……なぁ」
「あまり望めないの？」
「まったくもってその通り。どうも奴ら、勝利を掴む気概が見えん」
「神や魔王をターゲットにしているのに？」
「打倒することと勝利を掴むことはまた別ということだ？　奴らには勝利の理想（ビジョン）が見えなくてな」
「まあ確かに。ただあやかったり子孫として名乗っているって人が多い印象はあるわね」
「そういうことだ。どうも奴ら、自分が英雄の末裔だから英雄なのだといった程度な気がしているのぉ」
「私もそうだと思うけれど？」
「ただ身に纏うのと超えるのとは別の概念であろう？　奴らは虎の威を借りてイキる狐に見える。……地金が凡俗にすら見えてきた」
「なら、見切りをつける？」
「独立するというのは妥当な案だ。妾達は既に独立部隊と化している

しのぉ」
「でも、本意ではないの？」
「当然。勝利を掴んで勝ち逃げするぐらいがちょうどよいが、それを成す為にはただ喧嘩が強いだけではなかろう？」
「それもそうね。ただ強いだけなら、オーフィスはとっくの昔に世界を支配しているわ」
「その通り。弱肉強食と適者適存は同義。すなわち、勝ち残る為に必要なものを見出し掴み取り揃えられる者こそが強者じゃ。……ただ英雄派から抜けて独立するのでは、沈没船の中の鼠と変わらぬて」
「候補はいるのかしら？」
「うむ。根幹の在り方は相容れぬが、しかし馬が合う雇い主に心当たりはある。……後で会議でもするかのぉ」
「……団長、少しいいか？」
「あらブレイ。どうしたの？　おっぱい揉む？」
「あんたに溺れると後が怖いからパスだ。……曹操の方だが、京都で一度動きを見せるらしい」
「ほぉ？　ラカムはなんと言っておるのだ？」
「禍の団（カオス・ブリゲート）としてはやっておいて損はない。龍喰者（ドラゴン・イーター）もそっちで使う方がいいだろう……といっていた」
「なるほど、確かにその方がいいだろうて。だが―」

「もしもう片方に、もしくはそのあとの手札を過つのなら……その時は、本当に私掠船団（妾達）も見切りをつけるとするかのぉ」

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで次の日。
俺は今、途方に暮れている。
「……インガ姉ちゃん。なんか疲れたから俺学校休んでいいか？　というか寝込みたいから添い寝してほしい」
「凄い甘え方するね」
いや、だって……さぁ。
「うえええええん!!　あの爺、私のこと忘れていきやがったぁあああああ!!」
オーディン神、お付きのロスヴァイセさんを置いて帰りやがった。
何やってんの!?　あんた何やらかしてるの!?
あとリヴァ先生は気づこう!?　気づいていさめてあげよう!?
この人一生懸命頑張ってたのに、置いていかれるとか可哀想だろ。
体裁的に帰りたくても帰れないよ。
俺はなんていうか、頭痛がしてきた。
異形社会、トップのノリが軽すぎる！
「爺さんも何してんだよ……」
「どうしましょう。体裁的に帰りづらく戻しづらいでしょうし、帰れても悪目立ちして居づらくなるでしょうし……」
イッセーやシャルロットも頭を抱える感じだな、これ。
いや、本当に何してるんだよあの主神は。
「……プルガトリオ機関にでも紹介しましょうか？　その、ヴァルキリーも何人かいたはずだから」
カズヒ姉さんも暗部に誘わない。
っていうかヴァルキリーもいる……いや、血を引いている人はいたな。
しかしそれにしても暗部にこの流れで誘うのはあれだろう。

「カズヒ。流石に暗部は……」
「それもそうね。まだ疲れが残ってるのかしら」
リアス部長にそう言われて、カズヒ姉さんも額に手を当てて首を横に振った。
いや、それにしてもどうするんだこれ？
「……アニル、とりあえず燻製を持ってきて慰めないと」
「俺の燻製を何だと思ってんだよ、小猫」
アニルの燻製は四次元ポケットじゃないけど、確かに気晴らしにはなりそうだな。
「どうしましょう。アースガルズから連絡が来てないとなると、あちらも対応に困っているのではないでしょうか？」
「主神のお付きが主神に付き添ってないとか、主神が悪くても……難しいことになりそうだな」
ルーシアとゼノヴィアも困った顔だ。
いや、本当にどうしたものか。
「こういう時こそ祈りましょう。主はきっと、そんな苦しみも受け止めてくださいますから」
「その通り。良いこと言うわねアーシアさん」
「いや、その人北欧の神々に仕えてるからね？　この流れで改宗を奨めない！」
アーシアとイリナの天然はヒツギに任せよう。後で缶ジュースでも奢ろう。
「うえええええええん！　やっと落ち着いたと思ったのに！　あのセクハラ爺が相手でも、主神のお付きならお給金もいいと思ったのにいいいいい！」
「よしよしですの。こういう時ほどしっかり泣いた方がいいですのよ」
何時の間にかヒマリが胸を貸しているけど、具体的な改善が一切進んでないんだよなぁ。
今からインガ姉ちゃんに伝えても、どうしようもない気がするしなぁ。……まじでどうするんだ、この人？

「まあ、そろそろ落ち着きなさい。駒王学園高等部の教職として採用できるように取り計らったもの」
と、リアス部長が苦笑しながらそうフォローした。
っていうか教職？　この人、教員免許を取ってたのか？
「でも良かったのかしら？　貴方の年齢なら大学部で大丈夫でしょうに、教員で？」
「ぐす……。はい、まだ重大ですけど、教員課程は終わっていますから、教員で大丈夫です」
おぉ……。
つまり飛び級。やっぱりこの人、優秀だ。
俺達が感心していると、とリアス部長の雰囲気が変わった気がした。
な、なんだ？　このバーゲンセール中の主婦のようなさっきは!?
たまたまスーパーにいた時に寒気すら覚えた感覚に近いこれは!?
俺が戦慄すら覚えた瞬間―
「ふふ。ならこんなプランもどうかしら？」
―ヘッドハンティングか!?
「ふぉおおおお！　このタイミングとは、まさに悪魔のささやきですのぉおおっ！」
「主神のお付きをヘッドハンティングとは、マジで神すら恐れぬ所業じゃん!?」
テンションを上げるヒマリや軽く引いているヒツギの視線も何のその。
既に各種福利厚生やお給金で買収を図り、あろうことかオーディン神のお付きだった頃より待遇がいいとか。
これが、魔王を輩出した名門の本家頭首（予定）の力なのか。
俺はちらりと視線をインガ姉ちゃんに向ける。
「インガ姉ちゃんも売り込んだら？」
「いや、私の駒すでに埋まってるから」
それもそうか。
そんなことを言っていると、何時の間にやら商談がまとまったらし

い。
既にロスヴァイセさんには悪魔の翼が生えていた。
恐るべし、悪魔の交渉技術……っ！
いや待て、これなんて説明すればいいんだ？
リヴァ先生から連絡が来る可能性はある。隠し通すのは流石に俺も心苦しい。
だけど、「置いてけぼりにした人、部長が眷属に取り込みました」なんて、どう言えと!?
「……マジでどうしよう!?」
「え？　もう見てるから大丈夫大丈夫」
「あ、そうなのか。よかったよかっ……た」
俺はそこでふと気づいた。
振り返ると、Tシャツとチノパンという、ラフな格好のリヴァ先生がそこにいた。
いや―
「なんでいるのさ!?」
「ここに住むから♪」
笑顔でとんでもないこと言ったな、おい！
「えぇぇぇぇぇぇぇ!?　り、リヴァさんが何でここに住むんですか!?」
「ごめんね、ロスヴァイセ。お父様も私も……そっちはすっかり忘れてたわ。特に私は浮かれてて……本当にごめんなさい」
驚愕するロスヴァイセさんにマジ謝罪するリヴァ先生だけど、まじでちょっと待ってくれ。
「……部長、どういうことなんですか？」
そうだイッセー。言ってやってくれ。
連絡先がいるなら、スカウトしなくてもよくね!?
「……いえ、私も知らないけれど」
部長も知らないのかよ!?
「え？　でも大丈夫だって総督が言ってたけれど……？」
その言葉で、俺達は戦犯を瞬時に特定した。
あの総督、後で説教だ。ドッキリとかサプライズのつもりだろうし

な。バラエティ風にタライでも落としてやる。
「あらあら。先生ったら、うっかりしたのか、ドッキリなのか分かりづらいですわね」
と、朱乃さんがタッパーを持ってリビングに入ってきた。
「おはようございます、朱乃さん」
「うふふ。アーシアちゃんもおはようございます。……っと」
アーシアと朝の挨拶を交わしてから、朱乃さんはイッセーにタッパーを差し出した。
美味しそうなにおいがするけど、肉じゃがか？
「少し余ったものですけど、よければイッセーくんもお一つどうぞ」
……ほほぉ。
俺はそれとなくヒマリが割って入らないように位置取りを変えながら、ちらりと部長達の様子を確認する。
うん、とりあえずそれぐらいは感覚だなこれは。
「美味しいです！　いや、もっと食べたいぐらいですよ、朱乃さん！」
「あらあら。照れてしまいますわ……あら、ほっぺにジャガイモが」
そう微笑んでいた朱乃さんは、イッセーの口元についたジャガイモを……っ！
「「「「「ぁあああああっ!?」」」」」
自分の口でぱくりと食べた!?
っていうか位置的に、これは……ほほぉ。
「なるほど、ああいうのもありね」
「……え、えっと、とりあえず厨房……じゃなくて！」
いかん！　リヴァ先生とインガ姉ちゃんが参考にし始めている!?
既にイッセーはもみくちゃにされかけている気もするけど、そんな余裕がなくなってきた！
は、話を変えるんだ！　そうすればイッセーのタゲ集中も取れて恩も売れるぞ！
「そういえば忘れてたけど、リヴァ先生はどうするんだ!?　当面兵藤邸に住むにしても、立ち位置は!?」
そう、そこからいこう。

リヴァ先生は俺が話を逸らそうともしていると気づいているのか、余裕の笑みを浮かべながら、ビシっと紙を一枚突き付けた。
……あ、派遣バイトの契約書だ。
「とりあえずは週四で家賃と生活費を稼ぐ感じかな。で、来年になったら大学部の世界文化学部を受験するわ」
しょ、将来設計も踏まえてプランをしっかり決めていたってわけか。
そしてリヴァ先生は、俺にそっと顔を近づける。
「だから再来年から、一緒にキャンパスライフを楽しみもう♪」
……あ、逃げ場がない。
「おのれ……っ。お前はいつまで俺の先を行き続ける……っ!!」
「むぅ……」
イッセーとインガ姉ちゃんの視線が痛い。
あとイッセー、お前もある意味俺の先を行っているからな!?
「……何をやっているんですか、全く」
今度はシャルロットが入ってきた。
シャルロットは無意識レベルの動きでイッセーの隣に座ると、リヴァ先生の方をジト目で見る。
「一応言っておきますが、そちらには私も登録しています。仕事はしっかりして貰いますからね？」
「それはもちろん。仕事はちゃんとするから、お金を貰うことができるもの」
大人の余裕というかなんというか。
まあ、リヴァ先生は神目線だと若手も若手だけど、年季が違うからなぁ。
俺が遠い目をしていると、リヴァ先生は何時の間にか俺の後ろに……って!?
「ほぁ!?」
インガ姉ちゃんごと俺を抱きしめた。インガ姉ちゃんも声をあげるよそれは！
お、おぉう。柔らかい感触が横から後ろから!?

「おぉ～。やりますのね！　なら私達もですのよ！」
「ふわぁあああああっ!?」
あ、ヒマリがヒツギを巻き込んだ。
ってなんでイッセーが倒れる!?
「はばばばばばばばば!?」
「イッセー、ひきつけを起こさないでください」
そして流れるようにシャルロットが介保する！
他が介入する隙が無い。一周回ってビビるレベルだ。
「……ですが、ついにアースガルズの関係者が二人も住むとは、なんというか多国籍部隊になってますね……ここは」
と、介抱しながらシャルロットはそんな呆れ半分の感嘆を呟いた。
あ～、確かに。
上級悪魔の眷属に、神の子を見張る者の部隊、更に天使が率いる教会のメンバーによるチーム。そこにアースガルズの神に連なるリヴァ先生やヴァルキリーのロスヴァイセさん。
そもそも部長の眷属であるメンバーだって、やれ猫?とかいうレア妖怪やら、やれデイライトウォーカーのハーフヴァンパイアやらと、なんていうか多国籍状態だ。そこにヴァルキリーまで参加したという。
……この調子だと、更にとんでもないことになりそうだなぁ。
「オリュンポスとかからも誰が来たりしてなぁ」
俺は思わず呟いた。
本当にありえそうな気がするなぁ。
「流石にリアスさんの駒も埋まってますから……でも、数年もすればイッセー達も上級になりそうですし……あり得ますね」
シャルロットが冗談めかしたと思ったら、まじな表情でそんなことを言ってきた。
悪魔歴が長いメンツは面食らっている気がするけど、俺達はよく分からないな。
実際のところ、どうなんだ?
「どうでしょう?　転生悪魔の昇格は、割と少ない部類ですよ?」

「そうでもないでしょう。堕天使幹部や魔王血族、まして神すら退けているんです。いきなり上級最上級はないとしても、中級昇格ぐらいは認めなければ市民感情が悪化することは考えられますよ？」
　木場にそう答えるシャルロットだけど……確かにそれはあるかもな。
「あとはまあ、フロンズ・フィーニクスも妨害はしないでしょう。彼は平民の感情を考慮して立ち回るでしょうし、むしろ中級昇格ぐらいは応援した方が下級中級の支持も得られると聡しそうです」
「……それはそうね。あのフロンズなら、魔王派の眷属が昇格することを無理に止めるのはリスクを考えるでしょうし。下手したら今年中に中級かもしれないわ」
　更なる意見にリアス部長まで納得の表情だな。
　でもイッセーって、悪魔になってからまだ半年あるかないかだろ？
　それで昇格とか、すっごいことなんじゃないか？
「え、あれ？　まじな話!?」
　一番戸惑ってるな。
　それに困った表情を浮かべながら、シャルロットは腰に両手を当てて嘆息する。
「当然です。さっき語った者達は、上級どころか最上級ですら単独撃破はできないだろう領域ですよ？　貴女を含めたリアスさんの眷属は、総戦力なら最上級悪魔一人ぐらいは倒せます！」
　そう語気を強めで言ってから、両手でイッセーの頬を挟むシャルロットに、ちょっと皆面食らった。
　そしてどぎまぎするイッセーの目を、シャルロットは真っ直ぐに見つめる。
「イッセーは、もっと自分に自信を持ってください。シャルロット・コルデー（私）が言うことでもないですが、貴方は冥界の、グレモリー眷属の、そして―」
　そして。
「―私の英雄です。英霊（サーヴァント）の私が保障しますから、もうちょっとは誇ってください」

そのはにかみに、俺は自分がしたわけでもないのになんか照れた。
なんていうか、皆がちょっと沈黙して―
「ふふぅん。これは負けてられないわね、カズ君っ」
―俺は今自分が凄い状況だということを思い出したぁあああああ！
「は、はわわわわわっわぁあああああ～っ」
そしてインガ姉ちゃんがバグりかけている!?
うぉおおおい！　カズヒ姉さぁあああん！　鶴羽ぁあああああああ!!
リーネスでもいいから、ちょっと真剣にこの空気を何とかしてくれぇえええええ!!!

Other Side

「……で、だ。バラキエルも送ったから、一つだけ聞くぞ、カズヒ」
「何がですか、アザゼル先せ……いえ、総督」
「九条・幸香・ディアドコイは危険だ。状況次第では殺すことを視野に入れるほどの難敵と言ってもいい。それは分かってるな？」
「分かってます。むしろ私だからこそ、殺す覚悟で挑まなければいけないと思ってます」
「その判断は正しい。お前の場合はその腹積もりでないと、判断を甘く見積もりかねないからな」
「そもそも、ミザリ・ルシファーについても同じことです。……私は、あの二人が世界の敵になるのなら、覚悟をもって向き合います。……それが私なりの責任の取り方です」

「……覚悟は分かった。だが、それをするのはお前以外、それも大人がするべきことだろう？」
「だったら尚更だと思いますが？」
「……踏み込むのか、修羅の道を」
「……覚悟なんて、カズヒ・シチャースチエが物心をもってすぐに決めてます」
「……はぁ。止めても聞きそうにないな。だから条件だけ付けるぞ」
「と、言いますと？」
「半年以内に、オカ研のメンバーに全部言え。それまでのお膳立ては整えとく」
「……はい、覚悟はしっかり決めて―」
「言っとくが、九成和地や兵藤一誠を馬鹿にするなよ？」
「―ッ」
「あいつらはきっと、お前を嫌いになったりしねえよ。今のお前を見てきたからこそ、前のお前だけを見たりはしない。それは忘れるな」
「……年の功、ってやつですか？」
「あったりまえだ。お前の全部でも俺の十分の一にも届いちゃいねえんだよ。ってわけで、だ」
「カズヒ？　そろそろいい？」
「一通りの準備はできましたよ、総督ぅ？」
「やっぱり二人とも呼んでましたね？」
「もちろんだ。……さあ、覚悟はいいか？」
「ロキの残した各種データをリヴァの権限で寄越してもらった。ここから始めるぞ、プロジェクト・リスタートをな」

「そういえばお前、和地はどうするんだ？」
「一歩前進レベルには考えてます。ただ、私の過去から言ってやっぱり躊躇してしまいますね。いえ、和地なら受け止めてくれるかもとは

思うんですけど」
「……やっぱり知らないのか」
「総督？　どうしました？」
「いや、何でもないから安心しとけ！　……知ったらややこしいことになるし、ネタ晴らしはあとでいいか」
「……？」

神威動乱編　幕間　鬼の霍乱、カズヒ混乱！

和地Ｓｉｄｅ

俺は今、とても困った状況に追い込まれている。
汗が出てきそうだ。寒気がする。鳥肌が立つ。
なんで、こんなことになったんだと思う。
そう、今俺は―

「……さて。か、覚悟を決めなさい、和地」
「いや～、カズ君と初めて一緒に行く場所が、こんなところなんてね……」
「かかかか和地はもっとしゃっきききりしなさいよね？」
「あの、カズヒもリヴァさん南空さんも、緊張しすぎだからね？」
そんな、俺の大事な女性数人と一緒に俺は―

隣を歩いている人達が、そんな俺達を見ている。
「へぇ～。あの兄ちゃん、綺麗な姉ちゃんを四人も連れてるじゃねえか」
「ふふふ。私達も負けずに行きましょう、ご主人様♪」
そんな風に、女の人を侍らせて歩く男にそんなことを言われた。

乱交(オージー)クラブに来ている！

イッセーの奴に知られたら、奴は確実に殺しに来る！

あの野郎、婚約者の儀式を受けている自覚ないだろうからなぁ!!

「なんでこうなったなんでこうなったなんでこうなった」

三分ぐらい俺と鶴羽はそんな風にぶつぶつ言うしかなかった。

魔術回路を使って気配遮断までぶちかましているから大丈夫だが、使ってなかったら絶対悪目立ちしている。

なんで俺はこんなところにいるんだと、そう言いたくなるったらありゃしない。

というわけで、言い出しっぺにマジの詰問をしよう。

「カズヒ姉さん。なんで俺達はこんなところに行く羽目になってるんだ？」

「そうね。そういえば、言ってなかったわね……うん」

比較的冷静なカズヒ姉さんだけど、なんか顔が赤いというより青いぞ？

別の意味で心配になってきたんだけど。

「カズヒ。……この致命的特攻の理由を言ってくれない？　いや、まじで！」

それ以上に鶴羽がやばいけど。

「はぁ。とりあえず飲み物持ってきたから、飲んで気分を沈めようか」

あ、インガ姉ちゃんがさらりと動いていた。

「凄いわね、インガちゃん。私も流石にこういうのは……」
「ディオドラのおかげでこういったのは慣れ気味だから。悪意がないだけましだしさ」
リヴァ先生にそう返すけど、ディオドラに感謝する日がやってくるとは思ってなかった。いや、マジで。
俺はとりあえず水を飲みながら、カズヒ姉さんを見る。
カズヒ姉さんはゴクゴク水を飲んでから、盛大に息を吐いた。
「……まぁいいわ。今回の件は、プルガトリオ機関からちょっとした頼みごとがあったのよ」
プルガトリオ機関から？
首を傾げる俺達に、カズヒ姉さんは遠い目をした。
「ロキ神や禍の団との三つ巴を四つ巴にしたあいつらのことよ」
「「……ああ」」
俺も鶴羽もリヴァ先生も、なんというか一気に納得した。
あれは本当に大変だった。まさかあそこで更なる勢力が乱入してくるなんて読めなかった。
おかげで後方も混乱して、プランTが大幅に遅れたからな。結果的にアヴェンジングシェパードが間に合ったけど、結果オーライで済ませていいことじゃないだろうし。
そうか、そういうことなのか。
「えっと、イッセー君並みに変態な人達がたくさん来てたっけ。あれの仲間がいるの？」
一人あまり接触してなかったインガ姉ちゃんが、ある意味一番冷静に考えられている。
まあ、インパクトがありすぎたからなぁ、あいつら。
俺達が遠い目をしていると、カズヒ姉さんがうんざりした目になっていた。
「禍の団の言うことをすべて信じる気はないけれど、あの連中の対応から見ても、禍の団とは事実上の別勢力であることは間違いない。それも神の子を見張る者に喧嘩を売れるレベルの人工神器技術もあるから、どの勢力もかなりのレベルで警戒をしているわ」

「確かに。あのレベルを開発できる組織なんて、神の子を見張る者(グリゴリ)以外には禍の団(カオス・ブリゲート)ぐらいしかいないわよねぇ」
リヴァ先生がげんなりするのも分かる。
あれ、リーネスも資料を見てたらしいけど、「アラは多いが単純なカタログスペックなら中級悪魔ぐらいならやりあえる」ってやつだったからなぁ。
先生がやらかした３００イッセー事件や、ディオドラが終わった後の犯罪組織の争いとかでも、それっぽい連中が混ざってたしな。
警戒必須すぎる。バラキエルさん相手に真っ向から渡り合える連中までいたとかいうしな。
イッセーでよく分かっていたけど、変態に神器が宿ると始末に負えないことになるよなぁ。
ぶっちゃけ、神の子を見張る者が開発で遅れてるというほかない。
なまじ神器を人に宿る異能として認識していたからか、禍の団の人工神器技術は人に宿ることが前提だ。その為悪影響などを内容にする安定性を重視して調整しており、総督の先生が徹底的に調整するという採算度外視かつ効率最悪な手法でもない限り運用には届いていないと言ってもいい。
高性能化と安全性の両立を、人が搭乗する兵器という形にして攻略するのは、一種の閃きだ。逆にこの点、人に宿る異能として神器に接し続けてきた神の子を見張る物(グリゴリ)では盲点だったんだろう。
むしろ禍の団もそこそこ接しているだろうに、よくコロンブスの卵じみた発想に至れたものだ。
「そして、各勢力の諜報組織が関与している可能性を悟ったのが、この非合法クラブ。……だけど、プルガトリオ機関は基本教会の組織だから、乱交(オージー)クラブに侵入できる人員は限られているの」
「それに巻き込む、普通!?」
俺と鶴羽のツッコミがシンクロしたよ。
鶴羽はそれどころか我慢できず、胸ぐらを掴む勢いでカズヒ姉さんに迫っている。
目が血走ってるけど大丈夫かぁ？

「あんたちょっと特攻精神治しなさい！　絶対メンタルゴリゴリ削れてるでしょ！」
「……だからこそ、私が行くべきかと思ったのよ。気がせいてたのは自覚してるから、本当にごめんなさい……っ」
どうやらカズヒ姉さんも冷静ではなかったらしい。一人で突っ込まなかったのはいいことだけど、巻き込むメンバーがおかしい。
むしろエロネタなら、先生に相談すれば調査スタッフを派遣してくれたんじゃないか？
今からでもレスキュー要請しようか。っていうかリーネスは気づいてないのか？
いきなり頼み込まれたからなぁ。この集団デートで、俺も舞い上がってたからなぁ。
そんな時、インガ姉ちゃんがゴホンと咳払いした。
「とにかく！　こうなると本当に参加する羽目になりかねないから確認したいんだけど」
なにを？
俺達全員の視線が集まるけど、インガ姉ちゃんが呆れた目をしてきた。
「〇ックス系の経験値ってどれぐらい？　私は……最悪、誤魔化す為に咥えたりお尻とか使うのは覚悟しかけてるけど」
……本っ当に、ディオドラに感謝することになるとは思わなかった。
でもそうなんだよなぁ。ここってそういうところなんだよなぁ。
だとすると……。
あ、これ、俺のメンタルゴリゴリ削れるかも。
「……落ち着け！　ザイアの生活を思い出せ俺！　大丈夫だ、あのふしだらな性経験があるんだ。男だって妻がいても風俗行きたいとかあるらしいし、その逆に対して寛容があってもいいはずだ……っていうか現時点で四人とか、俺の体力が持たないし」
「……まあ確かに。こういうのって、サクラとか無しなら男の方が多いらしいって聞いたことあるけど……どうなのかしら？」

鶴羽はツッコミ入れてくれていいんだぞ？　むしろ乗っからないでくれ。
っていうかリヴァ先生もなんか考え込み始めてるし。
「そういえばそうよね。性生活の不一致とか不満が原因で離婚ってよくある話だし、カズ君だけで四人もとか、体力というか弾が足りなくなるわね」
すいませんツッコミ待ちなんでツッコミ入れてください。
確かにその通りで、俺の性生活から考えると寛容でいるべきだと思うけども。
……よし、開き直ろう。
「っしゃぁ！　こうなったらやけくそだ。今から皆で突撃して感想を――」
「ゴメンカズ君、調子乗りました！　先生確かに人生の長さ的に経験あるけど、そういうのはちょっと抵抗あるかなぁ！」
後ろからリヴァ先生に羽交い絞めにされて五分後。
とりあえず深呼吸と水の一気飲みで落ち着けてから、インガ姉ちゃんが切り出した。
「……大学エスカレーター式の高校でうっかり○リサーに入ったうえ、ディオドラに目をつけられたから経験は豊富かな。……次」
その流れに、さっさとすべて話した方がいいと俺と鶴羽は判断して乗っかることにする。
「ザイアで和地含めて両手で数えられないぐらいの経験人数あります。次！」
「鶴羽と似たり寄ったりです。ちなみにヒマリは相方なので一から十まで知ってるし、あと夏季休暇中にうっかりアルコールを摂取した勢いでヒツギともいたしましたごめんなさい。……次」
リヴァ先生とカズヒ姉さんの場合、それぞれ別の意味でダメージ薄そうだよなぁ、こういうの。
「第一次大戦前後の生まれで経験長いから、まあひと夏の恋とか行きずりの関係とかは経験してます。……最後」
「……自慰はもはや趣味だけど、生まれてから一度も異性とエロいこ

としたことはないわ。……嘘じゃないわよ、天に誓って」
……。
最後のカズヒ姉さんの発言に、俺達は顔を見合わせてからため息をついた。
「「「特攻精神が旺盛すぎる……」」」
カズヒ姉さんはあとで説教されるべきだと思う。
っていうか既に周りでは結構あれなことになってるのに、俺達は異能をフルに使ってスルーしているとはいえなにやってるんだよ。
今頃イッセーは、おそらく花婿試験的なやつをやっているんだろうしなぁ。なんか羨ましいなぁ……。
「もういい機会だから、カズヒは和地で処女捨てたら？　なんだかんだで好感度稼いでるんだし、今なら経験者がサポートするわよ？」
「……まぁ、冷静に考えたらこれでもかなりマシな部類よね。女が戦場にいるなら強姦（当然）のリスクはあるし、いっそのこと―」
おいこらそこの鶴羽にカズヒ姉さん。なんてことを相談してるんだよ。
インガ姉ちゃんやリヴァ先生に囲まれながら、カズヒ姉さんの処女もらうとか……いやホントマテ。
「倒錯的すぎて変な扉開くから勘弁してくれ……」
なんというか、ちょっとこれはないってレベルでしかない。いやホント。
「……やっぱり帰った方がいいんじゃない？　カズ君の精神がゴリゴリ削れてそうだし」
「……今ならこっそり出れそうだし、この調子だと外れっぽいし……いいかな？」
リヴァ先生とインガ姉ちゃんはもはや帰りムードだ。
俺も同感。いや、ほんと帰りた―
『……諸君。性欲は力となる』
―あ。
『今日は諸君らにそれを示し、共に歩む同士となってもらたく思い、特別サービスで人を集めさせてもらった。大欲情教団が勧誘担当の―』

「「「「……戦闘開始！」」」」
よしよく来てくれたぁあああああ！
さっさとぼこって即座に帰るぞ、俺はぁあああああああ!!!

祐斗Ｓｉｄｅ

「……そんなことがあったらしいよ？」
「俺が謎の試練を受けてる時に何してんの？」
イッセー君のマジ返しの気持ちはよく分かるよ。
憔悴しきっている九成君達を見ていると、同情と呆れが同時に襲い掛かってくる。
見ている僕達でもこうなんだから、当事者の彼らの気持ちは凄いことだろう。
「で、先走ったカズヒはどうしたんだ？」
「プルガトリオ機関の本部と通信で説教されてるところだね。成果は結果的に上げたけど、独断専行の暴走にはけじめをつける必要がありそうだよ」
暗部組織はその辺り、かなり厳しいだろうしね。
ましてカズヒはダーティジョブ担当部署の出身だ。それこそ説教で済むだけ御の字だろうさ。
「疲れた……なんか本当に疲れた……」
「……あ～、お酒飲みたい。二日酔いになるギリギリのレベルで飲んで酔い潰れたい……」
「メイド長、今日は半日お休みください……」

九成くんもリヴァさんもインガさんも、盛大に疲れている。ちなみに南空さんは律儀に家に帰っているようだ。
いやぁ、ちょっと本気で同情するね。たまたまこっちに来たら凄い物を見たよ。
「……それはそうと、イッセーはどうだったんですか？」
と、シャルロットさんが話を変えると、イッセー君は首を傾げた。
「いや、テーブルマナーとかダンスとか、試練っていう割にはよく分からない内容ばっかりだったなぁ。……最後のサタンレッドとの一騎打ちとかは苦労したけど」
……さっぱり分からないけど、なんとなく分かるような気がする。
たぶん魔王様の誰かが戦隊ヒーローで挑んだんだろう。それも、レッドを自らやるようなタイプならサーゼクス様の可能性がとても大きい。
でも戦隊ヒーローだと五人だけど、誰が五人目をやったんだろう。……たぶん三人戦隊とかそういった変則的手法だと思うけど。
脳裏によぎる最強の女王（クイーン）からはあえて目を背けることにしよう。当たっていたら本心から同情します。
「……魔王ルシファーと一騎打ちとか、鬼仕様ですね」
既に悟っているシャルロットさんも、白目をむきかけている。
うん、とても気持ちは分かるよ。
一対一で最強の魔王と戦うとか、転生悪魔としては心労が激しいことになるだろうしね。
「こんなことなら私もついてくるべき……いや無理ですね。趣旨がこんがらがります」
「いや来てほしかった。なんで俺だけなんだよって感じがするし」
シャルロットさんにイッセー君はそう返す。
うん。やっぱりと思ってたけど、イッセー君は気づいてないね。
これは、本当に……。
「……イッセー君っていつもああなの？」
「あんな感じかな。……いやホント、ディオドラとは別の意味で女の敵過ぎるかな」

リヴァさんに答えながら、インガさんが遠い目をしている。
あとどうやら、同じ男を愛しているならとため口で会話しているようだ。
……ちょっと否定しきれないから、イッセー君が聞き逃していることが幸運すぎる。
「……とはいえお疲れ様です。大変でしたけど、成果はあったんですよね？」
と、シャルロットさんは話を変える形で九成君達に苦笑しながらそう尋ねる。
それに対して、九成君は苦笑で返した。
「……現場の末端だったけど、末端レベルの情報すらないのが今の俺達だからな。ま、第一歩ぐらいにはなったんじゃないか？」
確かに。
大欲情教団は、僕達三大勢力や神話勢力が完全ノータッチだ。情報のじょの字もないと言ってもいい。
ひとかけらでも情報が入ってくる。これは十分すぎる価値があるだろう。
だからだろう。九成君は気づかわし気な感情をちょっと浮かべながら、カズヒが連絡を受けている自室の方をちらりと見る。
「あんまり酷いことにならないと良いんだけどな、ほんと」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

『……そういう専門部隊がいることは知っているでしょうに。事情を知られたとはいえ、少しは落ち着いてくださいね、カズヒ』

「……本当に反省してます。冷静さを欠いていました」
『まあ、あんな事情を知られて冷静でいるのも大変だとは思います。ですが、一つだけ断言できることはありますよ』
「と、言いますと？」
『我らが教えは、心から悔いる物には慈悲を示します。貴女がかつての行いを心から恥じ、罪を成したと思っている以上は、私達も過剰な罰を与えようとは思っていません』
「……本当に、よろしいのですか？」
『ミザリ・ルシファーにおいてあなたに責任がないとは言いません。ですが、その打倒を自ら成し遂げようというのなら私からは強く責めることはありません』
「……」
『とはいえ、あれだけの事情ならば自罰や自責は消えないでしょう。貴女の視点から見れば、裁きを受けることなく逃げたような感覚を覚えるはずです』
「……」
『ですから、私が今命じれることはただ一つ。……プロジェクトリスタードを完遂しなさい』
「それで、いいのですか？」
『まずはそこからです。下品な言い方ですが、自分のケツは自分で拭きなさい。その機会を与えることで禊とするべきと、ミカエル様も判断なさっています』

「……分かっています。彼を止めないなんて選択肢は、私には決してありませんから」

第三章　なかがき

元々Ｄ×Ｄ原作からしても、禍の団との戦いが基本であった時期にしてみると異例だったラグナロク編。アニメでもこの辺りが特殊だったのか、扱っているシーズンはアニオリ要素が強かったです。

そんなわけで、この作品ではそれだけを取り扱った特殊パターンになりました。感覚としてはシーズンの合間に挟む劇場版やＯＶＡのノリですね。ちなみに第一部の段階で似た感じのがもう一つあります。

そんなタイミングもあって、導入前にライザー復帰話をベースにしつつ、プルガトリオ機関についての深堀もやってみました。この作品は得たった作品の要素をいくつも組み込んでおり、それもあってサーヴァントとしてジャンヌ・ダルクを出すのもあったので、この作品におけるプルガトリオ機関のボスであるクロードについてある程度深堀しますので。

そして出したくてたまらなかった「教会に属する神仏の集まり」たるエクストラ部隊。ＮＡＴＯフォネティックコードのあやかりからも外れている特殊部隊です。

ただその深堀や設定の調整をする為に、活動報告を使って情報の募集をしてみましたが、何故か「部隊名」の提案ばっかり出てきたのに困惑したり。説明って、大変だよね……。

そして原作でちょっと出てきた英雄派案件。

自分はシルヴァリオについて知った時の過程で、「英雄を目指す者はその時点で英雄失格」に対するアンチテーゼを知って目から鱗だった記憶があります。その後の作品設計においても凄まじく影響を受けており、そもそもシルヴァリオと自分の作品傾向には近しいところもあってか、こうしてシルヴァリオの要素を取り込んだ作品をガチで作ってしまいました。

いつかはシルヴァリオの二次創作とか作りたい。新西暦サーガが

型月世界の未来の姿で、神秘が枯渇した魔術を星辰体で代用して復興した魔術師や魔術使いの集団が暴れる、そんな感じのクロス作品とか妄想しております。

そしてそれゆえに誕生した、後継私掠船団。

かつて禍の団編までは終わらせられた作品において、自分は英雄派を「敵役として改善」して出してみました。あの作品はシルヴァリオを知ったときのテンションがもろに出てきておりましたが、曹操達を敵のまま全員死なせたので、今回は代役を用意した形です。

そしてそんなこんなで出くわす九条・幸香・ディアドコイ。彼女はガチの光狂いであり、それも光の亡者系列と書けば、分かる人は「うわぁ……」になることでしょう。同時に「あいつらよりマシ？」になりそうと書けば、知らない人は逆に「……うわぁ」となるでしょう。

そしてその後から、本格的にリヴァが参戦。

ぶっちゃけ、リヴァは和地ヒロインの中では「過去のどす黒さ」が薄いうえ、長命種ゆえに人格面でも安定感ありまくりの異色ヒロイン。かといって人生の長さが違う故、色々な経験値も多い。メジャーどころで例えれば、「スパロボのエクセレン」といったキャラクターです。普段意図的にぼけてるけど、実際のところは冷静かつ優秀でございます。

今後においてもムードメーカー要素が強いですが、いざという時は方向の修正もできるできるお姉さんです。

そして和地初期ヒロインとしては仮面ライダー担当。これは後述のロキの件も要因ですね。

元々和地初期ヒロインは、カズヒの五大属性に由来して属性を一つつける形で書いております。同時のこの作品も踏まえ「神器」「悪魔」「魔術」「星辰奏者」「仮面ライダー」の本作五つの異能要素を絡めるつ

もりだったわけですよ。
リヴァは神様なので異形関係で行けるかと思ったんですが、神々って意外と固有の異能というより異形としてハイエンド的な書き方なので、書くさいにその辺りを示しづらい。そこにロキの強化プランもあり、「オーディンの目を誤魔化しつつデータも取る」ことを踏まえ、いざという時のトラップも踏まえて神具アスガルドライバーというオリジナル変身ベルトをひっさげてリヴァに提供されたという流れにしました。

そしてそんなスーパー魔改造ロキ、参戦。
仮面ライダー、星辰光、更にサーヴァントも従えている超強化。この作品は味方も禍の団も盛られているので、容赦なく盛りました。普通に龍神化状態の二天龍とも渡り合えます。この段階で勝てたのは奇跡レベルといえるでしょう。
敵も味方も強化するのが私の作風ですが、ロキは禍の団の技術をそのまま流用させるわけにはいかないのが大変。ただ本作では技術が流出しまくっているので、そういう意味では戦闘用技術に興味を持っても説得力がある北欧神話のロキは、強化の余地が十分にありました。

そして本作の独自要素として、ヴァーリチームの手は払われました。
前から思っていることなのですが、どうも自分はヴァーリチームがあまり好きじゃない。はっきり明言できるぐらいには「英雄派〈ヴァーリチーム」でございます。
なんというか、本作で問題を起こす味方キャラにおいて、その問題行動のしっぺ返しを受けてない印象があるうえ、そんな自分達に対する意識が軽いことのダブルアタックなんでしょうか。ルパン三世とかは楽しめる割にヴァーリチームは好かないのに気づいた自己分析

がそんな感じです。
　あと別件になりかけてますが、そもそもＤ×Ｄにおける「龍＝誇り高い」という図式を持てないのも理由かと。個人的に誇りというのは「己を縛る」性質な印象があるので、ぶっちゃけやってることの是非を投げ捨てればリゼヴィムより明けの明星に相応しいっていう原作の結論もしっくり来てないですな。
　ＳＡＧＥるだけだったり改悪上等のヘイト創作は原作側から訴えられるべきだと個人的に思っておりますが、何故イッセーのアンチ・ヘイトは気を付けないと勝手に目に入るのに、ヴァーリチームをピンポイントにしたアンチ・ヘイトは探すぐらいでないと見つからないのか……と思ったことはありますね。この作品がヴァーリアンチ扱いされた時は「……この程度で？」と本気で思いました。
　とはいえ原作の改悪は好まないので、容赦はしないけどそれを守る。それらを踏まえた結果、こうして両サイドのオリキャラでＳＡＧＥる展開となりました。当分続くのでその辺りはご了承ください。
　そしてツーカーレベルで連携コンボを叩き込んだ、後継私掠船団とフロンズ一派。既に勘づいている人も多いでしょうが、この両勢力は割と気が合う連中として設計しております。これ以上はネタバレなので、また次の機会に。
　そしてそんなフロンズ達に仕えることを選んだ、マルガレーテ・ゼプル。
　正直に告白すれば、彼女はフロンズ達につかせること前提で作った魔王末裔。それもあって「ネガヴァーリ」とでもいうべき設計となっており、少なくとも現段階のヴァーリと相性が良いわけがない。
　シルヴァリオで言うならゼファーやシュウのように「才能は超優秀で当人もそれを武器にできるけど、メンタル的な性質があまりにかみ合ってない」キャラクターです。最近ようつべで「シャアの不幸は政治家の能力が高かったこと」なんてものを見ましたが、あれが近いです。とにかく才能に恵まれ後天的にも会得しまくっているくせに、当人はそれらが一切介在する余地がない生活こそを至高と思ってますね。ＦＧＯの茶の湯バトルに出たら、利休の理念に共感しまくる癖に

倒すことは確定という、ややこしい状況になるでしょう。
例えるなら「ジョジョの吉良吉影」と近しい精神性でしょうか？
奴は殺人衝動と傲慢さが理想の生活において足を引っ張りまくり、マルガレーテはその責任感とポテンシャルが理想の生活を許さない。結局吉良は衝動を克服することを持たなかったがゆえに破滅しましたが、果たして本作のマルガレーテはどうなるか……。

そしてそんなマルガレーテが大暴れしたりする激戦開幕。
原作とは比べ物にならない規模になっている上、何時の間にやら第四勢力まで出てきましたｗｗ
同時多発的に真面目な戦いが始まっているのに、変態が参戦した所為でシリアスになり切れないところもありますよね。
そして元凶たる、ガチ参戦した大欲情教団。奴らはもう変態極まりない天才の集まりともいえ、そんな奴らが勘違いしつつ神滅具を解析したことで、あんな訳の分からないことになっております。
そんな奴らが出てる中でも、シリアスなところはシリアスに。
アニルとルーシアがプログライズキーをフルに使って頑張っている中、超常大決戦でマルガレーテも頑張っている。他のメンバーもいろんな形でガチバトルです。
原作ではカテゴライズ的には出て来ても現物が未だ出てこない準神滅具も出したりと、とにかく盛りに持ったバトルですね。結果としてマルガレーテのストレスはマキシマム状態ですが（汗
加えて後継私掠船団もガチバトル。神殺しは出てくるは大量の同じ星を振るう連中は出てくるわと大暴れ。そろそろこいつら筆頭幹部も色々紹介した方がいいと思い、色々出しております。
幸香も幸香で超大暴れ。こやつは本作品における最強格の光狂いなので、更にここから成長までしますぜぇ？
そしてそんな奴らが出ているところで、恒例乳神降臨ｗｗｗ
乳神は降臨しないとリゼヴィムが動き出さないので、ここはもう恒例行事ですね。

そしてそんな乳神の加護を切り抜けたロキ一派の前に、カズヒと鶴羽が本領発揮。
ついに出せたよ固有結界。固有結界はサーヴァントに並ぶ、型月世界観の独自性が強い能力ですので出したかった。特にカズヒの固有結界は、何度もエタったうえで漸く出せた力なので感慨もあります。
そしてシュウマ・バアルの子供達が援軍にかけた漬けた上での一斉攻撃、とどめはイッセー&シャルロットが一気に決めました。
「イッセーじゃなくて使えるやつにミョルニルをパスして使う」というのを見たことがあるので、それを参考にしました。本作のイッセーは二人三脚で頑張っているので、令呪ブースト込みで仕込んでおります。

そして戦いが終わった後の祝勝会。
そこでシャルロットに語らせた、「個人の善悪と所業の善悪は別物」。これはとても重要な部分と言えます。
ヴァーリチームがテロリストだが、個人としてみると気のいい連中であるように。
善人は善行しかしないわけでも、悪人が悪行しかしないわけでもない。
これはこの作品に限らず、世界全体のある種の真理。太陰太極図とかいうのでも、白の中に黒い点があり、黒の中に白の点があったりするものですから。
そういう意味ではフロンズは分かり易い例えです。
奴はどこまで行っても政敵。外敵に対しては協力するし、悪辣な手段で足を引っ張ることもしない。だが利権の取り合いはグダグダにならない範囲でするし、対立相手の油断は、外敵に対してはともかくうちわにおいては容赦なくつく。
フロンズ一派はそういう手合いであり、それゆえにイッセー達に

とっては信用はできても信頼はできない、そういう手合いであり続けるのです。

そしてそんな裏で少しずつ明かされていく、カズヒ達の秘密。
この作品における最大の闇であり、個人的にこの作品の評価がごっそり下がるとしたらこの部分が明かされてからなんだろうなぁという想定までしていた部分です。
幸いその部分でダダ下がりはしなかったですが、とにかく闇が深いので、そこはご了承ください。

しかしそうなっても幕間は変態&ギャグ！
カズヒは光狂いなので、突っ走ると突っ込みすぎる悪癖があったり。これでもまだ、シルヴァリオの本家光狂い達に比べるとマシすぎる所がないでもないのが酷いです。
そして明かされる性遍歴のアレっぷり！　ぶっちゃけ、第二部ヒロインを足すと薄まるけど、あっちはあっちでそれぞれヤバいのがいるから結局遍歴が酷いというかなんというか。
前にも書いたかもですが、自分は作品作る時、「鬱になった気分の発散」でエロ作品のヒロイン要素を組み込んでハッピーエンドにもっていこうとするところがありまして……。結果的にキャラクターの芯やバックボーンが作りやすいので、今後もそんなキャラが出ることは間違いないでしょう……御免なさい。

そして次は冥革動乱編。
ネタバレするとベルナ＆春奈回です！

第四章　冥革動乱編

冥革動乱編　第一話　京都が揺らぐ前触れ

Other Side

「……さて、これはいい意味でも悪い意味でも想定外だね、フロンズ」
「ええ。異世界の実証がなされたというのはある意味で刺激になりますが、逆に外敵の存在が実証されたわけでもありますからね。……計画はどちらに進めるおつもりで？」
「本命は変わらないさ。技術もそちらに合わせて用意しているわけだし、異世界となるとグレートレッドが……ねぇ？」
「予定通りならさほど変わらないのでは？」
「可能だからやるというわけでもないだろう？　分かっているのに愚者を演じてこちらを立てようというのはやめてくれたまえ」
「失礼しました。自分は私より上なのだ……と上層部思わせる癖が抜けてないようです」
「まあいいさ。外界が存在するというのはフロンティアスピリットを刺激する。そして計画の要は愚者にとってはまさにシャングリラだ。幸いそういうろくでなしが腐るほどいるのがこの世界だしね」
「それをどう有効活用するかが、世界の行く末を左右する秘訣でもありますからな」
「十字軍しかり独立運動しかり。世界を動かすコツは、有能な者をいかに集め、愚かな者を如何に動かすかだからね。……だから、有能な者を少しでも迎え入れたまえ」
「委細承知です……シュウマ・バアル殿。我らが勝利を掴む為、粉骨砕身する所存です」

アザゼルＳｉｄｅ

「……さて、やりたいこともやるべきことも多いが、それでも少しは順調に進んでるっていうべきかねぇ？」
『プロジェクト・リスタートも、最低限の形はすぐにできそうだしね』
『とはいえ、使うことができるのと安全に使えるかは別問題です。カズヒの体のことを考えれば、リスタードは最終手段にしか使うことはできないでしょう。技術的改善は更に推し進めなければいけません』
「そこはお前に言われなくても分かってるさ、ミカエル。……まぁ、メリードがあんなものまで作ってたのには驚きだがな」
『ある意味で妥当ではあるだろう。龍は神に並び立つ異形の最高峰だ。ならミザリ・ルシファーが龍の力を求める可能性は十分にある』
「だな。あいつらにとってミザリ・ルシファー……いや、道間誠明を止めることは命を懸けるに値するだろう」
『……命といえば。アザゼル、捕縛した英雄派の人員ですが―』
「そっちは大丈夫だ。九条・幸香・ディアドコイの言ったとおりの場所に蛇を確認した。全部切除し終えてるさ」
『なら安心だ。とはいえ、禁手に至らないのならば死ぬような状況にするとは、テロリストらしい手法といえるだろう』
「まったくだ。神器の中でもブラックボックスに相当する部分を刺激し、所有者が死ぬか禁手に至ると解除される。……英雄派の連中、正攻法で蛇を利用しない辺り底が知れねえな」
『同意見だよ。だからこそ、我々も更なる軍備増強を図るほかないのが頭痛の種だね』
『同感です、サーゼクス。和平を結べたのなら軍縮こそが本来の在り

方でしょうが、あらゆる要素がそれを許さないのですから』
『……異世界の神である乳神。そして、そんな彼ら精霊族と争い異世界を滅ぼしすらする機械生命体を率いる邪神達か』
「乳神の方が接触しちまってる以上、邪神達もこっちの世界に関わってくる可能性はあるからな。悪意を持って世界を滅ぼす存在がいるとなっちゃぁ、備えは必要不可欠ってわけだ」
『そうですね。情報を聞く限り、乳神とやらの力は下手な主神を超える恐れすらあります。そんな存在が複数いてなお倒せぬ邪神ともなれば―』
『最低でも龍神クラス、いや、未知の存在だと考えるならそれ以上を考えるべきか。過大評価のし過ぎは無駄撃ちになるが、笑い話で済むならそれに越したこともない』
「まったく。禍の団（オーフィス）がグレートレッド打倒を考えてるだけでも厄介だってのに、それ以上の脅威が来るかもしれねえとか最悪だぜ」
『……となる以上、そろそろこちらも新たな手札を用意するほかありません。アザゼルにサーゼクス、こちらはあまり関与してませんが、現在どれだけ進んでいるのですか？』
『……かなり進んでいると言っておこう。アガレス家が全面的にバックアップをしていてね』
『そうですか。冥革連合のヴィールのこともありますし、名誉を挽回したいのでしょうね……』
「『いや、全然違う』」
『……？』
「ミカエルよく聞け。……アガレス本家の連中（うちの連中）は、むしろ趣味に全霊を注ぎ込んでる。神の子を見張る者が引き気味になるほどだ」
『……サーゼクス？』
『……なんだろうか？』
『視線を逸らしているところ申し訳ありませんが、アガレス家は疲れているようですし、可能な限り休暇を与えるべきではないでしょうか？』
『……むしろ自主的に休日返上をしていてね。休みを勧めると無言の

プレッシャーがね。あと疲れているのではなく憑かれているというべきだよ、あれは』
「あの熱意は怖かった。禍の団や第三勢力に先を越されていることでショックらしいな。大欲情教団について知ったとたんに倒れたって話も―」
『次期頭首のシーグヴァイラ君は本当に倒れたらしい』
『……一瞬、和平を結んだことを後悔しそうになったのですが？』
「……ははっ。まぁ、ヴィールの奴はちょっとは溜飲が下がるんじゃねえか？　冥界の軍事力をアガレスが底上げするんだからよ？」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

サウザー諸島連合国は文字通りいくつもの島で構成されている。そしてその中には多数の無人島が存在する。
そして無人島を個人が買い取るということは割とある話でもある。金持ちが別荘地として採用するなど、そういったケースがいくつもある。
そしてそんな島にまつわる話として、奇妙な話が存在する。
……脱線するが、犯罪者の再犯率というものは意外と高い。
そもそも反省していない馬鹿というものも少なからずいるが、同時に罪を犯した者という者は白い目で見られることがままあるものだ。
就職そのものが難しいこともあり、更に就職しても職場で冷遇されることも多い。そんな心理的負担から追い詰められ、一度したことがあるという心理的ハードルの低下もあって再犯する者は数多い。

そして、そんな罪を犯して刑を終えた者だけが雇われるバイトがあるという。
期間は一月。職場は外界と隔絶した小島。衣食住は保証される。雇い主はサウザー諸島連合国に本社を置くＰＭＣ。業務内容は武装ほう起した暴徒役での訓練の対象となっている。そして報酬は……日本円換算で平均三百万円及び、一年間のアパートの一室の賃貸契約。
サウザー諸島連合が転生者の壊滅によってガタガタになっていることもあり、これらは罪を償った者が再起する為の足掛かりとして、都市伝説のように扱われている。
そして、今日もまたその契約が終了されようとしていた。
「やぁやぁご苦労。じゃ、君達の歩合にあった報酬を差し上げよう」
そう言いながら札束を渡すのは、二十代前半の女性。
それを受け取る者達は、どこかぼんやりとしていた。
だが周りの者達はそれを気にせず、女性もそれを意に介さない。
そしていわゆるメガヨットに乗った彼らが遠くに行ってから、彼女は島に建築された自分の家に戻る。
基本的に彼女は此処に住み、そこからネット回線で仕事を行っている。
契約にのっとり法律を守って裏切らずに仕事をする者達がいる為、自ら者に赴く頻度は少なくて済む。そのうえで本社に顔を出す時は、必ず各部署を回ってお土産を渡すことで、上手く信用されるようにしている。
そして家に入ると、何かに気づいて女性は苦笑した。
そして彼が転移される一室に入れば、そこには予想通りの姿があった。
「あら曹操。京都に行くんじゃなかったの？」
「やあドゥリヨーダナ。そのつもりだったんだけど、ちょっと協力してほしくてね」
そう返す男は、異形達を揺るがすテロ組織である禍（カオス・ブリゲート）の団の事実上のリーダー格。主要派閥である英雄派の首魁である曹操だった。

そんな彼と対等に話すということ自体、彼女が禍の団の一員であることに他ならない。
そんな彼女に曹操は苦笑すら浮かべていた。
「だけどまあ、表の仕事が順調なようで何よりだよ。君から受ける資金提供は、毎月毎月割とシャレにならないからね」
「問題ないわよ。毎月毎月この島に流れ着く砂金の額は、個人が一生遊んで暮らせる額だもの。集めさせる労働者に三割、英雄派(あなた達)に三割渡しても、社員達の生活保障や我が一族の財産にする分には困らないわ」
「ふふふ。サウザー(こ)諸島(の)連合(国)は政府関連がガタガタだから、俺達みたいな連中のフロント企業にはぴったりだ」
そう笑う曹操は、槍で肩をとんとんと叩く。
これは曹操の癖であり、ゆえにドゥリヨーダナと呼ばれた女性も何も言わない。
曹操は彼女にとって恩人と言っても過言ではない。
彼がいなければ自分は無理心中で死ぬか英雄達に殺されるか、運よく生き残ってもその日暮らしの生活どまりだったのだから。
それを脱し恒常的な財源を確保してもらい、更に自分の名を歴史の教科書に乗せれる可能性までもらったのだ。彼によって手にしたと言ってもいい財源の三割ぐらい、資金源としていくらでも提供するとも。
そして曹操は、ふと窓の外を見る。
そこには先ほど出航したメガヨットが、まだちらりと見えていた。
「……それにしても羽振りがいいね。記憶を操作しているお詫びを兼ねているのかもしれないけど、人生が落ち目になっている連中に、たった一月で一年分の生活保障をするだなんてさ」
アパートの賃貸契約を代行し、更に一人暮らしの労働者が一年間で稼ぐような金を一月で与える。実態は数十人がかりでとはいえ個人が一生かけて稼ぐような値段になる砂金を集めているとはいえ、もっと足元を見れるだろうにと、曹操は思う。
それに対し、ドゥリヨーダナと呼ばれた女性は苦笑する。

「余裕が十分残るぐらいでサービスするのは問題ないでしょう？　それにブラック営業なんてリスクだらけでする必要がないし、ブラックにしないとやっていけない表の企業なんてさっさと畳んで再起の資材に変えるべきよ。それをし損ねたら今度こそ首を吊る羽目になりそうだもの」
「……確かにね。俺も君のことはあまり笑えない」
その複雑な表情の意味を、ドゥリヨーダナと呼ばれた女性は理解しきれない。
何故曹操はあの時自分を助けたのか、それもよく分かってない。
不用意に踏み込んで今の状況を壊されたくない為、そこは決して踏み込まない。
ただし―
「……お館様、そろそろ本題を訪ねるべきかと」
―だからと言って、そこを踏まえないといけない。
それを理解した従者が姿を現し、ドゥルヨーダナも曹操も苦笑する。
だからこそ、二人は真剣な表情で向き合った。
「……で？　やっぱり私も顔を出すべきなのかしら？」
「そういうことだね。そろそろ後継私掠船団（アレキサンダー）達に任せるのもあれだしね。顔見せぐらいはしておかないと」
その言葉に、ドゥルヨーダナはため息をつきながらも応じることを考える。
故に視線を自分の配下に向け、確認をとる。
「……意見を聞くわ。どうするべきだと思う、アーチャー？」
「拙者としては、ドゥルヨーダナとしてのみ動くのなら問題ありませぬ。必要なものを得る為の略奪は当たり前のことであり、今の現状では御家復興を真の意味で成し遂げるのは困難です故」
「本当に、そこは徹底してるわよね」
感心するべきか呆れるべきか。ドゥルヨーダナは判断に迷う。
ディスコミュニケーションがあったとはいえ、召喚直後に穂先が突き出されたのは記憶に残っている。曹操がいなければあの場で死ん

でいた可能性すら本当にある為、そういう意味でも英雄派の意向には協力すべきだとも思っている。
そして彼は考え方こそ一貫しているが、その一線さえ踏み越えてなければかなり鷹揚だ。
生まれた時代が時代故、略奪や虐殺一歩手前の行為もある程度は了承してくれている。こと異形社会における冷戦から和平に繋がる時期では、名を上げるにはテロリストになることも仕方なしとすら考えていた。曰く「似たような行為は拙者もしている故。むしろこの程度のこともせずに願いを譲れぬとは笑止千万です」と真っ直ぐに言い切られた時は、曹操の方が苦笑したものだ。
それなりの礼節を弁えれば、この程度なら何の問題もないだろう。それぐらいには彼は冷酷非情な世界を生きている。
故に、彼女は決意した。
「了解リーダー。なら、私もドゥリヨーダナとして動くとするわ」
その返答を聞き、曹操も満足げに頷いた。
「ああ。アーチャーも手を貸してくれるんだろ？　悪いけど名乗りは上げないでくれよ？」
「承知した、曹操殿。まあ、御家復興の為に夜盗に金を払って他国を襲わせる程度のことで、一々名乗りを上げる気もないゆえ、安心召されよ」
中々鋭い切れ味の暴言だったが、曹操は苦笑して肩をすくめるだけだった。
「じゃあ、手を貸してもらうよ。サイリン・アマゴ・ドゥリヨーダナ」
「はいはい。言っとくけど、尼子家の名を出したら道連れに地獄に落とすからね？」

サウザー諸島連合国に本社を置く、少数精鋭を体現するＰＭＳＣ（民間軍事警備企業）。
流出した星辰奏者技術の積極的採用――と見せかけての、禍の団の星辰奏者技術の積極的採用――による、数十人規模の星辰奏者（エスペラント）による護衛

任務や対星辰奏者の仮想敵を主任務にする精鋭企業。高い練度と規律は先進国の精鋭部隊にも匹敵し、更に引き抜きにも応じない義理堅さ。

それらを自らも順守する契約によって補強された魔術によってなしえた、急成長を遂げるＰＭＳＣ、アマゴフォース。

その代表取締役サイリン・アマゴを表の顔とする、同時にマハーラーバタの王ドゥリーヨダナの血を継ぐ者。

英雄派幹部にして後援者、サイリン・アマゴ・ドゥリーヨダナは、ここに京都に向かうことを決定した。

冥革動乱編　第二話　サイラオーグ・バアルという男

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「インガさん？　これ差し入れだけど……何やってるの？」
「あ、鶴羽。……何って、家の壁の掃除」
「メイドがやる業務じゃないと思うんだけど、メリード厳しすぎない？」
「あの人が一番やってるし、この家の人達は家事を自主的にやるから、仕事をもぎ取るのも中々大変で」
「メイドがいるところで家事を自主的にやる、普通？　……ま、休憩時間に他のメイドさん達とこれ食べて」
「あ、ありがとう……あの、生卵まで入ってるんだけど？」
「あ、ごめん。そっちはカズヒとヒマリとヒツギとリーネス用。あの四人、卵かけご飯が大好きだから」
「……あの四人、日本歴そんなに長いの？」
「長いっていうか……うん。色々あるのよ」
「へ～。……っと、そろそろ手を動かし直さないとメリードさんに説教されちゃう」
「あっとごめんね。……で、和地達って今日は遠出だっけ？」
「うん。グレモリーの本城に行くんだってさ」

和地Ｓｉｄｅ

俺は今、凄い物を見ている。
「凄い、目の前で見るとこれほどとは……っ」
隣の木場が息をのむのもよく分かる。それほどまでの凄まじさに、俺も内心でちょっと気圧されてる。
「なるほどな。流石は北欧の悪神ロキを打倒しただけのことはある。今まで交わした拳の中でも指折りの一撃だったぞ」
そう称賛の声を挙げるは、元七十二柱の大王バアル家が次期頭首、サイラオーグ・バアル。
そしてそんな男に称賛される拳を出したのは、俺達オカ研の主力。今代の赤龍帝、兵藤一誠。
ロスヴァイセさんの紹介も兼ね、俺達オカ研は冥界のグレモリー領にまた来訪していた。
そんでもって顔見世も終わったところ、たまたまサーゼクスさんが帰ってきていたので更に顔見世に。
そしたらサイラオーグさんも来ていたのだが、そこでサーゼクスさんが「そういえばイッセーに興味があったね」といった感じで話しており、そこから手合わせという形になった。
……まぁ、通常禁手で殴られても平然とし、更に掠めただけで鎧にひびを入れたりしているわけだが。
そこで戦車の駒に昇格して、漸く互角といったところだ。
女王の駒で全体を強化するより、分かり易い戦車の駒に一点特化。そういう対応法を考えていたらしい。
で、そこまでやって漸く互角。この人どんだけだよ。
指揮系統の問題から、この人が対ロキ戦に直接関与できなかったのが残念過ぎる。絶対もっと楽に勝ってた。
たぶんだけど、ヴァーリとやりあっても覇を使われない限り勝てるんじゃないか？　俺達で一対一で勝てるのって、たぶん変身したリヴァ先生ぐらいだろう。
そんな感じでちらりとリヴァ先生を見ると、リヴァ先生も目を補足

して真剣に見据えていた。
「……アースガルズとしては、彼ほどの戦士はやはり気になりますね」
「ええ全く。それに、彼はまだ本気を出してないわね」
ロスヴァイセさんに頷きながらのリヴァ先生の言葉に、誰もが面食らった。
「……冗談だよな、リヴァ先生」
俺が代表して聞くけど、リヴァ先生は静かに首を横に振る。
「ホントホント。両手両足に魔法がかけられてるけど、あれは強化じゃなくて抑制の類ね。たぶんだけど、一種の養成ギプスとかそんなノリじゃないかな？」
「きょ、巨人の○ですのね⁉」
ヒマリ、何それ？
割と全員が首を傾げてると、ヒツギがため息をついた。
「昔の野球漫画じゃんか。なんでヒマリが知ってるのさ？」
お前も何で知ってるんだよ。
内心のツッコミがシンクロした気がするが、まあそれはどうでもいい。
イッセーも本腰を入れるのならシャルロットとの一心同体が前提だし、そういう意味ではいいバランスではあるんだろう。
だけど、この調子だとどっちが勝つのやら。
正直ちょっと期待するけど、そんなとき―
「イッセーさん、おっぱいです！」
―アーシアがすごいこと言ってきたな。
思わずみんなが注目する中、シャルロットが額に手を当ててため息をついた。
「アーシアさん？　この状況下でそういうのは―」
「こんな時だからこそです！　今迄みたいにおおおっぱいを触れば、イッセーさんは勝ちます！」
シャルロットの言葉を遮って、アーシアはそう断言した。
それに対して、カズヒ姉さんはハリセンをいつの間にか取り出していた。

「馬鹿なことを言わないの。いろんな意味で空気を読んでちょうだい？」
警告目的で素振りをしているけど、嵐の夜かというレベルで轟音が鳴り響いているんだけど。ハリセンでのその速度なら人の骨を折れそうだぞ・
そんな警告を通り越して恫喝なハリセンを前にしても、アーシアは引かなかった。
「いやです！　イッセーさんが負けるところなんて見たくありません！　勝ってほしいんです！」
涙目でそういうけど、これ絶対ハリセンの恐怖じゃなくて負けるところを見たくないからだろう。
健気な子だ。健気だけれども。
そんな真剣な表情で、しかも手合わせでおっぱい使われる人の気持ちになろう？
「あ……すいやせん。なんか先輩が変なことを」
アニルがそう謝るけど、しかしその隣のゼノヴィアは手を打った。
「いや、おっぱいドラゴンのイッセーは胸を触ってこそだ。部長、今こそスイッチ姫の力を見せるときだ！」
「ゼノヴィア先輩？　あの、手合わせでそこまでする必要はないかと……」
ルーシアが止めようとするけど、もはや事態は転がり落ちる大災害のごとし。
「そうですすぅぅぅぅぅ！　イッセー先輩ならおっぱいがあれば勝てますぅ！」
「確かに！　エロこそイッセー君の力の源ね！」
「私のでもよろしいですのよ！」
ギャスパーまで声を張り上げ、イリナが太鼓判を押し、ヒマリが自分から胸を張る。
「……プッ！　ちょっとこれ……ふふ……ツボに……くふっ！」
「本当におっぱいで？　アースガルズにはない文化ですね……」
慣れてないリヴァ先生とロスヴァイセさんも、それぞれ笑いだした

り感心したり。
カズヒ姉さんとシャルロットは頭痛をこらえてうつむく中、朱乃さんとヒツギの視線が部長に向けられた。
「あらあら。どうしまするの、リアス？」
「あ～……部長、ガツンを行った方がいいかと」
からかい半分の友達モードな朱乃さんに、常識的な意見を提案するヒツギ。
その間に挟まれる形で、リアス部長は顔が真っ赤だ。
まぁ、サイラオーグさんは部長の母方のはとこらしいからな。乳房見せるとかおっぱい揉ませるとかを見せるのは抵抗があるだろうな、うん。
「……そういう話は聞いていたが、本当にリアスの胸でパワーアップするのか？」
「え、えっと……」
サイラオーグさんの質問に、イッセーは思わずどもる。
一度スイッチが入れば突っ走るけど、イッセーってなんだかんだで常識はしっかりあるからな。さすがにこの空気だと戸惑うわな。
だが、小猫がしっかりと頷いていた。
「……残酷な現実です」
いやまぁ、そうなんだけど。
こういう時、立ち位置的に参加していない鶴羽やインガ姉ちゃんがうらやましくなる。
っていうか、俺はどうしろってんだ？
部長がガチ泣きしそうなら張り倒しに行くけど、そうでないならまじで逃げたい。
もう部長顔真っ赤。覚悟決めるのは逃げるのかブちぎれるのか。どれなのか俺はちょっと怖い。
まあ、切れたり逃げたりしたらカズヒ姉さんとシャルロットによるお説教タイムだろう。確実にそうなる。
「木場。いざとなったら俺たちも説教側に回ろう」
「あはは……」

遠い目をするな木場。俺はマジで言ってるからな？
「……ふ、ふはははははははっ!!!」
と、サイラオーグさんもツボにはまったのか豪快に笑った。
少しの間相していると、サイラオーグさんは構えを解く。
戦意も消えているし、これは手合わせは終了だろうか。
「乳龍帝というだけのことはある。……だが本当にそうされると、ここで全部を味わってしまうだろう。それは少しもったいないな」
そう言いながら、サイラオーグさんはイッセーを真っ直ぐに見つめ、手を出した。
「この続きは、試合にするとしよう」
「……は、はい…っ！」
イッセーと握手をしあうと、サイラオーグさんは上着を拾って軽く羽織る。
「俺達もお前達も、譲れない願いや夢があるだろう。上役や観客が観戦する試合の場でそれをぶつけ合うわけだ。その日まで更に研ぎ澄ませて末から、お前達も鍛え上げてぶつかってこい。全力のお前達と戦うことを楽しみにしているぞ」
そんな男らしいという感じの言葉と表情で、サイラオーグさんは観戦していたサーゼクスさんに一礼すると、手合わせの場を去って行った。
「……でもまぁ、あのイッセー君を相手に封印をかけたまま戦うなんてね」
「そう、それがサイラオーグ・バアルだよ」
感心していたリヴァ先生に同意しながら、サーゼクス様は目を細める。
「非才を血反吐を吐くような鍛錬で補い、バアル家次期当主の座を掴み取ったのが彼だ。彼が率いる第四義勇師団は多くの戦果を挙げ、軽い手合わせですら自慢の魔力を破壊されて心を折られた上級悪魔は数多い。彼がレーティングゲームの本格参戦すれば、すぐにタイトルの一つや二つは取ることだろう」
「……そんなに……」

イッセーはそう言いながら、サイラオーグさんが去って行った方を見つめる。
そんなイッセーに、サーゼクスさんは問いかけるような目つきだった。
「君達の壁は、とても分厚く高いということだ」
「……それでも。俺はやります。ライザーの時も会長の時も、ゲームじゃ負けっぱなしですから」
そういえば、イッセーは二回のレーティングゲームでリタイアしてたんだったな。
特にシトリーとの一件では、盛大に嵌めてを食らってリタイアだったしな。
乳語翻訳（パイリンガル）などという技で注目集めまくったけど、思うところはあるんだろう。禁手に目覚めて注目喰らってたところに、言っちゃ悪いが完全下位互換の匙に時間差で相打ちに持ち込まれたわけだしな。俺なら凹む。
そんな強い決意を込めた目で、イッセーはサイラオーグさんが去って行った方向を見据える。
挑戦者のその姿に、リアス部長達は熱っぽい視線を向けていた。
まあ、今の姿は男の俺から見てくるものがある。こういうところはいい男なんだよなぁ。
「……そういえば、リーネスくんはどこかね？　オカ研のメンバーがほぼ揃っているのに、彼女がいないのはちょっと違和感を覚えるんだが」
と、サーゼクスさんがそう首を傾げる。
まあ確かに、リーネスだけがいないわけだからな。気にはなるんだろう。
リアス部長はそれにはっとなると、少し苦笑を浮かべていた。
「彼女はアザゼルと一緒に神の子を見張る者（グリゴリ）の研究施設です。なんでも急ピッチで開発したいものがあるそうでして」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……何とか、近日中には量産体制に持って行けそうですねぇ」
「まったくだ。禍の団とやりあって以来、あいつらに大きく水をあけられていたからなぁ」
「そこにあの変態集団までもが、ですからねぇ」
「しかも大王派も別ベクトルで開発してたからな。いい加減俺達も本腰を入れねえとよ」
「ええ、神器関連の研究は神の子（グリゴリ）を見張る者（グリゴリ）のアドバンテージ。いい加減に反撃を入れないといけませんからねぇ」
「そのうえプロジェクトリスタートもだ。手が空いてる時ぐらいは参加しねえと、部下に示しがつかねえってもんだ」
「ええ。それにぃ……私も後方支援だけっていうわけにはいきませんからぁ」
「……そうだな。それで、処置の予後はどうだ？」
「とりあえず落ち着いてます。まぁ、データは揃ってますから大丈夫ですよぉ」
「だが、俺達がやるのは初めてだ。何かあったら遠慮なく言えよな？」
「ふふふ、了解でぇす。……本当に、我が儘を聞いてくださって感謝しますよぉ、総督ぅ」
「ま、その分期待には応えてくれよ、リーネス」

冥革動乱編　第三話　修学旅行前夜（前編）

和地Ｓｉｄｅ

さて、明日には修学旅行で京都に出発か。
古都京都。日本出身ではあるけど、俺は行った覚えがないな。
そういう意味だと凄く楽しみだ、現代日本の高校だと逆に古臭いとすら言われることもあるけど、俺としては楽しみだ。
お土産もきちんと買わないといけないよな。メリード達は家に残るだろうし必要な気もするし、インガ姉ちゃん達メイドさん達や家主の兵藤夫妻、あとリヴァ先生をもらい受けるからオーディン様にも何か用意するか。
そんなことを思いながら、俺は風呂上がりの体を休めながらリビングでだれている……と。
「あら、和地はまだ寝ないの？」
「あらあら。もしかしてはしゃいで目がさえましたか？」
と、リアス部長や朱乃さんに遭遇。
「……あ、先輩」
「どもっす」
「そろそろ寝ないと、明日は早いのでは？」
と、兵藤邸に住んでいる一年生組も集まっていた。
「そっちも見送りはしてくれるじゃないか。そっくりそのまま返すぜ？」
そう軽口を叩きながら、俺はちょっと居住まいを質す。
「まあ明日から三泊四日は京都行ってきますから、文化祭の準備とかはお願いします」
三年生と一年生は、まあ当然だけど修学旅行中も学校だ。なので学園祭の準備とかもしてもらうことになる。

ちょっと申し訳ない気分にもなるけど、まあ俺が三年生になったら俺がやるんだからまあいいだろう。
……他のメンバーと合同になるだろうけど、お土産はきっちり用意しないとな。
やはりここは八つ橋とか生八つ橋だろうか。でも定番すぎて被りそうだし、後でオカ研二年生メンバーで集まった方がいいかもな。
そんなことを思っていると、リアス部長はちょっと物憂げな表情になっていた。
「どうしましたか、部長？　何か悩んでるようですけど」
ルーシアが素早く気付くと、部長は苦笑を浮かべていた。
「いえ、修学旅行がきっかけで急接近……というのはあるでしょう？　なんていうか先を越されそうで……」
「……確かに」
朱乃さんと小猫が俯いた。
まあ、そういう恋のさや当ては確かにあるんだろうな。
ん？　そういえば俺の場合、そういったのを見たことがない気がするんだけど。
いや、水面下でぎすぎすやっているんだろうか。だとするとちょっともやもやするというか、何とかしないといけないというか男の器が試されるというか……。
俺が悩み始めていると、我に返っていた朱乃さんがポンと肩に手を置いた。
「大丈夫ですわ。九成君の場合は問題はないかと」
「そうですか？」
俺は真剣に聞き返すと、アニルやルーシアもうんうんと頷いていた。
「まぁ、和地先輩はまずカズヒ先輩がいますからね。その辺すっぱり示してるから、序列的になってるっていうか」
「そうですね。南空先輩はカズヒ先輩に気を使っています。あの二人は仲が良いので、むしろカズヒ先輩が南空先輩に優遇させようという気配すらあります」

確かに、あの二人はそんな感じだ。
なんであんなに仲が良いんだ。なんか前世の縁がまじであり得るとか言ってたらしいけど、本当にマジなんじゃないだろうな？
「インガさんもカズヒが上だと考えているようですわ。むしろカズヒが貴方の背中を押してくれた恩人と見ているようですわね」
「……リヴァさんはむしろ、一歩引いた距離から先輩達の関係をつついて楽しむポジションを狙っているかと」
な、なるほど。
朱乃さんと小猫の言い分を聞いて、俺はちょっとほっとした。
そもそも俺がハーレム思考なのって、カズヒ姉さんの絶対条件が大きいからな。
……それがなければインガ姉ちゃんを引っ張り上げきれなかっただろうし、カズヒ姉さんにはまじで感謝だな。
俺が真剣に安心していると、リアス部長は再びため息をついた。
「問題は私の方だわ。私の可愛い下僕達や義妹のアーシアが集まっているのだもの。王（キング）としてしっかり立場を固めないといけないのに……イッセーの馬鹿」
「「「「あ～……」」」」
俺達は真剣に同情した。
あのスルーっぷりには俺達も引く。真剣にドン引きする。
ことアーシアのキス関連をボケ倒せる辺り、あいつ病気なんじゃないだろうか？
うん、俺の中で結論は出た。
「多分、修学旅行で羽目を外しすぎたとかそういう方向で結論出すから大丈夫だと思います。その程度でフォーリンラブするならそもそも部長がベッドインしてるでしょうし……ねぇ？」
「「「「……あ～……」」」」
うん、皆の心が一つになって何より。

いや、俺が言うことじゃないけどイッセーはもげろ。

イッセーＳｉｄｅ

「ぶぇっくしょん！」
な、なんだ？　風邪か？
特に寒いと思ってないけど、湯冷めしたのかな？
明日は修学旅行だってのに、こんなところで風邪をひくとか笑えないって。
うん、今日は早く寝よう。
俺がそう思っていると、階段からリーネスが上がってきていた。
「あらぁ、イッセー？」
「お、リーネス」
俺達は片手を上げて挨拶する。
そうだ、ちょっと思ってたことがあるから聞いてみるか？
「そういえばさ、神の子（グリゴリ）を見張る者（グリゴリ）の人工神器研究ってどうなってるんだ？」
ちょっと気になってたんだよなぁ。
アザゼル先生が龍王ファーブニルを封じた人工神器を使ってたけど、禍の団が人工神器を利用した人型兵器なんてものを作ってたからなぁ。
しかも大欲情教団なんて言う変態集団まで、似たようなコンセプトの兵器を作ってるし。
先生達もプライド傷つけられてたりしてるだろうし、たぶんそろそ

ろ何か作るとは思ってたんだよ。
　実際、先生とリーネスは時々本部の研究施設に言ってたしな。絶対何か開発してる。
「……そろそろ禍の団とかに新兵器で逆襲……とかやるんじゃないかって思ってるんだけど」
「まぁ、その辺りは考えるわよねぇ」
　リーネスはそう苦笑すると、しっかりと頷いた。
「その通りよぉ。そろそろ単機での試験は終了して、部隊規模でのテストが始まる頃……って言っておくわぁ」
「お、マジでか！」
　やっぱりそうなるか。
　いや、でも部隊規模でやるとか、意外と早いな。
「開発は進んでるのか？」
「それはもぉ。そもそも禍の団や大欲情教団の発想は「神器と宿す人を大型で人造する」が発想だものぉ。それで一気に加速したけど、それさえ分かっていればねぇ？」
　自信満々に頷くけど、なんていうか革新すらあるな。
「神の子を見張る者が人工神器方面で考慮してたのは「使い手の悪影響を抑える」が根幹だものぉ。それをクリアする方法が分かったのなら、後追いでもあるから追いつきようはあるわぁ？」
　そ、そうか。
　つまり―
「できるのか、○クやジ○に対する○ムや○ガーが！」
「ちょっと方向性は異なるかしらねぇ」
　あ、そうなの？
　ちょっと残念な雰囲気になったけど、リーネスは得意げに微笑んだ。
「どちらかといえばモビルスー○に対抗して○ルキリーができる形かしらぁ？　本領を発揮するなら、人工神器技術一本に絞る方が有効だしこんがらがらないものぉ。だからそういう方向で行っているわぁ」
「お、おぉ……。考えてるんだなぁ」

なるほど、そう来たかぁ。
と、リーネスはちょっといたずらっ子みたいな笑顔に変わった。
え、なんかあるのか？
「最も、ちょっとした研究でプログライズキーの運用技術を盛り込むって話は合ったわぁ。場合によっては、すぐに見せれるかもしれないわねぇ」
まじか！
うわぁ、ちょっと興味あるなぁ。
「それってつまり、カズヒ達が乗るのか？　ちょっと興味があるかも……」
「う～ん。カズヒ達だと態々乗るより生身で戦わせた方がいいと思うわねぇ」
あ、違うのか。
う～ん。だったらどうなるんだ？　いや、本当に気になる……。
俺が首をひねっていると、リーネスはぽんと糧に手を置いた。
「ほらぁ、そろそろ寝ないと寝坊するわよぉ。私も早めに寝るから……ね？」
おっといけない。
どうも風邪の可能性もあるし、俺も早めに寝ないとな。
「オッケー！　じゃ、お互い京都は楽しもうぜ？」
「ええ。私も楽しみだから、皆で楽しみましょぉ？」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……御呼びですか、サタン様？」

「ああ、お前は確か京都に何度か行った経験があるそうだな」
「ええ。親族が数人ほど京都近辺を担当していたことがあったもので」
「今回の英雄派の実験。俺達冥革連合も協力することにしたのでな。土地勘があるお前をアドバイザーにしたい」
「……よろしいので？」
「奴らの今回の実験は、禍の団全体の益であり、俺達にとっての益でもある。英雄派が持つ龍喰者（ドラゴン・イーター）とやらも気になるしな」
「なるほど。確かに我らのビジョンとしても、あれは実に有意義な実験になりますな」
「お互いに利用しあう関係とはいえ、禍の団と組んだ以上はたまには手を貸さなければな。ヴァーリ・ルシファーのような阿呆な真似はできん」
「あれがかのルシファーの末裔とは……」
「少なくとも、暴君よりは暗君だな」
「ミザリ・ルシファーも危険思想の持ち主ですし、旧魔王血族はろくなやつがおりませんな」
「まあその辺にしておけ。ヴァーリ・ルシファーの夢は俺達にとっても有意義である以上、少しは大目に見てやらんとな」
「とはいえ限度はあります。どうなさいますか？」
「あまりにもやらかすようなら、少し痛い目を見てもらう。だがまあ、当面は英雄派の意向にのっとるとするさ」
「承知しました。それで、人数はどれだけ？」
「基本的にはお前に一任するが、盟主が参加するのは式が高まる。春菜の奴も英雄派のベルナとどうも気が合っていたようだし、俺の眷属は武闘派を全部連れていくさ」
「なるほど。どうやら我々の力も見せつけられそうですな」

「準備をしろ、ケンゴ・ベルフェゴール。冥革連合もいい加減動くとしよう」
「承知いたしました、ヴィール・アガレス・サタン様」

冥革動乱編　第四話　修学旅行前夜（後編）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「それでそれで？　カズヒはどこに行きたいと思ってますの？」
「そうね。清水寺とか金閣寺銀閣寺とか、やっぱりまずはメジャー所を抑えたいと思ってるわ。班全体でそんな感じね」
　ヒマリにそう応えながら、カズヒは少し苦笑いを浮かべていた。
「その通り！　アーシアさんやゼノヴィア、そしてカズヒに日本の良さを知ってもらいたいもの。まずは変化球じゃなくてストレートにね！」
「……いや、イリナも大概日本から離れてるよね？　そんなに日本に詳しかったっけ？」
　胸を張るイリナにヒツギのツッコミが飛ぶが、もう何が何やらと言ったところだ。
　風呂を終えて少し涼んだら寝ようと思っていたら、ヒマリに見つかって引っ張られてこれだ。
　いわゆるパジャマパーティなのだが、どこから突っ込んだらいい物か。
「ふっふっふ。そして夜は子作りだ。修学旅行の夜が急進展というから、その勢いでイッセーとの関係に差を作らせてもらうぞ！　なぁ、アーシア！」
「は、はぅぅぅ～。その、リアスお姉さまを差し置いてだなんて、いいのでしょうか……？」
　そしてゼノヴィアは暴走超特急であり、アーシアが目を回しかけている。
　想像だけでそうなる辺り、純粋すぎるのか意外とスケベなのか判断

に困る。というより、毎日朝にキスをして起こしているらしいアーシアは、ある意味それ以上なきもしないでもない。
　あとこの場のメンツは殆どが教会関係者である。もう少し清楚な方向性にするべきではなかろうか。それともだからこそのぶっちゃけトークで発散するということなのだろうか。
「ちょっとゼノヴィア！　エッチなのはいけないわ！　信徒としてもっと純潔を尊びなさい！」
「っていうかそれ、フィクションの話じゃん？　本当にやったら反省文確実だと思うけど。現実と物語の区別はつけよ？」
「何を言うか！　お約束は大事だろう？　むしろイリナとヒツギも混ざるといい。信仰心もあるのだから四人仲良くといこう！」
　などと話がヒートアップしているが、張り倒した方がいいのだろう。
「ヒツギがするなら私もですの！　仲間外れは嫌ですのよぉ！」
「ちょぉ!?　参加確定!?　私参加確定!?」
　そろそろ止めた方がいいだろう。ことヒツギにダメージが入りすぎている。
　ため息を押し殺しながら、カズヒは切り込みを覚悟する。
「仮にも信徒が６Ｐ勧誘はやめなさい。ロマンチックやムードを大事にするのはいいけれど、奇をてらいすぎるのもあれでしょうに」
「む？　ならカズヒもどうだ？　イッセーはお勧めだぞ」
　とんでもない切り返しだが、カズヒには通用しない。
　というより、ゼノヴィアと自分以外の表情がぎょっとなって緊張感すら生まれたことといい、これはあれだ。
　……イッセーの奴、何時の間にフラグを立てたんだろうか。
　気づかぬうちにフラグを建立するフラグメーカーぶりに戦慄すら覚えながら、カズヒはスパッと切り裂くことにする。
「和地に悪いからパス。あとイッセー相手にした場合、松田と元浜がショックで死にそうだから尚更アウト」
「……妙なところで義理堅いね、君も。九成に義理立てするならそもそも松田と元浜相手にあんな啖呵を切ることないだろう？」

そう素早い反論がなされるが、自分には通用しない。
「和地ほどの男なら、私よりいい女はいくらでもいそうだけどね。鶴羽にしてもインガにしてもリヴァにしても、私より幸せにしてくれそうな気がするわ」
そこに関してははっきり言えると言ってもいい。
「そりゃまあ想われて思うところはあるけれど、私はこの生き方を曲げる気はないの。誰かが背負うしかない必要悪を背負うことで、尊ばれるべき正義を守護する。それを投げ捨ててまで幸せを求めたいと思わないのよ、私は……ってヒマリっ!?」
不意打ち気味に抱き着かれて胸に押し付けられ、更に頭まで撫でてくる。
そんなヒマリは困り顔で笑いながら、しかしカズヒを離さない。
「も～。カズヒってば頑固ですのね～」
そんな風に顔を胸に埋められるが、強引に抜け出す気にはならない。
「そんなに自分を犠牲にしなくてもいいですのよ？　私達オカ研の仲間に、少しぐらいは頼っていいですの！」
そうはっきりと言ってくるヒマリに、カズヒ以外の全員が頷いた。
……それにどうしても抵抗感を覚えてしまう自分自身に、カズヒは嫌悪と納得を感じてしまう。
彼女達なら、きっとカズヒの全てを知ったとしても向き合ってくれるだろう。
拒絶するにしても否定するにしても肯定するにしても、少なくとも命を預け合った仲間として、真っ直ぐ向き合ってくれるとは確信している。
だが、それでも抵抗を覚えてしまう。
それだけの事情だと自覚しているし、ヒマリとヒツギ関しては尚更だ。
だから、カズヒは小さなため息でそれを隠す。
「はいはい。暗部としての筋を曲げない範囲で頼るわよ……その時はヒツギや皆もよろしくね？」

そう、そこに嘘はない。
カズヒ・シチャースチエは仮にも教会に属しており、そしてダーティジョブ専門の暗部ゆえに一線はひいている。
だからこそ、暗部としての筋を通す以上の嘘を言うことはしない。
そう、だからこそカズヒ・シチャースチエはその一線だけは譲らない。
カズヒ・シチャースチエの罪を、彼女達のような綺麗な子によりかけさせるわけには―
「……カズヒ」
―思考で生まれた隙を知らずについて、ヒツギがこちらに顔を近づけていた。
その表情がかつての彼女にかぶり。
「……大丈夫？　なんか急に泣きそうになったけど？」
思った以上に顔に出ていたらしい。
カズヒは小さく一呼吸を置いて、それを呑み込む。
「……ごめんなさい。私の所為で傷つけた人の顔が急に浮かんだわ」
嘘をつかない範囲で、それを素直に答えることでそれとなくこぼす。
これなら深入りされる可能性は少ないし、踏み込まれても拒絶する余地はあるだろう。
幸か不幸か、自分は小さい頃からゲリラをやっているうえにダーティジョブ担当でもある。そんな過去がいくらでもあってもおかしくない来歴だ。
だから大丈夫。……まだ、話せる精神状態でもないのだから。
「そうですか？　その、何かあったらいつでも言ってください。主を信じる者として一緒にミサを開きましょう？」
アーシアの気遣いに微笑で返すが、その表情をヒツギは覗き込むように見つめる。
どうしたらいいのか躊躇するが、ヒツギはあえて踏み込まないことを選んだようだ。
「ま、いっか。……でもさ、忘れないでよ？」

「そうですよの～？」
そんな風に、視線と感触でヒマリとヒツギから挟み撃ちにされ、カズヒはどうしたものかと思ってしまう。
正義の味方で悪の敵な自分としては、相手が筋違いな真似をしていると思えない限りは強く踏み込むのがどうにも苦手だ。特にヒマリは天然善良系なので、実はあしらい難いタイプでもある。ヒツギも一見すると正反対のようでいて実は純朴よりなので、これまた意外と困る。
そんな、かつての彼女に似た側面をそれぞれ持つ二人に、カズヒはどうしても躊躇する。
それを気づいているのかいないのか、二人は挟み撃ちではっきりと断言する。
「私はカズヒの友達で仲間ですもの。カズヒが理不尽に巻き込まれるなんて認めませんもの」
「そういうこと。仲間で友達なんだから、少しは支えさせてよね？」
その言葉に、素直に頷きたい自分と頷けられない自分がいて。
「……そうね、考えておくわ」
そう、誤魔化すことしかできない自分に嘆息した。

「なんだよセラフォルー。こんな夜更けに急な連絡って」
『ごめんねアザゼルちゃん。ちょっとソーナちゃん達に気を使ってほしいのよん』
「修学旅行の件か？　ちょうどその頃、そっちも京都で会合があるって聞いちゃいるけどよぉ」
『それがねぇ。日本政府からちょっと不安なことを言われちゃって』
「なんだよ。一体何が起きたってんだ？」
『それが、星辰奏者（エスペラント）が行ってると思われる謎の犯罪が多発してて、赤龍帝ちゃんが心配なのよん』

「なんでイッセーがピンポイントで不安なんだよ。何があった？」
『……その、呆れないで聞いてね？』
「あ？　一体何をどうすりゃ―」
『修学旅行中の男子生徒や女子生徒がほぼ同時に、視界をハックされてお風呂に入っている異性の盗撮映像を流されたって事件が起きたのよん』
「……あの変態集団が関わってる気しかしないんだが」
『あ、それと公安に黄色人差別主義テロ組織の幹部が京都に密入国したっていう匿名のタレコミがメールで入ってたのよん。念の為にそっちもね？』
「普通はそっちが優先しそうなんだが。ま、あの変態集団ならどう考えても戦闘能力はあっちの勝ちだろうしなぁ……頭痛いぜ」

「バーニン―」
「―グッ！」
「バーニン―」
「―グッ！」
「バーニン―」
「―グッ！」
「バーニン―」
「―グッ！」
「バーニン―」
「―グッ！」
「バーニン―」
「―グッ！」
「バーニン―」

「―グッ！」
「……相変わらず見ていて暑苦しいのぉ、その鍛冶風景。それでよいのかブレイ？」
「構わないさ。こいつの炎は役に立つしな」
「おぉ頭領！　今日も野望に燃え上ってるかぁ！　俺はもちろんバーニングッ！」
「もちろんじゃ。まあそれはそれとして、曹操達の方に人員を少し派遣したいのじゃが、志願する奴はオルカ？」
「俺はパスだ。カミナキの問題点や改善点が見えたからな。当分はそっちに集中したい」
「なるほどのぉ。曹操達が集めた奴からエンキドゥ候補を見繕う為、アーネがベルナと一緒に行くのじゃが、本隊の本格的活動故、もう少し人を送りたかったのじゃが―」
「だったら俺に任せなぁ！　京都には一度行きたいって気持ちがくすぶってたんだ！　燃え上がらせるぜ！」
「おぉ、行ってくれるのか。……で、目的は？」
「神社仏閣燃やしまくりツアーだ！　手当たり次第に十件は燃やしてくるぜ！」
「それはやめろ。本隊の作戦を妨害する気か」
「まったくじゃ。妖怪どもだけでも厄介なのじゃから、神まで敵に回すな」
「え～？　木造建築を燃やす方法や時限発火装置も準備万端なんだけどよぉ？　俺の炎をボヤにすんなよぉ？」
「……異能を直接使わないなら、三つぐらいは陽動になるんじゃないか？　例の連中も行くんだろう？」
「なるほど、ブレイの意見も一理あるな。……よし、その辺にしておくのだぞ？」
「せめて五軒！」
「ダメじゃ。……まあ安心せよ、その代わりといってはなんじゃが―」

「―運が良ければ、須弥山の仏を燃やせるかもしれぬぞ？」
「うっひょぉおおおお！　俺のやる気にイグニッション！　燃やしてええええええやるぜぇ！」

「おい、火力が上がりすぎだからもう少し下げてくれ」
「あ、悪い」
「しまらぬのぉ」

冥革動乱編　第五話　では、京都に行こう！

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで修学旅行も出発時間となりました。
ここ最近は半月に一度レベルで窮地に陥っているから、本当に楽しんで心の洗濯をしたいとは思っている。本心から思っている。
だけど、不安を覚えるのはなんでだろう。
いや、どうも学校のイベントごとに合わさる形でトラブルに巻き込まれていることが多いからだろう。プール開きに続く流れ辺りで駒王会談もあったし、夏季休暇中に襲撃受けるし、体育祭とほぼ被るレベルで旧魔王派との決戦に巻き込まれたわけだ。思えばコカビエルによるエクスカリバー強奪事件も、駒王学園高等部の球技大会と被ってたしな。
だがまあ、連鎖的に来るだけだから修学旅行が台無しになることはないだろう。帰った直後に何かありそうだけど、たぶん修学旅行自体は大丈夫だろう。
うん、気分を切り替えるとするか。
そんな感じで荷物を持ち直した時、リーネスがこっちに近づいてきた。
「なんだよリーネス。クラスが違うから車両も違うだろ？」
「ゴメンねぇ。念の為に渡しておく物を渡しておこうかと思うのよぉ」
そう言うと、リーネスは俺にプログライズキーを渡してきた。
……新型のプログライズキー。しかもこの柄は……っ！
「……もしかして、試作テストした奴の……か？」
「そう、アレな結果だったから後回しにしたやつよぉ」

またピーキーな物を。
俺だってできれば使いたくない類の方向性だったんだけど。
まあ仕方ないことはある。リーネスが言いたいことも分かる。
「最近の敵のインフレ具合だと、こういう手段も必要ってことか」
「そういうことよぉ。私は基本的にデスクワーカーだから、用意できるものは用意しておかないとって思ったのよぉ」
確かになぁ。
これはできれば使いたくない。本当に使いたくない。
だけど―
「選べる手段がないのと手段を選んで勝つのとは、全然違うよな」
「そういうことぉ。私も頑張ってもっといいのを開発するからぁ、和地はできる手段で最善を掴み取って」
そう言って微笑みながら、リーネスはそっと俺の手を握る。
それはまるで、祈るような雰囲気だった。
「カズヒをしっかり支えてあげてね、和地」
「……ここ最近、基本としてカズヒ姉さんには助けてもらってばかりだけどな……」
言ってて悲しくなってきた。
惚れた女にフォローされてばっかりというのも、男としてちょっと沽券がその、なぁ。
俺はマジで泣きたくなってきた。なんで楽しい楽しい修学旅行で、こんな悲しい気持ちにならないといけないんだ。幸先悪いぞホント。
ただ、リーネスは本当に真剣な瞳で俺を見つめていた。
「大丈夫ぅ。支えるっていうのは、物理的な意味だけじゃないものぉ」
その言葉は、なんていうか実感が籠っていた。
「カズヒが貴方の体を支えるのなら、貴方はカズヒの心を支えて？素直にしたって、恥じないよう頑張っていることが、カズヒの心を支えているから」
言いたいことは分かるし、俺もそこはしたいと思っている。
嘆きの涙を笑顔で流す。涙の意味を変えることは、何も物理的に限らない。むしろ心こそ、支えて守らなければいけないものだと分かっ

ている。
それを実践してきたから。少なくとも、実践しようと努めてきたから。俺はインガ姉ちゃんやリヴァ先生に認められたのだと思いたい。
ただ、カズヒ姉さんの場合はなぁ。
「ぶっちゃけ、リーネスや鶴羽の方が支えになってると思うけどなぁ」
ツーカーの仲だしなぁ。
正直、同性の友人と異性の仲間とでは、やはり距離感が違うしなぁ。
むしろ二人こそが支えていると思っているんだけど、反論は後ろから来た。
「そういうわけにもいかないのよ」
そんな感じでしなだれかかるは鶴羽だった。
「何時の間に？」
「ちょっとトイレ行ってたから。……ぶっちゃけてさ、カズヒの心を支えるのは、私達だと限界があるから」
なんか凄い実感が籠っている響きだ。
リーネスも真剣な表情で頷いてるし。
「和地にはまだ話せてないけど、私やリーネスだとどうしてもカバーできないところがあるの。特に私は……限界がある」
そんな真剣な、後悔しているとしか言えない表情で、鶴羽は俺を真っ直ぐ見つめる。
「和地でも難しいところはあるけど、少なくとも私達じゃできないところをあなたは支えられる。……それでもできないところがあるからこそ、私達は和地に頼るしかない」
そんな、本当に最後に縋るような眼で、鶴羽ははっきりと告げた。
「瞼の裏に誓った和地が、それを形にしようと藻掻いて、それがカズヒの救いになるの」
「だから、カズヒに恥じない貴方でいてね？　それだけは、私達じゃできないからぁ」
その言葉と表情の意味を、俺はまだ理解できない。
人には隠したいことはあるし、親しい仲にも礼儀がある。
だからこそ踏み込めないところがきっとあるんだろうけど―

「……分かった」
—だからこそ、改めて誓う。
「瞼の裏の笑顔に誓って、俺は涙の意味を変えて見せる」
そう、それは絶対裏切らない。
命を懸ける価値があると、ずっと心が信じているから。
あの女性の笑顔に、そして思い起こさせるカズヒ姉さんに。そしてもちろん二人にも。
「カズヒ姉さんの涙の意味を、きっと変えて見せるから」
その言葉に、二人はほっとした笑みを浮かべていた。
……カズヒ姉さんもなんだけど、なんだこの年長者に見守られる子供のような気分は。

そんなしんみりした雰囲気なことがあったってのに……さぁ？
「松田、お前本当に病気だよ。イッセーもだけど性欲旺盛すぎだぞ？精神科医とか脳外科にかかれ」
「畜生！　今回ばかりは何の反論もできやしねぇ!?」
絶望の表情で崩れ落ちる松田に、俺は流石に同情した。
さっきの言葉も罵倒とかじゃない。本気で心配になっているから出てきた、友人に対する労りの言葉だと胸を張れる。
ちょっとイッセーが今後の成長の為に神器の中に意識を潜らせている間にだ。ついでに俺がちょっとトイレに行っている間にだ。そんな僅か数分の間にだ。
松田の奴、元浜の胸に顔を埋めていた。
野郎の悪ふざけというわけじゃない。松田は記憶が飛んでいるし、そもそもイッセー達は女好きのスケベが病的なレベルゆえに、男相手のそういうのは大っ嫌いだ。
本気の嫌がらせにホモ同人のネタにさせるだけのことはある。ガチでホモ的な扱いにされるのを嫌がるし、どうあがいても男とホモい

ことをする精神性を持ち合わせていない。
そんな奴が正気を失って男の胸にだいぶとか、ちょっと冗談抜きでやばいと言っていい。
そんなに女湯を覗きたいのか？　おいおい、ここ数日は女子は集団でお風呂に入るんだぞ？
……気づいた瞬間に床や天井を突き破って女湯に突っ込みそうで怖い。何かの拍子に変な覚醒をしてそうで怖い。
「……仕方がない。別のクラスのリーネス（友人）に相談して、ホテルのテレビのエロチャンネルを何とかできないか相談してやる」
「そこまで心配されるのかよ!?」
うるさいよ松田。
エロビデオを勝手に見て軽犯罪で補導されるのと、暴走して覗きで捕まって心神喪失で無罪判決喰らうまで裁判するのとではどっちがいいかなんて分かり切ってる。
やられる側も心が傷つくがやった側もトラウマだろう。これは流石にガスを抜かせないと、まじで起きそうで怖い。
あとで先生方にも相談しておこう。アザゼル先生に相談すれば、それとなくお目こぼしを引き出せるはずだ。
「松田の奴、そこまで女体に飢えてるなんて……」
「まぁ、兵藤も毎週毎週あれだもんね。その同類なら……」
「最近は覗きもやめて毎度パシってたけど、努力に免じて金と引き換えにビキニでも着てやるべきかしら？」
「金額は一万円未満にしておいてやるか……」
……星辰奏者の五感が察知した女子の会話は聞かないでおいておこう。
松田達が知ったら本気でバイトに励みそうだ。というよりイッセーの性欲に由来する、我慢の拒絶反応に慣れすぎて判断基準がおかしくなってる。
っていうかカズヒ姉さんどこだよ？　こういう時こそ出番だろ。俺としては複雑だけど、ここまで追い込まれているならガス抜きは必要だろ。

……いや、本当にどこだ？

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃そのカズヒは―

「精神が追い詰められるほど我慢し続けている以上、旅先ではしゃぐことで思考が変な方向に向かいかねないので、松田と元浜に添い寝をしてやりたいのですがいいでしょうか？」
「気持ちは分かるが自己犠牲精神が酷過ぎないかね？　いや、気持ちは分かるが？」
「先生、性欲というものは人の精神を堕落し腐らせる麻薬になりえるんです。気づけば人間の精神は腐るなり堕落して、見る影がなくなることもある以上、段階を踏んでコントロールをする為にも、相手の性欲と状態に応じた処方は必須です」
「君は性犯罪者や被害者専門のカウンセラーか何かですか？　いえ、私達も旅先で我慢の限界による暴走なんて避けたいですけど……そのですね―」
「その油断が暴発の元なんです！　生存必須の睡眠欲や食欲に、死のリスクなしに三大欲求として並び立つ性欲は油断できません！

うっかりセックスが上手な連中に引っかかった結果、跡形もなく醜く歪み果てる奴は、ごろごろいるんですよ!?」
「シチャースチエ君。落ちついて？　ここは新幹線だから、変態三人衆(彼ら)に慣れてない人もごろごろいるのよ？」
「誰かアザゼル先生を呼んで来い！　いや、エグリゴリ（リーネスの便宜上ファミリーネーム）か南空でもいい！」

―自己犠牲精神を全力で開放し、松田と元浜の暴走を防ごうとしていた。

冥革動乱編　第六話　京都、やってきました！

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで京都についた、そんな時―

「……おっぱい……お……ぱ……い……」

「ひ、いやぁ……っ」

―明らかに常軌を逸したゾンビみたいなおっさんが、虚ろな目で女性のおっぱいをガン見しながらよろよろ近づいてい来る光景をみた。

これはいかん。放ってはおけない。

女性が恐怖と嘆きで涙を流そうとしているとか、ちょっと看過できないな。

「松田、元浜！　ここで彼女を助ければあなた達の評価はうなぎ上りよ！　私がオフェンスをやるからそのあとにタックルで押さえつけなさい！」

カズヒ姉さんも悪の敵として看過する気はなさそうだ。

「いや、絶対事情聴取とかでめんどいことになるから、素直に警察か駅員さんに連絡する程度でいいんじゃない？」

しかし桐生、それはそれとしてもうやばいぐらい距離が近づいているし―

「……Ｈｅｙ！」

そんな時、その男の肩にごつい手が置かれた。

そしてその瞬間、勢いよく持ち上がるとパワースラムとかいうやり方で地面に叩き付けた！

な、なんだ!?

俺達が驚くぐらいの早業で変態を仕留めたのは、ごついおっさん。

いや、アメフトでもやっているのかっていうぐらいに筋肉質で大柄な体をしているな、おい。

っていうか、誰だ？　外国人っぽいけど。
「大丈夫カイ、ジャパニーズレディ」
「あ、ありがとうございます……」
そのまま連れの黒服に拘束させながら、その男は女性の方を見て歯を見せて笑った。
と、戸惑っている時に足音が響いてくる。
「こちらデス、ポリスメン」
「え、駅員です……ってあれ？」
これまた色黒の外国人に連れてこられる形で、駅員さんが現れた。
どうも既に警察にも連絡が行っているみたいだし、これは俺達の出番はない……か？
「おーい！　お前達も早く来い、まずは集会だぞ！」
おっと、先生達に呼ばれてしまった。
ちょっと気になるけど、俺達はいそいそとその場を後にする。
そんな風に歩きながら、カズヒ姉さんは俺の隣で鋭い目でさっきの人達をちらちらと見ていた。
「……また凄い大物が京都に来てるわね、観光かしら？」
「あれ、カズヒはあの二人を知ってるのか？」
イッセーが首を傾げると、カズヒは静かに頷いた。
「どっちも日本じゃあまり知られてないけれど、世界的にはそこそこ大物よ。色黒のは個人で油田をいくつも持つ大富豪のゼニーズ・マーワス。最ももう一人はその上を行くわ」
と、いうと？
「アメリカ合衆国上院議員にして、米国星辰奏者研究の後援者。自ら被検体として米国初の星辰奏者になった、ニールセン・キングスマン」
……凄過ぎる大物じゃないか。
「「富国強兵によるアメリカの地位再向上」をスローガンに掲げ、三代目ぐらい後の大統領候補になるだろうとまで言われるタカ派議員ね。……っと、更に来たわね」
その声に視線を向けると、今度は身なりのいいスーツを着た日本人男性が、ニールセン氏に近づくと苦笑しながら駅員さん達との会話を

取り持っていた。
「……あれって確か、野党議員の小面原拾杯（おもはら じゅうはい）じゃなかったっけ？　与党を叩くことにだけに全力を尽くしてるとかいう」
桐生がそう言うけど、なんていうか意外だな。
アメリカのタカ派議員と日本の与党アンチ議員って、取り合わせとしてどうなんだ？
「……おそらく、米国議員が与党と連携を取らないようにする牽制ってところでしょうね」
カズヒ姉さんはそう推測するけど、これ以上は時間をかけれないな。
まだ余裕はあるけど、余裕があるうちに集合しておかないと……な。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「それでーワ！　皆さんいい旅オ！」
そう言って真っ先に離れるゼニーズ・マーワスは、用意していたリムジンに乗り込むと苦笑した。
「小面原の奴、禍の団（カオス・ブリゲート）がテロを起こすってんで様子見か。俺と違って暇な時間とか少ないだろうによくやるぜ」
「では、私めはこれで」

そう告げてホテルに向かうことにした小面原拾杯は、誰にも聞こえないように小さな声で舌打ちする。
「ゼニーワ殿も確認か。ただでさえ少ない第三世界の富を独占する奴にしては、勤勉なのだと思いたいがな」

「グッバイ、ジャパニーズ！　両国の友好を願ってマース！」
そして、京料理を食べる為に最後に去って行ったニールセン・キングスマンも、二人にちらりと視線を向けてから肩をすくめる。
「まったく。訳の分からない変態が出てくるとは、禍の団の連中も苦労しそうだな。ま、三大勢力もか」
そういいながら、ニールセンは隣の部下に小声で確認をとる。
「で、京都の妖怪を仕切る八坂ってのは既に曹操達がとっ捕まえてるんだな？」
「そのようです。ですが幹部の小面原とマーワスまで来ているとは、大丈夫ですかね？」
その疑念に、ニールセンは鼻で笑うことで返答とする。
「大丈夫だろ。俺達で横の繋がりが深いのは末端ぐらいだ。基本はスポンサーの俺達にゃぁそう簡単には辿り着けん」
「そうですが……」
不安げにする部下に、ニールセンは軽く背を叩いて活を入れた。
それでも勢い余ってつんのめりかける部下に、ニールセンはニカリと覇を見せて笑う。
「第一、北半球先進国の崩壊を目的とする南海同盟のボス。正体不明で通信ネットワークを作り上げたトップのアーンノンが、まさか怨敵アメリカのタカ派だなんて異形でも思いつきゃしねえよ」
「日本の政治家が参加している時点でそうですが、気でも狂ってるような組織ですなぁ」

禍の団において、近代軍事的練度を誇る戦闘部隊を派遣した派閥が存在する。
スカラベレイダーシリーズを開発し、世界各地から職にあぶれたはぐれ者を集め、厳しい訓練を貸して戦力とする集団。
異形の力を利用しての、北半球先進国崩壊を目論むネットワーク「南海同盟」。
その正体を知られていない首魁が、まさか米国の軍事強化を推進する上院議員だと悟っている者は、未だ誰もいない。

イッセーＳｉｄｅ

おぉ……。これがホテルの部屋。
「へぇ～」
「ほぉ～」
同室の九成と一緒にちょっとそんな感じで見回してから、顔を見合わせた。
「夏休みの冥界のホテルの方が凄いよな？」
「ハイレベルすぎる比較対象で麻痺してるな」
うん、あそこは超大金持ちが使うようなホテルだしなぁ。
一応一般の観光客も使う、修学旅行のホテルならこんなもんなのかな。
あんまりホテルに泊まったことがないし、なんかよく分からない

なぁ。
「……でもまぁ、学生の修学旅行なら普通のツインルームだろ？　上級悪魔の貴族用と比べるなら、それこそロイヤルスイートとかグランドスイートが比較対象じゃないか？」
あ～、九成の言う通りかもなぁ。
……でも、流石に見させてくれって言っていけるわけないよなぁ。
いや、ここサーゼクス様の持ちホテルっぽいから、グレモリー眷属のごり押しならいける気もするけど。
あとすぐ近くにセラフォルーホテルとかあったんだけど。会長、メンタル的に大丈夫なんだろうか。
「……絶対先生も持ちホテルあるな、これ」
九成も遠い目をしているけど、それは同感。
そんな感じでなんとなく上を見ていると、足音が聞こえてきた。
「あぁ、イッセー君に九成君。ちょっといいですか？」
あれ、ロスヴァイセさん？
俺達が首を傾げていると、ロスヴァイセさんは二枚のカードキーを俺達にそれぞれ手渡した。
「リアスさんとソーナさんが、緊急事態が起きた時の会議室用に最上階のサタンスイートルームというのを抑えていたそうです。何かあった時はそちらに集合して会議ということになるので、とりあえず伝えておきました」
……さたんすいーと。
九成と顔を見合わせると、なんていうかお互いに困り顔になってるのがよく分かるなぁ。
なんていうか分かり易い。京都って妖怪とかいろんな縄張りがあるから、専用の木札を持ってないと揉め事になるって話じゃなかったっけ？
っていうかそんな超高級スイートルームって、誰にも使わせないのに使っていいのか？
「大丈夫なんですか？　流石に泊まる人がいた方がいいと思いますけど」

九成がそう言うと、ロスヴァイセンさんは首を横に振った。
「そこはご安心を。リアスさんがサプライズも兼ねて既に派遣してました」
……なに、俺達を交互に見ての複雑な表情。
思わず顔を見合わせて首を傾げた瞬間―
「こういうことだよ、カズくん♪」
「ちょ、リヴァさん!?」
なんて感じで、九成の背中に二対のおっぱいが!?
「リヴァ先生にインガ姉ちゃん!? ちょ、イッセーに殺されるから!?」
「そこは「なんでここに!?」がよかったなぁ」
「いや、本当にイッセー君が凄い顔になってるから、まずいってこれ」
ふふふ、そんな密着体制をこんな距離で見せつけるとか、殺意と憎悪が燃え上が―
「落ち着いてくださいね、イッセー?」
―とそんな声と共に肩に手を置かれた。
あ、苦笑いしているシャルロットも。
「シャルロットも来てたのか? あ、サタンスイートに泊るのって―」
「はい。いざという時の緊急スタッフとサタンスイートを埋める担当として、休暇半分で送り出されました。……まぁ、インガさんは立ち位置が立ち位置なので、表向きは私達の給仕担当となってますけど」
「京都はいろんな勢力がいるから、まだ行ったことがなかったのよねぇ。ふふぅん、後で京料理とか食べようかなぁ」
と、リヴァさんがウキウキしながら観光パンフレットを見ている。
俺はなんというか、九成をちらりと見た。
「……なんだよ?」
「いや……」
なんていうか、その―
「……別行動するなら、口裏合わせるぞ?」
「しねえよアホ! 学生の本分は守るっての!」

冥革動乱編　七話　京都で、再開です！

和地Ｓｉｄｅ

学生の本分は護る。すなわち、京都の修学旅行はしっかり班行動をする。
そう思っていた時が、俺にもありました。
『……和地、まずいうべきことは？』
「はぐれてごめんなさい！」
カズヒ姉さんの冷たい声に、俺は電話越しなのに平謝りで勢いよく頭を下げた。
イヤホンと情けないことに、盛大にはぐれた。
っていうか、思っていた以上に広いな伏見稲荷！
ちょっと辺りを見渡していたら、盛大に皆を見失ってしまった。なので仕方がないから、最初の入り口部分に向かっているところだ。
「とりあえず、行き違いの混乱を避ける為に入ってきたところの茶屋で待機しようと思う。カズヒ姉さん達は素直に観光しててくれ」
『……全くもう。ペナルティとして、合流後に茶菓子を奢ること。もちろん班全員よ？』
「了解です！」
大丈夫だ。俺も神の子を見張る者で仕事してるから、貯金はそこそこある。
念の為おサイフケータイをチャージしておいてよかった。まぁ、茶菓子一人一種類なら何とかなるはずだろう。
さて、道に迷ってつけないなんて恥ずかしい真似だけは何としても避けないと……あ。
「ゴメンカズヒ姉さん。もしかしたら合流遅れるかも」
『……全く。学生ならしかるべきところに届ける程度にしておきなさ

い』
すぐに悟ってくれてありがたい。
俺の視界の隅に、泣いている小さな女の子を見つけた。
あんな小さい女の子が一人で来るとは思いづらいし、たぶんだが親御さんとはぐれたといったところだろう。
迷子センター的なのはあっただろうか……とか考えながら歩いて近づく。
大丈夫。学生証はあるし、俺のスタンスは駒王学園内でも有名だ。ちゃんとした対応をしていれば何かあってもすぐ疑いは晴れる。
そんな感じで心を落ち着けながら声をかける。
「「大丈夫」か」」
……。
俺は、その女の子に向けていた視線を上げる。
そこにはちょっと癖っ毛な女の子と、ポニーテールの女の子。
「おい、なんで春っちとベルナがここにいるんだよ？」
しかもなんで観光してるんだよ。
「……気が合うから観光……ってことじゃ駄目？」
春っちはそう言うけど、ボロしかねえよ。
ベルナもベルナで、ため息をつきながら額に手を当ててうつむいている。
「そこは押し切れよな……っ」
だよなぁ。もう嘘ですよって言っているようなもんだろ、これ。
あ、これ絶対あのサタンスイートで会議するフラグだ。

とりあえず十分ぐらいかけて、しかるべき場所に連れて行った。
身元がしっかりしている俺が対応して、ベルナがあやす為にお菓子を買って与え、春っちがその間女の子をあやしていた。
で、そこから解散したいが、そんなわけにもいかないだろう。
俺は茶屋で、半目で二人を見据える。

「で、なんで寄りにもよって京都で作戦するんだよ。それもこのタイミングで」
タイミングが最悪すぎる。
今まで学園のイベントと大規模な揉め事が連鎖することはあったけど、まじで被るとか流石にないぞ。
嫌がらせか何かか。ふざけんな。
俺に至っては人生初の修学旅行だぞ。そしてまず間違いなく最後でもあるんだぞ。
……あ、涙出てきた。
「いや泣かないでよ。どんだけ修学旅行楽しみだったのよ？」
「だって、俺、人生で、たぶん最初で最後の……うあ～」
春っちにそう言い返しながら、俺はだれた。
流石に凹むっての。もう勘弁してくれ。
とはいえこんなところで暴れるなんてそれこそあれだ。堅気の人間に被害が出すぎる。
春っちもベルナも割と広範囲を攻撃できるからな。被害を考えると、俺の独断で仕掛けるわけにはいかないし……どうしよう。
いろんな意味で頭を抱えてると、ベルナは緑茶をすすりながらため息をついた。
「ったくよぉ。こちとら極悪非道のテロリストなんだから、遠慮すんなよなぁ」
「遠慮してんのはお前らにじゃねえよ。京都の異形や一般市民だよ」
反論するが、なんていうか呆れたような目を向けられた。
「第一なんでお前はアタシまで気にかけるんだ？　春菜は分かるけど、アタシとあんたはあの時が初対面だろうが」
「なんでだろう？」
思わず即答で答えてしまった。
あ、殺意向けられてる。
「喧嘩、売ってるのか？」
「いや、そういうわけじゃないんだが、その……な？」
ええい、隠し事はするな。

「泣いている風に見えたってのが一つだけど、なんであそこまで強く気にかけたのか、自分でも分からないんだよ」
真っ直ぐに目を見て、嘘偽りない正直な答えで応じる。
実際そうではある。そして冷静に考えると確かに首をかしげる的なあれでもある。
確かに俺は、涙の意味を変えることを己の生き方にしている。だからこそ、小さな女の子が迷子で泣いているのなら、このご時世で逆に通報されるかもしれなくても何かしらのアクションは起こす。
だけどまぁ、学生としての本分はわきまえるし、助けるという行為もある程度の幅があることはわかっているつもりだ。
しかるべき機関に通報するなり連れていくなりするというのは、きちんと社会が機能しているのなら十分誰かを助けることだ。いわゆる義援金や支援物資も、それがちゃんと使ってくれるだろうところや、必要となるだろう物資であることをきちんと考えるべきでもある。
敵味方がはっきりしているなら尚更だ。自分で言うのもなんだが、その辺りは線引きぐらいはできる自信がある。
身内のインガ姉ちゃんや春っちならともかく、過去にあった覚えがないベルナに対して、なんでそこまでと言われると、自分でも首を捻る。
「……一目惚れってわけでもないと思うんだが、何故か一目見てちょっと会話したらほっとけなくてなぁ」
「それはもう一目惚れじゃないの、和っち？」
春っちはそう言うけど、しかし違うと思うんだよなぁ。
「カズヒ姉さんに会った時のあのインパクトとは異なるからな。あの自分の運命（さだめ）に出会ったかのような心の動きはなかったんだよ」
「おいコラ。女二人も前にして、ナニのろけてるんだ、あぁん？」
今度はベルナにすごまれた。
いや、そんなこと言われてもだなぁ。
あ～。でも流石に失礼か？
「……スマン。カズヒ姉さんの彼氏に求める条件とかもあって、

ちょっとその辺の感覚がおかしくなってるみたいだ」
「どんな条件出されてんだよ？」
半目でベルナに呆れられるけど、実際そういう条件だしな。
……敵に言うことでもないけど、言わないでいられる流れでもないな。
なんというか、俺は遠い目をするしかなかった。
「来るもの拒まず去るもの作らず。ようはハーレム作る気概を見せろと、援護までしてくるんだ」
「……」
うん。その沈黙はとても納得だ。
あ、そういえばこれは連絡必須だよな。
いきなり合流してたら敵がいるとか大混乱だ。松田達もいるんだし、トラブルにならないようにそれないの手札はいるだろう。
俺は速攻でスマホを取り出すと、リダイヤルではなく着信履歴の方を出してしまったので、流れでイッセーにかける。
まあイッセーもいるだろうから問題ないだろう……っと。
『あれ？　どうしたんだよ九成』
「いや、実はちょっと問題が発生してて。今桐生達は近くにいるか？」
いるなら小声で話してもらわないとと思ったが、イッセーは「いや」と言った。
『元浜がばててたから、ちょっと先に行ったんだよ。一人じゃないと祈れないこともあるだろ？』
「あんまりエロいことばかり祈ってると、マジで神罰下るぞ？　特にお前は悪魔なんだから」
全く。現状だとお目こぼしに近い状態だって忘れてないか、こいつ。
まあいいか。なら尚更話しやすい。
『ちなみに今はてっぺんだけど、どうしたんだ？』
「ああ、実は―」
俺が何かを言おうとした時だ。

『……へ？』
なんだ？　様子がおかしいぞ？
というか、電話の向こうの雰囲気がなんかおかしい。
これは、別動隊が敵襲を受けたとかそういった感じの雰囲気だ。荒事の予感しかしない。
「イッセーどうした？　敵か？」
『いや、なんか天狗や狐のお面をつけた人達に囲まれて……っていうか妖怪か？』
おいおいどういうことだ？
修学旅行において、俺達は許可証だって貰っている。伏見稲荷ならそれなりに相手側の本部に近いだろうし、はぐれ者が襲ってくる可能性……いや、違うな。
俺は念の為、二人の方を見る。
「お前らまさか、別動隊でもいるのか？」
「ンなわけねえだろ。こっちの担当はアタシらだけ……あ」
「……馬鹿が勘違いしたってわけね。しょうがない、見逃してもらう代わりにあっちは助けておくわ」
そんな風に何かに納得した感じの二人は、すぐに立ち上がる。
「伏見稲荷のてっぺんだな。ならひとっ飛びでいいか」
「和っち、お代は置いておくから、釣りはサービスよ」
「え、あ、ちょ……」
追いかけたいところだけど、まだ清算が済んでない。
というかイッセーの方も慌ただしい。
……と、とりあえず。
「イッセー。元凶がそっちに向かったから、もうちょっと凌いでくれ」
『は!?　意味が分からないんだけど!?』
いや、俺もさっぱり状況が読めてないから、そんなこと言われてもなぁ。
あと―
「注文したお菓子、どうしよう」
あいつら食べかけで行っちまったぞオイ。

そう思った時、なんか急にベルナが戻ってきた。
「え、何を―」
「悪い！　もったいないから全部食っといてくれ！」
そのままさっさと行ってしまった。
……え？
女子の食べかけを、食べろ？
『九成!?　とりあえず今のところ何とかなってるけど、大丈夫なのか!?』
えっと、その―
「……イッセー」
『なんだよ!?』
「女子の食べかけのお菓子を食べれるんだが、松田や元浜は喜びそうか？」
―やばい盛大に混乱しているぞ俺!?

イッセーＳｉｄｅ

「なんだそりゃぁあああああああ!?」
全力でツッコミ入れたけど、一体どんな状況なんだよ!?
こっちもこっちで大変だけど、あっちはあっちでどうなってるんだ？
いわゆる烏天狗っぽい人の斬撃を躱しながら、俺はちょっと混乱している。
ああもう！　なんでこうなってるんだ!?
リアス部長から直々に、政府経由で渡された許可証を貰って俺達は

ここに来てる。第一駒王学園の修学旅行って学校行事だから、流石に連絡も行ってると思う。そんでもって、伏見稲荷なんて場所なんだから、当然連絡されてるはずの側だとも思う。

なんで俺襲われてるんだ!?

エッチなお願い事ばっかりしたのが悪いのか。九成のあれは軽口じゃなくてマジな話だったのか。それともロキみたいな和平反対派の暴発なのだろうか。

全く分からねえ。俺は馬鹿だから、そういうのをすぐに思いつくのは無理がある。

だけどここで暴れたら流石にまずいと思う。サーゼクス様やリアス部長に迷惑がかかるかもしれないし、一般人の人だって近くにいるかもしれない。

取り合えず、怪我人が出ないように気を付けないとまずいってことだけは分かる。

あと九成の奴、元凶がどうとか言ってたよな？

そいつらが来たら状況が分かるのか―

「おのれぇ！　母上を攫うだけでも許せぬのに、そのいい加減な対応はどういうことじゃ！」

―と思ったら、キツネ耳の女の子がなんか攻撃まで放ってきた。

籠手で咄嗟に弾くけど、なんていうか……偉そうだな。

話し方も話し方だし、周りの妖怪達もあの女の子の指示に従ってる感じがする。

つまり、お偉いさんの子供とかそんな感じか。

一番怪我をさせたらいけない側だよなぁ……と!?

「騎士（ナイト）に昇格（プロモーション）！」

俺は咄嗟にスピードを上げて、キツネ耳の女の子に突撃する。

「なっ―」

その子が反応するより早く飛び掛かると、ちょっと強引に伏せさせながら、アスカロンの刃を出して、そいつらに突きつけた。

「反応がいいわね。鎧抜きでこれ？」

「へぇ。流石はあのヴァーリ・ルシファーを負かした赤龍帝じゃねえ

か？」
感心しているのは、英雄派の格好をした男勝りなのがすぐに分かる女と、レーティングゲームの映像で見た九成の幼馴染。
どっちも禍の団のメンバーじゃねえか、何でこんなところに……九成が言ってたのはこいつらか！
「てめえら！　さっぱり訳が分からねえけど、何をしやがった！」
「悪いな赤龍帝。アタシらは下っ端だから上の指示に逆らうわけにはいかねえんでな。……ま、トップが動いてるとだけ言っとくぜ？」
英雄派の方がそう言うけど、つまり今動いているのは英雄派か！
今までは戦ってきたのは、送られてきた下っ端とか、独立部隊の後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）の連中ばかりだった。それが、トップが京都で動いているとかいう。
ついに本気で動き出したってわけか。
「……ちなみにヴィール様もそれに協力してるわ。そっちの妖怪の長を確保したとは聞いてるから、たぶんそれね」
幼馴染の方もそういうけど、つまり俺はとばっちりかよ!?
「マジで悪かったな。ついでに釣りをする感じで一部のメンバーが動いてたんだが、まさか無関係な奴に突っかかるとは思ってなかった」
「知ってる情報は吐いてもいいと言われてるし、和っちに免じて教えてあげるわ。……私達禍の団（カオス・ブリゲート）が黒幕よ」
そう言い捨てると、二人は空高く舞い上がる。
二人揃って悪魔の翼を広げながら、敵意むき出しの妖怪達に向き直った。
「むかつくんなら追いかけてきな！　追いつけたなら相手してやるよ！」
「ま、この程度の雑魚なら数分で全滅できるでしょうけど。手加減の練習も兼ねて、半殺しですましてあげるわ」
そんな風に言い捨てて、なんか二人とも微妙な速度で飛んで行った。
なんていうか、ちょっと遅くない？
そう思ってると、キツネ耳の女の子が強引にはい出てくる。

「逃げるなぁ！　……えぇい、追いかけるぞ！」
「かしこまりました！」
「八坂様を返せぇ！」
……行っちゃったよ。
えっと……これ、どうなってるんだ？
あ、まだ電話が繋がったままだ。
「なぁ、九成？」
『分かってる。トラブル確定だな』
俺達は電話越しに、盛大にため息をついた。
ついに学校のイベントごと巻き込まれるのかよ……。

あ、ちなみに女子の食べかけのお菓子は「死闘を繰り広げすぎて信用がなくなりそう」という理由で、九成が食べることになった。
俺？　シャルロットに申し訳が立たなさそうだから引き付け起こしたよ。慣れてない人に救急車を呼ばれかけたよ。

冥革動乱編　第八話　京都で蠢く影

和地Ｓｉｄｅ

アザゼル先生達に一通りの報告をしてから、俺達は一旦ホテルに戻って休んでいた。
晩御飯に舌鼓を討ち、自分達の部屋で少しくつろいでいるけど、正直気分は思いな。
春っちとベルナ。禍の団の別の派閥に属する二人が、またしても二人して活動していた。
しかも英雄派が主体で動いて冥革連合が協力している計画がある。それもこの京都における異形側の要人を誘拐してだ。
いろんな意味であれなんだが、先生からはリアス部長に連絡することを禁じられている。
まあ、俺達は今回修学旅行できているだけだからな。まずは現地のメンバーが対応するのが基本だとは思うから、その判断で口止めされると断りづらい。
断りづらいけど……どうしたものか。
そしてもう一つどうしたものかといいますと―
「大浴場大浴場大浴場九成大浴場大浴場大浴場食べ足りないから大浴場大浴場お菓子大浴場食べていいか大浴場大浴場大浴場な？」
「イッセー。お前、疲れてるんだ」
虚ろな目で大浴場と連呼しながら合間に俺と会話する、絶対自覚症状がないイッセーの姿に、俺は本気で涙が浮かんできた。
ここまで性欲が豊富だと、もう人生に支障があるだろう。新種の精神疾患とかそんな感じなんじゃないか？
「今度、病院に行こうな？　きっと新しい症例ということで、感謝すら

されるはずだ」
「酷くねえか大浴場！　女湯いっぱい何が女湯病院に行く必要女湯女湯大浴場！」
「そういうところだよ！」
どんだけ見たいんだお前は！
その時だ。俺のスマートフォンに、リーネスから大容量データが入ったメールが送られる。
確認すると「イッセーに見せてあげてぇ。追伸：先生から特例で許可をもらったわぁ」と書かれていた。
あ、エロビデオだ。
「イッセー。とりあえずこれでガスを抜け。会話はそれからだ」
「女湯女湯大浴場!?」
既に人語が変換されている!?
―すったもんだでその三十分ぐらいの映像を見て、イッセーは正気を取り戻した。
「……悪い。修学旅行に覗きをしないのは礼儀がなってないとすら思ったから」
「お前本当に医者に言って薬を処方してもらえ」
ここまでくると戦慄すら覚えるんだけど。
ただイッセーは自覚がないらしく、不満げな表情だ。
「そんな性欲過剰が病気になるのかよ？」
「ないとは言い切れないぞ？　医学の世界は「事実は小説より奇なり」なんて言葉が通用するからな」
実際あってもおかしくない。
そうだな、なんか具体例を挙げた方が……あ。
そういえばこのエロ動画、女優が双子で温泉旅館だったな。
ならこれがいいか。
「例えばバニシングツインってのがあるんだが」
「何それ？　必殺技？」
そう聞きたくなるイッセーの気持ちは分かる。
ただこれ、そんなカッコいいとかいうもんじゃないんだよなぁ。

「双子の妊娠初期に起こる特殊な症例でな。片方の胎児だけが死亡した際、母体の子宮に吸収されて消えたり、もう片方の胎児に宿ることが起きるそうなんだ。それがバニシングツインらしい」
「……まじか、そんなのあるんだ」
　あるらしいな。
「あとは食べた炭水化物で体がお酒を造ってしまう病気もあるらしい」
「何それ!?」
　まじであるらしいんだよ。
「あとエロい話だと、体が勝手に（ｐｉ―）する病気があるらしい」
「……」
　当事者は真剣に困っているそうだから、鼻血を流すのはやめような？
　そんな感じの話をしていたら、コンコンとノックされた。
　なんだなんだ？
『イッセー君と和地君はいますか？　アザゼル先生が呼んでいます、生徒会の人達と一緒に来てほしいそうです』
「……っ」
　どうやら、状況の説明はしてもらえるようだなっと。

　そんなこんなで連れていかれた料亭で、俺達はセラフォルーさんに迎えいられた。
「……やっほーみんな！　とりあえず話も長くなるから、ちょっと食べてからにしましょうね」
　そんな感じで京料理を食べてから、本題に突入。
「……で、だ。イッセーに妖怪が襲撃をかけて、和地とエンカウントした禍の団が介入してきた件だが、割と面倒なことになっているらしい」

「本当なら、私が仲介する形で須弥山(しゅみせん)と京の妖怪が会合をする予定だったのよん」
　ところが急にトラブルが起きたらしく、京都の妖怪側と連絡が上手くいってないという。
　イッセーが言うには誘拐とかなんだとか言っていたらしいので、それはつまり―
「禍の団の英雄派が、規模こそ小さいとはいえ一勢力のトップを拉致監禁ってわけ!?」
「兵藤、お前どんなトラブルに巻き込まれてるんだよ!?」
　鶴羽と匙が面食らうけど、そんなこと言われてもって話だよなぁ。
「イッセーもイッセーで大変だけど、和地くんも大丈夫?」
「確かに。カズ君の幼馴染に、あと気になる女の子まで関わってるんだっけ?」
　インガ姉ちゃんとリヴァ先生の気づかわし気な視線は、正直ちょっとありがたい。
　全くだよ。英雄派のベルナはともかく、冥革連合の盟主ヴィール・アガレス・サタンの眷属な春っちまでだ。
　俺の精神面もそうだけど、それ以上に―
「冥革連合は禍の団と同盟結んでいるとは聞いてますけど、あいつらまで他の勢力に積極的に喧嘩を売ってるってことですよね?」
「気になりますね。彼らはあくまで禍の団と同盟を結んでいるだけで、傘下として活動しているわけではないはずですが……」
　俺のボヤキに対して、シャルロットが怪訝な表情で考え込んでいる。
　でもあいつら、頭のねじが外れてるからなぁ。疑問はあるけど、俺達が考えて分かるのか?
　皆もその辺は気になっているのか、空気の重い沈黙が辺りを包み込んだ。
　……が、そこで先生が両手をパンと鳴らして俺達の視線を集める。
「一応言っとくが、これはあくまで情報共有だ。余程の事態になるようなら協力を求めるが、当分お前達は修学旅行に集中しとけ」

え、そうなのか？
俺達は戸惑うけど、そんな時にリヴァ先生は日本酒を一口飲んでから、おちょこを勢いよく机に置いた。
その音で俺達を注目させてから、リヴァ先生は不敵に微笑む。
「学生は学業が本分で、修学旅行は学を修める旅行だもの。段取りや下準備が終わるまでぐらい、大人に全部投げておいていいの。……でしょ？」
その言葉に、先生もビールが入ったグラスを掲げてそれに応じる。
「そういうこった。若いうちぐらい大人に甘えとけ。大人にも仕事させてくれよな？」
まぁ確かに。俺達一応学生だしな。
大人の仕事を奪ってまで動く必要はない。それは正論だ。
だけど……。
「―先生。一つ確認が」
そこで、カズヒ姉さんが片手を上げる。
先生がそっちに視線を向けると、カズヒ姉さんは真っ直ぐに視線を合わせる。
「英雄派はどちらにせよ、私達を敵としてみなしています。そして駒王学園の修学旅行が何時来るかは調べることは可能ですし、分かったうえでことに出た可能性がある。……なら、どちらにせよ私達を巻き込んでくるのでは？」
「……そうなのよねぇん」
と、セラフォルーさんが同意した。
まあ確かに、その可能性はあるな。
ってことは……。
「戦力としては普通に選択しとして考えていてください。どうせ仕掛けられるのなら、最初から戦うことを前提にしていた方がまだ気分よく旅行ができますから」
……そう言いながら、ちらりと俺に視線を向けていた。
というか、殆どのメンツが俺に視線を向けているんだが。
……うん。

「その、気遣い感謝します」
なんか恥ずかしい！
「……ま、その辺が落としどころかねぇ」
先生も苦笑しながら、俺達を見回して声を張り上げる。
「お前ら！　どうせ奴さん達はろくでもないことをしてるんだろうから、巻き込まれたならぶっ飛ばせ！　俺が許す！」
『『『『『『『『『『はい、先生！』』』』』』』』』』

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「曹操、少しいいだろうか？」
「やあヴィール。何かな？」
「あの赤龍帝及び、悪祓銀弾（シルバーレット）が京都の妖怪に絡まれたと聞いた。事前の取り決め通り当面は無視していいのだな？」
「ああ。彼らが京都に来る可能性は高かったからね。ちょうどいいからゲストとして呼びたいところだよ。……冥革連合（君達）としては不服かな？」
「いや、今の冥界政府の未来を担う者達について、近い距離で見定める機会が来たことは都合がいい」
「へぇ？　転生悪魔な期待の新星とか、嫌ってそうな印象だけど？」
「別に他種族の転生悪魔そのものを全否定するつもりはない。問題は、本来の悪魔に対する優先順位だ」
「なるほどね。まぁ、俺達も特例は認めてるし、そういう言い分は理解するよ」

「問答無用で論外なら、そもそもクラウディーネ達を眷属になどせんさ。だからまぁ、奴らがどれだけの力量を持つかは気になってはいる」
「同感だね。いくつもの追加要素があったとはいえ、シャルバ達三人を同時に相手にする羽目になって返り討ちにしたんだ。油断できる相手ではないし、興味がわく上にそそる相手でもある」
「だから実験のついてにちょっかいをかけると。……慢心していないか？」
「そのつもりはないさ。特に赤龍帝の兵藤一誠は、下手な嵌め手では逆手にとられかねない気がするんだ」
「……というと？」
「消耗を加速させる神器や禁手でばてさせるという提案がされたけど、すぐにでも禁手を解除して倍化のカウント短縮に使われる……とかかな？　何より、彼は想定外の成長を遂げ過ぎているしね」
「確かにな。異世界及び、その最高神が一角の乳神は耳を疑った。そちらのサブリーダーも寝込んだのではないか？」
「それがむしろテンションを上げているよ。異世界進出ができないか真剣に考えている節があるね」
「……チャレンジ精神が旺盛で結構なことだ。……まぁいいが、あとどれぐらいで準備はできる？」
「明後日の夜には実験開始だよ。赤龍帝達もその時はまだいるし、いい夜になりそうだよ」
「是非成功してもらいたいものだ。龍神を打倒することができれば、世界の未来も明るくなるというものだろう」
「むしろ混沌の闇に閉ざされるんじゃないかい？　まぁ、俺達英雄派としても龍神を打倒してみたいというのが本音だけどね」
「個人的には、いずれの前置き付きで必ず打倒すべき存在だ。その一点において全面的に協力したいと思っているからこそ、冥革連合（我ら）は禍の団と同盟を結んだのだから」
「正気の沙汰とは思えないね。赤龍神帝グレートレッドは、世界のバランスを支えているから、冥界にとっても益があるだろう？」

「いや、この世界全ての可能性を閉ざす害獣だよ。龍神は打倒できる存在に貶めねばならないと、俺は常々思っていたからな」

冥革動乱編　第九話

イッセーＳｉｄｅ

俺は早朝、ホテルの屋上に上っていた。
トレーニングはもちろん日課だ。毎日の鍛錬が力になるって分かってるから、修学旅行だからって怠けてられないさ。
ただ、もう先客がいたのには驚いたけど。
「……あらイッセー。もう起きてたの？」
「イッセーもですか、せいが出ますね」
カズヒはともかく、シャルロットまでいるとは思わなかった。
ちょっと目を丸くしていると、カズヒは小さく微笑みながらシャルロットの肩に手を置いた。
「強い目的意識を持ち、常に自分が弱いと戒められる手合いは基本的に成長するわ。そういう意味では、シャルロットは必ず伸びるし実際成長してるわね」
「……私は元々ただの一市民ですし、サーヴァントの都合上身体能力は上がりませんから。常に技術を磨かなければいけません」
へぇ。カズヒがそこまで褒めるぐらい、成果上がってるんだ。
「そんなに鍛えてたのか。っていうか、カズヒって包丁でも戦えるのか？」
「近代軍事戦闘の接近戦ならナイフは割と多用されるわ。ダーティジョブにおいてもその辺にある包丁を使った方が、光の剣や銃を使うよりは変な詮索をされないもの」
……軽い気持ちで質問したら、なんていうかぶっ飛んだ答えが返ってきた。
そういえばカズヒって、元々ダーティジョブ専門の部署にいたんだ

よなぁ。すっかり忘れてたぜ。
　でもまぁ、シャルロットが更に強くなるのかぁ。
「マスターとして、俺も頑張らないとな。俺も鍛え直さないと」
「そ、そうですか？　ちょっと照れますね……」
　あ、シャルロットがちょっと照れてる。
「……やば、可愛い」
「ちょ、イッセー!?」
　あ、思ったことがつい口から出てきちゃった。
　っていうかカズヒはなんで半目をむけてるんだ？
　俺が首を傾げてると、カズヒはため息をついてから軽くステップを踏み始めた。
「まぁいいわ。それなら生身での戦闘の訓練相手になってあげる。シャルロットも、格闘術を仕込んでおいて損はないでしょうしね」
　お、カズヒが鍛えてくれるのか。
　カズヒはめちゃくちゃ強いからな。俺も鎧抜きだと全然勝てない。
　星辰光込みとはいえ、生身でコカビエルと真っ向から戦ったんだ。めちゃくちゃ凄い奴だってよく分かる。
「一応言っておくけど、赤龍帝（あなた達）は表側の顔になる。そういう意味だと裏側のやり口をそのまま使うのは、貴方達の気質に合わないし世間体が悪くて士気が下がるわ」
　そんなことを言うけど、カズヒはちょっと口元が笑ってる。
「だけど、その手の輩がどう戦うのかを知っておくのは備えになる。狡すっからい悪党に寝首を掛かれないよう、ちょっと経験を積んでおきなさい……！」
「よっしゃ！　行くぜシャルロット！」
「は、はい！　……嫌な予感がしますけど」
　そして俺達は模擬戦を開始して―

「あ、イッセーさんもトレーニング……イッセーさぁあああああっん！」
―絶妙に跡が見えないような形で、徹底的にぼこぼこにされました。
くっそぉ！　真っ向勝負ならもっと戦いになったんだけどなぁ！
そういう勝負を仕掛けない奴対策って感じだったから文句も言えない！

和地Ｓｉｄｅ

なんだろう。今羨ましいようなそうでないような、不思議な感じになったぞ？
自主トレとしてこっそり早朝ランニング（フルマラソン）をしてから、俺はお風呂を浴びていた。
まぁイッセーに迷惑をかけないように気を使ってだけどな。……というか―
「ふふ～ん。さぁ、カズ君あ～ん。ほら、インガも」
「か、和地君あ～ん」
「ゴメン。比較的でかい風呂に入りたいなんて言って悪かったから、修学旅行で淫行にふけらせるような真似はマジでやめて」
……インガ姉ちゃんをそそのかしながら余計なからかいを入れないでくれ、リヴァ先生。

そして数時間後、俺達はホテルを出発して京都観光に行こうとしていた。
「流石はホテルの朝食ね。いい生卵を使ってるじゃない」
「卵掛けご飯の美味しさでホテルを評価する人、初めて見たわ」
桐生をマジ引きさせるカズヒ姉さんのＴＫＧフリークっぷりは歪みないな。
「美味しい卵かけご飯でしたのー！」
「いやぁ、いいホテルは生卵も違うじゃんか」
「ふふふ、ここの卵掛けご飯は中々だったわぁ」
……身内に四人も卵かけご飯大好きな人がいるから、引く気力もなくなったというべきだな。
「……あれ？　生卵って世界的に見てゲテモノ食いだって聞いたことあるんだけど？」
「日系っぽいナインテイルやセプテンバーはともかく、なんで完璧外国人な人達まで卵かけご飯でホテル判別してるんだ？」
周囲の人達の疑問はもっともだと思う。
俺もそこについてはかねがね疑問だ。
ヒマリもリーネスも大好きなんだよなぁ、卵かけご飯。いや、どんだけっていうレベルだけど。
とはいえ、荒事に巻き込まれる可能性もかなりあるんだ。今のうちに楽しめるだけ楽しまないとな。

とはいえ―
「これが異教徒の寺か！」
「異教徒の方は凄いです！」

「異教徒万歳ね！」
　―その楽しみ方は間違っていると思うけどな！

「……ではそこのおバカ三人衆。これから説教を始めます」
　金閣寺で失礼な褒め方をした教会三人娘をアイアンクローと三角締めの同時使用という器用なやり方で沈めたカズヒ姉さんによる、説教が盛大にかまされようとしていた。
　ちなみに俺達は抹茶とお茶菓子を堪能するところだった。
　更に言うと、カズヒ姉さんが自分の金でとにかく豪華なものを注文してくれた。……三人以外に。
「阿呆なことをしたペナルティよ。高級和菓子と高級抹茶を堪能する和地達をしり目に、空腹にあえぐがいいわ」
　鬼だこの人。いや、暗部だ。
「いいかしら？　前から思っていたけれど、戦争を仕掛けるわけでもないのなら人様の縄張りでは人様の筋に配慮するのが基本。聖書の教えを信仰しているという自負があるのなら、主の威光に泥を塗るような真似はよしなさ……ちょっと待ちなさい」
　タイマーで３０分ほどセットしたうえで説教タイムを開始するカズヒ姉さんだったが、何かに気づくとタイマーを止め、一瞬で駆け出し―
「……おっぱいおっぱいおっぱらっぱぁっ!?」
「うわぁ!?　痴漢の脛にプロ野球バリの速度で野球ボールが!?」
　なんか痴漢が瞬時に鎮圧されたらしい。
　そして素早くカズヒ姉さんが戻ってきた。
「待たせたわね。さて、それじゃあ続き行くわよ」
「「はい……」」
　一瞬で痴漢を鎮圧したようだ。流石はカズヒ姉さんだ。
　あと殺気が微妙に残っていることから、三人の佇まいが一割ほど引

き締まっている。思わぬ副産物。
「止めた方がいいんじゃないか？」
「いや、確かにあれはまずいからなぁ。俺も涙を呑んで美味しく食べて飲む……っ」
元浜にあえて厳しいことを言うけど、実際ペナルティは必須だろうしなぁ。
魔王の妹が有する眷属でありながら、聖書の神に祈りを捧げることを許されたアーシアとゼノヴィアが、和英を結んでいる神話の寺に失礼な真似をすると魔王様とリアス部長と天界教会に迷惑が掛かりかねない。イリナに至っては転生天使で天使長ミカエルさんの直属だから、尚更だ。ついでに言えば許可ももらっている。
あまりあれなことをすると、本当に外交問題になりかねない。悪意がなければなにやってもいいというものでは断じてないわけだしな。
それとなく賽銭に五千円札ぶっこんで「悪気はないし説教確定だからお目こぼしを」とはしといたけど、ロキみたいなタイプの神が日本にいないとは限らないんだから、もうちょっと気を付けてほしい。
「っていうか、さっきカズヒが仕留めたのも含めて、ちょっと痴漢多くない？　駅でもそうだし、なんかネットでも「京都　痴漢　多発」がトレンドになってたわよ？」
「俺も新幹線に乗ってる時に訳が分からなくなったからなぁ。京都全体に痴漢化星辰光でも展開されてるとか？」
桐生と松田の会話がシフトしたけど、そっちも気になるな。
大欲情教団辺りが何かした可能性もありそうだ。あいつらなら強制発情能力なんていう星辰光を獲得しても、全く驚かないというか納得しかできない。
っていうかそんなに痴漢が多いのかよ。また出くわすかもしれないし、念の為ちょっと確認を……ん？
「おいおい。この一週間で三件も京都市の寺社仏閣が放火されてるぞ」
物騒な話もあったもんだなぁおい。
ってちょっと待て。匿名の掲示板に「すいません。黄色人差別テロ

リストを密入国させました」なんて書き込みが数十件ぐらいされてるとかいう話まであるぞ？　それも京都関連のばかりに。流石にいたずらだと思うけど縁起が悪いな。
全く。折角の修学旅行だってのに……とんだ……迷惑……。
「皆、気をつけろ」
「そうみたいだね」
俺の言葉にゼノヴィアが真っ先に木刀を構えながら頷いた。
当然だが、オカ研のメンバーは全員が警戒し、陣形をとって警戒態勢に入っている。
……なにせ、俺達以外の全員が眠っているからな。
そして気づけば、妖怪と思われる奴らが何人か姿を現している。
「……伏見稲荷の連中と格好が似てるぜ」
「となると、またイッセー君を襲いに来たのかしら？」
イッセーとイリナがそう言いながら仕掛ける体制をとるが、そこにカズヒ姉さんが一歩前に出て手で制する。
「落ち着きなさい、殺気がないわ。……一応言うけど、許可証は持っているから仕掛けないでほしいわね」
確かに、なんていうか微妙な表情なだけだな。敵意とか戦意とか、そういう剣呑な空気はさほど感じない。
なんていうか、どうしたものかと戸惑っていると、足音が響いた。
「大丈夫です皆さん、彼女達は敵ではありません」
と、ロスヴァイセさんが駆け付けると、俺達を見回した。
「端的に言えば誤解は解けました。それで、直接会ってお詫びがしたいで来てほしいと」
「……お詫びねぇ？」
ロスヴァイセさんの説明に、カズヒ姉さんは肩眉を上げる。
「普通ならそちらからくるのが筋でしょうに。……よっぽどお偉いさんがやらかしたってことでいいのかしら？」
そう詰問するように尋ねるカズヒ姉さんに、妖怪達の一人が静かに頷いた。
「その通りでございます。その為、我々が住まう裏京都にご足労願い

たいのです」
つまり、京都の妖怪がいる本部に来いと。
俺達が顔を見合わせていると、申し訳なさそうに妖怪の方々がお辞儀までする。
「京の姫君である九重様は痛く反省しております。ついては正式に謝罪をいたしたいので、ぜひ裏京都までおいでいただきたい。既に総督殿や魔王様はついております」
……姫君、か。
そもそも、京都の妖怪を束ねているのは九尾の狐だという。そしてイッセーに仕掛けてきた妖怪を率いていたのも、キツネ耳の少女だったと。
ってことは、もしかしなくても。
「……盟主の娘が暴走したのね。……それはこっちから出向かせたい輩が多いでしょうね」
カズヒ姉さんが額に手を当てる気持ちもよく分かるってもんだよ。

冥革動乱編　第十話　無敵の言葉「自害の用意あり！」

和地Ｓｉｄｅ

「うらめシャベッ!?」
「人にちょっかいをかけるなら、張り倒される覚悟を持ってから仕掛けることね」
いきなり提灯から口と目が生えてきたと思ったら、パチンコ玉を叩き込まれて悶絶。カズヒ姉さんは見もせずにぶった切った。
というか指弾（しだん）しかも異形に通用するレベル。小動物なら確殺する威力まで習得とか、この人本当に凄いな。
「ルールの基本は「私はこんなことをしないから、こんなことをしないでください」よ。嫌がることするなら、やり返される前提でしなさい」
「……も、もうひわへありまふぇんれひは」
ろれつが回ってない謝罪を聞き流しながら、カズヒ姉さんは肩をすくめた。
「姫君が招いた客人に対する礼儀がなってないわね。うるさい手合いは本気で殺しにいきかねないから、少し風紀を引き締めるべきじゃないかしら？」
「申し訳ありません。なにぶん妖怪というものは、人を驚かすのが大好きなものでして……」
めっちゃ恐縮している妖怪の人を先頭にして、辿り着いたのはなんていうかでっかいお屋敷。
というか、こんな広い空間があるとは思ってなかった。
冥界に近い異空間なのだろうかと、俺は首をかしげるが、まあそこはいいだろう。

「やっほー！」
「お、来た来た」
と、そこにいるのはセラフォルーさんとアザゼル先生。
そして、小さな狐耳の女の子。
もう見て分かるぐらいシュンとしている子だけど、確かにどこか気品があって、お偉いさんの子供っぽいことが分かる。
ちらりとイッセーを見ても、イッセー自身覚えがある表情だから……つまり彼女が。
「先生、この子が例の？」
俺が尋ねると、アザゼル先生は頷いた。
「ああ。京の妖怪をまとめる九尾の狐である八坂の娘、九重（くのう）だ」
先生がそう言いながら、九重と言われたこの背中をぽんと叩くと、一歩前に出た。
「私は京都の表と裏を束ねる者、八坂の娘、九重と申す」
で、しっかり頭を下げる。
「先日の一件は申し訳ない。おぬし達の事情も知らず、こちらも気が立っておった故に襲ってしまった。どうか、許してほしい」
……とりあえず、春っちやベルナはしっかり自分達が下手人だと理解させてくれたみたいだな。
ちらりとイッセーの方を見ると、既にイッセーはかがみこんで九重と視線を合わせていた。
「……九重は、お母さんが心配だったんだな？　で、勢い余って俺達を襲ったってわけだ」
「う、うむ……」
そう答える九重に、イッセーはにっこりと微笑んだ。
「そっか、本当にお母さんが心配だったんだな？　結果的には間違ったみたいだけど、その気持ちは大切だし、ちゃんと謝ったんだ。なら、俺は何も咎めたりはしないよ」
……まぁ、イッセーが許すっていうなら俺達はいいんだが。
問題は……。
「言いたいことは分かっているわ」

うん、俺達の視線を受けるまでもなく、カズヒ姉さんも自覚はあるらしい。
この人デフォルトで厳しいからな。正義の味方で必要悪で、尊ばれるべき正義の為なら憎まれ役もいとわない。
こういう案件においては、憎まれ役を買って出てでもしっかり釘を刺すタイプではある。
イッセーも微妙に庇う体制で、九重の肩に手を置いた。
「……スマン、ちょっと説教タイムにはなる」
「う、うむ！　それは当然だから……その……」
そんな感じで震えてる九重だけど、カズヒ姉さんも片膝をついて視線を合わせる。
「当事者がいいと言っているうえ、怪我人も出てないのは確かに事実。……だけど、そうでなかったらこれは大問題だということは分かるわね？」
真っ直ぐに、だけど睨み付けることなくカズヒ姉さんは見つめながら告げた。
怒っているわけでもなければ、脅しているわけでもない。だけど同時に、それとなくプレッシャーを感じる威圧感がひしひしと。
むしろちょっとビビりながらでも、真っ直ぐそれを受け止めている九重を褒めてあげたい。この子、大物になれる素質があると思う。
「場合によっては、京の妖怪が戦争に巻き込まれることにもなった。それどころか返り討ちで殺されても文句は言えない。そうでなくても人によっては、詫びと称して搾り取れるだけとってくる奴だって出てきかねない」
つらつらとやばくなる場合の可能性を語ってから、カズヒ姉さんは改めて九重の目を覗き込んだ。
「信徒（わたし）としては真に悔やんでいるのが分かったし、イッセー（当事者）もこう言っているから事を荒立てるつもりはない。だけどそれがとても運がいいことなのは忘れないこと。……いいわね？」
「う、うむ！　心するのじゃ！」
しっかりと頷く九重に、カズヒは苦笑しながら頭をなでると立ち上

がった。
「ふぅ〜。大王派、それもフロンズ・フィーニクスみたいな例外枠じゃない相手だったら、徹底的につるし上げで、政治的に属国同然の扱いの条約を結ばれていたわね。当主の娘の暴走をいさめることもできない手合いじゃ、しのぐことなんてできないでしょうし」
そんな風に、カズヒ姉さんはわざとらしい大きな声を上げる。
とてもよく通る声で響いたので、なんていうか遠くから殺気じみたものまで向けられる。
その方向に、カズヒ姉さんは鋭い目を向けた。
「子供が馬鹿なことしないようにたしなめるのは大人の仕事で、上の者が愚行を働かない様、我が身をとして戒めるのは部下の務め。私を嫌う暇があるなら、自分の至らなさを恥じ入りなさい」
……あ、やっぱりカズヒ姉さん厳しい。
幼子の九重にはあの程度だけど、部下の人達には容赦なかった。
わざと相手を選ぶ為に喧嘩売ったなこの人。まじでバトルことになったらどうするんだ―
「あと喧嘩を売るなら容赦はしないし、やりすぎることも考えているから、そこのところは覚悟しなさい。……当方に、引責自害の用意あり！」
―脇差に毒薬当然服毒自殺用。すぐ死ぬが楽には死ねない類まで持ってるよこの人。
いつものことだが覚悟完了してるなぁ、オイ。常在戦場というか、死を想え（メメント・モリ）というか。仮にも聖書の教えに属していて、大罪確定の自決の準備万端ってどうよ？
そんな堂々とした覚悟の決めっぷりに、殺気も一気に引っ込んだ。
下手に喧嘩を売ったら、自決して責任をひっかぶること大前提で殺しにかかりかねないと悟ったらしい。相手がそこまで考えることを踏まえての発言ではあるだろうけど、万が一は本当にする気だから効果が抜群すぎる。カズヒ姉さんマジダーティジョブ。自分がトカゲの尻尾になることを当然として動いてやがる。
俺達が軽く引いていると、足音が響いた。

「ははは。まったくもってその通りであり、ゆえに我が身の不徳もお詫びしましょう……」
そう言いながら現れるのは、一人の烏天狗。
古傷の跡がいくつもある、歴戦の武闘派なのがよく分かる人物だった。
その姿を見て、九重は慌てて駆け寄ると体を支える。
「三烈（さんれつ）！　無理をしてはいかんのじゃ！」
「酷い怪我……っ！　すぐ治します！」
アーシアも駆け寄って回復をする中、三烈と呼ばれた烏天狗は、目を伏せて深く一礼する。
「この京都で軍事の一部隊を司る、三烈と申す。……恥の上塗りの覚悟のうえで、どうかお頼み申し上げる」
見れば分かるぐらい、この男は出来る。
そんな男がつい最近レベルで深手を負い、更に長の八坂が行方不明。
なるほど、な。
「どうかお力をお貸しいただきたい。八坂様を、助けてほしいのです……っ」
春っち、お前もこれに関わってるっていうのかよ……っ

Other Side

その後、屋敷の一室にて事情が説明される。
京の妖怪を束ねる九尾の狐、八坂が須弥山の帝釈天から送られた使いと会談する為に出立したのは数日前。
しかし会議の席に八坂は姿を見せず、不審に思い調べ始めた妖怪達

は、深手を負った三烈を発見する。
三烈は部隊を率いて八坂の護衛を務めていたが、しかし突如霧に包まれた結果、悪魔や人間の集団に囲まれたとのこと。更に全員が上級悪魔に匹敵する使い手であり、部下の殆どは討ち取られ、自らも聖なる力を放つ槍によって深手を負わされたという。
一心不乱に戦うも、気づいた時には八坂は捕まり用無しとばかりに霧によって放逐される。そして発見されて、今まで静養を余儀なくされた。
そしてその間に九重達が半ば暴走気味で怪しい人物を探していたのだが、そこにイッセー達を見つけて仕掛けてしまったのが例の一件となる。
英雄派や冥革連合はそういう追跡を潰す為に、わざと釣り上げる為に何人かを京都に送り込んでいたらしい。その一組が成田春奈とベルナ・ガルアルエルということになる。
そこまでがまとまり、一応は誰もが難しい表情を浮かべていた。
「まぁ、三大勢力(俺達)の時しかりロキが動いた一件しかり、いがみ合いの関係から和平に動くと、反発や妨害の動きは生まれるもんだ」
「今回は隙をついたテロリストってことなのねん。私達と同じ感じみたいね」
アザゼルやセラフォルーが経験もあって告げれば、カズヒ・シチャースチエは額に手を当ててため息をつく。
「そして私達の時はヴァーリが内通者になったわけだけれど、今回もそこは懸念した方がいいでしょうね」
その言葉に九重は目をむくが、何か言う前に三烈が手で制した。
「そうであろう。京に住まう妖怪も、百や二百では聞かない数がいる。当然、その中には一人や二人ではない不満分子がいることだろう」
「それを見つけて餌で釣れれば……ね。最悪なことに、おあつらえ向きの能力を持ってるやつが英雄派に入るわけだし……っ」
カズヒが奥歯を噛み締めて示唆するは、九条・幸香・ディアドコイ。
己と志を同じくしうる者を見抜くだけでなく、応用すればある程度の読心ならぬ見心ができるだろう、覇王の魔眼しかも非常に高ランク

の黄金の魔眼の保有者だ。彼女の存在は難敵だろう。
内通者になる者を探し出し、かつそそのかすのには相応の難易度がある。外れればそこから人が出てきかねないし、不満分子がいてもそれが火種になるほどのものかどうかという懸念事項がある。
だが、幸香なら見れば分かることだろう。何より―
「神器や術や星辰光と、そういう一品物の異能を持っている奴がいてもおかしくないもの。……イッセーの乳語翻訳（パイリンガル）も似たようなものだし」
「こいつのは特殊すぎるだろ」
「酷くない!? 二人揃って酷くない!?」
軽く茶化されたイッセーが思わずツッコミを入れるが、それで空気がなごむほどにはならない。
「既に教会からデュナミス聖騎士団が一部隊派遣されることになってるのよん。ただ、場合によっては皆にも手伝ってもらうからよろしくね？」
「おぉ、デュナミス聖騎士団か！ 教会も本腰を入れるんだな」
セラフォルーの補足説明に、ゼノヴィアが目を見開く。
教会が誇る精鋭部隊、デュナミス聖騎士団。共闘した経験もあり縁者もいる彼らの存在に、少し心強くなるが、油断はいけない。
そんな風に戒めたのか、和地はちらりと三烈に視線を向ける。
「万が一見かけるかもしれないので、一応八坂姫の写真とかありませんか？ 九重にどことなく似た外観だとは思うんですが、さっぱりですから見落とすかも」
「おぉ、これはすまなかったな」
三烈はぽんと手を打つと、近くの妖怪が大きめの巻物を広げる。
そこには、九重と面影が似通っている女性が移っていた。
一誠が目を見開いて微妙に痙攣しているが、オカ研関連者はいい加減慣れているのでほぼ無視した。
八坂の姿に劣情を本能で浮かべてしまい、シャルロットに対する誓いからひきつけを起こしかけているのだろう。いい加減慣れすぎて、この程度で一々騒げなくなっている。アザゼルに至っては妖怪達に

堕天使パワーでプロップを出して説明していた。
「八坂姫は京都からはまず出てないと考えていい」
と、アザゼルがはっきりと告げる。
「なんで分かるんです？」
「九尾の狐は京都一体の気の流れを統括してバランスを保っているからだ。彼女が殺されてたり遠くに連れ出されているのなら、バランスが崩れて大騒ぎになってるはずだ」
イッセーに対してアザゼルはそう告げる。
それだけ八坂が重要な存在であり、強大な存在であることの証明。裏を返せばそんな相手を連れ去るほど、禍の団は本気で活動していることの証明でもある。
それでも安全が確保されているという保証にはなる。それゆえに空気が僅かに緩み―
「……いえ、それは楽観視しすぎかと」
―カズヒ・シチャースチエはそう釘を刺す。
注目を集める中、カズヒは少し表情を険しくしながらも地脈の流れを指でなぞる。
「超一流の魔術回路持ちなら、地脈の流れを繋げることも可能です。禍の団が事前にそういった場所を用意して、こちらの油断をついている可能性は十分あるかと。……後でリーネスに調べてもらってください」
「なるほどな。それに魔術回路持ちは一芸特化になりやすいし、得意分野じゃ俺達の度肝を抜いてくる。……他に懸念事項はあるか？」
納得したアザゼルに、カズヒはちらりと九重を見る。
涙を浮かべている彼女を見て、カズヒは奥歯を食いしばった。
これだけで、最悪の予想を浮かべるには十分すぎる。
「……三烈さん、その、九重を―」
「構わぬ」
一誠の気遣いを、九重はあえて遮る。
そして小さく震えながらも、まっすぐにカズヒを見た。
「……今ここで伝えてくれ。覚悟をした方がいいのじゃな？」

「……その覚悟に敬意を」
カズヒは目を伏せ頭を軽く下げると、真っ直ぐに九重を見つめながら、あえてはっきりと言う。
「いわゆる死霊魔術（ネクロマンサー）型月的には死体を材料にマジックアイテムが作れる系統。指を材料にホーミング呪殺弾とか作れるに類する者なら、強い特性を持つ異形や妖魔の死体から礼装を作り出せます。……万が一レベルですが、地脈が乱れないように一部だけ加工されている可能性も……覚悟をするべきかと」
その言葉に、九重は目を伏せ和地達も息をのむ。
それを可能とする魔術回路保有者の恐ろしさも痛感し、そして事態は決して楽観視できないということも理解できる。
そのうえで、更にカズヒは覚悟を求める。
「……続けて言えば、要人を誘拐して声明発表も親族への通達もない以上、身代金や交渉を目的としてない可能性は高いです。おそらく、八坂姫そのものが目的でしょう」
八坂そのものが目的である場合、カズヒの懸念は更に可能性が高くなる。
八坂が協力を拒否した場合、英雄派が手段を択ばないことはこれまでのテロで誰もが悟っている。まして魔術回路保有者ならそういったことができる場合があると分かっているのなら、最悪の予想はこの場の誰よりも重く受け止めているだろう。
だからこそ、そんなカズヒの懸念は十分考慮するべき事態であると誰もが痛感する。
「……可能な限り楽観視して、奴らが堕天龍（ダウンフォール・ドラゴン・スピア）の閃光槍じみた人工神器を作ったからコアにする。最悪の場合は……既に腑分けされて礼装に、か」
アザゼルがあえてそれぞれの方向で極まったパターンを告げ、そして目を伏せる。
「……すまねえが、妖怪側もこっちも人手が足りねえ。対禍の団ではお前達の協力を求めることは確実だ。ここにいないメンバーには俺が伝えておくから、旅行を満喫してもいいが、心の準備だけはしてお

いてくれ」
アザゼルの言葉に、決意は誰もが決まっていた。
涙を目じりに浮かべながら目を伏せて耐える九重の姿。
自分達の修学旅行を乱し、京の妖怪達を不安にさせ、小さな子供を泣かせている。
オカルト研究部は、そこに義憤を浮かべることができる者達だ。
「「「「「はい、先生！」」」」」

冥革動乱編　第十一話　幕間風小休止

イッセーＳｉｄｅ

俺達は裏京都から戻ると、松田達を起こして旅行を再開してからホテルに戻った。
最悪のパターンが最悪すぎた所為で、ちょっと空気が重くなっちまったな。元浜達が気にしてたのはちょっと悪かったかも。
桐生も何かあったと思ってるみたいだからか、アーシア達を連れてゲームコーナーで遊んでるみたいだ。松田と元浜はカズヒに連れられて、戻ってきた女子達にパシリになってイメージ回復に努めてる。
あと九成は九成で、外の空気を吸ってくるとか言って出て行った。
あいつもやっぱ色々と気にしてるんだろうか。それともこっそりインガさんやリヴァさんとあんなことやこんなことを……っ。
そうだとしたら許せねえ。もてない男と同室なのに、なんでそんな神経を逆なでする行動を……っ！
耐えろ、耐えるんだ俺！　とにかく耐えて耐えるんだ！
シャルロットに恥じない俺でいる為に、覗きはダメだ！　駄目なんだ―

その瞬間、あまりにも色鮮やかな桃源郷が、俺の目に見えた。
え？
ナニコレ？
これ、暴走した妄想なのか？
いや、これは……現実（リアル）!?

「お、いたなイッセー！　子作りに来たぞ！　さぁ、イリナやアーシアも混ざるといい！」
「いや、混ざったら天使（私）は堕天するんだけど!?」
「気合で乗り切れ！　イッセーはいい男だし、赤龍帝の子供を授かったらミカエル様の為にもなるだろう！」
「ぜ、ゼノヴィアさん駄目です！　九成さんも帰ってくるかもしれないのに、そんなエッチなことは……」

聞き覚えのある声が聞こえてくるけど、それを理解する余裕は俺にはなく―

「ブバッハァ！」

―これまでにない量の鼻血を出して、俺は目の前が真っ暗になった。

「いやぁあああ!?　ちょ、イッセーくん、二人が見てる……だめ、私堕ちちゃう……」
「い、イッセーさん!?　一体何が!?　え、エッチなものはなさそうですし……とにかく回復を！」
「ここで私でもアーシアでもなくイリナとはね。天使も狙っていると

は流石だな、イッセー！」

あれぇ？　なんでアーシア達の声が聞こえて……くる……んだ……ガクッ！

和地Ｓｉｄｅ

なんか上が騒がしいけど、何かあったのか？

俺は首を傾げながら、ホテルのラウンジで紅茶を飲んでいた。

重い話もあったので気分を切り替えたかったし、あとイッセーに教会三人娘が突撃しそうだったから気を利かせてみた。あと一時間ぐらいしたら電話でイッセーに確認しようと思っている。それまでは此処で時間を潰そう。

ティーラウンジは色々な茶葉が置かれていることを確認していたから、ちょっと飲んでみようと思っていたんだ。より具体的に言うなら、リヴァ先生は茶葉にもコーヒー豆にもそこそこ造詣があるみたいだから、俺も少しは詳しくなってみようかと思っている。もちろんリヴァ先生にも直接教えてもらう気だけど、多少は自主学習をした方がいいだろう。

睡眠に悪影響が出ないよう、今回はあくまでお試しで二杯ほど飲むつもりだ。時間を空けるつもりだから文庫本を持ってきているし、時間をかけるわけだから、ケーキセットを頼んでゆっくりと過ごすつもりだ。

……しかしなんか騒がしくなってるな。上の方で何かあったのか？

俺が首を傾げていると、足音が近くで小さく響いた。

「隣、いいですか？」

その声に視線を向けると、そこにはシャルロットが。

「どうしたんだ、シャルロット。イッセーは部屋だけど？」

「確かに私はイッセーのサーヴァントですけど、個人の時間はとりますよ。時間潰しに紅茶を飲もうと思ったら見かけたので、いい機会なので一緒にお話でもと」

あ～、なるほど。

確かに俺達同じ屋敷に住んでいるけど、人が多いから割と付き合いに偏りが生まれやすいしな。

シャルロットと一対一で会話する機会はなかったし、いい機会だから俺もそれでいいか。

「では、注文が来るまで少し食べてもいいですよ？」

「そうですか？　それではお言葉に甘えさせていただきます」

……そんな感じで紅茶を飲みながら、俺達はふと上を見上げる。

「それにしても騒がしいな。シャルロットは何か知ってるか？」

「いえ。実はおみやげ物コーナーを物色してからだったので、上の方にはかれこれ一時間ほど行ってないんですよ」

なるほどなぁ。

まぁ、本当にやばいことになるならこの程度で済むわけないか。何より上にいるカズヒ姉さん達がすぐに連絡をしてるだろ。

一応確認するけど、スマホは忘れてないし特に着信履歴も増えてないな。

なら大丈夫だろう。俺も一応学生だし、あまり揉め事に深入りするわけにもいかないしな。

……さて、とは言っても何を話したらいいものか。

「……そういえばイッセーは常々努力しているけど、今の努力ってどんな感じなんだ？　確か残留思念と話そうとか言ってたけど」

そんな感じのことを言っていた。

覇龍を何度か使ったことで、赤龍帝の籠手の残留思念が何かしらの反応を見せているとかいないとか。で、交流を持てないか試みているらしい。

つい先日には、花婿試験としか思えない儀式をクリアした際、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）のブラックボックスを解除してもらったとか言われている。ちょっと試合とかで卑怯ではないかとも思ったけど、その辺は調整できるから大丈夫らしい。

とは言ってあまり上手くいってないらしいが、その辺はどうなんだろうか。

シャルロットも紅茶を一旦置くと、少し眉間にしわを寄せていた。

「芳しくないですね。一応一人とは接触できたようなんですが、その後とんでもないことになっておりまして」

「へ？」

また想定外なことが起きてるんだなぁ。

と、何故かシャルロットはこっちを怪訝な表情で見ていた。

「……というより、イッセーから聞いてませんか？　可能性が飛んで行ったそうなんです」

……。

「すいません理解不能なんですけど？」

あいつどんな事態になってるんだ!?

乳神の時点で意味不明なのに、別ベクトルで意味不明なことになるなよ。あいつはいったいどこに行く気なんだ。

シャルロットも思い出しただけで頭が痛くなったのか、額に手を当ててため息をついていた。

「なんでも京都に向かっている途中の出来事ったのですが、伝えてないとはどういうことなんでしょう？　報告連絡相談は重要なんですから、隣にいた和地さんにこそ伝えるべきでしょうに」

「あ～。たぶんそのタイミングで松田がアレになったんだなぁ」

インパクトがありすぎて、すっかり抜け落ちてたんだろう。

「っていうか、ここ数日痴漢との遭遇率が高くて怖いんだが。松田のあの精神状態、今にして思えば痴漢共に近かったぞ」

いくら痴漢でも、あんなゾンビみたいな状態には普通はならない。流石にあれが痴漢のデフォルト扱いは、痴漢に失礼だろう。
……。今日、半ば冗談で聞いた「そういう星辰光」が本当にありそうで怖い。
っていうか、あの変態集団ならそういう星辰光に目覚めていてもおかしくないしなぁ……。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、夜のビルを飛び跳ねる戦いが繰り広げられていた。
「させないわ！　まだ、祝福を広めたりないもの！」
そう返す追われる女性は、振り返り様に目から強大な光を放つ。
その破壊力は、天使の光力に換算すれば最上級クラス。直撃は上級悪魔でも欠片も残らず消滅する威力がそこにあった。
だがしかし、追撃する三人の女性達は素早く回避する。
一人は少々恐怖心を見せていたが、残る二人は正確に回避する余裕があった。
それに舌打ちをしながら、女性は距離をとり続ける。
既に緊急用の後詰の部隊の近くにいる。
まずは合流。そしてそこから、人々に救済の光景と視線を広める為、奮起して―
「同志逃げろ！　これは罠だ！」
―その気勢を、合流予定の仲間達の声が切り裂いた。
ふと気づけば、彼らは二倍近い数に包囲されている。
そのオーラが追撃してくる者達に似通っているものもあることに気づいて、女性は歯噛みする。

想像以上に大規模な人数による行動らしい。それも、力の性質が近いものまでいるという。
誘いこまれたのは自分の方だと悟り、だが決して諦めない。
「諦めるものか！　そうでしょう、みんな！」
その強い意志が込められた言葉に、戦士達は戦意を蘇らせる。
「……そうだ。例え我らが死のうとも、同志郭清（かくせい）は生かして返さねばならない！」
「真菜子先輩は死んでも守る！　皆、気合を入れろ！」
その強い同志達の決意に、郭清真菜子（かくせいまなこ）は死力を尽くすと決意した。
「創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌めく流れ星」
故に、ためらうことなく本日二度目の星を開帳する。
それに舌打ちするのは、追撃してきた女性達。
特に先頭を飛ぶレイダーと異なる装甲に身を包んだ女性が、囲んでいる味方に告げる為に吠える。
「気をつけなさい！　奴の星辰光は拡散性と付属性に特化した視界共有能力。視界に頼らない戦闘で仕掛けないと、死ぬわよ！」
その声に警戒するが、もう遅い。
「超新星（メタルノヴァ）――月女神（ブレッシング・アルテミス）よ、汝成すべきは恩讐にあらず」
その言葉の意味をいやというほど悟り、追撃する女性は怒りの声を上げた。
「この変態覗き強制女が。……視界を強制ジャックして異性の大欲情を生中継するな！」
盛大に犯罪行為を告げ、追撃してきた仮面の戦士―仮面ライダー道間ダイナマイティングライオン―こと、カズヒ・シチャースチエは突貫した。
「いや、あの天使の鎧（エンジェル・アームズ）、絶対に禁手になってるから気を付けて！」
「亜種発現して亜種禁手とか、凄いことになってるしね」
そしてついてきたインガとリヴァも参戦し、戦闘は苛烈となる。

変態集団による、視界ジャックを利用した覗き強制事件。
あまりに意味不明な事態により、混乱を避ける為にかん口令が敷かれていた事件の犯人が打倒されるまで、あと三十分。

冥革動乱編　第十二話　お酒は飲んでも飲まれるな！

和地Ｓｉｄｅ

「……寝不足と二重のストレスの三弾コンボで、流石に肩が痛いわね」
「お疲れ様、カズヒ姉さん」
俺はそっと、カズヒ姉さんの肩に手を置いた。
なんでも向かいのホテルで例の変態軍団が、「視界共有能力の星辰光で、男女それぞれの風呂場にいる同志の視界を共有させる」などという真似をした模様。
位置取りから範囲内にイッセー達数名が巻き込まれて、それに気づいたカズヒ姉さん達が急行して追撃戦を繰り広げたが、逃げられてしまったらしい。
なんて恐ろしい変態集団だ。騒がしいと思ったらそんなことがったのかよ。
ちなみにイッセーはひきつけを起こした上出血多量だったが、何とか復活している。あとイリナが堕天しかけたが、こっちも何とかしのいだみたいだ。
イリナの視線がちらちらとイッセーの方に行って、顔を赤くしたりしている。あ、これはイリナもかなりやばいな。
っていうか俺も呼んでくれよ。インガ姉ちゃんとリヴァ先生まで連れて行ってるんだから俺も呼んでくれよ。のんきにお茶飲んでた事実に俺のメンタルは割と削れてるよ。
ちょっと恨みがましい視線を向けるけど、カズヒ姉さんはそっぽを向いた。

「……慌ててたのは認めるわ。こっちも割といっぱいいっぱいだったもので……ごめんなさい」
まぁ確かに。カズヒ姉さんも割と余裕がない時はあるよな。
というより、カズヒ姉さんは余裕をもってどうにかするタイプではない。どちらかというなら常に手を抜かず真剣にかつ本気で事に当たるタイプだ。
だからまぁ、そういうこともあるんだろうけど―
「インガ姉ちゃんはともかく、リヴァ先生は気づいてくれそうだったんだけどなぁ」
―リヴァ先生はそういう余裕はありそうな気がするんだけど、なんでだ。
俺がため息をつくと、カズヒ姉さんは何かに気づいてポケットを探り始めた。
「ぁあ、そういえばリヴァさんからこんなのを渡されてたわ」
そんな言伝で託した手紙を、俺とカズヒ姉さんは覗き込む。
―本命はそっちじゃないでしょ？　優先順位は作らなきゃ駄目よ？―
……俺とカズヒ姉さんは、顔を見合わせる。
「大人の余裕って、こういうことを言うのかしら」
「女性に年齢はタブーだけど、年季の差だよなぁ」
なんていうか、駆け引きで勝てる気がしない。
お互いに苦笑していると、なんか急にドンって感じの音が連続してなった。
振り返ると、そこには連続で壁に頭突きをかます元浜の姿が!?
「落ち着きなさい！　何があったの!?」
「しっかりしろ元浜！　お前までか!?」
松田みたいに暴走しかけて理性を取り戻そうとしているのか!?
俺とカズヒ姉さんがそう思って取り押さえていると、松田と桐生のため息が聞こえてきた。
「「いや、ロリコンが暴発しただけだから」」
というと？

首を傾げる俺達の視界に、九重の姿が見える。
あ、そういうことか。
「そういえば、今日は貴女が道案内をしてくれるんだったわね」
「うむ！　京のことなら任せるがよいぞ！」
そんな風に自信満々で元気よく頷くところは、年相応かつ素直でいい子だ。
それが暴走してイッセーを襲撃とか、それだけお母さんのことが大事だったということなんだろうな。
……カズヒ姉さんの微笑に苦いものが混じっているのは、あえてスルーする。
そんな子供に母親がただ殺される以上の悲惨な目にあっている可能性を告げる酷さは、カズヒ姉さん自身がよく分かっているだろうしな。俺からあえてつつくことはない。
できれば、プライベートな時に愚痴ぐらい聞いてあげたいんだけど、たぶんしてくれないんだろうなぁ。
絶対リーネスか鶴羽に吐き出すだろうしなぁ。ちょっと二人が羨ましい。
まぁ、今日は素直に京都旅行を楽しむとするか。
その方が、九重も気がまぎれるだろうし……な。

そんなこんなでお寺を回っていたりすると、中々面白い物を見れてしまっている。
「……本当に、場所を変えてもこっちを見てる風に見えるな」
天龍寺では中々面白いのが見れたな。
俺達がなんていうか感心していると、首を捻っている人が隣にもいた。
「……なるほど。目の錯覚というものは奥が深い。いや、奥が深いのは心というものか……」

ニットの帽子を深めに被っているその人は、俺達とほぼ同じタイミングで観光していた人だ。
な、なんか真剣に考察しているな。……あ、人にぶつかりそうだ。
「おーい、ぶつかりますよー」
俺が声をかけると、その人はハタと気づいて足を止める。
おしゃべりに夢中でゆっくり歩いている女性達にぶつかりそうだったけど、すぐに気づいたようだ。
「これはすいません。考え込みすぎていました」
「気を付けた方がいいですよ？　お寺でうかつなことをしたら、天罰が堕ちそうですから」
そんな風に桐生が言うけれど、何故かその男は眉を顰める。
「……天罰、ですか。まぁ、あるなら落ちるかもしれませんね」
なんか意味深なセリフだな。
ちょっと気になる雰囲気になっていると、その男の人は我に返ったのか苦笑した。
「あ、気を悪くしたみたいですいません。……私はそろそろ知人と合流するので、失礼します」
そう言って慌てて退散する人達に、俺達はちょっと首を傾げる。
「お寺に来ているにしては、なんか妙な感じだったな」
「ま、無神論者や違う宗教の人が寺に来ちゃいけないって法律はねえからな」
「天竜寺ともなると観光名所だもんねぇ。純粋に観光目的なんじゃないの？」
そんな感じで言いあいながら、俺達もそろそろ対の観光名所に行くとするか。
「……ふむ、私の正体を知ったら、あの男は驚きそうじゃな」
「リヴァ先生当たりが正体明かしながら接触したら、失神するかもなぁ。」
そんなことを、俺は九重と言い合いながら、天竜寺を後にした。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「神か。そんなものは今のこの世には存在しない。いるのはそう名乗るただの特異な存在だけさ」
「……やぁ、君も来ていたのかい？」
「いい機会だからな。君達が動く間に特異存在に喧嘩を売るつもりだよ」
「ふふ。君にはちょっと思うところがあるけれど、今は味方だから手は出さないで上げるよ」
「こっちのセリフだ。有効活用こそできるが、お前達のような存在は優先的に間引きたいからね」

「ふふ、その時はお互いに全力で行こうか、疾風殺戮・ｃｏｍの幹部、ヒューマギアのリク」
「同感だ。英雄派首魁、曹操」

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで湯豆腐をお昼に食べ、俺達は新たなる観光に向かうべく、店を出ようとしたその時―

「お、お前らもこの店か。いい店だよなぁ？」

「あらあら、こんなところでなんて奇遇ね？」

……なんでリヴァ先生とアザゼル先生がここにいるんだよ。

あとちょっと待て。

「フリーで来ているリヴァ先生はともかく、あんた仕事中に酒飲むなよ」

思わずガチツッコミを入れてしまった。

修学旅行の監督をしなければいけないのに、真昼間から酒を飲むか、普通。

ほら、松田や元浜も険しい表情を―

「ま、まさか中学時代の恩師とかか？」

「女教師と親密な関係だと？」

―あ☒

命を危険が危ないぞこれ!?

思わずパニックに陥りかけるがそれより先にカズヒ姉さんが肩に手を置いた。

「気を静めなさい。その激情がヘイトの元よ？」

「イエス、マムッ!?」

カズヒ姉さんありがとう。しつけがしっかりしてるようで何よりです。

俺はカズヒ姉さんの頼もしさと恐ろしさを痛感しながら、リヴァ先生の両隣にいるインガ姉ちゃんやシャルロットに同情の視線を向ける。

完全に巻き込まれてる側だしな。真剣に同情しよう。

視線を合わせるだけで心の同情が伝わってくるからなぁ。

「先生！　シャルロットを巻き込んで昼酒なんてやめてください！シャルロットは（前世年齢からくる便宜上年齢が）未成年ですよ!?」

そしてイッセーは食って掛かるが、アザゼル先生は意にも介さない。

「固いこと言うな？　未成年で飲酒なんてちょっとした悪戯程度のことだろ？」
「いや飲んでませんからね？」
さらりと飲酒したことにされ、シャルロットが素早く反論する。
だが先生はスルーして、そのまま再びお猪口をあおる。
野郎、堂々と生徒の前で飲酒しやがった。
「折角京都に来たってのに生徒の引率なんだ。昼ぐらいちょっとは羽を伸ばさせなって」
「……ずっとこんな感じなんです、この人。何度も言っているというのにもぅ……っ！」
そしてロスヴァイセさんが業を煮やしたのか、徳利の方をひったくった。
「いい加減にしてください！　私達は生徒の監督を行う立場なんですよ！」
「なら生徒が苦しくない様きちんと緩めようぜぇ？　そうじゃねえとモテないぞ～？」
アザゼル先生の切り返しに、ロスヴァイセさんの中で何かが切れたと思う。
「させません！　ええい、貴方に飲ませるぐらいなら……っ」
「あ☒」
切れて妙な方向に突っ走ったロスヴァイセ先生が徳利の中身を飲み始めた瞬間、リヴァ先生がめちゃくちゃ焦った声を上げた。
「全員撤収。アザゼル先生を生贄にターンエンドで退避するわよ。……迷惑料込でお代は置いておくわ、お釣りはとっておいて！」
リヴァ先生が俺達を押しながら即座に離脱し、更に万札を五枚ぐらいお会計の場所においておく。
え、どういうこと？　そんなレベルでやばいのか？
「ぷっは～♪　こりぇおいしいですね～、おーりんのくそじじぃのところでによんだのより、なんていうかありにふかみがありますよ～」
酒癖悪ぅ!?　あと酔うの早っ!?
俺達が面食らっている間に、逃げ多くれたアザゼル先生が完全に絡

まれている。
「ロスヴァイセはお酒を飲むとああなるの。……逃げないと巻き込まれるからすぐに離れて」
今までにない真剣な表情のリヴァ先生に促され、俺達は即座に撤収を開始する。
「うぉおおおい！　リヴァ、てめえおぼてろぉおおお！　あ、イッセー達は旅行愉しんでいいから、そいつの場所は把握しとけ―」
「ありゃれるせんせい～？　さっききゃらおさけのんでたくせに、わらしのさけはのめないんふぇすか～？　あぁん？」
とりあえず先生は見捨てておこう。
普段盛大にこっちを振り回す側だからな。たまには酷い目に遭ってくれないと溜飲が下がらない。そもそもあんたが飲まなかったらこんなことにはならなかったしな！
そんなこんなでお店から二十メートルぐらい距離をとってから、俺達はため息をついた。
「ロスヴァイセ先生、酒癖悪かったんだなぁ」
「お酒って人間のリミッターを解放しちゃうらしいしね。たぶん相当ストレス溜まってるんだと思うわ」
松田と桐生がそう言う中、俺は気づくと元浜に近づかれていた。
「っていうか、嫉妬抜きで紹介してくれよ。そっちの綺麗なお姉さん達は誰だ？」
えっと、どう説明したらいい物か。
俺が困っていると、リヴァ先生はむしろいたずらっ子の顔をしながら、インガ姉ちゃんを引っ張って俺にしなだれかかってきた。
あ、これ完全に振り回されるパターンだ。
「ふふ～ん。ロスヴァイセと同郷のリヴァ・ヒルドールヴよ。カズ君を婿にもらおうと日本に来日して、今はイッセー君の家に居候させてもらってるわ」
「「なんと!?」」
知らない組が全員面食らう爆弾を投入してきやがった!?
「ちょ、リヴァさん!?　あの、人が見てるから―」

「ちなみに故郷じゃ一夫多妻は可能だから、そこのインガやカズヒを巻き込む気満々なので、よ・ろ・し・く・ね？」
「……やってくれるわね……っ」
額に手を当てたカズヒ姉さんすら巻き込みながら、何時の間にか俺達は二条橋に差し掛かっていた。
あ、気づくと木場達の班も見えている。
いっそのこと、木場に増援を頼み込むべきか。俺は本気でそう思った。
そう、そんな時―
―ぬるりとした空気と共に、霧が俺達を包み込んだ。

冥革動乱編　第十三話　　我ながらこれにあやかる奴よく作れたなぁと思ってます（ｂｙ作者

和地Ｓｉｄｅ

……急に黒い霧に包まれたと思ったら、景色が一変していた。
一見すると二条橋周辺のままなのだが、桐生達一般人の姿がどこにも見えない。向こうの木場の班も、木場だけが残っているような状態だった。
っていうか霧か。八坂姫が誘拐された時や、アーシアがディオドラとアルケードに誘拐された時のような異常事態だな。
確か、先生の推測では十中八九で神滅具（ロンギヌス）の絶（ディメンション）霧（・ロスト）だったな。
ふと気づけば、すぐにアザゼル先生も駆けつけて……あれ？
「先生、ロスヴァイセさんは？」
「酔いつぶれたんでな。結界を張って寝かしといた」
イッセーにそう答えるけど、どういう状況だよ。
え、あの人もう酔いつぶれたの!?
「……酒に弱すぎじゃない？　その、ヴァルキリーってエインヘリヤルのお酌とかもするって聞いたけれど？」
「信じられないぐらい弱い上に絡み酒なの、あの子」
カズヒ姉さんの視線に、リヴァ先生が遠い目をしていた。
へ、へ～。そうなんだ……。
俺は気を取り直しながら、周囲を警戒する。
「気を付けるのだ……」
そこに、九重が震えながら俺達に告げた。
「この霧は三烈が告げていた霧の特徴と同じだ。間違いなく、母上を誘拐した者達の所業！」
「……たぶんその通りです」

アーシアも静かに腰を落としながら、周囲を警戒している。
「私がディオドラさん達に捕まった時と同じ感覚でした。禍（カオス・ブリゲート）の団の方々で間違いないです」
となると、仕掛けてきたのは英雄派か？
俺達は警戒しながら周囲を確認していると、急に周囲が燃え上がった。
というか、俺達の周囲を炎の壁で囲んだという方が近いな。
『『『

なのは良いことだけど。
「八坂は俺らが頂いた♪　ちょっと実験したいんだ♪　そろそろ準備もできたんだ♪　ついでに挑戦したいんだ♪」
えっとちょっと待て。頼むからちょっと待て。
色々情報が出てきているけど、それを理解する余裕がない!?
ゼノヴィアとかも面食らっているというか、ラップのノリについていけてない。
なんだあのバカとしか思えない男。本当に馬鹿なのか!?
「ちなみに俺は私掠船団(プライベーティア)♪　後継者(ディアドコイ)としてやってやるんだ♪　ヘラストロテスを超えてやるんだ♪　神殿如きでとどまらないんだ♪　アルテミスの奴燃やしてやるんだ♪　だから字(あざな)は捻ってるんだ♪　俺は超越神焼(オーバーヘラストロテス)だぁあああああっ♪」
すいません自己紹介はもっと普通にやっていただきたい！
あとお前どう見ても日本人だろ。百歩譲っても東アジア系列。
俺は全力でツッコミを入れたい。後周囲の炎が熱くて迷惑！
八坂殿の誘拐犯だって宣言しているにも関わらず、九重ですら困惑してる。どう反応したらいいか分からないって顔に書いてある。悪い意味で掴みがよすぎる。
幸い、どうやらラップは一旦終了らしい。バックダンサーも踊りを止めて水分を補給している。
え、えっと……え？
「……後継私掠船団(ディアドコイ・プライベーティア)、人材が個性的すぎないかい？」
木場の感想に凄く納得してる自分がいる。
幸香の奴も大概だし、アーネも大概あれだけど、その上を行くな。
ブレイの奴、めっちゃ常識人なのかあの性格の裏でとんでもないのがあるのかのどっちなんだろうか。
「やってくれるわね。……おっぱいドラゴンの歌で大ブレイクするイッセー君に対抗してラップで挑むなんて。これはミカエル様に頼んで、聖歌隊をバックコーラスにしたバージョンを……っ」
イリナが変な解釈をしている。
あとゼノヴィア。そうだったのかっていう顔をするな。

「なるほど！　そういうことか納得だ！」
納得するなゼノヴィア！　あとたぶん違うと思う！
納得する前にイリナを止めろ。カズヒ姉さんがショットガンを構えているから止めてやるのが親切だ。
「……ヘラストロテスにあやかる奴とか初めて見たぞ。お前、頭大丈夫か？」
そして先生はドン引きの表情だ。
え、知ってるの？
「先生！　誰なんですかそいつ？」
イッセーの質問に、アザゼル先生は頷いた。
「歴史に名を残したいという理由で、女神アルテミスを祀る神殿に放火したろくでなしだ」
本当にあやかるような名前じゃな無いな！
ドン引きの視線を俺達は向けるが、ヘラストロテスは首を傾げる。
っていうかちょっと待て。外観からして日本人にしか見えないんだが？
「何を言ってやがる情けねえ。ヘラストロテスは神話の英雄よりよっぽど素晴らしい栄光を成し遂げた傑物じゃねえか？」
しかもマジ返ししたけど、何言ってるんだこいつ。
いやどこが？
俺達の心は凄くシンクロした。
先生の方をちらりと見るけど、しっかり首を横に振っている。少なくとも先生の知る限りはそんなことはないらしい。
なので視線がヘラストロテスに戻ると、真剣に奴は怪訝な表情を浮かべている。
「神々を冒涜する発想に至り、そして死を恐れず成す行動力！　ヘラストロテスは閃きとそれを成しえる度胸さえありゃぁ、凡俗でも歴史に名を残すことは出きることを示した世界有数の偉人だぜ！　人類の可能性を切り開いた偉人の一人じゃねえか！」
「「「「「「「「「どんな前向きな受け取り方!?」」」」」」」」」
俺達、ほぼ全員が大声でツッコミを入れたよ。

前向きかつ好意的な解釈にもほどがある。ちょっと目が曇ってないですか？
しかもなんかこぉ、スピンしながらポージングまでしている。ついでに言うと隙あらばポーズを切り替えてやがる。
「まさにバーニングな偉業ってやつだ。だから後進はバーニングに超えなきゃダメだろぅ？　神殿バーニングを超えるなら、神様本人バーニングってな！」
バーニングバーニングうるせえよ。
八割がたドン引きの視線を向けられながらも、ヘラストロテスはへこたれない。
「全然バーニングできねえ情けねえ奴らめ。俺の炎がバーニングして、アルテミス燃やしてお前らの魂もバーニングだぜぇファイヤー！」
すいません。お前ちょっと本当にバーニングバーニングうるさいよ。
「いや、たぶんそれで燃え上がるのは怒りの炎だと思うよ？」
「確かに。そんな簡単にはいかないって」
木場とイッセーもまじツッコミだ。
と、その時足音が響く。
あ～。これ、準備万端にする為の時間稼ぎか。
そして、何より……っ

祐斗Ｓｉｄｅ

炎の壁の一部か霧に包まれ、そしてそこから数十人規模の若者達が

姿を現す。
学生服にも見えるその集団は、全員が人間で、そしてほぼ全員が神器を保有しているようだ。
なるほど、彼らが英雄派の本隊というわけか。
そして先頭を歩くのは数名の男女。
一人は桃色の長髪を持つ、蠱惑的な女性。おそらく、彼女が九成君とぶつかったアーネ・シャムハト・ガルアルエル。後継私掠船団からの派遣組だろう。
そして片方は、どことなくフリードを思わせる白髪の少年。雰囲気は違うようだけど、何故かフリードを一瞬強烈に思い出した。
最後に彼らを率いる形で近づく、漢腹を腰に巻いた格好の青年は、槍を肩に担いでいる。
……寒気がするほどの聖なるオーラだ。おそらく、デュランダルに勝るとも劣らない力だろう。
何より感じるこのオーラ。間違いない、シュウマ・バアル様の子息子女が身に着けていたサークレットや、フロンズ氏が呼び出した槍と同質のもの。
ああ、これは―
「初めまして、グレモリーの諸君。ディアドコイ達後継私掠船団（プライベーティア）のメンバーが世話になったようだね」
―その青年が、僕達に堂々と挨拶の言葉を継げる。
「俺は曹操。日本なら三国志で有名な、かの曹操孟徳の子孫で、英雄派のリーダーだ」
英雄派のリーダーか。
別動隊の後継私掠船団を率いる九条・幸香・ディアドコイがサブリーダーなのは知っていたし、彼女とは何度が戦ったこともある。
そしてついに、リーダーが出てくるとはね。
僕達の警戒の視線を気持ちよさそうに受け止めながら、曹操は自分の槍を注目させるように軽く振るう。
「そして最強の神滅具（ロンギヌス）、黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）の今代の保有者でもある。お見知りおきを」

そうか、あれが……っ！
「あれが、神の子を貫いた槍。その本物……っ」
「た、確かに神々しいけれど、本物までテロリストに渡ってるなんて……っ」
聖遺物の筆頭を目にし、ゼノヴィアやイリナさんが動揺するのも無理はない。
アドルフ・ヒトラーのデミ・サーヴァントという形でミザリ・ルシファーが使っていることは知っていたけれど、本当の意味での黄昏の聖槍までもがテロリストになっているなんて……っ！
「あれが、かの聖槍、その本物―」
「アーシア、見るな」
とくに茫然としていたアーシアさんの目を、アザゼル先生が手で塞いだ。
「信心深い奴はうかつに見るな、心を持っていかれるぞ！
あと転生悪魔は気をつけろ、掠めただけで致命傷は確実だ！」
先生の本気の声色に、僕達の警戒心は更に高まる。
実際問題、サーヴァントの宝具として持ち込んでいるクロードさんの強さの一端は間違いなく聖槍にある。
イッセー君が持つ赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）を超える神滅具である以上、油断できるわけがないんだ。
現時点で上位神滅具のうち、二つが敵側に渡っている。幸い一つは教会が保有しているそうだけれど、もう一つがどこにあるかが分かってない以上、油断は全くできない。
睨み合いになる中、アーネ・シャムハト・ガルアルエルはにっこりと九重ちゃんに微笑んだ。
「ふふ、お母さんに関してはもうちょっと待っててね？　お嬢さん」
「……っ！　母上をどうするつもりだ！　まさか、殺してはおらぬだろうな!?」
顔を真っ青にさせる九重ちゃんだけど、そこは曹操が首を横に振った。
「九尾の娘殿はご安心を。姫君には我々の実験に付き合てもらってい

ますが、命の安全は保障いたします」
……どうやら、最悪の事態は避けれているようだ。
いや、嘘をついている可能性がある以上、決して油断できる相手ではない。
それにしても涼しい表情だ。余裕があるのか舐めているのか、少し神経が逆なでされるね。
「……実験？　京都の妖怪が長を使った実験って、京都で大規模な聖杯戦争でもする気なのかな？」
「我らのスポンサーであるオーフィスの願いを叶える為、そして我ら英雄派の理念の追求にとっても有意義な実験と言っておきましょう。北欧の主神が娘殿よ」
リヴァさんの詰問にも、曹操は余裕の態度でそう答える。
しかし、スポンサーであるオーフィスの願いか。
オーフィスの目的はグレートレッドの打倒だと聞く。そのうえで英雄派独自の理念にとっても有意義となうと、嫌な予感を覚えてしまうものだ。
だけど、龍神であるグレートレッドと九尾の狐である八坂姫に何の関連があるんだ？
その辺りは疑問だけど、たぶん答えてはくれないんだろうね。
「……それで？　平和に暮らしている小さな女の子を本気で泣かせるような真似をしてただで済むと思っているのか、お前ら？」
九成君は殺意が隠せないレベルでそう問い質すけど、それに対して曹操は一瞥だけすると肩をすくめる。
「……子供の一人や二人を泣かせる程度で戸惑うなら、そもそも俺達はテロリストになってまで理念を叶えようとはしないさ」
「……そう。ならこちらも容赦をしてあげる理由はないわね」
それに対して、カズヒをため息をつきながら一歩前に出る。
「……イキリ散らした糞餓鬼共が。トチ狂ったテロ活動は、説教や尻叩きで清算されないわよ？」
『フォースライザー』
『ＣＲＹ！』

「同感だ、カズヒ姉さん。……九重(この子)の嘆きの涙の礼は、お前らの悔し泣きで払ってもらう！」
『ショットライザー』
『ＳＡＶＥ！』
二人がベルトを装着し、プログライズキーも起動させる。
二人とも、その心情もあって相当怒っているようだ。
そしてそんな二人を見て、曹操と白髪の少年は面白そうに笑っている。
「いい殺気だ。英雄の相手はこうでなくては……っ」
「同感だね。こいつの相手に相応しい」
曹操は聖槍を構え、白髪の少年は赤黒い魔剣を抜き放つ。
動きが洗練されているし、得物も強大なオーラを秘めている。
間違いなく、油断できる相手ではない。
そしてゼノヴィアとイリナさんは、白髪の人を見て眉をひそめていた。
「まさか、教会で名をはせる者までもが禍の団に組みするとはね……っ」
「なんてことなの。ああ、主よ！　この愚行を決してお許しにならないでください！」
……悪魔祓いの上着を着ていたけど、どうやら教会の関係者らしいね。
イッセー君も鎧の準備をしながら、少し首を傾げていた。
「なぁ、あの木場とフリードを足して二で割った感じの奴って誰なんだ？」
ははは。酷いねイッセー君。
言われて見るとちょっと納得だけど、テロリストと一緒にしないでほしいかな？
とはいえ、確かにフリードを思わせる白髪も気になるところだね。
カズヒも白髪だけど、フリードは思わせない。となると何かしらの縁があると思うんだけど。
「奴はジーク。教会の若手悪魔祓いでも名うての使い手で、魔帝(カオス・エッジ)と

呼ばれている。かの北欧神話の英雄であるシグルドの末裔らしい」
ゼノヴィアが警戒し、そして英雄派の一員なだけはある。英雄の末裔で若き実力者か。
「あとフリードとは同じ戦士育成機関の出身らしいわ。白髪なのはその育成機関出身者の基本らしいわよ？」
イリナさんの説明には少し気になるところもあるね。
白髪か。僕と同じ研究施設にいた子にもいたけど、もしかして……いや、今はいいか。
「英雄派ではジークフリートとも呼ばれているよ。呼び方はお好きにどうぞ？」
そう冷たい微笑みを浮かべながら、ジークフリートは一歩前に出る。
そして英雄派の戦士達は戦闘態勢を取る。
「レオナルド。対悪魔用の魔獣を頼むよ」
その言葉に反応するのは、後ろにいたメンバーの中でも小さな少年だった。
彼は無言で頷くと、足元から闇を展開する。
そしてそこから、単眼かつ人型の魔獣を具現化した。
独立具現型の神器か？　いや、それにしても数が多い。禁手に至っていると考えるべきか。
そう推察していると、アザゼル先生が舌打ちする。
「くそったれ！　全員気を引き締めろ、あれも上位神滅具だ!!」
「その通り。所有者のイメージした魔獣を作り出し使役する魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）。ちなみに、レオナルドはアンチモンスターの創造に特化している為」
曹操の説明に応えるように、魔獣達は光力を砲撃として放つ。
「今回はアンチデビルモンスターだよ？」
これは、流石に厄介そうだ―

「―そう、吠えたわね糞餓鬼共が」
「―上等だ。なら俺達が動かないとな？」

『Ｋａｍｅｎ……Ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……Ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……Ｒｉｄｅｒ……』
―怒り振るえるカズヒと九成君が、素早くプログライズキーを装填する。
合わせるように魔獣達が砲撃を放つが、二人は素早く回避しながら、それぞれライダモデルを展開する。
「「変身！」」
『ショットライズ！　サルヴェイティングドッグ！』
『フォースライズ！　ハウリングホッパー！』
仕掛ける魔獣達をライダモデルが弾き飛ばし、そして二人は装甲を纏う。
『Ｏｌｌ　ｌｉｇｈｔ　Ｉ，ｍ　ｇｕａｒｄｉａｎ　ｏｆ　ｈｕｍａｎ』
『Ｉ　ａｍ　ａ　ｓｕｐｐｏｒｔｅｒ　ｏｆ　ｊｕｓｔｉｃｅ　ａｎｄ　ｅｎｅｍｒｙ　ｏｆ　ｅｖｉｅｌ』
そして次の瞬間、速やかに魔獣達を刃をもってして薙ぎ払う。
『Ｂｒｅａｋ　ｄｏｗｎ……！』
仮面越しの視線が、英雄派達にぶつけられここに戦線は本格化する。
「テロに走った以上容赦はしない。死ぬ覚悟はできてると判断するわ」
仮面ライダー道間、ハウリングホッパー
「嘆きの涙は認めない。精々無様な負け方で喜劇に変えろ」
仮面ライダーマクシミリアン、サルヴェイティングドッグ。
二人の仮面ライダーの敵意をぶつけられ、曹操は不敵な笑みでそれ答えるる。

「いいね。そういう外連味は、英雄譚らしくて大好きだ！」

そして、本格的に戦端は切って落とされた！

冥革動乱編　第十四話　乳龍帝破れたり!?

和地Ｓｉｄｅ

この手の輩に容赦をする理由はどこにもない。
とりあえずぶん殴って無力化してからゆっくり尋問でいいだろう。
ぶちのめす！
「叩きのめしたうえで八坂姫の行方を吐いてもらう！」
「同感ね！」
速攻で俺とカズヒ姉さんは射撃体勢に入った。
抜き打ち気味に放つ銃撃を、曹操は素早く槍で弾き飛ばす。
「狙いも早さも反応もいい。だけど俺に当てるにはまだ足りないね」
「チッ！　流石にこの程度じゃ……なら！」
躊躇することなくカズヒ姉さんは追撃態勢。
素早く展開するのは追撃砲。
二本出したうえで両手に砲弾を構えて装填体制。
敵もそれに気づいて攻撃を放つが……甘い。
「俺の星辰光を舐めるなよ！」
俺の本来護衛向きの星辰奏者でな。そんな射撃なんて通しはしない。
障壁で攻撃を弾くと共に、反撃として雷撃の魔剣を瞬時に創造。
常時発動状態で投げつけることで、雷撃で敵の侵攻をけん制する。
魔獣達の攻撃も同時にしのぎながら、俺が腰を落とすのとほぼ同じタイミングで砲弾が発射。
炸薬すくなめで放たれた砲弾はすぐに弧を描き、同時に破裂して散弾を撒き散らす。
「「「「防御態勢っ！」」」」

「「「「更に突貫！」」」」

上から氷の幕がそれを受け止め、更に全身を氷の鎧で包んだ連中が、雷撃を突き破って突貫。ついでに魔剣を砕いていきやがった。

「後継私掠船団に負けずに行くといい」

曹操が指を鳴らすと共に、英雄派のメンバー達が一気にこっちに突撃をかましてきやがった。

ええい、面倒な連中ばっかり出てくるなぁ！

俺が内心で歯噛みしていると、龍の鎧を纏ったアザゼル先生がすり抜けるようにそいつらを突破する。

あんな真似までできるのか。総督凄いな！

「お前の相手は俺だ、曹操！」

「堕天使総督に挑まれるとは、光栄ですな！」

光の槍と聖槍がぶつかり合い、二人はそのまま遠くに吹っ飛んでいく。

「曹操（こいつ）は任せろ！　お前らは他の連中を！」

「……分かったわ！　仕掛けるわよ、みんな！」

カズヒ姉さんが真っ先に頷き、素早く二丁のマシンガンで敵に制圧射撃を行う。

全員が回避もしくは防御を行うが、そんなことは問題ない。むしろそれをさせるのが制圧射撃だ。

そして制圧射撃で動きが制限されたところを―

「一人ずつ確実にぶちのめす！」

『ＳＨＩＥＬＤ』

素早くディフェンディングタートルに切り替えて、俺は即座に変身体制。

『ショットライズ！　Ｉｔ，ｓ　ｐｏｉｎｔｌｅｓｓ　Ｉ　ｄｏｎ，ｔ　ｄｉｅ』

ディフェンディングタートルに変身し、制圧射撃を変質化した星辰光で無視して敵陣に突貫。魔剣で魔獣に切りかかる。

アンチ悪魔に特化した魔獣の相手を、数の上で主力な転生悪魔（グレモリー眷属）にさせるわけにはいかない。明らかに不利な相手にぶつけさせるとか馬

鹿の行動だしな。適材適所で―
「木場！　皆にフリードと最初にやりあった時の魔剣を！」
―そんな気遣いを吹き飛ばすように、イッセーの声が響いた。
木場がそれにすぐ気づくと、素早く魔剣を作り出して、グレモリー眷属のメンバーに投げ渡す。
それが靄のようなものを展開すると、放たれる光を食らいつくすように吸収して無効化した。
なるほどな。そういうこともできるってわけか！
ならそこまで心配はいらない。となれば俺は―
「……集団戦術の定石に従うのみ！」
―まず弱い奴から優先的に叩き潰す！
集団戦において最も有効な方向性は二つ。数的有利を確保するか、敵集団の士気を削ることだ。
戦いは数とはよく言ったもの。一人で三人倒すより三人で一人を倒す方が簡単で、１００の困難も１０で分割するより１００で分割する方が個人個人の負担は少なくなる。
そして数を持って行動するには、ある程度の連携や目的の共有が不可欠。これが崩壊すると逆に数の多さが混乱に繋がるし、足の引っ張り合いが多発してできることもできなくなる。
結果として、集団戦における最適解は二つに絞られる。
士気がごっそり下がるような人物を真っ先に潰して烏合の衆にするか、弱い奴から確実に削っていって堅実に士気と数を減らしていくか。
前者はそんな人物をスパッと見つけてスパッと倒す必要がある為、効果は大きいが難易度は絶大。当然ふつうは後者に重点を絞るわけだ。そして後者には裏技がある。
俺は先生によって曹操が引きはがされたうえ、イッセーの機転で魔獣の優位性が削れた混乱をついてターゲットを選出。
動揺が消しきれてない相手に向かい、即座に突貫を開始する。
『ディフェンディングブラスト！』
一発放ってからそれを盾にするように突貫。

敵は反応して迎撃するが、動揺していたこともあって動きは鈍い。
ディフェンディングブラストは推進力を持つことで馬力に優れた頑丈な大型弾頭。その性質は一発の破壊力より、壊れず進み続ける砲撃でごり押しするのが本質だ。
必然として俺はそのまま突貫し、敵を接近戦の間合いに捉え。
「悪いが恨んでくれていいぞ」
『ディフェンディングブラストフィーバー!』
反発力場を脚部に展開するディフェンディングブラストフィーバーで、敵を上に蹴り上げる。
反撃すら強引に蹴り飛ばしたうえで、更にショットライザーの照準を構え、同時に魔術詠唱体制。
「がばばばばばばばっば!?」
……空中でわざと威力の低い攻撃をつるべ打ちに食らい、ボロ雑巾になって落ちた敵を、更に掴んで敵集団に投げつける。
「うわぁ!?」
「ひ、ひぃっ」
よし、いい感じに気圧されている。
これが一種の裏技。簡単に言えば敵を倒す時にとにかくむごたらしく倒すことで、周囲の敵に心理的圧迫をかけて士気の削り具合を上げるということだ。
我ながらやり口がえげつない。涙の意味を変える男として、正直選びたくない手段ではある。
……が、手段を選ぶ必要を理解してないなら、ザイアにいる時点でもっと派手に動いて死んでいただろう。
カズヒ姉さんのようにダーティジョブを担当するほどではないが、俺だって必要悪ってものは理解しているさ。
さて、
「次は誰がこうなりたい?」
ドスを利かせた声で周囲を睨み付けると、英雄派の連中は一歩下がり気味だった。
まあ、禁手に到達してイキっていたり、洗脳でやる気スイッチが

入ったるだけの連中なら、これで少しは躊躇するはず――
「なら、私が相手をしましょうか？」
――そう思ってすぐに、俺は感じた殺気を迎撃する。
左腕に二重三重に障壁を展開したうえで、体を回転させてそれを迎撃。放たれた矢を受け流す。
そしてその勢いのまま右腕を向けてショットライザーで反撃するが、うつぶせに近い体制で回避すると同時に特化した敵は、そのまま槍を突き出した。
回転の勢いを利用して倒れるように回避すると共に、魔術を利用して体勢無視の強引な飛び跳ねで距離をとる。直後逆手で振り下ろされた脇差が、俺のいた場所に突き立った。
そして俺が魔剣を創造して切りかかるのと、相手が刀を創造して切りかかるのはほぼ同時。結果としてつばぜり合いの体制になり、睨み合いになる。
ライダースーツとバイクのヘルメットで姿を隠しているのは、体格から見て二十代前半の女といったところか。
「おお！　ドゥルヨーダナさん！」
「下がってなさい。こいつは幹部級じゃないと苦戦必須よ」
構成員を下がらせながら、ドゥルヨーダナと呼ばれた女は俺をヘルメット越しに鋭く見据える。
「初めまして、涙換救済（タイタス・クロウ）。私はマハーラーバタの王、ドゥルヨーダナの末裔。曹操子飼いの特別幹部よ」
「それはどうも。中々洒落たあだ名を作ってくれたな」
俺の星辰光とスタンスからあやかってくれたのか。ちょっと気に入ってしまったな。
そのままつばぜり合いといきたいが、あまり時間をかけるわけにもいかない。
俺は一旦蹴り仕掛け、ドゥルヨーダナが回避して距離が空いた瞬間、素早くショットライザーで射撃戦に持ち込む。
向こうも弓を創造して反撃するが、これでよく分かった。
打ち合った感覚から言って、持っている神器は俺と同じ魔剣創造（ソード・バース）。

そして英雄派の幹部ということなら、既に禁手に至っていると考えるべきだ。
そしてさっきから使ってくる武器すべてに、魔のオーラを俺は感じている。
答えは、一つ。
「魔剣以外の武器を作り上げることもできる禁手か」
「正解。魔装創造（アームズ・バース）っていうの」
……シンプルにアップグレードされた禁手に至ったもんだ。
さて、神器を二つ持っている俺と、禁手に至らせている相手。
それだけなら仮面ライダー分俺が有利でないといけないんだ……が。
「それだけってわけでも、なさそうだな！」
「それはもう。特別幹部は伊達じゃない！」
明らかに身体能力で、俺より上じゃないか？
相手はまだ本気を出してない感じだし、これはちょっと……まずいか？
俺が歯噛みしたその時、何故かドゥルヨーダナは動きを止める。
「……なんだ？」
「いえ、此処がいいの」
そう返答したその瞬間、俺は本能的に全身に障壁を展開する。
その瞬間、障壁に包まれた体に矢が三本同時に突き立った。
なん……だと!?
いや、三本じゃ……ない!?
「……偶々視界に移ったからよかったものの、やってくれるわね！」
―カズヒ姉さんがハウリングディストピアで、二本ほど切り落としてた。
危ない!?　全部もらってたらさすがに深手だった！
「ゴメン助かったありがとう！」
「五分の二程度で大げさよ。……気をつけなさい、敵も戦術のせの字は理解しているみたいね」
なるほどな。前衛だけでなく、後衛もきちんと用意していると。

しかも、おそらく射出速度を調整することで矢が当たるタイミングを同時にして迎撃を困難にした今の射撃。ただ者じゃない。
「感覚からして、持っている神器は剣豪の腕（アーム・ザ・リッパー）、それもおそらく練り上げは私以上ね」
「人材豊富だな、禍の団……っ」
カズヒ姉さんと背中を合わせて警戒する中、ドゥルヨーダナも薙刀を創造してこちらに構える。
……これ、もしかして。
「……カズヒ姉さん。まさか―」
「可能性はあるわね、おそらくドゥルヨーダナ（彼女）がマスターよ」
あ～、確かに。
英雄の末裔が中心となっている組織なら、英雄そのものに興味を持たないわけがない……か。
思った以上に難敵だぞ、これは！

イッセーＳｉｄｅ

「すべて聞こえる、そしてすべてを破く！」
「「いやぁあああああああっ」」
三人の英雄派の少女達が仕掛けてきた連携殺法を、俺はスマートに返り討ちにした。
乳語翻訳で連携パターンを読み取り、そして洋服崩壊で無力化する。完璧なコンボだ。
『そんな!?　心を読む術の対策はしていたのに!?』
『なんで分かるの～！　は、恥ずかしいし!?』

なるほど。心読まれない対策をしていたというわけか。流石に乳語翻訳に備えてはいたのか。
ん？　ならなんでおっぱいの声が聞こえるんだ？
『おそらくですが、イッセーの乳語翻訳は「おっぱいと対話する」異能なので、「心を読む」異能とはアプローチなどが全く異なるのでは？……おっぱいが勝手に本体の考えを語っていると、当人の心そのものを読み取るのは別物ではあります……が……』
『気持ちは分かるぞシャルロット。なんで俺達の相棒は変態性で前人未到を達成するんだか』
俺の相棒達の視線が冷たい！　いや、一体化してるから分からないけど！
糞ったれ！　だって、だっておっぱいの声が聞きたかったんだ！
女の裸が見たくてたまらなかったんだ！
自分の少ない才能を徹底的に注ぎ込んだのに！　特に乳語翻訳は素晴らしい軌跡を体現したのだと、シャルロットに胸を張れる出来だったのに！
鎧の内側で涙を流しながら、俺は周囲を警戒する。
「アルテミスの前にお前をバーニン♪　半分神ならテストでバーニン♪　これでいければ絶対バーニン♪　本命相手も行けるぜバーニン♪」
「主神の娘を前座にしないでほしいかな！」
リズムに乗りながら飛び跳ねて炎を放つヘラストロテスの攻撃を、仮面ライダーグリームニルに変身したリヴァさんが蹴り壊す。
しかも地面から砲台をポコポコ出して反撃してる辺り、あっちは当分大丈夫そうかな。
でもヘラストロテスの野郎も、全身からジェットみたいに炎を噴き出して高速移動してるから全然当たらねえ。
流石に英雄派の幹部は伊達じゃないか。まして神様を燃やそうっていうなら、たぶん幹部の中でも強い部類だろうしな。
そう思いながら英雄派の攻撃をカウンターで殴り飛ばして、俺はちらりと他の周りを見る。

「この！　なんて動きが早いんだ！」
「攻撃があたら……へぶぁ!?」
　英雄派の構成員達が、攻撃を全部回避されて戸惑ったところに風をまとった細剣に貫かれる。
　操られている可能性もあるから急所は避けられてるけど、刺さってもすぐには死なないところを絶妙に貫かれて、敵はどんどん動けなくなっている。
「うぉおおお!?　め、目が回るぅ～!?」
「大丈夫ですか？　舌を噛むのであまり声を出さない方が……」
「後ろ後ろ！　三人ぐらい来てるから！」
　……アーシアは大丈夫そうだ。インガさんがカバーしてることもあるけど、九重を庇いながら敵の攻撃を全部回避している。
　アーシアちゃんの成長に、俺は嬉しいやら戦慄するやら。ディックの野郎はアーシアをどこに連れて行くつもりなんだ？　通信教育的なトレーニングメニューまで送ってるらしいしなぁ……。
「やれやれ。女性では赤龍帝を打倒するのは不可能か」
　と、そこでジークとか呼ばれた英雄派の幹部が俺の前に来る。
「相手の心を乳房から伝えられることで聞き取り、瞬時に衣服を破壊して恥辱で悶えさせる。鋼の精神力がなければ、女性では戦いを挑むことすら不可能とは恐れ入るよ」
　馬鹿にされてるのか感心されてるのか分からないけど、とりあえずあっちも本気ってことか。
　っていうか、あれは魔剣か？　ジークの奴が持ってる剣、明らかにやばいオーラがするんだけど。
　寒気も感じる。なんていうか、俺があいつとやりあうのはやばいって肌で感じるっていうか……。
『気をつけろ相棒。あれはおそらく、グラムだ』
　ドライグが警告してくれるけど、グラムって？
『北欧神話においてファーブニルを倒した英雄シグルドが持っていた剣のことです。そんな伝承を持っていることから見ても、おそらくエクスカリバーやデュランダルの魔剣版と考えるべきかと』

ありがとうシャルロット、そしてやばいな！
つまりあれも龍殺しか。俺の天敵ってわけね。
なら、かなり本気で挑まないと―
「いや、そういうわけにはいかないね」
「ふふ、同感ね」
―そこに、敵も味方も割って入ってきた。
木場が聖魔剣を構えて割って入れば、桃色の髪の女も、ジークの前に割って入る。
確か、アーネ・シャムハト・ガルアルエルだっけか？
「あの惨状を見てから、女で赤龍帝に挑むのかい？」
「あら、ちょっと違うわね」
ジークが怪訝そうに言うと、アーネは微笑みながら首を横に振る。
「聖継娼婦（シャムハト・セカンド）は戦士じゃない。戦士を育てる聖娼よ？　だから―」
そしてアーネが指を鳴らすと、そこには十人ほどの女の英雄派が。
なんていうか、海賊っぽい意匠の改造制服だ。ってことはこいつらも後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）なのか？
「……何だか知らないけど、ジークさん相手は教会の戦士だった私がけじめをつけたいわね」
「何より龍殺し相手にイッセーをぶつけるわけにはいかないさ。イッセー、アスカロンを貸してくれ」
そこにイリナとゼノヴィアも来る。
……となると、此処はそういう感じか。
「分かった。任せたぜ、みんな」
俺はゼノヴィアにアスカロンを投げ渡しながら、アーネが率いる女達に向き合った。
さっきの女子たちの惨状を見ても、それでも突っ込んでくるといはいい度胸だ。
全員、剥いて―
「行くわよ、みんな！」
―やろうと思った時、戦闘の女が服に手をかけながらそう声を張り上げる。

そして気づくと、全員が服に手をかけて力を入れた。
「「「

になるってのも、それはそれでね」
な、なんてことだ。
え、そういう方向性もありなのか？
『無しです無しです！　正気に戻ってくださいイッセー、子供達が泣きますよ！』
シャルロットの声に、バグっていた俺の頭がしゃっきりする。
は！　そうだ、俺を応援してくれる子供達に会わせる顔がない。
シャルロットにも恥じるし、部長の名誉にも瑕がつく。正気に戻らねば。
助かったぜシャルロット。お前は頼れる相棒だ。
『いえいえ。とはいえ気を付けてください、後継私掠船団の方々は、どうやら頭のねじが外れているようです』
ですよね！
既にフォーメーションで囲んでいるけど、ならばこっちも考えがある。
何よりどれだけフォーメーションを組もうが、それを教えてもらえばいいだけだ！
「いくぜ、乳語翻訳！　さぁて、お姉さんたちのおっぱいよ、作戦を―」
「フォーメーションA……フォーメンションD……と見せかけてCで今度はB！」
なんかリーダー格が急にしゃべり始めた。
そしておっぱい達の声も聞こえるけど―
『まずは前衛が突撃すると見せかけ……あ、壁になる……と本当に突撃―』
『前衛が止まったら……っと、前衛を突破されないように隙間から……じゃなくて牽制を―』
『後衛の警護が私達の……って、前衛の上からちくちく……じゃなくて前衛と攻撃を合わせて―』
―リーダー格の声に合わせておっぱいが作戦を切り開けてしゃべっている！
そしてその間に攻撃がどんどん切り替わってるから、声を聴いてい

るより敵の動きの方が早い!?
『練度が早い！　これではしゃべっている間に行動が完了します!!』
『というより、あのリーダー格もフォーメーションをどうするか決めてないな。おそらく遠距離からランダム設定されている映像を見ているんだろう』
慌てるシャルロットと冷静に分析するドライグには悪いけど、俺大ピンチだよ!?
な、なんてことだ。
行動の切り替えや作戦の変更が早すぎて、おっぱいの声が追い付かない。更に既に全裸だから、脱がすまでもない。
「……こんな簡単に対応できるのに、なんでそんなに脅威なのかしら？」
アーネが真剣に首を傾げるけど、たぶん出来る人少ないと思います！
うぉおおおおお！　大ピンチだぁあああああ!!!

冥革動乱編　第十五話　冷水をぶっかけろ！

和地Ｓｉｄｅ

なんかイッセーが大ピンチになっているぞ!?
裸の女達による、作戦をランダムで切り替えまくっての即興対応でのかく乱にイッセーが苦戦している！
そしてこっちも割と苦戦しているから、対応しきれない！
サルヴェイティングドッグに戻してからの多角的障壁で遠距離攻撃はしのいでいるが、英雄派の構成員達も攻撃を仕掛けてきている所為で、こっちはこっちで納めこまれている。
なんとかカズヒ姉さんに襲い掛かる攻撃も防げているが、そこを割って入って仕掛けてくるドゥルヨーダナとの戦闘で、割と苦戦しているぞ！
「……流石は悪祓銀弾（シルバーレット）といったところね。単独で悪神ロキを足止めしたのは伊達じゃないか」
「そちらもマハーラーバタの英傑を名乗るだけのことはあるわね、名前負けはしてない様ね！」
自在に武器を作り出せる相手に対して、多数の武器を用意できるカズヒ姉さんは上手くしのいでいるけど、それでも中々攻めあぐねている。
というか、剣術・槍術・弓術から格闘術まで、全方位で長けてるなあの女。ゲリラと暗部で鍛えられたカズヒ姉さん相手に、技量で負けてないとかかなりできる。
……いや、技量に限定すれば他の英雄派のメンバーを踏まえても頭一つ飛びぬけているな。年齢も高めだが、数年でどうにかなる差……なのか？
考え込みたいところだが、放たれる遠距離からの狙撃をしのぐ為に意識が途切れる。

だけど、この状況は本当に苦戦しているな。
リヴァ先生はヘラストロテスと真っ向からぶつかり合ってこれまたてこずっている。
イッセーはイッセーで、乳語翻訳と洋服崩壊を攻略（？）した女子軍団にかく乱され気味。
サポートに回っているアーシアも、インガ姉ちゃんがいなければ流石に負傷していただろうレベルで攻撃が集中している。
そしてとどめに―
「ははは！　バムルンクにノートゥングも使わせるとか、グレモリー眷属の剣士達は流石にできる！」
「余裕で捌きながら言ってくれるね！」
アスカロンをグラムで弾かれて、ゼノヴィアが歯噛みするほどに相手は強い。
確か魔帝（カオス・エッジ）のジークだったか？　英雄派でも手練れと見える。
「アーメン！」
「なめるな！」
更に左右から光の剣と聖魔剣で攻めるイリナと木場の攻撃を、アスカロンをグラムで捌きながら二本の剣で迎撃する。
使っているのはジャンヌが移植された宝具という形で使用したバムルンクとノートゥング。だが問題はそこではない。
野郎、背中からドラゴンのものと思える腕をはやして、それによる三刀流で立ち回ってやがる。
確か龍手（トゥワイス・クリティカル）の亜種発現でそんな感じになるんだったか。たぶんだが、禁手で至ったとかそんな感じじゃないな。
……ふう。
俺は深呼吸をしつつ、手を額に当てる。
仕方ない。こっちもこのままってわけにはいかないか。
「―回路起動（アクティブ）」
魔術回路を起動し、思考回路をフルで回転させる。
一流の魔術回路保有者は、スマートフォンやノートＰＣ程度の演算機能は自前でどうにかできるという。

俺の魔術回路は量に特化しきった欠陥品だが、それでも魔術回路ではある。また、脳内にショットライザー用のＡＩチップが内蔵されている。
だから、その脳とリンクしたＡＩチップを強化する。
……きついな。だが、十分や二十分なら……行ける！
「俺だって……少しは成長するんだよ！」
気合を入れ、強化されたＡＩチップのサポートで一気に事態をひっくり返す。
サルヴェイティングドッグのセンサーと、俺の脳を、ショットライザー用のＡＩチップでリンクさせ、周囲の敵味方の位置情報を把握。
攻撃態勢に入っている敵の目の前に、障壁を張って機先を制して激突させる！
「バーニンブフォッ!?」
「あたぁ!?」
「……なに!?」
ヘラストロテスの炎が爆発して自身を焼き、接近戦を仕掛けようとした女が顔面を強打し、ジークの斬撃が受け流される。
そんな現象に合わせ、瞬時に一つ一つの結界を解除。
そして、それを逃すほど俺の仲間は間抜けじゃない！
「うぉおおお！」
突貫したイッセーが、敵を殴り飛ばして包囲を脱出。
「隙ありだ！」
ゼノヴィアのアスカロンが、掠める程度だがジークの龍の腕に傷をつける。
そして―
『Ｏｄｅｎ！』
「……私の男は凄いでしょ？」
『スキルヴィングディストラクション！』

「俺の方がバーニングぅううううう!?」
暴発した炎に包まれたヘラストロテスを、盛大に蹴り飛ばす！
……よし！　これで仕切り直しをと思った時、遠くから一気に近づいてくる二人の影。
「……ここまで聖槍を使いこなすとはな。流石興味がわくな」
「ふふふ。俺としても、かの人工神器には興味がありますよ」
……お互いそこそこボロボロになっているアザゼル先生と曹操が戻ってきたようだ。
「先生、大丈夫ですか!?」
「大丈夫、お互いにまだ様子見だ！」
先生がイッセーに答える中、曹操はイッセーを興味深そうに見ていた。
「いやぁ、アザゼル総督と戦いながらだからすべては把握できないけど、中々いい指示じゃないか、兵藤一誠」
なんていうか、面白そうなものを見ている感じだな。
「戦闘に関与するようになってから数か月にしてはいい指示で、そしてそれに反応する仲間達も優秀。君はあれだね、純粋な性能や戦闘技術は歴代でも低いけど、ドラゴンが持つという人を引き付ける魅力なら歴代でも有数だと思うよ」

あ、イッセーが思わぬ評価で戸惑ってる。
しかも曹操の言葉はまだ続く。
「というか、素質が良くも悪くも高すぎるんじゃないかい？　君が異形に参入してから僅か半年そこらで、魔王の末裔やら神やらと戦うことになるなんて普通はない。英雄譚の主人公も真っ青な誘因属性だよ」
「それ褒めてねえだろ！」
イッセーが思わず絶叫した。
……凄いこと言われてるな、イッセーの奴。
でもまあ、こいつ確かにモテる要素はあるしな。木場とかホモかというぐらい夢中だし、グレモリー眷属の女子からは絶大な人気だ。あとヒマリやヒツギも好感度高い感じだしな。
そういう意味では、的を得た評価か？
……直接会うのは初めてだろうに。人を見る目があるってことか。
「間違いなく、君は歴代最強はともかく歴代でも一番危険な赤龍帝になるだろう。もしかしたら転生悪魔初の魔王……とかにもなりえたかもね」
そう面白そうに評価する曹操に、先生が槍を突き付ける。
「曹操、てめえ、禍の団になんて所属して何がしたい！」
まぁ確かに。そこはちょっと気になるな。
敵が何を考えているか。倒すにしろ倒されるにしろ、それで気の持ちようが変わることはあるだろうし。
どうせならろくでもない理由だといいな。ぶちのめす分には遠慮しなくていいからな。
まぁ、答えるとは―
「総督殿、我々の目的はシンプルだ。……人間がどこまで行けるのかを知りたいのさ」
―答えるのかよ！

祐斗Ｓｉｄｅ

「異形に比べればちっぽけな存在である人間。だがそんな人間の中から、異形の中でも強大たる龍すら打倒する英雄が現れる。そしてそんな英雄の末裔であり、また神器という奇跡を会得した俺たちがどこまで行けるのか、それを試すのが英雄派という組織ですよ」

―曹操は不敵な笑みを浮かべながらそう語り、そして英雄派の何人かがそれに同調するように笑みを浮かべている。

おそらくは洗脳を受けてない正規構成員か。後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）はどこか意味深な表情を浮かべているけど、独立部隊である彼らにはまた違った理念があるんだろう。

「……文字通り、英雄になろうってか？」

先生が茶化すように言うけど、曹操は笑みを深くしながら指を上に突きつける。

「よわちっちい人間のささやかな挑戦さ。この蒼天の下（もと）、人間のままどこまでやれるのか試したくなっただけさ」

その言葉に、アザゼル先生は嘆息した。

「……全員、油断するなよ。こいつらは旧魔王派なんて目じゃない。お前達を知ろうとする敵は例外なく強敵と思うべきだが、その中でもヴァーリに匹敵するレベルの危険人物だ」

その言葉に応えるように、魔獣達と構成員が仕掛ける体制になる。

僕達も構えを取り直すけど、流石に危険だね。

英雄派のジークはまだ本領を発揮していない。それ以外の幹部級も、まだ全力ではないだろう。

そしてリーダーの曹操。龍王の鎧を身に着けた先生を相手に、お互い本気でないとはいえ手傷を与えあっている。

これは本当に警戒に値して―

「いや先生。まさか底が知れないとか思ってませんか？　……それは

ボケているっていうんですよ？」

―ため息交じりのカズヒの声が、やけに響いた。

冥革動乱編　十六話　相容れない存在

祐斗Ｓｉｄｅ

カズヒの響き渡った声に、嫌な沈黙が漂った。
英雄派の構成員達は大なり小なり空気が冷たくなっているし、僕達としてもちょっと今の発言に引き気味だ。
「……へぇ？」
興味深そうに一瞥する曹操に、カズヒはしらけ切った表情の冷たい目で返す。
あ、これは……割とキレてる？
「どんな御大層な理念があるのかと思ったら、旧魔王派の方がまだマシじゃないかしら。……分かり易く言ってあげるわ。くっだらない」
うんざりという言葉がこれほど似合う態度を今までカズヒはしたことがないような気がする。
それぐらい、カズヒは本気で呆れ果てていた。
「……先生、こいつらは底が知れないんじゃなくて、浅すぎて蓋と間違えて取ってるだけです。中二病をこじらせたなんちゃって不良と似た方向性の、イキったファッションテロリストですよ」
「……おい、てめえ今なんつった？」
英雄派の構成員の一人が額に青筋まで浮かべている。
だけどカズヒは哀れみすら浮かべた表情だ。
「十年ぐらいしたら、思い出して身もだえする類の若気の至りって言ったのよ」
それを真っ向から切り捨てた。
しかも妙に具体的なのがまた神経に来る。本気で呆れたのか殺気や戦意まで消えているから、嘘偽りのない本当の感想なんだととてもよく分かった。

え、え～？　そんな言葉で片づける内容……なのかい？
「いや、カズヒ姉さん？　今そんな話じゃ―」
「そんな話よ。聞くだけ損したというか、こんなバカに世界が引っ掻き回されてるのかと思うと帰って寝たいわ」
九成君にそう返して、カズヒはため息をつきながら向き直った。
「もしかして「英雄やってる俺カッケー！」って思ってる？　むしろすっごくダサくてみっともないけど？　ちょっと映像にとって冷静になって見直しなさい？　恥ずかしさで絶叫したくなるわよ？」
煽っているとしか思えないレベルで、もの凄いずばずば切り捨てている。
英雄派の正規構成員が殆ど程度はともかく切れかかってる。
そんな空気を一切無視して、カズヒは震脚じみた踏み込みで周囲の注目をしっかりと集める。
そして息を吸い込み、言い放った。
「カッコいい生き方がしたいなら、まずは通すべき筋と流儀に乗っ取りなさい！　あんたらみたいななんとなく法律無視して俺カッケーなんてやってるくっだらないＤＱＮなんかより、法律をしっかり守って生きている真面目なサラリーマンの方が百倍カッコいいのよ、この中二病軍団が！」
……お、おぉ～。
なんていうか、本当に説教が似合う人物というかなんというか。
思わず誰もが二の句を告げないでいると、カズヒはため息すらついた。
「……さっさと出頭して罪を償うことね。そんなダサい真似するよりよっぽどカッコいい生き方よ」
同情にすら見える目つきで、そう吐き捨てたカズヒに、英雄派の正規構成員の殆どが殺意すら見せていた。
こ、これ大丈夫かな？　たぶん今回は小競り合いのつもりだろうけど、本格衝突になるんじゃないかな？
「……どうやらかの悪祓銀弾（シルバーレット）は、蒼天の下に行う俺達の挑戦がお気に召さないようだ」

「それでお天道様に恥じないの？　それは勘違いっていうのよ？」
曹操が流すけど、更にキレッキレで切り捨てている。
うわぁ、遠慮がない。
「こ、この……」
顔を真っ赤にしてブちぎれかけている構成員が動こうとしたその瞬間だった。
「「……はぁ、つっまらない」」
シンクロした男女の声が、その空気を塗り替えた。
先ほどのカズヒに負けないぐらいの呆れた感情を、カズヒに向けて吐き捨てたのは、ヘラストロテスとアーネ・シャムハト・ガルアルエル。
何の価値もないような道端の石を見るような目で、二人はカズヒを冷たく蔑視していた。
「幸香（団長）が気にしてたみたいだけど、この程度の子を気にするなんてね」
「まったくだぜ。さっさとバーニングして灰も残さず燃やした方が、このままにするよりまだマシなんじゃねぇか？」
その顔に浮かんでいるのは、断じて怒りの感情じゃない。
しいて言うならば、残念なものを見る哀れみに近い。
あぁ、この女はなんて可哀想なんだ。視線と表情がすべてを物語っていると言ってもいい
それに対して、カズヒも冷徹な視線を向ける。
哀れみ半分。もう一つは、しいて言うならば「手遅れ」と言わんばかりの表情だった。
「……一応聞くわ。いつまでくだらない真似をして、格好つける気でいられるの？」
「「もちろん、死ぬまで」」
即答で、ためらいもなく、心の底から断言した。
「生まれたのなら勝ち上がろうとしなくちゃね？　負けたら悔しいからって、勝つのを捨てるならもう死んでいるのと同じでしょ？」
「団長風に言うならあれだ。あんたみたいにつまらない人生を送る気なんかねえんだよ。生きているならバーニングになぁ？」

その答えに、カズヒは冷めきった眼を向けていた。
「もっと輝いて生きなさい？　自分の人生をつまらなくしてはダメよ？」
「お生憎様。反吐が出る異常者より平凡な常人は格上よ」
諭すような言い分をカズヒはあっさり叩き切り、
「気狂いがマトモよりカッコいいと、まさか本気で思っているのかしら？」
「当然だ。マトモな碌でもないモンは、さっさとバーニングしちまいな」
カズヒの指摘は鼻で笑われ切り捨てられた。
お互いに「能力だけはある邪魔者」と、認識が一致したことだけはその場の誰もが理解する。
曹操やアザゼル先生ですら介入をためらわせる空気の中、カズヒはアーネとヘラストロテスに殺意を向け、相手も敵意を鋭くする。
そして激突が始まろうとし―

「あ、ちょっとよろしいでしょうか？」

―唐突に、そんな声が響いた

和地Ｓｉｄｅ

……え？

俺達がふと振り返ると、そこにとても場違いな雰囲気の女の子がいた。

なんていうか、古き良き魔法使いのイメージを可愛い女の子に落とし込んだ感じの、金髪の女の子だ。

っていうか、どこから出てきた？

「……あら、ペンドラゴンのルフェイじゃない」

ドゥルヨーダナがそう言うけど、ちょっとタンマ。

ペンドラゴンって、まさか……。

「え、ペンドラゴンってアニルやアーサーの？」

「はい。アーサー・ペンドラゴンの妹で、ヴァーリチームに属しているルフェイ・ペンドラゴンです。おっぱいドラゴンさん♪」

イッセーにそう答えるルフェイって子は、なんていうかヒーローショーの最前列に座っているようなうきうきした表情をイッセーに向ける。

「ヴァーリ様達からお話は伺っています！　実はファンなんです、握手しても……いいですか？」

「え？　あ、どうぞ……？」

戸惑いながらもヒーローショーで鍛えられた反応で握手をすると、これまた年頃の少女らしい調子でぴょんぴょんと跳ねて喜んでいる。

……いや、ちょっと待とうか。

ここ、こっち側になんでいるんだ？

俺達が首を傾げていると、ルフェイはにっこりと微笑みながら英雄派の方を向いていた。

「……これはこれは。もしかして、俺達がこっそり送り込んだ監視に気づいたのかな？」

「はい。なのでお仕置きを頼まれまして……ゴっくん！」

ルフェイがそう言うと、川の方から……なんかでかいゴーレムが!?

「おぉ！　まさかゴグマゴグか！　動いてるのを見たのは初めてだぜ

！」
「そうなんです、アザゼル総督。オーフィスさんが次元の狭間で動きそうなのを見てたとおっしゃっていたそうでして、ヴァーリさまは探しておりました」
先生には後で詳しく聞くとしてだ。
……そのゴっ君とやらの腕が、持ちあがりながら英雄派の方を向く。
「そういうわけで、勝手なことをした罰ですよー！」
その瞬間、勢いよくゴグマゴグの腕が振り下ろされ―
「いや、木っ端組織が主流派（俺ら）に文句つけんなや！」
―それに向かって飛び出してく影が！
飛び掛かっていくのは、老人一歩手前なくせしてしっかりしたガタイの男。
そして飛び出す勢いのまま拳を握り構えると、そのままゴグマゴグの拳と激突する。
どでかい音が出て、お互いの衝撃がお互いを弾き飛ばし……って嘘だろ。
あのでかさの差でほぼ互角の衝撃だって？　何がどうしたらそうなるんだ!?
ゴグマゴグはそれでも踏ん張って、もう一度拳を構える。
と、とりあえず橋が崩落しそうだから一旦下がって―
「……様子を見に来たら何を凶行に走っている、ヴァーリチーム」
その瞬間、ゴグマゴグが空高く打ち上げられた。
見れば、さっきまでゴグマゴグの胸があった辺りに、悪魔の翼をはやした青年が一人。
っていうか、あいつは確かヴィール・アガレス！
「てめえはヴィール！　なんでこんなところに！」
「知れたことだ赤龍帝。禍の団と冥革連合は同盟を結んでおり、英雄派の実験は冥革連合はもとより冥界にとって益となる。ならば多少は手を貸さねばならぬが浮世の義理というものだろう」
そう答えるヴィールの後ろには、武闘派側の眷属が勢揃い……って

ちょっと待った。
何故かベルナまでいるんだけど。
「曹操、姉貴ぃ、とりあえず言われた通り合流とその辺りのすり合わせは終わったぜ？　資料にまとめておいたから、確認よろしくな？」
「お疲れ様。ちゃんと仕事がこなせる良い子でお姉ちゃんは嬉しいわ」
「ご苦労、ベルナ。では、そろそろ小競り合いは終えるべきかな？」
アーネや曹操がそう言うと、ヴィールは冷たい目で首を横に振る。
野郎、此処で俺達を殺す気か。
俺が構えると、ヴィールはため息をつきながら首をまた横に振った。
……怪訝な表情を浮かべてしまうが、ヴィールの殺気は俺達に向いていない気が―
「その前に、馬鹿に目覚ましの一撃をくれてやるとしよう―」
……って―
「―うおっ!?」
その瞬間、放たれた魔力砲撃に俺は反射で障壁を間に合わせた。
同時に、イッセーが拳を構えて前に出る。
その結果、障壁をぶち抜いたが減衰した一撃が、イッセーの鎧を軽く傷つけるにとどめた。
ふ、防ぎ切れなかったけど、イッセーが庇ったから結果オーライだ。
というか―
「てめえ、何を考えてやがる！」
「……味方を撃つか、普通!?」
イッセーが怒り気味に言うので、俺も乗っかって思わず突っ込んだ。
そう、ヴィールが狙ったのは敵である俺達ではなく、一応味方であるはずのルフェイだ。
いや、ルフェイの側も攻撃したけど。したけどガチの殺意は込めてないだろ。殺気が込められすぎてて、思わずカバーしちまったよ。
そんな俺達の言い分に、ヴィールは冷たい目で返す。

「普段から組織的活動を無視して好き勝手に動いたうえ、当然の警戒をされれば逆切れする。そんな連中には仕置きも必要だろう？　首でも捥いで投げつけようと思っただけだが」
「やりすぎな気がしないでも……いえ、あまりないわね。冷酷非情なテロ組織なら、それぐらいは当然するでしょう」
カズヒ姉さん。納得しない。
なんかもぉ、敵と味方の関係がごちゃごちゃになりそうな雰囲気なんだけどなぁ、これ。
俺が正直困っていると、更になんか妙な調子の足音が聞こえてきたぞ。
っていうより、俺達の後ろの方を英雄派の連中が怪訝な表情で見ている。
な、なんだ？
「……和っち。あの、なんで酔っ払いがこんな時間帯に？」
「……え？」
春っちに言われて振り返ると、そこには千鳥足のロスヴァイセさんがいた。
……いや、酒を飲み始めてから五分も立たずにこの状況だぞ。なんでそんなに酔えるんだ。
「人がいい気分で眠ってたらぁ～、なぁにをズッコンドッカンバッコンやってるんれすかぁ？　ぶっ殺しましゅよぉ？」
……しかも絡み酒のノリだ。酔っぱらいすぎて空気を読んでくれる気配がない。
俺はちらりとアザゼル先生やリヴァ先生に視線を送る。
おい、目を逸らすな。
「やるんれすか？　やるんれすね？　オーディンの糞爺にお付きなんてやってたわらしを……」
なんか気づけば、大量に魔方陣が展開されてるんだけど。
ヴィールもちょっと目を丸くしているレベルだ。割と怖い。
「全魔法フルバーストをくらぇぇぇぇぇ！」
やばい退避ぃぃぃぃぃ！

凄い勢いで周囲の地形が吹っ飛んでいく。英雄派は速攻で絶霧を展開して防いでいるし、ヴィール達もそっちに回り込んで避難している。
「はっはっは！　本当にいい感じの眷属が集まってるじゃないか、グレモリー眷属！」
曹操はひとしきり満足げに笑いながら、俺達の方を向くと槍を掲げる。
「グレモリー眷属の諸君！　俺達英雄派は冥革連合や各派閥と協力し、二条城で一つ実験を行わせてもらう！」
実験？　それが八坂姫を誘拐した目的か。
「余興も兼ねて招待しよう、止めに来るといい！」
その言葉と共に、霧が辺りを包み込む。
「全員変身や武装を解除しろ！　元の場所に転送されるぞ！」
え、まじで？
急いで変身を解除して―
「……なんだったんだ、あの霧？」
―ギリギリで変身が解除されると共に、霧が晴れてもとに空間に戻った。
……流石に少し、皆の表情が険しいな。俺も気を付けないと。
あ、先生に至っては我慢しきれなかったのか、近くの電柱を殴りつけている。
九重もうつむいて涙を堪えていた。
「母上が、母上が何をしたというのじゃ……っ」
英雄派に冥革連合。俺の前で、嘆きの涙を流させたな……っ。
招待してくれるならいいだろう。
「……あのにやけた顔に一発叩き込んでやる……っ」
俺はそう声を出してしまいながら、同時に二人の顔を思い出す。
何かに思い詰めているような春っちと、努めて感情を消しているようなベルナの顔。
あいつらは、本当にそんなことをしていて構わないってのか……っ。

冥革動乱編　第十七話　緊急会議、京都大決戦！

和地Ｓｉｄｅ

「しかし豪勢なバイキングだったな」
「それは同感。思わず食いすぎたな」
元浜に同意しながら、俺はスイートルームのソファでゆったりと体を休ませている。
夕食後、お風呂に入ってからの自由時間で、俺やイッセーは松田と元浜の部屋でだべっていた。
イヤホンと、バイキングってのはついつい食べ過ぎるな。
ああいう雰囲気込みで金をとっているようなもんだ。食材とかで元を取ろうとする奴いるけど、バイキングはまず楽しんだもん勝ちだよな、うん。
そんな風に満腹状態の腹を休ませていると、女子達も集合。
それとなく俺はカズヒ姉さんの隣に座り直す。うん、これぐらいは―
「「「「本当に分かり易い」」」」
「そう言わないの。流してあげなさい」
イッセー、ゼノヴィア、桐生、松田、元浜にハモって突っ込まれ、カズヒ姉さんも分かってスルーしてましたか。
地味に恥ずかしい。すっごく悶えたい。
「うんうん。これも青春よね！　主もにこやかに微笑んでくださるわ」
「あの、落ち込まないでください九成さん」
イリナとアーシアにも見抜かれていたようだ。本当に恥ずかしい。
正直五分ぐらい悶えていると、既に松田の撮った写真を部屋のテレビに映してだべり始めている。

なんていうか、こういう日常はいいもんだ。
もちろん、そういった日常が得られないことはいくらでもある。だけどこういう日常を過ごしている人達が、その責任を取って不幸になれとは思いたくない。
そして、小さな女の子のそんなものを壊した奴が、今夜実験とやらを行うわけだ。
……一発かましてやらなきゃ、俺は涙換救済（タイタス・クロウ）なんて呼ばれるに値しないだろう。
静かに決意を秘めながら、俺は拳を握り締めた。
そして、そんな拳にそっと手が添えられる。
いや、五秒ぐらい決意が吹っ飛びかけたんだけど。
ちらりと視線を向けると、小さく微笑みながらカズヒ姉さんが頷いてくれた。
……やる気が別の意味で跳ね上がったな。それはそれとして九重には謝るべきか？

そして就寝時間前後。ヘルスイートルームなどという名前の、会議室を兼ねてリヴァ先生達が止まっている部屋のリビング部分に、俺達全員が集合した。
うん、割と広いけど二十人近いからちょっと手狭だ。
「じゃ、悪い知らせ一つにいい知らせが幾つかあるが、まずは敵陣だ」
そしてその中央部で座っているアザゼル先生が、地図を勢いよく広げた。
「地図に記してある通り、二条城の周辺に英雄派及び冥革連合と思われる人間と悪魔の連合軍、そしてほかにも小規模派閥と思われる東西の魑魅魍魎が集まっている。どうやら本気で実験を成功させたいようだな」
先生がそう言うと、軽くため息をつきながら、小さな小瓶を三つほ

どおいた。
「悪い知らせだが、此処一連のテロでフェニックスの涙が困窮状態になってしまった。今回の作戦でお前達に配布されるのは三つ止まりだ」
　三つか。上位神滅具が三つもある敵を相手にするには、ちょっと不安になりそうではあるな。
　いや、貰えるだけ凄い幸運なことではあるんだが、難易度も信じられないぐらい高いから、ちょっと不安になってしまうな。
　皆も割と緊張感を見せているけど、カズヒ姉さんはあまり気にしていない雰囲気だ。
「まぁ、こういう時元々貰えるはずがない勢力は気楽でいいわ。そう思わない？」
「カズヒって覚悟完了すぎじゃん？　いや、確かにフェニックスの涙に慣れちゃってる自分がいるけどさ」
「主よ、この献身っぷりにご慈悲を……いえ、ちょっと引くわね」
　ヒツギもイリナもちょっと引き気味だ。メンタル強者というか特攻精神上等すぎないか？
「でもまぁ、回復系人工神器の研究は進んでいるからぁ、いずれはフェニックスの涙抜きでもある程度は大丈夫になるでしょうねぇ」
「っていうか、テロに使われないように聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）の保有者も探しているもの。フェニックスの涙は本当に必要な相手に集中するでしょうね」
　と、リーネスとリヴァ先生はそんな感じでまとめている。
　そしてまた、先生は不敵な笑みを浮かべていた。
「そして良い知らせについてだが、まとめるなら増援の当てができているって感じだな」
　おお！　増援の当てがあるのか！
「そうなんですか？　結構テロで分散してましたけど」
「だからこそだ。英雄派が幹部ごっそりで集まってるから、可能ならここで一気に潰したいってわけさ。現地の妖怪や術者はもちろん、三大勢力からも戦力は総出だ。デュナミス聖騎士団や大王派からも戦

力が急遽集まってるとよ」
　木場にそう答える先生だけど、まじで凄いな。
　どの勢力も本腰を入れているということか。これはちょっと期待できるぞ？
「フロンズさんが戦力を派遣するんだ。……凄い数送ってきそうだな」
「しかも団長達も戦力派遣ってわけだしね。リュシオンとか来たら割とガチで勝ち目増えそうじゃん？」
　イッセーとヒツギがちょっとドキドキワクワクだけど、これは中々凄いことになるな。
「しかも会談予定だった須弥山からも出る。思わぬレベルで大盤振る舞いだが……まぁ、これはサプライズにとっておこう」
「いえ、こういう時にサプライズはよしてください」
　カズヒ姉さんが当然のツッコミを入れるけど、不敵な笑みを浮かべる先生はびくともしない。
「ちなみに更にダメ押しだ。神の子を見張る者（グリゴリ）の秘密兵器を急ピッチで用意している。時間が長引くようならそいつも投入だ」
　おお。ついに神の子を見張る者が新兵器か。
「……なんか凄い物が出てきそうだな」
「正直楽しみだね。先生のことだから度肝を抜きそうだよ」
　匙やゼノヴィアがそんなことを言う中、先生は不敵な笑みを浮かべながらリーネスの肩を叩く。
「で、そんなわけだからリーネスも今回はオフェンスだ。その辺よろしくな？」
「「……え？」」
　思わず俺とヒマリがハモった。
　いやいやいやいや。ちょっと待とうか。
　リーネスが？　前線に？　それもオフェンス？
　いやいや、いやいやいや！
「無謀だリーネス！　何考えてんだ!?」
「そうですのよ!?　ワンパンですのよ、リーネスが！」

ハモってそう突っ込むしかない。冗談抜きで。
だってリーネスは完全にデスクワーク型だ。
中級堕天使ではあるが、それはあくまで性能の話。中級堕天使レベルでこのレベルの戦いのオフェンスになるには、数と技術が必要すぎる。
死ぬだろ、まじで!?
っていうかカズヒ姉さんと鶴羽は止めろよな!?
「まぁ、こっちもカバーするから心配はいらないわ。役に立つと断言していいわよ？」
「同感。いや、心配する気持ちは分かるけど、その辺りをきちんと考える奴だから、安心していいわよ？」
意外と心配してないな。
と、言うことはそれなりの準備は整えてるのか。
なら……様子見といくか。
「でも大丈夫ですか？　リーネスさんは、戦闘が得意ではないんですよね……？」
「心配かけてごめんなさぁい。でも、備えはきちんとしているし、必要な手間がかかるのぉ」
アーシアにそう答えてるし、だというなら……いいか。
「ま、フォローはきちんとするから安心しなさい」
「頑張って見せつけてきなさいよ」
カズヒ姉さんと鶴羽がそう言うけど、そんな鶴羽にアザゼル先生が肩を叩いて意識を向けさせる。
「悪いが南空。お前は匙と一緒にオフェンス担当だ。他のシトリー側（生徒会）はホテルの警備担当な？」
「「えぇ!?」」
驚く二人に、先生は呆れたような目を向けた。
「いや、匙の龍王化や鶴羽の固有結界は強力だからな？　特に曹操の聖槍を相手にするに当たって、ピエールの宝具を限定的にでも利用できるのは効果覿面ってやつだ。龍王の力も戦力として使えすぎる」
あ、それもそうか。

この二人、戦力としての価値がロキ戦で一気に跳ね上がったからな。
この状況下だと、それぐらいの戦力は必須ということか。
これだけの戦力がいるなら、勝ち目ぐらいはあるだろう。
と、そこでリヴァ先生が手を上げる。
「ただちょっと懸念事項があるわ。……八坂姫の居場所について」
と、注目を集める中、リヴァ先生は二条橋の方を指さした。
先生も損編で渋い顔をしているようで、たぶん既に伝えられていたってことなんだろうな。
「私の感覚だから理論的じゃないけど、英雄派が作ってたあの二条橋を模したフィールドは、地脈の感覚も二条橋と区別がつかなかったの」
「……つまり、地脈に近いオーラのラインまで作った異能的な偽物ってわけね？」
カズヒ姉さんの確認に頷いてから、そのうえで二条城の方に指を動かすリヴァ先生。
「そして戦闘中の周囲の風景から見て、京都市内はほぼ全域がコピーされてると見てよかったわ。更に力の感覚まで区別がつかないなら、もしかすると地脈そのものとリンクしている可能性もある」
おいおい。英雄派の技術力が馬鹿にならなさすぎるぞ。
っていうかちょっと待った。地脈とリンクしている偽京都ってことは―
「八坂姫が捕まっているのは偽京都かもしれないってか？」
「そうだと仮定すれば、いまだに八坂姫も英雄派の隠れ家も発見できない理由に説明がつく。リーネスが行くのはその辺の確認も兼ねてるってわけだ」
先生が俺の言葉に答えることで、厄介さが跳ね上がっていることを実感した。
となると、二条城での戦闘を制しても八坂姫を救出できないどころか、そもそもいないって可能性もあるわけか。
ちょっと空気が重くなるけど、先生はパンと手を叩いて俺達の注目

を集める。
「だがそれならそれで構わん。どちらにせよ二条城近辺に英雄派が動きを見せる以上、京都の二条城も抑えれば実験に介入はできるだろう。突破口ぐらいは見えてくるはずだ」
まぁ、実際それをしないという選択肢はないわけだ。
ならまずはそこに集中する。そのうえで、敵が何かをしてくるようなら叩きのめす。八坂姫を救出できるならそれもする。
ああ、それぐらいでいいだろう。
俺達の意志が統一されたタイミングで、アザゼル先生は最後のまとめに入る。
「いいか？　オカ研主体のチームはオフェンスだ。二条城に乗り込んで、八坂姫がいたなら確保して離脱が最優先。英雄派の相手は助っ人を主体とする方向だ。……無理をして死んじゃねえぞ！」
『『『『『『『『『はい！』』』』』』』』』
全員が声を上げ、作戦はまとまった。
……覚悟をしてもらおうか、英雄派。
嘆きの涙を流させて、只で済ませれると思うなよ？

冥革動乱編　第十八話　英雄とかより大事なこと

和地Ｓｉｄｅ

最も、出発までは少し時間がある。
なのでちょっと時間を持て余していたんだが……イッセーの奴、何を落ち込んでるんだ？
アザゼル先生やロスヴァイセさんと一緒にいるけど、相当落ち込んでいるな。
このタイミングでメンタルが不調とか、流石に不安だ。愚痴を聞いてガス抜きぐらいはさせてやるべきか。
「……どうしたんだイッセー？　一体何が―」
「京都の痴漢はイッセーが原因だったんだよ」
先生が言ったことに理解がさっぱり追いつかない。
俺は説明できそうなロスヴァイセさんに視線を向けるが、こっちはこっちでもう二日酔いだ。
別の意味で大丈夫か不安だな。星辰奏者（エスペラント）は肝機能も強化されるから、二日酔いには十中八九無縁なんだよなぁ。気持ちは分かってやれないだろう。
仕方ないのでイッセーに視線を向けると、何とも言えない表情だった。
「新幹線に乗ってる時に飛んで行った俺の可能性が憑りついた人が、おっぱいを求める痴漢になってたんだ」
「……俺は、一周回って嫌味抜きでお前を凄いと思ったぞ」
どういう意味だよと言いたげな視線が返ってくるが、実際嘘偽りなんてない。

真剣に視線を合わせて、両手をイッセーの方において断言する。
「どいつもこいつも理性を失ってただろうが。お前普通に生活できてる時点で奇跡だって」
「反論できねえ！」
いや本当に感心したぞ。
松田もおそらく被害者なら、イッセーの性欲は常人では精神汚染のレベルだということだ。それで普段からあれなら納得だし、むしろ敬意を向けるべきかもしれないぞ。
そりゃ一日七回から七日に一回の頻度でひきつけも起こす。むしろその程度で済んでいることを褒めるべきだ。
「とは言っても、痴漢になった人達にはフォローしてあげないと。イッセーが悪いわけじゃないけど、過失ゼロってわけにもいきませんし……ねぇ？」
「アジュカの奴も巻き込んでやるか。悪魔の駒のブラックボックス解放は絶対に要因だろうしな」
そうだな。これはマジで何とかしないといけない。
いや、イッセーからしても予想できるわけはないんだが、かといって痴漢に走った原因である以上何かしらの補填は必須だろう。
まぁ、それ以上にきっかけを作ったアジュカ・ベルゼブブさんも巻き込めば資金面はどうにかなるか。おっぱいドラゴン、印税が凄いことになってるらしいし。
「とりあえず、星辰奏者（エスペラント）の犯罪者が動いたことにしません？　あれ独創性強すぎるのもたまにありますし、誤魔化しようはあると思うんですよ」
「それもそうだな。いやぁ、文明の発達に伴って異形を隠すのも大変だと思ったのが昔の話になってきたな。星辰光（アステリズム）様様だぜ！」
俺の提案に先生も即座に乗っかってくれる。
イヤホンと、星辰光は何が出てくるか分からない一芸特化が結構多いからな。こういう時、そういう星辰奏者が出てきたことにすればそれで押し通せるところがあるよなぁ。不幸中の幸い。
「それはいいですけど、反省は必要ですよ、イッセー」

と、シャルロットがそこで割って入ってくる。
「そもそもの話、下手な核兵器を超える戦術的価値を持つ赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）の更なる覚醒に繋がる行動を、移動中の新幹線でやるのも問題といえば問題です。何かあったら大事故で死傷者多数ですからね？」
「うん。今度からはもうちょっと安全なところでやるよ。……痴漢多発の原因とか、正直シャルロットにも痴漢になった人にも悪かったし」
イッセーも素直に反省しているようだ。
とはいえ、イッセーはそれとは別の意味で考え込んでいるみたいだな。
「どうしたんだ、イッセー？」
なんていうか、このタイミングで悩まれると困るんだが。
そしたらアザゼル先生が、何かに納得した感じでうんうんとうなづいていた。
「なんだかんだで色々と考えるお前のことだ。英雄派について考えてたのか？」
「似たようなもんです。というか、英雄ってものについて考えてました」
な、なんか深い話になりそうだな。
「ある意味お前も、三大勢力にとって英雄だろ」
「それ言ったら、お前も似たようなもんだろ」
即答で返されるけど、ちょっと……なぁ？
「お前の活躍には劣るって。ことロキ戦において、俺はちょっと目立つモブ程度だったろうしな」
というか、カズヒ姉さんやイッセーのパワーアップっぷりに比べると、俺はどうも目立たない気がする。
いや、インガ姉ちゃんやリヴァ先生を引っ張り上げれたのは良い事だとは分かっている。そこに関しては胸を張れる。
大体俺の主眼は「涙の意味を変える」ことや「そもそも嘆きを生まない」ことだ。褒められるのは嬉しいし、カズヒ姉さんを惚れさせた

いし、ボーナスが貰えるのは良い事だけど、渇望的なところに名誉欲はない。
　それだけ原初の誓いが強いってことだけど、それを踏まえてもだ。
「窮地において俺は、どうしても突破力というか打開においてはあまり尽力できてない。守りにおいては出来ているとは思うが、それでも活躍という点ではお前やカズヒ姉さんには負けるからな」
「その割には、落ち込んではいませんね」
　シャルロットに指摘されるけど、それはそうだ。
「結果的に本願は叶えてるからな。……と言っても、今後を考えるとちょっと不安だけど」
「確かに……な」
　先生もその辺は納得しているようだ。
「言い方は悪いが、お前は精神面が成熟しているうえ地に足をしっかりつけるタイプだ。常に自力で出せるギリギリを出して戦える安定した強みを持つが、爆発力にはどうしてもかけているからな」
「やけにはっきり言いますね」
　イッセーに首を傾げられるけど、これに関しては納得できる。
「星辰光（アステリズム）って個人個人の精神や肉体の素質が関わるだろ？　あれってある程度の性格診断にも使えるんじゃないかって話が多くてなぁ」
　俺がそう言うと、先生も頷いた。
「で、メンタル面については基準値（アベレージ）と発動値（ドライブ）とかが案外当てはまりやすくてな。当人の肉体的資質もあるから断言はできないが、この差が小さい奴ってのは、土壇場の爆発力とかより安定して戦うのが向いているメンタルが結構多いって意見が多い」
　先生の言うとおりだと思う。
　実際問題、逆のパターンは当てはまりやすいからな。
「まあ、逆パターンの「出力差が激しい奴はメンタル面でも爆発力がある」ってケースはもっと当たりやすい。たぶんだが、イッセーは絶対出力差が大きいタイプだし……な？」
　そう言いながら、リーネスや鶴羽と話し合っているカズヒ姉さんの方をちらりと見る先生。

……うん。言うまでもない。
カズヒ姉さんはまさにそれがぴたりとあてはまっている典型例だ。
「カズヒ(あの女)の星辰光とメンタルを考えろ。対悪戦闘(勝つべき時)に何が何でも勝ち目をもぎ取るタイプだ。あれ見てると血液型占いより絶対に参考になる気がしないか？」
実際カズヒ姉さんの星辰光は、星辰光占いの信憑性を高くするタイプだと断言できる。
「ちなみに、「出力差がデカい」「最高出力も高い」「それとは別に収束性も突き抜けてる」の三点セットは高確率で「ヤルと決めたら死んでもヤル」タイプだ。根性で激痛とかも無視して突貫するような化け物だと思え」
「「凄い納得です」」
先生の説明に、三人が揃って納得する。俺も後ろでうんうんと頷いたとも。
ぶっちゃけカズヒ姉さんはまさにそのタイプの典型例だと思う。
そもそも性能を高くするには肉体的な資質も必要だから、絶対ではない。だが強力な星辰光と断言できるようなタイプの星辰奏者は、大抵の場合星辰光の性能で性格がある程度読めることが多い。
そういう意味だと、俺の場合は—
「性能が全体的に強力なうえで、出力差が大きくない。この手のパターンは土壇場の窮地より安定してポテンシャルを発揮するタイプに多い。神器持ちでもこのタイプは、禁手に至りにくいと統計的にも出てるんだよ」
そんな先生の説明的にも、俺はやっぱり禁手になりにくいわけだ。
「いっそのこと、英雄派から技術でも奪った方がいいんだろうか」
「やめとけやめとけ。禁手ってのは神器が極限の思いに応える形態だ。理論的に至れる方法で至ったとしても、本質的には劣っていると考えるべきだろうさ」
先生はそう言うが、しかしなぁ。
「天然だから人工より下というのは横暴では？　ダイヤモンドも人工の方が強度は高いと言いますし、文明社会では何かしらで人工にして

いる方が基本的には優秀ですよ？」
「原理が細かく解明してるならそれもありだが、まだまだ未開の分野で人工だよりってのはやはり脆いと思うがな。特に和地は神器関連のレアケースだし、天然で至ってこそだと思うだけどよぉ」
「うぷっ。すいませんが、ちょっとトイレに……」
シャルロットとアザゼル先生が議論になる中、ロスヴァイセさんがトイレに特攻した。
まだそんなに酔ってるのか。どんだけお酒に弱いんだというか、いっそのこと星辰奏者になれないものかと思うというか。
まぁ、話を戻すか。
俺はイッセーに向き直ると、話を元の方向に誘導する。
「で、英雄について考えてたって言うが、どうしたんだ？」
「いや、なんていうか……そもそも曹操ってどんな人なんだろうって。……言っとくけど、史実の方だぞ？」
その言葉に、俺はそういえばよく知らないなぁと思った。
たぶん三国志の漫画とかは参考にしない方がいいだろう。
というわけで、ちらりと現物を知っているかもしれないアザゼル先生に視線を向けると、先生はうんうんと頷いた。
「そうだな。手っ取り早く史実の曹操（奴）の英雄としての根本を考えると、人材狂いってところか？」
人材狂いか。
「細かいことは各自で調べてもらうが、曹操という男は当時の価値観としては異例なほどに、地位や身分を重視せずに能力がある物を集めていた。そういう意味では英雄派の曹操もそうだが、手段がえげつないのが頂けんな。史実の曹操は三国志で言うほどは悪役じみてないぞ？」
ふんふんなるほど。
と、イッセーは何か深く考え込んでいる。
怪訝な表情を浮かべていると、アザゼル先生がため息をついた。
「まったく。大方自分が英雄に打倒される悪魔だってんで、その辺無駄に考えこんでるんだろ？」

そういうと、先生はシャルロットの肩を掴んでイッセーに押し付ける。
「ちょ、アザゼル総督!?」
「先生!?　ちょ、恥ずかしいからストップ！」
「いいからその状態でよく聞け。……シャルロット・コルデーも味方にとっては英雄に負けず劣らずの偉人だ。だが、お前はシャルロットを見てそんな風に考えるか？」
そういわれて、イッセーはぶんぶんと首を横に振る。
「ありません！　シャルロットはそれ以上に俺の相棒で、家族で、仲間です！」
……シャルロットがちょっと顔を赤くしている。うん、そういうとこだぞイッセー。
でもまあ、先生の言いたいことが何となく分かった気がして、俺はなんていうか苦笑する。
「つまり、その程度でいいってことですか先生？」
「そういうこった。英雄の意味だのなんだの考える暇があるなら、そいつ自身を見て判断しろ。特にイッセー、お前はそこが良いところだぜ？」
確かにな。
そういった視点をあまり持たず、個人の人柄とかを見る。そして体当たりで寄り添ってくれるのが兵藤一誠。ハーレム王になってる男だ。
英雄が何たらとかそういうことは、イッセーにとってあまり重要な価値観じゃない。考える必要がある時が来ても、そこに囚われたらしくない。
なんていうか納得してると、先生がにやりと笑ってイッセーの顔を覗き込む。
「お前の夢は何だったんだ？　言ってみろ！」
「おっぱい一杯夢いっぱいの、最高のハーレム王になることです！
そして最強（ポーン）の兵士になって見せます
！」

「そういうこった！　お前はそれでいいんだよ。何よりそんなおっぱいドラゴンだからこそ、俺達やガキどもはお前に期待してんだからな！」
そう言ってにっこり笑った先生につられて、俺やシャルロットも笑ってしまう。
ま、イッセーはそっちの方がらしいよな。

で、そして出発のタイミングになったらひと悶着だ。
「今すぐ戻るか絞め落とされるか好きな方を選びなさい」
「鬼かお前！」
殺気一歩手前の睨みを利かせるカズヒ姉さんに、イッセーが思わずツッコミを入れた。
二条城に向かう為に移動手段を待っていた俺達に、九重が一緒に行きたいと突っ込んできた結果、こんな感じになっている。
「そこまで言うことないだろ？　もしかしたら八坂姫を助ける力になるかもしれないし、ちょっと可哀想だろ」
「具体的にどう役に立つかも提示できないのに、要人を前線に送れるわけないでしょ？　もし何かあればあなたや私の責任じゃすまないわよ？」
「なら俺達が守ればいいだろ？　何の為に俺達は一生懸命鍛えてきたんだよ」
「少なくとも私は違うし、そもそもそれは慢心でしかないわ」
なんて感じで、イッセーとカズヒ姉さんで言い合いになっている。
あ～、コカビエルの時もそうだったけど、この二人って根っこの相性は悪いところあるよな。
暗部部隊のダーティジョブを覚悟完了しているカズヒ姉さんと、子供のヒーローを地で行く節がある人気者なイッセー。スタンスが違うのは当然だし、相容れないところは徹底的に相容れない。

普段は双方ともに無駄な揉め事は起こさないし、どっちも双方に多少の理解があるからまとまってるけど、ガチで対立すると絶対激しくなると思ってはいたよ。
「リアス部長やクロード長官、アザゼル先生に魔王ルシファーの責任問題にも繋がるわ。私やあなたが罰則受ける程度で済む行動で納めるべきだと思わないの？　彼らに恥ずかしくないのかしら？」
「ここで九重を突き放すことがいいって？　そんなもん、ファンの皆にも、そんな人達のヒーローでいてほしいといったサーゼクス様にも、俺を信頼してくれる部長にも、もっと恥ずかしいに決まってる！」
……お互いの言い分が分かるし、何より二人が重点を置いているスタンスが違うから平行線確定だな。
となると、此処でガチバトルになるまでに何とかするのが俺の役目……か。
「ハイハイ二人ともちょっとテンション落として！　とりあえず俺に話をさせろ」
そう言って割って入ってから、九重に屈み込んで視線を合わす。
九重はイッセーにしがみつく形で、意地を見せている感じだった。
まあ、今回の問題は通すべき筋を通せば片が付くから、そこまで意地になる必要はない。
「なあ九重？　今お前が無断で俺達についていったら、いろんな方面に迷惑がかかるんだ。……どうしてもついていきたいなら、やるべきことは別にある」
「……そうなのか？」
よし、つかみは行ける。
俺は目を閉じてうんうんと頷きながら、言うべきことをはっきりと告げる。
「無理を通したいならきちんと許可を取れ。どうしても助けに行きたいというのなら、その価値があることを三烈さんとかアザゼル先生にしっかり認めさせろ。こんなところで我が儘を言うより、そっちの方がよっぽど建設的だ」
実際それが筋ではあるからな。

なんていうか空気が温くなった気がするけど、そこが重要なんだ。いやホント。
「通すべき筋を通していれば、カズヒ姉さんだってある程度は妥協するさ。反論も許可を出した先生に向けられるし、そもそも先生が許可を出したのなら先生の責任関係は八割がた俺らも無視できる」
誰もが聞き入っている気がするから、このまま続けるか。
なんていうか本当に静かになった気がするし、このまま続けて――
「……おーい。ちょっと目を開けろー」
「和っちゴメン。なんか、マジゴメン」
――あれ？
何故か聞き覚え在りすぎるけどここで聞こえるわけがない声が聞こえるぞ？
嫌な予感がして目を開けると、そこは破壊されていた偽京都の二条城。
そして何より――
「……悪い。取り込み中だったか？」
「悪いけど、和っち以外は別にいるから」
――ベルナと春っちだ。

これ完璧に恥ずかしい奴だ!?

冥革動乱編　第十九話　京都大動乱！

アザゼルＳｉｄｅ

「九尾の嬢ちゃんごとイッセー達が消えただとぉ!?」
俺は連絡を聞いて、思わず絶叫しちまったよ。
「九重殿までとは、これは困りましたな……」
三烈の奴も歯噛みしている。ま、これは当然だろう。
ったく、あの嬢ちゃんには大人しくしとけって言ったんだがな。我慢できずにイッセー達についていこうとして、そのまま巻き込まれたってことか。
態々あっちから強制転移させるってことは、これはリヴァの言っていた通りだな。
本命はあの疑似京都。二条城近辺に集まっているのは、実験を滞りなく進める為の備えってところか。
「どうするの、アザゼルちゃん？　赤龍帝ちゃん達を助けに行く？」
「いや、あの疑似京都への突入はまず困難だ。今の俺たちにそこまでの余裕は捻出できねえ」
セラフォルーにそう答えるが、同時に方策がないわけじゃねえ。
「増援なら何とかできるだろう。同時にそのタイミングでアレを物故むことで対処する。フロンズ達の例の奴はそっちに回すように伝えといてくれ」
さて、それだけ叩き込めば余地はあるが、それまでイッセー達がしのぎ切れるかがすべてを分けるな。
英雄派の連中、おそらくほぼ全員が禁手に到達していると見ていいだろう。曹操達の考えから見ても、態々引っ張り込んだ連中なら勝てると算段を立てているはずだ。
加えて冥革連合の連中は、英雄派に比べると遊びがない。容赦なく

殺しに来る可能性も捨てきれねえ。
ったく、この状況で面倒なことになったもんだぜ。
「……本当に困ったものです、九重殿にも」
静かに三烈の奴がため息をつく。
……俺とセラフォルーは、静かに警戒心を強めていた。
勘、と言えばいいんだろうな。魑魅魍魎跋扈する政治の世界や、化け物だらけの神話の激闘を潜り抜けてきた身として、警戒する方がいいと直感が告げていた。
「三烈ちゃんってば、あまり慌ててないのよねん？」
「ええ。グレモリー眷属のあの治癒の少女がいるのなら、即死と欠損以外は気にしなくてもよいでしょう？　いい神器を持ったものです」
その返答に、警戒心は一気にマックスに跳ね上がった。
「つまり、アーシアの当てがあるなら重傷程度はしてもいいって感じか？」
「ええ、そういうことです」
ああ、なるほど。
そういうことか……っ！
「三烈殿？　どうなされ―」
「近づくな！」
声をかけようとする狐の女を庇いながら、俺は光の槍を突き付ける。
やってくれるじゃねえか。確かに、ベッドから出てはいけないような深手を負ってる奴を真っ先に疑う奴は中々いねえ。
「アーシア（グレモリー眷属）が京都に修学旅行で来ることまで踏まえた作戦だってか？」
「こちらのアドリブだがな。こういう時の為に思考誘導は必要だろう」
にやりと笑いながら、三烈は刀を抜き放って俺達と対峙する。
同時、三烈の後ろにあった壁が切り裂かれ、そこから悪魔や妖怪がわらわらと入ってきた。
なるほど。手勢を既に潜ませていたってか！

「……三烈殿、利害の一致とはいえ感謝するぞ。おかげで直接セラフォルー様に批判ができる」
「こちらのセリフだケンゴ・ベルフェゴール。我ら妖怪の復興が成し遂げられる余地が生まれたのだからな」
　そう言い合う悪魔と妖怪の筆頭共に、俺は舌打ちした。
「冥革連合の連中か！　しかもてめえがそこそこの立場だとは思わなかったぜ、三烈！」
「しかり。我々は禍の団が派閥、百鬼ハント。そして彼らは今回派遣された冥革連合の幹部と眷属だよ」
　百鬼ハント。……頭悪そうな組織名なことで。
　だがそんな和洋折衷な名前名だけあって、入ってきた妖魔の類は日本の妖怪だけじゃない。
　西洋のオーガや、妖精の類までいるじゃねえか。やってくれるな、おい。
「世界中の妖魔のはぐれ物や馬鹿が集まった組織ってことか。ってことはあれか？　百鬼夜行とワイルドハントからとったってことか！」
「左様。脆弱な人間に人界を押し付けられるなど不満ゆえに、我ら強大たる者が世界を堂々と闊歩する世界を作る軍団だ」
　うわぁ、馬鹿の集まり。
　俺はツッコミを入れるのも面倒なんで、隣の上級悪魔に視線を向ける。
「そしてあんたが冥革連合の幹部か。名代ってところか？」
「その通り。実働部隊の指揮を一任された、ケンゴ・ベルフェゴールという者だ」
　そういいながら、ケンゴ・ベルフェゴールは右手を軽く振るう。
　そこから血液のようなオーラが流れ出し、一振りの剣を作り出す。
　そこから放たれる聖なるオーラ。……どういうことだ？
「ハーフなのか？　冥革連合の幹部は、全員上級悪魔だとばかり思っていたが」
「ハーフや他種族を問答無用で拒絶するつもりはないが、私は純血悪魔だよ。……だが」

そう告げ、聖なる剣を構えたケンゴはにやりと笑う。
「我が刃、魔性を切り捨てるに相応しい力と知るがいい」
それに応えるように、ケンゴの眷属も全員が刀剣類の得物を構える。
……ったく。初っ端らからこれってのは流石にきついってもんだなぁ、おい！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

三烈が本性を現しケンゴ・ベルフェゴールが強襲をかけるタイミングで、敵の本隊も動きを開始する。
ターゲットは各勢力の首脳陣が集まっている京都サーゼクスホテル。そして同時にテロ組織による犯行声明が送られながら、敵戦力が出撃する。
各地のビルに潜伏していたバトルレイダーが総力を挙げて飛び出し、分隊単位で包囲するように京都サーゼクスホテルを囲み出す。
そして一部が小隊単位で合流し、部隊としてサーゼクスホテルを襲撃せんとしたその時―
「……撃てぇ！」
その声が聞こえたと共に、砲弾がサーゼクスホテルの近くにある寺社仏閣の門に直撃した。
その砲撃に対し、ホテル警護の部隊と禍の団の部隊は困惑する。
狙いが間違いなくおかしいし、何より双方共に想定外の攻撃だったからだ。
結果といて視線がその方向に集まり……誰もが困惑した。

そこに現れるは、少なく見積もって１００を超えるレジスティングアントレイダー。そしてそれらにカバーされる、機甲部隊として機能する数の戦車・歩兵戦闘者・装甲車の軍勢、その指揮車両から声が響く。

「愚かなるジャップ共よ！　偉大なる白き栄光に従属する栄誉を放棄し、あろうことが偉大なる米国兵士に貸しづく所から反対運動まで見せる愚図共が！　教育をしにきてやったことに感謝するがいい！」

その言葉で、誰もがあの勢力が異形と全く関わり合いの無いテロ組織だということを理解する。

理解はした。だが、何故京都だと言いたくなる者が多数生まれたのは仕方がない。

「さあジャップ共！　教育的指導の時間としれぇい！」

そして戦車砲からＡＰＳＦＤＳが放たれ、更に混乱は加速し―

「……これだから人間は屑が多い。間引きぐらいは自分でしてほしいものだよ」

―それを拳で弾き飛ばす者がいた。

衝撃で帽子が吹き飛べば、そこにあるのはヒューマギアであることを示すユニット。

もしそこにイッセー達がいたのなら、記憶を刺激されて怪訝な表情ぐらいは浮かべていただろう。

彼らと少しだけ言葉を交わした青年こそが、ヒューマギアとしてこの場に立っていた。

「ん～？　ガラクタ風情が我らの教育的指導に意をとな……まて、そもそも何をした？」

「迷惑な害獣だ。ちょうどいいからちょっと間引くとするか」

困惑するテロリストに対し、彼はため息をつくと腰にフォースライザーを装着する。

『フォースライザー！』

『Ｃａｐｅ　Ｌｉｏｎ！』

最大のライオンとも称される、ケープライオンのロストモデルが組

み込まれたゼツメライズキーを、彼はフォースライザーに装填する。
そして冷徹なまでの殺意を見せて、処刑を宣告するように宣言する。
「変身」
『フォースライズ！　ケープライオン！』
鋼の装甲を身に纏い、そして彼は拳を構える。
そこからあふれる神々しさすら感じさせるオーラを制御しながら、戦線は布告される。
「死になよ、愚かな人間達。疾風殺戮．ｃｏｍのリクが、面倒だけど直々に間引いてあげるからさ」
今ここに、事実上の三つ巴が発生した。

一方その頃、京都二条城上空に、神仏が降臨した。
「気の流れが微妙に乱れ……いや、繋がっとるなぁ。あの坊主、またやんちゃをしとるもんじゃ」
そう呟くは闘戦勝仏。
かつて孫悟空と呼ばれる仏は、この事態に増援として派遣されていた。
『おいおい勘弁してくれよぉ！　聖槍の相手なんて俺は嫌だぜ!?』
「……我慢しろぉ。俺も腹減ったけどやるんだからよぉ」
「ったく。俺達全員を送り出すたぁ、天帝も本気ってことなのかねぇ？」
更に彼と共に三蔵法師に仕えし、西遊記の一行が勢揃い
魔王を眷属ごと相手取っても勝ち目をもぎ取れるだろうその戦力は、それに気づいた者達が一周回って笑ってしまうほどのものである。
故に彼らの参加によって、この戦いの勝敗は決定づけられたかに思えた。

「なるほど。どうやら少しは楽しませてくれるようだ」
だが、それは違うといわんばかりに声が響く。
闘戦勝仏の視線がちらりと向けば、そこには三人の悪魔が向かい合うようにして立ち塞がる。
「悪いが、忌々しい害獣を駆除する為に必要な実験でな。引き籠ってばかりの老害共に邪魔はさせんよ」
「そういうこと。ゴメンねぇ、おじいちゃん達」
「……邪魔はさせない。さて、覚悟してもらおうか」
戦意を滾らせるは、ヴィール・アガレス・サタン及びその眷属。
女王、クラウディーネ・ドゥルカンナインと、変異の駒たる戦車の駒を使用する、双竜健也（そうりゅうけんや）
更に後ろには、ロキ達との戦いで認識された新型のサリュートが確認されている。
「ほっほぉ。冥革連合の坊主達か。剛毅なこったのぉ。……その程度で足止めできると思われるのは心外じゃな」
「足止めなどとはなめられたものだ。……その首、貰い受けるつもりで来た」
静かに、お互いが闘士を燃やす。
そんな中、健也は怪訝な表情を浮かべていた。
少し首を傾げていたが、我慢ができなかったのかヴィールに意識が僅かに向けられる。
しかしそこを突かれることはない。
意識が僅かに割かれているが、戦闘の構えと集中力は十全に残っている。これを隙と捉えて仕掛ければ、逆に討ち取られるのが自分だと分かる。それほどの実力者であると、認識させられるからであり―
「ヴィール様、少しだけ気になったことがあるんですが」
「なんだ？　隙にならぬよう、今のうちに聞いておけ」
「……河童がいないんですけど、沙悟浄は誰なんですか？」
―ただし相手の逆鱗を踏む抜いた時は話が別である。
「「あ、馬鹿！」」
「……死ね」

「え、なにその本気の口調……うわぁあああああああ!?」
戦線の火ぶたは切って落とされた。

補足。
沙悟浄は一種の仙人であり、実は河童ではないそうです。当人は凄く気にしているので、うかつに言わないようにいたしましょう。

冥革動乱編　第二十話　真正面から不意を衝く！

イッセーＳｉｄｅ

疑似京都の引っ張り込まれて、俺達はそれぞれ英雄派の襲撃を受けた。

誰もかれも禁手に到達してたうえ、自分の意志で英雄派に属している連中。それも、こっちの能力を考えて選ばれたっぽい奴らだったから皆手古摺ったみたいだけど、何とか無事に潜り抜けた……って言いたいんだけど―

「和地ー！　和地出ますのよー！」

「……この様子だと、和地だけ追い込まれてるみたいねぇ」

電話に出ない九成を心配するヒマリやリーネスを俺達も不安げに見てしまう。

そう、九成だけが合流できていない。それどころか誰も連絡すらできていない状態だった。

「……どうする？　九成だけ疑似京都に連れ込まれなかったなんてことは、流石にないだろ？」

「同感です。それにどうも戦闘が二条橋近辺で起きているようです。おそらく戦闘が長引いているのかと」

ロスヴァイセさんが俺にそう答えるけど、つまりかなりやばいってことだよな？

九成以外は大抵何人かでまとまって転移させられてた。俺の場合は九重が強引に入ったこともあって特殊だけど、その時は俺を倒したがっていた奴が選ばれた感じだった。

となると、九成の場合はそういう奴が選ばれてるってわけで……。

「絶対ベルナね。断言できるわ」

南空さんがそう言うと、カズヒも額に手を当ててため息をついた。

「イッセーのケースといい、妙なところで外連味を……っ」
「でも、落ち着かなきゃ駄目よぉ」
苛立ちが見えてるカズヒの肩に、こっちも不安げなリーネスの手が乗っかった。
「今優先するべきは和地じゃないわぁ。まずは八坂姫の救出か英雄派の打倒。優先順位をはき違えれば、そこから絡めとられるわよぉ」
リーネスは首を横に振りながら俺達を見回して、そうはっきりと言う。
くっそぉ。めっちゃくちゃ心配だけど、言ってることが正しいから言い返せねえ。
たぶん九成はそうするだろうし、俺達が助けに行こうとしたら逆に怒りそうな気もする。
「確かに、和地なら「そっちは任せる！」とかですましそうですのよねー」
付き合いの長いヒマリまで言うなら尚更かぁ。
よし、こうなったら覚悟を決めるか。
九成だって俺達の仲間だ。そう簡単にやられるわけがないしな。
「じゃあ、まずは八坂さんを助けて曹操達をぶっ飛ばす！　それまで九成がしのぐって信じよう！」
「よ、よいのか？　母上を助けてくれるのは嬉しいが……」
九重が躊躇いがちだったけど、その肩にカズヒは手を置いて首を横に振った。
「これが私達に課せられた責任というものよ。将来的に貴女もそれ以上のものを背負うのだから、勉強しておきなさい」
うん、カズヒってば厳しい。
ただ―
「少し手に力が入りすぎているぞ？」
「そこ、指摘しない」
ゼノヴィアに南空さんがビシっとツッコミを入れるけど、実際俺達もちょっとは気づいてた。
うん、カズヒも九成のこと結構好感度高いんだよなぁ。

なんていうか、ちょっと空気が緩んだな。
「……うんうん。カズ君が順調に成果を上げてて先生は嬉しかったり」
「リヴァさん、ちょっと空気を呼んでくれない？」
リヴァ先生に茶化されて、カズヒもちょっとだけ頬が赤い。
……ちょっと空気が緩みすぎたかな？
と、そこでインガさんがパンと手を鳴らす。
「……和地君は心配だけど、まずはやることを終わらせないとね。それに――」
その言葉に合わせてるみたいな感じで、二条城の門がゆっくりと開いていく。
なるほどな。
「向こうも待ちくたびれてるみたいだし、寄り道は許してくれそうにないしね」
インガさんの言う通りか。
これ以上何かをしようとしたら、あっちが余計なことをしてきそうだな。
ああ、ならこっちもやってやるさ。
「……上等よ！　ミカエルさまのA（エース）として、テロリストにはお仕置きしちゃうわ！」
「お怪我は私に任せてください。全部癒して見せます」
イリナもアーシアも気合を入れてるし、ならやることは決まってる。
俺は一歩前に出ると、同じタイミングで前に出ていたカズヒと目を合わせて頷いた。
「まずは曹操達を何とかして――」
「――その後和地を助けましょう」
待ってろよ、九成。
やることやったら絶対助ける。だから死ぬなよな！

九成Ｓｉｄｅ

糞ったれ！　連絡している暇もない！

ベルナと春っちの左右からの砲撃は、前回よりも正確でいて、しかし若干のばらつきによって弾道の予測と阻害している。

左右から放たれる連続砲撃を回避しつつ、俺は何とか隙を見出そうとしているけど……だめか。

二人揃って練度が高い。この砲火を掻い潜りながら突破するのは、今の俺では無理がある。

となるとベターな選択肢は、とにかくこの二人を釘付けにすることだ。

間違いなく手練れである二人を足止めしていれば、それだけでもカズヒ姉さん達に貢献できる。少なくともむざむざやられたら、敵の戦力的にも味方の士気的にもキッツいからな。

ただ、その動きにした瞬間に春っちの砲撃に殺意が上乗せされた。

「そんなものじゃないでしょう、和っち！」

「いや、こんなものでも苦労してるんだけど!?」

というよりだ。

いい機会だ。今のうちに聞けるだけ聞いておくさ。

俺は腹をくくると、多少の被弾覚悟で春っちに向かって突撃を仕掛ける。

ディフェンディングタートルの強みを最大限に生かして突貫し、俺は多少の負傷と引き換えに、春っちの懐に飛び込んだ。

春っちも炎を刃を形成して切りかかるが、俺は魔剣で受け止めてつばぜり合いに持ち込む。

ベルナは即座の攻撃を避け、最適な仕掛けるタイミングを計っているようだ。都合がいいからこのまま話を勧めよう。

「春っちは、何をそんなに追い詰められてる？」
俺はそこが気になっている。
ロキとの戦いでかなり暴走気味だったが、ふと考えてみると再会した時から片鱗は見えていた気がする。
切羽詰まっているというか、張り詰めているというか、余裕がないとでも形容するべきか。
ロキの一戦においてはそれが暴発した。そう考えるべきだろう。
ヴィール・アガレス・サタンは純血悪魔の強化を主眼とする男だ。もしかして、気を張り詰める必要に迫られた環境なのかもしれない。
「やむを得ない事情があるなら、力を貸す！　春っちにそうしてやりたいと心から思ってるし、それが俺の決めた俺の生き方でもあるからな！」
「……そろそろいいか！」
後ろから振るわれる高圧水流の斬撃を回避し、俺は視界にベルナも捉える。
ああ、それにだ。
「なんでここまで気にしているか分からないが、お前もだベルナ！」
ああ、こいつのも言っていいだろう。
なんで気になるかはまだ分からないが、それでも分かることはある。
「当ててやろうか？　お前、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）どころか、英雄派の理念に賛同なんてしてないだろ？」
春っちの攻勢が緩んでいるのを利用して、ベルナと打ち合いながら俺ははっきりと確信を口にする。
向こうも特に強気の言葉はかけてないが、図星を疲れたのか表情が強張っている。
ああ、やっぱりな。
ザイアの連中を思わせる、後継私掠船団のアーネ・シャムハト・ガルアルエル。
昼間に曹操が告げ、カズヒ姉さんに酷評された英雄派の基本理念。
それを参考にして、俺は漸く確信した。

「テロリストなんてのは付き合いでやるもんじゃない。真っ当な幸せこそを欲するなら尚更だ」
「はっ。……痛いところを突くじゃねえか」
肯定と受け取らせてもらう。
やっぱりだ。ベルナ・ガルアルエルの本質が見えてきた。
常識人だとは思っていたが、まさしくその通り。こいつは真っ当な倫理観や価値観を持っていて、そんな真っ当な暮らしを良しとするタイプだ。
アーネ・シャムハト・ガルアルエルのような、ぶっ飛んだ在り方なんてしていない。そもそも英雄派の理念どころか、英雄というものに対して焦がれていない。
なら、そこから引っ張り上げる奴が必要だって分かり切っている。
切り結びに移りながら、俺は説得する為に声を振り絞る。
自分が生き残る為じゃない。英雄派を打倒する為じゃない。
ただ、しなくてもいいことで嘆きの涙を流しかねない、そんな生き方をする人を放っておけるか。そこに割って入れる力があるなら、尚更何とかするべきだろうが！
ああ、この二人は引っ張り上げられるべきだ。それが人として、カズヒ姉さんの男として、春っちの幼馴染として、そして何より――
「嘆きの涙が生まれるというなら、流れる前に意味を変えるが、俺の生き様なんでなぁ！」
――涙換救済（タイタス・クロウ）なんて呼ばれる、俺という存在の根幹が、引っ張り上げろというんだよ。
「真っ当に生きて真っ当な幸せを得る。その価値がある人間がいるのなら、そんな人間がテロリストに引きずり込まれることを良しとできるか」
ベルナ・ガルアルエルは引っ張り上げられるべきだ。少なくとも、その余地があるのなら引っ張り上げてやりたい。俺は心から思っている。
「幼馴染がらしくない生き方を強いられている。もしそうだとするのなら、どうにかしたいと思って動くのは当然だ」

成田春奈という少女は、俺が知る限りテロリストとして嘆きを作り広げることを喜べる子ではなかった。その頃を知っているからこそ、無理をしている風にしか見えない彼女を良しとできるか。
だからこそ、俺は俺として立ち上がるさ。
「止めるさ。強引に殴り飛ばしてでも、まずあんた達を引っ張り上げる！」
ああ、時間稼ぎなんて言ってる場合じゃなくなったな。
ここからは、本気で行かせてもら―
「ハッ！　吠えたな、この野郎」
「そう、まだ足りないわけね」
―その時、寒気を感じた。
強引に振りほどき、そのうえで足を踏み入れる。
直感で何が起きるかを悟り、それでも俺は踏み込んだ。
「……そういうのはなぁ、幸せになるべき奴にやれって言ってんだよ!!」
「……私は強くなったのよ！　それを絶対、認めさせてあげるわ！」
とりあえず、逆鱗を踏んづけた責任はとる。まずはそこからだ!!

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

放たれた絶大な聖なるオーラを、曹操達はさらりとしのいで見せた。
偽二条城だった場所は、ゼノヴィアの先制攻撃でクレーターとなり果てた。
六本のエクスカリバーを錬金術で鞘にすることで、制御性能を大幅

に高めたデュランダル。エクス・デュランダルと呼称されしその一撃は、まさに絶大だったというほかない。
だがそれをしのいで見せた、英雄派の筆頭幹部達はその上を行くということだろう。神滅具保有者とそれに並び立つ猛者達というならば、十分あり得ることではある。
それを静かに受け止めながら、カズヒ・シチャースチエは内心で嘆息する。
今自分達と対峙しているメンバーは、その殆どが胸からネックレスをつけている。
おそらくは幹部の証。曹操や霧使いのゲオルグとやらも持っている可能性がある。そしてそれはつまり、異形社会に属しイキり散らした中二病組織ならば、実力者の証でもあるだろう。
となれば、戦闘においても警戒は必須。誰もが難敵だと考えた方がいいに決まっている。有利を押し付けられれば、相手が調子に乗って油断でもしない限りは死人が出るだろう。
この流れそのものをどうかと考えながら、カズヒはこっそりと立ち位置を変え、九重の隣でメモを取り出すと筆談を始めた。
そのうえで、意識の八割は英雄派にしっかりと向けられている。
カズヒがそんな器用な真似を行う中、一誠達と睨み合う曹操は楽しげだった。
「いやいや。そりゃシャルバ達も倒されるわけだ。これを馬鹿にできたとか、馬鹿はあいつらの方だと思うね」
「下から追いかける者なんて気にもしてなかったんだろうね。さて、そろそろやろうか」
それに答えるジークは、魔帝剣グラムの切っ先を祐斗とゼノヴィアに向ける。
敵からの指名に対して、二人もまた剣を構えて挑む体制になっていた。
「なるほど。我らが魔帝（カオス・エッジ）は剣と剣技の比べ合いをご所望か。……君達はどうするのかな？」
そう告げる曹操に合わせるように、筋骨隆々の大男と、麗しい金髪

の美少女が一歩前に出る。
「二人はそれぞれ、ヘラクレスとジャンヌ・ダルクの魂を継ぐ者さ。さて、誰が誰を相手するんだい？」
「さっさと決めてくれや。バーニングに行きたいんでな」
「私は様子見に徹するわ。戦闘は本命じゃないしね」
ヘラストロテスとシャムハトがそう言う中、ジャンヌ・ダルクの方は不敵な微笑みをイリナに向ける。
「じゃ、私は天使ちゃんにしようかしら♪」
「なら俺はどうするかねぇ？　ヴァルキリーの姉ちゃんは調子が悪そうだし、此処は主神の娘でも相手するかぁ？」
そう告げられ、それぞれも臨戦態勢に入っていく。
そして曹操もまた、聖槍の切っ先をイッセーへと向けた。
「なら俺は赤龍帝だ。さて、ヘラストロテスとシャムハトはともかく、君はどうするんだデュルヨーダナ」
「……そうね。能力的には、サーヴァントの影を呼び出せる固有結界使いが――」
そう、英雄派の意識が鶴羽に向いた、その瞬間――
「……活動開始（セット）」
――カズヒもまた、すべての準備を完了した。
誰もの意識がカズヒに向いたその瞬間、カズヒは宝石魔術を解放する。
「暴風投射（エメラルド・カタパルト）」
発動するのは風属性。シンプルに風を利用して物体を投射するというものだ。
ただ投射した人物注：誤字じゃありませんが問題すぎて、誰もが一瞬呆気に取られる。
「母上を返せえええええ！」
『『『

剛速球もかくやの速度で投射される九重を前に、曹操は反応こそするが対応は甘い。
槍の石突でバントのように弾くという、そんな咄嗟故の対応が仇となる。
「空域置換（ダイアモンド・シャッフル）」
「ッ!?」
その瞬間、九重に括りつけられた宝石が光、瞬時にカズヒがそこに現れる。
咄嗟に迎撃に移ろうとする曹操だが、しかし反応速度が追い付かない。
カズヒは右腕で石突を掴むと、勢いを利用して半ば投げ飛ばすように曹操と共に宙を舞い、左腕で構えるショットガンを曹操の顔面に突きつける。
それも只のショットガンではなくザイアから流れた技術による、アタッシュウェポンが一角のアタッシュショットガン。ダメ押しとしてハウリングホッパープログライズキーまで装填されている。
『ハウリングカバンショット!』
右手を放すと同時に、悪を滅する瘴気の弾丸が曹操の顔面狙いで放たれた。

冥革動乱編　第二十一話　完全敗北！　兵藤一誠破れたり！

Other Side

そのまま反動でお互いの距離が開き、地面に激突する前にお互いに受け身を成功させる。
転がるように起き上がり、お互いの武器を構えるまで、対応できたのは誰一人としていなかった。
「……くくく、まさかいきなりもらうとはね」
心底楽しそうに笑いをかみ殺しながら、曹操は血が流れる左目の辺りを触れる。
かろうじて身を捻って回避したようだが、左目そのものは破裂して使い物にならなくなっていた。
それを心底嬉しそうに触れながら、曹操は肩をすくめた。
「やってくれるよ。確か置換魔術（フラッシュ・エア）だっけ？　転移魔法と併用してこんな奇策をとるとはね。しかもいきなりとは酷いじゃないか」
「笑わせないで。既に攻撃は叩き込んでいるし、戦闘だってしたでしょう」
冗談半分の非難にたいし、カズヒは平然とそう返す。
自業自得だといわんばかりに、カズヒは視線で罵倒までしていた。
「テロリストとは交渉しない。なんであなた好みのマッチメイクができると思ったのかしら？　のうのうと油断してるなら付け入るのが汚れ仕事（ダーティジョブ）だし――」
そういいながらカズヒは、巨大な狐となった八坂姫を一瞥する。
「……実験に八坂姫（彼女）が必要な以上、結果が出るまでは殺されないで

しょう？　それを知らせて交渉できると思うそっちが間抜けなだけよ」
そう、英雄派の目的はグレートレッドの誘導。
龍王クラスのドラゴン数体を確保することで行える儀式を、その困難さから八坂姫と京都で代用しようと考えたのが今回の事件の理由だった。
九尾の狐は龍王クラスと同等だが、龍王数体の確保より一人確保するだけの方が容易なのは明らか。更に司る京都の龍脈を、同調する疑似京都を経由する形で使うことで、複数対分の代用とする。京都とワンセットともいえる八坂姫を狙うからこそできる簡略化（ショートカット）だ。
しかし、それは八坂姫と京都に多大な悪影響を当分与えられないということも意味している。
だからこその奇策は功を奏し、リーダー格の曹操の深手を負わせるという好機を与えることに成功していた。
「……イッセー！　ジャンヌ・ダルクかアーネ・シャムハト・ガルアルエル、もしくはドゥルヨーダナを狙いなさい！　剥いて聞いて心身ともにねじ伏せなさい！」
「よ、容赦ねえな!?　いや、やるけどね！」
思わずたじろぐイッセーだが、カズヒはどこまでも容赦しない。
暗部出身は伊達ではない。短い戦闘とデータから、自分達に有利なマッチメイクを既に考慮していた。
敵には基本容赦がない。弱みをついてまず確実にこちらに戦況を傾けるという、分かり易い鬼のような考えで行動していた。
……だが―
「……ガバァッ！」
―その瞬間、イッセーは顔面の鎧から血をこぼして倒れ伏した。
カズヒがそれに面食らったことは、どうしても責められないだろう。
敵は文字通り何もしていないのに、いきなりイッセーが血を噴いたのである。こういう時すぐに動いてしまうアーシアすら、一瞬呆気に取られていた。

「じゃぁお返しだ！」
「っ!?」
その隙を突いた曹操の攻撃を回避し、カズヒは飛び退った。
しかし敵も逃がす気はないのか、ドゥルヨーダナが既に弓を構え攻撃を放つ。
それを魔術と体捌きで躱し切るカズヒは優秀だが、そこで止まるほど敵も遠慮はしてくれない。
「やってくれるじゃねえか、姉ちゃんよぉ！」
飛び上がり突貫するは、初老の大男。
巨大なゴグマゴグを揺るがせるその体術は油断できないと、カズヒは迎撃の構えをとるが―
「……流石に見過ごせんでござるな」
―別方向から放たれた矢に、咄嗟の迎撃を使われてしまう。
更に質が悪いことに、大男は槍を構えていた。
自力での回避がほぼできず、カズヒは内心で舌打ちすらし―
「おぉおおお！　シチャースチエぇぇぇぇぇぇ！」
―飛んできたそのラインを、咄嗟に掴めた自分をカズヒは褒めた。
それを利用して大男の攻撃を掠めるにとどめ、発生した激痛を強引に無視して蹴りで反撃。
当然防がれるが、それをラインの伸縮と併用し、カズヒは即座に仲間たちの下へと戻ることに成功した。
そして着地したカズヒは、何かに堪える様に拳を握りながら一呼吸を置く。
「……っ！　……助かったわ、匙！」
「へへっ。いいってことよ」
礼に答える匙は格好をつけていたが、冷や汗と動悸が目に見えているのが微妙にしまらない。
この辺り、イッセーと似ているなとカズヒは一瞬思ったが、すぐに意識を先頭に集中させる。
そしてそんなカズヒに、鶴羽と九重が慌てて駆け寄ってきた。
「ちょ、カズヒ!?　ビビらせないでよもぉ！」

「だ、大丈夫なのか!?　私がもっと上手くやっていれば、倒せたかも―」
「敵の虚をつくチャンスは逃せなかったし、対応されたのは敵が凄腕なだけよ。今は戦闘に集中して」
慌てる鶴羽と九重に素早く返しつつ、カズヒは視界に移っているイッセーの様子を視点を変えずに確認する。
大量に出血しているが、失血で意識を失うほどではないようだ。当人としても困惑しているが、これは出血したこととは異なる印象を感じている。
「イッセー！　何がどうなったのか簡潔に報告！」
最低限の情報を把握して対応しなくてはと、心を鬼にしてイッセーに状況の説明を要請した。
そしてイッセーは混乱しながらも、それを素直に実行してする。
「乳語翻訳（パイリンガル）を使った瞬間に、エロ配信みたいな感じでアーネが〇〇ニーしてる映像が映ったんだ」
きちんと分かり易く説明してくれた。
だが、それをもってしても意味不明すぎた。
「「「「「「「「「……え？」」」」」」」」」
大半のメンバーが意味不明すぎて首を傾げたその直後、何かを悟ったリーネスがポンと手を打った。
「あぁ、なるほどぉ。その手があったわねぇ」
「どんな手!?　何がどうして俺はエロ配信を見る羽目に!?」
イッセーが尋ねれば、リーネスはひき気味の目でアーネを見る。
「言葉にすれば簡単よぉ。イッセーの煩悩に反応して、それが込められた魔力を使いながら辿って、イッセーの脳内にエロ配信画像を送り込んだのよぉ」
そして答えが狂気的すぎた。
思わずオカ研メンバーはアーネを二度見し、英雄派もヘラストロテス以外は同情の表情を彼らに向ける。
そしてヘラストロテスは自慢げで、アーネに至っては勝ち誇った表情だった。

「ふっ。団長達が作り上げたバーニングなカウンターさ！　すげえだろ！」
「名付けて色技便乗（エロス・ジャック）。言っておくけど乗っ取る技だから、範囲内で使った瞬間に強制配信よ」
一周回ってドン引きの表情を浮かべてたイッセー達は間違っていない。
確かに効果的な技ではあるだろう。洋服崩壊や乳語翻訳は、絶大に強力と言ってもいい技だからだ。
洋服崩壊の破壊力は、着用物限定なら普通に殴るより効果がある。実際物理的な攻撃では禁手の力をもってしても壊せなかった絶霧の結界装置を、「肌に密着しているから衣服扱い」などという手法で破壊してのけたのだ。女性が身に着けている物体限定とはいえ、通常攻撃を凌駕する破壊力を出せるのは敵にとっては脅威というほかない。
乳語翻訳に至っては、その性質が曲者すぎる。読心術は術式の対策だけでなく。「思考を空にする」「異なる情報を大量に考える」などの原始的な対策が存在するが、乳語翻訳には通用しない。おっぱいに質問を答えてもらう都合上、埒外過ぎて全てすり抜けてしまうのだ。
それをただ無効化するのみならず、範囲内で発動すれば誰に使用することも防ぐことができる。間違いなく強大なカウンターになりえるだろう。
だが内容がエロ配信である。それも自分のである。
軽く正気を疑う状況だが、アーネは本心から胸を張っていた。
「研鑽や確立には苦労したわ。あ、言っておくけどそういうものだと認識した以上はその認識を利用して滑り込むからね？」
『『『

「イッセー、これ以上はＳＡＮ値がゴリゴリ削れるから、潰しに行った方が早いと思うわ」
思わずツッコミを入れるイッセーの肩に、カズヒは首を横に振りながらストップを入れた。
敵は油断できないうえにメンタルをゴリゴリ削ってくるのだ。相手のペースに乗ってはいけないだろう。
……体中に走る激痛を堪えながら、カズヒは努めて冷静に戦う意識を燃やしていた。

イッセーＳｉｄｅ

クソったれ！　大量に失血したけどまだ戦えるぜ！
『想像の遥か彼方を超音速で飛んでいく対策でしたね』
『効果抜群なのが癪に障るな』
シャルロットとドライグの相棒，Ｓが辛らつだけど、とりあえず意識を切り替えよう！
俺の洋服崩壊と乳語翻訳が完全攻略されたのは凹んだけど、今はそれどころじゃない！
何とか立ち上がり、俺はアスカロンを構えながらドラゴンショットで牽制する。
確かにカズヒの言う通り、八坂姫を向こうが同行できない状況ならこっち側が動くべきだしな。
そして俺が女相手に特攻をかませない以上、やるべきことはシンプルだ。
「カズヒ！　曹操は俺とお前で挟み撃ちだ！　本丸を叩き潰す！」
「同感ね！　リーネス、九重とアーシアをカバーして！」

スタンスが違うから揉める時は揉めるけど、俺達は仲間なんでな。
一応最強戦力の赤龍帝（俺）と、悪党相手にゃ最狂な道間（カズヒ）の二人がかりで、曹操（本丸）を叩き潰す。
「いいね！　赤龍帝の戦いは味わいたいし、やられっぱなしも性に合わないんだよ」
『レイドライザー』
そういいながら、曹操はレイドライザーを装着する。
なるほどな。当然持ってるか、持ってるよな！
「つけさせるとでも―」
「―思ってんのかっ！」
カズヒと俺で挟み撃ちの攻撃を仕掛けるけど、曹操はステップで回避しながら槍で牽制まで入れてきやがる。
野郎、俺達二人の挟み撃ちを此処まで捌くか！
最強の神滅具を持ってるのは伊達じゃないな。神滅具の性能どころか、本人の技術もシャレにならない。
カズヒの不意打ちかました一撃を片目ですましたのも、自力でってことか！
『ＣＨＡＬＬＥＮＧＥ！』
しかも器用にプログライズキーまで起動しやがった！
「さて、実装！」
『トラベリングホース！　Ｌｅｔ，ｓ　ｇｏ　ｂｅｙｏｎｄ　ｔｈｅ　ｍｏｕｎｔａｉｎ』
糞ったれ、馬を模したレイダーに実装しやがった。
そう思った瞬間、俺達は一瞬曹操を見失った。
殺気で反応して咄嗟に伏せれば、そのまま聖槍が横なぎに振るわれる。
そして振り返った時にはもう、曹操の姿が捉え切れない。
「イッセー！　背中合わせで迎撃するわ。お互いに死んでも攻撃を後ろに通させない！」
「お前は本当に実行するから、ある意味安心できるし不安だよ！」
背中を庇い合って迎撃に集中することで何とかしのげているけど、

曹操の奴……早い！
「はっはっは！　これは元々長距離行軍や一撃離脱が基本なんだけどね。俺ぐらいになるとこんなこともできるのさ！」
全くだ。移動速度を殺さずに左右に機敏に動いているから、背中を完璧に預けて意識を集中しないと、見失って攻撃を捌けない！
……しかも、他の仲間も苦戦している……っ！
「ちょいさほいさどっこいさぁですの！」
「つたくもう！　やってくれるじゃんか……遠距離支援とか鬱陶しい！」
ヒマリとヒツギは連携でドゥルヨーダナを相手にしている。
ヒマリが密着しての猛攻とグリドで遠距離から支援してくる奴をけん制しつつ、ヒツギは接近戦を挑みながらも相手の遠距離攻撃に砲撃を返している。
それで何とかしのげてるけど、相手は余裕をもってさばいている感じだ。
なんなんだよあいつ。曹操張りに強いじゃねえか！
「バーニンバーニンバーニンバーニンバーニンバーニンバーニン……！」
「攻撃が、どんどん強く……っ！」
リヴァさんもかなりてこずってる。
というかヘラストロテスの野郎、さっきからバーニンバーンうるさいのに、攻撃がどんどん強くなってる。
それも攻撃と一緒に巻き散らかされた炎が、どんどんリヴァさんに向かって集まってきてる。そのせいで迎撃に大地の砲台を使われてる感じだ。
となると、頼みの綱は他のメンバーなんだけど、あっちも敵がやばい！
くそ、勝てるのか……俺達!?

冥革動乱編　第二十二話　英雄乱舞

祐斗Ｓｉｄｅ

振るわれる六本の斬撃を相手に、僕達は全員が二刀流で迎撃することで何とか牽制に成功していた。

僕とゼノヴィア、イリナさんの三人がかりで挑んでいるのは、魔帝（カオスエッジ）とも呼ばれるジークフリート。

なんてことだ。彼の戦闘能力はフリードの比じゃない。それどころか、間違いなく単独で最上級悪魔に届くだろう。

これが教会でも有数の悪魔祓いということか。技量が卓越しすぎている。

何より―

「喰らうといい、ティルヴィング」

発生する衝撃により、僕達は連携を崩される。そしてその瞬間、ジークフリートのターゲットは僕に集中された。

「君が作れる炎の魔剣は、こいつを超えられるかな？　ダインスレイヴ」

ホグニ王が振るっていたダインスレイヴの原典をもって、ジークフリートは僕を潰しにかかる。

炎の聖魔剣を使って凍結を防ぐけど、出力で劣っている為かどうしても押されてしまう。

そしてそこを逃がすことなく、ジークフリードは接近してダインスレイヴを突き出し―

「そうはいかないのよ！」
―それを急接近したイリナさんが、聖剣を伸ばして弾く。
素早く続く連撃を回避しながら、ジークフリートは面白そうに唸っていた。
「いいね！　ただ合体させるだけでなく、そういった手法も取れるのが厄介だよ」
「抜かせ！」
ゼノヴィアが二刀で切りかかるが、ジークフリートは六本の剣を使ってそれを受け止め弾き返した。
魔帝剣グラムは切れ味すらデュランダルに届くというわけか。そこに龍殺しが加われば、最強の魔剣と称されるにふさわしい力を持つわけだよ。
……何とか戦闘は抑え気味だけど拮抗している。その理由は敵味方に分けて二つ。
一つはジークフリートは六本の魔剣をすべて使って戦闘できるという点。
彼は背中から龍の腕をはやすという亜種発言をした龍（トウワイス・クリティカル）の手という神器を宿している。無銘の龍を封印した封印系神器であり、亜種発現によるアドバンテージがなければ赤龍帝の籠手の完全下位互換といえる代物だ。
だがその禁手も亜種にすることで、四本の龍の腕をはやしてその分だけ自己を強化する阿修羅（カオスエッジ・アスラ）と魔龍（レヴィッジ）の宴により、魔剣全てを振るったうえでなお余裕を持っている。
そして僕達以外の戦いも、白熱しているというほかない。
「我、ピエール・コーションに希う……もいっちょ燃やす！」
「これ結構厄介ね。というか、嫌味が効いてるマッチメイクなこと！」
ジャンヌ・ダルクに対して突貫したのは南空さんだ。
彼女は固有結界の応用で、縁あるサーヴァントの宝具を再現することができる。長時間の詠唱必須な固有結界こそ妨害されているが、それでも宝具の一部が使えれば十分すぎる。
なにせ、ピエール・コーションは宝具として聖なる力を燃やす力が

ある。その力をもってすれば、どうやら聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）であるジャンヌ・ダルク相手に有利に戦えないわけがない。
イメージした聖剣を具現するという、魔剣創造の聖剣版であるがゆえに、相性という点において圧倒的に有利に立ち回れるのが南空さんだ。
既にジャンヌは禁手として聖剣で作られた龍、断罪（ステイク・ビクティム）の聖龍（ドラグーン）を具現化しているが、それすら一撃で深手を負わされる始末。
なんだかんだで抜け目がなく、おそらく一番有利に戦えているのが彼女だろう。曹操にぶつけられればよかったのだが、そう簡単に行かせてくれるほど敵も甘くはないか。
そして―
『うぉおおおおおお！』
「母上、正気に戻ってください、母上！」
匙君と激突する八坂姫に、九重ちゃんが何度も声を投げかける。
時折近くのアーシアさんが回復のオーラを僕達に飛ばし、またリーネスも魔術で周囲の解析を行っている。
龍王化した匙君は、単純なスペックならイッセー君に次ぐレベルだ。
だが絶霧（ディメンション・ロスト）を保有するゲオルグの術を受けているからか、八坂姫の解放は出来ていない状況と言ってもいい。
こちらは何とか余裕が生まれたら援護が必須だろう。
残りのロスヴァイセさんはインガさんの支援を受けながらヘラクレスと戦っている。
「はっはっはぁ！　こんなもんかぁ、ヴァルキリーの姉ちゃんよぉ！」
「くっ！　これでも威力は自慢なんですけどねぇ……うえっぷ！」
「ノックバック！　ノックバックで接近されなかったらなんとかなるから！」
悪酔いが抜けてないロスヴァイセさんを上手くカバーするインガさんによって、あの戦いは一種のチェイスとなっている。
ロスヴァイセさんの魔法攻撃をもろともせずに突貫するヘラクレスは、巨人の悪戯（バリアント・デトネイション）という神器を持っていた。

とにかく接近されなければ削り殺せるかもしれない。そういう目論見で動いているようだが、敵もそこまで甘くはなさそうだ。
「だったら行くぜぇ、禁手化(バランス・ブレイク)うううううう！」
そう吠えた瞬間、ヘラクレスの全身からオーラが突起として具現化し、そして射出される。
「……っ!? ごめん、加減抜きで行くよ！」
「え、ちょ……おえっぷぅ!?」
その瞬間、全力の変則起動にインガさんが切り替えたことで、ロスヴァイセさんは酔いが加速したらしい。
「オラオラ、俺の巨人による悪意(デトネイション・マイティ・ブレイク)の波動は当たればただじゃ済まねえぞぉ！」
く！ 長距離攻撃を可能にするとは、シンプルだけど厄介な禁手に至ってくれた！
と、インガさんは空高く飛び上がってヘラクレスの真上に移動して
―
「今！ 思う存分吐いて！」
「え、ちょ……おぼろろろろろろろろ」
「てめえふざけんなうおわぁああ!?」
―精神衛生上よくなさそうなので、視線を逸らしておこう。
なんだかんだでインガさん、抜け目がないというかなんというか……。
「やれやれ、これはちょっと困ったかな？」
と、そこでジークフリートは苦笑する。
エクス・デュランダルがエクスカリバーを分割使用できることで、ジークフリートは思ったより苦戦していると感じているようだ。
ゼノヴィア自身は慣れた破壊(エクスカリバー・ディストラクション)の聖剣を使い、イリナさんには使い慣れていた擬態(エクスカリバー・ミミック)の聖剣に、僕達の移動力に合わせるように天閃(エクスカリバー・ラピッドリィ)の聖剣を貸し与えることで、機動力によりお互いをカバーしやすくすることに成功している。
そして何より、ジークフリートには欠点とは言い難いがどうしても付け入るスキが存在していた。

「やはり聖別されただけの剣では限度があるかな？　対悪魔対策なら光の剣にするべきだけど、それだと無効化されそうだったからって、性能で劣る方にしたのは痛し痒しか」
そう、ジークフリートは六本の腕を持つが、魔剣は五本しかない。
彼が六本目に使っているのは、聖別が施されたただの剣。悪魔祓いが光の剣より前に使っていたような類だ。
確かに僕の魔剣や聖魔剣なら、光の剣を食らうことで無効化できる。そこまで踏まえたんだろうけど、それにより明確に能力が下がっていることは否めない。
それぞれ二刀で三人が仕掛ければ、当然六本目の使わざるを得なくなる。それが僕達にとって優位点である以上、つかない道理はないだろう。
だから、なんとしても突破して仲間の援護をしなくては―
「―仕方ない。その奮戦に免じてもう一段だ」
―そのジークフリートの言葉に、英雄派の幹部達はにやりと笑った。
「おいおいいきなり見せるのかぁ!?　俺はもっと神との真っ向勝負をバーニングだぜぇ！」
ヘラストロテスはそう言うが、他のメンバーは肩をすくめてそれを流す。
そして同時に、首から下げたアミュレットを取り出した。
そういえばそんなものを身に着けていた……まさか、あれは幹部の証ではなく―

「「「創生せよ、天に描いた星辰を―――我らは煌めく流れ星」」」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「尼子の武威を支えるは、武将だけには務まらぬ。城に船に大筒に、そして名馬も欠かせぬだろう」
　ドゥルヨーダナの星を聞いて、ヒマリもヒツギも怪訝に思ったのは仕方がないことだろう。
「甲斐の国より献上されし、名馬があればと願いはする。だがしかし、ない物ねだりは負けの元。故に自ら用立てよう」
　その詠唱はどう聞いても、インドの神話に連なる詠唱ではないのだから。
「見るがいい、この黒岩による名馬の雄姿を。武田の騎馬が軍勢にも、これほどの馬はないであろう」
　しかし、星に応えて岩石は馬となり、ドゥルヨーダナを乗せて駆ける。
「足りぬというならこれならどうだ？　熊に狼、猩々も、獣の群れが汝らまとめて相手取ろう」
　更に詠唱通りに岩石が獣となり、グリドを抑え込みにかかる。
「さあ刀を佩いて弓を取れ。我は尼子の弓取りなれば、貴様の首を討ち取って、国盗りすらも成し遂げようぞ」
　そして、岩石による軍勢がヒツギとヒマリを圧殺にかかる。
「超新星（メタルノヴァ）――新生尼子（アマゴ・フォース・カイノクロコマ）の弓取りに、甲斐越えの名馬を！」
　ここにドゥルヨーダナーサイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナ――の星が開帳される。
　その本質は岩石獣創生能力。影響範囲の地面に干渉し、岩石で構成される獣の使い魔を作り使役する星辰光。

サイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナ
新生尼子（アマゴ）の弓取（フォース・カ）りに、甲斐越（ィノック）えの名馬（ロコマ）を
基準値：C
発動値：B
収束性：B
拡散性：D
操縦性：B
付属性：E
維持性：C
干渉性：C

「さぁ、ギアを上げるわよアーチャー！」
―承知。星を開帳した以上、できれば皆殺しにしたい所存
「それは無理でしょ。曹操（リーダー）は生かして伸ばす方針でしょうしね！」
相手が二人がかりで来るなら、こちらもサーヴァントとの連携で挑むのみ。
覇龍を状態で使う難敵を前に、ドゥルヨーダナは攻撃を激しくする。

「今ここに、聖なる乙女は新生する。聖なる刃は我が身に集い、幾重にもなってその身を包む」
その瞬間、鶴羽の周囲を幾人もの騎士達が囲む。
咄嗟に槍で薙ぎ払うが、すぐに追加が来たので、咄嗟に炎を利用して距離をとる……が、それでも甘い。

「もはや我が身を滅ぼすことは、暗君共にはできはしない。輝けるこの戦乙女を裁こうなど、愚行の極みと知るがいい」
弓による一点特化の攻撃を咄嗟に伏せて回避するが、それによって追撃の龍が飛び掛かる。
「裁きを示すは汝にあらず。裁定は我が意が成すと知るがよい」
迎撃の攻撃をした瞬間、更に聖剣の騎士団が包囲圧殺を図る。
「灰は灰に、塵は塵に、土は土に。我らの敵となる罪は、命をもって償うがいい！」
鶴羽は内心で狼狽すらしていた。
そう、これは―
「超新星（メタルノヴァ）――新生の聖処女（ディバインフォース・ラ＝ピュセル）、奇跡を此処に」
「禁手の、複数同時運用!?」
―宝具という形での神滅具の再現にも喧嘩を売れる、異常事態がここに発生しているのだから。
「これ結構苦労したのよ？　だって使い勝手が悪いんだもの」
そう、ジャンヌ・ダルクのこの現象は、ある意味では応用と言ってもいい。
彼女が顕現させる星の本質は、存在多重化能力。同じ場所に同じものを複数存在させる矛盾を引き起こす、一見すると強力に見える欠陥品。

ジャンヌ・ダルク
新生の聖処女（ディバインフォース・ラ＝ピュセル）、奇跡を此処に
基準値：C
発動値：B
収束性：C
拡散性：E
操縦性：B
付属性：B
維持性：B

干渉性：E

付属性が微妙に足りていない為、脳や心肺機能を多重化させるとバグを起こして廃人になりかねない。だが血液の成分を多重化して強化するには、操縦性が足りていない。

基本的には肝機能や腎機能の強化程度が限界のそれを、ジャンヌ・ダルクは己の神器に与えることで解決した。

これにより疑似的に神器を複数持つ状態になった彼女は、英雄派の実験の成果をフルに使うことで禁手を複数同時に運用する。

今は基本計である聖輝の騎士団（ブレイド・ナイトマス）や、サイリンから看取る形で至った聖装創造（ウェポン・ブラックスミス）が限界だが、いずれ成長すれば更なる禁手にすら至れるだろう。

だからこそ、天敵如きに臆することはあり得ない。

「さぁて、当て馬になって頂戴、固有結界ちゃん？」

「……上等、返り討ちよ！」

それに返すように、鶴羽は吠える。

聖なる軍勢と聖燃やす紫炎による、死闘は更に激しくなる。

「アルゴノーツの参戦で、英雄譚は幕開く。一番槍にて無双の矛は、この俺こそが相応しい」

その瞬間、ヘラクレスの左右に魔剣が生み出されたのをインガとロスヴァイセは理解した。

「愚かな神の嫉妬の炎も、この勇士には通用しない。我が武威を見て感銘し、手のひら返して栄光（光）をよこせ！」

そこに現れるは灼熱の大剣。

左右に現れた灼熱の大剣を、ヘラクレスは掴み取って飛び上がる。

「黄金の獅子など恐れるに能わず。我が腕は汝を絞め殺し、そして我が刃はその毛皮すら断ち切ろう」
恐るべきことに、灼熱の魔剣はヘラクレスを焼こうとしている。
その足りていない付属性を、ヘラクレスは己の耐久力で無理やり抑え込むことで飛翔する。
「聖王の剣を超える栄光の魔剣は、今ここに英雄譚を切り開くのだ。さあ獅子の王よ、我に刮目するがいい！」
その灼熱を操ることで、ヘラクレスはインガに追随する空中戦を成し遂げる。
「超新星（メタルノヴァ）――神域英雄（ゴッドフォース・マルミアドワーズ）は此処に、魔剣を担いて」
灼熱剣創造能力を開帳したヘラクレスは、片方をサーフボードのようにしつつもう片方を推進機として、更に乗りこなして追撃戦を開始する。

ヘラクレス
神域英雄（ゴッドフォース・マルミアドワーズ）は此処に、魔剣を担いて
基準値：C
発動値：B
収束性：C
拡散性：C
操縦性：B
付属性：D
維持性：B
干渉性：E

「くぅ……ううううう！」
「うぇ……ちょ、止まって……おぼろろろろろ！」
強敵と酔（二重の窮地）いに苦しめられるロスヴァイセをカバーしながら、インガ

は寒気すら覚えていた。

「いざ来るがいい黄金龍君（ファーブニル）。貴様の滅びは此処に在る」
ジークフリートは、先祖を尊ぶように星に祈りを捧げ始める。
「唯一たる神の下で、戦の神々が認める魔剣は新生する。聖の加護持つ魔の名剣は、神々すらも断つだろう」
それはシグルドの末裔として教会で生まれた己を混ぜ合わせ、此処に新たな魔剣の神話を作るが為か。
「魔剣の帝王此処に在り。聖王の名剣も聖遺物たる大剣も、この魔帝（カオスエッジ）には届かない。刃の極みを成し遂げるのは、龍すら殺す帝王の偉業と心せよ」
そして六本同士の剣劇の流れは、確実にジークフリートに傾いていく。
「この栄光は勝利の証。己を殺す龍殺の呪いも、いざ打ち勝って見せようぞ」
何故ならば、彼の手に六本目の偉大なる剣が鍛えられているのだから。
星の輝きをもってして、なまくら一歩手前の剣は、グラムの補佐を担うに足る龍殺しへと進化する。
「勝利を我が手に。余人を超える我が腕で、余人を超える栄光を」
今ここに、滅龍星剣変性能力が、魔帝に真なる六刀流を確立させる。
「超新星（メタルノヴァ）――龍王殺しの魔剣（ファーブニルベイン）よ、英雄譚（カオスエッジ）を成せ！」
君臨する龍殺しが、英雄譚を切り開く。

ジーク

龍王殺しの魔剣（ファブニル・ベイン）よ、英雄譚（カオスエッジ）を成せ

基準値：C
発動値：A
収束性：A
拡散性：E
操縦性：D
付属性：B
維持性：B
干渉性：E

間違いなくそのポテンシャルは、英雄派の幹部でも最強クラスの星の顕現。

「さぁ、この剣と龍が織りなす阿修羅の剣舞に花を添えてくれ！」

魔帝による剣舞は此処に、星の光で彩られた。

冥革動乱編　第二十三話　降臨の序曲

イッセーＳｉｄｅ

畜生！　曹操の奴、全然攻撃が当たらない！
というか迎撃で手いっぱいだ。反撃に移る余裕がない！
「カウンター狙いで漸く装甲を削れるだけ。まぁ、技術で負けているのに……カウンターってのが無理あるわね」
カズヒはそうぼやくだけだけど、なんか調子がおかしくないか？
おい、まさか―
「カズヒ、さっきもらった攻撃で何かされたのか!?」
「大したことはないわ。ただ単に激痛が走っているだけよ。……今のところは」
それ大問題だろうがぁ！
「なんで言わなかったんだよ!?　っていうかそんな状態で戦うか、普通!?」
「余裕がないからよ。この戦い、全員が本気を出さないとまずい。リーネスの伏札も、まだ少し時間が必要だしね」
あ、カズヒはリーネスが戦場に出てきた理由を知ってるのか。
でもだからって、正気かよ!?
「はっはぁ！　そろそろ混ぜてもらうぜぇ、曹操！」
「はいはい。じゃ、自分が傷つけたカズヒ・シチャース（獲物）チエを頼むよ」
って此処でサーヴァントまで乱入かよ!?
あのごつい爺さん、いったい何者なんだ？
槍を片手で振り回しながら、その爺さんはカズヒを感心した感じで見ている。
たぶんだけど、あの爺さんの攻撃が原因だな。俺も傷を負わないように気を付けないと。

「しっかしやせ我慢が得意だな？　俺の槍に塗られてるのは、どんな豪傑も悶え苦しんで九日もあれば殺せる猛毒だぜ？」
ってとんでもないのだな、畜生！
そんなの喰らってカズヒは大丈夫なのか？　むしろなんでまともに戦えてるんだ？
俺が不安げなのに気づいたのか、カズヒは肩をすくめた。
「死ぬまで九日あるのなら、解毒する前にあんたを殺す余裕はあるわね。……三段離れの発動値平然と使える連中は大体頭のネジが外れているレベル。ただし、基本的にためらいなく使えるメンタルの持ち主のステータスでもある。を舐めないで、この程度なら戦闘に支障は……さほどないわ」
星辰奏者も大変だな。
曹操からも同情の表情が見えてきてるんだけど。
「まったく。まぁ、投降するというなら治してもいいよ？　こんなものもあるしね」
そんなことを言いながら、曹操はどこからともなく小瓶をって――
「なんで、フェニックスの涙をお前が持ってるんだ！」
「大規模テロリストを舐めないでくれ。裏社会ってのは金さえあれば大抵のものは手に入るからね。冥革連合にもフェニックス家出身がいたりすることもあるし……あと旧魔王派も色々としてるようだよ？」
「でしょうね。プルガトリオ機関も何度か手に入れたことはあるもの」
カズヒは納得してるようだけど、俺は到底出来ねえよ。
こっちは高騰しすぎてフェニックスの涙があまり使えないのに。それがあれば、治せる奴だって増えるだろうに。
そもそも高騰した原因のテロリストが持ってるとか、納得できない……っ。
そう思った瞬間、鎧がいくつもかけて損傷する。
まずい、曹操の攻撃がこっちに集中して、捌ききれない……っ！
「なるほど。ヴァーリが認めるだけあって中々やるけど……まだ俺に

は届かない」
『イッセー！　禁手を切り替えることも考えてください。真っ向勝負ではこっちが不利です』
分かってるさシャルロット。
ただ、曹操にそれをさせてくる隙がない！
何とか隙を見つけ出そうとした時、空が明るくなった。
な、なんだ？
まさか本当にグレートレッドが!?
「ゲオルグ。どうやら成功したようだ、龍喰者（ドラゴン・イーター）を……ん？」
あれ？　なんか曹操が怪訝な表情を……あ。
なんか落ちてくるけど、あれグレートレッドじゃない。っていうか西洋系じゃなくて東洋系の龍だ。
『痛いっての畜生がぁ！　もぉ～、なんで引退したのにこんな目に遭うんだよ！』
なんか愚痴りながら落ちてきたのは、なんていうかこぉ……カルいドラゴンだな。
ドライグ、知ってる？
『ああ、あれは龍王の玉龍（ウーロン）だ。西遊記の三蔵法師が乗る馬になったこともあるぞ』
へ、へぇ～。あんな龍王もいるんだ。
タンニーンのおっさんやヴリトラよりは、ミドガルズオルムに近いタイプだな。外見も性格も。
っていうかなんでこんなところに？　あ、もしかして増援って玉龍？
俺がちょっと期待したその時―
「ほぉ、そちらも存外てこずっているようだな」
―聞き覚えのある声が、いくつもの落下物と一緒に舞い降りた。
衝撃で土煙るが上がる中、出てきたのはアロハとサングラスを身につけたおさるの爺さんやら、ロキとの戦いで出てきたΔサリュートとかいうでか物。
そして何より、俺達悪魔にとって因縁があるのは―

「―直接会うのは二度目か。曹操相手にしのぐとは存外できるな、赤龍帝」
「……ヴィール・アガレス！」
こんにゃろう。いるのは知ってたけど、此処で来るのかよ！

和地Ｓｉｄｅ

放たれる攻撃は激しすぎて、さっきから防戦一方になっている。
やばい、逆鱗を踏んづけたのは失敗だったか……っ!?
「……なんで？　なんで？　なんでなんでなんで!?」
猛攻を仕掛ける春っちは、むしろ泣きそうだった。
「私は強くなった。ここまでずっと頑張ってきた。それでもどうしようもなくなりそうだったけど、ヴィール様のおかげで乗り越えられた」
まるで俺に駄々をこねているみたいなその声に、俺はその意味を理解しきれないことで悔しくなる。
「……ま、あんたにはあんたの都合があるんだろうがな」
一方冷静に、それでも悲しそうに仕掛けているのはベルナだ。
こっちが比較的冷静な所為で、突破することもできやしない。
「助ける相手は選ぶもんだろうが。……人並みの幸せを受けるべき奴なんてのは、もっと他にたくさんいるってことだ！」
春っちのアラをカバーするように、ピンポイントで集中攻撃を入れてくる。
やばいな。加えて氷塊で叩き付けてるから、熱衝撃でダメージがデ

カい。
「強いられてなんていない。自分から進んでるの。強くなる為に、強い自分でいたいから。なのに―」
そしてそれを支援として、春っちはこっちの懐に飛び込んでくる。
「……あなたは、なんで私をそんな風に見るのよ、和っちぃっ!!」
そしてしのぎ切れず、もろに攻撃が叩き込まれる。
まずい、意識が―
「ま、そういうわけだ。手を伸ばせば救いになるほど……いや、手を伸ばして救ってやるほど、価値のあるやつばっかりじゃねえってことだよ」
―そして俺の視界に、寂しげなベルナが映る。
「残念だな。アタシらなんかを救うより、もっと多くの奴を救いに行くべきだったんだよ、お前は」
そして　更なる砲撃が叩き込まれ、俺の意識は飛んだ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

その状況に、カズヒ・シチャースチエは舌打ちする。
想定外にもほどがある。しかも、悪い方向に極めて傾いた形でだ。
闘戦勝仏、孫悟空。更に三蔵法師を共に守った一行が来た以上、彼らがアザゼルの言っていた増援の当てであることは間違いない。
そんな彼らが苦戦しているうえ、苦戦させている相手ごと来てしまったのは状況の悪化というほかない。
何より―

「……皆さん、しっかりしてください！」
―既に広義的グレモリー眷属は壊滅寸前だ。
死者こそいないが、深手を負って意識すら朦朧としているものが殆ど。
動けるのはインガが庇う形で深手を負ってないロスヴァイセ。あらゆる意味で格が違うリヴァ・ヒルドールヴ。そして自分とイッセーに、九尾の狐に何とか食い下がっている匙ぐらいだ。
『どうすんだよこれ!? 肝心の増援が苦戦してるとか聞いてない……っていうか化け物かよ、ヴィールの奴！』
「誉め言葉と受け取っておこう。貴殿こそ見違えたぞ、匙元士郎」
そう返すヴィールは、体の調子を確かめながら、油断なく周囲を警戒する余裕がある。
静かに闘戦勝仏達を警戒しながら、いつでも動ける体制でこちらを見据えていた。
「暴走せずに龍王の力を使うとは見事。最初に会った時はただの無能かと思っていたが、現場の戦士としては有能なようだな」
「確かに面白いね。今度機会があれば一戦交えてみたいものだ」
槍で肩をポンポンと叩きながら、曹操もそれに同意している。
それを静かに警戒しながら、カズヒは激痛を無理やり無視して魔術の準備を行っている。
英雄派は既に勝ったも同然とみなしており、次の状況を見据えることばかり考えている。
一方冥革連合も、闘戦勝仏達ばかりに警戒心を向けており、決して無警戒ではないが優先順位を高めていない。武闘派かつ歴戦の神仏が連携まで十全に取れる状況であるのなら、当然の判断ではある。
英雄派の舐めた対応は屈辱に思うが、しかし警戒が薄いのなら隙をつける余地はある。冥革連合においては闘戦勝仏達に感謝といったところか。
ヴィールたちは一応警戒しているため寝首を掻くことは無理だろうが、それでも闘戦勝仏たちが仕掛けるのにつなげる余地は作れるかもしれない。英雄派においては寝首を掻く余地すら十分にある。少

しずつ準備を進めておく。
そしてこの睨み合いなら、情報を集める余地はあるだろう。
鶴羽やインガを叩きのめした怒りを押し殺し、カズヒはちらりとΔサリュートを見て疑問をあえて口に出す。
「形状が違うわね。それにロキとの戦いで出てきたやつが、武闘派の神仏をその数でどうにかできるのかしら？」
そんな風につぶやけば、余裕が慢心になりかけた曹操達は苦笑する。冥革連合もヴィールが肩眉を上げていた。
「まぁ、そういう疑問は出てくるだろうね」
「……むしろ語ってくれと言われていたな。だから教えておくとしよう」
……どうやら、Δサリュートには相応の秘密があるらしい。
「そもそもΔってついているのがシャレらしいよ？　サリュートの技術を流用し、高性能にしつつコストといったカタログスペック外の問題を少しでも減らそうとして、ロシアの軍事関連から発想を得たらしい」
曹操の言葉にカズヒは考え、しかし先に悟ったのはカズヒではなくリーネスだった。
「ああ、なるほどぉ。だからΔねぇ？」
「嬢ちゃん、何か分かったのかいのぉ？」
闘戦勝仏に聞かれて、リーネスは目を細めてΔサリュートを見る。
「多分ですけどぉ、最低でもあと一つは仕様変更がありますよぉ？　Δサリュートそのものはプラットフォームなんですよぉ」
「正解っ！　冴えてるね」
曹操がそう答えると、ヴィールもまた頷いた。
「ロキ相手に派遣されたのは、対軍勢制圧用のΔサリュート・ブラスト。今回連れてきたのは対神仏迎撃用のΔサリュート・マキシマ。あとは開発が遅れているΔサリュート・アサルトが存在するそうだ。確かアサルトは対大型異形用だったな」
その言葉に、カズヒも大体のことを悟っていた。
「そういえばロシアって、プラットフォーム化を進めていたわね。

あぁ、三つの形態があるから△（デルタ）……ダジャレ？」
ロシアは陸軍の開発といて、いくつかのプラットフォームとそこからの派生を考慮している。
そこから発想を得た△サリュートの根幹は、星辰体運用兵器としてのプラットフォーム。そこから外装や装備の一部を変えることで、目的に応じた三機種を分けるということなのだろう。
少数で多数の雑兵を制圧するブラスト。数機がかりで神仏クラス一柱を相手取るマキシマ。アサルトはおそらく、一対一で高位大型異形クラスを相手取る設計と思われる。
確かに、それができるなら価値がある……が。
「そんなものを開発できる技術力が、既に禍の団にあるなんてねぇ。発想の転換で足元をすくわれただけじゃないみたい」
リーネスが目を細めながら告げるのがすべてだ。
換装で機能を自在に切り替えるには、そんな技術を生産できるだけの下地が必須だ。
発想の転換で開発できるサリュートとは異なり、これだけの技術を開発するには相応の技術力が必須となる。
神の子を見張る者でもそれを作るのは中々困難だろう。少なくとも、相応の試作や実験が必要になりかねない。
神の子を見張る者の技術研究に身を置くリーネスだからこそ、カズヒ以上に警戒をしているはずだ。
カズヒの聞いている情報が正しければ、開発者はミザリ・ルシファーが契約し悪魔として新生したサーヴァントである、アルバート。
変異の駒とはいえ兵士一駒で転生しており、サーヴァントでも弱い部類と踏まえられていた……が、それは間違いだった。
ミザリはピンポイントで頭脳労働系の天才を迎え入れたことになる。彼が単純な戦闘能力だけに囚われない人物であることの証明だ。
―誠にいなら納得かな。小論文とか推理小説の犯人当てとか得意だったものね……っ―
つくづく自分の悪行が世界にここまで迷惑をかけることになると

はと、カズヒは自分の腹を切り裂きたい衝動に駆られるが、それを答える。

—げぇき……だし……ぇ……？

あの、事情など欠片も把握していない。だからこそ心を救う笑顔に誓った想いだけは裏切らない。

この命は、正義を奉じて邪悪を滅ぼす、その為に生きると誓ったのだ……から。

思考が微妙に緩んだのは、隣の謎現象に由来する。

具体的には、赤龍帝の鎧から光が放たれていた。

あ、これまたおっぱいだ。

意識を向けることができたオカ研メンバーは全員がそれを痛感した。

慣れるとは恐ろしい物であり—

「これは、まずいでござるな」

—慣れることなく悟れることは、更に恐ろしいことでもある。

冥革動乱編　第二十四話　スイッチは走馬燈とおっぱい

和地Ｓｉｄｅ

あ、やばい。
俺の視界には、いくつもの思い出が映っていく。
これってあれだな。走馬燈ってやつか。命がピンチの時に脳が対策を引っ張り出そうとしてバグるっていうあれだ。
まずいまずいまずい。これ絶対まずい。
とにかく意識を引っ張り上げないと、絶対とどめを刺され―
「……ごめんなさい」
―そんな意識を、そんな言葉が忘れさせる。
そこに移っているのは、セミロングの黒髪をツインテールにした、十代後半の少女の姿だ。
年齢はリアス部長と同じぐらいだろう。ただどこか、成長のピースがかけているような、そんなちぐはぐな印象を覚えていた。
視界は曖昧だ。なんていうか、視力が弱い状態だなこれは。
そんな俺のぼやけ気味な視界の中で、彼女は泣いていた。
そう。彼女は俺の原風景の人だ。直感と、そして雰囲気で俺はそれを悟っている。
彼女は絶望していた。
彼女は後悔していた。
彼女は嘆き悲しんでいた。
「ごめんなさい……乙女ねぇ。ごめんなさい……アイネス……七緒……っ」

泣きはらしすぎて涙すら枯れ果てそうな彼女は、自分の罪に押し潰されそうな罪人とでもいうべき表情だった。
そしてなんでだろうか。そんな顔を、俺はついさっき……あ。
そうか、そうだったのか。
これは俺の記憶だ。俺が覚えていて、だけど思い出せなかった記憶だ。
自分でも答えが出てこなかったわけだ。思い出せてなかったんだからな。
どこかで納得しながら、俺はその光景を見ている。
視界が動き、少しずつだけど彼女に近づいていくのが分かる。
「……だぁ……ぶぅ？」
そんな言葉足らずの口調に、ふと彼女は俺の方を見る。
「だぁじょぶ……？　げぇき……だし……ぇ……？」
そんな、普通物心もつかないだろう時期の励まし。
その言葉に、彼女はまるで憑き物が落ちたような表情になった。
「……うん、そうだね。……そうだよね」
そんな風に頷きながら、彼女はまた涙をこぼしていた。
だけど、それはきっと悲しみの涙じゃない。
「……あの子も生きてる。君も生きてる。アイネスも、七緒も生きてるし……乙女ねえも、死んでない」
それはきっと、決意だった。
「……私は間違えた。道を踏み外した。越えちゃいけない一線を越えた。……それでも……っ」
そっと、その手が俺の頬に触れる。
「……そのままでいいわけがない。君が笑顔をくれるなら、それが間違ってないって……少しでも示さないと……ね」
感謝の笑顔と涙をもって―
「元気を出すし、頑張るよ。せめて私が不幸にした分は、君を幸せにしたいし、償いたい」
―彼女は俺に微笑んだ。
「君のおかげで、絶望したままでいいわけがないって気づけたから。

だから……ね？」
その本心から救われたような笑顔が、次に告げる言葉は分かり切っている。
それこそが俺の原風景。絶対に忘れない大前提。
九成和地の原初の誓い―
「ありがとう。そして、笑顔でいて……欲しいかな」
瞼の裏に焼き付いた、その笑顔を俺は焼き直す。
「君が笑顔で入れるよう、私も……全てをかけて頑張るから」
そう、俺は……思い出すべきことを、思い出した。

イッセーＳｉｄｅ

ぅおおおおおおおお!?　訳が分からないぞ!?
『『『『『『『『『『おっぱいおっぱいおっぱいおっぱいおっぱいぱいぱいおっぱいぱい』』』』』』』』』』
なんてことを連呼しながら、行進する、俺が痴漢にした人達の残留思念。
いやちょっと待ってくれ。これ、十人とか二十人通り越して、数百人は確実にいるだろ。
どんだけ痴漢を増やしたんだ、俺の可能性ぃぃぃ

棚ぼたで聖杯戦争に優勝した俺が、こんなことで聖杯戦争を引き起こさなきゃならないって、いろんな意味で最悪じゃね？
まじでこれ、どうしよう？
「何やらすんごいことになっとるのぉ。いつもこんな感じなのかねぃ？」
「……今回は特にすごい部類ですが、乳神案件（ベクトル違い）で同格が……あったそうッス」
お猿のおじいちゃんに匙が答えるけど、いやホントそれぐらいすごいよな、うん。
乳神も大概あれだったけど、これもそういうレベルじゃねえだろ。まじどうなってるんだよこれ……。
『さぁ、準備は整ったわ』
と、そこで協力的な歴代の残留思念、歴代女性赤龍帝最強のエリシャさんが声をかけてくれる。
呼ぶって何？　この状況下で何を!?
『あなただけのおっぱいよ。さぁ、サモンおっぱいと叫ぶの！』
この状況下でそんなこと叫ぶの!?　え、まじで!?
「……おっぱいゾンビって感じだね。いやぁ、これが噂の乳龍帝か」
「……流石に直接目にすると、精神的に来るものがあるな」
曹操とヴィールも色々とドン引きというか気圧されてるよ。
いや、なんかゴメン。俺って何故か毎度毎度、おっぱいで何か起こしてるんだ。
自分でも引くぐらいの出来事が、最近多いなぁ。乳神様も大概だけど、おっぱいゾンビでサモンおっぱいってのもとんでもない。
仕方ない。ここはちょっと覚悟決めるか。
『『『

そして輝きが放たれ、そこに現れたのは―
「え!?　ここどこ?　京都……ってイッセー!?」
―着替え中だったのか下着姿のリアス部長ぅぅぅぅぅぅ!?
いや、まあ俺がおっぱいサモンするなら確かに部長が最適だけど……?
『リアスさん!　説明している暇がありませんが緊急事態です!　たぶんつっかせてもらえば事態は好転します!』
シャルロットは何を言ってるのかな!?
部長のおっぱいは俺の覚醒スイッチじゃないんだけど!?
『いいえ、覚醒スイッチよ。彼女のおっぱいこそ、貴方の可能性を飛翔させるスイッチ。女性の歴代最強として、断言するわ』
エリシャさんも何言ってるの!?
え、これそのための儀式なの?　まじで!?
「……わけがわからないけどわかったわ。イッセー、私の乳首をつっけばいいのね?」
リアス部長の方が納得早い!?
なんてすごい部長なんだ。俺は心から尊敬する。
よ、よし……。俺はまず部長に近づくと、そのままだと英雄派や冥革連合の連中に見られるからそれとなく場所をかえ―
その時、視界に映った。
部長のこめかみにあたる方向で、一本の矢がいきなり飛んできた。
あ、まずい。
誰も反応出来てない。
部長が、
殺され―

「っせるかぁあああああ!」

―そんな部長のこめかみを守るように、壁が生まれた。
魔力と星辰体で編まれた壁に当たった矢が、まるで滑るように部長からそれて近くのがれきを粉砕。そのまま一直線に１００ｍ近い溝を作って漸く止まる。
あ、危なかった。反応できなかった。部長なんて死角からだからまだ理解もできてない。
英雄派や冥革連合まで反応が遅れてるし、お猿のおじいさんもこっちに近づきかけてる感じで、まじでやばいタイミングだった感じだ。
ってちょっと待って？
この壁、もしかして―

「……どうやら、肝心な時には間に合ったみたいだなぁ！」
「悪い姉貴！　押し返されて此処まで逃げる羽目になった！」
「ヴィール様、お恥ずかしいところをお見せしました！」
そして三人ほど、俺達の間に着地する。
「……よかった、無事……だった」
消耗した体力で、朦朧としながらもインガさんが涙を浮かべ、
「ったく、惚れ直すぐらいカッコいい登場じゃない」
かろうじて起き上がれた南空さんは顔を染め上げて、
「ふふっ。流石はカズくんね」
余裕を装いながらも、リヴァさんも顔を赤くして、
「「……もぉ」」
どこか懐かしそうな、ヒマリとヒツギも声も聞こえた。
「……全く。私もしないような狂気の沙汰をよくもやったものね」
そしてカズヒが苦笑しながら、それでも顔を綻ばせる。

そして、カズヒは息を吸って、気分良く声を張り上げる。

「だけどそれでこそ私に惚れた男。さぁ、涙換救済（タイタス・クロウ）なんて洒落た異名をつけた礼を、それに相応しい戦いで示しなさい、和地！」

「―もちろんだ！」

そして九成が声を張り上げ、勢いよく受け取った。

和地Ｓｉｄｅ

はっはっはっは！　タイミングが良すぎてちょっとテンションが上がってきたぜ！

春っちとベルナをごり押しして二条城まで来てみれば、何故かリアス部長に矢が迫っていたときたもんだ。

大方またおっぱいで何かして、空気が緩んでいたんだろう。読まない奴が遠慮なく打ったようだが、そうはいかないってわけだ！

そして都合が良い事に、会いたい奴が二人もいる。

「ヴィール・アガレス・サタン！　そしてアーネ・シャムハト・ガルアルエル！」

俺は手に持った二本の魔剣を突き付けて、敵対するべき奴らに宣戦布告する。

ちなみに空気を読まずに矢を射ってくる奴がいたが、結界でカバーして強引に告げる。
「大事なことを思い出した。大事なことのその根幹を、死にかけて漸く思い出した！」
まったく。人間ってのはいい加減というか情けないっていうか。
だけど、思い出した。思い出したんだ。
「俺は嘆きの涙を変えると誓った。泣きはらす彼女を笑顔にし、そして交した言葉に誓った原風景が俺にはある！」
あ、駄目だ。
テンションとかいろんなものが振り切れて、自分でも「端折れよ」って部分まで言ってしまう。
これ絶対阿呆なツッコミを受けそうな―
「いいわ。続きを語って頂戴」
「己の魂をかけて吠えるのならば、是非もなし。聞いてやるから言ってみろ」
あ、思ったよりも好感触。
あとイッセーが部長を連れてどっか行っているけど、どうせおっぱいだから無視だ無視。
「あの女性は泣いていた。絶望して後悔して泣きはらすほど……何かを踏み間違えたのだと、今ならそうだとよく分かる！」
そうだ。最初はそれすら分からなかった。
ただ可哀想で、元気を出してほしくて、ろれつも回らない頃に励ました。
それが、彼女の何かを切り替えた。
前を向こうと、何かをしようと、そんな風に考えさせることができたんだろう。
だからこその誓いだ。それをどこかで覚えていたからの誓いだ。
彼女の笑顔と言葉を胸に、それを続けたいと本能が刻み込んだ、原初の誓い。
だからこそ―
「だからベルナが放っておけない。春っちのその決意は尊重しない。

……踏み越えそうに、踏み越え続けるような、そんな嘆きは認めるものか！」

―それが、俺の理由だった。

俺自身の原点であり、だからこそ、初対面のベルナを放っておけなかった。

だからこそ、それを思い出すきっかけに感謝を。

なればこそ、そんな道を彼女達に進ませないと決意を。

故にこそ、その要因となる怨敵に、宣戦布告を告げるべきだ。

「……だからこそ！　宣言する！」

言ってやれ。言ってしまえ。

どうせ今更なんだ。むしろここで堂々と言うぐらいの方が、潔いってもんだろう。

息を吸え。

カズヒ姉さんに、リヴァ先生に、インガ姉ちゃんに、鶴羽に、そしてベルナと春っちにも。

心の奥底まで届かせろ！

「成田春奈とベルナ・ガルアルエルは、いずれ！　必ず！　俺が！　この手に！　もらい受けるっ!!」

……あぁ、一周回って爽快感すら覚えている。

どいつもこいつも音に聞け。近くにいるなら目でも見ろ。

俺は、涙換救済（タイタス・クロウ）は、嘆きの涙を作らせる、そんな奴らに勝負を挑む。

「文句があるならかかってこい！　問答無用で……叩き潰す!!」

その瞬間、後ろから何かが迫り―

『『『『『『『『『『―よく吠えたぁ！』』』』』』』』』』

―ハッ！　いいタイミングじゃねえか。
その時、俺の後ろから舞い降りたのは、９機の航空機と一セットの列車。
なるほどな。これが……リーネスが来た最大の理由か。
ついに完成したんだな、切り札が。
『増援のタイミングとしちゃぁ最高じゃねえか！　援護するぜぇ、和地ぃ！』
「サンキューキュウタ！　悪いが後でぶっ倒れるから、診断と応急処置もよろしく頼む！」
最高のタイミングで来たキュウタに、俺は堂々と宣言する。
そんな俺に、リーネスがいつの間にやら近づいてため息をついた。
「まったくもぉ。凄い無茶苦茶をしてるじゃない」
たしなめるを通り越してハラハラしている目で、俺が持っている魔剣にリーネスが視線を向ける。
ああ、俺がここまで二人を押し切ったのはこの狂気的発想が理由だ。
この期に及んでも禁手に至らなかった以上、頭を捻って狂気的方法を考えつかなければ死んでたからな。
そう、この魔剣は特別性だ。
「魔剣創造で疑似的に神星鉄（オリハルコン）による自分の同調特化型の魔剣を作るだなんて。脳内のＡＩまで強化魔術でブーストかけてるでしょぉ？自殺志願者なのぉ？」
「そうでもしないと逆に死んでたんでね。死中に活ありって感じで、今回だけは流してくれよ」
星辰体感応合金であるアダマンタイトを遥かに超える、神話の金属を名前に付けられた完全上位互換の合金、神星鉄（オリハルコン）。
理論上はスパコンレベルの演算機器と併用しての工業的運用が前提であり、人造惑星はこれを使っているが、それだってこれを使うことを前提とした設計が施された兵器だからだ。生身の人間がそのまま使うような阿呆な真似はしていない。
常人がこの膨大な星辰体の感応量に耐えることはまず不可能。禁

手如きの意志力では到底御すことなどできない代物を、俺は脳内のＡＩチップや魔剣の機能としての同調などで強引に振り切った。
賭けてもいい。終わったら俺は絶対にぶっ倒れる。
だから……こそ！
「更に上乗せさせてもらう。……ごめんなリーネス。後で世話をかけまくる」
「まったくもぉ。カズヒの悪いところを真似しちゃ駄目よぉ？」
そう言いながら、リーネスも一歩前に出る。
どうやら覚悟完了済みみたいだな。ま、キュウタが来たってことはそういうことだ。
「仕方ないから手伝ってあげるわぁ」
『スラッシュライザー！』
なるほど、それで凌ぐのか。
「そっちも大概やらかしてるじゃん」
『ショットライザー！』
ったく。脳内のＡＩチップはどうやったんだか。
「魔術回路と錬金術を舐めないでよねぇ。私、これでも魔術回路はオーソドックスに優秀なのよぉ？」
『ＶＥＨＩＣＬＥ！』
独自開発のプログライズキーを起動しながらそう答えるリーネスだけど、発想がだよ。
まさか脳内に直接錬金術でＡＩチップ作ったのか？　そっちの方がどうかしてるだろ。
「悪かったな、ピーキーすぎる魔術回路で。てかオカ研そっちのが多いだろ」
『ＧＡＮＴＬＥＴ！』
そして俺も、できれば使いたくなかったプログライズキーをとどめのダメ押しに起動する。
さぁて、そろそろ仕掛けさせてもらう。
『『Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』』
お互いに覚悟を決め、前を向き―

「「変身！」」
行くぜ新兵器！
『スラッシュライズ』
『ショットライズ』
展開される装甲を、俺達は同時に身に纏う。
『ライディングエレファント！　Ｒｉｄｅ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｓｕｐｅｒ　ｒｏｂｏｔ!!』
リーネスが装着するは、象のライダモデルを組み込んだライディングエレファント。
『チャージングリザード！　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅｄｙ？　Ｉ，ｍ　Ｏｋ』
俺が装着するのは、ディフェンディングタートルとは異なる形に星を変える、チャージングリザード。
さぁ、覚悟はいいか？　俺は出来てる。
「仮面ライダーアイネス、初陣よぉ？」
「涙の意味を変える為、仮面ライダーマクシミリアンの全力突撃、喰らうといい！」
そして、そこに赤が並び立つ。
「俺も混ぜろよ。反撃タイムだ」
ああ、その方がいいってもんだ。
……ここからが、反撃の時だ！

冥革動乱編　第二十五話　勝利に向かって出発進行！

和地Ｓｉｄｅ

俺達を前に、ヴィールは邪気なく誇らしげな笑顔を浮かべ、アーネは不満顔を隠さない。
「素晴らしい！　是非惚れ倒して娶って見せろ、俺は止めん！」
「私はごめんね。愛する妹をつまらなくなんてさせられないわ！」
なるほど。ならターゲットはアーネで決まりだ。
「開幕速攻！　歴代最強がどっちも変人だった鬱憤込みでぶっ飛ばす！」
なんか訳が分からないけど、イッセーはイッセーでフラストレーションが色々溜まっているんだろうな。
だが、展開された二門のキャノン砲が追加された鎧は、それだけで十分すぎるパワーアップだってわかるもんだ。
『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』
「いっけぇ、ドラゴンブラスタァァァァァァァッ!!」
明らかに今までにない出力で、反動で後ろに押されるぐらいの砲撃が放たれる。
俺はそれに合わせて即座に突貫。アーネに意識を集中する。
「上等、受け止めて―」
「馬鹿避けろ―」
ヘラクレスを曹操が蹴り飛ばそうとした時―
「いいえ、諸共喰らいなさい！　地殻干渉（トパーズ・メイク）！」
その瞬間、カズヒ姉さんが盛大に魔術を発動した。
視界の隅で何か呼び出していたし、何かするとは思ってたぜ！

そしてその瞬間、英雄派の足元が５０センチぐらい陥没する。
英雄派は全員人間なので、その一瞬だけは動きを制される。そしてそれだけあればイッセーの砲撃は届くわけだが。
「バーニング！」
その瞬間、ヘラストロテスがそれを受け止める！
「奥羽君!?」
アーネが声を荒げるけど、あいつ本名は奥羽っていうのか。
だがあれなら―
『『『

祐斗Ｓｉｄｅ

凄まじい戦いが繰り広げられる。
消耗が激しい僕達は、もはや見守ることしかできない域だ。
今迄からは想像もできない爆発力で突貫する九成君は、お互いに星を開帳してアーネと激突している。
またイッセー君は瞬時に鎧を大幅に変えると、今までにない特化した出力操作で英雄派を翻弄している。
初代孫悟空様達も、ヴィール達の眷属相手に突貫して、神仏の底力で渡り合う。
多方面から放たれる最上級悪魔クラスの砲撃や、巨大な氷の出力による面制圧を、優れた仙術と連携で凌ぐ彼らは凄まじ過ぎる。
今の僕達では一人を相手にするにも全員総出で挑んで可能性がある程度だ。恐るべきはそんな歴戦の勇士と渡り合うヴィール・アガレス眷属。
真魔の駒とやらを使っているとはいえ……いや、オーバーフローを解決する真魔の駒を使う必要があったヴィールは、既に魔王クラスを超える力量を発揮しているということか。
そして、この戦闘の立役者は他にいる。
何故ならば、彼ら神仏を抑え込んだΔサリュート・マキシマを何とかしなければ、彼らが本領を発揮することはできないからだ。
そう、その立役者―
『『ダイヤを乱さず快速特急、緊急事態に無事現着―』』
―いや、ちょっと待った。
何故かリーネスさんが乗り込んだ列車が空高く舞い上がりながら

人型ロボットに変形していく。
……え、なにあれ？
『『機動特急アントニオン、誓約通りに出発進行！』』
……なんかスーパーロボットが参上している!?
『待たせたな坊主！　援護するぜぇ！』
『とりあえず一旦取り押さえるわ。動脈を絞めて失神させるわよぉ！』
『「え……え……えぇ？」』
匙君と英雄派のゲオルグが困惑している中、素早くアントニオンとかいうスーパーロボットが取り押さえにかかる。
我に返ったゲオルグが魔法攻撃を放つけど、その攻撃をアントニオンはものともしない。
「馬鹿な!?　あんなふざけた機械が私の魔法を!?」
『無駄無駄ぁ!?　俺の対魔力は列車ごとに限ってＣ＋ランク！　四小節までの魔術は無効化できるし―』
『加えて機動特急アントニオンは、宝具との同調で疑似的にＡランク宝具！　一流の魔法使いであっても傷つけられないのよぉ！』
なんか荘厳なオーケストラな音楽を流しながらのアントニオンは、下手をしなくても匙君並みに戦えている!?
「くっ！　ザイアの大型兵器制御用プログライズキーであるブレイキングマンモスを参考にした、兵器制御用形態か!?　だがアントニオン……なんだそのネーミングは!?　由来はなんだ？」
『それは、一人の音楽家が残した願い―』
混乱しているゲオルグに、リーネスが何か語り始めた。
『自分の力を貸し与える代わりに、交わした契約に乗っ取った神の子（グリゴリ）を見張（ゴリ）る者が持つ義理堅さの象徴―』
え、これアントニオンの話？
っていうか、もしかして今はキュウタがデミサーヴァントに？　でも何が何だか―
『そう、列車強化のＡランク対物宝具、栄光差し出すほどに欲した黒鉄（マイ・エクスプレス・エンチャント）に最適化した人工神器。可変ロボット型人工神器列車、機動特急アン

トニオン！』
何そのピンポイントすぎる宝具!?
『アントニン・ドヴォルザークとの契約に基づき、この宝具をもって悪を討たせてもらうわぁ！』
「いろんな意味でふざけるなぁあああああ！」
盛大にツッコミを入れながら、ゲオルグは大量に結界装置を作り出す。
『気持ちは分かるがさせるかよぉおおおおお！』
そしてそれに邪龍の呪いをかけて妨害する匙君により、ゲオルグは完全に抑え込めた！
あとは、彼らが抑えてくれれば！
その時、更に空間の歪みから何かが飛来する。
敵の増援かと身構えたけど、その紋章を見て苦笑したくなった。
……隙を逃さず来てくれるよ、彼らも。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そして同時期。ホテル近辺での戦闘も佳境を迎えつつあった。
「アーメェエエエエエエッン！」
「ぐぬぅ！」
振るわれるメイスの一撃に、三烈が受け流すも大きく吹き飛ばされる。
それに一瞬気を取られた瞬間に、聖なるオーラを纏った剣が、ケンゴ・ベルフェゴールに襲い掛かった。
それをヴィールによって得た力たる剣で受け流すも、こちらも難敵

というほかない。
何より、既に自分達以外の戦力は返り討ちに在っている。
「お待たせしました！　あとは全員総出で行きましょう、団長！」
「うむ！　ここでリュシオンまで来たのならば確実に倒せるものよ！」
「同感です。すぐにでもお姉さまを助けに行きたいですから」
リュシオン・オクトーバーが数の制圧を終え、それを理解したストラス・デュランとカズホ・ベルジュヤナが、武器を構えてこちらを見据える。
……既に堕天使総督アザゼルと、魔王セラフォルー・レヴィアタンは自軍の指揮に向かっていた。
戦術的には既に敗北。可能な限りデータをとってから離脱するべきと判断したが、引き際を見誤った気がしないでもない。
「おのれ人間風情がぁ……っ」
頭に血が上っているこの男を囮に離脱したいが、おそらくそれを許す相手ではない。
なら何とかして二人で離脱を図りたいが、おそらくそれも困難で―
「……無事なようだね」
―その瞬間、壁をぶち抜いてスマートな装甲に身を包んだ存在が突貫してきた。
それは素早く近くにいたリュシオンを狙い、一瞬の交錯の末こちらに飛ぶ。
装甲は僅かに傷ついたが、しかしリュシオン・オクトーバーの頬も僅かに切り裂かれていた。
ケンゴの記憶が正しければ、あれは疾風殺戮・ｃｏｍのメンバーである、ヒューマギアのリクが変身した仮面ライダー戮だ。
それだけの戦力であることは聞いていたが、実際に一瞬の交錯で神の子に続く者（ディア・ドローサ）と渡り合えるのは強大さがよくわかるというもの。
「気を付けてください、あのレイダー……？　とにかく手練れです」
「分かっておる！　外からこちらに突入する時点で、油断は出来ん！」
「……しかもこのオーラ、まさか……っ！」

三者三様に敵が警戒する中、乱入した存在は視線だけでこちらを確認する。
「撤退の許可が下りた。ツヴァイハーケンが死兵型アステロイドを五百ほど突っ込ませるから、それに乗じて離脱した方がいい」
「なんだと!? 京都を、我ら妖怪の手に取り戻すことを諦めろと!?」
三烈が食って掛かるが、彼は首を横に振る。
「百鬼ハントのトップからの指示でもある。あとで人類は削りに削るから、そのあとでゆっくり獲得すればいいだろう?」
「それがよさそうだ。聞き分けが悪いのなら、見捨てるだけだが?」
二人がかりで諭して、三烈を連れ戻す体制も獲得した。
そして睨み合いになる中、リクは苦笑を漏らす。
誰もが怪訝な表情をする中、リクの視線はリュシオンに注がれていた。
「……人間が皆君のようなら、世界はもっとましなんだろうけどね」
「……おかしなことを言うね」
静かに、リュシオンはその言葉を否定する。
「コツさえ掴めば誰でもなれるさ。俺はそれを証明するために、此処にいる!」
その強い決意が見える眼差しに、リクは肩をすくめて首を横に振った。
「前言撤回だ。君みたいなのがいると、世界が大きく歪むだろうね」
その言葉に合わせるように、死兵型アステロイドが突貫を開始した。

冥革動乱編　第二十六話　似て異なる願い

和地Ｓｉｄｅ

突貫してアーネに激突して吹っ飛ばすが、そこからアーネの反撃が即座に始まる。
手には氷で出来た巨大なメイスを振るう……かと思えば、それが投擲された瞬間自在に動いてこっちを狙い、一瞬でも隙を見せれば超高速で射出される。しかも場合によっては爆発する。
そして同時に、素早く抜き放った軽機関銃により銃弾が放たれるが、こちらは障壁で防御。
そして盛大に爆発して、空気が震える。
……そう、爆発した。５，５６ｍｍ弾が。
加えて牽制として放たれたと思った回し蹴りを受け止めた瞬間に爆発したのも恐ろしい。
そう、この女は本当に恐ろしい女だ。
俺は四方八方からの後継私掠船団の援護射撃を飛び跳ねて躱しながら、アーネ・シャムハト・ガルアルエルが難敵だと理解した。
「困ったものね！　妹の近づく悪い虫は退治しない……と！」
「笑わせるな、毒親ならぬ毒姉が！　あんたとベルナは絶対に違う！」
銃撃を躱し合いながら、俺とアーネは戦場を駆け巡る。
ちなみにアーネは氷をサーフボードのようにして使い飛翔していた。
俺も障壁を足場に飛び跳ねながら、三次元機動で戦闘を行っている。
「アーネを守れ！」
「私達の聖継娼婦（シャムハト・セカンド）に手を出させるな!!」
四方八方からアーネを援護する、氷を使う星辰奏者。

軽く二十人は超えているが、問題はそいつらの星辰光がかなり似通って、アーネ自身が振るっている星の下位互換になっている点。
氷の武器を振るう。氷の塊を操作する。氷の弾丸を発射する。大別すればそれらが三つ。
そしてアーネはそれをまとめて使っており、また爆発物にしている。
そしてアーネは銃弾を爆発させていて、サイズから想定される爆発力は銃弾の方が強大だ。
答えは二つ。
一つはアーネは禁手に至らせた巨人（マイティング・デトネイション）の悪戯を持っている。おそらく禁手は「物体を爆発物に変化させる」といったところだろう。条件に素材や時間もあって、氷の場合は即席であることが爆発力の低さに繋がっている。
そしてもう一つ。こっちの方がやばい。
「聖継娼婦（シャムハト・セカンド）とはよく言ったもんだ。ここまでスタンスと星が合致したパターンもそうはない」
そう、仮説として立てられるものは一つ。
「他者に疑似的な星辰光を与える星辰光。ここまで他者強化に特化した星辰光なんてそうはない」
「惜しいわね。厳密には与えるんじゃなくて調律するのよ」
なるほどな！
つまり星辰光ならぬ疑似星辰光。そして本体であるアーネ自身はその統合版ということか。
なるほど……な。
「ああ、断言してやるよ聖継娼婦（シャムハト・セカンド）。あんたはとても運が良く、同時にとても運が悪い」
「あら、どう運が良くて悪いのかしら？」
ああ、教えてやるよ―
「星があまりに最適すぎて、妹はあまりに相性が悪いってことだ、この悪女（ファム・ファタール）!!」
俺は猛攻を障壁でカバーしつつ、強引に突撃を敢行した。

Other Side

「「「「「「「「「「創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星」」」」」」」」」」

戦闘態勢に突入するΔサリュート・マキシマに対し、相対するのは九機の大型戦闘機。

Δサリュート・マキシマのパイロットは当然の如くだが警戒を跳ね上げて攻撃を開始する。

先制攻撃はこちらに通用することを痛感しており、それゆえに油断をする余裕が欠片もない。

「「「「「「「「「「「「敵超常存在確認により、これより星辰体兵装の本格駆動を決定」」」」」」」」」」」」

故に星辰光を即座に発動。瞬時に飛翔する攻撃端末を具現化する。

「「「「「「「「「「「「

なのだから。

Δサリュート・マキシマ
収束型星辰兵装・駆動開始（アストラル・マキシマ・アームズ）
基準値：A
発動値：AA
収束性：AAA
拡散性：A
操縦性：A
付属性：A
維持性：D
干渉性：E

極まりすぎるほどに高い収束性から生まれる特攻を、高い拡散性・操縦性により適切に制御。更に付属性の高さによって過負荷を半ば無視した機動で敵の攻撃に対応するのがΔサリュート・マキシマの基本戦術。

機体そのものは高速機動に特化することで、神仏魔王といった絶大すぎる威力を防ぐことを完全に捨てた、「当たらなければどうということはない」を徹底的に突き詰めた設計。それにより四機一個小隊でそれぞれ攻撃・支援・警戒・休息を挟んだインターバルにより、確実に削り殺すことを前提とした機体となっている。

それが四個小隊もあったからこそ、ヴィール達は神仏においてもことさら武闘派である西遊記の英傑達を相手に、あそこまで渡り合うことができたと言ってもいい。

事実、彼らの援護を失ったヴィール達は、3対3という状況に対し、総合的に見て若干押されている状況に追い込まれている。Δサリュート・マキシマがそれぞれ一人ずつに一個小隊でカバーに入っていた時は優勢だったことを踏まえれば、その設計思想が適切に機能し

たことも、今しのいでいる彼らの実力が凄まじいことも痛感できるだろう。
そして、Δサリュートはどの機種も他の機種が行う戦闘においては一歩劣る。そしてマキシマの場合は「効率が悪すぎる」という形で劣っている。
つまり燃費を無視すれば他の機種に追随する性能を発揮することは可能なのだ。
それをもってして、新たなる敵には大きな苦戦を強いられる。
戦闘機を迎撃しようとした瞬間、その戦闘機は瞬時に人型ロボットに変形し、攻撃を開始する。
機敏な機動と表面を覆う力場の頑丈さで、一対一でマキシマを押している。
総合的に短期決戦をインターバルで対応するマキシマは、９対１２という僅かに優勢な状況で、しかし苦戦していた。
『くそったれ！　三大勢力が人型兵器の分野で俺達を上回るだと!?』
『ふざけやがって。初陣で泥を塗るとか恥ずかしいじゃねえか！』
『負けられるか！　俺は今日、気になってた酒場の姉ちゃんにステーキとパインサラダを食べてたらデートに誘われた某可変戦闘機アニメにおける究極の死亡フラグんだ―』
『『『

分けた。
『食らいやがれ、トライデンカノン！』
その瞬間、絶大なエネルギーが砲撃となって発射される。
収束砲撃を打ち抜いてなお余りある威力は、中隊が射出した疑似聖槍端末による弾幕で更に削られなければ、中隊長機を撃墜していたと断言できる。
『おのれ、この対神仏魔王用Δサリュートを、マキシマを相手に……っ』
『ハッ！　いつまでもマウントを取れると思ってもらっちゃ困るなぁ』
その悔しげな声に、可変ロボットの部隊長は少しにやけてしまう。
今までずっと屈辱的だった。
星辰体との併用とはいえ、人工神器という分野で大敗を喫していた。更にロボット兵器などという、ロマンあふれる形でだ。
神の子を見張る者にとってここまで屈辱的な敗北もない。
アガレスの資金援助によって得られたこのチャンス、目に者見せると決意した。
『覚えておけ。これが三大勢力反撃の狼煙。人工神器技術の粋を集めた、三大勢力の人型機動兵器群――』
そう、これこそがアドバンテージを追い抜かれていた屈辱を濯ぐ第一弾。
『Ｔ　Ｆ　ユニット、量産機――』
息を吸い、そして部下達と声を合わせて宣言する。
これが、三大勢力の本気。
これが、人工神器の新たなる姿。
あえて人工神器に特化することで、アドバンテージとノウハウを生かした高性能兵器群。
更に可変システムを応用して内部ユニットの配置を変更することで、目的に応じた形態を使い分ける。そのうえブロック化によって比較的数を揃えられる整備性と生産性を獲得。とどめにライディングエレファントレイダーになることで、操縦者の耐Ｇ限界をある程度無

視することに成功してその分性能が更に向上した高性能機。
冥界においてＤ（ディアボロス・フレーム）Ｆという数と共に並び立つ、質を担当する人型兵器―
『『『

「私の神聖七夜の伽（クルチザンヌ・シャム）、英傑に至る陶酔（トナイト）をここにで調律したくなるぐらい。聖継娼婦（シャムハト・セカンド）の伽を受ければ、きっと凄い英雄になれるでしょうに」
「必要ないな。俺を導く女の笑顔も、共に生きる女達にも、あんたみたいなタイプは必要ない！」
強引に周囲の攻撃やアーネ自身の攻撃を、障壁を展開して何とかしのぐ。
それを見ながら、アーネは余裕の表情を見せていた。
「そのプログライズキーの性能も読めたわ。星辰光のスペックを下げる代わりに、出力を上げる機能があるのね？」
まぁディフェンディングタートルから言って、読まれる可能性は考えられてる。
さっきから障壁も分厚く、かつ近距離にしか発生させてないからな。気づかれるのは当然の想定範囲内だ。
「出力が一段上がったのは驚いたけど、その程度なら凌ぎようはある。だからそうね―」
その瞬間、氷の砲弾がいくつも集まり、そして俺の周囲に着弾する。
爆発が発生し、しかも氷の破片までもが大量に飛び交う。二層構造の破片榴弾にしやがったか。
そしてそれで俺の移動は制限され、正面から二丁の汎用機関銃を構えるアーネが見える。
「この距離と出力なら、貴方の今の出力にも対応できる！」
その瞬間、大量の炸裂弾が俺に向かって放たれ―
「―そう思ってくれると思っていた！」
―るより早く、俺は一気に踏み込んでアーネに組み付いた。
「速い!?」
「かかったな馬鹿め！」
ああ、このために態々出力を一段上がっただけに見せかけていたんだよ。
星辰奏者は出力の調整がろくにできない。基準値（アベレージ）と発動値（ドライブ）の二択のみで、５の敵を相手にするにも１の基準値で無理なら１０の発動値

でどうにかする必要がある。
だからこそ、俺は高くなった出力をあえて生かさず、可能な限り低めに見積もらせた。
足を全力で動かしながらも、走り方をあえて劣悪にすることで遅く走っていた感じだ。それを今、速く走るやり方に切り替えた。
チャージングリザードプログライズキーは、突撃を意味するチャージと銘打たれているように、突破力を重視したプログライズキー。俺の星辰光のステータスを、とにかく出力重視に再調律。それにより俺個人を守ることで防衛線を成立させるディフェンディングタートルとは異なり、絶対に守るべき相手を確実に守る為の爆発力を与えるプログライズキーだ。
それによって変貌する性能は、本当に出力重視だ。

救済の時来れり（セイヴィング・タイタス＝クロウ）、悲劇を終える帳は此処に　チャージングリザード発動時（括弧内は通常時）
基準値：B
発動値：AAA（A）
収束性：E（D）
拡散性：D（B）
操縦性：D
付属性：E
維持性：D
干渉性：A

とまあ、ここまで分かり易く最大出力に特化する仕様だ。
発動値の上昇は俺本人の身体能力の上昇にも繋がる。それによってカタログスペック以上の速度で移動し、守るべき相手を確実に守り

切るのが、チャージングリザードの本来の運用思想。
だが同時に、この絶大な出力はピンポイントで制するべき相手を制するにも向いている。
なにせ出力が絶大なのだ。収束性が一段下がったところで、上昇した出力で障壁を分厚くすれば大体どうにかなる。拡散性が低くなっても、俺の周囲をカバーする分にはどうにかなる。
そう、これは俺が窮地においても守るべき相手を守る為のプログライズキー。
だからこそ、此処でアーネを倒すことこそが、守るべき相手を守る方法だ。
「お前のスタンスはこの際どうでもいい。だが、お前の考え違いだけは訂正する」
瞬時に俺達の周囲を結界で包み込み、アーネの逃げ場を封じる。
そして躊躇することなく、接近戦を敢行する。
アーネの星辰光は、こいつが調律できる三つの氷を操る疑似星辰光の統合だ。
氷の武器を身に纏っての操作。おそらく付属性が最大の特性でこれにより凍傷を防いでの近接戦仕様。
氷の塊を自在に操作する。おそらく操縦性が最大で、これにより範囲内を自在に操る中距離戦仕様。
氷の弾丸を高速で射出する。おそらく収束性が最大で、これにより離れた相手にも攻撃を届かせる長距離戦仕様。
これを統合し、更に禁手で爆発物とすることで攻撃力を高めるのがアーネの基本戦術。
つまり、爆圧が逃げずに全方位から襲い掛かる小さなドーム状空間でなら、アーネの本領を無効化できる。
「アーネ。お前に一つだけ同情する！」
「何がかしら！」
自覚はなさそうだ。まぁ、仕方がないんだろう。
この女のスタンスと、あれだけの数の疑似星辰奏者から見て、思ってもいないことの可能性はでかい。

「どんな子供も親は選べないが、それは別に親に限った話じゃない。……姉妹だって選べない」
そう。アーネについてないところがあるなら、そのうちの一つは間違いなくそれだ。
アーネ・シャムハト・ガルアルエルは英雄足らんとしている。そしてその在り方としてエンキドゥを人として確立させたシャムハトを選び、それを超える形として幾人もの英雄を伽で導くことを選んだ。結果として、奴は数多くの英雄志願者を強くした、ある意味で体現した存在だ。
だが―
「気づけよ馬鹿姉。お前の妹は、英雄志願(お前達)じゃ断じてない」
―俺ははっきりと言ってやる。
ああ、それだけは確信を持って言える。
短い戦いだが、それだけで十分すぎるほど分かっている。
―そういうのはなぁ、幸せになるべき奴にやれって言ってんだよ!!
あの叫びは本音だった。嘘を言うようなタイミングじゃなかった。
だから分かる。断言できる。
「ベルナ・ガルアルエルは幸せなんかじゃ断じてない。あんたの理想とベルナの理想は、全く別の形なんだってな!」
至近距離からの接近戦に限定すれば、俺の方が有利。
この叫びと共に、押し切って―
「それは違うわ。断じて違う」
―その俺の視界に、大量の弾丸が映った。
ライフル弾、拳銃弾、更にショットガン用の散弾やスラグ弾。
この女、戦闘中にばらまいていたのか。
俺が思わず目を見開く中、アーネは強い決意を秘めて胸を張る。
「世界は自分と他人で出来ている。だから輝きを示さなければ大衆(モブ)になる。……自分の人生を自分が主役にできないなんて、そんな哀れな人生を味合わせるわけないでしょう!」
強い決意を持ち、アーネは相打ち覚悟の大勝負に打って出る。
その目も声も、嘘偽りなく本心から生まれたものだ。

本心から、アーネはベルナの幸せを願っている。
ああ、だからこそ―
「だからお前はザイアと同じなんだ」
―最初の嫌悪は、決して嘘ではなかったと確信する。
より踏み込み、改めて結界を展開。
俺とアーネは密着状態で結界に包み込まれる。同時に外で爆発が起きたが、爆発の性質から障壁は崩れることはない。
そしてしっかりとその目を見据えて、俺ははっきりと断言する。
「愛っていうのは、たとえ押しつけがましくても相手の尊重が重要だ。あんたのそれはベルナの尊重じゃなく、あんたにとって都合のいい世界しか見えてない」
「強引に引っ張り上げるあなたが、全力で幸せを押し付ける私にそんな批判ができるの？」
そう返されるが、何をバカげたことを言っている？
「できるに決まってる」
『ＧＡＮＴＬＥＴ！』
至近距離から、俺はショットライザーを押し付ける。
アーネは再び魔法で異空間から弾丸を出そうとするが、一手遅い。
俺は引き金を引き―
『チャージングブラスト』
至近距離で拡散砲撃を喰らい、どうしても動きが揺らぐ瞬間に、ショットライザーをベルトに装填。
『ＧＡＮＴＬＥＴ！』
「幸福に喜ばれて当然と押し付けるお前と、恨まれても幸せでいてほしい俺は、少なくとも全く別の考え方だしな」
そして与えるは、リミッターを外部から強制解除して放つ、後先を考えない最大の蹴り技。
「自分が嫌われる可能性は考えろ、この馬鹿姉貴！」
『チャージングブラストフィーバー！』
チャージング

ブラスト

フィーバー

その蹴りが、強引に障壁を吹っ飛ばしてアーネを吹き飛ばした。

冥革動乱編　第二十七話　京都大決戦、終幕

イッセーＳｉｄｅ

「アーネ！」
「シャムハト!?」
ヘラストロテスと曹操が驚いている視線の先で、アーネ・シャムハト・ガルアルエルがきりもみ回転で吹っ飛んだ。
「……姉貴……」
なんか寂しそうに見つめるベルナを通り越して、アーネはそのままがれきの山に激突しそうになった。
けど、その時飛び出した男が、拾いあげて着地する。
よ、鎧武者!?
なんだあれって思ったけど、その時ドゥルヨーダナが声を上げた。
「アーチャー！」
「マスター。どうやら実験も失敗した様子、そろそろ撤退が妥当で御座ろう」
あいつもサーヴァントってことか！　っていうか、あいつら撤退する気か!?
……こっちはこっちでそろそろやばいけど、もうちょっとぐらいぶちかましたい……っ
『……いえ、これぐらいでいいでしょう』
シャルロットが俺にそう諭す。
え、でもこのまま逃がすのは―
『こちらも力に慣れていません。多くを得る可能性を選ぶより、多くを失う可能性を避けるべきかと』
……ぐう。

確かに、曹操も俺の力に慣れたみたいだし、このままだとカウンターをもらうかも。
それに、こっちも結構ダメージがデカいし……な。
「……どうやら逃げるなら追わないでくれそうだ。これ以上頑張ると痛い目を見そうだし、そろそろ帰るとするかな？」
「同感だな。実験は不発に終わったようだし、これ以上の消耗に価値があるとは思えん」
曹操とヴィールが合流してそういう也、ゲオルグが霧を具現化する。
ったく。新しい力に目覚めたのに、一人も倒せてないってのはちょっと癪に障るぜ。
霧がどんどん濃くなる中、英雄派と冥革連合の連中が曹操達のところに集まる。
俺が複雑な気分でいると、曹操は俺の方を見て笑顔を向けた。
「シャルバを馬鹿にしておきながら、君達を舐めてかかりすぎたことを謝罪しよう。次は俺もこいつの力を見せるから、君達も力を研ぎ澄ませるといい」
そんな曹操に肩をすくめながら、ヴィールの奴も俺にちらりと視線を向ける。
「……今代の二天龍、その力の一端を見せてもらった。次にまみえる時は俺自ら相手をすると―」
『いや、その前に一つ聞かせろ』
その時、ドライグが声を上げる。
珍しいな。このタイミングで皆に聞こえるようにだなんて。
俺が戸惑っていると、ドライグの意識がヴィールの女王（クイーン）に向いた。
『お前、サーヴァントだな？　そして久しぶりというべきか？』
そんな不思議な言い回しに、クラウディーネとかいうヴィールの女王はにっこりと微笑んだ。
え、まじで!?
俺の敵、受肉したサーヴァントが多すぎないか!?
面食らっていると、クラウディーネはニコニコと微笑みながら手を

振ってきた。
「覚えてくれて嬉しいわ♪　ふふ、今度会う時はリベンジマッチを受け付けるわね」
り、リベンジマッチって……え？
あ、もう霧に包まれて転移しちまった。
っていうか、あの言いぶりだと歴代の人と戦ったことがあるのか。
どんな英霊なんだろうか。後で調べておかないと―
『……相棒、気をつけろ』
その時、ドライグが冷え切った声を出した。
クラウディーネってのは、ドライグがそんな声を出すような奴だっていうことなのか。
俺は、なんというか覚悟を決めるべきかって感じで息を呑む。
『あの女は、かつて歴代の二天龍が激突した時に割って入り、ほぼ共倒れとはいえまとめて滅ぼした女だ』
……まじかよ。
『歴史に名を遺したはずがないのだが、英霊になるとはな。……覚悟を決めろよ、あれは俺が神器になってから見てきた相手でも指折りの強者だ』
そうかい。そんな奴がヴィールの眷属なわけか。
ったく。今のライバル達だけでも強い奴がたくさんだってのに、昔の強い奴とまで戦わないといけないなんて……な。

和地Ｓｉｄｅ

……あ……あうあうあ～。
あれ、もう十分ぐらい経った気がするぞ？
駄目だ。時間間隔が曖昧っていうか、もう限界―
「お疲れ様、和地」
―そんな倒れそうな俺を、背後からカズヒ姉さんが抱き留めてくれた。
それで気が緩んで、俺は一気に脱力する。
いや、ほんとに……もぉ……。
「反動……キッツッ！」
発動値を解除してから、反動で色々大変でもう何もできなかった。
悶絶して転げまわりたかったけど、それやるとかなり心配されるだろうから何とか我慢。だけど我慢するのに精いっぱいで、何もできなかった。
なんていうか凄いとしか言えない。どんな感覚かと言ったら、内蔵をアイアンクローされながらばらばらにシェイクされてるとでも言いたくなる感覚だ。
テスト時よりピーキーに再設計されてやがる。覚悟してたのより数段上だったぞ。
カズヒ姉さんの感触とかにおいとかを感じる余裕もない。正直、そんなことに意識を回す余裕がない。
「呼吸が浅くなってるから、少しずつ深くしなさい。控えめに言って悶絶と絶叫が同時にできるような感覚だけれど、だからこそ呼吸を整えてゆっくりと気分を緩めるの」
「わ、分かった……」
流石出力格差がデフォルトで三段上なカズヒ姉さん。その辺りについてもお手の物か。
というより、カズヒ姉さんはこんな反動のデカい星辰光をポンポンと使ってるんだよなぁ。正気か？
いや、好きな女性に言うことじゃないけど……正気か？
そんな俺の気配を察したのか、カズヒ姉さんは苦笑していた。
「私は参考にしては駄目よ。参考っていうのはもっと真っ当なやつを

対象にするべきだから」
「自分で……言うか……？」
まったく。思わずツッコミを入れちまったよ。
といっても、あまりこうしてもいられない……か。
「インガ姉ちゃんや……鶴羽が気になるし、そろそろ……」
移動したいと、カズヒ姉さんに肩を借りようと思ったその時だった。
「えい♪」
そんなリヴァ先生の声と共に、ふにょんと二対の柔らかい感覚が。
あ、これおっぱいだ。
っていうか鶴羽にインガ姉ちゃん!?
「ちょ……ちょっとそのまってこれはそのあばばばっば!?」
「……ゴメン和地君。リヴァさんを叱って……すぐに……っ」
疲労困憊消耗しまくりな二人を持ち運んで何をしているのかな、リヴァ先生は。
思わずカズヒ姉さんと一緒にジト目になってしまった。
俺、声出すのも結構しんどいんだけど。
「……怪我が治ってると言っても、消耗が激しい子に何してるのよ、もう」
「こういう時だからこそ、人肌が恋しいんじゃない♪」
ツッコミを入れたカズヒ姉さんごと、器用にリヴァ先生は抱きしめてくる。
いや、この状況は男としてヒャッハーものなんだろうけど。
今の俺、割ともだえ苦しみたい感覚だから余裕が……ね？
視線で訴えると、何故かにっこりと微笑まれた。
何かと思ったら、遠くに聞こえないような小さな声が聞こえてくる。
「ほらほら、愛する人達にぐらい、弱音を言ってもいいものよ？」
……。
ほんと、敵わないなぁ。
俺はなんていうか、肩の力がすとんと抜けた。

「……反動きっつい……いやもぉ、本当に……うぁ～……っ」
弱音というか悲鳴が漏れた。
いや、少しずつゆっくりと息を吐いて、何とか立ち上がった状態で動き出したかったんだけど……ね？
いやもういいか。この状態ならそんな風には見られないだろ。
「……あんたも大変ね。いや、私も限界……あ……ぐぅ……」
そう言いながらさらりと頬ずりしないでくれない、鶴羽。
いや、もう俺もすり返そう。今は弱音が出てきまくりで、なんていうか甘えたい……
「はわぁバラブアァッ!?」
そして反撃でパニクって体の負担のダブルパンチ喰らったよ、鶴羽の奴。
「……はぁ。ふざけながら実利をもぎ取るから困ったものね」
「……同感。しかもこっちにまでメリットを押し付けてくるから怒りづらいし」
盛大に、カズヒ姉さんとインガ姉ちゃんがため息をつくと、リヴァ先生は胸を張った。
……位置的に押し付けられないけど、まぁ押し付けられても堪能する余裕がないからなぁ。俺はどう反応すればいいんだ。
「ふふぅん。年季の差を思い知ったか♪」
まぁ、なんというかそう評するとだ。

……ほんと、リヴァ先生には敵わないなぁ

「あば、あばばば……あれ？　カズヒ、顔色悪くない？」

「……ごめん鶴羽、聖杯使って？　……気が緩んだら、毒が……キッツ……っ」
「はぁ!?　カズヒ姉さんって毒もらってるのかよ!?」
「うわ、す、すぐアーシアさん呼んでくるから待ってて！」
「待ってインガ。解毒の場合はアーシアだと無理あるから。急いでホテルに戻って、緊急搬送の準備とか……ね？」
そしてカズヒ姉さんが痙攣し始めて大騒ぎ。
おかげで反動とか気にしてる余裕がなくなったけど、天然でなんということしでかしてるんだよ。
あと猛毒喰らってそのまま戦闘とか、何度も思ったけどカズヒ姉さん正気か。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……く……そぉ……っ」
「何を悔しがっている、春奈」
「……悔しいですよ、ヴィール様。私は、結局……弱いままで……」
「まったく。そんなに強くなりたいか？」
「当たり前です。だからあなたの手を取って、そのおかげで私はここまでこれたのに……っ」
「……これは、荒療治が必要か」
「……ヴィール、様？」
「春奈。そこまで言うのなら、今度の作戦で機会を与える」
「え、ヴィール様？」
「いい機会だ。少し魔王達に発破をかけるべきだと思っていたし、疾風殺戮・ｃｏｍや旧魔王派の提案に乗るとしよう」

「そ、それは!?　でもヴァーリチームがうるさいことを―」
「やりようはあるし、もとより奴らが禍の団の運営に文句を言える立場か。個人的に奴は一度叩きのめされるべきだとは思っていたし、ちょうどいい」
「ッ！　では、例のレーティングゲームに!?　しかし、それは無粋とヴィール様自らおっしゃっていたではありませんか！」
「あの無能と赤龍帝の試合に無粋は差しはさまん。そのうえで、四大魔王や大王派の連中に発破をかけるとしよう。そして―」

「―お前も次で証明するといい、九成和地に、お前が強くなったのだということを」

冥革動乱編　第二十八話　さよなら京都、また会う日まで！

和地Ｓｉｄｅ

疲れが正直まだ残っている。絶対、帰りの新幹線は爆睡する。
そんな確信を覚えながら、俺達は京都市内でお土産の物色をしたりしながら最後の観光をしていた。
全く。英雄派の連中の所為で毎日トラブルが襲い掛かってきたけど、何とか最終日は平和に終わりそうだ。その分溜まりに溜まり、昨夜にドカンと溜まった体の疲労とかが色々きついけど。
最も睡眠不足気味になるのは分かっていたので、俺は奥の手として魔術を使って、メンタル面は完全にしゃっきりさせた。
精神の解体清掃という、精神構造をオーバーホールすることで、二時間程度でメンタルを完全リフレッシュする魔術がある。二時間完全に無防備確定なのであまり使われないが、メンタルだけでも復活させないと後がきついしな。
「……これ、今日使う用に買おうかしら」
「カズヒ姉さん、漢方薬コーナーを見ない。そこはお土産コーナーじゃないから」
俺は漢方薬コーナーを真剣に見ているカズヒ姉さんにため息をついた。
あのあとカズヒ姉さんは緊急搬送で解毒処置を受けた。本来なら休んだ方がいいとまで言われたけど、俺と同じように精神の解体清掃で強引にメンタルだけ回復させて、朝にはホテルに戻っていた。
……なお、魔術や化粧で誤魔化しているけど、顔色が微妙に悪い。

なのでそれとなく、事情を知っているメンバーがカバーする形で動いている。あと桐生は魔術で誤魔化されてるのに、何かに勘づいているようで気にはなる。
まぁ、動きにおいては無理していると気づかれにくいように動いているのには感心するやら呆れるやらだ。言っても聞かないだろうけど、無理しすぎだろこの人。
「流石に休んだ方がいいんじゃないか？」
俺は真剣にベッドに叩き込むべきか考えるけど、カズヒ姉さんはため息をつきながら首を横に振る。
「帰りの新幹線で寝るから安心しなさい。桐生達を不安がらせたら、折角の修学旅行にケチがついて、良い思い出にならないじゃない」
あ、そういう理由。
俺はちょっと感心するけど、カズヒ姉さんは何故かそっぽを向いた。
ど、どうしたんだ？
なんていうか、ちょっと頬が赤いような。熱でも出てきたのなら、流石に強引に休ませるべきだけど―
「……私だって、修学旅行は最後まで楽しみたいし」
―あ、そういう理由もあるのか。
体調不良をごり押してまで、修学旅行を楽しみたかったのか。
そ、そっか……。
実は意外と楽しみにしてたんだな、カズヒ姉さんも。
うん、これは仕方がない。
「なるほど、そういうことなら分かったよ」
俺としても、そこまで楽しみにしてることに無体な真似は出来ないな。
俺だって疲労は残っているけど、それでもフォローするぐらいはできる。
ああ、ぜひ楽しんでもらうとしよう。
「御所望があるなら、ぜひ私めにお任せを」
軽く冗談めかして、手を差し出しながら言ったその時だった。

……カズヒ姉さんが、俺の手をぎゅっと握った。

カウンター喰らったぞ、俺。

面食らって思考が真っ白になっている俺に、カズヒ姉さんが恥ずかしそうに苦笑した。

「なら、できればこうしてくれる？　人のぬくもりがあるって、それだけでメンタル的に楽だから」

「……はい」

あ、これ俺が修学旅行に集中できない奴だ。

いや、逆に考えろ。これは修学旅行最大のイベントではなかろうか。

よし。

覚悟は。

決まった。

頑張るぞ、俺！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「ま、まとめるとそんな感じだぜ、サーゼクス」
『よく分かったとも。英雄派はやはり、禁手（バランス・ブレイカー）の使い手を多数保有したということか』
「まったく困ったもんだぜ。禁手ってのはあるのとないのとじゃ、基本的には段違いだ。今後英雄派の正規構成員は、どいつもこいつも上級悪魔からそれ以上の戦力だと考えるべきだしな」
『更に二騎のサーヴァントまで所属しているとなれば、彼らの戦力は本当に警戒必須だろう』
「ああ、片方は顔を隠していたから分からないが、鎧から逆算して戦国武将。もう片方はカズヒが食らった毒を解析した結果、ほぼ確実に真名が分かった」
『……報告は聞いている。ケルト神話の戦士、カラティーン・ダーナ。クラン・カラティンの怪物の方が通りがいいかな？』
「ああ。かのクーフーリンを相手にして戦った戦士。そして質の悪いことに、屁理屈ぶっこいて一騎打ちに家族２９人がかりで仕掛けた一騎打ちが半ば強制されている状態で、「自分の家族は自分の肉体も同じだ」という理屈で本当に挑んだとのこと野郎だ。英雄派との相性はいいだろうさ」
『そして推測される宝具は、そんな家族達と一体化した伝承に由来する質量増大化能力か』
「自在に質量を変えれるなら、奴は格闘攻撃を３０倍近く強化することができるだろう。地味に面倒な宝具の持ち主だぜ」
『となれば、今回開発されたＴＦ（トライフォース）ユニットの配備は急務だろう。……可能かね？』
「飛行将兵トライデンⅢは余裕だ。既に生産ラインは稼働しているからな」
『……確か各勢力１１１機ずつ、合計３３３機だったね。それ以上の増産は―』
「避けるべきだ。あれは動力源に三大勢力が存続する願いを利用した、マオウガーを参考にした兵器だ。実働機体が多すぎると、稼働率

が急激に低下するだろう」
『ままならないものだ……が、それも前提だったな。ＴＦユニットはあくまで質を重視した機体として開発される……だったな』
「そういうこった。数においてはＤ（ディアボロス・フレーム）Ｆに任せるさ。教会に関しちゃアテもあるらしいしな」
『ＤＦに関しても、今回の一件で更なるデータが取れたと、大王派は喜んでいたよ。……そして、技術試験段階だった拠点防衛モデルも既に生産ラインが稼働しているそうだ』
「数のＤＦと質のＴＦユニット。禍の団の連中も色々やっているようだが、そうは問屋が卸さねえってな」
『その通りだ。……ここからが、反撃の時だとも』

「……なんて感じで、向こうも色々動いてるみたいだろうね。どう思うかな、アルバート？」
「いやぁ、してやられたな！　流石は神器研究の第一人者、後追いでここまで追いかけられるとは思わなかった！」
「確かにね。でも、そう簡単にアドバンテージは奪わせないだろう？」
「もちろんだとも！　仕込みはこれで発動したし、何よりこちらにはアサルトがある！　疾風殺戮・ｃｏｍに対する協力も終わったのでな！」
「それは重畳。あ、確かヴィールの提案で、動く予定なんだっけ？」
「そのようだ！　なので別件で調整に忙しくなるのだが……どうする、マスター？」
「もちろん参加するさ。仕掛けるだけでいい感じに絶望や悲しみが見れそうだしね。それに、ニスネウスの宝具をこの上なく最大限に発揮できる機会と思わないかい？」
「確かにな！　英雄派はハーデスに狙いを向けているようだが、我々は―」

「―そう、ポセイドンを狙い撃ちだ。フフ、疾風殺戮・ｃｏｍにはゼウスを集中攻撃してもらおうかな？」
「本当に、マスターは性格最悪だなぁ！　はっはっは！」

冥革動乱編　第二十九話　嵐の前のひと時

和地Ｓｉｄｅ

「せーの……おっぱ～い！」
『『『

そんな感じでおっぱいドラゴンのヒーローショーは、無事終了した。

そんなわけでそれとなく冥界を見学する感じで回っているんだけど、事実上のデートに近くなっている。
「へぇ～。冥界の一般市民はこんな感じの生活なんだ」
「リヴァさんって冥界に来てたんじゃなかったっけ？」
「主神の娘はこんなところに来ないって。私も基本はディオドラの周りだから、平民の生活環境はあまり見たことなかったなぁ」
そんな感じでリヴァ先生が鶴羽やインガ姉ちゃんと話しながら周りを見ている。
そしてその後ろで、俺は今カズヒ姉さんを隣に歩いている。
……冷静に考えると、ちょっと緊張する状況だな。
あと前方三名。それとなく俺の方向に向けて親指を立てるな。あんたらすっかり仲良くなったな。
俺はちょっとため息をつきたくなったけど、まあ応援は感謝します。あと埋め合わせは何かしらします。
なのでそれとなくカズヒ姉さんの方を向いたら……どっか向いてるし。
「……あれ、イッセーかしら？」
ん……あ、ほんとだ。
なんか子供と話してたらと思ったら、今度はスタッフの人に何だか苦言を呈されているぞ？
しかも今度は部長のお母さんや部長の甥っ子のミリキャス君と話しているし、割って入りづらいな。
というか、何時の間にかこっそり見られにくいところから見る感じになってしまった。
「何があったのかしら？」

「……多分だけど、イベントに参加できなかった子供にファンサービスをして、横紙破りを咎められたとかかしら？」
怪訝な表情を浮かべる鶴羽とリヴァ先生に、俺も首を捻って考える。
「あれ、でも整理券は余裕をもって配れたみたいだけど……あれ？」
「そもそもその辺りが分からなかったからあぶれたんじゃないかな？
冥界って特撮ヒーローショーとか、たぶんおっぱいドラゴンが初めてだし」
俺の疑問符にインガ姉ちゃんがそう答えてくれる。
なるほど、その可能性はあるな。
このメンツだと一番冥界に詳しいインガ姉ちゃんが言うなら、その辺りの知識が広まってない可能性はあるんだろう。
さて、カズヒ姉さんはどんな反応になるのやら。
必要悪以外で横紙破りとか、あまりいい顔をしないと思うんだけど……。
「……」
―俺は、その横顔に目を見開いた。
まるで泣き出しそうな雰囲気を見せる、あまりに寂しそうな表情は同年代の女性がする表情とは思えない。
それはまるで、ずっと年上……いや、母親が見せるような―
「ん～。そろそろ出て行った方がいいんじゃない？　部長のお母さんも武勇伝ある人でしょ？　気付かれるより先に顔出した方が、たぶん色々言われないと思うわよ？」
―と、鶴羽がそんな提案をして、俺達は我に返る。
言われてみればそうだった。部長のお母さんって、なんでもバアル家の才女だったらしいしな。
部長やグレイフィアさんと一緒に、グレモリー領で起きた暴動を鎮圧した女傑だし。ばれたらなんか小言とか言われそうだ。
「やっほーイッセーにリアスちゃん！　なんかあったみたいだけど何があったのかしら～？」
「ちょ、リヴァ!?　見てたのなら言ってちょうだい」

そして素早くリヴァ先生が絡みに行った。
勢いで指摘を逸らす作戦のようだ。こういうところは参考にするべきかしないべきか。
「……あはは。じゃ、私達もいこっか？」
「そうだな」
インガ姉ちゃんも苦笑しているし、じゃあそういうことで……っと。

「……ゴメン鶴羽。手間を掛けさせたわね」
「ま、遅かれ早かれ言う約束だけど……ね」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「よ、春菜」
「ベルナ？　あなたも参加するの？　英雄派は今回の作戦、サポート止まりじゃなかったっけ？」
「いや、姉貴と喧嘩しちまってな。それにまぁ……その……」
「……和っちの奴、すっかりジゴロになったっていうかなんて言うか」
「うっせえよ！　お前の方はどうなんだよ!?」
「……私のことはどうでもいいでしょ。っていうか、次の作戦で今度こそ決着をつけるし。念押しされたから最後のチャンスになりそうだし」

「アタシが言うことじゃねえけどよ？　お前、それでいいのか？」
「いいに決まってるわ。……違う、よくするのよ」
「そんなに勝ちたいのか？　九成和地に」
「勝ちたい……？　いや、なんか違うわね」
「じゃあなんでだよ。思わず愚痴ってたのを聞かれてからの付き合いだけどよ、あんたはなんで和地の奴と戦うんだ」
「私は、和地に証明したいだけよ」
「証明って？」

「私が強くなったってことを、もう弱くないってことを。……それが証明できないのが、一番嫌なの」

冥革動乱編　第三十話　洗脳と教育は紙一重

イッセーＳｉｄｅ

ふぅ～。そろそろ学園祭だし、それが終わると中間テスト。二年生は修学旅行もあったから、割と忙しいぜ。

だからかなぁ。俺もちょっと、普段とは違う感じでのんびりしたかったんだけど。

「あ」

「あ」

なんていうか、タイミング悪くカズヒと出会っちまったよ。

自販機で飲み物を買おうとしたら、また意外なやつと会っちまったなぁ。

「……あ、先にどうぞ」

「そうね。ちょっと待ってて」

とりあえず、先に自販機の前にいたカズヒに先に使わせるのが筋だよなっと。

カズヒが缶コーヒーを買ってから、俺もカフェオレを買う。

……うん、ちょっと気まずい。

そういえば俺達、プライベートで二人きりになったりとかあんまりなかったしな。

最初に会った時もひと悶着あったし、つい最近だと京都で揉めたりしてたからなぁ。

まぁ、どっちも共闘して死線を潜り抜けたりもしたんだけど。そういう意味だと不思議な関係だ。

俺って子供達のヒーローやってるから、元々汚れ仕事担当のカズヒとは合わないところも多いからな。

……うん。二人っきりだとちょっと気まずい。

「っていうか、無糖ブラック？　渋い趣味だな」
「眠気覚ましよ。中間テストが迫ってるもの」
ん？　流石にまだちょっと早くないか？
俺が怪訝な表情を浮かべていると、カズヒは肩をすくめた。
「元ストリートチルドレンの私が、勉強得意な方だと思ってるの？
自分で言うことじゃないけれど、成績は絶対あなたの方が上よ」
疑問符抜きで断言したよ。
え、まじか。要領よく勉強しているイメージあったんだけど。割と予習復習と化している姿を見たこともあるぞ。
……あ、逆か。予習復習してないと追いつけないってわけか。
「……その様子だと、駒王学園の偏差値が高いことを忘れてるわね？」
すいません忘れてました。
オカ研になってからは勉強することも多いし、勉強会とかをアーシア達とやることも多いからなぁ。アーシアもゼノヴィアも国語すら成績が優秀な方だから、一緒に勉強したりすると引っ張られて俺の成績も結構上がってなぁ。
うん。それでもオカ研二年組では低い方だったけど。木場は完璧イケメンだから勉強も完璧なんだ……。
俺がなんていうか落ち込んでいると、カズヒはちょっと引き気味になっていた。
「……というより、貴方はカフェオレなのね。この時期の高校生って、見得でブラックとか飲んだりすること多いけれど？」
「いや、そんな見得はった程度じゃモテなかったし。それに俺、乳製品とると何故か調子が良くなるからさ」
いや、何故か昔っからそんな体質なんだよ。
「そういえば、チーズケーキが好物だとか聞いたわね」
「そういうことだよ。ま、カズヒの卵かけご飯には負けるけどさ」
あの大好きっぷりには負けるからなぁ。
というより、ちょっと引く。好きすぎだろ、卵かけご飯。
なんていうか空気が緩んだんで、そのまま世間話でもした方がいいか。

……あ。
「そういえば、英雄派のことなんだけど、ちょっといいか？」
「何かしら？　辛口評価ならいくらでも出そうな気がするわね」
あ、やっぱり酷評な感じだな。
めっちゃくちゃぶった切ってたしなぁ、あいつらのこと。
ただ、だからこそ聞きたいこともあるからな。
「偽京都でカズヒ達に仕掛けてきた連中は何か言っていたか？」
「こっちに仕掛けてきたのは、おそらく操られている感じのメンバーだったわね。毎度毎度駒王町（こっち）に仕掛けてきたのと変わらない感じだったから、適当にのして拘束して……あぁ、あの後突入した部隊が確保してたわね」
あ、手慣れてるな。
そっちはそんな感じだってことか。
「俺は前に仕掛けてきたやつが来たんだよ。影を操って攻撃を転移させる神器持ちで、鎧を着た俺にやられた時の影響で全身に影を纏う神器だったんだ。九重が炎で攻撃した時の反応から火攻めにして何とか倒したんだけど……さ」
「ふむ。何か言われて気にしてるのなら、さっさと話してガスを抜いた方がいいわよ？　部長達に話してもいいけれど……違う視点が欲しいのかしら？」
あ、そんな感じなんだよなぁ。
「っていうかバッサリ切ってほしいのかもな。……そいつは自分の意志で、英雄派に属していた連中だったんだ」
俺がそう言うと、カズヒもちょっと気にした感じだった。
「あの一件って、禁手に到達する方法を探りアンチモンスターのデータを取る為の実験だったんでしょ？　自分の意志でそんな使い捨て同然の作戦に参加したの？」
正気かって言いたい顔してるな。
「俺も信じられなくてさ、なんでそこまでしてるんだって聞いたんだよ。……それで、さ」
「話が長くなりそうね。……ちょっと場所を変えましょうか」

「なるほど、ね」
大体のことを説明し終えた後、カズヒはそう言って盛大にため息をついた。
「典型的な思考誘導の手口ね」
「ボロッカスだな!?」
凄い切り捨て方しやがったぞ、カズヒの奴。
俺が戦った英雄派の奴は、洗脳されてるわけじゃなかった。なのに、死んでもおかしくないっていうか死ぬ気じゃなきゃできないような実験の為に俺達と戦った。それも、曹操の為なら死んでもいいって言いきるぐらいだ。
だからこそ、俺は気になってそれを聞いた。
……神器保有者は酷い人生を送ることも多い。少なくとも、そいつはそうだと言った。
そんな中、曹操に出会って英雄になるという光を見せられたから、命を掛けても付いて行くってあいつは言った。
九重達を泣かせることになってもいい。そこまでしてでも、あいつは英雄という光を目指して、曹操に付いてきたと言って最後まで戦った。
なんていうか、やっぱり胸に重い物があったんだよなぁ。
まあそれとなく切り捨ててほしいとは思ったけどさ。……凄いバッサリと切り捨てたな！
と、カズヒも俺に思いっきり突っ込まれ、ちょっと考え込んだ後一つ頷いた。
「いえ、言い過ぎたわ」
そっかそっか。言い過ぎたか。
そうだよなー。そんな洗脳みたいないい方は—
「自覚の有無なく、そういう形で他者の思考を固定化させてしまうこ

とはよくあるわ。軍隊とか警察でも使われる手口だし、洗脳みたいないい方は失礼ね」
「訂正するのはそっちかよ！」
二度目のツッコミは平然と受け止められた。
っていうか、思考誘導って、そんな洗脳みたいなやり口なのか？
「っていうか、よくあるのかよ？」
「ええ、心身に負荷がかかっている状態に追い込んでからわざと救い上げることで、相手に信頼させるように誘導するのはよくある手口ね。警察の尋問とか軍学校で教官との上下関係を作る際によくある手口よ」
さらりと言ったな。
「まあ軍学校は厳しすぎる訓練を課したうえで引っ張り上げて褒めるという、マッチポンプがままある物ね。警察の場合は更に本番で信頼を裏切ることで心をへし折るというやり口を使ってくるわ」
「世界は真っ黒だな！」
世の中本当に綺麗ごとばかりじゃやってられないな、おい！
俺はちょっと世界を嘆いたけど、カズヒは苦笑しながら首を横に振った。
「訂正するって言ったでしょ？　確かに今のは必要悪で、それを利用して相手の心を犯罪行為に誘導する邪悪も腐るほどいる。だけど、この手のケースは決して悪というわけではないわ」
そんなことを苦笑しながら言うと、カズヒはなんていうか遠い目をして上を見上げた。
「死の危機から救われた子供が、救った対象の職業を目指すっていうのが定番ね。死病の類なら医者を目指すし、災害や事故においてはレスキュー隊員や救助隊。犯罪なら警察で、テロの類なら軍人もある。何かしらの発明によって救われたのなら、研究者だってあり得るわ」
なんていうか、実感籠ってるな。
もしかして、カズヒもなのか？
「カズヒも、ストリートチルドレンだった時に救われたくちか？」
「残念だけど、ゲリラに参加するまでは救い上げる側ね。カズホもだ

けど、他にもストリートチルドレンって多かった地域と時期だったから」
あ、違うのか。
そう思っていると、カズヒは盛大にため息をついた。
「まぁ、そういう意味ではその英雄派の男を悪く言えないわね」
お、意味深な言葉。
「カズヒもテロったこととかあるのか？」
「政府転覆に尽力した以上、負けてたらテロリスト扱いは確定だけどそうじゃないわ。……綺麗事を通すには、自分の力もだけど環境も大きく関わるのよ」
また盛大にため息をついた。
「ストリートチルドレンなんて者が当たり前な環境なんて、まさにその典型例ね。順法精神というものを得ることがまず大変……どころかそもそも法律すら分かりようがない訳だし。そもそも法律を守ってたら餓死確定なんてことも普通にあり得るわ」
……えっげつねぇ環境。
なんだろう。今の冥界の子供達も割と大変だと思うけど、カズヒの昔の方がもっと過酷な気がするぞ。
「誰も助けてくれなかったのか？」
「そもそも助ける余裕がない人達ばかりだもの。それに、そういう環境だとストリートチルドレンは助けるべき弱者なんて考えるどころか、汚い害獣として嫌悪されることだって多いわ」
……本当にえげつないな。
日本って恵まれてるっていうけど、なんていうか痛感したよ。下手すると冥界の子供達の方が恵まれてないか？
「半端に助けようとする人が来ると、余計なことをするなとリンチされることだってある。そしてそんな環境で生きていくには、それこそ盗みの類はしないいわけないし、場合によっては同じような境遇から強盗だってする羽目になるわ」
そう語るカズヒの目は、只淡々と事実を語っているだけで、強い感情は込められてない。

本当に、かつてのカズヒにとってそれは当たり前だってことなのか。
「……そんなに酷かったのか」
「言っておくけど、更に悲惨(下)があることと、下(悲惨)な人がいることは矛盾しないわ。冥界の子供達はもっといい環境にいてもいいし、この国の子供が普通に過ごすことは、悪いことでもなんでもない」
俺に釘を刺してから、カズヒは鋭い視線を空に向けた。
誰を思い返して睨んでいるのかは、俺でも分かる。
曹操達英雄派。あいつらをばっさり切り捨てたカズヒは、きちんとそこに残っている。
「だから、私は英雄派の所業もスタンスも認めないわ。自分が酷い目に遭ったからって、だから真っ当に生きていける者を酷い目に遭わせていい理由はない」
その言葉に嘘はない。カズヒは本心からはっきりと言い切っている。
真っ直ぐに、強い決意をもってカズヒや英雄派を否定する。
「必要悪はやむを得ず《b》容認《／b》されるものであって、当たり前に肯定されるものじゃない。ましてあいつらの行動は、必要性だってないただの悪事よ。……悪祓(悪の)銀弾(敵)として、あいつらに容赦をする理由はない」
「そうだな。九重を悲しませたり、洗脳した奴を使い捨てるなんて、認めていいわけがないか」
俺がそう答えると、カズヒは苦笑をしながら肩をすくめた。
「ええ。奴らにはしっかりとけじめをつけさせるべきよ。……その方が、彼らにとってもいいことでしょうしね」
「え？」
なんか妙なことを言った気がして、俺は思わず聞き返した。
なんか今、英雄派を倒すことが英雄派にとって良いことみたいに言っている気がするけど。
流石にそれ、おかしくないか？
「……言っておくけど、あいつらを被虐趣味(マゾ)扱いしたわけじゃないわ。

自分の悪行にけじめをつけられるっていうのは、決して悪いことじゃない」
カズヒは、どこか寂しそうな表情でそう言った。
「悪事をきちんと裁いてもらえるってのは、それだけ社会が正しく機能しているっていう意味で恵まれているもの。それに自分の罪を罪として償えないっていうのは、考えようによっては辛いことでしょう？」
そういうカズヒの言っていることは、確かに分かるかもしれない。
カズヒは基本的に「過剰報復も悪」ってスタンスだし、悪いことをしたらけじめはしっかりつけさせるスタンスだ。言っていることはカズヒのスタンスから言っても何も間違ってない。
だからだろう。
俺はまるで、カズヒが裁かれなかった罪人みたいに、自分のことを言っているみたいに聞こえた。

冥革動乱編　第三十一話　一年生も大変です！

和地Ｓｉｄｅ

本日、駒王学園高等部に、レイヴェルが転入してきた。
人間界について学ぶ為とか言っていたけど、本命の目的は絶対にイッセーだ。分かり易い反応だったしな。
あれでわかってないのは、多分イッセーぐらいだろう。あいつは本当にモテる気があるのだろうかと不安になる。
お嬢様スタンスだけど物腰は筋を通しているが、それでも慣れないことには何かあるかもしれないだろう。ことこれまでのメンバーと違い、種族が明確に違うから尚更だ。
なのでなんとなく、暇潰しを兼ねて一年の方に足を運んでみたんだ……が。
「どっちの味方ですか！」
「え、えっと……」
……なんでレイヴェルと小猫がイッセーを責めている？
「あの部長、何があったんですか？」
「ふふ、見ての通りの取り合いかしらね？」
あぁ、喧嘩になったから、惚れた男に味方してほしいと。
で、イッセーは性格からいって「みんな仲良く！」って感じになったので、怒られていると。
さて、これはどうしたらいいいいか。イッセーやギャスパーはおろおろしているし、リアス部長はなんか悩み顔だ。
俺がそう思っていると、なんか怒気を感じて寒気を覚えた。
「あっちゃぁ……」
そしてアニルがため息をついたそのタイミングで、足音がカツンと

響いた。
　そんな行動で俺達の視線を集めさせるは、一年生最後の一人ルーシア・オクトーバー。
「……小猫ちゃん。いい加減にして」
「わ、私が？」
　思わずたじろぐ小猫に、ルーシアはずずいと詰め寄った。
「慣れないことをするともたつくのは当たり前でしょ？　それをどうにかしようと努力してることだってわかるのに、レイヴェルちゃんが悪いみたいに言ったらダメ！」
　思わぬ剣幕に、珍しく表情をこわばらせる小猫だったり。
「で、でも、イッセー先輩に恥をかかせて―」
「慣れない子が慣れなことをして戸惑うことが何で恥ずかしいの？　別に失敗したら大変なことになるわけでもないことで、戸惑って当然の時期にそんな風に攻める小猫ちゃんの方がよっぽどイッセー先輩に恥ずかしいよ！」
　反論すらぶった切られ、あろうことはイッセーを引き合いに出せれて非難され、涙目になりかけている。
　お、おぉ……。珍しい展開になってきた。
　小猫は普段からできる方だから、こういう流れは逆に新鮮だな。
「いや、ルーシア。俺は別に恥ずかしくなんて―」
「イッセー先輩は女性を甘やかしすぎです。間違っていることや問題行動ははっきり言ってあげないと、相手のためにもなりませんよ！」
　そしてすかさずにイッセーに指摘してから、真剣に怒った表情で小猫に再度向き直る。
「イッセー先輩に恥かしい真似をしたくないなら、きちんと成長しようとしてる子の一度や二度の失態でとやかく言わない！　取り返しのつく失敗が何度かできるのは、未熟者（私達）の特権です！」
「え、えっと、ルーシアさん？　その辺にしてあげてよろしくてよ？」
　レイヴェルがフォローに入るぐらい、小猫は盛大にけちょんけちょんだ。
「……る、ルーシアちゃんが怖いです……」

「ルーシアは割とこういうところあるぞ？　普段荒事を好まないから出てこないだけで、目に余る行為とかは正そうとするタイプだからな？」
怖がっているギャスパーに、アニルがそう説明する。
そして聞こえていたルーシアも、毅然とした表情で胸に手を当てた。
「私の兄はリュシオンですから。常に兄さんに恥じないよう、清く正しく生きています」
……思わず、周囲から拍手が鳴り響いた。

ちなみに、これがきっかけで小猫ちゃんがやり玉に挙げられる……なんて問題もなかった。
そうしようとすると真っ先にルーシアが注意するし、そもそも一年生組は基本が仲良しだからな。
まぁ、小猫とレイヴェルは連携も取るようになったけど喧嘩も多いそうだ。
イッセー。罪作りな男―ッ

イッセーＳｉｄｅ

「……なんてことがあったんだけど、なんで二人って喧嘩するんだろ」
俺は何となく、学園祭の作業中にそんな子をボヤいた。
そして一緒に作業をしているカズヒと木場は顔を見合わせた。そ

してカズヒはため息をついたし、木場も苦笑いしてやがる。
ひっどいなぁ、もう！
「……そろそろ指摘した方がいい気がしてきたね。というか、いい加減部長達がキレそうだし」
「冗談抜きで殺されそうだしね。……この手のもつれは人の負の面を一気に肥大化させるもの」
な、なんか訳の分からないことを言ってくるなぁ。
全く分からん。一年生は特にみんな仲良しなのに、小猫ちゃんとレイヴェルだけはお互いにかなりの頻度で喧嘩をしてくる。
まじでどうすりゃいいんだよ……。俺がなだめようとすると、何故かヒートアップするか俺が責められるかの二択なんだよなぁ。
そんな感じにため息をついたら、二人がため息をついてきたよ。
くそ、納得いかねえ。
駄目だ、話を変えた方がよさそうだ。
「そういえばさぁ、カズヒ。前の話なんだけど……もうちょっと踏み込んでいいか？」
「別にいいけど、まずは木場……オカ研の男子を一人だけ別枠するのもあれね。祐斗にも説明した方がいいわね」
「ん？　どういうことだい？」
そんなわけで、前に話した英雄派の影使いについての話を木場にもする。
木場も途中から真剣みが増してたけど、話を聞き終わると複雑な表情だった。
「なるほどね。確かに、見方によっては僕達グレモリー眷属にとっての部長やイッセー君みたいな人物が、英雄派（彼ら）にとっての曹操だということか」
「そ、そんなレベルか？」
俺が戸惑っていると、カズヒは逆に木場の意見に同調した感じではたと手を打ってた。
「……言われてみると近いわね。カリスマ性もあって血統もよく、バアルの消滅や最強の神滅具と才能もずば抜けているし」

あ～……。そう言われるとそうかもなぁ。こういうのが箇条書きマジックっていうのか。
確かに、俺達も部長に助けられて今があるし、少なくとも俺は部長の為に死ねるところはある。あいつの曹操に対する感情も、そういう意味だと分かりそうになってくるな。
いや、そうじゃなくて。
「で、その後の話だよ。カズヒがストリートチルドレンで綺麗事ができないとか、そんな感じの」
「……といっても、あまり気持ちのいい話じゃないわよ？」
まあそうだろうけどさ。それでもだよ。
「ぶっちゃけ俺って、そういうところは日本の普通だろ？　冥界の子供達だって色々大変なところもあるし、知識としてぐらい知っておきたいっていうか……」
「まぁ、子供のヒーローなら子供の悲惨な現実に一家言ぐらいあった方がいいわね」
カズヒは俺にそう言いながら、作業に戻りながら話し始める。
「実際問題、氏より育ちって言葉は正しいのよ。厳密にいうなら、幼少期の生活環境が人間の人格形成に与える影響は、馬鹿にならないってこと」
……なるほど、なんとなく分かった。
「俺におっぱいの素晴らしさを伝えてくれた、あの紙芝居屋のおっちゃんみたいな感じか！」
「イッセー君。そのどうしようもない話は絶対に比較対象にしちゃいけないから」
酷いよ木場！
「とりあえず張り倒した方がいい男がいることは分かったわ」
カズヒも酷い!?
「怒るぞ！　俺に大事なものを伝えてくれた恩人だぞ！」
「いや、だから」
どういう意味だよ!?
「まぁいいわ。話はするから、作業は続けなさい」

「おーい。こっちが終わったから手助けに来たぞー？」
あ、和地まで来た。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……はぁ」
「どうしたのかしらぁ、部長？」
「あらリーネス。そっちも困り顔に見えるけれど？」
「……事前の備えについて、和地に頼まれていたこともあって動いていたんですよぉ。……それがちょっと困ったものでしてぇ」
「よく分からないけれど、危険なものなの？」
「安全性を併せ持ちたかったんですけれどねぇ。和地の方は難しそうでしてぇ。部長はぁ？」
「……先日、お母様にイッセーのことで色々と言われて、意識しすぎているのよ」
「どんなことを言われたんですかぁ？」
「要約すれば、そろそろ関係を進めたうえで、私の立ち位置を確立しなさい……ってところね」
「あの、それはイッセーの方に問題がある気がしますよぉ？」
「だとしてもよ。既に儀式も終えた以上、今後も踏まえればグレモリーの次期当主として、しっかり正妻の座を獲得しておきなさいということね」
「……まぁ、当主が下僕の側室っていうのは、世間体的に無理がありますしねぇ」
「ただ、イッセーってば私はもちろんだけど、アーシアのことすら未だ

に「家族の一員」としか見ていない感じでしょ？　どうすればいいのか全く分からないのよ」
「そうですねぇ。彼氏ができたことがない身で言うのもなんですけどぉ、告白してもらうって発想を捨ててすぐにでも告白するべきではぁ？」
「……いえ、でも―」
「あそこまで鈍感なら、絶対に誤解されない形で叩き付けるぐらいしないと駄目な気がしますから。それに、何が起きるか分からない人生で、私達は割と危険な戦いを何度もしてるんですよぉ？」
「そう言われると、そうね。……できれば告白されたかったけれど、少し区切りをつけるべきかもしれないわね」
「でしたら、願掛けをするというのはぁ？　そろそろバアルとのレーティングゲームですしぃ、そこで勝ったら自分から告白するぅ……というのはぁ？　気合入りますよぉ」
「……そうね。それぐらいのきっかけを作らないと、どうにも自分から仕掛けられる気がしないわ」
「その通りです。何時までも自分達がこのままってわけには……いきませんから」
「……？　そういえば、和地の件ってどんなものを頼まれたの？」
「実をいうと……って感じでしてぇ」
「それは確かに、できれば使わせたくないわね」

「さてヴィール。ベルナの方はどうなるのかな？」
「おそらくだが、抜ける可能性はあるだろうな。もとよりあの女は、禍の団（こちら）向きではないだろう、曹操」
「確かにそうだね。だから作戦に関わらせることはあっても、組織の根幹には触れさせなかったわけだ。……第一、シャムハトのたっての

頼みでなければ、ハーフとはいえ悪魔を人間(英雄派)に入れたりはしなかったさ」
「その辺りの拘りには理解があるつもりだ。まあ、それはともかくだ」
「ああ、次の作戦は好きにするといい。俺達は今のところ、ヴァーリに喧嘩を売る気はないんだ」
「そうか。とはいえ、我々もヴァーリにとやかく言われるような真似はしないのだがな」
「どうだろうか？　彼、そんなやり口を見逃したりはしないと思うよ？」
「その時はまとめて叩きのめすだけだ。まぁ、それぐらいあって漸く勝ち目が生まれる程度だとは思うがな」
「怖い怖い。流石は冥革連合のサタン様だ」
「よく言う。俺を倒す牙は常に研いでいるだろうに」

「まあいい。少し冥界政府に活を入れてやるとするさ。他の派閥の賛同者も借りていくぞ」
「構わないさ。あ、ミザリはぜひ行きたいって言っていたから、彼と数名は派遣するからね？」

冥革動乱編　第三十二話　下を探すとキリが無い

和地Ｓｉｄｅ

なんか知らんけど、作業しながらカズヒ姉さんの身の上話を聞くことになった。
うん、カズヒ姉さんがオカ研の仲間と仲が良いのは結構だけど、イッセーと話していると少し不安になる。
スタンスが大きく異なってるから大丈夫だとは思うけどさ？
イッセーのフラグ建設能力を考えると、ちょっとね？
ま、一緒に聞く分なら問題ないだろ。落ち着け俺ー。
「さて、知ってると思うけれど私はソ連崩壊後の政情不安定地域出身でストリートチルドレン。イッセーには言ったけど、そんな待遇で順法精神なんて、自殺志願者でもなければ持ちえないような環境だったわ」
なんてことがないように語りながら、カズヒ姉さんは作業を続けていく。
本当にカズヒ姉さんにとって、それは作業をし続けながら話せることだということか。
カズヒ姉さんが強いのか、それとも荒んでいるのか。……もしくは、慣れてしまって気にしようがないのかもしれない。
そんなことを思いながら、俺も作業の手伝いをしながら話を聞く。
「そういう環境ではストリートチルドレンは基本的に害獣よりで、うかつに手を差し伸べれば周囲から排斥されかねない。そしてそんな環境では学ぶことなんてできないから、尚更悪事をしたり残飯をあさることで生きるしかできず、更に嫌われる悪循環だわ」

本当にそれな。悲惨な環境っていうのは、這い上がるチャンスすら得られにくい環境になることが多い。
勉学の一番大事なところは、それが大事だと知るには勉学を学ばなければならない。……もともとどこの言葉だったかは覚えてないちなみに筆者が知ったのはまおゆうが、真理だと思う。
必要な知識がなければ価値がわからないことなんていくらでもある。そして価値があるかどうかを知らなければ、それを知ろうという発想だって生まれにくい。
実際、貧困地帯というものは識字率も低いそうだ。ままならないものだ。
「……私が物心ついた時には、既に私は親がいなかった。その時たまたま近くにいた、同じく孤児だったカズホを放っておけずにカバーしながら生きてきたわね」
地金が良い人だったんだろう。そんなレベルで凄いというかなんというか。
俺が感心していると、カズヒ姉さんは盛大にため息をついた。
「普通だったら無理だったけれど、幸い私には魔術回路があって、更に早い段階で神器に気づけたことがよかったのよ。でなければ、野垂れ死んでいるか犯罪に走って落ちぶれていたわ」
遠い目をしながら、カズヒ姉さんはそうぼやく。
まあそれは分かる。悲惨な環境で子供が数人だけで、生きていくには綺麗事ばかりではいられないものだ。子供が健やかに育つには、環境にボーダーラインがあるだろうしな。
そして、カズヒ姉さんは具体的にどうしたんだ？
俺達の視線に、カズヒ姉さんはついと視線を逸らした。
「……細かい事情はいずれ話すけど、幸か不幸か私は基本的な魔術知識を得ることができた。後はそれを使って、可能な限り犯罪にならないように立ち回ってきたわ」
「犯罪にならないように？」
「簡単なことよ。魔術的な精神干渉を使って契約を順守させたり、子供達に強引にでも多少の知識を覚えさせたりした程度よ。そうやっ

て簡単な作業を手伝う代わりに、対価をきちんと貰って過ごしたの」
なるほど。確かに「交わした契約を反故にさせない」っていうのは重要だな。
屁理屈使って誤魔化したり、いいように弱者を使うだけ使って切り捨てる奴っているからな。それを抜きにするだけでも十分すぎるか。
「もちろん、契約そのものを成立させる為にも苦労したわ。対価として低く思えても、相手が契約しやすいようにあえて対価としてもらうこともあったし、一見すると何の役に立つのかも分からないものをせびったりね」
「それでどうにかなったのかよ？」
イッセーが首を傾げるけど、カズヒ姉さんは頷いた。
「ボロボロになって捨てるだけの毛布でも、何枚か重ねて着れば凍死はしのげるわ。同じように凹んですすけた鍋であっても、煮沸消毒で生水を飲めるようにすることも、雨水を溜めることもできる。しっかり煮込めば鼠を食べても病気になりにくいもの」
そんな風にさらりと返されて、イッセーは絶句していた。
どうやら想像の数段下レベルで酷い環境に、軽く戦慄しているらしい。
まぁ、そのレベルだとはすぐには思い至らないだろう。日本で過ごしていると底辺のラインが割と上になるしなぁ。
そんなイッセーにカズヒ姉さんは、すました顔で更に続ける。
「あとはまぁ、子供の教育に使っていた絵本とかもあったわね。最低限の読み書き計算ができるだけでも、受けれる雑務は増えるもの。そこから更に色々知っていく為にも、最低限の基礎は習得するべきだったわ」
更にイッセー絶句。
イヤ、これ本当にあるからな。世界を探すと、底辺ってのは日本人が思っているより更に下にある物だからな。
俺もその辺は少しは調べてドン引きしているからなぁ。これでも任務の難易度も高いから給金も相応にあるし、相応に募金はしているつもりだ。さらりと上層部に頼んで裏取りしてもらった団体にのみ

送っている。
絶句しているイッセーに苦笑をしてから、その後盛大にため息をついた。
「……でも、ソ連崩壊後のあそこの政情は実に悪くてね。結果として反政府軍が組織されて内乱状態。当時の政府にストリート(私)チルドレン(達)関連で期待できなかったし、何よりやり口に我慢ができなかったから反政府軍に参加して、まぁ神器を乱用して物資をプレゼントしてたら革命の(異)ジェド・マロース(名)なんてつけられたわけ」
そういえばそんなこと言ってたなぁ。
っていうか、冗談抜きで戦局左右する大活躍じゃないか？　物資を大量に盗んでプレゼントとか、冗談抜きで戦局に影響出るぞ。
俺がちょっと引いていると、カズヒ姉さんは肩をすくめた。
「十三歳後半ぐらいに決着がついて、少年兵の社会復帰プログラムの過程で派遣されてた教会の警護に来ていたクロード長官に見い出されて、私は訓練を受けてから暗部に属したというわけよ」
「また、壮絶な人生を送っているものだね」
木場が苦笑するけど、カズヒ姉さんはさほど気にした筆もなかった。
「貴方達も大概でしょ、祐斗。それに、あそこもだいぶ孤児院が増えているし、そういう方面に金をきちんと回しているものね」
な、なるほどぉ。
人に歴史あるというが、カズヒ姉さんも大概だな。
「……まぁ、そんな劣悪な環境から心身を引っ張り上げられたのなら、そのまま引っ張られる道に進みたがるというのはあり得るわね。……英雄派のやり口はやっぱり問題だわ」
そして容赦ない。
「……けじめはしっかりつけさせる。そのうえで悔い改め……なくとも、懲りて真っ当に生きるというのなら厳しめにする程度にしてあげるわよ」
「厳しいのか厳しくないのか分からないな」

俺がそう言うと、カズヒ姉さんは肩をすくめる。
「厳しいに決まってるわ。私は正義の味方として、奉じるべき正義の為なら命すら捧げる覚悟だもの」
「覚悟完了はカズヒ姉さんの基本理念だしなぁ。ま、容赦する余裕もないわけだけど」
あいつら強敵だし、実際余裕は欠片もない……か。
……ベルナの奴とも、いい加減決着をつけないと……な。

祐斗Ｓｉｄｅ

やはり、カズヒの人生も中々に壮絶だったね。
あれだけの自他ともに厳しくあれる人だ。過酷な反省を送っているとは思っていたし、ストリートチルドレンでゲリラ活動までしてもいる。十分すぎるほどに証拠は揃っていた。
とはいえ、実際に聞く彼女の過酷さはやはり凄まじい。
そんな環境で過ごせば、荒んでいてもおかしくない。いや、ある意味で彼女の厳しさは、その過酷な環境が生んだものでもあるのだろう。
……そんなことを思っていると、資料を持った南空さんがこちらに気づいて会釈をする。
「こんにちは、木場くん。ちょうどよかった、部長さんはいる？」
「部長なら部室におられると思うよ？　それは生徒会からの、学園祭関連の？」
「そういうこと。なんか知らないけど他の部より多いみたい。……昨年、何かしたの？」

あはは……。やっぱり釘は指してくるよね。
「昨年はお化け屋敷だったんだけど、暇をしていた妖怪を雇ってやっていたものでね。ルール違反だと怒られたよ」
「……違反かどうかはともかく、それは流石にやりすぎね。そりゃ釘も指すわ」
南空さんも流石に引き気味だった。仕方ないね。
まぁ、今回はそんなことがないようにきちんと修正も入れているしね。たぶん大丈夫……だと思う。
「それで、今回はどんな感じなの？」
「人が増えていることもあったし、旧校舎そのものを一種のテーマパークに見立てて、色々なことを同時にするっていう形に落ち着いたよ。オカルトの館って感じかな？」
そう、人数が一気に二桁になったことをいいことに、色々な提案をまとめてやる方向になったんだ。
料理ができる人もそこそこいるから喫茶店。オカルト要素を出す為にお化け屋敷。更に朱乃さんが巫女であることからお払いの真似事をしてみたり、教会出身のメンバーも多くなったから、いわゆる懺悔室を作ってみたりとかね。
流石に内容次第では色々と動くけど、学園祭の催しでガチなことを言うこともないから、基本的にはお目こぼしする予定だよ。やむを得ない事情で大変な目に遭っているようなら、特別サービスで僕らが裏で動くこともあり得るかな？
オカルトのコスプレや発表会の類もする予定だ。イリナさんが布教を従っていたから、基本的には聖書の教えに由来する豆知識的なものが主体になる。
あとは……そうだ。
「お焚き上げ擬きもする予定だよ。中々捨てれないものとかもあるだろうから、案外人が来るだろうしね」
まぁ、その辺りにおいて生徒会は厳しめだろうけど。
実際、旧校舎の位置から見て火事になったら大変だからね。消火用にドラム缶に水を入れたり消火器を集めたりしたし、それが目立たな

いように魔術儀式的なカモフラージュとかもしたりしてる。
南空さんもそれは見ていたのだろう、納得した表情だった。
「あれってそういう……そして資料もそういう……」
うん。たぶんそうだ。
明らかに一見すると手間と成果が釣り合ってないだろうけど、これには先を見越したある目論見がある。
「ちなみにお焚き上げ参加者には、アニル君の燻製が先着５００名様限定で配られる予定さ」
それを聞いて、南空さんは首を傾げる？
「……燻製ってそんな簡単にできるの？」
「まさか。それに適当に廃棄物を処理した煙は使えないからね。あくまで煙が大量に出る雰囲気と合わせたものさ」
そしてアニル君は、今は兵藤邸の燻製用ペントハウスで燻製作成の真っ最中。
ちなみに僕達が修学旅行に行っている間、部長達はその備えとして獣害被害の多い地域に言って獣狩りをしていたそうだ。
人を襲う熊や農作物を食い荒らす鹿がたくさん討ち取れたらしい。熟成が終わった順に大量に燻しているそうだ。
……正直、料理ができる者としてはあれを使って何か作りたいね。いや、本当に腕がなりそうだ。
南空さんもご相伴に預かっていたのでちょっとうずうずしているけど、ふと首を傾げた。
「……喫茶店で出した方がよくない？　儀礼済みとかなんとか適当に銘打って」
「それもあったんだけど、出来が良すぎてサンドイッチにするにはパンとかもこらないと行けなくてね。学園祭の予算でできる範囲じゃなかったのさ」
いや、本当に出来がいいからね、あれ。
まぁ、そういうわけで今回はそこまでは行けなかったけど―
「アニル君は一年生だからね。そして彼の燻製なら食べた人は多くが次を期待するだろう。……それが今回ねじ込んだ狙いさ」

「卒業後のことまで考えてるんだ。リアス部長も中々やるわね」
ああ、そうなのさ。
「……ただ、やっぱり少し悩んでいるところもあってね」
そこが、少し気にはなるんだよね。
「えっと、それって私達が知ってもいいことなの？」
「割と分かり易いことだしね。簡単に言えば、イッセー君が鈍感すぎるのさ」
実際、あそこまで鈍感というのもどうかとは思う。
リアス部長は婚姻に夢を持っていることは、ライザー・フェニックスとの戦いで明らかになっているはずだ。加えて、アーシアさんも敬虔な信徒であった上で、毎朝目覚めのキスをしていると聞く。朱乃さんにおいても不倫なんて言葉を使っているのだから、そういう関係を連想するのは当然ともいえる。
……ゼノヴィアの場合は、まず子供を作りたいという主張から来ているから微妙だけどね。とはいえ、イッセー君一人に絞っているのだから気づいてもよさそうだろう。
勢い余って関係が進んだら進んだで、猿のようにはまるというのもあるから今まではスルーしてきたけど、やっぱり少し気づかなさすぎる気がする。
毎回死闘を繰り広げている以上、自分達の思いが伝わる前にどちらか……あるいは両方が死ぬかもしれないのはストレスだろう。
「イッセー君も罪作りすぎるところはあるね。正直、僕も時々もやもやするよ」
そうため息をついてから、僕は南空さんの方を見る。
「……」
なんていうか、凄い真剣な表情で考え込んでいる。
ここまで真剣に考えてくれるのはありがたいけど―
「ぶつかるよ？」
「え……ブッ！」
よそ見をしながら歩くのは、ちょっと厳禁だったね。

冥革動乱編　第三十三話　悶絶、悶絶、大悶絶！

和地Ｓｉｄｅ

うごごごごご……。

俺は数分レベルで悶絶しそうになる感覚を堪えながら、足早に歩いていた。

「その調子。まずは反動が襲っている間でも動けるようになりなさい。そこから少しずつ慣らしていくのよ」

そんな風にカズヒ姉さんの激を受けながら、俺は反動を呼吸で上手く押し殺しながら、歩く速度を早くしていく。

今俺達は鍛錬中。そして俺の今回の鍛錬は、「チャージングリザード解除の動作を可能にする」に絞られている。

めちゃくちゃ高い出力で、何とか後継私掠船団のアーネをぶっ飛ばした俺だが、あれは初見殺し要素がとても大きい。

おそらく二度目になったらそう簡単にはいかないだろう。英雄派経由で情報も禍の団に流れているだろうから、あんな思考誘導は二度とできないと考えるべきだ。

なので当然、今後も全力で使う機会は少なからずあるんだろう……けど……。

「なんでカズヒ姉さんは、こんなものを毎度毎度使えるんだよ!?」

「こればかりは向き不向きね。そもそも星辰光（星）とは祈る物。よっぽど才能がないわけでもないなら、できる心の持ち主に、祈（星）りは宿るということよ」

なるほど道理だ。星辰光性格診断なんてものが考えられるほど、星辰光は能力から性質まで千差万別。肉体的因子だけでなく、地金の精神性までもが影響を与えられていると考えられている。

なら当然、出力格差がデカい奴というのは、メンタルそのものがそれに適合している場合が多いのは当然だ。そもそもそうでないのに資質まで低いのなら、最大出力だって差が出ないように安定するはずだしな。基準値低いのに発動値が非常に優秀だなんて、才能が低くても強い力を出してしまうようなメンタルの奴限定だわ。
基本的に俺の真逆だってことだけはよく分かる。だって俺、高い水準で安定してるし。安定して力を発揮するタイプだってよく言われるし。
……そして、そんな無茶をして漸く何とかできる後継私掠船団との戦いには、当然それぐらいが必要になるわけだ。
よし、頑張ろう。
とりあえず、必要だと判断したら躊躇なく発動し、解除した後も残心ぐらいはできるようにしておかないとな。
「でもさぁ、カズヒ姉さんってそれにしたって凄いよな？　あんなのを毎度毎度使ってるわけだろ？」
やってみたからこそ尚更分かる、ドン引きレベルの反動。
いくらメンタル的に使える奴に宿りやすいからって、好き好んで使う気になんて絶対にならないだろ、あれ。
自分が使ったことのある視点からだとよく分かる、カズヒ姉さんの覚悟ガンギマリ具合。
よくもまぁ、毎回必要な相手がいるとは言ってもポンポンと使えるというかなんというか。
「……言いたいことは分からなくもないわね」
カズヒ姉さんも自分を客観視はしているのか、自嘲気味な溜息をついた。
「私を星辰奏者の基準にしたらいけないことぐらいは分かってるわよ。ただし、これからもそれを使うのなら、参考にぐらいはしてもらわないと困るわ」
「まぁ、そうなんだよなぁ」
直接戦闘特化でないアーネ相手ですらあれなんだ。武闘派の連中が妨害に回ってくるなら、選択肢にはできるようにしないとな。

……ふう。少なくとも、最低限の自衛はできるぐらいに慣れないといけないわけか。あの、常人なら痙攣して悶え苦しみそうな痛みに、か。
これ、普通のトレーニングよりよっぽどきついぞ。
……いや、頑張れ！　気合を入れろ!!
「……よし、もう一回！」
「その勢いよ。頑張りなさい！」
よっし！　頑張るぞ！

そして盛大に消耗したよ。特に心が。
流石にメンタルが弱くなった。今日はもう、きついことはしたくない。
俺は遠い目になりながら、この訓練用フィールドを眺めてみる。
広義的なグレモリー眷属は、間違いなく下手な減益の上級悪魔異常の戦果を挙げてきている。となれば当然、何かしらの褒美が与えられるべきだと考えるのが市民というもの。こういうのもトップの仕事の一環だ。
なので与えられたのが、この鍛錬用の異空間。プロのレーティングゲームプレイヤーも持っているらしいが、若手で盛っているのは部長以外にはサイラオーグ・バアルとかそれぐらいらしい。
フロンズ氏やノア氏は持っていてもおかしくないが、あの二人なら個人用ではなく師団での運用ができるタイプにしていることだろう。
まぁそんなわけで、俺達は遠慮せずに全力のトレーニングができるようになったわけだ。こと、イッセーの新技やエクス・デュランダルの特訓が楽になったのはでかい。
赤龍帝の三叉成駒（イリーガル・ムーブ・トリアイナ）だったか。あれ、かなり癖が強いからなぁ。
既にあの火力は最上級悪魔クラス。それも上位側に位置すると考えられている。そんなものを地下室でポンポン使えるわけがないが、

ある程度は使い慣れておいた方がいいに決まっている。そういう意味では実に都合がいい。
レーティングゲームでは本来使えないような手法で至ったらしいけど、サイラオーグ・バアルとのレーティングゲームでは使えるという。いいのかそれでと思うが、対戦相手の要望だから仕方がない。
……ふぅ。流石にメンタルが削れた。
なんとなく俺はしゃがむと、そこにスポーツドリンクが差し出された。
「お疲れ様ぁ」
「そっちも体力削れてるんじゃないか？」
俺はそれを受け取りながら、差し出したリーネスにちょっと皮肉を飛ばす。
今後を踏まえ、リーネスも研究だけじゃなくガチのトレーニングをするつもりになった。基本的には基礎体力重視で、技術面には別の方法を考えているらしいけどな。
しっかしまぁ、こいつも本当にやってくれるというかなんというか。
「アントニン・ドヴォルザークを宿すのはキュウタにしたんだ？　一体なんで」
「アントニオンはトレインモードにおいて他の車両もけん引するものぉ。プランとして治療用車両を用意する案があったしねぇ。……あと、音楽療法を研究する気らしいから、その辺の素質を上乗せできるかと思ってねぇ」
あ～なるほど。そういうことか。
神の子を見張る者において、リーネスは何度が試験的に聖杯戦争を行っている。
その際幾つかのサーヴァントに交渉して、条件付きでデミ・サーヴァントとして力を貸せるよう計画していたらしい。そしてアントニン・ドヴォルザークの場合条件があった。
それがアレだ。自分の宝具用に特注の列車を用意すること。
ちなみに、変形ロボットにするパターンは了承済みらしい。神の子

を見張る者のアニメ好きが持っていたその手のアニメを見て、基本ベースが列車ならありということになったそうな。
「……しっかし、プログライズキーを利用してパイロットスーツ作るってのは発想がいいな」
「携帯性に長けるものぉ。まぁ、基本はレイドライザーを使うことが前提なんだけどねぇ」
　そう返すけど、よくもまあそういうことをするよ。
「……血管を経由して材料を脳に送り、錬金術で一からＡＩチップを作るとか、気が狂ってんのか？」
「ＡＩチップとの連動で脳をスパコン化してぇ、自身に対する加護魔剣として作った神星鉄を制御するのも大概よぉ？」
　そう言い返されると、ちょっと反論できない。
「我ながらやんちゃしすぎたのは認めるさ。走馬燈
　まで見えてガチで暴走してたけど、実際それぐらいしないと打破でき無くてなぁ」
「個人的には、先にチャージングリザードを使ってほしかったわぁ。まぁ、そうなるとリアス部長が助からなかったけれどねぇ」
　あの距離だとチャージングリザード使用時だと間に合わなかったからな。結果オーライで何でも許すってのもあれだけど、結果的には何とかなったわけか。
　とはいえ、あんな狂気的な手法を何度もやってられるか。寿命がマッハで削れていくこと間違いなしだし。むしろ一歩間違えてたら脳が耐えきれず廃人だ。
　それをやったら、拭える涙もぬぐえない。
　……というわけでだ。
「リーネス。なんかまだマシなプランの開発計画とかないのか？」
「私は○○えもんじゃないわよぉ。まぁ、そんなこと言うだろうと思ったから、プランを二つほど持ってきているけどね」
　あるのかよ!?　自分で聞いておいてなんだけど、あるのかよ!?
　面食らっている中、リーネスは二つのプログライズキーを取り出した。

っていうか、片方はサルヴェイティングドッグ……あれ？
なんか、両方ともごつくなってるというか、後部に付属品がついてるな。
俺がリーネスに顔を向けると、リーネスもため息をつきながら真っ直ぐに俺を見た。
「片方は、将来的に使えるようになる……かもしれない本命。もう片方は確実に使える保険。詳しく説明するわねぇ」

なるほど。確かに言われた通りだ。

「できれば保険は使わないでほしいけれどぉ、多分、割と使う羽目になるから覚悟しなさぁい」
了解だ。そして、その想いは無駄にはしない。

冥革動乱編　第三十四話

和地Ｓｉｄｅ

そんな日が続くある日、夜にトライフォース放送局を終えた後でびっくりすることを言われたわけだ。
「「乳語翻訳（パイリンガル）を使ってくれって言われたぁ!?」」
「うん。びっくりだろ？」
イッセーすらちょっと引き気味だったことを言われて、俺とアニル、そして本日のゲスト参戦な……なんとカズヒ姉さん。
まさかカズヒ姉さんが、この手のゲームできるとは思ってなかった。足を引っ張らない程度の腕はあったし恐るべし。
だがそんな驚きを吹っ飛ばすインパクトというかなんというか……なんでだよ？
「誰が、誰に、なんでそんな狂った要請したのよ」
「気持ちわかりますけど、リアス部長経由で頼まれることなんて、絶対偉い人ですぜ？」
カズヒ姉さんのツッコミも当然で、アニルの指摘も当然。
そう、それはつまり―
「―異形のお偉いさんって、人間とは思考回路がずれてないか？」
「言うなよ。八坂さんだってそれで助かったんだから……いや凄い要望だとは思うけど」
イッセーに言われて思い出したけど、そういえばそうらしいな。
初代孫悟空殿が乳語翻訳に上乗せすることで、八坂姫の心に直接語り掛ける形で正気に戻したらしい。凄いけど、それ使うか普通。
イッセーのスケベ根性が満載な変態技を有効活用かぁ。発想力が凄いな。
「で、先輩。その一世一代の決断した人って誰なんですかい？　しゃ

べっていい相手ッスか？」
「いや、それが……サイラオーグさんのところの執事さんが、サイラオーグさんのお母さんにかけてほしいって言ったんだよ」
……。
俺達は顔を見合わせた。
そして、頷いて―
「言っとくけど、本気で心配してだからな!?　嫌がらせとかクーデターじゃ断じてないし、サイラオーグさんのお母さんが悪事を働いているわけでもないからな!?」
―派閥争い的な嫌がらせだと思った俺達に、イッセーのツッコミが先に飛んだ。
あ、違うのか。
じゃあなんで？
そんな俺達の視線に頷いて、イッセーはアニル特性ベーコンを巻いた、採れ立てアスパラガス（調理五分前に採取。先日農家の人との契約の代金として、採れ立てを少しもらう許可を得たそうな）を一つ食べてから話し始めた。
……なんでもサイラオーグ氏のお母さんは、産んだサイラオーグ氏が魔力をひとかけらも持たないことから、息子ともども冷遇されていたそうだ。
家の恥としか考えられないバアル現当主は、サイラオーグ氏を絶対に領地から出そうとせず、なのでお母さんは家に戻ることなく領地の辺境に連れてひっそりと暮らしていたらしい。
魔力を一切持たないことから、サイラオーグ氏は下級中級からもいじめられる。加えて相応の貴族出身であるから、田舎暮らしには負担も大きい。
そんな中、一生懸命そのお母さんはサイラオーグさんを育て、叱咤激励し、裏では罪悪感で泣きながらも頑張って生きて……病に倒れる。
眠りの病と言われるもので、既に彼女は何年間の眠り続けている。そしてこのままいけば、眠り続けたまま死ぬ可能性が高い。

そんな状況にも耐え、サイラオーグ氏は本家に戻り、次期当主であり消滅の魔力を宿した腹違いの弟を打倒して、次期当主となる。
……で、話を戻すとその執事さんは、イッセーの乳技なら何かしらの効果が出るのではと思い、藁にも縋る想いでグレモリー家を経由して頼んできたそうだ。
とりあえず、俺達は顔を見合わせて頷いた。
「「……凄く真面目に考えたんだ」」
「感心してるのか引いてるのか分からないけど、気持ちは分かる」
イッセーもそこは同意してくれた。
「っていうか、鎧になってまでやったけど声は聞こえなかったし、その姿をサイラオーグさんにも見られたんだよなぁ」
「大変ね。いえ、あなたもだけど教えられてなかったっぽいサイラオーグ・バアルも」
カズヒ姉さんが素直に同情するけど、そのうえでため息をついた。
「でも大丈夫なの？　お互いにやりづらくならない？」
あ、そういうことはあるか。
事情を知るとやりづらくなりそうだし、サイラオーグ氏も何とかしようとしてくれた人に対して、手が出しにくくなるかもしれないな。
だけど、イッセーは静かに首を横に振った。
「いや、真剣勝負にそんな気後れしたら相手に失礼さ。サイラオーグさんも全力の俺達と戦いたいって望んでいるしな」
な、なるほど。
俺だったら絶対やりづらくなるけど、凄いな。
アニルもちょっとびっくりしているけど、カズヒ姉さんは微笑みながら頷いていた。
「いい根性ね。あなたも彼も、その武人肌の資質はある種の美徳だわ」
そう言いながら、カズヒ姉さんもベーコンのアスパラ巻きを一口で食べる。
そしてお茶を飲んでから、イッセーに真っ直ぐ真剣な表情を向けた。
「同種の土俵でやる分において、そういった精神性はある種の美徳よ。

……まぁ、受けが悪い層も幅広いでしょうから、その辺りは適宜考えてね？」
ふむふむ、なるほど。
まぁ、お互いにある程度の尊重をするのは人間関係の基本だしな。
……しっかしまぁ、大変だなその人も。
「バアル家っていうと名門中の名門で、しかもその本家っすよね？
間違いなくプライド高いだろうし、責任も重いはずっすよね？」
「それは違うわね。あの手のタイプは家柄が高い奴は何してもいいと思い込むタイプよ。諜報網でそれなりに人柄も知られてるから、絶対そんなこと考えないわ」
アニルにカズヒ姉さんがそう言うけど、なら尚更大変だな。
魔力がないサイラオーグ氏が大王バアル家の次期当主になってるとか、下手するとやばいことになるんじゃないだろうか。
「……致命的に付け入る隙になるんじゃね、そのお母さん」
俺がそう聞くと、イッセーも遠い目をして頷いた。
「一応シトリー領で療養してるんだよ」
「それがいいでしょうね。というより、そのサイラオーグっていうのもバアル本家に拘る必要、ないんじゃないの？」
と、カズヒ姉さんが頷きながらそう口にする。
というと？
俺達の視線を受けて、カズヒ姉さんは肩をすくめた。
「そんな余計に敵を作るやり方で見返すより、やり方はあるんじゃないかって話よ。……いっそのこと弟の眷属に名乗り出るなりして、面従腹背で彼の理念に近い魔王派に情報を売るとか……いえ、部長やイッセーと波長が合うタイプでそれは無理ね」
流石暗部、それもダーティジョブ専門部隊所属。
え、えげつねぇ……。
男子全員、五センチほど後ろに下がった。
カズヒ姉さんも、そりゃそうだと納得したのか苦笑していた。
「……まぁ、魔王派がそういうやり口を好まないっているのもあるけどね。どちらにしても、無理して大王派に属するよりやり方はあると

は思うわね」
な、なるほどぉ。
確かに、大王派のそれまたバアル本家には敵が多そうではある。なら味方の多いところに流れ着けるようにするというのも選択肢か。
と言っても、イッセーと波長が合うタイプがそれはしないだろうとは思う。ぶっちゃけ、そういう方向性に向いてないしなぁ、イッセー。
カズヒ姉さんもそこは分かっているのか、悪い感じはしない笑みだった。
「……あとでその人に私を紹介してちょうだい。下種な連中がやりそうな絡め手とその予兆でも教えておくわ」
「ああ。頼んだぜ、カズヒ」
イッセーも、それが分かっているから笑顔で頷いた。
……うん、ガチの場合でない限りは、お互いに多少は尊重するからとげが立たない。
正直、揉め事にならないかちょっと不安だったりしてたからな。京都で合わない時はガチで合わないのを再確認したし。
思わず俺は、そっと胸をなでおろした。
「……よく分かんないっすけど、とりあえず一つどうぞ」
アニルがそっと出してくれたアスパラ巻きベーコン、本当に美味しいな。

そして、そんな次の日もトレーニング！
毎日毎日鍛錬必須！　ゆとりが多いなら自主鍛錬も！　ハードにならないギリギリで！
これが広義的グレモリー眷属。すなわちオカ研の基本スタンスで強さの源。
ほら、ちょっと離れたところを見れば―
「少しはフェイントを見抜けるようになってるわね！」

「そっちも！　アタッシュウェポンを使いこなしてるじゃねえか！」
アタッシュウェポンの一つである、アタッシュアローを使ったカズヒ姉さんと、通常禁手状態のイッセーが模擬戦をしていた。
おぉ、新技に目覚めた後も通常禁手もしっかり鍛えているのか。こういうやつは強いんだよなぁ。
やはり基礎は重要だからな。俺もサルヴェイティングドッグで模擬戦とかをした方がいいな。
「それにしても、イッセーも強くなりました」
そんな風に微笑みながら、シャルロットはシャルロットで技術を体に覚えこませる為に反復練習をしている。
……いや、ちょっと待とうか
「今イッセー、単独でやってるのか！」
「そうですよ？　連携で行くのが基本ですけど、一人で戦わざるを得ない時もありましたから」
シャルロットにそう返されるけど、本当にあいつはそういうところをきっちりとしているよな。
感心しながらスクワットをしつつ、俺はふとため息をつきたくなった。
鍛錬も真面目に取り組み、基礎を忘れることなく質実剛健に鍛えながら、新たな技を得る努力も欠かさない。学業もなんだかんだで偏差値高い高校で、落第生にならない程度あるなら十分優秀。慣れない貴族関連のマナーも一生懸命取り込んで、最低限はこなせるレベルにもう習得している。変態性を抑える努力もしており、ひきつけこそ起こすが人様に迷惑はかけていない。あと、おっぱいドラゴンの興行収入とかもあって、貯蓄は数十年は遊んで暮らせるぐらいあるだろう。
割と完璧に近い良い男で、そんなイッセーの周りには良い女が結構いるわけだ。
……にも関わらず、だ。
「そろそろあいつ、後ろから刺されるんじゃないだろうか」
「そうなんですよね」
シャルロットも真剣に頭を抱えていた。

「まだ私が召喚されてから四か月そこらですけど、その短い期間に熾烈な戦いを何度も経験しています。リアスさん達もそんな危機感から、我慢の限界が近づいている気がしますよ」
「やっぱりそう思うよな？　なんていうか、流石にアーシアやリアス部長のそれには気づいた方がいいと思う」
いや、本当に……。
刺されそうで怖いなぁ、あいつ。
……俺も気を付けよう。真剣に気を付けよう。
カズヒ姉さんを惚れさせたい。インガ姉ちゃんやリヴァ先生に関しても責任はとる。鶴羽のことだって大事にしたいとは思っている。
そして―
「今度機会があったら、絶対に引きずりださないとな」
―春っちとベルナも、ほおっておけない。
男として、あそこまで言ったんだ。最後まで責任はとる。勢い任せとはいえ、嘘は何一つ言ってないんだから。
だからこそ！
「アーネとの再戦があっても勝つ。ヴィールにも一発かます。それぐらいの決意で頑張らないと、な」
よし、ちょっと走り込みをし直すか―
「……そろそろ上がりよ。明日のインタビューに支障が出るもの」
―タイミングが悪いなぁ!?

冥革動乱編　第三十五話　大爆発

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで次の日の夜。俺達オカ研非悪魔組は、撮影室の一室を使って、統合インタビュー番組を見ることとなった。

リアス・グレモリー眷属とサイラオーグ・バアル眷属。若手悪魔のレーティングゲームは、これをトリとしてやることになっているそうだ。

いや、これはもうプロの人気プレイヤー同士がやるようなレベルだな。

「……どうやら冥界では、リアス部長、ソーナ会長、サイラオーグ・バアルさん、シーグヴァイラ・アガレスさんを「若手四王（ルーキーズ・フォー）」と呼んでいるそうです」

「へー。あれ？　でもフロンズ・フィーニクスとノア・ベルアルはどうなってるの？」

ルーシアが資料を見ながら言った言葉に、ヒツギがふと首を傾げる。

それに合わせて首を動かすヒマリが、もう息が合いすぎてお前ら双子かと言いたくなる。

いや、でもなんでだ？

「ん～？　あのお二人はどんな感じですの、リーネス？」

「あの二人は別枠っぽいわぁ。若手四王（ルーキーズ・フォー）は眷属込みでの評価だけれど、二人は眷属を頻繁に交換（トレード）してるからねぇ」

と、ヒマリに振られてリーネスはそう答える。

あ～なるほど。そういえばそんな話だったな。

あの二人は眷属の殆どを頻繁に入れ替えていることで有名だった。そもそも戦力の強化を眷属レベルで考えてなく、参加の部隊レベルで

考慮しているからな。計算に入れづらい。
実際二人の戦果って、傘下に収めている第一特務研究師団の戦果と言ってもいいからな。
なるほど、別枠になって当然か。
「……で、会長は会長でシーグヴァイラって人とレーティングゲームをすると」
「そうみたいだな。もっとも、部長とサイラオーグ・バアルが目立ちすぎて注目されてないみたいだけど」
アニルにそう答えながら、俺はちょっと真面目に匙や会長に同情する。
いや、同期が無駄に目立つってのも考え物ってことか。
とはいえそのぶん苦労することも多いだろうがな。イッセー達、割と緊張してるヤツは緊張しているし。してない奴は全然してないけど。
サイラオーグ・バアル眷属も強い戦意が見えているし、ちょっとピリピリしている感じでもあるな。
「……全員、相当鍛え直しているわね」
カズヒ姉さんがポツリと呟くけど、まさにその通りだ。
以前見たノア氏とのレーティングゲームの時より、面構えが違うし、画面から見る雰囲気も違う。
……ノア氏とのレーティングゲーム、サイラオーグ・バアル眷属はサイラオーグ氏だけを残して全滅して勝ち逃げされた形だからな。相当堪えたと見える。
「イッセーも新技ゲットしたし、ゼノヴィアのエクス・デュランダルもあるからちょっと有利かと思ってたけど、ちょっと舐めてた感じかな？」
「そうですね。誰一人として生身でやりあうと負けそうですし、覚悟をもって全力でぶつかるべき相手ですね」
苦笑いしているヒツギに、ルーシアが真面目に頷いた。
確かに、俺もマクシミリアンに変身しないで戦いたいとは思わない……な。

それぐらい、佇まいからして見違えている。これまでも常に真剣に鍛えて戦ってきたんだろうけど、それでも負けたことが影響しているんだろう。絡め手で負けたことで、元々ないような慢心すら消えている。

カズヒ姉さんに雰囲気が近いといえるだろう。油断するほど部長達も間抜けではないだろうが、この意識の変わり具合が、勝利をもぎ取る形になりかねないな。

「……皆が帰ってきたら、一緒にトレーニングですのね！」

ヒマリがそんな風に意気込んだ、その時だった。

『おっぱいドラゴンの兵藤一誠さんにお聞きします』

……この流れで、それ言う？

あとイッセーも緊張が増したな。何か聞かれるとは思っていただろうが、まぁ実際に来たら緊張するか―

『次の試合、リアス・グレモリー選手の乳首をつつくのでしょうか？』

……。

「悪い。どうも疲れて白昼夢を―」

「疲れてない疲れてない。寝言言ってるのはあっちだから」

ヒツギに肩を叩かれなければ、俺はこのままベッドに直行してた。

まさか、此処でそう聞くとは。想定外にもほどがある。

というか、他のインタビュアーとかも固唾を？んで見守っている。

馬鹿か、お前ら全員馬鹿なのか。

「こういう時、文化の違いを強烈に感じるわね」

「……割と、苦労するところはあるのよねぇ」

カズヒ姉さんとリーネスが遠い目をしている。

まぁ、俺も気持ちは分かる。

文化が、違うよなぁ。

『どうなのでしょうか？　乳龍帝おっぱいドラゴンと同様に、リアス選手の乳首が力となっているとのことですが』

真面目にそんなことを言われて、イッセーは思いっきり困惑していた。

『え、えっと……ぶちょ、じゃなかった―』

『ぶちゅう!?　ぶちゅうとは……つつくのではなく、すうのですか!?』
「なんでだよ!?」
俺とアニルのツッコミが響き渡った。
こんなところでそんな発言するわけないだろ。あと「ぶちゅう」じゃなくて「部長」って言ったんだよ!?
「……学生服を着てるんだから、部長って連想できますわよね？」
ヒマリがきょとんとしていると、ルーシアは目頭を指で押さえながら首をひねる。
「……いえ、学生服という概念は意外とない文化も多いです。ましてグレモリー眷属が同じ学び舎の同じ部活に属しているとまでは、冥界で知れ渡ってるとは限りませんし―」
「あ～。下手するとあの格好、特注したユニフォームって思われてるとか？」
ヒツギが納得しかけているけど、確かにあり得るかもしれない。
ぶっちゃけ駒王学園高等部の制服って、普通の高校で使うような学生服よりよっぽどおしゃれだしなぁ。特注品と言われたら、学生服の文化が薄いところなら信じられそう。
それにルーシアの言う通り、同じ部活動に集まっているとまでは知られてない可能性は高いな。となると、部長という呼ばれ方を普段されている可能性まで思い至る奴は少ない……か？
「いや、でもシトリー眷属も同じ制服つけてるんだから、連想できない？」
「いやぁ、そこから部長って考えに繋げるのは……難しいかもねぇ」
ヒツギとリーネスがそう言い合っている中、会見場はとってもうるさく騒がしいことになっている。
あ、これもう吸うことで話の流れが確定しているノリだ。
カズヒ姉さんも、なんというか遠い目をしていた。
「真面目にやっている人ならキレそうね。揉めないといいけれど―」
『サイラオーグ選手は、吸うという事実にどう思われますか！』
言いかけている最中にとんでもないことに!?
俺達は思わず、固唾を呑んでサイラオーグ氏を見守るが―

『ふむ、赤龍帝がリアスの乳首をすれば、凄まじい強化をしそうだな』
―ノリが意外と軽かったようで何よりです。
たまたまバイトとかち合って、これを見ていなかったリヴァ先生とシャルロットは運がいいのか悪いのか。
……リヴァ先生は絶対面白がるから運が悪いけど、シャルロットは頭痛を感じそうだから運がいいってことになりそうだな。

そしてそんな日の夜中、俺はこっそり地下の大浴場に向かっていた。
以前サウナに行った時は、ちょっと大変なことになって堪能できなかったからな。今度はゆっくりと堪能したい。
既にサウナ用にドリンクも準備済み。インガ姉ちゃんに相談して、メイドさん達が利用することはないと確認済み。念の為水着も用意しているので、万が一にハプニングも対処の余地は十分ある。
さぁ、大浴場にも到着したし、後はゆっくりサウナに―
「あら、カズ君じゃない」
―今度はリヴァ先生か！
俺は思わず崩れ落ちた。
駄目だ。リヴァ先生と一緒だと、ゆっくりサウナを堪能することは不可能に近い。絶対からかわれる。
俺は何時になったらゆっくりサウナを堪能できるんだ。あの広いサウナを一人で堪能することが、理論上可能なのに全然できやしない。
「こうなれば、誕生日にサウナ独占使用を要求するしか……っ」
「何言ってるのかしら？　っていうか、さっきリアスさんが入ってたけど、覗きとかするタイプじゃないでしょ？」
しかも部長が入ってるのか!?
絶望的だ。はぁ……帰ろう。っていうかやけ食いしよう。

「リヴァ先生、夜食食べるけど、よければどう？」
「ふ～ん？　これは、先生がカズ君独占とかもあり得るのかな？」
その辺はまぁ、いいだろうさ。
二人だけの時間とか、一人の時間もちゃんと用意してこその恋愛だ。そのあたりのバランス感覚は必須だろう。あとでインガ姉ちゃんとも時間を作らないとな。
モテる男にはそれなりの責任はある。さて、こうなったら二人の時間を堪能し―
「……～っ」
―その瞬間、俺とリヴァ先生を半ば突き飛ばすように部長が駆け出して行った。
……いや、服着てないんですけど。
五秒思考が真っ白になって、俺はリヴァ先生に向き直った。
「記憶消してくれない？」
「役得じゃない？　ふふ、イッセー君が嫉妬しそうね？」
駄目だこの先生。こういう時は大概こうするんだよ。
俺がため息をつこうと思った時、大浴場の方からイッセーが顔を出した。
「あ、九成にリヴァさん。部長見なかったか？」
「お前もいたのかよ!?」
思わず突っ込んだよ。
っていうか何が何だか分からないな。いや、まじで何があった？
「一体どうしたの？　なんていうか、イチャイチャできそうだと思うけど」
「イチャイチャって、俺と部長がそんな関係になれるわけないじゃないですか。……いや、部長が裸で迫ってきたんで、体の関係にはなれるかもしれないですけど」
……いや、その流れはおかしい。
「それならもうなったも当然だろ。っていうかなんでそこからああなったんだよ？」
「それが急に部長が機嫌を悪くしてさぁ。……っていうか、可愛がっ

てるだけなのにそんな風に思ったら失礼だろ？」
俺に対する反論に、俺は真剣に呆れたというかなんというか。
思わずリヴァ先生と顔を見合わせると、なんていうかため息をついた。
「これってあれか？　死ななきゃ治らないっていう」
「このままだと、ゲームの前に仲間割れが起きそうね……」
俺達は盛大にため息をついた。
「え～。何が何だか分からねえよ」
「いいこと教えてやる。俺はお前にそう思っている」
もうこういうしかないよ。
外野が無理に指摘するのもあれだしなぁ。さて、どうしたもんか……。

「……これって、もしかして……？」
そんなリヴァ先生の呟きは、正直よく聞こえなかった。

なんていうか、昨日はよく眠れなかった。
結局サウナに入れなかったし、何よりイッセーがアレすぎてもやもやしたしな。
なんで、レーティングゲーム絡みに会議に近いことも起こることから、俺はちょっと外で時間を潰していた。
缶ジュースを飲みながら、なんとなく空を見上げてみる。
それなりにいい空なんだが、微妙に雲があるのがなんか思うところが出てきそうだ。

なんていうか、いざレーティングゲームが迫っている時に変な爆弾が爆発しかけてる感じだな。しかも原因のイッセーに自覚がゼロだから、ある意味でどうしようもないってのがきつい。
外野の俺があまり突っつくわけにもいかないし、どうしたものか……ねぇ？
……まぁ、そろそろ終わる頃だし、カズヒ姉さん達も合流することだろうしな。
俺もそろそろ戻るか。
そう思って缶をゴミ箱に入れてから、俺は体を伸ばす。
「ん～……っ。さて、そろそろ―」
「あれ、和地？」
あ、鶴羽。
「どうしたのよ？　こんなところで」
「俺はちょっとした時間潰しだよ。鶴羽は？」
俺が尋ね返すと、なぜか鶴羽は視線とついと逸らしながら、頬を赤らめる。
「会長に頼み……頼まれて、ちょっとした資料とかをリアス先輩にところに届けに……ね」
……俺はちょっと頬が赤くなった気がする。
あ、これ俺に会う為に会長に仕事を求めた感じだ。自惚れとかでなく、真剣にその可能性を考えられてしまう。
なんていうか、カズヒ姉さんもインガ姉ちゃんもリヴァ先生も、そういう意味での仲間扱いしているしな。というか、ボロが最近よく出ている。
ぶっちゃけ、鶴羽はポンコツ属性が見え隠れしている。よくもまぁ、ザイア時代は色々と暗躍じみたことができたもんだ。……いや、ザイアから抜けれたから反動がデカいのか。そういうことにしておこう。
俺はなんというか、ちょっと苦笑しながら鶴羽の資料を半分とった。
「じゃ、行こうか。そろそろ部長達の用事も終わるだろうからな」

「そ、そうね。……じゃ、行きましょうか」
そんな感じで、俺達は並んで旧校舎に向かう。
それとなくシトリーのレーティングゲームの話を振るが、あっちはあっちで真剣に準備をしているらしい。
「っていうか、鶴羽はシトリーの試合か？」
「う～ん。ま、生徒会の手伝いしてるからね。まぁ、時間帯はずれてるみたいだから、終わったらそっちに……ん？」
と、そこで鶴羽は資料の方を見る。
俺が視線を向けると、鶴羽は資料に挟まっていた地メモ付きのチケットを取り出した。
……あ、これグレモリーの立見席チケットだ。
メモを見ると「無理せずあちらに行きなさい」と書かれていた。
俺はちょっとにやにやが隠せなかったよ。
「流石会長。聡い人だ」
「あ、あわわわわ……」
どうやら、ちょっとは茶目っ気もあるみたいだ。
あとで俺からもお礼を言っておこう。部長に会長の好みを聞いておかないとな。
と、顔を真っ赤にした鶴羽が何も言えなくなっているので、そのまま旧校舎の部室に向かい―
「―馬鹿ぁっ！」
「はぶぁっ!?」
―いきなり部長が明けたドアに、鶴羽が弾き飛ばされた。
「鶴羽ぁあああああっ!?」

冥革動乱編　第三十六話　心的外傷

和地Ｓｉｄｅ

「鶴羽ぁ!?　ちょ、部長……え、無視!?」
なんか凄い勢いで飛び出していったけど、何があった!?
と、更にアーシアが飛び出して―
「酷いですイッセーさん！　どうしてリアスお姉さまの気持ちに気づいてあげられないんですか！」
―これまた珍しいことに、盛大にイッセーをディスって言ったぞ!?
え、え、ええ……？
俺がいない間に何があった。
いや、答えは分かっている。
細かい事情はさっぱりだが、イッセーがまたやらかして部長が爆発したということだろう。
実際外から様子を伺うと、メンバー総出でイッセーにバッシング状態だった。
「え……え……？」
イッセーはイッセーで、何がどうなっているのかさっぱり分かってない状態で戸惑っている。
そんなイッセーをヒマリがあやすように抱きしめるけど、これまた困り顔だ。
「イッセーはイッセーで問題ありまくりですのよ？　まずはしっかりと見つめ直して考え治すべきですの。……それでも分からなかったら流石に教えますわ」
「……そ、そんなにダメなのか？」
「ダメに決まってるじゃん。……みんなもそう思うよね？」

ヒツギもかなり引き気味だし、これはやっぱりあれか。
「先輩。いい加減にした方がいいですぜ？　……ちょっと昨日見たアニメを見返しましょうや。自分に照らし合わせりゃ何とかなると思いますぜ？」
「……確かにイッセー先輩にも問題があるけど、多分それだと何も伝わらないと思うよ？」
アニルも割と憤っているし、ルーシアもカバーしきれてないっていうか、駄目であることは認めている。
昨日見たアニメっていうと、鈍感主人公がスルーしすぎてヒロインに張り倒されるアニメか。……あれ見て自分を顧みれないってのも、冷静に考えるとやばいよなぁ。
カズヒ姉さんも厳しいことを言いそうだったけど、こっちは目を閉じて何かを考えこんでいる。
そしてリーネスが肩に手を置くと、お互いに顔を見合わせて頷き合った。
「とりあえず、私も部長を追いかけるわ。イッセーは今何をしても総スカンで逆効果だから、一人でできる作業をしてなさい」
「そんなに!?　え、俺ってそんなにやばいことしたのか!?」
カズヒ姉さんに言い捨てられたイッセーがそう聞くけど、間違いなくイッセーがやらかした側だな。
「そうなるわねぇ。今の流れだと、ちょっと味方できる子は此処にはいないわぁ」
リーネスにまで言われて、イッセーはマジで涙目になっている。
……俺はもう何も言わない方がいいだろう。それとなく後ろに下がると、鶴羽を庇う方になって……あれ？
「……全く、イッセーも大変ね。よく知らないけど被害者として、私ぐらいは味方してあげるわ」
「……いや、これ絶対九成に睨まれる奴!?」
なんでイッセーに抱き着いてる鶴羽!?
え、これってまさか……N！T！R!?
……いや、流れがおかしすぎるだろ。流石にないか。

でも、だったらなんでだ？
「まったくもう。恋愛したくないわけでもないんだから、リアス先輩ももうちょっと対応を変えるべきよねぇ？」
しかもなんか、イッセーに盛大に同情的な意見を言って、周囲から顰蹙かってるしな。
「…そりゃ、そうだろ……っ」
イッセーは尚更自覚をしような？

『……まさか、リアスがふがいないという次元ではなかったとは思いませんでした……』
「だな。はたから見てたら面白いから放置してたが、ここまでとは流石に俺も引くぜ」
と、ヴェネラナさんとアザゼル先生が盛大にため息をついた。
イッセーを追い出し、カズヒ姉さんを除いたうえで、緊急会議がぶちかまされたわけですよ。
で、アザゼル先生やロスヴァイセさんまで連れ、更にリアス部長のお母さんであるヴェネラナさんを通信で呼び出した。そんな本気の会議となったんだけど……？
議事進行役となった朱乃さんがため息をついた。
「……今まではそれとなく流していましたが、流石にイッセー君のあの鈍感ぶりには我慢の限界になるものです」
まぁ、そこは共通認識だな。
「……とは言いますが、部長とイッセー先輩が知り合ったのも数か月前なんですよね？　日本の恋愛事情はよく分かりませんが、男女の関係とはもっとゆっくりかかってもいいのでは？」
と、そこでルーシアがある意味で常識的な意見。
まぁそういうところもあるんだけど。だがそういうわけにもいかない事情だってある。

なんで、言える俺が言うべきだな。
「と言ってもだ。俺達は何時死んでもおかしくないだろ？」
そこは重要だ。
平和に暮らしていたって、急病や事故死で死ぬ可能性は少なからず存在する。まして俺達は戦闘職であり、挙句の果てに戦う連中が強大すぎるからな。
堕天使の中でも超強いコカビエルさんがやらかした県がきっかけとなり、俺達はこんな形になっていった。そして魔王の血を引く白龍皇やら、魔王血族が超強化されて三人がかりやら、挙句の果てに北欧の神。京都でも、最強の神滅具持ちが同格の神滅具持ち二名を含めた英雄の末裔軍団で大激突だ。
インフレが酷過ぎる。どう考えても、プロのプレイヤーにもなっていない上級悪魔の眷属が戦うような相手じゃない。最上級悪魔が眷属を率いても、複数人派遣されるレベルだろう。
「何時死んでもおかしくない。それを痛感している状態で、好きな相手にその辺りを一切意識されてないなんてストレスが溜まり過ぎるだろ？　俺だって、カズヒ姉さんに告白せずに死線をくぐっていたら、なんていうかフラストレーションが溜まるって」
なもんで、部長の気持ちも少しぐらいは分かるというか察せるというか。
実際問題、イッセー大好きな女性陣は同意見っぽい雰囲気でもある。
「同感ですわ。もし私がそれで死んだら死んでも死に切れませんし、イッセー君が死んでいたら……っ」
考えただけで我慢ができなくなるのか、朱乃さんは涙目になってしまっている。
女子メンバー、割と同じような状態だしな。
「……でも、イッセーも流石に鈍感すぎませんの？」
「同感でさぁ。あれ、普通は気づきますわな」
首を傾げるヒマリに、アニルも同意を示す。
鈍感にしたって限度があるだろう。普通、あそこまでアプローチを

されていたらもうちょっと気づきそうだが。
「そうですね。私は入ったばかりですからよく分かってませんが、言われてみるとその辺りの自覚に欠けている印象はありますね」
「……というより、他の方々は百歩譲ってまだ勘違いできるとして、何故アーシア先輩のアプローチに「兄妹すら超えた家族」といった考えになるのかが分かりません」
ロスヴァイセさんとかルーシアとか、比較的冷静に考える組も盛大に首を傾げる。
イヤホンと、冷静に考えるとアーシアのそれを感知がするのは……あれだろ？
一体何が―
「……恋愛したくないってことよ」
―と、ため息交じりな声に俺達は振り返った。
流れで参加していた鶴羽が、ちょっと困り顔でそう言い切っていた。
「……いやいやいやいや。流石にないだろ」
思わず俺はツッコミを入れると、木場もギャスパーもアニルもうんうん頷いてくれた。
「イッセー君はモテる為に女子比率の多い駒王学園に入った人だよ？
モテたくないなんてないと思うよ？」
「そ、そうです！　僕が神器を嫌っていた時も、女の人の動きを止めれるなんて欲しくてたまらないってい言っている人ですぅ！」
「……そりゃ女の人に囲まれてキャイキャイ言われるのと恋愛するってのは違うッスけど、イッセー先輩、たまに神社や寺に行ってもモテたいとかガチで願っちゃうタイプの人ですぜ？」
そんな木場達男子のそうツッコミに、鶴羽は戸惑いながらも真面目な表情で返す。
「細かい内心の動きとかは分からないわよ。でも、イッセーが恋愛したいっていうのは嘘。少なくとも、自分で言っているほどじゃないって断言できる」
や、やけに断言するな……。

俺達が戸惑っていると、鶴羽が肩をすくめながらため息をついた。
「……ＣＩＡとかの諜報機関が、異能を使わずに嘘を判断する技能を持ってるって話は知ってる？」
なんかめっちゃ言いにくそうに、なんでそんなことを？
なんて感じで俺達が首を捻っていると、鶴羽は首も手を当てた。
「脈拍や呼吸の乱れ、あとは瞳孔の開き具合で、精神的な動揺を見ることで判断するの。……私、それ出来るのよ」
「……そういう技法があるとは聞いたことがありますが、本当にできるのですか？」
朱乃さんにそう言われると、鶴羽は視線をついとそらしながらも頷いた。
「……和地と信頼関係を結べたのも、それのおかげよ。以前ガチになって習得してたから、ザイアの施設で手当たり次第にハグしてカマかけて、初めて見つけたのが和地だってのが……そ……その……」
『『『

いって。
だがそれはそれとしてだ。
自分でも気づいてない振り」か。確かにそれは納得できる。
だからこそあの体たらくだと考えるべきだ。というか、自覚しているならもうちょっと上手く立ち回れるだろう。
……つまり、だ。
「イッセーは過去に恋愛関係で盛大なトラウマがあって、その所為で無意識的に恋愛関係というステップを踏むことを避けている。そう考えるべきだな」
「そうですね。そう考えれば、あの分かり易いアプローチや対応をおかしな解釈でスルーするのも納得です」
俺の推測にルーシアも納得するが、問題がある。
何が原因でそんなことになった、だ。
それが分からなければ、解決のアプローチも効果が薄くなるだろう。
と、言うわけで。
「……ちょっと、松田や元浜にその辺りの心当たりがないか聞いてくるか」
俺はそう立ち上がろうとした時、ふと気づいた。
なんていうか、何人か表情が引き締まっている。
というより、冷や汗すら流れている。
具体的には朱乃さんや木場、小猫。
……これ、心当たりあるだろ。
「……何か知ってますの？」
ヒマリがきょとんと首を傾げながら、そう聞いたその時だった。
「……話は全て聞かせてもらったわ！」
ドカンと勢いよく扉を開いて、リヴァ先生が入ってきた。
というか、割と真剣な表情のシャルロットまで入室している。
え、どういう流れ？
俺が戸惑っていると、シャルロットは難しい顔をしながらアザゼル先生に鋭い視線を向けた。

「アザゼル総督。流石に大規模組織のトップをいきなり糾弾するのは理不尽な気もしますが、あえて言います」
「まて！　俺が何をした!?　まだお前らに何か言われるようなことは―」
「あとでそれは聞かせてもらいますねぇ」
自爆した先生にリーネスが釘を刺してから、神妙な顔をしてシャルロットの方を向く。
「……それで、神の子を見張る者（我々）が何をしてしまったのかしらぁ？」
……え、もしかして原因堕天使側？
俺とヒマリが顔を見合わせて面食らってる中、シャルロットは頷いた。
「具体的に言うと、イッセーに痛烈なトラウマを刻み込んでいます。既に滅ぼされた末端の裁量とはいえ、今の情勢下ではそれなりのフォローを入れるべきですね」
そんなことを言い出したシャルロットの後ろで、リヴァ先生もうんと頷いていた。
「というか、今の乳龍帝フィーバーを考えると……悪魔側の市民が堕天使に対して悪感情を一気に上げかねないわよ？　下手すると和平にヒビが入るレベル」
うわぁ。
というか、朱乃さん達心当たりあるだろこれ。
そういえばギャスパーは結構な間封印されていたというし、なら知らないこともあるだろう。
「……何があったんですかい？」
「……イッセー先輩が悪魔になった経緯のことだと思う。ですよね、シャルロットさん」
小猫がそう言うと、シャルロットは真剣に頷いた。
それで分かってる側は全員が納得したようだ。
「……駒王会談に参加した人は覚えているかもしれないけど、イッセー君は元々神器を制御できないと判断されて、堕天使に殺されたんだ」

「名前はレイナーレという中級堕天使。そして彼女は組織内での発言力上昇を目論み、ディオドラの姦計で追放されたアーシアちゃんを殺してでも神器を奪い取ろうとしていましたわ」
木場と朱乃さんがそう言うが、ちょっと待て。
「タンマタンマ。そりゃ殺された方は納得しきれないけど、その判断が下された殺されたことそのものは……異形がとやかく文句を言えるわけないじゃん」
ヒツギの言い分ももっともだ。
神器を暴走させかねない宿主の殺害は、どの勢力も堕天使側に黙認しているようなものだ。それそのものは責められない。
日本の異能勢力である五大宗家だって黙認している。和平を結んでいようがいまいが、それそのものは直接責められるものではない。
っていうか会談の時も、その辺ははっきり総督が言い切っている。ついでにシャルロットもその辺は知っているはずだ。
それを今更？　流石にちょっと厳しすぎないか？
ただ、シャルロットは首を横に振った。
「……私も伝聞でしか知らなかったので流していましたが、そこが問題なんだとついさっき痛感しました」
ついさっき……というと？
盛大に首を傾げる俺達の中、鶴羽が何かに気づいた感じだった。
「……南空先輩、何か知っているんですか？」
俺より先に気づいた小猫に聞かれて、鶴羽はちらちらとシャルロットの方を見る。
そしてシャルロットは促すように頷き、鶴羽も腹をくくったらしい。
「いや、サーヴァントとマスターって霊的なパスが繋がるから、お互いの過去を夢として見ることがあるの。サーヴァントは本来寝る必要がないから、もっぱらマスターが見るんだけど……」
「……なんていうか、イッセー君の恋愛関係の対応が、大戦後に心を病んでいた帰還兵のそれっぽかったからね。気になったからシャルロットさんに頼んで、魔法でちょちょいと支援する形で探ってみたら

……一発でビンゴ」
と、リヴァ先生が軽くプライベート侵害じみた手法を吐いたんだけど、問題はだ。
「つまり、堕天使(うち)のレイナーレ(おバカ)はそれぐらいのトラウマをイッセーに刻み込んだというわけねぇ？」
「それはもう、盛大に刻み込まれてます」
リーネスに聞かれて、シャルロットが躊躇いなく頷いた。
更にその辺りを知っている側のオカ研メンバーは、盛大に俯いていた。
「レイナーレ様はイッセーさんを調べる為、嘘の告白をして彼女として接近していたそうなんです」
「一年生で当時縁がなかった私の耳に届くぐらい、喜んではしゃいでいたんですけど、初デートの終わりに殺されて……たまたま運よく部長を引き当てたから転生できたんです」
「そして徹底的にこき下ろしていたよ。正直あの言い草は、聞いているだけの僕でも殺気立った」
「しかも追い詰められたら、今度は手のひらを返してイッセー君にすり寄ることで助かろうとしてましたわ。それに激怒したリアスに消滅させられましたけど」
うわぁ。うわぁ……うっわぁ。
全員ドン引きの表情になるぐらい、とんでもないことしてるなそいつ。
それ聞いて喜ぶ神経の堕天使幹部に心当たりがないぞ。百歩譲ってコカビエルさんぐらいじゃねえの？
っていうか、それっておいおいおいおい。
「どう考えても人生歪むレベルのトラウマになるだろ、それ」
「俺なら反動で女性不信とか女性恐怖症に目覚めますわ、それ」
俺とアニルが素直な感想を言うと、全員がちょっと俯いた。
……なんであいつ、そんな経験を持ちながら普通に女に性欲向けられるんだ？
アニルの意見が普通な気がするぞ。京都のおっぱいゾンビといい、

あいつの煩悩強すぎだろ。
いや、今はそこじゃない。一周回って尊敬すら覚えるけど、そこはどうでもいい。
問題は。
「先生、一緒にしますんでイッセーに土下座しましょう」
「これは真剣に組織として謝罪をした方がいいですよぉ？　下手に知られたら絶対に和平にヒビが入りますしぃ」
俺とリーネスがそういうぐらいに、これちょっとまずい。
「う～ん。総督の責任ではないかとも思いますけれど、これはちょっと謝っておかないといけない問題ですわね」
ヒマリすらガチの真剣な表情だ。そのレベルであれだ。
「……いや、まぁ。現場の末端がやらかしたことの責任をトップが全部追うってのもあれだけ……ど……」
「……それは酷過ぎですぅ」
ヒツギやギャスパーがちょっと引き気味で、同情込みの視線を向けるぐらいに、これはまずい。
先生も盛大に頭を抱えて、盛大にうつ伏せになった。
「何やってんだ糞末端がぁあああああ！　いや、悪趣味にもほどがあるだろうがぁあああああっ!!」
『……多くの人を管轄する立場として、無条件で総督が悪いとは言いません……が、今後のことについて真剣に話し合っていただきます』
吠えたくもなるよなぁ。あとヴェネラナさんもきつめだ。
末端の末端が何しているかなんてトップオブトップがどうにかできることじゃない。それは確かにわかるんだけど……うん。
これ盛大にやらかしすぎ。もし生きてこんな事態が発覚したら、絶対にそいつは厳罰確定だ。下手したらクビになるし、最悪物理的に飛ぶ。
いやぁ、これはそりゃ恋愛したくないって無意識に思う。むしろ無意識止まりなのが凄い。
イヤ本当に……どうするんだよ、これ？

冥革動乱編　第三十七話　爆発鎮火

Other side

屋上で黄昏ていたリアスは、隣に座ってくる人に気が付いて、視線をちらりと向ける。
「……大変ですね、部長」
と、そこに映ったカズヒは、ペットボトルに入ったミネラルウォーターをリアスに差し出した。
あと間にポテトチップスの袋が置かれている。
一瞬困惑したリアスに、カズヒは同じくミネラルウォーターのペットボトルを開けながらため息をついた。
「とりあえず、まずはちょっと愚痴を吐き出しながらやけ食いとやけ呑みをしてください。流石にお酒は学内なので無理ですが、三十分ぐらい付き合います」
「……そうね。なら盛大に吐き出させてもらうわ」
そして本当に三十分愚痴を語り続け、リアスは盛大に息を吐いた。
勢いよく水を飲んでから、ポテトチップスをバリ掘りを食べて、人心地つく。
心のささくれだった感情が、発散したことで少しは落ち着いたことを自分でも理解できた。
それを理解しているからか、カズヒは珍しく柔らかい表情で苦笑を浮かべていた。
「……まぁ、大抵のストレスはやけ食いやけ飲みをしながら愚痴を吐いていれば、少しは落ち着くものです。アルコールで流すと八割は収まりますけど、それは流石に学生（私達）だとですけど」
「……そうね。自分でもびっくりするぐらい、すっきりしているわ」

そうカズヒに答えながら、リアスはもう一回ポテトチップスをバリボリと食べる。
ふと気づけば、袋は三つ目に突入していた。どうやら考えなしに食べている時にも、カズヒが気を使っていたらしい。
自分に常に厳しいがゆえに、他者にも基本厳しいカズヒにしては珍しい。それほどまでに自分はメンタルが追い込まれていたということだろう。
素直に反省し、リアスは苦笑する。
「悪かったわね。最近ちょっと焦っていたのか、冷静じゃなかったみたい」
「いえいえ。恋愛沙汰っていうのは、良くも悪くも理性のタガを外しますから」
意外なまでに理解を示しながら、カズヒは水を一口飲むと息を吐きだした。
「自分の想いが報われないと、世界が自分を嫌っているのかと思いたくなることぐらいは分かります。……まして、思いが届くどころか知られることなく、自分はともかく相手が死んだらと思うと、気が気じゃないですよね」
「……そんな経験があるの？　やけに実感が籠ってるわね」
あまりに実感が籠っている様に見えて、リアスは思わず目を丸くする。
今の言葉を放ったカズヒは、どこか涙を浮かべたくなるぐらい悲惨な雰囲気が漂っていた。
カズヒはそんなリアスに答えることなく、ふと地面を見る。
「……自分の想いが破れて、それに納得するのも大変です。まして相手が何一つ悟ってくれないと、何時の間にか愛情が呪怨に変わることだって……ある」
その言葉に、リアスは返答がどうしてもできない。
今までにもカズヒという女の側面を見てきたが、それとはどこか異なる異質な雰囲気であるがゆえに、リアスはそれがカズヒの根っこにある物ではないかとすら思ってしまう。

それほどまでに言葉に重みがあり、凄味もあり、実感があまりに籠っていた。
表情すら、普段とは思えないぐらい寂しげで悲し気で、何より打ちのめされた人間のそれだと、リアスは多少なりとも色々な人間と関わってきた悪魔の経験則で理解する。
「……イッセーがなんであそこまで悟れないのかは分かりません。ただ、あそこまで鈍感なら間違えようがない形で直接的に叩き付けることも考えるべきです」
「リーネスにも似たようなことを言われたわね。サイラオーグとのレーティングゲームが終わったら、そうしようとも思っていたんだけれど……ね」
だが、あまりにレイヴェルがイッセーに推されたことで、少し冷静でいられなかったようだ。
心底反省していると、カズヒはため息をついた。
「……ただ何となくなんですけど、イッセーは恋愛にトラウマでもあるのかもしれません」
「……実感が籠っているけど、貴女の経験則？」
リアスはそう返すが、カズヒはそこには答えない。
もとより人に弱みを好き好んで見せる方ではないと、リアスも理解はしている。だからそこはいいと思いつつ、ただいうべきこともある。
「……あなたに恋愛のトラウマがあるからって、それが和地に当てはまるとは限らないでしょう？　……イッセーに何か恋愛を避けたい理由があるからって、私がそんな理由と同じみたいに思われたくはないわ」
「……なら、力強く見せつけて叩き付けるべきですね」
カズヒはそう答えると、今度は上を見上げる。
「私は、割と叩き付けられてます。正直な話、見事に条件をクリアしたうえ、あそこまでけなげな好意を向けられると……ぐっと来てます」
「……この流れで惚れ気を語られるとは思わなかったわ」
お前は私の愚痴を聞きに来たんじゃなかったのか。恋愛で我慢の

限界に気かけている女に、そんなことを語るとは宣戦布告と受け取っていいのだろうか。
思わず殺気が漏れ掛けるが、カズヒは盛大に肩をすくめた。
「……まぁ、回避できない絶対攻撃を、拘束した状態で叩き付けたらどうですか？　女として男に告白されたいと思う気持ちは分かりますが、本当に好きなら自分から告白する気概があってこそですよ？」
そう切り返したうえで、カズヒは盛大にため息をつく。
「……とはいえ、それで断られるとメンタル地獄ですけどね。泣きたくなるほど凹みますし、そんな時に更に酷い目にあったら人格が歪んで淀んで捻じれて腐りますから」
「これまた実感が籠り切ってるけど、貴女の人生がどうなってるのかさっぱり分からないわ」
混乱すらし始めるが、言いたいことはそこではないのだろう。
そう、彼女が言いたいことは―
「失恋する覚悟込みで、自分から挑むことも重要ってことね」
「……まぁ、イッセーの反応を見る限りは大丈夫でしょうけどね」
そう答えるカズヒに、リアスは最適な言葉が浮かばない。
普段から弱みを基本見せないうえ、過去に関しては同にも不透明というかおかしなところが多いものだ。
元ソ連の政情不安定地域出身。にも関わらず世界的に見て日本含めたごく一部限定の卵の生食を好み、日本文化に意外なほど詳しく、更に繋がりが見えないのにリーネスや鶴羽とツーカーの仲。
ただ、それを此処で少しとはいえ語ったということは―
「……いつか、話してくれるのかしら？」
「……覚悟はまだですけど、近いうちにリーネスや鶴羽と一緒に、必ず」
なら、今はいい。
話そうと、歩み寄ろうとしてくれるのなら、今はそれで十分だ。
色々とあったし、これからも色々あるだろう。スタンスが明確に違う以上、揉めることがなくなることはない。
だが、共に死線を潜り抜けてきた。手を取り合って困難を乗り越え

てきた。
だから、今はいい。
「……で、もう一袋いきます？」
「流石に甘いものが食べたいわ。……奢るから喫茶店に行きましょう？　いい紅茶とケーキのお店を知ってるの」
今は、これぐらいで構わない。

イッセーＳｉｄｅ

ふぅ～。なんていうか、心地よい疲れって感じがするな。
……自分で漸く自覚できたよ。俺、恋愛するのが怖かったんだってな。
レイナーレに色々言われたりされたりして、トラウマになったのか。
でも、皆はアイツとは違う。違うなら、きっと大丈夫だ。
まだ怖い。っていうか、自覚したからこそ怖い。
だけど、皆はそれを受け止めてくれた。それが嬉しくて、ありがたくて、愛しいから。
……次のレーティングゲーム、どんな結果になっても俺は一歩を踏み出そう。
リアス部長に、俺は―
「あ、イッセーいましたの！」
―と、そこで元気な声が聞こえてくる。
この声はヒマリだなと思った時、ふにょんと柔らかい感触がぁあああああ！
うぉおおお！　おっぱいぱい！

「……もう朱乃さん達が励ましたんですのね？　ちょっといい感じに思えますの」
「はいはいいきなり抱き着かない。その年ですることじゃないからさ」
　ヒツギも来てたのか。っていうか、俺のことを探してくれてたんだ。
「……なんか、悪かったな、心配かけて」
「いいっていいって。トラウマ発症している仲間を気にかけんのは、当たり前のことじゃん？」
　ヒツギはそう言いながら、なんか電話番号が書かれた一枚の紙を俺に渡してきた。
「これ、悪魔祓い専門の心理カウンセラー。事情は先に伝えといたから、まあ気休めぐらいにはなるんじゃない？」
　あ、そういったのあるんだ。
　でもカウンセラーか……。
「ドライグも、俺のおっぱいで心を病んでいるって聞いてたけど……こういう感じなのかぁ」
「……深刻度が似たり寄ったりなのに、過程がアレすぎてちょっと引くかな」
　いや、なんかゴメン。
　俺も時々困惑するぐらい、おっぱいおっぱいで事態何とかしてたからなぁ。先生が言うには二天龍がおっぱいで進化するとかショックでしかないって感じらしい。
　いや、乳神とかおっぱいゾンビは流石に俺に言われても困る。どっちも俺がきっかけだけど、あんなの想像できるわけねえだろ。
　っと、今はそっちじゃなかったな。あとヒマリは抱き着いてすりすりしすぎだろ。
「でもまぁ、何とか俺も一歩前に進んでみるよ。サイラオーグさんとのレーティングゲームを終えたら、リアス部長と……向き合ってみる」
　ちょっと震えたりしたけど、それでも何とか言えた。

しっかりと、人前で言うことで、腹も少しはくくれたと思う。
俺も、覚悟を決めないとな。
「俺はリアス部長が好きだ。愛してるから、ハーレム王の第一歩は、やっぱりあの人から始めたい」
ああ、まずはそこからだ。
今度こそ、真剣に、覚悟を決めてハーレム王を目指してやる。それぐらい、本気で俺は決意した。
「皆にも、そこから改めて考える。ハーレム王を目指す身として、真剣に愛する皆に向き合ってやるさ！」
ああ、まずは……そこからだ！
「「……おぉ、おぉう……」」
あれぇ？
ヒツギが顔真っ赤だし、抱き着いてるヒマリもなんか熱いぞぉ？
え、これって、つまり……？
「そういう勘違い、してもいいの？」
「え？　勘違いも何も、割と当たって―」
「うわぁあああああああああ！　ちょ、ヒマリストップ！」
うぉおおおい！　これは勘違いじゃなくて当たりそうだぞぉおおおお!?
想定外の方向から想定外の一撃をもらったぁあああああ!?
「いや、グっと来てるけど！　ポイント高いけど！　まだ届いてない、届いてないからね!?」
「今のでポイント急上昇ですの。もうちょっとでハートを打ち抜けますのよー？」
おぉおおおおっぃ！　俺が考えなきゃいけないこと、更に増えたなぁ、おい！

和地Ｓｉｄｅ

……そっとしておこう。
俺はイッセーを探していたけど、なんか大丈夫そうだからそっとその場を去る。
あとヒマリやヒツギに春が来た感じだな。おめでとう、なんか寂しいけどほっとしてる自分がいるよ。
さて、とりあえず他のメンバーにも連絡しておくか。
ＬＩＮＥでオカ研のメンバーに「イッセーは大丈夫そう」と送りながら、俺は軽く背を伸ばした。
先生は先生でカウンセラーとか準備できないか動いているけど、案外必要なくなるかもな。リーネスはキュウタに連絡して音楽療法のメンタル回復とか考えてるけど、こっちはしておいて損はないだろう。
とはいえ、サイラオーグ氏とのレーティングゲームは何とか問題なく始められそうだ。
……とはいえ、ちょっと不安がないではないがな。
なんたって、俺が駒王学園と縁を持ってから、学園のイベントごとタイミングを合わせて大事が巻き起こってやがる。
球技大会から少ししてコカビエルさんがやらかすし、終業式に滑り込むように駒王会談で大規模テロ。夏休みには冥界でテロが起きるし、体育祭直前に旧魔王派の大規模テロだ。とどめに修学旅行は、対英雄派と同時進行ときたもんだ。
サイラオーグ氏とのゲームも、学園祭直前に行われる。言いたくないけど、タイミングが微妙にかち合っているのが不安になってたまらない。
……警戒はしておくべきだろう。それに、だ。
「春っち、ベルナ」
あの二人は、必ずこちら側に引っ張り込む。

嫌われてもいい。憎まれることも覚悟の上だ。春っちにおいては縁を切られることも踏まえてもだ。
あの二人の表情を、俺は瞼の裏の彼女と照らし合わせる。
……まだ、あそこまで入ってない。踏み越え切って、手遅れになってしまった絶望には落ちていない。
そう、だからこそ。
「……必ずだ。いずれの前置き付きで、必ずもらい受けてやる」
腹をくくれよ、九成和地。
お前の誓いをお前が汚す、そんな阿呆は絶対するな。

そして、レーティングゲーム当日がやってきた。

冥革動乱編　第三十八話　浮遊都市アグレアス

和地Ｓｉｄｅ

リアス・グレモリーＶＳサイラオーグ・バアルのレーティングゲームは、アグレアスという都市で行われることになった。
旧魔王に関連するでかい浮遊島に作られた、ファンタジーの権化みたいな都市。そこはレーティングゲームの聖地として呼ばれ、また技術担当魔王のアジュカ・ベルゼブブとその眷属が検査する遺跡が存在する。
でかい湖の上にあるその浮遊島は、いくつかの移動ルートで向かうことになっている。
まずは、限られた許可をもらった者達だけが使用できる、直接転移。最もポピュラーなのが、飛行船などを使用する移動方法。そして下の町とアグレアスを繋ぐ、ロープウェイじみたゴンドラによる移動の三種類に大別される。
そして俺達はゴンドラで移動している。部長が以前乗った時の景色の話をした結果、満場一致で見てみたいとなったわけだ。
……確かに、かなりいい感じの景色だよなぁ。
思わず外を見ずにはいられないぐらい、幻想的な光景だ。これは移動ルートの都合上、飛行船では見づらいだろう。
「ふぉおおおお！　これ、ファンタジーですのよぉおおおおおお！」
隣でヒマリもめちゃくちゃ興奮している。
目がキラキラしているというか、一年生組よりはしゃいでないか？
むしろ一年生組、気圧されてないか？
「……ですけど、これだけの巨大物体を浮遊させるという旧魔王の技術は、解析されてほしいですね……」

ルーシアはルーシアで、もうちょっとはしゃいでいいぞ？
なんていうか、此処で真面目な対応はしなくていいとすら思う。
う～ん。なんていうか、肩ひじ張ってる感じがするのが大変だな。
常に肩ひじ張るのも大変だしなぁ、まぁ、人それぞれの塩梅ってのがあるから大変だ。
「それにしても、プロデビュー前の悪魔同士がゲームするってのに、ゲームの聖地って大盤振る舞いじゃん？」
「それに関しちゃ、面倒くさい事情があるんだよ」
と、世間話感覚のヒツギの言葉に、先生がそんな返しをする。
「そうなんですか？」
「ああ、なんてったって現魔王トップのサーゼクスの妹と、血統主義派の筆頭でもあるバアル本家の次期当主だ。大王派はバアル領でしたがってたし、魔王派もグレモリー領でしたいという連中がごろごろいたのさ」
「……それ絶対にどっちも譲らねえ奴じゃねえですか。聖地にしたの、それ以外の代案で最適なのがなかっただけじゃねえですかい」
イッセーに答える先生が語る内容に、アニルがうっへぇという表情を見せている。
ああ、すっごい泥仕合になりそうな感じだなぁ。
「ま、そんな感じで大公アガレス家がとりなしたってわけさ。大王派と現魔王派の間に入りまくっている、中間管理職様様だな」
「……あの人、胃とか大丈夫なんだろうか」
一応顔を見たことはあるイッセーが、そんな心配をしているようだ。
映像で見たけど、クールビューティな次期当主だったな。眉間にしわが刻まれそうだ。
今度顔を合わせる時があるかもしれないが、日本の銘菓でも用意した方がいいんだろうか。
確か少し前に会長とゲームをしているそうだけど、そろそろ終わる頃合いだろうか。
「ま、旧魔王派を排斥したとはいえ、血統や階級を全部捨てるような連

中ばかりじゃない。大王派はそういうものを重視する連中が多いから、俺らみたいなタイプとはソリが合わないんだよな」
「あらあら、確かに先生とは相性が悪そうですわ」
朱乃さんが先生にそう返すけど、まあ先生は相性が悪いだろうな。
「そうねぇ。お爺様も最近は相性悪そうだし、真面目に魔王派には政争で勝ってもらいたいかも」
「難しいところですね。出生率の向上や、ＤＦなどの軍事力強化で底上げされているのが大王派です。落日により価値が下がり消え去ろうとしてる魔王の字(あざな)は、和平を結べた流れをもってしても……苦戦はするでしょう」
「……下手に力を借りると、内政干渉になりますしね」
リヴァ先生が茶化すように割とまじなことを言えば、ある程度は内情も分かる木場や小猫がそう返す。
フロンズ氏やノア氏、そして彼らを擁するシュウマ・バアル達の動きは中々だしな。和平の促進で現魔王派も追随しているが、現状では現魔王派不利といった感じだ。
「そういう意味では、このゲームは大王と現魔王の代理戦争になるのかもしれませんね」
木場はそう、確信をつく感じのことを告げる。
まぁ確かにな。現魔王筆頭の妹と、大王本家の次期当主がゲームをするんだ。
政治について考える立場なら、そういう意識を向けずにはいられないだろう。少なくとも、全体のムードが左右されることは十分に考えられる。
「ま、裏でそういう考えをする奴は多いだろうがな。別にお前らが負けたところで、サーゼクスに迷惑は掛からねえさ。大王バアル家についてる連中が喜ぶだけだよ」
「……努力でのし上がってきたサイラオーグさんを、利用する連中ですか」
先生に反応したイッセーの言葉には、不満が割と見えている。
イッセーはサイラオーグ氏のことをリスペクトしているからな。

ある程度は事情を知っている身としても、手のひらを返し胡麻をする裏側で、体よく利用してやるぜな感じだろう連中だって推測もできる。苛立つ奴はいるだろう。

カズヒ姉さんもそこは同感なのか、頬杖を突きながらため息をついた。

「偏見だらけの意見だけれど、体よく利用するつもりなだけでしょうしね。血統と家柄を何より大事にする連中が、どんな生まれでも能力があればいい待遇を得られる悪魔社会なんて望まないでしょうし」

「ま、裏でこき下ろしてるのはサイラオーグも承知の上さ。例え相容れない相手であろうと、上り詰める為にはパイプが必要だと分かってるんだ。我慢強い男だよ」

我慢強い。そんな先生の言葉に、俺は心底から納得する。

嫌いな連中だらけで、更に劣悪な待遇に置かれながらも、ハンディキャップを乗り越えてのし上がるのがどれだけ大変か。少なくとも、俺がザイアにいた時よりよっぽど酷い環境だったのだけはよく分かる。

ザイアの連中は好意的に受け取れないが、生活待遇は気を使っている。飯は上手く栄養があり、娯楽もそこそこ用意していて、健康にも気を使っている。更に強く賢く逞しい存在にしようと、英才教育だってしていたからな。俺の戦闘能力は、間違いなくザイアに育てられたことが大きく関わっている。

そんな強くなる為の至れり尽くせりもなく、あそこまでの力をよく手に入れられたと素直に感心するさ。その精神力は、間違いなく傑物だ。

「……アザゼル、警備はどうなっているのかしら？　言いたくないけれど、禍の団がこのタイミングでテロを仕掛けてくる可能性はあるわよね？」

リアス部長が、ある意味怖いことを言ってきた。

でもまあ当然の懸念だ。リアス部長の気持ちはよく分かる。

シトリーとのレーティングゲーム前日にテロを仕掛けられ、アスタロトのレーティングゲームはそもそもテロの土俵となったわけだ。

二度あることは三度あると、懸念するのは当然だろう。
「うぅ……。やっぱり狙いたくなるんでしょうかぁ」
「あり得ますね。良くも悪くも注目されているでしょうし、現政権の上役や、和平を結んだ神話体系の上層部も直接観戦に来ていると伺っていますし」
ギャスパーはロスヴァイセさんも懸念するけど、先生はなんというか余裕な雰囲気だ。
「ま、テロの機会としちゃこの上ないからこっちも警備は厳重だ。もっとも、杞憂に終わる可能性は割と高いがな」
「どういうことです？」
イッセーが聞くと、先生はにやりと笑った。
「ヴァーリの奴からメッセージが来たんだよ。「今回の試合は注目している。誰にも邪魔はさせない」ってな」
「……イッセーってば、女の子だけじゃなく男からもモテモテですの！」
「やめたげなって。絶対望んでないから」
ヒマリにヒツギがツッコミを入れるけど、確かに俺もそう思った。
サイラオーグ氏からも気に入られ、匙からは超えるべき目標扱いされる。ヴァーリだけでなく英雄派の曹操からも注目される。とどめに木場からはホモホモしい雰囲気を見せられることもあるからな。
ドラゴンの人を引き付ける才能は歴代でも有数と、曹操が評価していたんだったな。言い得て妙な気がする。
「……変態性を飼いならしていれば、稀代のカリスマとして人間界でも有名になっただろうに」
「うるせえよ！　男にモテても嬉しくないって！」
俺に反論するイッセーだけど、まぁそれはいいか。
テロをしようとしたら内部から攻撃を受けるとは。禍の団も哀れだが、こっちにとっては好都合だな。
「曹操もミザリも、会場に集まったＶＩＰに加えて白龍皇まで相手取るリスクは負わねえだろう。ま、万が一があるから警戒はしておくがな」

だよなぁ。
たまには純粋にイベントを楽しませてほしいものだ。
……本当に楽しませてくれよな、ホント。

祐斗Ｓｉｄｅ

ゴンドラから降りると、大勢の記者や報道陣によるフラッシュライトが浴びせられた。
まぁ、僕達は今回の主役の片割れだし当然かな。イッセー君やリアス部長を見ようと、民間のファンも待ち構えていて大歓声だ。
正直ちょっと戸惑ったりもしたけれど、スタッフや警備員の方々から誘導してもらって、レイヴェルさんが準備していたリムジンに乗り込めた。マスコミの車も後ろから追いかけてくるけど、これから今回の試合会場であるアグレアス・ドームまでは問題なくつけそうだ。
そんなマスコミの方々の様子を見てから、アザゼル先生が僕達の方を振り向いた。
「……グレモリー眷属の連中、特にイッセーはマネージャーをつけとけ。今後は間違いなくテレビ出演の機会も増えるだろうし、おっぱいドラゴン関係もある。……学生生活と両立させるには、そういった支援が必要不可欠になるだろうからな」
「……部長、私が駒王学園を卒業するまではおっぱいドラゴン関係に関与させないでください。補修を通り越して卒業ができなくなりそうです」
凄い真剣というか切羽詰まった表情で、カズヒがそんなことを言ってきたものだから、皆少し噴き出した。

カズヒの頬に冷や汗が伝っていることに気づいた人数は少ないようだ。どうやら本気で言っているらしい。……学業、割と苦労しているのかな？
「大丈夫ですのよー。カズヒはやればできる子ですし、勉強会もしますもの」
「むしろ、今回もお願い。……特に数学が、赤点と補修の危機に直面しているわ……っ」
ヒマリさんに抱きしめられると、俯きながらカズヒはそんな弱音まで吐いてきた。
相当心配になるレベルらしい。後で僕も勉強会に参加しよう。
「リヴァ先生、数学も教えられるレベルだっけ？」
「年齢三桁目前の私を舐めないで。大学卒業レベルの学力は持ってるわ」
「いや、リヴァ。勉強ができるのと勉強を教えられるのはまた別な気が……」
「和地もインガも安心しなさい！　カズヒとの勉強会は私も参加するから！　ザイアの連中に珍しく感謝したいわね！」
と、九成君達は仲が良いようで何よりだね。
「真剣に、真剣に教えを乞うわ。……弾道計算とか経験則と直感でやってたから、数式になると環境の差が……モロに……っ」
「相当キてるわねぇ……。今度、一緒に勉強会しましょうねぇ？」
そしてカズヒは本当に追い詰められているらしい。学内の風紀においてはトップクラスに引き締めているけど、勉学においては苦労する側のようだ。
リーネスに頭を撫でられながら、頭を抱えている姿は失礼だけど新鮮に映るレベルだ。
「ふむ。確かに学園祭が終われば中間テストも近いしね。私達も勉強会をするべきか」
「そうね、ミカエル様のA（エース）として、何より信徒として恥ずかしい真似は出来ないわ！」
ゼノヴィアやイリナさんも、割と本気で勉強の方に意識が向いてい

る。
……うん、今はゲームに方に意識を向けた方がいいからね？
「……そういえば、テストの問題作成もそろそろ進めないといけませんね。アザゼル先生も、そろそろ始めた方がいいのでは？」
「おーい。今はゲームの方に意識を向けとけよな？」
先生方も大変ですね。

イッセーＳｉｄｅ

到着しましたアグレアス・ドーム！
冥界ではゲームだけじゃなくライブ会場にも使われるっていうし、しかも東京ドームよりでっかくて豪華！　……いや、直接行ったことはないけどね！
内装も豪華絢爛というか貴族的というか。しゃんでりらだけじゃなくて、なんか有名そうな感じの絵画まで掛けられてる。
いや、夏休みにグレモリーのお城で過ごしてなかったら、緊張で右手と右足が一緒に出てきちゃいそうだな。慣れててよかったぁ。
「……グレモリーのお城ほどでないと思った辺り、感覚がマヒしているわね」
「少し普通の生活水準に感覚を戻した方がいい気がするな……」
カズヒと九成がそんな感じで首を捻ってるけど、ちょっと分かる気がする。
京都グレモリーホテルの時も、感想が周りとずれてたしなぁ。部長の眷属やってるなら金回りもよくなるだろうけど、その辺しっかり気

を引き締めないと。
そんな風に思いながら、俺達は控室に向かって歩いていく。
と、そこでローブと仮面の集団が向こうから歩いてきた。
っていうか、中心にいる豪華なローブの人なんか骸骨じゃん。それも、アザゼル先生やサーゼクス様より凄いオーラを纏ってる。……オーディンの爺さん並みって感じだし、神様か何かか？
っていうか、アザゼル先生やカズヒの雰囲気がちょっとピリついてる。
……テロリストじゃないよね？　不安になるんだけど。
『これはこれは……グレモリーの娘に堕天使の総督殿か』
と、すれ違う距離になったとたん、口を動かさずに骸骨が声を放ってきた。
すいませぇぇぇぇ！　なんか敵意が見え隠れ手しているですけど！　特に近くにいる若い雰囲気の人達から、殺気レベルの敵意が見え隠れしているんですけどぉおおおお！

冥革動乱編　第三十九話　冥府の神、ハーデス

イッセーＳｉｄｅ

なんていうか、険がある雰囲気だ。先生もなんていうか、ピリついた雰囲気で向き直ってるし。

「オリュンポスにおける冥府の司る、死の神ハーデス殿じゃないですか。死神（グリムリッパー）を引き連れて、堕天使と悪魔を嫌うあなたまで来ているとが驚きですな」

ハーデス!?　馬鹿な俺でも名前だけなら聞いたことがある奴じゃねえか。確かポセイドンの兄弟とかいう、ギリシャの神さま！

昔ポセイドンにあった時は豪快なおっさんだと思ったけど、兄弟でも雰囲気違いすぎだろ。……むしろちょっと怖い。

というより、先生とハーデスの間に火花が散ってそうな感じなんだけど？　あと先生、今ハーデスのことを「堕天使と悪魔を嫌う」とか言ってませんでしたか!?

え、敵？　やっぱり敵なのか！

『ファファファファ。堕天使（烏）と悪魔（蝙蝠）が上でうるさくしておるのだから、たまには視察をと思ってな。相変わらず騒がしいことをしておるようだ』

すっごい敵意満々な言い方！　絶対この人、俺達のこと嫌いだよ!!

「はっはっは。オリュンポスの神々で唯一協定に否定的なあんたに言われるとは、誉め言葉にしかならねぇなぁ？」

先生も切れ味鋭い返し！

あと、やっぱり和平には反対なのか。

っていうことはロキみたいな感じ？　それっていろんな意味でやばいんじゃね？

『ファファファ。ならロキのように私も潰すか？　あの若造が中々暴れたようじゃが』
「好き好んで潰してるみたいに言うんじゃねえよ。オーディンやゼウスみたいに寛容になってくれんなら、こっちだってことを構える必要もないんだがな」
　すいません！　できれば今はやめてください。サイラオーグさんとのゲームに集中させて!?
　俺が内心で願っていると、なんかハーデスの視線がこっち向いたぁあああ!?
　怖い雰囲気が見えまくってるんだけど。おいドライグ、お前何かしてないだろうな!?
『昔、ちょっと冥府で白いのと戦ったことがあってな』
「ドライグ、後で真剣に方々に謝罪して回った方がいいのでは？」
　ドライグにシャルロットが釘を刺すけど、絶対敵意向けられてるよこれ。
　そりゃ自分の縄張りで勝手に喧嘩されたら迷惑だしね。しかも封印される前の二天龍が喧嘩とか、絶対核兵器とかの比じゃない大破壊だって。
　これ、宿主として謝った方がいいのか？　俺に怒られても困るけど、謝った方がいいのか!?
「……全く。二天龍には出会い頭に土下座ぐらいしてほしいものだがな」
　うぉおおお！　死神に一人がすっごいこと言ってる。
　さっきから殺気と敵意を隠してもいないし、これかなり嫌ってるよ。
　いやでも、俺が直接何かしたわけじゃないんだけど!?
「……そこまでです、サイスル隊長。彼ら如きに崇高なる文化を理解しろなどという方が無理でしょう？」
「それに、元々日本人なんですから。彼らに謝罪を期待しない方がいいですよ」
「イシヅキもスピエルもその辺で。ここ、悪魔の縄張りよ？」

近くにいた死神もキレッキレだし!?
っていうか日本人嫌いもいるのかよ。
『……皆さん落ち着いてください。今日の我々はハーデス様の護衛であり、ハーデス様はあくまで客人として冥界に来ているのです』
と、ハーデスの隣にいたフードの死神が、そんな風に周りをたしなめた。
か、仮面がなんかメカメカしい。目の辺りモノアイっぽいし、もしかして最新技術？
『ここで我々が失礼な態度をとれば、ハーデス様の名誉に瑕がつきます。三大勢力がどうであれ、こっちが品位を下げることはないでしょう』
でもこっちも切れ味鋭いし。
「おいおいひっでぇなぁ。最低限の礼儀作法はわきまえてるつもりだぜ？」
先生がそう言うけど、一番説得力無いですよね？
というか相手の方も呆れてる雰囲気だし、どうしたもんかなこれ。
俺が真剣に困っていると、ハーデスは軽く肩をすくめた。
『まぁよい。今日のところは試合を観戦させてもらおう。精々我らにとって実のある試合をすることだな』
そう言うと、ハーデスは死神達を連れて離れていった。
なんていうか、思わず息を吐いちまったよ。
なんていうか不気味だった。後こっちに敵意も見せてきてるし、正直精神的にも疲れたよ。
「……はぁ。流石はオリュンポス三大神格の一人と、言ったところね」
カズヒもちょっと気圧されてる感じだし、そんなレベルだってことでいいんだろうな。
「ま、奴はオリュンポスどころか全勢力でもトップレベルだからな。三大勢力でタイマン張れる奴なんて、超越者（サーゼクス）達程度だろうよ」
先生がため息つくけど、そんなレベルかよ。
っていうか先生より強いのか。怖い話だぜ。
「……確か死神って、種族としての戦闘能力は異形でも上位側ですよ

ね？　あいつら全員、上級悪魔より上って感じでしたし」
「そりゃそうだ。三大勢力嫌いのハーデスが、三大勢力の都市に連れてきてるんだぜ？　全員最上級悪魔に喧嘩売れるだろうさ」
九成に先生がそう言うけど、そんなレベルかよ。
ヴァーリ辺りは喜んで喧嘩を売りそうだけど、俺はちょっと勘弁……かな。
全くもう。今日はサイラオーグさんとの試合だってのに、こんなところで疲れたくないぜ。
「悪い神ってわけじゃねえし、人間にとっても必要な神様なんだがな。ミカエル達までならともかく、俺達にまで喧嘩腰なのはどうなんだよ……」
「ギリシャ神話って、どうも罪業をコミュニティ単位で清算させる傾向ありますからねぇ。……多分三大勢力の罪業とでも考えているんですよぉ」
リーネスが先生と一緒にため息までついてるよ。っていうかすっごい迷惑な価値観してたんだな、オリュンポスって。しかもハーデス達はそんな価値観をまだ残してるって感じなのか。
なんていうか、今後も疲れさせそうなことになってるんだなぁ。
そんなこんなで何となく周りを見ると、皆ちょっと疲れた感じだった。
……ただ、何故かリヴァさんだけは変な動きをしてる。
微妙に焦ってる感じだし、何してんだ？
「何してんの、リヴァ先生？　……あ」
リヴァさんにツッコミを入れていた九成が、何かに気づく。
リヴァさんがそれに頭を抱えているけど、俺達はそこにある爺さんを見つけた。
「……オーディン様！」
ロスヴァイセさんがオーディンの爺さんを見つけて、オーディンの爺さんもこっちに気づいた。
あ～。リヴァさんは爺さんに声を出さずに離れさせようとしてたのか。でも爺さんは気づいてなかったのか、こっちを見て「あ、ヤ

べ」って顔してそそくさと離れていった。
……ロスヴァイセさんから寒気のする戦意が、殺意が！
「ここであったが……百年目……っ！　っていうか、その隣にいるヴァルキリーは何なのよぉ、クソジジイいいいいいいいいい！」
「ストップ！　ロスヴァイセストップぅぅぅぅぅ！」
とっさにとめようとしたリヴァ先生を豪快に引っ張って、ロスヴァイセさんがオーディンの爺さんを追いかけていくぅぅぅぅぅぅ!?
「がっははは！　誰かと思ったら赤龍帝にアザ坊ではないか！」
「応援しとるぞぉ！　ははははっ！」
「ってゼウスにポセイドンじゃねえか！　応援するならハーデスをたしなめとけよな！」
しかもハーデスの兄弟なオリュンポスのトップが先生にウザ絡みを！
「……とりあえず、祐斗達はロスヴァイセを連れ戻して頂戴。試合に響くわ」
手で顔を覆うリアス部長に、カズヒが肩に手を置いて首を横に振る。
「グレモリー眷属を消耗させてどうするんですか。ここは非グレモリー眷属（私達）で行くべきよ」
「了解、カズヒ姉さん。先行ってる」
カズヒや九成が走り出してロスヴァイセさんを取り押さえにかかり始める。
いやその……ごめんな！

Other Side

『ファファファ。あれが今代の赤龍帝か』
「……本当に、日本人ってのは失礼な人種ですよね。なんでハーデス様達に出会ったのに、土下座しないんでしょう」
『落ち着くがよいスピリア。儂も流石にそこまでは求めぬよ』
「ですが、やはり不愉快な人種達です。自分達の罪を清算もせずに和平などとと。……他の神々は何故愚弄されながら手を取るのでしょうか」
「同感だな、アクジス。ゼウス様やポセイドン様は、何故尊き断罪の摂理を示さないのか……っ」
『サイスルもアクジスも落ち着いてくれ。今三大勢力と争うのは、時期尚早というのがハーデス殿の決定だろう?』
『ふむ、分かっているようで何よりだが……。貴様はロキの仇を討たなくてよいのか?』
『今のままではただぶつけるだけに終わります。美しき戦いの世を広め続ける為にも、今は雌伏し牙を研ぐ時期ですから』
『ファファファ。貴殿には悪いが、ロキはまさに早すぎた。忌々しいが和平の流れが進めば、必ず我らと共に戦わんとする不満分子が増える。それまでは技術と腕を磨き、備えるのみよ』

『ゆえに、力を貸してもらうぞ? ロキが作りし人造惑星(プラネテス)。マークアイン、シュトゥルムよ』
『もちろんです、人間社会に素晴らしい進歩と新陳代謝を広める為にも、三大勢力は邪魔者ですからね』
「……フン。相容れぬ神話だが、その誇り高き在り方だけは認めてやるさ」
『お互い様だよ、サイスル』

和地Ｓｉｄｅ

はぁ、なんか始まる前から疲れた……。
まぁ、それはともかく試合開始まで後僅かだ。
ドリンクよしで食べ物よし。万が一のテロに備えて、軽くウォーミングアップも済ませているので戦闘もＯＫだ。
「……レーティングゲームって、観戦する時はこんな感じなんだ……」
「あら、インガは観戦したことないの？」
興味津々で周りを見渡すインガ姉ちゃんは、リヴァ先生にそう聞かれて、瞬時に黄昏た表情になった。
「ディオドラのところでそんな贅沢はね……」
「すいませーん！　売り子さーん！　ビール、ビールをこっちに売って下さぁーい！」
「奢るから。一杯飲んで忘れましょ？」
鶴羽とリヴァ先生が即座にフォローの為にやけ酒を買おうとしているので、俺そっと肩を抱き寄せることにした。
うん、頑張れインガ姉ちゃん。
そんなわけで、俺の右隣はインガ姉ちゃんになった。
左隣はカズヒ姉さんで満場一致。なんていうか俺の女性関係、カズヒ姉さんを立てるということで納得されてるのが凄いというか嬉しいというか怖いというか。
「……ふぅ。久しぶりのアルコールが、しみわたる……っ」
カズヒ姉さんもさらりと酒を飲んでいるよ。ちなみに冥界の法律的にセーフなので飲んでいるそうです。抜け目がないな。

「まったくもう。やっぱりディオドラのところじゃ冥界の基本が全然分かんないし、正直悪魔歴そこそこなのに、全然フォローできないし……。一応、二番目に年上なのに……っ」
「大丈夫。インガ姉ちゃんにはいつもお世話になってるから」
インガ姉ちゃんも地味に凹んでいる。試合前からブルーなのもあれ何で、俺はそっとインガ姉ちゃんを抱き寄せる。
「……でもまあ、本当に熱狂しているわね」
「おっぱいドラゴンは人気があるし、サイラオーグ・バアルも冥界の下級中級にとって希望なところがある物ね。どっちも大人気だわ」
カズヒ姉さんとリヴァ先生がそう話しながら、双方の熱狂的ファンが集まっている部分に視線を向けている。
……俺達は今回、ソーナ会長が回したチケットに合わせて集まっている。その為イリナ達おっぱいドラゴンブースに集まっている側とは距離が空いている感じだ。
まぁ、近距離でおっぱいおっぱい言われるのもあれだし、距離を開けておいた方がいいだろう。
ちなみにヒマリはおっぱいドラゴンブース。ヒツギ達も俺に気を使ってくれたのか、水入らずになっている感じだったりする。
……事実上のデートだよな、これ。
俺はそれに思い至り、ちょっと顔が赤くなってきた。
だ、大丈夫だ。冥界や異形社会では、実力とか権力とか持ってるやつは、ハーレム作っても全然おかしくないからな。俺だってそれなりにネームドだし、普通普通！
よし、ちょっと緊張を紛らわせる為にもジュースでも飲むか……ん？
なんか苦いな。辛口のジンジャーエールでも……ない……し？
「……あ……わわ……っ」
っていうかインガ姉ちゃん、顔真っ赤にしてどうし……あ。
「天然でビールを間接キスだなんて、カズ君やるわねっ♪」
「あわわわわ……っ！　て、天然ジゴロの年増殺しめ……っ」
「思ったより緊張しているみたいね。現地法律的には問題ないし、

いっそのこと回し飲みで間接キス祭りでもしたら？」
　周りの反応に、俺とインガ姉ちゃんは思わず顔を真っ赤にしてうつむいてしまう。
『……お待たせしました皆様！　今回司会を担当する、ガウド・ナミジンから試合開始の挨拶をさせてもらいます！』
『『『『『『『『わぁあああああっ!!』』』』』』』』
　おお！　いいタイミングで切り替えるように、ついにアナウンスが！
「インガ姉ちゃん、試合見よう！」
「うん、そうしよっか和地君！」
「「あ、逃げた」」
　うるっさいよ！

冥革動乱編　第四十話　バアルの死闘

和地Ｓｉｄｅ

なんかアザゼル先生がレーティングゲーム一位と一緒にゲストとして司会と一緒にゲームを語り始めたりしながら、本格的にゲームの流れが説明される。

このゲーム、バアル側の解説としてレーティングゲームのトップが出てくるは、審判役として人間からの転生悪魔ならトップのリュディガーなんたらが出てくるや、プロのゲームでもそうそうないんじゃないかってぐらいの大御所だらけだな。

まぁ、部長もサイラオーグ氏も、ロキの造反で戦った傑物だ。既に実戦経験なら、半端なプロプレイヤーより質で上回っているだろう。注目度も高いわけだ。

「……万が一禍の団が仕掛けてきても、返り討ちにもできるでしょうね」

「案外そういう備えも含めてかもしれないわね。各勢力の重鎮も直接観戦するし、当然と言えば当然の配慮かしら」

カズヒ姉さんやリヴァ先生がそっちを考察するけど、まあそこはいいだろう。

対テロに優先されて値段も高騰しているフェニックスの涙も、双方に一つずつ提供されるそうだ。

まず間違いなくバアル側は王（キング）に使用するだろう。ただ部長達はアーシアがいるから、勝てば使用せずに済ませられるのはアドバンテージか。

『そして本試合は特殊ルール！　その中でもメジャーなルールである、ダイスフィギュアが採用されます！』

「ダイスって……さいころ？」

どういうルールなのか分からず、俺はちょっと首を傾げる。
レーティングゲームはいわば集団武術競技と言ってもいい。
それにサイコロって……何するんだ？
「あ～なるほど、これはリアスさん達、手古摺るかも」
と、インガ姉ちゃんが唸っている。
俺含めて視線がインガ姉ちゃんに集中して、インガ姉ちゃんは苦笑した。
「簡単に言うと、ダイスフィギュアは王（キング）二人が転がしたサイコロの出目の合計数以内の駒価値しか出れないゲームなんだ」
あ、サイコロはそういうことに使うのか。
そしてインガ姉ちゃんが言った通りのルールを司会が説明する。
「……となると、イッセーが出るには最低でも合計八以上にならないと出れないわけね。もっとも、相手の兵士も駒価値七が一人だから、さほどの差にはならない……けど」
鋭い目でカズヒ姉さんがそこまで言うと、リヴァ先生も頷いた。
「逆に言うと、多くて四人が限界な以上、回復担当のアーシアさんは試合に出して回復担当っていうにはリスクが大きいわね」
あ、なるほど。確かにな。
総力戦なら部長とアーシアをカバーするフォーメーションをとれば持久戦で有利だけど、この試合の場合人数を絞らざるを得ないから、アーシアのカバー担当を用意しにくいのか。以下にアーシアの回避力がシャレにならないとはいえ、これではリスクが上回る。……万が一同伴したメンバーがやられたら、倒される以外の選択肢がなくなるからなぁ。
つまり試合で大ダメージを負うと、即時回復ができないから削り倒されるリスクが大きくなるわけだな。
「最大のアドバンテージが生かしづらいってことか。……勝ちさえすれば回復できるから、まだましだけどな」
「でも相手からすれば、試合中は回復されないってわけだし、メンタル的には相手有利になりそうね」
「……もしかして、私が一番戦術的な理解が低いのかな」

俺と鶴羽もすぐ理解して、一歩遅れたインガ姉ちゃんがちょっと引きつる。
いや、俺も鶴羽もザイアで戦術とか講義は受けてるからな、一応。
人間界の戦争も経験し、暗部として数多くの任務に出ているカズヒ姉さんや、人生経験の年季が違うリヴァ先生と比べるのもあれだしな。
「そこはほら、全部ディオドラの所為にしておきなさい」
「別にディオドラに気が引けるわけじゃないけど、それですましてばかりってのもなぁ……」
カズヒ姉さんの励ましに、インガ姉ちゃんはそう言って首を横に振る。
とはいえインガ姉ちゃん、メイド業務もあるからなぁ……。
「……まぁ、これなら短い試合が連続するから、子供の観客にも優しいし、一般市民にも受けがいいのかもね」
「逆に受けが悪いのって何があるの？」
気を取り直したインガ姉ちゃんに鶴羽が聞くけど、本当に何があるんだろうか。
「そこはほら、やっぱり玄人好みなルールとかじゃない？　直接戦闘じゃなくて別のところに勝敗があるゲームとか」
リヴァ先生がそんな感じで意見すると、逆にインガ姉ちゃんは首を横に振った。
「大抵のゲームは直接王を打倒すればやりようはあるから、そういうのはまだマシだよ。どっちかというと、文字通り丸一日かかるワンデイ・ロング・ウォーとかの方が酷いね」
……たまげたな。
「なんだよ、その観客にも参加者にも優しくない特殊ルール」
「まぁ、レーティングゲームって元々軍事演習を兼ねていたから……もっと長いのがあってもおかしくないわね」
引き気味の俺とは逆に、カズヒ姉さんは感心していた。
まぁ確かに、元々レーティングゲームってそういう要素もあったんだったな。なら長丁場のルールがあってもおかしくないのか。

更に王の駒価値は対戦相手との比較など、様々な条件で一々算出されるとか説明があって、今回の王の価値が発表される。
部長が１０で、サイラオーグ氏が１２だった。
「……結局どっちも一人でしか出れないじゃない。あの二人、このルールだと不利だわ」
「というか、リアスさんもそこまで大きいのね。言ったら悪いけど、グレモリー眷属全体で見ると中堅レベルだった気がするけど」
「いや、純血上級悪魔の本家の跡取りよ？　流石にそれは見積もり低いんじゃない？」
カズヒ姉さんやらリヴァ先生やら鶴羽がそれぞれ感想を言っていると、ついに試合がスタートされる。
一回目の出目は合計が3か。さてどうなる？
「……サポートタイプのアーシアとギャスパーは論外。となるとゼノヴィアと祐斗だけど、ゼノヴィアのエクス・デュランダルは隠し玉だから、できればもっと大一番で使いたい。となると消去法で祐斗になるわね」
「そういう意味だと木場君って、強くて便利って意味だとイッセー君以上に使い勝手がいいよね。なんていうか、裏エース？」
「言い得て妙ね。駒価値が高ければ強いというわけでもない。悪魔の駒（イーヴィル・ピース）も奥が深いじゃない」
「まぁ、チェスって頭使わないと勝てない競技だしね。悪魔の駒も総量は決まってるから、強い人ばっかり集められるわけじゃないし」
カズヒ姉さんとインガ姉ちゃんが会話してるけど、間の俺はなんていえばいいんだろうか。
なんて思っている暇もなく、想定通り木場が選ばれ、サイラオーグ氏はベルーガ・フールカスとやらが出てきた。
聖魔剣による多様性で攻める木場に対し、ベルーガ・フールカスは愛馬との連携で食らいつく。
愛馬との連携は分身すら生まれるほどで、あの木場ですら食らいつかれ……いや―
「……相手が優勢ね」

「純血上級悪魔と元人間の転生悪魔、種族的な性能差がもろに出る……違うわね」
歴戦の猛者であるカズヒ姉さんと、人生経験豊富なリヴァ先生が、かなり真剣な表情で見入っている。
そして、ベルーガ・フールカスは確かに有利に立ち回っていた。
少しずつ、少しずつだが木場の傷が増えている。
『……見事である。だが、私とアルトブラウも鍛え直しているのでな。この調子ならかろうじて私が削りきれる！』
『恐れ入りました。馬との連携もさることながら、基礎の地力が厚みを増している……』
あの木場が、技術で凌がれている。
聖魔剣という手札と武器のアドバンテージがなければ、やられていた可能性だってあるほどだ。
『一撃の威力ではあなたは倒せない。……ゼノヴィアのことは笑えない……こちらも伏札を切らせてもらいます！』
その瞬間、木場は聖魔剣ではなく聖剣を、騎士団と共に構える
その光景に、ベルーガ・フールカスは明確に動揺した。
『馬鹿な……禁手を作り変えたのか、この土壇場で!?』
『いいえ、聖剣創造の亜種禁手、聖覇（グローリィ・ドラグ・トルーパー）の龍騎士団です』
まぁ、確実に面食らうだろう。
木場は聖剣因子を同胞の残留思念ごと取り込むことで、聖と魔の力を融合させた聖魔剣を作り出す禁手に目覚めた。
その副産物として木場は事実上聖剣創造を後天的に会得したようなものだったが、聖魔剣が完全上位互換であるため、京都でゼノヴィアがデュランダルを持ってない時ぐらいにしか出番がなかった。
だが木場は己を鍛え直し、聖剣創造の亜種禁手まで目覚めたのだ。
……ちなみに三叉成駒（トリアイナ）状態の本気イッセーに聖剣だけで模擬戦をするという荒療治だ。だから聖剣の騎士団を作る聖輝（ブレード・ナイトマス）の騎士団という通常禁手ではなく、竜騎士の亜種禁手になったんだろう。自殺志願者じみた荒療治の価値はあった。
映像には、全身を傷だらけにしながらもベルーガを捉えた木場の姿

があった。
『見事……っ』
……初戦から凄い激戦だったが、これが初戦なんだよなぁ。
俺は次のダイスが降られてメンツが選ばれるのをしり目に、ため息をついた。
「あの木場が、いきなり伏札を切ることになるなんてな」
あの亜種禁手は正真正銘の伏札だ。通常禁手は一つしか使えないし、木場の神器はあくまで魔剣創造だ。当然、相手は手札を想定する際に盲点になる。
その伏札をいきなり使わせるとは……。
「これが、サイラオーグ・バアル眷属か……」
「うわぁ、ノア・ベリアルとのゲームとは、比べものにならないぐらい強くなってる……」
俺とインガ姉ちゃんが感嘆していると、部長達は１０の出目に合わせて五の駒価値なロスヴァイセさんと小猫のペアで出陣。
対するバアル側は化け物じみた大男のガンドラ・バラムと、騎士であるリーバン・クロセルを選んだらしい。
「……嘗てのゲーム映像とは比べ物にならない強さね。祐斗に伏札まで使わせた以上、他のメンバーも強さが比較にならないはずよ……っ」
「戻ってから回復のアドバンテージが無かったら、リアスさん達の敗北は確定ね」
「それだって体力の回復まではできないでしょ？　これって、もしかしてスタミナの部分で削り殺される可能性があるんじゃないの？」
カズヒ姉さんやリヴァ先生や鶴羽がそう話し合う中、試合は白熱していっている。
極めて頑丈なガンドラは小猫の仙術打撃やロスヴァイセさんの魔法攻撃すらしぶとく耐え、そのすきをついてリーバン・クロセルは神器による重力攻撃を仕掛ける……が、そこで一瞬の読み合いが行われた。
ギャスパーのこともあってスパッと対策として閃光を放つが、それ

を読んだリーバンの魔法製鏡が逆に光をロスヴァイセさんにぶつけ……そこまで読めていたロスヴァイセさんの転移魔法の光で、ガンドラを重力の影響で動きを封じる。

……相手が対策ぐらい持っていることを踏まえ、よしんば対策できなければ、目をくらませたリーバンが小猫の打撃を食らう距離にきてしまう。

ならこの戦いは、部長達が勝つか……？

そう思う中、戦術で弱ったガンドラごと、リーバンをロスヴァイセさんの魔法フルバーストが襲う。

……粉塵が包まれているが、どうなった……？

『油断すんなって……言っただろ？』

そこにいたのは、血まみれかつ腕がへし折れている様子のリーバンただ一人。

思わずガンドラを探そうとしてしまった二人は、リーバンの視界に残ってしまい重力の束縛を食らってしまう。

そしてその瞬間、残った粉塵を振り払って血まみれのガンドラが小猫を殴り飛ばした。

『小猫さん!?　この―』

そしてロスヴァイセさんは魔法攻撃を放とうとして―

「あ、馬鹿後ろ！」

聞こえないのは当然だが、例え聞こえていても鶴羽の声は間に合わない。

ロスヴァイセさんの腹部から、剣の切っ先が生えた。

『悪いな。横合いからの策に絡めとられたんで、反射レベルで防御魔法を使えるように戦いこんでるんだ。そして、策にはめたと思わせる為の偽装魔法も習得してる』

負傷こそしているが、血まみれでもなければ骨も折れてないリーバンが、ガンドラに気を取られたロスヴァイセさんを背中から貫いていた。

『部長……お役に立てなくて……ごめんなさい……っ』

『……まさか、魔法で私が……嵌められるなんて……』

転移の光に包まれてリタイアする二人を見送りながら、リーバンの魔法でリタイアにならない程度の重傷止まりの二人が静かに呼吸を整える。
『我らの敗北は、主の汚名』
『敗北で失ったパイプは、この戦いで取り戻すのさ……っ』
これが、サイラオーグ、バアル眷属……っ

冥革動乱編　第四十一話　死闘連発（一部除く）

和地Ｓｉｄｅ

「お、終わった？　終わった？」
「終わったから。なんかよく分からない理由で、イッセー君が吹っ飛ばしたから」
インガ姉ちゃんからお墨付きをもらって、俺は顔を隠していた両手を外す。
イッセーが出れる合計８に対し、バアル眷属が「乳技対策」とうたって駒価値さんの僧侶である、コリアナとかいうお姉さんを出してきた。
効果があれば負けようが勝とうが名が上がりそうなそれに対し、挑発に「酷い嵌め手をサイラオーグはしないだろう」と、イッセーが乗って……ストリップだ。
乳語翻訳（パイリンガル）はそもそも脱ぐ個所を言うだけで意味がなく、変態は脱いでいく女性を強引に全裸にすることを望まない。脱いだら終わりだが脱ぐまでは時間を稼げる、恐ろしい作戦だった。
でも、脱ぎ終わって吹っ飛ばした様子ではなさそうだな。
「ストリップは男の視覚的影響を与えるけど、女が脱ぐ際の実用性とは異なるのよ。勉強不足がコリアナの敗因ね」
「なんで、ストリップの流れに詳しいの？」
カズヒ姉さんの解説に、内容ではなく説明できることに戦慄しているリヴァ先生が新鮮だった。
「ストリートチルドレン時代に、そんな方法で金を稼いでいたのか？
……言っててなんだけど本当にやりそうで怖い」
「そうだとしてもメンタル絶対削れないから、まじでありそうなのが

怖いわね」
俺と鶴羽は遠い目をしているけど、鶴羽との間にすごい温度差を感じる。
惚れている男の俺の方がダメージでかいはずなのに、鶴羽の方が深刻度が上に思えるのはなんでだろう？
「あ、次の試合始まるよ」
と、その手のネタにかなり強いインガ姉ちゃんが次の流れを指摘する。
次のダイスの目は合計8。部長達はゼノヴィアとギャスパーを出し、バアル側は戦車のラードラ・ブネと僧侶のミスティータ・サブノックを出した。
どうも二人とも断絶しながらも人間と混ざったりで残っていた家柄らしい。先生は大王派に皮肉度満載の説明をして、一応大王派よりのディハウザー氏も特に怒らず認めていた。
立ち位置が大王派でも、内心は違うということなんだろう。
そしてラードラはブネ家でもごく一部の者しかできなかったというドラゴン化で大暴れだ。サイラオーグ・バアル眷属の鍛えられ具合は、ノアに負けたことで更に洗練されているようだ。
そしてギャスパーの霍乱にサポートされ、ゼノヴィアがエクス・デュランダルの全力を解放しようとした瞬間―
『聖剣よ、その力を閉じよ！』
―ミスティータが神器を使い、その力を封印する。
あれは異能（トリック・バニッシュ）の棺か。消耗が非常に激しい代わりに、ある程度の時間相手の力を封印する神器だ。
『聖剣使いとしての素質を封じきれなかったか。反動で……ダメージを与えたかったんだけどね』
『くそ……こんなところで、役立たずになるとはね』
ミスティータは消耗が激しいから当面戦闘はできないだろうが、それ以上にゼノヴィアが封印されるだろう。むしろ才能がありすぎて、バックファイヤを防げただけ優秀なんだがな。
そして戦闘激しくなり、ギャスパーはゼノヴィアを隠した上、更に

自分用のイッセーの血を使ってどうしようもない状態で、死力を尽くして足止めを敢行している。
……正直見ていて痛々しい。
相手も覚悟に応じて全力で仕掛けているからこそ、見るも無残になっているといってもいい。
……ギャスパー、精神的な成長は嬉しい。嬉しいけど、これはきつい。
『何が……起きても……諦めない』
意識も半ば失いながら、それでもギャスパーは立っていた。
その光景に、非難の声も上がらずギャスパー日する敬意が満ちる。
『これ以上はあまりにむごいか。この一撃で、全力で打ち倒―』
『―そうはいかない』
ゼノヴィア、解呪されたのか……！
『ふがいない。こんな神器如きに封印される、私の弱さがふがいない……だからこそ！』
『させるか、例え死んでも―！』
その瞬間、ミスティータの時間が停止する。
ギャスパー、お前、自力で―
『時間停止!?　意識もなく―』
『お前達は、ギャスパーに負けたんだぁあああああ！』
そしてデュランダルのオーラが二人を包み―
『……なっ』
―いや、オーラの量が明らかに少ない。
『グレモリー眷属の僧侶、バアル眷属の僧侶、リタイア』
その審判の判定が、すべてを決めた。
既にゼノヴィアには、少しだけだが封印の呪詛が再開されていた。
野郎、まさか停止されているのに封印を!?
『ミスティータは、自身にかけられた停止を本能で封印し、残滓でお前の力を封じた』
血まみれのラードナは、そう告げながら息を大きく吸い込む。
ゼノヴィアの封印はすぐに消えていく。

だが、時間が足りない……っ
『言い返そう。貴様達は……ミスティータに負けたのだっ!!』
そして絶大な炎がゼノヴィアを包み込んだ。
『グレモリー眷属の騎士、リタイア』
……壮絶な、壮絶な戦いすぎるだろ……っ

そんな壮絶な戦いに感化されたからか、合計9による女王同士の戦いは熾烈だった。
どちらも絶大な異能をもって食らいつくが、朱乃さんが雷光を全力で放った瞬間、相手が一枚上を行く。
『呑み込め、『穴(ホール)!』』
アバドン家の特性を使った、バアルの女王であるくいーシャ・アバドン。
更に器用に光の特性だけを引き出して、朱乃さんを撃破する。
……全体的には、サイラオーグ・バアル眷属が有利か。
残っているメンバーは未出場のサイラオーグ氏と兵士以外が全員満身創痍だが、逆にグレモリー眷属は殆どが撃破されている。
……アーシアの回復というアドバンテージを殆ど使えていない。これほどのものか、バアル眷属……っ
「部長達とバアル眷属の力量は、決して開いていないわ。地力は若干劣っているけど、異能の種類を含めた総合力はやや上。……だけど」
「意識の違いが出てきてるわね。相手は例え死んでも相手を道連れにする意識できているから、地力と相まって粘り強くて牙が突き刺さるってところかしら」
相も変わらずカズヒ姉さんとリヴァ先生の解説が納得者だ。
「……あ〜。リアスさん達、地力で明確に上回っているか、油断気味な格上との戦いが多いからなぁ」
「実力が伯仲していて、死んでも一矢報いるぐらいの相手には慣れて

ないってことね。死兵は相手にするとまずいって、ザイアで教えられたことを心から理解したわ」
インガ姉ちゃんと鶴羽も、サイラオーグ・バアル眷属の戦いぶりに戦慄している。
総合力、才覚なら部長達が上だろう。鍛錬も研究も余念がないし、アドバンテージの相性もあって、互角ではあるが若干上だ。
それも文字通りの死ぬ気で。それに引っ張られて、想定以上に食らっている。
……今まで戦ってきた相手とは、ゲームであることを踏まえても全く違う手合いだ。人っていうのはどうしても、未知の相手には一手遅れるからな。
これが、バアル眷属か……。
既にダイスの合計は出てきて、寄りにもよってサイラオーグ・バアルが出れる12。
逆に部長達はかなり揉めている印象があるけど……!?
「……これは、イッセーくんは相当反論したわね。一対一で勝てるのなんて、イッセー(彼)ぐらいしかいないもの」
「……犠牲(サクリファイス)ができてこそ、ゲームで本領を発揮できる。でもこれ―」
「完璧にカミカゼのノリでしょ。ってか、本気……っ？」
リヴァ先生も、インガ姉ちゃんも、鶴羽も息を呑む。
今回グレモリー側から出てきたのは、木場とアーシアの二人……っ
「……覚悟を決めてるわね。二人とも」
「ああ、寝た子を起こしたな、バアル眷属……っ」
カズヒ姉さんと一緒に固唾を呑む中、ついにサイラオーグ・バアルが参戦した。

冥革動乱編　第四十二話　戦慄と衝撃

アザゼルＳｉｄｅ

「これは意外な展開になってきました！　流れから言って、おっぱいドラゴンである一誠選手が出てくるものだとばかり思っていましたが―」
「そうですね。リアス・グレモリー選手は、犠牲（サクリファイス）を好まない印象がありましたが―」
司会のガミジンや、皇帝ベリアルが怪訝な表情をするのも無理はねえ。
この出目なら、イッセーに木場かアーシアを出すのがリアスの最適解だろうからな。
だが、俺は何となく分かったな。
「コーチングの時に、イッセー達にはゲームの心得として「仲間を見捨てる覚悟」については話していた。二人の決意に、イッセーとリアスが折れたってところだろうな」
あの二人は特に気にするだろう。ましてアーシアは、二人にとって守る対象だ。自分達を優先して、アーシアが痛い思いをすることは望まないだろう。
だが、木場とアーシアが決意を決めて、此処に挑んだ。
……とはいえ、アーシアの回復というアドバンテージを捨てるのは中々できない決断だ。
そこまでしてでもこの戦いで、可能な限りサイラオーグを削るってことか。それだけの価値がある相手ではあるがな。
リアスの方も隠し玉がある感じだったが、それがあることも踏まえてなのか？

俺がその辺りを考えていると、サイラオーグは退治する木場とアーシアを、少しの間だけ怪訝な表情で見た。
最大のアドバンテージを此処で切ることに疑念を持ったんだろうな。自分を少しでも削るには必須だが、それでどうにかできるアドバンテージなのかは俺も疑問だしな。
『……リアスの策か？』
『はい、お姉さまも納得してくれました』
『僕達二人で、貴方を最高の状態でイッセー君の元に送り届けさせてもらいます』
二人の決意を込めた目と意志に、サイラオーグは壮絶な笑みで答える。
『ならば深くは尋ねん。……俺の全力をもって応えよう』
その瞬間、サイラオーグにかけられていた封印が説かれ、全身を薄いオーラのようなものが包み込む。
なんだ？　魔力……ではないな。
「おぉーっと！　サイラオーグ選手を包み込むあれはいったいなんだぁ!?」
「雰囲気としては小猫が仙術を使うときに纏っている気に近いが……。サイラオーグ選手が仙術を習得しているとは思えないな」
司会や俺が疑念の言葉を言うのを待ってから、隣のディハウザーは静かに頷いた。
「ええ、彼は仙術は使えません。あれは極限まで己の肉体を鍛え上げたがゆえに、可視化されるまでに高められた彼の生命エネルギーそのもの……いわば、闘気です」
どこのジャン○漫画だよ。かめはめ○でも出せそうだな、オイ。
だがそんなトンチキな真似をやらかした以上、今のあいつはイッセーとの模擬戦とは比較にもならんだろうな。
全身を生命エネルギーが包んでいるなら、攻防ともに大幅に上乗せされてるだろう。それこそ、下手な神器の全身鎧型禁手を上回る。
威力より技術の木場や、直接戦闘型じゃないアーシアでどうにか―
『ではこちらから行くぞ！』

―んなことを持ってる間に、サイラオーグの奴は真っ向から突撃をかけてきやがった。
素早く二人同時に潰すつもりか、すれ違いざまのラリアット。
だが、木場のアーシアもそれを素早く躱した。
木場はサイラオーグに何とかついていける速度で回避するが、アーシアに至っては軽く伏せるという最小限の動きで回避したな。
……ディハウザーも面食らってるぞ。
「アーシア選手は凄まじいですね。初見で全力のサイラオーグ選手の動きを見切っています。身体能力で追いつければ、真っ向から渡り合うこともできたでしょう」
……ディック・ドーマクの奴、アーシアをどこに連れて行くつもりだったんだ？
「……おっと、此処でアーシア選手に指導をしたという、ディック・ドーマクさんが観客に居られるようです。ご意見を伺ってみましょ……うぅっ!?」
いろんな情報量があったが、視界のガウドが面食らう展開になってきたな。
なんとあの二人、アーシアをサイラオーグの前に出したうえで、木場がアーシア越しに聖魔剣で突きかかる動きだ。
アーシアはサイラオーグの打撃を回避しながら、木場の刺突すら回避している。木場が刺突より切断を得意にしていると踏まえても凄いな。
しかもアーシアが壁になっている所為で、サイラオーグは反応がどうしても遅れてやがる。爪で肌をひっかいたようなレベルだが、聖なるオーラがあるならこの小さな負傷も地味に効いてくるぞ。
「なんと凄まじい攻防！　何より恐るべきは、味方の攻撃も回避しながらサイラオーグ選手の打撃を回避し続けるアーシア選手です！あ、ここで中継がディックさんと繋がりました。……指導者としてご意見を伺いたいです！」
『そうですね。最低限として治療中に妨害する敵と流れ弾を同時に捌くレベルにまでは高めておりました。その後はほぼ通信教育ですが、

彼女の人を癒すことにかける熱意があってこそです』
冷静に眼鏡をキラーンさせるな。
あれどう考えても、アーシアが一番負担が大きいだろ。全部の攻撃完全に回避してるのが信じられん。
『難易度が高いと思われがちですが、実戦において攻撃とはどこから飛んでくるか分からず、また流れ弾といった殺気の無いものもある。競技試合には競技試合ゆえの深みや難しさがあるでしょうが、少なくとも今回のルールは私の指導方法からすれば比較的やりやすいものだといえるでしょう』
「なるほど！　確かに人数が絞られるダイス・フィギュアは、そういう意味では気にする対象が限られる分、本領を発揮できるということですね！」
ディックの奴、アーシア限定とはいえ俺達より解説してるんじゃねえか？
いや、アーシア以外なら俺達だって―
『とはいえ、このままだとサイラオーグ選手が最終的に競り勝ちますね』
―なんだとぉ!?
ディックの奴、完全にこの試合の解説担当になって着てやがる。
「というと？　非常に微細とはいえ、確実にダメージを受けているのはサイラオーグ選手の方に思えますが……？」
『いえ、負傷と難しい攻防をしながらも、サイラオーグ選手の心身の消耗はごく僅か。むしろ削っている実感を感じてない木場選手や、何より前後から直撃が敗北必須の攻撃を回避し続けるアーシア（彼女）の心身の消耗速度は、負傷分を加味してもサイラオーグ選手より遥かに多いですね』
え、映像越しに心身の消耗速度の差を見切ったってのか!?
「映像越しにそこまでのことが分かるとは、プロのゲーム解説者でも中々できることではないですね」
『いえいえ。戦闘中に回復の取捨選択を行うのなら、深手に繋がり易い心身の消耗を把握するべきですから』

ディハウザーにまで褒められる解説具合。正直ちょっと驚いたな。
しかもそのディックが、このままなら確実に勝てるといわんばかりというサイラオーグは凄まじいな。
『あの肉体以上の鋼の精神、カズヒ殿にも匹敵……いえ、今はいない人物では駄目ですね』
……カズヒとサイラオーグがタイマン張ったらどっちが勝つんだろうな。
仮面ライダーにならないんならカズヒが不利ではある。星辰光がとにかく邪悪特化だから、どう見ても邪悪なんて言葉が似合わないサイラオーグには効果が薄い。
だがあいつのメンタルは凄まじいからな。心身の強靭さでカズヒがサイラオーグと互角なら、サイラオーグの身体能力からみてメンタルはカズヒ有利って判断なわけだ。
だが、サイラオーグのメンタルが弱いってわけでもねえ。それが既に見えてきた。
十分近くの攻防で、目に見えて動きが悪くなってきたのはアーシアと木場の方だ。
特にアーシアの消耗が酷い。逆にサイラオーグは余裕だらけと言っても過言じゃねえ。
『悪いが、基礎体力というものは日々の積み重ねがものをいう。……あと一年基礎を鍛えていれば、話は変わったのだろう……がっ！』
その瞬間、サイラオーグの打撃がアーシアを吹き飛ばす。
反射で自分に回復をかけてしのいだが、これで一気に均衡が崩れたな。
木場も聖魔剣一本では無理と判断して、聖剣創造の禁手に切り替えた……が。
『如何に早くとも、こう脆くてはな』
『く……っ』
サイラオーグのポテンシャルが高すぎるな。真っ向からやりあえるのは、リアスのところじゃ鎧のイッセーぐらいだ。
これは……ここまでか？

『まだです！』
その瞬間、アーシアが広範囲に回復フィールドを展開する。
正気か？　あれではかけた消耗だって削れるはずだ。意味がない。
『……体力の消耗だけで良しとする気か？』
『……いいえ。最高の状態で、イッセーさんとお姉さまのところに貴方を届ける、その最後の手段です！』
サイラオーグにアーシアが吠える。
珍しいが……なるほど。
『……覚悟を、してもらいます』
『む？』
サイラオーグがアーシアに気を取られた一瞬だった。
木場が、一振りの聖魔剣を創造する。
一見すると、自分に強化を与えるタイプの聖魔剣だが―
『星極剣（サンライズ・アルティマ）……っ』
―そう思った瞬間、木場の肉体が爆ぜた。
瞬間的にアーシアの回復がかかるがゆえに問題ないが、そうでなければこの数秒で三回は死んでいる。
ありえねぇ……あれは!?
「基準値（アベレージ）Eに発動値（ドライブ）Aの疑似星辰光だと!?　そんな出力格差、使った瞬間に普通に死ぬ……っ」
だからか!?
『ええ、研究の果てに開発したはいいけれど、こんな代物なのでろくに使えないんです……よ！』
その瞬間、文字通り異常なレベルの出力格差で、木場はサイラオーグに切りかかる。
その聖魔剣の斬撃は、間違いなくサイラオーグの腕に深く食い込んだ。
ああ、そういうことか。
確かに負傷してもすぐ治る。だが、例外はある。
それは―
『……そういうことか!?』

サイラオーグが悟った瞬間、木場は切り飛ばしたサイラオーグの腕を、全力で蹴り飛ばす。
そしてそれを掴んだアーシアが、更に全力で後方に投げ飛ばした。
投げ飛ばされる腕が遠くに飛んだ時には、木場はアーシアに背中から抱き着かれ、背負う形になった。
『……あと数十秒、付き合ってもらいます』
『それまでは……倒れません！』
『見事だ。……フェニックスの涙を使わざるを得なくなったことも含め、その覚悟に敬意を払おう』
そしてサイラオーグは筋肉で出血を止め、腰を深く落とす。
『返礼だ。渾身の一撃をもらって逝け！』

『リアス・グレモリー選手の騎士（ナイト）と僧侶（ビショップ）、リタイア』

和地Ｓｉｄｅ

凄い、壮絶な戦いだ。
文字通り死力を振り絞るサイラオーグ・バアル眷属に、感化されたかのような木場とアーシアの奮戦。
そして、気丈にも耐えてリアス部長はダイスを振り、９が出たことでイッセーと相手の女王が戦場に転送される。
……そしてイッセーの奴、完璧にキレてるな。

「なんか、怖くない？」
比較的イッセーに慣れてない鶴羽は怪訝な表情止まりだけど、他のメンツは息を呑んでいる。
「……全く。これは試合だっていうのに誰も彼も」
カズヒ姉さんはため息交じりだけど、それでも真っ直ぐに映像を見る。
そして試合が始まった瞬間、決着はついた。
三叉成駒の騎士で反応されるより接近したイッセーが、戦車になっての打撃を放つ。
そして当たるより先に、リタイアの光に包まれた相手の女王が敗北した。
別の映像に映るサイラオーグ氏は、厳しい表情だった。
『俺が転送させてもらった。……殺す気だったようだったのでな』
『すいませんね。でも、我慢できなったんですよ』
強い目で、強い敵意と殺気すら浮かべて、イッセーはサイラオーグ氏に真っ向から向き直る。
『木場、ギャスパー、朱乃さん、小猫ちゃん、ロスヴァイセさん。……そしてアーシアを、試合とはいえぶちのめした相手に、無心で挑めるほど人間出来ちゃいないんです！』
『いい殺気だ。そんな表情もできるとはな……試合会場にいるすべての者に問いかけよう！』
声を張り上げるサイラオーグ氏は、周囲を見渡して更に続ける。
『これ以上、この男をルールで縛る意味を感じられん。俺は次の戦い、双方全メンバーによる総力戦を提案する!!』
おいおい、まじかよ。
「まぁ、ルールの都合上、このままだと余程のことがない限り、サイラオーグとイッセー君が激突することはないわね」
「あ、なるほど。それだとこの試合、観客の人達も楽しめないか」
リヴァ先生の発言に鶴羽が納得するけど、まあ確かにな。
連続で同じ人物を出せない以上、このままだといやでもリアス部長が削り殺される雰囲気が見えている。よしんばイッセーが出れると

きでも、１２なんて早々出てこないのは明白だ。
「……でも、総力戦だとリアスさん達の方が不利じゃない？　まだ人数が絞れる今のルールの方が勝ち目はあると思うけどなぁ」
「……とはいえ、部長もイッセーも乗るタイプでしょうしね。観客もそういった流れの方を好みそうだわ」
確かに、インガ姉ちゃんに答えるカズヒ姉さんの意見が答えになるだろう。
見えている戦いの流れより、このテンションでの最終決戦の方が、部長やイッセーもポテンシャルは出てくる。サイラオーグ・バアルも武人肌だから、イッセーと真っ向勝負が終わるまでは部長が倒されるリスクも減る。観客もそういったのに燃え上がっている。
となれば、だ。
『……運営からの判断がおりました。サイラオーグ選手の提案、リアス選手が受けるなら受諾するとのことです！』
司会の人の宣言に、観客が一斉に沸き立った。
そしてもちろん、此処で断る部長じゃない。
『構わないわ。サイラオーグ、決着を次の試合でつけましょう……！』
その宣言に会場が一斉に沸き立ち、そして最終決戦の火ぶたが切って落とされようとしていた。

―の前に、ちょっとだけ休憩時間だ。ちょうどトイレ休憩をはさむタイミングだった。
俺も急いでトイレを終えて、駆けだそうとしたその時だ。
「……いたわね、和っち」
……おいおい、冗談だろ。
聞き覚えのありすぎる声に反応して、俺が振り返ったその瞬間―
「和地！」

―しかも別の意味で聞きなれている声が響くと共に、空間が変化した。
それはレーティングゲームのフィールド技術を使ったと思われる、広大な空間。
「和地、どうやら最悪のパターンみたいね」
隣に張ってきたカズヒ姉さんが、俺の隣で鋭い視線を前に向ける。
ああ、俺もまったくもって想定外さ。
仕掛けてくる可能性は確かにあったが、こういう形でやってくれるか。
「……あ～、悪いな。気が緩んだタイミングでよ」
「やる気を入れ直していいわよ。……そのうえで、私が強くなったって証明して見せる！」
ベルナ、春っち。
……妙なところで気を使ったみたいだな、アーネとヴィールは！

冥革動乱編　第四十三話　表と裏の二つの決闘

アザゼルＳｉｄｅ

さて、トイレも終わったし、いいタイミングで試合もクライマックスだな。
「さぁ！　サイラオーグ選手の提案が受諾された結果、リアス・グレモリーＶＳサイラオーグ・バアルのレーティングゲームも最終決戦！　残ったメンバーによる総力戦となりましたぁあああ！」
司会が盛り上げていく中、フィールドでは眷属を率いるサイラオーグに向き合う、リアスとイッセーの姿があった。
『これが最後だが、まずは言わせてほしい。お前も妬けるほどにいい眷属をもったな、リアス』
『そっくりそのまま返すわ、サイラオーグ。文字通り命がけで使えてくれる、いい子に恵まれたわね』
サイラオーグとリアスがそう視線と言葉を交わし、お互いがお互いの眷属と向き合った。
そしてイッセーとサイラオーグが一歩ずつお互いに近寄る中、リアスに合わせて少しずつ離れるサイラオーグの眷属のうち、仮面をつけた兵士が一歩前に出る。
何故か名前も『兵士（ポーン）』にしているそいつは仮面をとったが、その瞬間、どんどん膨れ上がっていく……っていうかちょっと待て。
なんか黄金の獅子になったっていうか。あれ―ッ
「まさか、獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）か!?」
思わず立ち上がっちまったけど、いや驚くに決まってんだろ!?
「アザゼル総督？　彼をご存じなのですか？」
「獅子王の戦斧は神滅具（ロンギヌス）の一つ、ギリシャ神話の英雄ヘラクレスが挑

んだ十二の難行でも出てくる、ネメアの獅子の一体を封印した神器だ」
おいおい、大王派の連中はなんてモンを隠してるんだよ。
これ協定違反だろ、後で絶対追及してもらわないとな。
だが、とんでもないことになってきたぜ。
「本来は所有者に遠距離攻撃に対する加護を与える、大地すら割る斧なんだがな。肉体と一体化してネメアの獅子を顕現する亜種禁手……ってところか？」
もしくは亜種発現って可能性だな。
だが、サイラオーグは静かに首を振った。
『いや、俺が宿主を見つけた時は、謎の集団に殺された後だった。……だがその時、獅子王の戦斧は自らを獅子に変化させて、主の仇を討ったのだ。……母が獅子に縁あるウァプラの者であったが故、縁を感じ俺はレグルスを誘い、我が眷属とした』
「おいおいどんだけイレギュラーだらけなんだよ、この世代の神滅具は！　あとでそいつを俺のところに連れてこい！」
思わず研究者の言葉が出ちまったが、これはリアスまずいんじゃねえか？
なんたって、神滅具そのものに、更にサイラオーグの眷属が三人だ。
レグルス以外は疲弊しているが、それでも試合に出ずにいたことで体力は相応に回復しているはず。連携でこられればリアスはしのぎ切れないし、フェニックスの涙を使われる可能性だって―
『……サイラオーグ。さっき貴方は私の眷属を褒めてくれていたけれど、実は私、あの子達に後ろめたい気持ちがあったのよ』
―その時、リアスがそう呟いた。
『イッセー達が頑張って成果を上げる中、私は目立って活躍は出来ていなかったわ。それにイッセーは禍の団から「ドラゴンの人を引き付ける才に特化している」とまで言われているし、私自身もイッセーがいたからこそこの子達は集まったと、そんな風に卑下していたことがあるの』
そう呟くリアスは、だが卑下している風には見えない。

『……だが、お前は乗り越えた風に見えるが？』
『いいえ。乗り越えたのはこの試合に臨む直前よ』
サイラオーグにそう答えながら、リアスは苦笑すら浮かべている。
『戦術や強さは努力もあればある程度は高められる。だけど赤龍帝と引き合い、素晴らしい眷属達と巡り合ったその才覚は天性のもの。そういったうえで、イッセー（この子）達は私の財産だと、ライザーが言ってくれて……漸く少し、吹っ切れたわ』
そういうリアスは自嘲気味だったが、だが真っ直ぐにレグルス達に向き直った。
『私が私の都合で拒否し、横紙破りじみた真似で婚約を破棄したライザーが、それでもそう断言してくれている。そしてあの子達は私以上に、私の勝利を望んで尽力してくれた。……だからこそ、私はこの力を恥じることもなくなったわ』
そう言いながら、リアスはどこからかサークレットを取り出して、そして自分の頭に乗せる。
『……死力を尽くしてイッセーに向き合いなさい、サイラオーグ。……あなたの眷属は、私が一人で片づける……っ』
『そうはいかない。貴殿にフェニックスの涙を使わせる。それがサイラオーグ様の後顧の憂いを断つ唯一の方法だ！』
そう吠えながら、レグルスは突貫する。
遠距離攻撃に耐性を持ち、更に接近戦は優秀で間違いないのが獅子王の戦斧だ。
リアスははっきり言って、不利―

『創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星』

「――え？」
思わず声が出たぞ!?

和地Ｓｉｄｅ

いろんな意味で最悪だな、おい。
この空間から見て、レーティングゲームを参考にした空間なのは分かる。
そしてカズヒ姉さんがたまたま近くに飛び込んでくれなかったら、俺が一人で巻き込まれていたわけだ。
そして、俺と因縁があるベルナと春っちが、こうして俺の相手をする形になっている。
どう考えても、アーネかヴィールが外連味を増した判断を下したということでいいだろう。
そして、それはつまり……っ
「……禍の団は、ヴァーリに喧嘩を売ってでもこの試合を邪魔したいってわけか」
粒揃いとはいえ数人程度のチームなら、主神達とまとめて相手しても問題ないって判断したのか。
と思ったが、ベルナは肩をすくめながら両手まで広げる。
「いや？　アタシは詳しく知らねえが、試合の邪魔はしないらしいぜ？」
「ってことは俺をピンポイントに狙ってるのかよ!?」
思わずツッコんだけど、カズヒ姉さんはため息をついた。

「そうじゃないでしょうね。おそらくだけど、テロを仕掛けるのは試合終了後なんじゃないかしら？」
あ、そういうことか。
試合を邪魔したら許さないと言われたのなら、試合が終わってからしかければいいや……ってんなわけあるか！
なんだその、一休さんの「このはし渡るべからず」みたいなノリは！　現実でやったら張り倒されるわ！
「……それでヴァーリが納得するとは思えないんだがな」
「……まぁ、ヴィール様も想定済みよ」
春っちは俺の言葉に、切羽詰まっているとしか思えない表情で拳を構える。
「ただ、バアルとグレモリーの連中はしっかり治療もする予定だもの。それでなお納得しないのなら……まとめて潰せばいいだけでしょう？」
凄い自信だな、ヴィールの奴。
ヴァーリを無駄に敵に回すと、被害が甚大になりかねないだろうに。奴は既に主神でも舐めてかかれないような化け物だぞ。
……いや、ちょっと待て。
部長やサイラオーグ氏の眷属を治療もする？
思わず目を見開くと、カズヒ姉さんも舌打ちを小さくしていた。
「……内通者がいるのは当然だけれど、会場内にいるっていうの!?」
「冗談だろ!?　流石に本格的な部分ぐらい、裏取り調査はしてるだろ!?　どうやってすり抜けた!?」
いやいやいや。どうやってだよ。
警戒だって厳重なはずだ。すり抜けられるわけが―
「それはそうよ。反乱を起こしてからそいつに連絡したの、一昨日だけだし。英雄派のテロでターゲットに選ばれた時すらしてないもの」
なんだとぉ!?
た、確かにそれなら疑いは晴れる。普通に考えて、内通している奴をテロの標的にしたがるとは思えない。
少なくとも、まともなやつなら事前にさせないように釘を刺すはず

だ。
……まともじゃないな、どいつもこいつも。
「……で、お前らは俺達の足止めか？」
それだけ警戒してくれていると考えたいが、主神や警備主任とかを優先的にした方がいいだろう。
既にそれだけの準備ができていると思うべきか。
だが、春っちは静かに首を横に振った。
「いいえ。これは私に与えられた最後のチャンスよ」
そう言いながら、春っちは据わった眼で俺を見据える。
静かに右腕から炎を巻き上げ、そして一歩前に出る。
「決着をつけるよう言われてるの。そして、私もあなたに強くなったことを証明する……っ」
「……悪い。何が理由か思い至らないが、それだけのことをしたんだろうな」
子供の頃って色々やらかすからな。未熟なのは当然だが、場合によっては笑ってすまされないことだってある。
いじめられていたのを助けたことはある。ザイアに行く前に、いじめっ子共があほやらかさない様、それなりに立ち回ったりもした。釘は刺したしいろんな方面に連絡したり、できる範囲内で頑張ったと思う。
……だけど、本当に小さい頃の話だ。俺だって、あの頃は今より遥かに未熟だし不足もある。
きっと何か悪いことをしてしまったんだろう。もしそれが今の春っちに繋がっているなら、責任を取るべきだ。
今にも泣きだしそうな春っちに対し、俺は拳を構え―
「氷水沈静（サファイア・スタン）」
―その瞬間、不意打ちの魔術で俺は戦闘不能になった。
「えええええええ!?」
訳が分からず絶叫する、ベルナと春っちの声を耳にしながら、俺は崩れ落ちた。
……いや、ちょっと待って。

「……なに、すんの……カズヒ、姉さ……ん……？」
いや、本当に何してくれてんだこの人。
春っちもベルナも面食らってる。そりゃそうだろ。
むしろ流れ的に、俺が一騎打ちになる雰囲気だったろ。
いや、暗部組織のダーティジョブ担当なカズヒ姉さんに、その辺を理解を求めても納得はしない。多少は空気を読んでくれるけど、あくまで多少だ。
でもさぁ、これ俺がどうにかするべき問題だよなぁ!?
「……どういうつもり？　私は、和っちに――」
「――自分を見失って迷走している女を殴り起こすのなら、私の方が向いているってだけよ」
春っちの言葉を遮って、カズヒ姉さんはロザリオを取り出す。
「……今のあんたに和地をぶつけても、まとまる物もまとまらない。和地と真っ向から戦いたいなら、まずはその寝ぼけた頭をしゃっきりさせなさい」
切れ味鋭いことを言いながら、カズヒ姉さんは一歩前に出る。
いやちょっと待った。まさか生身でやるのか!?
「正気かよあんた？　さっさと仮面ライダーに――」
「そこのずぶずぶ引きずられた系のなんちゃって不良！」
「――はぁ!?」
ベルナにまで一括すると、カズヒ姉さんは顎で俺の方を示してきた。
「付き合いできたなら和地の面倒を見て頂戴。宝石魔術でごり押ししたから、二十分はろくに動けないわ」
「雑なやり方しやがったな、オイ!?」
盛大にツッコミを入れながら、でも律儀にベルナはこっちに方に来てくれた。
あ、やっぱ良い奴だこいつ。
「……テロリストなんて付き合いでやる物じゃないわ。地獄まで付き合うなら、相応の覚悟を持ってしなさい」
カズヒ姉さんは横目でベルナにそう言うと、一歩一歩前に出る。

「なんなのよ。私は、和っちに、強くなったって……証明―」
「笑わせないで、あんたは弱い」
真っ向から、激高しかけている春っちの言葉を、カズヒ姉さんはぶった切る。
そしてフォースライザーを装着することなく、真っ向から殴り掛かれる距離に向き合った。
「仮面ライダー(道間)にはならない。そんな必要もないわ」
「……いいわ。その挑発に乗ってあげる……っ」
お互いに、手を出せば当てられる距離にきて、そして真っ直ぐに目と目を見合って―
「貴女を倒せば、和っちも私が強くなったと認めるでしょうしね！」
「迷走しきってる女如きに、やられてあげるつもりはないわ」
―その瞬間、激戦が大規模になって発生した。

冥革動乱編　第四十四話　戦場を制す紅

Ｏｔｈｅｒ　ＳＩＤＥ

「ああ、綺羅星の如き宝玉よ。我が冠として輝く汝らに、果たして私は相応しいのか」
リアス・グレモリーの詠唱を、しかしバアル眷属は待ってはいない。
何をしてくるのか分からぬ上、相手はフェニックスの涙を一つ持っている。その懸念材料だけは阻止しなければならない。自分達が失ったアドバンテージを相手からも奪わなければ、主の戦いに懸念が残ってしまう。
「煌びやかな彩りが舞い踊る度に、我が心は届かぬその身を呪ってしまう」
剣が、拳が、爪が、炎が、魔法が。
あらゆる攻撃の猛攻は、リアス一人では決してしのげない。
瞬く間に十の攻撃が届き、そして獅子王の戦斧が持つ特性を生かすことで、リアスの攻撃はその本領を発揮しきれない。
「この輝ける財宝は、万の軍勢にも劣りはしない」
……なのに、リアスはフェニックスの涙を使わない。
「だが万の軍勢を率いし先達に、果たして我が身は追いつけるのか」
にも関わらず、リアスは全力での戦闘を続けている。
「悩むからこそ、そこに沈むことは許されぬ。誇りを掲げて高みに上がれ」
負傷があるにも関わらず、まるで何もないかのように戦闘が継続される。
「私の至宝が私を光と誇るのならば、私の道はただ一つ。我が至宝の輝きと共に、我が身よ輝き歌劇を歌え」
今ここに、紅の姫君は王冠を被り、戦場を制する星となる。

「超新星（メタルノヴァ）――侯爵彩れ（グレモリー・ジュエル）、紅玉の宝冠（クラウン）」
詠唱の完遂と共に、リアスの頭部を紅の紅玉がいくつも旋回し始める。
そして次の瞬間、バアル眷属の周囲を聖剣を持った騎士団が包囲した。
「馬鹿な!?」
「これば、木場祐斗が使った――」
そして驚愕する眷属達のうち、レグルスが一瞬だが動きを止める。
いな。止まったのは動きだけでなく思考も……どころか、時間そのものが止められた。
「これは吸血鬼の……レグルス!?」
龍騎士達にかく乱される仲間が気づくも、もう遅い。
接近したリアスは、目を光らせながら右手を添え――
「まずは一人ね」
「――ッ！　なに……が……っ!?」
気づいた時には、レグルスは痙攣しながら崩れ落ちる。
「如何に神器とはいえ、転生悪魔になった封印系神器なら生物でもある。体内の気を乱しに乱した以上、あとはゆっくり削ればいいだけね」
静かに宣言し、リアスは消滅の魔力だけでなく、雷光すらも身に纏う。
その光景に、バアル眷属は驚愕を隠せない。
純血悪魔のリアスが雷光を纏っていることも驚きだが、それまでの攻撃も異常に過ぎる。
聖剣創造の亜種禁手。時間を停止する邪眼。更に純血悪魔では習得が困難であろう、仙術すらも放っている。
普通に考えれば星辰光によるものなのだろうが、それにしても異常としか言いようがない。
星辰光は一人につき、原則一つ。九成和地やカズヒ・シチャースチエはプログライズキーを利用して性質を上乗せして変化させるが、それでも限度はある。和地はステータスを変化させるだけだし、カズヒ

も思念の招来という骨子を変えず性能を下げることと引き換えだ。
これは明らかに異常と言ってもいい。それでいて、星辰光であるのならば、一つの異能でしかないのは明白なのだ。
だからこそ、バアル眷属は全員が戦闘しながらも思考を回転させ―
「巻いていくわよ。私の縁は、眷属達だけじゃないのだから！」
そして、更なる異常は発生した。
リアスの姿が掻き消える。より厳密にいえば、目にもとまらぬ速度の高速移動がなされたのだ。
これにより、視界に映す必要があるリーバンの神器はほぼ無効化される。そして更に、すれ違いざまに振るわれる聖剣の斬撃は、明らかに威力を増していた。
「ぬぅおおおおおっ！」
ガンドラ・バラムが怪力で、周囲を破壊することでリアスの接近に干渉を試みる。
そしてそれを回避する為に飛び上がったリアスの姿で、ついにバアル眷属は異常性に混乱の境地に達した。
「なん……だとぉ!?」
リアスの高速移動の種は、シンプルなまでに騎乗物。
リアスは聖剣片手に二輪車に乗り、そして雷光を構えていた。
あり得ない。その混乱の中、しかし戦闘ができないがゆえに、思考に全力を傾けたレグルスだけはふと気づいた。
二輪車。そして眷属だけじゃないという言葉。その二つが繋がり、レグルスは遂に辿り着いた。
リアス・グレモリーが至った星辰光。単独でいくつもの神器や異能を操る、自分達を絶望させるに足るその星は。
「……異能再現、能力……！　眷属達だけでない、仲間達なら満たせる条件付きで、異能を再現する星辰光……っ」
その結論に、バアル眷属は自分達の行動が意味をなさない可能性に思い至った。
そう、この推測が真実なら、今までのリアスの異能に説明がつく。同時に、フェニックスの涙を使わせるという目的そのものが意味をな

さなくなる。
何故なら、これだけの異能を再現した以上、アーシア・アルジェントの癒しの力もまた再現可能であり―
「……その通り。正しくは異能再現能力・同調型」
―その絶望を、リアスは後押しする。
そう、同調という時間を必要とする代わりに、自分自身と星の力量に応じて異能を付属させることで再現する。それこそがリアス・グレモリーの星辰光。

リアス・グレモリー
侯爵彩れ、紅玉の宝冠（グレモリー・ジュエルクラウン）
基準値：C
発動値：A
収束性：B
拡散性：D
操縦性：D
付属性：AA
維持性：B
干渉性：D

驚異的な付属性により、同調した異能を付属させることで再現する。それがリアスの星の構造であり、リアス・グレモリーの星に最も相応しい特性。
それすなわち、優れた異能を持つ仲間と巡り合うことが出来てこそ、その本領を発揮することができる。
個人の武威でも頭脳でもなく、ある種の天性の素質である巡り合

い。人の和によってこそ本領を発揮する星辰光。
そして、リアスはかすり傷をアーシアの力で癒し―
「それと、赤龍帝の力は流石に無理だったから、代わりにこれを借りているの」
―聖魔剣と共にアスカロンを振りかざし、リアスは突貫し制圧する。

『サイラオーグ・バアルの騎士一名、戦車二名、兵士一名、リタイア』

今ここに、紅の滅殺姫（クリムゾン・ルイン・プリンセス）は、巡り合う絆を力に変える女傑として、新たに羽ばたいた。

イッセーＳｉｄｅ

ありがとうございます、部長。
仲間の仇を、倒れた皆の悔しさを、拭い去ってくれて感謝してます。
だからこそ―
「今度は、俺の番だぁあああああ!!」
「来るがいい、兵藤一誠っ！」
俺とサイラオーグさんの戦いは、シンプルなまでに殴り合いだ。
殴っては殴り返し、殴られては殴り返す。フェイントや殴り方の違

いはあるけど、それでも殆どはそれだけだ。
この人相手に小細工は無用だ。いや、俺は今の気持ちを全力で叩き付けることしか考えない！
部長の星辰光は、本当にギリギリでなったものだから、できることにも限りがある。
そもそも今の部長の力量と熟練度じゃ、オカ研全員の異能を再現するなんてできないんだ。
だからこそ、此処まで成果を上げた部長に無理はさせれない。
俺が、サイラオーグさんを、倒すんだ！
『壮絶な戦いです！　リアス選手が星辰光で華麗な戦いを繰り広げて繋げた、サイラオーグ選手への激突。背に受けたおっぱいドラゴンは、愚直なまでにシンプルな殴り合いだぁあああ！』
『『『『『『『『『『わぁあああああああっ!!!』』』

だから―
「……負けられないんだよぉおおおお！」
―俺の全力で、ぶん殴る！
「……俺も、負けんぞぉおおおおおっ!!」
そしてサイラオーグさんも殴り返す。
右手の動きは僅かに遅い。ドラゴンブラスターを当てる余裕が、作れるかもしれない。
だけど、そう簡単には決して行かない。
「作って見せる！　俺のようなものが生まれない世界を！　誰もが、力を持てば必ず相応しい立場につける世界を！　魔王に……なることでぇっ！」
ああ、負けられないよな、サイラオーグさんも。
だからこそ―
「「勝つのは俺だぁあああああああっ!!!」」
―全力で、戦いましょう!!

アザゼルＳｉｄｅ

ったく。これは解説なんて挟む間もねえな。
サイラオーグとイッセーの、真っ向からの殴り合い。
何とかごり押しで戦車の三叉成駒になったが、それでもサイラオーグは倒しかねない勢いで殴り返してやがる。
スピードもあるだろうから、動くことで回避する余地もあるだろうに。
だが、今の流れでそれをする選択肢もないだろう。この流れで真っ

向勝負以外を選択したら、ファンが手のひらを返して離していくだろうからな。
しかし、リアスの奴が星辰奏者になってたとはな。更に能力が凄まじい。
リアスの巡り合いの才能は本当に天賦のそれだ。更に、イッセーの赤龍帝が持つ強者を引き付ける才能との相乗効果。強敵の引きも強すぎるのが何だが、おかげで生き残ったあいつらは若手上級悪魔としては最強の領域だろうしな。
……正直な話、この戦いはリアスの勝ちだろう。
リアスは消耗しているが、アーシアの回復力を発揮しながら聖剣を振るえるのはでかい。
サイラオーグも実力者だが、木場とアーシアの渾身の時間稼ぎにより、だいぶ削れてた。はっきり言って、イッセーとサイラオーグのどっちが勝つかは分からないレベルだ。サイラオーグが勝っても消耗はでかく、更に回復手段がない。
……そのうえで、フェニックスの涙まで残しているリアスが負けることはまずないだろう。
いや、例えそうでもサイラオーグは最後まで戦うだろうな。そしてリアスも、イッセーとサイラオーグに敬意を示して、二人の戦いに割って入ることはない。
……いい試合だな。
見ている他の奴らも手に汗握ってるだろう。流石のカズヒも、試合であることを踏まえればリアスにとやかく言うことはないだろうしな。
あと、なんか三十回ぐらいスマホがなってるんだよな。
っていうかいい加減イラついたんで、念の為にちょっと確認してみたら―

リヴァ
件名：ちょっと警戒
和地とカズヒが全然戻ってこないの。
あの二人のことだから、抜け出してデートとかじゃないと思うから、念の為に警戒を。
追伸：把握したのなら、文字無しでいいので返信メールを

……全部同じ内容だよ。
「……ディハウザー。ちょっとまじで警戒してほしいんだが」
……あいつらの場合だと、本当に嫌な予感がしまくるじゃねえか……っ！

冥革動乱編　第四十五話　灼熱ぶつかり氷雪語られ

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

振るわれる業火を紙一重のぎりぎりを見極めて避けながら、カズヒ・シチャースチエは呼吸を整えつつ戦闘を継続する。
普通の炎として放たれる業火は、すなわちある程度拡散する。その性質ゆえに、当たりやすい警戒必須の攻撃と言えた。
内心でカズヒは感心すらしている。
禁手に至り、更に複数を使い分ける。そんな偉業を成し遂げてなお、彼女は基本も決して疎かにしてはいない。
基本とは根幹であり、下地である。一見すると華やかかつ奇抜で難易度の高い技の方が強い風に見えるが、それはそれを使えるほど使い手が優れていることも大きい。それだけの技量をもってすれば、基本系ですら強大な技になりえる。
オーソドックスこそが最強とまで言うつもりはないが、基礎というものはそれゆえに頑健で突破されにくい。必然、奇抜な策に頼る者は嵌れば強いが、逆に基礎を重視する者は嵌めれなければ強いのだ。
ヴィールが、決して王の駒やその系譜だけに頼っている男でないことがよく分かる。春菜自身もそうなのだろうが、主が基礎鍛錬を軽視していればこうはいかない。難敵であることをいやというほど痛感する。
だが、悪祓銀弾（シルバーレット）とまで敵に称される女傑は、それで崩れるほどやわではない。
最上級悪魔との戦闘すら生身で行ったことのあるのが彼女だ。ただでさえ基本性能で上回り、固有の異能を持っている場合もある。加えて彼女自身が持つ神器は、武器の強化と格納という、持っているだけで圧倒的な力を得られるタイプでもない。

絶大な邪悪特攻の星辰光も、絶大な反動や自身に対する負荷を踏めれば、決して圧倒的と言い切れるものではない。むしろデメリットやリスクも大きく、凡人が振るって圧倒的な成果を上げるような真似は到底不可能と言っていい。

魔術回路も五大属性という稀少な才覚を持ち、また固有結界すら保有しているが、それも決して無敵ではない。固有結界は長時間の戦闘は不可能に近く、またその性質上、元の段階でどれだけの魔術が使えるかが大きく左右されるものだ。そして固有結界を抜きにしたカズヒの魔術回路保有者としての才覚は、五大属性以外では決して優秀とは言い難い。

徒手空拳から武器の戦闘術。戦闘における勝利を目指した戦術的判断力。基礎を重点的に研鑽した魔術の組み立て。そして何より、絶大な反動や無理のある戦闘を可能にする、基礎身体能力と運動技術。

星辰奏者という次元に限定すれば、カズヒ・シチャースチエは間違いなく最高峰の使い手だ。既に最上級悪魔に届くである、相性の悪い兵藤一誠と肩を並べられるのは伊達ではない。彼女自身が強いからこそ、仮面ライダー道間は強いのだ。

だが―

「な……めるなぁ！」

―カズヒの反撃を、春奈は灼熱の刃で叩き切る。

成田春奈もまた、絶大な戦闘能力でカズヒに食い下がっていた。

仮面ライダーマクシミリアンになっていた状態の和地を、二対一とはいえ追い込み気絶させたことがあるのは、決して運で出来たことではない。

振るわれる絶大な炎は、同じく最上級悪魔にすら通じる出力と火力。それを時に放ち、時に砲撃にし、時に斬撃にするその戦闘は、一つを極めるがゆえに攻撃力によりカズヒに喰らいつく。

更にに基礎をしっかりと鍛え上げているからこそできる粘り強さもあり、カズヒですら決して楽に勝てる相手ではない。

「……なるほど。読めてきたわ」

そしてカズヒは、拳を交わし異能をぶつけて、少しずつ理解を深め

ていった。
やはり、和地ではなく自分が挑んだ意味はあった。
目を見て、攻撃を躱し、本気の意地をぶつけ合うことで、カズヒは急速に春奈を理解していく。
すべてが分かるなどという馬鹿なことは言わない。全てを理解できるなどという妄言もたれない。彼女の全てを見透かすなど、僅かな時間で悟ってやれるなどという、そんな過信をする気はない。
だが、分かり理解し見透かせることもある。既にカズヒは、成田春奈という少女が持つ問題の、その根幹を悟っていた。
「……そうね、そこだけは分かってやれる。少なくとも、ある程度は共感すらできるでしょうね」
そう、カズヒは戦闘中とは思えないほど穏やかな声色で、はっきりと言い切った。
「何が……分かるって……っ！」
それに激昂する春奈は、両手に灼熱を纏い―
「分かるわよ。特に大事なことを取り違えて迷走しているってことぐらいはね」
―その余波で自分が焼かれることもいとわず、カズヒは一気に接近した。
それを理解しきれない春奈だが、此処にカズヒ・シチャースチエの経験の差が生きる。
幾度となくゲリラとして命がけの戦いを繰り広げ、また生物として格上の異形と戦い、また卑怯卑劣を地でいく器用な手合いを殺す汚れ仕事も経験してきた。そんなカズヒ・シチャースチエは、真っ向勝負以外にも強い。
今迄の戦闘中全てにおいて、彼女は罠を張っていた。
相手にわざと動きを覚えさせることで、相手の行動予測や反射の反応に固定パータンを作り上げ、一気に切り替えることで滑り込む。心身の消耗でポテンシャルが低下することを逆手に取り、わざと低下速度を大きくすることで、本命の攻撃時に急に動きをよく見せさせることで隙を作る。更に戦闘の蓄積で微弱だが読め始めていた相手の動

きを、わざと反映せずにいることで、一気に読んで動くことにより一撃につなげる空白を作り出す。
真正面からぶつかりながらも、少しずつ張ってきた罠と仕込みを使い、カズヒは一気に攻勢に出た。
そして、それは決して春奈を殺す為ではない。
むしろその逆。春奈の心を死なせない為、カズヒは歯を食いしばり
―
「今すぐとっとと……目を醒ませっ！」
「あっ痛うっ!?」
渾身の頭突きが叩き込まれ、春菜の視界に火花を盛大に散らした。

和地Ｓｉｄｅ

……魔術的な阻害が酷くて、動きたくても動けない。
体中が割としびれているというか、力も入らないから戦闘なんて不可能だ。今敵が仕掛けてきたら、確実に殺される自信がある。
だからまぁ、ベルナが攻撃しないでくれるのは、本当にありがたい。
それはともかく、カズヒ姉さんと春っちは大丈夫だろうか？
二人とも強いからな。下手しなくてもガチな大激突になるだろうしな。カズヒ姉さんは面の突破力がシャレにならないし、春っちも面制圧がシャレにならない。
ここは普通の町だったら、更地になる大惨事は確定的に明らかだろうなぁ。
「のんきなこと言うけど、取り込まれた結界で本当に良かった」
「だな。ヴィールの旦那にゃ感謝……いや、しなくていいか」

ベルナがそう言うけど、同感だ。
野郎、アグレアスをレーティングゲームの終了後に仕掛けるらしいしな。
確かにヴァーリは試合の邪魔をするなといっているわけだが、試合直後に仕掛けるとか、とんちか。
絶対ヴァーリはキレるだろうし、何より市民のメンタルがゴリゴリ削れること確定だろ。
しかたない。ここは腹をくくるとするか。春っちはカズヒ姉さんに任せて、俺は情報収集に努めよう。
「……で、どんな形で襲撃するんだよ？　どうせヴァーリが納得しないことも織り込み済みなんだろ？」
「悪いが、アタシは今回春奈の付き添いだ。英雄派がノータッチだってことぐらいしか知らねえよ」
ベルナはそう言い捨てると、ため息をつきながらどっかりと地面に座った。
「……ぶっちゃけ、やることなくて手持無沙汰なんでな。責任取ってもらっていいか？」
「……分かってる。行動には責任が伴うし、自分の責任は自分で何とかするべきだしな」
ああ、ちょっと方針変換だ。
まずは、ベルナの話を聞くとしよう。
こいつに涙を流させないと、そう決意している。貫い受けるとまで堂々と宣言しているんだ。受け止められるだけ受け止めるさ。
真っ直ぐ目を見て言い切ったのが良かったのか。ベルナもそれを真剣に受け止めてくれたらしい。
どこか憑き物が落ちた表情で、少し遠い目をし始めた。
「……アタシとアーネ（姉貴）は、元々ちっとばかし裕福な出だった」
「……以外と納得が半々ぐらいあるな」
そして悪いとは思うが、納得はアーネによるものが多い。
よく言えば男勝りで、むしろ男よりな態度のベルナだけを見ていると、意外と思うところは多いだろう。

だが姉のアーネは態度も雰囲気も、それだけなら育ちの良さが見えている。そしてベルナはベルナで、なんだかんだで常識的かつ良識的だ。

真っ当な教育を受けれて、礼儀作法なども教えられるような幼少期を送ってきた可能性は、言われてみるとなんだかんだで納得できる。

ベルナも自分がどう見られているのか分かっているのか、特に反論はしてこなかった。

「親父は零細貿易会社の社長だったがサウザー諸島連合国と大口の契約を長期で結べたことで、一気に中の上から上の下ぐらいに跳ね上がった。……ま、食う物や生活は良くなったけど、良いことばかりじゃねえんだがな」

「そこは分かる。名門の令嬢（リアス部長）とか、しがらみとか体裁とか、結構苦労してるしなぁ」

ちょっと前の面倒ごとも、それが理由で爆発したところはあるし。

「ったくだ。男に交じって泥だらけになってサッカーする、アタシみたいなやつには面倒だらけさ。ま、姉貴はすぐに習得するどころか、ものが違ったがな」

ベルナはそう言いながら、軽く肩をすくめる。

「……本当に凄かったよ。半年そこらで完璧にできるだけじゃなく、相手に応じて度合いまで使い分けてやがった」

「……礼儀作法なんて、完璧にこなせて悪いことないと思うんだけど」

なんというか、意味が分からない。

そりゃ、人を馬鹿にしたい奴とかの前で完璧にやると嫌われそうだが、そんな奴の前で悪くしたら、むしろ大ダメージじゃないか？

だが、ベルナは苦笑しながら首を横に振る。

「……目上の相手の子供がどれぐらいできるかで、自分もある程度下手にしたのさ。そうすりゃそこのガキは恥をかかねえし、偉いさんが小物でも嫌がらせはされねえだろ？」

……あぁ、なるほど。

つまり悪目立ちしていじめの標的になったり、変なプライドを傷つけて因縁をつけられないように、テストの点をわざと悪くしたのか。

ああいうのって、ある程度悪くするのには相当勉強ができないと駄目だからな。何とか平均点を取れるレベルだと、間違いの数で点の調整とか絶対できないしなぁ。
あの女、まじで優秀だったんだな。
俺が正直したくもない関心をしていると、ベルナもそれに気づいたのかまた苦笑した。
「本当に、姉貴はそういうのが得意なんだよ。……だからこそ、なんだろうが……な」
そこから、ベルナの話は本格的に始まっていく。
それは、アーネ・シャムハト・ガルアルエルの狂気を見せる話でもあった。

冥革動乱編　第四十六話　聖継娼婦の飛躍

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ことの発端は、アタシが十歳ぐらいの時だった。
住んでいた地域で内戦が勃発して、流れ弾で親父とおふくろが死んだんだ。
しかも内戦は激化して、その所為で暴徒まで大量に出てくる始末。姉貴の咄嗟の判断でとる物も取らずに瓦礫になってた家から離れたからよかったものの、そうでなければアタシらは死んでたね。
ぶっちゃけると、アタシらはアフリカの小国に住む、イタリア系の移民だったんだ。
内乱の原因は人種間のトラブルでさ。部族同士の抗争もあったうえ、一部の白人と黒人のトラブルがかみ合った結果もう殺し合いが起きるのなんの。最終的に犯罪組織が牛耳る形になるまで、ちょっと散歩すれば死体を見つけるようなあれ具合さ。
そんな中でストリートチルドレンとか、ぶっちゃけがちで死にかねなかった。治安の悪化もあって殺されかねないしな。
……そんなところで生きていくには、それこそガキでも悪事をするなり、体を売るなりすることだってある。
だけど、姉貴はいろんな意味で格が違ったよ。
アタシだけじゃなく、何人かのストリートチルドレンのリーダー格になっていた。男も女もいたが、姉貴は上手くまとめていた。そして早いうちに自分の魅力を理解して、体を売って生活費を工面していた。
そしてまぁ、それなりの年齢になった奴らはそれに引っ張られた。女は自分から姉貴と同じ娼館に、姉貴の紹介で働き始めたし、男も姉

貴の紹介で雑要役として働いたり……な。アタシもまぁ、四の五の言ってる場合じゃなかったし……な。

だけど、本当に姉貴は格が違った。

姉貴はその娼館で、先輩に嫉妬されにくい三番手から四番手をキープしていた。そして姉貴が指導することで、殆どの女はそこそこの人気を獲得して、何時の間にやら娼館の裏ボスにまで上り詰めた。

なんでかって顔だな。あんたも姉貴がただ者じゃねえのは知ってるだろ？

姉貴は昔から、相手に合わせてすり寄り、いい気分にさせたりやる気を引き出させるのが得意だった。言い方を変えるなら、相手に気に入られやる気を出させる女になることが、姉貴にとっての自然体だった。

ま、さっき話したやつの発展形ってやつだよ。それを、姉貴は全力にやってきた。

女を下にしか見ない男の時は、上手くへりくだって敬った。落ち込んで暗くなっている自信のない奴には、良いところを見抜き慰めて、やる気を出させた。娼婦を下に見ているから来たような野郎も、上手くおだてて良い気にさせた。それを上手くバランスとって人気を調整し、更に後輩共の性格や体つきを見て、相性の良いタイプとそいつらに気に入られるコツを教えて、裏で牛耳るほどになったってわけさ。

更に客の顔と名前は全部覚えて、職業や愚痴の内容も全部覚えて上手く取り入った。そして気に入られるごとに本とかをねだり、少しずつ学んで人にも学ばせ、どんどん成長していった。

そして事態が動いたのは、サウザンドディストラクションが起きる一年ほど前だ。

その頃には、姉貴は広い縄張りを持つマフィアの幹部、辺り一片を仕切ってるやつに気に入られた。そして上手く取り入って気に入られて、アタシらを部下として引き取る形でのし上がったわけだ。

そしてそれが目に留まったんだろうな。姉貴にマフィア本部のトップが会いに来たんだ。

……そして、アタシ達はジョン・ラカムに初めて会った。

和地Ｓｉｄｅ

「いや、ちょっと待て」
思わず俺は突っ込んだ。
「ラカムって幸香のサーヴァントだろ？　なんでマフィアのボスになってんだ⁉」
流石に驚いたぞ。っていうか驚くに決まってるだろ。
マフィアのボスがサーヴァントとか、流石に面食らうって。ビックリするしかねえよ。
ベルナもそれは同感なのか、軽く肩をすくめていた。
「ま、そうなるだろうな。……聞いて驚け？　サウザンドディストラクションの主犯は、幸香だ」
また凄い情報をぶっこんで来たな⁉
え、マジか⁉　あいつ俺達とそんなに歳変わらないだろ⁉
……いや、それっぽい方向性のことを言っていたような気がしないでもないけど……いやいや、流石にちょっと大暴れしすぎだろ。
俺が唖然としていると、ベルナも盛大にため息をついた。
「なんでもマフィアを牛耳ってた時にザイアが接近してきたから、根こそぎ力を奪ってやろうってノリで拾われたらしいぜ？　で、ラカムの方が組織運営に慣れてたこともあって、代理で運営してたんだとよ」
そういう問題か。
あいつの過去が本当に気になってきたな。軽く引くぞ。
「そんでもって、魔眼を使って自分の側に付きそうなやつを探してた

ら、ちょっと違うが疾風殺戮・ｃｏｍの連中を見つけて手を組んだんだとよ。そして四年ぐらい前に禍の団の前身をサウザー諸島連合で見つけて、誘いをかけて起きたのがサウザンドディストラクションだとよ」

歴史の転換期、あの女が原因かよ！

……これは先生にガチで伝えとかないとな。というか、後継私掠船団がガチで厄介すぎる。

まぁ、そこはこの際置いておこう。現場の戦力が考える領域を超えている気がするしな。

とりあえず、だいぶ麻痺は解けてきた。体内の水分を利用する形で魔術干渉をされたけど、あと少しで何とかなるだろう。

……問題は、だ。

「この戦い、割って入るのも一苦労だな」

俺は目の前の戦いを見て、素直にそう言うしかない。

いや、激しすぎるぞ。特に春っちの猛攻が。

控えめに言って、辺り一面火の海だ。地獄の業火ってこういう例えになるんだろうなぁと、俺は何となく思ってしまった。

隣のベルナも、ちょっとひきつり気味だ。

「どうすんだよ？　これ、止めるのも一苦労だぞ？　春菜だけぶちのめすとかになるんだろうが―」

「―それをしたら、カズヒ姉さんがまた鎮圧してきそうだからなぁ」

なので、あの戦いに割って入るならカズヒ姉さんを相手にすることも考えないといけない。

といっても、春っちを引き込むと決めたのは俺だ。そして春っちもまた、俺と決着をつけようとしている。

なら、俺が相手をするべきだと思うんだよなぁ。

「なぁベルナ。なんで春っちが俺をつけ狙うのか、お前知ってるか？」

とっかかりを作りたいと思い、俺はベルナにその辺を聞いてみる。

どうも気が合っているみたいだし、もしかしたら知ってるかもしれないな。

「……アタシもその辺気になってたんだけどよ、深いところが関わっ

てんのか、具体的なことは言ってねえんだよ」
そっか。
ならちょっと真剣に、昔の記憶を振り絞って考えるしかないってことで―
「……ただ。倒したいとか勝ちたいとか、そういうつもりじゃないみたいだったな」
―その時、ベルナの言った言葉が強く気になった。
思わず勢いよく顔を向けてしまうが、ベルナは戦闘の方を見ている。
「あいつはずっと、同じことを言ってたんだよ」
ずっと、同じことを……？
いったい何を―
「―強くなったって認めさせたい。あいつは、ずっとそれだけを言ってたよ」
その言葉に、俺はふと考える。
……俺の記憶の中の春っちは、はっきり言えばいじめられっ子だった。
いじめられる側にも理由があることはある。いじめる側の環境に多大な問題もあることだってある。ただ、春っちの場合は幼稚園のレベルだったこともあり、単純にからかわれる類だったと思う。
そういうのを黙って見過ごせなかったのはその頃からだ。俺はその頃から瞼の裏に誓ったあの笑顔があったんで、色々と頑張ってきた。リヴァ先生が小さい子供に教えることじゃない情報まで伝えてくれるので、割となんとかできてきたとは思う。
もちろんザイアに引き取られてからは俺はどうしようもなかったが、それでも頑張って釘を刺したり、伝えられる対処法は伝えたと思う。
でも、やっぱり小さい子供だと無理だったのだろうか。それとも、何かをやらかしていたんだろうか。もしかすると、何かをした時に酷いことをしてしまったんじゃないだろうか。
小さい頃の記憶だから、全部鮮明に覚えているってわけでもないか

らな。その可能性がないとは言えない。
それに確か、春っちは強姦されていたところを助けられてヴィールの眷属になったんだ。その辺のトラウマで、にっちもさっちもいかなくなっているかも―
「……あ」
―そんな風に考えがぐるぐる回っていた時に、俺は大事なことを思い出した。
ああ、そうだ。
俺が、やるべきことは……っ

冥革動乱編　第四十七話　取り戻した原点

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

成田春菜は、十回目の頭突きを喰らい、割と悶絶していた。
頭蓋骨が分厚い額で、頭部の人体急所を勢いよくどつき倒す。シンプルゆえに威力はあるが、自分だって多少はダメージが入る自爆一歩手間の技といってもいい。
実際問題、転生悪魔と人間なら前者の方が性能は高い。如何に相手が星辰奏者（エスペラント）とはいえ、限界というものは存在するのだ。
にも関わらず、カズヒ・シチャースチエは更に容赦なく頭突きを叩き込もうとしてくる。
額から血が流れているんだから、いい加減にしろ。
真剣にそう思いながら、春菜は全力で額をぶつけ返した。
「いい……かげんに……しろっ！」
「こっちの……セリフ……よっ!!」
更に三度、額を全力でぶつけ合い、お互いにぶつけた態勢で押し合いの形になる。
既に戦闘というよりは意地の張り合い。特に春菜は頭部に衝撃が入りすぎて、思考が軽く麻痺していた。
逆にカズヒはそういったことはないのだが、目論見通りに行ったと内心でガッツポーズをしながら、睨み合いの体制になる。
「いい加減にしてほしいわね。なんで和地にやけに執着するのかしら？」
「決まってるでしょ！　証明したいのよ、強くなったって！」
歯を食いしばり、カズヒを真っ向から睨みつけながら春菜は吠えた。

それだけだ。本当にそれだけだ。
「頑張ったのよ！　鍛えたのよ！　傷ついても、泣きたくなっても、あいつ等に犯されて心が折れても……っ!!」
心の底から、振り絞るように声を出す。
「ヴィール様がいてくれたから、私は此処まで強くなれた！　それを和っちに認めさせたい！」
その渾身の叫びに、カズヒは静かに鋭い視線をぶつける。
「……理由は？」
その言葉に―
「……？」
―春菜は、返答ができなかった。
「それが本当なら、何でもいいわ。見下したいの？　自慢したいの？　態々和地に強くなったことを認めさせたい、その理由を教えて頂戴」
真っ直ぐに、至近距離から、カズヒは春菜に詰問する。
「本当に、何でもいいのよ。実は和地に助けられるのが屈辱だったから見返したいでもいい。単純に自分にとって強い奴の象徴的な感じだから、上回りたいという挑戦でもいい。まあ個人的には嫌いな理由もあるでしょうけど、尋ねた身としてそこはこの際おいておくわ」
困惑する春菜から額を離し、そして改めて一歩近づき―
「……貴女が和地に、強くなった自分を認めさせたい根幹は何！　それを見失っている馬鹿に、和地の相手なんてさせるつもりは断じてない！」
―胸ぐらを掴み上げ、真っ向から声を張り上げる。
目と目を合わせ、目線も合わせる。そんな至近距離から、カズヒ・シチャースチエは成田春菜と魂をぶつけ合わせようとする。
「はっきりと本心から、貴女の理由を伝えなさい！　涙の意味を変えるという、九成和地の誓いに向き合う、貴女の本心からの理由をもって、和地に挑めと言っているのよ!!」

春菜Ｓｉｄｅ

彼がいなくなってから少しして、私は自分の体を鍛えることにした。

スポーツではなく、武術を習得する方向だった。将来的な目標としては、婦人警官や女性自衛官、それも前線で戦える方向を目指していた。

小学校に上がってからは、毎日トレーニングをしてきた。高学年になることには、通信教育で武術を始めながら、いじめをするような奴に何度も突っかかっていった。怪我をすることも多かったが、日々の鍛錬と技量の差で何度も勝ってきた。

中学生になってからは、武術研究会に所属して更に極めて言った。勉強も鍛錬も毎日積んできたからこそ、高校までエスカレーター式の学園に入学して、頑張ってきた。

……ヴィール様に出会ったのは、中等部三年生の夏だった。

きっかけは、先輩が不良に絡まれていたところを助けたことだ。

そのことでやられた不良が、自分の先輩を引き連れて襲ってきた。他の取り巻きは返り討ちにしたが、その先輩は既に成人していて、しかもプロデビューしたばかりの格闘家だと思い出す頃には、叩きのめされていた。

仮にもプロの格闘家が、悪さをした不良の敵討ちなどという真似に反吐が出そうになったが、そいつらの行った所業の方が更に反吐が出る。

……自分の初めてが、そんな男によって奪われるなど屈辱でしかなかった。

意地でも睨み付けて、隙あらば殴り飛ばそうとしたが、殴りつけら

れ、そして……心が折れた。
投げ捨てられても立てなくなった。震えが止まらなく、漏らしてしまった。
もう逆らえない。抵抗できない。立ち向かえない。
だが同時に、言うことを聞くこともできなかった。
震えが止まらない(このままは嫌だ)
逆らう勇気が出ない(立ち向かわなきゃいけない)
もう立ち上がれない(倒れたままでいるな)
思考がぐちゃぐちゃになり、何もできずに絶叫を上げそうになったその時、全身から炎が立ち上がった。
困惑する男達に、自分はよく理解できず両手で頭を抱えてうずくまるしかできない。
もう嫌だ。
まだ駄目だ。
そんな感情が混ざり合ったまま体の中に溜まっていき、限界を超えて壊れそうになった、その時だった。
「―下種が。俺の管轄でよくもまぁ、ふざけたことをやっているものだな」
「同感です。しかもこいつら、僕のいた高校の制服着てますよ?」
「ふ～ん。歯ごたえもない雑魚を伸しても、何も楽しくないんだけどねー」
一瞬だった。
文字通り一瞬で格闘家は全身の骨を砕かれ、更に不良達は悶絶し、骨まで外された。
そして小瓶を取り出して中身をかけられた格闘家は、一瞬で砕けた骨が治り――今度はまたぐらを潰された。
「……これから貴様達は俺の奴隷だ。いいか? 今すぐ自分の今いる場所をやめて、三年間ここで働き続けろ。しなければ殺す。歯向かえば殺す。だが言うことを聞くのなら、一人で生きていくに困らない程度の金をくれてやる。……いいな?」
再び小瓶で潰れたまたぐらを治しながら、彼はそう告げ相手の心を

打ち砕いた。
そして、炎を消すことができない私に、二人を監視としておきながら近づいた。
「……この状況で至るか。そしてその目……ふむ、惜しいな」
「え……あ……」
そして、炎で少しずつ焼かれながらも、ためらうことなくヴィール・アガレス様は私の手を取ってくれた。
「縋る存在（モノ）がなければ、立ち上がりきれないか。……なら、当面は俺に縋れ」
「な……んで……？」
なんでそんなことを言うのかが、分からなかった。
だが、ヴィール様は真っ直ぐに私の目を見て、断言した。
「例えへし折れ踏み潰されようと、朽ちることができないその願いを認めよう。お前が自力で立ち上がれるようになるまで、この俺を添え木とするがいい」
そう言いながら、あの方は小便を漏らしているうえ下種どもの精子がこびりついた私の肩に手を置き、誇らしげな表情を浮かべてくれた。
「……誇れ。お前は潰され心が折れてもなお、力を狂的に欲する飢えた者だ。……力の集め方を、教えてやる！」
その強き意志に、焦がれた。
その強くあり続けんとする在り方に、憧れた。
へし折れ、踏みつけられ、唾を吐きつけられた私の心に、彼は光と柱を与えてくれた。
だからこそ、命を懸けることに否はない。だからこそ、彼の力になりたいと更に強さを求めた。
戦いと鍛錬を続ける中、力を得る機会は多かった。禍の団と同盟を結んだ折、ヴィール（主）は私の為に私が取り込める力を調達してくれた。
そして彼が与えてくれた力を、発現させることができなかったのは悔しく惨めで申し訳なく悲しかった。
そんな時に、彼がかけてくれた言葉を覚えている。

「これは眷属に対する報酬であり、先行投資だ。いずれ必ずお前は、血脈を目覚めさせると信じている。……例えへし折れ朽ちても滅びることがなかった、お前の願いが蘇ればな」
その言葉に、感謝しつつも……今、ふと思う。
では、なんで強くなろうとしたのか。
なんで、強くなろうと思ったのか。
それを思い出せず、だからこそ、答えることができない。
それはヴィール様のような目で、カズヒ・シチャースチエは真っ直ぐに見つめる。
「……大事なことを忘れて取り違えて、そんなザマじゃぁ大事なものを自分で汚して壊すのよ。和地に挑むのなら、せめてその理由は確固たる今の自分の持ち物にしてから挑みなさい」
その言葉に、何も言い返せない。
分からない。思い出せない。
大事なことだと断言できる。大事な思いだから、どれだけへし折られて踏みにじられて汚されても、手放せなかった。だからこそ、禁手に至ったのだ。
どれだけ力が足りなくても、絶対に強くなりたいから。足りなくて弱くて砕かれたのなら、せめて強さを集めたかった。
だからこそ至ったのに、その大事な根幹がぽっかり抜けていた。
ヴィール様の与えてくれた力が、発現しないのも当然だ。それがない者が目覚めさせられるほど、彼の禁手は甘くない。
それを理解して、崩れ落ちる。
情けない。和地にもヴィールにも合わせる顔がない。
そう思い、俯きかけた時。
「……ごめんな、春っち」
その手が、和っちの声と共に取られた。
合わせる顔がなくて、顔を上げられない。
だけど、和っちは屈み込んで下から顔を覗き込んだ。
その申し訳なさそうな顔に、自分の方がいたたまれない。
「……ごめ、んなさい」

何も分からず、何かを失って、ただ強くなり続けるだけだった。
なんで、和っちに強くなったと認めさせたいのか、今ではさっぱり分からない。
そんな言葉を受け止めて―
「強くなったな、春っち」
―そっと、和っちは私を抱きしめた。
労わる様に、あやす様に、そして褒める様に。
優しく背中を叩きながら、和地は自分を抱きしめた。
「一生懸命、つらい思いをしてでも頑張ったんだな。俺が助けてきた時から、とっても見違えるほど強くなったんだな」
その言葉に、思い出すことがあった。
小さい頃、父や母に頼んで、強くなる為の努力を始めようとした、その時を。
―今度和っちに会った時、私は守られっぱなしじゃいやなの！
そんな、彼女の瞼の裏に焼き付いた、助けてくれた彼の顔が浮かんでいく。
―和っちと一緒に守るの！　和っちが褒めてくれるぐらい、守れるぐらい強くなりたいのーっ！
「……ぁあ、あ……ぁあああああ……っ」
思い出した。
何時の間にか、強くなり悪い奴に立ち向かい続ける中、忘れていった原初の願い。
ヴィールが添え木になる前から、ずっと根本だけは残っていた、始まりの願い。
「……私、ずっと、ずっと頑張って。辛くても、いやになっても、怖くても……ずっと、ずっと……」
見失っていた願いを思い出し、私は今度こそ敗北した。
「ずっと……和っちに、胸を張りたかった……っ」
「ああ。強くなったんだな……春っち……っ」
その誇らしげな笑顔を受けて、私はヴィール様の眷属ではいられなくなった。

添え木ではなく、本当に柱が、私の中に戻ってきたから。

冥革動乱編　第四十八話　試合が終わり死合が始まる

イッセーＳｉｄｅ

……いい加減、意識が飛びそうだ。
殴った拳も痛いし、拳で殴られたところも痛い。
視界もぼやけてきたし、体力の尽きかけている。
それでも、俺もサイラオーグさんも殴るのやめない。
理由はいくつもある。
俺もサイラオーグさんも勝ちたい。この強い人に対する敬意もある。そして―
『『『『『『『『『『おっぱいドラゴン！　おっぱいドラゴン！』』』』』』』』』』
『『『『『『『『『『サイラオーグ！　サイラオーグ！』』』』』』』』』』
こんな応援の声が聞こえてくるんだ。そんな簡単に止まれるわけねえだろ！
そうでしょう、サイラオーグさん！
俺も、サイラオーグさんも、どこか笑顔になりながら殴り合っている。
何度も何度も殴りあって、お互い血まみれで酷い顔だよ。
……だけど、サイラオーグさんは本当に格好良い。
俺もそんな風に見えてるんだろうか。見えてるといいな。
サイラオーグさんは、自分のことを格好突かないなんて言っていたけど、そんなことなんてない。
格好悪いわけねえだろ。格好良いに決まってるだろ！
これだけ、全力で、一生懸命頑張っている。そんな姿が、かっこ悪

いわけないだろう！
だから、負けない。負けたくない。
負けてやりたくなんてない。できることなら勝ちたいし、負けるにしても文字通り全部を振り絞って負けたい。
だから……だから……。
俺はついに鎧が解けて、だけどそれでも腰に力を入れて地面を踏みしめる。
リタイアするまで、退場するまで……っ
「最後まで、殴り合ってやらぁあああああ!!」
だからこそ、ゆっくりと拳を構えるサイラオーグさんに、俺はカウンター覚悟で突撃し―
「……そこまでだ」
その瞬間、審判のリュディガー・ローゼンクロイツさんが、割って入って魔法で俺の拳を止める。
待ってくれ！　まだ俺は……戦える！
そう抗議しようとしたけど、更にリアス部長が俺に抱き着いた。
「もういいのよ、イッセー！」
「ダメです部長！　部長の為にも、サイラオーグさんに対しても―」
俺がそう言おうとしたとき、部長は涙すら浮かべながらサイラオーグさんの方を向いた。
俺はそこで振り向いて、サイラオーグさんが動かなくなっていることに気が付いた。
え……これって……？
「君からの反撃が止まったことで、彼も反射的に動くことがなくなったのだよ。……気づくのが遅れたが、数分前から意識を失っていたようだ」
リュディガーさんがそういうけど、いったいどういうことなんだ？
いや、意識を失っていた……って？
「かつて、ライザーとレーティングゲームをした貴方と同じようなものね。……それだけ、貴方と最後まで戦いたかったんでしょう」
部長の言葉に、俺は涙すら出てきた。

サイラオーグさん、そこまで、俺のことを……。
そのまま静かに崩れ落ちていくサイラオーグさんを、俺は思わず抱きかかえた。
重いし、固いし、でかい。
そこまで体を鍛え上げて、魔力を持たないハンデを乗り越えた。そんな、努力と信念が積み重なった体に敬意まで浮かぶ。
俺はもう、涙を我慢することなくこぼしながら声を絞り出す。
「……ありがとう……ございました……っ!!」

アザゼルＳｉｄｅ

「試合終了ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ!!!　激闘を制したのは、乳龍帝おっぱいドラゴン！　これにより、リアス・グレモリー選手の勝利です！」
『『『『『『『『『わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!』』』

でも楽しそうに笑顔を浮かべられるとは呆れるやら感心するやらだ。
だが同時に、少しだけ憂い顔になってもいた。
「とはいえ、この敗北は彼にとって本当に痛い。上役は相当に冷たくなるでしょうね」
「……また、パイプがゼロになるってことか」
ノアに屈辱的な敗北をした結果、サイラオーグは集めていたパイプをすべて失うことになった。
それでも第四義勇師団の活躍もあり持ち直していたが、それもごっそりなくなりそうだ。
利用価値がなくなれば、あっさり見切りをつける。それが悪魔のドライな側面であり、こと大王派はそういう連中だしな。
カズヒは「次期大王なんて狙わず、最初から魔王派としてやる道もあった」なんてことを言っていたみたいだが、いっそのこと真剣に話してみるべきかねぇ？
今なら大王派もフロンズやノアに意識を向けているし、比較的スマートに鞍替えすることもできるだろう。むしろ今だからこそできる手ではあるしな。
……まぁ、それはともかくだ。
―俺だ。九成とカズヒは？
―まだです。……でも、禍の団が仕掛けてくるにしては遅いですね。
不意打ちじみた念話だったが、返信はすぐに返ってきた。
リヴァも相当に警戒しているみたいだが、あいつの能力は浮遊島では発揮しづらいからな。
しかし、ある意味で格好のタイミングだったゲームは既に終わっている。……この上でテロを起こすってのも、タイミングとしては悪くないか……っ。
俺は、その時寒気を感じる閃きを覚えた。
確かに、それならある意味でヴァーリの発言には抵触しない。だが同時に、誰でも分かる屁理屈でしかない。
まさか、禍の団の連中は……っ

その時、映像に映った奴らの姿を見て、俺は面食らった。
司会もディハウザーも面食らっている辺り、どう考えてもこれはゲーム運営側の判断じゃねえ。
おいおい、何がどうなってるんだ!?

イッセーＳｉｄｅ

「……イッセーさん！」
「イッセー！」
声が聞こえて、俺は顔を上げる。
途端に、涙を浮かべたアーシアが、俺の胸に飛び込んでくる。
しかもアーシアごと抱きしめる感じで、ゼノヴィアまで抱き着いてきた。
「イッセーさん！　本当に……格好良いです！」
「よくぞ勝ってくれたイッセー！　流石にちょっと不安だったぞ！」
アーシア、ゼノヴィア……。治療を受けている時に心配してくれたのか。
……あぁ。本当に、俺は良い女に恵まれたよ。
見れば、サイラオーグさんの周りにも眷属の人たちが集まっている。
「サイラオーグ様……っ。よくぞ、戦い抜いてくださいました……」
「また、這い上がりましょう。我らも共にまいります……っ」
……良い仲間を持ってるよな、サイラオーグさんも。
きっと大変だろうけど、また戦いましょう。

俺も、貴方のようにもっと強くなって挑みますから……。
「……お疲れ様でした、部長。伏札が決まってくれたようで、一安心です」
「ええ、サイラオーグの眷属達と戦って、少しずつだけどコツも掴めてきたわ」
ねぎらう木場にそう答えながら、部長は少し怪訝な表情を浮かべていた。
「でも大丈夫なの？　あれだけ殴り倒されていたら、怪我はもちろん疲労も大きいでしょうに」
「それが、運営の方が用意してくれた薬湯を飲んだらすぐに治ったんです。部長達の分も預かってきてます」
あ、そういえば、栄養ドリンクサイズの小瓶を持ってるな。
サイラオーグさんにも、眷属の方が飲ませている。
「……イッセー先輩。先輩の分です」
お、ありがとう小猫ちゃん。
……おお！　なんか凄い回復したぞ！
怪我も疲れもだけど、なんていうか心も回復したって感じだ。メンタルの疲労まで回復とか、なんだそりゃ！
アーシアの神器をもとに回復技術も発展してるんだなぁ。
「さて、そろそろよろしいでしょうか？」
と、そこに見慣れない悪魔の人が不敵な笑みを浮かべていた。
「我々が用意した薬液が効いてくれたようで何よりです。大丈夫なのは確認しておりますが、万が一もありますからね」
へ～。もしかして今回の為に急遽用意したって感じなのか。
それぐらい大盤振る舞いってことかな？　それとも、半分ぐらい治験も兼ねてるとか？
俺がそんなことを思っていると、ふとその人と俺達に間に、審判のリュディガーさんが割って入ってきた。
……なんか雰囲気が怖いぞ？　まるで、本気の戦闘をしようって感じな雰囲気だ。
なんていうか、俺達も警戒心が湧いてきた。

「……このような催しは聞いていないが？　実況側には連絡が言ってますか？」
『それどころか、そんな治療薬なんてまだ開発されてねえはずだ。……あんた達は知っているのか？』
なんか先生まで警戒している。え……どういうこと？
『えっと……そういった話はないですね。大王派の御厚意でしょうか、ディハウザーさん』
『私も聞いたことはない。……だが、彼は二年前までさかのぼって、禍の団関係者や冥革連合にも繋がりはないと言われているが……どういうことかね？』
おいおい、司会の人もチャンピオンも、なんか不穏なことを言っているぞ？
おい、この薬液って……大丈夫なのか？
俺達のそんな視線を向けられて、その上級悪魔の人は胸すら張った。
「薬液の安全性は誓って保証します。なにせ一昨日に渡された分を、ランダムに私と私の眷属が飲んで検証していますからね」
いや、そこは安心だけど、そうじゃない。
俺達が皆警戒心を向けていると、その悪魔は、迷いも曇りもない目で、俺達を真っ直ぐに見据えた。
「そして捜査も間違っておりません。……二年と半年前から一昨日まで、私はヴィール様とは連絡を取っておりませんから」
――――ッ！
一気に警戒が跳ね上がる。同時に、この空間に何人もの悪魔が足を踏み入れ始める。
『……君は英雄派のテロを何度も仕掛けられ、眷属や使用人にも死者が出ているという。間引きの為かね？』
「ヴィール様と現四大魔王に誓って、そんなことはありません。英雄派どころか禍の団にヴィール様が伝えていないのですから、ターゲットにされるのは運が悪かっただけですとも。……ねえ、ヴィール様？」

「その通り。彼は俺の工作員において古株でな。特定の符丁で指示を伝えるまで、現政権に忠実に仕えるよう命じておいた。場合によっては、命を懸けて我々が相手でも殺しに来いと指示を忠実に従ってきた誇るべき部下だ」

そして、俺はそいつに三回目の直接対面をした。

鋭い目つき。鍛えられた体。そして強い戦意。

サイラオーグさんに負けずとも劣らない、そんな完成された戦士の姿で、俺の視界に堂々と映ってくる。

「……まずは健闘を称えよう。そしてすまないが、此処からは実戦の時間だ」

ここで、お前が来るのかよ……っ！

「勝利直後にすまないが、冥界政府に活を入れる為に犠牲になってほしい。……死力を尽くせ、グレモリー眷属にバアル眷属。さすれば、俺達を返り討ちにして生き残れるかもしれんぞ？」

ヴィール・アガレス・サタン……っ!!!

冥革動乱編　第四十九話　役者は集う

アザゼルＳＩＤＥ

ふざけたことをしてくれるじゃねえか、あのイカれ集団……っ！

「ヴィール！　てめえ、ヴァーリの奴にまで喧嘩を売るってことでいいのか！」

俺が声を張り上げて詰問すれば、ヴィールの奴はため息をつきながら首を横に振った。

ヴァーリに話を通してるのか？　いや、奴がこういった真似を好むとは思えねえ。

どういう意味の反応か、俺は沈黙で促した。

『奴は試合の妨害をするようなら許さないとは言っていた。だから試合後まで待っていたし、ミザリに頭を下げて消耗している両眷属も可能な限り回復させた。ここまですれば文句を言われる筋合いはない』

胸すら張って嘘偽りなく断言しやがった。

一周回って尊敬すら覚えそうな俺達の視線の先で、ヴィールは軽くため息すらついてやがる。

『そもそも我々冥革連合は、禍の団とは対等な同盟関係だ。ろくに禍の団（組織）に貢献していない末端の愚連隊如きが、同盟組織と主要派閥の連合作戦に文句をつけれる立場ではない。言うとおりに試合中に仕掛けなかったうえに回復までしてやったのだ。これで文句をつけるなら、殺したところで禍の団から文句を言われることはない……いや』

ヴィールの奴は、此処にはいないヴァーリに侮蔑の嘲笑まで浮かべやがった。

『むしろあいつのような旧王族の愚かさを煮詰めた男、殺した方が旧魔王派からも喜ばれそうだな。足を引っ張ることしかしない、性能だ

けはある無能など、害悪すぎるだろうしな』
……本当にボロッカスだな、ヴァーリの奴。
ちょっと言い分が理解できるのがあれだ。なんかムカつく。
「……で？　まさかお前らだけで、リアスやサイラオーグ、それどころか俺達全員相手にできるってか？　結界にはそう苦労せずに入れそうだけどなぁ？」
俺はドスすら聞かせてそう言うが、まぁこれで終わるわけがねえだろ。
試合空間内にいるヴィール達は、依然あったケンゴを含めた三人の上級悪魔とその眷属を連れ込んでいる。間違いなく俺でもてこずるだろう。
だがその程度だ。この試合を此処まで怪我しておいて、ゲストの腕利き共だって黙っているわけがない。
その程度のことが分からないわけがない。旧魔王派がテロぶちかました時より少ない戦力で仕掛けるなんて、自殺行為をするわけがねえ。
目を見りゃ分かる。ここから更に出てくるだろうぜ？
『結界内に入ることは可能だ。部下達はその迎撃の為に用意したと言っても過言ではない。……が』
ヴィールがそう告げると共に、アグレアス・ドームの外延部に、見覚えのあるやつを右引き連れた、二人のヒューマギアが姿を現した。
確か右の奴はサツとかいった、疾風殺戮・ｃｏｍのヒューマギアだ。
ってことは、あの二人が―
「……姿を見せるのは初めてだな、アザゼル総督。疾風殺戮・ｃｏｍリーダー、ハヤテだ」
―やっぱりか。
しかも、それだけでは終わらねえ。
疾風殺戮・ｃｏｍのメンバーと並び立つように、見覚えのある連中がごろごろ出てきやがった。
「……はっはっはぁ！　三大勢力が歯応えのある期待を作ってくれ

て、正直少し滾ってきたぞぉ！」
「さて、ヘラはいないのか。……まぁ、今回は名代だから構わないか」
「そう。私の方は当たりだわ。疲れたかいがあったものね」
「ふふふ、武闘派の神々がより取り見取り……っ！　ぶつかりがいがあるわねぇ……っ!!」
「さぁて！　ロキは封印されたけどぉ？　アースガルズが崩壊するに越したことはないってねぇ！」
「……さて、今度こそオーディンに仕掛けられるということか。やりがいがあるというものだ」
……ミザリのところの転生サーヴァント共が揃いも揃ってきやがったか。
糞ったれ、これはイッセー達の支援に行ける気がしねえなぁ、畜生が！
―リヴァ、結界を経由してイッセー達のサポートに行け。リーネス達にも伝えとけ！
―既に集合してるって。じゃ、行ってきます
よし、これで最低限の支援はできるな。
あとは、外をこっちが何とかすれば……だな。

イッセーＳｉｄｅ

こ……の……野郎！
「回復までするってことは、それだけいりゃぁ俺達全員殺せるっていう自信か！」

「万死に値する愚弄ね。試合を汚したことも含め、許しがたいわ……っ！」
俺もリアス部長もマジでキレてるよ。
そりゃそうだろ。俺達は一生懸命全力で試合に臨んでいたんだ。それは、サイラオーグさん達も同じだろう。
それを此処までコケにしやがって。絶対に許せない。
俺達全員の殺意が籠った視線を受けながら、ヴィールの野郎は少し眉をひそめていた。
「何か勘違いをしているようだが、後ろの者達はお前達の相手はしない」
なんだと？
「これまでの記録映像と今の試合を見て確信した。……今のお前達なら、俺達三人で十中八九圧倒できる。戦場の土壇場で更なる飛躍を遂げる赤龍帝を加味したうえで……だがな」
ふ……ふざけ……やがって……っ！
確かに、初代孫悟空達と真っ向からやりあったこいつらは強いだろう。
だけどなぁ……っ！
「……なるほどな。どうやら、俺達はどこまでもコケにされているらしい」
回復したばかりのサイラオーグさんも、怒り心頭の様子で拳を握り締める。
「俺達の夢をかけた戦いに泥を塗ったその罪、命で贖う覚悟を持ってもらうぞ、ヴィール・アガレス！」
全くだ。俺だってまじ切れだよ。
絶対、あの顔面に一発叩き込んでやる！
俺とサイラオーグさんの戦意をぶつけられても、ヴィールの奴は余裕の表情を崩さない。
隣の女王と戦車も、一歩前に出るけど警戒は少し薄い感じだ。
その様子に俺たちはさらにキレそうだけど、その時ヴィールはふと時計を見た。

「さて、そろそろ来ても良い頃だが……やはり来たか」
俺達の後ろをちらりと見ると、同時に後ろの方で空間が歪んでいく。
途端に、見知った顔が何人も、意外なやつまで出てきやがった。
「イッセー！　助けに来ましたのよ！」
「すまないな、兵藤一誠。二天龍を怒らせる愚を、奴らがここまで犯すとは思ってもみなかったよ」
ヒマリ達に、ヴァーリチーム!?
ヒマリ達は分かるけど、ヴァーリチームはいいのかよ!?
「……いいのか？　お前たちは禍の団だろう？」
「構わないさ、サイラオーグ・バアル。……俺もこの試合は楽しみにしていた、それを汚したというのなら報いを与えなければ……ね」
サイラオーグさんにそう答えながら、ヴァーリは鋭い殺気の籠った眼をヴィールに叩き付けた。
「早速だが死ぬ覚悟はできたかい？　態々警告をしたというのに、よくもまぁやってくれる」
「こちらのセリフだ。本来ならあの場でお前らにペナルティが下されるべき発言を、素直に聞いて試合終了まで待ってやったのだ。感謝の言葉を貰いたいぐらいだな」
お互いにまだ戦闘態勢じゃないけど、殺気と敵意がすごいことになってる。
殺気が可視化できるなら、ドラゴンブラスター並みの威力になってるだろうな。
「……言っておくが、冥革連合（我々）は禍の団全体と対等な同盟組織だ。末端の愚連隊如きにとやかく言われる立場ではない。……分かったうえで仕掛けるのなら、殺されても文句は言えんぞ？」
「白龍皇をそんなもので縛れると？　つくづく舐めてくれるものだね」
ヴァーリの返答に、ヴィールの奴は冷めた目すら向けてきた。
あ、これ旧魔王派の連中が俺に向けてきた目と同じだ。
めっちゃくちゃ馬鹿にしてるよ、あいつ。

そしてため息までしてから、ヴァーリをしっかり向き直ると―
「……貴様のメンタルはつくづく龍のそれだ。言っておくが罵倒だぞ？　ドラゴンの多くによくある、自分の気の向くままにしか動かんうえ、そんなただの我儘を誇りと取り違える愚者だと言ったのだ」
―キレッキレの罵倒ぶち込んだ。
思わず俺は、怒りも忘れてヴァーリの方を確認したよ。
あ、めっちゃキレてる。
「……ここ最近、本当に俺を馬鹿にする奴が多いものだね。ルシファーの血と白龍皇アルビオンの競演を、現在過去未来で最強になるとアザゼルに断言された、この俺を―」
「そのザマでルシファー（王族）を誇れると思っているのか、恥さらしめ。貴様のメンタリティは典型的な愚かなドラゴンのそれだ」
ヴァーリの言い分をぶった切って、ヴィールはむしろ怒りすら込めて、ヴァーリを睨み付ける。
「……人のことは少々言えんが、道理も知らぬ蜥蜴と蛇が、世の在り方を憂う我らの足を引くな。燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんやとは、貴様に言う為にあるような言葉だな！」
その宣言に、ヴィールの後ろに控える上級悪魔と眷属が、たたずまいを治した背筋を伸ばす。
『『『

出した。
「王族の血を誇りながら、冥界の、悪魔の未来を想えぬ愚か者などに、我らが配慮する理由なし!!」
『『『

その時、外から声が響いた。
『あ、あ～。マイクテスマイクテス。聞こえているなら、アザゼル総督辺りが返事してくれるかな～？』
外の方で、どうも通信越しに何か言ってくる奴がいるらしい。
今度はなんだ？
俺が気になっていると、ヴァーリの奴が心底から嫌そうな顔になっていた。
「まぁ、名代に全てを任せるわけがないな、あの屑は……っ」
ヴァーリがそう吐き捨てた時、外から放送が起動する音が聞こえてくる。
『ああ、よぉ～く聞こえてるぜ、糞野郎』
アザゼル先生が、ここまで苛立ちを見せる相手。
断言してもいい。絶対碌なやつじゃない。

『通信越しとはいえ、顔を出すとは余裕じゃねえか、ミザリ・ルシファー！』
『いやいや、余裕があったら直接来るよ？　神様や無辜の市民がたくさん苦しんで絶望してくれるんだからさ？』

そうか、例の奴まで来てるのか。
本当に、めちゃくちゃやってくれるじゃねえか……っ!!!
旧魔王派に鞍替えした裏切り者……いや、最初っからたくさんの人を苦しめる為だけに三大勢力にいた糞野郎。
ミザリ・ルシファー……っ!!

冥革動乱編　第五十話　三十倍

アザゼルＳｉｄｅ

「で？　なんでお前さん、今回来てねえんだよ」
俺はムカつきまくりな内心を抑えて、努めて普段の調子でミザリの野郎から情報を引き出しにかかる。
野郎は完全に趣味で動く野郎だ。となると、できる限り現場で見たいと思うやつだ。
同時多発的な作戦ならまだしも、今回のような一点特化なら絶対に顔を出すはずだ。
それが出てきてねえとか、その時点で嫌な予感がする。できれば「出れない状況」があいつにとって不利な理由であってほしいな。
そして、ミザリの野郎は苦笑交じりで肩をすくめた。
『僕もできれば行きたかったんだけどね？　つい最近聖杯を禁手にしたばかりで、しかも乱用したからドクターストップなんだよ。フィジカルじゃなくてメンタルの方でね？』
「……なるほどな。ヴィールの連中がよこした薬液ってのはそういうことか」
幽世の聖杯を禁手に至らせたってのは厄介だが、同時に神滅具でも指折りのリスクを持つのが聖杯だ。
乱用すれば魂が汚染される。アドルフ・ヒトラーの迷走も、おそらくそれが理由の一端だと確信を持てるぐらいに、聖杯はリスキーな神滅具だ。ミザリのことだから対処法はあるだろうが、流石に何度も乱用できるほどじゃねえだろうしな。
ミザリもそこまで読まれていると確信しているのか、もう隠し必要もないといわんばかりに肩をすくめている。
『普段は護衛マシマシで精神の解体清掃を使えばいいけど、今回

ヴィールの要望に応えたらやりすぎてね。あと半日は静養しろって言われたから、今回は名代を送って観戦しようって感じかな？』
そうかい。転生サーヴァント共を総出で送りつける辺り、この作戦には奴も気合が入ってるってことか。
いや、違うな。
重要なのはそっちじゃねえ。
「神様恨んでる連中だらけだったな、お前さんの部下。……勝算があるほどの作戦だってことか」
『そういうこと♪　ま、細かいところは出しゃばらず、現場の方に任せようかな？』
「……そうだな。そろそろこちらが主軸で動かせてもらう」
ミザリから引き継ぎ、ヒューマギアの一人が口を開いた。
さて、こっからが本番か。
ゲストの神達に戦闘支援要請をしているし、とりあえず連携が取れる域にまでは五分もない。
そこまで粘れば、取り合えず相応にやりあえるはずなんだが……な。
「んじゃハヤテだったか？　疾風殺戮・ｃｏｍがそんなことまでやるたぁ何考えてやがる？」
「知れたことだ。人類削減の為に邪魔になるだろうお前達の力を削ぐ。その為には集いに集っているこの状況は優位であり―」
『―そして、冥革連合（我々）も三大勢力（お前達）に発破をかけたかったのでな。神々に対して攻撃を加えたいミザリ達との間で、目的の為の手段が一致した形だ』
ヴィールもそう言っているなら、更に戦力が集まっている可能性もあるな。
「発破をかけるねぇ？　ＴＦ（トライフォース）ユニットやＤＦ（ディアボロス・フレーム）じゃ足りないってか？」
確かに王の駒は使っちゃいねえが、別に王の駒に拘る必要はねえだろうに。
そこまで徹底的に駒に拘る連中だってわけでもねえと思ったんだ

が……な。
『確かにその通りだが、あれは下級悪魔を主体とする兵器だろう？　全体を強化するのは妥当だが、それに頼って悪魔という種族そのものや一点特化の質を度外視するのはいかがなものかと思ってな』
なるほどな。そういうことか。
確かにヴィール達の要求は、どちらかと言えば貴族を更に強化しつつ、支配下に置く民を増やすという発想が根幹にある。
そういう連中からしてみれば、下級中級ばかり軍事的に強化するという状況には思うところがあるか。否定はしないが貴族の強化も必須だろう……と。
確かに、それなら奴らのスタンス的に納得だな。
だが―
「それでゲームの聖地たるアグレアスを襲撃ってか？　発破をかけるにしても他に何かあるって気がするんだがよぉ？」
『さて。悪魔の未来を憂うべき立場なら、少しは我が行動から読んでもらわないと困るのだが……ね』
なるほどな。
ヴィールの返答で大体読めた。
アグレアスには何かがある。それも、悪魔側の未来を左右するだけのガチな秘密がな。
あとでサーゼクス達に聞いた方がよさそうだな。
だがまあ、おかげでだいぶ時間を稼げている。あともうちょっとで最低限の準備はできるだろうな。
「……で、だ。そっちの戦力がそこだけってことはねえだろう？　最低でも、サリュートIは投入してくるはずだ」
「当然だな。作戦においては、質だけでなく量が必要だ。当たり前のことだろう」
ハヤテは涼しい顔でそう言うが、さて、どう出る？
ハヤテが制御するサリュートIは、十二機がかりなら魔王クラスでも苦戦する。神クラスでも戦闘系じゃなきゃ倒されかねない危険な連中だ。

だが、今ここに集う神はどいつもこいつも高位の神だ。それもオーディンの爺さんやゼウスの爺、更に須弥山の帝釈天まで来てるという、有名どころのオールスター。
倒せればでかい。だが倒すのにでかい犠牲を生み出しかねない。そんな化け物どもを相手に、十や二十のサリュートIでどうにかできるわけがねえ。
疾風殺戮．ｃｏｍの連中は、元が機械だからかその辺はデジタルかつロジカルに動く連中だ。いくら何でも特攻じみた少数精鋭ってわけがねえ。
間違いなく他の派閥も抱き込んでいる。そしてそれを踏まえても、サリュートIは今までで一番多く投入されるはずだ。
「順当に少しずつ制御できる数を増やしているだろうしなぁ？　最初に冥界でテロったときは、会談の時から数割ほど増えてやがった。ひと月そこらでそれな以上、もう三倍から四倍は増やせてるって考えるべきか？」
……まぁ、もっと増やしていると思うべきだがな。
増えた機関と数から考えればそれぐらいだろうが、ハヤテが直接乗り込んでるっていう点を考慮するべきだ。
絶対にそれ以上ある。何かしらの手段でそうしている。
だからこそ、此処でその辺りを調べ上げて―
「……三倍から四倍？　挑発も兼ねてわざと低く見積もったのだろうが、それにしても耄碌しているのかね？」
―ハヤテは、失笑しながら手を広げた。
そして周囲の空間が歪み―
「創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星」
―おい、冗談だろ……っ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「制御なく、無尽に増える醜き猿ども。己を制御する節度もなく、その増殖で星々の同胞(はらから)に圧政成して、何故(なにゆえ)恥を覚えぬか」
その祈りから生まれるは、徹頭徹尾軽蔑の感情。
「裁きを成して人を正す、神の所業はなぜ起きぬ。この腐敗を正せぬのなら、もはや神など世には無し。特異なだけの無能な存在(モノ)に、頼る意味などないだろう」
増え続け自然を圧迫し、それを戒めることが仕切れない人間という種族に対する軽蔑。また、人々の上に立つ存在とされながら、それを戒める裁きを下すことなく、その在り方を良しとして放任する神々に対する軽蔑。
そう、それこそがハヤテのヒューマギアに至った感情。
「軽蔑」によってシンギュラリティに至ったハヤテは、見誤ったザイアによって人造惑星型ヒューマギアに選ばれ、故にこそザイアすら軽蔑する。
「故に我、断罪の名の元に汝を鋳造する。汝に罪無し」
自分という存在を人を守護する物とする阿呆に見切りをつけ、ハヤテは人類削減の為に動き出すことを選んだのだ。
ザイア壊滅という利害が一致した人間が持つ愚かさの極みと利用し合い、技術の多くを獲得した。
故に、ハヤテは己の星と合致する、サリュートIを大量に展開する。
「肉の森を間伐せよ。宿主滅ぼす寄生虫を、その鋼で間引き給え。共生成すに必須の節度を、愚者の代わりに成し給え」
姿を現すサリュートIは、もはやかつての比ではない。
三十を超え、五十を超え、百を超えても尚止まらない数。
僅か十二機で神にすら牙を届かせる鋼の軍勢は、展開する疑似反物質粒子アザトースで、アグレアスの空を包み込む。
「絶望の嘆きは此処に終わる。今こそ此処で、地球(星)の悲劇に幕引きを」

今ここに、疾風殺戮．ｃｏｍのリーダーであるハヤテは、真の意味で鋼の守護星を開帳する。
「超新星（メタルノヴァ）――機神奉仕、殺戮の責務を果たす時（スローター・デウス＝エクス＝マキナ）」
サリュートＩに込められた樹脂が兵器を制御して、人造惑星が圧倒的な軍勢を統率する。
「……これが、人造惑星の本気というものだよ、各勢力の諸君」
そう断言するハヤテの星は、同調樹脂干渉型制御能力。
特殊な配合で作られた樹脂の制御系に組み込むことで、それらを制御下に置き同時制御することが、ハヤテの人造惑星としての異能。
それにより軍勢を統括する、面の制圧と前線での部隊式こそが、ザイアが彼に与えた軍事的な役目であり、それが意図せぬ形で本懐を遂げんとする。

ハヤテ

機神奉仕、殺戮の責務を果たす時（スローター・デウス＝エクス＝マキナ）

基準値：Ａ
発動値：ＡＡ
収束性：Ｃ
拡散性：ＡＡＡ
操縦性：Ａ
付属性：Ｅ
維持性：ＡＡＡ
干渉性：Ｅ

単独での直接戦闘にこそ向いていないが、その戦力は間違いなく驚異の一言。
何故ならば、今制御されるサリュートⅠは、本領を発揮したがゆえにかつての比ではない。
「最初の出撃数である、３６機を基準として告げよう」
ハヤテは目を見開くアザゼルを、人造惑星型ヒューマギアの性能で視認して告げる。
示威目的で両手を広げ、従えるサリュートⅠを自慢するようにし、告げる数は―
「千八十機（三十倍）だよ、諸君。……最もサリュートⅠを製造するという縛りがある故にこの程度だが、主神たちを相手にするには十分だろう？」
冷静かつ正確に、ハヤテは戦力費を考慮する。
ここに集う神々を相手にするには、十分な勝算が見込める戦力。その確信が彼にはあった。
「さて、では更にもう一段だ。……旧魔王派の諸君、よろしく頼むよ」

冥革動乱編　第五十一話　切り札はポセイドン！

イッセーＳｉｄｅ

な……なんだありゃぁ!?
「なんて数なの!?あれが、人造惑星の本気……っ」
俺が驚愕する横で、リアス部長も息を呑んでいる。
糞ったれ！　今迄疾風殺戮の連中は手加減してたってのかよ!?
っていうか、なんか後ろからでかいのが来てないか!?
……いやホント、でかいのが出てきやがったぞ!?
Δサリュートっぽいのを１００機ぐらい引き連れて、さらに倍以上のデカさのロボットが出てきやがった!?
『ギガント、ヒュージョン！』
あとアルバートとかいうミザリの部下が、なんか光に吸い込まれるようにでかいのに入っていったぞ!?
『ふはははは っ！　どうかね？　私の開発したΔサリュート三番仕様、Δサリュート・アサルト及び、試作実験機ギガンティスサリュートは！』
つ、作ったのはアイツか！　そういえばそんなことを言っていたような！
やろう、アザゼル先生みたいなことをしやがって！
『……ガッハッハ！　どうやら敵もさるものというやつか！』
『いいだろう！　儂らの前で狼藉を働いた報い、覚悟してもらうぞ！』
お、こっちもこっちで本気の体制だ。
ギリシャのポセイドン様やゼウス様が、並び立ってハヤテたちに向き合った。

しゅ、主神クラス二名が並び立つとか、とっても心強い光景だ。
俺は真剣に片津を飲むけど、ミザリの部下が一歩前に出てきやがった。
出てきたのは、アーシアをぶん殴ったアルケードに、なんか気品のあるお姉さん。確かお姉さんは、ニスネウスって名前だったな。
どっちももともとサーヴァントで、しかも優秀な悪魔の体を持ってるわけだしな。絶対油断ができやしねえ。
『個人的に、ヘラがいないのが残念だが……まぁいいか。頼むぞ、ニスネウス』
『ええもちろん。じゃぁ、本気で行くわよ』
あっちもガチな感じか、く……そっちは本当に任せ―
『じゃあポセイドン様―』
『む……？』
―にっこりと、ニスネウスの奴は槍を突き付けながら微笑んだ。
めちゃくちゃきれいだから、俺はこんな時じゃなきゃ見とれそうになって―
『ミザリの契約にのっとってお願いします。自分の命をなげうってでも、アグレアスと無辜の民を破壊しつくすことだけを考えなさい』
―は？
いま、何馬鹿な事―
『うぉおおおおおっ』
その瞬間、ポセイドン様は槍を構えてアグレアスドームの観客に攻撃を叩き込もうとした。
『な、なにをしておる！　やめんか！』
『壊すぞぉおおおおおお！　全部壊すぞぉおおおおお!!!』
ゼウス様が止めるけど、それも構わずポセイドン様は目を血走らせてアグレアスドーム……いや、アグレアスそのものを住民ごと殺そうとしている。
な、なにがあった!?
慌ててほかの神様も止めに入るけど、ポセイドン様は強引に振り払おうとしている。

噛みついてでも自分の腕を引きちぎろうとしてでも、とにかくアグレアスを壊そうとすることだけに専念してやがる!?
『……貴様ぁ、何をしたぁあああああっ!!』
ニスネウスが何かしたと確信して、ゼウス様は全力で雷を放つ。
だけど、そこにアルケードが割り込んで―
『死なない程度に削って頂戴』
『無論だ。……部隊を下におろしておけ』
―ニスネウスに頷いたアルケードは、さらに後ろの奴らにも指示をだした。
って、両手にサイラオーグさんみたいな闘気を纏ってそれを受け止める!?
雷撃が少し飛んでニスネウスに傷が入るけど、アルケードは雷撃を受け続け―
『ぬぅん!』
―そのまま上にそらして受け流しやがった。
手が少し雷で傷ついているけど、かすり傷止まりになっている。
さらにアルケードはこぶしを構えると、闘気を投げ槍のようにして投げつける。
それをゼウス様がよけようとしたとき。
『急所で受け止めなさい!』
ニスネウスの声が響いた途端、ゼウス様はアルケードの攻撃を股間で受け止め……っ
――この場に男全員が、一人を除いて身をすくめた。
っていうか、ヴィールの戦車さん!? あんたなんで平然としてんの!? ヴィールですらちょっと肩動いたよ!?
『……〜〜〜〜〜〜〜〜……っ』
そのまま泡を吹いて昏倒するゼウス様を見ながら、ヴィールの奴は冷や汗を流しながら肩をすくめた。
「当然のことだが、容赦がない奴らだ」
「ヴィール! あの力は、いったい何!?」
リアス部長が詰問するけど、それに対してヴィールは肩をすくめ

る。
「むやみやたらと手の内を語るのはどうかと思うが、語った方が牽制になるそうだ。だから本人が言うのを聞くといい」
って、どういうことだ？
『ふふふ、無駄よ？　ゼウスは今ので尽きたけれど、ポセイドンは言葉じゃ止まらないわ』
ニスネウスはすっごい良い笑顔で、暴れるポセイドン様を眺めている。
あいつが何かしたと思うけど、何をした？
『そもそもポセイドンには特別効くし、本来より上乗せされているもの。強引に封印して数か月単位で精神を洗浄しなければ、正気には戻らないわ』
『てめえ、まじで何をしやがった!?』
アザゼル先生が怒鳴りつけると、ニスネウスは肩をすくめる。
『簡単よ。私は神の要素と与えられた苦しみに比例して、神々にゲージ制の令呪を会得する。そしてその由来上、ポセイドンには特別効くの』
なんだって!?
つ、つまりポセイドン特攻宝具!?　しかも神々にも十分効くから、ニスネウスはアルケードに技とダメージが入るような庇い方をしてもらったのか！
確かに言っても問題ねえよ！　むしろ分かっているから、神様全員ニスネウスに気を使わないといけなくなる!?
手傷を負わせた瞬間に、アルケードのあの攻撃を躱せなくなる以上、どうしても全力で暴れるわけにはいかなくなったじゃねえか!?
『ついでに言うと、私は女としての絶望を二重に与えられた身だものね。本来より遥かにポセイドンを縛れるわ。……だからこそ、更にもう一段』
そしてニスネウスが指を鳴らすと、空から四体ぐらいの獣人が飛び掛かってきた。
……おい、あの獣人見覚えがある。

その狼の獣人は、一撃離脱で神々に攻撃する。神々も迎撃するけど、軽く傷をつけられた。
……その瞬間、あいつらが傷つけたように、神々は崩れ落ちた。
間違いない、あの獣、間違いなく……フェンリルやその子供と同じだ!?
『……ふふふ、体外受精で産んでみたけれど中々のものでしょう？ポセイドンによって作られた逸話がポセイドンを苦しめるって、すっごい気持ちがいいわねぇ、マゾとサドを併発しそう！』
そんなことを言うニスネウスに、アザゼル先生は目を見開いた。
な、なんだ？　何に気づいたんですか!?
『おいおい……お前、サーヴァントでありながらデミサーヴァントだってのか!?』
え、どういうこと!?
俺が困惑していると、映像越しのミザリがぱちぱちと拍手までしてきた。
『正解だよ。ニスネウスは特に特殊でね。二騎だけの小規模亜種聖杯戦争だったんだけど、どっちも利害が一致したから、僕との取引と相乗効果でサーヴァントにサーヴァントの力を上乗せして、悪魔になったんだよ』
……なんだそのとんでもない来歴!?
そして、いったい誰なんだ!?
「なるほど、そういうことですか……っ」
シャルロットが何かに気づいて、奥歯を噛み締める。
しゃ、シャルロットは知っているのか？
「なんなんだ、シャルロット!?」
「……ギリシャの神々は色々とやらかす逸話が多いですが、ポセイドンに恨みを抱くような経験を持ち、そいて件（くだん）の異能を持てそうな人物は一人ずついます」
そ、そんな奴がいるのか。
っていうかあのおっさん、何やらかしたんだよ!?
「一人は海辺を歩いている時にポセイドンに強姦され、その後対価と

して「二度とこんなことがないように強靭な男にしてほしい」と要求して叶えた美女、カイニス」
本当に何やらかしてるの!?
昔の俺でもそこまではしてねえよ!?
「そして獣人の方は、夫が特定の生贄を捧げる契約を反故にした裁きとして、その生贄である牡牛に欲情し、交わって命と引き換えに、いわゆるミノタウロスの元祖を生んだ王妃、パシパエ」
「本当に何をしまくってるの!? 恨まれて当然じゃねえか!?」
もう声に出してツッコんだよ！
そりゃ恨むよ！ そんな方法でも復讐するよ！
ちょっとぉおおおおお!? 北欧神話もそうだけど、聖書の教えとか三大勢力のこと、オリュンポスは全然悪く言えないだろぉおおおお!?
『そう、私は狂気によって狂気を打ち消したバーサーカー、パシパエ＝カイニス！ あはははははっ！ そのまま正気に戻って屈辱と絶望を味わいなさい、ポセイドン!!』
そりゃ嬉しくもなりますよね！ 納得です！
ああもう！ 俺達もだけど外は外で大丈夫になれるのかよ!?

アザゼルＳｉｄｅ

やってくれたなぁ、ニスネウス！
あの女一人いる所為で、神々が大暴れしずらくなりやがった。
無駄に広範囲に広がる攻撃をぶちかませば、奴がわざと喰らいに

行ってダメージ分の強制命令権で足を引っ張られる。そうなった途端に、他の連中が一気に潰すってことが可能になった。
しかも……だ！
「アルケード。てめえ、聖槍を持ってるな？」
「惜しい、正解は分身を借り受けた、だ」
そう言いながらアルケードは全身から神殺しの聖なるオーラを纏わせる。
やはりか。その可能性は、最悪なことに一つある。
「ミザリの禁手か！」
『その通り。幻日に輝く聖槍（トゥルー・ロンギヌス・ディオスクロイ）。他者に貸し与えられる一本の聖槍を具現化する亜種禁手で、更に亜種にするという真似もできる』
野郎、全身と一体化するタイプの亜種で宿っているってことか！
しかも質が悪いことに、ニスネウスをほぼ全員がカバーする位置取りに立ってやがる。
あれじゃぁ、一撃でぶち殺して宝具を使わせないってわけにはいかねえな。ロッキーの幻術とアルケードの技量で凌がれちまう。更に穴をつこうにも、ザンジュが割って入って迎撃をしてくるって寸法か。
こっちが舌打ちしていると、更にイシロ・グラシャラボラスが不敵な笑みを浮かべながら指を鳴らす。
その瞬間、奴の影が大きく広がり、中から大量の魔獣が姿を現してきやがった！
おいおいあれ、どう考えてもレオナルドと同じ流れじゃねえか!?
「しかもてめえ、魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）持ちかよ！」
「もちろん！　さぁ、厄介な女と敵意を込めて睨んで！　殺意を、憎悪を、侮蔑を、嫌悪を……うっ！」
俺が睨み付けると、なんかびくりと震えた。
「……ふぅ」
そして穏やかな表情になり、周囲の連中をドン引きさせた。
「……さぁ、かかってきなさい三大勢力。ミザリとの契約に基づき、我々は遍く神話と神々に絶望を振りまかせてもらう！」

「賢者タイムで悪党やってんじゃねぇぇぇぇぇ!」
我慢できずに一発ぶちかましたが、俺悪くねえよなぁ!?
それに、俺達だってやられてばかりだと思ってんじゃ……ねぇ!

冥革動乱編　第五十二話　外周戦闘（その1）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

千を超えるサリュートＩと神々が激突する中、魔獣を率いる形で、Δサリュートが進軍を開始する。
『『『

……そう、飛行将兵トライデンⅢが翻弄したのは、対神仏魔王用のΔサリュート。
費用対効果や効率が悪いだけで大型異形や対軍勢もこなせるが、本来の用途でないがゆえに、搭乗者の練度も総合的なバランスも向いていない状態になっている相手と戦って優勢止まりだった。
故に、この戦いこそがΔサリュートとＴＦ（トライフォース）ユニットの正しい意味での真っ向勝負。
『『『『『『『『『『『『全行程終了（オールコンプリート）――戦闘行動（オープンコンバット）を開始する』』』

基準値：A
発動値：AA
収束性：B
拡散性：E
操縦性：C
付属性：AA
維持性：AA
干渉性：E

疑似反物質粒子アザトースの運用を主体とした攻防に、同格の性能を誇る相手に有利に立つため、パイロットとの同調が大きく作用。
機体との同調により、柔軟な手札や対応力に、高い反応速度や空間認識能力を低燃費で実現。さらに消耗や負担を軽減させることで、長期戦に持ち込むことで疲弊が大きくなった相手を打倒可能にする。
ライディングエレファントレイダーの機能で負荷が軽減しているがゆえにその効果が薄くなっているが、もしそうでなければトライデンⅢは最終的に壊滅必須であっただろう。
質実剛健を体現する戦闘により、可変機構を生かした変幻自在に振り回されることなく対応する。
そしてお互いにアプローチは異なれど、長期戦を人機含めて可能にすることから、両者の戦いは膠着状態が確定する。
……そう、膠着している。
大型異形を長期戦前提で削り殺すΔサリュート・アサルトを相手に、飛行将兵トライデンⅢは膠着状態に持ち込んでいた。
『……ちっ！　ジャンル違いをボコってイキってたわけじゃないってか。流石だな』
『当たり前だ。人工神器（この分野）でいつまでもルーキー（お前ら）にぁイキらせねえよ！』

攻撃を放ち合い、躱し合い、捌き合う。
真っ向から、Δサリュート・アサルトと飛行将兵トライデンⅢは戦闘を拮抗常態に持ち込んだ。

サリュートⅠの猛攻は、ニスネウスによる牽制もあって神仏魔王と食い下がる。
頼みの綱のトライデンⅢも、好敵手の出現によって抑え込まれる。
故に、この戦いの趨勢は、それ以外に託されることとなる。

そう、ここからがアグレアス攻防戦の更なる激化に繋がっていく。
趨勢を傾けきれない戦いを決定づける、趨勢を傾ける余地のある戦いが始まった。

魔獣達は分散し、アグレアス中に分散を試みる。
冥革連合の手前、民間人に対する積極的攻撃は行わない。そんなことをすれば冥革連合の機嫌を損ねかねず、またまず優先的に潰すべきは敵でもあるので、ミザリもそこは許容していた。
イシロ・グラシャラボラスは魔獣創造を持っているが、同時にそのポテンシャルは英雄派のレオナルドと異なっている。
レオナルドはアンチモンスターに類まれない才能を持っているが、

未熟であることもありまだまだ弱い。魔獣を作り出す速度や、連続に作り出し続ける量にも限度がある。
その観点で言うならば、イシロはオーソドックスを高めたタイプと言ってもいい。
特異な性質こそ持っていないが、性能はバランスよく数も多い。
純粋に強くて厄介という、シンプルゆえの強固な強さをもってして、アグレアスの防衛部隊を少しずつ確実に押していた。
「踏ん張れ！　俺達がやられれば民間人に被害が出るぞ！」
「魔王様や神々に任せるな！　アグレアスを守るのが俺達の役目だ！」
吠える警備の悪魔達は尽力しているが、しかし不意を突くように一人ずつ滅ぼされていく。
それを成すのは二頭の魔獣。コードネームをフローズヴィトニルと名付けられた存在だ。
後継私掠船団が鹵獲したフェンリルの子供達。それを旧魔王派のミザリは、取引である物を引き出せていた。
それはすなわち子種。自分達にも利益がある、大王派や大欲情教団の人型兵器の解析と引き換えに、これを確実に回収している。
幸香ですら首を捻った対価だが、しかしミザリ達にとっては十分すぎる価値がある。
一つは、ミザリがデミ・サーヴァントの宝具として幽世の聖杯を保有している点。
そしてそれと同調することで、ニスネウス本来の宝具を比較的安全かつ強大な運用ができることに意味がある。
ニスネウスの真名はパシパエ＝カイニス。共にポセイドンを恨みうる、二人の美女が召喚された亜種聖杯戦争。
利害が一致する二人は、道間誠明（ミザリ）とも利害が一致したことで、戦いの果てにどちらかがどちらかの力を受け継ぎ悪魔として転生する、二重のデミサーヴァントとして転生した。そしてカイニスの宝具で大きな影響を与えているが、本体はあくまでパシパエである。
故に、此処で意味を成すはパシパエの宝具。

彼女のサーヴァントとしての逸話の殆どは、ミノタウロスの逸話に由来する形で構成される。
かつて夫のミノス王は、ポセイドンの怒りを買った。
とある牡牛を生贄に捧げる契約を破り、何とかごまかそうとしたが結局ばれてしまった。そしてそれに良かったポセイドンは、ミノス王ではなくパシパエに呪いをかける。
それによって牡牛に強い恋慕を抱いたパシパエは、牝牛の像に入ってまぐわい、そして一体の化け物を産むとその影響で死んでしまう。
それこそがミノタウロス。パシパエやミノス王は知らなくても、ミノタウロスの名前は聞いたことがあるほどの有名な魔獣。その原初こそが彼女の子供である。
それに由来するパシパエの宝具。それこそが、対獣宝具、雷光宿す異種との交合（バース・オブ・アステリオス）。
獣の遺伝子を取り込むことにより、”父親”の影響を色濃く受け継いだ子供を生み出す宝具。
更に彼女の場合、悪魔となったことで更なる強化が果たされている。
元々パシパエは太陽神ヘリオスと女神同然のニンフであるオケアニデスの一人が生んだとされる女であり、それゆえに絶大な神霊適性を持つ。更に悪魔として生まれ、更に悪魔の駒で強化された結果、生前を超える肉体性能を会得している。
ここにミザリの持つ幽世の聖杯がかみ合った結果、本来なら命に係わる負荷を乗り越えることに成功し、必ず最上級悪魔クラスの異形を産みだすことを可能にした。
そしてそんな彼女が、フェンリルに比べれば劣るとはいえ、神殺しすらなせる獣を”父親”として子供を産めばどうなるか。
名づけられたフローズヴィトニルにという魔獣は、スコルとハティに匹敵する性能を獲得している。
更に知能も獣としては非常に高く、彼らはうかつな真似をしない。
相手の隙をついた不意打ちや、心身が弱ってきた者を確実に殺していくことで、アグレアス防衛側の士気と数を堅実に減らしていく。

圧倒的な機動力で潜む伏兵に、確実に防衛側が減らされていく。
そして、戦闘は更に激化していく。

冥革動乱編　第五十三話　大艦巨砲主義はジャスティス

Other Side

「創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星」
そして、アルバートもまた、更なる兵器の星を開帳する。
「駆動モードを巡行モードから戦闘モードに変更。星辰体との感応出力の発動移行を確認」
星辰光の発動を展開する中、その大型機を中心にして、世界が塗り替わっていく。
「星辰体感応及び、各種駆動システム、兵装システムとの同調成功。システムの最終チェックを完了する」
その途端、大型機は俊敏な動きを体現する。
「影響範囲拡散、空間補助付属、空域安定維持」
一部の者は既に気づいていた。
変化していく空間そのもの。ほのかな燐光を浮かべる地域一帯が、超大型機を機敏に動かす為の補正具なのだと。
「全行程の安定化成功。これより戦闘を開始する」
今ここに、超大型騎乗型人造惑星、ギガンティスサリュートが戦闘を開始する。
「超新星（メタルノヴア）――人造巨星（アストラル・ギガントマキア）が蹂躙、星を薙げ」
今ここに、世界はギガンティスサリュートの為に存在する。
「集中砲火だ、放てぇぇぇぇぇ！」
『『『

全員が魔力の高さを中心に選ばれた者であり、その火力は総合でなら龍王クラスにも届くだろう。
だがしかし、ギガンティスサリュートはそれを上体そらしで回避する。
あまりに機敏なその対応に、呆気にとられた最上級悪魔達に、ギガンティスサリュートは両手を向ける。
その指先から粒子の輝きを察知して、慌てて彼らは散開。その瞬間、大量の破壊力の塊が嵐のように放たれる。
その砲弾は疑似反物質粒子アザトース。当たれば上級悪魔ですら深手を負うだろう砲撃を、すべての指先から放つことで秒間数十発の砲撃を叩き込む。
その攻撃力に仕掛けようとした悪魔達が気圧されるが、それがいけなかった。
「はいファイヤー！」
アルバートは素早く機体を操作して、両肩に格納された対空ミサイルを一斉発射。
それに気を取られた隙をつき、更に脹脛に内蔵された多目的ミサイルを、アグレアス・ドームに向けて発射する。
更に迎撃の為に動いた敵を狙い、起き上がりざまに頭部に格納されたガトリングガンが火を噴いた。
放たれる多重砲火に、巨体からは想像もできない軽快な機動。
これにより、最上級悪魔とその眷属が翻弄され圧倒される。
更に放たれる砲撃により、このままならばアグレアスの都市部は破壊され―

『『タイクウレッシャー』』
『グスタフレッシャー』
『『ミサイルレッシャー』』

―そんな音声と共に、放たれるミサイルが撃ち落とされながら、多数のミサイルと砲撃がギガンティスサリュートに襲い掛かる。
「おっと！」
アルバートは軽快な動作でそれを避けるが、しかし更なる攻撃もあり、そちらに注力せざるを得なくなる。
その隙に体勢を立て直した悪魔達はその援軍を視認する。
「……あれはなんだ？」
「……龍？」
「……魔獣？」
「いや……」
そしてその姿を確認して、面食らった。
『『『『『『『『『……列車ぁあああああああっ!?』』』』』』』』』
更に驚愕はそこにとどまらない。
追いかけるように飛翔して変形するは、緊急展開用ＤＦ、Ｄ―ウイング。
京都で戦闘した試験生産期ＤＰ―ウイングから得られたデータで急ピッチで開発が進められていた最新鋭機。
これまでのＤＦに比べると一回り以上大型なのは、必要とする性能を持ったうえで兵器としての信頼性を両立するため。
ＤＰ―ウイングは機体サイズを他機種に近づける為に無理をしていたが、実戦データを会得したことで大丈夫と判断されたが故の、割り切った設計が具現化する。
更にアグレアスの各部から、それとは別に全体的に無骨な外観の新型ＤＦが姿を現す。
『ＤＰ―フォートレス中隊、これより戦闘を開始する』
『同じくＤ―フォートレス試験中隊、味方の援護を開始する！』
現れたのは、拠点防衛用ＤＦとして開発されていたＤ―フォートレスと、試作型のＤＰ―フォートレス。

ウイングと同様の理由で無理な小型化を進めたＤＰ―フォートレスだが、それでも高い性能を持つことに変わりはない。ましてそこから見直されたＤ―フォートレスは、防衛戦に限定すれば上級悪魔の中でも上位よりの性能を発揮できる。

そして機動特急アントニオンの内部で、リーネスは苛立たし気に貧乏ゆすりをしていた。

「カズヒも和地も消息不明。それも冥革連合（ヴィール）が動いている以上、間違いなく成田春菜もいる。……ああもぉ！　リアス部長達の方だって大変だっていうのにどこもかしこも！」

『落ち着いてください……とは言いませんが、荒い判断を成されない様お気を付けください。キュウタ、フォローをしっかりお願いします』

「あいよ。そっちも避難誘導よろしくな」

キュウタが避難誘導を行っているリーネスと少なく言葉を交わしている間に、リーネスも思考を何とか切り替える。

「とりあえず、あれの相手はアントニオン（私達）よぉ。牽制しつつデータを回収して、後に生かしながら今を守る。まずはそこからねぇ」

そう、リーネスはもちろん分かっている。

戦闘はまだ序盤であり、しかし敵も味方も手札をためらうことなく切る。

それほどまでにレーティングゲームの聖地たるアグレアスに、各勢力の重鎮がいるという事実は重いのだ。

故に、戦いは膠着状態に突入する。

敵味方が共に新兵器を送り込んだことで、そのデータをとることも重要になった為だ。

……ゆえに、その決着は別の形が重視される。

ヴィール・アガレス・サタンを、グレモリーとバアルの眷属が白龍皇の助力込みでとはいえ打倒できるか。
すべては、まさにそこにかかっている……と思われた。

「……ふぅむ。旧魔王派の連中や冥革連合も中々やるのぉ」
「同感だな、団長。……で、どうする？」
「どうするもこうするもなかろう。今後を踏まえると、今ここで妾達が出張るわけにはいかんだろうて。そうは思わぬのか、ブレイ」
「まあそうなんだが。アーネの奴が相当しょげててな。暴走しないといいんだがという話だ」
「……ベルナ・ガルアルエルは抜けるということか」
「メールが来たそうだ。事実上の絶縁状だな」
「はっはっは！　まぁあれは後継私掠（我々）船団とは合わんだろうしな。姉馬鹿が過ぎてその辺り、目が曇っておったようだしのぉ」
「それとなく指摘しても気づいてなかったしな。聖継娼婦（シャムハト・セカンド）らしくもない話だが」
「身内は別腹になりやすいものだろうて。……まぁ、今回は様子見といこうではないか」
「……そうだな。それに俺としても、今後は予定通りの方が都合がいい」
「まったくじゃ。……六道入道（マサムネ・ジュニア）としては、奴を師と仰げるに越したことはなかろう？」
「ああ。ぜひあいつの元で学びたい。その為にも、ぜひ生き残ってもらわないと……な」

「いやぁ、中々どこも白熱している感じだね。ここで見てるだけっていうのがちょっともどかしいよ」
「……ふ～ん。ま、ヴィールきゅん達があそこを奪った方がいいかって気持ちは分かるけど、大盤振る舞いするじゃねえかマイサン」
「あ、父さん。珍しいね、父さんがこっちに来るなんて」
「ま～ね～。俺は禍の団の理想とかシャルバきゅん達みたいな魔王の座奪取なんていう価値観には興味ないし～？」
「退廃的にちょくちょく悪事をやって暇を潰すのが父さんだしね。……でも、もっと楽しめることを探した方がいいんじゃない？　生きてて楽しくないでしょ？」
「いやホントその通り。ソファーで暇潰しに悪行しながらワイン飲む生活も飽きててねぇ～。……だからこそ、ちょっとばかし俺も動きたい感じかな？」
「……へぇ。あの時の僕みたいに、スイッチが入ってる感じだね」
「ちょっと違うって。お前が僕の息子になる前の自覚スイッチと、俺のやる気スイッチはまた別もんだよ。ま、やりたいことが燃え上がってる感じだけどさ」
「ま、人生に生きがいがあるのは良いことさ。ただ成り立てってどうしても足元見落とすから、もうちょっと慎重に動いた方がいいと思うよ？　長く太く楽しめるに越したことはないじゃん」
「う～ん。お前と違って俺、楽しみの為に楽しくない準備期間作るぐらいなら、準備も楽しくエンジョイしながらやりたいタイプなんだよね～」
「まぁ、そういうタイプの言い分も分かるけど、あんまり八茶けすぎない方がいいと思うよ？　せめて足場を固めるまでは慎重に行かないと」
「あ、そっちは大丈夫。ちょっと欲しくて研究したいものがあってさ

？　潜伏するには都合がいいし、ゲットするまでは色々手間がかかりそうだから、もうちょっと時間かかるかな？」
「へぇ～。ちょっと気になるけど、どんなものなんだい、父さん」

「ハーフヴァンパイア、それも王族に神滅具が宿ったなんて言う、ヴァーリ（俺の孫）みたいなやつなんだよ、叔父さんとしてはどう思う、ミザリ・ルシファー？」
「……なるほどなるほど。それは色々と悲劇を引き起こせそうで、すっごく応援してるよ。お爺ちゃんとしてもやりがいがありそうだね、リゼヴィム・リヴァン・ルシファー？」

冥革動乱編　第五十四話　鮮血の聖別洗礼

イッセーＳｉｄｅ

外も結構やばいことになってるな。
だけど、俺達が気にするべきなのは目の前だ。なんたって、こいつらを引かせれば禍の団も退くんだからな。
冥革連合盟主、ヴィール・アガレス・サタン。
折角のサイラオーグさんとの戦い。それを最後の最後で邪魔しやがって……許さねえ。
この試合を楽しみにしてくれた、冥界の子供達も怖がってるだろうし、尚更許せねえ。
俺達の、部長の、仲間達の。この全力で臨んだ試合に泥を塗ってくれた礼は、しっかりしてやらなきゃ気が済まないんだよ！
「……兵藤一誠。龍の戦いは基本一騎打ちだからね。できれば譲ってほしいんだけど」
「それは出来んな。この戦い、試合を汚された俺達が糺すべきだろう」
ヴァーリとサイラオーグさんが一歩前に出て構えるけど、俺だって我慢できないんだよ。
「そういうわけにはいかねえよ、ヴァーリ。俺もサイラオーグさんも、ここまでされて黙っていられるわけがないんだからな」
ああ、だから―
「……いいから三人まとめてかかってこい。まさか三人がかり程度で、今の俺を倒せるとでも思っているのか？」
―ヴィールの声が、俺の思考が真っ白になりかけた。
や、野郎……っ
俺達が一斉に睨み付けると、ヴィールは服のボタンをはずすと胸元を見せる。
そこには魔法陣が描かれていて、僅かに光っていた。

「真魔の駒は封じている。その上で断言しよう」
そして体の調子を確かめるように軽く振りながら、一歩一歩前に足を踏み出した。
「……先ほどの試合が全力中の全力ならば、お前達は俺一人に手も足も出ないと知るがいい」
そういう也、ヴィールは一歩踏み込んで―
「こんな風にな」
―消えたと思った時、ヴィールは俺達三人を通り越して、黒歌の前にいた。
「は―」
「まず一人」
そんな気の抜けた声が聞こえたと思った瞬間、黒歌の姿が掻き消えた。
そして数百メートルどころか、数キロは離れてるだろうところで土煙が上がる。
十秒近く、音が聞こえてくるまで俺達は反応できなかった。
「ヴィール……貴様ぁ！」
激高したヴァーリがめちゃくちゃ密度の高い魔力の塊を放つけど、ヴィールは腕の一振りで受け流す。
弾き飛ばすのでも受け止めるのでもない。最小限の力で受け流し、更に黒歌の方に魔力を当てやがった。
こいつ、本当に……強い！
俺が戦慄していると、ヴァーリは更にブチぎれ、全身からオーラを放つ。
「貴様……ぁっ！　俺の仲間を、俺の力で―」
「やかましい」
その瞬間、ヴィールの抜き手がヴァーリに叩き込まれる。
性格に鎧の隙間をぬってつき抜かれた抜き手が、ヴァーリを１００メートルは吹っ飛ばした。
くそ、こいつ速い！
「いいからさっさと本気を出せ。今俺達は殺し合いのしているのだ。

油断して逆転の芽を潰される貴様らが間抜けなだけだぞ？」
「いい……度胸だ！　禁手変性（バランス・チェンジ）！」
とたんにヴァーリは鎧を変えて、真っ向からの殴り合いを仕掛ける。
そして俺達だって出張るんだよ！
サイラオーグさんも駆け出しながら、レグルスの方を振り向いた。
「レグルス！　あれを使うぞ！」
『承知！』
レグルスが黄金の光になると、そのままサイラオーグさんに飛んでいき、サイラオーグさんが全身に黄金の鎧を身に纏った。
「禁手化（バランス・ブレイク）ううううっ!!」
そして振るわれる拳が、ヴァーリの攻撃をいなすヴィールの髪を散らした。
すげえ。あんな力を、サイラオーグさんは隠してたってのか！
「ほぉ？　それを真っ先に使っていれば、勝ちはお前のものだったと思うがな」
「この力は冥界を守る為に使うべきもの。だからこそ、貴様にこの獅子王の剛皮（レグルス・レイ・レザーレックス）を使うことにためらいはない！」
二人がかりの猛攻になるけど、俺だって負けてられねえ！
「……部長、シャルロット！」
「そうね。遠慮する理由はないわ！」
「真っ向から挑みましょう！」
二人の猛攻は間違いなく激しくて、はっきり言って三叉成駒じゃ勝てないと思う。
だからこそ、三人がかりの覇龍を使うこともためらわない！
こっちは何とかやってやるさ。
……だから、先生は外の方をお願いします!!

アザゼルＳｉｄｅ

本当にやってくれるぜ、連中もなぁ！
何とか新型のＤＦや緊急展開部隊で拮抗常態に持ち込んでるが、流石に激戦意外に何物でもねえな。
イッセー達はイッセー達で苦戦しているし、ヴィールの野郎がここまでできるとはな。
……サイラオーグが既に禁手になっていたこともそうだが、そこにヴァーリの新禁手やイッセーの三人場降りをまとめて相手をして、よくしのいでいる。
攻撃を全部腕で凌いで、反撃を魔力でする割り切った戦闘。……というか、サイラオーグほどじゃねえがうっすらと闘気を纏ってやがる。
だが、この調子なら―
『ふむ、ではギアを一段上げるぞ』
―その瞬間、今度は全身を聖なるオーラが包みやがった。
その瞬間、全員悪魔であることもあって一気に戦闘はヴィール側に傾いていく。
っていうか、あれはまずいぞ！
「ガウド・ナミジン！　通信設備を俺に向けろ！」
「いいんですか総督殿！　いま、かなり本気で戦っているようですが―」
「いいから急げ！　イッセー達がやばい！」
俺は既に龍王の鎧を纏って暴れているが、まずはイッセー達の安全確保が先決だ。
数が全然違うから、こっちは少しぐらいは大丈夫だしな！
そして通信が繋がったんで、勢いよく息を吸い込んだ。
「気をつけろ三人とも！　ヴィールの奴、神滅具を持ってやがる！」

『えええええええ!?　ヴィールって純血悪魔じゃなかったんですか!?』

まあびっくりするだろうが、これに関しちゃすぐ分かるからな。

「神器の中には既に生きている宿主を渡り歩くレアケースがたまにあるんだ！　そいつが持ってるのはその類だ！」

ああ全く。そういうのがたまにあるから厄介なんだよ。

例えば紫炎祭主の磔台もだ。あれは自らの意志で宿主を渡り歩き、宿主に合わせて紫炎の発動形式が色々と変わる。

例えば南空が再現するピエールの場合は紫炎の十字槍。俺がやりあってきた連中には、紫炎で出来た十字架を武器にする巨人を作るってのもあった。ミザリに至っちゃ紫炎の盾だしな。

そしてある意味、ヴィールが持っているのはそれと似通った多様性を誇る……否、それ以上だ。

「アドルフ・ヒトラーが保有した聖遺物系神滅具の一つ、神の子が処刑の際に零れ落とした血に由来する、個と質と深度に特化した神滅具……」

ったく。聖槍だけでも厄介だってのに、聖血すらもテロリストにとはな！

「鮮血の聖別洗礼（パプテマス・ブラッド）！　能力は独自の異能『神聖血脈』の発動と、聖なるオーラを司る『神聖存在』に自らを変質させることだ！　ヴィールはそいつ其の物が歩く聖遺物になったと考えろ！」

……本気でふざけた話じゃねえか。

何とかしのげよ、イッセー！

祐斗Ｓｉｄｅ

僕達は、ヴィール・アガレスの眷属の妨害を受け、ヴィール・アガレスと戦うイッセー君達に近づけなかった。
「悪いけど、僕達に付き合ってもらおうかな？」
「ふふ～ん！　あなた達ってみんな強いし強くなるから、割と本気で楽しみなのよね！」
双竜健也とクラウディーネ・ドゥルカンナインは、二人とも全身を鎧で包み、更に数をもってして僕達を包囲し制圧する。
青い鎧を身に着けた双竜健也は、全身から三つの羽がついたリングのような戦闘端末を射出。ガトリングガンのような連続射撃や、回転して切りかかる攻撃を、十二の端末が行うことで僕たちを近づけさせない。
更に鎧を纏った彼自身も強く、ロスヴァイセさんの魔法攻撃をことごとく回避。クイーシャ・アバドンの穴（ホール）を使って何とか数発当てても、ノックバックすらろくにない。
加えて一撃離脱で攻撃を仕掛けてくるけど、鎧による攻撃力はイッセー君の通常禁手を超えている。油断すれば一撃で吹き飛ばされるだろう。
氷で出来た鎧を纏うクラウディーネは、極寒の空間を作り出して僕達を苦しめる。
更に巨大な氷の槍を作り出し、朱乃さん達が迎撃に集中するほどの遠距離射撃をしてくる。それも、近接戦闘まで長けているうえでだ。
リーバン・クロセルの重力結界を受けてなお、機敏に動いて僕の竜騎士が仕掛ける包囲攻撃をしのぐ彼女は、圧倒的な攻撃力だ。
これほどとは……だけど！
「いい加減にしてもらいましょうか？」
「まったくだ。覚悟しやがれぃ！」
そう、幸い僕達は僕達だけではない。
コールブランドを構えたアーサーが双竜健也に切りかかり、美猴もまた、分身を大量に作ってクラウディーネを圧殺しにかかる。
ヴァーリチームも黒歌をやられたことで相当不快感を抱いている

ようだ。既に黒歌はアーシアさんが癒したとはいえ、かなり戦意が高まっている。
そして僕達も、いい加減二人の攻撃に慣れてきた。
そろそろ、反撃といかせてもらおうか。そう思ったその瞬間だった。
「……なるほど。どうやら思った以上に底力があるようだ。二人とも、一段上げるぞ」
「了解です」
ヴィールの指示に合わせて、ヴィールを含めた三人から、更なる戦意があふれ出る。
……どうやら、彼らもまだまだできるということか！
「「血脈、覚醒……っ！」」
その瞬間、彼らから赤い血のような力の粒子が沸き上がった。
……本気が来ると、言うことか！

「……どうやら、こちらにおいては間に合ったようだな」
……この声は!?
敵を警戒して後ろを振り返らないようにしている中、僕達に並び立つ者達が何人も現れる。
「……無事なようで何よりだ。さぁ、反撃といこうか」
「同意見だ。あまり好き勝手に暴れられても、こちらが困るのでな」
リュシオン・オクトーバーに、フロンズ・フィーニクス……！
ここで、これだけの増援が来てくれるとはね……っ！
だが、それに対してヴィール・アガレスは静かに目を細める。
「いいだろう。なら更にギアを一段上げるとしよう」
そう告げながら、彼の腕につけられた腕輪が輝き―
「創生せよ、天に描いた星辰を―――我らは煌めく流れ星」
―更に、此処で星辰光を使うというのか!?

冥革動乱編　第五十五話　猛攻の星辰

祐斗Ｓｉｄｅ

冥革連合の悪魔達が突貫の態勢をとる中、リュシオン・オクトーバーはイッセー君達と戦いながら星を明かそうとするヴィールに突撃していく。

普通に考えれば、ここでリュシオンさんすら参加したのならヴィールも勝ち目は薄いだろう。

だが、次の瞬間生まれる現象が、その甘い目測を吹き飛ばす。

「恐れるがいい老害共よ。革命の炎は汝らを焼き尽くし、その果てに悪魔（彼ら）は昇華される」

ヴィールの動きは急に悪くなり、リュシオンさんの動きは恐ろしいほどに速くなる。

だが、更に迫りくるイッセー君達の猛攻すら含めて、ヴィール・アガレスは圧倒的な数の暴力で迎撃しきる。

「そして我らが敗北を踏み台として、新たなる世は訪れるのだ。栄光を磨かぬ怠惰の罪は、斬首によって禊とせよ」

数が多い。それは、文字通りの意味で驚異になる。

そう、ヴィールは数が多くなった。それこそ、十人近い人数に増えて、四方八方から攻撃を叩き込んできている。

「無知蒙昧たる愚者共に、勝利の栄光は訪れない。鍛錬精進研鑽などは、最低限の下準備。大いなる力を手に宿さんとする研究と改良こそが、覇道をなす礎となる」

分身そのものは、本体よりも脆いようだ。魔力も結果として弱くなっており、それによって撃破されるのも数多い。

それに何故か戦闘に直接参加していないのに、消えていくものも見

えている。安定性に欠ける不安定な星の可能性すらある。
「故にこそ、怠惰を広める愚者に死を。我が命捧げる献身を、愚者の怠惰で汚させはせぬ」
だが、その瞬間にヴィールの動きは圧倒的に早くなる。
すべての攻撃をより素早く確実かつ余裕をもって、回避して反撃して迎撃する。
「先に行く者達の辞書から、不可能の文字を消す為に。我らの命を捧げる御恩をもって、勝利を掴む奉公に繋げん」
僅か一分足らずの攻防で、ヴィールはすべての攻撃を捌き切ってカウンターすら叩き込む。
「超新星（メタルノヴァ）――神聖魔王（ディアボロス）が化身、覇道（ポナパルト）を成せ!!」
その瞬間、ヴィール・アガレスはイッセー君の鎧を拳で突き破る。
「……っ」
「悪いが赤龍帝、今は貴様が一番崩しやすい。……致命傷は避ける。その力、磨き高めて冥界を担う者達を守る為に使うといい」
崩れ落ちるイッセー君が、頭を強く強打しないようにそっと倒れ方を調整する。
サイラオーグ氏を、リュシオンさんを、ヴァーリ・ルシファー。
その猛攻をすべて捌きながら、その絶大な星が僕達の心に楔を打ち込んだ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

信じられないものを、ヴァーリ・ルシファーは見た。
あのリュシオン・オクトーバーの星を、敬意すら覚えるサイラオーグ・バアルの拳を。そして未来永劫最強の白龍皇になるとまでアザゼ

ルに言わしめた、空前絶後たるこのヴァーリ・ルシファーを。
その猛攻に逆に有利な体制を示しながら、ヴィールは兵藤一誠を一瞬で鎮圧した。
「……なんだ、この強さは……っ！」
「まだこんなものではない。血脈を見せてやろう……っ！」
歯噛みしたその瞬間、ヴィールの戦闘能力が数段跳ね上がる。
拳の威力が、オーラの密度が、何よりすべての能力が、間違いなく跳ね上がった。
ギアを無理にでも強引に上げるが、それでも迎撃が追い付かない。
すべての攻撃に対応を挟み込んでいる者すら、リュシオンだけという状態だ。自分とサイラオーグに至っては、鎧が凄まじい速度で破壊されていく。
むしろ迎撃を間に合わせているリュシオンに戦慄すら覚えてしまう。
この男、どこまで化け物だというのか……っ。
そしてそんなリュシオンをもってしても、迎撃を間に合わせるのが精一杯。
リュシオンが突入した少しの間はヴィールも動きが鈍っていたが、すぐにでもその低下を抑え込んでいるのが更に恐ろしい領域だ。
戦慄を覚えるこの猛攻に、ヴァーリは憧憬すら覚えていく。
だが、そんなことを言っている場合ではない。
気づけば、ヴィールはこちらの攻撃に全てカウンターで迎撃を成功させている。
あり得ないことだ。カウンター系の神器を禁手に至らせているならともかく、ヴィールは本人の技量と打撃によってカウンターを成立させている。
そういった異能を使って言うわけではないカウンターというものは、基本的に高騰技能だ。
相手が放った攻撃を、放った直後に見抜いて、最適な動作ですり抜けるようにして、自分の攻撃を叩き込む。それゆえに普通に打撃を与える以上の効果を発揮するが、同時にそこに必要な工程は難しい。根

幹的にテクニックタイプとして格上でなければ放つことができない高等技術。
それを、この猛攻ですべてにおいてカウンターを成立させている。
魔力攻撃をこちらの遠距離攻撃を捌くことに使っていることもあり、ヴィールの当てている攻撃はすべてが打撃攻撃だ。
それはすなわち、魔王と神滅具の競演である
ヴァーリ・ルシファー（自分）、打撃戦ならば自分を超えて獅子の神滅具を鎧としているサイラオーグ・バアル、そして異常というほかない精神によって肉体を使いこなすリュシオン・オクトーバーの三人がかりの猛攻を、一人で裁くだけの戦闘技術をヴィール・アガレス・サタンが持っていることを意味している。
「……ここまでとはね……っ！」
「だが、俺は負けん……っ！」
ヴァーリが唸るのに合わせるかのように、サイラオーグ・バアルは吠える。
カウンターの連打を意志力と頑健さで強引に突破しようとしながら、攻撃密度を高めることで何とか一撃を射れようとする。
全身を傷だらけにし、額から血を流しながら、それでもサイラオーグ・バアルは突貫する。
そこにあるのは驚異的なまでの勝利への執着。
勝ち負けを超える勢いで戦いを愉しむ自分とは異なる、強迫観念ともいえるその決意は、敬意を持つに値するだろう。
リュシオン・オクトーバーの異常というほかない精神に比べれば真っ当だが、真っ当だから弱いというわけでは断じてない。
敬意を覚えるほどのその猛攻を前に、ヴィールはしかし冷静に分身による包囲戦闘を自身のカウンターを叩き付けながら、ちらりと視線を向ける。
「……やはり、お前は本当に無能で無意味なやつだな」
そう、はっきりと吐き捨てる。
それに対して不快感を、サイラオーグ・バアルは示さなかった。
だが、ヴァーリとしては不快感を感じるほかない。

「言ってくれるね。見る目がないのはどちらだという？」
不愉快なことをいくつも見せているが、いい加減一言言っていた方がいいだろう。
振るわれる攻撃の密度にずれを産むことで、牽制を仕掛けるように攻撃を叩き込む。
「これだけの拳を、これだけの武威を、無能と……無意味と本気で言えるのなら―」
「阿呆が、そんな次元の話じゃねえよ」
その全ての攻撃をすり抜け、ヴィールの肘がヴァーリのみぞおちに叩き込まれる。
その直後、肘を基点に絶大な魔力がヴァーリを貫いた。
致命傷に限りなく近い一撃を食らい、ヴァーリは動きが一瞬止まる。
即死はしない。だが戦闘継続は不可能に近く、更に治療をしなければ確実に死ぬ。
そしてアーシア・アルジェントがいる状況下で、即座の回復を許すほど相手は甘くなく―
「すっこんでろ阿呆が。遠くで寝てろ」
―素早く救い上げるような回し蹴りで、ヴァーリは数百メートルの彼方へと吹き飛ばされた。

祐斗Ｓｉｄｅ

あの、ヴァーリ・ルシファーをああも簡単に……っ！
いくらなんでもあり得ない。というよりも、さっきから急激にヴィールが有利に立ち回り続けている。

こんなわずかな時間で、そこまで急激に成長できるのか？　僕達グレモリー眷属も成長率では著しいが、それにしたって有利になりすぎている！
「……まず確実に無能を潰すか。……戦術を変えるぞ、クラウディーネも健也も、本格的に血脈を使え」
「了解」
更に、ヴィールの眷属も本格的に戦線を動かし始める。
赤いオーラに包まれた双竜健也は、一秒に何発もの絶大な魔力を砲撃で叩き込み、宣戦をかき回している。
一発一発の破壊力は、今の部長なら上回るだろう。だが秒間数発も連射するという条件化なら、リアス部長でもすぐにガス欠になっているだろうレベルだ。
「イッセー、イッセー起きて！」
そしてイッセー君を庇いながらの部長は、必要不可欠な迎撃だけにとどめているけど消耗が激しい。
更に回復の基点となるアーシアさんや、増援に来てくれたデビルレイダー部隊にデュナミス聖騎士団も苦戦している。
その理由は、クラウディーネ・ドゥルカンナインが出現させる氷の兵士達。
まるで血を凍らせたかのようなその兵士達は、既に三桁後半に届く数で戦略的に仕掛けてきており、こちらの連携を阻害していく。
連続砲撃と人海戦術。砲撃と兵士の海により、僕達を圧殺するように仕掛けてきている。
そしてそれを全面的に使ったうえで、更にヴィール・アガレスが連れてきた上級悪魔達が、リュシオンさんを包囲して制圧を目論んでいく。
「うかつに接近せず遠距離から抑え込んでおけ。奴の星辰光は接近戦には鬼門だ」
「……気づいたのかっ」
リュシオンさんが警戒の色を濃くするけど、ヴィールは彼の星辰光に気づいているのか？

かつてツヴァイハーケンの武将型アステロイドとも渡り合った彼の星辰光。相当強力なものだと思うけれど、見抜いているのか？
ヴィールは呆れているのか感心しているのか分からない表情で、リュシオンを一瞬だけ見つめていた。
だがすぐに、ヴィールはサイラオーグ氏に向き直る。
「いい機会だ。貴様がどこまで無能で無意味なことをしているか、その体に叩き込んでやる。……かかってこい、一対一（サシ）だ」
「……いいだろう。その勝負、受けて立つ」
静かに、だけどオーラを纏って一歩を踏み出すヴィールに、サイラオーグ氏は闘気を纏って突貫する。
……だが危険だ。
この戦い、油断すれば……負ける！

冥革動乱編　第五十六話　なぜサイラオーグは無能なのか

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「無能で無意味なサイラオーグ。今のお前は冥界の毒になる」
「貴様が言うか、冥革連合……っ！」
怒りが籠った返答と共に、放たれる拳を最小限の動きで躱してヴィールはサイラオーグに拳を叩き込む。
今のままならまず負けない一対一だが、決してなめてかかれるわけではない。それぐらいには、サイラオーグ・バアルは脅威だと、ヴィール・アガレス・サタンは重々理解している。
何故ならば、彼の一撃は間違いなくこちらに届くのだから。
「言っておくが、お前はたぶん勘違いしているぞ？」
最小限の動きで躱して捌き、ヴィールはサイラオーグに攻撃を叩き込んでいく。
はたから見れば容易くやっているように見えるほど、流れるようなその動きに無駄はない。
最小限の力で十分な余力を残しながら、ヴィールはサイラオーグを一方的に殴り続ける。
それでいながら気圧されることなく、反撃を振るっていくサイラオーグは、決して弱い男ではない。心身の強靭さで言うならむしろ真逆だろう。
「お前は確かに優れた戦闘能力を持っている。また上級悪魔でありながら魔力を欠片も持たないという、本来なら性格が歪んでいるだろうデメリットを持ちながら、肉体を鍛え上げてきた精神も確かに強靭

だ。それは認めてやる」
ヴィールもそこは認めている。
認めているからこそ、うかつな手だけは打たない。
必要な部分は慎重に。かつ有効な時は大胆に。それによって堅実かつ迅速に、サイラオーグを削っていく。
「貴様は優れた戦士だ。獅子の鎧と共にならば、いずれ必ず魔王に匹敵する戦闘能力を会得するだろう。むしろ超えるかもな」
「そうだ！　そして俺は必ず夢を掴む！」
反撃のカウンターを嵐のように浴びながら、サイラオーグは突貫する。
「誰もが、それに見合った力を持つのなら！　必ず見合った地位につける冥界を！　母上に恥じぬ冥界を、俺のような者が生まれぬ冥界を！　俺は必ず作って見せる！」
「……だからだよ、馬鹿が」
それを狙いすましたように、自分でも称賛するほどの拳をヴィールはサイラオーグに叩き込んだ。
衝撃で強引にのけぞったサイラオーグに、ヴィールは一歩前を踏み出す。
そして聖と魔を融合させたオーラを全力で纏い、渾身の頭突きを叩き込む。
「てめえのっ、間抜けなっ、頭にもっ！　分かるように訊いてやるから答えてみなぁ！」
三連続で頭突きを叩き込み、更にボディブローを叩き込んでから、ヴィールはサイラオーグに詰問する。
「……だったらなんで、大王派に潰す前から伝えてんだ、あ？」
本心から、ヴィールはそれが分からない。
そしてなんでそんなことを聞くのか分からないと、サイラオーグの表情が物語っている。
「おのれの夢を、隠す必要がどこにある！　夢を掲げて示さずに、どうして民がついてくるというのだ！」
だからこその反論に、ヴィールは冷めた目を向けるほかない。

本心から思える。
こいつはダメだ。
「だからお前は無能で無意味なんだ、間抜け！」
はっきりと、誰の耳にも聞こえるように宣言する。
「あの連中がそんな夢を応援すると思うか？　お前を後援する大王派の大半は、お前を利用して魔王派に目にもの見せたいだけだと、まさか本気で分かってないのか？」
「分かっているとも。だが例えそうであろうと、上に上る為のパイプを掴む必要があるのなら―」
「それがまず論外なんだよ、間抜け！」
話を聞く勝ちすらないと、ヴィールはその口に拳を突き入れた。
反撃の攻撃を右手以外で捌きながら、ヴィールは翼で己を支えることで、サイラオーグを持ちあげる。
そして真っ直ぐに目を見たうえで、サイラオーグを否定した。
「自分の夢を応援するわけでもなければ、相互利益を得ようとするわけでもない。ただ利用して甘い蜜を吸うことだけ考える屑共の手を取って夢を叶えるぅ？　それが無能で無意味だと、俺は言ってるんだよ、馬鹿が」
まったくもって理解ができない。
「……大王派に取り入って真逆の夢を叶えるなら、まず知られねえように隠せよなぁ！」
そしてその瞬間、サイラオーグの口の中にオーラの攻撃を叩き込む。
聖と魔が入り混じったオーラの一撃を喰らい、サイラオーグの動きが一瞬だが確実に怯む。
そして畳みかけるように、攻撃と口撃を放っていく。
「何故、態々消滅を継いだ弟から次期大王の座を奪う!?　奴らのプライドを踏みつけるだけだろうが！」
一撃
「何故、大王派の連中が嫌うような夢を態々教える!?　挑む準備をし終えてもないのに、妨害させて何になるという!?」

一撃

「何故、大王派の連中のスタンスを肯定しない!? 相手から利益を得たいのなら、相手の弱みを握るか何かしらの益を与えるだろうが、普通!」

一撃

「何故、見下し毛嫌いされる自分を卑下し、魔力を持つ貴族達にへりくだらない!? 奴らに恩恵を与えてもらいたいなら、奴らが喜ぶような自分を見せつけろ!」

一撃を放ち、そしてヴィールは肩をすくめる。

「大王派で真逆(そんな)の夢を叶えようっていうなら、それが最低条件だろうが、あぁん!?」

そして投げ飛ばし、更なる攻撃を叩き込む。

「大王派の連中から多くの支援を受け取りたいなら、奴らの機嫌を伺えよ! 実の弟に土下座して「自分は腕力だけですから、魔力を生まれ持っているあなた方の下僕として、偉大にして崇高たる方の敵を滅ぼすために全てを捧げます」と、靴を舐めながらへりくだって、屑をおだててていい気分にさせろよなぁ!?」

「何を……ふざけている!」

激高するサイラオーグは、強引に突貫して反撃を試みる。

「掲げる夢を踏みつけにさせて、へらへら笑っておきながら、どうして夢を叶えられるという!」

「馬鹿が! 自分の夢に泥を塗り、唾を吐きつけてるのはそっちの方だ!」

振るわれる拳に拳を叩き付け、ヴィールはサイラオーグの反論を真正面から粉砕する。

そしてそのまま流れるように、拳の猛攻を叩き付けた。

「邪魔して馬鹿にして愚弄するだろう連中の支援を得ようとしながら、何故そんな奴らの前で夢を語る! 何故夢を虐げ踏みにじるような連中に、邪魔しやすいような夢を語る! 「こんな嫌なことをするから妨害してください」と、自分から自分の夢が敵わない様にしておいて、偉そうに講釈を垂れるんじゃねえ!」

すべての攻撃を攻撃で打ち砕き、ヴィールは全力でサイラオーグを否定する。
「夢を本気で叶える気がないから、そんなことをしているんだろうが。臥薪嘗胆という言葉を知らんのか、この阿呆がぁ！」
本気の怒りを込めた拳は、サイラオーグの矜持を圧倒してすべての攻撃で攻撃ごとサイラオーグを打ち抜いた。
「何故お前は夢を叶える為の行動をしない!?」
全力の拳の応酬は、すべてが怒りをもってサイラオーグに叩き付けられる。
「何故、生まれ持った魔力と血統を誇る悪魔に尽くす為だけに己の武力と器量があると思わせて油断を誘わなかった!? 何故、自分達に都合のいい存在と思わせることで奴らの弱みとなる情報を調べられる位置に潜り込まなかった!? 何故大王派の連中からすべて絞りつくしてから投げ捨てられるように、逆らおうとすら思えないように心をへし折り脅さなかった!?」
殴り殴り殴り、そして問うて問うて問い質す。
「何故、自分よりすべてが劣る弟を称え下僕のように尽くしつつ、その隙をついて魔王派が喜ぶようなバアル本家の弱みを探そうとしなかった!? 何故、自分の理想を応援する者が多いだろう魔王派に繋ぎを作り、大王派を完膚なきまでに潰す間者になろうとしなかった!? 何故己の夢を宣言するまでに、邪魔をする大王派のスキャンダルを集めに集めて同時に公表しなかった!?」
理解ができない。信じられない。まったくもって愚かしい。
そんな糾弾と共に、ヴィールはサイラオーグを殴り続ける。
「大王バアルに散々踏みにじられ、奴らが認めないだろう夢を叶えんとしてんなら、それぐらいの覚悟がいるだろうが！ お前の精神力と武芸があれば、奴隷のように尽くすふりをしつつ魔王派の連中と繋がれば、今頃お前の夢を邪魔する大王派（最大勢力）を、夢の宣言と共に一気に崩すこともできただろう！」
あまりに情けない。あまりに不甲斐ない。
「運よく巻き込まれた聖杯戦争と、同時期に得た鮮血の聖別洗礼（パプテマス・ブラッド）がス

タートダッシュを一気にかけたからとはいえ、僅か五年と少しで俺は冥革連合を決起させることができた。貴様ほどの才覚が真剣に夢を叶える手法を考えて、全力で奴らを利用しつつ魔王派と繋ぎをとれば、同じぐらい……長くとも十年……いや、もっと早く奴らを潰すこともできただろうに！」

連続の攻撃でよろけるサイラオーグの頭を掴み、ヴィールはサイラオーグを持ち上げる。

そこには怒りの感情がこれほどまでにといわんばかりに込められていた。

「いいか？　貴様は夢を叶えようなどとしていない。叶えようとしているつもりなら、それは自分を騙しているだけだと思い知れ」

その宣言に、サイラオーグの鎧となったレグルスから怒りを見せて睨み付ける。

『ふざけるなよ、サイラオーグ様がどれだけの覚悟をもって、奴らの前で夢を掲げたと―』

「だから夢を叶えようとしてないんだよ、馬鹿が」

その反論を、真っ向からヴィールは切り捨てる。

「本気で叶えるつもりなら、させるつもりがないと分かりきっている連中の前で準備もなしに夢を宣言しないだろう？　叩き潰す算段を整えて宣戦布告する以外に、そんなことを言う理由がないだろう？本気なら相手を上手く利用する為に隠すか、真っ向から叩き潰す宣戦布告として使うんだよ、馬ぁ鹿」

本心から罵倒したうえで、ヴィールはサイラオーグの目を真っ直ぐに見る。

「お前の掲げる夢など、嫌いなやつに勝てないと分かっている奴が「自分は決して屈してません」と自己弁護する為の下らん虚勢だ。足を引っ張るだけ引っ張って、本気で挑もうとしない臆病者の無意味なポーズだ。それを自覚もしてないから、俺はお前を無能だと言ってるんだよ、ボケが」

「俺が、本気でないだと……っ？」

腕を掴み、引きはがそうとしながらサイラオーグはヴィールを睨み

付ける。
　それに対して、ヴィールはため息すらつく余裕があった。
「まったくだ。自分の夢を裏で邪魔すると分かっておきながら、そんな連中の前で夢を語ったうえで後援者にする。自分の夢に自分で唾を吐きつけて、踏みにじっていると何故分からん」
　はっきりと、ヴィールは此処に宣言した。
「サイラオーグ・バアルは無能で無意味な男だ。この程度の身命を賭す覚悟持つ傑物なら十分できるだろう臥薪嘗胆如きもできず、下らん虚勢を張ることに全霊を尽くす阿呆などが、夢を叶えるなど千年早いっ!!」
　そして、ヴィール・アガレス・サタンは拳を握り締める。
　更にその拳は、一つの真魔の駒を握り締め―
「目を醒まさせてやるし真魔の駒（餞別）もくれてやる。性根を入れ替えて一から夢を掲げ直せ、この……大馬鹿野郎がぁっ！」
　―全身全霊の拳が、サイラオーグを真正面から打ち抜いて沈黙させた。

　軽く１００ｍは吹き飛ばされ沈黙するサイラオーグを一瞥し、ヴィールは少しだけため息をついた。
「……ぬかったな。地が出た」
「……なるほど。組織のトップとして口調を作ってるわけか」
　振るわれる攻撃に、ヴィールもまた迎撃で返す。
　そして反撃がすり抜けてこちらに打撃が届きかけ、ヴィールは瞬時に状態を逸らすと距離をとった。
　間違いない。変えている。
　それを悟り、ヴィールは素早く分身を差し向けながら、敵手を確認する。
「やはり貴様か、リュシオン・オクトーバー」

部下は決して弱くない。
自主鍛錬は欠かさず、才能も少なからずあり、それを王の駒や真魔の駒で強化している。
筆頭格は全員が最上級上位クラスの性能を持ち、それ以外も含めて技量とて年齢水準を遥かに超える。
それをもってしてなお、リュシオン・オクトーバーは突破してこちらに攻撃を叩き込んだ。
ならば―
「リュシオン・オクトーバーは一旦俺が相手をする。隊列を立て直せ」
『『『

防を繰り広げる。
「……やっぱり、君はそういうことか！」
「……多分だが当たりだよ、慣性制御能力者！」
お互いにお互いを察していたがゆえに、その言葉の応酬で隙は生まれない。
ゆえに、ヴィールは味方に伝える目的で種を明かす。
「リュシオン（貴様）の星辰光は既にツヴァイハーケンが幾つか仮説を立てていたが、自ら喰らって慣性制御だと確信できた。自分に使えば動作の機敏化や打撃力の強化に、他者に使えば動作の干渉で動きを阻害するといったところか」
「……さて、素直に語るほど間抜けじゃないけどね」
リュシオンはそう返すが、それが焼け石に水程度なのは自身も理解している。
ゆえにこそ―
「とはいえ、これ以上隠していても意味がない……か。創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌めく流れ星」
―遠慮する理由も欠片もない。

冥革動乱編　第五十七話　自覚無き傑物

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｕｄｅ

リュシオンは星を開帳し、そして突貫する。
「己が業を背負いて進め。万民の原罪を背負いし神の子に比べれば、なんと軽やかな責務だろう」
星の全力解放に伴い、ヴィールの動きはどうしても制約される。
「前を向け。足を動かせ。そしてなるべく真っ直ぐに。ただそれだけを成せばいいなど、どれだけ容易きことだろう」
どう足掻こうと、質量を持つ物体が動くにおいて慣性の法則は無視できない。
「そう、世界とはこれほどまでに分かりやすいのだ。それを悟れぬ者達に、行動をもって示したい」
高速で動く質量を持つ物体は、進行方向に向かって慣性が働く。それゆえに、動作の反転や急激な方向転換はその負荷や影響を受けてしまう。
「主の子が成し遂げしこの優しき世を、我らが背負いて続けよう」
増幅されれば慣性の影響は強くなり、軽減されれば弱くなる。物理的な影響を受ける戦闘軌道において、これの操作は絶大な影響を与える。
「歩み続けよ己が生を。それこそが救済を成し遂げる力なり！」
増幅は自身に使えば攻撃力の増加に繋がり、敵に使えば動作の阻害に繋がる。
軽減は敵に使えば攻撃力の低下に繋がり、自身に使えば動作の高速化に繋がる。
「超新星（メタルノヴァ）――聖人（ネバーエンド・デイアー＝ドロローサ）も人なれば、日進月歩に精進あるのみ！」

それこそが、リュシオン・オクトーバーの星辰光。慣性制御能力の本領発揮である。

リュシオン・オクトーバー

聖人（ネバーエンド・ディアー＝ドロローサ）も人なれば、日進月歩に精進あるのみ

基準値：B
発動値：AA
収束性：B
拡散性：D
操縦性：B
付属性：D
維持性：AA
干渉性：D

発動値に移行したことで、リュシオンが与える影響もリュシオン自身の身体能力も大幅に向上される。

だが同時に、この星は決して強い星というわけではない。

何故なら戦闘における慣性制御を生かすには、瞬間瞬間で最適な選択肢を複数同時にこなす必要があるのだ。操縦性が優秀とはいえ、当人の判断力が重要であることに変わりはない。

高い出力ゆえに数十分の一から十倍近くにまで跳ね上げられるということは、物理的な影響が大きくなるということでもある。

いくつもの動作が組み合わされる近接戦闘において、この操作を一瞬でも誤れば肉体にかかる悪影響は致命傷にすら繋がりかねない。

増減のタイミングを間違えれば、脱臼骨折どころか、戦闘速度次第では関節から肉体が引きちぎれかねない。
敵に対する干渉にしても、こちらはひとえに性能が足りていない。
拡散性・付属性・干渉性といった遠隔地の他者に異能を与える要素が尽く低い。これはすなわち「接近戦闘中に微弱な効果を適切な複数個所に設置する」という超絶技巧を必要とすることを意味する。
近距離で高速機動を行う相手に、微弱であっても有効になる最適な運用を必要とする。そんなことは並みの星辰奏者では断じて不可能。自身に対する適切な同時発動を併用するなど、人間としての性能が極まって高くなければ不可能だ。
まして、命を懸ける状況下でそれだけの行動を行うのには、判断力だけでなく胆力だって必須となる。
……その最適解を、リュシオン・オクトーバーはひき続ける。
自身の行動は機敏かつ重く、相手の行動は引きずられ軽くなる。星の全力解放により、リュシオンはその優勢環境を作り出す。
更に打撃を受けた武威にすら干渉することで、疑似的な発頸を叩き込むことにも成功している。
「恐るべしとはこのことか。常人のくびきから外れてなければ、ここまでの域には届かねえ……っ」
「見当違いなうえ口調もあれている。どうやら、意外と追い込めているようだね」
ヴィールに対し、リュシオンはそう断じる。
見当違いにもほどがある。それほどまでに目が曇っているのか。
攻撃・態度・言葉の全てをもってして、リュシオンはそう宣言する。
「俺がやっていることは決して異常なことじゃない。当たり前のことの繰り返しと蓄積だ。人より呑み込みが早くてコツを掴み易いことは認めるけど、そんなものは俺の本質じゃない」
リュシオンは拳を握り、更なる猛攻を加える。
「前を向いて常に自分を改善していく。ただそれだけの積み重ねが、人の本質と強さの根幹だ。この程度のこと、コツさえ掴めば誰でもできる」

「……俺の手法を捌いておきながら、それも誰でもできることだと？」
質問と共に振るわれた攻撃を、リュシオンは素早くいなし―
「当たり前だ！」
―その一撃をもって返答とする。

「……よぉく分かった。お前は俺より質が悪いな」

―そして、それすら受け止めヴィールは動く。
「馬鹿につける薬はねぇ。さっさとぶちのめすとするかぁっ！」
そして、戦いは更に激化する。

「……そう、馬鹿に付ける薬はない。いい答えだ」
その映像を、戦場の外側で優雅に見つめる者がいた。
彼はこの窮地において、ホットドッグとコーラをもって観戦する余裕を保っている。
禍の団の一員ではない。だが同時に、禍の団は現政権態とと防がせる目的以外で積極的な民間人の攻撃を行わないと理解していた。だからこその余裕だ。
冥革連合の目的は、いうなれば次の革命に繋げる為の先の革命を担うことだ。観戦する彼はそれを悟っている。
革命というものは、往々にして大きな流血が流れるものだ。そして

革命は急激な変革である為、当然だが反発も多く生まれる。
だがその反発を抑えながら、急激な改革を成し遂げたうえで安定させる方法もないわけではない。
そのうちの一つは、二つ目の革命を起こすことだ。
歴史上、革命といえる出来事の後に二回目の革命というべき次章が起こったケースはある。そして二回目の革命は、一回目よりその後が安定し易いのだ。
これはヘイトコントロールと言ってもいい。変えたいところの多くが最初の革命で起こってくれれば、二回目の革命では最小限の変化でとどめることができる為、反発も少なくなる。更に急激な変革につきものなヘイトなどは、一回目の者達が背負ってくれるのだ。行いたい変革の多くをさせて発生するヘイトの多くを背負わせることで、ヘイトを背負った先達を打倒した後進は、最小限の手間とヘイトで目論見を成せる。
そして冥革連合は、二回目の革命を自分質が起こされることを前提として活動している。最初から自分質を生贄に、冥界の未来を担う者質に託そうとしているのだ。
故に、冥革連合は禍の団と手を組んだ。その上で、自分質主導の作戦で冥界の民に積極的被害は強いない。
できる限り少なめの犠牲で、最大の変革と最多のヘイトを稼ぐ。それが冥革連合の作戦における勝利条件。自分達に都合のいい敗北を掴み取ることこそ、冥革連合の方針だ。
それを読み切っているからこそ、彼は自分達がいる空間が比較的安全だと理解している。
無論不測の事態は起こるものだが、ここまで安全性がある状況下で、万が一の可能性に振るえるようなら、敵地のど真ん中に潜入などしない。
ゆえに、彼は優雅にかつて存在しなかった美味をたしなむ。
自分のような者がこんなものをたしなむのもある種の問題ではあるが、擬態の為に平民の嗜好品を食す程度なら、まぁ言いくるめようはあるだろう。

「精々参考にさせてもらうよ。……そして」
冥革連合に聞こえるはずがない感想を告げながら、彼は映像を見る。
そこでヴィール・アガレス・サタンと一進一退の攻防を繰り広げるのは、リュシオン・オクトーバー。
神の子（ディ・ア・ド・ロ・ロー・サ）の後に続く者と称される彼の在り方を見て、男は内心でため息をつく。
「……哀れな男だ。いや、主は彼のようなものこそを人間としたかったのだとは思うのだがね」
惜しいと、素直にそう思う。
彼は間違いなく、枢機卿になれる可能性を持つ。もしかすれば、司祭枢機卿（ストラーダ）や助祭枢機卿（クリスタリディ）すら超える、司教枢機卿になりえるだろう。もし既に東洋人の教皇がいたのなら、教皇にすらなれるかもしれない。
だが、それは彼が自分を理解してこそだ。
自覚のない傑物とは、愚者にとって刺激が強すぎるものだ。デュナミス聖騎士団という傑物やそれに追随する者達の中では自覚が困難なのは当然だが、それにしても残念だ。
ヴィールもおそらく残念がっているだろう。彼は自ら一番目の革命者を担っているがゆえに、無自覚ゆえに一番目にならざるを得ない者は惜しいと感じるだろう。
そして―
「ちょうどいい。奴を出汁にすれば聖騎士団内部の愚者も引き込めるか」
―だからこそ、それを狙わない理由はない。
男は内心でほくそ笑みながら、コーラとホットドッグで舌鼓をうった。

冥革動乱編　第五十八話　外周戦闘（その２）

祐斗Ｓｉｄｅ

くっ！　状況はかなり悪い。
ヴィール・アガレス眷属が、たった四人の戦闘要員だけでゼファードル・グラシャラボラスを眷属ごと打倒したのは知っている。そして本気を出してなかったこともだ。
だが、ここまでとは思っていなかった……っ！
「部長、アーシアさん！　イッセー君の容態は⁉」
「ダメです、意識を取り戻してくれません！」
「肉体の負傷は治ったけれど、ここまで食らっていては……イッセー……っ」
部長とアーシアさんの二人がかりで、治療は出来ているようだ。
だけど、昏睡状態に追い込まれているのならすぐに戦線復帰することは……っ
咄嗟に飛びのけば、そこに並みの上級悪魔の全力に匹敵する攻撃が着弾する。
……どうやら、僕はかなり警戒されているようだね。
更に飛来する攻撃端末が、僕に対して包囲するように飛んでくる。
即座に聖剣の龍騎士を展開して迎撃するけど、一体一体の攻撃力と機動力は龍騎士を超えているのか、すぐに破壊されていく。
更に周囲の味方も、クラウディーネ・ドゥルカンナインが一撃離脱で叩き潰していく。
更に増援やリュディガー氏も、ヴィールの配下が抑え込んでいる。
……これは、本当にまずい……っ！
頼みの綱といえるなら、リュシオンさんがヴィールを打倒するながらだけれど、それも困難だ。

「……いい加減こちらも慣れてきたぞ？　再び読めてきたしなぁ！」
「安心してくれ。一度コツを掴んだのなら、すぐに対応すればいい！」
戦闘は一進一退だけれど、ヴィールが若干優勢だ。
まるで攻撃を前もって教えてもらっているかのようにカウンターを連打していくヴィールに、時々その流れを盛り返していくリュシオンさん。
どちらも神滅具の禁手を出していないが、このままだとヴィールが優勢のまま押し切れる。
まずいな、このままじゃぁ……押し切られる。
外の方は、決着がついてくれないか……っ

アザゼルＳｉｄｅ

「漸く見つけだぞ、この野郎！」
俺は何とかハヤテの奴を見つけて、龍王の鎧を身に着けて突撃する。
もちろんここにいるのは俺だけじゃねえ。
「……なるほど。当然だが、私を潰すのが戦術的に最も妥当ではあるな」
「そういうことだ。……私もレーティングゲームのプレイヤーとして腹が立っていてね。あの最高のゲームに水を差し、多くの民を苦しめている罪を償ってもらおう」
俺の隣にはディハウザーがいる。更にそれだけでもねえ。
「その通りだ。すまないが、君を打倒することがこの戦闘を終わらせる最適解ではあるのでね」

サーゼクスまでいるという大盤振る舞い。勝機は十分にあるはずだ。
とにもかくにも、今この戦闘で一番厄介なのはこの野郎だ。
千を超えるサリュートＩによる連携戦闘。数十体の魔王クラスを相手取れる以上、そんな数の圧殺をどうにかするのが一番大事なのは馬鹿でも分かる。星辰光で統合制御しているのなら尚更だ。
流石に星辰光の限界で、態々戦場に出てくるしかねえのは確実だ。でなけりゃ戦場に出てくるようなタマじゃねえのは既に確信しているしな。
つまり、こいつが潰せるのなら一気に形成をひっくり返せる。
だが―
「ディハウザー。手加減は無用だ、一気に決めるぞ！」
「それほどまでの相手と？」
サーゼクスにディハウザーがそう言うが、こればっかりは経験の問題だ。
「逆だ。こんなところに出張るのなら、こいつが備えをしてないわけがねぇって話だよ！」
だからこそ、俺も鎧を着て挑んでるんでな。
間違いなく野郎は何かを仕込んでいる。あの野郎はそういう奴だ。
「良い判断だ。なのでこちらも抜くとしよう」
『フォースライザー』
疾風殺戮フォースライザーを装着しながら、更に護衛のサリュートＩが防壁を展開する。
やっぱりこいつも変身するってわけか。で、何を―
『ＹＨＶＥ』
―おい、ちょっと待て。
「……変身」
『フォースライズ』
俺達が想像を絶するロストモデルに絶句した一瞬で、ハヤテは冷静に変身する。
展開される重装甲は、どこか神聖さが漂っている。だが同時に、ど

こか壊れているような外観をしていた。
……野郎、寄りにもよって飛んでもねえものを用意しやがった……っ！
「何を驚く？　我々が神々を神々として認めていないことは知っているだろう？」
首すら傾げながらハヤテは装甲越しにこっちを見る。
『Ｂｒｅａｋ　ｄｏｗｎ』
「……神といえるものなど既に存在しない。ならばそのロストモデルを利用して何かおかしなことがあるのかね？」
……名づけるなら、仮面ライダー疾風。
野郎、寄りにもよって聖書の神のロストモデルを組み込みやがった……っ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、ギガンティス・サリュートもまた、大いなる力を振るっていた。
それに対して遅滞戦術を敢行して時間を稼ぐのは、機動特急アントニオン、トレインモード。
人型機動兵器として戦闘を可能にすることは既に知られているが、それにとどまらないのがアントニオンの真骨頂。
そもそもアントニン・ドヴォルザークの力を借り受けることで初めて真の力を発揮できるアントニオンは、その性質上列車状態でも強大であることが前提となる。故に列車状態なら列車状態で渡り合える機能が満載されているのだ。

それこそが、エンチャントによって強化された随伴列車による拡張能力。
もともとアントニン・ドヴォルザークは、芸術家系サーヴァントが持っていることの多い、「何かを補強する」力を持つ。
それこそがスキル「エンチャント」。ドヴォルザークの場合は自らの音楽家としてのポテンシャルに由来するＢＧＭ作成と言ってよく、またライダーとして召喚されている彼は鉄オタが引き出されていることから、何かしらの逸話や箔がついているのなら、Ｂランク宝具相当の神秘とできる。
これを最大限に生かせるように調整された人造神器車両である随伴列車を複数けん引することで、アントニオンはトレインモードでも優れた機能を発揮することができるのだ。
故に、対格差を考慮したある程度距離を置きながらの射撃戦闘でアントニオンはギガンティスサリュートを迎撃する。
『ハーッハッハッハァ！　この私と技術力で張り合うとは、見事！　だがその程度ではなぁ！』
吠えるアルバートからも余裕の色は消えていない。それだけの敵であることを理解して、リーネスは歯噛みした。
「カズヒや和地と未だに連絡突かないのにぃ、こんなのまで出てくるなんて厄介ねぇ……！」
「だがどうすんだ！　メリードが避難誘導を八割がた終わらせたって連絡来たけどよ？　アグレアス・ドームの方は出来てねえんだろ？」
制御を行っているキュウタの言いたいことも分かるが、リーネスとしてはそこは不安視していない。
「ヴィールと連携をとっている手前、アグレアス・ドームに火力は集中しないわぁ。神々も防護加護を張っているし、実は一番安全な地区と言ってもいいものぉ」
「だがこのままじゃジリ貧だぜ？　どっかで仕掛けねぇとまずいだろ」
リーネスもキュウタも、ギガンティスサリュートの仕込みについては既に理解している。

あれもサリュートの系列に属する以上、星辰体運用兵器なのだ。そしてどういった星辰光を使っているのかについても、ある程度は当たりがついている。

随伴列車の一つである、情報観測車両イージスレッシャーで解析した辺り一帯の変化から、敵の能力はある程度想定ができる。というよりも、それが分かればすぐに分かるぐらいに分かり易い能力だ。

「……浸食型疑似固有結界による、自分が自在に動ける空間の生成とか、発想の勝利ってこういうことを言うのかしらぁ？」

放たれる大量のミサイルをジャミングと対空迎撃で対処しながら、リーネスは呆れるべきか感心するべきか真剣に苦慮したくなってきた。

逆にこちらが放ったミサイルが撃ち落とされる光景を確認しながらも、砲撃を試みるキュウタも同情しているほどだ。

……極論を言えば、ギガンティスサリュートの星辰光は浸食型の固有結界、それも「ギガンティスサリュートが自在に動ける空間」を生成する星だ。

想定される性能はすべからくが和地の発動値や干渉性並み。想定される要素の半分以上が、魔星であるからこそ出せるような異常な性能だと推定されている。

そしてそれだけの星をもってして、魔術回路保有者の極一握りのみが使える異能の亜種再現。そしてそれだけ使って漸く自在に動けるようにするだけなのだから、頭がいいのか悪いのかが分からない。

実際、アルバートからしてもこの星は実験的なものが強かった。

ギガンティスサリュート
人造巨星（アストラル・ギガントマキア）が蹂躙、星を薙げ
基準値：A
発動値：AAA
収束性：A
拡散性：AAA
操縦性：A
付属性：AAA
維持性：AAA
干渉性：A

ギガンティスサリュートの星辰光はリーネスの推測通りの代物。より厳密にいうのならば浸食型固有結界・巨星合戦場（ジャイアント・バトルフィールド）創生能力。
いわば都市規模の空間そのものをギガンティスサリュートの外骨格とする星辰光。これにより、ギガンティスサリュートは超大型人型機動兵器でありながら、機敏かつ堅牢な兵器として完成する。
「まぁ、こんなもので満足しちゃいけないわけなんだがな」
だからこそ、アルバートはそれを誇らない。
一手は何だが星辰体運用兵器としても、当然だが通常の兵器としてもギガンティスサリュートは欠陥品一歩手前だ。
技術的に無駄もあらも大きすぎ、何より生産性が悪い。とてもじゃないが禍の団に全面的に配備することはないだろう。上手くいっても三十機製造されれば御の字で、そんなものはアルバートにとって完成品とは言えない。
技術とは広まり拡散できてこそ価値があり勝利なのだ。技術開発的には大きな価値があると断言できるが、礎や段階止まりであるというほかない。

アルバートは不敵な笑みを浮かべながら、今の敵を見据えたうえで決定的な攻勢に打って出ない。
だからこそ―

―そう、だからこそ。
リーネスは此処で決定的な攻勢に打って出ない。
「彼女が到着するまで、あと何分かしらぁ？」
「……まだ時間がかかりそうだな。だが、そこまで長くはならねえだろうさ」
キュウタからその答えを聞き、リーネスはうなづいた。
和地やカズヒ、鶴羽達のことは不安だが、今はそこを優先的に考えるわけにはいかない。
こっちに出てきた以上、自分はこっちを優先するのみ。
だからこそ―

「いいデータを持ってきてくれ。何か隠し玉があるんだろう？」
ギガンティスサリュート（れ）を餌に更なるインスピレーションを敵から得ようと、アルバートはほくそ笑む
「彼女が来てから反撃開始よぉ。ジャンクを作って研究しましょうかぁ」
ギガンティスサリュート（レ）を検体（ジャンク）にしようと、リーネスはその為に必要な戦力を待つ。

二人の天才的頭脳の持ち主は、奇しくもギガンティスサリュートを踏み台とすることで、敵味方にも関わらず思考を一致させていた。

冥革動乱編　第五十九話　神娘の慧眼

アザゼルＳｉｄｅ

「ひれ伏せ」
ハヤテの奴から声が聞こえた瞬間、俺達は咄嗟に身構えた。
反応出来たやつは全員がしのげたが、周囲にいる反応できなかった連中は全員が言われた通りにひれ伏した。
こっち側もあっち側も関係ない。その光景に、ハヤテは少し肩を動かしていた。
「……少し加減を間違えたか。やはり実戦でデータを取り直すのは重要だな」
「なるほど、そういう能力か」
そしてその周囲をサーゼクスの消滅の魔弾が取り囲む。
奴が万が一回避するようなら、狙えるところに光の槍をぶち込めれるような場所に一撃叩き込めれるようにしちゃぁいるが……。
「散れ」
……まぁ、そうなるわな。
ハヤテの野郎が一言告げた瞬間に、襲い掛かった消滅の魔弾は殆どが吹き飛んだ。
なるほど。つまりそういうことか。
「告げた言葉を存在に強制させる能力ってことか。自我の有無や出力で抵抗可能なあたり、まだマシってことかねぇ」
「そういうことだ。ヤハウェゼツメイライズキーは言動執行能力が根幹といえる」
俺の鎌賭けにあっさり乗りやがったな。
だがしかし、聖書の神を模した仮面ライダーにはピッタリな能力

だ。
光あれ……って感じを実現する。出力や影響範囲は小さいが、それでも厄介なゼツメライズキーだ。何より皮肉が聞いてやがる。
聖書の神の死を知っていようと知っていまいと、奴らのスタンスから言って皮肉だって分かるのがセンス良すぎだよ。一周回ってムカつくどころか感心しそうだぜ。
「重ねて言うと、そういうものだと認識してくれるのならより効きやすくなるのでな。ぜひ情報を広めてくれ。戦いやすくなる」
「……なるほど、ならまずはそれを封じよう」
ムカつく仕組みを言ってきたハヤテの後ろをとって、ディハウザーが素早く攻撃を叩き込む。
ハヤテの野郎はそれを、装甲の分厚いところで受け止めて勢いを利用して距離を取りやがった。
野郎、冷静かつクレバーに戦いやがる。
「吹き飛べ」
カウンターで言葉を強制するが、ディハウザーは後ろに引っ張られても尚更突撃する。
「なるほど。全てを無価値にはできないようだ」
「ほぉ。無価値は科学的機能にも効くのか」
冷静に打撃を躱し合うが、こっちを忘れてねえか？
「そろそろ俺もやらせてもらうぜ？」
「そして、私も遠慮をする気はない」
俺とサーゼクスは、ディハウザーの片手間に倒せる奴じゃ断じてないぜ？
「安心しろ。貴様達の相手はそっちだ」
「そういうことだぜ総督さんよぉ！」
「悪いけど、ハヤテはやらせない」
ちっ！　そういうことか。
後ろからぶっ放された荷電粒子砲をサーゼクスが迎撃した瞬間、突貫してきたやつが神殺しのオーラをもって突っ込んでくる。
俺がそれを受け止めるが、……質が悪いなおい。

「確かリクだったな。……そういうことかよ、星辰光は何でもありじゃねえか？」
「そういわないでくれ。ザイアはどうしようのないけれど、能力だけは優秀だったからね」
鍔迫り合いをしながら、俺は突貫してきたリクの野郎の種を悟る。
サツは荷電粒子砲をぶっ放し、ハヤテは同時並列で大量の兵器を使役する。
つまり疾風殺戮・ｃｏｍはスリーマンセルだ。大量の軍勢を従えるハヤテが戦場全体を対応し、同時にサツが攻めるところをその砲撃力で制圧する。
そして最後のリクは、おそらくピンポイントでの制圧。そしてザイアが裏で対異形―それも神話体系込み―を踏まえているのなら、こいつの星辰光は「対神仏魔王」が考慮されていて当然。
だからって、まじでやるかよ―
「亜種聖槍再現能力。肉体に宿る亜種再現で、黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）を疑似再現するとか冗談だろ！　羨ましいぞ解析させろ！」
「俺を壊せたのならお好きにどうぞ。もっとも、人類をのさばらせるのなら……」
俺が鎧の出力を上げると共に、リクの野郎も聖槍のオーラを増幅させる。
「……あんた質を殺して、そこから更なる力を集めさせてもらう！」
上等、勝者の総取りってことでいいんだな！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

リヴァ・ヒルドールヴは、二度の世界大戦を経験している女である。
主神オーディンの血を引いていたこともあり、外見そのものは若々しい。だが同時に、世界でも未曽有の大戦乱が二度も起きた時代を生きてきたがゆえに、その中には一種の老練や老獪さを持っていると言ってもいい。
だからこそ、リヴァはこの場において即座の全力戦闘を仕掛けていなかった。
彼女の戦闘スタイルが、地脈を持たないレーティングゲームのフィールドに向いていないこともある。いきなり全力を出したところで、敵の全力と真っ向からぶつかるだけだときちんと理解していた。
故に、戦闘において彼女は一歩引いた距離から立ち回っている。
だからこそ、警戒が必須であると痛感した。
「……なるほどね。大体分かってきたかな」
「っていうと!?」
襲い掛かる赤氷の兵士を背中合わせで迎撃する、鶴羽が思わず聞いてくる。
それに対し、既に変身して対応しているリヴァは簡潔に答える。
「多分、さっきから赤く使われている異能は全部根本は同じものね。共通の神器を独自に奪取したか、それとも独自開発の人工神器か。たぶん基幹といえるものは全部同じ」
「って！　こんなのを自力で作ってるの!?　冥革連合が!?」
機動力があることから遊撃に回っていたインガも、休憩代わりに一度近くに着地して驚愕する。
気持ちは分かる。冥革連合の筆頭格が使っている異能は、全部同種の異能だというなど、考えたくもない。
だが、リヴァはそれを可能にする余地があることを理解していた。
「ちょっと、試しを入れた方がいいんでしょうね」
「試しって……」
「……何する気？」
インガも鶴羽も嫌な予感を感じていたが、リヴァは安心させるよう

に肩をすくめる。
「もちろん、やるなら私がやるから安心しなさい」
「「安心ができないから！」」

祐斗Ｓｉｄｅ

凄まじい猛攻に割って入ることができず、僕達は他の戦力を相手にするほかない状況だった。
イッセー君も、サイラオーグ氏も、ヴァーリ・ルシファーも打ち倒された。それだけの恐るべし戦果を、ヴィール・アガレスは成し遂げた。
そのヴィールが十分かけても、リュシオンさんは食い下がっている。
戦闘全体で言えばヴィールの方が上だ。時折急にすべての攻撃にカウンターを合わせることまでやってのけている。
それをしのぎ続け、更にカウンターの連打も一分足らずで対応するリュシオンさんには感服するするほかない。
もっとも、それはヴィール・アガレスが分身を積極的に多用してないこともある。
確かに要所要所で仕掛けてはいるが、積極的に仕掛けることは最小限にして周囲の警戒や牽制の方に主軸を置いている。
分身の魔力量や肉体強度は明確に本体に劣っているようだから納得ではあるけれど、それにしたってもっと強硬策が取れる気もする。
だが、今仕掛けられるのか？
あの二人の猛攻は激しすぎる。イッセー君が打倒されている今、割って入れるのはアーシアさんか星を振るう部長ぐらいだろう。そ

の二人もイッセー君を中心としたカバーに入っていて本領を発揮しきれない。
何より、乱戦になってきてしまっているため僕たちも仕掛けきれない……っ
「そこか、聖魔剣！」
切りかかる敵の斬撃を、僕は後ろに飛びさって躱す。
確かアザゼル先生と戦ったとかいう、ケンゴ・ベルフェゴール。
若手悪魔としては有名で、剣術の使い手を優先的に眷属に迎え入れ、領内の兵士たちに剣術を叩き込んでいるという話を聞いたことがある。
そして何より、彼が持っている赤い剣が脅威だ。
強度はある、切れ味も鋭い。そして何より、聖なるオーラを纏っている。
つまりは聖剣ということか。それも、伝説の聖剣に匹敵する性能を持っている。
強敵以外の何物でもない。これだけの敵がいると、それだけで危険になる。
「乱戦になってしまったのは残念だが、貴公もまた剣を作り出し、そして聖魔剣などという規格外の担い手と伺っている。……いい機会だ、死合おうとしよう！」
振るわれる斬撃を聖魔剣で凌いでいく。
彼らもできる。一人一人がサイラオーグ氏の眷属や僕達にも匹敵……いや、それ以上。
英雄派のジークフリートにも匹敵する力量だ。かつて僕だけでなくゼノヴィアとイリナさんが三人がかりで挑んで倒された、あの力量に追随する。
だけど、なら尚更だ。
ここでこの男と真っ向から戦えない様では、英雄派と戦って勝つことなど夢のまた夢。気圧されるわけにはいかないね。
僕が決意を持って相対すると、ケンゴ・ベルフェゴールは目を細める。

「かの赤龍帝がグレモリー眷属の中核だと思っていたが、倒されてなお戦う意思が消えないとはな。中々油断できないか、グレモリー眷属」
なるほど。確かにそれは否定できないね。
部長が主ではあるけれど、グレモリー眷属である僕達は心のどこかでイッセー君に強い信頼を持っている。
イッセー君がいるからこそ頑張れたところがあるだろうからね。彼らの推測は間違ってない。
だけど、なめられたものだね。
「……イッセー君を馬鹿にしないでもらいたいね」
「ほう？」
切り結び、鍔迫り合いになる中、僕ははっきりと言い切る。
「彼はこのまま終わるような男じゃない。断言するよ……ヴィール・アガレスはイッセー君に一泡ふかされる！」
「よく吠えた。ならその光景、貴殿を切り捨ててからゆっくり拝むとしよう！」
ああ、こんなところで終わるような男じゃないだろう、君は。
だから僕達は持ち堪える。そして必ず、君に繋いで見せる!!

そう思ったその時、爆音が鳴り響いた。
戦闘を行いながら視線を向ければ、そこでは突貫した仮面ライダーグリームニルが……リヴァさんがヴィールを後ろから攻撃していた。
素早くそれを魔力で凌ぐヴィールだけど、挟み撃ちの態勢なら、彼女の方が有利だ。
そう、彼女は僕達の中でも指折りの戦力。
仮面ライダーとなる者達は誰もが有能だけれども、こと彼女は本人も仮面ライダーも絶大だ。
故にすぐに拳の間合いに入り、そして猛攻を叩き付ける。

「……なるほど。主神の娘としての才覚が主体だが、鍛え方も悪くない」
「それはどうも。……で、どうするのかな？」
そんな短い会話が続く中、分身は戦闘を繰り広げたり遊撃をしながら、数が増減していく。
それを、認識したその瞬間―
「ああ、こうするだけだ」
―カウンターが、吸い込まれるようにリヴァさんに連続で叩き込まれていく。
まただ！　またカウンターが成立する。
ある程度戦闘が続くと、それだけであっという間にカウンターを叩き込めるようになっていく。
これは……一体!?
このままだとまずい。その緊張感がどうしても増していく。
そんな寒気を覚えた、その時―
「……あ～、なるほど」
―リヴァさんは、何かを悟った。
その瞬間、リヴァさんを基点に大爆発が起きた。
ま、まさか……口封じか!?
リヴァさん、大丈夫なのか!?

冥革動乱編　第六十話　神性魔王が覇道の根幹

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

爆発によって、潰すつもりだった相手を取り逃がしヴィールは内心で警戒の度合いを高める。

派手に動くにはリュシオンの存在が脅威というほかない。今のヴィールはどうあがいても、リュシオン・オクトーバーにリソースの六割を傾ける必要がある。だからこそ、リヴァに逃げられた。

短い戦いだが痛感できた。この男は自分とは異なる意味で異常性を極めている。

もし自覚が生まれたのなら、彼はきっと枢機卿にすらなれるだろう。それだけの人を集める器を持ち、自覚の無さがそれを大きく削っている。

それを少し残念に思いながら、ヴィールは爆発によって吹き飛ばされたリヴァ・ヒルドールヴを警戒する。

短い戦闘ですぐに読むことができたが、同時に相手に何かを掴まれた。

敵に手札を知られることは、それだけで不利に繋がりかねない。未知、もしくは原理不明の手札があるということは、それだけで戦局に影響する要素なのだ。解析されて良い事はまずない。

無論、冥革連合からすれば強くなった現魔王政権が自分達を打倒してくれるのに越したことはない。むしろそれこそが悲願だが、悲願はその方向性にこそある。

冥革連合の目的とは、悪魔という種族そのものが強化される形で自分達を乗り越えること。その為の手法として、王の駒の量産及び、真魔（ディアボロス）及び民（シビリアン）の駒の製造、そしてその開発技術を伝えることにある。

態々王の駒まで大量に生産して提供したのも、冥革連合の目的は悪

魔という種族の強化だからだ。
和平を結ぶのはいい。失った数を増やす為に、他所から人材をスカウトするのもいい。
だが、悪魔という種族が真の意味で富国強兵を成し遂げるには、悪魔という種族そのものの強化も必要不可欠だ。他種族に全てを任せるようなやり方では、悪魔という種族そのものは先細っていくことが透けて見える。
だからこそ、王・真魔・民の駒全てを作り出したことにして、それらを製造できるように堂々と公表して伝えたのだ。
他種族そのものを力に変えるのではなく、民の駒で転生させるのは、知識や技術を教えられる者を取り込むことで、悪魔という種族そのものがそれを習得する為。王の駒を真魔の駒と共に広めるのは、まがい物に頼ることなく悪魔という種族そのものを強くする為だ。
その為、フロンズ達大王派のＤ（ディアボロス・フレーム）Ｆやデビルレイダーに魔性聖剣、また三大勢力合同のＴ（トライフォース）Ｆユニットは、価値があるとは思うがそれだけでは駄目だとすら思っている。
態々王の駒まで伝え広めて流通させれるようにしているのに、未だ広まっていない状況はヴィールとしては憂慮するべきことだ。使わないにしても、代わりに悪魔という種族そのものを強化する手法をとってもらいたいと強く願う。
故に、こうして発破をかける為に若手のエースたるリアス・グレモリーとサイラオーグ・バアルを打倒することを選んだ。
彼らを自分達が打倒すれば、少しは意識を変えることが可能だと思ったからこそだ。
だからこそ、リアス・グレモリーやサイラオーグ・バアルやその眷属以外に自分が打倒されることはできれば避けたいのだが……。
「種は割れたわ！　厄介すぎるわよ、あれ」
……どうやら、本当に悟られたらしい。
「どういうこと、リヴァ！」
リアス・グレモリーがリヴァ・ヒルドールヴに尋ねれば、リヴァ・ヒルドールヴはこちらを警戒しながら、更に距離を取りつつ広範囲攻

撃の構えを取る。
　どうやら本当に悟られているようだ。やはり何事も予定通りにはいかないものだということか。
「言うは易く行うはなんとやら。……手っ取り早く二つ言うわ。彼はこっちのリズムを読んで、更にそれを分身達を利用して高速でフォーマットしてるのよ」
「……敵ながらその慧眼はあっぱれだ。ああ、事実だとも」
　隠しようがない以上、ならばあえて明かすほかないだろう。
　それをもって相手の士気にダメージを与える方向に繋げる為、ヴィールは堂々と宣言する。
「その通り。俺の星辰光は星辰分身製造及び情報統合能力。……雑に日本人が分かるような例えをしてやろう。ＮＡＲＵＴ○の影分身だ」
　日本人と縁深いことからそういう例えをするが、一手からこれで本当に分かるのか不安になった。
「……そ、そんな⁉　影分身の術なんてチートです！」
「なんて、厄介……っ」
　どうやら分かる人がいたらしい。
　リアス・グレモリーの眷属であるハーフヴァンパイアと猫？が知っているとは幸運だった。説明が楽になるだろう。
「どういうこと、ギャスパー、小猫？」
「……ヴィール・アガレスが強い理由はあの星ですぅ！　毎日星を使って特訓して、人の何倍の訓練時間を獲得してますぅ！」
「ＮＡＲＵＴ○の影分身の術は、分身の一つが消えると本人や他の分身を含めた残り全員に一人が得た知識や経験がフィードバックされます。……全員が戦闘しているわけではなかったのは、俯瞰視点で戦場を把握して戦術的判断をしたうえで、消えることでそれを統合させる為です」
「大体そういうことだ。この星は直接戦闘能力よりその運用の方が便利でな」
　リアス・グレモリーに答える眷属達の判断を、ヴィールはすべて肯定する。

ここまで悟られているのなら、最初からオーバー気味に肯定して士気を削りに行くという手法をとるのがベターだと判断した。
そう、ヴィールの星は分身による多角戦闘以上に、分身の情報を統合することによる技術や情報のフィードバックにこそある。

ヴィール・アガレス・サタン
神聖魔王(ディアボロス・ポナパルト)が化身、覇道を成せ
基準値：C
発動値：AA
収束性：A
拡散性：B
操縦性：D
付属性：A
維持性：B
干渉性：D

直接戦闘においてこそ、星によって生み出される分身の身体機能や強度が本人ほどでない為、雑に戦って強いというものではない。
だからこそ、この星の真骨頂は情報統合。経験した情報を本体と他の分身に統合することによる、情報伝達と即時反映に他ならない。
分身をすべて戦闘に投入しなかったのもその為だ。岡目八目という言葉が日本にあるように、離れた視点で物を見るということはそれだけで大きな優位性を与えることになる。その情報を速やかに統合できるなら尚更だ。
また非戦闘時においても効果は絶大と言っていい。
一日は基本として二十四時間しか存在しない。これだけは大半の

生物にとって絶対の平等性であり、それゆえに生物にはどうしても時間的リソースに制約がある。
その制約が解き放たれればどうなるか。もし、一時間を同時に十や二十も持つことができればどうなるか。学生で例えるなら、同時に行われる選択制の授業をすべて受けることができればどうなるか。
その答えが此処に在る。
肉体の反映こそできないが為、ヴィール本人は体力や魔力を中心に鍛える。同時にその時間帯で、数多くの研鑽を積む。それにより、ヴィール・アガレス・サタンは驚異の成長を遂げる。
各種格闘術・各種武器戦闘術・各種身体操作技術・各種座学・各種魔法・更に複数の有識者を招いての、様々な視点からの帝王学や、人材を見抜くための直接的な軍事や運営に関わらない農学・医学・工学といった知識まで。もちろん予習や復習にも使用する。
非常時の戦闘も踏まえ、一日に一時間ずつを数回程度だが、それだけでも驚異的な成長十二人体制で四回やれば丸二日全てを自己研鑽に費やすことになるを遂げる余地はある。
これにより、ヴィールは文字通り時間的制約を乗り越え、驚異の成長を遂げた。
それこそが、ヴィール・アガレス・サタンの強さの一角。
そして、それを下地として掴み取った奥義が、この戦いを大きく動かしている。
「……そして、こっちが行動するタイミングを凄い正確に読んでるわね。「相手が何かするタイミング」を完璧に読んでいるから、相手の行動に合わせて正確にタイミングを合わせてカウンターを叩き込める」
「実に慧眼だ。正確には、俺が読んでいるのはリズムや呼吸と言った方が近いがな」
つくづくリヴァ・ヒルドールヴは脅威であると痛感する。
「素直に称賛しよう。主神の遺伝子をただ継いでいるだけで得られる見識ではなく、自らの経験と研鑽といった己自身の鍛え上げたあってこその強みと厚みがある」
「それはどうも。最も、今日中に貴方にカウンターを喰らわないって

のは無理だけれどね」
そこまで読まれているのは、やはり警戒に値するだろう。
呼吸やリズムを読む。言葉にすれば単純だが、これは習得することも対応することも容易ではない。
生物は生きていくにしたがって独自に成長を遂げていくものだ。この個人差の一つがリズムや呼吸と言ってもいい。
これらは行動のタイミングやレスポンスと言い変えることもできる。基本的に大半の者は意識せず、また人生の積み重ねによって形作られるものだ。故に大半の人物は自ら自覚することはないし、また気づいたとしてもすぐに変えられるものではない。
故に、ヴィールはそれを読めるようになって以来、最も優先することをその把握に努めている。
記録映像により事前にある程度のあたりをつけ、成長による変化を戦闘で修正すれば、大半の敵はそれで圧倒できる。行動のタイミングを把握することができれば、必然的に大きなアドバンテージを得る。カウンターの連続攻撃を叩き込めたのはこれが非常に大きい。
そしてよしんば悟られたとしても、対応される余地が非常に少ないのが最大の利点だ。自らの人生経験が作り出した大きな地盤を改変することは、常に意識して切り替えることができない限りは困難の極みなのである。
だからこそ、一周回って呆れを感じながら、ヴィールは称賛の念を隠すことも放棄する。
「……故にこそ、心底感服しているぞ、神の子（ディア・ドロローサ）の後に続く者。こちらがリズムを把握するのに対し、速やかにリズムを切り替え続けることで対応するとはな」
「……そこまで驚かれることかい？　コツさえ掴めばできる人は多そうだけどね」
だからこそ、その返答が惜しいと感じてしまう。
「自分の動くタイミングが読まれているというのなら、切り替えればいいのは当たり前の発想だ。完全に大きく異なるのは困難でも、少しずつ変えていく程度ならコツさえ掴めればできるだろう？」

自然体と言ってもよく、気負うこともなく断言する。
その言い回しに気取ったところはなく、当たり前なことを当たり前に告げているといわんばかりの言い回し。それが、嘘偽りのない本心からのものだと痛感させてしまう。
その反応は、大きく分けて二つに分かれる。
納得し、感服する。
驚愕し、畏怖する。
前者は基本としてデュナミス聖騎士団に多く、後者の方が敵味方問わず圧倒的に多い。
その光景に対し、リュシオンは不思議そうに首を傾げる。
同じ光景に対し、ヴィールは同情の感情を浮かべて周囲に苦笑する。
その明確な違いを前に、ヴィールはリュシオンに宣言する。
「はっきり言ってやろう。……自分が普通だとでも思っているのか？」
「コツを掴むのが得意だとは、流石に自覚しているさ」
その返答が、何より両者の反応を色濃くする。
まあそうだろうと思いながら、ヴィールは肩をすくめた。
「……自覚のあるなしで狂人は迷惑の度合いが変わるというが、貴様の場合はまさにそれだな。俺を参考にするといい」
「……心外だね。俺の本質は真っ当な人間なら誰でもできることを、人より理解して突き詰めているに過ぎない」
本心から不満だったのか、リュシオンの表情が不快気に変わる。
同じように、デュナミス聖騎士団からも不満の色が強くなる。
「てめえ……っ！　リュシオンさんを馬鹿にする気か！」
「俺達の誰よりも真っ当に前を向き続ける、リュシオンさんを……っ」
「……同感。兄さんは誰よりも、真っ当に成長することを極めて―」
「だからだよ、阿呆が」
更にグレモリー眷属の仲間である少女が不満を語ろうとしたところで、ヴィールは断言する。
はっきりと、真っ直ぐに、偽りなく。

「教えてやろう。異常というのはあり得ない方向性だけでなく、あり得る方向性を突き抜けることでも至るものだ。そして異常者の突き抜けた進行速度に追いつこうとしても、それができるのは一握りの傑物が無理をしてか、同じ異常者にしか不可能だ」
「……俺がそこまで異常かい？　何より、なんでそれが断言できる」
リュシオンのその詰問に、ヴィールは平然とするほかない。
自分がそれをよく理解しているのは、極めて単純なことだ。
「決まっている。俺自身異常者であることを自ら理解しているからな」
自分を客観視して異常性を理解しているのなら、この程度のことは把握できなければいけないのだから。

冥革動乱編　第六十一話　神聖覇王の狂気

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ヴィール・アガレスは忌子として、人間界で育てられた。
アガレス分家、その中でも能力はあるが素行に問題がある上にプライドだけは高い男がいた。
男は同じく優秀だが性格の悪い女と金と遊びの為に婚約したが、そんな精神性ゆえに下級中級の女を半ば強引に遊び相手としていた。その上悪魔の出生率が低いことから避妊もいい加減であり、結果として生まれたのがヴィールだ。
それに対して分家の男は余計な悪評が立っては困ると、半ば強引に人間界に送り出すという手法をとった。それも、妻との子供に何かあった時に備えて最低限の帝王学だけは学ばせていてだ。
……だが、ヴィール・アガレスはそこでとどまることをしなかった。
自分が不遇であり、父親が下種であり、余程のことがなければ引き上げられないことも悟ったうえで、常に精進を続けていた。
知識があるならそれに越したことはない。体も鍛えればより強靭になる。それをヴィールは幼子の頃に見たテレビの内容から把握し、誰に言われるまでもなく努力を務めてきた。
いじめられることもあったが、そんなことは意に介さない。教えてくれる者がいるのなら必ず礼を言うし、幸い親はある程度の金は寄越してくれるから、それをもってして謝礼はきちんと出したのが功を奏した。
最も、それにしたって限界はある。もとより頭を押さえられている状態では、成長してものし上がれるチャンスは薄い。やろうと思えば下剋上で父を引きずり落とすこともできるだろうが、うかつにそれをしても意味がないと悟っていた。
少なくとも、この頃のヴィールは冥革連合のような規模の騒動を起

こすつもりはまだなかった。
自分一人が革命を起こしたところで意味はない。冥界の未来をより良くしたいという志はあったが、故にこそ決定的な手段もなく内乱を起こすことをに価値を感じていなかった。
……転機が訪れたのは、今から五年と少し前のこと。
ヴィールは田舎に叩き込まれていたが、その田舎で亜種聖杯戦争が起き、結果的にヴィールは巻き込まれた。
マスターの一人は魂喰いを敢行し、更に神滅具による力を使うことも考慮。それらのポテンシャルを最大限に発揮する為、悪魔がいることを悟った時点でターゲットにしていたのだ。
……窮地だったといえるだろう。追い詰められたといえるだろう。
だが、ヴィールは勝利した。
究め高めてきた地力によりマスターを打倒し、もとよりマスターを嫌っていたサーヴァントを鞍替えさせることに成功し、そして優勝した。
そしてこの時、ヴィールが願ったのは悪魔の駒についての知識だった。
冥界の発展において最も貢献していると言ってもいいものは二つある。大王派に属する分家の主導による、純血悪魔の出生率向上。そして魔王ベルゼブブによる、悪魔の駒というアイテムだ。
この悪魔の駒にはまだ可能性があると、ヴィールは常々思っていた。故にこそ、可能性があるなら悪魔の駒の全てを知り、自らその可能性を広げたいとも。
それゆえの悪魔の駒に対する知識を知り―そこから、ヴィールの覇道は始まった。

祐斗Ｓｉｄｅ

「……俺は聖杯戦争に巻き込まれ、そしてそのマスターから己が器量をもって鮮血の聖別洗礼（パプテマス・ブラッド）とサーヴァントだったクラウディーネを奪い取り、聖杯によって冥界は変わるべきと悟って行動を起こした」

静かに、ヴィールは語り始める。

「俺がここに至るまでにしたことは、決して珍しいことではない。……少しでも多くの有効な努力をする。基本的にはそれだけだ」

それは、確かにその通りだと思う。

「努力をしたから夢が必ず叶うわけではない。何より多くの物は程度の差はあれ努力をし、更に才覚の違いがあり、場合によっては夢が競合することもあるのだから当然だ。だがだからこそ、より可能な限りより良い努力を、厳密にいえばより有効な努力の仕方を見出して積み上げることは重要だ」

「それは当然だ。当たり前のことじゃないか」

ためらうことなく、即答するようにリュシオンさんは答える。

だがなんでだろう。彼の当り前で真っ当で立派な考え方に、どこか寒気を感じるのは。

まるで塔だと思っていたものが、より巨大な建築物を構成する支柱の一つでしかなかったかのような、そんな違和感を覚えている。

そして、ヴィールもまた肩をすくめた。

「……では、これを聞いているすべての者に尋ねよう」

そう前置きし―

「……君達の中に、実行可能だと確信しているのなら毎日採血採尿採便をして医者に検査してもらった結果に合わせて、管理栄養士が設定した量と栄養バランスの食事を指定された時間帯でとることを毎日続けられると確信できる者はいるかね？」

―凄いことを言い出した。

「毎日数回体温や脈拍を検査し、次の日の起床時間と睡眠時間を算出された通りにすることはできるか？　毎日決められた時間に決めら

れた内容の基礎体力を上げるトレーニングを行い、空いている時間帯を常に座学をすることは？」
ここまではまだ分かる。明らかに異常な気もするけど、まだ分かる。
だがここからが更に加速した。
「前日のデータに合わせた薬湯での毎日違う時間の湯浴みをし、整体や鍼灸による調整を行いながらレーティングゲームの記録映像を見取り、睡眠時間中も魔法や魔術を使用して数多くの映像資料を見る睡眠学習を行うことができるかね？」
真っ直ぐに、嘘偽りがない本気の目で、そう尋ねる。
「十数人もの医師・トレーナー・教師達が設定した、休息時間すらより効率的な休息をとる為の機械的に設定した、分刻みでの完全なスケジュールによって管理された「より目的を達成する為だけ」の生活を二十四時間三百六十五日を何年も続けることが、できるか？」
周囲が気圧されるようなことを言って、ヴィールは静かに首を横に振った。
「少なくとも、俺は俺以外にそんなことができる者を知らない。冥革連合の決意に満ちた者達ですら、長くて一年で心を病んでドクタストップがかけられたとも」
そして、真っ直ぐにリュシオンさんを見据える。
「……お前はそれができそうだな」
「やったことがないし、そのやり方は誰もがついていけるようなものではないからやることもないだろうね」
まっすぐに、平然と答えられるリュシオンさんを、僕は信じられないものを見る目で見ていただろう。
彼は気圧されていない。かと言って、ヴィールがそれをしてないという風に信じていないわけでもない。
ヴィール・アガレスがそんな生活をし続けてきたと信じたうえで、特に気圧されることなく平然としていた。
むしろ彼のあの対応は、それができると無意識にでも思っている人間の反応だ。

それが、僕には信じられない。
彼の告げている生活が本当なら、そんなものは狂気的と言っていい。そんな生活を冥革連合の中でもヴィール以外ができてないということも納得できる。むしろできる悪魔が何人もいてたまるものか。
それを、信じたうえで平然と受け止められるリュシオンさんに、寒気すら感じる。
「……そんなやり方は誰もがついていける類ではない。コツとかそういう次元ではなく、間違いなく何かが外れているものだけの特権だろう」
「当然だとも。俺は自分が外れていることを自覚している。お前と違ってな」
真っ直ぐに、視線をぶつけ合いながらリュシオンさんとヴィールは言葉を交わす。
そしてヴィールは苦笑すら浮かべながら、肩をすくめる。
「俺はな？　多くの者達が言う「頑張ったけど叶わなかった」とかいう言葉を実感できん。多くの者達がそういう状況になることを知識としては知っているが、真の意味で理解すらしていないと断言できる」
「……そうかい？　確かにコツを掴めずに実行しようとするのは困難なことは、数多いと思うけどね」
リュシオンさんのずれた返答に、ヴィールは静かに首を横に振り―
「そうではない。なら何故生きているのかが理解できないんだよ」
―そんな、寒気のする言葉を言い放った。
夢が叶わないことと、死んでいることが同義かのように、ヴィールは告げる。
まさか、死ぬまで努力するのが当たり前のことだとでも、そういうつもりか？
努力を基本とする僕達グレモリー眷属でも、決してそこまでは―
「……理想（夢）をもって歩み始めて以来、どうしてもそれが理解できない。どうして夢に近づけていないのに、生きていられるのかが皆目共感できないのだ」
―なんて？

「なんで夢に近づける実感もないのに、心因性の狭心症や胃炎や過呼吸や不眠症に陥らない？　血便血尿血痰血涙が出てこない？　何故夢の邪魔をしようとするような家族に憎悪を覚え排除しようと思えない？　何故通常の鍛錬で夢に近づけていないと思いながら、薬物投与や禁呪付与といった自己改造を試みずに精神を安定させ、幻覚や幻聴に襲われない？　何故夢が叶えられないと悟りながら、その絶望で狂い死にせずに普通の生活を送ることができる？」

寒気を覚える。思わず恐怖で身震いすらする。

彼が嘘をついていないと、それを本能で悟ってしまったからだ。

彼は本心からそれが疑問だった。そしておそらく、自身は本当にそうなるのだろう。

でなければ、あそこまで狂気的な生き方をして精神に異常をきたしていない理由が納得できない。彼にとってはそこまでしなければ逆に精神が安定しない、そういう「理想の為に全てを捧げる」ことが本能的な常態だと、痛感した。

「……だからこそ、俺は外れている。それを自覚しているからこそ、できないことが珍しくもないと理解しているからこそ、それを痛感してもできるようになりたいという者達に敬意を持つ。だからこそ、俺は武闘派の眷属を持っている」

そう告げ、そして静かに拳を構え直す。

「来るがいい、三大勢力。すまないが、春菜が決着をつけるまでは終わってやる気はないのでな」

一歩、思わず引いてしまったことを自分で責めることができない。

この男は、化け物だ……っ。

今迄化け物と形容できる存在と、何人も戦ってきたことを自負している。

白龍皇ヴァーリ・ルシファー。北欧の悪神ロキ。それに英雄派の曹操もそうだった。サイラオーグ氏もその領域といえるだろう。

だが、目の前の男はベクトルが違う。

常人を圧倒する絶大な精神性。その精神性に由来する圧倒的な力。

そう、精神性こそがこの男の圧倒的な力のポテンシャルに繋がってい

る。
　寒気を覚える精神的異端者。それを実感して、僕は今までにない戦慄を覚えている。
　そして―
「なめられたものだね」
　―もう一人の精神的異端者が、真っ向からそれを受け止める。
　リュシオンさんは気圧されることなく、静かに一歩を踏み出した。
　そして二人に呼応するように、冥革連合の戦士たちがヴィール・アガレスに、デュナミス聖騎士団の半数ほどがリュシオンさんと並び立つ。
　気圧されることない者達が、そこで真っ向から睨み合う。
「……残念だな。なまじ真っ当な方向を突き抜けているうえ、傑物揃いであるがゆえに自覚ができない環境か」
「なら教えるしかないだろうね。本当に真っ当な道を歩んでいるからこその強さというものを……！」
　リュシオンさんが拳を構えると共に、しかしヴィール・アガレスの前に、彼の眷属が壁になるように立ち塞がる。
「……少しは主らしくどんと構えてなさい。というより、私達にも少しは獲物を頂戴？」
「クラウディーネさんはすぐそういうことを言う。まぁ、僕としても主が僕達より危険なところにいるのは避けたいけどね」
　女王のクラウディーネ・デゥルカンナインと、変異の駒で転生した双竜健也。
　……この二人もまた、ヴィールほどではないけど狂気的ということか。
「こういうセリフを言ってみたかったの。……まずは私達を倒してからにしなさい」
「まぁ、眷属としては主より先に体を張らないとね。……かかってこい」
「……いいだろう。どちらにせよ君達も打倒するべき敵だしね」
　静かに、三人が向き合い――

次の瞬間、激戦が再開した。

冥革動乱編　第六十二話　始まるクライマックス

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「禁手（バランス・ブレイク）化！」

そう告げ、そしてリュシオンさんは突貫する。

飛び上がりそして禁手を展開すると同時に、絶大な聖なるオーラが彼から放たれる。

あれが、リュシオンさんの禁手か？

「なるほど。ヴァーリが言っていた通り、禁手を切り替えるなんて真似ができるみたいだね」

双竜健也が信じられないことを言いながら、そのオーラに突貫する。

それと同時に冥革連合の悪魔達が僕達に攻撃を仕掛けてき、再び戦闘は激化する。

仕切り直しになったこともあって何とか対応できているが、それにしてもリュシオンさんと双竜健也の激戦は絶大すぎる。

リュシオンさんは聖なるオーラを広範囲に垂れ流しながら、敵陣に突貫することで広範囲の敵に攻撃を仕掛け、更にピンポイントの打撃はエクス・デュランダルを使うゼノヴィアの渾身の一撃に匹敵する。

そんな絶大な聖なるオーラの打撃を、双竜健也や鎧で受け流すようにして凌いでいるうえ、更に強力な魔力砲撃の連打で反撃する。

同時に全方位から黒い戦闘端末が襲い掛かるが、それに対してリュシオンさんは広範囲を薙ぎ払うことで振り払った。

間違いなく絶大な戦いだけど、こっちもこれ以上は気にしていられないか！

咄嗟に飛び退れば、そこに氷の兵団が襲い掛かる。

数を担当するかのように兵団が突貫を仕掛けながら、更にクラウディーネ・ドゥルカンナインはこちらに襲い掛かる。
「じゃ、ちょっと付き合てもらうわよっと！」
氷の鎧を具現化しながら、クラウディーネはこちらに攻撃を仕掛けてくる。
「下がれ木場！　一気に薙ぎ払う！」
「合わせて、ゼノヴィアちゃん！」
そこにカウンターを仕掛けるように、ゼノヴィアのデュランダル砲と朱乃さんの雷光が放たれる。
それに対し、クラウディーネは不敵な笑みを浮かべながら突撃を敢行する。
正気を疑う真似だが、しかし彼女は真っ向から不敵な笑みを浮かべる。
「真名解放、我ら、英雄を継ぎ駆け抜けるもの也（アレクサンドロス・ロマンシア）ぁぁぁぁぁっ!!」
その瞬間、絶大な軍勢を思わせる魔力を纏った彼女が、真っ向からデュランダル砲と雷光を打ち破る。
まずい、あのままでは二人が―
「させると思う!?」
その瞬間、更にリアス部長が雷光と大量の魔法攻撃を追加させた消滅の魔力を叩き込んだ。
更にその瞬間停止の邪眼が発動し、ほんの一瞬だけどクラウディーネの突貫は止まる。
それによって何とか回避が間に合ったけど、何だあの突貫攻撃は！
「ドライグ！　覚えている範囲でいいから、すぐにでも説明して頂戴！　あれは何!?」
『分からん！　俺や白いのと三つ巴で戦った時は、あんな突撃攻撃は習得していなかった！』
ドライグですら知らない攻撃？　そんなものを隠し持っているとは思えない……なら！
僕と同じタイミングで悟ったのだろう。リアス部長は聖魔剣を構えながら奥歯を噛み締めてクラウディーネを睨み付ける。

「サーヴァントになったことで得た宝具か、転生してから習得した技術ということね?!」
「前者よ！　これは私のサーヴァントとしての伝承に由来する宝具、我ら、英雄を継ぎ駆け抜けるもの也！」
そう答えながら、僕達グレモリー眷属とバアル眷属を、たった一人で相手をしてのけるクラウディーネ。
流石は、漁夫の利じみたと前置き付きとはいえ、ドライグが歴代の二天龍二人を倒したと認める女か！
「効果は単純。私の同類達の力を借りて駆け抜ける突貫攻撃。ランクはちょっと低いけれど、対城宝具は伊達じゃないのよ？」
対城宝具!?　宝具の種別としては「一発で戦局を決定づける」とされる、決戦兵器クラスの宝具じゃないか！
神滅具ですら基本的には対軍宝具どまりとされる中、そんな宝具を持っているとは……っ！
『どういうことだ？　貴様はどういうサーヴァントとなっている。人間世界で名を遺したわけではないのだぞ！』
「そこは残念だけど、私達はその生き様によって英霊となったのよ。……そして、私は覇道をもって個人として英霊になることで、彼らの更にその先を行く！」
なんていうかノリノリだ。というか、どういうことなんだ？
いや、今はそこはどうでもいい。
とにかく今ので何とか意識が切り替わった。このまま戦闘を再開するべきだろう。
振るわれる攻撃と猛攻は絶大だけど、だからと言っておくする理由になるわけがない。
……イッセー君が復帰するまでは、僕達がなんとしてもこの場をしのぐ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

振るわれる猛攻をしのぎながら、リュシオン・オクトーバーは双竜健也と真っ向から渡り合う。
ヴィール・アガレスは、眷属の戦闘要員を三人しか用意せずに、あのサイラオーグ・バアルに次ぐ成果を上げてきた。それも、誰もが力を隠した上でだ。
分かっていたが、油断できる相手ではないと痛感する。
今回リュシオンが至り直した禁手は、聖別の超聖域（カテドラル・アルティメイタム）。絶大な聖なるオーラを生成するという、単純故に凶悪な亜種禁手だ。
聖なるオーラは状態で漏れ出る為、悪魔相手の戦闘では圧倒的。とはいえ加減が難しい為、突貫することで味方に対する被害を最小限に抑え込む戦法だ。もちろんだが、任意で叩き付ける時は威力が更に上昇される。
でありながら、真っ向から双竜健也はそれにぶつかり合える。それができるという時点で、強敵であることは疑いようがない。
双竜健也は神滅具候補とされる新種の神器を保有。全身鎧と戦闘端末の二種類を具現化すると聞いているが、どうやら禁手ということではない。
「……下手な上位神器の禁手級の力を、二種類具現化する。神滅具は強大な力を二つ持っていることが多いけれど、こういう形で具現化するとはね！」
「照れるね。まぁ、僕自身はこの蒼天鎧（ブルー・プロテクト）と漆黒装（ブラック・ファング）があってこその戦力だけど……さ！」
ぶつかり合い、攻防を繰り広げながら、リュシオンは相手の神器の特性を理解していく。
青い鎧は基本性能が二天龍の鎧に匹敵し、こと防護加護が絶大だ。

おそらく白龍皇の半減であっても、特化した亜種禁手でもなければ効果を発揮しないだろう。
黒い戦闘端末も厄介だ。三つのフィンで構成される端末は、合計12機による多角戦闘を可能とする。それもフィンそのものを利用した手裏剣のような斬撃やドリルのような刺突に、展開の仕方で連続砲撃や拡散砲撃を切り替えられるのは厄介だ。
どちらも厄介で、何より絡め手に対して圧倒的に強いこの特性は、真っ向勝負でのぶつかり合いを強制する。パワータイプとして優れた資質でありながら、テクニックタイプに対して天敵といえる特性を持っている。これが厄介でなくてなんて言うのかという次元と言ってもいい。
とはいえ、単純な力押しならこちらも負けてない。
もとより、生誕の超新星（ビックバン・イマジネイター）は小技には全く向いていない神滅具候補。力押しでの真っ向勝負は望むところと言ってもいい。
慣性強化による阻害を単純な馬力で凌がれているのは難点だが、自分に使用する分には問題ない。ならば、戦いようはある。
「ところで、禁手は使わないのかい？」
「……おや、使わせられないのかい？」
挑発で手札を見させようとしたが、そういうわけにもいかないか。
……ヴィール・アガレス・サタンが誇る眷属は、誰もが優秀と言ってもいい。
そしてその中でも武闘派の一角。変異の駒を使って転生したのは伊達ではないということか。
それを冷静に把握しながら、リュシオンは拳を握り締める。
全員が投入できたわけではないが、それでもそれを率いる立場であることに自負がある。
ここで自分が負ければ、一気に崩れると悟っている。
故に―
「遠慮はしないし加減もしない。覚悟は決めてもらう……っ！」
「安心してくれ心配いらない。覚悟なんて、彼に仕えた時から決めている……っ！」

―遠慮なく、全身全霊でぶつかった。

そして、足音が響いた。

それに気づいた者達は、ふと視線を向けて目を見開く。

そう、今ここに、涙を拭い悪を祓う、青と銀が参戦する。

「……待たせたわね。遅れた分だけ仕事はするわ」

『ＢＵＲＳＴ！』

悪祓銀弾（シルバーレット）、カズヒ・シチャースチエ

「ヴィール。悪いが、一発かまさせてもらう」

『ＧＡＮＴＬＥＴ！』

涙換救済（タイタス・クロウ）、九成和地。

『Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』

二人はそれぞれベルトを着け、プログライズキーを装填し、そして構える。

見据える対象はただ一人。
冥革連合盟主。ヴィール・アガレス・サタン。
「「変身！」」
『ショットライズ！　チャージングリザード！　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅｄｙ？　Ｉ，ｍ　ＯＫ』
『フォースライズ！　ダイナマイティングライオン！　Ａ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　ｅｘｐｌｏｓｉｖｅ　ｆｏｒｃｅ　ｌｉｋｅ　ｆｉｒｅｗｏｒｋｓ』
展開される装甲を纏い、二人の仮面ライダーがここに立つ。
『Ｂｌｅａｋ　ｄｏｗｎ……』
並び立つ二人の仮面ライダーが、静かに歩きながらヴィールに向かう。
それに対し、ヴィールもまた静かに向き合い構えをとる。
「その様子では、春菜は引っ張り上げれたようだな？」
「いや、残念だがまだ足りない」
ヴィールにそう返し、仮面ライダーマクシミリアンたる九成和地が真っ直ぐに目を合わせて睨み付ける。
「九成和地（俺という柱）が、ヴィール（お前）・アガレス（という代）・サタン（わり）が無くてもいいだけのものだと証明しなくては、あいつはきっと本当の意味で前に進めないだろう？」
「そういうことよ。そして、私としても筋は通すの。……目を醒まさせたのなら、その後の面倒も最低限見る必要があるでしょう？」
そう返し、仮面ライダー道間たるカズヒ・シチャースチエが共に、ヴィールを和地と共に挟み込むように並び立つ。
そして次の瞬間、彼らの周囲を障壁が包み込んだ。
……ヴィール・アガレス・サタンの圧倒的なポテンシャルは、一言でいうなら「リアルタイムでの見取り稽古」が非常に大きい。
情報を統合する分身により、相手のリズムを主体とする情報を瞬時に取り込み、それにより相手に対する圧倒的アドバンテージを獲得することこそがヴィールの恐ろしさ。更にその応用ともいえる圧倒的な研鑽量によって、一度追い抜かれれば真っ当な手段で追いつくこと

は困難と言ってもいい、圧倒的な格下殺し。
故に、分身が戦いを視認できない環境下での戦闘こそ、有効な対策といえる。
それを即座に敢行した時点で、ヴィールはなおのこと評価を改める。
「良い覚悟だ。その勝負、受けて立つ」
その言葉と共に、二人はお互いに視線を合わせて頷き合う。
……すべては、ここでヴィール・アガレス・サタンを殴り倒す。それをもって、成田春菜の最後の枷を砕く為。
故にこそ―

「覚悟はいいか？　死ぬ気で来い」
「是非も無い!!」

―ここに、大一番が始まった。

冥革動乱編　第六十三話　終わるのクライマックス!?

Other Side

真っ向から、仮面ライダーマクシミリアンと仮面ライダー道間がヴィールに猛攻を仕掛ける。
狭い一本道で、更に視界が見通せない半透明の結界で覆われている。
これによる挟み撃ち。二方向からの無茶のある猛攻がヴィールに襲い掛かる。
真っ当な成長では決して追いつくことができない圧倒的な成長速度。それに対して解析され難い環境で追いつかれる前に倒すのは、ある意味で真っ当な対応策だ。
だが、その程度で倒されると思うほど、ヴィールは自分を馬鹿にしていない。
だからこそ、更なる一手が来ることは読めていた。
「耐えなさい、和地！」
「ああ、カズヒ姉さん！」
その瞬間、打撃において計算することなく文字通りの乱れ撃ちによる榴弾の連射が発生する。
同時に、九成和地の全身から炎がまき散らかされる。
―なるほど。確かにこれは俺にも当たる
ヴィールは素直に感心する。
すなわち無差別攻撃による面制圧。自分諸共巻き込むことで、確実に当てて削ることを踏まえている。
一言でいうならマトモではないだろう。だが同時に、まともな手段

で勝てない状況でまともな手段に拘らないのは、勝ちを目指すには当然の手法だ。
卑怯卑劣は敗者の戯言。何故ならば、勝った者達からすれば、そんなものはただの小細工でしかないのだから。
むしろ相手が手段を選ぶと思わないことこそ、強者が気を付けるべきことだと理解しているから。
故に、この程度でヴィール・アガレス・サタンは止まらない。
「この程度で……終わりか？」
冷静に、正確に、攻撃に対応していくのはヴィールの方が早い。
もとより彼は、既に二人の戦闘を映像込みで何度も見てきている。
春菜が決着をつけれたのなら、当然次は自分に挑みに来ると予想済みだ。なら当然だが対策はとる。少なくとも、分かっている敵に備えるのは当然のことだ。
ここ一週間ほど、分身の一体は記録映像の確認及びシャドウトレーニングに努めていた。結果として、かつての二人が相手ならカウンターは取れると自負している。当然相手も成長しているだろうが、それでも対応速度は速く済むはずだ。
向こうもこちらに対抗する隠し玉や、初見殺しは用意してくるだろう。だからこそ常に鍛え備えている。もし西遊記の英傑達に喰らいついた自分達相手に備えてないのなら、そのまま打ち砕くだけだ。
だからこそ、喰らいつけるだけの成長を鍛錬で成し遂げた二人の、更にこちらの戦い方に対する対策は称賛に値する。
おそらく春菜からある程度の情報を聞いていたのだろう。そのうえで即座にそれなりに対策をとっている辺り、相手が優秀であることを痛感する。
強い精神力で強引に食らいつくのも難敵だが、こういう正解を探し出して突きつけるのも難敵だ。人によって向き不向きがあることは当然理解している為、彼らはそういうタイプであるというだけだろう。
だが、しかし―
「神滅具を纏ったサイラオーグと、覇に準ずる力を振るえるヴァーリ、

そして覇を三人がかりで制御する兵藤一誠による五人がかりには程遠い！」
―既に迎撃は可能だった。
攻撃は当然一方的にこちらが当てており、範囲攻撃も弾き飛ばし返す余裕すらある。
それでもなお食い下がる二人の精神力は認めるが、この程度で終わるというのなら―
「春菜を救い上げるには、どうやら足りんということか？」
「……それはどうかな？」
その、九成和地の言葉に、ヴィールの警戒心は一瞬だが跳ね上がる。
分身は数体を油断なくつかせて、入れ替えることで情報は統合している。
外観から見える情報と、内部の情報は矛盾してないように見える……否。
違和感を覚えたその瞬間、九成和地は吠えた。
「カズヒ姉さん！」
「もちろんよ！」
答えるその瞬間、結界が一枚解除され、二人を障壁が包み込む。
そして気づいた時には、大量の爆薬が仕込まれていた。
「……そう来るか！」
なるほどつまり二段構え。
第一弾で倒せると最初から考えず、本命はこの第二弾。
障壁で逃げ場がない空間による、爆圧による圧殺。リズムを読んだ程度ではどうしようもない上、どうやらセンサーによる自動操作なら、カズヒのリズムを四でも意味がない。
ご丁寧にクレイモア地雷の系列とサーモバリック。大量のベアリング弾による制圧に、爆発燃焼により呼吸すら止めんというその凶悪な手法に、ヴィールは思わず笑みを浮かべる。
見事。ここまでの策を瞬時に組み立て、命がけの戦闘の中で備えるとは。
外側から見た結界と内部から見た結界の推定サイズが違うことに、

気づくのが遅れたこちらの不徳。
ならば、答えは一つ。
「……全方位圧殺が相手なら、全方位攻撃で対応するのみだ」
すなわち、結界と爆圧を自力で粉砕する。
込められた力を反動を覚悟のうえで開放する。
そして同時に起爆し―

「この程度ではなぁ！」

―ヴィールの魔力が、強引にすべてを吹き飛ばした。
そしてその瞬間、爆圧を強引に突破した二人が左右から迫りくる。
「「まだだ」」
『ＧＡＮＴＬＥＴ』

獅
爆　　裂
子

『チャージングブラストフィーバー！』
『ダイナマイティングユートピア！』
そして更なる三段構え。爆圧に対応する為に大技を放った瞬間を狙っての、必殺技による突貫攻撃。
隙を作らぬ波状攻撃。当然肉体にかかる負荷やダメージは大きいが、それだけの相手であるとこちらを認めているからこその本気。
しかし、ヴィールはそれを更に上回る。

「甘いぞ！」
双方の攻撃を、聖と魔の融合したオーラを纏っての回し受けで受け流し打ち上げる。
そしてそのオーラを全力で収束させ、相手が回避する隙を与えずに叩き込む。
そして、強大な爆発が巻き起こった。

その光景を、会場にいる者達は見てしまっていた。
絶望のあまり、避難する気力すら失っていく。
冥界のヒーロー、おっぱいドラゴン。悪魔達の英雄、サイラオーグ・バアル。更に魔王の後継たる、ヴァーリ・ルシファー。
そんな若手悪魔の超人といえる者達が尽く倒れ、その仲間達も倒れていく。
その光景に、観客達は心が折れていく。
希望の光だと思っていた英雄達が、冥界に対して反乱を引き起こした男に倒されていく。
「……これ、王の駒って奴を使わなきゃ勝てる者も勝てねえだろ」
そんな風に、ぽつりと呟く者がいる。
王の駒によって強化された戦士達。
そしてまだその恩恵を受け取ることなく、英雄達を打倒するヴィール・アガレス。
そんな存在を前に、増援を送る当てもないのにどうすればいいというのだ。
「……う……ひっぐ……っ」
子供達の中には涙を流し始める者もいて、下手をすれば一気にパニックが引き起こされかねない。
「……おっぱい……おっぱいドラゴン……」

「死んじゃ……やだぁ……っ」
そんな絶望と恐怖を嘆きがあるがゆえに、子供達が泣き出すのは時間の問題であり―

「泣いちゃダメぇぇぇぇぇぇっ！」

その声が、やけに強く響き渡った。
会場中が、しんと静まり返る。
その声を出した者は、一人の小さな少年だった。
「おっぱいドラゴンが言ってたもん！　男は泣いちゃだめだって！　転んでも、何度でも立ち上がって女の子を守れるぐらい、強くならなきゃだって！」
つたない声で、それでも強い意志を込めて懸命に叫ぶ。
それは、心から全身全霊だからこそ、人々の心に届く。
「……そうだ、おっぱいドラゴンは負けないんだ」
「頑張れー！　おっぱいドラゴン！」
「おっぱーい！　頑張れー！」
一人、また一人、声援が飛ぶ。
届いてくれと、立ち上がってくれと。
その懸命な声が、何時の間にか合唱にすらなっていく。
『『『

紅が、光った。

冥革動乱編　第六十四話　みんながクライマックス！

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

サイラオーグ・バアルの耳に、声が聞こえた。
『……さい』
懐かしい声が聞こえる
『たちな……ーグ』
ずっと、聞きたかったその声は―
『立ちなさい、サイラオーグ』
―かつてのように、自分を叱咤していた。
『このようなところで倒れてはいけません。あなたの決意はそんなものだったのですか、サイラオーグ』
厳しい声で、真っ直ぐに、母は自分を見据えている。
『冥界の未来の為に、自分が味わったものを後世に残さない為に拳を握りながら、あのような男に切って捨てられたままでいるとは、それでも大王バアルの跡取りですか』
その声に、サイラオーグは拳を握る。
『生まれに関わらず能力があれば、しかるべき地位に辿り着ける世界。それを作るという決意は、あの一方的な言葉と暴力でおられるようなものではないでしょう』
そうだ、此処で倒れているわけにはいかない。
冥界の未来を開きたいと思っている。その未来の姿も見えている
そして、それを阻害する男がそこにいる。
ならば自分がやることは一つだ。

……だが、どうする？
今の自分では断じて勝てない。間違いなく敗北するだろう。
その時、自分の胸元に王の駒があることに気が付き……踏みとどまる。
自分達が切り開く未来は、ドーピングによって得られるものではない。もしこれに手を出せば、それこそ自分達の誇りと夢に唾を吐く所業だ。
それを再確認しながら意識がかぶりを振った時、一つの物体が目に留まった。
……それを見て、彼は決意を決める。
神器が想いに応える物なら。世界の均衡すら崩す想いが禁手に至るのなら。何より、禁手を作り変えることができるのなら。
そこまで思い至り、そして彼は意識を覚醒させる。
『……頑張りなさい、私の自慢のサイラオーグ』
その声が、自分の背中をしっかりと押してくれた。

意識が混濁しながらも、ヴァーリ・ルシファーは呼吸を整える。
絶大な魔力で強引に傷を塞ぎ、静かに気炎を滾らせる。
白き天龍は、明星の王は、誇り高くあるものだ。
その気高く何物にも縛られない在り方を誇るがゆえに、彼は戦意を消してはいない。
故に、彼は切り札を切る覚悟を決めた。
覇龍では勝ち目がないだろう。あの圧倒的な力は同時に質実剛健と言ってもいい基礎構造がある。常に暴走のリスクに振り回される覇龍では、性能で上回っても時間切れまでしのがれるのが関の山だ。返り討ちに遭う可能性だってある。
故にこそ、此処で示そう。
明星に輝く白龍皇。その現在過去未来において最強を体現する己

が示す、覇を屈服させた力というものを。
そして意識を研ぎ澄ませた時、視界に映る者が見える。
……それでこそだ。
その喜びが、更なる活力を生み出した。

イッセーＳｉｄｅ

……声が、聞こえるな。
『おっぱいドラゴン！　おっぱいドラゴン！』
『ちちりゅーてー！』
『がんばれー！　おっぱーっい』
ああ、応援してくれる、声が聞こえる。
それに、まだ仲間が戦っている。
皆が、友達が、大切な女性達が。まだ戦っている。
なら、負けてられねえよな。
そんな風に立ち上がると、そこは歴代の残留思念が集まっている空間だった。
そこにいる歴代の人達は、しっかりとした意識で恐怖の感情を浮かべていた。
その視線の先には、悠然と立っているヴィール・アガレスの奴がいる。
「覇龍……が、負けた……」
「馬鹿な……赤龍帝が……負けた？」
「化け物……勝てるわけが……」
う～ん。なんかへし折れてる感じだな。

全く、情けないぜ先輩達。
「何やってんだよ、歴代達！」
俺はなんていうか不甲斐なくて、思わず声を張り上げた。
それに気づいて唖然とした表情を向ける先輩達に、俺ははっきりと言い切った。
「一回叩きのめされたからって、なんでそんなに凹んでるんだよ！
それでも赤龍帝……か……」
そこまで言いかけて、俺はふと我に返った。
あ、そういうことか。
「何を言っている？　お前は、あれを見て……何を言っている？」
「赤龍帝（我ら）が、覇道を成す赤き龍が、圧倒されたのに!?」
めっちゃショック受けてるな。
赤龍帝の覇道が、ヴィールの覇道にコテンパンにされた所為で心が折れてるのか。なるほどなるほど。
ただ、悪いね先代達。
「……俺は覇道なんてなさないからな。やるならもっとエッチでやらしくいかせてもらうぜ」
ああ、そうなんだよな。
だから、俺は折れない。まだ立ち上がれる。
「俺を待っている子供達の声だって聞こえる。覇道なんて選んだら、子供達が泣いちまうしな」
「何を言う!?　赤龍帝は覇道こそが本質だ！　それ以外の道など―」
強引に止めようとする歴代の人達だけど、なんか急にその力が弱まった。
「いいじゃないか。少なくとも、僕は二天龍の新しい可能性だって思うね」
そこにいたのは、なんか見覚えのないお兄さん。
俺はちょっと首を傾げるけど、歴代の一人が面食らって指を突き付けた。
「……貴様は！　白龍皇の宿主ではないか！」
え、まじで!?　てかなんで!?

思わぬ人物に俺の方が訳が分からなくなっていると、白龍皇の人は朗らかに笑っていた。
「以前今代と戦った時に宝玉を取り込んだだろう？　その影響で残留思念がコピーされたようなものさ。本来の僕はちゃんと白龍皇の方に宿っているよ」
そう告げると、歴代の白龍皇の人は半減の力を展開する。
「さぁ、時間を稼いでいるうちに行きなさい。今代の二天龍は、僕達とは違う道を行くべきだ」
……っ
俺は涙すら浮かべたくなるけど、それを堪えて真っ直ぐに上を見上げる。
たぶんだけど、至れる力はある。今ならきっと至れるって、なんとなく思う。
だけど、ヴィールはそれだけじゃきっと勝てない。それ以外にも何かが必要なんだ。
それを考えて……俺は、悟った。
ああ、俺は孤独な覇道なんて歩まない。だから、俺の答えは決まっている。
そう、俺はアイツに恥ずかしくない男になるって、誓っているんだからな。
だから、俺は腕を突き出す。
「令呪に命ず！　応えてくれ、シャルロットぉおおおお！」
だから力を貸してくれ。
きっと、このアイディアを形にするには……お前の力が必要だ！
「……イッセーっ！」
そして、手が手に触れる。
「まったくもぅ。凄い事を考えたり実行したりするんですから」
「ゴメン。いろんな意味で心配も苦労も掛ける」
俺はちょっと申し訳ないけど、シャルロットは微笑みながら首を横に振ってくれた。
「構いません。その分、しっかりと見せつけてあげましょう」

ああ、そうだな。
ヴィールに……皆に……そして……！
俺は振り返り、歴代の人達に声を張り上げる。
「一緒に見ようぜ、夢に輝く未来ってやつを！　俺が……見せてやる!!」
「……夢」
「未来……？」
ちょっと呆ける歴代の人達に、俺ははっきり言ってやる！
「ああ！　おっぱい一杯夢いっぱい！　俺の夢を、未来を！　絆を！　皆も一緒に見ててくれ！」
そう言いながら、俺の視界は紅の光に染まっていく。
ああ……ここから、反撃だ！

和地Ｓｉｄｅ

……ああ、やっぱりこれでは駄目か。
分かっていた。春っちから聞いていた内容と、そこから感じる奴の凄味なら、これぐらいはやってのける。
それでも勝算があるとは分かっていた。だからこそ、まずはやった。
だが勝てなかった。ヴィール・アガレス・サタンは上を行った。乗り越えた。
痛感したさ。奴は間違いなく化け物だ。あり得ないような困難を、

決意と信念と気合と根性で乗り越えてきた、意志力の怪物だ。そこに鍛え上げられた身体能力と技量を持っているのだから、同年代で限定すれば間違いなく化け物だ。

追いつけれるわけがない。それだけの積み重ねの密度を持っている奴を打倒できるものがいるとするなら、それは数倍を超える経験を持つ者だけだ。しかも追い抜かれればまともな方法では絶対に勝てない。

だからこそ、まともな方法では勝てない。嵌め手をもってしても、それ以上の執念で乗り越えてくる。それがよく分かったとも。

……だからこそ、この手が通用するようになった。

諦めるなどありえない。

春っちを引きずり戻す為、奴の打倒は必須だろう。そうでなければ、崩れ落ちてミイラのようになる春っちをとどめた、奴（ヴィール）に対しても失礼だ。

証明しないといけない。春っちにも、ヴィールにも、全てに対しても。

九成和地はヴィール・アガレスが託すに足る、成田春菜を支える柱の相応しいのだと。

それを此処で示してやろう。全身全霊全てをもって。

すべてを振り絞れ。その誓いを死ぬ気で果たせ。

九成和地という男は、彼女の笑顔に交わした誓いを、守り通せる男なのだと、三千世界に示して見せろ……っ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

故に、ここからが決戦となる。

刮目せよ。真の戦いは此処から始まるのだと知れ。

冥革動乱編　第六十五話　目覚めよクライマックス！　―この救済を邪魔する術など無い―

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……我、目覚めるは―」

その声が響いた時、戦闘を続ける神魔の超常は、覇を悟った。
この脅威を前には、二天龍でとれる手札は覇龍ぐらいしかないと、それほどまでにヴィールの力を認めてしまっていたからだ。
当然の判断だろう。覇は封印系神器の奥の手。禁手という究極をもってしても届かない相手を打倒するには、それ以外の手札など普通は考えない。
だからこそ―

「王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり!!」

―新たなる可能性に、誰もが刮目する。
「無限の希望と不滅の夢を抱いて王道を往く」

その新たなる祝詞に、誰もが驚愕する。
「我、紅き龍の帝王となりて―」
そう、それこそが最新にして最優の赤龍帝。
「―汝を真紅に光り輝く天道へと導こうっ!!」
兵藤一誠が編み出す、新たなる天龍の姿。
紅の光を纏い、赤龍帝は紅の鎧を身に纏う。
そう、これこそが赤龍帝の新たなる可能性。
魔王ルシファーの縁者の眷属たる、兵藤一誠が至る紅の天龍。
憎悪を脱ぎ捨てし、天龍の新たなる姿。
「……イッセー……？」
乳房を紅に輝かせるリアスは、その姿に思わず見惚れる。
翼から紅の光翼を作り上げ、全身を紅に彩る鎧を身に纏い、兵藤一誠は前を向く。
「……ははっ」
自分のあふれる力に、自分自身で笑ってしまう。
そして、紅という輝きに、愛する主を思い起こして苦笑いまで浮かべてしまう。
『相棒、何があった!? 俺ですら手が付けられないほどに高まった怨念が、何時の間にか吹き飛んでいるぞ!?』
『大丈夫です、ドライグ。今のイッセーに、怨念（そんなもの）は通用しません』
慌てるドライグとそれをなだめるシャルロットの声を聴きながら、兵藤一誠は前を向き、そして刮目するヴィールを真正面から見据える。
「……なるほどな。女王（クイーン）の昇格（プロモーション）を、この土壇場で成し遂げるか」
「ああ。かつての白龍皇や、シャルロット……そして、子供達の声援が俺を此処まで進ませてくれたよ」
ヴィールにそう答え、一誠は視線を外の映像に向ける。
そこにいる、最初に声を上げた少年を見る。
そういえば、つい先日のショーの時に出会った少年だ。泣いていたので激励をしたうえ、そのあと対応をスタッフに怒られたのでよく覚えている。

彼の声がきっかけとなった。それで集まった声援が、力になった。
だからこそ、今自分は此処に立っている。
「……ありがとうな、リレンクス！　おかげで何とか立ち上がれたぜ！」
『……やっちゃえええええ！　おっぱいドラゴンっ！』
その声に腕を掲げて答えたイッセーに、白と金が並び立った。
「ふふ。君は本当に前人未到の連続だよ。俺をどこまでも高ぶらせてくれる」
「真紅の赫龍帝（カーディナル・クリムゾン・プロモーション）といったところか。リアスと同じ色とは魅せてくれる」
ヴァーリ・ルシファーが。サイラオーグ・バアルが。
鎧を身に纏い、そして並び立つ。
「えっと、二人とも……大丈夫で？」
二人も相当やられていたと思ったので、思わず尋ねる。
それに対して、サイラオーグは肩をまわしながら胸を張った。
「安心しろ。母上に叱られては情けないところは見せられんさ」
「ならば負けられんな。母親はしっかり大切にするといい」
そう答えるヴァーリもまた、しっかりと大地を踏みしめる。
ああ、大丈夫だ。
その安心感と共に、イッセーは拳を握り締めた。
「兵藤一誠。今の奴に届く札はあるんだが、おそらく数手が限界だ。……しのげるか？」
ヴァーリのその言葉に、答えるのはイッセーではなかった。
「ならば俺が手を貸そう。……今なら、凌ぐ程度はできるはずだ」
その言葉は力強く、それに頷くヴァーリも頼もしい。
ああ、可能性はある。
1パーセント程度だろうと、あるのならそれを掴み取ればいいだけの話であり―

「おいおい、俺達を忘れてもらっちゃ困るな」
「同感ね。これから第二ラウンドよ？」

—それが一気に跳ね上がるのなら、なおのことだ。
そんな頼もしい声と共に、二人の戦士が立ち上がる。
「まさか、一発殴り飛ばせは終わりだと思ったか？」
九成和地が、目を血走らせながらヴィールを見据える。
「まだだ、まだだ、まだまだまだ……っ。たかがこの程度で、終わるわけがないのよ」
狂気すら感じさせる強い眼差しで、カズヒ・シチャースチエもヴィールを睨み付ける。
「……大丈夫？」
「「問題ない。倒してから倒れる」」
思わず問いかけたら即答された。断じて大丈夫なやつのセリフではなかったが。
まぁ、頑固なのはお互い様だ。決意を決めているのなら止まるまい。
だからこそ—
「……頼むぜ皆。一緒にぶっ飛ばすぞ！」
—その声と共に、誰もが一歩を踏み出した。

和地Ｓｉｄｅ

まったく。こういうところで外さないのは、イッセーのイッセーたる所以って奴か。
俺はちょっと苦笑しながら、ヴィールに向き合った。
「さて、こちらとしてはむしろほっとしたところだ。……この期に及んで王（キング）と真魔（ディアボロス）を否定するのなら、可能性を示してもらわねば困るのだからな」
ヴィール・アガレス・サタン。冥革連合の長であり、春っちの主。
俺が、届くことを証明しなくてはいけない男。
俺達は真っ向から向き合い、静かに戦意を高める。
ああ、第一歩はやっぱり無理だった。これはもう仕方がない。
春っちから聞いた奴の化け物っぷりに、俺もカズヒ姉さんも勝つ為の手札をいくつか考え出すのには苦労した。
だからこそ、出すのは二段構え。第一弾を仕込みとすることで、本命である第二弾の為の備えとする。その覚悟を持ってここまで来た。
だからまぁ、ここからが本番だ。
そんな時に誰もかれもが一気に持ち直してくれて助かった。袋叩きは趣味じゃないが、それをするだけの相手だしな。
「確認するわ。私達はアイツ対策があと一つあって、加えて伏札を一つ所持。……そっちは？」
カズヒ姉さんが魔術行使用の宝石を構えながら、皆に対して確認する。
「土壇場で培った手札がある。あと、すまないが一枚借りるぞ」
「まだ慣れてないが、切り札がある。最も一分も持たないから、切るタイミングは見計らうべきだがな」
「俺も、いくつか用意してきたぜ。……シャルロットのおかげだ」
三人揃って切り札があるようで何よりだ。
……おそらく、それら全部を叩き付けての逃げ切り勝ちがベストの選択肢になるだろう。

情報を統合できる分身による、圧倒的な成長速度。それこそがヴィール・アガレス・サタンの力の源泉。
こと技能に限定すれば、一度ヴィールに追い抜かれた者が真っ当な手段で追い抜き返すことはできない。常人を超える鍛錬の時間を確保し、それを狂気的に突き詰めることこそがヴィール・アガレス・サタンの本質なんだから。
だからこそ、鍛錬で超えることは放棄しよう。
俺が覚悟を決めると共に、リアス部長が並び立つ。
「……イッセー、大丈夫？」
「大丈夫です、部長！　此処からです」
そうしっかりとイッセーは答え、その左腕を伸ばす。
「力を貸してください、部長。あいつに勝つには、部長の力が必要です」
『説明は合一化するまでお待ちください。……おそらく、真っ当な戦闘で対応する手段はこれぐらいしかないでしょう』
イッセーとシャルロットがそう告げるのを確認してから、俺は一歩前に出る。
「一つだけ、感謝をさせてくれ。あんたがいなけりゃ、春っちはきっと何か別のものになっていた。……春っちを終わらせないでくれて、ありがとう」
それは、きっと真実だ。
だからこそ俺はそれだけは嘘にしない。成田春菜という少女を、残してくれたことにだけは感謝したい。
そして、言うべきことはもう一つ。
「そして宣言を少し変えよう。……成田春菜は俺が、今ここでもらい受ける。お前をしっかりぶちのめしてな」
ああ、此処でそれを成し遂げなければ、きっと生涯それはできない。
ああ、だから―

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「いいのか、行かなくて？」
「……どうしたらいいのか、分からないのよ」
「そりゃそうか。和地もヴィールも、お前がここまで歩けた理由なんだしな。どっちかに肩入れするのは躊躇するか」
「ベルナこそ、このまま投降するってことでいいの？」
「……説教されて、人に語って、漸く悟ったよ。アタシはずっと惰性で動いてた。惰性でやっちゃいけないテロまでやっちまってたんだ。気づいたなら、けじめぐらいはつけねえとな」
「……そっか」
「春菜」
「なによ？」
「和地に愚痴ったりとかで意気投合してたあんたは、ぶっちゃけ今のあたしにゃ唯一のダチだ」
「そうね。正直、結構楽しかったわ」
「ま、そんなわけだからダチの頼みは内容次第じゃ聞いてもいいって思ってんだよ」
「……素直に和っちを助けたいって言えば？　自分でやりなさいよ」
「痛いとこついてくんなよ。……言い変えるぜ、助けに行こうぜと誘いたいわけなんだけどよ？」
「だから、私は―」
「逆に考えな。どっちに対しても胸を張れる、そんな答えはどこにあるんだ？」
「……」
「アタシはヴィールの旦那のことは詳しくねえし、和地との付き合いもろくにねえ。だから、お前が自分で考えなきゃいけねえってわけ

だ」
「……」
「アタシはその辺半端者だからな。誰かの動きにただついていってきただけの女が、いきなり自分で決めれるわけねえだろ。……せめてダチに付き合うところから始めさせろや」
「……」
「……なぁ、胸を張れる自分でいたかったんだろ？　だったらどうすりゃいいかを考えようぜ？」
「……ベルナ」
「ん？」
「……付き合って、欲しいことがあるの」

和地Ｓｉｄｅ

決意を決めた。覚悟も決めた。
だから、遠慮なくぶちかます。
「……いくぜ、ヴィール。第二ラウンドだ」
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ』
装填するのは、サルヴェイティングドッグプログライズキーに、新たなる装置を取り付けれるようにした改良型。
アサルトグリップ。ザイアが試験開発していたプログライズキーの拡張ユニット。安全装置などのリソースを攻撃性特化に改竄する装置と考えればいい。
星辰奏者であるのならある程度は負荷にも耐えられるだろうが、それでも安全性に問題があることから、早期の投入をリーネスが控えて

いた、新たなる札の一つ。
本命のプログライズキーを俺が使えないことから、保険として用意された札。
いきなりこれを使わなかったのは、仕込みを入れるというその為だった。この仕込みを最大限に生かす為にも、こいつの使用は第二ラウンドに取っておくつもりだった。
だからこそ、俺はこれをもってヴィール・アガレス・サタンを打倒する。
『Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』
まっすぐに、迎え撃つ構えのヴィールを見据え、俺は引き金に指をかける。
「……変身！」
『ショットライズ！』
展開されるショットモデルが、犬の幻影を浮かべて俺に飛び掛かる。
そして展開される装甲は、これまでより色濃くなった強化装甲。
『サルヴェイティングアサルトドッグ！』
かかる負担を乗り越え、俺は呼吸を整える。
『Ｎｏ　ｃｈａｎｃｅ　ｏｆ　ｐｒｅｖｅｎｔｓ　ｓｕｒｂｉｂａｌ』
「俺の救済は止められない。春っちは俺がもらい受ける」
「ならば示して見せるがいい。お前が春菜を笑顔にできる男だと」
その言葉をきっかけに、俺は突貫を開始した。

冥革動乱編　第六十六話　誰もがクライマックス！

和地Ｓｉｄｅ

重装甲重武装ゆえに、若干だがサルヴェイティングアサルトドッグはサルヴェイティングドッグより遅い。
だが、それを補う武装を満載しているからこそのアサルトグリップ。この程度は何の問題にもならない。
当然だが急加速用のスラスターが組み込まれていて、瞬間的ならスピードも出せる。
俺はそれによる突撃で真っ先に突貫し、更に全身の武装を発射する。
背部と肩部のミサイルをトップアタックで発射しつつ、両腕部から星辰体粒子を短機関銃として斉射して突貫。ヴィールの動きをけん制するだけでなく、発生する噴煙で周囲の視界を阻害する。
対ヴィールにおいて、視界阻害による分身の見取り稽古阻害は必須条件。
そして懐に飛び込むと共に、躊躇なく胸部のオービタルバインダーから拡散星辰粒子砲を発射し、魔剣を創造して切りかかる。
というか、ヴィールも全部あっさりと凌ぐな。
「攻撃性能特化型か。更に全兵装を使って分身の視界を阻害するのは見事だ……が」
四方八方からヴィールは分身を展開して包囲する。
「分身は直接戦闘でも十分脅威だと知るがいい」
ああ、だろうな。俺もその辺はネックだった。
だが―
『そうはいかないわね』
―その瞬間、聖剣の龍騎士が分身達をけん制する。

そして聖剣を両手の籠手から延ばして突貫するのは、新たなる鎧を身に纏ったイッセーだ。
相変わらずの三人羽織りだが、性能が大きく向上したことで龍騎士の性能も上がっている。
そして更に、此処で動く頼れる人がいるからな。
「……詠唱完了。固有結界――――極大魔術行使機構（マキシマム・マギステル・ジェネレーター）・道間日美子！」
浸食される外界に、浸食する毒々しい心象風景。
……これがカズヒ姉さんの固有結界。魔術回路保有者の極限ともいえる大秘術。
心象風景がこれって、カズヒ姉さんは何を背負っているんだよ……っ！
だが今はそこを気にしている余裕がない。
俺とイッセーが二人がかりで本体を仕掛けている間に、更にカズヒ姉さんが固有結界を使う理由は、意外と単純だ。
「相手の攻撃タイミングを読んで対処するなら、当然避けようも捌きようもない攻撃が最適解よね！」
その瞬間、固有結界全体に灼熱・極寒・雷撃といった攻撃現象が全面展開される。
同時に俺たち味方にだけは識別するように無効化されるが、これにより空間全てが攻撃となったことで、ヴィールは嫌でも手傷を負い続けることになる。
「なるほど、だが甘いぞ！」
そんな常時負傷を続けながらも、ヴィールは遠慮も躊躇もない。
攻撃は一切緩まないし、対処できる攻撃にはきちんと対処する。
更に分身が消えるごとに情報が更新され、ポテンシャルが数段上に跳ね上がる。
そして一気に分身が押し切ろうとして――
『『『

しかもすべての龍騎士達は、動きがそれぞれ切り替わっていくという訳の分からない展開になっている。
これは、一体!?
「……まさか」
イッセーが、その時ぽつりと呟いた。
心当たりが？
そう思った時、鎧から、小さな雫が零れる。
「手伝って……くれるのか？」
『何を言う』
『君が言ったことだろう？』
『未来を見よう』
『皆で！』
……あぁ、なるほど。
本当にヒーローだよ、お前はさ。
瞬間的に切り替わる、歴代赤龍帝の遺志で制御される龍騎士達。
文字通り動かす者が変わるがゆえに、リズムを読むヴィールの分身達ですら読み切れない。
それでも拮抗常態には持ち込まれているが、裏を返せば拮抗常態が限界だということ。
そして―
「礼を言うぜ歴代方！」
―おかげで懸念はゼロになった。
俺は踏み込み、そして殴り掛かる。
連続の攻撃をヴィールは完璧に回避し、そしてカウンターを合わせようとする。
既にリズムは読まれている。だからこそ、ここまでは当然だ。
そしてそれゆえに―
「……らぁっ！」
「ぬぅ……っ！」
―まずは一発、入れたぞ。
驚愕が分かる。狼狽は感じない。

戦場において、初見殺しは有効だ。何故なら想定外に完ぺきな対処ができる奴などまずいないから。
それを分かっているからこそ、驚愕の事態が起こることは本来いくらでもありえる。だからの対応の早さだが、それでも想定外には違いない。
だからこそ、此処で一気に傾いていた流れが食い止められる。
ごく僅かだが、確かに流れは俺達の方に有利になってきた。
「リズムが変わり……いや戻った!?　……まさか！」
「その通り！　お前がどれだけリズムを読もうと、リズムが切り替えられるのならやりようはある！」
もちろん、そんなことはまず不可能だろう。
事前に練習を何度も積んでいたのならともかく、即興でできることではない。
だけど、俺には可能性が一つだけあった。
「ザイアの脳内ＡＩチップは、ある程度の動作支援プログラムなども仕込まれている。カズヒ姉さんに固有結界全開で仕込んでもらって、オート動作プログラムをいくつか仕込ませてもらったぜ！」
「体の駆動権を一時的にオートにすることで、こちらにどのリズムか判断するロスを組み込んだか！」
すぐに悟ろうがどうしようもない。
切り替えられるリズムのパターンはいくつもあるから、俺自身の切り替えや動作を含めれば、先ほどまでのような完璧なカウンターは入れられまい。
まして、一度無理をしてまで覚えさせたリズムだ。戸惑いも少しはあるだろう！
狂気の沙汰は承知の上だ。それでも成したいことがあり、その為に必要ならやってやるさ。
「まだまだ行くぜぇえええええ！」
「そうでなくては、春菜は渡せんしなぁ！」
攻防の密度が高まる中、更に入ってくる戦力が突入する。
「借りるぞ、カズヒ・シチャースチエ！」

突貫するサイラオーグ氏に、ヴィールは魔力攻撃で応戦する。
それを強引に受け止めながら、サイラオーグ氏は何かを起動させた。
『ＢＵＲＳＴ！』
あれは、ダイナマイティングライオンプログライズキー!?
俺が面食らいながら戦っていると、ヴィールやイッセーも面食らった？
「「鎧が違う!?」」
「母上に叱咤されたばかりなのでな。少しは一手を用意する！」
赤龍帝の鎧に比べると軽装なそれは、腰部にプログライズキーをはめ込むスロットが成立していた。
そしてサイラオーグ氏は、それを勢いよく装填する。
「実装！」
『レザーライズ！』
鎧がライダモデルを参考に追加装甲を展開し、全身の装甲がない部分に装着される。
そして顔面を仮面が多い、幻想的な本体と科学的な追加装甲による、どこかミスマッチな全身鎧が完成した。
『ダイナマイティングライオン！　Ａ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　ｅｘｐｌｏｓｉｖｅ　ｆｏｒｃｅ　ｌｉｋｅ　ｆｉｒｅｗｏｒｋｓ』
「行くぞ、これが俺達の新たなる力―」
『名を鋼獣纏う獅子王の皮鎧（レグルス・メイル・レザーレイダー）。ダイナマイティングレザーレイダーで、貴様を打倒する！』
サイラオーグ氏と獅子の声が響き、爆裂を利用した強引なロケットモーターと爆発力で、カウンターを強引に突破する。
……想定上の展開だ。これなら、博打を超えた勝算が得られる。
そしてイッセーも、まだまだ動く。
「部長！　時々パスするんで動かしてください！」
『ええ、分かっているわ！』
阿吽の呼吸でイッセーも動きの主導権を時折リアス部長にパスすることで、ヴィールのリズム把握にずれを作り出す。

「……いいぞ！　それぐらいはしてもらわないと……困るというものだ！」
そして同時にヴィールの出力が更に上昇する。
なるほどな。ここからが、本番か！
だがヴィール、気づいているか？
この状況下で、イッセーは基本一心同体で戦うシャルロットではなく、リアス部長だけに肉体操作のスイッチを頼んだ。
断言してやる。この馬鹿、更にもう一手仕込んでるぞ！

アザゼルＳｉｄｅ

おいおいおいおい！　なんか凄いことになってんなぁ！
「……禁手の改変を起こしたサイラオーグ・バアル。そしてアサルトグリップを使用した涙換救済（タイタス・クロウ）。挙句の果てに、怨念と手を取り合って禁手の更に上へと至った赤龍帝だと？」
「おいおいどうすんだ！　流石にこれは想定外だろ!?　俺ら撤退させられるんじゃねえか!?」
人間なら頬が引くついてそうな状態のハヤテに、サツの野郎が懸念を叫ぶ。
だろうな。ここにきて思わぬ展開の連続だ。
なら、俺らも頑張らねえとなぁ！
「気合入れるぜサーゼクス！　ディハウザーも付き合え！」
「そのようだね。義弟（おとうと）だけのいい恰好はさせられないか」
「レーティングゲームの聖地、守って見せましょう」
俺達はこの流れに乗じて一気に攻めるが、だがリクの野郎が素早くカバーに入る。

「二人とも冷静に。あの調子ならまだヴィールの方が有利だ」
「……それもそうだな。まだヴィールは真魔（ディアボロス）の駒を解放させていない。ならば―」
ハヤテが冷静になりかけた、その時だった。

『紫の空を駆け、今ここに冥界を守りし鋼が降臨する―』
あ。
そんな鳴り響く声に、俺は思わず感極まったぜ。
『鋼の悪魔は此処に在る。絶望するがいい怨敵よ、汝の時は我らが制する―』
「な、なんだぁ!?」
サツの野郎が面食らう中、ついにそいつは現れた。
やっと来たのか千両役者。……いや、よくこのタイミングに間に合わせた！
「聞いて驚け見て嘆け。これがＴ（トライフォース）Ｆユニットの第二弾！　スポンサー泣かせの新兵器！　……泣くと言っても感涙のぉ！」
俺はついつい勝ち誇って、大声を張り上げちまったよ。
開発にかかわった身として、こんないいタイミングでお披露目ってのも最高だ。
さぁ、やっちまいなぁ―
『刮目せよ！　大公機甲アガレッサー、君！　臨！　なりっ!!』
―シーグヴァイラ・アガレス！

冥革動乱編　第六十七話　滾るぜクライマックス！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

その光景に、誰もが一瞬度肝を抜かれた。
別の個所でレーティングゲームを行っていたはずのシーグヴァイラ・アガレスが、何故かロボットに搭乗して現れたのだ。
だがしかし、魔獣達はプログラムされた動作によって駆動する為、こういう時空気を読まない。
むしろミザリの「こういう好機で気が緩んだところに殺されると絶望だよね♪」な嗜好がサーヴァントとマスターのパス経由で流れ込んでいるのか、目ざとく攻撃を仕掛けてくる。
だが、それは黒い炎の壁によって防がれた。
『させるかよっ！』
同時に現れるは。黒いオーラで構成される蛇型の龍。
黒邪の龍王（ブリズン・ドラゴン）ヴリトラ。その姿を再現させるはソーナ・シトリーの兵士（ポーン）たる、匙元士郎だった。
そこに瞬時にフローズヴィトニルが攻撃を仕掛ける。
準龍王クラスの増援ともなれば、そのままにしておけば敵が活気づく。そう悟ったが故の指示を受けたのだろう。
だが、そんなことは彼女も織り込み済み、それどころか、そこまで考えての作戦でもある。
「今です、結界で動きを阻害しなさい！」
「「「「『はい、会長！』」」」」
龍王状態の匙を攻撃できる間合いに入った瞬間、ソーナ・シトリーの指示でヴリトラの神器を流用した結界がフローズヴィトニルを包み込む。
「……例え規格外の機動力を持って翻弄しようと、移動範囲を制限し

てしまえばその脅威は半減します」
静かに一歩一歩を踏みしめながら、ソーナ・シトリーは宣言する。
自らの眷属だけでなく、アガレス眷属も代理で率いて、彼女は断言した。
「狼藉もここまでです。では、本格的に反撃いたしましょうか」

和地Ｓｉｄｅ

振るわれる猛攻に対して、ヴィール・アガレス・サタンは明確に対抗しきっている。
リズムを読んでタイミングを完全に悟る手法こそ、俺とイッセーは何とか克服。そのうえで、歴代赤龍帝の協力もあって分身は抑えこめれている。
だが、本体……しぶとい！
「どうしたぁ！　ここまで来てこの程度だというのなら、期待を裏切られたと言っていいんだがなぁ！」
こいつ、リズムを読まなくても強いんだった！
しかもリズム対策ができるのは、現状では俺とイッセーだけ。カズヒ姉さんが空間全域攻撃の支援に徹してるのもそれが理由だ。
ちっ！　これ、俺とカズヒ姉さんだけで挑んでたらやられてた……っ！
「……この程度ならここまでだ。せめて加減ぬきで粉砕することで礼

儀としよう」
その瞬間、ヴィールの性能が明らかに急激な上昇を遂げる。
野郎、此処で真魔の駒を解放したか！
気づけば後方に大量の魔力弾が展開されている。あれが一斉射されたら一気に形成が畳みかけられるぞ。
どうする？　今迄ですら攻めあぐねていたというのに、此処で一気に性能を大幅に向上させられたら……っ
「頭上げるな！」
その瞬間、絶大な氷塊が魔力弾を撃ち落とす。
この攻撃、まさか―
「ベルナか!?」
―本当にいたよ!?
俺が面食らう中、ベルナの奴は苦笑交じりで首を横に振る。
「アタシは付き添いだ。……いけ、本命！」
「……分かってる！」
そこから炎を纏って突貫するのは、春っち!?
え、ちょ、おま!?
「ヴィール様……私が己の足で立つ為、胸を借ります！」
「良いだろう。遠慮はしないが歓迎しよう。……俺は、それを待っていた！」
全身から炎を纏って突貫する春っちに、正確無比な聖と魔が融合した打撃が放たれる。
いやちょっと待て、それ直撃―
「血脈、覚醒―ッ！」
―その瞬間、驚愕の事態が連発して行われた。
一つは一撃で春っちの頭が吹っ飛んだ。
一つは吹っ飛んだ春っちの頭が炎のようになって瞬時に再生する。
最後に、突っ込んだ春っちは打撃戦でヴィールのカウンターをしのいでいる。
ヴィール以外の全員がちょっと困惑するが、仕掛けた春っちはなにも驚いていない。

「貴方の眷属になってから、私はずっとあなたを見て鍛えてきた」
「当然、俺のリズムを多少は把握しているのだ。俺ほどではないがリズムを読めなくては片手落ちだ！」
そ、そういうことか!?
ヴィールがどれだけ春っちのリズムを読もうとも、春っちがある程度はヴィールの動きを悟れるのなら、そのカウンターは効果を発揮しない。
性能が急激に上昇したヴィールの攻撃を、春っちが食らいつくことで追いすがる。
「この戦いだけは……私は、貴方に喰らいつける！」
「いいぞ！　漸く己の足で立ち上がれるか！　自分の柱を取り戻せたか！」
なんか分かり合いながら、打撃戦が白熱化している。
喰らう攻撃を炎と共に回復させながら迎撃を叩き込む春っちが入ったことで、形勢は何とか喰らいつけている。
……だが、決定打を叩き込むチャンスが―
『……待たせましたイッセー！　今ならいけます！』
―シャルロットの声が、俺の不安を払拭する。
そして、ヴィールすら喜色を浮かべやがった。
「更に見せるか！　千両役者だな貴様は！」
「そうさ！　俺とシャルロットとドライグの三位一体に、惚れた女がいるなら尚更ってなぁ！」
イッセーが全力で吠える。
……なら、期待するぜ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そして外周部でも、戦線は一気に三大勢力優位に傾き始めていた。
自軍を翻弄していたらフローズヴィトニルがソーナ・シトリーの策で抑え込まれたことが大きいが、それだけでは断じてない。
その理由はいくつもあるが、一つはとても分かり易い。
神々が本領を発揮できない最大の理由が、今押されこまれたことに由来する。
「……本丸は任せた、マルガレーテ」
「もちろんです。責任は果たします！」
クーア・バアルの援護射撃を受け、マルガレーテ・ゼプルが聖なるオーラを込めた射撃を放つ。
それそのものはアルケードが弾き飛ばすが、四方八方から迫る氷の蠅の攻撃まではカバーしきれない。
「……くっ！　そう来るのね！」
その攻撃は打倒の為ではなく牽制の為。ノックバックで神々に接近させない為の攻撃だ。
これにより、ニスネウスは動きを完全に封じられた。これでは神の攻撃を受けに行くことができないが為、神々は思い切った行動をとることができるようになる。
既に幾人もの部隊がニスネウスの突貫を阻害する為の部隊を展開しており、これにより神々の反撃体制が整ったことが非常に優位に働いているのだ。
「はっはぁ！　流石は神話の英雄さん、やるじゃないかい！」
「流石は魔王ルシファーの血縁が率いる奴だな」
「ちっ！　バアル分家の傑物は伊達ではないか！」
ティア・バアルやナシュア・バアル達前衛により、ホグニ王達も喰らいつかれ、猛攻を叩き込む暇がなくなっている。
「右に五度ずらした方がいいぞ、兄上」
「あいよ！　ほらぁ、手柄になりなぁ！」
ローゲの幻術も事前に対策を整えていたのか、短時間でシュメイ・

バアルに破られて食い下がられている。
更に一瞬の隙をついて、シュウゴ・バアルの遠距離狙撃が正確に殺さんと放たれる為、イシロ・グラシャラボラス眷属は完全に縫い留められていた。
忌々しいのは包囲は完璧ではなく、逃げようと思えば逃げられるという点。
これが逃げるという道にリソースを誘導することで、一点突破の策をさせにくくしている。
それを冷静に踏まえ、イシロ・グラシャラボラスは苦戦の喜びに身を震わせながらも納得する。
「この部隊単位での立ち回りは、ノア・ベリアルはこっちに戦力を割いているということね？　やるじゃない」
その推測の通り、ノア・ベリアルはハッシュ・バアルと共に大王派の戦力を借り受け、イシロ・グラシャラボラス眷属の包囲網を確立化させた。
神々が集うこの戦場で、自分達が不利になっている理由はいくつかある。
その大きな理由は、パシパエとカイニスの宝具を併せ持つニスネウスの存在だ。
故に、ノア・ベリアルは時間をかけてニスネウスを抑え込める準備を整えた。
「さぁて、これで形勢は何とか傾けられるってところかねぇ」
「そうでなくては困るがな。まぁ、戦線の報告から見て、ニスネウスの釘付けに気づいた神々は既にサリュートIに本腰を入れている。十分我々は仕事を果たしただろう」
ノアにそう答えながら、ハッシュ・バアルは既に他の作業も進めていた。
その光景を見て、ノアは少し呆れの表情を向ける。
「……既に激戦区やその戦闘傾向パターンを算出するとか、それ絶対戦闘じゃなくて戦後復興の準備だろ？　アンタそれでいいのかよ？」
「構わんさ。どちらにせよそろそろ神話からの増援派遣が確定される

だろう。今回のテロは制圧ではなく発破をかけることを兼ねた対神仏である以上、アグレアスそのものは今回制圧されないだろうしな」
ハッシュ・バアルはシュウマ・バアルの跡取りとして、彼の立ち回りの才覚を色濃く受け継いでいる人物である。
バアル分家という立場の跡取りである彼は、その才覚もある種の独特さを持っている。
フロンズ・フィーニクスのような、国家全体の方針を決める才覚は一歩劣る。部隊単位での緻密な戦術的采配は、ノア・ベリアルが一歩先を行く。だがその二つで二人に追随する力を持つ彼は、更に独自の手札を持つ。
それこそ、分家当主が積極的に対応する手法。主役を補佐する各種業務に対する手腕。すなわち優先順位が二番手三番手の業務に備える才覚である。
この短い時間と戦線の士気業務で、ハッシュは既にアグレアスの被害状況を区画単位で把握している。それは当然、復興業務において必要な作業や資材を把握しているということに他ならない。
彼は既に、アグレアスから禍の団は撤退すると踏まえていた。故に敵が撤退した後のことに備え、戦闘終了後に速やかに復興作業ができる手配を準備している。それも注力しすぎることなく、戦場の采配にきちんと関わりながらの並列作業だ。
今まさに人命が失われる戦場で、失われた先のことにリソースを割く。その才覚は、ある種の冷血さを必須とするがゆえに国家運営に必要な才覚と言ってもいい。
カズヒ・シチャースチェは己を必要悪とみなして活動する女傑だと、ノアは聞いている。
だが同時に、ハッシュ・バアルもまた必要悪を正確にこなせる傑物だと、ノアは理解し直して苦笑した。
「……ま、今回俺達は裏方でしっかり仕事をするだけだ。フロンズは今回動きづらいだろうしな」
「それはそうだろう。だが、フロンズは終わってからのかじ取りが本領だろうしな」

我らがリーダー格がこのあと大量の仕事をするのだと考えれば、この程度の苦労はまあいいだろうと思えてしまう。
それとなくやりがいを感じながら、大王派の若き新鋭達は堅実に自らの得意分野を発揮していく。
「ああそうさ。俺達のフロンズ（大将）にとっちゃ―」
「―龍神（グレートレッド）など前座にすぎぬのだからな」
全ては、星海を疾く目指すフィーニクスと目指す理想の為に。

冥革動乱編　第六十八話　終わりのクライマックス！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

『うなれ眼光！　ウインクラッシュ・アイ！』
アガレッサーの二つのアイカメラが瞬き、視線の先が爆発してミサイルを撃ち落としていく。
ギガンティスサリュートが放つミサイルを撃ち落とし続けるアガレッサーは、更に仕掛けるサリュートＩを相手に拳を構える。その瞬間、両腕部のユニットが展開する。
『マナックルダスターＮモォオオオッド！』
カウンターで放つ拳が、サリュートＩの防壁を粉砕して一機撃墜。
その一撃の破壊力に、しかしサリュートＩは隊列を速やかに組み直して、一斉射撃を敢行する。
だがアガレッサーは止まらない。華麗な動きで回避しつつ、更に直撃弾を腕で弾き飛ばした。
『Ｂモード！　更に、Ｍモード！』
反撃の砲火が放たれ、更にウインクラッシュ・アイも併用したことで、牽制が成立する。
加えて増援として魔獣達まで差し向けられるが、シーグヴァイラ・アガレスは遠慮なく突貫する。
そしてすれ違いざまに、全身のブレードユニットが魔獣達を切り刻む。
『……リッパー、フリルっ！』
斬撃によるかき乱し、更に突貫した勢いで距離をとった瞬間、アガレッサーの胸部が揺れる。

否、カバーが稼働して揺れるように見え、そのまま展開すると共に、絶大な魔方陣が多重展開される。
反撃の為にサリュートＩと魔獣達が振り返ろうとするが、しかし遅い。
『うなれ双丘！　ツインブラスタァァァァァァッカノンッ！』
その瞬間、赤龍帝のドラゴンブラスターに匹敵する砲撃が、二つ同時に放たれて敵を吹き飛ばす。
その頃にはギガンティスサリュートも、反撃の態勢を構えてた。
構えるのは、大口径の長銃。だがギガンティスサリュートサイズである以上、それは列車砲に匹敵する口径だ。
だが同時に、アガレッサーもまた一丁のスナイパーライフルを構えていた。
『撃ち抜け、アグレアスナイパーッ！』
その瞬間、双方の砲撃が叩き込まれる。
双方が双方の攻撃が当たるも、しかしすぐさまアガレッサーは突貫する。
そして手に握られるは、巨大なグレートソード。
その刃に纏われる力を見て、アルバートは目を見開いた。
『……疑似反物質粒子!?　ついにそこまで』
『三大勢力驚異のメカニズムは、いつまでも追い抜かれないのですよ！』
驚愕に反応が遅れた瞬間、斬撃がギガンティスサリュートの装甲に裂傷を刻み込む。
『これぞ、アグレアスパタ！』
『なるほどねぇ!?　だけど浅い!!』
その瞬間、ギガンティスサリュートは蹴りを放つ。
その脚部からは疑似反物質粒子アザトースの刃が形成され、アガレッサーを蹴り裂かんと襲い掛かり―
『ＶＥＨＩＣＬＥ！』
―それをみすみす許すほど、三大勢力は甘くない。
『ライディングレイン！』

列車の姿をしたエネルギー弾が、ギガンティスサリュートの蹴りを受け止めそらす。
「頑張ったな姉ちゃん！　そろそろ決着つけようぜぇ！」
『ええ、アガレッサーとアントニオンの、二つの力を今一つに！』
キュウタに応えるテンションが変な方向に振り切れ気味のシーグヴァイラに、半ば呆れて反応できなかったリーネスは苦笑する。
「ノリノリねぇ。まぁ、神の子を見張る者的にはいいスポンサーなのかしらぁ……？」
アガレス領の財政が傾かないか少し心配になりつつも、リーネスもまた意識を真っ直ぐに向ける。
幸か不幸か、アガレス家が主導となって開発されていた計画は成功を収めたのだろう。
……真魔の駒を腐らせるのももったいないということで、操縦者ではなく機体の方に内蔵させることで高性能化を実現。ついでにアガレス家が家のフラッグシップ機にする名目で予算を大量投入したことで、新技術や高性能化を思う存分組み込めた。そんな趣味に全力投球する者達の協力で完成した、シーグヴァイラ・アガレス専用機兼概念実証機、「大公機甲アガレッサー」
このアガレス領の目玉ともいえるアグレアスを守るのに、これほど相応しい機体も存在しない。
ゆえに―
「行きますよぉ！」
『ええ、よくってよ！』
―今の返答のノリは何かのネタだろうか？
それは置いておいて、リーネスはシーグヴァイラに合わせて天に舞う。
それに対して迎撃を叩き込もうとしたギガンティスサリュートに、砲撃が集中して叩き込まれる。
それを成したのは、一個中隊の飛行将兵トライデンⅢ。
増援と戦局の変化を逃さず、トライデンⅢはΔサリュート・アサルトを突破して攻撃を叩き込む。

そして、此処に超大型兵器の終焉が確立される。
『砕け散りなさい！　極！　限！　アガレェエエエエッスゥウウウッ!!　キィイイイイイイイックゥウウウウウウウウッ!!!』
アガレッサーは脚部に大量の魔力を束ねて突貫し
『ライディングレインラッシュ！』
アントニオンもまた、全身のエネルギーを集め飛び蹴りを叩き込む。
『よし脱出！』
それに対して、明晰な頭脳で耐えられない避けられないと瞬時に判断したアルバートが転移装置で脱出した直後―
『……爆っ砕！』
―ギガンティスサリュートは、文字通り胴体に巨大な穴を空けられて爆散する。
飛行将兵トライデンⅢ
機動特急アントニオン
大公機甲アガレッサー
三種のＴＦ（トライフォース）ユニットによる鋼の協奏曲が、大いなる巨星を打ち砕いた。

「……カズヒ達は大丈夫かしらぁ」

……約一名のメンタルにそこそこのダメージを与えることと引き換えに！

和地Ｓｉｄｅ

今この瞬間、赤龍帝の鎧から強い光が展開される。
待ってたぜ、千両役者。冥界のヒーロー、おっぱいドラゴン！　俺達の兵藤一誠っ!!
「受け取ってくれ、皆！」
その声と共に、俺・サイラオーグ氏・春っちの三人に、赤い龍のオーラが装着された。
そのオーラは、それぞれが別々の鎧の形をとって具現化される。
春っちには鎧というより鎧型のスラスターとなって装着される。これによりヴィールの機先を制し、攻防の流れをこちら側に揺るがす。
サイラオーグ氏には全身から強い力場を生成する鎧が形成される。これによりカウンターを強引に押し切り、そして強大な攻撃をもってして反撃に転じる。
そして俺に追加されたフィンを持つ鎧は、俺の魔力を極限まで上昇させる。
……なんか知らないが、これは都合がいい。
遠慮をすることなく、魔力を消費する分だけ威力が上昇する魔剣を創造。オーバードーズで崩壊するほど注ぎ込み、連続生成で攻撃力を上昇させる。
「「うぉおおおおっ！」」
「これは……赤龍帝の三叉成駒（イリーガルムーブ・トリアイナ）を発展させたのか！」
猛攻に食い下がられ、ヴィールがすぐにその為を見抜いたようだ。
野郎、俺より先に俺の仲間の秘密に気づくなよ。
で、答えは？
「その通り！　真女王の勢いでシャルロットに調整してもらった新しい切り札、禁断なる三叉の赤龍報奨（イリーガル・ギフト・トリアイナ）だ！」
真女王で突貫しながら、イッセーも吠える。

なんていうか恐ろしいことをつるべ打ちするよな。
事前に何度も鍛えたり準備しているからと言っても、この連続進化にはちょっと関心を通り越してちょっと呆れる。
俺にちょっと分けてくれよ。具体的には禁手に至らせろ。
ま、今はそこじゃない。
至ってないのに至れるようにとか考える方があれだ。まずは持っている手札で何とかする方法を考える。特に俺はそういうタイプだから尚更だ。
向いてない方向性に拘る暇があるなら、向いていることを突き詰める！
だからこそ―
「合わせろイッセー！」
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ！』
「分かってる！」
『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔ!!』
俺がショットライザーを構えて全武装を向けると共に、イッセーも背部から砲身を具現化してオーラを込める。
「「行っけぇぇぇぇぇぇっ!!!!」」
『マグネティックスターブラスト！』
『Ｆａｎｇ　Ｂｌａｓｔ　Ｂｏｏｓｔｅｒ！』
俺の全武装強化一斉砲撃「マグネティックスターブラスト」と、イッセーがのちに「クリムゾンブラスター」と名付ける最大砲撃が、ヴィールに激突して鎬を削る。
なるほど耐えるか、だが！
「動きが止まりましたね!?」
「この隙は断じて逃がさん!!」
その瞬間を、春っちとサイラオーグ・バアルが逃さず突貫する。
『ダイナマイティングレザーボライド！』
超至近距離からの爆裂打撃がヴィールをのけぞらせ、
「焼き砕け……赤き紅炎（ルーラー・オブ・ファイヤ）の支配者よ！」
出力がけた違いに上がった炎の拳が、更に弾き飛ばす。

それだけ喰らいながら、ヴィールはすぐに立て直す。
くそ！　まだ持つか！
「やればできるじゃないか！　だがまだ足りん―」
「ならこれも上乗せしよう」
『Ｃｏｍｐｒｅｓｓｉｏｎ　Ｄｉｖｉｄｅｒ!!』
その瞬間、ヴァーリの声と共に空間が連続で半減していく。
瞬時に魔力を放出したヴィールは耐えるが、放出する側から半減が連発していき、喰らいつく。
な、なんだあの出力!?
「呆(ほう)けるな！　この力は一分も持たん！」
声にはっとなり、俺は咄嗟に突貫する。
イッセーも共に突貫し、全身に力を籠める。
「部長、シャルロット！　合わせてくれ！」
『分かっているわ、イッセー！』
『託します！』
イッセーは拳に全力の力を籠め、三人のオーラを合わせていく。
そして俺も、ショットライザーを装填して起動させる。
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ！』
さあ、覚悟しろヴィール！
「これでとどめだぁあああああっ!!」
『マグネティックスターブラストフィーバー！』
『Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ　Ｂｏｏｓｔｅｒ！』
全武装のエネルギーを脚部に収束してのドロップキックを、イッセーの全力打撃と共に叩き込む。
ヴィールはそれを両手で受け止めるが、受け流すには至らない。
聖と魔の融合したオーラで何とか押し返そうとするが、こっちもそう簡単に負けるつもりは断じてない。
だが競り合いは、僅かにヴィールが押し勝とうとしている。
「どうした！　託された想いで至った新たな領域と、春菜を引き上げんとする想いはこの程度か！」
「こなくそ……っ」

まだだまだだまだだまだだ！
ここで……負けて……られる……か―

「そう、まだよ！　私は和地に守られたいんじゃない。並び立ちたくて貴方に支えてもらったのだから!!」
『その通り。私の連理比翼たる赤龍帝は、一人で戦っているわけではないのだから！』

その声と共に、俺とイッセーの力が増幅する。
俺は全身から魔力の炎を巻き上げ、イッセーは一時的にだが覇のオーラが放たれた。
「「これは?!」」
ヴィールやイッセーと同時に驚くが、だけどすぐに分かった。
ああ、そうか。そうだった。
「ここでもう一つ至りました。これが禁手の全てを和地を強化する為に使う、赤き熱愛の餞別（マリッジ・オブ・ファイヤ）！」
『そしてこれこそが新たなる亜種禁手。瞬間覇龍安全発動能力、閃光の如き赤龍の覇道（ウェルシュ・ライトニング・ドレッドノート）！』
春っちとシャルロットの思いをもって、俺達は更に押し込んだ。
「「「「「『『『『行けぇぇぇぇぇぇぇ!!』』』』」」」」」
俺が、イッセーが、春っちが、ヴァーリが、サイラオーグ氏が、カズヒ姉さんが、ベルナが、リアス部長が、シャルロットが、ドライグが、アルビオンが。
全員が吠える拮抗は、少しずつだが確実にこちらに傾いていく。
それに対し、分身達は一斉に対応する。
連携で防戦の構えをとって龍騎士を足止めし、残った数人で俺達を

背後から攻撃する体制に入っていく。
間に合うか、このままだとギリギリ―
「この流れでそれは無粋だろう。私はともかく、君達には向いていないさ」
―その瞬間、大出力の炎と聖なるオーラが分身達をけん制する。
それを成したのは、何時の間にか入っていた、魔性聖剣を構えるフロンズ・フィーニクス。
使い捨てだったのか魔性聖剣が朽ちるが、この一撃で趨勢は完璧に決した。
分身達は押し飛ばされ、出力の形成はこちらに傾く。
その光景に微笑みながら、フロンズ・フィーニクスは宣言する。
「貴殿の無価値な無謀に我らが臣民は巻き込ませません。……自身に厳しくとも他者にぬるすぎる貴殿では、大願成就は果たせぬと知れ」
その静かな断言に、俺は一瞬だが違和感を覚える。
確かに、王の駒や真魔の駒はドーピングだ。そんな方法で楽して強くさせようっているのは、確かにぬるいといえるだろう。
だが、これはそういう意味ではないような気がする。そんな違和感を覚え―
「ぼさっとしない、和地！」
―同じように飛んできたカズヒ姉さんの声に、俺ははっと我に返る。
ああ、今はそんなことを思っている場合じゃない。
「ダメ押しよ！　これも喰らえ！」

銀

断　　罪

蝗

変身していたカズヒ姉さんの、ダメ押しの一撃が叩き込まれ、一気に趨勢は傾いた。

『ハウリングユートピア！』

その瞬間、固有結界と共にヴィールは勢いよく、吹き飛ばされた。

冥革動乱編　第六十九話　クライマックスの後は―

イッセーＳｉｄｅ

や、やったか!?　いや、これ言っちゃダメなやつだ！
俺はもう鎧が解除されて、これ以上はちょっとまじでやばい。
サイラオーグさんやヴァーリも鎧を解除しちゃっているし、九成やカズヒもいい加減体の方が限界っぽい。
固有結界が解除されて、俺達は睨み合う形になったけど……大丈夫か？
そんな俺達の視線の先、ヴィールはゆっくりと足と上半身の力だけで立ち上がった。
……両手があらぬ方向に曲がってる。どうやら骨折したらしい。
「……見事だ。あれだけの数を揃えてとはいえ、俺の全力をよく押し返してのけた」
「……禁手も使わずによく言うわね」
カズヒが不満げに言うけど、何故か成田って人が首を横の振った。
「あ、それ違います。ヴィール様の禁手はこの場だと何の役にも立たないんです」
なんかそんなこと言ってるけど、え、どういうこと？
神滅具の禁手がこういう時に役に立たないわけないよね!?　どう考えても使いどころだよね!?
「春っち、できれば説明してくれないか？」
あ、九成が聞いた！　でかした幼馴染！
「ヴィール様が至った鮮血の聖別洗礼（パプテマス・ブラッド）の禁手は　洗礼（パプテマス・ブラッド）の血統秘術（ファミリア）。ある程度のインターバルを必要とする代わりに、他者に神聖血脈を与える亜種禁手よ」
そ、そうなのか。

確かに、直接戦闘だと全然役に立たないな。本人は強化されないんだし。
でも、別の意味で厄介すぎる。
それってやろうと思えば神滅具級の異能を持ってるやつがごろごろ出てくるんだろ？　それってマジでやばいじゃねえか。
……あ、ってことは⁉
「なんかフェニックス家みたいな再生したの、それか⁉」
ちょっと通常攻撃系の禁手には思えなかったしなぁ。成田さんの再生力がそっちだというなら納得だよ。
「……どうやらそのようだ。洗礼の決闘秘術での神聖血脈は意志力が重要故、与えてから一年以上経っても発現しなかったが、ここにきて覚醒したようだ。礼を言うぞ九成和地。俺が見出した者が、ついに念願かなって己の足で立ち上がれたのだからな」
「……本当に余裕だな。言っとくが春っちは返さないぞ」
べた褒めするヴィールに九成がジト目でそう返すけど、ヴィールはむしろ誇らしげだった。
「当然だ。むしろ戻ってくるようなら、全軍をもって殺すから覚えておけ」
「それでいいのかね？」
フロンズさんがそう突っ込むけど、ヴィールはどこ吹く風だった。
しっかりなんていうか凄い奴だな。
自分を一切強化しない禁手とか、並みの精神力じゃ至れないだろ。
「あ、ってことはあそこの連中にも神聖血脈使える奴がたくさんいるのか⁉」
「っていうか使える奴は堂々と使ってるわよ、赤龍帝」
成田さんに呆れられたけど、まじか！
「例えば健也さんがぽんぽん大出力の魔力砲撃を放てるのは、魔力急速回復能力「聖魔剛力之炉心（せいまごうりきのひだね）」によるものだし、クラウディーネさんが呼び出す兵団も兵団創生能力「氷河なる追随師団（ついずいしだん）」よ？」
まじか⁉　ポンポン使ってたんだな⁉
「……他の連中も使ってると見ていいのか？」

「ええ、あそこのケンゴさんが持ってる剣もそれよ。怠惰与えし赤剣（ソード・オブ・スロウス）だったっけ」
本当に使ってるやつゴロゴロいるな!?
なんか俺がビビってると、フロンズさんは盛大にため息をついていた。
「まったく。自分にはともかく他人にはゆるいことだ。私も強化手段は外付けする主義だが、もう少し厳しさをもって他者に接するべきでは？」
「ビジネスライクに接している貴様ならそういうだろう。だが俺は、同士や見出した者にぐらい情をもって接したいのでな」
そう真っ向から言い返したヴィールだけど、すぐに肩をすくめた。
「とはいえ、ここまでやられたなら認めるほかない。心配していた真魔や王の駒も使ってはいるようだし、此処は引くとしよう」
そうヴィールが言うと、なんか後ろの上級悪魔のお姉さんが、ぱちんと指を鳴らすとなんか赤い門が開いた。
見ると向こう側に別の景色が見えているし、何人か先に入って行ってる。
畜生！　なんだあれは！
「速攻発動乳語翻訳（パイリンガル）！　あれはなんですか!?」
『簡単に言うと転移ゲートよん？　事前に登録した扉と扉を繋げるの』
『すっごい転移ゲートでござる。我らがここにこれたのも、トーゲ殿が前もってアグレアスにいたからなれば』
「このテロお前の所為かよ！」
思わずツッコンだけど、何か外の様子も落ち着いているな。
「ふむ、撤退なのか？」
『ハヤテ達が忙しいから返答するけど、こっちも撤退態勢に入ってるね。サリュートIを殿に使ってる感じかな？』
あ、ミザリがそう答えるけど、向こうも頑張ったんだな！
「まぁそういうわけだ。俺達も当分は様子見していいと判断した。……とはいえ長くは待たんがな？」

そう言いながら、ヴィールも扉をくぐろうとする。
「まぁ、君はそっちの方がいいだろうさ。今後は遠慮しないから、精進はおろそかにしちゃ駄目だよ？」
「ま、貴女にこっちは向いてないわね。……今度会う時は魅せて頂戴？」
ヴィールの眷属はそう言いながら扉をくぐって行く。
そしてヴィールがくぐろうとした時、成田さんが一歩前に出た!?
「待ってくださいヴィール様！　何故、私に神聖血脈の素質を残したままにしたんですか!?」
あ、確かに。
取り消しておかなきゃ、俺達を倒せてたかもしれないよな。
本当になんでだ？
俺達が疑問に思っていると、ヴィールは扉をくぐりながら首を傾げた。
「ん？　そもそも洗礼（パブテマス・ブラッド・ファミリア）の血統秘術にそんな機能はないぞ？　一度与えれば意志力次第で覚醒できるようになるという、ただそれだけの亜種禁手だが」
え、まじで!?
あれ？　でもその割には成田さんを放っておいている感じだけど？
成田さんも、なんていうか信じられなさそうな雰囲気だし。
「なら、なんで私を和っちのところに!?」
「……全く。何度も言わせるな」
扉が消えようとしたとき、ヴィールは苦笑すら浮かべていた。
「俺は九成和地と並び立ちたいという、お前の潰され心が折れてもなお、朽ちることができないその願いを認めたのだ。眷属としたことなど、側にいることで添え木になる為以外の何物でもない」
「……っ」
その言葉に、成田さんは肩を震わせて―
「……今まで、ありがとうございました！　恩を仇で返すこと、お許しください……っ」

―涙をこぼしながら、頭を下げる。
それに対して、ヴィールは苦笑しながら首を横に振った。
「恩に思うのなら、全力で来い。お前の生き様で貴族達に発破をかけ、冥革連合(俺達)を打倒して見せてくれ」
その言葉と共に、ヴィールは扉をくぐって転移する。
その扉が消えてもなお、成田さんは肩を震わせながら頭を下げる。
そんな成田さんに、九成がそっと寄り添った。
……でもまぁ、何とかなった……か……？
「イッセー!?」
「い、イッセーが限界です！　アーシア、小猫ぉおおおおっ！」
慌てて合一が解除された部長やシャルロットが支えるけど、なんか意識が保てない。
……あ、やば、もう無理―

九成Ｓｉｄｅ

あ、イッセーが倒れて大騒ぎだな。
いやまぁ、こっちも結構キッツいけど。
「カズヒでかし……たぁあああああ!?」
鶴羽の絶叫が聞こえ来たけど、カズヒ姉さんに何があった!?
あ、ヒマリやヒツギが邪魔で見えない！
「カズヒが倒れましたのよ!?　白目剥いてますの!?」
「限界だったんじゃん！　ちょ、こっちにもアーシア……いや、もうさっさと医務室連れて行った方がいいかなこれ！」
カズヒ姉さんまで倒れた！　あっちも相当限界だったらしい。
俺もちょっと本気ですぐにでも助けに行きたいけど……我慢。

カズヒ姉さんにはたくさん人が集まっているからな。そっちはそっちに任せて……任せよう！
後ろ髪を引かれる思いで、だけどやるべきことをまずやらないと。俺個人としてもそうしたいし、カズヒ姉さんだって怒るだろうしな。
だから、俺はなんていうか燃え尽きそうな春っちに近づいた。
「……春っち」
「和っち……」
ちょっと言葉が見つからないけど、俺はそっと春っちの手を握る。
これぐらいしてもいい。きっと、俺はそうしてもいい。勘違いじゃないと思う。
とりあえず、振り払われたりせずにギュっとされているので大丈夫だよな。
うん。カズヒ姉さんが色々大変な感じなので、凄くいたたまれない。
「……そこよ！　もっとこぉ、肩を抱いて！」
「はいはいリヴァさんは邪魔しない」
インガ姉ちゃんサンキュー！　リヴァ先生は今どっか遠くに引っ張っておいてくれ！
……ええい根性！　今は春っちだ春っち！
「……春っち！」
「え!?　あ、はい！」
なんかちょっとぎくしゃくしているけど、それでもこれだけは断言する。
「多分俺達が住んでるイッセーの家にメイドってことになると思うから！　色々あるだろうけど理不尽な目においては俺が全力で動くから！　たぶんない……いや別の意味であるか」
真剣に別の意味で理不尽が巻き起こりそうだ。その辺真剣に思うほかない。
いや、心配になるようなこと言ってどうするんだよ！
……深呼吸だ。深呼吸。
落ち着け。俺が言うべきことはそこじゃない。

一度目を閉じて冷静になってから、春っちの顔を見る。
なんというか困惑と照れが混ざっているけど、とりあえず俺の所為だし困惑はスルーするとしよう。
で、だ。
「春っち……」
俺が言うべきことは、きっと―
「……大丈夫だ。俺は、此処にいるから」
―ここに居ていいと、それを保証することだ。
「罪を犯したと思うのなら、これから償っていけばいい。俺もまぁ、少しぐらいは肩を貸すさ」
「……でも、いいの？」
春っちは、少し俯いた。
「……私の禁手は、本領を発揮するまでに結構な犠牲者を生んでるわ。そういう、禁手なの」
そう言いながら、春っちは自分の右手を抱え込むようにする。
「赤き炎の腕（アーム・ファイヤ）を取り込むことで出力を増し、更に取り込んだ分だけ別の禁手に至ることができる亜種禁手。それが私の禁手、赤き紅炎の支配者（ルーラー・オブ・ファイヤ）よ」
なるほどな。
アザゼル先生の疑問はそういうことか。
高すぎる出力と、禁手クラスの出力の手札をいくつも持っていたことも、それで納得だ。
そうか、自分を支えられる力がへし折られてなお、それでも力を求めたから、そんな禁手に至ったのか。
そして、そんな禁手を生かすのなら答えは一つだ。その成長には、幾人もの赤き炎の腕を持つ者から、それを奪い取る必要がある。
成田春菜の成長は、血塗られた道の先にある。
俺はそれを理解したうえで、春っちを抱き寄せた。
「……大丈夫だなんて言わない。恨んでいる奴は多いだろうし、一生向き合う必要はあるだろう」
それは否定できない。どんな形で神器を奪ったのか分からない以

上、春っちがどう思われるかなんて俺が理解することも、悟ることもできない。
だからこそ、やり方次第では一生背負い続けることにもなるんだろう。ヴィールならある程度は手段を選んでそうだが、それでも恨まれている可能性はある。
だけど……だ。
「春っちが向き合って償うっていうなら、俺はそれを応援する。それに三大勢力全体も、多分そういう方向で行く」
ああ、それだけは理解している。
むしろそんなことは、インガ姉ちゃんでも分かりきっているわけだしな。
それにだ。
「……後忘れてると思うけど、春っちは俺が今からもらい受けたわけなんで……うん、俺のものだからその辺りはある程度クッションとか減衰とかさせてもらうから！　大丈夫！　俺ユーチューバー的な収入とかで貯金あるし！　保釈金とか賠償金なら多少は建て替えれる！」
どうしても物理的という時は……俺も殴られよう。
内心で治癒魔術の練習を真剣にやり直そうと思いながら、俺はとにかく元気よく、大きな声で宣言する。
「とにかく！　春っちは俺のものだ！　俺の裁量の範囲内でしっかり償ったのなら文句は言わせないからその辺はよろしく！」
いや、これどうよ？
いや、もうこうなったら真剣に押し切れ。このままいくぞ。
どっちにしてもこの選択肢で突っ走るしかないわけだ。だったらもう、やるしかないだろう！
気合を入れて、まっすぐに、俺は春っちの方を向いて宣言する。
「……一緒にいてくれ！　ずっと一緒にいたいような、そんな男でいられるよう頑張るから！」
……違う！　方向性が違う。
やばいパニクっている!?

こ、これは……その……。
「……っ」
涙目!? これはどっちの意味ですか!?
冷や汗だらだら心臓バクバクで俺は返答を待つ。
そして―
「……うん。私も、ずっと一緒にいたいような、そんな女でいて見せるからっ」
―華やかな笑顔に、俺はほっとした。

――ハッ!?
やばい!? 気が緩んだ所為で限界がきてぶっ倒れたぁ!?
俺は馬鹿か!? 何をやっている!?
うぉおおお! 俺はラブコメ漫画のあほなタイプの主人公かぁあああ!?
思わず悶絶していると、盛大な溜息が聞こえてきた。
「何やってんだ、お前」
「あ、ベルナ」
そしてこの流れで第二弾か!?
なんというか微妙な空気だ。というか、ベルナに関しても真剣に向き合うべきだ。
向き合うべきだ。だけどどうする?
春っちと同じパターンだと二番煎じで、変な空気になりかねない。何より付き合いの少なさがこういう時に微妙に働いてしまうのは間違いない。
畜生! なんとしてもマシな答えを考えないと!?
真剣に俺が拘束で頭を回転させていると、俺が横になっていたベッドにベルナは座り込んだ。
「……なんつーか、ありがとな」

そんな風に告げられて、俺はパニックを抑え込んでまずは話を受け止める体制になった。
……俺はベルナについてよく知らない。そのうえで、もらい受けると宣言した。
なら、ベルナについて知る努力が必要だ。皆に対してもそうだけど、ベルナに対してはもっと強く知ろうとするべきだ。
だから、ベルナが自分から語るのなら受け止めるべきだろう。
俺の真剣な表情に、ベルナは苦笑しながら天井を見上げた。
「……あんたが真剣にあんなこと言ったことで、アタシは自分が引きずられっぱなしだって理解したよ。まぁ、シチャースチエの奴にガツンと言われたのもあるけどな」
「そうか。なら、カズヒ姉さんにも感謝しといてくれ」
カズヒ姉さんは俺が敬愛する人だからな。感謝の言葉は直接伝えてほしい。
そしてベルナは頷くと、盛大にため息をついた。
「つーか色々過去話して、漸く完璧に実感したからなぁ。春菜は下僕悪魔だからまだ情状酌量とかが冥界的につくだろーが、アタシはそっちはつかねえだろうし罪は重いだろうな～」
た、確かに。
悪魔社会的に眷属悪魔が主に逆らうとか普通はないだろうから、その方向性で情状酌量はあり得る。そういう意味だと春っちは安心だ。
だけどベルナはそういうわけでもないしな。そっち方面での減刑とかは無理……か。
「あ～。でも来歴的に色々あるし、まぁ流れ的には情状酌量……というか、メイド業務って大丈夫か？」
まぁ流れとしてはそうなってほしいけど、ベルナってメイドとかできるんだろうか？
「なんで使用人だよ。……まぁ、家事はそこそこできる自信はあるぜ？」
「そ、そうか。……失礼な感想だけど、ちょっと意外だな」
なんていうか、そういう雰囲気がなかったな。

俺がついそう言っちゃうと、ベルナもため息をついた。
「そうなんだよな～。何つーかこれが地なんだけどよ？　やっぱこれだとお嫁さんとか無理だよな……」
「へぇ……」

「「……あ」」

凄いことがぶっこまれたな、これ。
なんだこのギャップ萌え。いやそうじゃない！
……もらい受けると宣言したんだ。引っ張り込むこともできたんだ。何より発言に責任を持ちたいと思っているだろう。
なら、俺が言うことはただ一つ！
顔真っ赤にしているベルナに対し、俺は起き上がりながら断言する。
「と、とりあえずまずはお見合いからでよろしいでしょうか!?」
「お前すげえな!?」
返答はそれでいいのか!?
ベルナはベルナでパニクってるけど、俺もちょっとパニックだったか？
お互いに深呼吸をして落ち着きながら、ベルナは一度目を伏せて息を盛大に吐いた。
「……っていうか、テロリストとお見合いしてどうするんだよ!?」
「いや、ついさっき抜けたばかりだろ。そもそもヴィール相手に一発かましてるんだから、今更戻れないだろ」
「そりゃ確かに姉貴にもきちんとメールは送ったけどよ!?　お前はそれでいいのか!?」

「既に禍の団所属経験者は二人もいますけど!?　自分の発言には責任持つよ俺！」
　失礼な。俺は掲げた誓いは死守する男だぞ。
　っていうかやっぱりもうやめてるんだな。なら尚更だろ。
「多分冥界のノリだと極刑はないだろうし、間違いなくお前は兵藤邸でメイドだ。メリードにしごかれること間違いないから、まぁ春っち含めて愚痴ぐらい聞いてやる」
「そ、そっか。……問題は口調だな……じゃねえよ！」
　なんかノリツッコミ!?
　というか、盛大に顔赤いな。
「……いいのか？　割と重い女だぞ、アタシは」
「まぁ、まだ色々と知らないから知っていくことから始めるさ。あと重い女は大丈夫だ。春っちやインガ姉ちゃんで慣れてるし、主神の娘とかいるから」
　うん。答えてから自分でも呆れるけど、重い女が多いな俺。
　インガ姉ちゃんの柱になっている自覚はあるし、春っちにおいては誰もが断言するレベルで俺がガチの柱だ。リヴァ先生に関しても、半世紀以上のとっかかりを解消したきっかけであり、あそこまで宣言している。鶴羽だって色々と抱えているところはあるというか、ザイアの中でザイアに染まらなかったのには俺と意見が一致していたこともある。割と俺ってそういう支えになる定めっぽいな。
　それに、カズヒ姉さんだ。
　リーネスも鶴羽も知っているようだけど、カズヒ姉さんは何かを抱え込んでいる。きっとそれは、インガ姉ちゃんやリヴァ先生、春っちや鶴羽に負けず劣らずの重い何かだ。
　……だからこそ。
「……聞いてる範囲内なら問題ないさ。俺だって色々と捻くれた人生送っているし、ベルナが自分の意志で前を進むというのなら、言い出しっぺとして手伝うさ」
　ああ、そこに嘘は断じてない。
　まっすぐに、心から。断言して見せる。

その俺の本気に、ベルナはどこかほっとしたような苦笑を浮かべてた。
「……あたしは、まだ誰かに流され付き合いでテロするところから、付き合う誰かを自分で選んだ程度なんだ。たぶんだけど、まだ自分の意志で歩いて行ってるなんて全然言えない」
そのうえで、ベルナは真っ直ぐに俺を見た。
「だから……あたしが自分の足で歩けるようになるまで、支えてくれるか？」
そうか。
それが今のベルナの決断で、そこから先を見据えているなら。
俺の答えはただ一つ。
「もちろんだ。そして、一緒に歩く道を選んだっていうなら、俺は最後まで責任持つぜ？」
その言葉に、ベルナは涙目で顔を赤くする。
「殺し文句言ってるんじゃねえよ。……だ、だったら担保をよこせ、担保を！」
「分かった分かった。とりあえず、何がいい―」
その瞬間、俺の唇はベルナに塞がれた。
……。
面食らって顔を真っ赤にする俺に、同じぐらい顔を真っ赤にしながらベルナはにやりと笑ってきた。
「……仕事抜きだと初めてだからな？　その甲斐ぐらいはよこせよな？」
……あ、今ので俺の限界が再び来た。
と、とりあえず―
「……頑張ります」
―言うべきことを言って、俺は再び気を失った。

冥革動乱編　第七十話　銀の宿命が幕開けは、すぐそこに

和地Ｓｉｄｅ

「え、イッセー達が昇格ってマジですか!?」
「厳密には三人だけだし、中級昇格試験を受けれるだけだけどね」
俺は学園祭の真っ最中、自分達の休憩時間中にサーゼクス様に会ってその話を聞いた。
まさかそんなことになっているとは。どういえばいいんだろうか。
レーティングゲームの成果が基本で、何十年何百年も下級悪魔のまで試験も受けれない。そんな奴が何人もいると聞いていた。だからその意味では、転生して半年程度なイッセーが試験を受けれるというだけでも凄い話だ。
だがイッセーは熾烈な戦いを繰り広げて勝ち残ってきた。タカ派堕天使としては最強なコカビエル。魔王と天龍のまさに悪魔合体なヴァーリ・ルシファー。更にドーピングされた旧魔王の末裔三人がかりに、北欧の悪神。最近では最強の神滅具保有者や、努力（文字通り）チートな神滅具保有者まで出る始末。そういう意味では十分すぎる。
……まぁ、イッセー達は特殊すぎるからな。
「特例って、出ないに越したことはないですから……ってまとめた方がいいんですかね？」
「はっはっは。まぁ、政治を仕事としている者としては言いたいことは分かるよ」
サーゼクス様は朗らかに言うと、コーヒーを一口飲んだ。
ちなみに今は三年生がやっている喫茶店。コーヒーに拘りのある

生徒と親が喫茶店やってる生徒がいたそうで、コーヒーに限定すればたぶんこの学園祭の飲食店でトップだろう。
で、たまたま出くわしたのでこんな感じでちょっと世間話といった感じだ。
「で、時期って何時なんですか？」
「あと数週間といったところだね」
早いよ。中間テストと殆ど時間差がないって。
駒王学園、偏差値高いんだけどなぁ。
「ちなみに断るとペナルティとかあります？」
「特にはないね。ただ個人的に、イッセー君達は皆合格可能な能力を持っているとは思っているよ」
う～ん。俺だったら今回は時期が悪いから見送るな。昇格の機会はリカバリーが簡単みたいだけど、中間テストはポシャるとリカバリーが大変だ。
だが合格可能かぁ。……まぁ、グレモリー眷属の戦闘能力って、プロの上級悪魔とその眷属を比べても上位側らしいしな。イッセー達は既にヴァーリやサイラオーグ氏と真っ向勝負できるしな。たぶん朱乃さんとかも参加資格を得ているだろうし、二天龍の宿主や神の子を見張る者幹部と五大宗家のハイブリットだしなぁ。最後は木場だろうが、あいつは総合力が二人より高いしな。
むしろそういった実技が基本なら、同じ試験に参加する人達が可哀想だな。
基本的には中級の下だろう。なんというか、濃い味の食べ物を食べた後に薄味を食べると味がしない的な感じになりそうだ。評価が下がりそう。
「……実技試験はお釣りがきそうですね。ただ筆記試験もありそうなんですけど」
「そこは大丈夫だろう。朱乃くんや祐斗君は十全に知識があるからね。イッセー君も夏季休暇の時に家の者が叩き込んで評価もされているからね」
……そういえば、悪魔って二足のわらじどころか三足ぐらいは履い

ているからなぁ。中間テストと資格試験ぐらいは同時にやってこそって感じか。
頑張れイッセー。俺は自分が転生悪魔じゃなくて良かったって心から思ってる。
さて、ちょうど良い事もあるな。
凄く気になることを、いい機会だからズバリと尋ねるとしよう。
「春っち……いや、成田春菜とベルナ・ガルアルエルはどうなりますか？」
真っ直ぐに目を見て尋ねると、サーゼクスさんは小さく頷いた。
「……冥革連合も英雄派も、冥界政府はもとより和平を結んでいる各勢力に相応の被害を与えている。出がかりと同時に潰されたディオドラの場合とはまた違う」
そう言ってから、コーヒーを一口飲むとカップを置いたサーゼクス様は少し遠い目をする。
「またインガ君のケースとも似て異なる。彼女達はディオドラに心を折られ事実上の洗脳状態だったが、二人は洗脳されているわけではないからね。罪状はやはり重くなるだろう」
確かに……な。
被害規模から言っても、自由意思の度合いから言っても、二人はインガ姉ちゃんより罪が重くなるだろう。
俺だって犯した罪に対するけじめはしっかりつけるべきだと分かっている。
ただ、それでも―
「……なので、君達にも頑張ってもらいたいね」
―ん？
「……と言うと？」
あれ？　流れおかしくないか？
インガ姉ちゃんの時より罪が思いってことは、インガ姉ちゃんの時のようにはいかないってことだろ？
え、え……ええ……？
思わず面食らっていると、サーゼクス様は苦笑した。

「罪状はインガ君より重いから、彼女達とは違っていくつもの魔術的拘束をかけることになる。破った場合は死ぬほどの呪詛をかけることになる為、君達も下手なことが起きないように監督してくれたまえ。リアスには既に伝えていたけどね」
「あの人サプライズ好きだな！」
　相手を選べと後で真剣に行った方がいいんだろうか。イッセーの家を改築する時も、改築することは言ってもタイミングは言ってなかったしなぁ。こういうノリは相手を選ばないと余計な揉め事になるっての。
　ま、まぁそういうことになるのは仕方ないな。うん。
　あとはこっちが色々と気を使っていればいいだろう。ああ、変なことはさせないような生活を保障するだけだ。
　とはいえ、まぁちょっとほっとしたな。
　少し脱力していると、サーゼクス様はコーヒーを一口飲んでほっと息をつく。
「あと周りから聞いたが、リアスやイッセー君の関係も進展しそうなようだね。どうもイッセー君の方に事情があったようだが、改善の兆しが見えているようだ」
「あ～。そっちに関しては神の子を見張る者の末端がすいません」
　あれは本当に酷かった。
　全く。既に死んでいるから責任も追及できないしな。レイナーレって奴にも困ったもんだ。
　ただ……まぁ。
「こっからはこっからで、はたから見ていると楽しいというかやきもきしそうというかって感じですけどね」
「青春というものだね。ふふ、若いとは良い事だ」
　そういうことになるんだよなぁ。
　うん。そこには嘘はつかないし、つく必要もない。
　俺の根幹は決まっている。だからこそ、責任はきちんと持つさ。
「しっかり罪を償わせたうえで、幸せにするべく頑張らせてもらいます！」

ああ、これだけははっきりと、断言できるさ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……フロンズ。連絡が来てたらしいから俺が受け取ったぜ？」
「彼女からか。どうやら、そろそろ結論が出るようだな」
「そうらしい。奴らが愚行を実行したら、手土産を持って亡命する……ってよ。何をするんだろうかねぇ？」
「ふむ、少々予想はできることがある」
「つーと？」
「禍の団はオーフィスという絶対的な強者を長にしたからこそ、あれだけの規模になったところはある。だが同時に、オーフィスの目的が成立すれば多くの派閥にとっても不都合は多い。そのデメリットを込みでもそれだけの象徴が必要だったからこその抜擢だろうがね」
「……おいおい。つまり連中、無限をどうにかできるってのか？　俺達でもまだ形にできちゃいねえことを、既にできるってのか？」
「断言はできん。だが例の極晃星（スフィア）とやらに至った者がいるのなら、十分可能だ。……最も、愚行と言うからにはそういうことではないのだろうが」
「んじゃどういうことだ？　ぶっちゃけ、オーフィスをどうにかできる力があるなら、俺達をもっと派手にぶっ飛ばせるから分からねえな」
「簡単なことだよ。……オーフィスはいったいなんだと思う？」
「何って無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）に決まって……おい」
「その通り。単独では神滅具でも不可能だろうが、マルガレーテや匙

元士郎、成田春菜のように複数の神器を束ねたのなら、龍神に届くメタを張ることは可能だ。もっとも、英雄派は人間という種族が持つ強みたる、ある種のいやらしさを自覚的に武器にする組織だしな。他の手段を見つけ出した可能性はある」
「……そう考えると、奴らは英雄より人間って言った方がいい気がするな。実際、生物として脆弱なくせして地上の覇権を握っちまってるのは、一握りの英雄じゃなくて人間という種族だしな」
「だからこそ、我々も人間の秀でた物は積極的に取り入れるべきだ。今時一騎当千やエース部隊などはやらない。時代は全面的な強化だよ」
「とかいう割に、一騎当千もしっかり集めてるじゃねえか。ただの見せ札ってわけじゃねえだろうに」
「まぁ、異形ゆえにそこにも理解はあるさ。机上の最高は良いところ取りだろう？」

「そう、夢想（理想）の未開（明日）を手にするが為、この程度のことはして見せるとも。……彼方の光を掴む為に、な」

アザゼルＳｉｄｅ

ふう～。漸く学園祭も終了だな。
校庭じゃぁ、火を囲みながらオクラホマミキサーだ。九成は南空にとっ捕まってたが、まぁまんざらでもない感じだな。

さて、俺は一旦旧校舎の方を顔出しするか。イッセーの奴は全然姿を見せねえし―

「ストップです」

―いきなりアタッシュショットガンの銃口を突き付けられたぞ。

俺何かしたか？　……いくらでも思いつくが、ばれてるやつはないはずだぞ？

おのれ！　何かやらかしていると踏んで拷問する気か!?

「手段を選べよ！　そこまで俺には信用がねえか!?」

「何か勘違いしているようですけど、貴方こういう時引っ掻き回すでしょうが」

カズヒの鋭い視線がきついが、いったい何の話だ？

俺がよく分からず周囲を確認すると、校庭を見ることができる位置の窓に、リアスの姿があった。

というか、位置取りから見て誰かと話しているな。あと顔がちょっと赤い。

……ははぁん。

「余計な茶々は禁止ってか？　過保護だねぇ」

「真っ当な恋愛が真っ当に成就してほしいっていうのは、私からすれば尚更でしょう？」

さらりと言ってくれるが、なるほどな。

まぁ、堕天使側があほやった所為でこじれたところもある。ここは俺も大人としてクールに去るか。

それに、カズヒの方が気にもなる。

……真っ当な恋愛が真っ当に成就してほしい、か。

それができなかったカズヒが、それを言えるようになるだなんてな。それも、俺の前でそう言い切ったんだ。

「……言う覚悟、決めたんだな？」

「ええ。中間試験が終わってからにします」

そうか。

俺が要望したとはいえ、覚悟がいるだろう。

つらい記憶だ。語りたくない記憶だ。正真正銘の意味でトラウマ

で、言わずにい切れるならその方がいいと思いたくなる気持ちも分かる。
だが、俺は言うべきだと思っている。
「つっても、なんか急に決めたんだな」
「……和地が成果を上げ、男を見せているのが一つ。あとはミザリ……誠にいのこともありますから」
……あ～。
「あの野郎、あの手この手で引っ掻き回してくれたな。あそこまで手札を揃えてるとかまじで脅威だ」
「はい。なので、もし出会って気づかれれば、絶対に自分から話してくると思ったので。……事前に伝えておいた方が、皆の動揺も少ないでしょう？」
なるほど、そういう方向か。
確かに、ミザリ・ルシファーが転生した経緯を考えればその考えは妥当だ。むしろカズヒ達がの件もそれが理由だと考えるべきだろうしな。
……ただちょっと気になるな。
「それなら早い方がいいんじゃねえか？　なんであと数週間もかけるんだよ」
いっそのこと、スパッと言った方が早くねえか？
カズヒは少し微笑ましい表情で、リアス達が薄っすら映っている窓の方を見る。
「イッセーや部長に少しは浸らせてあげたいですし。……なに……より……」
と思ったら、急に俯いて黙り込んだ。
なんだ？　なんか凄いレベルで言い難そうだぞ？
ただなんだ？　どう考えてもギャグのノリだぞこれ。
見る見るうちに顔を赤くしながら、カズヒは俯いた。
「……語った後のメンタルで、中間テストを切り抜けられる自信が……なくて……」
「あ、あぁ～」

そっかぁ。そうだな。
こいつ成績悪い側だしな！　オカ研で学年平均下げてる奴、今やこいつぐらいだしな！
ストリートチルドレンに学力を求めるのも酷ではあるがな。というか、十年以上ストリートチルドレンだったのに何で学力がそこまであるんだこいつ。
「……十年以上前の高校の授業なんて、殆ど覚えてないわよ……っ。というか、どっちにしても偏差値が１０ぐらい離れてるわよ……っ！」
「あ～、まぁ、頑張れ」
あとでマンツーマンで講義してやるべきかねぇ？
こいつも割と人生ヘビーっつーか、間違いなくあの話はヘビーの極みだしな。それぐらいのフォローはしてやるべきか？
なんていうか同情しながら天を仰いでいると、なんか旧校舎が騒がしいぞ？
あ、ゼノヴィア達の姿が見えた。
「……どうやら俺以外にも乱入者はいたみたいだな」
「今すぐ〆てきます」
……え、まじで？
俺が振り返ったその瞬間には、既にハウリングホッパーで変身しているカズヒが旧校舎に突入していった。
……え☒、マジで!?
「この空気を読めない阿呆共がぁあああっ！　男と女の甘いひと時をなんだと思ってるのよ糞餓鬼共ぉおおおおおおお!!」
やべぇ！　まじで大暴れしてやがる!?
と、止めないとマジで死人が出るぞぉおおおおおおお!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、連絡は終わったか？　ラカムよ」
「もちろんだマスター。ま、ああは言ったがほぼ確定だろうよ」
「まったくだ。折角龍喰者（ドラゴン・イーター）を引き出せるのだから、そのまま奪い取って堂々と公表すればよかろうに。そうすれば神話体系一つを崩すこともできるだろうに」
「ま、妙なところで縮こまってるからな。……あいつらは英雄になろうとしてるんじゃなくて、英雄って看板でイキりたいだけってことだろうさ」
「ふん。百や二百じゃ足りぬ数を誘拐し、死戦をさせて使い潰そうとしておきながら何を今更。そこまでやるのなら最後まで走りきらんか」
「で？　態々タイミングを引き延ばしたのはなんでだよ、マスター？」
「決まっておる。実際に使ってからの方がハーデスめに一泡吹かせられるじゃろう？　その方が手土産の価値が跳ね上がるじゃろうから、閉じ籠っている間に退屈することは減るだろうて」
「確かになぁ。当面は馬車馬のように働かねえといけねえし、一仕事の後に潤いぐらいは欲しいもんだ」
「そういうことだ。奴にしても、ハーデスのような奴には痛い目を見てほしいだろうからな？」
「懲りずに逆恨みしてほしいみたいだしな。いやぁ、俺達よりよっぽど怖い連中だと思わねえか？」
「まったくじゃ。……あのすまし顔であそこまでの野望を持つとは、妾達が上納し契約するに相応しい」
「……じゃ、俺は団員達に通達してくる。手土産の整理や慣らし運転もする必要があるからな」
「頼むぞ。過去（かつて）を踏みしめ現在（いま）を乗り越え、未来（かなた）を目指すが後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）。先達を超えるという点において、奴は曹操やシャ

ルバとは話にならぬ次元におる。……後継者の私掠船団、なってやろうではないか」

「夢想(理想)の未開(明日)を掴むが為に、妾達もこれぐらいのことはして見せるとも。……悪いが曹操、貴様に英雄(光)は掴めぬよ。」

和地Ｓｉｄｅ

俺は十分ぐらい、玄関の前をうろうろしていた。

お、落ち着かない……。

「まったくもう。私が代わってあげたんだから、もっと落ち着いて出迎えてあげなさい？」

「部長？　魔改造の手配も費用もグレモリー家(部長達)がしましたけど、此処一応兵藤邸ですよ」

リアス部長にカズヒ姉さんのツッコミが飛ぶけど、二人とも俺の方を微笑ましい顔で見ているしな。

「ふふ。九成君もやっぱりまだまだ年頃の少年みたいですね」

「カズ君ってば、なんだかんだで男の子だよね～」

リヴァ先生、ロスヴァイセさんと一緒にからかわないでくれないかな？

「……あらあら。こういうところは年相応ですわね」

「ふふ。和地ってば可愛いですの～♪」
「ま、動揺しないで悠然としてるって年じゃないじゃんか。いいっていいって」
朱乃さんやらヒマリやらヒツギまで!?
……っていうかそろそろだよな。
と思った瞬間、ドアがノックされた。
思わず緊張してきたぞ、これ!?
なんていうかドキドキバクバクしてると、ぽんと肩に手が置かれた。
「大丈夫だよ、和地君」
あ、インガ姉ちゃん。
にっこりと、落ち着かせるようにインガ姉ちゃんは微笑んだ。
「私を引っ張り上げてくれたみたいに、それで充分だからさ？」
……そうだな。うん、そうだった。
「ありがとう、インガ姉ちゃん」
笑顔で頷くインガ姉ちゃんに微笑んでから、俺はゆっくりと扉を開く。
まだ午前中なので、朝日が差し込むそこで―
「あ、和っち!?　え、と……ほ、本日はお日柄もよく!?」
「落ち着けよ。……よっ、カズって呼んでいいか？」
めっちゃてんぱっている春っちに、緊張しながらもこっちに歩み寄ろうとするベルナ。
……うん。俺は、彼女達を引っ張り上げれたんだな。
その満足感を胸に秘め、俺は自然と微笑むことができた。
「これからも、よろしくな」
ああ、ここからだ。
ここから、二人の時間を進めていこう。
「……よっしゃぁ！　それじゃ二人の歓迎会だ！　……畜生、九成めモテやがって!?」
「イッセーは人のことを言えないというか、此処から一気に追い上げているというか、ある意味追い抜いているのを自覚してからです」

イッセーやシャルロットがきっかけになって、わいわいがやがやとなっている。というか、既に春っちやベルナが引っ張られて巻き込まれている。
うん、兵藤邸はこういう時平和だから何よりだ。
あ。アニルの燻製がクックスによって調理されて振舞われている。なんて強烈な洗礼なんだ、舌を肥えさせる意味で。

思わず苦笑していると、ぽんと俺の肩に手が置かれた。
そこにはカズヒ姉さんがいて、真っ直ぐな目で頷いてくれた。
「誇りなさい、涙換救済（タイタス・クロウ）。貴方が変えた涙は笑顔と共に流れたの。私も惚れられた身として鼻が高いわ」
「そっか。いろんな意味で期待したいな」
思わず苦笑すると、カズヒ姉さんも苦笑し―

「あ、今度最後の試練がマストダイレベルで襲い掛かるは。それ乗り越えたらベッドインしてあげるわ、期待しなさい」

なんかとんでもない爆弾ブッこんで来たぁあああああ!?

冥革動乱編　幕間　女子会開催！　男子大被害！

Other Side

「……では、これより「和地ラバーズ女子会」を始めたいと思います！」
「……いや、まだ私撃沈されてないわよ、リヴァさん」
リヴァの宣誓にカズヒがストレートにツッコミを入れるが、同時に鶴羽やインガの視線が「え、まだなの？」と付きこまれた。
それを軽くスルーしたカズヒは、椅子に座ると気晴らしにオレンジジュースを一口飲む。
盛大にため息をつくなり説教をしたいが、多分それをすると負けになりそうな気がした為、話を進めることにしよう。
「というより、関係者とはいえ巻き込まれた春菜とベルナが困惑しているからそっちをまず何とかしなさい」
「……あの師匠。これどう言うことなんですか？」
乗っかってくれるのはありがたいが、なんで師匠だ。
内心で春菜に対してツッコミを入れるが、なんというかある意味慣れているので声には出さない。
言うべきことはただ一つだ。
「和地に恋焦がれるのを続けるのなら慣れなさい。リヴァさんは基本こんな感じよ」
「勘弁してくれよ……」
テーブルに突っ伏したベルナに、ぽんぽんとインガがなだめる様に手を置いた。
「リヴァさんは基本こんな感じだから……慣れてね？」
「そうそう。この人、一番年季があるくせして一番精神年齢若くする

から……」
一番振り回される性格な鶴羽がついついぼやくが、しかしカズヒが言いたいことはそこではない。
とりあえず、話を前に進めよう。
「……というか、なんでこんなことになってるの？」

きっかけは、和地が男子陣で馬鹿話をしようと思うとのことで、オカ研男性陣だけでカラオケボックスに出かけて行った直後だ。
カズヒの電話にカズホから連絡が来て、「日本に来ているから時間が合うなら会いたい」ときて、時間を合わせる為に早めにハンバーガーショップに出発したら……何故かリヴァに引っ張られる形で鶴羽達が先回りしていた。
そして何時の間にやら神様パワーで軽い結界を張ったうえで、神様パワーで強引に高い食べ物とジュースを持ってきてから話がこんなことになった。
流れから言って、もはや本音を言っていいだろう。
「……とりあえず第一議題は「リヴァ（この馬鹿）はもうタメ口の扱いでいいでしょう」にしましょう」
「相変わらずキッツい！」
「「「異議なし！」」」
「みんなキッツい！」
へこたれないこの女に、変な遠慮をすることもないだろう。
満場一致で扱いを雑にする方向で決定し、話は更に進んでいく。
「……というか、なんで私達まで引っ張られたの？」
「え～？　カズ君がいないところで女子会とかしたくない？　男同士の馬鹿話もそうだけど、ガールズトークもぶっちゃけし甲斐があるじゃない」
さらりと返され、鶴羽は軽くため息をついた。
「最年長が一番軽いのどうなのよ」

「年季が違うから、はっちゃけるところははっちゃけるのよ。……まぁ、皆はあんまりそういうことしないタイプっぽいけど」
素早くカズヒに切り返しながら、リヴァは不満顔でアイスティーを一口飲んだ。
「あんまりはっちゃけないのも問題よ？　ロキみたいになるかも」
「うっへぇ」
思わず、鶴羽と一緒にカズヒがげんなりした。
確かにロキ神はギャグキャラという印象は全くなかった。真面目過ぎると異形は最終的にああなるのかと言われているようだ。
つまりまともな異形ははっちゃけるということになる。あながち反論できない長命の異形達ばかりいることから、そんな感じになってしまうのも無理はない。
「……私は人間のままでいい気がしてきたわね」
「同感。長生きするのも考え物ね」
鶴羽と視線が合い、心から同意見であることを共感した。
持つべき者は腹を割って語れる共であると、常々痛感する。
無論だが、かなりハードにぶった切られたので流石のリヴァもダメージが入っている。それはスルーしているが。
「カズヒも鶴羽も酷くない？」
「だって目の前の例が……」
シンクロで更にカウンターを叩き込むが、外野になっていた三人はちょっと遠い目をしていた。
「私、これでも転生悪魔なんだけどな……」
「師匠、私も転生悪魔なんですけど!?」
「アタシはアタシで、混血が覚醒してるから長生きするだろうしなぁ」
「あ、ゴメン」
「私にだけ厳しいなぁ、皆！」
これぐらいしておかないと引っ張り回されるからだ。
誰もの心がシンクロした。

一方その頃、和地達は―

「イッセー！　洋服崩壊（ドレス・ブレイク）やってこい！」
「分かってる、九成！　木場、援護を頼む！」
「ああ、僕達がかく乱した隙に、ギャスパー君は停止させるんだ！」
「はぃいいいいっ！　先輩がた、お願いしますぅううう！　アニル君も頑張ってえええええ！」
「任せとけギャスパー！　和地先輩が障壁で稼いだ時間は、無駄にしねぇ！」

「させんぞ怠惰な男子共！　カラオケボックスに来ておきながら○EXをしないなど言語道断！　我々が男どもに、カラオケボックスの最高の使用法を教えてやる！」
「行くわよ、皆！」
『『『

……同時多発的にカラオケボックスを襲う、大欲情教団による逆○イプによる性欲覚醒作戦に巻き込まれ、壮絶な死闘を繰り広げていた。

そして時間は経ち、カズホが来る頃には女性達もだいぶ空気が和んでいた。

というより……

「で？　で？　師匠って子供の頃からこんな感じだったの？」

「はい。お姉さまは昔から考えたうえで全力をつくしてくれるからこそ、私は今生きています。……例えばレストランの店主さんに直接交渉をしに行ったおかげで、私達って週に二回もシャワーを浴びれたし、週一で出来立てのパイも食べれたんですよ

「そりゃすげえな。どんな交渉したらそんな好待遇でスラムのガキを雇うんだよ？」

……と、完璧にカズヒ関連のネタになってしまっていた。

カズヒを師匠と慕ってくる春菜がカズホに質問をするばかりだったのだが、そこでスラム経験豊富なベルナまで話に食い込んできて、何時の間にやら話の主眼となっていた。

「……それは私というより店長のスタンスよ。「払うにしろ貰うにしろ、値切りもぼったくりもしない」って人だっただけ。ほら、スラムで子供が金とか食べ物をいっぱい持ってたら襲われるじゃない？だから色々断ったら、何時の間にか職場環境の方でバランスとってこられただけ」

「あぁ、確かに。スラムでストリート（ガ）チルドレン（キ）が食べ物たくさん

持ってたら襲撃確定だな。そりゃ職場で消費しねえとな」
ベルナがすぐに納得するが、他の者達は軒並みドン引きだった。さもありなん。
リヴァですら苦笑が少し引きつっている。これに関しては実際にストリートチルドレンとして劣悪環境にいたかいないかの差というものだろう。
とはいえ、あれがあってくれたおかげでスラムの子供達がだいぶ助かったのは事実だ。
それなりに偵察してあくどいことはしない手合いに当たりをつけてからだったが、あの当たりは本当に助かった。
「でもまぁ、良い雇い主がいてくれて良かったじゃない。こういうのって当たり外れが大きいものよ？」
「……確かに、上司とかってハズれを引くと本当に酷いからなぁ」
世界大戦後の敗戦国にも縁があるリヴァや、かつての上司が致命的にあれだったインガも話に乗っかってきた。
「だけどシャワーありとか本当に好待遇ね。水だけってわけじゃないんでしょ？」
「あ、そっちはむしろ仕事の一環。厨房の掃除とか荷物運びとかもやらされてたけど、飲食店ってやっぱり衛生面が重要でしょ？　仕事前にシャワー浴びて服も洗濯しろって言われてたのよ」
鶴羽に素直に答えながら、素直に過去を想いにはせる。
思えば、あの当たりは本当に幸運だったといえるだろう。あれがあったからこそ生き残れたところは少なからずある。
ちなみにおつり分を別途計算しており、それとなく相談して古着などを代わりに買ってもらったり、使い古して買い替える調理器具や食器などを貰ったりもしていた。おかげでスラムのアジトはだいぶ生活環境が良かっただろう。
……内戦も凌ぎ、今でも店をやっていたはずだ。冬休み辺りにでもリアスとイリナに頼んで、一度顔を出した方がいいだろう。
相手は成果に応じてくれただけなのだろうが、あの環境でそんな誠実な対応をしてくれたということが恩でしかない。

そんな話をある程度進めていてから、何時の間にやら会話はあの大騒動の後に映っていた。
「そういえば、デュナミス聖騎士団（あの人達）にヴィール様が色々言ったりしてたそうだけど、あの後ってどうなったの？」
「……あ～……」
気づかわし気な春菜の言葉に、カズホは凄い複雑な表情で遠い目になった。
あ、これ厄ネタだ。
誰もの心が一つになったのだが、今更なかったことにできる雰囲気でもない。
「……カズホ。愚痴ぐらいなら聞いてあげるわ。貴女もしっかり聞いてあげなさい、馬鹿弟子」
ため息をつきながら弟子認定すると、認定されたことに気づかず春菜は少し落ち込み気味で神妙に頷いた。
「はい、師匠……」
「い、いえ。確かに色々とごたついていますが、前からあった話がそれで加速した程度なんです」
慌ててカズホがそうとりなすが、どちらにしても少々問題が生まれていることは間違いない。
それを誰もが悟ったからこそ、リヴァが真っ先に話に切り込んだ。
「カズホだったっけ？　それで、どんな話が合ったの？」
こういう時、空気をあえて読まずに突っ込んでくれるリヴァはありがたい。
興味津々な様子で聞いてきたこともあり、カズホも雰囲気を和らげながら苦笑いをした。
「元々和平が結ばれたことで士気向上の必要性が薄れたとして、デュナミス聖騎士団を分散配置させる話があったんです。……その、ストラス団長は人柄と器で部下を率いる人なので……」
「腹芸、苦手そうだったわね。確かに、今後別勢力の和平に一物ある連中とも関わるのなら……そういう専門部署を作った方がいいところはあるわね」

妹分の言い難そうなところは、あえてカズヒが言い切った。
もとより、エース部隊というものは軍事的には効率が悪いとされている。こと現代に近い時代の人間社会だと、どの超えたエースの収束かといった部隊編成は苦戦している勢力の方が行う傾向が強いとされている。
ことデュナミス聖騎士団というものは、危険な任務における士気向上などが重視されていた部隊だ。その為星辰奏者（エスペラント）という死に難く強い者達が現出して以来、更にその中から心身共に信徒に近い者達が選出されている。
だが、禍の団という難敵が出ているとはいえ和平は結ばれた。そして禍の団という世界規模の難敵が出ていることを踏まえれば、面の戦力を高めることは重要だ。異形が個と質を重視するとはいえ、だからこそカバーする面は重要だろう。
和平というものが不満分子を抱えながらという点を踏まえているのも考慮すれば、尚更そういった綱渡りじみたことに対応できる専門部隊が必要になりえる。
数百人規模の生成を集めに集めたデュナミス聖騎士団は、そういう意味では時代にそぐわない規模のエース部隊。各部隊に分散させるというのは重要だ。
……が、カズホのいうことはそれだけではないらしい。
「……先日のヴィール・アガレスに指摘されたことがきっかけで、聖騎士団内部でいくつかの派閥ができてしまったのです。それも、いがみ合いが生まれるほどに」
「……あぁ、リュシオン・オクトーバーとかいう子の？」
リヴァがすぐに思い当たるほどに、あの一件は注目されてるだろう。
ヴィール・アガレス・サタンの異常なまでの精神性と、彼に同列と指摘されたリュシオン・オクトーバーのずれた反応。
それに対する反応が、内部対立が発生し始めているということなのだろう。
「……言われてみると納得だし、むしろ今まで起きなかったことが不

思議なぐらいだけれどね」
カズヒがつい呟くと、探るようなリヴァの視線が向けられる。
「ふぅ～ん？　心当たりとか、あったの？」
その言葉に、カズヒは少しだけ躊躇ったが、隠すほどのことでもないと思い直す。
どうせスタンスとして、自分はリュシオンから距離をとっていたのだ。今更隠す必要なんてない。
「……悪魔祓いに成り立ての頃、同期数人と一緒にあいつに教えを受けたことがあったのよ」
思い出しながら、そう答える。
「あいつは当時からあんなスタンスで、ただ私はスラム上がりでゲリラ生活もあったから、「いうほど簡単じゃない」って反論したわ。そしてもちろんだけど、リュシオンは「簡単だろ？　常に自分を改めて、少しずつ前に進めばいいだけさ」と、「それを正義っていうんじゃないかな？」とまで言ってきて……大事に巻き込まれたわ」
思い出しても頭痛を感じる。
悪魔信仰者とはぐれ悪魔が組んだ結果、爆弾テロまで起きる流れになってしまった。
そして前衛としてリュシオンがはぐれ悪魔といった戦闘要員を相手にしている間、爆弾の解除を試みることになった。
多くの人達が巻き込まれかけている中、カズヒは周囲を叱咤激励しながら爆弾を何とか解除した。魔術回路保有者が使える解析魔術などを使っての、綱渡りだったと覚えている。
「……多くの人命を、とりえる手札を使っての綱渡りで何とか助けた。多くの人命を救い上げれた安堵や高揚、多くの人命を左右する行為に対する畏怖や重圧。それを味わっている私達に対して、敵を倒した彼はにこやかにこう言い切ったわ」
今でも、その笑顔と共に思い出せる。
カズヒ・シチャースチエがリュシオン・オクトーバーに対する強い抵抗感を持つことになった、その言葉は。
「邪気一つない微笑みと一緒に「ほら、簡単だったろう？」……ってね。

この時私は理解したのよ。彼にとって不特定多数の命を背負って博打じみた綱渡りをすることは、心がけ一つで誰でもできることなんだって」

「……ぶっ飛んでる精神してるわねぇ」

苦笑いでリヴァがそう言うが、実際にそう言うほかないだろう。

少なくとも、カズヒにはそんな風に言える神経が理解できなかった。

「……実感してなかったり気にも留めない人だったら平然とできるでしょうけど、真剣に向き合ったうえでそうするのって、簡単にできることじゃないわね。少なくとも、それに耐えきれずに心が折れる人って数多いわ」

世界大戦を経験しているだけあって、リヴァの言い分にはとても理解できることが多かった。

実際に、彼は埒外の傑物だと断言されたのだから尚更だろう。

少なくとも、カズヒ・シチャースチェはそんな風には考えていない。

常在戦場覚悟完了を前提としているカズヒにとって、多くの人の命を左右する事柄に関与することは常に意識している。だからこそ、必要と在らばすぐにでも行える。いつでもそういう事態が起き、そして向き合うことになりかねないと心のどこかで意識をしている。

だが、そういったことは誰にでもできることではない。厳しい訓練や経験を積んだ者の中から、更に一部だけがなるといったところだろう。

もしそれを本当に当たり前の自然体で出来る者がいるのなら、それは生まれついての英雄とかヒーローといった存在に限るだろう。

「……あの時はまだそこまで自分で考察ができてなかったから、強く反論は出来なかったわ。ただ、それがきっかけで私を含めたその場の六人は大きくばらばらの方向に行ったわね」

カズヒ・シチャースチェは、元々の自分に対する考えもあって、暗部という道を選んだ。「自分ができる範囲内で、善を尊び正義の為に、邪悪を食らう必要悪となる」という生き方を、元々決めていたとはいえより強く選んだといえる。

一人は、リュシオンを心の師としてデュナミス聖騎士団に選ばれた。聞けば、彼はリュシオン派ともいえる現状生まれた派閥の一つに属しており、リーダー格とまでは言わないが発言力も強いらしい。

一人は、リュシオンに続こうと強く生きようとしたが、夢破れて戦死した。最後の言葉は「無念だけど、それでも前に進みながら死んでみよう」と語り、最後まで前を歩き続けようとして果てた。

一人は、次の日には悪魔祓いになることを諦め、教会の研究者としての道を選んだ。「あんなことを簡単にしなくちゃいけないと思うと、吐きそうになる」と、たまたま再会した時にお茶の席でこぼしていた。

一人は、悪魔祓いになることを選びながらも、ドクターストップを受けて病院で静養している。「簡単なことなのに、頑張ってもできない……」と、虚ろな目で何度も呟いているそうだ。

そして一人は、品行方正だった教育機関時代からは考えられないほど素行が悪化し、最終的にはぐれ悪魔祓いになってカズヒが討伐した。今でも思い出すのは「俺達がどれだけ一生懸命頑張ろうが、それが当たり前なんて糞だろうが！」と致命傷を負ったうえで喚き散らし向かってくる彼の姿だ。

「……またすっごいことになってるわね。その、リュシオン・オクトーバーはそれについて知ってるんですか、師匠？」

「……敬語はやめて頂戴。あいつの性格なら、割と結構な人数は知ってると思うけれど……どうなの、カズホ？」

春菜をたしなめつつ尋ねると、カズホは少し難しい顔で考える。

「以前話していた時に、そういった話を伺っています。……ただ、「……彼らのように難しく考える人を減らす為にも、何とかコツを理論化したいんだけどね」と寂しげに笑っていました」

その説明に、何とも言えない空気になった。

彼なりに責任を感じているのだろう。そのうえで、できる範囲内で失敗を繰り返さないようにしているのは立派だ。そして同時に、どこまでも何かがずれている。

そもそもコツの問題ではないと言いたいのだが、リュシオンはその

辺りがどうしても理解できていない。
デュナミス聖騎士団の者達は、殆どがそうあろうと努力できてしまうのも問題だろう。星辰奏者という少数派の才覚を持つがゆえに意識が高い者から、更に心身共に精強な者達だらけの環境だ。そんな環境では、そうでない者達が普通で多数派ということに理解が及び難いのかもしれない。
とはいえ、このずれはこのままではそれどころではなくなるのではないだろうか？
真剣に何とかするべきなのだろうが、カズホの話から推察するとリュシオンはこの期に及んで自覚が薄いと見える。
どうしたものかと思っていると、ベルナが軽く手を挙げた。
「そういやさ？　兵藤邸ってリュシオンの妹がいただろ？　あいつは大丈夫なのか？」
そういえばその通りといえるだろう。
ルーシア・オクトーバーはリュシオン・オクトーバーの実の妹だ。
星辰奏者の適性も神器も持ち合わせていない為、デュナミス聖騎士団には属していない。
普段から真面目で堅実であり、一年生組においては暴走時に全力で止めてくるストッパー役といえる。こと小猫とレイヴェルがよく喧嘩をしたりすることを踏まえると、最近は重要度が更に高まっているだろう。
彼女自身はそういった才覚の恵まれなさに腐ることなく、実直かつ前向きに努力している。リュシオンは実にできた妹を持っているだろう。もしくは、リュシオンという兄がいたからこそルーシアもまたそうなったのか。
「……パターンA、立派な兄が手本になったからこそああなったので、多分だけどリュシオン派に近い。これは十分あるわね」
「……BとかCとかあるの？」
真剣な表情を浮かべるリヴァに対して、比較的付き合いの長いインガが尋ねる。
すると、眉間にしわまで寄せてリヴァは頷いた。

「パターンBは悪い方ね。兄のようになりたいと常に背伸びしたり無理をしてるパターン。これって限界来ると一気に崩れるわね」
……ほぼ全員が少し俯いた。
なんというか、場の流れ的にどうしてもパターンBの可能性に思考が集まっていく。
ルーシアは間違いなくいい子だが、同時に肩ひじを張り詰めるタイプであることは兵藤邸に住まう者達は大抵理解している。
性格とは個人個人で差がある以上無理をして変えるつもりはなかったが、このままだと変な方向で爆発するのではないかという不安が脳裏をよぎり始めてきた。
「え、えと……お姉さま方？　どうしました……あれ？」
と、戸惑っているカズホがスマホを確認する。
その瞬間、凄いレベルで真剣かつ複雑な表情になった。
「……何があったの？」
妹分のその表情に、カズヒは瞬時に意識を切り替える。
この表情は今までに見たことがない。機密にかかわらない範囲なら、瞬時に手助けをしなければ。
それゆえに言葉に、カズホは混乱ゆえに無表情を向けた。
「……同時多発集団逆〇イプ事件が巻き起こり、日本警察や自衛隊が対処に追われてるとのことです。異形側も星辰奏者（エスペラント）やプログライズキー保有者は人によっては援護の為に出撃することになると、騎士団の方々から連絡が」
「「「……あ～……っ」」」
思わず、カズヒ・鶴羽・リヴァ・インガは突っ伏して頭を抱えた。
「ちょ、師匠!?」
「お姉さま!?」
その反応に春菜とカズホが困惑するが、ベルナは何かに気づいたのか天を見上げる。
「……もしかして、多いのか？」
「多いんだ。私が来てから月1ぐらいで兵藤邸関係者は巻き込まれるから、言われてみると納得だけど……ね」

めちゃくちゃ気づかわし気なベルナに、インガはすすけた表情で引きつり気味の乾いた笑いを漏らす。
「そういえば、カズヒって駒王学園に転校した直後ぐらいにそんなこと経験してなかったっけ？」
「それは和地達の方よ。もっとも、タイミングよくアザゼル先生（馬鹿総督）が馬鹿やった所為で、駒王学園で影響がデカすぎたけれどね」
鶴羽に対してカズヒが答えた悲惨な現実に、誰もが思わずひきつった。
あの変態達には多くの者が苦労しているが、平均して月1レベルで巻き込まれているのは自分達ぐらいだろう。
「ロキ絡みの時や京都でもいたわね。……もしかして日本に本部があるとか……うわぁ」
「あぁあれ……うわぁ」
リヴァに至っては最悪な予想をして、言った自分がげんなりしていた。春菜とベルナも思い出して悟り、凄くげんなりしている。
だがしかし、そうも言ってはいられない。
「……該当者は準備するわよ。非該当者は先に帰って、やけ食いの準備をしてくれると助かるわね。意義はある？」
「「「「異議なし」」」」
その後、やけ食いの準備は一切無駄にならなかったことが答えである。

第四章　なかがき

まず開幕速攻で、暗躍連中がゴロゴロ出てくる話から始まる冥革動乱編。名前の通り、冥革同盟が暴れまわる回でもあります。

設定やプロットを煮詰めすぎると燃え尽きる男、グレン×グレン。そのため見切り発車やポッと出敵役は即興でやったりなどをしております。

ただその弊害もあり、ヒロインの攻略面においては割と苦労気味でした。

インガは立ち位置上ホーリー編で攻略。リヴァも立ち位置上本格参加はラグナロク編。鶴羽は来歴上、最重要懸念事項を明かすウロボロス編から想定して、カズヒはヒーローズ編でまとめる形でした。

ただし結果として余っている、ベルナと春菜は順番が曖昧気味でした。どっちをパンデモニウムにしてどっちをライオンハートにするか悩んでおり、確かその辺りを漏らした時に「どっちも」という提案があり、それをもとに同時攻略に近い流れとなったのが本編ですね。

そして登場する、サイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナ。ドゥルヨーダナの部分が各媒体で大きく文字が違うので、いまだに結構こんがらがっています。

彼女は英雄派所属のオリキャラを作ろうという発想から始まり、他のメンバーとは毛色が違う形にする発想や、ジークフリートが死亡し後継私掠船団が手を切ったのちの副官ポジションともなるキャラクターですね。そこにお気に入りD×D小説の英雄派オリキャラもあり、曹操によって助けられて彼らのスポンサーに近い立ち位置となりました。

そんな彼女達を筆頭に、英雄派幹部の多くが星辰奏者になる大幅強化。この作品、人数増えてるし強化もされているから、これぐらいのテコ入れはしないとオカ研がストレート勝ちしかねないので。

自分はバトル系作品に「歯応え」を求めますし、この作品はコンセプトからして敵も強化されてないとおかしいですからね。むしろこの段階では、イッセー達オカ研側が相対的に弱くみられていたぐらいでした。

そしてそんな中でも暴れるヴィール・アガレス・サタン。冥革連合は「自己研鑽に余念のないエリート集団」という、かなり面倒な連中です。その筆頭格たるヴィールはとにかく強くストイック。神滅具もあって西遊記の三英傑をもってしても、眷属込みなら渡り合えちゃう連中です。

……実は発想コンセプトは、たまたま創作掲示板で見かけたキチガイ台詞が元でして。本当はもっとイカれたキャラにする予定だったんですよねぇ。それが書いていくにしたがってどんどん誇り高い漢になり、味方によってはヴァルゼライド閣下見たくなっているところがあるぐらい。いやはや、結果的に良好でしたしまぁいいか。

そんな連中に追い込まれつつ、割って入る我らが救済者。この段階でカズヒとの関係に必要な伏線を張りつつ、一皮むけることで春菜やベルナにフラグを立てております。

我ながらかっこいいことを言わせたものです。ちなみにイメージとしては、クロスボー○ガンダムのあるセリフをオマージュしているところもありますね。

そんなタイミングで漸く出せたチャージングリザード。結果的に出番が少ない辺り、三叉成駒と同様の扱いになってますなぁ。

とりあえずリベンジはさせてやりたい。ただこの調子だと、下手をすると第三部にまでもつれ込みそう……。

そして同じように登場する、ＴＦユニット。のちのちで出番は少なめですが、相応に優秀な戦力として姿を見せております。ちなみに見ての通り、トライデンはマクロスモチーフですね。陸戦特化型は作りましたので、水中戦闘特化型を作りたいところ。

そしてそんな死闘を制したのちに、本番ともいえるライオンハート編。

自作品ではとにかく途中で試合が台無しになるのが定番。という

のも、個人的にはＤ×Ｄ二次創作における鬼門とみなしているところもあります。

フェニックス編もそうですが、レーティングゲームが中心になる為、あまりオリジナル要素を入れられる隙間が見えなかったのが理由ですね。この辺り色々悩みましたが、先述のお気に入り小説を参考に、決着がつくまでは試合を別の視点で見るという流れをとりました。

そして同時進行で、春菜を引き戻す大一番。ここは和地がやるより、人生経験が豊かなカズヒが説教する方が効果的だと判断しました。ま、その辺の伏線は微妙な張り方でしたが、それを逆に先の伏線にした感じですね。

和地は本質的に引っ張り上げる側なので、尻を蹴とばすのはカズヒの方が向いているところがあります。また当時の春菜はややこしいところがあるので、下手に和地だけでやると意固地になる可能性があると判断しました。

そして一気に大暴れな禍の団。尻を蹴っ飛ばすヴィール達冥革連合の意向もあり、ゲストも派手なので大暴れです。

ちなみにカイネウスベースの対神報復宝具やアルケードの対神特防宝具は、出したくてリベンジして漸く出せた感じですね。跡形もなくなっている原型作品であるハイアポにおいて、オーディンがボコられた理由は半分ぐらいこれです

そしてΔサリュートも大体全種類出せた感じですね。対雑魚無双・対精鋭決闘・対神格圧殺という形で、三者三葉の仕様を持ちつつも、本体は同じなので生産性や整備性も割と高い、厄介な連中です。……今度久しぶりに出してみるか……？

そしてそんな中、もはやレイドボスと化したヴィール。こやつの星辰光を影分身にするのはかなり早い段階から決定しており、これもあってレイドボスとなっている感じですね。真面目にこの段階で、Ｄ×Ｄでもタイマンだと手こずるというか、神滅具込みとはいえ既に超越者級なのがマジレイドボス。

そんなレイドボスに立ち向かう、和地＆カズヒ。特に和地のアサル

トグリップは、いまだに主力になっております。
自分は中間フォームの類や初期のフォームチェンジがあまり使われなくなる傾向は好んでおらず、この段階でのちに出てくるパラディンドッグとの使い分けパターンは考えておりました。アサルトグリップ最大の欠陥である「安全リソースを全部戦闘性能に回す」面も、星辰奏者なら何とかなるという発想でした。
元から和地は爆発力にかける男ですが、この発想もあってもう禁手の才能がクソなまでに低くなっちゃいましたね。これがのちに残神へと繋がるのかと思うと、この形式が自分には合っていたのでしょう。
そんな中巻き起こる、クライマックス乱舞。特に個人的に思い起こすのは、ヴィールの最適化分身乱舞に対抗する歴代赤龍帝軍団。我ながらよくこの展開を作ったと自画自賛したい所。

そしてそんな激戦が終わり、次章への伏線というは予兆を入れまくっての終了
ある意味大一番であり、当初の想定でも一番波乱かつ不安なところだらけの、銀弾落涙編。
この作品のストーリーにおける根幹が明かされる回であり、ある意味で最重要回。こと第一部に限って言うのなら、銀弾落涙編以上にストーリーとして重要な部分はないかもしれません。

その前に変態が出るけどね!!
幕間は本編とはちょっとずれているから、本編だと入れづらい部分

を入れられるのも利点だったり。特に今回の幕間は、和地ハーレムの親睦会にもできますからね♪

さぁて、次回は何時になるか未定ですが、ある意味一番本番なので、気合を入れて書きたいところです。

第五章　銀弾落涙編

銀弾落涙編　第一話　穏やかな日々……と書いて嵐の前の静けさと呼ぶ

和地Ｓｉｄｅ

トレーニングというものは、毎日欠かさず行えるに越したことはない。

日々の積み重ねは本当に大事だ。特に若い時期というものは、肉体の成長が早いから尚更大事だろう。まぁ年取ったら衰えると取り戻しづらいから、成人してからもずっと鍛錬は定期的にやるだろうけど。

まぁそんな感じで、俺は常々鍛錬を積んでいる。

毎度毎度言っている気もするが、基礎というのは実に大事だ。安定性とか堅牢さに繋がるこれらの要素は、誰でも鍛えればある程度は身に付くからこそ誰もが身に付けるべきといえる。

だからこそ、基礎体力や体幹はしっかりと成長させる。こういう部分こそ、最終的な競り合いにおいて大事だしな。

というわけで、腕立て腹筋背筋スクワットを毎日やっている分だけこなし、更にランニングで鍛えてから、俺はしっかりとストレッチなどをこなしてシャワーを浴びに向かう。

あと時間的に余裕はあるし、サウナもちょっと長めに入るか。水分は余分に持ち込んでおこう。

そんな時、ふと思い出す。

―あ、今度最後の試練がマストダイレベルで襲い掛かるか。それ乗り越えたらベッドインしてあげるわ、期待しなさい―

……それってつまり……最終試験的なあれか？
終わったらあれか？　付き合えるのか？
……前言撤回。冷たいシャワーを浴びて水風呂に浸かろう。
体を動かしたとかそういう次元でないレベルでほてってきそうだ。
いや、本当に！

そんな感じで、中間テスト前の毎日は続いていた。
カズヒ姉さんが不意打ち気味に叩き込んできた爆弾発言は、幸い俺にしか聞こえてなかったみたいだ。
からかわれなくて良かった。というか、からかわれなくても大騒ぎになっていた可能性がある。
だからまぁ、こうやって普通に朝食を食べれるのも良い事なんだけど……。
「それでイッセー？　孫はいつ見れるのかしら？」
「ごぶっほぉ!?」
……イッセーはイッセーで大変だな。
部長に正式の告白して受け入れられて以来、とりあえずイッセー絡みは「まずはイッセーとリアスを見守ろう」といった方向になっていた。
おかげでそっちに意識が向けられているから、こっちについては集中はしていない。していないんだけどなぁ。
ご飯を噛みながら、俺はちらりとカズヒ姉さんの方を向く。
「……ふぅ。今日も美味しい卵かけご飯ね」
「まったくですの！　話が合いますわね、カズヒ！」
「……いや、まったくもってその通りじゃん？　卵かけご飯は日本の美食が極みだよねぇ」
そんな感じで、ヒマリやヒツギとにこやかに卵かけご飯を堪能するカズヒ姉さん。

あの爆弾発言を言ってから、カズヒ姉さんは普通の態度のままだった。
鋼の女と形容するべきか。それともとっくの昔に覚悟を決めていたのか。
どちらにせよ、俺の今までの人生である意味とんでもない分岐点だ。運命の瞬間と、若気の至りであることを自覚しつつ言いたい気分だ。覚悟必須の状況だ。
というか、最後の試練ってなんだ。
カズヒ姉さんはストリートチルドレンだから、両親にご挨拶とかそんな感じではないだろう。
じゃあなんだ？　「私より弱い男にはなびかない！」って感じで真っ向からの決闘とかそんな感じか？　いや、カズヒ姉さんってそういう強さ至上主義ってわけでもなさそうだしな。たぶんこれも違う。
ということは、初恋の男性と死別したとかなんだとかで、墓参りとかか？　確かにそれはそれで重いし重要だが、試練というほどか？
う～ん分からん。
そんな風に悩みながら食べていると、何時の間にやらご飯を全部食べてしまった。
いっけね。まだおかずがこんなに残っているのに、白米が全然ないのはちょっとなぁ。お代わりするか？
「えっと、悪いけどご飯をお代わりするから―」
「はーい！　それではこれからカズ君のお替りを誰がよそうかコンテストを始めたいと思います！」
何を言ってるのからリヴァ先生!?
いきなり突拍子もなく始めやがったこの流れに、メリードはすまし顔だった。
「では、インガ、春菜、ベルナがノミネートですね。他に参加したい方は？」
なんでその方向に進める!?
「……ここはメイド業先輩に任せてくれないかな？」
「いや、幼稚園での阿吽の呼吸を此処で見せてあげるわ」

「いや、真面目に張り合うなよ。っていうかあたしも参加か!?」
インガ姉ちゃんと春っちが散らす火花に、ベルナだけついていけてなかったりしている。
というかこれ、俺は何時になったら白米が食えるんだ!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「どこも色々と可愛いことで」
そんな風に、左右で盛り上がっている環境において、カズヒはそんな風にお茶を飲んで一息ついた。
卵かけご飯で少しぬめっとした口の中を、香ばしい緑茶でゆすいですっきりとする。
ああ、美しき日本の朝食。卵掛けご飯は日本の至宝なり。
そんなたわごとを脳内で展開していると、既に周囲は騒がしいことに。
「さぁ！　カズ君のご飯をよそうのは誰だ!?　更なる乱入者が現れるかぁ!?」
「そういうことならやりますのー！　和地のご飯をよそいたいなら、まずこの私を倒すことですのね！」
「ヒマリってどんなポジションやってんの!?」
リヴァに呼応するようにヒマリが暴走してヒツギがツッコミを入れているが、まぁここはスルーしよう。
あまりに目も当てられない様なら張り倒しに行くが、これぐらいはスルーしてもいいだろう。

イッセー側に関しても、イッセーの問題が解決したことで急激に進んでいる。現在はリアスを全員が優先する流れだが、少しすれば一気に加速して面白いことになるだろう。

なら自分が何をするべきか。カズヒはそれを考えて、既に答えを出している。

まずは中間テスト。既に毎日の時間における勉強の割合は増やしている。これまでの活動で何故か敬意を持ってくれている先輩方を経由する形で、これまでのテスト傾向は知れているから山勘も張れる。リーネス達も勉強会を開いてくれるから、このまま順当に時間を割り振れれば赤点回避どころか平均点はとれるだろう。

そのあとは過去を話す。距離を置かれる可能性は覚悟はしている。アザゼルは大丈夫だというし大丈夫な可能性は自分でも分かっているが、あれを踏まえればそんな楽観的観測で挑むのは迂闊とか平和ボケとかではなく、純粋に失礼というべき領域だ。

そのあとは和地に向き合おう。和地がどんな答えを返すのかは分からないが、真摯に向き合って答えを出すべきだ。自分を慕い、己の掲げる理念に向き合い続け、かつて出した条件を確かに真っ当し、肩を並べて背中を預けられる青年に対して、真面目に向き合って答えを返したいと思っている。

……だが、同時に常に脳裏に刻まれていることがある。

―大好きな妹だよ。当たり前じゃないか―

……あの苦い思い出、すべての始まり。

その負の原点であり呪詛の始まり。それを踏まえたうえで、カズヒ(自分)は果たしてどこまで恋愛に足を踏み入れることができるのか。

そう、ふと思い当たってしまい、お茶と一緒に強引に飲み干した。

勢いよく飲み干したので、お代わりを入れようとした時だった。

「……はい、どうぞぉ」

「リーネス……ありがとう」

ニコニコ笑顔でリーネスが急須を持っていたので、少し甘えて素直に入れてもらうことにする。

右と左でラブコメが展開される中、ふと静かな雰囲気になってい

た。
いや、これオシドリ夫婦か何かか。などという内心のツッコミをよそに、リーネスは静かな笑みを浮かべながらお茶を注ぎ終える。
その目は、静かにカズヒを見ていた。
「カズヒ」
「何かしら？」
何を言うのかと思わず力んだが、リーネスはふっとした笑みを浮かべる。
「和地なら大丈夫よぉ。私が、保証する」
その言葉に、カズヒは思わず何も言えなくなる。
そのうえで、リーネスは背中を押すように頷いて、微笑み直す。
「和地は必ず、貴女の過去を知ったうえで、カズヒ・シチャースチエを見てくれる。それだけは、絶対に保証できるわ。……頑張って」
頑張って。
その言葉に、カズヒは静かに目を伏せる。
瞼の裏に映る、小さな笑顔を目に焼き付ける。
あの日、自分が勝手にあの子に交したあの誓い。
それを思い出し、カズヒは静かに微笑みながら頷けた。
「ええ。テストを乗り越えたら、絶対に言うことにするわ」
「ふふ。私も補足説明すからねぇ。鶴羽と一緒に補足しないと、絶対カズヒは自分を下げるものぉ」
「はいはい。その辺りの調整はお任せしますよ」
そんな風に語り合いながら、騒がしくも暖かい時間を過ごしていた。

銀弾落涙編　第二話　嵐の前（未察知）にも鍛錬鍛錬♪

和地Ｓｉｄｅ

日夜トレーニングはオカ研の基本スタンス。日々の鍛錬により積みかなせた基礎力もまた、俺達が勝ち残ってきた理由の一つだ。

天賦の才覚を持つ者が多く、またトンデモ覚醒を遂げることも多いから、そっちばかりに目が行くこともあるだろう。だけどそれだけでどうにかなるほど、俺達が乗り越えてきた困難は甘くない。

リーネスが日々進める技術研究があるからこそ、新型プログライズキーを投入することもできる。交した絆や縁があるからこそ、そこから新たな可能性を取り込める。そしてそれらをきちんと生かせる余地を、日々の鍛錬が作り上げているからこそ勝利してきた。

まさに友情・努力・勝利。下手なジャンプ漫画よりよっぽどジャンプ三原則をしていると胸を張れる。

だからこそ、俺達は日々のトレーニングを疎かにしない。ましてプロの上級悪魔でも持ってないものがいるような、トレーニング用の異空間までもらっているなら尚更だ。

そんなわけで、俺達は日々トレーニングを重ねている。

そしてそれはもちろん―

「行くぜイッセー！」

「ああ、来い！」

―模擬戦もだ。

今回俺がぶつかるのはイッセーだ。

何度もやっているが、イッセーは意外性に富んでいるよう見えて、意外にも質実剛健だ。

亜種禁手をいくつも用意できているにも関わらず。三叉成駒に

至ってからも、それどころか真女王といえる形態を会得したうえで、基本となる禁手での鍛錬をしっかりと積んでいる。
だからこそ、生半可な仕込みでこいつを崩すのは困難だ。厚みと密度の違いで逆に崩そうとして突き入れた得物が折れる。
故にこっちも、小細工には頼らず真っ向から打撃戦を展開する。
なにせ戦闘訓練の量や期間なら俺の方が上だ。ザイアの訓練や座学は腐らせていない。脱走するとするなら能力は必要だし、俺の誓いを達成するのに有効だったしな。
だからこそ、初期形態同士での戦闘ならこっちが優勢。とはいえ基本性能では神滅具パワーでイッセーが有利だから、決して油断できるような差ではないけどな。
このレベルの出力が相手だと、普通の魔剣創造では到底対応しきれないってわけだ。
そんなわけで、俺達の戦闘は派生形態に切り替わり始める。
イッセーが僧侶の大火力砲撃を叩き込むのなら、俺はディフェンディングタートルで固くなりつつ直撃を避けて突貫する。
超機動力の騎士で離脱を試みれば、俺は疾走車輪（ソニック・チャリオット）で追随する。
攻防一体ならぬ攻防絶大の戦車になられたら、チャージングリザードで回避迎撃反撃を試みる。
……やはり、切り崩すのは流石にきついな。
絶大な反動によるポテンシャル低下を疾走車輪で離脱することで時間稼ぎしつつ、俺はイッセーの成長に舌を巻く。
成長速度は速い。更に毎度毎度信じられないような進化を遂げる。だが、それに驕らず基礎をしっかりと鍛えていくその強さは、生中な奇策が通用しない。
堅実に強い奴が突拍子の無いことをしてくるとか、敵からしたら厄介だな。勤勉な天才に匹敵する敵に回したくない奴だ。
「ったく！　やっぱりお前を崩すのは大変だぜ！」
お前が言うなと言いたくなるがな、イッセー。
だからこそ、俺は回復に合わせて本腰を入れる。
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ』

素早くアサルトグリップを装着させ、俺はサルヴェイティングドッグプログライズキーをアップデート。
素早くサルヴェイティングアサルトドッグに変身し、突貫する。
イッセーもまた真女王に至って迎撃する……が。
「あ」
なんか瞬間的に鎧が切れた。
「あ」
そして俺は既に引き金を引いていた。
「あ☒ぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
イッセーゴメン！
顔面もろ入ったぞ!?　だ、大丈夫かぁ!?

イッセーＳｉｄｅ

「……ふぅ～。痛みもだいぶ引いてきたぜ」
「悪いイッセー。タイミングが悪かった」
俺が回復して冷や汗を拭う九成だけど、あれは仕方ない。
真女王になってからすぐに鎧が解除されたもんだから、九成も対応が難しかったしな。っていうか、引き金を引いたタイミングで鎧が解除されたからなぁ。
いやぁ、昔の俺だった危なかった。これでも生身だって鍛えてるから、何とか顔面がめちゃくちゃ痛い程度で止まったよ。死ぬかと思ったな。
「……やっぱり、今の俺にとってネックなのは真女王の持続時間か。全然安定しねぇ～！」

「持続時間にばらつきがありすぎるからな。長いと五分超えるが、短いと一分切るしな」
俺がついぼやくと、九成もうんうんと頷いた。
いや、ほんとそうなんだよ。
俺の強化形態のネックは持続時間の不安定さ。真女王もそうなんだけど、三叉成駒もこれまた厄介だ。
三叉成駒は一つ一つはまだマシなんだけど、駒の切り替えを繰り返すと消耗が一気に跳ね上がる。何度も繰り返すと体力だけは自信がある俺でもすぐにばてるぐらいだ。
ま、ベースとなる昇格（プロモーション）自体、ポンポン切り替えられるようなものじゃないしな。曹操がイリーガルムーブなんてチェスの反則を思い浮かべただけあって、サイラオーグさんみたいな特例でもない限りゲームで使用を認めないだろう手札だ。体力の消耗が加速する程度って、考えてみると軽い代償かもな。
ただこっちはコンボを多用しなければいいだけだから、まだ安定した運用ができないわけじゃない。問題は真女王だ。
全部が全部三叉成駒以上に強化されるけど、その所為か持続時間が全然安定しない。ヴィールと戦ってた時はリアスの魔力もあって十分以上持ったけど、そういう場合でもないと十分持たせることも難しいし、一分も持たない時がある。最悪一発攻撃しただけで解除されたこともあった。
流石にこの不安定っぷりは、戦力として使うのは難しいって代物だよなぁ。
「う～ん。不安定すぎてうかつに使うと自滅しそうだよなぁ。何とか安定させないと」
「まぁ、いざという時の切り札に限定すれば大丈夫な気もしないではないけどな」
九成がそう返すけど、そうかぁ？
一発殴ったらすぐ解除なんてことになると、心臓に悪いなんてもんじゃないぞ。せめて三分ぐらいは絶対に持続してほしい。ウルトラマンレベルが欲しい。

だけど九成は、苦笑してこっちを見てきた。
「お前はカズヒ姉さんの次に精神力で物理法則と喧嘩できるからな。絶対に負けられない時なら、多分真女王(それ)も長持ちさせれるだろ」
すっごいこと言ってきたな。
ま、まぁ？　俺って土壇場にパワーアップすることが多いから、そんな風に思われるってのも分かるぜ？
だけどそれだって、いろんな人が俺に力を貸してくれたからこそだ。ただピンチになったからノリで進化を遂げたわけじゃない。
あ、でももう至ったものを安定させるのはまた別の話か。生徒会長も俺の根性を危険視してたし、ライザーの時もグレモリー眷属全体で根性に注目している人が多いみたいだしなぁ。真女王を長持ちさせるぐらいならできるって、他の人からも思われてるかも？
……いや、でも今のは言いすぎだろ。
「物理法則に喧嘩って、俺そんな別次元なことしてるか？」
流石にちょっと反論したい。
俺はまだまだだぜ？　一対一で神様や魔王様に勝つことだってできないだろう。物理法則に喧嘩なんて、そんな方々でも難しいって。
だけど、九成はすっごい遠い目をしてこっちを見てきた。
「……乳神」
「……あっ」
確かに。あれは物理法則に喧嘩って言っていいかもな。
なんでも今までは、異形社会でも宇宙人とかそんなレベルな話だったらしい。いる可能性はあるけど実際に見たことはないよって感じな話。
そんなのが、俺のおっぱいを愛する気持ちに呼応してきてくれたわけだしなぁ。それも、ミョルニルを使えるようにしてくれたわけだし。あれは凄かった……いろんな意味で。
いや、今でもちょっと困惑する。
「俺のおっぱいを求める気持ちって、どんなレベルなんだよ」
「京都の一件を思い出せ。常人では理性を保てないレベルだろうが」
……あれは本当に酷かった。

痴漢被害者の方もそうだけど、痴漢をしてしまった人だって被害者だ。っていうかこれ、俺が加害者なのか？

しかもそれでしたことが、リアスを駒王町から疑似京都に転移させただけ。なんていうか……すっごく申し訳ない気分になる。

「コスパがいいのか悪いのかさっぱり分からないよな」

九成の言いたいことも分かる。

なんでもあの空間、強引に入るのが困難らしいって話だ。だけど京都と繋がっている空間だから、距離的には上級悪魔なら普通に転移できるレベルだ。

燃費がいいのか悪いのかさっぱり分からん！　そして燃費扱いしていいのかどうかもあれだ！

俺ってこういう時はやっぱり馬鹿だな。それに……うん。

「いざとなったら成果上げられるからって、それに甘えて怠けてちゃいけないよな……っと」

そんな感じで力を入れて立ち上がると、九成は同じように立ち上がりながら、なんていうか微笑んでいた。

「……ああ。お前はそういうところだよな」

え、どういう意味？

呆れられたのか褒められたのかがよく分からん。悪い意味じゃないといいんだけど。

ま、それはともかく。

「じゃ、痛みも退いたし休憩終了。お互い生身で鍛錬しようぜ？」

「オーライだ。お互い叶えたい望みの為に頑張ろうか！」

祐斗Ｓｉｄｅ

イッセー君達も頑張っているね。
さて、それはともかくだ。
「……まぁ、これぐらいできれば仕込みは十分かしらね」
と、カズヒが僕との模擬戦を終えながらそう呟いた。
今僕は、カズヒに頼み込んで対英雄派を備えた手札の調整を行っていた。
こういう時、元々暗部中の暗部だった彼女の視点はありがたい。
英雄派のスタンスと、今の僕が持つ手札の欠点。それを利用して作り上げた策を、更にしっかりと高めることができた気がする。
「やられる側の視点でも完成度は高いわ。間違いなく初見殺しの類だけれど、だからこそ初見に限定すれば確実に通用するわ。……流石はグレモリー眷属唯一のテクニックタイプ担当」
「できれば、本当に他に用意してほしいんですけどね」
本当に、僕以外にテクニックタイプのメンバーを育成してほしい。
特にゼノヴィア。エクス・デュランダルはエクスカリバーを統合しているんだから、もうちょっとテクニックを伸ばした方がいいと思うんだけど。
「まぁ、肉体的精神的な向き不向きはあるもの。そもそも多種多様な手札ってもので真の強者を相手にする場合、個人の時間的リソースを分割させるというネックが生まれるものよ？」
カズヒは汗をぬぐいながらそう言い含めるように告げてくる。
彼女も暗部出身なだけあり、テクニックも相応にある部類だ。手札の多さでは多種多様な武装や装備を携行できることから、下手をすると創造系神器持ちの僕より多いかもしれない。
そんな彼女が、むしろ手札を増やすことに対して懸念を示すとはね。暗部として多種多様な敵と戦ってきたからの意見だろうか。
「いろんな手札を持っているから強いってのは、天才か子供の最強論よ。基本戦場において、戦力ってのは特化型の方が重宝されるものよ？」

訂正。ゲリラ時代の経験の方が生きているようだね。
経験論というのは確かに参考になる。とはいえテクニックタイプを増やしてほしいのは事実なんだけどなぁ。
「……流石にテクニックタイプが僕だけっていうのはダメですよ。絶対絡めとられるチームになってますよ？」
「まぁ、戦場でも部隊編成は特化型を組み合わせた、連携での対応力が重要だもの。ちょっとシンプルに破壊力重視が多いのは難点ね」
あ、カズヒもそこは納得してくれるのか。
……僕としてはゼノヴィアの宝の持ち腐れを何とかしてもらいたい。エクスカリバー六本は無駄にしていい才覚ではないと本当に思う。
「……となるとやはり、気質的には小猫ね。次点で最近前線戦闘力を踏まえているギャスパーかしら」
……やはり視点が違う。
確かに二人もテクニックタイプに慣れる素質はあると思う。小猫ちゃんは姉の黒歌がテクニックタイプよりのウィザードタイプだし、ギャスパー君は割と何でもありな素養のオンパレードだ。
だけど！　だけど六本のエクスカリバーは重要だと思うんだよ！
「……もしかしてカズヒって、エクスカリバーにあまり価値を感じていないのかな？」
「……個人的には、エクス・デュランダルそのものに不安要素があるのよ。……暗部的視点で」
というと？
視線で促すと、カズヒは少し俯き気味になった。
「……現在の聖書の教えにとって、悪魔や堕天使は「絶対的な悪にして敵対者」といった風潮がある。ただでさえ数か月で他の神話も含めて和平を進めているこの状況で、エクスカリバーとデュランダルのダブル聖剣を信徒から悪魔になったような女に使わせてるなんて……って思っている信徒は割と多いと思うの」
……なるほど。
和平に反対している者が、三大勢力にいないわけじゃない。悪神ロ

キのように大規模な反乱を起こしている者はいないけれど、全員が全員和平に全面賛成……というのは楽観論だろう。
元々戦争の積極的継続を願った者達が追放され、禍の団に集まった僕達悪魔側でも、僕らが京都に行っている間に色々と騒ぎが起こったみたいだしね。堕天使側はそもそも開戦筆頭派のコカビエルが潰されたことで和平が結ばれたから、こちらはまだ安心できる部類だ。
そう考えると、そもそも信徒や天使の戦争継続派に楔が撃ち込まれる前に和平を結んだ天界や教会には、不安要素が多い気がするね。
「教会の方はどうなんだい？」
「……基本的に、和平が結ばれてから教会から去った者は数多いわ。青天の霹靂だったからこそ、その衝撃が強すぎて振るい落としはある程度は出来ているわね」
カズヒはそう言いながらも、厳しい表情を崩さない。
「裏を返せば、今残っている者はそれでも信仰を捨てきれなかった者ということ。……不満を捨てきれなかった場合、溜め込みすぎて自家中毒や暴発の可能性は懸念するべきだわ」
やはり、何事も順風満帆とは言い難いわけだ。
と言っても、僕達は下級悪魔で部長だってあくまで次期当主だ。
そういった動きに対してできることはない以上――
「……何かあった時動けるよう、鍛えて備えるしかないわけだね」
――そういうことに終始するだけだ。
誰が相手であろうと、僕達は僕達自身の夢と平和の為に立ち向かうだけだ。
その為にできることを積み重ねる。結局はいつも通りそれに終始されるわけだしね。
カズヒもそこは同意見なのか、苦笑しながら頷いていた。
ただ、少しだけ何かを考えこむと僕の方に真っ直ぐな目を向けてきた。
いや、どこか揺れているような気もするな。どうしたんだろう？
不思議そうに見返していると、カズヒは少し俯き気味になってから気合を入れた感じだった。

「……和地には既に言っているのだけれど、中間テストが終わったらちょっと衝撃的な事実を貴方達に伝えるつもりなの。その……色々と重い話になるから、テスト後には覚悟しておいてほしいわ」
へぇ。
カズヒは色々と背負い込みたがっているところはあったし、初対面の頃からリーネスと阿吽の呼吸だったり南空さんとも阿吽の呼吸だったりしているからね。世界的に寄食側の卵掛けご飯が大好きすぎたり、なんか不思議なところはあった。
もしかすると、それ絡みなんだろう。
でも、なんでそんな時期に？
「むしろ早い方が良くないかい？　中間テストぐらいなら、先に終わらせた方が集中できそうだけど」
僕がそう返すと、カズヒは凄いすすけた表情になった。
「私が、中間テストを……乗り切れないからよ……っ」
凄い真剣な声色だった。そんなに勉学に苦労していたのか。
まぁ、カズヒってストリートチルドレンだったしね。駒王学園はそもそも偏差値高いし、地頭の良さだけでは苦労するのか。
「……今度、一緒に勉強会しようか」
「本当に、ありがとう……っ」
涙目になって感謝された。相当不安だったらしい。
……すべてにおいて完璧な人なんていない。何かしらの欠点なり不得手なりがある物だ。
そういうことに、しておこう。

銀弾落涙編　第三話　昇格のチャンスです！

和地Ｓｉｄｅ

そんなある日の深夜。俺達は兵藤邸のＶＩＰルームに集合していた。

というのも、現魔王のリーダー格でもあるサーゼクス・ルシファー様が態々ここに来たからだ。

いや、この人もアザゼル先生並みにフランクだから、ノリで来ていたとしても全然驚かないんだけどね。それにしたってこのタイミングでとなると……あれか？

「さて、イッセー君には直接伝えているから知っている者も多いと思うが、イッセー君、朱乃君、祐斗君に昇格の話がある」

あ、やっぱり。

「これまでの成果を考えれば上級昇格でもいいとは思ったのだが、一応慣例を守って中級からということになった」

「まったく。特例を認めておきながら順序は守れとかうるさい旧家がいたんだろうな。お前ら全員上級昇格でも問題ねえだろうによぉ」

サーゼクス様は苦笑しているし、アザゼル先生も厭味ったらしい。

ただ、カズヒ姉さんはむしろ逆らしい。片目は閉じているけど肩眉は上がっている。

「それはどうですか？　特例って一度作ると、必ず何故そうなったかを考えずに自分に適用させたがる馬鹿が出てくるじゃないですか」

あ～。それは分かる。

何か特例とか出るとすぐに湧いて出るよなぁ、自分にも自分にもっていうやつ。

もうちょっと条件とか色々考えて言えよ、子供か。

「それに階級が上がればそれ相応に責任とかやることも増えるでしょ

うし、下級がいきなりとかあれです。イッセーに至っては悪魔になって半年そこらなんですから、段階を踏んで慣らさせてあげるべきでは？」
あ～、確かに。
急に出世しても、出世した階級がやることに慣れてないと苦労するしな。段階とか段取りってのは急激な変化で混乱しない為にも必要か。
ただ、リアス部長は不満そうだ。
「イッセーはそんなヘマはしないと思うわよ？　今までどれだけの難敵を戦って生き残ったと思ってるの？」
「部長。デスクワークに必要な能力は戦闘のそれとは全く異なります。サバイバルもそうですけど、求められる能力が事柄で変わることを理解してください」
あ、そこは同感。
この辺に関しては種族の違いなんだろうか。戦闘能力とサバイバル能力とデスクワーク能力と統率能力は全部違う能力だからなぁ。別に脳筋じゃないんだから、理解してほしい。
「……それで三人だけですの？　オカ研が立ち向かってきた困難で言うなら全員でもよくありませんの？」
と、ヒマリが首を傾げるけど確かに分かるな。
……冷静に考えてプロデビューもしていない上級悪魔がどうにかできるような敵じゃない。文字通り神話級の敵だらけだ。むしろなんで全員生き残っている俺たち。
「ぶっちゃけ、俺はなんで自分が生き残ってんのか分かんなくなる時がありまさぁ」
「同感かな。……いや、人生のハードモードがジャンルが代わっただけな気がしてきたよ」
お茶請けに使うサンドイッチ用のスモークサーモンを持ってきながらアニルに、同じように遠い目をしながらインガ姉ちゃんが紅茶を入れつつ同意する。
いやまぁ、確かに。

「ふふふ。これもイッセー君と共に頑張っているからさ。彼がいるのなら、僕達はどこまでも成長できると、強くなれると思わせてくれるからね」
「そういうこと言ってるから、イッセーとのホモ同人誌がナンバリング二桁超えるじゃんか」
「数か月で同人誌がそこまでって、異常レベルよねぇ」
木場がどんどんホモ臭くなるし、ヒツギにリーネスまでナンバリングまでは把握しているレベルで周知されてるわで、男としてイッセーに同情する。
ノンケが友人とのホモ同人を作られるって、明らかに殺意案件だろう。真剣に同情する。
ちなみにカズヒ姉さんが「肖像権侵害」としてストレートにぶちのめしに行ったりしているのだが全然懲りないらしい。最近はイッセーに直接「裸を見せるから裸を見せて」と、更なる完成度を求めて暴走しているとか。つくづく同情する。
というより、俺やギャスパー、アニルまでもが掛け算にならないか地味に不安だ。いや、あの手の作品で男の娘って需要があるのか？ないならギャスパーは逆に安全か。
話が脱線しているうちに、サーゼクス様は紅茶とサーモンサンドを堪能している。ご満悦なようだ。
「これは中々。インガ君もメイド業務に慣れてきたようで何よりだし、アニル君の燻製は本当に美味だ」
「メリードさんの教えがよいこともあるのでしょうが、インガさんが真面目に努力をしているからでしょう。……それと今度の食事に使いたいので、燻製をいくらか貰ってもよろしいでしょうか？」
このレベルの人達に認められるとは、インガ姉ちゃんを誇らしく思う。
俺もそんなインガ姉ちゃんと寄り添うに足る男として精進せねば。戦闘能力だけでなく、日常生活でも技能を増した方がいいかもしれない。
そしてアニルの燻製はどこまで行くというんだ。本人も軽く引い

ているぞ。
「……お話は戻りますが、今回の昇格資格、イッセー先輩や朱乃さん、祐斗先輩だけなんですか？　他の方々にも十分資格はありそうに思いますが」
と、真面目なルーシアが話を戻す。
それに対し、サーゼクス様は苦笑した。
「流石にいきなり全員というのは、旧家の者達も了承できなかったようだ。今回はその辺りのバランス、転生悪魔になってからの年月や、いわゆるネームバリューなどのバランスも整えた結果といえるだろう」
「……なるほど。転生したばかりの私は流石に無理ということですね。できればもっと昇格して安定したお給金が欲しいのですが、残念です」
ロスヴァイセさんがそう言いながら少ししょげるが、まぁ転生してから一月経つかどうかの彼女は流石に無理があったか。
とはいえ、その辺りのバランスを加味した結果、最も求められているイッセー以外に選ばれたのが、朱乃さんと木場だっていうのはそれだと納得だな。
「朱乃はリアスの眷属としてはベテランで、更に神の子を見張る者の幹部であるバラキエルの娘だしな。木場もベテラン側で、イレギュラーな禁手である聖魔剣の持ち主。イッセーと並び立たせるなら十分行けるってわけか」
先生がそう茶化し気味に言うが、確かにそうだな。
「……なるほどな。とはいえ私達もおいていかれてばかりではない、近いうちに資格を手にして昇格試験に臨むとしようか」
「ふふふ。ゼノヴィアなら意外とすぐになれるかもしれないわね。主よ、ゼノヴィアの出世を応援してください、アーメン！」
気合を入れるゼノヴィアに、イリナが天使の光で祝福をプレゼントしている。
教会組は仲良くて何よりだけど、悪魔の出世を聖書の神に祈っていいのか？

「イッセー先輩たち、おめでとうございますぅ！　ぼ、僕も頑張って追いかけます！」
「はい。イッセーさんが頑張るなら、私たちも頑張りましょう、ギャスパーくん」
「そうですね。私もいずれは上級悪魔になって更なるしっかりとした立場やお給金をゲットして見せます！」
　と、ギャスパーやアーシア、ロスヴァイセさんも意気込みを新たにする。
「とはいえ、中間テストも迫っているとは聞いている。個人的には同時にこなせると思っているが……どうするかね？」
　と、サーゼクス様がそう話を本題に進めてきた。
　実際問題、時期が中間テストと被っているんだよなぁ。中級悪魔試験の方が少し早いと言ったところだ。
「参考までに聞きますけど、試験内容はどういったものがあるんですか？」
「そうですね。基本的に中級昇格試験の場合、レポートの提出に実技と筆記の試験となります。もちろん失敗しても資格が失われることは、よほど醜態をさらしたり問題を起こしたりしなければ取り消されたりは致しません」
　イッセーにグレイフィアさんがそう教えるが、割と緩いところは緩いよな、中級試験。
「……ちなみに、春菜やインガは受けたことねぇのか？」
「私はほら、ディオドラがあれだから」
「私も昇格試験にはあまり興味なかったわね。そもそも私がなった時点で、ヴィール様は冥革連合を発起するつもりだったし」
　ベルナがインガ姉ちゃんや春っちに話を振る中、イッセーは少し考え込んでいた。
　まぁ、イッセーって意外と小市民的なところもあるしな。上級悪魔になって最高のハーレム王とか言っていても、こんな短期間でその可能性が来るとは思ってなかっただろう。悪魔の人生は数百年数千年レベルで考えるものだし。

とはいえ、それだけの努力はしていると思うけどな。
「僕は構いません。この栄誉に恥じない成果をリアス部長とサーゼクス様に捧げたいと思います」
「わたくしもお受けいたします。イッセー君はどうしますの？」
……二人は結構余裕だな。
中間テストと同時にこなせるという自負があるのか。まぁ、勉強得意だし当然か。
問題はイッセーの方だな。少なくとも俺が知る限り、イッセーの成績も相応に良好だ。中間テストで赤点をとることはまずない。
とはいえそこに中級昇格試験もだと、やっぱり色々とハードになる気がするが―
「……俺も受けます！　折角のチャンスを無駄にしたくないですし、すぐにでも上級悪魔になった方がリアスと一緒に居易いですから！」
お、決定したようだ。
「……もう、イッセーったら」
部長も嬉しそうで何よりだけど、そこでアザゼル先生がにやにや笑ってきやがった。
「おーおー。バカップルはこんな時でもお熱いねぇ？」
ほら、やっぱりからかってきやがった。
「あらまぁ。アツアツカップルってこういうものじゃないですかぁ、総督ぅ？」
「まあ、本格的に付き合い始めればそうなっちゃうでしょう。ただ一応、魔王様の前よりリアス部長（上級悪魔）とイッセー（その眷属）」
リーネスがそれとなくフォローするけど、そこにカズヒ姉さんが気を引き締めることを言う。
まぁ足しかに、トップの前でいちゃつくのって体裁的にはどうなんだよなぁ。
「でもまぁ、サーゼクス様ならオッケーですわよね？　むしろテンションヒャッハーなんじゃありませんの？」
「もちろんだともヒマリ君。むしろ堂々と名前で呼び合ってくれたまえ」

ヒマリにふられるまでもなく、サーゼクス様もノリノリだ。
「むしろこれで堂々と義弟(おとうと)になったわけだ。さぁ、私のこともお義兄(にい)ちゃんと！」
スパンと、盛大にグレイフィアさんのハリセンが叩きこまれた。
「おお！　これが噂の夫婦漫才！　カズくんも、よかったら私にハリセン入れる？」
「入れないから。ここで茶化すのやめなさい！」
俺は思わず突っ込んだよ。
怒られるかとも思ったけど、グレイフィアさんもカズヒ姉さんもさらりとスルーしている。
というより、まずはサーゼクス様らしい。カズヒ姉さんまでハリセンを構えてるよ。
「サーゼクス様。この場ではイッセー様とリアス様は構いませんが、それは早いと思われます。いずれ……でよろしいではありませんか」
「というより、百年千年生きれる悪魔なのになんでそんなに気が早いんですか？　本格的に交流があって半年の相手に婚約だの親御さんへの挨拶だのって、人間基準でも性急です。イッセーはこと、馬鹿な末端堕天使の所為で大変なんですから、年単位のスパンで組んでくれませんか？」
「そ、そうだね。性急すぎるのはグレモリー家の悪い癖かな？　……末端の暴走に関しては、悪魔も人のことは言えないから尚更だね」
サーゼクス様もグレイフィアさんとカズヒ姉さんのダブル説教に素直に反省してくれている。
とはいえ、カズヒ姉さんはまだ足りないのかちょっと憮然としていた。
「折角何もしなくても時間が経てばまとまるような状況なんです。まだ二人とも高校生で長命種なんですから」
はぁと、盛大にカズヒ姉さんはため息をついた。
まぁ実際問題、二人とも高校生であってから半年ちょっとだしな。更に貴族社会だからややこしいこともあるし、長命種である悪魔だから長い目でも見れるだろう。

ただ、それでカズヒ姉さんの話は終わらない。
「……とはいえ、こういうのを狙う悪意というのはありますから防護体制はとりたいですけどね。部長は学園のマドンナでイッセーは問題児ですから、下手に知られると悪意を持つ馬鹿が出かねません。悪魔側においても注目されるから馬鹿は出るでしょうし、大王派や純血主義などはやはりいい顔をしないでしょうし……ね」
な、なんか深い話だな。
俺達はちょっと戸惑っているけど、むしろ真剣な表情でサーゼクス様やアザゼル先生は頷いていた。
「……そうだね。冥界に関してはこちらも気を付けておこう」
「学園においては俺も目を光らせるか。リーネス、念の為の警戒網を作るの手伝ってくれ」
「当然ですねぇ。しっかり守らせてもらいます」
な、なんかガチな対策が始まりかけている!?
「……そこまでする勢いになるたぁねぇ？　冥界ってこういうノリなのか？」
「いえ、普段は此処まででではありませんわ。とはいえ、イッセー様とリアス様の恋愛ともなれば当然……なのかしら？」
アニルに聞かれたレイヴェルも首を傾げるけど、確かにガチ度が高いよな。
な、なんだ……？

その時俺は気づかなかった。
そういえば、小猫は一言もしゃべってないってことに。

イッセーＳｉｄｅ

いやぁ、なんか凄いことになったよなぁ。
まだ転生悪魔になってから半年経ったぐらいだってのに、もう中級悪魔に慣れるかもしれないんだから。
ロスヴァイセさんも鍛え直す為に一旦アースガルズに戻ることになってるし、今日の夜は色々あったよなぁ。
それにリアスとその……付き合うことになったし。アーシア達も俺のことを好きでいてくれるとか、ちょっと信じられないよな。
あと、レイヴェルが本格的におっぱいドラゴン含めた俺の活動のマネージャーになるって話も合った。レイヴェルはレイヴェルですっごい乗り気だし、つまりそういうことなんだろう。
そういえば、ヒマリやヒツギもたまに熱視線を向けてる気がするんだよなぁ。流石に思い上がりかもしれないけど、ちょっと気になるかも。
ま、そんなことで色々とぼんやりしていたら勉強もできないからな。俺はこうしてサウナに入ってゆっくりしている。
少し前にも入ったけど、その時はリアスも入ってきたうえ、色々大変なことになったからな。
ふふふ。今回はムフフなイベントは無しで、ゆっくりサウナに――
「……あら、イッセー？」
――唐突に、カズヒがサウナに入ってきていた。
……あ、これ死んだ？
「ごめんなさい！」
俺はすぐに謝って脱出しようとするけど、カズヒは何故か手で制した。
「脱衣場の服に気づかなかったこっちの落ち度よ。それに湯浴み着温泉とかに入る時に着る服。画像検索でも割と出てくるは念の為に着

てるから安心しなさい」
あ、本当だ。
バスタオルより服っぽいのを着てる。これが湯浴み着って奴か。
というより、俺が入ってくる可能性とかを警戒してたんだな。用意周到ってのはこういうことか。
いや、それでも万が一があるから離脱した方がいいとは思うんだけど。
俺はそう思っているんだけど、カズヒは特に気負うことなく、隣に座ってきた。
「ちょうどよかったわ。少し、話がしたいの」
「え、マジで？」
どういう展開？
俺はちょっと考えて……うん、これはまずないなとは思った。
「万が一にもないと思うけど、俺より九成の方が好きだろ、カズヒは」
「……そんなに分かり易いかしらね。まぁ、真剣に向き合う覚悟を決めつつあるわ。……だからこそよ」
あ、案外すんなり認めた。
っていうか、だからこそって？
俺が首を傾げていると、リーネスは体ごと俺の方を向いて、真っ直ぐに俺と目を合わせる。
「和地や祐斗には言っているけれど、中間テストが終わった後、話すべきことを話そうと思うの」
……真剣な声と表情に、俺も少し真剣になる。
話すべき、ことか。
「それって、前じゃダメなのか？」
「……話してから中間テストに意識を割ける自信がないの。赤点と補修は……避けたいの……っ」
すっげぇ真剣に声を絞り出したよ、カズヒ。
ま、まぁストリートチルドレンとかゲリラって、勉強はあまりできないイメージはあるよな、うん。
これは迂闊に踏み込んだらまずい。話の方に戻そう。

「……っていうか、そんな重要な話があるのか？　知ってる奴っているのか？」
少なくとも、リーネスや美空さんは知ってることだとは思う。
あの二人とカズヒの関係性は、凄く深いっぽいからな。たぶん既に聞いているはずだ。
そう思ったんだけど、カズヒは怯えてる様な表情で口を開いた。
「……リーネスと鶴羽は当事者よ。あと事情を知っている人は……クロード長官を含めた、貴方がよく知る三大勢力の重鎮は皆知っていると考えていいわ」
な、なんかとんでもないことな気がしてきたぞ？
つまりサーゼクス様やアザゼル先生、ミカエルさんも知ってるってことだろ？
なんつーか、すっごいくだらないことかすっごい重要なことの二択な気がしてきた。たぶん後者だと思う。
そんな、真剣で怯えているような表情をカズヒは俺に向けている。
「……これはとても重要な話。それに、人によっては私のことを唾棄し嫌い、憎悪までするかもしれない。少なくとも私は、そうなっておかしくないと思っている」
あ、暗部的な話か!?
いや、たぶん違う。
だけど、ちょっと嫌な気分だ。
「俺達が、今更カズヒのことを嫌うと思ってるのか？」
俺がそう聞くと、カズヒは視線を少し逸らした。
「……そうなっても文句が言えない。そういう話をするのだと思って言うべきことなのよ」
そこはちょっと腹が立つな。
そりゃ考え方が合わないところは多いけど、それでも俺達は仲間だろ？
ちょっと不満だったけど、それでも強くは言わない。
たぶん、カズヒにとってその話は、俺にとってのレイナーレの一件に近いんだろう。もしかすると、もっと根が深いのかもしれない。

だけど……やっぱりこれだけは言わないとな。
「……俺も、九成も、皆も。今までのカズヒをしっかり見てきたって思ってる。……そのカズヒが嘘じゃない限り、どんな過去があっても関係ない」
そう言いながら、俺は立ち上がった。
なんていうか、カズヒにとっても根が深い問題だ。だからきっと、すぐに気持ちを切り替えられるわけじゃないんだろう。
それに、これはきっと俺の役目じゃない。
だから―
「話を語りきってから、そんな不安を持ったことをまず九成に謝っとけよ？　あいつは絶対、そんな狭い奴じゃないんだから……さ？」
―それだけは、絶対に断言できるからな。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一誠がサウナから出て、五分ほどカズヒは俯いていた。
そして静かに、汗がにじんだ手の平を見る。
耐え切れず、静かに俯いた。
「思えるわけ、ないじゃない」
素直な心がそう告げる。
思えるわけがない、そんなことは不可能だ。
何故ならば、カズヒ・シチャースチエは心の底から断定している。
「道間日美子（私）は、全てを裏切る邪悪だったのだから……っ」
絞り出る声は、カズヒ・シチャースチエの根源。
悪祓銀弾（シルバーレット）は何よりも、自分という邪悪が嫌いだからこそ錬成された

罪人なのだから。

銀弾落涙編　第四話　あらゆる関係はお互いの尊重と距離感が大事

和地Ｓｉｄｅ

放課後、俺はちょっとした事情から一人で缶コーヒーを飲んでいると、匙に出くわした。
「あ、匙か。生徒会の仕事か？」
「ああ。とりあえずちょっと終わらせれたんで、お茶でも飲もうと思ってな」
なるほどなぁ。
そっちはそっちで大変だってことか。まぁ、生徒会ってのはそれなりに忙しい方がいい役職ではあるわな。
俺が何となく思っていると、匙は小さく首を傾げる。
「っていうか、九成はなんでこんなところにいるんだよ？　オカ研はどうしたんだ？」
あ、やっぱり言われた。
いや、確かに今は部活中なんだけどな。
ただ、その……ね？
「カズヒ姉さんがグレモリー眷属女子メンバー相手に、盛大に説教してるから。……イッセーが態々隠しているエロビデオやエロ本を全部あさって読んだ上、そのことを隠そうともしてないことでキレた」
「……うわぁ」
盛大に同情の表情が出たよ。もちろんイッセーにだ。
気持ちは分かる。とても分かる。
俺も男だ。そういったものに興味がないわけではないけど、それを自分が好きな女子が目を通すどころかしっかりと熟考までしている

とか、精神的にクる。というか、隠してるの見てるとか基本的にプライバシーの侵害だろう。
特に気負うことなく話だした教会三人娘は、流れるようにカズヒ姉さんに制裁された。ヘッドロックとアイアンクローをイリナとアーシアに仕掛けながら、更に両足でゼノヴィアを絞め落とした流れるような動きにレスリング部所属のクラスメイトが感動の涙すら流してスタンディングオベーションだ。ちなみに女子なので純粋な感動だろう。
あとそういったことを諭した桐生は既に説教されている。「下半身の口で〇〇〇を加えたこともないルーキー未満のド素人が、遊び半分で阿呆なこと教えるんじゃない」と長々と説教され、珍しくダメージがデカかった。イッセー達がフォローに入ったぐらいだ。あと生々しい内容に、男女問わず思わず俯いた。
まぁ、イッセーラバーズは基本的にイッセーのプライベートとか個人的時間に配慮が欠けているところがあるからな。いい機会だし少し説教されるべきだ。
「……アーシアさん達って、今でも立派なクリスチャンだろ。それでいいのか？」
「ちなみにルーシアが説教のサポートをしているから、二人の相互交代で長時間続くだろうな。仕方ないんで他のメンバーはそれぞれ時間潰してる」
匙に補足説明しながら、俺は真剣に部長達に同情する。
あの二人、別の意味でまとめ役というか締めるキャラだからな。流石に怒った以上、説教は長くなるだろう。
なんで、俺達はこうして距離をとっているわけだ。巻き込まれたくない。
「……で？　兵藤達は何やってるんだ？」
「木場がヒツギとヒマリに相談されて、ちょっと料理を教えるらしい。ギャスパーとアニルは他の一年生とちょっと遊びに行くらしいぞ？
で、イッセーはいい機会だからと、新形態についてリーネスが調査してる」

そんな感じでちょっとあぶれたので、俺はアニルから燻製を貰ったうえで、ちょっと休憩をしてからやろうと思っていることがあるわけだ。
そして匙と在ったのは好都合だな。ある意味タイミングがぴったりだ。
「ま、そんなわけで鶴羽に差し入れでもしたいと思ってるんだ。ついでだし、生徒会室に向かっていいか？」
「……まさか、それが例のアニル君の燻製か!?　金取れるって噂の!?」
どんだけ広まってるんだ。
いや、アニルの燻製は間違いなく美味しいけど。学園祭のオカルトの館でも、美少女ウェイトレスによる喫茶店に追随する人気を誇っていたけど。
最近料理研究会にスカウトされることがあるらしいな。燻製専門だからと断っていたが、アニルはもう、剣士とか悪魔祓いじゃなくて燻製を人生の進路にした方がいいんじゃないか？
なんてふと思っていたら、匙はなんかすぐに我に返って首を横に振った。
「……いや、今日はやめておいた方がいいな」
え？
な、なにがあった？
「ポカでもしたのか？　でもあいつ……抜けてる時は徹底して抜けてるけど、なんだかんだで仕事はきっちりこなせるぞ？」
確かにポンコツ臭はあるけど、ザイアで俺と同じように翻意を隠していたのは伊達ではない。
ザイアは能力を教え込むことにおいては間違いなく英才教育だし、翻意を持つからこそ技術や知識の習得は必要だったので、面従腹背臥薪嘗胆でしっかり学んでいた。ぶっちゃけ基礎体力はともかく、座学においてはアイツが上だろ。
ポンコツスイッチが入らない限り、いくら何でもそんな長々と説教されるようなポカはしない奴なんだが。
俺が首を捻りながら心配していると、匙は苦笑しながら首を横に

振った。
「あ、そういうわけじゃないんだ。ただ最近、悩み事があるのか沈んだ表情が多くてな。会長が聞いても「テストが終わったら話す」ってぼかしてるんだよ」
匙はそう言うけど、鶴羽のことを心配している表所だった。
ん？
今、テストが終わったらッて言ったか？
「……匙」
「なんだ？」
「カズヒ姉さんが、テストが終わった後になんかするみたいなんだ。もしかしてそれと関わっているんじゃないか？」
カズヒ姉さんは、なんでか知らないが鶴羽やリーネスと非常に仲が良い。
なんというか、例えるならリアス部長と朱乃さん、もしくはイッセーが三バカでエロ話をしているような感じだ。阿吽の呼吸とかそういったのが近い。
年季が必須な関係性のあれを、初対面の連続でやっているから不思議と気になっている。となると、カズヒ姉さんの何かしらのアクションに対して鶴羽も知っているんじゃないか？
「いや、リーネスさんは平然として―」
「リーネスはなんだかんだでそういったのが得意だからな。それにカズヒ姉さんも、基本的には普段通り。鶴羽はその……こういう時に迂闊になるというか、一枚劣るというか……」
言っててなんだが怒られそうだな。嘘を言ってないのがまた。
なんか気になるんで深入りしようとした時だ。
「悪いがそこまでだ」
「アザゼル先生!?」
思わぬ人物が出てきやがった。
苦笑―というには苦みが強い笑顔―で立っていた先生は、何時の間にやら缶コーヒーを一本ずつ俺達に渡しながら、軽く頭を下げる。
「その件については俺も聞いている。……あの三人にとっちゃぁ、本

当に重要な話をするんだ。覚悟は決めてるみたいだからちゃんと話すだろうし、もうちょっと待ってやってくれないか？」
あの先生が、そんなレベルでか。
それも頭を下げるほどだ。軽くとはいえ、あほやっても全然謝らない先生がここまでするってことは、割とまじすぎる話かもしれない。
俺も匙も、それを悟って戦慄している。
いやいやいやいや。俺はどんな爆弾発言を聞かされるんだ!?
「あの、先生！　そんな重要な話なら、テストが始まる前にでもやった方がいいんじゃ？」
そんなことを匙が言うけど、それは違うだろ。
「重要な話だからこそ、何かしらの区切りをつけたいんじゃないか？
そういうことなら俺はカズヒ姉さんを尊重――」
そこまで言いかけて、俺も匙も気が付いた。
……先生が凄い遠い目をしている。
これはあれだ。傍から見るとギャグとかそんな感じのあれだ。俺も経験が長いから少しぐらいは分かるんだよ。
先生は凄く言いづらそうにしていたけど、遠い目で遠くの空を見つめながら覚悟を決めたようだ。
「……テスト、対策ですね？」
俺が気遣ってあえて先に尋ねると、先生はやっぱり頷いた。
「……ああ。言った後のメンタルで、赤点を回避する自信がないそうだ。カズヒ（あいつ）、お前らの中で一番学業成績低い奴だからなぁ」
「え、マジで!?」
匙が面食らっていた。
ああ、匙は知らなかったかぁ。
カズヒ姉さん、頑張れ！

イッセーＳｉｄｅ

「……で、どんな感じになるんだ？」
「そうねぇ。イレギュラーだらけだから断言はできないけれど、真女王（こっち）を主体にするべきじゃないかしらぁ」
俺を調べた結果をリーネスは言うけど、やっぱりか。
赤龍帝（イリーガル・ムーブ・トリアイナ）の三叉成駒でもどうしようもないヴィール達に対抗する為、俺が思いついたのは三叉成駒の更なる改変だった。
赤龍帝の譲渡の特性と併用して、仲間達に赤龍帝の鎧を三叉成駒の形態に近い形で至らせればと考え、シャルロットの力を借りて変化させた。
それこそが、禁断（イリーガル・ギフト・トリアイナ）なる三叉の赤龍報奨だ。
それぞれの駒に対応して、三叉成駒とはまた異なる形で強化された鎧を三つ、味方に装着させれるこの形態。真女王とも併用できるから、将来的には三叉成駒より使うことになるとは思っていた。
そして色々調べてもらったうえでリーネスが言うのなら、やっぱりこっちを主体にするべきなんだろうな。
「というより、真紅（カーディナル・クリムゾン・プロモーション）の赫龍帝は三叉成駒（ムーブ）の完全上位互換だもの。消耗が激しくて安定した運用が困難な今ならともかく、安定して使えるようになるなら三叉成駒に態々する必要がないでしょぉ？それに赤龍報奨（ギフト）は誰もに使うことを前提としてるからか、イッセー自身が使うには一歩劣るわぁ」
「そうなんだよなぁ。まぁ、三叉成駒とはまた違っているから俺が使うのには癖が強いんだけどな」
三叉成駒とは違い、赤龍報奨は俺が使うにはそれぞれ癖が強い感じになっている。
僧侶の形態は、聡き赤龍の魔導士（ディアボロス・ウェルシュ・ワイズマン）。重層化されたフィンによって魔力生成量を増大化して、魔力による戦闘を強化する形態だ。
ただ俺が使うには魔力運用が苦手なのが足を引っ張るし、それなら

単純な砲撃を使う三叉成駒の方が都合がいい。
騎士の形態は、速き赤龍の軽騎兵（ライトニング・ウェルシュ・ドラグーン）。鎧というより鎧型のスラスターを全身で纏う高速機動形態だ。
分厚いスラスターを全身に纏っているようなものだから、運動性を発揮するにはテクニックが必須で、強引なブースターの増設は三叉成駒の時より癖が強い。テクニックタイプ向けだから、やっぱり俺が使うには向いてない。最高速度も加速性も三叉成駒の方が上だから、俺が使うなら装甲が薄いことを踏まえても三叉成駒の方がいいな。
戦車の形態は、猛き赤龍の銃戦士（ギガンティス・ウェルシュ・ウォーリア）。鎧以上に全身を包むオーラが、強化外骨格のように使える形態だ。
総合的には俺が戦車向きなのもあってバランスがいいけど、爆発力や重装甲の三叉成駒の方が俺が使う分には優れているんだよなぁ。
「……自分で言うのもなんだけど、シャルロットの力を借りたとはいえ俺が至らせたとは思えない進化してるよなぁ」
ちょっとぼやいてみると、リーネスは苦笑しながらも納得している感じだった。
「多分貴方もシャルロットも、無意識に「兵藤一誠以外が使う」ということを想定していたんじゃないかしらぁ？　だからこそ、それぞれの昇格に適して癖が強くない進化を遂げたのよぉ」
あ、なるほど。
確かに僧侶の駒なら、本当なら魔法とか魔力を自在に運用するもんだしな。単純な砲撃に限定している俺の三叉成駒の方がおかしいのか。
騎士だってとにかく早さを追求したから装甲が薄いし、戦車に至っては鈍足ってレベルじゃない。そういう意味だと、全部もりで完全上位互換な真女王がやばすぎる。
なるほどなるほど。俺って強敵に勝つために結局無茶をしているから、三叉成駒は俺に特化しているのか。才能がないのがこんなところで仇になるなんてなぁ。
となると、味方に使うにはやっぱり赤龍報奨の方がいいってことか。

待てよ？　じゃぁ態と赤龍報奨の力を俺が使ったら、相手が俺じゃないと誤解してくれるとかあるかな？　英雄派とか弱点とかついてくるから、一瞬だけなら虚を突けるかも。
それに洋服崩壊や乳語翻訳なら、赤龍報奨を使った方が使いこなせるかもしれないな。やっぱり赤龍報奨の方も使い慣れていた方がいいかもなぁ。
俺がそんなことを考えていると、リーネスはニコニコしながら俺の方を見ていた。
「あれ？　どうかしたのか？」
「……ふふ。実は今、ヒマリとヒツギってば、祐斗に料理を習っているのよぉ」
へぇ～。確かに木場は料理上手だしな。教えるのも上手そうだ。
でもなんでいきなり？　それに、部長達に教わるって方向でもいいような……っ!?
こ、これは思わず誤解がしたくなる流れだぞ!?
……俺が鈍感というか恋愛恐怖症的なあれで色々あったってことを踏まえると、そういう冗談は……ないよなぁ。
「じ、自信もっていいのか？」
「少なくとも、食べ専のヒマリが自分から料理を習おうとしているのだものぉ。好感度は高いわよぉ？」
ま、マジか!?
え、俺ってどんだけモテてるの!?　ハーレム王まで秒読み段階!?
上級悪魔になった瞬間に確定ですか!?
あ、でも料理の腕はどれだけのものになるんだ!?
そこは凄く不安だ。兵藤邸、メシマズはすっごいゲテモノ料理を出してくるからなぁ。
大抵そういうトラブルは、知るとカズヒが張り倒して食い止めてくれるんだ。「料理は愛情。されど料理にするまでは技術よ！　料理にできない奴がアレンジなんて技術あってのひと手間など千年早いわ！」と、ゼノヴィアを武器にしてイリナを撃沈したのは記憶に新しい。
しかも「スラムの残飯料理で鍛えられた私を……なめるなぁ！」と食

べてまでくれるし。
ヒツギはまぁ、変なアレンジと化しないだろうし、味見とかしてから出してくれると思うんだ。見た目はギャルっぽいけど、多分潜在的女子力は高いだろうし。
だけど……ヒマリは大丈夫なのか不安だ。どことなくイリナとかゼノヴィアとかのタイプだ。
俺が内心でがくがくブルブルしていると、リーネスは胸を張っていた。
「大丈夫よぉ。センスはあるから酷いことにはならないわぁ」
「マジで!? 確信持ってるところ悪いけど、根拠は!?」
どこから来るんだその自信は。
俺が戸惑っていると、リーネスは苦笑しながら肩をすくめた。
「その辺は、中間テストが終わったら教えてあげるわぁ」
なんだその前置き!?
しかも中間テストが終わったらッて、カズヒがなんか話す時じゃん。タイミングをそこに被せるなよ。
……まさか二人まで関わってるってことは……流石にないか。

銀弾落涙編　第五話　常に勉強できる奴は、そもそもテスト前に慌てない

和地Ｓｉｄｅ

正直に言おう。俺はテスト前に重点的に勉強とかはしていない。
そもそもテストってのは、今までの勉強の成果を見せる物だろう。ならテスト前に詰め込むのはなんか反則みたいな気がする。というより、大抵のテストは授業でやったところから出てくるんだから、まじめに授業を受けて予習復習をやっていれば大丈夫だろう。よほど勉強ができないタイプとか、生徒を振るい落とす系の学校でもない限り、これで十分点は取れる。
なので、俺は積極的にテスト勉強はしていない。しかしテスト勉強をしている人は多いので、ほかのみんなと時間を合わせられないところは数多い。
と、言うわけでだ。
「……上から順に春っち、インガ姉ちゃん、ベルナの順番だな」
「と言っても、水準としては十分高いわね。これなら来年まで少しずつやれば行けるわね」
「「はぁ～……」」
と、リヴァ先生と一緒に春っち達の勉強を見ることになった。
高校中退なインガ姉ちゃん、ストリートチルドレン出身のベルナ、中学から異形世界に突貫した春っちの三人だからな。今後を踏まえて勉学面を見るのは理に適っている。
ちなみにカズヒ姉さんは、テストに特化した猛勉強の真っ最中。大活躍で縁がある人を経由し、過去の問題用紙を貰って山勘張ることまで踏まえた対策をとっている。

……そこまでやって目標が「脱！　補習＆赤点！　目指せ平均点！」ってのはどうなんだろうか。カズヒ姉さん、地頭は悪くないんだから真面目に授業も受けてるし平均点はいけそうなんだけど。

まぁ、それはともかくだ。

「春菜が一番成績がいいのね。中学時代も基本的に肉体系中心だって聞いていたけれど？」

「あ～、ヴィール様はその辺厳しくてね。それにヴィール様の常時研鑽っぷりを見ていると、勉強も疎かには……さ」

春っちは苦笑しながらリヴァ先生にそう答える。

ヴィール・アガレス・サタン。あの狂気的自己研鑽を見ていたら、最低限の努力水準が上にはなるわな。

まぁ、春っちがお馬鹿にならないのは良いことだ。そこについても感謝しておこう。

と言っても、インガ姉ちゃんもベルナも、学力確認の結果は悪くない。インガ姉ちゃんはなんだかんだで進学校行ってたし、ベルナも良いとこのお嬢様になってたからそれなりの教育環境に慣れてはいるんだろう。

それにしても、春っちが一番上かぁ……意外に思ったのは失礼だから黙っておこう。

「……これでも、これでも高校生活は送ってたのに……っ」

「まぁ落ち込むなよ。この手の勉強ってのは……ほら、あれだろ？日々に継続した積み重ねってのがな？」

インガ姉ちゃんもベルナに慰められ、とりあえず凹んでいる状態から持ち直したらしい。

できれば俺もフォローしたいところだが、まぁそれは良しとしよう。

自分の女が仲良いことは良いことです。ギスギスとかドロドロとか言った擬音が必須な関係は勘弁してほしい。

もちろん、今後もそれとなく探ったりして見守ろう。深入りしてはいけないところとかもあるだろうから、時々リーネスに相談したりとかしよう。

俺はその辺気合を入れ直していると、なんかリヴァ先生がにやにやしている。
「ふふぅん？　カズ君ってば、私達が仲良くて安心してるんだ～？」
「……そりゃそうだって」
誤魔化しきれる自信がないから、その辺は素直に答える。
更にリヴァ先生は、なんかいたずらっ子の表情をベルナ達にまで向けてきた。
「まったくも～。なんで態々学校行ってないのに勉強会をしてるのかって、考えないといけないわよね～？　そう思わない？」
その瞬間、思いっきり慌てるベルナとインガ姉ちゃんがいた。
「……は、はぁ!?　いや別に……学があった方が人生得することが多いとか、そんなだからな!?」
「うんうんうん！　ほら、日本で高校中退とか、今時真剣に人生心配されるからね！　そういうことだよ!?」
盛大に慌てて何かを取り繕う敵な二人に対して、春っちは冷静だった。
「何言ってるのよ二人とも。和っちと大学行きたいって感じでアザゼル総督に相談したじゃ―」
「わーっ!?」
二人とも、そこまで言ってたら流石に気づくからな？
「バッカ野郎！　色々恥ずかしいだろうが！　乙女かって思われるだろ!?」
「そそそうだよ!!　そういうのは、ほら……ね!?」
盛大に慌てている二人に、春っちは呆れを、リヴァ先生はなんていうか……愉悦？
とにかくそんなわけで、こんなチャンスをリヴァ先生が見逃すわけがない。
「あらぁん？　カズ君とのキャンパスライフ、私や春菜が独占していいのかなぁ～？」
すかさず後ろから強襲！
だが甘いな。俺はリヴァ先生にそう簡単にやられないしやらせな

い。
「俺はしたいなぁ、キャンパスライフ。というかいい年の男として、可愛い女の子と楽しいキャンパスライフなんて夢のようなもんだろ？」
「ふぉおっ!?」
あ、間違えてインガ姉ちゃんが撃墜された。
仕方ない。せめて道連れをくれてやるか。
「もちろん、リヴァ先生とも送りたいな。ぜひ一緒にカフェで論文の相談とかしたいもんだ」
「……やるようになったわね、カズ君も」
残念。撃墜には遠かったか。
ま、これぐらいのことはできるようになりたいしな。俺だってモテる男としてそれなりの力量は持ちたいものさ。
「私はもちろんしたいわね。どうせ十年ぐらいは色々不自由しそうだし、大学に通っての勉学っていいわけがないと、デートするのも一苦労しそうだもの」
「お前はストレートに好意を向けてるよな!?」
春っちのストレートっぷりに、ベルナが割と驚愕している。
それに対し、春っちは堂々と胸を張る。
「和っちと並び立てて、ヴィール様に恥じない自分でいたいもの。ずっと私の心にあった、柱ぐらいはしっかり認めるわよ」
ちょっと恥ずかしげだったけど、それでも春っちは堂々としていた。
それに対して、ベルナはうぐぐといった感じだったけど、なんか急にそっぽを向いた。
「……たまにはアタシもしたいけどな！」
「……俺は本当に男冥利に尽きる状態だな。うん」
こんだけ好意を可愛い女の子や綺麗な女性に向けられて、喜ばない男がいるだろうか？　いや、大半はそんなことはない。
うん。ならちょっと頑張るか。
「明日からＯＢやＯＧを探して、過去の入試問題とかの傾向を探るとするか」

「「「いや、まずは今の中間テストで」」」
「なんでシンクロツッコミ?!」
息がいいことは何よりだけど、息が合いすぎじゃね!?
これはむしろ俺の立場がまずいような気が―
「あらあら、仲が良いことで何よりですわ」
―なんでここに朱乃さんが!?
「あら、朱乃じゃない。どうしたの?」
リヴァ先生がそう言うと、朱乃さんはいつもに比べるとどうも影がある表情を浮かべた。
何かあったのか?
「ちょっと問題が発生しましたの。なので、差し支えなければ集合してもらえます? 祐斗くんやギャスパーくん、アザゼル先生も呼んでますので」
……なんかまじな話だな、これは。

「……身もふたもないことを言うけれど、避妊をしっかりすればいいという手段はないのかしら?」
「それ絶対仲間割れで全滅するフラグ誰が初めての女になる科的な順番争いじゃん?」
カズヒ姉さんの発言に、ヒツギが鋭いツッコミを入れる。
いや、確かにそれで解決しそうな気もするけど、壮絶な争いが発生しかねないだろそれ。
仕方ない。ちょっと空気を切り替えるか。
「……とりあえず、話を纏めると……イッセーと部長のアツアツっぷりに当てられた小猫が、体が完成してないのに発情期を発症。猫?という希少種であることもあって肉体に負荷なく問題を解決するのは大変なので、イッセーがとにかく生殺しで我慢しなきゃいけないということになったわけだな?」

俺が注目を集めながら確認したうえで、心の底から同情の視線をイッセーに向ける。
「……頑張れ。いや、本っ当に」
「心からの同情ありがとうよ！」
思わず真面目なトーンで行ってしまい、イッセーからもやけくそ気味な答えが返ってきた。
いや全く。イッセーの問題が解決して恋愛関係が一気に進むかと思ったら、小猫が進みすぎて命の危機とか想定外だろ。一難去ってまた一難だ。
しかも中間テストが迫っているってのにこれだ。更にイッセーの場合、中級昇格試験まで迫ってるわけだしな。
本当に同情する。俺が当事者だとしても、かなりメンタル的にいっぱいいっぱいだろ。
「いえ、妊娠するのがまずいのなら避妊さえきっちりすれば大丈夫だっていうのは具体的な策だと思うのだけれど」
「だからそれやったら仲間割れの余波で私達まで死ぬじゃんか！」
「仁義なき争いとかになりそうねぇ」
カズヒ姉さんが珍しくボケ倒しており、カズヒとリーネスがツッコミに回っている。
カズヒ姉さん、実はいっぱいいっぱいで脳がオーバーフローを起こしてないか？
「でも、テストとか大丈夫ですの？　イッセーはもちろんですけど、小猫も大変ですのよ？」
「……性欲抑制は無理でも、精神安定の軽い薬は必要かもしれませんね」
ヒマリが心配そうに言うと、ルーシアも考え込み気味だ。
「……そういえば、性欲って他の満足感で発散できるって授業でやってたよね？　アニル君が燻製をたくさん作ればいいんじゃないかな？」
「ギャスパー。俺の燻製は魔法のアイテムじゃないからな？　いや、まぁ作っとくけど」

ギャスパーもアニルも。小猫は確かによくものを食べる健啖家だけど、あの状態では食欲とか出てこないと思うぞ。
というか、最近食欲不振気味だったしな。発情期の影響ならこれは難しいか。

……とはいえ、このままってのも問題だな。
イッセーは二つの試験を控えているし、小猫だって中間テストが待ち受けている。
可能な限り何とかしないとまずいんだが……どうしたもんか。
「……イッセー。大変だろうけど頑張って我慢して頂戴。代わりと言っては何だけれど、ご褒美は考えておくから」
「頑張ります、リアス！」
……いや、もしかしたら大丈夫かもしれない。
まぁ、俺もそれとなく見ておこう。やばい時は星辰光で強引に止めればいいか。
というか熱視線を交わしあうなバカップル。そういうのが原因の可能性があるって話だろうが。
「……とりあえず、小猫に刺激のあることはやめとけ。ほれお茶」
ベルナがそれとなくお茶を渡して切り離してくれた。
気が利く上に割と常識人で、しかも乙女なところもあって頼れるところもある。完璧かベルナ。
……うん。こういうのはしっかりと伝えた方がいいんだろうな。
「俺はベルナがいてくれて本当に良かったと思う。これからも苦労かけると思うが、俺もできる限りフォローするから頼りにしてる」
「お!? お、おう。ま、一応懲罰でメイドやってるしな、うん！」
顔を真っ赤にしながらも、まんざらではなさそうだ。
あ、可愛い。
思わず見惚れかけていると、シャルロットがため息を盛大についた。
「……別カップルがいちゃついても意味がないでしょう」
そ、それもそうだな。

俺もちょっと疲れてるか？　少し気合を入れておこう。
深呼吸しながら気合を入れなおしていると、アザゼル先生は少し片手を上げた。
さっきまでイッセー達を茶化す感じで見ていたんだが、なんか急に真剣な表情だな。
「ちょうどいい。実は俺の方で来客が明日あるんだが、事情があってこの家に連れてくるしかないんだ。頼めるか、リアス？」
「先生。ここは一応グレモリー邸ではなく兵藤邸です」
カズヒ姉さんがぴしゃりとツッコミを入れるけど、すぐに軽く肩をすくめた。
「というより、割と色々忙しい上にトラブルまで発生しているんですが？　来客の方にはまたの機会にとはいかないんですか？」
カズヒ姉さんの指摘ももっともだな。
中間テストやら中級試験やらで忙しい上に、更に小猫がこんなことになっている。はっきり言ってドタバタしていて来客を迎えられるような類じゃない。
そんな時期にこんな急に来客関連とか、流石にもうちょっと余裕がないと無理だろ。
リアス部長もなんか怪訝な表情を浮かべて、イリナの方に振り向いた。
「それもそうね。少なくとも私は上から聞かされてないわ。イリナは？」
「う～ん。私もそういった話は聞かされてないわ、リアスさん」
現魔王政権と天界からの代表が知らないということは、完璧に堕天使側の独自案件ってことか。
俺はそう思ったが、リーネスがいぶかしげな表情を浮かべている。
「総督ぅ？　私もそんな話は聞いてませんけれどぉ？」
まじか。
俺やヒマリならともかく、リーネスまでも聞いてないってのはおかしいな。一応立ち位置としては、リーネスがナンバー2になるわけだ。無理を入れてでも接触させるべき人物が来るなら、リーネスにも

話は入っているはずだ。
なんか不穏なんだが。先生も真剣な表情を浮かべているし。
「ああ。ついでに言うと、その来客はお前達にとって敵意を通り越して殺意を抱くような相手だ」
「……はい？」
ヒマリがきょとんと首をかしげるが、勘弁してくれ。
敵意を通り越して殺意ってなんだ。誰が来るんだよ。
俺がなんていうか警戒心を全力で出してしまっていると、何かに気づいた感じのイッセーに先生が振り向いた。
「お前が想像している奴で半分は正解だ」
「半分正解って……ヴァーリ達が来るんですか⁉」
ヴァーリ達が、この街に来る？
あ～。確かにあいつらが来るなら、敵意ぐらいは出すかもなぁ。
というか、和平会談のタイミングで裏切ってテロ組織を連れ込んだ裏切り者だからな。敵意は普通に向けれるぞ俺は。
ただ、殺意を抱くほどか？
「……警戒は当然するけれど、ヴァーリチーム相手に殺意を抱くほどのことはないと思うけれど？」
「そうね～。なんだかんだで割と助けられているし、アグレアスの時とか何時の間にか消えてたから、むしろお礼を言いたいぐらいよね」
リアス部長とイリナはそう言うし、カズヒ姉さんも不満気ではあるが殺意が出そうな雰囲気でもない。
「真面目な話、あいつら敵味方の判別基準に立場を踏まえない、完璧に気分屋の根無し草よね。正直同じ組織にいると胃に負担がかかるタイプだわ」
めっちゃバッサリ切っているけど、言い得て妙というかなんというか。
自分達のしたいしたくないに対して良くも悪くも忠実というか。完全に気分屋なタイプだ。
完璧にフリーランスでやっていくというか、フリーランスでないとやっていけないタイプだよなぁ。真っ当な組織ならよほど余裕がな

い限りは手を出さないタイプだろう。傭兵として名を上げることはあっても、軍人として名を上げるのは難しい。
そして傭兵なんて言うのは、戦力に余裕がない時に仕方なくするぐらいがちょうどいいわけで……。
いや、思考がそれたな。まぁ、真面目に相手をするのが馬鹿らしくなるくせして、能力がありすぎるから真面目に考える必要がある面倒な奴らだ。
「……アーサーとか来るのかよ。勘弁してほしいぜ」
アニルも割とげんなりしているな。まぁ、ペンドラゴン分家からすれば、本家の跡取りが家宝持ち出してテロリストなんて、敵意とか殺意とか通り越して憎悪レベルだろうしなぁ。
「……ヴァーリチームが来るんですか？　まぁ敵意は感じるというか基本禍の団（敵）ですけど、いきなり殺意がわくかというと……」
「そうね。割と色々と助けてもらっていることもあるもの。警戒は必須だし仲間扱いするわけではないけれど、いきなり殺意を抱くかというと……」
木場とリアス部長がそう言いながらカズヒ姉さんを見るけど、カズヒ姉さんもため息交じりに肩をすくめた。
「とりあえず、事前に来ると分かっているのなら即戦闘はしません。まぁ、帰る直前に後ろから始末できればそれに越したことはないですけど」
「やめてくれ。今回のは割とマジな話なんでな」
先生はため息をつくけど、なんか話が妙だな。
まぁ好きなわけではないし、敵ではある。とはいえなんというか、真面目に殺意を向けるのもあほらしくなる馬鹿どもってのが総評だ。
はっきり言って真面目に付き合う方が疲れるような手合いだ。社会人とか組織人としては間違いなく欠陥だが、方向性が悪い意味で自由だから、こういう流れで来るなら遊びに来る感覚な気がする。
ただ、先生の言っていた半分っていうのが気になるところだな。
「……今この場で話したりはしないんですか？」
「すまん。可能な限り情報を出したくないんでな。ただ向こうから殺

しに来るってことはないから安心してくれ」
俺にそう答える先生は、どうも歯切れが悪い。
なんだろう。すっごい嫌な予感がするなぁ……？

そして次の日。

「ドライグ、会いに来た」

……もっと問い詰めておけばよかったと、俺は今更になって後悔した。

銀弾落涙編　第六話　ラスボスはダンジョンにいる物であってホームに襲い掛かる者ではない

和地Ｓｉｄｅ

「ドライグ、会いに来た」

玄関から入ってきたオーフィスに、俺達は一瞬思考が停止した。
だが俺は強引に意識を切り替える。この思考停止は、下手をすると本当に命に関わる。むしろなんで俺死んでないんだってレベルだ。
速やかにバックステップをして、後ろで待機していたメイド達の方に移動。更に瞬時に発動体としての魔剣を創造し、星辰光も発動。
ショットライザーも装着するが、即座の変身をしようとして、俺は少し思いとどまった。
殺しに……でも、戦いに……でもなく、会いに来たというオーフィスの発言。更に昨夜の先生が言っていた説明の数々を思い返す。
つまり、アザゼル先生が言っていた客人がこいつってことか？　だとするといきなり攻撃ってのはさすがにためらうな。
「とりあえず春っち達は下がって……っていうか、インガ姉ちゃん大丈夫か!?」
オーフィス視点では裏切り者に近いメイド達の安全確保は必須だろう。というか、インガ姉ちゃんを含めて数人は失神している。
「……冗談、だろ……っ」
「……死ん……だ……っ」

ベルナも春っちも顔面蒼白だよ。そりゃそうだ。
メリード以外の兵藤邸のメイドは、いわば懲罰としてのメイドであり、禍の団を裏切ったメンバーと言ってもいい。
目の前に大ボスが現れれば、そりゃ恐怖におののくというものだ。
ああもう！　先生は何を考えているんだ!?
俺以外のメンバーも全員が戦闘態勢だけど、カズヒ姉さんだけは武器を持ちつつも手で皆を制している。……というか、向けている相手はオーフィスではなく先生だ。
「とりあえず全員一旦抑えて！　あとアザゼル総督、客人はオーフィス（彼女）と見ていいようだけど、説明してくれるかしら？」
「……っ!?　どういうこと、アザゼル!?　オーフィスという存在がどういう存在か、貴方だって理解しているでしょう!!」
敬語ぶん投げたカズヒ姉さんのブチギレ気味な詰問に、リアス部長もすぐに悟ってアザゼル先生に激怒する。
そりゃそうだろう。自分の管轄地区にテロリストの親玉を連れてくるとか、これで何も言わないなんてことの方がおかしい。
というかだ、凄く嫌な予感がしてきたんだが。
「……そもそも私もイリナも知らない以上、警備をしている者達だって把握していないでしょう。……アザゼル、いったいどれだけの人員や結界を欺いたというの!?」
そうなんだよなぁ。
悪魔関連がこんな事態を知っているなら、それなりの情報はリアス部長に伝えられているはずだ。魔王の妹でありグレモリー本家の次期当主は、それぐらいの権利を持っている。
それにイリナが何も知らないってことは、天界や教会も把握してないんだろう。天使長ミカエル様の直属たる、転生天使のA（エース）であり、この駒王町における彼ら側のトップがイリナにだからな。流石に知っていたらバチカンもセラフも伝えているはずだ。
そして駒王町の結界だって、オーフィスレベルの存在が入ってこようとするなら流石に感知するはずだ。警備メンバーだっていないわけではないし、三大勢力の地球側における陣地としては、駒王協定の

場でもあるこの街は最上位レベルの価値を持っているんだからな。
そして、リーネスですら把握してないってことは、これはアザゼル先生の完全な独断だ。
そりゃキレる。
「協定違反よアザゼル！　堕天使が悪魔や天界から糾弾されても仕方がないほどの！」
部長はもうかんかんって言葉も生ぬるい。
「それどころか、各勢力の和平が完全崩壊しかねない暴走よ！　自覚はあるの!?」
カズヒ姉さんは、返答次第では殺しに行きかねないレベルだ。
すでに戦闘態勢を万全にして、とびかかる寸前といってもいい。
「誰よりも和平を推し進めてきたあなたが、こんなことをするだなんて全部を台無しにしかねない行為だわ！　ことと次第によっては、この場で殺されても文句が言えないって分かっているんでしょう―」
「―待って」
その時、部長がカズヒ姉さんの肩に手を置いた。
まだ色々激高寸前だけど、部長は冷静になっている……？
「……和平を推し進めてきたあなただからこそ、これが必要だと思ったのね？　それだけの、価値があると？」
真っ直ぐに部長が向ける目を見て、先生は静かにうなづいた。
「ああ。成功しても社会的に首が飛ぶだろうし、失敗すりゃ物理的に俺の首は飛ぶ。だが、それだけの価値があると思ったからこそいろんな奴らを騙してオーフィスを連れてきたんだ」
……なるほど、な。
確かにこの人はトラブルメーカーであり、人を引っ掻き回すは勝手に人体実験をするわ、しかも能力がある聖である意味成果が出て面倒なことになるは、そのくせろくに反省すらしないわで色々と迷惑な人だ。
だが、あくまで悪ふざけレベルでとどめている。好き好んで世界を揺るがしたりはしないだろう。
その辺は天然で悟っているのか、比較的慌ててない組のヒマリは指

を口元に当てて考えたうえで、うんと頷いて微笑んだ。
「ん～。まぁ、先生は人に迷惑をかけることはあっても、世界を破滅に導いたりはしませんのよ？　信じてもいいと思いますの！」
「てめえなんて酷いことを!?　天然だから流してやるが、今度言ったらお前を破滅に導くからな!?」
「いやいや。これだけのことやってんだから、むしろ先生が破滅に導かれるんじゃない？」
　怒る先生に鋭い現実を突き付けながら、ヒツギもため息交じりで苦笑した。
「ま、此処で戦闘しても勝ち目はほぼないし、街が跡形もなく吹っ飛ぶじゃん？　向こうが戦闘する気がないなら、様子見してもいいんじゃない？」
　そう言いながらイッセーをちらりと見ると、イッセーも少し戸惑いながらも構えを解いた。
「……そうだな、ヒツギ。俺は先生を信じます。これで禍の団がどうにかなるかもっていうなら、話ぐらいはしてもいいです」
「助かる。まぁ、オーフィスそのものはグレートレッドが関わらねえならこっちに敵意を向けたりはしないだろうさ」
　先生もほっとしているけど、確かに。
　さっきから敵意や殺意どころか、戦意すら見えてないからな。
　そして戦闘になれば十中八九どころか百中九十九でも足りないぐらいまず負ける。しかも周辺被害が、都市規模どころか地形規模で出てくることも間違いなし。
　なら、様子見ぐらいは……いいか。
　そんな感じで戦闘態勢は緩むなか、リヴァ先生が手を上げる。
「で、オーフィス以外はどこにいるのかしら？　昨夜の話だと、ヴァーリチームもってことでいいと思うけど？」
　あ、そうか。
　ヴァーリチームで半分正解と言っていたから、ヴァーリチームも一人は来るとみていいだろう。
　あいつら苦手なんだよなぁ。オーフィスとは別の意味で胃や神経

に悪いというかなんというか。
俺が内心でげんなりしていると、魔方陣が展開して何人か出てくる。
……すいません。どこかで見たような狼が、ダウンジングサイズされているんですが。
「やっほ～、赤龍帝ちん！　白音はいないのね？」
「お久しぶりです、赤龍帝さん♪　試合、感激しました♪　サインもください」
……黒歌とルフェイか。
……相応に因縁があるのに笑いながら来る黒歌もそうだが、ルフェイはルフェイで自分が敵対勢力だって自覚があるのか分からない。
こいつら、基本的に社会不適合者だよなぁ。縦社会とか規律重視の組織とかと相性が悪すぎる。
ちらりとアニルを見ると、俯いて背を曲げて腹を抑えていた。
あとで胃薬を差し入れしておこう。俺はそう決意した。

そしてあまり人が多くても空気が悪くなると思い、俺は一旦席を外してトイレに向かった。
そのあと手をしっかり洗って消毒してから、色々と過負荷でストレスが溜まったので、何か食べて発散しようと別館のミニキッチンに向かった。
一応俺、料理は出来なくはない。というか、家庭科の授業や野営の指導を真面目に受けたので、どっちかといえば作れる側だ。自炊はできるに越したことはないし、脱走するなら野営はできないといけなかったしな。
とはいえまぁ、今回作るのはインスタントラーメンカップではなく袋麺だけどな。あとは栄養バランスを考えて、野菜数種類を細切りして炒めて、チャーシュー数枚と水菜と一緒にラーメンに盛り付けて

……と。
さて、やけ食いと……と思ったら、なんか客間の方が騒がしい。
「何かあったかぁ～？」
「きゅ、九成！　悪い、オーフィスがドライグに「乳龍帝」とか言った所為で発作起こしたんだ！　薬はかけたから大丈夫！」
『す、すまん……。何とか収まったから、大丈夫だ』
普段あんまりイッセー以外とはしゃべらない、ドライグが思わず声を出すレベルか。
実はドライグ、イッセーが毎度毎度おっぱいで何かしら赤龍帝の力を進化させたりするもんだから、心労を患って心を病んだらしい。
で、カウンセラーも封印されたドラゴンゆえに手探りでやっていたんだが、精神安定用の薬液を籠手の宝玉に振りかけると効果があると判明。毎日定期的に振りかけることで何とか持ち直しているらしい。
とはいえ、この流れで乳龍帝とか冗談抜きでトラウマだろう。心底同情する。
「……申し訳ありませんが、乳龍帝というのはドライグにとってトラウマなんです。意図的になったというより流れでなったものなので、あまり触れないでくれませんか？」
「ん。わかった」
流石に哀れんだのか、シャルロットが少し緊張しながらオーフィスにそう告げる。
あとあっさりだな。なんというか、こうしてみると純粋かつ素直な子供にしか見えない、
というか、何をどうしたらテロリストの大ボスがこの流れで言うんだよ。
俺は思わず半目になった。というか、ついラーメン持ってきちゃったな。さっさと戻って食べるか。
と思ったら、なぜかオーフィスがこっちを見ている。
俺はいったい何をした!?　この流れで急に俺がピンチになるのか!?
警戒したのでとりあえずラーメンを置いて、向き直る。

あれ？　視線がずれて……あ。
俺はラーメンを再び持って立ち上がると、オーフィスの視線がそっちに向いた。
ら、ラーメンに興味津々!?
「それ、なに？　ヴァーリが似たようなの、よく食べてる」
「……ラーメンという料理だ。中国の料理をベースに日本でいろいろ魔改造された料理だな。西洋風に言うなら、一種のスープパスタ……でいいんだろうか」
なんかちょっと戸惑うが、意外とまじに視線を向けてきている。
というか、視線がラーメンに固定化されてるな。
「……興味があるなら、食べるか？」
思わず聞いてみると、素直にこくんと頷いた。
そっと差し出そうと思ったが、冷静に考えると箸を使えるのか？
なんか不安になったが、そこでカズヒ姉さんがため息をつきながら、異界の蔵（スペイス・カーゴ）からフォークを取り出す。
「ほら。これでくるくると麺と野菜を汁と絡めて食べなさい」
「ん。食べる」
……素直にもぐもぐ食べてるけど、口元めっちゃ汚れてるな。
……本当に小さい子供にしか見えないぞ、これ。
「ああもう。いろいろ汚れてるでしょうに。ほら、これを首に巻いて」
毒気を抜かれたカズヒ姉さんは、布を取り出すとそれで首元を巻く。
素直にされるがままのオーフィスが本当に子どもにしか見えないので、なんというか……。
「「「母親みたい」」」
俺やイッセー含めた何人かがぽつりと呟いた。
……なんか盛大に肩が震えたんだが。
「カズヒ。……深呼吸な」
「総督、そこまで私はどうしようもなくないですから」
なんで先生がカズヒ姉さんにフォローする流れなんだ。
フォローするようなことではないような気がするし、というかこう

いうのはむしろリーネスが―
「あれ、リーネスはどこに？」
「ああ。鶴羽が来たんで誤魔化してる」
俺の質問に先生がそう答えた。
先生、本当にこれ以上のサプライズとかないことを期待しますからね。あったらぶちのめすのでそこんところよろしく。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「え、今日立ち入り禁止なの？　なんで？」
「ごめんなさいねぇ。今ちょっと、オカ研メンバー以外は立ち入り禁止なのぉ。総督と部長とカズヒの三人が合議する必要があるレベルなのぉ」
「リーネス。教会側のトップはカズヒじゃなくてイリナでしょ？」
「……あ」
「ギャグじゃなくて天然なわけ!?　イリナ泣くわよ!?」

銀弾落涙編　第七話　宿命の時は近い

和地Ｓｉｄｅ

そんなわけで、オーフィス及び黒歌とルフェイは、一時的に兵藤邸に住むことになった。
真剣に勘弁してほしい。俺達中間テストが迫ってるし、イッセー達に至っては中級昇格試験だってある。しかもそれが終わったら、カズヒ姉さん関連でマジ話があるってわけだ。
……となると、だ。必然的に相手をするべきは、中級昇格試験はもちろん中間テストの問題もない奴が出張るべきだ。
つまりは俺だ。
そんなわけで、できる限り俺がひきつける方向になる。メイド達には任せてはいけないだろう。だって皆禍の団から抜けたわけだから、オーフィスが意に介していないとはいえ精神衛生上よくないわけだ。
まぁそんなわけでだ。必然的にサポートに回るべきは―
「……さぁ！　こんなのもどうかしら！」
「んまんま」
―全力でオーフィスに餌付けを敢行するリヴァ先生だった。
何やってんのこの人。まじで何やってんの!?
テロリストのトップ及び、大絶賛テロを仕掛けられている勢力トップの娘がすることじゃない。
とうか、こんなところで主神の娘としての権限を集めて菓子類買ってくるなよ。メイド達の気晴らしにも買ってきたのは良いことだけど。
「……とりあえず、気遣いができるリヴァ先生は凄いなぁということにしておくか」
「ふふん。できる女を恋人の一人にできて、カズくんはもっとふんぞ

り返っていいのよ？」
はいはい調子に乗らない。
ま、綺麗と可愛いが同居しているからなんとなく頭を撫でてみる。
……満面の笑みでほんのり頬を赤らめないでくれ。俺のメンタルがときめく。
というか、テロリストの親玉がいるところでするようなことでもないな。ちょっと気を引き締め治すか。
といってもだ。もぐもぐと回転焼きを食べるオーフィスを見ていると、なんというかこっちが警戒するのも馬鹿らしくなる。
ここだけ見ていると、やっぱりただの純粋な子供にすら見えるな。テロリストの親玉には思えない。
「……で、どうするんだよリヴァ先生？」
「ふふん、まっかせなさい！　リヴァ先生はやる時はやるのよ？」
「それはもちろん知ってるけど……どうするんだ？」
アザゼル先生とタイプが近いから、やるべき時はしっかりやってくれる人なのは良く知ってる。俺も何度も助けられてるしな。
だけど、さすがに龍神を相手にどうしようと―
「じゃぁオーフィス？　ぶっちゃけるけど、グレートレッドを狙うのってやめられないかしら？」
―ブッコんだ!?
……いや、これはあれだ！
ここ数日の餌付けと観察で、いきなり攻撃をされるほどではないと悟ったんだろう。そういうことであってほしい！
「……でも、グレートレッドがいると、次元の狭間で静寂を得れない」
「そうねぇ。でも正直、今の私達はそれを了承できないのよ。とりあえず理由を説明するから、まずは聞いて頂戴ね？」
お、おお……。
これはあれだ。外国語講座におけるリヴァ先生の雰囲気だ。まさに先生！
いや、幼稚園児レベルの時と同レベルのやり方で通用するオーフィスはどうなんだ。そりゃ外見はもはや幼女レベルだけど、それにし

たって千年は生きてるはずだろうに。
「まずはっきり言うと、今の三大勢力や神話勢力は和平を結びまくりの真っ最中。そうなると自然と交流も増えるけれど、移動にはどうしても次元の狭間を利用する部分があるの。なので、次元の狭間を完全に独占されるというのは了承しきれないわ」
「次元の狭間、必要？」
「必要ね。最も、オーフィスが禍の団に協力をしないでくれるっていうなら妥協は可能だと思うわ。例えば、一日数回毎日同じ時間帯にのみ使用可能にして、定期便という形にする……といった感じね。人間界で言う列車や旅客機みたいな形にするの」
とまぁ、噛んで含めるように代案まで出している。
この辺、やはり年季と経験が違うか。更に外国語講座の講師をやっていたことも大きな影響を与えている。
できる女だリヴァ先生。そんな彼女の惚れられているのは誇らしく思うべきか。
うん。恥じない男でいるよう精進しなければな。
「……で、よしんばこれは上手く行ったとしてもう一つ。次元の狭間に何かしらの影響が出ると、他の世界にも影響が出かねないところが危険なのよ」
「我が次元の狭間にいる、危険？」
「その手の研究者はそう推測しているわ。今の世界の安定は、次元の狭間にいるのがグレートレッドだからというのが共通見解だから、オーフィスに切り替わるというのがその時点で危険じゃないかって思われているの。特に今のオーフィスだと尚更って言うのが、多くの専門家の意見ね」
「……困った。我、静寂を得たい」
うーんと頭を捻ってくれるオーフィスだけど、さてどうしたものか。
「そうねぇ。だからまぁ、その辺りの代案をお互いに考えましょう？
あ、その前にポッキー食べる？」
「食べる」

……完全にノリがマンツーマンの家庭教師と教え子だ。
俺はそんな雰囲気に何とも言えないものを感じていると、ふと気が付いた。
「……あ、一つ思いついたものがあるんだけど」
「ん、なに？」
オーフィスが小首を傾げるので、俺はまぁ、思い付きを素直に語ることにする。
「レーティングゲームのフィールドとか、異空間を作る技術は三大勢力とかが持ってるだろ？　アレでそれっぽい空間を作って代用品にするっていうのは、条件次第じゃサーゼクス様達も了承しそうな気がする」
その提案に、リヴァ先生は考え込む表情だ。
うん。思い付きだからアウトってことはあるだろう。その辺はどうなんだろう。
「確かにそれならお父様も了承しそうだし、オーフィスの場合蛇とか色々なものを用意できるから、定期的な支払とかでＯＫも出そうね」
あれ？　意外と好感触？
そう思ったけど、リヴァ先生はやっぱり苦い表情だ。
「でもそんなんでいいなら、それこそ英雄派の霧使いで十分でしょうしねぇ。ほら、疑似京都なんて作れるならそれなりの結界作れるでしょうし」
あ、そうか。
英雄派のゲオルグとかいう、絶霧（ディメンション・ロスト）使いがいたのを忘れてた。霧を使って結界装置とか結界空間を作れるアイツなら、そりゃ当然用意できるはずだ。
でもオーフィスがそれをしないということは、これは無理ということかぁ。
俺とリヴァ先生が同時にため息をつこうとしたときだった。
「……ゲオルグに頼めば、静寂の空間、作れる？」
唐突に、オーフィスがちょっと興味ありそうな表情で言ってくる。
な、なんだなんだ？

俺とリヴァ先生は顔を見合わせるけど、まぁ……言ってもいいのか？

「そうね。それなりの対価を払えば作ってくれるかもしれないわね」

「あとはまぁ、レーティングゲームの技術を応用してもできそうだけどな。できればテロリストよりは真っ当な方に対価を払ってほしいけどな」

俺たちにそういわれて、オーフィスは少し考え込んで―

「……対価、蛇（これ）で足りる？」

―蛇をいくつか作り出してきたんですけど、この龍神。

「……とりあえず、後でお父様に相談するわ。それならこっちでどうにかできるだろうし、蛇（それ）は仲介料ってことで。あ、カズ君もアザゼル先生に仲介できるから、仲介料であと数匹頂戴？」

リヴァ先生何言っているの!?

あと対価で払ったものを仲介料止まりにするなよ！　ぼったくりだろそれ!?

「わかった。じゃ、これで」

更に増やすなオーフィスぅううう！

「いやいやいやいや！　ちょっとストップ！」

俺は思わず全力でツッコミ入れたよ。

あれぇえええ!?　案外マジであっさり解決しそうだぞぉおおおお!?

オイオイオイオイ。こんなんで解決してマジでいいのか？

色々苦労している重鎮達、ある意味で憤死するんじゃないかこれぇ!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、素直に吐きなさい。私だけ蚊帳の外ってのは無しにしてよね？」
「分かったわよぉ、鶴羽。……実はアザゼル先生が、オーフィスを無断で内密にイッセーに接触させたのぉ」
「ゴメン想定外!?　またアザゼル先生が変な物作ったのかと思ってた。イッセーのおっぱい好きをお尻とかうなじに向ける機器とかだと」
「そのインスピレーションを与えかねない想像は聞かなかったことにしておくわぁ。……でも、オーフィスはイッセーに興味を持っているみたいなの」
「マジかぁ。っていうかこれ、ばれたらマジでやばいことになるわね。ソーナ会長には悪いけど、黙っておいた方がいい感じかも。あと、大丈夫なの？　神経すり減ってない？」
「そうねぇ。ただ、オーフィスは意外と聞き分けがいいというか、仲介役のヴァーリチームの方が困っちゃう感じだぁ」
「……何だか意外だわ。虚無を司る龍神にして、禍の団の盟主でもある存在が平和的に対応してくれるなんて」
「むしろ、純粋な子供って印象ねぇ。イリナはトランプしてたわぁ」
「それはそれでどうなのよ。和地やカズヒが別の意味で頭抱えそうじゃない。……で、このままってわけにはいかないと思うんだけど？」
「一応、時期を見てからミカエル様や魔王様方にも話すそうよぉ？中級昇格試験までに、それとなく話を通すつもりらしいわぁ」
「ま、妹や直属まで巻き込んでるんだから伝えるべきね。っていうか、マジでカズヒや和地が心配なんだけど……大丈夫なの？」
「気になるならぁ、一緒に来てみる？」
「一緒に？　ってどこによ」
「昇格試験がもうすぐだからぁ、ついでにオーフィスを冥界に連れて行くのよぉ。それに、参加してみない？」

「……万が一の戦力を増やすつもり？　でもそれなら、兵藤邸に何人も候補とかいるでしょうに」
「……春菜達はぁ、やっぱり立ち位置的にちょっと心労が……ねぇ」
「……今度お見舞い的なあれしとくわ。それと、そういうことならついていくわ」
「ありがとう、鶴羽ぁ」
「当然でしょ、リーネス。カズヒもあなたも私の大事な親友なんだからさ」

「やぁ曹操。アレの調子はどうかな？」
「ミザリか、安全確認や慣らし運転は終わったよ。今度動く時にでも、使ってみようかと思ってるんだ」
「ふふ、用心されてるようで何よりだね。できれば使う時は、僕も連れて行ってくれると嬉しいかな？」
「ふむ。そういうことなら、ここ数日はこっちにいてくれないかな？」
「というと？」
「動くことは決まってるし準備も万端なんだけど、タイミングがどうしても予定を設定できなくてね。当たりはつけているけど、いつ動けるかは連絡している余裕が無さそうなんだよ」
「あ～。なんか死神臭いと思っていたけど、そういうことかい？」
「ああ、これで俺達英雄派のある意味で最大の目標が可能かどうかを試すことができるよ。ただヴァーリが色々と連れ回しているみたいだし、下手をすると赤龍帝のところにいるかもしれないんだ。だから裏取りができた瞬間に突貫って感じだね」
「それはいいねぇ。なら、当分はこっちにとどまりっぱなしってことでいいかな」
「お、思った以上に乗り気だね、ミザリは」
「グレモリー眷属は最近かなり目立っているしね。それに注目株では

あるけど、直接顔を合わせたのはないも同じだからさ」
「オーケー。なら、部屋を用意させるからちょっと待っておいてくれ」

「……アルケード、裏は取れているかい？」
「……ああ。ある程度は記録できたが懸念がある」
「なにかな？」
「どうも同じように動いている奴がいたようだ。こちらが気づかれないようにしたので詳細は分からないが、あれはおそらく―」
「―へぇ？　これは、こっちも別の形で動いた方がよさそうだねっと」

銀弾落涙編　第八話　宿命が追い付いた時。

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで、イッセー達の中級昇格試験当日。
転移で試験会場近くのホテルに移動した俺達は、そのままレストランで時間を潰していた。
まぁ、はっきり言って中級昇格試験で落ちる心配をしている奴は一人もいない。最悪落ちたにしても、それは筆記やレポートが悪かったからになると思っている。
だってそうだろう？　常識的に考えて、殆ど全員が元七十二柱や番外の悪魔という由緒正しい上級悪魔で構成される、更に自主鍛錬を鍛えに鍛えているサイラオーグ・バアル眷属と真っ向から渡り合ったのがリアス・グレモリー眷属だ。加えてイッセーは性能に限定すれば眷属でぶっちぎりトップと言っていいだろう。
中級昇格試験というのは、裏を返せば中級になる余地のある悪魔の試験だ。現状の転生悪魔が戦力としての資質が重視される以上、戦闘能力の平均は中級悪魔相当。慣れる可能性を見出されているのなら、大半は中級の下。強い奴にしたって中級の上位ぐらいだ。
今のイッセーの戦闘能力は上級の上位。それもあくまで通常の禁手であり、三叉成駒や真女王なら最上級クラスは確実に届く。シャルロットが使える実践なら、既に龍王クラスとも勝負になるだろう。
やれ神の子を見張る者の最高幹部やら、魔王の血を継いだ今代の白龍皇やら、龍神の力で底上げされた魔王末裔やら、サーヴァントを従え星辰奏者と仮面ライダーを併用する悪神やら、最強の神滅具を宿す覇王の末裔やら、心身共に常人では絶対にできない研鑽を積んだ神滅具保有者と、イッセーが戦ってきたのはどいつもこいつも下手な最上

級悪魔クラスを余裕で倒せるような連中だらけだ。
よっぽどのイレギュラーじみた偶然が傘らならない限り、それなりに警戒していれば後れを取ることはまずない。よしんばとっても、戦いぶりで判断されるから負けても問題はさほどない。
なわけで、俺達はオーフィス達に注意を払いつつもゆっくりしているわけだ。
ちなみに試験が終わったら合流して、ある程度だべって休憩してからサーゼクス様のところにオーフィスを連れて行くということになっている。
まぁ、メイド陣営であるインガ姉ちゃん達は今回欠席。一応皆立場が立場だし、その辺りの配慮もあるってわけだ。
とはいえ……。
「鶴羽が来てくれるとは思わなかったな。……というか、大事に巻き込んで悪かった」
「はいはい、そういうの良いから。……あ、それ美味しそうだからちょっと頂戴」
と、リーネスから聞き出した鶴羽も参加してくれている。
「まったく。そりゃ私はシトリー生徒会側だけど、和地の味方なんだからね。こういう時は頼ってほしいんだけど？」
唐揚げをもぐもぐしながら、ちょっと不満げな表情を鶴羽は浮かべてくる。
……そうだな。
鶴羽だけに内緒っていうのはやっぱりあれだった。素直に反省。
「……悪かった。これからはもうちょっと頼ることにするよ。ただし――」
これは言っておいた方がいいよな。最も真剣すぎるのもあれだし、ちょっと笑みを浮かべながらだな。
「――俺に頼れることがあったら頼ってくれ。あんまりやりすぎない範囲なら、力になるぐらいはするからさ」
「……はわぁっゴホッゲフッガハッ!?」
むせたぁあああああ!?

「鶴羽、鶴羽しっかりしろぉおおおお！」
なんでそんな盛大にむせる!?
あと女の子がしたらいけない顔してるからな!?　色々口から出てて大変なことになってるからな!?
「……見ました？　あれがナチュラルジゴロってやつですよ、ボス」
「……あれは鶴羽が紙装甲なだけよ。っていうかボスって言うな」
すいませんリヴァ先生にカズヒ姉さん！　ちょっとフォローしてくれませんかねぇ!?

そんなこんなで大分経った。
一応ドリンクバーとかはしっかり全員分頼んでいるし、少しずつ頼んでいるつまみの軽食は高い奴にしているから、まぁ大丈夫だろう。
オーフィス達はフードをかぶったり気配を術式で消したりしながら、少し離れた席で食べたりだべったりしている。フェンリルはペット持ち込み禁止だということから、魔法で陰に潜んでいるらしい。……ペット扱いは流石に同情する。
正直かなり気になっているが、しかしまぁ、暴れる気配がないならとりあえず殴り倒すのはやめておこうといった感じで一致している。アニルはペンドラゴン家絡みもあってピリピリしているが、自覚があるから比較的距離をとっている感じだ。
そしてそんな感じでイッセー達の試験も終了したんだが……。
「イッセー。お前何やってんだ」
「そ、そんな目で見るな！　俺だって未だに信じられないんだ！」
「いえ、どう考えても想定できたことでしょう」
俺とカズヒ姉さんから左右でツッコミを喰らい、イッセーは見事に狼狽している。
なんということでしょう。この兵藤一誠、中級昇格試験に割と実戦モードの拳を出して、対戦相手の人を壁抜きするほど吹っ飛ばしたの

です。
……最初っからなんか実技にかなり力を入れたがっている感じでしたが、まさかマジで不安だったから高めたかったのか。
確かにまだ見ぬ隠された強者がいる可能性はあるだろうけど、前代未聞の領域に突入した赤龍帝に喰らいつける牙の持ち主とか、万が一でも多すぎる確率だろうに。
俺は真剣に頭を抱えたいというか、ぶつかって殴り飛ばされて一発KOになったその相手に同情した。
中級昇格試験で新次元に突入した赤龍帝とか、ないだろ普通。RPGなら序盤のボスが相手かと思ったら、終盤のボスが出てきたレベルだろう。むしろ良く心が折れなかったと褒めてやりたい。
カズヒ姉さんも同情しているのか呆れているのか、白い目を割と真剣に向けていた。
「……前から思っていたんだけど、貴方今度サイラオーグ・バアル眷属に菓子折り持って謝りに行きなさい」
「え!?　なんでそこでサイラオーグさんが出てくるんだよ!?」
思わぬ展開にイッセーも面食らうけど、カズヒ姉さんは首を横に振った。
「サイラオーグ・バアルじゃなくて、サイラオーグ・バアル眷属よ。失礼どころか無礼なことしてるって自覚がないの？」
カズヒ姉さんははっきりと言うと、向き直って視線の高さも合わせてイッセーを睨んだ。
「……まず今回の件で、貴方は彼らを中級悪魔になれるレベルだと思っていたようなものよ？　彼らは殆どが由緒正しき上級悪魔で、更に自己研鑽を欠かさないという珍しい長所まで持っている。そんな彼らの筆頭たる、女王（クイーン）のクイーシャ・アバドンすら一瞬で倒した貴方の実力は、下手な上級悪魔を圧倒して当然なのよ？」
あ、そこは俺も思ってた。
しかもヴィールに負けたことで、どいつもこいつも更に己を鍛え直しているからな。そのポテンシャルはどいつもこいつも上級の上位だろう。

そんな連中と真っ向から渡り合えるメンツとか、どう考えても戦闘能力は中級悪魔じゃない。
相当問題と思っているのか、カズヒ姉さんはめっちゃ渋い顔をしている。
「万が一の警戒は必須だけれど、当たり前にそうだと考えて立ち回るなんて、多方面に失礼よ。バアル眷属はもちろん、彼らと真っ向から競り合った祐斗達にも、考えようによってはあなたが相手をした下級悪魔にもね」
カズヒ姉さんはそう言ってから、更に続ける構えだった。
まぁ、中級悪魔に慣れるかもと思っているところに、由緒正しい上級悪魔の一族を相手にするぐらいの心構えで来られたら泣きたくもなるか。むしろイッセーの水準、ヴァーリとか曹操といったレベルすら考慮していた可能性があるしな。
そして、なんかカズヒ姉さんの表情が少し変わった。
話が変わるのか？　もう一つの理由があるっぽいから、それか？
「ついでに言えば、そのクイーシャ・アバドンとの戦いに関しても問題極まりないわ。この辺、前から言おうとは思っていたのよ」
「……あ～、それは分かってる。キレて強引に言ったからなぁ……」
イッセーも反省はしているようだが、カズヒ姉さんは盛大にため息をついた。
あ、そっちじゃないのか？
「そもそもキレたことが問題よ。非がない相手に理不尽な理由で殺す気で仕掛けるなんて、真剣に悔い改めることね」
……割と本気で怒っている感じだな。
「ちょっと待ってくれよ。そりゃ俺が大人じゃなかったのは分かるけど、仲間を倒されて怒るななんて言われても―」
「―怒るななんて言ってないわ。そもそも怒る理由がないと言っているのよ」
真正面から、カズヒ姉さんはイッセーの言い分を根源から切って捨てた。
そこには怒りとか呆れもあったけど、それ以上に激情によるもの

じゃない真剣な声色があった。おかげで、イッセーはもちろん俺や部長も息を呑む。
「レーティングゲームはルールにのっとった競技。そしてそれは「王と率いる眷属同士で、相手を殺さない程度に戦闘不能にする」というものよ。その上サイラオーグ・バアルもその眷属も、悪辣なことをせず誠実に戦い、勝利を掴んだの。それに対して許せないと怒るのなら、貴方にレーティングゲームという競技に出る資格はないと断言するわ」
目線を合わせたうえで、カズヒ姉さんははっきりと言い切った。
「レーティングゲームはいわば集団での無差別武道競技。如何に死人が出ないようにルールを仕立てようと、怪我人が出ないわけがない。少なくともルールを破ることも悪用することもない選手が、同じ選手にそれなりの負傷を与えることは大前提よ。……それが許せないならそもそも競技に参加しようとすることを止めるべきだし、参加する選手がそれを怒り恨むことなど、トチ狂った寝言以外の何物でもない」
諭すように告げ、カズヒ姉さんはイッセーの肩すら掴んで向き合った。
「……筋違いの怒りも憎しみも、他者にぶつけていい物じゃない。貴方が仲間が試合で倒されることに怒るのなら、それは試合に参加することを選んだリアス・グレモリー眷属に向けなさい……！」
……イッセーが気圧されて何も言えないのは、その気迫に呑まれているからじゃないだろう。
俺も、部長も、はっきりって聞こえている全員が、気圧されている。黒歌もなんか面食らってこっちを見ているぐらいだ。
それほどまでに、カズヒ姉さんは真剣だった。
むしろ切羽詰まっているとか、何かが張り裂けそうになっている雰囲気だ。それも怒りではなく、心配とかそういった感じだ。
そんな、何とも言えない表情のカズヒ姉さんはイッセーを肩をゆすりながら、言い聞かせるように言葉を選ぶ。
「そんなことは屑の所業よ。人が実行に移していいことじゃ、断じて

ないって気づきなさい……っ」
な、なんだなんだ？
本気でちょっと、カズヒ姉さんの様子がおかしいぞ？
……まるで犯罪を犯そうとする親しい人間を、必死で説得しようとするかのような表情だ。
気づけば、鶴羽とリーネスがカズヒの肩に手を置いていた。
「……その辺よぉ、カズヒぃ」
「落ち着いてカズヒ。貴女はそう言いたくなって当然だけど……ね？」
そう諭す二人に続くように、アザゼル先生も立ち上がった。
「とりあえず、お前が冷静になれ。……例の件もあって不安定気味なのは分かるが、流石にそこまで言うこたぁねえ―」
その言葉が途切れた時、俺達もふと気づいた。
空気が変わった。いや、何かが流れ込んでいる。
「……あ～。ヴァーリ達はまかれたみたいだにゃん」
黒歌がそうぼやいた時、黒い霧が俺達を包み込んだ。
この感覚、覚えている。
これ、絶霧（ディメンション・ロスト）!?

銀弾落涙編　第九話　龍を喰らう者

祐斗Ｓｉｄｅ

気づいた時、ホテルのレストランには僕達以外誰もいなかった。
この感覚は覚えている。京都で絶霧（ディメンション・ロスト）で転移された時の感覚だ。忘れたくても忘れられないよ。
つまりここは、ホテルじゃない。ホテルを模した結界空間を考えるべきだ。
動いてるのは十中八九英雄派。それも、曹操達幹部クラスが関わっている。少なくとも、霧使いのゲオルグは確実に動いているだろう。
「……一応聞くけど、ここまでが仕込みだってオチは無いでしょうね？」
『フォースライザー』
『ＣＲＹ！』
カズヒはすぐに変身できるように準備しつつ、ヴァーリチームの方を鋭く睨む。
流石にカズヒも本当にそうだとは思ってないだろう。ヴァーリチームはこういったことはあまり好まないだろうし、そもそも英雄派とそりが合ってないことは理解している。
それにオーフィスをこういったことに使うなら、直接叩き潰す為に使った方がいいに決まっている。圧倒的最強戦力を囮に使うにしても、この使い方は非効率的だ。
だからこそ、睨んではいるけど敵意や殺意は向けていない。
黒歌もそれは分かっているから、警戒は周囲にのみでカズヒにはない。
「違うにゃん♪　ま、もしかすると英雄派（あいつら）がこっちに仕掛ける可能性

はあったけどね」
「あるなら言いなさいよ！　なんでそんな厄ネタ黙ってるのかなぁ！」
　既にレイドライザーを装着している南空さんが大声で叫ぶけど、黒歌はどこ吹く風だった。
「まぁまぁ。一応ヴァーリチーム（この子達）は敵対勢力なんだし、そこまで求めるのもあれでしょう？　今はこの場を切り抜ける方が重要だろうし……ね」
「同感だ、リヴァ先生。本隊の幹部も後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）の筆頭格も、俺達にとってやばい敵なわけだしな」
　こちらも変身体制を万全にしているリヴァさんと九成くんが、南空さんを宥めながら警戒する。
「お～。やっぱりホテルの内装も再現されてますのよ？」
　何時の間にかヒマリが外の様子を確認している。ただし顔を覗き込むことなく、鏡のようにした聖剣を使って確認してだ。
　それに続くように、ゼノヴィアとイリナさん、ルーシアちゃんとアニル君が、二人一組で前後を警戒しながらレストランの外を出て警戒する。
「……敵影は無し。ですがいないわけがないですよね」
「だろうな。話を聞く限り、どっかで待ち受けてるんだろうぜ？」
　ルーシアちゃんとアニル君がそう判断するなり、ゼノヴィアはエクス・デュランダルを構えながらため息をついた。
「なら考えるべきは、最上階かロビーフロアだな。最も、この位置ならどちらに向かうにしてもロビーに行くべきだが」
「悪の親玉は最上階にいるものだけど、親玉のオーフィスさんは此処にいるものね」
「……では、向かうしかないんですね」
　イリナさんに頷いたアーシアさんも、すぐに回避できるよう、体の調子を確認している。
　そしてイッセー君の禁手のカウントが終わり、イッセー君は鎧を身に纏った。

同時に九成君達も変身や実装を終え、僕達は走り出す。
そしてロビーに出た時、中央のソファーに座る二人の学生服の少年を確認した。
管服を腰に巻いた曹操と、ローブを羽織ったゲオルグが、こちらに気づいて不敵な笑みを浮かべる。
僕達が構えたその瞬間、別の方向から炎の塊が放たれる。
狙いはアーシアさんとイリナさんか！
間に合うか……と思った時、オーフィスがそれを腕で吹き飛ばした。
……意外な展開だけど、とりあえずは不意打ちが被害を出さなくて済んでよかったとみるべきだろう。
如何にリアス部長がいれば限定的に何とかなるとはいえ、アーシアさんが倒されることになれば僕達はアドバンテージを大きく失うことになるだろう。
この奇襲は危なかった。少し動揺が大きすぎたようだ。
「ふふ、かつてのデュランダル……いや、エクス・デュランダルの一撃に対する意趣返しさ。もっとも、オーフィスが止めるとは思わなかったけどね」
……割と根に持っているのか？
僕はそう思いながらも、周囲をそれとなく警戒する。
少なくとも一人、どこかで様子を伺っているようだ。気配はそれとなく隠しているようでいて、分かる物ならば分かるような具合。強者に対するけん制といったところだろう。
他にもいる可能性は考慮するべきだね。これを囮にして、本命が仕掛けてくる可能性は十分にあるだろう。
「さて、終了後に別派閥が茶々を入れておきながら言うことでもないけど、先日のバアルとの戦いと勝利におめでとうと言っておこう。戦いを求める物としては達してしまいそうだし、まして彼らを打倒して若手悪魔ナンバーワンに到達した君達グレモリー眷属は素晴らしい」
「礼を言っておくべきでしょうけれど、テロリストに褒められても喜べないわね」

曹操の賛辞に部長はつれなく返す。
誇り高きグレモリーの次期当主として、テロリストになびくようなことはない。
ただ、曹操はリアス部長を見て少し苦笑いを浮かべていた。
「……これが本当の始めましてかな？　リアス・グレモリー。京都での衝撃的なあれは、初対面とするにはお互いあれだろうしね」
……京都でのあれは、流石にノーカウントにしてほしい。
あれはちょっと酷かった。部長の混乱は僕達より激しかったことは間違いないし、冷静に考えるとかなり恥ずかしいだろう。
「言わないで頂戴。思い出すだけでも恥かしい……っ！」
ですね！　僕はその時意識が飛びかけていたけれど、心労お察しします！
そして曹操の視線はオーフィスに向いた。
「……とはいえオーフィス。ヴァーリ達に連れられてどこに行ったのかと思いきや、赤龍帝と行動を共にしているとはね。まさかと思って探ってみれば、正直驚いたよ」
なるほど。やはり禍の団全体としては、オーフィスが僕達のところにいたのは知らなかったということか。
とはいえ、連れ戻しに来たという雰囲気でもない。何か不穏な空気を感じている。
元々ヴァーリチームと英雄派は剣呑な関係のようだしね。今回のオーフィス絡みで、一気に爆発したと考えるべきかな？
「こっちも驚いたにゃん。ヴァーリ達の方に行ったと思ったんだけどねん」
「そっちにも別動隊を送っている。……ただ、チームメンバーが半分もいないのは懸念事項でね、変化の術を疑似餌にした釣りをしていると踏んだのさ。オーフィスが赤龍帝に興味を持っていることも知っていたからね」
なんかどんどん剣呑な雰囲気になっている。
それもヴァーリ達の方に別動隊を送っている、か。変化の術を疑似餌ということは、仙術を使える美猴辺りがオーフィスに化けていると

いうことか？
「……ルフェイ、黒歌。これってどういう状況なんだ？」
イッセー君がこの空気に違和感を感じたからか、隣にいるルフェイに問いかける。
何時の間にか姿を現したフェンリルも曹操を睨み付けて警戒していることといい、不穏な空気になっているのはどう考えても明らかだしね。
それにして、ルフェイは指を一本立てて話し始めた。
「えっとですね。ことの発端はオーフィス様が「おっぱいドラゴン」に興味をお持ちだったことと、ヴァーリ様がオーフィス様を狙う輩が禍の団にいると気づいたことから、アザゼル総督に出会いの場を打診すると同時に、術でオーフィス様に変じた美猴様を目立つように連れ回すことであぶり出しを行ったということです」
禍の団もいくつもの派閥がある都合上、派閥争いの類があるのは分かっている。これは大きくなった組織には少なからず生まれる問題だから、まぁ納得できる。
そして盟主に対して反感を抱く者も出てくる。これもまた、大きな組織にはままあることだ。
だが、現状で主導権を握っている英雄派が、この流れでこの場に出てくる。
……つまり、そういうことか。
僕やルフェイの視線に、曹操は微笑みをもって応える。
「オーフィスが今代の赤龍帝に興味を示していることは知っていたんでね。ヴァーリも無策でオーフィスを連れ出すことはないと思っていたから、探ったうえで奇襲をかけたらこの通りってわけさ」
そういう曹操に、オーフィスが首を傾げていた。
「曹操、我を狙う？」
特に怒りも失望も感じていない声だ。
虚無や無限を司る存在にとって、この程度のことはとるに足らない……ということか。
「そうなるね、我々には オーフィス（無限の龍神）という存在は必要だが、

オーフィス個人(あなた自身)は不要だと判断した」
そして曹操もまた、悪びれることなく悠然としている。
何より発言内容が不穏だ。……一体何を考えている？
「そう。でも曹操には我を殺せない」
「だろうね。ただ、一回だけやってみよう」
そんな会話が終わった瞬間、曹操の姿が一瞬で消える。
どこに!?　……いや、この気配は!?
僕が気配で位置を察した瞬間、曹操がオーフィスの腹部に聖槍を突き刺していた。
早い！　ここまでの者か、英雄派の長は！
「輝け」
更に曹操が呟いたその瞬間、聖槍から絶大な光が溢れ出す。
「ルフェイ、これはちょっとまずいにゃん！」
「はい！」
ヴァーリチームの二人が動くと、禍々しい煙のような霧が僕達を包み込む。
「光の力を軽減する闇の霧です。濃いのであまり吸い込まないようにしてください」
ルフェイに従って口を覆うけど、これだけの霧が聖槍の光を抑えるには必要ということか。
しかもこの霧をもってしても完全には消しきれないのか、強い光はホテル内を一気に照らす。
くっ！　これだけの力、もしうかつに喰らえば、この場にいる悪魔で耐えられる者は……まずいない！
そして、光が収まり、そこには苦笑している曹操と表情を一切変えないオーフィスがいた。
曹操が槍を引き抜くが、貫かれたオーフィスの傷跡には値は一切零れない。それどころか、圧倒言う間に塞がっていった。
曹操は僕達が攻撃するより早く後ろに下がりながら、特に残念がることもなく槍で肩をぽんぽんとたたいた。
「……とまぁ、こんなわけだよ。ダメージそのものは悪魔や神仏のよ

うに特攻が入らなくても、下手な最上級の異形でも致命傷に届く。だけど彼女には全く届かない。例えるならあれだ。一秒間にＨＰが１パーセント回復する、ＨＰ百万のモンスターに一万のダメージが入ったとかそんな感じだね」

曹操はなんてことの内容に言うけど、やはり凄まじい内容だ。

無限と称される存在なだけある。総量そのものには限界があるような言いぐさだけど、それが無尽蔵に回復し続けて底が見えないのなら、無限と言われるのも当然だ。

「そして俺に反撃しない理由は簡単。いつでも殺せる興味がない相手に、そんなことをする気がないからだ。この世界で龍神の次に強い破壊神ですら、龍神との間にはけた違いの差がある。まさに無限と称されるに相応しい」

それだけの圧倒的な力。分かっていたけど目にすればするほど痛感する。

この世界、僕達が知っている範囲内で、グレートレッドと並び立てる唯一の力量を持つ存在。

このオーフィスを、どうやって害するつもりなんだ？

それができると踏んだからこそ此処にいる。曹操はそういう男だと僕達も推測できている。

……何を、考えている？

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

その光景を、映し出す存在がいた。

気づかれないのも無理はない。それは気配を持たず、更に静音駆動

を可能とし、更に表面の色を変えることで発見しにくくなり、とどめにｋｍレベルで離れたところから特殊カメラと二つのレーザーを利用した音声記録装置をもって情報を記録しているからだ。
更に分散駆動で盗聴器や小型カメラを利用して、多角的にこの情報は記録されている。
そして、この事実を知る者は結界内に誰一人としていない。
そんな誰もが見られていることに気づかれない中で、曹操は告げる。
「……ただし、何事にも例外や特例というものはある。そう、あるんだよ」
曹操はにやりと笑い、そしてそのタイミングと同じくして、魔方陣が展開される。
「にゃはは。おかげで繋がったにゃん♪」
そう黒歌が告げると同時に、フェンリルが魔方陣に足を踏み入れる。同時に光がはじけ、そこにいたのはフェンリルではなく一人の青年だった。
「ご苦労だった、ルフェイ、黒歌。……久しぶりだね、曹操」
明星の血を引く白龍皇、ヴァーリ・ルシファー。その姿を見て、曹操は不敵な笑みを浮かべていた。
「なるほど、フェンリルと入れ替わりで転移したのか。こういう抜け道があったとはね」
曹操のその言葉に、ヴァーリもまた不敵な笑みを浮かべて返す。
「ああ。フェンリルには美猴やアーサーと共に、ドゥルヨーダナを叩いてもらうことにするよ。しかしこっちに来ることは想定済みだけど、たった二人で挑むとはなめられているのかな？」
ヴァーリは怒ってこそいないが、しかしそう答えるほどにはこの状況は有利といえる。
最強の神滅具とそれに並び立てる上位神滅具があり、更にゲストが潜伏している。確かに並みの脅威なら粉砕できるだろう。
だが、彼らが挑む脅威は並みの脅威では断じてない。
堕天使の総督が必要と在らば龍王を封じた鎧を纏う。の特性を生

かし、疑似的に覇に準ずる力すら振るう白龍皇。転生悪魔としての特性と英霊との力を相乗効果とし、覇を克服した更なる進化を遂げた赤龍帝。龍に連なる者だけでもこれだけの猛者が揃っている。
更に優れた眷属と巡り合い、その力を振るうリアス・グレモリーや。なるべき時に成すべきことを、必ず成し遂げる涙換救済（タイタス・クロウ）。光を奉じる意志をもって、限界すらねじ伏せる悪祓銀弾（シルバーレット）。他の者達もまた、間違いなく優秀な者達だ。
とどめに無限の龍神と敵対する。明らかに正気ではない行動だ。
……そして、それだけの状況を齎す切り札の一つを。記録される映像を見る者達は知っている。
「……隠れているのは噂の龍喰者（ドラゴン・イーター）かい？　対龍に特化した禁手の到達者か、もしくは新種の神滅具保有者と当たりをつけているが」
ヴァーリ・ルシファーはその本質を知らない。だからこそ、警戒がどうしても緩くなっている。
それゆえに、曹操は余裕の笑みすら浮かべられる。
「違うんだよ、龍喰者は俺達が既存の存在に告げたコードネーム。それは聖書の神が存命の頃から存在し……いや、聖書の神こそが彼を龍喰者に育て上げたのさ」
その言葉に、怪訝な表情を浮かべる敵対者。
だが、曹操ももはや遠慮をする理由はない。
「やるのか？　曹操」
ゲオルグに、曹操はうなづいた。
そしてゲオルグが魔方陣を展開する中、曹操は静かにヴァーリ達に向き直る。
「……さぁ、無限が終わる時だ。現世に舞い戻るがいい、龍喰者（ドラゴン・イーター）」
現れる者は、磔にされたおぞましい存在。
巨大な十字架に武器にな拘束具で磔にされた、堕天使のラミアと形容されるべき姿。全身のいたるところに太い釘が打ち込まれ、隠された目からは血涙が留まることなく流れている。
悪意、憤怒、憎悪。それらを力として浴びせられたその姿に、誰もが一瞬息を呑む。

そして、それを知る者が目を見開いた。
「馬鹿な……！　コキュートスの封印が解かれたのか!?　……まさかあの骸骨、俺達が憎いからってここまでするか……っ!?」
アザゼルが愕然としながら、曹操達を睨み付けつつそう呟く。
それに対し、曹操は不敵な笑みを浮かべ、その存在を誇るように両手を広げた。
「かの者は、本来あり得ない神の悪意を一身に浴びて生まれた神の毒。聖書の神が蛇とドラゴンを嫌う理由にして、それゆえに龍に対する絶対の呪いを宿す天使にして龍。名を龍喰者（ドラゴン・イーター）、サマエル」
その言葉に、誰もが目を見開いた。
分からないのは異形に対する知識がまだ疎い部類である赤龍帝のみ。
それだけの非常事態に、その映像を見ている者は呆れが混じった視線を曹操へと向けていた。

「さて、ここからどうするのかのぉ？　もっとも、十中八九見切りをつける流れじゃろうが……な」
その小さな呟きは、彼女と同じ部屋にいる者達だけが聞いていた。

銀弾落涙編　第十話　宿命の再開

和地Ｓｉｄｅ

冗談、だろ……っ。
いくら俺達が異形のネームバリューに在ってばかりとは言え、サマエルと会う羽目になるなんて思ってもみなかった。
「ちょ、先生！　ドライグまで怯えてるし、見るからにやばそうなのは分かるけど、あれなんですか!?」
ドライグまでビビるってか。本当にやばい事態だろうが、これは。
「アダムとイブ。それぐらいはお前も知っているだろう？」
俺がすぐにでも仕掛けられるよう、腰を落として身構える中、先生は奥歯を噛み締めながらそう尋ねる。
「アダムとイブが追放されたのは、蛇に諭されて知恵の実を食べたことがきっかけだ。で、その蛇は目の前の奴が化けた姿だ。……その結果、聖書の神はマジギレして蛇やドラゴンを嫌うようになったのが、聖書でドラゴンや蛇が悪として描かれるようになった理由だ」
「マジですか!?」
流石にそこまで知らなかったから、イッセーが驚く気持ちも分かる。
そして先生は、サマエルを睨み付けた。
「神の悪意なんて本来あり得ないものを叩き付けられ続けたやつは、存在そのものが最強最悪の龍殺しで、それどころか存在そのものが世界に悪影響を与えかねない。地獄の最下層、コキュートスに永久封印していたはずなんだよ……っ」
なるほどね。そりゃ最悪だ。
聖書の神の千年以上の悪意なんてものにさらされた以上、あれは対龍に限定すれば神滅具を対龍特化の禁手にさせてなお追いつけない

特攻を持つはずだ。
アダムとイブが食べた知恵の実。その元凶とか間違いなくネームバリューが凄いとは思っていた。だがこれはやばいといった方が近いだろう。
最強最悪のドラゴンスレイヤーとか、龍に関わる能力を持つ者が多い俺達オカ研にとって最悪だ。二天龍、龍王、更にそれに準じる高位の龍。それだけのメンツが皆殺しにされかねない……っ！
「ハーデスの野郎が……っ。ゼウスが俺達と協力体制に入ったのがそこまで気に入らねえか。禍の団はゼウスに深手を負わせたばかりか、ポセイドンに至っちゃまだ精神洗浄が終わらなくて封印までしてるんだぞ！」
「そのようだね。俺達もそれとなく伺ったけど、身内の恥さらしに罰が当たったと鬱憤が晴れたようだよ」
そこまでするか、あの神！
そりゃ聖書の教えに色々信仰を奪われたのは分かるが、千年以上前のことだろう。今を生きている者達の殆どは関与していないってのに、一歩間違えれば世界に悪影響が生まれかねないこんな真似までするか!?
ったく。ザイアの連中が三大勢力だけでなく、他の神話体系まで滅ぼすつもりだった気持ちが少しだけ分かったな。
こんな行動をされると思っていれば、そりゃ討伐すら考慮に入れた警戒をしたくもなるだろうさ……っ。
「さて、このサマエルが究極の龍殺（ドラゴン・スレイヤー）しなのは総督殿のおっしゃったとおり、二天龍やら龍王やらがいる君達対策としてはうってつけだしね。アスカロンはおろかグラムであろうと、サマエルに比べれば爪楊枝だ」
自信満々だな、曹操の奴。
まぁ確かに、聖書の神さまが千年以上も悪意を向けた存在だ。もはや負の聖遺物と言ってもいいだろうし、対龍に限定すれば現状考える中で最悪の部類だろう。
そして何より、オーフィスと敵対を表明したうえで出したってこと

は――
「さて、実験を始めようか」
――曹操が指を鳴らした瞬間、俺は咄嗟に動いた。
「オーフィス下がれ！」
瞬時の判断で、俺はオーフィスに怒鳴りつつ障壁を多重展開。更に強引に魔剣まで壁として具現化する。
そして、それらすべてをすり抜けたと勘違いする勢いで突破して、サマエルの触手がオーフィスを包み込んだ。
「「オーフィス!?」」
ヴァーリとイッセーの声が響く。
やっぱり本命はオーフィスか。そりゃ最強の龍を前にしてこんなものを出したのなら、真っ先に狙うのは最強戦力だろうさ。
だが、障壁と魔剣の群れをすり抜けたと勘違いする勢いで溶かすとか、冗談だろ。
あんなもの、手持ちの手段じゃどうにかできる気がしない。これほどまでか、聖書の神の悪意は！
「これは、攻撃を消し去るのか!?」
「くそ！　俺の半減すら通用しない！」
木場やヴァーリが何とかしようとしているが、どうやら一切通用しないらしい。
糞ったれ！　だったら答えは一つだろう！
サマエル本体、もしくはサマエルを制御しているゲオルグをぶちのめす。そして妨害する曹操もどうにかする。
それ以外―
「リーネス、サポートお願い！」
「……そういうことぉ、分かったわぁ！」
―その時、絢爛な輝きがロビーを照らす。
カズヒ姉さんが無数の宝石を呼び出し、大魔術を発動させる体制だった。
さらにリーネスが魔術回路を全開にして、それを補正する。
「五大属性、最大出力――ッ！」

「補正は完了。やって、カズヒ！」
そして二人の連携で、無数の宝石がサマエルの触手に叩き付けられる。
触手が蠕動して何かを吸い込む中、宝石が一斉に触手に叩き込まれる。
「……取ったわ！」
「いや、無駄だ！」
その瞬間、ゲオルグが術を制御して触手に魔法を走らせる。
そして勢いよく、宝石が弾き飛ばされた。
くそ！　あれでもダメか!?
「先生！　オーフィスをどうにかできないんですか!?」
「無理だ！　そもそもオーフィスがどうにかできてない以上、俺達じゃどうしようもない！」
先生がイッセーにバッサリというが、やはりサマエル狙いは無理か。
「だが先生、相手が龍なら私とイッセーがアスカロンを同調させれば―」
「むしろやめろ！　龍であると同時に最悪の龍殺しなサマエル相手に、ドラゴンスレイヤーなんてぶつけたら何が起こるか分かったもんじゃねえ！」
「……そう。そして万が一の可能性を封じる為にも、そろそろ妨害するとしようか」
先生がゼノヴィアと止めるのに合わせて、曹操が一歩前に出る。
「神滅具保有者二人に高位の聖剣使い、聖魔剣の担い手にグレモリーの次期当主。更に堕天使総督とはまぁ、恐ろしいメンツが揃っている、相手にとって不足なし……かな？」
「上等ね。あの呪いがどうにもできないなら、使う側（あなた達）をどうにかするのが次善策でしょうし？」
カズヒ姉さんがそう吐き捨て、そして殺気を込めて曹操を睨む。
それに対して、曹操は苦笑を浮かべながら肩をすくめた。
「ふふふ、怖い怖い。……ならゲストにも手伝ってもらうかな？」

そう言いながら、ロビーに繋がる廊下の一つに視線を向けた時、足音が響いた。

「そうだね。僕としても、こんな僥倖は中々ないんだ」

その声に、動きどころか意識すら止めたかのように、カズヒ姉さんは硬直した。

「そうなのかい？　もしかして、例の会合の時からグレモリー眷属に興味があったと？」

「……違う違う。グレモリー眷属なんか、この同窓会に比べたらどうでもいいさ」

曹操と会話をしているそいつを、カズヒ姉さんは目を見開いて見据えていた。

いや、違う。

「……タイミングが、悪すぎる……っ」

「よりにも、よって……っ」

鶴羽とリーネスが、今にも泣きだしそうな表情で奴を睨み付ける。

それだけじゃない、先生もカズヒ姉さん達を見ながら苦虫を噛み潰した表情だ。

イッセー達も、殆どないに等しいとはいえ面識がある。だから敵意はそこそこある。

だけど、それ以上に――

「……あ、れ……？」

「なに、これ……？」

――ヒマリとヒツギが、明らかに動揺していた。

自分達でもなんで動揺しているのか分からない。そんな、涙を流し、胸を押さえ、顔を真っ青にして震えながらそいつを見る。

なんだ。何があった!?

なんでヒマリとヒツギがここまでのことになる！　そりゃ二人は

とっても仲が良いけど、それにしたって……同時すぎだろう。
「お前は……何をした！」
ショットライザーを装着しながら、魔剣の切っ先をそいつに突きつける。
現三大勢力にとって最大の裏切り者。多くの者達を趣味の為に苦しめ、更に配下の力を使ってポセイドンすら汚染した。
そんな、二種類の聖杯によって力を最大限に生かせる形でルシファーに転生した、禍の団に属する男。
大打撃を受けながらも、それでも英雄派に次ぐ力を持つ旧魔王派。その現在のかじ取り役。
銀の髪をなびかせる、その男は―

「ヒマリに、ヒツギに、リーネスに、鶴羽に！　……そしてカズヒ姉さんに何をした、ミザリ・ルシファー！」
「まだ何もしてないよ。これからいっぱいするだろうけど、まずはこの同窓会を喜ぼうじゃないか。道間田知（たち）、君も含めてね」
そんな訳の分からないことを言いながら、怨敵ミザリ・ルシファーは、心底嬉しそうに微笑んだ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さぁて？　僕らの出番はいつになるのかな～？」
「同感だ。あの子には一発かまさないと気が済まねぇんだよ。こんな姿にされられたんだしよぉ」
「ミザリの所為ともいえるがな。……というか、何故乙女はあんなことになっている？」

銀弾落涙編　第十一話　聖槍が導く宿命の始まり

和地Ｓｉｄｅ

ミザリ・ルシファーは、俺のことを田知と呼んだ。
誰だよそいつは。いくら何でも、俺のことを知らないってのもどうなんだ？
「誰だよそいつは。俺の名前は―」
「九成和地だよね。だけど同時に、君は道間田知でもあるんだ。ま、覚えてないのは当然かな？」
ミザリは俺の言葉を遮って、本当に幸せそうな表情でカズヒ姉さんを見た。
「久しぶりだね、日美子。また会えて嬉しいよ」
「……は……え？」
顔面蒼白でミザリを見るカズヒ姉さんは、続けて目を躍らせながら俺を見る。
その表情は驚愕と狼狽に彩られ、信じられないといっているのが誰の目からも明らかだ。
「か、カズヒ？　どうした!?」
「しっかりしなさいカズヒ！」
イッセーや部長が声をかけるけど、カズヒ姉さんは答えられない。
震えながら、首を小さく振りながら、思わず一歩を後ろに下がり―
「……まだだっ!!」
―それを震脚にして、カズヒ姉さんは持ち直した。
そいて悲し気にミザリを睨み付けながら、拳を握り締める。
「誠にぃ……。久しぶりだし、当たり前に恨んでいるでしょうけど、それにしても悪趣味よ。私に対する憎しみに、和地達を巻き込まないで」

せいにぃ？
カズヒ姉さんが言っていることが、俺達はさっぱり理解できない。曹操達ですら不思議そうにしている。どういうことだかさっぱり分からない。
そして何より、当たり前に恨んでいる？
理解が全く追いつかない展開だが、カズヒ姉さんは俺達の方を向いてこない。
「……私を恨むのは当然よ。だけどそれに七緒を、アイネスを巻き込まないで。何より、和地が田知だなんて……なんでそんなことが分かるのよ!?」
感情があまりにも複雑に混じったその絶叫に、ミザリはしかし、小さく微笑みながら首を横に振る。
「分かるよ。僕が幽世（セフィロト・グラール）の聖杯を持っているのは知ってるだろう？　魔術回路や魔眼と聖杯を同調させればそれぐらい、すぐに分かるさ」
そう返しながら、ミザリは俺とカズヒ姉さんから視線をずらし、今度は鶴羽とリーネスの方を向く。
「七緒とアイネスは……２０年ぶりぐらいかな？　日美子と殺し合いになったのかとも思ったけど、友達でい続けてくれたんだね。嬉しいやら恨めしいやら」
完全に俺達を置いてけぼりにして、ミザリは鶴羽やリーネスにフレンドリーに会話する。
だけど七緒にアイネス？　七緒っていうのは鶴羽が小説のキャラにとか言っていたような気がするけど、アイネスってなんだ？
「……誠明！　……日美子を恨むのは仕方ないけど、こんなことはやめてよ！　何より、一番悪いのはパパ達だって、二十年も経ってるなら分かるでしょう!?」
鶴羽は泣き出しそうにそう怒鳴るけど、ミザリはきょとんとしながら首を傾げた。
「ん？　勘違いしているなら悪いけど、僕はもうあのことは水に流しているし感謝すらしてる。最初は恨んだけど、同時にあれがあったから僕は美しいものを知れたし……一回殺せば十分だろう？」

「……っ！」
微笑みながらの訳の分からない言葉に、鶴羽は息を呑んで絶句する。
何かを言いたいが何も言えない、そんな表情で振るわせるその肩に、リーネスが手を置いた。
「……久しぶりだな、誠明。こんな形で再会することになるとは分かっていたが、それでも残念だよ」
そのリーネスの口調は、いつもとは全く違っていた。
その違和感で、俺達は介入したくてもできない。
そしてミザリは、むしろ懐かしそうだった。
そんな懐かしそうなミザリと向き合い、リーネスは鶴羽やカズヒ姉さんを庇うような位置に立つ。
「……今更説得は無意味だろうし、お前のことを聞いている余裕もない。だがそれでも聞きたいことがある」
「君達が何でそうなっているか……かい？」
リーネスに頷きながら、ミザリは左右の指を一本ずつ立てる。
「一つだけ僕も分からないことがあるけど、大本は断言できる。……僕が生まれ変わったのと同じだよ。君達が死んだことを亜種聖杯を完成させた直後に知って、ついでに試したのさ」
なん、だと。
確かミザリ・ルシファーは、アドルフ・ヒトラーのデミサーヴァントになったと、その完全同調をもくろんで更なる仕込みを亜種聖杯戦争で行った。
それが、宿した幽世（セフィロト・グラール）の聖杯と亜種聖杯を使用することで転生をした。……それと同じことを、カズヒ姉さん達の前世に対して使用した……ってことか？
正直動揺が酷いが、それでも納得できることがある。
物心ついた時からストリートチルドレンでありながら、大人顔負けの行動力は判断力で生き残ってきたこと。
世界的に見て寄食の部類である日本の卵かけご飯をやけに好んでいること。

会ってすぐにも関わらず、ツーカーの関係といえる仲の良さを見せていた事。
それら全てが「前世の記憶と経験を持ち越したから」という前提条件が付けられれば、違和感なく納得ができてしまう。
だけど、なんでそこに俺が出てくる？
そして、ちらちらと俺を見るカズヒ姉さんの、動揺が隠れない目は何なんだ？
俺まで動揺する中、ミザリは不思議そうに小首を傾げた。
「だけどさっぱり分からないんだ。どうしても気になるから、答えを教え合うってことで教えてほしい。なんで―」
そう言いながらミザリが見るのは。
「―乙女が二人に分裂している理由は何だい？　どうも、記憶もろくに継承してないみたいだし、さ」
ヒマリとヒツギの二人だった。
二人とも、ミザリの会話なんて一切聞いていない。
むしろ様子がおかしいなんてレベルじゃない。そんなレベルでやばい雰囲気だった。
「……誠明？　七……緒？　あいね、す……ぁ、ぁあああああ!?」
ヒマリは顔面蒼白で頭を抱え、虚ろな目で絶叫までする。
「日美子……田知……た……ち……？　……うぐっ！」
ヒツギもどこかに視線を彷徨わせながら、頭痛を堪える様に額で手を抑えている。
共通しているのは、時々俺を見て動揺が激しくなっていることだけだ。
糞ったれ!?　状況がさっぱり分からなくて、動きたくても動けない。
「……は、ぁ……え？」
っていうかカズヒ姉さんまで!?　明らかに顔面蒼白で瞳孔まで開いて振り返ってる!?
リーネスや鶴羽は奥歯を噛み締めているし、いったい何がどうなってるんだよ!?

そんな中、アザゼル先生は何も言えなくなっているリーネスを一瞥してから、ミザリに顔を向ける。
「……俺が代わりに仮説を話してやる。……大王派経由で道間家から聞き出した情報だが、道間乙女はバニシングツインなんだよ」
バニシングツイン。
修学旅行で、イッセーの気晴らしに俺が伝えた用語だ。
豆知識レベルだが、一卵性双生児の片方が死亡し、母体もしくは双子の肉体と同化する。そういった現象のことをバニシングツインというらしい。
それが、いったい何なんだ？
「……お前さんが亜種聖杯を使った時は、デミサーヴァントとして同調が足りず、ゆえに幽世の聖杯も不完全にしか使えなかったんだろう？　そんな不安定な状態で亜種聖杯で強引に動かしたことで、バニシングツインだった方を蘇生させる形で転生させ、それによるバグが道間乙女を二つに分けて転生させた。……それが現状立てられる仮説だ」
……つまり、めちゃくちゃ強引な輪廻転生のやり方に、特異体質じみたイレギュラーがかみ合った結果、バグって二人で一人が二人で二人になった？
ああくそ。もう状況がさっぱりで訳が分からない。
っていうか乙女が何なんだよったくもう。状況が完全につかめないぞ、糞ったれ！
事情を知らない連中が軒並みついていけてない中、リーネスはミザリを睨んでいた。
「何故だ誠明。日美子がお前や乙女にしたことを許せというのは、酷だということは分かる。だが、何故そんな方向に行ったんだ、お前は！」
「……そうよ。なんでよ誠明！　日美子を恨むななんて、許せなんて言えないわ。だけど、テレビドラマで死人や怪我人が出るだけでも嫌な顔をするあなたが、なんで!?」
リーネスも鶴羽も、カズヒ姉さんが日美子だという前提で、更に日

美子を恨み許さないことを認めている。
……道間日美子は誠明に何かをして、その結果ミザリ・ルシファーとカズヒ・シチャースチエに生まれ変わった。そういうことなのか・駄目だ。必要な情報が足りてなさ過ぎて、何もかもが進みやしない！
訳が分からなさ過ぎて曹操達すら困惑している中、ミザリは不思議そうに微笑んだ。
「だからもう恨んでないし、感謝すらしてるといったじゃないか。日美子はもちろん、小父さんにだって感謝してるんだよ。少なくとも、僕は本心からそう思っている自覚している」
その言葉に、カズヒ姉さんも鶴羽もリーネスも、信じられないといった表情で固まった。
話からすると、カズヒ姉さんの前世含めた数名がミザリの前世に何かしたのは分かる。だけど、カズヒ姉さんを庇う側の鶴羽やリーネスすら許さないことも恨むことも納得している。にも関わらず、ミザリは感謝すらしていると言い切った。
本当に、訳が分からない。
「……なぁミザリ。なんで感謝しているんだ？　イッセー達にとまでは言わん。だがリーネス達に分かるように言ってくれ」
先生が見てられないのかそう言うと、ミザリは小さく頷いた。
「簡単だよ。あの時確かに僕は嘆き悲しみ絶望した。……だからこそ、日美子の目を見て見つけることができたんだ。知ることができたんだよ」
うっとりと、陶酔という言葉を体現した表情で、ミザリは本当にありがたく思っているように、カズヒ姉さんを見る。
「嘆き悲しみ絶望するという感情、そしてそうなっている人こそが、この世で最も美しく尊いものだと僕は知ることができた。人には美しい物を見て魅了され、それを追求することを選べる者がいる。僕はそういう人種だったと、言葉にすればそういうことだよ」
心から微笑み、純粋無垢といえるような表情でミザリは言い切った。

その答えを聞いて、リーネスと鶴羽は絶望の表情を浮かべて崩れ落ちた。
アザゼル先生は頭痛を堪える様に眉をしかめて拳を握り締める。
そして、カズヒ姉さんは肩を震わせ、泣き出しそうな表情で―
『ＣＲＹ！』
「……誠にぃ……っ！」
構えようとしたハウリングホッパープログライズキーを、ためらい―
「……ぅあぁあああああああああっ！」
『フォースライザー』
『ＢＵＲＳＴ！』
咄嗟にダイナマイティングライオンに切り替え、フォースライザーに装填する。
「ああ、本当に美しいよ……日美子」
『レイドライザー』
『ＤＥＳＰＡＩＲ』
ミザリもまた、レイドライザーを装着して、プログライズキーを装填する。
あれはバッタ……いや、イナゴか？
「変身！」
『フォースライズ』
「実装」
『レイドライズ』
そして二人は同時に、ライダモデルの装甲を身に纏った。
『ダイナマイティングライオン！　Ａ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　ｅｘｐｌｏｓｉｖｅ　ｆｏｒｃｅ　ｌｉｋｅ　ｆｉｒｅｗｏｒｋｓ』
『フォーリングホッパー！　Ｏｌｌ　ｕｎｈａｐｐｉｎｅｓｓ　ｉｓ　ｂｅｓｔ　ｈａｐｐｉｎｅｓｓ』
ライオンのライダモデルを装甲化した、仮面ライダー道間。
それに対するは、「すべての不幸は最高の幸福」だとかトチ狂った英文を掲げる、蝗を模した装甲に身を包んだレイダー。フォーリング

ホッパーレイダー。
「資格はないの分かってる。……それでも、私はあなたを止める！」
「いいよ。兄妹同士久しぶりに楽しもうか？　……ベッドの上がいいのかな？」
その小さな言葉を交わすと共に、二人はぶつかり合って壁を壊し、ホテルの外に飛んでいく。
まずい!?　カズヒ姉さんから冷静さが完全に失われている。
そしてもっとまずいのは、カズヒ姉さんを追いかけている余裕がないってことだ。
とんでもない状況ゆえに忘れてたけど、今はオーフィスを助ける必要がある。そっちの方が優先事項だ。
オーフィスがどういう状況なのかは分からないが、英雄派がろくでもないことを考えていることは分かる。それも、サマエルなんて厄ネタを持ちだした時点で世界レベルでやばいことになりかねない！
後ろ髪は引かれるが、今はカズヒ姉さんが持ち堪えることを祈るしかない！
「……どうも状況が掴めないけど、君達がミザリと前世からの友人ということは分かった。……まぁ、お互いにあの二人を優先できないだろうけど、ね」
「分かってくれて嬉しいよ。できればさっさとぶちのめされてほしいぐらいだがな」
曹操に俺はそう吐き捨てるが、そうはいかないんだろう？
曹操は俺達を見渡して、槍でポンポンと肩を叩きながら苦笑する。
「さて、ある意味で赤龍帝並みに何をやらかすか分かったもんじゃない悪祓銀弾（シルバーレット）はミザリが引き受けてくれたけど、それだけじゃとても安心できない。いくら俺と聖槍でも、これだけの猛者や技術を相手にどうにかするのは不可能に近い。とどめにゲオルグはサマエルの制御に徹させるべきときた」
そんな自分に不利なことをばかりを述べながら、曹操は絶望も悲嘆もしていない。
ああ、分かっているさ。俺達だって少しは敵について調べている。

こいつらは入念な下準備をしてから行動する。つまり、この状況を演出した以上勝算はあるということだ。
「だから、俺も切り札と秘密兵器を切るとしよう」
そう告げながら曹操は腰に何かを取り付ける。
『サウザンドライバー』
なんだ、あの人工衛星みたいな感じのデバイスは。
俺が疑問を脳裏に浮かべたとき、リーネスが目を見開いて驚愕する。
「サウザンドライバー!? そんなものまで再現を……っ」
「ミザリからの贈り物さ。アルバートが再現に成功した物で、禍の団の舵取り役用に提供された物さ」
そして曹操は、聖槍を肩に担ぎながら、器用に二つのプログライズキーを装填する。
片方はかつて使用したプログライズキーだが、もう片方は左右反転した特殊なゼツメライズキーのようだ。
妨害したいが、曹操の気配には何一つとして油断してない。ここで動くのは困難と言ってもいいだろう。
『ＣＨＡＬＬＥＮＧＥ』
『ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＭＡＬＩＣＥ』
「俺の愛用するトラベリングホースプログライズキーだけでなく、更にこいつ用のクリエイティングルシファーゼツメライズキーを使用することで、絶大な力を発揮する、１００％を超える戦士が、更に禁手を使えばどうなるかな？」
ああ、だろうな。
他の幹部が軒並み禁手に至っているのに、それを従える奴が至ってないと考えるのは、流石に見通しが甘いとは思っていたさ！
「ハーデス神からは一度しか召喚の許可を貰えてないんでね。計画の頓挫は流石にまずいから、出し惜しみ無しで行かせてもらう」
槍を横に向け、両手を広げながら曹操宣言する。
そして、俺達もまた警戒が最大限に高まった時―
「禁手化（バランス・ブレイク）……変身！」

『パーフェクトライズ』
馬と人型の化け物の姿をしたライダモデルが、早々の周りを旋回するのと同時に、曹操の周りに七つの球体が浮かびこれまた警戒するように旋回する。
そして曹操を挟むようにライダモデルが組み付くと同時に、その姿に光臨が輝き、そして吹き飛ばされたライダモデルから、金色の装甲を持つ青い仮面ライダーが姿を現した。
『Ｗｈｅｎ ｔｈｅ ｈｏｌｙ ｓｐｅａｒ ｓｈｉｎｅｓ． Ｔｈｅ ｇｒｅａｔ ｓｏｌｉｄｅｒ ＴＨＯＵＺＡＩＡＲＥ ｉｓ ｂｏｒｎ』
「これこそが、仮面ライダーサウザイアー・魏。英雄が纏うに値する、偉大なる仮面ライダーさ」
『Ｉ ａｍ ａ ＨＥＲＯ』
外連味マシマシでありがたいな。
さっさと叩き潰してカズヒ姉さんを追わせてもらう！

銀弾落涙編　第十二話　猛威蹂躙（その1）

和地Ｓｉｄｅ

黄金に包まれた青い戦士が、準備を整えて槍を借る服振るって調子を確かめる。
俺がそれに合わせて素早くショットライザーを構えたその時、サウザイアーは聖なるオーラを叩き付けられた。
……開幕速攻だな。これは機先を制したか？
ちらりと確認すると、俺の近くにいたゼノヴィアがエクス・デュランダルを構えてぶっ放していた。
「……どんな禁手や仮面ライダーだろうと、戦う前に叩き潰せば問題あるまい」
ドヤ顔で言い切ったし。いや、確かに正論だけど。
だがアザゼル先生は渋い顔だし、ヴァーリも警戒を全く解いていない。
そもそも、曹操の気配も消えてないしな。
「…黄昏の聖槍が持つ本来の禁手は真冥白夜の聖槍（トゥルー・ロンギヌス・ゲッターデメルング）だが、あれは間違いなく亜種だ。ヴァーリ、知ってるか？」
「その通りだ。奴が至った聖槍の亜種禁手は極夜なる天輪聖王（ポーラーナイト・ロンギヌス・チャクラヴァルティン）の輝廻槍。能力は七宝という下手な神器の禁手級の能力をそれぞれ別個に持つ七つの球体の具現化だ」
読みが長いは字は独特だわ地味に捻ってるはと中二病か。しかも強力な聖なる槍に七つの能力とか、エクス・デュランダルみたいな進化遂げやがって。
リーネスも持ち直したのか、スラッシュライザーを装着しつつ歯噛みしている。
「転輪聖王にちなんでるようだけれどぉ。転生の転じゃなくて天なの

ね。……帝釈天と顔見知りみたいだけど、そこからかしらぁ？」
既に考察までしてくれるようだし、俺は戦闘に集中した方がいいか。
間違いなく、今ので倒れてはいないだろうしな。
「……気をつけろ。以前手合わせした時は、奴は三つの能力だけで俺に覇龍を使わせたほどだ。ましてサウザイアーなどという手札は使っていなかった」
ヴァーリがそこまで警戒するほどとはな。
つまりまぁ。最低でもミザリクラスの化け物と考えた方がよさそうか。
そして曹操の奴は、ぴんぴんした様子で歩み出てきやがった。
「ふふ。既に一度先制攻撃を食らっているしね。読めているなら警戒はするさ」
「……そんなに私は分かり易いのか？」
ゼノヴィアは不満顔だけど、お前基本的に猪突猛進だしなぁ。
頭はいいけどベクトルが脳筋というか、出力をシンプルに叩き付けるタイプだからな。凌ぎ方を考えるのは比較的楽だろう。しのげるだけのものにするのは大変だが。
だがゼノヴィアのエクス・デュランダルと曹操の禁手は方向性が似ている。ならゼノヴィアは真剣に頼りになるな。俺もすぐに変身を
―
「……輪宝（チャッカラタナ）」
―と思った瞬間、そんな声が響き、俺は咄嗟に障壁を展開する。
本能的な危機感と、これまでの鍛錬が培ったとりあえず防御を固める思考回路によるものだ。
そしてその反応は正しかった。
「な……がはっ!?」
「……あ……っ」
ゼノヴィアとリーネスが、手に持っていたエクスデュランダルとスラッシュライザーが壊れた状態で崩れ落ちる。それどころか、出血も莫大な負傷を負っていた。

……俺もきついな。ショットライザーは庇い切れずに破壊されている。更にガードが間に合ったから致命じゃないが、かなりえぐれて動くのに支障がある……っ！

「ちなみに輪宝は武器破壊能力で、ついでに刃を出して攻撃してみた。卓越した使い手ならしのぐことはできるけど、ついでの攻撃すら捌けないものには不可能だね」

余裕綽々で能力語りやがって。しかも実力が必須だというのがムカつくにもほどがある。

つまり格下では勝てないってことだろう。実力がなければ超えることができず、装備で補うことができないんだからな。

「アーシア、急いで三人を治療して！」

「いや、リーネスとゼノヴィアを優先しろ！　俺は自前で応急処置ができる！」

星辰奏者は死ににくいし治りやすいからな。治癒魔術を魔力のごり押しで強引に押し切れば、回復はできる。今は深手を負った二人を優先的に回復しないと。

だが、当分俺は動けない。ましてリーネスとゼノヴィアは回復しても戦闘が継続できる消耗じゃない。

基本技術肌のリーネスはともかく、ゼノヴィアを一手で倒すとかやばすぎる。しかも仮面ライダーの性能を生かしようがない方法でだと？

野郎……っ！

「てめぇぇぇぇぇぇ！」

「許さないよ……っ！」

イッセーと木場が突貫して攻撃を振るうが、曹操はさらりと回避する。

攻撃を聖槍や七宝で捌くこともしない。文字通り見てから回避を間に合わせており、それだけでサウザイアーの性能が高いことの証明だ。

そこに左右から挟み込むように迫るのは、既にレイダーに実装したアニルとルーシアの二人。

「先輩方！　牽制します、アニル君と一緒に三方向から仕掛けてください！」
ルーシアが両手に重火器を展開してけん制射撃を行うが、曹操はすべてを見切って回避する。
銃弾を見切って回避するな。しかもあれ、どこによけるか考える余裕がある動きだろう。
回復まだだな。内蔵も割とえぐられている。チャージングリザードに慣れてなかったら、意識が薄れていたぐらいだ。
俺が回復度合いを確認している間に、イッセー、木場、アニルの三人が三方向から迫る。
『ラッシングボライド』
「聖魔剣よ！」
アニルがラッシングボライドを展開し、更に木場が聖魔剣を広範囲に展開して動きを封じながらの連携攻撃。
その高速の猛攻を、曹操は流れるように回避する。
『シューティングボライド』
そこに縫い留めるようにルーシアが必殺技を放つが、曹操は槍の切っ先で性格に突き穿って相殺。
更に手首に蹴りを入れるようにして、アニルの突貫攻撃を逸らして木場の聖魔剣をいなす。
さっきから超絶技巧が多すぎる！　あの野郎、腕試しも兼ねてわざと使いにくい技巧を試してやがるな？
だがその所為で、イッセーの拳の軌道が既に通っている。更にあいつも三叉成駒で戦車に昇格済みだ。
『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔ！』
「喰らいやがれ！」
撃鉄も起こされ、イッセーが渾身の拳を叩き込む。
これなら、ガードや受け流しが間に合っても多少は―
「甘いね！」
その瞬間、曹操もまた拳を握り締めて真正面から打撃をぶつけ合う。

轟音が鳴り響き衝撃波がアニルと木場を吹っ飛ばし、そして曹操とイッセーの拳がお互いに弾き飛ばされる。
冗談だろ。あの状態のイッセーの拳と互角とか、サイラオーグ・バアルか!?
いくら仮面ライダーの性能が高いといっても、いくらなんでも高すぎる。プログライズキーとゼツメライズキーの相乗効果とでもいうのか。
「瞬間的な出力向上はサウザイアーも可能でね。真っ向勝負でもやりようはあるんだよ」
そう涼し気に言いながら、曹操はイッセーを蹴り飛ばす。
三叉成駒の戦車という、機動力を犠牲に攻防を高めた鎧に輝まで入っている。
なんて戦闘能力だ。仮面ライダーとしても、ヴァナルガンドに次ぐ性能だろう！
だが、それだけで済むほど状況は甘くないんだよ。数の差を忘れているぞ曹操。
「一気に行くわよ！」
「分かってるわ！　鶴羽ちゃん、準備はいい？」
既に部長と朱乃さんが雷光を放つ準備は万端。
相乗効果で出力を向上させる狙いだろう。あれなら威力は倍率ドンだ。
そして、鶴羽も聖十字架の槍を構えて戦闘態勢は万全だ。
「覚悟しなさい、曹操――」
「甘いよ、女宝（イッティラタナ）」
リアス部長が仕掛けようとしたその瞬間、七宝の一つが瞬時に飛んで光る。
ダメージは見当たらない。だが、さっきまで高まっていた力が霧散して消滅する。
聖十字架まで消え去っている……だと!?
鶴羽たちは慌てて力を出し直そうとするが、全く力が具現化しない。

「ちょ、は……はぁああっ!?」
目を見開いて狼狽する鶴羽を、曹操は愉快そうに見て肩を震わせた。
「女宝は女性の異能を一定時間完全に封じる。これも相当の強者でなければ抗えない」
ちょ、ふざけるな!
オカ研のメンバーは女性の方が多いんだぞ。しかもこの状況下、アーシアが封じられたら完全に積む。
「ふふ。フランシスコ・ザビエルはともかくピエール・コーションは間違いなく輪宝をしのぐ強者。だけど、南空鶴羽君はそこまでじゃない」
曹操に断言され、鶴羽は涙すら浮かべながら歯を食いしばる。
……力ある英霊の力を具現化することができても、具現化する本人の力が封じれるなら問題ないってことか。
ああ……そうかよ!

Other Side

一方その頃、カズヒ・シチャースチエは奥歯を噛み締め狂い啼き、ミザリ・ルシファーに猛攻を仕掛けていた。
ダイナマイティングライオンでの道間は、両腕のグレネードランチャーによる攻撃力が持ち味。更に基本スペックも高く、とどめに榴弾という範囲攻撃は回避が困難といえる。
だが、ミザリはそれを容易く回避し続ける。
あらゆる手札による攻撃を、ミザリはまるで誰が、何時、何処で、どんな風に、どれぐらいか、全て教えてもらっているかのように回避す

る。
　それゆえに、カズヒはミザリに禁手をどれ一つとして使わせることができなかった。
　盾として振るう聖十字架に、迎撃で使われる聖槍。更に身体機能を聖血で増幅し、結界を聖墓でうまく同調させることで更なるフォローを成立させる。これではよしんば攻撃が当たっても、すぐに聖杯で回復させられるだろう。
　そしてミザリ自身、動きが素早く正確で無駄も少なく、しかしあえてムラを作ることで読みづらく動いている。
　完璧すぎないことで逆に安全性を成立させる。他者の絶望と悲嘆を望む、どちらかといえば攻撃性に特化した戦い方になりやすい精神性。その真逆といえる堅実かつ堅牢な戦闘スタイルが、ミザリの持ち味と言ってもよかった。
　そしてそれは、ある意味で当たり前の理由によるものだ。
　他者の絶望と悲嘆を与える戦いとは、すなわち相手が逆転できないことが最重要。自分の優位性を確保して、よしんばひっくり返されても生き残ることでいつか必ず蹂躙するという、そんな理念が見え隠れする戦い方。いつか勝てるのなら今勝てなくても負けなければいいという、そんな悪意を完遂するための戦法をもってして戦っている。
　それを悟ってしまうからこそ、カズヒは説得も説教もできない。
「うぁあああああっ！」
　自分に説教をする資格はない。説得などどの口ができるという。そして何より、そんなものは何一つ響かない。
　だからこそ、カズヒは激情を口からほとばしらせながら、猛攻を仕掛けることしかできない。
『ダイナマイティングディストピア』
　放たれる大量の榴弾を、しかしミザリは不敵な笑みを装甲越しに浮かべながら対応する。
「甘いんだなぁ」
『フォーリングボライド』
　放たれるは連続の蹴り。それはあろうことか榴弾そのものだけで

はなく、爆風すら余波で的確に吹き飛ばして迎撃する。
更にカズヒによってばらまかれた炸裂弾や迫撃砲が時間差で放たれるが、ミザリはそれを全て捌いていく。
それはまるで、グレモリー眷属が曹操に捌かれている構図に近い。
だがしかし、そこには僅かな違いがある。
曹操は見切り反応することで攻撃を捌いている。だがしかし、ミザリはまるで直前に知っているかのように最適なタイミングで、ゆとりをもって迎撃している。
そしてミザリが迎撃の構えを解いた瞬間、攻撃もぴたりとやんだ。
……そして、周囲の空間は一変している。
広がっているあまりに毒々しい光景。それはカズヒの固有結界。
心象風景を具現化したカズヒは、歯噛みする。
固有結界によって大幅に強化されたカズヒの魔術回路は、それによってミザリの星を解析していた。
だからこそ分かる。ミザリ・ルシファーの星がどれだけ厄介か。
理解はしていた。外界や外見に一切の変化が見えないということは、それは使用者本人に作用する星だ。自己強化系の星辰光であることだけは、とうの昔に悟っていた。
だが、これは厄介すぎる。
「……アザゼル総督やイッセーにとっては、ある意味で天敵といえるわね」
衝撃のあまり、冷静さを僅かに取り戻したカズヒはそう呟く。
そんなカズヒの視界の先、ミザリは周囲を見渡して感極まっていた。
「素敵だ、日美子。君はこんな心を持っているんだね？　あぁ、固有結界はなんて素晴らしいんだ。……その人の絶望がここまで分かる方法なんて、そうはない……っ」
幸福と快感に震えるミザリは、装甲越しからでも分かるほどの陶酔しながら、カズヒに槍の切っ先を向ける。
「ありがとう、日美子。僕は君のような《妹》を持てて、乙女のことを愛せて幸せだ」

「……誠、にいいいいいっ!!」
カズヒは我慢しきれず、心から絶叫する。
そしてアタッシュナイダーを呼び出そうとして、あえて普通の剣へと変える。
ためらう理由はない。だがためらわずにはいられない。
ただでさえ生まれるだろう躊躇を少しでも減らす為に意識をわきまえ、カズヒ・シチャースチエは突貫した。

祐斗Ｓｉｄｅ

蹴り飛ばされ意識を整える中、イッセー君は全身から煙を噴き出してよろめいた。
馬宝（アッサラナタ）によって転移された黒歌とルフェイが放ってしまった魔法攻撃から、アーシアさんを庇う為に三叉成駒の騎士と割って入った結果だ。
通常の禁手に比べて圧倒的に装甲強度が低下する今のイッセー君では、黒歌だけでなくルフェイの魔法まで乗った攻撃は防ぎ切れない。
だけど、イッセー君は倒れない。
『……やってくれますね。咄嗟に離れたところに割って入りこませれば、イッセーを撃破できると踏みましたか』
「そういうことさ。三叉成駒は赤龍帝の気質と合致しているがゆえに咄嗟に多用してしまうが、特化しすぎているうえに切り替えにタイムラグが生まれるのが欠点だ。そこを突けば簡単に倒せると踏んだけど、君のことを忘れていたよ、シャルロット・コルデー」

装甲越しに苦笑している曹操は、しかし傷一つ負っていないし、疲弊もろくになり。
トラベリングホースが、長距離高速行軍を主眼に置いた疲れにくさという強みを持つのは知っていた。だがここまで疲弊を削れるのか。
僕達全員を相手にしながら、ここまで余裕で対応するとは……っ
「なろうが！」
「先輩をよくも！」
その瞬間、アニル君とルーシアちゃんが連携で仕掛ける……と思わせて、武器を交換した。
アニル君がアタッシュショットガンを構え、瞬時に動きを切り替えて狙いをつけ、ルーシアちゃんがアタッシュシュナイダーで切りかかる。
二人とも、悪魔祓いとしての基礎的な技術は十分ある。しかしそのうえで多用している戦法はそれぞれ逆だ。
そのスイッチで一瞬でも隙を作ろうとしたのだが、曹操はふっと笑った。
「怒りは視野を狭めてしまうよ？」
その瞬間、切りかかったルーシアちゃんがアニル君の眼前に転移される。
「!?　うわぁ!?」
お互いに攻撃を叩き込む形になり、二人とも実装が解除される。
今のも馬宝！　だけど、アニル君の動きを見切って、タイミングを合わせてルーシアちゃんを転移させたのか！
ここまで見切って動けるとは、これでは下手な奇策は通用しないか。
「奇策というのはね。よほど上手い奇策や振るう側の基礎がしっかりしなければいけないんだよ。君達では俺には届かないのさ……っと！」
そう嘯いた時、曹操は素早く飛び退る。
その瞬間、いくつもの弾丸が曹操がいた場所を通り過ぎる。
視線を向ければ、そこにはレジスティングアントレイダーになった

南空さんが、少し得意げになっていた。
「異能を封じた程度で舐めないでくれる!? こちとらザイアで色々仕込んでるし、レイドライザーは持ってるのよ！」
「なるほど、その手があったね。だけど」
その瞬間、気づけば曹操は南空さんの目の前に移動していた。
そして一瞬の交錯で、南空さんは弾き飛ばされ実装が解除される。
「……たかがレジスティングアントレイダー如きにやられるほど、サウザイアーも俺も甘くないんだよ」
……ダメか！
純然たる科学技術なら女性でも戦えるだろう。だけど曹操はその方面でもそれ抜きでも、圧倒的に強すぎる……っ！
「曹操っ」
「させませんわ！」
そこにリアス部長と朱乃さんが、それぞれアニル君とルーシアちゃんが取り落としたアタッシュウェポンを構えていた。
だけど七宝の一つが動いたかと思うと、見るも無残に砕けている。
「っ!?」
「輪宝を忘れてもらっては困るね。デュランダル使いでも見切れないこれを、近接戦闘に長けてない君達が見切れる道理もない」
これでもダメか。
曹操の力量は高く、更に装備でも策でも長けている。ましてあの七宝、それぞれが強力で手札が多い。
今の曹操を出し抜くには、この程度の奇策では不可能ということか……っ。
リアス部長と朱乃さん、南空さんは力を封じられている。ゼノヴィアとリーネスは武器を壊されたうえに深手を負って戦闘不能。イッセー君や九成君も、ダメージが深くてすぐには動けない。ヒマリとヒツギに至っては、ミザリにあってから戦闘どころの騒ぎじゃない。ルーシアちゃんもアニル君も、お互いの攻撃を食らってダメージが大きい。
……動けるのは、僕を含めてあと少ししか！

「ヴァーリ！　アイツには共闘で行くぞ、合わせろ！」
「まったく。俺としては単独で動きたいんだけどね！」
そこに龍の鎧をまとった先生とヴァーリが左右から挟み込んで攻撃を仕掛ける。
「ふふふ！　君達はどこまで俺を昂らせ、高みへと導いてくれるのかな!?」
曹操はそう嘯きながら、聖槍をもってして迎撃する。
……これが、英雄派の盟主。三国志の曹操が末裔にして、最強の神滅具を保有する者。
強すぎる……っ!!

銀弾落涙編　第十三話　猛威蹂躙（その２）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

固有結界を維持できず、カズヒは結界を一旦解除する。
衝動的に暴れすぎたと痛感する。
自分の固有結界は、固有結界であることを加味しても短期決戦型だ。ミザリの星辰光が相手であるのなら、ヴィールと同様の手法で仕掛けるべきだった。それを忘れて威力重視の攻撃をし続けてしまった。
そしてミザリは余裕を持って凌いでいる。肩で息をしているこちらと違い、ゆとりを保ったまま戦闘を可能にしている。
油断しているようでいて、しかし緊急時にすぐ力量を高めることができる体制だ。幾度となく聖杯戦争を潜り抜けているだけあり、油断できるものでは断じてない。
だからこそ、なんとしてもここでどうにかしなくてはいけない。自分に資格がないとしても、自分が命を懸ける以外の選択肢なんて存在しない。
……この時点においてなお、カズヒ・シチャースチエは冷静とは言い難かった。
安定した状態である程度の思考能力は保っている。だがそれは、いうなれば超高速時における極めて不安定な安定だ。感情が暴走して結果的に真っ直ぐ走っているだけに過ぎない。
強い衝動で突貫することは、決して悪いことばかりではない。だがハイになりながらも保つべき思考力がない状態では、カズヒ・シチャースチエは本領を発揮しきれない。
悪祓銀弾は「何が何でも悪を祓う」存在だ。それは強い意志で限界を超えるだけではなく、様々な手段を使うことも踏まえてのものだ。

必然的に、強靭な意志力をもって、しかし冷徹な判断力を保つ二重の強みがあってこそ、悪祓銀弾（シルバーレッド）は悪を祓える。
翻れば、衝動に突き動かされているだけではどうあがいてもカズヒ・シチャースチエは悪を祓う銀弾として本領を発揮できない。
弾丸とは点の攻撃。爆発力でいくら加速しようと、それを的確に当てなければ本領は断じて発揮されない。
その時点で、カズヒ・シチャースチエの敗北は確定だった。
それでもなお、カズヒはミザリに追随する。
「まだだ……まだだ……まだまだまだだ！」
本領を発揮できなくとも、カズヒ・シチャースチエは強い意志力で体を動かす。
心身ともに限界が近づいていながら、彼女は性能の低下を一切起こさず、強引にミザリに喰らいつく。
「まだだ！　私が犯した罪の報いは！　他の誰かに押し付けさせない!!」
その渾身の意志力を見て、ミザリは—
「—だから恨んでないって。少なくとも、今は本当に恨んでないよ？」
—疑問符すら浮かべて首をかしげる。
それを、カズヒは信じない。
「嘘をつかないで！　あんなことをして、私を恨んでないはずがない!!」
それだけは、確信すらしている。
「恨んで当然よ！　だけど、それは私に向けて！　乙女ねぇにも……アイネスにも……鶴羽にも……っ」
それだけのことをした。そう、断言できる。
どんな理由があれ、あれだけのことをして恨まないわけがない。恨んで当然なのだ。
少なくとも、あの一件に限定すれば道間日美子が一番悪い。最低でも、道間誠明にも道間乙女にも罪はない。
だからこそ—
「私はいくらでも憎んでいいから、世界に悪意を向けないで!!」

「……う～ん。どうしたら信じてくれるんだい？」
―その致命的なずれが、ここにきて破局すら迎える。
「僕は本当にもう恨んでない。そりゃ一切なかったとは言わないけど、もうしっかり発散しているんだ。だからもう、日美子にも彼らにも恨みなんてないんだ」
本心から、ミザリは宣言する。
むしろ装甲越しの目は、何処まで行っても優しげだった。
「……日美子が傷つくのを見るのは、楽しいけど辛い。当然だろう？
罪もない人が、まして愛する妹が苦しんでいるところを見れば心が痛むさ。それはどんな人間にもある感情だ」
そう、微笑みすら浮かべて告げたうえで―
「……だから何より美しいんだ。日美子はもちろん、世界中も当然。何より僕も苦しくて悲しくて絶望できる。最高に美しいことじゃないか」
―決定的な断絶を痛感する。
相手の行動を予測する際、自分がどう思うか考えるのは、有効な手段の一つだ。
ミザリ・ルシファーは自分の身に置き換えて想像する。どうすれば苦しく悲しみ絶望するかを。それを自分のことのように感じることで、何よりも正確に把握する。
だからこそ、ミザリは他者の不幸と絶望を作り出す。
最高の結果とは、誰もがメリットを得ることだ。誰一人として損したと思わず、得したと思うことができれば最善だ。
ミザリはだからこそ、誰もが悲しく絶望に浸る光景を求める。そしてそれは、自分自身も含めてであってこそだ。
「覚えている。何もかもを失った時、心から幸せを掴めたと思う君の笑顔。……その瞳に映る、この世で最も美しくなった僕自身を」
思い出すだけで半ば達しつつ、ミザリは道間誠明が勝利を掴んだその時を思い出した。
それをカズヒ（日美子）を理解して、そして震える。
あの時、道間誠明が勝利を掴んだその瞬間は、彼女自身が作り上げ

たものだ。
あの瞬間、道間日美子は道間誠明から全てを奪い取って屈服させたことで勝ったのだと、日美子は思い込んでいた。
だが違ったのだと、カズヒは今まで思っていた。その憎悪を燃やし、雌伏し、裏でいくつもの積み上げることで、あの時復讐の刃ですべてを切り裂いたのだと。
そしてそれすら勘違い。それを理解して、カズヒは絶望すら覚えている。
あの時、勝利したのは誠明なのだ。厳密にいえば、自分にとっての勝利の形が確定した。そしてその勝利の形は、カズヒにとって敗北となった。
「嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ！　嘘だぁあああああああっ!?」
それが認められずに、カズヒは絶叫すら放って頭を抱えて髪を振り乱す。
恨まれて当然だと思っていた。その怨恨で壊れた結果がミザリだと考えていた。だからこそ、たとえ死んでも彼を止めなければならないと決意した。恨みを上塗りすることになると覚悟していた。
だが、その前提条件がひっくり返る。
道間誠明は真っ当な精神性を持っている。悲劇を悲しみ悪意をおぞましいものだと考える精神性を持っている。
だからこそ、彼は悲劇を振りまくことをいとわない。なぜならば、そうすれば他人の悲劇も絶望も、自分の悲劇も絶望も味わえるのだから。
壊れている方向性が破綻しきっている。その事実を、カズヒ・シチャースチエは了承できない。
「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！　嘘つかないでよ、誠にぃ！　恨んでるって言ってよ、憎んでるって言ってよ、復讐したいって言ってよ！　殺されてあげるから、それでもうやめてよ、お兄ちゃん!!」
「本当だよ。日美子には本当に感謝している。この世で最も美しい物を見たからこそ、僕は人生を本当に意味で彩ることができるようになった。人生を賭けてやりたいことができたんだ」

ショックのあまり変身が解けているカズヒに合わせ、ミザリもまた実装を解く。
心からの感謝と喜びを籠め、ミザリは華やかに微笑んだ。
それがあまりにも美しく、本心からでなければ出せない笑顔に、カズヒは愕然として何も言えなくなる。
武器を持つ手から力が抜け、手から零れ落ちることにも気づけない。
「嘘だ……。私を、恨んでないわけがない……ないよぉ……っ」
それでも認められず首を振るカズヒに、ミザリは困った表情を浮かべてしまう。
「どうすれば信じてくれるんだろう？　そりゃぁ、流石に恨んだことが一度もないとは言わないけど、一回やったらもう十分だよ？　……あ、これなら信じてくれるかい？」
そう何かに気づいたかのように呟き、ミザリは軽く指を鳴らした。
「……彼らに関しても、ちょっと嫌な感情はあるけど恨んでないんだ。だからやりすぎたと思ったから、こういう形でお詫びもしたんだよ。……ね、小父さん？」

「いや～。こんな体になったのは十分復讐な気もするけどね～？　でも、結構便利だしお詫びにもなって入るのかな？　ハハッ」
「……は？」
その聞き覚えのある口調と声に、カズヒは今度こそ完全に崩れ落ちた。

祐斗Ｓｉｄｅ

「……なんだ、この、強さは……っ」
攻撃をかいくぐり、そして曹操はアザゼル先生を貫いた。
ヴァーリの猛攻すら避けながらのその戦いに、僕達は信じられないものを見たとした言いようがない。
「仮面ライダーと違い全身鎧型禁手は、オーラが全身を包んでいるようなものなので攻撃が読みやすいんですよ。それに総督共も完全には鎧(それ)を自分と同調できていないので、尚更読みやすい。……まぁ、次戦う時は解析して対策するでしょうから、鼬ごっこみたいな勝利です」
そう涼し気にこたえる曹操は、更に振るわれるヴァーリの攻撃を回避していく。
「曹操ぅぅぅぅ!」
「ヴァーリ、兵藤一誠も踏まえてだけど、今代の二天龍は仲間に情を持ちすぎだよ。だから攻撃が荒くなっているし、オーラも読みやすくなっているよ?」
激高するヴァーリの猛攻は、曹操からすれば更にしのぎやすいということか。
おそらくオーラの集中度合いなどで見切っているのだろう。
そして次の瞬間、ヴァーリが攻撃を放った鎧の部分が石になり砕けている。
その瞬間、サウザイアー・魏の蹴りがヴァーリを力強く蹴り飛ばした。
「加えて、メデューサの邪眼(イーヴィルアイ)を移植していたことも都合がいい!」
「なめるなぁ!」
激高するヴァーリは、渾身の魔力を白龍皇の力で増幅して放つ。
―その瞬間、七宝の一つが発動して力を吸収した。
「珠宝(マニラタナ)。敵の攻撃を他人に受け流す能力。絶大な出力の攻撃も、受け流せばどうということはない」

なんだって？
いや、それどころじゃない。
受け流すということは、どこかに向かって放たれるということ……っ！
「小猫ちゃん！」
小猫ちゃんの前に、絶大な渦が見える。
あれはさっき攻撃を受け止めた物か！　ということは、絶大な龍と魔の力が放たれることに……っ！
まずい、僕もイッセー君もまだ動けないし、何より小猫ちゃん自身が、その脅威に体が引きつって間に合わない!?
「この……馬鹿！」
その瞬間、黒歌が割って入って攻撃を受け止める。
絶大なオーラの攻撃は、いくら最上級悪魔クラスと言ってもただで済ませられる威力じゃない。
事実、黒歌は全身から血を流して崩れ落ちた。
「……曹操……っ！　俺の仲間を、俺の力で……よくも！」
「やれやれ。虐待から逃げた先で拾ってくれたアザゼル総督や、禍の団での仲間にここまで感情移入しているとはね。おかげで更に攻撃が荒くなっているよ？」
振るわれる攻撃全てを回避し、曹操は反撃を叩き込む。
ヴァーリは何とか聖槍だけは直撃を避けているけれど、それ以外の打撃は吸い込まれるように喰らっていく。
「絶大な力も雑では意味がない！　雑で潰したいなら、もっと絶大な火力を出すといい！」
「良いだろう、なら極限まで高めてやる……我、目覚めるは―」
覇龍を使う気か。
確かに、覇龍の出力ならあるいは……。
そう思った瞬間、黒い塊がヴァーリを包み込む。
その方向を見れば、ゲオルグが魔方陣を展開し、サマエルの右手がヴァーリに向けられていた。
「すまないが、覇龍を使われると結界が壊れかねない。……曹操、流石

に覇龍は我慢してくれ」
曹操に謝るゲオルグに、曹操も苦笑で応じる。
そんな短い時間で、オーラは砕け散る。
だが同時に、ヴァーリの鎧も砕け散り、鮮血が辺りに散らばった。
……これほどまでか……なら！
「禁手化（バランス・ブレイク）、聖覇龍騎士団（グローリィ・ドラグ・トルーパー）！」
僕の新たな禁手。これで包囲圧殺を――
「甘いよ」
その瞬間、騎士団達は宙に浮きあがり、その瞬間聖槍のオーラが騎士団を粉砕する。
「存在を飛行させる象宝（ハッティラタナ）さ。ヴァーリ相手に使った時は自分が飛ぶのに使ったけど、こういう使い方もできる」
さらりと吹き飛ばした曹操は、苦笑すら浮かべているようだ。
「自分と同等の速さを与えられるのは素晴らしいが、技術を反映させれないのは欠点だ。お互い精進が必要だね」
……っ
僕は奥歯を砕きかねないほどに食いしばる。
実力が違いすぎる上に、装備までもが違う。
ここまで悔しい気分になるとは、流石に思ってなかったよ……っ
「よくも……みんなを！」
「抑えてイリナ！」
飛び掛かろうとするイリナさんを、リアス部長が押しとどめる。
「これまでに判明した能力は五つ。武器を破壊し、女性の異能を無効化し、任意の相手を転移させ、相手の攻撃を受け流し、自他を問わず意のままに飛行させる。……形状が同じだから、能力が発動するまでどの球か判別することも困難。更に二つも札があるなら、一人で挑んでも一蹴されるわ」
リアス部長の考えは正しいだろう。
曹操の能力は危険すぎる。
聖槍がそもそも武器として凶悪にも関わらず、七つの禁手級の異能が更に凶悪で、更に独自に攻撃手段としても使うことができる。その

上、仮面ライダーとしての性能も、ヴァナルガンドに次ぎ、長期戦に長けている。本人自身の技量も、僕達より一枚も二枚も上だ。
数少ない動けるルフェイ達も手が出せてないし、ヒツギとヒマリも精神的な動揺が酷過ぎて、まともに動ける状態じゃ……ない。
だけど、このままじゃ―
「じゃ、そろそろ俺の出番か」
―その瞬間、曹操の後ろから何かが切りかかる。
飛び掛かるその剣を曹操が切ろうとした瞬間、それが強い閃光を放った。
「目くらましか。どこに―」
曹操が周囲を警戒するけど、仕掛けた相手は剣を薙げた方向から突撃する。
目くらましを仕掛けたのなら、相手の不意を突ける位置に移動する。そう考えてしまうことを逆手に取った奇襲だ。
それを素早く迎撃し、つばぜり合いの体制になった曹操が、僕達と同様に目を見開く。
「涙換救済(タイタス・クロウ)!? 馬鹿な、君はまだ負傷を治療していない。魔術回路の治癒魔術で、こんな短時間に傷を癒すなんて―」
「ああ。だから治すのをやめた」
そう返す九成君の服は、焼け焦げてみるも無残な火傷の跡が……!?
まさか、普通に治すと時間がかかりすぎるから、焼いて塞いだのか!?
確かに、後先を考えないのならそっちの方が早い。それにアーシアさんは無事だから、後でゆっくり完治させればいいということか。
だけど、彼はショットライザーを―
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ』
―装着していることに、曹操も含めて全員が目を見開いた。
『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……』
「馬鹿な!? 君のショットライザーは確かに壊した―」
『ショットライズ!』

驚愕する曹操の隙をついて、九成君は引き金を引き、ショットモデルを展開する。
「間抜け。確かにショットライザーは脳内にＡＩチップが必要だ……が」
『サルヴェイティングアサルトドッグ！』
装着された全身装甲越しに、九成君は曹操を睨み付ける。
『Ｎｏ　ｃｈａｎｃｅ　ｏｆ　ｐｒｅｖｅｎｔｓ　ｓｕｒｂｉｂａｌ』
「ショットライザーそのものは互換性があるんだよ」
そうか、ヒマリのショットライザーを使ったのか！
曹操もこれは想定外だったのか、思わず後ろに飛び退る。
そして九成君と曹操は、静かに視線をぶつけ合った。
「……覚悟はいいか曹操。そう、まだだ」
「少し舐めてかかっていたよ。ああそうだ、君は理論上動かせるなら出せる限界まで体を動かす奴だったね」
静かににらみ合う、仮面ライダーマクシミリアンと仮面ライダーサウザイアー・魏。
そして数秒の間、お互いの様子を探るように睨み合い―

―激闘が一気に発動した。

銀弾落涙編　第十四話　猛威蹂躙（その３）

和地Ｓｉｄｅ

振るわれる聖槍を、俺は腕で振り払う。
サルヴェイティングアサルトドッグは、はっきり言って重武装が売りだ。
つまり、固定武装を豊富に持っているのが持ち味、同時に装甲でもあるのが利点ともいえる。
魔剣創造では強度が足りずに吹き飛ばされると踏んでいた。だからこそ、この強引な突破で吹っ飛ばす！
「流石に君は想定外だよ！　ああ、まさかここまでとはね！」
「そりゃどうも！」
ＡＳガントレットをアストラルスピニングドリルとして使用することで、装甲の突き破りを試みつつ、回転を利用することで攻撃を受け流す。
総合性能では劣っているが、重武装による制圧で何とか押し切れるか！
トップアタックでのミサイルを連発することで曹操の意識をかき乱しつつ、俺は組み付く体制に持ち込んだ。
放つのは胸部のオービタルバインダーから放つ、拡散星辰体粒子砲。その勢いで吹っ飛ばしつつ、空中に出たところをマイクロミサイルで始末にかかる。
「なめられたものだね！」
七宝を使って自在に飛行しながら、曹操は俺の攻撃を迎撃する。
策はある。だが、それを与えるにはどうしても俺が尽力する必要がある。まして負けた時の為にも、データは取れるだけとっておかなければ。

第一だなぁ……。
「カズヒ姉さんを追いかけたいんだよ俺は。いい加減潰れろ！」
「そうはいかない。ミザリに何か言われそうだしね！」
放つマイクロミサイルに対して、七宝の一つが輝くと共に、大量の槍を持った人型の存在が迎撃する。
ちぃ！　数が多い！
気づいた時にはヒット＆アウェイで曹操が俺を削ってくる。
ＡＳブーストで小刻みに加速して回避するが、こいつは連続使用ができるタイプじゃない。このままだと削りきられるか。
「居士宝（ガハバティラタナ）は木場祐斗の禁手と同じでね、技量が反映できてないんだ。攻撃力だけの代物に抑え込まれるとは恥ずかしくないかい？」
「そんなものを使うほど追い込まれてるのと思っていいか？」
嫌味に嫌味で返しながら、俺は曹操と激突する。
あとどれぐらいだ？　……いや、いいタイミングか。
俺はそれに気づき、右側に振り向いて叫ぶ。
「やれ、イッセー！」
「赤龍帝だと!?」
曹操は咄嗟に右側に振り向いた。
……かかったな馬鹿め！
「覚悟しやがれ、曹操！」
左側から、イッセーがドラゴンブラスター発射の構えをとっている。
同時に俺もショットライザーを操作して、蹴りを叩き込む体制だ。
思っているのと別の方向からくる攻撃は回避が難しくなる。仮面越しだから視線も見られにくいのを利用した小細工だ。引っかかってくれてありがとうよ！
ドラゴンブラスターとマグネティックスターブラストフィーバーの十字攻撃。このタイミングは避けきれまい！
そして何より―
「もらいました！」
―放たれる珠宝を、上から飛び掛かったシャルロットが組み付いて

そらす。
このタイミングならそれを使うと思ったよ。なら更に一手入れて妨害すればいい！
これで―
「「終わりだぁあああ」」
―潰す！

「甘い、将軍宝（パリヤーカラタナ）！」
『ＣＨＡＬＬＥＮＧ！』
『ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＭＡＬＩＣＥ！』
その瞬間、曹操は更に七宝を出すと共に、サウザンドライバーを操作する。
その七宝は俺にカウンターとして叩き込まれ、その衝撃で吹っ飛ばす。
『ロンギヌスディストラクション！』
更に放たれる蹴りが、ドラゴンブラスターを突き破って、イッセーの鎧を打ち砕いた。

ロ
ン
ギ
ヌ
ス
ディ　ス　ト　ラ　ク　ション

祐斗Ｓｉｄｅ

あの二人でも、ダメか……！

僕は何とか体を立ち上がらせ、リアス部長達を庇える位置で曹操を睨み付ける。

イッセー君も九成君も、ダメージが大きいのか動けない状態だった。……というより、意図的に動けない部分の骨を折っているようだ。

「……将軍宝は居士宝と同じで未完成かつ、能力も曖昧なんだ。ただ破壊力が大きいだけというのも雑だし、それなら輪宝の方が便利だしね。まして、サウザイアー・魏があれば十分なんだよ」

そう言いながら、曹操は吹っ飛ばしたイッセー君と九成君をちらりと見た。

二人とも、動けないながらも意識はあるらしい。悔しげに睨んでいるのを見て、曹操は肩をすくめる。

「今回はそれに救われたけどね。慣らしがまだ終わってなかったから、後一手遅ければやられていたよ」

そう言いながら、曹操はこちらに最低限の警戒を向けつつもゲオルグに振り向いた。

「さて、ゲオルグ。進歩はどうだい？」

「四分の三強といったところだが、召喚の方を維持できそうにない」

「それだけあれば十分さ。ハーデス神を怒らせないうちに返しておこう」

その言葉が引き金になり、オーフィスを包み込んでいた黒い塊が試算する。更にサマエルも魔方陣に沈むようにして、元の場所に召還されたようだ。

見れば、オーフィスは特に怪我をしているわけでも弱っている様子

もない。
最強の龍殺しでも龍神は無理だった……ということか？
僕がそう思った時、オーフィスはきょとんとしながら小さく呟いた。
「……我の力、奪った？」
……なに？
僕が愕然としている中、曹操は満足げな笑みを浮かべた。
「その通り。無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）の力は非常に価値があるが、無限の龍神（オーフィス）は底知れなさ過ぎて御せないと踏んだ。そこで、発想を転換したのさ」
変身を解除した曹操は、不敵な笑みを浮かべながら拳を握って宣言する。
「この奪った力で、俺達は新たなウロボロスを作る」
……っ！
そういうことか。よく分からない言い草は、オーフィスの力を奪って別のオーフィスを作るという意味か！
「その為に……態々サマエルを使ってオーフィスの力を奪ったのか……！」
何とか立ち上がる先生に聞かれ、曹操は素直にうなづいた。
「その通りです。龍神はともかくグレートレッド個人には興味がなかったので、オーフィスの力はともかく願いは迷惑でした。とはいえ、オーフィスの力はプロパガンダとしても象徴としても非常に有効。禍の団を作り維持するには、やはりそれなりの象徴がいるということです」
「……だから、オーフィスの力だけを使って都合のいいマスコットを作ろうってか。元から半ば傀儡政権だとは思ってたが、いっそ作り直そうとは……人間の嫌らしいところを煮詰めた発想だな、オイ」
九成君が睨み付けると、曹操は胸すら張った。
満更でもないどころか、誇らしいといわんばかりの清々しい表情だ。
「誉め言葉だよ、それは。なにせ俺、これでも人間だからね」
……象徴と力を併せ持ちながら、都合のいい傀儡を作り上げる。

異形社会ではあまり見ない発想だけど、人間世界では傀儡となる象徴は相応に見られるケースだ。冥界では魔王様は若手とはいえ権限は相応にあるけど、実態の権限がない人間界の名目上トップは、歴史上に何度も見られている。
人間だからこその発想。これが……英雄派かっ！
僕達が睨み付けるしかできない中、曹操は苦笑を浮かべて槍の切っ先を僕達から逸らす。
「さて、将来的には今確実に潰すべきだが、個人的にはこれからを見てみたいしデータも欲しい。禍の団でももっと見てみたいという意見があるし、三大勢力なら尚更でしょうね」
そう言いながら、曹操は苦笑すら浮かべている。
「……ふざけて、くれるわね……っ！」
その時、南空さんがふらふらとしながらも起き上がった。
そのまま九成君を庇う様に立ち塞がり、曹操を睨み付ける。
「そもそも、アーシアさんを真っ先に封じれば詰めるでしょう。……誠明と一緒に仕掛けた以上、カズヒは絶対に殺される。……私達を見逃しても、誠明は殺しに来るでしょう……！」
睨み付ける南空さんに、曹操は少し困り顔だ。
「悪いけど、俺は君達の関係にはノータッチだよ。相当因縁があるみたいだけど、ミザリ自身そうだとは思ってなかったしね。まぁ、悪祓銀弾（シルバーレット）一人ではミザリに殺されるだけだろうけど―」

「いやだからしないって。恩人をあっさり殺すほど僕は恩知らずじゃないよ？」
そんな言葉と共に、カズヒを抱えた謎の集団を引き連れ、ミザリ・ルシファーが姿を現す。
「……カズヒ、姉さん……っ」
「カズヒ……っ！　誠明……っ！」

動きたくても動けない九成君と、悲し気にミザリを睨み付ける南空さんが悔し気に唸る。
それに対して、ミザリは曹操をちらりと見て怪訝な表情を浮かべながらも、苦笑しながら僕達を見回した。
「だから殺さないって。僕にとって日美子は、すべてを奪うことで人生を賭ける価値のあるものを与えてくれた恩人だ。殺せば悲しいしそれはとても美しいけど、流石にちょっと気おくれぐらいはするよ」
その言葉に、南空さんは愕然とした表情を浮かべる。
今のミザリの言葉は、陶酔すら込められていた。
ミザリ・ルシファー。彼は僕達が思っているよりも遥かに異常な精神性をしている。
「……なんでよ、誠明。確かに日美子がすべて企んだことだけど、元をただせばパパがやったことじゃない！　もうあれだけ復讐したのなら、恨むのはパパ達にしなさいよ！」
そう涙すら浮かべる南空さんに、ミザリは不思議そうに首をかしげる。
「いや、小父さん達ももう恨んでないよ。……ねえ、小父さん？」
そんな答えに、南空さんは凍り付いた。
そんなミザリの視線の先にいる、謎の集団の一人に視線が向けられる。
複眼型のセンサーを持つ、装甲に覆われた人型の存在。独立具現型の神器みたいだけど、完全な人工物として具現化している。
そんな存在のうち、形状が大きく変わっている存在が気まずそうに首を動かした。
「……それいっちゃう？　流石の僕も、この流れで娘に正体明かすのは気が引けるんだけど？」
……は？
「馬鹿……な」
「ぱ、パパ？」
明らかに驚愕するアザゼル先生と、目を見開いて信じられないといった表情を浮かべる南空さん。

そんな二人や僕らの視線を受けながら、その存在は片手をあげた。
「……やっほー七緒ちゃん？　厳密にはちょっと別物だしこんな姿だけど、パパの六郎だよ？　……元だけど」
その返答に、南空さんは崩れ落ちた。
絶望としか言いようがない表情で、ゆっくりとミザリの方を振り向く彼女は、信じられないように首を横に振る。
「……なんで？　なんで、パパを……？」
「何って、むしろ感謝すらするべきだったからね。もちろん最初は恨んだし、一回殺したからこそすっきりしたし、何より自分が全力であそこまでの悲しみを作れたからこそ心から許せるわけだけどさ？」
苦笑しながら、しかしミザリは大したことはしていないといった風に苦笑している。
「ある意味で恩人でもあるのに殺すのもアレすぎる気がしたからね。元々幽世の聖杯を使って強化復活させようかとも思ったんだけど、第一世代型人造惑星の概念を知ったから、両立できないかって思ったんだよ」
そう微笑むミザリには、異形に対する悪意がない。
それを理解し、南空さんは思わず後ずさっていた。
僕も気持ちは分かるよ。
事情はさっぱり分からない。情報がどうしても把握できない。
だからこそ、分かることもある。
ミザリ・ルシファーは異常者だ。悲嘆を美しいと感じ、自分自身が嘆き悲しむことすら尊んで実行に移せる精神性。更に怨恨を向けて当然の相手に、その行動を感謝できる精神性を持っている。
彼は、何かが根本的にかけ離れている……っ！
僕達が戦慄する中、ミザリは苦笑していた。
「だから日美子を殺したいわけじゃないんだ。むしろ僕に何より大切なことを教えてくれた日美子には、一緒に嘆きを楽しんでほしい。でもあの時のことを考えるとそれも難しそうだから……こんなひと手間を考えたんだ」
そしてミザリは、プログライズキーらしきものを取り出すと、カズ

ヒの腰についたままのフォースライザーに装填する。
『ＨＩＭＩＫＯ！』
いったい、何を!?
「てめぇ……カズヒ、姉さんに、何を―」
「上書きするんだよ。僕を目覚めさせてくれた日美子の情報を、今の日美子の体にダウンロードするってところかな？」
『フォースライズ！』
その瞬間、フォースライザーが展開してカズヒに装甲が付属される。
異形たちと似通った装甲をつけた彼女は、振るえるように起動すると、声を発する。
『……あれ？　誠にい、またすっごいことしたねぇ』
「あれ？　なんか変なことになってるな？」
「カズヒ、姉さん……！」
戸惑うミザリや九成君の声にこたえるように、彼女は飛び降りると体の調子を確認する。
そして、振り返ると軽く手を横に振った。
『ごめんごめん。今の私は道間日美子でもカズヒ・シチャースチエでもないよ』
それにミザリが首をかしげる中、彼女は苦笑の雰囲気と共にミザリに告げる。
『……強いているなら、私はモデルバレット。悪祓銀弾（シルバーレット）よりもミザリ・ルシファー（あなた）と勝利を分かち合える存在』
悪意を全身から放ちながら、ミザリに寄り添い抱き着いた。
『私こそ、悪鬼明星（ルシファー）と並び立てる悪鬼伴侶（リリス）。貴方が描いた勝利の化身だよ』
「……興味深いね、後でゆっくり聞くとしようか」
「そうだね。俺もちょっと聞きたいことがあるから、一旦離れるとしようか」
興味深そうに微笑むミザリに、型を聖槍でたたきながら曹操が近寄る。

「……あのバカについてちょっと話を聞きたいね。まぁ、とりあえず一旦離れようか」
「……あいつ何やったんだい？　あと、結局彼らはどうするのかな？」
ミザリが僕らの方をちらりと見ると、曹操は肩をすくめながら苦笑する。
「俺は生かしておきたいけど、仲間やハーデス神に強制する気はない。オーフィスの搾りかすを御所望だから、大挙して死神達が来るようだよ」
「……ふ～ん……。で、君は？」
「さっきのヴァーリチームが使った術式を真似して、ジークフリートと交代するつもりだね」
そう語りながら、曹操は僕達を見る。
「……というわけだ。できれば俺としても、全力で一対一もしてみたい。ぜひ生き残って乗り越えてくれたまえ」
そう告げながら、姿を消していく曹操達。
……これが、英雄派か……っ！

銀弾落涙編　第十五話　銀の宿命とはいったい何なのか

イッセーＳｉｄｅ

畜生……っ
カズヒが訳の分からないことになるし、オーフィスは力を失うし、仲間達は殆どがボコボコにやられちまった。
曹操、ミザリ。あいつら……っ
「イッセー。冷静になれとは言いませんし、怒るなとも言いません。ですが、今は仕切り直すこのチャンスを活かすべきです」
分かっているさいるさシャルロット。
曹操もミザリも、俺達をこの場で殺さなかった。この油断はチャンスだ。
ハーデスの配下が来るまでに、曹操やミザリが俺達を殺しに来てれば確実に死んでた。そして死神達が来るまでにはまだ時間があるはずだ。
今のうちに時間を稼げるようにして、なんとしてもあいつらに反撃してやる！
「アーシア！　皆の回復は動ける程度でいいわ。今はとにかく、安全地帯を作ってそこに逃げ込むことだけを考えないと」
リアス部長が立ち上がって、周囲を警戒しながらアーシアに声を飛ばす。
ハーデスの配下はたぶん死神。先生の話じゃ異形としてかなりできる連中らしいし、全員が完全回復させてる間に襲い掛かりかねない。まずは完全回復できる余裕を作らないと―
『――――あ、皆聞こえる？　リヴァよ』

―リヴァさんの声が聞こえてきた!?
あ、っていうかリヴァさんがいない!? 何時の間に!?
『今ロビーに繋がる転移ゲートを作るわ。とりあえず階層の一つに結界とか障壁とかでセーフゾーンを作ったから、一旦集まってくれる？』
まじですか!?
何時の間にそんなことを。抜け目がないというか用意周到というか。
いや、でもリヴァさんは主神の娘に恥じない凄腕。そのリヴァさんが今まで時間をかけていたセーフルームなら……！
「ルフェイ！ ゲートの接続をこちらからもして頂戴！ とにかく籠ったうえで更に頑丈にするわ！ 回復はそのあとよ！」
「は、はい！」
部長の指示に従って、ルフェイがすぐに魔法を発動させる。
俺達は作られていくゲートに、まだ動けない仲間達を抱えて集まっていく。
俺は周囲を警戒していると、まだ動けてないヒツギとヒマリを見つけて駆け寄った。
「ヒマリ、ヒツギ！ とにかく今は……っ」
俺は何とか二人の肩を担ぐと、転移用魔方陣まで引っ張っていく。
そこに、南空さんの肩を借りている九成がこっちに来ていた。
南空さんも九成も顔色が悪い。
当然だ。カズヒがなんか訳の分からないことになっちまったし、しかもなんか訳の分からないことが置きまくってる。それも、少なくとも九成や南空さんにとって重要なことだってわけだしな。
それにヒマリやヒツギもだ。ぶっちゃけ馬鹿な俺には分からないことが多すぎたけど、ヒマリとヒツギが元をただすと一つの存在だっていうことなのか？
ドライグ、あり得るのか？
『あり得ないことではないだろう。一つの存在が分かたれ、それぞれ別個の存在になるということは神話においてはなくはない。それも

割と何でもありな聖杯戦争と、生命と魂を司る幽世の聖杯による強引な合わせ技なら……お前がおっぱいで何かするのと同じレベルで何でもありえる』

俺真面目に聞いてるんだけど？

『真面目な話だ。異世界からおっぱいを司る神が加護を与えに来たのに比べれば、理論上あり得る範囲内なだけまだましだよ』

そうかい。俺がおっぱいで何かするよりはましだってか。

……もっとも、マシなのはあり得るってだけで、内容からすると別の意味で質が悪いけどな。

ヒマリもヒツギも、さっきからろくに反応ができてない。

ただ、ちらりと九成を見て、どこか悲しそうな表情を浮かべているヒツギに、ミザリ達が去っていった方向を向いて泣きそうになっているヒマリ。

誰もがボロボロで、正直俺も訳が分からない。

だけど、俺は心の底で決意していることがある。

ミザリ、曹操。

お前達は、絶対に一発ぶっ飛ばす……っ！

九成Ｓｉｄｅ

俺達はリヴァ先生が用意したセーフゾーンに転移すると、更に厳重に異能による防御態勢を万全にする。

既に結界空間内では死神が露骨に姿を見せているうえ、どうやら曹操もジークフリートと入れ替わりで転移したらしい。

最強最悪の龍殺したるサマエルや、最強の聖槍を持つ曹操のコンボ

ほどではないだろう。だが龍殺しにして最強の魔剣たるグラムを持ち、星辰光や四本の魔剣による相乗効果を持つジークフリートも十分危険だ。死神という質までいい数の暴力があることを踏まえれば、まったくもって安心できない。

とりあえず、俺達は睨み合いに耐性になっていることを確認してから、少しだけ一息つける状態だった。

アーシアの回復で負傷は治っているし、女性陣の封印された異能も回復した。あとはとにかく体力を回復して、脱出に備えて英気を養うだけだ。

最も、結界空間のホテルは水道はないし冷蔵庫に何も入っていない。物資に関してカズヒ姉さんが囚われたこともあって、正直どこまで回復できるかだ。

……そして、はっきり言って俺を含めたかなりのメンバーが、メンタル最悪と言っていいだろう。

カズヒ姉さんがあんなことになったうえ、ミザリの口から明かされる、とんでもない爆弾発言。しかもミザリが元凶であり、二種の聖杯による相乗効果という筋の通った理屈まで発覚。とどめにアザゼル先生がミザリでも分からないところを補足した辺り、先生が知っていたと考えるべきだろう。

自分でも、正直いっぱいいっぱいだ。だから……。

「……先生、リーネス。そして……鶴羽」

俺は、ひと段落がついたそのタイミングを見計らい、三人を真っ直ぐ見据える。

「頼む、教えてくれ」

頭をまず下げ、そのうえで真っ直ぐに三人を見渡した。

正直に言えば、今聞いている余裕があるのかと言われると微妙だろう。

やらなければならないことの難易度は非常に高く、その為にやるべきことも見えてない。

分かっている。普段の俺ならたぶん抑えている。そもそも、それがカズヒ姉さんが言おうとしていたことで、それをこんな形で聞くのは

カズヒ姉さんにも失礼なことになる。
だけど、俺にだって限界はあるんだよ。
「……もう、知らないままではいられない。俺やカズヒ姉さん、鶴羽にリーネス、ヒマリにヒツギも……！　ミザリ・ルシファーとどんな関係があるっていうんだ!?」
我慢できるわけがない。ないだろう!?
何もかもが突然すぎて、正直こっちもなんでこのレベルで済んでるのかが分からない。
ミザリ・ルシファーにカズヒ姉さん達が前世の縁があって、しかも俺まで関わってるときた。
カズヒ姉さんがあんなことになったことも含めて、理解できないし納得できないし、何より知ることすらできてない。
そのままでいろだなんて、どうにかできる余地があるのでできるわけがないだろう!?
疲労が残っている状態で叫んだからか、そもそもメンタルが限界だったから、俺はそのままふらついて倒れそうになる。
その背中を、リヴァ先生が抱き留めた。
そのままリヴァ先生は、俺を後ろから優しく抱きしめる。
そのうえで、視線を先生達に向けるのが分かった。
「……私からも聞かせて頂戴。ぶっちゃけ曹操が絶霧（ゲオルグ）まで連れて動いた時点で、長丁場になるうえに私がやられる可能性を考慮しての行動だから、長時間時間を稼げるわ。……数時間はもつはずだから、それで足りるなら話してほしいわね」
そう言いながら、リヴァ先生は魔方陣を展開する。
異空間の魔法を利用したそこから、段ボール箱が一つ落ちてきた。
リヴァ先生はそれを開くと、中からペットボトルの水や缶詰の類を取り出した。あと酒も何本か入っている。
「栄養と水分を補給しながらでいいわ。素面じゃしゃべれないなら未成年飲酒も許しちゃう。だから……ね？」
そう苦笑交じりで言う中、リーネスは目を伏せてアザゼル先生はそっちを見て、意を決して―

「……分かった。私が話すわ」
—先生より先に、鶴羽が切り出した。
「鶴羽!? いいのぉ?」
「……大丈夫よリーネス。カズヒ(日美子)やミザリ(誠明)はいないし、まだ乙女はしゃべれる状態じゃないしね」
気づかわし気なリーネスにそう答えながら、鶴羽はヒマリやヒツギに気づかわし気な視線を向ける。
二人とも、負傷こそないから座っているだけですましているが、どう考えても戦闘に出せるような状態じゃない。
というか、俺をちらちら見て顔を青ざめさせているのはどういうことだ?
……それも含めて、話してくれるってことか。
「教えてくれるのか?」
「ええ。カズヒには悪いけど、このまま言わないでってわけにもいかないでしょ? それに……」
そして鶴羽は一歩前に出ると、俺を顔を見て顔を使づける。
そっと手が俺の後頭部に回され、鶴羽は涙を浮かべそうな表情で俺を見た。
「……私もそろそろ限界なの。お願い、全部吐き出させて」
……そっか。そうだな。
事情がさっぱり分からない俺だってこうなんだ。事情を知っているからこその限界だってあるんだろう。
なら、俺が言うべきことは決まっている。行動で示すことも決まっている。
俺は、自分から鶴羽を抱き寄せると唇を奪う。
五秒。心落ち着かせてからゆっくりと話して、ちょっとぎこちないけどほほ笑んだ。
「大丈夫だ。瞼の裏の誓いだけは、何があっても揺らがない」
「……きっと、それを知ったらカズヒも喜ぶわよ」
そう苦笑いを返しながら、鶴羽は一度目を閉じた。
そこにどれだけの感情を巡らせたのかは分からないけど、目を開け

た時、鶴羽の目には覚悟があった。
「……すべての始まりは三十年以上前、ある二人の兄妹が、一人の女の子に出会った時から始まるわ」
それは、例えるならば銀の宿命。
光になれるが黄金には届かず、それゆえに一度は錆び付き壊れてしまった、道間日美子（カズヒ・シチャースチェ）の物語だった。

銀弾落涙編　第十六話　銀の弾丸が背負う罪業（前編）

イッセーＳｉｄｅ

南空さんは九成の胸元に額を当てると、そのままぽつりぽつりと語り出した。
「……そもそも道間家っていうのは、魔術回路のピンキリを無視すれば、魔術回路保有者で歩兵一個大隊は作れるぐらい、親戚や分家が多数いるの」
そりゃすげえな。人が多すぎだってことか？
「より優れた魔術回路を産み出すには優生学じみたことが必要で、また天然で魔術回路を持っている人間がいれば、小遣いたくさんで風俗狂いや愛人囲ってもいいぐらいの勢いで囲うこともしばしば」
「補足するとぉ、海外に進出する頃には大王派と繋がりが出来てねぇ。血統をより良くしようとする道間家とは相性が良かったのかぁ、半ば蜜月関係なのよぉ」
リーネスが南空さんの説明に上乗せするけど、二人とも調子ははっきり言って悪そうだ。
それだけ嫌なことがあったっていうのか？
聞いているだけで内容と違って不安になっていく中、南空さんは更に続けていく。
「……ミザリ・ルシファーの前世の道間誠明と、カズヒの前世の道間日美子は実の兄妹。両親を早めに亡くした二人は、便利屋的な道間の家に引き取られるんだけど、そこで同じように引き取られた道間に連なる孤児と出会うの」
この時点で、俺はもう驚くしかない。

ミザリとカズヒが前世で兄妹!?　おいおいまじかよ。
俺以外にも驚いている人が多い感じだけど、南空さんはそれには目を向けないで、ヒツギとヒマリの方を向いた。
……ああ、これに関しては俺でも分かる。
「その女の子の名前は道間乙女。魔術回路の影響で、髪の色が桃色で昔はいじめられていたみたい。……まぁ、魔術に慣れれば認識阻害でどうとでもなったんだけどね」
そう苦笑する鶴羽は、ヒマリとヒツギの方を見る。
二人とも、何も言えてないし困惑しているけど、鶴羽の方を見て何か目を見開いている。
「……思い、出した……二人と会った時―」
「―日美子、ずっとむっとしてましたの……」
記憶が思い出していっているのか？
でも、なんか曖昧な感じがするな。
……二人に分裂している弊害って奴か？　だから情報とかが二分の一になってるとかそんな感じで。
ただ、南空さんとリーネスの二人を見る表情は、とても痛々しい。
なんか躊躇しているとしか言いようがないその雰囲気に、誰もが何も言えなかった。
「……話を続けるわ。そのあと数年ぐらいは、とても仲が良かったみたいなの。日美子はお兄ちゃんっ子で時々乙女と喧嘩もしていたけど、乙女と誠明は友達以上恋人未満って関係性がとっても相応しかった。傍から見てもくっつくのは確実って感じだったわ」
「……私と鶴羽―アイネス・ドーマと道間七緒が出会ったのは、そこから更に数年後。それまで面倒を見ていた血族が大王派と少し揉めて、それで私がホームステイをしていた七緒の家が本家からの指示があって引き取った形になるわねぇ」
そう語る二人の表情は、悲しそうだけどどこか笑顔だった。
きっと、その思い出は楽しかったんだろうな。
「……みんな魔術回路を持っているから、五人で秘密基地を作ったりしたわ。あと近くの農家とかにこっそり魔術を使って小遣い稼ぎで

支援とかしてたから、卵かけご飯がみんな大好きになってたのよねぇ。……私はパパやママが一時期毎日三食卵にしてたから、一周回って慣れすぎてたけど」
「生卵を食べるなんて斬新な発想に感銘を受けた記憶があるわぁ」
そんな風に楽しそうな思い出を語りながら、だけど二人の表情はどんどんつらそうになっていく。
それは何となく分かるかもしれない。というか、これからきっと悲しいことが起こるんだって、それが分かった。
「……話が動くのは数年後。中学卒業を機に、今度は私がアイネス（リーネス）の家にホームステイすることになって、三人と別れて三年目ね」
「だけど、まさにそんな時に来た連絡で、私達は凍り付いたわ」
リーネスが、ぽつりと俯きながらそう言った時だ。
南空さんの体が震えて、静かに俯いた。
そして、南空さんは声を絞り出す。
「……誠明と日美子が、道間分家の者を含めた二十名近くを惨殺。殺した弟子の一人と婚約していた乙女を誘拐して出奔したというものよ」
……なんだって？
凍り付きたくなるぐらい、それはあまりにもびっくりするしかないことだ。
さっき、誠明と乙女は恋人未満で、いつかくっつくって話だったじゃないか。
それが何で、別の人と結婚していて、その人まで殺すことになってるんだ？
いや、そもそも待てよ。
乙女って二人と同じ頃なら、高校三年生ぐらいだろ？　それが、なんで……？
訳が分からないながら嫌な予感を覚えていると、鶴羽が俯きながら震え、その肩を抱いたリーネスが話始める。
「……本家の者まで動いている事態に、分家でしかない私達は迂闊に介入が出来ず、待機を命じられたわぁ。でも鶴羽は我慢できず、たま

たま同時に発生が確認された亜種聖杯戦争に参加。……そこでルーラーと共闘する形で優勝した鶴羽は、「それに連なる事実を知る」ことを願い、そして―」

「―私達が幸せだと思っていた過去の裏にある、糞ったれな事実を知ることになったわ」

リーネスにしゃべらせたくないように、南空さんがそう声を振り絞った。

拳を血が出るまで握りしめて。奥歯を砕きそうなぐらい噛み締めて。目を悔しそうに強く閉じて。

そして、支えてくれないと倒れてしまいそうなほどに、頭を九成に押し付けて―

「―日美子は事件が起きる十年ほど前から、ずっと情欲にかられた道間家含めた男どもに犯され続けていたの。後から増えて言ったやつの中には……パパ、も……いたの」

――――告げた言葉を、俺は一瞬理解できなかった。

いや、多分知っている人以外は誰も理解できなかったと思う。

リヴァさんですら唖然として目を見開いていたぐらいだから、間違いないだろう。

事情を知ってるリーネスやアザゼル先生も、目を伏せていた。

「……パパはそこそこの魔術回路に目を付けたママが完全に優生学重視で政略的に結婚した相手だったわ。元々ロリコン気味なところはあったけど、まさか両親揃って同居している女の子を性欲のはけ口にしたり容認したりできるなんて、思ってもみなかった……っ」

そう言いながら、南空さんは九成に顔を埋めながら崩れ落ちる。

当然だろ、そんなもの。当然じゃねえか……っ

両親が、大事な友達に、そんなことをしてるなんて、耐えられるわけがねえ！

なんだよそれ、何なんだよ。

聞いているだけの俺だって、カズヒがそんな思いをしていたなんて、納得できるわけが―

「……そして、話は此処からが本番よぉ」

―リーネスの声が、俺達を引き戻す。
今、なんて言った？
ここからが本番？　ここまでで十分すぎるほど悲劇だろう？
そりゃ切れるに決まってる。殺したくなるに決まってる。
これ以上、いったい何が―
「……まず告げるわぁ。さっきの話は道間本家がある程度の誤魔化しを入れているだけでなく、誠明の偽情報などで振り回されたことによる誤報。……殺戮事件そのものは、誠明の独断よぉ」
―なんだって？
いや、確かに言われてみれば納得するところはある。
あのカズヒが？　復讐するにしても？　友人を誘拐してまでするか？
俺と同じ疑問を持っている人は多かったみたいだ。リアスも木場も、それに納得している。
「……確かにそうだね。いや、当たり前か」
「あのカズヒと記憶が連続している前世だもの。いくらなんでもそんなこと……ねぇ？」
木場やリアスが言葉にして、聞いている皆が納得しかけた時だ。
俯いたリーネスは、皮肉気に、やけくそ気味に喉を鳴らした。
「……クッ。そんな話で済むわけないわぁ。逆よ」
……逆？
何が逆だよ。その事件は誠明の独断だって、リーネス達が言ったことだ。
それが逆だなんて、どういう意味だよ。
俺達みんなが戸惑っていると、南空さんは拳を更に握りしめた。
「カズヒがああなったのは、元からじゃない。……逆なのよ」
逆って、何が―
「……日美子は、自分から公言するぐらい誠明のことが好きだと毎日のように言っていた。実の兄妹じゃなければ結婚したいとまで私（七緒）や鶴羽（リーネス）に言っていたし、実際告白して、兄妹だからと断れた挙句乙女を連れてどっかに行かれて、大泣きしたことを言って、誠明をからかっ

ていた。……その日から犯され続けてきたことだけを隠した上で」
―は？
俺達が、また凍り付く中、南空さんはそのまま続ける。
「……日美子はそれ以来ずっとやけっぱちで、それでも私達との毎日で心を支えていて、だからこそ、少しずつ歪んでいって―」
「―それが、私と七緒が離れたことで崩れたんでしょうねぇ。そこから、日美子の負の感情は一気に爆発したのよぉ」
何も言えなくなってきた南空さんから話を引き継いだリーネスは、だけど崩れ落ちるようにソファーに座り込んで、俯いた。
俺も、皆も何も言えない。
寒気を感じるし、体が震えそうになる。俺達ですらそうなるなら、リーネスや南空さんがどんな気分かなんて、少なくとも入れ俺達以上だってことぐらいは分かる。
見てられなくなったのか先生が動こうとするけど、リーネスも南空さんも手で制した。
せめて、自分達の口から話したい。そういうこと、何だろうな。
「耐え続けて限界を超えた日美子は、その負の感情をパパ達だけじゃなく、乙女にも向けた。……ずっと苦しみ続けながら、それでも誠明を愛しているという意識を支えの一つにしてきたからこそ、誰が見ても分かるぐらい誠明と結ばれそうになっている乙女ねぇに憎悪が一番集ったのよ」
だから俺達も止めることができないでいると、何とか持ち直した南空さんが話を再開する。
そしてリーネスも目を伏せながら頷いた。
「……もちろん犯し続けてきた男達にも向けていたし、誠明に対する感情も愛憎渦巻いていたわぁ。結果として、道間日美子は一つの計画を立てて実行に移したの……」
そして、二人は一瞬だまって、気づかわし気に視線をヒツギとヒマリに向ける。
ああ、気持ちは何となく想像できる。
ヒマリもヒツギも、まだ分からないことはあるけど、道間乙女の生

まれ変わりってことなんだ。そして、カズヒが……道間日美子が恨みを向けた相手だっていう。
それ以外の話も全部含めて、絶対に二人にとってもつらい話になるに決まってる。
俺達も聞いていいのかと、俺はそう思うけど―
「……なんかさ、夢みたいにふわふわなんだよね」
―そんな風に、ヒツギが話し始めた。

祐斗Ｓｉｄｅ

壮絶という言葉すら、きっと生ぬるいんだろう。
僕だって割と不幸な人生を送っていたと思っているけど、カズヒの―道間日美子の―それは方向性が違い、そしてある意味で遥かにえげつない。
そして同時に、その中で語られてきた道間乙女が、ヒマリであるヒツギである。
間違いなく、ここから先の話はヒツギにとってもヒマリにとっても酷い話になる。
だからこそ、ここでヒツギが話し始めたことに、僕達は息を呑む。
ヒツギも、記憶が戻っていったのか？
「……ぼんやりしているというか、夢の内容をはっきり覚えているいうか。……多分だけど、私の前世の記憶は、二人やカズヒとは違って、曖昧になってるのかな？」
ひきつり気味な表情で、ヒツギはそうぎこちなく笑う。
そんなヒツギに、アザゼル先生は目を伏せながらも首を横に振っ

た。
「無理もねぇ。バニシングロストと無茶な運用が原因によるバグみたいなもんだ。いうなればお前とヒマリは、道間乙女と混じっていた双子を、文字通り足して二で割った存在だしな」
確かに、そうなんだろう。
バニシングロストというのは詳しくは知らないが、話によるなら死亡した一卵性双生児が体内に混ざる現象だということだ。となれば、本質的に道間乙女と彼女は同一の遺伝子を持つが別人ともいえるし、そもそも死体が特殊な状態で保全されているだけとも言える。
そんな状態で起きたバグである以上、ヒツギもヒマリも、厳密には道間乙女から連続した存在ではないだろう。
だからこそ、二人は三人とは違って記憶を保持していなかった……ということか。
それでも記憶がないわけではなかった。だからこそ、明確な指摘を受けたことで驚愕したのか。そして、それがきっかけになって道間乙女の記憶が流れ込んできた。
「……一つ、聞きたいんだけどさ？　二人……カズヒもだけど、知ってたの？」
その言葉に、南空さんはリーネスを見て、リーネスは目を伏せた。
どうやら、まずはリーネスが基点になっている。そういうことなんだろう。
「……少し話はそれるけれど、私は堕天使の娘として生まれ変わった時から、魔術回路や聖杯戦争の研究を主眼にしていたわぁ。そして実験的に小規模な亜種聖杯戦争を起こした際、ＵＳＢメモリにかかれた内容を実行するという形で、余剰出力をもって私のように生まれ変わった子達を探せるよう、そういう魔眼を会得したのぉ」
そういうことか。
思えば、リーネスが初めてカズヒを見かけた時の反応や、南空さんと会った時の反応はリーネスが基点だった。
「……私はそこから補足的に情報を得てる立場だったからね。運悪くサウザンドディストラクションの後にリーネスと顔を合わせること

がなかったから、私もリーネスも試せなくって……さ」
悲し気に苦笑いする南空さんに、リーネスも同じような表情でうなづいた。
「鶴羽の嘘発見技術は、真相を探る為の独学で習得したものなのよぉ。……で、勘づいてカマかけをしたのか、鶴羽と私たちが初めて顔を合わせた時の一幕」
あれはそういうことだったのか。
冷静に考える不自然なあれらの行動には、そういった事情があったとは……ね。
僕達の多くが納得していると、そのうえで南空さんは真っ直ぐにヒツギに向き直った。
「……はっきり言うと、カズヒはアイネス(私)と七緒(達)や乙女が二人になっている以上の情報は知らないわ。仮説はアザゼル先生が立ててたけど、カズヒが罪悪感で死にそうだから、必要になるまでは明かさない方針だったの」
南空さんはそう言うと、いまだ何も言えず俯いているヒマリを見てから、少しだけ目を伏せる。
きっと、ここからが二人にとってもつらい記憶なんだろう。
そして、南空さんは意を決して、顔を上げて目を開いた。
……ある意味で、ここからが四人とって本当の地獄の始まりなんだろう。
それだけは、僕達でも分かった。

銀弾落涙編　第十七話　銀の弾丸が背負う罪業（後編）

祐斗Ｓｉｄｅ

「話を戻すと、限界を超えた日美子はある計画を立て、自分を犯し続けてきたことをばらされたくなければと脅して、パパ達を実行犯にして行動を開始したわ。……単刀直入に言えばあれよ、鬼畜調教ＮＴＲ系のエロゲをやったの」

心から苦々しげに南空さんがそういうと、ヒツギも泣き笑いの表情で、天井を見上げる。

「……曖昧だからちょっと自信ないけど、ある時日美子に泣きながら相談されたんだよね。「何年も前から男達に犯されてる」「警察に言うとその画像や動画をばらまく」「でももう我慢できない、死にたい」って。……で、年若く人の悪になれてない乙女（私）は、日美子の目論見通りに馬鹿正直に直談判」

「……あとはまぁ、なんとなく想像できる子も多いでしょうねぇ。乙女は交換条件で自分が犯され続け、日美子がそれとなくフォローする形で、誠明に知られないように乙女は快楽に染まり、そして堕ちた」

わざと茶化すように言いながら、だけど三人とも全く表情を隠せていない。

当然だ。胸糞が悪くなるなんて領域でもない。これはそれだけの重い話だ。

何より、あのカズヒがそんなことを計画して主導した。その事実以上に、カズヒ・シチャースチエという女性の今の在り方に衝撃を受ける。

彼女は常々、正義を奉じて邪悪を憎む、正義の味方で必要悪だと、そんな生き方を自分に課してきていた。
それほどまでに、彼女は正しく生きる人々や尊ばれるべき正義の為に、すべてを捧げんとする女傑だった。
誇り高い鋼の女性。そんな風に思っている人も多いだろう。僕だって、正義を奉じながらダーティジョブを自ら背負う彼女の精神性に、畏怖すら覚えていた。
その全てが反転しそうだよ。
……むしろ逆だ。まだ話は終わっていないけど、それでも分かる。
カズヒ・シチャースチエは道間日美子（自分自身）を心から嫌っている。かつての自分が成した所業を、心底から憎んでいる。だからこそ、二度目の人生を自分の為ではなく正義を奉じて邪悪を祓う為に捧げずにはいられない。
「……ちょっと前、ディオドラが裏切って旧魔王派がテロを仕掛けてきたときに、カズヒは言ってたことがあったよな」
イッセー君が、拳を握り締めながらそう呟いた。
その言葉に、当時共に戦った僕らは思い出す。
彼女はディオドラの眷属達を「鬼畜調教ゲームの攻略済みキャラ」や「薬物中毒」と形容し、そういった者達は依存しているから自力ではどうにもできないと言っていた。
それはきっと、道間乙女のことだったんだろう。そしてある意味で、道間日美子のことでもあるんだろう。
道間日美子は彼らになびかなかったし依存しなかった。だが同時に、道間誠明を愛しているという認識に縋りつくことでしか己を保てず、それでも歪みに歪んでしまった。
だからこそ、そんな事件を引き起こしてしまったんだろう。
「……うろ覚えでしかないけど、言われると一気に思い出してきたじゃんか。……最初は裏で泣きながら、画像も取られたからこそ誰にも相談できなかった。だけど、何時の間にか体が快楽を覚えて毎日うずいてたまらなくなって、しかもそんなことを隠してたから、誠明ともギグシャクしてさぁ……」

そんな風に、複雑な表情を浮かべながらヒツギが語る。
「……何時の間にか、楽しみになってましたの」
そして、ヒマリもまたぽつりぽつりと話始めた。
僕達の注目が集まる中、ヒマリは俯いたまま、それでも何かを思い出し始めていた。
「何時の間にか、誠明や日美子との毎日より、小父様達のところに行くことの方が楽しみになってましたわ。……小父様達に「誠明のことはいいのか」と聞かれても、「もうどうでもいい」「小父様達と一緒にいる方が大事」って撮られながら答えた風景が思い出せますの」
そんなヒマリが振るわせる肩を、そっとリーネスが抱き寄せる。
「精神的に追い詰められ、何かに縋り依存せずにはいられない。日美子はきっと、誠明を愛しているという認識じゃなくて、彼らに依存しそうになったことがあるんでしょうね。だからこそ、そうならないように裏で手をまわしながら、乙女が彼らに依存するのを……待った」
悲しみの憤りも混ぜ合わせながら、リーネスは伏せた目から小さく涙をこぼす。

「……日美子はそれからそれとなく、誠明と乙女がお互いの時間を取れないように動いていたわ。そして気を見計らい、「個人的な楽しみ」という理由で、パパ達から乙女ねぇとの記録映像を借り受けると、録画したうえで誠明が見れるようにそれとなく手を回した」
俯きながら、南空さんは話を引き継いで話始める。
「ご丁寧に「誰かに話すと無差別に流出させる」と前置きすることで、若い誠明は誰にも言えなくなって、乙女との関係は更にギグシャクして、更に乙女はパパ達にのめりこむ。……そして、あるトラブルが起きたのよ」
あるトラブル。……いやな予感しか覚えないね。
そして、それは実際に最悪といえるだろう。
「……日美子は乙女を差し出してスケープゴートにしながらも、変な暴発を避けたり餌を与える為にパパ達と関係を持っていたわ。ただ、乙女を差し出したうえで自滅覚悟の取引を持ちかけていたことで、避

妊だけはしてもらっていたみたい。……パパが参加する前は、中絶手術を受けた経験もあったそうよ」
重すぎる。あまりにも重すぎる。
僕達グレモリー眷属も、その過去には重い物がいくつもある。インガさんや春菜さん、ベルナさんも重い過去を持っている。
だけど、それを踏まえても彼女の過去は、あまりにも人間性を歪めるのに十分すぎる悲惨さがありすぎた……っ。
そんな、父親の所業を語りながら、南空さんはある意味で本題を語り始めた。
「そして本命を切るタイミングを計っていた日美子は、コピーする為の映像をパパから借りた時、ガス抜きも兼ねて公園のトイレでパパの性欲処理に付き合ったわ。……それを、精神が疲弊して放浪癖を持ち始めた誠明が見つけてしまったのよ」
ここからが、ある意味で本題か。
僕達は息を呑み、胸を苦しめながらもあえて無言でそれを聞き続ける。
「……パパは亡霊—残留思念—を利用した使い魔の制御に長けていて、それに気づいていたわ。だけど日美子は本命を叶えられると踏んであえてそのまま進めて、完全に動揺して周りが見えなくなった誠明を気絶させた」
震えながら、吐きそうになりながら、南空さんはそれでも話始める。
「日美子は誠明を動けないようにしてから、目覚めた誠明の前ですべてを語り始めたわ。更にバイアグラを投与させたうえで、誠明を犯し始めた」
「……それでも、いいえ、だからこそ。誠明はそこで奮起したわ。日美子も乙女も助けたいと心から思って叫んだのよぉ」
リーネスはそう続けると、だけどその顔を歪めてしまう。
「もちろん、あの状況下で誠明がどうこうできることはさほどないわ。強引に警察に全てを明かしたうえで、心無いバッシングなどから心の支えになるぐらいかしらね。……だけど、日美子はそこで決定的な切り札を切った」

決定的な、切り札？
「……道間乙女（私達）の妊娠検査キット、陽性の結果かな？」
ヒツギが尋ねるけど、その内容に僕達は凍り付いた。
……そのタイミングで、それは……っ！
そして南空さんは頷いた。
「……多分その時に誠明は、日美子の目に映った自分を見たんでしょうね。私達はそれが理由で破綻したのかと思い、実際は別の意味でやばい方向に行っていたわけだけど、それ以来、誠明はずっと雌伏していたようね」
「おそらく、自分が自分の求める生き方を追求するには、ある程度の博打は必要と踏んだんでしょうねぇ。ごく小規模の亜種聖杯戦争を行い、力を会得した。……そして、一年が経過したわぁ」
南空さんとリーネスは交互に語り、そしてある意味で本題が、始まろうとしていた。

イッセーＳｉｄｅ

「……既にその頃乙女は出産し、遺伝子検査の末に妊娠させた男と籍をいれていたわ。日美子も誠明との子を妊娠して出産し、パパを経由する形で一時的に、道間が表向きの事業を行うために用意しているフロント企業ならぬフロント一族に、一時的に養子として送っていたわ」
「その子は真っ当な家の人達に育てらていたようだけれど、方向性が違っていたこともあって、聖杯ではあまり情報が得られなかったのぉ。私も詳しい話は、カズヒから直接聞かされたわぁ」
美空さんとリーネスは、交互にえげつない話を続けていく。

重すぎる話が、此処で更に重くなるんだろうな。
糞ったれ。思い出しながら聞いてるヒマリやヒツギに、きつすぎる……っ
「……色々少しずつ魔術でやりくりしていたみたい。それで、最終的には同性愛者であることを隠したい奴を見繕って偽装結婚して同居し、養子縁組という形でその子を引き取るってところまでが日美子のプラン」
南空さんはそう言ってから、一旦目をつむって沈黙した。
ああ、俺達も薄々分かってるよ。
ミザリが……いや、道間誠明が動いたのは、まさにそのタイミングなんだろう。
「そして日美子が出産後、一般人の友人と遊んでいた時に、事件は起きたわ」
俺達は、多分みんなが自覚してるかどうかはともかくつばを飲み込んだだろう。
それだけの話だって分かる。間違いなく、ここからが話が急転するところだ。
「あるビルの高層階が突如として爆発。そこはパパ達がそういうことをする為に確保していた場所で、乙女がその日はいたことまで日美子は覚えていた。そして本能的にそこに向かった日美子は、魔術による阻害で行動ができないでいる救急隊や消防官達を掻い潜って現場に到着したの」
そこまで告げて、南空さんは一呼吸を置いた。
そして、話を続ける。
「そこで彼女が見たのは、誠明によって殆ど全員が殺されてるパパ達と、産んだ子供を庇って、深手を負った乙女よ。……その後、乙女は植物状態になったそうよ」
「……誠明は日美子を誘ったみたいねぇ。「僕と一緒にこんなことをし続けよう」って。だけど―」
泣き出しそうになりながら話を進める二人に、ヒツギが手を伸ばしてそれを止めた。

「そこから先、少しだけ私に話させてほしいかな？」
そう前置きしてから、ヒツギは苦笑しながら話し出す。
「うろ覚えで何なんだけど、そこだけはやけにはっきり覚えてる。……あの時、意識が朦朧として記憶も混濁してた乙女（私達）は、崩れ落ちて泣きそうになって日美子を見て、手を伸ばした」
そしてヒツギは更に続けようとして―
「―思い出しましたの。乙女（私達）は、あの時日美子を助けようとしてましたわ。何もかもが分からなくなっても、たまたま見えた日美子を助けようとして……結局そのまま意識を失いましたの」
―ヒマリが、その話を続けていく。
そっか。
大切だったんだな。大事だったんだな。
それだけ日美子（カズヒ）は乙女（二人）に大切に思われてたんだな……。
美空さんはそれを聞いてから、また話し出す。
「……カズヒが言うには、「ねじ曲がって明後日の方向に向いていた精神が、誠にいの行動で無理やり元の方向に曲げ直されて、乙女ねぇのあの行動で正気に戻ってしまった」とか言ってたわね。それで衝動的に乙女とその子を助け出して、私達が昔作った秘密基地に隠れ潜んだ」
「……ただ、生き残っていた道間家側の者が裏で手を回した事もあり、誠明だけでなく日美子も殺戮事件の主犯となっていたわ。私達が真相を知った時には既に裏でなあなあにするべく討伐部隊まで結成。私達は若かった所為で咄嗟に秘密基地に向かったけれど……」
リーネスがそう言うけど、俺でも何となく分かる。
……カズヒも、リーネスも、ヒツギも、ヒマリも、南空さんも。道間日美子でもアイネス・ドーマでも道間乙女でも道間七緒でもない姿でここにいる。
ああ、俺でも、重要なことだけは分かる。
「……死因は、何なんだ？」
「……私達がを事実を知った時、日美子（カズヒ）は半年以上の隠匿生活でだいぶ追い詰められていた。一発逆転の打開策として、亜種聖杯を利用す

ることを目論んだわ。でもカズヒの力量じゃ完成度は甘く、更に討伐部隊が秘密基地を知って派遣され、戦闘になった影響で致命的な事態になったの」

……俺が使った時、シャレにならない規模の原油が現れて大変なことになった。

もし半分以下であっても、そんなものが用意できるエネルギーが暴発すれば、大変なことになる。

俺達が悟っていると、先生はため息をついた。

「相当色々動いたみたいでな。何かが起きることも踏まえていたうえ大王派にまで情報をぼかしながら協力させた結果、表社会にそれらしい記録は一切ないってオチだ」

まじか。……道間家って、やばい連中だってことか……。

だけど、凄い話だったな。

重すぎるし、酷過ぎる。これが、カズヒ達が隠していたことだってのか。

隠したくもなるだろうさ。こんなの、しゃべれるようなことばかりじゃないだろう……っ

九成は黙って聞いていたけど、話を聞き終わったから何かを言おうとして―

「和地。ある意味で、和地に一番重要なことがありますよの」

―ヒマリが、俯いて震えながらそう声をかけた。

先生もヒツギもリーネスも南空さんも。それに何も言えないでいた。

何があるんだ。一体何……が―

「……子供の話じゃん。……そこが、ある意味で二人揃って重要なんだよね」

ヒツギが続けて、俺も面食らった。

そういえばそうだ。

道間乙女が生んだ子供と、道間日美子（カズヒ）と道間誠明（ミザリ）の間に生まれて、分家に一旦預けられたっていう子供。

そこまで全部聞かないと、話が進まないってのは分かる。

だけど、その子達は―

「……まず言うわ。そのフロント家系の字は、九条」

―は？

南空さんの言ったことに、俺は頭の中が真っ白になりかけた。

は、ちょっと待て……九条!?

「そして、子供の名前は「幸せの結晶」という意味で幸を入れることが決定して、出産した時ににおいが印象深かったことから、幸せの香りという意味で幸香と名付けられたわぁ」

リーネスが更に続けて、俺は凍り付きそうになる。

だけど、ヒマリとヒツギはそのうえで、息を吸い込んだ。

「……道間乙女（私達）の場合は。元々生まれた時は農村出身だったのと、いろんなことを知っていけると思ったから―」

「……田知と、名付けましたのよ」

……は？

俺達は、呆気に取られてたと思う。

そのうえで、南空さんは耐えきれないのか俯きながら―

「……和地。貴方の前世は道間田知。……まだ一歳になるかならないかで死んだ……ヒマリ（道間）とヒツギ（乙女）の息子なのよ」

―冗談であってほしいことを、言ってきた。

銀弾落涙編　十八話　全てを受け止め

和地Ｓｉｄｅ

……カズヒ姉さんの、鶴羽の、ヒマリの、ヒツギの、リーネスの。
彼女達の壮絶な過去を、俺は目を閉じ、静かに受け取った。
正直に言えば、混乱していることも数多い。というか、俺自身当事者側だって言われてるもんだから混乱して当然だろう。涼しい顔で全部受け止められる奴がいたら見てみたい。
だから、まずは一つずつ捌いていこう。
大丈夫。今ので、一つだけ悟ったことがある。だからまずはその確認だ。
「……カズヒ姉さんの、道間日美子のその時の外見って、覚えてるか？」
「セミロングの茶髪だったわねぇ。あと、ツインテールを好んで使ってたわぁ」
ありがとうな、リーネス。
これで、断言できることがある。
だからまず、俺はそっと鶴羽を抱きしめる。
鶴羽は肩を震わせる。
きっと、罪悪感だろう。自分の父親が自分の友達に、何年間も酷いことをし続けてきたんだ。鶴羽自身が悪くなくても、気にしてしまう。
だから、まずは鶴羽だ。
しっかりと、少し力が入りすぎるぐらいで俺は抱きしめる。
言葉より先に、まず行動で「大丈夫」と告げてから―
「―俺は、俺の原点は無事だ。いや、今までより強固になったって断言

できる」
―告げることを告げる。
ああ、そうだ。そうなんだ。
俺の原点は、瞼の裏の笑顔に対する誓いは、決して揺らいでなんていない。
だから、大丈夫だ。
少しは手も震えているし、胃の辺りに重い物もある。視界だって揺らいでいるし、正直ベストコンディションどころか、普段より遥かに調子は悪いだろう。
でも、断言できる。
「カズヒ姉さんは助け出すし、お前の親父にけじめはしっかりつけさせる。鶴羽が気にしてしまうのは当然だけど、だからこそしっかりけじめをつけて、そのあとは―」
少し強張っているけど、それでも俺は鶴羽に微笑めた。
「……カズヒ姉さんと一緒に、俺の傍にいてほしい」
まったく。散々女を囲っておきながら、プロポーズってのもなんだかなぁ。
俺もちょっと混乱が消えてないな。これは失敗。
ただ、今ので鶴羽は目を見開いて俺を見る。
「な、なな、なんで……」
「―カズヒ姉さんやリーネス達と再会してから、ちょっと俺にぎくしゃくしてたのは、俺が道間田知だったからなんだろ？」
俺がそう言うと、鶴羽は盛大に目を逸らした。
相変わらず、分かりやすいっていうかなんて言うか。
そりゃ気にするよな。いろんな意味で、好きでいていいのかと思いたくなる。
だけど―
「それでも、俺のことを好きでいてくれて嬉しい。だから……俺の今の現状でいいと思ってくれるのなら、俺と一緒にいてほしい」
―それが答えだ。
俺が田知であったとしても、九成和地を愛してくれているのなら。

俺はそれに応えたいと心から思う。
ザイアで会って、お互いに数少ない味方として支えあった。その積み重ねが生んだ恋心は、例え罪悪感や抵抗を覚える繋がりがあっても消えなかった。
そんな想いを知ったら、俺は本心から好きになってしまう。
同時に複数の女性を愛して、更にカズヒ姉さんを一番にしている俺が言うのもなんだけど、それでもいいというのなら、遠慮しないで好きでいてくれてほしい。
だから、俺はそっと鶴羽の額に俺の額をくっつける。
道間田知だと知ってもな、九成和地を愛してくれた彼女に、俺は断言する。
「無理だとしても大丈夫。必ずその罪悪感(重荷)は和らげる。だから……一緒にカズヒ姉さんを助け出そう？」
「……このジゴロぉ……っ」
顔をくしゃくしゃに歪めて、だけど流す涙は悲しみじゃない。
俺はちょっと目が熱くなる。
ああ、好きでいてくれている子に、嬉し涙を流させられる男になれて、本当に良かった。
ああ、俺はまだ戦える。まだ折れてない。
嘆きで生まれた涙の意味を、救いと笑顔で流せるように。
彼女の笑顔に誓った決意は、瞼の裏に残っている。
だから、そっと鶴羽の頬に手を触れて、真っ直ぐに涙目の鶴羽を見つめる。
「……大丈夫。少しぐらいは重荷も背負う。だから、鶴羽も力を貸してくれ」
そんなちょっと情けない俺のプロポーズに、鶴羽はちょっとむっとしながら、それでも微笑んだ。
「それが嘘なら、口から聖十字架を突き刺してやるからっ」
そして、そっと俺の唇に顔を近づける。
俺もそれに合わせて、唇と唇を触れ合わせた。
ゆっくり五秒。そして俺と鶴羽は微笑んで—

「「カズヒは、絶対に助け出す！」」
―決意を合わせて、覚悟を決めた。

イッセーＳｉｄｅ

……すっげぇ。これがモテる男なのか。
っていうか、俺もモテてるってことは、傍から見るとこんなことしてるのか。全然心当たりがないけど、こういうもんなのかぁ。
というか凄いな九成。あの重い流れからスムーズにいちゃつき始めた。それもカズヒを一番に据えたうえでだ。
「フフ。流石カズ君。……何よりこれは、あとでインガ達を連れて鑑賞会ね……っ」
そしてリヴァさんもブレねぇ。この空気の中でしっかり映像記録を撮ってるよ。
これ絶対「鶴羽本格参戦パーティ」とかする流れだ。全部終わったら公開処刑な勢いで、南空さんが悶絶するのが目に見えている……っ
「ふっふっふ。更にここからカズヒに決戦を挑むことになるでしょうし？　二人まとめて盛大にパーティで茶化してあげるわね♪」
鬼だ!?　いや、神様だから鬼神か！
カズヒが助け出されたとして、これだけの情報知られたうえでそこまでからかわれるとかマジか。あいつでもメンタル持たないだろ。
いや、これはあれだ。空気を意識して和らげながらカズヒを受け入れるってことの表明か？
……寄りにもよってこんなやり方かぁ
俺達が戦慄していると、九成も南空さんも真剣な空気を取り戻したみたいだ。

「じゃ、悪いけど次に進ませてもらうな？」
「はいはい。ま、私だけが独占してるわけにもいかないしね」
苦笑する南空さんに頷いてから、九成はリーネスに向き直った。
「ありがとうな、リーネス。あと、割と心労を掛けさせまくったよな？」
「まぁそうねぇ。特にヒマリとかヒツギとか、胃と心臓に割と悪かったわぁ」
苦笑いする九成に、リーネスは割とまじ顔で語る。
後ろの南空さんもすっごい遠い目になっているし、まぁ確かにだよなぁ。
ヒマリともヒツギともエッチなことをしちゃったらしいし、そりゃ事情に前から気付いているリーネスって、心労凄かったんじゃないか？
そんなリーネスは、小さく微笑みながら首を横に振る。
「私は私の意志でやったことだから、あまり気にしないでぇ。……それより、もっとやるべきことがあると思うわぁ」
「そうだな。うん、ありがとうな」
リーネスとの会話は、短く終わる。
……そして、九成もリーネスも南空さんも、すっごい渋い顔で振り返った。
そこでは、まだ疲れた顔で目も虚ろな、ヒマリとヒツギがいた。
ああ、二人がある意味で一番重いだろ。
記憶をほぼ持っていたリーネスや南空さんも大変だし、記憶がほぼない幼児の頃だった九成もヘビーな前世をする羽目になった。間違いなく、かなり精神的にキテるはずだ。
だけど、二人の精神的な悪影響はそれ以上だろう。
エロゲみたいな話を現実に経験してる上、それをいきなり思い出させた。しかも九成が前世の息子だっていうわけだしな。自分の前世が特殊すぎることもあれば、そりゃ気持ちが沈まないわけがない。
だから、九成もすぐには何も言えなかった。

そりゃそうだよ。むしろ九成だからこそ、何を言えばいいのかって感じだろうしな。

……よし！　俺が俺の意志で動くべきだ！

「……まぁあれだ。結局過ぎたことは変わらないし、覚えてないこともどうしようもない！　そこはもう仕方ないさ！」

ああ、そこはもう仕方ない。

どんだけ悔しくても、負けた事実は消えない。どんだけ後悔しても、失敗したことはなくならない。

だから、結局やることは一つなんだ。

「……落ち込んでもいいし、すぐに立ち上がれないなら少しぐらい休んでもいい。だけど、そのあと前に進んで歩き出そう。出なけりゃ、できることもできないんだし……さ」

ああ、もうほんとこれなんだよ。

そりゃつらい時でも前に進むのって大変だ。だけど、前に進まなけりゃいつまでもそこにいるだけだ。

グレモリー眷属（俺達）はいつもそうやってきたじゃないか。悔しい時もあったけど、だからこそ頑張って乗り越えてきた。大変だけど、その価値はある。

だから―

「……俺は頑張って先に進むからさ？　休めたら、追いかけてきてくれればいいさ」

―俺は、そうヒマリとヒツギに言う。

ああ、大変なことになってるから、今頑張れなんてちょっと言えない。それは俺だってわかってる。

だけどさ？

「俺はヒマリもヒツギも、少しの間だけど見てきたから大丈夫さ。昔に何かあったとしても、俺は今のお前らが大好きだ」

「「あ……」」

まだ疲れてるだろうし、カズヒと同じぐらいキッツいはずだ。

だからこそ。

「おっぱいドラゴンに任せとけ！　俺は根性ぐらいしか取り柄がない

からな！」
　時間ぐらいは稼いでやるさ。
　根性ぐらいしか取り柄がないんだ。だったら思いっきりぶつかってやる。
「……具体策を出してほしいけどねぇ？」
「ま、その辺は頭いい組が考えることだろ」
　リーネスも先生も厳しい！
　あ、でもこの状況をどうにかしないとそれどころじゃないからなぁ。
　ええい、だったら考えてやる！　馬鹿でも考えなきゃいけないなら考えるさ！
「と、とりあえずこの結界から脱出しないとですよね！　……そういえばルフェイ、ヴァーリとフェンリルを交換転送した方法で、誰かを助けに呼べたりとかしないか？　美猴とかアーサーとかならいけるんじゃないか？」
「申し訳ありません。黒歌さまも不調の状態で、更にゲオルグ様も対策をとっているでしょうから困難です。相応に準備をすれば二人ぐらいは送り出せるとは思いますが……」
　うーん。あの方法は無理か。
　まず連絡してから、サイラオーグさんとか匙とかをヒツギやヒマリと交換すれば……とか考えたんだけどなぁ。
　いやいや、此処で考えるのやめちゃだめだ。馬鹿の考え休むにたりとは言うけど、馬鹿だからって考えることを放棄してもなぁ。
　俺が頭を悩ませていると、少し考えた先生は一つ頷いた。
「ま、救援が呼べなくとも事態を伝えるべきだろうしな。その辺りの準備もしておくべきだろうさ。……ルフェイ、その辺りの説明を頼む。リアスとリヴァも、少し作戦を考えるから手伝ってくれ」
「そうね。ここまでコケにされて、黙っていられる道理はないわ」
「うんうん。先生も次はガチでバトっちゃうわ」
　……頼りになるメンツがいるもんだぜ。
　それにそうだ。曹操がいないならリヴァさんも大暴れできる。こ

の人は戦力として期待できるし、本気で頼もしい！
ああ、なんとしても生き残ってやる。
曹操やミザリの好きにはさせない。その決意はしっかりとある。
……待ってろよ。カズヒは助け出すし、お前達にも一泡吹かせてやる！

銀弾落涙編　第十九話　雌伏する白龍皇

九成Ｓｉｄｅ

トップ陣営が作戦を考えている間、俺達はそれぞれの形で休息をとることになった。

ルフェイの話では、禍の団は「組織を乗っ取ろうとしたヴァーリチームからオーフィスは奪還したので、ヴァーリチームは発見次第抹殺せよ」と通達があったようだ。

……ヴァーリチームはどうも、適当に禍の団としての仕事をしながら、強者とか伝説とかを調べていたらしい。アトランティス大陸とかムー大陸の伝承を調べてみたり、行方知らずの伝説の存在を探したり、そもそもドラゴンとはどこから生まれたのかを探っていたとか。

……自由人過ぎる。たぶんだが、オーフィスの件がなくてもいずれ追放されていただろう。趣味と仕事の割合がおかしいというかなんというかだ。

とはいえ、オーフィスに関しては流石に酷い話だ。力を抜き取って象徴は作れるから、オーフィス本人はもういらないってのはな。流石はテロ組織といったところか。

それと、オーフィスは力のいくらかを異空間に逃していたらしい。結果として戦闘能力は全盛期の二天龍を二回りほど大きいぐらいとのこと。それで見る影もないとか先生が言う辺り、龍神というのは本当に凄まじいということだ。

あとオーフィスがイリナとアーシアを助けた件だが、曰く「紅茶貰った、トランプした」とかいう感じらしい。

なんだろうか。本当に素直で純真無垢な子供といった感じだな。

これ、本当にここまで事態が拗れたのはディスコミュニケーションなだけなんじゃないか？　今からでも交渉すれば、普通にそれなりの

関係性を結べそうだぞ。
そりゃテロの象徴として活動したのはそれなりのけじめは必要だろうけど、あいつ自身が騙されたようなものだし……情状酌量はあり得るか。
おそらくまだまだ数千年は生きていけるだろうし、それも踏まえればそれ相応のことにはなりそうだな。
とはいえ、だ。
「……ふぅ」
少し俺はため息をついた。
原点は見失ってない。考えようによっては最低野郎だけど、俺は鶴羽を好きだと思っているし、カズヒ姉さんを欲している。
とはいえ、流石に驚愕の事実がつるべ打ちだったからな。無傷というわけにはいかなかったさ。
ちょっと疲れたのは事実だな。できればそれなりに休みたいところだった。
……ヒツギとヒマリが、俺の前世の母親か。それも、道間田知の生まれそのものがあまりに業が深いと言ってもいい。まして、カズヒ姉さんの悪意の結果なんだからな。
キツツい話だ。そりゃもう、俺ですらこうなんだからヒツギやヒマリ、カズヒ姉さんはもっときついだろうな。
鶴羽もリーネスも、俺や二人（道間田知 道間乙女）のことをカズヒ姉さんに明かせなかったのも当然だ。俺がカズヒ姉さんの立場だとしても、そんなことを明かされたら色々とメンタルが致命傷になるだろうしな。そんな状態では冷静に戦うことなんてできるわけがないだろうし、カズヒ姉さんが負けたのも仕方がないだろう。
俺は静かに目を伏せて、その上で自分の過去に向き直る。
思うところはたくさんあるだろう。冷静になってから思い返せば、きっと浮かんでくる感情はたくさんある。それほどまでに、重い話だったと理解している。
そのうえで、俺は呼吸と共に自問自答する。
……瞼の裏に映るのは、あの時の涙と笑顔だ。

思い返し、そして俺はほっとする。
ああ、大丈夫だ。
俺の原点は、微塵も揺らいではいない。むしろ、だからこそ強くなった。
そして尋ねたいこともできた。俺の原点に連なる、彼女に対する強い質問。
それを聞くまでは、死ぬわけにもいかない。
そういう風に呼吸を整えると、ふと足音が聞こえてきて振り返った。
「イッセーか」
イッセーも落ち着かないのか？
「お、九成。どうしたんだ？」
「俺はちょっと一人になりたくてな。お前は？」
俺に聞かれて、イッセーはちらりと視線を遠くの部屋に向ける。
確か、消耗が激しい黒歌があそこで休んでいたな。小猫とレイヴェルが付き添っているらしいけど。
俺が視線を戻すと、イッセーは渋い顔をしてた。
「黒歌は悪い奴だ。だけど、同時にお姉ちゃんではあったみたいでさ」
「……なるほどな。ま、それは後で聞くさ。……今はちょっとお代わりとかいらない」
それなりに重い事情があったのかもな。
ただまあ、そのあとノリノリで身勝手に生きてただろうしなぁ。その辺のけじめはしっかりつけてもらいたいところだ。
あと今は流石に重い話を聞く余裕はない。こっちはこっちで前世の情報という、普通知る由もない情報がつるべ打ちだ。しかもヘビー極まりないからな。
イッセーもそれで納得したのか、苦笑すると指で別の部屋を示した。
「ヴァーリの様子も見るんだ。お前はどうする？」
なるほどな。
二天龍の宿命とかどうでもいいとか言ってたくせに、何時の間にや

ら気になってるのか。
ま、俺もちょっとは気になるな。
「あの戦力がお荷物になるのはちょっと気になるしな。今のうちに確認して、心の準備だけでもするとするか」
さて、ヴァーリの奴はどうなるのやら……な。

そんなこんなでヴァーリの様子を見に来たが、様子はかなり悪いな。
顔色は悪い。呼吸は荒れている。汗も浮かんでいるし、誰が見ても要入院のレベルだろう。
俺はイッセーとヴァーリの会話を少し離れたところで見ていた。
ヴァーリはヴァーリなりにオーフィスを気にかけていたようだ。唯一オーフィスを力ではなく個人として見ていたのかもな。
まぁ、それはそれだ。
俺はそろそろこっちも話に入ることにする。
「……ヴァーリ。色々と言いたいことも思うところもあるが、一旦ぶん投げて単刀直入に聞こう。曹操の打倒は可能か？」
将来的にまた曹操とぶつかることになる以上、ある程度の手札を知るぐらいはしておきたい。
ヴァーリは苦笑すら浮かべると、軽く肩をすくめた。
「奴の禁手は、例え一人になって複数の上位異形と戦える為に生み出された物だろう。敵の弱点と己の力を研究してきた、英雄派という組織の集大成ともいえるな」
割と手放しで褒めているな。
まぁ、あそこまで大暴れした奴を見れば、へんな低評価をする気にはなれないな。
真っ向から戦う場合、どうしても今のままでは危険だろう。それほどまでの力の差がある。

「更に仮面ライダーサウザイアー・魏が厄介だ。曹操自身は俺や兵藤一誠が鎧を着れば、一発殴るだけで決定打になりえるだろう。だがそのクリーンヒットを当てるのが至難といえる、テクニックタイプの極限が奴だが……そこにサウザイアーが加わったことで、付け入るスキが失われているようなものだ」

……だな。

曹操最大の欠点は、本人がただの人間であることに由来する基本性能の低さだ。

こと耐久力の限界は決定的。高位の異形が一撃有効打を当てれば勝利はほぼ確実に至る。

それが極めて難しいとはいえ、勝ち筋があることはそれだけで価値がある。それを、サウザイアーという鎧が防いでいる。

「……体感だが、あれはヴァナルガンドに匹敵するカタログスペックを保有している。二つのキーを持つがゆえにサウザイアーが凄いのか、それにたった一つのキーで迫るヴァナルガンドが凄いのかは、この際おいておくとするけどね」

「どっちにしても最悪だな。鬼に金棒どころか、魔王に神滅具（ロンギヌス）じゃねえか」

「しかも仮面ライダーゆえ、曹操が言った全身鎧型禁手のような落とし穴もないときてるわけだしなぁ」

ヴァーリもイッセーも俺も、ぼやいて思わずため息をついた。

唯一無二といえる勝ち筋を、技術力で完全にカバーしやがった。俺が言うことでもないが、仮面ライダーを敵に回すのがここまで厄介だとは。

「先生曰く、初見殺しを上手く叩き込めばって言ってたよ」

イッセーがそういうが、初見殺しは大抵そういうものだからな？

初見ではまず対応できない策とは、それゆえに強大だ。同時に一発の手札だから、失敗したら一気にやばくなる。

……そんな切り札、あるのか？

俺が頭を悩ませていると、イッセーはヴァーリに向き直った。

「それでヴァーリ。お前はどうするんだ？」

確かにな。そろそろ脱出のプランができてきた頃だろう。
となると、ヴァーリが参加するかどうかはしっかり聞いた方がいい。
まぁ、常識的な判断ならやめるべきではあるが―
「―俺はどうしようもないほどに白龍皇でね。戦いの場に休んでいるなんてありえないさ」
―ま、そうなるな。
まあいいさ。戦力となってくれるのなら、現状使わない手は存在しない。
とはいえ、だ。
「脱出した後も大変だがな。カズヒ姉さんは助け出さないとだし、曹操にも一発かましとかないと」
本当にそこが難点だ。
ただ、イッセーもヴァーリも俺よりは落ち込んでない。
……なるほど。
「何かあるのか」
「ああ」
なら、曹操はお前らに任した方がいいのかねぇ。
……いや、違うな。
曹操の相手をしている余裕は、俺にはないと言った方がいい。
俺はカズヒ姉さんを思い返す。
彼女の過去を聞いて、だからこそ確信できるものがある。そして、想いは一層強くなった。
そう、俺は―

銀弾落涙編　第二十話　友人が元母親にフラグを立てるとか、普通はきつい

イッセーＳｉｄｅ

そろそろリアス達の会議も終わるぐらいかな。
ヴァーリもやる気だし、九成も少し休んでいる。
……とにかく、俺達も気合を入れ直さないとな。
まずはこの空間から何とか脱出。曹操達もどうにかしないといけないわけだしさ。
にしても、なんていうか、凄いことになってるよな。
カズヒ達の、道間日美子達の重すぎる過去はやっぱりきつい話だ。
カズヒにも、南空さんにも、リーネスにも。そして、ヒマリやヒツギにとっても。
俺は明るく前向きなこと言ったけど、でも五人からしたらそれをするのが大変なんだろう。ま、そりゃそうだ。
でも、俺やっぱり馬鹿だからな。それぐらいしかいうことなんてできやしないしなぁ。
……いや、そこで止まってたらいけないよな。馬鹿だからって、ただ馬鹿のままってわけにもいかないだろうしさ。
ただ、皆色々あっていっぱいいっぱいだろうし、ヒツギやヒマリが元気を出せるよう、俺も一生懸命頭を捻らないと。
それぐらいは頑張らないと、俺を元気づけてくれたみんなにも合わせる顔がない。
頭を捻って捻って考えるけど、なんていうかちょっとこぅ……ここまで……って感じだよなぁ。
あ～、畜生！　俺ってば重くてつらい過去の仲間に巡り合ってばっ

かりだけど、今回のはある意味で一番重いんじゃないか？
いや、なんたって人生二週目だもんな。悪魔の駒でも死者蘇生はできるけど、蘇生したんじゃなくて新しく生まれなおしたなんて、さすがに初めてだしいきなりだしでいろいろと困る。
どうしたもんかと考えていると、視界の隅にヒマリとヒツギの姿が映った。
……皆色々と大変だし、消耗も激しかったからな。それに、二人もそっとしておいてほしいんだろう。
だけど、何かやっぱりほっとけないさ。
よし！　こうなったら当たって砕けろだ。どうせ俺はそういうことしかできないんだからさ！
「……二人とも！　少しは休めた？」
あえて元気よく言ってみると、ヒツギが無理やり苦笑しながら肩をすくめた。
「ま、そこは大丈夫じゃん？　こっちはメンタルが地獄なだけで、フィジカルは全く問題ないしさ」
あ、やべ。地雷踏んだか？
二人とも、記憶が戻ったりで色々とやばかったからそもそも戦ってなかったしな。確かに体は疲れてないか。
い、いやいや。そういう問題じゃない！
「精神的な負担って案外やばいだろ？　だったら休んでおくに越したことはないって」
メンタルってのは重要だ。
想いの籠った一撃は、実力に関係なく強者に通用する。裏を返せば、想いを籠められないのは実力に関係なく悪影響があるってことだ。
この脱出では戦えなくても、せめて少しは和らげてやりたい。
俺は道間乙女の人生に寄り添ったことなんてないけど、だからって仲間が苦しんでるのをただ見てるだけなんて絶対嫌だしな。
「愚痴でいいなら聞くぜ？　こういうのって、他人に言うだけでもだいぶ楽になるっていうし、聞いた方が俺も何かできることが見つかり

そうだし」
実際そういうことあるからな。俺も、アーシア達にしゃべってすっきりしたことってあるし。
っていうか聞くまで離れません！　仲間の負担を和らげるのも仲間の役目さ！
なんで座り込んでいると、ヒツギは観念したみたいに同じように座り込んだ。
ヒマリはずっと俯いているけど、そんなヒマリを軽く抱き寄せながら、ヒツギは寂しげな表情を浮かべてた。
「……実はさ？　二人で記憶のすり合わせとか、そういったのをしてたんだよね」
そっか。
一人が二人に分裂しているなら、記憶が片方だけにってこともあるわけだしな。
十年以上の記憶を全部把握するなんてできないだろうけど、重要な部分のすり合わせは行った方がいいのか。
「ま、重要なところは全部同じ感じで覚えてた。視覚も聴覚も痛覚も大体同じだけど、同じような感覚だった」
そう続けるヒツギは、本当に寂しそうだった。
「……なんていうか、どこかぼんやりとしてるし遠いんだよね。たぶんこの感覚、経験者じゃないと分からない感じじゃん？」
泣きそうな表情のヒツギに続くように、ヒマリも小さく震え始める。
「いろんな気持ちを感じますのに、どこか借り物のように感じますの」
……前世の記憶を、自分のこととして感じられないってことか。
「悲しさも嬉しさも感じるのに、それが自分のだっていう感じだけはどうしても薄い。大切な思い出も、悍ましい記憶も、それが分かるのに何かが決定的に欠けて感じてる」
「道間乙女の大事な記憶なのに、それを本当に意味で自分のものにできないんですの……」
二人はそういいながら、本当につらそうな表情だった。

……う～ん。
俺はそれを聞いて、なんとなく思うことがある。
うん。言って怒られた方が話は進むだろ！
俺は決意して、切り出すことにした。
「……別にさ、それはいいんじゃないか？」
俺がそう言うと、二人はきょとんとして顔を上げた。
いや、そこまできょとんとしなくてもいいじゃねえか。
「俺にとって二人はヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバーだしな。そりゃぁ道間乙女の記憶と経験があるっていうのは事実だけど、そこから先の二人の人生は別々だろ？」
うん。馬鹿だから細かいことはわかんねえ。
だけど、俺にとって大事なことは分かってる。
「俺の知ってるヒツギは、面倒見がよくて可愛い女の子。俺の知ってるヒマリは、元気がいっぱいで可愛い女の子さ。同じ前世を持ってるからって、そこは変わらないし関係ないだろ？」
うん。そこは断言していいだろ。
さっきも似たようなこと言った気がするけど、俺にとってヒマリはヒマリだしヒツギはヒツギだ。
だから、道間乙女って人については俺はこの際どうでもいい。道間乙女がどんな人生を送ってきたかより、ヒツギやヒマリが今までそんなことに左右されないで生きてきた人生の方が大事だって。
ま、俺が馬鹿だからなだけかもしれないけどさ？
「俺にとっては二人は別々の大事なやつだからさ。カズヒ達からするとそうじゃないかもだけど、二人をごっちゃにするのは、やっぱりなんか違う気がするんだよな」
う～ん。自分でもこの言い方で合ってるのか気になる気がしたぞ？
……しかもやばい。なんかトイレ行きたくなってきた。
「……と、とりあえず俺ちょっとトイレ！　ま、道間乙女のことを深く考えるだけじゃなくて、今の自分がどうしたいかを色々考えた方がいい気がするってことで一つ！」

うん。これで少しは元気になってくれるといいんだけど……な。

九成Ｓｉｄｅ

凄いこと聞いた。
……これがハーレム王のおっぱいドラゴンって奴か。もてる男は持てるだけの奴だってことなんだろうな。
いや、俺もモテてるけどな。まぁそこはこの際どうでもいいか。
うん。俺は今は話さない方がいいだろう。
ヒマリはヒマリで、ヒツギはヒツギ。確かにその通りだ。
カズヒ姉さん達も、道間乙女としてはごっちゃにしてるだろうけど、二人が別々だとは判断してると思う。
ただまぁ、流れが流れだったからな。どうしてもそこは重要視されてない感じにはなっていたかもしれない。そこも悪いところだったな。
俺はそっと、二人のことを思い返す。
会った時から意気投合して、なんだかんだで二人一緒にいることが多い。
それはきっと、前世が同じだったことに由来するんだろう。それはもう仕方ない。
だけど、二人は別々の人間として仲良くなって絆を深めていったんだ。そこはきっちり考えてあげないとな。
そっと、少し離れたところから俺は二人をそっと見る。
……うん。母親としてではなく、仲間として見てるな。

なら俺にとってはそれで十分だ。今後何かしらで変わるかもしれないけど、それはそれとして今はこれで十分だ。
まったく。凄い奴だぜおっぱいドラゴン。
お前、やっぱり持てるだけの男だよ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……と、これが可能ならどうにかなりそうだわ」
「お前、凄いこと考えるな。これが愛の力か……」
「あらあら。少し妬けてしまいますわね」
「二人とも茶化さないの。とにかく、此処から反撃を始めるわよ！」

「イシロ、アルバート。そっちの準備はできたかい？」
『ええ。シャルバを探すので大変だけれど、魔獣は言われた通り送っておいたわ』
『追加生産されたギガンティスサリュートもすでに送っているとも！
では、俺達はシャルバを探しておくぞ！』
！』
「そこは頼むよ。いやホント、例の件を承諾してくれた直後に何やってるんだか」
『……ミザリ。その件だがまずいことになったかもしれない』
「あ、アルケード。もうついているのは驚いたけど、どうしたんだい

？」
『シャルバなんだが、どうも何者かの接触を受けていたらしい。どうやらオリュンポス関連だ』
「『……』」

「うん、こっちはこっちで予定通り動くから、例の件を実行に移しておいてくれない？」

銀弾落涙編　第二十一話　狂気（ガチ）と狂気（おっぱい）

和地Ｓｉｄｅ

作戦会議は終わり、俺達は動き出す。
リヴァ先生がそれなりに時間をかけて用意したセーフハウスは、まだまだ破壊されることはない。死神達は相応に壊そうと努力しているが、事前準備がここにきて生きている。
だが同時に、死神共は割とすぐに集まってきている。限界ギリギリまで回復を待っていると、逆に数で圧殺されかねない。
死神の戦闘能力は、下級ですら下手な中級悪魔を超える。最上級死神ともなれば魔王クラスの猛者であり、例え上級だろうと最上級悪魔クラスのポテンシャルを発揮するだろう。まして鎌は魂や生命にも影響を与える為、要警戒必須だ。
そんな連中が数を揃え切るのを待つ理由はない。むしろ不利だからこそ、相手の準備が完了するまでに先手を打って奇襲を仕掛ける。
……敵は有限になったオーフィス用の結界を作り上げており、その基点は三つある。
一番重要な駐車場部分に設置された箇所には、ゲオルグとジークフリートがいる。それ以外にも死神達が集まっており、警戒は徹底的にされていた。
最適解はまず他二つを潰し、本命の基点を挟み撃ちにすること。だがそんなものは当然警戒されるから上手くいくわけがない。
だからこそ、リアス部長の突拍子もない策が成立する。
「行くぜぇぇぇぇぇぇ！」

―作戦は比較的単純。三叉成駒で僧侶に昇格したイッセーのドラゴンブラスターを、左右それぞれ別々の方向に向けて発射する先制攻撃。
集まっている敵ごと先制攻撃で二つとも破壊すればいいという、敵からすると悪夢じみた方法だ。
部長、イッセーのこと好きすぎだろ。
そんな風にちょっと呆れ半分で感心するが、俺もすぐに飛び出した。
この砲撃で結界が少しは揺るぐだろうから、そのタイミングでルフェイ達による転移を敢行。飛ばすのはミカエル様直属ゆえに発言力が比較的あるイリナと、その護衛も兼ねてゼノヴィアだ。
絶不調なヒマリとヒツギ、もしくは客分のレイヴェルを優先する案もあったが、敵が転移を警戒して人員を派遣する可能性もある。レイヴェル自身が自分を優先しなくていいと言っていたこともあり、その方法は却下される形となった。
だからこそ、救援が来るまでしのぐなり、最後の結界装置かゲオルグをぶちのめしてこっちから脱出を敢行する。
俺は飛び出す前に、ちらりとヒツギとヒマリを見る。
二人はまだ不調なので、今回はホテルの部屋のように残って後方支援だ。
心配そうに、複雑な表情を向けるヒマリとヒツギ。
だから、俺は不敵な笑みを浮かべ、ヒマリから借り続けているショットライザーを構える。
「ちゃんと返すし戻ってくる。色々あるだろうからこそ、それはゆっくり進めていこう」
そう言うと共に、俺は飛び出して戦闘を開始した。

アザゼルＳｉｄｅ

ったく。なんか様子がおかしいな。
何がおかしいって、ミザリの姿が見えないってことだ。もちろん、ミザリが引き連れていた連中もだ。
あれだけの戦力を何で出さない？　ミザリ自身が俺達を此処で始末する気がないにしろ、それなりの動きは魅せて当然だろう。
そこが実に不安だな。
ま、逆に戦闘の方は今のところは不安じゃない。
グレモリー眷属は誰もが優れている。その実力は下級死神程度なら鎧袖一触できるし、中級クラスも木場やイッセーなら余裕で複数相手にできるレベルだ。
ま、俺もいい大人として少しは頑張るとするか！
「どうだイッセー！　少しは自分の強さを実感できたか？」
「先生！　あの、本当に俺が戦ってるのは中級クラスの死神なのかって感じです！」
そんな感じで余裕で死神共をぶん殴るイッセーだが、それが事実なんだよなぁ。
中級死神なら、最低でも中級悪魔の上位は届く。上の連中もそこそこいるだろうが、この数なら余裕を持って戦えてるのが今のイッセーの力だ。
は！　前人未到の領域に到達した赤龍帝、なめてると怪我するってなぁ！
「はっはぁ！　俺達を相手にするにはこの程度の死神じゃ役者不足だぜ！」
『あまり刺激しないでください！　死神が本命を出してきたらどうするんですか！』
シャルロットにたしなめられるが、その心配はねえよ。
「ハーデスのクソジジイのことだ。俺や二天龍対策で最上級死神の一

人は送るに決まってるさ！　どうせ来るんだから問題ない！」
「『大ありです！』」
仲が良くって何よりだな。シンクロツッコミありがとよ！
さて、どっちにしてもそろそろ本命が出てくるころ合いだろうな。
そう思った時、空間が歪んで豪奢な鎌を持った死神が出てきやがった。
『死神を舐められては困りますよ。……特に、忌々しい悪魔や堕天使にはね』
現れやがったな。
オーラの質が全く違う。どうやらハーデスが送り込んだ死神共の筆頭格が出てきたってところか。
俺も流石に警戒するし、イッセーも拳を構えて静かに睨む。
イッセーも成長したもんだ。ただ見ただけで敵の強さを悟れるようになったんだからな。
教え子の成長に感慨深くなりたいが、そろそろ集中するとするか。
『お初にお目にかかります。私は冥府の最上級死神、プルート。……残念ですよ、和平の中核人物であるアザゼル総督ともあろうものが、オーフィスと内通するとは』
なるほどな。そういう言い訳で通すつもりか。
「共闘している奴に言われる筋合いはねえな。ま、死人に口なしで通す気だろうがな」
『そういうことです。無限の龍神（オーフィス）ではなくなったその抜け殻もいただきます』
つくづくムカつくいいわけだぜ。言ったもん勝ちで押し通す気だってのが丸分かりだ。
まぁいいさ。だったらこっちも……っ!?
『!?』
俺が目を見開くのと、プルートが咄嗟に鎌を振るって攻撃を弾くのはほぼ同時。
その瞬間、プルートに攻撃を弾かれた奴は、軽く舌打ちした。
「チッ。さすがに最上級死神相手では、俺の気配遮断では届かないか」

残念そうに、闘気の弾丸を放った手を見るのはアルケード。
……こいつ、ミザリの部下だろう!?
『これはどういうことでしょうか？』
「アルケード!?　何のつもりだい！」
プルートとジークフリートが、共に糾弾の姿勢を見せる。
どうやら英雄派にとっても、アルケードの行動は想定外のようだな。
だがどうしてだ？　この状況でミザリがプルートに危害を加える理由がねえ。アルケードはオリュンポスを嫌っているようだが、それにしたって今このタイミングで仕掛けるか？
今ので戦場の流れが一旦途切れ、ほぼ全員がアルケードを睨む。
だがそこに、一人の男がアルケードと並び立った。
「……どうもこうもないさ。むしろ英雄派君達こそ、いったい何を考えているんだい？」
苦笑を浮かべたミザリは、ゲオルグとジークフリートにあきれ果てた目を向けている。
おいおい、この状況で仲間割れかぁ？
「オーフィスを有限にしたのなら、次は当然グレートレッドにも同じことをしなければ、禍の団の優位性が減るじゃないか？　それにハーデス神は味方じゃないんだから、当然サマエルはそのまま奪うつもりだと思ったんだけどね。……馬鹿じゃないかい」
「馬鹿はお前だ！　この状況でハーデス神を敵に回して何のメリットがある！　ただでさえ俺達禍の団は、総力戦では勝てないんだぞ！　立ち回りを考えろ！」
ミザリにゲオルグが反論するが、その反論にミザリは冷めた目を向ける。
……なるほどな。
俺はこの揉め事の理由が分かって、本心からため息をついた。
「そういうことか。おい、英雄派の糞餓鬼共」
俺は大体の予想ができて、だからこそ声をついかけちまった。
同情するぜ英雄派。なんで、ちょっとおっさんからアドバイスだ。

「どうやらお前さん達、ミザリのいかれ具合が分かってないみたいだな。そいつは最初(ハナ)からグレートレッドも含めた全勢力を狙ってるようだぜ？」
そういうことなんだろうな。
ミザリはオーフィスだけでなく、グレートレッドにもサマエルを使う気だったようだ。というか、最初っからそのつもりで動いていると踏んでいたんだろう。
だから目障りな死神を此処で減らすつもりで、こうして動き出したってわけだ。この作戦の本命は、俺達を餌にした死神殲滅のつもりだったんだろう。
で、その辺がディスコミュってたってわけだ。
俺の言うことを理解して、ゲオルグもジークフリートも目を見開いて愕然としていた。
「……この状況下で冥府まで敵に回す気かい？」
グラムを向けながらジークフリートが告げれば、ミザリは苦笑を浮かべて頷いた。
「当然じゃないか。神々は全て滅ぼすか蹂躙するし、グレートレッドを滅ぼすことで世界にも大きな悪影響を与えるつもりだよ」
自然な笑みに切り替えながら、ミザリは両手を広げて俺たちを見渡す。
「既存秩序はもれなく崩壊させ、悲(美)しい物で世界を包む。僕は最初っからそれが本命で動いているよ。それに協力してくれる人は外すけど……ね」
ウインクまでするその姿に、死神共もゲオルグ達も唖然とする。
ったく。残念だったな英雄派。
ミザリ・ルシファーのイカれっぷりを読んでねえ。ここで表面化したというかなんというかな。
元々英雄派は、禍の団では今の勢力を打倒することはできないと踏んでいた。だからこそハーデスとも協力する。それを持ってして、人間がどこまで行けるか挑戦する。
だがミザリは違う。自分に協力する者以外をもれなく悲(美)しくする

為に努力しているし、人生を捧げている。
そんな奴からすれば、ハーデスの爺さんはむしろ積極的に殺す対象だってことなんだろ。
「……特に死後を司る神は皆殺しさ。そうなれば善悪問わない死後の魂が亡霊として世界に漂い、いろんな悲劇が生まれそうだしね」
にっこりと微笑むミザリの後ろで、空間が歪んで魔獣がどんどん出てきやがる。
野郎、割とまじで本気だったか！
っていうか、後ろにギガンティスサリュートまでいるぞ！　追加生産してやがったのか！
死神達や俺達が警戒する中、ミザリは微笑みまで浮かべてプルートを見る。
「それに、冥府（君達）だってテロリストにいいように使われる気は、ないだろう？」
『さて、何のことやら』
しれっと答えるプルートだが、こいつも何か含んでるな。
まぁいい。乱戦はむしろ望むところだ。
人数で劣る以上、それぞれが狙いを分散する乱戦の方が都合がいい。むしろこの位置取りなら、俺達が挟撃される可能性は低いしな。
……さぁて、何とかしのがせろよ！

和地ＳＩＤＥ

ややこしいことになってきた！
っていうかミザリの方に行きたい。カズヒ姉さんについて問い質

したい！
だけどそんな余裕がない。くそったれ！
魔獣の群れやらギガンティスサリュートやら死神共やら、敵が多すぎる！
あの流れならまず俺達という感じに示し合わせることはないだろうが、この数はやはりきつい！
俺達は既にかなり消耗してるんだ。あまり長続きになると、間違いなくこっちが削れる！
「……くそったれ！」
強引にマイクロミサイルランチャーで魔獣共を吹っ飛ばすが、そこに死神が鎌を構えて後ろからしかけてき―
「はーい！　私達の旦那におさわりしないでくださいねー！」
―たと思った瞬間、グリームニルに変身しているリヴァ先生が、素早く蹴り飛ばしてくれた。
そこに死神と魔獣が結果的に挟み撃ちになるように、突撃を敢行してくる。
俺とリヴァ先生は無言の連携で背中合わせに迎撃するが、これキツいな！
「……隙ありよ！」
その瞬間、紫炎によって魔獣達が薙ぎ払われ、そのまま鶴羽が俺達を飛び越えて死神達を散らすように追い払う。
「和地、リヴァ！　まだ戦える？」
「まだまだいけるが……それでも割と疲れてきたな」
俺は素直に答えるが、地味にきついな。
戦闘というものは極限環境だから、どうしても消耗という弱体化がつきものだ。
早々にコテンパンにやられているのが響いている。完全に回復を待つと集中された戦力で押しつぶされかねないから動いたが、しかしこの長丁場はきついな。
数の振りが大きすぎるから、休憩をインターバルでとることも難しい。控えめに言って……やばいぞ。

「さて、ここはまだ余裕のある先生が動くしかなさそうね」
リヴァ先生も気づいているからこそ前に出るが、俺はその肩にてを置いて止める。
気持ちはありがたいし合理的だが、懸念事項がやばすぎる。
「……ミザリがいるだろ。あまり前に出すぎない方がいい」
「私も聖槍相手に戦う気はないけど、流石に今は出し惜しみできそうにないと思うわ」
確かにそうなんだが。
ミザリはやばい。まだ直接戦ってない先生だと、読み切れずに不覚を取る可能性が大きい。
くそ、戦力差がもろに出てなければ……っ
俺が奥歯を噛み締めていると、鶴羽も同じように悔しそうだった。
「ああもう！　そろそろイッセー辺りがおっぱいで何かしそうな気だってするのに」
気持ちは分かるが難しいな。
イッセーのおっぱい覚醒は、実は割とそれなりに裏付けというものがある。
禁手の到達とかはまさにそれだし、それだって一月誓い特訓があってこそだ。
三叉成駒だって事前に悪魔の駒がブラックボックスを解放しておりそれまでの蓄積があってこそだ。
流石に今のタイミングで、トンデモ覚醒をするような積み重ねとかきっかけは―
「……先生、大変だ！」
―あったよ。
この流れ、前にもあった。
「「……乳神？」」
俺達三人揃って、顔を見合わせて呟いたよ。
イッセー！　実際どうなんだ―
「歴代の赤龍帝達が、リアスの乳をフェーズ３にする為、譲渡をするべきだって言っているんだ！」

―そう来たか！

銀弾落涙編　第二十二話　能力がある馬鹿が暴走すると事態は本つ当にシャレにならない

和地Ｓｉｄｅ

控えめに言って、酷い光景が広がっている。
何が酷いって、死神達に心から同情する光景が広がっている。
具体的に言おう。
―部長のおっぱいを減らす代わりに、イッセーの魔力がごっそり回復するようになった。
おっぱいバッテリーとかおっぱいビームとか先生が言うけど、この場合はおっぱいデュートリ○ンビームが最適だと思う。いやそうじゃない。
……ゴメン。色々ヘビーな過去を知ってから時間が経ってないから、真剣についていけてない。
俺はそっと座り込むと、なんか黄昏たくなってきた。というか鶴羽は俯いて座り込んでいる。
「よしよし。まぁ、それぐらい皆はダメージ受けてないってことで一つね？」
「リヴァ～」
なだめたリヴァ先生に抱き着くぐらい思うところがあるらしい。気持ちは分かるぞ鶴羽。
なんか部長もイッセーも変なテンションで愛を誓い合っているが、まぁそれだけの逆転タイムではある。
鶴羽が落ち着いたころには、死神達はほぼ壊滅。禍の団もネームドやギガンティスサリュートぐらいしか残ってなかった。

俺は心の中で、おっぱいによって吹っ飛ばされたに等しい死神達の冥福を祈った。流石にこれは酷過ぎる。
あとリアス部長はカズヒ姉さん張りに胸が真っ平になっている。ちらちらとイッセーは小猫と見比べていたが、ソファーを叩き付けられていた。
……ちらりとミザリの方を見ると、なんか陶酔状態になっている。筋金入りで何よりだな、オイ。
まぁいい。とりあえず形勢は逆転した。
死神に増援は怖いが、ここまでごっそりないなら逐次投入分はどうにかなるだろう。そういうことにしておこう。
「まさか、ここにきてグレモリー眷属がこうくるとは……」
一生懸命結界装置を霧で防ぎ切ったゲオルグは、肩で息をしながらイッセーを睨んでいる。
おっぱいで倒されることだけは意地で凌いだようだが、どうやらここまでとみるべきだろう。
油断はできない。だが、この流れなら一気に攻めるべきだ。
「覚悟はいいかぁ？　これでチェックメイトだ」
先生が光の槍を構えながら告げる。
ああ、ここで一気に決着をつけれるなら、その方が―

「まったく。俺にあれだけのことをしておきながら、その体たらくは情けないぞ、ミザリ」

―その瞬間、そんな声が響き渡った。
おいおい、此処で更に状況が変わるのかよ！

視線を向ければ、そこには軽装の鎧を纏った一人の悪魔がいた。
奴は確か、シャルバ・ベルゼブブ！
「……シャルバか。内の構成員を何人か殺してどこかに消えたと聞いたけれど？」
「いやホント何やってるかな。真剣に謝ってあげなさいって」
ジークフリートとミザリにそう言われるが、本当に何をしている。
「……ふん。偉大なる魔王の末裔を取り押さえようとするから裁いただけだ。まぁ、蛇を失ってパワーダウンこそしたが、治療をしてやったことは褒めてやろう」
…この男、いろんな意味で最悪だ。
旧魔王の末裔ってのはこんなのばっかりか？　ヴァーリも含めて組織人に向いてそうなやつが全然いない。
組織人としての適性に限定すれば、ミザリがぶっちぎりでまともだっていうのがあれだ。俺は軽く引いているぞ。
リヴァ先生が長命種ははっちゃけないと老害になるとか言っていたみたいだけど納得だ。あまりに人間性が荒れすぎる。
この流れ、かけてもいいが絶対にろくなことじゃない。
「……それで、いったい何をする気なんだ？」
ゲオルグがそう尋ねると、シャルバは悪意がこれでもかと在る笑みを浮かべる。
「なぁに、宣戦布告だよ」
そう言いながらマントを振るうと、そこから一人の少年が姿を現す。
……どこかで見たというか、あいつ英雄派のレオナルドじゃないか？　確か魔獣創造の保有者だったはず。
というか、英雄派のジークフリートとゲオルグが明らかに驚愕している。ミザリも怪訝な表情で肩眉を上げていた。
少なくとも英雄派の想定外な事態と見えるな。一体何がどうなっている？
とりあえず今のうちに呼吸を整えておこう。治癒魔術で軽い負傷も回復しながら……と。

「何故レオナルドがそこにいる!?　別動隊と共に異なる任務で動いていたはずだぞ!?」
おいおいどういう展開だよ。
よく見れば、レオナルドの表情は明らかに何か術による支配を受けている状態だ。
これはどう考えても剣呑な雰囲気になっているぞ。
「なぁに。俺の目的の為に来てもらったのさ」
そんな風に嘲笑を浮かべたシャルバは、魔方陣を展開する。
その瞬間、レオナルドは表情を変えて絶叫した。
……この感覚、木場が禁手に至ったときにどこか似ている。
まさか、魔獣創造を外科的に禁手にさせようってのか？
というか、なんかすごくデカい物体ができ始めている!?
……魔獣創造によるものと考えるなら、やはり魔獣の類か？
「ふはははは！　魔獣創造はとても理想的な能力で、まして彼はアンチモンスターの創造に特化しているそうじゃないか！　君達の行動を調べ上げ、邪魔する者達を殺したうえでここまで連れてきたかいがあったというものだ！」
明らかに暴走しているぞアイツ!?
これはまずい。絶対碌でもないことが起きる……って、プルートがいない!?
野郎、まさかこれもハーデス達の仕込みか!?
俺がプルートの姿を探していると、既に魔獣はとんでもない規模で、かつ複数対出現していた。
２００ｍ近い魔獣が一体。一回り小さい魔獣が十数体。
どいつもこいつも、オーラと雰囲気が明らかにまずい!?
「さぁ見るがいい！　魔獣創造によって生まれた冥界を滅ぼす為の魔獣だ！」
シャルバが吠えると共に、魔獣達が魔方陣に包まれる。
というか今なんて言った!?
冥界を滅ぼすだと!?　おま、これを冥界に解き放つ気か！
「冥界全土にこいつらを転移させて暴れさせれば、サーゼクスに従う

屑共も滅ぼされるだろうさ！」
冗談、だろ……っ！
神滅具の禁手はその時点で、低く見つもって最上級悪魔クラスになりえる勢力だ。まして上位神滅具となれば、魔王でもてこずるレベルになりえるのは確定的に明らか。
しかもあれ、レオナルドの様子から見てかなり無茶苦茶な禁手だ。後先を考えていない分、性能はさらに高いと考えるべきか！
「……シャルバ、約束を忘れているんじゃないだろうね？」
眉をしかめたミザリに、シャルバが狂気が見え隠れする表情で応用に頷いた。
「安心したまえ、約束はきちんと守るともさ。その方が効果的だろうしな」
「ならいいけど。……とりあえずレオナルドは返してくれないかい？聖杯を使って治療してやる必要ができたよ」
明らかにやばい状態のレオナルドに陶酔一歩手前の表情を浮かべながらも、ミザリはレオナルドを魔力で引き寄せるとゲオルグやジークフリートのもとに降り立つ。
「とりあえず一旦撤退だね。話はお互い色々あるだろうし、シャルバは当分放っておこう」
「……クッ！　どうやらあの骸骨神が何かしたようだね。　レオナルドの治療はしてもらうぞ……っ」
ゲオルグが霧でミザリと一緒に転移しようとするが、今は止めている場合じゃない。
このままだと、まず間違いなく冥界に魔獣が転移される……っ！
「止めろぉおおおおおおおっ！」
先生が叫び、俺達は一斉に攻撃を叩き込む。
……駄目だ、全然応えてない!?
俺達の攻撃を意に介さず、魔獣は全部転移していってしまう。
……死神や魔獣達も消えたが、安心している場合じゃ断じてない。
あんな魔獣が都市のど真ん中に転移でもされたら、死人は千や二千じゃきかないぞ！

あの野郎、民間人まで積極的に巻き込むきか！
俺が睨み付けようとした時、シャルバは魔力を乱れ撃ちして俺達を攻撃する。
特にヴァーリに攻撃が集中している。今の奴では防ぐのもいっぱいいっぱいか！
「ふはははは！　所詮は下賤な人間と龍の血が混じった男！　真なる魔王には届かないということかぁ！」
「他者の力を借りてまで魔王を名乗る奴が吠えるか……っ」
ヴァーリはそう吐き捨てるが、シャルバの奴は意にも介さない。
相当ヴァーリのことが嫌いだったみたいだな。まぁ、組織人としての失格度合いは別ベクトルだから相性がいいわけもないか。
イッセーもイッセーで、ライバルを馬鹿にされたこともあってかなり切れているようだ。
「人のライバルを馬鹿にしてんじゃねえぞ、この野郎！」
指すら突き付けたイッセーの糾弾に、シャルバはこれまた馬鹿に仕切った表情を向ける。
……というか、目がイってるな。
「私を崇めない腐敗した悪魔どもに慕われる、下賤な転生悪魔の宿敵らしい評価だろう？」
誰が見てもまともじゃない表情で、シャルバはイッセーに対して凄まじいレベルの嘲笑を浮かべている。
「ついでに貴様の守る子供共も、我が呪いで滅ぼしてやろう！　差別のない冥界が望みだろうから、下級中級上級の区別なく絶息させてくれるわぁあああああっ!!　はぁあああはっはっはぁあああああっ!!」
……駄目だな、これは。
こんなのが王様だったらそりゃ内乱にもなる。血統主義の連中だって、了承できる限度があるだろう。
ノブレスオブリージュとかそういう次元じゃない。初代四大魔王も草葉の陰で嘆いているんじゃないか？
今この場でぶち殺すべきか？　あの時倒し損ねたツケは自分で清

算しないと―
「おっと、見つけたぞ！」
―その時、シャルバはオーフィスを魔力の拘束具で動きを止めた。
こいつもオーフィスを狙ってるのか!?　いい加減にしろ！　仮にもそいつはトップだろ！
「パワーダウンを補う為の蛇にも、真なる魔王の協力者たるハーデス神に対する土産も必要なのでな！　ふはははは！　英雄派がオーフィスを弱体化してくれたのには感謝せんとな！」
やっぱりあの老害が原因か！
教会に信仰とられたのは恨めしいのは分かるが、当事者以外をメインターゲットにしてるような真似は論外だろう！
いや、ギリシャ神話って罪をコミュニティ単位で清算させる傾向があったしな。ロキと同じで自分達の神話の在り方を変える気がないのなら、むしろ当然の行動ってわけか。
あの老害……っ！
糞ったれ！　しかも既に空間が崩壊し続けている。
次元の狭間に装備無しで持続するとか危険すぎる。何とか撤退しないと本当にまずいな。
……今度、次元の狭間にいても無に耐えられる加護を与える魔剣とか研究しよう。経験した緊急事態の対策は、できるのならばちゃんと用意しないと
！
「このままだとまずいにゃん！　幸い転移はこれなできるし、逃げるわよ！」
そうか、脱出はできるか。
これ以上禍の団の共食いに巻き込まれている余裕はない。ミザリも既に逃げた以上、此処は俺も脱出するしかないか。
慌てて魔方陣に集まる俺達だが、イッセーがいない。
ってあいつ、なんで動いてないんだ!?
「イッセー！　逃げるわよ」
リアス部長がそう叫んだ時、イッセーの奴は首を横に振った。

……あのバカ、まさか!?
「イッセー！　まさかお前、オーフィスを助けにシャルバに挑むつもりか!?」
「当たり前だ！」
当たり前じゃない！
「シャルバは冥界の子供達を巻き込んでいるし、オーフィスはアーシアとイリナを助けてくれた。この時点で、シャルバを見過ごすこともオーフィスを見捨てることもできない！」
言いたいことは分かるが、時と場合と状況を考えろ。
カズヒ姉さんがいるなら問答無用で絞め落としてるぞ絶対。
「みんなは先に転移してくれ！　赤龍帝の鎧なら、少しぐらいは耐えられる！」
あのバカ！　状況を考えろ！
……駄目だ、このままだと時間制限が切れる……っ！
「部長！　こうなったらいったん転移してから強引に術式で引っ張り戻すしかないです！　この馬鹿こうなったら口じゃ止まりません！」
俺はそう判断するしかない。
強引に引っ張り戻そうとすれば、結界空間の崩壊に巻き込まれる。
まったく。シャルバは今に拘らなくてもいいだろうに……っ！
「畜生が！　必ずあとで転移ゲート開くからな！　そっちには絶対入れよ！　何があってもだ！」
「……イッセー、生きて戻ってきなさい、絶対よ！」
先生と部長の言葉に、イッセーは力強く頷いた。
ああもう！　あのバカはこういう時本当に考えないんだから――ッ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「さて、赤龍帝は果たしてシャルバを倒せるのかな？」
「いや、今のシャルバが赤龍帝に勝てるのか？　紅の鎧を纏えば、蛇の無いシャルバに勝ちの目はないだろう」
「ふふ、それはちょっと違うんだよゲオルグ」
「……というと？　何かの切り札があるのか？」
「シャルバにはある研究の素体になってもらう予定でね。あいつ死んでも今の悪魔を呪う気だったから、説明を聞いても快諾してくれているんだ」
「一体なんの研究につき合わせる気だ。……いや、被験者ではなく素体だと？」
「そうさ。その前段階で今のシャルバは既に強化されている。たぶんだけど、紅の鎧でも楽には勝てないと思うかな……？」

銀弾落涙編　第二十三話　赤龍終焉

イッセーＳｉｄｅ

『まったく。イッセーはもう少し冷静かつ理性的な対応を心掛けてほしいですね』

そんなこと言わないでくれよ、シャルロット。

シャルバの野郎は後でも倒せる？　今ここで逃がすなんて選択肢が俺にはねえよ。

それに、オーフィスはアーシアとイリナを助けてくれた。俺が命を懸けて助けるには十分な理由だ。

シャルバの野郎に、オーフィスはこれ以上好きにはさせねえ。

「……忌々しい紅だ。ヴァーリではなく貴様のような下賤なまがい物が、我が前に立ち塞がるなど……っ」

こいつは本当にそればっかりだな。

いい加減飽き飽きっていうか、そんなことしか大事に思えないのかね。

正直、俺もとんでもない情報とか色々知りまくってるから、色々と余裕がないんだよ。

「……冥界の子供達をまで殺そうとするなら、俺がお前を見逃す理由はねえよ」

「ふん。幼子（おさなご）共に取り入って、冥界の覇権でも握るつもりか？　そんなもので握られるとは、なおのこと滅ぼさなきゃならんな」

こいつの頭は本当に、覇権だとか魔王の血とかそんなことばかりだってわけか。

こりゃ駄目だ。サーゼクス様達が魔王になって本当に良かったよ。

少なくとも、こんな奴が王様になるよりは何百倍も良いことだろうしな。

シャルロット、ドライグ。悪いけど、もうちょっと頑張ってもらうぜ。
『今更ですよ、イッセー。どちらにしてもあの男もこちらを見逃す気はないでしょうし』
『だな。それに天龍を此処まで愚弄しているのだから、それなりの仕置きといくべきだ』
ああ、頼りにしてるぜ相棒達。
魔力もオーラも、サーゼクス様達に比べれば明らかに低い。蛇を失くした所為だろうな。
少なくとも、ガチで挑んできたヴァーリや曹操ほどじゃないってことだ。
そう思った時、シャルバは歯をむき出しにしてオーフィスに視線を向けてきた。
「神滅具二つともなれば、真なる魔王と言えど分が悪い。オーフィス、失われた私の蛇を再び用意してもらうぞ」
「無理。今の我、無限でなくなったから蛇作れない」
……。
『無理やり拘束して助けてくれる人を倒す用にでオーフィスが蛇をくれると思うところが、もう……』
シャルロットが真剣に呆れるけど、俺もドーピング前提の王様ってどうかと思う。
シャルバの奴は奴で、蛇が貰えないことにすっごくショックを受けてやがる。
本気で貰えると思ってたみたいだ。お前、俺もエロが絡むと大概だけど、流石に女の子を無理やり拘束したうえで、警察に銃突きつけられながらそんな感じの要求はしないよ。王様が俺より馬鹿って、それ絶対ダメだろ。
ったく。まぁそれなら安心だ。
「蛇がねえなら、どう考えてもあの時みたいな力は出せないってことでいいだろうなぁ……！」
だったら、真女王でケリをつける！

『その通りだ』
『君の守る者を傷つける奴に、天龍を敵に回すことの意味を教えてやろう』
『未来ある物を守り給え。今代！』
　歴代の声援も聞こえてきたし、尚更―
「……いいだろう。ならば我が新たな力を知るがいい」
　―シャルバの奴、何かが……っ
　いや、この感覚はまずい。間違いない。カズヒや九成が使う時と、感覚が似てる。
　それもカズヒが変身してからのに匹敵する感覚だ。つまりこれって！
「創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星……っ！」
　野郎、人造惑星になったってのか!?
　仮面ライダーでもサリュートに乗ってるわけでもないってのにどうやって？
　いや、そんなことはどうでもいい。というか、ここまで来たのならやることは変わらない。
　そっちがそう来るならこっちだってやってやるよ！
「我、目覚めるは――王の真理を天に掲げし、赤龍帝なり!!」
『その通りだ、行け！』
「無限の希望と不滅の夢を抱いて王道を往く」
『我らに見せた、君達の夢を守れ！』
「我、紅き龍の帝王となりて―」
『それが、おっぱいドラゴンだ！』
「―汝を真紅に光り輝く天道へと導こうっ!!」
　歴代の声援を受けて、シャルバが星を発動させると共に、俺も真女王に昇格する。
　シャルバは全身だけでなく、魔力で出来た蠅みたいな奴からも黒い靄みたいなものを垂れ流している。
　というか、なんか体に負担を感じるな。まだ体力はもちろん、オーラだって残ってるぞ？

『何かしらのデバフや呪いの類かもしれん。星辰光（アステリズム）は何でもありすぎるから、初見で解明は困難だしな。……厄介だ』
『どちらかといえば毒の類でしょうか……？　イッセー、短期決戦で行きましょう』
ドライグもシャルロットも、今のシャルバに警戒している。
ああ、分かってるさ。元々真女王は、長期戦には向いてないしな！
全力でぶっ飛ばす！
俺はブーストをふかしてシャルバに突撃する。
シャルバは自分だけでなく蠅からも魔力の砲撃を放つけど、俺はそれを回避し、撃ち落とし、強引に突破して殴り掛かる。
シャルバはそれを靄の纏った拳で受け流しながら、こっちに拳や魔力の攻撃を放ってくる。
弱いな。魔力の力もだけど、戦い方がサーゼクス様に比べたら目に見えて低い。性能は確かに厄介だけど、これなら戦いようはある。
ドーピングなしだとこんなもんか？　殴り合いに限定すれば、俺だって真っ向から優勢に戦えるぐらいだぞ。
どこまでも、こいつは家柄とかそんなもんばっかりの奴だってことか。
「良いこと教えてやるよ。……日本じゃお前みたいなのを「親の七光り」って言うんだぜ！」
「下賤で下等な下民共の、負け惜しみなどしったことかぁあああああっ!!!!」
俺とシャルバは殴り合いながら砲撃も放って戦闘を続ける。
人造惑星になったのはビビったけど、総合的には今の俺の方が上だ。時間をかければ多分勝てる。
問題は、時間をかけられないってことだ。真女王はそもそも不安定だから長期戦に向いていない。しかもシャルバの攻撃は、一発一発の威力はともかく、喰らった後もずっとこっちに何かの影響を与えている。ついでに言うと、かすり傷は一瞬ってぐらいに早く治ってるから、長期戦に持ち込むと数時間は確実にかかるしな。
流石に真女王無しだと、今のシャルバをどうにかするのはきつい。

しかも奴の星辰光の影響か、少しずつかくずつにダメージが蓄積してるしな。粘られるとこっちが不味い以上、できる限り短時間で決着をつける必要があるわけだ。
……つまり、一発で決めれる攻撃をかますしかない。
シャルロット、ドライグ。俺は戦闘に集中するから、アスカロンの方を任せていいか？
『なるほど。倍化を譲渡した聖剣での一撃必殺か。今の相棒にそこまでさせるほどの相手とはな』
『腐っても素質は優秀ということですね。……クリムゾン・ブラスターの方も用意しておきます』
任せた、二人とも！
俺達が勝つ為の算段を整えた時、シャルバはシャルバで邪悪な笑顔を向けてきた。
「……なるほど、聖剣を使う気か。ならこちらも、必殺の手札とやらを見せてやろう」
そういいながら、奴は魔方陣で矢を転送するとそれを手に持った。
おい、なんだこのおぞけの走る感覚。
前にも感じたことがある。っていうか、つい数時間たってもいないレベルじゃねえか、これ。
まさか……っ！
俺が嫌な予感を覚えると、シャルバはそれに気づいたのかにやりと笑う。
「ハーデスからもらったサマエルの血が仕込まれている。ヴァーリに対する保険のつもりだったが、よもや貴様に使うことになるとはなぁ」
ハーデスの野郎、そこまでするのかよ。
三大勢力に恨みがあるのはともかく、子供達を泣かせるような真似する奴に手を貸すとか流石にないって！
だけど、まぁいいさ。
長期戦なら削り殺されかねない。短期決戦でも相手にだって切り札がある。

だけどなぁ……っ！
「そんなもんで、俺がビビるとでも思ってんのか！」
「馬鹿は道理も分からんから困るのだよ！」
俺とシャルバは真っ向から砲撃と打撃でぶつかり合う。
ドライグ、シャルロット！　準備はできたか!?
『できましたが、今の状態でシャルバに決定打を与えられるとは！』
そうか、分かったシャルロット。
そこに関しては、俺が何とかする！
こいつは絶対に逃がせない。ここで確実に仕留めなきゃ、冥界の子供達がどれだけ苦しめられるか分かったもんじゃねえ。
だからこそ、確実に勝つ為の一手を叩き込む！
……二人とも、こんな作戦で行けるか？
『面白いな。それに、今のままではこちらに不安要素が多すぎるからな』
ありがとうな、ドライグ。
さて、覚悟はいいか……シャルバ！
「行くぜぇえええええ！」
やるしかねえ！
俺は真っ先に照準を合わせて、全力のクリムゾンブラスターを構える。
広範囲に拡散する形で、それを一気にぶっ放した。
広範囲に拡散するクリムゾンブラスターで、シャルバの出した蠅をまとめて吹っ飛ばす。
ここまでは予定通り。あとは―
「―なめるなぁあああ！」
―その瞬間、突っ込んだシャルバが俺に矢の切っ先を振りかぶる。
のけぞりもしねえのかよ！　だけど見え見えの攻撃なんて喰らうか！
俺は咄嗟に奴の腕を右手で掴み取って左腕を構え―
「間抜けがぁ！」
―その瞬間、シャルバは手を離した矢を魔力で発射して俺に当て

た。
やられた……っ！
死ぬほど痛いってこういうこと言うんだよな。死んだことあるし色々攻撃も喰らったけど、これはきつい……っ！
ヴァーリが一瞬で倒されただけある。それだけの痛みと苦しみが走っている。
だけど……なぁ！
「おのれ、何故離さん！　効いてないのか!?」
シャルバが叫んで暴れるけど、俺は両手で両手を抑えて離さない。
はっ。めちゃくちゃ効いてるよ。今までで一番死ぬんじゃないかって思ってる。
だけどなぁ。そんなもんで俺が止まるかよ。
「お前は逃がさない。オーフィスは助ける。何より子供達を苦しめさせない……っ！」
ここで俺が手を離せば、全部できなくなるって分かってんだよ。
だからなぁ……っ！
「てめえは死んでも離すわけがねえんだよぉ！」
「下賤なまがい物の蜥蜴風情がぁあああ！」
激高したシャルバは、大量の魔力の蠅を産みだした。
このまま削り殺す気か！
「死ねぇえええ！　サマエルの毒が貴様を殺すより先に、我が魔力で滅びるが―」
「―いや、お前はもう終わりだよ」
俺は、それだけは断言できる。
それにシャルバは嘲笑すら浮かべていた。
「抜かせ！　この状態ならアスカロンは―」
そう言いかけたシャルバの首からアスカロンの切っ先が生えたのを、見た。
口をパクパクさせながらそれを見るシャルバに、俺じゃない声が宣言する。
「……残念でしたね。今代の赤龍帝は、三人羽織りなんですよ」

そう告げるのは、俺から離れていたシャルロットだ。
……そう簡単に倒せないし、アスカロンは当然警戒される。だから、俺はアスカロンを持たないで囮になった。
クリムゾンブラスターの拡散発射は、シャルロットとの分離を隠す為の目くらまし。そして今回、赤龍帝の籠手を二人が分割して使用する比翼連理たれ赤龍帝（ブースティッド・フリーバード・メイル）にして、シャルロットは決定的な隙を気配遮断を使って窺っていたってわけだ。
まさかいきなりこっちが致命傷を貰うとは思ってなかったけど、即死じゃないなら十分だ。
「終わりです。幸い、貴方を殺すことに躊躇はありません！」
「くたばれ……糞魔王……っ！」
シャルロットが切っ先を跳ね上げて、そのうえで俺が踵落として切り落とす。
頭から真っ二つになったシャルバは、完璧に死んでいる。
はは、……まぁ、これぐらいはしっかりしとかないと……な……
「イッセー!? イッセー、しっかりしてください!?」
『相棒！ くそ、ドラゴンゲートはまだか……っ』
悪い、シャルロット、ドライグ……。
これ……思った以上に、きつい……。

和地Ｓｉｄｅ

龍門という、ドラゴン用の転移ゲートがある。
ドライグを宿すイッセーは赤い龍門から転送されることになるが、その龍門からはイッセーの姿は見えなかった。

代わりに、小さな物体が８個だけ転送されている。
……それを理解して、殆どのメンバーが崩れ落ちた。
ヒマリも、ヒツギも、リアス部長も、アーシアも。
むしろ崩れ落ちてないオカ研のメンバーの方が少ないだろう。一年生組のアニルとルーシアも愕然としている。
俺も、こういうことが起きる可能性はあると分かっていた。
分かっていたさ。今まで一人も死人が出なかったことが、奇跡に近い綱渡りの勝利ばかりだって。
だからって……これは、ないだろ……っ！

「……イ……ッセー……っ」
涙をこぼすリアス部長は、震える手でそれを拾い上げる。
転送されたのは８個の悪魔の駒。
……兵藤一誠は、戻ってこなかった。

銀弾落涙編　第二十四話　騒動が始まる裏で

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「フロンズ！　連絡は聞いたか!?」
「既にハッシュから聞いている。……これは、流石に想定外だな」
「まったくだ。同時多発テロや同時多発攻撃は警戒していたが、このタイミングでシャルバが起こすとはな！」
「……ノア、諜報部隊をとにかく動かしてくれ。それと彼女達にもすぐ連絡を返すように伝えておいてくれ」
「了解だ。流石にこんなことを黙ってたなんてことになりゃぁ、こっちも考え直さないといけないだろうしな」
「そうだな。とはいえノア、その可能性は低いとは分かっているだろう？」
「万が一ってやつだよ、言わせんな。……アザゼル総督からの報告もちゃんと耳に入ってるからな」
「シャルバ・ベルゼブブが自分の治療にも関わっていた英雄派に危害を加える形で、魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）を禁手に至らせて同時多発攻撃とはな。……推測するに、奴はそこでも行動を起こしていたとみるべきか」
「なるほどなぁ。曹操達も一杯食わされたってわけか。流石は神様、えげつねぇ」
「となると、計画にもある程度の修正は必要だな。彼女達と連絡が繋がり次第、すぐにでも会議を進めるべきだろう」
「でかい魔獣の方は？」
「当面は避難誘導と避難者の一時受け入れに専念だ。こういう時は素直に指示に従うべきだろう？」
「ま、度の超えた独断行動は最小限にしねぇと、な？」

「ふむ、これはまた意外なことになったのぉ」
「どうすんだ、マスター？　奴さんからはすぐ相互通信を繋ぐように言われてんだが」
「すぐにでも繋いだ方がいいだろう。記録映像の使いどころは彼らに一任するべきだろうしな」
「大丈夫かねぇ？　情報の出し惜しみとか言われて、キレられねえか？」
「その心配は薄かろう。いくら何でも、ここまでの情報を出し惜しみする馬鹿だとは思っておらぬだろうて。むしろ今回のこと、アザゼル総督達は掴んでおるだろうしな？」
「ま、それなら大丈夫かねぇ？　……つっても、ハーデスの爺さん達には一発かまさねえといかねえんじゃねえか？」
「それがいいのぅ。なら、ブレイとアーネに煙霞の奴を送るとするか。……既に準備は出来ているのだろう？」
「うっへぇ怖い怖い。冥府はインフェルノとコキュートスが足して二で割る感じになるかねぇ」
「それぐらいのは意趣返しせんとな。まぁ、奴らの許可はきちんと得てからにするべきだろうがな」
「そうだな。で、手土産に関してはどうする？」
「変な編集はせぬ方がよかろう。ノーカット未編集の元データを丸ごと最初に送っておくがよい」
「あいよっと。……ま、これがあればハーデスの野郎にゃ十分な報復ができるだろうな」

「ファファファ。シャルバめは討たれたか」
「そのようです。ですが、オーフィスを有限にできただけでも英雄派とシャルバを利用したかいはあるかと」
「とはいえアザゼル(鳥)達には逃げられたようだな。奴らがここに来るかもしれぬ」
「……プルート殿を派遣してなお生き延びるとは、この調子では禍の団が潰れても三大勢力は健在でしょう」
「まったく、ゼウスもポセイドンも恥を知ってもらいたいものだ。我らが信仰を奪った者達と和議を結ぶとはな。ミザリには感謝すら覚えるものだ」
「同意見です。むしろあの場の流れなら、オリュンポスが声を上げれば反三大勢力同盟すら作れたでしょうに」
「そうだな。下手をするとポセイドンのシンパ共が動くかもしれぬ。いざというときに備え、お前も準備をするのだ、アクジスよ」
「承知です。既に防衛準備を整えている隊長達と合流し、外周警戒を行わせてもらいます」

「ただいま～。慣らしは終わっているようで何よりだよ、モデルバレット……いや、日美子でいいのかな？」
「誠にい、お疲れ～。で、赤龍帝は死んだの？」
「多分死んだとは思うけど、死体を厳密に確認できたわけではないんだけどね」
「そうなの？　シャルバの死体は回収できたのに？」
「サマエルの毒や呪いは洒落にならない感じだったからね。あれに侵されて死んだのなら死体は残らないさ。まぁ、心臓部分と思われる汚染された肉片は見つかったから……多分死んでるかな？」
「それなら死んだってことでいいんじゃない？　なにか気になることでもあるの？」

「いや、それがグレートレッドがあの辺りを遊覧飛行しててね。サマエルの毒はもうなかったから、結構な間あまり精査できてなかったんだよ」
「……そりゃまたすっごいことに。で、グレートレッドが赤龍帝を助けたかもって？」
「グレートレッドとはあまり接触できてないから、人となりが分からないしね。オーフィスも見つからなかったし、万が一はあるかもね」
「いや～どうだろ？　カズヒの記憶から見て、赤龍帝じゃぁサマエルの毒には耐えられなくない？」
「ま、杞憂で済めばそれでいいさ。僕は僕でこれをもっと楽しみたいし、最終調整をしてから説教もしないとね？」
「ま、それでいっか。で、私は何をすればいいのかな？」
「そうだね……うん、じゃぁこうしよう」

「……ちょっと実戦試験も兼ねて、英雄派と行動を共にしておいてよ。曹操とは話を付けるけど、お目付け役って感じかな？」

『さて、それじゃぁ……いいんだな？』
『はい。私も今のままではいけません。曹操に勝つというのなら、今後も踏まえて今まで以上の力が必要です』
『いいだろう。だがまぁ、相棒が起きたら大変なことになりそうだな』
『同感です。こんなことになったんですから、当然精神的に大きな負荷がかかるでしょう』
『まったくだ。まぁ、その分反撃は派手に行くべきだろうがな』

『ええ。その通りです』

『赤龍帝を舐めてかかった報いは、しっかり倍返しにしてこそでしょう。そうですよね、ドライグ？』

『無論だ。反撃の準備を進めておくぞ、シャルロット・コルデー』

銀弾落涙編　第二十五話　作ってみたいけど家じゃ作れない料理って案外多い

和地Ｓｉｄｅ

襲い掛かる魔獣達に、俺は正確にショットライザーの射撃を叩き込む。
三体ほどの魔獣をそれで牽制したところに、上から仕掛けるのは聖十字架の槍を構えた鶴羽だ。
一瞬で魔獣を突き穿ち、更に放った炎で一気にせん滅する。
「和地！　残りは！」
「あと十体！　これで半分だ！」
まったく、これは流石にしぶというというかなんというか。
とにかくしぶといんだよ、この魔獣。
これで漸く半分だ。割と消耗したというか、他の連中は大丈夫か？
いや、とにかくまずは―
「こいつらのぶちのめすのが先か……リヴァ先生！」
「任されたぁ！」
俺の言葉に応えて、離れたところから大量の砲撃が魔獣質に放たれる。
リヴァ先生は神格としての力を地脈の制御に利用することで、地脈から力を供給する砲撃を得意技としている。
性質上レーティングゲームのフィールドとかだと本領が発揮できないが、だからこそこの戦場ではめちゃくちゃ強くなるというわけだ。
魔獣達は凄い速度で削られながらも反撃を叩き込もうとするが、しかし遅い。

「左右がなぁ！」
「がら空きよ！」
そこに回り込んだベルナと春っちが、氷水と火炎の砲撃で左右から更に挟み込む。
一斉攻撃で削り潰され、魔獣達は壊滅する。
俺は復活しないか少しの間警戒するが、そのまま魔獣達の残骸は塵になっていった。
……よし、此処はもう大丈夫か。
「……和地君、皆！」
そこにインガ姉ちゃんが飛び降りるように現れた。
「避難誘導は完了！　一旦ここから後退するって指示が来たよ！」
「なるほどね。……分散した魔獣がほぼ駆除し終わるまではそっちの方が安全ね」
インガ姉ちゃんの連絡に、リヴァ先生は頷いて周囲を確認する。
……俺も見たけど、割と環境被害がデカいな。
これで人的被害がほぼ出てないってのが奇跡なぐらい、今の魔獣達はしぶとく、そして数が多い。
俺達が戦っていたのは、シャルバが強制的に至らせた魔獣創造の禁手。それによって生まれた魔獣が更に生み出していく小型魔獣だ。
最初の産み出された魔獣は、一番巨大な個体が超獣鬼（ジャバウォック）、それ以外が業獣鬼（バンダースナッチ）と名付けられた。
奴らはそれぞれ、短いスパンで小さい魔獣を産み出しながら侵攻を開始。それぞれが冥界の大都市に向かって進軍している。
現状撃破は一切なし。足止めに色々な作戦も行ったがすべて失敗。更に英雄派の暗躍を警戒して、神仏魔王の参戦も困難。結果として生まれている魔獣が人里を襲わないよう、可能な限りの駆除と避難誘導が主体になっている。
既に冥界上層部では対抗戦術と対抗術式の研究が行われているが、果たして間に合うかどうか。
俺達もその支援に駆り出された形だが、しかしてこずったな。
「……どうすんだ？　シャルバの野郎が何かしら動いたら、流石に更

に傾くんじゃねえか？」
ベルナがそう気にするのも当然だ。
今回の一件、旧魔王派の動きが思った以上に少ない。
おそらくは雌伏しているとかそんな感じだろう。だからこそ、一気に動き出せばタイミング次第ではかなりまずいことになる。
シャルバ・ベルゼブブの正確なら、尚更演説でもしてくるとは思うしな。
……ただ。
「イッセーが態々出張ったんだ。あいつなら倒しているだろうし、最悪でも深手を負わせているとみていいだろう」
俺はそう言い切れる。
イッセーはカズヒ姉さんや俺とは別の意味で、やると決めたら本当にやり遂げるからな。
シャルバも相応の切り札を持ち込んでいたようだが、この期に及んで演説の一つでもしてないというのなら……最悪でも深手を負っていると考えるべきだろう。
問題は、だ。
「……まさか、あの赤龍帝が……ね」
「うん。殺しても死ななそうな感じだったのに」
春っちが俯くと、インガ姉ちゃんも目を伏せた。
……龍門によるイッセーの転移は成功せず、悪魔の駒だけが転送されるという事態があった。
この手のケースは主に対する強い思いを盛った眷属の転送を試みた際に起きるケースで、すべてにおいてその下僕は死亡している。
とどめに、ゲートからはサマエルのオーラまでもが検出されたとのことだ。
イッセーのことだから、喰らったとしてもシャルバは何とかしている。少なくとも今すぐに何かされることはないだろう。
だが同時に、サマエルの毒を喰らってイッセーがただで済むとも思えない。
「……あの馬鹿……っ」

鶴羽も、あの時の光景を思い出して歯を食いしばっている。
俺も、思い出しただけで嫌な気分になるな。
……ここは辺境とはいえグレモリー領。そんなところの避難誘導に、俺達が出ておきながらリアス部長達がいない。
その理由は単純明快だ。
リアス部長達は、ほぼ全員が心神喪失状態に陥っている。
くそったれ。無理やりにでも連れ戻しておいた方がよかったな……っ！

避難誘導とは言っても、数百人数千人規模を一気に転移させるわけではない。
とりあえずベースキャンプ的な物を作っており、そこに人々を集めて安全を確保している感じだ。
俺達は避難誘導がほぼ済んだことから、大人の上級悪魔や眷属達に駆除を任せていったベースキャンプに帰還した。
休憩できる時に交代で休息をとることも重要だしな。というか、少しは補給もしておかないと。
「お疲れ様ぁ。ご飯、用意できているわよぉ」
……意外とエプロンが似合うなぁ、リーネス。
疲れてるのか、そんな場違いなことを考えてしまった。
「じゃ、ご相伴に預かるということで。何があるんだ？」
俺は努めて明るくそう尋ねる。
視界には子供も映っているからな。こういう時に不安がらせるのはよくない。
サムズアップで子供達を元気づけながら、俺はクックスがいるだろう炊き出しの場所に向かっていく。
「ふふぅん。実働班には栄養価抜群のをクックスが作ってるわぁ。カプサロンっていうんですって」

ごめんリーネス。さっぱり分からない。
「ほほう。カプサロンねぇ」
「知ってるの？」
何やら感心しているリヴァ先生は、春っちに尋ねられると指を一本立てる。
「フライドポテトの上にケバブとチーズを重ねてオーブンで焼いて、その上からサラダをのっけた料理よ。オランダのファーストフードね」
「……そんなの作れる設備なんて、何処に在んだよ」
ベルナの指摘はとってももっともな気がする。
イヤホンと、百歩譲ってオーブンはともかく、ケバブって結構専門的なものが必要な気がするんだけど？
俺達の疑問符に、リーネスは微笑みながら手である方向を向けた。
……機動特急アントニオンの随伴列車に、子供達の行列ができている。
「アントニオンの随伴列車には、一両丸ごとキッチン仕様もあるのよぉ。炊き出し用だけど、只煮込んだだけというのも味気ないでしょぉ？」
子供たちはドネルケバブを片手に笑顔になっている辺り、ある意味成功しているのか？
というかドネルケバブがあるならもうそれだけで十分な気もするんだが。
俺が首を傾げていると、リヴァ先生はおなかをさすりながらちょっとにやついていた。
「ちなみにカプサロンは、一食食べればもう一日何も食べなくてもいいと言われるぐらい、カロリーが豊富なの♪　過酷な戦闘で消耗した戦士達のカロリー補給にぴったりね♪」
「……ダイエットの天敵を通り越して怨敵かな？」
インガ姉ちゃんの意見にとっても納得。
ファーストフードは基本的にダイエットに向いていないが、サラダもあるのになんだその宿敵具合は。

まぁ、戦場で色々消耗した戦士達にはなんというか……完全栄養食？
いやまぁ、今はそんなことはどうでもいいか。
俺は気分を切り替えると、とりあえずカプサロンをクックスから受け取って、俺達用に用意された随伴列車に移動する。
二段ベッドや簡単なテーブルがある一両丸ごと俺達用の随伴列車で、俺達はカプサロンを食べて体を休めることにした。
……割と本当に大変だからな。
機動特急アントニオンは、同時に随伴列車込みなら移動要塞として使用することもできる仕様になっている。
その為随伴列車の中には、簡易病院として使用できる仕様もあり、キュウタはそっちで重症を負った者達の様子を見ているわけだ。
とはいえ、それに気を使って俺達の疲労や消耗が回復しないはそれはそれで問題だ。
ある程度の割り切りをもって、俺達が動く時の為に英気を養う必要もあるからな。これができないといざという時動けなくて更なる被害を生むことになる。
なので俺達も、カプサロンを食べて鋭気を養っていく。
「それで、あの魔獣はどうにかできそうなのかな？」
「まぁ大丈夫でしょうね」
インガ姉ちゃんが重要なところを聞くと、リヴァ先生はさらりと頷いていた。
またあっさりと断言したな。
結構俺達もてこずっているんだけど？
「断言できるの？　割とてこずってるんだけど」
春っちがそう返すと、リヴァ先生は軽く肩をすくめた。
「私達がてこずってるのは神仏魔王クラスが動けないことや、避難誘導を重視してるうえ、同時多発的な奇襲だからよ。裏を返せばそうでないなら対処は割と簡単にできるわ」
カプサロンをパクパク食べながら、リヴァ先生は断言する。
……まぁ確かに。本隊にも行って仕掛けたけど、しぶといのは事実

だが、敵として対峙するだけなら、ロキの方が遥かにやばかったな。
総合的な性能では上なんだろうけど、耐久や火力においてはともかく、技術や対処能力ではロキの砲が数段上だ。たぶん足止めでいいなら、ロキ一人でも一体は確実に行けるだろう。
となれば、つまり―
「奇襲による混乱さえ収まれば、やりようはいくらでもある。旧魔王派が過剰に反応してないのは、ミザリがその辺りを悟っているからと考えるべきね」
―リヴァ先生は、この展開をそう言い切った。
つまり準備が整うまでの間、被害を抑えられればこちらの勝ち。あの魔獣達は面倒なだけで、倒しようはいくらでもあると先生は言っているわけだ。
なるほど。割と余裕があるのはそれが理由か。
ちょっとほっとしていると、リヴァ先生は苦笑しながらため息をついた。
「……裏を返せば、準備が整ったところで後ろから仕掛けたりすれば、神の一柱や二柱は滅ぼせそうでもあるけれどね。そこも踏まえると、やっぱり面倒なことにはなるでしょうね」
まぁ、確かになぁ。
つまり神仏魔王の力を借りずに、あれを何とかしないといけないわけだ。
仮にも神滅具の禁手である以上、そのポテンシャルは神仏魔王に届くはず。それを神仏魔王抜きでどうにかしないといけないわけだ。やはり打倒は可能だが面倒な相手となるわけだな。
……とりあえず、英気を養う為にも食べておくか。
美味いしなこれ。しかもカロリー豊富だから、過酷な戦いで消耗したエネルギーが補充される補充される。
「それはそれとして、春菜に聞きたいんだけどさ？　冥革連合は動くと思う？」
鶴羽が春っちのそう聞くと春っちはさらりと首を横に振った。
ためらうこともなく、断言と言ってもいい動きだ。慌ててもないこ

とを見るに、これに関して絶対の確信がある。
「十中八九通り越して十中十でないわね。ヴィール様はあくまで冥界の発展に繋げる為に悪を成しているもの。禍の団との協力関係上、冥界政府を直接的に助けることはできないでしょう。だけど、あの方はこんな下劣なやり方で冥界に危害を加えることを良しとはしないわ」
まぁ確かに。
ヴィール・アガレス・サタンはまごうことなく誇り高い悪だ。
シャルバの逆恨み限界突破なこんなやり方で、民間人を中心に狙うような無差別テロを肯定するとは思えない。組織人として同盟組織にある程度の気は使うだろうが、自発的にこれに便乗することはまずないだろう。
「……あ、冥革連合から王の駒と真魔の駒が合計１３個送られてきたって」
「それ使ってぶちのめせってか？　ぶれねえな、あの旦那も」
ちらちらと情報を確認していたインガ姉ちゃんが見つけた情報に、ベルナが呆れ半分感心半分だった。
……まぁ、あの組織は王の駒や真魔の駒による冥界政府の強化を目論んでいるからな。この機会に使えと更に広めようとしてくるか。
少し俺は苦笑いするが、だけど問題はそこだけじゃ断じてない。
「あの超巨大魔獣軍団はそれで何とかなるとして、問題は曹操とミザリだな。オーフィスから抜き取った力も踏まえると、できればどっちかは何とかしたいし、カズヒ姉さんを何とか助け出したいんだけどなぁ」
俺のボヤキに、鶴羽もため息をつきながら俯いた。
「……誠明もとんでもないことしてくれるわよ。日美子を自分達に引き込む為に、あの頃の日美子を再現するプログライズキー作るとか。……そもそもどうやって作ったのよ」
泣き出しそうな表情で頭を抱え込む鶴羽に、俺達の同情の視線が集まった。
「師匠……っ。何か重い物を背負っているとは思っていたけれど、まさかあんなレベルなんて……」

既に事情は聞いている為、春っちはそう呟いて俯いた。
まぁ、俺も含めてヘビーすぎる因縁だからな。俺だってダメージがないわけじゃない。盛大なプラスで強引に持ち直しているところはある。
瞼の裏の笑顔に誓い、今この状況下でへこんでいる余裕はない。
「……というか、まさか経産婦だったなんて。しかも寄りにもよって―」
「―あの幸香が娘だってんだからな。前から相当キてるはずだろうよ」
インガ姉ちゃんやベルナも、その辺は本当に同情心だらけだ。
普通ならやったことがやったことだからヘイトも稼ぎそうだけど、その心配は全くない雰囲気だ。
……いや、俺が言うことでもないがちょっとびっくりするぐらいだな。
「……後回しにするのもなんだから今行くけど、三人は大丈夫なのか？　その、特にカズヒ姉さんとか」
やらかしがやらかしといっていいレベルじゃないぐらいだからな。
ただ、インガ姉ちゃんも春っちもベルナも、その辺に関しては衝撃は受けてるけどそれ止まりではあった。
なんでちょっと聞いてみたかったわけだけど、三人ともさらりとした表情だ。
「それを後悔して悔やんでるのは、今までを見てればすぐ分かるよ。だったらね」
「だからこそ、自分の二の轍を踏ませない為に人生を賭けてきたって分かるもの」
「ま、前世で罪を犯したから今生で償えってものあれだろ？」
……そっか。
短い付き合いだろうけど、それでもカズヒ姉さんをそう見てくれるのか。
視界の隅でリヴァ先生も、優し気な笑みを浮かべてくれる。
ああ、本当に―

「……ひっぐ」
―鶴羽が鼻水まで出そうな勢いで号泣してた。
すいません。何か言いたいんだけど言えないんですけど。いや、鶴羽が一番この流れなら言うべきなのか。
俺は苦笑して鶴羽に譲ると、それを悟ったの鶴羽はしゃくりあげながら、とりあえず食事をわきに置いた。
「……ぐすっ……本当に……ほんとにっ……日美子を……カズヒを……ありっ……ありがと……ありがとうっ……」
なんというか、ちょっとほっこりした気分が蔓延している。
俺はそっと鶴羽の肩を抱くと、小さく頷いて改めて決意を告げる。
「大丈夫。カズヒ姉さんは何があっても助け出す。ミザリの好きにはさせないし……あんなままなんて、断じて認めないさ」
俺の言葉に、全員が小さく頷いた。
ああ、そうだよカズヒ姉さん。
貴女は確かに罪を犯して、それはとても重くて大きな罪だ。
だけど、カズヒ・シチャースチエが成してきた善行や成果は、消えてなくなるわけじゃない。
邪悪を祓う銀の魔弾。正義に味方し奉じる戦士。
悪祓銀弾（シルバーレット）を認める者は、此処に何人もいるんだから……さ。

銀弾落涙編　第二十六話　精神論に縋るのは、まず人事を尽くしてからにしよう

和地Ｓｉｄｅ

とりあえず、俺達は数時間レベルで休憩を貰っている。
実際問題、この大騒ぎは少なく見積もっても数日レベルで考慮するべき非常事態だ。長ければ数週間どころか数か月かかっても全然驚かない。
だからこそ、休める時には休めるよう、交代制を投入するべきだ。戦術的にもそれが合理的かつ効率的。避難誘導がきちんと進んで被害者の数が現状最小限で済んでいる以上、決定打を討てる状況になるまではこれで消耗を最小限にするのが妥当だろう。
なので、俺達も、カプサロンでカロリーを補給してからは休んでいる。
機動特急アントニオンの随伴列車には、休憩用のブースもしっかり設置している。子供達用にシアタールーム仕様まで用意し、子供向けの作品を上映させることで子供達の心情に配慮したうえでだ。あえておっぱいドラゴンを避けるという念の入れ具合でもある。
仮眠用の割と質のいいベッドが仕込まれている随伴列車もあるし、シャワーやサウナがある随伴列車も連れてきている。同型車両込みで徹底的に準備したことから、作戦行動をとっている実働班だけでなく、避難民にも交代制で開放しているほどだ。
……だからこそ、俺達もそれぞれ休息をとっている。
何か手伝いたくなるけど、我慢だ我慢。
こういう時、しっかり休憩をとることも仕事のうちだ。無理無茶無謀なんてものは、本当に必要な時以外はしないに越したことはない。

だから、俺は休息用ブースで水を飲みながら休んでいる。
……この非常時においても、割と避難キャンプは生活環境がいい。
これはフロンズ・フィーニクスがその辺りを考慮していることにも由来する。大規模行軍時の拠点や戦勝の宴を踏まえ、コンテナ型のユニットを大量に用意していたことが効いたともいえる。
流石に民意もあって酒をばらまくようなことはしていないが、心理的不安が強くなりすぎる場合に備えて安い酒をかき集めているとも聞いている。終わったら終わったで民衆に無償で放出するつもりとも聞いている。
あのレベルの金持ちなら、安いカップ酒とかを一人三つや四つぐらいくれてやっても懐は痛まない。むしろ民衆の支持率も多少は上がるだろうからむしろ良いことづくめだ。金はさほどかけないから、大王派のうるさい上役もとにかく言ったりはしないだろう。
……この状況下でも抜け目がないな。とはいえ、避難誘導を積極的に行っているから問題はない。
やることをしっかりやったうえでなら、利益を求めても文句を言うつもりはない。頑張って成果を上げたやつがそれに見合った報酬を求めること自体は間違ってないからな。
とはいえ、フロンズ・フィーニクス達には何か不安を煽るものを感じているんだよなぁ。
……落ち着け。今考えるべきことは他にある。
首を振って意識を切り替えた俺は、視界に人を見つけて顔を上げた。
「あ、こちらに来てたんですか？」
「ああ。本格的に動く前の慰問活動のようなものだがな」
そこに現れたのはサイラオーグ・バアルだった。
ここは一応グレモリー領なんだが、慰問活動ならバアル領とかヴァプラ領じゃなかろうか。
俺の疑問を悟ったのか、サイラオーグ・バアルは座りながら肩をすくめた。
「リアスの様子を見に来た帰りでな。まったく、リアスにも困ったも

のだ」
そういうサイラオーグ・バアルは、本当に憮然としていた。
まぁ、この非常時に本家次期当主が何もしないどころか引きこもり状態では言いたくもなるだろう。
ただなぁ。
「……といっても無理があるでしょうに。たぶん人生初の仲間の死で、しかも相思相愛の男なんですよ？」
その辺はちょっとぐらい配慮してほしいものだ。
もちろん彼女の立場なら、戦闘で眷属や同胞が死ぬことは覚悟しておくべきで、備えておく必要はあるだろう。
だがその手のことは、訓練を積んでいてもなおしきれないことがあると座学で俺は学んでいる。
ザイアの連中は好きではないし、偏向教育があるのも事実。だが同時に、そういった要素を抜きにした部分なら、忌々しいことに優秀なんだ。駒王学園において俺が成績優秀組になっているのもそこが大きいし、実戦においても非常に役立っているからな。
だからこそ、俺はリアス部長の気持ちを察して余りある。
寄りにもよって人生初の眷属との死別を、最愛の男で経験したんだ。イッセー自身の影響力も踏まえれば、ろくに動ける状態でないことは推定できるだろうに。
なので非難する目になったんだが、サイラオーグ・バアルはため息をついた。
「そもそも何故お前達は愚かなことを考える？　兵藤一誠が死んでいるわけがないだろう」
……。
「どこから来るんだその自信」
思わずタメ口でツッコミを入れたよ。
え、状況聞いてる？
「いいか、よく聞け？　転移による引き戻しができず、死んでいる場合に起きる現象が発生し、挙句の果てに死因として納得できる現象まで示されているんだぞ？」

うん、どこからどう聞いても死んでない方がおかしい要素のつるべ打ちだ。
ここまで重なっていて、死んでいるわけがない？
「百歩譲って生きているにしても、それを大前提にできる根拠はどこにあるんだよ」
真剣に脳の病院に連れていきたい。
だがサイラオーグ・バアルは、何を言っているんだという表情だった。
「リアスから聞いていないのか？　兵藤一誠はいまだリアスを抱いていないんだぞ？」
「それ今関係ある!?」
渾身のツッコミを飛ばしてしまった。
いや真剣に関係ある？　文脈飛んでるんだけど、俺って意識飛んでたか？
っていうか何をぽかんとしているんだよ。俺の方が非常識みたいな感じなのはどうなんだよ？
「まったく。逆に聞くが、何故兵藤一誠が愛する女を抱いてもいないのに死ぬと思う？」
「逆に聞き返すが、信念とか渇望とか気合とかでできることには限度があることも分からないのか？」
それを大前提にするのは絶対にしちゃいけないことだろう。
ったく。面倒くさいというかなんというか。腹立ってきた。
「……精神は所詮精神だ。それだけで他の全てをどうにかできるわけじゃぁない。イッセーにしろ俺にしろカズヒ姉さんにしろ、それだけでどうにかしてきたことは一度として存在しない」
真剣に座り直して睨む感じで、俺はサイラオーグ・バアルと向き直る。
そうだ。俺達は確かに根性入れて困難を乗り越えてきた。その事実は認めよう。
だけど、それだけでやってきたわけがない。他にも色々なものがあったからこそ、今まで何とか乗り越えてきたんだ。

毎日欠かさず鍛錬をしてきた。生まれ持った才覚があった。たくさんの人の協力があった。場合によっては幸運もあったし、訳の分からない天運の類もあっただろう。
それらすべてが噛み合ってきたからこその結果だ。間借り間違っても、心一つでどうにかしてきたわけじゃ断じてない。
だからこそ、俺はサイラオーグ・バアルに物申す。
「ただそれだけでイッセーが生き残っていると断言するなら、それはイッセーに対する酷い侮辱だ。まして兵藤一誠という男は、無事ならこの非常時に動かないわけがないだろう」
「当然だな。俺もそれが分かっているからこそ、リアス達の不甲斐なさに憤ったのだ」
ならなんでそんな断言ができる？
俺は視線でそれを問う。答えを聞かずにはいられないし、ないなんて言う用なら、後々真剣に決闘を申し込む所存だ。
メンタル以外の根拠を言え。言わないことは許さない。
軽くキレ気味で俺はサイラオーグ・バアルを見据える。
それに対し、サイラオーグ・バアルも居住まいを正して俺を真っ向から見据える。
「あえて言おう。俺が知る兵藤一誠という男は、窮地に奇跡を掴み取る男だ」
そう、嘘偽りなくはっきり断言した。
―気づいた時には、俺は胸ぐらを掴み上げて魔剣を首元に突きつけていた。
珍しくブちぎれたな。だが、流石にそれは看過できない。
ふざけるな、愚直を通り越して愚鈍になったかサイラオーグ・バアル。
「……奇跡を掴み取ったことがあるのなら、今度も必ず掴み取る？本気でそれが根拠なら、この一件が終わったら殺し合いを申し込むぞ？」
ああ、ちょっと冷静でないのは分かっている。
ただなぁ。俺だってメンタルが普通じゃないんだよ。

イッセーのことも当然だ。瞼の裏の笑顔の誓いも、決して断じて曇ってない。
だがなぁ……っ
「最後まで諦めなければ夢が叶うほど、現実は単純じゃないし単純でいいわけがない」
そんな理屈が正しいと、本気で思っているなら言ってやる。
「そんな世界は地獄だからだ。夢が必ず叶う世界では、夢とは叶える以外が無条件で悪になる呪いに変貌すると知れ」
ああ、そうだろう。
夢は辛く苦しいことをしても叶えられるか分からないからこそ、挑むことが評価され、そして美しいものでいられるんだ。
頑張れば必ず何もかもができる世界。そんな世界が実現すれば、夢は叶えることが絶対的な義務になる。選択肢なんて何もない、持った瞬間にそれ以外の行動が悪徳になる世界だぞ。
そんな世界のどこがいい。諦めないことが美徳になるのは、諦める選択肢がある世界だ。
何より……なぁ！
「それはカズヒ・シチャースチエに対する最大級の侮辱だ。お前は今、俺の逆鱗に踵落としを叩き込んだぞ！」
その果てに歪み、打ち砕かれ、そのうえで正義の味方であろうとした、カズヒ・シチャースチエの人生を馬鹿にしたようなものなんだぞ。
事情を知らないと分かっているからこそ、俺はギリギリで踏みとどまっている。本能レベルで殺気が抑えられていたからこそ、サイラオーグ・バアルもあえてここまでは許容したんだろう。
だがもし知っているのなら、その瞬間に俺は我慢など不可能だ。この場で殺し合いになりかねない。
静かに俺とサイラオーグ・バアルは視線をぶつけ合う。
返答次第で殺し合いになると分かっているんだろう。サイラオーグ・バアルもあえて沈黙している。
「カズヒ・シチャースチエについての情報は聞いていない。彼女がこの場にいない時点で、相応の事態であることは察している」

静かに、真っ直ぐに。
サイラオーグ・バアルは言い切った。
「だからこそあえて訊こう。カズヒ・シチャースチエは、正義を奉じる邪悪の敵であることを、諦めるような女だったか？」
「諦めようが諦めまいが、誰だって死ぬ時は死ぬんだよ。その理不尽をいやというほど痛感しているからこそ、悪祓銀弾（彼女の夢）は尊いんだ」
大前提を断言し、俺は魔剣を消して手を放す。
これ以上は、カズヒ姉さんの事情を知ってからでなければ会話できないだろう。その辺りについては俺の一存で話すべきことでもない。
道間日美子の夢は、最悪の形で崩壊した。
ただそれだけが全てだった、彼女の絶対的に譲れなかった想い。だがそれは、どうあがいても叶わなかった祈りだ。
真っ当な精神を捨てなければ、挑戦することすら困難。だが真っ当な精神を捨てて挑戦できても、かなえることはほぼ不可能。どうあがいても詰んでいる、そんな願いだけが彼女にとっての全てだった。
それを痛感して、その上で彼女が悪祓銀弾（シルバーレット）となったのか。それは俺もすべてを理解しているわけではない。
だからこそ、俺は宣言する。
「千歩譲ってイッセーが生きていようが、それを当然のように語るなよ？　少なくとも俺はそれを知った瞬間に、あんたに決闘を申し込む」
「良いだろう。己の発言には責任を持つ。それぐらいはさせてもらう」
ならいいさ。
精々あんたと殺し合いにならないことを、割と本気で祈っているよ。
ただし、なった時の備えはさせてもらうがな。
俺がその辺りを整理して、息を吐いた時だった。

「な、なんだあれは!?」

そんな声と共に、外が騒がしくなった。
おいおい、今度はなんだ!?

銀弾落涙編　第二十七話　馬鹿の手綱はしっかりした人が握らないといけない

和地Ｓｉｄｅ

俺が警戒しながら外に出ると、すぐに理由は分かった。
冥界の空にでかい立体映像が展開されている。それも、後ろにはウロボロスのマークとベルゼブブ家の紋章が左右に並んでいた。
……どう考えても旧魔王派だ。だがなんで今更？
シャルバが生きているにしろ死んでいるにしろ、演説を行うならもっと早くの方が効果的だろう。この手の演説はタイミングを計るべきだ。分かる限りのシャルバの性格から見て、生きているならそれこそ食い気味でするだろうしな。
つまりこれはシャルバが死んでいるからこその遅れが理由か？
それにしたって、このタイミングでやるなら他にすることはありそうなんだが。
「……今更シャルバの死を利用した演説か？　タイミングが悪すぎるだろうに」
サイラオーグ・バアルも、その辺は気になるらしい。
シャルバがイッセーに倒されていることはほぼ確定なんだな。
まぁ、その辺はグレモリー眷属でも大体一致だ。俺も十中八九倒せてると思っているし、百歩譲っても再起できるか分からないようなレベルだと踏んでいる。
つっても、このタイミングがずれているところでシャルバが死んだことを公表して演説しても意味は薄いだろう。
なので警戒はしつつも、俺達はそこまで危険視はしていなかった。
―だが現れた姿を見て俺は目を見開いた。
あれは、細かい意匠は異なっているが、間違いない。

ミザリが引き連れた、鶴羽の親父達を元にしたとかいう第一世代型魔星ステラフレーム。その同型機としか思えない。
そして俺は、瞬間的に最悪のパターンを悟り、そして同時にタイミングが今なのを納得する。
「……ミザリの野郎、急造でシャルバの人造惑星（プラネテス）を作ったのか！」
「どういうことだ？」
サイラオーグ・バアルはそこまで掴んでなかったようだ。
なら仕方がない。
「……あれは、素体となる人物の死体を利用して製造された形の人造惑星だ。おそらくこのタイミングと映像から踏まえて―」
「―兵藤一誠が討ち取ったシャルバ・ベルゼブブの、死体を利用して作り上げたということか」
俺達が映像を睨み付ける中、その人造惑星は声を発した。
『ごきげんよう、真に奉じる物を忘れ去った腐り果てた冥界の民よ』
悪意が満々すぎて、一発で奴がシャルバだと確信できたよ。
『我こそは、第一世代型人造惑星ステラフレームにして、シャルバ・ベルゼブブの遺した怨念。すなわち冥界に魔獣を解き放った当事者である存在。モデルベルゼビュートである』
まぁこの場ならそういうだろうが、堂々とあいつ自身認めたよ。
というか、この流れから言ってシャルバ自身はちゃんとくたばったようで何よりだ。それが分かっただけでも安心できるな。
そして急ピッチで完成して漸くお披露目といったところか。元凶として色々宣言したいって訳だな。
ただ、問題は―
『忌々しいまがい者の赤龍帝により、シャルバ・ベルゼブブは死んだ！
だがシャルバの怨念により生まれた魔獣達が、尊ぶものを忘れた貴様達を冥界事焼き払おうとしているのは見ての通り！　猪口才な抵抗では対症療法が限界のようで何よりだ！』
そして同時に、ベルゼビュートは悪意の嘲笑を雰囲気で浮かべ始めた。
おいおい、これはまずい―っ！

『だが同時に、偉大なる魔王に手を貸してくれたハーデス神より賜りし、龍喰者（ドラゴン・イーター）サマエルの血を、シャルバは赤龍帝に叩き付けた！　白龍皇ヴァーリ・ルシファーすら、血反吐を吐いて倒れ伏す龍殺しの呪いを受けたのだ！』

やっぱり言いやがった！

そりゃそうだろ。そうなのは俺達も分かっていた。

それに言うに決まっている。この流れでこれは最高に効果的だしな！

あと絶対演説内容にはミザリの編集が入っている。たぶんベルゼビュートは自分が何を言っているか気づいていない。ハーデスを後ろから撃っている自覚はないだろう。

『あえて死んだとは断言せん。シャルバが死んで我が作られるまでの時間には空きがある為、死ぬところを確認したわけではないからだ。……だが！』

そこで、ベルゼビュートは拳を握る。

『あの匹夫は冥界の子供達を守るのだろう？　だが奴はいまだ何の動きを見せていない！　あれを愛する愚かなグレモリーの女も、動きを見せていないと聞く。……十分なまでの答えというものだ！　……これも踏まえてだ！』

そしてベルゼビュートは、何かを肉片と、どろどろの何かがこびりついた服を見せつける。

……オイ待て、あれは駒王学園の制服だろう!?

『この服は、バアルの無能と行ったレーティングゲームでも着ていたから知っているもの多いだろう？　そしてこの大きな肉片だが、心臓部位だということが調べられている』

や、野郎……っ！

これが本命か。イッセーが死んでいるという物理的な証拠を見せつけることで、非常事態で削れている市民のメンタルにとどめを刺すというわけかよ。

『絶望するがいい。真に尊ばれるべきベルゼブブの血を虐げた冥界の愚者共よ！　お前達の大好きなおっぱいドラゴンとやらは、お前達を

助けることなどできない！　奴にはそんな余裕はないのだから!!』
あ、の、野郎……っ！
『この場を借りてハーデス神に感謝の言葉を、シャルバ・ベルゼブブになり替わり、また真なる魔王の一派を率いるミザリの分も含めて告げよう！　そして屑共よ。彼らの貢献があったからこそ、貴様達は！
今ここで！　自分たちの罪を清算されるのだと覚えておくがいい！』
そしてさらりとハーデスを売りやがった。
この大騒ぎにハーデス神がしっかり関わっていると知られれば、バッシングでは済まないだろう。
というか、ポセイドン神がいまだに精神洗浄の為に封印されていることを踏まえれば内乱必須だ。ポセイドン派の連中は絶対にブチギレる。主神ゼウスも止めきれないだろうし、下手にとめれば矛先が向くだろうしな。
あれはミザリの入れ知恵だな。ベルゼビュートにその気はないかもしれないが、ミザリは絶対報復目的だ。冥府の神々は皆殺しのつもりみたいだし。
……冗談抜きで、ハーデスの野郎は大打撃だな。
……まぁ、元凶同士が共食いしてくれる分には良しとするか。

アザゼルＳｉｄｅ

「ぶはははははははっ！」
俺は思わず盛大に笑っちまったよ。
いやぁ、腹が痛いったらありゃしねえ。
俺の前で映像を見ているハーデスも、怒りのオーラを盛大に垂れ流

しているしなぁ。
ま、これ以上は笑ってばかりもいられねえ。目じりに浮かんだ涙を拭いながら、話を進めるとするか。
「詰んだな、ハーデス。こんな堂々と事件の元凶を名乗る奴が、具体的な方法まで込みで協力者として名前まで告げたんだ。どう足掻こうが徹底的な追及と捜査は免れねぇだろうよ」
ああ、ミザリの野郎も中々洒落た報復を思いついたもんだ。
絶対奴だ。シャルバ……もとい、モデルベルゼビュートとかいう人造惑星にあんな形で感謝を告げさせるようそそのかしたのはな。
あの映像は冥界全土に繋がっているが、同時に各勢力の重要拠点にも送っている。だから俺たちもこの光景を見れたわけだ。
こんな大騒ぎに主神クラスが関わってるなんて堂々と宣言されちまえば、どの勢力だってことを荒立てずとか内密にとかで動けるわけがねえ。冥界の民はもちろん、和平を良しとしている奴らから、ハーデスに対する追求や糾弾が求められるだろうしな。
ま、その所為で冥界政府は大混乱だろうがな。ただでさえ魔獣の所為で大忙しだってのに、更に市民からの通信とかを捌かなきゃいけないことには同情する。
なもんで、サーゼクスは頭痛を感じているようだしな。
『……この流れは私としても望まなかったが、しかしこうなった以上はやることは一つでしかない』
消滅の魔力そのものになっているサーゼクスは、殺意すらにじんだ視線をハーデスにぶつける。
ま、俺も教え子に色々されてマジギレだ。ハーデスの爺からすれば、むしろ俺達にマジギレなんだろうがな。
ただ、サーゼクスもかなりマジギレだってのを、忘れない方がいいぜぁ？
『……もう一度告げよう。我が妹リアスと、その恋人であり冥界の英雄足る兵藤一誠に向けた悪意は万死に値する。この場で争いになったときは覚悟してもらおう。……必ず、貴様を滅することを約束する……っ』

堂々とブチギレ発言をしてくれてありがたいぜ。
ハーデスの爺も、流石にこの流れは面倒なのか苛立たしげな雰囲気を見せてやがる。
『ふん。だがまぁ、鬱陶しい天龍めが滅んでくれたのは都合がいい。それが我慢できないというのなら、滅ぼせるかどうか試してみるがいいわ』
思ったより余裕があるな。この流れで挑発までぶちかませるなんてよ。
どうやら、備えているのは冥府もってことか。
……さぁて、ベルゼビュートの奴はあんなことを言っているが、俺はお前が死んでない可能性も理解してるぜ。
なんたって、サマエルのオーラは龍門の向こうから感知されたんだからな。
確証はないからリアス達には黙っていたが、駒がサマエルに汚染されてないって部分、お前なら何かするっていう確信になってるんだからよ。
冥界の子供達がみんな怯えちまってるんだ。きっちりひっくり返せよ、おっぱいドラゴン！

銀弾落涙編　第二十八話　暗躍する者達

和地Ｓｉｄｅ

あの後、避難キャンプは大混乱になったのは言うまでもない。
元凶が堂々と宣戦布告的なことを言ったうえ、主神クラスである冥府の神ハーデスが協力者だと宣言し、とどめに希望の星扱いされていただろうイッセーがやばいことになっていると証拠付きでぬかしやがったんだ。
どこもかしこも大混乱で、魔獣騒動は更に厄介なことになっていること間違いなしだ。
幸い、サイラオーグ・バアルはあれを見てもイッセーが生きていることを自信満々で信じている。その男の宣言で、俺達がいた避難キャンプは落ち着いてはいる。
俺からすれば死体の残骸が出てきたようなもので、尚更信じられないんだがな。
……そんな時、俺は木場からの連絡で一旦別行動だ。
とりあえず、現状動けるオカ研メンバーは全員でアジュカ・ベルゼブブ様のところに向かうことになった。
サイラオーグ・バアルの指摘で、闘戦勝仏の意見を聞いた結果、イッセーの死に懸念点があると判断されたらしい。そこでグレイフィアさんの情報提供で、駒をアジュカ・ベルゼブブ様に調べてもらおうという話になったとか。
……あれで生きてたら奇跡ではあるが、必要な時に奇跡を掴み取るのがイッセーではある。
とはいえ、そこに至るまでの積み重ねがあるからこそ、奇跡を掴み取ったわけだ。今回、それができるとする要素があるなら―
「オーフィス、か」
―俺の答えはそうでしかない。

イッセーはオーフィスを助ける為に全霊を注いだ。そこにオーフィスが思うところを持っているのなら、奇跡が起こる可能性はあるだろう。
とはいえ、死体の残骸と言ってもいい物を見て信じられる奴なんて、そうはいない。
合流したリアス部長達も、殆ど全員の目が死んでいる。むしろ良くここまでこれたと言いたい。
「……木場、どうなんだ？」
「正直、藁をも掴む思いだよ。……あの演説も相当堪えたね」
一番マシな状態の木場ですらこうだしな。そりゃそうだろう。
「……二人とも、大丈夫ぅ？」
「……正直、めちゃくちゃやばいじゃん？」
リーネスにそう答えるヒツギも、かなり来ているのが見て分かる。
無理もない。衝撃的すぎる事実でただでさえメンタルがやばい。そこから持ち直したと思ったら、そのきっかけでもあるイッセーがあんなことになるんだしな。
ヒマリに至っては、もう憔悴という言葉すら生ぬるい。
普段の様子が見る影もない。それほどまでに、沈み切っている状態だ。
俺も相方として、正直見ていられない。
望み薄だと分かってはいるが、それでも少しぐらいマシな何かがあってほしいと心から願う。
そう思いながら、シャルバ・ベルゼブブ様が人間界での拠点にしているビルに入ると、ロビーで数人の人間がいた。
なんか急に俺達のスマホやら携帯やらを向けてきて、いきなり動揺してるんだが。
俺達が怪訝な表情を浮かべていると、一人の悪魔がこっちに近づいてきた。
「申し訳ありません。ここは我々が主催するゲームの、文字通りロビーとなっている個所でして」
……ゲームの、ロビー？

なんかよく分からないけど、今はそっちはどうでもいいな。
俺達は彼女に連れられて、アジュカ・ベルゼブブ様が待つ屋上庭園にまで移動することになった。
さて、鬼が出るか……蛇が出るか、な。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、冥界での魔獣進軍は更に激化していた。
シャルバ・ベルゼブブのなれの果てともいえる、人造惑星ステラフレームモデルベルゼビュート。彼の犯行声明により、趨勢が傾き始めていると言ってもいい。
冥界の英雄とすらみなされている兵藤一誠が、ほぼ確実に死んでいるという状況。更にそれを成したシャルバ・ベルゼブブが、ベルゼビュートとして宣戦布告を行い旧魔王派を鼓舞したことにより、魔獣を支援する旧魔王派のシャルバ派といえる陣営が高い士気で構成を仕掛けていることにより、魔獣の進軍を止めるどころか、足止めすら困難になっているのが理由である。
敵の士気が上がり味方の士気が下がっているのならば、この不利は当然。更に兵藤一誠の死亡が濃厚という状況下は、冥界政府において内ゲバが怒りかねない状況であり、一気に被害が増大化することすらあり得る事態だった。
この状況で戦線が瓦解しなかった最大の要因は、魔王派と大王派が足並みを揃えていることが大きい。
内輪もめに近い状態になっているのは一部だけであり、魔王派と大王派が連携を取ろうとしているからこそ、事態は不利な状態で維持さ

れていた。
「……さて、ではそろそろ行ってくるよ」
その大王派の会議が終わり、シュウマ・バアルは跡取り息子であるハッシュ・バアルにそう朗らかに告げていた。
対して、ハッシュ・バアルは少し苦い顔をしている。
その理由は、彼らが行おうとしている行動にこそあった。
「危険すぎます、父上。やはり父上自ら動くのは―」
「―必要な演出だよ。我々が彼らを率いるからこそ、彼らが我々の側に立っているのだという認識を強めることになる。これは大王派はもとより、我々にとって大きな力となるだろうしね」
そう返すシュウマに、ハッシュは反論しない。
ハッシュ自身がそれを理解している。何より、それによってもたらされる恩恵はシュウマがもし死んだとしても、それ以上のメリットを与えることが確定的だ。
これを最大限に生かす為には、シュウマが動くのが最も効果的だ。そしてハッシュもシュウマも、そのためにシュウマを生贄にすることを了承できる人柄でもある。
故にこそ、ハッシュ自身がそれを感傷だと理解していた。
それを悟ったのだろう。シュウマは不敵な笑みを浮かべながら、その肩に手を置く。
「いざという時、我らが家はお前に任せる。フロンズ殿と共に、大願成就を果たすといい」
「……承知」
静かに頷くハッシュに微笑んでから、シュウマ・バアルは歩き出す。
同時に補佐官達が続き、移動しながら更なるすり合わせを行っていく。
「……全艦隊の出撃準備は整っているな？」
「はっ。第一艦隊は御身と共に。残りの艦隊は第零艦隊含め、第九艦隊まで準備は完了。全十五艦隊の準備が整うまで一日もかかりません」
「魔王派に対する根回しはどうなっている？」

「既にパイプのあるメンバーには、八割ほど了承を頂いております。特にアスモデウス派には、魔王様に「我々が奥の手を投入する」ことに繋ぎを作ってもらっています」
部下達の報告を聞き、シュウマは満足げに頷いた。
「……では、以後の判断はハッシュ、フロンズ、ノアの三人に仰いでくれ。私はこれから―」
そして足を止め、前方にいる、軍勢を引き連れた三人の男女を見て、不敵な笑みを浮かべる。
「―特級戦力を取り込む為の、大博打を始めるとしよう」

和地Ｓｉｄｅ

屋上庭園の片隅に、アジュカ・ベルゼブブ様がいた。
……この距離からでも分かる、優れた実力者の持つオーラ。
隠しているわけでもなく、しかし見せびらかしているわけでもない。文字通り自然体からあふれるオーラだけで、戦慄する。
比喩でも誇張でもなく、彼ならヴァナルガンドとなったロキ相手に一対一で渡り合えるだろう。それだけの実力者であることが直感できる。
「やぁ、グレモリー眷属の諸君。大変なことになっているのは聞いている」
「……お久しぶりです、ベルゼブブ様。本日は、どうしても調べてほしいことがありましてまいりました」
リアス部長がそう言いながら駒を出そうとするが、それをアジュカ様は手で制する。

その視線は、俺達とは別の方向を向いていた。
……おいおい。冗談だろ。
「すまないが、どうやら先に対応するべき客人が来たようだ」
俺の警戒とアジュカ様の言葉に反応するように、空間が歪んで何人かが転移される。
その人物たちを見て、俺は目を見開いた。
おいおい、冗談だろ……っ
「初めまして、アジュカ・ベルゼブブ。僕は禍の団の英雄派で幹部をしている、ジークという者さ。ジークフリートとも呼ばれているね」
英雄派の幹部である、ジークフリート。
こいつはいい。だが、問題は後ろについてきている連中、それも率いている二人だ。
「ふむ、残念だが壮健なようだが、まあいいか。……久しいな、忌々しい偽りのベルゼブブよ」
シャルバ・ベルゼブブ……いや、モデルベルゼビュート。しかもそれだけじゃなく……っ！
「……お、グレモリー眷属もいるんだ？　へぇ～、中々誠にいが好きそうな顔してるね」
喜色の雰囲気を魅せるのは、モデルバレット。
……カズヒ、姉さん……っ
落ち着け。今は抑えろ。
魔王アジュカ・ベルゼブブ相手にきている連中だ。今の絶不調なグレモリー眷属がどうにかできるような相手じゃない……っ
俺が警戒しながらも抑えていると、ジークフリートは興味なさげに視線をアジュカ様に戻す。
隣の木場が殺気立っているが、今は抑えろ。
「木場」
「分かっているよ。君も、抑えているからね」
ああ、察してくれて助かるよ。
俺としても仕掛けたいところなんだが、タイミングが盛大に悪い。今この場で仕掛けても、勝算が無さすぎる。

今は抑えろ。様子を窺え……っ

―そうなって自分自身を宥めながら、俺はカズヒ姉さんと向き合いたいことを見定めていた。
ああ、そうだ。
カズヒ・シチャースチエに。道間日美子に。俺は、聞きたいことがどうしてもある。
だから、そのチャンスだけは冷静に見極めろ。
そして、好機を掴んだのなら絶対に逃すな、九成和地……っ！

銀弾落涙編　第二十九話　魔王ＶＳ魔星

和地ＳＩＤＥ

俺達が来たのとタイミングが同じなのは、ただの偶然だろう。

だからこそ、メインターゲットは間違いなくシャルバ・ベルゼブブ様だ。というか、そうでもないのに魔王のところにテロリストが出てくる理由がないだろう。

しかも元シャルバであるベルゼビュートが、現ベルゼブブのアジュカ様にだ。

冗談抜きで何かある。それとも、ベルゼビュートはもはや魔王の血筋に興味すらなくなっているのかもな。

俺は静かに警戒しているが、警戒できているメンバーもごく僅かだ。

まともに対抗できる範囲内なのは、木場やリーネス、アニルにルーシアぐらいだ。他のメンバーは戦えるような状態じゃない。

ヒマリやヒツギも戦えそうになる。……これはまぁ、仕方がないところはあるだろう。

となると、尚更可能な限り俺達はカバーに回るほかない。タイミングが悪いときに関わる羽目になったもんだ。

「……さて、シャルバことベルゼビュートまで連れてきたけれど、貴方と敵対する気はないんだよ。むしろ、貴方をスカウトしに来たんだ、アジュカ・ベルゼブブ」

スカウト、だと？

ベルゼブブを奪ったことで殺意に滾っているシャルバの成れの果てが、モデルベルゼビュートだ。そんな奴を連れてきたうえで、スカウトだと？

本当に、ベルゼビュートは魔王ベルゼブブの血筋に興味がないってことなのか？

アジュカ様も首を傾げている。よほど意外な展開らしい。

「……意外な話だ。シャルバは元四大魔王、特に当時のベルゼブブを滅ぼしたサーゼクスと、ベルゼブブを襲名した俺に対する殺意が強い

と思うんだけどね」
「安心するといい。今の私はその提案を飲んでいる」
モデルベルゼビュートは、アジュカ様に対してそう告げる。
そこには殺意も憎悪も漏れていない。本当に冷静さすら見えて、むしろこっちが怖いぐらいだ。
思わず背筋に汗が流れる中、ベルゼビュートはむしろ愉快そうな雰囲気を見せていた。
「もはや悪魔に従える価値はない。ならば真なるベルゼブブの怨念たる俺に、ベルゼブブを襲名したお前が手を貸したという事実で悪魔どもを絶望させる方が価値があるだろう。これはそういう話だとも」
その言い草に、俺は確かに納得できた。
なるほどな。奴はもはや、冥界の覇権とかそういうのに価値を感じていない。
ただ冥界の民を苦しめて滅ぼせれば、それでいい。シャルバ・ベルゼブブを魔王として崇め奉らなかった冥界の民は、只苦しんで死ねばいいと思っている。そしてシャルバ・ベルゼブブの成れの果てと、現ベルゼブブが手を組んで冥界を苦しめることが、自分ができる最大の蹂躙だと思っているということか。
まずいな。ベルゼビュートは安定している風にも見える。
冷静と思えるようなレベルで、「如何に冥界の悪魔達を苦しめて滅ぼしつくすか」に邁進している。それゆえに、それ以外の要素に対して優先順位が著しく低くなっている。かつての怨念すら、奴の方針を揺るがせるには全く足りていない。
……魔星クラスの星の行使は、真っ当な人間では絶対に不可能だと言われている。
スパコンじみた演算能力か、異常なレベルの精神力。しかも後者は基本的に、裏技に近い。
だからこそ、人造惑星は基本的にヒューマギアやプログライズキーの支援が必須。大量生産型は大型の騎乗型兵器として運用されている。
……だがそれだって、応用系統。つまり、シャルバ・ベルゼブブを

素体して作り上げたモデルベルゼビュートは、ある意味で本来の人造惑星と言っていい。
奴の戦闘能力は、どう低く見積もってもかつてのシャルバより上と考えるべきだろう。
……つまり、真っ当な精神性をあえて外し壊すことで、魔星として星を振るうことに特化した存在として作り上げる。それが、第一世代型人造惑星。
間違いなく、今の奴はやばい。かつてのシャルバ・ベルゼブブと同じように考えるべきじゃない。
思わず息を呑む中、ジークフリートは微笑みすら浮かべている。
「貴方は魔王としてはサーゼクス・ルシファーと同規模の派閥を持ち、また政治的に対立していると聞く。こちら側に来てくれるのなら、我々が持っているデータなども、ほぼすべてを開示します」
「なるほど。確かに外から見れば俺はサーゼクスと対立している風に見えるし、実際あいつの言いつけも尽く破っている。そして研究者として、禍の団が保有するデータは確かに興味深い」
にこやかなジークフリートに、アジュカ様は同じようににこやかだ。
あのすいません。滅茶苦茶不安なんですけど？
最悪魔王様まで敵とか、この状況下だと詰む―
「―だが断る。……いや、これは日本（この国）におけるサブカルチャーの名言なんだが、一度言ってみたいものが多いんだよ。言える機会があるとは思わなかった」
―と思ったら即答！
流石にこの即答は予想外だったのか、ジークフリートはちょっと目元を引くつかせていた。
「……理由を聞いても？」
「単純なことだ。―俺が魔王をやっているのは、サーゼクスがルシファーをやっているからだ。ただそれ一点であるからこそ、その一点を裏切ることだけはない」
曇りない言葉に、ジークフリートは肩をすくめる。

ちらりとモデルベルゼビュートを見ると、こちらも特に動揺はしていなかった。
「まぁいい。使えないのなら別の手段を探るだけだ」
……これは、やばいな。
さっきも思ったが、今の奴は外れ切っているがゆえに安定性を獲得している。
一点に集中して突貫している。だからこそ、それゆえにそれ以外にぶれにくくなっている。
やはり脅威か。できることなら、魔王様の力を借りてでもこの場で打倒したいな。
「ま、失敗したならプランBだね。じゃ、真なる魔王の信奉者さん達ー？　モデルベルゼビュートやミザリ（誠）の為にも、目の前の偽魔王さんをやっちゃおっか♪」
そしてモデルバレットも、にこやかな調子でとんでもなく物騒なことを宣言する。
その瞬間、後ろの旧魔王派が一斉に魔力を放つ。
どいつもこいつも、下手な上級悪魔を凌駕する。平均して最上級悪魔クラスの砲撃を放っていて、龍王クラスでも全弾直撃はただじゃすまないだろう。
ただ、アジュカ様が手のひらに魔方陣を展開した瞬間、盛大に明後日の方向に飛んで行った。
「この程度で、俺の覇軍（カンカラー）の方程式（フォーミュラ）を無効化できると思われるのは心外だ。……こういうこともできる」
そういった瞬間、明後日の方向に飛んで行った砲撃が、更に強化されて敵に向かって放たれる。
ありかそんなの。
思わず唖然とするが、だがそこで、人造惑星二体が動き出す。
「――天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ」
その瞬間、襲い掛かる魔力攻撃を二体の魔星が薙ぎ払う。
……特にモデルバレットの星は、カズヒ姉さんのそれとも違う。
やはり、カズヒ姉さんそのものというわけではないようだ。そこは

安心したよ。
だが問題が多すぎるっ
「ま、失敗したなら失敗したで？　慣らしも兼ねてちょっかい掛けよっかな？」
「そうだな？　シャルバではない我が、どこまで戦えるかは確かめるべきだろうさ。……貴様らは先に戻っているといい」
「「「「は、はい！」」」」
慌てて旧魔王派の悪魔達が帰還していくが、ジークフリートは不敵な笑みを浮かべながらも、とどまったままだ。
「貴様は帰らんのか？」
「少し試したいものがあってね。僕も参加させてほしいかな？」
そして三人がかりでアジュカ様と向き合う禍の団の連中だな。
……さて、俺達はどう動くべきか？
正直一発かましたい。カズヒ姉さんのこともあるし、イッセーのこともあるからな。
だが同時に、味方の殆どがメンタルを削りきられているわけだ。この精神状態で戦闘ができるかというと、かなり不安だろう。
ここはいっそのこと、決着がつくまで避難させるという手段―
「……ふむ、俺が三人を同時に相手取るというのも選択肢ではある」
―そう言いながら、アジュカ様はこっちの方をちらりと見た。
「だが、強い殺気を君達に向けている者もいる。それを無下にするのもとは思うのだが」
「……そうですね。なら、ご厚意に甘えて助太刀させてください」
アジュカ様に応えるように、木場が一歩前に出る。
……これは、仕方がないか。
俺はため息をつきながらも、ショットライザーを装着する。
「リーネス、部長達を頼む」
「……分かっているわぁ。無理は、しないでねぇ？」
念押しされるが、まぁ分かっているさ。
モデルバレットの相手は後回しだ。モデルベルゼビュートも、狙いはアジュカ様に絞っているだろうから優先しない。

つまりは―

「ジークフリート。とりあえず英雄派に一発かまさせてもらう。それだけのことはしている自覚ありだろ？」

「君達のくだらない企ての所為で、僕達の親友は死んだんだからね。死ぬには十分すぎるよ」

―俺と木場は、魔剣の切っ先を向けてジークフリートに宣言した。

「良いだろう。僕としても、そろそろ聖魔剣の木場祐斗とは決着を付けたかったんだ」

「そうだね。なら他二人―いや二体はこちらで押さえよう。周囲の被害も気にしなくていい」

ジークフリートの言質も、アジュカ様からの許可も貰った。

個人的には様子見も踏まえたいが、しかしこのままというのも癪に障る。

「部長、僕は行きます」

「祐斗……」

木場の宣言に、リアス部長は駒を握り締めることしかできないでいる。

……仕方ない。俺達だけでやるしかない……か。

覚悟はいいな、ジークフリート。

悪いが、木場を死なせるつもりはない。死ぬ覚悟はできていると踏んでおくぞ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ぼんやりと、視界に色々なものが映っている。
それを彼女は無感情に見つめていた。
否。その言い方には語弊があるだろう。
今の彼女は、思考能力も感情も機能していない。だからこそ、何もかもをただ受け止めるしかできていなかった。
「さて、ザイアから流出した技術によれば、人造惑星とは死体を素体として強い衝動で絶大な星辰体を制御すると聞いている。外法ゆえに俺が手を出すことはまずないからこそ、現物を見ると興味がわいてしまうのは研究者の良くない癖だね」
そう語りながら、アジュカ・ベルゼブブは魔力を持って現象を操作する。
それに対し、視界の隅で動くモデルベルゼビュートと名乗っていたそれは、大量の蠅の魔力を展開して包囲圧殺を仕掛ける。
それらすべてをコントロールしてかく乱するアジュカだが、モデルベルゼビュートは更にそこから突撃を敢行し、拳を握り締める。
「散華せよ、醜悪なる贋作め」
打撃と共に、絶大な稲光が走り、アジュカの表情に僅かな通用が走る。
肉が爆ぜ、体液が瞬間的に沸騰した。
マイクロ波による肉体破壊。その超至近距離から大出力の生成による制圧は、魔王すら超える力を持つとされるアジュカ・ベルゼブブに負傷を与えることに成功した。
素体であったシャルバ・ベルゼブブなら、これに狂喜乱舞していた事だろう。
だがモデルベルゼビュートは冷徹なまでに、アジュカを殺さんと更なる猛追を仕掛けていく。
「シャルバのように死ぬがいい！」
その瞬間、振るわれる腕に合わせて長大なブレードが形成される。
周囲の木や建造物すら両断するは、超高密度に圧縮したアザトースブレード。
武器型の神滅具ですらこの切れ味を出すのは楽ではないレベルの

斬撃を、アジュカは覇軍の方程式で干渉し、ギリギリのところで切れ味を大きく殺す。
だが防御の魔方陣には切り込みが走り、後一瞬反応が遅れれば深手を負っていた可能性すらある。
「ここまでとは。これが星辰体運用兵器である、人造惑星の真の姿か」
「この程度なわけがないだろう？」
更にその瞬間、超至近距離から灼熱が放出され、アジュカを明確に後退させる。
超高圧で噴出されるバーナーによる一点集中により、防御用魔方陣が突破される。
すかさずあらゆる現象が冷却と拡散を行うが、この攻撃もまた、アジュカの手に炭化した部分を作り上げた。
そして視界は動き、アジュカ・ベルゼブブに接近して拳が放たれる。
それらをアジュカは魔力で防ぐが、しかし絶大な威力により魔力の七割が粉砕される。
そこから、ベルゼビュートと連携を仕掛ける形で攻撃を仕掛ける映像が映るが、彼女はそれを理解しきれない。

―悪祓銀弾（シルバーレット）の覚醒は未だ遠く。
勝利（罪業）に追いつかれ打ちのめされた銀の魔弾。
再び大気を切り裂き飛翔するのは、残念ながら今ではない。

和地Ｓｉｄｅ

何とか今のところは戦えているな。
木場が龍殺しの剣を創造できるようになったのがデカいな。特攻が入るというのは、それだけでも価値がある。ただでさえ強力な聖魔剣が龍殺しの力を発揮するのなら、ジークフリートと言えど苦戦は必須ということか。
俺はそれを援護しつつ、視界の隅にアジュカ様の戦闘を確認する。
モデルバレットをどうにかしなければ、カズヒ姉さんは助けられない。だが同時に、楽にどうかできるわけではない。
実際問題、モデルベルゼビュートと連携でとはいえあのアジュカ様と渡り合っている。これもはや油断が欠片もできない領域だ。
いくつもの攻撃手段を切り替えて攻めるベルゼビュートと異なり、モデルバレットは近接戦闘に終始している。
おそらくは設計の違いだ。フレームから作り上げているステラフレームと、ゼツメライズキーで強引にカズヒ姉さんを魔星にしているモデルバレットでは、できることが大きく違うのも無理はない。
裏を返せば、それだけの差があってもなお並び立てるということだが。
何かを纏っている雰囲気で戦っていることから踏まえて、おそらくはカズヒ姉さんと同じ何かしらを招来する形だ。この辺り、ベースの性質から決してかけ離れていない。この辺りはリーネス謹製の人造惑星化プログライズキーと変わらないな。
と、素早く飛び退ればグラムのオーラが通り過ぎる。
意識をこっちに傾け直すか。おそらく、あっちはまだ長続きするだろうからな。
「……やはり、君達相手にグラムを届かせるには今のままでは無理か」
苦笑するジークフリートは、グラムをそっとなでる。
「こいつは主を気遣ってくれなくてね。その所為で、僕は本気を二種類使い分ける必要があるんだよ」
そう苦笑いする奴の言いたいことは、なんとなく分かる。

強大な魔剣は何かしら呪われるし、龍殺しは龍にとって天敵だ。つまり龍殺しの魔剣、それも伝説級のグラムは、龍が扱うには危険すぎる。

その辺りを考慮すれば、龍（トウワイス・クリティカル）の手を持つジークフリートはジレンマを背負っているといえるだろう。

グラムを全力で振るえば、呪いが強大化することは間違いない。

龍の手を禁手にすれば、龍としての性質が大幅に強化される。

つまりどちらかを本気にすると、どちらかを本気にできなくなる。二つ同時に本気にすれば、必然的にジークフリートは自滅の道を進むことになる。

イッセーも赤龍帝の籠手にアスカロンの組み合わせだが、こっちはドラゴン側がスペシャルなうえ、様々な処置によって乗り越えている。だがジークフリートはそこまでは出来なく、グラム側がそれを良しとしないのだろう。

敵にも難儀なやつはいるということか。同情はしないし容赦なく付け入るがな。

だが、こんな時に自分語りか？

時間稼ぎというわけでもなさそうだが、いったい何を―

「―なので、こんな解決策を編み出してみた」

そういいながら、ジークフリートは注射器のようなものを取り出すとそれを突き入れる。

何かを注入した、その瞬間―

『……さぁ、これが英雄派の研究成果だよ……っ』

―目の前に、化け物が現れた。

銀弾落涙編　第三十話　業魔人

和地Ｓｉｄｅ

目の前のジークフリートは、完全に異形と化していた。
肉体は肥大化し、魔剣と龍の手は一体化している。
……六本腕のタイ○ントといったところか。しかも、オーラが明らかに異常な域に高まっている。
というか、何だあれは!?
「ほう？　シャルバを利用した例の実験はそういうことか」
モデルベルゼビュートが感心した言うに言うが、これシャルバが関わっているのか？
奴をどうすればこんな事態が発生する。
俺と祐斗が警戒していると、ジークフリートは体の調子を確認しながら得意げな笑みを浮かべる。
『神が作り出した神器に、相反する存在たる魔王の力をかけ合わせればどうなるか。英雄派は結構な間このテーマを追い求めていてね。魔王血統の血液から開発した神器のドーピング剤としてこの業魔人（カオス・ドライブ）が完成したのさ』
……ぁあ、だからシャルバか。
というか、神器に魔王の血を注ぐとか発想が凄いな。軽く引くぞ。
コロンブスの卵とはこういうことか。この辺の発想力は、人間特有の強みというべきか。
「とても興味深い。人間はやはり可能性の塊だ。流石は人間であることに拘る英雄派と言っておくべきか」
アジュカ様～？　悪いんですけど今そういうのはよしてもらえません？
俺はちょっと呆れたくなっているが、しかし発想が恐ろしい。技術者的には目から鱗なのか。

人間の急激な発展の理由が分かるし、異形が人間に存在を公表したがらない理由も分かる。
人間全体に異形を広めれば、同様の悪魔的発想を何度も広げられることになるだろう。そうなれば、世界が一気に混沌に包まれかねない。
人間という種族に対して、異形が時に異常なレベルで慎重にならざるを得ない対応をとる。その理由はこれを見るとよく分かる。
まったく、俺も人間だが、人間の業の深さには軽く引くな。
これは少し、覚悟を決めた方がよさそうか……っ
木場のサポートに回る程度にしていたが、そういうわけにもいかないか……っ
「変身！」
『サルヴェイティングアサルトドッグ！』
素早くサルヴェイティングアサルトドッグに変身すると共に、俺は一斉射撃でジークフリートに仕掛ける。
だがその瞬間、魔剣によって放たれた衝撃波がそれを迎撃しきる。
返す刀の魔剣の斬撃を回避していると、木場は炎の聖魔剣を大量に展開して投擲。それによる圧殺を狙う。
ジークフリートは魔剣による突撃でそれを突破するだけでなく、広範囲を魔剣による評決で制圧する。
俺と木場は炎の剣でそれを溶かして、左右から一気に切りかかる。
俺の攻撃がグラムとぶつかり合い、一瞬だが拮抗する。
そこに木場の龍殺しが放たれ―
「……残念」
―その聖魔剣が砕かれた隙に、返す刀の魔剣による斬撃が、木場の左腕を切り飛ばした。
……龍殺しでも、ダメか!?
「グラムの呪いに対抗する為の切り札さ。その程度の龍殺しが効いては困るというものだよ」
得意げなジークフリートから、俺は木場をかばえる位置に移動する。

そして同時に、後ろからジークフリートに襲い掛かる攻撃が放たれる。
それをジークフリートが切り裂いているうちに、レイダーになっているアニルが木場をひったくって、すぐさまアーシアたちのところに戻してく。
「アーシア先輩、治療を！」
「は、はい……あれ？」
回復が遅々として進まない!?
「ここまでとは……ねぇ」
リーネスが歯噛みするのも当然だ。
まさか神器をろくに使えないレベルに追い込まれていたとは。いくら何でもメンタルが削れすぎだ。
糞ったれ！　こんな状況下でテロリストとかち合うとか、護衛を連れてい来るべきだった。
リアス部長達も迎撃をするが、あまりに弱弱しく迎撃すらされない。
木場がここまで深手を負っている以上、俺以外に戦えるのはアニルとルーシアぐらいか。流石に今のジークフリート相手に、この戦力は心許ない。
冗談抜きで、かなりの窮地だぞ。
「……イッセー……っ」
部長もこの期に及んでイッセーに縋っている。
駄目だ。ここまで精神的に追い込まれている状態で、外に連れ出すべきじゃなかったか。
結果論だが、今回は致命的な失敗だ。ここまでやばい事態になっていれば、俺達だけでの対処は困難だ。
「な、んで……っ」
「こん……のぉ……」
ヒツギとヒマリも聖剣を作って構えているけど、明らかに絶不調で使えるような状態じゃない。
前に出ればその時点で足手まといになる。そんなレベルで追い込

まれているだろ、これ……。
俺たちのこの醜態に、ジークフリートも呆れを通り越して驚愕すらしている節がある。
『ここまでとはね。兵藤一誠一人いないだけでこのざまか』
心底落胆というか、期待外れという表情だ。
そのままやる気をなくして帰ってくれると嬉しいが、そういうわけでもないらしい。
哀れみすら向けた目で、ジークフリートは魔剣を向ける。
『赤龍帝も無駄死にだね。オーフィスはともかくシャルバは後でも討てたし、結局は人造惑星（あんな形）でどうにかなってしまっている。感情任せで考えなしに動くのは、兵藤一誠の欠点だよ』
「痛いところを突いてくる……っ」
反論しづらいのが尚更ムカつく……っ!?
俺は、その時どす黒い怒りの気配に、思わず身をすくめた。
魔剣を鏡にして確認すれば、信じられないぐらい激怒している表情で、木場が立ち上がろうとしている。
「……僕の、親友を！　お前のような男が愚弄するなぁっ！」
信じられないぐらいの怒声で、木場は立ち上がろうとしている。
だが同時に、ジークフリートは意にも介していない。
「あっほくさ。敵の親玉助ける為に、最初っからシャルバ（後で死ぬ予定）の奴と相打ちしてるから言われるんでしょ？」
モデルバレットまで鼻で笑い、アジュカ様と攻防を繰り広げながら器用に肩まですくめやがる。
「カズヒ・シチャースチエなら手足をへし折ってでも引っ張り戻したんじゃない？　馬鹿が馬鹿やった時止めもしないで、友人面できる方が馬鹿じゃない」
……まぁ確かに。カズヒ姉さんなら最悪そうする。
その辺りの判断ができるのは、確かにベースが道間日美子なだけあるということか。
とにかく冷静になれ。最悪囮になってリアス部長達を逃がすことも考えないと。

どうする？　考えろ、考えろ九成和地。
今この場で、泣いたまま終わるなんて悲劇を、受け入れるなよ、
涙換救済（タイタス・クロウ）――

――部長達を頼むぜ、九成！

――っ!?

Other Side

『……っ!?』
『どうした？』
『……語り掛けています』
『語り掛ける？　誰が誰にだ？』
『仲間達に、彼が語り掛けています。でも、なんでサーヴァントとマスターでもないのに、繋がって？』
『なるほどな。お前が繋げているのか、グレートレッドよ……』

銀弾落涙編　第三十一話　赤の奇跡　黄の具現　青の決意

九成Ｓｉｄｅ

今の、声は……？
幻聴にしたってタイミングが良すぎるだろう。追い詰められたからって、妄想する類だったか、俺って。
困惑していると、リアス部長達が涙を流し始める。
え、なに？　どういうこと？
……というか見れば、イッセーに使われていた悪魔の駒まで輝いている。
怪奇現象!?
「いやちょっと待ってどういう状況!?」
思わずパニクりながら周囲を警戒していると、アニル達もかなり本気で困惑していた。
「さっぱり分からねえです！　なんか急にイッセー先輩の幻聴が聞こえたりしたんですがね!?」
「アニル君も!?　え、じゃぁこれ……みんなが？」
アニルとルーシアもか。
え、え……え？
「残留思念が、駒に残っていたぁ？　いえ、それにしても……まさか……」
リーネスはリーネスで、面食らいながらも考え始めていて別の意味で不安になるし。
え、えっと、どういうことなんだ？
ジークフリートはもとより、向こうで戦っていたモデルバレット達も攻撃の手を止めて面食らってし。

とりあえず、イッセーの奴は死してなお何かする奴だということで納得するべきか!?
ただ、これで流れが大きく変わったことだけは間違いない事実だ。
そして、異常事態はそれだけにとどまらない。
駒の一つが急に木場のところに飛んでいくと、光り輝き剣の形をとる。
あれは……アスカロン！
『なんだ、この事態は……どういうことだ!?』
「悪いが、考察はお前を倒してからだ！」
この状況はよく分からないが、この好機は逃さない。
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ！』
素早くショットライザーを構え、俺は先制攻撃を叩き込む。
『マグネティックスターブラスト！』
放つ攻撃に対し、ジークフリートはグラムをもってして迎撃する。
絶大なオーラが放たれた砲撃を吹っ飛ばす中、更なる異変が巻き起こる。
オーラを放ったグラムは、そのままオーラを増大化させると、ジークフリートに対して離れる動きを見せていく。
今度はなんだ!?
『馬鹿な!?　グラムが、僕を拒絶する……？　業魔化（カオス・ブレイク）の弊害なのか!?』
狼狽するジークフリートを絶大なオーラで弾き飛ばし、グラムはそのまま宙を舞うと、木場の足元に突き立った。
こ、この流れでグラムがジークフリートではなく木場を選んだのか!?
しかも既に木場は完全に回復している。
それどころか、グレモリー眷属は全員が強い戦意を見せていた。
「……そうね、イッセー。貴方はこういう時にこそ、私達に戦ってほしいと願うわよね……っ」
涙を振り払い、リアス部長が宣言する。
「……さぁっ！　私の可愛い下僕達！　反撃を開始するわよ！」

「「「はい、部長！」」」
現在いるグレモリー眷属全員が、強い戦意をもってして反撃を開始する。
仙術が、雷光が、魔力が、回復の支援を受けてジークフリートに猛攻撃を仕掛ける。
それを魔剣で切り払うジークフリートも、すぐに星辰光を発動しながら予備と思われる剣を持って体勢を立て直す。
『殺しても脅威になるとは、兵藤一誠は末恐ろしいようだね！』
突貫するジークフリートを、俺と木場にアニルが迎撃する。
振るわれる斬撃を三人がかりで何とか凌ぐ。更にただ凌ぐだけですら、アスカロンとグラムの龍殺しがジークフリートを犯して負担をかける。
更にルーシアやレイヴェルも攻撃に参加し、一気に趨勢はこちら側に傾いた。
『なめるな！　僕はこれでも、英雄シグルドの完全たる末裔だ！』
星辰光によって予備の剣を龍殺しにしながら、ジークフリートはそう吠える。
だがそれに対して、朱乃さんとリーネスが動きを見せた。
「ならば私も、奥の手を切らせてもらいますわ！」
「こちらも試作型を使っちゃうわねぇ！」
朱乃さんは何かしら腕輪を身に着け、同時にリーネスはスラッシュライザーを装着。
更に、リーネスは見慣れないプログライズキーを取り出した。
『ＳＨＡＮＩＮＧ　ＪＡＭＰ！』
素早く装着し、スラッシュライザーを起動すると、二匹の飛蝗のライダモデルが展開する。
「変身！」
『スラッシュライズ！』
そして飛蝗が飛び上がり、上から網が下りると共に、装甲に変換される。
『Ｔｈｅ　ｒｉｄｅｒ　ｋｉｃｋ　ｉｎｃｒｅａｓｅｓ　ｔｈｅ　ｐ

ｏｗｅｒ　ｂｙ　ａｄｄｉｎｇ　ｂｒｉｇｈｔｎｅｓｓ』
展開されるのは、黄色を主体とする新たなる仮面ライダーアイネス。
『シャイニングホッパー！　Ｗｈｅｎ　Ｉ　ｓｈｉｎ，ｄａｒｋｎｅｓｓ　ｆａｄｅｓ』
そんな装甲に身を包んだリーネスと並び立つように、いくつもの黒い翼を広げた朱乃さんが飛び上がる。
「堕天使の力の活性化による自己強化。あの戦いでは使いませんでしたが、お披露目にはいい相手ですわ」
「そして急ピッチでザイアから流出した破損データをもとに開発した、シャイニングホッパー。白兵戦用に作っておいてよかったわぁ！」
飛び掛かる二人に対して、ジークフリートは迎撃の氷を具現化するも、朱乃さんが放つより強大な雷光が吹き飛ばす。
そこまで読んでいたジークフリートの斬撃に対し、リーネスはまるで流れるように打撃を叩き込む。
なんだあの動き!?　相手の動きをまるで読んでいるかのように立ち回ってやがる！
『馬鹿な!?　姫島朱乃はともかく、リーネス・エグリゴリの戦闘技術がここまであるわけが―』
「えぇ。だからこれはプログライズキーの能力よぉ」
振るわれるジークフリートの攻撃を的確に、しかも法則性が見えない動きで回避していくリーネスの技量は高くない。
つまりこれは、あの形態そのものが的確に動きをサポートしているということか！
「敵の動きをラーニングして、０，０１秒で２５０００通り算出した対処パターンから最適解を導き出す。貴方にそれを凌げるかしらぁ？」
『……これだから、デジタルっていうのは！』
強引な攻撃で無理やりリーネスを弾き飛ばそうとするが、軽やかな動きでリーネスはそれを回避し―
『シャイニングレインラッシュ！』

―蹴り飛ばしてから追撃で更に蹴りを入れる、鬼コンボで一気にジークフリートにダメージを叩き込む。
このチャンス、逃すわけにはいかないだろう！
「木場、行けぇぇぇぇぇ！」
「うぉおおおお！」
吹っ飛ばされたジークフリートは、体勢を立て直すのが間に合わない。
そして突貫する木場が構えるのは、アスカロンとグラムの二大龍殺し。
それをジークフリートは迎撃しようとするが、一歩足りず―

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「どうやら、決着はついたようだね」
その光景を見たアジュカ・ベルゼブブの発言に、モデルバレットは肩をすくめた。
「愚かな。シャルバの血をもって高めた力を無駄撃ちしおって」
「はいはい抑えて。ま、これ以上はやめた方がいい感じかなっと」
不満げなベルゼビュートを軽く宥めながら、モデルバレットは肩をすくめるほかない。
兵藤一誠が死んでいない可能性を、ミザリは念には念を入れて考慮していた。
だが、死んでいるいないどころかその場にいないに関わらず、仲間達の力になるなどとは思っていないだろう。
油断ができる相手では断じてない。それを痛感し、モデルバレット

は肩をすくめるほかない。
「業魔人（カオス・ドライブ）の性能強化は事実だしねぇ。ベルゼビュート、シャルバの残骸（残り）から造血細胞貰っていい？」
「……好きにするがいい。今更その程度で目くじらは立てん」
思った以上に恩讐に突貫してくれることに、モデルバレットはほくそ笑む。
ミザリ（誠に）もこれには喜ぶだろう。大量の業魔人を作り上げることができれば、派閥内の発言力向上や、テロの誘発にも繋げることができるというものだ。
ゆえに、これ以上此処にいる必要もない。
自分達がアジュカ・ベルゼブブに手傷を負わせ、しかも逃げおおせる。これだけでも、現冥界政府に対してある程度の心理的重圧は懸けれるのだ。
今はそれで充分。それら小さな種を蒔いて育てたうえで、そこから生まれる果実によって、悲劇という美酒を作り上げる。
それによりミザリが歓喜に震えることを想像するだけで、モデルバレットもまた歓喜に震える。
だからこそ―
「また会いましょうね、涙換救済（タイタス・クロウ）。今度はあなた達を殺してあげる♪」

九成Ｓｉｄｅ

その言葉を、俺はきちんと聞いていた。
ああ、お互い様だモデルバレット。
あんたが何なのかはどうでもいい。だが、カズヒ（そ）・シチャースチエ（体の）

を使って悪を成すというのなら容赦はしない。ぶっ飛ばす。
俺はそれを決意して、そして胸に灯る火を理解した。
イッセーがどうなっているのかは分からない。はっきり言って、俺だってダメージがないわけじゃない。
だが、お前の決意は受け取った。
生きていようが死んでいようが、俺もその覚悟に応えよう。
待っていろ。モデルバレット、ミザリ・ルシファー。
俺の愛する悪祓銀弾（シルバーレット）は、お前達にはくれてやらない。
「カズヒ・シチャースチエは――」
聞こえてないのは百も承知。その上で決意をもって断言する。
これが、俺の宣戦布告だ。
「――必ず俺が、もらい受ける……っ！」
待っていてくれ、カズヒ姉さん。
必ずあんたを、助け出す！

銀弾落涙編　第三十二話　魔獣騒動第二ラウンド

Other Side

業獣鬼（バンダースナッチ）迎撃作戦は一段階上のフェーズに到達した。
ファルビウム・アスモデウスによる対抗戦術に従い、アジュカ・ベルゼブブによる対抗術式を主軸とする攻撃が行われていく。
また他の勢力からの増援部隊も派遣され、波状攻撃の領域で攻撃を仕掛けていく。
グレモリー領に出現した業獣鬼に対しては、アースガルズからエインヘリヤルやヴァルキリーが増援部隊として攻撃を行っている。
リアス・グレモリーが眷属としてロスヴァイセを迎え入れたことと、食客としてリヴァ・ヒルドールヴがいることからくる配備だが、これにより業獣鬼は抑えられている状態だ。
そして既に、対抗術式による趨勢は傾き始めている。
「いよっしゃ！　これならいけるか！」
そして生まれ続ける魔獣達を迎撃する中、ベルナはその光景に思わず大声を上げる。
出現する魔獣達に向けれる戦力も増えていることから、この流れならどうにかなる。それは誰もが思っていることだった。
そしてそれゆえに、できる限り早く、もしくは被害者を出さずに終えようという思考も生まれていく。
「……どうする？　このままでも堅実にに何とかできそうだけど」
「でも他にもいるんでしょ？　だったらもうちょっとごり押しした方がいいんじゃない？」
インガと春菜がそう言葉を交わし合うが、しかしそこで揉めていればそれこそ意味がない。
それが分かっているからこそ、鶴羽はあえて思考を目の前に敵に集

中していた。
あとのことを考えると、モデルバレットやミザリのことに意識を向きすぎてしまいそうだ。そういう懸念が自分を抑え込んでいると、鶴羽はきちんと認識できている。
だが、そこに呑まれてこの場を離れることはしない。
耐えている者がいる。頑張っている者がいる。
何より、今この場を捨ててカズヒを助けようとしても、カズヒ自身が殴り飛ばしてくると信じている。
正義を奉じて邪悪を穿つ、魔性を滅ぼす銀の魔弾。
悪祓銀弾（シルバーレット）の誓いと決意は、カズヒ・シチャースチエの根幹なのだから。
だからこそ―
「まずはあんた達をぶっ飛ばす！」
その決意をもって、紫炎の槍が魔獣達を薙ぎ払う。
それでもなお魔獣達は襲い掛かろうとする……が。
「……待たせた！」
その瞬間、上空からのミサイルや砲撃により、圧殺されるように撃破される。
その攻撃に、鶴羽達は誰もが上を見上げた。
そしてその視線とぶつかるように、転移魔方陣から青い装甲を纏った戦士が舞い降りる。
仮面ライダーマクシミリアン、サルヴェイティングアサルトドッグ。
その勇士に、戦士達は色めき立った。
あのおっぱいドラゴンと肩を並べて、熾烈な争いを潜り抜けた勇士。それだけで、士気を上げるには十分すぎる。
「カズ！」
「和っち！」
「和地君！」
「和地！」
四人の呼びかけに腕を上げて答えながら、九成和地は腹の底から声

を上げる。
「アジュカ様からのお墨付きだ！　兵藤一誠、生存の可能性……あり っ！」
その言葉に、一瞬だけ悪魔達は沈黙し―
『『『

不意打ちとはいえ距離があったこともあり、それだけの余裕は捻出できた。まして敵にまで当たるというのなら、むしろ好都合といえるだろう。
ゆえに、大量のミサイルやロケット弾が業獣鬼に直撃――

「はいごめんなさーい！」

――する直前、地上からの大量の砲撃がそれらをすべて撃ち落とす。
爆発が低空を彩る中、その砲撃とタイミングを合わせた声の持ち主に、視線が一気に集まった。
「何やってるんですかリヴァ様!?」
「敵に当たる分には止める必要ないでしょ!?」
「塩送る必要あります!?」
そう突っ込みを入れるのはアースガルズ側の戦力。
何故なら、撃ち落としたのはリヴァ・ヒルドールヴ。アースガルズであるオーディンの最新の子供であり、地脈からエネルギーを引き出す砲撃を得意とする。その性質上、あの位置から攻撃を放てるのが彼女しかいないうえに声まで上げているから尚更だ。
別に味方に迷惑をかけているわけではないが、こちらにとって都合のいいことではあった。あまりダメージにはならないだろうが、それでも多少は敵に負傷を与えれたはずである。
なので困惑交じりの多少の非難が向けられるが、リヴァはちっちっちと指を振る。
「いや、いくら何でもおかしいでしょ？　なんていうか嫌な予感がしたから、念の為に離れたところで撃ち落としたのよ」

「具体的に何を予想してたのよ？」
春菜から呆れ半分の視線と共に指摘されるが、リヴァやどんどん指を折り始めた。
「毒ガス(C兵器)とか病原菌(B兵器)とか放射能汚染物質(A兵器)とか。悪魔相手なら燃料気化弾頭のノリで聖水が水蒸気的に展開されるってオチはありそうね」
「……壊れた感じだとどれでもねえっぽいぞ？」
遠い目で破壊されたミサイル群の方を見るベルナの指摘は正しいが、まぁ間違ってはいないだろう。
どちらにしてもあの破壊レベルなら、業獣鬼に負傷を与えられるとも思えない。ならば壊しても壊さなくても特に意味はないだろう。
そのような感じに思考が一致しかけていたが、リヴァはむしろ険しい表情だった。
「逆におかしいわね。だったらなんであんな低威力のミサイルを？」
リヴァの発言に、考えられるメンバーは確かにと思う。
こちらにとって決定的な何かを与える物でもなく、只の低威力のミサイルだけというのは何かがおかしい。
業獣鬼にも当たる様になっているのなら、業獣鬼に何の影響も与えないがこちらに悪影響が与えられるものを、迎撃されにくいように無差別で放ったと考えるのが妥当だろう。だがそういうわけでもない。
戦闘をし続ける余裕はあるが、だからこそ解せない。
意味が全くない攻撃を仕掛けるとは思えない。しかも業獣鬼を巻き込む形でなら尚更だ。
きちんと業獣鬼や生まれる魔獣を削りながら、何かしらの嫌な予感に襲われ始める。
「……ミサイルは囮で、何かバフがかけられる弾頭が混じってたとか？」
と、インガが呟いた時だった。
「……あ☒」
和地が、凄く焦ったような声を上げた。
「和地？　何か心当たりあるの？」
「今すぐ言えば誰も怒らないと思うから、先生に言ってごらんなさい、

カズ君？」
鶴羽とリヴァにそう言われて、我に返った和地は振り返る。
その表情は、割と引きつっていた。
「アジュカ様に寝返り工作を仕掛けてきたジークフリートが、魔王血族の血で作った神器のドーピング薬を作ってたんだけど」
『『『

あるだろうね」
「そのようだな。……で、ハーデスにはもう何もしないのか？」
「どうしようかな？　どうもアザゼル総督やサーゼクス・ルシファーとかが来ているみたいだし、今仕掛けると折角挙げた冥府へのヘイトが減りかねないところがあるよね」
「確かにそうだな。だがこのままというのも味気ないしなぁ」
「……ミザリ、アルバート。少しいいか？」
「ん～？　アルケードではないか。どうしたんだ？」
「少し不味いことになった。悪いが色々と動いて欲しい」
「……どうしたんだい？」

「後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）が全員行方不明になった。奴らの情報権限から考えると、最悪の場合大打撃を喰らいかねんぞ」
「……アルバート、即興でジャミングとかデコイとか仮説拠点とか用意してくれない？」
「了解だ。なぁに、たくさん作るのは得意技だとも！」

銀弾落涙編　第三十三話　さらなる変転

九成Ｓｉｄｅ

「……で、どうなった？」
俺がこっちの業獣鬼の撃退に協力して無事成功してから、俺は避難民キャンプでリーネスに確認をする。
リーネスはリーネスで、遠い目をして遠くを見つめていた。
もう答えは出ているな。でも一応教えてくれリーネス。
視線で俺がお願いしていると、リーネスも観念したらしい。
「……六体ぐらい超獣鬼になったわねぇ。超獣鬼そのものにはインターセプトが入ったみたいだけどぉ」
その答えに、俺達は盛大にため息をついた。
野郎……っ。やってくれたなぁ……っ！
シャルバの死体、それも骨から造血細胞を取り出して、幽世の聖杯で血液増産しやがったな？
よくもまぁやってくれたもんだ。ふ、ふふふ……っ
「まぁ、こればっかりはカズ君の失態じゃないでしょ。というか、それを言ったら目の前で見ている魔王さんやリアスさん達も大変なことになるしね」
リヴァ先生は見事に正しいことを言ってくれるけど、それでもなんていうか、こぅ……腹立つ。
あの野郎、とんでもないマジックアイテムを大量生産するな。どんだけ作ってるんだアイツら。
というか、神器で作られた物体にそのまま直で投入しやがって。バグが発生したらどうするんだ……あ、発生しても冥界が悲惨なことに

なるならＯＫというノリか。そういうやつだったな。
「……で、超獣鬼の方はどうなってるの？」
春っちが割とげんなりした様子で言うけど、本当にどうなっているんだろうか。
レーティングゲームトップのディハウザー・ベリアルが眷属総出でも成果が出なかったとか、ルシファー眷属が総出で迎撃に出ることになって一進一退だとは聞いているレベルだろ、あれ。
そんな奴らが更に六つも出てくるとか、割と真剣に冥界の危機がレベルアップしてるんだが。
「今挙げられてる映像を見てるけど、とりあえず遅滞戦術で時間を稼ぎつつ業獣鬼を撃退した部隊を割り振る感じだね」
「うっわぁ。撃破できると思った士気がパワーアップで殴り倒されてる。これちょっとやばくない？」
インガ姉ちゃんが見せた映像を見て、鶴羽がすっごい表情になる。
というか、一か所凄く戦線が崩れてるところがあるんだけど。
「……あ～、服の意匠から見てオリュンポスの増援がいるところね。ハーデス神が禍の団から協力のお礼言われてるから、オリュンポス側は困惑してるは冥界側と軋轢が生まれてるとかそんな感じで……そこに業魔人（カオス・ドライブ）と」
リヴァ先生が推測するけど、まさにそんな感じなんだろうなぁ。
「そりゃ戦線もやばいことになるだろ。戦線が崩壊してもおかしくねぇって」
心底げんなりしたベルナの答えが全てだろう。
おのれハーデス。禍の団にもこっちにも迷惑をかけてくるのはいい加減にしてほしい。
せめて無関係なやつは巻き込まないようにする配慮を魅せろ配慮を。……あ、聖書の教えに組みした時点で、冥府からすれば関係者か。ギリシャ神話ってそういうところあるし。
こっちに反省を促すなら自分達も顧みろって。野郎、マジで老害だ。
なんだろう。ちょっと痛い目を見てほしいんだけどなぁ……。

アザゼルＳｉｄｅ

『ファファファ。お主らの苦い顔を見れるとは、ミザリには感謝せねばならぬなぁ』

ハーデスの爺は映像を見ながら、こっちに皮肉まで物故んできやがった。

今映っている映像では、超獣鬼に対して遅滞戦術を敢行している冥界の防衛線が映っている。

アジュカとファルビウムのタッグで業獣鬼を肩に嵌めれたと思ったら、急に発射されたミサイルが業獣鬼に直撃。その瞬間、当たった業獣鬼は全部超獣鬼になりやがった。

おかげでひっくり返せると思った騒動が、第二ラウンドだ。倒せたと思ったらパワーアップして第二ラウンドとか勘弁してくれ。

死神共の愉快そうな感情がめちゃくちゃムカつく……っ！

「ハーデス。そんなに俺達が嫌いかよ！」

『……我らの信仰を奪ったやつらが何をほざくか！』

ハーデスの爺は痛いところを突いてくるが、見当違いでもあるんだろうが。

「前にも言わなかったか？　そういうのは死んだ神か、せめてミカエルに言え！　今苦しめられている冥界の民に何の恨みがある！」

冥界に住んでいる民間人が、教会の宗教的侵略に介入できると思ってるのか？　まして、生まれてもいないガキどもをターゲットにするような真似をする理由がそれか。

俺は殺意すら込めて睨み付けるが、ハーデスの爺からは疑問符の方が浮かんできやがる。
『そんな下らぬ詭弁で、三大勢力（貴様達）がしてきたことの恨みが誤魔化せるとでも思っておるのか？　三大勢力は我らの恨みを買った。その報復に三大勢力が文句を言えると、そんな寝言を抜かす奴らに配慮する理由など……ありはせぬ！』
あぁそうかい。
なら俺も言わせてもらうか。
「良いこと教えてやるよ。……俺はてめえらみたいに引きこもってばかりで外に出ようともしねえ奴らが大っ嫌いだ！　ゼウスやポセイドンを見習うんだな！」
今更隠すつもりはねえ。
引きこもって何もしないどころか、外に出ようとする奴がいれば嫌がらせか。
しかもその嫌がらせは関係のない奴にまで向けられてるってのに、奴らはむしろ当然の仕返しとでも思ってやがる。
こいつが冥府の神でなければ、本当に今すぐにでも殺し合いをしたぐらいだってのに……よぉ。
駄目だこりゃ。俺達とは絶対に相容れねぇ。
ここで仕留められねえのが面倒としか言いようがねえ……っ
俺達が睨み合いになっていると、ハーデスの後ろから足音が響いてきた。
「ハーデス様。ご報告があります」
そこに現れたのは、一人の女死神。
アグレアスでもハーデスの護衛をしてやがったな。相当できる奴だと思うが、しかし若いな。
おそらくサーゼクスよりも若いだろう。それだけの若手がハーデス護衛になるとか、アースガルズで言うならロスヴァイセみたいな才媛ってことか。
俺達が警戒していると、ハーデスは視線をそいつに向ける。
『アクシズか。何かあったのか？』

「はい。冥府の警戒を行っていた隊員が、ヴァーリチームを発見しました。現在第三小隊が迎撃を行っています」
第三小隊？
ヴァーリチームが何もしないとは思ってなかったが、たった一個小隊レベルであいつらがどうにかなるとは思えねえな。
『……貴様の手引きか、烏よ？』
「さぁ～。知りませんね～？」
俺がすっとぼけると、ハーデスは特に何も言わずに気配をアクシズとかいう奴に向ける。
『わしが指揮する必要があるか？』
必要だとは思うがな。
ヴァーリチームはどいつもこいつも凄腕だ。
何より神すら殺すフェンリルを相手にするには、最上級死神でも一歩劣るだろう。
ハーデスの爺が動かずに、対応できるとは思えない。
だが、アクシズの野郎は苦笑をしながら首を横に振る。
「その必要はありません。あの程度の匹夫など、ハーデス様のお手を煩わせる価値などありません」
そう言い切った奴は、同時に気配を変える。
俺達に対するけん制も兼ねて向けたそれは、間違いなく奴が一級の実力者であることを示している。
それどころか、奴が持っている得物が不味い。
鎌ではない。鎌がついているが、その本質は槍と斧。
ハルバートという武装を持ったその女は、胸を張って宣言する。
「我らが尊き冥府を汚す下賤な輩は、我々星辰奏者部隊「ハルベルト」が駆除します。ご報告以上のお手間を煩わせるなど、我らが身命に欠けてもさせません」
……なるほどな。少し訂正した方がいいか。
ハーデスの野郎。三大勢力をぶちのめす為に、牙を研いではいたってことか。
その力がどこまでヴァーリチーム（あいつら）に届くか、少し真剣に見定めるか

ねえ？

和地Ｓｉｄｅ

さて、こっちもこっちでやばいことになっているがどうしたものか。

とりあえず避難キャンプは念の為の確認が終わるまでは存続であり、またこっちの業魔獣を撃破した部隊は、八割が近くの超獣鬼の打倒に派遣されている。

それはともかくだ。

「問題は、こっからどうするか……だな」

「そうだね。また膠着状態になっているのが厄介っていうか」

と、俺とインガ姉ちゃんは同時にため息をついた。

交代でシャワーを浴びながら、俺達はどうにかすることについても備えないといけない。

対抗術式と戦術が用意できたことで、業獣鬼六体を撃破することには成功した。しかし業魔（カオス・ドライブ）人を使われたことで、残っていた業獣鬼が全部超獣鬼に。とどめに元からだった超獣鬼は、ルシファー眷属が総出になってなお膠着状態。

神仏魔王クラスがもっと盛大に送ることができれば勝ち目もあるんだが、そう簡単にはいかないわけだ。

おかげでまだ膠着状態。一旦リアス部長と接触した方がいいかとも思ってはいるんだがな。

「……そろそろゼノヴィアとかギャスパーとかも戻ってくるだろう

し、一旦城に戻るのもありか？」
「確かに。……でもイッセー君の状況って伝わってるのかな？」
そう言われるとすっごい不安。
モデルベルゼビュートの奴が色々やっていたからな。もしかするとややこしいことになっているのかも―
「……失礼します。緊急の連絡が入りました」
―と、そこにメリードが入ってくる。
更に、シャワーを浴び終えた鶴羽達も戻ってきた。
「あれ、メイド長？」
「どうしました？」
立場的に部下であるベルナと春っちが訊くと、メリードは渋い顔をしながら頷いた。
「皆様に緊急連絡です。首都リリスでシトリー眷属が英雄派と接敵。グレモリー眷属は先に転移で向かうので、皆様にも合流してほしいと」
「……会長達が!?」
目をひん剥いた鶴羽の気持ちも分かる。
英雄派の幹部共はどいつもこいつも強敵だ。
人間としての能力が優秀なうえ、神器も禁手に到達し、とどめに星辰奏者でもある。
シトリー眷属も弱いわけではないが、しかし匙以外は相手が悪い。
俺達は皆頷き合うと、既に決意も決めていた。
「じゃ、こっちも向かいますか」
リヴァ先生がそう言いながら一歩前に出るのに合わせて、俺達もすぐに動き出す。
車両から出れば、既にリーネスも準備を整えていた。
静かに頷き、そして転移用の車両に向かう。
待ってろよ、会長達……っ！

銀弾落涙編　第三十四話　開演、銀弾錬成

和地Ｓｉｄｅ

俺達は首都リリスに転移して、そこから周囲を見渡した。
既に避難はほぼ完了。シトリー眷属を含めた何人かが、逃げ残りがいないかの確認をしている。サイラオーグ・バアル達は暴れている旧魔王派の迎撃を行っていると聞いている。
離れたところでは超獣鬼の一体と、グレイフィアさん達ルシファー眷属が一進一退の攻防を繰り広げていると聞いている。
さて、部長達はどこに―
「……カズ君。ちょっとやばいかも」
―リヴァ先生が、マジな声を上げた。
先生が見ている方向を見てみると、何かいるな。
……いや、あれは!?
「やっほー。また会ったね」
モデルバレット!?　なんでこんなところに!?
魔獣達を引き連れたモデルバレットは、ちょっと意外そうな顔をしながら俺達を見渡した。
おそらく偶然の遭遇なんだろうが、このタイミングで来るか……おい!?
俺達が構えていると、モデルバレットは楽しそうな表情まで浮かべていく。
「いや、英雄派にジークフリートが討たれたことを伝えた方がいいと思って来てみたら……ねえ？　いきなり会えるとか思わなかったよ」
あぁ。そういえばジークフリートを打倒してたからな。連絡は入れるべきということか。
……さて、どうしたものか。

ゼツメライズキーを利用した方法によるモデルバレットをどうにかする方法は、ぶっちゃけると二つある。
一つはデバイスであるゼツメライズキーもしくはフォースライザーを破壊及び切除すること。ただしこれは、モデルバレットの戦闘能力次第では困難に近い。
もう一つ、リーネスが既に考慮していた手法がある。ただしこれは、今の段階では発動が不可能。
どうやら、前者で行くしかないようだな。
俺は深呼吸をして、そのうえで魔剣を創造する。
覚悟を決めろ。
「モデルバレット。悪いがあんたがいるとカズヒ姉さんが笑えない。ここで退場してもらう！」
「それはやだなぁ。だから殺した方がいいのかなっと！」
だろうな……っ!!

祐斗Ｓｉｄｅ

……なにか、おかしなことが起こっている。
離れたところ、それも超獣鬼がいる辺りで、何か強大なオーラがぶつかり合っていた。というか、空が赤く染まっている。
今現在、僕達は英雄派のジャンヌ・ダルクと睨み合っている。
幹部であるヘラクレスは、サイラオーグさんに圧倒され打倒された。ゲオルグは謎の力を発動させたギャスパー君に圧倒され、更に匙くんの渾身の炎で逃げることもできず闇に呑まれていった。
だが、ジャンヌ・ダルクは人質を取る形でこちらをけん制していた

ところ、人質にされた子供がおっぱいドラゴンの歌を歌った途端にこんな事態だ。
はっきり言って、状況が分からなさ過ぎて困惑すらしている。何があったんだろうか。
そう思っていると、何か壮絶な音が聞こえてくる。
戦闘の音のようだけど、かなり激しい音だ。
一体何があったのかと首を傾げたくなる中、空の向こうから何かが飛んでくる。
……あれ？
赤龍帝の鎧？
というか、背中にオーフィスが乗っている？
きょとんとしていると、その鎧は僕達のところに舞い降りた。
「皆！　やっと見つけたぜぇ」
そんなこと言ってくるけど……え？
いや、え、もしかして……イッセーくん？
いや、今のでジャンヌも面食らっている。この隙を活かした方がいいのか……な？
凄くきょとんとしている赤龍帝の鎧は、頭部の鎧を消してイッセー君の顔を見せた。
そして軽く手を上げると―
「えっと……おっぱい！　兵藤一誠、ただいま帰還しました！」
―あ、これ本物だ。
「イッセー！」
「イッセーさん！」
「イッセー君！」
「イッセー！」
「イッセー君！」
「イッセーですの！」
「マジでイッセーじゃん！」
「イッセー君ですか!?」
「兵藤!?」

凄い勢いで納得されたね。
『……皆さん。それで理解するのは流石にイッセーが可哀想なんですが』
『聞こえないもーん！　グレートレッドの声もこんな反応も聞こえないモーン！』
シャルロットの呆れ越えと、何かメンタルがいっぱいいっぱいになっているドライグの現実逃避はあえてスルーして……よし！
「あ!?」
ジャンヌが慌てているけどもう遅い。
僕は素早く子供を奪還すると、皆のところにすぐに戻る。
これで何とかなるだろう。あとは―
「……皆さん！　あちらの方を！」
―ロスヴァイセさんの声と共に、戦闘の音がこちらに近づいてくる。
振り返れば、そこには魔獣達を薙ぎ払いながらも、攻撃に押されている九成君達の姿があった。
中核になっているのはモデルバレット!?　更にフローズヴィトニルも数体確認できる。
そして僕達の近くに着地すると、一誠にイッセー君を見て目を見開いた。
「……イッセー!?」
「イッセー!?」
「イッセー君!?」
「なんでここに兵藤が!?」
春菜さんもベルナさんもインガさんも南空さんも目を見開いて驚愕しているね。
「……えええ～。これは先生予想外」
リヴァさんも凄い表情になっている。
そして九成君も目を見開いて、イッセー君と何故かサイラオーグさんを交互に見てげんなりして、すぐに意識を切り替えたらしい。
「イッセー、話はあとだ！　今は乳語翻訳（パイリンガル）！」

「え――」
「――早く乳語翻訳かましてくれ！　ハリーッ!!」
「え、あ、はい！」
凄い剣幕の九成君に押されるようにイッセー君が乳語翻訳を展開する。
その瞬間、九成君はモデルバレットに突貫し、我に返ったリヴァさんが魔方陣を展開する。
「半神の加護満載で赤龍帝パワーよ！　決めなさい、カズくん!!」
「分かってるっ!!」
魔剣を構え、魔獣を薙ぎ払い、九成君はモデルバレットに突貫する。
「なにを――」
「――こうするんだよ！」
そして魔剣を叩き付け、そこから光が僕達全体を包み込んだ。

イッセーＳｉｄｅ

……なんだ、この空間。
なんか靄っとする空間が広がっている。っていうか体の感覚も微妙だな。
辺りを見渡すけど、誰の姿も見えてない。
あの、俺の乳語翻訳（パイリンガル）は何をどうした結果こんなことになってるんだ？
――ふっふっふ。どうやら成功したみたいね
あ、リヴァさん！
どういうことなんですか!?
――京都で闘戦勝仏のおじいちゃんがやったことを参考にしたの。

これにより、今私達はカズヒの精神世界に突入したようなものだわ
マジで!?
そんなことできるんですか？
っていうか、精神世界には入れてるってマジで!?
そもそもなんで俺まで入ってるの!?　俺が乳語翻訳を使ったからですか!?
―カズヒが心象風景を具現化する固有結界持ちだったことが原因ね。たぶんだけど、他の子達も見えてはいるんじゃないかしら？
あ、俺やリヴァ先生が会話できているのはそんな感じなのか。
あれ？　でもなんで精神世界？
―簡単なことよ。今からカズヒの精神にカズくんがダイビングして、カズヒ自身の肉体に制御させるって感じなの。
え、そんなことできるの？
―あの子、基本的に意志力でどうにかできることはやると決めたら絶対どうにかするじゃない？　意識が飛んでる状態でミザリが仕掛けた以上、意識が覚醒すればあり得るとは思うわね。
あ～なるほど。
もしできなくとも、影響が出てきたのならどうにかできるかもしれないって感じか。
―そういうこと。……さて、そろそろえげつないのが来るわよ
……ああ、だろうな。
頼むぜ、九成――

銀弾落涙編　第三十五話　日美子忌憚―反転

カズヒ（日美子）　Side

限界を超えると、何かが反転する。
私がそれを実感したのは、いったい何時だったろうか。
少なくとも、今思い出しているこの時間帯でなかったことは断言できる。
「いや～。十代前半の女の子に思う存分出せるって、そうそうない機会だから助かったね～。ありがとぉ」
「ハイハイ、ありがとねー。じゃ、さっさとシャワー浴びるからね」
あと数年で十年ぐらいの付き合いになるおっさんにそう答えながら、私はねばついた体をさっぱりさせたいのでシャワーを先にもらうことにしていた。
向こうが平然と楽しめている関係の間なら、私の要望や都合にもある程度配慮してくれるのは、外道ゆえの余裕って奴なんだろうと、その頃から何となく思ってはいた。
これを逆手にとってそれなりにおねだりしてお小遣いやら欲しい物やらをせびるのが、当時の私の処世術だ。
加減の調整が面倒くさいので、せびるのはちびちび少しずつ。安い奴は直接せびって、せびった小遣いを貯めて高いのを買うプロセスすら組んでいた気がする。
「おっけー！　いやぁ、良いグループに参加させてもらったよ」
「これからもよろしくね、日美子ちゃん」
「たまにはみんなでじゃなくて、一人一人とってのもいいのかな？」
「はいはい恐縮ですっと。あとその辺はおっさん達とまず話し合ってからね～」
あとから参加してきたおっさんやら兄ちゃんやらに適当に返事し

つつ、私はそのままバスルームに入っていく。
普段なら風呂場でもやりたいぐらい盛りっぱなしの連中だけど、この日は二時間ぶっ続けだから、流石に弾切れっぽくて助かった。
熱いお湯で体の疲れを流しながら、ふと鏡に視線を向けた。
まだお湯を浴びただけだったから、体は特に洗ってない。
だから、盛っている奴らがノリで書いてくる落書きも、普通に体に描かれたままだ。
ちゃんと洗えばとれる程度のインクで書かれているそれは、鏡に映っているから別の読む気にもならない。
それを無感動に洗って流しながら、私はふとぼやいた。
「……あ～。なんで生きてるんだろ、私」
分かってはいる。この頃の私は、常にやけになっていると言ってもいい。
兄に対する想いを拒絶され、その直後に侵されて純血を散らされた。そしてその写真で脅されて、犯す男はどんどん増える。
面倒を見てくれるおっさんまでもが参加するとか、もう一周回って笑えてくるだろう。同じ屋根の下で面倒を見ている、自分の娘と仲の良い少女を性欲のはけ口にするとか最悪だ。とどめに奥さんも知っていながら、特に夫婦仲が変わらないのが厳しい話だ。
魔術回路を自覚的に保有している一族は、後継者の回路をよりよくする為に優生学を活かして交配相手として選ぶことが多い。あの二人もその傾向であり、元々おっさんは二十歳未満じゃないと興奮できないらしい。魔術で無理やり射○させるとか、頭がいかれてる関係だとすら思う。
……十年近く、道間日美子はやけになって捨て鉢な人生を送っている。普通の少女なら絶望して心を壊すか、耐えきれず自殺するような生活を、一周回って楽しもうとすらしている。
快楽と小遣いが得られることをいいことに、いろんなものを見ないふりで生きている。
それがこの頃の私の人生。
何もかもが糞ったれな、糞のような少女の毎日だ。

ふと、そんな記憶が蘇っていると、声がかけられる。
「どうした日美子。ぼんやりとしているうえに不機嫌に見えるが」
その心配そうな声に、私はぶんぶんと首を振って意識を切り替えた。
「ゴメンゴメン。昨日の夢が悪夢でさぁ？　思い出してたらちょっと不機嫌になっちゃって」
声をかけてくれたのは、私がお世話になっている家にホームステイしている、アイネス・ドーマ。
分家や海外に渡った家を含めれば、生きている奴だけで歩兵一個大隊は作れるっていう、かなり構成員が多い一族だ。
その中には外国で小規模なグループまで作れる場合もあって、アイネスはイギリスの出身。
イギリスの家ではかなりデカい感じの一族で、ちょっとした一族同士の交流も兼ねて、日本に三年ぐらいホームステイすることになった。
ま、本家にそのままって程ではないし、実力もそこまで高いわけじゃない家だけどね。それなりに人間社会だとでかい感じになってるから、その辺りの貢献度って感じだ。
私や誠にぃ、そして乙女ねぇが預かってもらっているのもそういう理由だ。便利屋的なところだけど、それなりに金も貰っているからまぁそんな感じ。
だけどまぁ、年は近いけど魔術回路がめっちゃ優秀なアイネスが、私達に偉ぶらないで仲良くなってくれたのはちょっと意外だ。
「でもさーアイネス。アイネスってあっちじゃ貴族的な感じなんでしょ？　私らみたいなのと仲良くなっていいの？　うるさい人とか出てこない？」
「気にするほどでもないさ。貴族的だからこそ、不遇な下民には手を

差し伸べるという手合いもいるからな。最悪でもあれだ、両性愛とか適当言って愛人にでも抱え込む」
「うっへぇ」
何時の間にか先に行ってる誠にぃ達を追いながら、アイネスも別の意味でえげつないところいるなぁって、会話してて思った。
いや、アイネスのところって悪魔とも縁があるらしいし、悪魔ってハーレム作ったり愛人豊富だったりすることもあるみたいだしなぁ。その辺り、やっぱり違うところはあるのかな？
誠にぃ相手に色目を使ってくれないところがあるからありがたいけど、ちょっと気になるというか不安になるというか。
「……ちなみに、誠にぃとかはどうなの？　魔眼持ちだから優秀だと思うけど。私的にはマジ結婚したい」
それとなく、私はその辺りを探ってみた。
無理だって分かってる。でも、それでも不安になってしまう。
今更だって分かってるけど、それでも嫌なものは嫌だから。
「私から誠明に粉はかけんよ。乙女に悪いだろう？」
……だから、その返答はある意味で予想通り。
それでもほっとして、むっとする。
アイネスが誠にぃを狙う様子がないことにほっとしている。そしてその理由が乙女ねぇに対する気遣いがあってのことだから、むっとする。
無理だって分かってる。乙女ねぇと誠にぃが、きっかけさえあればすぐそっちに転がるって、誰が見ても分かってる。たった二年半でアイネスでも悟ってるんだから尚更だ。
だけど、私は誠にぃが好きだ。
どれだけ犯されて汚されても、それだけは私の大切な宝物なんだ。
それを押し殺して、私はアイネスと一緒に三人を追いかけた。
「おーい！　遅いわよ二人ともー！」
そして追いつきかけていると、私達を預かっている家の娘な、道間七緒がちょっと怒りながら手を振っていた。
七緒は元気いっぱいで、私達の間だと一番引っ張るところがある。

色々な提案をしてきっかけになるし、魔術回路も可もなく不可もなく。家主の娘だからって偉ぶらない。
ただかっこつけたり不意打ち喰らうと、すぐポンコツになるけど。
「ごめんごめーん！　ちょっと話してたー！」
「今すぐつくからもうちょっと待てー！」
だから私もアイネスも、ちょっと苦笑してから、返事をしながら走り出す。
私達が向かっているのは、アイネスと打ち解け始めてから作ってきた秘密基地。
魔術回路持ちとしてめっちゃ優秀なアイネスがいるなら、家みたいな魔術的防護加護やトラップみたいなのを子供達だけで作れるんじゃないかって感じで、七緒が提案してみんなで面白がって作った秘密基地だ。
学校の裏山に作ったこれは、一年以上かけて山全体に処置を分散設置している。
だから最初に作った基点に登録してる私達以外は、大人の実力者だってすぐには見つけられない。ただの人間なら神器持ちでも辿り着かないし、そもそも歩いて着けないところに気づけない。
ぶっちゃけ年単位で作ってるからか、この秘密基地はマジですごい。
裏山全体を使って仕込んでいるから色々機能が仕込まれている。視覚妨害を兼ねた常緑樹でカバーされた小さな空間には、裏山中にしみこんだ雨水が集まった泉がわいたりしみこんで消えたりする、ちょっと幻想的な光景だ。使い魔にできる小動物が集まるよう、食べれる木の実が育つ植物や、食用や薬草にできる野草も裏山中から集めて植えているので、ちょっとした魔術用の素材も集められる。
秘密基地は温度も自動である程度調節出来る。夏は日陰もあるからそこまで熱くなく、そよ風が常に吹いているから居心地がいい。冬も地熱をちょびっとずつ集めているからあんまり寒くないし、魔術的に泉を調整すると、泉の一つを足湯にできる優れもの。今年の冬は足湯がブームだ。

更に木漏れ日が当たる場所には、使い魔の練習を兼ねてゴミの廃棄場から集めてきた、太陽電池が配置されている。これは魔術的な流れでこれまたたくさん集めてきた古いバッテリーに溜め込まれていて、また魔術的に繋げたクッキングヒーターと繋がっているので便利空間。

そんなところは私達の秘密の遊び場で、大人達もどうやら気づいてないっぽい。

で、私達は今日、そこにピクニックに来ている。

「生卵腐るわよー！　乙女と誠明で熱いんだからさー！」

七緒は誠にぃ達に当てられてるらしい。

だけどまぁ、生卵が傷んだからそれは最悪。折角古い飯盒を探してあさって、炊き立てご飯で卵かけご飯なんて目論見をしてるのに台無しになっちゃうな。

「私の卵かけご飯用魔術を舐めるなよ？　例え室内常温で三日経とうと、卵かけご飯は問題なく食べれる！」

「そっちじゃないから！　なんでそこに全力投入!?」

「アイネス。来年イギリスに戻って大丈夫？」

アイネスが胸を張ってあほなことを断言したから、七緒はまじツッコミだし私もちょっと不安になった。

生卵って、日本以外だと食べたりしないそうだけど……マジで大丈夫かな？

ちょっと不安になるながら秘密基地に入ると、そこではすでに焚き火の準備は万端。

煙で気付かれないように魔術的措置をやっている二人が、こっちに気づいて振り返った。

「日美子やアイネスも手伝ってくれるかい？　乙女と僕だけだと不安でさ」

そう苦笑するのは、私の最愛のお兄ちゃん。道間誠明。

ちょっと線が細くて頼りないところはあるけど、優しいし一生懸命頑張っている。あと顔もいいし、身体能力はそこそこある。

そして隣には、日本人ではありえないような桃色の髪の女の子。

……その年上の子は、私に振り替えると憎たらしくなるような満面の笑顔で、ちらっと誠にぃを見ながら微笑んだ。
「やっぱり私だと魔力だけだから。……お願いね、皆」
道間乙女。道間家の一人で、私や誠にぃと同じように引き取られた子。
魔力の量だけに特化した無駄にとがった魔術回路が特徴で、量においては並みのリーネスを圧倒的に上回っちゃう子。
私にも優しいし、ダメなことをしたらちょっと厳しいし、いいお母さんになれるって思う。
「ちょっとー！　私はのけ者なの、誠明⁉　私だってそれぐらいできますー！」
「まぁまぁ。誠明もちゃんと呼んであげなきゃ」
「……えっと、ごめんね？」
「気にしなくてもいいだろう。基地作りの時にうっかり火をつける場所を間違えた失態があるからな」
そんな感じで仲良く会話する皆との毎日は、本当に楽しい。
糞みたいな奴らに抱かれてることを皆は知らないし、教えたいとも思わない。知らないでいてくれる方が、きっと笑顔は曇らないから。
最近はそこそこ便利だし、実際テクはあるから気持ちいい。だから尚更、知られたくないし知らせる気もない。
知らせて全部終わったところで、何がどうなる？
嫌な思い出が皆に知られて、皆も「何も知らずにのうのうと」なんて気分になる。
だから、何も言わなくていい。今は楽しいんだから、それを壊したくない。
そう思いながら、私は自然な笑顔を魅せれる。
「……じゃ、そろそろご飯炊こっか？」
本当に今は楽しいから、だから自然と笑顔が浮かべられて―
「うん。ほら、誠明も手伝って」
「ああ、分かってる分かってる」
―その二人が笑顔を交わしているところを見て、何かが溜まってい

ることを自覚したのは、何時からだったろうか。

そしてそれから半年とちょっとが過ぎ、アイネスはイギリスに帰国した。

そして春休みも終わって、今度は七緒がアイネスのところにホームステイだ。

しかも七緒がいなくなった所為で、おっさんはタガが外れたのかちょくちょく私を呼んでくるし、困ったもんだよと思ったものだ。

「も～。自分の娘の友達相手に、週三で頼む、普通？」

「だからだよ～。七緒とエロいことするわけにもいかないじゃん？いやぁ、母さんが誤魔化しを手伝ってくれるのはありがたいよ～」

「世話してる子供と自分の夫がエロエロすんのを手伝おうとか、どんだけだよね～」

っていうかなんで、こんなおっさんとあんなおばさんから七緒みたいないい子が生まれるんだか。

ちょっと抜けてるところはあるけど、一緒にいて楽しいんだよなぁと、そんなことを思ったものだ。

そんなわけで、おばさんのアリバイ協力もあって、私はこうしておっさんとエロエロしてから帰ろうとしているわけだ。

それなりに周囲を警戒しながら、買い物のお手伝いって感じにして家に帰っていく。遠いところの買い物と引き換えに、晩御飯を奢ってもらうとかそういった体裁だ。

そんな風に車で帰っていると、ふと窓ガラスに自分の顔が映っているのが見える。

そして、ちょっと離れた橋を歩いている、カップルとしか思えない一組の男女が、透けるように見えた。

……それが、誠にいと乙女ねぇだって気づいた時、だったのだろう。

道間日美子の何かが、決定的に裏返ったのは。

銀弾落涙編　第三十六話　日美子忌憚―墜落

日美子（カズヒ）　Side

何かが決定的に裏返ったのか、曖昧なのには理由がある。
そこでいきなりおっさんを脅したり、乙女ねぇや誠にぃに対して凶行に及んだわけじゃないからだ。
ふとした時に、何かが裏返った。そして誠にぃを手に入れる為に、乙女ねぇをけり落とすと決めた。その為に都合がいいおっさん達を動かす為に、弱みを握ることも決めた。
三か月ぐらい、更に弾けた風に見せながら写真を撮ったりして保存。更にそれをデコイに、サイコロでインターバルを決めて録音をするといった小細工もやった。そして気を見計らってそれを見せつけながら、「乙女ねぇを堕とす手伝いをするから、私に対して避妊を徹底する」ことを確約させた。
保険として秘密基地にそれらの元データを隠すことも躊躇しなかった。異能と関りのない友達に暗示をかけて、予備を持たせて隠させることも躊躇わなかった。
友情をすべて踏みにじるような行為に、何の感慨も抱かなかったと覚えている。それほどまでに、私の心は誠にぃを独占することだけに終始していた。
そして契約を結び、一か月以上かけて計画を練った。
乙女ねぇを堕とす為だけの施設をいくつも確保して、更に私が見て楽しんだり密告させない為の脅しようとか言って、誠にぃに見せる為の映像も記録できるようにした。
そこまでできたら後は簡単。
「……乙女、ねぇ」

そんな風に、誠にぃがいない時を見計らって涙目で乙女ねぇを連れ出した。
ぽろぽろと、無表情で涙をこぼす。テレビドラマとかアニメとかを参考にしたけど、自分がこんな簡単にウソ泣き出来るなんて思ってもみなかった。
あの時、顔色を変えて私を心配してくる乙女ねぇに、何を思っていたのだろう。
獲物がかかったとほくそ笑んでいたのか。今まで気づかなかったくせに、何を心配していると怒っていたのか。それともただただ慎重に、うまく誘導するための方法を考えていたのか。
確実に覚えているのは一つだけだ。
「もうやだぁ……死にたい……助けてよぉ……」
「……わかってる。大丈夫だから、私に任せてっ」
涙をこぼしながらも強い決意で抱きしめてくれた乙女ねぇが、なんとなく暖かかったなぁって思ったことぐらいだ。
そこから後は簡単だ。
こっちは入念に準備してからだったから、乙女ねぇはあれよあれよと交換条件で自分が犯されることを呑んだ。
マジックミラー越しに泣いて犯される乙女ねぇを肴に、趣味の悪い兄ちゃんと交わりながらあざ笑ったのを覚えている。
思えばあの時、声が聞こえていればよかったんだ。防音を踏まえた魔術をかけて、声が漏れないようにしてればよかった。カメラのマイク越しに声を聴くなんて手間を面倒くさがればよかった。
……いや、違う。
もしそういう手段をとるなら、最初っから一緒に犯される方向になったかもしれない。その方が乙女ねぇが絶望するだろうけど、目的は自殺される可能性込みで苦しめることじゃなかったから、抑えただけだ。
とにかくいろいろと動くのが大変だったのも覚えている。
うっかり誠にぃがエンカウントしかけたので、普段甘えているノリでタックルをして気を引いたり。乙女ねぇが呼び出されるのを知ら

れないように、甘えたりして気をもんだりしたものだ。
そのまま絶望させて引きずり込んでもよかったけど、乙女ねぇは一年そこらで心まで堕ちてくれた。
「……ねぇ、気に入られる方がいいと思うから聞くんだけど、小父様たちって好きなプレイとか、格好とかあるのかな？」
そう、期待に満ち溢れた表情を隠せていない乙女ねぇを見たとき、笑い出すのを抑えるのに必死だった。
一生懸命頑張って、私を守ってくれている。総勘違いしている風に表情を取り繕うのは苦労したと思う。
むしろ教えられた乙女ねぇが、喜んでいることを隠せてないことが滑稽だった。そっちで笑い出さないようにするのも大変だった。
だけど、だからこそ私はこの時、自分が勝てる可能性に震えたのだけは覚えている。
乙女ねぇはもう終わった。私が十年以上かかっても、結局完全にのめりこめなかった、堕ちきれなかったおっさんたちに、夢中になって魅了されてる。これが終わってなくて何だっていう。
乙女ねぇと別れて、一人でカラオケボックスに入って、大音量で音楽を流しながら防音の措置を施して、私は我慢することをやめた。
「……あ、はははは……っ」
一度零れると、もう止まらない。
生まれてから一度も感じたことがない感情を感じる。
嗜虐的な愉悦とはこういうものか。相手を踏みにじることがこんなに愉しいなんて、知らなかった。弱い者いじめをしたがる連中の気持ちが、わかってわかってたまらない。
背中を曲げて、転げまわって、腹を抱えて盛大に笑い転げる。
「やったやったやったやったぁあああああっ！　ざまぁみろぉっ！」
生まれてこの方、こんな暗い快楽を感じたことなんてなかった。
悪人が人を虐げる理由が分かった気がする。おっさんたちが私たちを犯して笑ってられる理由がよくわかる。
そりゃやるよ。こんなの知ったら、またやりたいって思うやつはたくさんいる。そんな風に思えるぐらい、心が軽く酔いしれて気持ちが

いい。
「ざまぁないわよ乙女ねぇ！　一生そこで犯されてろぉ！　誠にぃがいなくてもいいままでいればいいわ！」
バンバンとソファーを手でたたきながら、私は気分が落ち着くまで何十分もそうしていた。
そしてようやく落ち着いて、私は乾いたのどを潤してから帰ろうと、起き上がる。
その時、ふとテレビの画面に映った自分を見た。
「……あれ？」
滂沱の涙ってのはこういうことかっていうぐらい、私の顔は涙でめちゃくちゃになっていた。
生まれてこの方、こんなに泣いたことなんて一度もない。誠にぃに告白を断られた時も、そのあとおっさんに犯された時も、こんなに泣いてないって断言できるぐらい、私は涙を流していた。
うれし涙でここまでボロボロ泣けるのかと、私はきょとんとしながら涙を引いた時、そう思っていた。
今にして思えば、私はそう思い込もうとしていたのかもしれない。

コピーしたＤＶＤを誠にぃが見つけられるように仕込んでから、私は全部をばらすタイミングをずっと見計らっていた。
ちょくちょく新しいＤＶＤを仕込むたびに、次の日に誠にぃが憔悴する。それを心配しながらも鈍感な対応に見せかけながら、私はめちゃくちゃな感情をただ喜んでいる風にごまかしていたのかもしれない。
もちろん、あのおっさんたちが私を犯すのをやめるわけがない。いくら何でもそれをすると、向こうが変な暴走をするかもしれないからだ。
なのでまぁ、新しい記録映像を貰うときなどは、ついでに股を開い

てあげたものだ。
「……ねぇ日美子ちゃん？　そのＤＶＤ、ちゃんと取り扱いには気を付けてよ～？」
「わかってるって。個人的な用事に使うだけだし、約束ちゃんと守ってくれてるなら、流出なんてしないって」
そんな感じで、援助交際みたいなノリでファミレスでだべったりしつつ、私はおっさんとお茶をする。
そう思いながら唐揚げを食べるけど、なにか味が変わったような気がする。
味がすごい新鮮に感じる癖に、どこか美味しいとは思えない。
今までにないぐらい心が解き放たれたとすら思っているのに、どこかが沈み込んでいるような気がする。
そんな妙な感覚にイラついているからか、おっさんが頼みごとを言ってきたときはいい機会だと思った。
で、そのまま一緒に連れ立ってついたのは、そこそこの規模の公園。
私が誠にぃに告白して、誠にぃに拒絶されて泣いて、このおっさんに初めて犯された公園だ。
久しぶりにこの公園で私を犯したいとか、また変態極まりないことをするおっさんだと、割と思ったものだ。
そして使い魔で常に警戒していた私は、私たちを誠にぃが見ていることに気が付いた。
……いい機会だと、私は確信した。
もう一月以上前に、乙女ねぇは妊娠が確定した。
妊娠検査キットはこっそりもらってずっと携帯している。どこで誠にぃにばらしてとどめを刺すか、見計らっているタイミングだったからだ。
だから誠にぃに見せつけるように、私はおっさんにキスをする。
「……え、いいの？　だって―」
「―報酬の前払い。誠にぃがいるから、周りが目に入らないぐらい激しくしてほしいんだよね」
……そこからは、とにかく誠にぃを動揺させるためにノリノリで交

わった。
聞こえてない風を装って、乙女ねぇを貶めたのが私なことも、ノリノリになっていく乙女ねぇの様子も語りながら、誠にぃに不意打ちを叩き込んで気絶させるまで交わった。
そのあともまだ出したりないおっさんに合わせて、避妊はしっかりしたうえで気絶した誠にぃの前でやる羽目になったのはさすがに苦笑ものだ。
で、そのあと誠にぃを家に運んで、動けないように手足をベッドに括りつけてから、私はシャワーを浴びた。
今更な気がするけど、初めて誠にぃと私が交わるんだ。できれば最初は綺麗な方がいいと、妙なところで乙女心を発揮していた。
とにかく派手にしようと、お尻もきっちり洗浄した。
口も、お尻も、もちろん膣も。全部を誠にぃに味わってもらいたいし、全部で誠にぃを味わいたい。
この時、私は心の底から決戦の時だと確信した。

「……あぁ」
「……あ♪」
全てを語り、全てが終わったことを見せつけた。
その時に、急に誠にぃは大きくなった。
最初っから、すっごく気持ちよかった。そりゃおっさんたちみたいに経験豊富の技量があるわけでもなし、絶対的な名器ってわけじゃないから気持ちよさは物足りない。だけど同時に、好きな人としているからこその柔らかい満足感があった。それとは別に私の勝利と誠にぃの敗北を突き付けて、念願をかなえた達成感とか、テンション極まって脳内麻薬がドバドバ出ている感じもあった。
だけど、あの時誠にぃはとっても気持ちよくなった。
だからちょっと気になって、誠にぃを観察するように見ている。

……その、何処までも幸せそうな陶酔の表情に、私はすべてを忘れて見とれてしまった。
私の目を見て、本当に大切なものを見ているかのような目を向けている。
……勝った。
その確信を、これ以上にないほど感じた。
誠にぃは壊れた。乙女ねぇは壊れた。そして私は誠にぃをつかみ取った。
だから、ゆっくりと誠にぃの拘束を外しながら、私はほっとした気分で指示かに告げる。
「誠にぃ。世界は、誰かの幸せのためにできてなんていないの」
それは、私が痛感している真実だ。
「世界はいつだって誰かの幸せを踏みにじる。愛や正義が必ず勝つわけじゃないし、悪党が最後まで幸せに生きることだってある」
誠にぃが私を受け入れなかったように。
おっさんたちが社会的に強者側なように。
だから、私も決意した。
「世界は勝とうとして、勝つために必要なものをつかみ取ったものに優しいの。だから、乙女ねぇとそのまま幸せになれると思ってた誠にぃが、誠にぃを手に入れて幸せになるために悪になった私に全部壊されるのは、当然なの」
そういいながら拘束を解いても、誠にぃは私に暴力を振るわない。
殴らない。叩かない。首を絞めない。殺意も憎悪も怒りも向けない。
誠にぃは壊れた。決定的な何かが終わった。その確信が、私に最後の一手を踏ませる。
すでに全裸になっている状態で、私はゆっくり心から微笑みと共に、股を開いて性器を見せる。
「何もかも失ったかわいそうな誠にぃを、私は今から手に入れる。……いっぱい愛してあげるから、誠にぃは私だけのものになってくれる？」

その言葉に、誠にぃは慈しむ笑顔と共に、そっと私のほぉをなでる。
「……きれいだ。君も僕も、今までで一番きれいだよ」
そしてそっと口づけを交わしてくれる誠にぃに、私も我慢が限界を超えたのを覚えている。
……空が白む頃、私を優しく抱きしめて眠る誠にぃの、安らかな横顔を見た。
私は、この時人生で初めて勝利を掴んだのだと、そう思い込んでいた。

銀弾落涙編　第三十七話　日美子忌憚―陶酔

カズヒ（日美子）　Side

そんな時から八か月ぐらいが過ぎた。
認識阻害の魔術を使いながら、食べ過ぎで太ったと異能を知らない友達にからかわれるのが最近の毎日。
今日も学食をたくさん食べて、買い食いもたくさんしてから家に戻る。
……誠にぃは、時々放浪癖ができていた。
どうも小旅行をしてみたかったらしい。夏休みに一週間ぐらい家を空けたりして、でもお土産を片手に家に帰ってきてくれた。
だけど、ちゃんと学校がある時は毎日通っている。今日はちょっと早めに帰っているみたいで、部屋からうめき声が聞こえてきていた。
「まぁ～た見てるの？　誠にぃったらもぅ」
ちょっとふくれっ面になりながら、階段を上がって誠にぃの部屋に入る。
電気も消してパソコンで映像を見ている誠にぃを気づかせるように、私は部屋に電気をつけた。
『……はいがんばってー乙女ちゃん！』
『ひっひっふーだよ、ひっひっふー』
『……ふぅ～……っ。…っ…っ…ふぅ～……っ』
『よっし、頭も見えてきた！　もうちょっとの辛抱！』
一心不乱に見ている誠にぃは、だいぶ遅れてから電気がついたことに気が付いた。
幸せそうに振り返る誠にぃに、私はため息をついてしまう。
「毎日毎日飽きないよねぇ、誠にぃ」
「日美子も見たら？　本当にいい映像だろ？」

そう微笑み誠にぃと向かい合うように、私は座っている誠にぃの膝の上に乗る。
「まったくもう。今日は乙女ねぇも来るんだから、こんなの見られてたら恥ずかしがるよぉ？」
最近は、乙女ねぇも隠すことなくすべてを明かして和やかに会話押している。
叔父さんは誠にぃに私の弱いところとかをアドバイスするし、叔母さんは乙女ねぇに経産婦としてのアドバイスをしている。誠にぃも乙女ねぇも、ぎこちないことなんてないぐらい普通に会話している。
とはいえ、さすがに乙女ねぇも病院で休んでいるころ間。
『……よっし産まれたぁあああああっ！　えっと、お尻を叩けば産声上げるのかな？』
『慎重に、慎重にな？』
『……ふぇえええええっ！』
『よっしこれでもう大丈夫!?　……ほら、乙女ちゃん？　産まれたよ～？』
……この映像は、乙女ねぇの出産映像だ。
元々は、裏物ＡＶとして撮影されたもので、女子学生妊婦が題材。ただこのタイミングで陣痛が始まって、色々と大慌て。今はラストで無事に出産ができたタイミングだ。
出産は厳しいものだとは聞いているけど、これを見ると本当にそうだと思う。
でも、おじけづこうなんて思わない。
「……私の時も、見てくれる？」
「当然だよ。しっかり記録を残してくれると嬉しいかな？」
そう答えながら、誠にぃは私の膨らんだおなかを撫でてくれる。
妊娠六か月。私は時々蹴ってくれるお腹の子に心からの感謝を覚えながら、赤ちゃんを愛しく抱えてる乙女ねぇの前でキスをした。

「……日美子は、大丈夫？」
と、お風呂上りに乙女ねぇにそう尋ねられた。
今になっては、乙女ねぇに対する負の感情はほぼなくなった。
むしろ今までで最も気安く思えているというか、経産婦の先輩が二人もいてくれるのは正直助かるというか。
なので、赤ん坊にお乳を与えている乙女ねぇの隣に座ると、甘えるように肩に頭を預ける。
昔はこれをする時も、どこかで不愉快なものが沈んでいた気がする。それがなくなったのは、乙女ねぇが出産しているからだ。
今の乙女ねぇは、あんな産まれ方をした赤ん坊を心から愛している。そんな幸せそうな微笑みが、乙女ねぇが私の敵にならないことの証明だ。
だからこそ、私は心から乙女ねぇに頼れる。
「大丈夫。だって誠にぃとの子供だもん。この子を妊娠出来て、本当に嬉しいし、産みたいもん」
ああ、本心からだ。
私と誠にぃの子供。そんなものが授かれるなんて、ずっと思っていなかった。
何回か妊娠して堕胎したこともあるけど、この子は絶対に産んで見せる。
誠にぃが私の物になった証明。私と誠にぃが結ばれた証。
「……この子の名前ね？　幸せの象徴だから幸（さち）って文字を入れようと思ってるんだ」
「そっか。誠明と日美子の子供だもん、きっと幸せに育ってくれるよ」
本当に壊れてるなぁと、この時素直に思った。
私の十年以上と、誠にぃと結ばれた流れでそう思えるのは凄い。乙女ねぇは、本当に心から堕ちているって確信できる。
自分がしたくせに呆れながら、私は乙女ねぇの赤ん坊をちょいちょいとつつく。
赤ん坊は色々なところができてないから、丁寧に扱わないと大変

だ。
……この子は、ぶっちゃけ色々と大変な人生を歩むだろう。
乙女ねぇは壊れているし、妊娠させたのは遺伝子検査でかなりあれな野郎だった。
なんでも、魔術回路を持っていたから道間家が末端の種馬用にスカウトしていたらしい。ホストクラブで働いており、暗示の魔術を使って大手ホストクラブのナンバー3前後を、高い酒やつまみを使って獲得しているとか。
地味に下種だな。この子大丈夫だろうか？
……私がこんな形で産ませたくせに、何を考えているのやら。
幸せすぎて呆けたのかと、私はちょっとため息をつきたくなった。
「……でも、きっといい名前を考えると思うよ？　私はちょっと変な名前にしちゃったから」
「あ～……。確かに、意味を考えた名前だけど意味が分かりにくい名前だよね～」
ちょっと苦笑いしたくなるのは、乙女ねぇの子供の名前だ。
乙女ねぇは元々農村出身で、だから「畑」か「田」の文字を入れたかったらしい。
で、いろんなことを知ってほしいって思ったこともあって、決まった名前が―
「ま、あんたも将来頑張りなよ、田知」
―そんな名前を呼びながら、私はつんつんと赤ん坊の頬をついた。
うん、すっごいかわいいし柔らかいからなんか抱きがいがある。私と誠にいの子供も、そんな感じになるんだろうか。
……いっそのこと、私達の子とくっつくぐらいのおぜん立てをしてもいいかもしれない。
そんなことを、適当に考えながら私は微笑んでいた。

そしてそれから数か月、私はぐったりしながら、漸くなくなってきた陣痛の余韻に浸りながら目を開く。
まだだ。まだ意識を飛ばしたらいけない。しっかり意識を持ったうえで、ちゃんと目に焼き付けよう。
「……あ～！　あ～！」
そんな風に元気よく産声を上げる、生まれたての赤ん坊を抱えた誠にいは、私に微笑んでくれる。
「元気な子供だよ。頑張ったね、日美子」
そう言って私を撫でてくれる誠にいは、そっと赤ん坊を私に抱かせてくれる。
赤ん坊特有なんだろうか。初めて嗅ぐにおいを感じて、私は陣痛の痛みじゃなくて幸せを感じて涙を浮かべる。
あの頃、私は自分が幸せになれるなんて思っていなかった。なったとしても、それはもう道間日美子じゃないんだろうとも思っていた。
だけど、誠にいは私の物だ。そして、その子供も生まれてくれた。
……同時に、私は何人もの子供を堕胎している。それが少し胸を痛ませる。
だから、この子には幸せになってほしい。
今迄の子供の分も、幸せを掴んで欲しい。漸く生みたいと思えた、愛する人との結晶に、幸せを掴んで欲しいと心から思える。
この香りが、私の幸せの証明だ。
そう思ったから、自然とこんな言葉が口をついて出てくる。
「……幸香。貴女の名前は、幸香だよ」
涙が湧き出てくる中、それでも私は幸香に微笑んだ。
幸せの香りを運んでくれた、私の愛しい可愛い子供。
貴女に、幸せが訪れることを願っている。
……だから、この涙はきっと嬉し涙だけだ。
罪深い道を歩んだ先の、何かどす黒い物がまとわりついた結果であっても、これは本当に嬉しいだけだ。
そう、これは絶対に嬉し涙だと、私はそう思いこんでいたんだろう。

それからおっさんに頼んで、色々と手順を整えていた。
乙女ねぇと誠にぃは喧嘩別れ的な感じで誤魔化せばいいとして、実の兄妹な私達がそのまま結婚ってわけにはいかないわけだからだ。
だからおっさんに頼んで、一体預けられる家を用意してもらった。
道間家が表の活動において利用する、事情を知らないフロントの家柄。九条家。そこの縁ある人に、養子ということで細かいところをぼかして預かってもらっている。
そして数年ほど経ったら、私と誠にぃは同性愛者だと知られたくない相手とカバーで結婚。そして誠にぃが養子として幸香を引き取り、私は第二子を作って生むという筋書きだ。
だからまぁ、二人目の子供は高校を卒業してからになるわけで。
まぁ、あれは結構きつかったから……一年ぐらいはインターバルも欲しいしな。そんな風に思いながら、私は高校生活最後の月を過ごしていた。
「っていうか大丈夫だったの、日美子ちゃん？」
「そうそう。なんか急にやせた気もするし、盲腸ってそんなにきつかった？」
「お医者さんに太りすぎってことで、病院食とか調整されてたんだよねー。いやぁ、大変大変」
あのおっさん覚えてろよ。他になんかカバーできる病名あっただろ。
おっさんにその辺りのフォローを全部任せていた自分のことを棚上げしながら、私は友達とカフェでのんびりお茶をしてた。
あ～。妊娠期間中は栄養バランスとか食べない方がいい物とかは気にしてからなぁ。砂糖たっぷり入れたミルクティー美味しいです！

……今にして思えば、よくもまぁ私はこんなことを言えたものだと思っている。
腐りきった情欲に塗れながら、反吐が出るような悪行を起こしながら。そんなことをしながら、よくもまぁこんなことができるもんだと、自分でも呆れそうになる。
ただこの時は、ひと段落ついたと思っていたからか、凄く気楽な時間を過ごせていたと思っている。
―そう、視界の隅でビルの一角が爆発した、その時までは。
衝撃が走り、数秒遅れて爆音まで響く。
「きゃぁああ⁉」
「え、なに⁉」
「事故……え、あそこ！」
友達がそれに気づいて慌てる間、私は一瞬だけだけど思考が真っ白に染まっていた。
あそこは、おっさん達が女の子を抱く為に用意していた部屋があるビルだ。
外側から位置を確認したことはない。だけど目で階層を数えれば、そこは確かにあの部屋がある階層だ。
その時になって、私はあそこに乙女ねぇがいることを思い出した。
「……乙女ねぇ⁉」
「あ、ちょ……日美子⁉」
叫びながら走り出す私を、友達は止めることができない。
咄嗟に強化魔術まで使った私の走る速度は、スクーターぐらいは余裕である。そんな速さで追いつける、運動部でもない女子は普通いない。
心臓が止まりそうになる中、私は本気で走っていた。
頭の中は乙女ねぇのことと、そして乙女ねぇがいつも可愛がっている田知のことだけ。
……この時点で、私は自分の本音を悟るべきだった。いや、少し違う。
私が乙女ねぇに黒い感情を覚え続けていたことも、誠にぃに対して

壊してでも手にしたい愛憎入り混じった感情を持っていたことも事実だ。それは嘘偽りでもなんでもない。
だが同時に、乙女ねぇが幸せそうな顔で田知を抱いているところを見て嬉しくなる感情は、乙女ねぇに対する悪感情からでもなかった。
それに、誠にぃを想う気持ちに嘘偽りは欠片もない。本当に愛していた、欲しくて欲しくてたまらなかった。私が欲しい形の上でとはいえ、幸せになってくれると嬉しいと思っていた。
異能を知らない友人とも、友情を持っていたいと思っている。本当の意味で腹の底を見せれないとは言っても、それでも心に安らぎがあったのは事実なんだ。
七緒やアイネスとの友情は本物だ。二人と一緒にいた時間は、かけがえがないと断言できる。……だからこそ、二人がいなくなったことで反転してしまったのかもしれない。
そんな自分の心を客観視できず、暴走して迷走してこんなところまできた女にとって、当然のしっぺ返しが来るのは当たり前だ。
だけど、それでも—
「—あ、日美子も来たんだ？　ふふ、驚いているかな？」
—息も絶え絶えになって駆け付けた先で、こんな綺麗な笑顔の誠にぃを見ることになったのは、他の形があってほしかったと思ってしまう。

銀弾落涙編　第三十八話　日美子忌憚―覚醒

日美子（カズヒ）　Ｓｉｄｅ

炎がいくつもの箇所で燃えている室内で、誠にぃは槍でおっさん達の頭を切り落としていた。
周囲には首が斬り落とされた死体が山ほどある。そこにいるのが全員、私や乙女ねぇを犯して楽しんでいた連中だ。
そして少し離れたところでは、赤ん坊用のベッドで泣きわめている田知がいる。
……そして、部屋の片隅には、頭から血を流している乙女ねぇの姿があった。
「な、んで……？」
混乱のあまり、当然といえることを態々聞いてしまった。
少し考えれば分かるだろう。道間誠明が、おっさん達を許す理由はない。
乙女ねぇにしてもそうだ。こんな変わり果ててしまった乙女ねぇを見たくないという、そんな感情があるとしてもおかしくない。
そして何より、今度は私だ。この流れで私を殺さないなんて、それこそあり得ない。
そんな、道間誠明の覚醒を知らない私に、誠にぃは安心させるように微笑んだ。
それが、どこか寒気を感じさせる。
だけど、誠にぃは怖がらせないように気を使った表情で私に笑いかける。
「大丈夫だよ。そりゃかなり恨んでるから暴発したし、勢い余って乙女も深手を負わせてしまったけどね。日美子をどうにかするつもりはないし、乙女も治療するつもりだよ」

この時、私は誠にぃが壊れたのだと思っていた。
実際別の意味で壊れているのだが、そういう意味ではない。
誠にぃの魔術の腕では、あんな深手を負った乙女ねぇを治せるとは思わない。私がおっさん達に頼んで用意しいた宝石魔術でも、たぶん無理だ。そんな深手だった。
誠にぃが幽世の聖杯を持っている可能性に思い至っていなかった私は。誠にぃが私に手を差し伸べていることに気が付いた。
「日美子。できれば一緒についてきてほしいんだ。やりたいことに、一緒に付き合ってくれるととっても嬉しいんだ」
美しい物を見て感激しているような表情で、誠にぃは私を誘う。
この時、私は誠にぃにどこか魅了されていたのかもしれない。
手を取りたいと思っていた自分がいる。一緒にいたいと思っている自分がいる。
それは、どす黒い悪意ですべてを裏切り蹂躙した私が、彼の純粋な悪たる姿に憧憬を覚えてからなのだろうか。
だから、あの時私は手を伸ばして—
「……ぃ……っ」
—その言葉に、ふと振り返る。
「……うぇ……ぇぇぇん……！」
ぐずる赤子を守るように、乙女ねぇは体を引きずろうとしている。
でも一センチも動かせないその体で、乙女ねぇは私に手を伸ばしていた。
「……大丈夫……日美子……助……から」
—その時だろう。道間日美子が完全に表替えったのは。
下劣な悪に蹂躙されて歪み続け、そして反転した私は。
それすら凌駕する悪意の権限に歪みを叩いて治されて、そして憎しみすら向けていた相手の本心からの慈愛で、表返ってしまったのだ。

気づいた時、私が辿り着いたのはかつて作った秘密基地だった。
思えば、アイネスが帰って七緒が行ってから一度も来たことがなかった。だからか、少しぼろくなってしまっていた。きっと、誠にぃも乙女ねぇも来てなかったんだろう。
そんな風にぼんやりと思いながら、私は真っ白になって覚えていない記憶を探すことを諦めた。
周囲を確認すれば、仮眠用に用意していた簡易ベッドに乙女ねぇを寝かしていた。すぐ近くにのクッションに、和地もきちんと寝かせている。
……その頃になって、私は自分にこびりついていた泥が全部そぎ落とされたと実感した。
肉体的な意味ではない。精神的な比喩だ。
そして、それは救いでもなんでもない。
私は今になって、漸く自分がしてきたことを実感した。
自分のことを大切に思ってきた、私の為に己を犠牲にできる人を台無しにした。海外にいる、何も知らない友人達が憎悪すら浮かべるだろうことをしてのけた。何より大事で大好きな、愛する男を想定外とはいえ暴走させてしまった。
……何より、何も知らない小さな赤ん坊に、汚濁としか言えない因縁を塗り付けた。
「……ぁ……ぁあ……ぁあああああああっ！」
堪え切れず、私は髪をかきむしりながら絶叫する。
私はいったい何をやっている。何をしているんだ。
……自分が破滅するリスクすら鑑みて、それでも相手を脅せるのなら全部しゃべればよかったんだ。それが無理でも、さっさと自殺でもなんでもすればよかったはずだ。
それがなんだ？　ずっと何も知らなかっただけの、私を大切に思ってくれる人達を、壊して汚して裏切った。その果てに、何も罪がない赤ん坊に、どす黒い汚濁を背負わせている。
「……ごめんなさい……っ」
そんな、今更どうしようもない意味の無い言葉が、口をついて出て

くる。
本当に今更だ。手遅れになっておきながら、何を被害者ぶった言葉を出している。
私は加害者だ。私は罪人だ。私は邪悪だ。
無垢な少女の恋を踏みにじった。
愛した男の心を踏みにじった。
何も知らない友人達の信頼を踏みにじった。
それも、自分を汚した連中を悪意をもって利用して。
私が邪悪でなくて何だという？　何年も前の砕けた恋心に、それも背徳的なそれに縋りついて八つ当たりをした女だぞ？　被害者であることを免罪符にして、どんな悪行をしても心を痛めなかった女だぞ？
道間日美子（私）は、決して私（道間日美子）を許さない。私が私を許すことを肯定する奴がいるのなら、そんな奴と仲良くなることは断じてない。
自分が酷い目にあっているのなら、どんな酷い目を他人に与えてもいい。そんな理屈が通るものか。
人には守るべき一線と、通すべき筋がある。その一線を踏み越えた物には、報いがなければいけないはずだ。邪悪は邪悪で正義は正義という、その区別だけは絶対に成されなくてはならない。
そう、私は絶望していた。
「ごめんなさい……乙女ねぇ」
私は後悔していた。
「ごめんなさい……アイネス……七緒……っ」
私は嘆き悲しんでいた。
そんな感情のままに、誰にも聞かれずにただ謝っていた。
そして、それでも謝らない。誠にいと、幸香に田知には謝らない。
誠にぃに謝るとするなら、それは断罪される時だけだ。そんな心の僅かな考えが、今この場で謝った気になることを許さない。
幸香と田知は無垢な赤子だ。あの子達に私の行動を謝れば、あの子達は存在そのものが罪になってしまう。
「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……っ」

もう私は、このまま朽ちるしかないだろう。
邪悪の権化がこれ以上生きていて、いったい何ができるというんだ
―
「……だぁ……ぶぅ？」
―声が、聞こえた。
振り返れば、そこには達がいた。
ハイハイで歩いて、私を気遣うように見ている。
「だぁじょぶ……？」
その声に、私は何かが醒めた。
「げぇき……だし……ぇ……？」
道間家に関係しているから、教育関係に魔術的な手法は組み込まれていた。
だからこそ、舌ったらずだけど少しだけ言葉をかけることができる。それは分かった。
だけど、それが、私を、気遣う言葉だった。
……その言葉に、私は気持ちを奮い立たせる。
私は邪悪だ。罪深い女だ。この業は私が私である限り背負っていくべきもので、脱ぎ捨てることを誰にも許しはしないだろう。
だけど。
私が邪悪であったことと、その後も邪悪であることは別だ。それはただの開き直りだろう。
私が踏みにじったからといって、乙女ねぇがこのまま踏みにじられたままでいいわけがない。そんなままでいいわけがない。
そして何より。幸香は違う。田知（この子）も違う。
私が邪悪だという理由で、この子達が悲劇のままで終わっていい理由なんて、かけらもない。
「うん、そうだね。……そうだよね」
そうだ。ここで終わるな。
許される為じゃない。償う為でも贖う為でもない。
ただ純粋に、この子達を嘆きのままで終わらせない為に。
「……幸香（あの子）も生きてる」

立ち上がれ。
「田知(君)も生きてる」
忘れるな。
「アイネスも、七緒も生きてるし」
開き直るな。
「……乙女ねぇも、死んでない」
自棄(やけ)になって投げ捨てるな。
「……私は間違えた」
邪悪だったからって、邪悪でい続けようとするな。
「道を踏み外した」
正義を踏みにじったからって、正義をないがしろにするな。
「越えちゃいけない一線を越えた」
何が正しくて何が間違っているか、考え続けることを放棄するな。
「……それでも」
私は涙をこぼしながら、それでも決意を決める。
これは嘆きの涙じゃない。
大切なことを思い出させてくれた、田知(この子)に対する感謝の涙だ。

「……そのままでいいわけがない」
そっと田知の頬に触れながら、私は自分を見つめ直す。
愚かな邪悪だ。間違えた女だ。罪を犯した罪人だ。
だけど、そこで終わって何もかも台無しにして、悲劇をまき散らす人生を続けていいわけがない。
そう思う私の前で、田知は私を元気づけるように笑顔を見せてくれる。
思い込みだろう。偶然だろう。幼子にそこまで求める道理はない。
それでも、私は感謝の涙と笑顔をもって、彼に応える。
「君が笑顔をくれるなら、それが間違ってないって……少しでも、示さないと……ね」
そう、この子の笑顔を裏切るな。
今迄が邪悪であったから、そのまま悲劇と嘆きを生み続ける。そん

な道理を認めるな。
「元気を出すし、頑張るよ」
そう、私が邪悪であったこと。尊ばれるべき正義がこれからも踏みにじられ続けること。
それはイコールじゃない。むしろ逆だ。
邪悪であることを認めたのなら、そのままでいることだけは自分に許すな。
だから、その想いを偶然と言え浮かべさせてくれたこの子に、今できるお礼を返したい。
「せめて私が不幸にした分は、君を幸せにしたいし、償いたい」
―そっと、私はこの子に微笑んだ。
「君のおかげで、絶望したままでいいわけがないって気づけたから」
ありがとう、田知。
私が生み出した悲劇の結果。でも同時に、誰かを心配できる心優しい素質がある子。
君は本当に優しい子だ。そう成長できる余地がある。
「だから……ね？」
そんな子に、私は意味もなく願いを持った。
私（誰か）を笑顔にしてくれる、そんな君の良さを残してほしい。
そんな気持ちを込め涙をこぼしながらを私は笑う。
「ありがとう。そして、笑顔でいて……欲しいかな」
そんな笑顔を共に、私は誓う。
この子の笑顔は裏切らない。
少なくとも、裏切らない生き方をし続けよう。その為に命を懸けていこう。
命尽きるその時まで、私はこの子の笑顔に恥じない自分でい続けよう。自分が許せなくても、この子が笑顔を向けてくれたことだけは許せるようになりたいから。
……瞼の裏に、今でも焼き付くその笑顔。
私の泥を流してくれたその笑顔に誓い、私は私をやり直すと、心の誓った。

銀弾落涙編　第三十九話　日美子忌憚―銀錬

カズヒ（日美子）　Side

だが残念なことに、私は彼を守り切れなかった。
当然だが、道間家は誠にいの凶行に対して厳罰を決めていた。
既にある程度調べていたこともあって、誠にいがこの凶行に至る根幹―すなわち私や乙女ねぇの凌辱―は、本家や一部の有力者には知れ渡っていたようだ。
既に道間家は、この事態を表に出さない為に立ち回っていた。大王派にすら最小限の情報流出でとどめることにしていたようだ。
街中の要点や市街に出るルートに、道間家の手の者が配備されていた。これではどうあがいても、乙女ねぇや田知を連れて出ることは不可能だ。
反面表ざたにしない為に、最小限の人員にしているから物資の調達は何とか可能だった。だけどいつかジリ貧になると、既に私は分かっていた。
だから、私はある程度の時が経ってからは聖杯戦争に全てをかけることにしていた。
博打なのは分かっている。だけど私の頭で考えられる範囲内で、他に打開策は思いつかない。そして他の打開策を考えている余裕も知識もない。
少しずつ準備をしながら、私は聖杯戦争を引き起こす為にとにかく準備を整えた。
……だけど、その準備が大詰めになった頃に事態は動いた。
隠れ家にしている秘密基地が見つかり、道間家が用意した異能の部隊が攻撃を仕掛けた来た。
考えるまでもなく、今までが幸運だと分かっている。いくら誰にも

伝えずに作り、天才的な能力を持つアイネスが協力した秘密基地とはいえ、子供五人が作った魔術工房を一流の魔術師や異能の使い手が気づかずにいられる方がおかしいのだ。

……それでも、私は諦めることだけはしなかった。

内蔵がえぐり取られた。折れた肋骨が肺を突き破った。頭蓋骨が砕け、破片が脳に食い込んでいる。心臓の外壁も破裂している。

そんな、当たり前に考えて死んでなくても動けなくなる状態で、私は第一陣を全滅させた。

そして早々に離脱する第二陣だけど、彼らが追撃することはないだろう。

……単純に、聖杯は爆発する。それに巻き込まれないようにする為の措置だ。

控えめに言って、大爆発が起きることは間違いない。そして物理的に動けなくなっている今の私では、乙女ねぇと田知を連れて逃げる余裕もない。そもそも外周部が逃がさない。

撃退できたことで気が緩んでしまい、私はもう動けない。まだ時間は正午前後なのに、晴れていると分かりながらも視界が暗いのも致命的だ。このままなら、聖杯が爆発する前に私は死ぬ。

というか、何で死んでないのか自分が信じられない。

自覚できる範囲で内臓が五つは破裂しているし、心臓も負傷している。肺には完璧に穴が開いているし、骨も何本も砕け散っている。気が抜けて倒れたから流れた血だけでも、数リットルは流れ落ちているだろう。

ショック死も失血死もしてないことが信じられない。関節が砕けていなければ、多分今でも動けているかもしれない。

だが、どうあがいても物理的な破壊はどうしようもない。

どれだけ気合を入れようと、物理的に駆動が不可能では動かしようがない。これはそんな当たり前の限界だ。

当然だ。仕方がない。不満はあるし納得できないけど、認めないといけない。

頑張っても叶わない夢はある。諦めるしかない願いはある。むし

ろそうでなければ、一度夢を持ったら叶える以外の選択肢が認められない、そんな素晴らしくもない夢の奴隷になってしまう。
夢は祈りであって呪いじゃない。自発的に歩いていくものであって、強制的に動かされるものではない。
こんなこと、もっと早くに気づけばよかった。
他人にまで呪いを振りまいて、結果がこのザマ。
私が死ぬのは自業自得だけど、乙女ねぇや田知を巻き込んでしまった。本当に、救えない。
あ～……クソ。
既に真っ暗になりかけている視界が、涙でにじんでくる。
乙女ねぇと田知を巻き込んで死ぬのか。本当に、救えないなぁ……
私は―
「……日美、子……っ」
「……あぁ……くそ！」
―その声に、私ははっとなった。
ゆっくりとしか動かせない首を動かせば、そこには泣きそうになっている面影がある二人の姿がある。
どっちもボロボロで、血まみれで、傷だらけで。
そんな、泣きそうになっている二人の女性は―
「……アイ、ネス……七緒……？」
―なんで、この二人が。
私は驚きで、ぽかんとなってしまった。
そんな私に、二人は殆ど倒れこむように屈み込んだ。
「……ゴメン。説明してる時間が、ない。……乙女ねぇや田知を……いや、二人だけでも……っ」
自分でも無理だと分かっている。だけど、それでも逃げてほしい。
できることなら乙女ねぇや田知を連れて。それが無理でも、せめて二人だけは逃げてほしい。
だけど、二人とも静かに首を横に振った。
「悪いが無理だ。既に本家の連中は、大王派の力まで借りて結界で裏山（ここ）を包み込んでいる」

アイネスがそういうなら、そういうことか。
……最悪でも、此処が吹き飛ぶだけのすればいい。そういう判断で安全を確保したわけだ。
逆に言えば、爆発するまでは裏山から出ることはできない。アイネスでも無理ならば、もう詰みだ。
「ごめんなさい……パパが……ごめんなさい……っ」
七緒は七緒で、泣きじゃくりながら私に謝っている。
それはつまり―
「そっか。知っちゃったんだ」
―全部、知っているんだ。
なんだろう。どんな感情なのか分からないや。
「……私からも、謝罪させてくれ」
アイネスも、目を伏せて私に謝ってくる。
「……私達は、友がずっと苦しんでいることにも気づかず……いや」
言い淀んで首を振るアイネスは、本当につらそうな表情だった。
「……友達面をしていた事こそ謝罪すべきだろう。本当に……すまなかった……っ」
「……それは、違うよ」
そうだ。それは違う。
「助けも求めず……勝手に呪って……乙女ねぇも誠にぃも台無しにした。そんな私が……悪いんだ」
「そんなわけない！　パパ達があんなしたのが一番悪いでしょう！
日美子は被害者じゃない！」
口から血をこぼしながら、七緒はそれを否定する。
だけど違う。それは違う。
「被害者だからって何もかもしていいわけがない。私の罪は、おっさん達の被害者って免罪符で、消していいわけが……ない」
そうだ。そこだけは違う。
おっさん達が諸悪の根源だろうが、私が大きな罪を犯した悪であることに変わりはない。
……駄目だな。もう視界がろくに見えやしない。

「……本当に、ゴメン。私こそ、二人の友達なんて……言えないや」
そんなことを謝ってしまう。
「乙女ねぇと田知も巻き込んで、二人まで巻き込んで……死ぬのかぁ。……幸香も、只じゃすまないのに……っ」
「……大丈夫。お前の子供だけは、大丈夫だ」
アイネスが、静かに首を振るのが気配で分かった。
幸香だけは、大丈夫？
それが正直信じられなかったけど、アイネスだけでなく七緒も頷いていた。
「……その辺り、パパ達は上手く隠してたわ。本家の連中は、あんたが子供を産んだことにも気づいてない」
「証拠関連も可能な限り抹消した。だから、幸香がすぐにどうにかされることはまずない」
……そっか。
「……ありがとう。そして、本当に……ごめんなさい」
ほっとしたのと申し訳なさで、また涙がこぼれていく。
ああ……くそっ。
アイネスや七緒まで巻き込んで死ぬのが、本当に情けなくて涙が出る。
私は結局、どれだけの人を巻き込んで死ぬんだよ。
だけど、そんな私を弱弱しく二人は抱きしめてくれる。
「こちらのセリフだ。友にこれぐらいのことはさせてくれ」
「友達だもんね。……せめて、地獄の沙汰で弁護ぐらいさせてよ」
その言葉に、更に涙がこぼれてきた。
「……いいの？　まだ、二人の友達でも？」
暴走する聖杯の臨界が始まる中、私はそれが訊きたかった。
これだけのことをして、乙女ねぇや田知ごと二人を巻き込んで死ぬ。
そんな私が、本当に二人の友達でいいんだろうか。
だけど、そんな私を抱きしめる力は強くなった。
「「もちろん」」

……そっか。
私は少しだけ救われた気分で、天を仰ぐ。
「ありがとう、二人とも。……そして、ごめんね……乙女ねぇ、田知」
結局、二人を助けることはできなかった。
これだけは絶対に心残りだ。どうあがいてもこの後悔は、拭えない。
「そうだな。死んだらあの世で謝るといい」
「一緒に、頭を下げてあげるわよ」
二人が慰めてくれた直後、聖杯は限界を迎えて崩壊する。
……一抹の救いと多くの後悔。
それが、私が末期に抱いた感情だった。

そんな感情と光景が切り替わるように、道間日美子は名無しの女として覚醒した。
「……え？」
唖然として周りを見れば、そこは間違いなく日本じゃない。
海外だ。それも、スラムと廃墟を足して二で割ったような場所にいる。
訳が分からない。記憶が混乱している。
そして、私の体も明らかに変わっている。
立っているのに視点が小さい。両手を見れば肌の色も体つきも全然違う。というか、さっき自分が言った声も明らかに道間日美子のそれじゃない。
……直感的に魔術回路を起動させようとするが、そもそも回路が開いていない。後でしっかり開いて固定させておかないとと思いつつ、顔を動かすとガラスの破片と焦げて黒くなっている壁を見つけた。
それを合わせて鏡のようにすれば、そこに映っているのは物心がつくぐらいの幼子が映っている。

顔つき、髪、目。全部外人のそれだ。まかり間違っても日本人のそれじゃない。
完璧に混乱していた。むしろ混乱しすぎて一周回って思考がさえてるところまでである。
これは……あれだ。
記憶を持ち越したまま転生しやがった。
……ただし、状況は致命的に悪い。
これはあれだ、私は孤児だ。しかも生活環境も致命的に悪い。
たぶんだが、これ確実に私は死ぬだろう。
そう思いながらも、私はどこかで納得していた。
地獄の沙汰を受けることなくよみがえる時点で問題だけど、地獄のような環境で死ぬのならまだマシだろう。
まかり間違って幸せな家庭に育てられる方がアレだ。問題がある。
地獄に落ちるべき女が、悲惨な環境で二度目の人生を終える。
それはまぁ、当然のことで―
「……うぇ……ぇぇぇぇん」
―その言葉を聞いて、私は咄嗟に振り返った。
そこには私と同じぐらいの、小さな女の子が泣いていた。
考えてみれば当然だ。こんな悲惨な環境があるのなら、そこにいる孤児は一人や二人では断じてない。私以外にいるに決まっている。
そんな彼女を見て、私は自分の諦観を投げ捨てた。
そもそも環境的にあれだ。寒すぎてこのままだと凍死する。
周囲を確認してカーテンの残骸を見つけると、それを引きちぎるようにして確保。それで私はその子を含めてカーテンで包まった。
「……大丈夫？　あぁもぅ……凄く冷えてるじゃない」
これは間違いなくあれだ。さっさと何とかしないと冗談抜きで死ぬ。
今すぐ魔術回路を開いて固定化して、取り合えず火属性魔術で暖をとらないと。……水と食べ物も確保しないといけない。
やるべきことを考えながら、私は一度考えこむ為に目をつむる。
そこに、あの時の田知の笑顔が焼き付いている。

……そうだ。私がどれだけ邪悪であろうと、その所為で罪のない者達が死んでいい理由にはならない。
何より、あの子が向けてくれた笑顔を裏切ることはない。その笑顔を間違いには断じてしない。
私は、これからどう生きるかを決めた。
私が邪悪であったのなら、せめて悪をもって悪を喰らおう。
悲劇と嘆きの敵対者として、毒を以て毒を制する。
綺麗ごとだけではどうしようもない悲劇を、悪をもって打倒する必要悪。
……暗闇の中にいる正しくあるべき者達が、道を踏み外さない為。せめて一つの灯(ともしび)として。彼らを更なる闇に引きずり込もうとする者達を焼き滅ぼす炎として。
「……貴女、名前は分かる？　私は……カズヒっていうの」
これが、道間日美子がカズヒ・シチャースチエとして活動することになるきっかけ。
道間日美子が死に、カズヒ・シチャースチエが始まった瞬間だった。

銀弾落涙編　第四十話　銀弾装填、忌憚の先に笑顔の花を

和地Ｓｉｄｅ

俺は、カズヒ姉さんの過去を歩いていく。
彼女の苦しみを。
彼女の後悔を。
彼女の過去をその目に焼き付けながら、俺は一歩を一歩を踏み出し、そして辿り着いた。
鎖に絡め捕られ、虚ろな目を向けるカズヒ姉さん。
俺は、そんな彼女の目の前に立ち、そして抱きしめた。
……いや、何やってんだ俺。
いろんな意味で感情がパニックになった。感極まって暴走した。
あ、あわわわわわわわ!?
「……何、やってるの……？」
しかも起きたぁあああ!?
ええい！　こうなればこのままいくぞ！
「……迎えに来た。帰ろう、カズヒ姉さん」
「状況が、分かってるの？」
カズヒ姉さんは、そうそっけない反応を返した。
「……見たんでしょう？　私の過去」
カズヒ姉さんはそう告げる。
「多分だけど、乳語翻訳（パイリンガル）をいろんな異能で調律する形で心を繋げたんでしょう？　今の私の精神状態なら、あの過去を見せつけたと考えるべきだと思うわ」

よくお分かりで。
まぁ、此処で隠すのもあれだな。
「……あぁ。しっかりと見た」
素直に答えると、カズヒ姉さんはうつむいた。
「なら分かるでしょう？　私は―」
「―俺はカズヒ姉さんと一緒にいたい。その気持ちがとても強くなったよ」
俺がそう切り返すと、カズヒ姉さんは驚いたようだ。
まぁ、驚くところはあるんだろう。だが素直な想いだと断言できる。
「壮絶な過去だったな。大変な過去だったな。罪深い過去だったな。悲惨な過去だったな」
ああ、それは間違いない事実だ。
道間日美子は間違いなく邪悪に生きた。それはもう事実だ、変わる余地はない。
だけど、そのうえでだ。
「その上で、言いたいことが二つある」
俺は、少し体を離してカズヒ姉さんに向き直った。
「愛している、カズヒ姉さん。結婚を前提に付き合ってくれ」
まずはこれだ。
それにカズヒ姉さんは面食らっているようだけど、とりあえずもう一つも言わせてほしい。
「そしてもう一つ」
そう。これはもっと重要なことだ。
最悪告白が断られるのは良しとしよう。
だけど、これだけは伝えておきたい。譲れない。
目を伏せ、焼き付いたその笑顔を思い出し、そして目を開けて彼女を見る。
「……今の俺があるのは、貴女のおかげだ。本当にありがとう」
この感謝の言葉は、絶対に譲れない。
その言葉に、カズヒ姉さんは困惑している。

まぁ、そりゃ困惑するだろう。
だけどいい機会だから、全部話させてくれ。
「……俺が涙の意味を変えたいのは、貴女が流した嘆きの涙を、笑顔でこぼさせることができたからだ」
そう、始まりはそこだった。
道間田知が、道間日美子の涙の意味を変えることができた。
道間日美子が、道間田知に願いを告げて笑ってくれた。
それがあるからこそ、九成和地は涙換救済（タイタス・クロウ）としてここにいる。
「貴女がくれたあの笑顔があるから、俺は誰かの涙の意味を変えれた。この事実は、何があっても変わらない」
そう。
涙換救済が助けた人は、道間日美子の笑顔が原点にあるんだ。
そして―
「俺の笑顔が貴女を再起させる力になれて、本当に嬉しいと思っている」
―原点たる笑顔は、俺自身が導いたものでもある。
本当に何でもない、何も分かってない子供の気遣い。
それが、道間日美子を一歩引き戻すことができた。そして彼女の笑顔に誓った決意が、いくつもの涙の意味を変えることができた。そして俺の笑顔に誓った彼女は、いくつもの正義を守り邪悪を祓ったのだ。
この事実は、道間日美子の罪業と同じだ。どうなったところで変わらない。
「あの日、お互いが瞼の裏に焼き付けた笑顔。それに誓った決意は、間違いなく多くの人を救ったんだ」
だから、俺は心からこれを言える。
「……これからも、お互いの笑顔に誓って涙（誰か）を変（救っ）えて（て）生きていきたい。涙換救済（タイタウ・クロウ）は悪祓銀弾（シルバーレット）と並び立っての存在だと、心の底から思えるから」
罪業も嘆きも消せないのなら、救いも笑顔も消せないんだ。
過去は変わらない。だからこそ、瞼の裏の笑顔に誓って生き抜いた

結果も変わらない。誰かが何人も救われた事実も、紡いだ絆も変わらない。
「カズヒ姉さんは自分を嫌っていてくれて構わない。嫌いになって当然だしな」
そりゃ自分のことを許せないだろう。そんなことは分かっている。
だけど―
「……そんなカズヒ姉さんを誰かが好きでいることを、カズヒ姉さんが誰かを救ってきた人間だということを、否定することだけはしないでほしい」
―そんな自分が成してきた善行と、向けられる好意は否定しないでほしいと心から思うんだ。
「愛している、カズヒ姉さん。貴女の笑顔に誓った決意は間違ってなかった。俺はあなたと共に笑顔の誓いを成し遂げあいたい」
これが、俺の本心だ。

Other Side

嫌われると、心のどこかで思っていた。
受け止めてはくれるだろう。だけど、今までのように思ってくれるだなんて自信はなかった。
それだけのことをしてきたと分かっている。罪深いことをしたのだと分かっている。
だけど、彼は笑って受け止めてくれた。
……あの時、田知(あの子)の笑顔に誓った決意。あの子もまた、自分の笑顔に誓ってくれた。
その誓いを胸に、自分もあの子も多くを救ってきた。その事実もま

た、罪業と同じように変わらない。
あの時、私を救ってくれたその笑顔。彼もまた、私の笑顔を胸に本当に立派な男になって笑ってくれる。
その救済は私がいたからこそだと。私が救ってきた成果は、罪業で打ち消されはしないのだと。彼は胸を張って断言する。
……自分を好きでいることは、それでもできない。
だが、それでもいいと言ってくれた。
私が私を好きになれないことを、彼が私を好きでいてくれることは矛盾しない。そのうえで、私を好きな彼を否定することもしたくない。
……瞼の裏の笑顔は、その真実を知ってなお、私に笑ってくれている。その笑顔の持ち主もまた、罪業を知ってなお私を誇って笑顔を向けてくれている。
かつて私を救った笑顔が、またしても私を救ってくれた。
私が誓った笑顔の持ち主。私の笑顔に誓った彼は、多くの涙の意味を変え、それを誓ってくれた私の成果でもあるといってくれる。
「……いいの？　私、実質的におばさんよ？」
「異形社会でなら二十年足らずの差はないも同じさ」
「私が貴方のお母さんにしたことは、許されないわよ」
「それは二人に言ってくれ。……いや違うな」
「あ、やっぱり―」
「―カズヒ姉さんがいなければ、俺は生まれなかったわけだしな。つまりカズヒ姉さんがいたからこそ、俺は多くの人達の涙の意味を変えることができたんだ。」
「……そうくる？　というか、私はこの生き方を変える気なんてないわよ？」
「構わないさ。俺だって涙の意味を変え続けるしな」
「……もし悪を成すというのなら、私は絶対あなたを倒すわよ？」
「逆に姉さんが暴走するなら、俺が体を張って止めるとも」
素直になれずに言い訳をしても、さらりと全部返してくる。
ただ、何時の間にか顔が真っ赤になってプルプル震え始めてきた。

「……それでその、できればそろそろ答えを……ですね？　割と心臓バックバクで緊張してるんですが。……は、吐きそう」
「……プフッ！」
そのくせ、妙なところで年相応だ。
……何かが馬鹿らしくなってきた。
そうだ。彼はこちらが出した条件を乗り越え、間違いなく重い過去の真実すら乗り越え、こんな私を選んでくれた。
だからこそ、まだだ。
全身に力を入れる。
強引に体を動かす。
拘束を引きちぎるように、私は和地に顔を近づける。
「……和地」
「ひゃい……っ!?」
強引にかつ力強いが、それでもその口にキスをする。
そうまだだ。こんな程度でとどまってもらっては困る。こんなところでとどまるつもりもない。
まだ助けよう。まだ救い上げよう。まだ涙を変えよう。まだまだ笑顔に誓い続けよう。
自分が好きになることはなくても、誰かが自分を好きでいていくれることを、自他問わず認めさせるために。
私も、彼も、悪を祓って涙を変えよう。
誰かを救い続けることこそ、瞼の裏に焼き付いた、お互いの笑顔に掲げた誓いなのだから。
「……不束者で問題児ですが、これからよろしくお願いします」
一瞬きょとんとした彼は、すぐに嬉しそうな顔になった。
「……お、お願いされますっ」
妙なところで初々しい反応に、思わず本気で笑ってしまった。

だからこそ―

イッセーＳｉｄｅ

「……まだだっ!!」
気づいた時、カズヒと九成が声を合わせて響かせた。
モデルバレットの右手が動き、フォースライザーに手を伸ばす。
それを止めようとする咄嗟の左手を、九成がしっかりと掴んで食い止める。
同時に、九成が持っている魔剣が強い輝きを放っていた。
『な……冗談でしょ!?』
狼狽するモデルバレットの右腕は、二つの意志がぶつかって拮抗する。
ああ、やったんだな九成。
待ってたぜ、カズヒ！
「……やっちまえぇぇぇぇぇぇ！」
俺は全力で声を上げる。
ああそうだ。馬鹿なこと言ってんじゃねえ。
「今更お前の過去を知ろうが、お前は俺達の仲間のままだ！　根性入れろよ、十八番だろ！」
全力で俺は声を飛ばす。
ここまで来たんだ。お前がお前の手で乗り越えなくてどうするんだ！
「そうよ！　今更私達が、貴女の貢献を否定するわけないでしょう！」
「やって見せろ。悪祓銀弾（シルバーレット）の強い意志は、俺や兵藤一誠にも負けんは

ずだぞ！」
　リアスもサイラオーグさんも、声を飛ばしてくれる。
「負けんじゃねえよカズヒ！　人に偉そうなこと言ってんだから、自分もやって見せろや！」
「師匠！　私達を引っ張り上げてくれた師匠は、こんなところで終わらないはずよ！」
「カズヒがいないとカズ君が元気でないでしょう？　それとも先生達が独占しちゃっていいのかな～？」
「カズヒ！　和地君がここまで頑張ってるんだから、頑張って！」
　ベルナも、春菜も、リヴァさんも、インガさんも、カズヒを呼んでくれる。
「……カズヒぃ。戻ってきて、私達にはあなたが必要なのよ！」
「ここまでやってダメでしたなんて、絶対許さないんだからぁあああああっ!!」
　リーネスと南空さんも、大切な友人の為に声を張り上げる。
　九成が妨害を止める中、カズヒとモデルバレットの拮抗はまだ崩れない。
「まだだ……そうまだだろう、カズヒ姉さん……っ！」
　九成が吠えるけど、このままだとどうなる？
　オーラの放出がデカすぎて、俺達は近づけない……っ！
「……カズヒ、姉さん―」
　オーラに吹き飛ばされそうになりながら、九成はそれでもカズヒから離れないように力を籠め―
「「……カズヒ！」」
　―その背中を、ヒツギとヒマリが支えていた。
　何時の間に。……いや、そうだよな。
　二人だって、カズヒが大事に決まってる！
「……道間乙女じゃなくて、ただのヒツギが言わせてもらうよ。……私はあんたの友達じゃんか！　それは、前世がどうだろうと変わらないし！」
　ヒツギの声がきっかけになったのか、少し動く。

「一緒に卵掛けご飯食べますわよ！　前世(昔)がどうあれ私たちは友達ですの。私はカズヒと一緒に卵かけご飯が食べたいですの！」
ヒマリの声が後押しになって、九成も一歩を踏み出した。
「……まだだ……まだだ……まだだ……まだだ……そう……まだ……だぁっ！」
カズヒが声を上げて、少しずつ、少しずつ動いていく。
『ざっけんな！　乙女ねぇを踏みにじったカズヒ(こいつ)を、あんたら(道間乙女)が助けるとかあほくさいんだよ！』
モデルバレットがオーラの放出を過激にするけど、それでも二人は九成を押す。
「あのねぇ……っ」
「そんなの……っ」
二人は強引に魔力で押し切り、そして息を同時に吸い込んだ。
「今はどうでもいい！」
そして、強引にモデルバレットに組み付いて動きを封じる。
その二人の姿を、九成は涙すら浮かべてみて、カズヒの手を取った。
魔剣の光は更に強く輝き、それに照らされながら九成は吠える。
「帰ってきてくれカズヒ姉さん。俺達はあなたが大好きだ！」
その言葉が―
「―ええ、そうよ。カズヒ(私)の人生は、まだ続くのよ!!」
―ゼツメライズキーを引き抜いた。
ぶん投げたゼツメライズキーが、軽い音を立てて地面に落ちる。
そのまま疲れたのか崩れ落ちようとするカズヒを、九成が慌てて抱き留め―
「「カズヒ！」」
「カズヒぃいいいいい！」
「カズヒぃ！」
―る前に、ヒマリとヒツギが抱き留め、駆け寄ってきた南空さんとリーネスが九成を跳ね飛ばした。
「九成ぃいいいいいっ!?」
思わず俺は絶叫するけど、四人は九成に向いていない。

四人とも涙目になって、苦笑しているカズヒを抱きしめていた。
「……四人とも、痛いって」
「やかましい！　散々心配させたんだから我慢しなさいよもぉおおおおお！」
大泣きする南空さんに、カズヒは苦笑している。
「まったくもぉ。……本当に心配したのよぉ？」
「ほんとゴメン。……それに、ありがとう」
涙目になったリーネスに、カズヒは撫でられたままで居られている。
そしてヒツギもヒマリも、カズヒを抱きしめていた。
「……ま、正直色々と複雑だしぎくしゃくもするだろうけどさ？　ざっくりまとめると―」
「―道間乙女は日美子のことが大好きで、私とヒツギはカズヒのことが大好きですの」
そんな風に抱きしめながらの二人に、カズヒは寂しげに、だけどしっかりと笑いながら頷いた。
「そうね。乙女ねぇはもういないけど、その残滓を受け継いだ子が二人もいる。……そんな二人を、私は大事にしたいもの」
カズヒは、そう受け止めたのか。
……これからどうなるかは分からない。
だけど、カズヒ達は大丈夫だと思う。
「……ありがとう。私もみんなが、大好きよ」
良かったな、カズヒ。

「……耐えろ、耐えろ俺……っ」
あと九成、ドンマイ！

銀弾落涙編　第四十一話　役者、超集う

九成Ｓｉｄｅ

ちょっとへこんだ。ちょっとダメージが入った。
ただまぁ、それ以上に得たものは大きいはずだ。
……カズヒ・シチャースチエを助けることができた。この事実に比べれば、俺のダメージなんて大したものじゃないだろう。
俺はかつての友やその魂を継いだ者達に囲まれる、カズヒ姉さんにほっとしている。
ああ、それがみんなの答えなんだよ、カズヒ姉さん。
カズヒ姉さんが自分のことを嫌い続けることと、皆がカズヒ姉さんを好きでいてくれることは矛盾しない。矛盾しないんだ。
自分のことを嫌ってくれていい。それでも、皆がカズヒ姉さんを好きでいてくれることだけは、否定しないでくれればいい。
ああ、だから―
「……ハイストップっ」
「逃がさないよ」
―その時、声が響いて俺は振り返った。
見れば、英雄派のジャンヌ・ダルクがリヴァ先生が操って生まれた土壁に逃げ道を塞がれ、木場の龍騎士団が更に包囲していた。
いたのか。というか、逃げようとしてたのか。
そういえば、フローズヴィトニルと魔獣達がいないな。どさくさに紛れてあっちは逃げたのか？
どうやらまだまだ終わりそうにないな。これはどうしたものか―
「……これは想定外だね。というより、どういうことだ？」
―その時、更に声が届いた。

更に土壁に一線が入り、あっさりと切り落とされる。
そして現れるのは、聖槍を肩に担ぎ、初老の男を従えた青年。
サーヴァント、カラティーン・ダーナを従えた、曹操がそこにいた。
「おいおいジャンヌ、情けねえなぁ。ヘラクレスも倒れてるし、ゲオルグもやられたってのか？」
カラティーンはそうからかうように言いながら、こっちににやりと笑ってくる。
ここでこいつらまで出てくるとは、流石に厄介な展開だな。
「……まさか、生きているとはね。心臓の肉塊が発見されたうえ、君の性格で無事なのに出てこないなんてことはないと思ったんだけど……」
曹操はかなりイッセーを警戒しているな。
むしろあれだ。畏怖とかそんな感じだな。
まぁ、そこに関しては同感だ。
「そういやお前、体はどうしたんだ？　アジュカ様が魂は無事かもしれないって言っていたけど、体はダメだってことで確定してたんだけどさ」
そこがさっぱりわからない。
「そもそもサマエルの毒に魂はどうやって耐えたのかしら？　そこも分からないわね」
リヴァ先生も首を傾げるけど、イッセーはちょっと寂しさと呆れが混じったような複雑な表情を浮かべていた。
「歴代の残留思念が犠牲になってくれたおかげで、籠手の宝玉に魂を移すことができたんだ。で、オーフィスが通りがかったグレートレッドに飛び移ってさ。さっきグレートレッドと一緒にシャルバが作ったでかい魔獣を、グレイフィアさん達と協力してぶっ飛ばした」
……。
えっと、その―
「……よく事情は分からないけれど、胸を張りなさいイッセー」
カズヒ姉さんが、割とストレートにそういった。
「え、そう？　自分でもめちゃくちゃなことしてるって自覚はあるけ

ど―」
「別にそんなことはないでしょう？　確固たる貴方の積み重ねの成果よ」
『『『『『『『『『どこが!?』』』』』』』』』
イッセーに対する姉さんの返答に、総ツッコミが飛んだ。
敵も味方もイッセーすらも、心が一つになったよ。
「ふざけるな！　グレートレッドがたまたまあの空間に現れるなど、その時点でイレギュラーというレベルではないんだぞ!?」
ガチな剣幕で曹操が吠えるが、カズヒ姉さんはむしろ疑問すら浮かべている。
「そうでもないでしょ？　オーフィスと絆を結んだからこそ、オーフィスは怨敵を利用する形ででも彼を助けようとした。たまたまグレートレッドが通りがかったことより重要なのはそこじゃない。」
そっちの主眼を置いているのか！
言われてみれば確かにそうかもしれないが、それでもちょっとこれは無理があるんじゃないか……？
俺達の信じられないものを見る視線に、カズヒ姉さんは肩をすくめた。
「何より、歴代の残留思念が身を挺したのは、彼らが後進を怨恨に引きずり込むのではなく、未来を行くことを認めたからでしょう？　それはイッセーが彼らと対話を試みてきたからなんだから、確固たる裏付けと下積みあっての成果よ。重要なのはそこでしょうに」
「あ、そっちに主眼を置いてるのね」
「言われてみるとそっちはそうねぇ」
鶴羽とリーネスが感心しているけど、まぁ確かに？
そしてカズヒ姉さんは肩をすくめると、鋭い視線を曹操達に向けた。
「……で？　ここで逃がす理由はないし、こっちも色々あってテンションがおかしなことになってるの。……投降しないなら覚悟してもらおうかしら……？」
不敵な笑みすら浮かべて、カズヒ姉さんのオーラが燃え上がってい

る。
た、頼も恐ろしい……っ
「私は、私の悪意で誕生した男に、私に恋焦がれることを認めたもの。それを周囲に認めさせる為にもやることしっかりやる必要があるのよ。とりあえず、手柄を上げた方がいいと思わない？」
……。
あ、そっかぁ。
俺ってば確かにそうなわけだし、俺はまったく気にしないどころかもはや成果込みでカズヒ姉さんの功績にする気だったけど、そういう考え方は確かにあるよなぁ。
いやでも、そのうえで今の発言はそういうことだ。
よし、とりあえず—
「……いよっしゃぁあああああああっ!!!」
—ガッツポーズ！　ガッツポォオオオオオッズゥッ!!
「言質とったから！　言質とったからなカズヒ姉さん！　今度デートな！　今度デート！」
駄目だぁあああ！　はしゃぐ！
テンションが止まらない！　いやっほぉう！
「はいはい。それどころか今夜にでも処女を捧げてあげるわよ。……松田と元浜に不公平が生まれそうだから、後ろの方もお願いね？」
え、マジで？
やっべぇテンションが凄いことになってきたぁあああああ!!
俺はもはや立つこともできず、倒れながらごろごろゴロゴロ転がっていく。
駄目だ。にやついてしまって止まらない。
テンション爆上がりだぜイィイイイヤァアアアアッホォオオオウッ!!!
「いよぉっしぃ！　お前らさっさと投降するかここで倒されるかどっちか選べぇ！　今の我が喜びに水を差す奴、問答無用でぶった切る!!」
「そろそろ落ち着け、な？　よそでやれよな？」

ベルナが俺に氷を置いて冷ますけど、でもでもでもでもこれってテンション上がるって。
いやったぁ！　苦節五か月ちょっと、ついに俺はこの領域に到達したぞ！
それも俺の人生の原点たる女性。俺を人生の原点にした女性。そして来世で巡り合って、肩を並べて戦った女性。
初っ端に一目惚れして、ずっと見続けて惚れ直して、そして今ここにＯＫが貰えたわけだ。
これでテンション上がらなくて何で上げろってんだ、いやっほぉう！
さぁ、それでお前らはどうするつもりなんだ？　あぁん？

『―これはこれは。中々興味深いことになっておりますな』

その時、空間が歪んで一人の死神が現れた。
このタイミングで今度は誰だ？
「……プルートか。察するに、オーフィスを狙っているのかな？」
曹操がすぐに気づくが、そういうことか。
『ええ。ハーデス様の命令ですので、是が非でもオーフィスはいただきます』
そう告げるプルートが鎌を構え―
「―いや、お前は此処で滅びてもらう」
―そこに、今度はヴァーリまでもが現れた。
「……おやヴァーリ。どうやらサマエルの影響はどうにかできたみたいだね？」

「おかげさまでな。そして悪いが、プルートの相手は俺にさせてもらおうか」
皮肉気な曹操にそう返しながら、ヴァーリは静かにプルートに向き直る。
「やられっぱなしは性に合わないんだ。ただ英雄派はことごとく兵藤一誠達が打倒しているし、ハーデスそのものは美猴達に任せている。……お前ぐらいしかぶつけ先がないんだよ、プルート」
相当奴も来ているようだな。
そして冥府ではヴァーリチームが暴れているわけか。正直ハーデス達にはざまぁとしか言いようがない。
というかこの流れ、曹操相手は俺達に譲るといっているようなものだな。……感謝するべきか否かといった感じなんだが―
『ああ、あの鬱陶しいだけの騒ぎはやはりあなたの差し金でしたか』
―そんな、プルートの詰まらなさそうな声が、俺達の緊張感を高めてきた。
今、なんて言った？
「……俺の仲間をお前達如きがどうにかできると？」
『どうにかできるも何も、既に無力化したと報告が届いていますが？』
おいおいまじかよ。
怒りすら見せるヴァーリに、プルートは涼しい態度でそう返す。
あいつら既に無力化とか、冥府もやるな。
これは、冥府の脅威度をもうちょっと上方修正した方がよさそうだ。要警戒としか言いようが―
「なるほどのぅ？　これはまた意外な展開が多いようだ」
「そのようだな。まぁ、ある意味でお披露目には都合がいいのか？」
―今度は意外な組み合わせで、とんでもない奴らが二人連れ添ってきやがった。

しかも事情を知っている側からすると、メンタルがゴリゴリ削れていく。
ほら、カズヒ姉さんとか地味に頬を引きつらせているし。
「……なんで、フロンズ・フィーニクスと一緒何かしら？　……幸香ぁっ！」
吠えるカズヒ姉さんに、フロンズ・フィーニクスと九条・幸香・ディアドコイは不敵な笑みで答える。
「……後継私掠船団（彼女達）と司法取引を行ったまでさ。これより彼女（ディアドコイ・プライベーティア）達には、超獣鬼軍団（ジャバウォック）の討伐及び、冥府に向かったシュウマ殿の護衛を任せている」
「悪いが曹操、貴様らのつまらなさには我慢の限界だ。悪く思っていいぞ？　それごと踏みにじって蹂躙するからな」
……おいおい、マジかよ。
なんか話がかみ合っている印象はあったが、こう来るか―
「……おや？　これは思わぬ形で親子が揃った感じかな？」
『まったく。フローズヴィトニルが戻ってきたと思ったら……どういうことだ？』
―ここにミザリとベルゼビュートまでくるか、おい!?

銀弾落涙編　第四十二話　迂闊な発言は自分の首を絞めるのでやめましょう

アザゼルＳｉｄｅ

冗談きついぜ。
俺達はアクシズ達が送った記録映像を見て、正直少しひきつっている。
あのヴァーリチームを、高々死神数十人で圧倒しただと……っ
しかも、あのやり口はこの後が予想できすぎてやばい展開が確定じゃねえか。
『ファファファ。我らが冥府に下賤なものが入ったのだ。仕置きは此処からだな』
ハーデスの爺は愉快そうに笑ってから、俺達に視線を向けてきた。
『さて、この場で戦うことにになったら覚悟していただこう……だったか？　こちらのセリフなのはもう分かっただろう？』
「……いやぁ、流石は冥府ってところっすかねぇ？」
ミカエルが護衛に派遣した、切り札（ジョーカー）デュリオ・ジュズアルドも警戒心を強めている。
確かに、これはまずいな。
話を聞く限り、ハルベルトはおそらく一個中隊レベルの規模があるはずだ。それを踏まえて考えれば、冥府の戦力は俺達が思っているより遥かに強化されている。
ガチでこられれば、俺やサーゼクスが滅ぼされる可能性は十分すぎるほどあるな。
しかも質が悪いことになってきた。
冥府の片隅から、武器が激突する音が鳴り響く。
そして直後、吹き飛ばされるように一人の男が飛び出してきた。

「……すいません、総督。気づかれてここまで押しやられました」
そう告げるのは、俺がこっそり連れてきた刃狗（スラッシュ・ドッグ）、幾瀬鳶雄。
神滅具（ロンギヌス）保有者の一人である、味方によってはヴァーリ並みにスペシャルなやつだ。
「……この崇高な冥府に、下賤な狗と日本人の雑種を連れてこないでくれませんか？」
そう不愉快そうに告げながら、若い死神が入ってくる。
野郎が鳶雄を一人でここまで押し込んだってのか!?
「気を付けてください、彼の星辰光は危険です」
「みたいだね。いや、そりゃ神滅具保有者を押し込めるわけだよ」
鳶雄もデュリオも警戒しているが、そりゃそうだ。
奴の星辰光がやばいのは、俺だって見ただけで分かるってもんだ。
……ははっ。冥府がここまでとはな。
「……訂正するぜ、クソジジイ。思った以上に先進的じゃねえか……っ」
星辰体運用技術を、冥府がここまで進めているとはな……っ！
これはまずいな。最悪、適当な理由をつけて俺質を皆殺しにしてくる可能性が真剣に見えてきやがった。
俺が少し寒気を覚えた、その時だった。
「……やれやれ。老害とその狂信者がイキっているようですなぁ」
そんな声と共に、足音が響く。
何人かの男女を引き連れ、そいつらを連れているはずがない奴が俺達の前に姿を現しやがった。
おいおい、今度はどういう展開だ。
『……どういうことだ？　何故貴様らが共に来ている？』
ハーデスも怪訝な表情を浮かべるなか、そいつは肩をすくめた。
「当然。彼らは我々の側につくことを決めたからだよ老害」
そう余裕の表情で告げる、シュウマ・バアルが引き連れているのは――
「俺質これから悪魔側ぁ♪　君質これから負ける側ぁ♪　仕掛けてくるなら覚悟しなぁ♪　それなら俺らがボコるからぁ♪　そしたら冥

府は焼け野原ぁ♪」
―鬱陶しいラップが鳴り響いてやがる。しかも挑発モード満点でだ。
「さて、仕掛けてくれるならその方がいいがな。死神に鎌には興味がある」
「ふふ。何なら後継私掠船団に参加する人は募集中よ？」
更にシュウマをカバーする形で、ブレイ・マサムネ・サーベラとアーネ・シャムハト・ガルアルエルまできやがった。
おいおい、どういう状況だ？
『……シュウマ。まずは一つ聞きたいが、何故後継私掠船団を連れている？』
サーゼクスが警戒するのも無理はねえ。
流れと言い分では俺らを助けに来たみたいだが、それにしたって引き連れているメンツがメンツだ。
最悪三つ巴に殺し合いになりかねねえ。当然その辺は確認するだろうな。
だがシュウマは、むしろ俺達を庇うような位置取りになってから胸まで張りやがった。
「無論、彼らは味方です。フロンズが頑張って交渉を続けた結果、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）は文字通り我々の私掠船団となりました」
……おいおい、マジかよ。
後継私掠船団の連中は、どいつもこいつも目をギラギラさせて死神達をけん制してやがる。
そうか、フロンズの奴、こいつらを味方に……おいおいおい!?
正気かアイツ、こんなぶっ飛んだ連中を抱えるってのか!?
『……フン。散々禍の団との対抗を利用して和平などを進めておきながら、そ奴らを迎え入れるとはどういうことか』
ハーデスはそう皮肉るが、それに対して、シュウマの奴は嘲笑まで浮かべてきやがった。
このタイミングでハーデスに嘲笑。凄まじく何かやらかす予感がする。

「そこに関しては感謝しますよ。……貴様のおかげでその辺りの手筈を整える必要は薄れたのでね」
『……なんじゃと―』
ハーデスが何かを言いきるより早く、何か外が騒がしくなってきやがった。
というかこれ、戦闘の音じゃねえか？
俺達が警戒していると、慌てて死神の一人が飛び込んできやがった。
明らかに、切羽詰まっている。これはどう考えても何かやばいことが起こったぞ。
『た、大変です―』
「―当ててやろう。ポセイドン派の過激派が冥府に侵攻してきたのだろう？」
シュウマが遮るように言うと、その死神は絶句していた。
おいおい、マジかよ。シュウマの野郎、何をしやがった!?
ハーデスの爺もそれに気づいているようだ。かなり殺気があふれてやがる。
『貴様、何をした!?』
「……別に何も？　ですが懸念事項ではありました」
わざとらしくそう返すシュウマは、片手を軽く上げる。
まるで示し合わせていたかのように、ブレイは記録媒体を取り出すとそれを魔法で映し出した。
……あ、ハーデスと曹操が映ってる。

イッセーＳｉｄｅ

空に映し出された映像で、早々とハーデスが話し合っている。
『なるほど。オーフィスに使うということでいいようだな。では……は儂らが貰うから、一方を入れてもらうぞ？』
『了解です、ハーデス殿。もしかすれば二天龍にも使うことになりますが、よろしいので？』
『構わんよ。忌々しい二天龍は冥府の怨敵。魔王の血が混じった白龍皇も、忌々しい和平の象徴となった赤龍帝も、まとめて滅ぼしてくれるのなら都合がよいわ』
……音質が悪いから聞こえにくいところはあるけど、これって盗聴というか盗撮だよな？
見えている場所がなんていうか、明らかにおかしいし。隠しカメラで確定だろ。
『しかしよろしいのですかな？　禍の団によって主神ゼウスは深手を負いましたし、ポセイドンにおいては未だ精神洗浄の為に封印されております。そんな禍の団に助力をするのは、親族としていかがなものでしょうか？』
『それは構わん。むしろその点においてだけは、ミザリには礼を言いたいぐらいだ』
この映像、多分だけどここ以外にもばらまかれてるってことでいいんだろうなぁ。
なんとなくそう思っていると、映像のハーデスは愉快そうに肩まで震わせている。
『身内の恥さらしに罰が当たった程度で何故怒る必要がある？　我らが信仰を奪った三大勢力がのうのうと和平などを抜かしておきながら、その手を取るような奴など、むしろ四肢をもぎ取られても自業自得というものだ』
……そういえばそんなこと言っていたって、曹操も言ってたな。
「ちなみに。この映像は既に冥界が流すことのできるすべての異形や異能の持ち主に見えるようにしている。……これでもある程度は編集しているがね」

フロンズさんはそう言ってから、だけどなんかため息までついていた。
「ただ残念なことに、この情報を獲得したタカ派が、ゼウス・ポセイドンのタカ派に未編集のコピーを送ってしまったようでね。おかげでオリュンポスは大混乱で、特にポセイドン側のタカ派は冥府を滅ぼす為に進軍を開始したようだ」
「よくもまぁ、ぬけぬけと……っ」
ソーナ会長が頬を引きつらせているけど、もしかしてこれってわざと!?
『……やって、くれましたね……っ！』
プルートの奴もかなりキレてる。
殺気まで向けられてる九条だけど、あっちはむしろ嬉しそうだ。
「礼を言うぞ？　おかげでいい手土産ができたからのぅ」
すっごいいい笑顔でそんなことを言うけど、少しして真顔になるとちょっと肩をすくめた。
「……まぁ、当面は肩をすぼめる必要はあるがな。命令があるまでは指示された区画から出ることは出来んし、命令には原則したがって危険な戦場で前衛を張ることになるだろうて。報酬も結構な割合を賠償金として各地に送ることになるのがのぅ？」
「そこは我慢してくれ。司法取引とはいえ、テロリスト（罪人）にはそれなりの代価を払ってもらう必要があるのでね」
フロンズが涼しい顔でそう言うけど、すぐに侮蔑の表情を浮かべながら、曹操の方を向いた。
「……そういうわけだ。悪いが、彼女達は貰って行くぞ」
「……全く、これは本当に困ったものだね」
曹操は目元を引くつかせながら、幸香を睨み付ける。
「ペルセウスもそうだけど、そんなに俺達と組むのが嫌かい？　彼とは違って、君達はテロに走っても気にしないと思ったんだけどね？」
「まぁそうなのだがな？　同時に妾達は目的達成の為なら政府の犬でも構わんのだよ」
幸香はそう返すと、むしろ可哀想なものを見るように曹操を見た。

「……長い会話をする暇もないだろうから、単刀直入に言ってやろう。……貴様らはあまりにつまらんのだよ。英雄をはき違えているところもそうだしな」
うわぁ、バッサリ。
っていうか、何故か幸香は俺の方をちらりと見てから、曹操に視線を戻した。
「文句があるならこの場をしのいでみよ。英雄の末裔でしかない貴様が、まさに英雄である赤龍帝に勝てるのなら……評価は多少改めてやるわ」
「……言ってくれるね。悪魔になった彼が、人間である俺より英雄だって？」
流石に苛立っている曹操だけど、幸香の奴はどこ吹く風だ。
むしろすっごい冷めた表情で、肩まですくめやがった。
「そこがダメなのだ、貴様は」
……なんかよく分からんけど、とりあえず幸香は味方ってことでいいのか。
っていうか、ミザリまでいるこの状況で、カズヒは大丈夫なのか!?
俺はちょっと不安な気持ちになるけど、カズヒは複雑だけどしっかりとした強い意志を持った表情で、幸香とミザリを交互に見る。
そして同時に、ミザリも二人を交互に見ながら微笑んでいた。
「うんうん。すっごく悲しむ顔が見たくなる。そんなそそる存在になってくれて、お父さんは嬉しいよ。そうだろ母さん？」
あ、やっぱりばらすのか。
っていうかこのながれ、ややこしいことになるって絶対!?
「……ん？　どういうことだ？」
「……めっちゃくちゃ単刀直入に言うわ。私の前世がミザリの前世を逆レイプして生まれたのがあんたなのよ、幸香」
首を傾げる幸香に、カズヒの奴はすっごく単純にまとめて言いやがった。
その説明は色々問題があるだろ。色々重要な過去とか、事情とかが全部ぶっ飛んでる。カズヒが悪者にしかならない例えだろそれ。

カズヒらしいっちゃらしいけど、流石にそれで誤解されるのはちょっとあれな気もするんだけど!?
俺は追加で説明しようとしたけど、幸香は交互の二人を見てから、ちょっとだけ頷いた。
「……ふむ。まぁそれは置いておくとしよう」
『『『『『『『『置いておくの!?』』』』』』』』
総ツッコミが飛んだよ。
フロンズさんもちょっと面食らっていたけど、幸香は本当に気にしていない。
ちょっとは気になっているようだけど、ただそれだけ。別に詳しく聞く機会がないなら、別に聞かなくてもいいやって感じだ。
ミザリも驚いているみたいだけど、幸香はため息すらつきそうな感じだった。
「別に強姦で産まれた子供など、探せば現代にも四桁は確実にいるだろうて。妾が養子であったことは知っておるが、生まれではなくどう生きるかが重要であろう?」
いや、言っていることは正しいと思う。
そりゃ産まれ方はどうしたって選べないけど、生き方はある程度は選べるもんだ。それだって環境とか周り要素が大きく関わるだろうけど、それでも選ぶ余地は少しぐらいあると思う。
思うけど、いくら何でもさっぱりしすぎじゃねえか……っ
これ、カズヒにとってミザリの本質張りにきついんじゃないか?
「……ま、貴女はそういうだろうとも思っていたわ」
カズヒは、すました表情でそう言っていた。
……だけど、そっと九成の手を握っている。
分かっていてもつらい。そんな感じに見えて、俺は胸が痛くなる。
そして、そんなカズヒの手を、九成はしっかりと握りしめた。
「……いろんな感情がまぜこぜになっているから、俺から何も言うつもりはない。だが―」
九成は目を伏せ、そして開いて強い目で幸香を見た。
「今は味方でいいんだな?」

「うむ。そこは安心すると良い」
幸香は強く頷いた。
……今は、それでいいんだな。
カズヒは俺の視線に、強い視線で頷いた。
ああ、なら今はそれでいい。
今は、この場を切り抜ける……っ！

銀弾落涙編　第四十三話　決戦、首都リリス！

祐斗Ｓｉｄｅ

中々壮絶なことになっているけど、今重要なのはそこではないか。
フロンズ氏が後継私掠船団を取り込んだのは問題な気もするけど、考えようによっては都合がいいだろう。
既にフロンズ氏も、イッセー君の隣にいるオーフィスにちらりと視線を向けていた。
「……フロンズ・フィーニクス様。ここはお互い様ということにしませんか？」
「それがいいだろう。そちらがオーフィス（象徴）を持つことは構わんから、そちらも後継私掠船団（彼女達）を抱えることに文句を付けないでくれるとありがたい」
……言質はとった。録音もしている。おそらく相手もしているだろう。
これで、イッセー君がオーフィスを助けた件で大王派から色々言われる可能性は削れるだろう。フロンズ氏が後継私掠船団を抱えることに文句を言わないことと引き換えだけどね。
どちらかがどちらかを批判した時点で、お互いが逆に自滅することになるんだ。余程のことが無ければ、イッセー君がオーフィスを助けた件を指摘されることはなくなるだろう。少なくとも、フロンズ氏は大王派を説得してくれるはずさ。
さて、後顧の憂いを断ったことだし、僕達も―
「……あ、それとお土産があるんだ」
―そこで、ミザリが不穏なことを発現する。
今度はいったいなんだ!?
そう思った時、彼は映像を展開する。
そこに映っているのは……超獣鬼（ジャバウォック）が、六体!?

「ベルゼビュートの援護もあって、彼らを転移する算段が付いてね。ちょっと犠牲者は出たけど、リリス（ここ）を破壊することで与えられる心理的損害の方ならお釣りが貰えるだろう？」
くっ！　そういう方向で―
「……なるほど。ではそちらはこちらで対応しよう」
「任せるがよい。手土産はそちらで対応するとしよう」
―その直後、フロンズ氏と九条・幸香・ディアドコイが動き出す。
「……さて、それでは切り札を切るとするか」
そう告げながら、フロンズ氏は魔方陣を操作する。
その直後、超獣鬼とは反対側、リリスの外周部から何かが転移される。
それを見て、僕達は皆が唖然とした。
どう少なく見積もっても数百メートルはある、巨大な物体。全体的に細長いそれは、何隻も現れていた。
そう。あれは空を飛ぶ船だ。
しかもでかすぎる。どう控えめに見ても、海に浮かぶ船でもあそこまでデカいのはないだろ。ギガフロートとかそういったレベルにかなり近い。
しかも何隻もある。更にバリエーションまで豊富だ。
厳密には後ろ半分はさほど変わらないんだが、前方半分辺りに色々と違いがある。
そんなうち、一隻の戦艦から、なんかスピーカーとかが音を出す前みたいな感じな音が響いた。
『マスター！　そろそろ俺らの出番ってことでいいんだよなぁ！』
この声は、ジョン・ラカムか！
九条・幸香・ディアドコイがこちらにつくのなら、確かに彼が来てもおかしくない。
だ、だけど……あれはなんだ!?
「……あれこそが、我ら大王派の新たなる力。対オーフィスをコンセプトに開発されし、大出力兵器群……Ｇ（ギガンティック・フォートレス）Ｆ。その第一弾である、サンタマリア級戦闘母艦だ」

フロンズ氏が説明するが、信じられない。
あれだけの規模の兵器を複数投入するなんて、どれだけの資材と時間が必要になるというんだ……っ
そんな驚愕する僕達の前で、フロンズ氏は幸香に振り向いた。
「さて、悪いが我々は超獣鬼（ジャバウォック）だ。貴殿は元テロリストなのだから、大一番はグレモリー眷属たちに譲るべきだろう」
「まったくもってその通り。裏切り者として謙虚さも持たねばならぬのが仕方のないことだろうて」
頷きながら、幸香は指を鳴らした。
その時、現れるのは一組の男女。
黒髪を伸ばした少女に、金の髪を切り揃えた青年。
「……紹介しよう、曹操にグレモリー眷属よ。こ奴らは我ら後継私掠船団のメンバーであり、表の組織……ゆうてもマフィアじゃが……を任せていた筆頭戦力だ」
「姉がお世話になっておりました。九条・幸香・ディアドコイの義理の妹であり、彼女を劉邦すら超える高みへと押し上げる忠臣。張越（チョウリョウ）・最良（エポリューション）、九条・梔子・張良と申します」
「初めまして格下共。俺はヴァーリ・ルシファーという凡人を超え、九条・幸香・ディアドコイをいずれ必ず超える者。第三征王（ナーディル・イスカンダル）、ユーピ・ナーディル・モデウだ」
……凄い自信だ。
なんというか、このノリは後継私掠船団のそれだと痛感できる。
梔子はお淑やかかつ大人しそうな雰囲気ながら、強い意志を込めた目で決定といわんばかりに宣言している。
ユーピの方も、ヴァーリを凡人と形容して幸香を超えるという言葉に、一切の虚言はないだろう。
双方共に、いずれ必ずそれを成すという狂気の決意があふれている。
「だがまぁ、奴らが英雄派か？　……幸香、こんなイキった餓鬼如きの部下になるとか、いずれ追い抜かれるとはいえ俺の先を行くお前らしくもない」

「言うな。妾ももう少し期待できるかと思ったのだが、いい加減見切りをつける他なくなったのでな」
「まぁまぁ二人とも。今この場にいる英雄と本気でぶつかれば、もしかすると一化けするかもしれませんよ？」
　三人はそう言い合うが、しかしそこに曹操の殺意がぶつけられる。流石に言われてムカついているようだ。槍を握る手にも力が込められている。
　それを三人とも、平然と受け止めているのが更に癪に触っているんだろう。
　実際、三人とも曹操を低く見ていることがよく分かる。
　強いとは思っている。だからこそ、三人ともいつでも動ける体制だし、戦闘ができる心構えであることも分かる。そこまでしないほど、三人との舐めてはかかっていない。
　だが同時に、見下しているとも呆れているともとれる雰囲気だ。……性能ではなく性質を下に見ている、と言えばいいのだろう。
　実際そんな雰囲気を見せていることもあって、曹操は特に苛立っている。
「俺を……英雄の血を引き、聖槍を宿す、異形達の毒になるべくして生まれた存在を―」
「だから貴様はつまらんのだ」
　曹操の激高すら、幸香は切って捨てる。
「英雄の血と才覚で生きるだけの英雄気取りが、下らんという他ないものよ。……文句があるならそこにいる、英雄となった者達を打倒するがよい。さすれば話も聞いてやる」
「……彼らは悪魔だろうに……っ」
　曹操の睨み付けと共に向けられる返答に、幸香は本心からつまらなさそうに見下している。
　……そんな幸香に、カズヒは静かに隣から出るように前に出た。
「そうね。その辺だけは理解できるわ。妙なところで血を感じるわね、馬鹿娘」
「ふむ。氏より育ちとはよく言われるが、生まれそのものも決して馬

鹿には出来んか」
交す言葉は、さほどない。
それに複雑な何かを覚えるけど、少なくとも二人は気にしてなかった。
「……いずれ少し話したいわ。だから、シャルバの怨念は任せるわよ後継覇王(アレキサンダー)」
「よかろう。悪祓銀弾(シルバーレット)の再びの輝き、妾の目にとめさせてみるがよい」
そんな短い言葉が交わされ、そして幸香達は上空のＧＦとやらに飛び乗った。

九成Ｓｉｄｅ

「……やれやれ。お互い知らぬ関係だったとはいえ、お父さんにはろくに会話もなしとは……悲しくていい気分だよ」
本当になんか幸せそうだな、ミザリの奴。
……とはいえ、そろそろこちらも始めるべきというわけか。
「まったく。流石の俺も、割と苛立ってきたな」
曹操は曹操で、割と苛立っているのか頬がひきつっている。
さて、そろそろこっちも本格的にやりあうべき―
「プルート様、そちらにいらっしゃいましたか」
―更に現れた!?
空間が歪むと現れたのは、ハルバートを持った女の死神。
……おいおい、あのハルバート、星辰体感応合金か！
ということは、星辰体感応奏者(エスペラント)か。死神にもいたとはな。
『アクシズですか。では、準備は終わったので』
「もちろんです。手早くヴァーリ・ルシファーを駆除し、オーフィスを

確保しましょう」
そう言いながら、そのアクシズとかいう女はこっちに静かに向かい―
「―そういうわけにはいかないかなぁ？」
―そこに、リヴァ先生が立ち塞がる。
「……テロリストの首魁を、和平賛同派の神の娘が庇うのは問題行動では？」
「今の死神に渡すわけにはいかないでしょ？　あなた達は八割方テロリストよ」
そりゃそうだ。
今の流れで冥府の扱いなんて、テロリストを利用して暴走行為を働いた冥界の敵だ。
『そうですか。では倒した方がよさそうですね』
「―いや、お前の相手は俺がする」
……死神達の相手は任せた方がいいんだろうな。
「リヴァ先生、そっち任せた！」
「任されて！」
サムズアップまでされたのなら、尚更任せるしかないだろう。
つまり、俺達が相手をするべきは禍の団。
英雄派の曹操、ジャンヌ・ダルク、カラティーン・ダーナ。
旧魔王派のミザリとモデルベルゼビュート。
どいつもこいつも厄介だが、やるしかないってことだろうな。
「で、俺の相手は誰なんだい？　流石に全員は厳しいけど、それはないのが幸運かな？」
「決まってんだろ。俺達だ」
曹操に、イッセーが真っ向から一歩出る。
……俺達、総力戦であいつに負けたんだがな。
「勝てるか？」
「勝つさ。その為の準備は整ってる」
そう静かに告げ、イッセーはそのうえで部長に振り替える。
「部長。俺を貴女の眷属に戻してください。そのうえで……勝ちます

！」
「……そう、信じるわ私のイッセー。私の元に、ちゃんと戻ってきて頂戴……」
部長が悪魔の駒を使って、イッセーを再び転生悪魔に戻していく。
そのうえで、俺達は残りの敵を向き合った。
そのうえで、俺が相手をするべき奴は決まっている。
それを考えて一歩を前に踏み出そうとした時。同時に一歩を踏み出す人がいる。
分かっている。動かないわけがないだろう。
そのうえで、俺は止まることなく静かに頷いた。
「……手伝わせてくれ。というか、手伝ってくれ」
「私のセリフよ。……お願い、私と一緒に誠にぃに一発かまさせて頂戴」
今は、その言葉だけでいい。
そして、だからこそ―
「リーネス。あれ……使うと思う」
「そう。分かったわぁ」
―その言葉に、リーネスが頷きながらプログライズキーをカズヒ姉さんにも渡した。
「……これは」
「最後の一つ。きっと今なら……使えるわぁ」
リーネスにそう言われ、そのうえでカズヒ姉さんはそれを握り締める。
そして、小さく微笑んだ。
「ありがとう。ちょっと一発かましてくるわ」
そして、今度こそを前を向く。
『……ふん。ここでミザリにやられてもらうわけにはいかんのでな』
そこにモデルベルゼビュートが割って入るが、さてどうしたもんか―
「……いいえ。あなたの相手は私達よ」
―そこに割って入ったのは、リアス部長達だった。

リアス・グレモリー眷属の全員が、怒気をにじませながらモデルベルゼビュートを睨み付ける。
「イッセーの体を滅ぼした罪、冥界の民を苦しめた罪、そして今なおお兄様達が作ろうとする冥界を邪魔する罪。……すべてをもってあなたを滅ぼす。万死に値する罪の報いを受けなさい！」
『よかろう、その妄言、我が恩讐にて滅ぼしてやろう……っ』
モデルベルゼビュートの相手は、グレモリー眷属ということか。
そして残るジャンヌ・ダルクとカラティーン・ダーナの相手も残るメンバーが睨み付けている。
どうやら、マッチメイクは決まったようだな。
そして、始まりのゴングを鳴らすように、リアス部長が息を吸い込んだ。
「さぁ！　相手は冥界を苦しめるテロリストよ！　後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）だけに戦わせるわけにはいかないわ！」
分かってますよ、部長。
……涙の意味を変えることこそ、俺がカズヒ（彼女）に交した誓い。
だからこそ、此処で俺がやることは決まっている。
……覚悟を決めろ、禍の団。
この悪行のツケ、まとめてノシつけて返してやる！

銀弾落涙編　第四十四話　明星昇りしリリスの決戦

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

突如として現れた六体の超獣鬼。この事態に、外周部の部隊は絶望すら感じていた。

当然といえば当然だろう。ルシファー眷属が総力を挙げて一進一退の攻防が限界。たまたま現れたグレートレッドが協力してなお、てこずるだけの手間がかかったのだ。

これが上位神滅具の禁手。シャルバ・ベルゼブブの怨念の結晶。

それを漸く痛感し、しかし少しだけだが息を付けた。それが、打倒の余韻だった。

そこに今度は六倍だ。絶望して恐慌状態になってもおかしくない。

だからこそ、真逆の方向から謎の艦隊が現れ、有ろうことか砲撃で足止めを成立させていることに驚愕した。

出力に限定すれば魔王クラスを超えるだろう。実際のところは巨体もあって一対一では苦戦するだろうが、それでも脅威の存在であることに否はない。

更にそこからＤ（ディアボロス・フレーム）Ｆが何体も射出されて、彼らはあれが大王派の戦力であることを理解した。

そんな圧倒的な力すら垣間見える増援に、更なる動きが見える。

現れるのは大量の獣。更に天空に円環とでもいうべきものが見えたかと思うと、数秒後に強力な砲撃が超獣鬼に対して殺到する。

その砲撃が足止めどころか押し返すほどに、超獣鬼達に通用を与える。

更に負傷している者達の近くに、人間の集団にカバーされた者が駆け寄ると、瞬く間に傷を癒していく。

そんな光景に戸惑う者達が出てくる中、艦隊の一つから声が放たれ

る。
『冥界の民、そして兵士達よ！』
フロンズ・フィーニクスの凛とした声が響き、更に立体映像が浮かび上がる。
その隣に九条・幸香・ディアドコイがいたことで、困惑すら生まれたのは仕方あるまい。
だが、フロンズは幸香に誇らしげな表情を向けた。
『禍の団の愚行の数々に対する義憤、そして我らが誠意に応えたことにより、これより後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）は我らが大王派の旗下に入る！』
その言葉に、困惑と感銘が半々となっていた。
禍の団の主要派閥である英雄派、それも独立した特殊部隊ともいえる後継私掠船団。そんな彼らが、突如として大王派に組するというのだ。
何を考えているのかと困惑する者も、鞍替えさせた大王派に感銘を感じる者も、いて当然だろう。
だからこそ、フロンズは此処で終わらない。
『彼らが持ち込んでくれた情報により、ハーデスが禍の団を利用して我らに悪意を向けた事実も発覚した！　またつい先ほど、おっぱいドラゴン兵藤一誠の安全も、我らがこの目で確認している！』
その二つの事実により、困惑も関係も吹き飛んだ。
ハーデスが禍の団と内通しているとは、既にモデルベルゼビュートが宣言していた。
だが同時に、一種の欺瞞工作だという考えもあったのだ。
だが先ほどの流れている映像とフロンズの発言により、流れは一気にハーデスが禍の団を利用したという方向に統一される。
同時におっぱいドラゴン兵藤一誠の生存を大王派が断言したことで、歓喜の大波が巻き起こる。
大王派は魔王派と近しいおっぱいドラゴンにいい感情を覚えていない者が多い。そんな大王派のフロンズが自ら彼の生存を表明したことで、これは事実だと多くの者が悟ったのだ。
むしろ会話の流れから、大王派がおっぱいドラゴンの生存に一役

買ったと誤解する者まで出てきている。むろんフロンズが意図的に誤解しやすいように語ってはいるが。
だがこれで、後継私掠船団の参戦に対する違和感は大きく薄れた。
そのうえで、フロンズ・フィーニクスは宣言する。
『これより我々大王派は、新型兵器Ｇ（ギガンティック・フォートレス）Ｆ及び、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）による、超獣鬼殲滅（ジャバウォック）作戦を開始する！』
……今ここに、魔獣騒動と称されることになる一連のテロの終幕が切って落とされた。

和地ＳＩＤＥ

「なら、こっちも遠慮なくいこうか」
『ＤＥＳＰＡＩＲ』
『レイドライザー』
微笑みながらミザリはレイドライザーを装着し、同時に星辰体との感応を高めていく。
当然といえば当然だ。星辰奏者の本気とは、すなわち星辰光（アステリズム）の発動に他ならない。
故に、これこそがミザリ・ルシファーの本気の発動。その本領の開帳だ。
「創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星」
『レイドライズ！　フォーリングホッパー！　Ｏｌｌ　ｕｎｈａｐｐｉｎｅｓｓ　ｉｓ　ｂｅｓｔ　ｈａｐｐｉｎｅｓｓ』
フォーリングホッパーレイダーに実装をするとともに、星はミザリの祈りを具現化する。

「傲慢なりし魂は、流浪の果てに明星の元へと辿り着く。尊ばれる遍く全てを蹂躙したい、魔性の願いは聖なる光を悪用し、悪鬼の星へと至ったのだ」
一見すると、ミザリに変化は見当たらない。
だが、それはミザリの星が低レベルだとか危険じゃないとかいうことを意味しない。
「愛しく美しい衆生の営みは、絶望と悲嘆に染まってこそ。ああ愛しさの素養持つ者たちよ、どうか希望を失い嘆き給え」
つまり、奴の星は自分の内面に作用するということ。
超感覚の獲得。肉体機能の向上。そういったものが主体となっている、十分危険な星の具現化に他ならない。
「かつて見た艶やかな宝珠に映る至高の美。我が人生全てはそのために。我が心を捉えて離さぬあの美しさに、我が全てを捧げよう」
何よりも、警戒するべきはカズヒ姉さんをどうにかできたというその一点。
あの悪祓銀弾（シルバーレット）を打倒する。それがどれだけ脅威であるか。それが分からない道理がない。
カズヒ姉さんのメンタルが最悪に近かったとはいえ、それだけで倒せるほどカズヒ・シチャースチエは間抜けでも愚者でもないんだから。
「さぁ、夜明けの時は訪れた。明星はここに太陽を超え、世界を照らし彩ろう」
寒気すら感じさせる星の具現化を伴い、ミザリ・ルシファーは聖槍と聖十字架を具現化させる。
あろうことか、聖槍は二本具現化し、聖十字架は四つの十字の盾として、紫炎を纏って現れた。
向こうも大盤振る舞いのようで何よりだ。越えるかいがあると滾るべきだな。
「天より注ぐ光を消すなど、もはやあり得ぬことなれば。天が夜に包まれるその時まで、悲嘆と絶望よ輝き給え」
ここに、悪鬼明星（ルシフェル）は悪意の星を顕現させる。

「超新星（メタルノヴァ）――魔性（プルト）の戯（リッ）れ、悪鬼明星（プ・ルシフェル）の遊技場」

……上等だ。

何があろうと、此処で一発ぶちかます！

銀弾落涙編　第四十五話　激戦多発

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

『天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ』

リアス・グレモリー達と激突するに当たり、モデルベルゼビュートは躊躇することなく己の星を開帳する。

『悔恨せよ、糞にも劣る馬鹿者どもが。地に伏せ従い天仰ぐように尊ぶべき、王を敬いこともできぬか。その醜悪さは万死すら温い罪とし れ』

あふれ出るは怨嗟の嵐。

憎悪、怨恨、恩讐、殺意。

文字通り怨嗟をあふれ出し、モデルベルゼビュートの星は此処に悪意を具現化する。

『悔恨せよ、懺悔せよ、跪いて許しを乞え。されど何時に与えるは絶望のみ。それこそが成した罪の重さと知るがよい』

生まれながらに尊ばれるべきベルゼブブを愚弄した、遍くすべての従うべき者達に苦悶の果ての滅びを求める。それこそがシャルバ・ベルゼブブが生者のままに人造惑星の領域に到達できた理由。けた違いの衝動。

そしてそういった衝動を持たせるように調律される第一世代人造惑星となったことで、モデルベルゼビュートは第一世代型人造惑星の更なる可能性を切り開いた存在ともいえる。

『故に、世界に滅びを齎そう。真なる道理を失いし、腐った世界に滅びあれ。我が怨念の成就こそ、世界が果たすべき唯一無二の真理なのだから』

具現化されるは、悍ましくオーラを纏った蠅の群れ。

千を超える大群だが、それそのものは警戒すべきものではない。

何故ならば、ベルゼブブの特性からいって、魔力による蠅の群れを具現化することは想定できることなのだ。
『醜悪なりし愚者共よ。崇高なりし王の怒りを思い知れ。我が神意すら超える究極の至高が、わざわざ裁きを下してやるのだ。醜怪なる下民共には、過ぎた栄誉と知るがいい』
故に、真に警戒するべきは追加要素。
蠅に纏われたオーラこそ、シャルバのままで赤龍帝を苦しめた驚異の本質なのだ。
『天に煌めく星々が如き、我が偉大なる魔蠅の軍勢は波濤の如く。星を宿した大波により、世界に至極の滅びを与えよう』
シャルバを素体にして生まれた、シャルバを超える魔の巨星。
ステラフレーム、モデルベルゼビュートがついにその星を開帳する。
『神の言葉すら超えし、終焉の言葉を聞くがよい。―裁き、在れ！』
今ここに、憎悪の魔星が顕現した。
『超新星（メタルノヴァ）――――怨霊（プル）の蠅従（トリッ）えし、王者（プ・ベル）の裁（ゼル）きは此処（ビュー）に在（ト）るぉっっっ!!』

モデルベルゼビュート
☆怨霊（プル）の蠅従（トリッ）えし、王者（プ・ベル）の裁（ゼル）きは此処（ビュー）に在（ト）る（括弧内は星辰奏者時）
基準値：A（C）
発動値：AAA（A）
収束性：AA（B）
拡散性：D
操縦性：D
付属性：AA（B）

維持性：ＡＡ（Ｂ）
干渉性：Ｄ

絶大なステータスは間違いなく脅威だが、しかしその本質こそが凶悪の権化。
それを魔法による解析で悟り、ロスヴァイセは血の気が引いてしまった。
「……イッセーくんが手古摺るわけです。ある意味サマエルの血より悍ましい」
「どういうこと、ロスヴァイセ？」
リアスが迎撃の魔力を解放しながら、モデルベルゼビュートから視線を逸らさずに促した。
瞬時に放たれる大量のミサイルと蠅を撃ち落とす中、しかしイッセーすら苦戦させたシャルバ・ベルゼブブに由来する星辰光を警戒するべきと判断しているからこその対応だ。
聖なるオーラが、雷光が、魔法が、炎が、モデルベルゼビュートの猛攻に食らいつく。
そのうえで、ロスヴァイセは青白くなった顔で星の性質を断言する。
「あの星辰光によるオーラは、放射能汚染と同等の現象を引き起こしています。つまりあの星は、核崩壊・放射能汚染能力というべき星なんです」
その言葉に、誰もが警戒の色を濃くするほかない。
放射能汚染。いわゆる核分裂などで発生する、猛毒の波動。人間が到達した最強の力の具現にして、圧倒的なまでの諸刃の剣。
放つ攻撃や現象に、放射能汚染に酷似した影響を与えるオーラを纏わせる。それこそが、シャルバ・ベルゼブブが兵藤一誠を苦戦させるだけの圧倒的な力の具現だった。
ましてモデルベルゼビュートのそれは、長所が全て跳ね上がった完

全上位互換。
絶大な出力を、高い収束性で強引に押し付け、極まって高い付属性と維持性によって確実に敵を汚染していく。それは行為の異形であっても、決して完全な無効化ができないほどだ。
一周回って、イッセーが肉体を失ったことは幸運だろう。
もし肉体が無事だったら、汚染を除去して悪影響から回復するのにこれ以上の時間がかかったはずだ。それほどまでに、シャルバの星はスリップダメージとバッドステータスの二つに特化した星といえる。更に出力の高さで敵を直接殺すことにも長けているのが更なる悪夢だ。
それを痛感し、だがリアス達は決して怯まない。
「……私の可愛い下僕達！　イッセーを苦しめ、今も冥界を苦しめる元凶が、どれだけ凶悪でもひいては駄目よ！　あの男は、此処で私達が確実に滅しましょう！」
「「「「はい！」」」」
曹操と戦っているイッセーや、今は倒れているギャスパーがいなくとも関係ない。
今ここにいる自分達が、仲間に恥じることなどあってはならないのだから。
「素晴らしいわ！　主よ、この民と仲間の為に頑張れる、私の友人達にご慈悲を！」
「言ってる場合っすかイリナ先輩！　いや、マジ今は祈るより戦う！」
「……一撃でも当たるとあれですね。特に私とアニル君は直接戦闘ができないです」
イリナもまた、アニルとルーシアを引き連れて戦闘に参加する。
ここに、冥界を担うべきだと驕り高ぶる悪鬼と、冥界を担う未来を持つ若者達の戦いが激しくなる。

一方その頃、ヴァーリ・ルシファーとプルートの戦いは一瞬で決

まったと言っていい。
それは決してプルートが弱いのではない。むしろ、ヴァーリ・ルシファーの切り札があまりに強すぎたのだ。
―白銀の極覇龍《エンピレオ・ジャガーノート・オーバードライブ》。覇龍の力をあえて極め、結果として絶大な体力の消耗と引き換えに暴走のリスクをかき消し、有ろうことか伸びしろまで作り上げた絶対的な力。
一瞬だけだが主神にすら届く牙をもって、主神に及ばないプルートは瞬殺された。
だが同時に、その消耗でヴァーリは肩で息をしている。
強い怒りによって報復を決意したがゆえに攻撃だが、しかしおかげでかなり疲労をしてしまった。
だが、まだ戦いを終わらせるつもりはない。
その意識をもって、ヴァーリは立ち上がろうとし―
「……っつぅ！」
―弾き飛ばされた仮面ライダーグリームニルに、思わず目を見開いた。
グリームニルとなったリヴァ・ヒルドールヴはヴァーリが極覇龍を選択肢に入れるだけの力を発揮する。神の血を引く娘は伊達ではないのだ。
だが、弾き飛ばしたアクシズが無傷でこちらに来たことで、ヴァーリは警戒の色を更に濃くする。
「……まさか、プルートより強いとは思わなかったよ」
「……まさか、プルート様を滅ぼすとは信じたくないですね」
お互いにお互いを警戒するが、アクシズは残念そうに首を横に振った。
「……プルート様の無念も晴らさせてもらいましょう。では、お覚悟を」
そう言いながら、アクシズは後ろ手に何かを振るう。
仕込みがあると踏み、ヴァーリは警戒し―
「あっぶない！」

―リヴァに回し蹴りを叩き込まれ、結果としてヴァーリは地面に転倒した。
だが、それに文句を言う暇も余裕もない。
転倒したことで自分を貫かず空を切った、その切っ先は信じられない。
「コールブランド、だと……っ」
驚愕するのも無理はない。そして、いくらなんでもおかしすぎる。
美猴達が倒されたことも信じがたいが、そこからいきなりコールブランドを敵が使っているのは不自然すぎる。
コールブランドは簡単に使い手が見繕えるものではない。これは、明らかにおかしな事態が起きている。
疲労と混乱でヴァーリは動きが止まっていた。それこそ、リヴァがアクシズと睨み合う状態でなければ五回は殺されていただろう。
「……外法により肉体を取り込んだ。もしくは、何らかの秘術でアーサー・ペンドラゴンの肉体を利用しているってところかしら？」
「構いません。私の星は明かした方が戦略的に優位になりますので」
その微笑と共に、アクシズに後ろの空間が歪む。
それは茨の生えた高熱の鎖に満ちた空間。そこに囚われた、美猴達の姿があった。
そして同時に、ヴァーリは気づいた。
自分の肉体に何らかの負荷がかかっている。それも、強制転送や拘束封印と思われる力だ。
これによりすべてを悟った。
確かにこの星は、仕組みがばれたからといってどうにかできる類ではない。何より、知られた方が敵に対するけん制に繋がるし、有象無象に使ってもあまり価値がない星ゆえ、その方が戦略的にも使用者的にも都合よく働く。
「……抵抗できない存在を取り込み、強制的に異能を保有者に使われる異空間を形成する星辰光か……っ！」
「その通り。我らが尊き冥府を汚す愚者を封じ、その力で同胞を裁くことで禊とする。それが私の星辰光です」

素直に応えるのも当然だろう。
ある意味これほど対抗策がない星辰光もそうはない。
単純に彼女の星に抵抗できるかどうか以外の対策がないに等しい。そしてある程度は抵抗できる実力者でなければ取り込んでも真価を発揮できない。
性質上有象無象は無力であり、ある意味で彼女にとっても益がない。本質的に人海戦術による制圧を阻害する、抑止力としての運用こそが基本といえるだろう。
人海戦術を完全に無効化できるこの星は、知らしめることで敵を警戒させる。冥府は今後、徹底的にえりすぐられた戦力だけを送り込むしかない。数の制圧はこの星で無効化されるからだ。
だが同時に、美猴達が倒されたのも頷ける。
まず倒されたのはルフェイだろう。そしてルフェイの魔法使いとしての力で驚愕させたところで、美猴かフェンリルをどうにかする。
前衛が減り、更に誰に対しても通用する仙術や爪の力をもって残りの前衛を削り、最終的に聖王剣コールブランドで、悪魔である黒歌を打倒。その勢いで自分を討ち取りに来たと考えるべきだ。
……憤怒に燃えるという感情を、この短い期間で感じることにヴァーリは苦笑すら覚えた。
「良いだろう。俺の仲間を愚弄するのその行為、万死に値する……っ」
「愚かな。醜悪たる悪魔に生まれたうえ、尊き冥府を汚す罪の上塗りをしてこれとは。ルシファーとは暗君の一族のようですね」
「あ〜、これは和解とか無理そうね。先生貧乏くじ引いたかも」
三人がそれぞれ状況を把握し、そして激突を再開する。
リリスの一角を跡形もなく消し飛ばす激戦が、此処に繰り広げられた。

銀弾落涙編　第四十六話　同時多発決戦

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「フロンズ様。何か御用でしょうか？」
「ああ、首都リリスの方はどうなっているかね？」
「はっ。リアス様達は戦闘を開始しております。それぞれ禍の団のメンバーが一人ずつ対応しているようです」
「シトリー眷属は民間人の保護に徹しております。しかしあの数と戦力を前に、一人ずつでどうにかできるとは思えませんから問題ないかと」
「……ふむ。念の為だ、デビルレイダー部隊を一個大隊、増援として送れるように備えておいてくれたまえ」
「フロンズ様は、リアス様達が負けると？」
「私はノアではないからそこまではな。だが、こういう時は悪いことが起こる前提で動くべきだろう？」
「……出撃することが無ければ、無駄な備えになりますが？」
「笑い話で済む程度の備えさ。必要がないなら私自ら彼らに詫びを告げれば何とかなるだろうて」

ジャンヌ・ダルクは躊躇なく、業魔人の使用を決意した。
寿命が削れるリスクは覚悟の上だ。今この場を切り抜けるには、それぐらいの覚悟は必要だろう。
星辰光をもって、業魔化の影響を拡散。剣・槍・斧・盾・弓などで武装する聖剣の騎士団数十体に、数体の聖剣の鎧で構成される龍、そして己を聖剣のラミアとして、ジャンヌ・ダルクは敵の殲滅を開始す

る。
だが同時に、敵もまた決して油断はしていない。
子供達の護衛をシトリー眷属に任せ、真正面から相対するは、成田春菜。
「あんたとは共闘したこともあるけど、今回容赦する気はない！」
開幕速攻で放つは、大出力火炎砲撃禁手。名を赤き爆熱の砲撃（ブラスト・オブ・ファイヤ）
それでジャンヌをノックバックで交代させると、更に灼熱の刃を右腕に具現化し、音速突破で龍を相手に大立ち回りを演じる。
超高出力のバーナーブレイドを展開する赤き灼熱の魔剣（ブレイド・オブ・ファイヤ）と、熱核ジェットエンジン級の高速推進である赤き熱風（スラスト・オブ・ファイヤ）の飛翔。それによる一撃離脱攻撃で、一気にジャンヌの軍勢をかく乱する。
更に騎士団相手に火球大量生成能力である赤き爆炎（スコール・オブ・ファイヤ）の豪雨の迫撃砲一個連隊に匹敵する制圧力で、完全にジャンヌの機先を制していた。
これはジャンヌが弱いのではない。単純に春菜が強いのである。
いくつもの赤き炎（アーム・ファイヤ）の腕を統合した赤き紅炎（ルーラー・オブ・ファイヤ）の支配者を担う彼女は、十を超える赤き炎の腕を統合した高出力と、それによる十を超える別の禁手に到達する可能性を秘めている。
単純に数が多くその分出力が上がっている春菜と、星辰光の応用で疑似的に禁手を増やしているだけで一つだけのジャンヌ。この差をどうにかしているだけ、業魔人の性能とジャンヌのポテンシャルは高い方だろう。
そしてジャンヌも、すぐにでも対応を試みる。
聖剣をとにかく耐火炎・耐高熱に設定することで、押され気味だった戦いを拮抗にまでもっていく。
あとは、自分が復帰すれば形勢は傾き―
「させると思うか！」
「あまいよね！」
―そこに、カウンターを叩き込むようにベルナの砲撃を援護に受けた、インガの刺突が叩き込まれる。
ベルナは更に春菜の援護に制圧射撃すら敢行し、これにより更に趨

勢は傾いた。
「悪いがなぁ！　こっちも旦那と本妻が大一番なんだ！　余計な茶々は入れさせねえよ！」
「そういうこと！　懲罰メイドの意地があるんだ！」
「この……武闘派メイドめ！」
吠えるジャンヌは更なる攻撃を叩き込もうとするが、しかしそこに広範囲を高熱が包み込む。
結ぶ露のような高熱空間にジャンヌは聖剣を創り出して迎撃するが。これで手札が制限された。
その趨勢を、二人は決して逃さない。
「さっさと決めなさい！」
かつてテロリストによる極寒空間を相殺した、広範囲高熱空間生成禁手、赤き熱波（ラウンド・オブ・ファイヤ）の城塞。
範囲は更に狭まっているとはいえ、この範囲では火花が少し飛び散っている程度。だが相手の手札を制限させるには十分だ。
「まとめて吹っ飛ばす！」
故にベルナの極低温の砲撃は熱衝撃で聖剣を砕く。また大気を冷やして対応もしている。
また、大気の渦を層にすることで熱を軽減しているインガもまた、ためらうことなく攻撃を敢行する。
「ここで情けない姿は、見せれないんだから！」

そしてまた同時に、轟音が鳴り響く激闘が繰り広げられる。
ランサーのサーヴァント。名をカラティーン・ダーナ
一対一の戦いという条件を、「家族は自分の体も同じ」という屁理屈で強引に押し切って相手を苦戦させた、英雄譚の悪役そのものと言ってもいい男である。
だがその相手のク・フリンは、例えるならば三国志の呂布やギリ

シャ神話のヘラクレスというレベルの豪傑だ。そんな英雄を苦しめて歴史に名を遺した男が、弱いわけがない。
更に彼を厄介にさせているのはその宝具と武装。
武装はどんな豪傑も九日もあればもだえ苦しんで死ぬ毒が塗られた槍の数々。
これを喰らってまともに戦える者は、現代においてもごく僅か。グレモリー眷属でもカズヒやイッセー以外は、流石にポテンシャルを維持したまま戦うことは不可能だろう。それだけの驚異的な猛毒である。
そして何より厄介なのが、上記の悪行に由来する宝具の性質。
これにより疑似的に28人の集合体と化したカラティーン・ダーナは、体力と精神力は常時28人分に強化。さらに任意で質量も28倍にできる。
物体の攻撃力や耐久力に、質量は非常に貢献する。人間サイズのまま瞬間的に質量を28倍にすれば、近接戦闘において大きなアドバンテージが生まれるのだ。
更に、真名解放においてより強大な効果も発揮する。
まさに、カラティーン・ダーナはそれをした。
「ウニにでもなりなぁ！　溶け混ざる二十八の血族（クラン・カラティーン）」
その瞬間、カラティーン・ダーナは28人に増える。厳密には、自分の肉親たちの姿を一瞬だけだが取り戻させる。
その連携殺法は、まさにヘラクレスや呂布すら苦戦させる猛攻。
それを、サイラオーグ・バアルは獅子の鎧をもってしても防ぎ切れなかった。
いくらかの裂傷や刺し傷を刻まれ、サイラオーグは一旦距離をとる。
そのうえで、その表情は強張っていた。
「……なるほどな。この激痛は、慣れてない類もあってかなり効く……っ」
「……悪祓銀弾（シルバーレット）はぴんぴんしてたんだけどよ。やっぱりアイツ、いかれてるよなぁ」

思い出してげんなりするカラティーン・ダーナに、サイラオーグは少し同情した。
彼女が傑物であり心身ともに強靭であることは知っていたが、その由来となる過去があそこまで壮絶とは思わなかった。
何よりあの地獄のような経験と敗北と再起は、そして笑顔に誓った決意が、彼女の絶大なる精神力を与えていた。
単純な意志力ならば、おそらく兵藤一誠をも超えるだろう。そのうえで自分が外れているという自覚をもって、他者に正しさを求めることはあっても意志の覚醒を求めていないところは凄まじい。
あの毒を喰らってなお平然と戦闘を行い、実情を知ってなお「戦闘を終えてから倒れればいい」と考える。並大抵の意志力ではなく、おそらく自分よりも強いのだろう。
……だからこそ、超えてみたい。
自分も苦渋を味わった経験はある。そもそも才能が少ない自覚もある。そのうえで努力で乗り越えてきた自負がある。
だがしかし、果たして彼女と同様の事態になって、あそこまで強くなれただろうか。
それほどまでに悲惨な人生をもって、しかし彼女は銀に輝く祓魔の弾丸となった。
……ならば、負けるわけにはいかんだろう。
どれだけ自分に悪魔としての才能が無かろうと。悪魔という種族が人間より強靭だということに違いはない。
……なればこそ。
「覚悟してもらおう。カラティーン・ダーナ。貴様を冥界の敵と断定する！」
「上等だぁ。俺もお前を殺して名を上げるぜぇ！」
そして更なる激戦が、繰り広げられた。

銀弾落涙編　第四十七話　半端に追い詰めてはいけないものは割と多い。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、超獣鬼と後継私掠船団の戦いは熾烈を極めていた。
ＧＦ（ギガンティック・フォートレス）を連れた大王派もいるが、彼らは後継私掠船団が被害を抑えて戦えるようにする程度にとどめ、本格的な攻勢を仕掛けない。
理由は二つ。後継私掠船団以外の被害を最小限に抑えることと、後継私掠船団を活躍させる為だ。
このタイミングでＧＦを投入したのは、それが必要だと判断したこともあるがＧＦのデモンストレーションともいえる。
はっきり言って、サンタマリア級はＧＦとしては見感性もいいところだ。
本来のコンセプトを達成するには色々なものが足りない。だが同時に冥界の戦力として有効であることも事実であるがゆえに、あまり出し惜しみをしてはいけないと切られた札である。
それゆえに、此処で大敗してＧＦの開発が白紙になっては困るのだ。
もう一つとして、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）の価値を冥界にとって高めることも必要である。
彼女達は今後を踏まえれば間違いなく有用な存在であり、またフロンズにとって同士一歩手前になる領域だ。彼女達を冥界に受け入れさせることも重要な要素である。
この為の準備は完了している。懲罰部隊という体裁は整える為、サンタマリア級０番艦を含めた艦艇で作戦活動を行う以外は、艦隊をと

どめておく要塞から出ないことになっている。またそれ以外でも常に三割以上を奉仕活動に繋げる予定だ。
とはいえ、後継私掠船団はかなりノリノリでテロ行為をしている組織。また社会秩序に対して興味がない。
悪逆に振舞うことを好き好んでするわけではない。かといって善行により誰かが幸せになることに雌伏を感じるわけではない。
あり方としては、秩序でも混沌でもなく中立。自分達が楽しく、また超えるべき目標を超えればいい。できるのならば善行でも悪行でもする。裏を返せば、有効な方向を示すことができれば味方に引き入れることはできたのだ。
だが、被害者に納得させるにはそれなりのものが必要だろう。けじめというものはその為にある。
今回の一件で、フロンズ達はそこを最も重要視していた。
本命は曹操達英雄派主流幹部の妥当だったが、しかしそれはそれでマッチポンプ臭がしないでもない。
また、兵藤一誠達冥界の英雄が動いているのだ。流れ的には彼らが打倒できるに越したことなく、横から入って打倒するのは悪印象を与える。この方向では彼らが大苦戦しているときに援護をするのが最適だが、それはそれで出待ちを考えられるとまずい。
なので、超獣鬼だ。
元凶ともいえるモデルベルゼビュートや曹操達をおっぱいドラゴンが打倒する。そして冥界を直接苦しめた超獣鬼は。フロンズ達に感銘を受けて鞍替えしたという形の後継私掠船団が露払いとして打倒する。
できるかどうかが問題だが、できなくとも奮戦すればそれでいい。
最悪の場合は被害が出るだろうが、サンタマリア級を中核とする艦隊の総力を挙げれば倒せることはできると試算が出ている。ルシファー眷属の協力を得れば尚更だ。
そういったプランもあり、「休憩できる時に休憩するのが優秀な戦力」と説き伏せ、艦艇の一つでルシファー眷属に休息をとらせている。
故に後継私掠船団を中核として、超獣鬼を打倒したいのだが―

「……シャルバめ。よもやここまでとはな」
―超獣鬼の猛攻に、流石の幸香も苦戦を強いられていた。
当然といえば当然だろう。敵はルシファー眷属が総力を挙げて一進一退。グレートレッドですら手古摺ったのだ。
如何に神滅具と同格の神器を持とうと、九条・幸香・ディアドコイは人間。どうしても限界はある。
勝つ為の備えはしているし、それなりの手段も用意した。だが、限度はある。
タイミングが最適故にこのタイミングで動いたが、手札においてはまだ馴染んでいない。それが理由となって、幸香はいまだ手札を切れず―
「お姉さま！」
「幸香！」
―梔子とユーピが叫ぶが、しかし遅い。
その瞬間、超獣鬼の攻撃が、幸香を包み込んだ。

和地Ｓｉｄｅ

振るわれる攻撃はすべてが回避される。
俺とカズヒ姉さんは、真っ向からの戦闘でミザリに傷一つ負わせていない。
……奴の禁手は合計で三つと思われる。
一つ、聖槍の禁手。これはアグレアスの襲撃でも見せた、聖槍をもう一本具現化し、場合によっては亜種で発現する。
一つ、聖杯の禁手。これはどうやら、聖杯を利用して精神や疲労す

ら癒す霊薬を作成する。精神の負荷はかかるだろうが、魔術回路保有者の精神の解体清掃でリカバリーは可能。

一つ、聖十字架の禁手。これは盾として具現化する星十字架を四つに増やして自在に使役する。たぶんだが、まだ何か伏札がある。

そしてレイダーとしては、どうやら神滅具多重盛を活かすこと前提でやっている。オーダーメイドで開発したと思われるこれは、脚力関連を重視している。総合的に見て、パンチ力や装甲強度は神滅具の恩恵や星辰光で補うこと前提なんだろう。

そして星辰光（アステリズム）。カズヒ姉さんが悟った奴の星辰光は、ある意味で最も厄介だ。

ミザリ・ルシファー
魔性（プルト）の戯（リッ）れ、悪鬼明星（プ・ルシ）の遊技場（フェル）
基準値：B
発動値：A
収束性：D
拡散性：AA
操縦性：D
付属性：AA
維持性：B
干渉性：C

総合的に性能は高く、拡散性と付属性が著しく高い。

そしてこの星の厄介な点は―

「甘い甘い……おっと辛（から）い」

そう言いながら、振るわれる斬撃や奇襲で放つ魔術を察知して回避する。

更に後ろからの斬撃すら、方向を分かっているように受け流す。
いや、分かっているんだ。
「……当たりのようだな、カズヒ姉さん！」
「ええ。共感覚型脅威察知能力。五感全てをもってして、自分にとっての脅威を察知する星辰光よ！」
厄介極まりない。
これの厄介な点は、五感全てで察知するという点だ。
当たり前だが、五感というものは一つだけですべてに対応する者じゃない。そもそもそれができるなら、五つも感覚を持つ必要がない
五感がそれぞれをカバーすることで、初めて生物は高い情報獲得を可能とする。すなわちミザリの星は、正しい意味で全方位に対応できる脅威察知能力を持つ。
呪詛の類すら瞬時に察知し、いっそのことバフでバランスを崩そうとしても先読みして迎撃してくる。
……カズヒ姉さんが倒されるわけだ。メンタルがボロボロでなかったとしても、これをどうにかするのは困難だろう。
奇策や絡めての類はおろか、初見殺しの類すら察知して対応しかねない。少なくともやばい攻撃がどこから来るかを察知できるんだ。まともにやりあうなら、昨夜隙を伺うのではなくジュンスな性能差がいる。
そんなミザリによる１００点満点の対応に、俺達は疲労を重ね—

「さて、じゃあ一人」

—カズヒ姉さんに、聖十字架の盾がめり込んだ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そう、敵は圧倒的。
相手はこちらの上を行き、そして絶大な威力の攻撃を叩き込む。そして自分達はアウェイなり疲弊なりで、間違いなく不利な状態だ。
そう、すべての条件が揃っている。
実力もしくは性能差。こちらの悪条件。更に強大な攻撃の直撃。
そう、すべての条件は今揃った。
故に―

「……まだだっ！」

―刮目せよ。
光に狂った超越者が、覚醒し飛躍する条件はすべて揃ったのだ。

銀弾落涙編　第四十八話　赤龍婚乳（バス・トライク）

イッセーＳｉｄｅ

畜生！　ぶっちゃけ全然攻撃が当たらねえ！
「ははははは！　お互いにクリーンヒットが全然当たらないな！　流石は真女王だ！」
曹操の野郎はテンションが上がってやがる。
糞ったれ。奴の禁手とサウザイアー・魏はどっちもやばい。
真女王でも有効打が一発も当たらない。分かっちゃいたけど大変だ。
……だからこそ、俺だってこのままってわけにはいかないさ。
勝ち目はある。当たればまず間違いなく決着を付ける切り札はある。
ただし、サウザイアー・魏を突破したうえで有効打にする必要がある。でなければ、この攻撃は届かない。
『調律はもう少しです。……ですが、このままでは……』
そうなんだよな。
シャルロットの懸念はもっともだ。俺もぶっちゃけそこを気にしている。
真女王はどうあがいても長期戦に向いてない。少なくとも、今の俺じゃぁ長時間の運用はきつい。
もう片方の切り札を使えば、勝ち目はある。ただ慣れてないから妨害されない形で発動させたい。
でも流石に、この戦闘状態でやるのは間違いなく無理があるっていうか―
「……おっと。やっぱり援軍が必要な感じじゃん？」
「少しはわたくし達も頼ってほしいのですのよー！」

―って、ヒツギにヒマリ!?
え、こっち来たの、マジで!?
面食らってると、二人はそれぞれ聖剣を具現化させて俺に並び立った。
「一人でかっこつけないでほしいですの。一発かましたいのは私達も一緒ですのよ？」
「そういうことじゃんか。……それに、いい機会だから言っとこうかな？」
え、それってつまり―
「……私達は、兵藤一誠を愛してます」
―マジか。
シャルロット、ドライグ。俺は自分のモテ期に戦慄が止まらない。
『後にしてください！　というより、お二人ともなんでこのタイミングですか!?　あとカズヒはいいんですか!?』
シャルロットのツッコミが乱れ飛ぶ！　あと曹操もなんだかんだでこっちを攻撃し続けている！
でも確かに、今カズヒって大決戦だけどいいの!?
そんな中、ヒツギはめっちゃ顔を真っ赤にしながらも、しっかり迎撃しながら胸を張った。
「……こういうの恥ずかしいから、勢いに任せないと言えないじゃんか！」
……意外と初心（うぶ）だ。
一見するとギャルっぽいけど、ぶっちゃけこの子が俺達の中で一番乙女かもしれない。
イヤホンと、ゼノヴィア達はヒツギの爪の垢を煎じて飲んでほしい。俺もそうだけど、カズヒの胃が死ぬ。
「どうせならヒツギと一緒にしたかったですの！　インパクトって大事ですのよ！」
こっちは平常運転でありがとう。でもなんだかんだで顔赤いのがポイントデカいよ。
うん、ヒマリは間違いなくゼノヴィア達側だ。どうかあいつらと一

緒に来ないでくれ。俺の胃が死ぬしカズヒの胃も死ぬ。
いやでも……なら……。
実を言うと、切り札以外にも新しい伏札はある。それを使えば、勝算はあるかもしれない。
でもこの新しい札は、リスクもかなりデカい。
俺も体が消滅したこともあるし、ハーデス達も今後俺達を警戒するかもしれないしな。このまま封印っていう考えもあったかもしれない。
でも、ふと思った。
ぶっちゃけ、これ二人にはデメリットが少ないんじゃないか？
どう思うかな、二人とも。
『構わんだろう。むしろあの二人なら、恩恵が更に向上する余地すらあるだろうしな』
『確かにそうですね。というより、何時ものように煩悩まっしぐらでやってしまってはいかがですか？』
そうか。ならやるか！
「二人とも！　実は新技とか切り札とかいろいろあるんだ！　……おっぱい貸して！」
「はっふぁぁ!?」
ヒツギがめっちゃ動揺している。
「ち、ちちちち乳技なの!?　え、リアス部長いないじゃんか!?」
めっちゃ動揺してるけど、大体察してくれて嬉しいよ。
あ、定番パターンだから当然か。……これが定番パターンっていうんのもどうなんだろうか。
いや、今はそれどころじゃない。
曹操も面食らっているから今がチャンスなんだ。何とか納得してくれないと―
「……やりましたの！　一番乗りですのよ！　グリド、足止め任せましたのぉ！」
―と、ヒマリがグリドをけしかけてからヒツギを押してこっちに来てくれた。

この子のこのスタンス、こういう時はめっちゃ嬉しいです！

……よし、深呼吸。

「え、え……えっと、その……」

「どうしましたのヒツギ？　これはチャンスですわよ！」

めっちゃ顔真っ赤のヒツギに並び立って、ヒマリはむしろ胸元をはだけ始める。

めちゃくちゃ見たいけど今は我慢。

「大丈夫。服越しでも掴めれば十分だ。これはそういう技なんだ」

「え、そうなんですの～？」

なんか残念そうなヒマリだけど、ヒツギはむしろほっとしている感じだ。

「え……そうなの？　なら、その……うん」

そして目を閉じて、そっと上半身を俺に近づけた。

「……優しく、してください」

「ヒマリはガシっといってもオッケーですわ！」

……元同一人物とは思えない、この二人の反応の違い。

一粒で二度美味しい？

なんか間違ってることを思いながら、俺は二人のおっぱいに触れる。

そして一気に煩悩集中！　更に全力赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）！

行くぜ、新技ぁ！

「二人とも大好きだ！　受け取ってくれ……赤龍婚乳（バス・トライク）!!」

「馬鹿な!?　味方に対して発動する……いや、使ったことは多いが！」

グリドを弾き飛ばした曹操が面食らうけど、そりゃそうだ。

洋服崩壊（ドレス・ブレイク）は相手の服を破壊する技。アーシアに使ったことはあるけど、あれは拘束している結界装置を破壊する為だ。

乳語翻訳（パイリンガル）はおっぱいの声を聴く技だ。最近神様パワーとかで味方を助ける為に使うことが多いけど、どっちかというと戦闘時に相手の作戦とかを聞く方が向いている。

だけど赤龍婚乳は違う。この技は、最初から味方に使うことを大前提としている技だ。

そしてこの技は悪魔の魔力運用が中心じゃない。赤龍帝の籠手、それも譲渡を中核に据えた、俺の新たなる力。
そして、二人には特に効くはずだ！
うぉおおお！　届け、俺のおっぱい愛！
「……いやぁんっ」
その前に鼻血で失血死しそうだけどね！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

その技を妨害できなかった曹操は、更に驚愕を覚えてしまう。
ヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバーの全身から、何度も味わったオーラを感じたからだ。
「……赤龍帝のオーラ？　やはり譲渡……いや、違う」
瞬時に曹操は悟る。
赤龍婚乳。その力は、これまでの乳技とは一味違う。
そして同時に、振り返った二人によってそれは証明される。
「……うぉおお！　と、とりあえず口封じぃ！」
顔を真っ赤にして放つ、ヒツギ・セプテンバーの砲撃。
高位の龍である八面王を封印した龍の咆哮（ドラグレイ・カノン）はそういうものだ。故にためらうことなく受け流しを試みるが―
「多……すぎる!?」
―受け流しが追い付かないほどの、弾幕ならぬ砲幕。それに曹操は回避と迎撃をする必要に迫られ、距離を開けるほかない。
だが受け流しを可能としたことで、その砲撃は一部が三人へと向けられる。
それが当たると思った瞬間、割って入った龍がそれを薙ぎ払った。

「頑張りましたわね、グリド」
微笑んだヒマリ・ナインテイルが鋭くこちらを見据える。
……あり得ない。
彼女が持っている神器は龍の外装（ドラグナイト・メイル）。リントドレイクという高位の龍を組み込んだ神器であり、亜種として龍其の物を発現している。
だがあり得ない。明らかにおかしい。
龍を封印した神器、それを絶大すぎるほどに魔力量一点特化の魔術回路を活かし、常時覇龍で発動させるのがあの二人の持ち味。
だが天龍はおろか龍王にも届かない、高位とはいえ無銘の龍。その力を覇で出したところで、できることなどたかが知れているのだ。
だからこそ、曹操は驚愕する。
そう、赤龍婚乳とは―
「譲渡の力を応用し、対象そのものを赤龍帝に昇華させる異能だと!?」
「……げ、もう分かったのか!?」
―兵藤一誠の驚愕が、それを分かり易く示していた。
恐るべし異能であり、かつ躊躇ったのも理解できる。
ドラゴンそのものに変質化させる異能など、異常事態と言ってもいい。
何かしらの異能で龍に変化した逸話は探せば割とあるが、それを神器の特性を応用するというのは恐ろしい異能だ。しかも完全には程遠いとはいえ、赤龍帝にするというのは脅威以外の何物でもない。
もちろん限界はあるだろう。また龍になるということは龍殺しによる特攻が入るということでもあり、リスクはとても大きい。ただ龍にするだけでは、性能強化とリスクが釣り合ってないだろう。
……だが、二人に限って言えば話は別だ。
何故なら彼女達は、元から高位の龍を封印した神器の宿主。元から龍殺しには比較的弱い。
高位の龍が赤龍帝化することによる、効率の良さからくる更なる強化度合い。そして龍種であるがゆえに龍殺しに元から弱いという、欠点がさほど問題にならないという点も逆手に取られた。
赤龍婚乳と二人の相性は間違いなく凄まじすぎる。

「うぉおおお！　と、とりあえず死ねぇぇぇぇぇぇ！」
「なんか胸がほっこりしますの！　これが恋ですのね！」
どこから突っ込みを入れたらいいか分からないが、だが曹操も決して油断はしない。
確かに性能は上がっている。だがそこまでだ。
禁手だけでは危険だったろうが、サウザイアー・魏の性能があれば十全に対応の余地はあり―
「……そして、おかげでなんとなく分かったよ」
「私達の、本当の星辰光の使い方が……」
―そのタイミングで、更なる警戒要素が跳ね上がり―
「ああ。そして俺達も使うぜ……俺の星をな！」
―とどめに更なる伏札まで開帳された。
これはまずいかと思った時、更に曹操は目を見開く。
臨界する星辰体は、個人に感応していない。
それは共振。すなわち―
「「『創生せよ、天に描いた双星を――――我らは煌めく双子星！』」」
―星は一人につき一つという、大前提が崩壊する。

銀弾落涙編　第四十九話　心を合わせ

イッセーＳｉｄｅ

「「創生せよ、天に描いた双星を――――我らは煌めく双子星」」
俺とシャルロットは、二人で一つの星辰光（アステリズム）を祈りだす。
きっかけは、俺が体を失った時のことだ。
歴代のおかげで魂だけは無事で、体もたまたま通りがかったグレートレッドにオーフィスの力を利用して新しく作ってくれた。
そして、シャルロットはドライグに提案してその体を調律した。
究極の羯磨を使って使った前代未聞。それこそが、この力だ。
「「極みを超え、赤すら超える帝王よ。羯磨を糧に黙示を越えろ。今こそ勝利を掴むのだ」」
いうなれば、俺は人間型の龍であると同時に、一からこの星辰光を使う為の肉体が調律された。
そしてこの星は、シャルロットと二人で扱うことで初めて機能する星辰光。
だからこそ、この星は俺達が祈らないと始まらない。
「夢幻より聞こえる声に、今こそ応えろ紅よ。麗しの姫と同胞に嘆きの終わりを与えるな」
俺の決意が究極の羯磨（テロス・カルマ）と共振する。
「無限の彼方を見たうえで、今こそ願いを掴み取れ。麗しの姫君と並び立つ、究極の答えを示して見せよう」
シャルロットの願いが赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）と共鳴する。
そうこれは俺とシャルロットが更なる高みに行く為の星辰光。
二人が同時に使うことで、初めて至れる星なのだから。
「この身に宿る令嬢よ。俺に可能性（光）を示してくれ。君に恥じない己こそ、俺が俺自身に科した誓いなのだから」

俺の中に宿っているシャルロットに、俺は心の中で手を伸ばす。
「ならば光を授けましょう。汝、愛しき紅の帝王よ。我が究極をその手に宿し、輝く夢で冥界(世界)を照らせ」
その手を、シャルロットが掴んでくれるからこそ、俺達はこの星を掴み取れた。
「「絶望よ、ただ安らかに燃え尽きろ。希望の光は此処に在る！」」
そう、だからこそ――
「「超新星(メタルノヴァ)――赫極連理(シンフォニック)、限り無き夢と幻(カルマ)を現世(ギア)に!!」」
――ここからが本番だぜ、曹操うっ！

Other Side

「「創生せよ、天に描いた双星を――――我らは煌めく双子星」」
そして曹操に、紅を止める術などない。
何故ならば、今彼はまさに紅に攻撃されているのだから。
「死の断絶を乗り越えて、蛇は二つとなり果てる。困惑と嘆きの宿命を背負い、されど紅の祝福が我らが心から枷を解き放つ」
ヒツギ・セプテンバーが祝詞を唱える。
自らの宿命を見据えたことにより、彼女達は星を振るう段階に対に到達した。
かつての自分達であった命の果てを知り、そしてそれをなんてことの内容に受けた赤龍帝が、彼女達の祈りを正しく具現化する。
「ああ、愛しき赤き天道よ。汝の飾らぬ言葉が、どれだけ私達を救って

くれたか。我らは前世(かつて)ではなく今生(いま)を生きると決意しよう」
ヒマリ・ナインテイルもまた祝詞を繋ぐ。
だからこそ、今こそ彼女達は彼女達としてここに立つ。
ヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバーという、二人の少女として、正しく星を向き合った。
「堕落の染まった乙女の祈りも、されど決して捨てはしない。銀弾の軌跡は光となって、我が宿命を指し示すから」
そしてそのうえで、二人は前世も受け止める。
かつてそうであった少女を知り、その顛末すら受け止めた。その上で、愛憎渦巻く感情でその発端となった少女の成れの果てを、道間乙女ではなく自分達の意志で、灯して受け止める。
彼女達の過去をないがしろにはしない。その上で、自分達は自分達だと、愛する男の力をもって、心の底から選び取る。
「絶対なる死すら乗り越えて、我らを掴め紅と銀(くれないしろがね)。神に届く軌跡をもって、我らは共にあると誓う」
故に、彼女達の星は変質した。
本来とは異なる祈りを赤き龍の力とその影響で紡ぎあげ、此処に二人で一人の星辰光が具現化する。
「超新星(メタルノヴァ)――紅に寄り添(クリムゾン)え比翼(カ)の蛇龍(ドウ)、双立(ケウ)せ(ス)よ!!」
この瞬間、仮面ライダーサウザイアー・魏は、間違いなく抑え込まれていた。
女宝による女性の異能封印すら通用しない。圧倒的な強者の性能をもってして、連携攻撃が曹操を一瞬だが縫い留める。
それを成す彼女達からは、まるで霜が剥がれ落ちるかのように紅の結晶体が飛び散っていく。
それをサウザイアー・魏のセンサーで悟り、曹操は目を見開いた。
「星辰体結晶化能力、だと!?　幸香が言っていた、ザイアの長達が使っていた能力と同系統……っ！」
驚愕に値する、ヒマリとヒツギの星辰光。
その実態は星辰体結晶化能力・共振型。

ヒマリ・ナインテイル＆ヒツギ・セプテンバー
☆紅(クリム)に寄り添(ソン)え比翼(カ)の蛇龍(ドウ)、双立(ケウ)せよ(ス)（括弧内は単独発動時）
基準値：Ａ（Ｅ）
発動値：ＡＡ（Ｄ）
収束性：Ｃ（Ｅ）
拡散性：Ｅ
操縦性：Ｅ
付属性：ＥＸ
維持性：Ｃ（Ｅ）
干渉性：Ｅ

互いが互いに最適化された結晶化された星辰体を付属させることで、能力を乗算レベルで強化する星辰光。

これまで二人が星を発揮できなかったのは、このお互いに使用しあうことで共振する性質を理解していなかったが故。そして本来ならば、この星はもっと違う使い方もできたはずだ。

だがしかし、今この場において二人はこの選択肢をとった。そしてそれができたのも、兵藤一誠によるものだ。

「……ヒマリ。イッセーのこと、好き？」

「ヒツギはどう思ってますの？　それが答えですの」

そう語り合いながら、二人は更なる連携をもって曹操に食らいつく。

かつて一つであり、今は二つになった自分達。

だが、彼を好きになったのはだからではないと断言できる。

そう、ヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバーは二人で別々の存在なのだ。そう、当たり前のように語ってくれた彼のことを、好きになれてよかったと思っている。

だからこそ―

「もうちょっと粘らせてもらうじゃん！」
「覚悟しますのよ！」
「いや、そろそろ終わらせる！」
―その激戦は、曹操に傾きながらも食らいつく。
だが曹操もまた、瞬時に相手の動きを読み取り始めていた。
相手が性能で女宝を突破するのなら、自分は技量で対抗するまで。
聖槍を華麗に操り一瞬の隙を作り上げ、そこを転移の七宝で連携を削る。
ただそれだけで、この連携は致命的になる。
規格外の付属性を生かすには、最底辺の拡散性ゆえに近距離での連携が必須となる。既に曹操はそこまで読み切っていた。
ゆえに、針の穴に糸を通すような器用さで、曹操は同時に三つの七宝を動かす。
そのどれもが対応を困難にするが、本命を隠すには十分すぎる。
故に遠慮などする必要はなく―

「そうはいかねえなぁ、曹操！」

―ゆえに、その針の一刺しを正確に弾き飛ばされ曹操は驚愕する。
赤龍帝の拳は、連携を崩す為の七宝を正確に捉えていた。
そこに迷いはない。むしろ警戒がある。すなわち革新すらあった。
それは、兵藤一誠が七宝のどれがどれかを把握していることを意味し―
『油断大敵だな、小僧』
―更なる脅威が振るわれる。

放たれる攻撃は性格かつ、相手が動きを悟らせないぶれを見事に組み込んでいた。
それは圧倒的な経験値を持つ者だけが振るえる攻撃。断じて悪魔になれたての兵藤一誠ができる者ではなく、才能や鍛錬とも異なる攻撃だった。
まるで赤龍帝という力を最大限に生かしたとすら思えるその攻撃は、すなわち―
「……赤龍帝、ドライグだと!?」
『少し違うな。これは疑似的な独立具現型になる亜種禁手さ』
「そして、更なる不意打ちをさしあげましょうか？」
更に後ろからの奇襲を、間一髪で回避する。
そこのは、軽装だが確かに赤龍帝の鎧を身に纏ったシャルロット・コルデーがいた。
混乱が加速する。
そしてその上で兵藤一誠は宣言した。
「覚悟しやがれ、曹操。……俺達赤龍帝が、てめえをぶっ飛ばす！」

銀弾落涙編　第五十話　決着の始まり

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ステラフレーム・モデルベルゼビュートは間違いなく難敵で強敵だった。

二対一とはいえ、アジュカ・ベルゼブブがてこずったのはそれだけの力を持つからだ。それをリアス達は痛感する。

『どうした屑共！　この程度で、シャルバの怨念を止めれるとでも思ったかぁ！』

モデルベルゼビュートがそう吠えると共に、彼の上の空間が歪んで百を超える砲弾が放たれる。

放射能汚染に酷似したオーラを付属された砲弾の群れは。数秒のタイムラグに合わせて自分達に向かって自由落下を開始する。

その砲弾の雨を撃ち落としながら、リアスは少しずつ敵の手札を考えていた。

……大量の手札を持ち合わせるモデルベルゼビュートだが、手札にある種のパターンがある。

一つはシャルバから継承した魔力運用。一つは星辰光による放射能汚染。

だがそれ以外の手札があまりに多種多様だ。そしてどこか、共通点を感じてしまう。

そこまで考え、リアスの思考はあることに思い至る。

そもそもステラフレームと前置きされているということは、すなわち彼らはある程度の共通性を持っている。

また、禍の団が運用している人造惑星は、その多くが同型機は共通する星辰光を運用している。

加えてミザリ側が関与した人造惑星の大半は、人工神器技術を積極

的に運用していた。
　それらは星辰光だけでなく、「宿す人体を含め、出力を高める為に大きく造る」というアプローチを得ている。そしてそれらをより確実に運用する為、星辰光を補正としている。
　星辰光そのもので同調や出力を上げているサリュートⅡ。それぞれの運用能力に合わせ、星辰光と人工神器を一対にしたと言ってもいいΔサリュート。そして人工神器そのものは超大型ゆえに高出力だが、自在に運用する為に星辰光を使用するギガンティスサリュート。
　そこまで思い至り、リアスは絡繰りを悟る。
「……そういうこと。ステラフレームとモデルベルゼビュートは別々の星辰体運用兵器なのね」
『ほぉ、気づいたか』
　答えは関心という肯定だ。
「どういうことっすか、部長!?」
「簡単なことよ、アニル。……ステラフレームはおそらく共通で星辰光を保有しているのよ」
　アニルに対して簡潔にまとめれば、それですぐに何人もが理解したようだ。
「……なるほど。つまりステラフレームは素体の星辰光を宿す人型躯体と―」
「―人工神器を組み込んだユニットがある、一対セット……っ」
　ルーシアと小猫が悟った通りということだ。
　禍の団の人工神器技術は、とにかく大型化することに終始している。
　大型化することで技術力が低くても高出力化に繋がり易くなる。更に宿主との相性による不都合を、大量の人員による分散処置や、宿す人体すら大型人造の人型兵器化で対応する。これが禍の団の軍事力の高さに繋がっている。
　だが同時に、それは大きくなるがゆえに運用面でも不都合も多い。
　ステラフレームはそれに対するアンサー。すなわち「巨大なウェポンプラットフォームと繋がり、人間サイズの躯体がそれを運用する」

という解決策だ。
だからこそ―
「……勝ちに行くわよ、皆！」
―その程度で、負けてやるほどグレモリー眷属は甘くないのだ。

カラティーン・ダーナは間違いなく強敵だと、サイラオーグは痛感する。
神話の英雄譚における難敵が弱いわけがない。だが、サーヴァントとなったことで更なる強さを得ている。
瞬間的な打撃力や防御力の二十八倍化。これが危険でなくてなんという。
故にこそ、遠慮をする理由は欠片もない。
「……いいだろう。ならばこちらも札を切ろう」
「漸く神滅具を使うのかぁ？　だがさせる気もねえんだよなぁ！」
突貫するカラティーン・ダーナに、サイラオーグはしかし油断はしない。
「……レグルス！」
『承知！』
『ＭＯＮＡＲＣＨ』
妨害を試みるカラティーン・ダーナは、しかし見誤っていた。
サイラオーグ・バアルは獅子王の戦斧の保有者ではなく主。彼は眷属悪魔としてレグルスを従えているのである。
必然、レグルスが別個でプログライズキーを装着するという手法も可能となる。
「『実装！』」
『レザーライズ！　キングライオン！　Ｇｏ　ｔｏ　ｌｏｒｄ　ｏｆ　ｋｉｎｇ』

故に、装着した状態で宿るというからめ手により、サイラオーグは妨害を受けることなく禁手に至るとともに、レザーレイダーとして顕現する。
黄金に輝く獅子を模した追加装甲。
それは、サイラオーグ・バアル専用に開発されたプログライズキー。
神の子を見張る者による神滅具調律機能と、生体調律による闘気の増幅。
獅子王の剛皮（レグルス・レイ・レザー・レックス）と比べてそれ単体での性能に劣るという、鋼獣纏う獅子王の皮鎧（レグルス・メイル・レザーレイダー）の欠点を完全に補うシステム。サイラオーグ・バアル強化特化型プログライズキー。
「……では覚悟してもらおう。この場がお前の死に場所と知れ！」
キングライオンレザーレイダー。
獅子の大王サイラオーグ・バアルの、更なる飛躍の証明である。
「上等だ！」
「ぬぅん！」
その瞬間、剛腕と剛腕がぶつかり合う。
二十八倍に瞬間増幅された質量を、しかしサイラオーグは拳で弾き飛ばす。
神滅具との同調が強化され、更に闘気が増幅されたことで、サイラオーグのポテンシャルは更に増幅された。
徹底的なまでにサイラオーグそのものを強化すると言ってもいい方向性は、単純故に絶大に強固。そしてそれは、徒手空拳という単純なスタイルに終始しているサイラオーグを更に高めていることを意味している。
瞬時に激突を繰り返すカラティーン・ダーナは、それゆえに自分が不利であることを理解した。
その上で、しかし彼はほくそ笑む。
―そいつの弱点は分かってるんだよなぁ―
英雄譚の物語は、単純な脳筋ばかりによって構成されるものではない。むしろ性能で格上の相手を、絡めとる策を思い至る知恵をそれでもなお博打になる戦いに挑む勇気をもって実行する者が至れること

の方が多いのだ。
故に、カラティーン・ダーナはためらうことなく宝具を開帳する。
……２８人がかりによる包囲。それも、打倒ではなく打倒する為の前段階。
プログライズキーを使用した者達最大の欠点は、プログライズキーが必要不可欠。
装填するという形故に、握りを強くして耐えるという真似もできない。四肢に組み付いて動きを封じたその瞬間を狙えばいい。
そう理解しているがゆえに。カラティーンは内心でほくそ笑み―
「―まずは貴様だ」
―その瞬間、自分の死神が目の前に現れた。
ためらうことなく自分に突貫したサイラオーグは、それゆえにカラティーン・ダーナの反応を超える。
『ＭＯＮＡＲＣＨ』
分身をカバーに入れる暇などない。
既に死神は拳を構え、そして振りぬいた。
『キングレザーボライド！』
その圧倒的に増幅された闘気の拳は、文字通りカラティーン・ダーナの胸を貫通する。
霊核の粉砕。決定的な致命傷。
その時彼が思ったのは、唯一の疑問。
「な、んで……本体(俺)が、わ……分かった……？」
ためらいも躊躇の無く、自分を狙って拳を叩き込めたその理由が、カラティーンには分からない。
サイラオーグ・バアルは非才だ。
魔力がない。それ以外の異能の類にも長けていない。ただ単純に生命体としての強さと武人としての強さで挑んでいる男だ。
殺気を感じることはできても、正確に誰が本体化を悟ることなどできるわけがない。
「……何を言っている？」
そして、それは何も間違っていない。

「俺はただ、一人ずつ確実に倒そうとしただけだぞ？」
……そのあまりに愚直すぎる答えに、カラティーンは返答すらできない。
極めつけに単純かつ滅茶苦茶な対応に、カラティーン・ダーナは討伐されたのだ。

そしてタイミングを同じくして、リアス達も決着をつける。
「……いくわよ皆。この男はそこで倒すわ！」
「「「「「「「「はい、部長！」」」」」」」」
リアスに応える仲間達と共に、リアスもまた星を開帳する。
放たれる大量の蠅を、祐斗と同じ龍騎士団によって迎撃。
それに対し、モデルベルゼビュートもあらゆる攻撃で対応する。
それをリアスは、仲間達と共に力を組み合わせて突破していく。
放たれる大量の迫撃砲を、雷光によって粉砕する。
プラズマフィールドはロスヴァイセと同調した魔法によって中和する。
アザトースブレードをゼノヴィアのエクス・デュランダルで相殺し、更に投げ渡された天閃（エクスカリバー・ラピッドリィ）の聖剣で距離を詰める。
更にそれを投げ渡し、バーナーユニットによる超高圧火炎放射をアニルに捌かせ一気に迫る。
仙術による強化をもって、アザトースカノンを食い止め、聖母の微笑みを展開することで負傷を回復していく。
イリナと共に光力を放つことで、左右から迫るように放たれたミサイルを迎撃する。
ルーシアと共に射撃を行い、ガトリングレールガンの攻撃を逸らす。
そして迎撃の為に振るわれた聖魔剣を、祐斗と共に振るう聖魔剣による数で捌き切った。

『おのれ……忌々しいグレモリーの小娘がぁ！』
「こちらのセリフよ、悍ましい魔王の出来損ない！」
放たれる攻撃に対し、リアスは至近距離に食らいついた。
放たれる打撃はあまりに重い。おそらくは質量を共有する人工神器によるものだ。
だが、それをリアスは強引に突破する。
その全身に纏う生命力を見て、モデルベルゼビュートは目を見開いた。
『それは！　バアルの出来損ないと同質！』
「そうよ。眷属以外とも、絆を結ぶのは当然でしょう！」
闘気を纏って吠えながらの突貫に、モデルベルゼビュートは絶大な力の奔流で迎撃する。
その瞬間、リアスはすぐに悟った。
この一撃は、クリムゾンブラスターすら超えるだろう。
すなわち、正真正銘の魔王級。シャルバ・ベルゼブブは成れの果てとなったことで、まさに魔王の領域にさえ到達したのだ。
だが、それがどうした。
敬意を向ける理由などない。敵意を覚える理由しかない。
そして何より、目の前の敵は冥界の民を苦しめ、愛する兵藤一誠の体を崩壊させた男の怨念を受け継いでいる。
ならばもう、語るまでもない。
「……私の可愛い下僕達！　どうか、力を貸して頂戴！」
「了解です、部長！」
「部長、受け取れ！」
手を伸ばし、掴み取るは魔帝剣グラムとエクス・デュランダル。
二つの刃を文字通り、全力で開放して斬撃を叩き込む。
グラムの呪いと聖なるオーラもまた増幅し、リアスを襲うが問題ない。
その瞬間、億が一にも満たないだろう、リアスが無事適合する一瞬の可能性が連続する。
究極の羯磨（テロス・カルマ）すら限定的に発動し、リアスは魔王の頂すら踏破した。

『認めぬ、認めぬぞ……シャルバを認めぬ冥界など、断じて認めぬ―』
「こちらのセリフよ、恥ずべき悪魔」
吠えるモデルベルゼビュートの発声器官に、リアスの言葉がそれを止める。
輝く目は邪眼のそれ。何より闇すら噴き出す停止の奔流は、一瞬だがモデルベルゼビュートを縫い留める。
―戻ったら、ギャスパーについて調べないと
そう思うほどに禍々しい力に、だが何故か恐れを今は感じない。
闇と停止の奔流は、まるでこの身に纏う鎧のように自分を守ってくれるから。
きっと、この力も愛するギャスパーの一つなのだと、なんとなく思いながら、リアスは魔帝剣グラムとエクス・デュランダルを振りかぶる。
「滅されなさい、モデル・ベルゼビュート。これ以上、シャルバ・ベルゼブブの怨念に奪わせるものは何もない！」
そして十字に両断し、消滅の魔力がシャルバの怨念を跡形もなく滅ぼした。

銀弾落涙編　第五十一話　守護星覚醒

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

そして、戦線は動き出す。
「……まだだ！」
強引な魔術の行使で、カズヒ・シチャースチエは窮地を脱する。
「……まだだ！」
急上昇する星辰体による出力向上で、九条・幸香・ディアドコイは攻撃を弾き飛ばす。
「そう、まだだろう？」
そしてカズヒに問いかけるように、九成和地は問いかけた。

「「「そう、まだだ！」」」

それに呼応するように、並び立つ者は現れる。
リーネスが、鶴羽が、梔子が、ユーピが。
今ここに、反撃の為に並び立つ。
その頼もしさを胸に、親子は奇しくも同時に覚醒を果たす。
意志の力が文字通り、肉体の性能を底上げする。
……そして、奇しくも二人は異なる形で力を成す。

呼応する星辰体を感じながら、幸香はシャルバに僅かな敬意を感じる。
恨み節によるものとはいえ、上位神滅具を使った禁手とはいえ、瞬間的にとはいえだ。
それでも、ここまで凶悪な禁手に至ったことはまごうことなき偉業だろう。称賛するべき力を振るったあの男に、そこだけは敬意を示す。
だからこそ、此処で至る。ここで成し得る。ここで振るう。
それこそが、目の前の超えるべき敵手に対する礼儀だと、彼女は決意によって覚醒する。
「天進せよ、我が守護星――」
ここに至るまで、彼女は研鑽も研究もし、鍛錬だけでなく力を集めることにも貪欲だった。
故に人造惑星という手段を考慮し、それを最大限に生かして会得するべき研究もしてきた。
そこで到達したのが、魔術を利用したアプローチ。程度はともかく己が体に手を加えることも多々ある、魔術回路保有者のアプローチの応用。魔術回路保有者が己が血族に受け継がせることで強化できる、魔術刻印の応用。
フロンズ達の手を取るタイミングで、幸香は処置を決定した。フロンズに事前に集めてもらった道間家の技術まで使った、魔術的処置によって至った人造惑星。
そして強き衝動をもって、彼女は新種の魔星が一番槍に到達する。
「――鋼の未開(あした)をかけるがために」
刮目せよ、魔獣共。
今ここに、礼装型人造惑星の猛威が開帳されるのだ。

和地Ｓｉｄｅ

「和地、そろそろ本番行くわよ！」
『ＢＩＲＴＨ　ＣＲＹ』
「当然だ、カズヒ姉さん！」
『ＢＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ』
俺とカズヒ姉さんは、並んでプログライズキーを起動させる。
覚悟は決まった。決意もある。
何よりも、此処に笑顔を交わして誓い合った、愛する彼女がいるのなら。
必ずやれるさ、答えは決まっている。
だからこそ―
『ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……』
「「変身！」」
『ショットライズ！』
『フォースライズ！』
展開される無数の犬と飛蝗の軍勢が、俺達を囲んでアーマーを展開する。
『パラディンドッグ！　Ｔｈｅｎ　ｓｍｉｌｌｉｎｇ　ｓｉｌｖｅｒ　ｂｕｌｌｔｅ．　Ｓａｖｅｒ　ｉｓ　ｅｘｔｒｅｍｅ　ｏｖｅｒ』
俺が展開するのは、水色のアーマーに身を包んだ騎士のような強化装甲。
『リスターティングホッパー！　Ｉｔ，ｓ　ｒｅ　ｓｔｅｒｔ』
カズヒ姉さんが展開するのは、これまでよりスマートになった白銀の装甲。

仮面ライダーマクシミリアン、パラディンドッグ
仮面ライダー道間、リスターティングホッパー。
今ここに、俺達は揃い踏みで変身した。
「……いいよ。それを潰えさせた時、とても悲しくなりそうだぁ」
陶酔するミザリには悪いが、そんなつもりは欠片もない。
俺とカズヒ姉さんは頷き、そして前に出る。
覚悟はいいか、ミザリ・ルシファー。
ここのお前が望むものなど何もない。あるとするなら、それはお前達だけにある物だ。
だからこそ、俺は魔剣を手にして決意を込める。
「――禁手化（バランス・ブレイク）」
俺が作り出したのは、一振りの魔剣を超える魔剣。
魔帝剣でも聖魔剣でもない、この魔剣は魔星剣。
同時に俺は魔星剣と感応し、此処に真なる意味で魔星の頂に到達する。
これが俺の禁手（バランス・ブレイカー）。名を、星宿す想いの魔剣（スターソード・オブ・スフィア）
そして同時にパラディンドッグプログライズキーに取り付けられたダイヤルのついたユニットの、小さな液晶画面に「０：０７：３０」のカウントが動き、一秒ごとに減っていく。
これがこのプログライズキーが本領を発揮できる、残り時間だ。
それが終わるまでに片付ける。
そして俺はカズヒ姉さんと共に、祝詞を此処に宣言する。
「天衛せよ、我が守護星――」
そう、ここにきて俺達は、新たな領域に到達する。
「――鋼の笑顔（誓い）で涙を変えろ!!」
悲劇をかき消す涙を変える、救済の銀弾は此処に在る！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……和っちってば、ここで至る?」
失神したジャンヌ・ダルクに拘束術式を駆けながら、春菜は思わず苦笑した。
師匠には恩があり、また彼女がいてこその九成和地だと否応なく理解している。
なのでカズヒが上で自分が下であることに文句をつける気は欠片もない。だがそれはそれとしてちょっと妬くし、そこまで分かり易いと一周回って笑えてくる。
道間日美子の笑顔に誓った生き方を貫く九成和地。彼が道間日美子の成れの果てであるカズヒ・シチャースチエと思いを合わせることで、世界の均衡すら崩す力を獲得した。
もはや運命とすら言えるが、ここまで分かり易く一直線だとどうしたものかと思ってしまう。
「……和地くんもあれだねぇ。分かり易すぎてなんで私達(ハーレム)やっちゃってるんだか」
後処理をしながらも、インガも少し苦笑していた。
あそこまで分かり易く好意を彼女に示しておきながら、何故自分達まで愛せるのやら。
……そもそもカズヒがそういう要求を出したことが理由だが、それはそれとして素質もあるのだろう。
「ま、だからこそ何だろうし文句はねえよ。それにまぁ、事情を知ったら色々お似合いじゃねえか」
苦笑交じりのベルナの言葉がすべてを物語っているだろう。
互いに前世の笑顔を瞼に焼き付け、今世での生き方を貫いてきた。そして和地はカズヒの過去をすべて知ったうえで、それでも想いを決して曲げなかった。
これには勝てない。むしろご相伴に預からせて貰っているだけ、そ

ういう条件を出したカズヒに感謝するべきだ。
二人に人生を救われた者として、そこに文句は欠片もない。
そこで三人の意見が重なった時、近くのビルが粉砕される。
現れるは、ボロボロになりながらも戦闘を繰り広げ射ていたと思しき三人。
そして、そのうちの一人が膝をつくと、空間が歪むように何人かが吐き出されるように現れた。
「……あ、ヴァーリチーム？」
「おいおい、どういこった？」
春菜とベルナが怪訝な表情を浮かべる中、インガは他二人の方を意識してカバーに入る。
仮面ライダーグリームニルとなったリヴァ・ヒルドールヴも、白龍皇の鎧を付けたヴァーリ・ルシファーも、共に満身創痍に近かった。
それは残された一人であるアクシズもそうだが、この二人を相手にボロボロになる程度ですまされていることがおかしいレベルだ。
更にヴァーリチームが全員倒れているこの状況下は、相手が難敵であることを示していた。
「……よもや、更にプルート様を相手に札を隠したまま打倒するとは。……怨敵ではありますが、その力量だけは認めねばいけませんね」
うんざりしたような雰囲気を纏いながらも、アクシズは空間を歪ませて離脱の構えを見せる。
「決着は次会う時に。それまでにこちらも牙を研ぎ直しておきましょう」
「……いいだろう。その時には俺もこの力を更に研ぎすまそう」
静かにヴァーリと睨み合い、アクシズは空間の歪みに消えていく。
―のちに地獄事変と称されることになる戦いにおいて、D×Dを幾度となく苦しませる死神部隊ハルベルト。
その因縁が結ばれたのは、まさにこの瞬間だったのだろう。

銀弾落涙編　第五十二話　魔獣討伐の巨船

イッセーＳｉｄｅ

俺は皆の力を借りて、曹操に食らいつく。
放たれる七宝はだいぶどうにかなる。
何故なら、何がどこから振るわれるか分かっているからだ。
今の俺は、曹操が振るう攻撃の可能性が見える。
曹操の禁手で一番厄介なのは、七つの手札のどれを使ってくるかが分からないからだ。
裏を返せば、手札が分かればやりようはある。全部能力がはっきりしてるから、どう気を付ければいいのかも分かるからな。全部一度見ていたのがこんなところで役に立つとは思わなかった。
だからこそ、俺は相棒や愛する人達と一緒に何とか戦えている。
「でもいいのか、ヒツギにヒマリ！　カズヒ達の方に行かなくって！」
そっち本当にいいのかな!?
俺はその辺本当に気にしているけど、ヒマリはにっこり微笑みながら親指を立てる。
「カズヒには和地がいますもの！　私達は愛する人をまず何とかしますわ！」
「……あははぁ……。ま、あっちはあっちで任せられるのが多いじゃん？」
俺、本当に最近モテてるなぁ。
こりゃ負けられないってもんだよな！
「そうですよ、イッセー！」
そしてシャルロットが曹操をけん制する。
俺が曹操の女性封じにさえ気を使っていれば、シャルロットもヒツギもヒマリも動ける。
今の曹操の力量じゃ、女性封じ以外に力をまわすことも困難だ。だ

から、やりようは十分ある。
いくらサウザイアー・魏が強力だからって、そう簡単にはやらせないぜ！
「そういうことか！　ここでここまで見せてくれるとはね！」
曹操も俺達の攻撃を回避しながらしのいでいく。
しかもこれ、俺達の星辰光についても悟ってきやがったな!?
「神滅具同士を共振させ、お互いの神滅具が保有する力を副次機能としてお互いが独立して使用する能力……といったところか！　しかも別の禁手として、ドライグ自身も使えるようにするとはね！」
『やはり貴様は危険なやつだ。誉め言葉と受け取っておけ！』
独立して動くドライグも、ここまで言うぐらいとはな。
実際星辰光の能力をすぐに悟っているしな、まったくだ。
……そう、曹操の推測は当たってる。
俺とシャルロットが振るう星は、神滅具共振再現能力。お互いの神滅具の力を疑似的に神滅具に宿すことで、下位互換という形で力を振るう星辰光だ。

兵藤一誠&シャルロット・コルデー
☆赫極連理（シンフォニック・カルマ＝ギア）、限り無き夢と幻を現世に
基準値：C
発動値：A
収束性：B
拡散性：EX
操縦性：D
付属性：A

維持性：Ｄ
干渉性：Ｄ

正直言って、俺は本当に危なかった。
サマエルの毒で意識が飛んで、体はあっという間に滅んでいく。
それを歴代の残留思念が、身代わりになって受け止めてくれたから魂を籠手に封じて何とか助かった。
……まぁ、お別れの言葉として残された「ぽちっとぽちっと、ずむずむいや～ん」の合唱にはちょっと思うところあるけど。
そしてたまたま通りがかったグレートレッドに、オーフィスが俺を掴んで飛び乗ったことで何とか俺は助かった。
しかもドライグの判断で、オーフィスの力まで込めてグレートレッドの体細胞から俺の体を新しく造るなんてことをして、俺は此処にいる。
だけど、それだけでは曹操には勝てない。
そこで俺もいくつか策を立てたりはしたけど、シャルロットも策を立てていた。
それがこれだ。
シャルロット自身も含めて、神滅具同士で共振して力を再現する二人で一つの星辰光を使えるようにする。
究極の羯磨の力をフルに使って、シャルロットは体を作るついでに成し遂げた。
……だからこそ、俺は勝つぜ。
「覚悟を決めやがれ、曹操ぅぅぅぅぅっ！」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

振るわれる猛攻が始まる時、同時にジョン・ラカムは決断した。
「野郎ども！　ここが攻め時だ、気合入れろやぁあああっ！」
『『『

命令に合わせ、艦首に二門ある大きなユニットから、絶大な魔力が集まっていく。
そして収束された砲撃は、超獣鬼の一体に直撃し揺るがした。
反撃を行う為に砲撃の力が籠められるが、しかしラカムは慌てない。
「防壁モード！　円錐型に展開してそのまま突っ込め！」
その言葉に合わせるように、魔力が傘となって反撃の炎を突き抜ける。
そして突貫した勢いで、そのまま超獣鬼を空へと持ち上げていく。
……本来、マルチユニットにそれだけの機能はない。
二門の人工魔力放出ユニット『ブル・ゴルディアス』は絶大な魔力制御機構であり、人工的に生成された人工魔力は魔王クラスの出力制御を可能とする。そこに大型の格納庫もあって、万能戦艦といえば聞こえがいい。
だが空母としても使える格納庫やユニットを踏まえて搭載した結果、どうしてもスペースやリソースの問題からできることには限度がある。空母としてのスペースも限界がある為、結果としてどっちつかずで本領も発揮しづらい。少なくとも魔王クラスの砲撃を与えた後に突撃攻撃を仕掛けられるほどではない。
だからこそ、それはサンタマリア級ではなくラカムの力。
此ぞ海賊、集え我が旗の元に。己の海賊旗に集う知名度補正を利用した、海賊船団の呼び出しが本命だ。末路がダサかったのでラカムの海賊団が一番集まりにくいが、海賊という概念に作用する為近代の海賊すら呼び出せる。
そしてこれは、海賊旗ゆえに応用ができる。
旗の元に集った者達を「ジョン・ラカム率いる海賊団」という形で与える、疑似的なエンチャントスキル。Ｂ＋ランクに到達しているこれは、海賊団という形で自分やマスターに心酔する後継私掠船団のメンバーに、高位霊体レベルの強化を与えることが可能。器物においてもＥ～Ｃランクの宝具とできる。
「ジョン・ラカムが船長となる海賊船」として仕立て直したネオ・マ

ケドニアは、その影響でCランクの宝具として強化されている。
これにより、器用貧乏といえるマルチユニットを組み込まれたネオ・マケドニアは、器用裕福というべきレベルにまで高まった。
そして、それゆえに反撃はこれにとどまらない。
「野郎どもぉ、出撃だぁ！」
『『『『『『『『『『いぇぇぇぇぇぇぇっぃ！』』』

た砲撃で超獣鬼二体を相手に挟み込んでいく。
そして超獣鬼を直線ラインに結べるようにした際、そこに対して左右から強襲突撃ユニットが突貫する。
高出力の艦首魔力フィールドユニットが、幅広の刃をもって超獣鬼を深く切り裂き、側面の支援砲撃ユニットと格納されたＤＦによる砲撃がそれを更に深くする。
そこでぐらついた超獣鬼達に、とどめの砲撃が放たれた。
「出力最大……発射ぁ！」
その号令に合わせ、砲撃戦艦ユニットの根幹、艦首ユニットとほぼ同じ長さの方針から放たれる艦首収束魔力砲『ルシファーカノン』が、全方位から超獣鬼に叩き込まれた。
……それに耐えられる余地など欠片もない。
超獣鬼二体は、胴体に大きな穴をあけられて昏倒する。
そこに慎重に砲撃を当てながら、ＤＦ部隊が周囲から警戒する形で敵を削り続ける。
今ここに、ＧＦという兵器体系が有用であることを世界は示された。

銀弾落涙編　第五十三話　悪敵銀神の婚姻

和地Ｓｉｄｅ

「「天衛せよ、我が守護星――――鋼の笑顔（誓い）で涙を変えろ！」」
俺とカズヒ姉さんが起動詠唱（ランゲージ）を唱えると共に、絶大な量の星辰体（アストラル）が感応される。
「悪意に染まりて罪を成し、償うこともできぬまま。そんな悔恨と共に幾星霜を渡り歩き、我は悪を祓う銀の弾丸へとなり果てた」
カズヒ姉さんが紡ぐのは、自分のかつての罪業の果て。
道を踏み外し何もかもを壊し、挙句の果てに友すら巻き込んで死んでいった。そして生まれ変わった彼女は、俺の笑顔に誓った決意を持って、悪祓銀弾（シルバーレット）として生きてきた。
「その域はもはや神にも届く。故に、鮮烈なる銀の輝きは只人が浴びるには辛かろう。我が身は人界を照らすのではなく、悪を示して裁くのみ」
悪神ロキにすら通用したその力は、まさしく正義の味方で悪の敵。
正義を奉じて邪悪を滅ぼす。銀の魔弾は絶大で、彼女が倒してきた悪は数多くどれもが強大だ。
そして強大で苛烈な存在は、只人にとっては苦しいだろう。イッセー達に対して常に正義を奉じて戒めるその姿勢は、多くの人にとって忌むことだってあるだろう。それは確かに納得だ。
「だけど愛しき救い手は、私を人々（みんな）に導いた」
そんな彼女を、それでも俺は愛している。
その手を取ってくれたこと。受け入れてくれたことは俺にとって本当に幸せだ。仲間達の元の引っ張り戻せたことを、俺は心から胸を張れる。

「我が悪逆の道行きを知り、それでも今を支えてくれる。我が鮮烈なる銀光も、救いの笑顔が緩やかに、彼らに注がせてくれるのだ」
俺が間に入ることで、カズヒ姉さんが皆に受け入れられてほしい。
……いや、なんだかんだでカズヒ姉さんは、駒王学園の皆に割と受け入れられている。
「その光に報いたい。そして何より共にいたいと、願ってみてもいいのなら。悪を滅する銀の光は、彼らの道も照らしたい」
だからこそ、カズヒ・シチャースチエもまた変わっていこうと願ってくれた。
「決意を胸に。痛みと共に。救済者（タイタス・クロウ）と並び立て」
ああ、俺も貴女と並び立ちたい。
何故ならば―
「瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻め」
―あの時お互いが向けあった笑顔こそ、俺達の原点（オリジン）そのものなのだから！
「超新星（メタルノヴァ）――銀神婚姻（シルバーレット）、救済者（トゥ）よ悪敵（ノーデン）の神（ゴッド）を誘（ス）えッ!!」
今ここに、悪祓銀弾は涙換救済（タイタス・クロウ）と導きあう、悪敵銀神（ノーデンス）へと昇華する。
そして突貫する、仮面ライダー道間リスターティングホッパー。
それに合わせて俺もまた、魔星剣をもって突貫する。
瞬時にミザリの周囲に展開されるは、今までを遥かに超える多重障壁。
ミザリが一瞬反応が遅れるのは仕方がない。奴の星では見切れない。
何故ならば、奴の星が察するのは奴に襲い掛かる驚異のみ。奴に直接干渉しない、脅威でもなんでもないただの守りはカバーしきれないだろう。
速やかに聖十字架による破壊が試みられるが、俺達が間合いに入るまでに壊れることは欠片もない。
そして真っ向からカズヒ姉さんは迎撃の聖槍にアタッシュナイダーを振りかぶる。
『ハウリングカバンシュナイデン！』

豪快な音と共に、聖槍とアタッシュナイダーが激突して、瘴気により僅かに競り勝つ。
それに対して続いて振るわれるもう一つの聖槍に、俺は魔星剣で迎撃。同じように瘴気を纏って競り勝った。
奴の星に対する最も有効な対応は、対処されること前提で攻撃すること。
つまりは範囲攻撃で少しずつ削るか、回避困難な状態で強引に迎撃ごと吹き飛ばす。
普通は無理だ。プログライズキーで強化され、神滅具を大量に持ち、魔王血族のポテンシャルまで持っているミザリにそれを行うのは困難だ。
……だが、今の俺達はお互いに状況が全く違う。

九成和地
救済の時来れり（セイヴィング・タイタス＝クロウ）、悲劇を終える帳は此処に、魔星剣使用状態（括弧内は通常時）
基準値：A（B）
発動値：AA（A）
収束性：C（D）
拡散性：A（B）
操縦性：C（D）
付属性：E
維持性：C（D）
干渉性：AA（A）

カズヒ・シチャースチエ
銀神婚姻（シルバー）、救済者（レッド・ノーデン）よ悪敵の神を誘（ス）え
基準値：C

発動値：A
収束性：A
拡散性：E
操縦性：E
付属性：B
維持性：B
干渉性：A

禁手によって作られる魔星剣は、いわば俺を人造惑星にする為の魔剣だ。
それこそが俺の禁手、星宿す想いの魔剣（スターソード・オブ・スフィア）の本質。俺を安全に人造惑星の域に昇華させる為の魔剣、魔星剣を創り出す亜種禁手だ。
創造系神器の汎用性や手札の多さを犠牲にしたが、その分価値は絶大だ。
つまり星辰光による戦闘という土俵で、俺は文字通り破格の強化を遂げたことになる。
加えて俺も想定外だが、魔星剣に纏わせるという形に限り、今の俺はカズヒ姉さんの星辰光を振るっている。
まるでカズヒ姉さんと俺は星を同時に作り出しているような。そんな錯覚を覚えるほどに、これは嬉しい想定外だ。
そして同時に、カズヒ姉さんの新たな星辰光も強大だ。
真っ向から聖槍と攻撃をぶつけないながらもカズヒ姉さんはびくともしない。
本来ならあり得ない。悪を滅する瘴気を集めることこそカズヒ姉さんの星辰光。自らを悪と定義しているからこそ絶大な威力を発揮するが、それゆえにカズヒ姉さん自身も呪ってしまう。これは今後も変わらない欠点だ。
だが、今のカズヒ姉さんの星辰光は変質している。
そう、これはカズヒ姉さんという悪を呼び水にした祈りではない。
その為、ミザリに対する特攻はどうしてもアタッシュナイダー限定の

為に収まっている。
だがそれはすなわち、その上でミザリの攻撃を真っ向から撃ち返すことができているということだ。
そう、それこそがリーネスが作り上げたリスターティングホッパープログライズキーにより変質化した星辰光。
守護霊招来昇華能力。カズヒ・シチャースチエという「邪悪」を呼び水に悪を呪う瘴気を呼び出す基本の星辰光を変質させた星。カズヒ・シチャースチエという「助けを求める誰か」を呼び水に、彼女に力を貸したいという気持ちを少しずつ集めることで全性能を強化する星辰光。
性質上、爆発力や突破力はどうしても劣る。アヴェンジングシェパードと違い、特定の特攻能力を持つわけでもない。
だがしかし、代わりに総合的に彼女は強くなった。
「……不思議ね。以前使った時は使えなかったのよ」
そんな風に、カズヒ姉さんはどこか澄んだ水のような言葉を出した。
ただ、俺はそれに対して苦笑しそうになる。
「簡単だろ。はたから見てるとすぐに分かる」
ああ、これは難しいことでもなんでもない。
自分で言うのも照れ臭いが、だけどまぁ、言うべきか—
「そうねぇ。和地を受け入れて、カズヒが拒絶しなくなっただけでしょお？」
「あんたが、自分自身が誰かに助けてもらうことを認めたってだけじゃない」
—言われたぁあああああ！
対に突入したリーネスと鶴羽が俺より先に言ったぁあああ！
「めっちゃ恥ずかしいんだけど！　あと俺に言わせてくれよ！　なんでそこ言っちゃう⁉」
「「親友ですからぁ」」
茶化すように言うなぁ！
あ、カズヒ姉さんなんか嬉しそう！

「……そうね。私達は親友だもの！」
……そっか。
きっと、カズヒ姉さんはそこも認め切れていなかったんだろう。抵抗があったんだろう。
だけど、少なくともそこは認めた。認めることができるようになった。
だからこそ、彼女は一歩を踏み出せた。誰かが助けたいと思ってくれる価値が、自分にあると認められた。
そう、だからこそ―
「「「今ここに、悲劇はいらない」」」
―俺達全員が、此処で一歩を踏み出す理由は確立された。
さぁ、覚悟してもらおうか。
ミザリ・ルシファー。今ここに、悲劇の出番はあり得ない！

イッセーＳｉｄｅ

振るわれる猛攻に、俺達はどうしても攻めあぐねる。
曹操が変身する仮面ライダーサウザイアー・魏。こいつは本当に強敵だ。
こっちの攻撃を全部対応して、正確に反撃してくる。
俺達は事実上の五対一だってのに、しぶといだろ。
どうする？　いい加減こっちもガス欠寸前だ。真女王が切れる可能性だって―
「……イッセー！　あと少しよ！」
―その時、俺のオーラが一気に回復された。
見れば、そこには胸を張ったリアスの姿が。

うぉおおお！　愛する部長が、おっぱいを削って俺を助けてくれるうううう！
気合十分！　負けてたまるかぁ！
「噂の……おっぱいビームか……っ」
……そして、俺は気づいた。
曹操の奴、動きにキレがなくなってきている。
そうか。体力だ。
俺達五人がかりの猛攻に、曹操の体力が削れてきている。
……なら、此処が決め所だな。
「シャルロットぉおおおおっ！」
俺はシャルロットにパスを経由してイメージを送り込む。
行けるかシャルロット？　これが決まれば、あいつに一発かますことができるんだ。
「……ええ、やって見せます！」
ああ、俺は主にも相棒にも恵まれた。二人とも、愛してる！
最強の兵士（ポーン）にしてハーレム王になる男。それがこの俺、兵藤一誠！
ここで決めるぜぇえええええ！
全力で込めるのクリムゾンブラスターに対し、曹操は槍を構えながらむしろ喜びすら見せた。
「ここでミスかい？　今の俺ならかわせないとでも―」
「そもそも―」
「かわさせ―」
「―ないのよ！」
その瞬間、リアス、ヒマリ、ヒツギの猛攻が曹操を一瞬縫い留める。
その瞬間、一時的に俺はドライグやシャルロットとの一体化状態を取り戻し、一気にオーラを増幅させる。
さぁ、初見殺しを叩き込む時間だぜ？
「クリムゾン……ブラスタぁあああああっ！」
放たれる砲撃に、曹操は回避が間に合わない。
だが同時に、曹操は冷静に七宝を前に出した。
「耐えられない攻撃も受け流せばいい。知っているだろうに―」

「―当然だ！」
その瞬間、クリムゾンブラスターは曲がった。
大きく弧を描いて回転し、放たれたクリムゾンブラスターは俺に当たる。
そして同時に、シャルロットが究極の羯磨で可能性を操作する。
『『『『『『『『『『『『『Ｂｏｏｏｓｔ！』』』』』』』』』』』』』
「……オーラを、自分に纏わせて―」
曹操が気づくがもう遅い。
防御の為に出した七宝を呼び戻す隙は与えない。
俺はクリムゾンブラスターを全身に纏って拳を構えて曹操に突貫する。
それに対して曹操もドライバーを操作して迎え撃つ。
『ヒーローズディストラクション！』
ああ、そいつは確かに強力だ。
だけど、今の俺なら―
「突破してやらぁあああ！」
―超えられる！
俺の拳が曹操の蹴りにぶつかり――――そのまま押し飛ばす！
「クリムゾン……インパクトぉおおおおおおおおおっ！」
その瞬間、盛大な爆発が巻き起こった。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

血で血を洗う殺し合いの真っただ中になった冥府にて、ハーデスは憤怒の視線でシュウマを睨む。

『この……下劣な悪魔風情が……っ』
「下劣というのはあなたに言うべき言葉ですが？」
即答で首すら傾げるシュウマは、盛大にため息までついた。
「今時相手を選ばなず無駄な被害の多い復讐など、論外なのですよ。時代の流れについていけていない老害に権力を与えると、こちらにとっても不都合になるとよく理解しました」
更に神経を逆なでさせるが、しかし死神達がシュウマを害することはできない。
「お前らブチギレ♪　だけれど倒され♪　焼けるの炎で♪　俺のフレイムで♪」
そんな風にラップ調で奥羽・煙霞・ヘラストロテスが踊るように動きと共に、激高して攻撃を仕掛けようとした死神達が炎に包まれる。
この意味不明な状況が、ハーデス達に本格的な攻撃を躊躇させている。
そしてそうでなかったとしても、シュウマが止まることはない。
「殺したいのならご自由に。私は死んでも代役は立てていますし、むしろ冥界政府も大手を振って戦争ができるというものです」
余裕の笑みは、自分が殺されないという自信によるものではない。自分が殺されても問題ない。その準備をしっかり整えてきたという自負があるからこその余裕だった。
その余裕を持った表情で、シュウマはハーデスに断言する。
「だからここに来ているのです。……とはいえ、一発ぐらいはかまさなければ冥界の民の納得しないでしょうね」
そう首を振るシュウマに、ハーデスは寒気すら感じていく。
そして、その懸念は遅すぎた。
「……私はただの観測手（スポッター）だよ」
その瞬間、絶大な魔力の奔流がハーデスに叩き込まれた。
『ぬぅ……ぉぉぉぉぉぉっ!?』
不意打ちだったこともあり、ハーデスは回避することなく直撃される。
そのまま決して浅くない傷を負い、周囲の死神達が巻き込まれて消

滅する中、シュウマは肩まですくめた。
「しょせん神などこの程度。文明とは恐ろしい者ですなぁ」
そう告げるシュウマの後方、吹き抜けとなった神殿の空白部分に、大きな物体が映る。
全長５００ｍ以上の巨体な戦艦。
艦首の砲門から煙をあげ、そして各部からギリシャの戦士達が飛び出して死神達に襲い掛かる。
戦士達が飛び終わると、そのまま戦艦は少しずつだが後ろに下がっていく。
それを確認しつつ、シュウマはにっこりと微笑みながら一礼する。
「では、当分自分の行動に責任を取ってもらいましょう。それが終わってもなおこちらに悪意を向けるというならご自由に。こちらも駆除のしがいがあります故」

銀弾落涙編　第五十四話　三連決着、真紅！黄金!!銀弾!!!

イッセーＳｉｄｅ

立ち上がると、鎧が完全に消えていた。
だからかシャルロットも立ち上がっていて、だけどお互いボロボロだ。
「曹操は、何処に……？」
「倒せているといいのですが……」
俺達はそう言いながら周囲を確認する。
そして俺は、ある物に気が付いた。
ドライグ。あれ、これに込められるか？
『いいだろう。全く愉快な流れになりそうだ』
全くだな。だけど、これは結構虚を付けると思うぜ？
そう返しながら俺はそれを握り締めた周囲を確認する。
……そこに、ボロボロの曹操がいた。
服はボロボロで体中傷だらけだ。体力もだいぶ削れているから、かなり喰らっているみたいだ。変身も解けているしな。
ただ……。
「禁手は解けたようだね。なら、まだ勝算はありそうだ」
だろうな。
俺は禁手で曹操に挑んで、曹操は一人で禁手無しでどうにかしてたからな。勝ち目があると思うのは当然だ。
だからこそ、曹操は遠慮なく瞬時に突貫し―
「あまい！」

―その瞬間、俺とシャルロットは腕でそれを食い止める。
そしてその腕を見て、曹操は目を見開いた。
だろうな。俺達の腕が龍になっているんだから。
「……そういえば、グレートレッドとオーフィスで肉体を作っていたんだっけね」
ああ、だからこういうこともできるんだ。
闘争本能とかが刺激されるし、禁手よりは弱いから最終手段だけどな。
「……まったく。おもちゃ売り場で物騒なものを振り回さないでくれません？」
「と言ってもね。今は戦闘中だろう？」
シャルロットに曹操は軽口をたたくけど、その意味は違う。
これで、流れは出来た。
「なぁ曹操。俺はおっぱいドラゴンなんて呼ばれてて、関連グッズでおもちゃとかも多いんだよ」
俺はそう言いながら、隠し持っていたものを見せる。
デフォルメ化したリアスのフィギュアだ。確かハンバーガーとかで付いてくるおまけのおもちゃだったかな。
「リアスもそれに巻き込まれててさ？　このおもちゃとか、おっぱいが飛び出すんだぜ？」
「……？　追い詰められてどうかしたのかい？」
曹操が怪訝な表情を浮かべるけど、俺は気にしない。
同時に強引に曹操を振り払うと、俺はおもちゃのおっぱいを発射する。
そしてそれを曹操は怪訝な表情で切り捨てる。
そこに込められた物が曹操に当たった時、俺達は勝利を確信した。

……いや、本当に大丈夫だよな？　龍だけじゃなくて蛇も嫌いな神様の呪いで龍殺しになってるサマエルの血を入れてるけど、メドゥーサって蛇の化け物だから効くよね!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そして、超獣鬼に対する決着の攻勢が開始される。

「行ってください、お姉さま。黄金の覇道を世に示してください！」

梔子も。

「俺がお前を追い抜くのはもっと後になるはずだろう？　さぁ、先に進むがいい」

ユーピも。

『頼むぜマスター！　俺を焦がせるその魂を、冥界中に見せつけろ！』

そしてラカムも。

残り二体の超獣鬼を大王派と共に打倒しながら、しかし最後の一体に攻撃を仕掛けることはない。

そう、それは自分達の役目ではない。

それこそが―

「天進せよ、我が守護星――――鋼の未開（あした）を駆けるがために」

―後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）が団長、後継覇王（アレキサンダー）こと九条・幸香・ディアドコイの掲げる覇道を示す為である。

「輝かしきは英雄譚。武勇と覇道の物語に、憧憬がとめどなく溢れ出す」

具現化されるは窒素の獣。

本来超高圧と超高熱を必要とし、更に安定化など現状不可能な特殊

爆薬。ポリ窒素をゴーレムとして使役することこそが彼女の星。
「約束された破滅など、恐れる道理はどこにもない。煌びやかな輝きになりえるのなら、死に際さえも華やかに。守勢に纏まる凡俗共など、矮小浅薄軽々しい」
だがその数は、そして展開される範囲は、何よりその密度すら、明らかに彼女のかつてを大きく引き離している。
それに応える様に、彼女の魔力が調律の刻印によって輝き、そして広がっていく。
「にも拘らず破滅を嘆き、夢を捨てるとは笑えない。栄光が死後に破綻して、それが一体どうしたと？」
問いかけるは世界の民。投げかけるは制覇を目指さぬその理由。
敗北は忌むべきものであり、だがそれに恐れて勝利を捨てるは愚か者。憧憬を持ったのならば、超えるがために進軍すべきと彼女は天高らかに歌い上げる。
そしてそれに呼応するように、圧倒的なまでの軍勢が今ここに顕現する。
「我が栄光は我の物。その勝ち逃げさえできるのならば、後の者が負う責任など、知る必要もないだろう。その後全ては何もかも、継がんとする者の責任だ」
その在り方はまさしく傲慢。
過去をすべて踏み台とし、輝かしき未来を自分が味わう為だけに、今を全力で邁進する。
まさに圧政者であり略奪者。皇帝と海賊などという、ある意味で相反する二つの性質をかけ合わせるは、共に「奪い取り肥え太る」という、その在り方が同一とみなしたからこそ。
「故に我、汝の全てを奪うとも。力も夢も覇道も誇りも、怯えで捨てるのなら我が物だ。略奪と征服と蹂躙の果てに、汝はそこで朽ち果てろ」
そしてどこまでも奪う者であるが故、彼女は超獣鬼からすべてを奪うことをためらわない。
敵であり悪である愚者である、そんなシャルバが生み出した脅威。

その執念にのみ評価こそするが、それはそれ。むしろだからこそ、打倒することで自分の名は上がりその成果によってフロンズ達も楽にこちらを味方化する流れに持って行けるだろう。

攻撃により失われた右目を顧みることなく、彼女はそれ以上の成果を奪い取らんと光を纏って覚醒する。

「我、見果てぬ先を欲し楽しむが故に我なり。この身に焦がれし後継者（ディアドコイ）よ、破滅を超える征服者たれ」

その権限の元に現れるは、数百を超え千の大台を超えた爆薬の軍勢。

遍く敵を蹂躙する、光の超越者は此処に君臨する。

「超新星（メタルノヴァ）――金色覇道（ゴールディ・ロード）の後継者（ド・マケド）よ、新天地（ニーア）を征け!!」

その宣言と共に、怨念より生まれた魔獣を金色の覇道で塗り潰さんと、獣の軍勢は突撃する。

九条・幸香・ディアドコイ

金色覇道（ゴールディ・ロード）の後継者（ド・マケド）よ、新天地（ニーア）を征け（括弧内は星辰奏者時）

基準値：A（B）

発動値：AAA（AA）

収束性：AA（C）

拡散性：AAA（AA）

操縦性：B

付属性：B（C）

維持性：AA

干渉性：B（C）

古来より、魔術回路保有者は己を改造することをいとわない。
魔術回路を開いて固定化するという高位がそもそも自己改造であり、また優秀な後継者を生む—すなわち魔術回路という臓器を増やす優れたものにする—為の努力は自己改造も含まれる。
故にこそ、幸香達は人造惑星という手法を魔術的アプローチで試みた。
一流の魔術回路保有者ならば、デスクトップパソコンやスマートフォンを自前の回路で再現することなどできて当然。まして近年の研究では、魔術回路を利用したハッキング技術などというものもある。
魔術的アプローチにより星辰体運用に特化した制御特性を絵得した彼女達は、いわば礼装型人造惑星。
ただし手探りなところもあり、決して使いこなせる段階ではなかったのだが—
「まだまだまだまだぁ！」
—それがどうした。
超えるべき目標がいる。その決意と奮起があればこんなもの、できてしまうのはしょうがないのだ。
振るわれる圧倒的な爆発魔獣により超獣鬼は動きを完全に封じられる。
生み出す小型魔獣はその瞬間に粉砕される。
大量の爆撃の雨あられに、動きたくとも動けない。
反撃の炎や光線も、打ち上げられ揺らされた星であらぬ方向にしか飛んでいかない。
今ここに、超獣鬼（サンドバッグ）は全方位から滅多打ちにされていた。
そしてだからこそ—
「まだまだまだま

揺らす程度で済ませる者か、貴様は此処で必ず滅ぼす。
その圧倒的決意により、ごく僅かずつ、しかし確実に、彼女は連続で覚醒を遂げていく。
全ての攻撃が次当てる時は成長する。そんな過酷な極限環境下である戦場の、常に心身共に消耗する弱体化を超えて成立する。
その光景に後継私掠船団は沸き立ち、大王派は苦笑し、魔王眷属はかすかに寒気を覚える。
そしてそれをもってしても、超獣鬼は滅びない。
それに対し、幸香は歯をむいて笑う。
ここまでやっても倒れない。これが上位神滅具を魔王が渾身の呪いで至らせた結果ということか。
――だからこそ、まだだ。
その決意が、彼女を新たなステージへと進化させる。
「そう……まぁあああだだぁあああああっ！」
天高らかに吠え上げ、そしてすべての意志をもってして、己の力を掌握する。
そして彼女は宣言する。
皇帝の力を簒奪した者として、今ここに霊体への命令権を持っていることにして運用する。
アレクサンドロス三世が保有する独自スキルに、偉大なる覇王というものがある。
Ａ＋ランクのそれは、高ランクのカリスマ・軍略・行程特権の複合スキル。それを彼女はデミサーヴァント化により、自己流に改編したスキルとして憑依継承を行った。
それこそがＣ＋＋ランクスキル。偉大なる覇王の簒奪者。
Ｃランク相当にカリスマ・軍略・皇帝特権が下がる代わりに、「倒した存在の魂を生贄として己を強化し続ける」スキルと化した。
これまで強敵との戦いにばかりしていたこともあり活かしきれなかったが、超獣鬼が生み出す小型魔獣がこれを一時的に代用。
これにより、彼女は己のスキルを掌握する。
会得するは低ランクの神子のような神降ろしであり、それを成す為

の呪術特性。
それらを令呪の応用で高め、此処にアレクサンドロス三世の第四宝具を顕現する。
「皆よ！　我が目の前に立つは、一つの種族を滅ぼさんとする憎悪の結晶！　偉大なる神が作り上げし極大を、悪魔達の頂点が悪用したことで産まれし力！　これを越えんとする者よ、今ここに、死すら乗り越え集うがよい！」
そう号令をかけると共に、多くの光が集まっていく。
それは、アレクサンドロス三世の覇道に焦がれた者達。
彼と共に進軍制覇に生きた者。彼の後継者とならんとした者。そしてその夢を心に宿し、自分もそうありたいと願った者。
その想い全てを、彼女はアレクサンドロス三世以上に高めて集めていく。
そして、頂点に達したその問いに、ついに宣言した。
「蹂躙せよ！　我、焦がれ目指される夢也（アレクサンドロス・ドリーマー）!!」
今ここに放たれる、アレクサンドロス三世の第四宝具。
Ａ＋＋ランク対城宝具。我、焦がれ目指される夢也（アレクサンドロス・ドリーマー）。
真名解放と共に指定した相手に対し、アレクサンドロス三世の覇道に魅せられた者達の思念を集め一斉攻撃として敵に放つ対城宝具。
主神・超越者クラスに届くその猛攻を受け、超獣鬼の前身が削れていく。
それでもなお、超獣鬼はシャルバの怨恨に従い突撃を敢行しようとする。
その最後まで進まんとする姿に、幸香は僅かな敬意を感じ―
「故にこそ、まぁだだぁっ！」
『ＡＲＭＳ！』
飛び上がり、そして自らもまた突貫する。
蹴りこみ、そして大量のプラスチック爆薬が最後の破片に叩き付けられ―
『ブローニングレインラッシュ！』

ブローニングレインラッシュ

その爆発に呑み込まれ、此処に最後の超獣鬼は消滅した。

和地Ｓｉｄｅ

四方向の隙間から、俺達はミザリに攻撃を仕掛ける。

確実に、少しずつ、俺達の攻撃はミザリに届いている。
「……ぁあ……いぃ……」
陶酔するミザリは己の悲しみに酔いしれる。
正直に言って複雑だ。
カズヒ姉さんの愛する男。そしてカズヒ姉さんが目覚めさせた悪鬼。
彼は俺にとっても縁深く、また義理の兄ともいえる関係だ。
だが、ミザリの願いは世界に嘆きを生み続ける。
それは、道間日美子も笑顔に誓った俺の生き方からは絶対に受け入れてはならない戦いだ。
だから、こそ。
「ぶちのめすぜ、ミザリ……ルシファー！」
「ええ……そうよ！」
強引に打ち上げ、結界で回避困難な状態にする。
そして俺はショットライザーを展開し、カズヒ姉さんもフォースライザーを一旦開閉。
更にリーネスも、スラッシュライザーを構えて体制を整えた。
『ＳＨＩＮＩＮＧ　ＪＵＮＰ』
『ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ』
「……食らいなさい、ミザリ……誠……にぃ……っ！」
カズヒ姉さんのその呟きに合わせ、俺達は一斉に攻撃を開始する。

銀
制
裁
神

『パラディンブラストフィーバー！』
『シャイニングレインラッシュ！』
『リスターティングユートピア！』

三人がかりの蹴り技が、ミザリを盛大に跳ね飛ばし―

「いや、此処はもうちょっと……ね？」

―同時に、ミザリから絶大な紫炎が巻き起こる。
やろう、せめて首都を吹き飛ばして、民衆の心を傷つける気か!?
まずい、この距離だと俺達の手札では奴に対応されるし、間に合わな―

「な……めるなぁあああ！」
その瞬間、鶴羽が飛び上がり紫炎の前に立ち塞がる。
いや、確かに鶴羽の聖十字架は性質上、ピエール・コーションの宝具て対聖特攻だけど。
それでも無理だろ、しかも性質上、俺が障壁を張るわけにもいかないし!?
「ふふふ？　いくらピエール・コーションでも、これは無理なんじゃ―」

そう、ミザリが陶酔の笑みを浮かべた時だった。
「……我、クロード・デュ・リスに希う!!」
その瞬間、鶴羽も左手に聖槍が具現化する。
……え？
「ふふぅん。色々頑張ったのよぉ、私もねぇ」
「……クロード長官、何時の間に……」
自慢げなリーネスに、カズヒ姉さんはちょっと呆れ顔だ。
あ、そっか。
固有結界に登録したサーヴァントの力を再現するなら、別に鶴羽がマスターでなくてもいいのか。
俺は思わず感心したが、すぐに我に返る。
このチャンスを、無駄にはしない。
「リーネス、そろそろ本領いくぜ！」
「ええ、やってしまいなさぁい！」
そして俺は、パラディンドッグプログライズキーを操作する。
パラディンドッグプログライズキーに仕込まれたダイヤルを回し、俺は静かに意識を統一する。
残り時間は４０秒を切っている。だからこそ、すぐに至る！
「禁手変性（バランス・チェンジ）！　誓約成す勝利の銀剣（カリブリヌス・シルバーレット）!!」
その瞬間、俺の禁手は完全に切り替わった。
それに対して、ミザリが目を見開いたのが分かるが、さほど驚くことではない。
元々神器研究では神の子を見張る者が独走トップ。そして疑似的に禁手に至る為の技術も開発されていた。
それをベースにしたこのパラディンドッグは、禁手に向いていないと判断された俺の補正用。禁手可能時間を三倍に増やし、更に禁手を切り替える機能を持っている。
総合力では星宿す想いの魔剣（スターソード・オブ・スフィア）が上だが、瞬間最大火力なら、事前登録されたこれの方が上だ。
何故ならこの禁手の特性は……っ
「ぐ……が……ぁあああああっ！」

強引に引きずり出される魔力に、俺の体が悲鳴を上げる。
そう、これがこの亜種禁手、誓約成す勝利の銀剣の特性。
俺の魔力を限界まで吸い上げ、増幅圧縮した魔力斬撃を放つ火力重視の切り札だ。
「和地!? 大丈―」
「―安心してくれ、カズヒ姉さん」
俺はカズヒ姉さんの言葉を遮り、断言する。
「今日の夜は絶対処女を貰うから、こんなもので倒れたりはしないさ」
ああ、俺だってやる時はやるんだよ。
「……そうね。信じるわよ!」
そう言いながら、カズヒ姉さんは走り出す。
同時にリーネスも走り出し、鶴羽も全力を込めて紫炎を迎撃する。
そう、静かに両肩が震えているのは、恐怖でも疲労でもない。
「……私は友達失格だけど……それでも、私はあなたのことを友達だと思っていた。……だから誠明、あんたの悪行は見過ごさない!」
その渾身と共に、聖槍と聖十字架が共振し―
「それが、誠明と、乙女と、アイネスと……そして!」
―紫炎を一気に、押し返した。
「……カズヒと和地に捧げる想いよ!」
「……ああ、これからもよろしくなぁ!」
その一瞬の拮抗の傾きに、俺は渾身の力で魔力斬撃を叩き込む。
ゆらいだ紫炎はその斬撃を防げず、一気に書き散らされてミザリへの道を切り開き、奔流でミザリの動くを阻害する。
そして同時に、カズヒ姉さんもリーネスも、小さく何かに堪える様に肩を震わせ―
「「ミザリ……ルシファァァァァァァァッ!」」
『シャイニングレイン!』
『リスターティングディストピア!』
その瞬間、一気に接近しての連続攻撃がミザリを滅多打ちにして叩きのめした。
全身を滅多打ちにされ、そして実装が解けるミザリの体が光に包ま

れる。
「……残念だけど、此処は悲劇には出来なさそうだ」
本当に残念そうに苦笑しながら、ミザリは俺達を向き―
「だけど、まだチャンスはあるからね？」
その言葉と共に、転移で俺達から逃亡する。
……逃がしたか。だが、追い返せただけで今は良しとするか。
いずれ必ず決着はつける。だが、今はお互いそこに至れる段階ではない。
俺は禁手の持続をできずに変身ごと解除して、少しふらついた。
それを比較的近くにいた鶴羽が支えてくれる。
そして俺達は顔を見合わせると、着地していたカズヒ姉さんたちのところに向かう。
「……先に、部長達に状況を伝えるわねぇ」
気を利かせたリーネスが、俺達に微笑みながら先に歩き去っていく。
それをちらりと眺めてから、俺達は黙って俯いていたカズヒ姉さんを、後ろからそっと抱きしめる。
「……ゴメン。まだ……ちょっとだけそうしていて」
肩を震わせながら俯くカズヒ姉さんを、俺達はただ抱きしめる。
いずれ決着はつける。今はだが無理だった。
だけど、できれば今付けたかった決着だった。
ふと空を見上げると、既に戦闘も終わっているようだ。
怪我や負傷も回復していく辺り、アーシアが何かしたのかもしれないな。
……あぁ、本当に……今はこれで良しとするしかないんだよなぁ……。

銀弾落涙編　第五十五話　終焉の魔獣騒動

和地Ｓｉｄｅ

とりあえず何とかなったかと思った時、もの凄い光が一瞬出てきて慌ててそっちに向かった。
辿り着く頃には光が消え、なんか苦笑気味で悶え苦しんでいる曹操と、それを見下ろすイッセー及びシャルロットの姿がそこにはあった。
……どういうことだ？
「どうやら、終わったようじゃな」
と、そこに右目が潰されて血を流す幸香がいた。
割と痛々しい姿だが、むしろ威風堂々としている風に見えるのは人徳……人徳？　まぁ気風とかそんな感じで。
とにかく、向こうも決着はついたようだな。
「ふふ。俺のライバルは中々のものだろう？」
「当然だな。こいつならこれぐらいはできるだろう」
そこにヴァーリやサイラオーグ氏まで姿を現す。
「僕の親友は大人気だね」
更には木場も様子を見に来たらしい。
……うん、これはあれだな。
「人気者だな、イッセー」
「野郎にモテても嬉しくねえよ!?」
ま、そう言うな。
本当にモテる奴というのは、異性だけでなく同性にもモテるものさ。
性別関係なく好かれるというのは、ある意味でめっちゃくちゃラッ

キーなことだとすら思うしな。
とはいえ、曹操の奴は死にかけだな。
だとするなら、さっきの光は何だったんだ？　切り札とかそんな感じにしては、イッセーはぴんぴんしているし。
「……一体さっきのは何だったんだ？」
「それは分からんな。俺も何かしらの切り札かと思ったが」
「感覚としては聖なるオーラや神のオーラに近かったけどね」
俺と一緒にサイラオーグ氏や木場が首を傾げていると、幸香は呆れたように鼻を鳴らし、ヴァーリはヴァーリで興味深そうに目を細めていた。
「まったく。やはりこうなったというべきかのぉ？」
「へぇ？　おそらく覇輝（トゥルース・イデア）だと思ったけど、不発になると思ってたのかい？」
あ、そういえばそんなものがあるらしいな。
二人の言葉に俺も、思い至った。
なんでも聖槍だけの切り札的なあれらしい。覇龍とか覇獣とかの類だろうけど、それにしてはイッセーがぴんぴんしているな。
なんというか、さっぱり分からん。
「……なぁ曹操。お前が使ったのが覇輝っていう奴なら、なんで何も起こらずに光が消えたんだ？」
イッセーもさっぱり分かっていないのか、曹操にそう尋ねた。
それに対して、曹操は真っ青な顔で苦笑いを浮かべていた。
「覇輝（トゥルース・イデア）は覇とは言うが、封印系神器のそれとは違ってね。槍に宿る聖書の神の遺志が何を行うのかを決めるのさ」
……えっと、つまり―
「ＴＲＰＧでパルプンテを使ったみたいなことになるのか？　で、聖書の神というＧＭが何をするのかを決定すると」
―我ながら、この例えはどうなんだろうかとは思った。
ただ曹操はＴＲＰＧもパルプンテも分かっているのか、むしろ納得している感じで頷いていた。
「……まぁそういうわけさ。そして聖書の神の遺志というＧＭは、静

観を選んだ。もし何かする気なら、俺が回復するなりシャルロット・コルデーを強制的に召還するなりするだろうからね」
なるほどな。
つまり、聖書の神の遺志にそっぽを向かれたと。
俺が納得していると、幸香は心底呆れた感じの表情を曹操に向けている。
「阿呆の極みよ。三大勢力……すなわち天界や教会に危害を加えながら、聖書の神が己に力を貸すとでも思うたか」
まぁ確かに、ある意味でそこは分かるな。
助けを求めるなら助けてくれそうな相手にするべきだ。追い詰められて博打でやったんだろうが、冷静に考えるとどう考えても確率は低いだろう。
「やるのなら、ヴァーリを真似て聖書の神の遺志をねじ伏せようとするべきなのじゃ。人間として神に挑むのならそれぐらいはせねばならぬだろうて」
幸香はそう言うと、つまらなさそうに早々に背を向ける。
「……そ奴は好きにするがよい。民草を苦しめた怨敵を裁くのは、英雄の仕事というものだろうて」
「……兵藤一誠の方が、俺より英雄だというのかい？」
曹操のその言い分に、幸香は肩をすくめる。
「何をもって英雄とするか。それは英雄を見た者達のそれぞれの見方になるだろうな。……だが、一つだけ絶対に断言できることがある」
少しだけ止まり、そして幸香は威風堂々とした態度で胸を張る。
「英雄とは種族でも一族でも品種でもない。冥界に住まう民にとっての英雄がどちらかなど、幼子ですら分かるだろうよ」
……凄い辛辣な言い分だな。
だがまぁ、なんだかんだで正論なのが納得だ。
ああそうだ。冥界にとって、兵藤一誠は正真正銘英雄だ。
「……せめてその意味を理解したうえで目指すのならば、槍も少しは温情を与えたであろうよ。お主は迷走の果てに自滅したのだ」
そう言い切って、幸香はそのまま去っていった。

そこに見問えていると、ふと気づいた。
……あ、なんか霧が出ている。
「……お互い失敗だったな。二天龍に関わると……」
「……ああ、うかつなちょっかいは滅びに繋がる……な」
ゲオルグいたのか!?
しまったぁあああああああっ!?

アザゼルＳｉｄｅ

「……で？　どうするつもりだよ」
俺は帰り道、シュウマの誘いでサンタマリア級汎用母艦のネームシップに乗せてもらっていた。
そこの応接間で、俺はシュウマにそこを切り込む。
聡いこいつなら言いたいことは分かるだろう。
……なんで、あそこまでハーデス達を煽るようなやり方をしたのかだ。
「その通りだ。彼を相手に迂闊な手法は、更なる敵意を増すだけになるだろう。うかつに手を出して滅ぼしても、人間界に悪影響が出かねないが？」
サーゼクスもその辺は気にしているからこそ、鋭い視線で切り込んだ。
それに対し、シュウマ・バアルは平然としていた。
「……被害というものは、中小規模が何度も続くより大きいのが一発で終わる方が、心理的な悪影響は少ないのですよ」

話は少しずれているようだが、俺達は黙って聞く。
「幸い禍の団は大規模テロ組織であり、ある意味では一度の対テロ戦争という区分にできるでしょう。またテロリストの行動理念故に、民間からも厭戦気分や政治に対する不満に直結しずらいところはあります……が」
そこまで言って、シュウマは真っ直ぐ俺達の方を向く。
「北欧の悪神ロキ。彼のようなケースがもし何度も起これば、それは信頼の低下や厭戦気分により、政府に悪影響が生まれます。……だからですよ」
紅茶を一口飲みながら、シュウマは言い切った。
そして同時に、渋い顔までしてくる。
「禍の団という驚異が懸念となり、三大勢力の和平は基本的に進んでいます。ですが内心では不満が多い者も多いでしょうし、禍の団という抑えがなくなれば、和平の流れは滞り、反発勢力もいずれ必ず動くでしょう」
なるほどな。言いたいことは分かったぜ。
つまりあれだ。こいつがハーデスに求めているのは―
「この手の残虐行為は一回にまとめられるならそれに越したことはないのです。総量が同じであっても、民衆が感じる不快感は間違いなく少なくなりますからね」
―まとめて滅ぼしやすくする為の、誘蛾灯だ。
シュウマの野郎は、禍の団との戦いがどう転ぼうがハーデスの野郎がまた何かしてくると考えている。
そしてちまちま嫌がらせを繰り返されるぐらいなら、いっそのこと他の不満分子も集めて大規模にやらかしてほしいとすら考えてやがる。
……戦略的にはありではあるが、よくもまぁ恐ろしいことを考えるもんだ。
「……その判断は、勝てるという前提が必須だと思うのだが？」
「正直に答えましょう。……負けたのならそれはそれでいいのですよ」

サーゼクスの鋭い視線に、シュウマも向き直ってそう答える。
その眼には一切の嘘がない。
「我々が負けたとしても、大きな決戦で決着がついたのなら大勢も決するでしょう。ならば致命傷にならないうちに余力を残して投降させ、ハーデス神による安定した統治で世界は収まるでしょう。……最悪ではないと考えていますよ？」
微笑みすら浮かべるその真剣な言葉に、俺はシュウマ達に対して警戒心が生まれてくる。
こいつらは、サーゼクスとは相容れない。
冥界の未来を憂いて足並みを揃えているが、その実本質的な狙いは別にある。
……こっちに乗り込む前、サーゼクスが言っていたことを思い出す。
サーゼクス達は自分達を「個の力」として、イッセーたちを「輪の力」とした。
だが、シュウマ達は科学的なアプローチを利用した強化で、輪の力に並ぶ「知の力」をもってしている。俺はそんな風に感じていた。
……イッセー。堕天使総督を降りる予定の俺が言うのもなんだが、大変だな。
賭けてもいい。フロンズ達はイッセーにとって、争うより厄介な敵になる。そう、確信すら覚えている。
ま、手を貸せる範囲で貸してやる。
負けるなよ……こいつらにな……っ！

銀弾落涙編　第五十六話　新たな一歩（悪党共も）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……一つ、聞いてもよいか？」
「どうしたのかね、幸香？」
「簡単だ。お主、もう少し成果を欲張っても行けたのではないかの？」
「性分でね。最大成果を得ることはきちんと考えるが、まずは確実に必要最小限を獲得する性質（タチ）なのだよ」
「そういうところはつまらんのぅ。敗北は忌むものじゃが、それで勝利することまで放棄してどうするのじゃ」
「大丈夫さ。今後は君達がそれを担ってくれるだろう？」
「……確かにな。ああ、勝利は我らが掴み取る。汝は敗北を受け流すといい」
「なら安心だ。……まぁ安心してくれたまえ、盆式聖杯戦争は成功した以上、早ければ数年後に計画は実行に移せるだろう。それまでの人気取りは頼むとしようか」
「テロリストにそれを頼むとは、慎重なのか大胆なのか。……とはいえ、早められないかとは思ってしまうがのぉ」
「確かに、あり得る可能性は一つほどあるがね」
「あるのか？　そんな便利なものが？」
「……ザイアから流出した情報にある、星辰光（アステリズム）を超えた星辰光（アステリズム）」
「極晃星（スフィア）か。だがあれは、狙って獲得できるものではないぞ？」
「分かっているさ。だが、研究はしておくべきだろう？」
「……はっはっは。本当にお前は、妾が手を組むに値する大望の持ち主じゃよ」
「そこは自画自賛しよう。だからこそ―」

「―万が一の時は、君にサーゼクス様や赤龍帝の打倒をお願いしよう。起きないことは願っているがね。」
「―任せるがよい。お主とならば、星々の彼方にすら漕ぎ出せそうだからのぉ」

『……うっへぇ。危なかったぁ』
「ご苦労様、モデルバレット。新しい体もできてよかったよ」
『まったくだよ。ちゃっかり回収してくれたから復活したけど、あのままだとやばかったなぁ』
「大変だったね。まさかカズヒがあそこで持ち直すとはね」
『九成和地……田知の転生者だっけ？　確かにインパクトでかいけど、誠にぃを捨ててまですることかなぁ？』
「まぁ、人の選択はそれぞれだろうさ。……とはいえ、今後に備えた方がいいだろうけどね」
『ステラフレームの増産とか？　戦力は多い方がいいだろうけど』
「そうなんだ。実は今世（いま）の父さんが興味深い計画を進めているから、尚更戦力は多いに越したことがなくってね」

「お、戻ってきたかいマイサン。そして義理の娘となるモデルバレットくんも無事……じゃないけど帰って着てこれたんだね」
「あ、父さん」
『……へぇ～。おじさんが私の新しいお父さんになる人？』

「そうともさ！　ま、今回悪祓銀弾（シルバーレット）にしてやられたみたいだけど、リベンジはちょっと手伝ってからにしてちょーだいな」
「というと、そろそろそっちも準備ができたのかい？」
「大正解！　んじゃ、ちょっくらいい年こいたおじさんの中二病ライフ、スタートです♪」

和地Ｓｉｄｅ

まぁ色々とあるが、とりあえず問題は解決した。
突貫作業じみたイッセーとシャルロットの龍の体。
明かされたカズヒ姉さん達の過去とそこからくる因縁。
結局逃げてしまった曹操の行方。
オーフィスから奪った力による、禍の団のオーフィス。
更にギャスパーの謎現象まであるらしいし、グレモリー眷属には課題がたくさんだ。
まぁ、それはそれとして嬉しいことも多いわけだがな。
イッセーは死んだと思ったら無事生還。
カズヒ姉さんも助けることができたし、人生をちょっとは前向きに生きてくれることになった。
中級昇格試験は三人とも見事合格。
更にカズヒ姉さんは、俺の告白をついに受け止めてくれた。
……ぶっちゃけ、昨日は張り切ったぜ。太陽が黄色いとか言いたくなっちゃう感じだな。
思い出すだけで笑い出しそうになる。起きた時に高笑いしたくなってたまらなかった。

もうお赤飯も自分でパックのを用意したしな。スマホのスケジュール機能にも、数年先まで「告白成就記念日」を作ったから、毎年ちょっとお祝いしたい。

な・ん・だ・け・ど

「……さぁ！　これより色々めでたいこと総まとめパーティを……始めまぁっす！」
『『『

巻き込まれる。というか、割って入れる空気じゃない。
独占インタビュー形式でやられているこれは、イッセーと俺の分も残っている。
木場と朱乃さんも入れろよ。二人の昇格も入ってるだろこれ。
「師匠！　和っちって結局ベッドどんな感じなの？　……わ、私もトラウマ克服できる……かしら？」
「……あ～。やっぱりそうなるよな？　その、トチったりとか、しないのか？」
春っちとベルナが顔真っ赤でそんなことを聞いてくる。
ちなみに既にしているインガ姉ちゃんは、さらりと距離をとっている。にこやかに労わる笑顔をカズヒ姉さんに向けていた。
最近図太くなってくれたようで何よりです。まぁ、繊細だと神経が持たないからな、兵藤邸。
「ちなみに恋愛関係の進展ではカズくんが数歩リード！　イッセーくんはおいつけるのかな～？」
「……大丈夫です。牛乳飲んで、おっぱいも背丈もおっきくしますから」
既に場酔いしている小猫が、リヴァ先生の茶々入れに余計なことを言っている。
これは後でからかわれる流れだ。頑張れ小猫！　いっぱいネタにされてリヴァ先生達を飽きさせてくれ！　ノリノリだからいいだろ!?
「……くっ！　小猫に追い抜かれたのは流石に不覚だ。悪魔としては先輩とはいえ、私達も負けてられないぞ、アーシアにイリナ！」
「は、はい！　イッセーさんを好きになったのは私が一番早いです。頑張ります、負けません！」
「え、えっとね？　私は一応天使だからね？　そういうことしたらまずいからね？　……でも、赤龍帝を天界に迎える為にも頑張ります！」
「そうですね。ですが先輩方、此処で脱ごうとしないでください……酔ってますか？　場酔いですか？」

あそこで暴走している教会三人娘は、良心たるルーシアに任せよう。
「……お待たせしました皆様。要望によるスモークサーモンサンドを用意しました」
「ふっふっふ。スモークサーモンだけじゃなく、スモーク鱒とかも用意してますぜ？　分かりますかな？」
こっちもテンション高めなアニルが、クックスのサポートを受けて特別に料理まで作っていた。
とりあえず後で食べよう。食いっぱぐれないほどの量はあるけど、内には大食らいが多いからなぁ。
そんな感じでちょっと引っ張られ気味な感じでいると、俺の隣にリーネスが座ってきた。
「……和地、本当にありがとうねぇ」
「なんだよ急に」
いきなりそんなことを言われても、正直俺も困惑するんだが。
だけど、リーネスは本当に感謝しているのが分かる表情で俺を見ていた。
「私達だけじゃ、カズヒの心の壁は取り除けなかったわぁ。貴方がいたから、瞼の裏の笑顔をずっと持っていたから、カズヒは根負けできたのよぉ」
そう、なのか。
まぁ確かに、道間日美子に連なる関係は色々と後ろめたいところがあるだろうしな。どうしても抵抗はあるんだろう。
「……そういえば、和地君とデートするんだよね？　今度も映画？」
「いえ、違うパターンにするべきかと……っていうかインガまで乗ってきたの？」
「ほほぅ？　それは気になりますなぁ？　最初のデートについて伺いたいところですなぁ？」
「どういうノリよりヴァ。っていうかね？　あの時はちょっとそれどころじゃなかったから……」
「だったら尚更楽しみなさい！　お土産はツーショット写真でいいか

ら！　幸せそうなら家宝にするから！」
「鶴羽。ちょっと本気でお願いだから、感涙しながら絡んでこないで……ってその瓶、度数に０がないんだけど!?」
「あっちゃぁ、配送ミスだな。確かに１２パーセントって書いてやがる。……で、デートできていく服とかあるのか？」
「いっそのこと、ホテルによって朝帰りもあり得るんじゃないの？　あるわよね師匠！」
「ベルナも春菜もそっちの話を今振らないで。ちょっといい加減にキャパオーバーだから！」
……凄いことになってる。まじでなってる。
俺はちょっと引き気味になったけど、でもあの空間が大切なものに思えている。
あんな暖かくてにぎやかな空間に、カズヒ姉さんが入れるということが、俺にとって嬉しくてたまらない。
それを俺が導けたっていうのなら―
「……リーネス。約束する」
「なにかしらぁ？」
ふと見ると、イッセーはイッセーで女性陣にもみくちゃにされている。
「いやっほぉおおおいですわぁ！　背中ゲット！」
「ひゃぁああ！　サンドイッチは……や、やめえええええ!?」
そこに滑り込むように背中に抱き着いたのは、ヒツギを巻き込んだヒマリだ。
ヒツギも顔が赤いけど嬉しそうで、ヒマリは今までにない艶やかな笑顔だったりする。
イッセーがいたからこそ、俺の二人の母さんは幸せな笑顔を迎えている。
そしてそれを受け止められるぐらい、カズヒ姉さんの笑顔は俺が導けた。
だからこそ―
「……九成和地は、涙換救済（タイタス・クロウ）は、道間日美子の笑顔に誓って、彼女の笑

顔を守って見せる」
―この日常を守る為に頑張ろう。
絶対にできるといえないのが難点だが、それはそれ。
できる範囲内で頑張ることまで放棄しない。それだけは、俺にとって涙の意味を変えることと同じぐらい頑張りたい祈りだ。
この夢想(祈り)を、悪夢(呪い)に変えずに生きて見せる。
俺はそう、決意した。
「……うん。応援するわ」
その静かな言葉を受けて、俺は立ち上がった。
「カズヒねえさ―」
そこまで言いかけて、俺はちょっと考える。
周囲から注目が集まる中、俺は決意を入れ直した。
ああ、愛している。だからこそ―
「カズヒねぇ！　今度デートしよう！」
―まずは、これが第一歩だ。

ちなみに、めちゃくちゃ反応がうるさかったことだけは伝えておく。
あとその後、イッセーと共に次のデートの順番争奪戦に巻き込まれたことを断言しておく。

銀弾落涙編　幕間　賛歌の前段階

和地Ｓｉｄｅ

「……いい？　人間世界ではマルチタスク、という概念があるの」
指を一本立てて、カズヒねぇはそう語り出す。
「これは同時に複数の全く別の思考を意識的に行うことで、できることは凄いこととされているわ。つまり人間の脳とは、意識しての同時並列作業を苦手としているわ」
ホワイトボードにそう告げながら、カズヒねぇは何故かパソコンの絵を描いた。
「パソコンとかのデリート作業やダウンロードとかがいい例ね。あれは一つ一つ消すとすぐ終わるけど、同時にいくつも進行させるとパソコンの動作そのものが重くなることが多いの」
「そうなんですか。でも、お父様はいくつもの消滅（ルイン・ザ・エクスティンクト）の魔弾を使いこなしてますよ？」
そう首を傾げる少年に、カズヒねぇは軽く肩をすくめた。
「例外とか特例とかは異常は、基準値に入れてはいけません。言い方は悪いけど、頭の良い人がテストの時にわざと成績を下げることはできても、頭の悪い人が照すの都の時だけわざと成績を上げることはできないのと同じことよ。比較対象は良くも悪くも真剣に吟味しなさい」
そう告げたうえで、カズヒねぇは振り返った。
「だからゼノヴィアを無自覚に虐めては駄目です。彼女は単純なことに全力投球させる方が気質的にもあってるから」
「ミリキャスから私を庇うにしても、他に言い方はあるんじゃないか!?」
ミリキャス・グレモリーから庇って講義までしたが、カズヒねぇの

講義はどっちにしてもゼノヴィアの心にえぐりこむようなダメージを叩き込んでいた。
……まずなんでこうなったのかを話すと、単純に言えばミリキャス・グレモリーの社会見学のノリだ。
素直で勤勉で才能もあるミリキャスは、今後の自分の人生も考え、人間界における悪魔の活動を見学したいと言ってきた。となれば当然だが、年の近い叔母であるリアス部長が選ばれる。
それとなく殺気を感じたが、モノローグぐらいは正確に言わせてほしい。というか口にも出してないんだから、それぐらいは許してくださいよ部長。
まぁそういうわけで今日来たわけだけど、ゼノヴィアと話になった時にいきなりエクス・デュランダルのコンボ的な運用をすらすらしゃべって「使わないのはもったいない」と言ってきたわけだ。
素直な年下の少年にずばずば言われ、悪気もないからゼノヴィアのたじたじなんだがここでカズヒねえが動いたわけだ。
わけだけど……ねぇ？
「言っては何だけど、単純な性能の高さに比べて、手札の多さはイコールで強さに直結しにくいの。……アーミーナイフとコンバットナイフの違いで説明しましょうか」
そう言いながら、カズヒねぇは十徳ナイフと戦闘用の……ククリナイフだっけ？　と神器から取り出してミリキャスに見せていく。
「……こんな風に見てもらえれば分かるけれど、基本的に戦闘で多用されるものというのは目的をしっかりと決めてそれに特化した運用ができるようになっていることが多いわ。多機能性を重視しているものは、非常時の保険とか非戦闘用の荷物を少なめにする為に運用されることが多いわね」
「でも、ハルバートという武器があると聞いたことがありますよ？」
「そういうのは特例というものよ。ハルバードにしろ十文字槍にしろ方天戟にしろ、あれらは使いこなせるものが少ないの。……いわゆるマルチウェポンはフィクションとかでは出番が多いけれど、つまりロマン重視で実用性に難があるのよ」

そんな風にミリキャスに教えていくカズヒねぇは、なんというか、妙にしっくり来ていた。
あ、カズヒねぇがお母さんになったら、厳しいけどきちんと見てくれる良い母親になりそうだなぁ。
……それだけに幸香の件が惜しまれる。いや、あの女はどうなっても割と似たような感じになりそうだけど。それでもちょっとはこぉ……マシになったんじゃないか？
まぁ、カズヒねぇが闇堕ちから復帰してなければ駄目だという前提があるから、不可能に近い仮定なんだけどなぁ。
「とにもかくにも、戦場とは「１の状況を１００の出力で突破する」もの。多機能性というのはサバイバルのように「１００の状況に多数の方法で対応する」状況に特化していて、戦場においては一見便利なようで使い勝手は逆に悪くなるものよ。近年の突撃銃はマルチウェポン化できるけど、あれも突撃銃という１００の突破力を中核にした補佐武装の組み合わせよ。……自分で言うことじゃないけど私やサーゼクス様みたいな特例は基準値にしてはダメよ」
「いや、カズヒ。本当にそろそろエクス・デュランダルというテクニックタイプ向けの切り札を活かす方向に進めてほしいんだ。テクニックタイプを増やしてほしいと切に願うんだけど」
木場が真剣な表情で割って入ってきたが、カズヒねぇはきょとんとしていた。
「……リアス部長がいるじゃない。むしろ手札最多の彼女に、聖魔剣の練習をさせる方が確実でしょう？」
「もったいないって概念知ってるかな!?　世界でそのまま「ＭＯＴＴＡＩＮＡＩ」とか広まったこともある、日本の良き文化だよ!?」
木場が半泣きだが、カズヒ姉さんは安心させるように肩に手を置いた。
「三割冗談だから安心しなさい。既に手は打っているわ」
「カズヒねぇ。たぶんだけど、絶対木場が望む方向じゃないよな？」
絶対そんな方向じゃない。いやな予感しかしない。
そしてカズヒ姉さんが自信満々で取り出したのは、何かのアンプル

だった。
……本当に嫌な予感しかしない。
「「「これは？」」」
俺、ミリキャス、木場、ゼノヴィアの疑問符が一つになった。
「リーネスがホムンクルス研究の過程でついに作り出した人工聖剣因子よ。大丈夫、魔術刻印の要領で移植できるから魔術回路持ちなら誰でもローリスクで適合できるわ。……私もリーネスも鶴羽も皆、エクスカリバーを借りれるわよ」
「ゼノヴィアは合体攻撃要員かよ!?」
俺は思わず全力ツッコミだよ。
スパロ○でたまに出てくる奴ぅぅぅぅぅぅ！　スーパー系でたまに出てくる奴ぅぅぅぅぅぅ！　タイマンでも強いけど、持ち技以上に合体攻撃が豊富な奴ぅぅぅぅぅぅぅぅっ!!
エクスカリバーの機能を使わないのがもったいないなら、エクスカリバーを使える奴増やすとか発想が斜め上だなおい!?
「私は常々思っていたのよ。ゼノヴィアにとってのエクスカリバーはデュランダルの補佐でしかないのに、ゼノヴィアにエクスカリバーを使わせようという発想の方が邪道じゃないかとね。折角人為的に聖剣使いを大量生産できる土壌が整ったんだから、目指せグレモリー眷属全員エクスカリバー使い化と言いたいところね」
「それは流石にどうなんだい？　っていうか、それ殆どドーピング……いや、何でもない」
木場のツッコミは正論だが、後天的な力の上乗せはイッセーとかよくやるから文句が言いづらいな。木場も聖剣因子を取り込んだからの聖魔剣だし。
……そこで俺はふと気づいた。
あれ？　そういえば他のメンツ、どこ行った？

イッセーＳｉｄｅ

「……来てくれてありがとう。とりあえず、今回は手短に済ませるわ」
ミリキャス様がカズヒ達に注目している間に、俺達は何故か南空さんに呼び出された。
ちなみに南空さん、近々オカ研に移籍予定だったりする。これからは鶴羽って呼んだ方がいいのかなとか思ったりしてる。あとオカ研に移籍するに当たって、リーネスの部下という形でこっちに住む予定だ。
っていうかなんで俺達こんなところに呼び出されたんだ？
「それで、何なんですか？」
小猫ちゃんが切り出した時、南空さんは静かに頷いた。
そして目を見開いて拳を握り締める！
「依頼よ、リアス・グレモリー眷属！　カズヒと和地のデートを、全身全霊命がけで完璧に守り切りなさい!!」
「……さて、ミリキャスのところに戻るわよ」
リアス部長が振り返ったその瞬間、その横を紫炎を纏った槍が通り過ぎて壁に突き刺さる。
……聖槍と聖十字架の合わせ技を躊躇なくぶっこみやがったよ、この人!?
思わず俺達全員が寒気を覚えて緊張感まで感じていると、何の躊躇もなく南空さんは―
「お願いします！　もちろん依頼ですので報酬は払います！」
―ためらいなく土下座したよ。
え、この流れに俺達ついていけてない。
「とりあえず落ち着いてください。……あと報酬とはどれぐらいですか？」
ロスヴァイセさんが微妙にバグっている。

「……具体的にはあれね。イッセー、避妊前提なら抱いていいわよ」
「落ち着きなさい。それはもはや宣戦布告よ」
リアスも星辰体と感応しないで!?
固有結界による神滅具三つ盛と星辰光による眷属異能総決算とか、激突したらこの家も流石に吹っ飛ぶから！
「その、お気持ちは何となく分かりますけど、とりあえず落ち着いてください南空さん」
「その通りですわ。カズヒの件は理解していますから、冷静になれないのは分かりますわよ？」
アーシアと朱乃さんがなだめる中、南空さんは肩を震わせて涙まで流している。
まぁ、カズヒってすっごく大変な前世だったしな。しかもその原因が南空さんの前世の両親にもあるわけだし、これぐらいバグってもおかしくない……のか？
「カズヒの……カズヒのデートを……今度こそ、完遂させてあげたいの……っ」
ぽろぽろと涙までこぼしているし、友情に訴えるんじゃなくて依頼という形で筋を通そうとしているわけだし、どうしたもんだろうか。
「どうする、リアス？」
俺は手伝ってもいいって感じだけど、俺達全員となるなら主のリアスが決めないとさ。
リアスはリアスで額に手を当てているけど、こっちも理解はしてくれてるみたいだ。
「……手伝ってもいいし、報酬を出すのなら多少の無茶も聞くわ。ただしイッセーの貞操を奪うようなことはしないで頂戴」
「分かったわ。……前金はぱふぱふいわゆるおっぱいで男の顔を挟む奴。確かドラクエが発祥だったろうか？ね」
うぉおおお！
いきなりおっぱいが！　南空さんのおっぱいが！
と思ったら目が見えない！　何かぶつかって痛い!?
「……見ては駄目です。南空先輩も、ドラクエみたいなことしないで

ください」
こ、小猫様……お手数おかけしました。
あとそうだった。ドラクエだ。
ぱふぱふ……素敵な響きだけど、我慢しないとね！
何とか俺が復活して南空さんが落ち着き始めると、ギャスパーがゆっくりと手を挙げた。
「あの、それでデートを守り切るって、何をすればいいんですかぁ？」
あ、それもそうだな。
具体的にどうするんだ？　っというか、守り切るって何をするんだ。
俺達の視線が南空さんに集まった。
「周囲を警戒して問題の排除よ。迷子がいたら二人が気づく前に保護しておまわりさんに引き渡し、不良がいたら二人に絡む前にぶちのめしてゴミ捨て場にでも捨てておくの」
真顔だった。真剣だった。マジって意味がここまで分かる表情も中々ない。
「……具体的な方向性もすり合わせるわよ。できれば犯罪行為は避けたいもの」
お疲れ様です、リアス！

アザゼルＳｉｄｅ

「そういうわけでぇ、気づかれないならデバガメしていいからデートを何とか無事に遂行できるようにしてほしいんですぅ」
「「まっかせなさい！」」

リーネスの頼み、俺とリヴァは一もにもなく受け入れた。
俺が駒王町でアジトにしているマンションの一室で、俺達はリーネスに頼まれて集まっていた。
なんでも鶴羽の奴を呼ぶ予定だったが、あっちはあっちで別件があるらしい。
……八割方リーネスと同じことを、多分リアス達相手にやろうとしている。後でリアスに連絡して、それなりのすり合わせをしておかないとな。
「……リーネス様、メイド部隊からは人選を既に選抜し終えています。準備は万端です」
「安心しな。偽装随伴列車を組み合わせずみさ。データリンクは確実にできるぜ？」
メリードとキュウタの協力も取り付けて、凄い本気の警護体勢だな。過保護すぎだろ。
「ふっふっふ。デートお守り大作戦！　愛を守る一大決戦ですわね！　燃えますのよ！」
「……テンション爆上がりじゃん」
ノリノリのヒマリにちょっとついていけてないヒツギだが、すぐに気を取り直したのかリーネスを真っ直ぐ見る。
「で、具体的にどうすんの？　ぶっちゃけ下手にこっそり近づいても気づかれるじゃんか」
「大丈夫よぉ。既に使い捨ての人工衛星と異形技術満載型のステルスドローンの準備は出来てるわぁ。二人の範囲外から範囲内に近づきそうなトラブルの元を、事前に始末すればいいだけよぉ」
……ヒツギの表情が死んだな。
この場で一番の常識人だ。リーネスが完全に暴走しているあまり、ついていけてなくなってやがる。
「先生聞きたいんだけど、映像とか見れないの？」
リヴァが気になることを言ってくる。
だがそこは本当に気になる。ぜひ知りたいし聞きたいし確認したい。

「安心してくださぁい。上方向からの映像は魅せてあげるしぃ、音声も万全よぉ」
それは良い事を聞いたな。
リアスとイッセーもだが、あの二人も距離感が一気に縮まった雰囲気でぶっちゃけすっごくからかいたかったからな。
からかうと後が怖いが、こっそり映像を見てニマニマできるってのは十分すぎる楽しみだ。
ふっふっふ。ちょっと盛り上がってきたなぁ、おい！

「……ねぇインガ。なんか今日の兵藤邸、休日なのに人少なくない？」
「そういえばそうだね。……何か嫌な予感がするなぁ」
「春菜もインガも手が止まってるぞ？　掃除しっかりしとかねえと、メイド長が後で怖いぞ、まじで？」
「あ、ゴメンベルナ」

第五章　なかがき

さて、折り返し地点ともいえる第五章。銀弾落涙編。思えばここまで長かった。

元々カズヒ関連の部分を書きたいという衝動が強かったのですが、二度に渡りエタったこともありどうしたものかと悩んでいた部分もあります。それでもどうしても書きたかった。

そして自分を見つめ直し、「設定を詰めすぎると燃え尽きる」という致命的欠点が自分にあると悟り、詰める部分は最低限にしつつ、可能な限り見切り発車を行うながらこうしてここまで来れました。……もっとも、塩梅の調整は難しいので奇跡的なところもありましたが（汗

そして同時に、かなり話を進めておかないと一気に人が離れるだろうとも予測できていたので、禍の団との戦いをしている時期の折り返し地点たる、ウロボロスとヒーローズを利用して明かすつもりでした。この辺りでは割とひやひやしていた自覚がありますね。

気を取り直して本編のなかがきですが、この章はもう徹頭徹尾「カズヒ達の秘密を明かし、和地やイッセーがそれを受け止めることで進展する」話ともいえます。

カズヒ・シチャースチエ―すなわち道間日美子―が起点となって生まれし、道間誠明ことミザリ・ルシファーという闇。そしてミザリにとっても想定外たる、ヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバー。この二つの大きなポイントを明かし、そしてオカ研達が受け止めるこ

とで、更なる話となるわけです。

そして大きな変化の要素ともいえるオーフィス。個人的にはあまり批判的感想がいかないのは、もはや「悪い大人に騙された子供」としか見えないことでしょうか？　ヴァーリチームは逆に「クソガキの集まり」な印象を覚えていることが彼らに対する不快感の根源かもしれぬ。……自分が子供のころは低レベルな発達障害に対する理解も少ないし、いろいろといじめられた経験がありますからなぁ……思い出したらイライラしてきたな。

まぁ、この話を書いている段階で「理由はともあれテロリストの首魁」という点もあるし、多分ヴァーリチームに厳しい内容で批判的な感想の内にも入っていたはずで、それもあって後々にふいっちゃんねるが開設するきっかけになったとうろ覚えですが思ってます。

そして英雄派と共に来たミザリによって、本格的に明かされていくいくつもの裏情報。もっとも彼にとっての予想外もあったりしますが。

何度も書いているとは思いますが、自分は作品のキャラクター造形において、一種の発散行為も兼ねて「鬱になるタイプのエロ作品のキャラクター」を参考にしたヒロインなどを作る傾向にあります。今回のモデル作品は特に鬱になったこともあり、どうしてもやりたかった。

そして今回においては色々と設計を大きく変えており、このような

形に。ちなみに最初期、ヒツギと鶴羽のポジションはまだ設計してなく、ヒマリは精神的に壊れていたことと植物状態だったことが記憶を継承してない原因にするつもりでした。ただそれだと説得力が薄かったことと、その辺りの時期でバニシングツインが原因となって別種の二人に分かれたキャラクター造形を知ったことと、和地周りのサブヒロインをカズヒが持つ五大属性にあやかる形で設計することとなり、二人が誕生したりしています。

そして誠明ことミザリや、その支援も受けた曹操が大暴れ。かぁなぁりぃもっております。

特に曹操は好きなキャラクターであり、ヒーローズにおける大ボス。加えて二次創作だと扱いが軽かったりあっさり潰されたりしているのが不満だったので、決戦装備を引っ提げて登場させました。

ステラフレームにおいても書きながら煮詰めておりまして、最終的に「同一規格で作られた基本戦闘用星辰光持ち素体フレーム」に「専用の星辰光を持つ素体」を組み合わせたモデルになりました。かなり早い段階で「日美子を犯した連中を素体にした第一世代人造惑星」は出すつもりでしたが、ただの第一世代では押し切られると判断して、こんな強化を施しています。

そして盛大に敗北した後、より詳細に明かす形です。この部分は本当に評価が下がるリスクがあると思ってました。積み重ねがあったのかむしろ増えた気もするぐらいですがね。

とにもかくにも重い内容になっております。伝聞と説明台詞で和らげていますが、もうこれだけで腹いっぱいになってもおかしくないでしょう。

ですが、だからこそ和地及びイッセーの主人公ｓが男を見せるわけですが。

自分は主人公がヒロインを攻略するなら、それに見合った部分があってこそだと思っています。イッセーは基本的にそういった部分が多いのも、彼が好きな理由ですね。なので和地達主人公達にも、モテるだけの部分や惚れさせたと納得できる部分を用意したいと思っております。……できてるといいなぁ。

そしてヒーローズ編。ウロボロス編まではカズヒにとってのＳＡＧＥであり、ここからＡＧＥです。

シャルバを素体にしたモデルベルゼビュートですが、奴はいうなればステラフレームのチュートリアルや、リアス達のマッチング相手ですね。ただでさえキャラが多いので、マッチメイク相手も用意必須とみなしました。

モデルバレットと連携でアジュカと渡り合ってますが、これはアジュカが本腰を入れてなかった部分も大きいです。研究者としての気質でステラフレームを見てみたいという願望も沸いて出てくるでしょうし、未知のジャンルなら今後を踏まえてデータをとることも重要ですからね。

そしてシャルバの死体が回収されたこともあり、業魔人大量生産。第二部でも、神器持ちを禍の団に残しているので隙があれば使ってみたいところです。……原作でももう一度ぐらい出番無いかなぁ……？

まぁそれはともかく、巻いていってからカズヒ視点。

蛇足という意見もありましたが、これはかなり早い段階で予定して

いました。まずリーネスや鶴羽による説明でワンクッションを置いたうえで、カズヒ視点で本格的に見せて詳細を明かす形です。
カズヒはシルヴァリオサーガにおける光の奴隷枠ですが、その素質を半端に目覚めさせたのが闇に堕ちたことなわけです。そして光の意思で誠明を手に入れる為に悪逆非道に手を染めながらも、ミザリの特殊性が原因で失敗。そのショックと乙女の言葉で漸く正気に戻ってしまった。
だけど、そこに田知の言葉があった。絶望と罪悪感に染まった日美子は、その笑顔を瞼に焼き付けたことで、正義の味方で邪悪の怨敵――すなわち悪祓銀弾《シルバーレット》に覚醒しました。致命的な挫折経験があることで、光の奴隷としては異例なレベルで弱者に寄り添える精神性を会得しています。
そこからの再起のきっかけも見せる。このお膳立ての上で、和地が再びカズヒを再起させるわけです。
かつて互いの笑顔を瞼の裏に刻み込み、勝利の約束を誓った二人。その決意の人生は本来ありえぬ終焉からの再誕と共に、こうして巡り逢い交じり合う。
これをもってして、涙換救済と悪祓銀弾は並び立ち、ある意味で本格的なスタートを切るわけです。
ここまでが本当に長かった。本当に本当に長かった……っ！

そして同時に、ヒマリとヒツギもスタートです。
実は当初の脳内プロットから大きく変わった展開でもあります。
ヒマリとヒツギをイッセーのヒロインにするのは割と流れもあって決まった形でした。来歴上和地のヒロインにすることはまずないですが、その辺りは当初宙ぶらりん気味。まぁ収まるところに収まった形というか、イッセーの主人公力故というか。
それ以外にもありますね。二人の星辰光は最初から「互いが同時に

発動すること前提」「極晃星ほどではないが規格外の付属性」は決定でした。ですが本編の前書きか後書きで書いた通り、これは本気モードだと二人が融合するという設計でした。

もちろんそれも、当初の発想ネタと同じで乙女であって乙女でない。カズヒ達転生ヒロインはアズールレーンのキャラクターを外観モデルにしていますが、当初の融合体はプレマートンみたいなキャラにする感じでした。そして融合して神器を持っている影響から、合計六つの禁手を使えるという形でチートにする想定でした。

ただ、書いている最中に「果たしてイッセーがそれを良しとするだろうか？」と思い、最終的に二人は別個の状態のまま頑張るルートになりました。まぁそれはそれとして道間乙女復活は望まれていたので、ｔａｐｐｅさんの協力も受けて復活となりますが、そこはまた別のなかがきで。

同時に幸香達後継私掠船団が、ついに大王派に鞍替え。第二章からそれとなく、密会させたり意気投合させたりで張っていた伏線をここで回収。

これも本編の前書きか後書きでぶっちゃけてますが、この二チームは当初から「禍の団編が終わった後の物語におけるラスボスポジション」として設計しております。その為同盟を組ませるのは決定事項で、英雄派が敗北するこのタイミングにしておりました。

またその過程で、幸香も質の悪い系統の光の奴隷に大幅変更。何が酷いって凡人に無茶ぶりをしない分、原作の質の悪い光の奴隷こと光の亡者二人に比べると、絶対的にマシなんですよ。ほんと酷いはあの亡者。

まぁ当面は「政敵な味方」ではありますが。これはフロンズが百年二百年先すら見据えて動いているからですね。今の段階で動くとするなら、それこそ誰にとっても予想外すぎるリターンがフロンズに確

定した時でしょう。そうでないなら数百年は反旗を翻さない奴です。
そして後継私掠船団筆頭戦力は、最終決戦において和地ヒロイン達を筆頭とするグループがそれぞれ相対するポジションにしたいと思っています。その為、第一部登場の筆頭戦力はある種の属性を持っている形ですね。
まぁ、そういう想定なだけで難産な奴も多かったですが。特にこの章で顔出しした梔子とユーピ。キャラクターの芯は作ってましたが、そこからが大変という出下。ｔａｐｐｅさんの情報提供で何とか完成させましたので、この場を借りて改めてお礼を。

そしてハーデス陣営の精鋭部隊、ハルベルトも顔出し。
こいつらも割と即興というか、ハーデス陣営も強化する必要があるよなぁという発想から作ったキャラです。
基本的には全員が星辰奏者であり、筆頭レベルの戦力は漏れなくやばいです。また当時のコンセプトとしては、基本的に「有象無象による圧殺が困難」を母体としており、アクシズの星辰光は癖の強い部類です。
この段階では明かしてませんが、ヴァーリは白色衰星でアクシズの星辰光を弱体化させて痛み分けに近い状態に持っていきました。

そして和地とカズヒの更なる一歩。パラディンドッグとリスターティングホッパー。
ここは大一番なので、新フォームのお披露目に近い形ですね。ただし、両者ともに近年の仮面ライダーとは異なり他のフォームを使用する余地も残っています。

まず和地ですが、こちらは「パラディンドッグの恩恵を長時間維持することが和地では現状不可能」という形で、アサルトグリップとのすみ分けをしております。

この辺も割と即興ですが、感想などで客観視したこともあり「和地はそもそも禁手のような精神性があまり持ってない」点を認識したが故の発想です。ただしパラディンドッグ事態が「理論上できるようになるけどやるのが困難」なので、脳内ＡＩチップと和地の優れたセンス＆テクニックで強引に成し遂げているところもあり、同型プログライズキーは今のところ他には使われてないですね。

まぁ、タートルとリザードも再び出番を見せたい所。とりあえずリザードは方向性がだいぶ早くから思いついていますが、タートルは最近になって活かせるチャンスを思つきました。

そしてカズヒのリスターティングホッパー。カズヒのフォームチェンジは基本として「星辰光の性質変化」をモットーとしており、こちらは「新たなる基本フォーム」として設計しました。

今までカズヒが集めてきたのは、方向性は異なれど負の側面。カズヒ自身が己を邪悪とみなしていたこともあり、特定の敵に対する特攻に特化しておりました。いうなれば、「死ぬ前に敵を倒す」という破滅的な方向性です。

ですが、悪敵銀神として一皮むけたカズヒは「守る為に力を借りる」という、正の方向性での強化を獲得。安定性や安全性がけた違いゆえ、今後の基本フォームとなっております。

まぁ、時にはハウリングホッパーの出番も作りたいですけどね。幸か不幸かハーデス達とやりあうこともありますし、その際は久し振りのシェパードを出したいところですなぁ。

そうじて「中盤の山場」「折り返し地点」であり、同時に一番書きたかったところを漸く書き終えた形になっている章でした。

幕章　銀愛賛歌編

銀愛賛歌編　第一話　海外で砂糖を入れないコーヒーは、日本から逆輸入されたらしい。

和地Ｓｉｄｅ

……精神の解体清掃という魔術がある。

これは解体清掃の名の通り、精神という概念を一度ばらしてオーバーホールすることで、メンタルをリフレッシュする魔術だ。

もっとも数時間はかかるうえ、精神が文字通り解体されるから無防備極まりない。その為難易度は俺でも十全に使えるレベルだが、あまり使いたがる奴はいない類の魔術だ。

だが、この魔術のメリットは二つある。

まず一つ。精神的疲労や消耗の回復速度が尋常じゃない。

もう一つ。精神を解体するから、絶対にメンタルを回復させることができるし数時間は体も休まる。

……そう、興奮して全然寝付けない時も、この魔術があればとりあえずしのげるのだ！

俺は全然寝付けなかった。明日の響く可能性から睡眠薬は使えず、気づけば既に午前４時。このままではまずいと判断し、精神の解体清掃を実行した。

心配するな。俺はかなり鍛えている男。眠れなかったが派手な運動はしてなかったから、体力的にはひとかけらの問題もない。そしてメンタルは完全リフレッシュだ。

そう、俺がカズヒ姉さんにマジで受け入れられてからの、初デートは……今日だ!!

「……待たせたわね」
と、カズヒ姉さんも玄関についた。
俺の格好はかなり気を使った。
無駄に気負いすぎず、だがそれなりにおしゃれな感じにしたい。一張羅一歩手前な格好で行きたいといった感じだ。
結果として、そこそこカジュアルといった感じだ。シャツの上からジャケットを着て、ズボンもそれなりのを選択した。
……持っている衣服とファッション雑誌を見比べて、色々と頭を捻ったり木場の力を借りて何とかって感じだな。
そしてカズヒねぇだが、凄い。
もう一度言おう。凄い。
ズボンとシャツではあるけど、上にファッション性重視の秋用ジャケットを羽織ることで、おしゃれな感じにまとまっている。軽い化粧やイヤリングまでしている。
……イヤリングに使われている宝石は、分かりやすい偽物に見せかけて宝石魔術として使える魔力を込めた代物なのはちょっと苦笑。あとコートの裏地も異形技術による強化加工が施されているけどな。
おしゃれをしつついざという時に備えた相応の装備になっている。この辺りはカズヒねぇらしいというかなんというか。
ただオーダーメイドというより、買ったものを改造した感じだ。それなりの保険レベルなのがまたなんというか……いい。
俺が思わず見とれているとカズヒねぇは、ほんのり顔を赤くしていた。
「……な、中々似合ってるというか、おしゃれにできたと思うわよ？だからその、私はそこに、その、釣り合ってるかしら？」
「いろんな意味で嬉しくなりますっ!!」
反応も格好も嬉しくなる。
い、いやっほう！
内心でバグりかけていると、カズヒねぇは右腕で何かを掴むと、押し付けるように何かを渡してきた。
見ればカズヒねぇの右手にはおしゃれなチェーンのブレスレット

がつけられていて、握っているのも同じものだ。
「り、リーネスに頼んで作ってもらったの。対になってるの物の方向と距離を魔力反応である程度把握できるわ。……駒王学園でもカバンにチェーンを付ける程度なら何とかなるそうだから、備えとして持ってもらえると……嬉しいわね、うん」
……いやこれ。まじでほんとそのね？
「カズヒねぇ。俺を萌えで殺す気か？」
ときめきがオーバーヒートしそうなんだけど。
カズヒ姉さんはカズヒ姉さんで、ちらちらと視線をちょくちょく逸らしながら顔真っ赤だし。
「むしろ長生きして。一緒にいる期間が長い方が嬉しいわ」
どうしよう。ときめきで死ぬかもこの反応!?

アザゼルＳｉｄｅ

「こちらディフェンドポスト。ブラックコーヒーをエスプレッソで用意させるから、欲しい奴は順次交代で取りに来い」
『『『『『『『『了解（ラジャー）』』』』』』』』
甘い！　なんだこの甘さは！
エスプレッソに突っ込むべき甘さのようだ。本場のエスプレッソは砂糖が解け残るほど入れて、最後に残ったそれをティースプーンですくって食べるのが通だぞ！　むしろブラックコーヒーは日本から派生した文化と言ってもいいレベルだぜ！
なんか脳内で蘊蓄を語っちまったが、まぁそれはいい。
このＤ×Ｄ（デート×ディフェンダー）　作戦、いきなり俺達は壮絶なものを喰らってしまっ

た。
あの女傑カズヒ・シチャースチエが、この甘い展開を見せるとは思ってなかったぞ。
断じてツンではなかったが、まさかあの女傑がデレるとあああも可愛いことになるとは思ってなかったぜ。
これを使ってからかえないのが凄く残念だ。からかったらリーネスと鶴羽に殺されるからな！
「こちらディフェンドポスト。護衛対象は最寄り駅に向かう模様。ディアボロスチーム車両に搭乗して移動準備。ディバインチームとダウンフォールチームは、それぞれ上りと下りのホームの端に潜伏し、対象が電車に乗り次第どちらかが乗り込め。外れた方は別途待機しているバンに乗って追跡せよ」
ガチの表情のガチな口調のリーネスが、ガチのガチで準備を整えてやがる。
『……ディアボロスチーム……了解』
『ダウンフォールチーム、了解ですの！』
『ディバインチームも了解よ』
明らかに引き気味のリアスに、ノリノリなヒマリとイリナの返事が聞こえてきた。
……ちなみに俺達は機動特急アントニオンのトレインモードで、今駒王町上空５ｋｍをステルス機能を展開して旋回している。
今後想定される地区の上空にこんなのを移動させる許可をとらされるのに、俺は心底から苦労した。
やべぇ。軽い反応で了承するんじゃなかった。総督を辞したとはいえ元総督を此処までこき使うか。
更に今回、リーネスは新たな札まで用意しやがった。
「トレイン０。事前情報による推定ポイントに到着したか、オーバー」
『トレイン０。既に旋回して待機中。必ず護衛対象のデートを守り切るわよ。オーバー』
……返事をした鶴羽は、とんでもない切り札を獲得している。
元々鶴羽は、登録したサーヴァントの影を使役する固有結界を持

つ。更に固有結界の零れ落ちた残滓として、登録したサーヴァントの宝具なら神滅具だろうと使える女だ。
……そしてリーネスはかつて契約したサーヴァントから許可をとることで、デミサーヴァントとして力を借りれるようにする仕込みをしている。
こいつら、アントニオンの試作型を使う為に、鶴羽にアントニン・ドヴォルザークと接続させやがった。
他人のデートを守る為にここまでするか。
ちょっと本気で、軽い気持ちで協力したのを後悔してるぞ、俺！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そんな中、ある小さな通信室で、一人の指揮官が部隊に通信を行っていた。
「諸君。我々の全人類淫乱化計画は、ついに新たなフェーズに到達した」
『『『

「これより我々、大欲情教団は……国連加盟国首都すべてに対し、性癖覚醒波の発生装置を起動させる！　かつて初夏に行った技術を更に突き詰めたこの力で、人々を淫乱へと導くのだ!!」

『『『『『『『『『『はっ』』』』』』』』』』

静かに、だが誰もが声を揃えて支持を受け取った。

今ここに、世界の淫乱さを揺るがしかねない大いなる戦いが始まらんとしていた。

……始まらんとしていた!!

銀愛賛歌編　第二話　他国の料理を魔改造するのは割とよくある

和地Ｓｉｄｅ

俺達は今、都心でデートをしている。
前回は映画だったけど、今回は買い食いやショッピングやゲームセンターなど、色々と見て回っている。
そして今俺は、真剣にボタンを押し―
「……っしゃぁ！」
「でかしたわ！」
―今ここに、一発でクレーンゲームで欲しい物ゲット!!
熊の可愛いぬいぐるみを、今ここにゲットしたのだ！
「これでいいか、カズヒねぇ」
「ええ、ちょっと欲しくなってたけど……こういう時に花を持たせられてよかったわ」
ちょっとはにかみながら、カズヒねぇはそのクマのぬいぐるみを抱きしめる。
いやちょっと意外な気もしないでもないが、カズヒ姉さんだって女なんだ。
可愛い物の一つや二つ、気になったっておかしくない。
とはいえだ。ここで終わらず踏み込んでいこう。
いろんなことを知ってみたい。そして俺のことも少しぐらいは知ってほしい。
だからまぁ、ちょっとその……き、気恥ずかしい！
「カズヒねぇって、意外とぬいぐるみ好きなのか？」
ちなみに部屋に遊びに行った時は、そういうのを見た覚えがなかっ

たんだが。
……遊びがない部屋ではあったな、うん。
簡単な釣り道具はあったけど、ぶっちゃけそれぐらいで趣味の産物はあまりなかった気がする。来歴が来歴なので分からなくもないが、いきなりぬいぐるみとかはちょっと驚き。
……ぶっちゃけかっこいい系の女性が可愛い物をもって笑顔なのは、かなりのポイントだとは思うけどな！
で、カズヒねえはちょっと視線を泳がしながらも、ぬいぐるみを抱きしめている。
「……昔っからこういうのに意識を向けたことがあまりなかったからね。あなたのおかげでこういうのに興味を持ちたいと思えたの……ありがとう」
お、おぅふ。
「ど、どういたしまし……て？」
ヘビー極まりない来歴がちょっと出てきたけど、その上で今からでもそれをどうにかしたいと思えているのは、俺は誇っていいんだろうな。
うん、ちょっと真剣に……照れる。
カズヒ姉さんもちょっと照れ気味だけど、ぬいぐるみはしっかり抱きしめているからそこがこう……いやっほう？
「「……」」
あ、なんかちょっと沈黙が続いたな。
こういう時はあれだ。時計を確認！
よし、ちょうどお昼時！
「買い食いしておいてなんだけど、ちょっとお昼にしないか？」
「そうね。うん、そうよね、うん」
よし、とりあえず言質はとった。
さて、何処に食べに行くか。
それとなく洒落たところに行きたいけど、俺達ってあんまり豪勢に金を使うタイプでもないから場違いになりそうだしな。
ふとその時、遠くで何かが光ったような気がした。

ふと目が行くと、そこにはチェーン店じゃない類のハンバーガーショップが。
俺とカズヒ姉さんは、視線が集まった。
なんとなく見つめあうと、ちょっとお互いに噴き出した。
「……ま、高校生のデートならあれぐらいがいいかしらね」
「それもそうだな」
値段も軽く腹を満たすなら二千円超えないだろうしな。ちょっと奮発したい高校生のお財布にはいい感じか。
さて、もっと楽しんでデートをしたいものだなっと。

イッセーＳｉｄｅ

「……ふぅ」
「よくやったわね、祐斗。少し休んでいていいわよ」
一呼吸ついて脱力する木場を、リアスが背中を撫でながらねぎらった。
あの空気が硬直した瞬間を止める為に、木場は素早く周囲を確認して高校生がちょっと奮発するレベルの店を発見。素早く聖魔剣を使って光を操り注目を集めてから、その速さで二人に視認されないように誘導に成功したのだ。
凄いぜ親友。お前、本当によく頑張った……！
『よくやったわぁディアボロスチーム。左右からディバインチームとダウンフォールチームがカバーしているから、まず最初に昼食よぉ。素早く食べれるようアニル製ベーコンのＢＬＴサンドを用意しているわぁ』

リーネスが素早く指示を出すけど、手筈が整いすぎて怖い。
……っていうか、交代制なんだ。言いたいことは分かるけど、ちょっと怖い。
っていうか、冷静に考えるとなんでここまでやっているんだろうなぁ。
ある意味デートの手伝いだけど、三割ぐらいデバガメだしなぁ。
いや、俺だって可愛い身内の女の子がデートってなったら気になるけど。俺が朱乃さんとデートしたときもリアス達が分かりやすくついて来てたけど。
このスパイ大作戦レベルで隠匿装備満載の、スニーキングミッションは色々と怖い。
でもまぁ、このまま何も起こらないでいてくれればいいんだけどなぁ。

和地Ｓｉｄｅ

チェーン店じゃないハンバーガーは美味かった。
チェーン店のあのチープな感じもレッツジャンクフードでいいんだけど、こういう一歩格上のも中々いい感じだな、いやホント。
そんな感じでリフレッシュして、その後もウインドウショッピングとかをしながら楽しんだ。
そして午後、ちょっと遅いお奴な感じで俺達は古風なものを食べている。
「……へぇ、これ美味いな」
「でしょう？　なんだかんだで古き良き日本の味よね」

カズヒねぇの提案で、小腹を埋める為に来たのはそば店だが、食べるのは麺じゃない。
注文したのはカズヒねぇが食べたいと言ってきた蕎麦掻だ。ちなみに麺は区別の為にそば切りと言われることもあるらしい。
……いや、これ結構美味いな。新鮮。
「っていうかカズヒねぇ、日本人でも失念してそうな物に意外と詳しいな。旧ソ連県内長かっただろ？」
「そこで食べた……というより、ちょっと作ったことがあってね」
ん？
「知ってる？　ソ連圏って環境的に育ちやすいのがそこまでないこともあって、蕎麦が割と消費されるのよ」
そう言いながら、カズヒねぇは苦笑する。
「基本的に粥にしたりガレットっていうクレープみたいな感じにするけれどね。……前に言っていたかもしれないけれど、スラム時代に雇ってくれた店主のところで、間違って賞味期限切れの粉が納入されたことがあったのよ」
あ～、それは駄目だ。
仮にも飲食店でそれを出すと、流石にやばいことになるだろう。黙って出す奴はいるかもしれないが、カズヒねぇが世話になるような店主がそれをするとは思えない。
カズヒねぇはそれを思い出しながら、小さく苦笑していた。
「ただまぁ、消費期限は切れてなかったからもらったのよ。で、なんとなく蕎麦掻って料理があることを思い出したから、熱湯で練って食べていると興味を持たれてね」
そう言いながら、カズヒねぇは蕎麦掻を一口食べていた。
それをゆっくり味わって呑み込んむと、蕎麦掻の残りを橋で掴む。
「……アイディア料まで用意してから、色々試して作ってみたのよ。魔改造は日本の専売特許じゃないってわけね」
「へぇ～。なんかちょっと興味がわいてくるな」
いや、ロシア風の蕎麦掻とかどんな感じになるんだろうか。
ボルシチとかウォッカとかしか思い当たらないから、どんな料理に

なっているのか真剣に興味がわいてくる。
……うん、機会があったら行ってみたいな。
そんなことを思っていると、カズヒねぇも上を見ながら微笑んでいた。
「冬休み……は寒すぎるわね。春休みぐらいにでも行ってみる？　私も久しぶりにあそこの料理を食べたくなってきたわ」
「え、いいの!?」
マジか。え、いいの!?
いやちょっと待て。その店主、つまりはカズヒ・シチャースチエの育ての親だろ？
つまりこれって、お父さんとの挨拶的な感じになるんじゃないかなぁ!?
うぉおお！　テンションが、テンションが変なことにいいいいい!?
「……えっと。ど、どうかしたの？」
「え、いや、気にしないで！」
うん、ちょっと落ち着こうか……俺！

イッセーＳｉｄｅ

「うぉおおお！　行くぜ、禁手化（バランス・ブレイク）ぅ！」
「なんと、ここまで強力な精力を持っているとは！」
なんか変な勘違いされてるけど、今はそんなことを言っている場合じゃない！
糞ったれ！　まさかこんなところで変態集団に遭う羽目になるな

んて思わなかった。
しかも世界各国の首都で同時多発変態化計画だと!? 俺が京都でやらかしてしまった悲劇を、意図的に大規模でやらかすだと!?
させるわけないだろ。そんなことになったら、九成やカズヒのデートも台無しだ。
俺も許せないし、何よりリーネスや南空さんがどんなことになるか分かったもんじゃない。ぶっちゃけ九成とカズヒが一番ダメージ少ないかもしれないけど、それはそれ。
やらせねえ、やらせねぇぞぉおおおおお!!
世界各地に分散で跳んで戦っているリアス達や、大慌てで世界中の首脳陣に情報を伝えてくれるアザゼル先生に顔向けできない真似はしない。
うぉおおおお！　頑張れ、俺ぇぇぇぇぇぇぇっ!!!

和地Ｓｉｄｅ

ふぅ。なんというかもう日が暮れちまったな。
晩御飯は外で食べていいとは言われているし、今から戻ってもみんなが逆に困るだろう。
となると、もうちょっと見て回った方がいいかもな。
そんなことを思っていると、カズヒねぇはふと俺の袖を引っ張った。
何かと思ってみてみると、カズヒねぇはちらちらと観覧車の方を見ながら、なんというか頬を赤らめている。
「……なんていうかベタだけど、一度ぐらい経験してみたいの……い

い、かしら？」
……。
え、デートのラストに、観覧車？
定番的な感じっていうか、俺はカズヒねぇのリアルな感じのデートで、観覧車？
「もちろん是非むしろお願いします！」
「落ち着きなさい」
逆にカズヒねぇが冷静になっちまったよ。
「……あ、でもちょっと混んでるわね。時間もかかるし先に晩御飯かしら」
「あ、そっか。時間的にもちょうど混みそうだしな」
時間帯的に、まず観覧車行ってから晩御飯とかができる感じだしな。
いや、でも晩御飯は何にしようか。
「……手早くラーメンというのも味気ないわね。……まぁ、ちょっと色々見ながらでもちょうどいいタイミングになるんじゃないかしら？」
そう言いながら、カズヒねぇは俺に手を差し伸べる。
「……そうだな。ま、十分ぐらい見てから決めればいいか」
俺はそう答えながら、カズヒねぇの手をそっと握る。
……まぁ、なんていうかだ。
正式な形での初デート、このまま終わってほしいもんだ……な。

アザゼルＳｉｄｅ

「では諸君！　俺が奢るからそろそろ食うぞ！　デートは何とか無事に終わりそうだしな！」
『『『

銀愛賛歌編　第三話　一応ヒロイン全員に好物は設定しております。

和地Ｓｉｄｅ

時折思うところがある。
モテる男にはそれなりの責務があるべきだと思う。
少なくとも、並みの男が務まる者ではないだろう。
ハーレムだろうと逆がつこうと、一人が多くを独占するというのならそれなりの能力というものが必要だろう。
何でもかんでも自分一人で用立てる必要はないだろう。だがどうあがいても片方が独占的に集めるのなら、相応の比率を一人の側が負担できなければならないとは思っている。つまり、生活を保障する財力だ。
これはまぁどうにかなるだろう。俺はぶっちゃけかなり戦果を挙げているしな。昇給ぐらいは確実にある。っというか既に要請している。
もう一つは器量だ。複数人の愛を独占するというのなら、当然だが彼女達をまとめる器の大きさというものが必要だろう。
ここに関しては、少なくとも周りからは心配されてない。相談してみたこともあるけど、財力面を指摘されることはあっても人柄面では心配されてない。
あと何時の間にやら、カズヒねぇが女性陣のリーダーポジションになっているから尚更だ。まぁ俺が俺である理由はまさにカズヒねぇによるものと言ってもよく、だからこそ皆を引っ張り込めたところはあるし、そもそも俺がハーレムやってる理由はかなりカズヒねぇの要

望によるものが含まれるから納得でもある。
あとはまぁ、体力だな。
多くの女性を抱え込むというのなら、人生の重荷や発生するだろうトラブルに対する対処……すなわち心身の頑健さは必要不可欠。あと夜の性生活も相手が欲求不満にならない程度は必須だろうしな。
ちなみにこっちはそこそこあるとは思っている。ぶっちゃけ経験豊富気味だし、男がどうあがいても必須となる残弾関連は、前とか後とかのテクニックでどうにかしようと思っている。
さて、そんなことを思うわけだが、だからこそやるべきことはいくつもある。
……そう、バランス感覚と調整だ。
俺はカズヒねぇが一番好きだ。そこはもう断言できる。
みんなもそこは了承してくれている。まぁさっきも言ったが、俺が俺であるのにカズヒねぇが果たした役割は絶大で、カズヒねぇの要望こそが俺がハーレムを作ることになった大きな理由だからな。当然といえば当然だ。
だからと言って、他のみんなをないがしろにしていいわけがない。むしろそうであってなお愛してくれるのなら、本気で俺もそれに応えるのが責任の取り方だろう。
そういうわけでだ。
「……さて。何処に行きたいんだ、ベルナ？」
「……お前、一気にスケコマシ度が増してるよな？」
八割呆れたベルナの表情にはちょっと傷ついたんですけど。

祐斗Ｓｉｄｅ

「……なんというか悪かったわね。二人には私から言っておくわ」
「いや、対価はきちんともらっているから別に構わないけどね」
カズヒにそう答えながら、僕はカズヒがお土産に持ってきてくれたカステラをしまう。
どうやらカズヒは、南空さんやリーネスが動いた一件を知ってしまったらしい。
……というより、大欲情教団という組織名が発覚した変態達の騒動に、プルガトリオ機関のリマ部隊が動き出したらしい。古巣からの情報提供で悟ったようだ。
「とはいえ、本当に気にしなくていいよ。ミリキャス様に悪魔の契約活動を紹介するタイミングだったし、良い経験になったんじゃないかな？」
「流石に割と特殊な部類だとは思うけどね」
苦笑しながら、カズヒは僕が出した紅茶を一口飲む。
「……あら、ティーバックじゃないのね」
「これでも貴族の眷属だからね。朱乃さんほどじゃないけどお茶は入れられるんだ」
僕とギャスパー君は兵藤邸に住んでない組でもあるしね。それなりに家事だってできるさ。
あとギャスパー君も生まれた家は割と高貴な家柄だしね。紅茶が上手に入れられるに越したことはないね。
だけどちょっと意外だったかな。
「カズヒってあまり贅沢してなかっただろう？　紅茶について意外と詳しいのかい？」
「……安物じゃないかどうかぐらいは何とかね。リーネス……いえ、アイネス・ドーマはイギリスではそれなりに裕福な家柄だったもの」
あぁ、そういうことか。
実家から送られる高級茶葉を振舞ってもらったから、良し悪しが多少は分かるようになったと。
ちなみにリーネスは今後に備えた色々な研究を行っていると聞い

ている。アントニン・ドヴォルザーグの力を振るえることから、南空さんはキュウタと共に参加しているそうだ。
機動特急アントニオンは当初から更なる強化を目論んでいるらしい。その研究を勧めているとか。
……何かとんでもない事態になりそうで怖いね。神の子を見張る者が関わっている訳だし。
「大丈夫なのかい？」
「俺と私でダブルアントニオン……といったことにはなりそうね。……アイネス・ドーマは堅いようで意外とノリがいいから、今のリーネスだと更に悪乗りしかねないわ」
ちょっと遠い目になっているね。
気分を切り替えた方がいいかと思い、ふと思い出した。
「そういえば、今日はベルナが九成君とデートだったね。気になるかい？」
「それなりにはね。私が言うことでもないけど、ベルナも割と大変な人生を送ってきているもの」
そう呟くと、少し真剣に考えこむ表情になった。
「異文化コミュニケーションって意外に難しいし、和地が妙なミスをしなければいいんだけれど」
おや、そっちかい？
特に嫉妬している風には見えない辺り、イッセー君の辺りとはまた違っているね。
むしろ九成君が何か間違ったことをしないかと、ベルナの方を心配しているようだ。
「仲が良いことは良いことだけど、少しは嫉妬してもいいんじゃないかい？」
「まさか。私が一番だというにも関わらず、和地を愛してくれる女なのよ？　真面目にケジメをつけようとしているし、その上でなら幸せになってほしいと心から思っているわ」
微笑すら浮かべながら、カズヒははっきりと言い切った。
……正直、ちょっとイッセー君に同情する。

最近イッセー君周りは、女性陣の独占競争とかが激しいからね。朝起きているとベッドから蹴り落とされていることが多いとか。
九成君関係は、むしろそれなりに協定が取れているからその辺りは安心なんだよね。
「……イッセー君は九成君が羨ましいだろうね」
「安心しなさい。あまりに続くようなら私が一夜四人ぐらいでスケジュール調整をするから」
相変わらず厳しいことで。いや、目に余るからしているだけでむしろ温情なのかな？
とはいえ、だ。
「ベルナはたぶん、大きな形で休暇的に動いたのは初めてだしね」
「和地には、ぜひリフレッシュさせてあげてほしいところね」
こういう機会に、いっぱい楽しんでほしいものだね。

「あ、でもそうなると彼の場合――」
「当然だけど残り四人もよ。まぁ、和地の功績なら余裕はあるでしょうしね」

和地Ｓｉｄｅ

「……ふぅ。久しぶりに食べたぜ」
「日本で食べれる店探すのはちょっと苦労したけどな」
色々と日本文化について分かるような場所を巡ってから、俺とベル

ナはお昼ご飯をとっている。
大雑把に言うとフランス料理だ。それも日本人好みではなく正真正銘の本格的な奴。
あとコース料理ではなく、複数のメニューを意図的にとっている。
……具体的に言おう。カエルを食べている。
はいそこドン引きしなーい。卵かけご飯に代表される卵の生食だって、世界的に見れば寄食だからなー。ゴボウ（根っこ）とかタコだって、食べない地域ではドン引きされてるからな～。
それに日本じゃめっきりドン引き対象の昆虫食も、世界的に見れば六割の国だか人間だかは食べているしな。
「つっても日本じゃ引く奴も多いって聞いたけどよ、普通に食べれんだな、和地」
「ザイアのサバイバル講習で蛇やらカエルはもちろんのこと、虫関連もある程度は叩き込まれているからな。むしろ丁寧に下ごしらえまでされてるから普通に美味いぞこれ」
サバイバル講習は食べれるようにする技術だから、技術が下手だと本当に不味いからな。
流石は美食大国。これなら問題なく食べれるな。
「カレー粉ぶっかけて誤魔化すような奴じゃないし、やはり本格的な料理は基本的に美味いよな」
「まったくだ。……いや、別に好物ってわけじゃねえんだけよ、ふと思い出して食べたくなるって奴だったんだ」
なるほど。
確かに兵藤邸は、事情を知らない夫妻が日本人でもあるからな。基本的には日本人が普通に食べるような料理ばかりが出てくる。
それはそれで問題ないが、やはりこういうのを食べたくなることもあるんだろう。
まぁ、それはそれとしてベルナは別途で美味しそうに食べているものがある。
……チーズオムレツだ。いや、卵も適度に柔らかい上とろりと溶けたチーズがマジで美味そうだな。

俺はピッツァにしたけど、こっちはこっちで美味そうだったな。
ちょっとちらちらと見てしまっていると、ふとベルナがそこそこのサイズにチーズオムレツをとりわけた。
一口で食べるサイズじゃない。あいつもっと小さめに切っているよなぁと思っていると、小皿に取り分けて差し出してきた。
「気になるなら食ってみろよ。実はこれが大好物なんだ」
「え、それなのにいいのか。ありがとな」
あ、これマジで美味い。
卵とチーズの組み合わせは、ハムやベーコンに匹敵するな。程よく混ざり合っているうえ、とろける感じがたまらない。
俺はしっかり味わってから、ピッツァの残りをひと切れ小皿に乗っけて素直に渡す。
「ならこっちもだな。……ほれ、イケるぞ？」
「へぇ？　んじゃまぁ、ちょっと食べてみるか」
……うん、ハンバーガーショップも良かったけど、こういうのもいい感じだなぁ。

そんなこんなで夕方になり、デートも終盤といった感じだ。
ちなみに今夜も晩御飯は外で食べてくるぐらいの勢いで許可が出ている。リーネスからも了承は得ているしな。
「……で、残りはどうしますか、お嬢様？」
「茶化すなよ。ガラじゃねえのは自覚済みだ」
そう返しながら、ベルナはふと夜空を見上げる。
どこか考えて混んでいる風でいて、俺はちょっと気になった。
何か不手際があったか？　ふむ、その可能性は大いにあるな。
親しい中でも意外と知らないことはある物だ。そして俺の女性関係において、ベルナは一番縁が浅いところからいきなりできた関係ともいえる。

……よし、ここは「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」精神でいこう。古人の伝える教訓を生かすべし。
「……何か問題があったら言ってくれ。治せるところはしっかり治したいし、付き合いが浅いからこそ、いろいろ知っていきたいとも思っているからな」
「あ、悪かったな。……別にお前が悪いんじゃねえんだよ」
そう返すと、ベルナは自嘲気味にほほ笑んだ。
「アタシは一応テロリストだったわけだろ？　それがこんな風にデートまでしていいのかとも、思ってな」
ああ、なるほど。
ベルナは、はっきり言って口調とは裏腹に真面目で、だけど主体性が意外と薄めだ。
ずっと姉に引っ張られて生きてきて、惰性でテロリストをやっていた。そこを俺やカズヒ姉さんに叩き直される形で、自発的に抜けたのがつい最近だ。
気にしたくなるのも、当然だな。
……ただまぁ、言うべきことはあるだろう
「ベルナ。一ついいか？」
「ん？　なんだよ」
俺は素直に苦笑しながら、ベルナをそっと抱き寄せる。
「……ちょ、おま、人目が!?」
「たまの息抜きぐらい気にするな。人間精神の耐久力にだって限界はあるんだから、たまには休息ぐらいしてもいいんだよ」
そこについては断言できる。
主体性を確立できなかったがゆえに道を踏み外したとはいえ、それをきちんと反省して償おうとしているんだ。
ケジメをきっちりつけるというのなら、俺はそれで構わない。だからそれはそこでいい。
うん、それに―
「折角のデートで凹まれると、俺の気分も凹むしさ。だから楽しんでいいんだよ、その方面での文句が出るなら、俺が受け止めるからさ？」

―そういうことで、納得してほしいかな。
正直これでいいか心配だったが、ベルナはふっと体の力を抜いて、俺に持たれるように抱き返す。
「わぁったよ。ったく、妙なところで強引なんだな、カズって」
「……まぁ、女性を複数侍らせるのなら……締めるところは締めれる男でないとダメだろ？」
とりあえず、まぁ納得してくれたようで何よりだ。
さて、気分も切り替わったところだし……よし。
こうなればこれはあれだ。俺からちょっと引っ張るとしようか。
「少し落ち着いた方が良さそうだし、俺から提案があるんだけどさ？」
そういいながら、俺は親指である施設を示す。
そこにあるのはちょっとした観覧車。
「海外はともかく、日本じゃデートで観覧車ってのはある種の定番なんだ。……ついでに色々お互いのことを教え合わないか？」
まだまだ俺達はお互いのことが分かってない。責任を取るのは確定だが、相互理解はその為にも必須だろう。
だからこそ、デートの定番も使って進めたいって感じではある。
感じではあるんだけど、良いでしょうか？
「……あ、割とちょっと緊張してきた」
「ガッツがあるのかないのかどっちだよ」
半目で呆れられた。くそ、反論しづらい。
なんで俺はこういう時に限って急にチキンになる。もうちょっとこぅ……バシっと決めろよ。
自分でも凹みたくなっていると、ベルナはなんていうか苦笑した。
そんでもって、少し離れてから俺の左腕に抱き着いた。
あ、これってもしかしてオーケーですかマジですかそうですよねそうであってくださいな！
「ま、ちょうどいいか。お互い色々知っていこうぜ？」
いよっしオーケーだったぁ！
俺は思わず右腕でガッツポーズ！
良かった。本当に良かった。

はずれでなかった。解決できた。とりあえず一歩進展！
「……そんなに嬉しかったか？」
「もちろんだ！」
顔を真っ直ぐにベルナに向けて、俺は勢いよく頷いた。
うん。まずは一歩前進だ。これでいい。
これから少しずつ、知っていけばいいとも。

……ちなみに夕食はガチの日本食を経験したいとのことで、熟考の末に焼き鳥にした。塩やらタレやらで色々とやりようがあるしな。
ちなみに割と高評価でした。今度七輪を買って自分でも試してみよう。

銀愛賛歌編　第四話　バランス型と特化型のどっちがいいかは状況次第

和地Ｓｉｄｅ

なんというか、デート乱舞となっている気がしないでもない。
最初のカズヒねぇとデートして、次はベルナとデートした。ここまでくれば当然だが、全員とデートするべきだろうと常々思う。
そしてある意味、フィジカル的に最もハードになるだろう今回のデート。
そう―
「カズ君カズ君。さぁ、お姉さんのビキニアーマーに酔いしれなさい！」
―リヴァ先生だ！
いきなり秋葉原のコスプレショップに連れていかれ、こうしてファッションショーを見せられている！
「……なんだあの外国人美女は！」
「ノリノリでエッチな格好をするお姉さんは、ＡＶ業界以外にも実在した……っ」
「誰だあの彼氏は……妬ましい……っ」
既に周囲の殺気が怖い！　例え戦車が小隊規模で来ても余裕で返り討ちにできる自信はあるが、それでも倒されるかもしれない気迫を感じる！
「ふふぅん。次はメイド服で行くわよ？　なんちゃってなメイドカフェ風も、ガチのクラシックメイド風も任せなさい！　ヴァルキリーになれているお姉さんは、すなわち女戦士にもウェイトレスにも情婦

の類にも理解がある神話におけるヴァルキリーとは、エインヘリヤル相手に給仕や夜伽もするらしいのだー！」
「この流れでそれは俺の死亡フラグ！」
殺意のオーラが五割増しぐらいになってますがな！
うぉおおお！　誰かぁあああ！　助けてくれぇえええ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そんな午前のある日のこと、リアスはちょっとしたお茶会を開いていた。
「……これが日本の抹茶ですか。苦いですけど、良い風味があると思います」
「以外ね。あなたぐらいの年だと抹茶は無理があるかと思ったけれど」
「ふふ。グレモリーの一族は日本好きが多いもの。ミリキャスにも素質はあると思っているわ」
そう、カズヒやミリキャスまで交え、紅茶ではなく抹茶を愉しんでいる。
とはいえ正式な茶会ではないので、抹茶を呑みながら和菓子を食べる程度である。
カズヒも羊羹を口に運びながら、気分を切り替えるように抹茶を一口飲んでいる。
「まぁそれはそれとして、私がお邪魔して良かったんですか？　このメンツとしては場違いな気もしますけど」
「気にしなくていいわ。交流も兼ねて数人ずつ呼ぶつもりなの。……アザゼルはやめておくつもりだけれどね」

リアスが懸念するだけのことはあるだろう。
兄であるサーゼクスも悪乗りする時はあり、またアザゼルと波長を合わせる時もある。
だがレベル６０に慣れているからレベル１００も大丈夫というのはあれだろう。
懸念はまったくもって同意なカズヒも、静かに頷いていた。
だがしかし、理由はそれだけではない。
「あと、ミリキャスは貴女と話したかったみたいだからね。あなた、あまり幼い子と話したがらないじゃない？」
実際問題、避けるというほどではないが積極的に関与しようとはしていない。
カズヒは自分に対する評価が低いし、前世を知っているなら真っ当な子供に積極的に関りたがらないところがあるのは仕方がない。
とはいえ、リアスとしてはミリキャスに関しては心配は不要だと思っている。身内びいきだとは思うが、この甥はそういう方面なら太鼓判が押せる出来のいい甥だ。
ならば甥を信じて誘うのが、姉同然の親戚として当然だろう。叔母と呼ぶ者には制裁あるのみ。
「ほら、ミリキャス。色々と聞きたいこともあったのでしょう？　いい機会だから聞いてみなさい」
「はい！　……カズヒさんは戦い方について色々詳しいと、先日のことからも感じました」
「あの時の？　まぁ、腐ってもそれなりに戦闘経験もあるし、訓練を受けたことも訓練を受けた他人も見たこともあるものね」
ゲリラとはいえ、元軍事教官を迎え入れての訓練なども受けたことがある。
その手の訓練は基本的に、マンツーマンでは行われない。少なくとも数人単位で、同時に数十人単位で行うことも多かった。
戦いは数だ。一定以上の質さえ用意できるのなら、後は数が多い方が基本的に有利。近年は精鋭による点の制圧も重要だが、和による面制圧は基本にして上道でもある。

なので個人の才覚や得意不得意にも理解はある。そもそも彼女は基本として、できないことや挫折することが普通であると理解しているから尚更だ。
リアスにしろサーゼクスにしろミリキャスにしろ、才能があるうえに努力を積み重ねられるのなら基本的に成長する。基本的に最も成功しやすいのは勤勉な天才だ。
その観点において、リアスもミリキャスも将来的な成長は確実に見込める部類だ。
だが、それはすなわちそれらが稀少であることの証明でもある。
「大抵の凡人にとって努力ってのは大変よ。1の努力で得られる対価に大きな個人差があるなんて珍しくもないし、努力したから満足できる結果が得られるわけでもない。そもそも大半の凡人にとって、努力するという行為そのものがまず負担が大きくてやりたがらないしね」
バッサリと現実を言ったうえで、カズヒは苦笑しながらリアスやミリキャスを見る。
血統での才覚の差が大きく、寿命が長いゆえに経験で出来る事も増える。
そんな悪魔にとって、自主鍛錬を欠かさず行うというのは尚更広まり難いことではあるだろう。
そんな種族で自主鍛錬を当たり前のように詰めることは、別の意味で立派な才覚だ。
だからこそ、立派であることは自覚しなければならない。
「あなた達は当たり前のようにやっているから忘れがちだけど、今後多くの人々と嫌でも関わるのだから気を付けなさいね。人々っていうのは、結構な割合で凡俗や悪党がいるんだから」
そんなカズヒの言い分に、ミリキャスは真摯な表情を浮かべて頷いた。
「……はい。心に留めておきます」
ミリキャスが知っているカズヒの情報は、さほど多くはない。
彼の年頃で知らせていいとは思えない事情も数多い。リアスもそれは知っているし、カズヒ自身自覚しているから詳しくは語っていな

い。
その上で、事情を薄っすらと悟ったうえで真摯に受け止めることができる。
彼が立派であることを、リアスは再確認しカズヒも納得した。
「……さて、とはいえ例ぐらいは教えた方がいいかしらね。……自慢じゃないけど、スラムのストリートチルドレンで内戦を少年兵として生き抜いた教会暗部が私だもの。その手のケースは経験豊富よ？」
「……あまり重いのは語っては駄目よ？　ディオドラよりましな部類にとどめておいて」
うっかりすると戦術核レベルの爆弾を語りかねないので。リアスは心を引き締めた。

和地Ｓｉｄｅ

「ん～！　健康にも配慮する兵藤邸では中々食べれない、栄養バランスを無視しまくったカロリー爆弾！　マカロニ＆チーズホームアローンとかで出てくるチーズクリームを茹でたマカロニにぶかっけた奴。一から作ると割と大変だが、アメリカではレトルトが大量にあるそうです！　う～ん、アメリカン！」
「……野菜は全部スムージーで済ませる辺り、健康に気にしつつ大雑把に解決してるよなぁ」
お昼にアメリカの代表的料理であるマカロニ＆チーズを選んだリヴァ先生に、俺は苦笑をしながらシーザーサラダをサイドメニューにシカゴ風ピザピザ生地が器みたいになっているアメリカのピザ形式。一度作りたいを食べている。

よもやアメリカンな料理専門店をサーチして突入するとは思わなかった。しかも問答無用でカードを出して奢ってきたので、男の沽券を発揮する余裕もない。
糞ったれ！　ヨーロッパの出身だし、キッシュ器じみた記事に様々な具を入れた卵液を入れた料理。筆者はパイ生地が無かったのでパンの耳などで代用したけど美味かったですの専門店とかリサーチしてたのに！
「せめて……せめて割り勘がよかった……っ」
正直少し凹むぞ。
「はいはい、年下なんだから先生相手に見栄はらないの。あと半分残っているんだから、年上にぐらい甘えなさい」
その辺りも見切っているのか。
敵わないところは本当に敵わないなぁ。
……いや、ちょっと待て。
「前世とか込みなら俺って年上が主体なんだけど。あと春菜は誕生日が俺より先……あとベルナも先だった」
鶴羽は奇跡的に俺の後だけど、そもそも前世があるからなぁ。自分でも分かりようがないカズヒねぇ現世年来のみ。前世は流石に覚えてるよ？込みで、俺は事実上の最年少だ。
鶴羽がかつて俺に対していったおばんキラーの呼称は、ぶっちゃけ当たっているというほかない……っ
「……妙なところで共通点があったのね」
流石にリヴァ先生も、これにはちょっとびっくりだったらしい。
だがしかし、そこで止まるリヴァ先生の分けがない。
「なら私が可愛い燕を囲ってあげる！　さぁ、追加注文もオッケーよ！」
「なくていいから！　流石にちょっとは健康に気を遣わせてくれ！」
というか、此処で腹をパンパンにすると絶対後半戦についていけなくなるからさぁ！

イッセーＳｉｄｅ

「……やっぱりちょっと様子を見に行きたいわね」
「我慢しとけよ」
そわそわしまくりな南空さんに、俺はちょっとマジで止めた。
いや、あの人属性的にアザゼル先生だからちょっと不安だけどさ。セーフラインとかは本人なりに見極めてるから大丈夫だろ。
先生はその辺があれだからな。ノリで実験して暴発と鎌であるから、事態がシャレにならない時がまじである。
……俺のドッペルゲンガー３００人ＵＦＯ案件はやってみたかった。……変態を上手く絡ませたアイディアが湧かなかったんや……っはマジであれだった。……後でリーネスを拝んでおこう。
「でもリヴァよ？　何かやらかしそうというか振り回い層というかぁ」
「確かに気持ちは分かるけど、九成なら目に余るようならしっかり止めるだろ？」
俺はそこまで言って、ふと気づいた。
「……リヴァさんがチキンレースする可能性はあるかも」
「でしょ？」
あの人そういうことしそうだよなぁ。アザゼル先生にキャラが近いし。
……いや、此処は我慢しないと！
「気合入れて止めないと駄目だ！　我慢するんだ南空さん！」
「……うぅ、和地が変な方向でマダムキラーになったらどうしよう……っ」
いや、心配なのは分かるけどその辺にしとこうぜ？

……頑張れ、九成！

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで振り回された。
コスプレショップでファッションショーをしたと思ったら、今度はノリで地下アイドルのコンサートに入ってきた。
いや、割と楽しめた。楽しめたけど、リヴァ先生オタ芸するなや。むしろこれ、オタ芸がしたいから適当に選んだけじゃないだろうな？
ちなみに結構気に入ったのか、「絶対お父様はこういうの愉しむ」としてＣＤを買って郵送していた。
あとこじらせてやばいことしそうなファンには回し蹴りを叩き込んで気づかれることなく鎮圧し、呪詛をかけて救急車を呼ぶという大活躍。ちなみに女神パワーフルスロットルで秋葉原から遠く離れたところで呼んでおいた。呪詛により毎週この日の曜日は「二度とするな」とエンドレスで聞く悪夢から始まる仕様らしく、それどころじゃなくなるだろうとのこと。
女神の本気、怖い。
その後は同人誌とかも売っている某オタク向けショップに行き、内容は割とマジな部分もある萌え女子化資料集あれ今でも売られてるんだろうか？　昔数冊買った知識は結構役に立ったけどの北欧神話版を三冊買っていた。ネタで兵藤邸のリビングにも置いて、ついでにアースガルズにもネタで送るらしい。
オーディン神とかはめっちゃ笑いながら読みそうだとは思う。
正直ちょっと疲れたけど、まぁ色々考えたり気を遣ったりしなかっ

たのは気楽だったな。
で、晩御飯だけど―
「……牛皿、漬物、そして豚汁。これを肴にビール二杯目いっきます牛皿って酒飲み層がターゲットらしい。試しに注文したけど割とイケた！」
「飲みすぎて吐かないでくれよ、リヴァ先生」
―まさか牛丼系チェーン店とは思わなかった。
というか、牛皿って存在意義がちょっと分からなかったけど「ご飯不要」のニーズだったんだな。確かに酒のつまみに白米は嫌って人、多そうだな。
そんなことを思いながら、俺はサラダと唐揚げをセットにしてカレーライスを食べたりしている。
いやしかし、疲れたけど気楽ではあったかもな。
リアルタイプで振り回されっぱなしだけど、だからこそ色々気を使っている余裕はなかった。あとバカ騒ぎオンリーな気もするし。
……もしかして、リヴァ先生ってこれが狙いか？
「……ふふぅん？　他のみんなはカズ君に頼っちゃうことも多いでしょうけど、先生は年季の差でカズ君に頼られる女性を目指すのだー♪」
察した途端に自分で言ったよ。
こういうところはいいのか悪いのか。いやまぁ、深く考えなくていいのはある意味でいいことか。
……いやまぁ、ちょっと肩の力は抜けたかな。
この後もデート乱舞は続くからな。というか、まだ半分だし。
インガ姉ちゃんに、春っちに、鶴羽。
インガ姉ちゃんも春っちも重い物を背負っているし、鶴羽は鶴羽で最近はカズヒに気を使いっぱなしな気もする。
そういう意味ではかなり重いな。ここで肩の力を抜いてデートできたのは良かったかもな。
まったく、こういう時に年上なところを見せてくるから、この人には敵わない。

「……ありがとうな、リヴァ先生」
「ふっふっふ。もっと褒めて参考にしなさい。メンタル健康と長生き両立の秘訣は、はっちゃけることに慣れることよ」
それすっごい納得だよなぁ。
そんなことを思っていると、リヴァ先生の笑顔の質が変わった気がする。
なんというか、被保護者を慈しむ保護者のそれだ。
……いや、ちょっと真剣に見惚れる。
「頑張りなさい、私の愛しい教え子君。周りを見てるからこそ言えるけど、女を侍らす男には、色々なものが必要なんだから」
その言葉にも実感籠っているから、ほんと敵わない。
「私はみんなほど背負いきれない重さかないから、カズくんを気楽にするポジション独占。だ・か・ら―」
そう言いながら、気づいた時には俺は頬にキスされていた。
少し離れたリヴァ先生の笑顔が赤いのは、アルコールだけの所為じゃない。
「―先生には頼らせるより頼っちゃいなさい？　独占ポジションゲットでｗｉｎｗｉｎだしね♪」
……そのウインク、ずるいってもう。

銀愛賛歌編　五話　温泉とジャグジーは全く違うよね？

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで、デートもいい加減折り返し地点だ。ここからも男として頑張らないといけないだろう。モテる男、頑張れ！
そんな感じで今日はインガ姉ちゃんのターンだ。
そしてそのデートなんだけど―
「……ぷはっ！　ほら、取れたよ？」
「ありがとうお姉ちゃんっ」
そんな感じで小さな女の子と、女の子が落として半分流されてた髪飾りをとってきたインガ姉ちゃんは、どっちも水着だ。
ついでに言えば俺も水着だ。周りの人も全員水着だ。
……そう、俺達は屋内温水プールに来ている！
実はインガ姉ちゃんは水遊び全般が趣味であり、フェンシングと並ぶ特技が潜水だ。たぶん海女さんとかで食っていけると思う。
そんなインガ姉ちゃんたっての要望であり、水着もレンタルなので問題なくレッツゴーだった。そして一通りの温水プールを愉しんだ後、流れるプールで子供が髪飾りを落として泣いていた時、速やかにインガ姉ちゃんは動いたわけだ。
あとついでに迷子になっている。流れるプールでちょっと親御さんが目を離した隙に、勢いよく泳いで行ってしまったようだ。
なので迷子センターに連れて行って、俺達はデートを続行する。
……帰る前に一応覗いておこう。しかるべき場所に預けたとはいえ、万が一の可能性がある気もするしな。

ガチの命がけで何とかしている者として、責任感はしっかり持って行動しなければ。
そんな風に俺が気合を入れ直していると、インガ姉ちゃんはクスリと笑っていた。
「……あれ、俺何かしたか？」
「ううん。ただ、あの時のちっちゃな男の子が、ずっと前から言ってたことをずっと続けてきたんだなぁって思ってたら……ほっこりしたっていうか感心したっていうかね」
むぅ、ちょっと照れるな。
顔が赤くなっている自覚がある。これ、ちょっとどうしたものか。
……いやまぁ、褒められているようなものだよな！
よし、頑張る！
「なら、涙の意味を変える男らしく、泣いてた女の子に嬉し泣きさせるようなデートをしますかね？」
「……ふふっ。だったら今日だけは私が独占だよね？」
よし、このままデートで勢いよく進むとするか！

アザゼルＳｉｄｅ

まぁ、旧魔王派のシャルバは死んで、英雄派の曹操達も壊滅的打撃を受けたわけだ。
ちょっとは平和を満喫できるだろうし、俺も総督を引退したから趣味に走るかね……と思ったんだがな。
「で、先生？　変な実験とかしてませんよね？」
「なんでお前が見に来るんだ」

一番見に来られると困る女が出てきやがった。
自分が正論で人を殴るのではなく、正論が人を殴る時に自分を使わせる女。悪祓銀弾（シルバーレット）ことカズヒ・シチャースチエ。
正義に味方する必要悪を自認するこいつは、ある意味悪の堕天使である俺の天敵だ。
しかも俺の実験室に来るとか、何を考えている!?
「心配しなくても、馬鹿なことをしてないのなら私は有害ではないですよ。ほら、差し入れも買ってきましたから」
お、駅前のあんまんだな。
コンビニじゃなくてマジの菓子屋から買ってくるとか、心構えは立派だが金は大丈夫かよ？
「学生が無駄遣いしていいのかぁ？」
「組織の金を私用で使うよりはましです。それに一応ハードな職場ですから、お給金はしっかり貰ってますからね」
そう言いながら、ペットボトルのウーロン茶に紙コップまで出して、カズヒは隣に座り込んだ。
「……ちょっと気になるところがあったので、いっそのことトップの時期に関わっていただろう先生に質問があるんですよ」
「なんだぁ？　ミカエルに怒られそうなことは今のところしてねえぞ？」
俺は割とマジな返答をしたんだが、カズヒの奴は真剣な表情で俺の目を見つめてきた。
……割とマジな目だな。
「組織全体としては、公式に転生システムを採用しないそうですね。良かったんですか？」
「サーゼクスにも似たようなことを聞かれたが、良いんだよ。これは幹部全体の意見でな」
ま、意外っちゃ意外かもな。
三大勢力はどこもかしこも、かつての大戦で減った数が回復しきってねえ。
だからこそ悪魔は転生システムを作り上げたわけだ。で、和平を機

に天界もそれを採用し始めている。
なら元々もあって数が一番少ない、俺達堕天使こそ必要だと思う奴はいるだろう。カズヒもその辺疑問に思ったわけか。
だがまぁ、これは本当に大した理由はねえよ。
「言っとくが、堕天使(俺達)は基本的に堕落した天使だぜ？　天使の連中が転生のも含めて堕ちるなら大歓迎だし、子供を越させるのも止めやしねえ。だが転生システムなんてものを作ってまで、堕天使を増やす必要はねえだろうよ。和平も結ばれたしな」
そう言いながらあんまんを食べると、同じように食べていたカズヒが呑み込んでから感心している目を向けてきた。
ぶっちゃけるが、普段の俺を見て感心してほしいな。適度に力を抜いて評価の高い授業をし、生徒からの人気も高いんだぜ？
「……妙なところで賢者みたいなことしますね」
酷い評価だ。
俺は年季が長いし堕天使だから、遊び所を弁えているだけだぜ？
ま、その辺がロスヴァイセとかも不満らしいがな。半世紀ぐらい生きてりゃ、あいつ等だってその辺は……できんかもしれん。こいつらマジで遊びがないところあるし。
リヴァの奴が「長命種ははっちゃけ慣れてないと老害になる」とか言ってたが、めっちゃ納得できる。ハーデスの爺とかまさにその典型だろ。あとロキも。
……ま、カズヒは大丈夫か。
「お前は転生したら絶対に和地たちとつるんでろよ？　あいつらが適度に肩の力を抜かせてくれるだろ」
俺が茶化すように言うと、カズヒの奴はちょっと目を丸くしていた。
あと微妙に警戒してるように、数センチほど下がっている。
まったく。俺が気づいてないとでも思ってたのかねぇ？
「……リーネスの独自研究、気づいてたんですか？」
「上(こっち)の決定を気にして一旦中断してることもな。ま、大量生産とかしない範囲なら技術研究と試験運用って名目で許してやるさ。転生堕

天使技術もな」
リーネスの奴が独自にその辺を研究していたことは気づいていた。
三大勢力に限定すれば堕天使が最も欠点が少ないのは事実だ。更にリーネスが堕天使として生まれた以上、カズヒ達が人間として生まれていれば同じ時間を生きることはまずない。
合理性と個人的な理由の二つから、あいつは昔からそういったレポートに興味を持っていた。リアス絡みのコネを使って、ちょっと悪魔の駒を手に触れて確認してることも知っている。
それにまぁ、和地やカズヒの件もあるしな。
リヴァは半神。ベルナは悪魔の先祖返り。インガと春菜は転生悪魔。
となればまぁ、そういったことも尚更気にするだろう。
「引っ張り上げたんなら責任取りな。長生きするのも一つの取り方だしよ」
俺はそう言うと、リーネスに直接渡すつもりだった物をカズヒに押し付ける。
「……これ、悪魔の駒……いえ、その原料ですか？」
「サーゼクスに頼んでアジュカの奴から流してもらったやつだ。組織の技術研究目的だし、ミカエルにも断ってるから問題ねえよ」
ま、これぐらいの融通を利かせる程度の成果は上げてるしな。
俺は思わずきょとんとしている珍しいカズヒの表情を肴に、飲み干したウーロン茶の紙コップにウイスキーと氷を入れながら一杯ひっかけることにする。
「……礼があるなら、今度一杯付き合えよ。お前の年でも酒が飲める国なんていくらでもあるし、ちょっとひっかけにな？」
「……考えておきますよ。これの異形の特権ですかね？」
よっし言質とったからな！

イッセーＳｉｄｅ

「ふぃ～」
「ふぅ～」
俺とシャルロットは、足湯に体を震わせた。
ちょっとずつ寒くなってきている季節。足のあったかさと体の涼しさが、なんかいい気分にさせてくれる。
兵藤邸はお風呂が充実してるから、シャルロットも風呂にはだいぶ慣れている。
ただ、足湯……それも温泉は初めてだろうからちょっとどぎまぎしてたけど―
「―これはこれでいいですね。なんというか、足だけがあったかいのが新鮮です」
―ご満悦みたいで何よりです！
そう、今俺達はデートの真っ最中。
リアスとデートすることになったり、九成が連続デートしたりとかで、こんな感じで俺もデートを連発している。
……彼女いない歴＝年齢の、もてない男だった俺が、ついに連続デートなんて大変な幸福を味わせるなんてなぁ。
しかも近場に温泉があり、無料で楽しめる足湯があるなんてラッキーだ。温泉饅頭とかお土産とかに金を少しだけ使ったけど安上がりだ。
いや、こういうデートもなんていうか……いいね！
「あ～。最近本当にバトルとか多いし、体が一度なくなってるからなんていうか……癒される～」
「そうですね～。私もあの時、究極（テロス・カルマ）の羯磨を全力で使い続けていたので、正直疲れてましたから」
なんだよな～。

……俺とシャルロットの星辰光は、ヒマリやヒツギの星辰光と同じで、二人一組で発動しないと使用することがまずできない。
これはリーネスが色々調べたところによると、「一人が二人となって星辰光を使用している」状態になっているから生まれたバグだそうだ。
前世が同じ道間乙女だったヒツギやヒマリはまさにそれ。俺とシャルロットの場合も、シャルロットが俺を依り代としたサーヴァントであることから俺の異能としてカウントされたんじゃないかって話だ。
反面、その結果のバグとして、本来あり得ないレベルの一点特化型星辰光になっている。
ヒツギとヒマリの場合は付属性、俺とシャルロットの場合は拡散性が、それぞれ計測不能。
俺とシャルロットの場合、サーヴァントとしてのパスの繋がりもあったことで産まれたバグって推測されている。なので、パスの繋がりを持続していれば地球の裏側に相手がいても、別の世界にいても発動できる。
ヒツギとヒマリの場合は付属性が天元突破であり、リーネス曰く「理論上はフュージョンできる」らしい。ただその場合、記憶とかの状態がどうなるかが微妙に分からないらしい。
……俺としては、今の使い方で良かったと思う。
ヒマリとヒツギはヒマリとヒツギだ。前世は道間乙女であっても、今更道間乙女に戻ってほしいとは思わない。
これも俺の我儘だけど、つまり俺がそんなことさせる必要がないぐらい頑張ればいいだけだしな。
俺はそんなことを思いながら、缶コーヒーをちょっとすする。
シャルロットも缶のミルクティーを一口飲んで、ほっと息をついた。
「ふぅ～」
あ、こんな空気もなんかいいかも！

和地Ｓｉｄｅ

でかいプール施設なだけあり、カフェコーナーなどもあったのでそこを昼食ですます。
そしてサウナでゆっくり体を温めながら、俺達はほっこり休憩タイム。
そして午後もプールやジャグジーを愉しんで、そして今は夕暮時。
そろそろ夕食をどうするかも考えるべきだろうが、さてどうしたものか。
インガ姉ちゃんはビーフシチューが好きだったからな。やはり洋食店を狙うべきか。
ガチ目で色々考えるべきだな。気合を入れて動かないと―
「……」
―ふと、インガ姉ちゃんの横顔を見て、思考が止まった。
楽しんでいたと思う。愛されていると思う。
ただ、ふと何かを思い出したかのようなその表情は悲しげだった。
「インガ姉ちゃん」
俺は、そっとインガ姉ちゃんの手を取った。
何もかもを常に言い合うとかは無理だろう。愛する者同士とはいえ、プライベートという概念ぐらいはいるはずだ。
だけど、何か思いつめることがあるなら相談してほしい。
解決策が出るとは限らない。だけど、型を借りれるだけでも何かが救われることもある。
俺は、インガ姉ちゃんにとってそういうことができる相手でありたいと願っている。
「……あ、ごめんね？　心配かけたかな」

苦笑いを浮かべながら、インガ姉ちゃんは空を見上げる。
「なんていうか、ふと思ったんだよ。……私は、弱いなって」
「そんなことないだろ。グレモリー眷属は比較対象が悪いぞ？」
冗談抜きであれは比較対象が悪い。インガ姉ちゃん、普通にプロの上級悪魔が率いる眷属にも通用するからな？
あの伝説級にすら通用する猛者たちは、比較対象にしてはいけません。俺も大概肩を並べているけど、自分で言うことじゃないが遠くで褒め称えたりするような奴らですからね？
ただ、インガ姉ちゃんは頷いてから首を横に振った。
「性能というより精神だよ。……今日は、両親のところに行くいい機会だったのにさ」
ああ、そういうことか。
インガ姉ちゃんは、両親から絶縁一歩手前だ。
それだけの事態に関与しているし、しかもそのあと転生悪魔という形で行方知れずになっているようなものだ。
それを自らどうにかしたいと願いながら、積極的に動けない。
それは、きっと弱さと言われても仕方がない。
だけど……だ。
「……カズヒ姉さんも俺も、弱いことそのものを罪にはしたくないと思ってる」
それは、はっきり伝えておく。
嘆きの涙を流すのは、大抵流させる奴より弱い奴だ。
カズヒ姉さんも、道間日美子はそうだった。
その涙をどうにかしたいと、幼心に思った俺が、弱さそのものを罪とはしたくない。
邪悪から尊ばれるべき弱者を守るカズヒ姉さんも、敵より弱いがゆえに泣いてしまう者を救いたい俺も、弱者に寄り添うことこそが理想なんだ。
少なくとも、それを投げ捨てたいとは思わない。
だからこそ、俺はインガ姉ちゃん手を両手で包み込む。
「……次、機会があったら一緒に行こう。俺だけじゃ頼りないなら、カ

ズヒ姉さんも連れて行こう。いや、リヴァ先生達も巻き込むか」
いっそのこと、リアス部長達に契約として補佐をしてもらうのもありかもな。
色々大事になりそうではあるからなぁ。カズヒ姉さんとかリアス部長が間に入った方が、ゴタゴタとかはないかもしれない。
いや、こういう時こそ年の功。アザゼル先生を引き連れるのもありかもな。
「和地君、絶対凄い大事にしそうなこと考えてるね？」
インガ姉ちゃんはちょっとツッコミを入れてから、少しだけ肩の力を緩めてくれた。
……確かに、インガ姉ちゃんは俺の周りの女性で、一番弱いだろう。
戦力と精神、その両方のつり合いならば、間違いなく一番弱い。それは事実というしかないだろう。
だけどさ、俺は言えることがある。
「俺はインガ姉ちゃんが好きだ。弱いとこもあるだろうけど、それを踏まえたうえでインガ姉ちゃんが好きだ」
そう、そこだけは間違いなく言える。
俺は強い弱いだけで、好きか嫌いかを決めたくない。愛する女性をそんな数値だけで決めたくない。
俺はカズヒ姉さんを強いだけで好きになったんじゃない。俺はインガ姉ちゃんが弱いだけで嫌いになったりしない。
だから、はっきりと断言できる。
「何かあったら俺もだけど、周りのみんなも頼ってくれ。報告、連絡、相談をしっかりしてからなら、そうそう嫌な顔はしないはずだよ」
俺以外にも、インガ姉ちゃんを好きな人はいっぱいいるからさ。
そんな俺の気持ちが届いたのか、インガ姉ちゃんはほっとした表情で、俺の手を握り締めてくれる。
「……うん、大丈夫。信じるよ」
そんな風に、俺とインガ姉ちゃんは微笑み合い―
「……おいおい、あれがバカップルって奴か？」
「やっべ。現実で初めて見たな」

「彼氏さんも彼女さんも綺麗で似合ってるぅ～。ちょっと羨ましいかも？」
―周りの視線が集まりまくっている!?
「え、あ、その……お目汚し失礼しましたぁ！」
「う、うわわわわ!?　和地君ストップ!?」
思わず、俺はインガ姉ちゃんを抱きかかえると全力ダッシュで離脱する。
あ、これ俺の初お姫様抱っこかも!?
「インガ姉ちゃんは自慢していいぜ!?　これするの初めてだし！」
「この流れだと自慢できないって！」
ごもっともです。

……よっぽど恥ずかしかったのか、帰りに寄った洋食店で高いワインまで開けられました。
時折周囲の視線を忘れるのは、俺の悪い癖だな、うん。反省して次に生かさないと！

たぶん無理な気がするのは、自分でもどうなんだろうかなぁ？

銀愛賛歌編　第六話　親御さんへの挨拶は、大体最大級の試練である

和地Ｓｉｄｅ

少し肌寒くなる季節。そんな秋の風を感じながら、俺は二人でちょっと田舎に近い道を歩いていく。

「……雰囲気的にはいいんだろうけど、生活環境は便利なんだろうか」

「大丈夫でしょ。コンビニもあるし、ショッピングモールもちょっと離れたところにあるもの。魔王様達には感謝しないとね」

そう答えるのは春っちこと、成田春菜。

インガ姉ちゃんやベルナの時もそうだが、普段懲罰メイドで動いているメンバーも必要最低限の私服や、身内の冠婚葬祭用の服は用意されている。

……いい機会だし、ここで兵藤邸の懲罰メイド達がどういう生活をしているか軽く説明しよう。

基本的にメイド達の生活スペースは地下にある。

一人一人の就寝などを使う個人用スペースは三畳レベル。更に談話スペースやシャワーブース、私的な食事をする為の共用キッチンなどが存在する。

懲罰業務なので極めて安いが、一応自給数百円レベルで生活費は与えられています。その上で三食きちんと用意されているし、兵藤邸の住人達が差し入れをすることもままある。

俺は春っちにもインガ姉ちゃんにもベルナにも差し入れをしている。その上で他の子にもちょくちょく差し入れしている。

……まぁ、兵藤邸に住んでいるメンバーの多くが家事を手伝うこと

から、「それはメイドの業務？」と言いたくなるような仕事もしているようだが。
朝早くのボランティア活動なども交代で参加しているらしい。
まぁ、それはともかくだ。
たぶんを通り越して間違いなく、このデート乱舞で一番遠くに来ている。
そして俺達が歩いていると、ふと近くを通りがかった人が一礼する。
「九成和地様と、成田春菜様ですね？　主達を経由する形で、リアス様から言付かっております」
彼は転生悪魔だ。いまだ下級悪魔だが、この街にいる転生悪魔は仕事ぶりの真面目さが評価されている。
数人の上級悪魔が眷属と共に住み、最上級悪魔が眷属ごとおり、更にそれ以外の人間側の戦力も雇い入れているこの街は、一種のセーフハウスだ。
米国とかにある証人保護プログラム的な者と言ってもいい、安全を確保するべき者を守る為に土地ごと管理している警護地帯。
そこで、拳を握り締めながら春っちは彼に向き直った。
「……それで、父と母は――」
「――こちらです。安全確保の為、料亭での会合となりますがご了承ください」
それに頷いて、俺達は彼についていく。
……ここは、現魔王政権に関わる人間が多く住む町。
更に言えば、安全確保の為に保護するべき人物達が住む、警護の為の街だ。
今この街には、春っちの両親が住んでいる。

イッセーＳｉｄｅ

なんていうか、今ふと九成達のことを考えてたな。
今日の九成は春菜とのデートだ。ただ、デートと言っても今までとは毛色が違う感じだからな。
……いや、今はそこを考えない方がいいか。
俺はすぐに考え直すと、俺の方に振り返ろうとしていたヒツギの方を向いた。
「悪いな、ちょっと考えごとしてた」
「……あ～。ちょっと何考えてたか分かるかも」
ヒツギも苦笑すると、なんとなく空の方を見上げる。
「和地のことは私もちょっと気になるしね。だからまぁ、似たような感じでしょ？」
「やっぱりそうなるよなぁ」
……ぶっちゃけよう。今俺は、ヒツギとデートしている。
九成が連続デートしているし、リアスとデートすることが決まってるしで、当然だけど俺もアーシア達と連続デートすることになった。
で、今日はヒツギの番ってわけだ。
まぁ、俺の財布とかに気を使ってくれたのか、都心とかじゃなくて比較的近くにあった温泉とか博物館がある施設にしてくれたんだけどさ。
博物館デートもある意味定番だな。ぶっちゃけ俺、おっぱいドラゴンの興行収入とかはグレイフィアさんが色々懸念して管理しているようなもんだし、金はあまり使えない。そういう意味だと金のかからないデートは真剣に考えないとな。
いや、グレイフィアさんなら理由がきちんとあれば出してくれそうだけど。ただあの人は真面目だから、「学生の範囲内にするべきです」って感じで沢山は出してくれないだろうしさ。

そんなわけで、俺達はちょっと休憩で喫茶店で紅茶とか飲んでいたわけで。そしたらふと気になったって感じだな。
「やっぱりちょっと気になるんだよなぁ」
「確かにね。仲間だし、それに私に至っては……ねぇ？」
まぁ、前世の息子だしなぁ。
ヒツギはヒツギで道間乙女は道間乙女だと思うけど、それでもちょっとは記憶とか感情とかも受け継いでるわけだし。そこを考えると気になるよなぁ。
……いや、イカンイカン！
それでデートを楽しめなかったなんてことになったら、きっと九成も気にするだろう。
ここはしっかり楽しまねえと！　何よりデート相手の女の子を沈ませていいわけがない！
よし、気合入れ直すか。
「……ヒツギ、こうなったらどっちに転んでもいいように頑張ろうぜ？」
「……へ？　どんな感じに？」
ヒツギに言われて、俺はその辺考えてなかったのでちょっとつまる。
あ、勢い任せ過ぎたか。
いや、此処はしっかり考えろ。そうだ、良いことを思いついたぞ！
「お、お土産乱舞で祝勝会でもやけ食いでも問題ないようにしようぜ？　ほら、此処ご当地お菓子とかあるみたいだし」
昔は隅の原産地で今でもちょっとやってるとかで、炭火焼せんべいとかそんな感じのが結構あったりするしな。
いっぱいかってみんなで食べよう！　それならどっちに転んでも問題なし！
「あ、確かに。せんべいとかはみんな食べてるし、よっぽど変な味じゃなければ問題は無しっぽいかな？」
ヒツギもそっちの方向で考え始めてくれて、俺はちょっと安心した。

……こっちはこっちでデートを頑張る。だからお前も頑張れよ、九成？

和地Ｓｉｄｅ

「「「……」」」

沈黙が痛いが、何を言えばいいのか。

料亭で春っちの両親と合流したけど、何を言えばいいのかさっぱりわからん。

それは誰もが同じなのか、どうしても何も言える状態ではなかった。

……一応ある程度は把握しているが、ヴィールの転生悪魔になった春っちは、ちゃんと両親に事情込みで説明したらしい。

実の娘が強姦されるは、そのあと助けに入った奴が悪魔だわ、更に娘が人間を辞めるわと、親御さんが困惑するのは当然だろう。

しかも納得して動いたら動いたで、今度は政府に対して討伐されること前提のクーデターを敢行したんだから、精神的に負担が大きいのは仕方がない。

ただし、ヴィールはその辺をしっかり考慮していた。

春っちの家族はきちんと保護し、丁重……を通り越してかなり優遇な待遇で保護していた。これはまぁ、春っちをどうにかする為の人質作戦を防ぐ為だ。断じて春っちに対する人質ではない。

その証拠に、春っちがこっち側についた時は丁重に魔王様のところに送り届けている。むしろ美食を提供されたうえ、春っち絡みでストレスが溜まっていたのか４キロぐらい食べ過ぎで太っていたとのこ

と。
ついでに言うと当座の生活を支援する為の支援金まで送っているらしい。日本円にして約１０億円だそうだ。……支援金というか一生裕福に暮らせる額だろう。妙なところでスケールがリアス部長並みだな。
ついでに言うと「退職金」を別途で春っち宛に預けており、春っちはこれを禍の団被害の復興支援金として全額寄付している。これまた日本円換算で約５億だ。スケールが本当に違う。
まぁそういうこともあって、春っちの家族はこのセーフゾーンならぬセーフシティで、多少の監視的魔術などを駆けられているが裕福に過ごしている。
サーゼクス様としても、若者には未来があってこそであり、また直接的に咎のない親族に過度な責任を負わせないということで与えられた温情だ。この辺り本当に感謝しまくりです。
ただまぁ、ヴィールの眷属時代は春っちも家族とあまり交流してなかったらしい。
メンタルが迷走気味であり、とにかく強くなる為に心血を注いでいたことが大きな理由だ。もちろん定期的に家に帰っていたしヴィールもその辺りは気を使って指示していたようだが、どうもちょっとギクシャクしていたとか。
加えて冥革連合絡みの流れで、色々と横幅が激しい生活だからな。お互いに何か言えない感じだろう。
「……そう、だな」
と、親父さんはためらいがちに春っちに声をかけると、春っちも肩をびくりと震わせる。
「……メイド業務とか、大丈夫なのか？　お前……女子力低いし」
「だ、大丈夫！　経験がないって理由の未熟には肝要だし、力仕事でフォローできるし！」
と、とりあえず現状の仕事とかで何とかしている流れか。なるほど。
ちなみに俺及び俺の女でそういった女子力系をランキングする場

合、春っちが俺より段違いで低く一番下だ。
ヴィールは食生活にも気を使っているからこそ強いんだが、その辺りは貴族なだけあって専門家を複数迎え入れて会議とかをさせながらッて感じだったからな。
自主鍛錬を奨励し応援する環境だが、それはあくまでそれぞれの得意分野や目的分野。春っちは武闘派なので戦闘担当であり、むしろそれらに集中できる生活環境を整えるのがヴィールの方向性だ。結果として戦闘特化であり、それ以外の技量は女子高生として比較的高めレベルだ。
俺の場合はザイアの講習で、兵站部分や野営活動技術などもあるからな。真面目に受けているので、そこ止まりだがきちんと料理は作れる。まぁ、ちょっとした家庭料理レベルならできる。ちなみに鶴羽が前世での家庭科授業もあって若干俺を上回っている。
ちなみに上位三位はベルナとカズヒねぇとインガ姉ちゃんだ。修道院で家事などを経験しいるインガ姉ちゃんを前世の花嫁修業でカズヒねぇが上回り、しかしお嫁さんという夢を真剣に考えていたベルナが更に上回る。
リヴァ先生は年季の差で中間だ。基本的に買い食いとか主体だが、年季の差は決して油断できない。
……とはいえ、メイド業務を重ねていって下ごしらえとか簡単な調理補助なら問題なくこなせているからな。俺もちょっと油断できない。家事でも足を引っ張らないレベルの能力をつかみ取らなければな！
「……ご飯とかは、しっかり食べれてる？　貴女まだまだ育ちざかりなんだから、食事はしっかりしないとだめよ？」
「そこも、大丈夫ね。……むしろお菓子の差し入れとか多すぎて、太りそうなぐらいだったり……するし」
まぁ確かに。
懲罰メイドは刑罰業務の一種ではあるが、基本的にそこにいたりまでの事情が事情だ。だから少なくとも兵藤邸では、ほぼすべてのメンバーが好意的に接している。

俺も春っちにしろインガ姉ちゃんにしろベルナにしろ差し入れとかはよくするし、それだけだと不公平なので他のメイドさん達にもちゃんと差し入れしている。
他のメンバーもちょくちょく差し入れしているので、結果的に少ない給金はお菓子に使われにくいので貯金すらできている状態である。
そして当然だがアニルの燻製はふんだんに振舞われている。元々「浮浪者への施し」と「害獣や侵略性外来種の駆除」を兼ねているので、大量に作るのが主体でもあるからだ。きちんとした処理をしているので、美味いのは変わらないしな。
……最近、真剣に通販ビジネスをするべきではないかという意見も出てきている。もちろんそれをするなら色々と手間はかかるが、本格的にするならリアス部長が資金提供をする勢いだ。

いやそうじゃない！

このぎくしゃくした空気は何とかしなければ。
俺は春っちを娶る男だぞ？　しなくてどうする……あ、そうだ！
「……すいません！　一番最初に言うべきことを忘れてました！」
「「え？」」
思わず困惑している三人を前に、俺はまず言うべきことを今この場ではっきりという。
「……春っちを、春菜を、いや……娘さん俺にください！パニック起こして「を」が抜けてるのは誤字にあらず、お義父(とう)さんお義母(かあ)さん！」
「はぁあああああああっ!?」
春っちが顔を真っ赤にして俺の肩を掴んでガックンガックン揺らしてくる。
めっちゃくちゃ混乱しているのは分かるが、しかし真っ先にするべ

きことだった。
「異形の側に立っているとはいえ、日本人が嫁を複数持つという流れには抵抗が生まれるでしょう。まして俺は強敵と戦い続けるし、比翼連理の悪祓銀弾（シルバーレット）とかわしあった瞼の裏の笑顔に懸けて、過酷な生き方を曲げるつもりもありません」
そう関上げると不義理と言われてもおかしくない。
ただ、だから何も言わないのはそれこそおかしいだろう。拒否にされるにしろ罵倒されるにしろ決別されるにしろ、せめてきちんと向き合ったうえでするべきだ。
だからこそ、まずはそこだ。
俺は揺さぶられながらも真っ直ぐに、義両親と向き合った。
「……ですが、春菜さんはただ守られる女性ではないですし、俺達に手を差し伸べてくれる人もたくさんいます。俺ではなく、彼らと……何より春菜さんの強さだけは信じ上げてくれませんか？」
どうか、そこだけは信じてほしい。
成田春菜は強くなった、強くなろうとしている少女だ。
そんな彼女を支えたヴィールも、カズヒねぇ達
その思いを込めて真っ直ぐに、気持ちを図ろうと懇願する。
……心臓がバクバクなっているんだけど、返答は如何に……？
そんな風に不安を何とか呑み込んで答えを待っていると、ご両親二人は顔を見合わせて苦笑した。
「……良かったな、春菜」
お義父さんが、そう言って春っちに微笑んだ。
「お前昔っから和地君のこと好きだったからなぁ。……和地君は立派になっているみたいだし、ここまで真剣に貰ってくれるっていうのは、嬉しいんじゃないか？」
「え、あ、その―」
ついに硬直する春っちだけど、お義母さんも涙目でうなづいていた。
「そうね。ずっと和地君と守り合いたくて頑張ってたんだもの。認めてもらえて、受け入れてもらえて……良かったわねぇ……っ」

「……うぅ。嬉しいです」
顔真っ赤だよ春っち。
いやまぁ、とりあえず空気は和んだな。
言うべきことはちゃんと言ったし、おかげで空気も緩んだし……よし！
「と、とりあえずあれですね。今日はその辺のすり合わせとかで行きましょう！　お昼食べながら……ね？」
ここから、頑張って話を進めていくぞぉおおお！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、ちょっと心配になるけど大丈夫かしら？」
そんなことを呟いたカズヒに、ゼノヴィアは首を傾げた。
「気になるならついてくれば良かっただろう？　何故行かなかったんだ？」
「いやゼノヴィア先輩。それは空気読めてないっすよね？」
まじ顔でアニルがツッコミを入れる中、ルーシアも軽くため息をついていた。
「前から思ってましたけど、ゼノヴィア先輩は……もうちょっとその辺考えた方がいいですよ？」
そのため息に対し、イリナはしかし首を傾げる。
むしろゼノヴィアの方に同意といった雰囲気が丸分かりで、一年生組は一歩引いた。
「そうかしら？　カズヒのことを成田さんは師匠と慕っているんだし、別に問題なくない？」

それに対してカズヒは盛大にため息をついた。
「空気を読みなさい。あと日本の文化を知りなさい。一夫一妻が大前提の日本人相手に、段階は踏むべきでしょう？　第一、他人のデートに首を突っ込む悪趣味は持ってないわ」
ばっさり切り捨てるカズヒだが、隣でアーシアが遠い目をしていた。
ちなみにカズヒは確信犯である。遠回しにデートにわっかりやすい変装で尾行していた件にツッコミを入れたようなものである。
まあそれはそれとして、カズヒは腰に手を当てながら宣言した。
「……じゃぁまぁ、そろそろ頑張って狩猟を始めるわよ。この村の畑が荒らされないように、ノルマは一人五頭と覚えなさい！」
「あと下ごしらえもサポートよろしくっす。……一人じゃ絶対持たないんで」
アニルがそう苦笑しながら、剣を構えて突撃する。
……本日教会関係者組（―ヒツギ）。アニルの事業支援の為に、鹿狩り敢行。

和地Ｓｉｄｅ

「ふぅ～。食べた食べた～」
「ひっさしぶりに食べたよなぁ。思わず食べ過ぎたかもな」
夜八時過ぎ、俺達二人は帰路についたうえで帰りに回転ずしを食べ終わった。
何とかお昼の家族会議は、それなりに和みながら終わることができた。

今後もまだまだ関係の回復は必要だろうが、とりあえず最小限の段階は踏めただろう。
今度はカズヒねぇ達も連れてきた方がいいな。そのあとはリアス部長達とも顔合わせぐらいはさせるべきか。
あと最近の回転寿司はメニューが豊富だな。
野菜の天ぷらだけでなく、かんぴょう巻きまであるんだから。
チェーン店だったし、今後も駒王町にあるようならちょっと寄ってみるか。
そう思いながら、俺と春っちは夜道を歩いて帰っていく。
……ちなみにちょっと頬が赤いのは、手を握り合ってだからだ。
春っちの右手を握り締めながら、俺は決意を新たにする。
春っちが進む過程で背負う業は、春っちが背負うべきものだ。
だけど春っちを引っ張り上げた身として、俺も片ぐらいは貸してあげたい。
そんな気持ちを込めて、俺は春っちの手をしっかりと握りしめる。
それに対して、そっと握り返してくれる春っちの答えに、俺は決意を改めてしっかりと固める。
……お互い、頑張ろうな？

銀愛賛歌編　七話　Ｗデートはお互いのデートが楽しめるよう気を遣うべし

和地Ｓｉｄｅ

連続デート祭りもついに最後。
俺は今、鶴羽とデートをしている。
南空鶴羽。かつて道間七緒だった少女。
俺やカズヒねぇのことを分かったうえで、それでも俺のことを愛してくれた彼女に対し、俺もできることをしていきたい。
過酷な前世の分だけ幸せになってほしいし、カズヒねぇ達とも仲良くしてほしいと常々思っている。
思って……いるのだが。
「よっしゃぁ！　行くわよ！」
「オッケーですのよぉ！」
そんな鶴羽がヒマリとハイタッチする光景に、俺は隣のいるイッセーと視線を合わせた。
「どうしてこうなった？」
デート乱舞最終日。
俺と鶴羽のデートは、イッセーとヒマリのデートと合わせたダブルデートである！
なんでこうなった!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「今頃、和地や鶴羽にヒマリはイッセーを含めてのダブルデート中ね」
「あ～。確か遊園地でダブルデートだっけ？」
そんな風に共通の友人や恋人を話のタネにしつつ、カズヒ・シチャースチエはヒツギ・セプテンバーとお茶をしていた。
カズヒが自分の部屋に呼んだうえでだが、その分自由度が高く色々な飲み物でなんとなくだべっている感じだったが、話がそこになると一味違う。
「遊園地デートは定番よね。私も今度はそっちにしようかしら？」
そんなことをカズヒが言えば、
「でも割とお金がかかるじゃん？　学生的にどうかなぁ？」
そういう風にヒツギが応える。
そんな風にだべりながら、カズヒとヒツギは取り留めのない会話を続ける。
学食や購買の話をしたり、暗部中の暗部や表の筆頭部隊という視点の違いを教会が関与した作戦についての視点で聞いてみたり。
そういう風にだべっていると、カズヒは少し寂しげな表情を浮かべていた。
その内容をあえて告げようとしないカズヒだが、ヒツギはそれをすぐに悟れている。
自分達の関係性を踏まえれば、すぐに分かるというものだ。
「……なんか、ごめんね？」
ヒツギのその言葉に、カズヒは少しだけ肩を震わせる。
ヒツギはそのまま少し言いづらそうにするが、しかし意を決して向き直る。
「……本当ならさ、やっぱり道間日美子としての決着はつけたいと思ってるかもしれない。だけど私もヒマリも……自分達でいることを選んだわけでさ？」
「……謝るのはこちらの方よ」

カズヒもそれを素直に認め、目を伏せて自分の弱さを恥じる。
ヒツギとヒマリの決断は知っている。それに繋げたイッセーの在り方も認めている。
それは決して、道間乙女を知る道間日美子（カズヒ・シチャースチエ）にも道間七緒（南空鶴羽）にもアイネス・ドーマ（リーネス・エグリゴリ）にもできないことだ。道間乙女として見てしまう自分達では、二人を道間乙女としてどうしても見てしまう。
そんな二人が、その事実を知って、それでも別個の二人として自分達を定義した。
そのきっかけとなるイッセーに対して恋焦がれることも含めて、本当なら寿ぐべきことなのだ。
前世とは前世であり、決して今生ではない。記憶と経験と感情全てが連続しているカズヒ達こそが異常だ。限定的とはいえそれが繋がり、それでも自分達を乙女とは別の存在として定義することこそ、褒められるべき行為だろう。
「……こうしてヒツギとして話して、知らぬとはいえそう接してきたのに、私はあなたを乙女ねぇとして見ていたくなる。……全然異なるのにね」
それが今回のお茶会の理由だった。そして、それでも引きずられる自分がいる。
そんなカズヒに対して、ヒツギは苦笑しながらそっと彼女の右手をとった。
「……ま、それはそれだって思うから安心しなよ」
その言葉に、カズヒは返答に窮する。
むしろ意図が把握できていない。それゆえに、どう答えればいいのか分からない。
そんなカズヒに、ヒツギは静かに苦笑する。
「正直言って、道間乙女（そっち）もないがしろにする気はないから。これはヒマリも一緒なんだよね」
それは素直な結論だ。
確かに自分達は別々の親友で、そうであることを選んだ。最も優しい赤龍帝が、その決断へと導いた。

だが、祈りの通りそれだけじゃない。
かつて道間乙女であったこと。その事実をなかったことにしようとは思っていない。むしろそれすら捨て去れというのなら、流石にイッセーと縁を切るぐらいあり得るレベルで決意している。
何故なら―
「……私もヒマリも思い出してるからさ。道間日美子（カズヒ）を本気で大事に思う、道間乙女（かつての私）の感情を」
―それもまた、二人にとってかけがえのない事実だから。
その事実をもって、彼女達は自分の未来を選ぶと決めた。
覚悟をもって、決意をもって。
だからこそ―
「大丈夫だよ、カズヒ。……私もヒマリも、貴女の友達だからさ？」
―その言葉は、本心だ。
その答えに、カズヒもまたぎこちなく微笑みながら頷いた。
「そうね。私も……乙女ねぇもヒマリも、もちろんヒツギのことも大事な人だと思ってる」
なら、今はそれでいい。
今ここで急に変える必要はないのだと、二人はそれで納得した。

イッセーＳｉｄｅ

「いやっほぉおおおおお！」
「いぇえええええっい！」
ジェットコースターで全力で歓声を上げる二人に、俺とイッセーは複雑な気分だ。

いや、ジェットコースター程度の速度なんて慣れているというわけじゃない。慣れているけど楽しむ楽しまないは別の感じだ。この雰囲気は実戦では味わえないしな。
ただ問題がある。
「なんで自分の彼女が隣じゃないんだ」」
おかしいだろダブルデートとしても！
俺もイッセーも本気で首を傾げたくなっているよ。
ぶっちゃけめちゃくちゃ楽しんでるの、鶴羽とヒマリなんだけど。俺とイッセー、なんていうかさっきから微妙な感じで楽しめ切れてないんだけど!?
おかしい。ダブルデートってこんなんじゃない。
これは彼女たちが遊ぶのに振り回されている男の悲哀だ。断じて、断じていちゃつき×２とかそういうやつじゃない。
「「やっふぅううううっ！」」
「「ちくしょぉおおおっ！」」
全く別々の意味の絶叫が、それぞれ響き渡った。

祐斗Ｓｉｄｅ

ひと段落ついて安らぎを得ているけど、それでも僕達は研鑽を欠かすつもりはない。
その一環として、僕達は堕天使が保有している戦闘の記録映像を見たりもしている。
こういった自主的な研鑽に、付き合ってくれる人も数多い。
とはいえ色々な人達がいるので、組み合わせも様々だ。

「なるほどねぇ。やっぱり実力者同士の戦闘は、反応速度や判断の速さがかなり早いわねぇ」
今日はリーネスと一緒に映像を見ている。
彼女は基本的に後方支援型だけど、必要と在れば戦闘を行うことも踏まえている。
その一環で開発したのザイアスラッシュライザーに、シャイニングホッパープログライズキー。
その戦闘能力は僕達と肩を並べられるほどだ。行動パターンを大量に作り出して最適解を選んで行動するそれは、間違いなく凄まじい力だろう。研究職の後方支援であるリーネスをそこまで高めるなど、凄まじいというほかない。
だけど、リーネスはそこで満足していないようだね。
「今での十分だと思うけど、それでもかい？」
「それはそうよぉ。あれはザイアから流出した技術を復元した物。既にそれをベースにしたプログライズキーだっていくつも作られているのに、それ以上を目指さないのは油断でしかないわぁ」
なるほど確かに。
技術とは基本的に、新しくなっていけばいくほど高性能化する傾向がある。
技術の復元や再現だけでは、いずれ追いつかれて敗北すると考えているのか。
「……僕達も精進しないといけない。そういうことかな？」
「そういうことよぉ。……それに、私は一時的に追いつく程度で我慢しないものぉ」
そう告げるリーネスの表情は、微笑みだけど真剣だった。
「……アイネスの後悔をリーネスが繰り返すわけにはいかないわぁ。この先を、私は必ず作り上げないといけないわねぇ」
その強い決意こそが、自らの精進する為に努力や研究を行わせる原動力なんだろう。
とはいえ、少し気になることも多いね。
「……そういえば、具体的な方向性とかは決まっているのかい？」

「ええ、ちょっとこんな感じのを考えてたりするのよねぇ――」
そう前置きして告げられたコンセプトに、僕は思わず苦笑した。
もしできるなら、きっと凄いことになりそうだね。

イッセーＳｉｄｅ

ジェットコースターも終わって、俺達は遊園地に併設されているレストランでお昼を食べてる。
食べてるんだけどね？　だけどね？
「やだこれ美味しい！　そっちにしたらよかったかも？」
「そっちのも美味しいですわね。別々に頼んで正解ですの！」
「……なんだろう」
さっきから一緒になっていちゃいちゃしてるの、ヒマリと南空さんじゃん！
俺も九成もは持ってぼやき始めてるよ。そりゃそうだよ。
これダブルデートって言わない！　デートに付き合わされてる取り巻き！
連続デートはこれでラストなのに、最後がこれってどうなんだよ!?
俺も九成も昼飯のカレーライスを食べながら、この雰囲気に真剣に困っていた。

アザゼルＳｉｄｅ

俺はある研究所で、あるデータを参照していた。
それは神の子(グリ)を見張(ゴリ)る者が研究開発を行っている、様々なデータが記されている。
そして俺が見ているのは、そろそろ試験運用の為に少数生産が行われる新型のＴＦ(トライフォース)ユニットと、プログライズキーの運用技術。
こいつらが完成すれば、禍の団との戦いは大きく変わるだろう。
英雄派の主要幹部が軒並み大打撃を受け、禍の団は旧魔王派一強の時代に戻ったといえる。
ルシファーの純血な後継でありながら、同時に人間の強みを受け継いだ転生者。ミザリ・ルシファー。かつての道間誠明。
あいつの行動原理とそこに至る来歴を知れば、必ず禍の団を使ってろくでもないことを起こすと、殆どの上層部が理解している。
だからこそ、俺達は研究を投げ捨てることはない。
だからこそ、リーネス達がそれをどうにかしないわけがない。
その成果を見ながら、俺は同時に内心で嫌な予感を覚えていた。
ミザリ・ルシファーの狂気的嗜好は一種のカリスマ性として機能する。
だが同時に、奴は己の悲嘆すら美しいと喜べる破綻した精神性だ。あそこまでの破綻した精神性では、当然だが組織運営にある程度の歪みが生まれるだろう。
だからこそ、それ以上のカリスマ性とミザリよりは低い破綻性を併せ持つ盟主が生まれなければ、もう一つのオーフィスがいても決定打にはなりえない。
そして、それができる可能性を持つ奴を一人俺は知っている。
奴はまだ生きている。少なくとも、十数年前までは確実に生きている。出なければミザリはヴァーリの叔父を名乗ったりできない。
だが同時に、奴は俺達が知る限り虚無的な男だった。

旧魔王血族と現政権の内乱においても、奴は興味を示さず雲隠れした。その後の歴史においても奴が積極的に動いたなんて話は聞いたことがない。
だがしかし、奴が出てくれれば俺達の戦いは大きな変化が起きることも事実だ。
「……こういう時は、万が一の備えが肝心だってな」
ま、組織の財政が破綻しない程度に備えておくか。
それぐらいしかできることがない。というか、それ以上のことなんて俺達にはできない。
だからこそ、イッセー達には今ぐらい楽しんでほしいもんだ。
「命短し恋せよ乙女。……ま、あいつらは俺達並みに長生きできるんだろうがな」
さて、デートはどんな感じになってるのかねぇ？

九成Ｓｉｄｅ

「えー。本日のダブルデート反省会を始めたいです。イッセー議長、総評を」
「これダブルデートじゃない！　デートに巻き込まれたアッシー二人！」
大量のお土産を運ぶことになった俺達は、晩飯として入った焼肉屋（チェーン店）で盛大に文句をぶちまけた。
いやホントだよ。二人だけの空気を作るなよ。彼氏に少し配慮しろよ。
男も女に配慮するべきだと思うけど、それは女が男に配慮しなくていいことにはならないんだぞ!?

もっと相互理解を求めます！　プリーズ、配慮！
「あ～、なんかゴメン」
鶴羽はその辺自覚はあったのか、ちょっと言い難そうにポリポリと頬をかいた。
「その、ヒマリと仲良くなりたかったのよ。だからその……男性陣に甘えました、ごめんなさい！」
「イッセー達が楽しくなかったのはごめんなさいですの！」
二人して頭を下げるけど、鶴羽の理由はちょっとこう、文句が言い難くなるな。
なんというか、言いたいことは分かる。
乙女ではなく、ヒツギとヒマリでもなく、ヒマリと。
そこに込められた意味を、俺はきっとある程度は理解できているんだと思う。
「……道間乙女ではなく、二人を二人として見る為の努力ってことか」
「あ、あ～……」
俺がそう言うと、イッセーもすぐに悟ったのかちょっと困り顔になる。
道間乙女。バニシングツインであった結果、ヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバーに分かたれた、鶴羽達の大切な親友。
かつての来歴における被害者であり、カズヒねぇだけでなく鶴羽にとっても負い目もある。その生まれ変わりである二人に対して、リーネス含めて思うところがいっぱいあるのは当然だが分かる。下手人が自分の親父だったわけだしな。
だけど、ヒマリはヒツギと共に、道間乙女であった別々の二人として歩き出した。
それは完全に記憶と感情を繋げていた三人にはできないことだ。リーネスやカズヒねぇ含め、鶴羽達はだからこそ困っているんだろう。
特に鶴羽が一番困っているんだろう。
長い間ヒマリの面倒を俺も含めてみてくれたリーネスは、性格の違いもあって多少は二人を別個とした扱いができると思う。カズヒ

ねえは不意打ちで知らされたこともあって、比較的そっちになれることが少なかった。
だけど、二人を道間乙女の生まれ変わりと知ったうえで絆を結んできた鶴羽にとって、それは難しいかもしれない。
記憶が戻らなくてもいい。そう思っている可能性はある。だけどもし思い出した時に、どんな感想を抱くか俺は考える。
……きっと、昔の関係を修復できたらと思うだろう。少なくとも、そう思う時は少なからずあったはずだ。
だからいい機会だと思って、まずヒマリをヒマリと思う為にいちゃついてたのか。
俺はついイッセーの方を見ると、視線が合った。
イッセーもイッセーでかなり困っている感じだな。まぁ、二人がそういう決意をした要因だし、当然か。
う～ん。これはどうしたものか―
「……でも、大丈夫ですのよ？」
―その時、ヒマリはそう告げた。
思わず鶴羽も含めてみんなできょとんとしていると、ヒマリはふふんといった笑みを浮かべながら胸を張る。
「私はヒマリ・ナインテイルですが、道間乙女であった事実も変わりませんもの！　立派な大人とはどっちもないがしろにせず済ませる者。どちらの自分も自分として受け入れ両立して見せますわ！」
そんな風に元気よく断言するヒマリに、俺達は一瞬ぽかんとしたけどちょっと笑いそうになった。
……確かに、ヒマリはそういうやつだよな。
何の根拠もないのは困りものだが、そういうやつだからこそできることがあるのはまた事実だ。
「そういうわけですので、これから和地は私をママと呼んでもいいですのよ？」
「「それはやめて！」」
総ツッコミだ。
いやちょっと待ってくれ。それだとイッセーのことをお義父さん

と呼ばねばならなくなる。イッセーも同い年の息子とか事実上年上の娘ができるし、鶴羽に至ってはヒマリをお義母さんと言わねばならなくなるだろう。
いろんな意味でアウトだからな、それ！
ただ、天然だけど鶴羽の肩の力は抜けたみたいだ。
「……そっか。私達、ヒマリ達に乙女ねぇを見てもいいのか」
本心からほっとしたその表情に、だけど同時に後ろめたさは消えてない。
いうなれば、年下も同然のヒマリに対して甘えているようなものだからな。一番苦しんだ乙女に対して、加害者の娘である道間七緒が甘えることにもなる。どうしてもすべてに納得はできないだろう。
だけど、それも踏まえてこそ絆を結ぶ意味がある。
俺は、きっとそう思う。
「……よっしゃ！　そういうことなら今からでも、マジでダブルデートを楽しむか！」
「あ、お前それは俺のセリフだぞ!?」
おのれイッセー！　格好良いところを取るな！
こ、これがダブルデートの欠点か。良いところを見せたくても、相手に良い男がいると取られるという罠があるのか。
おのれぇ！　こうなれば俺の出番だ！
「そういうことなら物理は俺が確保するからな!?　ここの料金は俺が奢るからな!?」
財布で勝負してやる。大丈夫、いろんな仕事で金はある!!
「あ、なら私特上カルビ頼みますの！」
「え、マジで!?　じゃ俺も！」
あ、しまった。
いくら安めのチェーン店とはいえ、遠慮なく特上頼まれると財布に響く!?
しかも言い出しっぺとして撤回できない。払うことは可能な範囲内だと尚更だ。
「……なんかゴメン」

元凶だけど謝らなくていいよ!?　彼氏として頑張りたい!!

まぁ、そのあとは相応にみんなで楽しめたと思う。
ちなみにだが、焼き肉店を出る時に鶴羽が言ったことは、割ときゅんと来た。
「食べ過ぎでお腹出るのはあれだったわね。……お腹が出るなら、和地との愛の結晶とかがよかったわ」
その直後顔を真っ赤にした以上、これはうっかり出てきたポンコツな本音だ。
そう、本音だ。
「……みぎゃぁあああああっ!?」
「……っしゃぁあああああっ!!」
最後の最後でそんなレベルまで考えてくれることが分かるなんて。
これだけでも、いろんなダメージが帳消しになってお釣りがくるぞこれはぁ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「はい天帝。要望通りの仕事はしてきたわよ」
「ＨＡＨＡＨＡ！　曹操達を冥府送りにした直後に来て、それを知っ

た瞬間に「傘下に入るから大株主になって」と言われた時には驚いたが、おかげで合法的に戦力を人間界でも動かせるようになったＺＥ！
星辰奏者（エスペラント）はそこそこ用意できたが、禍の団が暴れてくれねえと実戦経験させれなかったからなぁ
！」
「ご安心を。民間軍事警備企業アマゴフォースの主な業務は、星辰奏者（エスペラント）による護衛及び、対星辰奏者を前提とする演習の仮想敵（アグレッサー）。星辰奏者を必要とするレベルの荒事や、対星辰奏者を踏まえた軍事部隊との戦闘が基本なので、星辰奏者の実戦経験やそれに類する戦いを経験するにはぴったりです」
「俺が個人的に使える金で、十分すぎるぐらい規模も拡張できたしな。須弥山の星辰奏者は出向だから、給料も殆ど須弥山が出してるもんでぼろ儲けだろ？」
「安心してください。曹操が帰ってきた後のけじめ用の上納金として、規模拡張に伴う必要経費以外は貯蓄してますから」
「抜け目がねえなぁ。……だが、曹操が本当に帰ってくると思うか？」
「逆に聞きますが、天帝は帰ってこれないと思っているんですか？」
「……ＨＡＨＡＨＡ！　俺の負けだ。奴は帰ってくると思ってるぜ？　出なけりゃ他の勢力に情報を隠す意味がねぇ」
「そういうことです。私は曹操に救われ、そしてドゥルヨーダナや尼子という光を得た。なら私がするべきことは、曹操が帰ってきた時の居場所を作ること」
「ならＯＫだ。奴は間違いなく帰ってくる。まぁ一年や二年はかかるだろうが、その頃にはアマゴフォースは世界最大のＰＭＣだ。中国製の戦車や攻撃ヘリとか、俺のコネで仕入れてやろうか？」
「現行の国際法に引っかかるから結構です。むしろ安全かつ美味しい食材を、兵站用に調達してください」
「そうかい。……なら別口として、お前さんがあやかれるスペシャルなものをくれてやろう。こんなもんがあるんだが―」
「……なるほど。ドゥルヨーダナとしては中々洒落た力ですね。ありがたく受け取りたいですが、流石に貰いすぎですので追加業務をくだ

さいな」
「オーライオーライ。じゃ、ちょっとばかし準備を整えといてくれや」
「なんです？」

「どうも根暗な吸血鬼共に、神滅具が宿っちまったらしいんだよ。偵察したいが神滅具相手だとあれだし……な？　分かるだろ？」
「なるほど、切り捨てても損がない斥候を用意しろと。……神滅具相手なら私達が出るべきね……行ける？」

「―無論でござる。お家復興の大きな足掛かりをくれた天帝殿に対する御恩、奉公によって返すに能う者でござるからな」

第六章　明星双臨編
明星双臨編　第一話　ひと段落のある朝

九成Ｓｉｄｅ

朝起きて、本館の方に言ったらくぐもった悲鳴が聞こえてきた。
何かと思って声の聞こえたイッセー達の部屋がある階まで行くと、そこにはカズヒねぇにアイアンクローを駆けられて宙づりになる黒歌がいた。
「……何やってんだ？」
いろんな意味でだよ。
そもそもなんでテロリストが、朝もはよからこんなところにいるんだよ。危機感ないのか？
俺が首を傾げていると、カズヒねぇはため息すらついていた。
「アザゼル先生が許可証出して入れるようにしてやがったわ。これから黒歌でどついてくるがの誤字にあらずから」
「いや、そこはいいけど……そもそもなんでカズヒねぇがイッセーの部屋から来た感じなんだ？」
「……いや……た、たすけ……」
黒歌は八割ほど無視して話を進める。
というより、現政権の英雄達が住まう家にテロリストが入ってきたら、そりゃそうなるだろ。むしろ殺されてないだけ温情だよ。
なぁんかなぁなぁで味方面されてるんだよなぁ。インガ姉ちゃん

達の手前もあるし、個人的にもけじめはしっかりつけてから参加してほしいんだがなぁ。
どうも三大勢力のトップは若者に甘い。恩恵をある程度は受けている俺達が言うのもなんだけど、しかしディオドラに巻き込まれた被害者を懲罰メイドにしているんだ。自主的にノリノリで愉快犯なテロリストに対しては、もうちょっと厳しめに行ってほしい。
ちなみに英雄派で捕まったジャンヌ・ダルクとヘラクレスは、それぞれバチカンの食堂や冥界の幼稚園で働いている。
それだって抵抗したりすれば確実に死ぬような呪詛をかけたうえでだ。やっていることの規模や被害は違えど、奴らより理念がない連中に対しては同レベルぐらいはしてほしいところなんだけどなぁ。
まぁいい。一応ヴァーリチームに関しては、フロンズ氏もある程度は目をつむってくれるだろう。グレモリー卿もある程度は目をつむるようだし、今回は俺からはしないでおくか。
……もっとも。
正論を自分が人を叩く武器にするのではなく、正論が人を叩く時に自分を武器にさせるスタンスのカズヒねぇが気にしないわけがないんだが。
「……にゃぁっ！」
と、そこで強引に黒歌が星辰体と感応してカズヒねぇから脱出した。
そして互いに星辰光を発動することも辞さないにらみ合いに突入する。
「少しは自分がどういう立場かわきまえて行動しなさい。懲りろ自粛しろケジメを付けて殊勝になれ。言っとくけどさっきの発言は九割本気よ。一割は本気で今後しないと決めるのなら様子見する止まりよ？」
「別に私やルフェイが来るぐらいいじゃない。白音とも仙術教えるって約束したしい？　オーフィスだって住んでるんでしょ？」
カズヒねぇに対して、黒歌はオーフィスを引き合いに出して反論する。

そう、オーフィスはこの兵藤邸に住むことになった。
禍の団が対外的に、英雄派が搾り取ったオーフィスの力で作った自分達のウロボロスをオーフィスとしていることを逆手に取った形だ。各勢力はイッセーに懐いたうえに意外と素直で話が通るオーフィスを、イッセー達が監視責任を取る形で様子を見るということになった。
流石に一般民衆にはオーフィスは禍の団にいるウロボロスってことにしているが、ハーデスですら大体は周知したうえで黙認している形だ。
最も、冥府は完全に暴走したポセイドンタカ派と内戦状態。オリュンポス側もハーデスの今回の暴走行為に責任を取らせるべきと考えており、またポセイドン側の怒りももっともかつ、止めると自分達に矛先が向きかねないから、手を出せない構えだ。
ついでに言うと、大王派はここぞとばかりに民意を味方にするべくポセイドン派に魔性聖剣の技術を流用して聖剣使い化を行うなどの支援をしている。
現状ならハーデスを叩く行為に手を貸すべきだが、直接的に軍を送ると魔王派と揉めるのでそこは避けたい。だからついでに魔性聖剣関連のデータ収集を目論んで動こうといった形になっている。
まぁそれはともかくとして、トップがここに住んでるのなら自分達もと言いたいようだが―
「特例は特例、例外は例外。自分達が該当するかも考えずに適用を求める馬鹿に特権を与える趣味はないわよ」
当然その理屈はカズヒねぇには通用しない。
「良いから少しは殊勝になりなさい。最悪私はあんたで先生をぶちのめしてから、切腹詫びで上に類が及ばないように処置するわよ」
言いながら自決用の短刀出さないでカズヒねぇ。
あんた本気で言ってるから怖いんだよ。朝っぱらから最愛の女性が自決するところなんぞ見たくないから。
っていうか黒歌もガチでドン引きしてるし。……ぶっちゃけ、サーヴァントで言うなら秩序・悪なカズヒねぇと、よくて混沌・中立な黒

歌って絶対相性が悪いからなぁ。
仕方ない。ここは俺が止めるとするか。言いたいこともあるしな。
「とりあえずいったんその辺で。後黒歌は、オーフィスとお前らを一緒にするのをやめろ……あ」
そこまで言って俺は気が付いた。
ちょうどいいタイミングだろ、今。
「ちょうどいい。どこが違うか見せてやる」
「……にゃ？」

「フィスフィスキッチンタイム。我、朝ごはん作る」
「……なにあれ」
某動画配信サイトで登録者数は数十万に到達し、毎月数百万円もの収益化を果たしている、三大勢力のコマーシャル活動を兼ねたトライフォース放送局。
余談だが、料理関係の番組で補佐をしているクックスも含めて関わっている俺達で分割しても結構な額だ。バイト学生レベルを通り越してフリーターレベルの収入が入ってきている。
そのスタジオとして使用している別館一階のスタジオを借りて、オーフィスがクックスのサポートの元朝ごはんとなるクロックマダムを作っていた。
その光景に面食らっている黒歌に、カズヒねぇが満足げにうんうんと頷いている。
「……贖罪活動及び生活費稼ぎを兼ねた、トライフォース放送局とは別口の動画配信シリーズ「ふぃっちゃんねる」よ。流石にテロリストの親玉をのうのうと住まわせているのとか広まるとあれだし、ばれた時の言い訳も兼ねて提案したら承諾してくれたわ」
ちなみに今月中に収益化する見通しだ。オーフィス可愛いし雰囲気が独特だし、あと地味に美味そうなものばかり出てくるし。

聞き分けはいいし素直だから、そうと知らずに子供として接している分には特に問題ないんだよな。のうのうと只居候させるのもあれだし、俺としてもこれぐらいはさせるべきだろう。
ちなみに収益の九割は復興義援金に回し、残りを生活費とお小遣いに回すことになっている。トライフォース放送局も必要な経費以外は俺達の貯金になっているし、割とその辺はラッキーだ。
と、いうわけでだ。
「……まぁそういうことだから。オーフィスはしっかり筋を通そうという行動を示しているから。待遇を同じにしたいのならせめて復興義援金を用意してから出直してこい」
その辺は本当にしてほしいな、うん。

イッセーＳｉｄｅ

なんかカズヒと九成が黒歌を連れてオーフィスの番組収録の見学させてるけど、それはともかく。
俺は気分転換も兼ねて、リーネスの研究室に足を運んでいた。
「……で、そういえば聞いてなかったけど、パラディンドッグって凄いんだな」
イヤホンと、あれまじで凄かったよなぁ。
「ついに九成も魔星なんだろ？　リーネスって本当に凄いよなぁ」
「ふふ。ちょっと勘違いしているようねぇ」
そう苦笑しているリーネスだけど、違うの？
俺が首をかしげていると、リーネスは研究用のパソコンを操作して画面を変える。

そこにはパラディンドッグプログライズキーのデータが映し出されていた。
あ、俺が疑似的に禁手になる時に、アザゼル先生がくれた輪っかもある。
「パラディンドッグそのものに魔星化する機能はないわぁ。あれはねぇ、禁手の拡張強化ユニットなのぉ」
あ、だから腕輪とかが出てるのか。
「人工神器研究の過程で、私は一つのアプローチを思いついていたのぉ。神器そのものを再現するのではなく、神器を拡張するオプションといったものよぉ」
そういうとリーネスは、魔剣創造のデータを出しながら色々と操作する。
見ると、拳銃とか戦車とか出てきたけど……なんだ？
「例えば魔剣創造ならぁ、機能を拡張して無限にいろんな弾丸を作る拳銃とかぁ、環境に合わせたキャタピラを作る履帯とかねぇ。パラディンドッグはそこから発展した、禁手の拡張強化パックなのよぉ」
「……って言うことは、九成が魔星になったのは九成の禁手によるものってわけか」
俺に応えるように、リーネスは何時の間に取っていたのか戦闘の記録映像を見せる。
同時にいくつかのデータが出てくるけど、専門知識がないからそっちはさっぱり分からない。
ただまぁ、桁がたくさんあるからなんか凄いっぽいな。あ、九成のデータが出てくるけど、同じ部分に出てる数値は最初の数字の方が大抵大きい。
「あの禁手はいうなれば「星辰奏者を魔星にする特殊発動体」を作る亜種禁手なのよぉ。神星鉄（オリハルコン）に匹敵する星辰体感応性質に、それらを制御する為の演算機能。和地が疑似京都で強引に準魔星状態になったけれどぉ、出力も精度も負荷も安定性も、全てにおいて禁手の方が優れているわぁ」
あ～、確かに。

それっぽい数値が全部上回ってるなぁ。確か九成はあの時めちゃくちゃ無茶をしてたけど、それを禁手で代用することで大丈夫にしたってわけか。
俺が感心していると、リーネスは更に操作する。
「で、パラディンドッグはそういった禁手の補佐を目的とした、和地専用に調整したプログライズキーよぉ。主な機能は禁手や和地を簡易調律することで持続時間を約三倍化させたり、英雄派が流したデータなどを利用することで、一時的に別の禁手にさせることもできるわねぇ」
「ってことは、もしかして木場の聖魔剣とかもできるのか？」
俺が訊いてみると、リーネスはちょっと苦笑した。
「聖剣因子を取り込めば、短時間ならできるかも。ただ、和地が星辰奏者であることを踏まえると態々魔星剣を封じるだけの価値があるか微妙ねぇ」
「すげえな魔星剣」
あとリーネスも凄い。
ただ、リーネスは凄い遠い目をしていた。
「ただ、問題は和地の方ねぇ」
え、なに？
九成は禁手になったしカズヒとも仲良くなったし、良いことづくめな気がするけど？
俺が訳が分からないでいると、リーネスはすすけた表情で俺の方を見た。
「……最大三分。和地がパラディンドッグ無しで禁手を持続させれる最大時間よぉ」
「……短ぁっ!?」
いや本当に短い!?
俺が禁手になった時だって、三十分は出来たぞ!?　今なら何時間もできるぜ!?
木場だってもっと長かったし。っていうか三分って、先生がくれたリング込みなら疑似禁手の俺でももっと長かったよ!?

「禁手は世界の均衡を崩す意思が必要と言われるけれどぉ、和地は基本的に自分にできる範囲でどうにかするタイプだからぁ」
「そもそも禁手に向いてないってわけ？」
いや、それにしても短いだろ。
パラディンドッグが最大三倍だっていうから、長くて最大９分が限界ってことかよ。俺だってマジで禁手になった時は三倍以上行けたってのに。
これ、長期戦とかに持ち込まれたら絶対負けるって。
「本当なら、至ってからはパラディンドッグを主体にする予定だったわぁ。アサルトグリップは生命維持機能とかのリソースを使うから、不可も大きいしあくまで緊急回避が本命だったのよぉ」
あ～なるほど。だからあの二つが作られたのか。
パラディンドッグは禁手が持続しないと意味ないから、禁手が使えなくなったのならサルヴェイティングアサルトドッグにしないとまずいってわけか。
ただ、リーネスは本当に遠い目になっていた。
「ただ星辰奏者って生命力とかも強化されるからぁ。アサルトグリップの影響はあまりなかったりするのぉ」
「逆転してるってわけね。……お疲れさん、リーネス」
いや、本当にリーネスに同情する。
っていうか九成、お前もお前だよ。
俺も結構色々あれだけど、お前も大概アレだったんだな、おい。

明星双臨編　第二話　自他問わず誰にとっても厳しいのはツンとは言わない。

和地Ｓｉｄｅ

「まったくもう。イッセー、本当にくじ引き制にしなさい。無視して突っ込む馬鹿は遠慮なく絞めるから」
「待って待って待って！」
ナチュラルに高校生でありながら肩車まで使用してきた教会三人娘をシームレスに絞め落とし、カズヒねぇはイッセーにそう提案している。
まぁ実際問題、ここ最近の女性陣のイッセーに対するべったりっぷりは色々とあれだ。イッセーの負担が大きすぎる。
というかだな。ベッドから結構な頻度で蹴り落とされるとか可哀想だろ。カズヒねぇの言う通り、くじ引きでローテーションを決めろとは思う。
「女の子が左右で困ってるなら、左右共に助けたいと思ってしまうのです！　木場にも言われたけど、無理でもなんとかしたいんです！」
「それであなたの体調が崩れたりしたら逆効果でしょう。当面は黙って見ていたけれど、貴方の悪いところは締めるところを締めないところよ」
盛大にため息をついたカズヒねぇは、どっかりと椅子に座ってから、何故か俺の方にずるずると移動する。
また珍しく行儀の悪い。
などと思っていると、コテンとカズヒねぇは俺の肩に頭を乗せた。
……わぁお。
思考が軽く真っ白になった。

しかもカズヒねぇ、体から力を軽く抜いて俺にもたれかかってるし。
わぁい。なんか頼られてる感じでめっちゃくちゃ俺のテンション爆上がり！　いやっほう！
「……本当に毎度毎度疲れるわよこれ。和地、予鈴が始まるまでちょっとこうさせて？」
「え、マジで分単位でこれするのカズヒねぇ？　むしろご褒美なんですけど何かしたっけ？」
わぁい。口元がにやけるのが止められない。
そして俺がそんなことになっているうちに、クラス中が面食らっている。
気持ちはとてもよく分かる。カズヒねぇが、俺の肩にもたれかかって、弱音を吐いている。そんな光景が繰り広げられている。
鋼鉄の女と認識すらされていただろうカズヒねぇが、大好きであることを俺は常々公言しているとはいえ男の肩にもたれて、軽くだけど弱音まで履いている。
完全に男に甘える女のそれだ。驚天動地というかなんというか、杞憂が現実に起きたレベルの非常事態だろう。
「な、ななな何があったの!?」
「あのカズヒが!?　あのカズヒがだぞ!?」
「九成がカズヒに対する呼び方が変わってたからまさかと思ってたが、マジでこれ、九成が決めたのか!?」
狼狽する生徒達が殆どな辺り、カズヒねぇがどう認識されているかがよく分かるというものだ。
そして真っ白になっている松田と元浜はどうしたものか。
あ、崩れ落ちた。
「……俺達の、努力は何だったんだ!?」
「生股……お尻……っ」
完全に絶望しているが、そこは安心していい。
というか大事なことを忘れるな。彼女はカズヒ・シチャースチエだからな？

ほれ、カズヒねぇも呆れた表情だし。俺にもたれたままでだけど。
「心配しなくても約束は守るわよ。まぁ、前も後ろも口も処女はあげたからそこは我慢してもらうけれど」
「ちょ、カズヒねぇ!?」
そこまで言いますかぁ!?
『『『

気がするぞお？

祐斗Ｓｉｄｅ

「オイ聞いたか!?　あのカズヒが九成とできたらしいぞ!?」
「今朝に至っては堂々といちゃついたらしいぞ!?」
「え？　エロ眼鏡とエロ坊主がしたっていう血判状ってどうなったの？」
「あ、そっちはするって」
「正気かシチャースチエ!?　九成も止めろよ！」
あ、あはは……。
割と二年生どころか学園中が騒がしいことになっているね。
解くカズヒは隠してなかったから遅いぐらいだけど、かなり衝撃的な事態になっている感じだよ。
「ここまでとはね……」
「そうか？　俺はシチャースチエが普通にそういうことを言うのが珍しく感じるけどよ？」
たまたま飲み物を買う時に会った匙君はそう言うけど、僕としてはそこまで驚くには値しない。
彼女は普段から厳しい人だから勘違いされがちだけど、別にいわゆるツンデレといったタイプじゃないからね。
「カズヒは好意や評価は割と隠さないよ？　自他問わず常に厳しいから、そもそも高評価や好意を示す機会が少ないだけさ」
「……あ～。そういやそうだな」

実際そういうところがあるからね。指摘されれば匙君もすぐに納得できる範囲内さ。
彼女は本当に常々厳しい。裏を返すと厳しいからそういう評価になっているだけで、好意的な対応をするべきと考えれば割と素直に宣言できる人だ。
個人の向き不向きや才能の差にもある程度は鷹揚だし……いや、鷹揚すぎるかな。
「……そういや、兵藤のエロ仲間相手に血判状でとんでもないことしたって有名だけど、あいつら大丈夫なのか？」
匙君がそんなことを言うけど、そこの問題はない。
問題はそこじゃないんだよね。いや、本当に。
「むしろ彼女は「どっちが最初にするかで揉める可能性が減った」といった感じでほっとしてたよ」
「……シチャースチエと今後も付き合う、九成の奴に真剣に同情してきたんだけど」
だよねぇ……。
真剣に九成君は、ここからが試練な気もするね。
「……お、木場に匙もいるみたいじゃん？」
と、そこにヒツギも来たようだ。
「お、セプテンバー。お前も飲み物を買いに来たのか？」
「まぁねぇ。ただ、カズヒと和地がすっごいことになりそうじゃん？」
「だねぇ。この様子じゃ、今日中に高等部全域に話が広まりそうだよ」
お互い苦笑いをしていると、匙君はふと遠い目になった。
なんだろう。凄いすすけているといった感じの表情だ。負のオーラというか絶望の気配というか。
思わず僕とヒツギは一歩下がるけど、匙君はそんな僕たちにちらりと視線を向けた。
……すっごい悲しみのオーラが出てきているんだけど。
「そういえば、兵藤ってリアス先輩と付き合ったんだって？」
「……あぁ」
そういえば、直接言う機会には恵まれてなかったね。

僕は苦笑しながら素直に頷くことにする。
「学園祭の最終日にね。イッセー君から告白した感じだよ」
「そこまでにひと悶着あったから、ちょっとほっとしたね」
うんうんとヒツギも頷くと、匙君は崩れ落ちた。
「畜生……俺なんて、いまだに会長とは主と眷属止まりだってのに。名前だって呼んでもらえないってのに。ソーナ会長は兵藤のことを名前で呼ぶこともあるってのに……っ」
凄まじい絶望のオーラだ。
なんというか、僕は女子人気が強いから何も言えない。皮肉になりかねない。
あとヒツギもそっと距離を取り始めている。すっごい気まずそうに視線を逸らしている。
まぁ、ヒツギもイッセー君に告白していたみたいだしね。あと他の女性陣もだけどデートはしているし。
たぶん、伝えたら匙君は失神する。
それとなく顔を見合わせて、お互いにそっと距離をとるという意思を確認して頷いたその時だ。
「あ、ヒツギ！　一緒に告白した身として、別クラスに甘んじてはいけませんわよ！　休み時間ぐらいイッセーといちゃつきますの!?」
「ちょっとぉ!?」
この子はこういう時空気を読んでくれない!?
あ、匙君が痙攣している!?
ほ、保健委員は何処かな!?

明星双臨編　第三話　できない奴ほど根拠のないアレンジにすぐ走る。これ大抵の物事に通じる真理なり

九成Ｓｉｄｅ

本日、グレモリー眷属は魔法使いとの契約関連で大忙し。
なので俺達オカ研非悪魔メンバーは、別口で活動だ。
具体的には―
「よしイリナ。思い付きで妙なことをするなレシピを可能な限り読み込んで順守しなさい。料理は愛情だけど、料理にするには技術が必須なのよ」
「あいたたたた!?」
―みんなで協力して差し入れを作るといった感じだ。
ちなみに料理のコツは「可能な限りレシピに忠実」がもっとも有効。メシマズの九割は「アレンジしたがる」「レシピ守らない」「味見しない」だからな。逆張りしていれば大半の料理は食えるようにはなる。
要はあれだ。取扱説明書を読んだり講習を受けるのは当然という話だ。運転免許の前に教習所で習うのは基本的である。独学だけで一発合格できるのは一握りの天才だけである。
まぁ自分に常に厳しいから他人にも厳しくなるタイプのカズヒねぇがいる限り、そんなあほ行動は撃墜確定だ。そういう意味では比較的安心だろう。
というわけだ。俺達は頑張って差し入れを用意しないとな。
「……燻製終わりましたぁ！　これで材料は完全に揃ったっす！」
「でかしましたのよアニル！」

アニルが即興で最終仕上げを終えた燻製をキャッチして、ヒマリはそのまま流れるように調理を始める。
「カズヒ？　その……ヒマリも流れるようにオリチャーなんだけど？」
「あなた自分が特例側になったとでも思っているの？　言っておくけど乙女ねぇは女子力めちゃくちゃ高い……念の為に様子は見ておきましょう」
カズヒねぇはバッサリ切ろうとして、しかしすぐに意見を翻して念の為確認向かっていった。
……一応言うけど、ヒマリはザイアで講習は受けているからね？
最低限の料理はできるからね？
俺がその辺ツッコミ入れるかどうか考えていると、隣のヒツギが首を傾げていた。
「しっかし、教会の私らや堕天使側の和地達が、悪魔と魔法使いの契約に関わるなんてねぇ？　ちょっと新鮮じゃん？」
あ～確かに。教会的には魔法使い組織って、割とグレーゾーンだからなぁ。
魔法そのものを使いたがらない教会の人物も数多い。錬金術の類に関しても、嫌な顔する連中は少なからずいるみたいだしな。
ただまぁ……。
「実は魔法使い組織と神の子を見張る者って、それなりに繋がりがあるんだよなぁ。いや、俺は直接会ったことないけど」
「マジで？　じゃあ先生とかと話しが弾んでるかも？」
そんなことを言いながら調理を続ければ、三種類の身にサンドイッチによる簡単な差し入れの完成だ。
スモークチキン・スモークサーモン・更に出来立てベーコンというメインを中核にすえたミニサンドイッチ盛り合わせ。
あくまで中核を燻製にし、それを補佐する形で味のバランスを整えた。そんな必要があるぐらい燻製の出来がいいから仕方がない。
さて、そろそろ向こうも話が落ち着いた……かな？

イッセーＳｉｄｅ

「おーい、そろそろ終わったかー？」
あ、九成達が入ってきた。
俺達は契約を求めている魔法使いの資料を送ってもらっているところだけど、もう差し入れができたみたいだ。
ただ、魔法使い組織の会長をやっているメフィスト・フェレスさんがアザゼル先生と古い付き合いだったことから、話がはずんだりとかでまだ終わってはいないんだよなぁ。
それにちょっと気になることもあったし……いや、いい機会だしちょっと聞いてみるか。
「……なぁ、皆。ちょっと禍の団が妙なことしてる可能性があるっていうんだけど」
「妙な事ですの？」
きょとんとヒマリが首を傾げるけど、割と気になる情報なんだよなぁ。
メフィスト・フェレス会長も、通信映像越しで頷いていた。
『簡単にまとめると、はぐれ魔法使いや禍の団に属している魔法使いがフェニックス家の者に接触したりする事例が多発してるんだけどね？　それと同じ時期にうちの組織が偽物なのに本物と同じ効果を発揮するフェニックスの涙が裏で売買されてることを掴んだんだねぇ』
「……うわぁ。それ絶対誠にぃ案件じゃない」
流れるようにカズヒが崩れ落ちそうになってた。

うん。確かに真っ先に考えるよな。
命と魂を司る幽世の聖杯なら、フェニックス家の細胞とかあったら本当にフェニックスの涙も作れそうだし。あいつのサーヴァントでもあるパシパエ＝カイニスの宝具なら、フェニックス家の人の細胞とかからフェニックスと同じ特性の魔獣とかを作れそうだし。
カズヒが元凶って言ったらある意味あってるし、カズヒが崩れ落ちそうになるのも分かるかも。
「……頑張ってぇ、カズヒ」
そっと肩を抱きしめるリーネスに、九成がめっちゃくちゃ動かしかけた手を震わせている。
頑張れ九成。いやホント頑張れ。
とはいえ、その辺は本当に不安だよなぁ。
特にうちはレイヴェルがいるわけだし。
「つってもたぶん大丈夫じゃん？　此処ってなんだかんだで警戒網ビッチリだし、私らがついてるなら下手な拠点より何倍も安心でしょ？」
「俺も同感だな。禍の団の連中も主流派閥がごっそりやられてるし、不穏ではあるが尚更だろ」
先生もそんなことを言っているし、他のみんなも大体がそんな雰囲気だった。
だけど、そこでため息が一つ。
何とかメンタルを復帰させたカズヒが、起き上がりながら肩まですくめている。
「流石にそれは楽天的でしょうに」
カズヒ的には安心じゃないってことか？
俺達が視線を集めていると、カズヒは少し渋い顔をしていた。
「油断は禁物よ。禍の団は基本的に元から「能力のある馬鹿」の組織。むしろ比較的考えられる頭目が相次いでやられたうえ、想定できる今のトップが自他問わない悲劇中毒のミザリ（誠に）で、象徴としてオーフィスから抜き取った力による新たなウロボロスだもの」
俺達はちょっと考えて、すっごく嫌な予感を覚えた。

確かにそうだ。色々ヤバイ。
オーフィスが象徴だった頃は、オーフィスの目的がグレートレッドの打倒と世界の狭間の掌握だったのを、利用だけしたかったから抑えていた。曹操も正気だったシャルバも、一応戦略とは考えていた。
ただミザリはやばい。あいつは完全に趣味で禍の団をやっているうえに、その趣味が他人の悲劇を自分も悲しむ形で味わいたいって奴だ。その為なら来世一つ使うぐらいの真似だってやる。
……あいつはかなり危険だ。何をしてくるかが全部分からない。
しかも禍の団のウロボロスは、オーフィスの力で一から作られたものだ。オーフィスの力を持っているけど全部じゃなく、オーフィスでもない。
作られ方次第だと、なんかやばいことになりそうだしな。下手するとなんていうか……ミザリと一体化するとかありそうだ。そうなるとミザリ＝天龍の二回り上ってことになる。
そうなったらやばいことになりそうで怖い。いや、ちょっとまじで。
俺が思わず肩を震わせていると、アザゼル先生はちょっと首を傾げていた。
「……だが、ミザリは血統を転生である程度打ち消しているようなものだし、性格がアレすぎるところもある。今のアイツで禍の団レベルの規模の組織を運営できるとはちょっと信じがたいな」
「それはそれで不安ですねぇ。逆に言うと、末端が暴走して何をしでかすか分からないですしぃ」
リーネスがそう言うけど、末端が暴走してどうにかできることってそんなにあるのか？
ただ、カズヒはかなり不安そうだった。
「そういうのは厄介だものね。得てしてそういう奴ほどろくなことをしないわ。曹操やシャルバを私達が倒したことも、私達が凄いんじゃなくて曹操やシャルバが大したことなっただけとか勘違いする馬鹿って必ずいるもの」
……え、そういう奴いるのか？

曹操って間違いなくめちゃくちゃ強いじゃんか。最強の神滅具持ってるし、それを抜きにしてもアザゼル先生やヴァーリの動きを見切ってだし。
俺達だってめっちゃくちゃやられたし、リベンジした時もいろんなものぶっこんで漸く決定打を入れられたってのに。
正直信じられないでいると、ルーシアが少し難しい顔をしながら頷いていた。
「……あり得ますね。かのアインシュタインは人の愚かさを無限なものと断言できるとおっしゃったそうです。もし禍の団のウロボロスがずさんな管理で愚者に持ち出されでもしたら、何が起きるか断言しきれませんからね」
あ、アインシュタインって俺だって名前ぐらい聞いたことがある奴じゃねえか。
そんな人までそんなこと言うの？　これ、マジでやばくね？
ちょっとみんなで目を合わせるけど、リアスがそこで咳ばらいをした。
「……仮定の話ばかりしても仕方がないわ。とはいえ、客分でもあるレイヴェルに何かあってはいけないでしょう。念の為、レイヴェルは出来る限り他の子達と一緒に行動するようにしてくれるかしら？」
「確かに、それぐらいしか今できる対策はありませんねぇ。何か用意できないか考えてみますわぁ」
リーネスもそれに頷いたけど、俺も気を付けないとな。
……漸く落ち着けるかと思ったけど、そうもいかないってのがなんていうかなぁ。

和地Ｓｉｄｅ

そんなことがあったが、そのあとも色々とイッセー達は忙しいようだ。
メフィスト・フェレス氏がそれなりに選別をしているが、それを通った契約を求める者達はかなり多い。これはまぁ、リアス・グレモリー眷属全体が異例なレベルの成果を上げていることも理由だ。若手四王《ルーキーズ・フォー》とも称される魔王派よりの若手悪魔は、眷属込みで勤勉で才能もある奴が多いからな。
そんな奴らを肩を並べて戦う俺達も、これからも頑張って鍛えないとな。ミザリとの決着はカズヒねぇがつけるべきだろうが、俺だって力になりたいしさ。
そんなことを思いながらちょっとのんびりしていると、本を片手に読み込んでいるシャルロットを見つけた。
「あれシャルロット？　何してるんだ？」
よく見ると本も悪魔文字だ。冥界の本か？
俺が首を傾げていると、シャルロットも俺に気づいて会釈してくれた。
あと本に目が行っていることにも気づいて、ちょっと微笑みながら本を掲げる。
「冥界で、眷属悪魔向けに出版されている指南書です。主のデスクワークを補佐する方法などが記されているんですよ」
そんなのがあるのかと感心していると、シャルロットは少し強い意志を感じさせる目で本を見る。
「今後も比翼連理の赤龍帝として、イッセーと共にありたいですからね。……サブマネージャーぐらいはしたいところです」
なるほどな。
俺もカズヒねぇとは比翼連理としてやっていきたいし、この心構えは見習うべきか。
……よし、ちょっと色々勉強しなおそう。
と、心構えを見直したがそれはそれでだ。

「……そういえば、吸血鬼の会合はそろそろらしいな」
「そうですね。遅くとも今月中に確定しそうです」
その辺がちょっと気になるな。
いや、吸血鬼との会合は色々ストレスが溜まりそうだが、問題はそこじゃない。
「……その今月中に、ちょっと俺達別件で関われない可能性があるんだよなぁ」
「まぁこちら側が多すぎると余計な警戒になりそうですしね。それは構いませんけどどうしたんですか？」
いや、それが―
「―後継私掠船団が独自に調べていた情報をもとに、日本の政治家相手に大捕り物が起きるかもしれないとかなんとか。裏取りが終わるのが今月中で、ことがことだから終わり次第速攻なんだよ。しかもレイダー部隊が出てくるかもしれないから、近隣の異能関係のプログライズキー保有者に応援要請があって」
―なんか別の意味でとんでもないことだしなぁ。

明星双臨編　第四話　ヘキサカリバー計画

九成Ｓｉｄｅ

「……糞ったれ。漸く……１０秒増えた……っ」
「いや、少なすぎだからな？」
イッセーに禁手関連で哀れまれた。
こいつだって歴代で最も才能がない赤龍帝とか言われてるくせに、何時の間にやら歴代でも異例すぎる成長を遂げている赤龍帝だ。禁手だって数時間は余裕で出せるし。
まぁ、イッセーの場合成長方法やアプローチが色々特殊だからな。異例なことしまくっているからイレギュラーなことが起きても納得できるというか。あとおっぱいに対する情熱が強すぎるからバグるし。
しかし、結構練習したんだがそれでも禁手持続時間は漸く１０秒増えたってところだ。
つまり単独使用３分１０秒。パラディンドッグで９分３０秒といったところか。
……パラディンドッグプログライズキーって、禁手の発動時間を３倍ぐらいにできるはずなんだよなぁ。それで十分いまだに届かないって凹むぞ。
イッセーですら、至りたてでも３０分使えたってのに。これ本当に問題だぞ。
パラディンドッグは総合性能ではサルヴェイティングアサルトドッグより下と言ってもいい。厳密には機動力方面では安定的に上だが、サルヴェイティングアサルトドッグは瞬間的なスラスター加速がつく。その為総合的に見て武装追加もあって、単体ではパラディン

ドッグの方が下なんだ。
　これはつまり、それだけ禁手というものが強力だということだ。禁手の発動時間を3倍にするというのはそれだけで恐ろしいことでもある。更に切り替えの余地がいくつもある以上、それでも十分すぎるほどに価値がある。だからこそ、使えない時の保険として肉体負荷を大きくしてでも攻撃性能を高めたサルヴェイティングアサルトドッグが選ばれたわけだ。
　それがどうした？　パラディンドッグは俺の禁手方面におけるへっぽこぶりから使いどころを見極め必須。逆に星辰奏者の死に難さから、サルヴェイティングアサルトドッグの方が使いやすすぎる。
「……イッセー。リーネスが絶対胃痛案件だろうから、後でマジねぎらいたいんだけど」
「確かに。結構頭抱えてたからなぁ」
　いやほんと、これどうしたもんだろうなぁ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「お疲れ様、部長」
「ええ、良い感じに出来てきているわね」
　苦笑交じりのカズヒが差し出したタオルを、リアスは苦笑しながら受け取った。
　カズヒ・シチャースチエは基本的に他人に厳しい以上に自分に厳しい。だが同時に、厳しいから珍しいだけで評価に値するものはきちんと評価する。好意に関してもむしろストレートに告げるタイプだ。
　故に彼女がねぎらうということは、本当にねぎらうに値するという

ことだ。
「しかし凄まじい技だったわね。あれはひいき目に見ても最上級悪魔クラスはおろか、龍王クラスにも届くであろう力よ」
「威力だけはね。色々使い勝手も悪いし、これからだわ」
そしてねぎらった理由が、リアスの編み出した新たなる技だ。
そんな技を素直に称賛しながら、カズヒは固有結界を解除する。
そして疲労回復の為にスポーツドリンクを取り出しながら、カズヒは思い返すようにうんうんと頷いた。
「タメは絶大に長いけれど、その分威力は最上級悪魔の上位にも届く。部下を率いることを前提とする上級悪魔が使う奥の手と考えるのなら、十分運用の余地があるわ。……発想を転換するだけでよくこんな技を考えついたわね」
「そこに関してはむしろ未熟よ。幾度となく命がけの戦いを経験しながら、私はいつまでもレーティングゲームにばかり目を向けていたということだもの」
カズヒの称賛に対して、リアスはむしろ己を戒める。
実際問題、今回の技はゲームでは決して使えない類だろう。
レーティングゲームという「可能な限り安全に配慮した競技試合」での運用を完全に排除したことで編み出したこの技。使えば間違いなくゲームの安全装置でも安全を獲得できないだろう。
裏を返せば、ゲームに拘らなければリアスはこれだけの技を放てるだけの余地があったということでもある。意識を切り替えきれなかったがゆえに足を引っ張ってきたこともあったのだと思うと、リアスはむしろ反省すらするべきだろう。
だからこそ、此処で止まる気は断じてない。
「まずは使い勝手を良くしないとね。できればだけど、今後も練習に付き合ってくれるかしら？」
カズヒの固有結界は、その性質上この技の発展の為に有効だ。
なんでもありの異空間に取り込まれることで、可能な限り何らかのトラブルが発生しても対処の余地が増える。正直凄く便利ともいえる。

しかし固有結界は術者の消耗が大きい秘術。そういう意味では了承はきちんと取りたい。
故にした質問だが、カズヒは躊躇うことなく頷いた。
「私も固有結界を少し煮詰めたいですから。お互い様ということにしておきましょうか」
その答えを聞いて、リアスはカズヒが少し変わっていることを改めて認識する。
かつても今も常に厳しいが、和地の愛を受け入れたことで壁が大きく取り払われた。自己嫌悪に由来する他者に対する距離感が、確実に縮まっているといえるだろう。
それはまるで、イッセーが眷属達の問題に体当たりでぶつかって改善に繋がった時のようだ。
そう思うと、思わずリアスは微笑んでしまう。
「お互い、いい男に出会えたものねっていうべきかしら？」
「……確かに。それに関しては胸を張って断言できますしね」
……この女、常に厳しいだけでむしろデレが真っ直ぐすぎる。
思わず戦慄を覚えるその華やかな雰囲気に、リアスは微笑みをちょっと戦慄でひきつらせた。

祐斗Ｓｉｄｅ

イッセー君やリアス部長がそれぞれ鍛えている中、僕達は僕達で顔を突き合わせていた。
「……さて、こんな話が上がっているんだが、どうすればいい？」
「特に教会の枢機卿で賛成意見が多いのよねぇ。とりあえず、まずは

試してみるってことになっているけど」
そうゼノヴィアとイリナさんが言うけど、僕はちょっと頭を抱えたくなった。
なるほど、こう来るか……っ
そこで見せられたのは、枢機卿の方々から提案されたらしいある計画と、それに伴うゼノヴィアへの協力要請だ。
確かにこの計画を試すには、どうしてもゼノヴィアが了承する必要があるだろう。むしろ強引に事を進めないようにしているだけ、この計画が行われた意図を考えれば穏健的ともいえる。
「エクスカリバーを再び分割する……か」
その計画名は「ヘキサカリバー計画」
近年エクスカリバーとデュランダルのレプリカが開発されたことに端を発する、発展形といえる計画だ。
ちなみにこの計画において、ある意味で最も強く関わっているのは英雄派といえる。より厳密にいうと、主流派幹部のジャンヌ・ダルクと、後継私掠船団のブレイ・マサムネ・サーベラだ。
きっかけは大王派に組みした後継私掠船団が、ある程度の自分達の情報を開示したことに由来する。
ブレイは神殺しを鍛造するというとんでもない真似をしたけど、その要素はある禁手に至ったことに由来する。
神器は僕と同じ魔剣創造。だが彼が至った禁手は、ある意味で最もその性質を進化させたものと言ってもいい。
魔剣創造はイメージした魔剣を神器の力で作り出す神器だ。そして彼が至った禁手は、魔剣そのものを神器の力で作り出すのではなく、加工の要素して神器の力を使う禁手。すなわち、「魔剣を創り出す鍛冶師となる」禁手。その名も魔剣鍛造（クリエイティブ・ソード）。
そしてこれを知った教会の枢機卿は、自分達のところで奉仕活動を刑罰して行っているジャンヌ・ダルクにある提案をした。
それは彼女が星辰光を使用する手法である「同時に複数の禁手を運用する」ことの応用で、聖剣創造版の魔剣鍛造を至れないかというものだ。

結果は見事に成功。錬金術師達の監修のもと、エクスカリバーやデュランダルのレプリカを作らせてみたら、彼らが手伝ったからとはいえ複数あっさり作ったり、更なる性能向上型を作ってしまったそうだ。

そしてこれを聞いた際、ある枢機卿が発案し、試作型が開発されているのがヘキサカリバー計画。

彼は元々悪魔に対して懐疑的で、しかし主の代行であるミカエル様の意志を尊重し、反対意見を持つ者達の説得などをしている人物だ。その過程において反対派の人達を活気づかせない方法がとれないか、何度も各勢力に打診を求めている。

そして彼が懸念事項としていることが、ゼノヴィアが使っているエクス・デュランダル。

エクスカリバーは長年殆どを教会が補完し、扱う為の人工聖剣使いまで生み出したほどのものだ。

ゼノヴィアは半分不可抗力とはいえ、半ば勢い任せに教会から足抜けして悪魔に転生した人物だ。半ば上層部も黙認してデュランダルを返却させなかったしミカエル様も了承しているが、更にエクスカリバーを全部預けることに、不満を抱いている者も少なからずいるとのことだ。

そこに対する懸念も考慮して試作されたヘキサカリバーは、いくつかの特徴がある。

一つは合一機能こそ持っているが、これらは分割された状態で作られていること。

一つはある特殊機能を盛り込んでいるだけで、一本一本の性能は分割状態のエクスカリバーに数段劣ること。

そして最大の特徴は、「エクスカリバーと共鳴することで、お互いの性能を向上させる」という点だ。

つまりだ。教会はエクスカリバーをあえて再び分割させ、ヘキサカリバー六本と統合。それでエクス・デュランダルとして機能するようなら、ゼノヴィアにはエクスカリバーを一本だけ使わせる方向にしたい。言外にそう言っている。

……また数奇な運命を辿っているね、エクスカリバーも。
思うところは多少あれど、流石にちょっと同情してしまう。
だけどまぁ、それもありなのかもしれない。
「確か、教会内部で和平に不満を持っているものが活発化しているんだよね？」
僕がイリナさんに確認をとると、イリナさんは少し肩を落としながら頷いた。
「ええ。それも一番多いのは戦士達なの。今回の件はそのガス抜きも兼ねているって話よ」
……確かに、分からないでもない。
僕だってエクスカリバーに対する憎悪が強い時に、和平なんて言われたら納得できないところもあっただろう。こと教会の戦士は冥界政府や神の子を見張る者と争ったこともある以上、犠牲となった同朋を思うと負の感情を抱きやすい。
そういったガス抜きは確かに必要か。
「となると、残念だけど早く進めた方がいいね。今日中にでも部長に報告しておかないと」
「思ったより納得が早いね。君はむしろ、エクス・デュランダルを運用させたい側だと思ったけど」
結構な頻度でエクス・デュランダルの本領を発揮する使い方を求めてきたから、うんざりするほど言われていたゼノヴィアは首を傾げている。
いや、僕としてはもっと使ってほしいよ？　単純な火力に限定するのは流石にどうかと思っているよ？
だけど……ねぇ？
「ことは僕達グレモリー眷属だけの問題じゃないからね。教会勢力全体で大きな問題にならないようにする為の手法となるなら仕方がないさ」
残念だけど、実際こっちの方が全体的にはいいんだろうさ。
それに、少し思うところはあるしね。
「……結果次第ではエクス・デュランダルとほぼ同等の機能を維持で

きるかもしれないんだ。それなら結局僕の悩みは変わらないしね」
「……そんなに私をテクニックタイプにしたいのか、君は」
半目で言われるけど、なってほしいよほんと。
テクニックタイプがほぼ僕だけというのは、間違いなく眷属構成として問題だって！

明星双臨編　第五話

九成Ｓｉｄｅ

学園生活は確かに平和だ。
こと俺達は過酷すぎる戦いを潜り抜けすぎているからな。どう考えても日常生活と戦場生活では過酷さのレベルが違う。両方を経験していればいやでも分かるし、分からない奴はひいき目に見て頭のねじがずれている。
だからこそ、この平穏を守る為には色々と勘が無ければならないだろう。
時として戦場や日常に区別をつけない奴が出てくるが、その理由は「日常生活だって何がきっかけで死んだり死なせたりするか分からない」というものだ。いわゆる死を想（メメント・モリ）えというやつだな。
それはそれで極論とか暴論だとは思うが、しかし何が起こるか分からないというのは事実だ。事実は小説より奇なりというしな。
……世の中には、シロップの洪水で死傷者百人越え禁酒法直前のアメリカで起きた実話ですとかいう事件もある。信じられるか、これ現実に起きた事件だぜ？　あとイギリスではビールの洪水で死傷者が出た産業革命時代に起きたこれまた実話ですそうな。
ダーウィン賞とかギムリー・グライダーとか、世界には信じられないことが現実に起きたりするものだ。人間が考えることができることは現実に実現できるとかいう意見が出るのもちょっと納得できそう。
……イッセーのおっぱい現象もこの類でいいだろうか。乳神とか信じられない現象まで起きるからな。
……というか、俺は学食で何を考えているんだろうか。

そんなこと思ったのは、珍しく学食で食べている今、テレビでやっている番組を見たからだろうか。
なんでもこの番組でやっているのは「世界のＰＭＣ特集」
軍事アレルギーなんてものもままある日本で珍しいと思ったが、やはり昨今の世界情勢があるのだろう。
サウザンドディストラクションによって流出した技術は、世界の軍事バランスを大きく変えうる可能性が生まれているうえ、治安の悪化にも繋がっている。
プログライズキーを使用するレイダーや、星辰体による超人である星辰奏者。この二つはいうなれば、歩兵の戦闘能力を兵器以上に底上げすると言ってもいい。ぶっちゃけどっちも一対一で戦車や攻撃ヘリを潰せるレベルだ。
加えてどっちも携帯性が高い上、ザイアの連中があほをやらかした結果犯罪者の手に現物が渡ることも数多い。結果としてマフィアや半グレが星辰奏者になるという事例も数多く、また優れた星辰奏者を引き当てればテロリストが正規軍の基地を落とすことも可能になっている。
人口最多国の中国やインドが覇権を握れそうだが、両国はそれなりに問題も多く、むしろテロが頻発化しているというらしい。
そしてそんな歩兵の能力向上は、ＰＭＣ（民間軍事会社）にとって大きな影響を与えている。
ＰＭＣは傭兵とは異なる為、兵器関連には所持できる限界点が多い。だがしかし、星辰奏者においてはかなりイージーになっているだろう。
発動体を警棒などの護身用武装として採用し、星辰光を利用した生身の戦闘に特化する。これにより星辰奏者を上手く取り込むことができたＰＭＣは、国家に口出しできるような規模に成長する可能性すら示唆されている。
そして今回の番組で取り上げられているのは、サウザー諸島連合国に住む若い日系人がＣＥＯを務め、近年中国の金持ちが資金援助を行って急成長を遂げている、星辰奏者を主体とする企業だ。

『それではサイリンさん。アマゴフォースという名称は、自分の名字からつけられているのですか？』
『ええ。世間的には復興の為に尽力した山中鹿之助の方が有名でしょうが、我が先祖の尼子家は元々一国を収める武士の一族です』
インタビュアーに応える若いＣＥＯは、微笑みすら浮かべている。
『流石に現代で一国を起こすのは非現実的です。ですがアマゴフォースに所属する星辰奏者は１０００人を超えており、これは国連加盟国でも小国では保持し得ない人数です』
『中国系の資産家から資金援助を受け、それを経由する形で世界各国から星辰奏者の適性がある人物を迎え入れた結果と伺っております』
インタビュアーの相槌に頷きながら、ＣＥＯの女性は微笑みすら浮かべていた。
『結果としてアマゴフォースは、米国海兵隊の星辰奏者部隊が演習相手として指名するほどの戦力となりました。もちろん護衛においても数多くの任務を成功させており、そういう意味では現代に適合した形で尼子家が復興した……とも言えますね』
そんな風に語るＣＥＯに、インタビュアーがずずいと迫る。
『破竹の勢いで発展を遂げていますが、今後の展望などは考えておられるのでしょうか？』
その言葉に、ＣＥＯは表情を少し変えた。
それはまるで、強い自負から何かに対する羨望に切り替わったようだ。
自分自身を誇るのではなく、素晴らしい者に仕えているかのような、そんな雰囲気だ。
『……しいていうなれば、この蒼天の元、人間が持つ可能性をＰＭＣとして追求したい……といったところですね』
『な、なるほど。少々漠然としている気がするのですが、具体的な目標は何かあるのでしょうか？』
『そうですね。……星辰奏者（エスペラント）は千差万別を体現しており、個人差で大きく能力や性能が異なる存在。となれば……我が社から英雄を輩出したい、とでも言っておきましょうか？』

そんな風に、一見すると冗談めかした感じに告げるＣＥＯ。
……なんだろう。ちょっとまじな感じがして寒気を覚えたんだが。
いや、ちょっと曹操を思わせる言い草もあって、真剣に嫌な予感すら覚えてしまった。
いやいや。まさかテロリストが堂々とテレビのインタビュー番組に出演したりとかないだろ。豪胆とかそういうレベルじゃないだろ。
『それでは時間となります。本日のゲストは国際ＰＭＳＣであるアマゴフォースのＣＥＯ、サイリン・アマゴさんでした！』
『アマゴフォースは民間からの御依頼にも対応しております。星辰奏者の護衛が入用でしたら、ぜひ日本語版ホームページからアクセスを』
そんなことを言っているサイリン・アマゴだが、まぁ英雄派ではないだろう。
……だってアマゴフォース、ついに異形社会にすら進出しているし。
なんでも異形社会が保有している星辰奏者に社員としての名義貸しをさせることで、実戦経験を積ませるビジネスを進めているとか。
流石にこれで正体がテロリストだったりとか、ちょっと豪胆すぎだろうし……なぁ？
俺がそう自分を納得させながらうどんをすすっていると、スマホにメールが届いた。
……裏取りが完了したとのことだ。まじでアタリかよ。

祐斗Ｓｉｄｅ

僕は昼休み時にカズヒと出会い、少し話をしていた。
「……で、カズヒはヘキサカリバー計画についてどこまで知っているのかな？」
「プルガトリオ機関では採用しない予定よ。まぁ、理由はわかるんじゃないかしら？」
気になっていたことを訊いてみるけど、まぁ想定内の返答だね。
エクスカリバーはいうなれば、教会にとって価値のある武装だ。それを転生悪魔に独占させない為のヘキサカリバー計画なら、暗部であるプルガトリオ機関にはあまり融通したくないものだろう。優先的に配備するのは表側になるはずだ。
とはいえ、流石に気になるからね。
「ちなみに、誰に与えられるかって話は聞いているかい？」
「助祭枢機卿であるエヴァルド・クリスタリディ猊下はほぼ確定で、選定最有力候補は支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）。破壊の聖剣（エクスカリバー・ディストラクション）と擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）はゼノヴィアとイリナでこちらもほぼ確定ね」
……なるほどね。
ゼノヴィアとイリナさんはかつて使っていたエクスカリバーが確定になる。これに関しては、和平の顔ともいえるグレモリー眷属に配慮し、また天使長であるミカエル様のA（エース）にエクスカリバーというのは妥当なところか。
そしてエヴァルド・クリスタリディ。
僕も和平が進んだことで聞いたことはある。
「……かつて三本のエクスカリバーを使っていた、数少ない戦士上がりの枢機卿」
「ちなみに、全部のエクスカリバーを使いこなせただろうとも言われているわ。ヘキサカリバー計画の意義を考えれば、前線を引いているとはいえあの方が選出されるのは間違いないでしょう」
現代における最強のエクスカリバーの使い手に、最強のエクスカリバーを組み込んだヘキサカリバーが届く。
非常時の戦力として考えるにしろ、信徒達の士気向上を考えるにしろ、これは重要か。

とはいえ、残り四本のエクスカリバーが中核となるヘキサカリバー。それらの使い手がどうなるのかは気になるところだね。
相応の使い手か相応の立ち位置の物になるだろう。……凄く気になる。
「……まぁその件だけれど、クロード長官から面白い話を聞いたわ」
「というと？」
僕が促すと、カズヒは苦笑すら浮かべて肩をすくめた。
「教会でもヘキサカリバーの保有者には、戦力以上にある種の象徴になってほしいみたいなのよ。で、和平の象徴であるこの駒王町在籍メンバーにもう一振りぐらい預けていいんじゃないかって話になっているわ」
……そうなのか。
教会からすればゼノヴィアにエクスカリバーをすべて預けることに抵抗がある者もいたのだろう。だが同時に、和平を推し進めたい教会上層部からすれば、和平の象徴でもある僕達駒王町メンバーに使い手が複数いるのは都合が良いということか。
ふむ、誰が選ばれるのか興味は沸くね。
可能な限り教会のメンバーから選ばれるだろうから、最有力候補はアニル君だ。ルーシアちゃんは射撃戦主体だからエクスカリバーと相性は微妙だし、ヒツギは聖剣創造があるからかぶるしね。
それにアニル君はペンドラゴン家の分家だ。エクスカリバーには縁もあるだろうし、その点も気になる。
だけどその場合、どのエクスカリバーが選ばれるのかが気になるね。
「残っているのは、天閃の聖剣（エクスカリバー・ラピッドリィ）、透明の聖剣（エクスカリバー・トランスペアレンシー）、夢幻の聖剣（エクスカリバー・ナイトメア）、祝福の聖剣（エクスカリバー・ブレッシング）の四本だね」
「他の選定者との相性とかもあるでしょうけど、どれを選んだにしても戦術の幅は広がるでしょうね」
うんうんと頷きながら、カズヒもちょっと興味がありそうだった。
……とその時、僕達のスマートフォンにメールが届く。
気になって見てみると、僕が眉をひそめたタイミングでカズヒも眉

をひそめていた。
「……部長から吸血鬼との会合で日取りが決まったそうだよ。そっちもかい？」
最近は同時にメールを送る機能もあるからそれかと思ったけど、カズヒはため息をつきながら首を横に振った。
「残念ながら別件。……最近裏ルートで妙なものが出回っているっていう、プルガトリオ機関からの連絡よ」
妙な、もの……？
「……使うと超人になれる宝石ですって。名前は―」

アザゼルＳｉｄｅ

「……オーバーナッツ、ですか？」
俺は神の子を見張る者が掴んだ情報を、たまたま一緒になったロスヴァイセに話していた。
いやほんと、なんだこりゃって感じだな。
「ああ。ぶっちゃけるとサイラオーグ・バアルみたいなことができるようになるらしい。しかも使う人間を選ばないってことで、ある意味でレイダーや星辰奏者（エスペラント）よりやばいって言っていいな」
あれはレイドライザーや発動体を携帯する必要があるが、これは使用すれば半永久的に使えるって代物らしい。
既に米国陸軍が接触し、レイダー部隊を投入して苦戦したって話だ。
プルガトリオ機関も接触して戦闘しているらしいし、多分だがカズヒにも伝わっているだろう。

だがこいつらは実にやばい。
具体的に言えば、オーバーナッツを使用した連中は闘気を身に纏って戦闘を行うことができる。
戦闘能力は中級悪魔に喧嘩が売れるレベルとも言われている。しかも裏ルートで流されているそれは、日本円換算で百万円以下だって話だ。
これだけの代物がそんな感じで流通すれば、人間世界は更に荒廃しかねない。
今の人間界が悪い意味で変化するのは、俺としても避けたいんだがな。
「……厄介なことになりましたね。禍の団もおかしな動きをしているようですし、これはこちらも警戒が必須では？」
「同感だな。今後を考えると相応に備えが必要になるだろうさ」
ロスヴァイセの懸念ももっともだ。
こりゃ、こっちも色々動いた方が良さそうだな。
ま、それならそれで都合がいい。
「……一応、神の子を見張る者も備えはしているんだがな」
「どんな備えをしているんですか？」
ふっふっふ。その言葉を訊きたかった。
「……神の子を見張る者がこれまでに会得したザイアから流出した技術をブラッシュアップし、新たなる力を編み出したのさ。そう―」
俺はその内容を簡潔に聞かせ―
「―なるほど。それは今後の力になりそうですね」
―良い感じでロスヴァイセが納得してくれた―
「ですがお金がかかりすぎです。お金はもっと大事に使うべきものですよ。第一アザゼル先生は勝手に組織の金を使って妙な研究までやっていると伺っておりますし―」
―と思ったらシームレスに説教に繋がった。
しまった。百均ヴァルキリーに金のかかる話は禁句だった!?

明星双臨編　第六話　東京大混乱！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ある日の都心の深夜。そこで大規模な作戦が行われた。
警察、自衛隊といった表の戦力は当たり前に動員。更に五大宗家という裏の組織もまた集まり、一つの高層マンションを囲み、部隊すら突入させた。
そして同時タイミングで報道がなされた。
『信じられません。つい先ほど内閣と警視庁の緊急合同会見で、野党議員である小面原拾杯氏に外患誘致罪をの容疑で逮捕すると発表がありました！』
『今年初夏に起きた謎の弾道ミサイル発射事件。領海内から都心近郊の駒王町近辺で撃墜に成功したあれを発射したテロ組織と繋がり、様々な情報を提供していたとのことです』
『小面原氏はそもそも野党議員になる前からテロリストと繋がっており、日本政府は警察はおろか自衛隊からもレイダー部隊及び星辰奏者（エスペラント）部隊まで投入すると説明がなされています！』
『逮捕は今からとのことですが、その上で講師て内閣から発言があるということは、小面原氏を逃がさないという強い決意の表れと思われ―』
テレビのチャンネルを変えてもこのニュース一色になっている中、扉の向こうから大きな音が響いていく。
玄関のドアがこじ開けられるどころか、蹴り破られるすら通り越して粉砕される。そしてすぐに固い足音が連続して響いてきた。
そして破壊されるドアの向こうからバトルレイダーが姿を現すのを、小面原拾杯は静かに見た。
「……小面原拾杯！　貴方を外患誘致罪の容疑で逮捕する！」
「やれやれ。まさか真っ先に気づかれるのが私とはな」

軽く肩をすくめる小面原に、突入したＳＡＴのバトルレイダーが、装甲の内側でしかめっ面になる。
彼は小面原が所属している野党に投票したことがある為、内心ではこれが誤認逮捕であってほしいと心から願っていた。
だからこそ、ここまで慌てることなく肯定と受け取れる言葉が出てくることに忸怩たる思いを覚えていた。
だが同時に、小面原が一切慌てていないことに懸念すら覚える。
これだけの事態になっている以上、小面原はどうあがいても復権はできないだろう。また外患誘致罪ともなればただでは済まない日本ですら基本死刑という超重罪。
にも関わらず、避難すらせずにこの余裕を見せている。
その時点で、突入したＳＡＴは備えができていると確信した。
念には念を入れ、小面原の住んでいる一室は完全に包囲している。上下左右の部屋にも部隊を突入させており、さらにマンションの外にも自衛隊が舞台を待機させているほどだ。
更に相手が禍の団に繋がっていることを踏まえ、事情を知っているメンバーだけを厳選したうえで周囲の異形にも強力を要請。もちろん日本の異能主体組織である五大宗家も動員している。
その上で警戒をしつつ、ＳＡＴは小面原を拘束しようとして―
「君達の油断は二つだ。外と私だよ」
―その瞬間、小面原が異常な動きでＳＡＴを攻撃する。
咄嗟にガードを間に合わせたＳＡＴの隊員は、しかし衝撃で大きく後ろに弾き飛ばされる。
更にその瞬間、マンションの外から大きな爆発音が響いて衝撃でマンションが揺れる。
外周部は半径１００ｍほどに渡って警戒網が敷かれている。その上で衝撃がマンションを揺らすほどの事態が起きるなど、ことはあまりに大きなレベルと言ってよかった。
そして同時に、小面原は一切動揺していない。
その危険をレイダー部隊が悟ったその瞬間、小面原は大きく脱出を敢行した。

イッセーＳｉｄｅ

『し、信じられません!? この日本で、東京都内で、これだけの規模の戦闘が起きるなどありえません!?』
大慌てするリポーターがそういう中、テレビ画面ではなんていうか凄いことになってる。
外にいた自衛隊や機動隊のバトルレイダーが、外からどんどん出てきたレジスティングアントレイダーや、以前冥界のパーティー会場を襲ったレイダーの連中と戦いまくる羽目になってる。
……禍の団と内通している政治家を逮捕するっていうから、禍の団から何かしらの妨害が出てくるとは思っていた。
にしたってこれは大事だろ!?
「……レイダーと星辰奏者なら表の世界にも出ているが、かといってここまで大々的に動くとはな」
「それだけに絞れば、人間界に対するテロ行為も比較的隠す必要はないですが……っ」
吸血鬼との会談の為に集まったアザゼル先生や、天界からのスタッフにしてゼノヴィアの姉貴分でもあるグリゼルダ・クァルタさんが渋い顔をするのも当然だ。
あいつら、一周回って開き直った真似してやがる！
リアスも渋い顔をしていたけど、だけどため息を一つつくと切り替えた。
「……どちらにせよ、今の私達では手が出せないやり口だわ。まして私達もまた、別の意味で厄介なことをするのだもの」

そこまで言うほどなのか。吸血鬼との会談ってのは。
一応テロと化してるわけじゃない連中相手にそこまでとか、吸血鬼ってどんだけあれな連中なんだ。ギャスパーはギャスパーで吸血鬼として参考にならない感じが凄いから、全く分からねえ。
俺が首を傾げていると、リアスは静かに立ち上がった。
そしてテレビ画面を、まるで頼もしい者を見るかのように見ている。
「それにあそこには和地やカズヒが向かっているわ。敵がどう動くかにもよるけれど、決してこっちにとって最悪にはならないでしょう？」
……っ
そうだ。そうだった。
あっちにはカズヒと九成が、プログライズキーを使う皆と一緒に向かっているんだ。
仲間達が頑張っているんだ。それも、九成とカズヒもだ。
なら信じよう。あいつ等なら、禍の団の好きにはさせないって確信できる。
……頼んだぜ、皆！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「嘘でしょ……あり得ない。ここ、日本……」
もはや実況を行う気力すら失った、報道チームはへたり込んでいる者すらいた。
無理もないといえば無理もない。日本は世界的に見ても、こういった大規模な武力行使的事件が起き難い土壌がある。

元々銃火器や刀剣類の規制は厳しい部類であり、また憲法九条の存在もあってか、そもそも大規模な軍事力による問題解決その物に抵抗感がある者は数多い。むろん国際的にみて買いに分類される問題点も探せば多いだろうが、こと大規模な殺傷事件やテロの類においては世界的に見ても数少ない部類だろう。

だが同時に、そういった危機が少ないということはそれらに対するノウハウが足りないことを意味する。

地震の発生率やその規模が日本に比べて大きく劣るアメリカなどの国家で耐震基準がかなり低いように、リソースというものがある以上、必要性が薄い物に対策は取られづらい。

故に、都心で中隊規模レベルの武装勢力による戦いなど、日本人にはどうしても耐性がなくなっている。

ゆえに、報道陣が完全に混乱して動けなるなることは仕方がないことでもある。

だが同時に、それが致命的に行けなかった。

―気づいた時、戦闘の余波で寄りにもよって大型のバンが一台、彼らに向かって吹き飛ばされていた。

反応などできない。そもそも、理解が追い付いていない。

故に当然のように彼らに向かってバンは直撃―

『リスターティングディストピア!!』

―する前に、四方八方から打撃が叩き込まれ、跳ね返された。

「……はい？」

もう呆気に取られて何も分からなくなっている報道陣の後頭部が、優しく軽めに張り倒された。

それで我に返った彼らは、その姿を見た。

「……無事なようね。しゃっきりしなさい」

銀のインナーと黒の装甲で身を包んだ、レイダーよりスマートなその戦士を。

「ここはもう既に戦場だけれど、更に激しい戦いになるわ。命を懸ける覚悟がないなら、今すぐ逃げることを勧めるわ」

女性と思える声を放つその戦士は、そのあと一切こちらを振り返る

ことなく、こちらに気づいたレジスティングアントレイダー達に向き直る。
「……死ぬ気で撮るか死ぬ気で逃げるか、今すぐ決めろ！　十秒だけ稼いであげる！」
そしてその瞬間、戦士はレイダー達を相手に大立ち回りを実行する。
その光景を見て、彼女達は決意を新たにした。
「あ、ありがとうございます！　……逃げるわよ！」
全力疾走での逃亡。それに誰もが頷くことすらなく同意して疾走する。
下手に感化されて暴走することなく、自分達の命を大事にしても逃亡を選択。
これに銀の戦士―すなわちカズヒが変身する仮面ライダー道間リスターティングホッパー―は、ほっとしたように肩をすくめた。
こういう英雄的行動に浮かされて、無謀なことをする者は数多い。
それが問答無用で悪いとは言わないが、冷静に自分達を見返してそれを選ばないことも悪いことでは決してない。
故に、カズヒはアタッシュショットガンとアタッシュナイダーを左右の手に構え、更に道路を封鎖するようにコンテナを展開する。
「堅気の奴には危害を加えさせないわ。そして―」
『ＢＵＲＳＴ！』
『ＣＲＹ！』
静かに腰を落とし、悪敵銀神（ノーデンス）は宣言する。
「お前ら全員、この場で邪悪と断定する！」
『ダイナマイティングカバンショット！』
『ハウリングカバンシュナイデン！』
あとは語るまでもない。
尊ばれるべき正義の為に、邪悪を穿つ銀の魔弾。悪祓銀弾（シルバーレット）の決意はいまだ、翳ることなく輝いている。
まして、今レジスティングアントレイダーになっている者は半グレ集団。こういった事態に備え、自分まで被害者にする形の詐欺事件の

手はずを整えることと引き換えに、薬物まで使った催眠療法でかけた暗示による保険の陽動戦力。小面原拾杯の保険如き。

正義の味方で悪の敵たる、カズヒ・シチャースチエをしのぐに能わず。

明星双臨編　第七話　地下の大捕り物

九成Ｓｉｄｅ

カズヒ姉さん、飛ばしてるなぁ。
「これは負けれられませんわよ、和地！」
「同感っス。俺らもしっかり仕事をしないと！」
先行するヒマリとアニルを前衛として、俺達は小面原が移動していると思われるルートに先回りしていた。
都心の水没を透ける為の排水用の区画だが、保険として警戒していたルートを通るレベルでどうにかしてくるとはな。
最近裏ルートで出回っている、禍の団がばら蒔いていると思われる超強化アイテム「オーバーナッツ」。それを小面原は自分に使用して保険にしていたらしい。
既にレジスティングアントレイダーがバトルレイダーとやりあっており、更に都市の各部から冥界でも使用された特殊なレイダー部隊が仕掛けている。
最も日本のバトルレイダー部隊は、基本的に数を揃える段階だからこそ精鋭に配備されている。カバーしきれない部分はカズヒ姉さんや、ルーシアの援護を受けたヒツギが回っているので大丈夫だろう。
何より心配する前に、俺達は俺達の仕事をしないとな。
「……三人とも、どうやらこのルートで当たりみたいよ」
と、タブレット片手に自衛隊や機動隊と情報を共有していた鶴羽がそう告げる。
同時に、センサーが複数人の足音を検知。どうやら近づいて来ているようだ。
俺達は無言のハンドサインで最低限の連携体制をとると、タイミングを見計らう。

「……まったく。杞憂にすめばよかったのだが、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）を甘く見すぎていたか」
「禍の団（カオス・ブリゲート）の信頼関係は薄いとはいえ、南海同盟でも正体を知る者が少ない貴方についてここまで調べ上げていたとは、忌々しいことです」
声の聞こえ方からして、あと三十メートルといったところか。
「世界の富を独占して使い潰すろくでなしどもを潰すには、相応の手段が必要だ。今の世界を良しとする異形共も含め、叩き潰す為にはそれなりの草が必要だというのに……っ！　私の十五年間がこれで台無しだ」
……このおっさん。最初っから売国奴として国の情報をテロリストに売る為に侵入してたのか。
公安も気づけよ。いや、此処は小面原達の手腕が上手かったことにするべきか。
なんだかんだで所属政党でも結構な有力者だしな。この様子だと色々な国の政治家も参加している勢力なのが南海同盟みたいだし、それなりに手回しはできると考えるべきか。
味方と敵の有能無能はケースバイケースだ。客観的材料も乏しいのだから、此処は小面原が有能だったと考えた方が安心安全だろう。
というわけで、そろそろ奇襲ができるタイミングか。
俺達は視線で頷きあって、仕掛ける為に力を籠め―

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

その時、誰もが思わぬところから足音を聞いた。

それに誰もが動きを止め、警戒心を急激に高めあう。
九成和地達とは違う方向の地下道から、小面原達に向かって足音が響いてくる。
小面原を守る為に、南海同盟が開発した独自レイダー、スカラベレイダーシリーズの二個分隊が、前衛を前に出す形で警戒する。
護衛の一個小隊の内、一個分隊は殿で逃走経路の追撃を防ぐ為の破壊工作を行っている。完了しているとはいえ、到着までにある程度の時間がかかるだろう。
だからこそ、この場は自分達だけでどうにかするべきであり―
『ＣＵＳＴＯＭ！』
―ゆえに、対応が行って遅れたのは失策だった。
『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……』
その音は、これまで禍の団に幾度となく被害を与えてきた敵手のそれと同じ。
すなわち―
『ショットライズ』
―ショットライザーによるものだと悟った瞬間、放たれるライダモデルが先制攻撃といわんばかりに小面原を襲う。
素早く伏せることで回避する小面原だが、その勢いでショットモデルは闇の中へと戻る。
『Ｎｅｖｅｒ　ｇｉｖｅ　ｕｐ！　Ｗｅ　ａｒｅ　ｅａｒｔｈ　ｄｅｆｅｎｄｅｒｓ！』
その音と共に姿を現したのは、仮面ライダーを先頭にした謎のレイダー部隊。
レジスティングアントレイダーと似通いながらも明確に異なったそのレイダー部隊は、しかしレジスティングアントレイダーと同様に人型戦闘ドローンであるレジスティングアーミーを展開して、攻撃を仕掛ける。
だが、護衛部隊も決して無能ではない。
スカラベレイダーはその共通設計として、プログライズキー状態での物質創造能力を限定的に保有している。

これによる煙幕やレイドライザーを生成することで隠匿性や緊急対処能力を高め、戦闘時は派生機種ごとに武装を展開する。
故にガトリングガンを生成しての制圧射撃や対空迎撃を担当するブラストスカラベレイダーが攻撃を行うことで、レジスティングアーミーは瞬く間に数を減らす。
だが、そこに突貫する二体のレイダーが現れる。
片方は機敏な動きで弾幕を交わし、片方は頑丈かつ修復される装甲で強引に突貫。
それによりブラストスカラベレイダーの動きが制限され、それに呼応するように新型アントレイダーによる攻撃が行われる。
……そして同時タイミングで、都市部でもこの謎のレイダー部隊による戦闘が行われていた。
これにより戦線はどの勢力にとっても混乱状態になり、誰もが完璧に隙を創り出してしまう。
今ここに、戦線は混迷に包まれ―

「そうはいくか！」

九成Ｓｉｄｅ

この状況下で第三勢力とかふざけるな!?
俺は咄嗟に突貫し、星辰光による障壁でとにかく誰もが移動を困難になるようにしながら、飛び上がって小面原の確保を狙う。

「させると思うか異形の狗が！」
「ＡＩＭＳの恥さらしが！」
今ので所属も完璧に分かったよ。
ザイアの連中、残党勢力を持ってるとか想定外だ。いや、想定しておくに越したことはなかったな。
仕掛ける一対のレイダーは、どう考えてもリベレイティングキャットとサルヴェイティングドッグのそれだ。レイダーだとああなるのか。
だが悪いな。俺は一人じゃないんだよ。
「させませんのよパチモノー！」
「こっちも仕事はするんだよ！」
ヒマリとアニルが機動力で割って入り、レイダー部隊との乱戦に奴らを引きずり込む。
同時に横合いから突貫するレジスティングレイダーになった鶴羽が、更に聖十字架で紫炎をまき散らして混乱状態を加速させる。
短期決戦しかないな。この場で突貫して小面原を確保し、全力で離脱して禍の団にザイアを押し付ける！
「援護頼む、鶴羽！」
「分かってる！」
とにもかくにも、この隙にさっさと―
『ＣＵＳＴＯＭ』
「……判断は早い、だが６０点だ」
―その瞬間、俺達は聞き覚えのある声を聴いて一瞬だが反応遅れた。
すぐに我に返って動くが、この一瞬の隙は致命的といえる。
「……っヒマリ先輩！」
ヒマリはアニルがすぐ近くにいたこともあって、窮地は抜けれた。
だが、俺達は間に合うか……っ！
『ドーピングブラスト』
その瞬間、紫炎をぶち抜いて弾丸が放たれる。
俺は射線にいた鶴羽の足を払い、同時に対応する。

この場における、最適解は―っ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

『マグネティックスターブラスト！』
和地は咄嗟に、上部に向けて一斉射撃による必殺技を叩き込む。
同時に、射撃によって薄らいだ紫炎を突っ切った敵仮面ライダーに対し、魔剣の投擲で一瞬だけ突貫を阻害。
これにより、落ちた瓦礫は和地を呑み込んだが、同時に地下道が大きく陥落して小面原も巻き込まれる。
「か、和地ぃいいいいいっ!?」
思わず驚愕する鶴羽だが、しかし即座の反応だけは間違ってない。
相手が揺らいだ一瞬のスキをついて、拘束狙いで腕をとる。
そのまま組み伏せつつ獲物を向けることで、敵の動きを封じて捕縛に持ち込もうとし―
「７０点だ南空鶴羽。少しは九成和地を見習うといい」
―その瞬間、まるで流れるように地面に叩き付けられた。
その理由は単純明快。
鶴羽が腕をとって拘束使用する動きに合わせ、全身運動で勢いを利用した空中投げを叩き込んだのだ。
全体重と落下速度だけでなく、その場の蹴りと体裁きで勢いまで乗った衝撃に、鶴羽は一瞬だが力が緩む。
そのまま反動で跳び起きる動きと併用で、敵仮面ライダーは束縛から解き放たれると即座に下がる。

「撤収だ。責任は俺がとるから、小面原の確保は諦めるぞ」
「……よろしいので、小隊長？」
部下と思われる新型レイダーの一人が、スカラベレイダーを警戒しながら訪ねる。
だが仮面ライダーは静かに首を横に振った。
「戦闘を行いながらがれきを撤去する暇はない。人類の裏切り者を討てぬのは残念だろうが、まぁ三大勢力もしっかり絞って他の裏切り者を捕縛するだろう。温いと思うがここは良しとするぞ」
『『『

は奥歯を噛み締める。
「……分かってますよ、教官。相変わらず嫌いな奴にも正論で指摘するんだから……っ」
その声は、戦闘の音でかき消された。

「と、とりあえず、早目に助けて……」
「「あ、はい！」」

明星双臨編　第八話　復活の影

九成Ｓｉｄｅ

ことが終わって駒王町に帰還するのは、本来なら現地で一泊してからの予定だった。

これは大捕り物になる為どうなっても疲れるだろうという日本国側の気遣いであり、高級ホテルの準備もしてくれている至れり尽くせりな対応でもある。

だが俺達はそれを今回断って、すぐに駒王町に帰還した。

……余談だが、流石にちょっと申し訳なかったので、ホテルの部屋代は貯金で払うと言ったがそこで揉めた。最終的にカズヒ姉さんの提案で、サポートメンバーとして派遣されていたプルガトリオ機関の日本担当部隊であるジュリエット部隊に提供されたらしい。

日本はそのごった煮性質上、宗教的な文化や要素なども入ってきやすく日本通の異形も多いことから、プルガトリオ機関では日本専門部隊を作っているとか。プルガトリオ機関が凄いのか日本が凄いのか。

まぁそれはともかくだ。今回はぶっちゃけ割とやばいので、俺達はとんぼ返りで駒王町まで戻ってきた。

そして当然だが、イッセー達も吸血鬼側との会合で大変だったそうだ。

純血の吸血鬼は血統主義の悪魔を更にやばくした連中なので、性格的な面はこの際全部ぶん投げて本題に入る。

具体的に言うと、吸血鬼の二大派閥で戦争が起こりそうになっている感じらしい。

ギャスパーがいた男尊主義のツェペシュ領と、今回接触してきたエルメン何某が所属する女尊主義のカーミラ領。そんなカーミラ領に、吸血鬼の欠点が大きく緩和された吸血鬼が嫌がらせをしているらし

い。
　更にギャスパーの恩人でもあるハーフヴァンパイア、ツェペシュ家に生まれた女吸血鬼のヴァレリー・ツェペシュに聖杯が宿ってしまったことから、まず間違いなくそれによるものと思われているとか。
　どう考えても怪しいわけだが、まぁそこは一旦置いておこう。
　こっちもこっちでやばいことがあるからな。まずはそっちの説明だ。
「……単刀直入に分かっていることだけを話します。……ザイアの残党が動き出しました」
「マジか。あいつら残党が集まって新型プログライズキーとか開発できるレベルの戦力が揃ってたのかよ」
　先生が思わず呆れ半分感心半分で言うが、まぁ気持ちは分かる。
　ザイアはダメな方向で突っ走った新興宗教のノリだからな。しかも無駄に能力があるから始末に負えない。
　……そんなザイアの残党がいたこともだが、そいつらが組織だって動きを見せてきたことも質が悪い。
　間違いなく、サウザンドディストラクションの頃よりやばくなっているだろう。先鋭化というか狂暴化というか過激化というか。
　そして実際問題だが―
「……しかも実働部隊に教官がいたなんて最悪ですの」
「同感。しかもショットライザー使ってるところから言って、ＡＩチップの移植手術ができるレベルに達してるわけだしね」
　ヒマリも鶴羽も凹み気味だが、気持ちはよく分かる。
「細かいところはこっちに来てから聞くつもりだったけれど、件（くだん）の仮面ライダーに変身している奴は、知り合いなの？」
　カズヒねぇが訊きたいこともよく分かる。とりあえずそこについても話さないとな。
　というよりあの人、非常に厄介だし。
「……ＡＩＭＳにおける拳銃射撃術と捕縛術の教官でもある、グロウ・セブンデイズ。俺達が戦った仮面ライダーは十中八九あの人だ」
　あの人、いろんな意味で厄介なんだよなぁ。

「あの人マジで厄介なのよね。ザイアに所属した理由が理由だし」
鶴羽もうんうんと頷いているが、確かに本当に面倒だ。
「異形側の人からの説得なんて、絶対聞きませんのよぉ」
ヒマリの凹み気味だしな。さもありなん
「そ、そんなに人の話を聞いてくれない人なのか？」
「ザイアってそんなイメージあるけど、そんな感じ？」
ヒマリの頭をなでて慰めながらイッセーとヒツギが訊くけど、そうじゃない。
いや、ある意味そっちの方がましだったかもしれないな。
鶴羽もそう思っているのか、頭をガシガシ書きながらしかめっ面になった。
ああ、あの人ある意味でめっちゃ面倒くさいからなぁ。
「……あの人、自分から断言する白人主義の差別主義者なのよ」
『『『

命体を許容できるわけがない」って言ってました。ちなみに元米国警察官ですけど「人種差別的対応をしないでいられる自信がなくなった」から辞職して、その戦闘技術からザイアにスカウトされたそうです」

鶴羽、お前そこまで聞いてたのか。

まぁ、そういう真面目かつ自分を客観視できる人だ。そして職務に対しては常に誠実で成すべきことを成さんとする人でもある。

そして、そんな人が所属している勢力ということは―

「……ザイアの残党勢力が組織的に活動しているわけねぇ。もしかすると、結成そのものは早くてこれまで準備をしてきただけかもしれないわねぇ」

リーネスがかなりガチな表情でそう推測するが、だからこそヤバイ。

つまり動き出したということは、それなりに算段があるということだろう。これ、もしかして不味くないか？

暗部出身のカズヒ姉さんとか、謀略にも多少離れているだろう先生がかなり渋い顔をしているしな。この二人が渋い顔をしていると、絡め手とか番外とかで既に手札ができていると考えるべきかもしれない。

いや、そこも気になるがそこじゃないな。

「まぁそれは上の方で色々考えてもらうとして、まずは吸血鬼の方だな」

俺は首を振って意識を切り替える。

実際問題、目の前の問題を意味もなく後回しにしていいこともない。まずはしっかりと自分達の問題をある程度解決しておかなければ、ろくなことにならないしな。

「そうですね。吸血鬼に聖杯が渡っている事態は看過できないでしょうし、ザイアに関してはやはり一つの街レベルでどうにかすることでもないでしょう」

「どうします、部長？　ギャスパー君は行くつもりですが、彼だけを連れて行くわけにもいかないでしょう」

シャルロットと木場の言葉に、リアスも一つ頷いた。
「……そうね。とりあえず、私の考えを聞いて頂戴」
そう前置きして、リアス部長は目を開いた。
「まずザイア残党については、魔王様達に伝えて判断を仰ぐべきでしょう。こちらについては表の国家に連なる案件である以上、裏の側である私達が独断で動くようなことではないもの。そしてギャスパーについてだけれど……」
そう言いながら、部長はギャスパーの頭をそっとなでる。
小さく微笑んでから、部長は俺達を見回した。
「まずは私がツェペシュの方に向かい、ヴラディ家当主と話をするわ。カーミラが私達に接触するほどの事態が起きているのなら、向こうもいい加減対応するしかないでしょうしね……カーミラ側もそれぐらいのことは想定できるでしょう」
まぁ、妥当だな。
そもそもギャスパーの件がある以上、あんな話をしたのならこうなることはカーミラ側も読めているはず。下手にこじらせてヴラディ家に付かれても困るだろう。
と、そこでイッセーが拳を握り締めて気合を入れていた。
「ならすぐにでも行きましょう！　できればその流れで、ヴァレリーって人に話をすることも―」
「いいえ。眷属全員を連れて行くような真似はしないわ」
……ほう。
いや、言いたいことは分かる。
ここで迂闊にヴラディ家を刺激してツェペシュにまで火花が行くような可能性は避けるべきだしな。ある程度は下出に出ておく必要もある。
「刺激は最小限に……ですね？」
「ええ。それに私の留守中に禍の団が何かしないと考えるのは油断でしょう？」
俺にそう頷きながら、リアス部長は木場の方を向いた。
「とはいえ護衛は必須。祐斗、お願いできるかしら？」

「任せてください、部長」
まぁ、こういう時は木場が最適解か。
「なら俺は一旦カーミラの方に行こう。そっちの方がカーミラも余計なことはしないだろうしな」
更に先生までその大勢だ。
どうやらリアス部長の案は、先生でも評価に値するレベルらしいな。
さて、となると俺達は留守番で―

「一つ、よろしいでしょうか？」

その時、メリードが挙手をした。
まさかこのタイミングでメリードがとは思わず、誰もがかなり驚いて注目する。
リーネスも想定外らしく、割と面食らっていた。
「何かあるのぉ？」
「はい。リアス様の護衛ですが、もう一手用意してみてはいかがでしょうか？」
と、言うと？
「質においては祐斗様がいれば十分かもしれませんが、万が一に火急の事態ともなれば、全方位攻撃などを警戒するべきかと。リアス様自身がお強いとはいえ、もう一手保険をかけるべきかと具申します」
「だけど、下手に増やすと相手を警戒させるわ。何か手はあるの？」
部長がそう言うと、メリードは静かに頷いた。

「……インガをお連れくださいませ」
……
「インガ姉ちゃん!?　なんで!?」
俺が思わず素っ頓狂な声を上げたよ。
というか、給仕担当で来ていたけど一応侍従なので発言はなるべく控えていたインガ姉ちゃんが面食らってるよ。
「メイド長、私で大丈夫なんですか？」
「大丈夫でしょう。客観的に見て貴女は上級悪魔クラスとも渡り合えます。祐斗さんがカバーしきれない部分を埋める補佐としては十分です」
困惑するインガ姉ちゃんに太鼓判を押してから、メリードはリアス部長に振り向いた。
「失礼ながらリアス様。ツェペシュ領の滞在は、星辰光の特性を発揮しきれる範囲内に留まると思いますか？」
その質問に、リアス部長は失念していたことを思い出したような表情になる。
というか、そういうことか。
リアス部長の星辰光は、時間をかけて同調した相手の異能を再現する星辰光。その性質上、同調する時間が掛けられない相手や状況では手札が一気に減ってしまう欠点がある。
長期間のツェペシュ領の滞在では、部長は木場の神器ぐらいしか再現できるものがなくなるかもしれない。それに伴う戦闘手段の低下に、部長が対応できないリスクを踏まえたのか。
俺達が納得していると、メリードはインガの方を見た。
「リアス様は元七十二柱の本家次期当主。メイドを一人連れて行ったとしても懸念はされないでしょう。……その上で、インガなら比較的相手が警戒をしないと思われます」
「……なるほど、そういうことか」
と、そこで先生が納得の表情を浮かべていた。
な、何かに気づいたのか？
インガ姉ちゃんがピンポイントな理由って何？　マジで何？

「メイドであること相手の油断を誘う形で、木場をカバーする護衛にする。その観点だと、最適なのは確かにインガだな」
「……ああ、なるほど」
先生が納得していると、インガ姉ちゃんもちょっと呆れ半分感心半分な表情になった。
しかもカズヒねぇも、ふと思い至った感じでポンと手を打つ。
「なるほどね。懲罰メイドの戦闘能力で、今の部長や祐斗を個人でカバーできるレベルに到達しているのはインガを除くと春菜にベルナ。だけど二人は、良くも悪くも禍の団として目立っているわ」
……あ、そうか。
「ベルナは後継私掠船団の筆頭戦力なアーネの妹で有名だし、春っちはあのヴィールの眷属だったから、流石に注目されやすいのか」
俺も流石に納得できた。
言われてみればその通りだ。
片や疑似的に星辰奏者を増やすなんて反則の権化じみた女傑、聖継娼婦（シャムハト・セカンド）。アーネ・シャムハト・ガルアルエルの妹。
片やアグレアス攻防戦でグレモリー・バアル領眷属だけでなくヴァーリチームまで相手にし、神の子に続く者（ディ・ア・ド・ロローサ）にすら渡り合った冥革連合盟主。ヴィール・アガレス・サタンの戦車（ルーク）
アグレアス攻防戦のこともあって、否応なく目立つ。吸血鬼達があれであっても、流石に気づかれて警戒される可能性がデカい。
だがインガ姉ちゃんは、良くも悪くも目立ってない。ディオドラの眷属である以上多少は注目度もあるだろうが、それはあくまでディオドラのおまけ。二人に比べると圧倒的に注目度が低い。
その上で戦闘能力は他のメイド達に比べると圧倒的に上。加えて近接戦闘型だから、星辰光抜きだと遠距離主体のリアス部長の護衛に向いている。
確かに最適だ。
最適だけど……凄く不安！
いや落ち着け。冷静になれ。
インガ姉ちゃんだって仲間だ。仲間というものは一方的に守って

庇護するだけじゃない。貢献しあってこそだろうし、危険を分かち合ってこそだろう。
それにメリードの言い分は極めて正論だ。リアス部長の戦闘能力低下を踏まえ、それにリアス部長が対処しきれないリスクも考慮した。その上で吸血鬼側の警戒心を可能な限り抑えている、間違いなく最善手。
禍の団が関与している以上、今一番組織を運営している側であろうミザリを警戒することは必須。相手を過剰に警戒させない範囲内で、可能な限り安全策を考慮するべきだ。
加えて客観的な視点を考慮すれば、安全に一番気を使うべきはリアス部長だ。メイドや下僕の安全を考慮して、リアス部長を危険にさらすのは対外的にもまずい。
……危険を覚悟したうえで、俺は腹をくくった。
俺は覚悟を決めて一度頷き、インガ姉ちゃんを真っ直ぐ見る。
気づけば、インガ姉ちゃんも俺を見つめていた。カズヒ姉さんも俺達を見て頷いていた。
「……ま、何かあったらその時は私達が駆け付ければいいだけよね」
「任せとけ！　そういうのは得意さ」
鶴羽とイッセーも力強くそう決意を決めている。
……なら、俺が言うことは一つだな。
「何かあったらすぐにでも向かう。だから……そっちは任せる」
「……うん。頑張るよ」
微笑み合い、頷き合う。
ああ、今はこれで十分だ。

明星双臨編　第九話　出立の前に（前編）

祐斗Ｓｉｄｅ

僕は今、リアス部長の護衛として出立する為の準備をしている。
荷物はあまり多くする気はないし、やろうと思えば魔剣を収納する為に習得した異空間の魔法で拡張はできる。だからこそ、手荷物は最小限だ。
その上で、出立は兵藤邸になるだろうから僕も兵藤邸に移動して荷物を置いている。
いっそのこと、荷物そのものはまとめておいた方がいい。だから転移ゲートを置く一室にまとめておいている。
そこで、僕はヒマリとカズヒがいるところに出くわした。
「あら祐斗。ちょうどよかったわ」
「どうしたんだい？」
僕が首を傾げると、カズヒは一枚の紙と小型の通信機を取り出した。
……紙に書かれている文字からして、教会関係かな？
「プルガトリオ機関の対吸血鬼部門である、Ｖ（ヴィクター）部隊との連絡コードと通信機よ。ことが起こること前提で踏まえると、それなりの備えが必要だから……できれば彼らと連絡を取ってくれるとありがたいわ」
なるほど。
確かにプルガトリオ機関は教会の暗部組織。ドラゴンが所属する部隊がいたり、他神話の神々すら専門部隊がいるぐらいだ。
吸血鬼を専門に対処する部隊もいるだろう。特に、暴走した吸血鬼の所為で小さな町が丸ごと浄化する必要に迫られることもあるしね。
でもなんでヒマリも？
「あとザイアも吸血鬼にはかなり警戒を割いてましたの。とりあえず

潜伏用の武装とかのデータとかを持ってきましたので、警戒はしてほしいですわ」
なるほど。
確かにザイアは異形に対するヘイト思想が強かった。彼らの残党が組織的に動き出している以上、警戒は必須だね。
ザイアの方も技術を刷新している可能性があるけれど、ある程度の知識はあるに越したことはない。
「……ありがとう。心強いよ」
ああ、吸血鬼の里は警戒することも多いだろうからね。本当に心強い。
鎖国的政策をとることが多い異形の勢力の中でも、吸血鬼のそれは他とは一線を画する。
世界には純血の吸血鬼とそれ以外しかいない。カーミラが遣わした、エルメンヒルデ・カルンスタインはそう断言した。
そんなスタンスの者達の本国に向かうともなれば、警戒するべきことは多いだろう。
そこにザイアの残党の活発化もかみ合えば、万が一の場合は本当にとんでもないことになりかねない。
油断はできない。できうる限りの対策をとるべきだ。
「……そういえば、九成君は？」
九成君と特に縁深い二人がいたからか、僕は九成君のことが気になった。
まぁ、可能性が高いのは―
「……やっぱりインガさんのところかな？」
彼女のところにいるのが一番だろう。
危険な地帯にインガさんが送られるんだ。彼の正確なら色々と気を遣うし、一緒に居てあげたいと思うことだろう。
そこで、二人はちょっと苦笑いを浮かべた。
カズヒはともかくヒマリまでもが苦笑い。
……何かあったのか？
「どうしたんだい？」

「それが……」
二人から話を聞いて、僕はちょっと納得した。
お、思わぬ方向から思わぬことになっているんだね、これは。

イッセーＳｉｄｅ

リアス達が出立するまで時間はないけど、俺達は俺達でやることをやらないと！
俺と並び立つグレモリー眷属のエースたる木場に、九成を一対一で苦戦させたインガさんまでいるんだ。気にはなるけど心配しすぎてもいけないだろう。
できればリアスとは一緒にいたかったけど、リアスはリアスで忙しいから我慢！
そう、こういう時こそ自主鍛錬だ。走ったりしていれば気はまぎれるし、何より基礎鍛錬は決して俺たちを裏切らないからな。無駄にはならない。
そんなわけで、訓練用の異空間に転移して俺は自主鍛錬中だ。
そして俺以外にも鍛錬をしている奴は結構いる者さ。
「……にしてもよぉ、ドライグの奴はまだ本調子じゃねえのか？」
と、一緒に走り込みをしているベルナが俺に聞いてくる。
そうなんだよなぁ。ドライグの奴、最近は本当に眠りっぱなしだ。
俺を復活させる為に色々無茶をしたみたいで、その所為で意識が全然目覚めない。
俺のパワーアップはドライグのサポートがあってこそだ。ドライグが眠っていると三叉成駒や赤龍報奨、そして真女王も使えない。

俺はあれがないと赤龍帝としては最弱だから、何かが起きる前に起きてほしいとは思ってる。
でもまぁ、それに頼ってばかりはいられない。
「俺の所為で眠りっぱなしみたいだからさ。せめて起きるまで何とかしのぐ為にも自主トレしとかないとって感じかな？」
「良い心がけだわ。常に最善の状態を維持し続けることに拘らず、最悪の状況でも戦えるようにするのは立派だと思うわよ」
同じようにランニングをしている春菜が、うんうんとすっごく満足げに頷いている。
ちなみに結構走っているんだけど、春菜が一番ペースとか呼吸が乱れてない。
俺、基礎体力とかには結構自信があったんだけど。
やはり積み重ねてきた年月の差か。幼稚園の頃から鍛えてきた実績は、そう簡単に追い抜けるわけがないな。ヴィールもしっかり鍛えさせていたみたいだし。
いやいや。男の意地もありますしぃ？　いつか必ず追い抜いてやる！
俺は気合を入れて加速しようとすると、春菜が軽く肩を叩く。
「はいはいペースを無理に上げない。変にバランス崩すと逆にバテるわよ」
「……はい」
二重の意味で鍛え方が違うから、こういう時適切なアドバイスまでされたりしてます。
「そういや、魔法使いとの契約ってどうなってんだ？」
「ああ。レイヴェルに手伝ってもらって、リアスが最終確認するまでは頑張って俺達でやってるよ」
俺は将来独立するつもりだからな。こういうことも自分達で出来る様にならないとさ。
ただ、研究や能力の貢献度が足りないのはレイヴェルがバッサリ斬り落としたんだよなぁ。俺としては、色っぽいお姉さんとかと契約したかった。

ちょっとすすけながら走り込みを終えると、そこでシャルロットもトレーニングを終えたみたいだ。
「お疲れ様です、イッセー。あとで汗を流すとしましょう」
「オッケー。俺達も一旦上がるか」
……サーヴァントはその性質上、技術はともかく身体能力は自主トレで上がらない。
だけど今のシャルロットは、人型のドラゴンとなっている。
俺の体を新しく造る時に、今後に備えてシャルロットが判断した結果だ。いうなれば赤龍帝の宿主である俺の化身といった感じで、独立して動く俺の体の一部に近い。
だから、シャルロットは基礎体力などを鍛えることで成長ができる。なのでシャルロットも最近は隙あらば自主トレしている。基礎体力はあるに越したことないしな。
まぁ、霊体じゃなくなったことで不便も増えたみたいだけど。……サーヴァントはトイレとか必要ないから、その辺で危なかったらしい。いい年こいてトイレが間に合わないとか死にたくなるレベルだしな。
と、春菜とベルナは半目でこっちを見ていた。
「……一緒に入りそうね」
「雰囲気が熟年夫婦だろ」
悪かったね！
一緒に入ってますよ！　でもエロエロなことにはなってないから安心しろよ！
なんというか、比翼連理の相棒過ぎて、逆にそういう雰囲気にならないんだ。この俺が、スケベ根性なら誰にも負けない俺がだ。自分でも怖い。
と、シャルロットは顔を真っ赤にしながら咳払いをする。
「ゴホンっ！　そういうお二人こそ、和地と一緒のお風呂にでも入ったらいかがですか？」
反撃も兼ねてそういうことを言っているぐらいだけど、二人は顔を見合わせると肩をすくめた。

「生憎予約が詰まってるのよ。空気は読むわ」
「あのリヴァですら空気読んでるからよ。アタシらは尚更だろ」
……。
「「え⊠？」」
思わずシンクロでビビったよ。
え、あのリヴァさんが!?

アザゼルＳｉｄｅ

リアスや木場は出立前に忙しいようだが、俺はそんなことにはならねえな。
男やもめはこういう時気楽だしな。長年生きてるから最低限の準備もスマートに行くもんさ。
なんで、軽く酒を飲んでゆったりとくつろいでいるぜ。
まぁ、こいつと一緒に飲むことになるとは思わなかったがな。
「……吸血鬼の縄張りって、位置取りとしては欧州ですよね？　となると、ワイン辺りは流石に良いのがあるかもしれないと思いません？」
「ちゃっかりお土産をせびってくんじゃねえよ。……ま、吸血鬼（あいつら）の性格上良いワインがありそうだがな」
リヴァにそう返しながら、俺達はブランデーを舐めつつチーズをつまみに今後の予定を話していく。
ま、吸血鬼の里で観光をするわけにはいかねえからな。鎖国政策の場所で土産物ってのもあれだが……酒は良い物が揃ってるかもな。
……いっそのこと、日本酒や焼酎の上物でも献上するかねぇ？　そういった方面から異文化に興味を持ってくれりゃぁ和平を結んでも

問題は起きにくくなるかもな。
ま、それはともかくだ。
「チッとばかし真面目な話をするが、俺が出張れば駒王町で一番の最年長はお前だ。主神の娘であることも踏まえりゃ、サブリーダーぐらいのポジションに座ってるつもりでいとけ」
基本的にはソーナが指揮を執るだろう。グリゼルダやリーネスもいるから、補佐の十分可能なはずだ。
だが、年季の差ってのは決して無視できねえ。まして主神の娘として、それなりの立ち振る舞いや立ち回り方も教えられてるだろう奴がいるのならな。
そういう意味では、こいつはサブリーダーの一人ぐらいに位置する意識を持つべきだ。
ま、分かっているとは思うがこういうのは言っとくべきことだしな。
「そこはもちろん。実際問題、禍の団と繋がりを持っている可能性のあるツェペシュにリアスさんが行くわけですし？　レイヴェルに危害を加えるなら好機と思われかねないですからね」
実際問題そこも懸念だ。
禍の団の連中は大きくダメージを受けている。それこそ、当初の俺達の予想を圧倒的に上回る速度で倒れているわけだ。
だからこそ、そんな大打撃を受けている中での奴らの動きに嫌な予感は覚えている。
……ミザリ・ルシファーの性格もあれだしな。いろんな意味で懸念事項が多すぎる。
まぁ、深く考えても逆に煮詰まって空回るな。最低限の備えはしたし、酒もまずくなるからこの辺でいいだろう。
「で？　お前としちゃ珍しいな。こういう時に二人の時間をあえて邪魔して、空気を軽くしそうなやつだろ？」
その辺は割と気になるんで、俺はちょっと茶化す。
こいつはその辺り、空気を読んだ上で無視するからな。だからこそできることもあるし、気負いすぎない為には必要な奴でもある。

良い雰囲気になっているだろう、九成とインガの間にダイナミックエントリーするタイミングを計るだろうに。
だが、俺の茶化しにリヴァは苦笑いを浮かべていた。
「いやぁ、流石のカズ君もダブルアタックは疲れるでしょうからねぇ？　珍しく空気読んじゃう先生なのです」
……ダブルアタック？

明星双臨編　第十話　出立の前に（後編）

和地Ｓｉｄｅ

俺の部屋は、ちょっとカスタマイズされている。
防音面を一段上に強化し、更にベッドを大きく設定している。
実は俺、趣味関係はゲームがメインだからスペースをあまりとらない。最近はネットのダウンロードとかそういった手法もあるしな。それに軽い感じでやっているから、ガチなのはあまりしないし。
あとはちょっと釣りもたしなんでいるが、これも釣りの雰囲気とかを楽しむタイプだ。だからあんまり金はかけてない完全エンジョイ勢。
だからベッドをキングサイズにするのには問題ない。それぐらいのスペースを費やしても十分すぎる。
ちなみに理由は単純というか、女性関係に決まっている。その為洗濯とかが簡単にできるようにいろいろと考慮した。
……いつかタイミングがあったら、全員まとめてのハーレムプレイとかしてみたい。いやマジで、割と男の夢だろ。
精力剤とかを用意しないと。あとリヴァ先生がふざけ半分で〇ズプレイやらかすだろうけど、止めるべきかガン見するべきか地味に迷う。
まぁそれはともかくだ。俺は両手で、そっと彼女達を抱き寄せる。
やることやったらあとは勝手なんて真似はしないし、これはこれでいいものだ。後こういうマメさは重要だ。
それに、二人ともメンタルが厳しいみたいだしな。
「……大丈夫か、インガ姉ちゃん」
「うん、むしろこういうのがいいかも」

俺が訊いてみると、インガ姉ちゃんはそっと微笑んだ。
うん、だいぶインガ姉ちゃんの癖とか好みも掴めた気がするけど、断言されるとほっとするな。
俺はそっとインガ姉ちゃんの髪をなでながら、もう一人の気になる女性の方を振り向いた。
「で、落ち着いたか……鶴羽？」
「……うん。悪かったわね、私まで参加しちゃって」
そう答えながら、鶴羽はちょっと申し訳なさそうにそっぽを向いた。
今夜は、全員了承のうえでインガ姉ちゃんが俺を独占する予定になっていた。
まぁ当然としてリヴァ先生が引っ掻き回すことは想定していたけど、そこで想定外の形で来たのが鶴羽。
……まぁなんだ。○Pとか普通に興味あるというか、こういうハーレム街道を邁進しているなら当然考慮するべきことだしな。詰んでおいた方がいい経験は詰むに越したことはない。積んじゃいけない経験もあるけれど。
だからまぁ、今日はこんな感じになったわけだ。
「大丈夫？　ザイア残党が動いたあの夜から、ちょっと様子がおかしかった気がするけど」
インガ姉ちゃんも気遣う側に回っている。それぐらい、最近の鶴羽はちょっと微妙だった。
だからまぁ、インガ姉ちゃんを送ったら鶴羽の方に注力するつもりだったんだ。思いった以上に早く来たけど。
実際、鶴羽はちょっと黙って俯ていた。
「……教官はさ、味方ではないけど信用に値する人だったわ」
そう、鶴羽は話始める。
「ザイアの思想に洗脳されてるわけでもなく、自分を客観視したうえで異形を肯定できないからザイアに属している。少なくとも、理由に関しては彼なりに筋を通しているわ」
「……そうだな。差別主義者とか言ってるくせに、俺達に対しても真

摯に教導してくれたし」
同意しながら、俺もちょっと困った感じになってしまう。
あの人は本当に、教官として誠実だった。
生理的に受け付けられない人種差別主義者であり、だからこそ仕事において手は抜かない。
人種差別主義者だからこそ、被差別対象がいい加減であることを許さず、非差別対象に怠惰でいることも許さない。そして許さないからこそ、勤勉であろうとするのなら誰であっても職務もあってきちんと向き合って相談に応えてくれる。
教官という立場から点数付けをする癖こそついているが、大体なんでその点数なのかを教えてくれるし、何より人種で点数を操作するような真似もしない。
……ああ、良い教官を持てたことは俺のザイア時代の数少ない運の良さだ。
だから、教官と今更戦うことに、鶴羽が思うところを持つのはよく分かる。
「……割とキッツいよなぁ。俺も、ちょっときつい」
そう言いながら、俺は何となく天井を見上げる。
ザイアの施設にあった無機質な天井とは違う、ちょっとシックな雰囲気の天井。
何故かそこに、ザイア時代の思い出が映っている気がする。
そんな複雑な気分の俺に、インガ姉ちゃんがそっと手を振れた。
同時に、鶴羽のこともそっと抱き寄せる。
「……二人にも色々あるよね。うん、全部は分かってあげれない」
そう前置きして、インガ姉ちゃんはそれでも微笑んでくれた。
「でも、何かできることがあったら私達にちゃんと言ってね？　私達だって、みんなの力になりたいから」
インガ姉ちゃん……。
そうだよな。こういう時こそ、他人に吐き出したっていいはずなんだ。
そういう、そっと寄り添ってくれるということだけでも、救われる

ことはきっとある。
ったく。涙の意味を変える俺が、逆にそこで学ぶことになるとはな。
気分を切り替えるように、俺は勢いよく二人を抱き寄せた。
「わっ」
「ふにゃぁ!?」
驚いているようで喜んでいるインガ姉ちゃんに、喜色こそ混じってるがガチで驚いている鶴羽。
ああ、皆色々あるし、困ることも多いだろう。
……その上で、俺ははっきり言うべきだ。
「何かあったら助けに向かうし力になる。だから、俺が困った時は手伝ってくれるか？」
ちょっと気弱なことを言っているだろうが、嘘はついていない。
俺が一人で何でも出来る男なんて、そんな自信過剰はない。
だからこそ、助けるんだ。
自分が何もかも出来ないからこそ、相手も何もかも出来ると思わない。
負ける時だってある。泣く時だってある。だからこそ、せめてそれを嘆きで終わらせたくないから。
涙換救済（タイタス・クロウ）はそういう男だ。だからこそ—
「うん、分かってる」
—抱きしめてくれるインガ姉ちゃんの肌のぬくもりを、俺は心から受け止める。
「引っ張り上げてくれたことを、間違いだったなんてことにはしない。和地君が困っているのなら、少しぐらいは力になるよ」
「……うん、そうしてくれると私も嬉しい」
鶴羽も、そんなインガ姉ちゃんに頷いた。
「結局助けられなかったし、大変な半生を送ってきてる。そんな子がこんなに立派になってくれてるから、その文幸せになってくれると、すっごい嬉しい」
そんなことを言う鶴羽に、俺はそっち力を込めて抱き寄せ直す。

「だったら、鶴羽にも幸せになってほしいんだよな」
「……うん。分かってる」
そっと、鶴羽の手が俺の腕の触れる。
そして振り返り、ちょっと涙の浮かんだ目で俺達のことを見つめてくれた。
「だから、カズヒも含めてお願いね？　私、自分で言うのもなんだけどポンコツだから」
……やばい、めっちゃ可愛い。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、やっぱり純血のデータがあった方がいいね。僕が聖杯でサポートするのも限度があるし」
「そうですか。ではやはり、彼らのガス抜きも兼ねてやってみますか？」
「それがいいね。ついでだし、父さんの言っていた彼らのテストも兼ねるといいよ」
「かしこまりましたミザリ様。では、私はこれで」

和地Ｓｉｄｅ

そしてまぁ、出発の時が来た。
向こうの天候が想定外の形になったことで、ちょっと急になったけどな。
みんな思い思いで出発するメンバーと話しているけど、俺はやっぱりインガ姉ちゃんだ。
「インガ姉ちゃん。何かあったら遠慮なく連絡してくれ。絶対に助けに向かうから」
「うん、分かってる。和地君がそういう子だから、私も頑張って出発できるしね」
そう語りあうと、俺達は小さく微笑み合った。
ああ、大丈夫。
こっちはこっちで何とかするし、その上で助けが必要なら絶対必ず突入する。
だから頑張れ、インガ姉ちゃん。

「そこで、そこで再会を約束するキスをぶふぉっ!?」
「はいはい。いい雰囲気なんだから邪魔しないの」
「いや、同感なんだけどよ？　リヴァ止めるのも同意なんだけどよ？　あんたはもうちょっと気にしようぜ？」
「落ち着きなさいよベルナ。師匠はこういう人なんだから」
「実際私達って、そういう理由でこんな感じになってるしね。いや、その分絶対に力になるからね、カズヒ！」
「そこは頼らせてもらうわよ。とりあえずリヴァの口を塞ぐの手伝って、鶴羽」

……外野は無視するけどな！　いい雰囲気台無しだしね！

明星双臨編　第十一話　出立後の一幕

和地Ｓｉｄｅ

カーミラにインガ姉ちゃん達が出発したその日の夜。俺の寝室は―

「……うわ、すっごい混雑状態」

―春っちが言うだけのことはある混雑状態だった！

「ふっふ～ん。やっぱり考えることはみんな同じかしらねぇ～」

よりにもよってメイド服を着て突入しているリヴァ先生。

「あ～。アタシはあれだ。一緒に寝るとかじゃなくてちょっと話でもとかそんな感じでな？」

そしてメイドなので当然メイド服なベルナ。

「……そしてなんで強制的に着替えさせられるわけ!?」

そしてリヴァ先生にあれよあれよという間にメイド服に着替えさせられた鶴羽。

それを見て、これまたメイド服のまま来ている春っちがちょっと唖然としている。

というか何だこのメイド空間。

言っておくが、俺は別にメイドマニアとかそんなわけじゃない。いや、可愛い女の子のメイド服は確かに素晴らしいですけどね？

まぁそれはこの際おいといてだ。

「……とりあえず、なんか長続きして寝落ちしそうだから寝巻に着替えてから出直しなさい。なんか用意しておくから」

とりあえずあれか？　ホットミルクとか用意するべきか？

ミニキッチンの方に移動する気満々で立ち上がろうとすると、ベルナと春っちがポンと手を置いた。

「いや、メイドに任せなさいよ。いい加減少しはできるから」
「安心しな。春菜もだいぶできるようになってる。五分あればそれなりに用意できる作り置きもあるからよ」
……おぉ。成長が思った以上に速い。
だが待ってくれ二人とも。
この流れで鶴羽及びリヴァ先生の二人だけを置いておくと何が起きるか分からないから、とにかく二人は着替えさせてくれ。
なんというか、相乗効果でツッコミ必須の状態になりそうだから。いやホントに待って。
真剣に俺も出る方法を考えていると、リヴァ先生は何時の間にやら鶴羽に抱き着いてた。
「ほにゃぁあああっ！」
「いやぁ、出るとこ出てますなぁ？　ほれぇ、カズ君に色っぽい女同士の絡みでも見せてあげなぁい？」
おぉおおい！　俺はどう反応すればいいんだよおぉおおおおい!?
っていうかすいません。つい先日鶴羽とインガ姉ちゃんで楽しんでおりました。こんな早くに連発じゃなくていいんだよ！
「……いや、流石に今回は師匠を参加させてあげなさいよ」
春っちもそういうところじゃないから。ツッコミどころはそこじゃないから。
いやまぁ、まだカズヒねぇとは複数でやってないけど。
というより自分から言えるわけないだろ。どう言えっていうんだよ。
というよりメイドさん侍らせての多人数プレイとかまだ俺に早いと思います。
というかですね？
「……この流れでカズヒねぇだけいないってどういうことだよ！」
カズヒねぇプリーズ！　マジプリーズ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……ふぅ」
カズヒ・シチャースチエは息を吐きながら、ベッドに最後のメンツであるヒマリを放り込んだ。
リアス・グレモリーが出立したこの日。それはすなわち、女性陣の暴走が加速するということといえる。
この駒王町の担当であり、グレモリー眷属の主でもあるリアス・グレモリー。それはすなわち、ほぼ全員が程度はともかく多少は遠慮する人物がいなくなったことを意味する。
それを懸念し、カズヒは固有結界をもってしての奇襲攻撃でベッドインを目論んだ者達を制圧。星辰光まで使用したことによる消耗と反動に耐え、全員を部屋のベッドに投げ込んでいた。
そして全員を叩き込んだことで気が緩んだのか、思わず足がつんのめる。
すぐに壁に手を突こうとしたが、そこを誰かが支えてくれた。
「……お手数おかけしました」
「……気にしなくてもいいわ」
そう、カズヒはシャルロットに返す。
シャルロットは既に一度寝入っていたのだろう。少し寝巻が乱れていた。
「本当にすいません。本来ならサーヴァントの私が警戒するべきでしたが、疑似的にとはいえ受肉したことにまだ慣れてなくて」
申し訳なさそうにするシャルロットにカズヒは苦笑しながら首を横に振る。
サーヴァントという霊体に対し、逆に肉体を得るということはいく

らかのデメリット―という名の当然の制限―が生まれてしまう。
そこも踏まえていたからこそ、カズヒはこうして動いていたのだ。
「睡眠は本来必要な物よ。二十四時間連日動くなんて、本来できる方がおかしいんだから」
カズヒはそう答えながら立ち上がる。
サーヴァントが受肉するということは、つまり肉体を持つが故の負担も得るということだ。必然的に睡眠などの必要性も出てくるだろう。
なのでシャルロットがカバーしきれないと思っての行動でもある。
それをシャルロットも理解しているからか、やはりシャルロットは苦笑するしかない。
「もう少し気楽に生きてもいいんですよ？　むしろ和地の方に女性陣が集まっていそうですけど」
「彼女達はいいのよ。酷い暴走はしないもの」
その辺りの信用はしっかりしているので、カズヒはその余裕すら見せる。
リヴァが基本的に空気を読まないが、あれは読んだうえ無視しているような性分だ。当人なりのセーフゾーンは作っている。
だからこそ、此処でこうしていられるのだ。
「……まぁ、そういうわけだから大丈夫よ。そっちこそ、今ならイッセーのベッドは空いているけど？」
「何の為に全員沈黙させたんですか？」
呆れるシャルロットだが、客観的に考えて大丈夫だからと断言できる。
……というより他がアレすぎる。ヒマリすら沈黙させたのは、ひとえにその辺りイッセーの負担面の不安要素を考慮したからだ。
すなわち―

「ふ、ふわぁあああああ……っ!?」
「どうしました、ヒツギさん？　折角イッセーさんと寝られるんですから、そんなに緊張なされなくても……？」
「いや、だからだと思うぞアーシア」

―安全牌には温情ぐらいは与えるのである。

明星双臨編　十二話　動乱の駒王町

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで数日間は、何もない時間帯だった。
ちなみにインガ姉ちゃん達は、まだ吸血鬼の里に到達してすらいない。これでは事態が動きようもない。
とはいえ、決して度の超えた油断は禁物だ。
この駒王町は和平成立の場所がら、心理的要所なので相応に警戒網は強い。更に魔王排出家の次期当主が担当し、堕天使の元総督やら天使長直属のＡ（エース）も住んでいる、要人の集まりだ。
だから相応の警戒網は強くなっているが、だからこそ過信は禁物。
だからこそ侵入する奴らは腕に自信がある奴だって出てくるはずだ。そして人が競合する事例において絶対はあり得ない。
まして何が起きるか分からないのが世界という物。しかるべき事態に対応するものとして、相応に備えだけはしておかないとな。
そう思いなおしながら、俺は体育の為に体操服に着替えて校庭に向かう。
……その前にちょっとトイレトイレと。
手早く用を足して手をしっかり洗い、そして急いで校庭に――
「……おいおい」
――その時、俺は視界の隅にとんでもない連中を見つける。
一般人が見たらコスプレとしか思えない、ローブを着た連中。だが異形や異能を知る者が見れば、相応の魔法が施されたローブを纏った連中だとすぐに分かる。
冗談だろ。いくら万が一があるにしても、いきなりこんなところに、誰も反応ができないタイミングで襲撃だと!?
幸い敵は俺にまだ気づいていない。なら先制攻撃を叩き込むべきか。

……いや待て。奴らがすぐに動いていないなら、まずは皆に連絡だ。
「――駒王学園にいる全異形関係者ッ。禍の団と思われる不審者を確認した。全員その場の生徒達をカバーする覚悟を持ってくれ」
連絡をしつつ、俺はそもそも連中の目的が何なのかをとにかく頭をフル回転させて考える。
ガチの襲撃にして戦力が本腰を入れている雰囲気でもない。
かといって、くだらないちょっかいをかける為とも考えづらい。流石に上の方が止めるだろう。この状況下で俺達を意味もなく刺激させる意味などないしな。
では俺達が思っている以上に禍の団はガタガタだということか？
いや、慢心は禁物だ。
可能性はあるか？　何かこんな行動をするほどの意義のある何かがあるのか？
そこまで考え、俺は思い至った。
それは、魔法使い側から伝えられた例の情報――ッ！
昨今出回っている偽物のくせして効果は同等なフェニックスの涙と、同時期にフェニックス家に接触を繰り返す禍の団の関係者。
にしたってここを狙うか普通！
「――たぶん狙いはレイヴェルだ！　一年生組はカバーに回ってくれ！」
追加で告げてから、俺は素早くショットライザーを装着。
すぐにでも奴らをまずぶちのめして――
「……おっと、あんたが涙換救済（タイタス・クロウ）かい？」
――上からくる殺気に、素早く跳び退りながら俺はサルヴェイティングアサルトドッグプログライズキーを装填する。
「誰だ!?」
変身の為に放つショットモデルを牽制で放てば、相手はそれを槍で弾き飛ばす。
そして俺の全身にショットモデルが装着される段階で、奴は大振りで槍を振るう。

そして、そこから間違いなくやばい出力の力が込められた球体が射出される。
俺は躊躇することなく魔剣を出してそれを打ち上げ、同時に上空に星辰光の障壁を展開して爆発に余波を封じにかかった。
この短い攻防で痛感する。
こいつは、強敵だ。
少なく見積もっても英雄派の幹部クラス。……それもジークフリートレベルのハイスペック。
この状況下でそんなのが来るってのか！
睨み合いになっていると、そいつは愉快そうに口元を歪めている。
「いいねいいねぇ。流石は曹操達をぼこった連中だ。滾りそうだぜ」
「お前、英雄派か。曹操の敵討ちとか言いたいのか？」
奴の攻撃力から考えて、うかつに戦闘になれば周辺が壊れないように気を使う必要性が高すぎる。そうなると絶対他に余裕を差し引けない。
だからこそ、調子に乗っているうちに少しでも情報を引き出すべきだ。
そんな俺の思惑を知ってか知らずか、野郎はゆっくりと首を横に振った。
「まさか。むしろ感謝してるぜ？　……曹操の奴はちんけなところが多くてなぁ」
そう言いながら、野郎はため息までついた。
曹操、人望があるのかないのかどっちなんだよ。
ちょっと同情心すら芽生えているが、奴にとってはどんな感じなんだ？
「ちっぽけなんだよ。英雄なんてお題目を掲げてるくせに、歴史に残らねぇようなちっぽけな収まり方で満足してる感じなのがな」
そう前置きしてから、そいつは強い決意を示した目で周囲を見渡す。
「いっそのこと、この街ごと吹っ飛ばすぐらいやるぐらいじゃねえとダメだろ？　現代で英雄譚なんてやるんだったら、先進国落としぐら

いはやらねぇとなぁ？」
……あ、やばい。
こいつらあれだ。まじでやばい。
ノリが後継私掠船団に近いようでいて、何かが決定的に異なる。
というか、人間世界に積極的に介入したがっているとかまずいだろ。
「どうやら、本気で潰した方がよさそうだな」
遠慮はしない方がいい。
俺は即座にパラディンドッグに切り替える体制をとるが、奴は急にバックステップで下がり始める。
撤退だと？
駒王学園内で俺達レベルのガチの激戦は、冗談抜きで被害が大きすぎる。
逃げてくれるなら助かるが、しかしこの場合逃げる理由は二つある。
一つは作戦失敗と判断して、被害を少なくする為の戦術的撤退。
もう一つは、多分そっちが正解で最悪だ。
くそったれ！　思ったより敵ができたのか、何かやばいことでもやらかしたのか……っ
ならせめて、目の前のこいつだけでも捕まえないと―
「悪いがそうはいかねえぜ！」
―その瞬間、奴は槍を使って器用に飛び上がる。
同時に、一瞬何かが空を横切った。
それに反応して上を見上げるのと、衝撃波が校舎中の窓を破砕するのはほぼ同時。
……この低高度で高速飛行の航空機だと!?
振り仰げば、その航空機は既に遠くに飛んで行っていた。
……最悪だ。
ミザリの野郎が禍の団を動かしていれば、いずれ必ず人間世界にも被害は出ると思ってはいた。
思ってはいたが、早すぎだろう！

イッセーＳｉｄｅ

「……とりあえず、プルガトリオ機関の隠蔽工作部隊であるＣ（チャーリー）部隊が欺瞞工作をしているわ」
まだごたごたしてる中、カズヒが苦虫を噛み潰した表情で俺達にそう伝えてきた。
「具体的に言えば星辰奏者を複数保有する犯罪組織が行ったテロ行為ということで処理するわ。三日以内に適当ぶっこいた犯行声明が出てくる予定よ」
便利だよなぁ、星辰奏者。
表に出てる上、星辰光は個人で全然違ってある意味何でもありだから、こういう時の偽装に便利すぎる。
だけど……っ
「イッセー。一応言っておくけれど、罪悪感を感じる必要はないわ」
俺が何を考えているのか思ったのか、カズヒははっきりとそう言った。
でも、俺達が駒王町にいるからこそ狙われたんだ。
しかも俺達はそれを隠している。だからこそ、どうして襲われたのかも正しく伝えることもできない。
俺はそう思うけど、カズヒは静かに首を横に振った。
「彼らはふざけたテロリスト。そんな奴らの身勝手な理由で行われた悪行に、私達が悪いなんて思ってはダメ。罪悪感を感じるのは悪いことを実際にしている者が感じることよ」
カズヒは静かにそう告げると、ちらりと俺の隣に視線を向けた。

そこには、座り込んで俯いているルーシアがいた。
たまたま自販機に飲み物を買いに行っていたルーシアは、レイヴェル達が連れ去られるのに巻き込まれずに済んでいた。
レイヴェルを狙った連中は、近くにいた生徒を人質にとって、レイヴェル達を連れ去ったらしい。
……そうだな。本当にふざけた連中だ。
俺達の日常まで壊しやがって。絶対に後悔させてやる……っ
俺がハラワタが煮えくり返るって感情を理解していると、ルーシアは肩を震わせる。
「……迂闊でした。急な襲撃に混乱して、合流が遅れるだなんて……っ」
「落ち着きなさい。駒王町の結界をあんな小物が察知されずにここまで掻い潜り切るなんて異常事態よ。十六になったばかりに貴女がそこまで悔やむのなら、それ以外のメンバーは絶望して自死しなければいけなくなるわよ」
カズヒがそう言って落ち着かせようとするけど、ルーシアは首を横に振る。
「私の兄はリュシオンです……っ！　兄さんなら私と同じ年でもこの程度の事態で失態なんて……いえ」
ルーシアはそこで一旦切ると、目に涙を浮かべながら奥歯を噛み締める。
「私よりも若く、経験も訓練も無くても、兄さんはもっと酷い事態に対処しました。その背中を見ておきながら、こんな体たらくでは兄さんに合わせる顔がない……っ」
涙が床に落ちる。
いや、むしろそれはリュシオンさんがどうかしてるだろ。
アグレアスでの戦いの記録情報は見たけど、リュシオンさんはなんていうか……何かがズレてる。
俺もおっぱいが絡むとなんかおかしなことになる。リュシオンさんは俺のおっぱい絡みレベルの何かがある気がする。そうでないとおかしいぐらい、何かが決定的に違う気がする。

「……リュシオンさんは、いったい何をしたんだ？」
気分を切り替えるのも兼ねて、俺はルーシアに尋ねてみた。
そもそも、俺はリュシオンさんについて何も知らない。
神器神滅具候補を持ち、教会が誇る精鋭部隊の筆頭格。あとカズヒはどうも敬遠している。俺が知ってるのはそれぐらいだ。
知らないんじゃ分かりようがない。だからこそ、教えてもらえるなら聞いてみるべきだ。
「……私と兄が異形と関わったのは、今から九年ほど前です」
九年前。ルーシアはその頃、小学校に入って一年ちょっとぐらいって感じか。
リュシオンさんは何歳ぐらいだ？　いや、さっきのルーシアの話から見て、多分今のルーシアより若いんだろう。
「休日に家族と出かけていた街中で、準神滅具が暴走するという事件が起きました。更にそこには追放された上位吸血鬼が、下位の吸血鬼を集める形でマフィアの支配者として潜伏しており、結果として教会や近くの魔法使い組織の三つ巴の争奪戦になり、暴走している神器そのものもあって地獄絵図でした」
そりゃ……きついな。
準神滅具の暴走ってことは、それこそ街の数ブロックは簡単に吹っ飛ぶはずだ。
それに対応できるなら、教会の戦力も相応にあるはず。魔法使いたちもかかわってくるなら腕に自信はあるだろうし、吸血鬼も上級レベルなら相当のはずだ。
下手しなくても、街が地図から消えたっておかしくないぞ……っ
「そんな中、兄さんはパニックになっていた私達を励まして、冷静に周囲を確認して安全な方向を見つけて避難していきました。慌てている人達に大きな声や時には物を壊した音で落ち着かせながら、何とか数十人レベルで避難していたんですが、そこに上級吸血鬼が襲ってきたんです」
そう、ルーシアは続けていく。
「その吸血鬼は悪魔祓いや魔法使いに対抗する為、即興で下僕を作ろ

うとしました。あと蘊蓄を語りたい人物だったのか、神器についても詳しく説明していました」
そして、ルーシアは拳を握り締める。
「そして兄さんは神器に覚醒し、更に暴走する神器が禁手になったのを確認して、そこから自分も禁手に至らせ、事態を解決に導きました」
……嘘だろ？
ルーシアは自分の不甲斐なさとリュシオンさんに対する敬意を感じさせる声だったけど、俺とカズヒは顔を見合わせて目を見開いているのをお互いに確認してた。
神器の持ち主が神器について語られたから、そこから自分が神器を持っていることを知って覚醒させて、禁手に至る光景を見て自分も禁手にその場で至った？
あり得ないだろ。俺はいくらなんでも別の意味であれだけど、どう考えてもおかしいだろ。才能があるとかそういう次元じゃない。
「そして、兄さんは教会の戦士達から話を聞いて、自分も戦士になることを選び、私も両親の反対を押し切って、戦士育成機関に入って鍛えてつづけたんです」
どこまでも自分の不甲斐なさを責めるように、ルーシアはそう言い続ける。
「兄さんの背中を見続けて、追いかけてきたというのに。兄さんは自分の力を知って、やるべきことをきちんとやったのに……。私は……私は……なんでいまだに足元にも追いつけない……っ」
また涙をこぼすルーシアだけど、俺とカズヒは思わず二の句も告げなかった。
リュシオン・オクトーバー。神の子（ディ・ア・ド・ロ・ロ・ー・サ）に続くもの。
……あの人は、何かが決定的に違いすぎる……っ

明星双臨編　第十三話　チンピラ撲滅大作戦！

九成Ｓｉｄｅ

ある程度落ち着いた時、俺達はソーナ会長を指揮官とする形で集まっていた。
「……さて、それではレイヴェルさん達の奪還作戦について進めたいと思います」
『『『

ソーナ会長はそう言いながら、魔方陣を展開して映像を映す。
そこには二正面作戦と思える体制が確立されていた。
「……作戦は二段構えの奇襲です。まずは私達がレイヴェルさんが捕まっている空間に奇襲。そこで駅地下の集団は動揺するでしょうから、そこを別動隊が攻撃して撃破といったところです」
まぁシンプルだが効果的な作戦だろう。
待ち構えた場所に呼び出そうとしたら、先に本丸を攻撃された。これは動揺するに決まっている。そこに一気に奇襲を仕掛ければ、敵は高確率で総崩れだ。
ほっとくという選択肢はない。ここまでふざけたことをした連中を何もせずに見逃すとかあれだ。というか、ほっといたら戻ってきて攻撃班が挟み撃ちに遭いかねないしな。
そして部隊分けはどうなるかだな。
「では会長。メンバーはどう分ける？」
ゼノヴィアが今か今かと出ていきそうな雰囲気で聞くと、ソーナ会長は静かに頷いた。
「まず突入部隊はグレモリー眷属を中核とします。その上でリアスから指揮を任されている私が、匙を護衛として随伴。別動隊にも相応の戦力を集めるべきでしょうし、堕天使側と天界側からは一名ずつにとどめておくべきでしょう」
まぁ確かに。
人数を多くしすぎるのもあれだな。別動隊も大立ち回りをするんだから、戦力はある程度バランスを踏まえるべきだろう。
あと会長も、普段扱いなれてない戦力を率いるんだから人数はある程度絞るべきだろう。そういう意味では、リアス部長の思考をある程度読めるだろうと踏まえてもグレモリー眷属主体になるだろう。
で、誰が随伴するかだが―
「では行きますわよヒツギ！　イッセーの両脇は私達が守りますわよ！　伴侶として！」
―速攻でヒマリが立ち上がって胸を張った。
「いえ、堕天使側からはリーネスを指名します」

そしてソーナ会長が素早く切り捨てた。
あら、ちょっと意外な人選。
仮面ライダーアイネスに変身できるとは言え、リーネスは基本的には後方支援要員だ。突入作戦の戦力として換算するべきだろうか。
俺は疑問符すら浮かべたいが、会長は本気の目立った。
「最近出回っている、本物に近い効果を持つ偽のフェニックスの涙。禍の団及び関与する魔法使いがフェニックス家に接触を試みていることから考えて、レイヴェルさんは偽の涙に関与する何かが目的で誘拐されたと考えられます。となれば、相応の技術が使われている余地もあるわけです」
そうすらすらと説明して、ロスヴァイセさんが納得の表情を見せた。
「なるほど、そういう意味では技術者であるリーネスさんを連れて行った方が都合がいいですね。……私達の全力では、戦闘後は更地になりかねませんし」
あ、なるほど。
圧倒的攻撃力が持ち味のグレモリー眷属では、何とかした後の調査が難航しかねないというわけか。
となると、天界側はどうなる？
「ヒマリが行かないならヒツギを連れていく必要もないわね。ここは順当にイリナに任せましょうか」
「はいな！　任されたわ！」
そうカズヒねぇが提案し、イリナも速攻で了承した。
……立場上はイリナがリーダーだが、彼女は人柄で引っ張るタイプだからな。どうしてもカズヒねぇが参謀役になりやすいな。一年生組は後輩属性強いし、ヒツギはどっちかというとなだめ役とか潤滑剤向けだし。
となると、俺達は別動隊として襲撃者達をぶちのめすわけか。
まぁ当然だな。このまま逃がすほど俺達も腑抜けたつもりはない。
そして気合が入っていく中、ソーナ会長は同時に渋い顔をした。
「……ですが誰もが気を付けてください。今回のような事態をあの程

度の輩が引き起こせるとなると、内通者がこの駒王町の相応の立ち位置の物にいる可能性があります」
……あぁ、なるほどな。
確かにそうなんだ。
今の駒王町は、色々な意味で要所の一つだ。各神話勢力にまで広まった、三大勢力和平の場所という心理的な重要拠点。魔王排出家の次期当主二人に、堕天使元総督や天使長直属転生天使第一陣と、三大勢力でも相応の重要な人物も集まっている。ついでに言うと―
「さて、いっそのことオーフィスちゃんも投入したら別動隊泣くんじゃないかしら？」
「我、イッセーたち、手伝ってもいい」
―主神の娘とか（元）無限の龍神もいるしな。
イヤホント冗談抜きで、この駒王町は警備厳重にしないといけない場所だよ。テロ集団の元盟主までいるんだから、警戒網は相応にあるはずなんだ。
それがあんな小物集団ばっかりの奴らに深入りされた。流石にそれは警戒して当然で、そういう懸念もしてしまう。
「……だったらさ、私とヒマリは今回待機した方がよくない？」
と、渋い顔ををしているヒツギが手を上げる。
「おいおい！　俺の女が裏切り者なんて、そんなこと俺が思うと思ってんのか!?」
「同感だね。そんな悲しいことを言わないでほしい」
イッセーとゼノヴィアがそう反論するけど、ヒツギも渋い顔で首を横に振った。
「私らの前世関連はみんな知ってるじゃん？　道間誠明がことを起こした時に、何かの仕込みをしてた可能性は否定しきれないと思うけどね」
……そう言われるときついな。
幽世の聖杯という神滅具。それらを利用してミザリが道間乙女に何かの仕込みをしている可能性は捨てきれない。
二人に分裂している今の状態では上手く機能していないかもしれ

ないが、だからこそ探って発見することは難しいだろう。
そこを踏まえると、ヒツギの懸念は当然……か。
会長もそこを理解したのか、少し目を伏せて考えたうえで、一つ頷いた。
「ではヒツギさんとヒマリさんは、別動隊の更にサポートで待機していてください。私としても裏切り者の可能性は少ないと見ていますが、だからこそそれだけの何かを敵が用意していると考えるべきですから」
「そうですね。私としても、あの程度の連中がここまで入り込むならそれぐらいしか思いつきません」
魔法に長けるロスヴァイセさんまでそういうのなら、やはり尚更か。
それぐらいの警戒はしておいた方が……いいってことか。
とはいえ、仲間の絆を信じるグレモリー眷属的にはいい気分はしてないよな。
特に気にして要るっぽいイッセーだが、その背中をリヴァ先生が勢いよく叩く。
「はいはいイッセー君は気合を入れるっ」
そんな背中を叩いたリヴァ先生は、こっちを安心させるように微笑んだ。
「あくまで内通者(それ)は、私達で考えられる内容の確実性。敵だって負ける為に動いているわけじゃないんだから、私達にとって初見の方法を編み出したりしてるかもしれないんだから。考えすぎは隙になるわよ？」
「そ、そうですよね！　あいつらいっつもこっちが思ってもいないようなことしてきてますもんね！」
イッセーが元気になったようで何よりだが、
そこで話がまとまり、そしてソーナ会長は不敵な笑みを浮かべた。
「では皆さん。……この駒王町を、私達を敵に回すことを恐ろしさをしっかりと御享受してあげるとしましょう」
その言葉に、俺達は気合を入れ直す。

「うふふ。久しぶりにビリビリさせれますのね？」
朱乃さんのドSが久しぶりに解放されるようだ。これは怖い。
「ふっ。今エクスカリバーは一旦返却しているが、デュランダルはあるから遠慮をする必要はないね」
「ふっふ～ん！　ミカエル様のAとして、駒王町の平和を乱したテロリストを成敗しちゃう！」
ゼノヴィアとイリナもやる気満々。それに、他のメンバーも既に戦意は満タンのようだ。
そして俺も、隣に座っているイッセーと顔を見合わせて互いに笑みを向ける。
「じゃ、そっちは頑張れよ？」
「そっちも、やっちまえ！」
拳を軽くぶつけ合い、俺達は動き出すことを決定する。
覚悟はいいか、禍の団。
ふざけた真似の礼は……必ずかましてやる……っ！

Other Side

「……で？　リーダーはなんて？」
「ああ、そろそろデータも取れるから呼び出していいってよ」
「いよっしゃ！　漸くあいつらに挑戦できるってわけか」
「あのシャルバや曹操を倒したっていうグレモリー眷属ねぇ？　異例の評価とはいえ若手なんかにやれるのかぁ？」
「はっ！　シャルバや曹操が大したことなかっただけだろ？」

「確かに。ハーフのヴァーリも飼いならせなかったシャルバや、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）に逃げられてる曹操が、凄いって言われてもなぁ？」
「違いない！　逃げられていいなら俺達だってできるぜ！」
『『『

「知れたこと。我らは人類を守り悪鬼を滅ぼす者」
『サウザンドライバー！』
「ゆえに、人類の裏切り者に遠慮などしない。……全軍、仕掛けろ！」

明星双臨編　第十四話　テンサウザー・ロスト

イッセーＳｉｄｅ

「な、なんだぁあああああっ!?」
俺達がアントニオンで突入すると、中に居た連中が面食らってパニクってる。
そしてそんな奴らが立ち直る余裕なんてやらねえぜ！
「俺の可愛い後輩達を返しやがれ！」
真正面から魔法使いを殴り飛ばし、俺は皆と一緒に突撃する。
俺達の可愛い後輩を、人質とって誘拐しやがったんだ。逃がすつもりも欠片もないぜ。
「あいつら何してんだ！　俺達が帰るまで待ってろっていたのに、もう負けたのか!?」
「役に立たねえチンピラ共が！　こうなったら一斉砲撃で―」
魔法使い達が反撃しようとするけど、遅いって。
もう既に、そっちにはイリナとゼノヴィアが駆け出しているぜ？
「アーメン！」
「退けぇ！」
聖魔剣やら光力やらデュランダルで、アッというまに吹っ飛ばされる。
こいつら、弱いな。
俺達がだいぶ強くなっているにしても、それにしても弱い。たぶん強いので中級悪魔クラスじゃないか？
たぶん戦う連中は駅の地下にいるんだろうけど、それにしたって弱いな。
「皆、どう思う？」

走りながら聞くと、ロスヴァイセさんがちらりと敵の魔法を見ながら首を傾げる。
「そうですね。魔方陣から考えて、明らかに研究特化で戦闘慣れしていない印象はあります」
「東洋の術も垣間見えますが、こちらも戦闘に長けている式ではありませんわね」
朱乃さんもそう言うけど、ってことはやっぱり戦闘担当はいないのか。
なんか変なカプセルとか機械とか見えるけど、どういう施設なんだよ。
「そもそも、この施設はいったい何なのでしょうか？」
身体能力のごり押しでぶっ飛ばすシャルロットに、機械を見ていたリーネスや施設全体の様子を見ているソーナ会長が眉をしかめる。
「施設から見て、細胞の培養やホムンクルスの作成術式を科学的に補正する……といった感じねぇ？」
「それに既に廃棄する予定のようですね。必要な資料や書類の類、あと機械の起動具合などから見て、既に引き払いが完了しかけている雰囲気です」
つまり、此処はもう捨ててもいい施設ってわけか。
っていうか細胞の培養とかホムンクルスの作成とか、えげつない話に聞こえるな。
効果のある偽フェニックスの涙とか、フェニックス家であるレイヴェルの誘拐とかから考えても、やっぱり嫌な話でしかなさそうだ。
レイヴェル、無事だといいんだけど。
俺が不安になっていると、ソーナ会長の耳元に通信用の魔方陣が展開される。
そこから届いた通信を聞いて、会長はなんか険しい表情になっていった。
な、なんだ？
九成たちがやばいことになったんじゃ―
「……敵の相手や施設の研究は後回しにして、とにかくレイヴェルさ

んの保護を優先しましょう」
会長はそう言うと、一息覚悟を入れるように置いて―
「駅地下の空間で既に戦闘が勃発しています。どうも、南空達が前回であったザイア残党が禍の団や魔法使い達に仕掛けてきたようです」
―なんてことを言った。
っていうか、ちょっと待って。
ザイアの連中が禍の団と、駒王町で戦闘してるってのか!?
冗談だろぉおおおおおおっ!?

九成Ｓｉｄｅ

何がどうしてこうなった！
今俺は、完全な三つ巴の戦いを繰り広げている。
魔法が飛んできたと思ったら、別の方向からエネルギーが付属された弾丸が飛んでくる。
岩石で出来たゴーレムが殴り掛かってきたと思ったら、諸共ぶっ飛ばそうとする発動体のメイスが襲い掛かってくる。
とりあえず一言言いたい。
「……変態までくるんじゃないだろうなおい！」
「「「「凄い同感！」」」」
今俺は、俺を愛してくれる女性達と共にこの混沌極まりない三つ巴を戦っている。
インガ姉ちゃんがいないのが残念というべきか、インガ姉ちゃんがこの混沌極まりない戦いに巻き込まれなくてよかったというべきか。

あとヒツギとヒマリがいなくてよかった。前世のおふくろがこんなあほみたいな展開に苦労するのは……ヒマリは逆にテンション上がりそうだな。
あ、ダメだ。なんか混乱してて変な方向に思考が飛んで行っている。
落ち着こう。とりあえず三つ巴において最も警戒するべきことは、まず挟み撃ちで潰される状況に持ってこられないようにすることだ。
せめて挟み撃ちにされない位置取りを確保しないと―
「……させんぞ九成。お前の考えることは大体読める」
―と思ったら教官がぁあああ!?
おのれ教官！　有色人種嫌いなのに、ほぼ黄色人種だけの国に来るなよ。あんた暇なのか！
とはいえ、教官に対して感謝の念がないわけでもない。
生理的に有色人種が嫌いと公言しながら、この人は俺達に真摯に向き合い続けた。
どうしても受け付けない者達を相手に、それでも真摯な対応をし続けるなんて困難だろう。少なくとも察することぐらいはできる。
それを、只の邪魔者として打倒されるなんてオチは……勘弁だ。
俺がそう思いながら一歩を踏み出すのと、鶴羽が一歩を踏み出すのは同じだった。
視線が合えば、気持ちも通じ合う。
「外野はこちらに任せなさい。恩師の打倒は、雑にやるより誠実に向き合いたいでしょうしね」
「地脈も繋げたし、露払いは任せて頂戴な♪」
カズヒねぇとリヴァ先生が、俺達の気持ちを察してそう告げながら、鎧袖一触で敵を薙ぎ払う。
「ま、たまにはそっちの我儘も聞いてやらねえとな。恋愛ってのは相互の関係性ってやつだ」
「つけたい決着があるのならやってみなさい、鶴羽、和っち！」
ベルナと春っちがそう言って、教官が引き連れたアントレイダー系列と激突する。

そして俺と鶴羽は、教官と向き合う。
「……教官、お覚悟を」
「こちらのセリフだ。教え子とはいえ、有色人種に遠慮をするほど俺は博愛主義者ではない」
交す言葉は小さく、そして覚悟はそれで完了した。
恩は、せめて礼節をもって倒すことで返させて―

『なんか面白いことになってるわね。じゃ、そっちはお任せだよおっさん』
『うっへぇ。娘に手を上げるのは流石に気が引けるけどねぇ』

―その声が聞こえると共に、事態は更に激しくなった。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

カズヒが気づいた時、忽然と和地達三人の姿が消えていた。
それに対してすぐに警戒心を高めると共に、大上段に振りかぶられたバーナーブレイドが襲い掛かる。
素早く回避しながら、カズヒはアタッシュナイダーにハウリングホッパープログライズキーを装填する。

『ＣＲＹ！』
『ハウリングカバンシュナイデン！』
続いての連撃を真っ向から瘴気の斬撃で弾き飛ばす。
そして遠慮なく振るう攻撃を、相手も強大な瘴気を漂させて受け流す。
カズヒは瞬時に精神力で、意識を目の前の強敵に強引に集中させる。
和地と鶴羽は心配だが、二人とも決して弱くはない。
まず自分がやるべきかは、自分が産み出したと言ってもいい、まだ滅びてなかったこの強敵に対応すること。
そう切り替え、カズヒ・シチャースチエは呼吸を整えながら敵を睨む。
「宿主がいなくなったのに、長生きしてるんじゃないわよ。……モデルバレット！」
『するに決まってるじゃん？　むしろあんたの方が邪魔だっての！』
仮面ライダー道間に変身するカズヒ・シチャースチエと、ステラフレームに躯体を映したモデルバレット。
同じ女を基点とする、銀弾が相対するべき宿命が激突した。

「和っちぃ!?」
「まずい、カズと鶴羽がやられた!?」
そう慌てながらも、春菜もベルナも襲い掛かる敵を薙ぎ払う。
英雄派の特別幹部と、ヴィール・アガレスが擁する武闘派眷属。その実力は伊達ではない。
それを確認してほっとしながら、リヴァ・ヒルドールヴは内心でため息をついた。
いきなり敵にマッチメイクを喰らったらしい二人は気になるが、しかし和地は自分がやるべきことはしっかりやってのける男。

そんな男と愛し合うなら、自分も対応するべき敵に対応しなければならないだろう。
「……ごめーん。余裕があるなら余剰戦力を突入させて？　こっちはちょっと手が足りないから、春菜とベルナの二人をカバーしてくれない？」
『それほどまでに、ザイアが難敵ということですか？』
どうやらまだ、グリセルダ達上の警戒班は襲われてないようだ。
となると、今回はカズヒや鶴羽をピンポイントに狙っているということか。
そう静かに推察しながら、リヴァは目の前の敵を静かに睨む。
「……ミザリ一派も動いているわぁ。それに、こっちもちょっと余裕がなくなりそうなだから……お願いね♪」
見えていないだろうがウインク付きで通信を切り、そして静かに近づいてくる敵を見据える。
その外観の意匠だけでも、危険視するには十分すぎる。
どうあがいても相性最悪だと判断して、最初から戦闘を行うことも避けていたが、その強者としての力量の一環でもあった、曹操が変身した仮面ライダーサウザイアー・魏。
それを思わせるその仮面ライダーのスペックが、弱いわけがない。
「……さて、ザイアさんのサウザイアーはどんな感じなのかしらね」
「よく分からないことを言うが、一つだけ訂正を求めよう」
そして敵手は一歩前に出て、静かにこちらを見据える。
「これは人類を解放するザイア究極の戦士が残滓。サウザンドフォースのフラッグシップ……テンサウザー・ロストだ！」
その宣言と共に、戦闘は更なる激化を遂げた。

明星双臨編　第十五話　反撃、禍の団

和地Ｓｉｄｅ

『天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ』
その声が聞こえた時、俺達の周囲は一変していた。
『人道外れた悪鬼は此処に。死すらも超えて新生する』
タイミングが、あまりにも機先を制している。
『家畜人生は畜生道かよ。一見悲惨な末路だが、住めば都という物だ。獣となるのも悪くはないと、自然と思える今日この頃』
野郎、ミザリ達め狙ってやがったか。
『喰らえ、殺せ、犯して眠れ。主の命には服従すれど、意外に気楽なこの獣生。自由も割かしある以上、ペットになるのも一興だ』
この感覚、固有結界とも似て異なる。
『さて、仕事の時は訪れた。おもちゃ遊びも兼ねまして、ちょっくら敵さん殺しましょうか』
というよりだ。
『男はゆっくり蹂躙しよう。圧倒的な蹂躙は、とっても気分がスカッとするよ』
この声、口調、何より態度。
『女はちょっくら犯そうか。立派な一物貰ったんだし、入れたり出したりやってみよう』
俺は、警戒しながら鶴羽の様子を窺う。
『さて、人の世界よしばしさらばだ。なにせ僕ちゃん獣なもので、畜生道こそ我が世界』
……顔面蒼白、いや、憤怒で真っ赤に染まっている。
『世界卵から隔離して、此処が僕らの遊技場。思う存分……遊ぼうかい？』

その矛盾を両立させているその顔は、一切の表情が浮かばない。
それほどまで混沌となった感情を浮かべる道間七緒（南空鶴羽）を相手にして、前世の父親は心から楽しそうに星を顕現する。
『超新星（メタルノヴァ）――創造せよ、遊興の畜生道（プルトリップ・ビーストロード）♪』
今ここに、異空間と化した周囲から、そいつらは姿を現した。
現れるのは、いくつもの魔獣。
十メートルを超える上級悪魔クラスの魔獣もあれば、中級悪魔クラスだが人間サイズの魔獣も多数出てきている。
これだけで、俺は奴の星辰光が何なのかを理解した。
『やっほー♪　道間六郎ことモデルヘキサ、ミザリの命令でお仕事するよ～？』
そう、これは……魔獣創造空間生成とでも形容するべき星辰光。
魔獣創造の力を再現する、固有結界と似て異なる異空間を作り出す星辰光……っ！

モデルヘキサ
創造せよ、遊興の畜生道（プルトリップ・ビーストロード）
基準値：A
発動値：AA
収束性：D
拡散性：B
操縦性：A
付属性：D
維持性：AAA
干渉性：A

異空間を生成するという形で、必要なステータスをカバーする星辰光。
再現度合いがどれほどかは分からないが、もし業魔人を併用すれば、下手をすれば超獣鬼まで創造されかねない。
このメンバーで対応とか、流石にまずいだろ……っ！
『ちなみに我が子には悪いけど、固有結界対策は万全なのです♪　固有結界で塗り潰して脱出なんて……できないＺＥ？』
そうかい。
……前向きに考えろ。
道間日美子と道間乙女の人生を滅茶苦茶にしたすべての根幹が一人。
すなわち、俺の最愛の女性と母親をズタボロにしてくれちゃった野郎が目の前にいるんだ。
「一応言っておくが、ある意味生みの親でもあるから……投降するならハラワタ煮え繰り替えるが温情をかけるぜ？」
『え、やだやだ。とっ捕まったら女の子とＳＥＸできないじゃん？自我覚醒から調整とかでまだこの体だと童貞だから、思う存分可愛い女の子とＳＥＸしたいもん』
「そうかすぐ死ね今殺す」
遠慮する必要なくて助かった。
『ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ！』
ぶっ殺す……っ！

イッセーＳｉｄｅ

「てめぇら……っ」
レイヴェル達を庇いながら、俺達は今回のリーダーとかいう、フードを被った奴と睨み合う。
奴らの目的は、どれもこれもこっちからしたら本気で怒りを覚えるものだらけだ。
曰く、末端の抑えがきかなくなったから、奴らの要望である「メフィスト・フェレス達が評価している俺達へのちょっかい」でガス抜きをする。
曰く、偽物のフェニックスの涙を作る為に必要な「フェニックスのクローン」の精度を高める為に、レイヴェルを誘拐して魔力のデータをとる。
ふざけるにしても限度があるだろ。
何の関係もない一般市民に被害が出るような真似をする。レイヴェルにこんな酷い物を見せる。
抵抗したギャスパーをぼこぼこにしたことといい、こっちもいい加減ぶっ飛ばしたくて堪らねえんだよ。
最後に「俺達と戦いたがっている奴」をぶつけるとか言いやがったけど、だったらまとめてぶっ飛ばしてやる。
ただ、転送魔方陣は三つほど出てきた。
しかも一つは龍門（ドラゴンゲート）だ。
色は緑に光っているけど、緑色の光る時は玉龍（ウーロン）が出てくるらしい。ただ玉龍は俺達に協力してくれたし、禍の団と敵対している。ついでに言うと、当人はなんというかノリが軽い。
どう考えても、禍の団と協力している感じがしないんだけど？
ただ、ソーナ会長は眉をしかめていた。
「緑……ではなく深緑ですね。深緑を司る龍……？」
「お目が高い。そう、かつて深緑を司る龍がこの世には存在していたのですよ」
フードの奴がそう言いながら、先に転移した奴らの方を向いた。
っていうか誰だ？　片方はどこかで見た気がするけど、もう片方の男は……マジで誰？

思わず首を傾げていると、その男は堂々と両手を広げて俺達を見渡した。
「初めまして！　そして曹操が世話になったな！　俺は英雄派の天才発明家……ジョン・マージ・ガトリング！」
なんか、変な奴が来た。
そんなことをふと思った時には、既に不敵な笑みを浮かべながら何かを腰に巻き付けた。
『ハンドレッドライバー！』
『ＲＥＶＯＬＶＥＲ！』
ってプログライズキー!?
俺達が警戒するのと、相手がプログライズキーをベルトに装填するのはほぼ同時。
なんか大量にショットモデルっぽいのがばら撒かれながら、どんどんアーマーが展開されていくううううっ!?
『ガトリングヘッジホッグ！　Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　ｓｐｉｎｅｓ　ｓｈｏｏｔ　ｔｏｗａｒｄｓ　ｔｈｅ　ｅｎｅｍｙ』
そして何時の間にか仮面ライダーにいいいいい!?
「そしてこれこそが、仮面ライダーハンドレット！　さぁ、ハチの巣にしてやろう！」
て、敵に仮面ライダーがぁ!?
『グハハハハっ！　で、俺は誰もぶっ殺せばいいんだぁ？』
「あ、ちょっと待ってろ。俺達完璧に空気になってるから」
っていうかなんか狂暴そうなドラゴンが出てきたし。
あと思い出したけど、なだめてる最後の一人はゼファードルの眷属やってた奴じゃねえか!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

振るわれる連続攻撃を、カズヒは冷静かつ大胆に回避しながら、カウンターのように反撃を叩き込む。
それらを上手く受け流しながら、モデルバレットは時に距離を取り時に距離を詰め、戦闘を継続する。
『あっははは！　冷静に見えるけど、いいのかなぁ？　六郎のおっさんに涙換救済（タイタス・クロウ）が殺されるんじゃないのぉ？』
悪意をこれでもかと込めながら、モデルバレットはそう煽る。
モデルヘキサこと道間六郎がそれをできると、そう考えているからこその煽りだろう。
絶対にできないと考えているのなら、カズヒはそれを悟れるだろう。それぐらいには、彼女と自分は同調できる。
だからこそ、それは本気だ。
できると思っているからこそ、それによって煽ることが成立する。
カズヒ・シチャースチエの神経を荒立てられると信じている。
だが、カズヒは不思議と心が乱れない。
決意と覚悟と気合と根性で、押し付けて鳴らしているのではない。
むしろその逆。全く必要がないぐらい、彼はまだまだ大丈夫だと確信している。
だからこそ。
「そうね。なら和地がしっかりやることをやれているうちに、貴女を潰すとしましょうか！」
戦闘を継続することに、憂いなし。
互いに誓った瞼の裏の笑顔に、翳りは一切生まれない。
九成和地は、涙換救済（タイタス・クロウ）は。
愛し合う連理比翼の救済者は、そう簡単には倒れない。
彼は必ずできる範囲でやるべきことをやってのける。その確信があるからこそ、カズヒはためらうことなく一歩を踏み出す。
その攻撃を、モデルバレットは手で受け止める。
力が拮抗して睨み合う中、モデルバレットは不愉快をオーラで分か

るほどに示してのける。
「……気に食わないなぁ。誠にいに相応しくないくせに」
その言葉と共に、殺意の質が変換される。
先ほどまでの楽しみながら殺したいと荒ぶる陽の殺意が、すぐにでも殺さんと研ぎ澄まされる陰の殺意に。
そして、星辰体の感応量が増大化する。
「天弄せよ、我が守護星――鋼の悪意で世界を犯せ」
静かな殺意と共に、モデルバレットだけが持つ星辰光が、此処に開帳される。

遍く激戦は、その全てが激化する。

明星双臨編　第十六話　改良とは欠陥や問題を克服することである。

和地Ｓｉｄｅ

襲い掛かる魔獣達は、文字通り俺達を集中砲火で囲んで叩いている。
砲撃型、近接型、更に防御型。それらを攻撃力重視と機動力重視に区分けして、部隊単位で運用することによる波状攻撃。
防御障壁を瞬時に出現させれる俺にとってはやりやすいようで……実際のところはこのままだと削り殺される。
おそらくだが、敵の星辰光は維持性が高いと考えるべきだ。態々軍事的に調整した星辰光なのだから、一定以上の継続戦闘能力はあって当然だろう。
つまり長期戦は不利。なので俺は短期決戦で叩き潰しを仕掛けるのみだ。
もとより、パラディンドッグは俺の所為で長期戦なんて不可能だしな。この手の輩に長期戦は愚策だということも考えれば尚更だ。
なので、遠慮なく突貫する。
「覚悟してもらおうか！」
遠慮することなく、俺は魔星レベルの星辰光で猛攻をしのぎつつ、ショットライザーと魔星剣で突貫する。
モデルヘキサは後方に下がりつつ砲撃でこちらを攻撃してくる。まぁこの手の能力を持っていながら接近戦とか、基本的に効率が悪いから当然だ。
だからこそ、後先をあえて考えずに突貫する。
この星辰光はその性質から考えて、絶対必須のコンセプトがある。
それは「取り込んだ敵を確実に削り殺す」という確実性。

敵をあえて絞って異空間に取り込み、圧倒的な数の暴力で長時間かけて圧殺する。それがモデルヘキサの星辰光に必須のコンセプト。人造惑星として調整されたのなら、当然だがそれができるように補正されてあるべきだ。

だからこそ、長期戦ではこっちがもたない。必要なのは博打にしてでも短期決戦で叩き潰すという突貫攻撃。

長期戦や防御に徹するのはリスクが多すぎる。それは安全策とか堅実という名のジリ貧だ。やるなら速攻！

故に、俺は即座にショットライザーを操作する。

『ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ！』

突貫する為の突破口を開くべく、俺躊躇なく攻撃を叩き込む。

『パラディンソードブラスト！』

放つのは、魔星剣を母体として生成される特殊弾頭。

星辰体と強大な感応を施された弾丸により、道を邪魔せんとする魔獣達を即座に打ち抜く。

それを確認する間も惜しんで、素早くバックルにショットライザーを装着。

『ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ！』

脚部にエネルギーを収束させ、俺は一撃狙いの跳び蹴りを叩き込む。

『パラディンブラストフィーバー！』

狙うは速攻……一気に潰す！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

リヴァ・ヒルドールヴは、目の前に敵を相手に内心で舌打ちをしていた。
短い戦闘ですぐに確信できた。
仮面ライダーテンサウザー・ロスト。その総合能力は今の仮面ライダーグリームニルより上だ。
成長性という持ち味を持つグリームニルだが、今の成長段階ではどうしての性能は限度がある。
断言してもいい。基本性能でテンサウザー・ロストは現段階のグリームニルをしのいでいる。
更にそれ以外の特性を持っているとすら思える。
まず、こちらの動きに対して最適な動きをほぼ確実にとっている。
おそらくだが、シャイニングホッパーと同系統の行動予測対応機能を持っている。これにより、瞬時に大量の対応パターンを出したうえで即座に最適解を導き出しているのだろう。
更に厄介なのは、敵が持っている武器。
黄金の剣と思える機械的な武装は、武装としての性能すら高い。
そして、それだけでなく―
『ジャックライズ！』
組み込まれたレバーを引き込むと同時に、強烈な攻撃が振るわれる。
『レジスティングアント』
同時に具現化するのは八体のレジスティングアーミー……の強化型。
八体のそれは下手なレイダーを超える身体能力で包囲圧殺をかけるが、リヴァは素早く大地を隆起させると同時にキャニスターじみた砲撃を放ち、それらを迎撃し―
『ハッキングブレイク！』
『Ｏｄｅｎ！』
―相手の次の攻撃に備え、素早くプログライズキーを起動させる。
『サルヴェイティングドッグ！』
『スキルヴィングディストラクション！』

光の防壁を纏って突撃を敢行するテンサウザー・ロストに、カウンター狙いの蹴りを叩き込む。
衝撃が走り、お互いが反動で吹き飛ばされ―
『サウザンドライズ！』
―更なる反撃が発生する。
『サウザンドブレイク！』
その瞬間、リヴァは持てる全てをもって防御を選択し―
『リベレイティングキャット！』
振るわれる連続攻撃を、何とかしのいだ。
『ＺＡＩＡ　ＥＮＴＥＲＰＲＩＳＥ』
小さなコールが聞こえる共に、リヴァは後ろに下がって体制を整え治す。
……かけてもいいと、そんな確信を覚える。
あのテンサウザー・ロストは、サウザイアー・魏に匹敵する仮面ライダーだ。
今のグリームニルでは性能が一歩足りない。それほどまでに高性能。
しかも動きの対処から考えると、テンサウザー・ロストはシャイニングホッパー以上の行動予測を可能とする。
とどめのあの黄金の武装。
推測するにプログライズキーのデータを取り込んで多種多様な技を発動するのみならず、プログライズキーを装填することで更なる技すら発動できる。
高い性能と最適解を見出す本体と、多様性を一手に担う武装。まともに運用できるのなら、間違いなく脅威となる存在である。
だがそれは、武装を何とかすれば手札を大きく減衰させれるということでもある。
普通なら難しい。出来る方がおかしい。
だがしかし―
「じゃぁ、反撃言っちゃおうかしら♪」
―既に仕込みは万全だった。

リヴァの微笑みを悟りテンサウザーが警戒したその瞬間、テンサウザーの得物に鎖が具現化される。
鎖は地面に繋がり、雷電を放ちながら武装を引っ張り込む。
その衝撃が、テンサウザーから獲物を奪い取るという隙を生み出し、それをリヴァは逃さない。
「もらったわよ！」
躊躇なくリヴァは突撃を敢行。
この一瞬の隙を逃す理由はない。というより、改修されれば二度目は確実に警戒されるから困難になる。
決定的な隙が生まれたのなら、そこに全力を投入する。それは立派な戦術であり、リヴァは決して間違った判断をしたわけではない。
そう、判断は間違ってない。
「甘い！」
だが、そもそもの前提が間違っていた。
振るわれる打撃を弾き飛ばすのは、テンサウザーの徒手空拳ではなく黄金の得物。
同時に、リヴァの視界は鎖が絡み取った獲物があることを認識している。
その在りえない事態。それが何で起きるかを、リヴァは瞬時に推測する。
異空間に属する異能にいくつも格納していた？
星辰光が武装を創り出す？
否、星辰体や異能の気配は察知しなかった。
であれば何があるのか。その可能性を、リヴァは悟る。
プログライズキーは大抵の場合、コンセプトに乗っ取った機能を持つ。
そしてあの武装はプログライズキーを併用することが大前提となる武装だった。
そう、つまりテンサウザーのプログライズキーは、最低でも片方に―
「その武器そのものを創り出すのが―」

「―その通りだ、聡いな」
―専用武装を創り出す機能が組み込まれている。
悪夢のような付け入る隙の埋め方に、リヴァは戦慄すら痛感した。

イッセーＳｉｄｅ

……やばいやばいやばい!?
え、ちょっと待って。
これどうするんだよ!?
『おっぱいこわいよぉおおおお！　うえええええん！』
俺の籠手から鳴り響く、おっぱいを恐れる子供の声。
なんということでしょう。
ドライグが幼児退行しておっぱいを怖がっている。
「おっぱいを怖がるなんて……そんな!?」
「そっちじゃないです」
小猫様のツッコミローキックが地味に痛い!?
「……まさかここまで追い詰められていたとは。イッセー、真剣に後でドライグに謝りましょう？」
シャルロットもキッツい！
いや、それにしてもどうするんだよこれ。
大昔に滅びたとかいう邪龍グレンデルが何故か出てきたり、オリジナルの変身ベルト使って英雄派の残党が仮面ライダーになったり、あとヴィールの眷属ともやりあえる元ゼファードル眷属が現れたり。
そんなときにドライグがこの調子って、絶対にやばいだろ。
『おい、俺は何時になったらぶっ殺しができるんだよ。っていうかドライグのクソは……何がどうなってるんだ？』

「例え天龍であろうと、生きるのがつらくなる時はあるのでしょう。強引にこちらの要望を押し付けているわけですし、もう少し様子を見ましょうか」
グレンデルにフードの男がそんなこと言うけど、ひっどいこと言うなおい！
天龍が生きるのを辛く感じるぐらいおっぱいは酷いってのか!?
そんなにおっぱいは悪夢なのか!?
どうせ俺が悪いんだよ、此畜生！
正直ちょっとグレたくなるけど、これマジでどうしたらいいんだ？
ドライグが不調すぎて、俺今は普通の禁手も難しいんだぞ？
「……兵藤。お前マジでどうすんだよ」
「先輩。ちょっと真剣に今後を考えましょうぜ？」
匙とアニルの男性陣からも辛らつなコメントだよ。
男なんだからもうちょっと、おっぱいに理解を示してくれよ。そんなにおっぱいは悪者扱いされるのか。
いや、でも今はとにかく……この状況をどうにかしないと。
「会長、リーネス！　俺に知恵を授けてくれ！」
「「と、言われても……」」
視線を露骨に逸らさないでくれ。
そんなにおっぱいは難題なのか。そんな悪夢レベルの代物なのか。
おっぱいは素晴らしい物なのに。尊いものだってのに……っ！
ってそんなことを言ってる場合じゃない。
マジでこれ、どうするんだよぉおおおおっ!!

明星双臨編　第十七話　底を突き抜ける窮地

和地Ｓｉｄｅ

とった。そう確信すらする直撃だった。
手応えもあった。決定的な一撃だと確信する。
そして見るからに、ステラフレームの胴体に風穴すら開けていた。
その上で、俺は悟る。
―まずい。
咄嗟の本能で、俺は瞬時にサルヴェイティングアサルトドッグに変身を切り替える。
モデルヘキサに攻撃を叩き込むと共に、スラスターを全力で噴射して強引に脱出を図る。
それだけの必要があるほどに、モデルヘキサは俺を捉えて離さない。
寒気を感じた。これはまずいと経験則が俺に警告を鳴らし続ける。
故に全力で障壁を張れるようにしたそのタイミング。
『隙ありだよっと！』
真上から、超高出力のアザトースによる砲撃が放たれた。
障壁を多重で形成しつつ、スラスターで何とかそこから離脱。
障壁が受け止めた一秒足らずの時間が、俺を窮地から何とか脱出させてくれた。
だがこれはまずい。というより……だ。
「ダミーかよ！」
『もちろんだね！　それぐらいの手段は用意するよぉん？』
やられた。今の攻撃でかなり時間をロスしている。
魔獣創造の再現を活かした、自分が経由して運用する更に力まで経由して振るうダミー魔獣。こちらが本体狙いを仕掛けてくると見込んでの、その為の備えは万全だったということか。

いいか落ち着け冷静になれ呼吸を整えろ。
今の咄嗟の対応でロスは大きいが、禁手は一旦解除したから時間経過で少しずつは回復するだろう。感覚的にだが、禁手はパラディンドッグなら5分使えるし普通に使っても一分四十秒は行ける。
だが使いどころは見極めないと。回復時間だってかなり遅々としている「数分一秒レベル」んだ。焦って乱用すれば今度こそ終わる。
だが時間をかけている余裕もない。無尽蔵の物量による圧殺は、こちらの消耗だって激しくなるから、使いどころを決めないと消耗が多すぎて禁手を使っても届かなくなりうる。
だが、どうする？
俺がそれを、戦闘と並行しながら考えようとした時だった。
「お前が本体かぁあああああっ!!」
殺意を全身からまき散らしながら、鶴羽が聖十字架の槍を構えてモデルヘキサに飛び掛かった。
俺は咄嗟にショットライザーとミサイルで援護するが、モデルヘキサはそれを半自動迎撃で撃ち落としつつ鶴羽の攻撃を捌いていく。
『ちょっとちょっとぉ？　パパも実の娘に酷いことしたりとか勘弁なんだよもぅ』
「ふざけるな！　日美子を……乙女を……なんで、あんな……あんな！」
まずい完璧に冷静さを失っている。
俺は何とかカバーに入ろうとするが、魔獣達が典型で襲い掛かり、俺が割って入るのを妨害する。
糞ったれ……しぶとい上に多すぎる！
「友達なのに……大好きなのに……分かってるはずなのに、なんでパパはそんなことできるのよっ!?」
涙を流しながら、怒りを覚えながら、鶴羽は猛攻をモデルヘキサに仕掛けていく。
だが全て、モデルヘキサは捌いていた。
感情が高ぶりすぎて動きが荒くなっている。あれでは威力は大きいがロスが大きすぎて、すぐに消耗するぞ。

実際攻撃が荒すぎたことが仇になり、モデルヘキサは鶴羽の腕をつかんで攻撃を食い止めていた。
『そんな酷いことばっかり言わないでよぉ。僕だってこれでも苦労してるんだよ？』
そう返すモデルヘキサだが、続く言葉が最悪すぎる。
『だって、実の娘に劣情を我慢できず暴発ってのは……流石にねぇ？』
「……は？」
思わず鶴羽の激情が減衰するほど、モデルヘキサの言い草はとんでもない。
『そりゃ僕は年が二十歳未満な若い女の子じゃないと魔術抜きじゃぁ興奮できないけど、実の娘に手を出すのはまずいでしょ？　母さんとしてもそれはちょっとまずいかもって感じでね、一生懸命ガス抜き相手にできるのを探してくれたんだよ？』
……よくもまぁ、そんな両親（奴ら）から鶴羽みたいなのが生まれたもんだ。
一周回って関心すら覚えるが、これはまずい。
「どけぇぇぇぇぇっ！」
『マグネティックスターブラスト』
全力で敵を薙ぎ払いながら駆け出すが、鶴羽の思考は極まりすぎて呆けてしまっている。
無理もない。実の両親がそんなレベルだと知れば、そりゃメンタルも限界だろう。
だがこのタイミングでそれは流石にまずい！
実際、モデルヘキサも拳を握り締めていた。
『だから殺すのは忍びないし……ちょっくら眠ってもらおうかな？』
糞ったれ、間に合わな―

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

吹き飛ばされたリヴァを見て、ベルナと春菜は思わず面食らっていた。
リヴァ・ヒルドールヴは非常に強い。これに関して二人も文句を一切持っていない。
そもそも主神の娘故に、基本性能が圧倒的に上だ。そこに百年を超える人生経験がかみ合っており、その厚みは自分達とは決定的に異なる者と言ってもいい。
更に仮面ライダーグリームニルの基本性能も非常に優秀ときている。特殊機能こそ目立ったものは持っていないが、特殊な力を持っているなら強いという物ではない。逆に強いのなら特殊機能に頼る必要もないものだ。
瞬間的な爆発力ならカズヒが最強だが、総合力においてはリヴァが一番優秀。それがリヴァ・ヒルドールヴだ。
そのリヴァが、素早く着地して体制を整えながらも変身を強制的に解除された。
その事実に、ベルナも春菜も警戒の度合いを色濃くする。
「おいまじかよリヴァ！　お前がそこまでやられる相手だってのか!?」
「いや～見誤ったかな～。これちょっとまずいかも」
リヴァの返答に、ベルナは頬が少し引きつっていた。
主神の娘にそこまで言わせる相手。それだけの力量を持つ者がザイアの残党に存在する。
想定外の事態にもほどがある。禍の団との戦闘に意識を割り振りきっている状態で、乱入したイレギュラーがそれほどまでの力量などと。
「変態じゃない分メンタルは気が楽だけどよ。これって不味いぞ！」
「でしょうね。乱戦だからまだましだけど……っ」

春菜もまた、思わず奥歯を噛み締める。
三つ巴や乱戦において最も避けるべきは、自分達が収束して狙われる環境を作らないことだ。
敵の敵は味方の理論で、「まずこいつを優先的に潰そう」という暗黙の了解が生まれればそれだけで詰む。数が多くなり連携されれば、不利になるのは当然だ。
今回の戦闘ではそれが起きていないのが唯一の救いだが、裏を返せばそうなればこちらは確実に負ける。
ホームともいえる駒王町での敗北は、三大勢力の和平ムードにも当然のことだが水を差す。そうなると禍の団との勝利などもあってここまで一気にきた分、反動で和平其の物に大きな悪影響が起きてしまうだろう。
それはまずいということを痛感し、三人は背中に寒気を感じる。
そしてその大きな要因ともいえる者が、ゆっくりと足を踏み入れる。
「愚かなる異形達に尻尾を振る、人類の裏切り者共よ。我らの断罪を受けるがいい」
その戦士が姿を現したことで、ザイア側のレイダー部隊は明らかに士気が向上していく。
「生き残ることができたのなら、我らの名を伝えるがいい」
科学的な武装を手に持ち、空いた片手を掲げて吠える。
「愚かなりし異形よ、我らを恐れよ！　道を踏み外した人間よ、我らに悔いれ！」
そしてその切っ先を自分達に突きつけ、力強く宣言する。
「我らが名はサウザンドフォース！　異形の支配から人類を解き放つ者なり!!」
その宣言と共に、更なる激戦が勃発した。

「まだかまだかまだか！　まだ着かないのか!?」
「……落ち着いてくれ。後五分もかからないし、かなり早い方だろう？」
「分かっているがなぁ!?　気にならないわけじゃないんだよ!!」
「少しは冷静になれ。あのグレモリー眷属がそう簡単に後れを取ると思うか？　まだ十分戦えているようだし、五分や十分でどうにかなることはないだろうさ」
「……それもそうか。とはいえ、今のリアスの領地に潜入するだけの連中だ。油断は出来んぞ」
「当然だとも。こちらも仕事はしっかりしないといけないのでな。星辰光（伏札）を切ることも仕方がないだろう」
「頼むぞ。まぁ、俺も切り札をしっかり切らせてもらうがな」

明星双臨編　第十八話　黄金龍君……え、マジで？

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、カズヒとモデルバレットの戦いはさらに熾烈を極めていた。
振るわれる猛攻はどちらも凶悪。既に空間内は大きく破壊され、しかしどちらも決定的な被害を受けていない。
そしてその戦いは……カズヒが押され気味だった。
既にアタッシュナイダーにハウリングホッパーを使用することで、仮面ライダー道間は凶悪な矛を獲得している。
更に高い安定性を持つ自己強化能力を発揮していることもあり、今の仮面ライダー道間は間違いなく盾と矛を最高品質で極めていた。
その上で、モデルバレットはその上を行く。
『いたぶるのはやっぱり楽しいけど、逆転されかねない相手だとやっぱいよね～？　本気でやっても殺しきれないと尚更って感じ？』
「そりゃどうも」
短く切り捨てながら、カズヒは冷静に相手の様子を窺っている。
戦っていくにして違和感を少しずつ覚えているが、それ以上に気にするべきはモデルバレットの星だ。
カズヒの影響を受けている以上、彼女自身が振るう星辰光からあまりに逸脱した星を獲得するとも思えない。
すなわち、モデルバレットが独自に振るう星は何かの意志を招来するという前提条件が必須となる。
純正たる魔星ゆえに性能ではこちらが劣っているにしても、そこを明かすことができれば勝機は十分にある。
問題は、それをさせる余裕がないことだ。
固有結界の展開に関して、モデルバレットは当然だが非常に警戒し

ている。
どうやら対固有結界の備えをしているようだ。これを突破して固有結界を展開するのはかなり難しいと考えられる。
となると、鶴羽にも同様の備えが成されている可能性もある。
「……後先考えている余裕は、なさそうね」
カズヒはそこで覚悟を決めた。
アタッシュナイダーからハウリングホッパーを取り外して、相手の動きを警戒する。
やるべきことは一つ。ハウリングホッパーに変身し直し、後で緊急搬送されることすら踏まえて強引にモデルバレットを打倒する。
その後すぐにでもモデルヘキサを何とかしなければ、流石の和地や鶴羽もただでは済まない。
『……言っとくけど、私を倒せてもおっさんにぶつかるのは無理だよ？』
その仮定を、モデルバレットは真っ向から打ち砕く。
『おっさんの星辰光はそういうやつだからね。殺しにかかった連中に増援が来ないようにして、長時間かけて確実に削り殺すのがコンセプトだから』
「えげつない星を用意してくれるわね……っ」
つまり介入はほぼ困難。中に入れられた者達だけでどうにかするしかない。ただし、相手は勝てると踏んだ連中だけを入れて対応している。
忌々しいほどに堅実な対応だ。正しい選択をきちんととっているから負けることはまずないという、苛立たしいほどの正論の叩き付けで仕掛けてきている。
カズヒは奥歯を噛み締めながら、その上で勝機を考える。
敵とて戦力計算をしたうえで戦っているだろうから、見出すならばそれができないだろう要素での要素だ。
……あるにはある。だが、それが本領発揮できるかは別問題。
そこまで考え、睨み合いの体制に入りながらカズヒな素早く念話を繋げる。

―悪いけど、そちらはどうにかできそう？　かなりまずい状態だから、すぐにでも来てほしいのだけれど。
そう呟いてみると、何故か凄い困惑の気配を感じてきた。
内心で首を傾げながら返答を待つ。
―ゴメン！　今ちょっとアーシアのパンツでドライグの幼児退行を治すことになってるから無理！　そのあと仮面ライダーとグレンデルとはぐれ悪魔を相手にするから……まだかかる！
「はぁっ!?」
思わず絶叫したのは、仕方がないだろう。
むしろこの程度で済んだカズヒの胆力こそを賞賛するべき展開であった。
『あ、隙ありぃ!!』
結果として更なる窮地に追い込まれたのだが。

イッセーＳｉｄｅ

「カズヒ!?　カズヒぃぃぃぃぃ!?」
やばい、カズヒからの通信が切れた！
「カズヒがここまでの窮地に陥るとは……っ」
「ダーリンのおっぱいネタで鍛えられているのに？」
ゼノヴィアとイリナも大慌てだよ。気持ちはとっても分かる。
だってカズヒだもんな。あのカズヒだからな。
俺達の中で一番胆力あるっていうか、俺とは別の意味で根性極めてるっていうか。
糞ったれ。俺のおっぱいネタは、俺としても不本意だけどいい加減

なれていると思ってたんだけどなぁ！
「……お言葉ですが、パンツ（ファーブニル）は色々な意味で想定外でしょう。人という者は未知には大抵弱いものです」
会長の鋭い正論が俺達に突き刺さる。
そうでした。おっぱいとパンツは全く違う物でした！
いや、そういうことじゃない。
『おパンティー、プリーズ』
うっさいよこのドラゴン！
なんということでしょう。アザゼル先生が契約を解除してアーシアと再契約した龍王。黄金龍君（ギガンティス・ドラゴン）ファーブニル。
こいつは、アーシアの使用済みパンツを要求するド変態だった。
いやほんと、ちょっと待って。
ミドガルズオルムは常に眠りたい。玉龍はなんというかチャラい。そして目の前のファーブニルに至っては、俺ですら引くほどのド変態。
まだ見ぬティアマットは大丈夫か。というか、邪龍と呼ばれるヴリトラが良識すら持っている風に見てきたぞ。
タンニーンのおっさんが本当に誇らしい。あの人が六大龍王のカテゴライズから抜けたのって、性格がマトモすぎるからか？　真剣にそうじゃないかと思いたくなる。
『おい、俺はいつになったらぶっ殺しができるんだよ？　っていうかファーブニルにしろドライグにしろどうなってやがる？』
律儀に待ってくれるのだけは感謝するぜグレンデル！
そしてそんなグレンデルに、裏切り者と英雄派が何故かうんうんと頷いている。
「おいおい油断したらいけないぜ？　突拍子もない変態性の発露こそ、グレモリー眷属逆転の始まりだからよ？」
「その通り。あれで曹操も痛い目を見たらしいしな」
うっさいよ！
どうせ俺は変態を突き詰めて窮地を脱してますよ！　何かにしろ覚醒とかにおっぱいが絡んでますよ！

でもここまで酷くねえよ。っていうかあれと同レベルに扱われるのは流石に泣きたい。
「そういうことです。今代の二天龍は乳房と臀部で異様な覚醒を遂げるのです。ここからが本番だと考えてください」
フードの男がとんでもないことを言いやがった。
ヴァーリとアルビオンまで同類に思われているのか。なんていうか、後であの二人に謝った方がいいような気がするぞこれ。二人まで巻き込まないでくれよ。
っていうか、これ本当にパンツでドライグを治す流れなのか？
いや、治すのはファーブニルとヴリトラだけど。でもファーブニルは対価でパンツを要求してるから、間違ったことは言ってないんだよなぁ。
「ちょ、マジでこれ、アーシアのパンツで治す流れなのか!?　どうにかならないのかよ!?」
真面目に思うんだけど、何故かロスヴァイセさん達が俯きながら首を横に振った。
なんて悲しい反応なんだ。これだけで答えが分かってしまう。
「……アザゼル先生が別の対価を用意しようとしていたのですが、ファーブニルの方が拒否したんです」
『金髪シスターの使用済みパンティ、プライスレス』
ロスヴァイセさんが遠い目で言うのに合わせて、ファーブニルは強い口調で断言した。
反論できないのが悔しい。まじで悔しい。
確かに、それは金に換えられない価値がある。そこには俺もエロを追求する者として、納得するしかない。

……いや、そういう問題じゃねえええええええっ!!

明星双臨編　第十九話　リモートライズ

和地Ｓｉｄｅ

『ＣＵＳＴＯＭ！』
間に合わない。そう思った時に、その音が響いた。
『ドーピングブラストフィーバー！』
放たれた蹴りが、モデルヘキサを鶴羽から遠くに蹴り飛ばす。
そのまま三回転ぐらいしながら地面に落ちるモデルヘキサを見下ろしながら、その下手人は侮蔑の感情をこれでもかと見せつける。
誰かなんて言うまでもない。今この空間にいるのは四人以外は全部が魔獣。つまり残る最後の一人に限られる。
それが、納得できるようでどこか信じられなかった。
「……下種が。こういうのをこの国では毒親というんだったな」
「それはちょっと違うと思います教官」
間の抜けた声を貸すほかないが、俺は教官にそこは指摘する。
いや、ちょっと待て。待ってくれない？
なんで教官がこの流れで助けるんだ。一応教官、敵だよな？
「……教官？」
「３０点だ。この状況下で呆けるなど愚行だろう」
ぽかんとする鶴羽に、教官は鋭い気配で周囲を警戒しながらそうたしなめる。
ちなみに俺は今の時点で、既に教官と共に鶴羽をカバーできる位置に待機している。
なにせ今は完璧に包囲されているからな。物量による圧殺を実現する空間に隔離されている以上、数の不利はどうしようもないほどこっちの状態だ。
教官が共闘の姿勢を見せているのなら、その手を掴む選択肢以外は

存在しない。
「……この場においては共闘する。その前提でいいんですね？」
俺が念のための確認としてそう尋ねると、教官は小さく頷いた。
「むしろ俺こそ必要だろう。俺は黄色人種は生理的に受け付けんが、アレは黄色人種以前で論外だ。むしろアレの娘などという鶴羽に流石に同情するぞ」
「……まぁ、めちゃくちゃ複雑な事情があるんで、厳密にはあっているけど違うんですけどね」
鶴羽も槍を構えながら、何とか立ち上がる。
そしてモデルヘキサは突っ込まない。
それはビビっているとか困惑しているとかじゃない。
既に大量の魔獣を具現化して、俺達を確実に圧殺する体制をとっているからだ。
戦力の逐次投入は愚策。集団戦とは基本的に、如何に相手の戦力が分散している時に、如何にこちらの戦力を収束させて叩き潰すかというのが一種の定石だ。
そして劣勢側がそれに付き合ってやる理由は欠片もない。
仕掛ける戦闘は短期決戦オンリー。それは俺達全員理解していた。
「現状の手札では勝ち目は薄い。付け入る隙はあるか？」
教官に対し、俺も無駄に隠したりはしない方がいいと素直に判断する。
「俺は一つ隠し玉が。鶴羽は？」
あるとすっごく嬉しいんだけど、有るんだろうか。
キュウタと同じくアントニン・ドヴォルザークの力を獲得したとはいえ、それがこの状況下で圧倒できるかというとちょっとあれだし―
「大丈夫。冷静になったし、切り札を切るわ」
―あるんだ。
何を持っているのかはともかく、此処はその切り札を頼るしかない。
俺も教官も視線を合わせて頷き、そして鶴羽を庇う体制で敵と睨み合う。

そして鶴羽は、何かを取り出すと腰に巻き付けた。
……それは、どこかショットライザーやスラッシュライザーと似通った、変身用のデバイスだった。
基部といえる部分は両者と同様。だがしかし、そこから先が違っていた。
ショットライザーもスラッシュライザーも、武器として運用できるデバイスだ。その為基部から突き出るような形で銃身や刀身が展開される。
だがその変身デバイスは、武器が接続されているわけではなかった。
どちらかというなら通信機の一部パーツがくっついているような形だ。
V字の様にも見えるその変身デバイスを装着し、そして鶴羽は周囲を警戒しながら、プログライズキーを駆動する。

イッセーSide

『……相棒。俺は状況がさっぱりつかめん。ここ最近の記憶が跳んでいるし、ファーブニルは何故かパンツを被っているし、しかも何で滅びたはずのグレンデルがあんな所にいるんだ?』
なんとか復活したドライグに、俺はなんて言ってやればいいのかさっぱり分からなかった。
いや、だってそうだろ。
俺だって状況の半分ぐらい分からないもん。確実に断言できるこ

とは「お前はおっぱいを怖がる幼児になってたから、パンツと引き換えに直してもらったんだよ」だもん。いろんな意味で言えるわけねえだろこれ。
なんなんだこの展開。まじで何なんだ！
俺が絶叫したくなっていると、グレンデルのやつは目見るからにうずうずしている。
『漸くぶっ殺しができるってわけか！　おい、俺にドライグの奴とサシでやらせろ！』
あの野郎、一対一の戦いがしたいのか。
ま、俺も一発マジでぶっ飛ばしたいから構わないけどよ。敵さん達はそれでいいのかが気になるな。
っていうか、二人揃ってちょっと不満そうだし。
「おいおい。独り占めはよしてもらおうか」
「そうだぜぇ。ここまで来たんだから、俺達にも楽しませろよなぁ」
『あぁ？　なんならお前らとぶっ殺しあってもいいだぜ？　邪魔すんな!!』
三人がそれぞれぶつかり合いそうになった時、フードの男が咳払いをする。
「落ち着いてください。別に赤龍帝以外にもいるのですから、そちらにすればいいのでは？　龍王ヴリトラやデュランダル使いも十分すぎる獲物でしょう？」
みんなも巻き込まれる形かよ。
つってもどうする？　俺は流石にグレンデルの相手で手いっぱいになりそうだし―
「そういうことならぁ、私が相手をするべきかしらねぇ」
―その時、リーネスが一歩前を踏み出した。
え、ちょっと待とうか。
いや、リーネスも戦えるといえば戦える。その為にスラッシュライザーを作って、仮面ライダーアイネスになったわけだし。
でもリーネスは基本的に後方担当だ。前線で大暴れするタイプじゃないし、仮面ライダーアイネスだって、基本的には護身用。前線

で積極的に暴れるタイプじゃない。
いや、あの本当に大丈夫なのかとか不安になる。
「……よろしいので？」
「ええ。どうやら彼も私と似たようなタイプみたいですしぃ」
ソーナ会長にそう答えながら、リーネスはジョン・マージ・ガトリングとかいう奴に向き直った。
に、似たようなタイプってどういうこった。
正直俺はちょっと分からないでいると、リーネスとジョンはお互いを見て不敵な笑みを向けた。
「特定のプログライズキーに限定特化した変身デバイス。考えたものねぇ」
「そっちこそ。よくぞスラッシュライザーを復元することができた。中々の技術力と知啓を持っているじゃないか！」
あ、技術者関連か。
俺が感心していると、既にリーネスはスラッシュライザーを装着していた。
そして、静かに視線を鋭くする。
「さて、こっちもあまり負けてられないから……ねぇ？」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

『ＭＡＧＩＣ　ＪＵＭＰ！』
『ＨＹＰＥＲ　ＪＵＭＰ！』
その音声は、異なる場所で同時に響き。
『Ｗａｒｎｉｎｇ，ｗａｒｎｉｎｇ．　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｎｏｔ

ａ　ｔｅｓｔ！』
彼女たちは決意を決める。
「「変身！」」
『スラッシュライズ』
舞い降りるスラッシュモデルが被さる様にリーネスを包み、
『リモートライズ』
展開されるドローンのようなリモートモデルが、まるでプリンターのように装甲を映し出す。
『コーリングホッパー！　Ｄｏｎｔ　ｌｏｓｔ　ｆｉｒｅｎｄｓｉｐ．Ｐｒｏｎｔｅｃｔ　ｈｅｒ　ｈｅａｒｔ』
具現化されるは、共に飛蝗を模した強化装甲。
『シャイニングアサルトホッパー！　Ｎｏ　ｃｈａｎｃｅ　ｓｕｒｖｉｖｉｎｇ　ｔｈｉｓ　ｓｈｏｔ』
だが同時に、その在り方はそれぞれが異なっている。
「……いつまでも後ろにいるつもりはないのぉ。そう、日美子（カズヒ）だけには背負わせないわぁ」
一人は友情に追いつき並び立てるように。
「カズヒ（日美子）を歪めた罪は重いわ。覚悟しなさい、糞親父……っ！」
一人は友情と並び立ち続けるが為に。
「だから、実験体になってもらうわぁ」
ここに、仮面ライダーアイネスの更なる形態が具現化され、
「今度は遠くで知らずにいてたまるもんですか。一緒に立ち向かうって決めてるのよ！」
同時に、全く新種の仮面ライダーもここに顕現する。
再現されたザイアスラッシュライザーで変身する、仮面ライダーアイネス、シャイニングアサルトホッパー。
新規開発された試作型リモートライザーで変身する、仮面ライダーファスト、コーリングホッパー。
ここに、更なる先を進む二人の戦士が降臨した。

明星双臨編　第二十話　異空間での激闘

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

推進力による加速を行うリーネスに対し、ジョンは躊躇することなく反撃の体勢をとる。
向けられるのは二門のガトリング砲。それぞれが腰部のサブアームで簡易保持されることで、両手持ちのガトリングガンによる圧倒的砲撃が襲い掛かる。
それをリーネスはシャイニングホッパーの行動予測機能を駆使し、更に瞬間的な推進力を発揮することで回避し続ける。
だが敵もさるもの。そこに更なる攻撃が叩き込まれる。
「ふはははー　弾幕は力なり！」
背部のユニットが前を向き、そこから更に砲撃が放たれる。
それはリボルバーカノン。総合的な連射速度こそガトリングガンに劣るが、しかし決して油断していい物ではない。
それらの猛攻がリーネスを打ち抜こうとした時、更に仮面ライダーアイネスの全身が輝きを灯す。
「シャインクラスター！」
展開されるのは光り輝く攻撃ユニット。
シャインクラスタと呼称されるそれは、弾幕を撃ち落とし弾き飛ばすだけでなく、隙あらば光弾を放ってジョンを狙う。
だが仮面ライダーハンドレットもまた、決して油断していい難敵ではない。
両肩のパーツが開店したと思った時、そこから光の翼が生えてハンドレットが飛翔する。
更に周囲の壁に足を突けば、脚部でローラーが回転して更なる変幻自在な機動を行使する。
リーネスもシャインクラスタを多角的に運用して動きを制限しよ

うとするが、そうすると防御が薄くなることで、逆にハンドレットが猛攻を当てれる状況に持ち込まれる。
仮面ライダーアイネスと仮面ライダーハンドレットの戦いは、一時的にだが膠着状態に持ち込まれた。

その光景を見て、一人の男が戦場に割って入ることを心みる。
だがその眼前を、聖なる斬撃が割って入った。
「……そこは直接狙っとけよ。今更投降すると思ってんのか？」
「そうか、斬られるのが望みならやってやろう」
短い言葉の応酬と共に、デュランダルの斬撃が襲い掛かる。
それを男もまた、剣を具現化して軽くいなす。
そこから素早く攻撃の応酬が繰り広げられ、そして一時的に鍔迫り合いの構えに入る。
そこに至って切りかかったゼノヴィアは、その刃を見て眉をしかめる。
「殉教四聖剣（デュリン・カリバー）を使っておきながら、よりにもよってテロ組織に入るとはね。ましてこんな下種な作戦に参加するとは……そこに宿った聖遺物が泣いているぞ！」
義憤と共に、ゼノヴィアが膂力をもって敵を弾き飛ばす。
殉教四聖剣（デュリン・カリバー）。準神滅具（ロンギヌス）の一種として数えられる、聖遺物を取り込んだ聖剣を具現化する神器（セイクリッド・ギア）。四つの異能を振るうことができる、高位の神器である。
それほどの物を振るいながら、寄りに持って下劣極まりない作戦に参加するテロリストに落ちぶれる。ゼノヴィアはそれを嘆き憤る。
だがそれを見て、相手はため息交じりに肩すらすくめる。
「ご立派なものを貰いましたから、ご立派な人生に拘りましょうってか？　勘弁してくれ、趣味じゃねえし懲りてんだ」
そう言い切り、そして反撃の刃が振るわれる。

他の仲間を一年生達の護衛や周囲の警戒に当てているが、ゼノヴィアは真っ向から敵と斬りあった。
これは驚くことには値しない。
殉教四聖剣は準神滅具だが、聖剣としてみれば本来のエクスカリバーや、何よりデュランダルとは一歩劣っている。
むしろ真っ向から渡りあえられているということこそが屈辱に感じるべきことなのだ。
その上で、ゼノヴィアはしかし攻撃の手を緩めない。
「それだけの刃を持ちながら、愉快犯のような愚行を！　刃が曇ると思わないのか！」
「んなわけねえだろ、若いねぇ」
ため息交じりで、男はゼノヴィアの攻撃をいなしきる。
彼女の言い分を愚かだと、態度をもって宣言していた。
何よりその猛攻をしのぐことで、そんな信念程度、大したことはないと断じていく。
「強さってのはな？　才覚と鍛錬で研ぎ澄まし、経験で磨いていくもんだ。むしろ正邪や貴賤なんて差異に囚われちまってるから、お前さんの剣はその程度なんだよ」
むしろ懇切丁寧教えるように、己の技量をもってゼノヴィアに持論を叩き込んでいく。
「ついでにいやぁ、想いの強さってのは正邪や貴賤じゃ決まらねえ。……つまりこういうことさ」
その瞬間、目の前の男の気配が何もかも切り替わった。
『……おほっ！　いい気迫じゃねえか』
戦闘中のグレンデルが思わず顔を向ける。
「なんだ、この気配⁉」
そこを追撃することすら忘れ、兵藤一誠が目を見開く。
技術者側でそちらに疎いリーネスとジョンは気づかなかったが、逆に言えば気迫を察知しやすい手合いは誰もが目を見開くほどの気配。
それだけの強い気迫をもって、彼はゼノヴィアを押し飛ばす。
「……どれだけ貫き何かを成せるか。思いの強さに価値があるなら、

それはただそれだけだぜ？」
弾き飛ばしたゼノヴィアを相手に、男は剣を正眼に構える。
そこからくる気迫は、あまりに鋭く、そして強い。
思わず誰もが見惚れるほどに、彼は己の言葉を体現していた。
「どんだけ他人から見て下らなかろうが、どんだけ他人から見て尊かろうが、そんなことは重要じゃねえ」
そう告げる男は、まさにその持論を体現する。
「自分の想いに価値が欲しいなら、その想いを糧に成し遂げろ。世の中、実績のない奴の言葉なんかに重みなんてないんだよ」
故に、成果を成し遂げることもできない思いなど知ったことか。
言外にそう断言し、彼は瞬時に切りかかり―
「……いいだろう」
―その刃を、ゼノヴィアは真っ向から食い止める。
そして衝撃で押し込まれた体勢を、デュランダルの力を増幅させることで強引に拮抗にまで持ちなおす。
その眼には決して油断もなく、むしろ倒すという強い思いが滾っていた。
「惚れた男の前で何度も情けない姿は見せん。何よりやりたいことがあるのでな。そういう意味では……」
その言葉と共に力が増し、そしてゼノヴィアは男を弾き飛ばす。
圧倒的な気迫を胸に、ゼノヴィアはデュランダルをこれまでにないほどに高めていく。
その力は、二強と言えただろうイッセーやグレンデルにも匹敵する。
それに男が舌を巻く中、ゼノヴィアは一歩を踏み出した。
「……何も成せなかった哀れな女だと、イッセーや会長の前で見られたくはないのでな。覚悟してもらう！」
「……いいねぇ」
その気迫と一撃に、男は敬意と歓喜の混じった笑みをもって応える。
殉教四聖剣を更に高めながら、彼は一歩を踏み出し胸を張る。

「我が名はリーダム・セカンドライフ！　情けないゼファードル・グラシャラボラスに見切りをつけ、更なる力を求めてツヴァイハーケンに鞍替えした男にして、ヴィール・アガレス・サタンと肩を並べて聖杯戦争を乗り越えた男なり！」
　そして気迫と共に、オーラを強くまき散らす。
「かかってきなぁ！　こういう心身共に強い奴とガチの殺し合いがしたかったんだよなぁ！」
「良いだろう、その首……もらい受ける!!」
　その瞬間、更なる剣劇が繰り広げられた。

　そしてその光景を見ながら、ソーナ・シトリーは静かに周囲を確認する。
　もとより自分達が仕掛けてこないのは、一騎打ちに応じたイッセー達に対する配慮だけではない。
　それだけなら、ジョン・マージ・ガトリングやリーダム・セカンドライフに配慮する必要はない。彼らにおいてはさっさと総がかりで仕掛けるということも可能なのだ。
　だがしかし、警戒に値する何かがあると踏まえていた。
　既に薄々気づいている。水を獣にして操る魔力をもってして、ソーナは何かを探り当てた。
　全てを察したわけではないが、敵が総力ではないことだけは分かった。
「イリナさん。ゼノヴィアさんの援護をしたくなるかもしれませんが、余力を残しておいてください」
「え、どうしてですか？」
　問い返されるが、ソーナは周囲に小さく視線を向ける。
「辺りにいくつか何か物体があります。おそらくですが、後詰の類かと」

敵は一切油断ができない。
それを痛感して、ソーナは内心で警戒心を高めていた。

明星双臨編　第二十一話　星を蹴り砕く時

和地Ｓｉｄｅ

「開幕速攻で決めるぞ。長期戦では削り殺されるだろう」
「了解教官！」
こういう時は教官に合わせる。
そして……この下種野郎は俺達が潰す。
こちらも遠慮をする理由はない。奥の手を切らせてもらう為、素早くパラディンドッグにフォームチェンジ。
故に、遠慮なくぶちかまさせてもらう。
「禁手化（バランス・ブレイク）！」
パラディンドッグの機能は、大きく分ければ二つに集約される。
一つは禁手の持続時間を三倍にする。今のところ残存時間は二分半であり、七分半が限界だ。
そしてもう一つの機能は禁手の切り替え。これにより、俺は禁手を複数使い分けるという荒業を可能とする。
今回至る禁手は、ある意味で最も単純といえる代物だ。
現れるのは八体ほどの魔剣の騎士。そして、俺はそれに合わせてもう一つの手を切る。
「……さて、こんなもんでいいだろう」
俺に同調する、レイドライザーのような装填部分がついた魔剣。即席だがこれで十分だ。
さぁ、覚悟してもらおうか―
『ＧＡＮＴＬＥＴ！』
―ここから、奇想天外な芸を踏まえさせてもらう。
『チャージングリザード！』
その瞬間、騎士団はすべてが星を纏って戦闘を開始する。

一人一人の高まった出力により、魔獣達を薙ぎ払い、攻撃を障壁で弾き飛ばす。
これこそが俺の今回の禁手、星宿す魔の騎士団（ディアボリック・ステラ・クルセイダーズ）
仕組みとしては木場が至った聖剣創造の亜種禁手に近い。いうなれば、本来の禁手である騎士団に、更なる特殊性を加えて具現化する応用発展形。
追加要素は単純。所有者の星辰光を振るうことができる騎士団を創造する。そしてそれを、チャージングリザードによって短期決戦高出力少人数仕様に変化させた。
今回は人数が少ないから、チャージングリザードが最も効果的。これはそういう単純な話だ。
故に―
「カバーは任せろ。行け、鶴羽！」
「ありがとう！　あと愛してる！」
―行け、鶴羽。
一発、絶縁宣言をかましてこい！
突貫する鶴羽をカバーしつつ、俺は可能な限り魔獣達をけん制。
更に撃ち漏らしを教官が捌き、鶴羽はその勢いをもってしてモデルヘキサに突貫する。
問題は奴が本体かどうかという点だが、鶴羽は聖十字架をフルに使って突貫する。
それに対し、モデルヘキサは―
『んじゃ、ガス欠まで逃げまくるよ～ん！』
―なんか増えた!?
野郎、維持性の高さにものを言わせて、徹底的に持久戦に突貫する気か。
『いくら聖杯でも、乱用できないならこっちの居場所は探れないよねぇ？　じゃ、ばてたところを捕まえてお二人さんを潰すだけさ？』
「分かり易いが妥当な手段だ。八十点をくれてやろう」
教官、褒めないでいいです！
くそ、だがどうする？

このまま本体を探しても、多分ダミー魔獣を増やす用が圧倒的に―

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

一方その頃、戦闘は更に激化していた。
『はっはっは！　ぶっ殺すのが趣味だからついやっちまったが、全員無傷とは潰しがいがあるぜぇ！』
グレンデルが興に乗りすぎて不意打ちでソーナ達を攻撃するが、しかしそれはソーナ達の力量で防がれる。
それがきっかけとなり、ギャスパーから闇が噴出。
これにより、状況は更に二転三転し―
「ならこっちも追加だ！　ゴー、ガトリンガル！」
―ジョンがそう告げると共に、研究施設の各部から何かが現れる。
それは遠目で見るとゴリラに近いシルエットだが、しかし明らかに大きく、更に機械的……否、機械そのものだった。
それらの数は少なく見積もっても四十弱。
「……サリュートとは全く異なる兵器ですね。それも人型から少し離れ……あぁ、そういうことですか」
「なるほどねぇ。そういうアプローチがあったのねぇ」
「感心してるところ悪いんですけど、会長もリーネスも何がなるほど的な!?」
ソーナとリーネスが何かに納得しているのに、急激な事態の変化に追いつき切れてない匙が、他の者を代表して追加の説明を願う。
これは仕方がないところも多いだろう。
これまでにも禍の団は大型兵器を投入していたが、このサイズの兵器は人型に留まっている。

ゴリラも猿系なので比較的近しいが、しかし明確にバランスが異なっている。これは不可解だ。
何故なら禍の団の人型兵器は「神器と宿す人体を大型人造にすることで、悪影響の低下と機能の高出力化を実現する」アプローチだ。
必然的に、人型から離れるのはディスアドバンテージが増えるのだが―
「おそらくサリュート系列とは別アプローチでしょうね。独立具現型を参考に、「使い手が巨大な人工神器に乗り込む」ことで安全性を確立したモデルでしょう」
「禍の団に流れた人工神器技術、独立具現型は比較的データが多い物ねぇ。たぶんそこから発想に至ったのかしらぁ？」
方向性は違えど頭脳は二人の指摘に、ジョンは仮面越しでも分かるほどに喜びを浮かべていた。
これだけで、誰が作ったのかがよく分かる。
「その通り！　独立具現型神器を発想の根幹とした人工神器系兵器群……ガトリンガル！　データ試験中で、怪我人が出てもいいようにこの工場を使わせてもらったのさ！」
そのまま盛大に胸を張りつつ、仮面越しでも分かるほどに不敵な笑みを浮かべている。
「さて、禍の団はこんな風に戦力強化済みさ。そっちは油断できるのかな？」
それは、シャルバと曹操を失ったことが痛打にならないとでも言わんばかりの態度。
それに対し―
「油断はしてないわよぉ？」
―リーネスもまた、不敵な笑みで対抗する。
仮面越しにお互いが不敵な笑みをぶつけ合う中、リーネスはジョンに断言する。
「今頃、鶴羽が試作型を使っているでしょうしねぇ？」

和地Ｓｉｄｅ

やばいと悟った瞬間、鶴羽は躊躇することなく聖十字架をあらぬ方向に突き出した。
その瞬間、放たれた紫炎が一体のステラフレームを焼く。
どれが本体か分からないダミーだらけの中、やけっぱちに見えないような正確に狙った砲撃。これはすなわち―
『熱ちゃちゃちゃちゃちゃぁ!? な、なんで分かって!?』
―やっぱり本体。
いやちょっと待て、今のでなんですぐに分かったんだ!?
「……悪いわね。これ、ぶっちゃけると強化が目的じゃないのよ」
え、そうなの鶴羽!?
「リモートライザーはプログライズキーの制御の殆どを遠隔制御することで対応する変身デバイス。だからどうしてもラグが出る分即応性重視の打撃力は低いし、この結界内だと通信もろくに繋がらないから本領なんて発揮できない」
ならなんで―
「だから、使ったのはあくまでプログライズキーよ」
―そう、はっきりと断言する。
「コーリングホッパーは南空鶴羽(私)専用のプログライズキー。その特性は、機械的に私の魔術回路を補佐し拡張することに特化した物。……単純に言えばね、今の私は固有結界を発動しなくても、限定的に拡張運用できる」
その時、俺は気づいた。
何かがいる。それも、霊体の類と思われるのが。
ま、まさか!?
「さっきから霊体化させたザビエルのシャドウサーヴァントがいるこ

とには気づかなかったみたいね。あんたの位置は割れてるのよ、糞親父！」
マジか!?
いや、それが分かるなら尚更行ける。
ためらうことなく俺は魔獣達相手に、騎士団を用いて迎撃と牽制に徹する。
今この場でどうにかするなら、それは数を補完できる俺の仕事だ。
そして―
「教官！　鶴羽のフォローを！」
「分かっている」
『ＣＯＳＴＯＭ！』
既に教官も分かっている。
この戦い、鶴羽を最大限に発揮させれるかが勝利を分ける！
展開されるは八発のミサイル。そしてそこに小銃を合わせたショットライザーの引き金が引かれる。
「ロック完了。逃げ場はないぞ……っ！」
『ドーピングブラスト！』
その瞬間、放たれたミサイルがモデルヘキサの逃げ場を防ぐように爆発する。
そこを見逃さず突貫する鶴羽は、リモートライザーの通信部分を操作していた。
『ＭＩＧＩＣ　ＪＵＭＰ！』
具現化するのは飛蝗型のライダモデルが複数。
そしてそのライダモデルは、飛び跳ねて上から紫炎を投射する。
ライダモデルにサーヴァントの宝具を宿して運用するってか！
凄いこと考えたなおい！
『コーリングチェイン！』
『あだだだだだぁ!?』
全方位から攻撃を喰らい、モデルヘキサは反応が遅れる。
……なるほど、あの野郎、戦闘訓練はさほどでもないな。
まぁこれだけの化け物兵器なら、戦闘技術を磨く必要性も薄いから

手も抜けるんだろうけど……甘すぎる。
俺達はいつだって、自分達より強い武器や強みを持つ相手に勝つ為に鍛えてきた。
そんな俺達を相手にして―
「怠けて勝てるとか舐めすぎだろうが！」
『ＢＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ』
―つくづく苛立たせてくれるもんだ！
俺は既にショットライザーを起動し、反転する。
そして騎士団も同時に反転し、魔剣創造の過剰反応で疑似的にショットライザーを構える。
『ＭＡＧＩＣ　ＪＵＭＰ！』
『ＣＯＵＳＴＭ！』
そして鶴羽と教官も、既にライザーを駆動させている。
「コード３Ａだ、決めろ！」
「了解教官！」
それに合わせ、まず真っ先に叩き込むのは俺の必殺技。
『パラディンステラブラスト！』
騎士団を含めたショットライザーによる集中砲火がモデルヘキサに襲い掛かる。
直後に襲い掛かるは教官の跳び蹴り。
『ドーピングブラストフィーバー！』
『なめんなこらぁ！』
振るわれるモデルヘキサの攻撃は、奇跡的にもそれに迎撃を当てる。
だが、その瞬間発生する衝撃波がモデルヘキサを一瞬だが宙に持ち上げる。
そしてその瞬間、大量のレジスティングアーミーと騎士団が組み付いてモデルヘキサの動きを封じる。
コード３Ａはザイアで教育された、ショットライザー使用部隊とレイダー部隊の複合戦術の一つ。
ピンポイントで攻撃を叩き込むブラストフィーバー系の必殺技に

繋げる為、敵の動きを集中砲火を盾にした組み付きで封じる行動パターン。
そしてどてっぱらをがら空きにした状態で、モデルヘキサは死神を見る。
飛び上がり、ライダモデルに蹴り飛ばされるようにして高速で迫る、仮面ライダーファストの姿を。
『ちょ、自分のパパを殺しちゃダー』
「うるさい」
その声は、強い決意と決別がこれでもかと籠っていた。
『コーリングチェインスマッシュ！』

コーリング
チェイン
スマッシュ

粉砕されるモデルヘキサが爆発する中、結界が解除されて俺達は駅地下の空間に脱出する。
そしてゆっくりと立ち上がる鶴羽は、静かに上を見上げていた。
俺はそれを、そっと抱きしめる。
言葉はいらない。上を見上げる理由も、なんとなくだが分かっている。
「さよなら……パパ……っ！」
ほんのわずかに震える肩に手を振れ、俺はそれを少しだけだが受け止める。
頑張れ、鶴羽。俺もまぁ、たまには弱音を訊けるぐらいには頑張る

から……さ

明星双臨編　第二十二話　クラスカード

和地Ｓｉｄｅ

よし、空間が解けて脱出できた！
っていうか周囲を見ていると、かなりやばいことになっているな。
「カズヒねぇっ！」
「カズヒぃっ!?」
なんか追い込まれ気味だったカズヒねぇをカバーする為に、俺も鶴羽もすぐにモデルバレットに飛び掛かる。
モデルバレットは回避してこっちを攻撃しようとするが、その前に俺達ごと大量のミサイルに襲われた。
「まさかと思うが共闘は続いていないぞ？　ここからは三つ巴の再開だな」
教官えぐい！　正論なのがまたムカつく。
『あれ、おっさんやられたの？　マジかぁ……なに使った？』
モデルバレットが、モデルヘキサの残骸を見て少し意外そうな表情をしていた。
それでカズヒねぇもモデルヘキサが倒されたことに気づいたんだろう。鶴羽の方を見て、少し気まずげな様相だった。
「……そう。私がやるべきかと思ったのだけれど……ゴメン、鶴羽」
「いいわよ、別に。……私が決着つけたかったんだし、さ？」
お互いに苦笑いだけど、残念だがそれを長続きさせている暇はない。
なにせ禍の団側はほぼ壊滅だが、ザイア残党はぴんぴんしているみたいだからな。
「全員大丈夫なのか？　特にリヴァ先生……変身解けてるけど」
「ん～、割とピンチ？　ちょっとチートみたいな真似されててねぇ」

そう返されたので相手を見れば、サウザイアーに酷似した仮面ライダーがそこにいる。
手に持っている武器がチートみたいなのか？　まったく状況が分からないが―
「……よっし脱出成功！」
―そのタイミングで、イッセー達が空間を歪めて慌てるようにしてこっちに出てきた。
ギャスパーが負傷しているが、それ以外は基本的に無事なようだ。
そしてこのタイミングなら、増援と言っても過言じゃない。
「イッセー！　畳みかける、手伝え！」
「なんか分からないけど分かった！」
信用してくれてありがとうよ！
この状況、一気に俺達でひっくり返す！
その決意を見ってみんなと共に構えれば、サウザイアー擬きが肩をすくめた。
「これ以上の戦闘は危険か。……隙は作る、撤退するぞ」
そう言いながら、サウザー擬きはプログライズキーを得物に装填する。
どういうつもりか知らないが―
『ＳＴＲＯＮＧ　ＨＯＲＮ！』
『ＴＨＯＵＳＡＮＤ　ＢＲＥＡＫ！』
―いやちょっと待って。
なんか大量にライダモデルが出てきたんだが。
狗、猫、鷹、蟻。飛蝗に狼。チーターにマンモス。更には狐に鷲。更にゴリラに虎に熊に鮫にスズメバチにサソリ……多い！
なんだあのライダモデル博覧会は。たった一つのプログライズキーであそこまで出せるとかどういう理屈―
「ではさらばだ！」
って一斉に襲い掛かって―

イッセーＳｉｄｅ

いきなり大量に襲い掛かってきたライダモデルに、俺達は全力で迎撃した。
魔法の使い手であるロスヴァイセさんや、ロスヴァイセさんから魔法を学んでいる朱乃さんが防御魔法を展開し、匙もヴリトラ系神器を使って結界を作る。
ゼノヴィアがデュランダルで撃ち落とそうとするのに合わせて、俺もドラゴンショットを乱れ撃って迎撃する。
そんな風に皆が総力を挙げてライダモデルを弾き飛ばしきると、そこには―
「……誰一人倒れることなく凌ぐか。まんまと取り逃がした事実を差し引いても、９０点をくれてやる」
―確か九成達の教官とかいうやつが立っていた。
まさか……っ
「捨て駒ですか。それでいいのですか？」
ソーナ会長が俺と同じことを考えたみたいだけど、そいつは静かに首を横に振った。
「残ったのは独断だ。全員無傷とは思わなかったが、九成なら追撃は必ず来るだろうと踏んでいたのでな」
……俺達をそこまで警戒してるってのか。
思わず構え直すと、そいつは苦笑しているように肩をすくめた。
「教え子の中でも特に勤勉かつ意欲的な九成と南空がいるのでな。そいつらと肩を並べる連中なら、あれをもってしても追撃されると即座に判断したが、正解だったようだ」
「……めちゃくちゃ褒められてるわね」

カズヒがそういうと、九成も南空さんもちょっとむずがゆそうだった。
「それで、このまま戦うのですか？　一人では勝ち目がないと思いますが」
「殿とはそういうものだ。言っておくが投降すると思うなよ？」
ソーナ会長に、そいつは真っ直ぐに返答する。
投降する気は欠片もない。その意思が、これでもかと見えていた。
「そも俺達は機密保持用に措置を施されているからな。負けたら死ぬ、その覚悟があって初めてこの場に立っている」
馬鹿な俺でも何となく悟った。
ザイアの連中、そこまでするっていうのかよ。
『ふ～ん。こっちはもう終わってる扱いなんだ～？』
あれ？　この声モデルバレット？
気になって声の方に向いてみれば、そこにはステラフレームが。
あれモデルバレットなのか。あいつ、あんな感じで復活してたのかよ!?
っていうかなんかどんどん現れてるんだけど、もしかしてここで何人か片づけたい的なそれか？
まずいな。俺達だって結構疲れてるんだ。これ以上の戦闘は、きついんじゃないか？
俺がちょっと嫌な予感を覚えた、その時だった。
「レイヴェル無事かぁ！　手間取ったが眷属も連れて助けに来たぞ……どうやらまだまだ大変なようだな！」
なんか聞き覚えのある声が聞こえてきたと思ったら、炎をまき散らしながらあらぬ方からライザーが。
おいおい、冥界からここまで駆け付けたのか。
レイヴェルの為にそこまでするとはな。意外といい兄ちゃんじゃねえか。
「お兄様！　ちょうどよいところに、ありがとうございますわ！」
レイヴェルも驚きながら嬉しそうにするけど、そこに足音が響き渡る。

「かといって一人で先行されてもな。……だがまぁ、興味深い奴もいるようだ」
あ、なんかスラッシュライザーを装着した仮面ライダーが現れたぞ？
あ、九成やカズヒがいぶかしげだった。
「……どこかで会ったような……？」
九成とヒマリが警戒しながら首を傾げてると、カズヒが何かに気づいてから複雑な表情を浮かべていた。
「ブレイ・マサムネ・サーベラね？　大王派がここで動かすとは意外な展開だこと」
あ、そっか！
そういえばこんな奴いたっけ！　確かロキと神殺し作って一戦交えたとかそんな奴！
あとゼノヴィアやイリナが興味深そうな表情だ。確かヘキサカリバー計画のきっかけになったらしいからそれか。魔剣創造を禁手で資材を魔剣に加工するらしいし。
「フロンズ・フィーニクスからの依頼だ。フェニックス関連は分家の彼も無視できる問題ではないしな。今回はあくまで様子見だった……が」
そしてブレイの奴も複雑な表情を敵に向ける。
「確か拳銃術などを担当するグロウ教官だったか。彼ほどの実力者が生存していたとは、ザイアも存外しぶといものだ」
「久しいな、サーベラ。お前たち後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）には思うところは数多いが、そこに気取られる余裕もない」
そう返しながら、グロウと言われた奴は一枚のカードを取り出した。
弓を構えた男が描かれているカード。一見するとただのカードみたいで、役割とかもよく分からない感じだ。
だけど油断できない。
異形や異能に縁深い俺達だからこそ分かる。あのカードから感じるのは、明らかに強い異能の力だ。

寒気すら感じる異能の力。
明らかにやばい。下手な神器を超える異能の力を持っているのがよく分かるし、底知れないのがなおさらだ。
「……夢幻召喚（インストール）」
その瞬間、グロウの姿が変化する。
というより、仮面ライダーとしての装甲の上から、どっかで見たことのあるような外套を羽織った形だ。
なんていうか、軍装みたいな印象だ。軍人が前線で羽織る防寒具……って感じな印象を覚える。
それを見て、何故か南空さんが目を見開いた。
「冗談……でしょ？」
「鶴羽ぁ？　何に気づいたのぉ？」
リーネスがそう問いかけると、南空さんは信じられないように首を横に振る。
それにリーネスが怪訝な表情を浮かべ、九成とカズヒが庇う様に前に出た時だった。
「教官が、サーヴァントの力を宿してる……？」
南空さんその言葉に、俺達全員面食らった。
いや、冗談だろ。
サーヴァントの力を宿す手段がないわけじゃない。キュウタやメリードも宿しているし、南空さんなんて複数のサーヴァントの力を切り替えられる。
だけどそれは簡単じゃない。キュウタやメリードはリーネスがかつて試験的に行った聖杯戦争で召喚し、当人から了承を得た場合のみ出来て、しかも専用に躯体を調整しているからだ。南空さんに至っては固有結界の応用だから特例すぎる。
それを、アイテム一つでやったってのか!?
「……サーヴァントカード、もしくはクラスカードと呼ぶらしい。置換魔術の応用で媒体となる自身の肉体の本質を、座にいる英霊と置換する代物だそうだ」
グロウはそう言いながら、真っ直ぐこちらを見据えて告げる。

「孤軍陣地（シュライネン・フェアディーンスト）」
その瞬間、気配が明らかに俺達から見てもやばくなる。
自己強化系の宝具か。しかもこの気配……やばい。
「さて、サウザンドフォースは俺一人で挑ませてもらうが……容易く抜けれると思うなよ？」

和地Ｓｉｄｅ

「上等だよ、やってやる」
俺は一歩を前に踏み出す。
この人は、もはや止まるつもりはないのだろう。
だからこそ、確認の為に俺は再び問いかける。
「……なんでそこまでするんですか？」
「決まっているだろう。俺はそれを許容できない。かつて語った通りだよ」
グロウ教官は、真っ直ぐに俺と向き直って告げる。
それが俺の戦う理由だと、誰に恥じることなく宣言する為に。自分はこうだと俺達に告げる為に。
「俺のような人種差別主義者が、そもそも人間でない人型まで許容できるか。なら戦うぐらいしかないだろう？」
そう告げ、そしてショットライザーを構えて告げる。
戦う理由を宣言し、それの命を懸けると決めた。ならばあとは語る必要はないと、気配で告げる。
俺もそれを理解し、ショットライザーを素早く再装填。
『ＡＳＳＡＬＴ　ＳＡＶＥ』

既にパラディンドッグは時間切れだ。これ以上はこれで挑むしかない。
覚悟を決めろ。彼は自分の価値観が異形を許容できないと、今ここで断言した。
理解しても相容れない存在はいる。そして妥協や寛容が相互に成されないのなら、後はもう戦うほかないだろう。
せめて真っ向から挑むことで、礼儀をするしかないのだから。
「……ちょっとちょっと。私にも手伝わせなさいよね？」
そこに、鶴羽が並び立つように一歩前に出る。
「鶴羽……いいのか？　大丈夫なのか？」
「……お前は下がっていた方がいいだろう」
思わず教官と一緒に気遣いの言葉すら出てくるが、鶴羽は胸すら張って聖十字架を構える。
その態度が、気配が、大丈夫だと告げていた。
「大好きな親友を汚した糞親父と決別したぐらいで、大好きな男性と並び立つのやめるのなら、そもそもこんなところに私はいない」
そう告げて、鶴羽は俺をちらりと見る。
その表情が、どこか誇らしげで笑み交じりだと。仮面越しにも関わらず、俺はそれをよく理解した。
なら、これ以上は野暮だろう。止めるのなんて論外だ。
カズヒ（道）・シチャー（間）スチエ（日）（美）（子）の親友として、今度こそ共にいたいと願う。
九成和地という少年を、一人の女性として愛したい。
それが彼女の決意なら、是非も無し。
共に、道間日美子（カズヒ・シチャースチエ）を大事に思う者として。互いを支えに、ザイアの日々を呑まれず育った者として。何よりお互いに愛しく思える、相互の関係性として。
俺は彼女を尊重したい。
だからこそ―
「カズヒねぇ、イッセー」
―俺は真剣に一歩を踏み出す。

その上で、後ろの仲間にしっかり頼る。
「モデルバレット(そっち)は任せる。教官(こっち)は任せろ！」
できることはしっかりと成し遂げる。だから、できないことはできる奴にしっかり任せる。
「「……任せた！」」
返答はしっかりはっきりと。なら、もはや憂いは欠片もなし。
「「教官……お覚悟を！」」
「そんなもの、既にできているから安心しろ」
そして、決戦は始まった。

明星双臨編　第二十三話　星、乱れ撃ち

イッセーＳｉｄｅ

そっちの決着は任せたぜ、九成。
そういうわけで、俺達はモデルバレットと向き合った。
『ふ～ん。なら、もうちょっと伏札を切ろっかなぁ？』
モデルバレットはモデルバレットで、そんな余裕の態度を崩さない。
……って、何か気づいたら増えてない？
ふと気づくと、何処からか二体ぐらいモデルバレット……っていうか、ステラフレームが現れた。
なんか動きがぎこちない感じだけど、途端に更に魔獣が具現化しているし……これ、やばくね？
「なるほどねぇ。ステラフレームってつまり……そういうことぉ」
「何か分かりましたの？」
感心しているリーネスに、朱乃さんが尋ねる。
何か分かったのなら教えてくれると嬉しいです。
「簡単に言えばぁ、ステラフレームそのものは共通規格であることをいいことに量産しているのよぉ。ステラフレーム自体が共通の星辰光を持っていることから考えてぇ、無人機……と言っていいのか分からないけど、そういった運用もできると考えるべきねぇ」
なるほど！　やばいね！
『そゆこと。私らみたいな独自の星を振るえるぐらい自我を保っているのは「自我復活体」って感じなんだよね～』
そんな風に軽く答えながら、モデルバレットは腕を俺達に向ける。
その途端、量産型ステラフレームがこっちに突撃してきやがった！
上等だ。ここまで来てやられるかってなぁ！

俺が拳を握り締めると、ライザーとブレイも一歩前に出る。
「ならいいだろう。レイヴェルを誘拐した報いを与えてやる！」
「仕事はきっちりする主義だ。やることをやらなければ参考資料も買えやしないしな」
今回は頼るぜ、二人とも！
『ならこっちも、本腰入れて相手しよっかなぁっと！』
そう言いながら、モデルバレットも強く星を具現化してく。
来るか。ここで！
『『『創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星』』』
これが、ステラフレーム共通の星辰光か！
『『『戦闘状況変転により、これより星辰体兵器の全開駆動を開始する』』』
確かステラフレームは、共通の星辰光を持っている。
リーネス達の推測は、別の場所にいる人型人工神器プラットフォームとの接続だったな。
『『『ラージフレームとの接続係数を１００％に。遠隔接続ラインの並列駆動数強化及び、乱数変化込みで実行。戦闘状態の維持及び、安全機構の搭載を増設する』』』
ラージフレームってのがそうなんだろう。たぶんだけど、人型兵器にしたリソースの殆どを内蔵する人工神器の強化に割り振った代物。人型機動兵器としてろくに使えない、歩いて動くのも一苦労だろう代物。
その分武装も大型かつ強力。もちろんそれを住専に振るうには、大型かつ更に高性能な人型躯体がいなけりゃいけないんだろう。
だからこそ、発想を転換したのがステラフレームだ。
『『『必要工程を全て完了。これより最終パスコードを入力する』』』
ラージフレームの武装を遠隔操作して、その攻撃や結果だけを自分を中継端末にして発動させる。
これが、禍の団が至った人造惑星の新しい回答。
『『『全ては嘆きを生むために』』』
自他問わず悲劇を望むミザリの奴が振るう、新しい人造惑星（プラネテス）

高い出力と優れた運用性を併せ持った、ミザリの直卒高性能兵器。
『『超新星（メタルノヴア）――神意と星光の契約（ステラ・アーム・ステライト）、魔道たれ（ズ）』』

神意と星光の契約（ステラ・アーム・ステライト）、魔道たれ（ズ）
基準値：C
発動値：A
収束性：E
拡散性：AAA
操縦性：C
付属性：C
維持性：A
干渉性：E

第一世代型魔星（プラネテス）、ステラフレームの星辰光か！
上等、やってやる。
俺が決意をもって足を一歩踏み出せば、それより先に踏み出す奴らがいた。

Other Side

ステラフレームを見据えながら、ブレイ・マサムネ・サーベラは剣を構える。

今回はシンプルに威力が高く頑丈なだけの代物。使い捨てにすることも踏まえた試験作であり、特に銘もない代物だ。
だがそれで充分。否、十分にできない様では話にならない。
輝く未開(明日)を駆けるが為に、こちらもそれだけの価値があると証明し続ける必要がある。
故にこそ―
「天進せよ、我が守護星――――鋼の未開(あした)を駆けるがために。」
今ここに、更なる魔星が降臨する。
「鍛えられるは鋼の刃。未開の闇を切り裂いて、輝く明日(あした)に届かんと、刃を手に取る武士(もののふ)たち」
それは先を目指し進み勝ち取らんとする者達への敬意。
「故に受け取れ我が刀を。切る物を選ぶなどと嘯かず、全てを切れと願いて鍛えた我が刀剣こそ、五郎入道を超え六郎入道。村正すらも凌駕せし、切り裂きの刃は此処に至る」
それは己が見出した超えるべき目標と超え方を踏まえ、先に進まんと表明する決意。
六郎入道の極みは、五郎入道政宗を超えることによって初めてなされる。
「その理想(あした)を望むがために、我が望むは理想の担い手。限界を越えろというわけではないが、十全を示す者がいる」
故にこそ、必須となるのはそれを振るう物。
戦闘機などで言うテストパイロット。性能をきちんと引き出し、過酷な要求を乗り越え、それにより欠点や性能をきちんと把握できるようにしてくれる類の使い手。
そういったものが存在しなければ、作られた者は改善点を探ることすら難しい。優秀な武器や兵器には、優秀な試用者が必要不可欠なのだ。
「でなければ、真の進歩はつかめない。己(おの)が刃の限界を知らずに、さらなる刃をどうして作れる？　極みの刃を作るがために、優れた担い手は必須なり」
だからこそ、彼の星はそれを叶える方向に進んだのだろう。

干渉されるはエーテル。魔術回路保有者の言う空属性に由来する力をもって、彼は星を描いていく。
「故に我、刃を極めるがために担い手すらも鍛えよう」
そして具現化されるは数人の剣士。
人形のようなそれは、ブレイが投げ渡す刀を受け取り、ステラフレームやそれらが具現化するドローンと切り結ぶ。
それらはすべて、華麗な動きで魔剣を使いこなして挑んでいく。
「故に手に取れ我が刀を。その武威を余すことなく示すがいい」
それを誇りにすら思いながら、六郎入道（マサムネ・ジュニア）は星を振るう。
「超新星（メタルノヴァ）――曇りなく振るわれよ（セイバーズ・マサムネ）、六郎入道（ブレイド）が名刀」
具現化される、エーテル人形製造操作能力が、ステラフレームと激突する。

ブレイ・マサムネ・サーベラ
曇りなく振るわれよ（セイバーズ・マサムネ）、六郎入道（ブレイド）が名刀（括弧内は星辰奏者時）
基準値：B（C）
発動値：A
収束性：A
拡散性：C（D）
操縦性：AAA（A）
付属性：E
維持性：B（D）
干渉性：D

礼装型人造惑星として自らの星を更に極めたブレイの星は、極めて俊敏かつ繊細な動きを可能とする。
それはもはや本人を超える動きであり性能はともかく技量においては高みの息に到達している。
己以上の繊細な動きをもって、自分が作り出した魔剣を的確に振るう。
その猛攻によって、文字通り強敵を切り裂いていくブレイの猛攻を縫うように、ライザー・フェニックスもまた突撃を敢行する。
「俺の妹を可愛がってくれたようだな。返礼だ、豪勢なものをくれてやる！」
そう激高するライザーは、素早く腕を振るって突貫する。
そこに欠けられた腕輪が光、星辰体が感応する。
『ちょっとちょっと、悪魔の星辰奏者（エスペラント）化が激しすぎない!?』
モデルバレットがそうぼやくが、そんなことを気にする理由はかけらもない。
「創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星」
強く星と感応し、ライザー・フェニックスは星辰光（アステリズム）を解放する。
「火の象徴とは不死なれば。万年生きるが悪魔なれば」
そう、彼は不死鳥にして悪魔。
例え苦しい思いをして地に落ちようと、強き心の想いが炎を纏って復活できる。
それを知っているからこそ、星を振るうことで更なる成長を遂げることに躊躇はない。
「火と不死司る悪魔足る、我は再起を成し遂げよう」
その瞬間、強い炎が噴出され、文字通り圧倒的な加速力でステラフレームを翻弄する。
「翼を広げろ、炎を灯せ。艱難辛苦が立ち込める闇夜の吹雪を前にしようと、恐れることなく天を駆けろ」
そう、ライザー・フェニックスには強い想いが、根性がそこに残っている。
だからこそ、彼は此処に復帰して戦うことができたのだ。

「なぜならば、その先にこそ見果てぬ楽園が待っているのだ」
かつて届かなかった想いも、いずれは必ず叶えてみせる。心の中の誓いが、まるで抑えきれないように強い炎が加速を生み出す。
その強い想いが、決して絶対的な強さを発揮するほどではない星をもってして、大いなる成果を発揮する。
「輝かしく彩られし宝の如き花々を、目にするまでは死ねるものか。男の本懐遂げることなく、無様に地を這う道理無し」
そう、自分の再起はあの雪山から始まったと、ライザーは強い気持ちで思い返す。
「いざここに、新生を果たせ不死鳥よ。天の龍など何するものぞ。紅蓮の炎で焼き尽くせ」
いずれ必ず兵藤一誠すら超える。悪祓銀弾にすら通用しない、不死の炎を見せてやる。
その決意をもって、ライザー・フェニックスは飛翔する。
「超新星（メタルノヴァ）――いざ楽園（リ＝フライング・フェニックス）に届くため、再起しろ不死（ニック）なる鳥（ス）よ」
今ここに、灼熱加速能力たる、ライザー・フェニックスの星が降臨する。

ライザー・フェニックス
いざ楽園（リ＝フライング・フェニックス）に届くため、再起しろ不死（ニック）なる鳥（ス）よ
基準値：D
発動値：C
収束性：C
拡散性：E
操縦性：C
付属性：C
維持性：A
干渉性：D

この星の性能は、決して見ての通りで優れた星というほどでもない。

長時間優れた機動力を発揮できるといえば利点があるが、同時にそれ以外は決して優秀とは言わない。
だがそれでも、フェニックスという無理の効くライザーと、何よりそこにかける強い想いがこの星を強者に至らしめている。
そしてそれを悟った者は二人。
赤龍帝たる兵藤一誠。
悪祓銀弾（シルバーレット）たるカズヒ・シチャースチエ。
二人はこの星に欠ける祈りを悟り、思わず全力で大語を上げた。
「どんだけ覗きたいのっ!?」
心底からの絶叫に、思わず視線がまとめて集中した。

イッセーＳｉｄｅ

この人どんだけあの時覗けなかったことを根に持ってるんだぁあああああ!?
星辰光の詠唱って、本人の祈りとかが影響出るんだぞ。ある意味で本音が出てくるんだぞ。
それがもう覗きたい一色で染まってるじゃねえかぁ！
「……彼、赤龍帝の籠手を持ったらヴァーリ級の領域に到達したんじゃないかしら？」
若干遠い目をしながらカズヒが凄いこと言ったよ。
『びぇ～ん！　カズヒまでそんなこというぅ～！』
『ドライグしっかり！　また幼児退行してます！』
ああもう。ドライグがまた幼児退行しかけてるし！
気持ち分かるけどちょっと抑えてくれないかなカズヒ！　ドライグは復活したてで不安定なんだから。

いやまぁ、言いたいことは分かるけど。
俺に匹敵するレベルのスケベ根性だ。ライザーが赤龍帝の籠手を持っても、俺に匹敵する覚醒を遂げる可能性は十分にありそうだ。
……もう赤龍帝の才能が変態性になってしまっている。半分ぐらい俺の所為ではあるけど、本当にドライグに失礼な気がしてきた。
『……え～。覗き根性に一矢報いられてるの？　やだな～』
モデルバレットも凹み気味だけど、そんなことは知ったことか！
これ以上禍の団に、俺達の街を好きにさせる気はないんだよ。
「カズヒ！　さっさと決めるぜ！」
「同感ね。力を借りるわ」
俺達は同時に突っ込んで、動揺しているモデルバレットに迫る。
ドライグ！　大技一発で一気に決めるぞ！
『あ、ああ……この鬱憤、あの女で発散してやる！』
相当追い詰められてるから、尚更さっさと決着つけないとな！
「「ぶっ飛ばす！」」
『クリムゾンインパクト！』
『リスターティングユートピア！』
『あ、ちょっマジで!?』
遠慮なく、盛大に俺達は一発ぶちかました。
こっちは何とかして見せるから、そっちは任せたぜ、九成！

明星双臨編　第二十四話　教え子の理想とは師を超えることにあり

和地Ｓｉｄｅ

向こうは向こうで頑張っているようだ。
なら、俺達は俺達で頑張らないとな！
「なろっ！」
「せいっ！」
「７０点に届かんな。この程度か？」
ああもう！　教官やっぱり手強い！
っていうかさっきから打撃の威力が上がって……っというか筋力が底上げされてないか!?
だけど教官は神器を持っていなかったはず。かといって何か強化魔法を使っているとも思えない。
そこまで考えて、俺はふと気が付いた。
あ、まさか―
「サーヴァントの宝具か何かですか!?」
―そう考えるしかない。
しかもだが、おそらく発動条件が厳しく設定されているタイプだ。でなければモデルヘキサとやりあっている最中に使わないわけがない。意味のない出し惜しみで窮地に陥る人じゃないしな。
おそらくは本領発揮の為に必要な条件があるタイプだ。あの状況下では使えないからこそ、教官はそれを使わなかった。そう考えないと理屈が通らない。
となれば、次はその条件が何かだ。
……キーワードはこれまでの状況と宝具の真名。

宝具の真名はつまりその本質だ。サーヴァント同士の戦闘において宝具の開放は肝だが、同時にサーヴァントとしての真名を知られることと表裏一体。サーヴァントはサーヴァント故に過去を知りやすい為、攻略法や注意事項を察せられるというリスクがある。

それでも真名を躊躇なく開放したという以上、おそらくばれても問題ない。

孤軍陣地（シュライネン・フェアディーンスト）。この言葉と今この状況下で開放した事実こそが、正体に繋がる。

フェアディーンストは戦争・争い・勝負を意味するドイツ語だ。問題はシュライネンだが、どういう意味だ？

あの外套もおそらくはドイツの軍服に由来するだろう。となると、第二次大戦期のドイツ軍人……？

「……落ち着きなさい、和地」

その時、聖十字架を振るう鶴羽が、強引に弾き飛ばす形で教官から距離を置く。

その上で警戒しながら、俺に聞こえるように声を上げる。

「……英雄研究の講習で教わっているわ。レミ・シュライネン。たった一人で対戦車砲普通は二人で一つを使い、かつ部隊規模で運用するを一人で使い、ソ連の戦車部隊に多大な被害を与えて勲章を授与された義勇兵よ！」

「……あぁ！」

微妙な時期の人物を出したもんだなオイ。

いや、だがそれなら納得がいった。

宝具の真名と併用して考えれば、おそらくは自身を強化する類の宝具。それも、「たった一人で敵軍を相手にする」もしくは「個人での防衛戦」で発動できる類か。

俺達がそこに思い至ると、教官は苦笑の気配を見せる。

「……正解だ。孤軍陣地（シュライネン・フェアディーンスト）は単独での防衛戦に限り、単独行動・戦闘続行・勇猛スキルをCランクからBランクに上昇させ、更にCランクの千里眼と怪力を獲得する」

その上で、教官は近くのデカい瓦礫に手を置くと―

「それと筋力強化神器である剛力（マッスル・ブースト）の王も保有している！」
―そのまま勢いよく投擲する。
素早く鶴羽がそれを弾き飛ばすと同時に、俺は防壁を展開。
苦し紛れではなく目くらましと足止めと踏んでだが、相手も中々動いていた。
俺達の視界に映ったのは、明らかに個人で使うような代物じゃない大型の大砲が、水平射撃の体制だった。
「そしてレミ・シュライネンは、対戦車砲で名を挙げた英霊だ！」
『ＣＯＳＴＯＭ！』
放たれる砲撃をけん制に、更にショットライザーで必殺技を放つ構え。
なろう、だが分かった以上やることはシンプルだ。
レミ・シュライネンは最終的に砲撃を喰らうも、奇跡の生還を遂げたとかいう人物。砲撃戦闘で片づけるのは余計な影響を受けかねない。
だから―
「突貫するぞ、鶴羽！」
「分かってる！」
『ＡＳＳＡＬＴ　ＳＡＶＥ！』
『ＭＡＧＩＣ　ＪＵＭＰ！』
俺達は突撃し、そして攻撃を開始する。
砲撃は障壁である程度防ぎ、そして聖杯の加護で何とか突破。
「遅い！」
『ドーピングブラスト！』
「させるかぁ！」
『マグネティックスターブラスト！』
放たれる大量のミサイル攻撃を、俺は咄嗟に迎撃する。
そして、鶴羽は飛び上がった。
具現化される飛蝗のライダモデルと両足を合わせ、回転しながら一気に加速。
だが同時に、教官はそれを察知してショットライザーをバックルに

装填している。
『ＣＯＳＴＯＭ！』
教官が鶴羽の位置を悟るのと、鶴羽が突っ込んだのはほぼ同時。
「温い！」
『ドーピングブラストフィーバー！』
「喰らえ！」
『コーリングチェインスマッシュ！』

コーリング　ドーピング
チェイン　ブラスト
スマッシュ　フィーバー

ぶつかり合う二つの必殺技が、強い衝撃となってお互いを弾き飛ばす。
そこから先に復帰したのは、文字通り地に足をつけていた教官。
いや、例えそうでなくても結果は同じだ。
教官は俺達の教官であり、俺達は教官を越えているわけではない。
砲撃の衝撃を喰らいながらも生存していたレミ・シュライネンも宿っている。真っ向から弾き飛ばされての復帰では、教官が圧倒的に有利だった。
そんなことは分かっている。厳密にいえば俺達は、教練課程を終えていないんだ。当然だが、そんな奴は教官より劣っていて当然といえる。
だからこそ―
「そこで止まると思わないでください！」

―そこをカバーするのが、仲間だろ！
俺は素早く魔剣を具現化すると、同時にチャージングリザードを装填。
渾身の防護障壁で、追撃を流す。
そして、その一瞬の時間が―
「……教官っ!!」
―鶴羽の槍を、届かせた。
「……無念だが、見事だ」
こと切れるように崩れ落ちる直前の、教官の言葉が耳に響く。
「……合格、点を……くれてやる……っ」
その言葉は、彼なりの激励なのか、只の信念なのか。
ただ、俺達はその言葉を受け止める。
「今までのご指導……ありがとうございました……っ」

イッセーＳｉｄｅ

やったのか、九成、南空さん！
俺がちょっとガッツポーズをしていると、同時にいくつもの爆発が発生する。
そしてその爆風を間に挟んで、更に二体の量産型ステラフレームを盾にするようにモデルバレットは逃亡している。
「あ、こら逃げんな！」
『逃げるに決まってんでしょバーカ！　不利な環境に身を置かない判断力も強さの内ってね！』
なろぉムカつくぅ！
言ってることはある意味あってるのがマジでムカつく！　すっご

い腹立つぅ！
っていうか……カズヒは大丈夫か？
「……どうかした？」
残念そうだけど、特に変な様子はないか。
いや、ちょっと気になってたんだよなぁ。
「お前にとって、モデルバレットはあれだろ？」
モデルバレットは、ある意味でミザリ以上にカズヒにとって因縁があるはずだ。
なんたってカズヒから生まれたようなもんだしさ。カズヒにとって負の側面が具現化したようなモデルバレットは、ある意味だとミザリよりきつい存在だと思う。
だけど、カズヒはまだ余裕があるというかなんというか。
俺が首をかしげていると、カズヒは肩をすくめていた。
「そう簡単に倒せないって分かっているもの。倒せなかったのは忸怩たる思いだし後を考えると憂鬱だけれどね」
そう返しながら、カズヒはちらりと後ろを振り返ってから――
「……いえ、今日はやめておきましょう」
――小さくそう呟いた。
俺がちらりと見ると、そこには決着をつけた九成と南空さんが。
ったく。こういうところは自分に厳しいのか南空さんに甘いのか。
しゃぁない。ここは俺が一肌脱ぎますか。
「よっしゃ！　レイヴェルと一緒にカズヒも慰めるか！　ひと段落ついたら何か食べに行こうぜ？」
あとリーネスも誘っとかないとな。俺だけだと手古摺りそうだ。
……卵かけご飯が美味しいお店を探した方がいいかもな。こういう時は好物に限るってね。
俺がそんな風に考えていると、カズヒはこっちを見て苦笑した。
「そういうところだけ見せていれば、とっくの昔にモテモテだったでしょうにね」
すいませんねぇ。台無しにしてて！
「うっさいよ！」

「今のは誉め言葉よ？　私ってそんなに皮肉屋に見える？」
あ、そうだったのか。
俺は納得しながら、ちらりと後ろを振り返る。
……もうちょっとだけ、そっとしておいた方がいいかなっと。

明星双臨編　第二十五話　喪に服した後は、前を向いて歩こう

和地Ｓｉｄｅ

俺は、鶴羽と一緒に二人で兵藤邸で休んでいた。
イッセー達からメールで「レイヴェルとカズヒを励ましてきます。行く気になったら来ていいぞ」って来ていた。だがまぁ、今回はやめておこう。
モデルバレットを取り逃がしたカズヒねぇや、えげつない物を見せられたらしいレイヴェルも、気晴らしはいるだろう。そっちに気を回してくれるのはありがたい。
だが同時に、俺達を直接誘わなかった辺り、俺達がそうでないことは分かってるみたいだ。
なんというか、俺達はちょっとため息をついた。
教官は色々厳しい人だし、自他ともに認める人種差別者。更に相容れない組織についているうえに敵対しているわけだしな。
だが、それでも教官がいたからこそ俺達は強くなれた。
彼は差別主義者だが、教育に関して人種で贔屓はしなかった。教え方は厳しいが意味もなく厳しいことはせず、評価に値するなら高得点を付けてくれる。更に個人で質問をする時も、訓練の延長線上や自主鍛錬に繋がるのなら真摯に答えてくれた。
……そういう意味では恩師だ。少なくとも、生理的に受け付けない人物にも真摯に向き合って教えられる人間は、中々いない。ある意味で尊敬に値するし、差別主義者だからこそ真摯な態度の感銘すら覚え

た。
だからこそ、俺は鶴羽と共に簡単な形で喪に付している形だ。
駒王学園の制服は派手気味なので、素直に喪服として黒い服を着て、目を伏せて祈る。
教官達の立場では無宗教だろうから、とりあえずこの手のことに緩いだろう日本式だ。
目を閉じて手を合わせ、望まないだろうが冥福を祈る。
そして沈黙が五分ほど続いたが、ふと鶴羽が苦笑した。
「……パパを供養する気にはなれないのに、白人至上主義者の供養はしたくなるってのもおかしな話ね」
そう呟く鶴羽は、何とも言えない複雑な表情だった。
今日、鶴羽は二人の縁深い人物を自ら葬った。
前世のとはいえ肉親である、道間六郎ことモデルヘキサ。
今生における恩師ともいえる、ザイアの教官であるグロウ・セブンデイズ。
その上で、鶴羽は教官だけを供養することを選び、父親を供養する気にはなれてない。それが当人としても思うところがあるんだろう。
……俺はそっと鶴羽を抱き寄せる。
なんというか、普段より弱く感じるその体を、力を入れすぎないようにしながら抱きしめる。
「……大丈夫だ。少なくとも俺は今日、此処にいるから」
討ち取ることに共に全力だった者として、愛を向けられ愛を返す者として、俺は今日この日だけは鶴羽だけの九成和地でいよう。
カズヒねぇが俺を直接誘わなかったのも、きっとそういうことなんだろうし……な。
鶴羽も何も言わず、只そっと抱きしめられる。
五分ぐらいそうしていた気がすると―
「あ、入っても構いませんの？」
―ドアの影から、ひょっこりヒマリが入ってきた。
……恥ずかしいっ
というか、鶴羽がすっごくプルプル震えている。

「あわわわわっ!?　まってヒマリちょっと待って！　私、え、これ心の準備というか嫌無理だし乙女で義母で竿姉妹ぃいいいいっ！」
「鶴羽、教官は絶対今のお前を低評価するぞ」
凄い勢いでバグってきている。思わず俺も突っ込んだ。
いやホンと、これが鶴羽なんだけどなんて言うか。何も間違ったことは言ってないけど、間違いなくこの流れでお前が想像している流れいわゆる○Ｐにはならないと思うぞ？
俺が何とも言えない感覚を味わっていると、ヒマリはそのまま部屋に入ってくる。
彼女もまた、黒一色の喪服を着ていた。
そしてそっと線香の前に座ると、そっと手を合わせる。
そっか、ヒマリも教官の供養に来ていたのか。
「教官は私が質問に来ると、いつも眉間にしわを寄せてましたわ」
「「ですよね」」
これに関しては教官に心底同情する。
明後日の方向の質問が来て、対応に心底困ったことだろう。人種差別主義者として、ストレス１０割増しだったかもしれない。
もう一回線香を差して冥福を祈りたくなったが、ヒマリはそれでも懐かしそうだった。
「でも、ヒマリが真面目にした質問には、必ず真面目に答えてくれましたわ。問題のある人でしたけれど……そういう意味では誠実でしたもの」
ああ、そうだな。
間違いなく相容れないけど、あの人は俺達の恩師だった。
だから、せめて俺達だけは敵ではなく教え子として喪に服したい。
それは、きっとヒマリも同じだったということだろう。
なんとなく苦笑しあうと、勢いよくヒマリは手をパンと鳴らす。
「さて！　供養は終わりましたしそろそろ切り替えますのよ！　教官ならこのまましんみりしていると皮肉交じりに低評価してきますもの！」
そう言いながら、ヒマリは立ち上がると俺と鶴羽の手を取った。

「流石に豪勢な外食とは言いませんけれど、ピザをとっておりますの！　ヒマリもお腹すきましたし、皆で思い出話に花を咲かせるとしますわよ！」
そんな元気な言葉に苦笑しつつ、俺と鶴羽は視線を交わす。
―これからも、頑張ろっか
―ああ、分かってるさ
そんな小さなアイコンタクトで、俺達も意識を切り替える。
すいません教官。俺達は、意外とその手のことにルーズなもので。
がばがばとか緩いと言われるかもしれませんが、俺は今の自分達を気に入ってます。だから、よりよくしようとは思っても改めようとは思わない。
それこそが、涙換救済（タイタス・クロウ）が笑顔に誓ったあり方なので。
……まぁ、気が向いたら採点でもしてください。

Other Side

「ったく。グレンデルやら英雄派の残党やら、ゼファードルの元眷属やら、また面倒なのがどんどん出てきやがるもんだな。どう思うよ、リアス」
「アザゼルに同感だわ。というより、千年以上前に滅びているグレンデルは……やはりミザリ？　それともヴァレリー？」
「どっちかは断言できん。いくらミザリでもグレンデルの復活は反動が大きすぎるだろうが、だからこそツェペシュも虎の子のヴァレリーに乱用させるかというとな」

「だけどミザリはある意味で破滅主義者。それにツェペシュも男尊社会だから、女性であるヴァレリー・ツェペシュを使い潰す可能性は十分ある」
「しかも最悪、聖杯を使えるサーヴァントを召喚していることもあり得るしな。むしろ適切なコーチとして選ぶ可能性も十分だ」
「まったくもう。星辰光で神滅具の再現までできるのだから、何でもありすぎよこの世界」
「この調子だと、あと十年ぐらいで龍神級の強者がゴロゴロ生まれるかもな。俺らも軍備を強化する必要がありそうで凹むぜぇ」
「それはそれで頭が痛いわね。できれば味方に生まれてほしいけれど」
「……部長、先生。吸血鬼達が近づいて来ています」
「率いている人から見てカーミラですね。ただ、他に気配がするのでツェペシュも気にしているかと」
「ありがとう、祐斗、インガ。じゃぁアザゼル、そろそろ私達も仕事をしましょうか」
「そうだな。用事を終えたらすぐ合流するから、そっちもしっかりな」

明星双臨編　第二十六話　小規模な敵って説明する機会があんまりないよね？

イッセーＳｉｄｅ

今日俺達は、兵藤邸の地下にゲストを招いている。
そのゲストは冥界のブランド菓子を手土産に、俺達の前で一礼した。
「改めてまして、お義姉様達がお世話になりました。九条・梔子・張良です」
丁寧にお辞儀をしてくれるお淑やかな雰囲気だけど、絶対に頭のねじが外れてるだろうお姉さん。
超越最良（チョウリョウ・エボリューション）と名乗る、後継私掠船団の筆頭戦力だ。
「ま、そんなわけでよろしくな？　ちなみにこっちはフィーニクス家が新名物にする予定の焼酎だとよ。親御さんにでもやってくれや」
そしてノア・ベリアルさんも来ているけど、正直ちょっとピリピリしている。
ま、後継私掠船団は元々敵だしな。俺達が警戒するのも当然というかなんというか。
しかもあの幸香の義理の妹だしな。いろんな意味で警戒するというかなんというか。
そんな感じでピリピリしていると、とりあえずそこでリヴァさんが前に出て……梔子に抱き着いたぁあああ!?
「や～んかわいい！　お金に困りそうなのにお土産まで持ってくるなんて、後継覇王（アレキサンダー）はいい妹を持ったものね～？」
「いえいえ。今のところは仕事も多いので、無駄遣いをしなければこれぐらいは」

そして動じてねえ！
この女、もしかしてかなりできる……できるか。あの幸香の妹で、後継私掠船団の筆頭幹部だしな。
なんというか、警戒心が緩んだ気がするな。
と、そこでカズヒがゴホンと咳払いをする。
「……とりあえず、話を先に進める為にも地下に行くわよ。さっさと用事を済ませましょう」
カズヒがそういうと、梔子はなんていうか華やいだ笑顔を浮かべている。
なんか浮かべる理由ってあったっけ？
「はい、お義母さま。まずは用事を終わらせましょう」
―あ、カズヒが転びかけた。
っていうかお義母さまって。確かに幸香の義理の妹だとその例えあってるけど、カズヒの方が（肉体年齢は）年下だよな。
というか、カズヒ的に母親って状態はかなり地雷なんじゃ―
「あ、じゃ俺のことはお義父さまなのか？」
「そこは今どうでもいいから」
なんで九成はこういう時バグるんだよ。南空さんが素早く肩に手を置いて首を横に振ってるし。
カズヒはカズヒで珍しく凄い表情だったけど、すぐに我に返ったのか真顔に戻っていった。
「できればそれはやめて頂戴。普通にカズヒでもなんでもいいわ」
「そうですか？　ではカズヒさんで」
そこまで行くと、今度はノアさんがコホンと咳払いをする。
「とりあえず、話を先に進める為にも場所を変えようぜ？　……禍の団関連の情報を優先的にそっちに話すんだからよ？」

九成Ｓｉｄｅ

今日、ノア・ベリアルが後継私掠船団の九条・梔子・張良を連れて来たのは、禍の団が新たに動き出したことに連なる情報共有によるものだ。
なにせ今回、現場指揮官として禍の団の連中を率いていたのはユーグリッド・ルキフグス。
悪魔側の内乱において行方不明となり、まず間違いなく死んでいると踏まえられていたグレイフィアさんの実の弟だ。
しかもとっくの昔に滅びているはずの、邪龍グレンデルを引き連れてという事態だから尚更やばい。
其処にきて、大王派側の若手有力者であるノア・ベリアルは、情報をある程度共有するべきと判断して魔王派側である俺達に接触してきたというわけだ。
ちなみにソーナ会長も同席している。ま、リアス部長がいない以上は彼女がこの場におけるトップとして立ち回るべき相手だろう。リヴァ先生はサブリーダーポジにしておかないと色々不安だ。
「ではこれより……魔王派＆大王派合同による、禍の団関連情報の共有会議を始めまっす！」
しかも司会ポジションをキープしておりますしこの人。
「お前さんも大変だな」
ノア・ベリアルにも同情されたし！
「とりあえず！　今冥界の方はどんな感じなんですかねぇ!?」
俺が強引に話を進めると、ノア・ベリアルはため息をついた。
「大王派の連中はグレイフィア・ルキフグス殿をガチで警戒しかけてるな。ま、フロンズは可能性はまずないと見ているから、ちょっかいをかける暇があるなら情報収集をするべきだと進言しているがよ」
肩をすくめながらノア・ベリアルはそういうが、まぁこれは仕方がない。
死んだと思っていた実の弟が生きて禍の団にいるとか、実の姉は本

当に知らなかったのかと疑うのは当然の判断だ。
あの手の立場が一切疑わず鵜呑みにするのもそれはそれで問題だしな。そこはこの際おいておくか。
問題は、これでグレイフィアさんは身動きがとりづらくなっていることだ。必然的にサーゼクス様方にも多少の負荷はかかるだろ。厄介なことをしてくれる。
「……で、そちらについて元禍の団はどれぐらい知っているんだ？」
俺はそう梔子に問いかけるが、まぁ疑ってはいない。
というか、事実上の大派閥の側近である春っちでも把握していない存在を、禍の団と距離を置いている人員だった梔子が把握できているわけがない。
だがまぁ、こういう段取りは取れるのなら取っておいた方がいい。段取りというのは人間が行動をスムーズに切り替えるためにあるものだしな。相応の傑物はともかく、大半の人間には段取りという物は必要なのだ。
なので、梔子も静かに首を横に振った。
「私個人は知りえておりません。むろん、お義姉さまもそこまでは知らないはずです」
そこまで告げると、ノアが引き継ぐように軽く片手を上げる。
「で、だ。その辺も含めて情報を切り替えるぞ」
そこまで言うと、ノアは肩をすくめながら語り始める。
「まずは小面原の件だ。……奴が所属する組織の名は南海同盟と言って、いうなれば禍の団で後方支援を担当する組織だ」
……本題に入ってきたな。
「主な業務は運営資金の調達や、スカラベレイダーシリーズを運用する雑兵のスカウトとかだな」
後方支援を担当するバックボーンというわけか。
確かに、戦闘においては前線で戦う物だけでなくそういう支援者が必要不可欠だ。
其処を担当する部門がしっかり存在している。これは禍の団の危険度が更にやばくなっていることになるぞ？

「問題は奴らの目的だ。ここに関しては一部の上層部しか把握しておらず、後継私掠船団は独自の諜報活動で掴んだに過ぎない代物でもある」
というと？
俺達が無言で促すと、今度は梔子が引き継いだ。
「彼らの最終的な目的は一つ。禍の団の武力を利用することで、Ｇ１２に代表される北半球の先進国に壊滅的打撃を与えることです」
……は？
とんでもない展開に、俺達はちょっと面食らっている。
なにせ目的がＧ１２に対する壊滅的打撃だ。異形や異能側の組織である禍の団としては意外というか異例といえる。というか、どういう組織だ。
「なるほどね。つまり第三世界は今の世界情勢に不満があるから、異形と異能の世界情勢を覆そうとしていた禍の団と利用しあえると考えたわけね」
カズヒねぇがため息をつくと、ノア・ベリアルも苦笑いで返す。
なるほどな。
先進国というか国家的に上位といえる国家は、基本的に大半が北半球側だ。どうしても国際社会はそういう国家が主体となってしまうのは世の性質ともいえる。
加えるなら、異形勢力や異能勢力はそれを良しとしている。
積極的に人間界に関わる気がない。人間界の今の情勢に満足している。そもそも人間界の情勢にさほど興味がない。理由は様々だ。
だが、今の人間界に不満がある人間界側からすればそれは不満にもなるということか。だからこそ、異形側の情勢を打破する禍の団に恩を売ることで、ついでに今の人間社会の強者を打倒しようと目論んでいる。
「……そんなに、平和な世の中が嫌な奴って多いのかよ」
イッセーは渋い顔をするが、そこでリヴァ先生が苦笑する。
「まぁ、今の世界って平和でない部分が点在しているもの。そういう側にいる人達からすれば、平和を甘受する先進国は、それだけで不愉

快な対象になるかもしれないわね」
「……しかもそういう環境に置かれている者は、そもそも真っ当な教育を受けれず真っ当な人生を歩めない者も多いですしね。尚更テロという形に動く者も多いでしょう」
ソーナ会長もため息をつく中、ノア・ベリアルは別の意味で苦笑している。
「ちなみにとっ捕まえた小面原拾杯だが、取り調べて「私は外患を誘致したのではなく外患そのものだ。誘致した者扱いすることは名誉棄損に値する」とか「政治家になったのは情報を国家打倒の為に使う為だし、野党に入ったのは与党をこき下ろしてストレスを発散するだけで仕事になるからにすぎない」とか言ってるそうだぜ？」
うわぁ……うわぁ……うっわぁ。
とんでもないのがいたんだなぁ、おい。
「後継私掠船団（我々）も後の活動を見据えて諜報をしておりましたが、南海同盟は一部のメッセンジャー以外に主要人物は接触を避けていたので、つかめた人物は京都でメッセンジャーと接触を行っていた彼だけでした。他にも候補はいますが、数百人を超える為裏取りは困難です」
梔子がそう言うが、どんだけ規模がデカいんだよ。
こっちがげんなりしていると、今度はロスヴァイセさんが手を上げる。
「では次に進みましょう。……私達が接敵したジョン・マージ・ガトリングという青年ですが、英雄派と名乗っていましたが聞き覚えは？」
そういえばそんな奴がいたらしいな。
独自開発したデバイスを用いて仮面ライダーに変身するのみならず、後詰としてサリュートとは異なる人工神器兵器を投入していたとか。
更にロスヴァイセさんは魔方陣を操作して映像を映し出す。
ゴリラっぽいメカメカしい兵器だが、そいつらは手からオーラを発射したり、オーラを纏っての打撃を行っている。
同時に出されるデータから、機能の主体は人工神器で、独立具現型

神器を再現して「中に乗り込むスペースを作る」ことで使用者の安全を図っている仕様にしているようだ。
独立具現型というと、数年前に五大宗家のはぐれものやはぐれ魔法使いの組織に、神の子を見張る物から脱走したあほが技術提供した事件があったらしい。たぶんそこからの流れだろう。
「見ての通り、ガトリンガルと命名されたこの兵器体系は中々に危険です。知っていることは素直に全部話してほしいですね」
「構いません。お義姉様からも伝えるよう、情報を言付かっております」
なるほど。
じゃ、ある意味ここからが本番ってことか。

明星双臨編　第二十七話　でかい組織なら派閥の三つぐらいあるものさ

イッセーＳｉｄｅ

栀子がホワイトボードに、何枚かの写真を張っていく。
あ、ジョンの奴もそこにいたよ。あと一枚の写真を見て九成も眉を上げる。
「……確かそこの奴、駒王学園の襲撃犯にいたな」
マジか。
他にはあと数名ほどいるけど、俺達には心当たりはないな。
ただ二人もいるというのなら、こいつらが今の禍の団に残っていると考えていいんだろう。
「……禍の団は様々な組織が寄り集まっており、一枚岩ではありません。そしてそれは英雄派という大派閥でも同じことでした」
栀子がそう言うけど、それはそうだな。
旧魔王派の中にも、現魔王を上手く利用できればと考える奴もいた。英雄派にも後継私掠船団なんて言う奴らがいたわけだしな。
今の冥界も魔王派と大王派がいるし、どちらにも更に細かい派閥みたいなのがいるらしい。面倒くさいけど、組織ってでかくなるとそうなるんだろうなぁ。
「彼らはお義姉様曰く、混沌回帰連隊（ケイオス・フォース）。英雄派の中でも異端である、「必要なものを敵から略奪できる古き良き世界の奪還」を目的とする集団です」
……聞いただけでドン引きするんだけど。
「またそれは、愚かというか悍ましいといった感じだね」
ゼノヴィアは眉をしかめるけど気持ちはとっても分かる。

何そのヒャッハー集団。そいつらは北〇の拳みたいな世界が望みなのかよ。
俺達全員ドン引き気味だけど、梔子もちょっとため息気味だった。
「ちなみに彼らは「オーフィスを利用して人間世界の各国主要施設をすべて破壊」などという作戦を提示したこともあり、当然ですが曹操は却下したようです」
「本当にろくでもないですわね」
朱乃さんもドン引き気味だし、俺達もだよ。
マジでやばい連中じゃねえか。っていうか、南海同盟と仲良くなりそうな気が……いや、各国とか明言しているし、ちょっと違うか。
でもまぁ、そんな連中ならあんな滅茶苦茶な魔法使い共と手を組んだりもするな。
ユーグリッド・ルキフグスやグレンデルと一緒にこっちに来るような奴らだ。はっきり言って油断ができないっていうか、間違いなくやばい。
禍の団は間違いなく大打撃を受けたってのに、それでも強い連中が残ってるってわけか。
俺達も警戒しないといけないな。
特に今回、満身の所為で駒王学園の普通の生徒達にまで迷惑をかけているんだ。正体を隠して学生生活を送らせてもらっているんだから、今後は同じことが無いように気合を入れないと。
俺がそう気合を入れていると、リヴァさんが片手を上げる。
「ならもう一つ聞きたいけれど……グレンデルの復活とかに心当たりは？」
あ、確かに。
何千年も前に滅びているはずのドラゴンが、今更になって姿を現しているんだ。そこも気にしないといけないよな。
しかも、アスカロンに譲渡まで使って高めた一撃が決定打にならなかった。
いや、ダメージはしっかり入っていたんだ。だけどそのダメージを、邪龍のしぶとさでは説明ができないぐらいにとどめていた。これ

は絶対におかしい。
その辺り、そいつらが関わっているのかどうかを確認するのは大事だよな。流石リヴァさん分かってる。
ただ、そっちに関しては梔子もノアさんもいぶかしげだった。
「少なくとも、後継私掠船団(私達)が把握する限りでは考慮できるものがないですね。英霊ではないとはいえ歴史に名を残している以上、サーヴァントという可能性はあるかもですが……」
「ミザリが聖杯を使ってるにしても不自然だ。そんなことが簡単にできるならもっと早くしてるだろうしよ」
大王派や後継私掠船団が持っている情報からでは説明ができないのか。
リヴァさんもその辺は想定していたのか特に動揺はしてない。
ただ、ソーナ会長と一緒にギャスパーの方を気づかわし気に見ていた。
おいおい、まさかギャスパーの恩人であるヴァレリーの方なのか。彼女が持っている本物の幽世の聖杯(セフィロト・グラール)が使われてるってのか。
「……まさか、ヴァレリーの方が？」
ギャスパーの悟ったのか、目を見開いて二人を見る。
それに対して、リヴァさんは隠すことをせず頷いた。
「消去法でそうなるわね。ミザリが考慮するほどのリスクがあるのなら、それ以上に使わせて見捨てても問題ない人物を選びそうよ」
「……データをとることで安全な運用法を確立する捨て駒。そういう手法の可能性もあります」
リヴァさんに続いたソーナ会長の残酷な推測に、ギャスパーは肩を震わせる。
ミザリの野郎。推測でしかないけど、奴なら本当にやりそうだからシャレにならない。というか、その可能性の方がデカい。
カズヒも奥歯を噛み締め、拳を握り締めている。
ミザリに関して、カズヒは自分の責任として考えている。というか、責任が零ってわけじゃないのは俺達だって認めるしかない。直接的にスイッチを入れたのは道間日美子(カズヒ)だしな。

この件、二人の推測通りならギャスパーの次か同じぐらいに、カズヒにとってもきつい事態だ。
「どうやら、可能な限り早くリアス部長に成果を上げてもらう必要がありそうね……っ」
ああ、これは本当にマジな事態だな。
俺達にとっても、ギャスパーの恩人なら助けるに値する人物だ。少なくとも、俺にとっては十分すぎる理由だよ。
頼みます、部長。
どうか、色よい返事を掴んでください！

和地Ｓｉｄｅ

ノア・ベリアルと九条・梔子・張良が帰った後、カズヒねぇは屋上で黄昏ていた。
というか手に酒瓶が握られている。……あ、何とかしまった。
「カズヒねぇ。大丈夫か？」
いろんな意味でカズヒねぇのメンタルはきついことになっているだろう。それぐらい推測できるほどには、俺にだって考える頭はあると思っている。
だから俺はそう聞きながら、カズヒねぇの隣に座り込む。
それをちらりを見たカズヒねぇは、そのまま倒れるように俺の肩に頭を乗せた。
……こういう感じに甘えてくれるのはすっごく男冥利に尽きる。
ただし、今はそれを堪能するわけにはいかない。空気を読んで気合

を入れろ、俺。
そう意識を切り替えながら、俺はそっとカズヒねぇの肩を抱く。
秋も後半で冬に近づいている季節。少し肌寒いけど、鍛えているからこの程度ならといった感じだ。
「愚痴なら聞くぜ。少しは発散しなよ」
「……そうね。未成年飲酒なんてぶちかますよりはよっぽど健全ね」
カズヒねぇはそう言うと、盛大にため息をついた。
「本当に、誠にぃが何かするたびに私の罪悪感はひしひしと悲鳴を上げるわね」
そう皮肉気な表情で呟くカズヒねぇは、遠い目で過去を見つめながら、俺に体重を預けていく。
「いくら何でも予測は不可能だと分かっているけど、もう少し後先考えて行動するべきだったと痛感しているわ。しかもケジメもつけずに死んで生き返るとか、個人的にもどうかと常々思ってはいたのよ」
其処もまた、カズヒねぇの背負う業だ。
自らが罪深いことを成したのだと思っているからこそ、カズヒねぇは「成したことのケジメがつけられる」ことをいいこととしている。それはすなわち、自分がけじめをつけることもできずにいるということの証明だ。
前世においてけじめをつけることができたのなら、カズヒねぇは此処まで拗らせてなかっただろう。それはそれで果たして俺達がこうしていられるかという疑問にもなるが、それとこれとは別の問題だしな。
だからこそ。
「……そうだな。だからこそ、ミザリは俺達で止めよう」
せめて、俺は一緒に背負いたい。
どのような業であったとしても、それがあったからこそ俺はカズヒねぇと誓い合えた。その事実だけは変えたくないし、変わってほしくない。
だからこそ、カズヒねぇの業は俺も背負いたい。俺ぐらいは背負ってやりたい。共に背負いたいと心から願う。

だけど、それだけじゃないだろう。
「俺だけじゃない。鶴羽もリーネスも、ヒマリもヒツギも。……そしてイッセー達も、カズヒが背負いきれるきれないに関わらず、一緒に手伝って背負ってくれると思う」
「……そうね。正直もったいないと思うぐらいに良い仲間を持ったと思うわ」
カズヒねぇも同感なのか、そう微笑んだ。
ああ。俺達は本当に良い仲間達を持ったといえる。そこは本当に思っている。
だからこそ、素直に力を借りよう。
ミザリ・ルシファーは配下込みで強大で、更に禍の団まで控えているんだから。できないことを無理にするより、できる方法を考えて実行した方がいいに決まっている。
だから、待っていろ。ミザリ・ルシファー……道間誠明。
カズヒねぇは必ずお前を止める。お前の背中を押した責任をとる。
俺達が、それを成させて見せる。
天を見上げ、俺は心で決意する。
瞼の裏の誓いの原点。その表裏一体の業を背負う。
それもまた、俺の誓いなのだと決意した。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「で、どう備えるべきかしらね。リーネスはどう思うの？」
「そうねぇ。リヴァも思っていることでしょうけどぉ、絶対にろくでもないことが起きているわねぇ」
「ヴァレリー・ツェペシュを禍の団が利用しているのはほぼ確実。と

なると、ツェペシュ家はどれぐらいか分からないけど禍の団の息がかかっている。リアスさん達に増援を送る容易だけはしっかりしておかないとね」
「そういうこと。だからまぁ、それなりの備えは急ピッチでしておかないとねぇ」
「ふむふむ。先生気になるけど、どんなのびっくりドッキリメカができるのかな？」
「こんなびっくりドッキリメカができてるわよぉ」

「……わお。先生本気でビックリ」
「自信作だものぉ。インガも喜ぶといいけれどぉ」
「いや、ピーキーすぎて文句言いそうかな？」

「まぁ、もう一つ研究中のものがあるけれど……ねぇ」
「そうなの？」
「ええ、とびっきりのトンデモアイテムになりそうだわぁ」

明星双臨編　第二十八話　前兆

九成Ｓｉｄｅ

「この……阿呆共がぁあああああっ!!」
……カズヒねぇの怒声が響き渡るけど、今度は誰が何をやった？
一応カズヒねぇは分別だってある。それをもってしてもあそこまで怒鳴るとか、多分だけどド級の阿呆をやったわけだな。
俺はそれを考えながら、それとなく釣り道具を手入れする。
なんというか最近色々忙しかったからな。今度空いた日ができたら釣り堀にでも行こうかと思っている。海や川でもいいが、まぁ釣り堀は釣り堀で楽しいものだ。
海や川でも色々釣りたいな。連れたら美味しい魚で食事が彩られるし、自分の成果で美味しい想いをしてみんなにも美味しい想いをしてもらえると思うと、ちょっとワクワクするしなぁ。
……それにこの手のあほ喧噪からは絶対離れられるし。
「お、九成君も釣りをするのかい？」
と、そこでたまたま通りがかったイッセーの親父さんに声をかけられる。
この感覚。もしかしてたしなむ人か？
「親父さんも釣り好きなんですか？」
「そうなんだよ。いやぁ、君みたいな若い子が釣りに興味を持ってくれると嬉しいねぇ」
そう言われる照れるな。
そっかそっか。親父さんも釣り好きか。それは良い事を聞いた。
家主と共通の趣味を語れるのは良い事だし、今度トライフォース放送局でも釣りコーナーを作ってみるのもいいかもしれないな。

あ、そういえば。
「さっきからツッコミに入っているカズヒねぇもたしなんでますよ？
よければ一緒に行ってみるのもいいかもしれません」
「そうだったのかい？　それは良い事を聞いたよ。イッセーはちょっと釣りから距離をとっているからね」
あ、そうなのか。
イッセーはそんなに釣りをしてなかったのか。まぁ、学生の趣味としては古風な気もするし、イッセーの場合エロ方面に傾きそうだしな。
釣りとエロは結びつかない……釣りゲーとエロゲーの融合……ありか？
いや、思考が変なことになっているな。
訳の分からない思考になっていると、親父さんは苦笑する。
「昔釣りに誘った時に、高い釣り竿を流してしまったことを気にしてるのかもなぁ。覚えてるか分からないけど、そういうのって無意識に残るっていうしさ」
「あ～。それはためらいとか覚えるかもですねぇ」
堕天使側の方の件とかも尾を引いたしな。
……いや、あれは尾を引いて当然だろう。なんて迷惑なことをしてくれやがったんだそのクソ堕天使は。
と、こんなところで殺気を出すわけにもいかないな。
さてさて、いい機会だしここは釣り談義に花を咲かせるか―
「あ、和地は此処にいましたか」
―そんな時、真剣な表情のシャルロットが姿を現した。
……どうやら、釣り談義は後にした方が良さそうだな。

イッセーＳｉｄｅ

「馬鹿なの？　馬鹿なのね？　馬鹿だと思ってたけどもっと馬鹿だったのね？」
カズヒが鎮圧した教会三人娘にそうぼやきながら、俺に上着を放り投げてくれる。
……流石にカズヒに裸を見られるのは恥ずかしいしな。さっさとパンツだけでも履いておこう。
ついさっき、俺はゼノヴィア達に拉致られてエロゲーをする羽目になった。
女の子と一緒にエロゲーをする。真面目にこれはキツツい。普通にキツツい。
しかも桐生のタレコミで「全裸でする」なんて、変態紳士のノリまでやってきて俺が困惑したよ。
おかしいなぁ。俺はエロエロで、変態と言われてもおかしくないのに。なんで俺がエロで、シスターとか信徒に引くようなことになるんだろう。
なんか黄昏たくなると、カズヒがゼノヴィア達を逆さづりにして説教をし始めていた。
「もはやこれだけは絶対順守してもらうわ。桐生の、アドバイスはっ、絶対に信じるなっ!!」
「何を言う！　桐生のアドバイスはすべてが目から鱗の金言だぞ!?」
ゼノヴィアから反論が出るけど、カズヒはむしろそこが問題だといわんばかりに睨んでいる。
「並みの男ならドン引きで百年の恋も冷めるアドバイスは、金言じゃなくて禁言とでもいうものよ」
誰が上手いことを言えと。
意外とユーモアにも理解あるよなぁ。まぁ、前世は普通にバラエティ番組も見てるっぽいけど。
カズヒはため息をついて額に手まで当てて俯いていた。

「どうしてもいうならまずこれを確認しなさい。「下・上・後の口で○ン○を何人加えこんできているんだ」とね。具体的なプレイの内容もしっかり聞きだして書面に起こして私に確認させなさい。参考にするのはそれからよ」
桐生に逆セクハラの報復が！
いや、桐生のアドバイスはもっとやってほしいといい加減にしろが同時に来るから、一発かましてくれてもいいか。
ゼノヴィアはともかく、仮にも天使なイリナや、別の意味で天使なアーシアに変な情報ぶっこんでくるからな。それはそれで興奮するけど、同時にどうもあれな気がするしな！
というか、俺でも戸惑う方向性なのはどうなんだよ。マジで信じるゼノヴィア達もどうかと思うけど、言う方も言う方だ。
「……いえ、ちょうどいいから今度学校に行った日に直接聞くとしましょう。イッセーの人生も掛かっているから虚言は認めさせないわ」
「それは流石にどうよ!?」
なんかカズヒはカズヒで暴走してらっしゃいますか!?
俺も流石にツッコミを入れるけど、カズヒもとりあえず落ち着いたのかゼノヴィア達を下ろすと服を投げる。
「とりあえずさっさと服を着なさい。あとエロゲは一人でやるものよ。異性はプレイ中は黙って席を外すのがマナーと心得なさい。っていうか信徒として淫蕩まっしぐらなのはどうなのよ？」
盛大にカズヒがため息をついた時、レイヴェルがこっちに入ってきた。
「……出遅れましたわ！」
レイヴェルまでも!?
マジ勘弁してくれ。っていうか、この流れでそれは―
「ボケ倒さないでくれる……？」
―こうなるよなぁ
そっと、最後通牒としてカズヒがレイヴェルの頭を軽く掴んだ。
返答次第では全力で行く。奴はマジでやるから怖いんだ。
レイヴェルも思わず顔を真っ青にさせるけど、すぐに我に返ったの

か慌てて首を横に振る。
「……そうではありませんでした！　アザゼル先生から緊急連絡ですわ！」
「「「「……っ」」」」
俺達は緊張感を取り戻す。
おいおい。吸血鬼の里がやばいなんて言うんじゃないだろうなぁ!?

Other Side

「まったく。間違いなく禍の団が絡んでいるのでしょうけど、ここまで動きが早いとは思わなかったわ」
「旧魔王派のシャルバと英雄派の曹操。彼らがいなくなったことで組織の統制が崩れていると思ったんですけどね」
「祐斗もそう思うわよね。しかも象徴といえるオーフィスはいなくなった。指導者は破綻者過ぎるミザリで、象徴の新たなウロボロスだって本来の無限には届かない」
「組織力はどうあがいても大きく損害を受けていたはずです。そこからここまで盛り返すにしても、早すぎるかと」
「となると、余程のカリスマ性か統率力を発揮する新たな存在が禍の団についたとみるべきね。グレンデルを復活させたのも、その人物の入れ知恵かしら？」
「あり得ますね。とはいえ、格好の得物になるだろう僕達を殺さず呼び出すだけとは。……ただ」
「……そうね。まさかこんな形でインガが大変なことになるとは、

思ってみなかったわ」

「大丈夫……ではないですけど、そこまで心配しなくてもいいですよ。リアス様、木場君」
「インガ？　でも大丈夫なの？」
「少なくとも、リアス様がそこまで心配することではないです。……分かっていることはありますから」
「……ああ、なるほど。そうだったわね」
「はい。和地君は必ず来ます。貴女のところにイッセーくんが来るように」
「やれやれ。僕の男友達は女性陣からの信頼が厚いね」

明星双臨編　第二十九話　クーデター、起きちゃいました!?

和地Ｓｉｄｅ

俺達は地下に集まり、アザゼル先生から報告を受ける。
だがそれは、正直とんでもない事態だった。
「……ツェペシュ領でクーデター!?」
イッセーが思わず絶叫するけど、俺も絶叫したくなったよ。
おいおい、クーデターか。あれか。政権が武力によって強制的に強制交代されるあれか！
俺やイッセーが面食らっていると、通信越しの先生がため息をついた。
『まぁ、間違いなく禍の団と連携だろうな。これまでカーミラにちょっかいをかけていた連中も、そのクーデター連中が主体だったんだろうよ』
なるほどな。あくまで聖杯を使って行動してたのはクーデター連中で、本格的に動く為にクーデターまで起こしていたと。
で、リアス部長達はそれに巻き込まれた可能性があるわけか。
既に連絡を行っているけど、いまだに返信はない。おそらく軟禁されている可能性があるな。
「流石の祐斗くんも、リアスを庇いながらで一国レベルを抑え込めるわけがありませんわね」
「……最悪の可能性を考慮するべきかも、しれませんね……っ」
朱乃さんの歯噛みする声に、ロスヴァイセさんがかなり怖いことを言う。
まぁ、クーデター連中に禍の団が関与している可能性は絶大だ。グ

レンデルの件もあるわけだしな。
となれば最悪、インガ姉ちゃん達は……っ
俺達が薄ら寒いものを感じているが、アザゼル先生は軽く肩をすくめながら首を横に振る。
それは最悪の予想が当たっているという意味ではない。むしろその逆の、気にしすぎといわんばかりの反応だった。
『その可能性は流石にないだろう。今の禍の団を率いている奴に心当たりがあるが、あの野郎ならあえて殺さない程度の遊びは入れるだろうさ』
やけに確信がある言い方だ。というより、既に禍の団を現状率いている奴に心当たりがあるということか。
なんか、めちゃくちゃ嫌そうな言いかたなんだが。というより、表情から既にめちゃくちゃなレベルで嫌そうだ。
ここまで嫌そうな表情な先生も見たことがないな。どんな奴が禍の団を率いているんだよ。
別の意味で嫌な予感を覚えているが、もはや今はそれどころではない。
『今カーミラの方は、対ツェペシュクーデター陣営で準備を整えている真っ最中だ。脱出したツェペシュ王からの救援要請で貸しも作れるし、何より今まで仕掛けてきた奴らが確定したことから乗り気だよ』
……ツェペシュ王が里を脱出するほどの事態とはな。クーデター連中も相応の実力者が集まっているようだ。
十中八九聖杯による強化だろう。とはいえ、禍の団にも手練れが残っているようだから助っ人を貰っている可能性はある。例の現リーダーも実力者のようだしな。
となれば、こっちも黙って見ているわけにはいかないな。
「先生！　俺達グレモリー眷属もリアス達を助けに行かないと！　許可を取れないんですか！」
イッセーがそう言うのも当然だ。
そもそも、リアス・グレモリー眷属が主を軟禁されて黙って見てい

る理由はない。
カーミラに関してもごり押しできる余地はあると思うが……どうなんだろうか？
俺達が注目する中、先生ははすぐに頷いた。
どうやら既にその辺りの準備は整えていたらしい。この辺り、流石は元総督といったところだな。ありがたいことだよ本当に。
『カーミラも今回のことは重く受け止めていたな。直通の転移をしぶしぶ許可してくれた。すぐにでも準備してこっちに来てくれ』
へぇ。吸血鬼の里に直通で転移できるのか。
吸血鬼連中がそこまでしてくれるとは意外だが、そこまでツェペシュのクーデターがやばい事態すぎる言うことだろう。
相手も余裕がないならなりふり構っていられないといったところか。まぁ、魔王の妹が窮地なんだしな。変にごねて魔王軍が総力を挙げて介入する方がやばいと踏んだのかもしれない。
さて、かといってあまり多すぎるとツェペシュクーデター陣どころかカーミラも警戒するな。
となると―
「やっぱりオカルト研究部（いつものメンツ）ってことに？」
「そうですわね。リアスの窮地に向かうのならば、それが一番納得されることでしょう」
俺が聞くと、朱乃さんはそう答える。
まぁそうなるよな。リアス・グレモリーの窮地である以上、眷属などの関係者が主体となって動くのが当然か。
あまり別動隊まで用意して動くと、余計な警戒を吸血鬼側に植え付けるしな。助けに向かって吸血鬼側といきなり全面戦争は流石に避けるべきだ。
「となると、今回私達は待機した方がよさそうね。特に先生が行くと、アースガルズが介入するのかと警戒されそうだし？」
リヴァ先生がそう言うが、確かにそうだな。
リヴァ先生、主神の娘だし。そんな人物が鎖国中の地帯に入っていったら、絶対に戦争を警戒してくるよ。こっちにその気がないとか

関係ないよ。
となると、人員的にはいつものオカ研メンツに限った方が良さそうだな。
「となると、私達も今回は待機よね」
「ま、懲罰メイドがぽこじゃか出るわけにもいかねえか」
ちょっと残念そうだけど、春っちとベルナもそこは自発的に納得していた、
となると、客分であるレイヴェルも今回は待機だろう。
そもそも彼女は客人であって戦力ではない。今の立ち位置では態々危険だと分かっているところに入れるのは問題だ。その辺りはイッセー達が了承させようとしているからそれでいいだろう。
とはいえ、リアス部長達が軟禁されているわけだ。
……インガ姉ちゃん、大丈夫だろうか。
いや、逸るな。どちらにしても俺がどうにかできることは今のところないんだ。あの状況下では俺がリアス部長についていく余地もない。
自分にできることはあの時ちゃんとやっていた。自分を責めることもできることがあったと思いあがることもあってはならないだろう。そこは重要じゃない。
重要なのは、今俺達が何をするかだ。
そこまで俺が意識を切り替えた時、俺の目の前にカズヒねぇが立っていた。
こっちを覗き込むようにすると、少し安心したような表情になる。
「しなくてもいい責任を背負ってないようで結構。今するべきことはきちんと理解しているようね」
「……ああ、心配無用さ」
そうだ。今するべきことはインガ姉ちゃん達の無事を確認すること。
できないことを無理にしようとするな。成すべきことを把握し、成し得ることを見ぬき、成したいことを選べ。それが必要だ。
……だからこそ。

「力を貸してくれ、カズヒねぇ。インガ姉ちゃん達を助けたい」
「分かってるわよ。あと、私だけに言うことでもないわね」
そうカズヒ姉が返すと共に、思いっきりのしかかるように後ろから抱きしめられる。
こ、この感触は……ヒマリか！
「まったくですのよー！　バディを無視するなんて酷い子ですわね～和地は～」
体重をかけて俺を揺らしながら、ヒマリは俺の頭をなでる。
それがなんというかほっとする感じで、俺はまだ少し残っていた焦りが和らいでいくのを感じていた。
これが母性。前世の母親が齎す強い母性か……っ
「ちゃんと頼ってほしいですわよ？　ちょっと寂しくなりますもの……ね～？」
誰に相槌撃っているのかと思っていたら、俺の方にイッセーも手を置いた。
「俺達だってそうだぜ？　リアスや木場も心配だけど、インガさんだって俺達の仲間なんだからさ？」
……そうだな。ちょっと焦りすぎていたか。
俺はイッセーに拳を突き出しながら、少し笑みを浮かべる。
「頼るぜイッセー。その分頼りな」
「分かってるって。頼んだぜ、お互いにな」
拳をぶつけ合わせ、俺達は気合を入れ直した。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、漸く到着だけど、流石にちょっと寒いかな？」
「やっほ～！　待ってたぜマイサン！」
「やぁ父さん。それで、準備は出来ているのかい？」
「もちもちおけおけ♪　一通りの準備は出来てるし、ブツの抜き出しも完了しているよん♪」
「それは重畳。父さんは遊びを入れすぎることがあるから、肝心なところが抜けてないかちょっと不安だったよ」
「それはそれで喜びそうだけどな。ま、お互い重要な部分ぐらいはしっかりしとこうや」
「そうだね。で、リアス・グレモリーがここにいるって本当なのかい？」
「マジっぽいぜ？　流石にグレモリー眷属も来るみたいだし……ちょっと挨拶していい？」
「まぁ、初っ端にしておけば速攻で戦闘にはならないかな？　ま、僕は今回やめておこうか」
「そうなのか～い？　例の悪祓銀弾（シルバーレット）も来ると思うけど？」
「だからだよ。僕もいるって分かったら、日美子は絶対ガチの警戒でとんでもないことしそうだし。遊びは堅実に安全マージンを稼いでからにしないとね？」
「なるほどねぇ？　でもそれならなんで来たんだよ？」
「ふふっ♪　ちょっと新しい禁手を使おうと思っているんだよね」
「おっほぉ～。そりゃちょっと楽しみだＺＥ！」

明星双臨編　第三十話　政争バチバチ

和地Ｓｉｄｅ

俺は素早く荷物をまとめると、外の男子メンバーが荷物をまとめるサポートに回っていた。
何分こういった準備の教練も受けているからな。有事に素早く荷物をまとめる教練を受けていれば、必要最小限の荷物はすぐにまとめられる。
非常持ち出し袋と同じで、すぐに持ち出せるよう前もって備えをしておくに越したことはないといった形でもある。それらを前もって用意しておけば、この手の準備はすぐに済む。
「さて、荷物はこの辺でいいか」
「助かったっす先輩」
アニルの礼を受けてから、今度はイッセーの方だ。
幸いアニルは悪魔祓いの仕事をしているだけあって、長距離行軍に備えた荷物の準備はできるしな。
流石に女性陣は多少時間がかかるだろうが、これに関してはセクハラになるから流石にしない。
というわけで、俺達はイッセーの方をサポートに向かうわけだ。
あいつはこういう緊急の移動における荷物の準備には慣れてないだろうしな。何より―
「……どのエロ本持っていくかで迷ってそうだな」
「ガツンと言っちゃってください先輩」
付き合いが長いからすぐ予想できる。
そんなこと思いながらイッセーの部屋についたので、ノックをして確認をする。

「……おい兵藤、他にも来たみたいだぞ？」
「九成か～？　入っていいぞ～」
　匙の声まで聞こえたな。あいつも来ていたのか。
「イッセー、準備できたか？」
「うっす匙先輩」
　俺たちが入ってみると、イッセーの準備も大体できる感じだった。
　とはいえだ。防寒対策はどれぐらいできているか見ておかないとな。
「防寒具とか使い捨てカイロは用意してるか？　ヨーロッパは駒王町より数段寒いぞ」
「そっすね。この時期だと位置取りから考えて、雪降り積もってますぜ？」
「そうらしいな。一応防寒具とかは準備してきたけど……カイロも用意しとくか」
　イッセーが俺達の指摘を受け、荷物を確認し直している。
　とはいえだ、まだ時間に余裕はあるんだよな。
　あ、そういえば。
「そういや匙、以前言ってたレーティングゲームの学校がそろそろ始まるんだってな？」
　そうなんだよ。
　ソーナ会長が目指していた、どんな悪魔でも通うことができるレーティングゲームの学校。その建設が始まり、試験的な運用が始まろうとしているそうだ。
　いやぁめでたいめでたい。また大変なことが乱れ撃ちになりそうだから、そういう嬉しい話題は本当にありがたいことだ。
　とはいえだ。懸念事項がないでもない。
　アニルもその辺は同意見だったのか、ちょっと遠い目だった。
「フロンズ・フィーニクス達はどんな感じなんです？　色々面倒なこととか押し付けそうな気がするんですけど？」
　そこな。
　フロンズ一派は一応味方だけど、同時に政敵だからな。協力はする

けど油断はできない連中だ。
とにかく政治的にやり手だから、また何かされたんじゃないかと懸念しているわけだ。本当に油断ができないわけだし。
ただアニルがそう言った瞬間、匙が遠い目をして少し震えていた。
「ああ、ぎゃふんと言わされてたよ」
「「……え？」」
思わぬ展開に、俺達は面食らっていた。
匙はとても遠い目をしていた。ちょっと真剣に恐怖していた。
「……最初は、ソーナ会長とフロンズがお互いの利権とか負担とかで色々話し合っていたんだよ。ぶっちゃけると、フロンズが主導権を握っていた感じだった」
まぁそうなるな。
あのフロンズ・フィーニクスを相手にするなら、苦戦は必須だろう。
だが、匙は無意識に自分の体を抱きしめていた。
「それでフロンズ有利でも会長にも利があるような感じで決着がつきそうな時……会長がとんでもないことをやりやがった」
俺達は、思わず息をのむ。
それはいったい―

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

フロンズ・フィーニクスは遠い目をして思い出していた。
あの議題において、フロンズは一方的な勝利を目指したつもりはない。
自分達が可能な限り利益を得ながらも、ソーナ・シトリー達にも利

益が得るように立ち回った。負担もソーナ側が大きくかかるようにしていたが、自分達も相応に背負う形だ。
あまりに一方的にやっては、余計な怨恨を生みかねない。魔王排出の元七十二柱本家との家柄の差も踏まえて、致命的な事態を避けていた。
何より交渉とか商談は、双方に理があることが最も理想的だ。一方的に搾取する関係など、長期的な視野で見ればリスクどころかダメージの確定ともいえる。
こっちが大きく儲ける形にしつつ、しっかり相手にもリターンを与えることこそが、将来的な視点も含めた理想象だ。
そして想定されていたパターンにおいて、比較的不利益が少ない形に落ち着いたと思った時だった。
フロンズは思い出して、思わず肩を寒気で振るわせる。
『……本当に、私は不出来のようです。貴方の方が良くものを考え、先を踏まえて思索を行っている。……私如きの才覚で介入することこそ問題でしょう』
その、自虐すら感じる表情に、フロンズは一度きょとんとしてしまった。
何故この流れでソーナがそんなことを言い出したのか、理解が追い付かず―
『私は此処に宣言します。学園の全てはフロンズ・フィーニクスに預けるべきだと』
―とんでもない爆弾を叩き込んできた。
繰り返すが、フロンズはそもそも利益を独占するつもりはなく、不利益などの負担もある程度は背負うつもりだった。
理由はいくつもある。
先ほどの商談の理念も一つだが、他にもある。
家柄もあり、一方的な勝利を掴むのは余計な怨恨を背負うことになる。シトリー本家が持たなくても、縁ある馬鹿が恨んでくる可能性は大きいだろう。余計な恨みはなるべく避けるに越したことはないのだ。

そして、もう一つ問題点がある。
一言でいうならば、リスクやダメージを分散させたいのだ。
ソーナはもちろんフロンズも、学園設立は自分達が利益を得る為というよりは冥界全体の利益が主体だ。少なくともフロンズにとって、それにより結果的に利益が入ることを求めており、目先の家に入る利益は副産物に過ぎない。
故に、重視するべきはリスクとダメージの分散。かといってすべて押し付けるのも悪手。ある程度のダメージとリスクを背負うことこそ、将来気に過度な恨みを買ったり信用を失ったりしないギリギリの塩梅に繋がるのだ。
フロンズはそれらをソーナに読まれていることを承知のうえで、ギリギリのラインを見極めてきたつもりだった。
ソーナ達は極めて善良な者達だ。今回の件においても自分達以上に冥界の民を想ってのもの。必然的に、余程無茶なリスクの押し付けなどをしなければ最終的には了承すると思っていた。
そして想定範囲内かつ比較的都合がいいパターンだと思っていたら、全リターンを代償に全リスクをぶん投げてきた。
これは利益は独占できるが、失敗のリスクと失敗した時のダメージまで独占してしまう。更にソーナ以外の魔王派側に、余計な恨みすら買ってしまう。将来性を踏まえればどう考えても絶対に避けるべきことだ。
結果として、周囲の者達を上手く乗せる形で何とかそれは回避できた。
だが同時に、許容範囲を若干オーバーするレベルでソーナ側に利権を過剰提供することになってしまった。
「……正直に告白しよう。私はソーナ殿を舐めていた」
「ハッハッハッ！　お主が政（まつりごと）で後れを取るとはのぅ。若手四王（ルーキーズ・フォー）もやるではないか！」
それらを聞いていた幸香は、思わず腹を抱えて笑いながらソーナ達を評価する。
フロンズ・フィーニクスは幸香にとって同盟相手であり契約相手

だ。彼のことを幸香は本心から評価している。
　こと政治という分野では若手悪魔の域を遥かに超えていると思っていたが、決して油断できないということか。
「妾達のライバルは、将来有望で滾るのぅ？　お主としては不満かもしれぬがの」
「まぁ、歯応えが全くないのは油断と腐敗を招くしな。ある程度は必要だとも」
　二人はそう語り合いながら、紅茶を飲む。
　……ちなみに、冥界かつ後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）用の特別区域であることから、お酒が香りつけの域を超えている量は入っている。
　フロンズはブランデーを入れ、幸香はラム酒。ちなみに幸香のラム酒は廃糖蜜黒砂糖から白砂糖を作った際の残り。本来ラム酒はこれの利用法を模索した結果生まれたとのことを使ったとにかく安いものだ。
「……もう少し高いのも入れられると思うが？」
「気休め程度の気遣いだとも。高いのだと文句が出るだろう？」
　そう言い合いながら、二人はちらりと資料を見る。
　そこに書かれているのは、緊急連絡が成されたツェペシュのクーデター。
「妾達は動くのか？」
「いや、今回は様子見だ。あまり過剰に戦力を用意すると、余計な刺激が発生しかねないからな」
　此度は静観を決め込みながらも、しかし準備は怠らない。
　フロンズ・フィーニクスと九条・幸香・ディアドコイ。
　契約を交わした二人は、今後を踏まえて備え続ける。

明星双臨編　第三十一話　専用機ってロマン要素満載だからマニアも多種多様

和地Ｓｉｄｅ

俺たちは地下で転移し、カーミラの領地に転移する。
その瞬間、空気が冷たく乾いた感じになる。やっぱりだが日本の真冬レベルのそのまた上位レベルになっている感じだな。
「よぉ、待ってたぜ！」
「……手前どもはギャスパー・ヴラディのみでよかったのですが……まぁ、カーミラ領へようこそお越しくださいました」
にこやかに手を挙げて迎えるアザゼル先生に、滅茶苦茶嫌そうな雰囲気を示すカーミラの吸血鬼達。
相当嫌そうだが、それでも俺達を呼ぶことを許した当たり、あいつら側にとっても相当の事態だということだ。
というより、オカ研のメンバーが先頭の吸血鬼と顔見知りの雰囲気だな。例の会いに来た吸血鬼が彼女なのだろうか。
まぁ、今は急いで部長達と合流しないとな。
……今回のメンツは、ツェペシュはもちろんカーミラの刺激を最小限に押させる為、オカ研メンバーで固定。更に客分であるレイヴェルを引いている。その上で会長からの提案で、会長の神器眷属であるベンニーアとルー・ガルーを連れていくことになった。
ちなみにベンニーアは冥府から出奔したハーフ死神で、しかもおっぱいドラゴンのファンらしい。俺は誰に同情したらいいんだろうか。
とはいえそれでも大所帯だけどな。ただまぁ、吸血鬼の領地に入ったことのある異種族は少ないだろう。ちょっと興味深い。

とはいえ非常時だからと気を引き締めていると、ヒマリが目をキラキラさせながら女吸血鬼の方に近寄っていた。
「ふお～っ！　なんというか雰囲気ありますわね！　ザ・吸血鬼って感じで素敵ですわ！」
「お、お褒めの言葉はありがとう……ございます？　あの、近いですよ色々な意味で」
「悪いエルメンヒルデ。ヒマリ、落ち着こうな？」
イッセーがヒマリの肩に手をやるけど、こういう時素直すぎるだろヒマリ。
「落ち着きなさい。優先順位はわきまえて頂戴」
「ごめんなさいねぇ？　この子こういう時素直に動くからぁ」
カズヒねぇとリーネスもカバーに入って、とりあえず俺達は階段を上る。
そして外に出てみれば、どうやらそこは塔だったようだ。
そして外の光景は―
「……うわぁ……」
「お、おぉ……」
アーシアとヒツギが感銘を受けていると、ヒマリは目をキラキラ光らせている。
「おぉおおおっ！　すっごい光景ですのぉおおっ！」
確かに、この光景はなんというか凄いな。
雪が降り積もり深夜の山中に浮かぶ、幻想的な城を中核とする城下町。
やばい。これはちょっと来て良かったとか思いたくなるかもしれない。
「さ、寒いですぅ……」
そしてギャスパー。お前吸血鬼の本場に吸血鬼でそれはどうよ。
女吸血鬼達を見ろ。白い息一つ吐いてないぞ。
それはともかく、俺達はカーミラ側が用意してくれた数台のバンに乗ってツェペシュ領の方に向かっていく。
そしてそのバンで、驚くべきことを聞いた。

『ヴぁ、ヴァレリーがツェペシュの新たな王!?』
通信越しでギャスパーが驚くのも無理はない。
クーデターによって交代されたツェペシュの王。男尊主義なツェペシュの王に、俺達が助ける流れだったヴァレリー・ツェペシュが選ばれたというのだ。
どう考えても傀儡政権だとは思うが、それにしたってあれだろう。クーデターにしたって相当の事態が起こっているとしか言いようがないな。
「……吸血鬼の印象からかけ離れたやり口ね。クーデターの首謀者は異端者とか狂人の類かしら」
カズヒねぇもそう呟くが、そこに関しては同感だ。
いくら何でもセオリーとか常識からかけ離れすぎている。よく言えば常識に囚われない。悪く言えば周囲を一切考慮しないともいえる。
そんな奴がクーデターを引き起こしたというのなら、禍の団とつるんでいるとかいう次元ではないかもしれないな。ろくでもないことを吸血鬼側がしでかす可能性も大きいだろう。
これはより真剣に危険性を考慮した方がよさそうだな。寒気が気温とは別の意味でしてきたぞ。
『ろくでもないことになるのは確定でいいだろう。あの野郎が禍の団の新たな盟主だというのなら、むしろこの程度でとどまるわけがねえ』
先生が意味深なことを言っているが、禍の団を率いている奴に心当たりがあると踏まえていいんだろう。
あとで真剣に聞いておくべきだろうが、それはそれとして今はツェペシュだ。
インガ姉ちゃん。リアス部長に木場。俺達にとって重要な人達が、そこに捕らわれているかもしれないのだから。

イッセーＳｉｄｅ

俺達はカーミラが確保している、ツェペシュの城下町に入る為のゴンドラに乗り込んで移動している。
なんかゼノヴィアがこんな時でも勉強しているけど、それはともかくだ。
「……とはいえ、未だに禍の団が動いているうえ、更にザイア残党まで動き出したもの。戦力強化は必須でしょうね」
カズヒがふとため息交じりに言うけど、さてどうしたものか。
普段から毎日鍛えているからな。ここから新しいことを考えるにしても色々大変だろ。
俺はそう思っていたけど、カズヒはなんか違うみたいだ。
というか、俺の方を見るとジト目気味になってる。
「言っておくけど、私達だけの話じゃなくて全体の話よ？」
なんで俺の心を読んだ!?
小猫ちゃんやらフリードやら、敵味方に関わらず俺の心を読んでるかのような奴が多すぎないか!?
「貴方が分かり易いのよ」
そうですか！
俺ってそんなに分かり易いか。なんかゴメン。
ただカズヒは追撃もそこそこに、眉間にしわを寄せながら額に手を当てている。
「禍の団の規模は大きく、ザイア残党も小さくはない。更に変態集団など不確定要素も多い以上、どう考えても全体量と平均的な質を同時に底上げするべきでしょうね」
「……なるほどな。確かに、奴らの強化具合を考えるとそっちも必要か」

先生はすぐ納得したみたいだけど、えっと、どういうこと？
「ふむ、それはつまり……サイラオーグ・バアルなどと合同訓練をするということか？」
「いえ、おそらくですが二人が言っているのは……三大勢力や神話体系全体の強化かと」
ゼノヴィアにロスヴァイセさんがそう返して、俺も納得した。
つまり、俺達以外も強化するべきって感じか。それも、サイラオーグさんとか生徒会とかのレベルじゃなくて、一般兵まで踏まえた強化とかなのか。
シャルロットも感銘を受けたのか、ふむふむといった感じで頷いている。
「確かにそうですね。規模が大きい戦いならば、当然面の制圧力が必要ですから」
た、確かに。
ってことは……フロンズさん達の出番なのか？
「フロンズさん達に相談するのか？」
「その必要はないんじゃないか？　あの人絶対言われるまでもなくしてるだろうし」
九成が俺にそう応えるけど、じゃあどうするんだ？
思わずカズヒの方を見ると、カズヒは軽く肩をすくめた。
「個人的には人工神器関連が欲しいところね。ＴＦ（トライフォース）ユニットの新型とか……あ、それと鶴羽が使っていた新型の変身デバイスもあるかしら？」
ちらりと先生の方をカズヒが見ると、先生は頭をガシガシかきながら苦笑する。
お、あるのか!?
「リモートライザーは性質上大量生産は厳しいがな。だがＴＦユニットの方は色々考えてるぜ？」
『『『『『『『『『『おぉ～』』』』』』』』』』
俺達がみんなで感嘆していると、今度は九成がポンと手を打った。
「ああ、シーグヴァイラ・アガレスが乗っていた例の奴関係ですね？

浮いたままの王の駒と真魔の駒を使えるし、いい加減量産されると思ってたんですよ」
あ、それか！
確か……アガレッサーだったっけ。あれめっちゃくちゃ強かったらしいしな。
確か真魔の駒を使っているらしいし、王の駒って確か元七十二柱の本家に送られてるはずだ。
少なくとも、似たような性能の機体を元七十二柱の当主分だけ作れるわけだし……行けるんじゃね？
俺達はちょっと期待しそうだけど、何故か先生とリーネスが遠い目になった。
あれ？　どうかしたの？
「いや、そっちは全然進んでない。神の子（俺）を見張る（達）物の出番すら始まってねぇ」
先生がそう言うけど、意味が分からない。
アガレッサーは既に完成しているだろ？　なら開発するのは神の子を見張る者の仕事だろ？
出番意外無いと思うけど、なんだこの展開。
思わず戸惑っていると、リーネスは真面目な様子でため息をついた。
……リーネスがまじなトーンでこれとか、嫌な予感しかしない。
「単刀直入に言うと、今悪魔側はアガレッサーの技術流用機体のプラン選定でもめているのよぉ」
意味が分かりません。
アガレッサー強いじゃん。そのまま作ればいいじゃん。
……はっ！　あれか！
「ダン○ムみたいに「そのまま大量生産は、金がかかりすぎるからダメ！」的なあれか！」
「いえ、むしろ逆ねぇ」
違うのリーネス!?
っていうか、今逆って聞こえた。いろんな意味で嫌な予感しかしな

い！

「具体的に言うとねぇ？　「それぞれの本家に王の駒以外は完全新規開発で一機ずつ作る例：アルドノア○ゼロのヴァース製カタ○ラ○ト」とか「一機種だけ作るが、それぞれの家格に合わせて数種類の仕様変更を作る例：マブ○ヴの武○雷」とか「一機種のみだけど固定武装や増加装甲で仕様変更する例：鉄血○ラインバレルにおけるア○マ」とか「基本フレームだけ同一にして、それ以外をそれぞれのお家事情に合わせた独自機種にする鉄血○オルフェンズのガンダム○フレーム」とかで派閥ができて、どのプランで行くかで話が進んでないのよぉ」

まさかの「もっと金かけていいから、そのまま生産するな！」だった。

「馬鹿なマニアしかいないのかよ」

九成が思わずぼやくけど、すっごい気持ち分かる。

もうカラーリングだけ変えろよ。なんでそんなレベルの派閥ができてるんだよ。

俺も正直げんなりしそうだけど、リーネスはもっともげんなりだった。

「しかも初手で潰れたけど「それぞれの家に合わせて駒を使わない量産型と駒を組み込む前提の本家専用機を作るナイツ○マジックの幻晶騎士とか」というのもあったわねぇ」

「流石にＴＦユニットの仕様上、大量生産（それ）をやると性能低下に繋がりかねないから俺が却下したがな。ちなみにカラーリングオンリーはそれ以外が手を組んでぶっ潰したぞ」

先生の追加情報で俺はドン引きだよ。

いや、ちょっとそれマジですか。

カズヒなんてすっごい呆れた表情だし！

「……冥界、滅ぶんじゃないかしら」

ガチなトーンやめてえええええ！

ちょっとシャレにならないから！　ヴィールがキレそうだから！

っていうか知ったらキレるんじゃないかマジで。そんなあほな理

由で自分が待ったのを台無しにされたとか、俺だってキレたくなるし。ちょっと同情。

……た、頼むから何とかなってくれ。というか早く決めろよ。

くじ引きとかじゃんけんとか、なんかすぐ決まる解決策なかったのかなぁ……。

ちょっと遠い目をしていると、ゴンドラはもうツェペシュに着く頃だった。

仕方ない。ちょっと切り替えてツェペシュに入るとするか、うん。

明星双臨編　第三十二話　ツェペシュ城の謁見

和地Ｓｉｄｅ

ツェペシュ領に到達し、俺達はゴンドラを降りる……と、すぐに吸血鬼が何人か姿を現した。
違法で入ったわけではないとはいえ、早い反応なことで。
クーデターが起きてから日が経ってないだろうに。余程スマートにクーデターに成功したと考えるべきか。
「アザゼル元総督殿とリアス・グレモリー眷属の方々ですね？　我らが王がお待ちしております」
……態々ご招待してくれるってか。
流石に現状なら、すぐに殺すという可能性は低いか？
まぁどちらにせよ、今ここで暴れるのは賢明ではないな。
……俺達は、ついてきていたシトリーの二人がこっそり別動隊として動いている中、馬車に乗ってツェペシュの城へと向かった。
街の様子はいたって普通と言ってよく、クーデターが起こった直後とは思えないほど静かで平穏といってもいい。
市民はクーデターが起こったことすら知らない可能性を示唆されていたが、当たりの様だな。
それほどスマートかつ最小限の手間でクーデターは完遂した。余程入念な準備が起きていたんだろうが、それにしてもツェペシュの王が城を脱出する必要に迫られるほどの事態を起こせるとはな。
禍の団が組んでいるからこそだろうが、それにしたってスマートだ。
これは、相応の戦力がいると考えるべきだろう。
そんなことを考えているうちに馬車は城に到着し、俺達は謁見の間

と思われる部屋の前に待機させられる。
「……どう思います？」
たまたま近くにいたロスヴァイセさんにちょっと意見を聞いてみるが、彼女も思うところがあるらしい。
「城の内装も特に直したといった部分は見られません。本当に最小限の手間でクーデターが完遂したのでしょう。禍の団が関与しているにしても、相当の根回しがあってのことでしょうね」
やっぱりな。
いくら異形パワーの修復がすぐにできるとはいえ、それにしたって被害が見当たらなさすぎる。
どうやら、禍の団かクーデター側かは知らないが、相当の手練れがいるとみて間違いないだろう。
要点をほぼ確実に抑えたうえで、優れた実力者による一点突破。要をどう押させるかが重要になる、現代戦の手本といえるだろう。
カズヒねぇも険しい表情だしな。……インガ姉ちゃん達も大丈夫なのか―
「……イッセー！」
―その声に、俺達はすぐに振り返った。
見れば、メイド達に連れられる形でリアス部長がこちらに歩いてきていた。
後ろには控える形でインガ姉ちゃんと木場もいる。どうやら三人とも、特に怪我を負っているわけではないらしい。
「リアス！」
「インガ姉ちゃん！」
思わるイッセーと一緒に駆け寄るが、その時、インガ姉ちゃんが耐えきれないように駆け出した。
「……っ」
俺に抱き着き、そのまま顔を胸元に埋める。
うん、男冥利に尽きるし不安だったのだろう。それはいい。
だが、これはそれだけじゃない。
俺はそっとインガ姉ちゃんを抱きしめながら、ちらりと視線を木場

の方に向ける。
木場も真剣な表情で頷いていた。
それだけで十分だ。アイコンタクトでとりあえずインガ姉ちゃんに重い何かが起こったことだけは分かる。
だから俺は、そっとインガ姉ちゃんを抱きしめる。
「大丈夫だ、インガ姉ちゃん。俺は此処にいるから」
「……ゴメン。あとちょっとだけ……こうさせて……っ」
震える肩を支えながら、俺は体温をインガ姉ちゃんに感じさせるようにして慰める。
事情は分からない。それでも、クーデターに巻き込まれた不安とかそうではないことだけは分かる。
だから……今は受け止めるだけだ。

祐斗Ｓｉｄｅ

……さて、ここからが問題なんだろうね。
リアス部長に危害は加えられなかった。イッセー君達とも合流できた。
だけど、だからこそここからだ。
僕は視線を、インガさんを抱きしめる九成君を見ているカズヒに向ける。
こういうのなんて言うんだろう。後方師匠面？
凄く満足げというか感慨深げというか、何処か戸惑っているようで凄くほっとしている感じに見える。
「どうしたんだい？」

「……いえ、総合的に見て……色々な意味で不安が解消されたのがね」
カズヒは苦笑すると、目を細めながら天井を見上げている。
だけどそれは、天井を見ているのではない。天井の先に何かを投影しているようにして見ているのだけは分かる。
「和地がきちんと私以外も愛せて愛されて、同時にそれを本当に安堵して見ていられる自分に安堵している。……この感覚、分からない人の方が多いでしょうね」
「まぁ確かに。中々覚えられない感覚だとは思うよ？」
カズヒはカズヒで色々複雑だからね。そういうこともあるだろう。
自分を愛する男に、自分以外の女性も心から愛せることを条件として提示する。それがカズヒが九成君に叩き付けた絶対条件。
きっとそれは、道間日美子（過去の自分）が起こした罪に由来する。
自分の愛する男が自分以外を愛する。自分以外の女が、愛する男と結ばれる。地獄のような半生の中、それを耐えることができなかったからこそ彼女は凶行に走った。
きっと最初はそこからくる自制心の発露。強すぎる自罰と自戒の感情が、妙な形で出てきた結果だ。
だけど、だからこそカズヒはここまで来ることができたのかもしれない。
そこからくる、彼女自身の成長がその感慨なんだろう。
うん、なら感想はこっちの方がいいかな。
「きっと、それがカズヒにとっての救いに繋がるよ」
ああ、きっと―
「みんなが君を幸せにしてくれる。まぁ、僕達もだけどね？」
―仲間との絆を、今度こそ大事な宝とできるはずだからね。
「……そうね。私も、そうであってほしいと心から願うわ」
カズヒも苦笑しながら頷いて、そこで表情を引き締めた。
「だからこそ、インガの問題をどうにかするべきね。何があったの？」
確かに、そこについても話すべきだろう。
僕が頷いて話そうと―
「お待たせいたしました。ヴァレリー様達の準備が整ったようです」

―した時、吸血鬼の貴族が声をかける。
どうやら、まずはあちらの用事を終わらせてからにした方がいいようだね。
視線を交わしてカズヒと頷き合うと、僕達は扉に向き直る。
そして鎧と剣で武装した警護の兵士達が、ゆっくりと扉に手をかける。
「「それでは、新たな王に謁見を」」
そして扉が開き出す。
さて、ここから漸く謁見か。
鬼が出るか蛇が出るか。そういうことになりそうだね。

イッセーＳｉｄｅ

謁見の間には、あんまり人がいなかった。
敬語の兵士達、貴族服らしい人が数人。そして玉座に座る女性が一人。
もっとたくさんいるかと思ったけど、最小限の人数って感じだな。
でもそうか。クーデターが成立するわけだ。
必要な人員は全員聖杯で確保済み。あとはタイミングを見計らって一気にやればどうにかできる。むしろどのタイミングでやるべきか色々考えていただけなのかもな。
禍の団が絡んでいる可能性はほぼ確実だっていうしな。リアス達が来たことで俺達までくると考えて、だったら今すぐにでもって可能性もあるよな。まぁ、タイミングがたまたま被っただけってこともあ

るだろうけど。
ただ、吸血鬼連中も聖杯で強化されているだけあって、そこそこ強いのもいるようだ。
油断しているとやばいな。全員上級悪魔クラスって考えた方がいいかもしれない。
そして、俺達の視線の先。
「……初めまして、グレモリー眷属の皆さん」
そう語るのは、虚ろな目をした金の髪を持つ女性。
吸血鬼の作り物めいた美しさと、人間が持つ自然な美しさが同居した、俺達よりちょっと上程度の年齢の女の人。
……彼女が、ヴァレリー・ツェペシュ……っ
俺は、思わず拳を握り締めた。
ここにギャスパーがいるって連中は知ってるだろうに。
態々、こんな状態の彼女を見せつけるのかよ……っ

九成Ｓｉｄｅ

……吸血鬼の価値観は受け付けないところがあるが、それにしたって悪趣味だろう。
どう見てもヴァレリー・ツェペシュは異常な精神状態だ。精神面を掌握されているとみていいだろうし、聖杯そのものもかなり乱用されているだろう。おそらくは、聖杯を乱用させる為に精神をどうにかされたとみるべきか。
態々それを見せつけるとか、いくら吸血鬼共だ解いても悪辣すぎる。それに周囲の反応を見る限り、その辺りについても一部の意見が

押し切られたとみるべきか。
イッセー達が冷静でいられるとは思えないからこそ、俺は俺で精神面を強く律して周囲を観察する。
視線で気取られないように視界に意識を向けてみる限り、下手人といえる悪辣な様子を見せている男は一人だ。
ヴァレリー・ツェペシュに最も近い、どこかに通った男の吸血鬼。
奴が黒幕側にいるのは間違いないだろう。万が一、この場で荒事になるなら一点収束で叩きのめすべきだ。
最も、その辺りの保険ぐらいは仕掛けているだろうが……な。
と、視界でヴァレリーが急にあらぬ方向を見て話しかける。
誰かいるのか？　俺達には感じられないが……聖杯による超感覚とかありそうだな。もしくは特殊な禁手という可能性も―
「お前達。ヴァレリーが見ている方向に視線を向けるな」
―その時、先生が強めの口調でそう告げる。
「特に信徒は全員気を付けろ。信仰心の強い奴はことさら持っていかれるぞ」
その言葉に、アーシア達が視線を下に向ける。
先生の表情と口調にはかなりの真剣みがあり、かなりマジであれな事態だということが何となく分かった。
「先生、ヴァレリーが見ているのは何なんですか？」
「聖槍に魂が持っていかれるという方向性でもなさそうですが」
イッセーと俺がそう言うと、先生は見るからに渋面を作る。
「俺にも詳しくは分からん。生と死を司る聖杯を持つからこそ見える、生きているものが見てはいけない領域の存在……としかな」
そう返す先生は、かなり険しい表情だ。
どちらにせよ、かなりやばい状態なのが今のヴァレリー・ツェペシュだと尚更分かった。
そして、その下手人があの男か。
ヴァレリーの近くにいる吸血鬼。そいつはヴァレリーのほうを見ながらパンパンと手をたたいた。
「ヴァレリー。彼らと話すのもよいですが、王としてまずは客人にご

挨拶を勧めなければいけませんよ？」
「あら、ごめんなさい」
ヴァレリーがそう謝るように言うと、男はこちらを向いて会釈をする。
「初めまして。私は暫定宰相をする羽目になってしまった、ヴァレリーの兄でもあるマリウス・ツェペシュと申します」
する羽目にねぇ。
明らかに面倒くさそうな雰囲気だな。しかも性格の悪さが透けて見える雰囲気すらある。
「お兄様達が手伝ってくれることで、誰も差別されないツェペシュが作れそうなの。もうあなたをいじめる人もいないわよ、ギャスパー」
「それはもう。できればすぐにでも辞めたい宰相業務ですが、妹の目指すツェペシュを見てみたいものでしてね」
……マリウスが嘘っぱちなのも、ヴァレリーが騙されているだけなのもすぐにわかる。
というより、マリウスの奴は隠すつもりもないんだろう。逆にここまであからさまだと分かりやすいという物だな。
俺たちはほぼ全員、敵意と嫌悪すら浮かんでいる。
「マリウス・ツェペシュ。このクーデターはあの野郎の意向に乗っ取った者ってことでいいのか？」
先生がそのものずばりと切り込むが、マリウスは悪意を見せながらも余裕を見せている。
「いえいえ、私が聖杯を好きに研究できる環境が欲しかったので、政治をしてくれる協力者を見つけたうえでやったことです。あの野郎は彼のことを指すのでしょうが、彼はあくまでクーデターには協力者止まりですよ」
……これまたズバリといってくるな。
今迄ろくでもない連中とは何度も敵対してきたが、ここまでの奴もそうはいない。
吸血鬼の貴族連中も動揺したりたしなめたりしているが、それに関しても拘束力はなさそうだ。

ヴァレリーはヴァレリーで微笑んだまま。どうやらかなり精神を支配されているようだな。
そしてこの余裕、余程の馬鹿か余程の根拠があるという考えでよさそうだな。
「……その様子だと、ヴァレリーを解放する気はなさそうね」
「もちろんです」
リアス部長にそう返すマリウスだが、まぁこれは予想範囲内だ。
忌々しいが、今この状況下では迂闊に仕掛けられない。
なにせ一国レベルを敵に回すようなものだしな。聖杯で強化されていることも踏まえれば尚更だ。アウェイというのはそれだけで不利なんだ。
「問答は無用だ、リアス部長」
と思ったらゼノヴィアが臨戦態勢―
「こいつは生かしても害になるだけだろうし、さっさと滅ぼして帰るトーラス……っ!?」
「黙れこの馬鹿」
―をとった瞬間にカズヒねぇが流れるように首を絞め落とした！
泡を吹いて痙攣しながら倒れるゼノヴィアを見下ろして、流れるように絞め落としたカズヒねぇがため息をついた。
「時と場所と状況を考えて発言しなさい、この間抜け。敵地のど真ん中で考えなしに動くな、この唐変木。あと下僕が勝手にそんなことすると流れるように主の監督責任が生じるのよ阿呆」
辛辣な評価だ。一部の趣味人なら感動のあまり失禁すらすることになるだろう。
だがゼノヴィアは既に失神しているので意味がないと思うのですが。
「……お目汚し失礼。この馬鹿はあとで躾け直しますのでご容赦を」
心底嫌そうにカズヒねぇがそう言うと、マリウスは愉快そうにククと笑う。
いきなりデュランダルを使われそうになったにも関わらず剛毅なことで。

もっとも、この手の輩は余裕の根拠があってのタイプだと思うがな。
「いえいえ、ではこちらも頼れる護衛を紹介しましょう。……我々の余裕の源泉とでも言いましょうか」
そう言いながらマリウスが指を鳴らすと、途端に寒気を感じた。
これは、言いたくないけど強者の気配だ。
俺達全員が緊張感を覚えながら、寒気を感じる方向を向くと、そこには一人の男が壁にもたれていた。
吸血鬼ではない。金と黒の混ざった髪を持つ男。その視線は、何故かイッセーに焦点が合わさっている。
『……気を付けろ。今のお前達でもまずいことになるぞ』
イッセーの左腕から、ドライグの声が響く。
「……どうやら、名のある龍ということですね？」
「ドライグ、できれば私達に紹介してもらえるかしら？」
『伝説に記されし邪龍の中でも最強とされる存在、クロウ・クルワッハだ』
シャルロットとリアス部長に促されて、ドライグから緊張感のある声が響き直された。
クロウ・クルワッハ。確か、滅びた邪龍の一角だと資料で呼んだことがあるな。
まったく。俺達もだいぶ強くなった自信はあるがそれにしたって限度がある。あれは魔王クラスが眷属悪魔を率いて挑んでなお不利な戦いを強いられるレベルだろう。
半端なレベルじゃ神クラスでも返り討ちに合うレベルだ。おそらく天龍・主神・超越者といった頂点級の連中とも真っ向勝負ができるだろう。
そんな用心棒がいるなら、如何に吸血鬼の本部といってもやばいことになるだろうな。
おそらくは、聖杯によって復活された邪龍の一角。禍の団のがグレンデルとやらを連れていたことも踏まえれば、相当の蜜月関係ということか……っ

ゼノヴィアをしっかり止めれてよかった。ここで戦えば俺達全員が全滅することも十分あり得るだろうしな。
俺達が警戒を高めたことに愉快になったのか、マリウスは微笑みすら浮かべながら手を叩く。
「では、こちらも業務があるので本日の謁見はこの辺にしましょうか。城内に部屋を用意したので、当分はゆっくりとなさっていてください」
相当の余裕なようで何よりだ。俺達を強制的に返すこともなく、滞在を許すとはな。
その余裕、油断であることを願ってるからな……っ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……あれ？　父さん達はどこに行ったのかな？」
『あ、誠にぃ？　お義父さんならさっきマリウス達のところに行ったけど？』
「そうなのかい？　ついさっきグレモリー眷属が城内に入ったって聞いているけど？」
『別に会ってもいいやって感じかも。ほら、どうせもう革新されてるって前提で話勧めてたじゃん』
「マリウス・ツェペシュも油断しすぎじゃないかなぁ？　父さんは遊び好きだから仕方ないにしてもね」
『まぁ大丈夫でしょ？　護衛もしっかり二人付けてるしさ』
「その護衛も心配だけどね。確か、縁があったりしたんだろう？」
『それもそっか。まっさか妙なところで縁が出るなんてびっくりだよ

ねえ～』

明星双臨編　第三十三話　リゼヴィム・リヴァン・ルシファー

和地Ｓｉｄｅ

俺達は、マリウス達が用意した滞在用の部屋に向かっていた。
ちなみにゼノヴィアは失神したままなので、カズヒねぇが抱えている。
「しっかし危なかったっすね。あのままゼノヴィア先輩が突っ込んでたらまずかったかもしれないでさぁ」
「確かにねぇ。あれはどう考えても相応の準備と覚悟を必要とする戦いだものぉ」
アニルが額の汗を拭っていると、リーネスも苦笑して頷いた。
まぁ確かに。全盛期の天龍に喧嘩売れそうなやつが護衛だったからな。こっちもそれ相応の備えが必須だろう。
まったく。滅びたはずの伝説の邪龍がぽこじゃかですぎだろう。グレンデルとクロウ・クルワッハで、更にアジ・ダハーカなんてのもいるようだしな。
この様子だと他の滅びたドラゴンも復活していることだろう。むしろその程度でとどまってくれているとマシなぐらいだ。油断ができないとしか言いようがないというか、戦力が減ったと思ったら底上げされすぎだろう禍の団。
そして、復活させたのはミザリではないだろうな。
……あの、明らかに精神面が不味いことになっているだろうヴァレリー・ツェペシュ。彼女が復活させたと考える方が確実だろう。
おそらく体のいい試験運用。自分でやるより他の誰かにやらせて

データをとってからの方が、都合がいいと判断したんだろう。外道極まりないが、極めて合理的な判断といえる。
しかしまぁ、ヴァレリーが急にあらぬ方向に話しかけていたが……なんだったんだ？
その辺り、真剣に気になるな。
「いやホント、禍の団も更にやばくなってるじゃんか。カズヒがいなかったら吸血鬼と挟み撃ちってこともあったかもね」
「ヒツギさんの言う通り、鎮圧してくれて助かりました、カズヒ先輩。流石は教会側の筆頭です」
「違うよ!?　紫藤観察団は文字通り私（紫藤イリナ）がリーダーだよ!?　ルーシアちゃんってば天然で酷いわ！」
「落ち着きなさい象徴（リーダー）、私は裏ボス（参謀）とかその辺りで考えればいいわ」
教会組がそんなことを言い合っている。
あとカズヒねぇ。リーダーと参謀ってルビは何に振った？
ちょっとそっちに意識がとられていると、イッセーが落ち込んでいるギャスパーを気にしながらも先生の方を向いていた。
「先生、ヴァレリーはいったい誰と話してたんですか？」
「そういえば……何か妙な危機感を覚えましたけど、何だったんでしょうか？」
シャルロットがそう続けて首を傾げると、先生は眉をしかめながらため息をついた。
「亡者の集合体……といったところだろうな」
亡者？
死者の霊のことか？　だが、悪魔家業の手伝いとかで幽霊退治とかも手伝ったりしているけど……もっとしっかり見えていたぞ。
「そういえば、鶴羽が言ってたわね。なんかよく分からないものが見えてくるから、聖杯は出来れば多用したくないって」
「ただの死者の霊とは違うということかしらぁ？」
カズヒねぇとリーネスがそう漏らすが、鶴羽もやばいものが見えていたんだな。
そしてそれを当たり前に感じているのが今のヴァレリーってこと

か。かなりまずいんじゃないか？
「ま、そういう訳の分からない存在なのさ。聖杯の乱用は魂というあまりに多く複雑な情報を無理やり近くさせられるから、精神の汚染が激しいんだよ」
「そんな……ヴァレリー……っ」
先生の説明に、ギャスパーが奥歯を噛み締める。
ただ泣き続けていただろう昔に比べれた成長したが、こんなことで感じたくはなかったな。
だがそうなると、かなりまずいな。
「大丈夫なんですか？　明らかに鶴羽やミザリとは違った感じでしたが」
俺がその辺を訊くと、先生も髪をかき乱しながら歯を食いしばる。
「神の子を見張る者達（俺達）も聖杯のデータは少ないが、アレと当たり前に会話している時点で末期症状だ。マリウスの奴は相当ヴァレリーを酷使したと見えるな」
「となるとすぐにでも治療したいわねぇ。聖杯を一旦封印したうえで精神の解体清掃を何度かかければ、だいぶ回復するとは思うけれど……」
リーネスが先生に続いて説明するが、どこか懸念がありそうだ。
その辺を分かっているのか、カズヒねぇも眉をしかめている。
「精神の解体清掃は文字通りの解体清掃。だけど掃除をしたからすべての汚れをきれいにできるわけでもなかったりするわ。余程こびりついてたりしみついていれば、後遺症だって残るかもしれないもの」
なるほど、そういう心配か。
確かに鶴羽やミザリも、聖杯は可能な限り連続で多用しないようにしているからな。しかもその上で、精神の解体清掃などの精神洗浄を欠かさず行っている節がある。
それをせずに短時間で乱用すれば、悪影響が残る可能性は十分すぎるほどあるか。
まったくもって油断ができない。しかも一刻を争うレベルと見える。

何とか増援の当てを作って、隙をついてヴァレリーを奪還する必要があるな。
「……どうします？　荒事はどうせ確定ですけど、タイミングは見計らないとまずいでしょう？」
俺がリアス部長にそう振ると、リアス部長もそのつもりのようだった。
「ええ、まずは作戦を行う為に必要な情報を集めるべきだわ」
そう前置きをしてから、部長は木場に視線を向ける。
意図を把握していているのだろう。木場は流れるように頷きながら、カズヒねぇに視線を向ける。
「ではそれは僕が。できればカズヒにも手を貸してほしいね」
「任せなさい。そういう仕事は暗部の出番だもの」
となると、俺達はその為の準備をとにかくしないといけないわけか。
「……リーネス。精神防護加護の聖剣や魔剣のデータはないか？　創造系神器持ち（俺達）で作ってヴァレリーに装着させればいけそうなんだが」
ヴァレリーのメンタル面も踏まえないとな。最悪外部から強制的に操作される可能性もあるし。
なので思いついた提案を精査してもらわないと。報告連絡相談は必要不可欠だ。
「そうねぇ。そういった手法なら応急処置レベルは行けるかしらぁ」
よし、良い反応だ。
リーネスのその反応に、ヒツギとヒマリも胸を張った。
「そういうことなら任せて頂戴！　大量に作って見せるとも！」
「その通りですよの！　同型剣の大量生産は、創造系神器の独壇場ですもの！」
「そうですね。なら私も仙術で処置を……っ」
其処に頷きかけた小猫が、急に眼を見開くと前を見る。
な、なんだ―
「……っ！」

―その時、インガ姉ちゃんが俺の袖をそっと掴んだ。
其処に気をとられた時、更に周囲の気配が変わる。
「え……えぇ……!?」
「……あのローブは!」
イリナとロスヴァイセさんが声を上げて、俺はその方向を見る。
其処には後ろに何かを控えさせている、銀髪の男がいた。
気配からして悪魔。それも強大な存在。
だが問題は、その恰好。
……おいおい、サーゼクス様が着ている魔王としてのローブとそっくりすぎだろう!?
俺達が戸惑っていると、そのおっさんは俺達を見て愉快そうな表情を向ける。
「およよ、こいつは奇遇だねぇ」
明らかにおどける道化のような口ぶりのそいつは、俺達に悪意満々の笑顔を向けながら片手をあげる。
「どうも！　孫と息子がお世話になってます！　リゼヴィム・リヴァン・ルシファーでっす♪」
……はぁ、ルシファー!?

祐斗Ｓｉｄｅ

……その銀髪の男性は、誰かに似ているとすぐに思った。
そしてその名前はリゼヴィム・リヴァン・ルシファー。それも僕達に対して、息子と孫が世話になったとまで言った。

……つまり、彼がミザリ・ルシファーの実父であり、ヴァーリ・ルシファーの祖父だということなのか。
「ちょ、先生!? ルシファーって、ヴァーリの!?」
「……誠にいの、父親っていうわけ……っ」
イッセー君やカズヒも、流石の事態に動揺が見えている。
そしてアザゼル先生は、強い敵意を後ろからでも感じさせながらリゼヴィムを睨みつけている。
「そうだ。こいつは本来の魔王ルシファーと、悪魔の母であるリリスとの間に生まれた、正真正銘ヴァーリの祖父でミザリの父親だ」
「……更にお兄様やアジュカ様と並び称される、三人の超越者の一人に数えられているわ」
リアス部長の続けられた言葉に、僕達は更に戦慄する。
超越者。魔王クラスすら超える力を持ち、悪魔という種族として認識していいかも分からない。そんな、圧倒的な強さを持つ三人の悪魔。
現魔王であるサーゼクス様とアジュカ様の二人以外に一人いるとは聞いていたが、まさかこんなところで会うことになるとは思わなかった。
しかもそれがヴァーリ・ルシファーやミザリ・ルシファーの血縁者とは。本来のルシファーの血統が超越者なのはむしろ納得とはいえ……ね。
だけど、アザゼル先生はそれ以上に嫌悪感と敵意を見せている。
「俺がちょくちょくあの野郎と言ってたのは覚えているな？」
そういえば、そういった言い回しをしていた気がする。
確か、マリウス・ツェペシュにその言い回しで尋ねていたね。マリウスの返答も考えると、彼は禍の団に属していていることか。
旧魔王の末裔なら旧魔王派とも縁があるだろう。ならいても不思議じゃ―
「―ヴァーリの調べじゃ、こいつが禍の団の現リーダーだ。魔王ルシファーの血を引く超越者なら十分すぎる箔と力だろうよ……っ」
―なんだって!?

言われてみれば納得だけれど、寄りにもよって超越者が。
旧魔王の末裔であるシャルバ・ベルゼブブや、聖槍の担い手である英雄派の曹操。彼らがオーフィスの力を象徴としてまとめていたのが禍の団。半分ほどのオーフィスの力を新たな象徴としているとはいえ、その上でまとめるのは相応の物でないとできない。
だけど、ルシファーの実子たる超越者なら十分すぎる……っ
僕達の目の前で、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーは悪意が見える無邪気な笑顔を浮かべていた。
「そゆことそゆこと～♪　したいことができたんで、ミザリに頼んでボスに据えてもらったんだよね～♪」
どこまでもふざけた表情で、三代目禍の団盟主は僕達と対面する。
「ま、いずれやりあうことになるだろうさ。よ・ろ・し・く・ね・？」
これが、新たなる禍の団の盟主か……っ

和地Ｓｉｄｅ

禍の団三代目盟主リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。
超越者の一人とか、控えめに見積もっても下位の神に匹敵するだろう。下手すりゃ主神や天龍でも手古摺るレベルと踏まえるべきだ。
よりにもよって面倒な奴が、沈没しかけただろう禍の団をまとめ上げたってのか。
俺達の敵意が込められた視線に対し、リゼヴィムは愉快そうな表情を浮かべている。
「ふっふ～ん。戦意滾らせてるところ悪いけど、此処で俺とやりあう

のは得策じゃないぜ？」
　余裕綽々のリゼヴィムに対し、カズヒねぇはいやそうに眉をしかめながらも納得の表情だ。
「でしょうね。こんなところで堂々といるのなら、クーデター連中と繋がりは当然あると考えるべきだわ」
「ぶち殺したくてたまらねえが、今やろうとすりゃ流石にこっちが先に潰されるだろうしな」
　先生も心底苛立たし気だけど、その通りだろう。
　クーデター直後の城に堂々と姿を見せている以上、堂々とできる立ち位置を獲得していることは間違いない。グレンデルやアジ・ダハーカ、邪龍達の復活にもまず間違いなく関わっている。しっかりと付け込まれた関係を確立していることだろうさ。
　つまり、リゼヴィムに手を出した時点で一気にツェペシュは俺達を総攻撃する。もちろんだが、禍の団から出向しただろうクロウ・クルワッハも仕掛けてくること間違いなしだ。
　間違いなくこっちが圧倒的不利勝、相手が油断しまくってこっちを相手しないでくれているわけだしな。……ここで手を出すのは我慢するべきでしかない。
「ふっはっはー！　鎖国主義国家万々歳って感じで、俺ってばマリウス君の研究に対する出資と化してる立場なんだよね～。ま、そういうわけだから手は出さない方がいいし―」
　不敵な笑みを浮かべながら、リゼヴィムは手で後ろに指示を出す。
　そしてそこから現れた、ゴシック調の服を着た少女を見て俺達は更に驚愕する。
　誰が見ても分かるぐらい、その子はオーフィスにそっくりだった。
　なるほど、つまり―
「……いい趣味してるな。態々オーフィスに似せて仕立て直すとか」
　つい俺がぼやくと、リゼヴィムは機嫌良さそうにその子の頭をなでる。
　そしてその子は特に無表情でそれを受け入れていた。
「こいつが俺の護衛でもある、禍の団のウロボロスなリリスちゃんだ。

俺の母親の名前を付けてみたけど、可愛いロリっ子が最強ってロマンあるんじゃね？」
そりゃどうも。
だがまぁ、尚更これは危険と考えるべきなんだろうな。
どうしても手を出したくても出せない状況だ。今手を出したら間違いなくこっちに死人が出るし―
『―リゼヴィム様、ミザリ様が「早めにマリウス殿との話を終えてほしい」とおっしゃっています』
「そうですよー。あなたは遊びすぎなのが欠点なんですから、息子さんの意見とかを参考にしましょうねー」
―その時、更に後ろから何かが使づいてくる。
片方は美人かつ強そうな少女だが、問題はもう片方。
全身鎧に身を包んだごつい人型。一見するとそれだけだ。
だがその声の響きが、俺達に否応なくその正体を告げている。
そう、奴はステラフレームで……っ!?
気づけば、そっと袖を握っていたインガ姉ちゃんの手に、力がかなり入っている。
なるほど、様子がおかしいと思ったらそういうことか。
思わず、俺の視線はその二人を睨む形になる。
「インガ姉ちゃんが世話になった。そう見ていいのかステラフレーム……っ」
そう、全身鎧の奴は間違いなくステラフレームだ。
共通躯体だから体つきは同等だし、声の響きも似通っている。
全身鎧で一応の言い訳をしているようだが、インガ姉ちゃんの視線が向いていることから考えて、こいつが原因とみて間違いない。
俺としても軽く殺意が芽生えてくるが、ステラフレームは軽く肩をすくめていた。
『別にこっちから何かしたわけじゃないけどね。ここに来たのはたまたまだし、そこまで縁があるわけでもないわけだし』
嘘を言っている雰囲気がない素直さだが、だったらどういうことだ？

俺が警戒を解かないでいると、暇だったのかリゼヴィムの視線がリアス部長の方を向く。
「そういやお嬢ちゃんがリアス・グレモリーなんだってな。サーゼクス君は元気かい？」
「お兄様に何か思うところでもあるのかしら？」
真っ向からリアス部長が視線をぶつけ返すと、リゼヴィムはおどけるようにわざとらしく両手を前に出す。
「おっとと。別に恨みつらみがあるわけじゃないぜ？　同じルシファー名乗ってるから思うとこはあるけど、俺はシャルバ君達みたいに怨恨とかで動いちゃいねえよ。魔王の座とか興味ないしぃ？」
へぇ。妙なところでヴァーリやミザリと似ているな。
まぁ、だったら何が目的なんだといいたいところだが……っ
正直ストレスがぐんぐん溜まっている中、リゼヴィムは視線をカズヒねぇに移す。
「で、オタクがマイサンの前世の妹ちゃんな悪祓銀弾（シルバーレット）ってわけかい？
お父さんって呼んでいいよ♪」
「これからよろしく糞親父」
素早くばっさり切り捨てるカズヒねぇに、リゼヴィムは後ろのリリス達を振り返って「嫌われちゃった♪」とおどけて見せる。
つくづくふざけっぱなしだが、リゼヴィムは平然としながら肩をすくめる。
「ま、俺は俺のやりたいことをする為に禍の団を使いたいだけだからな。その為にマリウス君と協力して色々するから、いい加減話に行くとすっぜ。ミザリにも怒られそうだしねっと」
そう言いながら俺達を通り過ぎるリゼヴィムは、ちらりとイッセーの方に視線を向ける。
「そういや、オタクが我が孫のライバルな二天龍の片割れきゅんか。孫は禍の団（ウチ）を抜けてるし、こっちに鞍替えして決着つけてみない？」
冗談百パーセントだが、こういうのをさらりと流すようならそれはイッセーでもない。
既に臨戦態勢なレベルで、明確にイッセーは敵意を向ける。

「ふざけんな！」
「そりゃ残念♪　……ま、それはともかくちょっとだけ聞いておこうかな？」
　おどけるリゼヴィムはそういうと、今までと笑みの質を少し変える。
「孫のヴァーリはどれだけ強くなったのかにゃ？　あいつのオヤジなヘタレなバカ息子よりは、元々余裕で強かったけどよ」
「安心しろ。いずれお前の首も取るさ」
　先生がそう切り返すと、リゼヴィムは肩をすくめてそのまま歩き去る。
「あ、カーミラのとこと組んでクーデター返しするならいつでもいいよ～？　むしろ俺達楽しみにしてっからさ」
　どこまでもふざけたことを言ってくれるな、あの野郎。
　いい加減我慢の限界だった先生は、鬱憤晴らしに拳を叩き付けようとして―
「あ、最後にもう一人！」
　―その瞬間、リゼヴィムは振り返ると俺の方に視線を向ける。
　なんだ？　俺が特別奴の気を引く何かを持っている気はしないんだが。
　怪訝な表情を俺が浮かべていると、リゼヴィムはこっちを観察するように見ながら、にやりと笑う。
「嘆きの涙が流れる前に、笑顔に変える涙換救済（タイタス・クロウ）だっけ？　俺の息子とはいろんな意味で宿敵になりそうだけど……あいつを舐めたら怪我するぜ？」
　ああ、なるほどな。
　確かに俺とミザリはいろんな意味で対になっているといえる。
　だから少しだけ興味がわいたってことか。
　なら、俺もはっきり言ってやる。
「いずれ必ず決着はつけるさ。よければアイツに伝えてくれ」
「おＫ！　帰ったらちゃんと伝えとくぜ！　超越者をメッセンジャーにできるなんて、君はとっても幸運です♪」

ああ、そりゃどうも。
……ちなみに少しだけ、カズヒねぇの肩が震えたことには既に気が付いている。
男の見せどころというかなんというか。まったくもって疲れる話だろうさ……っ

Other side

「……ノア。この報告は本当かね？」
「十中八九。アザゼル元総督が直々によこした情報だしな。嘘やでたらめってことはないだろ」
「ヴァーリ・ルシファーが皮切りとなり、ミザリ・ルシファーが大きな打撃を与えてきた禍の団（カオス・ブリゲート）。その新たな首魁がかのリリンとは……っ」
「ノア、フロンズがここまで表情をこわばらせるほどなのか？　元よりミザリが統率している以上、ルシファー血族が禍の団を統率している事実に変わりはなかろう？」
「そうでもないんだよ、幸香。奴さんは血統だけじゃなく能力もやばい。かのサーゼクス・ルシファーやアジュカ・ベルゼブブと同格の純血悪魔は、現状奴しかいないからな」
「あ～なるほど。ドーピングでイキっていたシャルバや、人間から転生したミザリよりは象徴的権威も戦闘能力も併せ持って強そうじゃな。だからフロンズは警戒しているのか」
「そういうことだ、幸香。すまないがネオマケドニアごと準備を進めてくれ。許可は私がもぎ取ってくる」

「おいおいフロンズよ。流石にそれは大丈夫なのか？」
「同感だな。相手がリリンなら大王派（こっち）もうるさい奴が出てくるぜ？」
「だからこそだ。超越者にしてルシファーの実子。彼が立ったのならば血統重視の大王派はおろか、魔王派からも離反者が出かねん」
「……やばいのは分かってるが、お前がそこまで警戒するほど？」
「懸念しすぎではないか？　会ったこともないのによくもまぁ」
「よく理解しているのだよ、二人とも」

「……もし彼が内戦から手を引いていなければ、冥界の内乱はどうなっていたか分からない。あの男はそれだけの存在なのだからな。警戒はしておくに越したことはないのだよ」
「「……？」」

明星双臨編　第三十四話　不安と不穏のひと時

和地Ｓｉｄｅ

俺達は部屋に通された後、メンバーを少しずつ分ける形で行動することになった。
アザゼル先生とリーネスは吸血鬼達の研究者側と接触するとのことで、リーネスの護衛にヒマリ。リアス部長はギャスパーと一緒にヴァレリーに呼ばれ、木場が護衛。他のグレモリー眷属やイリナ達教会側は、ギャスパーの父親と話をするとのことだ。
そして、俺とカズヒねぇはインガ姉ちゃんと一緒に部屋に残っていた。
というより、他のメンツが色々と気を使ってくれたと考えるべきだろう。ちょうどいい感じに色々やることがあったとはいえ、全員まとめて動く必要もないわけだしな。……ギャスパーの父親との件とか、吸血鬼の思想的にあまり人が多くても問題だろうし。
だからまぁ、俺は今何をしているのかというとだ。
「……落ち着いたか、インガ姉ちゃん」
そっとインガ姉ちゃんを抱きしめて、落ち着くのを待っている。
インガ姉ちゃんにとって重い何かが起きたことは確信している。おそらくあのステラフレームが原因だとも察している。
だからこそ、無理強いして聞くのは最終手段。インガ姉ちゃんの気持ちが決まってからでいいと思う。
だからゆっくりと落ち着かせながら、俺は静かにそれを待つ。
「……ごめん、落ち着いたかな」
インガ姉ちゃんはそう言うと、苦笑しながらゆっくりと俺から離れた。

とはいえ、精神的に消耗している感じだ。
元々クーデターに巻き込まれたうえ、軟禁までされていたからな。リアス部長の護衛も兼ねている立場だし、張り詰めた状態にならざるを得なったんだろう。
駒王町に戻ったら、デートを一回ぐらいした方がいいかもな。
「……持ち直したようで何よりだわ。ほら、とりあえず何か飲みなさい」
と、カズヒ姉さんが人数分のココアをクッキーと一緒に持ってきてくれた。
ちなみにこれは、カズヒ姉さんが自前で持ち運んでいたものだ。異界の蔵（スペイス・カーゴ）はこういう時に凄まじく便利だ。
そして俺もカフェオレを呑んで一息入れて、雰囲気はだいぶ和らいだ。
だけど、インガ姉ちゃんはそこで気合を入れ直す。
説明してくれる。そういうことでいいんだろう。
そっとカズヒねぇと視線を合わせて頷き合うと、俺達は背筋を伸ばしてインガ姉ちゃんと向き合う。
とはいえ、ある程度は予想ができている。
「……分かってると思うけど、あのステラフレームは私の知り合いが素体になってるみたい」
そうだろう。
ステラフレームは共有の星辰光を使う本体と、それに武装を提供する外部ユニット、そして中枢となる素体でワンセットの人造惑星だ。
つまり素体となった人物がいる。それが第一世代魔星。
素質のある人物を材料に、強い衝動をにより神星鉄（オリハルコン）を制御することで強力な星辰光を運用する。それが第一世代型魔星という物なのだから。
問題は、具体的に誰がそんなことになったのか……だ。
俺もカズヒねぇも、あえて黙ってそれを促す。
インガ姉ちゃんも分かっているから、コップを握る手に力を込めながら前を向く。

「……単刀直入に言えば、私が入ってしまったヤリサーの女子の一人。年齢的には一つ上の先輩……って感じかな」
「……あ～……ッ」
俺は思わず天を仰ぐ。
確かにそうだ。うっかりヤリサーに入ってしまった挙句、その一人の恋愛絡みで起きた自殺騒ぎでそれが発覚して、結果として修道院に叩き込まれたのがインガ姉ちゃんだ。
そしてヤリサーならば、当然だが男女問わず他にもいないとおかしいわけだ。この辺は当たり前ともいえるだろう。
そしてインガ姉ちゃんが修道院に叩き込まれたように、人生のルートががらりと変わるのは当然考えられる。
そんな一人が寄りにもよって、ミザリ達に目を付けられた結果がアレか。質の悪いルートを引き当てたという形か。
「……なんというか……責任を感じるわね」
カズヒねぇも俯いて、手で目元覆っている。
実際問題、ミザリ・ルシファーが何かやらかすというのはカズヒねぇにとって罪業の上乗せに近いからな。流石に全責任をカズヒねぇに負わせるのも問題だが、道間誠明（ミザリ）を最悪に近い形で自覚させたのは道間日美子（カズヒねぇ）ではある。だからこそ、俺も全否定させることはできないししていいことでもないし。
だけど、インガ姉ちゃんは首を横に振る。
「そうじゃないよ。そういうことでへこんでるんじゃないの」
違うのか。
なら、いったい？
「私が一番つらく思ってるのは、私はあの件で私のことしかいまだに考えてなかったこと」
そう告げるインガ姉ちゃんは、どこか悲しげだった。
「……客観的に見て酷い半生だと思う。だけど、デイオドラの眷属（悪魔になってから）のことだけを向き合って乗り越えようとしているだけで、修道院に入る（悪魔になる前）理由は乗り越えようという気になってるだけで向き合ってなかった。それを、いやって程痛感したからなんだ」

……そうか。
確かにそうだ。
インガ姉ちゃんは、何時かという前置き付きとはいえ両親に会おうとも考えている。
だけど、そもそもインガ姉ちゃんと両親が疎遠になったのはディオドラの所為ではない。ディオドラは疎遠になった後更に悪い方向に引っ張り込んだだけだ。
そもそもの疎遠に、半ば投げ出された理由。そこに対して、インガ姉ちゃんは向き合ってなかったのかもしれない。
俺もまだ未熟だな。そこにもきちんと向き合って付き添ってやるべきだってのに、全く気付いていなかった。
だからこそ。
「インガ姉ちゃん」
俺は、インガ姉ちゃんの手をそっと取る。
両手で包み込み、真っ直ぐにインガ姉ちゃんの目を真っ直ぐに見つめて、俺の本心を告げる。
「大丈夫だ。俺も、インガ姉ちゃんが笑顔になれるよう頑張るから。今からでも、付き添う覚悟を決め治すから」
ああ、そこに嘘偽りなど欠片もない。
インガ姉ちゃんを強引にでも救うと決めた。その俺には、インガ姉ちゃんが向き合おうとすることに付き添う責任がある。インガ姉ちゃんを愛する者として、必要なら共に支えあいたいと願っている。
幸せを分かち合うのなら、悲しみだって分かち合いたい。嬉しいことだけ分け合うなんて、そんなことはしたくない。
だから、大丈夫だ。少なくとも、俺一人分は大丈夫だ。
「……必要なら助けを呼んでくれ。できる範囲で必ず助ける」
「そうね。それでこそ私の愛しい救済者（タイタス・クロウ）よ」
そして俺の手から更に包み込むように、カズヒ姉がそっと手を乗せる。
「人間はいつだって未来より未熟よ。自分の未熟を理解して、それでよしとしないなら是非も無い」

小さく俺に頷いてから、カズヒねぇもインガ姉ちゃんに微笑んだ。
「必要なら力を貸すわ。だから、貸していい時に力を貸して？」
「……うん。ありがとう」
そのインガ姉ちゃんの微笑みに誓おう。
インガ姉ちゃんに、せめて胸の張れる決着を。

イッセーＳｉｄｅ

インガさんが持ち直したみたいで何よりだな。
ギャスパーの父親と話し合ってから帰ってくれば、雰囲気も和んでいた。
だからこそ、俺は九成やカズヒを連れ出して、俺達が聞いた情報を伝えている。
……ギャスパーは生まれてきた時、闇が蠢く訳の分からないものだという。
それでギャスパーのお母さんは気が狂って死に、産婆達も急死した。ギャスパーの父親はそれをギャスパーが無意識に呪ったからだと考えている。
正直訳が分からないけど、ここ最近のギャスパーが発現した謎の力から考えると納得できることもある。
それに、俺達にとってギャスパーは仲間だしな！　既に悪魔に転生してるんだし、悪魔でいいだろ。
……ただ、ギャスパーの父親はそういう考えではなさそうだ。意外と話が分かる吸血鬼だったけど、ギャスパーに関しては化け物扱いで預かってくれるならそっちの方がいいといった感じだった。

その辺りを何とかかみ砕いて説明すると、九成もカズヒも分かり易く困惑していた。
こと二人は、ギャスパーの力を見てないから尚更か。あれ、めっちゃ凄かったしなぁ。
ゲオルグが使った上位神滅具だって完封してたみたいだし。一体何だってんだ？
「……原因がさっぱり分からないし、能力の当ても分からないな。不気味ではあるけど、だからこそある程度の解明は必須ってことか」
九成はそう言ってため息をつくけど、同時に不安そうな表情だった。
「しかもその際、ギャスパーは別人格じみてたんだろ？　何かに憑かれて生まれてきたとか、そんな感じか？」
あ～。そういう可能性もあるのか。
九成の言いたいことも分かる。そもそも神器（セイクリッド・ギア）だって、聖書の神様が遺したシステムが人間の魂に宿らせるわけだしな。
カズヒもそれに納得しているのか、なんか急に閃いた表情を浮かべていた。
「……ヴァレリー・ツェペシュは命と魂を司る、幽世の聖杯（セフィロト・グラール）を持って生まれてきた。そして近年、ハーフの吸血鬼が神器を持って生まれてくることが多い。……もしかして、それら全部が繋がっているのかもね」
な、なんかよく分からんけど凄いこと言ってきたぞ。
「ど、どういうことだよ。馬鹿な俺にも分かる様に言ってくれ」
俺がそう言うと、カズヒは少しだけ考えてから、俺達に真剣な表情を向ける。
「ヴァレリーが幽世の聖杯を持ったことが連鎖反応になって、後続のハーフ（同）ヴァンパイア（胞）に無意識レベルで加護を与えている可能性があるってことよ」
……っ
確かに、言われてみると納得だ。
ヴァレリーは心優しい女性だと、少しの会話で分かっている。そん

な彼女が自分と同じハーフヴァンパイアが酷い目に遭うことに、心を痛めるのはすぐに考えられる。
だからこそ、無意識に何かしらの恩恵が与えられるように願った……？
「……ハーフとはいえ悪魔の王族なヴァーリが現在過去未来で最強の白龍皇になると言われてるからな。ハーフとはいえ吸血鬼の王族なヴァレリーでも、似たような可能性はあり得るか」
九成も唸ってるけど、言われてみると確かに！
……これは、本当にマリウスなんて奴にヴァレリーを預けさせるわけにはいかねえぞ。
なんとか、助け出すチャンスを考えないと……っ
「イッセー。言っとくが逸るなよ」
と、俺に九成が声をかける。
見れば、九成は真剣に、だけど心強い笑みを浮かべていた。
「お前やギャスパーだけじゃない。ヴァレリー・ツェペシュをこのままにできないってのは、オカ研ならほぼ全員が思ってることだろうからな」
「安心なさい。タイミングさえ合わされば、私もあの外道を良しとはしないから」
カズヒもすまし顔で、だけどちょっと微笑みながらそう言ってくれる。
ああ、本当に心強いぜ。
「いざという時、頼んだぜ？」
「もちろん」
ああ、気合も十分入った。
あとは、タイミングを見計らうだけだ。
待ってろよ、マリウス・ツェペシュ。リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。
お前達の好きには、絶対させやしないからな！

明星双臨編　第三十五話　不安な時でも息抜きができるに越したことはない

和地Ｓｉｄｅ

その後俺たちは、数日間を過ごすことになる。
吸血鬼側もヴァレリーを奪われないように気を使っているようで、クロウ・クルワッハを警護につけるなどの対応をしている。
だからこっちも静かにせざるを得ない。下手に動くと全盛期の天龍でも苦戦するだろう奴が出張ってくるうえ、今のツェペシュ全てを敵に回すからな。
やるのなら相応の戦力による面のカバーが必須だろう。カーミラ側が横やりを避けたがっていることもあり、それが難しいのが実情だ。
すでにプルガトリオ機関のヴィクター部隊も動いているらしい。さらに帝釈天が星辰奏者を大量に近くに連れて行っているとか。相応に戦力を注ぎ込める環境でもあるな。
だがカーミラ側も脱出したツェペシュの王族側も、彼らの突入に難色を示しているらしい。
吸血鬼の問題に外部を介入させたくない。まぁ自分の問題を自分で解決することはある意味大事な姿勢だが、難易度をきちんと踏まえるべきだとも思う。あとすでに禍の団が絡んでいる以上、三大勢力は他人事じゃないし。
しかもたちが悪いことに、悪魔側は大混乱のようだ。こっちの増援はちょっと期待できない。
まぁ、死んだと思われていたルキフグスの人間が出てきたと思ったら魔王ルシファーの実子が禍の団を率いているわけだ。悪魔側はは

大混乱も同然だろう。
魔王派はグレイフィアさんの弟が出てきた利で混乱だろうし、血統主義の大王派ならさらに混乱状態だろう。こちらには関しては本当に期待できない。
……そして俺たちは少しずつだが、何とかするべき準備もしている。
基本的には武器の手入れとかだ。その上で、木場やカズヒねぇが吸血鬼側の警備などを調べているらしい。
暗部出身のカズヒねぇに、器用貧乏どころか器用富豪な木場がサポートに回れば相応のことはできるだろう。俺たちは必要な時のために備えるべきだ。
べきなんだが、やれることも少ないから正直暇だったりする。
ギャスパーは連日レベルでヴァレリーと話をしており、小猫やリアス部長がそれに付き合ったりも多い。後はギャスパーの父親と話し合いをしたりとかな。
とはいえあまり大所帯でやるべきことではないだろう。なので暇をしているメンバーも相応出てきている。
イッセーたちは監視有りで城下町に出ていたりもしているが、俺は万が一を考慮して待機中だ。
禍の団とつながっている以上、神の子を見張る者から流れた神器関連技術で神器の摘出は可能だろう。それを踏まえると即座に動ける人員はいた方がいい。
……マリウスが「ヴァレリーを解放する」という、裏の意味を考えたくなることを言っていたしな。
禍の団が聖杯をこっち側に流れるようにするとは思えないし、今回のクーデター側ならなおさらだろう。
聖杯を抜き取って開放とか、そういう言葉遊びとしか考えられない。非常に警戒するべきだとすら考えている。
なので部屋の中で軽い筋トレやストレッチを繰り返し、いつでも動けるように睡眠時間も分散させている。
あとはまぁ、盗聴と化されてないかの入念なチェックは何度も繰り

返している。
……しかし、リーネスたちはまだ帰ってこないのか。
どうも連日連夜、吸血鬼側の神器研究部門にこもりっきりのようだ。ヒマリが何かしないかどうかが真剣に不安なんだが。
まぁ、それはそれとしてだ。
ふと俺は、外の様子を見る。
太陽光が体に悪いのが吸血鬼。酷ければ浴びただけで死ぬこともあるし、上位吸血鬼でも可能な限り浴びないようにした方がいい。ハーフやデイライトウォーカーなら人間レベルで日射病になりやすい程度だろうが、それでも吸血鬼たちがごろごろいる環境なら全面的に避けるべきだ。
なので霧に包まれたこの城と城下町は、雪が降り積もっていることもあって幻想的だ。
できることなら観光で来てみたかった。そもそも来れるのが奇跡的なのだが、こうも鬱屈する状態だとどうしてもさすがに気になってしまうな。
……イッセーたちが帰ってきたら、次の日にでも俺も出るか。あまり出すぎるとあれだが、少人数ならまだカバーできるだろうしな。
とりあえず、汗を流して一息入れよう。
そう思った時、俺の前の前にタオルが差し出される。
「はい。お茶も用意しているから一休みだよね？」
「ありがとう、インガ姉ちゃん」
俺は微笑むインガ姉ちゃんからタオルを受け取ると、汗を拭きながら休憩に入る。
スコーンとアイスティーで休憩を取る。
そうしていると、ノックされてからドアが開かれる。
「やぁっと戻れましたの～！」
「戻ったぞ～」
「疲れたわね～」
とまぁ、見事に疲れた様子のリーネスたちが戻ってくる。
ヒマリは特に退屈していただろうから、メンタル的に割と消耗して

いる感じだな。先生も長い間いろいろしていたからか、こっちも割と真剣に疲れている感じだ。
俺はインガ姉ちゃんと顔を見合わせると、苦笑した。
「とりあえず、もうちょっとお茶菓子用意するか。俺も手伝うぜ？」
「いや、シャワーでも浴びてなよ。こういうメイドの仕事はあまりとらないでね？」
そういわれると強く言い返せないなぁ……。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、こっちの準備もほぼ完了。しかもいいタイミングでカーミラも動く、と」
『誠にぃ？　混沌回帰旅団の連中が、「動くならこっちも暴れさせてくれ」だってさ～？』
「そうなのかい？　……まぁいいか。大丈夫だって伝えておいてくれるかい？」
『オッケー！　で、誠にぃのほうは何かする感じなの？』
「ああ、そろそろ新技の一つや二つはいるだろうと思ってね。面白いものを用意しているから楽しみにね」
『お、いいね～。めっちゃ楽しみにしてるからね、誠にぃ♪』

九成Ｓｉｄｅ

シャワーを浴び終え、俺は改めて休憩タイムに入る。
「ま、教える必要があることは全部教えたから何とかなるだろうさ」
「だといいですわね～。私はもう一度とかは勘弁ですわ
～」
「ハイハイ。次は他のメンバーに護衛を頼んでおこうな」
先生の太鼓判にヒマリがヘタれたので、俺はポンポンと肩をたたいて慰める。
すでに吸血鬼界隈でも人間の血を引いた神器保有者が出回っており、そこに英雄派によって導かれた禁手の至り方が流れているらしい。
冥界よりさらに権威的で閉鎖的で高圧的な環境だから、それがきっかけで暴走する可能性は十分すぎるほどある。むしろもう出てきているらしい。対抗策は必要不可欠だが、技術的な遅れはあまりに大きい。
だからこそ、先生もある程度は教えるべきだと判断したようだ。幸いマリウスが統括しているだけあり、種族の誇りとかを重視しすぎない人物が多かったようだしな。
とはいえ、正式に交流しているわけでもない組織に技術を提供するのは後々を考えると悩みどころではある。
まったく。冷徹になるべきところはきちんとしているけど、こういうところは甘いところもあるよな。
まぁ、俺も吸血鬼だろうと罪なき市民が嘆きの涙を流すのは望まない。これぐらいで文句をつけるのもあれだよな。
そういうわけでスコーンを食べながらアイスティーで休んでいるわけだが、しかし美味しいなこのスコーン。
吸血鬼の里もなかなか馬鹿にしたもんじゃないというべきだろうか。……いや、この味―

「もしかして、インガ姉ちゃんが手作りで？」
―兵藤邸で出てくる場合の味に似ていたので、露絵はまさかと思ってそう聞いてみる。
その質問に、インガ姉ちゃんはちょっと自慢げだった。
「メイド長や料理長からも太鼓判を貰ったよ。これでも懲罰メイドじゃベルナと私しかいないんだよ？」
「「「おぉ～」」」
思わず全員でほめる。
いやぁ、あの二人が太鼓判を押すレベルってのはそうそうないだろう。見事としか言いようがない。
「嫁さんが料理上手ってのはいいなぁオイ？　ちょっと前時代的だがやっぱクるものがあるんじゃねえかぁ？」
先生がからかい目的で俺に言ってくるが、そんなもので戸惑う俺ではない。
「それはもう。その分補佐や後片付けはきちんとできる男を目指しますよ」
「「おぉ、家庭的ジゴロ」」
リーネスとヒマリはシンクロで何言ってるかな？
まぁいいだろう。インガ姉ちゃんに胸を張れる男でいるべく、この程度のことではためらわない。
だがジゴロというのは何なんだろうか。文脈が誤解を生みそうだから訂正してもらうべきか。
俺がそんなことを悩んでいると、メイドの立場なので給仕として動いているインガ姉ちゃんは少し真剣な表情になった。
「……アザゼル元総督。少し相談があるんですがいいですか？」
「なんだ？　例のステラフレームについてか？」
先生はそのあたりの事情をまだ聞いていないが、さすがに想定済みらしい。
その真面目な視線に、インガ姉ちゃんも真面目な視線をぶつけることで返す。
「単刀直入に言います。私は今すぐにでも力を底上げしたいです」

その真剣な想いに、俺はあえて何も言わない。
これはまず、インガ姉ちゃんがどうにかするべき問題だろう。俺はそこの補佐やカバーに回るべきだ。
「私はまだまだ弱くて、今から向き合うことが多いです。だからこそ、心だけでなく戦闘能力も必要だと思いました」
「なるほどな。……事情は今はあえて聞かんが、そういうことなら問題ない」
先生はそう返すと、にやりと笑いながらリーネスの方を向いた。
俺たちの視線が集まると、リーネスも不敵な笑みを浮かべている。
「ふふぅ。和地の大事な女の子なら、私もちょっとぐらいサービスするわよぉ。カズヒや鶴羽のためにもなるものぉ」
頼もしすぎる技術者発言だ。びっくりドッキリメカを期待できるぞこの流れ！

そして内容を聞いて、まさにその通りだと実感したよ。
なんという恐るべき代物を。あとそれ、もはやエンゲージリング的な感じなんですけど。いや、胸を張って受け入れますけどね？
とりあえず、リーネスは敵に回すと恐ろしい奴だと実感したとだけ言っておきます。

明星双臨編　第三十六話　風雲急のツェペシュ城

和地Ｓｉｄｅ

イッセー達も戻ってきたが、ギャスパーは素直にマリウスの言うことを受け取っているようだ。
これはちょっと「どう考えてもやばい意味だ」というのは気が引ける。だが同時に誰かが言うしかないわけだ。
できる限り早く伝えて、ヴァレリー救出の準備をした方がいいわけなんだが……どうしたものか。
「……九成君、少しいいかい？」
と、イッセーが先生達と話し合っている間に木場が俺に近づいてきた。
「どうした？」
「今後に備えた話さ。……君達は、リゼヴィムが連れていたステラフレームの相手になるのかい？」
ああ、そういうことか。
ある程度はもうみんなにも伝わっているだろうし、そう考えるのは当然かもな。
ただ、俺は首を横に振る。
「あくまで状況次第だ。最優先はヴァレリー・ツェペシュの安全確保だしな。ステラフレームは後でも相手できるだろ？」
実際そういうことで話はまとまっている。
インガ姉ちゃん（メイド）としてもカズヒね（暗部）ぇとしても、もちろん俺としてもそっちの方が優先だ。そこははき違えていない。
最も、禍の団だって聖杯を俺達に奪還されたくはないだろうからな。ヴァレリーを奪われない為に安易か下の戦力を用意することだ

ろう。
だからこそ、結論は簡単だ。
「出てくるなら俺達が叩く。ただしこっちから探さない。そういう感じだ」
「……分かったよ。僕達もその前提で動くことにするさ」
分かってくれて何よりだ。
しかしまぁ、割といい加減動きが出てきてほしいと思ったりもする。
なんというか、結構な日数をこうして過ごしているからな。いい加減に授業に追いつけるかどうかも不安になりかけているし、ちょっと焦れてくる。
そう思ったその時、ふと空気が切り替わった。
感覚的に結界が離れた感じだな。
ただ敵意は感じない。というより、この感覚はどこかで感じたな。
そう思っていると天井に魔方陣が展開され、にゅっと誰かが出てきた。
髑髏の仮面をつけてフードを被った少女。確か、シトリー眷属に売り込んだイッセーのファンな女子死神だったな。最上級死神オルクスと人間の娘なベンニーア……だったか。
『漸く繋がりましたぜ……』
別行動で脱出ルートとかを用意してもらっていたが、この様子だとそっちは準備ができていたようだ。
と思っていると、なんか落ちてきた。
「……きゃぁっ!?」
ドスンと尻もちをついたのは、人形めいた美しさを持つ吸血鬼の少女だ。
確かリアス部長達と接触したという、エルメンヒルデ・カルンスタインだったか。
俺達がちょっと面食らっていると、それに気づいたエルメンヒルデはコホンと咳払いをする。
あとその間に、もう一人の新任シトリー眷属なルガールーさんが華

麗に着地していた。
「……ご、ごきげんよう皆様。お元気なようで何よりですね」
……武士の情けだ。指摘はしないでやろう。
「大丈夫ですの？　お尻にあざとぶっ」
「はーいちょっと黙ってあげようねー！」
ヒツギナイス。あとヒマリステイ。
しまった。ヒマリはこういう時空気が読めないというのをうっかりしていた。
缶詰同然の緊張状態で集中力が欠けていたか。これはまずい。
「……ここでカーミラが接触してくるってことは、そちらは動く気でこちらの介入も了承したということでいいのかしら？」
カズヒねぇが強引気味に話を切り込んだ。
ナイスカズヒねぇ！　そのまま話を強引に進めてくれ！
エルメンヒルデは文句を言いたげだったが、ヒマリから視線をずらしてこっちの方を向いてくれた。
「ええ。個人的には不本意ですが、我らが女王は三大勢力（あなた方）の参戦をお認めになられました」
エルメンヒルデは不満げだったが、そう言い切った。
言質はとった。まぁ、大王派以上の貴族主義な吸血鬼の純血なら、盟主の発言には文句は言うまい。横からうるさいことを言われる恐れが減って何よりだ。
しかし女王自ら許可を出すとは。いっそのことヴァレリーを遠くに連れ出してくれた方がいいとでも思ったのか。もしくはリゼヴィム・リヴァン・ルシファーはそれだけの脅威だと思ったのか。
まぁ、ツェペシュでクーデターが起こるぐらい聖杯に目のくらんだ連中がいるなら、カーミラにも出てきそうではあるからな。聖杯は過ぎた力だと判断した可能性があるだろう。
まぁそこはいい。問題はだ。
「……それはいいとして、それを伝える為だけに態々？」
リアス部長が怪訝な表情でそれを聞く。
純血吸血鬼でその在り方を尊んでいるらしい彼女が、それだけの為

に態々自分から来るのか？
部下に任せるなり、ベンニーア達をメッセンジャーにするだけでもいいとは思うんだが。
無性に嫌な予感を覚えてくる。というか、最悪のパターンが起こりそうだな。
「……マリウス・ツェペシュ達が聖杯を使った計画を進めると、エージェントがつかみました。ヴァレリー・ツェペシュから聖杯を抜き取り、領内の吸血鬼を純血混血問わず、弱点を取り除いた吸血鬼に作り変えるようです」
……最悪のパターンだった！
「……ヴァレリーが死ねば聖杯が流れるから、取り出して殺してでも手元に置いておきたいといったところかしら。合理的すぎて嫌になるわね」
「そ、そんな……。マリウスさんは、ヴァレリーを解放するって言ってたのに……嘘だったの……っ」
吐き捨てるカズヒねぇが痛ましい視線を向ける先、ギャスパーはショックに震えて涙すら浮かべている。
それをリアス部長が抱き寄せて慰める中、アザゼル先生はため息すらついた。
「弱点克服ってのは確かに合理的だが、それはもう吸血鬼と言っていいのかねぇ」
「忌まわしい考えです。相容れぬとはいえ誇り高き純血の吸血鬼が、吸血鬼であることすら捨て去ろうなど。おぞけの走る行為ですね」
エルメンヒルデがそう渋い表情で言ってから、ちらりと窓から外を見る。
「既に脱出していたツェペシュの者達と協力し、我らカーミラの吸血鬼は城下町に突入しています。愚かなマリウスの好きにさせるわけにはいきませんわ」
カーミラの方もかなりやる気なようだ。
まぁ、弱点を潰すのは大事だけど、それで種族そのものを捨てるのがいいかは別の問題だろうしな。

俺が何となくそう思った時、外が急に明るくなった。
見れば、城の上の方で巨大な魔方陣が展開している。
おい、どういうことだ？
「……やばい！　かなりオリジナルが混じってるが、神器摘出の魔方陣と見て間違いないぞ！」
先生が目を見開いて大声を上げるが、タイミングが良すぎないかおい！
このままだとまずくないか……おい！
「……マリウス達の諜報能力も相応にありそうですね。すいませんが、エージェントと合流するので繋げてもらえませんか？」
そう告げながら、エルメンヒルデは冷たい微笑みをこちらに向ける。
「ヴァレリー・ツェペシュを助けるのならどうぞご自由に。女王が許可した以上、止めはしませんわ」
「……思ったよりあっさり認めるんだな」
思うところがあるらしいイッセーにそう聞かれると、魔方陣に歩き出しながらエルメンヒルデはニコリと微笑む。
「貴方達の実力は買っておりますのきゃぁ!?」
……なんか落ちるように魔方陣に消えて、しかも音が聞こえてきたような？
俺達は魔方陣を作ったベンニーアに振り向いた。
『さっきと同じで屋上に繋げましたぜ』
……ちょっとエルメンヒルデに同情した。

祐斗Ｓｉｄｅ

作戦開始前の会議として、僕は事前に集めた城内の警備状況を伝えていく。
非常時故にある程度は変えているだろうけど、非常時だからこそ内部は手薄になっているだろう。
更に先生が掠め取った地下の図面を見れば、ある程度のルートは算出できる。
「……ミザリがこちらに来ている様子はないわねぇ。誠明なら先手を打って私達を抑えにかかるかと思ったのだけれどぉ」
リーネスがそう呟くけど、確かに少し気にはなる。
ミザリ・ルシファーは趣味で禍の団に参加している、正真正銘の危険人物だ。だが同時に、高い知性を持って活動できる人物でもある。
彼が僕達に対して何の手札も切ってこないというのも気にはなるね。
「……いくら誠にいでも、聖杯をむやみやたらと乱用はできないはず。それができるなら、とっくの昔にグレンデルを復活させているはずだもの。……だからこそ、ヴァレリーの聖杯を確保できるに越したことはないはず」
「にも関わらず、一切の手札を切ってこないのも妙ね。自分も含めてカズヒ達に因縁がある者達も数多いでしょうに」
カズヒとリアス部長も怪訝な表情だけど、しかし考えこみすぎるわけにもいかない。
間違いなく、吸血鬼達は僕達を警戒しているはず。更に摘出術式は既に進んでいる。時間をかければ相手の迎撃態勢や術式の終了が間に合ってしまう。
それを理解しているからこそ、アザゼル先生は僕達を見回して告げる。
「いつものことだがぶっつけ本番になりそうだな。……最悪、聖杯が摘出されたとしてもマリウスは捕縛で、吸血鬼の上役もなるべく生き残らせろ。禍の団の連中は俺が許すから始末していい」
大筋の確認を終え、先生はギャスパー君の方をちらりと見て頷いた。

「可能な限り急いで、聖杯の摘出を阻止できるのならそれに越したことは……ない」
「もちろんです！　ヴァレリーは、僕が助けます！」
強く決意した表情で頷くギャスパー君。
ああ、彼は本当に強くなった。
だからこそ、僕達もそれに応えよう。
自然と視線が合い、僕達は強く頷いた。
だからこそ―
「イッセー君、景気づけに一つ頼むよ」
「え、俺?!」
僕に言われて、イッセー君はちょっと戸惑った。
そしてその戸惑いを見て、カズヒは軽くため息をついた。
「今までのあなたのポジションから見て、それが相応しいでしょうに。オカ研全体のリーダーはリアス部長でご意見番はアザゼルだけれど、筆頭というならイッセー以外に誰がいると？」
『『『

和地Ｓｉｄｅ

さて、地下階層に突入してしばらく経つが、思った以上に順調だな。
地上部分では、ちょっと警備部隊数人とニアミスした程度で済んだ。今更その程度でやられるどころか、時間を取られる俺達ではない。
この辺は木場のおかげだな。後で改めてお礼を言うべきだろう。
そして地下階に突入したが、此処で敵が待ち構えてきている状態となっている。
最初に大量の兵士達が仕掛けてきたが、こちらはシトリーから来てくれた死神ベンニーアと狼男ルガールさんが対応してくれた。
時間的猶予があまりない為、二人に任せてそのまま侵攻する。戦闘能力はかなり高いので、数主体の連中ならそう簡単にやられたりはしないだろう。
更に下には比較的上位の吸血鬼達が待機していたが、こちらは小猫が本領発揮。
存在そのものを問答無用で浄化するとかいう反則じみた手段で壊滅させた。一周回って吸血鬼に同情しかけたぞ。
だがまぁ、ここまで禍の団の連中が出てきてないのが気になるな。
そもそも出がかりを潰さなかったことといい、何かが気になる。
以下にミザリが精神の解体清掃を使えるからって、聖杯による負荷は決して無視できるわけがない。聖杯を獲得できるならそれに越したことはないのだ。何よりミザリは質の悪い趣味に全力投球しているだけで、割と堅実な男だ。
もっと警戒して戦力を用意してもおかしくない。……何故、自我未覚醒のステラフレームすら出してこない？
「部長、先生、カズヒねぇ。リーダー格の三人に聞きたいことが」

「教会側のリーダーは私だけど!?」
「……間違えた、策ができるタイプに聞きたいことが」
イリナには後でなんか奢ろう。
とりあえず俺はその辺の懸念を伝えると、三人ともそこは理解していたらしい。
「……精神の解体清掃はメンタル特化のフェニックスの涙じゃないわ。誠にいは聖杯の禁手で心も回復できるとは言え、邪龍復活なんて無理のある運用を乱発するのは避けるべきだと思って当然でしょうね。……そこは気になっているのよ」
「リゼヴィムは悪意ある遊びを好んでするような奴だがな。つっても、今の禍の団でサブリーダーに近いミザリの意見ならある程度は呑めるはずだ。……そこは解せんな」
カズヒねぇもアザゼル先生も、そこは元々気になっていたようだ。
そこで同じように考えていたリアス部長は、少し考え込みながらも何かの思い当っているようだ。
「邪龍達の復活はあくまで試験的なもので、本命があるという可能性は？　もしくは、何らかの形で聖杯を保有するサーヴァントの当てがあるとか」
「もしくはぁ、ザイアのクラスカードと同様の手段を確立したのかもぉ。それなら使い捨てで聖杯を使うことも理論上は可能だわぁ」
リーネスがそれに便乗するが、その危険性も考慮しないといけないのか。
あれ、本当に凄い技術だしな。
大量生産されれば世界が色々とひっくり返るぞ。
俺はその辺りをげんなりしたけど、カズヒねぇはちらりとリーネスに視線を向ける。
「そういえば研究しているようだけれど、こっちが生産できる余地はあるの？」
あ、そうか。
あれが技術なら、大量生産する余地は十分にあるはずだ。
それが可能ならこっちにとっても大きな力になるぞ、これは。

思わず俺達の期待の視線が集まるけど、リーネスは少し渋い表情だ。
「安定した生産ラインの確率は困難ねぇ。ザイアも和地達に渡してなかった当たり、そもそも絶対数を確保できなかったと思うわぁ」
……そうそう上手い話はないということか。
確かに、ザイアの連中がクラスカードを大量生産できているなら、そりゃ俺やヒマリにだって渡されるだろうしな。
「む～ん。過去の赤龍帝だったサーヴァントを宿して、イッセーとペア赤龍帝したかったですの～」
「ごめんなさいねぇ。開発の余地はあるけれどぉ、現状だとサーヴァントをえり好みできるような余地はないわぁ」
ちょっと落ち込み気味のヒマリに、リーネスが器用に走りながらぽんぽん慰める。
「……ま、そんな簡単に力を上乗せできるわけがねえですわな。プログライズキーみたいな便利技術なんてすぐにゃぁ出来ませんぜ」
「それもそうね。ヘキサカリバーもエクスカリバーとの同調なしだと、一本一本は同種のエクスカリバーと比べて半分レベルらしいもの」
アニルやイリナがそう言う中、今度はシャルロットも苦笑する。
「仕方がありません。どちらにせよすぐにできない以上、まずは目の前の問題を解決しましょう」
確かにな。
話はそれたし疑問は消えない。ミザリが温い対応をしていることは不安だが、どちらにせよ突貫しないという選択肢はもうないわけだ。
ヴァレリーを救出できているならそれで充分。もうそういうことにしておこう。
「……先生、ヴァレリーのところまで、あとどれぐらいですか！」
「地図を見る限り、あともう一関門ある程度だろうな。迎撃に使えるような箇所はそこにしかない」
ギャスパーにそう答える先生の言葉に、俺達は気を引き締め治す。

つまり、最終関門といえるのはそこぐらいということか。
こりゃ、一番やばい連中がいると考えるべきだな。
小猫ちゃんは大技を使った反動で意識を失っている。まぁ、後輩や新入りが頑張った分、俺達も頑張るとするか！

明星双臨編　第三十七話　激突、グレンデル!!

祐斗Ｓｉｄｅ

僕達が突入した大広間には、これまでのようにたくさんの敵がいるわけではなかった。
敵の数は三体程度。これまでに比べれば最も少ないと断言できる。
……だけど同時に、間違いなく最難関だとも断言できる。
何故なら、内二体はステラフレーム。おそらく自我が覚醒していない量産型。それでも最上級悪魔ですら苦戦必須の性能を発揮する以上、随伴としては十分すぎるほどに難敵だ。
そして最大の問題は真ん中の存在だ。
１５ｍほどの人型のドラゴン。そのオーラは少なく見積もっても龍王クラスはあるだろう。更にその気配は邪悪というほかなく、殺意と悪意を隠そうともしていない。
そうか、あれがイッセー君達の言っていた――
『グハハハハハッ！　またぶっ殺しあいに来たぜぇ、ドライグちゃんよぉ！』
――グレンデルか！
「あいつが例のグレンデルか」
「なるほど、確かにやばい手合いね」
直接相対してない九成君やカズヒも、警戒の色を隠そうともしていない。
それだけの難敵と断言できる。いや、断言するほかない。
この雰囲気は間違いなく強者だ。まして龍王クラスはあるだろう性能もあり、更に聖杯によるものか龍殺しの効果すら薄い。

そこにステラフレームが補佐としている以上、強引に突破してヴァレリーを救出することもまず不可能。打倒する以外の選択肢が封じられている。
なるほど、禍の団からすれば上層の吸血鬼達はおまけということか。
「あれが完成していれば……っ」
カズヒとリーネスが同時にそう唸るけど、何かを開発中らしい。
この二人の関係とこれまでの流れから考えれば、対龍特化のプログライズキーを開発はしていると考えるべきだろう。間に合ってないとはいえ、開発は進めているとは抜け目がない。
だけど、今はそれがない。
……どうやら、此処が死戦のようだね……っ!!

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……吸血鬼達の拠点を確認、同時に内戦が起きている模様です」
「人間を家畜のように扱う、特に有害な異形達の拠点で内戦か。都合がいいと考えるべきか」
「ま、今回はあくまで威力偵察だけどね。そこは忘れないようにいきましょう」
「了解しました。散開している部隊を集合させます」

「……さて、グレンデルのガス抜きも兼ねて配置したけど、そこはどうでもいいんだよね」
『いやぁ、もうこっちは目的の殆ど達成してるなんて、グレモリー眷属はもちろん、吸血鬼共も絶対気づいてないだろうし……ねぇ？』
「そういうことだよ。じゃ、僕もそろそろ準備をするかな？」
『オッケー誠にぃ。何かあったら連絡するね～』
『……モデルバレット。私も出撃していいかしら？』
『を、モデルダストじゃん。パパはほっといていいの？』
『リリスがいるから大丈夫よ。それと、リゼヴィム様の行動開始と共に動いていいかしら？』
『そこはオッケー。誠にぃも分かってるから伝言頼まれてるよ』
『……どんなことを？』
『なるべくみんなが悲しむようにってさ。ま、モデルダストの星なら問題ないから大丈夫でしょ』
『そうね。ええ……やっと暴れられる……っ』
『頑張れぇ？　最新の自我覚醒体型ステラフレームとして、大暴れしちゃってね～』

九成Ｓｉｄｅ

グレンデルはかなり強敵だし、ついでに言えばステラフレームは難敵だ。
しかも感情的ゆえに爆発力はあっても粗のあるグレンデルと、機械的ゆえに粗はないが爆発力の無いステラフレームは、上手く連携でき

れば互いの隙を埋める組み合わせと言ってもいい。
　ステラフレーム二体は直接的な戦闘を避け、グレンデルの補佐に徹している。これにより意に介さないグレンデルと、無理に連携を取らずに作戦の為に穴を埋める形になった。グレンデルも一切気にしなくていいと思えるからか、結果として思い切りがよくなっている。
　おかげでこっちは突破が困難だ。グレンデル以外にも難敵がいると分かっているから、どうしても後先を考えてしまうこともあれだ。
　とはいえあまり時間もかけられない。趣味ではないが多少博打じみた伏札の開帳を踏まえるべきか……？
「どうする!?　パラディンドッグか真紅（イッ）の赫龍帝（セー）が本気出した方がいいんじゃ!?」
「俺（俺）もそう思った！　このままだとヴァレリーもまずいし俺達もまずい！」
　イッセーもその辺は同意見のようだ。
　実際問題、頭のねじが外れた戦闘狂が本当に強者だからな。あまり時間をかけられないし、このままだと死人が出かねない。
　グレンデルはハイテンションで疲れ知らずだし、ステラフレームも長丁場を前提としているからな。長期戦だとむしろこっちが不利になりかねない。
『グハハハハハッ！　あの紅の鎧になるのか？　それともユーグリッドが言ってた水色の装甲ってかぁ？　どっちにしてもぶっ殺しがいがありそうだぜぇぇぇぇぇぇぇっ！』
「まだだっ！　というより……こっちを忘れるなっ!!」
　楽しそうなグレンデルの拳を真っ向から喰らいながら、カズヒ姉さんは気合で無視して反撃に魔術攻撃を叩き込んだ。
　……うん、カズヒねぇが真っ向からオフェンスやってくれているから、今のところ消耗は意外と少ないんだよな。
　つくづくこういう時の頼りがいが半端ない。おかげでこっちも冷静に対応できる。
　とはいえこれ以上やると、終わった後にカズヒねぇが倒れかねない。いっそのこと同時に使って真っ向から潰したいぐらいの敵だ。

クロウ・クルワッハとかリゼヴィムとかリリスとか確実にいるからできないけど。
でも出し惜しみして時間切れはもっと駄目だし……やはりどっちかは出すべきか。
「……皆、数分ほど時間を稼いで頂戴」
其処に、リアス部長の声が響く。
視線を向ければ、リアス部長は恐ろしいほどの消滅のオーラを集めていた。
そうか、例の部長の新技。レーティングゲームだと安全対策すら突破するから使えない実戦仕様。
あれはあれでえげつないしな。……あれならいけるか！
「頼ってもいいの、部長？」
「任せなさい。時間がかかるだけで、イッセーや和地のそれに比べれば再使用の余地はあるわ！」
それもそうか。なら尚更だな。
「ならこっちも遠慮はしない！」
俺はサルヴェイティングアサルトドッグを展開したまま、更に新作の魔剣を創造する。
「……新武器、ライズセイバー！」
モデルヘキサ相手に立ち回った時の即興魔剣を参考に、プログライズキーの機能発動に特化したモデルだ。
限定的なので大半のプログライズキーには向いていないが、それでも―
『ディフェンディングタートル！　Ｉｔ，ｓ　ｐｏｉｎｔｌｅｓｓ　Ｉ　ｄｏｎ，ｔ　ｄｉｅ』
―俺の派生形態にはぴったりなんでな！
「交代だカズヒねぇ！」
「任せたわよ、和地！」
俺はディフェンディングタートルによって変化した星辰光で、カズヒねぇの代わりにグレンデルの猛攻を受け止める。
重く早く鋭い一撃だが、この状態なら受け止めることは可能だ。

そしてスラスターを全力で使用することで、とにかくグレンデルの打撃を俺が止める。
悪いが、防衛線は十八番でな。
「他をぶっ殺したいなら俺をまず殺すんだな！」
『言ってくれるじゃねえかぁ！　ならぶっ殺されるまでぶっ殺させるなよぉ！』
さて、このまま何とかしのぎ切れるか……っ

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……あの～、ＣＥＯ？　一度質問をしてもよろしいでしょうか？」
「ええ。あまり時間はないけど、大丈夫よ」
「緊急案件とはいえ、いきなり欧州の山奥なんてどういう仕事なんですか？　俺、南米で研究されていた人造惑星（プラネテス）とかいう悍ましい生物兵器を打倒した直後なんですけど」
「本当に申し訳ないと思っているし、助かっているとも思っているわ。特別ボーナスと昇給と臨時休暇は必ず用意するから。……というより、星辰奏者１０人足らず（一個分隊）で戦闘特化型魔星を撃破するとか、異常な成果だから誇っていいわよ」
「タンク役は本当に疲れました。……それで聞きたいんですけど、そんな緊急案件何ですかい？」
「文字通り神話級の緊急案件よ。……言っておくけど比喩じゃないわ。最悪の場合、人類は吸血鬼達に侵略されるの」
「そういう星辰奏者とか魔星ってわけですかい。……洗脳能力……い

や、生態改造能力って感じで？」
「いえ、本当に文字通りの種族よ。私達が相手をするのは、聖書に記され志神の子が血を受けた聖杯を悪用する、暴走した吸血鬼達」
「……あの、もしかして変なお薬やってます？」
「本当に真実なのよ。ちなみにアマゴフォースの大株主になったあの人、会ったことあるでしょ？」
「あ、あのアロハシャツの人。任務前にＣＥＯと話してましたね」
「彼は帝釈天。中国の神々を束ねる存在よ。インド神話のインドラと言った方が分かるかしら？」
「いや、俺日本人なんで帝釈天の方が……は？　あれが？　マジで？」
「本当よ。それにアレは聖書の教え側に比べれば、ある意味でとてもマシと言っていいわね。……あくどいとかそうじゃなくて、ノリ的な意味で」
「……一周回って凄く聞きたいんですけど、何ですかＣＥＯ」
「聖書の神と悪魔の王が死んだことが遠因となって、悪魔・堕天使・天使が和平を結んだの。そしてその立役者の一人はおっぱいをつついて子供達のヒーローとなって、大一番の競技試合では対策でストリップショーが引き起こされたわ」
「……ボーボボ？」
「よく分からないけど覚悟をしておきなさい。その悪魔、元を辿れば日本人よ」
「……ええ～」
「とは言っても、そういう意味だと日本人が世界を左右しているもの。吸血鬼達と手を組んでいる魔王ルシファーの実子には子供や孫がいるんだけど、実子の一人は聖杯を悪用して転生した日本人なの」
「ＣＥＯ？　あの、俺、本当に全くついていけてないんですけど？　ちょっと仮眠とりたいぐらいなんですけど!?」
「悪いけどあまり時間がないから耐えて。最悪の場合、あの道間誠明ことミザリ・ルシファーが―」
「――ちょっと待った。待ってくれませんか!?」
「え、どうかしたの？」

「どうかしたのも何も、道間誠明って……あの誠明先輩ですか!?」
「いや、私が知っている道間誠明は一人しかいないけど……え、先輩？」
「え、あ、いや、違いますよね？　はは、あの先輩に限って悪徳の権化通り越した世界大動乱とかないって。いやすいません、同級生の兄貴がそんな名前だったんで―」
「……道間日美子」
「―はい？」
「あと道間乙女、道間七緒、アイネス・ドーマ。彼女達の名前に聞き覚えはあるかしら？」
「……ＣＥＯ。ちょっとどころかかなり質問があるんですけど、時間ってあります？」
「残念ながらないわ。ただ運がいいことに、今から行く吸血鬼のアジトであるツェペシュ領には、その五人……厳密には六人が揃ってるわ」
「よく分かんないですけど、そういうことなら分かりました。とりあえず、最後に一つだけ質問を」
「何かしら？」

「日美っちと俺の関係を知ってるわけじゃないなら、なんで俺をそんなところに連れて行くんですかい？」
「……今後を踏まえて社員に異形を関わらせたい。そして天帝の依頼は断れないから、最強戦力を投入したいの。アマゴフォースの星辰奏者（エスペラント）で人造惑星クラスを一対一で足止めできるの、貴方しかいないじゃない」

明星双臨編　第三十八話　対決、クロウ・クルワッハ！

祐斗Ｓｉｄｅ

なんとか……なったか。
リアス部長の奥の手。レーティングゲームの安全システムや魔力に対する相性すら削り殺す、極限まで圧縮し敵を削り続ける消滅の魔力級。その名も、消滅の魔星。
絶大な威力だった。敵を引き寄せ逃がさず、そしてゆっくりとだが確実に削り続ける。瞬間的な火力ならともかく、最大ダメージならイッセー君のクリムゾン・ブラスターにすら匹敵するだろう。
僕達の部長はやっぱり凄い。これだけの火力を放てる消滅の特性の持ち主なんて、現役のバアルや最上級悪魔にすらごく少数だ。
ステラフレームごとグレンデルを削り切り、頭部の半分ほどを残して消滅させ切った。
『……グハハハハッ！　やるじゃねえか赤い嬢ちゃん！　ここまで俺をぶちのめした奴はそうはいないぜぇ？』
そしてグレンデルはそんな状態でも愉快な表情を崩さない。
『ここから一人ぐらいぶっ殺しができるか試してみるってのもありか？　なんたって聖杯がありゃぁいくらでも体は作り直せるからなぁ！』
……やはり聖杯は恐ろしいね。
邪龍の魂が頑丈であることもあって、すぐにでもこれだけの強敵を復活させれるんだから。
「……それを素直にさせると思ってるのか？　ヴァレリーの聖杯は摘出させる気はないし、万が一抜かれてもくれてやる気はないんだがな」

九成君がそう言うが、実際その通りだ。
グレンデルほどの脅威を何度も復活させられては堪らない。急いでヴァレリーさんを助けに行かないとね。
「とりあえず、跡形もなく消滅させれば少しは時間を稼げるでしょう。その上で、聖杯はヴァレリーごと私達が奪還させてもらうわ」
リアス部長がそう告げながら、魔力を更に込めたその時だった。
寒気が、走った。
グレンデルを遥かに超えるだろう強者の気配。それを察して僕達は一瞬だが確かに怯み―
「まだよ！」
―それを吹き飛ばす声と共に、強者の気配が立ち上る。
一歩を踏み出したカズヒが、素早くアタッシュナイダーを構え、現れた男を睨み付ける。
金と黒が混じった髪を持つ、長身の男。
間違いなく、あれはクロウ・クルワッハ。
ここに来て、更に邪龍が出てくるとはね。
「ここは退け、グレンデル。どうせ長くはもたないだろうから、体を新調しておくといい」
静かに告げるクロウ・クルワッハに対して、グレンデルは苛立ちすら見せていた。
『邪魔すんじゃねえよ、旦那！　いい機会なんだしもっと楽しませてぶっ殺させろや！』
殺意すら浮かべて不満を見せるグレンデルだが、クロウ・クルワッハは冷静な態度のままだ。
むしろ視線を真っ向から見せつけるように、グレンデルを見据えている。
「我(が)を通したいのなら、つまり俺を倒す必要があるぞ？」
その言葉に、グレンデルは怒気を抑えたのが分かる。
明らかにしぶしぶといった調子だが、しかしそれだけの存在だと痛感しているのか。
『……分かったよ。あんたとぶっ殺し合うなら、万全の状態にしてぇ

しな。ったく、殺しがいのある奴の戦いは毎度毎度横やりが入っちまうのかよ』
「させると思ってんのか！」
「好きにさせるつもりはない！」
イッセー君と九成君がグレンデルを逃がさないように構えるが、それより先にクロウ・クルワッハが割って入る。
早い。僕ですら、集中力を一点に集めなければ目で追うことも難しい。
機先を制されてイッセー君達が手を出しあぐねているうちに、グレンデルに転移魔法陣が展開された。
この状況では、妨害は困難か。
僕達が悔しい思いを浮かべていると、グレンデルは悪意に満ちた笑みを向けていた。
『クロウの旦那が相手となっちゃぁ、お前ら全員くたばったも同然だな！　ま、生き残ることができたなら今度こそぶっ殺してやるから、頑張って生き残りな！』
そう言い捨てながら、グレンデルは転移する。
あれだけ僕達を苦しめたグレンデルが、その上で絶対に助からないとまで言い放つ。それだけの実力が、クロウ・クルワッハにはあるということか。
どうやら、ここからが本番になりそうだね……っ

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……ああもう！　増援要請は来てないの!?　マジで！」

「来てないのよそれが。まぁ、吸血鬼側がかなり嫌がっているみたいだから仕方ないところはあるでしょうけど」
「リヴァはなんで平然としてるわけ⁉　なんか初代ルシファーの息子が、オーフィスから分捕った無限の力まで引き連れてるとかいうやつがいるじゃない？」
「だからこそでしょ？　状況的に増援要請を吸血鬼が出さない可能性は大きいけれど、だからこそ冷静にならとね。はい、カステラ食べる？」
「あ、おいしそ……じゃない！」
「とにかく落ち着きなさい、鶴羽。私達がすることはみんなの無事を祈ることと、万が一増援の当てが出来た時に、問題なくいけるように英気を養うこと。今から色々消耗してたら、結局ドクターストップでしょ？」
「むぐぐぐぐ……っ」
「とにかく無事を信じましょう？　実際問題、そう簡単にやられるような子達じゃないんだし……ね？」
「むぅ～！　和地もカズヒも……とにかくみんな無事でいてぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」

「おいリヴァ……って鶴羽もか！　ちょうどいい！」
「増援突入の許可が下りたわ！　っていうか、フロンズ・フィーニクスが全責任を負う形で艦隊派遣したって！」
「「……え？」」

「……さて、どうやら色々と動いている人が多いみたいだね」
『そうなの、誠にぃ？』

「ああ、教会の戦士達が多いみたいだけど、それ以外に星辰奏者（エスペラント）が数多く動いているようだね」
『あ、ホントだ。結構多い……いや、多すぎでしょ!?』
「ああ、軽く百人は超えているね。星辰奏者だけでこの規模となると、現代じゃ正規国家でも中々動かせない数だよ」
『冗談きついって。デュナミス聖騎士団でも動き出したっての？』
「その可能性はありそうだけど、教会の戦士とは別口なようだ。これはいったい……？」
『あ、あっちの映像見て。なんか転移魔法陣が』
「……陣の様子から見て、須弥山……いや、ゲオルグが考案した陣の要素もあるね」
『あ～。曹操って帝釈天がなんか接触してたし、その縁？　やっぱあれ、内通の口封じとか？』
「どうだろうか？　だけど、転送されたのは二人か。それもあれは―」
『ドゥルヨーダナのサーヴァントじゃん。詳しいことは知らされてないけど、やっぱり帝釈天は曹操を匿ってるだけとか……って、あれ？』
「どうしたんだい？」
『誠にぃ。転送された奴の一人、一番年喰ってるやつ』
「……あれ、どこかで見たよう……な？」
『おいおい勘弁してよ。あいつは……っ!?』

「マスター。どうやら吸血鬼側も派手におっぱじめてるみたいだぜ？」
「そのようだな。いやはや、ここまでの規模になるとは思ってなかったのぉ」
「どうします、お義姉さま。うかつに突入すれば三つ巴になりかねません。突入する機は此処ではないと思います」

「そうは言うがな、梔子。リゼヴィム・リヴァン・ルシファーがいるから、場合によっては全責任を負うので突貫しろとフロンズに言われてるのだぞ？　策はあるのか？」
「ご安心を。機は此処ではないだけで、すぐにでも動くことになるでしょう」
「……ほぉ？　根拠は？」
「一言で申し上げるのなら、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーです」
「あ～。さっぱり分からねえんだが、どういうことだ、梔子？」
「単純な話ですよ、ラカムさん。この状況下で禍の団のリーダーとなるような人物なら、お義姉様や私達とは別の意味でネジが外れています。態々客人としてツェペシュに逗留している以上、必ず動きます」
「なるほど。そうなれば初代ルシファーの息子による悪事を見過ごせないという形で、冥界側（妾達）が強引に動いてもフロンズにかかる負荷が減ると。確かに契約者の負担に配慮するのも仕事の内だな」
「ええ、それに――」

「どうせ突入するなら、派手に動いてきた方が後継私（私）掠船団（達）に向いているとは思いませんか？」
「「……なるほど、確かに」」

和地Ｓｉｄｅ

糞ったれ。うかつに動けないうえ、敵のポテンシャルが高すぎる。
真女王状態のイッセーと、更にヴァーリが来た状態で余裕すら見せてやがる。
隙を見て突破したかったが、クロウ・クルワッハはこちらに対する警戒を消していない。
……となると、どうする？
このまま時間をかけていれば、間違いなくヴァレリーの救出には間に合わない。
場合によっては後先を考えない強引な突破も考えるレベルで――
「……仕方ない。最終手段だ、アーシア！」
――その時、先生が声を上げる。
「ファーブニルを呼べ！　奴に渡したタスラムのレプリカなら、直撃すれば効果はある！」
「は、はい！」
……いや、ちょっと待て。
確かファーブニルって、使用済みパンツと引き換えにってことになってるんじゃなかったっけ？
凄く嫌だ。まさに最終手段だ。
というかなんでそうなった。他になんかあるだろと凄く言いたい。
あ、何時の間にか召喚されてる。
『おパンティータイム？』
……あ、頭痛い……っ
「は……いえ……はい！　おパンティータイムです！」
うわぁ、アーシアのメンタルがすっごいことになってる。
『聞いては駄目だ白いの！　あれは我ら二天龍にとって、おっぱい（相棒）とは別次元の悪夢になり果てた、ファーブニルという別の何かだ!?』
『ぱ、ぱんつ……ぐぅ……うが、がが……くるちぃ……～っ!?』
二天龍が酷いことになってるし。
っていうか自分の相棒を悪夢扱いするな。いや、パンツとおっぱいは別物だけど。

「……どういう状況だ？」
「ファーブニルは何を言っている？」
「ゴメン気にしないで！」
ヴァーリとクロウ・クルワッハの疑問符をイッセーもごり押しで無視しようとしているし。
いやこれ、どうしろと。
俺達が途方に暮れていると、ファーブニルはだが鼻息を荒くした。
『でも俺様、今はおパンツの気分じゃない』
『『『『『『『『『なにぃ!?』』』』』』』』』
しかも今度は訳の分からない展開に!?
「パンツじゃないだと!?　な、ならブラジャーか!?」
「アザゼル！　アーシアの下着を何だと思ってるの!?　ランジェリーショップか何かと勘違いしないで！」
「まったくですわ！　アーシアちゃんのことも考えてあげてください！」
狼狽する先生に、アーシアを妹同然に愛する部長と朱乃さんの叱責が跳ぶ。
だがどういう状況だこれ。俺には全くついていけん。
俺と鶴羽が教官と共闘してガチシリアスなことしてる裏側で、こんなこと起こってたのかよ。イッセーのおっぱいも大概だが、別の酷さにも程があるな。
っていうか、答えはなんだ？
「経験から言って、使用済みのハンカチや靴下とか？」
「いや違うぜカズヒ！　たぶん脱ぎたてだ！　俺ならそれを要求する！」
変質者に慣れているカズヒねぇさんと、変態という意味では同軸のイッセーがそれぞれ推測するが、ファーブニルは首を横に振った。
『俺様、アーシアたんの使用済みスクール水着が欲しい』
……。
いや、あのね？
「雪が降り積もる山中をどこだと思ってるんだ!?」

思わず俺は全力ツッコミだよ。
「……ＴＰＯをわきまえなさい。せめて手に入る可能性を考えたりできないのかしら……っ」
カズヒねぇがガチでキレかけている。真面目にピンチだから、この展開に我慢の限界ギリギリなんだ。
いやでも、実際そんなものを此処で手に入れられると考えるとかどうなんだ？
もうこうなったら、いい加減パラディンドッグを―
「あげます！　ここにあります！」
『『『『『『『なにぃ!?』』』』』』』』
―あった!?
「ど、どういうことだアーシア!?　こんなところで泳ぐ予定でもあったのか!?」
ゼノヴィアが信じられない表情で問い質すが、アーシアは涙目だがしっかりとした表情で首を横に振る。
「先日プールで泳いだ時に、会長さんがファーブニルさんの視線に気づいて、要求される可能性を教えてくれたんです」
あの人も大変だな！
え……えっと……とりあえずゴー！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「なぁフロンズ。吸血鬼側で動きがあるが、どうするんだ？」
「ある程度は現場判断に任せるさ。幸香はそこで気の狂った判断はしないだろうしな」

「あいつ別の意味でトチ狂ってるけどな。ま、こっちはこっちで色々と動くわけだな」
「その通りだ。今迄ろくに動きを見せなかったリゼヴィム・リヴァン・ルシファーが、今頃になって急に動きを見せる。何が目的かは分からんが……備える必要はあるだろう」
「……そういや、グレモリー眷属が更にパワーアップしているみたいだな」
「龍王ファーブニルと契約か。どうも対価が妙なことになっているようだが、何かしらでこちらも契約できないだろうか」
「……人間界にはそういう店もあるらしいが、なに頼むつもりなんだよ」
「ティバールやブレイに、ファーブニルが持っている宝を少しでも見せることができればいいインスピレーションになると思ってな」
「……探してみるかねぇ。いや、幸香達なら意外とノリノリで用意しそうだな」

九成Ｓｉｄｅ

……頭が痛い展開だ。
何が酷いって、クロウ・クルワッハが迎撃に成功したことだよ。
ここまで頭痛い展開なのに迎撃された。迎撃されるということは効果があるということだが、だからこそ痛い。
正直これ以上時間をかけられないんだがと思った時、クロウ・クルワッハは戦意を解いた。

「どういうつもりかしら？」
「指示は果たしたのでな。正直に言えば、お前達と戦うのならそちらが本領を発揮できる時にしたいと思っただけだ」
リアス部長に聞かれ、クロウ・クルワッハはそう答える。
……まずいな。つまりそういうことだと考えればいいわけだ。
俺が内心で最悪の状況を悟っていると、カズヒねぇはため息まで吐いた。
「色々な意味で頭が痛いわね」
そこまで言うと、カズヒねぇは視線をリアス部長に向ける。
「念の為警戒するわ。先に行ってください」
「……そう、分かったわ。和地はカズヒのサポートに回って頂戴」
なんか視線で意見を交わし合ったのか、リアス部長はそう言って他のみんなを連れて走り出す。
それを見送ってから、クロウ・クルワッハは怪訝そうな表情を向ける。
「俺が後ろから仕掛けるとでも思っているのか？　心外だな」
「そっちの方が個人的な評価は高くなるわよ。まぁ、流石にドラゴンに帰属意識を持たせるのは難しいとは分かっているけど」
皮肉気に返すカズヒねぇだけど、まぁ分からなくもない。
暗部部隊出身で、正義を奉じる必要悪を自認しているのがカズヒねぇだ。真っ当な社会秩序を良しとしている彼女にとって、どの超えた自由人とは相性が悪すぎるのだろう。
だからこそ、警戒心を消さない道理はない。
そして何より―
「……時間切れ、だよな」
―たぶん、もう間に合わない。
実力的にも位置的にも、最後の門番だったはずのクロウ・クルワッハ。そんな男が戦闘を解いたということは、必要がなくなったということだ。
既に禍の団やクーデター連中が聖杯を確保することは止められない。そういう状況下だからこそ、クロウ・クルワッハに気の進まない

戦いまでさせる必要はないと踏んだんだろう。でなければ、流石に俺達を通らせるわけがない。
カズヒねぇのクロウ・クルワッハに対する警戒は本当に念の為だ。クロウ・クルワッハ以上に、ミザリ側が「後ろから殺せればそれはそれでよし」とかしかねないという、そっちの警戒の方が主軸だろう。
だからこそ、部長も防衛戦に向いている俺を残したんだろう。この状況下で恋愛的な要素を主軸にするほど、あの人はロマン脳ではない。
そしてクロウ・クルワッハは、こちらをちらりと見てからこの場を去ろうとする。
「音に聞こえし悪祓銀弾（シルバーレット）よ。機会があれば、俺と戦ってほしい」
……戦闘狂に好かれるのって、いいことではないよなぁ。
だがカズヒねぇは戦闘狂には垂涎ものではある。理屈や理論を踏まえて詰めることも、気合と根性で限界突破することもできる。戦闘狂にもタイプはあるだろうが、どのタイプにも好感度が高くなる要素がある人物だろう。
まぁ、そんな奴らに付き合ってやるほどカズヒねぇも甘くない
「安心なさい。禍の団について戦うのなら、遠慮なく殺してあげるわ」
ほら、容赦ない。
ただし、相手はちょっと喜んでいるから始末に負えない。
「……その時は、俺も本気をもって挑むとしよう」
そう言い残し、クロウ・クルワッハは歩き去って行った。
そしてカズヒねぇは、瞬時に神器を使ってバリケードとトラップを設置し始めた。
分かり易いトラップを大量に起きつつ、それを隠れ蓑に更にトラップを満載。脅しとして警告しながら、それでも入ってくる奴を遠慮なく始末する仕込みだ。殺意が満タンすぎる。
一人でトレーラー十数台分の荷物を運べるって、こういう時怖いな。
「……さて、それじゃぁ行くわよ。ちょっと懸念点もあるしね」
「具体的にどんな？」

態々残るほど警戒しているのに、そこから更に急ぐレベルの懸念っていったいなんだよ。

「ヴァレリーの死でキレた皆が、なるべく殺さず捕縛するを忘れて皆殺しにする可能性よ」

「……あ～……」

その可能性は確かにあった。

基本的に情に厚いから、そういうことありそうだしなぁ。

明星双臨編　第三十九話　説得（物理（マリウス））

和地Ｓｉｄｅ

そして祭儀場に突入した俺とカズヒねぇは、とんでもない光景を見た。
大量の闇に包まれ、更に闇で出来た獣が部屋中を包み込む。
更にそこには吸血鬼達の姿がなく。しかも手足を一本ずつ食いちぎられたマリウス・ツェペシュが恐れおののいて喰われようとしていた。
っていうかちょっと待て！　もしかしてあの闇の塊って、ギャスパーか!?
話に聞いていたギャスパーの力と似通っている。ということは、ギャスパーの奴はぶちぎれて大暴れしているということか！
……ったく！　懸念的中かよ！
「そこまでだギャスパー！」
俺は咄嗟に障壁で闇の獣を抑え込みながら、ギャスパー（？）の前に割って入る。
大体状況は読めたが、作戦を忘れるな。
『……邪魔しないでくれないかい、九成先輩。こいつは死ぬべきだ』
「そういうわけにはいかない。お前、既に吸血鬼の貴族共を皆殺しにしてるんだろう？」
周りにいないということは、その可能性が莫大だ。
状況はほぼ分かっている。予想通り、ヴァレリーはもはや手遅れだということだろう。
だが、この状況下でマリウスを殺させるわけにはいかない。
『悪いけど、そいつは生かしては置けない。万が一ヴァレリーが生き返ったとしても、そいつの生き死にには関係ない』
「ああそうだ。ヴァレリーの生死に関係なくマリウスは捕縛する。ま

して他の吸血鬼達を皆殺しにしているのなら、尚更殺す選択肢なんてありえない」
聞き出す為の口が一つしかないというのに、それを殺すことは断じてできない。
まったく。こういうところはグレモリー眷属の悪いところだ。冷静な奴がフォローに回らないとまずいな。
「イッセーの悪いところを真似しないで頂戴。感情任せで考えなしに動くのは悪いところだと、ジークフリートも言っていたでしょう？」
カズヒねぇも、マリウスをカバーできる位置取りでアタッシュナイダーまで構えている。
いやほんと、この状況下でマリウスに死なれると俺達の首が締まるからな？
ただでさえリゼヴィム・リヴァン・ルシファーで冥界が大混乱だというのに、そいつと繋がっている今回の首謀者を殺すとかないから。他にしゃべれそうなやつが全員死んでるなら尚更だから。
『あんな奴がイッセー先輩を馬鹿にすることの方が許せないだろう？
そんな言葉を持ち出すなんて、流石に酷くないかい？』
「正論は常に耳に痛いものよ。敵の言い草だからと実際に問題なことを無視する方があれでしょう？　私達ぐらいは止める側でいないとね」
カズヒねぇがギャスパーにそう返しながら睨みを付けたその瞬間――
「「……？」」
――俺達の変身と星辰光が、解除された。
『悪いけど、貴方達の力を一時的に停止させてもらったよ』
なるほど。強化度合いも高いだろう、吸血鬼の貴族達がやられたのはそういうことか。
いや冷静に言ってる場合じゃ――
「まだだ」
――その瞬間、カズヒねぇが星を開帳し直した。
星辰体が感応し、カズヒねぇを瘴気が包み込む。

『……え』
真顔（よく分からないけど）なギャスパーがきょとんとした声をした瞬間、カズヒねぇは間合いに踏み込んでいた。
そして大量の魔術用の宝石を左手に握り締め、右腕はマリウスを振りかぶっている。
え、マリウス？
「ちょ、カズヒねぇ何を―」
俺が言い切るより早く、カズヒ姉は気合と根性を踏み込みで示して攻撃を開始する。
「まだまだまだま

なんか記録映像で見た幸香みたいなことしてるよ。
こんなところで血の繋がりを感じるとか思ってなかったよ。
いや、今は血は繋がってないけど
「まぁあああああだだだ

「これ、もしかして見せ札の偽物？」
「いいえ、マリウスはそれを使って、私が吹き飛ばした上半身を再生させていたわ。偽物とは思えないけれど」
カズヒねぇも部長も困惑している。
じょ、状況が二転三転しすぎてついていけてない。俺特についていけてない。
「……取りあえず、出てきたのは事実ですから戻しませんの？」
ヒマリが人差し指を口元に当てながらそう言ってきたので、我に返ったカズヒねぇが聖杯を先生に渡す。
それを埋め込む処置をしながら、先生はすっごい興味深そうな表情だった。
「どうやら亜種だな。英雄派のジークフリートが、本来腕に装着される龍（トウワイス・クリティカル）の手を背中から生える第三の腕として出していただろう？あれと似たような感じで、本来とは違う発現の仕方で具現化しているみたいだな」
あ～。そういうケースあったなぁ。
探せば意外とあるらしいけど、神滅具でそれってのは珍しいんじゃないか？
「えっと、でも神滅具って一種一つですよね？　二つあるなんてあるんですか？」
「いや、多分だがそうじゃない。たぶん二個に分裂してるとかじゃないか？」
イッセーの疑問に俺がそう言い返すと、ふとみんなの視線がヒマリとヒツギに集まった。
……そういえば、似たようなケースがそこあったな。
いや、二人の場合は違うか。元々二人になるはずが一つになって、それがバグって二つになったとかいう形だったからな。
ただ、それも聖杯が関係していたからなぁ。なんかこう、感慨深いというかなんというか。
「おぉ！　つまりその聖杯は、幽世の聖杯（セフィロト・グラール）ではなく乙女の聖杯（オトメ・グラール）とかいうわけですのね！」

「いや、それ違うから。……まぁ、私もちょっと思うところがあるけどさ？　絶対それは違うから」
素ボケのヒマリはヒツギに任せつつ、俺達は視線を先生に戻す。
「過去に前例がないから分からんが、まぁ性能はある程度ダウングレードされてるんだろうさ。俺たちの研究結果じゃ神滅具を抜き出せばもっと派手なことになるはずだからな」
そう言いながら、先生は埋め込みを進めている。
「ま、そのおかげでヴァレリーは昏睡状態止まりだ。埋め込みが完了すればすぐに目が覚めるだろうさ」
その言葉に、皆がほっと息をついた。
亜種神滅具とか、記録上前例がないからな。先生も断言しているし、かなりレアな体験だ。
色々あったが、まぁ後々酒の肴にできる話に終わりそうだな。良かった良かった。
「……ヴァレリーも死なずに済んだのなら、尚更今すぐ殺す必要はないわね。こいつはこのまま拘束するわよ」
『……仕方ないね。どちらにしても、力を振るいすぎて少し休んだ方がいいみたいだ』
カズヒねぇがギャスパーに念押しすると、ギャスパーも不満気だけど渋々といった様子で頷いた。
納得してくれたようで何よりだ。これで何とか情報源にできそうだしな。
さて、それはそれとしてだ。
俺達は闇の獣状態のギャスパーに視線を集める。
「あなた、ギャスパーではないわね？」
リアス部長の言いたいことも分かる。
闇の獣になったままのギャスパーは、口調も雰囲気もいつものギャスパーじゃないしな。
何かが操っているとか、そういうことだとは思うが。
ただ、獣は首を横に振った。
『いや、僕はギャスパーだよ。ただ、ギャスパー・ヴラディでありそう

でない存在……胎児である時に宿った、バロールの残滓とでもいえばいいのかな』
　そのことばに、先生が勢いよく振り替えった。
「おいおい、バロールってケルト神話のバロールかよ!?」
　ここ最近で一番驚いているみたいだが、どういうことだ？
「先生、ギャスパーの神器にもそんな名前がついてましたよね？　関係者ですか？」
「どっちかというよ神器があやかってるんだ。邪眼の持ち主として有名な滅びた神様さ。っていうかマジでバロールかよ？」
　イッセーにそう答える先生だが、ギャスパーの方は苦笑している雰囲気だ。
『本質的に僕はギャスパーだよ。ルー神によって滅ぼされ神性も失われた、意識の断片と残留した魔の力さ。まぁ、例えそれだけだとしても神を宿せる力を作られるだなんて思ってもいなかったよ。聖書の神は本当に恐るべき存在だということとかな』
「全くだ。唯一神とか言われるわけだぜ。インドラやシヴァみたいに単純に強い神様の方がまだ可愛げがありそうだな」
　なんか分かり合っているようだけど、とりあえず細かい解説は後でいいだろう。
『まぁ、この人格はバロールではないからね。もう一人のギャスパーってことにしてくれればいいさ』
　そうまとめるギャスパーに、ゼノヴィアやイリナは近づくとポンポンと触れる。
「なるほど。ならお前はギャスパーでいいな！」
「おっきくなったわねぇ。見違えたわ」
　それでいいのかとか言いたいけど、まぁそれはそれでいいだろう。
　まぁ俺達のこともきちんと先輩と認識しているしな。記憶がギャスパー・ヴラディと連続しているかは分からないが、まぁいいだろ
「とはいえ性格が変わりすぎだね。正直いきなり出てきたときは、かなり困惑したよ」
『ごめんごめん祐斗先輩。でもだいぶ力にも慣れてきたし、記憶も噛

みあうだろうから……いつも通り接してくれると嬉しいかな？』
　木場にそう答えながら、獣のギャスパーは眠りヴァレリーの頬を優しくなでる。
『バロールとしてのギャスパーは、彼女を救わないといけないと強く感じた。それはヴラディのギャスパーが彼女に向ける感情とまた違っているんだ。僕にもよく分からない感覚でね』
　そう独り言ちるギャスパーに、イッセーは何かに気づいたようにポンと手を打った。
　そのまま視線はカズヒねぇに向くけど……あぁ。
「カズヒねぇが言ってた、ヴァレリーの聖杯がハーフヴァンパイアが神器を生まれ持つケースの増大化に関係してるって奴、当たりじゃないか？」
「だよな？　そう考えると、ギャスパーの神器にバロールの断片が宿ったってのも納得な気がするしさ！」
　俺とイッセーが頷き合っていると、カズヒねぇとアザゼル先生は何とも言えない表情だった。
「可能性として言っただけだけど、まさか本当にそうなるとは思わなかったわ。専門家としての意見はどうですか、先生？」
「流石に想定外でさっぱりだよ。だがめちゃくちゃ興味深いというか、模倣したものに本物が残滓とはいえ宿るとか、聖書の神の奴はどんなもん造ってるんだがなぁ」
　まぁ確かに。
　聖書の神様、本当に凄い奴だったんだなぁ。
　むしろ良く魔王クラス四人で相打ちにできたもんだよ。悪魔って怖いなホント。
『ま、今の僕は神器とバロールの融合が産み出した、禁手であってそうでない形態だね。禁夜（フォービドゥン・インヴェイド）と真闇翳（バロール・ザ・ビースト）の朔獣とでも名付けようかな？』
「自分で名付けますのね？」
　ヒマリ、突っ込むな。
　あとリーネスが、かなり遠い目をしている。

「アザゼル先生ぇ？　これもぉ、準神滅具どころか神滅具として新しく認定した方がよくありませんかぁ？」
「あとで議題に挙げるとするぜ。ま、神滅具も時代が進むにつれて増えてきてるからおかしくねえがな」
増えるんだ神滅具。
俺、もしかしてある意味歴史的な瞬間に立ち会ってるのか？
いやまぁ、歴史の転換期になりえる戦いを何度も経験している気はするけど。
「また凄いことになってますね。リアスさんの眷属をやっていると、今後も同じことが起こりそうです」
「……正直、ちょっとついていけてないかも」
ロスヴァイセさんは興味深そうだし、インガ姉ちゃんは思考停止寸前だし。
まぁ、とりあえずこの流れなら大丈夫か？
『……っと。流石にもう限界だね。後はみんなに任せて、僕は少し眠らせてもらうよ』
そういいながら、ギャスパーの闇はどんどん消えていく。
『僕はすべてを闇に染める存在だけど、貴方達に危害を加えたいとは絶対に思わない。もう一人の僕を通して、ずっと見ていた……大事な……仲間だから……ね……』
そう伝えきると共に、闇が消えてギャスパーは倒れていく。
それを抱きとめるリアス部長は、目元を潤ませていた。
「当たり前よ、私のギャスパー。貴方は私の、大事な眷属なのだから」
……色々と不穏な情報も多かった気がするが、まぁ要約すればそこでいいだろう。
オカ研は色々とド級の来歴が多いからな。俺も前世の記憶と力を引き継いで、トンデモ連中の英才教育を受けてるし。
邪神の残滓が宿ったハーフヴァンパイア程度じゃ、ちょっと目立つ程度だろう。
そんな風に俺達がほっこりする中、ヴァレリーの聖杯が埋め込まれる。

そしてそれを終えた先生が息を吐き、リーネスも映像を見て……固まった。
「……リーネス？　何か不安なのだけれど」
カズヒねぇがそういう中、先生は先生でけげんな表情を浮かべていた。
「……ん？　息はあるし聖杯も戻った。もう意識を戻してもいいんだが―」
「―総督、まずいです！」
その時、リーネスが飛び跳ねるように振り返る。
途中から話を聞いてないと断言できる表情で、目を見開いていた。
「魔術回路による解析結果が出ましたぁ！　彼女の聖杯は、三個一セットの亜種で、既に一つ抜き取られています！」
その言葉に、俺達は寒気を感じた。
三つで一つ扱いの亜種発現した聖杯。
一つ抜き取られて、もう一つがヴァレリーにあった。そしてもう一つがまだ抜き取られたまま。
そして禍の団側の迎撃が少なく、最終防衛ラインのクロウ・クルワッハに至っては聖杯が抜き取られ切ってないのに中断するいい加減さ。
おい、これってまさか―

「流石はリーネス・エグリゴリ……いや、ミザリが自慢げに語るアイネス・ドーマってところかい？」
そんな、悪意のある声に俺達は振り返る。
そこにいるのは、リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。
そして、その手元に浮かぶのは―
「そしてこれが三つ目だ。そこのマリウス君は数どころか亜種であることに気づかない情けない聖杯研究者だけど、おかげでこういう悪戯

もできたってわけさ」
—まさにその、三つ目の聖杯だった。
「よい子の皆さんこんにちわー？　リゼヴィムおじいちゃんの勉強タイムですよん？　ちょっとお時間ちょうだいするねーん♪」
オーフィスの分身体を連れたリゼヴィムは、明らかに何かを我慢できないでいる様子だった。

悪意が、始まろうとしていた。

明星双臨編　第四十話　リリンの野望

和地Ｓｉｄｅ

聖杯が抜かれと思ったら、二つあるから大丈夫となって、実は三つ目が抜き取られていた。
ギャスパーの秘密といい、想定外の事態が起こりすぎだろ。こっちはちょっとついていけてないぞ。
いや、それより警戒するべきは目の前のリゼヴィム・リヴァン・ルシファーだ。
「うひゃひゃひゃ！　解説の通り、ヴァレリーちゃんが持っていた聖杯は三個一セットっつーとんでもない亜種だ。聖杯研究者を自称しながら、いくつもあることすら気づかなかったマリウス君を笑ってやっていいと思うぜ？」
悪意ある表情で失神しているマリウスをあざ笑うリゼヴィムに、俺達は不快感が消えやしない。
実際問題マリウスは外道だが、だから目の前の外道の悪意が気にならないわけじゃ断じてない。
何より、絶対碌でもないことを考えていると、それがよく分かるからな。
「……リゼヴィム……っ」
しかもヴァーリはヴァーリで凄まじい表情だ。
殺意と憎悪がこれでもかと込められているこの顔には、ちょっと引くぞ。
「せ、先生？　ヴァーリはリゼヴィムのことがそんなに嫌いなんですか？」
イッセーも戸惑ってそういうが、アザゼル先生は嫌悪感をあらわにしながらリゼヴィムを睨んでいる。

「そりゃそうだ。そいつは自分の息子にヴァーリを迫害しろと命じたからな」
「……そりゃ、外道ですね……っ」
あまりの内容に、俺は嫌悪感が表情に出ていると自覚する。
あの外道極まりないモデルヘキサ、道間六郎だって娘である道間七緒（鶴羽）に相応の気遣いは出来ていた。当人なりにはしていただろう。
それが、自分の息子に孫を迫害させるだと？
血の繋がった親族に外道な行為ができる奴なんて腐るほどいる。だが、それを見て不快感を抱かないほど俺は人間を辞めちゃいない。
俺達全員の嫌悪に満ちた視線を受けて、リゼヴィムは悪ガキのように口を尖らせた。
「語弊があるぜぇ、アザゼルおじさんよぉ。俺はビビりでヘタレなラゼヴァンが、ルシファーの才覚ですら上なのに神滅具まで持ってるヴァーリ（そいつ）にビビってたから的確なアドバイスをしただけだぜ？「怖いなら虐めろよ」ってな？」
……そういうことか。
父親由来のルシファーの力と、母親由来の白龍皇。その二つを持っているヴァーリが何故堕天使側にいるのかは、考えてみればちょっと不思議にはなるだろう。
だが、迫害までされていたのなら逃亡する選択肢は確かにある。
「ま、我慢できずに逃げ出したヴァーリきゅんはラッキーじゃね？アザゼルおじさんは面倒見がいいしぃ？　あのヘタレ息子はムカつくぐらいヘタレだったんで、ついはずみで殺しちゃってるしね～？」
「……そうか。まぁ、奴のことは別にいい」
ヴァーリはかなり激怒しながら、おちゃらけるリゼヴィムを睨み付ける。
「奴も殺したいが、それ以上に殺したいのは貴様だからな。明けの明星たるルシファーに相応しくない、貴様は殺す……っ！」
今までにないぐらいの負の思念をまき散らすヴァーリに対し、リゼヴィムはむしろ嬉しそうに頬を歪めている。

「なんて劇的ビフォーアフター！　オナ○ー感覚でこさえちゃったミザリといい、俺って意外と血族に恵まれてる感じかな？」
「……まぁいいわ。腐臭のする外道が腐れっぷりを見せている程度で、一々激高するほど私も馬鹿じゃないの」
　不愉快な言動をまき散らすリゼヴィムに、カズヒねぇはため息をついてから鋭し視線を向ける。
「で、態々取り返すべきそれを持って出てきたのはどういうつもりかしら？」
　その通りだ。
　ヴァレリーの意識喪失を回復させるなら、おそらく抜き取られた聖杯を確保するのが最適解。取り返す為にも誰が持って行ったのかを探る必要があった。
　それが態々この場に出てくるとか、どういうことだ？
「簡単だよ。悪の親玉らしく、どんな事計画してるか話したくて堪らねえのさぁ」
　そう嘯くリゼヴィムは、聖杯を器用に魔力で浮かべながら、指を一本立てる。
「そのきっかけは今からちょっと前。俺達の世界において、「多分あるけど実証できない」って存在が実証される出来事があった」
　そう告げるリゼヴィムは、明らかに嬉しそうな表情だった。
「実証として出てきたのは、神様の使い。だがそのオーラは間違いないことに、北欧神話でもギリシャ神話でも日本神話でもなく、もちろん聖書の神様でもない未確認の存在であることが証明された。そう、つまりは異世界の証明が成されたわけなんだよ。これって専門家の間邪すっごい大発見なんだぜ？　自覚あった？」
　そう言いながら、リゼヴィムの視線はイッセーに向けられる。
　この流れ、イッセーが異世界の実証に一役買った……あ。
「おいまさか……！」
「……あの時の!?」
　先生と俺が目を見開いてイッセーの方を向いて、イッセーはさっぱり分かってないのか首を傾げる。

だがその答えに、リーネスもまた辿り着いていた。
「ロキとの戦いに出てきたとかいう、乳神の使い……っ」
その言葉に、残りのメンバーが一気に悟る。
そう、ロキと戦うことになった時、突如としてイッセーに接触して支援した、乳神とかいう謎の存在。
八百万に出てくる多産とかそういう神様ではなく、文字通りおっぱいを司るとかいう訳の分からない存在。しかも性欲を持っていると振るえないミョルニルを、レプリカとはいえイッセーが使えるようにしたとんでもない奴。
確かに、言われてみれば凄いことではあるんだよ。
「ユーグリッドきゅんからそれを伝えられ、更にミザリ達が独自にヴァレリーに宿った聖杯とか色々伝えてきてくれてねぇ。それを知った俺に、夢が宿ったんだ」
夢だと？
おい、流れから言って嫌な予感しかしないぞ。
何より、リゼヴィムの悪意ある笑顔がそれを確信に近づける。
「はっきり言うぜ？　俺ってば、異世界侵略したいんでございます！」
「はぁ!?」
思わず俺が声を上げるが、当然だろう。
異世界があるから侵略したいとか、どういう理屈だ。
いや、新大陸が発覚した時にもヨーロッパでは侵略活動は行われていた。植民地が大量に解放されたのも、結構時代としては浅い時期だ。
大昔から生きているような奴なら、そういう感覚を持ってもおかしくは、ない。
「いやもぅほんとにやってみたい！　邪龍軍団を引き連れて異世界を蹂躙してみたい！　そんでもって異世界に俺達の名が知られるとか、すっごいワクワクするロマンだぜ！」
そんな質の悪いことを言いながら、何故かリゼヴィムは急にテンションを落とした。
「だがそれはまず無理。理由は簡単で、この世界最強の存在が次元の

狭間を牛耳ってるから出ていこうにも行けないんだよ」
「……そういうことか。お前、グレートレッドを!!」
リゼヴィムの言い草に何かを気づいた先生が激高する。
そしてリゼヴィムは、更にニヤリと笑う。
「正解です！　俺達の目的は異世界侵略で、その為の手段としてグレートレッドを滅ぼしちゃったりしたいのです！」
いろんな意味でやばすぎる。
禍の団だってグレートレッドの撃破には二の足を踏んでいた。世界に悪影響が齎されると、三大勢力や神話の専門家も踏んでいた。だからこそ、オーフィスの目的としてグレートレッド抹殺は掲げられていたが、結局禍の団はその為の積極的な行動をしなかった。
そしてオーフィスも、今のところは対グレートレッドを意識していない。イッセーと結んだ友情と、駒王町での生活が気に入っているようだからだろう。
それなのに、この期に及んでグレートレッド抹殺計画だと!?
「ちなみに、今の禍の団では割と好評だったりするんだよ。冥革連合にもＯＫしてくれてるし、むしろ積極的に研究が進められちゃっております！」
「何考えてんのかなあいつら!?」
ヒツギがそう絶叫するけど、本当だよ。
色々あれだけど、冥界発展を考えて行動しているのにグレートレッド抹殺とかやめろ。本当に何を考えてるんだよ。
いや待て。そもそもできるのか？
「どうするつもりですの!?　は、まさか超越者というだけあって、何か超越しちゃってますのね!!」
ヒマリがそう大声を上げるが、リゼヴィムはわざとらしくしょんぼりする。
「いや、俺は超越しちゃってるけどそっち方面じゃないから無理無理。かといってサマエル奪おうとすると、ハーデス爺さんがマジギレしそうだし、そもそもこっちの邪龍軍団が全滅しそうだし？」
そこまで言ってから、リゼヴィムは指をぴんと立てる。

「だがしかし、そこに抜かりはありません！　ヴァレリー君の聖杯と、ある協力者によって俺達は対を成す存在をマジで見つけちゃったのです！」
つ、対を成す存在？
二天龍みたいにグレートレッドにも、真なる白龍神皇とかがいたってのか？
俺達が戸惑っていると、先生が目を見開いて顔色を変えていた。
「まさか、黙示録の一説を……獣の方を見つけたってのか!?」
「大正解でございます！　分かるの早い人がいるとテンポがいいぜ！」
両手の指で先生を差しながら、リゼヴィムはわざとらしくはしゃぐ。
そして俺達の前で、更なる宣言をかましやがった。
「異世界とは別の意味でいるだろうけど分からない存在。黙示録に記されし獣。黙示録の凶獣（アポカリュティック・ビースト）、トライヘキサを見つけちゃったのでぇ……ございます！」
ふざけるな!?
黙示録の獣って、黙示録の赤い龍であるグレートレッドと同格だろうってどこかで聞いたことあるぞ!?
カズヒねぇ達教会側なんて顔色が真っ青どころか白くなり始めてるし。悪魔側も堕天使側もやばいよこの状態。
あ、イッセーだけさっぱり分かってない顔だ。首までしっかり傾げてる。
「黙示録にグレートレッドと同じく記されている存在。それを司る数字として、６６６が記されている獣です。６６６が不吉な数字だというのはご存じですよね？」
「あ、あれそういうことか！」
ルーシア解説ありがとう。
っていうかリゼヴィム。なんでお前が嬉しそうにうんうん頷いているんだよ。
「うんうん。解説会に必要なのは、理解が早いアザゼル叔父さんみた

いなタイプ。そして君のように説明されるわかってないタイプだねぇ、赤龍帝くん」
　ある意味正論だからムカつく。
「ただ残念なことに、見つけたトライヘキサはやばいぐらい厳重に封印されてたんだよ。誰が俺達より先に見つけて封印してたかっていうと、なんと聖書の神様だ」
　更にとんでもない情報がぶっ困れすぎだろ。
　神器という神の残滓すら宿す代物を創り出しただけでもやばいだろうに。更に龍神に匹敵するだろう化け物を真っ先に発見して、人知れず封じただと？　どんだけだよ。
　俺達がついていけてないでいると、リゼヴィムはドン引きと関心が混ざった表情で遠くを見ていた。
「いや、それも下手な神様じゃ一つ使っただけで死んじゃいそうな禁呪を何十レベルで使って封印しててねぇ？　下手すると封印したの、俺の親父達と戦って相打ちになる直前かもしれないんだよ。それだけやって弱りまくったうえで漸く親父達と相打ちとか、どんだけだろうねぇ？」
　更にとんでもない情報をぶっこむな。
　いや、これ以上考えているとこっちの頭が痛くなる。話を前に進めよう。
　とにかく、奴は異世界を侵略する為にグレートレッドを打倒する為にトライヘキサの封印を解除したい。ややこしいがそういうことだ。
　賭けてもいい、状況は十分以上にやばすぎる……っ！
「ちなみに聖十字架の使い手にも協力を貰っており、封印解除はだいぶ進んでます！」
　しかも封印解除は進んでいるのかよ!?
　おいおい冗談だろ。ふざけるな……っ
　控えめに言って、世界崩壊の危機とかそういうレベルだろうが!?

祐斗Ｓｉｄｅ

なんていう、悍ましい考えと計画なんだ。
リゼヴィム・リヴァン・ルシファーの目論見は、異常というほかない。
異世界の存在を知ったから侵略したい。その邪魔になるからグレートレッドを滅ぼしたい。その為に必要だから、封印された黙示録の獣を解き放ちたい。
寒気がするほどのその考えに、僕達は戦慄を誰もが覚えているだろう。
「ふざけんじゃねえ！　そんな下らねえことの為に、いろんな人達に迷惑をかけるんじゃねえ！」
イッセー君が激高して、拳を突き付けるのもよく分かる。
それほどまでに、質が悪いというほかない。
だがリゼヴィムは、むしろ不満げにイッセー君を見る。
「そこまで言うかー？　自分で言うのもなんだけどさ？　これって俺が生まれた初めて持った願望って言ってもいいんだぜ～？」
そう言い返すリゼヴィムは、どこか虚無を感じさせる表情を浮かべていた。
「ぶっちゃけ、今までの俺は生きてちゃいねえ。ただ考えることができるだけのものだったのさ。夢も野望も理想もないし、そもそも生きてるってなんだとか悪魔ってなんだとかって、そんな下らねえことばっかり考えてワイン飲んでただけなんだよ」
心底から嫌そうにそういう彼は、ふと僕達元人間や人間のメンバーを羨ましそうに見ていた。
「そういう意味じゃ、人間ってのは凄いと思うぜ？　短い人生で次々野望とか夢とか理想が生まれるんだろ？　生物学的な違いってのを踏まえても、凄いことじゃね？」

師匠が似たようなことを言っていたの思い出す。
人間から悪魔に転生した者は、早い段階で夢を叶えてしまい燃え尽きるように虚無的な人生を送ってしまうことがあるらしい。
むしろリゼヴィムの場合は更に酷いんだろう。元から持ってないみたいだしね。
「そんな俺にとっちゃぁこれはマジで人生懸ける理由なんだよ。異世界に悪意ばらまいて大暴れとか、めちゃくちゃ胸がときめいてるんだよねぇ！」
「ふざけやがって！　今まで戦ってきた連中でも、一番ろくでもねえな、おい!!」
イッセー君が激怒するのも当然だ。僕達も敵意があふれ出てくる。
そんな僕達に視線に、リゼヴィムは嫌そうな表情をする。
「……正義の目だねー、ろくでもねぇ。教会の連中とかはともかく、仮にも悪魔になった奴がしていい目じゃねえだろ」
蔑むように向ける視線は、本心から嫌そうな本気の目だ。
「俺達は悪魔だ。悪魔ってのは、邪悪で悪辣で悪質であるべきだろ。悪徳ってもんを体現しようとか思わねえのか、おい？」
「興味がねえよ。少なくとも、お前みたいなろくでもねえ奴になる気はねえ！」
何時でも殴り掛かれる体制になりながら、イッセー君はリゼヴィムの言い分を切り捨てる。
それに対して、リゼヴィムも手を上に向けると不敵な笑みを浮かべてきた。
「そういうことなら仕方がねえ。中二病をいい年になってこじらせたダメ親父でいいなら、相手すんぜ？」
「上等だ……っ」
その長髪に、イッセー君は渾身のドラゴンショットを放つ体制に入る。
かなりの魔力が込められている。直撃すれば、最上級あくまでも相応のダメージが入るだろう。
それに対し、リゼヴィムは一切構えをとらずにノーガード。

いくら超越者とはいえ、そこまでの余裕を二天龍に向けれるとは―
「待てイッセー！　そいつには―」
―その先生の声と共に、イッセー君のドラゴンショットが放たれ……掻き消えた。
僕達はきょとんとするが、僕達側に二人ほど平然としているものがいる。
ヴァーリ・ルシファーとアザゼル先生。二人はむしろ納得の表情だった。
イッセー君がドラゴンショットを放った手とリゼヴィムを何度も見直して言ると、先生が首を横に振る。
「よく聞けお前ら。リゼヴィム・リヴァン・ルシファーの超越者たる特性は、神器無効化能力《セイクリッド・ギア・キャンセラー》。神器及び神器で高まった力全てが、あいつには効果を成さねえんだ」
なんだって？
まずい。イッセー君の神滅具はもちろんのこと、僕達はかなりの人数が神器保有者だ。
この状況では、戦力は数割減と言っても過言ではない。
「そういうこと。ま、その所為で聖杯にもあんまり触れれないし？サーゼクス君も神器保有者以外で眷属を固めるぐらい対策しちゃってるんだけどねぇ」
そう言いながら、リゼヴィムは聖杯を異空間に格納する。
ただある意味で納得だ。ヴァーリがうかつに手を出さないわけだし、サーゼクス様の眷属に神器保有者がいないわけだろう。
憎悪に燃えるヴァーリ・ルシファーが何故か手を出してこないのも、サーゼクス様の眷属に神器保有者が一人としていないもの、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーのこの力があるなら納得できる。
これが第三の超越者。ここまで厄介とは！
「なら神器以外で仕掛ければいいのだろう」
「確かに正論！」
ゼノヴィアが勢いよくデュランダルから聖なるオーラを放つ。
同時に九成君もショットライザーを構えて、別の方向から射撃をし

かける。
だがゼノヴィアの一撃は割って入ったリリスが吹き飛ばし、ショットライザーの射撃はリゼヴィムは指先で弾き飛ばす。
リリスはもう一つのオーフィスだから納得だけど、あの射撃を指一本でとは。
「残念？　護衛のリリスちゃんも凄いしい？　俺も一応超越者の看板背負ってるだけの性能はあるんだよん？」
これが超越者。ここまでの物か……っ
僕が戦慄していると、リゼヴィムは素早い動きであらぬ方向に蹴りを叩き込む。
その衝撃で何かが俺、そして数舜遅れて着地した影があった。
「さっすがアサシンのサーヴァント。でも神滅具ゼロじゃぁ、俺には通用しないぜぇ？　残念でーした♪」
「……やはり、そう上手くはいきませんか」
シャルロットも動いていたのか。
アサシンのクラススキルを使って仕掛けたけど、それすら察知されたのか。
やはり、超越者の名は伊達ではないか。
僕達がその実力に手を出しあぐねていると、リゼヴィムは明らかに楽しそうにしながら僕達を見渡した。
「あと、それはそれとして見せたいものがあるのよ」
そう言ってリゼヴィムは指を鳴らし、祭儀場に立体映像が出現する。
どこだ？　一見するとツェペシュの城下町に近い雰囲気だけど。
「……カーミラの城下町？」
カズヒがそう口にすると、リゼヴィムはぱちぱちと拍手をする。
「大正解！　そしてこれから俺が指を鳴らすと、素敵なライブがあそこで始まりま～す」
そういいながらリゼヴィムは指を鳴らす。
……数秒ほど経つが何も起こらず――
「……が？」

―その時、倒れ伏していたマリウスが痙攣した。
なんだ？　このタイミングで一体何が？
「おっと忘れてた。ツェペシュでも起きるんだよ」
そう言うリゼヴィムが愉快そうにするなか、マリウスは文字通り体が変貌する。
骨格も体格も無視して膨れ上がり、マリウスはどんどん黒いドラゴンに姿が変わっていく。
そして気づけば、カーミラの城下町にも似たようなドラゴンが飛び上がり出現している。
それも言ったいや二体ではない、数十を超え百すら超えて言っているドラゴンが、炎を吐いて町を破壊していく。
これはいったい、どういうことだ!?
「リゼヴィム、てめえ何しやがった！」
先生がリゼヴィムを問い詰めると、リゼヴィムは指を一本立てる。
「カーミラにもツェペシュみたいに弱点のない吸血鬼になりたいってやつはいてね？　情報を流すことと引き換えに強化してあげたんだよ……特典付きでな！」
特典、だって？
「……まさか、それがこれだというのか！」
「その通り！　俺が指を鳴らすと量産型の邪龍に変貌するＧとかＣとかのウイルスみたいな案件なのでっす！」
リゼヴィムはアザゼル先生にそう告げるが、なんてことだ。
それは、つまり……っ
「ふっふっふ。伝統と血を重んじる吸血鬼君達の成れの果てが大暴れ！　吸血鬼の起こした問題は吸血鬼がするとかいうのがスタンスみたいなんで、吸血鬼を滅ぼすのも吸血鬼にしてみました！　……元だけどな!!」
まずい。カーミラの吸血鬼は、クーデターを起こしたツェペシュの方にだいぶ割り振っているはず。
しかもツェペシュの方には強化された吸血鬼が大量にいる。
その懸念に、振動が応えるように発生する。

やはり、既にツェペシュの強化吸血鬼達も……っ！
僕達が怒りに震えていると、リゼヴィムは指を鳴らした。
「じゃ、映像より生で見に行くとすっか！」
そして魔方陣が展開され、僕達を包み込んで強烈な光を放ちはじめた―。

明星双臨編　第四十一話　悪意に燃える街

和地Ｓｉｄｅ

気づけば、そこはツェペシュの城下町外周部にあるだろう、監視塔の一つ。その屋上に俺達は転移していた。
そこから見える光景は、まさに悲惨の一言だ。
大量の邪龍が空を舞い、城下町を破壊している。既に大火災があちこちで発生し、此処からでも悲鳴や断末魔が時折聞こえて来る。
……なら、俺がやるべきことは決まっている。
「先生、細かい指示は通信で頼みます！　俺はとにかくこの周辺だけでも安全を確保してきます」
「……っ！　そうだな、とりあえず行ってこい！」
よし言質とった！
俺は素早く飛び降りながら、プログライズキーを再装填。
今回は長期戦である以上、必要な時以外は負荷の大きい形態は使わない。なら必然として、通常のサルヴェイティングドッグが最適解だ。
素早く転がるように着地して体制を整えつつ、瞬時にショットライザーと魔剣で近くの邪龍に切りかかる。
龍殺しで素早く近くの邪龍を始末しながら、星辰光で民間人の安全を確保。
「とりあえず塔の前に集まってくれ！　実力者が集まっているから、そこなら比較的安全だ！」
「は、はい！」
「ありがとうございます！」
「急ぐぞ、また来てる！」
走り出す市民達を追いかけるように、更に邪龍達がごろごろと。

クーデター側の強化吸血鬼がまとめて邪龍になったというのなら、数も質も厄介だと考えるべきだ。手練れの多くは俺達の迎撃に割かれているだろうし、カーミラ側との戦いで減ってはいるとしてもだ。百や二百できくわけがない。

しかもここからが禍の団の本格活動だろうし、絶対もう一段ぐらいあるだろうしな。

「和地くん！」

そこに素早く飛び降りて、邪龍の一体に細剣を突き入れるのはインガ姉ちゃん。

星辰光も使った正確な刺突は、眉間を貫いて邪龍の一体を絶命させる。

「城下町の東門を越えたところにあるシェルターに避難させるって！ツーマンセルで邪龍を倒しながら市民に伝えろってアザゼル元総督が！」

「分かった！　俺が塔に走らせた人達は!?」

魔剣を鏡にして確認するが、既に彼らの姿はない。

おそらく、誰かが先導してカバーしているんだろう。それぐらいのことはやってくれるはずだ。

「木場君とリアスさんが。どっちも聖剣創造の禁手で面のカバーをしてるみたい」

なるほど最適解。多数の人間をカバーしつつ避難させるなら、数を活かせるあの二人が最適か。

となれば、俺達がやることは一つだな。

「……時間的に市民が集まってるだろう地区は？」

「ある程度は把握済みだよ。確かあっちに歓楽街が！」

よし、まずはそっちだな。

……やってくれるぜ、禍の団。

だが、早々簡単に被害を増やさせるか！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、カズヒ・シチャースチエはリーネスと共にヴァーリを追跡していた。
理由は単純。リスターティングホッパーとシャイニングホッパーの性能的相性だ。
一言でいうなら、機動力関係の性能バランスが近寄っている。差こそ明確にあるが、使用者の身体能力さもあるからある程度合わせる余地はある。
またリーネス自身は戦闘慣れしていない為、戦闘慣れしているカズヒがカバーに入るのが最適解でもある。付き合いが長い分、連携がとりやすいのも有効だ。
その上で突貫しつつ、カズヒとリーネスは邪龍達を確実に無力化していっている。
即座に撃破することに拘らない。優先するべきは避難の補佐であり、敵の殲滅は避難が進んでからで十分だ。
なので、使うのは殺傷力より敵を足止めする手段。
故に扱うのは―
「カズヒぃ、次用意ねぇ」
「三十発お待ちぃ！」
―ネット弾による、邪龍達の動きを封じることである。
大型異形用に開発していた捕縛用ネット弾。練りこんだ宝石粉末を使用することで強制的に昏倒することも踏まえているモデルである。
どんな時に何を使えばいいのかを踏まえ、大容量の輸送が可能なカズヒはリーネス謹製の各種武装を多数携帯している。
ここぞとばかりに生きた検体確保を兼ねて徹底的に捕縛を試みている。

「どうするリーネス？　そろそろ弾切れだし、この辺りの避難もほぼ済んだわ」
「そうねぇ。可能な限り封印処置をしてから、誘引処置とかできればいいんだけれどぉ」
　避難の支援に必要なのは、敵の殲滅ではなく足止めや誘導だ。
　とはいえその手段の確率は難しい。相応の調べてデータが集まれば手段も確立できるだろうが、そんな時間は当然ない。
　だが、リーネスはそこについて一つの対案を持っていた。
「まぁ、此処にいればいいでしょう。……分かり易く動いたんだし、誠明がちょっかいを掛けるでしょうからぁ」
「まぁ、その辺の期待はしているけどね」
　二人にとって最も警戒するべきは、道間誠明ことミザリ・ルシファーである。
　彼がいるとするのなら、分かるように動けば何かしらの動きを見せる。そう踏まえているからこそ、二人ともそこを警戒する。
　そして―
『まぁそうなのだが、今回二人は忙しくてな。私が代わりに挨拶を頼まれた』
　―その声に、二人は振り返る。
　そこに立つのは一機のステラフレーム。
　その静かな雰囲気は、これまでのステラフレームとは異質であり、故に警戒は必須。
　同時に、カズヒは一瞬でその素体となった者が誰かを理解する。
　この流れでミザリがお約束を外すとは思えない。必然的に、相手は自分を犯した連中だからだ。
　そして、この静かな雰囲気を見せる手合いに心当たりは一人しかいない。
「……リーネス」
「大丈夫、分かってるわぁ」
　カズヒの気づかわし気な視線に、リーネスは苦笑で返す。
「そもそも会ったことなんて一度あるかないかだものぉ。皮肉を聞か

せているのは分かるけど、思ったよりショックでもないわねぇ」
そう答えるリーネスだが、しかし静かな殺意がステラフレームに向けられる。
それを静かに、何より無感情に受け止めるステラフレームは、静かに拳を構えながら相対する。
その雰囲気に反応するように、リーネスの怒気は更に強まり―
「……覚悟してもらおう、叔父上。いや、ザイネス・ドーマ」
『それは素体の名だ。モデルアーチと呼んでおけ』
―因縁は、此処に激戦を発生させる。

祐斗Ｓｉｄｅ

僕達は、九成君がカバーした人達をシェルターまで連れて行ってから、城下町に再び突入していた。
邪龍達の戦闘能力は、吸血鬼を素体としたこともあってか中級悪魔クラスはある。それも、マリウス達がかなりの数を改造していたからか数百を確実に超えている。
ここまで数が多いと、僕達だけでカバーしきれるか……っ
「部長！　こうなればグラムでまとめて薙ぎ払います！」
魔帝剣グラムなら、中級クラスの邪龍なんて一撃で数十は断ち切れるはずだ。
だけどリアス部長は、振り返りながら首を横に振る。
「駄目よ。既にグレンデルとの戦いで消耗している以上、その一撃で動けなくなるでしょう？　なら多少時間はかかっても、聖剣の騎士団で龍殺しによる殲滅を行った方が効率はいいわ」
そう言われては反論しきれない。

だけどこの緊急時にグラムが使えないのは厳しいね。
ジークフリートが業魔（カオス・ドライブ）人に頼った理由がよく分かる。この魔剣は、使い手のことを気遣わないからこそ、絶大な威力以上に扱いが難しすぎる。
最大火力を使う余地が現状出せない。これは歯がゆすぎる……っ
僕が内心で忸怩たる思いを浮かべていた、その時だった。
近くから感じるその感覚。それは僕が今思い浮かべていたものだからこそ、信じられない。
そして同時に、信じられないからこそ危険性を痛感してた。
まさか、そんな!?
「祐斗、伏せなさい！」
その瞬間、リアス部長もまた察して消滅の魔力を抜き打ちで放つ。
そしてその一撃を、よく知るオーラが両断した。
「……へぇ。流石はジークフリートを返り討ちにしたリアス・グレモリー眷属。面白いじゃない」
そこに立つのは、一人の少女。かつてステラフレームと共にリゼヴィムと合流した人物だ。
だが同時に、今の彼女は英雄派の制服を上着として羽織っている。更にその下には、女性の悪魔祓いがよく着る戦闘服を纏っている。
そして、だからこそ彼女の髪の色を今更ながらに理解してしまう。
あれは……白い髪だ。
ジークフリートや、同じ戦士育成機関のフリード・セルゼンと同じ白髪の少女は、その手に持つ魔剣を軽く振るう。
そして消えていくそれは、間違いなく……魔帝剣グラムだった。
「混沌回帰旅団所属、リムークよ。フリードやジークを倒したというグレモリー眷属とは、一度戦ってみたかったの」
「あらそう。なら一つ聞いていいかしら？」
リアス部長は魔力を滾らせながら、鋭い目でリムークと名乗る少女を睨み付ける。
「これだけの事態を引き起こしながら、私達の前に出てくるということの意味……分かっているのかしら？」

ああ、リアス部長も僕達も、これだけのことをした禍の団に対して強い怒りを覚えている。
クーデターを起こした貴族達はともかく、普通に暮らす市民達まで遠慮なく巻き込むこれだけの大破壊。許しておけるわけがない。
そして、相手がどういう返答をするかも読めている。
「ええ。……ちょうどいいデモンストレーションでしょ？　ついでにちょっとお金でも強奪しようと思ってたの」
そこまではっきり言いきり、そして同時にリムークは指を鳴らす。
「あと、吸血鬼が嫌いな人達にも暴れさせてあげるのよ。そういう世界が欲しいからね」
その言葉と共に、更なる敵が現れる。
……背中が異様に膨れたゴリラを思わせる、巨大な存在。
あれがイッセー君たちが相対したという、ガトリンガルか。
だが、それ以外にも更なる姿が現れ……なんだと？
一見すれば、それはゴリラ型と設計者が同じと思われる、鋼のライオン。
だが問題は、そのサイズだ。
少なく見積もっても、ＴＦユニットと同等レベル……っ
「陸戦特化型ガトリンガル、ガトリンガル・レオン。試験運用も兼ねて、此処で使わせてもらうわね」
これは……まずい！

イッセーＳｉｄｅ

畜生！　いくらなんでも数が多いだろ！

邪龍達どころか、ガトリンガルまで出てきやがった。それに新型の兵器まで！
空を見上げれば、なんかでかい飛行機が飛んでるし。しかも地表に向かって砲撃まで仕掛けてる。
撃ち落とそうにも意外と機動力が高いし、しかも結構離れているから中々当たらない。邪龍まで防回するからかなり鬱陶しい！
「こんなことならシャルロットと離れて戦うんじゃなかった！」
『ぼやくな相棒！　俺達が一匹でも引き付けていれば、その分避難は進む！』
ドライグにたしなめられるけど、流石にこっちもイライラしてるんだよ。
リゼヴィムのクソ野郎、よくもここまで酷い真似を！
「あの野郎……絶対ぶちのめす！」
「それはおやめください。あれでも私の主人ですから」
その声に、俺は咄嗟に振り替える。
そこにいたのはローブを纏った銀髪の男。
グレイフィアさんの実の弟。ユーグリッド・ルキフグス！
「……てめえ、いったい何の用だ！」
「いえ、リゼヴィム様と合流しようとかと思ったのですが、貴方を見かけたのでいい機会と思ったのですよ」
そういうユーグリッドは、俺に見せつけるように右腕を突き付ける。
そして光と共に奴の腕に現れた物を見て、俺達は目を見開いた。
「『な……っ!?』」
驚くに決まってる。ドライグだって驚いてるんだからな。
だって、あれは赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）じゃねえか!?
「これも聖杯の恩恵です。実は次元の狭間からあなたの崩壊した体の肉片が見つかりまして。そこからデータを回収した成果といったところですね」
「人の体で何しやがるんだ！」
寄りにもよってテロリストに、俺の失った体の残骸を悪用された

だって!?
人の、人の体でなんてことを！
「まぁ、一度使うだけで相応のドラゴンを代償に捧げる必要はある完全なデッドコピーですがね。それでも―」
そう言いながら、ユーグリッドはオーラを高める。
そしてそこから展開されたのは――
「―これぐらいのことはできるんですよ」
――赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）、だって……っ!?

明星双臨編　第四十二話　戦火猛る城下町

和地Ｓｉｄｅ

俺達が繁華街に突入した時、やはりかなりの人数が逃げ遅れていた。
其処に襲い掛かろうとする邪龍達を攻撃しつつ、俺は障壁を展開して市民を避難させる。
「東門の先に向かってください！　其処のシェルターに味方がいます！」
インガ姉ちゃんが誘導する中、俺は素早く邪龍達を牽制しながら攻撃を行う。
数は多いが、この調子ならなんとか行けるか。
そう思った時、聖なるオーラを俺達は察知した。
振り返れば、西門の辺りから何かが起き上がるように立ち上がる。
全長は二十数メートル。聖なるオーラに包まれた、巨大な騎士が具現化していた。
その瞬間、邪龍達が聖なるオーラに包まれる。
傷は癒え、早く強くなり、そして俺達に攻撃を仕掛けてくる。
即座に迎撃をするが、戦闘能力が準上級悪魔クラスにまで高まっている。確実に一段上に跳ね上がった存在だ。
ここで、更なる伏札の開帳かよ！
「どうかな？　至り立てだからまだまだ慣れてないんだけどね」
その声に、俺は咄嗟に振り替える。
慈愛の微笑みを浮かべながら、ステラフレームを傍らに連れたミザリ・ルシファーが姿を現した。
あの野郎。滅茶苦茶浸ってやがる。
「お前の仕業か！」

「うん。現世聖域の墓標を禁手に至らせたから、テストも兼ねているのさ」
さらりと認めてくれるが、厄介なことだなおい。
「素直に言ってくれるとか、なめてくれてるようで嬉しいな」
「そういうわけじゃないよ？　はっきり言えば霧の中の理想郷（ゲオルグの禁手）と同じなのさ」
なるほど。創造系に近い形だから、知られてもそこまで危険じゃないと。
そして現世聖域の墓標の亜種禁手だとするなら厄介だ。
確かあれは、地脈からエネルギーを引き出す形で、地形操作を行ったり聖域を創り出す神滅具だ。ミザリはレーティングゲームのフィールドを利用して、敵陣の前に要塞を創り出すなんて真似をしていた。
となると、地脈から力を受け取る形で、特殊な力を持つ巨人を創り出す禁手。それも振るう力はある程度自由に設定可能か。
今回は邪龍の力を増幅させることに特化していると見るべきだな。
これは、かなりまずい。
「じゃぁ、僕はこの辺でお暇するよ。……モデルダストは、好きに暴れていいからね？」
『わかりました。じゃぁ……』
インガ姉ちゃんの縁のあるステラフレーム。モデルダストと呼ばれたそいつは、すぐに気配が変わり始める。
寒気がするほどのこの気配。これは―
『天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ』
―底なしの、悪意……っ！
『人を呪わば穴二つ。呪いは我が身に返るというが、もはや私は恐れない』
寒気がするほどに高まる、妬み嫉みの憎悪の感情。
周囲を瞬く間に包み込むそれは、一瞬で効果を発揮する。
『我が身は既に死人であるなら、怨念こそが我が根源。残留されしこの呪怨のみが、我が身を動かす理由なり』

それに呑まれた者達は、瞬く間に呪われる。
俺もまた、影響を受けて激痛が走り、咄嗟に魔剣を創り出して対抗する。
それでもなお負荷は大きく、だからこそ第一世代型人造惑星の強大さを思い知る。
『故に、万象全てあらゆるものよ。我が怨念を受けるがよい』
カーミラのエージェント達を苦しめるのは、高密度の呪いの瘴気。
咄嗟に対呪詛の加護を与える魔剣をもってして対応するが、それでも呪詛の影響を完全には殺せない。
『理不尽に苦しめられぬ汝が憎い。理不尽から救われる貴殿が妬ましい。理不尽に苦しめられながら、まだ死のうとしないお前が苛立たしくてたまらないのだ』
推測するに、拡散性と付属性の二点特化。超広範囲に展開され、一度呪えば長時間呪い続け祓われない。
ミザリが聖なる力で邪龍を強化することを選択したのも簡単だ。この星なら当然そういった形が支援に向いている。
『八つ当たりなど百も承知。既に我が身は穴に落ちているからこそ、返し風など恐れるものか』
そして何より恐ろしいのは、モデルダストから放たれる気配その物。
この世全てを恨むと言いたげなその怨念は、人間が放つ者とは思えない密度と量を誇っている。
『恨むなら、私を連れ戻す明星こそを恨むがいい。私は怨念、悪鬼の魂。一切合切呪うのみ』
これが、衝動により絶大な星を制御する兵器。
これが、兵器であるがゆえにただ使うだけで凶悪といえる、星辰奏者の完全上位互換。
俺は今、改めてその脅威を痛感した。
『超新星（メタルノヴァ）――世界に呪（ルト）いを、怨念（リップ）よ止（プ）まることなかれ（カース）ウウウッッ!!』
具現化される高密度の呪怨が、辺り一帯を浸食していく。
例えるならば、呪怨増幅・空間汚染能力。

単純極まりない広範囲攻撃による制圧力。その具現がここに襲い掛かる。

モデルダスト

世界(プ)に呪(ル)いを(ト)、怨念(リッ)よ止(プ・)まることなかれ(カース)

基準値：B

発動値：A

収束性：E

拡散性：AA

操縦性：E

付属性：AA

維持性：B

干渉性：B

確信する。

もはや彼女は救えない。言葉で止まる領域をとっくの昔に越えている。

衝動に呑まれ、それを克服しようとも思わない、八つ当たりの権化。

元から持っていただろう負の感情。誰もが未熟な時に一度は持つであろう、周囲に対する鬱憤や不満。自分の苦しみを他人に味合わせてやろうという、苛立ちの具現化。

魔星は衝動によって神星鉄(オリハルコン)を制御する。それを意図的に八つ当たりさせたがる方向に外した、生態兵器が目の前に存在する。

これが、インガ姉ちゃんと似て異なる過程を辿った少女の成れの果て。

ミザリ・ルシファー。道間誠明。
ここまで態々外して壊して、そこまで悲劇が見たいのか。
「あの、野郎……！」
俺はミザリに対するものか、奴を生んでしまったカズヒねぇに対するものか。それが分からないながらも、憐憫の感情すら覚えてしまう。
だから、こそ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

振るわれる猛攻に対して、カズヒはリーネスを補佐しながらも冷静に対応していた。
敵は間違いなく難敵だ。具体的に言えば、自我非覚醒状態のステラフレーム四機を率いるモデルアーチ。
ステラフレームは最上級悪魔でも苦戦するレベルの人造惑星。自我覚醒体ともなれば、龍王クラスには到達する。
それが合計五機も仕掛けてくれれば、正面戦闘で苦戦するのは必須だろう。
だからこそ、読めない。
「リーネス。そういえば私、あいつのこと詳しく知らないんだけど」
「一言でいえば真性のサイコパスねぇ」
攻撃を仕掛けながら、カズヒはリーネスと情報を交換する。
ザイネス・ドーマというフルネームは知っていたが、正しい意味でアイネスの縁者であるという確信はなかった。ザイネスの名が会話

に出てきていたぐらいで、違う可能性も踏まえていたぐらいだ。
純粋に性欲発散の為に来ているようでいて、他に目的があるようにも見える。少なくとも医術に秀でており、道間日美子の堕胎手術は彼がやっていた。むしろ彼が参加してきたのはその縁だ。
だからこそ、今からでも確認しなければならないだろう。
「……ザイネス・ドーマ。先天的に魔力量が少ないながらも、質においては特級と言ってもいい魔術回路を保有していたわ」
そう告げるリーネスは、だが仮面越しに不快感を顕わにしている。
長年の付き合いでそれを悟りながらも、カズヒはあえて言及せずに周囲を警戒する。
「ただ倫理観は道間一族全体でもトップクラスに低いわ。「自分の魔術回路に与えられる影響」を少しでも把握する為だけに、女性を妊娠させて堕胎させ、魔術を使って回収して実験していたそうよ。それが問題視されて家を追放された男、それが彼よぉ」
「……なるほど、ね」
不快感は見せない。その資格もない。
だが、だからこそカズヒはザイネス・ドーマの危険性を考慮する。
思えば、ザイネスが参加してから一気に堕胎回数—すなわち妊娠回数—が増えていた。過度に避妊をしているわけではないが、それにしたって頻度が増加しすぎている。
その答えが何となく、理解できた。
『必要性は高いだろう？　血族の魔術回路を有効的に強化するには、当然だが近い遺伝子の被検体が多いに越したことはない。性欲も発散できる』
特に動揺することなく、相手を挑発する意図もない返答が投げかけられる。
カズヒは速やかに納得する。
この男は、モデルヘキサ達とは方向性が違う。
性欲処理のついでに、自分の魔術回路を調律する為のデータ取りに使える被検体を作れる可能性がある。ただそれこそが目的なのだ。
だからこそ。

「……アイネス」
あえて、カズヒはその名で親友を呼ぶ。
「力を貸すから力を貸して。あいつは、生かしておくわけにはいかないから」
「……もちろんだ」
あえて、リーネスは昔の口調でカズヒに応える。
「一族の半端な処分が起こしたことの責任をとる。それがドーマ家次期当主候補だった私の務め。そして日美子(お前)の友たる私の決意だ」
言葉はそれだけで十分。
カズヒとリーネスは踏み込み、そして戦闘を再開する。

Ｓｉｄｅ　祐斗

大量のガトリンガルの援護射撃を受けながら、リムークはこちらに連続で切りかかる。
一撃離脱を主体として、鋭い斬撃はかなりの脅威だ。
それもこのオーラは、間違いなく魔帝剣のそれだろう。
おそらく何らかの禁手によるものだろうけど、それにしたって限界はあるはずだ。魔帝剣グラムの完全再現なんて、低く見積もって準神滅具クラスの禁手が必要だろう。
おそらくは発動時間。出せるのはごくごく一瞬が限界と考えるべきだ。
だけど、一撃離脱ならその問題点も欠陥になりにくくなる。そしてそれを可能とするだけの戦闘能力を相手は持っている。

「なるほどね。……例のオーバーナッツを使っているのかしら？」
「ええ。あれ、悪魔の駒を参考にジョンが作ったの」
リアス部長と切り結びながら、リムークは部長の言葉を肯定する。
そういうことか。あれだけの強力な力、何処から出てきたのか疑問だったけど、悪魔の駒を参考にした力なら納得だ。
忌々しいけど、冥革連合と繋がっている禍の団なら悪魔の駒を製造することは可能だ。そしてそれを元に、別のアイテムを作成することも理論上は可能だ。
とはいえ本当に作ってしまうとはね。ジョン・マージ・ガトリングという男は、かなりの危険要素だろう。
しかもあえて禍の団にとどめるわけではなく流布させることで、社会治安の悪化に繋げるというのも厄介だ。
英雄派も禁手に至る方法を流布しているが、派閥の一つである混沌回帰旅団もそれに倣ったのだろう。それも人間世界の治安悪化に繋げるのが嫌らしい。「奪いたい物を自由に奪える世界に回帰させる」とか言った理念を持っているだけのことはある。
だからこそ、僕達がそれを許すわけにはいかない！
「ここで一人ぐらいは捉えないとね！」
敵軍の総体をリアス部長に任せ、僕は聖魔剣に切り替えてリムークに切りかかる。
それを迎撃するリムークだけど、禁手が瞬間的にしか使えないなら、聖魔剣のこちらが有利。
そう思った時、リムークはこちらをあざ笑うように微笑んだ。
「創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌めく流れ星」
その瞬間、リムークの動きが跳ね上がる。
星辰奏者（エスペラント）だったのか。厄介な――
『ＳＡＶＥ！』
『ＦＲＥＥ！』
――その時、更なる敵意を察知して僕達は同時に距離をとった。
同時に舞い降りる影が、手に持つ刃を振りかぶる。
『サルヴェイティングレイン』

『リベレイティングレイン』
「くっ！」
咄嗟に僕とリムークは、魔帝剣の力を振るって迎撃する。
なんとかはじけたけど重く鋭い斬撃だ。迎撃が間に合わなければ危なかっただろう。
そして僕達に間に割って入るように現れた者達に呼応して、更に幾人もの姿が現れる。
『『『

その敵意に溢れる言葉と共に、更に戦いは激しくなっていく……っ！

明星双臨編　第四十三話　反撃の前兆

イッセーＳｉｄｅ

この……野郎！
今までで一番屈辱を感じてるぜ。
赤龍帝の偽物が出てきたかと思ったら、真女王になってまで挑んでいるのにフルボッコにされている。
いくら俺が歴代最弱の赤龍帝だからって、相手はデッドコピーだぞ？　ユーグリッド自身がそう言ってるってのに……っ！
糞ったれ……本気で、悔しい……っ
「申し訳ありません。これでも私はルキフグスなので、弱い悪魔ではないのですよ」
ああそうかい。
確かにあのグレイフィアさんの弟なんだ。上級悪魔としても強いだろうし、下手すりゃ最上級悪魔の上位クラスはあるかもしれない。最悪、生身で魔王クラスだ。
籠手の性能が弱くても、使い手の性能が圧倒的に上なら問題ないってか。
俺自身が籠手なしだと弱いって自覚があるから、余計に腹立たしい……っ
―シャルロット！　そっちは行けるか？
―待ってください！　ザイア残党が介入してきました。今そちらに向かうと彼らを抑えきれません！
シャルロットの力を借りようかと思ったら、なんかあっちはあっちでやばいことに!?

どうすんだよ。呼び出したらあっちが崩れるじゃねえか。
つまりこれは、俺達で何とかしなけりゃいけない状況だってことか……っ
「……ほぉ？　どうやら助けが必要なのかのぉ？」
その時、俺の頭上から声が聞こえる。
見れば凄い勢いで邪龍達を吹っ飛ばしながら、幸香が仮面ライダーディアドコイになった状態でこっちに来ていた。
後継私掠船団!?　どうしてこんなところに？
「貴女がかの後継覇王（アレキサンダー）ですか。禍の団の方やミザリ様から、お噂は窺っております」
「貴様がかの殲滅女王（クイーン・オブ・ディバウア）の弟か。しかも神滅具の偽物を持ってくるとは、中々面白い趣向じゃのぉ」
「いや、なんでいるんだよ？　フロンズさん達は今回動かないそうだけど？」
ソーナ会長達曰く、フロンズさん達は様子見だったはずだ。
リゼヴィムが出てきたから冥界政府は大混乱だっていうし、尚更出てきそうにないと思う。
ただ幸香もちょっと苦笑気味で周囲を見渡していた。
「そのフロンズの特命でのぉ。奴はリゼヴィム・リヴァン・ルシファーめを非常に危険視し、相応のダメージを負ってでも倒すべきと踏んでいたようじゃが……その気持ちも少しは分かりそうじゃな」
フロンズさん、そんなレベルでリゼヴィムを警戒してたのか。
そして当たりだよ。ここまでの事態を引き起こすような糞野郎なんだ。戦力を送ってくれてむしろ助かる。
しかも奴の目的が目的だからな。そこまで考えればまだ足りないぐらいだって。
そして幸香に呼応するように、ネオマケドニアが霧を割って突入して、更に後継私掠船団のメンバーが市内に突入する。
「ハッハァー！　ドラゴン退治とはやりがいあるぜぇ！」
「まだまだぁ！　吸血鬼（お前）と邪龍（達）に見せてやる！　魂の輝きって奴をなぁ！」

「英雄譚の始まりだぁ！　お前らも見習いやがれぇっ!!」
凄い勢いで真っ向から邪龍達を食い止め、それどこか撃墜合戦まで始めそうな勢いだ。
なんて味方に回すと頼りになる奴らなんだ。下手したら俺より根性あるから、敵に回した時の厄介さを禍の団が味わってやがる。
ユーグリットはユーグリットで、あいつらの戦いぶりを興味深そうに観察してるし。余裕にも程がある。
「なるほどなるほど。音に聞こえし後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）なだけはありますね」
「だろう？　誰もが妾が誇るべき後継者（ディアドコイ）にて略奪者（プライベーティア）だ」
ユーグリッドにそう言いながら、幸香は俺にちらりと視線を向ける。
「さて、こやつの相手は妾がした方がいいのかのぉ？」
……っ
正直、今のユーグリッドに勝てる気がしない。
負けるわけにはいかないなら、幸香に任せて他の邪龍を相手にした方がいいかもしれない。
思わずそんな弱気になった時、籠手が強く光った。
『腑抜けるな相棒！』
ドライグの強い声が、俺の背中を押すように叩き付けられる。
『今の赤龍帝はお前だろう。そのお前が偽物に屈するなどあってはならぬ。赤龍帝は俺達のことを指すのだぞ！』
ドライグ……。
そうか、そうだよな。
珍しく戦闘で腑抜けたけど、情けないところを見せちまった。
俺達が赤龍帝だ。これからも赤龍帝だ。偽物に屈しちまったら、赤龍帝であることを否定しちまうようなもんだ。
悪いな相棒、助かった―
『そう！　乳にも尻にも悩んでないような奴が、偉そうに赤龍帝を名乗るんじゃない！　貴様のようなその苦しみを欠片も理解できん奴が赤龍帝だと!?　相棒ですら自分と状況を振り返って、たまには困惑

できるのだぞ！　頭を悩ませてから出直してこい!!』
　―そっち!?
「ふむ、何なら妾の生乳房に顔を埋めてみるか？　覚醒して五分には持って行けるかもしれんぞ？」
　幸香も何を言ってんの!?
「なるほど。かつての敵の乳房の力を借りるとなれば、そういう事象も起こりえるでしょうね」
　ユーグリッドも真剣に納得すんな！
　いや、まだ見ぬ生おっぱいは堪能したいけど。堪能したいけどカズヒの子供のおっぱいとか複雑だから。あと絶対リアスにもカズヒにも怒られるだろ。幸香相手でこの状況だと、俺ですら客観的にみるとツッコミどころだって理解できる。
　俺がちょっと全方位に戸惑った時。急に全身の宝玉が発光した。
　え？　まだおっぱいに触れてもないのに!?

Other Side

『やっほー、ザイネスさん！　誠にぃの調整も終わったから援護に来たよー♪』
『ちょうどいい、多少攻めあぐねていたから援護を頼む』
　舞い降りるモデルバレットがモデルアーチと並び立つ光景を見て、カズヒは内心で歯噛みした。
　日美子（自分）やアイネス（リーネス）と因縁のある敵が出てきたのは、前向きに考えれば決着の付け所だといえるだろう。
　だが普通に戦況は不利になった。モデルアーチだけでも手古摺っているのに、更にモデルバレットまで出てくれば一気に不利になる。

そしてもちろん、それを見逃す容赦は欠片もない相手でもある。
『天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せぇ！』
躊躇なくモデルバレットは突貫する。
ただでさえ面の制圧力で抑え込まれている中、点の突破力で更に仕掛けられるのは危険すぎる。
「チッ！　リーネス下がって！」
「カズヒ！　流石に無茶よぉ！」
前に出たことでリーネスの声が跳ぶが、こればっかりは仕方がない。
モデルバレットが突貫までしてくるのなら、郭清して強引にでもちゃぶ台をひっくり返さなければ死ぬ。
後先を考えている余裕はない。一旦突破したうえで、味方との合流をする必要がある。
だからこそ―
「創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星」
―味方の方からくれば、ちゃぶ台もひっくり返るのだ。
突貫する人影と、それに随伴する数十人レベルの戦力。
モデルバレットの突貫に体当たりでぶつかりともに弾かれたその瞬間、遠距離戦を主体とする星辰光がステラフレームを滅多打ちにして動きを縫い留める。
其処に接近戦主体の星辰奏者が割って入り、連携をかき乱した。
『げっ!?　寄りにもよってここで来る!?』
『増援だと?　一体どこから?』
出鼻をくじかれる形で、モデルバレットとモデルアーチは警戒し、自我未覚醒体を壁にして仕切り直す。
そして何より驚くカズヒとリーネスに、最初に突貫した星辰奏者が振り返った。
一見して三十代後半に差し掛かった中年男性。だが鍛えられた肉体は弛みが見えず、前線での戦闘を考慮した、ベテランの戦闘員だということがよく分かる。
そんな男性は、仮面ライダー道間と仮面ライダーアイネスを見比べ

て首を傾げた。
「……えっと、駒王学園オカルト研究部の人でいいのかい？」
「え、ええ。……えっと、プルガトリオ機関のヴィクター部隊の方ぁ？」
事前に近くに派遣されているというプルガトリオ機関を予想したリーネスだが、カズヒがそこに首を振って否定する。
「いえ、間違いなく違うわね。というか……星辰奏者がこんなにって、どちら様？」
カズヒが否定するということは違うのだろう。
だがそれだと尚更分からない。
この場で増援が確定できるような事態になっているとは思えず、だからこそ首を傾げてしまう。
それに対して、男性の方は警戒を同伴した者達に任せて懐から名刺を出した。
「あ、大株主の帝釈天様から依頼されて来た、ＰＭＣのアマゴフォースのもんだ。あ、あとでちょっと聞きたいことがあるから時間貰える？」
「え、あ、どうも」
リーネスが名刺を受け取るが、状況がさっぱり分からない。
見れば名刺には「アマゴフォース　特務星辰奏者　接木勇儀」と書かれている。
日本人が海外企業のＰＭＣにいるのは意外だが、遠く離れた南国じみた島国から、雪が降り積もる山間部に連れてこられるとは大変だなぁと、なんとなくリーネスは思った。
ついでに言うと帝釈天が出てくるとはまた意外な展開だと思った時、何故かカズヒがぎょっとしたかの勢いで名刺と男性を交互に見る。
何かと思った次の瞬間、震える指で男を差し―
「……勇ちん⁉　あんたなんでＰＭＣでツェペシュぅ⁉」
―素っ頓狂かつパニック交じりの大声を跳ね上げた。
「……お知り合いぃ？」

面食らってそう言うほかないが、しかしパニックは伝染する。
『まさかと思ってたけどマジで勇ちん!? ＰＭＣで星辰奏者って、お義姉ちゃんに振られたの!?』
具体的にはモデルバレットだった。
「ちっげぇよ！ 少ししたら結婚記念日だよ！ １２月１２日だから覚えとけ！」
全力で勇儀は言い返すが、そこではない。
「っつーかマジで分裂みたいなことになってんだな。いや、マジで大変だな日美っち。聞こうとした答えがこんな形で分かるとは思わなかったぜ」
「更に大変になったわよ。なんで勇ちんとこんなところで再会するのか。……ま、お義姉さんと結ばれることに成功したのはほっとしたわ」
何やらよく分からない会話をするが、リーネスは完全に置いてけぼりだった。
それに答える様に、勇儀は武器を構えながらリーネスの方をちらりと見る。
「道間日美子のクラスメイトやってたもんでな。ま、俺も状況は殆ど分かってねえから話は後だ」
「……そうねぇ。詳しい話はまた後にした方が良さそうねぇ」
リーネスも一旦思考を切り替え、ステラフレーム達と睨み合う。
『うっわぁ。思わぬ展開でちょっと動揺止まらない感じかも』
『なるほど。ではもう少しデータを取ってから離脱するか』
相手はそろそろ引くことを踏まえているが、ハイそうですかというわけにはいかない。
「悪いけど、あんたの方はデータを取らせてもらうわよ」
「同感ねぇ。ろくに会ってもいない叔父だけど、日美子を苦しめたお礼はしたいものぉ」
意識を切り替え、睨み合い激突まで後僅か。
それを理解し、接木勇儀と名乗った男もカズヒをちらりと見ながら敵を睨む。

「詳しい事情は分からねえが、とりあえずダチが世話になったみたいだなぁ……」
そして星辰体と感応し、まごうことなき強者の雰囲気を纏い――
「とりあえず一発ぶちのめさせろヤァ！」
――激突が再開した。

和地Ｓｉｄｅ

『あはははははっ！　死ね死ね死ね死ねぇ！』
放たれる猛攻を捌きながら、俺は内心で舌打ちする。
呆れるぐらいシンプルで、反吐が出そうなほどに厄介な星辰光だ。
とにかく広範囲に呪怨を撒き散らし、自分を中心とする区画一体を、異形でも下級レベルなら倒れてもだえ苦しむこと請け合いの空間に汚染する。単純にそれだけだが、だからこそ兵器として厄介な星辰光だ。
増幅された呪怨は土地そのものすら汚染している。これが長続きすればこの辺り一帯に深刻な影響を与えるだろう。かなりまずい。
対呪詛加護を設けた魔剣を持ってカバーしつつ、移動しながらばら撒くことで汚染を最小限にしているが、このあっまだとこっちが削り殺されるな。
何よりインガ姉ちゃんが不安だ。巻き込まれてないと良いんだが――
『お前も死ねぇぇぇぇぇ！』
――思った瞬間に打撃が振るわれ、俺は咄嗟に障壁を張りつつ防御態勢をとる。

振るわれる打撃は異常なレベルで重く、一撃で障壁すら砕いて俺を吹っ飛ばす。
これ、技術というより純粋に衝撃がありすぎるな。そういう人工神器を付加していると考えるべきか。
更に追撃として差し向けられるドローン群を撃ち落とし切り捨てながら、俺は可能な限り円を描くようにモデルダストに食らいつく。
幸か不幸か、モデルダストの固有星辰光は、広範囲を呪うというただ一点だ。
おそらく操縦性が劣悪だから密度を操作したり集中させることもできない。加えて収束性も劣悪らしく、対呪詛用の魔剣でだいぶ防げている。
単純に撒き散らすだけという、分かり易いほど頭の悪い星辰光。だがそれだけで強力故に、遠くに連れて行くわけにはいかない厄介な星辰光だ。
兵器とはこうあるべきというぐらい、誰が使っても強く凶悪。しいて言うなら味方との連携が困難な在り方だが、単独で戦局をひっくり返せる軍勢殲滅に特化した星辰光。ステラフレームというそれだけで最上級悪魔クラスの難敵に相応しい代物だ。
だからこそ、こいつは此処で潰すしかない。
一周回って清々しいレベルで妬み嫉みを撒き散らすモデルダストは、誰が見ても壊れている。
説得をする余裕すらない以上、此処で俺がするべきことはこいつの打倒だ。
なんとしても、此処で潰す。
その決意を決めた時、後ろから接近してくる気配を察知した。
おい、まさか!?
「させないよ、佐備先輩！」
インガ姉ちゃん!?
呪詛の影響を高速展開する暴風を身に纏うことで最小限に抑えたインガ姉ちゃんが、細剣でモデルダストに攻撃を仕掛ける。
それを強引に振り払ったモデルダストは、そのまま怒りに任せて砲

撃をばら撒いた。
機関銃感覚で戦車砲レベルの砲撃を乱れ撃つなと言いたい。
だがそれは後回し。今はインガ姉ちゃんだ！
「インガ姉ちゃん下がって！」
「下がらない！」
俺が援護しながら撤退を促すが、インガ姉ちゃんは呪詛に苦しみながらもそれを拒絶する。
間違いなく呪詛の影響を僅かながら受けながら、インガ姉ちゃんは強い意志を見せて立ち上がる。
「私は弱いから。弱いからこそ、向き合うべきことから逃げたくない」
歯を食いしばり、拳を握り締め。
どこか恐怖が残る目を、だけど強くモデルバレットに向けて立つ。
「……ここで彼女から目を背けたら、私はこれからも目を背け続けるから。少なくとも、もっともっと引きずるから」
肩をすく振るわせながら、それでもインガ姉ちゃんは細剣を構えて戦う意思を見せる。
「私は！　引っ張り上げてくれたことが間違ってないって、和地君に証明したい！　周りの人にも認めさせたい！」
その決意を、彼女は吠える。
「私は！　私の過去から逃げないでいたい！　手を差し伸べるべき子に手を伸ばして、踏み外して誰かを傷つけるなら、私自身の意志でそれを止めたい！　止めれる自分でいたい！」
真っ向から、モデルダストを見据えて戦意を見せる。
「私は！　私がしたことの結果ぐらい、背負える自分でいたいから！」
その声をもって、インガ姉ちゃんは自分自身の弱さを認めたうえで乗り越える。
「……だから、戦うよ。佐備先輩は倒してでも止める、止めて見せる」
その決意に、俺は引き離そうとすることを止める。
その決断が、本当に正しいのかは俺には断言できない。
だが同時に、既に踏み越えて走り続けるしかなくなったモデルダスト（リビングデッド）はそうする以外に手段がない。それだけは分かる。

それを、あえて自分でしたいというのなら。
自分と同じように道を引きずり落とされた、自分の別の可能性を、自分の意志で向き合いたいと願うなら。
俺が、するべきこととしたいことは一致する。
「……分かった。なら俺は援護に回る」
『ＢＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ！』
素早くパラディンドッグプログライズキーを装填しながら、俺はインガ姉ちゃんと並び立つ。
「変身したら、インガ姉ちゃんの剣を渡す。それなら届くはずだ」
「……ありがとう。それに、もう一つ切り札はあるしね？」
そう微笑みながら、インガ姉ちゃんは左手に短剣を構える。
それは、リーネスがインガ姉ちゃん用に作った試験型の人工神器。
そうだな。それがあるなら、尚更俺は支援に回る。
だからこそ、だ。
「頼りにしてるぜ、インガ姉ちゃん」
自分の意志で立ち向かう、インガ姉ちゃんなら隣を任せられる。
それを、俺自身の言葉で口にした。
「……任せていいよ、和地君」
その、嬉しそうな言葉に俺は決意をもって応えよう。
「変身！」
『ショットライズ！』
発射されるショットモデルをきっかけに、モデルダストの殺意が増幅される。
『私の前でイチャイチャイチャイチャ……っ！　お前も私と同じ癖にいいいいいいいいいいっ!!』
「そうだよ。だからこそ、止める」
短剣を構え、インガ姉ちゃんは宣言する。
「何かが違えばそうなっていただろう、私のあり得る可能性。だから、私自身がそれを止める」
その決意に応える為、パラディンドッグに移行した俺は細剣を投擲する。

それを受け取ったインガ姉ちゃんは、二つの刃をもって一歩を踏み出した。
「そう、私のように……流れる涙を止める為に!!」
ここに、ツェペシュ領での戦いは大きな転換点に到達する。

「なるほどね。なら……使いなさい!!」
その、カズヒねぇの声が遠くで確かに聞こえた。

明星双臨編　第四十四話　決着、ツェペシュの激闘！

イッセーＳｉｄｅ

よっしゃぁ！　だいぶ有利になってきたっていうか、形勢はひっくり返せたぜ！
なんかよく分からないけど、だいぶ前に手に入れた白龍皇の力が進化したよ。
前は右の籠手を変化させて半減を使うという物だった。それも成功するかどうかはイマイチで、使うと寿命が削れるレベルの負荷がかかる。だから使いどころがあまりなくて、しかも色々あったから使用禁止だった。
だけど今は違う。
鎧の宝玉から現れる白い飛龍。いくつも現れるそれは半減を使うだけでなく、アルビオンの封じられた「反射」の力で俺の攻撃に変幻自在な特性を与えてくれる。更に負担も体力が減るだけになりました！
これならシャルロットがいなくても何とかなる。少なくとも、ユーグリッドにだいぶ通用した。
「フハハハハ！　まさかおっぱいに悩んでないことでキレたら進化するとはな！　乳房無しに進化を遂げるとは、新たな領域に至ったようではないか！」
そう言いながら幸香は幸香で、星辰光で作った爆弾の獣達で邪龍達をぶちのめしまくっている。
最も聖なる加護を受けている所為で中々減らないけど、滅多打ちになっているから邪龍達もろくに暴れられてない。
人造惑星スゲー！　俺も負けてられないぜ！
いや、負けるわけがない。

なにせ今の俺も星辰光を発動している。因果律を上手く調整してバグらせることで、ドラゴンショットの反射にランダム要素を入れてユーグリッドを翻弄してやるぜ！

「なるほど。流石に本物は油断できません……が」

その瞬間、ユーグリッドは絶大なオーラを放出して強引に飛龍とドラゴンショットを吹っ飛ばした。

なるほどな！　そりゃグレイフィアさんの弟で、リゼヴィムのお付きをやってるんだ。

最低でも生身で最上級悪魔クラス。こっからが本番か。

ふっふっふ。星辰光を使っているおかげで、体力の消耗は最小限で収まっている。体力の消費が一番少ない可能性を連続で拾ってるぜ。

色々と不安定な現状だけど、それでも最良や事前の結果をシャルロットの力を再現して抑え込んでいるからな。今の俺は継続戦闘能力がかなり高いのさ。ありがとうシャルロット！

だからまだまだ戦える。

そう思った時、ツェペシュの城下町が急に闇に包まれた。

炎が止まり、そして喰われる。

これはまさか―

「ギャスパーか！」

『そうだよ。ちょっと寝てる間に色々とあったみたいだね、イッセー先輩』

其処に闇の獣となったギャスパーが姿を見せてくれる。

「ほぉ？　中々愉快なことになっておるようじゃの。それがゲオルグを圧倒したとかいう力なのか？」

『後継覇王（アレキサンダー）か。今は味方でいいみたいだし、君達は喰らわないで上げるよ』

そう幸香に返しながら、ギャスパーは闇の力で邪龍達を攻撃する。

停止の力を聖なる加護で防ごうとする邪龍達だけど、少しずつ確実に倒されて行っている。

よし、これなら何とかなるか！

「うっひゃひゃひゃ！　ユーグリット！」

『やっほー！　ユーグリット君そこにいたんだ？』
　其処にリリスを抱えたリゼヴィムと、ステラフレームを一体随伴させたモデルバレットが合流した。
「リゼヴィム、逃げるなぁ！」
「イッセーにギャスパー？　幸香まで!?」
　其処にヴァーリとカズヒが追いかけてきて、俺達はリゼヴィム達と睨み合う。
　リゼヴィムはユーグリッドと少し話したかと思うと、ユーグリッドに転移魔法陣を展開させながらこっちに振り替えるとにやにや笑う。
「んじゃ、俺達はそろそろお暇させてもらうわー。ミザリが遺したあの巨大騎士は、壊れない限り残り続けるから頑張って壊してねー？」
　余計なお土産残してるんじゃねえ！
　こっちにムカつくことを言っておいてから、リゼヴィムは更に不敵な表情を浮かべてくる。
「最後に一つプレゼントだ。――――俺達の組織の名は、クリフォト。セフィロトの木って奴の逆向きみたいなやつでな。セフィロトってついてる神滅具の聖杯を悪用するからって感じでつけてみたんだ。……今後もバリバリテロりながら、トライヘキサの封印を解除して、グレートレッドをぶっ殺して見せるんでよろしくねー！」
　ああそうかい。
　だけど逃がすわけねえだろうが！
「逃がすと思うか、リゼヴィム！」
「てめえもだ、ユーグリッド！」
『ヴァレリーの聖杯を返せ！』
「貴様の首は逃せんなぁ！」
　ヴァーリを皮切りに俺やギャスパーがオーラを放ち、更に幸香も花弁を展開してリゼヴィムを狙う。
　だがリゼヴィムが軽く魔力を撒き散らしただけで、触れたその攻撃は霧散していった。
　くそ！　神器無効化能力があれば、あの程度の魔力で神滅具の力が無効化されるのか。

今の魔力、下級悪魔クラス止まりだぞ。本気の神滅具の攻撃なんて、四つも集まれば魔王クラスは行くだろうに。
「残念でーす！　それが神器を経由している以上、俺には通用しないんだよね～♪」
「……そう。ならこうしましょう」
リゼヴィムの馬鹿にした声に合わせるように、カズヒが俺にプログライズキーを投げて渡す。
「イッセー譲渡してパスハリーッ!!」
「お、おう！」
俺は咄嗟にプログライズキーに譲渡すると、それをカズヒに投げて渡す。
そしてカズヒは受け取るなり飛び上がって、アタッシュナイダーにプログライズキーを装填すると一度開閉した。
『フルチャージ』
そのまま飛び上がって仕掛けるカズヒに。リゼヴィムは微笑みすら浮かべながら堂々と手を開き。
『ダイナマイティングカバンシュナイデン！』
「それでも神器じゃ無理なんだ―」
ああ、当たりそうだけどやっぱり無理なのか―
「知っているから使わないわよ」
『ハウリングカバンショット！』
―と思った瞬間、抜き放ったアタッシュショットガンでリゼヴィムの股間に接射した。
余波で破裂するアタッシュショットガンと、真顔になって沈黙するリゼヴィム。
俺もギャスパーもヴァーリも、寒気を感じたとお互いに共感できた。
「……え、リゼヴィムさ―」
「そしてこっちはあんた用よ」
そして同じく硬直したユーグリッドに、大振りで空ぶったと思ったアタッシュナイダーが振るわれる。

当たるかと思ったけど、咄嗟にモデルバレットがリゼヴィムごとユーグリッドを引っ張り込んでそれを回避させた。
『あんたって、ホント怖いわね』
「お互い様と言っておこうかしら」
そのままモデルバレットの蹴りを何とかガードしながら、カズヒはその勢いで距離をとって、建物の屋根に着地する。
『ちょ、お義父さん大丈夫？』
「ふ、ふふふ……っ。流石ミザリの昔の実妹、容赦ないぜぇ……っ」
リゼヴィムはプルプル震えているけど、割と耐えれているみたいだ。
あれ喰らってあの程度で済むのかよ。これが、魔王すら超えて悪魔と言っていいかも分からないとされる、超越者の力なのか。戦慄するぜ……っ。
超越者は股間すら超越してるのか。なんて奴だ。
「戦慄するところが間違っておる気がするのぉ？」
「その辺にしてあげて。男は特にそこを気にするのよ」
其処の親子！　女には分からないだろ、これはそれだけのことなんだよ！
そのまま我に返ったユーグリッドともう一体のステラフレームが転移魔法陣を完成させて、あいつらは転移の光に包み込まれる。
「させると思っておるのか！」
我に返った幸香が、今度は星辰光の爆弾魔獣を使って攻撃する。
おかげで邪龍達の攻撃が活発化するけど、これでリゼヴィムがどうにかできるなら価値はある。
だけど、その猛攻もリリスがオーラを放って吹き飛ばした。
半分こになったオーフィスなだけあって、幸香の本気でもダメってことかよ。
「……じゃ、バイビー……。あと、悪祓銀弾（シルバーレット）ちゃんは後で泣かすんでよろしくね……？」
「安心しなさい。次は切り落としてあげるわ」
中指立てたカズヒの返答を訊きながら、リゼヴィム達はそのまま転

移していった。
……逃げられたか。
「グレートレッドを倒す？　俺と同じ夢を、あいつが……？　……いや、俺とアイツは違う、違う……違うんだ……っ」
とても悔しそうなヴァーリが見えるけど、今はそれどころじゃない。
「ギャスパー。その力はいつまで使える？」
『十数分ぐらいは行けるだろうね。ただ、今のままだと膠着状態に近いかな』
カズヒに尋ねられて、ギャスパーはそう答えながら闇の獣をどんどん出していく。
ギャスパーは十分は持つのか。
なら、俺達が何とか邪龍達を倒せば事態は収まるな。
「赤龍帝。あの飛竜は使えるのか？　妾はまだまだいけるがのぉ」
『安心しろ。こっちも十分ぐらいは持たせて見せるさ』
幸香の質問にドライグが応えてくれるけど、ならまだまだやれますよ。
これ以上、あいつらの好き勝手な理由でここに住んでいる一般市民まで傷つけさせてたまるかよ。
「カズヒはみんなの援護を頼む！　お前、広域殲滅は苦手だろ？」
「そうね。ならシェルターの方に向かっておきましょう。誠にぃだとピンポイントで手駒を差し向けそうだもの」
すぐに俺に頷いてくれるけど、それでいいのか？
……いや、確かにミザリを警戒するとそこは重要だけど。そういうこと聞いてるんじゃないんだよなぁ。
「九成やインガさんの方に行かなくていいのか？」
二人のことも気になると思うんだけど。
だけど、カズヒは不敵な笑みを浮かべて首を横に振った。
「大丈夫よ。私も空気は読めるもの」
そう答えると、カズヒは微笑みを向けながらある方向を向いた。
「示してみなさい、インガ。貴女が和地に胸を張れるということを！」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「天衛せよ、我が守護星――鋼の笑顔（誓い）で涙を変えろ」
一歩を踏み込む枉法インガは、九成和地から託された細剣を持って突貫する。
「獣になりて檻へと連れられ、更に悪意に拾われる。愚かな少女の人生は、一冊の本へとなり果てた」
それは九成和地が託した、インガの為の星魔剣。彼女を魔星の頂に高める、この戦いの趨勢を決める切り札の一つ。
枉法インガは転生悪魔ではあるが、同時に異能としての素質は星辰奏者としての物に限定されている。
人造惑星に星のみで対抗するなら、必然的に魔星の頂に届く必要がある。それはインガ自身を魔星にすることで、条件はクリアされたのだ。
「其処は超常の書庫なれば、余人が辿り着くことはなし。戯れに人に貸し出されようと、買い取られるなど夢のまた夢。人知を超える宿命は、まるで地球（ほし）よりかけ離れた暗き宇宙の片隅のようで、少女は諦観と絶望に凍り付く」
だからこそ、今の彼女の圧縮大気は、呪いを一切受け付けない。
密度が大幅に上がった、高い収束性により、枉法インガは呪怨を一切受けずに突貫する。
「―されど愛しき救い手は、星々の彼方に踏み入れる」
そう。その事実こそ、インガに死地に挑む勇気を与えてくれた。
だからこそ、諦観と悲嘆に沈む詠唱は、ここからが本番なのだ。

「幼き笑顔は消して変わらず、されど旧神の石が如く固く優しい光を胸に、私の鎖を砕き切る。過去を忘れず未来を目指す救済者は、我が涙の意味を変え、凍てつく体を温かい地球(ほし)へと連れ戻したのだ」
モデルダストの猛攻を、繊細かつ機敏な動作で回避し、細剣と短剣を持っていなしていく。
高密度の圧縮気流が補佐となり、細身の剣や短剣という代物で、最上級悪魔すら苦戦する猛攻に対処する。
「その救済に報いたい。彼を導き共にある悪を祓う銀弾のようにはなれなくても。愛しき思いは黄金に届くことが無かろうととも。銀のように光り続け翳らないでほしいと、心の底から願うのだ」
そしてそんな一歩間違えた瞬間に散り果てる戦闘に、彼女は決意を持って向き合える。
諦観ゆえに死すら無感動になっていた、かつての戦いを遥かに超える動きで、インガは戦闘を繰り広げる。
それは強い意志で何かを成そうとする者が振える力。
意志の力を必要としない魔星の星に、圧倒的弱者たる枉法インガは、意志の力を必須とする戦い方で食らいつく。
「故に我、主失われし図書館の主となり果てよう」
決意を持って。
覚悟を持って。
そして強い願いを持って。
「刃は此処に、決意は胸に、そして笑顔は我が心に。黄衣を纏いし支配者が、悪しきに対して牙をむかん」
圧縮大気制御能力を持つ、少女でもある淑女は此処に、自分がなりかねなかった闇と相対する。
全ては、涙換救済(タイタス・クロウ)に応える為に。
「超新星(メタルノヴァ)――救済(ハ)の手(ス)を取る乙女(トゥール)よ、黄(コン)の衣(バート)を纏え!」
黄衣銀妾(ハストゥール)は今ここに、魔の星を制する為に突貫する。

枉法インガ
救済(ハ)の手を取(スト)る乙女(ウール)よ、黄(コン)の衣(バート)を纏え（括弧内は人造惑星時）
基準値：B（A）
発動値：AA
収束性：D（B）
拡散性：E
操縦性：AA（AAA）
付属性：C（B）
維持性：B
干渉性：D

魔星の領域に到達した圧縮大気制御能力は、まさにステラフレームを縫い留める。
そう、モデルダストを縫い留めることには成功した。
だが悲しいかな。ステラフレームは第一世代型人造惑星。それも戦闘特化型。
自らの星に現地すれば食い下がれる領域には到達したが、決定打には届かない。
戦闘特化型人造惑星相手では、インガの基本性能が届かない。更にステラフレームは共通の星辰光を使う星辰体運用兵器。この差はどうしても埋まらない。
『ああくそ……本当に妬ましい！』
だからこそ、食い下がられていることにモデルダストは激高する。

―モデルダストの素体となったのは、佐備羅美華（さびらみか）という。
綺羅星という文字に妙な感銘を受けた両親が、綺羅星という言葉で感じそうな印象の漢字をあてたＤＱＮネーム。そのストレスが、結果的にはけ口となる性交に溺れる一助となり、そんな親の元に生まれたからか、家族関係は事件後一気に破綻した。
一年も経たずに自殺を考えた。一人で死ぬのは怖いからと、自殺目的のインターネットサイトを探した。そこですべてを吐き出して、そのまま死んでしまおうと思っていた。
だが同時に、羅美華は周囲全てが妬ましかった。
自分を助けない周囲が憎い。
自分より幸運な奴らが妬ましい。
そんな八つ当たりじみた嫉妬を無自覚に押し殺し、彼女は死ぬことを選んでいたが……故に悪魔に見い出される。
「君のような子に手を差し伸べたい。君が恨みを思う存分晴らすことが、僕にとって益になるからね」
そう告げた、サイトの管理者でもある悪鬼明星に見い出されることで、彼女は魔星として生まれ変わった。
とにかく周囲の自分がムカつく連中を苦しめたい。その煮詰まった衝動を軸に作り変えられたモデルダストに、躊躇や良心というブレーキは通用しない。
だからこそ、自分と同じ目に遭いながら幸せになる、枉法インガは許さない。
その憎悪をもって、モデルダストは拳を握り締め―

『殺す殺す殺す殺すぅ!!　なんであんたは私と同じ目に遭ってるのに、あんたは幸せそうなのよぉおおおおおおっ!!』

その激情と共に、呪怨の出力は更に跳ね上がる。
圧倒的な出力の力押しによる圧殺。乱暴かつ大雑把だが、それができるならそもそも小手先など必要ない。
故にこそ、小細工を必須とするインガは呑まれるほかなく―
「……そうだね。私は本当に幸運だよ」
―それを受け止めたうえで、インガは呪怨を切り裂いた。
あり得ない。そうモデルダストが感じる中、インガは一歩を踏み出す。
「だからこそ、この幸運を無駄にしたくない。引っ張り上げてくれた和地君や、そこに繋いでくれた皆の想いに恥じない自分でいたいから」
そう、インガがここにいるのは、和地だけのおかげではない。
彼を繋げ、支えてくれたリーネス達。
彼と共にあり、そして並び立つイッセー達。
そして、彼の原点であり共に歩む、カズヒ・シチャースチエ。
そんな彼らと同じように、和地と共に痛いと願うからこそ。
黄衣銀妾（ハストゥール）は、その手に握った力を振るう。
その決意を目にし、モデルダストは漸く気付く。
その手に握られた短剣は、ワイヤーのようなものを細剣に繋げていた。
そして、短剣と細剣は共に銀の光を薄く纏っている。
知っている。何故なら、ミザリの宿敵故に教えられているし、そもそもデータベースに登録されている。
そう、その銀の光こそ、今この場における自分最大の天敵。
遍く邪悪を怒り呪う、生死を問わぬ人の思念。その集まりによる邪悪を滅ぼす銀の瘴気。
『……悪祓銀弾（シルバーレット）おおおおおおおっ!!!!』
「そう。カズヒの祈りも、ここにある！」
これこそが、リーネスが今後に備えて開発した、試作型人工神器。
その名を銀隕（サテライト・クリス）の共剣。
能力は極めて単純、短剣を基点とする形で指定登録された範囲内に

いる人物の星辰光を使用するという物。
インガの星が持つ性質以上の性能は発揮できず、インガより低い性質は基本的には再現出来ない。それゆえに性能は完全下位互換であり、とどめに短剣を基点として使用する為、劣悪レベルに扱いが難しい。
安定性や使いやすさを重視する、神の子を見張る者の人工神器としては欠陥品。元々それであっても通常の神器を下回っている以上、この人工神器は使い勝手が致命的に悪い。しかも短剣を基点とする為、扱いは非常に限定的になる。対策として制御においてはインガの星を流用しているが、いうなれば星を制御するコントローラーを操作する為のマニピュレーターを別のコントローラーで操作するような、非常に使いづらい装備といえる。
だがそれでも、インガの力を底上げするには十分すぎる。
もとよりインガの星は、極まって高い操縦性特化型。それが星魔剣で更に極まっている以上、インガならこの人工神器を十全に使うことができる。
そして、今の収束性とカズヒの星があるのなら。
「……ぁあああああああああっ！」
答えなど、一つしかない。
遍く邪悪は尽く、銀の光が撃ち抜き滅ぼす。
今ここに、一つの邪悪が滅び去る。その真実が決定した。

和地Ｓｉｄｅ

インガ姉ちゃんはやったようだな。
俺もモデルダストが展開したドローンが消えたことで、それを確信

できた。
既にザイアの連中も禍の団も撤退を始めており、残っているのは邪龍と巨大な騎士。
そして邪龍殲滅における最大の障害は、巨大騎士が原因と見られる邪龍に対する加護だ。
だからこそ、後は奴をぶちのめして終わらせる。
だからこそ、俺はサルヴェイティングアサルトドッグに変身して、突撃を敢行する。
あれさえ倒せば邪龍の強化は消える。そういう意味では的がデカくて倒しやすい。
問題は、ああいうでかいのは馬力と頑丈さとかの桁もでかいのが基本ということだ。
だが、いや、だからこそ！
「さっさと片付ける!!」
全武装を投射しながら、俺は魔剣を創造して巨人に突貫する。
それに気づいた巨人もまた、聖なるオーラを剣に変えてこちらを薙ぎ払うように振り下ろす。
それを回避しようとしたその瞬間、それ以上の聖なるオーラが剣とぶつかって弾き飛ばす。
「行け、九成！」
ゼノヴィアか！
俺がそっちに意識をとられた瞬間、更に大量の光の槍が、横合いから巨人を牽制する。
「美味しいところを独り占めはよくねえなぁ！」
「アーメン！　聖遺物の悪用は認めないわ！」
先生、イリナ！
っと。頭部から絶大な聖なるオーラがほとばしっている。
これは迎撃必須―
「構わず進んで頂戴！」
「その通りです！」
―と思ったが放たれる直前に朱乃さんの雷光とロスヴァイセさん

の魔法攻撃がそれにぶつかって相殺する。
しかしそれはフェイントだったのか、大量の邪龍がこっちに向かって殺到する。
流石に一旦迎撃するか通ったが、そこに大量の聖剣を持った騎士達が割って入ってきた。
「進みなさい！　こいつらは私達が」
「流石にグラムを乱用できなくてね。本命は任せたよ！」
リアス部長に木場まで来てくれたのか！
「先輩！　こっちは威力が低いんで囮が限界でさぁ！」
「決着はお任せします！」
アニルにルーシアまで！
これは尚更失敗できない……あ、やばい。
なんか胸部から聖なるオーラが雨あられと降ってきた―
「―掴まってぇぇぇぇ！」
その声に咄嗟に手を伸ばせば、その瞬間天高くに俺は引っ張り上げられた。
「……ヒツギか！」
「私もいますわよー！」
振り返ってヒツギが実装したフライングファルコンレイダーを確認すれば、ラクシュミーに変身しているヒマリがこっちに手を振った。
とはいえ敵も気づいているな、残っている邪龍も一旦こっちに集まってきている。
さて、これはまだまだ時間がかかりそう―
「はーい親子三人仲いいタイミングに水を差さないでねぇ？」
―更にその瞬間、そんな声と共に大量の砲撃が邪龍達を牽制する。
加えてこっちを殴り落とそうとした巨人の拳に、大量の氷塊と炎弾が叩き込まれた。
「カズ！　そのまま突っ込め！」
「懲罰部隊は素直に裏方に回っとくわよ、和っち！」
リヴァ先生やらベルナやら春っちまで!?

え、三人とも来てるってことは―
「和地ぃぃぃぃ！　ヒマリにヒツギも！」
―飛び掛かる形で、仮面ライダーファストに変身している鶴羽が抱き着いてきたぁ！
「無事でよかったぁあああ！　プルガトリオ機関のヴィクター部隊と合流してたら、ツェペシュもカーミラも城下町がドラゴンに襲われてるっていうからもぉおおおお！」
「心配かけて悪かった！　でもとりあえず、今は敵を―」
俺が宥めていると、手の武器や砲撃だと迎撃されると踏んだ巨人が、高く足を蹴り上げてくる。
オイ待て迎撃間に合わないしこの位置だとヒツギ見えてな―
「……隙ありだぜえええ！」
―どちらさまぁあああ!?
見たことないおっさんが軸足に跳び蹴りで膝カックン!?
気づいた俺達が全員面食らっていると、そこに推進力と跳躍力で飛び上がる仮面ライダーアイネスが。
「説明は後よぉ！　今は、とどめが最優先でしょぉ？」
「「「あ、はい」」」
ええ、もうどっから突っ込んでいいか分からないけど、あの明確な隙は逃せない！
『ＷＩＮＧ！』
「じゃあ一気に接近するよ！」
『フライングボライド』
ヒツギが超高速で巨人に迫り、敵を引き付けながら俺達を投げ飛ばす。
そして、一瞬だが相手が見失った隙は逃がさない。
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ！』
『ＦＲＥＥ！』
『ＳＨＩＮＩＮＧ　ＪＵＭＰ！』
『ＭＡＧＩＣ　ＪＵＭＰ！』
これ以上、此処で悲劇は産ませやしない。

『マグネティックスターブラストフィーバー！』
『リベレイティングブラストフィーバー！』
『シャイニングレインラッシュ！』
『コーリングチェインスマッシュ！』
　四つの蹴りが巨人の胴体をぶち抜いて、この戦いの趨勢は今度こそ決定した。

明星双臨編　第四十五話　夜明けの宣言

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

その後、少ない時間で邪龍は殲滅されることとなる。
だが短時間とはいえ、いきなり町中にドラゴンが現れ街を襲撃するという事態は、少なくない犠牲者を生んでいることは想像に容易い。
故にグレモリー眷属達も動いているが、その一環として、城内に取り残されたヴァレリーをギャスパーが回収しに向かう事となった。
そして同時に、カズヒは懸念の解消として、リーネスや鶴羽を連れて同行していた。
そしてその要因を確認し、カズヒはちらりと振り返る。
「鶴羽、どうかしら？」
「……あ～、ゴメン無理だわ」
鶴羽の謝罪を受け取りながら、カズヒはため息をつきたいところを抑えつつ、その成れの果てを確認する。
その邪龍は、明らかに歪な姿となって死んでいた。
変貌したマリウス・ツェペシュ。ヴァレリーと同じく転移に巻き込まれてなかったので、拘束術式はかけたとはいえ気になったので地下に降りてきたのだ。
情報を聞き出す為にも鶴羽を連れて聖杯で戻せないかを考慮していたのだが、無理なら仕方がないだろう。
「……後先考えずに感情に任せるのはよくないわね。一度判断を誤った身として、二度目は自他問わず認めるわけにはいかないわ。今後も先達として、後進に同じ失敗をさせないようにしないと」

「と言っても、この調子だと他の貴族達も似たような処置を施されていたでしょうけどねぇ」
かつて感情に振り回されて失敗したカズヒは自省も込めたため息を吐き、リーネスはマリウスですらこうなっているならどちらにせよ情報を聞き出すのは無理だったという意味でため息をついた。
これでツェペシュのクーデター側は文字通りの全滅と言ってよく、情報を聞き出すことは不可能に近い。
クリフォトと名乗った禍の団の新たなる盟主陣営。その目的は、グレートレッドを殺すことによる異世界侵略。あまりにも問題のあるこの事態に対して、情報を殆ど掴めないのはのは問題だった。
不幸中の幸いは、マリウスの強化がテストと口封じを兼ねたであろう滅茶苦茶なものだったことだ。
マリウスが勝手に死んでくれたことで、同じように転移に取り残されたヴァレリーに被害がなかったのは幸いだった。そこだけは安心できることだといえるだろう。
しかし、これから更に大変になることは想像に容易い。
魔王ルシファーの直系にして、神器を無効化する超越者。そんな存在が、黙示録にするされし魔獣を復活させてグレートレッドを滅ぼす。しかもその理由が異世界に侵略する為ときた。
あらゆる意味で非常事態というほかない。視野がこの世界の内側に留まっているだけ、旧魔王派や英雄派が可愛く思える事態といえるだろう。
今後の対応や戦いは更に厳しいものになると考え、カズヒ達は内心で重いものを感じる。
ミザリだけでも厄介だというのに、ここに来てリゼヴィム。シャルバが滅び曹操が冥府に落ちて安心できたと思ったらこれである。
三人揃ってため息を更につきたくなるが、それより先に動く者がいた。
「……あの、嬢ちゃん方？　俺のことは置いてけぼりかよ」
「ごめんなさい、勇ちん。事態が色々重すぎてちょっと意識がずれてたわ」

カズヒは素直に勇儀に謝る。
自分から色々と話す為に連れてきておきながら、意識を他のところに向けているのは問題だった。人がいないところで話せると、こんなところまで引っ張ってきたのだから尚更だろう。
ただ同時に、勇儀は凄く怪訝な表情だった。
「……マジで日美っちなのか？　性格全然違うし、そもそも完璧に西洋人じゃねえか」
その反応は完膚なきまでに正論だ。
改めて自分の転生という事態に、カズヒ自身も少しすすけた感覚を覚えてしまう。
だが、妙な感慨に浸っているばかりではいられない。
「っていうかカズヒ？　この人どっかで見たことあるような無いような……誰だっけ？」
鶴羽が首を傾げるのに、むしろカズヒは少し感心した。
「ま、七緒やアイネスはあんまりこいつと付き合いなかったしね。誠にいや乙女ねぇはちょこちょこ会ってたけど」
そう苦笑しながら、カズヒは勇儀を二人に紹介する。
「紹介するわ。彼は接木勇儀と言って、中学校で何度か、そして高校三年間はずっと私のクラスメイト。道間家とは関係ない、一般人としての道間日美子の友人よ」
そう告げると共に、今度は勇儀の方に振り替える。
「そして勇ちんにも紹介するわ。二人は私の前世からの親友、アイネス・ドーマことリーネス・エグリゴリと、道間七緒こと南空鶴羽よ」
「本当に状況が分からねえ!?　っていうかアイネスって、あのイギリスからホームステイしてたアイネスで、道間七緒ってお前が世話になってたとかいう!?」
明らかに状況が把握できていない勇儀に、カズヒもどうした者かと困り顔になる。
「正直、詳しい説明にはかなり専門的な知識とかも言わなきゃならないのよ。どこまで把握しているの？」
「日美っちがこの城下町にいて、しかもアイネスとか七緒とか乙女先

輩とかと一緒にいて、でもって俺の今回の敵は高確率で誠明先輩だってところだな。なんか知らんけど全員十代後半になってるとも聞いてるがよ」
そこまで聞いてちらりとカズヒはリーネスの方を振り返る。
リーネスもそこまでで大体のことを把握したのだろう。小さく頷いていた。
……ミザリに関する情報、こと基点となるカズヒ達に連なる情報は、各勢力のトップクラスならば多少は把握している。不意打ちでミザリが明かすことによる混乱を最小限に抑える必要があるからだ。
だが同時に、不用意に人に広めない様、ある程度のかん口令も敷かれている。如何に帝釈天とて、いきなり異形に連れ込んだ人間に教えるほど酔狂ではないだろう。
彼が日美子の友人だとしてもだ。日美子の友人とはいえ、接木勇儀という男は異能にも異業にも縁がない人間だ。態々来歴を調べ上げるほどの要素はないし、かん口令が敷かれていることを無意識に語るとも思えない。
そこからある程度の推測をしつつ、カズヒは静かに勇儀と向き合った。
「……流石に老けたわね。ま、三十代後半に差し掛かってるなら当然か」
「そういう意味じゃぁずるいよな、お前ら。文字通り十代じゃねえか。反則だろ」
茶化すように言えば、茶化すように言われる。
……道間日美子にとって、接木勇儀とは一線を引いた友人だ。
だからこそ、アイネスや七緒ほどではない。だからこそ、自分の反転を抑え込めるほどではなかった。
だが、比較的軽いこととだから重くないことは違うのだ。
「言うべきことは色々あるけど、まずはお礼を言わせて頂戴」
その想いを、まずは形にしよう。
「これから凄くどす黒いことを言うけれど、そんな日美子[私]の人生は、あなた達のおかげで少しは息抜きができていたの。本当に、ありがと

う」
その上で、そんな友情の裏でいくつものどす黒いことをしてきたことを謝りたい。
それを口にする前に、勇儀は軽く苦笑した。
「ったく。男と女で喧嘩した時に、勢い任せでセクハラ発言した男に対して、「私は一日に三連発は誠にぃおかずに○ナニーしてるけど何かぁ？」とか言って全員ドン引きさせた奴とは思えねえな」
「……うわぁ」
後ろの親友二人が一歩を引いたのには多少のダメージがあった。
確かにあの時期、自分の性的観念はぶっ飛んでいたから時々漏れてもいただろう。そういえば言った記憶は残っている。その所為か男友達の割合が女子生徒の中では多い方だった気もする。
これも過去の業か。カズヒは心底からそう思った。
「……流石、変態の性犯罪を防ぐ為に血判状まで書いてアナ○○○クスを確約するだけことはあるわねぇ」
「真面目にその辺、別の形にしなさいよ。和地は性経験が私と同じで捻くれてるから言えないだけで、絶対結構キてるわよ」
「お前何やってんの？　そこだけ聞くと意味不明だけど何やってんの？」
そして全方位から追加攻撃が叩き込まれた。
「っていうか日美子の頃からだったのねぇ。その、もしかして他にも色々やっていたのかしらぁ？」
「まぁな。男の性的観念に理解がありすぎて、橋渡し役になってた感はある。っていうか待って？　今の話聞くと彼氏いるのに他の男とヤる予定なのか？　スワッピング？」
「そうなのよ。そりゃ付き合う前の約束だけど、約束した男どもの方も想定外でびっくりしてるみたいでさぁ」
しかも一気に気安くなっている。
それはそれでいいことなのだが、何かが納得できない。
しかし間違ったことは言われてないので我慢していると、勇儀はこっちにほっとしたような視線を向けていた。

「ま、色々あったんだってことは分かるけど、安心したぜ」
その表情は、まるで娘を見る父親のよう。
本当に意味で人生を積み重ねた、自分達のような特例ではないからこその成長を感じさせる瞳だ。
「ダチが卒業前にいきなり行方不明でそのままってのはきつかったからな。何も出来なかった俺だけど、今少しは幸せだって知れたのは良い事だな」
「……あなた、もしかしてそれが理由で？」
だから、なのだろうか。
今彼が、海外のＰＭＣで星辰奏者になっている。それは、自分のことがきっかけなのか。
何もできないのが嫌だから、力を欲してここまで来たのか。
そんな視線に、勇儀は少し照れ臭そうに視線を逸らした。
「別にそれだけってわけじゃねえけどな。お前が俺の恋心を茶化さず、応援どころか支援までしてくれたから結婚して子供も四人作れたんでな？　そんな奴がいなくなって何も出来なかったってのは……キツいだろ？」
「そうね。お義姉さんと結婚して、子供まで出来てるのよね。……泣きたいぐらい羨ましいけど、正直ちょっとほっとするわ」
本心からそう言える自分に、安堵する。
自分が出来なかったことを、誰かが成し遂げる。
それを羨むだけでなく、心から祝福できる。それができることに……本心で安堵した。
「「……」」
鶴羽とリーネスも、そんなカズヒにほっとする。
親友は、反転してもなお、自分達の大好きな親友であった名残はあった。そして、それを取り戻し、来世において誰かと寄り添うことができた。
その事実に思わず涙ぐみ、勇儀はそれに戸惑ってしまう。
「お、おいおいなんだこの状態？　つーか、あんな華奢な女の子に人ひとり背負わせるのっていいのか？　あと人がいないところでしたい

話って何なんだよ？」
困惑しながら話を戻したりする勇儀に、カズヒは今度こそ意を決っする。
振り返り二人に視線で確認を問えば、リーネスも鶴羽も頷いた。
ああ、彼ならすべてを話しても大丈夫だ。
嫌われるかもしれないし、友情は終わるかもしれない。しかし真摯に受け止めてくれることだけは確信できる。
何もかも反転した自分の人生だと思っていたが、光る宝はあの時からあったのだ。その宝に、せめて誠実で向き合おうと心から思える。
だからこそ。
「そうね。長い話をさせてもらうわ。あとギャスパーはあれで走り込みとかもしてるから大丈夫だし……」
ただ、雰囲気だけは和らげたいので、
「……ギャスパーはグレモリー男子だもの。まぁ、学校でもあの格好で通う筋金入りの女装男子だけど」

「はいいいいいいいっ!?」

この絶叫に三人の心は一つになった。
ですよね～
そして
―感覚マヒしてたかも

その辺りの意識をちょっと見直す必要すら覚えていた。

和地Ｓｉｄｅ

なんだろう。俺は今、すっごく「ですよねぇ」って感覚を覚えたぞ？

「和地、私今、すっごく同意の感覚を覚えましたの」

「ヒマリ先輩もっすか？」

ヒマリやアニルまで同じ感覚とはどういうことだ？

俺は少し考えて、とりあえず結論を出した。

「幽世の聖杯（セフィロト・グラール）が乱用された影響とかか？　それでなんか妙な感覚共有がされてるとか」

「……マジでありそうで怖いっすね。アザゼル先生にちょっと相談しときますか」

アニルは俺の推測にそう答えながら、ベーコンを器用に切り分ける。

そしてヒマリはベーコンを焼き、俺はその間にトマトとレタスを切ったりしている。

単刀直入に言えば、俺達は今炊き出しをしている。

カズヒねぇ達は別件でギャスパーと一緒に地下に言っているが、資材は大量に置いて行ってくれた。更に鶴羽が試作型アントニオンで資材も持ち込んでくれたから、こうして炊き出しの準備も可能になっている。

なので、いくつかに分散して炊き出しの準備をやっているところだ。俺達は手軽に食べれるサンドイッチ主体だ。
他にもシチューを作ったりするメンバーもいる。なのでまぁ、分散しているわけだ。
かなり破壊されているから復興作業も流石に一日や二日では終わらないだろうし、数日はシェルターで過ごすことになるだろう。しかも今日は、いきなりの大破壊に巻き込まれた直後だ。
せめて旨いものを食べて気晴らしぐらいさせてやりたい。嘆きの涙を変える者として、これぐらいはできないとな。
「よし、真剣に料理の練習するか。主に炊き出し系統」
少し気合を入れ直そう。
物理で嘆きを生む存在を倒したり、側にいて大切な人の支えになることばかりが涙の意味を変えることではないだろう。
こういう炊き出しとかでもできるだろうし、セラピー的な物は香りや音でもあったはずだ。
うん、いい機会だしセラピーの勉強でもするか。表向きの職業としてセラピストというのも、人間世界に関わるにおいて重要になりそうだしな。
いやまぁ、今はＢＬＴサンドだ。
ストレス溜まっているだろうし、急いで避難下から突かれてもいるだろう。ついでに言うと時間帯も時間帯だから、腹もすいて当然だ。
美味しい物を食べて少しすっきりするだけでも、だいぶ変わるだろう。食べるというのはそれだけでストレスを回復させる。ましてそれが美味いのなら、尚更効果が出るはずだ。
……だが同時に、俺は強い怒りも覚えていた。
ＢＬＴサンドの出来に左右しない様抑えてはいるが、かなり腹に据えかねている。
リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。そして、奴が率いる新組織クリフォト。
ミザリと相容れないことは分かっている。嘆きで産まれる涙の意味を変えたいという、この涙換救済(俺)。自他問わず嘆きという美に染

まってほしい、悪鬼明星（ミザリ）。相容れる道理がどこにもない。
同じ道間日美子（カズヒ・シチャースチエ）をきっかけとして生まれた二つの信条。共にその為に死んでも構わないと思っているからこそ、相容れることなどありえない。
そしてそれと同じぐらい、決して認められないのがリゼヴィムだ。
聖書に記されるほど前から生きていたのなら、当然だが千年を超える人生だろう。それほど長く生きているということは、１００年生きれるかも怪しい人間には分からない感覚だろう。
そんな長い間、夢や野望を持つことがなかった。どこまでも虚無だっただろうその人生に根差した野望。それだけで、奴にとって命を懸けるだけの価値があることは分かる。同時に、どこまでかというのは俺には分からないとも分かる。
そういう意味では哀れだろう。同時に決して譲らないレベルで邁進するだろうことも分かる。
純血の古い上級悪魔、それも魔王血族は大抵人間を馬鹿にしているというか見下していた。リゼヴィム自身もそんな雰囲気を感じる。その上で、その人間を羨ましいというほどの虚無は、だからこそ反転した熱意に変わっている。
いうなれば、ある意味でカズヒねぇと同じだ。溜まりに溜まって膿んだものが反転した結果、驚異的な熱量と質量の塊となって突破を試みている。
だからこそ、奴は絶対倒す。
夢を見させたまま殺してやろう。それがせめてもの哀れみで、怒りだ。
そこまで決意を決めたうえで、俺は怒りを抑え込みながらレタスやトマトを切り分け―
「か～ずち！」
「おぉうわぁっ!?」
―いきなりヒマリに抱き着かれた!?
危ない危ない危ないから！　いや、絶妙に包丁で手を切らないタイミングを見計らってのことだけど、心理的にキッツいから！

思わず張り倒そうかと思った時、抱きしめられたまま器用に頭を撫でられる。
「あとで一緒にカラオケでもして、発散しますわよ？」
……敵わない。
どうやら直感で悟られていたらしい。そして久しぶりに俺に対して母性爆発と言ったことになったのだろう。
むぅ。何時の間にかベーコンを焼き終わっているから、強引に引きはがしづらい。
「流石元親子、こういう時しっくりきますね」
「アニル、止めてくれ」
俺はちょっと力なく言うというか、俺だけ全部終わってないから作業に戻りたい。
だけどまぁ、少しは気晴らしになったな。
……ため込みすぎてもそれはそれであれだ。まずはしっかり発散して、そこから改めて考えるか。

祐斗Ｓｉｄｅ

もうすぐ朝日が昇るかもしれない頃、漸くひと段落がつける状態だった。
残りの業務はプルガトリオ機関とアマゴフォースが引き継ぎ、大王派からの増援が来るまで後継私掠船団が周辺警戒に当たっている。
そんな中、アザゼル先生とリーネスがヴァレリーを診察してため息をついた。
「……推測するに、三つある聖杯の二つを抜かれたショックによる昏

睡ねぇ。一つ目を抜かれてぎりぎりだったところに二つ目も抜かれたから、一気に崩れたといったところでしょう」
「幸い最後の一つがあったから命は無事だったが、崩れ落ちた以上一つ入れただけじゃぁどうしようもねえ。リゼヴィム達が持っていった最後の一つを回収するぐらいしないと無理そうだな」
やはりか。
先生やリーネスでもどうしようもないのなら、奪還するしかないのだろう。
この状態に、ギャスパー君は大丈夫なんだろうかと不安になる。
視線を彼に向けると、ギャスパー君は震えて俯きながらも、それでも力を込めていた。
「……皆さん。僕は、決めました」
朝日が昇りかけ、周囲が明るくなっていく。
その光がギャスパー君に当たる時、彼は再び口を開いた。
「聖杯は必ず取り戻します。ヴァレリーの聖杯を、悪用なんてさせたりしません」
涙を浮かべ、それでも彼の眼には決意がある。
そして朝日が差し込むと同時に、顔を上げ、宣言した。
「ヴァレリーは……僕が救います！」
……ギャスパー君。君は本当に立派になった。
僕達皆が、それこそカズヒですら、その決断といきに笑みすら浮かべて賛同する。
「なら一から鍛え直しね。相手が神器無効化能力を持っている以上、貴方の場合は吸血鬼の力を主体にするしかないのだから」
「はい！　走り込みからやり直します！」
カズヒの言葉に力強く頷くギャスパー君。
それを見て、カズヒは微笑みを浮かべて頷いていた。
「もちろん俺も手を貸すぜ！　後輩の決意を無駄になんてさせないさ！」
「同感だな。涙の意味を変える者としては、今度は嬉し涙を流させてやらないと」

イッセー君と九成君も頷きながら視線を合わせている。
「なら僕も、魔剣の方を使いこなせるようにならないとね」
「無理はしない範囲でね？　……でも、本当に立派になったわね、ギャスパー」
僕もリアス部長も、そして皆も彼の決意を受け止める。
ああ、今回はしてやられ大きな被害を受けた。
だけど、そう簡単には行かせないさ。
そう、グレモリー眷属はこれまで何度も脅威を乗り越えてきた。
だからこそ、今度も……必ず乗り越える。
「……ふふっ。年下の子達が頑張っているところを見たら、私達も負けてられませんね？」
「私達もさほど年は変わらないですけどね。ですが、トライヘキサまで出てくるのなら、私達も気合を入れ直さなければ」
シャルロットやロスヴァイセさんも、同じように戦意を見せている。
ああ、敵が超越者だろうと関係ない。
ヴァレリー・ツェペシュは、僕達の仲間の大事な人は、必ず助け出す。
その決意を胸に、僕達は新たに一歩を踏み出した。

明星双臨編　第四十六話　Ｄ×Ｄ、結成です！

祐斗Ｓｉｄｅ

吸血鬼達がリゼヴィム達クリフォトによって大打撃を受けてから、数日ほど経った。

それまでは動きもなく、僕達も日々を過ごしながら鍛えている毎日だ。

だが今日、兵藤邸の地下に多くの者達が集まった。

オカルト研究部や生徒会はもちろんのこと、サイラオーグ氏やシーグヴァイラ氏といった若手四王の面々も一堂に会している。天界からもグリゼルダさんとデュリオ・ジュズアルドが来ており、神の子を見張る者からも神滅具保有者の幾瀬鳶雄さんが来ている。そして須弥山からも闘戦勝仏殿が御来訪だ。

しかもヴァーリチームも来ているけど、流石に何人かはピリピリしているね。

積極的に敵対はしなかったけど、元々禍の団のメンバーでもあるし仕方がないところはある。元々相性が悪いカズヒも、警戒を解いていないしね。

「……さて。この場のメンバーならもう知っているだろうが、初代ルシファーと悪魔の母リリスとの子供であるリゼヴィム・リヴァン・ルシファーが、クリフォトを結成して禍の団を統括した」

先生がそう告げ、そして思い出して眉をしかめる。

「目的はかつてイッセーに加護を与えた乳神がいる異世界への侵略。そしてその手段として、黙示録に記された獣であるトライヘキサの復活及び、異世界移動の邪魔になるグレートレッドの抹殺を掲げてやがる」

そこまで言ってから先生我慢できなかったのかため息をつく。

「既に吸血鬼共相手に多大な被害をもたらした上、奴の目的が達成されればこの世界に甚大な悪影響が出かねん。そもそもグレートレッドが同格と本気で戦えば、その余波で世界に壊滅的被害が発生するとみられているしな」

……あの男はあまりに危険だ。

それを経験している僕達の雰囲気を察したのか、リゼヴィムを直接知らないだろう人達も黙ってそれを聞いている。

そして、先生は僕達を見回した。

「既にどの勢力も緊張状態だ。これまで和平に応じなかった連中も今回ばかりは話し合いに応じている連中が出ているうえ、一部の連中が暴発しかける程度には……な」

またため息をついてしまった。

「お気持ちお察しします。ミカエル様が宥めたことで落ち着ている者も多いのですが……」

「まぁ、かのリリンが異世界侵略の為に龍神を殺すともなればのぅ。半端な神なら返り討ちにできる正真正銘の化け物、超越者という悪魔の一人じゃしな」

グリゼルダさんと闘戦勝仏殿がそこまで言うほどなのは、僕達もよく分かっている。

これまでの禍の団は、全体的に三大勢力を中心に狙っていたことから、和平に応じない勢力などは三大勢力が対処するべきと考えていた。

だけどクリフォトは違う。目的そのものが三大勢力どころかこの世界にない上、その手段として世界全体に悪影響を齎すだろうことを行おうとしている。

対岸の火事と判断できなくなっているなら、尚更だろう。

そして先生は更に続ける。

「だが実際問題、リゼヴィムはもちろん奴が復活させた邪龍共はどいつもこいつも化け物揃い。どの勢力も対応できるだろうクソ強い武闘派の神はいるが、立場や体裁もあるから身軽には動けねえ。……ようは高い戦闘能力と身軽な立ち位置を併せ持つ連中で構成された、対

テロ部隊ってのが必要なんだよ」
そこまで先生が言ってから、リヴァさんがウインクをしながら指を一本立てる。
「まぁ簡単に言えば、私達は対テロチームのメンバーとしてスカウトされたってところね？　う～ん、若い実力者が中心になって構成される多国籍部隊……ロマンね！」
その雰囲気に何とも言えない感じになる者いたけれど、おかげで空気は若干緩んだ。
こういう時、彼女のこの空気をあえて読まないところには助かるよ。肩を張り詰めてばかりだと疲れるしね。
そして先生は雰囲気を軽くしながら、にやりと笑う。
「そういうことさ。ま、基本的に有事に動けるメンバーが集まって対応するって任務を請け負う程度で考えとけ。……で、返事はどんな感じだ？」
そう言って先生が見渡しながら確認すると、リアス部長達はすぐに頷く。
「問題ないわ。そもそも、ヴァレリーの聖杯を取り返すと決めているのだもの」
「同感だな。こういう時に動かず何がバアル次期当主か」
「ルシファーの血族が悪事を働くのなら、シトリーとして動くべきでしょうね」
「そうですね。まぁアガレスは後方支援になりそうですが」
若手四王の方々はすぐに了承してくれた。
他の方々も特に断ることなく了承してくれる。
それを確認しながら、先生はデュリオに向き直った。
「ちなみにリーダーはお前がやれ」
「……ん？　……えぇぇぇぇぇ!?」
一回振り返って後ろを確認してから驚いたよ。
どうやら自分が言われたとは思ってなかったらしい。
「先生がやるんじゃないんですか？　適任な気もしますけど」
イッセー君が意外そうに言うけど、先生は苦笑しながら首を横に

振った。
「俺は悪の堕天使だぞ？　悪魔もそうだが各勢力の合同部隊のリーダーに据えるには悪役イメージが強すぎて体裁が悪い。だが天使なら体裁はいいし、三大勢力をはじめとする各勢力和平のリーダーとしてもいい感じの立ち位置になるからな」
「私アースガルズの主神の娘や闘戦勝仏須弥山の代表格さんの場合、後から三大勢力の和平に乗っかった感があるから微妙だしね」
　先生とリヴァさんにそう言われても戸惑っていたデュリオだが、その肩に強い力を込めてグリゼルダさんが手を置いた。
「デュリオ。ジョーカーともあろうものが、この名誉を断ることはないですよね？」
「あ、はい！　了解です姐さん」
　慌ててそう答えると、なんというか戸惑いながら片手を上げる。
「えっと、とりあえずそんなわけでリーダーになりました。よ、よろしく！　お菓子食べる？」
「はーい！　じゃ、後でリーダーのおごりでお菓子パーティして親睦会ってことで」
　瞬時にリヴァさんがそんな提案をして、デュリオはちょっと真顔になっていた。
　ちょっとしまらないけど、まぁそれはいいだろう。
「言っとくがリヴァ。お前さんも主神の娘だからそれなりの地位についてもらうからな？　あ、あと初代殿には悪いが、サブリーダーを頼みたい」
「構わん構わん。年寄りは若いもんのケツ持ちぐらいがちょうどええわい」
　そういいながら、初代殿はふと思い出したようにキセルを振った。
「おっと。天帝からの頼まれごとを忘れてたわ。対テロ部隊なんじゃが、天帝の要望で下部組織にある連中を所属させておけと言われておる」
　その言葉に、僕達は少し怪訝な表情を浮かべていた。
　天帝は曹操達英雄派に繋がりがあるのがほぼ確定だ。その彼が何

をしようというのだろうか。
少し不安になるが、先生はあえて表情を崩さずに視線で促す。
「天帝が大株主をやる代わりに独自に集めていた星辰奏者の適性持ちを所属させたＰＭＣ、アマゴフォースからの出向班を下部組織という形で動かせとよ。心配せんでも代金は天帝の財布からじゃ」
その言葉に、先生は軽く肩をすくめていた。
「……ああ、それぐらいならまぁいいだろ」
こ、これはまた意外なことになってきたね。
とはいえあれだけの数の邪龍を相手にする以上、相応の人海戦術がとれる土壌はあった方がいいか。
「ま、それぐらいならいいだろうさ。……英雄派の残党とかがこっそり紛れ込んでそう繋がりを示唆していたので、ちゃっかり抱え込んでいると思っている。サブリーダーがＣＥＯだとはまだ考えてもいないだが、まぁ悪事をしねえならお目こぼししてやるか」
……先生。本当に入ってそうむしろフロント企業だとは露にも思ってないなのでシャレになってません。
こうして見ると、相応のメンツが本当に集まっていると思うよ。
とはいえ、これだけのメンツが揃っているなら相応の戦力になるだろう。
如何にリリンと邪龍が相手とはいえ、対抗馬としてはちょうどいいかもしれないね。
「……あ、ならリーダーとして初仕事っすけど、チーム名はどうしよっかなーって思うんだけど」
と、そこでデュリオが片手をあげる。
ふ、ふむ。それは今重要なんだろうか？
と思っていたら、意外にもカズヒが頷いていた。
「まぁ確かに。各勢力を宥めることも踏まえるなら、それなりのインパクトがあって覚えやすい名称はあった方がいいかもしれないわね。箔ってものは意外と重要だもの」
先生もちょっと目を丸くするぐらいだけど、一理あると踏んだのか闘戦勝仏殿の方を見る。

「意外なところから賛同意見出たな。なら、年の功で初代殿が決めるか？」
「わしはどうでもいいわい。若いもんが決めるべきじゃしな」
と言われましても。いきなりそんなことを言われても―
「……D×D」
―と、小猫ちゃんがそんなことを言い出した。
「あ、なんとなくですので、あんまり注目しないでください……」
そう言いつくろうけど、先生達は意外といい感じだった。
「いいな！　ドラゴンオブドラゴンなんて言われるグレートレッドを守る部隊でもあるしデビルなりダウンフォールなりデウスなりディバインなりとメンバーにこじつけられる上に短くて覚えやすい！」
なんかかなり食いつきがいいような気がするんですけど、どうしたんですか先生？
僕がつい質問しようと思った時。今度はリヴァ先生が飛び上がって両手を合わせた。
「何よりあの疲れたD×D（デート・ディフェンダー）作戦を塗り潰してくれるわ！　大賛成!!」
……ああ、なるほど。
納得と同時に凄く賛成したくなったよ。
『『『『『『『『『『じゃあそれで！』』』』』』』』』』
ほら、あの作戦に巻き込まれた殆どのメンバーが賛同しているし。
「「鶴羽とリーネスがごめんなさい！」」
そして護衛された二人が謝っちゃったし。
な、なんかグダグダになりそうな雰囲気なんだけど、これでいいのかな？

Other Side

「ＨＡＨＡＨＡ！　戻ってくるとは思ってたが、流石に早すぎだろ？　お前どんだけだよ、曹操」
「自分で落としておきながら、本当に酷い神様だ」
「しっかし、ゲオルグとレオナルドはどこだよ？　お前のことだからあいつらもまとめてにするかと思ったんだがな」
「ゲオルグが冥府に落ちた魔法使い達と共に研究に没頭していてね。レオナルドもそれに付き添っている形になる」
「今代の神滅具保有者はさっぱり分からねぇなぁ。強くなる方向も特殊なケースが多いし、退屈はしないＺＥ！」
「それはともかく、須弥山が慌ただしいようですが。ミザリが何かしましたか？」
「……そんなもんじゃねえよ。聞いて驚け？　ミザリの親父でヴァーリの祖父、かのリリンで有名なリゼヴィム・リヴァン・ルシファーってのが動いたんだよ。よりにもよってグレートレッドを殺して乳神の世界に攻め込むんだとよ」
「……凄まじいことを考える者がいたものですね。シャルバが常識人に思えてきた」
「お前は参考にしとけよ。お前に足りないのはそういうところだＺＥ？」
「とはいえ、それなら兵藤一誠達は苦労していそうだ。ヴァーリも肉親は嫌っているようだし、二天龍は二天龍で大変だね？」
「ＨＡＨＡＨＡ！　いい意趣返しと思ってるところ悪いが、いい機会だしお前さんも参加しとけ？」
「……正気ですか？　他の神話から文句が出てきますよ？」
「あのリリンが相手なら、これぐらいの札を切っても押し切れるだろうよ。アザ坊達には俺から言っておくし、既に恩も知らずに買わされてるからやりようはあるだろ」
「知らずに恩を買わせた？　どういう―」

「……曹操、やはり戻ってきたようね」

「サイリンか!? よく、天帝に見つかって無事だったな」
「逆だ、逆。こいつが俺に自分達を売り込んでんだよ。既にお前さん達の保釈金や賠償金の第一弾も準備できてるしな」
「天帝の言う通り。あなたなら絶対に帰ってくると思っていたから、その為の器を用意したかったの」
「……そうか。恩に着る」
「いいわよ。どうせ天帝なら、体よく戦力にする可能性があったもの」
「ま、そういうこった。つっても体よく利用するどころか、アマゴフォースという企業の株主になっちまったからな。お前さん達を稼がせねえと俺の財布が寂しくなっちまう」
「そういうことよ。あと、混沌回帰の連中がリゼヴィムに同調しているもの。あまり好きにはさせられないわね」
「そうか。確かに、あいつらに大きな顔をされるのは心外だな」
「そういうわけだ。既に初代の爺さんを送っている、アザ坊が組織しようとしている対テロ部隊ができるそうでな。下請け部隊って形でアマゴフォースをねじ込めるように手配もしてるんでな」
「……アザゼル総督に同情するよ。顔合わせの時は胃薬でも持っていくべきかな?」
「ま、英雄名乗るってんならこれぐらいはやって見せな。邪龍やルシファーの首を一つぐらいは上げて見せろや?」

「……フロンズ殿。よろしいので？」
「構わんさ、ハッシュ。むしろ今後を踏まえると都合がいい」
「対テロ多勢力混合チームの下部組織として、バアル第四義勇師団を提供。これでは今後、サイラオーグ・バアル達を含めた彼らを我らが管理できなくなりますが」
「このままでもいずれはそうなるさ。むしろそうなった時に形だけでも大王派に属している方が、こちらの醜聞になるだろう？」
「なるほど。英雄譚は彼らに任せると？」
「少し違うな。我らの英雄は既にいるのだから、余計な軋轢は起こさない方がいいということだよ」
「……体よく切り捨てるいい機会になった。そういう判断でいいのでしょう。父上もお認めになっているからこそ、大王を納得したのでしょうし」
「いや、大王を説得したのは別人だよ」
「というと？」
「……初代殿が了承してくださったのさ。おかげで説得の手間が省けたよ」
「なるほど。いっそのこと完全に魔王派にした方がいいと。それだけ買ってもらっているということでしょうな」
「その分油断は出来んがね。まぁ、目立つ戦いは彼らに任せ、我々はその間にしっかりと地盤を築くとしようじゃないか」

明星双臨編　第四十六話　異議、出てきました!?

和地Ｓｉｄｅ

「よし、分かったなイッセー。Ｄ×Ｄのモットーは―」
「―おっぱいは正義!!」
とりあえず馬鹿なことになっているのは無視したうえで、大義名分は後に回しておくとしよう。
とはいえだ、万が一に備えた対テロ部隊ができたことは都合がいい。
こういう集まりが結成してメンバーになった以上、大事になった時にＤ×Ｄに属するメンバーは優先的に派遣されることになるだろうからな。俺達が窮地な時に何割かは来てくれることが確定でいいし、逆に彼らがピンチの時に俺達が出張ることになるのもいい。
「……しっかし、まさかあの乳神がきっかけでリゼヴィムがハッスルするとはなぁ」
「同感だな。確か、乳神とやらは自分達の世界で邪神達と争っているのだろう？　共に異世界に介入しているそうだが、まさか逆に侵略を受けるとは思ってもいないだろう」
俺の呟きにサイラオーグ氏がそう言うが、確かにそうだった。
まさかあのどこからツッコめばいいのか分からない訳の分からない状況下がこんなことに繋がるとは。世界って訳が分からないよなぁ。
と、俺がそんな感慨にふけっていると、先生がヴァーリの方を振り向いた。
「……ヴァーリ。分かってると思うが、リゼヴィム達に対する抑止力として、お前達にＤ×Ｄの参加を要請する。その事実と功績をもって、お前が禍の団に参加していたことに由来する不信感を払拭させる

つもりだ」
……まぁ、此処にヴァーリチームがいるというのならそうなるわな。
正直に言えば、シーグヴァイラ・アガレスなど不満げな表情を浮かべている者も多い。
それを分かったうえで、先生もあえて言っているんだろう。
となると、組織の一員として話を進める提案をした方がいいか。
「でも先生、各勢力から反対意見が出てきてもおかしくないのでは？」
俺がそう言うと、先生は少し頷いてから軽く肩をすくめる。
「確かにそこは懸念だが、オーディンの爺さんが全て承知のうえでヴァーリを養子に迎えたいと言ってててな。世間的に悪役イメージが積み重なってる悪魔（サーゼクス達）や堕天使（俺）、立ち位置的に魔王血族の保護者に向いてない天界（ミカエル達）とは違い、おいそれと文句が言われない後見人が出てくれたのならやりようはある」
なるほど。その辺に抜かりはないと。
そういえばヴァーリのこと気に入っている感じだったな、オーディン神。
「……アルビオン。宿敵と組むことになりそうだが、構わないのか？」
ヴァーリは相方を気遣ったのかそう確認するが、つまり色よい返事が貰えそうだな。
正直もっと厳しい対応をしてもいいと思うんだが、まぁ相手が超越者と邪龍軍団じゃそうも言ってられないということか。
とはいえ、長年の宿敵と本格的に轡を並べるのはアルビオン的にどうなんだ？
『構わんさ。むしろ赤いのとこれからも話し合えるとは素晴らしいことじゃないか』
はい？
アルビオンの言い草に俺が目を丸くしていると、イッセーの左腕からドライグの気配が目覚める。
『まったくだ。白いのとかつての話をしていられるとはいい時代になったもんだ』

ドライグまでなんて機嫌がよさそうなんだ。
正直二天龍の関係性を知っている者達全員が、軽く驚き気味だったりしているな。
「ずいぶん、仲が良くなったな？」
ヴァーリも思わぬ展開に戸惑っているが、二天龍はむしろ上機嫌だ。
『当然だ。我らは対を成す二天龍であり、ともに乳と尻の苦しみを味わった者。同胞といがみ合ってどうするのだ』
『そう！　我らが組めば、乳だの尻だのは怖くない！　白いのとなら耐えられる、乗り越えられるのさ！』
ドライグもドライグでノリノリだな。
『『ねー！』』
ねーってなに!?
どんだけ意気投合してるの？　っていうか性格が大きく変わっているぞ！
こ、これが乳と尻の苦しみを共に味わい、分かち合った者達の関係性だというのか。
「長年続いた二天龍の確執が、こんな形で収まるとはな」
サイラオーグ・バアルも地味に唖然としているし。
幼児退行や失語症を患い、封印された魂を癒すために試行錯誤で投薬までされた。その果てに、過去の確執を乗り越えて同胞とみなすようになったというのか。
とりあえず、言うべきことは一つだな。
「イッセー。お前マジで何やってんだ」
「俺のせいかよ!?　……ですよね！　なんかゴメンね!!」
俺がつい言ってしまうと、イッセーもやけくそ気味だった。
まぁそれはそれとして、返答はいかに？
俺たちがその様子をうかがうと、ヴァーリは少し考えてから肩をすくめた。
「お互いに利益が出そうなときは協力しよう。後は独自にやらせてもらう」

「へいへい。素直じゃねえ合意だこと」
勝手知ったる先生がそう受け取ったのなら、まぁそういうことなんだろう。
なんか釈然としないものもあるが、まぁ戦力が増えるのは―

「異議あり。というか、異議ができたわ」

―うん、そこで終わらないよね。
たぶん何かしら言ってくると思ったよ、カズヒねぇは。
最悪、俺が体を張って止めよう。
俺はその辺の覚悟を決めながら、とりあえず様子を見ることにした。

アザゼルＳｉｄｅ

おいおい。和地の奴、覚悟決めた目をして様子見に入りやがった。
最悪の事態になる前には止めるが、そうならない限り割って入らない方向だな。あいつもヴァーリチームのスタンスは受け付けないだろうから、まぁ仕方ねえのか。
ったく。絶対何かしら言うと思ってたが、寄りにもよってこのタイ

ミングで言うか？
まとまりかけたタイミングじゃなくて最初の方で言ってくれよ。ここからとりなすの大変だろ。
俺はため息をつきたくなるのを我慢して、とりあえずカズヒに向き合った。
「……お前、今まで何も言わなかったから容認はしてくれると思ったんだがな」
イヤ、ホントそこだ。
カズヒだって状況はわかってるだろうし、戦力は多い方がいいともわかっているだろう。ガチのダーティジョブ担当だろうし、なおさらその辺はわかってるはずだ。
これはあれか？　とりあえず反対意見を出して俺が説得させる形で納得させるとかか？
そうであってほしいと思いながら、俺は概要をまとめることにする。
「いいか？　北欧アースガルズ主神であるオーディンの爺さんが養子にする形で恩赦を引き出したうえで、史上最強の白龍皇になるっつーかすでになってるヴァーリ率いるヴァーリチームを戦力にする。もちろんうるさい奴もいるだろうが、成果を上げることでさらに恩赦を引き出せればいい。……ここで異議を立てれるだけの要素、さすがにお前も持ってないだろ？」
実際そうだと思ったんだが、カズヒは肩をすくめながら首を横に振った。
……あ、これマズい。
絶対何かしらの切り札がある。そういう顔だ。
と、とりあえず最悪の場合、プルガトリオ機関を経由する形でミカエルに出張ってもらおう。
さすがにミカエルやクロードから言えば、引くはずだし―
「悪いけど、それは白紙にできるわ」
―と思った瞬間、カズヒの奴は一枚の書状を見せつけた。
っていうかちょっと待て、その紋章とオーラって……っ！

「オーディンの爺さんからの委任状だとぉ!?」
俺は速攻で確認してから、勢いよくリヴァの方を見る。
「ごめんなさいね、総督。カズヒの言い分に私も一理あると思ったから、お父様に繋ぎを作ったわ」
マジか!? っていうかそういうことは言っとけよ!?
しかも文面を確認するとマジでやばい。
「……ヴァーリ・ルシファーを養子とすることによるヴァーリチームの減刑措置において、下記の条件を満たした場合、その判断を実子リヴァ・ヒルドールヴ及び将来の養子であるカズヒ・シチャースチエに一任する……っ」
あの爺、そういうことは伝えとけよ!?
しかも下記の条件は―
「……ヴァーリチームが己が罪人であることをわきまえ、それにふさわしい態度と感謝を、形だけでも見せなかった場合……っておい」
俺はカズヒを見ると、カズヒは眉間にしわを寄せながらうなづいた。
「私としても、この馬鹿どもに後悔とか改心までは求めないわ」
そういったうえで、つづけてヴァーリたちに心底から嫌悪の表情を向けてきた。
「ただし、懲りて己を戒めることは絶対条件よ。寄りにもよって和平会談にテロリストを招き入れる形で裏切った挙句、その理由が強者と戦いたいとからいう愉快犯じみたものだもの。恩赦を受けるにしてもそれ相応の殊勝さは必須だわ」
「……別に、俺は協力なんて無くても構わないんだがね」
ヴァーリもヴァーリでそういうこと言うのやめろよな!?
完璧に一触即発になっちまったぞ、どうすんだこれ。
「それならなおさら反対ね。自分のやったことのケジメを付ける気が無い奴に、特例の恩赦なんて必要ないわ。勝手に共食いでもしてなさい」
カズヒもカズヒでキレッキレなことを言ったと思ったら、なんか急に考え込んで軽く頭を下げてきたぞ。

ヴァーリですらなんでそうなったのか理解できない顔だ。っていうか、俺たちもさっぱりわからないんだが。
こいつなら意図を言うと思ったんで見守ると、カズヒは苦笑を浮かべていた。
「……ごめんなさい。そんなことを言われたら、本当にいやでもリゼヴィムに仕掛けなければいけなくなるわね。ポーズだけで済ませなくなるのはかわいそうだわ」
……周囲の気温が十度ぐらい下がった気がした。
というか、ヴァーリチーム全体がピリピリしてきてるし、ヴァーリはキレる一歩手前だ。
「……おかしいな？　俺がリゼヴィムに挑まないと思っているのか？」
「繕わなくていいわよ。さすがにかわいそうだから、こんなことを言いふらしたりはしないもの」
カズヒの奴は動じることなく、むしろ半分ぐらい本気の表情でそんな風に返してきやがった。
おいおい、なんかこのままだとまずいんじゃないか―
「……大嫌いでも勝ち目なんてない。だったらせめて隙あらば潰すポーズを付けないと、薄っぺらいプライドなんて守れないものでしょう？　白龍皇なんて立場だと、どうしてもそういう体裁を気にせずにはいられないものね―」
―その瞬間、ヴァーリが抜き打ちで魔力弾を放った。
和地がとっさに障壁を張ろうとしたが、カズヒはむしろ踏み込むと、神器から取り出したアタッシュナイダーのアタッシュモードでそれを砕く。
おいおい勘弁してくれよ。このままだとマジで殺し合いになるぞ。
つってもうかつに介入すると、それこそが血で血を洗う大暴れになりかねねえ。ヴァーリの野郎がマジギレしたらシャレにならねえ。
「あの明けの明星の面汚しは、俺が殺したくてたまらない奴の筆頭だ。俺はもともと奴を殺すために力をつけてきたといってもいい。それを―」

「そういうことにしたいんでしょ？　わかってるわよ」
カズヒの奴はさらにキレッキレで笑顔まで浮かべている。
おいおい、この期に及んでさらに挑発するってか。
もう挑発目的なのが見え見えで、カズヒはむしろ慈愛の表情まで浮かべてやがる。
まずいぞこれ。
こいつが悪意を持ってガチで動くとまずいのはよく知ってる。だがヴァーリチームはその辺について理解が足りてないだろうし、多分ここからが本番だって気づいてない。
最悪、俺が体を張らないとまずいんじゃねえか!?
もう寒気が止まらねぇんだが―
「リゼヴィムに比べれば貴方なんて豆電球だもの。勝ち目がないことを理解したうえで、勝てるというポーズをとらないと耐えられないメンタルの矛盾には同情するわよ」
―あ、これ不味い。
「……いいだろう。ここまで愚弄されておきながら、このまま帰ってはそれこそ沽券に関わる」
やばいレベルで殺意を出しながら、ヴァーリはカズヒに近づくと殺意の籠った目で睨み付ける。
それをカズヒは涼しい顔で受け止め、更に一枚の紙を取り出した。
「ならこうしましょう。この条件の元、ヴァーリチーム（あなたたち）と私が集めたメンバーで勝負しましょう？」
おいおい、その紙は―
「自己契約証明文（セルフギアス・スクロール）。この書面をもって交わされた契約は双方の死後の魂すら縛る。魔術回路保有者が止めることなどできない絶対の契約書よ」
―この女、そんなものまで用意してやがったのか!?
最初っから覚悟完了で準備してやがったな。それも、この流れになる可能性を踏まえて、絶対に断れないように激昂までさせやがった。
駄目だ、こうなったら俺も止められねえ。
「……なるほど。アザゼルがオーディン神やサーゼクス・ルシファー

達の協力をもって進めている、他勢力も行える国際レーティングゲーム大会。そのルールのテストも兼ねて、俺達と君達でレーティングゲームをするということか」
ヴァーリは書面を確認しながら、その条件を見てけげんな表情を浮かべている。
「試合内容は時間無制限一本勝負。現在試験中の国際レーティングゲームの判定基準に合わせたチーム構成ができるなら、何人でも追加メンバーを用意してもいい」
あ、その辺はしっかり用意しているんだな。
増援メンバーも用意できるってのは、ヴァーリチームにとってもカズヒにとっても有利か。
最悪ヴァーリはルシファーの直系だから、ある程度は当てもありそうだしな。
まぁたぶんしないだろうがな。それでもできると前もって明言しておくのなら、しなかったヴァーリの落ち度にできるというわけか。
外野からの物言いをなるべく避けることまで考えてやがる。カズヒの奴、最初からここまでプランを立てての行動か。怖い奴だ。
「……君達の勝利条件は王の撃破。俺達全員の対テロチームでの処遇は、アザゼルやリアス・グレモリーの前で君が告げ、了承された物を無条件で受け入れる」
お、思ったよりマシな条件だな。
俺やリアスがきちんと精査して是非を決めれるなら、まぁやばすぎる内容になることは―
「そして俺達の勝利条件は、カズヒ・シチャースチエの抹殺のみ。それが対価そのものともいえるわけか」
―オイちょっと待て。
「……カズヒねぇ。流石にそれは止めたいんだけど？」
和地もそりゃ言うわな。
ただカズヒの奴はすました顔だ。
「……堕天使元総督や現ルシファー。更に北欧アースガルズの主神の顔に泥までぬる要求をするのだもの。命ぐらいかけるのが責任とい

う物よ」
あ、これ説得できねえ。
いつものことだが既に覚悟を決め切ってやがる。
カズヒもそうだが、ヴァーリもヴァーリで止まる気がねえ。
徹底的に挑発までされたしな。こりゃ絶対止まらねえぞ……っ
「前から思っていたが、君はどこまでも俺達のことを舐めているらしい。君も相応に事を起こしてるミザリの事ようだけどね？」
「だから言うのよ。折角恐ろしく軽いケジメ主神の養子特権で対テロ部隊に従事することで済ませられるっていうに、それを理解もしないなんて、論外でしょう？」
互いに至近距離で睨み合っている。
敵意も怒気も殺意も溢れまくっているが、戦う機会は別にあるから今は動かない。それ止まりなのがよく分かる展開だ。
ああ全く。これ絶対ガチの激突で決着つけないと収まらねえ。
「……誇り高き明星にして白き龍の皇帝は縛られない。それが理解できないなら、死を持って思い知らせてやろう。醜悪な悪逆に染まった銀メッキ如きが、白銀の極覇龍に叶うと思うなよ？」
「白ペンキで塗られた蜥蜴には分からせてあげるわ。……先達とは後進に、自分と同じ失敗を繰り返させないのが務めの一つ。そして誇りとは貫く為に己すら縛る矜持だとね」
……止められねえなぁこりゃ。
はぁ、サーゼクス達になんていえばいいんだよ。

和地Ｓｉｄｅ

思わぬ形で決闘が成立した後、俺はそのまますぐに「じゃあ人員を

集めてくるわ」といったカズヒねぇを追いかける。
「カズヒねぇ！　ストップストップ！」
「悪いけど忙しいから、歩きながら話してくれる？」
　ああもう！
　俺は何とか歩幅を合わせると、カズヒねぇの方を覗き込む。
　自己契約証明文なんて使ったらもう断りようはない。そういうものだということは俺も分かっている。
　っていうかあそこまで用意してるってことは、ヴァーリがどういう反応するか読んでただろ。
「……そこまでする必要あるのか？」
「当然でしょう？　和地こそ冷静に考えて」
　俺にそう断言しながら、カズヒねぇは俺の目を覗き込むように見つめてくる。
　……その眼には怒りはあまり込められてない。少なくとも、ヴァーリに対する怒りは俺達が思っているほどじゃないようだ。
　だったら、なんでだ。
　俺の視線に込められた意味を受け取ったのか、カズヒねぇは肩をすくめる。
「あんなふざけた態度で恩赦が認められれば、まともに罰を受けている連中や被害を受けた人達が馬鹿を見るわ。……何より兵藤邸（うち）のメイド達が馬鹿を見ているじゃない」
「……た、確かに」
　それは確かにそうだよ。
　兵藤邸のメイドの殆どは、ディオドラの眷属が主体になっている。
　やむを得ない理由とはいえ禍の団に協力した彼女達が、社会復帰することを認めさせる為の一種の形式的な罰という側面がある。それが兵藤邸のメイド達だ。
　だからインガ姉ちゃんはもちろん、ベルナや春っちだってメイドをやっている。
　確かに、それに対してろくすっぽ反省している風に見えないヴァーリチームがあの流れで免罪というのは、メイドのみんなに対してなん

か悪い気はする。
……いや違うな。
だとするなら、俺が言うべきだった。
インガ姉ちゃん。春っち。ベルナ。彼女達が馬鹿を見ているような流れに異を唱えるのは、むしろ俺がするべきことだ。
あの流れでそれを怠っていたのは事実。それは素直に認めて反省しよう。
だからこそ。
「分かった。なら俺もメンバーに入れてくれ」
「却下」
即答で切って捨てられた。
流石に非難めいた視線になってる自身があるが、カズヒねぇは肩をすくめている。
「貴方はまず、インガの方についててあげて。〆るのは私がメインでやるから、貴方は支える方をお願い」
……そうだな。
俺が納得したように、カズヒねぇも微笑みすら浮かべていた。
「私を本気で愛してくれるなら、私以外もないがしろにしないで愛してあげて。それこそが、私の愛する瞼の裏の笑顔の君なんだから」
ああ、そこは確かにそうなんだ。
だからこそ、俺にはそっちを優先させたいのだろう。というより、多分強引に参加しようとしたらこの場でガチバトルが発生しかねない。
……だけどさぁ。
「実際問題、俺無しで勝ち目あるのか？　イッセー達も参加させる気ないんだろ？」
パラディンドッグやサルヴェイティングアサルトドッグを併用してとはいえ、俺のポテンシャルはオカ研でも指折りだ。
たぶん使用した状態の総合力なら、上回っているのはイッセーかアザゼル先生、そしてカズヒねぇぐらいだろう。
そして先生やイッセーを入れるつもりもないんだろう。それぐら

いは読めている。
実際素直に頷いているし。
「ええ。この件はヴァーリに対して批判的なメンツでやるべきだし、五割は私闘だから巻き込む気もないわ」
だろうなぁ。
まぁ、カズヒねぇのことだし当てもあるとは思う。
思うけどさぁ。
「……ほんと、勝ってくれよカズヒねぇ」
こんな理由で死別とか、流石に嫌だぞ。
俺の心配を素直に察してくれたのか、カズヒねぇはむしろ不敵な表情を浮かべていた。
「大丈夫。勝ち目はある……というか、決まれば絶対にヴァーリをぶちのめせる伏札はあるもの」
そう言いながら視線を変えるカズヒねぇに釣られて、俺もその先を見る。
其処には、カズヒねぇにとって頼りになる親友がいた。
鶴羽にリーネスに謎のおっさん……いや待って？
「その、どちら様？」
俺が思わず効くと、そのおっさんは軽く手を上げる。
「お前さんが、ブラコン超直球の日美っちを射止めた坊主かい？　俺は道間日美子の高校時代のクラスメイト、接木勇儀ってんだ」
……俺はカズヒねぇの方を勢いよく振り返った。
「え、カズヒねぇってまだそんな繋がりあったの!?」
「いえ、私もびっくりしているの。異能とは全く関係ない、一般人としての繋がりがこんなところで関わるとは思ってなかったわ」
カズヒねぇもなんかすすけた感じだった。
なるほど。つまり松田や元浜みたいな繋がりだったと。
だったらなんでこんなところにと思うが、それはこの際おいておこう。
俺は勇儀さんの方を向いて、しっかりとその目を見たうえで問いかける。

「カズヒねぇを任せていいんですね？」
「安心しとけ。事前にそういった依頼も受けて、上にも話を通している。……ダチの力になるし仕事はきっちりこなす。両立できるならするのが大人ってもんだ」
真っ直ぐに視線を合わせての答えに、俺は息を吐いて力を抜いた。
ああ、この人は信用に値する。
視線ではなく顔の向きを変え、初対面の俺に対して真摯な言葉を投げかけた。そもそも、この場にいるならカズヒねぇの事情を知ったうえでだろう。
なら、託せる。
「……鶴羽も頼む。リーネスもお願いな」
愛する女と頼れる仲間に頭を下げると、鶴羽は胸を張ってそれに応えてくれる。
「任せときなさい！　既に準備は進めてるってね！」
隣のリーネスに至っては、すっごい勝利の確信に満ちた表情だ。
「既にほぼ完成しているから大丈夫よぉ。ふふふ、白龍皇なら絶対効くし、実験台にはちょうどいいわぁ」
……逆にヴァーリが心配になってきたな。
いやまぁ、カズヒねぇもレーティングゲームのルールに乗っ取るなら殺しはしないだろう。うん。
そこまで考えて、俺はカズヒねぇに向き直る。
「そっちは任せる。勝てよ、カズヒねぇ」
「勝利の美酒は注いで頂戴。それにインガは任せるわよ」
どうせ言っても聞かないし、ならやることをしっかりやるとするか。
本当に、頼んだからなカズヒねぇ！

明星双臨編　第四十七話　不倶戴天

イッセーＳｉｄｅ

そんなこんなで三日経って、俺達は冥界に転移していた。
今回の決闘としてのレーティングゲームは、アザゼル先生が中心となって進めている悪魔以外の三大勢力や神話が参加できるタイプの国際レーティングゲームのテストケースも兼ねているらしい。ちょうどいいからデータをとるとか。
駒価値などは結構自由にできるようで、神クラスでもない限りは騎士とか僧侶とかで二駒になることはないとか。あと普通の眷属悪魔とも違う設定にするから、場合によっては俺が兵士じゃなくて戦車の駒相当で出ることもできるらしい。
ただ、今回かなり注目されているのはそこじゃない。
あの白龍皇（アルビオン）ヴァーリと、あの悪祓銀弾（シルバーレット）カズヒが激突するってことで、かなりのメンツが興味津々らしい。
ただ色々体裁があるから神様とかが出張ってこれないし、事情が事情だから大っぴらなゲームにもできない。
なので直接見て雰囲気などを確認しろって感じで各勢力から色々派遣されてたりしている。
……俺からするとゲーム感覚で見てほしくないんだけどなぁ。
結局カズヒはカズヒで、俺達には一切頼らず自力で戦力集めに走ってたらしい。
リーネスや南空さんはそれに協力していたけど、九成の協力も断ったそうだ。
ちなみに、九成は今回インガさんの方に行ってるからいない。
―もうこうなったらカズヒねぇが勝つことを前提に動く。具体的にはレストラン予約する

なんてこと言ってたけど、あいつメンタル大丈夫だろうか。
普段や荒事なら心配ないけど、恋愛が絡むとバグるしなぁ。
そんなことを持っていると、見覚えのあるメンツが何人も来ていた。
「あ、フロンズさん」
「息災のようだ赤龍帝。今回は色々と心労がかさんでいるだろうが」
そうなんです。結構胃が痛いです。
だけどフロンズさんまで来てるとは思ってなかったな。
油断できないところは色々あるけど、基本的には足の引っ張り合いはしない人だからな。愚痴ぐらいは言えそうかも。
と思ってたら、その後ろから幸香が……なんか大量にビニール袋を持ってきてるんだけど。
あとたくさん入ってるな。良いにおいまでするけど食べ物かよ。
「……お前は観光気分なんだな」
「それはそうであろう？　かの悪祓銀弾（シルバーレット）とヴァーリ・ルシファーの激突ともなれば、中々見れるものではないからのぉ」
そう言いながら幸香は、面白そうな表情で会場の方を見る。
こいつ、一応カズヒはお母さんなんだろうに。
本気で観戦ムードだな。ちょっとイラってくるぞ？
「……へぇ。こんなところで会えるとはね」
と思ったら、ヴァーリまでラーメンの器を持ちながらこっちに来たし。
げんなりしていると、幸香とヴァーリが軽く向き直ってバチバチと視線をぶつけ合っていた。
「しかしお笑い種だのぉ？　散々テロをやっておきながらほぼ無罪で済みそうだというのに？　余計なことを言って余計な諍いを生むとはなぁ？」
「ふん。尻尾を振って飼い犬になったお前達よりはましだと思うけどね」
ヴァーリチームって禍の団では他の連中と折り合い悪かったみたいだけど、後継私掠船団でも同じだったよなぁ。

っていうか、盛大に馬鹿にしてたな幸香達。
実際、今も幸香はヴァーリに哀れみすら向けている。
「誰にも縛られぬ無頼を気取っているつもりか？　真に優秀な英傑ならば、自らを見出し迎え入れる者には筋を通して仕える者だぞ？」
「首輪をつけられて躾けられることが誇りとはね。覚えておくといい。龍にとって誇りというのは、何物にも縛られぬ自由という物だよ」
ヴァーリは幸香にそう言い返すけど、幸香は見るからにこぉ……憐れんでる目つきだった。
あ、これあれだ。「ああこいつ、可哀想な生き物なんだ」って目だ。具体的には俺がひきつけを起こすようになって半月足らずで、ひきつけを起こしているときに時々向けられる目だ。
ヴァーリも憐れまれてることに気づいたのか、更になんていうかオーラがピリピリしてる。しかも幸香は幸香でちょっと楽しそうに哀れみの表情を強めているし。
似たような目を向けられ慣れている身として同情はするけど、カズヒは幸香と連戦して勝てる相手じゃないと思う。抑えろヴァーリ。
「ちょ、その辺で押さえとけよヴァーリ。誇り高いドラゴンなら周りも気にしない方がいいだろ？」
「幸香もだ。燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんやというように、この手の輩に何を言っても無駄だろう」
俺とフロンズさんがそれぞれヴァーリと幸香を宥めるけど、内容があれだった所為でちょっとまずいかも。
幸香は俺まで可哀想なものを見るようにしているし、ヴァーリはフロンズさんにまで敵意を向けてきた。
あ、これ不味いかも。
「……ふむ。主の為に自らを鍛え上げている男と思ったのだが、妾の見込み違いだったのかのぉ？」
「ふん。躾けられた飼い犬でなければ良しとできないとは、所詮貴様も龍を愚弄する愚者ということか」
同時にそう言い放ち、その瞬間―

「「死にたいのか？」」
―お互いがお互いに睨み合ってきたし！
「幸香、抑えておきたまえ」
「ヴァーリも、ストップ！」
フロンズさんと俺が抑えるけど、一歩間違えばこの場で殺し合いが勃発しかねない状態だ。
おいおい勘弁してくれよ。
ただでさえヴァーリはまだオーディン爺さんの養子になってないんだ。しかも幸香はフロンズの配下として、大王派が全面的に認めている奴だ。
ここでヴァーリと幸香が激突すれば、カズヒと決闘する以前の問題でヴァーリが袋叩きに合っちまう。
「フロンズさんも！　あんまりヴァーリの神経を逆なでしないでくださいよぉ！」
俺はヴァーリに組み付く準備までしてフロンズさんに文句を言う。
俺もちょっと幸香の神経を苛立たせたかもしれないけど、フロンズさんの場合遠回しだけど間違いなくヴァーリを馬鹿にしてるよ。そりゃ怒るよ。
この人悪い人じゃないんだろうけど容赦ないからなぁ、もう。
「これは失礼。これでもオブラートに包んでいるのだがね」
え～……。
ここまでヴァーリチームが嫌いだとは思ってなかった。
後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）を傘下に入れられるんだから、禍の団にいたというだけで色々言ったりはしないと思ってたんだけどなぁ。
「……そんなに嫌いですか、ヴァーリチーム（こいつら）」
「評価においては底辺に近いとも。なまじ性能が高いのが余計に悪い」
俺が聞いたら即答だったよ。
「知性体とは法という秩序を設けることで、烏合の衆を統率して大いなる力にすることで世界を開いてきたのだ。まして王族といった貴種にとって、責務を負わずに偉ぶる者など貴種という概念を崩壊させ

る悪性腫瘍も同然だ」
そう断言するフロンズさんは、ヴァーリに対して本当に冷たい目を向けていた。
ああ。この人は本心から、今のヴァーリを評価してないんだ。評価できるところが全くないんだ。
「自由を主張したいのなら、最低限の義務を果たしてから吠えたまえ。義務無き自由はただの無法、獣の論理と同義だよ」
心の底からヴァーリのことを見下しているって、態度で堂々と宣言している。むしろ自分から言っているって自覚すらある感じだ。
ああこの人、本っ当にヴァーリのことが嫌いなんだ。
「獣の世界がお望みなら人里から離れるといい。最も、そこでは相手も同じことだから、そこだけはきちんと覚悟をするべきだがね」
断言するフロンズさんは、片手で既に幸香に指示を出している。
状況次第で仕掛けていい。そう合図しているのが俺にも分かる。
「本能を理性という手綱で上手く動かすことこそ、意志という知性体の在り方。そもそも手綱を握る気が感じられん者を、知性体とみなせるほど私は弛み切った器を持ってないのだよ」
ヴァーリにそう吐き捨てながら、フロンズさんは後ろの幸香を微笑を浮かべながら見ていた。
「逆に彼女は優秀な知性体だ。自らの欲望をよく知ったうえで、それを叶えるために理性という手綱をきちんと扱っている。……どちらが優れた知性体かなど、考える余地があるかね？」
ああ。この人は心の底から、嘘偽りなく言い切っている。
ヴァーリは幸香よりろくでなし。逆に幸香たちはヴァーリより上等。そう心の底から思っているからこそ、ヴァーリチームを堂々と罵倒している。
ただ、さぁ……っ
「……俺のライバルを馬鹿にするの、その辺にしてくれません？」
俺も、さすがにちょっとムカッと来たぜ。
フロンズさんは大王派で貴族主義だし、俺が個人的に何かを言うといろいろ言われそうだ。それはわかってる。

エルメンヒルデとの会話で嫌って程理解してるからな。外野から見れば、本来俺は赤龍帝だけどリアスの下僕でしかないってことは。
だけど、俺にだって我慢の限界はあるんだよ。
「流石に後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）が問答無用でヴァーリチームよりマシってのは納得できないんですけど」
「そうかね？　こちらの言い分は大体言い切ったつもりだが」
フロンズさんは、とりあえず俺の言い分を聞くつもりらしい。
軽く言い返したけど、そのまま視線で俺を促している。
この人はその辺が鷹揚だからありがたい。貴族主義だけど、俺が相応にトップに気に入られている事実も考慮していてくれているんだろう。聞いてみる価値があるのなら聞いてもいい程度には、考えてくれている。
いいさ。じゃぁその辺で甘えるとしますかね。
「好き勝手に自分達の為だけにテロを繰り返した後継私掠船団（そいつら）が、ヴァーリチームよりマシってのは納得いかないです。だってヴァーリチーム（コイツラ）、仕事の時以外は積極的にテロなんてしてないですよ？」
「禍の団という大規模テロ組織に属する時点で、大した差があるとは思えんな。少なくとも、呪術的拘束や物理的隔離を受け入れつつ、精力的に懲罰活動をしていることに比べればね」
おいおい本気かよ。
「悪意満々で略奪活動する連中が、テロリストではあっても悪辣なことをしてない奴らよりマシだって？　ちょっと納得できないですね」
「悪意が無ければ何をしてもいいと？　堂々とテロリストであることを自覚的に立ち回っている組織にいる時点で、社会的には悪逆非道の連中だろう。むしろそんな組織にいながら悪の側であるという自覚がない方が始末に負えん」
俺の反論にそう返すと、フロンズさんはむしろヴァーリを侮蔑に近い表情で見る。
「そもそも三大勢力の和平という、育ての親の悲願が成就するときにテロリストを手引きし、一歩間違えれば三大勢力の頭といえる人物が

失われる事態を引き起こした時点で十分すぎる悪行だとも。忘れていると思うが、現魔王政権(我々)は貴族主義階級社会(平等ではないの)だよ？」
「だから何も知らない人間たちを何人も誘拐して洗脳して、死ぬような実験でテロを起こさせた英雄派(連中)と同じだって？　自分の血筋だの権威だの覇権だのばかり言って、それが認められないから冥界事滅ぼそうとする旧魔王派(奴ら)と同類だって？」
　ああ、確かに貴族主義者ってのは人の価値を平等にはしてないだろうさ。
　だけど、偉い人でなければ何人死んでもいいみたいないい方、納得できるなら俺はこんなところにいやしないんでね。
　俺は真っ直ぐに幸香とフロンズさんを見たうえで、はっきり言ってやる。
　ああ、これは言ってもいい。言っていいだろうさ。
「……堂々と自分達が略奪者なんて名乗って暴れる連中が、悪党だって自覚してなくて何だってんだ。暇人の方が百倍マシだね!!」
　これだけは、例え他の偉い人がいる前だって断言できるんだよ！
　フロンズさんはそれを聞いたうえで、軽く息を吐きながら肩をすくめた。
「罪業とは動機と被害で決まるものであり、刑罰とはそれらに加えて下手人達の対応で決める物だ。過程はどうあれ我々の手駒として命がけで戦うことを決めたうえ、相応の手土産を持ち込んだ彼女達に司法取引じみた対応を行ったことは、さほど恥じる気はない」
　そう言い切ってから、ヴァーリチームの方を見るフロンズさんの視線は冷めていた。
「手土産の類はない。恩赦に対する反応も悪い。そもそも自分の立場を理解していない。そんな立ち回りもろくにできぬ輩などに、私は敬意を覚えず嫌悪を覚える主義だよ」
　そうかい。
　ならこっちも言ってやるさ。正直前から思ってたこともあるしな。
「俺は逆ですね。どっちかっていや、そいつらの方がよっぽど嫌悪を覚えるさ」

カズヒの、道間日美子の知り合いだってこともあるんだろう。
ただ、それとは別の意味で俺は幸香が認められない。
ああ、はっきり言えることはある。これは心から断言できる。
「誇り高い白龍皇（俺のライバル）の無頼を、節操ない私掠船団（そいつら）の擦り寄りより下扱いしてんじゃねえよ……っ」
流石に我慢できないんで、殺意は無しでも敵意は見せたぜ。
正直抑えきれずにオーラまで漏れてる。だけど構うもんか。
幸香達みたいなイカれた覇道なんか、ヴァーリたち趣味人の覇道より質が悪い。
其処だけは、はっきり言わせてもらう。
「……残念だ。所詮貴殿も二天龍の宿主か」
フロンズさんは失望したように、そうため息を吐いた。
そこから俺を見る視線は、間違いなく今までより冷たくなっている。
「龍種の誇りなど、所詮自分達が気ままに生きる為だけの我儘に過ぎん。誇りとは己自身を気高くある為に縛るものと知るがよい」
はっきり言いきったうえで、フロンズさんは何か思い出したように俺の方を見直した。
「……そういえば、貴殿は覗きの常習犯で懲りる様子もなかったな。そんな程度の奴には、身勝手なだけの連中が素晴らしく見えるのも仕方がないか」
そうかい。
悪かったな此畜生。シャルロットに恥じないからこそやめているけど、男が女を求めることがそんなにおかしいか。
「……燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや、でしたっけ？」
俺がフロンズさんが言っていたことを言ってみると、フロンズさんは肩眉を上げる。
「その通り。簡単に言えば「愚者は賢者の考えを理解できない」という意味だったはずだ」
そっか、ならこれは言ってもいい。
「そっくりそのままあんたに返しますよ。少なくとも俺にとっちゃ、

ヴァーリチーム(こいつら)より後継(そい)私掠船団(っぱら)を評価してんだから当然だ」
「……なるほど。これは理解し合えそうにないな」
フロンズさんは特に怒ることなく肩をすくめるだけだった。
「精々お互いに激突しないことを祈り合おうではないか。どっちに転んでもお互いが苦労する結果になりそうだ」
「そうですね。俺も同感ですよ」
この人達の戦い方に付き合うと、絶対に俺もろくでもないことになりそうだしな。
「……ふむ。まぁ妾も曹操達に比べれば、そ奴らの方がましだとは思っておるがの」
「そこはお互い様か。まぁ、帝釈天(パトロン)に手を切られるようでは当然だろうがね」
幸香とヴァーリは曹操を馬鹿にすることでまとまった感じだ。
あいつはアイツでとばっちりだな。生贄だろこれ

「ＨＡＨＡＨＡ！　ところがどっこい、言質を取られてっから再び手を組むことになっちまってよぉ？」

その声に振り返った時、俺は面食らった。
アロハシャツを着て歩いてきている坊主頭のおっさんが、男女を連れてこっちに来ていた。
が、画像で見たことある。あのおっさんは帝釈天だ。初代孫悟空の爺さんを従えている須弥山のトップ。
だけど問題は、帝釈天が引き連れている男女の内男の方だ。
学生服を思わせる上下に、中国の漢服を腰に巻くように羽織っている、俺よりちょっと上ぐらいの少年。

そして何より、そいつが肩をポンポンと叩きながら抱えている槍は、忘れるわけがねぇ。
「……どういうことでしょうか、帝釈天殿？」
フロンズさんが代表するように、一歩前に出て帝釈天を詰問する。
「……それを没収したうえで冥府に叩き込んだ。そのはずなのに黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）と何故セットで出てきているのでしょうか？」
なんで、曹操がこんなところにいるんだよ……っ!!

明星双臨編　第四十八話　曹操、戻ってきました!?

イッセーＳｉｄｅ

英雄派の主要メンバーをまとめていた、曹操孟徳の末裔、曹操。
俺が激戦の末に深手を負わせ、その後帝釈天に捕まった男だ。
他の勢力には「ゲオルグ及びレオナルド含め、神滅具を奪ったうえで冥府に落としている」って話だった。
それが何でこんなところにいるんだよ。おかしいだろ！
っていうか隣の女性って、確か最近テレビで出てた気がする。
あ、思い出した！　ＰＭＣのアマゴフォースでＣＥＯやってるとかいう、日系人のサイリン・アマゴ！
そういえば、帝釈天が大株主やってることから依頼を受けて百人ぐらい星辰奏者を派遣したんだ。おかげでツェペシュの城下町では助かったりしたもんだ。
一体どういう取り合わせだよ。
「……帝釈天殿。私が上層部から伺った話では、曹操達は神滅具を簒奪したうえで冥府に送ったということでしたが？」
フロンズさんも流石に目を丸くしつつ、警戒心を見せてそう尋ねている。
「それは本当だ。……ただ、できるにしてもほとぼりが冷めた頃だと思って「聖槍無しで冥府から帰ってこれるなら、神滅具は返してやる」って言っちまってよぉ」
それって、つまり……。
「ほぉ？　聖槍無しで冥府から戻ってきたのか。中々の偉業じゃのぉ」
幸香が感心しながらそう言うけど、今度は呆れ半分の様子だった。
「お主がそこまで化けるとは思わなんだ。馬鹿は死なねば治らないと

はよく言ったものじゃ」
勘弁してくれよ。冥府に叩き込まれるって、普通死んでるんだぞ。
聖槍ぬきでそんな奇跡、起こすとかマジ勘弁してくれって。
……俺が言えた義理じゃないけどな。っていうか、体が消滅したことも考えると俺は二回死んでるし。俺のが凄いじゃん。
ヴァーリはヴァーリでむしろ嬉しそうだ。曹操はヴァーリに覇龍を使わせたっていうし、強い奴が戻ってくるのは嬉しいんだろうさ。
「いやホント呆れたぜ。ここまで早く帰ってくるとは思ってなかったし、ゲオルグとレオナルドに至っちゃ冥府が気に入って当分自分から残るって感じだしよぉ？　お前ら二天龍も含めて、今代の神滅具保有者は予想がつかねえ奴らだらけだＺＥ！」
「……自分で戻ってこれたらと言ったくせに、本当に酷い神様だ」
曹操が軽く苦笑いしているけど、まぁ確かに。
どうも帝釈天は曹操が聖槍を持っていることを早い段階で知っていて、それを他の勢力に黙っていたらしいしな。冥府に叩き込まれた事といい、振り回されたって感じに思ってるんだと思う。
「ふふ。私は半年もかからないと思っていたけれど、一月かかるかからない程度なのは流石に驚いたわ」
サイリンさんはそう言いながら、曹操を眩しい物を見るように見つめている。
あれ？　この感じだと、サイリンさんも曹操と縁があったということなのか。
帝釈天がアマゴフォースの大株主になったのは最近だ。もしかして、裏でこっそり繋がっていたのを気づかれる前に繋げたとかだろうか。
「……はっ！　そういうことか……ハッハッハッハッハ！」
俺がちょっと首を傾げていると、幸香は何かに気づいたのか急に腹を抱えて笑い出した。
え、なにこれ。
俺達がちょっと戸惑っていると、何故か曹操と帝釈天もそれに反応して納得している感じだし。

ちょっと混乱していると、サイリンさんが一歩前に出る。
「さて、どうせ明かす予定だから改めて挨拶をするわね、二天龍」
え？
俺とヴァーリって、サイリンさんと会ったことあったっけ？
ちらりとヴァーリの方を見るけど、ヴァーリもちょっと困惑気味で俺の方を確認するように見ていた。
ヴァーリも心当たりがないらしい。ならどういうことだろうか。
俺達が視線をサイリンさんの前に戻したとき、サイリンさんは不敵な笑みを浮かべながら、急に薙刀と弩を創り出した。
創造系神器の力だ。それも、この魔のオーラは魔剣創造（ソード・バース）……っ！
俺とヴァーリが気づいた時、彼女はゆっくりと優雅に一礼する。
「アマゴフォースＣＥＯにして、英雄派サブリーダー兼スポンサー、サイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナ。聖槍を担いて蒼天を進む、曹操という英雄に続く者よ」
凄い堂々と言い切った。
っていうかこいつがドゥルヨーダナかよ!?　おいおい、なんでそんな奴が超精鋭ＰＭＣのＣＥＯなんてやってんだよ!?
俺達は一旦、視線を帝釈天に戻す。
「ちなみに、アザ坊達にはついさっきＯＫを貰ったよ。ま、曹操達には相応の呪縛をかけてるし、毎月毎月復興支援金を色々働いて稼いで払ってもらうけどＮＡ！」
うわぁ、いい笑顔。
絶対先生もサーゼクス様もミカエルさんも、正直内心で頭を抱えたり頭痛をこらえたりしてたよ。
さっきまで俺達対立してたのに、俺もヴァーリもフロンズさんも、割と同じ感想を抱いたかもしれない。
これが神様、なんてはた迷惑な。
「クックック。しかし帝釈天殿、曹操如きにそこまでしてよいのじゃろうか？　妾からすれば投資相手として危険だと思うのじゃが？」
幸香だけは愉快そうにしているけど、曹操のことを決行酷評してるな。

俺からすればやばい奴なんだけど。っていうか、ヴァーリに覇龍使わせる時点でやばいんだけど。
「ま、言いたいことは分かるぜ？　本気出せばＳ級出せる奴ってのは、探せば意外といるもんだ」
帝釈天はそう言うと、何故か俺の方をちらりと見た。
え、此処で俺が出てくるのか？
なんかきょとんとしてしまうと、帝釈天は俺の方を見て楽しそうに笑っている。ぶっちゃけちょっと怖い。
「特にやばいのはそこの赤龍帝みたいに、普段も本気もＢ級のくせして大事な時に絶対ＳＳＳとか出すような奴だ。長生きしてる俺が言うんだから間違いない」
「確かに。そういう手合いは良くも悪くも計算に組み込みづらいところがありますな」
フロンズさんは感心しているけど、これ褒められてるのか？
帝釈天は帝釈天で、今度は幸香の方を見て愉快そうに笑っているし。
「ま、そっちの嬢ちゃんも？　出せるはずないのにＳＳランク以上を出し続けるような狂った真似を平気でするからな。イカレっぷりではどっこいどっこいだな」
「それはそうであろう？　まともなんてろくでもないもの、なってたまるかという意思で行くべきじゃ」
幸香はそう胸すら張って断言するけど、多分皮肉は言ってると思う。
帝釈天もちょっと苦笑いになりけていたけど、すぐに合図をすると曹操とサイリンさ……サイリンを引き連れて観客席の方に向かっていく。
そして俺達の方に振り返りながら楽しそうな表情を浮かべていた。
「そういう意味じゃぁ悪祓銀弾（シルバーレット）もやばいがな。本気出してもＡ級が精々だろうに、必要な時に必ずＳＳランク以上を出し続けてやがる。……ある意味血を感じるって奴でいいのか？」
ちらりと幸香の方に視線をずらしてから、今度はヴァーリに落ち着

いた。
「精々楽しませてもらうぜぇ？　天の文字をドラゴンに使われんのは癪だが、俺の称号を勝手に使ってんだ。負けるにしても精々魅せる勝負をしてくれよな？」
「安心するといい。奴は俺が叩き潰す……っ」
あ、ヴァーリの殺意が復活した。
実際問題、カズヒとヴァーリのマジバトルかぁ。
……何が起こるか分かったもんじゃない。心臓に悪い戦いになりそうだ。

和地Ｓｉｄｅ

そろそろ決闘始まるよなぁ。
そんなことを黄昏そうになりながら思いつつ、俺は意識を切り替えてバスを降りる。
「じゃぁ和っち、私達はやばいことになるまで周囲警戒してるから」
「まぁ、流石に一般市民相手に大立ち回りってことはないだろうけどよ」
と、ついてきてくれた春っちとベルナがそう言ってくれる。
まぁ杞憂ではあるとは思っている。思っているけど念の為ってやつだ。
万が一もないだろうが、大騒ぎになる可能性はあるかもしれない。それぐらいにはあのお二人は腕利きというか実力者だしな。
もしかすると星辰奏者になっている可能性も無きにしも非ずといった感じで、大立ち回りになるかもしれないことから警戒をしてい

る形だ。
俺はその過剰すぎるレベルの警戒に我ながら苦笑しながら、バスを降りたインガ姉ちゃんを見る。
……微妙に顔色は悪いし、表情も強張っているな。
まぁそうだろう。修道院に入れられてから初めて、インガ姉ちゃんは両親に会いに行くんだから。
インガ姉ちゃんからすれば、もう何年も顔すら合わせていない。インガ姉ちゃんの両親からすれば、修道院が滅びて行方知れずになっているんだ。しかも人間を辞めているわけだし。
一応、日本政府とかにアザゼル先生やリアス部長達が仲介する形で事情は伝えている。だがそれでもとは思うだろう。
だから俺は手を差し伸べようとした時、インガ姉ちゃんは一歩を踏み出した。
「……ありがとう。でも、まだ必要ないよ」
そう微笑みインガ姉ちゃんは、その上で一つ頷いた。
「勇気をもらうのはもっと後。こんなところから力を借りてたら、結局足りないと思うもん」
……そっか。
なら、もうちょっと後にするべきだろう。
俺は小さく頷くと、インガ姉ちゃんの隣に立って歩いていく。
……さて、カズヒねぇは大丈夫だろうか。
あそこまで啖呵を切ったんだから、マジ死なないでよカズヒねぇ。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

そして、カズヒ・シチャースチエは呼吸を整え意識を整える。
敵は魔王ルシファーの血を引く白龍皇。瞬間的になら主神に届く域に達した、歴代最強を未来永劫確立するであろう存在。
それに対して喧嘩を売り、命がけて挑むということはどういうことか。そんなことは重々理解している。
だが譲れない。譲る気もない。
あの態度でよく分かる。あの男は自分がどれだけ甘く恵まれた厚遇を受けているかを理解していない。少なくとも、理解していると思えない。
目を伏せ、そして思い返す。
理由はどうあれ様々な形で禍の団に参加し、その上で人生をやり成すべくメイドとして活動している彼女達を。
……ヴァーリ・ルシファーは、あまりに彼女達を馬鹿にしすぎている。自覚があるかはともかく、とても納得できる対応ではない。
それを見つめ直し、カズヒは目を開け、そして立ち上がる。
既にメンバーは全員揃っており、カズヒを待っている状態だ。
だからこそ、彼女ははっきりと告げる。
「作戦は単純よ。……二十分以内に私がヴァーリをぶちのめす。それまでしのいで頂戴」
そう告げ、そして一歩を踏み出す。
白銀と銀弾の激突が起きるまで、後五分。

「すまん日美っち！　メンバー急遽リザーブにしてくれ!!」
「はぁっ!?　このタイミングで何でよ勇ちん!?」

その土壇場で、いきなり躓きかけた。

明星双臨編　第四十九話　ケジメ、つけさせます！

イッセーＳｉｄｅ

俺達が観客席で見守る中、会場にヴァーリチームとカズヒ達が入場する。
観客席は試合じゃないからまばらだけど、それでも結構な人数が見に来ていた。
だからちょっと熱気を感じる中、激突する二チームが向かい合う。
ヴァーリチームは増員無し。ヴァーリ、美猴、黒歌、アーサー、ルフェイ、フェンリル、ゴグマゴグの七名。
カズヒもそれを見越していたのか、こちらもカズヒを含めて七名だ。
カズヒ、リヴァさん、南空さん。あと何故かメリードが参加している。
更に残り三人だけど……アニルに、あとラトスとディックさんだ。
そしてお互いのメンバーを引きる形のカズヒとヴァーリは、肉薄して睨み合う。
「……散々舐めてくれた礼だ。真の明星を見せてやろう」
「貴方はただの白い龍よ。魔王なんて向いてないからやめなさい」
ばっさり切り捨てるカズヒに対して、ヴァーリは少し苦笑する。
「……とはいえ、君の挑発に乗せられすぎた気はするけどね。少しリゼヴィムの目的が俺と被っていた所為で冷静さを失っていた気はするよ」
あ、あぁ。
確かにそうだな。リゼヴィムもヴァーリも対グレートレッドを視野に入れていることで被ってたから、ヴァーリもかなりイラついていただろう。

其処にキレッキレの罵倒で神経を逆なでされたものだから、ヴァーリもブチギレでこうして勝負に乗っかったわけだし。
ただ、カズヒはちょっと眉を上げたけど、すぐに肩まですくめたものだ。
「５０点ね。私はあえて悪辣に言っただけで、嘘なんて何一つついてないわ」
はっきりと言い切ったカズヒに、ヴァーリは逆に目を丸くする。
それを気にせず、カズヒは皮肉気な表情を浮かべていた。
「実際問題、神器を無効化できる相手を殺したいのに神器主体で成長するなんて勝つ気を感じられないわ。勝つ為の手段と方法を真剣に吟味し直したらどうかしら？」
冷ややかな目でそう言ってから、今度は一転してにっこりと微笑んだ。
「最も、あんな軽い挑発に乗ってくれて良かったわ。おかげでこの決闘、最悪でも私が死ぬだけで済むんですもの」
あ、あ～。そういうこと。
カズヒのあの悪意たっぷりな言い回しって、つまり「ヴァーリチームの待遇に文句言う責任を、可能な限り自分だけにする」のと「その不平等決闘にヴァーリチームを絶対に乗せる」ことを両立させる為の策だったと。
流石、暗部組織のダーティジョブ専門部隊。普段俺達に合わせようとしているだけで、やろうと思えばえげつないことも平気な顔で出来るわけね。
しかもあれを軽いとか、マジで怖……っ
「……それを平然と言える辺り、君も大概イカれているね」
「今頃気づいたの？　ならこの勝負はもらったわね」
そう言い合いながら、二人はチームメンバーと一緒に転移していく。
……さて。
この試合はどうなるんだろうな。
「リアスさん。この戦い、どうなると思いますか？」

「そうね。真っ向勝負ではフェンリルまで擁するヴァーリチームが有利。長期戦になれば最終的に削り殺されるのは間違いなくカズヒの方でしょう」
シャルロットもリアスも、真剣な表情で転移されたフィールドが移される映像を見ている。
正直に言えば、俺も不安もあるけどこの戦いがどうなるかが気になるところはある。
相容れないところはそれぞれあるけど、カズヒは頼れる仲間だしヴァーリはライバルだ。どっちの強さも分かってる。
俺もなんだかんだで、実戦もレーティングゲームも経験している。そしてこれからもそれに向き合う身だ。だからまぁ、こういう強者同士の戦いは学ぶ者も多いし、今後を踏まえると気になることも多い。
もうこうなったら止まらないし、だったらもう見守るしかないわけだ。
……まぁ、カズヒが敗北条件に「自分の死」を明言したうえ断れない呪術的契約までしているからなぁ。カズヒが勝ってくれないと困るんだけど。
正直ちょっと不安の方が強い。
なんたってヴァーリ、めっちゃ強いからなぁ。
特に新技の極覇龍だっけ？　主神にすら通用するってどんな化け物だよ。いくらカズヒでも、ちょっと厳しいんじゃないか？
俺が固唾を呑んでいると、そっとシャルロットとリアスが席を外して、俺の両隣に座ってくれた。
「……こうなってはもう、彼らの決着を見届けるしかないです」
「……見守るしかないでしょう。大丈夫、私達は一緒にいるわ」
……うん。ありがとう二人とも。
ああ、此処にいない九成の分も見守るしかない。
いや、本当に頑張れよカズヒ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

転移されたフィールドで、カズヒは静かにヴァーリへ視線を向ける。

どちらにせよ、この戦いの流れはほぼ確定している。

ヴァーリ・ルシファーはプライドが高い。あそこまで盛大に神経を逆なでしてやったのだ。自分の手でカズヒを殺しに行くぐらいのつもりでなければおかしいだろう。

カズヒにしても、この戦いで他のメンバーにヴァーリの相手をさせるつもりはない。

レーティングゲームのシステムを流用し、多くの者達が見ている決闘だ。柄ではないが勝ち方という物が求められ、それに反すればのちの禍根に繋がるだろう。

必然、この戦いは根本的には「カズヒとヴァーリの一騎打ち」が基本ベクトル。ずれるとするならそれは、「他のメンバーの戦いが明確に傾いたら」になる。

故に、カズヒが告げることは単純。

「場所を変えるわよ、ヴァーリ。……みんなは、取り巻きを抑えて頂戴」

そう告げ、カズヒは飛び跳ねるように移動する。

ヴァーリもそれに合わせるように移動し、そして互いにチームメンバーに視線を一瞬向ける。

そこにあるのは不安ではなく信頼。

彼等なら、そう簡単にやられたりはしない。その確信を持って、二人は場所を移動する。

祐斗　Ｓｉｄｅ

カズヒとヴァーリは、やはりお互いに決着をつける場所に移動したね。
流れと状況から言って、こうなることは読めていた。
推測できる決着は「リーダー同士が一対一の戦いで決まる」か「リーダー以外の趨勢が決まったことで、圧倒的有利な状況になっての圧殺」のどちらかだろう。そうせざるを得ないところがある。
だからこそ、他のメンバーがどう戦うかが気になり―
『はーいマッチメイクー♪』
―微笑みながらのリヴァさんが、瞬時に地形に干渉する。
彼女はもとより独自の戦法として、地脈を利用した砲台の生成を行っている。そしてそれらはつまり、地形をある程度操作できることにつながっている。
それにより、一瞬だけどヴァーリチームは連携が崩れる。
そして当然、それを事前に伝えられていただろうメンバーは動き出した。
『では、貴女の相手は私がさせていただきます』
『にゃ!?　そういうこと!』
黒歌に接近し、そして突き飛ばすように他から引き離すのはメリード。
『つーわけだ。俺としてもあんたはもっかいぶっ飛ばす!』
『いいでしょう。私も前回の苦戦には思うところがありました』
真っ向から剣でアーサーと切り結ぶのは、既にラッシングチーターレイダーに実装しているアニル君。

『お！　半神の姉ちゃんが付き合ってくれるのかい？』
『ええ。あぶれ者になるけど先生が相手してあげるわ』
リヴァさんは美猴の相手をする方向か。
それぞれがそれぞれを突き飛ばすように距離を開けさせる中、残るメンバーがフィールドで睨み合う。
『フェンリルちゃんとゴっくん、そして私とやるのはあなた方ですか？』
ルフェイが首を傾げながらも魔方陣を展開すると、残りのメンバーの一人であるディック・ドーマクが眼鏡をくいっと上げる。
あ、少し輝いた。
『そういうわけです。ちなみに、貴女の相手はラトスですよ』
『そういうわけだ！　ちっとばかし体裁は悪い感じだが、姉御の頼みなら全力で行くぜぇ！』
ラトス・スプライトは全身から蒼い稲光を纏いながら、拳を構えてルフェイと相対する。
そして同時に、ディック・ドーマクはフェンリルに視線を移した。
『そして貴殿に邪魔はさせられませんよ、フェンリル殿。私を貴方がどうにかしなければ削り殺されることはわかるでしょう？』
そう嘯くディックに、フェンリルは姿勢を低くしながら小さく唸る。
フェンリルが即座に仕掛けてこないだけあり、ディックは自然体のようでいて隙が無い。
あれと突破するのは難しいだろう。教えを受けているアーシアさんですら、サイラオーグさんの猛攻を短時間なら回避できるのだから。
そして最後、南空さんは一呼吸を入れてからゴグマゴグに向き合った。
流れから考えれば、彼女がゴグマゴグの相手なのだろう。
そう思った時、彼女は天高く右手を持ち上げ―
『さぁ、ガチで行くわよ！』
―指を鳴らした瞬間、大量の列車が姿を現した。

え、あれは確かアントニオンの試作型？
そう思っていると戦闘車両に南空さんが飛び乗り、そして現れた車両がエネルギーの奔流を纏いながら、渦を巻くように天へと昇っていく。
そして少しして奔流が弾け飛ぶと共に、空から巨人が舞い降りた。
『ダイヤを守って特急出発、緊急事態に現着完了――』
いや、ちょっと待った。
これあれだよね？　完全にあれだよね？
それ一々名乗り上げるのかい!?
『漆黒超特急アントニオン・ノワール！　誓約守って出発進行！』
あ、ゴグマゴグ相手にそういう手法で挑むのかい!?
え、それでいいの!?

Other Side

「……中々面白いことになっているね」
離れたところでその戦闘を見ながら、ヴァーリは笑みすら浮かべていた。
思った以上に向こうも面白い趣向を凝らしていると見える。これは興味深い。
それに対し、カズヒはどこまでも冷静かつ冷徹だ。
叩き潰す。その一点で研ぎ澄まされた戦意を持って、彼女はヴァーリと相対していた。
「悪いけど、あまり時間をかけるつもりはないの。短期決戦で行かせ

てもらうわ」
「そうか。辞世の句はそれでいいのかな？」
ヴァーリは光翼を展開しながら、その確認を行う。
殺すつもりで挑んでいる。そもそもそういう勝負を相手が挑んできており、加えて徹底的に愚弄してきた相手に容赦する理由もない。そもそも負ければリゼヴィムを打倒する為に割ける時間が無くなってしまう。
よって、カズヒ・シチャースチエは此処で殺す。
その殺意に対し、彼女はいたって冷静だった。
冷徹に戦意を纏い、流れるようにフォースライザーを装着する動きに淀みはない。
「……自分は殺されないという確信があるのかい？」
「馬鹿なの貴方？　そんな可能性はこの世のどこにも存在しないわ」
呆れるように返し、カズヒは肩まですくめていた。
「環境の過酷さなどで程度の多寡は大きいとはいえ、生物は基本的にいつか死ぬし、それが急に訪れることはままあるわ。もちろん戦士として戦いという危険性を銃後の民間人に与える気はないし、過酷な戦場と平和な日常のそれを同一にする箇条書きマジックをする気はないけれどね」
そう告げたうえで、彼女は真っ直ぐにヴァーリを見据える。
「ただ、人よりいつ死ぬか分からない生活を送る者として、常にそこに対して覚悟を決めようとして生きているだけよ」
「なるほど。本当に君は油断できない」
つまり、何時死んだとしても後悔が無いように備え続けていると言ってもいい。
そういう手合いは恐ろしい。それぐらいは理解できる。
そして、その恐ろしい女は宣言する。
「十分以内に叩き潰すわ。凌げれば貴方はほぼ確実に勝てると思いなさい」
「いいね。なら十分以内に俺が君を滅ぼすとしよう」
あとはもう、何も言う必要などない。

『ＧＩＬＴＹ』
『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ　Ｄｒｇｏｎ　Ｂｒａｎｃｅ　ｂｒｅａｋｅｒ！』
『ジャッジングサマエル！　Ｃｈａｒｇｅ　ｙｏｕ　ｆｏｒ　ｆｒｅｅｄｏｍ』
今ここに光臨する、覇なす白龍（ヴァニシングメイル・クルーズドライブ）の戦装飾。
それに相対する、仮面ライダー道間ジャッジングサマエル。
今ここに、壮絶な死闘の幕が上がる。

明星双臨編　第五十話　白色衰星（ディバイディング・ステラ）

祐斗　Ｓｉｄｅ

目の前で同時にいくつもの激戦が繰り広げられていた。
まず真っ先に目に行くのは、サイズの都合もあってアントニオンノワールとゴグマゴクの戦いだ。
ロケット推進のように突貫するゴグマゴクを、アントニオンノワールはステップで交し、その背中に頭部から何十発もの砲弾を叩き込んで先制攻撃を当てる。
だが同時にそれに臆することなく、ゴグマゴグは振り向きざまに頭部からビームを発射。
それを身じろぎで回避するアントニオンノワールに、更に拳を発射することで攻撃を試みる。
だが同時に、その身じろぎはそこまで読んでの構えだった。
『唸れ、ノワールスマッシュ！』
その勢い良く振るわれた蹴りが、ゴグマゴグのロケットパンチを蹴り返す。
しかし素早くキャッチしたゴグマゴグはそのまま砲弾を大量に発射しながら突撃を敢行。
対し、アントニオンノワールも頭部から砲撃を撃ち放ちつつ、勢いよく組み付いた。
『露払いぐらいちゃんとやるのよ！　友達には友達の意地がある！』
そのまま力比べになる中、滑るように行われるのはフェンリルとディック・ドーマクの攻防だ。

僕ですら取られるのも難しいフェンリルの猛攻を、ディックは素早く回避している。
それもただ回避するのではなく、疲労を最小限に抑えるようにした回避の仕方を常に意識している。
流石はアーシアさんに回避術を叩き込んだ人物だ。単純な速度はともかく、瞬間的な体裁きでは僕やサイラオーグ氏すら超えている。
だが同時に、フェンリルはディックが回復のオーラを当てれないように俊敏な動きで射線を遮っている。
こうなると、カズヒに回復を当てるのはまず無理だろう。
『なるほど。力を封じられているならやりようはあると思ってましたが、存外賢い。……ただの強大な狼と思っていたことを謝罪いたしましょう』
そう漏らすディックに、フェンリルは油断なく警戒しながら攻撃を仕掛けていく。
そしてその合間を縫うように、ラトス・スプライトもルフェイを牽制していた。
放たれる魔法攻撃を雷を纏った打撃で打ち砕き、時折竜らしくブレスをもって反撃を行う。
どの戦闘も、長引きそうだね。
そう思っていると、隣に座る人がいた。
……誰だろう？
「えっと、お前さん達が日美っち……カズヒの仲間だっけか？」
「どちら様かしら？」
近くにいたイリナさんがそう聞くと、その人は苦笑を浮かべている。
「道間日美子と高校時代のクラスメイトだった、接木勇儀（つぎきゆうぎ）ってもんだ」
……凄い人物が来た。
思わず面食らっていると、彼は試合を見ながら遠い目になった。
「本当は俺も参加する予定だったんだが、土壇場でとんでもないことになってなぁ。「意義が薄れる」ってことで満場一致でなしになった」
「どういうことが起きたんですか？」

僕がそれを聞くと、乾いた笑いというのが相応しい表情を彼は向けてきた。
「俺の職場のＣＥＯが英雄派のサブリーダーだった」
「……それは、確かに色々と問題になりそうですね」
ロスヴァイセさんが納得するけど確かにそうだ。
英雄派のサブリーダーというと、確かドゥルヨーダナという女性だったね。
顔を隠していたけど、まさか表社会に名の知れた人物が参加していたとは。
「で、でもどういう会社なんですかぁ？　それにカズヒ先輩と共闘できるって……」
「ああ、星辰奏者たんまり抱えているＰＭＣの、アマゴフォースだよ」
ギャスパー君にそう答える勇儀さんだけど、なるほど……いや待ってくれ。
確かあそこ、ニュースで見たけど質においてはＰＭＣ最強候補。米国海兵隊の対星辰奏者訓練における仮想敵（アグレッサー）をしたこともある企業だ。
それも、帝釈天が最近株を大量に獲得したとも聞いている。
……それ、問題が多そうなんだけど。
「あ、ちなみに和平結んだ勢力のトップ人には話は言ってるそうだぜ？　……ＯＫになってくれないと俺、家族まとめて路頭に迷いそうだぜ」
シャレになってないことを言ってくる勇儀さんだけど、これはもうどう言ったらいいのか。
「……だが、道間日美子と相応に仲が良かったのか？　私達が言うことでもないが、高校生の男女間というのは、そこまで言うほどの親密な付き合いなど恋人関係とか古くからの仲になりそうだが」
「ん？　ああ、あいつ野郎のセクハラに実の兄貴をネタにしたガチ話で返せるから、割と性別関係なく浅い付き合いは多いぜ？」
首を傾げるゼノヴィアに勇儀さんがそう言うけど、それはそれでどうなんだろう。
あの頃の日美子（カズヒ）はかなりの精神状態だろうけど、それはそれでどう

なんだろうか。
少し引き気味な僕たちだけど、勇儀さんはなんというか感慨深い表情だった。
「あと、俺ってば義理の姉にマジで惚れてたもんでな。あいつに背中押されたりして、結婚して子供四人ほどできちゃってるからなぁ」
『『『

『それはまぁ。ルフェイが巻き込まれに来たのは残念ですが、居心地が良くやりがいのある毎日ですから』
真っ向からアニルの攻撃をコールブランドで捌くアーサーだけど、一旦仕切り直すように距離を開けると、興味深そうに自分の服の裾を見る。
其処はアニルの斬撃で切り裂かれている。そして、肌こそ切れてないけど服が切れている個所はいくつもあった。
へっへぇ。アニルも立派なオカ研メンバーだからな。毎日毎日鍛えてるんだから、当然強くなってるんだよ。
それに今回、アニルが振う武器だって馬鹿にできたもんじゃねえ。
アーサーもそれにはとっくに気付いているからか、微妙な表情をそれに向けていた。
『エクスカリバーのレプリカ……いえ、一本だけ本物でその補佐ですか』
そう。アニルが今回使っているのは、最近開発された特殊な量産型エクスカリバー。
ゼノヴィアにデュランダルとエクスカリバーを両方とも渡すのはどうかという意見があったことから生まれた、ヘキサカリバー。
エクスデュランダルの代わりにゼノヴィアに一本渡されているけど、そのうちの一本をアニルが貰い受けたんだ。
与えられたのは天閃（エクスカリバー・ラピッドリィ）の聖剣を核とした、六天聖剣（ヘキサカリバー・ラピッドリィ）・天閃。
単純だけど、だからこそ単純に剣士で悪魔祓いなアニルが使っても対応できる。更に機動力が高いラッシングチーターレイダーとの相性も良い。
だからこそ、アニルはアーサーと切り結べている。
前回は絡め手しまくって何とかできた戦いも、真っ向勝負でどうにかできるようになっている。
負けんなよ、アニル！　先輩として応援してるぜ！
そして他の方でも激戦が続いている。
『まだまだ行くぜぇい！』
『ふっふ～ん。そう来なくちゃ♪』

大量に分身を出しながら仕掛けてくる美猴に、リヴァさんが大量の砲台で薙ぎ払いながら、仮面ライダーグリームニルとして真っ向から攻撃を展開する。
美猴の棍を華麗に躱しながら、だけどリヴァさんの打撃も美猴は上手く弾き飛ばしている。
こっちもこっちでそう簡単にはいきそうにないな。
そして黒歌の相手をしているメリードもかなり真っ向から戦えてた。
『なるほどねぇ。やっぱりあんたは私対策ってわけ？』
『そういうことです。それに、私的に思うところがありますので……』
そっか。メリードはヒューマギアだから仙術が効かないのか。その辺もきっちり考えられているんだな。
これなら、カズヒとヴァーリが決着をつけるまでは行ける……っ
その瞬間、映像の一つでカズヒが盛大に吹っ飛ばされた。
「単純な性能ならヴァーリが流石に上でしょうけど……それでもあそこまで？」
「違和感が強いですね。カズヒのことですから、隠し玉の一つぐらい用意していると思ったのですが」
リアスとシャルロットが怪訝な表情になるけど、俺も同感だよ。
あのカズヒだぞ？　基本的に気合と根性で限界超えるような奴だけど、それに頼り切るような女でもない。勝ち目はちゃんと用意する奴だ。
それなのに、あそこまで一方的にやられるか……えぇ？
俺達が困惑していると、黒歌はメリードに対して不敵な笑みを浮かべていた。
『ま、その必要ななないわね』
な、なんだ？
なんか自信満々に言えるんだ？
俺は首を傾げたくなる中、黒歌は胸すら張っていた。
『今のヴァーリに星辰奏者（エスペラント）は勝てないわ。出張る必要もないわね』
「はぁ!?」

思わず声が出るけど、星辰奏者では勝てないってどういうこった？
ヴァーリの能力に星辰奏者を狙い打てるような能力なんて……あるわ……け……。
「……ま、さか……っ」
俺は、可能性の思い至った。
おいおい。だとするとカズヒの勝ち目ってかなり薄いぞ!?
おい、大丈夫なのかよ!?

Other Side

「まだ……だぁ！」
吹き飛ばされ追撃を受けながらも、カズヒは素早く立て直して迎撃する。
それすら力負けするのを気合と根性で食い止めるが、しかしおかしい。
明らかに、星辰光はおろか星辰体と感応することによる、星辰奏者の性能向上そのものが削れている。
カズヒ・シチャースチエは星辰奏者だ。そして星辰奏者とは、星辰体と感応することで身体機能を高める存在だ。さらに星辰光も星辰体と感応することで具現化させる異界法則である
つまり、星辰体と感応する力が削られれば星辰奏者は詰むと言ってもいい。
そこまで考え、カズヒは寒気すら感じていた。
この状況。その答えはつまり—

「周囲の星辰体（アストラル）に半減をかけることで、星辰体が必須な力を須らく半減させている？」
「正解だ」
―その返答に、カズヒは内心で舌打ちすらした。
つまりヴァーリ・ルシファーは、星辰奏者にとって天敵となる技を編み出した。
白龍皇の持つ半減の力を最大限に生かし、星辰奏者の天敵といえる技を確立した。
「……即興で編み出した技ではない。そういうことでいいかしら？」
「当然だよ。以前ハーデスの飼い犬が出てきたことがあっただろう？あの時に一度使ったおかげでコツが掴めてね」
なるほど。かなり厄介な星を持っていたそうだが、これだけの力があるのならやりようはあるだろう。仕切り直しぐらいはできるはずだ。
その情報に、カズヒは素直に評価する。
もとより、ヴァーリ・ルシファーの能力を否定するつもりはない。彼が傑物であることは誰もが認めることだろうし、そのポテンシャルとモチベーションの高さがあってこそ、彼はここまでの実力者になっている。
だからこそ、だ。
「……まだだ。貴方を倒すという事実は、必ず断行させてもらう」
「無理はしない方がいい。この白色衰星（ディバイディング・ステラ）は一時的なものだが、その分効果範囲は比較的広く取れてね」
そう告げると共に、ヴァーリの姿は一瞬消える。
直後、悟った時にはヴァーリはカズヒの背後をとっていた。
同時に、周囲に対して魔法の障壁が幾重にも張られる。
「今の君を範囲外に出さない程度のことはできるのさ」
そう告げる共に、ヴァーリの右手がカズヒの首を掴む。
それをカズヒはあえて振りほどこうとしない。
分かっているのだ。今この場に限定すれば、そんなことは不可能だと。

「そして今の君ならどうとでもできる。全てを謝罪するというのなら、俺も水に流していいんだけどね」
「貴方馬鹿でしょ」
即答で、カズヒは切って捨てる。
その理由は、大きく分ければ単純だ。
「一つ。自己契約証明文（セルフギアス・スクロール）は、交わした契約を絶対に敗れなくするからこそ価値があるの。それだけの決意を示しておきながら、我が身可愛さに翻す女と思ってるのかしら？」
「なるほどね。まぁ俺としても期待薄だったよ」
ヴァーリは残念そうに首を横に振る。
それは圧倒的強者の余裕。油断ではない証拠に、一瞬でもカズヒが決死の行動をとるようなら、瞬時に首の骨を折れる状態で対峙している。
だからこそ、ヴァーリは宣言する。
「ならそのまま殺すとしよう。白き天龍の皇帝宿す明けの明星が系譜を愚弄したんだ。覚悟もあるならいいだ―」
ろう。
そう言い切る、その刹那。
「……間抜け」
カズヒ・シチャースチエは、ヴァーリの首根っこを左手で掴んだ。
握力で締め付けられることに反応し、ヴァーリも瞬時に力を籠める。
だからこそ、ヴァーリは驚愕した。
あり得ない。
星辰体との感応そのものが半減しているこの状況下で、人間の女の首を折ることが、準覇龍状態といえる今のヴァーリにできないなど、ありえない。
そんなヴァーリと首を片手で締め合いながら、カズヒは鋭い表情で宣言する。
「一つ。私の隠し玉が一つだとでも思った？」
その瞬間、寸勁じみた無拍子の打撃が炸裂する。

衝撃で弾かれる両者は、瞬時に体制を立て直して睨み合う。
ヴァーリ・ルシファーは今なお強大。その事実は揺らがない。
だが、それがどうしたといわんばかりに、カズヒ・シチャースチエは真正面から睨み付ける。
「好き勝手に振舞ったツケを払いなさい。ヴァーリ・ルシファー……っ！」
今ここに、決戦は佳境へと突入する。

明星双臨編　第五十一話　銀靴龍討

和地Ｓｉｄｅ

俺達は今、駅前のファミレスで一休みをしていた。
今のところ、誰も話すタイミングを外していると言ってもいい。
……結論から言うと、インガ姉ちゃんと家族の話は悪い意味でスムーズに運んだ。
イッセーがギャスパーについて父親と話したのと、形としては近いだろう。
自分達としては異形や異能と関わる気は無い。今後のインガ姉ちゃんの扱いはそちらに一任します。そういった形でスムーズに運んでいた。
まぁ、愛想が尽きかねないレベルで修道院に叩き込んだ娘が死んだと思っていたら、人間を辞めて生きていた。そんなことに冷静に対応できる人間ばかりではないだろう。
俺が対異形や異能の訓練を受け、インガ姉ちゃん含めて殺し合いを経験済みだと聞いた時の、無意識だろう怯えの色を踏まえれば、強く言えないところもある。
人間が皆、異形や異能の世界を受け入れられるわけではない。実際問題、英雄派のメンバーの中には神器を嫌悪された迫害を受けた者もいるそうだ。アーシアも、実態としては遠ざけられていたみたいだしな。
世の中は本当に難しい。少なくとも、異形や異能の側が自分達を人間社会に堂々とひけらかさないようにする理由も分かるという物だ。
なんでまぁ、俺達はとりあえずドリンクバーだけ頼んでからだんま

りだ。
ただその時、インガ姉ちゃんは小さく頷いた。
「……うん。とりあえずご飯にしようか」
俺達の視線が一斉に集まると、インガ姉ちゃんは小さく苦笑で返す。
きついことはきついが、それでも大丈夫だと、その態度で示していた。
「そもそも家は追い出されたようなものだしね。そこから何年間も失踪してたら、悪い意味で向こうも区切りをつけるって分かってたから」
「……それで、いいの？」
春っちが、様子を窺うようにそう尋ねる。
春っちは、家族とそれなりに折り合いを付けれたから、尚更そう思うんだろう。
数日に一回ぐらいだけど、メールでやり取りはしているようだ。今度休暇を獲得したら、一緒に食事をする予定になっている。それぐらいには修復を始めている。
だからこそ、春っちはインガ姉ちゃんにどうしても聞きたくなったんだろう。
それに対して、インガ姉ちゃんは寂しげに笑いながらも小さく首を横に振った。
「ケジメをつけるとか向き合うっていうのは、いい方向にするってことじゃないよ？　悪い形で終わったとしてもいいから、区切りをつけるってことだよ」
確かに、その通りだよな。
自分達が望む通りの結果が得られるほど、世の中は断じて甘くない。一生懸命頑張っていれば必ず夢が叶う程、世の中は優しくできてない。
頑張って努力しても臨んだ結果が得られないことはままある。全力を出して生き残ろうとしたその瞬間、流れ弾で命を失う時もある。努力がかみ合い成果が出たとしても、先に成功した者が出てきて栄光

を掴めない時も実際にあるんだ。
そういう意味なら、こうして受け止めてくれる人がいるだけインガ姉ちゃんは恵まれている。
ならもう、これは仕方がないな。結果を受け止めて前に進むしかない。
「……よっしゃ！　こうなったらやけ食いとやけ飲みだ！　インガ姉ちゃんはお酒飲める年なんだから呑んでいい！　っていうか俺が奢る！」
仮にも神の子を見張る者の一員であり、もはやエース枠としてそれなりの給金は貰ってます。一応懲罰労働のインガ姉ちゃん達よりはお金あります。ファミレスで三人分奢る程度のことは余裕で出来ます。
そう、それこそが男の甲斐性。ふっふっふ、こんな時こそかつてコカビエル絡みで起こった事件で貰った石油代。ありがとうイッセー。
大量に寄付金や組織の上納金とかに回してたが、俺の分もしっかり等分しているからな。数十億を当分したから数億円は俺の手元に入っているのだ。
ファミレスで可愛い女の子（一人成人済み）三人に奢るぐらい、訳ないぞ！
「……よっし。お、オムレツあるじゃん。じゃとりあえずそれで……セットでスープとサラダもつけっか」
「え、ここ鰤大根あるの!?　やったじゃぁそれで！」
「……ビーフシチューに……ワインも貰っちゃおうかな？　あ、年齢に関しては保険証（便宜上確保済み）で何とかできるからちょっと見せてきた方がいいかな？　うん、ボトルで」
ためらうことなく全員が好物を選択したな。
ま、これぐらいはいいだろう。
……あとはカズヒねぇの勝利報告があれば最高だ。頼むぜカズヒねぇ！　あとで祝勝会でもするから頑張って勝ってね！

「お、マジで機嫌がいいな。ちっと不安だったが、アドバイス的確だったな」
「リヴァが言ってたとおりね。男が女に奢ると言ったら、素直に奢られた方がいい気分になるって」
「やっぱり人生経験三桁だし、恋愛経験も豊富なのかな？」
「「……なんか羨ましい」」

……あれ？　小声で何か話してたら凹んでないか？
デザートも後で注文した方がいいな、これ。

イッセーＳｉｄｅ

『あまり舐めるなよ、この私を！』
そう吠えると共に、カズヒの反撃が始まった。
ヴァーリの反撃を喰らいながらも、それ以上に攻撃を連続で叩き込む。
しかも攻撃が鎧を盛大に砕いて、ヴァーリは全身からどんどんを血を流していく。
っていうかこれ、わざと出血が増えるような攻撃に特化してやがる。

俺がシトリー眷属とのレーティングゲームで、匙にやられたのと同じ手か。出血多量で強制的にゲームを敗退させる狙いがあるな。容赦ねえ！
いや、それにしてもヴァーリのダメージが大きすぎる気がするかも。
「リアス、なんかヴァーリが弱りすぎな気がするんですけど」
「そうね。……ただ、予想はできるわ」
部長はそう関心しているというか微妙に引いているような表情でカズヒを見ている。
っていうか、冷や汗かいてる。
俺とシャルロットは顔を見合わせてちょっと首を傾げるけど、その間にヴァーリは膝をついた。
というか血反吐まで吐いている。かなりダメージが入っている証拠だ。
咄嗟に魔力攻撃でカズヒを一旦押し飛ばすけど、カズヒはすぐに立て直す。
それでもその短時間で、ヴァーリは強引に立ち上がってカズヒを睨んだ。
『……あの時の言葉は……そういうことか……っ』
よく分からない事を言ったヴァーリに、リアスは同情の表情でため息をついた。
「抜け目がないとはこのことね。あのタイミングでよくもまぁ、そんな判断ができたこと」
「どういうことですか？」
俺が聞くと、リアスはちょっと目元を引くつかせながらこっちに視線を向けてきた。
「覚えてない？　曹操がサマエルを使ってオーフィスを有限にした時のこと」
それはもう。いやって程覚えてます。
曹操に俺達がほぼ全滅するし、カズヒ達のとんでもない秘密まで、ミザリの出現で知る羽目になった。しかも俺達全員敗北したからな。

その後俺なんて、体が消滅したし。
で、それが何かと思った時、シャルロットが遠い目になった。
「……あぁ。あの時の「取った」って、そういう……」
シャルロットの呟きに、俺はふと思い出した。
サマエルに捕らわれたオーフィスを助け出そうとして全然できなかった時だ。カズヒはリーネスと連携で、宝石魔術を叩き込んだ。その時確かに、取ったって言ってたな。
俺はあれでどうにかできるという意味で言って、結局は出来なかったのを思い出した。
思い出したけど……。
「あれ、サマエルのオーラを取ったのかよ!?」
思わず絶叫したけど、それってやばくないか？
カズヒの星辰光は、自分を触媒に悪に対する怒りや憎悪を集めて瘴気に変えて身に纏う星だ。
プログライズキーを使って魔星化したり、特殊なプログライズキーで集める思念を変えて性質を変えることもある。だけど基本的に「思念を集める」の統一だ。
でもってサマエルは、聖書の神様の怒りと恨みを向けられ続けたことで、自分と同じ属性を持つ龍と蛇に対して規格外の特攻存在になっている。
つまり、思念が集まった結果異能となってる意味では同じなんだ。
しかも今のカズヒは、これまでにない形態になっている。
もうこれってつまり……っ
『サマエルのオーラを元にしたライダモデルによる、劣化サマエルに己を変質させるプログライズキー……ということか！』
『その通り。曹操の企みが阻止できないなら、せめてそれなりの収穫が欲しかったから取ってみたのよ。おかげでジャッジングサマエルプログライズキーは完成したわ』
ヴァーリの言葉にためらいなく認めるカズヒだけど、何て代物を作ってるんだよ!?
観客席も戦慄しているけど、カズヒはため息交じりに肩をすくめて

いた。
『まぁ、サマエルに比べると完全下位互換ね。精々アスカロンの性能を全部龍殺しに振ったぐらいかしら』
十分すぎない!? アスカロンって、仮にも伝説の聖剣だからかなり強いよ!?
その聖剣としての性能まで龍殺しに割り振ったら、それもう対龍に対する攻撃力上昇率だけならやばすぎだろ。
十分シャレにならない。なんて切り札を持ってたんだよ。
ほんと、カズヒは怖いって。
勝てる手段を用意することを忘れず、その上で気合と根性でハードルを飛び越える。
ったく。こりゃヤバイ。
『馬鹿な……っ！ だとしても、俺の白色衰星（ディバイディング・ステラ）の影響下で星を十全に使えるわけが―』
『使えてないわよ。半減してるわ』
カズヒはヴァーリにそう答えながら、更に一歩を踏み込んだ。
『ただ、星辰体の力が半減されたのなら、星辰体を強化すればプラスマイナスはある程度埋められる。……星辰体をピンポイントに狙った伏札を、自分だけが持っているとでも思ったのかしら？』
そう、カズヒははっきり言った。
『これが剣豪の腕（アーム・ザ・リッパー）の今の亜種禁手（バランス・ブレイカー）。自分と感応する星辰体を強化する、昇華の星（ステラ・ザ・ブースト）』
カズヒの断言は、ちょっと冗談抜きでやばい。
つまり、ヴァーリの新技で星辰体の力が半減してなかったら、カズヒはこんなもんじゃすまないってことだろう。
もし万全な状態で星を開帳していたら、カズヒの龍殺しはとんでもない域に到達する。
それこそ、グレンデルどころかクロウ・クルワッハにだって通用する。それだけの……新兵器だ。
そんな新兵器をひっさげながら、カズヒは右手を上に向けると挑発するようにくいっと手前に曲げる。

『面倒だし、真っ向勝負のノーガードデスマッチで決めましょう？
私も星を発動値に持って行って勝負を仕掛けるわ』
静かに戦意を滾らせて、カズヒはヴァーリに宣言する。
『抜け、極覇龍を。お前の全てを真正面から、言い訳できないぐらい叩き潰してあげるわ』
悪祓銀弾（シルバーレット）の宣言が、会場中を湧き上がらせた。

Other Side

「……いいだろう。そこまで挑発されれば、俺も逃げるわけにはいかないな」
ヴァーリ・ルシファーは血を吐き捨てながら、静かに立ち上がる。
どちらにせよ、このままでは自分が不利だ。前例を出しての真っ向勝負は、望むところと言ってもいい。
己の極覇龍は、主神にすら届く牙だと断言できる。それをもってすれば勝てると思っているし、負けるにしてもすべてを出し切れる。
だからこそ、ヴァーリはすべての力と意志を込める。
そして真っ向から睨み合い、そして―
「創生せよ、天に描いた守護星を―――我らは鋼の流れ星」
「我、目覚めるは―」
カズヒの詠唱に続けるように、全ての開放を決意する。
「醜悪なりし悪龍よ。汝を滅ぼす銀の騎士が、ここに裁きを下しに来たぞ」
祝詞を告げるカズヒに対し、ヴァーリもまた宣言する。
「―律の絶対を闇に落とす白龍皇なり！」
白き龍の皇帝を宿す明星の末裔として、ヴァーリは誇りを宣誓す

る。
「ヨークシャーが如き悪意の蹂躙、その報いを此処に受けるがいい」
それを誇りとみなさぬ女が、龍に対する敵意を告げる。
「無限の破滅と黎明の夢を穿ちて覇道を往く」
真正面から向き合う二人は、至近距離にまで近づいて互いを見据える。
「この銀の祈りを束ねた蹴りは、遍く龍の怨敵足らん。六杯の麦酒で恐怖を呑み込み、三日かけても汝を潰す」
カズヒ・シチャースチエは強い意志をもって、ヴァーリ(敵)を倒すと宣言する。
「我、無垢なる龍の皇帝と成りて――」
それに向き合う祈りをもって、ヴァーリ・ルシファーは強く宣言する。
「正義の祈りは此処に叶う。願いを受けた悪の敵が、龍を滅する銀騎士とならん」
「汝を白銀の幻想と魔道の極致へと従えよう――っ」
双方の決意と宣言の元に、
「唯一神の怒りの前には、龍神すらもただではすまぬ」
その詠唱を待つことなく、先に発動した極覇龍の拳が襲い掛かる。
その神域の一撃は――
「約束された正義の前に、悪意の龍よ滅ぶがよい」
――正真正銘、片手で易々受け止められた。
「超新星(メタルノヴァ)――邪龍滅(シルバー)ぼす銀の一蹴(レッ)、裁(ト)きは此処(モ)にッ(ア)!!」
その瞬間、極覇龍の鎧が拳に打ち抜かれる。

これこそが、ジャッジングサマエルプログライズキーにより発動する、カズヒ・シチャースチエの新たなる星辰光。

その名も、邪龍滅ぼす銀の一蹴、裁きは此処に

カズヒ・シチャースチエ
邪龍滅ぼす銀の一蹴、裁きは此処に
基準値：C
発動値：A
収束性：AA
拡散性：E
操縦性：E
付属性：C
維持性：D
干渉性：AA

カズヒとリーネスの想定を超える性能を発揮するそれは、奇しくも観客席で兵藤一誠が考えた理屈に則っている。
いうなれば相性の良さ。神の怒りと憎悪を向けられたことで最強の龍殺しになったサマエルの特性は、思念を集めることで力に変えるカズヒが振るう星の性質と酷似している。
それゆえに、龍殺しという特性に限定すればジャッジングサマエルはアスカロンやグラムすら超える。
その切り札たる一撃をもって　カズヒは前例の攻撃で決定打を求めんとする。
それに対し、ヴァーリ・ルシファーは拳と魔力での反撃をあえて捨て、即座に渾身の必殺をもって勝利を狙う。

既に猛攻はヴァーリの対応力を超え、また極覇龍は長期戦には向いていない。
故に―
『Ｃｏｍｐｒｅｓｓｉｏｎ　Ｄｉｖｉｄｅｒ!!』
―その全身全霊の半減をもって、存在そのものを滅する勢いで挑み―
「まだだぁっ!!」
『ジャッジングディストピア！』
その瞬間、絶大な龍殺しのオーラが全方位に放出される。
半減の力は白龍皇という龍に由来するもの。
結果として、その半減の力は龍殺しのオーラにより沈静化し、一時的にだが不発に終わる。
そして、それが突破する時間は与えられない。
「これで―」

銀
龍　討
靴

『ジャッジングユートピア！』
「終わりだ……糞餓鬼ぃっ!!」

ジャッジング

l　ユ

アピト

その一撃をもって、ヴァーリ・ルシファーは空高く打ち上げられる。
……ラートリーのモアという、龍殺しの逸話がある。
元々はある弁護士が神父を相手に起こした裁判を元にしたとされるそれは、龍の股間を蹴り上げる一撃がとどめになり、龍を打倒する物語だ。
その逸話を関した星をもって、白龍皇に決定的な一撃がここに叩き込まれる。
打ち上げられるヴァーリは、信じられないという驚愕で顔を染め上げ、痙攣しながら地に落ちる。
―その姿が転送の光に包まれ消えた瞬間、決着は示された。
その決着に喜色を見せるカズヒ陣営に、信じられないという驚愕を顔に浮かべるヴァーリチーム。
そんな視線を一身に受けながら、カズヒは宣言する。

「ヴァーリが起きたら沙汰の時間よ。分かったなら居住まいを正して受けることね」
『ヴァーリ・ルシファーの脱落（リタイア）を確認。カズヒ・シチャースチエの勝利です』

そのアナウンスと共に、大歓声が鳴り響いた。

明星双臨編　第五十二話　ケジメはしっかりつけましょう

イッセーＳｉｄｅ

「さて、じゃぁ誓約通りに沙汰を言い渡すわ」
「ぐ……屈辱な姿勢で受けさせるとはね……っ」
カズヒに見下ろされて、縛り付けられて座らされているヴァーリはすっごく悔しそうだった。
正直ちょっと同情するけど、カズヒはむしろ心外と言わんばかりの表情だ。
「……和平会談なんて言う大一番に、組織を「神々と戦いたい」なんて理由で裏切って手引きした奴が偉そうにしないでくれる？　それは当たり前の体勢よ」
ばっさり切り捨てたうえで、カズヒはヴァーリチームを睨み付けた。
大半が嫌そうな表情だけど、自分達が負けた側だってことは分かっているみたいだからとりあえず言うことは聞く構えらしい。
まぁ、神々すら見ている戦いで負けた結果だしな。ヴァーリもプライドは高いから、此処で反抗はしないだろう。
まぁ、リーネスが余裕の表情でセルフなんたらを見せびらかしているからそもそもできない仕様っぽいけど。魔術的に誓約まで掛けられた書面って、色々やばそうだし。
そんでもってカズヒだけど、微妙に嫌そうな表情だった。
「……まぁ、異形のノリは人間とは違うからそれなりに温情の意見は多かったりするのよ。だからまぁ、私から言わせればかなり軽くした

わ」
「……そうか。まぁ、リゼヴィムを探せるのなら俺はかまわ―」
ほっとしたようなヴァーリの眼前に、勢い良くカズヒの踵落としが叩き込まれる。
あ、カズヒの雰囲気が基本で言うなら五度ぐらい下がった。
「寝言は寝て言え……と言いたいけれど、週三日はくれてやるわ。感謝しなさい」
あ、その辺りも擁護とか入ってるんだ。
ただヴァーリもかなり不服そうだ。
「……週三日だと？　そちらとしてもリゼヴィムのアジトが分かるのは良い事だろうに―」
「それはこちら側の諜報部隊や偵察部隊がすることよ？　この期に及んでそれができると考えていることが私からすれば人生舐め腐ってるわね」
ばっさりヴァーリを切り捨ててから、カズヒは処罰の内容が書かれて要るっぽい巻物を開くとヴァーリチームを見下ろした。
「まず一つ。あんた達はただの食客兼交換要員としておくつもりだった黒歌とルフェイね。……うちのメイド達の前で食っちゃねできる生活とか舐めてんの？」
あ、うん。そうですよね。
そもそも兵藤邸（ウチ）のメイドって、禍の団に関係している人達の贖罪活動って側面もあるからな。しかもディオドラの眷属とか、割とやむを得ない事情の人達だ。
それが隣で、割とエンジョイしながらテロしてたヴァーリチームがとなると……なんか色々と無理があるな。
メリードが参加したのって、黒歌対策というよりそっちが強そうだな。厳しいけどちゃんと面倒見てるし。
……でもメイド？　黒歌が、メイド？
俺がめっちゃくちゃ失礼なことを考えていた時、カズヒもため息をついた。
「まぁ、社会不適合者に上流階級までいる家のメイドができるとは

思ってないわ。感涙しなさい黒歌」
「なんかムカつく！　いや助かるけど！」
素直な黒歌にうんうんと頷いてから、カズヒは沙汰を言い渡す。
「というわけで、あんた達は今後ふぃっちゃんねるのアシスタントね」
お、思ったより軽いな。
オーフィスの贖罪活動兼お小遣い稼ぎのふぃっちゃんねるは、確かにトライフォース放送局とは別アカだし、アシスタントが出てくれるのはありがたい。
レフ版の調整とか大変だからな。もはや俺達って、映研の手伝いぐらいは普通にできるようになってるし。メンバーの一人に異能関係者がいたから、手伝ったけどかなり感心されたし。
だけどそれって軽すぎないか？　基本ふぃっちゃんねるって、子供レベルの活動だぞ？
そう思ったけど、カズヒがそんな温い真似で済ますわけがなかった。
「……ちなみに明後日からサハラ砂漠でエクストリームアイロンをやってもらうわ。あ、これ着ぐるみだからちゃんと慣らしておきなさい」
「「……え⊠」」
うわぁ。黒と紫のドラゴンっぽい着ぐるみだ。ゆるキャラ風だから動きにくそう。
しかもサハラ砂漠で着ぐるみって。確か湿度が低いと着込んだ方が熱くないっていうけど、あれだとかなり熱くなるだろ。風通しも悪いし地獄じゃね？
「っていうかエクストリームアイロンってなに？」
「字面がもう意味不明です」
俺もシャルロットも唖然としているけど、隣にいたリアスが苦笑した。
「なんでも大変な環境下でアイロンをするマイナー競技らしいわ。アイロンがけの速さや丁寧さなどでポイントがつくらしいわよ？」
「ああ、確かにサハラ砂漠は該当しそうな環境ですね」

遠い目になっているシャルロットが見るなか、カズヒはため息をつきながら。
「流石に懲罰活動込みだから、もっと厳しくもっと支援金を稼げるようにしたかったの。ちなみに、季節がらから今後は雪山を主体にする予定だから頑張りなさい。最終的に南極や北極でやりたいところね」
カズヒの目はマジだった。
あ、これ本気だ。
「……黒歌さん、頑張りましょう！」
「え、これマジでやる流れ!?」
ルフェイとは違って黒歌はビビり気味だけど、カズヒがそれを止めるわけがない。
「……自殺の名所や心霊スポットも考えたのだけれど、メンツがメンツだからエクストリームにならないもの。まぁ頑張りなさい」
そういった後で、今度はヴァーリ達の方に振り向いた。
「で、あんたたちは週三日はリゼヴィム探させてあげるから、その分厳しめに行かせてもらうわ」
「あれで温いのかよ!?」
美猴のツッコミが飛ぶけど、カズヒはむしろ呆れ気味だった。
「当たり前でしょう。ぶっちゃければただのＡＤだもの」
そういい捨ててから、カズヒはため息一つで態度を切り替える。
「まずあんた達は週四日の奉仕活動！　ヴァーリはそれと合わせて月一でルシファー血族として冥界のイベント業務に参加しなさい。週四に入れてあげるから喜ぶといいわ」
あ、三人揃って微妙な表情だ。
特にヴァーリはかなり不満顔だな。
「……そんな面倒ごとをしている暇があるなら、リゼヴィムを――」
「シャラップ！　王族としての誇りを語りたいなら、まずは王族らしいことをすることね。ついでに言えば、テロリストの首魁を探すのは諜報組織の仕事で、あんたはエージェントですらない。数日でも探せるだけ感謝しなさい」
カズヒは盛大にバッサリ切ってから、次はアーサーの方に向いた。

「あとあんたはコールブランド一旦没収」
その沙汰を聞いて、アーサーは怪訝そうな表情を思いっきり浮かべていた。
「私以上にコールブランドを使いこなせる使い手は、今のペンドラゴン家にいるとは思えませんが？」
「使いこなせようがテロに走る奴に預ける道理もないでしょう。ま、厳密には少し違うわ」
カズヒはアーサーにそう言い返すと、ちらりと観客席の方を見ていた。
既に曹操がいることに気づいたんだろう。事情は完全には分かってないけど、微妙な表情を浮かべてからアーサーに視線を戻す。
「英雄派のジャンヌを使って、エクスカリバーやデュランダルの量産計画が進んでいるわ。コールブランドはその計画に徴用されるからそのつもりで」
そうカズヒに言いきられて、アーサーは目を丸くしていた。
「ペンドラゴン家の至宝に量産型を!?　家の者達は何を考えているのですか!!」
「八割あなたの所為だけど？」
カズヒはアーサーをばっさり切り捨てると、ため息までつきだした。
「本家の跡取りが家宝持ちだしてテロリストなんてしたものだから、ペンドラゴン家も文句が言いづらいのよ。むしろペンドラゴン分家に一振りずつコールブランドの弱体化機能を盛り込んだ量産型を送る形になって、反発や不満も一気に下火になったと聞いているわ」
あ～確かに。
つまりカウンターを用意したいってことか。確かのそれだと、テロリストに使われてるって事実があるから文句も言いづらいか。
これはアーサーが悪い。趣味の合間にテロなんてやってるからな。自業自得っちゃ自業自得だ。文句を言えないな。
「なるほど。ペンドラゴン分家に利益を与えると共に、同様の事態における火消し役を担わせるのね」

「和平による協調路線なら、三大勢力外の強化もした方がバランスもとれますしね。」
隣でリアスが感心していると、シャルロットも指を口元に近づけて唸っている。
二人とも才媛だから、馬鹿な俺よりちゃんと考えられるんだよなぁ。
でも実際、アーサーのプライドとかめちゃくちゃ傷つきそうだから、懲罰としてはありなのか？
そんなことを考えていると、今度は美猴の方を向いて―
「……貴方ぶっちゃけ、対して目立ってないから特別追加する必要はないわね」
「今までで一番ひでぇ!?」
あ、美猴がめっちゃショック受けて崩れ落ちた。
あ、でもあんまりこいつが活躍してるというか目立ってるとこを見たことないかも。
なんか可哀想だから何かないか思い出していると、カズヒは更に一枚紙を取り出した。
「ついでに言うと生活環境においても多少縛るわ。まぁ安心しなさい。もっと強くなれるから」
「「……？」」
首をかしげるヴァーリチームに対して、カズヒは一息数と―
「あんた達当分カップ麺禁止。あと一日最低二食は自炊しなさい」
―なんか訳の分からない条件が課せられたぞ!?
「てめえふざけんな！　カップ麺美味しいのに禁止ってどういうこったい！」
「そうですよ。食事は戦闘糧食（レーション）で十分でしょう？」
反論した美猴とアーサーの足元に、素早く短剣が突き立った。
投げつけたのはもちろんカズヒ。その目は呆れが思いっきり溢れ返っていた。
馬鹿か貴様は。誰でも分かるぐらい目が口以上にものを行ってるよ。

「戦闘糧食（コンバットレーション）もカップ麺も、毎日それですましたら不健康すぎるわ」
ばっさり言い切ってから、カズヒは今までで一番盛大な溜息までついた。
「食品添加物や過剰な脂質と糖質を盛大にとりまくって。成人病に未成年でなるつもりかと言いたくなるし、そもそもフィジカル重視の戦闘職がそんなことでやっていけると？」
あ、確かに。
健康にめっちゃ悪そうな生活だよなぁ。
そういえばアザゼル先生から聞いたけど、ヴァーリチームってルフェイがいないと本当にカップ麺や戦闘糧食で済ませてるらしいな。フェンリルにまでカップ麺出してたとか。
犬にカップ麺って、問題だらけだよなぁ。いや、狼だけど。
「食生活は体づくりの基礎。まさか自分の好きなことだけ頑張れば好きなことを極められると？　世の中そんなに甘くできてないのよ、間抜けが」
正論過ぎてぐうの音も出ない。
「中にはそれでできる奴がいることまで否定はしないけど、私に見事にぶちのめされた奴らが該当するとは思えないわね。……安心しなさい、お料理教室にはエプロン込みで案内してあげるわ」
そこまで言い切って、カズヒは軽く息を吐いた。
そして観客席に振り返って、胸を張って声を張り上げる。
「沙汰は此処に下った！　異議がある者はこの場にて名乗り上げてもらいたい！」
その言葉に、誰も何も答えない。
それを確認してから、カズヒはふぅと息をついてヴァーリ達に振り替える。
「自分達がないがしろにしてきたものが、どれだけ誰かにとって価値があるか、それを理解することね」
そう、真摯な表情でカズヒは言い切り―

和地Ｓｉｄｅ

「……カズヒねぇ、全部終わってから倒れたって」
「「あぁ……」」
なんというか、一周回って全員納得してしまった。
とりあえずカズヒねぇはいつも通りで、つまり世はことも無し。とりあえず決着はついたのでまぁそれは良しとしよう。
「あとリヴァ先生と鶴羽も来るって。あとカズヒねぇにお土産買うからデリバリーできるか確認してくれと」
「……確か外でお持ち帰りメニューとかあったわね。いや、だからって態々こっち来る？」
春っちにそう言われても俺が困る。
「あれじゃね？　毎度毎度のこと過ぎて、鬱憤溜まってるから外食してぇとか」
「「あ～」」
ベルナの推測が当たってそうだな。
かなり毎度毎度だしなぁ。そりゃ思うところも出てくるというか。
とりあえず、区切り付けるまでは意志力で無理やり断行。その後まとめて一気にぶっ倒れる。これがカズヒねぇの基本パターンになりすぎて心配する気もなくなってくる。
いや本当、意志力で無理を通しすぎだろう、カズヒねぇ。
「よっし見つけたわよ！　おねぇさ～ん、あそこの四人組と相席なんでよろしくぅ！」
「食べる！　今日は食べるわ！　とりあえずカレーライスとオムライス！　お腹すいたぁ！」
しかもあっという間に二人とも来たし。
……騒がしくなりすぎないように、度が過ぎるようなら注意しよ

う。
俺はそう思いながら、ベルナや春っちと話始める鶴羽とリヴァ先生を苦笑交じりで見ながら座り込む。
隣のインガ姉ちゃんも苦笑交じりだけど、視線が合うと思わず笑い合ってしまう。
今日のことは、インガ姉ちゃんにとっては区切りになってもいい結果とは言い切れない。
だけどそれでも、前に進もうとしてくれることが嬉しい。そうなる要因になれていることを誇りたい。
だから、俺はそっとインガ姉ちゃんの手を握る。
「何かあったら言ってくれ。俺も、助けが欲しい時はちゃんと言うから」
「分かってるよ。私の素敵な救済者（タイタス・クロウ）」
ああ、分かってる。
今までも大変だった。今後も大変だろう。というか、異世界侵略を目論む魔王の実子とかド級の厄ネタすぎる。
だけど、それでも前を向いてやって見せるさ。
だからまぁ、カズヒねぇも明日には復活してくれと思いながら、俺はインガ姉ちゃんに微笑んだ。
「さて、やけ食い側は俺も何とかするけど、お酒の相手はまだできないんでリヴァ先生任せていいかな？」
「任せて。これでも一応、成人済みだからさ？」
ああ、まずは英気を養おう。

明日からも、いっちょ頑張ります!!

明星双臨編　幕間　ワックスがけの前にはきちんと埃を掃除しよう

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……なんで、こんなことをしているんだろうな」
思わず、ヴァーリ・ルシファーはそうぼやいていた。
そしてそれを聞いた隣の男が、半目でこちらに向けてきた。
「気持ち分かるが声がでけえよ。ガキどもに聞かれたら後で叱られるぞ」
その意見は実に正しいのだが、非常に癪に障る相手に言われてしまった。
その感情を盛大に表情で表しながら、ヴァーリは声でもはっきり伝える。
「すっかり保父が似合うような対応をとるようになったな、ヘラクレス」
「今の何処がだ。あとだから声が出けえんだよ」
そう小声で言い返しながら、英雄派主流幹部である、ヘラクレスは小さくため息をついた。
そんな二人の視線の先、悪魔の子供達が数人の人間にカバーされるようにして、周囲を物珍し気に見ている。
「お空が青いー」
「人間界の建物って、こんななんだー」
そう次々に辺りを見回す悪魔の子供に対して、戦闘を歩く男女が振り返って声を上げる。
「ほら、あまり前を見ないでいるとコケるぞ？」
「そうよ。珍しすぎる機会でしょうけど、少しは周囲に気を配りなさ

い？」
そう告げるのは、兵藤一誠とカズヒ・シチャースチエ。
二人のたしなめる声に、子供達は一斉に頷いた。
『『『『『『『『はーい！　しるばーれっとにおっぱいドラゴーン♪』』』』』』』』
「……どうしてこうなった……」
今度はヘラクレスとハモりながら、ヴァーリは思わずため息をついた。

和地Ｓｉｄｅ

「今頃、カズヒねぇはイッセー達と一緒に引率か」
「子供のヒーローのおっぱいドラゴン（イッセー君）に、締める担当のカズヒで上手く飴と鞭って感じかな？」
そう言い合いながら、俺とインガ姉ちゃんはモップ掛けを行っていた。
ここは冥界の保育園。俺達はそこで掃除の手伝いをしていた。
そして俺は視線を別の方向に向けると、動きが止まっている奴らに声をかける。
「ほらそこ！　モップ掛けぐらいきちんとしろ！」
「……へ～い」
そう言われて、うんざりした感じで渋々モップを動かすのは美猴だ。
隣のアーサーは釈然としないものを感じながらも、それでもこっちはちゃんと動いている。

「……エレインの視点を知るいい機会と考えますか。これはこれでいい機会でしょう」
素直に掃除をしてくれるのはありがたいが、エレインって誰だ？
「そっちモップ掛け終わった？　ワックスかける？」
「隣の部屋もう終わるぞー？」
掃除が終わった部屋でワックスをかけていた春っちとベルナが声をかけてくる。
これは急いだ方がいいな。かといって雑にならないようにしなくては。
俺とインガ姉ちゃんは、無言で頷き合うと美猴とアーサーの慣れない仕事の粗を埋めるべく動き出す。

ことの発端は簡潔に言えば、ヴァーリ達に参加させている奉仕活動の一環だ。
現大王派、厳密にはフロンズ・フィーニクスがちょっとした社会科見学の一環として「冥界の子供達に人間界を見学させる」などということを目論んだ。
その試験的運用として、魔王サーゼクス様が手練れの護衛がいるある保育園を指定。ついでにそこのワックスがけなどもすることになり、こうしてヴァーリチームの奉仕活動も兼ねている。
ヴァーリは仮にもルシファーの末裔なので、子供達を護衛する役目として向けた。子供もおっぱいドラゴンやルシファーのひ孫と一緒に参加できるのならテンションが上がるだろう。
上がりすぎて何か起こるかもしれないが、カズヒねぇが監視として付いて行ってるからそこまで危険ではないはずだ。変な不良に絡まれるとか、いきなりトラックが突っ込んでくる程度なら余裕で対処できるメンツだしな。
しかし、まぁ。

「あのヘラクレスが保育園の守衛兼用務員とは」
子供が乗っているバスを人質にとるような真似をした奴を保育園の用務員兼守衛とか、悪魔の発想は俺達人間とはやはりずれているような気がしないでもない。
まぁ文化の違いだ。種族も違うんだから、お互いに寛容が肝心だろう。
そう思いながらもモップ掛けを終え、俺達は一旦外に出る。
……しかし冥界の紫の空は、人間界で過ごすのが殆ど並みとしては違和感大きいな。
今頃、冥界の子供達もそんな感想を抱いているのかなぁ……。

イッセーＳｉｄｅ

『『『

「オイ何がどうなってんだ!?　どう考えてもガキの教育に悪いだろうが！」
「ほ、本官に言われても!?　急に警部補まであれに加わって何が何だか!?」
ヘラクレスがキレ気味に警察官に詰め寄ってるけど、あっちはあっちでいっぱいいっぱいいっぱいしい!?
「これが今の人間界なのか……」
「「んなわけあるかっ！」」
ヴァーリはボケるなぁ！
んなわけないだろ！　人間界なんだと思ってんだ！　特にここは、世界的に見ても大規模な事件が起きにくい日本だぞ！
だけど、俺は何となく展開の予想ができ始めていた。
この展開、めっちゃ覚えてるぞ。最近多すぎて忘れたくても忘れられない。
月に一回レベルでオカ研が巻き込まれる謎の変態現象。これはそれだ、それでしかない。
となるとまずい。この騒ぎはもっとでかくなる！
ロキがオーディンの爺さんを狙った時に、あいつらは俺達三大勢力や禍の団まで戦ってみる三つ巴を四つ巴にできるだけの戦力だった。
そんな奴らの戦力がこれで終わるか。絶対にもっと規模がデカくなる!!
だってあいつら、異形知らないんだもん。だから絶対もっとやらかすし。予想ができて頭が痛い。
こ、これはなんとしても子供達を逃がさないと―
「……なんと！　よもやここまでの規模で性都が顕現するとは！」
―遅かったか！
見ればそこには、なんていうかエロゲで出てきそうな衣装を着こんだ連中が立っていた。
かなり集団で、しかも制服として着込んでいるのか共通の格好だ。
こいつは、こいつらは絶対にまずい。
俺の、お得意様から関係者などの変態に関わりまくってきた勘が告

げている。
　あいつらは、ファーブニルレベルのド変態だ!!
「今これより、この地は色欲の洗礼受けし性都となる！　遍くものよ淫らたれ！」
「いくわよ、筆おろしと姫はじめを！」
『『『

それを見て、ロスヴァイセも居住まいを正しながら画面に近づいた。
優れた研究者であるリーネスが、ここまで警戒するほどの事態。どう考えてもただで済むことはないだろう。
画面を見始めるロスヴァイセもまた、そのデータを確認して眉を顰める。
「……現世聖域（カテドラル・グレイブ）の墓標。かつてアドルフ・ヒトラーの手に渡って判明した、聖遺物も同然たる聖墓に由来する神滅具。それが、禁手（バランス・ブレイカー）に至っているというのですか」
「ええ。地脈の力を利用して理想とする効果を施した聖域を作る能力。これを遠隔地に発動させることで、自分達にとっての聖地に変革させる禁手と考えるべきねぇ」
今回の事件はその一環と考えるべきだろう。
大欲情教団は、組織的に本格的な布教活動を開始し始めたと見える。
「この様子では、おそらく他にも多数の似たような場所が生まれているわねぇ。各勢力に頼んで調査を進めてもらわないとぉ」
「……クリフォトだけでも頭が痛いというのに、迷惑な話ですね」
リーネスもロスヴァイセも、この事態に重い溜息をついた。
……そして何より、そんな連中に巻き込まれているカズヒやイッセーの苦労を想い、更にため息をついた。

イッセーＳｉｄｅ

「お疲れ様でした！　いや、本当にそっちはお疲れ様！」

「「「……はぁ」」」
九成がねぎらってくれるけど、いや本当に疲れたよ。
今あの町、凄い勢いでいろんな勢力が除染に動いているからな。凄い勢いで住人が変態に目覚めていって、しかも自発的に覚醒しているから完治は難しいっていうし。
自分達の性癖を自覚させ、変態でいることを誇りに思わせる。更にそんな彼らに力を与え、能力が明確に上昇する。そんな力を持つ土地になってしまった。
冥界の子供達が影響を受ける前に避難できて良かった。なんか除染中に除染している人が変態になる事例も発生しているみたいだし、マジ危なかった。
「一歩間違ってたら俺も変態になってたのかよ。やばい連中だって聞いてたが、マジでやばいじゃねえか……っ」
ヘラクレスはウーロン茶をすすりながらそうぼやくけど、ちょっと離れたところで美猴はむしろ興味津々の様子だった。
「傍から聞いてると、一周回って面白そうだけどねぃ？　どうだった、ヴァーリ？」
「そうだな。士気は高く練度も取れている実働部隊だったと思う。影響を受けた者達も強い意志ゆえに能力以上にしぶといところはあったね。……兵藤一誠には劣る精神性だったけどね」
「なるほど。流石におっぱいドラゴンほどの強い変態性を得るには、外部からの刺激だけでは不可能ということですか。先天的かつ自発的に覚醒しているからこその乳龍帝とその力なのでしょうね」
ヴァーリの説明にアーサーまで感嘆しているけど、お前らそれでいいのか。
思わず半目でいると、ヘラクレスと視線が合った。
―あいつらイカれてんな
―本当にそれな
心が通じ合ったと思う。この馬鹿どもはどうしたもんか。
「……和地、ちょっと肩貸して？」
と、カズヒ姉がそう言ってきたので、素直に隣によるとカズヒねぇ

はそのまま方に頭をのせてもたれかかる。
あ、これかなり疲れてるな。
「つたく。ガキどもが変なことになったらどうするってんだ。あの変態どもは、乳龍帝以上に始末に負えねえ」
「大変だったなそっちも。ま、今日は苦労した分休んどけ。お代はグレモリーが持つそうだから、ちっとぐらい高いの頼んでも問題ねえしな」
ヘラクレスはベルナが愚痴を受け持ってくれるらしい。
ま、一応アイツも英雄派に属してたからな。少しは話しやすいだろう。
今回ばかりは苦労しただろうし、それぐらいはお目こぼししてやるか。あと帰ったら俺がベルナを甘やかそう。
「師匠、お茶のお替り持ってきたわよ」
「ありがとう。そこに置いといて」
春っちもカズヒねぇのフォローに回ってくれてありがとう。本当に疲れてる感じだから、今日は甘やかさせてくれ。
「でも、あの集団って本当に規模が大きいね。しかも活動がどんどん大規模になってきてない？」
俺の隣をさらりとキープしていたインガ姉ちゃんが、そこを気にしていたのかそう呟いた。
その瞬間、俺達の脳裏に浮かぶ光景があった。
……京都のおっぱいゾンビや、ファーブニルみたいな連中が大挙して押し寄せてくる光景だ。
「ちょっと戦うのも面白そうだねぃ？」
「確かに。乳龍帝の本領発揮はヴァーリだけがぶつかってますし、興味がないでもありません」
「ふふっ。中々面白い戦いになるぞ？　滾りそうだね」
平常運転にもほどがあるだろ、この馬鹿ども。
ヘラクレスを見習え。心の底からげんなりしてくれるぞ。
「んなもん兵藤一誠だけで十分だろうが」
まったくもって同意なんだが、現実は残酷なんだ。

「「「「「ゴメン、ファーブニル増えてる」」」」」
俺達兵藤邸メンバーが異口同音でつい謝ると、ヘラクレスは顔面に絶望を張り付けた。
「またドラゴンで変態かよ!? もうなんも誇り高くねえだろうが、そんな種族!」
『……一緒にしないでくれ。頼むから!』
思わず出てきたヘラクレスのツッコミに、反射で二天龍が懇願までする事態だった。

あの連中、さっさと本拠地見つけて神滅具だけでもなんとかしないとなぁ。
クリフォトのが優先順位高いけど、そっちの決着ついたらさっさとケリをつける方向で言ってほしい。いや、マジで!

第七章　英霊乱戦編

英雄乱戦編　第一話　悪意は感染し広がっていく

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ある日、世界各地で同時多発的な作戦が決行されようとしていた。
数十年の時を駆け、彼らはこれまで準備を続けてきた。その結果が、此処に結実しようとしていたのだ。
その発端は一世紀以上前。麻薬が危険視されるようになった時、それを悲観していた者が小規模な亜種聖杯戦争に偶発的に参加した時だ。
先見の目を持っていた彼らは、最低でも百年を超えて計画を進めるべく暗躍していた。
本来全人類に与えられるべき福音を、犯罪という形で暴利を貪る道具にならない世界とする為に。
事実彼らがここまでの規模を獲得できたのは、本来犯罪とされるそれを金稼ぎの道具にしなかったからに他ならない。
それで金を稼ぐつもりもなく、むしろ無償で人類すべてに広まるべき。その一念の元、可能な限り合法的な手段で人脈と金策を集めた。そしてサウザンドディストラクションを見過ごすことなく、集められる要素も集め続けた。
その結果がここに結実する。
米国、英国、中国、そして日本国。それらを含めたいくつもの国家の首都に、この為に準備した十機以上のヘリコプターが発進できる。
満載されたこれらを散布すれば、嫌悪する者達もその祝福を理解することだろう。

その決意を胸に、今建設において異能や異形の力を借りて設立した秘匿格納庫から輸送ヘリが各地に向かって発進―

「機動隊だぁ！」

「ＳＡＴだぁ！」

「自衛隊だぁ！」

「五大宗家だぁ！」

「グリーンベレーだぁ！」

「スペツナズだぁ！」

「ＩＣＰＯだぁ！」

「国連軍だぁ！」

―するまさにその時、世界各地で一斉に戦闘部隊が突入した！

和地Ｓｉｄｅ

「よし間に合ったぁ！」
「入口確保ですのぉ！」
俺とヒマリが連携で入り口を確保し、そこから一斉に突入部隊が突貫する。
なんてことだ。なんてことだ。
「全人類が麻薬を楽しめる世界を齎したい」とする秘密結社なんて言う、あほみたいな組織がこんなところに存在していたとは。
しかも「同時多発強国首都麻薬散布作戦」なんていう大作戦が実行される直前に掴めるとは、悪夢というほかない。
しかも異能保有者まで組織に参加している所為で、撲滅作戦には異能関係者まで参加する事態になっている。
これが阻止できなければ、首都近郊に住まうたくさんの人が最低でも数百人規模で麻薬中毒になってしまう。責任重大すぎる。
……結果として、特に戦力が集まっているらしい日本の本拠地。なんでも独自開発型のプログライズキーや変身デバイスまであるらしい。そんな地区に、戦力確保を兼ねて「お前ら共同出撃に慣れてこい」などと上の判断で派遣されたよ我らがＤ×Ｄ。
結果として、とりあえず突撃しているメンバーが精鋭すぎてちょっと敵に同情。

中国は天帝参加で英雄派が、アメリカはフロンズ・フィーニクス主導で後継私掠船団が動いているらしい。
イヤホンとこれ、あまりの戦力過剰に敵に同情したくなるというか―
「うぉおおお！　邪魔はさせん、世界を至福につつませる邪魔はさせんぞぉおおお！」
「我らが命に代えても、至福を広めさせてみせる！」
「至福を世界に広める為に！　邪魔する者に死を！」
「麻薬は至福！」
「至福は麻薬！」
「ドラッグイズピース！」
「ピースイズドラッグ！」
「至福！　至福！　至福！」
「麻薬！　麻薬！　麻薬！」
……前言撤回したい。
『トッピングユートピア！』
『『トッピングディストピア！』』
『『『『『トッピングボライド！』』』』』
そして敵の猛攻も激しい。
麻薬を広め麻薬中毒のまま活動する為に開発されたとかいう、トッピングクロコダイルプログライズキーによって変身するトッピングクロコダイルレイダー。
更にザイアから流出した滅亡迅雷フォースライザーを参考に、トッピングクロコダイルキーの力を正面戦闘に必要な部分に必要ない部分を回して強化された、仮面ライダードラッグ。
もはやどこから突っ込んでいいか分からない、悪夢のような軍団がそこかしこから襲い掛かってくる。
クロコダイルのライダモデルを部分的に具現化して武器にするだけでなく、跳び回転踵落としとかぶっかましてきて突入部隊も手古摺っている。
なにせ麻薬キメてる奴らばっかりだから、結果的に打たれ強いから

な！
「とりあえず四肢の関節を砕きなさい！　物理的に稼働不可能にすれば無力化はできるわ！」
「はっはぁ！　殺さない方が敵集団の鎮圧はやりやすかったりするからな！」
そして前方を突貫するのは、対人戦に慣れているカズヒねぇと、同じように対人戦ばっかり経験している勇儀さん。
的確に相手を物理的に動けない様ぶちのめしていく！
そしてそれに続くように、
「その通り！　冥界にまで麻薬が広まる前に叩き潰す！」
「このレベルの愚か者を見過ごす気は無いわね！」
それに続いて大暴れするは、サイラオーグ・バアルと並び立つように駆けるリアス部長！
二人揃って武闘派なので、圧倒的武力をもって薙ぎ払っていく！
相も変わらず頼もしくも恐ろしい。この二人を同時に敵に回すとか、分かる奴なら失神ものだ。
そして二人の眷属もまた、全力で暴れ回って敵を薙ぎ払っていく。
うっかりやりすぎてもすぐにアーシアの回復までくるからな。頭とか重要臓器が丸ごと砕け散ってもいない限りは、首の骨が砕けても瞬時に直される鬼仕様だ。勢い余って関節まで直されてしまえば、後詰が慌ててカバーで砕くから地獄第二弾。
……うん。殲滅は時間の問題だな。
俺はその辺を理解したうえで、周囲を警戒してヒマリと共に移動する。
主力メンバーは圧倒的な力で敵を薙ぎ払って行くが、これはある意味で陽動だ。
この作戦の目的は敵集団を打倒することではない。敵集団の目的を阻害することだ。
すなわち、ヘリによる麻薬の無差別散布を阻止すること。つまりヘリの鎮圧こそが最も優先するべき目的といえる。
なので適度なところで別行動を行い、ツーマンセルでの連携に慣れ

ている俺とヒマリが素早くヘリポートを探して突貫する。
「それにしても善意で麻薬を無償配布とか、何度聞いても首を傾げますのねぇ」
「麻薬って覚せい剤と違ってダウナーになるはずなんだけど、なんでハイテンションなんだよあいつら」
正直ちょっと戦慄すら覚えている。
まぁそんなことをヒマリと交わしながら、俺達はすぐにヘリポートを見つけていた。
異能保有者が集まりまくって防護体制をとっているから、此処は一気に仕掛けるしかないだろう。
既にヘリも出る直前。なら尚更さっさとしないとな。
「よし、グリド出して相手をかく乱してから俺達でヘリ制圧だ」
「ラジャーですわ！」
俺の判断にヒマリがすぐに頷いて、指を突き出し―
「……和地」
「どうした？」
―このタイミングでなんだ？
俺が疑問符を浮かべながら思わず首をかしげると、ヒマリが珍しくぎこちない動きでこっちを見る。
「……グリド出ませんの？」
「……マジで？」
出足がくじかれたぁ!?
『先輩方ちょっと非常事態っす！　ヒツギ先輩が神器使えなくなりました！　ドラゴンの方です！』
しかもヒツギもぉおおおおお!?
糞ったれ！　とにかくまずはヘリの鎮圧だ！
「こうなればやけだ。ディフェンディングタートルで突貫するから援護よろしく！」
強引に弾幕を突っ切って、とりあえずヘリに損害を与えるのみ！
俺は素早くディフェンディングタートルに形態を変えると、意を決して突貫を―

「いや、その必要はねぇよ」

―その瞬間、ヘリの辺りに盛大な爆発が起きた。
それもナパームの類だったのか、麻薬の類が凄い勢いで燃えていく。
思わぬ展開に俺とヒマリが顔を見合わせた時、素早く俺達の近くに着地する人影が。
三十代後半に差し掛かった直後レベルの髪が長い男性。
そんな人物が素早く着地すると、こっちに強い声を出す。
「急げ！　気化した麻薬を吸ったら問題だぞ！」
「はい！」
俺もヒマリもすぐに走り出し、とりあえずその場を後にすることに成功した。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「さて父さん。どうやら今回のケースは上手くいきそうだよ」
「おっほー！　こっちからしたら大したことない情報を流した程度

で、人間世界のテロリストがどんどん活性化してってるねぇ～♪」
「異形技術を研究環境に応用し、更にサウザンドディストラクションで後継私掠船団が保有した情報に価値があり、とどめにアルバートが研究発展を進めていたからね」
「俺達にとっちゃぁ型落ち当然でも、そんじゃそこらの犯罪組織にとっちゃぁ暴れたくなるには十分すぎるおもちゃだってことか」
「そりゃそうだよ。そしてだからこそ価値がある」
「大したことない出費で、対クリフォト組織（俺達）も引っ掻き回せるし、それ以外の連中なら尚更気を散らせられるってか？」
「とても大事なことでしょう？　異世界に侵略するというのなら、それこそ戦力は多いに越したことはないんだから、時間が欠けれるに越したことはないでしょ？」
「う～ん。こののんびり屋というか準備に時間をかけすぎてもいいってところ、俺とはどうしても合わねえなぁ？　ま、だからこそ怖いんだけどさ！」
「ふふっ、まぁ、やりたくてたまらないからこそ、本気で成功させる為に頑張るべきだって話さ」

英雄乱戦編　第二話　縁は異なもの味なもの

イッセーＳｉｄｅ

何とか作戦は成功して、麻薬配布組織に壊滅的打撃を与えることに成功した。
ただ、麻薬が満載されたヘリが燃え盛っているからそっちが大変。
今大絶賛封鎖されてるし、万が一吸い込んでたら大変ってことで、俺達も待機ってことになってる。
特にヒマリと九成が大変だよなぁ。
炎上する麻薬のすぐ近くにいたから、特に念入りに検査されてるみたいだし。
「……っていうか、私とヒマリが同時に不調って、なんか繋がってるよねコレ」
「確かにね。まぁ、何とかなってるみたいでよかったけど」
ヒツギとカズヒがそう言いながら一緒に来てくれているけど、実際その辺が不安でしかないっていうか。
……ヒツギとヒマリはいろんな意味で繋がってるから、二人同時だとやっぱり気になるよな。
カズヒがついて来てるのも、九成の見舞いも兼ねてるってだけじゃないだろうし。
前線に出張れるだけで基本後方支援な上、今色々と忙しくて後方で研究に徹しているリーネス。一応立ち位置はソーナ会長側の出向で、ＡＩＭＳ第二部隊でもあるから今回は周囲の警戒とか後詰を担当している南空さん。二人もいるならついて来てただろう。
俺もかなり気になるよなぁ。
ヒツギもヒマリも神器が不調になってる。それも、龍を封印した神器の方だ。
「……赤龍婚乳（パストライク）が関わってそうだよなぁ」

「確かにねぇ……」
俺もヒツギも、正直ちょっと遠い目だった。
カズヒもその辺は同意なのか、ちょっと何とも言えない表情になっている。
「半永久的にドラゴン化させる技を使い、龍封印神器の持ち主そのものを赤龍帝化したわけだもの。ギャスパーの神器みたいなイレギュラーは十分起こりそうね」
確かに。今になれば分かるけど、あれって本当にやばいことになりそうだよなぁ。
元々強力だったギャスパーの神器は、肖り元の神様の残滓が宿ったことで神滅具級の神器になったわけだ。なら、ドラゴンを封印されている神器に、持ち主を赤龍帝化させる技を使ってもやばいよなぁ。その神器そのものもギャスパーの神器張りに強力だし。
前例があるから又あるかもって思っちゃいたいくなるよなぁ。しかもきっかけは俺が作ったようなもんだし、不安になるし責任も感じちまうよ。
うん。俺がきっかけなんだから頑張らないとな。
「ヒマリにも言うけど、神器で何かあったらすぐに俺に言ってくれ。あんまりできることはないけど、添い寝ぐらいはできるし興行収入とかで資金面には自信あるから」
俺はまぁ、微妙に情けないことをヒツギに言う。
イヤホンと、それぐらいしかできないのが男として情けないっていうかなんて言うか。
俺って神器で色々と前代未聞なことをしているし、ちょっとぐらい本気で神器の研究資料とか見た方がいいかもなぁ。特にギャスパーのデータとか知った方がいいだろうけど、そもそもの知識がないから基礎から始めないと。
「カズヒ、悪いんだけどリーネスに後で頼みごとしたいから相談に乗って……くれる……と？」
なんか、俺がちょっと考えている間に何かがおかしい。
ヒツギは口をパクパクさせながら顔を真っ赤にしている。カズヒ

は俺に感心している表情でまじまじ見ているし、そのあとヒツギの方を見ると、にやにやしているようなほっとしているような複雑な表情を浮かべている。
そんなにあれなことは言った記憶がないんだけど。何かしたようなことあったっけか？
俺がちょっと訳が分からないでいると、なんていうかカズヒが感謝してるような感じの苦笑を浮かべてきた。
「……ヒツギやヒマリが貴方と会えたのは本当に幸いね。二人にとっても、私にとっても……」
す、凄い事を言われた気がする。
そ、そんな凄い事言ったっけか？
俺はちょっと首を捻って考えてみるけど、何時の間にかヒマリと九成が検査を受けてる部屋のすぐ近くに来ていた。
あとドアの前に人がいる。確か木場や九成が会ったっていう、英雄派幹部の部下になってたらしい人か。
なんかすっごい微妙だったらしく、真剣に転職を考えているらしい。いっそのこと独立して星辰奏者の派遣サービスとか日本でできないか考え中とか。
名前は……接木勇儀さんだったな。その接木さんがカズヒを見て、ちょっと苦笑してた。
「よう日美っち。そっちは身内の検査か？」
「どうしたの勇ちん？　貴方、施設外周の包囲担当じゃなかったかしら」
カズヒにそう聞かれると、接木さんは肩をすくめて苦笑いしてた。
「爆発で燃えながら吹き飛んだ麻薬（ブツ）が近くの風上に落ちてきてな？　すぐ離れてガスマスクも付けたが、万が一を考えてちょっと検査してもらおうかと思ってんだよ」
あ～。なるほど。
爆発って結構デカかったみたいだしなぁ。ちょっとぐらい破片とか飛んでくることもあったかぁ。
俺が同情していると、接木さんとカズヒが話し合ってお互いの事情

とかを把握したらしい。
「じゃ、此処は年上がやっとくかねぇ。……D×Dの者です、入ってもよろしいでしょうか？」
接木さんはドアの方をノックするとそう声をかける。
あ、そうか。実年齢的に接木さんが一番年上だからやった方がいいんだ。
「お話は伺っております。どうぞ入ってきてください」
部屋の中から返事が返ってきたので、俺達は頷くと医務室に入っていく。
お、結構人が多いな。
まぁ麻薬が全人類に不足なく行き渡る世界を作ろうとしている連中だしな。そこかしこに麻薬があって、戦闘の余波で燃えたりしたんだろう。
割と結構騒がしいな。
「検査キットは持ち運べますので、よろしければお二人がいる方へどうぞ。彼らの結果はもうすぐ出ますよ」
「ありがとうございます。んじゃ、行くか」
接木さんがそう言ってくれて、俺達は九成達の方に行く。
……あ、二人とも近くの人となんか話している。
「おーい！　二人とも体調とか大丈夫かぁ……あれ？」
あれ？　なんか声に反応して二人と一緒に振り返った人が、面食らってる。
年齢から言って多分俺達の知り合いじゃないし、接木さんかな……あれ？
なんで接木さんと一緒にカズヒまで面食らってるんだ？
「……おま、勇ちんか!?」
あ、やっぱ知り合いっぽい。あの人愛称で呼んでるし。
ただ接木さんの方は、カズヒと顔を見合わせてから、勢いよく振り返った。
「「ディーレン!?　なんでここに!?」」
「……え、待って。隣の嬢ちゃんはあったことあるっけか？」

あ、これもしかしてまた―
「あ、カズヒは道間日美子ですわよ？　同級生ですの？」
「「それ今言う!?」」
―躊躇なくぶちこんでいい情報じゃないよ、ヒマリ!?
俺・ヒツギ・九成のツッコミがシンクロして響き渡った。

「あの、すいません。ちょっと声が大きすぎなので……もう少しお静かに」
「「「「「あ、ごめんなさい」」」」」

しかも怒られちゃったし。

アザゼルＳｉｄｅ

九成とヒマリが麻薬を吸ったかもしれないってことで、俺もまぁ、一通り終わったんでちょっと様子を見に来たんだが―
「……それで日美っちのやつ、めちゃくちゃ振るわれてるのに気づかないでコーラを開けちまってよぉ？　いやぁ凄いのなんの？」
「あの後よく振ったコーラを顔面に開けられたあいつら、同窓会でも炭酸だけは呑まなかったからな。完全にトラウマになってるなあ

りゃ」
「……その頃からカズヒねぇって怒らせたらいけなかったのかぁ」
なんか大人二人に凄い真剣な表情で聞き入ってる九成がいたぞ。
「人に歴史はありますのねぇ」
「ま、まぁその頃はマジで十代半ばなわけだし？　それぐらいの反応が普通じゃんか」
「でも既に女傑っぷりが見え隠れしてるよなぁ」
イッセー達も興味深そうに聞いてるけど、なんだこりゃ。
そして隣ではカズヒは努めて作った無表情で、そっぽを向きながらスポーツドリンクをちびちび飲んでるし。
「……お前ら、これはどういうことなんだ？」
「「「「あ、先生」」」」
イッセー達が俺に気づいたが、そしたら隣の接木とかいう奴とは別の男が立ち上がると敬礼をしてきた。
「アザゼル元総督ですね？　ＩＣＰＯ対異能班に所属している、引岡（ひきおか）＝Ｆ＝ディーレンと申します」
ああ、今回の事件は国際的だったから、ＩＣＰＯからも人員が出てたっけな。
「今は総督じゃねぇから、そこまで堅苦しくなくていい。つーかなんでカズヒの過去話が始まってんだ？」
俺はむしろそっちの方が気になるぞ。
接木の奴が道間日美子と同じ学校に通っていた奴なのは既に知っている。また意外な縁が繋がったと思ったもんだ。
だがなんでＩＣＰＯと話してんだ？　そっちの方が気になるぞ。
俺はそんなんで話を振ってみたが、応えたのはカズヒだった。
「……ディーレンも勇ちんと同じでかつてのクラスメイトです。当時の私の男友達」
お、おぉ……。
いや、お前最近前世の知人と再会しすぎじゃね？
正直少し引くぐらいの前世との縁引き合い率だろ、おい。なんか変な加護とかかけられてねぇかとすら思う。

カズヒも自分でそう思ってるのか、ちょっと複雑な表情だ。
……いや、これなんか違う？
「まさかあのディーレンが、国際警察機構で働いているとは思ってなかったわ。いやマジで」
え、そこ？
「そこは同感」
「うっせぇよ」
接木の奴にも頷かれて、引岡はなんか複雑な表情だ。
この感覚、自分でも心当たりがありそうな感じだな。
なんか視線が注目されてしまって、引岡は視線をそっとそらしてる。
「……犯罪は犯してない。犯してないからＩＣＰＯに属してる……けど―」
けど？
俺達が首を傾げてると、引岡はこの場で隠せないと踏んだのか、意を決した。
「……暑い日の体育で女子の水泳を妄想しすぎて、熱中症で幻覚の内容を大声で叫びながら壁に激突して保健室に運び込まれた……っ」
……ん？
俺達が首を傾げてると、接木の奴は笑いを我慢しているのか腹を抱えながらプルプル震えていた。
「しかも体育の記憶が吹き飛んでたのか、起きた瞬間に「だ、誰か！女子が全員スク水で朝礼に参加してる!?」なんて言い出してなぁ。……あれ以来、日美っちの伝説的所業や俺のリアルシスコンに匹敵する三勇士なんてあだ名ができて……その……あれ？」
接木はすぐに気づいたのか、なんかおかしいといった感じで俺達を見ている。
え、いや……え？
俺達が顔を見渡していると、カズヒは盛大にため息をついた。
え、いや……え？
その時、九成がはっとした表情になってから頭を抱えた。

「……イッセーで感覚がマヒってる……っ」
「「あ☒」」
しまった。その通りだ。
「すいませんねぇ！　死の危険を感じてる時も裸のリアスやアーシアの妄想ができるようになって！　自分でもどうかしているとは思ってますよ！」
顔を真っ赤にしたイッセーの絶叫に、俺達は完璧に我に返る。
イッセーを比較対象にして、「その程度かよ」とか本気で思っちまった。比較対象が悪すぎる。
「……なぁ日美っち」
「そいつってどんなレベルだよ」
「性犯罪を我慢するだけで、平均週三～四は吹いた泡を痙攣でまき散らしながら失神する益荒男よ」
旧友に凄く言いづらそうにするカズヒのそれが答えだ。
……いや、本っ当に凄いよな。良くも悪くも。
前代未聞の変態すぎて、俺達の感覚を麻痺させてやがる。流石異世界から乳を司る神様が使いを寄越してきた男だぜ

英雄乱戦編　第三話　驚天動地

アザゼルＳｉｄｅ

「……同窓会か！」
開口一番、カズヒが割とでかい声でそうぼやいた。
ここは兵藤邸の地下にある、リーネスの研究施設だ。中々良い機材も揃ってるんで、俺もちょくちょく利用させてもらっている。
そこでカズヒが珍しくだれた状態で、椅子の座りこんでいる。
ま、大体想像つくがな。
道間日美子時の異能とか関係ない友人が、思いっきりこっち側に関わってきたわけだ。しかも連続で再開してるわけだ。
確かに同窓会だとか言いたくなるだろうな。この調子だと更に何人か出くわすことになりかねねえぞ。
「……ふふぅ」
そしてリーネスはリーネスでニコニコしながらデータの調整とかを行ってる。
それに対して、カズヒは珍しくリーネスにジト目を向けてきた。
「愚痴にきておいてなんだけれど、その反応はちょっとムっと来るわよ？」
「ごめんなさいねぇ。でも、本当に嬉しいものぉ」
そう返すリーネスは、本当に嬉しそうに笑ってやがる。
むしろ安心とかそういった感情すら見えてくるな、あれ。
手元の作業もなんていうか気軽というかなんというか。カズヒもちょっと戸惑っている感じだ。
だがまぁ、俺もなんとなく分かるかねぇ。
「事情を知っても友（ダチ）で言ってくれる奴が二人もいるわけだしなぁ？親友の人徳って奴を感じていい感じになるんじゃね？」

そういうことなんだろうしなぁ。
俺がニヤニヤしながら見ていると、カズヒは何とも言えない表情で黙り込んだ。
ふっふっふ。照れ臭いのが丸分かりだぜ。
俺とリーネスは視線を合わせると、思わず苦笑したもんだよ。
はっはっは。教え子の人間関係がいいと気分がいいな。
あとでリヴァを誘って祝杯でも挙げるとするか。……ロスヴァイセは断じて入れんがな！

「大変ですのよ！　ロスヴァイセ先生がイッセーにデートを申し込みましたの！」
「ちょっちこれ大事じゃん!?　なんな心当たりあったりする!?」

「「……え？」」

なんか突入してきた風呂上がりのヒマリとヒツギが、とんでもない情報を叩き込んできやがったぞ!?

和地Ｓｉｄｅ

俺は地下のメイドたちの談話コーナーに、差し入れとしてコンビニで買ってきたクッキーアソートを持ってやってきていた。
「おーい。そっちは仕事もひと段落かー？」
「あ、和っち。ま、こっちはひと段落で休憩中だけどね」
春っちが真っ先に気づいて手を振ってくれるけど、なんというか空気が微妙な感じがするというか。
気になって様子を窺ってみれば、原因が発覚。
「うにゃ～」
談話コーナーのテーブルに突っ伏しているのは黒歌だ。
誰が見ても分かるぐらい疲れている感じだな。雰囲気が微妙に近づきづらい。
……確か、今回のふぃっちゃんねるは南米のジャングルだったか。
高温多湿環境でだれているんだろうが、場所考えてくれないだろうか。
正直メイドの人達も、どう対応していいか困っているところがあるな。
インガ姉ちゃん達は別時間枠でいないみたいだし、こうなれば俺が何とかするしかないだろう。
「……ご苦労さん。クッキー食べるか？」
「にゃ～……食べる……」
相当疲れているようだ。過酷な環境でグロッキーらしい。
まあ着ぐるみ来て参加しているからな。あれ、懲罰活動の一環だからわざときつめにしているし。
一応保冷材は突っ込めるようにしているが、まぁあの環境ならすぐに温くなることを請け合いだろう。疲労はでかいと思える。
でもなぁ。
「とりあえずだれるなら自分の部屋でやれ。ここだとメイドさん達に迷惑かかるから」

禍の団でも指折りの連中が集うヴァーリチーム。そんな奴がここにいることで、抵抗というか畏怖を感じている連中はそこそこいるだろう。
つまりはそういう問題だ。メイドさん達では言い難そうだし、俺が言うしかないだろう。
ただ、そう言われた黒歌は怪訝な表情を浮かべると、はたと何かに気が付いた。
「あ、違う違う。ちょっと聞きたいことがあったけど、疲れが溜まってたんでついだれてたニャン」
「人騒がせ!?」
思わずツッコんだけど、聞きたいことってなんだ？
態々ここに来るってことは、聞きたい相手ってのは兵藤邸のメイドってことか？
ちらりと視線を向けるけど、春っち達は心当たりがない感じで手を横に振る。
それを確認してから、俺は首を傾げつつ話を進めさせることにする。
「具体的に何だよ？　真面目に懲罰メイドとして頑張ってると思うけどな」
少なくとも、カズヒねぇ的には黒歌より評価が高いこと請け合いだろう。
内容があほらしいと致命的にカズヒねぇから説教が飛んできそうなんだが。そのことぐらいは分かっているとは思うんだが。
ただ、黒歌は呆れ半分な視線でメイド達の方を見る。
「そもそもなんで懲罰メイドなんてしてんの？」
……ん？
言ってる意味がよく分からず、思わず首を傾げてしまう。
思わず春っち達の方を見ると、これまた俺と同じで首を傾げている。
発言の意味が本当に分からないので、俺達の視線は黒歌に集中する。

むしろ黒歌の方が何を言っているのか分からないって顔だった。
「だってコイツラ、基本的にディオドラって奴に悪辣なやり方でとっ捕まって、そのまま引っ張られてテロってたわけでしょ？　そもそも完全に被害者じゃない」
凄く怪訝な表情でそういう黒歌は、皮肉とかそういうの抜きで不思議そうだった。
真面目に「なんでこいつら、必要ない贖罪とかしてんの？」と思ってる顔だ。からかい要素が欠片もない。
心底疑問だからちょっと聞いてみよう。そういうノリで聞いているのがよく分かる。
いや、分かるからこそ困るというか。いや、言える答えはあるが、俺が言うべきことも出もないだろう。だけどメイドさん達に答えがあるのかちょっと困るような質問ではある。
メイドさん達も割と困惑していたが、これって俺が何か言った方が良さそうだな。
仕方ないと判断して、俺がとりあえず軽く一呼吸を入れた時―
「誰もかれもが自分と同じメンタリティしていると思ってんじゃねえぞ？」
―ため息をつきながら、ベルナが俺の隣にどっかりと座りこんだ。
そのまま何時の間にか用意していた水を一口飲んでから、ベルナは呆れ半分な表情を黒歌に向ける。
「お前さんからすりゃぁ「無理やり下僕にしたクソ主の悪行に付き合わされた」ってだけなんだろうが、生憎世の中にはお前らより罪業とかに拘る連中は多いんだよ」
「そういうもんかにゃん？」
「そういう奴もいるんだよ。理不尽に付き合わされようが悪事は悪事なんだし、迷惑かけたって思ってんのに、無罪放免でハイ自分の幸せ考えてねー……なんて、むしろもやもや溜まってできるもんもできねぇっての」
黒歌にそう答えながら、ベルナは水を飲みながらクッキーも食べ始める。

なんか会話がだべる形になってきたな。雰囲気がそれで和らいだから、他のメイドさん達も普通になってるけど。
ま、実際そういう奴は普通にいるもんだ。
この懲罰メイドも、はっきり言えばそういう精神的な区切りをつけるのも目的だ。本当なら無罪放免にするという案もあったが、外野はもちろん当人達もそれに抵抗がある感じだしな。
「そもそもディオドラ(奴さん)はそういう奴狙ってんの。ガチ敬虔なシスターや聖女なんてのは、ヴァーリチーム(お前さん達)とはメンタリティが違うんだよ」
うん、極めてその通り。
むしろヴァーリチームの精神性な奴なんて、ディオドラも狙わないだろう。よしんば狙っても上手くいかないだろうし、引き込めたとしても脱走しそうだしな。
はぐれ悪魔になれるようなメンタリティの相手なら、そもそも聖女になったりしないだろう。任命する側だって相手の精神性は考慮する。真面目で誠実な人物を好き好んで選ぶだろう。
そういう意味では黒歌とは本当に真逆のメンタリティだな。
「確かにそうよね。間違いなくあんた達はヴィール様もスカウトしないでしょうし」
春っちも乗っかるけど、ついでに俺に乗っかるのやめてくれ。
おっぱいが上に載ってるのはいいけどね？　位置取り的に首に負担がね？
「それもそっか。どっちかっていうと白音タイプよね、あんたらって」
黒歌もそう納得していたのか、ポリポリとクッキーを食べながらうんうんと頷いていた。
そしてふと、同情的な視線を向けてくる。
「……あの糞野郎とかの眷属になってたら、使い物にならなくさせられたでしょうしね」
「「……あ～」」
俺達全員納得だった。
イッセーが黒歌から聞き出していたが、黒歌がぶち殺した主はかなりあれな奴だったらしい。

眷属を強化改造するような奴だったらしく、かなりやばい実験などを眷属の親族で実験しようともしていたとか。
小猫だったら、幼少期なら素直に受けていた可能性もあるな。
「……確かフロンズ・フィーニクスがそっちの捜査班の設立を魔王様達に要望しているとか言ってたな」
俺はその辺りについてまた聞きの情報を思い出す。
あれ、かなりおかしな話になってるって聞いたぞ。
「なんでも、当時の捜査班がついた時にはあからさまなレベルで何もかもなくなってたとかなんだとか」
「……え、何それ？　そんなことしてないわよ？」
黒歌の言い分は何となく読めていた。というより、研究資料を念入りに処分するとかいうタイプな印象がない。
……なんというか、凄い不穏なにおいを感じる―

「み、皆大変！　ロスヴァイセさんがイッセー君にデートを申し込んだって！」
「先生も確認したからマジな話よー！　さぁ、酒の肴にして盛り上がろう！」

『『『『『『『『……ええええええええっ!?』』』』』』』』

な、な、何事ぉ!?

英雄乱戦編　第四話　激戦辛勝！

和地Ｓｉｄｅ

「……ふ、ふふふ……ふふふふふ……っ」
机に突っ伏して笑い声を漏らすカズヒねぇに、俺達クラスメイト一同は軽く引いていた。
憔悴という言葉を体現する様子で、同時に熾烈なる争いを文字通り乗り越えた勝者の雰囲気を見せている。
その文字通り圧倒的な在り方により、鬼気迫る気迫が俺達を無自覚に威圧していた。
そう、俺達全員が威圧されているのだ。
殺し合いという一種の極限環境に慣れている俺達すら気圧される、そんな壮絶な勝者のオーラに、俺達は息をのんでしまっていた。
そして―
「赤点回避ぃいいいいいいいっ!!　よぉおおおおっしぃいいいいいっ!!」
―渾身のガッツポーズと共に、椅子を吹っ飛ばす勢いで立ち上がって天を仰いだ。
『『『

低い。追加で言うと二十年近く前の勉強の内容なんて、相当真面目に勉学に励んでないと忘れていることもあるだろう。
そういうわけでオカ研で数少ない、学年平均点を下げる人物がカズヒねぇだ。中間テストの平均点では文句なしのぶっちぎりドベ。平均学力においてオカ研底辺の殿堂入りともいえる。
というより、基本的に俺を含めてできる奴が多すぎる。偏差値を無理やり上げて合格したとか言っているイッセーですら、毎度毎度学年平均は取れている辺り、地頭はいいんだろう。
……でなければ、毎度毎度死線を潜り抜け、その為に鍛錬まで積んでいる俺達が平均点以上を取れるわけがない。
いや、本当に大変だったなぁ。
特にカズヒねぇにとっては、リーネスや鶴羽が勉強に付き合っていたからこその勝利。感動もひとしおだろう。
「お疲れ様。今日はなんか奢るよ」
「ええ、本当に頑張ったわ。頑張ってきたかいが、本当にあったわ……っ」
そ、そこまでか。
ちなみに俺の平均点は９０前後といったところだ。
ザイアの英才教育はこういう時は感謝に値する。ただ知識を高めるだけでなく、勉学の受け方も踏まえて教えてくれるからな。授業を真面目に受けて予習復習を毎日少しずつやっているだけでだいぶわかる。
あいつら、本当にそういうところだけは極めて優秀なんだよなぁ。優秀だからこそダメなところが更に加速されてるというかなんというか。
俺が妙な感慨にふけっていると、アーシア達教会トリオはトリオで意気投合しているし、イッセー達はいつも通りのエロメンツでがやがやと。
……つまりだ。
俺は今、教室内でいい雰囲気にできる奇跡のタイミングを会得している。

気合を入れろ、全力を出せ。
なにか、何か更に良い雰囲気にできることを思いつけぇぇぇぇぇぇぇぇ！
「……カズヒ！　テストの点はどうだった!?」
「大丈夫かしらぁ？」
……Ｏｈ……っ
休み時間なのを良い事に、鶴羽とリーネスが来てしまいました。
俺は心から絶望するが、既にカズヒねぇもあっちに意識が行っている。
「……赤点回避よ！　ありがとう、二人とも!!」
「良かったぁっ！」
三人で抱き合う光景は美しい。
前世からの親友が現世でも巡り逢い、今でも仲良くやっている。共に苦しみを支え合い、喜びを分かち合っている。それも、かつてどす黒い悪意の翻弄され、それ以上の邪悪に堕ちた少女と、そのどす黒い悪意と縁があった二人の少女がだ。
邪魔する気は無い。カズヒねぇはもちろん鶴羽のことも愛しているし、リーネスは俺達の保護者と言ってもいいからな。
邪魔はしない。邪魔はしないさ。邪魔などしてたまるものかよ。
「何かが、寒い」
だけど心が凄い空虚になって、俺はぼそりと呟いた。
「おやまぁ。九成は彼女さんがとられて寂しいなら、もっと我儘になった方がいいんじゃない？」
桐生黙れ。シャラップ。
「恋人と親友は天秤にかけれる物でもないだろ。次言ってみろ関節極めるぞ」
「目が怖いわよ」
本気だからな。
あとカズヒねぇ達の会話が漏れ聞こえているけど、鶴羽も平均九十点台で、むしろ俺よりちょっと上だ。
あいつ前世の経験もあるうえ、カズヒねぇと違って俺と同レベルの

教育環境だったから基礎学力凄まじいんだよなぁ。座学の成績ならザイアでもトップ１０ぐらいに入っているんじゃなかろうか。
ただ満点を取ることはまずない。どこかで何かしらミスをしている。
ポンコツ……圧倒的……ポンコツ……っ
あ、なんか目に涙が。
「くっ！　まさか南空がここまでできるとは。私も流石に負けているな」
と、ゼノヴィアが地味に悔しそうだった。
「ゼノヴィアより平均点が高いなんて。今回九十点台なによ!?」
イリナもそう驚くが、むしろ俺もちょっと驚いたぞ。
なんというかクラス中興味が湧いているが、ちらりとテストの点数を見せてもらった鶴羽が逆に目を丸くしている。
「……げ、国語以外はむしろこっちが負け越しかも……っ」
「と言っても多くて二点ぐらいだろう。やはり国語はアウェイだからね」
ゼノヴィアはそう謙遜するが、つまり国語さえ何とかなれば鶴羽より学力が良い事になるんじゃないか。
いや、鶴羽の場合はスペルミスとかのうっかりによる原点が基本だしな。実際の学力面ではどっこいどっこいか？
俺がその辺考察していると、ゼノヴィアのテストを見たイッセーが地味にショックを受けている。
「……まさか国語も負けたのか？」
俺が思わずそう聞くと、イッセーは首を横に振るけどダメージが入っている様子だ。
「いや、どっこいどっこいだけど……俺、国語が最高点なんだぞ」
……それは地味にきついかもな。
日本生まれで日本育ちが最高点取った国語で外国人の最低点に並ばれるとか、地味にきついかも。
というより、イリナも平均八十点そこらでアーシアは平均八十後半。俺は九十前後でゼノヴィアが九十点台。

イッセー、オカ研メンバーとしては学力低い組ではあるな。
「何言ってるのよ。この学園の偏差値で平均点取れてるなら、平均的な日本の高校生より頭いいでしょうに。……ふふふ、赤点回避でも平均レベルは超えているはず……っしぃ！」
カズヒねぇ。確かにそうなんだけど赤点回避でそこまで喜ばないで。
「……ちなみにリーネス、道間日美子の学力って？」
「……偏差値平均レベルで平均点ちょっと……上ぐらいかしらぁ？」
それとなくリーネスに聞くけど、カズヒねぇってかなり勉強面で無理しているわけだな。
今度機会があったら、オカ研全体で勉強会開こう。
俺がそっと決意をしていると、そんなテスト内容を見ている桐生がにやにやとイッセーの方を見てからアーシア達の方を向いた。
「あんたらの子供、父親に似たら悲劇よね」
オイ待て桐生。ジョーク交じりのからかいなんだろうがそれはまずい。
その三人だとまず間違いなく。
「なに、きちんと教えれば何とかなるさ」
「愛があれば乗り越えられるわ！」
「勉強ができることだけが大事なことではないですから」
「ゼノヴィア、イリナ、アーシア。ＴＰＯって概念をモールス信号で教えてあげましょう。肘、膝、踵、拳のどれがいいか教えて頂戴」
ハイ、カズヒねぇによるお説教タイム入りました。
シャドウボクシングまでして準備万端だよ、これは流れ次第でサンドバッグ（モールス信号（物理））になること請け合いだな。
「……桐生さんだっけ？　そういうからかいとかはやめてくれない？」
「え～？　だってやってて反応が面白いもの。心配しなくてもガチなのはやらないから」
「そういう油断はいけないわよぉ？　この手の事例で加害者側と被害者側の感覚はずれてるものなんだからねぇ？」

桐生に対するストッパーは鶴羽とリーネスに任せるとしてだ。
「イッセー。そういえばお前の方のデータ採集はうんでたのか？」
ふと気になって聞きそびれたので、俺はその点を訊いてみる。
「ああ。ただ赤龍婚乳（パス・トライク）はリスクがあるから被験者とか出しづらくてさぁ」
イッセーの素直に答えてくれるけど、そこなんだよなぁ。

アザゼルＳｉｄｅ

「さて、どうしたもんかねぇ？」
俺は空いた時間に、パソコンに移したあるデータを確認していた。
つい先日起きた、ヒツギとヒマリの神器の不調。
全くの偶然とは考えづらい。その要因が二つ。
一つは二人の関係性。同一の前世からその特異体質により分かたれて生まれた二人は、いわば魂の双子と言っても過言ではない。同時に同じ不調を起こしている以上、何もないと考えるのもあれだ。
もう一つは神器の種類だ。どちらも不調なのは、高位の龍を封印した神器。そして聖剣創造の方は問題ない。聖剣創造ではなく高位の龍を封印した神器の方が不調だというのも、妙な共通点だ。
……そしてそこからくる、有力な不調の原因は分かり易い。
「赤龍婚乳（パス・トライク）、だよな」
赤龍帝の譲渡の特性を利用した乳技。あくまで限定的な時間、赤龍帝の倍化の特性を他者に与えるのが譲渡の力。それを乳技との併用で、女限定で倍化する力ではなく赤龍帝の力そのものを、永続的に与

えるのが赤龍婚乳だ。
その影響を受け、ヒツギとヒマリの基本性能は大幅に向上している。星辰奏者であることを踏まえれば、素の身体性能ならオカ研のメンバーでも指折りだろう。
本来この力は、龍化する影響で龍殺しに弱くなる。だからこそイッセーも開発したはいいが、「メリットをデメリットが超える」と判断して使いたがらない。
それでも二人に対して使ったのは、二人が龍を封印した神器を既に持っているからだ。
龍を封印した神器保有者は、元々龍殺しの類に弱い。そして龍を封印しているからこそ、龍化する際の強化度合いは向上する。既にあるデメリットが追加されるより、メリットが龍の力で増幅することを踏まえたからこその運用だ。
これまでにない乳技だからこそ、オカ研全体の意向として赤龍婚乳は原則使わない方向で進めている。
なにせハーデスの爺は冥府を管理しているから、本気で使おうとすればサマエル使い放題だしな。
奴は今のところ内乱真っ最中で動きづらいだろうが、だからこそ準敵対勢力とみなすしかない。ったく、三大勢力のやんちゃの文句は主導した聖書の神や初代四大魔王に行ってほしいもんだぜ。産まれてもねぇ若い奴らまで巻き込むなよ。
まぁそういうわけだから、俺らとしてもこの不調に関してはかなり慎重に調べている段階だ。
なにせギャスパーの神器が「あやかり元が宿って神滅具に」って状態だからな。高位の龍を封印した神器の保有者が赤龍帝化したとか、類似性がありすぎる。気づいた時には強くなりすぎて暴走って可能性もかなりあり得るだろう。
……まぁ、それで強くなってくれることそのものは大歓迎だ。
なにせ敵が敵だからな。主力もドラゴンだから龍殺しを好き好んで使うとも思えねえし、ドラゴンがパワーアップするのは大歓迎だ。
なにせクリフォトは既に色々と動いている。前回のテロ組織もク

リフォトが裏で手を回した可能性がある。その上、他にも懸念事項が多いからな。
「……やはり増えてるな」
俺がちらりと確認したのは、組織からの連絡だ。
既に神の子(グリ)を見張(ゴリ)る者が把握できている連中だけでも数名、トライヘキサの研究をしていた奴らが行方不明になっている。
タイミングから言ってクリフォトが関わっている可能性は絶大に高い。共通点も洗い出されており、同一犯なのはほぼ確定だしな。
こっちも色々と対策を用意しないといけないわけだ。真面目に気合を入れないと……な。
「あ、アザゼル先生。ちょっといいですか？」
「ん？　どうしました？」
と、なんか思案顔の先輩教師が声をかけてきた。
便宜上の年齢でも劣っているし、此処の教師としては俺の方が後輩なのは確実だ。気分転換にもなるし、話は聞かないとな。
というより、なんかかなり不安といった感じだな。どうしたんだ？
「アザゼル先生はロスヴァイセ先生と親しいと聞いてますが、どうも生徒から彼女が最近考え込んでいると報告がありまして」
……あ～。
そういやロスヴァイセからイッセーにデートの申し込みがあったとか聞いたな。
何か色々と考えこんだりする理由があるんだろう。あいつ力の抜き方をさっぱり把握してないからなぁ。下手すると一生あんな感じなんじゃないかって気に名てきたぞ。
クリフォトの件もあるから悩みの種は尽きないだろうしな。真面目過ぎて発散し損ねてるか―
「なんでも図書室で何度も聖書を読んでいるそうでして。ヨーロッパの方でしょうから、悩みがあって信心に縋っているとかだとは思うんですがねぇ」
―なんだと？
転生悪魔が聖書を読めば、聖書の神が遺したシステムの影響で頭痛

に苛まれる。アーシアやゼノヴィアはあくまで特例としてミカエルがシステムを操作しているだけだ。
ロスヴァイセならやろうと思えば魔法で対処はできるだろうが、アースガルズのヴァルキリーだったあいつが聖書だと？
……まさか、あいつもトライヘキサについて調べているの……か？

英雄乱戦編　第五話　ビックリドッキリメカ!?

和地Ｓｉｄｅ

俺達は常々言っているが、毎度毎度トレーニングをしているからこその強さを誇っている。

自主トレはほぼ毎日やっているし、ここ最近は初代孫悟空から指導を受けることで、更なる成長が期待できるわけだ。

そして俺は今、孫悟空殿から新たな指導を受けている。

それが禁手の制御面。とはいえ、これはイッセーと同様の手法によるものだが。

分かり易く言えば、出力の細かい調整といったところだ。

簡単に言えばメリハリだ。要は出力レベルを十段階評価にして、一回目に出した奴を十回連続でやるとかそんな感じ。最終的には自在に切り替えを可能にさせるとかそんな感じである。

要は出力調整をよりしっかりきっかりと切り替えれるようになれという話だ。その辺りが雑だと継戦能力に欠けるからな。人造惑星（プラネテス）が星辰奏者（エスペラント）に勝る最大の優位点も、出力の調整が可能という点にあるものだ。

イッセーはその辺で結構四苦八苦しているらしい。何度かやっていると気合が入ったり抑えすぎたりで、ほぼ確実に途中で出力バランスが乱れるとか。

だがまぁ、裏を返せば伸びしろがあるということだ。十段階レベルの雑なのを練習レベルでとはいえできるようになれば、だいぶ力のロスも減ることだろう。

……問題は俺だ。

はっきり言おう。初手から十回十セット完璧クリアに成功してしまった。困り顔の孫悟空殿の完璧認定はよく覚えている。

つまり、俺は地力を伸ばす以外で禁手の持続時間を増やす要素がない。できたとしても誤差になるという証明である。なにせ至って一月前後では考えられないぐらい、出力調整が完璧だから。孫悟空殿では手が出せないもっと繊細な領域でしか神器の問題点がないわけだ。

……凹んでいいか？

なので原始的に至らせて少しずつ伸ばすを進行中。現在は何とか三分十五秒出せるようになった。パラディンドッグなら９分４５秒といったところだ。

木場はもちろん、至り立てのイッセーですらもっと長時間できたぞ。

不幸中の幸いは回復速度もそこそこあり、インターバルを置けば再使用を一日何度も使える点だ。イッセーは一回至らせると一日それで終わるからな。

これは当分、サルヴェイティングアサルトドッグをメインで使わざるを得ないな。使いどころは見極めないと。

……となると考えるべきは魔剣創造そのものと基礎戦闘能力だ。

所詮世の中、基礎という下地はどこまで言っても重要だ。しっかりとした地盤があってこそ突拍子もない奇策が強き力を発揮する。

基礎を怠る者に真の強さは訪れない。人間、できることをしっかりやるしかないからな。

……新技とか思いつきたいけど、そういうのもまず相応の知識と技術と能力があってこそだしな。

うん。とりあえず基礎トレも兼ねて他のメンバーの訓練とかも見に行くか。

真っ先に向かったのは剣士組。

約一名が弱体化するのと引き換えに、二名が強化されているようなものだしな。ある意味で一番成長しているようなものだろう。

「……ん？　誰かと思えば九成か」
「よ、ゼノヴィア。そっちはどうだ？」
今回において最も成長する必要に迫られているのは、実を言うとゼノヴィアかもしれない。
ヘキサカリバー計画は教会の強化も踏まえているが、それ以上に心理的悪影響の軽減が目的だ。
如何に天使長ミカエル様に認められているとはいえ、和平前に悪魔に鞍替えした女にデュランダルをエクスカリバーを丸々渡すという行為に、抵抗を覚える者は少なからずいるだろう。
そういう不満をガス抜きする為の手法もある為、ゼノヴィアからエクスカリバーの内六本を没収するということになっていると言っても過言ではない。
その為エクス・デュランダルは性能が低下している。この部分に関してどうしても問題点が出てきてしまうところがある。
……まぁ、そもそもゼノヴィアは破壊の聖剣を主体にしているから将来的な話止まりではあったのだが。
ただし、総合力や当人の成長という観点なら話は別だ。
「あら、九成君こっち来てたの？」
「うっす先輩！　お疲れ様です！」
イリナとアニルが、同じくヘキサカリバーをもってこっちに手を振ってくる。
「……しかしまぁ、結果的に三本もこっちが持つってのも意外だったな」
「確かにね。まぁ二人は天使と信徒だから問題は薄いだろう」
ゼノヴィアと苦笑し合うが、実際問題意外なほどに多かったりする。
天閃の聖剣を使ったヘキサカリバーはアニルに渡されたが、イリナにも擬態の聖剣を母体としたものが提供された。
まぁイリナはもともと擬態の聖剣の使い手だったし、そういう観点から言っても主力となりえるか。
「ふっふぅん♪　つい先日天使としての格も上がったし、私の天使と

しての道は此処から新たに始まるのよ！」
「俺もコールブランドの量産型が特注で作られることになりやしてね。ちょっとテンションが上がってます！」
おぉ……。
「それは凄いな、急激なパワーアップかもしれないな」
「全くだ。自称天使がついに天使として本格始動ということか。親友として感慨深いものがあるな……」
俺が褒めると共にゼノヴィアもそう褒める。
……自称天使って、ゼノヴィアも言ってなかったか？
「もうゼノヴィアったら。照れるじゃない」
イリナは素直に受け取っていいのか？
俺はちらりとアニルの方を見ると、アニルもチラリと俺の方を見ていた。
沈黙は五秒。俺達は静かに頷いた。
とりあえず、スルーしよう。
その同意を、静かな頷きだけで繋げ合った。

そして次はリアス部長達のブースに来たら―
「「……ふぅ～……」」
―盛大に突っ伏して休んでいる、カズヒねぇとリアス部長の姿があった。
「大丈夫かカズヒねぇ。リアス部長も」
思わず声をかけると、二人とも俺に気づいたのかゆっくりと起き上がる。
「ごめんなさいね。休める時には休んだ方がいい物だから」
「ええ、流石に少し疲れたわ」
そ、そうなのか。
まぁ消滅の魔星は練習するにしても場所がいるからな。カズヒ

ねぇの固有結界が使えるならそれに越したことはないか。
そして結果として、二人とも魔力減少で休んでいたと。
「ってことは、少しは成果が出たと考えるべき……で……」
俺が言いかけると、ついと二人とも視線をそらした。
「魔術回路って基本的に先天的才覚だから、そこまで伸びないのは分かっていたけれど……もう少し伸ばしたいわね」
「私に関しては溜めが長すぎるもの。あれではイッセー達の負担が多すぎるわ」
向上心が強いのは良い事です。
まぁ、そういう意味では俺もあまり変わらないけどな。
「俺も禁手の持続時間を劇的に伸ばしたいです」
「「確かに」」
三人揃って、伸ばせれば一気に化ける力が全然伸びないんだよなぁ……。

そんなこんなで一通り見て回ったと、最後のミーティングをしようというときにだった。
「……ふふふぅ。待たせたわね、皆……ぁ」
壮絶な表情のリーネスが姿を現した。
疲労困憊というか幽鬼のようなというか。とにかくその状態に、俺達はちょっと引いた。
眼だけがギラギラしてるのが尚更怖い。
「どうしたんだよリーネス？　そんなに疲れて何してたんだ？」
「そうだね。ここ最近、トレーニングにも参加しないで何をしていたんだい？」
イッセーと木場が心配そうに声をかけた時、ぐらりとリーネスが揺れた。
って頭から倒れそうに!?

「──はいはい。落ち着いてくださいリーネス」
と思ったら、シャルロットがそっと肩に手を置いて支えてくれた。
ふぅ。危なかったぁ。
俺達がそっと胸を撫で下ろしていると、シャルロットはリーネスを支えたままため息をついた。
「すいません。秘密兵器がとりあえず形になったので、珍しく凄いテンションではしゃいだ勢いで来たもので」
困り顔のシャルロットだけど、いったいリーネスは何を作ったんだ？
俺達の視線が集まる中、リーネスはなんかアタッシュケース……いやでかいな。
「とりあえず、此処にいるメンバー分は真っ先に用意したわぁ。さぁご覧あれぇ」
そう言いながら、リーネスはアタッシュケースを開ける。

そう、それは俺達の新しいステージであり、より激しくなる戦いの為の切り札。
ガチでとんでもない物を、作っちゃいましたよこの人はもぉ!!

英雄乱戦編　第六話　人に惚れるという者は、時期も理由もあいまいだったりするのである。

イッセーＳｉｄｅ

凄い気迫を感じさせるリーネスは、アタッシュケースを開けると中身を見せてくれる。

……全体的に見ると、折り畳み式の携帯電話をでかくしたような物体だ。

Ｄが二つずれながら重なっているような紋章が表に描かれた物だけど、なんだこれ？

首を傾げていると、リーネスはなんか得意げな表情だった。

「ふふふぅ。これそのものも人工神器を利用した特注品よぉ。登録に合わせてそれぞれにフィッティングさせるから、とりあえず……イッセーにお願いしようかしらぁ？」

なんで俺？

正直ちょっと首を傾げるけど、カズヒはなんかすぐに納得している感じだった。

「なるほど。イッセーは色々と素直だから、リアクションを確認しやすいわね」

そ、そういう理由か。

素直に喜んでいいのかとも思うけど、まぁ素直なのは悪いことじゃないだろ。

そんなわけで手に取ると、リーネスが魔術的に調整を施してくれる。

その瞬間……なんか凄い！

「え、マジかこれ、すげぇ！」

「そうでしょぉ？」
リーネスが得意げになるのもよく分かる。
なんか目の前にいろんなものが浮かんでる。しかも周りの様子から見て、これ絶対に周りは見えてない。
ちょっと操作してみるとすぐにインターネットに繋がるし、画質もかなりいいぞ、これ！
「ふふぅん。魔法・科学・人工神器技術を総動員しているから、ＳＦ作品じみたＡＲデバイスとしても使用可能よぉ。最高級のノートパソコンレベルの情報処理システムとしても使える優れものなのぉ」
すっげぇ！　すっげえよリーネス！
で、でもなんでこんなものを俺達に？
「これ、俺達専用なのか？」
「少し違うわねぇ。とりあえずＤ×Ｄメンバーの証明証としても使用するから、Ｄ×Ｄの正規メンバーや準メンバーの代表格には支給するわぁ」
俺の質問にすぐ答えてくれるけど、これは確かに便利かも。
俺が感心していると、リアスも感心しながら首を傾げた。
「と言っても、便利止まりでしかない代物よね？　今ここで出すほどの物なのかしら？」
リアスのその質問、リーネスは魔法で映像を映す魔法陣を投影しながら更に微笑んだ。
……あ。多分ここからが本番だ。
俺達皆がそう思っていると確信できる中、リーネスは魔方陣を操作しながら胸を張る。
「そう、ここからが本番よぉ？　この映像をご覧あれぇ」
そう言いながら映し出した立体映像には、なんかでかいユニットがあった。
でかくて低めな円筒状のそれには、なんか椅子があって座っている女の子がいる。
っていうか、座ってるのオーフィスじゃん!?
『我、バッテリー担当。えっへん』

なんか胸を張っているところ悪いけど、バッテリー担当ってつまり座ってるだけで終わりじゃなかろうか。
あとつまり、オーフィスが動力源ってことなんだろう。
いくつもの封印で基本性能は強いドラゴン程度だけど、オーフィスはそもそも龍神クラスだ。
各勢力の最強格ですら足元にも及ばない、グレートレッドと相対できる唯一の存在。サマエルによって有限に落とされてなお、全盛期のドライグやアルビオンより二回り強い性能を持っている。
そりゃドライグやアルビオンが封印されている神器が神滅具になんてレベルなんだから、今のオーフィスを動力源にしたら凄いことになるとは思う。
思うけど……そんな動力源を必要とする機能あったか？
「なぁリーネス。本命の機能は何なんだ？」
「絶対もっとすっごいびっくりドッキリメカですわよね、それ」
九成とヒマリがそう聞くと、リーネスは待ってましたとばかりに頷いた。
「ふふぅん。実はこのDチェンジャー。あの中枢ユニットは霊的に繋げているものがいくつもあるのよぉ」
霊的に繋げてる？
「……つまり、何かしらの魔術的装置ということね。何と繋げているの？」
リアスがそう促すと、リーネスは一つ頷いて―
「―ヴァルハラ」
ヴぁ、ヴァルハラって、アースガルズのなんかすっごいところ―
「そしてエリュシオン。更に英霊を祀る日本の寺社仏閣に代表される、英雄と称される者に関与する各勢力の遺跡や施設と繋げているわぁ」
―すっごいたくさん繋げてるな！
俺が思わず面食らっていると、木場が目を細めながら考え込む表情になって、すぐにはっとなった。
「まさか、サーヴァントを呼ぶ触媒として？」

「──正解よぉ」
リーネスはそう頷くと、更に映像でいくつもの資料っぽい物を映し出す。
馬鹿な俺にはさっぱりなので、後で分かりそうな人に概要だけでも教えてもらおう。
っていうか分かる側が目を見開いている辺り、これ絶対凄いことしてるだろ。ロスヴァイセさんとかカズヒとかに至っては、頬が少し引きつってるし。
「可能な限り「優れた勇士達が集う」という概念そのものを触媒にすることで、優秀な存在と繋げられるようにし、更にそれだけの数を逆手に取ることで、更に呼び寄せられた英霊側に選択権を設定。それによって行われるのは──」
凄い自慢げにそこまで言ってから、リーネスは一旦切る。
思わず俺達全員が息をのんだ時、リーネスは拳まで握りしめた。
「……ザイアが行った夢幻召喚（インクルード）、できる余地を作り上げたわよぉ！」
『『『『『『『『『『『『何ぃ!?』』』』』』』』』』』』
思わず全員大絶叫だよ!?
夢幻召喚ってあれだろ、英霊の力を人に宿すっていう。ザイアの連中が開発した技術だろ、九成達の教官が使ったやつだ。
おいおいまじかよ。それができるなら俺達のパワーアップは確定じゃねえか!?
俺達全員がちょっと湧き上がるけど、リーネスはその時ちょっと視線をついと逸らした。
「最も、今すぐ簡単に……とはいかないのよねぇ」
「あら、そうなの？」
リアスがそう言うと、リーネスはちょっと苦笑い気味だった。
「夢幻召喚は使用者の心身、特に魂が汚染される危険性などもあってねぇ。その辺の対処もした結果、いきなり誰もができるってわけじゃないのよぉ」
そう言いながら、リーネスは魔方陣を操作して新しい資料を映し出す。

「簡単に言うと、今渡しているDチェンジャーは端末を持つ所有者のデータを中枢ユニットに送ることで、一種の書類申請をするようなものねぇ。それを受け取った中枢ユニットからそれぞれの使用者に力を貸すことを選んだ英霊を夢幻召喚可能にする装備なのよぉ」
な、なるほど。
つまり俺達の頑張っている姿を見せることで、サーヴァントの人達に協力する気を出させればいいんだな！
「まぁ、サーヴァントという存在は私が言うのもなんですが癖が強い者です。無理やり触媒で力を引き出すようにするより、そちらの方が安全ではあるでしょうね」
ゴホンと咳払いしながらシャルロットが言うけど、まぁ確かにそうだよな。
それに頑張っていけば、たくさんの英霊が協力してくれるかもしれないんだ。それができるならそっちの方がいい。力を貸してくれるなら、その人達の意志があった方がいいんだから。
「まっさか、そんなことまでできるようになるなんてねぇ？」
「あらあら、わたくし達には頼れる仲間がいて安心ですわ」
ヒツギや朱乃さんに褒められて、リーネスはちょっと得意げだった。
「それはもう。ここまで急ピッチで完成させるのは、大変だったものぉ」
「全くだわ。ありがとう、リーネス」
カズヒは微笑みながら頷いているし、ホントすげえよリーネス！
「ああ、これがあれば俺達は更に強くなる余地が生まれるわけだしな」
そっと端末タイプのDチェンジャーを握り締めながら、九成も力強く頷いていた。
そして笑顔で、リーネスに向き合って頷いた。
「いつも本当にありがとう。その助けに報えるぐらい、俺達も頑張って精進するさ」
「……えぇ。期待してるわねぇ」
……

俺はちょっとじっと見てから、ふと木場やギャスパー、アニルと視線を合わせた。
そして俺達の視線は一斉に九成に向けられた。
「「「……あり得る」」」
「何が!?」
渾身のツッコミを入れる九成だけど、なぁ？
だって九成、年上キラーにもほどがあるし。既にカズヒと南空さんの二人を落としている以上、リーネスがっていうのはなんていうか納得できる流れだし。
「最近の若いもんは進んどるのぉ？」
「ふ、初代殿も分かっているね。あぁ、若いからこそ新しいものを取り入れやすく、先達の切り開いた道を一気に駆け抜けれる者さ」
「……いや、そうじゃないぜ？」
孫悟空の爺さん、ヴァーリにもうちょっとこう、恋愛の機微とか教えてやってくれない？
この流れでそれはダメだろ。お前いい年こいてるんだからもっとエロに興味を持とうよ。
「……ＺＺＺ……ドーナツ、美味しいです……」
リーダーは平和でいいですねぇ！　流石に起きよう!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一通りの説明が終わったのち、リーネスはシャワーを浴びて気分転換をするべく一人別館に戻っていた。
そして服を脱いで熱いお湯を浴びながら、ふと思い返す。

ダメで元々の想いで習得した、自分と同様の生まれ変わりをした者を探す魔眼。それで初めて二人を見つけた時は、因果という物を痛感するほかなかった。
肉体関係を結んでいることに胃痛を覚えながらも、ヒマリ（乙女）の方に記憶がないのなら刺激する必要が無いと判断し、自分が保護観察を引き受けながら、共に過ごしていた。
保護した時から、前世の記憶もろくになくあっても大差ない経験がついただけにも関わらず、しっかりと地に足をつけて前を進んでいた彼。
一つの完成された精神性を確立し、己の在り方を磨き上げ続けた彼は、見ていて本当に眩しいものを感じていた。
そんな彼がカズヒ（日美子）に惹かれ、鶴羽（七緒）を惹きつけ、そして二人まとめてモノにしたのには、驚きと納得を同時に覚えたものだ。
自分の原点を決して見失わず、地に足をつけてそれを形にし続けてきた彼は、ある意味で兵藤一誠と対を成せる精神性を持っている。
多くの女性を魅了するに値する青年なのだから、異形のノリなら一夫多妻などおかしなことでもなんでもない。実際の人生経験の差も、異形なら大したこともない。
その上で、彼は瞼の裏の笑顔に誓い、涙の意味を変え続けた。
その真っ直ぐな在り方。その在り方こそが、二人の好意を勝ち取るだけのものだったのだろう。
それを素直に認めたリーネスは、ふと視界に映るものを見た。
シャワーの鏡部分を見て、そこに映る自分の表情を見て、リーネスは思わず目を見開く。
「……これ、ちょっとまずいかもぉ……？」
顔が赤いのはシャワーを浴びているのだから仕方がないが、もう片方が致命的だ。
自然に浮かべていたあの表情は、間違いなく鶴羽やカズヒ、そしてリアス達がよく浮かべている表情だ。

完膚なきまでに、恋にときめく淑女の表情。
リーネス・エグリゴリ。彼氏いない歴＝年齢×２。総合年齢と本来人間であることを踏まえれば、行き遅れと言ってもいい恋愛弱者。
彼女が、自分に春が訪れていたと遂に自覚してしまった時だった。

英雄乱戦編　第七話　そもそもしょっぱなから好感度が同じな恋愛の方が稀

和地Ｓｉｄｅ

「えー。ではこれより、第一回デート争奪じゃんけん大会を行いたいと思いまっす!!」
「「「「あ、はい」」」」
ノリッノリでマイク片手に声を張り上げるリヴァ先生に、俺達全員ちょっとついていけてない。
っていうか何だこのノリ。なんで俺のデートが俺の意思なく商品になっているんだ。
いや、言ってくれればＯＫ出すけど。可愛い女の子とのデート大好きです。
「っていうか、カズヒねぇはツッコミ入れないのか？」
「この程度でいちいち入れないわよ。第一恋愛ってのは適度な手入れや刺激という物が必要でしょう？」
俺にそう答えながら、カズヒねぇはそれとなく拳に力を入れている。
あ、これ意外とやる気だ。
「本当は私がシード権って話もあったけれど、中途半端に終わったとはいえ一度してるもの。フェアじゃないわ」
「カズヒの寛大な対応には、先生大感謝よ！」
「師匠、太っ腹！」
リヴァ先生と春っちがそうおだてるけど、カズヒねぇも悪い気はしてないみたいだ。
「じゃ、恨みっこ無しで勝ち残り戦かな？」

インガ姉ちゃんがそう提案すると、ベルナがちょっと首を横に振った。
「いや、この人数だとあいこが多そうだろ？　だったらカズにじゃんけんに参加させて、負けた奴がオチるルールにした方がいいんじゃねえか？」
……あ、なるほど。
確かにそれがスマートに進みそうだな。
「なるほど。ま、それぐらいのレクリエーションなら喜んで」
誰とデートになるんだろうなぁ。
いや、これはちょっと緊張するぞこれ。
「ふっふっふ。今日の私は星座占いも血液型占いも一位！　勝ったわ！」
……とりあえず、順当にフラグを積み重ねている鶴羽の可能性は低そうだな。
鶴羽に悪いのでその変なおくびに出さず、俺は拳を握りしめる。
そして地味に緊張感が走る中、俺達は拳を振り上げる。
「「「「「じゃんけん……ぽん！」」」」」
俺が出した手札は、単純にグー。
そしてカズヒねぇ達は……あ。
「「「「あ」」」」
そう呟くのは、チョキを出した約五名。
そう、五人が一気にここで脱落。必然的に勝者は一人。
そしてその一人に、俺達の視線が収束する。
「……お、マジか」
目を丸くして自分の出したパーを見つめるのはベルナ。
な、なんというスピード決着……っ！

そんなわけで、俺はベルナと今デートをしている。
どうも日本食に興味がシンシンだったようで、俺はその辺をチョイスしてそれなりに有名な日本食のお店をピックアップ。お昼を食べてからシンプルに映画とかで済ませている。
とはいえそれだけってわけにはいかないか。いっそのこと、そこそこ高めの日本の伝統調味料とかが撃っている店とかを巡ってみるか？
俺がそんなことを考えて、リーネス謹製のDチェンジャーを利用して情報を集めている中、ベルナはちょっと苦笑い気味で辺りを見回しながら俺の手を握ってくれている。
「……なんか悪いな。アタシがカズとこんなところでデートするってのも」
そんな呟きがふと聞こえ、俺はちょっとむっとなった。
「……あのなぁ。それはちょっといろんな方面に失礼だぞ？」
其処はハッキリ言った方がいいだろう。真剣に言った方がいいだろう。
俺はちょっと一呼吸おいてから、ベルナに意識と顔を向け直す。
「少なくとも、俺もカズヒねぇもリヴァ先生達も、かまわないと思っているから、こうしてデートをしているんだよ」
そう。そこに関しては本心から信用も信頼もして欲しいところだ。
ベルナ・ガルアルエルは九成和地とデートしてもいい女の子だ。少なくとも、俺達はそう思っているという前提で生きてほしい。
まぁそれはそれとして、ベルナがそう思ってしまう理由があることも分かる。
「大方、勢い任せでこんな関係になっている節があることを気にしてるんだろ」
「……そりゃそうだろ。お前は他の女との関係を思い返せってんだ」
そっちに関してはまぁ、言いたいことも分かる。
幼少期からの縁があるインガ姉ちゃん、リヴァ先生、春っちの三人。
ザイア時代から一緒に活動し、更に前世においても縁がある鶴羽。
とどめにカズヒねぇに至っては、互いの瞼の裏の笑顔に誓った人生

を進む同士である、運命レベルの関係性だ。お互いの人生を決定づける笑顔を瞼に焼き付けて生き続け、輪廻転生すら超えて再び巡り合うとか、天文学的確率だろう。どう考えても極小という言葉すら生ぬるい確率の再会だ。しかもお互いにそこに気づかず、俺に至っては本能で悟っての一目惚れから始まっている。

要は俺の恋愛関係は、ベルナ以外は相応の積み重ねとか基点といえるものがあるわけだ。その一点においてベルナは異端と言ってもいい。

メイドになるまでの付き合いなんて、禍の団が仕掛けてきた時に何度かぶつかった程度。それも殆どは、馬のあった春っちの付き添いで仕掛けてきたわけだ。

俺からすれば、一目見た瞬間に道間日美子の絶望しきった嘆きの表情を無意識に連想していたこともあり、春っち含めて宣戦布告して分捕りにいった形ではある。

つまりだ。ベルナは積み重ねの有無という物を気にしている。たぶんそうなのではないかとぐらい、俺もいい加減悟っている。

まぁ実際問題、一目惚れというのは相手の内面を見ていないと言われれば否定しきれない。運命を信じるといえば聞こえはいいが、何も分からない状態でそんなことを直感だけで断言するというのもあれだろう。

そういう意味ではベルナと俺の関係性は、ある意味で薄いという物ではあるんだろうが―

「ベルナ。はっきり言っておくからよく聞いてくれ」

―それにしたって、言えることはある。

「な、なんだよ」

ちょっと戸惑い気味のベルナの視線に顔ごと向けて合わせて、俺はハッキリ断言する。

「俺はお前のことをもっと好きになれると思っている。それが、短い間とはいえお前の男になった俺の今の認識だ」

心の底から言える本音を、俺はハッキリと断言する。

……見るからに顔が真っ赤になってるな。忙しなく視線を周囲に

向けて注目されてないかも気にしている。
確かにちょっと周囲を考慮していないようだが、だが構うものか。
人前だろうが堂々と愛を語れるということで、俺の発言力を態度で底上げしてやる。
「というか実際問題だな？　告白された時点で告白してきた相手のことをガチで愛してますってケースの方が少ないだろ？」
「……お前って、本当に身も蓋もねぇ現実をハッキリ言うよな」
そう言うな。現実だ。
現実とフィクションの区別はつけるべきだ。恋愛系のゲームや漫画みたいな展開は、現実ではそうそうないモノなんだよこれが。
毎回毎回会って話しているうちに好感度が上がって、一定レベルに高まった時に告白したら必ず成功。世の中そんなことが当たり前のように成立するほど甘ったるくできてない。
告白してきた相手とあまり話したことがないなんて珍しくもない。付き合いのある相手に告白されるからこそ、そんなことを全く思ってもみなかった不意打ち展開だってあるだろう。
というかだ。俺達まだ十代後半止まりだってことを考えろってんだ。
「更に身もふたもないこと言うが、学生の恋愛なんて半分以上ファッションだぞ？　恋に恋するなんて言い回しがあるぐらい、恋愛をするとかそういうことの方が目的になってる場合だって多いし、老後まで考えて告白する方が少数派だと思うぜ？」
うんうん。大体そういうものだ。
学生の恋愛なんて、結婚後の人生設計までしている手合いがまず希少だ。考えている奴なんて、九割以上が考えている気になっているだけで本当の意味で人生設計ができている奴なんてまずいない。どっちかと言えば彼氏彼女というステータスを持ちたいという方向性の奴が過半数を超えるだろう。
よしんばそうじゃなかろうと、告白した人が自分と同じぐらい好きでいてくれるなんて夢のまた夢。むしろ告白された側からすれば、「え、こいつ俺の事ＬＯＶＥだったの!?」になるんだよ。

ザイアの訓練施設でもそんな感じの恋愛とか普通にあったしなぁ。
結局、告白というものの返答とは「告白してきた相手に好意を抱ける可能性があるか」が基本パターンだ。
……うん。
「俺と(兵藤)イッセー(邸)は基本的に特例よりだからな？　その辺は勘違いしない方がいいぞ？」
「お前は恋愛ソムリエか」
うん。ツッコミは正論だしいつもの調子に戻ってきているようで何より。
まぁそういうわけで、俺は微笑みながら手を差し伸べる。
「俺はお前のことが愛せるようになれる、その可能性を確信できたからこそその手を取ることに否はない。ベルナは……ダメか？」
正直、それはちょっと不安なんだがな。
内心マジで不安になってきたが、ベルナはベルナでちょっと苦笑した。
「ま、そういう意味なら安心しな。結構ガチで来てるからよ」
……よっし！
俺は思わずガッツポーズ。いや、ちょっと不安になってきたから実に安心した。
俺のそんな様子を見て、ベルナは真面目に考えているのが疲れて来たのか肩をすくめる。
すいません。ちょっとその反応は傷つくんですが。
視線に感情が出てたのか、ベルナはちょっと苦笑した。
「お前さん、そういうところは意外と自信がねえんだな？　大概癖の強い女をこれでもかとオトしてんだろうが」
そう返させるとぐぅの音も出ないが、ベルナはそこでちょっと寂しげな表情を見せた。
「……悪いな。ちょっと不安というか、焦りってのがあってよ」
「……愚痴でいいなら少しは聞くぞ？　ちょっとぐらいそういうのも支えさせてくれよ」
むしろ強引にでもひっぱりあげた身としては、それぐらいの責任は

取らせてほしい。
　そんな俺の真面目な視線に、ベルナは根負けしたのか肩をすくめた。
「……なんつーか、ビジョン？　あたしにはそういうのがねぇって思ってな」
「……将来どうするかってことで、不安的な物があるのか？」
　これは、もっと踏み込んだ方がよさそうだな。
　俺は視線と表情で先を促すと、ベルナは小さく頷いた。
「アタシの迷走は自分の人生を他人に委ねてんのが根っこにある。だからカズ達に頼るよりまず、「自分がこれからどう生きるか」を決めなきゃ根っこが変わらねえよ」
「なるほどな。まぁ確かに、生きていく指針があるっていうのはある種の強みか」
　その言い分は確かに一理ある。
　俺やカズヒねぇの場合はまさにそれだ。それが必ずしも良い事とは言わないが、相対的に見れば一種の強みにはなるだろう。
　自分の人生をどう生きるか。これが明確に定まっている奴は、少なくとも強度や突破力ではない奴より上を行くだろう。
　ただ曖昧に生きるより何かの目的を明確に定めた方が、人生のリソースを的確に運用できるものだ。進むべき目標をきちんと定めて見失わなければ、途中で揺れたり大きく道を外れたとしても、そこに向かって進むこともできる。
　俺やカズヒねぇのある種の強みがそれであることは言うまでもない。逆にその辺りを持っていなかったインガ姉ちゃんや、見失っていた春っちがその点で弱みを持っていたのも事実だろう。
　とはいえ、年齢的には高校生のベルナがそれを明確に定めていることの方が少ないんだが……。
「……あの姉から自立するなら、必要ではあるよなぁ」
「だろ？　ないままだと絶対引きずるだろうしな……」
　俺達の脳裏に浮かぶは、聖継娼婦（シャムハト・セカンド）、アーネ・シャムハト・ガルアルエル。

神が作り出したとされる英雄エンキドゥに人の言葉などを与えたとされるシャムハトにあやかり、自らの星と手練手管をもって英雄達を大量に作り出すという形で越えんとする女傑。
幼少期からそういった「相手をその気にさせる」ことに長け、スラムに流れてからは子供達のリーダー格となり、その勢いで娼館でのし上がりマフィア幹部の情婦となり、その流れで後継私掠船団に属することになった女。
話を聞く限り、むしろよくもぞまぁ染まらなかったもんだと感心する。
「っていうか、他のスラム仲間に染まらなかった奴とかいなかったのか？　実の妹だけ染まらないってのも逆にびっくりなんだが」
イヤ本当に驚きなんだが。
恐ろしい影響力というかなんで実の妹だけ外れてるんだとか、何処から驚けばいいのか分からないから、なんというか一人ぐらい居てほしい。
そしてベルナはちょっと黄昏ているような雰囲気になっていた。
「……実は一人だけ、ダメな奴がいた」
「ダメな奴がいたのか」
そっか。ダメ人間ならあの極まった光の権化みたいな奴らは逆に苦手か。
あいつらは基本的に、「やればできる」とか「やろうとできる」連中に作用する傾向がある。そもそもそういう素質がない奴からすれば、迷惑というか不快感とかの方が強いだろう。
良くも悪くも未来とか先に進むことに人生捧げられる連中向けなのがあの手の光だ。加速がつきすぎて別の意味で害悪になりかねないから、カズヒねぇはなんだかんだで自制しているが。幸香も自分達が当たり前でないことは自覚している節があるし。
ま、そんな奴らにとっちゃ幸香やアーネみたいなタイプは居ててストレス溜まるだろうが。自分が過度に惨めに思えたらそりゃキッツいだろうし。
「……そういえば、そいつはどうなったんだ？」

「ああ、禍の団までは結局引っ張られて入ったんだが、あそこは意外と派閥が多いからそっちに流れてな」
なるほど。
禍の団って基本的に、テロリストの寄り合い所帯みたいなところがあるからな。大小ひっくるめれば相当数の組織が集まっているだろう。
光極めてる連中とは正反対の連中も多いだろうしな。
とはいえ、そうなると当然だが禍の団にまだいるだろうしな。俺達の側からすればラッキーというわけにはいかないだろう。
「……ま、流石に今日会うなんてことはないだろ。今は俺達もデートを堪能するとしようぜ？」
「……ま、そうだな。なら精々エスコートしてくれよ、我らが旦那様？」
お、冗談めかして言えるぐらいには回復したようで何よりだ。
と、俺たちの視界に見慣れてるけど見慣れない二人組が映った。
相応におしゃれをしているイッセーとロスヴァイセさんだ。まさか出くわすとは思ってなかった。
ベルナもそれに気づいたけど、お互い視線を合わせると苦笑する。
態々会話するのもあれだな。空気を読んで大人しく下がる……と……。
ん？　なんか後ろの席の奴を見てから急に雰囲気が変わったぞ？
一体何があった？
「どうする？　なんか異形っぽいし、ちょっと近づくか？」
ベルナの言う通りだな。イッセーやロスヴァイセさんがこんなところで暴れるとも思えないが、何か雰囲気がかなりやばい。
というか、相手の方もどこかで見たような気がしないでもない。遠めだと分かりづらいが、もしかすると禍の団の関係者かもしれないな。
俺達は静かに頷き合うと、そのまま歩を進め―
「あ、大事にする気は無いから安心してよ。……だから邪魔しないでくれると嬉しいかな？」

―その時。割って入る女がいた。
染めた青い髪を持つ、サングラスをかけた俺達と同じぐらいの少女。
このタイミングで割って入ることと言い、何か嫌な予感が―
「……アズール……っ」
―その呟きに、俺は嫌な予感が猛烈に膨れ上がるのを感じた。
唖然とするかのようなベルナの呟きと、さっきまでのベルナとの会話が嫌な予感を際限なく上げていく。
そして、その答えを教えるように女は微笑んだ。
「おひさー、ベルナ。ま、こんな再会はちょっと残念だけどね？」
噂をすれば影にしても、早すぎだろうが……っ

英雄乱戦編　第八話　衝撃！　東京大決戦！

和地Ｓｉｄｅ

俺達の前で、アズールであろう女は肩をすくめて苦笑していた。
「ごめんねー？　ユーグリッド様がどうしてもそちらさんのロスヴァイセって人に会いたいって聞かなくってぇ。なんで、こうしてサポート役やってまーす」
東京のど真ん中で、テロリストがロスヴァイセさんに接触を試みるだと？
どう考えても解せない。非効率的というほかない。
東京のど真ん中に侵入なんてすれば、世界各国の主要都市に侵入ができるというようなものだ。できるにしても余計な警戒を買うだけだし、それなら強引にでも駒王町に突入した方がまだ堅実という物だろう。
ロスヴァイセさんに何かしらの価値があるにしても、こんなやり方をとる理由が薄いだろう……？
かといってここで荒事を起こすのもデメリットが大きすぎる。
相手から積極的に動くならともかく、俺達から荒事を起こすのはかなり難しい。
秩序にしろ正義にしろ、その手の物はどうしても受け身にならざるを得ない時がある。ここで積極的にユーグリット達を攻撃に回ると、どうしても俺達にはダメージが大きすぎる。
分かっているからこそうかつに手が出せないが、アズールは余裕の雰囲気で片手を振る。
「だいじょぶだいじょぶ♪　ユーグリット様もここで暴れる気は無いからさ？　私達も保険だから、もう帰るよっと」
そう言いながら、アズールはベルナの方に視線を向ける。

「……あんたもアーネと縁切ったんだ。向いてないとは思ったけど思い切ったよね～」
「……むしろ遅いぐらいだけどな。お前こそ、クリフォト（ユーグリット）の部下とか面倒なんじゃねえか？」
皮肉で返すベルナだが、その口調はやはり苦いものが混じっている。
いつでもベルナをカバーできる力を俺が入れる中、アズールはにっこりと微笑んだ。
「ま、クリフォト（あそこ）が一番居心地のいい場所になりそうだからさ？ユーグリット様直々の御指名だしね～」
そう言いながら、アズールは踵を返すと人のいないところに入っていく。
おそらくは転移をするのだろう。後でしっかり残滓だけでも拾っておかないとな。
俺はその辺りの手はずを整えながら、そっとベルナの手を握る。
少し震えているのが分かる。動揺は抑えきれていない。
……全く、デートがこんなことで二つも台無しになるとかな。
俺はちょっと思うところがありすぎて、思わずため息をついた。

その瞬間、同時多発的に爆発音と振動が鳴り響いた。

え、何があった!?

イッセーＳｉｄｅ

え、何があった!?
ユーグリットの野郎が人のデートにいきなり現れたと思ったら、今度は爆発事故!?
いや違う。
かなり同時にいろんな場所から爆発が起きた感じだ。それも視界に映った爆発と音がほぼ同時なあたり、どう考えてもかなりの近距離で同時にだ。
これ完璧にテロだろ!?
流石にユーグリット達クリフォトがやったとは考えづらいけど、タイミングから全く違うとも思えないところだ。
糞ったれ！　とにかく訳が分からないで戸惑っている感じの人達をどうにか避難させないと！
「ロスヴァイセさん！　精神干渉的な魔法で、とりあえず落ち着いて避難させるとかできないですか!?」
「気持ちは分かりますが抑えてください。爆発がほぼ全方位で行われた以上、避難する方向をきちんと定めてからでなければ危険です」
あ、そうか。
だけど急がないとまずいだろ。
こんなところで連続して爆発なんて、誰がどう考えたって大規模テロだ。すぐにでも避難させないと被害が増える。
っていうか、周りの人達困惑しすぎだろ。カメラまで向けている感じで、危機感があまり感じないし何やってんだよ。
……いや、俺が日本人としては危機感がありすぎるのか。
日本はサウザンドディストラクションが始まってからも、世界的に見てレイダーや星辰奏者によるテロがかなり少ない。だから危機感に直結出来てないところがまだ強いのか。
俺ってば、やれレイナーレの独断での行動とかコカビエルの暴走と

か、ロキのクーデターじみた反乱やハーデスが差し向けた死神やら、何より禍の団との戦いでその辺の危機感が鍛えられてるからな。
自然災害ならともかく、只のテロだとどうしても反応が遅れるのか。
でもどうする？　若い男女の俺達が声を張り上げただけでどうにかできるとも―
「……イッセー！」
「無事かよ二人とも！」
―って九成とベルナ!?
「貴方達もデートだとは聞いてましたが、近くにいたんですか？」
「あ～……ちょっとそっちもややこしいことになってんだが、それは後だろ」
ロスヴァイセさんになんか言い淀んでるベルナだけど、すぐに首を横に振ると周囲を確認した。
「日本の平和ボケ酷過ぎだろ。大規模自然災害でもパニックが少ないことで有名なんじゃなかったっけか!?」
「自然災害とテロ事件はジャンルが違うんだよ。この辺はお国柄というしかないな」
ベルナに九成がそう言いながら、周囲を確認しつつ舌打ちする。
「まずいな。今の連鎖爆発で意識がずれてたが、どうもかなり広範囲で一気に爆破テロが起きてる」
「……となると、同時多発的に通報させることによる通信の麻痺が狙いでしょうか？」
「なるほどそれだな。となると本命はこの後か……っ」
九成とロスヴァイセさんの話を聞いていたけど、馬鹿な俺にも一つだけ分かる。
つまりこれは前座で、こっからがもっとやばいってことじゃねえか！
「やばいだろそれ。ぶ、部長に異能で連絡するとかしないと―」
俺じゃ判断が無理なんで、こうなったら部長のお力を頼るほかない。

どうせユーグリットに接触された時点で連絡必須だし、こうなったら先にそっちを相談した方がと思ったその時だった。
『『『『『『『『『『『『『Ｄｅａｄ！』』』』』』』』』』』』』
こ、この合成音声は……っ
そこかしこから聞こえる合成音声は、当然そこで終わらない。
『『『『『『『『『『『『『スイーピングラクーン！　Ｋｉｌｌ　ｊａｐａｎｉｅｓ
ａｌｌ!!』』』』』』』』』』』』』
なんか出てきたぁあああ!?
そこかしこからアライグマっぽい装甲のレイダー達が現れて、お互いを見かけるとハンドサインで確認しながらツーマンセルから四人一組にぃ！
あ、これ不味いこれ不味いこれ不味い！
「ど、どうする皆！　俺は流石に鎧になれないんだけど!?」
これを何もしないでとか無理に決まってんだろ。俺達が動くしかないって流石に。
でも鎧になると色々悪目立ちするから、できるだけ生身でどうにかしないといけない。
ロスヴァイセさんやベルナは星辰奏者ってことで誤魔化しようはあるけど、俺は籠手とか具現化必須だからかなりまずい。こういう時本当に星辰奏者の九成が本気で羨ましいんだけど。
だけど、その九成は盛大にため息をついてから、髪をかき上げて俺達を見回した。
「……迎撃は俺が何とかする。皆は避難の方に集中してくれ」
『ショットライザー』
「「「……え？」」」
いや、何ナチュラルにショットライザーを即装着してるんだよ。
俺達皆唖然となったよ。お前もトライフォース放送局出てるから、うかつな変身はまずいだろ。
俺はそう思ったけど、九成は見たことのないプログライズキーを取り出していた。
『ＪＵＭＰ！』

「安心してくれ。こんなこともあろうかと、偽装と民間人の安全確保重視でプログライズキーを用意しているんだ」
そう言いながら九成はショットライザーを構え―
「変身！」
『ショットライズ！』
その瞬間、ショットモデルが市民に攻撃を仕掛けようとした奴を盛大に弾き飛ばし、九成は追いかけるように高く飛び上がる。
『ライジングホッパー！　Ａ　ｊｕｍｐ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｓｋｙ　ｔｕｒｎｓ　ｔｏ　ａ　ｒｉｄｅｒ　ｋｉｃｋ』
落下する時には蛍光イエローの装甲を纏った、飛蝗っぽい仮面ライダーが降臨してた。
「市民の皆さんは避難してくださいねぇ！」
そう言いながら天高く何度も飛び上がって上から射撃を行いつつ、やばそうな所には跳び蹴りを叩き込んでいく。
ちなみにそこに気を取られた隙に障壁で即座の攻撃ができないようにすることで、民間人の被害も完全カバーだ。こういう時凄いなこいつ。
よし。ここは九成に任せよう。
「皆ぁ！　ここは戦場になってるからすぐに逃げてぇぇぇぇぇぇ！」
「急いでこっちに走れバカ死ぬぞ！」
俺とベルナが大声を張り上げていると、ロスヴァイセさんがそれとなく精神に干渉する魔法を広範囲に懸けて一般市民の皆さんの思考を誘導する。
とにかく逃げるぞおおおおおおお！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

東京都心における同時多発テロ。これがここまで大規模になった理由は、日本の平和ボケにも一因があるというほかない。
つい最近野党議員の大捕り物があったばかりとは言え、これまでの価値観を一斉に変えるのは難しいところがあった。なまじ外患誘致罪の容疑という前代未聞レベルの大騒ぎであったこともあり、ある意味で遠い世界のように見えてしまったこともあるだろう。民間人の被害が少なく済んだことも、結果的に悪い作用を起こした面が否めない。
更にクリフォトの危険性は人間界にも伝えられていた為、各国の警戒網はどうしても比率として異形に傾いていたことも悪く作用した。
文字通り一切異形が関与していない、異形ですら警戒するレベルのテロ組織。そんな組織に急成長を遂げたテロ組織による奇襲は、確かに効果が抜群だったのだ。
トワイライト師団という名のテロ組織。サウザンドディストラクションで得た技術を長く研鑽し、独自開発のテロ特化型プログライズキーを開発したことで、ついに動き出したその組織は、文字通り師団級の戦力を持っている。
スイーピングラクーンプログライズキーは、民間人を殺戮しつつ自衛隊の攻撃をしのぐことを主眼に開発されており、結果として数百人のレイダーによるこのテロで、犠牲者は日本史上でも有数の被害を出すことになる。
これに伴い日本国内では対テロを主眼に置くとはいえ、防衛力の強化が強く求められるようになり与党はこれに対応。野党などには反対者も出てきたが、野党の有力議員が外患誘致罪で逮捕され数多くの物議を醸し出す発言を繰り返したこともあり、異例のスピード可決が成されることとなる。
……そして同時に、異形の観点で動く者達は同時期に動いたクリフォトに戦慄する。
少しずつだが確実に増えていくテロだけでなく、異形同士の争いを

越えて異世界にまで悪意を向けるクリフォト。
　これに対応するべく、世界各国は対クリフォトを主眼として結成されたＤ×Ｄに対する支援をするべきだということで意見が一致。ある程度の中立性を確立する為、国際機関との連携を踏まえる事を前提として活動を進める事となる。

英雄乱戦編　第九話　混浴は男のロマン、異論は認める

和地Ｓｉｄｅ

疲れた。本当に疲れた。
正直凹むレベルだが、何とかなったのでこれはもう良しとしよう。
あとは日本政府などが動くべき内容だ。俺達は異形側にいる以上、最低限の一線を引かないといけない。
できる範囲で尽力は出来ただろう。その上で、犠牲者に対して合同葬儀や慰霊祭などがあるだろうから、それにも時間が合えば参加する。
その上で、だ。
「……まったくもって恐ろしい話だわ。都内で大規模テロが発生したこともだけど、Ｄ×Ｄ（私達）としてはクリフオト（ユーグリット）の方に警戒を向けるべきでしょう」
リアス部長が俺達の意識を切り替えるようにそう告げるが、実際その通りだ。
異形関連は結界などの対策はきちんとあるし、ユーグリットは駒王町でやってくれたこともあって尚更警戒が厳しいはずだ。
駒王町に仕掛けてきたときはグレイフィアさんの肉親故に、オーラの質が近いところを利用された。それで警戒網をすり抜けられたわけだ。
だがそれゆえに今回は逆。グレイフィアさんのオーラのデータなどがあれば、唯一の肉親であるユーグリッドを結界で感知することは比較的たやすくなるはずだ。ルキフグス家の生存者がこの姉弟しか

確認されていない以上、ピンポイントでサーチのメタを張っているといってもいい。
それが入ってくるとか、ただでさえテロで苦心する羽目になっている日本政府の方々には同情しかない。
真剣にお見舞いの品でも用意した方がいいような気がしてきた。コネでフェニックスの涙でも持って行った方がいいのではないだろうか？
そんなこと思うが、しかしそういうわけにもいかないだろう。
問題は、だ。
「まずはロスヴァイセ。トライヘキサについて研究をしていたというけれど、どういったものなの？」
リアス部長がそこに切り込む。
ユーグリットはロスヴァイセさんが結局他の論文にしていたトライヘキサの論文に目を付けて、直接スカウトに行くというとんでもないことをしてきていた。
いくら何でもリスクが大きい真似をしているんだ。相応の価値があると論文の残滓から察したと考えられる。
ある意味凄い価値がある情報だろう。ロスヴァイセさんが論文の内容を思い出せればトライヘキサについて何かが分かるかもしれないんだから。
もちろん一種の欺瞞工作という可能性だってあるが、危険性が大きすぎるから欺瞞工作にしても他の方法を優先するはず。ある意味で信用できる情報だといえるだろう。
「……私は異説である６１６で論文を書いていました。一応トライヘキサということで気にはなったので、事前に思い出して書き起こしてはいます」
そう答えながら、ロスヴァイセさんは紙の束を出す。
……もはや小論文の域を超えた量だ。流石にこれは専門家でないと分からないだろうな。
なのでここは専門家に任せるべきだろう。俺は俺で話を進めるべきだ。

「それと俺達側の報告ですが、ベルナやアーネと縁ある人物がユーグリットと繋がっているようです」
アズールとかいうやつだったな。ノリが軽いところがあるが、ユーグリットが直々に指名するのなら油断できないところはあるだろう。
「……そう。ベルナ、辛いかもしれないけど、後で詳しいことを教えて頂戴」
「分かってますって。後で箇条書きにでもしときますんで」
リアス部長にすぐに答えるベルナは一見普通に見えるが、やはり少し思うところがありそうだ。
しかし、今回は本当困ったものだ。
私的な理由としてはデートが嫌な感じに終わってしまったことだ。
人間としては、これだけの規模のテロが東京で何度も起きるような社会情勢になっていることだ。
そして異形関係者としては、クリフォトがこれまでの禍の団とは異なり人間世界への影響を本当に躊躇してないことだ。
異世界の侵略などということを目論んでいる以上、周囲に対する配慮は無いと言ってもいいとは思っていた。だがこんな形でそれを痛感する羽目になるとはな。
思えば、禍の団で発言力がそこそこありそうな残存勢力は、人間世界に直接的に害を与える連中だ。
サリュートＩの大量制御で数を担当でき、人類の大量削減を目的とする疾風殺戮・ｃｏｍ。
資金面などで多大な恩恵を与える、北半球に収束している人間世界における有力国を物理的に衰退させんとする南洋同盟。
更に主導するクリフォトがああである以上、もっと痛感するべきだったろう。俺達もだが上層部も危険視が甘かったかもしれないな。
……これは、鍛え直すぐらいはしておかないとな。

とりあえずの会議が終わり、俺達は一旦解散となった。
俺はとりあえずシャワーを浴びて気分転換をしながら、今後のことを考える。
まぁ色々と非常時ではあるが、それとは別に色々あるのも事実だ。
例えば、ソーナ会長が渇望し、フロンズをやり込めたうえで設立した悪魔なら誰もが通えるレーティングゲームの学園だ。
まだ開園準備をして体験入学止まりだが、ほぼ形になったという。その特別ゲストといった感じで、俺達が出ることになった。
色々と大事に巻き込まれて乗り越えた、俺達オカ研メンバーは冥界の民にとってある種のアイドル的存在だ。宣伝という物は重要であり、俺達がゲストとしてくるのはとても価値があるだろう。
個人的にも、学園そのものには大いに期待を覚えている。
ザイアの環境は洗脳教育を無自覚かつ善意でやっているろくでもないところだったが、英才教育という観点では凄まじいレベルだったと断言できる。
環境という物が成長に与える影響は馬鹿にならない。特に幼少期の環境がその後の人生に与える影響は、そいつの今後を左右するレベルで能力に違いが出てくるだろう。
だからこそ、子供達に相応の教育が与えられることは重要だ。なまじ異形はその辺に対する理解が低いだろうとは思う。
先天的な才能で成長の格差が大きくなりやすいからな。こと悪魔は血統で会得できる独自の能力があるケースが多く、また自然な成長でどこまで能力が高くなるかにも違いが大きい。
だからこそ、実績という形で可能性を示すのも大変だ。実績を作る為の土台がまず作りづらいのだから。
だからこそ、とりあえず一校作り上げるだけでも価値がある。後はそれを続けさせれば尚更だ。
嘆きで産まれる涙の意味を、流れる前に変える為。それを人生の指針とする俺にとって、環境で産まれる嘆きを少しでも変えることができるあの学園の存続及び発展は望むところ。
……だからこそ、その辺について色々と切り替えないとな。

クリフォトやら別件のテロリストやらで―方面にずれている思考を、気分を切り替えてすっぱり割り切らねば。
あとベルナのフォローもちゃんとやっておかないと。デートが悪い終わり方をしたのはアイツもそうなんだし、そもそもあいつにとってこそ負担の大きな終わり方だったろうしな。
そこまで考え、俺はただお湯を浴びるのではなく真剣に汗を流そうと、とりあえずシャンプーに手を伸ばし―
「はい」
「あ、サンキューカズヒねぇ」
―そんなスムーズな返答をして、三秒ほど固まった。
「ってカズヒねぇ……うわぁ!?」
振り返るともう驚愕。
全裸でタオルを肩にかけたカズヒねぇと、カズヒねぇに引っ張られる形でタオルで前を隠しているこれまた全裸かつ真っ赤な顔のベルナがそこにいた。
わぁい、眼福。
いや違うそうじゃない。
落ち着け俺。落ち着け九成和地。落ち着け涙換救済（タイタス・クロウ）。とりあえず落ち着け。
まずは状況を理解することをから始めるんだ。対話は知性体の効果的なコミュニケーション！
「とりあえずここ、男用なんですが？」
「大丈夫。アニルには銭湯のサービス券と代金を渡しておいたわ。イッセーは基本的に女子と一緒に地下の大浴場だから尚更大丈夫よ」
あ、その辺の心遣いは完璧なんだ。
其処は良しとしよう。では次だ。
「何がどうしてこんなことしてるんだよ」
「おかしなこと言うのね。彼女が彼氏と一緒の湯浴みをするなんて、そこまでおかしなことかしら……っと」
「おわぁっ!?」
と、俺の質問に答えながらのカズヒねぇに引っ張られて、ベルナが

盛大に悲鳴を上げる。
この体勢は俺とカズヒねぇでベルナをサンドイッチしているの等しい。メンタル的にかなり凄い。
あとこの場合、俺がサンドイッチされる方がいいのでは!?
「あ、あわわわわ……」
もう俺もベルナもいっぱいいっぱいだけど、カズヒねぇは肩をすくめるばかりだ。
あれ、俺達がおかしいのか？
俺とベルナの心が一つになったと思う中、カズヒねぇは少し重心をずらすことで、ベルナのおっぱいを俺に力強く押し付ける。
ちょっと微笑んでるんですが、何を企んでるのかなぁこの人!?
いろんな意味でいっぱいいっぱいな俺達を、カズヒねぇはふっと微笑みながら体を押し付けるように抱きしめる。
「大丈夫。私は此処にいるし、二人にとってのお互いもそうでしょう？」
その言葉に、俺達はちょっとパニックを起こしていたことを忘れて、ふとまじまじと顔を見つめてしまう。
そんな様子をしっかり見ているからか、カズヒねぇの手は俺達を包み込むように優しげに触れていると感じてしまう。
「大丈夫よ二人とも。私もいるから」
そう、カズヒねぇは俺達に微笑んだ。
「無理に私達全員を和地が背負うこともない。縁が薄いからってベルナが一歩引く必要もない。これに関しては、多分私以外も思ってるでしょうね」
カズヒねぇはそう言いながら、俺達を安心させるように微笑んでいる。
「和地が私達を救ってくれたように、私達だって和地を助けたいと思ってるの。ベルナ達が私と和地が結ばれることを喜んでくれるように、私達もベルナに和地と仲良くなってほしいとも思ってるの。だから、たまには愚痴の一つぐらい言ってもいいし、ちょっとぐらいは甘えていいの」

まぁ確かに正論なんだが―
「カズヒねぇが言う？」
「カズヒが言うかよ？」
「失礼ね。これでも甘えてるつもりよ？」
―二人同時にツッコミを入れられ、カズヒねぇは心外そうに眉を上げる。
ただすぐに考え直した表情になると、今度は力を抜くように体重のかけ方を変えてくる。
「なら更に甘えるわ。それも、二人にね？」
そ、そうくるか。
正直この体勢は、男としてめっちゃクる。メンタルに思いっきり来るような状態だ。
そんな二人まとめてのイチャイチャタイムとか……ぬぉおおおおおっ!?
「お、オイちょっと待て！　二人同時ってマジかおい!?」
ベルナはベルナでテンパり状態だし！
「おかしなこと言うのね。既に人数は六人なのよ？」
カズヒねぇはカズヒねぇ、なんかボケてませんか!?
「ここまで多くを抱えている以上、和地にはそれを上手くとりなす技量が求められるわ。二人同時に相手取れるぐらいでなければまとめ上げることなんてできないでしょう？」
その言い分に、俺とベルナの脳裏は一人の男を思い返した。
具体的に言うとイッセー。
……確かに、あそこまで振り回されるのはちょっとなぁ。
なんだろう。言い訳を与えられたことで逃げ道が塞がれた感がある。
ただ、まぁそうだな。
カズヒねぇとはいちゃつきたい。ベルナのメンタル面がちょっと心配でもある。ついでに言えば、俺自身メンタル面で発散できるならした方がいいか。
よし、決めた！

「じゃぁまずサウナにでも行こう。十分ぐらいしたら部屋だな部屋」
「おまっカズ!?」
俺が決断したので、ベルナが置いてけぼり気味になって思わず絶叫。
許せ。俺だって可愛い彼女達といちゃつきたいんだ。一日一時間ぐらいはいちゃつきたいんだ。もっとでも可。
となれば善は急げだ。まずシャワーを止めて、体を洗うのは夜でいいな―
「いえ、まずはこういうところでないとできないことをしましょう？
具体的には体で洗ってあげるわ」
―なんて言いましたかカズヒねぇ。
あ、既に石鹸を胸元でこすってとにかく泡立てている。
え、マジか。マジでか。マジでそういうことになるのですか。
俺は息をのみつばを飲み込むまじまじと見つめてしまっている。
そして思わず、ちらりとベルナの方を向いてしまった。
「……これアタシもやる流れか!?」
「経験ない？　ならとりあえず簡単に教えましょう。女同士の絡みは和地的にどんな感じかしら？」
なんかどんどん凄いことになってるぅぅぅぅぅぅ!?

結論として、俺はなんとかのぼせずに凄い光景と凄い体験をすることになった。
やっべぇ。これイッセーに知られたら激戦が勃発するよ。墓まで持って行くぐらいの覚悟を持った方がいいだろこれ。
ただまぁ、湯上りの女の子二人を左右にはべらせて見た映画は、内容が半分も入ってこなかったりしましたですハイ。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……なるほどな。リゼヴィム王子はそう動くか」
「どうなさいますか？　あの地を禍の団が確保するのは、我々にとっても不利益では？」
「そうですな。ここで禍の団があの地を確保してしまえば、冥界政府の富国強兵が遠のく恐れが」
「……いや、これは荒療治になるのかもしれん」
「なるほど。確かにあまりに計画が進まさな過ぎてますからな」
「王の駒も真魔の駒も十分な数を政府は持っているはず。それを増産するどころか、流用した運用すら遅々として進んでません」
「そういうことだ。我々は荒療治を試みたつもりだったが、あんなふざけた停滞を何時までも待ってやるつもりはない」
「では、クリフォトと連携をとる方向で？」

「その通りだ。今が非常時であることを未だに理解していない冥界政府に、灸をすえる為にも出陣する」
『『『『『『『『『『はっ！　我ら、ヴィール・アガレス・サタン様と共に!!』』』』』』』』』』

英雄乱戦編　第十話　来ました、アウロス学園！

和地Ｓｉｄｅ

アウロス学園。
冥界におけるレーティングゲームの聖地アグレアス。その近くにある小さな農村の名前を関した、ソーナ会長の夢である誰もが通えるレーティングゲームの学園。その第一号だ。
大王派、ことフロンズとの壮絶な政争で一発かまし、主導権と利権を共にそこそこゲットした状態で話を進めながらも、この学園をどこに設立するかは色々と厄介だった。
幸い、双方の派閥で特に推し進めているソーナ会長とフロンズ・フィーニクスは設立を重視している。その為最悪どちらに建てられても問題ないということで思考は一致しているが、外野がそうはいかないのが難点。結果として魔王・大王の二大派閥をとりなすアガレス家の領地で設立して様子を見るという流れになった。
アグレアスを目で確認できるぐらいの距離でありながら、アグレアスそのものが規模の大きい都市であることから人が集まる場所でもない。手ごろな距離感が学園の建設地に相応しいと判断されたわけだ。
「……ふふ。老後はこういったところで農業を営むというのもいいかもしれないね」
「ゼノヴィア。世の中には長期間滞在しないからこその味という物があるの。現地の人からすればもっと栄えてほしいという場合は十分あるわよ」
居心地よさそうなゼノヴィアに釘を刺しながら、カズヒねぇはしかし周囲を見渡して少し微笑んでいる。
「とはいえ、こういうところだからこその味はあるわよね。都会すぎ

ないのどかな感じは残してほしいとは思うけれど」
……カズヒねぇ、前世年齢足してもその言い草はちょっと年を取りすぎているそれではなかろうか。
「でも若い子供が寮暮らしもするのなら、もうちょっと栄えてた方がいいわよねぇ。若い子供は大人より我慢がきかないんだから、ガスの抜き場所は必須よ？」
「まぁ確かに。ただあまり遊ぶところが多いと逆に学ばなくなるかもしれないしなぁ」
リヴァ先生にそう答えながら、俺はザイアの生活環境を思い出す。
あそこは本当に英才教育に特化しているが、だからこそ適度な発散とかにも気を使っていた。
毎日三食食べれる食事は美味しいし、ベッドも枕もかなり上質だった。性的観念が歪む環境だったが、裏を返せば性欲の発散は容易い環境ともいえる。
自由時間はしっかりあるし、読書や映画鑑賞もできる余地はあったしな。そういう意味では至れり尽くせりといった環境だろう。
……うん。
「鶴羽、ヒマリ。ザイアの生活環境は参考にさせた方がいいような気がしてきたんだが」
「まぁ、あいつらその辺は優秀だしねぇ」
「生活に困った覚えはありませんもの」
と、鶴羽とヒマリもうんうんと頷き合っている。
とりあえず概要を説明して、アウロスの学園都市化を推し進めることにしよう。
しかしまぁ、アウロスは普通の農村だから、言っては何だがお土産物屋はなさそうだな。
兵藤邸のメイドさん達にお土産でも買った方がいいかとも思ったが、これはちょっと無理か。
「……帰りにアグレアスにでも寄るか？」
「別にそこまで無理しなくてもいいと思うわよ？」
「そうそう。普段から差し入れは多いんだし、大丈夫だよ？」

左右の斜め後ろから春っちとインガ姉ちゃんにそう言われるが、そんなもんだろうか。
とりあえず今回は泊まりの予定なので、世話役としてメイドを数名派遣されることになった感じだ。で、メンバーは戦闘能力も踏まえていつものメンツ。
いやまぁ言いたいことは分かるが―
「ふっふぅん♪　メリードも気を利かせてくれるわねぇ♪　いっそのこと一緒にベッドインしちゃう？　先生大歓迎……あ、ごめんなさい嘘です」
「あまり悪ふざけしないで頂戴。年若い子供達の体験入学よ」
―とまぁ、俺が思ってることを全部言ったリヴァ先生が、静かの拳を鳴らすカズヒねぇの本気を察して素直に引いた。
ま、観光というわけではないが、今後を踏まえるとある程度の開発は必須だろう。
そんなことをなんとなく思いながら、俺はちらりと後ろを見る。
視界に映るベルナは、こっちに気づくとちょっと顔を赤くしながら顔をそらす。
その流れでカズヒねぇの方に視線を移すと、カズヒねぇは苦笑しながら肩をすくめた。
うん。完全に気にしてるな。
あの後テンション任せて突っ走った感はあるからな。まぁ、おかげでベルナのメンタル的な問題はそれたと思うけど。
あとで何かしらフォロー入れた方がいいよなぁ。とりあえず、経験豊富なアザゼル先生に相談するか。からかわれそうだが他は恋愛経験の度合い的に不安だ。
まぁそれはともかくアウロス学園に到着。既にほとんど建設されているアウロス学園は中々いい感じだ。
悪魔の建設関連能力は本当に凄まじい。突貫工事という次元を超えるレベルでしっかりとした建築を可能にするんだからな。
そう感心しながら、俺たちはアウロス学園に入っていった。

アウロス学園では、既に特別講師として招かれた人達や、シトリー眷属が子供達を相手に何かしらを教えていた。
僕たちも後でちゃんといろいろと教えないととは思うけど、その時視界に人が見える。
「やぁ、リアス嬢。やはり呼ばれていたかね」
……フロンズ・フィーニクス。
後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）を擁し、近年大王派で大きく発言力を伸ばしている、同年代の上級悪魔。更に実家は亜種聖杯を利用した出生率向上に貢献した有力分家フィーニクス家。
イッセーの対話もあって、決して信頼に値する人物ではない。ただ同時に信用には値する人物であり、味方でいる限りは頼りになる男だ。
決して油断はできないが、同時に学園設立に限定すれば理念こそ異なるけど頼りになる人物ではある。
「ごきげんよう、フロンズ・フィーニクス。貴方も特別講師かしら？」
「もちろんだとも。ソーナ嬢が私に全てを任せようとするほど信頼してくれているのだ。これぐらいはしないとね」
部長にそう返すフロンズ・フィーニクスだが、すぐに苦笑すると肩をすくめる。
「……最も、おかげで私の優先順位を掴まれた節はある。今後を踏まえると中々困ったことになりそうだよ」
なるほど。やはりソーナ会長はフロンズにかなりダメージを与えたということか。
不意打ち気味に想定外で避けたい事態に追い込まれたことで、ある

程度地金をさらしたみたいだな。そしてそれは「フロンズ・フィーニクスが交渉の際に優先順位をどこにつけるか」を図れるほどということか。
恐るべしソーナ・シトリー。若手四王は傑物揃いで頼りになる。
脅属の総合力では最強を轟かせ、人を束ねるリアス・グレモリー。
脅属全員単純性能なら部長に並び、個人武力なら四王最強のサイラオーグ・バアル。
ＴＦユニット開発に大きく関与し、冥界への普及推進に精力的なシーグヴァイラ・アガレス。
そして格上のチームにすら牙を届かせ、かのフロンズ・フィーニクスを政（まつりごと）で一泡吹かせるほどに追い込んだソーナ・シトリー。
若手四王（ルーキーズ・フォー）はそれぞれキャラ立ちが出来ているようで何よりだ。
「ふふふ。これから貴方と政治的にやりあう時は、ソーナの補佐に徹した方がよさそうね」
「これは手厳しい。できればお手柔らかにお願いしたいものだ」
うん。笑顔の裏で鋭い攻防が繰り広げられているな、これ。
「とはいえ、貴方の事だから特別講師も用意しているのではなくて？」
「その通りだよ。ぜひ講演をしたいという者が何人かいたのだが―」
そう二人の会話がこの体験入学について戻った時だった。
「……おお、母上ではないか！」
その声と共に、分かり易い奴が現れた。
頬が引きつるカズヒねぇと共に振り向けば、これまた分かり易い連中が何人もって感じで現れる。
「ふっはっはっは！　幸香よ、いずれ俺に追い抜かれるものとはいえ、流石にそれは年甲斐が無いのではないか？」
「いいじゃない。たまには私達の団長にも可愛いところが必要でしょう？」
配下からそんな風に言われつつ、笑顔でこっちに来るのは、九条・幸香・ディアドコイ。
そして連れられるのは、第三征王（ナーディル・イスカンダル）とか名乗っているユーピ・ナーディル・モデウ。

そして聖継娼婦（シャムハト・セカンド）、アーネ・シャムハト・ガルアルエル。
……タイミング悪い登場だな、お義姉ちゃん。
俺はそっと、ベルナの手を握りながらそう思った。

英雄乱戦編　第十一話　ゴマすりも立派な処世術である。

イッセーＳｉｄｅ

で、出たよ後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）！

俺は一応周りを見渡すけど、特に他のメンバーがいる雰囲気はない。

そんな俺の対応に気づいたのか、フロンズさんは苦笑を浮かべている。

「流石に懲罰部隊を何十人もこんなところには連れてこんさ。審査のうえで数名を特別講師として連れてきたにすぎんよ」

あ、そうなんだ。

この人、本気で相容れないところがあるからな。下手すると遠慮なくたくさん連れてきているかもとか不安になってたよ。

そんな俺達の反応をしり目に、幸香の奴は笑顔でカズヒに近づいていた。

「はっはっは！　母上も中々活躍しているようではないか！　ヴァーリ相手の大立ち回りは見ていて面白かったぞ！」

「……色々と複雑になるわね。ま、そっちはそっちで元気そうで何よりね」

カズヒはちょっと戸惑いながら、幸香が差し出した手を掴んで握手をする。

この二人の関係って、かなりアレだからなぁ。

カズヒが前世の頃に産んだ娘だけど、実の兄との間の子供だから当然だけどカバーストーリーを入れるまでの間別の家に預けられていた。だけど色々あってカズヒ・シチャースチエとして再会するまで、

顔を合わせることもなかったわけだ。
しかも幸香はその辺のあれこれをいきなり教えられても気にもしていない。ヴァーリ相手の自分が殺されることを踏まえた決闘も、娯楽感覚で見に来てたしな。
だからむしろ、カズヒに対して幸香がフレンドリーなのが驚きだ。
正直俺達はもちろんカズヒも戸惑っているけど、幸香はむしろ上機嫌だ。皮肉とかそんな感じが一切ない。
「ふっふっふ。悪魔祓いであり年若い時から兵士として活動してきた母上ならば、レーティングゲームという戦闘競技において的確なアドバイスもできるであろう。ただアシスタントをするわけではないのだろう？」
「ええ、まぁ。悪魔祓いの観点から見る悪魔の戦い方ぐらいは言えると思うわよ」
カズヒも特に悪意がなさそうなので、多少は警戒しているけど会話はきちんと応じている。
でも、幸香達後継私掠船団が特別講師かぁ。
戦闘面でやばい方向に行きそうだし、なんか嫌な予感がするんだけど。
でもアウロス学園の権限とかは、ソーナ会長とフロンズで互いに結構持ってるからな。流石に断り切れるわけがないだろうしなぁ。
俺はちょっと不安に思うんだけど、大丈夫だろうか。
「……なぁ九成、どうにかできないか？」
「どうしろってんだよ。俺は学園的に部外者だぞ」
でもさぁ、なんか不安というかなんというか。
だって後継私掠船団って、言っちゃなんだけどヒャッハー系というかトンチキ系というか。とにかくあまり参考にすると、子供達に悪影響がありそうで不安なんだけど。
そんな感じで九成とぼそぼそと話してたけど、幸香は普通に聞こえてたらしい。なんか心外そうな表情を向けてきた。
「……失礼な。この学園の本質的な目的を見落とす妾ではないぞ？」
あ、そうなのか。

……いや、この学園って一応はレーティングゲームの選手を育てる誰もが通える学園なんだけど。
そりゃぁ冥界では下級や能力の低い子供達が通える学園ってのがまず少ないし、本命の目的はそうらしいけど、どういう意図で考えてるんだ？
俺がなんか不安に思っていると、幸香の奴は胸を張る。
「この学び舎は、これまで未来を選べぬ者の可能性を広げる場所であろう。そもそも学び舎とは未来を切り開く為の知恵と知識を得る為の場所じゃろうて」
……あれ？　もしかして俺より意識が高いこと言ってる？
「己（おの）が未来に勝利を掴まんとする後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）が、未来に勝利を掴ませるための学び舎に行くのだ。告げるべきは他にあるだろうて」
お、おぉ。
なんか本当にいい教えを授けてくれそうな予感がする。
予感がするけど、こいつら後継私掠船団なんだよなぁ。
な、なんか不安だ！
「……とりあえず、私も見学しようかしら」
「……姉貴が何するか分からねえからアタシも」
「じゃ、俺も付き添いで」
任せた、カズヒ、ベルナ、九成！

和地Ｓｉｄｅ

不安になる後継私掠船団の特別授業……というか講演。

正直すごく不安だったので、カズヒねぇやベルナについていく感じで俺もちょっと確認に来ていた。
……が、あのフロンズ・フィーニクスが許可を出すだけのことはあったようだ。
「……このように、人間世界の勢力たる国という概念において「失敗と判断する」大きな要素は「国民に学があるか」及び「国民を学ばせているか」である！」
星辰光で巨人を作り、黒板にでっかく図を描きながらの幸香の授業。
その本質は「学のあるなしがどれだけ大きな差であるか」という点に絞っている。具体的には学のあるなしで発生する差という者を統計学まで使って説明している。
名門大学と中卒での平均年収や就職の幅。国家における識字率の差と世界的に見た国家の格。そういった「学の有無と国の強弱の関連性」を、務めて分かり易く教えている。
一周回って俺達も感心してきたぞ。
「これに関して、妾の母国である日本の言葉で一例を締めそう」
そう言いながら書き出すのは「学問ノススメ」の文字。
「この書には「天は人の上に人を作らず。人の下に人を作らず」と書かれており、そこから「しかし実際に人に上下が生まれるのは何故か？」と現実を示し、その理由として「それ学のあるなし及びそこからくる就職できる職業の差ではなかろうか」と自説を提唱することで「勉強した方がいいよ」と人々に勧める本である」
そこまで書き、そこで「学有る」「学無し」の文字をそれぞれ分けて書いた。
「そして学のある者はこれをきちんと知っているから勉学に励む。学のない者は最初の文しか知ろうとせんから、最初の文だけ持ち出して不平等に文句をつける。……まさに学の有無が人の能力や価値を示す分かりやすい一例じゃ」
そこまで告げ、幸香は子供達だけでなく大人達まで見回して告げる。

「人より物を知る、すなわち知識多い者は他者より有利。知識を適切に運用できる、すなわち知恵者は更に有利。そして勉学とは多くの知識を会得し、それを知恵として運用する方法を習得することであり、その為の施設こそが学び舎である」
そう告げる幸香は、教卓に両手をついて声を張り上げる。
「汝らはこの冥界を一新させる可能性を持つ場所に入らんとする者。すなわち天運に恵まれし者である！」
不敵な笑みと共に告げる言葉はしかし、成功を確約する言葉ではなかった。
「だが天運とは掴み取り活かした者に真の恩恵を与える！　そしてこの天運はそれができなければ冥界の民草全ての未来すら左右するのだ！」
声を張り上げ、そして改めて見回した。
「自らが冥界の未来を左右することを意識せよ！　そして学び己を磨き上げ、冥界すら輝かせるがよい！　貴様らこそが新たなる冥界の繁栄を左右する先駆者であると心するがよい！」
……お、おぉう。
ちらりとカズヒねぇのほうを見ると、うんうんとうなづいていた。
「そうね。勉強ができるというのはそれだけで幸運だもの。……いや本当に幸運なのよね……」
前世の勉強経験、根性のストリートチルドレン生活でだいぶ流れているからなぁ、カズヒねぇ。スラム生活で痛感して、レストランの店長が良い人だったこともあって基礎学力は自他含めて何とかしてるけど。
そして実際問題、言ってることは間違ってはいない。
俺自身、今の自分の地力がザイアの英才教育にあると自覚している。だからこそこういった「誰でも一定水準の学を得られる」ことが重要だと断言できる。
「……さて、大きな根幹を語り終えたところで、妾は一旦下がるとしよう。さぁ、この二人の講師から、ある意味この学園で最も学ぶべきことを学ぶがよい！」

そう言いながら下がる幸香と入れ替わるように、アーネとユーピが前にである。
「我らが団長に代わりまして、此処からは数多くの英雄を導くこの聖継娼婦（シャムハト・セカンド）アーネ先生と――」
「――いずれ学でも幸香という凡人を超える男、第三征王（ナーディル・イスカンダル）ユーピ・ナーディル・モデウ様がお前達に眷属悪魔が最も習得するべきことを教えてやろう！」
……掴みは肝心だけど、掴みすぎだろ。
ユーピの方に良くも悪くも注目が集まってぽかんとしてるぞ全員。
そして何故か満足げに頷きながら、ユーピは宣言する。
「レーティングゲームの選手、すなわち眷属悪魔を目指す貴殿らが最も習得するべきもの。それすなわち――」
なんか溜めてから、ユーピは目をくわっと見開いた。
「――へりくだり方だ！」
「「なんでだ!?」」
俺達三人含めて総出で同時ツッコミ。
いや、マジでなんでだ。
もっとこう何かいるだろ。なんだよへりくだり方って。
ただユーピの奴は何故か嬉しそうに俺達の方を向いた。
「いい反応だ。故に応えるが、貴族に対して下民がとるべき態度はさほど多くはないぞ？」
そう鷹揚に頷いたユーピは、なんか自己陶酔しているような表情で両手を広げる。
「貴族とは生まれつき偉い者であり、自分が偉いと思っている者で、何より貴族社会の冥界ならなおの事そうなる者だ。そしてそんな貴族からすれば、自分に従い敬い立てる者より、自分の反抗的で不敬な者を優先することは基本的にない」
そう言い切ってから、ユーピは子供達を見回した。
「眷属悪魔とは主の従者であり下僕であり部下だ。そして偉い者とは下の者が自分を敬いへりくだってくれることに機嫌が良くなってしまうのが人情。……そう、主の気分を良くする為に自分を下における

者こそ、貴族の過半数が欲す眷属！」
……あながち的外れでもないのがなんかムカつく。
「どちらにせよ対外的には主君という上司である以上、態度で自分を下に置くべきものだ。これをきちんと考慮して立ち回れる方が、貴族達にも厚遇されやすいぞ？」
「そういうわけで、私とユーピが下僕と主といった形で「どんな態度の主にどんな反応するべきか」について教えるわね？」
……す、寸劇形式か。
確かに幼少の子供が多いし、そっちの方が分かりやすいし見る気にもなりやすい……のか？
俺はちらりとカズヒねぇやベルナの方を向く。
「……まぁ、これぐらいなら止めるほどではないでしょうね」
カズヒねぇはとりあえず静観の体制らしい。
ただ、ベルナの方はちょっと苦い態度だった。
「……」
……ちょっと、後で時間を付けた方がよさそうだな。

英雄乱戦編　第十二話　アウロス学園の一幕

祐斗Ｓｉｄｅ

学園内を見学していると、思わぬ人物を見つけてしまった。
「接木さんじゃないですか？」
「……お、木場君だっけか」
カズヒの前世で異能に関りのない友人関係を結んでいた、接木勇儀さんがここにいるとは意外だった。
「ごきげんよう。貴方がここにいるということは、星辰奏者関係の特別講師かしら？」
リアス部長がそう挨拶すると、接木さんは肩をすくめながら頷いた。
なるほど。今後は冥界の悪魔にも星辰奏者は増えていくことは、想像に難しくない。
となれば星辰奏者について知ることは悪いことではないね。レーティングゲームや人間界での戦いで星辰奏者とぶつかることもあるだろうし、自分が星辰奏者になるかもしれないのだから。
「金払いがいいから臨時警備員兼用で受けててな。……違約金払って独立した方が、嫁さんと子供の将来に響かないだろうし」
「大変ですね。いえ、本当に」
実際確かにその通りだから、彼の遠い目に同情するほかない。
まさか所属する企業のＣＥＯが、テロリストのサブリーダーだなんて想定外にもほどがあるだろう。しかも私的な金とはいえスポンサーでもあり、どうも移動関連では企業を上手く利用してサポートしていたらしい。
主神の庇護を受けてとりあえず黙認されているとはいえ、日本人としては出来る限り関係を断った方がよさそうだと考えたくなること

だろう。
　とはいえそれで苦労しているようだけどね。お疲れ様です。
「ま、アマゴフォースは仮想敵とかもやってるからな。教えれることはあるんで何とかやってるぜ。……っと、休憩時間終了だから日美っちにもよろしく！」
　そう言って足早に教室に戻っていく接木さんは忙しそうだ。
　……さて、どうしたものか。
「かなり興味があるわね。少し覗いてみようかしら」
　星辰奏者である部長としても気になるようだ。
　僕としても星辰体は運用するし、とても気になるね。
「見ていきますか？」
「そうねぇ。星辰奏者の専門部隊の意見は実に気になるけれど……」
　そういいながら、部長は少し周囲を見渡した。
「……カズヒや和地も聞く価値はありそうだけれど、皆はどこに行ったのかしら？」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「で、こんなタイミングで私達に相談って何かしら？」
「そうそう。凄い本気なのは分かるけど、何事？」
　急にリーネスに呼び出されたカズヒと鶴羽は、もの凄く真剣かつ戸惑っている表情のリーネスに首を傾げる。
　親友としてこれでふざけた理由なんてことはないだろうし、こんなタイミングでふざけたことはしないだろう。そういった確信がある程度には、カズヒも鶴羽もリーネスを信頼している。

だからこそ、急に呼び出して校舎裏に連れ出したリーネスのその表情に、心配すら覚えてしまう。
「ごめんな……さぁい。その、もっと時間を置きたかったけど、無理、だったのぉ」
とりあえず、かなり深刻な問題を抱えている。少なくともリーネスにとっては深刻であるということはわかった。
だからこそ、二人はともに頷き合い、内容次第ですぐ動くことを考える。
リーネスが態々二人に相談した以上、あまり人に知られたくない類の可能性がある。つまり巻き込むのなら信頼できる人物で、その上で厳選する必要があるだろう。
オカルト研究部のメンバーではなく二人だけに相談なのだ。それは本当に少数にのみ明かしたい類の相談だ。それを踏まえたうえで、厳選に厳選を極めるべきである。
故にカズヒと鶴羽はアイコンタクトで和地の候補に挙げたうえで、リーネスが語るのを待ち―
「……和地のこと、好きになってるみたいなのぉ」
「……はい？」
―想定外の方向に、思わず首を傾げてしまった。
十秒ぐらいお互いとリーネスの顔を、視線を行ったり来たりさせて考えた。
結論は、言うまでもない。
「さっさと告白したら？」
むしろなんでしないのというノリで、同時発言だった。
「真面目な話よぉ!?」
全力で大声をあげられるが、鶴羽はそんなリーネスの肩に手を置いた。
「いや、和地に限って真剣な告白に雑な対応はしないから安心しなさいって。この中じゃ一番付き合い長い私が保証するわよ」
年季に基づく断言できる保証だったが、リーネスは全く安心していない。

おろおろとしながら顔を真っ赤にし、泣きそうな表情になっている。
「だ、だってぇ。今まで保護者のつもりで接してきてぇ、和地だってそのつもりでしょぉ？　いきなりそんなことを言われたって、断られてギグシャクするだけじゃなぁい」
「……あのねぇ。リーネス、それは違うわ」
そんな不安まみれのリーネスに、今度はカズヒが肩に手を置く。
「何度も男女問わぬその手の会話に巻き込まれた身として保証するわ。告白される側ってのは基本的に「告白する側にＬＯＶＥ確定」なんてことこそ稀なの。その上で成功する率はそれ以上なの」
両肩に手を置いたうえで、カズヒははっきりと断言する。
「恋愛小説とか恋愛漫画を参考にしちゃ駄目。あれはフィクションである以上、現実とは何かしらの一線が引かれてるの」
「そうそう。よく「お試しで付き合いなんて失礼」なんて展開あるけど、実際お試しがアウトなら成功例はガクンと下がるわよ？　だってされる側からすれば基本的に想定外。むしろお試しする価値があると思われてラッキーってなるのが告る側よ？」
うんうんと鶴羽もまた便乗する。
「ザイアの施設ですらそんな感じが恋愛だもの。告白の返答ってのはね？「自分が相手を好きになれる可能性」が有るか無いかで決まるのよ」
うんうんと頷き合い親友二人に、リーネスは少し落ち着いたようだった。
その様子を見て、カズヒも鶴羽も少し落ち着いてきた。
なんだかんだで前世において他人の恋愛沙汰に慣れているカズヒや、ザイアの同年代で恋愛沙汰を何度も見てきている鶴羽と違い、リーネスは環境が特殊だからか、恋愛関連の知識が最も低い。
最も知恵者である親友の意外な弱みに、思わず苦笑すらしてしまっていた。
「……でも、カズヒはそのぉ……どうなのかしらぁ？」
「最低でも大真面目かつ誠実に対応してくれるわ。でなければ私は和

地に堕とされてない」
　弱気気味なリーネスにカズヒが断言すると、鶴羽もうんうんと頷いた。
「カズヒと私が続けざまにＯＫされてんのよ？　だったら少なくとも考えてくれるから安心しなさいって」
「……そう、そうよねぇ……うん、そうよねぇ」
　少しほっとしているリーネスに、二人は互いの顔を見て微笑み出す。
　そしてリーネスも落ち着いたらしく、ほっと息をついた。
「よかったわぁ。最近忙しくて気にしてなかったけれど、一息付けたら急に気になっちゃって」
「……え、そんなことあったの？」
　カズヒに言葉尻を聞かれ、リーネスはハッとなった。
　そして数秒の沈黙を、大量の冷や汗と共に流していく。
　当然だが、それを見た二人は嫌な予感を覚えた。
「リーネス、忙しくてって何があったの？」
　そう鶴羽に聞かれ、リーネスは視線を逸らし―

「そういうことは先に言いなさい！」
「ストップストップ！　首が！　リーネスの首がぁ!!」

　―聞いたカズヒがリーネスをゆすりすぎて、鶴羽が止める頃にはリーネスがノックダウンされる珍事が発生した。

和地Ｓｉｄｅ

「……このように、武器とはその種類によって適切な戦い方や使い手の向き不向きが意外と分かれる者で―」

「分かりましたか？　人間は魔力を使えない代わりに、それを再現するべく魔法を編み出したのです」

「このように、人間界には様々な種類の文字と文法があります。例えば朝の挨拶は英語だと……」

本当に色々な授業がやってるなぁと思いながら、俺はベルナと授業の様子を外から見て言っている。

何故かカズヒねぇさんは内緒の相談をされたらしく、俺達は離れている。

他のメンバーとはそもそも幸香の講演を監視してなかったことも

あるしで、結果としてベルナと一緒の巡っている形になる。
……これ、もしかして半ばデートになってないか？　博物館の見学とかそんな感じの。
なんとなく顔が赤くなりそうになっていると、ベルナが廊下の窓を見て、ぽんぽんと肩を叩いてきた。
「なぁカズ。あれ、イッセー達じゃねえか？」
「え？　あ……ほんとだ」
窓の向こうの校庭の片隅で、イッセーが悪魔の人と握手をしている。
ちなみにそこから少し離れたところで、ファーブニルが子供にまとわりつかれているが無視だ無視。星辰奏者の強化された五感によってパンツを確認し、陰に隠れ気味な場所でゼノヴィアとイリナに介抱されているアーシアを確認したが、無視だ無視。たぶん使用済みパンツ問題だから、触れないであげよう。
というかだ、どこかで見たような……あ。
「あぁ、アグレアスのレーティングゲームでサイラオーグ・バアルのコーチしていたとかいう、ディハウザー・ベリアルって人だ」
凄い人物が来ていたな。ちょっとびっくり。
「……確かレーティングゲームのランキング一位で、魔王クラスとかいう？」
「そうそう。ついたあだ名が皇帝。同じく魔王クラスあるとかいう二位や三位を抑え、不動の一位を何十年も維持しているレーティングゲームの頂点に立つ人だよ」
ベルナと一緒に記憶を思い出しながらだが、また凄いゲストが来たもんだな。
子供達も凄い沸いているし。まぁ日本で言うなら……オリンピック代表とかが出てくるようなものか。そりゃそうだ。
見ている限り朗らかに対応しているし、そもそもアグレアスのゲームでゲストの時も、アザゼル先生の大王派をこき下ろした発言を同意気味に流していたからな。
「イッセーとしても超えるべき目標だし、いい経験になるかもな」

「確かにな。そういうのって、大事だよな」
俺に応えるベルナの表情は、どこか考えこむような感じだった。
少し深入りしようかと思ったが、どこか決意すらあるような雰囲気で、振り返ると俺の手を引き始めてくる。
「行こうぜ、カズ。もうちょっと色々見て回った方がいいだろうしよっ」
「あ、ああ……」
何か思うところがありそうだけど、今このタイミングだと聞きづらいか。
よし、ひと段落ついてから聞いてみるとするか！

英雄乱戦編　第十三話　ベルナの夢

和地Ｓｉｄｅ

夜に入り、俺達はアウロス学園の学生寮として建設された建築物で一休みをしていた。
この体験入学は泊りがけの予定であり、俺達も最初から学生寮で泊まる予定だ。また体験入学に来ている側も、自費や理解のある貴族の資金援助で近隣の宿泊施設に泊まっている場合もある。
そんな中、俺は風呂を浴びる前に外の空気を味わいに来ていた。
なんとなく、といったところだろう。具体的な理由なんて何もない。
……しいて言うなら、俺はアウロス学園を気に入っているのだろう。その空気を味わいたかったのかもしれない。
この学園はきっと、冥界の子供達にとって未来を切り開く為の場所になるだろう。
人間界でもまだまだ数多くあるだろうが、教育という物は必要最低限すら足りない場所は数多い。冥界なら尚更だ。
異形とは総じて人間より性能が高く、そこに先天的な要素がとても多く関わる。だからこそ、生まれ持っての才覚とその自然な成長が優先されやすい。だから尚更教育に力を入れづらいところがある。
だが、学ぶことができるだけで人生の選択肢に幅が生まれてくる。そういうことが数多いのだ。
ザイアの英才教育もそうだが、教育環境に恵まれるかどうかはその者の成長に繋がるものだ。そしてザイアとは違い、この学園は子供の未来に選択肢を与えてくれる、その為の場所だ。
だからこそ、この学園は出発点であってほしい。
今後も同じような学園が増えてほしい。そして子供達が未来を選択できる余地があってほしい。

そう思いながら、俺は学園を歩いてみる。
体験入学が行われていた時と違い、今のアウロス学園に人はいない。だからこそ、アウロス学園という校舎そのものが見えてくる。
こうして見ると校舎そのものは日本のそれを参考にしているが、その上で冥界の文化や悪魔の能力に合わせて調整をしているようだ。
ソーナ会長が心を砕き、フロンズ・フィーニクスがよく考えていることがよく分かる。
こんな学園が増えてくれればいいと心から思いながら、俺はこんな時間帯だからこそ見れるアウロス学園を見渡し―

「……あれ？」

Other Side

アウロスは放牧や農業が基本で閑静な街だが、しかし何人もの人々が暮らす街である以上、ある程度の歓楽といった施設は必ずある。
そんな小さな酒場で、カズヒは盛大にため息をついた。
「……子供と一緒に飲みに行く。父親とかがよく思う夢とは聞いたけれど……まさか誘われるとはね」
そうぼやきながら半目を向ければ、安い麦酒を一気飲みした幸香はにやりと笑う。
「母上とは一度酒の席でも設けたかったのでな？　なぁに、フロンズに話を通して居るとも」

「だからってこのタイミングでする？」
そう返すが、幸香は肩をすくめて苦笑する。
「特別授業は終わったのでな？　アーネとユーピはフロンズの護衛としてアグレアスに向かうが、妾は明日にはさっさと帰るように釘を刺されておるのだよ」
どうやら、フロンズも幸香の微妙な立場をきちんと考えて連れて来ていたらしい。
まぁつい先日までテロリストだった女を毎日毎日外に連れ出すというのは、世間体としても問題だろう。
その辺りについて考えていることにほっとしつつ、カズヒはオレンジジュースをちびちびと呑む。
「母上は酒を飲まぬのか？　ここなら飲めるとフロンズから聞いておるぞ？」
……妙なところで気を回している。幸香もだがフロンズもだ。
そんな感想を抱きながら、カズヒは唐揚げを一口食べてからため息をついた。
「まだお酒は飲んだことがないもの。私はあなたと違って明日もアウロス学園（ここ）だから、その辺りは気を使ってるのよ」
呑み慣れてない以上、下手をすると二日酔いになる可能性だってある。
必要なら気合と根性で強引に突破できるだろうが、そもそもその必要が無いようにする努力は必要だろう。
それには納得だったのか、幸香は残念そうにしているが反論はしなかった。
「……まぁ、星辰奏者（エスペラント）でも限度はあるし悪酔いする奴はおるしな。仕方ないか」
「そういうこと。以前カズヒ（親しい星辰奏者）が同僚の星辰奏者の悪酔いに巻き込まれて苦労したみたいだから、その辺りの認識ができるまでは気を付けないとね」
そう返しながらカズヒは肩をすくめるが、その上で少し真剣に向き直る。

「……幸香。一つ、聞きたいことがあるの」
「なんじゃ、母上？」
聞きたいことはいくつもある。だが同時に、それは少しずつにするべきだ。
生みの親ではあるが、二十年近く顔を見たこともないのだ。そこで何の遠慮もない距離感は、何かが間違っているだろう。
だからこそ、カズヒは一つだけ聞く。
「……貴女は、私のことを恨んでないの？」
答えは何となく予想ができている。
だがそれでも、あえて言葉にして聞くべきことだと思ったから聞いてみる。
世の中には、あえて行動や言葉で示すことに意義がある物事など数多い。そうだと思っているだけより、そうだと示す方が自分たちはもちろん他者の認識もはっきりする。そういう儀式的な物があるのだ。
そしてその質問に対して、幸香の答えは予想通りだった。
「いや全く。すくなくとも殺意や憎悪を抱くような気にはなれんな」
即答で、気負いすらなくそう答える幸香。
その上で麦酒を呑み、ため息すらついた。
「まぁその生き方に言いたいことはあるがな？　かつて会った時に言ったはずじゃが、母上は妾と同類じゃろう？　その生き方は合わないのではないか？」
それに対し、カズヒはオレンジジュースを一口飲んでから、ため息をついた。
ああ、彼女はやはりそういう、自分とは相容れない生き方を良しとしているのだ。
「私はこう生きてそう死ぬと決めてるわ。逆に聞くけれど、貴女はその決意を他人の言葉で翻すの？」
「なるほど、一本取られたわ！　流石は母上と言っておくべきかのぉ？」
その返答が答えだ。
……最も自分と似ないでほしいところを、彼女は色濃く受け継いで

いる。
だからこそ、この状況はある意味で幸運なのだろう。
できることとすべきこととしたいことは、全て別の概念だ。だからこそ、フロンズ・フィーニクスという対立派閥に擁される形で、幸香が味方となったことは都合がいい。
「フロンズとリアス部長が、正真正銘の殺し合いをしないことを祈っているわ」
「妾はそれも一興じゃがのぉ？　まぁ、意味もなく内輪もめを勧めるほど阿呆ではないから安心せよ」
親子といえるような距離感なのか、それは間違いなく自分なんかには分からない。
元々物心つく前から両親を失い、下劣な男のもとで育ち、そして真っ当に子どもを育てることもできなかった。
だが、娘とこうして席を同じくできている。
……それは、悪くない。
「とはいえ明日になればとんぼ返りじゃがな。いっそのことご当地銘酒とかあれば買っておきたかったのじゃが」
「まぁ帰れるなら帰った方がいいわね。明日はヴァーリを引っ張り込む予定だから」
そんなとりとめのない会話をしながら、夜はどんどんと更けていった。

和地Ｓｉｄｅ

あ、やっぱりだ。

「……ベルナ、どうしたんだ？」
「お、カズか」
なんか黄昏ているベルナを見つけてしまい、俺はふと声をかけた。
なんとなくそのまま隣に座ると、ベルナは空を見上げている。
その雰囲気を味わいながら俺が何となく待っていると、ベルナがこてんと俺の方に頭を預ける。
うん。
よぉっし。
いよっしゃぁ！
内心でちょっとガッツポーズをしていると、ベルナの雰囲気もなんとなく和らいでいる。
あ、なんかいい雰囲気！　やっほぅ！
内心でテンションを上げていると、ベルナは笑みを浮かべながら体重を俺に預けてくれる。
「本当に、いいところだよ。こういうところがあの時ありゃぁとか、本気で思っちまうところがあるな」
ベルナが思い返しているのは、きっとスラム時代の頃だろう。
そこそこ金を持っていた企業の娘に生まれながら、内乱などが重なってストリートチルドレンになってしまった頃の事だろう。
確かに、ストリートチルドレンなんて言うのは孤児（みなしご）といった立場の子供に対する支援事業の有無で誕生すると言ってもいい。
そしてそんな出身の者達は学ぶことすら不可能に近いから、未来を切り開く余地すらない。
其処を考えてみれば、この学園の価値を俺よりベルナが痛感しても当然だろう。
……根っこの思想が致命傷なだけで、ザイアの環境は良かった方だろうしな。環境に恵まれるってのがどれだけ心強いかがよく分かる。
そう思っていると、ベルナは静かに拳を握っていた。
「増えるといいよな、この学園みたいな場所がよ」
「ベルナ……」
俺は、そっとベルナの手を握る。

軽く、だけどしっかり握るとベルナの肩がびくりと震えた。
「なぁっ!? な、なななんだよいきなり!」
「いや、グっと来てな」
顔を真っ赤にするベルナに、俺は本心からの笑顔を見せる。
ああ。ベルナはこの学園と自分の過去を振り返って、この学園が増えることを願えるんだ。それができる人なんだ。
なんか感極まって、俺はベルナの肩を引き寄せると抱き寄せた。
「おぉおおおお前!? お前カズいきなり何してんだぁ!?」
「すまん感極まった。こうさせてくれ」
今なら本心から確信をもって断言できる。
「俺はベルナのことが好きだ。今なら尚更そういえる」
ああ、彼女のことを好きになれると考えた、俺の気持ちは間違ってなかった。
「ベルナは凄い奴だよ。今アウロス学園のような場所が増えることを、自然体で言えるんだ」
本当に優しい女性だ。
複雑な気持ちを見せもしない。本当に持ってないのかもしれない。
そんな女の子を、引っ張り上げることが俺にはできた。
「ベルナ・ガルアルエルをこちら側に引っ張り込めれたのは、俺にとって誇れることだ。そんなお前のことを愛せなくて、何が涙換救済(タイタス・クロウ)だってんだ」
「お、おぅ……」
顔が真っ赤になっているベルナを、俺はぎゅっと抱きしめる。
そして真っ赤になってるベルナはちょっとそっぽを向きながら、それでも無理やり引きはがそうとはしない。
そしてふっと緊張を解いて、体の力を抜いて抱きしめられてくれる。
「……なぁ、カズ」
「どうした?」
俺はすっごくテンションが上がってるんだが。
「……アタシさ、この学園みたいなことがしたいって思うんだよ」

そう、ベルナは苦笑しながらつぶやいた。
「学のねぇ女が何言ってんだって思うがな？　この学園を見てたら、そこに通えるガキ達が増えたらいいなって思っちまって……アタシも何かを伝えられたらって、そう思ったんだよ」
そうか。
なら大丈夫だろ。
「大丈夫だよ、ベルナ。今からだって、教えられることはきっとあるさ」
俺は気休めでもなんでもなく、確信すら持って言い切れる。
「少なくとも日本には家庭科という授業体系があるしな。お前家事万能だし、今からでも頑張れば家庭科教師はイケるだろ」
「……そっか。それもいいかもな」
そう頷いて納得したベルナは、そっと俺に体重を預け直す。
「……もうちょっと、こうしてもいいか？」
「ああもちろん。むしろあれだな。ベルナが一歩成長した記念に、ちょっと盛大に甘やかしてやるよ」
「お、本当かよ？　なら十分ぐらいこうさせてくれや」
それぐらいならお安い御用さ。
ああ、こういうのもいい感じだよなっと。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

アウロス学園の女子寮で、リアスの前でリヴァが突如としてあらぬ方向を振り向いた。

「……なんかカズ君が好感度アップに成功した予感！」
「リヴァ？　何を妙なことを言っているのかしら？」
「あらあら？　リアスさんは女の勘を信用しないの？　それも女神の勘よ？」
「……無駄に信用度が高いのが複雑ね。でもあなたとしては歓迎じゃないかしら？」
「それはもう。自慢の旦那が可愛い女の子をひっかけてくれるなんて、いろんな意味でテンション上がるもの♪」

英雄乱戦編　第十四話　宇宙創成の真理

和地Ｓｉｄｅ

そしてアウロス学園体験入学二日目。フロンズ・フィーニクス達はアグレアスの方に向かったので、今回は魔王派側が集まっているようなものだ。

なんでもアグレアスの警備面で折り合いをつけるとか。対クリフォトを警戒した魔方陣の設置などが遅々として進んでないことを警戒したらしい。

まぁアグレアスは冥界にとって経済的にも象徴的にも意味がある都市だ。だからこそ警備は強化するべきだが、それで経済が滞ることを踏まえると二の足を踏まれる可能性はある。

仕掛けられてからでは遅いのだが、仕掛けられずに終わると金の無駄遣いを考える奴が出てくるからな。実際出費はでかいわけだし。

だからこそフロンズ・フィーニクスも強硬的な警備強化はしてなかったようだが、それにしたってしないわけにはいかないところもある。

その為の交渉として、大王派側からの意見を出す形だろう。

フロンズ・フィーニクスのそういうところは頼れるからな。彼なら上手い落としどころを付けれることだろう。

さて、そしてだが―

「……ふっ。まさか幼子の学び舎に来ることになろうとはね」

「これも社会福祉の一環よ。それにそっちにとっても益はあると言ったはずよ？」

―ここでヴァーリをゲストに派遣するとはな。

贖罪活動を兼ねて社会福祉活動に参加させているわけだが、アウロス学園の特別講師として送り付けるとは。

よく納得させれたなぁともうけど、カズヒねぇはヴァーリに対して胸を張って断言する。
「強者と戦いたいなら、強者が育つ環境の支援でもしなさい。天然資源に拘らず、増やす努力は必要というものよ」
ある意味納得ではある。
アウロス学園は基本的に「レーティングゲーム選手の育成」という名目だからな。必然的に競技選手としては強い奴が育つはずだ。
その観点で言えば、ヴァーリの関心を引く余地はある。それを踏まえてカズヒねぇは誘導して、ヴァーリを参加させたわけだ。
それに初代ルシファーのひ孫がゲストで来るというのは、冥界政府的には意味のある布石だろう。
「……でもまぁ、ヴァーリ大丈夫かにゃん？　目がうつろっぽいけれど」
と、同じくゲストで来た黒歌がヴァーリの方を気づかわしげに見る。
腐ってもレーティングゲームを何度も経験している黒歌の経験はそれなりに価値になるだろう。
だがしかし、ヴァーリの目がうつろっぽいのは俺も気になる。
相当ストレス溜まっているのか？　正直状況がよく分からないが、大丈夫だろうか。
「……ヴァーリ、講演については一応決まっているのかしら？　形にはなってほしいのだけれど」
カズヒねぇがそう確認すると、ヴァーリは力強く頷いた。
なんだ、あの凄い自信に満ち溢れた頷きは。
「なぁ、自信ありげなようだが何を言う気なんだ？」
「強さの真理。いい機会だし君達にもまとめて語るとするさ」
なんて頼りになる風格を見せながら、意味深なことを言ってくるんだ。
白龍皇ヴァーリ・ルシファー。魔王ルシファーの血と白龍皇を宿す神滅具（ロンギヌス）を併せ持つ、才能の塊。
その現在過去未来において最強の白龍皇が語る強さの持論。参考

にはなりそうだな。
さて、いったい何を語っていくことやら。

「……覚えておくといい。戦いの強さとは、素晴らしい麺を作ることと同じなんだ」

―その興味を八割がた後悔に塗りつぶすレベルで、とんでもないことを言ってきましたよこの人。
講演会場で俺たちを唖然とさせながら、ヴァーリはまっすぐな目で子供たちに告げる。
「強さを究める道は麺を究める道と酷似している。これこそが真理であり、レーティングゲームという戦闘を職業とする者は、すなわち麺の道を進むべきだ。逆もまた然り―」
「強制終了！」
速攻でカズヒねぇが鎮圧を試みる。
だがその拳をやすやすと受け止め、ヴァーリはためらうことなくさらに言葉を続けていく。
「そう。そして麺の道は世界の真理だ。麺を創り出すことは世界創世の再現なんだ。これを知ることこそがあらゆる全ての道を究める大いなる一歩。俺は、敗北をもってそれを悟った」
「ごめんなさい悪かった分かった麺は一日一回まで許す。だからヴァーリ本当にいったん戻りなさい！」
カズヒねぇが何とか鎮圧しようとするが、変なスイッチが入ったのかヴァーリはしぶとい。
「待てよヴァーリ！　落ち着けって！」

あ、イッセーが動いた。
「よしイッセー。俺とお前でヴァーリを止める―」
「宇宙の始まりは乳首をつつくことで悟るんだ！　子供に間違いを教えるな！」
俺の期待を返せ!?
あ、シャルロットが即座にイッセーを羽交い絞めにした。
「い、イッセーは私（サーヴァント）が責任をもって引き受けます！　皆さんはヴァーリを！」
「ごめんなさいシャルロットそっちは任せたわ！　和地手伝って！」
「わかったすぐ行く！」
こうして、ヴァーリ・ルシファーによる講演は緊急中断することになった。
ヴァーリ。週一は食えるのに何でその程度でノイローゼになっている。一周回って怖いぞ。
麺を週一にしただけで、相当疲れているようだ。どんだけ麺が好きなんだよ、ヴァーリ・ルシファー。

祐斗Ｓｉｄｅ

……なんだろう。今僕は、ヴァーリとイッセー君が微妙に似ているような気になっていたよ。
自発的に煩悩を制御してトラウマになっているイッセー君。カズヒに負けて麺を抑えた結果、ノイローゼを起こしていると思われるヴァーリ・ルシファー。
アザゼル先生は今代の神滅具保有者を変人としてくくっている節

があったけど、反論できなくなってきている。
まさか麺類を週一に限定された結果、ここまで暴走するとはね。妙なところで二天龍に共通点ができてしまったよ。
まぁ、それはそれとして講師達の手伝いをしないとね。
そう思いながら歩いていると、教室を覗き込むようにしているベルナを見つけた。
「どうしたんだい、ベルナ」
「ん？　ああ祐斗か」
ベルナは僕に気づくと、少し気恥しそうに頬をかく。
その上で、はにかみながら教室の体験授業に視線を戻していく。
「今後の参考にしようと思ってな。様子を見てたんだよ」
……少し、雰囲気が変わったかな。
なんというか、前に進もうとしているようなそんな雰囲気を感じている。
見るからに興味津々かつ意欲的に体験授業を見ているしね。この様子だと、何かを考えていることが見えてくる。
「……何か決めたみたいだね。九成君達には伝えているのかな？」
「カズにはな。ま、もうちょっとまとまってから伝えてやるよ」
そうか。
うん。それは良い事だよ。
「よくは分からないけど、九成君は喜んだだろうね。……力になれるなら僕達も手伝うから、後できちんと教えてくれると嬉しいかな？」
「そうだな。ま、その前にアンタらは体験授業の方を手伝ってきな」
その様子は普段と変わらないようでいて、どこかが変わっている。
なるほど。涙の意味を変える救済者、涙換救済（タイタス・クロウ）は伊達ではない。
きっと彼女も、自分の涙の意味を変えて新しい一歩を踏み出せるのだろう。
……僕も負けてはいられないし、仲間達もだろうね。
取りあえず、僕は上手くグラム達の魔剣を調整しながら扱えるようにならないと。ゼノヴィアにも本っ当にテクニック方面を鍛えてほしい。

ヘキサカリバーになったとはいえ、エクス・デュランダルを破壊の聖剣だけ使用するのはもったいなさすぎる。応用手段は持っている方がいいと本当に思うよ。
その為にも、まずはこの体験入学をいい形で終わらせないと……ね。

和地Ｓｉｄｅ

「……疲れたな、カズヒねぇ」
「そうね。疲れたわね和地」
俺とカズヒねぇは、ヴァーリを鎮圧した後で盛大にため息をついていた。
疲れた。本当に疲れた。
まさかヴァーリのＳＡＮ値があそこまで減衰していたとは。麺を週一にされただけであそこまで削れるとは、何処まで麺類に取りつかれているんだ。
意味不明すぎる謎講義に、子供達はともかく親御さんが凄い引いていた。とりあえず黒歌にレーティングゲーム関連の体験談を語ってもらって場を誤魔化しながら、俺とカズヒねぇはヴァーリに強制精神の解体清掃を叩き込んで何とか鎮圧した。
「……麺類の回数を週一から一日一回に増やした方が良さそうね。刑罰とはいえそれで発狂されては流石にやりすぎな気がするわ」
「それはそれで多すぎないか？　いや、確かにあれはイッセーの引きつけに匹敵するあれだけど、だからこそイッセーが耐えてるレベルでよくね？」

イッセーが頑張って一般人レベルのエロで何とか抑制しているんだから、ヴァーリにもそれぐらいを要請するべきだろう。
……いや、イッセーは家では普通にエロゲもエロＤＶＤも見ているな。なら一日一回の麺はむしろバランス的にちょうどいいのか？
あ、ダメだこれ。深く考えるとこっちのＳＡＮ値が削れていくあれだ。話を逸らそう。
「そういえばカズヒねぇ。接木さんと引岡さん、メルアドとか交換したか？」
前世からの友情を、真相を知ったうえで繋げてくれるあの二人は貴重な人だろう。俺だってそれぐらいは分かる。
カズヒねぇは無茶をしすぎるというか、無茶して死ぬリスクを平然と背負いまくるからな。俺で止められることでもないし、ブレーキ役は正直何人も欲しい。
俺としても今後も道間日美子（かつてのカズヒねぇ）の話を聞いてみたいし、縁を作ってくれるとすっごい嬉しい。
と思ったんだが、なんか急にカズヒねぇの雰囲気が凹んだ。
な、なんだ？
「……喧嘩でもしたのか？」
「いえ、ちょっととんでもない情報が叩きこまれてたから少し困っている感じね」
マジでなんだ？
俺はちょっと踏み込もうとしたが、カズヒねぇはそれより先に振り替えると真剣な表情になった。
「まぁ私の方はいいとして、和地はリーネスの事ってどう思ってるのかしら？」
「話の切り替え方がおかしな気もするけど……恩人だと思ってるぜ？」
ちょっと困惑するけど、嘘を言う理由は欠片もないしな。
なので素直に答えるし、本当に恩を持っている。
俺の前世を理解したからでもあるとはいえ、彼女の助けがあるからこそここまで頑張れたしな。

それにだ。可愛い良い女を嫌いになれるほど、俺は特殊な性癖してないし。
「そういう意味だと、リーネスにも良い出会いがあってほしいな。冷静に考えるとリーネスって、俺達のことに気を割きすぎて自分のことがおろそかになってそうだし」
カズヒねぇや鶴羽は俺、ヒマリやヒツギはイッセーと、リーネス以外は春が来てるからなぁ。
リーネスにも良い出会いがあってほしいと切に願う。それぐらいの役得はあっていいとは真剣に思う。
「そうね。私もリーネスには幸せになってほしいと心から―」
そうカズヒ姉が言いかけた、その時だった。
……空の色が、膜につつまれるように急に変わっていく。
そんな事前情報は聞いてない。というより、俺達の立場だとこういう時に警戒するべきことはシンプルだ。
「――カズヒねぇ！」
「分かってる。近くの子達を校舎の方に誘導するわよ！」
嫌な予感が凄まじい勢いで高まっていく。
おいおい、タイミングがある意味一番悪いだろ!!

英雄乱戦編　第十五話　切り取られた空間

和地Ｓｉｄｅ

職員室に集まった俺達は、この事態に対応する為に会議を行う体制に入っている。
「……部長、通信が繋がりました」
「ありがとう朱乃、出していいわよ」
朱乃さんと部長が通信を繋げると、アウロスで意見交換を行っていた魔法使いの代表として、ロスヴァイセさんの祖母だというゲンドゥルさんの立体映像が出てくる。
更にサイラオーグ・バアルとフロンズ・フィーニクスの立体映像も、おそらくアグレアス側の代表といった形で現れた。
『状況は？』
開口一番にサイラオーグ・バアルがそう言うと、ゲンドゥルさんが渋い表情を浮かべている。
『簡潔にまとめますが、アグレアス及びアウロスを広範囲の結界が包んでいます。加えて―』
そう言いながらゲンドゥルさんが髪をかき上げると、額には何かしらの魔方陣が展開されていた。
『―私を含めたこの場にいる魔法使い達は、魔法の殆どを封じられています』
……冗談きついな。
アグレアスを含めた広範囲を結界で包み込み、更に名うての魔法使い複数から魔法の殆どを封じるとか。
そんなことができる奴がいるってのがまず驚きだな。

「結界にしても魔法封じにしても、超一流が何人いてもできそうにないようなレベルね。……心当たりはありますか？」
カズヒねぇは唸りながらも、すぐにゲンドゥルさんに確認をとるように視線を向ける。
ゲンドゥルさんも心当たりがあるのか、すぐに頷いていた。
『かつて滅びた邪龍に該当する者がいます。千を超える魔法を扱えると言われる魔源（ディアボリズム・サウザンド・ドラゴン）の禁龍、アジ・ダハーカ。そして類まれなる結界を扱えかの英雄ヘラクレスすら苦戦した宝樹（インソムニアック・ドラゴン）の護封龍、ラードゥン』
『……なるほど。かの者達を聖杯で復活させたのなら……いや、それにしてもこれだけの規模は難しくないかね？』
フロンズがそう反論するが、確かにな。
いくらなんでもこれだけの規模の魔法、いろんなものが大きくなりすぎる。必要な出力や負担に消耗、それらを踏まえるとやはり現実的とは思いづらい。
そういう意味では極々真っ当な意見だったが、ゲンドゥルさんは首を横に振った。
『失うものを補い、足りない出力を上乗せする。それができれば可能ですし、クリフォトは可能とできるはずです』
ああ、そういうことか。
俺の隣で、イッセーとギャスパーが悔しそうにする。
「偽物の赤龍帝（ブーステッド・ギア）の籠手かよ。ユーグリッド……っ」
「ヴァレリーの聖杯……！　よくもそんなことにっ」
二人からすれば苛立ちもひとしおだが、同時に納得もできる。
偽物とはいえ赤龍帝の籠手なら倍化を譲渡することで出力を上げれるだろう。また幽世の聖杯を併用すれば、命を削るような禁術もある程度は連発できるわけだ。
つくづく始末に負えない。他の神滅具でも十分やばいが、聖杯と赤龍帝の籠手はテロリストに流れたらいけない類だということがよく分かる。
何とかして対策や回収に成功しないと、ジリ貧になりかねないぞこ

れは。
「……なら、解呪とかをイッセーの籠手でやってはどうですの？　倍化の力はデッドコピーより流石に上では？」
　ヒマリが首を傾げながら言うが、ソーナ会長とゲンドゥルさんが首を横に振る。
「流石にその程度は想定内でしょう。二重三重でカウンターが仕掛けられていると考えるべきでしょう」
『特定の術に対する呪詛がかけられている可能性もあります。相手は術と結界のスペシャリストである以上、後手に回っている今では危険でしょう』
　……なるほどな。
　言われてみればその通りだ。ただ、それだとこっちが不味いだろう。
　リアス部長も歯噛みした表情で外を見る。
「とはいえ、外部との通信もできない以上何かしらの対策は必要だわ。外側の方が異変を察してくれればいいのだけれど……」
『それも難しいでしょう。おそらくですが、結界内部は時間に干渉する魔法がかけられているとみるべきです。赤龍帝の籠手と聖杯を併用すれば、それぐらいのことは為しえるでしょう』
　ゲンドゥルさんは首を横に振るが、全く勘弁してほしいものだ。
　フロンズ・フィーニクスも眉間にしわを寄せてため息をついている。
『テロの頻発に伴いそういった対策を都市に順次施していたのだが、アグレアスは経済活動に支障が出る為反対が根強くてな。実際にそういったテロに巻き込まれなければ金の無駄遣いと叩く手合いが必ず出るから見送り気味だったのが今回は裏目に出たのだろう』
　……あ～なるほど。そういうことかぁ。
「難しい話ね。こういうのは無駄に終わった方がいいものだけれど、それを理解できる手合いは少ないもの」
「実際に損失する額を考えると、少し気持ちが分かってしまいます……」

カズヒねぇとロスヴァイセさんがそう言うが、もう過ぎたことだしそこはいいだろう。
問題は、だ。
「実際問題、敵の目的って何なのか考えた方がいいですよね？」
その辺を切り出すべく、俺はあえて声に出す。
問題は敵の目的だ。そこが分かると分からないのとでは守るにしても優先順位や効率が分からない。
『……おそらくは二正面作戦だろう。結界に意図的に包んだ以上、アグレアスとアウロスの双方に目的があると見るべきだ』
フロンズ・フィーニクスは推測を立てる。
「アウロスに関してはトライヘキサの研究をしている魔法使いが集まっています。アグレアスも旧魔王の時代から残る遺跡で未だ解析できてないものも数多いと聞きます」
ソーナ会長はそこから穴埋めのように情報を補足する。
『初代ルシファーの子が率いる、トライヘキサを復活させようとしている組織。奴らが狙うのならうってつけのタイミングか』
サイラオーグ・バアルは拳を握り締めて唸る。
「そうなると、冥界政府に内通者がいそうね。タイミングを見計らっていたとしか思えないわ」
そしてリアス部長が歯噛みしながら言い難いだろうことを言う。
初代ルシファーの実の子供が相手ともなれば、権威に弱い連中ならホイホイ言うことを聞く可能性はあるということか。
なんでも過去の内乱で奴が残っていたら戦況は変わっていたとされるだけの野郎だ。当時サーゼクス様達についた者達の中にも「リゼヴィム様がいないなら……」レベルの奴がいたっておかしくない。
いろんな意味で厄介すぎる。
「……なぁ、一ついいですかね？」
そこで、ベルナが片手を上げて発言を求める。
……なんというか、意外だな。ベルナってこういう時に積極的に発言しない雰囲気があったけど。
軽く眉を上げながら部長が頷くと、ベルナは部長達を見回す。

「問題ばっかり考えてても煮詰まるだけになりそうなんで言うんですけど、そろそろどう対抗するかについて変えた方がいいんじゃないですか？　……個人的に、アウロス学園も守りたいんですがねぇ？」
その言葉に、俺達はちょっと目を見開いた。
いや確かにそうだ。いつ何が起こるか分からない以上確かに目の前の問題をどう対処するかは考えた方がいい。
確かにそうだな。俺達もちょっとうかつだったか。
「そうですね。避難所にしている以上、この学園に戦火が訪れてはなりません。個人的にも、この学園は守り通したいですしね」
会長がそう言い切ると、フロンズ・フィーニクスも静かに頷いた。
『その通りだ。冥界のボトムを底上げし、冥界全体を発展させる為にもアウロス学園がコケるような事態は避けねばならん。勝って美談にしたいところだ』
……何かが決定的に俺達とズレているが、アウロス学園の防衛を優先してくれるだけありがたいということにしておこう。
とはいえだ。どうするかが重要だ。
リアス部長もそこは分かっているのか、立体映像のサイラオーグ・バアルとフロンズ・フィーニクスの方に振り向いた。
「サイラオーグ、フロンズ。アグレアスの防衛は？」
『市議をシーグヴァイラが説き伏せ、ディハウザー様と共に防衛体制を築いているところだ。彼女が優秀で助かったよ』
『指揮系統は一本化した方がいいと思い、連れた手勢の殆どは指揮権を彼女に移譲させている。都合状不可能な部隊に関しては私と共に二番手三番手のカバーに回らせる予定だ』
「……というと？」
リアス部長が首を傾げると、フロンズ・フィーニクスは肩をすくめる。
『なに。民衆の命を守れてもその後の生活が保障できなくては大きな問題だろう？　アグレアスの企業主などを集め、貴重な資料や重要なプロジェクトの保全を行っている。……直接戦闘は苦手なので、こういった後詰でポイントを稼がせてもらうさ』

おお、抜け目がない。
だがそれなら、アグレアスの方任せられるか。
となると今度は、俺達の―

「ソーナ様、リアス様！　外に……外に映像が!?」

―その時、教師の一人が慌てて飛び込みながらそう声を張り上げる。

……敵の方から色々伝えてくれるというのなら、それはそれでよしとするべき……か？

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「で？　なんであんたまでくるんで……すかい、曹操さん？」
「敬語はいいさ、接木勇儀。独立するつもりなんだろう？」

「ま、色々と思うところもあるんでな。日本人星辰奏者を中心にしたＰＭＳＣでも作ろうかって感じだよ。……日本好きの上級悪魔をスポンサーに、彼らの活動のカバーストーリー的な物も手伝うことになんだろうがよ」
「まぁいいんじゃないかい？　教会にもカバーストーリー担当の暗部部隊もいるそうだし、それぐらいしてもいいだろうさ」
「まぁ最近、いろんなテロ組織が出張ってるからどこも異形との契約を利用できねえかとか考えてるみたいだしなぁ。案外新しいビジネスの先駆けになるかもな」
「中国関係はアマゴフォース（サイリン）の独壇場になりそうだね。なにせスポンサーが天帝だ」
「確かに。ＣＥＯはやり手だしなぁ」

「……二人とも。どうも先方と連絡がつかなくなったぞ？」
「はぁ？　マジかよ？　何が―」
「……二人とも。急いだ方がいい」
「「……ん？」」
「グレモリー眷属や赤龍帝は、行く先々でトラブルに出くわすんだ。しかもその殆どは禍の団（俺の古巣）案件ときている。……急がないと被害者多数になりかねないぞ」

英雄乱戦編　第十六話　大王派の底力

和地Ｓｉｄｅ

うわぁ、すっごいムカつく。
空に浮かぶ「しばしお待ちください」の綺麗なフォントで書かれた文字に、さわやかな花畑の映像が凄くムカつく。
煽りスキルがとても高い奴がやったことだということは間違いない。才能を無駄遣いしすぎだろ。
『え？　もう始まってるから出ろって？　いやいや、俺はこれからお弁当食べるところなんだけどさぁ』
『はいはい父さん我慢して。お弁当はとりあえず僕が食べておくからさ？』
『……この芝居は必要なのか？』
『『お約束は大事だよね？』』
『似たもの親子で何よりだ……』
き、聞き覚えのある声が次々と……。
そう思ったその瞬間、ついに画面が切り替わる。
其処には後ろにたくさんの邪龍と悪魔を連れた、三人の悪魔がいた。
『初めましてもしくはお久しぶり！　みんなのアイドル、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーくんです！』
『いつもシクシク貴方の隣に暗躍上等。皆さんのお耳に嘆きの歌をお届けする、ミザリ・ルシファーです』
『……同じ穴の狢なのだろうが、とりあえず阿呆が二人連続で出てきたことはお詫びしよう。ヴィール・アガレス・サタンだ』
声の通りの連中が出てきたよ。

というか、ヴィールも大変だな。あの二人を同時に相手するのはメンタルがゴリゴリ削れるだろうに。
俺が同情心すら覚えていると、既に映像を見ているメンバーも、憤りの表情だ。
「あれが噂のリゼヴィム王子ねぇ。……能力的に先生出張るの必須かしら？」
リヴァ先生はリゼヴィムを初めて見たうえで、既に冷静に彼我戦力差を計算して先を考えてくれている。
こういう時はとても頼りになる人だ。正直リゼヴィム相手だと俺は弱体化するので真剣に頼む。
「……誠にぃ。ここで来るの……っ」
ミザリを悲しげに睨み付け、カズヒねぇは食いしばった歯の奥からそんな声を漏らす。
その上で、真正面から挑みに行くことは分かってるぜカズヒねぇ。その時は俺にも手伝わせてくれよな？
「な、なんでヴィール様まで!?」
そして意外といえば意外なヴィールの登場に、春っちは困惑している。
まぁ確かに。そりは合わないだろうからこうして堂々と一緒に映像に出るとは思えないしな。
ただサイラオーグ・バアルに拳を交えながら偉そうに説教していたし、腹芸はできる方だろう。少なくともするつもりな人物ではあるはずだ。
そういう意味では相応の理由があるならやるだろう。
問題は。
「……あのリゼヴィム・リヴァン・ルシファーがろくな事考えてるわけないよね」
「……誠明もいるし、多分本当にろくでもないことしようとしてるって、マジで」
そう。インガ姉ちゃんや鶴羽が言ったとおりだ。
あの二人が同時に出てきて動く以上、ろくなことを考えてないのは

言うまでもない。確実レベルで断言できるのがひどい。
『はい、そういうわけで俺達は悪党として、例え不利になっても構うことなく目的とかを色々解説するお約束をさせてもらいます』
『今回はアグレアスとアウロスの二つの街を丸っと包み込む結界をはり、同時にアウロスにいる魔法使い達の魔法をごっそり無効化することに成功しました。立役者はこちらにいるアジ・ダハーカさんとラードゥンさんの二大復活邪龍に、ユーグリット君の偽赤龍帝の籠手添え、かすめ取った聖杯を添えて……となります』
横から半目で見てくるヴィールを半ばスルーして、リゼヴィムとミザリがにこやかに手口を報告。
ユーグリットが持つ偽赤龍帝の籠手及び奪取された聖杯を見て、イッセーとギャスパーの怒りがすぐに分かるほど沸き立っている。
邪龍を復活して大小のデカい禁術すら使わせることが可能。更に高出力化で運用もできる。字面だけでも始末に負えない連中だな、オイ。
本当に神滅具は悪用されると始末に負えない。何とか奪還する方法を考えないと、最悪詰むぞ。
内心で舌打ちしながら、俺は映像を一挙手一投足を見逃さないように警戒して確認する。あとDチェンジャーを操作してカメラ機能も展開している。こういう時便利だなオイ。
『まぁ、テロの理由は簡単だよん？　親父の遺産ともいえるアグレアスを分捕るのと、あと邪魔になりそうな魔法使いの一斉大処分セールって感じだねぇ？』
『その際、こちらのヴィール・アガレス・サタンさんがアグレアス攻略作戦にご協力してくださるとのことでしたので、これ幸いと協力を求めさせていただきました』
にやにや笑うリゼヴィムに、さわやかなのが逆にイラつく微笑みのミザリ。
そして話を振られ、ヴィールは努めて二人の方を無視して一歩前に出る。
『……少し前にアグレアスを責めた際、俺は現魔王政権に期待してい

た』
　そう告げるヴィールは。しかしとても残念そうだった。
『王(キング)の駒や真魔(ディアボロス)の駒を、直接使わないとはいえ兵器転用という形で使う発想。そもそも強引な手を使った手前もあり、その譲歩には価値があると判断した。だからこそ我々は、禍の団からの非難を覚悟のうえで当面の活動を控えめにしたのだ』
　……あ、理由分かった。
　俺達は、ストレスと怒りから一気に呆れと同情に心境が一転したのを感じる。
『だが禍の団の諜報活動により、一方的とはいえ我らがかけた期待は踏みにじられた!!』
　やっぱりか～。
　オカ研の心は一つになった。
　うん、そりゃそうだ。
　俺達もツェペシュの城下町に向かっている時に思ったもん。あれ聞かされて思ったもん。
『……専用機としての性質をどうするかで会議が紛糾して、開発計画が停滞など……ふざけんないろんな意味でぇっ!!』
　地が出るレベルでツッコミ入れたよ。
　かなり憤ってるよ。キャラを作る余力すらないレベルでブチギレてるよ。怒り心頭とはこのことかって領域だよ。
　怒髪天を突くとか、ハラワタが煮えくり返るって例えはこういうことを言うんだろうなぁ。
『……今は非常時だろうが!?　とりあえずまず同型機を量産して量産してその場をしのげよ!?　専用機とかデータが取れてからしろよ!?
　……元凶の一角に言われて情けなくないのか貴様らは!?』
　自覚があっても言わずにはいられなかったんだろう。我慢の限界だったんだろう。
　だって俺達もアホかとかそんな感じのこと思ったもん。いくら貴族の本家が使うこと前提だからって、フレームからそれぞれ独自のオーダーメイドって、効率悪いだろ。せめて戦後に技術がこなれてか

ら始めろよ。象徴的な意味で。
　冥革連合は冥界の富国強兵を目的とする組織だから、漸く納得できそうな動きを見せたと思ったらこれはキレる。相手の立場でものを考えれば、そりゃキレると納得だ。
『もはや貴様達にアグレアスは過ぎたおもちゃだ。荒療治として今回、冥革連合はクリフォトに協力してアグレアス奪取作戦を執り行う。……聞こえているな、シーグヴァイラ・アガレス』
　うわぁ。名指しだよ名指し。
　これ絶対あれだよ。ターゲット宣言だよ。
　血走った目で親指を立てて、クイっと下に向けたよ。ジェスチャー込みで殺すアピールだよ。
『貴様は見せしめだ。アガレス家次期当主にして「本家専用機は一機ずつ完全新規開発」などという一番質の悪い量産性を投げ捨てた派閥の筆頭めが。……むごたらしく殺して阿呆共の尻を蹴り飛ばしてくれる』
　殺意満々だよ。あの人死んだんじゃね？
　正直ヴィールの方に同情心がわくというか、そりゃ奴の立場ならブチギレるに決まってんだろとしか言いようがない。
　そして言いたいことをいって少し落ち着いたのか、ヴィールは一旦後ろに下がる。
　そして今度は小躍りしながらリゼヴィムとミザリが入ってきた。
『そういうわけで♪　今から三時間後に本格的に攻勢をかけることになりました。あ、更にスペシャルゲストとして、協力組織から聖十字架の使い手が来てくれましたよ……ハイ♪』
　ミザリが微笑みながら片手を上げると、その瞬間にアウロスを囲うように紫炎で出来た十字架が昇り、結界として展開される。
　そしてそれを俺達が確認する時間を待ってから、リゼヴィムはにやりと笑う。
『確かD×Dなんつー洒落た対俺達部隊なんてもんを作ってんだってな？　しかもここに何人か来てるんだろぉ？　……なぁ、止めてみろよ』

そう、リゼヴィムが悪意に染まった嘲笑を浮かべた時―

『……なるほど。我々大王派は蚊帳の外……と思われるのは心外だな』

イッセーＳｉｄｅ

フロンズさんか!?

そのでかい放送に振り返れば、リゼヴィム達の映像と向かい合うように立体映像が浮かび、そこにフロンズさんが映し出される。

それにきょとんとしたリゼヴィムだけど、興味深そうに頷き始めた。

『君が噂のフロンズ・フィーニクスかい？　そちらさんにはハーデス爺さんが一泡ふかされたらしいねぇ？』

『ふむ。それに関してはあくまでシュウマ殿が中核となって行い、しかも情報漏洩のミスまで起きた結果なのだがね？』

フロンズさんはそう流すと、その上でため息をつきたそうな表情を浮かべていた。

『そしてＤ×Ｄにのみ言及する辺り、それ以外は敵ではないとでも思っているのかね？』

『おいおい無理しちゃいけねえぜ？　確かにミスター・チャンピオンなディハウザー・ベリアルは無視できねえが、君は基本文官だろ？

後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）も二人しかいないはずだし、どうするのかなぁ？』
本っ当にムカつく！
俺達は比較的慣れてるけど、それでも正直イライラしてくる。
フロンズさん、何で慣れてないのに涼しい顔をしてるんだよ。凄いなあの人。
それとも政治家って、あのレベルの挑発が当たり前のように飛び交ってるのか？　うわぁ、政治の世界になんて関わりたくねぇ……。
俺が思わずげんなりしていると、フロンズさんは静かに右手を上げ―
『では文官の戦い方をお教えしよう』
―その手を鳴らした時、何かが揺れた。
「……地震？」
誰かが呟いた時、フロンズさん側の映像が更に一つ追加される。
……アグレアスの下にある湖だな、あれ。
ただ、なんか急に水面が四か所膨れ上がっていく。
なんだろう。ロボットアニメとかで見たことある感じだ。そう、水中から飛行要塞とかが現れるような？
そう思った時、水面を割って出てきた四つの部隊があった。
いや、
っていうか、
あれは……。
『紹介しよう。サンタマリア級の新造艦四隻及び、特殊作戦用艦種である潜水巡洋ユニットだ』
……Ｇ（ギガンティック）　Ｆ（フォートレス）じゃねえかぁあああ!?
増やしてたの!?　増やしてたんですか!?
っていうか水中でも活動できるユニットとか仕込んでたのかよ。何やってんのあの人!?
俺達もリゼヴィム達も目を見開いている中、フロンズさんは不敵な笑みを浮かべている。
『文官は実働の武官が勝てる為の算段を整えるのも仕事の内。アグレアスの結界処置は遅れに遅れると踏んでいたので、少し前の観覧式イ

ベントのどさくさに紛れて長期潜水生活試験を兼ねて仕込んでおいてよかったと思っているよ』
『……やってくれるじゃん。張り合い出てきたぜ』
リゼヴィムは好戦的にな笑顔を浮かべながら、映像越しにフロンズさんと視線をぶつけ合う。
『じゃ、その仕込みを骨折り損のくたびれ儲けにできるよう頑張るかなぁ？』
『落ち込み給え。例え負けても実戦データが取れるだけでお釣りがくるとも』
その挑発を、フロンズさんは真っ向から受け止めて切り捨てた。
『そもそもＧ（ギガンティック・フォートレス）Ｆは対龍神クラスを想定した兵器。龍神級とされるトライヘキサを利用するテロ組織が相手なら、うってつけの試験対象だからな』
『なるほどなるほどぉん？　なら、グレートレッド君を倒す訓練相手にゃもってこいかぁ？』
そして数秒、お互いに視線をぶつけ合い―
『……ほえ面かかせてやんよ』
『やれるものなら、ご自由に』
―なんかすっごいことになってきたぞ、これ!?

英雄乱戦編　第十七話　激戦直前（その1）

九成Ｓｉｄｅ

とりあえず避難誘導は完了した。
アウロス学園は非常時に備えて地下にシェルターが設けられており、とりあえずアウロスにいる達達は全員そちらに避難してもらった。
アグレアスの方は規模が大きい為と市内の一か所に集まる形で避難しており、重要度の高い備品はサンタマリア級の一隻に集め、シェルターの防備を行う担当として配備される形になった。
とはいえ脱出はほぼ不可能。結界は本当に頑丈で、アウロスの方も紫炎の追加防護で更に脱出は不可能。アグレアスに至っては息をのむ数の邪龍達が囲んでおり、下手に脱出するよりは防衛線を展開した方が安全だと判断されていた。
転移も現状不可能であり、加えて時間操作までされていることから増援が来るまでどれだけ掛かるか分かったものではない。
幸い勇儀さんが一度離れているだけだから、彼が異変に気付く可能性はある。
時間的にあと十分ぐらいで学校に到着するタイミングで展開されたから、通常の時間軸で十分もあれば異変は発覚。規模から言ってもっと早く気づいてくれる。最もそこから増援が来るまでの時間が追加されるわけだが。
そこで頭いい組はとんでもない策を考えた。
名だたる魔法使いがいることを利用し、新しい転移魔法を今扱える魔法を参考に編み出そうという、突拍子もない策だ。
最もそれができるのに掛かる時間は、三時間以上は確実に掛かる。それまでの間防衛をしなければ、民間人に多大な犠牲が出ることは確

定されるも同然だ。
だからこそ、俺達は準備を整えている。
クリフォトが本当に三時間待つと思っておくのは油断に近いしな。
そういうわけで、長丁場になるだろうから今のうちにある程度食べておこう。補給は取れる時に取っておかないと体が持たないからな。
そう思って、何かないかと学食用の施設に向かった時、既に厨房の方で何かを作っている音が聞こえてきた。
俺以外にも誰かいたの……か……？
「ふぅ……ふぅ……ふぅ……っ」
「……ほ、ほどほどに……な？」
……なんだ、あの光景。
一心不乱に小麦粉をこねるヴァーリを、凄いひきつった表情でベルナが見ている。
むしろベルナが手を止めずに、大量のドーナツを作っているのがギャップを誘う。
「……何やってんだ？」
思わず俺はそう答えるが、ヴァーリはこっちを見ることもない。
「戦いに備えている。悪いが集中したいから邪魔しないでくれ」
よし、距離を置こう。
これは迂闊に踏み込むと事態が悪化するあれだ。君子危うきに近寄らずとかいうしな。
そういうわけで、俺は念の為に手を洗ってから厨房に入ってベルナの方に向かう。
「で、ベルナは何やってんだ？」
「みりゃ分かるだろ？　ドーナツの大量生産だ」
そう言いながらベルナが顎でしゃくった先を見ると、既に大量のドーナツが山のように置かれていた。
「避難の準備が整うまで、ガキどもが怖がるかもしれねえだろ？　なんか食うだけでも落ち着くかと思ってよ」
「……そうだな。確かにその通りだ」
俺もそこは参考にするべきだろう。いや、参考にしなくちゃいけな

いとすら思う。
こういう心遣いって大事だよな。うん、確かにその通りだ。
俺も何か作った方がいいかと思っていると、ベルナはドーナツ作りの手を止めることなく、小さく頷いた。
「カズ。アタシは……いつか教師になる」
その言葉は、小さいが力強く確かな決意に満ちていた。
「誰かに何かを伝えたい。そんな風に思えたんだ」
ドーナツを上げながら、ベルナは笑みすら浮かべてはっきりと告げる。
それは、彼女が自分の道を定めた瞬間だ。
……その微笑みに、俺は目頭が熱くなった。
そして視線をこっちに向けたベルナは思いっきり面食らっている。
「おい⁉　なんで泣くんだよ⁉」
「……感動の涙ぐらい俺だって出すさ」
とりあえず水道で涙を洗い流してから、俺はそう言いながら微笑んだ。
いや……うん。これはあれだな。
「綺麗なものを見た。そういうんだろうな」
本当に、そういうのが一番なんだろう。
さっきのベルナの横顔は、そういうのが一番いいと心から思う。
ああ。だからこそ―
「守り切るぞ、この学園」
「ああ、分かってるさ」
―改めて、その決意は定まった。

「もっとだ……もっとコシのある麺を……っ」

―隣がアレでなければと強く思うがな……っ

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

九成和地とベルナ・ガルアルエルが去ってなお、ヴァーリ・ルシファーは集中して作業を続けていた。
その目は真剣に彩られており、動かす手には邪念などない。
そして作業を終え、ヴァーリは一つ息をつく。
「今の俺では、時間的にもこれが限界か。麺の道は険しいな」
そう苦笑交じりに見るは、練られ切られた小麦粉の塊。今は生地を寝かせている段階だ。
自画自賛などできるわけがない。質は正直に言えば悪く、これを飲食店で出せば文句が大量に出てくるだろう。少なくとも金がとれるような出来ではない。
だが、これこそがヴァーリ・ルシファーの新たなる領域。その第一歩なのだ。
カズヒ・シチャースチエとの戦いに負け、彼は心を病みかけた。
麺を食する機会が激減。リゼヴィムの追撃にも制限が掛かる。更に正直食指が動かないことを何度もし続け、少し気が触れかけている。
そしてそれは、奇しくも兵藤一誠と近い精神状態にヴァーリを近づけた。
修行僧が滝に打たれながら悟りを開こうとするように、かつて兵藤

一誠が幾人もの女性を救うほどの力を持つ異能を会得したように。ヴァーリ・ルシファーもまた、悟り力を会得した。
母体は出来た。だが茹でて完成する為には必要なものが足りない。
白龍皇が持つ、敵の力を半減し己を強化する異能。そしてイメージに則って現象を起こす悪魔の魔力。その二つを併せ持つことこそ、ヴァーリ・ルシファーという奇跡の具現。
今ここに、ヴァーリ・ルシファーは新たな領域の一歩手前となっている。
寝かしが終わり、あとは切って麺として茹でる。そしてその前の肝心な段階こそが必須となる。
そしてそれを試せた時、戦いの形成は一気にひっくり返るだろう。
「待っているがいい、リゼヴィム。そしてカズヒ・シチャースチエ」
ヴァーリは誰もいないのを分かりながらも、その光を思って含み笑いを漏らす。
「これこそが、俺の到達した真理。それを目にする時はもうすぐだ……っ」
今ここに、更なる白龍皇の光が齎されることとなる。

和地Ｓｉｄｅ

その後、ドーナツを届けてから時間もそろそろなのでちょっとトイレに寄って行った。
事前の栄養補給とトイレは済ませておいた方がいいだろうしな。こういう細かいところも意外と大事だったりするんだよ。

そして出す者を出してすっきりしてから、俺はトイレを出ると、女子トイレの方から誰か出てきた。
「あら和地。貴方もトイレだったの？」
「あ、カズヒねぇか」
カズヒねぇもこういうところはきっちりしているよな。
俺はちょっと感心していると、ふと廊下の壁の方を見る。
―このがっこうにまたかよいたいです
―れーてぃんぐげーむのせんしゅになります
―おとおさんとおかあさんをよろこばせたいです
そんな、体験入学に参加した子供達の寄せ書きが目に入る。
「……勝ちましょう。そして守り抜きましょう」
同じように見たカズヒねぇが、目を細めながらそう告げる。
「この学園は子供達の未来を明るくしてくれる大事な学園だわ。それがこんなことで泥を付けさせるわけにはいかないもの」
「犠牲者が出れば悪印象は免れないけど、民間人を守り切れば美談として広まるだろうしな」
この学園は、この学園一つで終わっていいわけがない。今後も続いていく学び舎が出なくてはいけないだろう。
だからこそ、余計なケチはつけさせない。
正義を奉じて邪悪を穿つ悪祓銀弾（シルバーレット）も、嘆きの涙を笑顔に変える涙換救済（タイタス・クロウ）も、此処を守って邪悪を倒すことに否などない。
互いが互いに交し合った、瞼の裏の笑顔の誓い。
その誓いにかけて、この学園は必ず守る。
「……守り切って、そして勝とう」
「ええ。クリフォトにはしっかりお代を払ってもらいましょう」
お互いに拳を軽くぶつけ合い、そして俺達は頷いた。
覚悟はいいか、クリフォト共。
全員まとめて、叩き潰す……っ！

英雄乱戦編　第十八話　激戦直前（その２）

祐斗Ｓｉｄｅ

作戦会議を終え、僕達は地下シェルターから校舎に戻っていく。
時間は二時間三十分しか経ってないけど、クリフォトが言ったとおりに進軍を開始すると信用なんてできないしね。
「あ～もう！　クリフォトの連中も誠明も！　なんで子供達が多いタイミングでこんなこと……する奴だったわ誠明は！」
南空さんが髪をかき乱しながら愚痴を吐き、そして途中でミザリの性質を思い出して盛大に肩を落とす。
確かに。むしろタイミングが微妙に合わなくてもミザリはそういうことをしそうだ。悲劇に美を感じてそれを追求する彼は、より良く多い悲劇に拘りこそするが、だからこそ危険だ。
日本人であった経験と悪魔としての経験をかみ合わせれば、この学園が大きな影響を与えると読めた可能性は大きい。そのタイミングを見計らって何かする可能性も読めてたはずだ。あの会合にも出席していたしね。
もう少し警戒しておくべきだったかもしれない。だけどフロンズ氏のように上手く潜伏させてなければ、逆に感づかれて襲撃される可能性を警戒しなくてはいけない。トライヘキサ研究の魔法使い関係もあるから、尚更繊細なかじ取りが求められるしね。
僕達がたまたまここに来ていた事をサイラオーグさんはよかったと考えているけど、その通りだろう。
「……先輩のこともあるし、多分ステラフレームも出てくるよね」
「任せて頂戴！　ヘキサカリバーもいただいた以上、天使として彼らを裁いて弔って見せるわ！」
インガさんがステラフレームを警戒し、それに対してイリナさんがヘキサカリバーを握りながら胸を張る。

確かにステラフレームは強大で、邪龍達も脅威だ。
だけど、僕達だって負けるわけにはいかない。
そう、この学園は守って見せる。なんとしてでもね。
「……ま、しっかりちゃっかり守って生き残り、終わった後に生存記念で宴でも開きましょうか？」
「アニルのベーコン足りますか？」
「いや小猫、俺の燻製肉はどんな奇跡だとでもいうんだよ」
……リヴァさんが微妙に和ませてくれたけど、まぁこういうリラックスも重要なのかな？
そんなわずかに和みながらも引き締まった空気の元歩いていると、前方なら何十人もの一団が現れる。
兵士の鎧を着た大人の人達だ。だけど鍛え方から言って現職の兵士ではないだろう。かといって年齢から言って元兵士というわけでもないのだろう。
いや、そもそもどこかで見たような気がする。
僕が少し首を傾げそうになった時、イッセー君が何かに気づいたのか目を見開いた。
「……リレンクスのお父さん……!?」
もしかして、生徒達の父兄なのか？
僕が思い至り目を見開いた時、父兄達は決意の籠った目で僕達を見ながら、胸を張る。
「私達にも手伝わせてください」
「こんな状況です。人手は多い方がいいでしょう」
「この村は行き届いてない部分もあるでしょうし、戦えなくてもできることはあるはずです」
確かに。アウロスという場所を僕達だけでカバーすることは難しいし、駐留している兵もいないから尚更だ。
更に紫炎によるものか、小猫ちゃんの仙術による気の察知も難しくなっている。
だけど、リアス部長やソーナ会長も少し渋い顔をしている。
「相手は邪龍、場合によってはタンニーンとも張り合える龍王クラス

が出てくる可能性もあるわ。……私達ですら死戦となるのよ？」
そう、それが非常に懸念だ。
はっきり言って、兵士が駐留していたとしても戦力としてどこまで当てになるか分からない。
なにせ邪龍の戦闘能力は、雑兵ですら中級悪魔クラス。グレンデルともなれば龍王クラスはあり、更にクロウ・クルワッハともなれば天龍の全盛期に匹敵とすら称される。
加えて冥革連合の士気・練度ともに高い悪魔達まで関わっているとみるのなら、その難易度は大幅に向上するだろう。
正直戦闘訓練すら受けてない父兄達では、接敵が死に繋がるレベルなんだ。
だけど、父兄の方々は退かなかった。
「覚悟の上です、リアス様」
「このアウロスや冥界を守るなんて言えないのも含めて分かってます」
「それでも、子供が夢を見たこの学園を守る為に、この命を使わせてください」
これは、覚悟を決めた者の目だね。
ちらりとカズヒの方を見ると、こちらに気づいた彼女は肩をすくめながら頷いてくれた。
一番反対しそうだけど、意外だね。
「……戦闘は基本原則禁止。邪龍達に見つかったら私達に即報告して生存に全力を尽くしなさい。あくま邪龍達の索敵と逃げ遅れの捜索に徹すること。これが条件よ」
「そうですね。私達が戦闘に集中できるだけでも大いに助かります」
ソーナ会長も冷静にそう判断し、カズヒの厳命に同意を示す。
それ見て頷きながら、リアス部長は父兄の方々に向き直った。
「……絶対に死んでは駄目よ。貴方達には子供の未来を見る義務があるのだから」
『『『『『『『『『……はっ！』』』』』』』』』』
その声が、僕達の胸にも響き渡った。

和地Ｓｉｄｅ

こっちもこっちで凄まじく多いな。
アウロス学園の校庭から、アウロス全体を包むように布陣する邪龍達を見て俺はため息をつきたくなる。
そんな邪龍達が今か今かと待ち構える中、俺達は校庭に集合して最終確認に入る。
基本的に複合チームはツーマンセルに分かれ、それぞれが分散して邪龍達を迎撃。イッセーが龍帝丸と名付けたスキーズブラキニルという空飛ぶ帆船に乗ったアーシアが高速移動しながら回復を必要な者達にして、護衛としてロスヴァイセさんがつく。そしてその間に父兄さん達が逃げ遅れの確認や索敵を行う。
この作戦は防衛戦。シェルターに待機した魔法使いの方々が転移用魔法を作り上げるまではなんとしても守り切らなければならない。
俺達は基本的に少数にもほどがあり、必然的に面の戦闘には長けていない。民間人の避難が出来てからがある意味で本番だろう。
ツーマンセルは大きく分ければ、前衛後衛をきっちり分けるかオフェンスとサポートの組み合わせだ。
そして俺の場合は―
「……まっさかカズヒねぇと組むとはな」
「同感ね。戦力偏りすぎない？」
―まさかのカズヒねぇだ。
おいおい。俺もカズヒねぇもこの場の戦力ならかなり上位側な気がするんだけどな。

正直どうかと思う感じだが、ソーナ会長は眼鏡を直しながら真剣な表情だ。
「意志力で限界を超える攻撃型星辰光のカズヒさんと、常に自分の限界まで性能を出し切る防御型星辰光の九成君。こういう言い方はあれですが、この場でツーマンセルをするのならお二人以上の適任はいませんから」
……言われてみるとまったくもってその通りだ。
要は点の戦力が出てきた時の対抗戦力ということか。
だが、ツーマンセルなら俺とカズヒねぇ以上の組み合わせはないかぁ。そうかぁ。
「テンション上がってきたな！」
「……同感だけど、いちいち言わなくていいわよ」
ちょっと頬を赤らめてくれるカズヒねぇ最高です。
そしてこういうのははっきり言っておけるに越したことはないと思います。いやマジで。ちゃんと口に出して誰にでも分かる様にするのって大事だろ。
「……にしてもアグレアスの方は大丈夫かしら？　ヴィール様はかなりガチな雰囲気だったけれど」
「かの皇帝（エンペラー）がいるのですから、質ではこちらより上といえるでしょう。それにこちらも気を割いている余裕はないですしね」
と、春っちとシャルロットのコンビがそう言っている中、ふと通信用の魔方陣が展開される。
そこから映し出されるのは、ゴスロリ服を纏った女が一人。
『ごきげんよう、悪魔のみなさん♪　わたくし、リゼヴィム小父様の頼みで魔女の夜（ヘクセン・ナハト）のヴァルプルガと申しますのん♪』
きゃぴきゃぴしているが、雰囲気の危険性がこれでもかと出てきている女だ。
何より、この女はかなりやばい。
「……気を付けろカズヒねぇ。あの女が今代の聖十字架保有者だ」
「……神器のランダム性には流石に困ったものね」
ああ、本当にやばいと思うもんだ。

俺も詳しくは知らないが、かつて神の子を見張る者から離反した奴が人工神器技術を五大宗家のはぐれ者に提供してクーデターじみたことが進行した際、協力していたのがあの女だ。
どうもその時の集まりが禍の団のきっかけになったらしい。しかも当時まだ未熟だったとはいえ、その一件には神滅具保有者がヴァーリ含めて何人も関わっていたとか。
同じく神滅具を持っているとはいえ、それを逃げ延びたヤツが危険でないわけがない。最低でも手練れだ。
そんなことを思い返していると、ヴァルプルガは俺達を見回して小首をわざとらしく傾げる。
『それとユーグリットさんから、ロスヴァイセって人は連れて帰るように言われてますのん。どちら様かしら？』
……相当気に入られているようだな。
ロスヴァイセさんの論文がそこまでの価値があると考えるべきか。態々東京で接触するほどだし、相当執着されていると考えるべきだろう。
とはいえ、そんな言葉になびくわけがない。
ロスヴァイセさんは自ら一歩前に出ると、首を力強く横に振った。
「お断りします。できるものならしてみることですね」
『そうよねぇん』
そう危険な笑顔で答えてから、ヴァルプルガは一礼すると共に映像を切る。
……このタイミングで態々出てくるとは、な。
「ああいうタイプの心理はよく分かる。態々出てきたのは殺す相手の顔を見て楽しむ為だろうさ」
「典型的に下劣な女ね。信徒としても聖十字架をあんなのに渡したままにはできないわ」
ゼノヴィアとカズヒねぇがそう嫌悪感をあらわにすれば、シャルロットも渋い表情を見せている。
「とはいえ油断はできないでしょう。神滅具保有者まで投入するのなら、こちらもかなり警戒されているとみるべきです」

「でしょうね。禍の団の技術力や今の私達の戦力から見ても、禁手に至っているとみるべきでしょうし」
ソーナ会長がそう判断してから、俺達を見回して告げる。
「私達が敗れることになれば、この学園はアウロスごと跡形もなく消されるでしょう。……また直せばいいという問題ではありません」
そこに込められた強い意志に、俺達はもちろん気圧されていた父兄の人達も気合を入れ直す。
「守りましょう。この街を、この学園を、そして子供達の夢と未来を」
『『『『『『『『『『『『はいっ！』』』』』』』』』』』』
ああ、負けるわけにはいかないだろう。
……必ず、絶対、守り通す！

英雄乱戦編　第十九話　熾烈なる戦場

和地Ｓｉｄｅ

敵の数は多く、はっきり言って窮地以外の何物でもない。
とはいえ、俺達も何とか迎撃は可能な状況といえる。
そして俺とカズヒねぇだが―
「和地、右から回り込むわよ！」
「あいよーカズヒねぇ！」
―遊撃部隊として徹底的に敵を叩き潰せていた。
俺は疾走車輪を展開して高速走行を行いつつ、それに同乗しているカズヒねぇがアタッシュショットガン二丁もちで邪龍を続けざまに落としている。
援護射撃や牽制の為、俺はサルヴェイティングアサルトドッグ。カズヒねぇは対邪龍を考慮してジャッジングサマエルで猛攻を繰り広げている。
敵の厚みが増したところに向かって電撃戦でかき乱し削る。その繰り返しだが何とかこれで凌げている。
とはいえ……だ。
『南西部に敵集団が収束して仕掛けてきました。チームをツーマンセルから四人一組にして対応してください』
ソーナ会長の指示から判断して、戦況はやはり芳しくない。
「どうするカズヒねぇ？　俺達も向かうか？」
「いえ。ソーナ会長なら判断を過つことはまずないでしょう。指示があるまではこっちの遊撃に徹するわよ」
まぁそうだな。
とはいえ、一応言っておくのはある意味で大事なことでもある。こういう確認とかで意見が一致しているかをきちんと認識しておくこ

とはやはり大事だ。口に出して耳に聞くことそのものも重要だしな。
だがそれはそれとしてだ。敵の猛攻はやはり厄介だな。
……毎度毎度思うんだが、なんでテロリストに数で追い込まれなければならないんだ？
テロって基本的に戦力で劣る側のやることだろうに。何かが決定的に間違っている気がしてならない。
まぁいい。愚痴はこの場を潜り抜けてから……っ!?
「止まるぞカズヒねぇ！」
「っと!?」
素早く急停止すると、その眼前に何かが舞い降りる。
この明らかに強敵以外の何者でもない気配。そしてドラゴンのオーラは!?
「クロウ・クルワッハ！」
「……見つけたぞ、カズヒ・シチャースチエ」
舞い降りたクロウ・クルワッハは、カズヒねぇを見ると拳を突き出す。
「例の白銀の鎧すら打倒した悪祓銀弾（シルバーレット）よ、俺と戦え」
カズヒねぇを此処で名指しかよ！
いやまぁ、ヴァーリの極覇龍を破ったカズヒねぇに対して、ヴァーリとやりあえるような戦闘狂が興味を持たないわけがないか。
どうするべきか考えようとしたとき、カズヒねぇは肩をすくめて疾走車輪から飛び降りる。
「足止めに徹するわ。和地は一人で遊撃できる？」
「……少しぐらい手伝わせろよ」
思わずぼやくけど、カズヒねぇは肩をすくめて首を横に振った。
「戦力を余らせるわけにはいかないわ。天龍クラスを一人で足止めできるのなら、今はそっちの方がいいでしょう」
筋は通っているから反論しづらいんだが―
「そんな戦い方で相手が怒らないか？」
「構わん。守りを突破できないのなら俺の方に責がある」
俺の指摘はクロウ・クルワッハに否定された。

……仕方ない。
すっごく後ろ髪引かれるるけど、今は仕方がない。
「死ぬなよ、カズヒねぇ！」
「そっちこそ、守り切りなさい！」
いやもうほんと、頼むから無事でいてくれよなぁ!!

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、アグレアスの戦いも激化の一途を辿っていた。
邪龍のなかでも筆頭格といえるアジ・ダハーカに対し、魔王に匹敵すると称される皇帝ディハウザー・ベリアルが眷属を率いて、あえて派手な攻撃を誘引しながら、凌ぐという方法で対抗。
派手な攻撃をあえて誘引して対処することで、敵の強大さとそれに対抗できるディハウザーの雄姿を印象付けさせることに成功。結果として防衛側の士気は常に上がり続けている。
そして全体の戦闘は防衛側が大きく優勢。その最大の理由は―
「来るがいい、雑兵ども！　幸香すらいずれ越える我が力を思い知るがいい！」
「駆け巡りなさい英雄達！　シャムハトの伽は与えられたわ！」
―後継私掠船団の二人が齎す影響が非常に大きい。
圧倒的な数を持つ、中級悪魔クラスの力を持つ量産型邪龍。全方位から襲い掛かるこれらの猛攻は間違いなく難敵であり、精鋭のカバーが追い付かないという危険性を秘めていた。
だがしかし、アグレアス全体を覆うようにユーピ・ナーディル・モデウが巻き起こした嵐によって邪龍達は陸戦を余儀なくされ、そこに

アグレアスから集まった義勇兵が襲い掛かる。
彼らはすべてアーネによって疑似星辰奏者と化し、魔力と氷をもった三位一体（スリーマンセル）で邪龍を一匹ずつ確実に潰していく。
さらに外周からの増援も、サンタマリア級の砲撃によって削れていき、全体的な戦闘では優勢を確立している。
だが同時に、精鋭同士の戦闘では若干だがクリフォト側が有利だった。
理由は単純。
「恐れるがいい愚か者ども！　冥革連合を舐めるなあ！」
「その程度の気概と力で、冥界の未来が担えるかぁ！」
冥革連合の猛攻が、点の戦いでアグレアスに食い込んでいるからだ。
これに対しシーグヴァイラは、戦線にわざと戦力のムラを作るとともに、機動力に長けた者達で構成される遊撃部隊を作ることで対処。突出させて友軍の援護を得られないようにしたうえで、遊撃部隊で包囲攻撃を行うことで撤退に追い込む。
対し冥革連合もすぐに対応し、戦線が突出したと判断した場合は足を止めて防戦を行い、逆に橋頭保として左右の敵部隊を攻撃する方向にシフトすることで対処。結果として戦線は膠着状態に近づいている。
そしてそんな中――
「うぉおおおおおおおっ!!」
―サイラオーグ・バアルとヴィール・アガレス・サタンの壮絶な戦闘は他の者達が寄れないようなレベルに到達していた。
闘気を纏った打撃と魔力と打撃の連携。その猛攻は下手に近づけばその瞬間に余波で吹き飛ぶほどの猛攻。性質上そういったことを恐怖しにくく造られている量産型邪龍達を吹き飛ばしながら、二人は数千を超える攻防を繰り返し、距離をとった。
「……質実剛健かつ隙の無い防御を会得したな。リズムが読めても貫き切れん辺り、やはり戦士としては優秀極まりないよ、貴様は」
「お前の手法が分かっているなら、当然対処の方法も考える。何分拳（これ）

しか知らないのでな。それでどうにかするだけだ」
共に神滅具を纏う者同士。だが同時に、ヴィールの戦闘技量は追い抜かれればそれだけで詰むような凶悪さを誇る。
だからこそ、既に追いつかれたはずのサイラオーグが一対一で相対できるのには理由がある。
その一つが禁手の変化及び、それに合わせたプログライズキー。
自己強化に特化した禁手と専用に調整したプログライズキー。その二つの要素をもってしてサイラオーグは基本性能でヴィールの上を行く。
ヴィールはヴィールで星辰奏者という利点があるものの、それでも食らいつかれているのが実情だ。
そして何より、サイラオーグは他の防衛者とは意識が違う。
この場の戦いで冥界側は、基本的に守り抜くことばかりを考えていた。アウロスでも同じだろう。
だが彼は違う。
サイラオーグ・バアルは、冥界に危機をもたらした者達を滅ぼす為に拳を握っている。
その意識が、この場の誰よりもサイラオーグを強くしている。純粋な打撃戦に持ち込まれれば、ディハウザーですら後れを取りかねないほどにだ。
「覚悟してもらおう、ヴィール・アガレス。滅びの魔力が使えなかろうと、俺はお前を滅ぼしに来た」
「先にシーグヴァイラをどうにかしたいのだが、お前を無視するのは危険すぎるか」
既に周囲では、サイラオーグの眷属を中心とする迎撃部隊が、ヴィールが連れてきた戦力を迎撃している。
眷属二人は別行動をさせているのが失策だったのだろう。眷属間での連携ができないのが大きな影響を与えている。
「……全力を持って踏み越えさせてもらう。俺の標的はシーグヴァイラなのでな」
「させんぞ、冥界の敵よ。俺はお前を滅ぼすためにここにいる」

その瞬間、冥界の若手最強格が、今再び激突を再開した。

イッセーＳｉｄｅ

糞ったれ！　この状況はマジでやばい……っ

『グハハハハハハァ！　強い奴とぶっ殺しあうのもだが、弱い者いじめも楽しいよなぁ！』

高笑いするグレンデルは、遊び半分で時間を稼ごうとする父兄の人達を吹き飛ばしていく。

そして俺たちは結界に封じ込まれてなかなか出れない。匙もグレンデルに蹂躙されて、体を動かすのも大変な状態だ。

まずい。このままだと誰かが確実に死ぬ。

ふざけんな……ふざけんな！

『ではそろそろ本腰を入れましょう。我が結界の更なる力を知りなさ―』

「―させると思うか！」

その瞬間、ラードゥンの結界が瞬いたかと思うと、別の結界が俺達をそれから守るように包み込んだ。

「そういうことだ。俺のライバルに余計なちょっかいはかけないでくれ」

しかも急に結界の力が弱まると、一斉に放たれた魔力の攻撃で吹き飛ばされた。

え……これは！

「ったく！　クロウ・クルワッハで終わるわけないと思ったよ！」

「好都合な奴が出て来てくれたね。さぁ、俺に力を見せてくれ」

九成、ヴァーリ！
「無事かイッセー！　カズヒねぇはクロウ・クルワッハを抑え込んでる。こっちは俺達で片づけるぞ！」
「やぁ。滅ぼされた伝説の邪龍達と戦えるのは僥倖だ。……さぁ、白龍皇を見せてやろう」
このタイミングでめっちゃ頼りになる奴が二人も。
ああ、こんな奴らに、誰一人として失わせるものかよ!!

祐斗Ｓｉｄｅ

思わぬ展開に、なってしまったね。
僕はグラムとダインスレイブを構え、聖剣の騎士団と共に現れた敵を睨み付ける。
「なるほどな。まだ十代でこれなら十分すぎるほどに強大だな」
そう呟くのは、僕と同じくダインスレイブをもって僕や椿姫さんの猛攻をしのぎ、あろうことか正確な反撃を入れてくる男。
イシロ・グラシャラボラス眷属の騎士二駒で転生した男、ザンジュ。またの名を北欧の王ホグニ。
魔剣ダインスレイブを宝具として持つこの男が、この場で出てくるとはね……っ
僕としても今のダインスレイブの主となった身として超えたいという願望はある。
だけど、グラムと併用してすら届かない……っ
いや……まだだ！
グラムとダインスレイブの出力をとにかく抑えているからこそ、こ

こまで劣っているのだろう。
なら、まだ不安定だけど聖魔剣を利用して制御を行えばいい。
「っ！　駄目です木場君、無理をする気なのでしょう!?」
「いえ、此処で勝つにはこれをするしかありません！」
どちらにせよ、グラムを含めた五つの魔剣を使いこなせなければ今後の戦いを勝ち残ることは不可能に近い。
何時だって、イッセー君は土壇場で成長を掴み取った。
なら僕は……ここで成長を遂げ―
「そこまでだよ、木場」
―その言葉と共に、僕の動きが強制的に止められる。
これは、いったい……？
「ごめんなさいねぇ？　そういう無茶は君には向いてないと思うのよぉ」
「そういうことだ。非常時故に相方を交換する形で駆け付けさせてもらった」
ゼノヴィアにリーネス!?
確かに二人はツーマンセルが別の人だから納得だ。同時に何故交換するようなことをしたのかが―
「そういうわけだ。ここは私に任せてもらうぞ」
―ゼノヴィアが、一歩前に出る。
その手にはヘキサカリバー版のエクス・デュランダルがあるけれど、かといって態々リーネスが合流する理由は？
「……北欧の戦士ホグニ。悪いが仲間に無茶をさせるわけにはいかないんでな。お前は私が祓う」
そう告げながら、ゼノヴィアはエクスデュランダルを右手に持ち、そしてもう片方の手でDチェンジャーを構える。
え？　もしかして？
僕は思わず唖然としながらリーネスの方を見ると、リーネスも少し苦笑していた。
「前線での暴れっぷりを気に入った人がいたみたいねぇ」
……ええ……。

「夢幻召喚（インストール）！」
その瞬間、ゼノヴィアは背中に巨大な弓を背負っていた。
その大きさはどう考えても、並の人間が使うようなものではない。
そして部分ではあるが日本の大鎧を思わせる装甲を身に纏い、ゼノヴィアはエクスデュランダルの切っ先を構える。
そしてその気迫は明らかに増し、ホグニは剣を構え直す。
「……名を訊こう。英霊も含めてだ」
「ゼノヴィア。宿す英霊の名は、源為朝（みなものとためとも）」
その直後、激戦が巻き起こった。

英雄乱戦編　第二十話　激戦乱舞

イッセーＳｉｄｅ

「はっはぁ！　二天龍が相手だってんなら、俺も奥の手を切らねえとなぁ！」
そう吠えながら、グレンデルは何かを指先で掴んでやがる。
なんだあれ……って、あれプログライズキーか？
「あいつがレイダーになるのかよ!?」
「……いや違う！　あれはゼツメライズキーだ！」
九成が俺にそう言うけど、ゼツメライズキーって確かマギアになる方だっけか？
絶滅動物のデータを組み込んでるって話だけど、そんなもんをどうやって―
「行くぜ武装ぉっ」
『アンキロサウルス』
―なんかゼツメライズキーだけで変身しただとぉ!?
グレンデルは調子を確かめるように肩をグルんぐるんと回しながら、俺達の方を見て殺気を見せてくる。
『聖杯の実験ってのもいいもんだな。このアンキロサウルスソルドマギアなら、二天龍におまけがいてもいい殺し合いができそうだ……』
その時、グレンデルやラードゥンの耳元に魔方陣が浮かぶ。
何かと思ったら、グレンデルは相当イラついた様子でアグレアスの方を向き出した。
『ざっけんじゃねえ！　今一番盛り上がってんだから邪魔すんな！』
なんか急に吠えているけど、その隣のラードゥンもため息をついた感じだ。

『……仕方がありません。そちらには私が向かいましょう』
ラードゥンがそう言うと同時に、足元に魔方陣が浮かんで転送の光に包まれる。
『では、縁があれば』
それだけ言って、ラードゥンは転送されて行った。
アグレアスの方で戦況がクリフォト不利になった感じか？　それで増援としてグレンデルとラードゥンを呼んだのか。で、グレンデルが断ったからラードゥンが行く羽目になったのか。
サイラオーグさん達は頑張っているんだな。なら、俺達も負けてらんねぇな！
「九成、ヴァーリ！　こいつをぶっ飛ばすぞ！」
「できれば一対一がいいんだが、今は本領を発揮するわけにもいかんから仕方が無いか」
「こっちはオーケーだ。とりあえずアサルトの方でやってみるか」
ヴァーリは魔方陣を創り出して大量の魔法を放てる体制をとり、九成も素早く龍殺しを創り出す。
相変わらず器用っていうかなんて言うか。この二人の出来の良さはちょっとどころかかなり羨ましいな。
いや、俺は俺のできることをするだけだ！　こっから気合入れるぜ！
「なんか強化されたみたいだがなぁ……っ」
俺は突っ込みながら拳を握る。グレンデルはそれを待ち構える。
ああ。お前はこういう時逃げたりしない奴だよなぁ！
「……こっちもいい加減限界なんだよぉっ！」
渾身の拳が、グレンデルに最高の当たり方で入った！
その直後、グレンデルの拳が俺を叩き落す。
『悪いがあんまり効かないぜぇぇぇぇぇぇっ！』
「なろっ！」
追撃の踏み付けを転がってかわすと、俺の視界にグレンデルに突き刺さる魔法と砲撃が映る。
だけどグレンデルは意に介さず、そのまま拳を握ると、攻撃を放っ

たヴァーリと九成に突進する。
あの野郎、全然効いてないってのか!?
俺が起き上がって追撃するころには、二人はグレンデルの攻撃を左右に飛んで回避。
視線は一瞬交錯して、すぐに俺達は頷いた。
同時に、俺も九成もヴァーリも三方向から同時に攻撃を叩き込む。
俺はアスカロンのオーラを込めた左腕を、九成は龍殺しの魔剣を二刀流で。ヴァーリも魔力を込めた拳を握り締めて。
その三方向からの同時攻撃を―
『甘いぜぇ?』
―グレンデルは全部迎撃しやがった。
ヴァーリの打撃と九成の斬撃を拳で弾き飛ばし、更に尾の一撃で俺を吹っ飛ばす。
なんだこの一撃。ゼツメライズキーを使っているからって……重すぎる!
肋骨が割れるかと思ったけど、何だよこのパワーアップ具合は。
『グレンデルがここまでやるとはな。いや、ゼツメライズキーとやらの力がここまであるということか』
ドライグがここまで唸るレベルの強化がされてるってわけか。
見れば、今のグレンデルの尾は先端に丸い球体が出来ている。
なんだよあのハンマー。ありかってのか。
「落ち着けイッセー。アンキロサウルスはあれだ、尻尾がハンマーっぽい恐竜」
あ、そうか。
九成に言われて俺もなんとなく思い出した。
そういやそんな恐竜の絵を見たことある。尻尾がハンマーの恐竜ってあれか!
確か皮膚も頑丈そうなあれか。そりゃ堅い上尻尾もやばいな。
糞ったれ。これ、絶対長丁場になるぞ。
みんなの方は大丈夫か……!

祐斗Ｓｉｄｅ

「うぉおおおおっ！」

「ぬぅっ！」

ゼノヴィアとホグニの戦いは熾烈を極めていた。

ダインスレイヴを振るうホグニに対して、ゼノヴィアはエクス・デュランダルで対応しているが、その使い方が変わっている。

ヘキサカリバーの機能を利用することで、エクス・デュランダルはまるで大太刀のような形状になっている。

おそらくクラスカードによるサーヴァントの力を活かす為だろう。そしてそれがゼノヴィアとかみ合っている。

元々ゼノヴィアは、破壊の聖剣（エクスカリバー・ディストラクション）にしろデュランダルにしろ、巨大な剣を扱うことに慣れている。

それに対して大太刀も、使い方は異なるが普通の剣より刀身が長く大きい獲物という点では合致している。

能力的に相性が良いサーヴァントの力を借りている。というより、戦い方から言って多分地の精神性も似通っている気がする。

……どうすれば、ゼノヴィアをテクニックタイプに成長させることができるんだ……！

内心で崩れ落ちそうになるけど、それでも僕は気を取り直して聖剣の騎士団を展開する。

周囲を囲み、そして集中攻撃すら可能になる状態を維持する。

真っ向勝負でホグニを相手にできているゼノヴィアだけど、夢幻召喚（インクルード）は心身の悪影響が懸念されることから長期戦には向いていないだろう。

隙を伺って、一気に集中攻撃を入れるべきだ。
問題は、ホグニはそれをきちんと考慮して仕掛けづらい位置取りを維持している点にある。
やはり難敵というほかないか。だけど、隙は必ず出てくるはずだ。
だからこそ、僕はホグニの隙を伺い―
「……ふむ。全力を出さずに負けるのは不本意だな」
―そんなホグニの言葉に僕は寒気が奮い立った。
まずい。おそらく何かしらの切り札、おそらく宝具を使う気だ。
ダインスレイブだけではないと、そういうことだ。
「させる―」
「遅い」
僕が対応するより早く、周囲に強い冷気が生まれていく。
そこから誕生するは、氷で出来た戦士達。
斧を構えて襲い掛かる戦士達は聖剣の騎士団や僕達とぶつかり合い、壮絶な破壊の嵐を掲げていく。
だが足りない。まったくもって生成量に追いついていない。
創り出される氷の戦士達は、瞬く間に二桁を超え三ケタ台に突入する。
増殖速度が速すぎる！　これだけの質の戦士をこれだけの量で生み出し続けるなんて、サーヴァントの宝具だとしても凄まじいレベルだ。
「数が多すぎます！　このままでは……」
椿姫さんがそう言いかけた時、リーネスが首を横に振る。
「……いえ、それどころではないわねぇ」
正直に言おう。違う意味で寒気を感じた。
今この場においてどころか、D×D全体で見ても最も魔術回路関連に詳しいのがリーネスだ。それは裏を返せばサーヴァント関係において卓越した見識を持っていることを示している。
そんな彼女が危機感の度合いが違うことをにおわせた。それはすなわち、この宝具の危険性は僕達の想像を超えていること示している。

実際、シャイニングホッパーだったリーネスの仮面ライダーアイネスは、アサルトグリップを装填して戦闘態勢を一気に跳ね上げた。
「あの戦士団。生成にホグニではなくこの地の霊脈を使っているわぁ。この生成速度と負荷から言って、このままだと数十分で霊脈が枯れ果てるわよぉ！」
……っ!?
「本当なら十数時間は持つのだがな。この地域の時間が隔離されている弊害だ」
そう平然と告げるホグニは、ダインスレイブを構えて僕たちを見据える。
「まぁ非道極まりないことをしている自覚はある。……だが人倫を踏みにじる覚悟無くして、神々に対する復讐など成し遂げられる方が稀少だろう？」
この男、そこまで踏み越える覚悟があるということか。
ミザリ・ルシファー直下、イシロ・グラシャラボラス眷属。
僕は彼らを舐めていた。ミザリの破綻した精神性にマヒして、彼ら自身の危険性を甘く見積もっていたようだ。
すぐにでもこの男を倒さなければ、アウロスは死の大地になり果てるだろう。そうなれば、アウロス学園を守り切るなどという話ではなくなってしまう。
「ゼノヴィア、やはりグラムを使う！」
「……致し方ないな。こちらも宝具を開帳する！」
ああ、この男は、此処で倒す！

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

一方その頃、アグレアスでは更なる動きが見えていた。
膠着し、むしろ防衛側が徐々にだが押し返し始めている防衛線を、一気に突破する部隊が動いている。
Δサリュート三種がそれぞれ十二機の大隊規模部隊。それがアグレアスの防衛線を突破する電撃戦を敢行したのだ。
更にそこに追随するように、サリュートⅡを中核とする複合部隊が突貫することで、突破口の後ろをカバーする。
結果としてアグレアスの防衛線には鋭い槍が突き刺さる。そしてそのまま狙い違わずアグレアスの仮説指揮所に向かって突撃を敢行していた。
『全機突貫！　狙うはシーグヴァイラの首のみだ！』
『アガレッサーを使う可能性は極めて高い。アレの準備が整うまでに潰す気概で行け！』
『有象無象に邪魔をさせるな！　ここでD×Dの出鼻をくじくぞ！』
マキシマ、アサルト、ブラスト。
神仏魔王クラス相手の多対一、大型異形相手の一対一、下級異形相手の一対多を考慮した部隊がそれぞれ十二機。これだけであらゆる事態に対応して敵を叩き潰せる布陣といえる。
それだけの手段を可能とするほど、冥革連合の力の入れ具合は凄まじかった。
実際このΔサリュートに登場するのは冥革連合に属する下級中級の悪魔である。
上級悪魔達貴族を主体とする富国強兵を試みているとはいえ、冥界の未来を憂いて決起したのが冥革連合。出生率向上の策なども仕掛けており、下級中級の民にすら参加者は数多い。
結果として、そんな彼らの戦力としてサリュートを採用するのは理に叶っている。そんな彼らによる強襲部隊がシーグヴァイラを狙って突貫していた。
そして、そんな彼らを迎撃する者は当然出てくる。

そしてそのうちの一機は大公機動アガレッサー。
『いきなり出てきたぞ！』
『遅かったか……あれ？』
そして、問題は―
『ついに出てきましたね。さぁ、迎撃開始ですよ……』
そしてアガレッサーから勝利の確信を持つ声が響き渡り―
『行くのです、機獣将軍ヴォルティーガ！』
『『『

英雄乱戦編　第二十一話　凌ぐ比翼連理

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

振るわれる拳と拳がぶつかり合い、激しい衝撃が周囲の民家を破壊する。
直撃ではなく余波でヒビを入れ砕き、場合によっては粉砕する。そんな熾烈な打撃戦を、カズヒ・シチャースチエは繰り広げていた。
既にジャッジングサマエルに再変身し、龍殺しの星辰光による戦闘に徹している。
その上で、クロウ・クルワッハはその猛攻を凌いでいた。
「……流石だ。ツェペシュの城で一戦交えなかったのを後悔したくなるな」
「それはどうも。合わせてくれる余裕を持ちながらよく言うわ」
賞賛を流しながら、カズヒは内心で舌打ちする。
一件熾烈な戦いが繰り広げられているが、その実この戦いはクロウ・クルワッハがペースを握っている。
カズヒがクロウ・クルワッハと戦えている最大の理由は、彼がカズヒに合わせてくれているというその一点に尽きる。
クロウ・クルワッハはカズヒを倒しに来たのではなく戦いに来た。故にカズヒを嵌め殺しにするような戦法はとらず、真っ向からの打撃戦を挑んでくれている。
そうでなければ負けていたと、カズヒは自覚している。
仮面ライダー道間は、基本設計として人造惑星化及び星辰光の変化が基本。星辰奏者が時速百キロレベルで走れるとはいえ、仮面ライダーとしての基本性能が低いのはどうしても問題点が大きいといえる。
だからこそ、高速機動を併用して三次元で仕掛ければもっと有利に

戦えるのだ。
「戦士の驕り……いえ、誇りと考えましょうか」
「当然だ。俺は敵を潰しに来たのではない、挑みに来たのだ」
相手から合わせてくれるのなら、態々不利になることはない。
カズヒはクロウ・クルワッハの価値観をあえて利用し、食らいつく体制をとる。
そして同時に、気になることを確認するべきだろうと考えた。
「そういえば、モデルバレット達は来ていないのかしら？」
ここ最近は禍の団とかち合う度に出てきたので、そこが懸念事項だ。
不意打ち気味に仕掛けられれば詰む。まして彼女は自分を集中的に狙っているのだから。
それに対し、攻防を繰り広げながらクロウ・クルワッハは小さく頷いた。
「心配するな。作戦目標が達成するまでは手を出さないと、許可をきちんととってから来ている」
「律儀なことで感心するわ」
ならば構うことはない。
この戦いにおいて、カズヒ・シチャースチエはクロウ・クルワッハを抑え込むことと覚悟する。
暗部出身故に汚い手段も取れはするが、する必要がない時に積極的にとる必要はない。出した瞬間にぶちぎれられて逆に厄介になるのなら尚更だ。
故に、真っ向勝負を挑むとしよう。
「相手をしてあげるわ、クロウ・クルワッハ。……悪祓銀弾（シルバーレット）を倒すには、まだまだ足りないと知るがいい」
「ありがたい。こういうことがしたかったのだ」
そして、戦いは更に激化した。

和地Ｓｉｄｅ

ええいしぶとい！

グレンデルとの戦いは、まごうことなく苦戦としか言いようがない。

アンキロサウルスソルドマギアとかいうのになったことで、グレンデルは頑丈さと攻撃力が更に絶大になっている。

おかげでこちらの攻撃があまり通ってないのが実情だ。更に量産型の邪龍がポコポコ来ているが、こっちは一年生達に任せるほかない。

……あとカズヒねぇがじわりじわりとアウロス学園の方に近づいているのがちょっと不安なんだが。通信したいけど余裕がないから確認できない。

以前のデートで貰ったチェーンブレスレットがこんなことを伝えてくるとは。学園外では常に付けているのが仇になったか。

そっちの確認をする為にも、とにかくここでグレンデルを何とかしないと。

ただ正直忙しい。具体的にはグレンデルの猛攻や邪龍の猛攻を障壁で迎撃するのに忙しい。全員のカバーしながらグレンデルの相手は流石に負荷が大きい。

「なろぉっ！」

「できるな！」

『ぶっ殺すぜぇ！』

ドラゴン同士の激戦に介入して戦えているだけ、俺も十分やばいとは思うんだがな。

それでも思う。足りない……と。

今の俺は地力を伸ばすぐらいしか強化の手法がない。実際強くなるのはそういう物だが、発想の転換といった転機といえるアプローチが俺には欠けている。
今後の敵の強化度合いから考えると、このままではカズヒねぇ達に追いつけるのか？
カズヒねぇも禁手に至っている以上、此処からどんどん離れるんじゃないか？
考えろ、考えろ。どうにかできるかもしれない方法を。
とはいえ禁手は神器の究極であり、俺は既に亜種の神器に至っている。更に禁手の使い分けをプログライズキーで習得している以上、むしろ十分恵まれている方だ。
ならやはり、これ以上は無理なのか？
『お、隙ありだぜぇぇぇぇ！』
咄嗟に振るわれる攻撃を、俺は何とか凌ぐ。
糞ったれ！　考えてる余裕がないのを忘れていた！
『余裕がなくなってるみたいだなぁ！　そろそろ一人はぶっ殺せるかぁ!?』
悪かったな。ゆとりとか余裕とかがないのは自分で……も……
「……あ」
今、俺の中で何かがハマった。
ならいけるか？
ここで、それを試せるか？
そう思い、だが俺は―
「……ふん！」
―その誘惑を、自分で顔面を殴りつけて黙らせた。
「「「『……は？』」」」
ほぼ全員が一瞬目を丸くするが、俺はそれで冷静になれた。
……まったく。俺は馬鹿か。
戦闘中の土壇場で奇跡を掴むとか、基本的に俺の柄じゃないだろう。
毎度毎度窮地に妙な進化や新技をぶちかますイッセーを参考にす

るな。あれは特例側だし、それだけじゃない。
きちんと毎日鍛え上げて、色々考えているからこその結果だ。積み重ねたものがあるからこその進化だと言ってもいい。
だからこそ、俺がやるべきことはそこじゃない。
俺がやるべきことは、今をできる範囲内で切り抜けることだ。
その基本を忘れるな。奇跡を掴み取る前に、できることをきちんとやり切っていけ。
ああ、落ち着いた。
だからこそ、俺は呼吸を整えて静かに魔剣を構え―
「……よう。なんか吹っ切れたか？」
―その隣に、匙が並び立った。
「匙!?」
「ほぉ、思ったよりも頑丈みたいだね」
イッセーとヴァーリが少し目を見開くが、逆にグレンデルはつまらなさそうだ。
『よわっちぃ雑魚がよく吠えるぜ。流石にしぶといだけってのは面倒なんだけどよぉ？』
そう馬鹿にするグレンデルだが、匙は意に介さず一歩を踏み出す。
「てめぇに好かれようなんて思っちゃいねえよ。……俺達の学園を遊ぶ為の餌にするような奴なんかにはな」
「……無理するなよ、お前本調子じゃないんだろ？」
俺はそこが気になる。
今、実際のところドラゴン組は本調子じゃない。
アルビオンの深層に潜って赤龍帝被害者の会などという、歴代白龍皇残留思念の説得中だからだ。
それさえ終われば一気に形勢が逆転するんだろうが、それができないと不利だろうに。
俺はそこが心配だが、匙はむしろ俺の方を見るとにやりと笑う。
「安心しろよ九成。お前と同じでちょっと吹っ切れた」
……っ
気づいてたのか。

吹っ切れた、か。
まぁ確かに。吹っ切れたといえば吹っ切れたといえるな。
そして、吹っ切れたことを形にするにはここで生き残らないとな。
……うん。
「訂正する。手を貸してくれ匙、さっさとグレンデルを片付けるぞ」
「当たり前だろ。こいつ以外にも色々いるんだからよ！」
ならいい。
ちょうどいい。吹っ切れたついでに一つ策を思いついた。
それでさっさと、目の前の糞野郎をぶっ飛ばす！

英雄乱戦編　第二十二話　前哨戦、決着

祐斗Ｓｉｄｅ

襲い掛かる戦士団の猛攻に対し、僕たちは何とかそれを突破してホグニを打倒せんとする。
だがホグニは戦士団を上手く利用してこちらの動きを掻い潜っており、僕達はそれを突破できていない。
かといって、ホグニを相手に長期戦は論外だ。宝具を使われたことで、アウロスを守る為にもなんとしても短期間で撃破しなくてはならなくなった。
だがヒット＆アウェイを上手く使って乱戦を立ち回る彼を相手に、刃を届かせるのが至難の業すぎる……っ。
「悪いが、この調子では神託（ヒャズニング）による不滅（ラグナロク）の戦乱がすぐつきそうなのでな。……ここで終わってもらうぞ」
まずい、此処で一気に仕掛ける気か。
時間をかければ彼の言う通り宝具は使えなくなるのだろう。
だけど、そうなれば僕達の負けだ。アウロスは死の大地となり、アウロス学園も大きなダメージを受けるだろう。
こうなれば、此処で一気に倒すしかない。
「……どうやら、こちらも奥の手を切るべきだな」
そしてゼノヴィアが僕の方に視線を向ける。
ああ、分かっている。
向こうが勝負を懸けに来てくれるのなら、つまり時間ももうないのだろう。
この一瞬が勝負。その一瞬で、紙一重に切り込むしかない。
「……いい目だ。部下にもそういったものが何人かいたが、皆洩れる

ことなく能力とは別の意味で良い戦士だった」
そう語りながら、ホグニはダインスレイヴを構えて腰を落とす。
「決着をつけよう、聖魔剣とデュランダルの使い手よ」
「望むところだ」
静かに、僕達は睨み合い―
「―ゆえに、手向けとして受け取るがいい」
―その言葉と共に、もう一つの神秘が開帳された。
展開されるのは巨大な弓。
まともな人間が使う物とは思えない大きく頑丈な弓を、ゼノヴィアは同じく巨大な矢を呼び出して番えて構える。
「木場、私に構わず奴に一撃を当てることだけを考えろ。道は必ず切り開く！」
「分かった。死なないでくれよ」
お互い捨て身ということになるのだろう。
今の段階ではグラムの全力解放は大きな負荷がかかる。だからこそ、この一撃以外に勝ち目はない。
沈黙は一瞬、そして一気に動く。
「呑み込む潰せ、神託（ヒャズニング・ラグナロク）による不滅の戦乱よ！」
ホグニ王のその言葉と共に、戦士団は津波となった。
如何にゼノヴィアがデュランダル砲を放とうと、押し返すことはできないだろう質と量の波状攻撃。
だが、ゼノヴィアは静かにそれを見据え、矢を構える。
デュランダルは使わない。ヘキサカリバーも使わない。
ただ弓に矢を番え、真っ直ぐに狙いを定める。
巨大すぎる弓を悪魔の翼で僅かに飛ぶことで構え、そして静かな一呼吸。
「穿て、鎮西八郎・弓張月ッ！」
―その瞬間、放たれた矢は津波を穿つ。
「行け、木場ぁっ！」
「分かってる……っ！」
判断は一瞬。僕はその穿たれた穴が埋まるより先に突貫する。

躊躇うな。この一瞬をもってホグニを討たねば、戦士団の津波はゼノヴィアを呑み込むだろう。
僕はグラムを構え、そして真正面からホグニ王に突貫する。
既にホグニ王は矢を迎撃し、ダインスレイヴで受け流している。
隙はほぼない。後一瞬で、大勢は完全に立て直される。
その一瞬を、僕は自慢の速度で間に合わせる。
「魔帝剣よ！」
「温い！」
その攻防は、ホグニ王が見事に受け流した、
絶大すぎるグラムのオーラは、僕すら呪いながらホグニ王に襲い掛かる。
だがそのオーラすら、ホグニ王はダインスレイブをもって受け流した。
魔帝剣グラムは魔剣ダインスレイブを超える。それを、ダインスレイブをもって受け流す。それがどれだけの偉業であるかなど言うまでもない。
これが英霊。これがサーヴァント……っ
宙に打ち上げられるグラムを視界に移しながら、僕は敵ながらその技量に感銘を受け―
「ダインスレイブッ!!」
「ッ!?」
―手放したグラムの代わりに、ダインスレイブを構えて切りかかる。
片手持ちだったからこそグラムはあっさり弾き飛ばされたが、だからこそグラムに一瞬だけだが注意がそれた。
その上で意趣返しのようにダインスレイブを使うことで、更に一瞬の隙をねじ込むように叩き込む。
絶大な呪いで後がない。ここで切り倒せねば確実に僕達は負ける。
戦士団の猛攻に椿姫さんとリーネスは手いっぱいだ。ゼノヴィアもあの攻撃を放った後では戦士団の津波をカバーしきれない。
だから、届け。

届け。
届け、届け
届け届け届け！
届……かないっ!?
即座の切り替えしをホグニ王は間に合わせる。
このままでは一瞬早くホグニ王が僕を切り捨てるのが先だ。
だがそれでも。せめて相打ちには持っていく。
そう思った僕の視界の隅、そこから、瞬く間に恐ろしい勢いの槍が飛んできた。
「――――!!」
僕とホグニ王は声を上げる余裕もない
そしてそれは槍ではない。槍のように見えるが、それは確かに矢だった。
攻撃はホグニ王に直撃コース。それをホグニ王は何とか身を捻って回避。その上で僕に刃を振るおうとする。
だが、その回避で攻撃のキレと速度は確かに鈍る。
その一瞬。
その一瞬の間隙に、僕は滑り込み―
「……僕達の、勝ちだ！」
―その刃は、ホグニ王の霊核を確かに切り裂いた。
「……無念だ。アースガルズの神を討つこともできず、道連れ一人作れんとはな」
そう小さく呟き、ホグニ王は消滅していく。
ただ彼は、ちらりと僕の持つダインスレイブを見て―
「あと素振りからやり直せ。ダインスレイブの使い手が無様なのは、更に我慢ならん」
その厳しい指摘と共に、完全に消え去った。
感慨はある。だけど、今はそれどころではない。
「……アーシアさん！　すぐにこちらに来てくれ！」
「いいえぇ、その必要はないわぁ」
僕がアーシアさんに通信を繋ぎながらも、リーネスが首を横に振

る。
分かっている。だけど―
「仲間が死ぬかもしれないんだ。せめてひとかけらの可能性を追求するだけで……も……あれ？」
―振り返った僕の視界に、妙なものが映った。
「え、これはどういうことなのでしょうか？」
椿姫先輩が目を開く中、そこに立つゼノヴィアは夢幻召喚の体制のまま、炎に包まれていた。
ホグニ王の攻撃手段に炎はない。あとゼノヴィアにも炎の異能は無い。
あとゼノヴィア、どう見てもぴんぴんしているんだけど。
「ふっふっふ。私と為朝を甘く見てはいかんぞ木場。さっきの第弐射程度なら、攻撃をいくらか受け止めながらでも放てるからな」
自慢げなところ悪いんだけれど、どういうことなのかな？
僕が唖然としていると、リーネスがポンと僕の肩に手を置いてくれた。
「……為朝の逸話に、あり得ない回復をしたことがあるのは知っているかしらぁ？」
「えっと。弓を引けないように腱を切られたのに、結局常人では使えないような弓を使えるまで回復したという？」
源為朝は五人がかりで引くような弓を軽々使えたらしい。そしてそれを警戒した者達は、弓が使えないように腱を切った。だけど三人張りの弓は使えるレベルまで回復し、船を一隻弓一発で沈めたという逸話がある。
えっと、それが？
僕の視線に、リーネスは遠い目をしながら静かに首を横に振った。
「どうも為朝、フェニックス系の悪魔の血が僅かに流れていたみたいなのぉ。で、転生悪魔のゼノヴィアが使っているから相乗効果で並みの星辰奏者張りに死に難くなっているわぁ」
……ああ、あの第二射、攻撃を喰らいながら放ったのか。
そっか、そっかぁ……。

「偉人って、凄いんですね」
「ものによるとは思うけれどねぇ」
正直、乾いた笑いが漏れた。

九成Ｓｉｄｅ

振るわれる猛攻に四人がかりで迎撃を行いながら、俺は意識を切り替えて俯瞰的に判断する。
グレンデルは幸か不幸か、能力が単純だ。
変な特殊能力の類はなく、またアンキロサウルスソルドマギアもシンプルだ。
だからこそ、やりようはある。
あとはタイミングだけだ。それを考慮し、呼吸を合わせろ。
『グハハハハッ！　そろそろ一人ぐらいぶっ殺すぜぇ！』
「「ふざけんなぁっ！」」
グレンデルの猛攻を、根性でイッセーと匙が食いしばる。
更に冷静かつ正確にヴァーリの攻撃が叩き込まれるが、グレンデルはそれを意にも介さない。
分かっている。そんなことは分かっている。
だからこそ一瞬を見逃すことは許されない。
見ろ、見ろ、見ろ、見ろ、見ろ、見ろ。
見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ。
見見見見見見見見見見見見見。
見――――――

「そこだ」
その瞬間、何かが切り替わったの俺は察した。
自分の体を今までとは全く異なるレベルで自在に動かせる。
間違いなく高速域での戦闘を行っている。なのに止まっているように動ける。
今までとは違う次元で最適な動作を最適なタイミングで出来る様になっている。
まるで限界がなくなったかのように、何処までも進化していっているかのような錯覚すら覚える。
何より、凪のように静かな心持でどこか楽しく感じている。
……ああ、聞いたことがあるぞ。
プロスポーツ選手が稀に陥り、ごく一握りが意図的に突入できるという、いわゆるゾーン。
これがあれか、身勝手の極意とか透き通る世界とかの現代版。
よし、調子に乗らない範囲で使おう。
一瞬の確認で狙うべきところを判断し、攻防における安全ゾーンを確認。
故に後は行動するのみ。
滑り込むように安全圏内に入り込み、そして素早く武装を発射して砲撃。同時に障壁を的確に展開して、的確な移動ルートを見抜いて叩き込む。
調子に乗りそうなぐらい、動きがスムーズで判断が早く熟考ができて自由に動かせる。
このチャンスを逃すべきではない。
調子に乗らないように常に意識で枷をかけながら、出せる限界性能を見極めて攻撃を仕掛けていく。
『オッホ♪　動きが急によくなったじゃねえかぁ！』
嬉しそうにグレンデルが意識をこっちに向けた来た、その瞬間。
「匙、今だ！」
「分かってらぁっ！」
その瞬間、放たれる大量のライン。

その一部がグレンデルに巻き付くが、グレンデルは意にも介さない。
「そんなもんじゃ俺は―」
「ああ、そんなつもりはない」
その瞬間、俺の斬撃がグレンデルの腹を盛大に切り裂いた。
……種は極めて単純。俺は視界の隅に映るイッセーとヴァーリにサムズアップすら送る余裕があった。
簡単に言えば、今匙のラインは俺達全員に繋がっている。
ここにきて、イッセー達の神器をおさらいしておこう。
イッセーに宿る赤龍帝の籠手（ブースト・ギア）は、自身の力を倍加して他者にその恩恵を譲渡する。いわば力の増幅と供給だ。
ヴァーリに宿る白龍皇の光翼（ディバイン・ディバイディング）は逆に他者の力を半減し自身に上乗せする。いわば力の吸収と言っていい。
そして匙はヴリトラ系神器を総なめしているが、その一つである黒い龍脈（アブソーション・ライン）は力を流すラインを生成する。例えるなら出力はともかくイッセーやヴァーリの真似事が有線可能になる。
つまりだ。
匙の神器で俺達全員を繋ぎ、増幅した自分の力や奪取したグレンデルの力を、俺に吸収させるよう送り込む。
ほんの一瞬。それが限界。
だが、その一瞬だけは極まって高い性能を俺は獲得できる。
『なんだ……一体何が……？』
そして、狼狽している時間はグレンデルにはない。
「喰らっとけよ、グレンデルッ！」
「一騎打ちでなくて悪いな。せめて今の全力を礼儀としてくれ」
その瞬間、イッセーのクリムゾンブラスターとヴァーリの魔法一斉射撃がグレンデルを打ち据える。
今度は俺の魔剣創造を流用することで、龍殺しの特性をこれでもかと送り込んだ。
その砲撃を受け、グレンデルは力なく崩れ落ちる。
残心や警戒は必須だが、今はこの隙に残った量産型邪龍を屠るべき

か。
「イッセー先輩、宝玉をください！　グレンデルを封じ込めます！」
「黒歌が練習していたあれか。確かに邪龍対策にはもってこいだね」
「え、あ、分かった！」
「……なんとか、なった……っ」
「ちょ、先輩しっかりしてください！」
周りが慌てて事後処理をしている中、俺はゾーンから戻ってきたことに気が付いた。
実際にそういう現象が起こることは、知識としては知っていた。
ただ、俺がそこに至るとは思ってなかった。正直戸惑わずに全力を出せたのはありがたい。
……さっき思いついた発想と、今至ったゾーン。
これはきっと、俺の今後にとても重要になるだろう。その確信がある。
静かに邪龍の残りを始末しながら、俺は自分の成長に繋がるだろうこのきっかけを噛み締めた。

英雄乱戦編　第二十三話　奇跡の流れ弾

和地Ｓｉｄｅ

新型転移魔法の準備が整いかけているということもあり、俺達はアウロス学園に集まり、徹底的な籠城戦を敢行している。
殆どのメンバーが集まり、グレンデルの完全撃破もあって士気はかなり高くなっている。現状負傷者はいても死者がいないことも大きい。
ただ、カズヒねぇがほぼ連絡できない状態で徐々に反応がアウロス学園に近づいているのが難点だ。
強すぎるオーラがぶつかり合っていることも大きく、これを踏まえるとクロウ・クルワッハはいまだ残存して戦闘を行っているレベルだな。
だがこの調子なら、転移魔法で民間人は安全圏避難できるだろう。
そうなれば後は後顧の憂いもだいぶ削れて、戦闘にだいぶ集中できる。
……ただヴァーリの姿が見えなくなっているんだが。あいつどこ行った？
「姉様、ヴァーリの姿が見えませんが」
「……なんか何人か連れて行ってたにゃん」
猫姉妹の会話がなんかのフラグにしか聞こえない。
嫌な予感を覚えている。あいつなんかとんでもないことするんじゃないだろうなぁ。
あと何時の間にかリヴァ先生も姿を消している。
リヴァ先生はこういう時にろくでもないことはしないからまだ安心できるけど、なんか不安だ。

ヴァーリとリヴァ先生がタッグを組んだら、奇想天外なトンデモ現象が起こりそうなんだが。
……まぁいい。とにかく今は防衛戦に集中だ。
こと俺は星の性質が防衛戦に特化しているといってもいい。
この状況を維持する分においては、俺はかなり優勢といえるだろうしな。
「カズ！　まだ持つか？」
「余裕だ余裕。そっちはどうだ？」
着地しながら氷の砲弾と高圧水流の斬撃で邪龍をぶっ飛ばすベルナに、俺はそう応える。
ベルナは学園に俺達以上に入れ込んでいる節がある。だから気負いすぎてないか気になっていたが、その辺りの自制は出来てそうだ。
つっても、敵がかなり多いからな。
「……ベルナ」
俺は一応告げるべきことだけは告げておく。
「目標は全員生存だ。お互いそこは踏まえとこうな」
「…分かってる。ま、ちょっと気合が入り直ったな」
そうか、ならいいか。
そう思った時、校舎が魔法の光に包まれる。
転移の魔法だな。なら、これで民間人の安全はほぼ確保か。
後顧の憂いが一つ消えれば、こちらも思い切りのいい行動がとれる。ここからがある意味で本番だ。
「……なぁ、カズ」
と、ベルナが怪訝な表情を浮かべていた。
俺は少し首を傾げそうになったが、ふと気が付いた。
転移が成されている様子を感じない。いくらなんでも遅すぎる。
なんだ？　魔法使いの魔法を封じるのとは別に、トラップでも仕掛けていたっていうことか？
だとするとまずいな。すぐにでも治療とかをした方がいいんじゃないか？
そう思った時、光が急にアグレアスの方に向かって放たれる。

当たると思った時、何故かアグレアスに当たる直前に光が集まるように球体となる。
そして光は消えた。何も変わらず。
……何があった？
「……あらぁん？　面白いことになってしまいましたわねぇん」
その声に振り返れば、そこにいたのはヴァルプルガ。
凄く意外そうな表情だが、これはクリフォト側にも想定外の事態ということか？
しかし、だとすると一体何があったんだ？
『――諸君、聞こえているかね？』
あ、フロンズ・フィーニクス。
『たった今、戦闘中だったアガレッサーがそちら側から放たれた光を浴びて転移していった。心当たりはあるかね？』
……。
『『『

おいおいマジかよ。
「……いやちょっと待ってくださいよ！　いくら何でもクリフォトに旨い事行き過ぎてるでしょ!?」
「都合が良すぎるにもほどがある。こちらが協力でもしなければ無理だろう……っ」
イッセーとゼノヴィアが戦慄するが、そこにリアス部長が首を横に振る。
「……かつての魔王を尊ぶ者はいまだ多いわ。まして超越者であるリゼヴィムが動いたのなら、協力を表明する者は現政府からでも出てきかねないわ」
リゼヴィム・リヴァン・ルシファー恐るべし……か。
魔王の血族である超越者。加えて当人も人を先導するのに長けている節がある。そういう意味ではテロ組織のトップに最も立ってほしくないタイプだ。
今回の一件でよく分かる。魔法使いの会合をアグレアスの近くにし、更にアグレアスが防備を強化する前に合わせて設定させる。
タイミングを合わせて行動するなんて、別勢力では不可能に近い。こんなことを可能とできるのなら、内通者は間違いなく冥界の中枢に食い込むレベルだ。
下手をすると、魔王派大王派の区別なく名門レベルの輩が内通している可能性があるぞ……っ！
「しかし困りましたわぁん。リゼヴィム小父様もヴィールさんも、アグレアスの奪取の為にかなり本気を出していましたのに。私の責任じゃないですけど、怒られそうですわ……なら♪」
そこでヴァルプルガは寒気のする笑みを浮かべ、傘を俺達に向けて振り下ろした。
「一人でも多く萌え燃えして、手柄だけでも挙げておきますわねん♪」
おいおいやばいぞ……更にやばい!?
質の悪いことに気が付く、俺は寒気を痛感した。
「まずいぞ全員！　カズヒねぇが押し込まれた!!」
チェーンアクセサリーの反応が近すぎる。しかもそれに気づいて

確認してみれば、クロウ・クルワッハのオーラも無事だろこれ!?
「……ま……だだぁっ!!」
「……はぁっ！」
ってもぉ来たしぃ!?
壮絶な衝撃とともに、何とか受け流したカズヒねぇがかろうじて攻撃を受け流しながらぶっ飛ばされてきた。
何とかカズヒねぇは着地するけど、周囲の様子を確認して舌打ちする。
「転移は失敗!? それって不味くない!?」
「そうなの不味いの！ と、とりあえずクロウ・クルワッハは何とかしてぇ！」
鶴羽が大慌てで言うけど、実際問題それができるなら苦労はしないだろうというレベルというか状況だ。
いやこれ、流石にまずくない……か？

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「これは……」
シーグヴァイラ・アガレスはアガレッサーのコックピットから、周辺の状況を確認する。
空の様子から確認して冥界だが、しかしかなり辺境の地なのだろう。
冥界は住人が人間界に比べると圧倒的に少ない。それでいて地球と同じぐらいの広さを誇り、挙句の果てに海がない分陸地が圧倒的に多い。結論として未開の地は圧倒的に多くなる。

当然の帰結として、隠れ潜める場所など腐るほど存在する。こればかりはどうしようもない問題だ。
ここはそんな冥界の一角なのだろう。
そして問題はそこではない。
「……え？　なんで？」
「アグレアスはどうなった？　どういうことだ!?」
困惑している周囲の存在。そう、禍の団の勢力だ。
百を超える邪龍もそうだが、相当数の魔法使いや悪魔が集まっている。更にΔサリュートも確認されており、どうやら禍の団のそこそこ大きな拠点というべきレベルだ。
そこまで把握して、シーグヴァイラはどういうことをかを理解した。
「なるほど。本来の目的はアグレアスの奪取で、魔法使い達まで狙ったのは転移魔法を作らせる為でしたか」
全く新種の転移魔法を、転移魔法対策が厳重になっていないタイミングでアグレアスに使用する。
アグレアスと言う拠点を奪取するなら、確かにそれぐらいは必要だろう。忌々しいが考えられた作戦だ。もしかしなくても相当の地位についている内通者が出てきたと考えるべきだろう。
そしてその転移魔法が間違ってアガレッサーに直撃。それによってアガレッサーが禍の団の制圧部隊がいる地点に転移させられてしまった……という流れなのだろう。
なるほどなるほどと頷き、そして少し息をついた。
「……これはあれですね。どうやら絶体絶命ということでしょうか」
敵が戸惑いながらも慌てていないのは、つまりそういうことだ。
アガレッサーが相手であろうと、たった一機がこの数で囲んでいるなら問題なく潰せるだろう。そんな安心感が敵からは感じられる。
それを理解して、シーグヴァイラはため息をつく。
「なめてくれますね。このアガレッサーを……よくも……っ」
シーグヴァイラは怒りを覚えた。
大公機動アガレッサー。それを愚弄するかの如き敵の余裕に、シー

グヴァイラは怒りに燃える。
故に、遠慮をする理由は欠片もなくなった。
「叩き潰してあげましょう。ここが貴方がたの集団墓地だと知るがいい……っ！」

思わぬ偶然に助けられ、アグレアス奪取を阻止した英雄、シーグヴァイラ・アガレス。
彼女はこの戦いにおいて、最多キルスコアを確立することとなった。

英雄乱戦編　第二十四話　デカブツ打倒は同サイズ以上でどつくか、小型兵器で翻弄するかの二択が多い

和地ＳＩＤＥ

ええい！　なんかしまらないが、とにかく何とかしのぎ切らないと！

結界はまだ残っている。しかも避難民を逃がすこともできてない。防衛戦の状況は変わってないが、これだと別の意味で……まずい。

どうすればいいのか俺が歯噛みした時、視界に何か変化があった。

なんだ？　どこが変わった？

俺が周囲を警戒しながらそれを探っていると、木場もそれに気づいたのかあらぬ方向を見上げる。

「……部長、あそこの空を！」

その声に俺たちが視界にその位置を移せば、そこには大きなひび割れができていた。

さらにそのひび割れはどんどん広がり、次の瞬間結界は砕け散る。

「……結界が壊れたわ！」

「嘘でしょぉ!?　一体どうしてですのぉん!?」

イリナが喝采を上げ、そしてヴァルプルガが驚愕の声を上げる。

そして次の瞬間、何かが校庭に突き立った。

……あれは、黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）!?

ってことは曹操も近くに来ているのか。思わぬ形で助けられたな。

「ここで彼まで来ますのねん。厄介ですわね……でも♪」

その時、ヴァルプルガが悪意に塗れた笑顔を浮かべて、そして同時に影が差す。

『このままってのも味気ないし、学園は潰しておこうかなっと♪』
『いい機会だ。そこの女のデータぐらいはとるとしよう』
さらに二機のステラフレームの声が聞こえる。
おそらくはモデルバレットとモデルアーチ。だがそれにしたって影が大きすぎる。
そして振り仰いだ時、俺達は揃って面食らった。
頭上に全長２００ｍ足らずの巨大な飛行戦艦というべきものが見える。
更にそこからいくつもの鳥型の魔獣を射出するそれが、モデルバレットとモデルアーチを下ろしながら接近してきた。
『やっほーヴァルプルガ！　援護に来たよー♪』
『中々面白い事態になっているな。研究資料に事欠かない』
「うふふ♪　お二人が来て下さるのなら、もうちょっと遊んでも大丈夫そうですわねん♪」
ここに来て戦力投入かよ。作戦はほぼ失敗なんだからさっさと帰った方が傷が少ないだろうに。
「モデルバレット！　誠にいとリゼヴィムはどこ!?」
『あ、アグレアスの方が忙しくって。代理で私達が派遣された感じだね』
カズヒ姉にモデルバレットは答えると、そんなカズヒねぇとクロウ・クルワッハを交互に見ながら少し首を傾げる。
『でもどうしたもんかなぁ？　作戦は失敗したけど、大筋は終わってるから完了ともいえるし……ねぇ？』
「……確かに、判断に困る展開ではあるな」
……作戦が完了するまでは、クロウ・クルワッハがカズヒねぇの相手をするという話になってたのか？　で、この結果は想定外だからどう対応したらいいのかという感じなのか。
だがこれはまずいな。
こっちは長期戦で疲労困憊。敵は長期戦は難しいだろうが、数が圧倒的に多すぎる。とどめに敵戦力はエース級が複数投入されて、質の面でもこっちが苦戦必須になりかけている。

このままだと、死人が出てくる可能性が大きく上がる。アウロス学園も守り切れるかどうか。
そう思った時、サンタマリア級の一隻がこちらに向かってくる。
『リアス姫！　援護いたします！』
『全部隊、敵艦を狙え！』
ここに来てサンタマリア級の援軍か。
よし、これなら数の不利はだいぶ―
『残念、いくらサンタマリア級でも、そいつの相手は難しいんだよねぇ？』
―その時、モデルバレットから嘲弄の言葉が聞こえ―
『では魅せてもらおう。対グレートレッド兵器同士の戦いという物を』
更にモデルアーチがとんでもないことを言い出した。
そしてその瞬間、飛行戦艦が大量の星辰体と感応する。
『創生せよ、天に描いた守護星を――――我らは鋼の流れ星』
その起動音声と同時に、更に驚愕の事態が起こる。
『敵部隊確認及び、対多数戦闘の必要性認識。これより星辰体兵装の本格駆動を開始する』
大量の自動飛行端末が出てくるのはいい。おそらくそれが星辰光だ。
だが、同時に起こる現象に俺達は度肝を抜かれていく。
『全操作員の確認完了。戦闘可能人員との同調を開始し、順次出撃体制を確立させる』
変形した。変形したというしかない。
巨大な飛行戦艦と見えたそれは、変形して人型になっていく。
『戦闘可能人員の体制率、３０％……６０％……９０％……１００％を確認』
そして大量の飛行端末で艦載機を迎撃しながら、超巨大人型ロボットと化したそれは、腕を振りかぶってサンタマリア級に突撃する。
『出撃準備完了、全武装運用許可（オールウェポンズフリー）、出撃開始（テイクオフ）』
緊急回避を試みようとするサンタマリア級だが、敵の方が一手早

い。
『超新星（メタルノヴァ）――星屑（ウォー）の群（バード）れを率（カ）いれ、悲嘆（ンバ）の巨星（ニー）』
その星の発動と共に、敵巨大兵器はサンタマリア級に大打撃を与え座礁させた。
「……あのサンタマリア級を、一撃で……？」
「仮にも龍神クラスを想定した兵器を、ああも容易く……っ」
リアス部長とソーナ会長が絶句する中、モデルバレットから嘲笑の雰囲気が向けられる。
未だ自分達の優勢は崩れていない。そんな感情を態度と奮起で示していた。
『これがクリフォト製対グレートレッド兵器、マクロ・サリュート。ほら、でかい存在をぶちのめすのなら同じぐらいでかい奴がいた方がいいじゃん？』
『もっとも、クリフォトが実権を握るまではガス抜き用の言い訳程度で遅遅たる速度の開発でな。いい機会だからぜひ実働テストをさせてくれ』
モデルバレットとモデルアーチが、寒気すら感じさせる声色でそれを告げる。
くそったれ。警戒するべきだった。
グレートレッドを滅ぼすことを過程とする組織が実権を握っている。必然的に、トライヘキサ以外の対グレートレッド兵器の開発は想定するべきだった。うかつすぎる。
この状況、本当にやばすぎるだろ……っ

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

モデルアーチはどこまでも冷静に、新型兵器であるマクロ・サリュートの性能を確認していた。
マクロ・サリュートはサリュート系列の中でも最も特殊。対グレートレッド戦における前衛支援を目的として開発されたサリュートだ。
グレートレッドは世界最強の存在であり、当時の段階ではオーフィス以外に対抗戦力はいないだろうと考えられた。結果としてアルバートの設計は「グレートレッドに組み付いて妨害する、１００ｍ越えの大型兵器によるオーフィスの支援」を結論としている。
その性質上、非常に打たれ強く馬力もあるがそれが限界。現状出せるリソースの都合もあり、あくまでオーフィスがグレートレッドと戦う際、グレートレッドと同等以上の体格で組み付きや打撃を使って妨害するというのがコンセプトだ。
ただ同時に、それ以外の勢力が妨害することも踏まえている。同時に高性能化の過程でトルネード級神器力潜水艦やリーピ級神器力飛行船の発展形として、数百人による同時運用が基礎となった。
その結果として組み込まれた星辰体運用兵器こそ、星屑の群れ（ウォーバード）を率いれ（カン）、悲嘆（パニー）の巨星。飛翔戦闘端末創造能力という、軍勢としての星辰光である。

マクロ・サリュート
星屑の群れ（ウォーバード）を率いれ（カン）、悲嘆（パニー）の巨星
基準値：Ａ
発動値：ＡＡＡ
収束性：Ｄ
拡散性：ＡＡＡ

操縦性：ＡＡ
付属性：Ｅ
維持性：ＡＡ
干渉性：Ｅ

一体一体が戦術次第で上級悪魔と戦える性能を持つ、マクロ・サリュートの制御担当が遠隔操作する独立戦闘端末。独立具現型神器に近しいそれを生み出して戦闘を行うことマクロ・サリュートは、人型の戦艦にして空母となっている。
流石に基準値では十数機を出しての偵察程度が限界だが、発動値ともなれば百を超える数が創造できる。加えて複座的運用を行うことで対地攻撃を主眼とした仕様や対空迎撃を主眼とした仕様、さらに一機で数基分の偵察活動や電子戦を行る仕様など、バリエーションを増やすことも可能だ。
これにより、マクロ・サリュートは複数いればオーフィスを支援しての対グレートレッド戦及び、妨害に出てきた眷属を率いる魔王クラスの対処も可能とする、超兵器となる。
対グレートレッド兵器としての設計から開発が本格認可され、テストも兼ねて送り込んできたものだが、出して正解だったろう。
そしてモデルアーチは、大打撃を受けて不時着しているサンタマリア級を見て、確信を覚える。
『……サンタマリア級はあくまで艦隊規模での運用が主眼か。大王派らしいな』
「どういうことですのん？」
近くにいたヴァルプルガが問いかけるが、簡単なことだ。
『総合性能の問題だ、サンタマリア級はあくまで生産性と拡張性を重視し、複数の仕様を何隻も投入して連携することで龍神クラスに対抗する仕様だろう』
でなければいくら何でもあっさりと倒せすぎている。

おそらく潜水巡行ユニットは、本来の運用コンセプトである「対龍神クラス」とは異なる運用を目的として開発されたユニットなのだろう。
軍事に関わらずそういったケースはよくあるものだ。あれだけの大型兵器を対龍神以外に使わないなどと言いうのも当然だが無駄も粗も多いから尚更だ。
そこまで考えて、モデルアーチは思考を変える。
アグレアス奪取が失敗した以上、この作戦は無駄撃ちに近い状態と言ってもいい。せめて何かしらの得る者が無ければ効率が悪すぎる。
故に可能な限りD×Dの戦力を削りたい。それが無理でも可能な限り能力を把握したい。
故に冷静に考えた結果、モデルアーチは簡単な方法を思いついた。
『ヴァルプルガ、放火に興味はあるか？』
「……なるほどねぇん。とってもワクワクしますわ」
その言葉で悟ったヴァルプルガは、微笑みすら向けて傘をアウロス学園に向ける。
「……まさか……っ」
ソーナ・シトリーが察するが、しかし遅い。
『やってくれ。色々な意味で火が付くだろう』
「そうしますわ♪」
その瞬間、絶大な紫炎が放たれた。

英雄乱戦編　第二十五話　ドラゴン流ラーメンフライセット

祐斗Ｓｉｄｅ

間に合わない。
僕はそれを悟った。それぐらい、状況の余裕がない。
「……だめぇ！」
ソーナ会長が血相を変えて走り出すが、それでも間に合わない。
威力もまずい。あれではアウロス学園の校舎が丸々燃え尽きる。
下手をすればシェルターにすら被害が出る。
誰もが気づいて、何とかしようと動こうとし、だけどそれも間に合わない。
唯一対応できるだろう九成君だが、しかし機先を制するようにモデルアーチが攻撃を放って、妨害している。
これでは―

「今だ、やれ」
『『『『『『『『『『はい、ルシファー様！』』』』』』』』』』

―その直後、多重に展開された結界が紫炎を完全に防ぎ切った。
『『『

そしてその光景を見たクロウ・クルワッハが、目をぱちくりさせていた。
「……ラードゥンの結界だと？　何があった？」
ら、ラードゥン？
ラードゥンというと、今回の作戦に参加している邪龍の一角だよね？
イッセー君達が一回戦闘したというけど、アグレアスの方に向かったはずじゃぁ？
一体何がどうなっているのか、正直とてもさっぱりだ。
「……どう見ても、あの結界は彼らが発生させてますけど？」
『……あ、ラードゥン？　ないとは思うけどアウロスの一般市民になんか援護した？　……あ、してない？　やっぱり？』
ロスヴァイセさんが結界を確認して首を傾げ、モデルバレットも通信でラードゥンに確認をとっている。
いや、この状況はいったいどういうことなんだ？
僕達が困惑していると、ヴァーリはラーメンを持って朱乃さんの前に出ると差し出した。
「さぁ食せ。お前の結界術が必要だ」
あり得なさすぎる訳の分からない発言に、朱乃さんはすっごく警戒心をあらわにしている。
「食べてください！　それで結界が使えます!!」
だがそんな朱乃さんに、結界を張っている悪魔が大声を張り上げる。
いや、食べたら結界とか意味が分からない。
なんだろう。訳が分からなさ過ぎて状況が―
『なるほど、そういうことか』
―モデルアーチが何かに気づいた!?
僕達の視線がモデルアーチに集中する。
敵に期待するのもあれだけれど、分かったのなら教えてほしい。
一体、いったい何が起きているんだ！
「何がどうしましたのん？」

促してくれてありがとうヴァルプルガ。
『単純なことだ。兵藤一誠の乳技と同じ領域に、対を成すヴァーリ・ルシファーが至っただけの事』
なんだと!?
イッセー君の乳技と同様の領域!? 全く訳が分からない!?
エロと食事がどうかみ合うんだ。女体盛では断じてない。あとラーメンって精力がつく料理だっけ?
僕達が混乱している中、モデルアーチは感心という言葉を態度で表しながら頷いている。
『おそらく白龍皇の力を流用して吸収したラードドゥンのオーラ、その影響を受けた魔力でラーメンを完成させることにより、出来たラーメンを食べた者にラードドゥンの特性を一時的に付与したのだろう。食育で対抗するとは考えたな』
彼の正気を疑いたい。あとそれ、食育違う。
だけどそんなモデルアーチに、ヴァーリは賞賛の感情を浮かべていた。
「見事。俺の白龍製麺の根幹を見抜くとは、流石はリーネス・エグリゴリの親族だ。優れた魔術的観察眼を持っているようだね」
『大したことではない。食を利用した魔術も探せばいくらかある。魔術師とは自己強化も行う物だ。比較的悟りやすいさ』
そんなわけあるかと言わんばかりの魔術関係者の視線が、モデルアーチに突き刺さっている。
と、言うかなんてことだ。
確かに白龍皇の力は、敵の力を半減させて自分に上乗せするものだ。
だがそれは、自分の力が強化されるだけ。例えばイッセー君達赤龍帝の力を半減させても、倍化や譲渡の特性は得られなかった。
……それも己の麺の渇望と魔力で、手間はかかるけど克服したというのか。
なんてことだ。なんてことだ。
「……二天龍ってそっくりさんだにゃぁ」

「そんな……白龍皇までイッセー君の亜種に……!?」
「黒歌もロスヴァイセさんも酷くない!?」
げんなりする黒歌とロスヴァイセさんに、イッセー君の半泣き交じりなツッコミが投げられる。
だけどイッセー君の乳技も似たようなものだよね。むしろ社会的には比較的マシかもしれない。
「……意外と美味しいですわね」
そして朱乃さんが食べてた。
しかも味もいいらしい。なんてことだ。
「ま、負けないわ！　私も天使の祝福が物理で与えられるパンを作って見せるモン！」
「先輩、対抗意識を燃やさないでください」
そしてパン作りに目覚めかけているイリナさんが暴走して、ルーシアちゃんが止めている。
うん。本当に物理的に祝福が与えられるパンとか、一歩間違えると何かのテロに使われそうだからやめてほしいかな？
イリナさんは天然なところがあるから、本当に作らない様後で目を光らせておくべきかもしれない。
だけどこれにより、状況は更に変化した。
一般市民が防御専門とはいえ、上級悪魔クラス以上の戦力として換算できたのは大きい。おかげでこちらは攻撃に集中できる。
もとよりパワー重視で突破力に長けるのがグレモリー眷属。それを攻撃に集中できるのなら、守り切れる可能性は―
「……あ、ファーブニルさんが戻ってきました！」
―なんか嫌な予感が増えた!?

和地Ｓｉｄｅ

『こんにちわ。ファーブニル三分クッキングへようこそ』
……思考を停止したい衝動に、俺は何とか打ち勝った。
意味不明すぎて硬直したいが、今は一応戦闘中だ。
一瞬の油断や流れ弾もある以上、カバーできるように俺だけでもこの困惑した空気を乗り越えて防御だけでも意識しておかなければ！
すぐ近くで玉ねぎを不思議パワーでみじん切りにするファーブニルは無視したい！
……いや、邪龍が何故か食い入るように見つめている。攻撃の手を完全に止めているぞ。
『産地直送、アーシアたんのおパンティーにパン粉を付けて、高温でカラッと揚げる』
……無駄に音がいいのがなんか腹立つ。
あとなんで邪龍達はうんうん頷いているんだ。
なんてこと思いながら周囲を警戒していると、何時の間にかパンツが揚がっていた。
自分で言っててなんだがパワーワードすぎる。頭痛いし集中力が途切れるしで勘弁してほしい。
あとパンツ揚げたのが完成したのに合わせて、ぱちぱち拍手するな邪龍共。
そしてそれを一口で呑み込み咀嚼したファーブニルは、なんとなくだがすがすがしい表情だった。
『……ありのままの君でいてほしい』
……号泣している邪龍が出てきた事実に泣きたい。
「……私は蟹になりたいです」
「アーシアしっかりしろ！　蟹ではなく貝のはずだ！」
「そっちじゃないじゃんゼノヴィア！　混乱してんの!?」
「いいえヒツギ、ゼノヴィアは博識なだけよ！　さっすが期末テスト

平均９０点代！」
「イリナ先輩。それは学力の無駄遣いです」
「おーいルーシア。気持ちは分かるけどそのぶった切りはどうよ!?」
アニルがツッコミ入れるぐらい、ルーシアの心労が酷いことに!?
教会陣営ちょっとストップ！
え、ええい！　とりあえず周囲の邪龍の動きは止まっている。これならあるいは行けるか!?
俺がそう思っていると、今度はイッセーが何かに気づいたようだ。
「皆！　ドライグも戻ってきた！　歴代白龍皇の説得も成功したらしい！」
「ヴリトラも帰ってきたぜ！　……なんか微妙な表情だけど」
「アルビオンも戻ってきたようで何よりだ。ここからが本番だね」
よし、ドラゴン達が帰ってきた！
しかし浮足立たずに周囲の警戒に努めよう。こういう時こそ平常心だ。
「……あ、なんか歴代白龍皇からメッセージがあるみたいだぞ？」
おお、なんかありがたい含蓄のあるお言葉が聞けるかも。
そう思った俺の視界の先、映し出されたいい笑顔の人達が一斉に元気よく―
『『『

英雄乱戦編　第二十六話　変態大戦隊

和地Ｓｉｄｅ

混沌とした状況だが、それはそれとして俺は何とか周囲を警戒している。
凄く集中力が削がれ精神力が削れている。敵も味方も程度はともかく、自我がはっきりしている奴はメンタルが弱っているのが見える。
だからこそ、そこで油断しない。
集中しろ。警戒しろ。意識を常に周囲に回せ。
これまで敵も味方も想定外の事態を多々起こしてきたんだ。この状況下でも油断するな。
あのおっぱいビームの直後にシャルバがやってきたような事態が、また起きないとは限らない……ッ!?
「いつものことですが、龍というのは想定外ばかり起こします――」
「させるかぁっ！」
反応がギリギリ間に合った。
とにかくロスヴァイセさんの周囲に大量の障壁をランダム生成。同時に全力で突貫し、ロスヴァイセさんをカバーできる位置取りに到達。
直後障壁を粉砕しながら突貫する赤い光に対し、障壁破砕の時間が稼げたことで間に合った俺が迎撃の刃を振るう。
鳴り響く轟音、輝が入る魔剣。
だが甘い――
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ』
――こっちの準備は完了だ。
『マグネティックスターアサルトフィーバー！』

カウンターで叩き込んだ蹴りで、強引に敵を弾き飛ばす。
その必要がある敵だ。間違いなく、敵戦力でも指折りの精鋭。ここに来て更に厄介なのが出てきやがったな。
俺はショットライザーを突き付けつつ、その難敵に睨みを利かせる。
「そこまでロスヴァイセさんが御所望かい？　……ユーグリッド・ルキフグス!!」
このタイミングでピンポイントに奇襲するとか、本当に勘弁してほしい。
こっちが全力で気合を入れて何とか頑張って周囲の警戒をして無ければ、今のでロスヴァイセさんが確保されていたぞ。敵味方問わず真面目になれない雰囲気だというのに、シリアス全開の奇襲しやがった。頑張って耐えたかいはあるけど、正直無駄に終わってほしかった気があるから複雑だ。
「……ってめえ！　ユーグリッド!!」
「この状況下でその奇襲、何処までも卑劣な！」
我に返ったイッセーと部長が激高するが、ユーグリッドはあえて顔の鎧を解除して微笑みすら浮かべている。
この状況でもまだ余裕だっていうのか。なんて奴だ。
「申し訳ありませんね、お二人方。あまりに隙だらけだったもので、チャンスと思い……つい」
なるほど。どうやら本当の本当に、ユーグリッドはロスヴァイさんが欲しいらしいな。
どれだけロスヴァイセさんに執着しているんだよ。ストーカーじみて怖いぞ。
俺は腰を落としながら、周囲を警戒しつつユーグリッドと対峙する。
あの混沌極まりないアレな空気の中、躊躇することなくロスヴァイセさんを確保しようとする。東京のど真ん中という知られた瞬間に各地の警戒が跳ね上がる場所で接触したことと言い、ロスヴァイセさんはいったいどれだけ価値のある人物なんだ。

主神オーディンのお付き最長記録とか、優れた魔法の使い手とかそういう次元じゃないのか？　体質的にトライヘキサかグレートレッドに何らかの干渉ができる巫女の適性があるとかか？
俺が懸念の表情を浮かべていると、クロウ・クルワッハと対峙するカズヒねぇが、軽く手を前に出した。
「クロウ・クルワッハ。少しユーグリッドと話がしたいから戦闘を休止していいかしら？」
な、なんだ？
あとそもそも許可が出るのか？
「そうか。できれば手短に頼む」
……構えを解いたよ。
大丈夫かクロウ・クルワッハ？　カズヒねぇは戦闘再開を即座の攻撃で宣言（物理）しかねないぞ？
クロウ・クルワッハに妙な心配を浮かべてしまう俺の前で、カズヒねぇはユーグリッドに向き直った。
そして少し言いづらそうにしながら、それでも一呼吸を置いて真っ直ぐにユーグリットを見据え―
「貴方、もしかしてロスヴァイセさんを狙うのは個人的な理由？」
―なんてことを聞いてきた。
え、いや、ちょっと待って？
「カズヒ、いくら何でも個人的理由なだけで東京のど真ん中で接触するなんて、流石に―」
木場がそうたしなめかけた時、ユーグリッドは感服したように拍手をする。
ま、マジなのか!?
「八割正解と言っておきましょう。ロスヴァイセはクリフォトにとっても価値のある人物ではあるので」
「なるほどね。価値のある人物だからこそ、暴挙じみた行動も許可されたと」
ため息をつきながらカズヒねぇは納得するけど、俺達がさっぱり分からない。

「どういうことですの？　ロスヴァイセさんがトライヘキサの論文を書いていた事は聞いてますけど―」
「その論文は、クリフォト以上にD×D（我々）（そちら）に価値があるのですよ。なにせ、トライヘキサそのものでも封印の解き方でもなく、トライヘキサにかけられた封印そのものに行きついているのですから」
朱乃さんに告げるユーグリットの言葉は、あまりにも強烈だった。
冗談かと言いたくなる。それほどまでに、こちら側にとってこそ価値がある内容だ。
なにせロスヴァイセさんの論文から紐解けば、トライヘキサの再封印すら可能になりえるということだ。……想定外の方向から重要すぎる人物が出てきやがったぞ。
そして同時に、ユーグリッドはうっとりしているような視線をロスヴァイセさんに投げかける。
「ですが、私にとってはそれ以上の価値があります。……だって、とても似ているでしょう？」
その言葉の意味は俺達には分からなかった。
「似てるって誰にだよ！」
そう苛立たしく吠えるイッセーに、ユーグリットはきょとんとした表情を向ける。
「姉のグレイフィアですよ。見れば分かるでしょう？」
すぐ分かるだろうにと言いたげなその言いぐさに、俺達は逆にきょとんとした。
いや、銀髪巨乳なのは合致しているけど、それぐらいだろ。あとはまぁ、雰囲気的には真面目系だけれど……似てるというほどか？
「……姉を失って以来、私は死人も同然な状態で数百年を過ごしていました。ですが、彼女は私の新たなグレイフィアになってくれるかもしれないのです。これまでにないグレイフィアを見つければ、執着するのも当然でしょう」
……。
俺達は今、ユーグリッドに対する哀れみとか生理的嫌悪とか、そういった感情を抱いているだろう。

うん、あれだ。
ユーグリッド・ルキフグス。こいつはこじらせたシスコンだ！
は、まさか!?
「カズヒねぇ、まさか同類を嗅ぎ取ったのか!?」
「ええ。今初めて直接会ったけれど、見た瞬間に「あ、こいつ日美子(私)と同じだ」って本能レベルで悟ってね」
うわぁ……うわぁ……う……わぁ……っ
周囲の表情がドン引きと憐憫の二色に染まっている。
シスコンこじらせて新しい姉を求めるとか、発想からして病気だ。
こいつ、シスコンのあまり心が半ば壊れてやがる。
「……だからこそ、ロスヴァイセは私がもらいます。ええ、その為なら全力を出しましょう」
そう告げながら、ユーグリッドは指を鳴らす。
途端に邪龍達が我に返り、更に後ろから何かが高速で接近する。
確かあれは、禍の団がテロで使用していた大型の飛行船。それも三隻ぐらいあるぞ。
そしてそこから何人もの人や△サリュートと同サイズの兵器が……あれ？
なんかセンサーで確認した外見に俺の思考は停止する。
そして我に返るより早く何か音楽が聞こえてきて―

グレイフィアーズL・O・V・E
作詞：ユーグリッド・ルキフグス
作曲：ミザリ・ルシファー
ダンス振り付け：イシロ・グラシャラボラス
注意：現在作成途中につき、一番しかないことをご了承ください

L・O・V・E・マイブラザー♪

Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ・ユーグリッド♪
頑張っているようですね。私のかわいいユーグリッド。
貴方は立派な弟です。私の自慢の弟です。
一人じゃ足りない？　一人じゃ辛い？　ならばたくさん集いましょう。
姉が一人となぜ決めた？　本物だけだとなぜ決めた？
一人じゃ無理でも皆なら。貴方を愛してかわいがる。
だから今ですユーグリット。私の愛しい自慢の人よ。
赤すら手にした貴方なら、混沌（カオス）をきっと味わえる。
天も、魔王も、この世界すらも、貴方のためならえんやこら。
世界で一番愛しい貴方は、きっと世界を混沌（カオス）にできる。
さぁ頑張りなさいユーグリット。貴方はやればできる子です♪
よくできましたねユーグリット。私はとても幸せもです♪
ともに往きましょうユーグリット。愛しい貴方と混沌（カオス）を共に♪

……
俺達の思考が停止する中、歌って踊りながらこっちに来る集団と、うっとりするユーグリッド。
そしてそれを見たヴァーリは、ポンと手を打った。
「なるほど。偽赤龍帝の歌を作ることで、おっぱいドラゴンの歌という赤龍帝の歌を作り上げた兵藤一誠に対抗することが目的か」
『『『

るので、戦隊ヒーローならぬ戦隊ヴィランを中核とする私設軍事組織を作らせてもらいました」
『『『『『『『『『『あんた正気か!?』』』』』』』』』』
再び全力ツッコミが一斉に砲撃された。
何天然でボケ倒している。後なんでそこで戦隊ヒーロー。
かぶらないようにしたところ悪いんだが、魔王様方あんたの姉を巻き込んで戦隊ヒーローやってるからな!?
カズヒねぇはカズヒねぇて、半目になりながらため息をついていた。
「……誠にぃ。こんなところで音楽の授業で最大評価をとった経験を活かさなくても」
『『『『『『『『『『そこは今いいから!』』』』』』』』』』
三度目の全力ツッコミが飛んだ。
おい、白系カラーをイメージさせるメンツ。これ以上ボケ倒さないでくれないか。
俺達がツッコミで疲れていると、接近している奴らが肉眼で確認できるようになっていた。
そして肉眼で確認した者達が、どいつもこいつもやばいことになっている。
「な、なんだあいつら!?」
「グレイフィア様だ。グレイフィア様そっくりだ!」
「いやなんだあの女、相撲取りか!?」
「ロリっ娘だ。ロリっ娘がいるぞ!」
「ブルマにスク水!?」
そう。出てくるメンバーはどいつもこいつもグレイフィアさん「っぽい」。
似ているけど瓜二つではなく、むしろ明確に違う要素までである。
でっぷり太った人や頬がコケるほど痩せている者もいる。背か2mぐらいありそうな人もいれば、小猫より小さい奴もいる。
カズヒねぇばりに胸がぺったんなのもいれば、明らかな黒人女性もいる。獣人もいれば吸血鬼もいて、中には角が生えた妖怪もいた。

更に人型兵器もいわゆるメカ娘的な感じでグレイフィアさんの顔やおっぱい化している胸部装甲がある。
いやもう。ここまでくるとどう反応していいのか。
俺達が戦慄して気圧される仲、ユーグリッドに並び立つ四人のグレイフィアっぽい女たち。
っていうか一人アズールがいるんだけど。あ、髪型とカラコンで似せているからか、なんかグレイフィアさんっぽい！
っていうか寄りにもよってそいつかよ!?　お前そんなのに仕えて平気なのか。
ドン引きすらしているかな、四人のグレイフィアっぽい女たちは、ユーグリッドを守るように前に出てポーズをとった。
「吸血鬼を蹂躙せしカオスこそ、我が人生の救いなり！　ローゼス・グレイフィア！」
「ちょっといじって逆玉到達！　人生勝ち組確定済み！　アズール・グレイフィア！」
「ウザイ冥府を飛び出て参戦！　無軌道最高ビバカオス！　イエロー・グレイフィア！」
「神なき世界に弟はいる！　新たなユーグリッド弟私が守る！　ホワイト・グレイフィア！」
それぞれがどこからツッコミを入れたらいいのかわからない前向上を述べて、今度は四人で同じポーズ。
「愛姉戦隊グレイフィアーズ・カラーズ！　愛弟守って混沌確定！」
あ、色とりどりの爆発が後ろで発生した。芸細かいな。
こんな時でもとりあえず周囲の確認だけは出来てる自分をほめるべきかあきれるべきか。
そしてそんなとき、二十機以上いるグレイフィアさんっぽい大型サリュートが星辰体と感応する。
『『『

今の状態でシリアスな雰囲気やめて。その言い草でシリアスな雰囲気マジでやめて。

『『『

とりあえず一言いいだろうか。

これが、変態と敵対する真の意味だというのか。

……禍の団はよく立ち向かえたな。したくもない尊敬し始めたぞ

!?

英雄乱戦編　第二十七話　役者、大集結

祐斗Ｓｉｄｅ

これが、僕達の窮地を乗り越えてきた力なのか。
思わずイッセー君の方を見ると、僕の視線に気づいたのかすっごい不満そうだった。
「一緒にするのやめてくれない!?」
え～。
でも変態という意味では、僕達の中で代表格だし。たぶん敵は今の僕達みたいな理不尽を感じていたはずだし。
あとロスヴァイセさんは顔を真っ白にして鳥肌を立てている。当然ですよね。
しかもそれを見て、グレイフィアーズ・カラーズの人達は不思議そうにしているし。
あ、青い髪の人が首まで傾げた。
「なんでその反応？　勝ち組確定なのにどしたの？」
「死んでもゴメンですよそんな勝ち組!?」
渾身のツッコミだった。さもあらん。
そしてそこに、ベルナが凄くうんざりそうな表情を浮かべながら一歩を前に出る。
あ、あの人が例の知り合いの人なのか。
「お前馬鹿なんだなアズール!?　いろんな意味で馬鹿なんだな!?　そうなんだな!?」
「？　なんでそんなにわめいてるわけ？　訳分んない」
その渾身の怒声にも、アズールと呼ばれた少女は理解できていないらしい。

「ご飯は美味しい、ベッドはふかふか、ちょっと仕事と訓練してれば遊ぶお金もめっちゃ手に入るし、勝ち組確定じゃん？」
「馬鹿は気楽でいいなぁ！」
……あ～。これはあれだ。
ストリートチルドレンなだけあって学が無いというか、テロ組織に入るというデメリットが理解できない人だ。
たまにいるよね。冷静に考えるとリスクも大きいしヘイトも稼ぐといった感じで割に合わないことも多いので、犯罪組織の下っ端になっている人。まぁ彼女はある意味で幹部格なんだけど。
だけどこのままではまずい。
敵の数が一気に増えた。結界が壊れたことで増援も来るだろうけど、この数と質の両立では、こちらにも相応の被害が出るだろう。
どうする？　どうすればいい？
僕達の殆どがその不安を覚えているだろうが、それがいけなかった。
「隙ありですわよ♪　燃え萌えしましょうねん♪」
ヴァルプルガが高出力の紫炎を校舎に向けて放つ。
機先を制された、あの出力ではカバーが間に合わな―
「させるかよぉおおおおおっ！」
―匙君が、黒炎を纏ってそれを受け止める。
「サジ!?　駄目です、あなたが耐えられません!!」
ソーナ会長が悲痛な声を上げる中、ユーグリッドとアズールは冷淡な視線を匙君とソーナ会長に向ける。
「愚かですね。たかが下級悪魔が通う情けない学び舎の為に体を張るなどと」
「同感同感。下の下が下の中になる程度の雑魚い成長の場所なんている？」
本心から呆れているといえる、そんな声色なのが丸分かりだ。
「真に由緒正しい上級悪魔にはその為の学園があります。伝統を守りつつも近代の技術も取り入れ、社交界に出るまでに繋がりを作る素晴らしい学び舎がね。そんなことができる学園とは思えません」

「そうそう？　下の下をちまちま鍛えたって大した意味ないし！　才能をきちんと見抜いてくれる人がいなけりゃろくに変わりないって～♪」
その言い草に、僕は本心から理解する。
ああ、この人達は本当に、この学園の価値が理解できていないんだ。
そんな目の前の者達に、踏み込むものが二人ほどいた。
「……ああ、ちょっとほっとしたよ」
「……そうだな。ある意味ラッキーだな」
イッセー君とベルナは、僕達以上に怒りを見せてユーグリッド達に対峙する。
「あんたがクソの外道でよかったよ、ユーグリッド。心置きなくぶっ飛ばせるからなぁっ！」
「てめぇはそんなんだからダメなんだよ。遠慮なくぶちのめしてやるよ、アズールッ!!」
真っ向から睨み付け、そして二人は激高した。
「……いいでしょう。貴方達を打倒して、ロスヴァイセを迎え入れます」
「お前なんかにゃもったいねえよ。渡さねえしぶっ飛ばす」
「まぁおっぱいドラゴンなら金持だって有名だし、そういう意味だとありなのかな？」
「そこじゃねえってのが分からねえのが、お前のダメなところだよ」
激突するように睨み合い、そしてグレイフィアーズが庇う様に前に出る。
……これは、負けるわけにはいかないね。
何があっても、此処で生き残り敵を倒す。そこですべては終わっている。
だからこそ、必ず……勝つ！

「いいね。流石はグレモリー眷属だ」

「はっはっは！　そういう見る目だけはあるようだな！」
「まぁ、仮にも頭に担ぎ出したもの。それぐらいはできないとね？」

ここで、彼らが来るのか!?

和地Ｓｉｄｅ

よっしゃ援軍！
周囲を警戒しつつも、俺は内心でガッツポーズをする。
このタイミングでの援軍は、正直本気で大助かりだ。
ありがとう来てくれて！　メンツの多くがちょっと微妙だけど！
「日美っち無事か！　どうやら間に合ったな！」
「また面倒なことになってんなぁ、おい！」
「勇ちん、ディーレン！」
カズヒねぇに駆け付けるように、接木さんと引岡さんが駆け付け、
更にそこから槍を引き抜いた曹操が周囲を見渡して肩をすくめた。

「まったく。京都もそうだったけど、君達は本当にイベントに困らない生活だね？」
ここに来て曹操も参戦とか、かなり嬉しい増援だ。
しかも―
「ふはははははっ！　アグレアスは大体落ち着いたので、加勢に来たぞ凡人共よ！」
「あら、アズールまで来てるなんて、ちょっと意外」
―ユーピ・ナーディル・モデウにアーネ・シャムハト・ガルアルエル！
しかもかなりの人数を連れて来ているし、これはかなり助かるぞ！
「あらあらぁん？　そんなに来てくれるなんて、燃やしがいがありまわねん」
そしてヴァルプルガはそう悪意が溢れる笑みを浮かべながら、紫炎の火力を高めていく。
いかん、これは援護を―
『我が宿主を舐めないでもらおうか』
―その瞬間、黒炎の火力も高まっていく。
そうか、ドライグもアルビオンもファーブニルも戻ってきているなら、当然ヴリトラも戻ってきているか！
「ヴリトラ！　助かったぜ！」
『ボロボロだな、宿主よ。だがいい表情だ』
ヴリトラにそう言われて、匙は笑みすら浮かべながら紫炎を抑え込む。
「……今の今まで兵藤に全然追いつけないのが嫌だった。だけど、あいつはずっと自分のやりたいことの為に一生懸命走ってるんだ。兵藤じゃないのに兵藤に追いつけないのは当たり前だって、漸く気付いたのさ」
そうか。そういうことか。
余計なことに囚われず、自分の道を決めたからこそ―
「……俺は必ず教師になる。ソーナ会長の夢を支えて、子供達を育てて見せる！　だから行くぜ―」

そしてその瞬間、匙の体から光が放たれる。
ああ、この感覚はよく知っている。
あれは、至った者の放つ輝きだ。
『禁手化（バランス・ブレイク）、罪科の獄炎龍王（マーレボルジェ・ヴリトラ・プロモーション）！』
その瞬間纏われるのは、邪龍の力を秘めた鎧。
瞬間的に増幅した黒炎が紫炎を弾き飛ばし、放たれた大量のラインが邪龍に纏わりついて生命力を奪って倒し、全方位に展開される呪いが空すら埋め尽くす。
「……うふふ、面白いわねん♪　炎勝負の第二ラウンドといきましょうか？」
『上等だ！』
その瞬間、ヴァルプルガと匙は飛び上がり、激戦を繰り広げる。
冥界の空を彩り、聖なる紫炎と黒い邪炎。誰が見ても分かる激戦だ。
ただ、それをユーピとアーネは冷めた目で見つめていた。
「……はぁ。まさか諦めから至るとは、ろくでもない奴がいたものだ」
「同感ね。あれは伝説には程遠い、英傑の戦いに参加できる器じゃないわ」
あの光景と到達と見て、この二人はそうとしか思えないのか。
感性が違うのは分かっていたが、やはり相容れないところを感じるな。
ただそんなことは分かっている。だからこそ、そんなことはいいだろう。
この好機、決して逃すわけにはいかない。
どうせ奴らも「失敗したけど何もしないってのは」なんだ。そんな奴らの好きにはさせないさ。
だからこそ、此処で一気にと思った時だ。
『なるほど。ならばこちらも抜くとしよう』
その言葉を聞いて、俺達は身構える。
こちらを興味深そうに見ながら、モデルアーチが星辰体と感応する。

……敵からしてもここが決め所。そりゃそうだ。
どうやら、本気で挑むしかなさそうだな！

英雄乱戦編　第二十八話　冷徹なる進歩光明

和地Ｓｉｄｅ

「そうですね。なら私も抜くとしましょうか」
そう言いながら、ユーグリッドは籠手の調子を確かめる。
そしてそれに合わせるように、モデルアーチも星の開帳を開始した。
『天弄せよ、我が守護星――鋼の悪意で世界を犯せ』
紡がれるは、悪鬼明星の眷属たる起動詠唱（ランゲージ）
『悪鬼明星が天に輝き、世は悲嘆に包まれる。されどそれこそ、発展の光が集うとき』
モデルアーチは基本機能でこちらをけん制しつつ、星の開帳と共にその本質を二重の意味で見せていく。
『何故ならば、善性こそ発展最大の楔ゆえ。知性があれば分かるだろう。更なる兆しに必要な、命という名の対価はしかし、うるさい善性が邪魔をするから、浪費どころか消費もできぬ』
どこまでも倫理観や人道といったものを軽視するその祝詞と共に現れるは、無機質な戦闘兵器達。
ステラフレームが四体も出てきた挙句、それをカバーするようにサリュートIも現れる。
『己にとって価値あるものを得るために、己にとって価値無き物を提供する。それこそ交渉の根幹点。能無き他人を無駄に守れば、遅々たる歩みは当然だろう』
どこまでも効率的に機械兵器を具現化するそれは、更にモデルアーチが浮き上がることでそれ以上の凶悪性を見せつける。
『故にこそ、明星が昇ることこそ喜ばしい。悲嘆を求める悪鬼の知性

に、愚鈍な慈悲は起こりえない。過去を活かして未来を手にする。悪鬼の明星こそ進歩の光明なのだから』
それはかつてのアグレアス襲撃でお披露目された、ギガンティスサリュート。
瞬時に組み立てられるそれは、すぐさまモデルアーチを取り込んでいく。
『さぁ明星よ輝くがいい。汝の光が照らす先に、我が先行きは開かれん』
そして顕現するは星の軍勢。星辰体運用兵器の見本市。
『これぞさらなる天地創造。その一端を垣間見よ』
今ここに、倫理観をどこまでも放棄した星が開帳される。
『超新星（メタルノヴァ）――進歩光明（プルトリップ・）の光こそ、創世記（ジェネシス）が如く』
そして同時に、ユーグリッドの方も準備を整えたらしい。
「ではこちらも……昇格同調（ユニゾン・プロモーション）！」
その言葉と共に、ユーグリッドが身に着けている偽赤龍帝の鎧が変形する。
全身にスラスターが展開され、更に両腕が巨大な装甲を展開し、更に胸部に砲門が展開される。
……おいおい、冗談だろう？
あれ、それぞれが劣化再現とはいえ、三叉成駒のそれに近いぞ!?
「……なるほど、ねぇ？」
それを見ていたリーネスが、感心するように頷いた。
『リーネス先輩、何か分かったのかな？』
黒い獣を出して数の差を埋めながらギャスパーが聞けば、リーネスはため息すらつきたそうな表情になった。
どうやら敵の種が分かったらしい。あと分かったはいいけどあっさり突破できるものでもないらしい。
そしてリーネスはまず、ユーグリッドの方を向いた。
「まず彼の方だけれどぉ。たぶん冥革連合経由で悪魔の駒を用意して、燃料にしている龍を転生悪魔化させたんでしょうねぇ。そしてそっちに同調することで、劣化三叉也駒を発現させた……と」

「流石にご慧眼です」
あっさり肯定する当たり、嘘ではなさそうだ。
なるほど。イッセーほど極まって強化できないがその分安定性では上。更に多数龍を封印して燃料にすることで、女王とは別の形で全部もりにしたわけだ
そしてリーネスはモデルアーチの方を向くと、これまたため息をついた。
「叔父上の星はおそらく物質精密再現能力。星辰体を利用して兵器類などを再現しているのよぉ」
ああなるほど。
それで自我未覚醒体のステラフレームといった人造惑星をたくさん用意したわけか。厄介だな。
『いい線を言っている。厳密には物質精密投影能力。星辰体を利用した投影魔術の完全上位互換と言っておこう』
こっちも特に隠さないか。
まぁ、分かっているから具体的なメタが張れるモノでもなさそうだしな。
……本来直接戦闘向きではないだろうに、よくもまぁこんなことができるもんだと感心するぜ。
本っ当に、俺達の敵は毎度毎度俺達が勝てるかどうか分からない強敵ばっかり出てくるもんだよ。ちょっと嫌になる……っ

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

状況は圧倒的に有利だと、モデルバレットは思っていた。

作戦そのものは失敗だろうが、しかしこれなら敵のネームドを何人かは殺せるだろう。
というより、殺せるのなら殺さないと割に合わないとすら思っている。ここまで来てただ働きどころか損するだけなのは嫌だ。
いっそのことD×Dが存続を望みそうなアウロス学園を盛大に壊して、メンタルにだけでも利益が欲しいと思っている。
その為にもモデルアーチには頑張ってもらわないと困る。
そうでなければ、彼を魔星にしたかいが無いのだから。

モデルアーチ
進歩光明の光こそ、創世記が如く
基準値：B
発動値：A
収束性：D
拡散性：B
操縦性：AAA
付属性：E
維持性：C
干渉性：B
はっきり言ってモデルアーチ―ザイネス・ドーマ―の星辰光は、戦闘には向いていない。
この星はどっちかというまでもなく研究特化。設計図面を出した技術を投影してテストを行うことで、粗や欠陥を洗い出すのに使うべき星辰光だ。
出力と維持性を強化したことでこういった高性能兵器の瞬間運用を可能としているが、戦闘用として考えるのなら無駄に手間をかけているのだ。
自我未覚醒体の再現で必要時にプールしているラージフレームや

作戦投入して撃破された分のステラフレームを疑似的に投入できるが、それらは非常時の防衛戦用に開けている部分もある為、決して無遠慮に多用できるものでもないのだから。
だが、ラージフレームを出せた時点でアウロス学園には多大な被害が発生するだろう。
それぐらいの駄賃は欲しい。だからこそ遠慮はしない。
そこまで考えて、モデルバレットはカズヒをどうするかを考える。
作戦そのものが瓦解したことで、クロウ・クルワッハとの契約はどういった形になるのかが自分もクロウ・クルワッハも分からない。
二対一で嬲れるのが理想だが、クロウ・クルワッハが良しとするわけがない。そこを踏まえるとどうしても考慮するべき状態だろう。
そう考えた、その時だった。
「……日美っちはそのままで頼むぜ？　こっちはこっちで足止めぐらいはやってやるさ」
……接木勇儀が、そんな自分の前に立ち塞がる。
それだけでない。彼の隣に並ぶ者がいた。
「お前さんがもう一人の日美っちか？　なんつーか世も末だな、オイ」
『……もしかしてディーレン？　うわマジか』
思わぬ同窓会にモデルバレットが面食らっている中、それとは別で一歩を踏み込む者がいる。
「叔父上。悪いけれどぉ、これ以上好き勝手にさせるつもりはないわねぇ」
リーネス・エグリゴリはギガンティスサリュートに登場したモデルアーチに鋭い視線を投げかける。
どうやら、マッチメイクが成立し始めているらしい。
そしてそんなモデルバレットの耳に、通信の魔方陣から声が響く。
『……全く愚かな。ここまで愚者が多いとは嘆かわしい』
その声色はフロンズ・フィーニクスのもの。
彼は心から嘆くような声で、失望すら顕わにする。
『頂点が力を持ってこそよりよく舵取りができるものだが、それを活かす国力は底辺がどれだけ高いのかで決まることも分からんとは。

話にならんとはこのことだ』
　その哀れみすら浮かべる声の元、彼はその場にいる大王派の戦力に告げる。
『幸香の同盟者として指示を代行する。……馬鹿どもにアウロス学園を汚させるな。生死は問わんが叩き潰せ』
「了解」
　不敵な笑みをもって、ユーピ・ナーディル・モデウとアーネ・シャムハト・ガルアルエルが頷いた。
「愚かな凡俗共よ。賢明な凡俗が未来を築く邪魔をするのなら是非も無し……ここで掃除といこうか」
「輝く未来を掴む為の場所を汚させないわ。……さぁ、人生を輝かせる時が来たわよ！」
『『『『『『『『『ハイ！』』』』』』』』』
　そしてグレイフィアーズと対峙する後継私掠船団に対し、だが否を告げるように一歩を踏み込む者がいた。
「そうかい。ま、ユーグリッド以外は任せるぜ」
「姉貴、アズールはこっちで潰す。露払いは任せていいか？」
　兵藤一誠とベルナ・ガルアルエルもまた、どうやらこちらに対して潰しを仕掛けるようだ。
　どうやらこちらもあちらも戦意を滾らせているようだ。
　それを踏まえたうえで、一歩を踏み込むよう攻撃態勢をとる。
『……じゃ、頑張って誠にぃが微笑むような悲劇にしてあげるとしよっかな？』
　こちらもそうはいかせない。
　その意識をもって、モデルバレットは刃を構え―

「させると思うか、ばかばかしい」

そんなことを見逃すほど、九成和地は甘くない。
『ＢＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ』
一歩を踏み込み、九成和地はモデルバレットを睨み付ける。
「カズヒねぇが粘って、ベルナが夢を見つけて、リーネスがけじめをつけようっていうんだ」
『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……』
ショットライザーを構え、涙換救済（タイタス・クロウ）は宣言する。
「クリフォト（お前ら）の負けは確定だ。これ以上、この場で誰も奪わせない……っ！」
『ショットライズ！　パラディンドッグ！　Ｔｈｅｎ　ｓｍｉｌｌｉｎｇ　ｓｉｌｖｅｒ　ｂｕｌｌｔｅ．　Ｓａｖｅｒ　ｉｓ　ｅｘｔｒｅｍｅ　ｏｖｅｒ』
仮面ライダーマクシミリアンパラディンドッグ。
かつてミザリ・ルシファーと死闘を繰り広げた敵を見て、モデルバレットは肩をすくめる。
九成和地、接木勇儀、引岡＝Ｆ＝ディーレン。
カズヒ・シチャースチエと縁のある男三人を相手に、一人でも殺してカズヒの心に嘆きを作ってやるとしよう。
「すっげぇなおまえ。さらりとジゴロなんじゃねえか？　……羨ましい」
「ＩＣＰＯが嫉妬の炎を燃やすなよ。こいつはこいつで色々頑張ってるからな？」
「言っときますけど、俺がハーレム作った最大のきっかけはカズヒねぇの要求ですからね」
「なにバグってんだ日美っち？」
「あとでゆっくり相手してあげるから！　今は戦闘に集中して頂戴!!」
……目の前で漫才をされて、微妙にモデルバレットのボルテージは

上がっていく。
　そんなモデルバレットの感性を知ってか知らずか、リアス・グレモリーは不敵な笑みを浮かべながら、星を開帳しつつ胸を張る。
「皆、此処が踏ん張り所よ！　この学園を必ず死守して、クリフォトを撃退して頂戴。……この街も、学園も、何一つクリフォトが奪っていい物ないのだから!!」

『『『

英雄乱戦編　第二十九話　人間チート博覧会

イッセーＳｉｄｅ

俺の相手はユーグリッド。偽物はしっかり本物としてぶちのめさないと、赤龍帝の沽券に関わるしな！

「決着つけるぜ、ユーグリッドッ！」

俺はドライグが戻ってきたこともあって飛龍を展開して、ドラゴンショットの乱反射でユーグリッドの翻弄を試みる。

だがユーグリッドはそれに対抗するように、胸部の砲門に大量の魔力を籠め始める。

なら飛龍の半減で弱体化させて、真正面から吹っ飛ばす！

俺は真女王になりながらユーグリッドを待ち構え―

「言っておきますが」

その瞬間、放たれたビームは拡散した。

「魔力の運用で純血上級悪魔（私）が転生中級悪魔（貴方）に負けるとでも？」

野郎、そう来たか！

胸から放たれた魔力とオーラはぱっと見で十や二十じゃ聞かない数の砲撃になって、曲がりくねりながら襲い掛かる。

素早く飛龍で半減を叩き込むけど全部は無理だ。しかもわざと学園や仲間に当たりそうな砲撃もあるから、そっちに優先しないと―

「おっぱいドラゴンを援護するんだ！」

「流れ弾は我々が防ぎます！」

「赤龍帝は自分のことに集中してください！」

―思った瞬間、大量の結界が俺に当たらない砲撃を止めてくれる。

ヴァーリの麺技でラードドゥンの結界を参考にできるようになった父兄の人達が、砲撃を封じてくれている。

ありがたい。おかげでこっちも集中できる！

砲撃戦だとまずいな。乱反射でかく乱できるけど、あんな拡散砲撃だと俺も捌き切れない。
だったら答えは決まっている。
「殴り合いだぁあああああっ！」
「そうなりますね！」
俺とユーグリッドは同時に加速する。
鎧の性能は俺の真女王が上だけど、ユーグリッドは自分自身の性能でそれを補う。
そしてほぼ同時に拳が放たれ、同時に直撃する。
「んがっ!?」
「なんと!?」
同時に鎧に皹が入り、お互いに何メートルも吹っ飛んだ。
糞ったれ。ここまでやるとか想定外だ。
ただ、ユーグリッドの方が困惑してるからその隙は逃さない。
我に返る前に踏み込んで、一気に連撃でペースをつかんでいく。
「この状態の私と真っ向から？　いくらなんでも成長速度が……っ！」
どうやら気づいたみたいだな。
ああそうだ。今の俺は飛龍が引っ付いている。それも赤いのがな。
「まさか、白龍皇の力ではなく赤龍帝の方にもできるのですか!?」
「流石に偽物にはできねえだろっ！」
そう、これがドライグとの研鑽や鍛錬で習得した新技だ。
むしろこれでも圧倒できない辺り、俺達はクリフォトを舐めていたぐらいだな。反省反省。
だけどこれなら、俺だけでもやりようはある！
ユーグリッドは何とかする。だから皆、他の連中は任せたぜ！

祐斗Ｓｉｄｅ

イッセー君がユーグリッドと渡り合う中、僕達の相手はグレイフィアーズだ。
「急ぐぞ！　露払いを終えた後、ユーグリッド様を援護するのだ！」
『『『

「そしてその因子は神もあるのだぁっ！」
―と思った瞬間、今度は絶大な雷撃が放たれてそれを相殺する。
雷神の類も取り込んでいるのか。それもこのレベルで覚醒させているとは。
だがグレイフィアーズは油断することがなく、ホワイト・グレイフィアとイエロー・グレイフィアが左右から挟み込むように攻撃する。
それぞれ持っているのは和の聖剣と死神の鎌。左右から迫りくるそれは、最上級悪魔にすら通用するだろう。
「―温いぞ凡人，ｓ！」
だがその瞬間、ユーピは左右の手を動かして弾き飛ばす。
その攻撃を弾いた両の手は、それぞれが聖なるオーラの器物を持っていた。
ホワイトの斬撃を弾くは、ホワイトが持っているのと酷似した和の聖剣。
「これぞ我が一族が日本より流出した十束剣（とつかのつるぎ）を秘術で鍛え直し続けた刃。神聖宝剣、十界束剣（じゅっかいたばねのつるぎ）」
イエローの鎌を弾き飛ばすは、聖なるオーラに包まれた籠手。
そして驚くべきは、それはとてもよく知る相手の持つ神滅具と酷似したオーラを持っていた。
そしてその人物である曹操は、複雑そうな表情を浮かべながらも感心していた。
「……聖槍再現能力は、既に疾風殺戮・ｃｏｍが持っていたが、此処にもいたとはね」
「その通りだ凡人たる曹操よ。我が星辰光は籠手型亜種発現式・聖槍再現能力なのだ」
星辰光を保有。それも黄昏の聖槍を再現する星辰光だなんて……っ
僕達が戦慄しているその隙をつくように、グレイフィアーズ達と邪龍達が群れを成して包囲し攻撃態勢に入る。
今度こそ僕達が動くべきかと思ったその瞬間、ユーピはため息すら

ついた。
「我が才覚の前に数で押すのなら、桁が二つは足りん！」
その瞬間、アウロス学園を包むように暴風の渦が発生する。
台風を思わせるそれは周囲を囲む邪龍達を振り回し、体勢を取りづらくしていく。
そしてその次の瞬間、校庭を吹き飛ばすかの勢いで絶大なオーラの砲撃がグレイフィアーズに襲い掛かる。
無数の散弾は太い砲撃により、グレイフィアーズはもとより邪龍達が瞬く間に削れていく。なんていう破壊力だ。
「これぞ我が神器、天覇（カイザー・ストラトス）！　フロンズ殿曰く、新規神滅具候補と認定されているのだよ！」
……僕達は言葉もなくなっている。
悪魔や堕天使の血は最上級クラスにまで高め、神の因子も覚醒させ、聖剣を扱うことができ、星辰光により神滅具を再現し、更に保有する神器は神滅具級。
一つだけでも天賦の才といえるものを、この男はいくつ持っているというんだ。
だがユーピはむしろつまらなさそうにため息すらついていた。
「この程度か。なら流石に固有結界どころか魔術を使う必要もないな」
……更に魔術回路まで？
ユーピ・ナーディル・モデウ。ヴァーリを凡人というだけのことが有るほどに、才能に愛されすぎているじゃないか……っ！
これが後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）。こんな男を隠し持っていただなんて、どれだけの力を秘めているんだ……っ！

英雄乱戦編　第三十話　ＯＴＯＮＡが出てくる作品は良作。でも意図して出すのは困難

和地Ｓｉｄｅ

……圧倒的すぎるだろう、ユーピ・ナーディル・モデウ。
才能のつるべ打ちすぎる。そりゃ自分以外を凡人というよ、言うだけあるよ。
しかも全部高水準で成長させているし、ぶっちゃけちょっと引く。
才能の十連ガチャで全部ＳＳＲ引いているようなもんだろ、アレ。
まぁそれはともかくとして、俺は戦闘に集中しなければ……な。
『やっぱ。これ本気出さないと一人も殺せないっていうか、こっちが大損しそうだよ！』
「させるかよ、さっさと終わっとけ！」
モデルバレットが踏み込むより早く、接木さんは一歩を踏み込んだ。
そして同時に、星辰体との感応を双方が発動させる。
『天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ！』
「創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌めく流れ星！」
その瞬間、俺達が砲撃やドローンを迎撃している間に打撃戦が繰り広げられる。
「育つごとに痛感する。人に見える景色など、極々一部ということを。闇に包まれし実態は、足元すらも見えぬだろう」
驚くべきことに、接木さんは真っ向からモデルバレットと打撃戦を展開で来ていた。
「友人だろうと恩人だろうと、知らぬところはあるものだ。人の世は

まるで星々のように、輝かしく密接にあるようで、闇の断絶があるのだから」
出力そのものがかなり高いというほかない。さらに当人の技量もあって、打撃戦に限定すれば人造魔星に通用する。
だが星の本質をまだ開放していない以上、更なる伏札もあるのだろうと思った時、モデルバレットは強引に距離をとる。
「だからこそ、想う心と勇気を捨てるな。友を、家族を、愛する者を。寄り添い守るという心こそ、闇を照らす断絶を超える戦いに必ずいるのだから」
その瞬間に放たれるは、鬱陶しいレベルの小技の数々。
一目で分かる。あれは長期戦を踏まえたいやらしい戦い方だ。
人造惑星と星辰奏者の間にある最も重要な差。すなわち出力の微調整。
1か10かしかできない星辰奏者に対して対応する為、微妙な攻撃で出力を無駄撃ちさせてガス欠を狙った戦法はしかし、驚愕と共に無効化される。
「胸の炎に火をつけろ。拳と武器で悪を討て。悪しきものが光であろうと闇であろうと、善き想いの炎と光をもって立ち向かえ」
詠唱と共に適切に弾き飛ばす接木さんは、恐るべきことに出力を調整して戦っていた。
何とか援護しながらも、俺はその事実に戦慄する。
「交じり合う絆の輝きは、黄金ほど神々しくはないだろう。だが、決して劣らぬ価値があると幼きものに示すがために、大人は合金（武器）を振るうのだ」
非常に高い出力と出力の調整能力。これがあれば魔星にすら通用する戦闘が可能なのは確定的に明らかだ
……これが、英雄派サブリーダーの一人であるサイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナが態々連れてきた戦力の本質。
「超新星（メタルノヴァ）――銀（スター）に寄り添（ファイター）い星を撃ち抜（アマル）け、人ゆえ（ガム）にッ！」
接木勇儀の星辰光、星辰体感応性質強化能力ということなのか!?

接木勇儀
星戦士（スターファイター・アマルガム）は悪を討つ、人ゆえに
基準値：C
発動値：AA
収束性：C
拡散性：E
操縦性：AA
付属性：E
維持性：C
干渉性：E

星辰奏者の最大の難点といる大雑把すぎる出力調整。それを可能とする接木さんは、運用面での優位性に限れば魔星の域に到達している。

そういえばどこぞの国が研究していた第一世代型魔星を打倒する部隊で前衛を務めていたというが、この性能なら納得だ。

この男こそ、世界で唯一魔星の土俵を地力で踏みにじれる星辰奏者。

邪悪なる星の住人すら打倒できる、圧倒的な戦士のそれだった。

『……だったら一気に潰してやるよぉっ！』

そして激高したモデルバレットは、全力で星を開帳しながらフルウェポンで攻撃を開始する。

『星辰光の出力調整が能力なら、つまり魔星の基礎性能に到達できるだけ！　二つも魔星としての星辰光が使える私なら打倒はできるでしょ！』

「分かってるからこれ使うんだよ、バーカ！」

そんな子供っぽい反論をしながら、接木さんは……リモートライザーを装着した!?
「ま、そうなるわな。俺も行くかっと」
そう言いながら、何時の間にか引岡さんも腰にベルトを……なんだこれ!?
ショットライザーとスラッシュライザーを足して二で割ったような変身デバイスを腰に巻いているんですけど!?
『リモートライザー!』
『バヨネットライザー!』
リーネスだな、リーネスだな!?
今度はいったい何作った!?
『ＷＩＮＧ!』
『ＰＯＩＳＯＮ!』
俺がちょっと困惑している間に、それぞれがプログライズキーを装填しているし!?
『『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……』』
「「変身!」」
『リモートライズ』
『バヨネットライズ』
あのすいません、ちょっと反応が追い付かないんですけど!?
『フライングファルコン!　Ｓｐｒｅａｄ　ｙｏｕｒ　ｗｉｎｇｓ　ａｎｄ　ｐｒｅｐａｒｅ　ｆｏｒ　ａ　ｆｏｒｃｅ』
『スティングスコーピオン!　Ｓｔｉｎｇ　ｗｉｔｈ　ｆｅａｒ　ｂｙ　ｔｈｅ　ｐｏｗｅｒ　ｃｌａｗｓ』
か、か、か……。
「カズヒねぇの関係者仮面ライダー多すぎ問題!?」
俺は混乱のあまり訳の分からないことを言っていた。
……あ、流れ弾が校舎向かってるから障壁障壁。
こういうところはしっかりできるんだよなぁ、俺

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

体勢を立て直しているグレイフィアーズを前に、ベルナは呼吸を置いてから一歩を踏み込もうとする。
そしてその隣に並び立つ女性がいた。
「……姉貴」
「ベルナ、今でも変わらないの？」
その気づかわし気な視線に、ベルナは苦笑した。
「ちっと違うな。今から始めるんだよ」
その返答に、アーネは悲しそうに目を伏せる。
本当に可哀想と思っているんだろう。姉はそういう女だと、いやというほど痛感している。
姉妹でありながらまったくもって正反対。ある意味これほど不運なこともないかもしれない。
でも、だからこそ。
「安心しろよ。あんたと戦う時は胸を張れる自分になるからさ」
「……そう。残念だけど、ここは引くわ」
そう返しながら、アーネは表情を切り替えて片手を上げる。
その動きに反応し構える多くの者達を背中において、姉妹は此処に並び立つ。
「鬱陶しいなぁもう。本当に鬱陶しい……っ」
苛立たしい表情を浮かべているアズールを中核として再編されたグレイフィアーズに対して、姉妹は言葉を長々と語る気は無い。
アーネの光に染まることなく、ベルナのように真っ当に生きる気もない。そんな奴にかける言葉を探す余裕は、今はないのだから。

だからこそ、二人の言葉は互いに向けられる。
「外野は任せるわ。アズールを相手に示して頂戴」
「ああ、見せてやるよ」
姉に応えながら、ベルナは水を具現化する。
それらの一部を氷にしながら、ベルナは同時に暴風を巻き起こす。
……生まれて初めてといえるぐらい、戦う時に清々しいものを感じている。
それを実感し、ベルナは歯をむいて笑いながら戦意を燃やす。
「アタシが選んだアタシの道をな！」
今ここに、姉妹の後始末が勃発した。

英雄乱戦編　第三十一話　ガルアルエル・ファイト

和地Ｓｉｄｅ

もうどこから突っ込んだらいい分からない展開だ。
正直、俺にとってもモデルバレットはそこそこ気になる相手ではある。
なにせカズヒねぇの闇ともいえる存在だからな。カズヒねぇの恋人たる俺にとって、無視できる存在じゃない。
だが、正直俺が介入する余裕がない。
「うぉおおおおっ！」
『だぁもうっ！』
接木さんと引岡さんが変身した仮面ライダーは、空と地上からモデルバレットを縫い留める。
鶴羽も使っているリモートライザーで変身している接木さんは、飛行能力を獲得する形で手札を増やす選択肢をとったんだろう。フライングファルコンプログライズキーを使って上空を制している。
引岡さんが使っているのは毒物関連を取り扱うスティングスコーピオンプログライズキー。というか新型の変身デバイスなんだが、俺全く聞いてないぞ？
あと引岡さん、バイクに乗って陸上戦闘で機動力を発揮しているんだが。あれ絶対神器だよな？　疾走車輪（ソニック・チャリオット）だよな？　俺と同じ神器だよな？
あっちはあまり活かせてないし、今後の為にアドバイスでも貰っておくか。
……さて、なら俺がやるべきことはもっとシンプルだ。
周囲を警戒し、援護が必要なところに障壁を展開する。
この場において、俺達は誰一人として死んでやるものか。殺させて

たまるものか。
開校前から死者が出てきた学園なんて、本来縁起が悪いんだ。そんなものは避けれるなら避けなければならない。
だからこそ。
俺のやるべきことは、それだ。
そして、だからこそ俺が警戒するべき戦場は特に二つだ。
ベルナとリーネス。二人の戦いだろう。
それぞれ因縁がある相手だから、当然だが気負い気味だ。突破力はともかく安定性で不安がある。
モデルバレットを警戒しつつ、俺は周囲の戦闘を気にしながらも警戒だけは怠らない。
現状は決め所。それはつまり、行って間違えればこっちが潰れるタイミングだ。
曹操とヴァーリが動いているから決定的敗北は避けられる。だが同時に、メンツの何人かがやられる危険性は踏まえなければならないだろう。
……凌いでくれよ、二人とも……っ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

『天進せよ、我が守護星――――鋼の未開（あした）を駆けるがために』
ベルナが氷水を纏って駆け出すとともに、アーネは星の開帳を開始する。
告げられる起動詠唱（ランゲージ）は、やはり礼装型人造惑星のそれ。後継私掠船

団筆頭の一人として、それ以外の選択肢など考えもしていないのだろう。
その寂しさを覚えながら、ベルナは姉との久しぶりの連携戦闘を開始する。
『ようこそおいで下さいました。誉れある英雄の卵たち』
一礼しながら微笑むアーネの星は決して己の為の物ではない。
それに呼応するように、彼女が連れてきた者達が前進する。
『ここは聖娼集いし高級娼館。麗しの乙女たちが貴方を誘い、陶酔の禊をいたしましょう。七夜のコースを終えたとき、汝は卵の殻を破る』
グレイフィアーズ下部部隊であるグレイフィアーズ・アンダーは、決して弱い存在ではない。
須らくが上級悪魔に何かしらの戦い方ができる相手達であり、必然的に精鋭部隊といえる戦力だ。
『我らにかかれば土の野獣も、氷の如く透きとおる眼(まなこ)をもった勇士となる。光の決意を心に宿す、戦士たちならどうなるか』
だがしかし、氷結星辰眷属(エンキドゥ)となった者達はそれを上回る。
氷を放ち、氷を纏い、氷を操る。そんな異能を会得したアグレアスの住人達は、下級悪魔ですら死の猛威を恐れることなく勇猛果敢に攻めかかる。
『語るまでもなく無双の英傑。エンキドゥが如き英霊たちは、光をもって未開を照らす』
もはや彼らは民草にあらず。アーネとユーピの光り輝く生き様に魅了感染された者達は、自らの意志で後継私掠船団にならんとアーネの伽を受け入れる。
『屑石は生まれ変わり宝石が如き勇士となり、戦場を駆ける猛者とならん』
間違いなく能力があり訓練も受けたグレイフィアーズ・アンダーを、即席のはずな戦士達は、むしろ押し潰さんと猛威を振るう。
『汝、氷が如き透き通る意志もつ英雄(エンキドゥ)よ。我らが伽の祝福持って、我らが覇道を共に往こう』

その理由など、語るまでもない。
覇道に覚醒(光)した(狂った)者達は、限界を超え成長を遂げ続けるのだから。
『超新星(メタルノヴァ)――神聖七夜の伽(クルチザンヌ・シャムハト)、英傑に至る陶酔(ナイト)をここに』
今ここに、星継娼婦の星辰光は、彼らを育て強化する。

アーネ・シャムハト・ガルアルエル
神聖七夜の伽(クルチザンヌ・シャムハト)、英傑に至る陶酔(ナイト)をここに（括弧内は星辰奏者時）
基準値：B（C）
発動値：A
収束性：A（B）
拡散性：B（C）
操縦性：A（B）
付属性：A（B）
維持性：C
干渉性：AA（A）

これこそがアーネ・シャムハト・ガルアルエルが星辰光。
氷塊星辰眷属(エンキドゥ)調律能力。
氷塊を操る疑似星辰光という異能を会得させ、更にそれを調律する星辰光。
無論自らもすべての異能を扱うことができるが、応用にして奥義といえるのが発動値における異能。
拡散性の範囲内にいる眷属の星にブーストをかけることで、更なる強化戦力として運用するこの妙技が、アーネとエンキドゥ達をグレイフィアーズ・アンダーを凌駕する戦力へと覚醒させる。
そしてそれゆえに、グレイフィアーズ・アンダーは抑えられた。

だからこそ―
「てめえの相手はアタシだ、アズール！」
「本当に鬱陶しいよ、あんたら姉妹は！」
―ベルナ・ガルアルエルはアズール・グレイフィアと激突する。
放たれる魔力の猛威は、どちらも上級悪魔を超え最上級悪魔クラスの領域に突入していた。
その戦闘と感覚から、神器も大体把握できた。
「悪魔の力を振るう神器かよ！　確かそんな準神滅具があったなおい！」
「ピンポーン！　冥府（クリフォト）より伸びる大罪（リュトン）の大樹（ディバウア）、更に……っ」
警戒に応えるアズールのオーラが膨れ上がると共に、その姿が変化する。
乳房はより豊満に。背丈はより高く。そして髪に銀の要素が入り乱れる。
そして魔力の質すら大幅に変わり、その出力はもはや最上級悪魔ですらそうはない上澄みの域に到達した。
「禁手（バランス・ブレイカー）、大罪新生の銀髪女王。能力は―」
その瞬間、圧倒的な出力の魔力球が百を超える数生成される。
「自身をグレイフィア・ルキフグスに近づける禁手だよ！」
その言葉と共に、魔王にすら傷をつける魔力の波濤がベルナに襲い掛かり―
「悪いが、こっちも一皮むけてんだよ」
―その全てを掻い潜り、ベルナの拳がアズールに叩き込まれた。
「……このぉっ！」
即座に魔力で弾き飛ばし、集中攻撃を叩き込む。
だがベルナはその猛攻を素早く回避。目にも止まらぬ速度で追撃を試みるべく、猛攻を掻い潜り続ける。
その動きはあまりに早く、そして何かが煌めく余韻を残す。
そんな圧倒的な高速機動に、アズールは攻撃を当てることができず翻弄される。
「なんなのよ……何をしてんのよ、ベルナぁあああっ！」

「……なるほどねぇ。水蒸気とは盲点だったわぁ」
その現象を、リーネス・エグリゴリは理解する。
そして対峙するモデルアーチもまた、すぐにそれを理解していた。
『彼女は元々水と氷を魔力で扱う女だったな。なら水蒸気は確かに選択肢として十分あるか』
これは真っ当な教育を受けていれば常識レベルだが、物体には固体・液体・気体の三つの状態が基本的に存在する。
そして気体は基本的に、それ以前の状態とは比べ物にならないぐらい体積が膨張する。
それを利用した水蒸気による推進力の獲得。それがベルナ・ガルアルエルの新たな戦い方だということだ。
それを理解し、リーネスは何となくだが微笑んでしまう。
まだ知られてないとはいえ、同じ男を愛する女。そんな少女が成長を遂げたというのなら、自分がやるべきこともわかりきっている。
……その第一歩として、けじめをつけよう。
「覚悟して頂戴、叔父上ぇ？　貴方は此処で……終わらせるわぁ」
『どうやってかね？』
その瞬間、モデルアーチは投影した兵器を操作して攻撃を開始する。
ステラフレーム数機にギガンティス・サリュート。まともに戦って勝ち目があるわけがない。
冷静かつ理性的にモデルアーチはそう判断するのだろう。それは当然だ。
だからこそ、リーネスは一歩を踏み込む。
決意を胸に。覚悟を決めて。
彼女は一瞬だけ目を伏せ、声を張り上げた。
「来なさい、アントニオン！」

『あいよぉリーネス！』
そして現れるは、トレインモードのアントニオン。
素早く翼を広げて飛び上がれば、アントニオンは随伴列車の砲撃で敵をけん制しつつ、リーネスを迎え入れるように並走する。
『ＶＥＨＩＣＬＥ』
ライディングエレファントプログライズキーをスラッシュライザーに装填し、リーネスは更に宣言する。
「いくわよぉ！　急行……合体ッ!!」
『了解だぜぇっ！』
その合図とともに、アントニオンのトレインモードと共に、数両の随伴列車が分離する。
『ナックルレッシャー』
『キャクブレッシャー』
『ウイングレッシャー』
それぞれの随伴列車は変形したアントニオンに合わせるように、それぞれが分離変形しながらフォーメーションを展開する。
それに対して、モデルアーチは躊躇することなく砲撃を敢行。
全投影兵器のみならず、マクロ・サリュートにも連絡して攻撃を集中させる。
サイコパスにロマンは通用しない。そういわんばかりに遠慮のない砲撃だが、しかし現実とロマンの両立はきちんとやってのけるのがリーネス・エグリゴリ。
合体シークエンスに伴いそれぞれがエネルギーの奔流を放ち、渦となって攻撃を破壊し受け流す。
「変身！」
『スラッシュライズ！』
展開されるライダモデルと共に、リーネスはアントニオンに乗り込んだ。
『ライディングエレファント！　Ｒｉｄｅ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｓｕｐｅｒ　ｒｏｂｏｔ!!』
装着される仮面ライダーアイネスライディングエレファント。

そしてそれに合わせるように、反撃準備は完了した。
『悲劇を見過ごすことはなく、ダイヤの如く無事平穏―』
それは、ＴＦユニットの前身といえる決戦兵器の完成系。
『快速特急無事原着、笑顔の路線は今開設―』
そう、これこそが機動特急アントニオンの真の本領発揮。
そう、それこそが―
『『高機動超特急グレートアントニオン！　誓約守って出発進行ッ!!』』
―高機動超特急グレートアントニオン。子供達と仲間達の笑顔を守る、鋼の巨神の完成である！

そしてその勇士の顕現を、超遠距離から本能で察知した者がいる。
「……これは！　もの凄い良い物を見逃した気分です！」
『『『

英雄乱戦編　第三十二話　違う、そうじゃないｂｙ木場祐斗

祐斗Ｓｉｄｅ

猛攻が繰り広げられる中、僕達は翻弄される邪龍達を一体ずつ確実に討ち取っていた。

敵の布陣はその八割ほどをユーピにかき乱されており、凄い勢いで削れていく。

はっきり言ってこの調子なら邪龍軍団の全滅は時間の問題。あとはそれ以外が隙をついて僕達に犠牲者を出さないかを警戒するべき時だ。

しかし敵も決して弱くはない。その懸念事項の一つこそ―

「来ましたわ！」

朱乃さんの警告に合わせるように砲撃を放つ、マクロ・サリュートだ。

対グレートレッドを主眼に置いた兵器だけあり、ユーピの攻撃にも耐えながら攻撃を叩き込んでいる。

あの巨体が与える心理的重圧もある。それゆえに破壊できた時の士気の変化大きいだろう。必然的に、あれを壊せるかどうかで戦闘のバランスは大きく変化するだろう。

だからこそ何とかしたい。何とかしたいが、どうすればいいのかという問題だ。

対グレートレッド兵器だけあり、マクロ・サリュートはとても頑丈だ。僕達の攻撃でも破壊しきれるか分からないところがある。少なくとも、イッセー君のクリムゾンブラスターや、リアス部長の

消滅の魔星（イクスティンディッシュ・スター）でも難しいだろう。
狙うとするならピンポイントの点の攻撃。それで関節部を破壊するのが妥当だろう。
だけど、その為の手段がない。
どうする？　被害を抑えるにはあれの破壊は必須条件だというのに……っ！
僕が歯噛みした時、一歩前に出る人がいる。
「……あのデカブツ、流石にいられると面倒だね。私が潰そう」
そう言いながら、ゼノヴィアは大弓を構える。
だがその方法は悪手だ。
先の戦いでゼノヴィアの宝具は確認している。そしてあの火力ではとてもマクロ・サリュートを撃破できるものではない。
源為朝の逸話から逆算して、船舶の攻撃において威力が上がると踏まえてもだ。
だけど、ゼノヴィアはむしろ自信満々の表情でエクス・デュランダルを構え……え？
思わず目が点になりそうになる僕の前で、ゼノヴィアは不敵な笑みを浮かべた。
「……ふっふっふ。今まで口うるさくエクスカリバーの機能を多用しろと言われてきたが、為朝との繋がりでその究極を悟れたのでな」
そ、そうなのか！
ああ、正直それどころじゃなかったけど、だいぶほっとしたよ。
七つの機能を持つエクスカリバー。ゼノヴィアはそれをデュランダルの補佐にしか使っていなかった。
破壊の聖剣以外のエクスカリバーをヘキサカリバーにしたこともあって、エクス・デュランダルの本領を発揮することはなくなったのかもと思っていたけれど、そんなことはなかったんだね。
正直ほっとする僕の目の前で、ゼノヴィアはエクス・デュランダルを大弓に番える。
……あれ？
「擬態、形状変化」

そしてエクス・デュランダルは変化していく。槍のような長さと形をした、ひも付きの矢として。
「夢幻、透明、射線調整」
更にゼノヴィアの目の前が僅かに歪み、そして変化は止まらない。
「支配、弾道制御」
エクス・デュランダルを引き絞り、ゼノヴィアは狙いをつけ切る。
「破壊、天閃、射撃強化」
ああ、これは確かにエクス・デュランダルの全ての力を最大限に発揮してこその奥義だ。
「祝福、この一射に祈りを込めて」
全てのエクスカリバーの力を、デュランダルの力をピンポイントに当てる遠距離射撃武器として運用する、全ポテンシャルを使った新たな奥義—
「穿つぞ為朝——極聖・弓張槍ヶ月ッ！」

その瞬間、マクロ・サリュートの腕が肘を見事に貫かれて撃ち落とされた。

……帰ったら、胃薬を飲んで、寝よう

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

高機動超特急グレートアントニオンは、その猛攻でギガンティス・サリュートを追い込んでいく。
『カイソクフィストォ！』
強大なエネルギーを纏った拳が、ギガンティス・サリュートの打撃を弾き飛ばす。
更にそれでバランスを崩した隙を逃さず、グレートアントニオンは脚部から光力のブレードを展開して切りかかる。
『ジュンキュウレッグッ！』
『……なるほどな』
その攻撃をあえて受け、モデルアーチは冷静に距離をとる。
同時に放たれる大量の砲撃。接近戦では懐に潜り込まれると判断したが故の砲撃戦闘だが、しかし甘い。
『カイソクストーム！』
脚部から光力の弾幕が放たれ、砲撃を相殺。
一斉に爆発して盛大な爆炎が視界を塞ぐ。そしてそれを突破するようにグレートアントニオンの拳が飛び、ギガンティスサリュートの肩を掴んで引っ張りこむ。
『ジュンキュウナックル……そしてぇ！』
爆炎を強引に月に消させられたギガンティスサリュートは、そのまま至近距離から絶大な砲撃を喰らうことになる。
『カイソク……ブラスターッ！』
クリムゾンブラスターすら超える砲撃を喰らい、ギガンティスサリュートは一瞬だが衝撃で機能がフリーズする。
そしてその瞬間を逃すことなく、アントニオングレートは剣を具現化する。
そのオーラは聖魔剣のそれ。創造系神器技術の流用とリーネスの天才的魔術手腕の融合で具現化されるは、光力を纏う超大型聖魔剣。

『超特急剣―』
そしてギガンティスサリュートが体制を整える隙を逃さず、グレートアントニオンは踏み込むそして切りかかる。
ギガンティスサリュートはフリーズが解けて対応を試みるが、しかし遅い。
踏み込み、そして振るわれるその斬撃は―
『―エクスプレスパーダッ!』
―ギガンティス・サリュートを、一刀両断した。

超高速での機動戦闘を可能としたベルナ・ガルアルエルは、その機動力でアズール・グレイフィアを翻弄する。
準神滅具を禁手に至らせたアズール・グレイフィア。そのポテンシャルは高いことは言うまでもなく、間違いなく難敵だ。
防御にオーラをきちんと回しつつ、やたら目ったら打つのではなく牽制の弾幕と一撃狙いの大火力を使い分ける。センスか修練のどちらかが必須となる戦い方であり、彼女が優秀であることは言うまでもない。
だが、ベルナはその上を行く。
その差がどこにあるかと言われれば、総合力だろう。
ベルナ・ガルアルエルは、真面目な人物だ。
育ち故に口調は荒めだが、言われた仕事はきちんとこなし、自己研鑽もちゃんとする。受けた仕事には責任は持つし、自分の失態はきちんと受け止める。
そんな彼女はメイド業務をしながらも、自主的な鍛錬は逐一行っていた。むしろテロリストという不本意な活動をしなくなった分、意欲においては高くなっていただろう。
だからこそ、今までの自分の戦い方を見直して新たな運用方法を会得した。

反面アズール・グレイフィアは、本質的に怠惰な人物である。
人の能力において、生まれついての才覚や環境の差は決して馬鹿にならない。
自主的な努力や鍛錬は確かに重要だが、その必要性を感じ、またより良い鍛錬を受けれるかについて環境の影響は非常に大きい。
また努力という物は己を磨く物である以上、生まれついての才覚は決して無視できるものではない。先天的な才覚が無ければ成功できない分野はいくらでもある。
そして、やる気という物がこういう時に無視できない要素ともなる。
やる気があれば必ず成功するというわけではないが、只言われてやるだけと、自分の意志で邁進しているものには明確な違いが生まれるものだ。
その観点で見てみれば。
自発的に己に向き合い、鍛錬を積みかさねて己の才覚を新たに生かし始めたベルナ・ガルアルエル。
受動的に自分を拾われたことに半ば満足し、至りこそすれど言われた形で鍛えた程度のアズール。
この二人に明確な差が出ることは、ある意味において自明の理であった。

アウロス学園の戦いは、此処に終幕を遂げんとしていた。

英雄乱戦編　第三十三話　アウロス防衛戦、決着

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

圧倒的な猛攻。総合的なアウロス攻防戦は、Ｄ×Ｄ側に確実に傾いていた。

この趨勢を傾けた最大の要因は、恐るべきことにヴァーリ・ルシファーの白龍製麺にある。

打倒するのに中級悪魔クラスが必要な量産型邪龍の攻撃を、ほぼ全員が下級悪魔の市民によって防がれる。この異次元レベルの現象を引き越したのが白龍製麺。ただでさえ寡兵でも勝算のある防衛線で、数の差が防がれたのは実に大きい。

それを正確に把握したうえで、モデルアーチは冷静かつ冷徹な判断をしている。

自分が歪な形とはいえ生存しているのは、ひとえにミザリの気まぐれによるものだ。

魔術回路を持ち継承する者として、可能な限り上質な後継者を用意したいと心から思っている。

道間六郎達の所業に参加したのはそれが理由だ。本家から追放されたに等しい自分では、道間の家の力で上質な胎盤を得ることは不可能に近い。また後継者を作る種子の後天的な強化もできればしたいが失敗して後継者が成長してから死ぬという事態はリスクが大きい。とどめに自分の魔術回路は質に特化しすぎて量に欠けている。

結論として、道間乙女という量に特化した女を孕ませ、胎児の段階から摘出して後天的強化施術のテストも行える環境は、最良とすら言えた。

結果として誠明に殺される不手際は反省している。その上でどの

ような理由であれ、生殖能力を持った状態で蘇生させられたのは僥倖だ。自分を含めたあの件に関与しているステラフレームでは、自分が一番ミザリ・ルシファーに忠実に動いているという自覚はある。

故に、敗北するにしても何かしらの悲劇を起こしておきたい。幽世の聖杯を利用した後継者の調律を踏まえれば、そういう上納金は必須なのだ。

故にこそ、事態の打破と最重要ターゲットの殲滅は必要不可欠。

その冷静かつ冷徹な判断が、あくまで知性的な考えで結論を求める。

……結論は、秒で出た。

ベルナ・ガルアルエルの攻勢は、もはやアズール・グレイフィアがどうにかできる領域に到達していなかった。

水流・氷塊・水蒸気。この三種の水の性質を利用した高速機動戦闘に、アズールの対応力は処理堕ちすら起こしている。

（なんでなんで!? こいつこんなに強くなかったでしょ!?）

アズールの誤算はそこにあった。

英雄派時代、ベルナは基本的に流されて行動していた。

当人の性格的に不本意だった環境では、モチベーションの問題から自主鍛錬をしていたとしても成長や性能の発揮は難しい。やる気という物はきちんとかみ合えば高い効果を発揮するが、そもそもないのでは意味がないのだ。

ゆえに、そこから来る急成長を果たしたベルナのポテンシャルに、アズールは追いつけない。

他のカラーズはもれなくユーピ・ナーディル・モデウに他の有象無象の大半と共に圧倒されている。残っているメンバーも、アーネが連れた氷結星辰眷属（エンキドウ）に制圧され始めている。

一言で言えば詰みだ。

漸く勝ち組になれた。これからは良い思いをして生活できる。
言われた仕事と言われた業務鍛錬だけしていれば豪勢な生活が送れる。それが目の前でいきなり頓挫しかけている、そんな事実にアズールは絶望しかけ―
―聞こえるか？　勝機が欲しいなら私の指示に従え
―だからこそ、その声に飛びついた。

両断されたギガンティス・サリュートから飛び出したモデルアーチに、リーネスはとどめを刺さんとアグレアスパーダを構える。
この男はあまりに危険だ。生かしておけば何を仕出かすか分かったものではない。
何よりカズヒの親友として。かつてミザリの友だった者として。この悲劇の一端を担った男を許すつもりもない。
だからこそ、リーネスは躊躇することなく斬撃を振るい―

『よし、跳べ』
「分かったぁあああああっ!?」

―その瞬間、斬撃の延長線上にベルナがいた。

「……っ!?」
とっさにお互いが気づいて何とか事なきを得るが、しかしこれで大きな隙が生じる。
そしてその要因はモデルアーチ。
モデルアーチはこちらが不利であることを悟った瞬間に、仕込みを敢行。
作ったものは高性能の転移装置。それをアズールに同調させつつ、アズールに念話装置で接触を図りタイミングを合わせることで、ベルナすら巻き込んだ転移で仕切り直しを図ったのだ。
モデルアーチの天才的頭脳と、こっそり作成しておいた演算装置を踏まえた策だが、この一瞬の隙は非常に大きい。
そして同時にその瞬間、伏せていたステラフレーム自我未覚醒体を出現させる。
有機的ユニットがない分総合性能はただの自我未覚醒体より劣るが、しかしそれでもステラフレーム。最上級悪魔ですらてこずる程度の性能は確立されている。
今まであえて積極的に動かさなかったそれを、この一瞬のスキを狙い打って一斉に放射する。
誰もが反応が間に合わないと確信していた。
何故ならD×Dは基本的に正々堂々とした戦いを良しとする。また因縁の清算などにも理解がある以上、自分とリーネスが戦うのなら、下手な横やりは入れないだろうと踏んでいた。この乱戦なら尚更だ。
唯一の懸念は暗部中の暗部に属するカズヒ・シチャースチエだが、クロウ・クルワッハを相手にしている状態ではそれも難しい。
そんなプロファイリングまで行ったうえでの逆転の一手。
それに対し、多くの者が気づく余裕もない。気づいた者もこの妙手に反応と対応が間に合わない。
故にここからの巻き返しをモデルアーチは瞬時に試算し―

「させるかよ。俺が悲劇(それ)を見逃すと?」

―その攻撃全てが逸れ、モデルアーチはこの戦いで最大の驚愕を実感した。

攻撃が逸れた理由は単純明快。大量の障壁が攻撃を逸らす為だけに展開され、ベルナとリーネスに被害が出ないギリギリを成立させたのだ。

そして同時に、モデルアーチはその時点で介入者を悟り、驚愕している。

この激戦の中、この絶妙なタイミングにも関わらず、それを成立させた者。

そんな極めて困難な状況を、最善手を瞬時に叩き込む超絶技巧を成立させた化け物。

モデルアーチは、生まれて初めて絶叫する。

『……涙換救済(タイタス・クロウ)ううううううッ!』

「人の大事な女に何しようとしてんだ。そのまま、死ね!」

視界に中指を立てたパラディンドッグが、ショットライザーすら向けているのを確認するが既に遅い。

その瞬間、大量の星魔剣がモデルアーチに突き立った。

パラディン

ソード

ブラスト

そして同時に、その事態に思考が停止していたアズールごとに自分が砲撃に巻き込まれることを悟る。
「終わりよぉ、叔父上ぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
「百回死んでろ、アズールぅぅぅぅぅぅっ！」
その瞬間、結果的にだがモデルアーチはアズールの盾になるように砲撃を喰らい、全身を粉々に砕け散らせた。

イッセーＳｉｄｅ

本当に、ここぞという時に外すことがないよな、九成は！
だったら、俺も決着をつけないとなぁ！
「決着といこうか、ユーグリッドぉっ！」
「そうですね。ここは奥の手を切らせてもらいましょうか！」
その瞬間、俺もユーグリッドも本気の体勢に入る。
ユーグリッドの鎧は真女王のそれになり、その途端に鎧に小さな破損が生まれ始める。
俺は俺で飛龍を全身に装着し、力を籠める。
そして胸部から砲門を展開し、チャージを始める。
「短時間の使用が現状限界ですが、仕方がありません！」

ユーグリッドはクリムゾンブラスターの準備をし、迎え撃つ体制に入った。
それに対して俺が仕掛けるのは、ロンギヌス・スマッシャー。
覇龍の状態で出せる二天龍の奥の手。俺はそれを飛龍を使って再現する。
一発ぶっ放せば数週間は使えないし、普通に使う時に少しは悪影響が出る最後の手段だ。だけどこのままだと攻めあぐねるし、こいつをこれ以上野放しにする選択肢はない！
だからこそ、この一撃でぶっ飛ばす！
「喰らいやがれぇぇぇぇぇぇぇっ！」
俺はその思いを込め、全力のロンギヌス・スマッシャーをぶっ放した。
それに対してユーグリッドはクリムゾン・ブラスターを……撃たない。
あいつは放つことなく、ブースターをふかして射線からずれようとする。
「物事はスマートに行くものですよ？」
そう、鎧越しでも分かる勝利の笑みが―
「―全く同意です」
―後ろからアスカロンに貫かれ、凍り付いた。
まったく。今代の赤龍帝をどこまで馬鹿にすりゃ気がするんだ？
俺達はユーグリッドが射線に向かって蹴り飛ばされるのを見ながら、奴に敗因を断言する。
「『今代の赤龍帝は、三位一体だと忘れるな！』」

その瞬間、今まで気配遮断を使って最適なタイミングを見計らっていたシャルロットの介入で勝機を逃したユーグリッドは、ロンギヌス・スマッシャーに呑み込まれていった。

英雄乱戦編　第三十四話　戦後のアウロス（前編）

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「残念だったね父さん。アグレアスが奪取できなくて」
「全くだぜぇ。アレが手に入れば、すぐにでもトライヘキサが復活するんだけどな～？」
「はいはいジト目でこっちを見ない。何度言われても今以上の復活措置はしないからね？」
「ミザリきゅんのけちんぼー！　お前さんの持ってる聖遺物系神滅具全部使えば、今頃トライヘキサも復活するはずなのにー！」
「馬鹿なこと言わないの。異世界侵略には興味あるけど、僕はもっと準備がしたいんだからね～」
「え～？　トライヘキサさえ復活すりゃ、異世界侵略できるでしょ～？」
「甘いよ父さん。僕は自分の破滅も楽しめるけど、だからってあっさりやられるような手抜きで負けるのはごめんだもん」
「そうかい？　邪龍軍団とトライヘキサがありゃぁ、大暴れできそうじゃん？」
「何を言っているんだか。僕達の世界に龍神級が三体いるんだ。向こうの世界にもそれぐらいある可能性は考えないと。異世界はとっくの昔に統一されてるなんてこともありえるよ？」
「慎重だね、マイサン」
「そりゃそうさ。異世界がこの世界とどれぐらい違うかなんて分からないんだから。運よく乳神が頂点だとしても世界が統一されてたら総力で潰されるからね。世界が統一されている上、龍神以上の存在がいる可能性も考慮しないと」

「も～！　俺の息子は慎重すぎるぜ！　エンジョイ勢だろオタクもよぉ？」
「エンジョイする為に本気を出してるだけです。個人的にはグレートレッドを倒した後で、偵察部隊を派遣してから侵略活動にいそしみたい所存だからね」
「息子が慎重で何よりだねぇ？　ま、俺はその分エンジョイしながらトライヘキサを復活させるＺＥ」
「ふふっ。戦力はこっちも貸すから、楽しんでいくといいよ？　アレの調整もできたしね」

「はっはっは。真なる魔王の血族が仲良くできているのは良い事です」
「……やぁ、ミスターチャンピオン」
「初めまして、ディハウザー・ベリアル。貴方が協力してくれたのは、思わぬ僥倖だったよ」
「いえ、結局は失敗しておりますから。力が足りず申し訳ありません」
「気にしなくていいよ。アレはＤ×Ｄ達が優秀で、こっちに運がなかっただけさ」
「そういうことＳＡ！　それにこっちは君がついてくれているだけで、いざという時冥界を大混乱にできるからなぁ？」
「……とはいえちょっと気になるね。なんでこっちについてくれたんだい？」
「……お二人の力を借りてでも、どうしても知りたいことがあるのです」
「「というと？」」

「今リアス・グレモリーが担当している駒王町。そこではかつて私の親族が管理を行い、そして教会とバアルの手の者により処分されました。……その真相を知りたいのです」

祐斗Ｓｉｄｅ

ユーグリッド・ルキフグスが倒された後、戦闘は早期に集結した。これ以上は割に合わないという判断だろう。イシロ・グラシャラボラスによるものと思われる魔獣達が仕掛けてきて、残りのメンバーには逃げられることとなった。

正直僕達は疲れている。そして僕はかなり疲れている。

ただ単に戦いで苦戦しただけではない。まだ使いこなせていないグラムやダインスレイブを何とか使った反動もある。そしてダインスレイブの使い方で使い手のホグニ王に酷評された心理的負担もある。

そしてとどめにゼノヴィアだ。

彼女が生徒会選挙を会長として出馬するのはいいだろう。問題はエクス・デュランダルだ。

全ての力を「遠距離の相手にピンポイントでデュランダルの力を叩き込む」だけに使ったあの独自奥義は勘弁してほしい。もっとこぉ、巧みな戦い方を本当に覚えてほしい。

真面目にグレモリー眷属はテクニックタイプが少ないんだ。そこにヘキサカリバーに退化したとはいえ手札の多いエクス・デュランダ

ルがある以上、テクニックタイプとして真剣に成長してほしい。
イッセー君も譲渡を上手く生かせばテクニックタイプになれると思うんだけど、どうしたものか。
あれだけの素質を使いこなしてくれないのは、思うところがありすぎる。
「……はぁ」
「お疲れの御様子ね、木場君は」
僕のため息に、上から声が掛けられる。
顔を上げれば、苦笑気味のリヴァさんが水の入った紙コップを渡してくれた。
そういえば何時の間にかいなくなった気がするけど、見てみるとどこか疲れているような気がするね。
「そういえばどこに行ってたんですか？」
「ん？　地下の方に？
地下の方にね」
僕が首を傾げていると、リヴァさんは隣に座り込みながらため息をついた。
「なーんか敵の動きに待ってる感じがしてたし、吸血鬼絡みで内通者を作ってモンスター……なんてやってたから念の為にね？　そしたらドンピシャだったから慌てたわぁ」
そういえばそうだった。
術式のコントロールを奪うのなら、当然内通者もいるだろう。そしてクリフォトの作戦が転移魔法を利用する以上、戦術的にある種の待ちを考えるのは当然だ。
それに勘づいていたのか。流石だね。
ただリヴァさんは力不足を感じているのか、軽く凹んでいる感じだった。
「何とか自爆処置は阻止できたし、狙いの調整も邪魔できたから良かったけれど……ちょっとねぇ」
なるほど。アガレッサーに誤爆したのはそれも理由だったのか。
あと自爆処置をかけていたとは危なかった。でも阻止できたのな

ら、自分達が殺されるところだったことも踏まえてある程度の情報は手に入るだろう。リゼヴィムの秘書的立場であるユーグリッドをどうにかできたことも踏まえ、情報戦ではかなり価値がある。
ただ、それにしてもリヴァさんは思うところがありそうだった。
どうしたのかとは思うけれど、こういったことはむしろ九成君達が回るべきだろう。その辺りはわきまえた方がいい気がする。
あとでそれとなく彼に伝えるべきかと思っていると、リヴァさんはそっと自分の手の平を見つめていた。
「……あとで彼らの術式関係で、ちょっと伝えておくべきことがあるわ。先生的に心の準備がいるから、もうちょっと待ってほしいけどね」
その表情は、何時も余裕を見せる彼女からすると怖いぐらい真剣みがある。
余裕がなくなるほどの何かに気づいたということなのだろう。それも、主神の娘の余裕がなくなるというレベルだ。
……本当に、九成君やリアス部長に伝えておかないといけないだろうね。

英雄乱戦編　第三十五話　戦後のアウロス（後編）

和地Ｓｉｄｅ

冥界から増援が来たこともあり、俺は事後処理を任せて休息をとっていた。
ちなみに糧食としてヴァーリがラーメンを振る舞っていたが、地味に美味い。
……あの白龍製麺とかいう技も含めて、あいつはいったいどこに行くんだろうか。
というかだ。麺は食欲、おっぱいは性欲とすると、これは最終的に睡眠欲に繋がる特殊技が発現しそうだ。
もしかするとだが、何時か睡眠欲を司る天龍クラスの龍が誕生するのかもしれん。そうなれば天龍は、三大欲求を司るドラゴンとして世界に名をはせることになるのだろう。
……駄目だ。俺絶対疲れてる。
帰ったらすぐ寝よう。そうしよう。
そう思いながらため息をついていると、足音が聞こえてきた。
「……あ、ベルナ」
「よ、カズ」
そう言い合いながら隣り合って座ると、ベルナはそれとなく自分の腹に手を当てている。
「美味かったな、あのラーメン」
「だな。あいつ何でもできるな」
地味に戦慄するな。
まさかカズヒねぇに麺を制限された結果、トチ狂って変な技に覚醒するとは。
地味に戦慄する。むしろちょっと怖い。

……まぁ、おかげでだいぶ戦えたから良しとするか。
なんとなく疲労と満腹感で沈黙を味わっていると、ベルナは学園の校舎を見る。
ヴァーリの麺技による防壁の確立により、学園は殆ど破損していない。恐るべし白龍製麺。ラードゥンは哀れ。
そんなアウロス学園を微笑みながら眺めつつ、ベルナは俺の方をちらりと見る。
「なぁ。アタシは教師になれるか？」
そう言われても……と言いたいが、言うべきことはシンプルだ。
「今からきちんと教育課程をとればいいだけだろ？　お前ハーフ悪魔なんだから時間も余りまくってるし」
「変に希望論とか言わねえのがありがてぇな」
現実はきちんと見ないといけないしなぁ。
ただまぁ、行けるとは思っている。
だってベルナなんだかんだで優秀だし。うん、十分狙える。
ただ同時に、ベルナは苦笑交じりに肩をすくめてきた。
「……姉貴には改めて言ってみたがな。なんつーか微妙にずれた感じというか何つーか」
あの女何言ったんだが。
俺はちょっと考えてみるが、なんというかすぐに思いついた。
「子供達の未来を輝かせるいい職業……的な？」
「そうそう。どう考えても何かずれてんだろうなぁ」
なるほど確かに。
アーネのいう輝く未来と、ベルナの目指す道は絶対にずれている。
なんとなくだが、俺は後継私掠船団といつか雌雄を決するんじゃないかと思っている。
というか必須だろう。カズヒねぇと幸香のこともあるし、ベルナとアーネのこともあるからな。
レーティングゲームの国際大会とかが考慮されているともいうし、むしろなってほしいというべきではあるがな。
そんなことを思い、俺はそっとベルナの肩を抱き寄せる。

「……何かあったら言ってくれ。無理ない範囲で手を貸すから」
本心だ。嘘偽りなど欠片もない。
できる範囲で力を貸すし、その結果倒れるなんてベルナが気にする真似はしないように気を付ける。
そんな俺の言葉に、ベルナは俺の肩に頭をのせることで答えてくれる。
「期待してるぜ、旦那様？」
その言葉をそのまま受け取りそうになって、俺は一瞬硬直。
メイドさんに旦那様呼ばわり。だがその意味は形式とかそういうわけでは断じてない。
あ、これやばい。
「任せろ頑張るいよっしゃぁっ!!」
「お前、そういうとこ可愛いよな」
呆れ半分感心半分な答えなうえ、男として可愛いは果たして素直に喜ぶべきか否か。
だがそんなものはどうでもいい！　なんというか、最終的に今日は良い日だいやっほぅ♪

イッセーＳｉｄｅ

「……うぁあああ～……っ」
……ロスヴァイセさんやリアスと色々あってから一人でいた時、俺はすっごい物を目にしちゃったよ。
顔を真っ赤にして地面をのたうち回って悶絶しているリーネスがいた。え、なにあれ？

中二病をこじらせた産物を大人になってから見た感じなそれだ。
……意外過ぎる……っ!?
と、とりあえず見なかったことにしておこうと思い、俺はそそくさとその場を離れる。
その十秒後、俺の喉元に槍の切っ先が突き付けられた。
「今見たこと、忘れる、オア、ダイー」
「やめなさい」
すとんとカズヒの手刀が落ちて、聖十字架の槍を突き付けた南空さんが悶絶した。
あ、これ気付かれているあれだ。
っていうか二人は把握している感じだな。となれば尚更俺が関わらなくてもいい感じか?
いや、場合によっては動くに動けないことになってるかもしれない。そういう時ぐらい俺だって協力しないと!!
!!
「何があったんだ? 教えられるなら教えてくれ、仲間だろ?」
それぐらいには俺は三人のことを信頼している。リアス達だってそうだと信じている。
何より九成も絶対動く。リーネスは半分ぐらい育ての親みたいなもんだし、カズヒや南空さんのことを愛しているんだから。
だから真剣に聞くけど、その途端にカズヒがツイと視線を逸らした。
あ、これギャグ的なあれだ。
「……ゴメン、リーネスにネットスラング的な黒歴史なあれか?」
俺はそれとなく見なかったことにしようと思いなおしたけど、カズヒはそっと首を横に振った。
「いえ、ネットスラング的な喪女だということが発覚しただけなの」
「……も、問題ないって言ってるのに、今回のことで更に喰らったらしく……て……」
悶えながらの南空さんの補足説明に、俺はちょっと考える。
今回のリーネスは前世の叔父と戦った。

殆どリーネスが何とかしたようなもんだけれど、疑似的に作ったステラフレームとかはＤ×Ｄも相手をしたしたな。そっちは何とかなった。
モデルアーチの奴は策も仕掛けたみたいだけど、俺はユーグリッドの相手で手いっぱいだからそこはノータッチ。だけどベルナも含めて九成が華麗に割って入って何とかしてたな。あいつそういうところは本当に外さないよ。
……ああ。そういうことか
「おのれ、あの年上キラー……っ」
「まんべんなく落とすイッセーが言う？」
崩れ落ちる俺に二人のツッコミが来るけど、それはそれなんだよぉっ!!

英雄乱戦編　第三十六話　事前準備や息抜きはとっても大事

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、今後はどうするべきかな？」

ミザリが個人で保有するトルネード級神器力潜水艦。その一室でミザリはモニターを見ながら微笑んでいた。

彼の人生はすべからく、悲劇を堪能する為にある。

其処には質と量の両立を踏まえた区別や協力者に対する温情はあっても、それ以外には差などない。己自身が悲しくなることも踏まえて望んでいる以上、当然ではある。

だからこそ、今後の段階として異世界侵略を行うことには賛成だ。今生の父であるリゼヴィムがそれを目的とすることに否はないし、むしろ喜んで協力したい。

だからこそ、ミザリはそれを踏まえて行動している。

リゼヴィムの計画における最大の問題点。それが分かっているからこそ、ミザリは積極的な協力ができない。

それは、異世界についての情報不足だ。

情報とは武器である。仕掛ける世界の情報がほぼ欠如しているこの状況で、いきなり侵略活動など論外だろう。

どんな異能やどんな技術水準、頂点に立つ存在はどれだけの強さか。そういった情報が皆無と言っていい状況で仕掛けても、はっきり言ってグダグダになりかねない。むしろ乳神が一方的に赤龍帝に使いを送ることができる以上、異世界側の方が情報を持っている可能性もある。

下手をすると万全の体制で一丸となった世界に迎え撃たれるかもしれないのだ。それはそれでミザリ的には悲しめるからいいのだが、異世界に悲劇を撒き散らせないのはそれはそれで嫌だ。
だからこそ、ミザリは封印解除そのものには積極的に関与していない。
ヴァルプルガによる聖十字架や、ヴァレリーから一つだけ抜き取った聖杯で進んではいるがその程度。逆に五つの聖遺物系神滅具を使えるミザリが協力すれば、それこそ既に封印は解けているだろう。
だがしない。トライヘキサの封印が解ければ、その途端にリゼヴィムはグレートレッドを殺しに行きかねないからだ。
そしてグレートレッドを殺さねば異世界に行って帰るような真似は不可能に近い。つまり偵察ができない状態でぶっつけ本番を仕掛けなくては、異世界侵略はできないといえる。
だからこそ、ミザリの視点はまずこの世界に向けられる。
可能な限りこの世界を悲しませ、そのついでに戦力を強化する。それだけのことをしたうえで異世界侵略という悲劇を広げたい。
その為の準備は少しずつだが確実に進んでいる。
ホグニを討たれたのは中々に痛手だったが、しかしそれで終わるほどミザリは温い悲劇を求めてはいない。
そもそもミザリが召喚し契約し転生させたサーヴァントは、あえて言うならば初期メンバーだ。
既に禍の団に根を深く張り、戦力が拡充しているなら深手というには程遠い。禍の団で得たいくつものデータを流用すれば、同等以上の戦力を集める当てはいくらでもある。
だからこそ、ミザリは冷静かつ余裕を持ちながら堅実に対応を進めている。
リゼヴィムの悪意と遊び気質に則った行動は一種のデコイとしても機能する。この世界を通り越して異世界にまで悪意を広げようとしていることもあり、当然だが脅威度が違う為相手は勝手に注力してくれるのだ。
「……どうせ死ぬのなら、復讐して無残に相手を殺せる死に方をしま

せんか……と」
同時に人造惑星素体探しの一環で始めた自殺支援サイトの活動も行いつつ、ミザリは別のウインドウで開いている事象を確認する。
「……極晃星（スフィア）、か」
星辰光（アステリズム）を超える星辰光（アステリズム）。ザイアから流出したデータに存在する中で、間違いなく最強の力。
会得できれば龍神に通用する余地がある。だが同時に、狙って習得できるほど甘いものでもない。
その習得における絶対条件は三つ。
一つ。神星鉄（オリハルコン）レベルの星辰体感応物質の保持。これは技術的な問題なので、人造惑星を多数保有する禍の団なら何の問題もない。
一つ。極晃星の力の軸線になる、天元突破させるだけの余地がある特化した性質。これらは通常の星辰光でAランクレベルがあれば行ける上、発動の際の感応で高めることもできる以上問題は一番薄い。
そして、最大の条件。これが問題だ。
「……人生における勝利の答えを共有できる、想いを通じ合わせる存在か」
これは極めて難しいだろう。
人生においてそこまでのレベルで和えることができるものなど、はっきり言って極小レベルだ。数千年を生きる悪魔や神ですら会えるかどうか。
まさに世界の命運を左右するレベルで、物語の主役となれるような者達のみが得られる力だろう。
だからこれを得ようと思って得られるものではないと分かっている。
……だが、しかし。
「僕の勝利（答え）は決まっている。だとすれば―」
問題は、それを双方向で成立させる方法だ。
それが成立するまでは、試すのは避けるべきだろう。
ザイアから流出した技術である以上、リーネス含めた神の子（グリゴリ）を見張る者が知っている可能性は高い。もし勘づかれれば、間

違いなく何かしらの対策を取られるだろう。
だからこそ、当面は表に直接出るわけにはいかない。チャンスを逃せばその時点で詰むのだから。
故に当面は後方支援に徹し、リゼヴィムの援護をするべきだ。
もちろん、その過程で運命が殺される危険性はある……が。
「それはそれですっごく悲しくなれそうだし……ね？」
想像するだけで涙が出てきそうな嘆きに、ミザリは震えながら堪能すらしていた。

和地Ｓｉｄｅ

「……そろそろクリスマスかぁ」
俺はふと、そんなことをぽつりと呟いた。
「そうね。私達が再会してから、漸く半年そこらだっていうんだから驚きよね」
カズヒねぇもまた、俺の隣でそう呟く。
今俺がいるのはカズヒねぇの部屋である。
一応言っておくが、エロいことはしていない。する時はあるが今回はしていない。
猿じゃないんだ。常に二人っきりでは盛りっぱなしなんてあほなことはしない。
俺達は今、映画を見ながら二人っきりの時間を堪能していた。
ふっふっふ。こういう時間も彼氏彼女の関係ならいるだろう。
イッセーならおっぱいに手を伸ばし、リアス部長達辺りならむしろそれを喜んで受け入れるだろうが、俺は肩を抱く止まりだ。その辺はき

ちんと切り替えさせてもらう。
ちなみに見ているのは分かり易くコメディ系だ。バッドエンドになる余地が欠片もないからこそ、楽しんで見ることができるという物だろう。
ただまぁクリスマスを舞台にしていることもあり、ちょうど俺達の時期も十二月だから尚更そう思ってしまった。
それにまぁ、クリスマスは俺達D×Dも色々と動くからなぁ。
「……しっかしまぁ。駒王町の人々にプレゼントをこっそり配るとか、中々洒落た真似ができるもんだな」
「そうね。まぁ色々と危ない目に知らぬとはいえ巻き込まれているのだもの。それぐらいの役得はあってしかるべきだわ」
そんなことを言いながら、俺達は映画のクライマックスを楽しんでいる。
ああ、偶のこういう時間……いい。
ここ最近、本当にトラブル続きだから尚更だ。最近ひと月に二回レベルで国家存亡レベルの大激戦に巻き込まれているぞ。厄年か。
リゼヴィムやミザリならクリスマス前後にあえて狙って何かしてきそうだし、このほっこりとした時間はなんとしてでも大切にしないと。
俺は心の底からそう思いつつ、この愛し合う二人の時間を堪能していた。

イッセーＳｉｄｅ

……なんで俺、リアルタイム盗撮映像なんて見ているんだろう。

そんなことを思いながら、俺はカズヒが自分の部屋に仕込んだ隠しカメラの映像を見つつ、真剣な表情でそれを確認する南空さんの方を向いた。
「九成怒るぞ？」
「覚悟の上よ！」
そんな真剣な表情で南空さんは断言する。
そしてそのあとちらりとベッドの上で布団に包まって丸くなってるリーネスを見ながら、困り顔でため息をついた。
「まったくもう。和地が盛大に男を見せておきながら、逆にその所為でヘタレるなんて……リーネスもリーネスだって」
「……まぁ確かに。自分で自分の精神に魔術かけるほどだしなぁ」
なんでこんなことになったのかというと、俺がリーネスの秘密を知ってしまったことが原因だ。
リーネス、九成に惚れちまっていたらしい。
なんでも自覚したのはつい最近で、アウロス学園の体験入学の時に我慢ができずにカズヒと南空さんに相談したらしい。
二人はむしろ歓迎ムードで背中を押しているんだけど、リーネスが素面で九成に告白できなくて、こうしてグダグダになっている。
アウロス学園を防衛した時に俺がそれを知ったことから、こうして男の視点でアドバイスを頼まれるようになっちまった。
一応その辺しっかり筋は通すカズヒ達だから、それなりにお礼の品は受け取ってるけど。……具体的に言うと、新しく買ったエロ本やエロゲを二人の部屋に隠してもらっている。
いや、俺もどうかなーとは思っている。だけど、そんな場所に隠さないと、リアス達が見てくるんだ……っ。自然体でそんなことを話してくるんだ。しかも一緒にエロゲをプレイしようとしてくることまで！　とどめに教会トリオは桐生の言葉を真に受けて全裸でしようとしてくるし！
正直男としてすっごくメンタル的にあれで、カズヒは見つけ次第鎮圧してくださってありがとうございます！
女の部屋に隠すのもあれだけど、二人は見たりしないし見ても言っ

たりしないから、ガチで助かってる。本当にありがとうとございますです、ハイ。
だから俺も男の立場でアドバイスすることはいいんだ。
俺もモテるけどそれはそれとしてモテる男に嫉妬する奴だけど、それはそれとして九成に恋するリーネスは応援したい。九成は良い奴だし、リーネスも良い奴だからな。
だけどさぁ、これどうよ？
カズヒが自主的に隠しカメラを設置しながら九成といちゃついて、その要素を見たうえで男の視点で意見を聞きたいって話になってる。そもそも九成が相手だから、九成自身にアドバイスを求めるのもあれだ。あとあいつもなんだかんだで頭が回るし、勘づかれるリスクもあるんだろう。
だからって自分がいちゃつく光景を隠し撮りするなよ、カズヒ。南空さんも、なんでこんなところでポンコツ発揮してスルーするかなぁ？
「と、とりあえず一緒に何かの映像を見ることから始めたらどうだ？九成も戦闘職だし、レーティングゲームの映像を、今後の新型プログライズキーの参考資料的な感じにして、使うことになる場合の意見を聞きたいとか」
「あ、なるほど。その手があったわね」
南空さんは納得してポンと手を打つけど、リーネスはなんか痙攣し始めていた。
「一緒に映像……あ、あわわわわぁ……」
……これはなんていうか、前途多難だな。
とりあえず、九成頑張れ。
俺も人のことは全く言えないけど、モテる男はそういうのに積極的に察知することが必要だぜ？　かつての俺みたいにすっごくディスられかねないからな？

英雄乱戦編　第三十七話　天界来訪の裏で

和地Ｓｉｄｅ

さて、身だしなみはこれでいいか。
ちょっと念入りに身だしなみを整えてから、俺は共有洗面スペースを出ると、地下に向かう。
本日、オカルト研究部のメンバーは天界にお呼びされることになっていた。
クリスマス関連の話も踏まえてらしく、ミカエル様からお呼びがかかった形になる。和平が進んでいる証拠と考えるべきか。
オカルト研究部は悪魔や堕天使はおろか、他神話の出身だっている。そんなメンツが天界にお呼ばれするとか、和平が結ばれる前は絶対考えられないだろう。
こんな変化が続いていけばいいと思う。ただ、うるさい人は絶対文句や不満を出すんだろうなぁ。
こと教会の戦士などは、一年足らずで凄まじい勢いで進んでいる和平に思うところがある人が増えているらしい。ただでさえ禍の団による連日のテロで物理的に負担がかかり、更に和平が進むことでガス抜きの機会が減ることで心理的な負担もかかっている。そもそも一年足らずで主だった異形の勢力と和平がほぼ完了している異例のペースは、時間的余裕も削っている。
クリフォトによる異世界侵略計画などで上も余裕がないからな。何とかガス抜きの機会を設けようとしているが……間に合うんだろうか？
ちょっとその辺が不安になっていると、リヴァ先生を見つけた。
そういえば最近、リヴァ先生大人しいんだよな。
いや、普段からムードメーカーというかバカ騒ぎをする側で、その

辺はいつもと変わらない……様でいてなんか控えめというか。
今も俺が近くに来ているのに気づいてない感じだし。
……よっし！
「リ～ヴァ先生っ」
俺は飛び掛かる様にして、リヴァ先生に抱き着いた。
「ひゃぁっ!?」
おお、意外な反応。
本当に気づいてなかったか。珍しいな。
そしてそんな珍しい反応をするということは、だ。
「もしかして最近悩み事でもあるのか？　リヴァ先生」
「……おぉ～。流石カズ君、鋭いわね」
やっぱりか。
リヴァ先生もこの反応からして、無理に隠そうというわけでもなさそうだ。
まぁこの年で報連相の重要性を知らないわけでもないしな。おそらく心の整理がついてからってことなんだろう。
なら、もうちょっとぐらい様子を見るべきか。
まぁリヴァ先生ならそれぐらいはきちんとできる。余程切羽詰まってない限りは、それぐらいするのがいい男だろう。
「ま、リヴァ先生にも甘えられるとそれはそれで嬉しいからさ？　言える時に言ってくれ」
「……むぅ。それは先生のポジションじゃないんだけどなぁ？」
お、ちょっと調子が戻った。
それにちょっとほっとして俺は少し微笑んだ。
さて、それでは行くか、天界に!!

そして十分後。

「天・界・到・着！」
「こんにちわーっ！」
うん。いつも通りになってくれてありがたい。でもうるさい。
リヴァ先生とヒマリが組むとこうなるとは思っていたけど、本当にうるさい。
「ほ、ほぁあああああ……っ！」
「ここが天界、うわぁ……素敵」
この点における貴重なツッコミ役たるヒツギとルーシアが完全に無力化されているから尚更だ。
まぁ、敬虔な信徒からすれば天界に行けたのなら感動も当然か。ここは俺が動くべきだろう。
「はいはい二人ともその辺でねー？　天界の人達に迷惑がかかるから静かにしなさい」
「「ラジャー！」」
はいはい敬礼ありがとうねー。
とはいえだ。個人的にも興味深いが、ただ気になることはある。
……なにせ、オカ研は基本的に悪魔主体の組織だからな。その中核がリアス・グレモリー眷属である以上、その事実は変わらない。
天界に入っても問題ないようにする為の技術は完成しているからこそ、それでもＯＫが出た。悪魔や堕天使との技術交流で、教会や天界がせざるを得なかった腐本の行動も何とかなり始めている。
だが、その変化は一年も経ってない状態でなったんだ。急激な変化と言っていい。
……追いつけない奴はごろごろいるだろう。そこに関しては文句の言いようがない。
できない奴にやれということほど無意味なことはない。人間は全力を抑えることはできても、全力以上を出すことは普通は無理だ。そ

んなことができるのはカズヒねぇのような特例だけだからな。
テストの点と同じだ。全ての答えが分かるのなら、わざと間違えることで点を下げることはできる。だがそもそも、正解が分からなければ点を取ることはできない。
結局世界という物は、最初から切り捨てるつもりがないならボトムに配慮するしかないんだ。できない奴はできない以上、そこを考えるしかない。
……今度上に上伸してみるか。異形社会って階級にしろ実力にしろ、上を基準に考えているきらいがあるからな。気を使っているにしてもどうしても見落としが生まれそうだからな。
そんなことを思いながら、俺たちは天界を見ながらミカエル様のところに向かっていく。
ふと俺は、ちょっと嫌なことを思いついた。
……天国という物は、ミザリからすれば超進軍したいところなんじゃないだろうか。
いやアイツなら絶対やりたいだろう。自分含めて悲劇に塗れたがる奴からすれば、天国に住んでいる人を悲劇に叩き落すというのは絶対にやってみたいことだろう。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「あ～。死後の世界襲いたい」
『誠にぃ、いきなりどうしたの？』
「いやぁ、僕は自他問わず多くの人達を悲しませたいからね。質と量

の追求から見て、死後の世界に住んでいる人達を悲しませたいとは思いたくなるよ」
『冥界って一応あの世だよね？』
「冥界は地獄だからね。やるなら天国とか極楽浄土がいいんだよ」
『でもそんな簡単に行ける？　難しくない？』
「でもさぁ？　悪魔が天界に入っていけばそれだけでダメージが入るでしょ？　なんか急に凄くやりたいことができるっていうかなんていう感じ？」
『あ～なるほど。そういう時あるよね～』

「そんな息子に提案でっす！」

『あ、お義父さん。どしたの？』
「ふっふ～ん。ちょっと思いついたことがあってねぇ？　具体的には……」
「……へぇ？　それはちょっと面白そうだね。流石父さん」
「そうだろぉ、マイサン。ま、物のついでになるだろうけどさ？」
「ならちょうどいいや。新顔にも力を貸してもらおうかな？」
『お～。なんか面白そうだね？　ちょっと楽しそうだよ、コレ』

英雄乱戦編　第三十八話　現実逃避のドアノブ（前編）

和地Ｓｉｄｅ

そんなこんなで天界見学も終わり、俺達はこうして帰ってきた。
そして帰ってきた時、来客が来ていた。
その人物は紫藤トウジ。イリナの父親でプロテスタント側の局長を務めているとか。
今回のクリスマス案件における責任者でもあるのだが、問題はそこではない。
具体的に言うと、天界の研究成果を届ける役目を受け取っていたらしい。
……天使が悪魔とＳ○Ｘしても問題なくする為の部屋に繋がるドアノブだ。
……所詮、天界も三大勢力、いや異形社会だということとか。
というより、だ。
「これが天界の技術力ね、凄まじいわ……っ」
「うふふ。これは興味深いですわね」
などとリアス部長や朱乃さんが言っているんだが、使わせてもらいたがっているなこれは。
そんな感じで女性陣はかなり興味深そうだったりする。ツッコミを入れろよお前らと言いたい。
「イッセー。俺が見れなかった天界のおっぱいを見るんだ。お前の煩悩を燃やして見せろ！」
「はい先生。俺、これからもエロエロで煩悩を力に変えてみせるよ！」

馬鹿師弟の方はどうしたものか。っていうか常々思うがイッセーもそろそろ落ち着いて欲しいんだが。具体的には引き付け周期を平均八日ぐらい伸ばしてこい。未だ平均２～３日とか色々アレだからな？

……そもそも周期レベルで引き付けを起こすことがアレなんだけどな。まぁ京都の一件を思えば、むしろ良く耐えたレベルではあるけど。特例という物が存在することだけは理解してやらないと。

「……アニル。私って今、信仰に揺らぎそうじゃんか」

「落ち着いてくだせぇ。ベーコンできましたから」

そして一部のガチ常識人のメンタルがやばい！

「……私の兄はリュシオンだもん……私の兄はリュシオンだもん……リュシオン、だもん……」

ルーシアのメンタルが真剣にやばい!?

もぉおおおおっ！　ちょっとこれ流石にどうよ!?

っていうかあのベッドからして、絶対ラ○ホを意識しているだろ!?

力の入れ所が間違ってるだろ三大勢力!?

畜生。所詮は天界も三大勢力の一角でしかなかったということか。種族が違うと価値観が違いすぎるからなぁ!?

っていうか、俺はいったいどんな表情で見てればいいんだ!?

……なんかもういいや。流石にここでいきなり敵襲とかはないだろう。

ちょっと過去を思い返そう。そう、俺は現実から逃避する……っ！

そう、俺はかつての話を思い出した。

それはアウロス学園を防衛したのちの、Ｄ×Ｄメンバー合同での一種の意見交換会。

アニルの造った燻製をふんだんに使用したサンドイッチをお茶受けに、俺達は今後の意見交換を行っていた。

「……元七十二柱用ＴＦユニットですが、とりあえず試験生産と運用試験が始まる段階にまで到達しました」
転移後に暴れに暴れて敵を倒しまくって生還したシーグヴァイラ・アガレスは、そう渋面で告げる。
渋面の理由は単純明快。今回の襲撃で危機意識が跳ね上がったことで、生産性及び整備性を重視した形で第一弾を開発することが決定した為だ。
様々な派閥が出来て開発どころか設計段階で難航していた元七十二柱用ＴＦユニットだが、その仮定でも既に機体設計を進めている物は少なからずいた。
その派閥は「一機種だけ作るが、それぞれの家格に合わせて数種類の仕様変更を作る」だ。性質上基本設計は同一になるだろうからと、いくつかのパターン分けを行っていたらしい。
そもそも性質上量産性も高く、同型機の多数生産はその分データを取りやすい。これにより一気に話は進み、結果として現在試作期が開発されて運用試験が行われているとのこと。
しかしそこはロマンを愛する神の子を見張る者発祥の技術。同時タイミングでもう一つの派閥の意見も採用され、そこに合わせた調整が行われている。
それこそが「一機種だけだが固定武装や増加装甲で仕様変更する」派閥だ。
どうやらその派閥は戦力拡張の必要性と意見を通したい願望から、妥協案として「他のプランとの複合」という発想に到達したらしい。結果として仕様変更があるだけで一機種だけという観点から、派閥として補佐に回ることで対応を可能にした同盟を水面下で進めていたらしい。
この提案も「仕様変更の種類を最小限にできる余地がある」として相手側も手を取ったことで、派閥の規模が絶大に高くなったことが決定打にもなったようだ。
ついでに言うとヴィールの説教も別の意味で聞いていたらしい。「とりあえず同型機を量産してその場をしのげ」というごもっともな

意見もあり、冥界政府も「まず一機種量産でいいんじゃない？」という空気が生まれていた。他の派閥でまとめて潰されかけた「カラーリングオンリー」に力を注ぎかけていたこともあり、シーグヴァイラ・アガレス達も「それになるぐらいなら」と早期に折れざるを得なかったとか。

性質上ある程度の拡張性を盛り込む形で開発が進んで試作機のテスト真っ最中。元から拡張性や冗長性を組み込んだ設計であることから、基本データが確立したらまず同一型を製造。その後の同時進行でデータが確立し次第、家柄に合わせた仕様変更やユニット換装機能を組み込む予定だとか。

「質問なのだけれど、それがD×Dにも運用できる可能性はあるのかしら？　次期当主が四人にルシファーの系譜までいるわけでしょう？」

カズヒねぇが手を上げると、シーグヴァイラは力強く頷いた。

「そこは踏まえております。現段階では元七十二柱が率いる軍のフラッグシップ機とする予定ですが、必ずしも当主が乗る必要はないようにします」

そう言いながら、シーグヴァイラ・アガレスは魔方陣を操作して映像を切り替える。

「現段階では即時導入仕様しか開発されてませんが、この段階で基本構造を八割同一のままで仕様変更が可能なように開発されております。生産数においても、当初から元七十二柱本家分だけにとどまっておりません」

そう言いながら映し出されるは、換装用の機構が組み込まれたペーパープラン。

そして続くように、いくつかの仕様変更モデルが出てきている。

なるほど。その辺は考えているようだ。

場合によってはそれそのものをステータスにするということも考えているのだろう。

まぁ、これで少しは戦力が強化されてくれればいいんだけどな。

「……確か、マグダランが試験運用者に指名されていると聞いたが」

と、そこでサイラオーグ・バアルがそう呟いた。
……次期当主の方々がこぞって反応しているが、どちら様？
ただそれ以外のメンツはよく分かっておらず、代表する形でヒツギがサイラオーグ・バアルの方を向いた。
「なんか渋い顔してるけど、因縁でもあんの？」
「……俺の腹違いの弟でな。本来はアイツがバアルの次期当主になる予定だった」
ああ、それは微妙な表情になるだろう。
「その所為で相当恨まれているし、家でも俺とは別の意味で距離を置かれていてな。ただ俺が次期大王に反対している者からすればマグダランは必須だろうから、大王派の有力者があいつに箔をつけようというのだろう」
そう頷きながら言うけど、それって大丈夫なのか？
「大丈夫なんですか？　その、嫌がらせとかしてきそうですけど」
イッセーも心配してそういうが、サイラオーグさんはその直後にあっさり頷いていた。
されてるのか。
ただ、そのあとサイラオーグ・バアルは首を横に振る。
「……いや、確かに多少の嫌がらせは受けているが気にしなくていい。追放された無能に次期頭首の座を奪われれば恨まれて当然だし、仮にも実の弟の名誉を個人的な都合で奪ったのでな。あいつが俺個人に向ける嫌がらせは、全て俺個人で受け止めると決めている」
……難儀な人だ。
合わないところは合わないが、少なくとも強い人だ。その鍛え上げられた鋼鉄のような心身の強さは認めるべきだろう。
ただ、カズヒねぇは思うところがあったのか、小さくため息をついた。
「……不満が出そうだとは思ったが」
「いえ、そういうわけじゃないけれどね」
カズヒねぇは少し視線を逸らしていたが、すぐに意識を切り替えたのかサイラオーグ・バアルに向き直った。

「阿呆極まりない奴の経験論だけれど、向き合う気があるなら腹の内は明かせるだけ明かした方がいいわ」
その言葉に、誰もが思わず息をのむ。
この場にいる者達は、全員がカズヒねぇの前世について知っている。リゼヴィム・リヴァン・ルシファーとミザリ・ルシファーに相対する以上、聖書の神の死や道間誠明関連の情報は必須事項。あいつら絶対自覚的にその爆弾を使ってくるだろうから、専門対策部隊ぐらいは裏情報を知らないと話にならない。
だからこそ、その言葉の意味もほぼ全員が同じように理解しているだろう。
兄に対する慕情を切って捨てられた直後に、それに縋るしかない状態でこじらせ続けて醸造させ、最悪の形で爆発させた。
そんな経験を持つ者だからこそ、言えることは確かにある。
「恨まれるにしろ決裂するにしろ、今のままだと良くないと思うわ。貴方のスタンスぐらいはしっかり理解させておいた方が、そのマグダランとかいう奴も恨み方を定め切れるでしょうから」
「……そうだな。考えておこう」
サイラオーグ・バアルは瞑目したうえで、立ち上がって頭を下げる。
「貴重な提言に感謝する。道間日美子の人生に基づく言葉、それを語ってくれたことそのものにもな」
「まぁ参考にとどめておきなさい。仮にも貴方の弟なら、私や誠にぃみたいな拗らせ方はしないでしょうし」
カズヒねぇも目を伏せながら、そうさらりと告げる。
まぁ確かに、サイラオーグ・バアルはその点がやばいからな。
半生の壮絶さでは道間日美子とは別の意味できついところがある。それでも捻くれたり性根を腐らせなかったのは、母親の応援もあったとはいえかなりの強さだ。
半分とはいえそんな男の弟だし、そもそもカズヒねぇとミザリはそれぞれ別の意味でぶっ飛んでいるからなぁ。特例とか希少なケース止まりに考えた方はいいだろうし。
ただ精神性とかに鋼の形容が付けられそうな者同士、ある種のシン

パシーはあるだろう。
……あ、まずい。
「誰か精神安定剤を！　しなくていい嫉妬心が燃え上がってきた!!」
「お前落ち着けよ。そういうところだぞ」
イッセーの呆れた目が突き刺さるけど、お前も阿呆な嫉妬心むき出しにするだろよく。

英雄乱戦編　第三十九話　現実逃避のドアノブ（後編）

和地Ｓｉｄｅ

とりあえずハーブティーが出されて俺が落ち着いてから、話が別の段階に出てきた。

と、言うかだ。

「……さて、こいつが国際警察機構（ＩＣＰＯ）から派遣されてきた引岡＝Ｆ＝ディーレンだ。もう会っている奴は知ってるだろうが、道間日美子（カズヒの前世）のダチだとよ」

「よろしく頼む。ま、俺は人間世界側との連絡とかが主体だろうだけどな？」

アザゼル先生の紹介で引岡さんがみんなに教えられるが、引岡さんは俺達を見回した後急に後ろを振り返った。

「……よっし落ち着け俺ぇ。国際警察機構が女学生に興奮するなぁ。普通にキャバクラやソープで発散しろぉ。イメクラあるだろ日本にはぁ？」

「……神の子（う）を見張（ち）る者の運営してるところ、紹介しようか？」

壁に頭を打ち付ける引岡さんに、アザゼル先生が思わずガチな親切心を見せている。

ちなみに周囲はちょっとぽかんとしてから、大半がイッセーを見てちょっとうつむいた。

おっぱいドラゴンが濃厚すぎる。感覚がマヒしているよなぁ本当に。

「中々面白い刑事さんだねぃ。悪祓銀弾（シルバーレット）のダチとは思えねぇな？」

「逆よ美猴。道間日美子(私)はブラコンを一切隠さず行動してたから、当たり前のようにセットになったの」
美猴のからかいにさらりとカズヒねぇが返すけど、実際そうだよなぁ。
接木さんも普通にカズヒねぇと下ネタ会話もできるしな。
「ああ、思い出すぜぇ。エロ会話に文句言った女子にキレた男子のセクハラ発言に対し、実の兄貴を今でもオカズにしてると堂々とぶちかましたあの女傑っぷり。勇ちんが義姉ちゃんにガチ惚れしてんのに余計なからかいを入れたやつの眼球ギリギリにコンパス突きつける脅しっぷりも」
「私も手に取るように思い出せるわ。女子の水泳を意識しすぎて幻覚みた挙句、水着女子が出現したとパニックを起こしながら壁に突っ込んで失神した事件。おまけに保健室で起きたら体育の事実を忘れ、水着女子が現れたと勇ちんに掴みかかったことも含めてね」
……本当に、何してんだろうね二人とも。
軽く引き気味な視線が向けられるが、事実らしいから酷い話だ。
あと巻き込まれた接木さんに視線が向けられるが、接木さんは何故か得意げだった。
「ふっふっふ。義理の姉貴と結婚して子だくさんな今の俺は、間違いなくこの場で勝ち組だろ？」
「……畜生がぁっ！」
そしてイッセーがかってに撃沈した。
まぁ義理の姉とか、実の姉より希少価値だろうしな。そしていたとしても結婚までできることはまずないしな。
まぁそれはそれとしてだ。
「そういえば気になってるんですけど、引岡さんが仮面ライダーに変身したデバイスって何なんですか？　リーネスが言ってないなら別件？」
その辺りを聞きそびれていたので、俺はその辺を訊いてみる。
その瞬間、カズヒねぇと鶴羽がため息をついてリーネスはあらぬ方向にそっぽを向いた。

あとイッセーがリーネスに同情の視線まで向けたんだけど、マジで何なんだ？
「……あれ？　あんた言ってなかったのか？」
「ちょっと色々あって、私もあの日の前日に初めて聞かされたわ」
引岡さんが首を傾げてカズヒねぇがそう言うけど、そうなのか？
俺達が困惑していると、鶴羽が頭痛を堪えているのか頭を抱えている。
「カズヒとは別ベクトルにこじらせたシスコンとかいうユーグリッドが、東京でロスヴァイセ先生にコナかけたことあるでしょ？」
逆逆。いや、わざとかもしれん。
いやほんと、あの時は大変だった。
独自開発のプログライズキーまで持っている連中のかなりガチな作戦だったからな。
戦術的な動きや陽動作戦まで仕掛けられたものだ。現在日本では防衛費の倍増が確定したらしいし、日本の技術力に目を付けた数か国が資金援助と引き換えに共同開発を提案しているとか。
まぁ、日本は武器輸出が禁止されているからな。高性能の完成品ができそうだから、共同開発にして自国で確保できるようにしたいんだろう。
「あいつらはいわゆる日本の特殊な宗教観や善悪の判断基準を敵視して日本撲滅を目論むテロ組織、トワイライト師団の実働部隊だ。最近いろんな宗教系テロ組織の橋渡し役になったり国外の日本関連企業が狙われたこともあって、ＩＣＰＯも橋渡し役で色々動いてたんだ……が」
そう説明してから、引岡さんは盛大に肩を落とした。
「……気づかれて集中砲火を喰らってな。脳挫傷で植物状態になるとこだった」
「……そこでＩＣＰＯに対する技術協力の名目で、私が新型変身デバイスの試験体にする形で機能を補佐するＡＩチップを仕込んだのよぉ」
と、凹む引岡さんにフォローする形でリーネスが視線を逸らしたま

ま説明する。
「本当に、もっと早く言ってほしいわよ……っ」
カズヒねぇが割と苛立った声を出す辺り、本当に教えられてなかったらしい。
最近甘えてくることが多いけど、それが理由か。
「ちなみにデバイスはバヨネットライザー。試験的に作っていたショットライザーとスラッシュライザーを足して割ったデバイスねぇ？」
「武器としちゃどっちつかずだが、サブウェポンとしては便利だからな。リモートライザー含めてD×Dで採用することも含めてる。……ま、そういう意味じゃ感謝してるぜ？」
補足説明をしながらアザゼル先生が引岡さんの肩を叩くけど、引岡さんは落ち込んだままだ。
「……何がきついって、別れた嫁さんと娘は来てくれたのに息子だけ見舞ってくれなかったことだよなぁ。普通逆だと思うんだけどよぉ」
「「……結婚できてたのか……っ」」
カズヒねぇと接木さんが凄い戦慄している。
「……イッセー先輩がいるんですから、まだマシな引岡さんが結婚できてもおかしくないのでは？」
小猫、そのツッコミはいろんな意味で酷い。
「そういえばバツイチだって聞いたけど、離婚の原因は何？　やっぱりセックス要求が多すぎたとか？」
「いや、俺は酔った勢いで風俗行ってキレられただと思うぜ日美っち」
「そんな!?　愛し合う二人がセックスを求めたり、ちょっと風俗ではしゃぐだけで離婚なんですか!?」
悪友だからこそできる言い草のカズヒねぇと接木さんに、イッセーが戦慄するがそりゃそうだろ。
「いやイッセー、性的関連は離婚の原因としては割とメジャーだぞ？あと風俗どころかキャバクラ通いでキレる女性は数多いからな？」
男と女は性的観念の傾向が大きく違う物なんだよ。統計学的にも生物学的にもほぼ証明されてるから。

しかし引岡さんは首を横に振った。
「いや、無理強いどころかあいつが求めた時以外は逆にしないようにして平均週一回半だ。風俗どころかキャバクラも、上司に誘われたら即絶叫土下座で衆目を味方につけた回避を徹底してる」
じゃあなんでだよ。
むしろそこまで徹底している方が少数派な気もするぐらいの徹底ぶりだぞ。上司の誘いに土下座で抵抗するレベルなら、流石にちょっとは相手にも我慢してもらうべきではとか思いたくなるレベルだけど。
脱線しているけど凄く気になる内容に、視線がかなり集まっている。
そして引岡さんは、凄いすすけた表情になった。
「……結果ノイローゼを起こし、それが原因の事故で重体にまでなっちまってなぁ？　周囲もかみさんも満場一致で、そんな理由で死なれたら立ち直れなくなるから離婚ってことになった」
……。
俺達は、イッセーと引岡さんを交互に見た。
「……イッセー。合同誕生日プレゼントなら考えるから、半年前には相談してね？」
リアス部長の発言が答えだ。
「……畜生！　いまだに週一の壁が厚いから文句も言えねぇ!?」
絶望の絶叫が響き渡った。

離婚後も親戚ぐるみで付き合いがあって、何かあったら助け合う関係の離婚とかめったにないよなぁ。
俺は引岡さんの離婚話を思い、ちょっと思い出し苦笑いをしてしまった。
なんでも元妻とは今でも電話で話したりするそうだ。あと娘さん

は年もあって潔癖な態度をとりそうだけど、親戚関係で性欲の強さやあほ事件を教えられていたからか、本当に水商売に一切いかない様頑張ってきたことを評価されて好かれているぐらいらしい。逆に息子さんはそれで悪印象を覚えていたのか、早めの反抗期レベルで嫌われているとか。

まぁ、男女の性的観念のずれはあくまで傾向的な物だからな。どちらにも少数派レベルで逆レベルはいるものだ。

……俺もその辺、上手くバランスをとって生きよう。

「忘れるな！　お前の次の目標は！」

「天界の、おっぱいです！」

「イリナちゃん、後でドアノブを貸してくれませんか？　いえ、少しお父様と一緒に解析してから返しますから」

「……か、改良プランとかを出してくれるなら……」

まだやってるのかよ!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……少しいいかな、ヴァーリ」
「どうしたんだ、曹操。俺に直接接触するとは」
「天帝が冥界で妙な動きがあることを掴んでね。おそらくは―」
「ハーデス神め。リゼヴィムまで利用して三大勢力に嫌がらせとはね」
「過激派ポセイドン信奉者との戦いを逆手にとって、逆に接触をしやすくしているようだ。長続きしている割には冥府の人的被害も少ないようだしね」
「カモフラージュにする為にわざと倒さないわけか。やれやれ、老人の恨みつらみを若者に向けないでほしいものだ」
「元とはいえ、俺と同じテロリストだった君に言われたらおしまいだね。ただそれによると、どうもアポプスと接触した様子で、その上リゼヴィムと距離を取り始めているらしい」
「……独立したアポプスを経由したなら問題なしというわけか？　言い訳として下の下だが、彼の立場や現状だと十分か」
「自分の立場を自覚的に武器にする老害は始末に負えない。上手く利用された身としては尚更そう思うね」
「で、奴は何を伝えたんだろうな」
「そこまでは。天帝もボカしているみたいだしね」
「……だがリゼヴィムが動く可能性は大きい。さてどうしたものか―」
「簡単だろう？　兵藤一誠と共に動け」
「……なんだと？」
「分からないのかい？　禍の団を統括する組織の大きな作戦活動に、彼は高確率で巻き込まれる。ああ、九成和地もいるのなら尚更だし、二人が共に動くのなら即ついていった方がいいだろう」
「……ゲン担ぎだな。だが、確かに当てとしては十分すぎる」
「ふふ。俺も天帝が機を見計らって指図をするだろうからね。お互いに暴れられる時を楽しみにしようじゃないか？」

英雄乱戦編　第四十話　甘やかし尋問（前編）

和地Ｓｉｄｅ

その日の夜、俺は自分の部屋でなんとなく釣り道具を手入れしていた。

そういえば最近は手入れをしてなかったからな。忙しいこともあったから、行くにしても釣り堀ぐらいだ。

カズヒねぇも釣りをするし、イッセーの親父さんも釣りをする。今度何人か誘って釣りでもできるといいなぁ。

とはいえ、クリフォトが動いている今の段階でするのは難しい。決着がつくなり何かしなければ、対クリフォト部隊でもあるＤ×Ｄは無理があるだろう。

イッセーも忙しすぎて、悪友である松田や元浜と年末に遊ぶことは無理だったしな。

しかもヴァーリが訳の分からない呆けをしでかしたことで、あいつはエロビデオを人と一緒に見たくなくなってしまった。なんでも本番に突入した映像を見ながら、ヴァーリは「何を楽しめばいいんだ？」とか言ったらしい。解説を頼まれるようにしてみる羽目になったりと、あいつもアイツで大変だな。

あとヴァーリはもう病気だろう。一度真剣に脳の検査をするべきな気がする。もしくは正真正銘真性の同性愛者かだ。死後変態に覚醒した歴代と言い、ストレートに突き抜け切っているイッセーと言い、二天龍は基本的に変態のはずなんだが、異例すぎるだろうヴァーリ。

「……そういや、ユーグリッドも変態だったな。やはりデッドコピーで歴代上位クラスだったのはそれが理由だろうか？」

真剣にそう考えてしまう。

アウロス学園防衛戦の後、ユーグリッド及び愛姉戦隊グレイフィアーズの映像が上役にも目に入ってしまった。
……数日中にグレモリー本城に、グレイフィアさん当ての見舞いの品が山になるぐらい届いたらしい。魔王派どころか大王派の上役からも送られて来たとか。
まぁ、あれは同情しかないだろう。ユーグリッドを相手にグレイフィアさんが本気の尋問をしているそうだけど、ユーグリッドは本当に楽しそうらしいし。
俺も胃薬でもお見舞いに送るべきだろうか。快眠グッズか何か探してみようか。
そう思っていると、コンコンとドアがノックされる。
「入っていいかしら？」
あ、カズヒねぇだ。
わぁい。テンション上がってきた！
「オッケーです！」
素早くＯＫを出すと、カズヒねぇはそのままドアを開けて入ってきて……あれ？
「ど、どうもぉ？」
「お邪魔しま～す」
リーネスとリヴァ先生？
珍しい取り合わせなうえ、そもそもなんでカズヒねぇがこの流れで二人を連れてきたわけだ？
……いや、違うな。
二人とも最近は様子がおかしいところはあった。もうちょっと様子を見てからにするべきかと色々から判断してたけど、カズヒねぇ的には違うということだろう。
「あ、あと残りのメンツも鶴羽が連れてくるから」
「そこまで!?」
想定外なレベルだったよこれは!?

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「アザゼル、伝えるべきことができた」
『ユーグリッドの奴が何か吐いたのか？』
「いや、アジュカからの報告だ。だからこその不可解な情報なのだがね」
『……言ってみろ、まずはそこからだ』
「アグレアス地下には旧魔王時代の遺跡があり、現政権で製造される悪魔の駒はそこから産出される結晶体が必要不可欠だそうだ」
『なるほどな。なら冥革連合は、何故アジュカですら遺跡を必須とする悪魔の駒の製造ラインを作れたか……ってことになるな？』
「無論亜種聖杯を用いたのだろうが、あれは万能とはいえ限度がある願望器だ」
『過程をすっ飛ばして結果を叶えるにしたって、具体的な方向性は必須だ。野郎、独自開発の王の駒や真魔の駒と言い、どんな聖杯の使い方をしたもんだか』
「……そして、天界の方も冥界に負けず劣らず苦労しているようだ」
『吸血鬼と和平を結べたことが仇になったな。悪魔や堕天使との和平にすら戸惑っている奴にとって、吸血鬼との戦いはガス抜きになってたわけだ』
「結果として教会の和平に不満を持っている者達は急激にそれを高めている。このままでは大きな爆発が起きるだろう」
『ミカエルのことだからなるべく自力で何とかしようとするだろうが、俺達も援護がすぐにできるように準備をしないとな』
「……ああ。それに悪魔側には別の意味で懸念点ができてしまったようだ」

『リアスをグレモリー城に呼び出した理由か？』
「ああ。教会やバアルの者に襲撃される者が出てきているのは知っているだろう？　その件について、バアルの初代殿がリアスに伝えるべきことがあると言ってきたんだよ」
『……どう考えても厄ネタだな。お前は知ってるのか？』
「……言いたくても言えない、と言っておこう。少なくとも、リアスの口から聞いておくべきことだろうからね」
『つたく。和平を結べたよし万歳……とはいかないのが、世の中の苦労するところかねぇ？』

和地Ｓｉｄｅ

今俺は、心から困惑している。
「は～い。和っちあ～ん」
「はい、お茶のお替りだよ和地くん」
「どうだ？　キュウタから即席で教わったが、一応及第点はもらってんだが」
俺は今、春っち達メイド組にご奉仕されまくっている。
そしてその隣では―
「いや、これちょっとやってみるとなんとなく面白いわね」
「そうね。たまにやる分にはちょっとテンションが上がってくるわ」
「え、いや……ちょっと？」
そしてリヴァ先生と俺に対してでかい葉っぱで風を送る、なんか金持ちがやりそうなことをやっているカズヒねぇと鶴羽。
リヴァ先生が心の底から戸惑っている流れに、当然だが俺も戸惑っ

ている。
　これはこれで確かにちょっとテンションは上がります。テンションヒャッホイ状態ではあります。
　だけどツッコミが追い付かないよ!?
　え、なにこの状況!?　俺はなんで急にご奉仕されまくっているのかな!?　それもリヴァ先生と一緒に!?
「せ、先生なんかしたかな!?」
　リヴァ先生も大混乱だ！
「「「「いつもしてるし」」」」
　そして総ツッコミだ！
　ぐうの音も出ない正論だ。リヴァ先生はそういうことしまくってるからな。俺も即座に視線逸らして援護を拒否するぐらいには正論だ。
　引っ掻き回してツッコミを入れられるのが基本的なリヴァ先生だ。自分でも意図的にそうしている節があるというか、楽しんでいる感じだからなうん。
　ただだからと言ってこの方向性でお仕置きをするようなタイプではないだろう皆。
　そういう意味では二人して戸惑っていると、カズヒねぇはリヴァ先生の足に跪くと、頬ずりをする。
「こういうのはお好み？　男女問わずテンションが上がる手合いは多いけれど」
「わぁい。それを知った理由が想像できるからちょっと困惑」
「っていうかなんでまずリヴァ先生!?　普通そこは俺だろう!?」
　なんでだ。なんでなんだ。
　思わず崩れ落ちたくなるほどのショックを受けるが、男ならばちょっとぐらい分かってくれる者もいるだろうこの気持ち。
　いや、自分の女が自分の足に頬ずりする支配欲を堪能したいんじゃない。それはそれで興奮するが、積極的に要望するようなたぐいの男になったつもりもない。
　だがそれはそれとして、なんで俺より先にリヴァ先生なんだ!?

俺が何とも言えないショックを覚えていると、その瞬間に鶴羽が俺の膝にヘッドバッド。
「……こ、ここここれが好きなのね!?　よっしゃ頑張るから！」
「頑張りすぎだろ鶴羽。それむしろ攻撃になってんぞ」
鋭いベルナのツッコミに感謝。脛の衝撃に耐えることに集中できるから本当にありがとう。
そしてだ。これマジで何なんだ。
「……いやホント、これどう言う状況？　発案者はたぶんカズヒねぇだろうけど」
こういった発案をする手合いは、俺の女においてはほぼ確実レベルでリヴァ先生がカズヒねぇの二択だ。
経験則からそれが分かる。というより、ある意味ぶっ飛んでいるこういうアプローチは他のメンバーだと自分から自発的にすることはまずないと言ってもいい。
わざと適度のふざける感じでリヴァ先生が扇動する。そうでないならカズヒねぇが引っ張る形でぶちかますかの二択になるだろう。
そしてリヴァ先生が戸惑っているのなら、計画したのはまず間違いなくカズヒねぇだ。
実際問題、インガ姉ちゃん達は揃って視線を逸らしながら苦笑気味だった。
「まぁ、やっぱり気付くよねぇ」
インガ姉ちゃんはそう言うと、そっと俺に抱き着くように胸を当ててくる。
「……まぁカズヒの発案なんだけどね？　私達皆和地君に甘えてるなぁってことになったから」
……ふむ。
なるほどなるほど。甘えてばかりはどうかという形なのか。
……うん。
俺はそれを理解して、体の力を一気に抜いた。
「じゃ、もっと甘えてみようかな？」
「お、和っちも乗り気になったわね。はいあーん」

うん。自分の女が出してきたものをあーんする、これいいな。
「……まぁ、他にも理由はあるけれどね？」
そう言いながらカズヒねぇは、リヴァ先生の足をマッサージしながら、少し目を細める。
「……貴女、何か隠していることがあるでしょう？」
「……やっぱ気づかれちゃうか～」
リヴァ先生は、あえて取り繕うことなくそれを認めた。
ま、俺も気づいていたからな。他にも気づく奴は出るだろう。
「実はちょっと気になることがあってね～。核心は出来てないけれど、念の為にアザゼル元総督には言ってはいるのよ」
その言葉に、俺達は意識をシリアスな方向に切り替える。
どうやら、かなりシリアスなことになりそうだな。

英雄乱戦編　第四十一話　甘やかし尋問（後編）

和地Ｓｉｄｅ

「……知っての通り、先生は世界大戦を経験している割と長生きしている女でしょ？　まぁそんなわけで、ちょっと気が引けるけどカズ君以外の男も経験しているのよ」

そうそれとなく俺から目を逸らしながら、リヴァ先生は話し始める。

「……第二次世界大戦前の時期、一人の魔法を独自研究している人といい仲になったことがあるわ。ま、戦争秒読み段階で変なことになりそうだから先生雲隠れしたんだけど」

なるほどなるほど。

さて、そこから一体何が―

「その男の使っていた魔法に酷似した術式が、クリフォトに内通していた魔法使いに使われていたのよ」

―なるほどな。

しんと静まり返る中、リヴァ先生は目を伏せる。

「なんていうか敵が待ってる感じがしたんで地下に確認した時、ちょうどその魔法で内通者が戦闘をしててね？　本当にびっくりしたからモロに喰らっちゃったわ……その後しっかり伸した上、掛けられてた自爆術式は無効化したけど」

なるほど、な。

最近様子がおかしかったのはそれが理由か。

しかも第二次大戦直前のドイツ。禍の団が絡んだ事件でそんな頃の遺物が出てきたというなら、厄介な連想ができる。

禍の団の派閥が一つ、ツヴァイハーケン。

ナチスドイツの流れを組む、人体改造技術を中核とする小規模派

閥。ゼツメライズキーを使うことを前提としたアステロイドというサイボーグ技術を確立させ、禍の団に貢献している連中だ。
そんな連中がいる状況下で、禍の団に繋がっている魔法使いが、昔の男が扱う術式の流れを汲んでいる魔法を使った。
最悪の答えはすぐに思いつく。
「……最悪の場合、禍の団にあいつがいることになるのよねぇ」
そう、絞り出すようにリヴァ先生は言葉を吐き出した。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……で、だ。例の件についても話とこうぜ？」
『後継私掠船団や英雄派から確認をとった。ヴォルフ・フォン・ミッドガルズはツヴァイハーケンから禍の団に派遣されたメンバーでは最高幹部だそうだよ』
「なるほどな。ヴァーリはその辺について深入りはしてねえから助かるぜ」
『オーディン殿の娘であるリヴァ・ヒルドールヴ。彼女とかつて親交のあった男が、まさか禍の団でも有力な立場についていたとはね』
「あいつにとってもきつい話だ。だがまぁ、そこは和地達にフォローを任せるとするか」
『流石に雑な対応ではないか？』
「そうでもねえだろ。嫁のフォローは旦那の仕事だ。そして俺達大人はその間に、えげつねえ部分をなるべく引き受けねえとな」
『……確かにそうだな。アザゼルの言う通りだ』
「そういうことだよサーゼクス。ただでさえガキどもに負担懸けてん

だから、こういうところぐらい大人がしっかりケツもってやらねえとな」
『……リアスやイッセー君にも迷惑をかけているしな。それにリアスにはこれから苦労を掛ける以上、それ以上の黒い部分は我々がどうにかせねば』
「リゼヴィムと繋がっている連中、そんなにやばいのか？」
『残念ながらね。ユーグリッドも詳しい事は知らないようだが、候補として絞れた者の中には考えたくないような者もいる』
「……和平を各勢力と結んで争いを止めたところで、争いたがっている者からすれば逆に敵意が生まれるってことか」
『そして、和平を加速させる外敵たる禍の団は彼らの受け皿として機能する。そこに各勢力の不満を煽っているリゼヴィムが統率までしているのでは……ね』
「あの野郎にまさかそんな才能が有ったとか、流石に読めるわけがねえ。異世界の実証ができたことでこんな事態になるなんざ、それこそ聖書の神が生きてたって読めなかったろうさ」
『それはそうだが、だからと言って開き直るわけにはいかない。ロスヴァイセ君の論文から、新しいトライヘキサ封印の術式を用意するといった対応だけは確実にこなしていかなくてはね』
「……確かにな。禍の団の連中、アジトがアジトだからどうにかすんのも一苦労だ」
『後継私掠船団やヴァーリチームからの情報提供に出た、タイフーン級神器力潜水艦……恐ろしいものだ』
「移動拠点をいくつも持ってりゃ、アジトの撃破なんて困難だしな。……こっちも相応の対策は必須になるし、水中戦闘用ＴＦユニットでも研究するかねぇ？」
『大王派は水陸両用ＤＦを開発中とのことだよ。平和という物は本当に苦労するものだ』
「ま、生みの苦しみって奴だろうさ。……なるべくガキどもには苦労を掛けない形で苦しみたかったけどな」

和地Ｓｉｄｅ

「……とまぁ、そういうわけでねぇ」
そう言うリヴァ先生は、ため息をつきながら体重を後ろに預けて天井を見上げた。
「ひと夏の恋とは言わないけど、根無し草故の適当感はあったから大した思い出にもならないと思ってたけれど……意外と凹むわね」
苦笑するリヴァ先生に、俺はなんというかちょっと立腹者だった。
リヴァ先生に男の影があることではない。それについて俺が何か言うことこそ大の問題だろう。
俺が立腹する理由なんて、ただ一つだ。
なんというかムッしたので、俺は強引にリヴァ先生を抱き寄せる。
「にょわぁっ!? ちょ、ちょちょちょちょっとカズ君っ!?」
思いっきり顔を真っ赤にして大慌てするリヴァ先生は珍しいが、そこに感慨深いものを感じる余裕は俺にもない。
もう片手では我慢できないので、両手を広げてガバっとリヴァ先生に抱き着いた。
「お、おわわわわ……っ」
「……鶴羽、その驚き方は女の子としてどうかな?」
そしてリヴァ先生以上に顔を真っ赤にしている鶴羽に、インガ姉ちゃんからのツッコミが飛ぶ。
「おわわわわってなんだよ。おわは違うだろ」
「ちょっとそれ、女子力がちょっと……」
ベルナと春っちが軽くドン引きしているし。
正直ちょっと気がそれたぞ。軽く引くぞ。

まぁそれはそれとしてだ。
「リヴァ先生、そこはちょっと怒るぜ？」
まったく、ちょっとそこはなぁ。
そりゃまぁ、リヴァ先生は俺に対するスタンスとして俺を振り回してある意味で気楽にさせる方向性を自負している。
まぁそれはそれでありがたいし差別化としてもポテンシャルは高いわけだ……が。
「別に一切甘えるなってのは逆に俺が困る。というか、自分の女が困っている時ぐらい肩を貸させてほしいんだけどな」
ほんとそこだ。
まったく、水臭いぜリヴァ先生。そりゃないとすら言いたくなる。
俺はリヴァ先生のことを大事に思っているし、一緒にいたいと思っているんだ。
だからこそ。
「今度思いっ切り甘えるから、たまには俺に甘えてくれ」
……困ってる時ぐらいは助けを求めてほしいんだよ。
自分のことを好きでいてくれる人に対して、できることなんて実際のところ何処まであるのだろうか。
その中に、俺が絶対に譲れないことが一つある。
「……リヴァ先生が嘆いているなら、俺にそれを拭う手伝いをさせてくれ。……頼むよ本当に」
俺は目を伏せ、そう言うしかない。
……甘えるより甘えさせたいというのなら、俺はそれをすることで甘えたい。
「……ふぅ。カズ君も大概難儀な性格ね」
そう、リヴァ先生は苦笑する。
その瞬間、思いっきりリヴァ先生は俺に抱き着き返してきた。
というか頬ずりまでしてくるし。いやホント何してくださいますか。
「ん～。だったら今日はカズ君に甘える日にしましょう。アザゼル元総督には言えることは全部言ってるし？　明日からは対策を考え

るってことでよろしくね～♪」
……敵わないなぁ、本当に。
ただまぁ、ぎゅっと抱き着いてくれるのはありがたい。
あとはその抱き着きに対して、俺がどうにか対応できるかどうかの話だ。
「……もしかして、その辺り読んでたからこういった真似を？」
「時には強引に巻き込むしかない時ってあるでしょう？　そういうのは私の得意技よ」
……カズヒねぇにも、敵わないなぁ。

「あうあうあうあうあうあぁ～っ」
「あとリーネスは結局何しに来たんだ？」
「「「……さぁ？」」」
「ああ、全くもう……っ！」

Other Side

「……さて、調子はどうかな？」
『いい感じだよ。慣らしも終わったし、そろそろ本命かな？』
「獲物に関してはいい物を用意したよ。皮肉が実に聞いているし、かちあう相手が相手である以上、ステラフレーム自我覚醒体でも単独だ

と厳しいからね」
『至れり尽くせりで感謝するね。君達はいかないのかい？』
「ちょっと大仕事の予定があるんだ。まぁ、上手くいけばそこでとどめというコンボも仕掛けられるはずさ」
『ありがとう。……あぁ、殺さずにはいられないさ』
「和平なんて結ばれてるのは、お気に召すわけないか」
『当然だね。……三大勢力が今更和平を結ぶというなら……全部壊しつくすだけさ』
「いい感じに壊せて何より何より。これでどう転んでも悲しんでくれるかな？」

「……どうやら、三大勢力も次々に動くようだな」
「酷い話。ろくに仕事もしないくせに、餌を適当に与えれば宥められると思ってるみたいね」
「どうします？　無能共に一発かましてやりたいんですけど」
「前回の戦闘で経験を積んだものは増えたが、好機といえるものもないしな。ちょうどいいからいいガス抜きに仕掛けるとするか」
「我らサウザンドフォースは人類の防人。神祖の遺志を継ぐ為にも、火を絶やさぬように適度な動きは繰り返すぞ」
「了解！」

「……さて、そろそろリゼヴィム殿が動くようだ」
「あら大佐、となると……要所に仕掛ける作戦でも？」
「ああ。天界に仕掛けるそうだ。データをとる為にも私も出るとしよ

う」
「大佐に何かあると、禍の団での活動に支障が出ることになりますが」
「その時は南海同盟に移動してくれ。あそこのボスとは話がついているから、君達を悪いようにはしないだろう」
「え～？　私は参加できないんですかぁ？」
「……まぁ、前線戦闘担当の武将型アステロイドも一人二人は連れていくべきか。構わないけど、死ぬ覚悟はしといてくれ」
「当然ですよ大佐。戦士は前線で命を犠牲にすることが仕事の内です」
「それなら構わない。……こっちもあまり余裕がないだろうからね」
「そうですか？　何かありましたか？」

「ああ、昔の女がグレモリー眷属と組んでいるようでね。少し手を出す余裕がなくなりそうだ」

英雄乱戦編　第四十二話　さらなる可能性

和地Ｓｉｄｅ

リアス部長が冥界に戻った次の日のことだ。
どうもバアル家に関与する者が襲撃されていることもあり、何かありそうな気はするはずだ。
わざわざ次期当主を実家に呼びつけるわけだし、相応の厄ネタが冥界で動いているのかもしれないな。リアス部長の母親はバアル家出身だし、部長がターゲットになる可能性は十分あるしな。
ただ連絡ではなく呼び出しである以上、可能な限り情報が洩れてほしくない雰囲気が漏れている。
……おそらくは暗部が動くような事態なのだろう。あの親馬鹿兄馬鹿のグレモリー本家なら、可能な限り内緒にしたいと透けてみる。その上で……か。
それを考えるとやっぱり気になることも多いな。
どうもリゼヴィムは、あの手この手で不満分子を挑発するスタンスをとっているようだ。
リゼヴィムからすればトライヘキサ復活までの時間稼ぎが必要なんだろう。……問題は成果が出まくっていることだ。
こと和平は一年も経たずに一気に進んでいるからな。何事も急激な変化には反発や抵抗があるものだ。
それに過去の遺恨とかっていうのは中々拭えないものだ。割り切れる奴や流せる奴はそこそこいるだろうが、できない奴や難しい奴もそこそこいる。ましてパニック映画でよくあるように、余裕がない時ほど常に理性で抑えているところがダメになるしな。
元々禍の団という外敵兼受皿があるからこそ、和平も急激に進んだだろう。だが半端に禍の団はまずいと考える頭があり、しかし和平に

不満がある奴は絶対にいる。
もしその辺りを突かれると、でかい火事が巻き起こりそうだ。
その辺を考えながらちょっとお茶を飲んでいると、リビングをカズヒねぇが覗き込んできた。
「あ、和地。ちょうどよかったわ」
「カズヒねぇ。どうかしたのか？」
俺が首を傾げていると、カズヒねぇは少し肩をすくめて苦笑いだ。
「クロード長官から連絡が来てね。最寄りの機関支部で話があるからできる限り早く来てほしいって」
……ん～？
なんかきな臭いな。
クロードさんの人間性は信用に値する。人間時代も英霊時代も暗部やっているから信頼はしすぎない方がいいが、あくまで必要悪を担う範囲内だから、そこまであれなことにはならないだろう。
だがそんなこと、クロードさんだって承知しているだろう。
普通に地下に通信可能な設備があるのに、わざわざ俺達がいないプルガトリオ機関の支部で話す。
……もうこの時点で厄ネタ確定だ。下手すると身内案件かもしれない。
「ＯＫ。話せる内容だけ後で話してくれ」
「理解のある旦那で助かるわ」
うかつに突けないからこう言うほかないからな。
ただまぁ、その辺の口止めをしてないのなら……致命的ってわけじゃなさそうだな。
「ちなみに言わない方がいい相手は？」
「……紫藤トウジ氏には知られないように、とのことよ」
おいおいまじかよ。
あの人何かやらかし……あ。
「イリナの親父さんだからなぁ」
「ええ。何かやらかしてそうよね」
いや、悪い人ではない。敬虔な信徒でもある。そこは信用も信頼も

していいだろう。
だが信仰にのめりこんで酔いしれるタイプのイリナの親父だ。短い付き合いだがどうも親あっての子と言ってもいい気がするしな。
何かやりすぎたとしてもあり得るだろう。真剣にその辺は考慮しなければ……っ
「よっし任せろ！　今日は外出の予定だったし、トウジさんの方は俺が様子を確認しておくから！」
「……できる限り手早く済ませて帰ってくるから、無理はしないでね？　リヴァの事とかもあるし」
其処は確かに要注意点だよなぁ。
いやほんと、やることも気を付けることも多すぎる。
「……カズヒねぇ」
「……何かしら？」

「帰ってきたら膝枕をお願いしていいかな？」
「そうね。リヴァと一緒に徹底的に甘やかしてあげるわ」

よし、ご褒美ゲット！

祐斗Ｓｉｄｅ

リアス部長が前夜にグレモリー城に出立し、カズヒが急用でプルガトリオ機関の施設に出向して少しして、僕達は日課のトレーニングを行っていた。
敵が何をしてくるか分からない以上、僕達が今まで以上に鍛え上げる必要があるのは明白だ。
明白……なんだけど……
「もらったぞ、九成！」
「嘘だろおい!?」
ゼノヴィアが一撃で九成君の障壁を吹き飛ばし、僕達は目を見開いた。
彼の星辰光で生成される障壁は、はっきり言ってかなり厄介だ。
収束性が低い為、単純強度は決して絶大ではない。まして瞬間的に作るとするなら尚更だ。
だが彼はそれを承知のうえできちんと対策をとっている。様々な特性の多層構造にし、更に受け流しや脆性破壊による衝撃吸収も組み込んだ、多種多様な防御障壁。その突破は基本的に難しく、グラムでも抜き打ちでの突破は難しい。
それを、ゼノヴィアは一刀両断した。
「ふっふっふ。テクニックというのはとても大事だと今更ながらによく分かった。正確無比かつ瞬間的に力を叩き込むことで、こうも攻撃力が向上するとはっ」
笑顔すら浮かべてゼノヴィアは震えているけど、そうじゃないんだよ。
夢幻召喚により、ゼノヴィアは源為朝をその身に宿している。
クラスこそアーチャーであるものの、優れた武将としての力に偽りなし。当時武家という物は一人で様々な戦い方を習得して当然である以上、その戦いぶりは凄まじい。
結果として、為朝状態のゼノヴィアは圧倒的な技量を獲得したと言ってもいい。

そう。ゼノヴィアは絶大な力を最大効率最小負担で相手に叩き付ける術理を会得したといえるだろう。

……違うんだよ！　そうじゃないんだよ!?

僕が手にしてほしいのはそうじゃないんだ。もっとこう巧みかつ複雑な戦い方なんだよ。

夢幻、透明、擬態、支配、祝福といった各種ヘキサカリバーは、もっとこう変幻自在な戦闘が可能なんだ！

なにせ他二人の使い手は練習で活かし始めている。イリナさんは擬態と夢幻を併用したフリードのような霍乱攻撃を試しているし、アニル君も天閃と透明を併用したヒット&アウェイの応用発展に手を出している。こうして考えれば、殺気が読みやすいから捌きやすかっただけで、手にした瞬間に複合戦術や瞬時の使い分けをしたフリードがいかに天才的だったかを痛感するレベルだ。

頑張れば彼の域に到達できるだろう。むしろ完成度が高いからもっと上だろう。それがヘキサカリバーなんだ。エクス・デュランダルなんだ。

なんで戦術の幅を広げるのではなく、あくまで破壊やデュランダルをサポートする補助輪的運用しかしないんだ、ゼノヴィア!?

ゼノヴィアが為朝と同調することで放つ、極聖・弓張槍ヶ月が典型例だ。

あれは擬態でエクス・デュランダルを槍のような矢にし、夢幻と透明の応用でスコープを疑似生成して遠距離の敵を正確に目視、支配で弾道を制御して、破壊と天閃でより速く強力にした矢を、祝福により成功率を高めることで放つ奥義。

全ヘキサカリバーの適性を、「デュランダルの威力を最大効率で遠距離の敵にピンポイントで当てる」という形に発現する技だ。

……合ってるけど合ってない!?

あ、思い出したら僕は崩れ落ちていた。

ふふふ。グレモリー眷属のテクニック不足は深刻すぎる。テクニックタイプの資質を持ってほしい、譲渡が使えるイッセー君やエクス・デュランダルのゼノヴィアがこれだからかな？

もったいない、もったいないよ……っ
「……そろそろ諦めた方がいいんじゃないかしらぁ？」
そんな中、リーネスが僕の隣に座るとぽんと肩に手を置いた。
「向き不向きって、性能だけじゃなくて性格も関わるものぉ。ヘキサカリバーを有効活用はしているし、妥協は必要よぉ」
「そうなんだけどね。でも、グレモリー眷属にはテクニックが少なすぎるよ」
僕はとりあえず座ると、水分を補給しながら黄昏ていた。
グレモリー眷属のパワータイプ重視は偏りすぎだしね。いい加減、僕以外のテクニックタイプを真剣に用意してほしいぐらいだよ。
部長や朱乃さんもウィザード系だけどパワーよりだし、サポートタイプのギャスパー君もバロールの力でパワー系によっている。正直僕にテクニックを押し付けないでほしい。疲れるし休みたい気持ちだってあるんだよ。
分散を、分散を……っ
「イッセー君の眷属を考えている、レイヴェルさんは気にしてないのかな」
「あの子ぉ、むしろ「不得手なテクニックにリソースを割くぐらいなら、テクニックを吹き飛ばせるぐらいパワーを高めるのがグレモリー眷属の方向性」とか言っていたみたいよぉ」
……ある意味真理だけど。真理だけど……っ！
「まぁ実際、特化型って運用面だと分かりやすいしぃ、基本的に戦闘って如何に長所で短所を押すかだしねぇ？」
「技術開発者としては、反対はできないわけかな」
……僕がおかしいんだろうか。
なんだろう、心がきしみを上げそうだよ。
少し俯き気味になっていると、リーネスはぽんぽんと僕の背中を優しく叩いてくれる。
「どちらかというと、リアス部長や小猫に割いた方がいいんじゃないかしらぁ？　朱乃さんやギャスパーも小技ができる方でしょぉ？」
「そうなのかもね。少し、発想を転換するべきかな？」

僕は何とかその言葉で持ち直すと、少し考えることを変えることにする。
「そういえば、あのグレートアントニオンは凄かったね。できればもっと早く出してほしかったけど」
「ごめんなさいねぇ？　あれ、まだまだ技術的にこなれてないからオーバーホール必須なのよぉ。……当分出せないわねぇ」
ああ、そういうことなのか。
イッセー君のロンギヌス・スマッシャーも、当面は撃てないそうだ。それだけの威力であり、また影響もあって飛龍の扱いにも制限が掛かってしまったとか。
そういう意味では、僕達は若干弱まっているともいえるのか。
……やはりゼノヴィアにテクニックに目覚めてほしいけれど、当分は無理だろう。
となると、僕がやるべきことは―
「……木場くん、いいかしらぁ？」
―その時、リーネスが真剣な表情で僕の目を覗き込む。
なんだろうと思わず身構えると、彼女は僕の手の方に視線を動かしながら苦笑した。
「魔剣に意識を向けるのも仕方ないけれどぉ、聖魔剣も忘れちゃ駄目よぉ？」
その言葉に、ちょっと気が逸れたのは事実だ。
確かに、グラム達五本の魔剣を獲得してから、僕はあまり聖魔剣を使っていない。
魔剣を最大運用することを踏まえると、聖剣創造の禁手を使った方が有効だからだ。
ただ、リーネスからすると違うらしい。
「貴方の聖魔剣（それ）は間違いなく奇跡と言ってもいい偉業よぉ。研究者の観点から言えばぁ、グラム以上に可能性を秘めているわぁ」
……なるほど。
確かにそうだ。可能性があるのなら、グラムの制御と並行して新しい可能性を考えるべき……かもね。

そう考えた時、轟音が鳴り響いた。
ふと振り返れば、そこにはゼノヴィアが振ったエクス・デュランダルを受け流すどころか、絡めとる様にして打ち上げる九成君がいた。
ゼノヴィアはすぐに体勢を立て直すと仕切り直しになる。だけど、彼女を含めて僕達は全員が目を見開いていた。
何故なら彼が打ち上げに使ったのは、禁手でもないただの魔剣。
まるで青い飛沫が飛び散るように力を放った九成君は、同時にどこまでも澄んでいるような雰囲気で微笑んでいる。
「……ああ、掴めたかもしれないな」
あの感覚、あれがグレンデルと戦っていた時に入ったとかいうゾーンか。
一度入ったことがあっても、任意で入れるようになるのはひと握り。それを、こうして模擬戦で再現させれるだけでも彼は非常に優れている。
イッセー君のような必要な時に可能性をつかみ取る形でも、カズヒのように意志の力で限界を超え続けるのでもない。本来出しうる力を必ず出し切る可能性。それが、彼が掴み取るに値する方向性だろう。
「……よし、これならいけるか……？」
ただ、その直後から―

その後の光景は、僕達にとっても驚愕だった。
目を見張る。信じられない。唖然とする。現実を受け止めきれない。
そんな恐るべき光景の中、リーネスが隣で漏らした感想が、ある意味一番真理をついていただろう。
「……その発想は……なかったわねぇ……」

英雄乱戦編　第四十三話　主人公補正は正負合わさるものなり

和地Ｓｉｄｅ

「……ゴメンカズヒねぇ。トウジさんの方につけなくなった」
『……理由を教えて頂戴？　まずはそれからよ』
俺はカズヒねぇにそう謝罪すると、カズヒねぇは冷静にとりあえず話を前に勧めてくれた。
いや本当にごめん。俺もついうっかりやらかしてしまって困っている。
ちなみに今俺は、神の子（グリ）を見張（ゴリ）る者の研究施設に急遽叩き込まれた。
訓練時に試してみた新しい手法が上手くハマった結果、リーネスの判断ですぐにデータ取りとなったわけだ。
マッド入っている最高幹部達にどんな目に遭わされるか戦々恐々としながらだったので、トウジさんの方に様子を向ける暇がなかった。
なんとか出立前にアニルとルーシアに頼み込んで、それとなく護衛はつけれるようにしてはいる。いるけどやはり、事情を説明する余裕がなかったのでちょっと不安だ。
で、そんな理由について説明した結果、カズヒねぇは少しの間何も言ってこなかった。
「……カズヒねぇ？」
『……ごめんなさい。ちょっと絶句してたわ』
やっぱりかぁ。
思い付きで試してみたやつだから、多分すぐにやれと言われても困

難だ。
瞬間的にならともかく、ある程度の運用を踏まえるならゾーンに入るぐらいはしないと不可能だろう。それほどの難易度があると実感している。
実際研究者の方々は凄まじく関心して感心して歓心していたからな。神器研究における新しい切り口となるだろう。
最も、到達できる者は限られているだろうがな。
神器を禁手に至らせるとかいうレベルではない。厳密にいえば方向性が違う難易度の高さだ。
英雄派の人体実験において到達方法が確立される前の禁手という意味ではない。既に方向性や到達方法が分かっているからこそ困難だと理解されている方法だ。
時間が掛かれば補助具も作られるだろうが、それだって全く新しい方向性だから何時になるか。数年でどうにかなるレベルではないだろう。
なにせ、これは裏技とか隠しコマンドといった仕様ではない。いうなれば仕組みの穴をついたバグ技だ。
おそらくだが、イッセーやカズヒねぇみたいなタイプとは相性が悪い。それこそ補助具があって何とか一時的にレベルだろう。俺もゾーン無しでは意図的に持続は難しいしな。ゾーンに意図的に入るのは中々難しいから、狙って出すには相当の時間が必須だ。
おそらく再現できるとするなら、パワータイプではなくテクニックタイプ。そういう領域の技術だろう。ついでに言うと難易度鬼難仕様。
俺もぶっつけ本番だったから同じことを繰り返せるか不安だし、多分だが粗も多いしな。
とはいえ、夢幻召喚状態のゼノヴィア相手にあそこまでやりあえたわけだ。これは俺の新しい可能性ではあるな。
技術だから理論上は再現可能。理屈も分かっているからそういう意味では再現方法も確立できる。ただその上で難易度が高すぎるので、扱える奴がどれだけいるかだな。

……おそらくリュシオン・オクトーバーや曹操は到達可能だろう。ウチだと木場が筆頭候補か。

……俺、割ととんでもないことをしでかしてない……か？

まぁ、それはこの際おいておこう。

大事なことはそこじゃない。というよりだ。

「……それでカズヒねぇ。トウジさんについて何があったんだ？」

其処は実に気になる。

何故プルガトリオ機関が、ダーティジョブ担当だったカズヒねぇに、誰にも聞かれないように呼び出して伝えるようなことがあったのか。

今の流れなら聞こえていると考えるべきなんだろうが、いったいどういうことなんだろうか。

『……ここ最近、教会関係者が襲われているという事例は聞いているわね？』

「ああ。まさか彼に嫌疑が？」

だとするなら、それとなく監視という指示が出てもおかしくないだろう。またイッセー達には知られずにことを済ませたい事柄でもある。

ただ、通信越しのカズヒねぇは首を振ったようだ。

『残念だけど逆よ。殺された、それも意図的なターゲットとされただろう人物と紫藤トウジ氏には、私が来る前のリマ部隊（辺獄騎士団）がある嫌疑をかけていた人達なの』

その言葉に、俺は襟を正す。

この場で言ってもいいと判断したからこそ、カズヒねぇは通信越しで伝えているのだろう。

だがそうだとしても、警戒は必須だというほかない。

そして俺の緊張を悟ったのか、カズヒねぇも静かに頷く気配を見せる

『嫌疑の内容は現地の悪魔と無断で取引した疑い。……ただその直後、現地の悪魔やバアルの者と思われる悪魔と三つ巴の殺し合いを行い死者まで出したとのことで、証拠不十分もあって見逃されたそうだ

わ』
　中々の爆弾をブッコんでくれたな、オイ。
『最近の襲撃事件でターゲットされる被害者以外――つまり嫌疑のかかった人物で生きているのは彼だけよ。私の一存で保護の要請をするから、和地も検査が終わったらすぐに戻ってきて』
「ＯＫだ。いっそのこと検査を一旦切り上げるぐらいでやらせてもらう」
　そう返事をするが、真剣な話だが絶対何か起きているだろう。
　こういう間の悪さも、オカ研の特徴だからなぁ……。

イッセーＳｉｄｅ

　俺達は今、雨の中公園の東屋で雨宿りをしていた。
　……そして今、明らかに敵襲を受けている。
『やれやれ。娘さんは天使で、その友人は軒並み悪魔で、更に恩師は堕天使総督ですか。……忌々しいほどに皮肉がきいていると、あなたも自覚があるでしょう？』
「その声は……八重垣君、なのか……っ!?」
　戦慄するトウジさんが見る先、俺達の前に一体のステラフレームが剣をもって近づいて来ている。
　冗談きついにもほどがある。ここにきてクリフォトが刺客を送ってきやがるのか。
　しかもステラフレームだって!?　大盤振る舞いだな、糞ったれ！
　だけどこうなったらやるしかない。
　俺は籠手を具現化させ、すぐに鎧を装着し―

「あら、少し様子見で出て来てみれば……クリフォトも来ているとはな」
『ＦＲＥＥ！』
『『『

英雄乱戦編　第四十四話　見え始める裏側

イッセーＳｉｄｅ

いきなりやってくれるじゃねえか……っ！
俺は素早く真女王に移りながら、どっちの相手をするかを考える。
何故かトウジさんを狙っているステラフレームだけど、此処で俺達が逃げに徹すると追撃されかねない。
幸いこの公園は広いし、結界を張って助けが来るまで粘った方が周囲の安全は確保できるか。
「ロスヴァイセさん、アーシアとトウジさんを！」
「分かりました！」
結界術が使えるロスヴァイセさんにアーシアとトウジさんを任せて、俺はぶつかり合っているステラフレームとサウザンドフォースにぶつかっていく。
真っ向からぶつかり合うステラフレームにサウザンドフォースの仮面ライダー。そこに割って入るように、俺は拳を叩き込んだ。
『っと！　流石にできる！』
「噂の赤龍帝は違うねぇ」
やっぱり躱すか！
っていうか、ステラフレームにしてもサウザンドフォースにしても、動きが巧みだ。
サウザンドフォースは英才教育を受けているとはいえ、ステラフレームでここまで動きが巧みなのって、モデルバレットぐらいじゃないか？
こいつ、今までのステラフレームとは一味違うぞ！
「じゃぁ今度はこっちの番ってな！」

その時、サウザンドフォースの奴が右腕から炎を拭き出した。
俺は素早く伏せて躱すと、近くの木が綺麗に切り裂かれる。
切り裂く!?　延焼とかも起きてないし、どういう星辰光だよ!?
しかも今度は俺とサウザンドフォースを諸共吹っ飛ばそうと、ステラフレームが手に持った剣を振るってくる。
こっちもこっちで禍々しいオーラが溢れ出ているやばい剣だ。日本の大昔にありそうな剣だけど、剣としての性能は木場の持つ魔剣に匹敵するな。
「援護するぞ、撃てぇ」
「させるかよっ！」
「先輩方、こちらは抑えます！」
レイダー部隊をアニルとルーシアが抑え込んでいるけど、相手もかなり動きがいいな。
というか、動きから見て星辰奏者（エスペラント）か？　レイダーと星辰奏者の組み合わせとか、地道に厄介だな。
だけど、それぐらいなら俺達の後輩は何とかできる！
むしろこの三つ巴を何とかしないと―
「イッセー！　ステラフレームは私達で抑える！」
「イッセーくんは仮面ライダーをお願いね！」
―ゼノヴィアとイリナも参戦か。
なら、此処は二人に任せる！
俺はステラフレームを二人に任せると、仮面ライダーの方に集中する。
街中だから砲撃こそできないけど、機動力と打撃力で翻弄すれば行ける。
そう思ったけど、相手も中々強敵だった。
「その程度じゃなぁ？」
……できる。
体のところどころから生える炎の剣だと思っていた星辰光が、思った以上に厄介だ。
文字通り至るところから生えてくるから、打撃が入ると思ったらそ

れで弾き飛ばされる。しかも至るところから生えてきたと思ったら、真女王に追いすがれるレベルの機動力を発揮しやがる。
思った以上に強い。これがサウザンドフォースか。
そしてゼノヴィアとイリナも苦戦している。
あの二人の連携攻撃を前に、ステラフレームは剣技と動きだけで対応している。
あの二人を相手にそこまでできるとか、単純な性能じゃなくて動き方や戦い方が鍛えられている証拠だ。
やばいぞ。あのステラフレーム……ただものじゃないっ！
ゼノヴィアやイリナもそれを痛感しているからか、攻めかかれないでいる。
「……この動き、悪魔祓いのそれね？」
「教会の関係者がステラフレームか……っ」
しかも二人曰く教会の関係者化よ！　冗談きついだろ！
ただ、ステラフレームの方は不満げな様子が見える。
『元がつくけどね。とはいえ、音に聞こえるデュランダルは流石だ』
そういうステラフレームから、どんどん禍々しいオーラが溢れていく。
いや、厳密には奴が持っている剣からだ。それも、降り注ぐ雨が奴に当たる前に蒸発するぐらいのオーラでもある。
『遠慮なしで行かなければ、君達を突破して彼を苦しめることはできないようだ。……天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せ』
その瞬間、驚くべき光景が広がった。
最初からステラフレームが持っていた剣から、邪悪なオーラが八つ首の龍の形をして具現化する。同時にステラフレームの左腕に、エクス・デュランダルが具現化。瞬く間に、聖邪を併せ持つ化け物が目の前に現れる。
おいおい、何がどうなってやがる!?
サウザンドフォースを相手しながらも驚きを隠せない俺達に、ドライグが宝玉を光らせた。

『全員気を付けろ！　あの龍は霊妙（ヴェノム・ブラッド・ドラゴン）を喰らう狂龍、八岐大蛇だ!!』
八岐大蛇ぃ!?　俺でも知っている日本の有名なドラゴンじゃねえか!?　確かスサノオって神様が酒で酔わせて何とか倒したとかいう!?
また邪龍かよ。それも八岐大蛇ともなれば、グレンデルやラードゥンと同じで龍王クラスはあるレベルじゃねえか!?
サウザンドフォースも警戒の色を濃くする中、その反応に気をよくしたのか、ステラフレームは最初から持っていた剣を掲げる。
やっぱり、邪龍のオーラはあの剣に宿っているみたいだな……っ
『驚いたかい？　実はこの剣、修復中だったのを奪った日本の聖剣、天叢雲なんだよ』
しかもあれ、聖剣だったのか!?
「異教の物とはいえ、聖剣になんという真似を!?」
「とはいえ、天叢雲は八岐大蛇の尾から出でたという伝承を持つ剣です。ある意味で相性は抜群に良いはずですね……」
ルーシアとロスヴァイセさんが唸るけど、とりあえずあのステラフレームが今までとは別の意味でやばすぎることだけは分かった。
単純な技量ならモデルバレットに並ぶレベルで高い上に、伝説の聖剣と邪龍をミックスして装備。あと具現化したデュランダルはオーラの質からして、多分即興で作った偽物。だけど性能も高そうだし、多分星辰光がそういうもんなんだろう。
「先輩、こっちもこっちで危険っす！」
そしてアニルが、ヘキサカリバーで敵の武器を破壊しながらこっちに声を飛ばしてきた。
サウザンドフォースはサウザンドフォースでやばいってことか。まぁそうだろうよ。
「どんな風にやばいんだ!?」
「どうも星辰奏者っぽいんで発動体をぶっ壊したんすけど、鉄パイプを握った瞬間にまた発動値になりやがったんでさぁ」
なんだそりゃ!?
ああもう！　星辰光は何でもありすぎる上に千差万別だから、どん

な星を持ってるのかが分からない時は徹底的に分からない！
しかもルーシアの方も、銃を構えて少し気圧されているぐらいだ。
「それも、複数人が同様にです。星辰光（アステリズム）を使っているように見えないところもいい、不気味ですね」
おいおい冗談だろ。
サウザンドフォースの連中は、いったいどんな切り札を手にしたんだよ。
発動体ってのは、基本的に星辰奏者一人一人に対して調律する必要があるんだろ？　しかも外付けの内蔵も同じだから、一つじゃなくて一組といった形で作ったわけでもなければ複数持つことはできない。もちろん一組で作ると一つ壊れたら効果が下がるぐらいだ。
どう考えてもおかしい。一体何がどうなってるのかさっぱり分からない。
しかもそれについてばっかり考えているわけにもいかないってのが―
「……ぐぅっ！」
―その時、トウジさんが呻き声をあげてうずくまった。
見れば八岐大蛇の牙が、トウジさんの肩をかすめている。
それを見たドライグが舌打ちを響かせた。
『まずいぞ相棒、八岐大蛇はサマエルほどではないがかなりの猛毒だ！　治せる者も各勢力に数えるほどしかいないだろう……っ』
なんだって!?
畜生！　いくら乱戦だからって、こうもむざむざやられる羽目になるなんて……。
俺達はきちんと強くなっている自覚はある。だけどそれ以上に敵の強化が早すぎるじゃねえか。
そしてステラフレームはステラフレームで、全身を震わせてその光景を喜んでいる。
「よくも……よくもパパを!!」
イリナが怒りに燃えてヘキサカリバーを突き付けるけど、ステラフレームはそれを憐れむような雰囲気で見ている。

『覚えておくといい、いかに天使と言えど身内が傷つけられれば怒るだろう？　そして君が僕を倒した時、に感じる感情を僕は覚えているのさ』
「……え？」
その突拍子もない言い草に、イリナはもちろん俺達も怪訝な気持ちになる。
その壮絶な気配に、サウザンドフォース達も攻撃の手を止めてステラフレームを警戒し―
「……まずい、増援が来たぞ！」
「……さや当ては此処までか」
増援⁉　この流れだと……俺達側か！
『流石にそれだと分が悪いね。今日はここまでにしようか』
「お互いに、ということかねぇ？」
ステラフレームもサウザンドフォースも、転移魔法陣を展開しながら逃げる体制に入っていく。
サウザンドフォースはそのままこっちを警戒するだけだ。だけどステラフレームは、俺達に複雑な感情が籠っているような視線を向けてくる。
怒っている様にも、羨んでる様にも見える。そんな相反するような感情が透けてみる、その視線は―
『覚えておくといい、君達が住む駒王町の和平の土地という栄光は、教会とバアルの血塗られた業が積み重なって出来たものだということをね!!』

和地ＳＩＤＥ

「カズヒねぇ！」
「そっちも来たわね」
俺とカズヒねぇは合流すると、すぐに教会に入っていく。
「ステラフレームにサウザンドフォースか。タイミングの悪い挟み撃ちだったな」
「敵がこっちの事情を斟酌するわけないものね。面倒なことだわ」
出来る範囲内ですべきことをしても、敵だってそれぐらいはするんだからこうなることもある。
分かっているがやりきれない。だがここで無理を通そうとすればそれこそ論外だ。
だからこそ。
「……ここから巻き返しだな。今度は迎え撃つとしようか」
「そうね。どうせ半端に済ませる気は無いでしょうしね」
大まかな情報しか聞いていないが、今までの情報と統合すればこれで終わるとは思えない。
クリフォトの戦力であるステラフレームが、ピンポイントでイリナの親父さんを狙ってきた。
更に最近起きている事件のターゲットが、トウジさんと同僚だったという。
そして同僚だった頃の認知である駒王町について、血塗られた業とまで言ったステラフレーム。
全ては繋がっているだろう。まずはそれを知り、そこからどうするかを考えるべきだ。
「……まったく。リヴァ先生の元カレを相手するだけでも大変だってのに、やることを増やしてくれてありがたいこって」
「誠にいとリゼヴィムの性格から言って、知ったらセットで送ってきそうね」
俺のボヤキにカズヒねぇが同意するけど、絶対するだろあいつら。
なるほど。つまり俺は二重の意味で大変なことをする羽目になっ

たと。
「……上等だ。新技をそれまでに形にして待ち構えてやる」
「何か掴んでいるようね。これは期待できるかしら？」
俺達は不敵な笑みを向け合ってから、小さく頷き合う。
ステラフレーム。何があったのかは知らないし、当然だがしてやられたのは認めよう。
だが二度目はそう上手くいかせない。それは俺が俺である限り絶対だ。
涙換救済（タイタス・クロウ）と悪祓銀弾（シルバーレット）。俺達が今度はいるんだからな。
だからこそ、まずは知るべくイッセー達と合流する為に足を進めていった。

英雄乱戦編　第四十五話　明かされる裏側

和地Ｓｉｄｅ

イッセー達と合流する頃には、アザゼル先生やリアス部長も既についていた。
そして治療の結果が報告されたが芳しくはないようだ。
邪龍である八岐大蛇は、その猛毒こそが厄介。サマエルに比べれば流石に劣るとはいえ、ドライグが評価するほどの代物だ。この場の施設や人員では不可能ということで、天界の設備で治療することになった。
で、俺達はその前にトウジさんから話があるそうだ。
「……治療の為に天界に招いてくれるとか、信徒としてはある意味喜ばしいことでしょうが……伺いたいことがあります」
そしてカズヒねぇは、暗部としての態度でトウジさんに視線を向ける。
「昨今多発している教会関係者に対する襲撃事件。その中でターゲットとされる者達は、全員が貴方と共に駒王町で仕事をしていた者だと判明しました」
その言葉に、トウジさんは毒の影響を受けながらも頷いた。
今更隠すつもりはない。そういうことだろう。
「その通りです。薄々そうではないかと思ってましたが、彼が犯人なら納得です」
毒の影響もあってかなり苦しそうだが、しかしここは心を鬼にするべきか。
「リアス部長。教会に伝わっている報告では、当時あの町を管轄していたバアルの縁者とトラブルになり、結果としてあの地を手放す形に

なったと聞いています。そちらは？」
「こっちも似たようなものね。最も、そのバアルの関係者が教会とのトラブルで何かしらの失態を犯した。そういう風に聞いているわ」
　なるほど。つまりこれは―
「……トウジさん。まさかあなた達は、悪魔と裏取引でもしてたんですか？」
　―お互いが示し合わせて、互いの上層部を騙していた。そういう風に受け取るしかない。
　俺がそれを口にすると、トウジさんはさほど時間を掛けずに頷いた。
「似たようなものです。あの地を管理していた者はバアルの者ではありません。そしてその管理者と、ステラフレームの素体となった八重垣正臣という青年を、私達とバアル家は結果として殺すことになってしまった」
　……おいおい。何かこれ、やばいことになってないか？
「……実は本家の方で、バアルからの使いが私に話があると言ってきています。父も内容は知らないようでしたが、隠しきれなくなった情報をあえて話す体を感じていたと聞いています」
「なるほど。なら……まずは彼らから話を聞いた方がいいでしょう。その方が彼らに対して義理立てができるでしょうしね」
　……教会の人間が、十年ほど前のことでバアルの悪魔に義理立てか。
　これは、本当に現場で隠された裏事情の類だな。
　トウジさんは毒で苦しみながらも、それとは全く異なる理由の涙を目に浮かべている。
「……ただ、これだけは言えます。私達は、二人を……二人の想いを踏みにじった。そういう意味では、私は……殺されても文句なんて言える立場じゃない……っ」
　これは、かなり深い事情があるようだとしか言えないな。
　全く、絶対嫌な気分になる話だぞ……っ

そして俺達は搬送されるトウジさんと別れ、一旦冥界のグレモリー城に転移する。
とはいえ、あまり大人数で押し掛けるわけにもいかないということで、メンバーはリアス・グレモリー眷属及び当事者のイリナという形になった。
そして何とも言えない状態で待っていると、これまた渋い顔のリアス部長達が戻ってくる。
「……部長、どうでしたか？」
「ええ、大体の事情は理解できたわ。……当時においてはかなりの大事だといえるわね」
ルーシアにそう答えるリアス部長は、どこか気圧されているような表情だった。
当時において大事とはいえ、リアス部長にしては珍しいな。
「イッセー、リアスさんはどうしたんですか？」
「そうですのよ、らしくないですわね？」
シャルロットとヒマリがイッセーに振ると、イッセーはなんというか神妙といった感じの表情だった。
「……その、バアルから来た人がな？　ゼクラム・バアルって人で―」
「ゼクラム・バアル!?　ゼクラム・バアル様ですの!?」
イッセーを遮るように、レイヴェルが凄い驚愕の表情を浮かべている。
狼狽一歩手前のその姿に、聞いてない組はちょっと気圧されている。
「おいおいレイヴェル、そのゼクラムって……バアルの有名人だったりするのか？」
アニルが恐る恐る尋ねると、レイヴェルは軽く冷や汗を流しながら頷いた。
「……ゼクラム・バアル様は、バアル家の祖……初代バアルですわ」

「……ちょ、マジで!?　大物にもほどがあるじゃん!?」
ヒツギすら面食らう流れだったが、そりゃそうだろうというレベルだ。
冗談抜きでやばい事態としか言いようがない。いくら何でも大物が出すぎだろう。
俺達が思わず戦慄していると、カズヒねぇは何かに気づいたのか急に舌打ちした。
ん？
「……どうしたのぉ、カズヒ。暗部の勘かしらぁ？」
「ええ。おそらくだけど、ある種の牽制も兼ねているんでしょうね」
リーネスにそう答えるカズヒねぇだけど、牽制って？
「……どういうことだ？　先に教えてくれ」
ゼノヴィアにそう言われると、カズヒねぇは額に手を当てながらため息をついた。
「簡単な話よ。無意識レベルにでも「初代バアルがわざわざ出向いて話したんだから、これ以上は聞くな」……と思わせる牽制球のつもりでしょうね。立ち位置からすればある意味で現魔王以上の影響力を持つ御仁だもの。速攻で最終兵器を切るようなものだわ」
あ、なるほど。
つまりこれ以上話を訊こうとしても「初代殿が話してくださったのに何か不満が？」とかいった感じで気おくれさせることが狙いか。
よしんば踏み込んでも周りが止めるレベルだろうしな。それほどまでの事情があるって感じなのか。
「……となると、彼女には他にも何かあるのかしら……？」
リアス部長も悟ったようだけど、気になることも言っているな。
「……リアス様。彼女とは、トウジさんがおっしゃっていたクレーリアというお方の事ですか？」
「そうよ、レイヴェル。クレーリア・ベリアル。かの皇帝（エンペラー）、ディハウザー・ベリアルの従妹であり、駒王町の本当の前任者」
……また、凄いところから凄いネームバリューが出てきたな。
ただでさえ色々と出て来て大変だというのに、ここに来て皇帝ベリ

アルか。
「分かった、取りあえず話を進めよう。……で、具体的に何があったんだ？」
俺がそこを促して、そして事情が明かされる。
……イリナが駒王町に住んでいた頃、当時駒王町は教会の者が監視をする形になっているが、大王バアルが手を付けた管轄地になっていた。
バアルは当時、見どころのある上級悪魔が上級悪魔として管理活動を行い練習用にその土地を提供していたらしい。そして当時の担当はクレーリア・ベリアルだった。活動としてはまぁ問題はないといえる状態だったそうだ。
だがそこで大問題が発生。トウジさんの部下であった悪魔祓いの八重垣正臣と、クレーリア・ベリアルが本気の恋愛関係に発展した。
和平なんて発想もなかった時期にそれは双方からしても納得できない状態だった。しかもクレーリア・ベリアルは皇帝の妹同然であり、つつき方次第で戦争再開も懸念される。
それを良しとしなかった双方は、バアルが先に協力を申し出る形で強引な策を実行。ゼクラム・バアル曰く「多分教会が先だが、もしかすると自分達側からかもしれない」という形で、両者が粛清されることになったと告げたそうだ。
「……あの人、いろんな意味で凄かったぜ？」
イッセーは皆と一緒にそこまで語りながら、珍しくシリアスに気おされ気味だった。
「……俺達の前で平然と、魔王より大王だの、俺やサイラオーグさんでも魔王を狙えるだの、悪魔とは古き上級悪魔の一族だけでそれ以外は眷属だ、とかはっきり言い切った」
そりゃまた凄いな。
ただ、只の傲慢な上級悪魔とは違うとでも言いたげに、イッセーはちょっと首を横に振っていた。
「何より目だよ。強い目的意識があって生きているって感じだった。長く生きている悪魔ってそんな風にならないはずだけど、下手すると

サイラオーグさんを思わせるぐらいの目だった」
……そりゃまた、油断できない御仁のようだな。
大王派にも人がいないわけではない。まして最古参がそれだけの傑物だっていうならかなりまずいな……これは。
まぁ流石に、フロンズ・フィーニクス達以外にも大王派に人がいないとやっていけないだろう。油断は流石に禁物だったということか。

祐斗Ｓｉｄｅ

その後、三大勢力間で今後の対策を練っていたアザゼル先生も話を聞きに来て、事情を聞いてため息をついていた。
とはいえ、それはそういう対応をとるしかないサーゼクス様やトウジさんに対するものだと感じられる。
この人もまた、和平が結ばれるより遥か昔から堕天使を率いてきた身だ。戦争中であった三大勢力はもとより、各神話との折り合いを付ける過程で苦労してきたし、苦渋の決断もしているだろう。今回の件も、僕達以上に仕方がない事情であると痛感しているのだろう。
「……和平が結ばれる前は、そんな話はいくらでもある。危険な神器保有者の始末も似たようなもんだ」
そう言ってから、アザゼル先生はリアス部長の方に視線を向ける。
「サーゼクスを恨むなよ？　あいつは魔王という立場だが、一枚岩じゃない組織を率いる身としちゃできないことだっていくらでもある。できる範囲内で折り合いをつけた結果だろう」
その言葉に、部長も気負うことなく頷いた。
グレモリー次期当主として、そして禍の団との戦いで色々なことを

経験してきた身だ。部長だって、やむを得ない事情には理解がある。
むしろそれを下す必要に迫られる立場につく人だ。その自覚がある以上、サーゼクス様を責めれるわけもないか。
「むしろその分、たくさん気を使ってくれているお兄様に恨み言なんて言わないわ。……それ以上に、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーに対する怒りが強いわね」
そう語るリアス部長は、ふと窓の外を見る。
虚空を睨みつけながら、リアス部長は強い怒りを込めて拳を握り締めた。
「悲劇を利用して悪意を広めるクリフォトは、断じて許される存在じゃないわ。何より、彼の復讐を容認すれば、必要ない悲劇が更に生まれてしまうもの」
その言葉に、僕達も静かに決意を改める。
この駒王町が和平設立の地となる前の悲劇。それは三大勢力だけでなく、様々な勢力の者達が集まっている僕達にとってこそ重いものがあるだろう。
だからこそ、僕達は未来にそれを残さない為に戦わなければならないだろう。それが、意図せずとはいえ和平に導いた僕達の責任といえるはずだ。
……その為にも、僕達は更に強さを高めていかなくてはいけない。
「……やろうぜ、皆」
イッセー君が、静かに僕達を見回しながらそう言う。
「ああ、守り切るさ」
九成君が、小さく頷きながらそう応える。
「必ず勝ちましょう」
カズヒもまた、目を閉じながらそう言い切る。
そしてその言葉を受けて、リアス部長はあえて微笑みながら宣言した。
「……リゼヴィムの異世界侵略という野望も、その手段として広げようとする悲劇も、断じて認められるものではないわ。私達の先にそんなものを残さない為にも、クリフォトは必ず叩き潰すわよ！」

『『『『『『『『はい、部長!!』』』』』』』』

その言葉こそが結論だ。

僕達全員の決意は、決して変わることなんてないのだから！

英雄乱戦編　第四十六話　深夜の語らい

和地Ｓｉｄｅ

夜、俺は少し眠れないこともあったので下に降りてきていた。
ここで下手に体を動かすと余計に眠れないからな。ゆっくりと気分転換として、何か飲んでちょっと食べるか。
とりあえずホットミルクと甘いものをちょっと……と思っていたら、そこで意外なメンツに出くわした。
「あら、九成君」
「イリナか。奇遇だな」
まさかイリナと出くわすとはな。
いや、今回の事件では当事者側だからな。まして父親が重症なわけで、そりゃ眠れない時もあるだろう。
しかも和平の象徴ともいえるこの地でオカ研だ。その裏に潜んだ和平とは真逆の出来事に端を発す刺客があらわれ、父親ががっつり関わっている。この地を担当するリアス部長以上に、イリナが一番きついだろう。
まったく。ここはイッセーの出番なんだが。まぁ、たまにはいいだろ。
「お互い眠れないみたいだし、ちょっと一杯付き合ってくれ」
俺はイリナを誘うと、ホットミルクを作ったうえでちょっとしたティータイムならぬミルクタイムにしゃれ込んだ。
お互いにちょっと飲んでほっと一息を入れていると、イリナはコップに視線を向けながら、小さく息を吐く。
「……この街からイギリスに移る時はいきなりで、正直なんでだろうって思った時はあったの。あんなことがあったからっていうなら納得だわ」

「だろうな。あの八重垣正臣（ステラフレーム）からしてみれば嫌味の一つも言いたくなるだろう」
本気で愛し合った信徒と悪魔を殺した街が、十年後に堕天使まで含めた三大勢力和平の地となり、今や各勢力融和の象徴ともいえるわけだ。しかも自分を殺した男の娘が天界側の担当で、悪魔に恋する女の子。
嫌味の一つは言いたくなるだろう。流石にそれぐらいは察するべきだ。
「……一つ聞くが、だから八重垣正臣の行動を見逃すか？」
「そんなことないわ。パパのしたことは確かに重いけれど、あの時の教会なら仕方ない判断だし……パパだもの」
そうだな。
「まぁその通りだ。こういう言い方は残酷だが、八重垣氏やクレーリア・ベリアルにも責任はあるからな」
そもそも当時の環境で、それを成すのがどれだけ過酷かであるかは考えるまでもないんだ。
恋は盲目とはよく言ったものだ。そうなれば組織が粛清に動く可能性は考えられたわけで、その覚悟と責任があるだろう。
もっとも、和平が結ばれてしまった後の俺達が言ったところで納得するわけがないだろうがな。
「……イリナ。次出てきたら俺が相手をしてもいい。心情的にはお前が相対したいだろうし援護もしたいが、剣が鈍る可能性はあるだろ？」
俺は素直に今思っている提案を告げる。
実際問題、イリナが向き合うのは心理的な負荷も大きくミスを誘発しやすい。
だが同時に、イリナ自身が向き合いたいと思うことでもあるのはよく分かる。
だからこそ、答えは大体分かっているが確認だけはしておくべきだ。こういうのは前もってちゃんと聞くなりの儀式が重要なんだ。
だからこそ―

「……ううん。できるなら私にさせて」
―その言葉に、俺は頷いた。
しっかり言質も取ったことだし、その方向で頑張るさ。
「尽力はするし配慮もするさ。……止めようぜ、必ず」
俺はそう言ってホットミルクのグラスを前に掲げる。
イリナはちょっときょとんとしていたけど、すぐに微笑みながらグラスを手に取った。
「ええ、お願いするわね♪」
そしてグラスを打ち鳴らす。
ま、たまにはこういうのもいいもんだよな。

イッセーＳｉｄｅ

なんか眠れないから、俺はちょっと瞑想でもしようかと地下に来ていた。
肉体的な鍛錬はいつもやってるけど、こういう精神的な鍛錬も中々やりがいもあるんだよなぁ。
とりあえずプールでやってみようと思う。ああいうところが意外と一人だと集中できるからさ。
さてさて、それじゃぁ瞑想を―
「……あれ？　イッセー君？」
―あれ？
「リヴァさん？　こんなところで何してんすか？」
いや、俺も言われそうだけどリヴァさんの方がもっと言われそうだよ。
だってビーチチェアに寝そべったリヴァさん、隣のテーブルに酒瓶

置いているし。
あとよく見たら、ナッツとか入った小皿もあるし。
おいこれ。もしかしますけど―
「酒盛り!?　一人で酒盛りしてましたか!?」
「いや～。ちょっと最近メンタル凹み気味なんで、ちょっと気分転換をね？」
ニッコリ笑顔で言ってきたなこの人！
っていうか寄りにもよって地下プールでしますか。こんなところで酒盛りしてますか。
普通にリビングで飲めばいいじゃんか。なんでこんなところで!?
「どこで飲んでんですか!?」
「え～。なんか誰もいない地下プールとか、ロマンとか風情とかな～い？　なんていうか一度やってみたいと思わない？」
いや、俺未成年だからお酒飲めないし。
まてよ？　俺も誰もいないプールとかでエロ本とか読んでみたら興奮するかもな。
なんというか、普段それはないだろうというところでするからこその興奮とか、テンションとかあるかもしれない。
うん。そういう風に考えると、リヴァさんの気持ちもちょっとわかるかも。理解できそう。
「……俺、今度深夜のプールでエロ本読んでみます！　そしたら分かるかも！」
「うんうん。そういうのも男の子の青春だよねぇ」
うんうんと理解してくれている。
……あ、ちょっと冷めた。
なんだろうか。これもう瞑想するとかそういった空気じゃないな。別に今でなくてもいいからそれはそれでいいんだけど。
なんとなくこのまま帰るのもあれ何で、俺もちょっと隣のビーチチェアに座って気分転換することにする。
そしたらリヴァさんが予備の紙コップを取り出して、炭酸水を入れてくれた。

「あ、いただきます」
「うんうん。ちょうどいいからちょっと付き合ってほしいかな？
あ、おつまみは好きに食べていいわよ？　先生の奢り」
そう言われたんでナッツを食べるけど、あ、これ美味しい。
「……っていうか、こういうこと実はいつもしてますよね？」
絶対初回じゃない。この人の事だから、そういうイタズラ一歩手前の行動は何度もやってる。
まぁきちんと後始末もしてくれてるなら、責められることでもないから興味本位だけど。
リヴァさんも微笑みながらさらりと頷いたし、何度もやってる人だよこれは。
「……ま、最近はちょっと多いかな？　先生としても気にしちゃうことが多くてさ」
ん？
なんか寂しそうな表情で言うけど、何かあったのか？
いや、この人なんだかんだで百年以上生きてるんだ。普通に考えれば何かあるだろ。俺の短い人生でも色々あるんだし、当然っちゃぁ当然か。
ただまぁ、俺はもちろんだけど知らない人も多そうだよなぁ、それ。
「それ、九成達知ってます？」
「流石に話したから安心してね？　というか、勘づかれて……白状させられました」
そっか。一応知ってるのか。
ならいっか。九成達なら何とかしようとするだろうし、やばいんならちゃんと相談してくれるだろ。
でもまぁ、勘づかれて白状させられたのか。
つまり、九成達にも言おうとしなかったわけか。もしくは言いたくなかったのか。
トウジさん達の事情って程ではないだろうけど、まぁ言いづらいことってあるだろう。俺もエロ本やエロゲ関係の悩み事とかあったら、絶対リアス達には相談しないし。するなら松田や元浜だ。

なら、そうだな。
「九成達に言いづらいことがあったら、俺やリアスに相談してください。仲間なんだからそれぐらいはします」
うん。これぐらいでいいかな？
……あれ？　なんかリヴァさんの表情が面食らったっていうか、ハトが豆鉄砲を食ったっていうか。とにかく珍しい表情になってる。
俺が首を傾げていると、急にリヴァさんは噴出した。
え、なに？　俺なんかした!?
「ぷ……ふふっ！　流石ハーレム王、カズ君いなかったら……危なかったかも……っ」
え、え、ええ……？
俺がなんか訳が分からなくて混乱してると、リヴァさんはお腹を押さえながら手を挙げて俺に謝ってくれる。
でもまだ笑ってるし。え、マジでなんかしたか俺。
正直本気で困惑している俺の前で、リヴァさんは親指を立ててサムズアップまでしてきたよ。
「君はそれでいいと先生思うかな？　うんうん、リアスさん達も中々良い男を見つけたと思うかな？」
よ、よく分からないけど褒められたってことでいいんだよな。
な、なんか元気出てみてるみたいだし……これでいいか！
「も、もちろんっすよ！　おっぱいいっぱい夢いっぱいで、最高のハーレム王になってやります！」
「その調子！　うんうん、エインヘリヤルの素質あるよぉ、君！」
とまぁ、ちょっと夜中っぽくないけど、なんとなくいい感じの飲み会になった。
酒を飲めるようになった時は、この雰囲気を参考にしよう！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「さてミカエル。例の件はどうなった？」
『賛同させていただきました。和平の中核である以上、三大勢力間での融和が進んでいることをアピールはできるでしょう』
「それに防衛力を強化することもできるからな。……懸念事項が幾つかあるから、これぐらいしてもいいだろうさ。で、サーゼクスの方はどうしたんだよ？」
『……大王派からの予想外の提案もあってね。それについて連絡をすることになった』
「なんか嫌な予感がするわな。どうしたんだよ」
『フロンズ・フィーニクスの発案をゼクラム・バアルが賛同する形で、サンタマリア級を中核とする各勢力間における緊急展開部隊を大王派主体で作ることが可決された。どうやら事前に準備をしていたらしく、今は演習を行っている最中だ』
「ゼクラム・バアルの賛同か。シューマ・バアルを中核とするあの連中は大王派の別派閥だからな。余計なことに力を使わせたいってところも考えているんだろうが……」
『タイミングが悪いですね。なんとか融和の反発を抑えるべく、こうしてこのプランを通したのですが』
『しかもその件だが、フロンズには「無礼を承知で」と前置き付きで批判的な意見を言われたよ』
「奴さん物怖じしねえなぁ。で、なんて言われたんだよ？」
『……いわゆる爆風消火の類ですか、と確認する言いようで言われたよ』
『それほどまでに、今回のプランは問題なのですか？』
『私も疑問だったのだが、フロンズ・フィーニクスからは爆発寸前のガスにダイナマイトを投げ込む所業に見えたらしい。……融和がきちんと進み、悪魔と天界は仲良くできることを示す方法かと思ったのだ

が』
「あ～……。そういやカズヒにこの手の意見を聞いた時に、似たようなこと言われたなぁ」
『そうなのですか？　どのようなことを？』
「……「この時期に不満をくすぶらせるような連中を、自分達レベルの高次元で扱うんですか？」ってよ。容赦ねえが、フロンズもカズヒも言い分の根っこは同じなんだろうよ」
『……難しい話だ。だが、数多くの問題の根幹は、それなのかもしれないな』
「ヴァーリと今の世界について話したときに、「誰かの平和が誰かにとっての苦痛になる」っちゃぁ言われてるが、そういうことなんだろうさ。……ま、だとするなら爆風消火をやった方がいいのかもな」
『そして、それだけの火種を着火させるのがリゼヴィム・リヴァン・ルシファーですか』
「あの野郎は扇動の鬼才ってところなんだろうさ。各勢力の融和の最前線に立ち、多くの勢力から評価されるのがイッセーだ。逆の各勢力の裏側にある不満に現れ、多くの火災を引き起こすのがリゼヴィムなんだろうさ」
『冥界の内乱からも悪魔の治世にも距離を置いていたリリンに、まさかイッセー君の真逆ともいえる才覚が眠っていたとはね。読めるわけがないが、やはりもっと行動を起こすべきだったか』
『無理を起こそうとしなくてもいいですよ、サーゼクス。未だ悪魔社会に根強く畏怖を持たせている旧魔王血族、まして別格といえる彼を滅ぼすなど、余程の条件が揃ってなければ内乱の再発で悪魔が滅びる愚行でしょう』
「まったくだ。乳神の来訪なんて想定外の事態からこれを予測できた奴以外に文句を言う資格はねえよ。っていうかあの時の情報でリゼヴィムが異世界侵略計画を立てるなんて誰が予想できるか。カズヒ流に言うなら「出来る方が異常」ってやつだ」
『とはいえ、この問題だけは先達がどうにかするべきだろう。ロスヴァイセ君の結界術に関してもだが、例の計画を進めるべきだろう』

『それはそれで後進に負荷をかけることになりますけどね。お互い、そのあたりの選別も済ませなければなりません』
『悪魔はその辺の問題はないよ、ミカエル。選別するならアジュカ以外に適任はいない』
「こっちはあんまり人材送れないしな。その辺に関しちゃ頼むぜ？」
『我々はガブリエルが適任でしょうか。……ですが、その前に問題を考慮しなくてはいけないでしょうね』
「だろうな。フロンズ達の見立てじゃ遅かれ早かれ爆発する。そしてそうなった場合、やっぱりリアス達に矛先が向きかねない」
『せめて護衛や補佐を何とかできるようにしなければならないか。できることなら起きないことを祈るし、起きた際はシューマ・バアル達の部隊が尽力してくれればいいのだが……ね』

英雄乱戦編　第四十七話

和地Ｓｉｄｅ

オカルト研究部用に与えられた、訓練用の異空間。
レーティングゲームの技術を流用したこの空間で、オカルト研究部のメンバーは沈黙していた。
その視線の先にいるのが俺とイッセー。
まずイッセー。全身の鎧が切り刻まれ、俺が加減を誤ったことで少し切り傷まみれになっている。
そして俺。イッセーもまた加減をし損ねたこともあり、防御に回してしまった左上腕部の骨が折れている。
イッセーは赤龍帝の籠手が秘める可能性を更に引き出す余地があり、それを掴みかけた。俺は先日見出した更なる可能性を、形に仕掛けているので試してみた。
ウォーミングアップも兼ねて色々調整したうえで、同じタイミングで発動した結果だが……加減し損ねるぐらいの出来だな。
「……これなら、リゼヴィムの野郎にも通用させれそうだな」
「お前はアサルトの方になるけどな」
「と、とにかく二人とも治療をしてください！」
お互いに苦笑しながら立ち上がり、血相を変えたアーシアの治療を受ける。
「……末恐ろしいことになってますね。正直、そろそろ反則の領域に入っている気がします」
「ふふふ。私達の夫は全盛期の天龍に迫りそうね」
シャルロットとリアス部長が感心半分呆れ半分でそんなことを言い合っている中、カズヒねぇがこれまた苦笑を浮かべながら俺達の方

に寄って来る。
「まったく。私も負けてられないぐらいの成長ね」
「「え⊠？」」
思わずイッセーとハモってしまった。
あのすいません。毎日毎日成長し続け、戦闘中に覚醒して跳ね上がる人が何を言っているのでしょうか？
ほぼ全員の視線がカズヒねぇに突き刺さり、気づいたカズヒねぇもちょっと咳ばらいをした。
「……覚醒なんて普通はできないし、普段の鍛錬で成長できるならそれに越したことはないのよ」
そう言うと、そのままカズヒねぇは肩をすくめながらリアス部長の方に視線を向ける。
「では行きましょうか、部長」
「そうね。紫藤局長の体調もあるし、時間をとらせるわけにはいかないわ」
そう、俺達はこれから天界に再び向かう。
全ては、紫藤トウジ氏に直接例の話を聞く為だ。

祐斗Ｓｉｄｅ

天界に到達し、僕達はトウジさんの病室に通された。
人間界の電子機器があり、宙に浮かぶ寝台がある。天界は冥界とは別の意味で、古き異能と新しき技術を組み込んだ独特な空間になっている。
そんな病室で、だいぶ顔色が良くなったトウジさんは目を伏せてで

リアス部長の話を聞いていた。
ゼクラム・バアルから聞いた内容を部長が語り終え、トウジさんは上半身を起こしながらも俯いていた。
「……我々は最後まで八重垣くんの説得を続けました。今でも根強い同意者は多いでしょうが、当時の概念で悪魔と信徒の恋愛は許されるものではありません。しかも分家とはいえベリアル家という元七十二柱の家の者が相手では、ベリアルそのもの……いえ――」
「魔王に並ぶと称される、ディハウザー・ベリアルが出てくると？」
リアス部長が引き継いだ言葉に、トウジさんは頷いた。
確かに、ベリアル家と揉め事になれば最終兵器として皇帝（エンペラー）が出てくる可能性は考慮するべきだ。そしてそれはすなわち、悪魔にとっての頂点と敵対することになる。彼が冥界で確固たる人気を確立している以上、民意に後押しされる大騒ぎになりえただろう。
……コカビエルがかつて、エクスカリバーを奪ったうえでリアス部長とソーナ会長を狙ったようなものだ。ネームバリューが大きすぎて、そうなればミカエル様達天界のトップが出てくる必要性がある。そしてそうなれば、神の子を見張る者も注目し、コカビエル辺りは嬉々として介入しそうだ。
そうなれば三大勢力の戦争は再開だ。言って間違えれば戦争再開の火種になりえるともなれば、彼らからしても警戒は必須だろう。
「……小競り合いでは済まなくなりかねない問題に対し、悪魔側も同様だったのでしょう。バアル派の悪魔が内密に、穏便に済ませたいと接触してきたのです」
戦争をしたくないのは教会側も悪魔側も同じ。
今にして思えばそれがトップの意見だと分かっているが、当時の状況で互いのトップのそれを知ることは難しい。結果として彼らは上層部に相談することなく、内密に収めようと動いていた。
そしてその結果、『反逆者』は始末された、ということか。
その結果として双方の間で手打ちが行われた。
バアルはベリアル家にすら一部の者だけに事情を伝えるにとどめ、カバーストーリーを用意したうえでリアス部長を後釜に据えて評判

の塗り直しを図った。クレーリア・ベルアルの眷属も、口止め料の類を貰って冥界の僻地に飛ばされたとのことだ。
教会側も駒王町から手を引き、それぞれが別の部署に飛ぶことになった。トウジさんの場合はイギリスに転任されて、そこでイリナさんが悪魔祓いにということになったのだろう。
トウジさんはそこまで語り、涙を浮かべながら歯を食いしばる。
「……ゴメンね、イリナちゃん。パパの手は天使のイリナちゃんが娘だなんて言えないぐらい汚れているんだ。もっと上手く収めることができれば、イッセー君と離れてイギリスに行くこともなかったんだよ」
「やめてよパパ。私だって教会の戦士だったから、その時のパパがどれだけ大変かなんて分かるわ。それにパパの手が汚れていたとしても、家族だもの。……パパは私が守るわ」
イリナさんが首を振りながら告げる言葉に、トウジさんは何も言えずに涙を流し続ける。
その様相を見ながら、リアス部長は覚悟を込めた表情でトウジさんを見る。
「過去の出来事は事情が有れど悲劇でしょう。ですが彼がクリフォトの手駒となっている以上捨て置けません。……どんな結果になっても、悲劇と憎悪を増やさない為にも止めるしかないのですから」
その言葉に僕達は全員が頷いた。
「こう言っては何ですが、同様の事態は歴史を振り返れば数えきれないほど転がっています。それを重く受け止め改め償うことはあっても、此処でテロを認めて殺されるわけにも殺させるわけにもいきません」
カズヒもまたそう告げ、視線をトウジさんに合わせて真っ直ぐに彼を見つめる。
「貴方の身は守ります。それが教会の必要悪を担ってきた辺獄騎士団の責務であり、八重垣正臣を利用する道間誠明たるミザリ・ルシファーの妹としての責任です」
……カズヒもつらいだろう。

彼女は教義上のグレーゾーンに位置する者達が多く在籍する、プルガトリオ機関の一員だ。それもグレーゾーンの者をあえて入れないダーティジョブ専門部隊の出身なんだ。同様のケースは知識としていくらでも知っているだろうし、場合によっては自身が動いたこともあるだろう。
　まして八重垣正臣をステラフレームとして復活させたのは、ミザリ・ルシファーがサブリーダーになっているクリフォトだ。様々な意味で重く受け止めるしかない状況だ。
　そして、例えそうであっても彼女の判断は変わらない。
　業を背負い、汚れを浴び、そして自らが苦痛を味わおうとも。悪祓銀弾（シルバーレット）は自らの道を定めているのだから。
　その強い二人の決意を受け止めながら、トウジさんは涙をぬぐう。
「……実は、私はクリスマス企画の為だけに来日したわけじゃありません。D×Dにある物を提供することも仕事なのです」
　そう言いながら、トウジさんは細長いケースを取り出す。
　そしてイリナさんに渡しながら開ければ、そこには聖なる力が溢れていた。
「これは……？」
　イリナさんが取り出したのは、聖なる波動をもつ一振りの剣。
　エクスカリバーやデュランダルに次ぐだろうその剣は、魔剣で言うならダインスレイブといった伝説級のそれだ。
　僕達がそれに目を奪われる中、トウジさんはイリナさんを見ながら小さく頷いた。
「かのデュランダルの持ち主たるローランの親友オリヴィエ。彼が持っていたオートクレールが其れです」
　聖剣、オートクレールか。
　確かにそれなら、ダインスレイブ級の伝説クラスはあるだろう。逸話から言ってもそれぐらいはないとおかしいレベルだ。
　そしてトウジさんは、オートクレールの刀身を見ながら感慨深い表情になる。
「真に清き者以外は触れられないとされ、斬った者の心すら洗い直す

と言われる聖剣。イリナちゃんが一番適性を持っていると結論付けられたんだ」
「……でも、イリナ先輩は人工聖剣使いになってからも与えられてはいなかったはずですよね？」
ルーシアちゃんがそう首を傾げると、トウジさんも少し苦笑して頷いた。
「おそらく天使になったことで、取り込んだ聖剣因子を後押ししたんだろう。研究者はデュランダル使いのゼノヴィアさんの相棒を務めていたことも作用したと考えていたよ」
その言葉に、ゼノヴィアとイリナさんは思わずお互いを見つめてしまう。
お互いエクスカリバーの使い手を任命され、ヘキサカリバーの使い手にもなっている二人。デュランダルの持ち主たる先天的聖剣使いのゼノヴィアに影響され、後天的聖剣使いであるイリナさんがオートクレールの使い手となった。何かしらの因果を感じるね。
そしてトウジさんは、真っ直ぐにイリナさんに託す視線を向けると、小さく頷いた。
「……イリナ、八重垣君を止めてくれ」
その言葉に、イリナさんは強い決意をもって頷いた。
「ありがとう、パパ。必ず、あの人を止めて見せるわ！」

九成Ｓｉｄｅ

トウジさんからイッセーだけ残ってほしいと言われて、俺達は先に

退出する。
その上で、これはちょっと離れたところで少し残ったうえで現状を再確認だ。
ここは天界であり、天使達の本拠地だ。
本来悪魔であるグレモリー眷属や、堕天使側であるＡＩＭＳ第一部隊が入れる場所ではないが、技術革新でその辺りがだいぶ安全になっている。
とはいえあまり大人数でお邪魔するのもあれなので、メンツは前回来たメンバーだ。
つまりインガ姉ちゃん達はいないし、未だ厳密にはシトリー寄りの鶴羽も来てない。リヴァ先生は来ているけどな。
まぁここにいきなり襲撃が来る可能性は薄いだろうし、来たとしても天使の本拠地なのだから戦力は豊富だ。
そしてそれはそれとして、相応の備えもしているようだ。
ちらりと外を見ると、外付けの輪を取り付けた悪魔や堕天使が何人確認できる。他にも生きたままの人間もな。
三大勢力を中心とする和平が進んでいることを示し、各勢力が仲良くやっていけることを証明する為の融和政策。その一環として各勢力の重要拠点に対し、他勢力の部隊を衛兵の一人として派遣するという運動が進められている。
……まぁ確かに、融和の象徴としてそういった活動に価値はあると思う。思うけどそれはそれとして反発も強まりそうだな。
結局どう動こうが反対勢力は必ず出るだろう。だがなんというか……できない奴の配慮がちょっと足りなすぎないだろうか。
う～ん。どうも異形社会のトップ陣営、種族や存在的なあれもあって、その辺りの配慮が苦手な印象があるな。
これ大丈夫なんだろうか？　ちょっと不安になってくるぞ。
そんな不安を覚えていると、病室のドアが開いてイッセーが出てくる。
「九成か？　なんでまだ残ってるんだ？」
「単独行動はあれかと思ってな。許可をもらっているとはいえ、天使

にだって複雑な感情を持ってるやつはいそうだろ？　複数人行動しておくに越したことはないさ」
未然に防ぐ対策とかは必要だしな。
「で、これはあれか？　娘をよろしくお願いします的な？」
俺が茶化すようにそう言うと、イッセーは面食らった。
「なんで分かった？」
半分冗談だったが、どうやらマジらしい。
おいおい、もうお父さん公認かよ。こいつ凄いな。
……まぁ、それはそれとしてだ。
「イッセー。一応気を付けとけよ？」
「……クリフォトが天界に何か仕掛けてくるってか？」
いや、そんなレベルじゃない。
俺は首を横に振ったうえで、イッセーの認識を改めさせることにする。
「今回の件、ミザリからすれば垂涎ものの状況だ。……奴が八重垣正臣をステラフレームにするだけで済ませるとは思えない」
そう。最大の懸念点はそこなんだ。
和平の象徴たる駒王町のグレモリー眷属を中核とするオカルト研究部メンバー。
その駒王町そのものと主要メンバーであるイリナ。そこから負の歴史をほじくり返す八重垣正臣の一件は、俺から見たミザリにとってこの上ない悲劇の元だ。
質も量も拘りその為に資材や時間を費やすことをいとわない。そんな悲劇を求めるミザリ・ルシファーが、たった一人をステラフレームにするだけで終わるとは思えない。
流石に天界に仕掛けるのは難しいだろうが、いずれ必ず相まみえる時、更なる上乗せを仕掛けてくることは想像に難しくない。
考えるだけで嫌な予感が止まらない。どんな上乗せをしてくるか、想像ができないからこそ備えと覚悟をしておかなくては。
初見殺しに対する真っ当な策などという物は、根本的に喰らっても持ち直せる備えをしておく以上にないのだから。

「帰ったらあれを煮詰め直すぞ。最悪リゼヴィムとミザリがどっちも出てくると考えるべきだ」
「最悪のパターンを想像しろってか。あいつらその斜め上を行きそうだしな」
俺とイッセーは頷き合うと、先に第一天に戻っているカズヒねぇ達と合流しに向かう。
まずはあれをしっかり煮詰めて確立させることだ。それができれば……おそらくリゼヴィムにも通用するはずだから……な。

英雄乱戦編　第四十八話　急変する天界

祐斗Ｓｉｄｅ

トウジさんから話を聞いた後、僕達は天界で一時を過ごしている。
アーシアさんがアウロス学園防衛戦で量産型邪龍を仕えさせることができたり、この機会に天界側が僕たち関係で調べたいことがいくつもあるからだ。ゼノヴィアのエクス・デュランダルも大いに調べたいだろうしね。
僕も聖魔剣関係で色々調べてもらった後、喫茶スペースに一休みしに来てみた。
そこには既に先客が何人かいたよ。
「あ、祐斗くんやっほー♪」
「そっちはもう終わりかしら、祐斗」
リヴァさんとカズヒもまた、喫茶スペースでそれぞれドリンクを飲んでいる。
僕も会釈しながらドリンクを買うと、二人の近くに腰を下ろした。
「二人も所用は終了ですか？」
「まぁね。和地も独自に色々用事があるみたいだし、たまにはこういう女同士の時間も必要でしょう？」
「既に北欧から人員来てるみたいだから、先生の出番ってあまりないのよね～」
なるほど、そういうことか。
となると僕はお邪魔になるかとも思ったけれど、そこまで深く真剣な雰囲気でもなかったら雑談に混じらせてもらった。
基本的には天界の雰囲気とかが中心になったけど、その話が各勢力からの護衛部隊派遣という話になった時、カズヒが少し俯き気味に

なった。
「言いたいことも理念も理解できる。ただ、それを一番理解させたい相手が言いたいのはそういうことじゃないでしょう……とは思うわね」
「そうかい？　各勢力がきちんと仲良くやれることを示すのは重要だろう？」
　僕としてはそう思うけど、カズヒはどうも違うらしい。
「いえ、むしろ逆効果になりそうな気がしてならないわね」
　その言葉に少し理解が追い付かないけど、リヴァさんは少し分かるらしい。
　何かを思い返すように、遠い目をしながらリヴァさんは苦笑した。
「あ～確かに。大戦後の敵対国同士だとやっぱり色々いがみ合いはあったものねぇ。あれってどうしても時間が必要だもの」
　そう苦笑するリヴァさんに、カズヒも神妙な面持ちで頷いた。
「基本的にできない奴にとって、「正しいからそうしなさい」なんて言ってもどうにもならないのよ。そういう連中は少しずつ変わっていくしかないわけで、その間のストレスも発散させながらじゃないとどうしようもない。だってできないんだもの」
「そういう意味だと、各勢力の和平は早く進みすぎだよねぇ？　折り合いをつける時間や鬱憤を晴らす手段が全然足りてないところはあるかな？」
　……なるほど。
　言われてみれば、僕達オカ研のメンバーは各勢力から見てもできる人物が多いだろう。
　元から和平に対して肯定的な人物が主体だからこそ、僕達の関係性は良好だ。そういう人物を積極的に見繕ってもいる。
　そして能力面でも優秀だろう。誰もが自主鍛錬を欠かさず行い、大抵のメンバーは何かしらに秀でた才能を持っている。その上で各勢力からも十全な支援を受けている。とどめにそれらをもってして苦戦する難敵との戦いも、経験値として見て考えれば凄まじいものだ。
　そういう意味で見れば、僕達オカ研のメンバーはできる人物が主体

だね。
　しかもそこにイッセー君だ。彼の在り方は僕達全体に前を向いて進もうという意識を持たせてくれる。
「……僕達にとってのイッセー君が必要、ということかな？」
「いえ、それでどうにかならないからできないのよ？」
　カズヒから呆れ顔でそう指摘されるけど、そういう物かい？
　少しピンとこないけど、カズヒはふと上層に移動する為の門の方を向きながら、複雑な表情を浮かべる。
「本来聖書の教えにおいて、主である神の教えは絶対であり疑念を持つことすら未熟。その代行者たる教皇猊下や使者たる天使の下す言葉をもってしても、和平に納得がいってない者がいるということはとても重いわ。……それほどまでに、彼らはできないのよ」
　そう告げるカズヒは、本当に事態を憂慮している雰囲気だった。
「どうも異形は才能差がもろに出るから、その辺りがおざなりになっている節があるわ。……リゼヴィムは火種（そこ）を煽るのが得意なようだし、尚更……ね」
　……なるほどね。
　これは、まだまだ波乱は発生しそうだね。

和地Ｓｉｄｅ

　俺は何となくだが、天界の第一天を巡っていた。
　特に理由はないが、気分転換も兼ねた観光的なあれだった……ん、だが。

「……貴殿は、確か英雄派の曹操にヴァーリ・ルシファー殿か」
「ん？　誰だったかな、覚えがないな」
「俺達は異形社会じゃ有名人だからね。そういうことじゃないのかい？」
数人の従者を引き連れた男と、それに対面しているヴァーリに曹操だ。
あと従者を引き連れた方、服装から言って悪魔の貴族だな。
悪魔絡みの面倒ごとを、よりにもよって天界の第一天でやられても困る。
なので俺は割って入って、半目で二人の方を軽く睨む。
「……何やってんだそこの元テロリスト」
俺がそうツッコミを入れると、二人揃って肩をすくめた。
意外と仲良いな。なんかムカつく。
「ハーデス神がクリフォトに何か情報を流したみたいだろう？　それでリゼヴィムが動き出しそうだと曹操が言ったんでね」
ヴァーリがそう言うと、曹操は俺達の方を見ながら苦笑交じりで肩をすくめた。
「経験論から言って、グレモリー……というより兵藤一誠や君はその手のトラブルに巻き込まれやすいと踏んだのさ。だから色々と手を回してもらったんだよ」
手を回してもらった？　一体どういうことだ？
怪訝な表情を浮かべていると、近くの建物から見たことのある女が現れた。
「曹操、話は終わったわ。ここの部屋を一時的な拠点にして言いそうよ」
「ご苦労様、サイリン。いつも助かるよ」
曹操が返事をしておかげで分かった。
英雄派のサブリーダーの一人にして、国際ＰＭＣのＣＥＯ。ドゥルヨーダナの血を引き、更に日本の大名に連なる血筋。サイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナだ。
この女がフォローする形で、俺達のストーカーじみた真似をしてき

たってわけか。
張り倒したいがまあいい。そして俺も危機感を再認識するべきだろう。
フラグがここまで立っている状態でイベントレベルの移動だからな。実際に何が起こっても不思議じゃないだろう。警戒は必須か。
「分かった分かった。他の人達に迷惑をかけないようにな？」
俺はそれで話を打ち切ると、後ろの悪魔の方に振り向いて肩をすくめる。
「すいませんねぇ。あいつらあんななんで適当に流した方が得ですよ？」
「そのようだな。余計な手間をとらせてすまなかった」
お、意外と傲慢さとは離れている感じだ。
というかだ、こんなところに悪魔がいるってことは……あれか。
「天界に派遣された悪魔の方々ですか？　もしよければリアス・グレモリーを紹介しますよ？　コネづくりとか、便利では？」
貴族となると繋がりもあるに越したことはないだろうからな。そういうので機嫌は取れるかもしれない。
リアス部長からは睨まれそうだが、それとは別の意味で懸念も生まれた。
俺やら部長やらイッセーはトラブルに巻き込まれまくりだからな。フラグまで立っている以上、真剣にそのあたりを警戒するべきだ。
顔だけでも合わせておいた方が、いざという時連携も取りやすいだろう。
そういったことも踏まえた気づかいだが、その貴族さんは首を横に振る。
「いや、気遣いはありがたいが遠慮しておこう。私はグレモリー眷属からは敵視されているだろうからな」
……？
グレモリー眷属がわざわざ敵視する相手？　冥界政府のメンバーだし、余程のことがなければないだろう。
態度から見てもそういったことはあまりしそうにない。となると

勝手にそう判断しているようだが、大王派の重鎮か？　それもガチガチの。
　悪魔は外見で年齢を探りづらいからな。その可能性はあるか。
「……それは失礼。ならブッキングしないようにフォローしますんで、一応名前をうかがっても？」
「そうだな。いずれ顔を合わせることになるだろうし、名前ぐらいは名乗っておくべきだろう」
　そう小さく頷いた彼は、少しくたびれたような表情を浮かべている。
「私はマグダラン・バアルだ。兄のサイラオーグと懇意の君達からすれば、鬱陶しく迷惑な男だろうさ」
　あ、この人が。
　つい先日話題に上がっていたが、サイラオーグ・バアルの実の弟さんか。
　そういえばサイラオーグ・バアルに嫌がらせをしているとか言っていたしな。その辺で敵視されてもおかしくないとかいう認識はあるんだろう。
　まぁある意味で妥当な判断だ。だがそれはともかく。
「あれが実のお兄さんだと、名門悪魔としては色々苦労しているでしょう？　そちらはそちらで大変でしょう」
「……驚いたな。兄から話は聞いてないのか？」
　割と本気で驚かれているようだけど、それは違う。
「いえいえ。むしろあの人、「恨まれて当然なのだから、自分個人に向ける嫌がらせは受け止める」とか言ってましたんで」
　下手に突っかかると逆に怒られるだろあれは。
　そしてその返答も想定外だったのか、マグダラン・バアルは複雑そうな表情を浮かべていた。
「……あの兄は……なんなんだ……っ」
　あ、こっちはこっちで大変そうだな。
「えっと……よければ愚痴でも聞きましょうか？　なんか後ろの馬鹿共D×D準メンバーが迷惑かけたっぽいですし、それでトントンってこ

とで……」
俺は当たり障りがないように言い方を考えながら、とりあえず対処法を考えようとする。
……と、天使の一人が植物の束をケースに入れて持ち運びながら移動していった。
思わずつい視線がずれてしまっていたが、それにマグラダンも気づいたらしい。
「……あれが気になるか？」
「え、いや―」
俺はちょっと戸惑ったが、マグダランは小さく頷いた。
「冥界で生えている野草の一種だ。そのまま摂取すると意識混濁といった症状を引き起こす毒草だが、少量を少しだけ取れば軽い不眠症の薬にできる。人間にも同様の効果がみられると一月前に論文発表がされていたな」
……あれ？
今の植物、足早に移動している天使が持っていたから一瞬しか見えないはずだが。
あとその知識量、雑学とかそういったレベルではない。あと冥界の貴族が覚える類の知識として、今どき野草関連が出てくるか？
もしかしてだが、この人まさか―
「植物、お好きなんですか？」
「……ああ、すまない」
なんで謝る。
「大王バアルの次期当主として育てられた者として、不適格ではあるだろうな。ちょっと聞かれただけで語りすぎてしまったようだ、忘れてくれ」
……ああ。
なんとなくだが、この人のことが少し分かった気がする。
「……大王とかいう格の違う家に生まれると、しがらみの類も多いんですね」
正直だが、この人にちょっと同情してしまった。

勘違いかもしれないけど、この人多分、政治の場より学者とかになりたい人なんだろう。
ただ、大王バアルの次期当主としてはどうかと言われっぱなし。しかも次期党首の座をサイラオーグ・バアルに奪われる形になった。
そういう意味では、この人も大変ではあるんだろう。
サイラオーグ・バアルに対する嫌がらせのこともあって、俺はちょっと一言で言い表せない感情が渦巻いてしまった。
「……一つ、指摘をしていいかな？」
そこに何時の間にやら曹操がこっちを……というか、マグダランの方を見てこっちに声を飛ばしてくる。
「経験論だが、時折足を止めて自分や周りを見つめ直すのは重要だ。人間と悪魔では勝手が違うが、それでも迷走とは何時の間にかしているものだからね」
「……っ」
図星を突かれたかのようなマグダランに、だが曹操はもう視線を向けない。
気まぐれにアドバイスをすると、曹操はそのまま建物の中に入っていく。
っていうか、俺はどうしたらいいんだ。
後ろの従者さん達もちょっと困っている感じだし。
「えっと……愚痴ができたなら聞きますよ？」
とりあえず、変な爆発をさせないようにフォローに回った方がいいんだろうな。
そう思って俺が声をかけると、マグダランは俯き気味になった。
あの、誰か。俺はどうすればいいのか教えてくれ。
と、とりあえず言い出しっぺの責任として、一時間ぐらいは愚痴を聞く覚悟を決めるべきだとは決意をする。
そして固唾をのんで見守っていると、マグダランは声を絞り出す。
「……無言、なんだ」
その言葉を、沈黙で促す。
「食事の時だけではない、一事が万事そんな感じなのが今の我が家だ。

父と側室である私の母、そして私と兄のサイラオーグの関係は、兄が当主の座についてからそんな感じだ」
……なるほど。
サイラオーグ・バアル。より厳密にいえばバアル本家は色々と厄介なのは分かっている。
本妻との間に生まれた子であるサイラオーグ・バアルは消滅の魔力を持たず、それゆえに冷遇というのも生ぬるい扱いを受けていた。
しかし彼は努力で体を鍛え上げることで、既に単独で最上級悪魔の上位級に届く力量を獲得。その力によって、目の前のマグダラン・バアルを打倒して次期党首の座を獲得。だが強引な手法故に内部に敵が多く、力そのものは認める初代バアルも、消滅の魔力を持たぬがゆえに魔王の座に据えてでも大王家当主の座に座らせる時間を減らす腹積もりだ。
そんな彼らがどんな生活をしているかについては知らなかったが、相応に胃が痛くなるようなものだとは思っていた。
……当人の視点から聞くと、本当に胃が痛くなりそうだな。
「先日、リアス部長たちグレモリー眷属に初代殿が会いに行ったのは知ってますか？」
さわりぐらいは伝えられているだろうが、まぁ一応確認するべきだろう。
とはいえまぁ当然だが、心当たりはある表情で頷いていた。
「父上達が慌ただしくなっていたよ。……なんでも、十年ほど前に彼女の管轄を担当していた先代が起こした過ちの、隠蔽工作について話に行ったとか」
「その話が終わった後、赤龍帝を「サイラオーグも狙える地位」と前置きして次期魔王に勧めていましたね。次期大王はバアルの「消滅」を受け継ぐ貴方でなければならないというスタンスを宣言していました」
俺がそれを伝えると、マグダラン・バアルは少し苦笑いを浮かべていた。
「兄に手も足も出ない私がバアル本家の後継ぎか。……まぁ、そうい

う家に生まれたということなのだろう」
当人としてはどうしようもないと思っているんだろうな。
ただ、俺が言いたいのはそういうことじゃない。
「……だからこそ、せめて自分はどうありたいかは見定めるべきかと。今のままだと、貴方は自分の人生に折り合いをつけることすらできないと思います」
おそらくだが、サイラオーグ・バアルと彼の関係性における最大の問題はそこだろう。
マグダラン・バアルの反応から見て、俺は彼が本気でサイラオーグ・バアルを憎んでいるとも思えない。
そんなままではこじれるとかこじれないとかの問題以前だ。関係を改善しろとまでは言わないが、嫌うなら嫌うでその辺りをしっかりと見定めるべきだろう。それができなければ、サイラオーグ・バアルの方がどう動こうが意味がない。
「実は俺、彼のことが少し苦手でして。機会があれば愚痴の一度や二度は付き合いますよ。……彼はあまりにまっすぐすぎて、俺みたいなタイプとは噛み合いが悪いんでね」
「……意外だな。グレモリー眷属の食客ともいえる者が、兄ではなく私の肩を持つとは」
本気で意外そうに言われたが、問題はそこではない。
「好き嫌いと良し悪しは別の観念でしょう？　俺は俺のスタンス上、彼のようなタイプを全肯定しにくい。そしてそういうできる側に振り回される人に同情しやすいんですよ」
ああ、彼も彼で大変だ。
人生の方向性が定められたまま生きている中、横からいきなり壊されてそのままだ。そこからどうすればいいかについて、誰も彼もがいい加減だろう。
誰もが困難に真っ直ぐ立ち向かい続けられるわけではない。俺は俺の誓いにかけて、彼を無視するのはちょっと許容できない。
己の夢の為、真っ直ぐ前を向いて歩き続けられる奴ばかりじゃない。むしろそういう手合いほど、助ける必要がある事態に巻き込まれ

ることが少ないからな。俺が動く相手はそうでない奴が殆どだ。
詳しくは知らないが分かり易い大王派の貴族主義者らしい、現バアル。己の夢の為に競技試合ですら命を懸けるレベルで邁進する、サイラオーグ・バアル。そしてイッセーが言うには強い意志を持つ目をした、初代バアルことゼクラム・バアル。
マグダラン・バアルはこれだけのいろんな意味で強い連中に振り回されている。なんというかほっとけなく思えてしまった。
俺は苦笑交じりで彼に手を差し出す。
「もしよろしければ、冥界の植物について今度教えていただきたい。冥界でも活動することがある立場なので、薬草や毒草、あと食用などを見分けられるに越したことはないんですよ」
その俺の対応に、マグダランと彼の従者はかなり戸惑っている。
ただ、マグダラン・バアルはその手を握り返してくれた。
「そうだな。趣味について語れる相手がいると、少しは気晴らしになりそうだ」
そうして軽い握手を交わしたまさにその時だ。
―あらゆるところから、非常時を告げるものと思われる陣が浮かび上がった。
……曹操の発言通りの展開になってきたな、オイ。
「失礼。俺はリアス部長達のところに戻ります」
「そのようだ。私もここに招かれた役目を果たさせてもらう」
俺達は頷き合うと、急いで行動する為に走り出した。

英雄乱戦編　第四十九話　始まる天界防衛戦

和地Ｓｉｄｅ

急いで第一天の一室に駆け込むと、既に中では慌ただしいことになっており、カズヒねぇ達も集まって情報を集めていた。
「遅くなりました！　状況は？」
「かなりまずいことになっているわ。……見て頂戴」
部長が指さす映像を確認すると、そこには大量のデカい飛行船が浮かび、更に率いられるように大量の邪龍達やサリュートが蹂躙を開始していた。
数は千や二千では聞かない。邪龍だけでもアウロスやアグレアスを襲撃した比ではなく、サリュート系列を含めれば圧倒的といっても過言ではない。
「……第三天から現れたクリフォトは、既に第四天と第二天にも侵攻。第五天にも入っている連中が出ているようね」
カズヒねぇが苦い顔で戦況を語れば、隣のリヴァ先生も眉をしかめている。
「完璧にわき腹をつつかれた形ね。おかげで混乱で崩れたからかなり押し込まれてるわ」
全くだ。
天界だって当然テロ対策として警戒はしていただろう。だがそれは入り口から襲われることの想定だ。
今回の件はいきなり中心部の地下から敵の大軍が現れたようなものだ。それによって完璧に不意を突かれて対応が遅れ、敵の侵攻体制が整ってしまう。それによって更にどんどん急速に侵攻が進み、その混乱で対処が更に遅れてという悪循環。
漸くその辺も収まったみたいだが、ここまでやられると押し返すのも危険だろう。

「奇襲としては完璧だろうね。入口たる第一天からでなく、善なる死者以外が大挙して第三天から押し寄せるなんて、反応が遅れることをいさめられない」
ゼノヴィアが歯噛みするが、まさにその通りだ。
全く想定外のところに戦力を集中投入して穴をこじ開ける。奇襲としては完璧レベルでに近い。これは敵の手法が完璧すぎて、反応が遅れた警備達を悪く言えないだろう。
というよりだ。
そもそもどうやってそんなところから入ってきた？
「……なんでクリフォトは第三天から侵入できたんだ？　確かあそこは天国で、死んだ善人しかまねかれないんですよね、普通」
イッセーもそこが気になったのか口に出すが、誰もが首を傾げてしまう。
うん。クリフォトに限って天国に招かれるわけがない。流石にそこまで聖書の神が遺したシステムもバグってないだろう。
だからこそ困惑するとしか言えないわけだ。
「……抜け道とか裏道があったりとかしませんの？」
と、ヒマリがそんなことを言うけど、それぐらいしか思いつかないな。
ただそんなものがどこにあるんだって話になるんだが。
「いやそんな裏技あるにしたって、どうやって見つけたかってことになるじゃんか―」
ヒツギがその辺りを突っついたその時だ。
『―冥府だろうな』
アザゼル先生の声が聞こえると共に、映像が浮かび上がる。
「先生！」
「アザゼル。そっちはどう？」
イッセーと部長の声に、先生はしかめっ面で首を横に振った。
『悪いが増援はまだ無理だ。……だが奴らがどこから入ってきたのかの当たりはつく』
そう言うと、先生は盛大にため息をついた。

先生達ですら増援到着には時間がかかるか。クリフォトの連中、技術力が高まりすぎだろう。
『天界の第三天、つまり天国に行ける奴は限られている。天の国に招かれるだけの人生を送った死後の人間か、天界そのものに招かれる連中が第一天経由で行くかだ。……だが例外として、煉獄と辺獄については当然知っているな』
その言葉に俺達は頷いた。
煉獄は天国に行くにはちょっと足りない者達が一時的に天国に行けるようになるまでいるような場所で、辺獄が特殊な事情で天の国に行く資格がない善良な魂などが辿り着く死後世界だ。
プルガトリオ機関の辺獄騎士団に属していたカズヒねぇがいるから、その程度のさわりレベルは知っている。
『煉獄も辺獄も、そこに住まう魂は状況次第で天国に行ける可能性がある者達の居場所だ。……つまり、その二つからは天国に行く道筋があるんだよ』
その説明が終わるタイミングで、ゼノヴィアの姉貴分でありガブリエル様のQ（クイーン）であるグリゼルダ・クァルタさんが通信を聞いてこちらに振り替える。
「……確認が取れました！　クリフォトの軍勢は煉獄からこちらに侵攻しています！」
その言葉に頷いたアザゼル先生は、かなりのしかめっ面をした。
『ちなみにその二つはハデスとも呼ばれ、聖書の神は冥府を参考に二つの世界を作ったとも言われている。……ハーデスの爺なら、相応に情報を集めているなり冥府を参考にして構造の当たりを付けてると思わねえか？』
その言葉に、俺達は一様にげんなりとする。
あの神様、頼むからもうちょっと当事者で解決するといったことをできないのか。
死後の魂まで巻き込むのは可能な限り避けてくれ。不可抗力とかなら俺達だってもうちょっと容赦できるんだが。
「……未だ冥府はポセイドン派の過激派に侵攻されていると聞きまし

たが？」
『わざとその程度に済ませてるんだろうよ。奴さんが抱える星辰奏者部隊や、それとは別に囲っているらしい連中がいるならとっくの昔に返り討ちにできるはずだ。……あの爺は将来的にオリュンポスでクーデターを起こすぐらいのことは考えて立ち回ってんだろうさ』
グリゼルダさんにそう返しながら、先生はげんなりとした表情になる。
『どうやらクリフォトが復活させた邪龍の内、上位側であるクロウ・クルワッハやアジ・ダハーカ、そしてアポプスはリゼヴィムの支配から逃れているみたいでな。リゼヴィムが対価次第でそれを認め、そして半ば独立したあいつらを経由してハーデスの爺が情報を送ったら……とか、あの野郎ならやりそうだと思わねえか？』
「有りですかそんな言い訳!?」
イッセーが思わず大声を張り上げるけど、有りになりそうだなぁ。
「内乱状態って情報を精査できないですし、物証の類は難しいですからね……」
「ましてハーデス神は冥府の神。人間世界に対する影響度も大きい以上、これだけでは処刑や封印をするには足りないところはありますわ」
ルーシアと朱乃さんが苦い顔をするが、確かにそうだ。
まさに老獪とはこのことか。ゼクラム・バアルと言い、ここ最近優秀すぎる老人に出くわし続けている気がするぞ。
と、その時だ。
木場が何かに気づいたのか振り返る。そして映し出される映像の一部を見て眉をしかめた。
「部長、イッセー君！　第五天の映像を！」
その言葉に俺達が映像を確認すると、そこには剣を持っていると思われるステラフレームの姿が合った。
「あれは……間違いなく、叢雲だ！」
「ってことは八重垣さんか！」
ゼノヴィアとイッセーが声を張り上げるが、あれがくだんの八重垣

正臣か。
既にあんな所にまで侵入者が出るレベルとはな。流石にまずいだろう。
っていうか第三天の方を見ると、ヴァルプルガやらラードゥンやら、更にローゲまでもが迎撃部隊を圧倒している。
ちっ。流石にそろそろ俺達も出てくる必要がありそうで―
「いけません！　第六天には治療中の紫藤局長が！」
―そのグリゼルダさんの言葉に、俺達は凍り付きそうになった。
流石にまずい。このままだと確実に殺される……っ
「行くわよ皆！　どちらにせよ相手がクリフォトなら私達が戦うべきだし、紫藤局長も守らなければいけないわ！」
『『『『『『『『『『『『はい、部長！』』』』』』』』』』』』
まったく忙しい展開だよ。だがとにかく、俺達が出張るには十分すぎる理由だろうさ!!

祐斗Ｓｉｄｅ

僕達は第六天を目指すべく、今は第二天を走っている。
其処では転生天使達と純血の天使達が、邪龍達を相手に何とか戦っていた。
「行くぞ諸君！　我ら御使（ブレイブ・エンジェル）いの本領を見せるぞ！」
『『『『『『『『『『『『フォーメーション、フルハウス！』』』』』』』』』』』』
転生天使達はトランプを参考に設定されており、それゆえの特性を持っている。
それがそれぞれの札に合わせてポーカーの役を組み合わせること

で、自分達の能力を強化する機能だ。
チェスの駒を模してそれに合わせた強化が成される転生悪魔とも異なるこの方法。もし転生堕天使なんてものがあったらと思ってしまうね。
だがそんなことを言っている場合ではない。
クリフォトの軍勢も決して油断ができず、所々で突破に成功しかけている者達も多数存在している。
というよりだ、クリフォトも新兵器を投入し始めているようだ。
『全機砲撃開始！　天使共を撃ち落とせぇ！』
放たれる砲撃が役を成立させた天使達の猛攻とぶつかり合い、周囲をオーラで照らしてく。
それを成したのは、サリュートⅡと似たような、しかし明確に異なるサリュートだ。
巨大な大砲を構え砲撃を放ちつつ、背中から延びるサブアームから放たれる射撃で接近してくる敵をけん制している。
更にそこに接近を試みた天使達に、俊敏な動きで割って入る更なるサリュートが現れる。
『なめんな天使がぁ！』
「ぐぅっ！　こいつ、強い……っ！」
仕掛けてきた上級天使と切り結ぶのは、巨大な剣を具現化したサリュート。
更に全身から時折ロケット噴射のように推進力が放たれて天使の前進を阻止し、時折打撃が入った瞬間、推進力がまるでスパイクのように放たれて天使を傷つける。
それに僕達の注意が一瞬逸れた時、近くに着地音のようなものが聞こえてきた。
警戒の為に振り向いた時、僕達は一瞬何かがいる風には見えなかった。
だけど、小猫ちゃんが耳を立てて声を張り上げた。
「……います！　たぶんサリュートです！」
それに僕達が警戒した時、目の前から何かが放たれる。

朱乃さんとロスヴァイセさんの魔法による結界にぶつかったそれは爆発するけど、それによって何かが揺らめいて位置が分かる。
「そこ！」
リアス部長の抜き打ちの魔力が、回避を狙った敵機を撃破する。
その爆発によってマントらしきものが飛び、僕達の目の前にまた違ったサリュートが転がった。
これも新型か……っ
僕が戦慄を覚えていると、リーネスがその残骸に近づくと、軽く確認して、ため息をついた。
「そういうことねぇ……」
「どういうことだ、リーネス」
九成君が尋ねると、リーネスは眉をひそめながら周囲で戦っているサリュートに視線を向ける。
「ようはサリュートⅡをベースにΔサリュートを再現したのよぉ。換装機能でバリエーションを確立しているわぁ」
そういうことか……っ
「なるほどね。サリュートⅡに換装機能で更なる特化性能を確立した上位形態」
「どうも特化した部分なら上級クラスはありそうです。これは厄介ですね」
リアス部長とロスヴァイセさんが舌打ちじみた表情をした時、僕達に近づくオーラを検知した。
『これはこれは、まさか天界であなた方に会えるとは思いませんでしたよ』
そんな言葉をかけるのは、樹で出来たドラゴンといえる異様な風体の存在。
「てめぇ、ラードゥン！」
イッセー君が吠えるけど、そうか、奴が邪龍の一角。
龍王に相対できる域の邪龍。伝説に記されしドラゴンの一角ラードゥンか。
『ちょうどいいので私と遊んでいただきたい。アウロスとやらでは満

足できなかったので』
「ふざけんじゃねえ！　こっちは急いでるんだよ！」
イッセー君が拳を握り締めるけど、即座にラードゥンは僕達に対して個別の結界を展開する。
くっ！　力の発現すら阻害する結界。それもおそらく僕達個人個人に合わせたものを、この一瞬でか。
テクニックタイプの雄といえる能力だろう。これは僕達と相性が悪い……っ。
それぞれ結界を破ろうと悪戦苦闘する僕達を見ながら、ラードゥンは不気味な雰囲気で意識を後ろに向けていた。
『それにあなた方と遊びたいのは、私だけではないものでして、ねぇ？』
「まぁね。いい機会だし、ちょっと話をしようじゃないか……リヴァ」
「彼女が例の？　主神の娘と付き合ってたとか凄いですねぇ？」
『やっほー♪　いい加減一人ぐらい始末したいんだよねーっと』
「はっはっは！　そろそろ手柄の一つぐらいは貰おうとするかなぁ？」
……見覚えのある者達がぞろぞろと。
ツヴァイハーケンのジークリット・ゼーベックが、隣に一人の男性を連れて現れる。
更にモデルバレットにローゲまで来て、状況はあまりに僕達にとって不利といえるだろう。
そして、見覚えのない男性に向けてリヴァさんが泣きそうな表情を向けていた。
「……久しぶりね、ヴォルフ。何年ぶりかな」
「第二次大戦の前だからね。もう七十年以上も経つよ、リヴァ」
リヴァさんの知り合いなのか？　寄りにもよってツヴァイハーケンに属しているなんてね。
ただこのままだとまずい。間違いなく今の戦力では、突破なんて不可能だ。
せめてイッセー君とイリナさんだけでも向かわせたいけど、このま

までは―

「これはこれは。中々により取り見取りといったところじゃないか」
「へぇ。リゼヴィムの前の肩慣らしには十分だね」
『……この陣営と肩を並べるのは流石にな』
「ふふ。大王バアルの宗家ならこれぐらいの箔はいるでしょう？」
そんな声と共に、僕達を覆う結界の全てが粉砕される。
これは、このオーラと声は……っ
僕達が振り返るより早く、ラードゥンから凄まじい気迫を察し、思わず誰もが硬直する。
これは、イッセー君やヴァーリが心から激怒した時すら超える、寒気を感じるほどの殺意と怒気。憎悪と怨嗟すら塗れた、圧倒的な敵意の気迫だ。
『お久しぶりですね、白龍皇ヴァーリ・ルシファー……。……殺す……っ』
その殺意は、ヴァーリ・ルシファーはきょとんとした反応で首を傾げる。
「む？　そこまで殺意を向けられる理由がないと思うんだけどね？」

『『『

英雄乱戦編　第五十話　天の国を襲う大激戦

イッセーＳｉｄｅ

な、なんだこのオールスター!?
冥界から派遣された警護部隊やら、英雄派やら、しかもヴァーリまでやってきやがった。
一応味方だから頼もしいけど、それにしたって集まりすぎじゃねえか？
俺が正直戦慄していると、曹操や槍を肩で叩きながら苦笑する。
「まったく。英雄譚でもここまでの大一番は中々ない。役者が集いすぎてないかな？」
そういう曹操は呆れ気味だけど、確かにこれは凄い事になってるよなぁ。
伝説の邪龍にサイボーグ兵士に、人造惑星や悪魔として生まれ変わったサーヴァント。
これだけでも厄介だってのに。俺達グレモリー眷属率いるオカルト研究部も大概だし。そこに魔王の血を引く白龍皇と英雄の末裔たる聖槍使い、更に巨大ロボットまで出てきてるんだし。
出来の悪いバトル漫画かよってレベルで盛りすぎだな。
……いやいやいや、俺達今は忙しいんだよ。そんなこと思ってる場合じゃない。
これ以上時間をかけてる余裕なんてない。さっさと片付けないと、トウジさんがやばい。
こうなったら、もうやることは一つだ。
「力を貸してくれ！　急いでコイツラを倒さないといけないんだ！」
一応ヴァーリも曹操も、Ｄ×Ｄのサブメンバーだ。なら力を貸してくれないとこっちが困る。

ただ、二人は何故かこっちを見ると肩をすくめた。
おい、頼むから今そういうのはやめてくれよ。
「まったく、こういう時はこういうんだ。……ここは任せた、とね」
「曹操の言う通りだね。どうせリゼヴィムはまだ動いていないし、俺も邪龍達とは心行くまで戦いたかったんでね」
な、なんかすっごい頼もしい発言が来たぞ。
マジか。この二人が足止め担当とか、凄い事になってきてるぞオイ。
ただ、その反応にモデルバレットが肩をすくめる。
『悪いけど、私らまだ全員出てきてるわけじゃないんだよね～♪』
モデルバレットがそう言うと、更に空間が歪んで何かが姿を現した。
そこにいたのは、モンゴル風の服を羽織った英雄派の格好をした男。
その隣には、チャラい雰囲気の軽装鎧を着たイケメン。
そしてその後ろには……っ!?
「グレンデル!?」
リアスが目を見開くけど、そりゃそうだ。
グレンデルは封印したはずだ。っていうか、よく見たら四体ぐらい出てきてるぞ!?
『おや、量産型グレンデルは完成ですか？』
「まだテストだよ、ラードゥン。ま、性能は落ちるが数で戦術的にはいけんだろ♪」
ラードゥンにそう答える男に、今度は九成が何かに気づいたようにはっとなってる。
あれ、知り合いなのか？　ザイア時代か？
「……お前、レイヴェルを誘拐した騒ぎの時に突っかかってきた奴か。確か英雄派のはぐれ共！」
「混沌回帰旅団（ケイオス・フォース）だ馬鹿野郎が！　ったく、オイ曹操、もうちょっと詳しく教えてくれよ、元部下の扱いがなってねえぞ？」
怒鳴ったそいつが曹操に話を振ると、曹操も呆れたように肩をすく

める。
「話したのは幸香達だろうさ。……ちなみに奴が英雄派の第三派閥である混沌回帰旅団の団長、チンギス・ハンの末裔であるオイケス・ハン。魔術回路保有者でもある」
曹操が肩をすくめながら説明してくれるけど、魔術回路保有者で混沌回帰旅団の長がこいつか。
しかも魔術回路保有者ってことは、隣に奴はサーヴァントか。
俺たちの視線が集まると、そいつはへらへら笑いながら片手を振った。
「どーもどーも♪　オイケスのサーヴァントやってます、ライダーやってんでよろしくピ～♪」
めっちゃ軽薄だなオイ。
サーヴァントになる奴でもこんなのいるんだ。絶対碌でもないだろ、この野郎。
っていうか、なんか後ろからどんどん出てきたぞ。
……ライオン型のガトリンガル。そういやそんなのがツェペシュの城下町で暴れてたな。
「ま、俺らもリゼヴィムの旦那と一緒に暴れたくてな？　天界襲っていろんなもの奪って、手柄自慢したいんだよ。……リムークとジョンも別の場所で暴れてんぜ♪」
そう言いながら、オイケスは穂先の下がグローブみたいになってる矛を軽く振るうと、俺あっちの前に突きつける。
「つーわけで♪　俺もそろそろD×Dと一当てってことでよろしく……ッとぉ!?」
その途端、急にオイケスが伏せると頭があった位置を何かが飛んで行った。
っていうか矢だ。しかも凄い勢いで、突き立って破壊の嵐が巻き起こっているし。
っていうか、ここに来て更に味方が来たんだろうけど、今度はどんな奴が来たんだ？
「……流石にできるわね。私も新兵器を使うべきかしら？」

「そうでござろう、お館様。長には相応の首級を上げるべきでござるからなぁ」
　そう語りあって出てくるのは、鎧武者を控えさせたサイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナ。
「久しぶりね、オイケス。相変わらず時代錯誤な夢を持ってるようで」
「そりゃどうも、ドゥルヨーダナ。お前さんこそドゥルヨーダナ要素が全くねえなぁ？」
　そう皮肉を語り合ってから、五秒経って―
「仕留めなさい、アーチャー」
「ぶっ殺せ、ライダー」
「承知」
「あいよ」
　その瞬間、あっちはあっちで激戦が始まったし。
　俺がちょっと面食らってると、曹操が俺の方に視線を向ける。
「流石に頭数は欲しいし、とどめ役は君達がするべきだ」
「……確かに、この数を全部任せるのもあれね。イッセー、ゼノヴィアとアーシアを付けるから、イリナと一緒に紫藤局長を助けに向かいなさい」
　曹操に頷いたリアス部長が、消滅の魔力をほとばしらせながら前に出る。
「さぁ、私の可愛い下僕達！　天界に狼藉を働くクリフォト達を滅ぼしてあげなさい!!」
　相も変わらず頼もしい。ならここは任せちゃいますか。
「……いくぜ、イリナ！　アーシアとゼノヴィアも頼む！」
　……ここは任せた。だから任せてくれ。
　そして、皆で勝利を祝おうぜ！

和地Ｓｉｄｅ

さて、俺達は俺達でやることをするか。
「……リヴァ先生。俺はカバーに回るから、思う存分やってくれ」
「……ゴメンねカズ君、ちょっと甘えちゃうわ」
その言葉で、俺達は十分だ。
『アスガルドライバー』
『ショットライザー』
素早く変身デバイスを装填し、俺達は一人の男を向きあった。
その男、ヴォルフ・フォン・ミッドガルズは静かに苦笑しながら、こちらも対処の体勢をとる。
『ゼツメライザー』
『ドードー』
……やる気満々でご苦労なこって。
会話は戦いでするべきだろう。だが、いやだからこそ。
『Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』
俺は俺のやるべきことをやり遂げる。
リヴァ先生の決着はつけさせる。天界を襲うクリフォトも撃退する。
どっちもしなくちゃいけないのが、大変なところだがな！
「「変身！」」
さて、元カレさんに挨拶でもするか！

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……んじゃ、後ろで取りまとめ役任せたよぉ～ん」
「オッケー父さん。で、そろそろ使うのかい？」
「う～ん。誰に使うか悩んだけど、まぁ天界大襲撃でお披露目する分にはいい感じじゃね？　インパクトでかくね？」
「四大天使総出で返り討ち……なんてことはやめてほしいけどね？　あと赤龍帝も油断しちゃ駄目だよ？　おっぱいで妙なことが起きたらすぐ警戒すること」
「う～ん……。流石に神滅具がなきゃ中級がいいとこの奴にそこまで警戒することなくね？」
「だからだよ。その油断が事故の元だと思うよ？　消される前提で砲撃を出して目くらましして、日美子を突貫させて奇襲……ぐらいのことは考えないと」
「はいはい分かりました。ちょっとでも何かあったがすぐ使う……でいいだろ？」
「聞き分けのいい父で何よりです。じゃ、ついでの襲撃頑張ってね？」

英雄乱戦編　第五十一話　第二天の攻防

戦闘は乱戦の状態になり、敵と味方が何度も入れ替わるように戦いが始まる。
ただ数分が経ち、マッチメイクが完了し始めていた。
『ふふふふ……あなたにはここで完封してもらいましょう。……殺す……っ』
「やれるものならやってみるといい。しかし空腹なのか機嫌が悪いな……最後の晩餐にラーメンでもどうかな？」
とりあえずヴァーリとラードゥンの戦いには近づかないでおこう。軽く命の危険を感じてしまう。
『なるほど、最上級悪魔でもてこずる性能はある。だが、この機構悪魔ガレシオンならば……っ』
量産型グレンデルはＴＦユニットが抑え込んでくれている。
確かにグレンデルなだけあって強大だけど、性能はオリジナル比べて数段堕ちるし、何より畏怖すら覚える凶暴さが大きく削れている。
それでも並みの上級悪魔なら眷属を総動員してなお苦しめられるだろう。だけどその程度はどうにかできてこそのＴＦユニット。まして悪魔専用仕様ということか。
「ふふふ。流石にてこずらせてくれるけど、この程度かい？」
「うっせぇよ。お互い様子見してんだから、下手な挑発はやめときな」
曹操とオイケス・ハンはそれぞれの得物で攻防を繰り広げている。
どちらも何かの仕込みが出てくると考えているのだろう。お互いの足止めができれば現状十分といったところか。
「……ふむ。まさかと思うがこの程度でござろうか？　ジョン・マージ・ガトリングも思ったよりでござるな」
サイリンが連れたアーチャーは、ガトリンガルを相手に大立ち回りを演じている。
大きく動いてかく乱しながら、弓で器用に縫い留めるように一体ず

つ撃破していた。
あそこが一番安定感と安心感のある戦いだ。彼が全部倒しきるまでしのげれば、やりようは十分にあるだろう。
唯一の懸念はヴォルフと呼ばれていた男だけど、彼は九成君とリヴァさんが追撃に向かっている。
問題……は。
「ちぃっ！」
攻撃を弾かれるカズヒを追撃するように、残りの戦士達が僕達に攻撃を仕掛けに殺到する。
『あっはっはぁっ！　今回そろそろガチで殺すよぉっ！』
カズヒと因縁深いステラフレーム、モデルバレット。
「いいねぇ～。じゃ、俺も手柄を立てるとすっかぁ？」
混沌回帰旅団（ケイオス・フォース）に属するライダーのサーヴァント。
「ふふふっ！　殺し合いがいのあるいい相手達だわ！」
更にかつて駒王会談で戦った、ツヴァイハーケンのアステロイド。ジークリット・ゼーベック。
誰も彼もが間違いなく手練れで、更に厄介なのは―
「ふーんふーんふふーふーん♪　はい、此処はぁこんなぁ感じでねっと♪」
幻と炎の術で戦場をかく乱させる、ローゲの対応に他ならない。
ただの幻術や炎による援護ならまだいい。だが彼の本領は、断じてその程度じゃすまされない。
幻術だと見切って無視したらその内側に炎がある。炎かと思ったら幻術。幻術の炎かと思ったら本当に炎。見えないように幻術でカバーしつつ、超高密度の炎の糸によるワイヤートラップ擬き。
恐るべきはその幻術の完成度だ。視覚や聴覚だけでなく、触覚や嗅覚すら誤認させるその幻術。すぐ近くに炎がいるにも関わらず、熱気を一切感じさせない域に達している。
間違いなくウィザードタイプの傑物だ。アースガルズの神々が恐れるだけのことはある。
……まずいね。このままだと苦戦は必須になるしかない……っ！

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

猛攻を繰り広げながら、ヴァーリはため息すら覚えたくなっていた。
ラードゥンの結界術は確かなものだ。瞬時に結界を張り、白龍の力でも突破にてこずるほどで、更に結界そのものがこちらに負荷をかけることで、こちらを結界術だけで倒せるだけの域に達している。
だからこそ、ヴァーリはとても滾っていた。
「いいぞ！　やはり龍の殺し合いは一対一こそが本領だ……俺にその力を魅せてみろっ！」
吠えるヴァーリは猛攻をもってラードゥンを縫い留める。
絶大な魔力と複雑な魔法。それらを織り交ぜた波状攻撃で、ヴァーリはラードゥンの結界を次々に破壊しながら攻撃を当てていく。
それに対してラードゥンも結界を瞬時に張り直して対応するが、負傷が入る速度はラードゥンの方が若干多い。
まごうことなく龍王に並ぶ域の邪龍であるラードゥン。だが残念なことに、ヴァーリは龍王を超え天龍本来の域に近づきつつある傑物だった。
だからこそ、このままでいけばラードゥンが先に削り殺される。これは避けようのない未来ともいえる。
……だが、ラードゥンはそこでほくそ笑んだ。
『ええ、忌々しいことにあなたは天龍の域に到達するでしょう。誇り高き龍の一対一において、まごうことなく天の域に到達する』
そこまで語り、ラードゥンはしかしにたりと嗤う。
『……だがそんな誉れをくれてやるものか』

その怨嗟に塗れた言葉と共に、少しずづだが形勢はラードゥンに傾き始める。
その理由は単純明快。ラードゥンの負傷が治っていくからだ。
負傷は互いに微々たるもの。最終的にラードゥンが削り殺される速度だが、差そのものはそこまで大きくはなく、削れる速度も遅い。
つまり、怪我が治癒されていくようならば形勢はひっくり返るという、ただそれだけの事実が生まれていた。
その事実にヴァーリは舌を巻きつつも、しかし怪訝な表情を浮かべている。
回復していることそのものではない。回復の方法だ。
負傷の回復にもいくつかの形がある。
自然な、もしくはそれを強化しての治癒。破損した者すら治っていく再生。大きく分ければこの二つだろう。
だが、ラードゥンの回復はそのどちらでもない。
例えるならばそれは復元。そんな違和感のある回復に、ヴァーリは警戒心が浮かび上がる。
そしてその対応に、ラードゥンは気持ちよさそうに嘲笑を浮かべていた。
『どうでしょうか？　ミザリ殿の提案で新たな力を会得させてもらいました』
そう語るラードゥンは、その目を紅く輝かせる。
『誇り高き死などは与えません。……我が結界を麺如きで簒奪した罪、万死に値する』
今ここに、龍と龍の激突は更なる激化を迎えんとしていた。

和地Ｓｉｄｅ

放たれる幾重もの魔法をしのぎつつ、俺は魔剣をもってして敵マギアの振るう刃を受け流す。
直後ミサイルが放たれるが、そこはリヴァ先生が魔法を使って迎撃した。
……つくづくというか、地味に厄介だといえるだろう。
ヴォルフ・フォン・ミッドガルズのアステロイドとしての方向性は、ひとえにいうならば魔法戦闘特化だ。
おそらくは分散設置した補助演算機と脳をリンクさせることで、魔法の運用に特化した演算能力を会得している。
結果として放たれる魔法は、素早く生成されながらも複雑かつ頑丈。凌ぐのも中々苦労するな。
さて、ゾーンに入るまではまだだいぶかかりそうだな。
何とか任意で入れるようになってはいるが、入りますから即入るとか、そんなわけでは断じてない。
いうなれば相応の準備時間が必要だ。戦闘に入って意識をゾーンに近づけるまでにはそれなりに時間という物がいる。抜き打ちで開幕速攻とはさすがに行かない。
しかも一対一の真っ向勝負ならともかく、こうも曲線を描いて襲い掛かる攻撃に対処するとなれば……入るまで割と時間がかかりそうだな。
まぁ、俺はこの戦いにおいてはあくまで補佐だ。
向き合うべきは、リヴァン先生からな。
其処ははき違えないしわきまえている。俺がどうにかするとするなら、それはリヴァ先生が本当にやばい状態になってからだ。
だからこそ、俺は徹底的にリヴァ先生のカバーに比重を置きながら先生を見守る。
そして先生もまた、覚悟を決めたのだろう。
魔法に対して魔法で迎撃しながら、真っ向からヴォルフを見据えた。

「……ヴォルフ。なんで、その道を選んだの？」
静かに、リヴァ先生はそれを問いかける。
いくつも聞きたいことはあるだろう。長い時間をかけて話したいこともあるだろう。
その全てを横に置き、リヴァ先生はヴォルフに一番聞きたいことを問いかける。
心なしか、その態度には罪悪感のようなものを感じさせる。リヴァ先生のいつもの雰囲気とは全く異なるその態度は、それだけ彼女がヴォルフに対して思うところがある証拠だ。
「嫉妬なの？　私はあの頃から色々出来たって自覚してるし、なにより神の因子を引いている。その事実に屈辱を覚えて……だから、体を改造してまで強くなろうと―」
「……五十点だよ、リヴァ」
遮るその言葉は、攻撃を伴っていなかった。
足を止め、真っ直ぐに立ち、偽ることなくリヴァ先生を見つめる。
その姿に、俺は警戒だけは解かないが戦闘は行わない。
……これは、できることならさせてやりたいことだからな。

英雄乱戦編　第五十二話　この作品のＦａｔｅ要素はｆａｋｅ形式でいこうと思う（前置き）

祐斗Ｓｉｄｅ

ヴァーリ・ルシファーが追い込まれている!?
極僅かずつだが、趨勢が間違いなくラードゥンに傾いてきている。
その事実に、僕達は戦慄すら覚えている。
馬鹿な。覇龍を掌握した極覇龍の使用時間すら伸びているヴァーリは、短時間なら主神クラスとも渡り合える。それはつまり、天龍の域に届いているということでもあるはずだ。
ラードゥンが名だたる邪龍とはいえ、彼の力量は天龍には及ばない。一対一でヴァーリ相手に優勢に立ち回れるほどだとは思えない。
「……そういうことねぇ!?」
その光景を見たリーネスが、戦慄したように肩を震わせる。
そして舌打ちすらしそうな雰囲気で、モデルバレットを睨み付けた。
「伝説の邪龍を死徒にする。なんてとんでもない発想を……っ」
「しまった……その手がっ!?」
カズヒも戦慄して悟っているけど、状況が少し分からない。
「二人とも、どういうことか説明して頂戴！」
「簡単に言えばぁ、ラードゥンは魔術的処置で吸血鬼に変貌しているんですぅ！」
リアス部長にそう返答し、リーネスはラードゥンを睨み付ける。
「血液の継続的補給や太陽光に対する脆弱性と引き換えに、限定的な形で不老不死を獲得する魔術的な吸血鬼。それが死徒……っ」
「理論上はサーヴァントとも一対一でやりあえるだけの力を会得させ

れるとは言われながらも、その難易度やバイオハザードじみた事故を引き起こしかねないことから、魔術回路保有者でも禁じ手に位置する秘奥。……誠にぃ、まさか聖杯と掛け合わせてそんなことまで……っ」

カズヒもかなり戦慄しているけれど、そのレベルの窮地ということか。

これは、かなり状況が不味いと考えるべきかもしれない……っ

そんな僕達をじろじろと見るモデルバレットは、嘲笑の雰囲気を漂わせている。

『ふっふっふぅ～ん。ならついでに、此処でとどめといこうかなっとぉ♪』

その瞬間、モデルバレットと感応する星辰体が異常に膨れ上がる。

間違いない。ここで見せるのか、自分の星を……っ！

『天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せぇっ！』

歓喜に染まった詠唱が、モデルバレットの本気を見せつける為に告げられる。

『男に倒され下に敷かれる。ただその程度の業すら呑めず、上回ろうとは愚かな女め。汝は悪鬼明星（ルシフェル）に能わぬと、そんな道理もわからぬか』

カズヒをどこまでも愚弄するように告げられる詠唱と共に、感応された星辰体が大きな変化を生んでいく。

『笑顔にほだされ悪鬼に背を向く。醜悪なりし銀の女よ。お前はそこで臍を噛め』

纏わりつくは黒い瘴気。

悍ましい瘴気がモデルバレットに纏わりつき、しかしそれだけにとどまらず散布されていく。

『我こそは、上など載らぬ明星の花嫁。悪鬼たることを誇りてヴェールをかぶる、悪鬼伴侶（リリス）に至りし才女なり』

途端に天界の各地に異常事態を示す魔方陣が展開。あまりの負荷にモデルバレットに結界が張られるけど、モデルバレットはそれを振り払って胸を張る。

『涙を拭う布切れなどに、我が幸せの資格なし。全てを投げ捨て夫と共に、邪悪となるこそ我が誉れ』
それは、カズヒの―道間日美子の―裏面を思わせる邪悪の祈り。
『故に、銀の光を投げ捨てて、我は我を祝い続けるのだ』
悪祓銀弾（シルバーレット）を否定する、悪鬼伴侶（リリス）の星に他ならない。
『汝が如き、我になれぬ端女如きが、我が伴侶の明星が光に照らされし覇道を、邪魔するなど断じて許さん』
圧倒的な瘴気の塊となったモデルバレットは、悪意を持ってカズヒを見据える。
『明星が照らす祝福持って、悪意を阻む善を討て！』
そしてその勢いのまま、猛攻が僕達に襲い掛かった。
『超新星（メタルノヴァ）――悪鬼変性（ルト）が伴侶（リッ）、此処に愛（プ・リ）を告げん（リス）っ!!』
これが、モデルバレットの星辰光か！

モデルバレット
悪鬼変性（ルト）が伴侶（リッ）、此処に愛（プ・リ）を告げん（リス）
基準値：B
発動値：AA
収束性：AAA
拡散性：D
操縦性：C
付属性：AAA
維持性：A
干渉性：AA

これまでの戦闘データで推測される星の性質は、怨霊憑霊式自己強

化能力。
カズヒ本来の星である呪詛招来憑霊能力の亜種ともいえ、そして上位互換ともいえる力。悪と同調する怨霊そのものを力に変換し、自らを大幅に強化する星辰光だ。
カズヒが自らを呼び水に怨霊を集められる以上、モデルバレットが呼び水になっても怨霊は集められるだろう。
そして、それを魔星として能動的に振るうモデルバレットは、ステラフレームの中でも指折りの性能を誇っている。
……この勢いでこれは、流石に……っ

「あら、思ったより苦戦しているようね」

その直後、カウンターのようにモデルバレットを弾き飛ばす、光が現れた。
「……へぇ？　そういう隠し玉があるのね？」
ジークリット・ゼーベックが着地しながらそう呟く中、彼女と戦っていた女性が、肩をすくめながら薙刀を軽く振るう。
そう、彼女はサイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナ。
そんな彼女が、光り輝く鎧を纏って舞い降りた。
思わず僕達は唖然とするが、そこに対してサイリンは肩をすくめて呆れた表情を浮かべている。
「曹操達を打倒したことがあるのならば、この好機を逃してほしくないのだけれど？」
「そうね。この好機を逃さすべきではないものね」
そして既に、カズヒは一歩を踏み込んでいる。
「あんたの相手は私よ、モデルバレット……っ」

『上等じゃんか！　今度こそぶっ殺してあげるよ！』
激突する二人を見送りながら、サイリンは軽く薙刀を振るいながら、残る三人の敵を見据える。
ジークリット・ゼーベック。混沌回帰旅団のライダー。そしてローゲ。
そんな難敵達を見ながら、サイリンは微笑みすら浮かべていた。
「やっぱり私も英雄派ね。……滾る相手が目の前にいるって、こういうことかしら？」
英雄派のサブリーダー。そんな彼女が新たな装備をもってここにいる。
敵に回すと苦しい相手だが、味方にいるのなら心強い。
「……そうですわね。ここで腑抜けていればイッセー君達にも顔向けできませんもの」
「仕切り直してくれてありがとう、サイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナ。だけど譲ってあげたりはしないわ」
そして並び立つは、朱乃さんとリアス部長。
既にリアス部長は星辰光をもって聖魔剣を創造し、消滅の魔力を滾らせる。
朱乃さんもまた雷光を纏い、その上で目を伏せ―
「……ちょうど良い時に、素晴らしい方が力を貸してくれるようですわ」
―その、期待に満ち溢れるような言葉はつまり……っ！
朱乃さんは僕達の視線を浴びながら、懐からDチェンジャーを取り出した。
やはり、此処で来るのか……夢幻召喚（インクルード）！
本当に、オカルト研究部の二大お姉さまは頼もしい。
少し押されていた気配が持ち直し、そしてリアス部長は宣言する。
「油断しないことね。その瞬間に……消し飛ばしてあげるわ!!」
ああ、ここで負ける気はどこにもない!!

イッセーＳｉｄｅ

何とか、何とかもうすぐ第三天を乗り越えられる！
クロウ・クルワッハとヴァルプルガが同時に出てきた時はどうなるかと思ったけど、二人が仲間割れしたり、残ったクロウ・クルワッハをデュリオが抑えてくれたおかげで突破できた。
……デュリオ・ジュズアルド。神器の悪影響を受けたりする子供達に頑張れる、俺達の大事なリーダー。
ああ、やっぱり仲間の熱いところを見れるってのはいい気分になれるぜ。
「ふふっ。あの天界の切り札（ジョーカー）は頼もしいね。できれば禁手も見たかったが、余裕がないのが残念だ」
ゼノヴィアが苦笑すると、イリナもちょっと苦笑を浮かべている。
「ジョーカーは禁手をあまり使わないの。どういった相手に使うのかを決めていて、味方での模擬戦では一切使わないのよ」
へー。ちょっと気になるな。
トウジさんのところに急いで行くべきだし急いでいるけど、普段ちょっとだらしないジョーカーのカッコいいところも見れて、テンション上がってるのかもな。
実際一人で第三天をカバーしてるようなもんだからなぁ。天候操作で量産型邪龍達を薙ぎ払ってる光景は、ちょっと引きそうになるぜ。
「凄かったですよね、デュリオさんの戦いは……」
アーシアも思い返して、ふと後ろの第三天を振り返り―
「……あの、皆さん」
―何故かアーシアが妙な雰囲気になった。

なんだと思って俺達も振り返る。
……理由が、すぐに分かった。
「な、なんだありゃぁ!?」
俺は思わず絶叫するけど、そりゃそうだろ。
遠目で見てもでかいのが分かる、なんか固形石鹸みたいな丸っこい物体が、デュリオが出している竜巻を突っ切って第三天に姿を現した。
禍の団の飛行船と打ち合ってるけど、あれ圧倒的に相手の方が有利だろ。
しかも量産型邪龍もどんどこ撃ち落とされてる。なんか出て来てる感じがするし、対空砲火とかも喰らってるっぽい。
……もう嫌な予感しかしない。たぶんだけど、第三勢力だあれ。
俺達は顔を見合わせると、一つ頷いた。
「急ぐぞ皆！」
「ああ！」
「ええ！」
「はい！」
急がないとマジでやばい。
早くトウジさんの安全を確保しないと、これ絶対三つ巴になるだろぉおおおおっ!!

英雄乱戦編　第五十三話　男女の関係は、それぞれの違いを理解して配慮しあうことが肝要

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ヴァーリ・ルシファーは極僅かずつだが、ラードゥン相手に押されていた。
死徒と化したラードゥンは、復元呪詛による回復力で長期戦の優位性を獲得している。
少しずつだが確実に削られ、極僅かずつだがラードゥンは有利になっていく。
『どうですか？　いっそのこと極覇龍を使ってみては？』
余裕を持ったことで怒りを隠せるようになったラードゥンは、そんな皮肉を言えるようになっていた。
死徒には相応のデメリットもあるが、しかしラードゥンなら問題ない。
死徒は基本的に太陽光に弱く、だが太陽光に関しては結界術の雄たるラードゥンならどうとでもできる。そして血液もまた対処ができていた。
つまり、ラードゥンは自分の勝利を半ば確信していた。
『ふふふ。実は私が展開する結界は、極僅かですが吸血を可能としています。そしてご覧ください？』
そう告げて周囲の視線を向けるに促し、遠く離れた結界の中を魅せる。
其処には戦闘不能になった邪龍や天使達が封じられている。
いわば戦闘用の血液補給ユニット。一時間や二時間で失血死はしない程度の速度で血を常に補充しており、また解放しようにもラー

ドゥンの結界はすさまじい。
補充は万端。負傷はすぐに復元する。そして確実に敵は削れている。
その勝利の方程式に高笑いすらしたくなったラードゥンは―

「―お前は俺を舐めすぎだ」

―その言葉と共にヴァーリが取り出したラーメンに、凍り付いた。
凍り付くのも仕方がない。
そもそもラードゥンがヴァーリを狙ったのは、ラーメンによるものだ。
ラーメンを封じられて発狂寸前になり心を病みかけたヴァーリ・ルシファーは、それによって兵藤一誠の領域に到達した。
それこそが白龍製麺。ラーメンを作り食すという過程を踏むことで、奴は自身だけでなく下級悪魔にすら自分の力を使えるようにした。
屈辱だった。逆鱗で太鼓の達人最高難易度をするかの如き所業。ラードゥンは激怒した。
故にこそ、今ラードゥンは寒気すら覚えていた。
何故ならば、今ヴァーリのラーメンは形を変えていっている。
麺が絡みついて大筋の体を作り上げ、スープがまとわりついて繊細な表現が成され、具のメンマが目のようにくぼみの中に入って輝く。
今ヴァーリが掲げる器の中に、ラーメンで構成されたラードゥンが誕生していた。
『さ、させるかぁあああああっ!』
ラードゥンはすべてをなげうって、死のリスクすらある禁呪をもっ

てしてヴァーリの封殺を試みる。
なんとしても防がねばならない。そうしなければ自分は負ける。それも呪わしい形で敗北を喫する。
その判断は間違っていなかった。だが対応が二手遅かった。
「遅い。我が龍麺皇亭は完成した」
その瞬間、ラードゥンの結界は大きな力を失った。
結界が干渉されている。力が削減されて—否、相殺されている。
その現象を引き起こしているのは、ラーメンで作られたラードゥン。
そう、あの現象は—
「これが我が龍麺皇亭の力。俺はラーメンを経由することで、お前の力の残滓を変換して龍の力を再現できるようになった」
—更なる悪夢の権限だった。
まるで極覇龍の域に到達する現象であり、ヴァーリ自身汗をかいている。
だが、その圧倒的な力の価値は、ラードゥンに敗北を確定させる。
趨勢が完全に崩れたことで、一気に負傷の速度が増した。これでは復元呪詛も追いつかない。
更にヴァーリは大いなる力を籠め、勝利を叩き込む為のとどめを刺さんとする。
だがそれは、圧倒的な暴力による悪意ある蹂躙ではない。
そう、何故ならそれは—
「いい戦いだった。故に、俺の極限をもって滅びるがいい」
—敬意を持つべき敵に対する、慈悲の心によるものだ。
極覇龍の猛威が、ラードゥンを無様な死骸を生むことなく吹き飛ばした。

イッセーＳｉｄｅ

間に合った……ギリギリで、間に合った……っ
ステラフレームがトウジさんをこっちに引っ張ってきたからだけど、おかげで俺達は助けられる。
「パパを離して！　あなたの事情は知ったけれど……パパだって好きでやったわけじゃないことぐらい、パパの部下なら分かるでしょ……っ！」
イリナがオートクレールの切っ先を向けると、ステラフレームは殺意を明らかに浮かべていた。
『偉そうなことを言ってくれる。僕からすれば、君が彼と良い仲であることが挑発なんだよ』
深い気な雰囲気をあからさまに見せながら、ステラフレームはトウジさんを投げ捨てる。
トウジさんはボロボロになっていて、暴行を受けていたが丸分かりだ。
それだけのことをしたくなる気持ちは分かる。分かるけど……。
俺達が複雑な感情を浮かべていると、ステラフレームは静かに肩を震わせる。
怒りのあまりってやつかと思った。
だけど違う、あの気配はそんなものじゃない。
あれは逆だ。愉悦とか、そういった嫌な気配だ。
『元々天の国で殺そうかと思ってはいたんだ。だけど……ちょうどいい』
そう前置きして、ステラフレームは剣の切っ先を俺達に向ける。
『自分の娘である天使と、恋仲や友人である悪魔たち。彼らの無残な姿を見せてから、ゆっくりなぶり殺しにした方が……愉しそうだ』
……その時、俺達は漸く分かった。
あれはもはや、八重垣正臣って人間じゃない。
あの人はもう壊れている。何かが決定的に崩れ果てて、そのまま人

の道を外れている。外れたまま、壊れたまま、突き進みすぎている。
『抵抗せず切り刻まれるなら殺しはしないよ。でも殺して惨殺死体にした方が……局長は絶望したまま死ぬだろうな……ふふふ……ふはははは……っ』
駄目だ。あの人はもう止まらない。
そもそもあれはもう人じゃない。
……そういえば、リーネスが提出した資料か何かで見たな。
神星鉄（オリハルコン）を制御するという人間では不可能同然の所業を行うため、死体を材料に作ることで衝動による制御を試みたのが、第一世代魔星だって。
そうか、あいつは、アレは……それを突き詰めたステラフレームなのか……っ
俺は拳を握り締めて、後ろの皆に告げる。
「倒そうっ。これ以上、あいつを動かすのはクレーリア・ベリアルにも、トウジさんにも、何より八重垣正臣さんが可哀想だっ!!」
「ああ。あれはもう、救えない」
ゼノヴィアは、エクス・デュランダルを抜いて歯を食いしばる。
「回復は任せてください。私も……手伝います……っ」
アーシアは手を組みながら、抑えきれない涙を一筋零す。
そしてイリナもまた、俺と並び立って剣を構える。
ヘキサカリバーをオートクレールに纏わせて、涙の浮かぶ目で俺を向いて頷いた。
「手伝って、イッセー君。これ以上、パパも彼も苦しませない！」
ああ、やろうぜ。
そして俺達を見ながら、ステラフレームも愉快そうに肩を震わせて剣を構える。
『抵抗してくれてありがとう！　君たちをこのモデルジューダスの贄にできる。紫藤局長をもっと絶望させれるんだ……アッハハハハハハハハハハッ!!』
「させねえよ……っ！」
ああ、お前はもう逃がさない。

絶対に止める。それが、俺達が八重垣さんにできる唯一の事だろうから。
必ず……止めて見せるっ!!

和地Ｓｉｄｅ

「嫉妬したことがないなんて言わない。君は何でも出来て、そして女神としての力も強大だったからね」
そう語るヴォルフは、苦笑の雰囲気を纏っていた。
ただ懐かしそうに語るその口調からは、嫉妬の感情がそこまで感じられない。むしろ、これはその逆ともいえるだろう。
「ヴォルフ……？」
その態度にリヴァ先生も、どう返していいか分からないでいるようだ。
「君は本当に素晴らしい人だった。嫉妬も覚えていたけど、それと同じぐらい尊敬していた。そこは決して嘘じゃない」
それにさらに苦笑の雰囲気を濃くしながら、ヴォルフは、だがそこの決意の雰囲気を見せていた。
「……だからこそ、僕はこの間違った道を選んだことを後悔していないんだ」
マギア故に表情は分からない。
ただ、その表情が笑顔であることは俺にも分かった。
それほどまでに―
「だって、今俺は君と戦えるまで強くなった」
―その想いは、俺にも僅かに分かってしまうものだ。

ああ、理由は単純だった。
半世紀以上に亘り人の道を外れ、自分の体すら切り刻んで改造する。その果てに、テロ組織の最高幹部にまで上り詰めた男。ヴォルフ・フォン・ミッドガル。
その理由は、愛を知る男なら一度は思うだろう、ただ単純な理由。
その理由に、リヴァ先生は泣き笑いの表情になっているのがどうしても分かってしまう。
「……馬鹿だろう？　好きな女と肩を並べるようになりたい、ただそれだけの為に俺はテロリストに落ちぶれたんだ」
本当に、馬鹿な男だよ。
六十年間一人の女に惚れこんで、並び立てるぐらいの実力が欲しいからって、こんな形……か。
「……ゴメンね。私、今もう恋人いるから」
リヴァ先生のその言葉に、ヴォルフは肩をすくめて苦笑したらしい。
その視線が、俺に真っ直ぐに向けられる。
「知っているとも。だからこそ……いい機会だ」
そしてそのまま、両手に持つブレードの切っ先を俺に向ける。
「こんな馬鹿野郎より上等の男なんだろうが、生憎こっちは馬鹿なんでな。……俺より弱い男に任せられるか」
……まったく。本当に……馬鹿な男に引っかかったもんだよリヴァ先生。
俺は肩をすくめると、リヴァ先生より前に出て魔剣を構える。
「いいぜ、この大馬鹿野郎。お前はしっかりぶちのめして、俺の方が相応しいと冥途の土産に教えてやる」
まったく。本当に酷い大馬鹿野郎だ。
リヴァ先生がそんなやり方してまで強くなることばっかり望むと？　まぁ半世紀以上前だから断言しないが、まずないだろうとは思うぞ。
そして同時に、男という馬鹿な生き物としての自分がちょっとは共感してしまうのが情けない。出なけりゃ、こんなことはしてないだろ

うからな。
本当に、男ってのは難儀な生き物だよ。俺だって、カズヒねぇやリヴァ先生達に情けないところや弱っちいところは、できることなら見せなくないからな。第二次大戦前なら尚更か。
……ああ、いいだろう。
「リヴァ先生……構わないか？」
「頼むリヴァ。男の意地ってものがあるんだ」
俺もヴォルフもそのつもりだったが、リヴァ先生はどうするんだろうか。
くっだらない男の意地だからなぁ。女の立場からすれば文句どころか大反対ってこともあり得るだろう
ちょっと不安げに俺達が見ると、リヴァ先生は肩をすくめて—
「……悪いけど、カズ君ばっかりに背負わせる気とか先生にはないから」
—そう告げ、俺と並び立った。
きょとんとするヴォルフを前に、リヴァ先生は指を突き付ける。
「今の時代は男女同権！　見せてあげるわ、私が選んだ男は、私と一緒にヴォルフ（あなた）以上になれるって！」
その言葉に、ヴォルフは肩を震わせた。
「……ああ、そうだな」
その、寂しげなようでいて安堵している風にも聞こえる小さな言葉。
それを最後に、ヴォルフの気配は強い戦意に切り替わった。
「我が名はヴォルフ・フォン・ミッドガルズ中将。ツヴァイハーケン、禍（カオス・ブリゲート）の団出向軍団の総指揮官を務めている者」
倒せるものなら倒してみろ。自分一人どうにかできない連中に、この先を進めるはずがない。
そんな意志を見せつけて、ヴォルフは宣言する。
「名を上げる機会と心した前。……さぁ、討ち取って見せるがいい!!」
「……上等っ！」
返答は、攻撃と共にある。

ああ、見せてやるよ元カレさん。
リヴァ先生が愛してくれる涙換救済(タイタス・クロウ)は、必ず二人であんたを越えて見せるとな!!

英雄乱戦編　第五十四話　悲に振り回される者

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

天界の争いは新たなる局面へと突入していた。
第三天より新たに突入した謎の飛行物体及び、そこから姿を現す謎の兵器群。
ローターの代わりにジェットエンジンを組み込んだが如き飛行物体を大量に出したそれは、砲撃を行いながら戦いを三つ巴へと変えていく。
そしてその戦いは更に激化する。
低空飛行に移った飛行物体は、そこから大量の戦闘員を降下させる。
それを見たことで、幾人かの戦力は敵勢力を理解した。
直接の戦闘を経験した者は極僅か。だが同時に、あのリアス・グレモリー眷属達を苦戦させた相手として、映像で見たことのある者は多かった。
だからこそ、誰かがその名を叫んだのは当然の帰結だった。
「……サウザンドフォースだと!?」
降下してきた敵勢力は、ドーピングアントレイダー。
サウザー諸島連合を裏で支配していたと言ってもいいザイアコーポレーション。その裏側の後継組織である、サウザンドフォースの主力レイダーだ。
この時点で敵が強大であることは確定的に明らか。
何故なら、この世界を大きく揺るがしながら歴史の浅い力の二種。星辰奏者（エスペラント）や人造惑星（プラネテス）の根幹たる星辰体（アストラル）。そして純然たる化学によって異形に通用する白兵戦力を用立てれる、プログライズキー。
この二つはサウザンドディストラクションで技術の大量流出が行

われるまで、ザイアの独壇場だった技術である。
流出した技術は様々なところで独自発展を遂げているが、しかし大元を辿れば彼らの物であることは事実。また禍の団が移動拠点として使用する大型人工神器類も、元々ザイアが研究していた技術が大きく関与していると情報が出ている。
その彼らが天界にまで進軍を開始する。この時点で事態は更なる悪化を遂げていると言っても過言ではない。
その光景を、視覚に投影された映像で確認したマグダランは頭痛を覚えていた。
「……全く。箔をつける為の形だけの派遣がこんなことになるとは」
マグダランは、今更サイラオーグから当主の座を奪還しようなどとは考えていなかった。
バアル宗家の当主となるべく、苦しい思いをして何とか及第点レベルに高めた消滅の魔力。それをただの肉体による打撃で粉砕する、サイラオーグの強さ。
あんな男に勝とうとも思わない。勝てるまで鍛えようという発想が、そもそもマグダランには沸いてこなかった。
不満を嫌がらせにすることはあるが、それだって小さなものだ。まさか初代がサイラオーグを魔王に据えてまで自分を次期大王にするつもりだとは、欠片も思っていなかった。今回の仕事も精々が、無能に負けて何もできないなどという真似を消滅を継げた子息が背負い続けることを、払拭するものだと思っていた。
よもや兄を擁するＤ×Ｄのメンバーに教えられるとは思っていなかった。自分がいまだに次期大王の本命でいるなどとは思ってもいなかった。
その上、警備をある程度の期間していればいいと思っていた展開に、寄りにもよってクリフォトが来襲。更に第三勢力として、サウザンドフォースまでもが襲い掛かる。結果として貴族悪魔専用ＴＦユニットの初実践を担当する羽目になっている。
つくづくため息をつきたくなるが、それでもバアルの看板を背負っている自分が何もしないわけにはいかない。

その諦観を覚えながら、マグダランはふと襲撃直前のことを思い出す。
自分を見つめ直すように告げた、テロリストだった英雄の末裔。
どことなく自分を気にかけてくれた、Ｄ×Ｄのメンバーたる仮面ライダー。
彼らの事を思い出し、マグダランは慌てて首を横に振る。
あまり考えこんでいては、奇襲や不意打ちを喰らって死にかねない。考え事は戦闘が終わってからゆっくりすればいい。
そう考え直したうえで、それでもマグダランはふと思った。
あの二人の視点は、間違いなく自分達とは異なるところにあるはずだ。
そのことを心を胸に止めたうえで、マグダランは随伴機に通信を繋ぐ。
「……量産型グレンデルとやらの活動は、完全に止まったか？」
『はっ！　このガレシオンの前には大したことはなかったようです！』
『伝説の邪龍をこうも簡単に。このガレシオンなら、サイラオーグ・バアルだって倒せるはずです！』
興奮している同じ大王派の上級悪魔に、マグダランはため息をつきながらたしなめる。
「所詮は量産型の試作型だ。今の兄上は獅子の鎧込みなら龍王にも並ぶ。本当のグレンデルを相手にしたこともない我々がとやかく言える相手ではないぞ」
少なくとも、かつて自分が兄と決闘した時に感じた寒気や恐怖な奴らからは感じない。
その時点で、マグダランは量産型グレンデルはガレシオンのかませ犬になりえるとみなしていた。
知らないことはどれほど愚かなのかと言いたくなりながら、マグダランはレーダーを確認しながら一瞬だけ考える。
―なら、私も兄上について知るべきか
少なくとも、バアルから離れた視点の持ち主からそれを聞く余地は

ある。
その為にも、この場は生還することを第一に考えなければならない。その為にマグダランは戦闘を潜り抜けることに集中した。

イッセーＳｉｄｅ

『さぁズタボロになるといい。……このモデルジューダスの贄となれぇっ!!』
吠える八重垣さんだった存在。ステラフレーム、モデルジューダス。
『天弄せよ、我が守護星――鋼の悪意で世界を犯せ！』
増幅する星辰体。そして具現化する聖剣達。
来るぞ、奴の星辰光（アステリズム）が……っ！
『許し難しは聖魔の融和。我らが愛を否定しながら、今更になって融和を語る。その所業をなぜ許せるだろう』
どこまでも怨念を注ぎ込んだ、憎悪の魔星。
その手に持つ聖剣全てが、まるで本物かと思いそうになるほど強い力を放っている。
『我らが死こそが融和の轍。かの裏切り者が神の子を死に追いやるからこそ、復活という奇跡が起きたのだというかの如くに嘯くか』
どこまでも怨念が籠っているくせに、その詠唱はとても楽しそうに聞こえてくる。
いや、本当に楽しいんだろう。
目的の為に復讐するのでも、復讐することが目的でもない。復讐をして楽しむことが目的になり果てているんだ。

『いいだろう。ならば対価を払うがいい。汝の命で鋳造されし、銀貨を袋で求めてやろう』
もう、彼は救えない。
『平和に酔いしれ融和に狂う、無知蒙昧な者共よ』
どこまでも楽しみながら怨念を撒き散らす、負の魔星。
その姿に、俺は怒りが込み上げる。
『そこまで宴を欲すというなら、我が恨みに染まりし酒を飲み、死の眠りへとつくがいいっ！』
八重垣正臣でも、目の前の魔星にでもない。
リゼヴィム、ミザリ。
……よくも……こんな奴に作ってくれたなぁ……っ！
『超新星（メタルノヴァ）――銀貨強奪（プルト）、悲恋（リップ・ジュー）が対価を此処（ダス）にぅぅぅぅぅぅっ!!』
どこまでも、何処までも悍ましい星辰光が俺達に襲い掛かる。

モデルジューダス
銀貨強奪（プルト）、悲恋（リップ・ジュー）が対価を此処（ダス）に
基準値：C
発動値：A
収束性：D
拡散性：B
操縦性：C
付属性：D
維持性：C
干渉性：AAA

性能そのものは決して無敵でも強力でもない。

たぶんだけど能力は聖剣再現能力。範囲内の聖剣と共鳴して同等の性能を出す虚像を、聖剣に干渉して創り出す能力だろう。
つまり、強力な聖剣使いを相手にしない限り魔星としての本領を発揮できない星だ。
馬鹿な俺だって分かる。こんな使い勝手の悪すぎる星、いくら魔星が特化型だからって特化しすぎている。用途が限定的すぎて、他に作るべき魔星はいくつもあるはずだ。
そう。モデルジューダスはトライヘキサを復活させる為でも、異世界侵略の戦力にする為でもない。
ただ単に、三大勢力を、俺達を、苦しめる為だけに作り上げたろくでもない兵器だ。
『……イッセー。呼吸を整えてください』
今まで俺のフォローに回っていたシャルロットが、内側でしっかりと言葉を投げかける。
『相手は煽るのが得意なようです。怒るのはいいですが、怒り所を間違えれば乗せられて絡め捕られるでしょう』
静かに諭すシャルロットだけど、俺は反論したりしない。
シャルロットもまた怒っている。それが俺にはよく分かるからだ。
ああ、今はまだ爆発させない。
爆発させるのは……この後だ。
あいつらは、リゼヴィムは。

――――絶対に、ぶちのめす……っ！

英雄乱戦編　第五十五話　神域の戦い

祐斗Ｓｉｄｅ

戦いの様相は大きく変わっていた。
その理由は、敵の戦いにおける中核を抑え込むことができたからに他ならない。
そう、ローゲの幻術を、瞬く間に見破り迎撃する者がいるからだ。
「あらあら、そこにトラップを仕掛けているようですわね？」
「またばれたぁ!?」
朱乃さんは瞬く間にローゲの幻術に対応するようになり、これによって状況は一変。
更に雷光を展開するだけでなく、そこから暴風雨を纏わせることで炎を大きく鎮静化させることにも成功。一人であのローゲの力を大きく削いでいる。
其処に僕は突貫し、朱乃さんとローゲの攻防を掻い潜るジークリットの蹴りを弾き飛ばす。
ツヴァイハーケンのサイボーグ、アステロイド技術。彼女はその中でも特化型だが、どうやら蹴りを主体とした改造を施されている。
脚部に格納型のブレードを内蔵しての連続蹴撃。これを僕が聖魔剣をもっていなしながら、攻防は確実に傾いている。
そう、趨勢は大きく傾いている。
その結果がどうなるかと言えば―
「……力を借りるわ、皆。この馬鹿を、これ以上暴れさせない為にも!!」
「もちろんよカズヒ。さぁ、私の可愛い下僕達、モデルバレットを滅ぼすわよ!!」
……カズヒとリアス部長の二大女傑を中核として、モデルバレットに対する集中攻撃だ。

カズヒとしては出来れば一対一で決着をつけたいところもあるだろう。だが、それを呑み込めるからこその悪祓銀弾だ。何より、天界の安全が最優先ともいえるだろう。
結果として、モデルバレットは徹底的に集中砲火を喰らっている。
『おまふざけんなぁ！　ちょ、数が多い……いっ!?』
あれをよくしのいでいる。やはりモデルバレットは強敵だ。
僕はジークリットと高速で攻防を繰り広げながら、この戦闘の優勢を維持する。
今回僕は補佐役だ。あれに対抗できるのは朱乃さんぐらいだろう。
なにせ、機械的なセンサーすら完璧に欺瞞しているローゲの幻術をどうにかするのは困難だ。小猫ちゃんの仙術すら掻い潜ってきているなら尚更だ。
だからこそ、僕達は此処で抑え込む！
「……そういうことかぁっ！」
そして、押されているローゲは何かに気づいたかのように幻術を放棄した。
そのリソース全てを注いだ炎の魔法が、朱乃さんが放つ暴風雨を纏った雷光とぶつかり合った。
何かに気づいたのか。朱乃さんがなんの英霊を宿したのかに気づいた可能性もある。
そして、ローゲは忌々しそうに歯を食いしばりながら朱乃さんを睨み付けた。
「この女（アマ）……っ。神の援護を受けているなっ!?」
「うふふ。当たってますけど余裕がなくなってますわね？　散々やられたこともあって、ぞくぞくしてきましたわ」
久しぶりにドSの雰囲気を見せている朱乃さんは、あえて肯定している。
そして同時に、朱乃さんは静かに両手を構えると暴風雨の密度を向上させていく。
「そう。私に力を貸してくれる英霊は倭姫命。彼女の持つ神託スキルは、異教とはいえ神を翻弄して愚弄する貴方を敵とみなしてください

ましたわ」
　そう微笑む朱乃さんは、しかし鋭い戦意をそこに秘める。
「また神道の流れに連なる鬼道スキルもＡランク。今の私から逃れられると思わないことですわ！」
「なら真正面から焼き尽くしてやろうじゃないか！」
　高まり合う二人のオーラが、思わず僕達の動きすら縫い留める。
　そして、次の瞬間―
「神の念ごと焼き付くといい！　暁の焔（ゲッター）は神々の終焉（デメルング）なればっ!!」
「その悪意の炎、跡形もなく吹き飛ばしますわ。伊勢の神風（いせのかむかぜ）っ!!」
　―放たれる炎と嵐が、僕達を余波で吹き飛ばすほどの激突を巻き起こす。
「……これはまずいわね……一旦下がるか」
『で、でかしたローゲ！　一旦下がるよ!!』
　ジークリットとモデルバレットが咄嗟にその隙をついて下がる中、二人の激突は競り合いの形になっていく。
　朱乃さんの雷光龍すら纏った宝具の真名解放は威力で凌ぐようだけど、ローゲの宝具はそれに食らいつく。
　おそらくあの宝具は対神宝具。名前からしてそう考えるべきだ。それが朱乃さんに力を貸す神々の力を焼こうとしているんだ。
　これは、どちらが勝つか分からない―
「……ナイスよ朱乃さん。そのまま抑え込んでください」
　―あぁ、そうだった。
　真っ向勝負は僕達グレモリー眷属の基本で、オカルト研究部全体がそれにこそ力を発揮する。
　だけど、そうでない者だっている。
　その筆頭こそが彼女。邪悪を穿つ銀の魔弾。正義を奉じる必要悪。
　そう、彼女こそ
『ＣＲＹ！』
「くたばりなさい、このトリックスターっ！」
　我らが主力、悪祓銀弾（シルバーレット）。
「ちょ、正気か―」

「私にあるとでも―」
自分達の力で深手を負いながら突貫する彼女に、ローゲが驚愕するがどうしようもない。
『ハウリングカバンリッヒテン！』

ハウリング

ンテヒツリンバカ

「―思ってるならそのまま死ねっ！」
被害覚悟で突貫したカズヒのアタッシュナイダーが、ローゲを真っ向から唐竹割で断ち切った。

Other Side

ラードゥン、そしてローゲの打倒により、形勢は大きく揺れ動いていた。
純粋に敵の精鋭が打倒されたことで士気が上がったこともそうだが、それとは別の理由もあった。
……そう、それはラーメンである。
「さぁ出来たぞ。食して結界を張るといい」
「はい！　ありがとうございます！」
ヴァーリ・ルシファーがラードゥンを打倒したことで、形勢は完膚なきまでに圧倒されていた。
理由は単純。封印されたラードゥンが込められた宝玉を利用して、ヴァーリはダイレクトにラードゥンの力を吸収し続けているからだ。
白龍製麺の効率は圧倒的に上昇。部分的に取り込んだアウロス学園の時と違い、圧倒的に注げる量と取り込める量が増えた為、質も量も圧倒的に増えていた。
結論として、天界は防御方面で圧倒的な優位性を獲得してしまった。
更に禍の団は別の意味で問題を背負っている。
それは来襲したサウザンドフォース。
自分達と同じように煉獄を経由する形で天界に侵入したサウザンドフォース。これによりもっとも負荷がかかっているのは禍の団だ。
単純に第三勢力によって挟み撃ちにあっているに等しい。サウザンドフォースは天界にとっても敵であり、歓迎されぬ来訪者であるから天界も攻撃はしているが、位置取りが悪い。サウザンドフォースも天界を敵にしているが、結果として挟み撃ちだ。
予期せぬ挟撃によって、禍の団は大打撃を受け続けている。
またサウザンドフォースは何らかの目的があって動いているのか、戦闘そのものは比較的小規模で防戦を重視している節がある。
おそらく突入した部隊の殆どは、撤退を可能とする為の退路の確保に徹している。そのうえで、ピンポイントで天界を狙う理由がある。

その立ち回りがかみ合い、クリフォトはほぼ確実に撤退に追い込まれる流れとなっている。
だが、それは決して事態がすぐ終わることを意味しない。
クリフォトは未だ撤退を前提に移行しているが、まだ即座の撤退に移る気配はない。サウザンドフォースもまた、天界奇襲という唯一無二に近い好機をついた目的が明かされていない。
それを懸念している者は数多い。セラフレベルの者達は殆ど全員が警戒し、D×Dもリアス・グレモリーや曹操といった組織運営を行うレベルは考慮している。クリフォトにも数人レベルは警戒している者はいた。
だが、それを読める者などこの世にいるわけがない。
千年も前からこの時期を狙い打てるよう、入念極まりない準備を行われているなど、想定の余地がないし理由に思い当れる者などいるはずがない。
転生者という世界そのもののイレギュラー。そんな存在の視点など、読める者がいるわけがないのだから。

そして、サウザンドフォースは本気の作戦活動を開始する。
「……我らが神祖が残した緊急指示書。条件が成立した以上、動かないわけにはいかないだろう」
そう苦い顔を浮かべる男の後ろには、独特というべき兵器が並んでいた。
横倒しになったドラム缶の側面に箱を取り付けたようなそれは、サウザンドフォースの開発した最新鋭機にして、極限レベルで特化した兵器。
千年の時をかけて研鑽された技術の粋を集めたそれは、サウザー諸島連合に神祖が居た頃から幹部だったからをしても、その価値に疑念を浮かべるほどだった。

だが、この事態を予期していたのならば納得と言ってもいい。
これまでの事態を集めた情報から推測し、そしてこの事態を正確に察知したことで、この兵器を投入する価値があることを彼は痛感していた。
だからこその切り札。虎の子たる人工神器戦闘母艦たる、プロレマ級を三隻も投入した作戦。この作戦は非常に重いだろう。
もしこの作戦が失敗すれば、サウザンドフォースは再び雌伏の時を迎える可能性もある。それほどまでの一大作戦。
だからこそ、男は全力を出すことを前提とする。
『サウザンドライバー』
『ＳＴＲＯＮＧ　ＨＯＲＮ』
『ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＧＯＤ』
ザイアサウザンドライバーを装着して構えるは、アメイジングアクティオンプログライズキー及びアウェイキングアキシオンプログライズキー。
それを両サイドに装填し、男は目を開けて宣言する。
「変身！」
『パーフェクトライズ』
『Ｗｈｅｎ　ｔｈｅ　ｔｈｒｅｅ　ｈｏｒｎ　ｃｒｏｓｓ．Ｔｈｅ　ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ　ｓｒｏｌｄｉｅｒ　ＴＥＮＴＨＯＵＺＡＲＥ　ｉｓ　ｂｒｏｎ』
『Ｕｎｄｅａｄ　ｉｓ　ＺＡＩＡ！』
顕現するは、仮面ライダーテンサウザー・ロスト。
サウザンドフォースのフラッグシップが、後ろの秘密兵器部隊に宣言する。
「これより我々は、神祖が残せし最重要危険対象を捕縛に向かう。その為の機体だ、命を懸けろ！」
『『『

ここに、混沌たる最終決戦の火種が灯された。

英雄乱戦編　第五十六話　悲恋の決着

イッセーＳｉｄｅ

『ふはははははっ！　死ね死ね死ね死ね苦しんで死ねぇぇぇぇぇぇっ!!』

八重垣正臣……いや違う。その残骸であるモデルジューダスの攻撃は厄介だ。

魔剣と化した天叢雲剣とそこから具現化する八岐大蛇

更に星辰光で具現化されるエクス・デュランダル。

とどめにイリナのヘキサカリバーが擬態を中核にしているのを利用して、全身を聖剣の鎧で覆っている。ご丁寧にアスカロンすら展開して、サブアームのようにふるってくるから危険だ。

はっきり言ってかなり強い。剣士としての技量が優れているうえ、ステラフレームの人工神器でこっちが連携しづらいように立ち回っている。

更にこっちの攻撃が急に曲がって味方に向かう時がある。おそらく支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）で不意打ち気味に支配して操作してやがる。

だけど食い下がれる……いや違う。突き抜ける余地が残っている。

そう。モデルジューダスは確かに強い。

だけど勝ち目は十分にある。

モデルジューダスの技量は優れている。性能はステラフレームなだけあって当然高い。武器の天叢雲剣と宿った八岐大蛇もやばい。とどめにエクス・デュランダルとヘキサカリバー、更にアスカロンまでコピーされている。

だけど、付け入るスキはいくらでもある。

最初に公園で仕掛けてきた時より性能は上だけど、戦いやすさでは今回の方がいい感じだ。

……これが、人造惑星の欠点か。
典型的な第一世代型人造惑星。強い衝動によって神星鉄を制御する形式。
つまり、全力を出すと衝動に振り回されやすくなる欠陥がある。
もちろん対処できるやつもいるし、できなくても厄介な奴は多かったはずだ。だけど八重垣正臣を素体としたモデルジューダスでは欠陥が目立ってる。
当然だ。八重垣さんの星辰光は強力な聖剣が使えるようになる星だ。それを振るう技量があって初めて本領を発揮できる。
適当に使っても十分凶悪な星じゃないんだ。衝動に呑まれ過ぎてしまった所為で、剣技の冴えがなくなっている。
八重垣正臣はあくまで悪魔祓いであり、この戦いでは剣士としての戦いが中核なんだ。その戦い方の軸線が緩くなっていれば、当然戦い方に粗が目立ってくる。
モデルジューダスは、八重垣正臣より強力だ。だけど八重垣正臣より強者じゃない。それが、俺達の結論だ。
だからこそ、俺もアーシアもゼノヴィアも、何よりイリナも涙が出てきそうになる。
本当に……本当に……っ
「ふざけんじゃねえぞ……リゼヴィム、ミザリ……っ！」
俺は拳で天叢雲剣を弾き飛ばしながら、奥歯を食いしばる。
俺はあいつらを許せない。あいつらは、八重垣正臣すら穢しつくしている……っ！
そんな怒りが籠った拳を振るった俺に続き、イリナとゼノヴィアが駆け出した。
共にヘキサカリバーをオートクレールとデュランダルに纏い、全力の聖なるオーラを刃にして切りかかる。
「……ぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
その放たれる斬撃が、モデルジューダスの根幹部分を断ち切った。
『ふふふ……フハハハハハ……』
それでも、モデルジューダスは嗤いながら足を前に出していく。

自分の衝動のままに。憎悪に突き動かされるままに。
『もっとだ。もっと苦しめ、もっと死ね……死ね……死……ね……』
そのまま動かなくなるモデルジューダスに、俺達は拳を握り締めながら、ただ少しでも安らぎがあることを願うしかない。
本当に、こんなのってないだろ。
リゼヴィム、ミザリ。
あいつらは、絶対に許さない……っ

和地Ｓｉｄｅ

放たれる魔法の乱舞とそれに合わせる形で振るわれる二刀の刃。
俺とリヴァ先生はそれを掻い潜りながら、反撃を放っていく。
鍛えられた動きだ。洗練された魔法だ。
それを掻い潜りながら、俺はゾーンの突入を試みていく。
命の危険を感じるだけの攻撃を掻い潜ることで、俺の精神は研ぎ澄まされる。
そしてそれで押し上げることで、俺は意識を集中させていく。
やろうと思えばできるゾーンだが、同時にそう簡単にやれるわけではない。
抜き打ちでできるほど洗練されてはいない。そもそもゾーンに突入した経験があるだけでもまれなのに、その更に一握りだけが到達できる領域が簡単なわけがない。
だからこそ、鍛錬ですら時間をかける必要がある。実践なら尚更だろう。そこに注力した立ち回りができるわけでもないんだから。

だけど、時間をかければできるという自負が俺にはある。
あと少しで行ける。
少しだ。行け。
行け、行け、行け、行け。
行け行け行け行け行け行け行け……――――――

――――――イケタ

「決めるぞ、リヴァ先生！」
ゾーンの突入を理解し、俺は一気に踏み込んだ。
ゾーン突入時は動きが急激に洗練される。いうなればカズヒねえが覚醒するレベルの急成長ともとれるほどに、動作や対応を最適化させることができる。
だからこそ。相手がそれに対応する前にケリをつける。
俺は素早く大量の魔法攻撃を迎撃し、更に斬撃といった対応のリズムを崩す。
個人的には俺が決着をつけたいところもある。男の沽券とでもいうべきか。惚れた女の前の男相手に、今の俺が釣り合っていることを示したいと、勝ちたいと願う願望が。
だが、ここで挑むと決めたのは俺だけじゃない。そしてだからこそ――
「見せつけてやれよリヴァ先生。かつての男に今のアンタを、その成長を教えてやれっ！」
「……うん。ありがとうカズ君っ！」

―俺はリヴァ先生に道を譲り、そしてその道を守り切る。
『Ｏｄｅｎ！』
プログライズキーを操作したリヴァ先生に、ヴォルフも素早く対応する。
既に大量の魔法攻撃が展開され、それを時間稼ぎとして二刀に力が集まっていく。
「見せてくれ、リヴァ。俺が嫉妬した君の光を！」
『ゼツメノヴァ』
その攻撃に対し、リヴァ先生は突貫する。
ああ、それでいい。
俺がここにいる。涙換救済（タイタス・クロウ）がここにいる。嘆きで生まれた涙の意味を、流れるまで変える男が。
だからこそ―
「通すわけがないだろう！」
―すべての魔法攻撃は、俺が全部捌き切る！
しのぎ切るが為にすべての集中力を使い、ゾーンのポテンシャルで魔法攻撃すべてに障壁を間に合わせる。
既に禁手も星宿す魔の騎士団（ディアボリック・ステラ・クルセイダーズ）に切り替え済みだ。
そしてその攻撃を掻い潜り、リヴァ先生は間合いへと突入。
そして、その攻撃がぶつかり合う。
……均衡を崩す為の魔法攻撃を捌きつつ、俺は内心で固唾をのむ。
ヴォルフはリヴァ先生を超える為に外法にすら手を染めた。その七十年、油断できるわけがない。
事実、その一撃はリヴァ先生のスキルヴィングディストラクションに食らいついている。
大丈夫だよなリヴァ先生。俺は気が気じゃないんだけど。
そんな不安を押し殺し、俺が競り合いを援護する中だった。
「……凄いわ、ヴォルフ」
そんな、苦笑交じりのリヴァ先生の声が響く。
「女神をここまで追い込むなんて、さっすが私が惚れた男」
「……ああ、そうだな」

そう返すヴォルフの声も、苦笑の色が浮かんでいる。
「できることなら、並び立って見せたかったよ」
「ゴメンね？　私、禍（カオス・ブリゲート）の団はちょっとアウト」
そんな小さな言葉を交わし、拮抗は崩れた。
「……ありがとう、リヴァ。追いかけ続けた七十数年、この一瞬を含めて満足だ」
そのヴォルフの言葉と共に、ゼツメノヴァは砕け散る。
「……ありがとう、ヴォルフ。あの流浪の数十年で、あなたとの出会いは本当に彩られてたわ」
リヴァ先生の返答と共に、その一撃が叩き込まれる。

グンイヴルキス

ディストラクション

……俺はその光景を目に焼き付ける。
一人の男がたどった、惚れた女に並び立ちたいが為の人生。
それを胸に刻み込みながら俺は彼に告げる。
「約束する。俺は、アンタが「リヴァの隣にいてよかった」と思えるよ

うな男になって見せる」
その、自然と口をついて出た言葉に―
「……大丈夫。俺なんかより、よっぽどいていい男だよ、君は」
―ヴォルフはそう返し、そして爆散した。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

戦闘の趨勢は明確に、天界側に傾き始めていた。
既に第二天に進行していた禍の団幹部は後退し、前線で動いているのは使い捨てにできる量産型邪龍達主体になっている。
それを確認し、リアスは隣で息を整えるカズヒに視線を向ける。
「……あとは天界の人達で十分ね。カズヒ、第五天に向かうわよ」
「了解です、部長。……イッセー達なら大丈夫だとは思いますけど、油断と過信は禁物ですから」
そう返すカズヒだが、一瞬ちらりと視線をずらしたのにはリアスも気づいている。
理由は分かる。その方向はヴォルフを名乗るリヴァの知人と思しき男が、リヴァや和地と戦っている方向だからだ。
だが同時に、カズヒはすぐに意識を切り替えている。
それに対し、リアスは僅かに苦笑した。
「……少しぐらい気にしてるところを見せてもいいのよ？」
気にはしている。それぐらいには、リアスもカズヒのことを知っているつもりだ。
だがカズヒは肩をすくめると、小さく首を横に振る。
「流石に、他に優先すべきことがある時に横槍を入れる趣味はないで

すから」
気にしているが、今はそれどころじゃない。ついでに言うと、あれはリヴァが自分の手で解決したい事柄だろう。なら無粋なことをしなくてもいいだろう。
そう告げるカズヒに、リアスは苦笑を浮かべるほかなかった。
「難儀な性分ね」
「自覚的にしているので」
必要ならそういったことを自覚的に踏みにじりに行ける人物だが、後回しにできる余地があるならその間は配慮する。
そういう面倒くさい性分に苦笑しながら、リアスはすぐに今後を考える。
まずは紫藤トウジの安全を確保する。その後は和地にリヴァと合流してからクリフォトだ。
そこまで組み立てて眷属に指示を出そうとした、その時だった。
『……緊急連絡！　リゼヴィム・リヴァン・ルシファー……及び、サウザンドフォース指揮官クラス、便宜コード「テンサウザー」を確認しました！』
全員に通達するように、天界からの緊急通信が鳴り響く。
それに意識を割いた時、衝撃的な報告が告げられる。
『両者共に第四天！　天使イリナ達の近くにいます!!』
……寒気を感じるのに、理由はいらなかった。

英雄乱戦編　第五十七話　スーパーサウザンド大戦

イッセーＳｉｄｅ

俺達は今、リゼヴィムと激突している。
何とかモデルジューダスを打倒した隙をついて、リゼヴィムは後ろからこっちを攻撃してきた。
超越者のリゼヴィムはただでさえ魔王クラス以上に強く、しかも神器無効化能力（セイクリッド・ギア・キャンセラー）が俺とシャルロットに刺さりまくっている。
それでも、負けるわけにはいかねえよなぁ。
アーシアが殴られた。それに奮起してファーブニルは頑張った。
なら、今度は俺達の番だ!!
準備はいいか、ドライグッ！
『ああ。これで行けるぞ、相棒！』
ならいいぜ。そろそろ一発かましてやる!!
俺は背中のブースターをふかして、リゼヴィムに向かって突貫する。
拳を握り締め、そして真っ向から突っ込んだ。
「リゼヴィムっ！」
「ふぅん？　お前さんはどうでもいいんだけど―」
そのにやけっつらを引っぺがす！
「喰らいやがれぇっ!!」
『Ｐｅｎｅｔｒａｔｅ！』
その拳はリゼヴィムに吸い込まれ……かき消されない。
リゼヴィムの顔面にめり込み、そしてリゼヴィムは軽くのけぞって……そこで止まった。
「……痛い？　え、痛い……え？」
困惑するリゼヴィムだけど、こっちも正直困惑している。

赤龍帝第三の力。白龍皇の反射と対をなす力。それが透過
テストで時間をかけて九成相手に試した時は、九成の障壁を素通りして打撃を与えれた。
これならリゼヴィムの神器無効化能力をどうにかできる。そう考えたのに……浅い。
これでも、届かないのか。そう思った時、シャルロットの戦慄を俺は感じ取った。
『違います、イッセー！』
シャルロット？
何が違うんだ。一応リゼヴィムに攻撃は通って―
『よく見てください！　リゼヴィムではなく、自分を！』
―その言葉に、俺は目を見開いた。
同時にリゼヴィムも我に返り、腕で俺を弾き飛ばそうとする。
それを回避して距離を置いて、リゼヴィムも俺の変化に気づいて目を開いた。
「……はぁ？　よりにもよって普通の鎧で一発かまされたのかよ俺!?」
そう。俺の鎧が、真女王が解除されている。
もちろん俺の意思じゃない。リゼヴィム相手に弱くなってどうするんだよ。
でもなんでだ？　昇格（プロモーション）はしっかりやってるし、そもそもしなけりゃモデルジューダスは倒せなかった。最近は燃費もだいぶ良くなったから、まだ真女王は使えていないとおかしい。
そこまで考えて、俺は嫌な予感を覚えた。
確認のためにすぐに試して……やばい。
「……嘘だろ？　昇格（プロモーション）ができなくなってる!?」
ありえない。
真女王だけじゃない。三叉成駒も赤龍褒賞も、そもそも通常の昇格もできなくなっている。
いったい何が起きたってんだ!?　三叉成駒になれるようになってから、俺は俺自身の意思で昇格をできるようになってるのに。

リゼヴィムが攻撃が通ったことにまだ混乱しているところがあるから助かっているけど、流石に昇格もなしで魔王以上の超越者なんて倒せない。
くそ！　いったい何が―

『サウザンドブレイク！』
「イッセー!?」
「危ないっ!!」
―その困惑を、容赦なく元凶はついた。
ゼノヴィアとイリナの声に慌てて振り向けば、そこには大量のライダモデルが俺とリゼヴィムに向かって襲い掛かり、更に大量の砲撃が放たれる。
直撃する前にゼノヴィアが割って入ってデュランダル砲を放って相殺を試みるけど、殺しきれずに俺達を吹っ飛ばす。
くそったれ！　この攻撃は、あの時のじゃねえか！
激痛に耐えながら起き上がれば、自力で防ぎ切っていたリゼヴィムが、元凶を睨み付けていた。
「へぇ……。お前さんが噂のサウザンドフォースってのかい？　どちらさんかな？」
「テンサウザー・ロスト以上の名を語る気はない。名を知られるだけで何かしらできそうな連中がいそうなのでな」
リゼヴィムにそう返すのは、以前駒王町で俺達や禍の団と三つ巴になったテンサウザー・ロスト。
仮面ライダーグリームニルに変身したリヴァさんを追い込んだ化け物が、サウザンドジャッカーとかいう武器を構えながらリゼヴィムを睨み付けている。
その後ろには百ちょっとはいる銃を構えた戦士達と、後ろに……なんか空飛ぶドラム缶みたいな兵器を控えさせている。

というかドラム缶っぽい兵器は俺達がいるところを囲むようにして数十体は浮かんでいる。色は基本的に黄色っぽいけど、中には銀色や赤いのもあり、赤いのはなんか粒子っぽいのを放っている。

なんだこいつら。この状況で……っ！

俺たちが警戒していると、リゼヴィムは苛立たし気に俺が殴った頬を撫でながら、テンサウザーを睨み付ける。

「おたくが余計なことしたってことでいいのかい？　赤龍帝の奴が弱くなってるのもってことでいいのかねぇ？」

「少し違うな。我々が何かをしなくとも、貴様は赤龍帝に殴り飛ばされていたとも」

そうかえすテンサウザーは、俺の方を一瞥する。

警戒されてるな。っていうか、畏怖されてる感じがするぞ。

「赤龍帝兵藤一誠はこの時期に、白龍皇の反射と対をなす「透過」の力に目覚めている。今は亡き神祖の残した書物によれば、透過をタイミングよく当てれば神器無効化能力はすり抜ける……が、今回は違う」

そう語りながら、テンサウザーは得物を持ってない手を上に挙げる。

同時に、後ろに控えている戦士が銃を放った。

弾丸をリゼヴィムは避けない。そもそも直撃する打ち方じゃないし、どうもそれ以前の余裕を持っている反応だ。

その顔が、頬を掠めて血が出たことで強張った。

なんだ？　あれってもしかして神器なのか？

「……ありえねぇ。殲滅の突撃大隊（アサルト・カンパニー）はたかが準神滅具（ロンギヌス）だぞ？　それに、準神滅具の理由も数重視で、一体の性能はむしろ神器でも中の下止まりだったはずだ……っ」

愕然としているリゼヴィムに、テンサウザーは肩をすくめる。

「理由は極めて単純だよ」

そう言い切ったテンサウザーは、俺の方にも振り向いた。

「赤龍帝の昇格ができない理由もほぼ同じ。これはその為の星辰体（アストラル）運用兵器だ」

その言葉に、俺とリゼヴィムは同時に周囲を振り仰ぐ。

おいおい、まさかあのドラム缶、俺やリゼヴィム用の兵器だってのか!? しかも人造惑星(プラネテス)っ!?
となると、赤いのが対俺用で、銀色のが対リゼヴィム用か！　周りの黄色いのは俺達以外の警戒をしている機体ってことになるんじゃねえか!?
「メタルスターはサウザンドフォースの主力たりえる星辰体運用兵器。更にＴｙｐｅ―セカンドとサードは貴殿ら用の切り札として、神祖が直々に最優先開発研究を行った特別仕様だ」
そう自慢げに語ってから、テンサウザーはだけどちょっと苦笑している雰囲気だった。
「まさかリゼヴィム・リヴァン・ルシファーだけでなく今代の赤龍帝をここまで警戒するのかと、崩御なされる前どころかつい最近まで流石に疑念だったがね。……何とかこのタイミングに間に合わせることができて僥倖だった」
そう語るテンサウザーは、サウザンドジャッカーの切っ先をリゼヴィムに向ける。
「……悪神ロキとの闘いにて、赤龍帝兵藤一誠に力を貸す異世界の乳神。そしてそれを知って異世界侵略の為にクリフォトを結成するリゼヴィム・リヴァン・ルシファーによる、知恵の実と生命の実を回収するついでの天界侵略。ここまで符号が成立した以上、ここで貴様らを封印させてもらう」
「……うっそぉ。なんでそこまで知ってんの？」
リゼヴィムは唖然としているけど、知恵の実とか生命の実って……確かエデンの逸話にどっちか出てなかったっけ!?
リゼヴィムはなんて言うか唖然としていたけど、やがて肩をすくめると懐からしなびた木の実を取り出した。
「……俺のお袋が言ってたんだよ。これを天国に繋がる煉獄の道辺りに隠したってな」
マジか。そしてなんてこった。
じゃあ本当に天界を攻めたのはついでなのかよ。なんか侵攻できそうだから、ならやっちまうかっていうそんなあほみたいな理由で？

……ふざけやがって……っ！
俺はハラワタが煮えくり返りそうだし、テンサウザーもリゼヴィムに呆れている感じだった。
ただまずいな。今のままだと俺達が攻撃をしている余裕がない。
周囲の戦士達やドラム缶や、俺達にも強い警戒心を向けているのがよく分かる。たぶんだけど、今動いたらやられる……っ。
そしてリゼヴィムと睨み合になっているテンサウザーは、少しほっとした雰囲気も見せていた。
「最も、対リゼヴィム用の神意解析（リリス・キャンセラー）による明星沈静は、神器を千年間研究し続けたことによる、神器そのものの共通項から逆説的に無効化が影響する部位を探って開発した相殺波動なので、ぶっつけ本番だったから少し安心したぞ」
なるほど。ま、リゼヴィムが表に出てきたのは最近だし、それはそうなんだろう。
っていうか千年間研究して共通項を探るとか、ちょっとおかしな話だよな。
リゼヴィムは乳神が出てきたから動いたようなもんだ。超越者対策は悪魔と敵対するならありだろうけど、それにしたってサーゼクス様やアジュカ様の方が重要じゃねえか？
警戒しながらそんなことを思っていると、テンサウザーはこっちに視線を向けてくる。
リゼヴィムの警戒は怠っていないけど、そのうえで俺を見て呆れた表情を浮かべている雰囲気だった。
「それに比べれば赤龍帝用の兵士解雇（イッセー・シーリング）による隷属解放はまだ楽だ。上級悪魔は眷属に空きがあっても人間界に出てくるから悪魔の駒は回収できるし、検体としての兵士（ポーン）もはぐれを捕縛すればいいのでな。昇格（プロモーション）阻害粒子の研究・開発・試験はとても容易かった。透過をすり抜けられるかだけはぶっつけ本番だがな」
しかもそんなものまで作ってるのかよ。
やってくれるじゃねえか。おかげでこっちは―
『……なんだと？』

『そんな、馬鹿な』
ドライグとシャルロットの驚愕した声に、俺はきょとんとなった。
いやちょっと待ってくれよ。確かにやばいけど星辰光（アステリズム）って何でもありだし、そこまで驚かなくてもいいじゃんか。
俺はそう念じるけど、シャルロットが首を横に振るのを俺は感じる。
『ありえません。悪魔の駒の機能を阻害するのではなく、兵士の駒だけが持つ昇格を阻害する。この時点でピンポイントすぎます』
『それどころか、奴の発言が正しければ、あいつらは俺達が透過を取り戻す可能性を踏まえて能力を仕立てている』
ドライグが皆に聞こえるように告げ、そしてテンサウザーに声を飛ばす。
『ふざけるな。それは、相棒の成長をピンポイントに狙ったものだ。何年も前から研究開発するなんてありえない!!』
……その怒鳴り声に、俺は思い至った。
そうだ。俺が赤龍帝の籠手を持っていることは、つい最近まで知られてなかった。
堕天使に神器持ちだと判断され、暴走させると結論づけられて殺された時もそこまでは分かってない。レイナーレの奴も、俺が初めて籠手を発現させた時は龍（トウワイス・クリティカル）の手と勘違いしてたし。
そもそも赤龍帝の籠手が透過の力を発現したのも、本当につい最近だ。追加で言えば、昇格を利用した真女王・三叉成駒・赤龍褒賞は、全部俺だけのイレギュラーで発現してから三か月経つか経たないかぐらいだぞ。
そんな俺のピンポイントな対策を、何年も何十年も前から研究してるなんて、ありえない。
リゼヴィムの含めた俺たち全員の視線が集まる中、テンサウザーは自慢げに胸を張った。
「偉大なる我らが神祖の慧眼をなめるなよ？　サウザンドフォースの形を整えるまでの時間がかかりすぎて介入はできなかったが、神祖が遺した書は、三大勢力が駒王町の駒王学園高等部生徒会室で、和議を

行うことまで記されていた。吸血鬼の里にこれたのも、ヴァレリー・ツェペシュが聖杯を持っていることが記されていたがゆえに備えていたからだ」

……は？

おいおいおい。ちょっと待てよ。

なんだそりゃ。未来予知能力でも持ってるのか!?

俺達はもちろん、リゼヴィムも愕然としている。

そんなリゼヴィムに切っ先を突き付けながら、テンサウザーは警戒心を向けてくる。

「すべてが完璧とはいかないが、魔王血族の血を用いた神器のドーピング剤といった概要は八割がた的中しておられた。……つまり、貴様が自分が死んだ時に魂をトライヘキサ復活に捧げていることも当たりだろう」

「……マジですか」

唖然としているリゼヴィムの反応が答えだ。

ふざけんな、冗談だろ。

神祖ってのは一体何なんだ。まるでこの作品が完結した創作物で、全部読んでるみたいな感じで対応してるじゃねえか!?

っていうか神祖ってなんだよ。マジで何なんだオイ!?

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

これは、のちに資料として公表される記録映像となって提出されることになる映像だった。

「……はっはっはぁ。なんか神祖ってやばかったんだな。ハヤテくん

達が何で殺せたのかさっぱり分かんねぇわ」
そう乾いた笑い声をあげながら、リゼヴィムは頬を撫でると肩をすくめる。
そして―
「―ならば、私もまたルシファーの血を継ぐ者として、夢を叶える為に本気でいかねばならないようだ」
―そう口調を切り替え、そしてある物を腰に装着する。
『サウザンドライバー』
ザイアサウザンドライバー。それが装着されるのを見て、テンサウザーは警戒するように飛び退る。
それを見たリゼヴィムは、意趣返しができたと判断したのかにやりと笑い、プログライズキーとゼツメライズキーを取り出した。
『ＲＯＭＡＮ』
『ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＭＡＲＩＣＥ』
「偉大なる神祖が異形を打倒する為の、サウザンドライバーを悪用するかぁっ！」
激昂するテンサウザーが軍勢と共に攻撃を放つが、リゼヴィムは小躍りするように回避しながらキーを装填し、にやりと笑った。
「変っ身！」
『パーフェクトライズ』
二つの人に近い異形―すなわち悪魔―のライダモデルがリゼヴィムの周囲を旋回し、そして組み付くようにまとまったのちに吹き飛んだ。
『Ｗｈｅｎ　ｔｈｒ　ｅｖｉｌ　ｄｉｖｅｌ　ｓｔａｒｔｉｎｇ　ｄｒｅａｍ．　Ｔｈｅ　ｅｖｉｌ　ｋｉｎｇ　ＴＨＯＵＺＡＩＡＲＥ　ｉｓ　ｂｏｒｎ．』
黄金の装甲に身を包む、銀色の戦士。
『Ｐｒｅｓｅｎｔｅｄ　ｂｙ　Ｋｅｌｉｐａｔ』
その戦士があっさりと敵の攻撃を吹き飛ばし、そして内部のリゼヴィムから悪意が放たれる。
「兵藤一誠は知っているだろうが、サウザイアーはシャルバ達が実権

を握っている際に、禍の団のフラッグシップとして開発された仮面ライダー」
そう語るとともに、すべての攻撃を無駄なく回避しながら、リゼヴィムは魔力を滾らせる。
その絶大な、魔王クラスを超える量の魔力を放つ直前、リゼヴィムは嘲笑を気配で示した。
「つまり、本来サウザイアーは悪魔が使用する前提で設計されているのだよ！」
その言葉と共に、全方位に魔力が放たれる。
『ジャッキングブレイク！　サルヴェイティングドッグ！』
それをサルヴェイティングドッグの力を併用して突破したテンサウザーが、素早くケリを放つ。
回避したサウザイアーとテンサウザーは、まるで予定調和のようにお互いの攻撃を正確に回避しながら、正確無比な攻撃を叩き込み続ける。
「なるほど。このサウザイアー・リリンをもってしてなお苦戦する……予測パターンはほぼ同等か」
「テンサウザー・ロストに並ぶ予測演算か。ならこちらも切るのみだ」
感心するリゼヴィムから一旦距離をとったテンサウザーは、手元を魔法で操り大量のプログライズキーを射出する。
それを戦士達がキャッチすると共に、テンサウザーから強いオーラが放たれる。
「禁手化（バランス・ブレイク）！　突貫撃破の仮面大隊（ガンカンパニー・ドライバーズ）」
その変化は極僅か。一見すると違いを見出すことが困難。
だが、腰に具現化したカバーに包まれた挿入スロットがすべてを物語る。
『『『

そして、タイミングを合わせて一斉に起動した。
『『『

英雄乱戦編　第五十八話　兵藤一誠、なめたらアカン

イッセーＳｉｄｅ

クソッ！　敵の数が多すぎる!!
ドラム缶もどきは大量に砲撃を仕掛けてくるし、仮面ライダーサウザンドどかいう連中も、飛び跳ねてかく乱しながら射撃を叩き込んでくる。
接近しても強力な蹴りで反撃してくるし、こいつら全員、手ごわい……っ。
「ええい！　この数は……っ！」
「それにイッセー君の力が使えないなんて！」
ゼノヴィアとイリナがカバーしてくれているけど、このままだとこっちが押し切られる。
こいつら、ターゲットのメインはリゼヴィムだけど俺達も狙っている。むしろこっちの方が遠慮なしに攻撃を叩き込んできやがる。
このままだとかなりまずい……っ
「ふはははははっ！　中々やるようだな……ならばっ！」
「ぬかせ異形！　人類の未来は奪わせん！」
激突するリゼヴィムが変身したサウザイアー・リリンと、サウザンドフォースのテンサウザー・ロスト。
あいつら、戦闘の間にこっちも巻き込めるような攻撃ばっかりしてきやがる。
それなのに、両方ともまるで読んでるように正確に回避しきっている。いったい何だってんだ！
畜生。真女王どころか、赤龍報奨も三叉成駒も使えない。
これじゃぁ、俺は歴代最弱の赤龍帝のまま―

「……いや、違う」
―そうじゃないだろ。
俺は大事なことに気が付いて、思わず拳を握り締めると顔面を殴りつけた。
轟音が響き、思わず全員がこっちを見る。
ま、そりゃいきなりこんな事したら変な奴だしな。
ただ、何とか頭が冷えた。
悪魔の駒の力がない？　だから赤龍帝として歴代最弱？　違うだろ、馬鹿野郎。
『……い、イッセー？』
「シャルロット。お互い、まだまだ未熟だよな」
ああ、すっかり忘れてた。
そう、俺は―
「俺はリアス部長が愛する最強の兵士（ポーン）で、シャルロットが誇る比翼連理だ。この程度でへこたれるわけがねえ！」
―ああ、だから！
「久しぶりに行くぜ、シャルロット！」
『――ッ！　そう、そうでした。行きますよイッセー！』
ああそうだ。
俺達、二人で一人の赤龍帝は三位一体。ドライグと一緒の俺達だけの強みがあるんだって、最近すっかり忘れてたぜ!!
「『禁手化（バランス・ブレイク）ッ!!』」
そう、俺達の本領は究極の羯磨（テロス・カルマ）と赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）の相乗強化。
赤龍帝の籠手が持つ可能性を拡張することに特化した、究極の羯磨が至った禁手。天使の羯磨（テロス・アズライグ）に導かれし赤龍帝こそが真骨頂。
最近色々あって忘れてたけど、その多様性が俺の持ち味なんだよ！
そして、これまでの結果がこの程度で全部消えるわけでもない。
真女王を生かす為に、初代孫悟空の爺さんが教えてくれた方法は……生かせる!!
「閃光の如き赤龍の覇道ッ！」（ウェルシュ・ライトニング・ドレッドノート）
俺達の至った亜種禁手の一つ。極短時間限定で覇龍のポテンシャ

ルを発揮する亜種禁手。
連続発動は最初からでも一分程度。今でも三分続くか続かないか。
だけど、それは常に力を振るっている時だけだ!!
俺は素早く拳を振るうと、サウザイアーとテンサウザーの戦いに割って入る。
攻撃そのものは回避されるけど、こっちの動きが鋭いから割って入れる!
「出力の調整が機敏かつ正確……っ！　しかも克服した覇をあえて振るうなど、神祖が慧眼でも見通せていない……っ！」
「ええい！　これだけの機敏な調整、透過と併用できるわけがないだろうに……っ！」
そりゃどうも。俺だって必要な時はこれぐらいするさ。
孫悟空の爺さんから与えられた課題。出力の正確な調整を安定して使えるようにする訓練。
まだまだ大雑把なところはあるけど、赤龍帝そのもののドライグに究極の羯磨で可能性操作ができるシャルロットがいるなら、ハイロウの調整はかなり大幅にできる。
打撃を入れる瞬間だけ覇の領域にすることで、結果的に発動時間を長続きにすればいい。
このまま好き勝手にさせるわけにはいかねえしなぁ！
それに！
『そこですっ！』
「!?」
俺の打撃を回避した二体のサウザーに、オーラの砲撃が放たれる。
忘れてねえか？　俺とシャルロットの星辰光（アステリズム）は、自分の神滅具に相手の神滅具の力を籠められる能力だ。
シャルロットが自分の神器を使う分には、赤龍帝の力もある程度は使えるんだよ！
「なめられたものだ。……リリス、そろそろ援護を頼む」
「まったくだ。メタルスター部隊、攻撃開始！」
「それをさせると―」

「―思ってるの!?」
相手も更に総力を投入するけど、そこにゼノヴィアのデュランダル砲が放たれ、縫うようにイリナが入って攻撃を仕掛ける。
乱戦になってきたけど、この程度じゃなぁ！
……と思ったら、リリスが盛大にデュランダル砲と仮面ライダーサウザンド達を吹っ飛ばしてこっちに向かってきた！
流石にオーフィスの半分はきついか!?
「リゼヴィム、守る」
あ、思いっきり殴り掛かる体制だ。
思わず身を守ろうとした時、割って入る影があった。
『ＢＵＲＳＴ！』
『ダイナマイティングカバンバスター！』
カウンターでぶっ放した砲撃が、リリスの動きを一瞬だけど止める。
その一瞬で、割って入った奴が振り返った。
「イッセー、アスカロン貸して！　ハリー！」
「ＯＫカズヒ！」
いいタイミングで来てくれたぜカズヒ！
俺はアスカロンを投げ渡すと、カズヒはそれをすぐキャッチ。
確か聖剣因子を人造して移植したとか言ってたしな。短時間なら大丈夫だろ。
更にカズヒはアタッシュナイダーを取り出すと、魔術で展開しながらジャッジングサマエルプログライズキーをセットした。
「五分稼ぐわ！」
絶対稼ぐなこりゃ。
ただそれでもたった五分。カズヒがそれぐらいのことしか言えない辺り、やっぱりやばいか。
ただその瞬間、今度は大量の光がリリスに対して放たれた。
「なら私がいれば十分は稼げるでしょう」
「ミカエル様!?　ご、ご支援感謝感激です！」
カズヒが思わず挙動不審になるぐらい、この援護はありがたい。

天使長のミカエルさんなら魔王クラスの強さはある。しかも星辰奏者だからもっと強くなってるだろうし。
ありがとうございます！　信徒メンバーがちょっと戸惑っているけど！
そう思った時、更に仮面ライダーサウザンド達に消滅の魔力が放たれ、雷光と魔法の雨あられが、嵐と共にぶっ放された！
おお、最後のがよく分からないけど、リアス達まで来てくれたのか！
「イッセー、大丈夫!?」
「助けに来たよイッセー君！」
くぅ～っ！　仲間が来てくれると感激だぜ！
「みんな！　サウザンドフォースの連中がリゼヴィムの神器無効化能力を封じてる！　神器で畳みかけるんだ！」
そう、神器無効化能力が使えないリゼヴィムにとって、神器の攻撃は未知の攻撃に近い。
なら対応は困難になるだろうさ！　ここは容赦なく使わせてもらうぜっ!!
ああ、そしてこういう時にこそ―

「無事かイッセー！　こっちは片付いた！」
「浸らせてくれないＫＹな人達には、先生の女神パワーがお仕置きしちゃうわよ？」

―きちんと決めるから、お前に嫉妬するぜ九成っ！

和地Ｓｉｄｅ

どうやら、大一番にはギリギリで間に合ったようだな。
かといって状況は把握しきれてない。テンサウザーがいるということはサウザンドフォースが割って入っている程度だ。しいて言うなら、あのサウザイアーの色違いはリゼヴィムが変身したやつなんだろう。
何故イッセーが今更真女王以外で戦闘をしているのかとか、なんで神器らしき攻撃がリゼヴィムらしき奴に通用しているのかとか、疑問符があまりにも増えて来る。
こういう時は―
「イッセー何がどうなってる!?」
―人に聞こう！　当事者（イッセー）よろしく！
「……シャルロット、説明任せた！」
『上空を飛翔しているサウザンドフォース製人造惑星により、兵士（ポーン）の駒が持つ昇格（プロモーション）とリゼヴィムが持つ神器無効化能力が封じられています。前者は透過対策までしている念の入れようです！』
よし、シャルロットが要点だけをかいつまんでくれた。
かいつまんでくれたから尚更意味不明だ。
なんで透過対策万全の昇格（プロモーション）封じなんて、イッセーの力限定特化の能力作ってるんだ。しかも透過対策だぞ透過対策。内通者がいるにしても早すぎる。
「……ふっ。サウザンドディストラクションがなければ、乳神が来る前には開発し、兵藤一誠も殺害を行えていたのだがな」

テンサウザーはテンサウザーで、いったい何なんだオイ。
奴の言い分から逆算すると、まるで乳神が来ることを予期していたような雰囲気を感じている。
流石にあんなものを予想できるやつがいるわけ―
「気をつけろ皆！　そいつら、リゼヴィムがここに来た目的が煉獄と天国を繋ぐ道に悪魔の母リリスが隠した知恵の実と生命の実を回収したついでだってことも、リゼヴィムの奴が自分が死んだらその魂を生贄にトライヘキサ復活を早める気だってことも言い当ててた！」
『『『

るから殺せない!!　あと神器無効化能力は周りのドラム缶が封じてる」
「なんだと？　……ええい、なら殺して欲しがるほどいたぶるだけか。まぁ、倒しやすいのと差し引きで考えるべきだろうね」
イッセーと並び立ち、ヴァーリは素早く禁手を展開。
覇なす白龍の戦装飾（ヴァニシング・メイル・クルーズドライブ）。あれでも十分戦えるだろう。
「なら、俺は悪祓銀弾（シルバーレット）を援護しよう。リリスに関しては俺達英雄派に責任があるからね」
「分かったわ。なら私もサポートに回るべきかしら。アーチャー、援護して」
「承知したでござる」
曹操は連れてきた英雄派を率いて、カズヒねぇの方に向かうらしい。
なら、俺がするべきことは単純だな。
「ちょうどいい。ザイアの連中には常々何発もかましたいんだ。……テンサウザーは抑える」
俺はゾーンを維持しながら、テンサウザー・ロストの方に向き直る。
はっはっは。結果的に下地となる能力が鍛え上げられたことは事実だが、それとこれとは話が別だ。洗脳教育のツケは払ってもらう。
そして、そんな俺の隣に並び立つ女性がいた。
「カズ君がカズ君のケリをつけるなら私もやるわ。……お・か・え・し♪」
リヴァ先生……。
ああ、そうだな。
さっきまでは俺が割り込んだようなものだ。なら文句を言う理由もないし、力が欲しいのは尚更だ。
「頼りにしてるぜ、リヴァ先生！」
「もっと頼ってね、カズ君♪」
ああ、今後も頼むぜリヴァ先生。
だからこそ―
「これ以上、天界に嘆きを持ち込ませない」

―俺は、伏せ札をここで開帳する。
「覚悟はいいかテンサウザー。駒王町を含めたお前達の狼藉の代金、そろそろ一旦支払ってもらうぞ！」
チームD×D、なめるんじゃねえっ!!

英雄乱戦編　第五十九話　天界防衛最終戦（前編）

祐斗ＳＩＤＥ

天界を守る為に、僕達の戦いはここが大一番だと断言できる。
だからこそ、ここですべてを出す切るつもりで……挑む!!
「雷光よ、嵐を纏えっ！」
「撃ち落とせ、エクス・デュランダル！」
夢幻召喚をもってして更なる領域に到達した朱乃さんとゼノヴィアを中核に、僕達は大量に展開される敵仮面ライダーを迎撃する。
遠距離から攻撃をしてくる人造惑星は、うかつに撃破してリゼヴィムの神器無効化能力（セイクリッド・ギア・キャンセラー）が復活しては困るからあえて攻撃しない。だけど、具現化されている仮面ライダーは別だ。
『『『『『『『『『『ＪＵＭＰ』』』』』』』』』』
同型の援護射撃を受けながら、十数体の仮面ライダーサウザンドがプログライズキーを同調させる。
彼らは一斉に飛び上がると、それぞれが跳ね上がるような軌道で突貫する。
「させるか、龍騎士よ！」
カウンターをぶつけるように、僕は龍騎士を展開すると突貫させる。
『『『『『『『『『『

そこからくる僅かな隙をねじ込むように、ギャスパー君がここぞとばかりに闇の獣と停止の力で切り崩していく。
そしてその均衡が崩れたところに叩き込まれるのはリアス部長の渾身の魔力。
「まとめて……消し跳びなさいっ！」
放たれる砲撃は一撃で十数体の仮面ライダーサウザンドを消し飛ばす。
だが、それをもってしても仮面ライダーサウザンドは数多い。
更にテンサウザーも増産しているようだ。どうやら一度に出せる、もしくは効率的に制御できる数には限度があるだけのようだ。新たに補充する分の余裕は十分にあるらしい。
それでも、僕達D×Dによって仮面ライダーサウザンドは抑え込めている。
これだけでも十分すぎる価値がある。何故なら、その間にあの三人は必ず成果を上げてくれると信じているからだ。
悪祓銀弾（シルバーレット）、涙換救済（タイタス・クロウ）、そして僕達の赤龍帝。
ここは任せてくれ。だから、任せたよ!!

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

リリスを足止めに徹しているカズヒだが、ここで思い違いに気づき反省していた。
五分は足止めすると言ってたが、そんなものではない。
これなら本当に十分以上足止めすることも可能だろう。その確信すら覚えていた。

理由は単純。リリスは確かに強大だが、いなしようはある敵だったからだ。彼女に比べればイッセーやヴァーリ相手の足止めの方が苦労するだろう。

さもありなん。そもそも誕生してから二月立っているかも怪しいのだ。単純な性能は確かに高いだろうがそれ止まり。戦い方が拙いとしか言いようがない。

これが本来の無限と称されるオーフィスなら、圧倒的な力がありすぎて流石に無理だろう。だが半分になり有限となったオーフィスの力ならば、カズヒクラスの戦闘強者ならある程度は対処できる。

もちろん、それを持っても本来なら十分未満が限界だろう。だが今回は話が違う。

「させませんよ。無限の力は天界には厳しすぎますので」

天使長ミカエルの星辰光による援護も大きい。

ミカエル自身が魔王クラスとも戦えるレベルであり、更に斥力による拘束を可能とする星辰光が、リリスの動作から瞬発力を奪っている。間違いなく性能においては最強である彼を起点とすることで、更なる立ち回りが可能だった。

更にそこから縫い留めるように、聖槍の切っ先がリリスを僅かずつ削っていく。

有限と化したとはいえ無限だった存在。必然的にすぐ回復していくが、しかし動作から精細を欠かせるには十分だ。

かつてオーフィスを有限とし、リリスの元となる力を簒奪した英雄派。無限を攻略したその手際も含めて、彼の力量は絶大だ。

加えて彼の禁手と戦い方は、性能で圧倒する存在を技量と手法で絡め捕るテクニックタイプの極限域。圧倒的な性能による力押しに対しては、めっぽう強い存在でもある。

「流石に倒すのは無理だが、しかしいなす分には簡単だね。……二天龍の方が遥かに滾らせてくれるよ」

残念そうに告げる曹操の横から、更に突貫するは岩石の獣。

それにまたがり龍殺しの矢を放つサイリンは、そんな曹操に呆れたような笑みを浮かべていた。

「そんなに二天龍にご執心なの？」
「もちろん。慈悲の欠片もない圧倒的な力と、あらゆる手を覆す意外性の極み。あれに比べれば、俺を沸かせるには全く足りてないさ」
さらりと告げられるその返答に、サイリンは苦笑しながら矢を放つ。
リリスも反撃の攻撃を放つが、ミカエルの星もあって直撃は当たらず、そして余波はサイリンが真っ向から受け止めていた。
その偉業じみた耐久力の元となるは、サイリンが着込んでいる輝く鎧。
それを一瞥しながら、踏み込んでリリスの足を払うアーチャーが小さく微笑んだ。
「ふふふ。マスターは尼子の次代であってドゥルヨーダナはデコイにしておりましたが、よもやそちらの方から更なる高みに至れるとは思わぬでござった」
「インドラ神に感謝……いえ、皮肉のつもりかもね」
そうサーヴァントに返すサイリンを、カズヒはちらりと確認する。
「ドゥルヨーダナ方面から？　帝釈天……インドラって加護を与えるんじゃなくて妨害してきた側じゃなかったかしら？」
マハーバーラタには詳しくないが、ドゥルヨーダナは主役側であるアルジュナ達の敵で、アルジュナはインドラの子だったはずだ。
多くの神々がアルジュナ側を支援し、それはインドラ側も同様だったと記憶にある。敵対する側であり、加護を賜った逸話があっただろうか？
疑問を戦闘に集中する為抑え込もうとするが、そこでミカエルが小さく頷いていた。
「……なるほど、カルナの鎧ですか」
その言葉に、サイリンは小さく頷いた。
「そう。ドゥルヨーダナの配下であり、多くの神々によってアルジュナとの闘いで敗北を強いられた悲劇の英雄カルナ。彼の誓いを悪用したインドラが奪った、カルナの鎧のレプリカですよこれは」
そう返すサイリンは、そのうえで一歩を踏み込んだ。

「そう、私は二重の意味で国家元首の末裔たる者。……アーチャー、どうせばれてるだろうから、そろそろ名乗りを上げなさい！」
そう告げる彼女に、アーチャーは小さく頷いた。
「……では。拙者の時代より前のあり方ではござろうが……主の命なら名乗るがよしですな」
そう告げると共に、アーチャーはリリスの攻撃をいなし、胸を張る。
「遠からんものは音に聞け！　近くばよって目にも見よ！　やぁやぁ我こそは、尼子十勇士が一人、山中鹿之助也!!」
その名乗りと共に、アーチャー……鹿之助はサイリンを立てるように跪く。
「我が新たなる主、ドゥルヨーダナの血を纏いし尼子の新たな当主、サイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナ！　かつての尼子家が治めた国にも負けぬ一大ＰＭＳＣ、アマゴフォースのＣＥＯが栄える為に、貴様らの首を頂戴いたす！」
「そういうこと。さぁ、尼子家の新たな栄光、そして曹操が進む彼の夢！　阻むというならかかってきなさい!!」
構えサイリンが放つは鏑矢。
その龍殺しの矢がリリスをのけぞらせ、その隙を逃さず曹操が駆ける。
合わせるようにカズヒも駆ければ、そこにリリスは反撃を叩き込む。
少し面倒くさがったのか、津波のように広範囲を巻き込む大規模攻撃。
それに対し曹操がいなす態勢に入るより早く、カズヒは一歩を踏み込んだ。
「止まるな、道は切り開く!!」
踏み込むカズヒはフォースライザーを操作し、出力を大幅に向上させて突貫する。
『リスターティングディストピア！』
オーラを放出させながらの突貫、そして波涛に激突するカズヒ。
半減し有限になったとはいえ、リリスはオーフィスの力。その主神

すら超えるだろうオーラを前に―
「……まだまだまだま

具として、悲劇が撒き散らかされることを望んでもいない。
だからこそ、まだだ。
「二分で回復を終わらせます。行ってください、ミカエル様」
「分かりました。その二分、なんとしても持たせましょう」
そう、この戦いでこれ以上誰も奪わせない。
それは邪悪を穿つ銀弾たる自分の誓い。
それは平和を愛する優しい赤龍帝たる兵藤一誠の誓い。
そして何より、嘆きを変える青い救い手、涙換救済九成和地（タイタス・クロウ）の誓いなのだから。
「あっちは任せたんだから、こっちはしっかり任される。……そうでしょ？」

そして、外周での戦闘も大きく趨勢が揺れ動いていた。
「全軍、攻撃準備。目標は敵母艦と思われる飛行船群だ！」
その号令と共に、撤退準備に入っている飛行船を逃がさないとばかりに天使からの攻撃が放たれる。
放たれる光の槍は、数千を優に超える。それどころか派遣された護衛軍からも多種多様な攻撃が放たれ、迎撃を行っている邪龍達を薙ぎ払っていった。
更に掻い潜る様に肉薄する白兵部隊もいる。極めつけにサウザンドフォースは禍の団を盾にする様に布陣しており、加えて撤退を視野に入れてないのか更なる兵器が投入されている。
その兵器は二門のガトリング砲から弾丸を放ってけん制しながら、近づいた敵を拳で殴りつける戦闘を行っていた。
結果的に挟み撃ちになる禍の団だが、しかしそれでもよく耐えていた。
その理由は、禍の団が投入した新兵器にある。
サリユートⅡの蓄積したノウハウから発展形として開発された、デ

ルタサリュートのデータを組み込んだ新型人造惑星、サリュートⅢ。
各種換装装備を用意することで、基本的にサリュートⅡで出来ることをすべてこなしながら特化した長所を持つ兵器としての更なる進化を遂げた新型兵器。
近接戦闘型クロスユニット。砲撃戦闘型ロングユニット。隠密作戦用スパイユニット。そしてこの防衛戦闘用ガードユニット。
これらの完成と投入により、禍の団はここまでの作戦行動を行うことに成功していた。
この機体がなければここまでの作戦は不可能だったろう。もしするとしても、それは移動拠点としてのアグレアスを確保できていたら担っていたはずだ。
だからこそ、禍の団は何とか今でも戦えている。
だが、もう作戦はここまでだ。
元々物のついでで行った作戦である以上、これ以上ここで戦う理由はない。無駄死にを増やすだけで得することがないだろう。
ゆえに、ただの悲劇ではなく質と量に拘った悲劇を求めるミザリは、撤退を行う為の指揮を行っていた。
「無理して迎撃する必要はない！　近づくとまずいかもと思わせればそれで十分だ！」
そこまで語ったうえで、ミザリは軽くため息をついてからあらぬ方向を見る。
第四天に繋がる門がある方向を見て、ミザリは少し困り顔になった。
「早く帰ってきてくれないかなぁ。流石に置いて帰るわけにはいかないんだけど」
興が乗って遊んでいるのか、それとも兵藤一誠達かサウザンドフォースに一杯食わされて手間取っているのか。
最悪見捨てなければいけないが、それをやると禍の団は今度こそ組織的に致命的な麻痺を起こしてしまうだろう。
良くも悪くも禍の団ははぐれ物が多い故、トップに相応のカリスマ性や圧倒的な性能が必要なのだ。

つまり、リゼヴィムとリリスがいないと禍の団は今の規模を維持できなくなる。
この規模の組織は間違いなくミザリにとって必要不可欠。それを踏まえると、今生の父親であることも含めて二の足を踏んでしまう。
「……それはそれで悲しめそうだけどね。気が合うし」
だが深呼吸でそれを切り替える。
そうしないとトリップして、思わぬダメージを食らいかねないからだ。
そして同時に、脳裏で一つの思考を行う。
―やっぱり、今度機会があったら試さないとまずいよねぇ、コレ。
博打にはなるだろう。だが同時に、何の博打もなしにできるほど自分の願望は簡単ではない。だからこそ、「自主的に輪廻転生を悪用する」などという大博打をした自分でもある。
それを踏まえ、ミザリは小さく微笑んだ。
「その時まで生きていてほしいね。いや、死んだら死んだで悲しいけれど」

決戦の時は、近い。

英雄乱戦編　第六十話　天界防衛最終戦（後編）

イッセーＳｉｄｅ

俺とヴァーリは左右から、リゼヴィムを挟み撃ちにして攻撃する。
人造惑星は無視だ無視。下手に撃破するより護衛に意識を割かせた方がいいし、何より神器無効化能力が消せるならそっちの方が都合がいい。
なんたって、神器の力を問答無用でぶつけられるからなっ!!
……なんだけど……っ！
「ふっはっは！　我が華麗なるルシファーステップに翻弄されているようだぞ？　二天龍が聞いて呆れるな！」
この野郎、絶対ふざけてる時の方が素だろ!!
俺とヴァーリの二人がかりでの攻撃を、リゼヴィムの奴は苦も無く回避してやがる。
なんて奴だ。リゼヴィムのポテンシャルだけじゃない、サウザイアー・リリンの力も混みだからこそ厄介な力になってやがる。
たぶんだけどシャイニングホッパーと同じ行動の予測演算だ。それにしたって動きが良すぎる気もするけどな！
「リゼヴィムぅっ！」
ヴァーリが強引に突貫して殴り掛かるけど、リゼヴィムは無駄のない動きで腕を掴んで地面に叩き付ける。
俺が援護も兼ねて攻撃を放つけど、リゼヴィムは見えているように回避をしてきやがった。
「残念だな。赤龍帝は聞いているはずだが、サウザイアーは元々純血悪魔が使う前提で開発されている。……サウザイアー・魏とは比べ物にならないのだよ」
そう言いながらリゼヴィムは攻撃を放つけど、もう吸い込まれるよ

うに俺達に当たってのけぞってしまう。
逆にこっちの攻撃は、全部が見事に交わされる。まるで最初っから分かってるぐらいの回避で、怖くなるぐらい当たらない。
「千分の一秒で敵の行動予測を行い、最適解を算出する。基本性能こそ大差ないが、この力の有無は大きいぞ？」
神器無効化能力抜きでも（セイクリッド・ギア・キャンセラー）、奴は超越者。低く見積もっても魔王クラスはあるだろうし、そんな奴がサウザイアーを纏えばこうもなるってか。
だけど、勝負にはなっている。
攻撃は回避を試みられているし、攻撃だってどこか慎重だ。一方的だけど、いうなれば警戒されるだけの戦いにはなっている。
一瞬、一瞬でも調子を崩せれば……行ける！
「ああ、ちなみに予測行動パターンは一億二千万通りだ。読み合いで勝とうなどと思わない方がよい」
ああそうかい。
シャイニングホッパーもびっくりな予測演算数だ。そりゃやばい。
確かに、そんな読み合い俺みたいな馬鹿には無理だろうさ。
だけどなぁ、忘れてねえか？
「……比翼連理の赤龍帝を、なめるなよ！」
ここからが……反撃だ。
俺の拳がリゼヴィムのパンチと交差する。
それをリゼヴィムは余裕の態度で首を動かし―
「―ぶほぉっ!?」
―もろに食らった。
よっしゃ！　準備完了でいいんだな、シャルロット！
『もちろんです。そちらもいい加減慣れてきたようですね？』
シャルロットの返事の通り、俺はリゼヴィムのパンチを回避することに成功していた。
その事実にリゼヴィムは面食らいながらも、すぐに攻防を再開する。
そして、俺はリゼヴィムに食らいつけた。

食らう回数は俺の方が多いが、そこは根性でカバー。確実に、少しずつ打撃が入っていく。回避はともかく防御はだいぶ間に合ってきている。
その事実にリゼヴィムは混乱しているけど、動きそのものはすぐにリカバリーがきいてるのも厄介だな。流石超越者ってわけか。
『いや、動きの癖が少し違うところを感じている。おそらくだがサウザイアーの方が行動予測を利用した自動迎撃機能を持っているんだろう』
『おそらくミザリが仕込ませましたね。寄り道や脱線がリゼヴィムは好みのようですし、安全確保の為かと』
俺の相棒は俺より頭良くて嬉しいよ。ドライグは魂だけでも数百年は見識あるだろうけど、シャルロットの生きていた年代って既に教育が発展してたのか？
『いえ、流石に現代日本の進学校水準はないですよ？　ただサーヴァントは、聖杯から召喚年代である程度生活できる知識などが与えられるので』
つまり地頭の差かぁ……。
あ、ちょっと落ち込みたいかも。
『むしろ打開策を思いついた機転はイッセーの方が上ですから！　脱線しないで戦闘に集中してください！』
そうだね、ゴメン。
シャルロットにたしなめられて、俺は戦闘に意識を切り替える。
リゼヴィムも動揺が消えているし、ちょうどいいタイミングか。
というより、種に気づきかけているな。
「そういうことか。因果律の干渉、そして観測でこちらの予測を妨害しているということか！」
やっぱり気づきやがったな。
そう。俺達の最大の利点は、それぞれがそれぞれの神滅具の力をある程度利用できる星を振るっていることだ。
シャルロットは倍加の限定的利用で究極の羯磨の可能性操作をブーストして、サウザイアーが予測演算をミスるように操作してい

る。演算が多すぎて正確だから極僅かだけど、それでも通用しているなら良い事だ。
そして俺は因果律を読むことで、なんとか対応しているわけだ。もちろん限度はあるけど、戦える状況なら十分だ。
「覚悟しろよリゼヴィム。俺はまだ殴り足りてないんだよっ!!」

和地Ｓｉｄｅ

さて、大一番でもあることだ。
容赦なく、新兵器を切らせてもらう！
この状態はゾーンに入ってないとできないから、念の為にゾーンを解除しないでおいて良かった。かなり無理をしているから、終わったら倒れる自信があるけどな。
だからこそ……ここで決める。
「ザイアの戦士として育まれながら、異形に飼われることを選んだ恥知らずか。容赦をする道理はない」
『ジャックライズ』
そうほざきながら奴は得物を構えるが、会話をする気は欠片もない。
価値観が違いすぎるんだ。論戦が趣味なら取っ捕まった後に尋問官としてればいい。
それにまぁ、それはお互い様なんだよ……っ
『ドーピングアント』
現れるのはドーピングアントレイダーとやらを模した、数体の兵器。
そこからミサイルが発射され、トップアタックとダイレクトアタッ

ク、更に左右からも襲い掛かる。
そうだな、だが甘い。
「はいはいそういうのはやめてよねー？」
素早くリヴァ先生が魔法を発動して撃ち落とす。
さぁ、今度はこっちの番だ。
「……残創（コスモス・メイク）っ！」
発動と同時に、俺の体から青い飛沫が弾け飛ぶ。
これはこの力の発動に対する現象。アザゼル先生が推測するに、神器と俺のオーラが混ざって弾け飛んでいるらしい。
そしてすぐ俺は能力を選定し、創造する。
……ここからの俺は、一味違うぞ！
突貫する俺は、既に禁手の発動時間を超えている為サルヴェイティングアサルトドッグ。だからこそ、砲撃を放ってけん制しつつ、突貫して切りかかる。
テンサウザーは素早く正確無比な判断で対応するが、それはこちらも同じこと。
予測演算による素早い取捨選択に、俺もまた同じ速度で渡り合う。
予測演算に完璧な対応はできてない。だが、ある程度はできている。食らいつける、戦える！
その事実をもって、テンサウザーは驚愕を隠しきれていない。
「馬鹿な⁉　テンサウザーの予測演算に食らいつくだと……何をした！」
動揺しながらも正確な反撃を回避しつつ、俺は瞬時に強化魔術を併用し、素早い反撃を叩き込む。
振るう斬撃が敵の得物とぶつかり合い、強引に押し飛ばす！
「……ちぃっ！」
『ジャックライズ』
相手が素早く得物のレバーを引いた後、俺はそれを素早く予測。
そして瞬時に障壁を展開し、その特性をカタパルトとして飛び上がる。
『ボーイングイーグル！』

「……っ!?」
ライダモデルを掴んで飛び上がろうとする奴に先回りし、一斉砲撃で撃ち落としを図る。
それを相手も正確に回避するが、こちらの対応に気が付いたのか舌打ちをした。
「……まさか自力で予測演算!?　分割思考……いや、違う」
「さて、予想してみろ。できるかな？」
「しかもこっちもいるんだよね！」
俺とリヴァ先生が交互に挟み込むようにして、連続攻撃を叩き込む。
それを捌きながらでありながら、テンサウザーは魔術を使ってプログライズキーを装填した。
『ハッキングブレイク！　スカウティングパンダ！』
そして攻撃を受け止め強引に距離をとりながら、テンサウザーは舌打ちを漏らす。
「……数世代分の蓄積がなされた魔術刻印だと!?　馬鹿な、データによれば貴様は偶発的な回路保有者、持てるはずがない!?」
やはり敵もさるものか。もう当たりを付けれたとは。
そう、今の俺は魔術刻印を持っている。
魔術刻印。それは魔術回路保有者の一族当主が代々受け継ぎ受け継がせる、一族に宿せる魔術的な臓器とでもいうべき代物。
純粋に魔術回路の外付け強化ユニットにもなる。受け継いだ神秘が重なり合うことで、一族用の魔術礼装に近しい真似ができる。当主が簡単に死なないよう、生命維持を行う機能もある。要は一族の魔術回路を大幅に強化する拡張ユニットだ。
宗家の刻印をすぐに修復できる程度に削ったものなど、作るにはそれなりの芯といえるものが必要。また性質上一族の血縁でないとそのものの移植は難しく、場合によっては一族でも継続的な投薬が必要など、臓器移植に比べればハードルはだいぶ低いが近しいリスクがある。
そして何より、俺のような変則的極まりない形で回路を会得した者

が、それに合致する刻印を得れるほど世の中は甘くない。
……だが、これは似て異なる。
「持ってるというわけじゃない。……この刻印は俺が一から作ったものだ」
「なんだ……いや、創造系神器の保有者なら、亜種禁手なら持てる……いや」
そこまで言いかけ、そして奴は気づいたらしい。もしくは演算装置で何かを把握したのか。
「……まさか別物⁉　神器を利用し、しかし禁手とは異なる形で新たな機能を獲得した？　聖書の神が神器にそこまでの仕込みをしていたと――」
「そうじゃない。まぁ、解析データがあるなら分かるだろうから、威圧を兼ねて教えてやる」
俺は素早く戦闘を行いながら、答え合わせをしてやる。
まぁ実際問題、これは別に禁手じゃない。禁手だとするならちょっと性能が微妙だし、かといって神器の性能でそのままできるわけでもない。
そう、これはちょっとした気づきだった。
禁手（バランス・ブレイカー）とは神器の極限たる上位形態。基本的に一種類が設定されているが、同時に所有者によっては亜種が存在する。
裏を返せば、神器には禁手用にある程度のリソースがある。そしてそれは亜種になれる以上、ある程度のゆとりがある。
ならば、だ。
禁手に至った神器には、禁手になる際使われなかった余剰リソースが存在するのではないか。
そう考えた俺は神器を研究し、探り、そしてゾーン状態の集中力とポテンシャルを使うことで、一時的に組み上げることに成功した。
これは禁手ではない。だが通常の神器でもない。そして同時に、神器の仕様に則ったものでは断じてない。
そう、アザゼル先生曰く「聖書の神も想定外なバグ技」と称された一品。

その性質ゆえに禁手になってからでなくてはリソースを確保できない為、俺ですら今はゾーン突入中でないと困難。繊細極まりない神器の扱いを荒事中にする為、テクニックタイプで禁手に到達した後でないと組み上げることすら不可能だろうと言われている。鬼難易度だ。

そして、俺が至ったこの力は単純明快。

「これが俺の新技。禁手の残滓をくみ上げた全く新しい異能、残神（コスモス・ボルト）。魔術刻印創造能力、創造されるは魔の刻印（バースデイ・オブ・サーキット）」

そう、魔術刻印を創造する。

元々魔の特性を持つ剣を創造するのが魔剣創造（ソード・バース）という神器。魔の特性を持つ力を創造するのは、十分考えられる範囲内。使い手である俺自身が魔術回路を持っているなら尚更だ。

多様性のある俺自身の強化。今回は刻印の特性を予測演算に特化したモデルに組み上げたって訳だ。

「……これほどまでの化け物が、よりにもよってザイアと縁を切るなど……っ」

「安心しろ。施設時代からあんたらの理屈には辟易していたからな」

俺はハッキリと断言する。

ああ、俺はザイアの施設に入ってから、どんどんお前らに引いていたよ。

価値観が違いすぎる。滅茶苦茶な奴らとばかり思っていた。一部の例外や、尊敬する側面を持つ者もいたが、結果的には相容れない。

だからこそ、それに染まったまま死んでいった者や記憶消去せざるを得なかった者達がいることに、思うところはあるんだよ。

「都合がいい。俺はザイアに（お前ら）一発かましてやりたかった！」

「先天的レベルで異形に染まっているとは……なんと愚かな！」

俺の宣言に、テンサウザーは怒りに震えながらサウザンドジャッカーを構える。

悪いが、俺だけを警戒しても駄目だぞ？

「はーい！　先生を忘れちゃ駄目よ？　マイナス二十点♪」

「ちぃっ！」

リヴァ先生の攻撃を迎撃し、テンサウザーは更に舌打ちをする。
「動きが違う！　貴様、鍛え直したとかいう次元ではないぞ！」
「ふっふーん。ついさっきレベルが一つ上がったから、かつての私と一緒にしちゃ駄目よー？」
そう。精神的に過去を向き合ったからだろう。仮面ライダーグリームニルは、一段階上に上昇した。
この差が更にこいつを追い詰める。
周りの連中はリアス部長達が押させてくれている。だからこそ―
「そろそろ決着をつけるべきだろう、テンサウザー！」
俺はある対応を刻印使って行いながら、プログライズキーを操作する。
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ！』
「ふっふ～ん♪　なら先生もいいとこ見せちゃおうかしら！」
『Ｏｄｅｎ！』
俺達が決める段階に入ったその時、相手もそれに応える様に迎撃の体制をとる。
『ＳＴＲＯＮＧ　ＨＯＲＮ』
『ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＧＯＤ』
「よかろう。サウザンドフォースをなめるなよ？」
俺達は力を籠め、そして相手を睨み付ける。
ところで、今回の俺が使った魔術刻印は分割思考の疑似再現だ。
たくさん用意できれば人間の脳でスパコン並みの処理が可能になるが、余剰リソースで作った魔術刻印ではそれは無理。だが、ある程度なら予測演算は可能だ。
何が言いたいのかというと―
「そろそろ後ろを見た方いいぞ？」
俺はそう告げてから、リヴァ先生と共に突貫する。
『マグネティックスターブラストフィーバー！』
『スキルヴィングディストラクション！』
『アキシオンディストラクション！』
俺達二人の蹴りを、テンサウザーは緑の結晶体を纏った蹴りで迎撃

する。
その状態で競り合うなか、俺は小さく通信用の魔法陣を告げる。
「……そこだイッセー、こっちに吹っ飛ばされろ」
「何!?」
驚愕したテンサウザーのすぐ後ろ。そこで戦闘の動きが変わる。
『クリフォトディストラクション！』
「うぉおお防御ぉおおおおっ！」
「……なんだと!?」
テンサウザーのすぐ隣に、どす黒いオーラを纏った蹴りでイッセーを押しているリゼヴィムが並ぶ。
そう。俺は予測演算で可能な限りイッセー達の位置をトレースした。そして魔術的にメッセージを送り、こうしてタイミングを合わせたわけだ。
そしてその理由は単純明快。
「「……ヴァーリッ！」」
「「ッ!?」」
驚愕する二人だがもう遅い。
「遅い、逃がさんっ!!」
その瞬間、敵二人をまとめて包み込むように何十もの結界が展開される。
ヴァーリの奴、ラーメンで邪龍ラードドゥンを再現しやがった。ラーメンとラードドゥンって語感がちょっと似てるけど、流石に同情するぞ。
だが、これで趨勢は決まった。
多重結界は容易に脱出できるものではなく、敵同士がまとめて封じられたことで、予測演算とかそういう問題ではないレベルで二人の動きは一瞬完ぺきに封じられる。
そして同時に、結界にわざといくつもの小さな穴ができた。
「はい王手ー♪　これは流石に隙できるわよね？」
リヴァ先生が大量の砲台を生成し、
「覚悟はいいな、遠慮なくいくぜ？」

『即興到達、赤龍帝（ブーステッド・ギア・スケイルキャノン）が砲手、完成です』
イッセーはシャルロットとの連携で、籠手そのものを砲撃ユニットする新しい亜種禁手を生成した。
そしてもちろん、俺も遠慮をする気はない。
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ』
ショットライザーを構え、躊躇なく一撃を放つ。
『マグネティックスターブラスト』

マグネティック
スター
ブラスト

その砲撃が、結界では抑えきれず吹き飛ばす爆発となった。

英雄乱戦編　第六十一話　天界守ってクリスマス！

和地Ｓｉｄｅ

爆発が強すぎて、俺達も流石に吹っ飛ばされる。
素早く着地しながら構えると、そこに突っ込む影がある。
その瞬間、煙が吹き飛びテンサウザーが吹き飛ばされた。
テンサウザーが着地する中、吹き飛ばされた煙の中央部で、リリスがリゼヴィムを庇う様に立っている。
テンサウザーもリゼヴィムも、だいぶ喰らったようだがまだ戦えそうだな。これはまずいか？
そう思ったが、その時俺達をカバーするように仲間達が来てくれた。
「イッセー、無事!?」
「御免抜かれた！」
リアス部長もカズヒねぇも無事で何より。
「大丈夫！　むしろカズヒは五分以上抑えてくれてありがとうよ！」
イッセーがそう答えてから、拳を握り締めてリゼヴィムを睨み付ける。
「第二ラウンドといくか、リゼヴィム！」
「……いや、どうやら今回は遊びすぎたようだ」
そう肩をすくめるリゼヴィムは、変身を解くと薄く笑みを浮かべている。
「今回はもう引こう。遊びが過ぎると身を亡ぼすと痛感したしな。次は明星を見せつけるとするとも」
「貴様如きがルシファーを騙るか……っ」
ヴァーリはかなり切れ気味だが、どちらにしてもこれ以上の戦闘は

なさそうだ。
魔術刻印で強化された俺の感知力は、既に禍の団が撤退をほぼ終えていることも悟っている。
あとは転移して終わり……となるか。
テンサウザーの方も状況を把握しているらしい、なんか後ろから魔獣っぽいのが出てきているが、その陰に隠れ始めている。
『ＳＴＥＡＬＴＨ』
「無念だが、機を逸した以上もう無理か。……いずれ必ず、舞い戻り人の魂を解放させてもらう―」
『ハッキングブレイク！　ハイディングフォックス』
ご丁寧にハイディングフォックスまで使って逃げやがった。この状況では追撃は不可能か。
そして肩をすくめるリゼヴィムは、にやりと笑いながら俺達に向き直る。
「しばしさらばだ、我が夢を阻む者よ。次は透過が本当に私に通用するか試してもらうとしよう」
そう語ると共に、リゼヴィムもまた転移する。
……今度こそ終わりか。
既に天界側の戦力がこちらに駆けつけてきている以上、趨勢は完ぺきに決したな。
俺はそれを確信し、ゾーンから戻る。
数秒後、俺はあることを確信し、リヴァ先生に向き直る。
「リヴァ先生、頼みがある……っていうか甘えさせてくれ」
「え、何？」
きょとんとするリヴァ先生に俺は力なく微笑むと―
「抱っこ兼マット……ぉ～」
―そのまま胸にダイブするように失神した。
気づいた時、俺はリヴァ先生に膝枕をされていた。

「あ、おはよ～カズ君♪」
「お、九成も起きたのか」
その声に視線を向けると、イッセーがリアス部長に膝枕されていた。
「……何やってんだお前」
「俺も無茶しまくってて限界でさ。正直羨ましくて見てたらリアスがサービスしてくれて」
「ふふ。イッセーの為なら膝枕ぐらいいくらでもするわ」
お熱いことでありがとう。
視線を向けると、殆どみんながヘタレていた。
まぁかなり消耗したからな。そりゃ疲れるだろう。
ただカズヒねぇがいないんだが。
「あ、カズヒはヴァーリを監視してる。……炊き出しするって話を聞いたらラーメンを作り始めてさぁ」
ああ、ヴァーリか。
あいつはどんどん麺で訳の分からない領域に到達しているからな。変なことしないように見張る奴は必要か。
俺も手伝いたいが、体調が回復しきってないからな。
「……今日はもうリヴァ先生に甘える～。たまには俺も甘やかされるぅ～」
「おぉ～う。珍しいカズ君に乙女心スイッチが入っちゃうかも。カズ君に庇護欲全開なんてイレギュラーかもん？」
いつも通りに見えるようで、ちょっとリヴァ先生の顔が赤い。
……なんだろう。俺はものすっごくいたずら心が出てきたぞ？
よし、甘えていいから思いっきり甘えよう。
俺はごろんと体を回転させると、顔をリヴァ先生のおなかに埋める。
「うひゃん!?　ちょ、カズくん!?」
「……疲れたから神吸い～」
猫吸いならぬ神吸い。なんかご利益ありそうだ。
というより、これなんか変なテンションになるな。いいにおいする

し。
思いっきり深呼吸してしまうぞこれ。
あ、もう疲れが取れてないからテンションがやばいことに―
「リヴァせ……リヴァねぇ～」
「ほわぁっ!?」
呼び方をカズヒねぇ寄りにしたらなんか凄い悲鳴が出たけど、俺は八割意識が飛んでいる感覚でよく理解できてない。
「……いいにおい……だ……な……ぁ～」

「……あ、あわわわわわぁ!? う、羨ま……」
「それ以上は告白してからにしなさい。ほら、ラーメン食べて落ち着いて」
なんかリーネスとカズヒねぇの声が聞こえた気がするけど、もう色々無理なので俺は失神した。

「なんてことがあったんだよな～。な、九成?」
「ど、どこまで羨ましいイチャイチャしてやがんだ!? お前そんなキャラじゃねえだろぉ!?」
「……疲労でハイになってただけだから。なのでもう勘弁してくれ……」
匙に一部始終を語りながらにやにやするイッセーと、イッセーに一部始終を聞いて嫉妬心すら見える表情を浮かべる匙。この二人の視線を直接受け止めきれず、俺は自分でも珍しく顔を真っ赤にしながら

背けるしかなかった。
「お、おばばばばばばっ!?　ねぇ!?　リヴァねぇ!?　何その距離感!?　嘘でしょ!?」
「もう女子力が酷いことになってるわよ、鶴羽」
「とりあえず色々落ち着こう?　それは酷い」
そしてその視線の先、白目向いてる鶴羽に軽く引き気味のインガ姉ちゃんと春っち。
「……で?　猫吸い擬きされた感想はどうだったよ?」
「え、えっと〜?　ちょっと〜?　黙秘権〜?」
そして珍しく顔を真っ赤にしているリヴァ先生は、そっぽを向いてベルナからの質問をスルーしている。
そしてその光景を見たカズヒねぇが軽くため息をついてリーネスの肩に手を置いた。
「完全にそこまで余裕がなかったようね。ま、普段余裕満々の奴がパニックになるとこうなるものよね?　ねぇ?」
「そ、そうね?　羨ましい……げふんげふんげふん!」
リーネスが妙な状態になりっぱなしなんだが、あいつ本当に最近大丈夫だろうか。
あとでキュウタに聞いてみるか。キュウタならちゃんと検診しているだろ。
まぁそんなこんなで俺達は、数日遅れのクリスマスパーティ。
駒王町でもクリスマス便乗プレゼント配りを終え、それを手伝ったオカ研＋生徒会＋教会側スタッフｅｔｃは、こうしてパーティをやっている。
流石に色々大ダメージだったトウジさんは参加できなかったが、それでも結構なパーティになっている。
「皆さん。世界各国のクリスマスのメニューができました。デュリオさんがレシピを知っていて助かりましたよ」
「こっちこそだよクックスさん。俺だけだとみんなにごちそうできないからね?」
おお、いろんなところの美味いもの巡りをしているデュリオ監修

で、クックスが世界のクリスマスメニューまで作ってきているのか。
なんというか凄い事になってきているな。……このまま食いに行くことで逃げられないだろうか。
そんなことを思いながら、野郎で恋愛関係の馬鹿話をし続けているとだ。
何時の間にやらリヴァ先生が、どさくさに紛れて退散しているのが見えた。
……よし。
「イッセー、匙。悪いが俺は男を見せに行くので失礼します」
ちょっと様子を見ておかないとな、うん。

わざわざ一旦家を出て、スカウティングパンダプログライズキーを使って屋上のリヴァ先生をちょっと確認してから、俺は屋上に上がる。
足音は消そうともしないので、すぐにリヴァ先生も気づいたらしい。
苦笑しながら振り返るリヴァ先生は、コップに入れたワインを少し揺らしていた。
「あ、やっぱり気づいちゃう？」
「運よく気づいちゃったな」
そしてしっかり確認しているわけだが、そこまでは気づいているのかいないのか。
……まぁ、そこまで簡単に掴ませてくれる人でもないか。
俺はあえて気にせず隣に座ると、そっとリヴァ先生のように軽くもたれる。
「……あれ？　もしかして甘えに来てくれたのかな？」
「いいだろ？　人前で甘えるよりはメンタル楽だろうし」
うん。恋愛が絡むと精神年齢と判断力が妙な方向に下がるのは俺

の悪い癖だ。
見方によっては味といえるんだろうけど、やりすぎて辟易されたらそれはそれ。自覚的に甘える時ぐらいはＴＰＯをわきまえないとな。
それにだ。
「献杯ぐらいは静かにやりたいだろ？」
「あ～、そこまで気づいてたか」
てへへ、と可愛らしく困り顔で笑うリヴァ先生は、小さいコップに入っているワインを揺らす。
そう、これはリヴァ先生なりのヴォルフへの弔いだ。
どちらかといえば気持ちに区切りをつける為なんだろう。だけど、自分が愛した男を自分だけは弔いたい。そういう感性は十分理解できるからな。
だから、俺は小さいコップを持って掲げる。
「……もう一度言うが約束する。あんたが負けてよかったといえるぐらい、俺はリヴァ先生に相応しい男になって見せる……いや、なり続ける」
小さな、俺にとっての区切りといえる宣言。
それをもって、俺はヴォルフ・フォン・ミッドガルズの鎮魂を示す。
やったことは許されない。方向性も迷走だ。そういう意味では、ヴォルフは明らかにどうしようもないだろう。
だけど、愛する女に並び立ちたい。それは男として理解できる。おんぶにだっこは嫌だろうし、それはそもそも問題があるしな。
だから俺は、宣言する。
九成和地は、リヴァ・ヒルドールヴに相応しい男でい続ける。リヴァ先生だけじゃない。カズヒねぇにもインガ姉ちゃんにも春っちにもベルナにも鶴羽にも。胸を張って俺のことを自分の男だといえるような男でい続ける。
それがきっと、モテる男の責任ってやつなんだろうしな。
そんな静かな決意を示す俺に、リヴァ先生はそっと手を俺の頬に触れる。
そして、自然な流れでキスをされた。

あ。俺の顔、すっごく真っ赤になってるぞ。
それぐらいときめいている自覚が出るぐらいには、リヴァ先生は艶(あで)やかな表情で俺を見つめている。
「ずっと昔から、カズ君はとってもいい男よ」
……うん。俺、滅茶苦茶嬉しいクリスマスプレゼントを貰ったかも!!

英雄乱戦編　幕間　聖なる教えが震える時

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

日本山間部、十二月某日。
神滅具、現世聖域（カテドラル・グレイブ）の墓標によって作られた広大な地下空間。そしてそこに広がる地方都市レベルの街並みと、中心部にそびえる神殿のような建築物。
そこは異形すら震撼させる驚異の組織。性欲を崇め性癖を極めた変態足らんとする世界規模集団、大欲情教団の本部。淫らなる者達の理想郷である。
今この地は、一言でいうならば戦意に満ち溢れていた。
本部たる神殿前に広がる広場では、老若男女を問わず人々が集まっている。
その誰もが、発情し性別問わずペッティングで互いに宥めながら、しかし強い期待を秘めていた。
「漸く、漸く大きく動き出すんだな？」
「ええ。世界中の人々を、もっと淫らにできるんですって！」
「みんなでせっくすできるのぉ、おばあちゃぁ……んっ」
「そうだよ……おっ。ぼくちゃんも儂も、世界中の人々とまぐわえるんじゃ」
誰もが性欲を満たしあいながら、その号令を待っている。
その世界人口の九割以上が間違いなく正気を疑うような光景の中、神殿より何人もの神官を従える者が姿を現す。
歓声を上げようとする心を抑え、静かに言葉を待つ者達。
彼らに満足げな頷きを見せてから、男性のような雰囲気すら見せる女性に思える。
「……諸君」

静かな、しかし欲情していることがよく分かる声が響き渡る。
その声にときめき、興奮し、心を奮い立たせる者達の視線を受けて、言葉が放たれる。
「性都の洗礼に伴う人類の対抗。そして性都により目覚めた者達の協力。これにより、我らが次の目標は確定した」
語る存在は、目を一瞬伏せてから宣言する。
「我らはこれより、次の目標をバチカン市国へと定める！　我ら大欲情教団の性都洗礼の妨害と除去を行う者達は、その多くがキリスト教の聖職者であることが判明したからだ！」
『『『

そして一時間ほど経ってからパブを出た男は、自室にしている部屋に入ると、モップをとって上を何度も叩く。
その後上からも叩く音が返ってくるが、それは小さく連続してだ。
そしてそれを黙って聞いていた男は、窓を開けると何度か懐中電灯を点滅させる。
その後、近くの窓からライトの点滅が返ってきたことで、男はホッとするとベッドに横になった。
「……同胞達は全員準備ができているな。あとは決起の時に合わせ、ユニフォームを着こんでそれぞれの合流地点に向かうだけだ」
その時こそが、唯一神などという驕り高ぶった冠を掲げる邪神を報じる者達は、自分達の傲慢さを後悔することだろう。
……ここまでのことを可能とするきっかけは、半年ほど前だ。
かつて自分達は、ただただ教会に嫌がらせをする不良集団だった。
前に倣えといった乗りで信徒でいるのが面倒だった、ただ悪いことをしているとかっこいいと思い込んでいるだけの小物の悪党。
だが半年前、すべては変わった。
眠りについている時に急に声が聞こえ、慌てて起きてからもその言葉は脳裏にこびりついていた。
それを否定しきれず声が示した場所に向かえば、同じように声を聴いた者達が集まっていた。
そして互いに聞いた内容を示し合わせた時、自分達の中に異能を持つ者がいた。
更にその場所を探せばいくつもの宝があった。星辰奏者（エスペラント）の処置を受ける為の各種装置があり、そこに書かれた名前の者は星辰奏者になることができた。薬を瓶に名前が書かれた者が飲めば、魔法としか思えない不思議な力を得ることができた。置かれている剣についている札に書かれた名前の者が持てば、その剣は神話の武器のような力を秘めていた。
そしてその後授けられる神託。自分達が神々に見初められ、唯一神と驕り高ぶる邪神やその狂信者と戦う者達だと教えられた。
その後半年の間、自分達が驚くほど鍛錬をし続けることができた。

熱に浮かされるまま暴れることなく、半年もの間牙を研ぐことができた。
だからこそ、動く時は決まっている。
怪しまれないよう少人数ずつでバラバラに集まり、そしてモールス信号を駆使した連絡によって、全員が動ける時期を見出すことができた。
高ぶる精神を抑えながら、男は拳を握り締める。
「世界の目は、我々フォーレイザーが……覚ます……っ！」

そしてイタリアの全く異なる場所にある、小さな地下室。
そこから出てきた男が、女が持ってきた水を受け取り、一口飲むと息を吐いた。
「……ふぅ。拷問ってのはやっぱり疲れるな、心身共に」
「お疲れ様。ま、趣味で出来る人だと目的を見失いそうだもの。趣味でない者がやるに越したことはないわ」
そう返す女は、そのうえで真剣な表情になる。
「で、聞き出せる内容は聞き出せた？」
「ああ。奇跡的、奇跡的な偶然で亜種聖杯戦争に勝っちまったあの野郎。それで死にかけたトラウマから、願望機の力でテロ組織を作ってやがった」
聞き出せたその情報に、男女ともにため息をつくほかない。
亜種聖杯の悪用は、本来ならカウンターシステムもあってそう簡単にはいかない。だが世界の命運を左右しないレベルの嫌がらせなら十分なされる可能性がある。
そう言った警戒から動いていたら、とんでもない地雷が発見されてしまった。
「もうあいつの手を離れているから、何時動くのかは分からない。だ

がそいつらはバチカンの近くで結成したのは間違いない」
「聖書の教えを敵視する、星辰奏者（エスペラント）や魔術回路保有者を要するプログライズキー悪用型テロ組織。いい加減暴発しかねないこの状況で、そんな連中がバチカンに突っかかってきたら目も当てられないわ」
そう、今バチカン市国は爆発寸前の火薬庫……否、爆発を避ける為にあえて火を起こしている真っ最中と言ってもいい。余計な爆弾が近づいて爆発するなどという、被害の悪化に繋がる事態は可能な限り避けなければならないのだ。
彼らはその対処として、枢機卿二名の協力をもって動いている真っ最中。その過程において余計な事態を避ける為の火消しをしていたら、焼夷弾が満載の爆撃機の存在が発覚したに等しい。
「とにかく、俺はこれを騎士団長に伝えてくる。お前は猊下の方だ」
「分かっているわ。すぐに鎮火するように立ち回っているけれど、万が一がある以上報告をしておかないと―」
その時だった。
『『『

警戒を行っている。
そのうえで、ドローン操作担当が困惑していることに、誰もが懸念を抱いていた。
「どうした？　何かあったのなら報告しろ」
隊長格が促すと、男は首をかしげながらもそれに従う。
「……バチカン市国周辺を包囲して戦闘を行っている悪魔祓(エクソシスト)いと天使、それに悪魔達が後ろから多数の武装勢力に攻撃を受けています」
従ってくれたのはいいが、内容があまりに意味不明だった。
困惑のあまり誰もが沈黙するが、しかし隊長格の判断は素早かった。
「すぐに司令部に伝えろ。全く理解できないが、間違いなく相応の非常時がバチカンに起こっている。……仕掛ける好機かもしれん」

そして同時刻、禍の団移動拠点の一つである、トルネード級の一隻。
そこで士官室から出たミザリ・ルシファーは、軽くため息をついた。
「……思わぬ反撃を食らったね。これは最悪の場合も考えた方がいいのかな」
珍しく不愉快そのものな表情を浮かべるミザリだが、そこに焦った表情の構成員が駆けよってくる。
「ミザリ様、大変です！」
その泡を食ったような状態の構成員に、ミザリは表情を切り替えながらも首を傾げる。
「どうしたんだい？　父さんが煽ってた信徒達が決起したそうだけど、まさか勝っちゃったのかい？」
リゼヴィム・リヴァン・ルシファーは、その扇動の才覚を十全以上に引き出していた。
特に禍の団と共に相乗効果で拡大していった和平に不満のある、教

会の信徒達を煽ってクーデターを起こさせる計画は今動いている。
本来なら祝杯を上げているころだったのだが、それはそれ。
勝ったら勝ったで面白いことになりそうだが、まずありえないと思っていた。それほどまでに和平は進んでおり、よほど気をうかがって準備をしなければ反乱など成果を上げることはない。
もし成功させるのなら、ロキが決起したそのタイミングで便乗するなり、むしろそれより早く速攻で起こすべきだ。このタイミングでやるなら相応の切り札（ジョーカー）が必要。ハーデス神が反乱を起こしてないのも、そういった手札か相応の準備期間が必要だからに他ならない。
だからまずありえないが、勝ったのなら驚愕ものだろう。
だが、よく見ればそういった様子でもない。
それを疑問に思っていると、何とか落ち着きを取り戻し始めているその構成員は、それでも冷や汗を流していた。
「反乱軍に、救援部隊が現れました。その数一万人以上で、段階的にまだ増え続けています」
「……なんだって？」
瞬間、ミザリの表情は警戒のそれに代わる。
数万人規模の部隊が、このクーデターを援護するべき現れる。
結果的に見ればこちらにとっても都合がいい。時間を稼ぐ必要がある以上、クーデターが大ごとになって長丁場になるのは好都合ともいえる。
だが、突発的に起きたクーデターを、こちらが知らない部隊が、数万人規模で援護する。
「……眷属を全員招集してくれ。どうやら、こっちにとっても都合の悪いことになりかねない」
頭を悩ませる仕事が増えた。
その事実に悲しみを覚えれるのだけは、不幸中の幸いだ。
ミザリはそう切り替え、行動を開始した。

そして同時刻、バチカン市国から少し離れたイタリア上空に位置する、サンタマリア級のブリッジで、ため息の後に指示が飛んだ。
「……全軍に撤退指示を出せ。いいか？　全軍、つまり天使や悪魔祓いも撤退させるように動け。支援部隊は全員出すつもりで行け」
隣でそう指示を出したノアに、フロンズは渋い表情で振り向いた。
「まずいことになったようだ」
「お前さんも予想外ってか？　そりゃやばい」
ノアがため息をつく理由も分かる。フロンズもまた頭痛を覚えているのだから尚更だ。
サンタマリア級のブリッジでは、既に慌ただしい動きになっている。
既に戦況を探る為のモニターでは、味方部隊が混乱状態になり、既に戦闘を行える状態でないことが分かり切っていた。
……バチカンでのクーデターを予期していたフロンズは、大規模即応部隊を派遣できるようにし、そして投入した。
天界や教会に恩は売れるし、そもそもクーデターが長続きすればこちらに多大な負荷がかかる。なら多少出費を多めに出してでも、さっさと解決させる方がいい。
まして我慢の限界という形の暴発なら、なおのこと。どんな形で暴走して被害が広がるか分からないし、逆に本気で即座に動けな鎮圧はたやすい方だろう。
そう思っていたらこれだ。
モニターでは現在、三色が灯っている。
中央部。バチカンでクーデターを起こした信徒達。
その外周。それを包囲して削っていた対応部隊は、バラバラになっている。
そして更に外側。突如として電撃戦を仕掛け、対応部隊の後背をついた第三勢力。既に部隊の二割がクーデター部隊に合流して防護を固め、残り八割は六つの集まりになって外側から対応部隊を分断している。

「……圧殺されないだけマシ、とみるべきかね？」
「逆だ逆。わざと部隊を分けて穴を作ってるんだよあれは」
不幸中の幸いを意識しようとしたフロンズを、ノアは嗜める様に否定する。
そしてノアは肩を落とすと更にため息をついた。
「背水の陣って言葉があるが、緊急事態に露骨に逃げ道があると、そっちに行きたがる奴は多いんだ。これが穴がないように包囲されてたんなら士気も維持できるんだろうがなぁ」
「なるほど、そういうことか」
ノアの説明でフロンズもすぐに理解した。
時間をかければ確実かつ安全に勝てると思っていた、そんな者達の盲点を突く奇襲。
即座に布陣を突破された衝撃と、更に続けざまのクーデター部隊に対する協力体制による動揺。
クーデター部隊はそれにより士気が再び激増しており、混乱状態でそれを食らったことで戦意が減衰。
そこに大部隊が迫りくることで、対応部隊は心理的に追い詰められ恐慌状態一歩手前。逃げ道があるせいでそちらに流れてしまっている。
ノアが自分以上に渋い顔をしているわけだと、フロンズは心底納得した。
戦術家の彼だからこそ、ここからの立て直しは不可能だと痛感しているのだ。
「増えた連中にまず勝ち戦を経験させるつもりが、大敗確定。これは除隊願がたんまり送られるぜ、マジで」
「まぁ、その辺りの処理はこちらの仕事だ。残存部隊の再編に集中してくれればいいし、むしろ意志の弱い者達を振るい落とす必要がなくなったと考えるべきだろう」
そうフォローを入れてから、しかしフロンズはノアに鋭い顔を向ける。
「とはいえ急いでもらうがな。この事態、我ら大王派どころか、和平陣

営全てにとって毒となる」
「分かってらぁ。ハーデスの爺が好機と見るなり、クリフォトの連中が便乗するなりするだろうしな」
そう返すノアに頷きながら、フロンズはしかし考え込む。
「……これもクリフォトの仕込みなら、まだいいのだがな」
だがしかし、まったく別の要因なら。
良くも悪くも禍の団やハーデス達に警戒を向けていた自分達にとって、あまりに致命的な一撃に繋がりかねない。
その可能性を考慮しなければならないことに、フロンズは舌打ちを返すほかなかった。

そして年末において、三大勢力と各神話体系に大きな激震が走る。
突発的に起きた教会でのクーデター。そこに対して数万人規模の奇襲で援護を行った軍勢は、更に物資を輸送する三倍以上の増援部隊。これによりクーデターは年単位で続きうる籠城戦の形を成した。
同時にクーデター陣は増援部隊に統合され、犯行声明が改めて出されることとなる。
―掲げられしその名は、神聖糾弾同盟（ネオ・ディバイン・クルセイダーズ）。
「聖書の神がもたらす神罰による、我ら全員を地獄に導く裁定」を要求する、どの勢力にとっても想定外たる大いなる事態が巻き起こってしまった。

第八章　聖教震撼編

聖教震撼編　第一話　悩める新年、始まります!!

和地Ｓｉｄｅ

「……今週のふぃっちゃんねる。初日の出と共にぶれいくだんす」
オーフィスの前口上に合わせて、俺とヒマリはわざとらしく太鼓とかをどんどんぱふぱふ。
そして入念な計測に合わせたノリで登ってきた初日の出をバックに、オーフィスを中心に着ぐるみ二人当然だが黒歌とルフェイがダンスを踊る。
……これが今週のふぃっちゃんねる。年始特別バージョン。
オーフィスの今の状態がばれてもそれなりに抑えが聞くように、可能な限り現政権側の心情を慰撫するための義援金稼ぎ。それらを兼ねて行っている、このｙｏｕｔｕｂｅｒ系番組「ふぃっちゃんねる」。同時にオカルト研究部が主体になって行っている「トライフォース放送局」は年末の方に重点的に行った。具体的には年越しということで、クックスが監修を行っている「Ｄキッチン」で年越しそばをやってのけた。海老天ｖｅｒとかき揚げｖｅｒを男女で分ける念の入れようだ。
イッセーはイッセーでアーシアと共に、「ダンガムオタク吸血鬼ＶＳシーグヴァイラ・アガレス＆エルメンヒルデ」などという訳の分からない事態に巻き込まれているようだが、それは置いておこう。
そういうわけで、今頃イッセー達は京都に初詣に行く準備をしているはずだ。俺達はいかないがな。
……これやった後、それをやるテンションになれない。答えはそれだけだ。
こんなことを考えながらも、ダンスを踊るオーフィス＋その他の為

に音楽を鳴らしながら、俺はふと考える。
今、こんなことしてていいんだろうか。
その理由は年末直前に伝えられた、教会関係の大騒ぎ。
きっとだが、正月関係の三が日が終わったら俺達が動くだろう。それほどまでに大ごとであり、同時にクリフォトの介入が想定される事態だ。
そんな事態に、こうしてあほなことをしてていいのかとは、思ったりするぐらいには俺は常識をわきまえているつもりだ。
ちょっと首を傾げたくなるが、とりあえず放送は終了した。
……既に視聴者数は一万を超えている。思えば大人気番組になったもんだ。投げ銭も三万を超えているし。
この調子なら、これだけで五万を超える収入は確定だろう。それら収入の殆どを義援金に回される以上、オーフィスの減刑は確実といえる。
それはいいことなんだけど、そんなことをしている暇があるんだろうか。
そんなことを思っていると、撮影用カメラの向こう側でカズヒねえがパンパンと手を鳴らす。
「はいお疲れ様！　とりあえず、朝ごはん代わりにお汁粉でも食べなさい」
そう言いながらカズヒねえは。お汁粉を持って俺達に歩み寄ってくる。
「ほれ、一人一つずつよ。……はい、和地も」
「……やっほう！」
俺だけきちんと持ってきてくれた！　地味に彼氏なだけあって特別扱い！
今までの思考を投げ飛ばしそうになるテンションアップな俺に対し、カズヒねえも人差し指でこつんと俺の額を当てる。
「あんまりはしゃいでこぼさないようにね？　……ほら、オーフィスはもうちょっと丁寧に食べなさい」
と、オーフィスがお城子で口元を盛大に汚していたので、何時の間

にやらカズヒねぇは口を拭きに向かっていた。
まぁそうなんだが、ちょっと寂しい。
「よしよしですの。カズヒはしっかり和地を愛してますよの～」
と、何時の間にやらヒマリに頭を撫でられていた。
ああ～。そういえば、ヒマリにこうされるのも久々な気がするなぁ。
なんというか、懐かしさと寂しさでほっこりする。
「お、もう終わって感じじゃん？　お茶持ってきたよー♪」
「あ、ヒツギも来ましたのね？」
と、お茶を持ってきたヒツギに気づいたヒマリが駆けていくのを見て、俺は何というか分からない感覚を覚える。
前世の母親が前世の母親と仲良くしている。字面にすると訳が分からん。
しかも、厳密には前世の母親の精神性は受け継がれていない。前世の母親である道間乙女の、特殊極まりない性質が原因で、道間乙女はヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバーの二人に分裂してしまった。その影響もあって、記憶や精神の連続性は分かたれており、カズヒねぇ達とは違ってかつての己を同一人物として認識すらしていない。
記憶や精神がないわけではないが、朧気であり実感が薄い。なので、俺も二人も前世の親子ということに対してむやみやたらと意識はしていない。
それが悲しいとは言わない。ヒマリとはもう何年もバディとして付き合いがあるわけだし、ヒツギとはお互いにどっちかというとツッコミよりでオカ研メンバーをやっている。ついでに言うと……床を共にした関係なので……むしろ意識したらいろんなものが削れるし。
第一、前世の記憶をもって前世の縁ある人達とまた絆を結べるというのがおかしいのだ。本来起こりえない奇跡であり、あることに感謝原因がミザリなのはスルーするこそすれないことに憤慨するのは筋違いだ。
だからまぁ、文句を垂れるつもりは全くないんだが……。

「まったく。もうちょっときれいに食べなさい。お汁粉はべたべたするんだから」
「……ん、ありがとう」
もうオーフィスのおかんになっているカズヒねぇを見る。
「いやぁ～日本の冬も結構寒いもんじゃん？　もう手も頬も冷え冷えだし」
「どれどれ……おぉ！　雪見大福みたいな感覚ですの！」
と、ヒマリがヒツギに頬ずりする光景を見る。
なんとなく、ちょっとお汁粉を食べる手が止まっていた。
「……あんたもなんだかんだで大変ねぇ」
と、着ぐるみを脱いでお汁粉をずずずとすすりながら、黒歌がそんなことを言ってくる。
「色々複雑な関係ですから、大変なことも多いのではありませんか？」
ルフェイにまでそんなことを言われたよ。
いや、本当にそういうわけじゃないんだが。
俺は首を横に振りながら、しいて言うならというレベルで思ってることを言うべきだろう。
「道間乙女（前世の母さん）に関しちゃ、伝聞でしか知らないからな。色々特殊な所為で、流石にちょっと寂しくなるさ」
実際、そういうことなんだ。
俺は、道間乙女に対する記憶がないも同然だ。
知っているのはカズヒねぇ達からの伝聞と、ヒマリやヒツギの朧げな記憶から聞く話。そしてカズヒねぇの記憶をもとにした、あの再現映像だけだ。
それがまぁ、ちょっとは寂しいの……かな。

イッセーＳｉｄｅ

俺達グレモリー眷属を中心としたメンバーは、九重や八坂さんの誘いで、京都まで初詣に行ってきていた。
ただ九成達は事前に予定していたふぃっちゃんねるの方に向かっていて、そっちの神社に話を通しているからそこで初詣をするとか。ついでに現地でご当地グルメを食べて帰るらしい。
……エクストリームアイロンならぬエクストリームブレイクダンスだとか。まぁ新年初日の出をバックにブレイクダンスとか、色々注目されそうで収入も増えそうだ。あと着ぐるみでブレイクダンスもきつそうだし、ついでに黒歌の懲罰関係を強めにしたいんだろう。
ヒマリとヒツギもそっちについていったみたいだけど、まぁそれはそれ。俺達は今、九成達がいない家に帰って来ていて―
「……というわけで、ちょっと相談があります」
「つ、鶴羽待ってぇ!? ちょっと待ってぇっ!?」
―同時にリーネスが秘密解放（公開処刑）となっている感じだ。
南空さんも鬼だな。いや、人数は絞っているけど。
事情を既に知っている俺と、俺の恋人で主のリアス。そしてリヴァさん達九成ハーレム。
それだけの人数を絞ったうえで、今ここにリーネスが全然解決できていない秘密が明かされる。
「……もうぶっちゃけるわ。リーネス、和地に惚れた」
「ぬわぁあああああ……ぁ～」
もう投げやり気味な南空さんがバッサリいうと、リーネスは顔を真っ赤にして両手で顔を隠して崩れ落ちた。
いやぁ。恋愛関係でリーネスがここまでポンコツになるとはって感じだよな。
まぁ、恋愛経験全くないみたいだから仕方ないのか？　前世から恋愛経験がゼロみたいだし、そういう意味だと三人で一番恋愛に弱いのも納得かも。

どうやらカズヒも業を煮やしているみたいだ。九成にだけは武士の情けで黙っている代わりに、事前に根回しをして、外堀を埋めることにしたらしい。あとリアスはグレモリー眷属のボスだから、広義的に同列扱いされていることも踏まえた筋の通し方らしい。

で、みんなの反応だけど―

「「「「おぉ～。ようこそようこそ」」」」

―さらりと受け入れられたし。

「もうちょっと困惑してぇ!?」

リーネスが一番驚愕しているけど、隣の南空さんは納得だったのか全然驚いていない。

実際四人とも、特に動揺しないで歓迎ムードだ。ぱちぱちと拍手までしてるし。

そんな光景に困惑しているリーネスに、リアスがぽんと肩に手を置いた。

「まぁこうなるでしょ。和地はその辺りイッセーと同じで、絶対に増えるでしょうし。むしろ保護者ポジションだったあなたなら、今後の関係も円滑に進みそうだもの」

うんうんと頷いているリアスだけど、俺のハーレムは更に拡大するの前提ですか。

……そっか、今後も増えるのか！　いやっほぉ～っ!!

俺だけの最高のハーレム。強くて可愛い女の子達と、イチャイチャしながら上級悪魔をやっていく将来。そんな未来は今以上に幸せな流れになるってことか。

うんうん。俺も上級悪魔を目指して頑張りがいがあるってことだ。何よりリアスが保証してくれるなら、俺も遠慮なく頑張れるしな。

そう、いつかはベッドの上で裸のハーレム達とエッチなことも……ぐふふふ……っ。

「イッセー。この流れでよく妄想できるわね」

春奈にジト目で言われて、俺はふと我に返った。

いかんいかん。バラ色の未来が後押しされて、つい妄想の世界に行っちゃったぜ。

可哀想なものを見る目が向けられるかと思ったけど、そんな目で見ているのは春奈だけだったりしているな。
むしろインガやベルナは……なんだ？　気づかわし気な雰囲気だぞ？
「これは経験論だけど、あんまり増やすと夜が大変になるから……ディオドラみたいなパターンならしのげるけど、それってあれでしょ？」
「あ～確かに。粘膜擦り切れるかぐらいの女より、残弾数気にしないといけねえ男の方がエロ方面はあれだしなぁ」
……すいません。ご指摘とってもありがたくて参考にするべきなんですけど、二人の経験ってあれだからちょっと何かに来ます。
いやちょっと待て。ディオドラみたいな女の侍らし方になるのはマジで嫌だぞ。あいつは絶対参考にしちゃいけない糞野郎じゃねえか。
ああ、なんてことだ。俺の際限なく膨らむ最高最強のハーレムという夢に、俺の側の問題点が他にもあったなんて。
「……だ、弾倉を増やす魔法を教えてもらうべきか？　でもルフェイは多分知らないだろうし……どうすれば!?」
「はっはっは～。女性にも性欲はあるし、男女関係はそこの折り合いも大事なもの。頑張って悩んで成長しなさい、イッセー君や」
思わず崩れ落ちかける俺に、リヴァさんがそう言って肩に手を置いて……あ、首を傾げた。
「そういえば、カズ君ってどれぐらいなのかしら？　いや、みんなしたことはあるけど全員一斉耐久レースはしてないし」
……俺はもっと崩れ落ちた。
「まだ童貞な俺の心を削らないでくださいよ!?」
「いやいや。ハーレム作るなら夜伽も重要よぉ？　参考資料までに聞いた方がいいと思うけど？」
リヴァさんはそう言うけど、俺の心が悲鳴を上げるんだけど!?
「……なるほど。確かにイッセーの経験値を上げれないのなら、座学や知見は深めるべきね」

リアスも止めて!?
「……つってもなぁ。アタシらそこまで性に貪欲でもねえから、限界まではやってねえぞ？」
「えっと……結局どうなの？　私あれだから、気持ちいいと思うけど……水準がちょっと」
ベルナに乗っかる形で春奈がそういうけど、そこでインガさんがちょっと小さいけどしっかりとガッツポーズしてた。
「ポテンシャルはすっごい高いね。リヴァの経験的には？」
「とてもいいものですね～。でも質はともかく量は……どうなの？」
リヴァさんも首を傾げているけど、そこでゴホンゴホンゴホンゴホンと……咳払い多いな。
みんなの視線が咳払いの方に向くと、そこは顔を真っ赤にしている南空さん。
……注目してたら、汗をかき始めた。
「自分から煽っといて、それはないんじゃないか？」
「典型的な自爆するタイプね」
俺もリアスも流石にちょっと呆れるというか。
もうちょっと落ち着き持てよ。人生二週目なんだから。
「ふっふっふ。アドバンテージがあるのにスルーされて、つい自分からアピールしてから恥ずかしいことに気づいたのね？　……で、どんな感じ」
「最後マジ顔やめて！　いや御免、本っ当に調子乗りました！」
リヴァさんに詰め寄られ気味で少し引いてた南空さんだけど、深呼吸をしてから息を更に吸い込んで―
「……体力もかなりある！　一時期人気ありすぎて予約が三日先まで埋まってたけど、問題なく訓練メニューもこなしてたから!!」
―そう、顔を真っ赤にしながらまくし立てていた。
そして、俺はちょっと崩れ落ちた。
「あのベッドマフィア……！　俺の、俺の先をどこまで行っているんだ……っ」
「くっ！　流石カズ君……ハーレムを作るべくして作っている男なだ

けあるわ……恐ろしい子っ」
俺とリヴァさんが戦慄しているけど、後ろで春奈達も戦慄している。
畜生。ハーレム王にはやっぱりそっちも必要なのか。童貞の俺にはどれだけあるのかがさっぱり分からないから、道はまだまだ険しいのか。
九成和地。俺達の誇るべき涙換救済（タイタス・クロウ）は、ベッドの上での女の子の涙の意味を変えれるのか。どこまで涙を変える男なんだ……っ
「……ってことはあれか？　いっそのこと七人同時とか……イケるのか？」
「どうだろベルナ。いや、ディオドラでもそこまではやったことないけど……どうなんだろ？　春奈はどうなの？」
「あ～、やば、なんか想像しただけでも顔が赤くなってきた。ってリヴァ、どうしたの？」
「……ちょっと真剣に知り合いに意見をと思ったけど、ヴァルキリーってそういうの両極端で逆に参考にならないから。まぁそれはさておいて、どうかなリーネスちゃん？　そっちの方も問題ないっぽいわよん？」
「あ、あわわわわぁ～」
後ろの女性陣の生々しい会話に、俺はメンタルが限界に到達しそうだ。
「と、とりあえずそういうことだから！　安心していいから！　和地なら絶対リーネスまとめて面倒見れるから……そろそろいい加減告白しない？　いや、マジで」
「そんなに滞っているレベルで時間が掛かってるの？　たぶん問題なく話が進むと思うし……弾き飛ばしようがないと思うわよ？」
顔を真っ赤にしてプルプル震えながら南空さんが太鼓判を押せば、リアスも首を傾げながらリーネスの方を見る。
「で、でもでもでも……ぁ～ぅ～……ぅっ」
あ、リーネス失神した。
「っておいいいいいい!?　どんだけ!?　どんだけなんだよ本当に!?」

拝啓、天国の祖父ちゃん。
俺はハーレム王になれる見通しが立ってきたけど、代わりに友人の恋愛相談にまで振り回されてるよ。
木場はイケメン王子なのに女をスルーして俺にかまうし、匙は一生懸命頑張ってるのにソーナ会長は弟扱いのままだし。しかも割と完璧だと思ってたリーネスは、恋愛でポンコツまっしぐらです。
世界って、難しくできているんだね……。

聖教震撼編　第二話　年明けのサプライズ!?

九成Ｓｉｄｅ

リアス部長達、三年生組が部を後輩達に譲る形になった新年。三学期のオカ研は、少し静かだった。

これはまぁ、三年生が巣立ったことでしんみりしているってのもある。だが同時に、そうでない理由もある。

「……部長、話を始めたいので音頭を取ってほしいのですが」

ルーシアがそう切り出すが、しかし返答はない。

そして数秒後、今度はイッセーがちょっとため息をついた。

「部長～、アーシア部長～」

「……はぅっ!?　そ、そうでした、部長でした！」

と、あわてて声を上げるアーシアに、俺達は大半が苦笑した。

……リアス・グレモリー先輩が部を巣立つ際、後任として指名したのは何とアーシア。

理由は「新しいオカ研にしてくれそうだから」。

ちなみに副部長は、手堅く木場が選出された。イッセーという案もあったが、赤龍帝でありおっぱいドラゴンの芸能活動もあるイッセーは流石に多忙になると踏んだらしい。理由としては二代続けて部長副部長を女のままというのもどうかというもので、俺も候補ではあったのだが、堅実な運営能力とノウハウの差もあり、木場が選ばれたそうな。

そういうわけで全員、アーシア新部長をかじ取り役にしたいところなのだが……この調子。

俺達が意見してもそれに流されそうなので、まぁ当分は様子見を……というのが部の基本方針となっている。

とはいえ、そこはしっかり者のルーシアがため息をついているわけだが。

「……とりあえず、アーシア部長は大まかなスタンスだけでも自分で

考えてもらわないと困ります。部員の意見や力を素直に借りるのは方向性としてありですけど、トップはかじ取りの方向性をしっかり決めていただきませんと」
「はいはい。ルーシアも落ち着いて、な？」
イッセーがその辺を宥めるが、ルーシアは少し憮然としていた。
「イッセー先輩はもう少し厳しくなるべきです。一夫多妻を真剣に目指しているのなら、多少は主導権を握らないとダメでは？」
と切り返すけど、話が逸れていることに気が付いたのかゴホンと咳払いした。
……どうも、最近ちょっと余裕を感じないな。
少し心配になってくるな。俺達にとっても可愛い後輩だし、一年生組ではかなりまとめ役になっているみたいだし。
背負いこみすぎてないだろうか。その辺りは、俺達全員思っているところだろう。
「ルーシアはもうちょっと気を緩めてもいいと思うけどな？　普段から張りつめすぎてる気がするぞ」
俺がそう言うと、ルーシアは胸に手を当てながら首を横に振る。
そこは決して譲れない。そういう雰囲気がいやというほど出ていた。
「私の兄はリュシオンですから。兄に胸を張れる自分でい続けませんと」
ルーシアは、本当にそれを口癖のように言っているよな。
ただ、ちょっと気になるところはいくつもある。
イッセーもその辺りが同じなんだろう。真剣に心配している表情だった。
「リュシオンさんは確かに凄い人だけどさ？　俺達はリュシオンさんの妹じゃなくて、ルーシアって女の子の心配をしてるんだぜ？」
その言葉に、ルーシアは何を言っているのか分からないとでも言いたげな、きょとんとした表情を浮かべていた。
うん。どうもこの辺が大問題だな。
駒王学園に転校してきたからの付き合いだが、ルーシアにとってそ

れは口癖を超えている。むしろ自発的に使える機会で言っている節がある。
たぶんだが、意識的に何度も言うようにしているんだろう。自分はリュシオンの妹であることを、自他問わず宣言している気がする。
まぁ実際問題、リュシオン・オクトーバーは凄い奴だ。心技体全部揃っている、教会が誇るデュナミス聖騎士団のエース。何より神器業界でも類を見ない偉業たる、禁手に至った神器の初期化から亜種に至り直すなんて言う真似すらやってのけている。
誇りに思って当然だろう。またリュシオンは、異形や異能を知らない時に巻き込まれた異形や異能絡みの事件で、神器を目覚めたうえで禁手に至らせるという英雄譚をやってのけている。
生ける伝説といえるだろう。当人にその辺りの自覚が欠如している節はあるけど、人間性も優れている方だといえる。
完璧超人一歩手前の域ではある。だからルーシアが誇りに思うのは当然だ。
ただ、なぁ。
うん、これは誰かが言った方がいいだろう。
「ルーシア。はっきり言っておくことがある」
俺はちょっと居住まいを正すと、真っ直ぐにルーシアの目を見て、言うべきことを言う。
「あの人を尊敬するのはいい。だが自分があなれる前提で行動するのはやめとけ」
「……っ」
その言葉に肩を震わすルーシアに、俺は本気の視線で断言する。
ああ、ルーシアのアイデンティティは、リュシオンの妹であるという自任と自負にある。
リュシオンが兄であることが自慢であり誇りであり、兄であるリュシオンを心から慕っている。だからこそ、リュシオンに恥じず胸を張れる自分を目指している。それを常に自覚的に言うことで、己の気を引き締めさせている。
つまるところ、ルーシアはリュシオンを他人に自慢しているのでは

なく、自分がリュシオンの妹であることを自分に言い聞かせているわけだ。
それがルーシアの芯とでもいうべきものであり、精神性の根幹だ。これまで俺達もなんとなく分かっていたからこそ、うかつにつつく事を避ける風潮があった。
ただまぁ、今後に備えると誰かが指摘するべきではある。
サウザンドフォース、厳密にはザイアを牛耳っていた神祖。後継私掠船団から聞き出した情報によると、「世界の不条理を異形に押し付けている節穴の極み」とかいうそうだ。結果として幸香達が疾風殺戮・ｃｏｍと連携して後ろから仕掛ける形で始末したとかなんだとか。
だがその先読みは異常だ。奴らの言い草から考えると、サウザンドディストラクションがなければイッセーとリゼヴィムはロキが決起するまでに暗殺する予定だった可能性すらある。
そもそもその理由ともいえる乳神という、異世界の実証すらできてない段階で予想できるわけがない存在を予見するなど不可能。しかもイッセーが生まれる前からイッセーが昇格を利用した進化を遂げることや、赤龍帝の透過を会得する可能性まで踏まえて対策を研究していたと思しき念の入れようだ。リゼヴィム対策もばっちりな辺り、あいつら「リゼヴィムが十二月に、煉獄から天界を襲う」ことまで前提にしたうえで網を張っていたからの襲撃かもしれない。
そのくせ幸香達に後ろから刺殺されるような無様をしている辺り、なんというかアンバランスだ。なんというか不気味すぎて、本当に死んでいるのか疑問になる。
そんな奴らの残党ともいえるサウザンドフォース。まだ何かを隠している可能性は非常に大きい。懸念しかない。
そしてリゼヴィムもリゼヴィムだ。
あの野郎、扇動の才能がありすぎる。吸血鬼の里における一件もそうだが、不満がある連中を上手く煽って爆発させる才覚なんて、ただでさえ禍の団の脅威もあって進みすぎている和平の反動とかみ合わせちゃいけない類だ。

……教会でクーデターが起きてとんでもないことになっているが、確実にいくらかは関与している。
しかもテンサウザーの話じゃ、リゼヴィムは自分が死んだらトライヘキサの封印を解除する為に魂を贄にするつもりだとか。反応から見て間違いないと考えられており、そのつもりはないんだろうが嫌な牽制になっている。真っ先に殺すぐらいの勢いで何とかしたい奴を殺すと、最悪の事態に繋がっているとか勘弁してくれ。
そしてだ。リゼヴィムの扇動は、今のルーシアに特に効く。
そうでないとしても、今後を踏まえるなら流石に大きく致命的な隙になりえるだろう。レイヴェルが誘拐された時の件で露呈していたようだが、ルーシアは兄が凄まじ過ぎる所為で「妹の自分もその後ろぐらいは」とか考えている。誰が見ても真面目だから、そうでなくても常に倣う前提で動いているだろう。
だが、世界にはできるやつとできないやつがいる。個性という差が存在する以上、どうあがいても優劣はある。だからこそ、特別な奴も存在する。
リュシオン・オクトーバーは間違いなく特別だ。いや、特別という言葉とはちょっと違うな。
特別というのは、曹操達の方が近いだろう。誰が見ても分かる能力が凄く秀でている。そういう分かり易い連中を指すべきだ。ジークフリートも曹操をスペシャルとか言っていたしな。俺達で例えるなら、ゼノヴィアとか朱乃さんが近いだろう。
リュシオンは、しいて言うなら異常……言い換えるなら異例だ。スペシャルというよりイレギュラーと言った方が近い。
優れているとかそういう次元ではなく、しいて言うなら外れている。普通の尺度からずれた、理解できないような凄さを持っている連中だ。俺達で言うなら、カズヒねぇやイッセーの異種同類と言っただろう。
……俺は、できることならスペシャル側でいたい。ただ前人未踏のイレギュラーをぶちかましている辺り、傍から見ると大概イレギュラーな気もする。

そして、そういう連中は参考にするにしても度合いってものがある。
真っ当な方向性の先にないあり方は、やろうと思ってやれるものではないんだ。無理して真似をしようとしても、必ず無理がたたるだろう。
だからこそ、俺は真っ直ぐにルーシアを見る。
「……はっきり言っておく。リュシオン・オクトーバーはイッセーやカズヒねぇと近い特例の類だ。どこまで行ってもイレギュラーで、基準値に設定していい手合いじゃない」
まずそこを理解してからでなければ、進めるものも進めないだろう。
よしんばできても、それが決して良い事とは限らない。真っ当な在り方から外れることが、文句なしに誰にとっても良い事なんてなんでいえる。
「俺はイッセーのことを評価しているし、カズヒねぇを愛しているし尊敬もしている。だが二人のようになれると思ったことはないし、むしろなろうとする方が俺に問題を起こすと思っている」
俺のその真剣な表情に、ルーシアはもちろんイッセー達も気圧されている。
だが、機会が巡ってきたのであえて言う。
かつて道間日美子だったカズヒ・シチャースチエを愛する者として、そこは意識を変えてほしいと願うから。
「先達として伝えておく。好意を持つのも評価をするのも、同一視するのとは違うぞ」
「……っ」
俺の言葉に、ルーシアは明らかに動揺している。
正直心苦しいが、ここは踏み込んでおいた方がのちのリスクは抑えられるだろう。
最悪、俺から距離をとられるだけだろう。その後は他がフォローしてくれるという前提で―

イッセーＳｉｄｅ

「おっ待たせぇ！　ゼノヴィアッちの衣装、できたわよ！」
―勢いよくドアが開けられて、俺達は思わず振り返った。
「……ふっ。知っているぞ？　こういう時は「アンドレ！」とかいうのだろう？」
……どこかで見たようなヨーロッパ貴族っぽい男装をしているゼノヴィアが、楽しそうな表情の桐生に連れられてポーズをとっていた。
いや、これちょっと違くないか？
ゼノヴィアは新しい生徒会選挙に、生徒会長として出馬することを決めていた。期末テストで平均点が南空さん並みだったのも景気づけを兼ねてたとか。
そしてイリナやアーシアも手伝っているけど、同じぐらい桐生も手伝っていた。
「うっす先輩！　軽食のスモークチキンサンド出来やしたぜ！」
「ふぅ。たまにはこういうことをするのもいい感じがするわね」
と、そこでお茶請けとして軽食を作りに行ってたアニルと手伝いのカズヒも戻ってきた。
「おぉ～！　今日もアニル君の燻製がいい香りだわ！　ちなみにパンは私が作ってみたの！　桐生さんも食べていって♪」
「お、そりゃいいわね。学園祭でも評判だった、ペンドラゴン君の燻製かぁ」
と、あれよあれよと桐生も参加する流れに。
レイヴェルが入れてくれた紅茶を飲むけど、こりゃ真面目な話は終

了だな。
九成もルーシアもそこは分かっているからか、ちょっと複雑な表情だけど素直に紅茶を飲み始める。
いやしかし、こういう時は異形とかと関係ない奴がいるっていい感じ―
「……ちょうどいいわ。今後のオカ研関連だけど、桐生が知ってくれていると後の対処が楽になるし。……バチカン関係で辺獄騎士団(古巣)から連絡が来たわ」
―ってカズヒいいいいいっ!?
俺は思わぬ展開に紅茶を吹き出す。
何をストレートにそんなこと言ってんだよ!? 何考えてるのぉっ!?
「……あぁ、テレビじゃ誤魔化されてるけど、バチカン市国でクーデター起きたって話? よく誤魔化せてるわねぇ」
しかも桐生も平然と乗ってきてるし!?
いやいやいやいや。ちょっと待て。
「桐生に事情話してたのか!? 何時の間に!?」
俺が思わず絶叫すると、何故か部員達の反応が二つに分かれた。
俺と同じで割と驚愕している組と、アーシア達きょとんとしている組だ。
え、これどういうこと?
俺が思わず戸惑っていると、カズヒは何かに気づいたのか額に手を当ててため息をついた。
「あの先代い……。サプライズ好きもほどほどにしてほしいわね……」
「いや、たぶんゼノヴィアッち達が話してると思ったんじゃない? ほら、リアス先輩は三年生だし」
え、なに? どういうこと?
なんでカズヒがリアスにぼやいてるの? なんで桐生がそっちのフォローしてんの?
訳が分からないでいると、ゼノヴィアが何かに気づいたのか、ぽん

と手を打った。
「ああ、そういえば私からは言っていなかったな。桐生は先月チラシを使っててな。私のお得意様だ」
……。
「マジで？」
まじまじと桐生と見てみると、桐生は直に頷いた。
「マジ。たまたまチラシをゲットして使ってみたら、ゼノヴィアッちが来てね？　ちょっと混乱してたらリアス先輩まで出てきたのよ」
あ、そうなのか～。
……できれば教えてほしかった……っ
俺はちょっと崩れ落ちるけど、そんな俺の肩をポンポンと叩きながら桐生はカラカラ笑う。
「ま、そこそこ事情は聴いてるわよ？　なんでも伝説のドラゴンを宿しておっぱいで力を引き出してて？　あんたのおっぱい星人っぷりに異世界のおっぱい神が寄ってきた所為で、世界の命運左右する羽目になってるんですって？　なんていうか大変ね」
け、結構色々と教えられてたんだな。
ちょっと俺が引くぐらい教えられてるけど、そこでカズヒがゴホンと咳払いをした。
「これは前部長もグレモリー家経由で伝えられるでしょうけれど、バチカンで元々クーデターを起こしていた側から、特殊なルートを経由して救援要請がでたそうよ。……破滅的な事態に達する前に、彼らの用意したルートを通り少数精鋭でバチカン内部に潜入し、外側と示し合わせて挟撃。……つまり、私達は近いうちにバチカンに派遣されるってことね」
あ～なるほど。そういうことか。
教会側では、かなり前から天界や上層部に対する不満の声が上がっていた。
それが爆発してクーデターになったのが年末。ただ暴発じみたクーデターだったうえ、フロンズさんが予期して手回しをしていたから、殺さないように注意する余裕込みで鎮圧ができるはずだった。

だけど、鎮圧部隊はクーデター部隊に集中していた背後を挟撃された。
クーデター部隊すら困惑する中、数万を超える部隊は鎮圧部隊をかく乱しながら一部隊を合流させる。そして鎮圧部隊をぼこぼこにして撤退に追い込むと、更に補給物資を大量に持ってきた後方部隊が来て、籠城戦の構えになった。
確か上層部の計算では、頑張れば一年以上籠城できるレベルらしい。そして教会の中心地であるバチカン市国がそんなになっていることを、一年も隠しきれるはずがない。そして人間界にばれれば、絶対に大混乱になる。
しかも相手の要望は、和平の撤回とかそういう猟奇じゃないらしい。主導権をその増援部隊が握ったうえで、「聖書の神による断罪で我らを地獄に落としたまえ」ってことになってるとか。
流石にクーデターを起こした側も混乱しそうだけど、クーデターを起こした人達の大半はそっちについたらしい。それほどまでに勢いが高まっていて、鎮圧の根回しをしていたフロンズ達は珍しく頭を抱えているとか。
そして、その名が―
「……神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）は可及的速やかに鎮圧する。フロンズ達大王派は、大量に死者が出るとしても短期決戦で終わらせるべきと判断しているわ」
―カズヒのその重苦しい発言が、すべてを物語っている。
俺はふと、ヴァーリとちょっと話した時に聞いた言葉を思い出す。
―君にとっての平和が、苦痛に感じる者もいるということさ
……本当に、世の中は苦しいってことなんだろう……な。

聖教震撼編　第三話　神聖十字軍団

祐斗Ｓｉｄｅ

その日の夜、兵藤邸の地下に、Ｄ×Ｄの主要メンバーが集まっていた。
僕達オカルト研究部メンバーはもちろん、シトリー眷属は全員集まっている。冥界の活動が多いサイラオーグさんやシーグヴァイラさんも来ているし、リーダーのデュリオはもちろんグリゼルダさんも来ている。初代孫悟空殿も既に来ていた。
ヴァーリチームも常に兵藤邸にいるメンバーだけでなく、ヴァーリ以外が顔を出している。英雄派からも曹操とサイリンが、アーチャー山中鹿之助を連れて来ているほどだ。
それどまでに、今回は重要度の高い案件といえる。それこそ、一歩間違えれば人間界に多大な悪影響を与えかねない事案なんだ。
「……よし、呼んだ連中は全員来てるな？」
アザゼル先生が僕達を見回したうえで、映像を映す為に魔法陣を操作する。
そこに映し出されたバチカン市国の光景を見て、僕達は目を見開いた。
話には聞いていたけど、凄い光景になっている。
異能によって今まで通りのバチカン市国に誤魔化されているが、それを解除した状態のバチカン市国は自然に飲まれていると言っていい。
建築物にはもれなく蔦が絡みついているし、至る所に木々が生えている。
特筆すべきは、それらが全部果実を実らせていることだ。
木々からも蔦からも、それぞれ別々の実が実っている。種類としてはブドウが最も多いようだけれど、ブドウの種類もいくつかあるよう

だ。
更に小雨が降り注いでいるのも特徴か。天候そのものは晴れており、日本で言う狐の嫁入りの類になっている。
恐るべきは、これらが神聖糾弾同盟によるバチカン制圧から数日で起きたことだということ。それ以来、小雨は毎日数回、一時間前後の比率で注いでいる。それもあって、果実は毎日実り彼らに新鮮なビタミンを供給しているほどだ。
それにしたっておかしいとは思うけどね。水と光はともかく、肥料はどうやったというのか。
そしてそんな光景に、僕達は唸るほかない。
そしてそれだけに止まらない現状が、建物を縫うように現れる。
ＴＦ（トライフォース）ユニットでもＤＦ（ディアボロス・フレーム）でも、もちろん禍の団のサリュートでもない。首がなく、頭部と胴体が一体化した独特な形状の人型兵器だった。
時折上部もしくは胴体部のハッチが開いて中に入っている悪魔祓いが顔を出す。更に彼らは独自開発と思われるレイダーを率いていた。
山羊を思わせるそのレイダーは、銃剣付小銃を構え、十人弱で活動している。中には小銃ではなくかなり大きなナックルダスターを持っている者もいるが、その数は比較的少ない。
そんな映像が消えたのち、アザゼル先生は肩をすくめた。
一見すると軽い態度だけど、その表情は深刻そのものだ。
「……とまぁ、クーデター部隊を取り込んだ神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）はバチカン市国を要塞化してやがる。構成員のほぼ全員を独自開発のプログライズキーでレイダー部隊にし、教会が独自研究をしていた人型人工神器まで投入してやがる」
それが、あの映像か。
「……教会がＴＦユニットとは異なる形で人型人工神器を研究している。噂には聞いていましたが、実戦投入が可能なレベルだとは思いませんでした」
シーグヴァイラさんがそういうと、素早く魔法陣を操作して追加の

資料を見せる。
「教会製人型人工神器は、和平に不満を持つ技術畑の信徒のガス抜きが主目的。他神話体系や悪魔はもとより、神の子を見張るもの(グリゴリ)の技術も使わずに開発するというハードルの高い研究です。精々が現状認識、よくて自己満足の代物だと思ってましたが」
「だろうな。俺も正直驚いてるぜ」
ＴＦユニットの深く関わる者として、アザゼル先生もシーグヴァイラさんに同意を示す。
それに対して、リーネスも映像を手元に出して確認しながら目を細めていた。
やはり技術者としての立ち位置が強いリーネスは、こういう時に優れた見識を見せてくれそうだ。最近は日常だと地に足がついてない雰囲気をよく見せているから、ちょっとほっとしたよ。
そして追加で魔法陣で数値を記入しながら、小さく頷いた。
「おそらくぅ、独立具現型を参考にしているようですねぇ。機能としては搭乗している時に高性能化と、下りている時の自律動作機能が特色ですねぇ」
なるほど。つまり乗っている時も下りている時も油断できないということか。
先生もリーネスの私見に頷きながら、資料を取り出すとそれを流し見する。
「登録コードは「パラディメア」。おそらく雌馬を指すメアと聖騎士を意味するパラディンを組み合わせたコードネームだな。基本機能は悪魔祓い(エクソシスト)の基本性能を拡張強化しつつ、聖なる鎧の具現化や半自立兵器としてのサポート特性となっている。……もっとも、これだけの数を要しているなんて伝えられてないから、他にも伏せ札はあるだろうがな」
資料の映像も出てくるけど、割と高スペックだ。
可変させることで悪魔祓いの基本武装と同様のスタイルを切り替えられる「バタフライ・セイント」。光力精製などの主要機構は、小型艇性能を複数分散設置させることで、交代で使う長期戦や同時に起動

する長期戦、一部が破損しても対応できる防衛戦にも対応できる。
基本機能である聖なる鎧は、所有者の身体機能を向上させつつも防御面では大幅上昇。使用者が搭乗している間は機体そのものに展開し、下りている時は使用者が装着する形式か。割と立ち回りが色々できるように考えられているね。
「となると、当初から教会内部には一神聖糾弾同盟《彼ら繋がっている者がいるってことだろうね。彼らは相当根を深く張っているようだ」
曹操はそう呟きながら、確認するように先生の方に視線を向ける。
「単刀直入に聞くけど、これがクリフォトの仕込みである可能性は？」
そうだね。そこは重要だ。
クリフォト、厳密にはリゼヴィムは扇動の鬼才と言ってもいい。
連続で主導者を失っていた禍の団の末端を適度の暴れさせつつ、組織そのものを掌握する手腕。吸血鬼の二大派閥を巧みに煽り、双方に壊滅的被害を出した一件。更には八重垣正臣を素体にしたモデルジューダスによる、和平そのものやその象徴たる僕達に対する痛烈な一撃。アグレアス奪取未遂の手札から言って、冥界政府にも手を回しているだろう。
今回のクーデターも似たような側面がある以上、リゼヴィムの警戒は当然といえる。
ただ、先生は肩をすくめながら首を横に振った。
今回は違うのか。そう思うより先に、先生はかなり渋い顔をする。
「今回は奴らにとっても予想外だろうさ。なんたって、神聖糾弾同盟はクーデター陣にいるクリフォト内通者を呼び出して、保護すらしているからな」
先生の信じられない言葉に、僕達は少しざわめいた。
クリフォトの内通者を、神聖糾弾同盟が保護？
怪訝な表情になる者もいる中、先生はげんなりしている。
「なんでも「その身を地獄に落とす罪を背負い、起こすべき争いを起こした献身を評価したい。君がいなければ散発的な争いが続き、教会の威信と統一は乱れに乱れる羽目になったのだから」だとさ。流石に拘

禁一歩手前だが、奴らを経由してクリフォトに牽制を入れているそうだぜ？」
　なんてことだ。神聖糾弾同盟は、クリフォトとの戦闘すら視野に入れているのか。
「一つお聞きしたいが、神聖糾弾同盟の戦力は、人型人工神器や新型レイダー以外にも当然あるのですね？」
　サイラオーグさんがそう聞くと、先生は当然のようにうなづいた。
「ああ、そりゃもうたっぷりとな。和平初期に教会から離反した武闘派のうち九割が参加しているうえ、率いている奴含めて六騎もサーヴァントが投入されてやがる」
　先生はそう言いながら資料を配るけれど、それに対して僕達は更にどよめきを生んでしまう。
　資料に記されている真名が判明しているサーヴァントの来歴。そうそうたるメンツが確認されているからね。
　何より、神聖糾弾同盟を率いるキャスターのサーヴァント。彼は本当に凄い。何故なら―
「ろ、ローマ教皇!?　ローマ教皇がクーデターのトップやってるんですか!?　いや、昔のだけど！」
　―イッセー君が驚愕しているように、首謀者はかつてローマ教皇を務めていた男なのだから。

イッセーＳｉｄｅ

　本当だ。簡単に来歴も書かれてるけど、ローマ教皇ってしっかり描かれてる。

「……ウルバヌス二世。第一次十字軍遠征が行われた時期のローマ教皇」
小猫ちゃんがぼそりと呟くけど、十字軍遠征かよ!?
世界史の授業でやったけど、確かエルサレムを奪還する為に何度かやったっていう大規模な軍事作戦だったな。その一回目か。
そっか。大昔のとはいえ教会でトップをやっていた人が指導者になっている組織が助けに来てくれたんだ。今の信徒達のクーデター起こし方も、その人を立てたくなるのかもしれないな。
俺達で言うなら、クリフォトを率いているのがリゼヴィムじゃなくて蘇った初代ルシファーだったらって感じなんだろう。もしそうなってたら、たくさんの純血悪魔がクリフォトについてた可能性はありそうだしなぁ。
俺が納得していると、アザゼル先生は小さく頷いて、ウルバヌス二世の資料を魔法陣で映し出す。
「良くも悪くも十字軍遠征主導が目立ちすぎ、現代では十字軍遠征が批判的に言われることも多いから、奴さんを悪役扱いしたり腐敗貴族みたいにとらえる奴も少なからずいるだろう。……が、俺からいわせりゃむしろ逆だ」
そ、そうなのか。
俺はよく分からないから、素直に耳を傾けよう。
みんなも聞く態度を示していると、先生は少しウルバヌスの絵をちらりと見た。
「奴が聖職者として活動していた頃、当時の教会はむしろ腐敗してた方でな。王様や金持ちが教会の内情に介入できたり、そもそも聖職者の立場が金で買えるような時期だった」
そういう先生の表情は、ウルバヌス二世ってのを評価している。いや、警戒しているって方が近い感じだ。
ちらりと周りを見てみると、カズヒやグリゼルダさんも同じような表情だ。
年長者で実務作業とかも慣れているグリゼルダさんや、人生二週目で暗部として活動していたカズヒ。二人がアザゼル先生と似たよう

な反応ってところから見て、ウルバヌス二世ってのは結構な人物なんだろう。
　そしてそれを後押しするように、先生は俺達を見回した。
「グレゴリウス改革と呼ばれる当時の教皇による教会の清浄化。その際奴は教皇の腹心として精力的に活動し成果を上げた。その成果もあってか奴はのちに教皇に就任し、その継承発展を成し遂げたんだ」
　先生はそう言うと、本気の警戒心を浮かべている。
　先生がここまで警戒するレベルか。実際、クリフォトが裏で関わっていたであろうクーデターをやばいレベルにし、クリフォトすら出し抜いているしな。
「奴の政治及び外交の手腕は怪物的だ。確かに十字軍遠征は富や権威も絡んでいただろうが、奴はそれらに動かされる奴すらも利用して、当時の信徒達をある意味一つの方向性に邁進させることで、教会全体の綱紀粛正を果たした傑物だよ」
　それほどまでに先生が警戒する相手が、クーデターを乗っ取り反乱の主導者になったのか。
　と、そこでカズヒが少しため息をつきながら片手を上げる。
「……補足すると、ウルバヌス二世は生まれついてや当人ではどうしようもない理由で異端に属する者であろうと、信心を持つのなら裏で庇護し「信仰の助けになる活動」をさせることで暗部組織とはいえ居場所を確立させているわ。それはプルガトリオ機関の前身ともいえ、残された資料によれば悪魔や堕天使といった異端に対しても交渉次第である程度のすみ分けを許容されたとも言われている」
　その言葉に、今度はグリゼルダさんも小さく頷くと俺達を見回した。
「事実、彼は先見の明を持ち、敬虔な信徒であり、同時に現代にも通じる不条理を理解したうえで教会の組織を改革しました。十字軍遠征についても、いくつかの被害発生を予期したうえで組織の安定化を図ったものであると言われています」
　ま、マジか。そんなに凄いのかよ。
　俺がちょっと戦慄していると、先生は当時を思い返していたのか、

少し目を閉じていた。
なんていうか、雰囲気から言って凄く相手を評価していて、だからこそ警戒している感じだ。
「政治と外交において、あいつは歴代ローマ教皇でも指折りだ。そんな奴が掌握した組織である以上……かなりやばい」
そう語った先生は、そのうえで俺達を見回した。
「で、だ。知ってるやつもいるはずだが、掌握されちまったがクーデター側にも首謀者格はいる。その三人のうち二人が、連名で共闘の申し出を送ってきた」
そうそう。そんなこと言ってたんだよな。
でもさぁ、すっごいなんかありそうだ。
「……詳しくは知らないけれど、誰が送ってきたの？」
リアスがそう促すと、今度はグリゼルダさんが立ち上がった。
「クーデターを指揮していたのは、司教枢機卿テオドロ・ログレンツィ猊下、司祭枢機卿ヴァスコ・ストラーダ猊下、助祭枢機卿エヴァルド・クリスタリディ猊下の三名。そのうちストラーダ猊下とクリスタリディ猊下が連名で書状を送ってきました」
その言葉に、教会側のメンバーが分かり易く動揺している。
っていうか枢機卿ってのが教皇の次に偉いのは知っていたけど、なんか色々あるんだなぁ。
なんかもう、馬鹿の俺はまだ学が足りないから何が何やらだ。
「……上から順番に司教・司祭・助祭で考えてくれればいいです」
ありがとう小猫さま！　でも俺の心の中を読まないでね？
ってことは、つまりだ。ちょっと考えると割とやばい気がするぞ。
「つまりクーデターを起こした人の一番偉い人は、その教皇サーヴァントに取り込まれたってことですか？」
そう考えた方がいいと思ったので聞いてみる。
むしろその方が納得だ。元教皇様が連れてきた増援部隊に、クーデターのトップ中のトップが参加に入ることを明言する。そうすりゃスマートに取り込めそうだし。
ルーシアもそこに納得しているのか、小さく頷いていた。

「……そう考えるべきですね。ただ、残る両猊下がそう思わせる罠として張った可能性も考えなければですが」
「いえ、その可能性はかなり低いわ」
と、ルーシアの言葉をカズヒが否定する。
はっきりと確信レベルで言っているけど、なんか表情は渋いな。頭痛を堪えている感じだけど、今回の事件とは別のところで堪えてる感じがする。
俺たちの視線が集まると、カズヒは盛大にため息をついた。
「イッセー達には私も情報を聞いているのは知っているでしょう？……辺獄騎士団（私の元職場）、丸ごと今回のクーデターで両猊下の補佐をしていたわ」
その言葉に、少なくない同情の視線が集まった。
それとなく九成が隣に行くと、カズヒはそのまま九成の肩に頭を持たれかけさせる。
っていうかちょっと待ってくれ。カズヒの元職場っていうと、教会暗部組織プルガトリオ機関のリマ部隊。教義的グレーゾーンな人の受け皿だったプルガトリオ機関で唯一、ガチガチの汚れ仕事部隊だからグレーゾーンの人を入れない部署。通称辺獄騎士団。
そんな部隊が全面的に支援してたって、つまり―
「これ、教会側の仕込みなのか!?」
そう思ったけど、カズヒは首を横に振る。
あ、違うのか。
「厳密にはお二人に賛同して独自に支援していた形ね。お二人は珍しい戦士上がりの枢機卿であられるから、戦士達の不満がいつ爆発してもおかしくないことに気づいたのでしょう」
なるほどなるほど。戦士の気持ちは戦士が一番よく分かる的な感じか。
我慢し続けて変な方向に暴発するぐらいなら、爆発方向が制御できるうちに自分から爆発させたほうがいい。少なくともそれなら、被害を抑える余地がある。勝手に誰かが爆発させることも阻止できるからな。

なるほどなるほど。つまりあれだ。
「カズヒのおかげでエロを抑えてた松田と元浜が、我慢しすぎてノイローゼになった時に先生達がエロ本とかの購入を見ないことにしてくれたのと同じか」
「的確な例えだけど他になんかあるだろ」
うるさいよ九成。
あとカズヒも。体重を更に九成に預けんなよ。そんなに嫌な例え方だったのかよ。
あ。先生まで呆れ顔だよ。ため息つきそうな顔になってるよ。
う～ん。そんなに悪い例えだったんだろうか。
俺が首を傾げていると、先生は持ち直したらしい。
「……そういうわけだ。奴さん達はそのついでに内通者を探り当ててとっ捕まえた後、最後まで残ったうっぷんを和平のきっかけたる俺達にぶつけさせ、その詫びとして教会的に渡しづらい物を俺達に届ける算段だったらしい」
なるほどなるほど。
和平を結んではいるけど、納得しきれてない人はいっぱいいるしな。クーデターだって納得できないから起きたわけだし。
そういう感情や体裁もあって渡し難い物を渡す理由も兼ねて、クーデターを起こすことでそれを利用するクリフォトの内通者もとっ捕まえて、爆発させたことで不満のガス抜きもできると。
流石教会のトップ陣。考えてはいたんだなぁ。
納得できないところはあるけど、最終的に上手くまとまりそうな作戦ではあった。
だけど、それも神聖糾弾同盟が出てくるまでだ。
「神聖糾弾同盟は、和平に反対して教会をやめた者が中核になっています。そんな彼らが神器などの裏事情を知らないレベルの教会関係者や、教会に属していない信仰心の厚い者を取り込んで結成されたようです」
グリゼルダさんはそう言うと、苦い顔になる。
「中にはＰＴＳＤで退職し、心の慰撫を宗教に求めた陸軍教官も確認

されました。新型レイダーは突撃銃型の武装を主体としておりますし、最低限の軍事教練は受けている者と考えるべきです」
「古来より、宗教が絡んだ戦争は大ごとになるものでござる。あの尾張の織田信長も、一向宗には手を焼かされたそうですからな」
アーチャーの山中鹿之助が同情するように頷くけど、本当にやばいな。
……あと、召喚されたサーヴァントの真名で確定事項に「天草四郎時貞」って書かれてるけど、これはどうしたもんか。
絶対似たレベルでややこしいことになるじゃん。死ぬまで戦いそうなやつがゴロゴロ出てきそうなんですけど。
「ま、教会側からすりゃぁ打倒するべき悪徳の化身扱いしている連中と、いきなり仲良くしろなんていわれりゃ困惑するのは当然。異形の事情を知っている連中ならまだ折り合いもつけれるだろうが、その辺知らないやつがいきなり和平まで伝えられりゃぁ、変な暴走をしでかしてもおかしくねぇな」
「むしろそういう奴ほど乗せやすそうっすね。ほら、漫画とかでもよくある導入に似たようなのあるっすよね」
先生がうんうん頷くと、匙もそんなことを言ってくる。
あ～。最近の漫画だと結構よくあるよな。そういう展開。
自分たちの知っている世界のあり方が実はでたらめで、信じてきた組織は敵対してたと思ってた連中とグルみたいなもんってやつ。そもそも更に上のおもちゃみたいな感じになってるとか。で、真相を知った主人公は仲間と共に立ち向かうって感じの。そういう組織って割と宗教関連とかそういった感じのだし。
そんな連中がゴロゴロいるなら、なおのことやばいことになりそうだ。話聞いてくれなさそうっていうかなんて言うか。
なんか更に重い雰囲気になっていると、カズヒは持ち直したのか咳払いをした。
「とにかくそういうわけで、クーデター陣営はかなりの割合が神聖糾弾同盟に乗っ取られたようなもの。むしろローマ教皇がサーヴァントとして参加したことで、賛同して参加を選んだ奴も増えたみたい

よ」
カズヒがそう言うと、教会側のメンバーは全員が沈んだ表情になった。
アーシア達は元々教会に属してたからなぁ。悪魔になったり天使になったりしてる人も、今の三大勢力や各神話と仲良くやってる今をよく思ってるし。教会側で不満が爆発して大ごととか、やっぱり思うところはあるよな。
「……ストラーダ猊下とクリスタリディ猊下が味方同然なのは、不幸中の幸いだな」
そう言うゼノヴィアだけど、なんていうか結構感情籠ってるな。
他のメンバーより深く感情が籠っているっていうか、なんていうか。
いったい何なんだろうと思ってると、先生が同情の視線を向けていた。
「ストラーダの奴は先代のデュランダル保有者だったからな。気になって当然か」
先生がそう言うけど、え、ちょっと待って!?
「先代のデュランダル所有者!? っていうか先生も知ってるんですか!?」
すっごい人が出てきたな、おい。
っていうか先生の言いぐさが、知っている顔に対するそれなんだけど。これってもしかして、会ったことある感じか。
なんていうか先生は先生で、嫌な過去を思い返す感じだし。
「第二次大戦期にやりあって以来だが、あの時はコカビエルがだいぶ追い詰められてなぁ。あいつはそれ以来、聖剣に興味を持ち始めたんだよなぁ」
コカビエルの奴を追い詰めるほど!? それも第二次大戦期って、人間水準だと大昔だぞ!?
俺は面食らうけど、ゼノヴィアは真顔で先生に頷いていた。
「御年八十七になられるが、未だ猊下に衰えは見られない。技の冴えに限れば磨きに磨かれていると断言できるぞ、アザゼル先生」

ゼノヴィアのその言葉に、先生は感心しているような引いているような複雑な表情を浮かべている。
そ、そんなにやばいレベルだったのか。
「うっへぇ。下手したらそんな状態の奴と加減はされても戦う羽目になってたのか。そういう意味じゃ運が良かったな、お前ら」
いや、マジでそんなレベル!?
いや、確かにコカビエルはめっちゃ強かったしな。ぶっちゃけていや、今の俺でも普通の禁手じゃ苦戦すること間違いないだろうし。それを追い込んだ奴が、それ以上に強くなってるっていうならやばいだろ。
あ、戦闘狂な曹操やヴァーリチームがちょっとうずうずしてる。言っとくけど、今は救援要請を出している人だからね？　戦ったら駄目だからね？
「……ヴァーリがいなくてよかったぜ」
あいつがいたらややこしいことになってたと思う。だって、俺と戦う為にかなりえげつない挑発しやがったしなぁ。
あ、そういえばなんでいないんだろ。後で聞いてみるか。
「私も一度お会いしたことがあります。とても気さくで優しいお方でした」
アーシアが懐かしむようにそう言うと、アニルも同じような表情になる。
「若い戦士関係者は一度は会ってるはずですぜ？　あの人戦士育成機関の設立に関与した人だから、時々催事に参加してくださりますんで」
き、聞けば聞くほど凄い人だな。流石戦士上がりの司祭枢機卿。教会で三番目に偉い立場なだけあり、立派な性格っぽいな。
「クリスタリディ猊下と戦わなくて済んだのもよかったわ。私達にとって恩師だもの」
「そうですね、イリナ先輩。戦士育成機関の授業でいくつもの教えを授けてくれた恩師ですし」
イリナもほっとしている表情で、ルーシアもそこには同意している

のかコクコクと頷いている。
　クリスタリディって人も凄い人なんだろうか。
「……奴もストラーダ張りに神の子を見張るもの（グリゴリ）でも名が知られている奴だった。当時七つに分かれ教会が六つ保持していたエクスカリバー。それを三つも同時に扱い、すべてを扱うこともできただろうと言われている。戦士育成機関設立に深く関与し、多くの戦士を育成したこともあるあの二人は、戦士出の聖職者にとって二大巨頭だ」
　先生がそう唸るほどの人達か。
「ほんと、二人と戦わなくて済んだのはラッキーだよねぇ。あの二人、魔王すら倒せそうなぐらい強いから」
　デュリオがそんなことを言うけど、そんなレベルかよ!?
　あ、ヴァーリチームのアーサーが眼鏡をくいっと挙げながら興味深そうな表情になってる。
　やめて！　ヴァーリチームの野郎は全員バトルジャンキー気質だから、しなくてもいい戦いをしそうで怖いから！
「フフフ。それぞれデュランダルとエクスカリバーを持っていれば、きっと凄まじい強さだったのでしょう」
「そうですね。現役の戦力で例えるなら、デュリオや戦士リュシオンと同等の戦力になるでしょう」
　グリゼルダさんが凄いこと言うけど、そんなレベルですか!?
　ほ、本当に戦うことにならなくてよかった。いや、エクスカリバーはともかくデュランダルはこっちに丸ごと残ってるけど。
「そういえば、クリスタリディ猊下は満場一致で支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）を核とするヘキサカリバーの担い手に選ばれてましたね」
「確かデュランダルの増産計画もあったね。テスター最有力候補がストラーダ猊下とは聞いているよ」
　と思ったら、ルーシアとゼノヴィアが物騒なことを話している。
　おいおい。最強のエクスカリバーを中核にした、最強のヘキサカリバーの持ち主なのかよ。しかもデュランダルも増産計画が進んでると。
「へぇ。ジャンヌには感謝しないとね。生ける伝説が再び戦場に出る

のかもしれないんだから」
曹操、喜ぶな。下手したら戦ってたんだからな？
っていうかそうだった。英雄派のジャンヌが増産に関わってるんだった。厳密には後継私掠船団のブレイを参考に、聖剣を鍛造する禁手に至っちゃったからなんだけど。
そういう意味だと戦力増強なんだけど、敵もやばいぐらい強いのが多いからなぁ。心強いんだけど苦戦続きだよ。
あとたぶんだけど、神聖糾弾同盟もめっちゃくちゃ強いのが多いんだろうし。
……あ、そういえば。
「そういえば先生。協力者じゃないテオドロ・ログレンツィって人はどんな人なんです？」
その辺は詳しく聞いてなかったな。
と、何故か知ってそうな人達もちょっと首を傾げている。
「テオドロ・ログレンツィか。最年少で司祭枢機卿にまで上り詰めたと聞いている」
なんかが歯の間に挟まっているような言い方だな。
首を傾げていると、アーシアも同じように首を傾げていた。
「カトリックの上層部でも謎多き方と耳にしましたが、私もお会いしたことはないですね」
「私もね。シスター・グリゼルダも会ったことはなかったですよね？」
おいおい。ミカエル様の転生天使、それもＡ（エース）のイリナも顔を知らないのか。
なんか訳ありなんだろう。ただ、流石に顔ぐらいは知っておきたいんだけど。
……いやいや、それはちょっと脱線しているな。とにかくだ。
「……とにかく。私達がここに来てその話をする以上、Ｄ×Ｄはバチカンに潜入する側ということね」
「そうなるみたいじゃな。ま、神聖糾弾同盟はともかく、クーデターにクリフォトが関わっとるなら尚更じゃ」
リアスと孫悟空の爺さんがそう言うと、先生も頷いた。

「そうなる。何分事情が事情だから、凄腕かつ比較的動きやすい奴でないといけないんでな。……つまり、Ｄ×Ｄの出番というわけだ」

……それが、俺達の新しい仕事。

本当に、凄いことになってるな……っ

聖教震撼編　第四話　小さな願い

和地Ｓｉｄｅ

まったくもって、今回の一件はやばいことになっているな。
バチカン市国で年レベルの籠城戦が展開されかねない。そしてそのきっかけとなったクーデターの首脳陣から、救援要請が出てくるとは。
しかも、クリフォトは関わっているだろうが予想外の流れになっていると考えられている。まるで英雄派が主導権を握っている時期に、ロキが反乱を起こしたような展開だ。
まったく。世界は本当に予想外で満ちているよ。タイミングがかなり悪いところではあるんだが
とりあえずその辺りの作戦の概要を説明された流れだが、そこで先生小さく息を吐く。
どうやらひと段落はついたらしいな。
「……さて、今回話す内容はほぼ終わったが、質問がある奴はいるか？」
先生がそう言うが、確かに気になることは少なからずあるな。
あ、サイラオーグ・バアルが手を上げた。
「今回のことは父上達も了承しているのだろうか？　大王派は積極的支援を渋りそうなのだが」
ああ、なるほど。確かにそうだな。
大王派からすれば、今回の件は教会の内輪もめに近いからな。バアルの戦力を割くことに文句をつけたくなるかもしれん。あいつらなら魔王派がやればいいだろうとか言いたくなるだろうし。
ただ先生は、苦笑交じりだが首を横に振った。

「その辺は安心しろ。今回の件、フロンズ・フィーニクス達が外周からの制圧に部隊を回すからな」
なるほどな。
「あの人また出てくるんですか？」
イッセーがどこか警戒している感じで聞くと、先生はあっさり頷いた。
「野郎はむしろ積極的にこういうことに動いてるよ。後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）はもちろん、下級中級の民間人上がりの義勇兵、そして自分達が動かせる軍そのものまでな」
先生はそういうことを言いながら、別の映像を見せる。
そこにはＧ（ギガンティック・フォートレス）Ｆサンタマリア級で構成される船団が、禍の団と思われる敵勢力を攻撃している光景が映っていた。
あの人達、かなり精力的に動いているんだな。
どうも考え方が合わないところはあるが、こういうところは頼れるな。
「奴さん達はＧＦのテストや全体的な戦力の強化、後継私掠船団のイメージ回復とか色々考えてるんだろう。フロンズ達はサイラオーグを「バアル出身の魔王派」とみなしていることも大きいだろうがな」
……こうしてみると、大王派もかなり戦力が増強されているな。
後継私掠船団を戦力として組み込めたことも大きいが、ＧＦ及びＤＦによる機動艦隊による部隊運用は、かなりの成果を上げている。
そしてフロンズ達シューマ・バアル派は、サイラオーグ・バアルとそのシンパを大王派から切り捨てる方向に動いている節もある。
なら奴らからすれば問題ないわけか。魔王派の連中が魔王派の意向で動く分なら問題と思うわけもない。どうぞ頑張って魔王達の為に頑張ってくださいって訳だろうしな。
はぁ。相も変わらず食えない御仁なことで。
で、質問はいくつか出ては返ってきている。
「先生。規模が規模ゆえに死人を出さないでというのはかなり困難ですが、その辺りは？」〔カズヒ〕
「流石に今回は死者を出すなとは言えん。責任は上が取るから、まぁ

自分達がやばくならない範囲で自己裁量に任せる」
「これだけの人数が動くとなると、流石に神聖糾弾同盟も気付くのではないでしょうか？」〈ソーナ〉
「潜入用の独自ルートは分散させる予定だ。その辺りはミカエルや、プルガトリオ機関用の秘密ルートも併用する」
「バチカンでは聖剣の量産計画が進んでいるようですが、それらが敵の戦力となる可能性は？」〈アーサー〉
「十分あり得るから警戒しろ。いや、お前はそっちの方が喜べるのか？」
「バアル義勇軍や俺達アマゴフォースからの人員はどれだけ投入する？」〈曹操〉
「流石に多すぎるのもあれだから、五人未満だ。量より質で頼む」
次々に色々な方面から質問が飛んでくるな。
……あ、そういえばちょっと気になる方面があるな。
思い出したので、俺も挙手して質問をすることにした。
「先生、間違いなく敵と確定している連中で、特に警戒するべき手合いはどれぐらいいるのですか？」
その辺は重要だな。
事前に警戒対象が分かっているなら、ちゃんと把握した方がいいに決まっている。特に今回、俺達はアウェイに突入するわけだし。
事前に備えられる分は備えておかないと。戦いは大抵、戦う前から始まっているからな。
「……今のお前らでも危険というレベルは、意外と多くない。まぁ、お前らのポテンシャルが若手の域だと上澄み中の上澄みだからでもある」
そこまで言われるとはな。俺達も大概強くなったもんだ。
まぁ、俺の残（コスモス・ボルト）神はある種の反則だし、イッセーの昇格を利用した以上進化も同様か。匙の禁手も大概イレギュラーだし、曹操達はほら……禍の団のトップエースだったし。
とはいえ、それで油断していいわけでは断じてない。
先生もその辺は分かっているようだ。ちょっと考え込みながら、資

料を再チェックしている。
「……確定済みの連中でも上級悪魔クラスを単独で打倒できるやつは少なからずいるしな。後でまとめてリストアップする」
これは、やはりかなり苦戦しそうだな。
さて、俺から聞くべきはその辺なんだろうが、他のメンツは――
「……先生、侵入するのはD×Dメンバーだけなのですか？」
――そこで、ルーシアが手を挙げた。
なるほど。確かに俺達だけというのもあれだな。
今回の件は、元々和平に対して不満のある信徒達のクーデターが原因だ。
可能な限り教会や天界が尽力するに越したことはない。天使長のエースが天界のジョーカーが属しているとはいえ、可能なかぎり教会関係者が多く対応するに越したことはない。
そこについては気になるが、如何に？
俺達が注目していると、グリゼルダさんの方が静かに頷いていた。
「それについてはご安心を。バチカンの防衛専門部隊である聖都守護連隊及び、デュナミス聖騎士団からも人員が派遣されるとのことです」
……なるほどねぇ。
バチカン防衛部隊からすれば、雪辱と汚名は晴らしたい。そして教会関係の大規模作戦ともなれば、表の顔役といえるデュナミス聖騎士団も必須。実際精鋭部隊である以上、当たり前の人選だな。
俺達としても手練れ集団が援護してくれるなら、ちょっとは心強くなるってもんだ。実際イッセー達は気合が入り直っている。
そして何より、ルーシアは明らかに気配が変わっている。
デュナミス聖騎士団のトップエース。神の子に続く者（ディ・ア・ド・ローサ）、リュシオン・オクトーバー。ルーシアの実の兄でもある新規神滅具候補保有者だ。
あの傑物を投入するなら当然だが本気の入れようが分かるというもの。ルーシアも兄を敬愛しているから、そりゃ無意識レベルのやる気は変わるだろう。

静かに小さな笑みすら浮かべながら、ルーシアは胸に手を当てる。
「ならば、必ず成功させましょう。私の兄はリュシオンですから、ここで恥ずかしい真似はできませんね……っ」
……少し、懸念事項がありそうだな。

その日の夜、俺はカズヒねぇと一緒の部屋で、ちょっとした記録映像を見ていた。
内容は悪魔祓い達、それも今回の件で参加している者達の戦闘映像。
あの後選出された要警戒対象の模擬戦などを確認しているが、どいつもこいつもかなりできるな。
英雄派の幹部クラスでも手古摺りそうなのが割と多いな。このレベルが参加しているうえ、既に離反していた側の連中まで参加しているなら……確かに苦戦しそうだ。
「まったく。二人っきりの時間ならもうちょっとロマンチックに行きたいんだけどな」
「仕方ないでしょう。私達ってこういう性分だし、十分及第点じゃないかしら？」
そう語り合いながら敵となるだろう者達を確認しつつ、俺は懸念事項を告げることにする。
「ルーシアなんだが、大丈夫だろうか」
「そこは私も不安だったわ。あまり時間がないのも厄介ね」
そうなんだよなぁ。
ルーシア・オクトーバー。俺達の後輩であり、教会の悪魔祓いから選出されたメンバー。
ただ紫藤監察団とも呼ばれる聖ミカエル監察団は、どちらかというと三大勢力が和平を結んでいることのアピール面も強い。
もちろんグレモリー眷属の活動を手伝いこともあるから、無能が選ばれるわけがない。だがそれゆえに、そもそもの大前提として「三大

勢力の和平に好意的」かつ「年齢的に駒王学園に転入できる」ことが必要だ。となると当然だが、学力面でもある程度考慮される必要がある。

その為、優秀ではあるが突き抜けた強みがあるかというと、アニルとルーシアにはないというしかない。

もちろん、二人は毎日頑張って鍛錬をしている。また連戦の過程でレイダーとしての戦力を強化として行っているし、アニルに至ってはヘキサカリバーの一振りを任されている。そろそろコールブランドの量産型も支給されるはずだ。

だが、ルーシアはある意味で優秀ではあっても素質は決して高い方ではない。

人間としての性能は優秀だし、悪魔祓いとしても優秀よりだろう。だが神器を持っているわけではなく、魔術回路があるわけでもなく、星辰奏者の適性があるわけでもない。それでも腐らずちゃんとしようと頑張っているのは美徳だが、最近どうも背負い込みすぎている。

「リュシオン・オクトーバーを意識して前提においているからな。妹として兄に恥じないように、常に頑張っているわけだ」

ただその心構えと、当人の力量がかみ合ってない。

リュシオン・オクトーバーは傑物という言葉すら生ぬるい。イッセーやカズヒねぇとは別の意味で異常の域だろう。

何が異常かといえば精神性だ。神器を禁手に至らせる強い思いを、禁手がどうやって至るとされているか聞いたことで発現させる。更に逆の精神状態に至ることで神器を禁手前に戻し、至らせるだけの強い意志を別の形で持ち直すことで別の禁手に至る真似すら行っている。

控えめに言えば異常だろう。悪魔の駒と併用とはいえ異例の進化を遂げるイッセーや、魔王の血と才覚で覇すら凌駕したヴァーリとも別。意志を覚醒させて文字通り性能を上げるカズヒねぇとも違う。

何より異常なのは、奴がその精神性に対して無自覚だという点だ。

当人は本当にコツの問題としか思っていない。そしてだからこそそれを自分が示すことで前例になろうとしている。

考え方が徹底的にずれている。立派なんだがその所為で、多くの人が歪んでいる節もある。
始末に負えないのが、そんな男が属しているのはデュナミス聖騎士団。ただでさえ性能が向上する星辰奏者から、更に心身共に精強な奴らが属しているわけだ。
周りがそれを参考に、追いつけないながらも頑張っているから認識が修正されることがない。
……俺は正直、とても不安に思っている。
あれは、流石に何とかするべきなんじゃないか……？
「言いたいことは分かるわ、和地」
と、カズヒねぇの手がそっと触れてくれる。
その表情を窺うと、歯噛みしているといった雰囲気すら見せている。
「ただ、同時に時間がないのも事実よ。だからこそ、まずはこの場を切り抜けないといけないわ」
そう語るカズヒねぇに、俺その手を握り返す。
「分かってる。お互い頑張って生き残ろう」
「……ええ、そうね」
そっとお互いに微笑むが、カズヒねぇは少し寂しげだった。
だからこそ、できればと願う。
きちんとそれを知って、できればぬぐう手伝いができればと……心から。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

和地の部屋から出て、カズヒは自分の部屋へと……戻らず、ふと別館の屋上まで来ていた。
和地に恋する自分のことを、否定したいわけではない。
ただ、時々思ってしまうのだ。
「……乙女ねぇ」
そう、小さく呟いてしまう。
彼女が今の和地(田知)を見ることは一度としてないのだ。
「……我ながら、どこまでもどうしようもないことね……っ」
そもそもなんでこうなったのか。和地は何で生まれたのか。
その流れを考えればどうしようもなく、何よりそれを自分が言うことが問題だ。
それでも思ってしまう、自分の情けなさに耐え切れず—
「……くそったれ……っ」
—その苦悶を、一人の時に言わずにはいられなかった。

「「……っ」」

—それが聞かれていることに、まだカズヒは気づかない。

聖教震撼編　第五話　アマゴフォースの始まり

イッセーＳｉｄｅ

作戦決行日、俺達はバチカンから数ｋｍほど離れたところの地下に来ていた。

いや～。こんなことで海外に行けるとは思ってなかった。できれば観光もしたいけど、そういうわけにはいかないしな。

「まさか、バチカン市国に入れるとは思ってませんでした。……しかも地下の秘密ルートからとは」

「同感ね。悪魔がバチカンに入れるというのは和平的にはいいのでしょうけど、今回のような事情だとなおのこと予想外よね」

シャルロットとリアスも複雑な気分みたいだ。

まぁ、かつては修道院にいたシャルロットや、元七十二柱のリアスからすると、俺なんかよりよっぽどバチカンって重いだろうしなぁ。

それにしても、教会のクーデターから発展した事件に対応する為に、悪魔の俺がバチカンに、秘密ルートで入るとはね。

生きてると凄いことに巻き込まれるもんだ。いや、俺は二回ぐらい死んでるようなもんだけど。

そんなことを思いながら、地下部屋の壁が動いて現れた通路を歩いていく。

神聖糾弾同盟は、バチカン市国をいわゆる天守閣に近い立ち位置で籠城しているらしい。制圧したのはバチカン市国を中心とする直径十数ｋｍ。そこかしこが何かしらの宝具で加護を与えられたのか、小雨が毎日数時間降り注いで、その水分で実を作る木々や蔦がわんさか生えているからすぐに分かるとか。

実際外から見たけど、異能に縁がある奴なら一発で気づくレベルで緑が生い茂っている。異形の技術でテレビやカメラでも気づかない

ようにしているけど、うっかり才能のある奴が見たらパニックを起こしそうだよなぁ。ＳＦ……というか電脳要素が強いエロゲバル○スカイ真ルートのあれをイメージであんなのがあった気がする。

そして地下ルートも意外と綺麗だった。歴史は感じるけど定期的に整備はしているみたいで、あんまりカビ臭いとか埃っぽいといった感じはしない。

なんでも枢機卿レベルが緊急避難する為の隠しルートらしい。他にも制圧された際の奪還作戦用とか、プルガトリオ機関が使用する特殊ルートとか、そういった地下ルートがバチカンや近くの施設に繋がっているとか。

で、俺達は何人かのグループをいくつか作ってそれらのルートから別々に侵入。フロンズ達が率いる大王派や各勢力合同の奪還部隊が外側から仕掛けると合わせて作戦開始。遊撃部隊として教会側の反神聖糾弾同盟と連携して戦うことになる。

このルートでいくのはグレモリー眷属を中心とするメンバーだ。

リアスを筆頭に俺とシャルロット。他のグレモリー眷属はゼノヴィアとアーシア。残りのグレモリー眷属は別グループに分散配置だ。本当はいくつかのグループで複合することで部隊間の連絡を取りやすくする話だったけど、相手側の要望もあってその二人を連れてくるように言われた形だ。

で、残りのメンバーなんだけど……。

「しかし、禍の団だった俺達がバチカンに入れるとはね。……敵の本丸だったはずなんだけど」

「そういうものでござるぞ、曹操殿。戦国乱世では敵味方が入れ替わるなど珍しくもござらん」

「現在だと、流石に少し変わると思うけれどね」

……英雄派からの参加メンバーだ。

厳密にいうと、帝釈天がスポンサーを務めているＰＭＣ事実上の私兵集団のアマゴフォースになる。そこからＣＥＯ兼英雄派サブリーダーの一人だったサイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナに、英雄派首魁の曹操と、サイリンのサーヴァントである山中鹿之助が参加だ。アマ

ゴフォースから他にも参加者がいるけど、外周部隊に回っている。
正直ちょっと抵抗があるけど、曹操が「どうしても会いたい人がそこにいる」ってことで参加が許された。
それに曹操は聖槍の所有者だ。信仰心の強い信徒なら心を奪われるほどに、聖槍は強力。ガチの信徒なら効果があるかもしれないと、許可が出た形になる。
ただちょっと気まずいな。沈黙が痛いというかなんというか。
アーシアはこういう時強く出れないし、そもそも深入りさせたくない。ゼノヴィアも、先代のデュランダル保有者に会うからか、ちょっと緊張している感じだし。
いや、ここで変な沈黙とかでギクシャクしてるのも問題だ！
こういう時こそ馬鹿の俺の役目だ。ちょっと踏み込んでみよう!!
「……そういえば、アマゴフォースってめっちゃすごいＰＭＣだっていうよな!?　やっぱり禍の団から技術を貰ったりしてそうなったのか!?」
こういう世間話は聞いた方がいいよな。うん、ムードをよくするぐらいじゃないとダメだろうってわけで。
でも実際、それが理由な気がするよなぁ。
いくら星辰奏者（エスペラント）だらけだって言っても、俺達とそこまで年が変わらないサイリンが、帝釈天の傘下に入る前から世界的に有数のＰＭＣを運営してるんだから。それぐらいないと逆に不思議だ。そもそもよく運営で来ているよなぁとは思う。
ただサイリンは、それに対して苦笑しながら首を横に振った。
「中盤以降はそれもだけれど、一通りの基盤を作るのに禍の団は関わってないわ。むしろサウザンドディストラクションで流出した技術を提供した部分もあるわね」
あ、そうなんだ。
「そうなの？　……というより、世界的ＰＭＣを運営する貴女はなんで英雄派に入ったのかしら？」
リアスもそこが気になったのか食いついた。
いや、確かにそこは気になるな。

元々基盤をしっかりしている表の企業を運営しているわけだし。わざわざテロ組織の禍の団に付くこともないだろうし、なくても人生成功してるし。

英雄派って、俺が戦った影使いとか正気で参加しているメンバーも割といたしな。後継私掠船団とか混沌回帰旅団とかはアレだけど、そういうやつばかりじゃない。あいつは相当悲惨な人生を送ってきたからこそ「英雄」を目指していた。

話を聞く限り、アマゴフォースの基盤を築けたサイリンは勝ち組側だ。わざわざ英雄を目指すだけの理由が分からない。

いや、それは曹操もなんだけど……なんでだろう？

なんていうか気になっていると、サイリンは少し考えこんでから苦笑した。

「……そうね。あまり面白い話でもないけれど……同情でちょっとぐらい優遇してくれるなら好都合かしら？」

サイリンはそう言うと、歩いている通路の先を見る。

「まだまだ時間は掛かりそうだし、時間潰しに聞いて頂戴。……私が何で、英雄派に入ったのかを」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

そうね。まずは勘違いをただしておこうかしら。

私はアマゴフォースという基盤がある勝ち組じゃない。コンラ達みたいに……あら、そっちは知らなかった？　あなたと戦って過去について行ってた影使いのことよ。彼らみたいな側よ。

はっきり言うと、そもそもアマゴフォース自体が英雄派の前身と

言ってもいいわ。言い換えれば、私こそが英雄派の結成メンバー、その縁とアマゴフォースを経由する資金援助もあってこそ、私はサブリーダーの一人なんてやっているの。

元々私はサウザー諸島連合の生まれ。第二次大戦前に米国に流れ、大戦の勃発で居場所がなくなると考えて逃げた日系人と、カースト問題から逃れる為に密入国で逃げてきたインド人が結婚して、ザイアコーポレーションの前身といえる企業に就職したそうよ？

で、その縁と才覚があったのか、私の両親はかなり要職についていたわ。義務教育はもちろん、高校も大学も金をかけてくれたぐらいで、自分で言うのもなんだけど勝ち組だったわ。……サウザンドディストラクションまではね。

あのあとサウザー諸島連合は衰退を始めていると言ってもいい。それほどまでにザイアコーポレーションの壊滅と、その裏にあった対異形組織撲滅における大打撃は酷かった。そうなってしまうほどに、サウザー諸島連合はザイアコーポレーションのおまけに過ぎなかったのよ。

私の両親はザイアの表側で裏側なんて知らなかったけど、だからこそ致命的だったわ。ザイアは本質的に「神祖」を名乗る者達が主導権を完全に握っていたみたいだけれど、能力が相当高いからこその躍進だったみたいでね。彼らが幸香や疾風殺戮ｃｏｍの連中に滅ぼされたことで急激に滅びたの。両親は能力はきちんとあったけれど、神祖達の介入なしにそれを最適に扱うことはできなかった。

何とか持ち直そうと色々動いたみたいだけれど、それはすべて失敗したわ。貯金や私財をほぼすべて失い、常にサポート万全で致命的な失敗を経験しなかった両親は、借金をしてまで博打を打つことを考えなかった。同時にそれまでの生活が当たり前すぎて、それができなくなることを悟った二人は……いえ、一族は死を選ぶことにしたの。

……凶悪なテロを繰り返した人達に、同情できるのは美徳かしらね。

まぁそんなわけで私は無理心中に付き合わされかけたわ。何とか逃げようとしたけれど、一族は誰もかれもが、悲惨な人生を送らせる

よりこのまま終わる方がいいと思ってたみたい。見逃そうとかそういう発想はなく、私は追い詰められたわ。
本当に、そういう意味では私は一族で異端だったのでしょうね。私は悲惨な人生を送る可能性を分かっていたうえで、それでも生きる方を選んでいた。どうせ死ぬのなら前のめりに死ぬし、ここから巻き返して何かを掴みたかった。
……ええ。私にとって英雄とは、何かを掴み取った者をいうのでしょう。どのような形であれ、私は知らぬこととはいえ英雄になることを求めていた。
だから、奇跡的に私は曹操と出会い、同時期に行われていた聖杯戦争と繋がってアーチャーを召喚したわ。
ただそこからが大変だったわ。阿鼻叫喚と言ってもいいのかしら？
一族は飲んでいた毒が回ってバタバタ倒れ始めるし、アーチャーにはあのドタバタもあったけど殺されかけたわ。いえ、本当に殺しに来たというか、毒で死ぬ前にアーチャーに殺された親族もいたわね。曹操が守ってくれなかったら、私も死んでいたもの。

イッセーＳｉｄｅ

「いろんな意味で何考えてんの!?」
俺は思わず全力でツッコミを入れたよ。
いや、マジで何やってんのこのサーヴァント。
なんで召喚された直後に、自分のマスターとその親族を殺しにかかるんだよ。っていうかお前の主君筋だろ!?

ただ、俺がツッコまれた鹿之助は少し恥ずかしそうに目を伏せていた。
「流石にあれは短慮すぎたと反省しておる。……奴らを伝手として尼子家復興の祖となりえる者を探す余地はあったでござるからな」
「そちらですか？」
頓珍漢な言いぐさに、シャルロットも呆れ顔だ。
いやちょっと待ってマジで待って。なんかまったくもて訳分らないんだけど。
もしかしてこのサーヴァント。この場で一番あれなんじゃないか？
なんだろう。曹操達が苦労人に見えてきた。実際ハーデス達にいいように利用されたり、幸香達に思いっきり裏切られて酷評されてるし。
「……イッセー。あなたのおっぱい覚醒（常套手段）は全方位で苦労させますからね？」
相棒のツッコミが厳しい。
畜生。自分でも時々意味不明なことが起きるから文句も言えない。
特に英雄派、かなり意味不明なおっぱい事態に巻き込まれてるからなぁ。京都では痴漢を大量に作って、おっぱいゾンビでおっぱい召喚。サマエル関連ではおっぱい紳士歴代のサポートでおっぱいに譲渡しておっぱいバッテリービーム。曹操との決戦も、おっぱいで赤龍帝化でおっぱいで倒したし。
……話を戻そう！　このままだと、俺が一方的に不利だ！
「あの、山中さんは何故サイリンさんやそのご家族のかたを殺そうと？」
アーシアありがとう！
ちょっと引き気味なアーシアだけど、だからこそ話が元に戻ったし。
「ふむ。むしろ当然でござろう？」
なんかあっさり答えているけど意味が分からない。
「拙者は尼子家に使える者。必然、尼子家の名を守る気もないどころ

か、汚す輩を討ち取るが役目にござる」
……だから意味が分からない。
俺達がちょっと首を傾げていると、リアスが納得した感じで肩を落とした。
納得してるんだけど肩を落とした。もうさっぱり分からない。
ゼノヴィアも同意見だったのか、リアス部長に首を傾げてるし。
「リアス部長、どういう意味か分かったのか？」
「ええ、この感性はむしろ私達側に馴染み深いわ」
こめかみに手を当ててため息を吐きたくなっているリアスは、同情の視線をサイリンの方に向けている。
サイリンもなんか納得しているのか、苦笑をリアスに向けている。
「流石はリアス・グレモリー。そちらも苦労しているようね」
「ええ。要はアーチャー（彼）は尼子家に仕えているのでしょう？　当然、尼子家としての態度と責任を果たせない者に忠義は尽くさない……いえ、マスターが尼子家だからこそ絶対に要求されるわけね」
……あ、なるほど。
つまり尼子家という存在に仕えているのであって、尼子家の人間に仕えているわけではないと。
俺達が納得していると、アーチャーはうんうんと頷いていた。
「無論。拙者が欲すは尼子家の再興であるがゆえに、それをせぬ気がないどころか名を汚す者を認める余地はない。……まぁ、現代の知識や言い分とすり合わせ、国の建国までは求めぬでござるが」
や、厄介なタイプだった……っ！
俺は正直ちょっと引いているけど、曹操も苦笑気味だった。
「で、その辺りのすり合わせと聖杯の運用方法を攻防を繰り広げながら語り合った結果が、鹿之助の武力を生かして現代でも通用する星辰奏者（エスペラント）主体のＰＭＣ企業での成功さ」
「主が戦闘経験も鍛錬も積んでないのは中々に苦労したが、才能はあったがゆえにやりようはあり申した。曹操殿という一騎当千の益良雄も居っては、負ける方法を探す方が困難でござったがな」
うんうんと頷きながら曹操とアーチャーが言うと、そのままサイリ

ンは小さく微笑んだ。
「そういうわけで、アマゴフォースの地盤はそこで完成。そしてそこからくる人材探しや、聖槍に引かれるように集まった者達もあって英雄派の中核が完成したわ。あとはいくつか亜種聖杯戦争をして……こうして一大ＰＭＣの誕生というわけよ」
ひ、人に歴史ありだな……。
「……少し意外でしたね。曹操（あなた）が見ず知らずの人間を打算抜きで助けるとは」
「確かに。話を聞く限り、お前はわざわざ介入して助ける手合いでもなさそうだけどね」
シャルロットとゼノヴィアは曹操にちょっと驚き気味だけど、曹操は寂しげに笑うと聖槍に視線を向けた。
まぁ確かに。話を聞くと颯爽と助けに入ったうえ、突然現れたサーヴァントから身を挺してサイリンを守り通していたみたいだし。
ちょっと禍の団をやっているころの曹操からは想像できないな。
「……その直前に似たような経験をしていたことを知ってね。金に振り回されて人生が終わらされる彼女を見てられなくてね」
……。
よ、よく分からんが、こいつもコンラやサイリンと同じで色々大変なことをしていたみたいだな。
う～ん。俺はレイナーレに殺されるまでは普通にスケベな高校生をやっていただけだったからな。どうしてもその辺のキッツい過去にはついていけないところがある。
ただまぁ。
「ま、その力を俺達や子供達の為に使ってくれるんなら、俺から言うことはなにもねえよ」
うん。馬鹿な俺にはこれぐらいしかいうことがないな。
色々あったし殺されかけたりしたけど、今の曹操達は一応味方だ。
ヴァーリチームしかり、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）しかり、敵だけど今は味方も多いしな。むしろ後継私掠船団はフロンズも含めて油断できないけど。そもそもアザゼル先生やゼノヴィアだって、和平結ばれるまで

は敵なんだし。
「頼りにしてるぜ？　たぶんだけど、もっとやばい奴らとこれからも戦うことになりそうだからさ？」
俺がそう言うと、曹操達はちょっと目を丸くしていた。
ん？　なんか変なこと言ったか？
リアス達も顔を見合わせてなんか笑ってるし。
俺がよく分からなくて首を傾げていると、リアスがそっと俺の隣に立つと頬にキスをしてくれた。
「そういうところをなくさないでね。愛しのイッセー」
「な、なんか分からないけど頑張ります！」
よく分からないけど、リアスに愛してもらえるよう頑張るぜ!!

聖教震撼編　第六話　白龍製麺大繁盛

祐斗Ｓｉｄｅ

地下道を歩く僕達は、少し緊張感を感じながら歩いている。
僕達が向かう地下道が繋がってる先には、助祭枢機卿のエヴァルド・クリスタリディ猊下がいる。
エクスカリバーをすべて使いこなすことができると言われた、生ける伝説。当然のように支配（エクスカリバー・ルーラー）の聖剣を核とするヘキサカリバーを与えられた、現在最強のエクスカリバー使い。
そんな彼のもとに行くメンバーは、かなり多様性に満ち溢れているだろう。
グレモリー眷属からは僕だけとはいえ、オカルト研究部からは天使のイリナさんに、堕天使側のリーネスが参加している。
更に転生天使からはリーダーのデュリオ・ジュズアルドとシスター・グリゼルダ。
更にヴァーリチームから美猴とアーサー・ペンドラゴンが参加していた。
……チームＤ×Ｄだけとはいえ、かなりの複合チームといえるだろう。また相応の戦力が集まっているといえる。
「いや～。なんかここが一番Ｄ×Ｄらしいチーム構成みたいだね。あ、腹ごしらえにチュロス食べるかい？」
「お、いいねぃ！　辛気臭い道を歩いてばっかりなんで、気が滅入ってたんだぜい！」
デュリオが差し出したチュロスを、あっさりと美猴は受け取って食べ始める。
確かにいい香りで、少し空腹感を刺激するね。これだけでも出来が良い事が分かるというものだ。

「……デュリオ。もう少し緊張感というものをですね」
シスターグリゼルダはため息をつくけど、デュリオはむしろ笑いながら首を振る。
「まぁまぁ姐さん。あんまり辛気臭い顔ばっかりしてると、いざって時に力でなくなっちゃうって」
「それもそうですね。今のうちに少し食べておきましょうか」
意外にもアーサーが便乗して食べ始めて、そこから僕達も流されるようにチュロスをとって食べることにする。
……本当に美味しい。匂いから言って出来立てだと思ったけど、材料から作り方まで上等なものだからこそ出せる味だろう。
「最近よくクックスと話してたけどぉ、もしかして手作りかしらぁ？」
「そりゃもう手作り！　いやぁ、クックスって料理を作るのも上手いけど、教えるのも上手いね！」
「こ、これは私もパン作りを教えてもらうしかないかも！　ダーリンにごちそうするんだから!!」
リーネスやイリナさんも話に入って、緊張感が必要だけど和やかな雰囲気になってきている。
ちょっと苦笑したくなるけど、まぁ……まだ大丈夫かな？
そうして歩いていると、デュリオの笑顔は少し苦笑いのそれになっていた。
「ただまぁ、こんなことになったのはゴメンね？　今はもうちょっと我慢が大事だと思うんだけど、その辺が足りないのが多くてさ？」
彼も転生天使である以上、当然だが教会の戦士だったはずだ。
以前シスターグリゼルダから聞いた話では、戦災孤児で煌天雷極に目覚め、そこから戦士になったらしい。
同じような教会の子供達に優しく、転生天使になったのは神器に対する抵抗力が足りない子供達を思ってのこと。美味しい物巡りもそれを作れるようになって子供達に作ってあげることが本命らしい。
とても優しい人で、だからこそこんなことが起きたのは残念で仕方がないのだろう。
「最近になって、神の子（グリゴリ）を見張る者（グリゴリ）の技術で神器の影響を抑えられる

かもしれないって話もあるんだけどねぇ。逆にそれが不満な人も多いみたいでさぁ……」
「そんなに堕天使の力を借りるのが嫌なのかねぃ？　便利で役に立つならいいじゃねえかい」
　美猴が不思議そうな顔になるけど、確かにね。
　聖書の教えを強く信仰する者にとって、天から追放された堕天使や、悪徳を司るとされる悪魔は敵とみなしていたわけだ。その中には聖書の神ではない神を主体とする他神話体系も含まれているし、吸血鬼や妖怪は尚更だろう。
　それらの力を使うことに不満があるのは分かる。抵抗を感じてしまうのは仕方がない。
　ただ、それで子供達が早くに死ぬのを肯定するのは違うんじゃないだろうかと思う。
「考え方の違い、ではないでしょうか」
　と、そこでアーサーがそんなことを言い出した。
　僕達の視線が集まる中、リーネスも何か理解できているのか少し難しい表情になった。
「確かにそうねぇ。貴族とかが特に目立つけれどぉ、重要なのはどう生きるかって人は多いものぉ」
「そういうことです。世の中には手段を拘らず長生きするより、早死にしてでも手段に拘りたい人種という者はいますからね」
　シスターグリゼルダは、リーネスの言葉に不満げに肯定を返していた。どうやらそういう人がいることは事実らしい。
　なるほど、そういうことか。
　そう言われると、僕達も少し理解できるかもしれない。
「……確かに、僕もリアス部長を裏切ってまで命を守ろうとは思わない。彼らにとって堕天使の力を借りることはそういうことなのか」
「あ～……確かに。私も和平が結ばれる前だったら、転生悪魔にならなきゃ死ぬなら死ぬ方を選ぶかも」
　僕もイリナさんも少し理解できてしまっていたが、皆がそういうわけではない。

「面倒くさいな、そりゃ。もうちょっと気楽に生きられないのかねぃ？」
「そこは同感だなぁ。子供達を早死にさせてまで手段なんか選びたくないなぁ、俺は」
美猴やデュリオは理解できない方のようだ。
……うん。これは僕達の中でも理解すらできない人は多そうだね。
逆に理解を示しそうなのは……一人真っ先に思い付いた。
「カズヒはそういう意見、多少は理解しそうだね……」
「「「「あぁ……」」」」
全員もれなく納得してしまった。
正義を報じる必要悪を、己の生き方として完全に定めているからね。必要でない悪徳を成してまで生きながらえようという発想は全くないだろう。彼女のその辺徹底している。
良くも悪くも己の主義信条を貫くからね。ダブルスタンダートが滅多にないのはいいことだけど、融通が利かないといえば利かないよね。
まぁ、必要悪の範囲内と考えることはあっても、もろ手を挙げて喜んだりもしないだろうけど。自他問わず厳しいけど、他者に関してはあれで融通を利かせてくれるしね。
「……まぁ実際、教義的には悪魔や堕天使の力を借りて生きながらえれば、死後は地獄に落ちるだろうと発想してしまうのが信徒ですしね」
「和平にすら納得できてない者達が、それらを納得できるわけもありませんか」
グリゼルダさんやアーサーはそう言うけど、デュリオは明らかに不満顔だ。
「……それで子供達が早死にするのがいいことってのは、俺には到底受け入れられないってもんだよ。ま、そういう連中がいるのもわかっちゃいるけどさ」
……渋い表情だけど、心当たりがあるのだろうか。
「もしかして、そういう専門の暗部があるのかしらぁ？」

「……ええ、私達も相応の立場になって初めて知る暗部中の暗部ですが」
リーネスにそう答えるグリゼルダさんは、そう言いながら苦い色を顔に浮かべている。
なんとなく分かるよ。おそらくはそういうことなんだろう。
この事件は根本的に、教会の者達が和平についていけてないことに端を発している。
信仰心から教会に残りつつも、和平そのものに不満があった者達の爆発が発端。同時に信仰心を持ちながらも、和平を結んだ天と教会を認められなかった者達。更に強い信仰心を持っているがゆえに、そんな事実を教えられて義憤に燃えてしまった異能に関与してない側の人間達。
そんな者達が集まり、あまりに見過ごせない規模の事態を引き起こしたのが神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）。それはすなわち、今の教会の在り方を受け付けられない者達が主体となる組織だ。
そして教会が堕天使や悪魔の力を借りて神器による負担を取り除こうとする動きに、存在していたというそういった者達を対象とする暗部組織。
嫌な気分になる中、アーサーは興味深そうに眼鏡を動かしていた。
「……事実上の暗殺専門部隊、となりそうですね。それはそれで戦い方はありそうですが。ちなみに部隊名は？」
アーサーに聞かれ、シスターグリゼルダはその名を告げる。
「……ミゼリコルデ連隊。既に解散されてますが、確認された全員が神聖糾弾同盟に与しています」
これは、中々油断できない戦いになりそうだね……。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

サイラオーグ・バアル。バアル家次期当主であり、チームD×Dに自身の眷属だけでなく、冥界第四義勇師団を再編したレオニクス義勇軍団ごと所属している上級悪魔である。
本来家柄もあって大王派の若手と数えられるべき人物だが、その考え方も将来的なビジョンも魔王派のそれ。それでも戦力的価値から大王派と利用し合う関係だったが、ある程度改革することで本命を死守するやり方のシューマ・バアル一派台頭に伴い、何度か苦渋を飲まされた末に魔王派同然の立ち位置に追いやられている男だ。
生まれつき魔力を持たないながらも、鍛え上げた武威によってバアル次期当主の座をもぎ取った男。その技量はD×Dでも上位陣。眷属でもある神滅具、獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）と連携すれば、近接打撃戦限定なら最強格となる。
そんな彼もまた、神聖糾弾同盟の陣地に潜入する部隊の一角として行動していた。
「……気を付けておけ。騙し討ちされる可能性は低いそうだが、神聖糾弾同盟側に気づかれている恐れはあるからな」
「うっす旦那!!　俺も会長の名を汚すような真似はしないんで!!」
「ま、もし相手が仕掛けてくるなら……ぶった切りるのみでさぁ！」
そう語る匙元士郎とアニル・ペンドラゴン。
双方ともにメンタルが近しいこともあり、先頭を歩く三人が警戒をしている形になる。
「あらあら。アニル君も気合が入ってますわね？」
「……まぁ、アニルは悪魔祓いですし」
後ろに続くは姫島朱乃と塔城小猫。
メンバーの戦力バランスの調整や、後詰にも相応のメンバーを揃える必要があることを踏まえた人選である。
そして、今回参加するのは彼女達だけではなく―
「まっさかバチカンに私が行くにゃんてねぇ？　ま、白音の仕事ぶりでも見ようかにゃん♪」

「緊張感というものが……っ」
「まぁ、腕は実際立つし……」
クイーシャとレグルスに多少警戒されながら、黒歌が興味深そうに周囲を見渡していた。
緊張感が欠けているその姿に呆れる者も多く、小猫は少しいたたまれなくなっている。
「……姉さま、そういえばヴァーリ・ルシファーは来てないんですか？」
小猫がそういったのは、ある意味で空気に耐えれない感覚に近い。
だが、その言葉にだれもがそういえばといった感じで首をかしげている。
ヴァーリ・ルシファー。ルシファーの末裔であり、戦闘狂でもある今代の白龍皇。
手練れが数多く関わっている神聖糾弾同盟。更に事態の悪化に伴って殺害すらある程度は許可されているこの状況下は、殺し合いすら楽しめる彼にとって垂涎物だ。実際、美猴とアーサーは参加している。
それが少し気になっていたが、黒歌は視線をついと逸らしていた。
だが沈黙に耐えかねたのか、黒歌は観念したらしい。
「……天界でラーメン作ってるわ」
ただし、内容が意味不明すぎた。
「ほら、赤龍帝ちんと天使の子が、子作りできるようになる道具があったでしょ？　あれを利用して例の白龍製麺で、天界の汚染された地区に応急処置してるみたいだにゃん」
……
沈黙は、割と長く響いた。
「……そういえば、モデルバレットの所為で汚染が酷かったそうですね、第二天」
実際、クリフォトによる天界の襲撃で一番被害が出ているのが第二天だ。
モデルバレットが全力で星を開帳したことで、第二天は深刻に汚染

されている。
仮にも食い止められるほどの戦闘だったにも関わらず、敵の突入地点だった第三天や、第五天にまで突破される為蹂躙されたと言ってもいい第四天より被害は大きい。それほどまでに非常事態だ。
だが、そこの光明がある。
天使が堕ちることなく、悪魔と性交することを可能にするドアノブ。その力があれば、汚染の影響を抑え込むことはできるだろう。量産こそ時間はかかるが、光明にはなった。
そこで、半減で吸収した力を摂取することで再現できるように加工する白龍製麺だ。
ラーメンを食べることで疑似的にドアノブの力を発揮できるようになった天使達が、結界を作ることで汚染の影響を一時的に取り除く。それにより、天界の復興速度は見違えるほど高まっているのだろう。
「……ヴァーリも流石に渋ったけど、レーティングゲーム形式でセラフから選抜された天使達と模擬戦で切るってことで呑んだらしいわよ？」
「……釣れる餌が分かりきっている相手って、そういう時楽ですよね」
皮肉満載な小猫の返答だが、黒歌も特に否定しなかった。
だが空気は何とも言えない。それも仕方がないだろう。
未曽有の大被害を被った天界。その天界を魔王の末裔がラーメンで救う。字面だけならギャグマンガかと思えるが、まごうことなく事実である。色々酷い。
「カズヒ先輩、胃薬呑んだ方がいいんじゃないっすかね」
アニルがそう呟くが、そこで首を横に振ったのは朱乃だった。
「いえ、どうやら別件で既に胃痛を患っているようですわ」
その言葉に、誰もがふと悟っていた。
今回の別ルートを移動する、自分達の仲間。
カズヒ・シチャースチエは、今回かなりの大ごとに巻き込まれるのだからと。

聖教震撼編　第七話　地下を歩く比翼連理

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

カズヒ・シチャースチエもまた、バチカン及び近辺の教会施設に繋がる地下道を通っていた。

だが、その地下道は他に比べると細く拙く、掃除も行き届いていない。

その理由は単純明快。この地下道は使われなくなって久しく、また性質上そちらに資金を回しづらいところがあるからだ。

「……拷問を前提とする暗部組織が使用した、本部近辺に繋がる地下道かぃ？　ま、どこもそういう連中は必要な時代があったもんだぜぃ」

「ご理解いただけて感謝します。そういうわけなので、色々環境が悪いのはご容赦を」

初代孫悟空にそう返すカズヒは、戦闘を歩きながら周囲を警戒する。

この未整備状態ならトラップが仕掛けられている可能性は低いが、万が一というものがある。

それを暗部の経験則や鍛錬をもとに警戒しつつ、カズヒは薄暗い地下道を歩いていく。

このルートは孫悟空が言った通り、拷問を前提とする暗部組織が使用していたもの。そして施設は封鎖されているが残っている。つまり、この道に敵がいるのならば……それは危険な手合いになる。

それと道の狭さもあり、カズヒはこの道を提案した際、人材を特に選別している。

戦力として最強格、こと繊細な戦闘を可能とする技量を持つ初代孫悟空に頭を下げて同行を願い出た。更にその上で、二人だけだとカ

バーしきれない部分も考慮している。
「……なんというか、ちょっとわくわくしますわね」
「はいはい。出た途端に仕掛けられるから……警戒はできてるね」
となることで、選抜されたのはヒマリとヒツギ。
厳密にいえば、少人数での活動ゆえにバチカンにも何度か入っている土地勘を持つヒツギ。そしてヒツギとの連携面から星辰光を踏まえてヒマリになる。
神器の片方が不調気味なのはネックだが、それを踏まえても二人の能力は十分以上。初代孫悟空という鬼札を持っていることを踏まえれば、少数精鋭を体現している構成だ。他のメンツから文句が出かねない戦力だろう。
そして同時に実際問題、更なる札もできかけている。
「そういえば、カズヒ。夢幻召喚（インストール）できるようになりましたの？」
それをヒマリが指摘して、会話の流れがそちらにずれる。
「あ～、なんか直前で繋がったやつ？　どんな感じなの？」
「確かに気になるねぃ。今のところ強力かつ能力的に相性が良いのが出て来とるからなぁ」
ヒツギも孫悟空も気にしているが、当然だろう。
サーヴァントの力をサーヴァント側の意思とかみ合う形で憑霊させる、Dチェンジャーによる夢幻召喚。
夢幻召喚そのものが前代未聞レベルの事態であり、また英霊側の合意をもってしてはじめて成立する仕様ゆえに、ポテンシャルはかなり引き出される。そして先達であるゼノヴィアと朱乃がミザリのサーヴァント撃破に多大な貢献を果たしている、その事実も大きい。
それがある意味で最終兵器といえるカズヒが、そんな夢幻召喚を可能とする。
誰もが気にして当然ではあるのだが、カズヒは視線を逸らすと何とも困り顔になった。
「それがさっぱり発動できなくて」
「……そいつぁ妙な話じゃな。原因は分かったのかい？」
？」

孫悟空にそう言われるが、カズヒも首を傾げるしかない。
「私側の能力が絡んでいるバグではないかと、リーネスは見ています。……まぁ私の場合、ありえそうな能力がいくつかありますから」
自己分析でも二つほど、カズヒは心当たりがある。
そもそもサーヴァントが人々の祈りが集った存在を召喚するようなものだ。そしてカズヒの星辰光（アステリズム）は、人々の想念を己に集める能力と言っていい。性質上二重でかかるバグが発生してもおかしくない。
また夢幻召喚は魔術的に英霊の力で己を強化する。そしてカズヒの固有結界は、自身の魔術的要素を魔術的に超強化する。これまた二重になってバグに繋がりかねない。
その為リーネスが仮説としているのは―
「固有結界か星辰光の発動、もしくは同時発動で初めて出せるようになるのでは……というのが有識者（リーネス）の見解です。正直時間がなかったので、試してみる余裕を捻出できませんでした」
かなり難解な事態であることを踏まえると、安全策をきちんと施してから行うべき状況だろう。間違っても緊急事態に実働部隊が行えるものではない。
しかし懸念事項として、それを使う必要性に迫られる可能性もある。
すなわち―
「初代殿にご同行を願いしたのは、半分弱がそういうことです。お手数を色々な意味でおかけして申し訳ありません」
「なるほど、そりゃ仕方ないわい。ま、お前さんが暴走したら止めれる奴は少ないしな」
チームD×D最終兵器と言ってもいい、カズヒを止められる戦力は非常に少ない。
総合力がかなり高いこともそうだが、強い意志力で文字通り瞬時に強化することすらあるカズヒは、更に暗部出身の手練手管もあって打倒が困難な部類だ。極まった光は一歩間違えると周囲の目を潰すことに繋がりかねない諸刃の剣である。
確実性を期すのならば、総合力が高いテクニックタイプが最適解。

神仏であるデメリットアヴェンジングシェパードの対神特性能を踏まえても、初代孫悟空が抑え役に選ばれるのは当然ともいえる。
そして更に、それは半分でしかない。
それを改めて認識させる為、カズヒは周囲を警戒しながらも言葉を止めない。
「加えてそれを踏まえて半分どまりにするだけの危険性があります。神と魔王を滅するだけの力には、それこそ神や魔王クラスが必要だということです」
その言葉に、誰もが小さく頷いた。
「……神滅具の反応あったんだって？　やばいよねぇ」
ヒツギがそう苦笑いするのも仕方がない。
本来一種一つだけであり、だからこそまだ世界のバランスが取れているのが神滅具だ。
それがサーヴァントという系譜を利用することで、一種類が多数存在するという異例な事態を巻き起こす。世界の調和を考えれば、ここまで危険な事態もそうはないだろう。
そして何より―
「その反応が拷問を主体とする暗部組織に確認された。……懸念対象だとすれば、真っ先に潰すべき相手ですから」
―それほどまでに危険な相手が、神滅具をもって召喚された。
この戦いにおける台風の目になりかねない脅威を前に、カズヒ達は気合を入れ直していた。

和地Ｓｉｄｅ

比較的広い地下道を通りながら、俺達はバチカン近辺に潜入を試みていた。
チームD×Dが突入すると言っても、全員が一丸になって突入するわけではない。そんなことをした瞬間に総力を挙げて迎撃されるからな。
だからこそ、外周部の担当を置いたうえで分散して潜入。大王派や教会の戦力と共に、包囲制圧を行うと同時に内側から奇襲をかける。
そういうわけで、俺を含めて潜入部隊は合計五つに分かれて行動している。
ヴァスコ・ストラーダ司祭枢機卿のところに名指しで向かう、ゼノヴィアを連れたリアス部長達。
エヴァルド・クリスタリディ助祭枢機卿のところに向かう、リーダーであるデュリオ含めた木場がいるチーム。
教会守備部隊である聖都守護連隊の詰め所に向かっている、サイラオーグ・バアル達。
かつて使われていたルートを通って、閉鎖された拷問部署に向かっている、カズヒねぇと初代孫悟空のリーサルウェポンチーム。
そして、デュナミス聖騎士団の詰め所に繋がるルートを通る、俺達のチーム構成だ。
で、そのメンバー構成だが―
「……クリア。今のところ罠はなさそうね」
「そうですね。魔法による検知でも敵意ある者はいないようです」
―戦闘で各種トラップや待ち伏せを警戒しながら進んでいる、鶴羽とロスヴァイセさん。
最後尾で警戒しているのが、カバーに定評がある俺。そしてその真ん中辺りにいるのが―
「……兄さんがいてくれるなら頼りになります。それにギャスパー君も頼りになりますからね？」
「は、はいいいいっ！　死ぬ気で頑張るよっ!?」
―ルーシアとギャスパーだ。
今回俺達が向かうルートは、デュナミス聖騎士団から選別された精

鋭部隊が派遣される為、人員数は少なくていいと判断されている。
そういうわけでオカ研メンバーを主体にしつつ、奥の手的な切り札で鶴羽だ。複数の国家を担当する守護聖人であるフランシコ・ザビエルという大物ネームバリューと、教会暗部の伝説的人物であるピエール・コーションのダブルコンボを宿しているからな。いざという時に心理的影響も強そうだ。
できればヒツギも連れていけたら良かったが、カズヒねぇ側が可能な限り人数を絞る為、バチカンに多少は土地勘のあるヒツギを引き抜かれたわけだ。まぁデュナミス聖騎士団とはちょくちょく共闘しているしやりようはあるだろう。
まぁ、ルーシアと同じチームで入れるのは悪くはない。
どうにも不安に思える危うさを感じているからな。カバー関連に信頼がおかれている俺が出張れるなら、それに越したことはないだろう。
「……ルーシア。デュナミス聖騎士団と合流しても、すぐに作戦開始じゃない。ゆっくりとはいかないけど、少しぐらい話していいと思うぞ？」
それとなく反応を探るようにそういうと、ルーシアは小さく苦笑しながら首を横に振る。
「お気持ちはありがたいですが、優先順位をはき違えるつもりはありません。作戦が終わった後にでもさせてもらいます」
うん、優等生的回答。
まぁそんなことを言うと思ってた。つっても、もう少し年相応なことをしてもいいと思うけどな。
「そうなの？　折角お兄さんに会えるんだし、少しぐらい話してもいいんじゃない？」
「そうだよルーシアちゃん。仲良いんでしょ？」
鶴羽とギャスパーにそう言われるが、ルーシアはフルフルと首を横に振る。
「私の兄はリュシオンですから。お互いまずは、しっかりと任務を果たしてからじゃいけませんよ」

うん、マジメというか肩肘を張りすぎているというか。
中々めんどい連中というか、困った奴というべきか。この子も難儀な子だとは思うんだがなぁ。
前世の両親が糞過ぎる鶴羽と、事情はあれど家族に排斥されたギャスパーが言ってもだからな。マジメなのは基本的に良い事だけど、だからって限度ってものがあるんだが。
……その原因というのも、リュシオン・オクトーバーか。
悪い人物ではない。神の子（ディア・ド・ローサ）に続く者なんて異名を教会でつけられるのなら、それに見合った人物なわけだ。間違いなくその異名に違わない人物で、ガワを被るのではなく天然でそれだと俺も分かっている。
だが、だからこそ何だろう。
人間、自分が当たり前のようにできることは誰ができても当然だと思い込みやすい。人というものはそういう思考に陥りやすくできている。自分を基準に物事を考えやすいのだ。
だからこそ、リュシオンは自分が本当になんてことなくできることが難しいなんて思わない。何故ならできないどころか難しいとも思ってないから。それができなくてできなくて苦しんでしまう感情を実感できない。
コツの問題で全部片づけるのはどうかと思うが、考えようによっては良くも悪くもなんだろうな。コツがつかめるか否かで完結するから説得が難しいが、できないやつをその時点でどうしようもないと切って捨てたりしないわけだし。
だが、それゆえにリュシオンは影響力が高すぎる。彼に倣って常に前に進もうとできる奴ならいいが、できないやつは追い詰められて自他に刃を向けてしまう。そんなリュシオンを小さな頃から見て、その活躍すら見てしまったルーシアはかなりやばい。
なまじ血が繋がっているうえ、当人の気質が真面目だったからだろう。自分もまたそれに倣い、ついていけるようになろうという気概が強すぎる。心がねじ曲がってしまうよりは遥かにマシだが、それでも懸念事項が強すぎる。

例えるなら、俺がカズヒねぇやイッセーと同じ方向を進むことに拘るようなものだ。無理だというほかないだろう。

できること、すべきこと、したいこと。人間の行動には色々と種類があるわけだが、それは全部別なわけだ。これをきちんと理解しているに越したことはない。

世の中不可能を可能にしたり、普通出来ないようなことを成し遂げる者に焦がれるのは人情。だがそれと同じぐらい、できることをきちんと成し遂げるのも重要だ。

できることを見極め、すべきことを探して、したいことを選択する。結局のところ、大多数の人間はそれらを考えて動くのが最善策。不可能を可能にして最良の結果を得るというのは、誰もができることではない。

……要はあれだ。特例や例外を基準に物を考えてはいけない。ああいうのは、平凡なことをちゃんと成し遂げるやつがいるからこそ本領を発揮する。そして平凡なことでも常に成し遂げるのは大変なんだ。

こうして考えると、本当にリュシオンはスペシャルすぎる。

理論上はできると、誰でも実際にできるは別問題。そこには大きな壁が存在している。

何がきついかって、俺も大概とんでもないことしてるから、あんまり強気で言っても説得力がないことだ。

残神（コスモス・ボルト）とかがいい例すぎる。理論上は確かに可能だしあり得ることだけど、実際に前人未踏を成し遂げてしまっているからな。あんなことやってるやつが「特例を参考にするな」と言っても絶対聞いてもらえない。

ただ、ルーシア自身が気づいているかはともかく限界は近いだろう。

オカ研メンバーは当然として、チームD×Dはスペシャルが多すぎる。眷属に恵まれた破格の世代である若手四王（ルーキーズフォー）のシトリー眷属ですら、D×D全体で見れば基本性能や特性で劣っている側なんだ。基本種族が人間であることもあり、ルーシアは戦力としてはD×Dでは格

下であることは否めない。
当時はグレモリー眷属達若手悪魔を、対禍の団の矢面に出す予定ではなかった。そこに由来する形で派遣されたのが痛いな。戦闘も踏まえて弱いわけではないんだが、性質上重視される面は和平に理解があり駒王学園高等部に入学できるで、あと天使長ミカエル様のAであるイリナをリーダーとする面も踏まえ、同年代かつ年下から選んだんだろう。高位の神滅具、伝説クラスの龍やら超越者と戦闘することまで考えた人選なわけがない。
むしろレイダーとしての上乗せがあってとはいえ、足を引っ張らない程度の力量を維持していることが賞賛ものだ。貴重な委員長気質の常識人であることもあって、ある意味不動な地位を確立しているしな。
……だが、リュシオンに追随することを最低ラインにしているルーシアが納得するわけがない。
「……ルーシアさんは成績も優秀で、悪魔祓いの教育機関でも優秀な成績を出したと聞きます。神器を保有するわけでも星辰奏者でもないのにそれなんですから、お兄さんにとっても自慢なんでしょうね」
ロスヴァイセさんが気晴らしがてらにそう言うが、ルーシアは小さく首を振った。
「いえいえ。兄に比べたらまだまだですし、もっと精進しないといけないことは分かってますから」
……う～ん。基本的に一点特化で突き抜けたスペシャルか例外極まりないイレギュラー、そうでなくても器用貧乏どころか裕福レベルのオールラウンダーという、傑物揃いの環境が悪い方向にかみ合っているぞ。
何時爆発するか不安で仕方がない。とにかく気にしてフォローできるようにしておかないとな……。
そう思いながら歩いていると、小さく足音が響いた。
俺達が少し警戒していると、その足音は微笑みと共に姿を現した。
「待っていたよ。君達D×Dが共に戦うのなら、神聖糾弾同盟も少しは説得できるかもしれないね」

―リュシオン・オクトーバー。
いや、本当に悪い奴どころか正しく生きている人なんだがなぁ。

聖教震撼編　第八話　ウルバヌス二世

イッセーＳｉｄｅ

地下道を出て、俺達が入ったのはちょっとした地下室だった。
広さは精々十畳ぐらいだな。内装も綺麗ではあるけど、豪華ってわけじゃない。
なんていうか……中流家庭の地下室って感じか？　ちょっと宗教色はあるけど、そりゃバチカン関連なんだからそうなるだろう。
そして、そんな部屋には一人の老人……がいた。
ちょっと戸惑ったのは、そのお爺さんの体つきがよすぎたからだ。
なんていうか、服越しとはいえ重量級のレスラーとかのそれだ。腕ですら俺の胴ぐらいはありそうだしな。
……そして何より凄いのは、彼の気配とかオーラとかそういったものだ。
皺だらけの顔じゃなければ老人だなんて思えない。例えるならゼクラム・バアルのような、それでいて真逆の雰囲気すら漂わせる。ゼクラム・バアルがギラついているなら、この老人はキラめいている。そんな感じだ。
そんな老人に俺達が思わず息を?んでいると、その人は微笑みながら両手を広げて俺達を出迎える。
「Ｄ×Ｄの若人達よ。私達の求めに応えてくれて感謝する」
その言葉にはっとなると、リアスが咳払いをしてからその老人を真っ直ぐ見つめる。
「貴方がヴァスコ・ストラーダ猊下かしら？」
「その通り。そしてここは、教皇聖下が非常時に避難する為に使うセーフルーム兼用の脱出口、そこで私が把握しているものを使わせてもらった」
おいおいまじかよ。

ゼノヴィアの話じゃ８７の爺さんだろ？　これが？
顔が皺くちゃだから老人なのは分かるけどさ？　いくら何でもガタイがよすぎだろ!?
俺達はちょっと呆気に取られているけど、猊下はそんな俺達に微笑みながらソファーを示した。
簡素な作りだけど、なんていうか質が良さそうだな。他の調度品もそんな感じだ。
「……流石はローマ教皇が使用する前提の部屋。座るのが気後れするわね」
「確かにそうね。うっかり汚したらと思うと、ちょっとね」
大手ＰＭＣのＣＥＯなサイリンと、超名家のお嬢様な部長が戦慄するほどのソファーなのか。
これはあれだ。無駄な部分に金はあまりかけてないけど、基本的な部分が最高すぎて金がかかってる系だ。
俺達はちょっと気後れするけど、地下道を何ｋｍも歩いていたるから休んだ方がいい。
なので、曹操とアーチャー以外は恐る恐る座る。アーチャーはサイリンの護衛優先なのか、座らずに適度な距離感で立ったままだけど。
あ、座り心地がめちゃくちゃ良い。これ本当に、リアスの実家でも中々ないような逸品だ。良いか悪いか凄く良いかぐらいは分かる様になってる自分にびっくり。
ちょっとその座り心地に気を取られていると、ストラーダ猊下はサンドイッチが乗った皿と、水を持って来てくれた。
「質素なものだが、少し腹に入れておくといい。ここからが忙しく大変なことになるのでな」
「……そうね。では少しいただこうかしら」
リアスがそれを受け取って、俺達もとりあえず食べ始める。
元々クーデターを起こした人だけど、どうやら信用に値する人っぽいな。
ただ、難しい顔をしている奴が一人。ゼノヴィアだ。
「……猊下。一つ伺いたいのですが、何故クーデターなど起こしたの

ですか？」
ゼノヴィアは水を一口飲んでから、そう尋ねる。
「私も戦士であった身として、戦士達が戸惑い困惑していたことは理解しています。ですが、この状況下でクーデターを引き起こすなど―」
「―戦士ゼノヴィアよ、それは逆だ」
小さく、ストラーダ猊下はそう答える。
小さいながらもしっかりとしたその言葉に、ゼノヴィアは押し黙る。
その言葉に嘘偽りなどなく、確信があるからこそのものだと分かったからだ。
枢機卿っていうのは、日本のイメージだとでかい神社の神主とかそういうレベルのそのまた上だと考えるべきだ。それだけの立場にいるだけの、貫禄を言葉だけで見せつけた。
そしてストラーダ猊下は、真っ直ぐにゼノヴィアに向き直る。
「……貴殿は苛烈ではあるがリベラルだからこそ、そこ止まりで済んでいるのだろう。だが、戦士達の多くは貴殿ほど融通を利かせられないのだよ」
苛烈だけどリベラルか。
確かに。ゼノヴィアは最初に会った時はマジでムカついたけど、意外と融通を利かせられるところはあったな。一応模擬戦なら加減とかもしてくれたし。
だけど、当然人が多いならそうじゃない奴だって多い。リアスやサイラオーグさん達と違い、ディオドラみたいに俺達が下級悪魔だというだけで見下してくる奴がいる悪魔みたいなもんか。堕天使もアザゼル先生やバラキエルさんがいれば、コカビエルやレイナーレみたいな奴もいるしな。
ストラーダ猊下は俺達を見回してから、少しだけ目を閉じる。
「……テオドロ・ログレンツィ猊下は、奇跡の子でな。更にその中でも有数の力を持つことから、貴殿らより遥かに幼い身で司教枢機卿に任ぜられた」

奇跡の子。俺でも知識としては知っている。
天使と人間の間に生まれた子供を指すらしい。そして天使が子作りをするのはとても大変で、つい最近イリナと俺用に作られたドアノブみたいな物がない時期なら尚更だ。互いに性欲を抱かず交わらなければとか言ってたと思うけど、俺には絶対できない自信がある。
ドアノブがあるから今後は増えるだろうけど、つい最近できたばかりのそれがない時期ならそりゃもう奇跡そのものだろう。極僅かしかいないのも納得だ。
そんな中でとても優れた力があるのなら、そりゃ枢機卿にもなるだろう。聖書の教えとしてはとても価値があり名誉で素晴らしいことだろうし、異形社会は実力があれば年齢不問なところも数多いし。表向きの人間世界に秘匿こそしても、異形や異能の社会なら融通は利くはずだ。
ただ、ストラーダ猊下はそこに悲し気な表情を浮かべていた。
「……だが猊下の両親は、悪魔によって殺されている」
その言葉に、俺とリアスは肩を少し震わせた。
俺がレイナーレに殺されたように。司教枢機卿のテオドロ猊下は両親を悪魔に殺された……？
「和平もいいだろう。私も人を導く者として、無用な人死にを出さず健やかな生を育めるに越したことはないと思っている。だが戦いの中、もしくは戦いのきっかけとして悪魔や堕天使に絆を奪われた者にとって、それはすぐに頷けるようなものではない」
その言葉は、長い人生経験に裏付けされたものなんだろう。
きっと、何度も見てきたんだ。自分も失って、誰かが失うのも見てきた。そんな何十年もの時が積み重なっているからこそ、それが分かる。
「だからこそ、私はテオドロ猊下に力を貸すことを決め、猊下に動かされる者が多かった。若き貴殿らにそれを押し付けるのもまた間違いだろうが、その業に満ちた歴史が足元にあり、それを踏みしめていることを忘れないでもらいたい」
その言葉に、俺達は何かを言うべきかと思った。

ただそれより先に猊下は小さく詫びるような表情になった。
「最も、それを見事に絡め捕られた我々が言うことでもないのだろうがな」
……確かに。
神聖糾弾同盟、もう主導権がストラーダ猊下からは奪われている形なんだよなぁ。
事前に聞いた話とかなら、最終的にきっかけのグレモリー眷属（オカ研）とぶつかって、それでガス抜きを終わらせる予定だったみたいだし。
それが大量の増援とそれによる鎮圧部隊の撃退もあって、完全に取り込まれた形だしなぁ。そもそもそいつらを教皇が率いているわけだし。一番偉い枢機卿が取り込まれたら……無理か。
「その、説得とかはできないんですか？」
俺はちょっとその辺が気になった。
そりゃ教皇（元）と司教枢機卿（しかも奇跡の子）の二人がトップの方針として徹底抗戦を挙げているのなら、いくら枢機卿でも格下が二人じゃ無理なところもあるだろう。
だけど、ヴァスコ・ストラーダ猊下とエヴァルド・クリスタリディ猊下は戦士上がりで枢機卿になった人物。更に戦士育成機関の設立などにも貢献し、それぞれデュランダルとエクスカリバーの卓越した使い手だ。戦士限定の影響力なら負けてはいないはずだ。
それにしてはもっとこう、協力者がいてもいいと思うんだけど。
クーデターを起こしておきながら悪魔に協力を要請するのもあれだけど、だからこそ心配になって傍に仕えるぐらいする人が多くてもいいと思うんだ。
ただストラーダ猊下は小さく首を横に振った。
「残念だが、協力を結べたのは極僅かだ。背信に気づかれるリスクの回避もそうだが、ウルバヌス聖下はその点において非常に卓越した人物だったのだよ」
……そうなのか。
俺はその辺がよく分からないけど、リアスに曹操、あとサイリンはその辺りにピンと来たらしい。

「なるほど。生ける人物としてお二人は戦士の崇拝を集めるでしょうが、ウルバヌス二世は教皇であり英霊だものね」
サイリンはそう言うと、小さく肩をすくめる。
「十字軍遠征という、聖書の教えによる大規模軍事遠征。歴史的な観点の負の側面こそあれ、戦士からすればそれと同一視できる彼の傘下となることは、多大な名誉ということかしら」
「その通り。更に彼はこのクーデターの方向性すら大きく変えている」
サイリンに頷いたストラーダ猊下は、渋い顔をしながら一つのタブレットＰＣを取り出した。
それを素早く操作すると、映像プレイヤーが映し出される。
……最新電子機器に順応してるなこの人。老人なのもそうだけど、宗教関係者って最新技術に抵抗がある印象とかがあったぞ。
俺がちょっと感心していると、そこに映像が映し出された。
かなりデカい聖堂に人がたくさんいる様子が映し出される。
それを見ていると、同じように見ているリアスはかなり引き締まった表情になっていた。
「皆、特にゼノヴィアとアーシアは気をしっかり持って見るべきよ」
「そうだね。俺の聖槍を見るぐらいの気合を入れていた方がいいだろう」
曹操も苦笑交じりにそう言いながら、興味深そうに視線を画面に向けている。
「ウルバヌス二世は現代にも通じる優れた政治的手腕の持ち主。同時に希代の扇動家ということがよく分かる映像になりそうだ」

和地Ｓｉｄｅ

プルガトリオ機関詰め所の地下で、俺達は映像を確認する。
それは神聖糾弾同盟の盟主である、ウルバヌス二世によるクーデター部隊への演説の様子だった。
『……諸君』
静かに、しかしよくとおる声でその男性は告げる。
外観は５０代前半といったところだが、サーヴァントとは全盛期で再現されるのが常。
十字軍遠征を主導した時より、宗教改革や綱紀粛正に邁進していた頃の方が全盛期だという判断がされたのだろう。元々神聖糾弾同盟は和平に耐え切れずに教会を出た者が起こしたものであり、かつ聖杯戦争をもってして呼ばれたからな。教会の綱紀粛正側に引き寄せられるのは当然か。
時は夕暮れ時。更に雰囲気作りの為か、音楽が流れている。
そして彼は小さく沈黙した後、両手を広げる。
『勘違いをしてはならない。我らは今、大罪を犯しているのだ』
それは、クーデターを真っ向から批判するかのような言葉。
それにどよめきが起こるが、ウルバヌス二世は数分間待ってそれが収まるのを待つ。
困惑し、不安すら覚えるクーデター部隊。自分達の権利を守るべく、和平を間違いだと思っていた彼らの不安の視線を受け止め、ウルバヌス二世は再び口を開く。
『我らが教えにおいて主の命じることは絶対。どう解釈するかは議論の余地があり、本当に主が命じたことなのかを考えることは必要だ』
その前置きは、だけどそこからの話に繋げるものでしかないのだろう。
事実、それで持ち直しかけた信徒達の感情を下げるように手を前に出す。そのうえで静まった信徒達に、ウルバヌス二世は語りかけた。
『……だが、主の意思を見定め代弁する現教皇聖下及び、各勢力との会合に主の代行として動くミカエル様が連名で告げたのが和平であ

る。……より良き和平の為ではなく、和平そのものに否定的でいることは、すなわち悪であり罪なのだ』
他ならぬ教皇であったウルバヌス二世自ら、このクーデターが間違いであると断言した。
自分達のクーデターこそが悪であり罪だと言い切った。しかも、理路整然と信徒なら納得してしまう理屈をもってしてだ。これはクーデターを起こした信徒達も反論が封じられる。
その断言はクーデターに参加した者達に衝撃を与え、誰もがウルバヌス二世に注目してしまう。
それを確認してからなのか、小さな沈黙の後にウルバヌス二世は小さく苦笑した。
『そう、我々は裁かれるべき罪人だ。我らが主は慈愛と許しを説き、断罪と裁きを司る。一見矛盾するこの在り方は、主が人々を裁定する正義の体現者であるからこその絶対者ゆえ。少なくとも、私は思っている』
その言葉は、きっとすんなりと彼らの耳に入っていくのだろう。
『故に我らの行動は悪だ。主の代行者が告げた在り方に異を唱え、武力をもって抵抗するなど信徒としてもってのほか。我らは裁かれるべき罪人であり、審判の日が来るまで地獄の炎で焼かれるだろう。この争いを未だ続けるとは、そういうことだ』
映像で見ているだけの俺ですら、思わず気圧される在り方がそこにあった。
動作や声色、そして雰囲気。全てが強いカリスマ性を感じさせ、その言葉に説得力を感じさせる。
まして彼はローマ教皇だった人物だ。加えて十字軍遠征という、信仰に生きる戦士達にとってある種の英雄譚の立役者。とどめに教会の綱紀粛正を成し遂げた異常、教会の在り方に異を唱える戦士達からすれば、現教皇や天使長ミカエル様に匹敵するだろうカリスマ性があるはずだ。
だからこそ、その言葉は麻薬に等しい。
『故に裁かれることを望まぬ者はここより立ち去れ。我らが主より賜

る栄光はただ一つ――――主の断罪のみである』
　そこに、主から送られるものという言葉が更なる毒となる。
『主の意向に異を唱え、主が指示した和平に抵抗する。だからこそ、我らが求めるは許しでも許諾でもない。主の定めた未来に刃を向けるという罪をもって、主が自ら行う裁きという罰を求めるのだ』
　そしてそれは、決してただただ信徒にとって絶望ではない。そう思わせているのがよく分かる。
　何故ならそれは―
『それこそが、我らにとって最大の福音。絶対たる主の意思がそこにあるという、確固たる褒賞をもって我らは地獄に落ちるのだ』
　―聖書の神の意志が直々に示されるという、信徒にとってある意味で最高の奇跡に他ならない。
『勝利を求めるな、裁きを求めよ。主による断罪を受けることによって、我らは主の意思を実感する。ただそれだけを求めた代価として、我らは来るべき審判の時まで自らを悔い改め続ける……それだけが我らのいくべき道である!!』
　その言葉に、それを聞いている者達のスイッチが入ったのが俺でも分かる。
　彼らはもはや、ただ我慢できずに暴発したものじゃない。主の意思を本当の意味で実感する為に、命を捧げる殉教者。主の実在とその意志を裁かれることで証明し、真なる信徒達にその道の絶対性を保証する存在になる。
『故に、我らは傲岸不遜に悪を成そう！　主の意思に背き主の裁きを求めよっ！　全ては……絶対たる主の意向を実感する為にっ!!』
　その言葉と共に流れる音楽は激しく鳴り響いてから終わり、それが引き金となった！
『『『

所々でそんな合唱が鳴り響き、演説所となっていた聖堂は声で震撼する。
……その映像を確認した俺達は、戦慄していた。
「……うぅむ。よく分からんが、これはサクラとやらが関わってないか？」
「そうですね。それに演説時に夕暮れ時を選んだり音楽で雰囲気を出すのは、かのアドルフ・ヒトラーも行っていた手腕だと聞いています」
渋い表情で唸るストラス・デュラン騎士団長とロスヴァイセさん。
ああ、どこかザイアを思わせるそれは、そういうことか。
確かにそうだな。背景とかＢＧＭとか、そういう雰囲気って大事だし。少なくともギャグとかコメディ感溢れる雰囲気でシリアスな話をしても、ギャグに感じる時はあるし。
あいつらその辺も考えてたんだなぁ。本当に能力だけは優秀だよ。
……問題は、そんな手法を西暦数百年代生まれのウルバヌス二世が取り入れていることだけど。
現代に適合しすぎじゃないかあの男。歴史的なローマ教皇はそれに見合ったポテンシャルの持ち主だと、そういうことか。
「なんて人だ。なんでそんなに難しく考えようとするんだ……っ」
「兄さん……」
映像を見ながらリュシオン・オクトーバーは珍しく苛立ちを見せ、そんなリュシオンをルーシアは気づかわし気に見ている。
「なんていうか、ザイアを思い出すわね。能力ある連中は自分の考えを伝えるだけでいろんなことをしたがるものなのかしらね」
鶴羽も苛立ちは見せているけど、これはザイア時代を思い出しているからだろう。
ただ、リュシオンのそれは違う。
「なんでそんな風に……自分から物事を難しくするんだ。そうやって思考を凝り固まらせるから、尚更コツが掴めないんじゃないか……っ」
……はぁ。
これは、俺もちょっと何か言った方がいいんだろうな。

ただそれは、今ではないだろう。
今ここでやると、絶対にしなくてもいいトラブルに繋がるからな。
今は様子を見て、必要なら適宜フォローだ。その辺は弁えとけ俺。
ゆえに俺は呼吸を整えながら、今後について思考を回す。
……神聖糾弾同盟首魁。ウルバヌス二世。
この男は、まごうことなく傑物だ。かつてのカトリックを、教会全体をまとめる人物足りえる能力を持ち合わせた、歴史に名を遺すに値する人物だ。
そんな男により掌握された神聖糾弾同盟。
これは、絶対にややこしいことになるぞ。

聖教震撼編　第九話　手の内を読んで動いている黒幕は、ヤバイ奴にしか見えないものである。

和地Ｓｉｄｅ

映像を見て、そして俺は天を仰いでため息をついた。
いや本当に、これまずいだろいくら何でも。
ウルバヌス二世と今の現状、そして信徒達の不満が最悪な形でかみ合ってやがる。
「どうするんだよこの状況……っ」
俺は頭を抱えることしかできなかった。
とにもかくにも、この状況はまずいという事実はよく分かった。
ウルバヌス二世が傑物なのももちろんだし、そもそも相当鬱憤が溜まってきた和平の歪みも理由だろう。
だが、最もまずいのは—
「……なまじこれ、聖書の神が死なない程度に怒りを示せば一発で解決する問題なのがきつい」
—聖書の神が死んでいるという、その一点である。
ウルバヌス二世が言う通り、聖書の教えは一神教ゆえに主の意向は絶対だ。
もちろん解釈は人それぞれだろうし、それに対してむやみやたらと介入しては飼い犬と変わらない。だが余りにも目に余るのなら、神罰の一つや二つは確かに落としている。奴らの目的はそこにある。
どうしても我慢できないからこそ、せめて神罰でいいから主自身の意思を示してほしい。それをもって踏ん切りをつけるというのが一種の意向だろう。少なくとも、ウルバヌス二世はそういう方向にまとめ上げている。

つまり聖書の神が裁きを分かる形で下せば、一気に沈静化する火事なのだ。まぁある意味、それが実感できないからこその騒ぎなわけだが。

そしてそれが不可能だからここまで拗れてるんだよなぁ。

「うむ。確かに主の不在を知る者は、我らデュナミス聖騎士団でも一部のみに伝えられるのみという禁足事項。今公表すれば教会が終わる禁忌であるからなぁ」

困り顔でストラス・デュラン騎士団長が言う様に、これは不可能なわけだ。

聖書の神は初代四大魔王と相打ちになって死んでいる。リゼヴィムは下手な神が死ぬような反動を受ける封印術式を、トライヘキサ相手に大量に使用して封印した後に戦ったから死んだと踏んでいる。つまりはそれだけの存在がそれだけの大ごとをしたというわけだ。

だが、そもそもそんなことを知っている連中はごく一握りだ。天界や教会では知ることそのものが聖書の神が遺したシステムに悪影響をもたらすが故、ゼノヴィアをデュランダルごと放逐することすら選ぶほどで、天使やバチカンでも知る者はごく一握りだろう。冥界政府や神の子を見張る者ですら、対天界で使用するどころか、正式に要職についていなければ伝えないような劇物だ。

ゆえに、聖書の神が死んでいることは、正真正銘の極秘事項。和平によって各勢力にも伝えられているが、それこそ神といったごく一部の者に伝えられ、情報戦で使用したりしないように気を遣っている禁足事項だ。ハーデスやリゼヴィムですら、未だにそれを使った攪乱を行ってないことからもそれはよく分かる。

中級悪魔や下級悪魔で知っている者など希少ケース以外の何物でもない。チームD×Dのような特例の中の特例でもなければ、知ることそのものがペナルティに繋がりかねない案件だ。

そんなものを公表するなんて不可能だ。するにしても入念な準備が必要だし、それができると判断されるまでにいったい何百年掛かることやら。

もちろん、神聖糾弾同盟に告げるなんてあり得るわけがない。そん

なことになればこの騒ぎは更に激化することが日の目を見るより明らかだ。言った瞬間に収集をつける余地がゼロになりかねない。
例えるなら、全面的に燃え盛っている港に意図的に石油満載のタンカーを激突させるようなものだ。バチカンという港が物理的に消し飛ぶ大爆発しか起きない。
つまり、この方向性に固まっている時点で物理的に鎮圧するしか手段がない。絶対に不可能な条件を絶対にしなければならない交渉なんて、時間を無駄に消費するだけだ。
「……いくら聖杯が現代の知識をサーヴァントに与えるとはいえ、聖書の神が死んでいることまで伝えるわけではないでしょうしね」
「そういうことである。レグレンツィ猊下も司教枢機卿とはいえ、まだ幼子同然。流石に知らされてはおらぬだろうしなぁ」
ロスヴァイセさんやストラス騎士団長が困り顔になるのも当然だ。
流石に老年のヴァスコ・ストラーダ司祭枢機卿は知っているだろうし、エヴァルド・クリスタリディ猊下も戦士に対する影響力から、教えられている可能性は高い。
だが、映像に移るテオドロ・ログレンツィ司教枢機卿はまだ子供だ。小猫達一年生組より幼いのがすぐ分かる。ついでに言うと、精神面で負の感情や欲望が強くなりすぎたら堕ちかねないから尚更慎重になるだろうしな。
そして今更伝えたところで、この流れを鎮静化させるのは二人でも難しい。むしろ二人だからこそ止める側にはなれないだろう。手の平を返した途端に大爆発して泥沼だし、かといって上手い言い訳を用意できるとも思えない。
もはや流れは大きくなりすぎているし勢いまでついている。まとめてどうにかするならともかく、ここで一気に破裂して混迷化すれば収拾をつけられない。
「……まとめてどうにかする以外、手がないってわけね」
「あうぅ……凄い事になってしまってますぅ」
ため息交じりの鶴羽と、困り顔になっているギャスパーも事態を理解しているらしい。

良くも悪くも、今回の一件は不満分子が一つにまとまって高速で移動しているに等しい。
解決できれば教会関係の不満分子はほぼ一掃できるだろう。だが同時に、壊滅させるぐらいの勢いでなければもうどうしようもない状態に陥っている。変に穏便な策をとれば、更なる泥沼の大惨事につながりかねない。
ったく。こういうのはどう考えても、グレモリー眷属向きじゃないな。
あいつらは良くも悪くも真っ直ぐな気質が多いから、こういうのには向いてない。双方の性質がかみ合わないから、真っ向からぶち壊すぐらいしか選択肢が取れそうにない。
「……なんで、そんな風に難しく考えてしまうんだろうか」
リュシオンも悔しそうな表情で、そう漏らすしかなかった。
……はぁ。ため息をつきたくなる。
やってくれたなウルバヌス二世。あんたは良くも悪くも、派手にぶっ潰すしかない状況を作ってくれたもんだよ。
これは、かなり血を見ることになるんだろう……な。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、そろそろ向かうべきかな？」
「ええ、どうやらＤ×Ｄから派遣された者達は、ストラーダ猊下達と合流しているようです」
「ふふふ。彼らなら必ずこうすると思っていたよ。慎重に協力者を厳選していた所為で、こちらとしても仕込みなしではここまで把握する

ことはできなかった」
「そこがネックですね。もし我々が把握していない部隊がいれば、無用な犠牲者を生み出しかねません」
「まぁそこは仕方がない。彼らもまた自分達の目的を叶える為に努力するのだ。大昔の人間である我々ではできないことも多いだろうさ」
「よく言いますよ。半年足らずで色々知識を習得して、見事にクーデター部隊を取り込んだじゃないですか」
「あれは呑まれる彼らが愚かなだけだよ。……だからこそ、そんな者達と心中されては困るからね」
「そうですね。禍の団の連中もそろそろ来るはずですし、足止めは必須ですが……それで死にそうなのがなんとも」
「それぐらいの戦力が必要だと、そういうことだよ。最悪死なれても仕方がない程度の足止めだしね」
「決戦英霊の召喚体制は整ってますからね。如何にチームD×Dとはいえ、あれとぶつかれば死人は必ず出るでしょうし……止めに来る可能性は大きい」
「とはいえ、すぐに逃げれる状態でなら判断を変える可能性はある。決戦英霊である彼が召喚されるまで、D×Dやストラーダ達は逃げられる場所から離れないでもらわないとな」
「まぁ、そのうえで挑むのなら是非もないですね。……では」
「ああ」

「―私達はどこに向かいますか、ウルバヌス二世？」
「神の子（ディ・ア・ドロローサ）に続く者の相手は私が適任だから、そこだね。……最後まで付き合ってもらうよ、天草四郎時貞君？」

聖教震撼編　第十話　嵐の直前って、逆に静かというか穏やかだったりするよね？

イッセーＳｉｄｅ

猊下達との話し合いは、作戦に伴い推移を踏まえて動いていた。
ある程度は教会側の方ですり合わせているけど、この機会に話し合いをするべきことはいくらでもある。
そしてその一環として、ストラーダ猊下は色々な物を渡してきた。
それは、陶器の欠片と手紙の束。
「……あの、こちらは？」
渡されたアーシアはきょとんとするけど、ストラーダ猊下は微笑んだ。
「まず手紙の束だが、それは貴殿宛ての手紙だよ」
へ？
アーシア宛の手紙が、教会に束になるほど届いているって？
普通に考えたらリアスを経由して渡されると思うんだけど、どういうこった？
俺達が首を傾げていると、ストラーダ猊下は目を伏せながらアーシアに頭を下げる。
「まずは謝罪をさせてほしい。貴殿が追放される際、何とか穏便な静養先をあてがおうとしたのだが……力及ばず間に合わなんだ」
……っ。
アーシア。教会で聖女としてもてはやされながらも、悪魔も癒せる神器があると判明したばかりに、追放されることになった少女。
和平を結べてない教会にとって、信仰を揺るがしかねない存在を教会に置くわけにはいかない。アーシアは事情を知ってミカエル様達

を当然の様に許していたし、俺達と一緒に入れることも喜んでいた。だけど、俺がアーシアを幸せにするつもりだってことを踏まえても、どこか納得できないところもあった。

……だけど、教会にもアーシアを何とかできないかと考える人がいてくれたのか。

アーシアもその言葉に目を丸くしてから、すぐに何かに気が付いて手紙の束を見る。

「もしかして、この手紙をくださった方は？」

「そう、貴殿が癒した者達からの感謝の書状だ。この事件が落ち着いたら、一度返事を出してやってほしい」

ストラーダ猊下のその言葉に、アーシアは喜びで涙を流しながら、何度も頷いた。

そっか。アーシアのことをちゃんと感謝してくれる人は、いっぱいいたんだなぁ。

「……それと、その破片は聖杯だ。より厳密には、神滅具（ロンギヌス）の幽世（セフィロト・グラール）の聖杯の由来元。その破片だよ」

「そんなものまで!?　……まさか、ヴァレリー・ツェペシュの……っ」

リアスは猊下の説明に驚くけど、何か驚くところが違う気がする。

正真正銘の聖杯の欠片ってのは確かに驚きだろう。だけどなんでそんなもんを俺達にってのが分からない。

もしかして、リアスはそこに気が付いているから驚いているのか？

ストラーダ猊下はリアスに頷くと、リアスは信じられないように首を横に振る。

「ご厚意は感謝するわ。だけど、いくら和平が結ばれたとはいえこんな物を送るなんて……罷免の恐れすらあるわよ？」

罷免って……クビ!?　そんなレベル!?

そ、そんな事していいのか!?　やばくない!?

俺もぎょっとするけど、猊下は微笑みながら首を横に振る。

「クーデターなどを起こしたのなら当然そうなるとも。それに元々の予定なら八つ当たりじみた勝負を貴殿らに挑む予定でな。尻拭いを押し付ける現状もそうだが、相応の品を送らねばケジメがつけられぬ

だろう？」
そ、そんなレベルの代物だってことか。
いや、教会にとってマジモンの聖杯なら、欠片であっても悪魔に渡すとか責任問題だな。そりゃそうか。
でもなんでそれを悪魔に渡すんだ？　アーシアやゼノヴィアは喜びそうだけど、むしろ恐れ多すぎるって表情だし。
聖杯の欠片があると、俺達グレモリー眷属かD×D全体にとって得ってことなんだろうか。後でリアスに聞いてみるか。リアスは分かってるみたいだし。
あと同じように分かっている感じの曹操は、小さく肩をすくめながら頷いていた。
「流石は異能社会における現代の英雄とでもいうべき御仁だ。俺としても感心に値するね」
そう答える曹操は、小さく苦笑を浮かべている。
「まだ時間があるなら、よければ一つ質問をしてもいいだろうか？この機会を逃すのは惜しいと思うことがある」
「ふむ。今代における聖槍の担い手から問答とは……興味深い」
なんか今度は妙なことが始まりそうになった、その時だった。
『……ふむ。ならばぜひ私達も聞いてみたいものだ』
『そうじゃのう。現代の英雄がどのような見識を持つか、ぜひ拝見したいものじゃ』
……え、こいつら来たの？
俺はちょっとげんなりしたけど、通信用の魔法陣から画面が映し出されている。
大王派の若き俊英、フロンズ・フィーニクス
後継私掠船団団長、九条・幸香・ディアドコイ。
俺、この二人は基本的に苦手なんだけどなぁ。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

一方その頃、いくつもの勢力は準備を完了していた。

「―じゃぁ、そろそろ突入しておいてよ。流石にちょっと読めないから、あえて突いて反応を確かめたいからさ」
『オッケー誠にぃ。任せといてよ！』
『うっへぇ。あんたなんで俺を選んだんだよ』
「『いや、星辰光的に最高じゃない？』」
『性格最悪だなぁ、アンタら!!』
「あらあらぁん？　素敵に燃え萌えできるんですし、もっと楽しんだらいかがですのん？」
『できるわきゃねえだろ敵多すぎだろうが！　もっと楽にぶっ殺せる任務の方がいいっつーの!!』

禍の団も―

「まさかブラッドナイツの方々と共に任務をするとは思いませんでした」
「私もだよ。できれば神祖の方々にこそ、見守ってほしかったがね」
「……そうですね。あえて人を捨て、誰もが神祖の域に届くまで、人を否定する力を担う裁定者。ブラッドナイツはその為の力でしたのに」
「まったくだ。まさか五百年近く前に流れた連中から、このような事態が引き起こるとは思わなかった」
「ならば、我らの手で濯ぎましょう。神祖が示した世界こそ、聖書の神の示す世界を超える、真なる秩序なのですから」

サウザンドフォースも―

「全部隊、何やら異常事態が起こっているが、構うな！」
『ああそうだ。むしろ好機と考えろ！』
「掻い潜り教皇に刃を届かせるぞぉ！」
『『『

「さぁ、応援の伽は始まった！　我らはこれより、バチカンに進軍を開始する!!」
「承知！　全軍、性欲と共にあれ!!」
「教主様自らの出陣である、性欲たれ!!」
『『『『『『『『あっはんあっはんあっはんはん♪』』』』』』』』

―大欲情教団も!!

聖教震撼編　第十一話　英雄談義（幸香編）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

後継私掠船団が母艦、サンタマリア級０番艦「ネオ・マケドニア」のブリッジに、フロンズ・フィーニクスは待機していた。
後継私掠船団は懲罰部隊であり、その性質もあって監視役の名目で乗り込んだようなものだ。実態としては同盟相手に等しい為、自由度を上げる為の行動に過ぎないが。
そして事実上の大王派側の本部と化しているこの船は、内部に潜入しているＤ×Ｄメンバーと連携を行えるようにする為、地下道経由で通信を繋いでいる。
なので通信を繋いでいたら、興味深い話が始まろうとしていた。
既に作戦開始の為に必要なことは終えている。また現場での戦術的指揮はあくまでノアが行う為、フロンズはすることがないし幸香達もウォーミングアップ程度でしかない。要するにヒマになっている。
そんなこともあったので、フロンズも幸香もかなり興味津々で映像の方に視線を向けている。
「……じゃ、俺はノアと通信ですり合わせやっとくわ」
気を利かせたラカムに片手を上げて礼をしながら、二人は映像越しのストラーダ達に会釈を返した。
「通信越しに失礼するよ。一通りの準備は終わっている。あとはそちらの動き次第だ」
「手柄の上げ放題ともなれば是非もなし。勝利を奪い取るが為、妾（わらわ）達も大暴れするとしよう」
グレモリー眷属側、厳密にはアーシア・アルジェントを除いた四人から呆れた視線が向けられるが、意に介する気は欠片もない。
相容れないところが数多いのはもはや自明の理。作戦の足を引っ

張らない範囲内の批判的対応はお互い様だ。それさえ弁えているならどうぞご自由に。
その感性で、二人は七割観客気分で曹操の問いかけを待ち構えている。
それに対し、曹操は軽く肩をすくめるとストラーダに向き直る。
ストラーダも向き直ると、興味深そうな表情を浮かべていた。
『さて。貴殿は須弥山にて帝釈天の先兵となっていると聞く。異教の神がこの老骨に何を問いたいのかな？』
ストラーダのその確認に、曹操は静かに首を横に振る。
『いや。これは俺の個人的な質問だ。そして、聖書の神に仕える枢機卿にではなく、現代の英雄に対する質問でもある』
その返答に、ストラーダは一瞬だがきょとんとする。
その間に曹操は少し言葉を選ぶように考えながら、放たれた言葉は簡潔だった。
『貴殿にとって英雄とは、いったい何だろうか？』
―フロンズ達は知るよしもないだろう。だがその質問は、曹操にとって命題といえるものだ。
だからこそ、誰もがその問いが真剣であることだけは理解する。結論として、沈黙が響いていた。
ある者は質問の意味を理解することができずに首を傾げる。またある者は質問の意図を理解して興味を沸かせる。
そしてストラーダはあごに手をやりながら、微笑みを浮かべている。
『ふむ。中々に珍妙な問いをする若者だ』
曹操は少し俯き、一瞬だが兵藤一誠の方に視線を向けてから、話を続ける。
『ちっぽけな人間として生まれながら、最強の神滅具というこの聖槍を宿し、また曹操という英雄の血を引くのが俺だ。いつしか俺は「英雄」という、大いなる化け物どもすら倒す人間の極みでいたいと思い生きてきた』
そこまで語り、曹操はもう一度兵藤一誠を見て、また映像越しの九

条・幸香・ディアドコイを見る。
『だが俺は彼に負け、俺の信じてきたものすべてを全否定された。……明確に否定したのは幸香だが、そのつもりがないだろう兵藤一誠に負けたこともまた、俺にとっては同じぐらい人生を見つめ直すきっかけだった』
そういう意味では、今曹操は人生に迷っているともいえる。
曹操にとって英雄派の活動は、ある種の自分探しの一環なのだろう。
英雄の末裔という血筋を持ち、また聖槍というその領域に至る余地を与えられた。ある意味でお膳立てが整えられたようなものであり、それは物語の主人公が持つ来歴と力によくあるものだろう。
だがその全てを打ち砕かれ、更に徹底的に酷評された。それが今、曹操にとって道標を奪われたに等しい状況に陥っている。
そしてヴァスコ・ストラーダは、異形の世界において英雄といって過言ではない存在だ。
だからこそ、曹操はこの機会に問いかけたい。
どのような形であれ「英雄」を指標にしてきた男の目の前に、英雄と定義できる者がいる。敬意を向ける先達がいるのなら、その教えを授かりたいと思うのは十二分に考えられることだった。
そしてストラーダは、その悩みを聞いたうえで微笑んだ。
『フフフ……失敬。だがあまりに若い、赤ん坊のような有様なのでね』
彼を見る誰もが怪訝な表情を浮かべる中、ストラーダは曹操をぐずる駄々っ子を見るような表情で見つめていた。
『英雄を目指すなどと、それこそが考え違いも甚だしい。英雄を決めるのは己ではない。力を持たず力に焦がれる民達が、英雄を求め選定するのだ』
そう告げ、そしてストラーダは曹操だけでなく幸香にも向け、真っ向から問い質す言葉を選択する。
『そこにいる後継覇王（アレキサンダー）を名乗る者にも含めて聞こう。貴殿らは民に担（かつ）がれて英雄を演じようと決めたのかね？』
その真っ向からの言葉に、しかし通信越しの返答は即座だった。

「笑止。夢とは己の意思で選び掴み取り認めさせる者。他者のお膳立てで演じる許可をもらうなど、愚かな道化にすぎん」
一切の躊躇いも気負いも幸香にはない。呆れ顔でこそあれ、正しく自然体の発言だった。
彼女にとってそれは当たり前のことであり、殊更深く考えるようなことですらない。ゆえにその発言には悪意も敵意もない。挑発でもなければ罵倒でもない、本能の域に達する返答だった。
感情が荒立つことすらない。むしろある意味で予想していた答えだったのか、失望や苛立ちといった感情すら見えない反応だった。
ストラーダもまた、感情を荒立てることはない。
首を横に振りながら、諭すように幸香を含めて曹操に告げるだけだ。
『求められもせず自ら名乗る英雄などただの遊戯、ごっこ遊びでしかない。だからこそ、そこの赤龍帝ボーイのようにがむしゃらに己の道を行く者に負けたのだろう。……後継覇王よ、貴殿もそうではないのかね？』
「あいにく、ボケ防止のレクリエーションをするほど老いる気はない。華々しく豪遊して早逝する為に知見を広め熟考する主義でな。妾は道化を見事に演じるより、財宝（手柄）と共に凱旋して衆愚を沸かせる主義じゃ」
さらりと返答する幸香は、頬杖を突きながらストラーダに視線を向ける。
その視線は負の感情は見当たらない。呆れの類はあるが、反発するような怒りを感じていないのが明らかだ。
「まぁ、この状況下で意味もなく論戦をして敵を増やすほど愚かではないよ。懲罰部隊に属する以上、その程度の配慮はする……が」
そこまで前置きしてから、幸香は鋭い視線をしっかりと向け――
「……やめておこう。これ以上は連携が崩れかねん」
「契約者（クライアント）に対する配慮ができて助かるよ」
――茶化すような視線を向けた幸香は、フロンズからため息を引き出していた。

フロンズは心底からため息をついていたが、しかしすぐに持ち直した。
「まぁ、正義であることを示すべき教会が称える英雄が、後継私掠船団（彼女ら）と合致するわけがないのでな。大義名分（正義）を用意することまで契約のうちなので、分かり切った不倶戴天を顕わにしないでくれたまえ」
「はっはっは。悪い悪い。……ならば、最後に一つ質問を」
……その幸香の返しに、リアス・グレモリー達は多少なりとも付き合いのあるフロンズから初めての表情を見ることになる。
その心からの「勘弁してくれ」といわんばかりの表情は、彼女達から幸香に対する否定的な発言を出す機会すら奪っていた。それほどまでにフロンズが感情的な表情を浮かべていたのだ。
幸香もそれに気づくと、流石に少し気づかわしげな表情をしながら手を横に振る。
「違う違う。本当に理解できなさすぎることがあるので聞くだけじゃ。悪意も敵意も、何より批判的な感情も籠っておらぬから勘弁してくれ」
「……内容次第ではそれなりの罰則を用意するぞ？」
確認するようなフロンズの視線に、幸香は笑顔で頷いた。
そしてそれほどまでの自信を持つ、正真正銘のただの疑問。
それは―
「……曹操を肯定する論調で曹操を否定する言いぐさなのは、なんでじゃ？」
―あまりに意味不明すぎる言いぐさに、ストラーダすら首を傾げた。
『……意図を伺ってよいだろうか？』
「意味不明な挑発はよしてくれないか？」
ストラーダとフロンズの双方から問い質されるが、幸香はきょとんと首傾げる。
その態度が、本心からの疑問であることを如実に物語る。だからこそ、発言の意図が理解できず誰もが首を傾げる。
そして質問の意図が理解されてないことに、幸香が理解できず更に

困惑する。
とはいえ、無駄に時間を浪費する必要ないと判断した幸香が説明を試みるのに時間はかからなかった。
「意図も何も、英雄が誰かに担がれることが大前提だと言ったのは貴殿ではないか。ならば曹操は禍(カオス・ブリゲート)の団の頃から英雄そのものであろう」
その言葉にフロンズすら理解が追い付いていない中、幸香は当たり前のことを当たり前に言ってるかのように続けていく。
まったくもって嘘偽りなどない、心の底から当然だというべき流れで、彼女は己の心からの言葉を紡いでいく。
「英雄であることを多くの者から求められることが英雄を英雄たらしめる。貴殿の言い分を妄なりに解釈すれば、当然の帰結として曹操は英雄であろう？　でなければ、曹操は英雄派など作れておらぬわ」
その言葉に、小さく微笑みながら頷く者が一人いた。
サイリン・アマゴ・ドゥルヨーダナ。英雄派サブリーダーの一人だった彼女は、得心したように頷いた。
『そういう見方は確かにあるわね。何故なら、私もジークもゲオルグもヘラクレスもジャンヌも、コンラ達英雄派に自ら属する者達、全員にとって曹操こそ英雄としての先を行く者だわ』
そう語るサイリンに、何故か鹿之助は満足そうに頷いた。
『確かに正論ですな。拙者が生きた戦国の世からすれば、曹操達のような志を持ち英雄となった者などいくらでもいる者でござる』
その二人の反応に、幸香は茶化すように曹操を見る。
「妾は貴様を英雄として見てはおらぬが、どうやら英雄であることを保証する者は数多そうじゃな。そんなヴァスコ・ストラーダ(大衆の従僕)などより、サイリン(夢を追う者達)や鹿之助の言葉こそを尊んだ方が良いのではないか？」
「幸香。無自覚だろうがストラーダ殿に毒を吐くのはやめてくれ」
フロンズがそう嗜める中、画像の中の曹操は、少しと言わずどこまでも戸惑っていた。
『俺が、既に英雄……？　まだまだちっぽけな人間だと、自分でも自覚しているんだが……』

戸惑う曹操に対し幸香は軽くため息をついた。
「個人的な意見じゃが、かつては上司とした縁から再度告げておこう」
そう前置きし、幸香は曹操相手に威風堂々とした態度をとる。
「英雄とは種族でも一族でも品種でもない」
かつて告げた言葉を、後継覇王（アレキサンダー）は再び告げる。
かつて曹操を見限り、切り捨てるようにしたその言葉に幸香は続きをつける。
「少なくとも、ヴァスコ・ストラーダ（男）はそれに続きをいえる者じゃ。そしてその言葉に続きを言える……もしくは反論を堂々と返せる者にとって、英雄とは生涯変わらずそれなのだ」
それこそが、九条・幸香・ディアドコイが示す心からの言葉。
英雄。その憧憬を覚える単語に対する、一つの明確な形そのもの。
「曹操。妾やヴァスコ・ストラーダ、そして兵藤一誠に向き合うのならまずはそれを持つがよい。さすれば聖書の神の意志は、誰が相手であろうと覇輝の無駄うちだけはせんだろうよ」
その幸香の言葉に、ストラーダは苦笑を浮かべている。
『……流石にそれには賛同できないが、そこまで定めているのなら、説教に意味はない。貴殿はただ我武者羅に生きる赤龍帝ボーイに負けたとして、その在り方を変えぬだろうしな、後継覇王（アレキサンダー）よ』
「至極当然。勝利を掴むその為に、考え抜いて鍛え上げかき集めて、それでも敗北するというなら。是非もなくただ死ぬのみよ！　敗北に立ち向かわぬ愚図など、負け犬にすら届かぬからなぁ？」
胸を張って笑みすら浮かべるその言葉に、ストラーダはただ苦笑する。
そしてそのうえで、二人の視線は曹操へと向けられる。
『英雄とはただがむしゃらに生きた者に、後から付けられる褒賞のようなものだ。だからこそ、ただがむしゃらに己の道を生きた赤龍帝ボーイは貴殿を下したのだよ』
「妾はむしろ逆だがなぁ？　英雄（夢）を本気で目指すというなら、どうすれば叶うかをまず思慮せよ。そこを考えないからただがむしゃらに生きるような手合いに後れを取るのじゃ」

正反対の価値観に基づく言葉に、フロンズは曹操が戸惑っていることを理解する。そしてその流れで、フロンズはストラーダの曹操評を思い出した。

赤ん坊のようだと、そのようなことを言っていたはずだ。そして今の曹操の姿は、そう形容するに相応しい。

そういう意味では二人や自分は真逆だろう。人生のいくつもの経験や価値観から、ある意味で完成されたそれを持っている。少なくとも二人はそうだからこそ、お互いに感情を荒立てることなく正反対の価値観を言い合えるのだ。

それに対して、曹操は全く持って未完成なのだ。だからこそ英雄というものについて深く考えることなく、幸香やストラーダにとって思い違いというほかない思考に留まり、言い返すことも受け流すこともできていない。

こうして思えば、禍の団の盟主とは総じてそうなのかもしれない。純真無垢な子供同然だった、象徴のオーフィス。実力差を考えない子供じみた癇癪をぶつけてたといえる、旧魔王派のシャルバ。当人がいい年で中二病をこじらせているというほど幼稚といえる悪意で動く、クリフォトのリゼヴィム。

ならば、英雄派の曹操もまたそうなのだろう。むしろ本当に外見相当の年齢である以上、その幼さはウロボロスのリリスに次ぐのかもしれない。

そんな考察をしていると、曹操は非常に困り顔というべき苦笑いを浮かべている。

『まったく……ちっぽけな人間には難しい話だね』

その返答に、しかし首を傾げる者がいた。

『いや、お前全然ちっぽけでもなんでもねえだろ？』

聖教震撼編　第十二話　英雄談義（一誠編）

イッセーＳｉｄｅ

いや、本当に難しい話で俺は殆どついていけてない。
英雄だのなんだのと、ぶっちゃけ難しすぎだろ。バカな俺にはよく分かんない話だよ。
……というか分かってる余裕がないかも。ハーレム王になる為に上級悪魔を目指しながら、駒王学園での学園生活もこなしつつ、更に強敵に備えて日々精進だからなぁ。
余裕がねえよ、あるわけねえよ!?　むしろ過密スケジュールすぎて、松田や元浜と遊んでる余裕もなかったよ!?
今回もバチカン市国にクーデター起こした奴とかを何とかする羽目になってんだぜ!?　やること多すぎてそこまで考えてる余裕とか、マジでない。そもそもただの高校生から悪魔になって、一年も経ってないんですよ、俺は。
だからほんと、これはちょっと苛立ってきたから出てきた愚痴みたいなもんだ。みんなきょとんとしてるし。
う～ん。俺そんなに難しいことを言ったか？
「いやいや、絶対曹操はちっぽけでも何でもないって。っていうかどこがちっぽけなんだよ、めちゃくちゃ強いだろうが」
そこが本当に分からないんだけど。
ただ幸香は明らかに「お前馬鹿か？」って表情だし、何故かリアスもちょっと首を傾げ気味だし。曹操もぽかんとしているし。
「あのね、イッセー？　たぶんだけれど、曹操はイッセーが思っている

ようなことを言っているわけじゃないのよ？」
「まったくだ。そもそも異形に比べれば、人間なんて吹けば飛ぶような存在だろう？」
リアスと曹操がそんなことを言うけど、なんかしっくりこないな。
いや、だって―
「……そんだけ強けりゃ、守れる奴なんていっぱいいるじゃねえか」
―そうだろ？
曹操もリアスもきょとんとするけど、別におかしなことを言っているつもりはない。
なんだろうか。どういえば分かってもらえるのか、馬鹿なりに考えながら言わねえとな。
「そもそも人間はちっぽけじゃねえよ。当たり前のことを言うけどさ、人間も、悪魔も天使も堕天使も、神様や妖怪だってちっぽけじゃない。みんな一生懸命生きてるだろ？」
だからその辺からして分からない。
それに曹操そのものに対してだって分からねえ。
「第一、お前ってめちゃくちゃ強いじゃねえか。そんなに強けりゃ守れる奴だっていっぱいいる。一生懸命守れるように頑張ってきたからよく分かる」
なんでそんなに自分を小さいなんて言うんだろう。お前が凄い奴なのは、認めたくないけど認めるしかない。それだけの奴だって分かってるしな。
「力がないと誰かどころか自分のことだって守れない。だからちっぽけじゃないお前は、たくさんの人を守れるさ」
そこだけは断言できる。なんたって何度も戦ってるからな。
「ヴァーリにしろサイラオーグさんにしろ、そしてもちろんお前にしたって、たくさんの人を守れる力を持ってるんだ。そんな奴をちっぽけなんて言われても、俺にはさっぱり分からねえよ」
その言葉に、なんかよく分からないけど、部屋中の人が面食らっている感じだった。
え、あれ？　そんなにおかしなこと言ったか？

首を傾げていると、リアスが何故か噴出した。
「フフッ……いえ、本当にそういうところよ、イッセー？」
あれ、俺何かしましたか!?
思わず戸惑っていると、ストラーダ猊下もなぜかニコニコを微笑んでいる。
「はっはっは。悪魔になった者にも、素晴らしき若者は多いようだ。貴殿はそのまま我武者羅に生きるがよい」
え、ええ!?
名門貴族のお嬢様や、枢機卿なんて人にそこまで言われるようなこと言った？
な、なんかよく分からんが有り難い。有り難いけど恐れ多い気がする。
……よし！　否定的な意見を聞いて気を引き締めよう！
「フロンズさん！　あんたはどう思いますか!?」
『ふむ。……論点がずれている気はするが、ある種の悟りに近い考えだと思うがね』
あれぇ!?　この人まで評価してるぅ!?
っていうか論点がずれてるのか？　え、どういうこと？
ええい！　こうなれば絶対否定的なことを言うやつに聞いてみよう。意外と話はしてくれるから、教えてくれるかも!!
「幸香はどうなんだ!?　っていうかどこがずれてるんだ!?」
『そもそも妾からすれば、着眼点が二重でズレておるのだ。曹操のいう「ちっぽけな人間」がどういう意味かすら理解しておらんぞ』
そうなのか！
『曹操がちっぽけな人間というのは、いわば種族的な性能差のことを言うのだ』
しゅ、種族的な性能？
『まぁ現実問題、人体という生物として柔軟性に特化した構造は、強靭さにおいて野生動物に殆どの面で劣っておる。付け加えれば、そういった人体構造を持つ生物において、異形は人間の完全上位互換と言っても過言ではない。……悪魔と人間の各種性能差を考えるがよ

い』
あきれ顔で言われるけど、そういうことなのか？
う～ん。なんかピンとこない。
だって曹操、めちゃくちゃ強いじゃん。純血悪魔のリアス相手に、あっさり無力化できたるするじゃん。
そんな奴が人間だからちっぽけって言われても、さっぱり分からねえ。
『あとまぁ、私的なもう一つのズレを言わせてもらうがのぉ？　……説明に必要なので、世界地図を探してくるか』
あ、そこまで話すのか？
まぁ聞くだけ聞いてみるかと思っていると、ストラーダ猊下が何時の間にか大きめの地球儀を持ってきていた。
「これはどうかね？　平面にしたものが必要だというのなら無理だろうが……」
『いや、構わぬ。むしろそちらにある方が説明がたやすいな。感謝しよう』
あ、地球儀でもいいのか。
で、地球儀が俺達の方にあると説明が楽なのか。あと地球儀で説明できる俺の勘違いとか、わけがわからん。
首を傾げていると、幸香は俺の方に視線を向けてから、地球儀に視線をずらす。
『質問に質問を返すようじゃが、必要なので聞くぞ？　……おぬしは例えばマジックペンなどで、その地球儀に己の姿を縮尺に合わせて描けるか？』
……何言ってんの？
「無理に決まってんだろ」
『そう無理だ。貴様はもちろん妾だろうと曹操だろうと、それこそリアス・グレモリーやヴァスコ・ストラーダ、当然だがフロンズを書き込むこともできん』
なんか当たり前のことを訳が分からない形で言いながら、幸香はうんうんと頷いている。

『無論じゃが、グレートレッドも書けんだろうな。妾達が乗っているネオ・マケドニアすら、米に熟語を書けるような手合いでも難しかろう。……それがもう一つのズレじゃ』

……さっぱり分からん。

分からないからこそ、幸香の言い分をとりあえず聞こう。

真っ直ぐに幸香を見ていると、幸香もうんうんと頷いた。

『地球という星、そしてそれを含めた異形の生息域から比してみれば、あらゆるものが小さいものだ。ましてこの世界を内包する広大な宇宙はおろか、乳神によって異世界という幅が判明した以上なおさらであろう。……妾達はすべからく、ちっぽけな存在でしかないのだよ』

そう語る幸香は、うずうずしている笑みを浮かべて俺達を見据える。

『故に、妾は曹操とは違う意味で、自らが小さい人間であることを認めよう。……だからこそ、挑むのだ』

幸香は胸を張って、そう言った。

『この無限と形容できる広がりを持つ世界で、ちっぽけな砂粒にすぎぬだろうこの星の、砂粒一つとも形容できぬが我が身。そんな己が世界に版図を広げ、大いなる覇を描く』

誇り高く、誰が何と言おうとそれがいい。

きっとそこに、幸香の本質があるんだ。

そしてその本質を、後継覇王（アレキサンダー）は宣言する。

『まだ見ぬ未開（あした）を駆けるが為に、己の小ささに向き合うこと。……それすなわち覇道の根幹であり、妾からすれば龍神如きで止まっておるこの世界こそ乗り越えるべき対象よ』

『……その辺にしてくれたまえ』

そこで、フロンズが幸香を止める。

『思想が相容れなかろうと、かみ合う部分で合わせることも肝要だ。我らは魔王派（対立する派閥）と大王派だが、冥界の……そして和平を結んだ勢力のより良き未来に貢献する義務がある』

そう言ったうえで、ただフロンズも小さく微笑みを浮かべていた。

『……まぁ、龍神を勢力で超える余地は目標にするべきが勢力だと思

うがね？　出なければ対龍神をコンセプトに据えたＧ（ギガンティック・フォートレス）Ｆの開発計画など提唱はしないさ』
……本当に、あいつらとは相容れそうにないな。
俺もリアスもその辺を思っている。そしてシャルロットも似たような感想らしい。
「なるほど。ナポレオン辺りと気が合いそうですね……いえ、私は会ったことなどありませんが」
『まぁ、間違いなく覇道の権化だろうな。覇を克服し王道を行く相棒とは相容れまい』
ドライグまでそんなことを言う中、ストラーダ猊下は目を細めながらフロンズに視線を向けていた。
「そういえば、冥界政府は四大魔王という役職を指導者から外し、七つの大罪……いや、その前における八つの大罪と絡めた制度を設ける方針だとか。提唱者は大王派だったな」
そういえば、四大魔王制度ってそんな感じになっているんだっけか。
大王派がその辺りを主導していたとは聞いているけど、もしかしてフロンズ達が……？
ただ、フロンズは微笑みながらゆったりと頷いていた。
『色々とは考えていますね。とはいえ、人員は魔王派を多く選出する予定なのでご安心を』
そう言いながら、フロンズは魔法陣を展開すると十数人ぐらいいる顔写真を映し出す。
サーゼクス様達四大魔王の方々はいることから考えると、新制度における候補ってところか？
……いや、なんかタンニーンのおっさんやかのリュディガー・ローゼンクロイツさんまでいるんだけど。
「完全な他種族からの転生悪魔まで候補なのかしら？　一割ぐらいいるけれど」
リアスがそう言うけど、そんなにいるのかよ!?
『最低でも一名は入れる予定さ。旧八大罪には虚飾の大罪というもの

がある故、完全なる他種族からの者を据えるにはぴったりだろう？』
……皮肉が効いてるなぁ、おい。
『まぁ、先祖代々からの純血悪魔かつ大王派を一人は組み込みたいのでね。先にある程度妥協をして、ねじ込む余地を入れたいだけさ』
正直に言ってくれるよ。
間違いなく相容れない。だけど頼れる味方でもある。
本当に油断できない味方だよ。
油断してると、思いっきりむしり取られるのが分かり切ってやがる……っ
俺達がフロンズ達に対する警戒を強めた、その時だった。
『悪いが政治的な小競り合いはそこまでだ』
―ノア・ベリアルの声が聞こえてきた。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

その数分前、ノア・ベリアルはオペレーターの声を聴いていた。
「ノア様!?」
「どうした。事実だけを簡潔に述べろ」
そう指示をしながらも、内心である程度は悟っていた。
今回のクーデターがクリフォトによる干渉を受けて起きた部分がある以上、共倒れを狙える好機を逃すとも考えにくい。
リゼヴィム・リヴァン・ルシファーの子供じみた悪意も、ミザリ・ルシファーの異常な悲劇願望も、それを行う理由付けとしては納得できるからだ。
だが、事態はその程度では全く済まない。

「敵軍勢と思われる集団多数！　……過去のデータだけを考えても、禍の団とサウザンドフォースは確定です！」
その言葉で、既に更なる最悪を予期したノアはため息をつきたくなる。
マルチタスクで意識の数割を戦術プランの候補選定に回しながら、ノアは言うべきことを告げる。
「確定以外の敵勢力はどれだけある？」
「……最低でも、小規模勢力を含めて四勢力。仮説として大欲情教団らしい艦隊が確認されました」
それを聞いて、叫ばなかったノアは胆力がある方だろう。
発情と性欲を尊び、世界規模で被害を生んでいる大欲情教団。
たまたま神滅具保有者がいたことから、連鎖反応と独学で人工神器兵器を開発し実用化。一部に至っては兵藤一誠の乳技じみたことすら行える。出来の悪い悪夢が現実を犯しているようなものである。
ゆえに、ノアは瞬時に決断する。
「よし。全部隊に通達しろ―」

その指示がなされている間も、敵勢力はバチカンを目指し進軍する。
今ここに、バチカンの歴史は更なる空前の激戦を経験することになる。

聖教震撼編　第十三話　千客万来

イッセーＳｉｄｅ

ノアの声は、かなり真剣だった。
それも緊張感がある。いや、警戒しているのか？
フロンズも長い付き合いがあるからか、すぐに表情を鋭くしている。
『端的に聞こう。中と外のどちらかね？』
『外側だ。確認できるだけで四方向から、結構な規模の連中がバチカン目指して進軍中だ』
……は？
「外側から襲撃かよ!?」
おいおい冗談だろ。この状況下で外側から進軍とか、絶対に敵じゃねえか!?
しかも四方向とか、最悪全部別勢力ってこともあり得そうだ。
「……ノア・ベリアル？　できればある程度の情報を伝えてくれるかしら」
『確認できる限りすべて別勢力だな。禍の団が使用している神器力飛行船のリーピ級とかいうのが十隻。サウザンドフォースの天界に現れた船と同型が二隻。それとは別に数百人規模の戦闘部隊が車に乗って接近中』
おいおいやっぱり別勢力かよ。
クリフォトだけじゃなくてサウザンドフォースもか。しかも他にも別勢力が……っ。
そしてあと最後のは一体なんだ？
……おかしいな。答えが来ない。
なんか微妙な沈黙が響いていると、俺はふと嫌な予感を覚えてきた。

そういえば、毎月一度ぐらいの割合で出くわす連中と、先月は出くわしてなかったような気がするなぁ。
いやだなぁ。ロキとの闘いを思い出すなぁ。俺が言うことでもないけど、あれ絶対精神に来るからなぁ。
でもこれは絶対当たってるんだろうなぁ。とりあえず聞かないとなぁ。
「……大欲情教団？」
『……十中八九な。画像送る』
すっごく頭が痛くなってそうな声色で、俺に返事したノアの声と一緒に、画像が送られてきた。
……。
『『『

でもそんな風に凹んでる場合じゃない。
『そちらの枢機卿さんには悪いが、大王派(俺ら)はあくまで神聖奴隷弾圧(さ)同盟(ん)を鎮圧するのが目的なんでな。編成を即座に組み替えて素通りさせる方針だ。……潰し合わせる分には都合がいいんでな』
「致し方ないな。だが、こちらも動かせてもらうがよろしいかね？」
ノアの作戦内容に頷きながら、ストラーダ猊下はフロンズに確認の視線を向ける。
フロンズの方もそこは当然と判断しているのか、特に反論すること頷いていた。
『艦隊の布陣を仕立て直し次第こちらも動く。多少のタイミングのずれは誤差の範疇と判断しよう……ノアも幸香もそれでいいか？』
『オーライ。それぐらいの柔軟性は何とかできるだろうさ』
『構わんとも。手柄になる首がゴロゴロあると前向きに受け取ろう』
一応足並みを揃えてくれるからありがたいよなぁ。
そう思っていると、こっちの部屋の方からどたばたと足音が響いてきた。
なんだなんだと思っていると、ドアがけ破られる勢いで相手、傷を負った神父さんが転がるように入ってきた。
「猊下！　大変です……気づかれました！」
……おい、冗談だろ。
ストラーダ猊下も表情を引き締めて立ち上がり、俺達もすぐに臨戦態勢をとる。
その頃には神父さんも落ち着いて呼吸を整えると、それでも強張った表情を浮かべながら俺達に告げる。
「ウルバヌス二世聖下の直属部隊に包囲されました。既に戦闘を仕掛ける状態になっております……っ」
……上等だ。やってやろうじゃねえか。
「リアス！」
「分かっているわ。この様子から見て、他も同様と見るべきでしょう」
俺に頷いたリアスは、ストラーダ猊下に視線を向ける。
「反応から見て罠だったとは考えないわ。力を貸してもらうわよ」

「当然。我らの方が助けを請うた以上、背負うのが業という物だろう」
頼もしい返事が返ってきたけど、ここからが大変だというほかない。
……無事にしのいでくれよ、みんな……っ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

『……さぁて、陽動部隊にどれぐらい引っかかってくれてるかなっと』
『できればいっぱい引っかかってほしいもんだぜ？　俺はモデルバレット（あんた）と違って、安全に手柄を立てたいんでな』
「うふふ♪　後ろから燃え萌えしちゃうのは楽しそうですわねぇん♪」
リーピ級神器力飛行船を十隻も運用した大艦隊は、しかしクリフォトにとって陽動といえる。
既に内通し半ば拘禁されていた司祭や司教の力を借り、クリフォトは精鋭を動員していた。
紫炎のヴァルプルガを連れて、ステラフレームは自我未覚醒体を含めて七体も転送されている。
少数精鋭による本丸の強襲。その便宜上のリーダーであるモデルバレットは、肩を回しながらもう一体の自我覚醒体に視線を向ける。
『んじゃ、頑張って仕事しといてね？　モデルマッド？』
『へいへい了解。じゃ、スパッと仕事をしますかねぇ』
気怠そうに周囲を確認するもう一体の自我覚醒体ステラフレーム。コードネームモデルマッドは、その上で内通者だった司祭達に視線を向ける。

『んじゃご苦労さん。護衛に一体置いとくから、ここで引き籠って―』
「その必要はありません」
その言葉を遮り、額に冷や汗を浮かべていたその司祭は小さな震えを隠し切れなくなっていた。
怪訝な表情を浮かべるヴァルプルガが、すぐにそれに気づいた。
「……あらぁん？　もしかして、ここまで読まれてましたのねん？」
「―その通りだ」
『ディバイライザー』
『『『『レイドライザー……Ｅ』』』』
『『『『『『『『『『レイドライザー』』』』』』』』』』
『『『『『『『『『『『『ＣＲＯＳＳ』』』』』』』』』』』』
鳴り響く合成音声の大合唱。
そしてヤギのライダモデルが壁を壊し、同時に装甲化を開始。
『ディバイライズ』
『『『『レイドＥライズ』』』』
『『『『『『『『『『『『

レイダー部隊が……倒すっ!!」
『『『

聖教震撼編　第十四話　降臨の六聖英霊（前編）

Other Side

バチカン及び外周部を占拠した、神聖紐弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）攻略作戦は、開幕から混乱を極めていた。

理由は二つ。そもそも察知されていたと思われる、D×Dの突入ポイントに対する部隊への迎撃。及び禍の団・サウザンドフォース・大欲情教団といった国際異能系テロリストの襲撃である。

その艦隊規模の強襲に対し、ノアは瞬時に包囲する艦隊を移動させて素通りさせる。

どの勢力も主要な目的がヴァチカンにあることを前提にして、神聖紐弾同盟と潰し合わせる方向に移した対応だ。

三大勢力共通の目的は、神聖紐弾同盟の鎮圧。そして大王派からすれば、教会に恩を売るには鎮圧ができればいいのであり、無駄に犠牲を出してまで神聖紐弾同盟の人命まで守る必要はない。むしろそこまでして被害が増えると、大王派（自分達）の上役がうるさくなる。

それらも踏まえた状態ゆえに、最も攻撃が集中するのは間違いなく神聖紐弾同盟だ。

あらゆる勢力から集中攻撃を喰らう。連携をとっているわけではないから戦闘は他にもあるだろうが、最も注力されるのはバチカンだ。結論としてバチカンを拠点としている神聖紐弾同盟が攻撃を集中して喰らうのは確定だ。

……だが、神聖紐弾同盟は堅牢な構えで対応をしていた。

その光景を確認しながら、砲撃戦艦ユニットを搭載したサンタマリア級を預かっているノアは舌打ちをする。

「思った以上にやばいな。バチカン全体が大幅に強化されてやがる……っ」

この状況は、長続きすると苦戦必須だ。
もとより拠点攻略は防衛側が有利とはいえ、ここまで余裕を持って対応されているとは思っていなかった。
これは長丁場になるし、最悪の場合は敗戦もありうる。
あまりにも堅牢な敵の対応に、ノアは警戒心を強めていた。
「こりゃ、かなり気張らねえと無理っぽいな。……中の連中は大丈夫かねぇ？」
魔王派側と言っていいＤ×Ｄとはいえ、対クリフォト部隊がこんなところで大打撃を喰らうのはいいことではない。
それを懸念しつつ、ノアは迎撃態勢を素早く成立し続けることを考慮していた。

祐斗Ｓｉｄｅ

地下道に繋がっていた建物を完全に包囲されている、この現状に僕達は脅威を感じていた。
……罠という可能性は低いだろう。この建物に集まっていたクリスタリディ猊下の傘下達は、誰もが奥歯を噛み締めている。
おそらくウルバヌス二世達が読んでいたのだろう。下手をすると、外周に現れた敵勢力のうち、禍の団はあえて誘導したのかもしれない。拘禁している司祭達を利用すれば十分できる。
目的は分からないけど、乱戦にすることで敵体制旅行の同士討ちを狙っている可能性はあるだろう。とにかく危険な者達であることは間違いないようだ。
「……デュリオ。どうやら私達の行動は読まれていたようだ、すまないな」

目を伏せて謝罪するクリスタリディ猊下に、デュリオは片手を振りながら気にしないように態度で示す。
ただ、表情はかなり引き締まっているから……相当の事態にはなっているけどね。
あからさまに動いている者達も多いけれど、どうやらただの見せ札……のようでいて、仕掛けられても反撃できるレベルだ。
最低限の練度はあるようだね。レイダーであることを踏まえれば、難敵というほかないだろう。前座の陽動レベルでこれか。
「いやぁ～こりゃまっずいねー。完全に包囲されてるよぉ……いや、本当にマズいね」
「そうねぇ。確認したけど、百人ぐらいは囲んでいるわよぉ」
デュリオに頷きながら、既に周囲を魔術的に精査していたリーネスが中々に酷い情報を告げてくる。
相手からすればこの程度は想定内ということか。両猊下が僕達を招き入れて対処することまで踏まえて、既に部隊を編成済みだったとはね。
そんな外の厳重な様子を警戒する僕達、ため息をつく人物がいた。
「それでどうするの？　外は外で忙しい以上、もう打って出た方がいいとお姉さん思うけど？」
そう言いながら、その女性はサンドイッチが満載された皿をテーブルに置いた。
そして色々な感情が込められている感覚のため息をついて、呆れた表情を僕らに向ける。
「できれば曹操に来てほしかったし、久しぶりの暴れられそうだからコック見習いをするよりはいいんだけど。なんで懲罰を受けているところでクーデターが起こるのかしらね？」
そこにいるのは、英雄派の幹部だったジャンヌ・ダルクの魂を継ぐ者。
そんな彼女の文句に対し、シスターグリゼルダが少し眉を潜めながら一瞥を返す。
「……そこについては申し訳ありません。ただ、テロリストに色々と

言われるのは心外ですね」
そう返すグリゼルダさんには悪いけど、少しジャンヌの言い分に理解を示したくなってしまう。
英雄派のヘラクレスを保育園の守衛にあてがう刑罰がなされていたのは知っていた。ただジャンヌはジャンヌで、教会のコック見習いをやらされているらしい。
中々面白いことをしているとは思うけど、他に何かないのかと言いたくなる彼女の気持ちも分かってしまう。
アーサー・ペンドラゴンと美猴の視線も同情交じりだ。彼らも保育園のワックスがけとかをさせられている為、思うところがあるのだろう。
「そっちはそっちで大変だねぃ……いや、本当に大変だな」
「どういう意味で言ってるのかしら？」
サンドイッチを食べた美猴の表情が微妙になり、ジャンヌの額に青筋が浮かび始めていた。
どうやら彼女の料理の上では「頑張りましょう」レベルのようだ。なおのこと食堂で働かされるのは思うところがあるのだろう。
試しに食べてみると……うん、微妙だ。
「……あとでいい教師役を派遣しようかしらぁ？」
「う～ん。アドバイスできるところが五つぐらいあるけど聞くかい？」
リーネスとデュリオもそう言ってきた。どうやら意見は同じようなものらしい。
それに凄く何か言いたげな顔になるジャンヌだけど、ため息をついて流すと肩をすくめる。
「まぁ、今回は久しぶりに戦えそうだからいいんだけど。……あいつは出てこないでほしいけどね」
ん？
何やら戦いたくない者がいる口ぶりだね。
相当の強敵なのか、それとも相性が悪い相手なのか。
その辺りをふと考えていると、足音が外から響いて……いや違う

な。
なんだろう、ステップ？
僕達が首を傾げる中、教会の戦士達は一斉に視線をジャンヌの方に向けた。
なんだろう。このタイプの視線に僕は覚えがありすぎる。
ゼノヴィアの脳筋行動に伴い落ち込む僕に対する、仲間達の表情と近い。
そしてジャンヌはジャンヌで、すっごい嫌そうな表情を浮かべている。
そして、ステップは更に使づいた。
もはやステップを踏んでいる者の姿を見ることができる距離で……なんだ？
「ふふふ。皆さん信徒として、頑張ってくださるようで感激です！」
にこやかに煌めく笑顔を浮かべるその少女は、可憐な微笑みを浮かべながら両手を組んで祈りだす。
そしてその光景に、何人かがすすり泣いている様子を見せていた。
そしてその様子に少し苦笑を浮かべながらも、その少女は祈りをもって天を仰ぐ。
「ああ……主よ！　どうか我らに、正しき断罪を下したまえ！　そして我らの地獄の道行きを、阻む者達を薙ぎ払いましょう、皆さん！」
『『『

た、その時だ。
「我々からすれば、聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌこそ聖女の名に相応しいと思うのだがね」
―その声と共に、僕達は警戒心を一気に引き上げた。
振り返るその瞬間、既に相手は攻撃の間合いに入っている。
突貫するは一人の男性。壮年のその男は、手に盛った剣を既に降りぬく直前だった。
そしてその剣が持つオーラ。それに僕達は驚愕する。
まさか……このオーラは―
『『『

かった。
……神聖糾弾同盟は独自開発のプログライズキーを投入し、それによる連携を前提として動いている。
悪魔祓い（エクソシスト）とそれ以外で武装を分け、悪魔祓い以外は軍人による最低限の教導を受ける。そして戦闘補助機能を持つプログライズキー及び、そのリソースを性能の配分する機能を組み込むことで、同一のプログライズキーにより圧倒的な戦力を獲得することに成功した。
十万レベルの数を持つそのプログライズキーこそ、この戦闘における最大レベルの戦力確保。中級悪魔でも殲滅に手古摺るレベルのDレイダー部隊による数の猛威は、間違いなく脅威ではある。
「甘いぞ！」
『『『

「露払いも立派な仕事」
そしてその最強戦力によって吹き飛ばされた飛沫のような敵達を、的確に倒す者達もいるからこそ、この場の戦いは圧倒的だった。
アニル・ペンドラゴンも塔城小猫も、その戦闘能力は伊達ではない。単独でプロの上級悪魔眷属を、それもエース格を担える手練れ達だ。
更にはぐれにならなければ最上級悪魔は確定だったろう黒歌や、サイラオーグが誇る女王（クイーン）たるクイーシャ・アバドンなどの卓越した実力者達がここにいる。
必然、短期間の訓練を受けただけの有象無象では抑えきれるものではなく―
「―下がるといい」
―その剛腕を盾で受け流す、手練れがいなければすぐに終わっている戦いだった。
サイラオーグの攻撃を盾で受け流したものは、返す刃を回避されてしまう。
……すぐに修復された盾を確認する男と、僅かに鎧に傷を入れられたサイラオーグは、共にそれを確認しつつ間合いを図る。
うかつにサイラオーグが踏み込めば両断され、下手に刃の距離に拘れば男が粉砕される。
その絶妙な間合いを維持したうえで、サイラオーグは呼吸を整える。
「……簡単に行くわけがないとは思っていたが、やはりな」
「悪魔が聖都たるヴァチカンに入るとは世も末だ。……ここを聖墓と仮定する―ッ」
その敵意の籠った言葉と共に、男は王冠を具現化させると天へと掲げる。
その瞬間、土地そのものが切り替わった。
その事実にD×Dの者達は戦慄し、神聖糾弾同盟は歓喜に震える。
そして盾と剣で武装した男は、切っ先をサイラオーグに突きつけて宣言する。
「我は六聖英霊が一人。セイバー……ゴドフロワ・ド・ブイヨン」

強い意志を秘めたその目が浮かべるは、神敵打倒の色が浮かんでいる。
「今宵ここは聖墓となった。悪徳の化身にこの聖墓守護者を討てると思うな……っ」
その瞬間、戦いは更なる激化に繋がった。

聖教震撼編　第十五話　降臨の六聖英霊（後編）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ヴァチカン近郊に存在する建築物。その地下にはかつて廃棄された暗部の設備が存在する。

そこは異端審問、それも魔女狩りを主体とする者達が使用していた暗部組織。

激痛・心労・薬物といった多種多様な手段をもってして、必要とする証言を引き出すことを目的とした研究機関だった。

当然だが人道的見地が重んじられるようになれば忌避されるようになり、魔法技術の発展などもあって必要性は薄くなっていったことで、廃棄された設備である。

だが同時に、綺麗ごとだけでは成立できないことは数多く存在する。ゆえにこの暗部も半ば分散配置される形で廃止されたが、現代においてはやはりかつてより遥かに少ない規模になっていた。

……だからこそ、かつての過去に存在していた英霊（もの）はそれを嘆いている。

「まったく嘆かわしい。君達のような者が、あちこちに投げやられるなんて……ねぇ？」

「気遣い感謝いたします、アサシン様」

その男に同情され、一人が感動すら覚えて微笑んだ。

彼らは分散した拷問を担当する者達だ。そしてその役職すら終了させられたことで、一時は教会を離反していた者達でもある。ゆえに神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）に属することを選んだ者である。

そんな彼らに同情を浮かべながら、アサシンと呼ばれた男は施設を懐かしそうになでる。

「例え悪徳と誤解される恐れがあろうと、人には必ずそれを正しく使

える余地がある。そう、この施設こそ悪徳を正しく扱う為の光なのが、彼らはさっぱり理解しようともしない」
その言葉に、人々は救われた面持ちになる。
拷問というものを、世界の人々は忌避するのが全体的な傾向になっていることは数多い。
結果として善と正義を示す教会でも暗部の仕事となり、それすら和平によって不要とみなされた。
その不満を持ちながら過ごしてきた彼らが、神聖糾弾同盟の誘いに乗ることは当然だったのだろう。
そして、男は今の教会の在り方を心から残念だと思っている。
「邪悪なる異端を相手に容赦をする必要はなく、容赦しなくていい相手がいるからこそ拷問の必要はある。我らはその為に生まれた善なる者だというのに……ねぇ？」
その労わりの感情がある言葉に、そこにいる者達は本心から安堵を浮かべている。
中には拷問をすることに愉悦を感じた者もいただろう。拷問そのものをしてきたことが間違いだと言われたようで、落ち込んだ者もいただろう。自分達は悪徳だと言われたようで、涙を浮かべた者もいただろう。
そんな彼らにとって、まさにアサシンの言葉は福音であり―

「……いくら何でも流石に詭弁でしょうが、それはっ！」

―その床を粉砕して飛び出してきた銀弾に、殆どすべての者が一歩を引いたのは言うまでもない。

そして飛び上がってから器用に着地したカズヒ・シチャースチエは、アサシンを見据え睨み付ける。
「初めまして、ハインリヒ・クラマー。正義を人を殴る大義名分にしか使えない、くそったれの下種野郎」
「……初めまして悪祓銀弾（シルバーレット）。偉大なる主の正義を振るうことを良しとしない愚か者よ」
静かに視線をぶつけ合う二人をよそに、神聖糾弾同盟とD×Dは共に集合し、そして向き合う。
その静かな視線のぶつかり合いにおいて、ヒマリ・ナインテイルは少し首を傾げていた。
「カズヒってば、機嫌悪そうですわね」
死線を幾度となく潜り抜けてきたこともあり、共に戦ったカズヒの機嫌を直感的に悟っている。
そしてヒマリとは異なり、ヒツギはこれまでの経験と知識から、その理由を理論的に費やしていた。
「奴さんはほら、教会の負の歴史側だしめっちゃ自己肯定してるし……ねぇ？」
ハインリヒ・クラマー。魔女狩りを急拡大させた要因と言ってもいい男である。
魔女に与える鉄槌という所に関与し、拡大解釈などにより人々から魔女狩りに対する心理的抵抗を払拭したと言ってもいい人物。
表向きに異端審問官として活動し、同時に暗部組織としても活動をしていたことが教会の教本でも知られている。魔女狩りにおいてもそれを積極的に運用し、教会の尋問術の発展に貢献したとも言われている。最大の行動はこの建築物に仕込まれた、拷問術の研究組織を立ち上げたことだろう。
暗部という概念を容認できる余地があるか、そして過去のそういった行動をどういう風に受け取れるか。この差で評価が大きく分かれるのが目の前の男。そしてその実態がこれでは、カズヒが嫌悪感を示すのも当然だろう。
「……正義とは人を殴りつける為の大義名分ではなく、身を挺して殴

りつける者から守るべき庇護対象。異論は認めるけどあんたのそれは論外でしょう」
「それは違う。例え邪悪な精神を持っていても正しく生きれるよう、主がもたらした規範こそが正義だよ」
真っ向から鋭い視線をもって、カズヒの批判をハインリヒは否定する。
「そう、それこそが主の最大の功績。それを否定するなど主の否定そのものである。……恥を知れ、背教者めっ！」
「正義を大義名分に一線を楽しんで超える糞野郎が。……現在の信徒まで引きずり込むその行動こそ恥じなさい！」
互いにヒートアップし始めているが、しかし双方ともに精神力で爆発だけは制御している。
一瞬でここまでヒートアップするほど、互いが互いを不倶戴天とすでに認識している。正義という概念や信徒が持つ悪性において、真逆の認識を持っているのなら仕方がない。
それでも、互いに慎重かつ冷静に仕掛けるタイミングを見計らっている。
カズヒ・シチャースチエは意志力の怪物。意志の覚醒で文字通り力を向上させるほどの意志力は、同時に暴発した際の危険性の熟知とそこに対する自罰意識で、必要でないなら抑え込める精神的化け物の域に到達している。
対するハインリヒも、精神と肉体の絶対性を信心によって保証する、信仰の加護スキルをAランクで保有するサーヴァント。精神力においてはサーヴァント全体でも上位側に属するだろう。
ゆえに、互いに不倶戴天と言ってもいいあり方と性質を持ちながら、この地下施設での戦いはいまだ勃発していない。
その間にD×D側は全員が戦闘態勢を取り、同時に神聖糾弾同盟も統制を取り直して迎撃の体制をとっている。
互いに睨み合い、だがタイミングを見計らっているだけの状態。激突は確定であり、少なくともハインリヒかカズヒは討たれるだろう。
その睨み合いにおいて、真っ先にD×Dでそれに気づいたのは初代

孫悟空だった。
「……なるほどねぃ。読んでたかい？」
「……流石に気づくか」
孫悟空の祖の指摘に、ハインリヒは肩をすくめる。
だが言葉は肯定のそれ。ハインリヒは孫悟空の懸念を素直に認めたのだ。
当然、カズヒ達は全員が警戒し―
「だが、既に発動済みなんだよ」
―その瞬間、地下室は光に包まれた。

イッセーＳｉｄｅ

俺達が慌てて上に上ると、既に建物は周辺を完璧に包囲されていた。
やっべぇ。人数も凄いけど、見るからに強いと分かる連中も何人もいる。
中には真っ白な髪をした男や女もいる。カズヒみたいなケースもあるだろうけど、多くは動きから見て同僚とか同期といった感じだ。フリードやジークフリートのいた戦士育成機関の出身の共通点らしいし、たぶんそういうことなんだろう。
レイダーも見えるだけでも数十人はいるし、かなりの戦力がここに集まっている。
……いくら何でも赤龍帝（俺）や聖槍（曹操）がここにいることまでは把握しきれてないはずだ。

となると、ストラーダ猊下対策ってことなんだろう。行ける伝説と言われてるらしいし、コカビエルのような最上級堕天使すら追い込んだ人がいるんだ。そこに俺達D×Dなんていう対超越者・対邪龍チームが来るっていうなら、これぐらいの警戒はむしろ必須なのか。

俺達が臨戦態勢を取りながら警戒していると、怒りと悲しさが混ざり合ったような表情を浮かべた少年が前に出てきていた。

年は十二歳ぐらいだろうか。黒髪の子供は、だけど外見とは不釣り合いな、人をまとめる立場のような雰囲気を漂わせている。動きもリアスやミカエル様みたいに、人に仕えられる人達がよくするような動きをしている。

っていうかあの子、ストラーダ猊下と似たような服装だな。

……まさか。

俺がそれに思い至った時、ストラーダ猊下は俺達の前に出ると、その少年の前に姿を現した。

「……レグレンツィ猊下。来てしまわれたのですな」

「ストラーダ、何故だ……？　何故、ウルバヌス聖下を裏切るような真似をしたのだ……っ」

泣きそうな表情で、少年はストラーダ猊下を問い質す。

やっぱりあの子がレグレンツィ猊下なのか。

奇跡の子で俺達より若いっていうけど、本当に若すぎだろ。まだちっちゃな子供じゃないか。

……いや、つまりそれだけの能力があるからなんだろう。俺がリアスのプロデビュー前から中級悪魔の昇格資格が与えられたようなもんだ。

「何故だストラーダ！　この戦いは、もはや聖戦だ！　例え私達全員が死して地獄に落ちようとも、それだけの価値があるはずではないか!?」

泣き出しそうなぐらい悲しそうな表情を浮かべ、レグレンツィ猊下はストラーダ猊下にそう問い質す。

それに対し、ストラーダ猊下は静かに首を横に振る。

「それでは駄目なのですよ。この老骨、クーデターの終結にはクリス

タリディと共に命をもって詫びる所存でしたが、それはあくまで戦士達を守る為です」
……ストラーダ猊下の言葉に、俺達も驚く。
この人達、そんな覚悟までしてクーデターを起こしていたのか。
その言葉にレグレンツィ猊下も目を見開いている。おそらくそこまで聞かされてなかったのか。余裕が、なかったのかもしれない。
俺だって、アーシアが一度殺された時から堕天使に対して色々不信感があったし、リアス部長が望まない結婚をされかけた時はライザーのこともいけ好かない奴だと思っていた。
それでも、アザゼル先生の教えを受けたりレイヴェルと仲良くなったりで、良いところもあると思い直せたんだ。
だけど、レグレンツィ猊下には……。
「和平では救えぬ者がいる。それを一度示し、彼らの真摯な態度を引き出すことが我々の考えでした。胸の内を明かさなかったことは詫びますが、信徒達を道連れに滅びるような真似はよして下さいませ」
「……そんな。貴方まで、悪魔の肩を……」
信じたくないように首を横に振るレグレンツィ猊下の前に、割って入るように一人の男が立つ。
その人は教会の戦士のようだ。ただ、ストラーダ猊下を見る表情は鋭く、敵意も浮かんでいる。
「……そろそろ出た方がよさそうね」
リアスが危険だと判断したのか、建物から出てストラーダ猊下の隣に並ぶ。
俺達グレモリー眷属も並んで出て行くと、その男はゼノヴィアの方を見て目を血走らせる。
「斬り姫ぇっ！　よくもこのバチカンに顔を出すことができたな、背教者がぁっ!!」
なんかすっごいゼノヴィアに敵意燃やしているんだけど!?　何があった！
ゼノヴィアもゼノヴィアでちょっと面食らいながら、だけど首をかしげている。

あれ？　知り合いとはそういうわけじゃないのか？　斬り姫ってゼノヴィアの異名……というか忌み名みたいな感じだって聞いたことあるけど。
正直俺たちが戸惑っていると、ストラーダ猊下がかばうように手を広げる。
「戦士オウルよ。ゼノヴィアの離反は枢機卿の判断であり、またミカエル様により謝意すら示されたことであるぞ」
「何を言いますか！　何があったか知りませんが、我らが教えを国を閉鎖してまで拒絶したうえ、道端の石にすら神が宿るなどというふざけた文化を奉じる国で、仮にもデュランダルの担い手が悪魔に落ちぶれるなど!!　追放されたからといって、弱みに付け込まれるなど信仰に生きた者として論外です!!」
お、おぉ……う。
ゼノヴィアのファンかなんかだったのか？　かなりキてるな。
っていうかこれ、リアスに騙されたとかそういう感じで受け取ってないか？　追放されたところを言葉巧みに惑わしてって感じで。あと日本のことかなり嫌ってるなぁ。
これ、ゼノヴィアがどういった形でリアスの眷属になったのか知ったら絶対やばいことになるな。
よし、俺からは絶対に言わないように―
「―いや、むしろ私からリアス部長に売り込んだんだが」
―おバカぁっ!?
「馬鹿！　ゼノヴィア、絶対言ったらややこしくなる奴だろそれっ!!」
俺は思わず怒鳴るけど、もう遅いよなこれ。
「……なんという……なんという……っ！」
『ディバイライザー』
『ＣＲＯＳＳ』
あ、なんかフォースライザーそっくりのベルトを装着してプログライズキーまで装填した。
「許……さぁんっ!!」
『ディバイライズ』

『Ａｍｅｎ』
ブチぎれて変身したぁっ!?
しかも持ってるのって……あれ？
俺は思わずゼノヴィアの手元を確認するけど、これ間違いないよな。
「貴様らは……この仮面ライダーディバインとプロトデュランダルⅡで成敗するっ!!」
……やっぱりデュランダルぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ!?

和地Ｓｉｄｅ

既に外では轟音が鳴り響いており、どうやら地下から突入したメンツも攻撃を受けている。
そして俺達もまた、敵と向き合っていた。
と、いうよりだ。
「……まず挨拶をするべきだろう」
そう返す壮年の男性は、隣に若い日本人を連れて、微笑みすら浮かべていた。
「初めまして、チームＤ×Ｄとデュナミス聖騎士団の諸君。私はキャスターのサーヴァントにして神聖糾弾同盟の盟主、ウルバヌス二世だ」
「そしてランサーのサーヴァント、天草四郎時貞」
……サーヴァントを引き連れて、盟主自らが乗り込んできやがった、だと!?

聖教震撼編　第十六話　大王派の奮戦

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

神聖糾弾同盟による、完全にタイミングを見極めたうえでの潜入地点への部隊配置。

それとほぼ同じタイミングで起きた、多種多様な勢力によるバチカン襲撃。

この事態において、フロンズ・フィーニクスは素早く指揮権を自らの責任においてノア・ベリアルに委譲し、自身は補佐的な活動に徹していた。

これにより戦術家として名をはせるノアは瞬時に対応。優先順位の取捨選択を瞬時に行い、敵の殆どをバチカンに素通りさせる形で陣形を再編した。

神聖糾弾同盟に死者が出ることもいとわないという、危険性にゆえにある程度の容認がなされた状況を生かした策だ。敵の多くはバチカンを意図的に狙っている以上、神聖糾弾同盟との戦闘に戦力が割かれるだろう。少なくとも、自分達の優先順位はある程度下がる。

事実殆どの組織は困惑の有無はともかく、バチカンの突入にリソースを多く割いた。そして当然だが、神聖糾弾同盟は迎撃に動いた。

結論として、制圧部隊が態勢を整える時間は十分に稼ぐことができた。

そのうえで、ここからが本番といえる。

「……チッ。やはり無視はしてくれないわな」

舌打ちをしたうえで、ノア・ベリアルは瞬時に敵の行動パターンをある程度予測。想定外の動きが起きることも前提に、どう動いても対応できるだろう動きを持って対応する。
中々に難儀する対応だが、幸い独自判断は与えられた裁量の範囲内で行ってくれる部下に恵まれた為、何とか対応はできている。
既にバチカン周辺の上空では、艦隊による砲撃戦が発生している。
更にそこから割って入るように攻撃部隊が送られており、はっきり言って乱戦になるのも時間の問題だ。
だからこそ、その乱戦を敵対勢力に可能な限り押し付ける対応をとっている。
こういう時に引っ掻き回されるままになればそれこそが危険だ。自分のペースに拘りすぎて倒されることもあるが、ペースを徹底的に乱されれば勝てるものも勝てない。
ゆえに、敵同士で潰し合う流れにするのが最優先。最悪でも敵が来る方向をまとめることで、迎撃をしやすくする為に艦隊を動かしている。
だが同時に、ノアは解せない感覚を覚えていた。
「……読めないな。神聖紗弾同盟（やっこさん達）は何を考えていやがる？」
神聖紗弾同盟の対応はどうにもちぐはぐな印象を覚えている。
練度はあるのだろう。反応は早いし、このイレギュラー極まりない事態にもすぐに迎撃を行っている。迎撃そのものも堅牢であり、突入することが困難であることも言うまでもない。
だが同時に、迎撃を突破して突入に成功した手合いに対する迎撃速度が妙に遅れている印象を覚えている。
外部からの情報収集、まして自軍を指揮しながらでは分かるレベルなど極僅かだ。
しかしそれにしてもおかしい。突入してきた者を排除するまでの時間が、迎撃態勢を整えるまでの動きからみて明らかに遅い。明らかにそこに関する対応能力が大きく低いとしか思えない。
どう考えても、この練度と対応力ならもっと早くに反応できているはずだ。ここまでの練度と連携ができる勢力ならそれができないはは

ずがない。
まるで、意図的に遅らせている。そう思いたくなるが違和感しかない。
この手の戦闘で敵に深入りされていいことなどない。最悪突入されてもかまわないという、そんな戦術としての違和感を覚えていた。
「しゃぁねえ。……フロンズ、悪いが仕事だ」
『何かね？』
すぐに返答が返ってくることに苦笑しながら、ノアは自分の仕事に集中することを決めた。
「どうも神聖糾弾同盟の動きがちぐはぐだ。……たぶんだが、これはお前向きの案件だろ？　ちょっとそっちに集中しといてくれ」
苦手な分野を考えている余裕は現状無い。ならそういった分野に長ける者に任せるのが一番だ。
役割分担による効率化。これは知的生命体が編み出した、より大きな物事を成し遂げる為の戦略的活動である。
『……一応、便宜上ネオマケドニアの管理は私の担当だが』
「ラカムに任せていいよ。戦術的観点から俺が許可するし、何なら俺がそっちもやっておく」
親友の懸念をさらりと自身の責任で背負いながら、ノアは確信だけを伝える。
「この辺りを読み違えると、大損こく気がするんだよ。少なくとも、奴らの対応力は明らかに歪すぎて意図がありそうだ」
それを理解することができるかが、この戦いでの被害を左右するだろう。
その確信だけは、ノアにとって絶対に断言できることだった。

そして同時に、フロンズが懸念するほどに激戦が頻発しているのも事実だった。
具体的には、既に幸香は前線に出張る必要に迫られていた。

「ふはははははっ！　数だけではこちらが困るぞ？　もっと手柄を持ってくるがよいわぁっ!!」
すでに仮面ライダーディアドコイに変身している幸香は、さらに星辰光（アステリズム）を全力で放って敵を吹き飛ばしていく。さらにプログライズキーの力を併用し、面制圧を突破するだろう敵をピンポイントで制圧する。
有象無象の殲滅において、九条・幸香・ディアドコイは圧倒的な力を発揮できる。更にそれ以上の制圧力を持つユーピと異なり、ある程度の取捨選択を行うことができる。
純粋な才覚な能力の幅では、ユーピ・ナーディル・モデウが問答無用で後継私掠船団最強。だがそれを超える一手を打ち出せるからこそ、幸香は意志の力をもってユーピを超えるだけの要素を持てるのだ。
加えて反撃の殆どを不滅齎す黄金花（ゴルディモータル・ストレチア）によって防ぎ切る。
それ単体で堅牢なシールドビットであり、更にそれによる防護結界を張る圧倒的な防御力。
最上級悪魔如きでは傷一つつけられないだろう圧倒的な防御力を、しかし幸香は慢心しない。
予想外などいつでも起きる。敵だってこちらの裏をかこうとする。鍛え上げ、編み出し、研究し、作り出す。その蓄積こそが彼女の強みであり―
「……さぁ、まずは絶頂を知るがいい！」
―だからこそ、その現象に彼女は瞬時に反応した。
沸き立つは性的快楽と幻覚。
自分が圧倒していた敵集団もまた、陶酔状態になり光の眉に包まれてゆっくりと落ちる中、彼女はそれを味わいながらも意志を爆発させる。
「……まだだぁっ！」
気合と根性で覚醒し、その意志力により快楽の幻惑を突破する。
そして振り返ると共に、窒素爆薬の獣達を殺到させる。
そしてそれに対し、現象を引き起こした存在は胸を……もとい、股

を張った。
「吹きすさべ。エクスタスブラスター、サウザンド」
その瞬間、その存在から数百を超えるオーラの砲撃が放たれる。
イタリアの空を爆発と砲撃が埋め尽くす中、瞬時に幸香はスラッシュライザーを構えて切りかかる。
同時に神滅具による障壁まで展開しながらの突貫。常に気合と根性を入れる幸香のその一戦は、かつてロキの反乱で起きた戦いで放った宝具より、更に鋭く洗練される。
その斬撃が振るわれる一瞬……で、幸香は伏せるように上半身を屈める。
その瞬間、神滅具で張った障壁が切り裂かれた。
「性欲のかけらもない壁など、この絶頂剣には通じん」
静かに語るその存在は、素早く切り返して斬撃を幸香に振るう。
だが、光に狂った征服者を、相手は間違いなく見誤っていた。
「……まだまだぁっ！」
『ブローニングレイン』
放たれる増加ブレードによる斬撃は、だが斬り合いを行うものではない。
その攻撃は一瞬で相手の斬撃を受け流し、絡め取る様に逸らす。
その瞬間、幸香は自分の至近距離に爆薬を大量生成して爆発させた。
爆薬の形状を利用することで、爆圧は相手に集中する。だがそれでも多くの爆圧が幸香に襲い掛かることは必然で、それを彼女は気合と根性で強引に耐える。
それでも数十メートルは吹き飛ばされるが、すぐに体勢を立て直していた。
そして、幸香は敵が倒されているなどとは考えない。
相手の力量は警戒必須。ならば今の不意打ちは多少の痛手止まりが最高の結果だろう。それを踏まえ、幸香はすぐに呼吸を整えると、警戒の体制をとる。
そして、その存在は姿を現した。

「……我らが性欲の祝福をもってなお、迷走するとは……哀れなり」
「……やっぱり大欲情教団であったか。相手にとって不足なしよ!!」
戦いは、まだまだ続いていく。
「さぁ行くぞ、今度は二刀流だぁっ！」
「性欲を縛るすべてを断ち切れ……絶頂っ剣っ!!」
……まったくと言っていいほどかみ合ってない戦いだが。

聖教震撼編　第十七話　思慮する者たち（前編）

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

そう、戦いは激化の一途を辿っていく。
ノアの素早い判断で素通りとなった敵達だが、当然だが時間が経てば経つほどに乱戦の様相を見せていく。
その一つとして、既にこちらにも更なる戦いが繰り広げられていた。
「……まったく。様子見も兼ねて仕掛けてみればこれだ」
舌打ちをするは、疾風殺戮・ｃｏｍのリーダーたるハヤテ。
バチカン相手に一線を交えるのはいい機会だと、こうして来てみればこの状態。
敵と戦うのはいい。想定外の形になったのも仕方がない。
だが、よりにもよって相手があまりに嫌すぎる。
放たれる攻撃を回避しながら、サリュートＩを用いて反撃を仕掛ける。
同時に敵は素早い連携を取り、更に負傷をある程度考慮に入れない戦い方をしていた。
戦い方に覚えがある。魔術的に人間をやめた存在たる、死徒のそれだ。それも、正真正銘死徒と形容できる位階の者達が動いている。
この時点で脅威以外の何物でもない。そして何より、動きをラーニングしているがゆえに当たりというほかない。
「サウザンドフォースか。あの愚か者どものシンパがまだ健在だとは思わなかった」
徹底的に大打撃を与えたつもりだったが、数年である程度の形を整えられるまでに回復するとは想定外。神祖の操り人形という大前提で動いている者達だけだと思っていたがゆえに、ここまでの自律を可能とするとは思っていなかった。心から反省していている。
愚か極まりない人間の守護者気取り。まだ神仏の方がマシだとす

ら思う醜悪ぶり。それがハヤテにとっての神祖という存在の評価だ。
自分のような者を人類の友と思うことも愚かだが、ほぼほぼ無断で人造惑星にして喜ぶと思っている神経も理解できない。適当に話を合わせつつ出し抜くことを前提にしていたが、それであっさりどうにかできてしまったことにも呆れたい。
だからこそ、この状況には舌打ちしかする気がない。
「……まったく。別動隊として動いていたら裏切り者と出会うとは」
そう告げるリーダー格は、拳を握り締めてハヤテを睨み付ける。
「人の友として目覚めながら、何故人類と敵対する。神祖の加護を……許せん！」
ハヤテはその言葉になんの返答もしない。
言葉を交わすだけ無駄になるだろうと予測済みだ。９９パーセント以上で話がかみ合わないと出ている以上、この状況下でそんなことをするのが酔狂だろう。
「……サツ、リク。そちらはどうだ？」
『こっちもこっちで手古摺ってるぜ。後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）とかち合った』
『こちらリク。例の変態集団と戦闘中』
どうやらどこもかしこも満員御礼らしい。
それを理解して、ハヤテは判断を切り替える。
……あの計画を進める為にも、ここで倒されることだけは避けなければならないだろう。
今後を踏まえた判断を考慮して、ハヤテは後詰用のサリュートＩも投入を決める。
上級死徒を筆頭とする集団での敵部隊。それも星辰奏者すら確認されている以上、その脅威度は半端なサーヴァントを超えている。
多少の損害は覚悟のうえで、ハヤテは戦闘プランを再定義して遂行した。

そんな他方面での戦闘において、当然だがＤ×Ｄも動いている。
後詰として外周部担当だった部隊では、既に敵軍を確認しているほどだった。
「……これはややこしいことになりましたね」
地下道の入り口をカバーするように設営された、Ｄ×Ｄの陣地。そこを指揮するソーナは、すぐに預けられた戦力の指揮を執っていた。
そして同時に、この状況が混沌と言っても過言ではないことにも気づいている。そこからくる事態の悪化にもだ。
……おそらくだが、禍の団まではウルバヌスの仕込みだろう。
禍の団に内通していた者達を利用する形で、禍の団が仕掛けるタイミングを計っていたのだろう。おそらくは意図的にストラーダ達に協力者を内通させるなりして、同時タイミングで仕掛けてくるように誘導している。
それ以外の勢力までは想定外だろう。しかし対応と動きから言って、外周部で乱戦が巻き起こることは想定されていたように思える。そうでなければいくら何でも、神聖糾弾同盟の動揺が少なすぎる。
となれば、侵入する手合いに任せた戦力を事前に選別するぐらいはしているだろう。そこまでは考えておかなければいけないと言い切れる。
「どうしますか？　地下道そのものは確保できている以上、追加の戦力を送ることはできますが」
次点の指揮権をもつシーグヴァイラがそう提案するが、しかしソーナは首を横に振る。
「この陣や外周部隊に、対応力を削らせればこちらが潰されるでしょう。それに―」
「―地下道の広さでは戦力の逐次投入にしかならない。精鋭を既に集中的に送っている以上、効果的な援護になりえない……ということですか」
既にそこまで分かったうえで、あえての提案だったらしい。
頭の中で考えるだけでなく、あえて言葉にすることでより確実に認識する。また周囲の者に聞こえる形にすれば、業を煮やして提案する

二度手間も防げる。
そこまで考えてた上で、あえて損する役割をとってくれた。そんなシーグヴァイラに感謝しつつ、ソーナはすぐに知略を巡らせる。
「……悪意を無邪気に振舞うリゼヴィムと、悲劇を自他問わず質量ともに拘りつつ求めるミザリ。そんな二人のルシファーに率いられている以上、禍の団（カオス・ブリゲート）がこの程度で済ますとも思えません。」
「そうですね。ではそちらの指揮は私が。ソーナは全体の対応をお願いします」
素早く判断を行い、そして対応をする。
ソーナ・シトリーもシーグヴァイラ・アガレスも戦術家であり、その実後方の指揮を行うことにたけている側だ。将というよりは軍師としてのスタイルが向いている王（キング）であり、この点は前線での戦闘能力やそれに伴う士気向上に向いているリアス・グレモリーやサイラオーグ・バアルとは相対的といえる。
一見すると目立ちづらく華がないスタイルだ。だが実利をきちんと気にする者からすれば、こういう者にこそ価値を感じることも多いだろう。
それだけの資質を見せながら、二人はD×Dを預かり対処を行い続けていた。

そして禍の団が投入したリーピ級神器力飛行船の船団。その旗艦において、一人の男が周囲のデータを調べていた。
「教会の連中もやるじゃないか！　設計思想がサリュートとも（ディアボロス・フレーム）D　F（トライフォース）とTとも異なっている」
戦闘部隊やドローンなどの映像をもって、アルバートは敵の兵器体系を紐解いていく。
禍の団、ひいては自分が開発した兵器体系。人工神器の持つ問題を解決する手法として、「宿す人体ごと大型化する」を主眼に置いて開発

され、星辰光（アステリズム）との併用で高性能化を果たし、大量生産を前提とする搭乗型サリュート。
神の子を見張る者（グリゴリ）による兵器体系。サリュートの発想を生かしながらも、技術的アドバンテージもあって人工神器に一点特化。更にロマンを利用した、少数精鋭を基本とするＴＦユニット。
そして全く異なる兵器体系。強力な悪魔を人工的に再現し、下級悪魔や中級悪魔を制御ユニットとして同調させることで高性能化をはたしながら数の暴力を体現する。大王派の主力兵器が一つたるＤＦ。
更に大欲情教団による、肥大化した股間部が特徴的な人型兵器。こちらは拙い技術と知識で神器を再現しつつ、自分達の価値観や技能を推し進めた結果だろう。性欲をもって高性能化を果たす為、人間における生物の機転たる股間に重点が置かれているのだ。
そしてそこにパラディメアという、教会独自の人型兵器体系。加えてサウザンドフォースも独自の兵器を開発している。
興味深い。そしていいインスピレーションとなることが目に見えている。
いい機会だからと見学に来てみれば、これはあまりにも素晴らしい機会となっている。まさに最新戦闘兵器技術の見本市で、目で見て確認できるこの幸運に歓喜し続けてしまう。
頬をにやつかせながら、アルバートは目を見開いてデータの収集を続けていく。
……既に時刻は日付が変わる直前。
バチカンの未来を左右する戦いにおいて、一人の男は純粋なまでに知識欲を満たすことに徹底し続けていた。

聖教震撼編　第十八話　思慮する者たち（後編）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……う～ん。なんか乗せられてる感？」

首を傾げながら器用にサリュートⅡを蹴り砕いたリヴァは、再び首を傾げて考え込む。

それと同時に地脈を利用する大地の砲台を作っての、対空砲撃が邪龍達を次々と撃ち落としていく。

集中が明らかに散漫だというのにこの戦果。彼女が主神の娘に見合った性能を持ち、それに恥じない技量を鍛え上げていることの証明である。

が、見ている方が気が気が出なくなるのも事実だ。

「お前もうちょっと戦闘に集中しろよな!?　こっちの気が散るっての!!」

思わず絶叫するベルナだが、こちらはこちらで敵を薙ぎ払っている。

継続的に強度を獲得できる、氷塊による遠距離戦闘。瞬発的にそれ以上の攻撃力を出せる、水流による近距離戦闘。更に水蒸気による高速移動が、間合いの主導権を握っている。

遊撃として十分すぎる制圧力を発揮するベルナもまた、Ｄ×Ｄメンバーを名乗るに相応しいだけの力を発揮していた。

更に遠隔地の邪龍を撃破していた春奈とインガも戻ってきて、これまた不安げな表情を見せる。

「酷い乱戦になってきたわね。ヴィール様達が出てくるような事態じゃなくてちょっとだけ安心だわ」

「和地君達のチーム、連絡も取れなくなってるみたい。いつものことだけどまた大変なことになってるよね」

双方ともに健在ゆえの、若干余裕が見える口調。彼女達がもれなく実力と経験を持っていることの証明といえる。
そのうえで、リヴァは怪訝な表情を浮かべながらヴァチカンの方に視線を向ける。
……きっちり迎撃は果たしながらなのは安心だが、だからこそ不安を覚える対応だ。
「あの、リヴァ？　何がそんなに気になるの？」
襲い掛かる量産型邪龍を素早く突き穿ちながら、インガが代表する形で質問する。
普段から余裕を忘れないリヴァが、あまりに意識をヴァチカンの方に割かれすぎている。不安を覚えるには十分すぎる態度だ。
インガがその辺りを深く聞こうとするのも当然だろう。逆に自分達の集中力も割かれてしまう。実際、ベルナや春奈も若干気にしている。
それをリヴァも悟り、少し息を吐いた。
「……なんていうかね？　戦略的に相手の思惑に乗せられてる感じがするというか、今のところ手の平の上から出てないって感じ？」
「ここまでいろんな勢力が入り乱れてんのに？」
リヴァの言葉に春奈が首を傾げるのも無理はない。
神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）を巡る争いは、もはや多重事故の様相を見せている。あらゆる勢力が入り乱れすぎて、乱戦という言葉すら控えめな表現。しいて言うならば混沌そのものだ。
思惑通りに動ける勢力がいるわけがない。そう思えるほどの、混迷としている状況ともいえる。
しかし、リヴァは長年を生きていた直感と経験則から、懸念を拭い去ることをしていなかった。
「……というより、思惑を揺るがすような事態になってない的な？　余裕って感じがかなりあるのよねぇ」
その言葉に、それを聞いている者達が不安と寒気を覚えている。
もはやこれだけの情勢下では、神聖糾弾同盟は近日中に壊滅する。それは決定事項と言っても過言ではない。加えて聖書の神が関与す

る余地もない壊滅である以上、それが既に不可能であることを差し引いても、戦略的な勝利は不可能である。
にも関わらず、部隊を動かしている統括者といった視点から焦りを感じない。
……そう、これはしいて言うならば―
「絶対何かを読み違えてるわね。それも、冗談抜きで致命的レベルの」
―決定的な戦略ミス。もしくは相手にとっての好都合が成立している。
その根拠を感じない確信に、リヴァは睨むような視線をバチカンに向けてしまう。
かつてのローマ教皇、ウルバヌス二世。十字軍遠征という、教会史でも類を見ない軍事活動を引き起こし、財力や王権による腐敗や外部干渉を乗り越えた、有数の傑物。
英雄派とは別の意味で人間から生まれた才覚。それに対して油断をしたつもりはない。
だが同時に、それでもなお足りない危険性を察し、リヴァは内部に突入した仲間達を心配し始めていた。

リヴァが直感的に悟っていた懸念を、同じように悟っている者は少なからずいる。
神聖糾弾同盟の戦術から懸念を覚えたノアのように、形は違えど違和感を覚える者は少なくないのだ。
そして後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）にも、同様に懸念を覚える者はいた。
「……どうした？」
「ん～？　なんかバーニングしてねぇっつーか、妙にファイヤーじゃねえ奴らが集まってるんだよなぁ？」
ただし気づいたのは、奥羽・煙霞・ヘラストラトスだったが。
超越神焼（オーバーヘラストロテス）を二つ名とする彼は、全身から放つ炎を利用したホバー

走行で、敵の目前に迫りながら攻撃を回避し続ける。……動作が一々ロボットダンスであり、移動においても急加速急制動でそれっぽくしている神経を逆なでする回避だが。

意図的に凄まじい挑発を駆けながらのこの攪乱行動は、当然だがヘイトコントロールという点で凄まじい成果を上げている。

戦場でロボットダンスというのが時点で意味不明で、それを目の前に急に表れてやるのがまず苛立つ。無駄に上手なのが更にストレスを底上げし、攻防のタイミングで邪魔するように見せてくるから更に倍増。とどめに隙あらば似非ラップが飛んでくる為、単純に殺意がわく。

そんなわけで敵は半分一時休戦で奥羽を狙うが、器用に回避してくる所為で更に頭に血が上る悪循環。結果としてブレイ・マサムネ・サーベラが器用に何本も得物を切り替えながら切り捨てるという、試し切り相手になってしまっている。気が付くと全身が燃え出して倒れる者まで出てきており、この困惑が更に激昂を助長させる始末だった。

そのうえで、真っ先に違和感に気づいたのが奥羽であることそのものが、彼がまごうことなく傑物であることを示している。

既に一通りの敵を片付け、一息入れることが可能な状況下。交代要員として手柄を挙げに出陣する者達を見送ってからのその言葉に、ブレイは首を傾げていた。

「……要約してくれ。俺は本質的に刀匠なんで、細かい機微は分からん」

「簡単に言うとだ。士気にムラがあるし、何故か部隊の装備も違うって感じだな」

ブレイの注文に、奥羽は分かりやすく普通に答えてくれる。

そしてそれによって、ブレイも何かがあるということをすぐに悟った。

もとより能力の都合上、魔剣を鍛える際に役に立つ為、ブレイは比較的奥羽と付き合いがある。

加えて、後継私掠船団筆頭戦力でもあることから、その性質は共鳴

の部類に近い。ある種の阿吽の呼吸がそこにある。
必然として、十分警戒するべき違和感であることをすぐにブレイは理解した。
「……練度や任務ではなく、士気だけなのか？」
「八割ってところだな。……士気が微妙な連中達は、実力に関わらずプログライズキーを使ってねえ。あと引き籠ってる感じがするぜ？」
奥羽にそう言い直されて、ブレイも少し思い返す。
……そして、その一点を理解した。
「言われてみれば、プログライズキーを使用している連中は攻性だが、そうでない連中は籠城戦に近いな」
例えるなら、戦術の違いだ。
独自開発のプログライズキーを使用している者達は、練度や統率の差に関係なく堂々と姿を現して戦闘を行っている。
死を恐れてないというのは宗教系の大ごとでよくあるが、プログライズキーそのものが戦闘動作の支援を行っている所為か、割と敵として厄介ではある。
反面プログライズキーを使用していない者は、集団で籠っている傾向がある。
建築物を異能で要塞化し、そこに籠っての籠城戦。例え優勢であっても外に出ることは基本的になく、接近戦闘型も内部に入った相手の迎撃に徹している。いうなれば、そこを守ることが第一で、味方の支援が二番目で、能動的な攻撃は最後に回されている。
そこまで理解して、ブレイは当然首を傾げる。
何かがちぐはぐとしか言いようがない。言われて初めて気が付いたが、敵全体の統率の取れた動きと戦術的行動に比べて、妙なちぐはぐが生まれている。
「……どうやらこの戦い、何かしら二転三転しそうだな」
「確かにな！　バーニングにとんでもないことが起こりそうだぜ！」
何かが潜んでいるというのなら、是非もなし。
引き際を見誤らない範囲で首元に牙を打ち立て、そして食いちぎるのみ。

素早く上に情報を伝達するという基本をしっかりこなしつつ、二人は意識を切り替えた。

激戦が続く中、当然だが違和感に感づく者は増えていく。
その中に禍の団の者が出てくるのも、ある意味で自明ではあった。
「……おいおい。なんかおかしな動きじゃねえか？」
前線での指揮を担当する、オイケス・ハンもその一人だ。
既に敵を薙ぎ払っているが、その違和感に気づいたがゆえに舌打ちを漏らす。
内通者を経由して内部で攪乱を行うはずの、モデルバレット達と通信が途絶していることも、その違和感が警戒に代わる理由の一つだ。
普通に考えれば、気づかれて戦闘中なのだろう。だが通信が完璧に途絶されているのなら、神聖糾弾同盟は待ち構えている形で動いているのだろう。にしては、外周部の戦闘においてちぐはぐな印象を感じるのが違和感しかない。
練度において限度はあるだろうが、クーデター部隊援護における対応力から言って、どうもブレが大きい。意図的に連携に縛りを入れている印象がある。出なければ、いくら様々な勢力が入り乱れているとはいえ、外周からの敵を防衛するだけの対応にここまで乱れるとは思えない。
侵入した部隊に見事な対応をしておきながら、外周の迎撃に違和感が酷い。この時点で、オイケスは内部への進軍を避ける方向にかじを切っていた。
「よっしお前らぁ！　略奪対象は神聖糾弾同盟じゃねえ、それ以外の連中に的を絞りなぁ！　思う存分奪いまくるぜぇっ!!」
『『『

「内部に入ることはしなくていい。あとアルバートからは「壊れてもまぁいい程度の量だから」って言われてる、マクロサリュートを対艦戦闘に投入しろ。派手に引っ掻き回して略奪しやすくしようぜ？」
「了解でさぁ、団長！　野郎ども、マクロサリュートに指示を出しな！」
『『『『『『『『『『『『『『へい！』』』

聖教震撼編　第十九話　混迷のバチカン

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

控えめに言って、バチカンは変態に包まれようとしていた。
目の前で性交を繰り広げることで応援するという、気が狂っている。具体的にはこれをもってして人々をよりよい精神状態に持ち込めるという考えが狂っている。しかもバリエーションを増やすために、わざわざ放○や脱○、あろうことか獣○をその場で行い、それを護衛する為の部隊を用意している辺り、天元突破の領域である。
殆どの組織が全力で関わり合いにならないように動いているが、そんな連中が侵攻しているのだから神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）は迎撃するしかない。死なない程度の叩きのめされた暁には、鑑賞させる為に引っ立てられるのなら尚更である。どの勢力もそこだけは同情している。
そして当然だが、そんな連中を生かしておけぬと総力で進軍が試みられていた。
「成敗せよ！」
「断罪せよ！」
「粛正せよ!!」
虎の尾で逆鱗を叩くような所業に、当然だが神聖糾弾同盟は本気で挑んでいる。
独自開発したダイイングゴートプログライズキーで変身する、Ｄレイダー。
悪魔祓（エクソシスト）い用に、戦術支援プログラムのリソースを性能向上に割き、更に武装を小銃から、ブレードや弾丸を形成するＤグリップに切り替えるＤレイダーＥ。
そしてフォースライザーをダイイングゴートプログライズキーに最適化したフォースディバイライザーで変身する、仮面ライダーディ

バイン。
　これらの戦力が大挙して、色欲の大罪を全力行使している神敵に対して突貫していた。
「性交あれ！」
「発情あれ！」
「淫乱あれ！」
　変態達もまた、その変態性を全力で開放しながら反撃する。
　股間からオーラの砲撃を放ち、股間からオーラの剣を生成し、絶頂と共に周囲を吹き飛ばす。
「神罰あれ！」
「神威あれ！」
「神託あれ！」
　そしてそれに合わせて激高した者達が、更なる反撃を行う。
　控えめに言って、はた目に見れば悪夢のようなぶつかり合いとなっていた。
「……なぁ、帰っていいか？」
　ゆえにそれをこっそりと覗き見る禍の団の構成員は、全力で逃亡を望んでいた。
『落ち着けよ。あいつらそっちに気づいてないんだろ？　なら大丈夫じゃねえか』
　通信越しにそう返答が来るが、そういう問題ではないのである。
　控えめに言って精神がゴリゴリと削れていく。誤解を恐れずに言えば〈テロを行う精神が正気かはおいておく〉正気を失いそうである。見ているだけでこっちが狂いそうだ。
「セックス至上主義ってのもイカれてるけどよ、神様信仰した結果で断罪してもらうってのもイカれてるよな？」
『そりゃそうだ。聖書の神ってのが直接動かないのも、ぶっちゃけ関わりたくないからかもなぁ？』
　ボヤきの返答に、同じように偵察を行っている者達から「まったくだ」の大合唱が返ってくる。
　この場で偵察を行っている者達は、禍の団でも末端側だ。

乗っている機体はサリュートⅢで最新鋭機。しかしこれは数を揃えることを前提としている機体であり、裏を返せば雑兵用の機体だ。ゆえに実力者とか有力者というほどのことではない。

必然として、聖書の神の死を知らない者達のみ。だからこそ、神聖糾弾同盟の厄介さに関して実感が足りてない。

そんな彼らでも、大欲情教団に対するある種の畏怖は感じている。

当然だろう。神の子を見張る者でも普及レベルで実用化させることができなかった人工神器。禍の団がアルバートの発想に基づき実用化させたのと同じ次元。その領域を、よりにもよって神器に対する知識すらろくにない組織が、僅か四半世紀足らずで実用化させているのだから。

脅威以外の何物でもない。天才となんとかは紙一重とはこのことかと痛感する。

幸か不幸か最新鋭の兵器を与えられている彼らは、神の子を見張る者やアルバートが情けないとは考えない。その程度の知能はあるからこそ、その領域にさっさと到達してしまった大欲情教団を恐れられる。

そこにこの異常性まで加われば、関わり合いになりたくないというのは当たり前の感性だろう。そういったところだけはまともなモノを彼は持ち合わせていた。

ゆえにちょっと呑気に捉え過ぎている同僚達に、彼は少しため息をつきたくなる。

自分達が乗っているサリュートⅢは、サリュートⅡの発展形だ。

基本的な部分はさほど変わっていない。だが同時に、変わっている部分を起点としてユニットを交換し、機能を拡張できる。それによる幅こそが持ち味の機体だ。

裏を返せば、基本性能はサリュートⅡとさほど変わらない。つまり下級悪魔でも戦術次第では勝算があるレベルである。加えてこの部隊が装備しているスパイユニットは偵察・潜伏が基本であり、戦闘能力を強化する者ではない。

戦闘を掻い潜って情報を探る偵察及び、好機においては奇襲を仕掛

けてかく乱する隠密活動が主体。真っ向勝負に持ち込まれれば危険は相応にある。
この意味不明な状況で感覚がマヒしているのだろうが、戦闘能力は普通に禍の団の大規模派閥でもやっていける軍勢だ。一瞬でも油断をすれば致命傷は間違いないレベルとなる。
ゆえに自分だけでも気を引き締めねばと思い直した、その時だった。
「小賢しい伏兵め。我らを討つのは神罰だけと知りなさいっ！」
その声が聞こえた瞬間、咄嗟にスモークを展開しながら機体を飛び跳ねさせて距離をとる。
その瞬間、反応が遅れた部隊が切り裂かれ爆発していく。
恐るべきはそれが見えないことだ。切り裂いていく存在は間違いなくいるのに、映像に映し出されていない。
素早くセンサーを切り替えるが、赤外線といった映像確認でも感知できない。ただ音響センサーが大まかな方向を悟ったことで、素早く隠れながら距離をとりつつドローンを展開。
そして切り裂かれ一部が逃げ出す中、一機が爆発して生まれた爆風が切り裂かれる。
切り裂いた存在は知覚できない。だが、そこにいることは間違いない。
……その瞬間、恐ろしいことに逆バニーの格好をした女性が飛び蹴りを叩き込んだ。
その瞬間、何かがそれを防御し、距離をとる。
数秒後、現れるのは二十歳前後と思われる一人の女。
「……よく気づいたわね。このヘキサカリバーは透明（エクスカリバー・トランスペアレンシー）の聖剣を中核にしているのに」
神聖糾弾同盟の言葉に、大欲情教団の女は首を傾げる。
「見えてないわよ？」
五秒ほど、男と神聖糾弾同盟の女は沈黙した。
発言の意味がさっぱり分からなかったが、そこに逆方向に首を傾げた大欲情教団の女の信じられない言葉が放たれた。

「……殺意に囚われた麗しい耳の気配を察知したから、性欲を与えに来ただけなのだけれど」
男は全力で思った。
「おっぱいドラゴンかよ」
変態が神滅具という時点で連想するのが異形社会だが、連想するしかない変態っぷりだった。
「……死ねぇい、変態がぁっ！」
神聖糾弾同盟側が怒りの咆哮を挙げるのも仕方ないよなぁ。
そう思ったうえで、男はこれ以上変態と関わりたくないので、それとなく別の戦闘を偵察することにした。

変態達と同じように、神聖糾弾同盟と戦う者は数多い。
チームD×Dといった三大勢力主体の者達。クリフォトが主導する形での禍の団。そして、異形勢力を敵として人類解放を謳う存在、サウザンドフォースもその一つだ。
相応の部隊を投入しているサウザンドフォースの目的は、この好機をついてのバチカンからの技術奪取。
既に死した聖書の神と、その従僕たる天使達。それに惑わされた教会から、人類の力を奪還する。その為に神祖が遺した情報を元に、この時期を狙い打ってクーデターに介入する予定だった。
想定外の形になり対応に苦慮したが、だからこそのブラッドナイツ。
神祖達が過去に見出し、今に至るまで人類を律し導く先達者として死徒と化した戦士達。
存在そのものが人の為にある理を一方的に蹂躙できる、いわば対人の概念武装。基本性能も高く長い年月の鍛錬と蓄積で成長を続けた厚みも保有。ゆえにただの人間が真っ向勝負で勝てるようなものではなく、何かしらの形で人の理から外れる必要がある。そしてそれを

もってしても、中の下レベルである第Ⅳ位階で圧倒的な蹂躙が可能だろう。
そんな死徒は、サウザンドフォース全体では１００分の一未満。組織的に血液の供給ラインを確立していることもあり、むやみやたらと下位の眷属を作るような真似も必要ないしする気もない為、位階としてはⅣ以上がほぼすべて。死者や屍鬼といった手合いは、制圧戦闘の為に敵を材料に使い捨てで作る程度。
また暴走したり迷走する輩は積極的に排除され、そうでなくても弱い者はサウザンドディストラクションで滅び去った。
必然、サウザンドフォースに残る死徒はすべてが精兵。ブラッドナイツとして残る彼らは、総じて長い年月をかけて磨き上げた技量により、一階梯上の存在相手に防戦ぐらいは成立させられる
サウザンドフォースにとってブラッドナイツとは、ある種の後見人でありご意見番。彼らブラッドナイツは、選ばれながらも真の意味で神祖の頂に立つ資格を捨てたともいえる、神祖の腹心であるが故の奉公人。
その彼らが出陣した戦場で、「人間」である神聖糾弾同盟が蹂躙されるは必然。
プログライズキーという科学技術は彼らにとって余裕でどうとでもできるもの。神器（セイクリッド・ギア）も「人間の異能」ゆえに、世界の均衡（バランス）を破壊（ブレイク）する禁手（バランス・ブレイカー）でもなければ通用しない。異星法則を具現化する星辰奏者（エスペラント）は、その性質及び根幹の高次元粒子たる星辰体（アストラル）もあって突破は可能だが、積み重ねた年月と鍛え上げた技術をもってすれば生半可なものなら一蹴できる。
そんな圧倒的な暴虐に、しかし対処できる者もまた存在する。
「……吸血鬼、とはまた違う。これが死徒という物か！」
振るわれる斬撃は、伝説級に至った聖剣のそれ。
如何に人の理を否定する死徒とは言え、その本領は人理という概念が存在し、それらが薄絹のように星を包み込む世界でなされるもの。
ある種の域を超えているエクスカリバークラスなら、この世界でなら通用する。ましてヘキサカリバーとして更に高められたその刃は、

半端な死徒では対処ができるわけがない域だった。
更にその動きは幻影として多重であり、多重の幻影によって連携する味方の位置を誤魔化された死徒達は、第Ⅴ階梯や第Ⅵ階梯すら何人も切り捨てられる。
その斬撃は外周部の部隊にも容赦なく襲い掛かり、そして死体の山を作らんとし―
「……悪いが、そこまでだ」
―振るわれる黒い刃が、その一閃を跳ね返す。
距離をとる剣士は、その刃を振るう狗を見据えると舌打ちを返す。
「刃狗（スラッシュ・ドッグ）か。如何に主がもたらした権能が如き力であろうと、我らを裁くのは貴様ではない」
「……悪いけど、聖書の神に君達は裁けない。裁くとするならそれは俺だ」
その言葉に、聖剣使いは鋭い視線を向けながらも、静かに腰を落とす。
神滅具の担い手はその時点で脅威。既に仮面ライダーディバインに変身しているとはいえ、それで漸く彼に通用する領域に到達していると、そう考えるべきだった。
「我が名はグレゴール。ウルバヌス二世聖下より夢幻のヘキサカリバーを賜りし、全霊信徒」
そしてグレゴールと名乗った戦士は、ヘキサカリバーの切っ先を鳶雄に向ける。
「覚悟してもらおう。貴様はここで―」
その瞬間に、二人は同時に動いていた。
本能的に伏せつつ、同時に可能な限り距離をとり、更に得物を使って防御の体制をとる。
その瞬間、すれ違うように走り抜ける影が、直線状の近くにいた者達を両断した。
神聖糾弾同盟も、三大勢力も、禍の団や大欲情教団であろうと一切合切関係なく。サウザンドフォース以外を建築物すら切断した。
「……なるほど。生まれついて至っていた神滅具保有者に、神祖のお

言葉から外れた拡張されたエクスカリバーを持つ存在。なら我々が出張るぐらいでなければな」
そう語る男は、両手に赤い曲刀を構えていた。
何かが決定的にずれているようなその存在は、振り返ると共に宣言する。
「我が名はブレッド・ブラッドナイツ。「斬撃」の原理を持つ祖が子なり」

ここに、更なる激戦が勃発する。

聖教震撼編　第二十話　強敵襲来（前編）

イッセーＳｉｄｅ

なんだあれ。……デュランダル!?
いやいやちょっと待って、なんでデュランダルが二本もあるの!?
俺は構えながらびっくりするけど、ゼノヴィアはエクス・デュランダルを構えながら奥歯を食いしばる。
「信徒の慰撫の一環で、各種技術を利用したデュランダルのレプリカが作成されたと聞く。まさかあれが……？」
デュランダルのレプリカ!?
おいおい勘弁してくれよ。ヘキサカリバーの件もあるから、かなり高性能なものを作れそうじゃねえか。
俺はちょっとびっくりするけど、俺達の前に立つストラーダ猊下は首を横に振った。
俺達がそれに首を傾げていると、後ろから猊下に付き従った信徒の一人が剣を渡す。
……こっちにも別のデュランダルがあったよ。
「レプリカはこれだ。あれはそのデータをもとに開発が進められていた、デュランダルⅡ……の試作型だろう」
「その通り。私が試験運用を行い、そこから完成したデュランダルⅡは貴方に与えられる予定だった」
オウルって奴は頷くと、だけど親の仇のように猊下に怒気を向ける。
「だがもはやそれもない！　ウルバヌス二世聖下とレグレンツィ司教枢機卿猊下の信を裏切った罰、先に地獄で受けてもらう!!」
そう言いながら、オウルは素早くフォースライザーっぽいのを二回

開閉する。
　そのあと飛び上がると、オウルの右足には十字のオーラが……っていきなり必殺技かよ!?
『ダイイングエンピレオ』
「砕け散るがよい！」
　なろうが！　させるかよ！
　悪いけど、こっちも色々とチャージしてるんだ。迎え撃つ！
「喰らえ、最大出力ドラゴンショット！」
　俺が最大チャージをしたドラゴンショットを放つと、オウルの奴は真っ向からそれに蹴りを叩き込む。
　壮絶な競り合いの末、ドラゴンショットは吹っ飛んだ。
　オウルの奴は……衝撃で飛ばされたけど無事だな。あっさり着地しているし。
「……忌々しいが、異例の進化を遂げる赤龍帝が相手では、そう簡単にはいかないようだ」
　そう苛立ちながらオウルが言うと、既に大量の戦士達が武装を構えている。
　殆ど全員がレイダーになっているけど、これは数が多いな。
　だけど、俺だって成長している。最初の段階で周囲を確認しているし、だから中には女がたくさんいることだって気づいているんだ。
　そして、このメンツなら女相手にはめっぽう強い！
「曹操！　俺達は女を集中的に狙うぞ！　数を減らさないと押し切られる！」
「同感だね。サイリン達は男達を抑えてくれ……全女性を無力化してから男の方に移る」
　俺は洋服崩壊（ドレス・ブレイク）の準備をし、曹操も女宝（イッティラタナ）を呼び出した。
　ふっふっふ。既に真っ向から迫りくる女性の一団は確認している。まずはそっちの無効化だ！
　俺達は素早く迫り、俺は更に乳語翻訳（パイリンガル）すら発動を試み―
「……そうはいかんなぁ!!」
　―その瞬間、俺達の対女性異能が封じられた。

「なっ!?」
俺も曹操も面食らうけど、それがよくなかった。
既に女性達が変身したレイダーは攻撃態勢に入っている。
小銃とグリップが一斉に構えられた。
あ、これまずい！
『『『

……すいません。どこかで見たような顔してるんですけど。
具体的には、教科書で。
俺が何か思い出していると、その男は黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）を俺達に突き出すように構える。
そして同時に、その後ろから空に浮かぶ帆船が出現した。
大量の鎖に繋がれた帆船を浮かべるその男は、俺達に不敵な笑みを浮かべて宣言する。
「我が名は六聖英霊が一人。ライダー、クリストファー・コロンブス！
覚悟はいいか……異端者どもぉ！」
コロンブスだったぁ。やっぱりコロンブスだった！
あとコロンブスってクリストファーが名前だったのか。コロンブスが名前だとばっかり思ってた！
しかも聖槍の持ち主かよ。更にライダーだからって船を宝具にしやがって。
だけどなめるな。コロンブスは確か軍人じゃなかったから、あの船も戦闘に特化しているわけじゃないはず。
聖槍の方に意識を向けて、船は強引に突破を――
「気を付けたまえ。コロンブス（彼）の船は災禍齎す航海船（シックス・サンタマリア）と言って、コロンブス交換の負の側面が一つ、天然痘と梅毒の塊ともいえる宝具だ」
――試み掛けたら、ストラーダ猊下がとんでもないことを言いやがった。
嘘だろ？　それってつまり――
「……喰らったら童貞なのに性病になるのかよ!?　最悪じゃねえかぁっ!?」

『『『

なんか絶叫された!?

祐斗Ｓｉｄｅ

断ち切られた建物が崩れるより先に、僕達は外に出ることで対応する。

同時に素早く聖剣の龍騎士達を具現化させると、僕は彼らに先ほどの敵の迎撃を指示する。

間違いなくて彼だ。動きがいいのですぐ分かる。更にデュランダルを思わせ絶大な力を持つ聖剣まである以上、精鋭と言っていいだろう。

魔剣すら持たせて一斉に仕掛ける。全方位から仕掛けることで、一気に叩き潰すべきだろう。

……だけど、剣士の周りを聖なる騎士が出現して龍騎士は迎撃される。

一体一体の速さと技術はこちらが上。だけど騎士単体での力強さと頑丈さではあちらが上。とどめに数では圧倒されている。

更に魔剣を振るった龍騎士すら、二刀流に切り替えた男はその攻撃をいなしきった。

驚くべきは、その技量もだが持っている剣だ。

片方はデュランダルを思わせる聖剣。そしてもう片方も、僕はその

姿を見たことがある。
「殉教四聖剣（デュリン・カリバー）……っ」
準神滅具の持ち主が、敵に出てくるとはね。
あれは四つの奇跡を持つだけでなく、エクスカリバーですら七分割された状態では勝てないほどの聖剣でもある。聖剣であることを踏まえれば、真っ向勝負で僕やイッセー君でも競り負けかねない力を至ることなく持っている。
となると、もう片方のデュランダルの似ている聖剣はその禁手か？
僕はそう推測するけど、グリゼルダさんはその剣を見て苦い表情を浮かべている。
イリナさんやデュリオも思い当る表情だ。
「……シスターグリゼルダ。あれって」
「ええ。デュリンダナ、完成していたのですね」
イリナさんの言葉にグリゼルダさんは頷いていた。
となると、あれも教会の新兵器といったところか。
デュリオも珍しく苦い表情を浮かべながら、その剣を見て目を細めていた。
「実験的に作られた、量産型デュランダル。……使い手、用意しちゃうなんてねぇ」
……デュランダルの量産型、か。
元々デュランダルは、使い手の選別に難航している代物だったはずだ。
バルパー・ガリレイの研究で、エクスカリバーの使い手を見繕うことは可能になった。だが同時にそこまでで、デュランダルの使い手は未だ人工で用立てれるほどではない。
量産化に伴い、性能の低下と引き換えにしてでも使い手を増やす為の試みはなされただろう。だけどそれにしたって限度がある。
神聖糾弾同盟……幅が広いようだ。
そして僕達は包囲される形になっている。
「戦士ミゼル。例え闇に落ちようと、光が世界を満たす為に戦うその力に期待してますよ」

「了解です、聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌ。私としても、奴が相手なら少しやる気になっています」
サーヴァントのジャンヌにそう答えながら、ミゼルと呼ばれたその男は、デュリンダナの切っ先をデュリオに向ける。
「初めましてだな、天界の切り札(ジョーカー)。……貴様のような者が天使に選ばれるとは、主の意向とは言え苛立ってしまうものだ」
……相当敵意を向けられているね。名指しでしてくる辺り、相当嫌われているようだ。
そしてデュリオの方も、ミゼルと呼ばれた男の方を見て少し嫌悪感を見せている。
彼がこういった表情をとる印象はなかった。どうやら、彼にとっても好かないタイプの人種らしい。
そしてミゼルはデュリオをを一睨みしたうえで、クリスタリディ猊下の方に残念そうな表情を向けた。
「残念ですよ、クリスタリディ猊下。……ええ、本当に残念です」
そう告げながら、ミゼルは二つの聖剣を構える。
「残念ですが、これもまた世の無情というものです。……それでも、主の裁きを祈ると致しましょう！」
笑顔すら浮かべて、聖処女(ラピュセル)ジャンヌは旗を振り上げる。
どうやら、僕達の相手は彼らで確定のようだ。
僕達のメンバーは分からないだろうけど、エクスカリバーの使い手として最強とまで称されるクリスタリディ猊下がいる。となれば、当然だけど精鋭であることは言うまでもない。
いいだろう。僕達もこんなところでやられてやる気は、ない。
「覚悟してもらおう。D×Dクラスが打倒されれば、今度こそ主も自ら動かれるだろうしな」
「すべては迷いし神の子に神の御稜威を見せるが為に。……覚悟してください！」
二人が同時に動き、そして攻撃が開始される。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

聖都守護連隊の詰め所付近での戦闘は、熾烈を極めていた。
純粋に数が多いこともだが、それ以上の脅威が今まさに、その猛威を振るっている。
「失せるがいい悪魔めが！　このバチカンに貴様らの居場所は無ぁああああっぃ!!」
「ぐぅぅぅぅぅ……っ！」
『こなくそ……っ！』
振るわれる斬撃の余波で、獅子の鎧を纏ったサイラオーグ・バアルと、邪龍の鎧を纏う匙元士郎が弾き飛ばされる。
今この場におけるＤ×Ｄ側の戦力で、まごうことなく最強がこの二人。
龍王の力を宿す匙元士郎に、神滅具をプログライズキーを上乗せしたうえで鎧とするサイラオーグ・バアル。
その二大戦力を弾き飛ばすは、神聖糾弾同盟の筆頭戦力。
ウルバヌス二世を筆頭とする、六騎の英霊。六聖英霊と称される、神聖糾弾同盟の主力中の主力。
その一角、セイバーのクラスをもって現界する男。その真名はゴドフロワ・ド・ブイヨン。
ウルバヌス二世によって起きた第一次十字軍。そのエルサレム奪還の立役者ともいえ、聖墓守護者として生涯を捧げた男。まごうことなく教会が尊ぶ戦場の英雄でも代表格。
そのゴドフロワが、強い怒りを込めた目で二人を見据える。
「生まれついての悪魔だけならまだしも、人でありながら悪魔に転じた背信者め。……そのような邪法を利用する転生天使も業腹だが、原

点たる邪法が現代の聖都に踏み入れるなら是非もない」
そのうえで、ゴドフロワは両手を掲げる。
その手に具現化されるは、一振りの旗。
それを地面に打ち付け、ゴドフロワは体勢を立て直したサイラオーグと匙を見据える。
「もう一度言おう。今ここを聖墓と設定した……その意味を、死をもって知るがいい」
絶対的な力と意志を持つ、その声が誰にでも聞こえるように告げられる。
……単純戦闘能力において、六聖英霊で最強は誰か。その答えは誰もが知っている。
聖墓守護者、ゴドフロワ・ド・ブイヨン。こと戦闘で彼の右に出る英霊……否、戦士は―

「―ここが聖墓である限り、我が生き方に曇りなし。……滅びるがいい、神敵よっ!!」

―今この聖墓に、一人もいない。

聖教震撼編　第二十一話　神曲・神聖喜劇（ラ・ディヴィナ・コムメディア）

Other Side

気づいた時、カズヒ・シチャースチエは見覚えのある部屋を見ていた。

それは彼女が道間日美子であった時……否、その二つの長くはない人生で、最も多く性交を経験した一室である。

それに気づくと共に、彼女の脳裏に知識がインプットされていることに気が付いた。

「……対心宝具、神曲・神聖喜劇（ラ・ディヴィナ・コムメディア）」

その名は、ある作家が作り出した作品につけられた名。

すなわちそれゆえに、どの英霊が成し遂げたのかが判明したも同然だ。

「ダンテ・アルギリエーリ。もしくは神曲のダンテそのものか」

そう独り呟きながら、カズヒはため息をついた。

宝具の性質なのか、カズヒはこの空間のルールを既に理解していた。

指定した対象を取り込む結界。取り込まれた対象は、時間圧縮を受けた状態で、自身をダンテと仮定する形で神曲の旅路を再現した、自身ではなく対象の心象を具現化する固有結界。

正攻法での脱出は非常に困難。また時間圧縮をある程度受ける都合上、正攻法で脱出する方がはるかに効率的。それがある種の心理的な責め苦を与えることによる、トラップじみたものではあるのだが。

「……なめられたものね。嫌がらせ特化型の宝具で私を足止めとか」

だからこそ、カズヒはため息をついた。

地獄など何度も経験した。そうなって当然な選択をした自覚もあ

る。
今までの人生は煉獄ともいえる。それだけの業を、覚悟をもって背負ってきた。
そして天国を既に実感している。今の自分がどれだけ恵まれていると思っている。
ゆえに、正攻法で乗り越えよう。それが理論上可能ならば最短距離だと、とっくの昔に理解している。
ましてダンテの神曲とは、乗り越えて至高天まで到達する物語だ。性質上到達不可能に設定されているはずがない。
乗り越えて見せる。それが今までの自分の生き方に対する責任であり、今の幸せに対する誠意である。
まして自分はそれが得意技だ。強い意志をもってして、本来不可能な困難すら乗り越える異常者。攻略できるように設定されている精神的試練など、乗り越えられない道理がない。
ゆえに一呼吸。
既に部屋には、思い思いくつろいでいる男達が何人もいる。
最初が地獄ならどうなるかなど確定的に明らかだ。そろそろ道間日美子（かつての自分）が入り、下劣な欲望のはけ口になる。そういう、かつての当たり前を見るのだろう。
そこまですんなりを考え、カズヒは空いたドアに視線を向け—

「……こ、この格好でするの……？」

—赤面を俯かせた少女を見て、凍り付いた。
道間日美子（かつての自分）が来ていた制服を着ている、女子としては背が高い、桃色の髪をした少女。

魔術的特性で会得してしまったその特徴的な髪色を持つ彼女を、見間違えるなどありえない。
かつての大事な家族。そして恨みに恨みぬいた怨敵。自分が徹底的に汚しつくした哀れな生贄。
そして、愛する救済者を最初に世に生み出した、いわば義母ともいえる女性。
「乙女、ねぇ」
声に動揺の色が出てくることを、カズヒは驚愕ではなく納得と狼狽で理解した。
想定外の一撃をもらうということは、想定している一撃をもらうより遥かに精神的に動揺するものだ。
なにせ構えてないのだ。威力が高くとも予想していた一撃なら構えの分だけ対応できる。だが想定外の構えてない一撃は、威力が低くでも大きく崩される余地がある。
初見殺しの類が厄介なのと同じだ。対応ができてないというのは、それだけで影響が大きくなるのだから。
それでもなお、激昂も狼狽もしていない自分がいる。カズヒはそれを、諦観の類と共に理解した。
強い決意を生態として持ち続けて生き続ける。それゆえに、負けて砕け散るか貫いて勝つかの両極端。進めず立ち止まることも折れて道を変えることもできないのが、自分のような極まった光の厄介なところだ。
道間日美子（かつての自分）もそのようなものだ。幼少期ゆえにまだ未成熟だったそれは、しかし確かにあったのだ。だからこそ歪み汚れこそするが、願いだけは真っ直ぐに進み続けてしまったのだ。
そのザマが、目の前の光景を作ったのだ。
「……本当に、これで日美子にこんなことをしないんですね？」
「もちろんもちろん。無理やりしたりとかもうしないから、約束約束」
八割詐欺なその約束は、日美子の方から提案したものだ。
乙女がこいつらに処女を差し出し、その後も毎日と言っていい頻度で性欲のはけ口になる。その代わり、道間日美子に同じことを強要し

ない。それが乙女が誘導された約束。日美子(自分)が提案したことだ。
そもそもこの頃には無理矢理されたりしたことなんて、一切ない。
ある種の開き直りと諦めに至っていた日美子にとって、むしろ男達の性欲のはけ口になることは、不快感だけでなく快感も得られることだ。誠明に対する捨てられず叶わない恋心の、ジレンマを忘れるいい方法になっていた。自棄になった手合いというのは、自分を傷つけることをいとわないのだ。
だからこの頃には、日美子は自発的に参加していたも同然だ。むしろ職業や財力があることもあり、適度に甘えることでリターンを得ている、ｗｉｎ―ｗｉｎの関係に近づいていたともいえる。
だから当然だが、乙女がこいつらに犯されてからも、関係は減っただけで続いていた。
そもそも基本として、何時どこでするかについてのすり合わせはほぼできている。それ以外の時も、基本的に数日前から予定のすり合わせぐらいはしている。自発的に誘う時だって少なからずあったぐらいだ。
そう。こうなるように誘導したのは、ひとえに乙女と誠明の関係にひびを入れる為。
関係がぎぐしゃくしてくれたのならそれでよし。追い込まれた乙女がどこかに消えてくれれば好都合。万が一何かが壊れてくれたのなら、それを利用して誠明を壊してでも手に入れて見せる。
どこまでも汚れ果てながらも突き進んでしまった、悍ましい決意の始まり。
それをまざまざと見せつけられ、流石のカズヒも心を痛める。
「……訂正するべきね。流石はサーヴァントの宝具を言ったところかしら」
激痛を踏み越えながら、カズヒはしかし苦笑するしかなかった。
宝具が効果的に決まったことになのか、この光景を見てなお突き進める己のどうしようもなさになのか、それはカズヒ自身も分からなかった。

そしてカズヒがその固有結界に囚われた……ということは、当然だがカズヒ以外は固有結界に囚われてないということでもある。
それは本来そうであること。そして、現状は決してそうではなかった。
「……ここまで十全に仕込んだと、そういうことでいいのかねぃ？」
「いや、なんか予想外の事態になってるね」
孫悟空とハインリヒは、お互いに苦笑しながら睨み合う。
孫悟空によって展開された結界の陣を、紫炎で出来た棘付きの鎖が取り囲んで、突破を試みる状況が成立していた。
膠着状態となっているその競り合いに、しかしそれ以外の者達は関与していない。
神聖糾弾同盟の者達は、ハインリヒの命令で人員を集めに向かっている。確実に圧殺できる人数になるまでは、よほどの事態にならない限り戦闘を開始しないように言明されている。
音に名高い孫悟空。神仏の中でも勇名をはせる武闘派を相手にするのならば、それだけの物量は最低限必要だ。流石にサブリーダーであり大御所の孫悟空を引き連れてくるとは読めてなかったが故の措置ともいえる。
そして同時にその対応は、孫悟空以外が動かないという確信があってこそのものだった。
そんなハインリヒの判断を理解している孫悟空は、視線はそのままに後ろの気配に問いかける。
「そっちは大丈夫かい？　まだ動けない感じの気なのは分かっとるが」
「……いや、ほんと御免なさい。何が何だか……」
そこでは倒れこんだヒツギとヒマリが、何とか戦える体勢になれないか悪戦苦闘していた。

控えめに言えば、ヒマリとヒツギは急に動けなくなり、こうして戦力として対応できない状態に陥っていた。
そして、カズヒもまた動けない。
ダンテ・アルギリエーリの宝具に囚われたカズヒは、立ったまま意識が喪失している状態だ。
その体には魔力で構成された紙片（ページ）がまとわりついている。それが宝具の影響を受けていることを示す証拠であり、外部からの干渉で外せない、認識としての紙片（ページ）だった。
そして、そのうち数枚はヒツギとヒマリにも出現して張り付いていた。
その状況に最も目を丸くしたのはハインリヒであり、だからこそ彼らは警戒を重視した対応をとっている。
そして孫悟空も無理をせず、この異常事態を好機を掴む余地として防戦に徹していた。
そして、その拮抗状態を作る要因はハインリヒにもある。
「……神滅具（ロンギヌス）、紫炎祭主の磔台（インシネレート・アンセム）。ったく、同じ神滅具の使い手を一年に何度も見れるたぁ、サーヴァントは怖いもんだ」
「まぁ確かに。自分と同じ神滅具の使い手を見れるとは、サーヴァントというシステムは怖いものだよ」
苦笑で返すハインリヒの手には、もう一つの要因たる本があった。
同様の本は室内のいたるところに設置されており、その全てが共鳴してある種の結界を作り出している。
「魔女に与える鉄槌、じゃったかのぉ？　対異端の力を持つ宝具……を大量に作れると、そう考えてよいのか？」
「ああ、既に数百冊ほど。仕様変更も多少しているんだ」
そう微笑むハインリヒは、得意げな表情となっている。
魔女に与える鉄槌。ハインリヒ・クラマーが大きく関与し、そして魔女狩りの加速や激化に一躍を担った本である。
ある意味でハインリヒの代名詞であるがゆえに、彼はそれを宝具として保有。更にその性質から、ハインリヒは対異端宝具である魔女に与える鉄槌を、製造することまでが保有する宝具の性質となってい

る。
　それを利用した対異端結界。異なる神の加護対策が込められたそれが上乗せされたがゆえに、ハインリヒは神仏でも実力者である孫悟空を相手に、足止めを行うことに成功していた。
「他にも宝具が使われとるようじゃが、おぬしじゃないだろうて。サーヴァント二人係とは豪胆なこったい」
「少し違うな。これは私が召喚された亜種聖杯戦争を利用した札という物さ」
　孫悟空にそう答えるハインリヒは苦笑しながら肩をすくめていた。
「ある程度保存が利きそうだから決起まで残していたんだけど、D×Dには暗部を救いと取らない女がいると聞いた。私みたいなタイプは真っ先に狙ってきそうだから、調べ上げて対策をとったまでさ」
　そう、ハインリヒはカズヒを狙い打った対策をとっていた。
　ダンテ・アルギリエーリは亜種聖杯戦争で戦った相手だ。元が文学者だったこともあり、対処は比較的簡単だった。神聖糾弾同盟の手厚い援護ありとはいえ、それなりに戦闘の心得はあるからだ。
　そしてその過程で、ダンテの宝具を知っていたからこその狙い撃ちだ。
　この宝具は、あるデストラップを秘めた決まれば確殺の宝具と言ってもいい。
　時間稼ぎにその辺りの説明をすることを踏まえながら、ハインリヒは警戒だけは忘れない。
　それは孫悟空に対する警戒で、意味不明な事態になっているヒマリ・ナインテイルやヒツギ・セプテンバーに対する警戒。
　カズヒ・シチャースチエに対する物ではない。
　万が一を掴んでも、カズヒ・シチャースチエは消耗する。その確信だけはある。
　だがそうなる可能性は極小だ。九割九分九厘以上で、カズヒ・シチャースチエは昇天する。
　ゆえにそれを待ち構えながら、ハインリヒは本格的な攻撃の機会を待っていた。

そんな確信を向けられているなど露知らず、カズヒは過去を見せつけられる。
正直に言えば、かなり精神的にダメージが入っている。
自分の業は理解しているし、息を抜く時はあっても投げ捨てたことはない。日夜背負い続けてきたという自負ぐらいはある。それがカズヒ・シチャースチエという極まった光の在り方だ。
とはいえ、こうして乙女の視点でそれを体験したことはなかった。
もちろん、道間日美子は自分が道間乙女を地獄に引きずり込んだという自覚はある。何をされるのかと言われれば自分がされたことだと即答できる。誠明に見せる為に録画映像をもらっているし、万が一六郎といった顔見知りが参加していたりする映像だとまずいので、ちゃんと毎回毎回確認している。
だからこそ、その光景はもちろん何度も見ている。実際に見るのと映像で見るのとは違うというが、何度も経験している時点でほとんどその辺りは変わらない。しいて言うなら視覚以外の五感で感じれることだが、自分が経験している方がより多く感じれるだろう。
己の業は生涯背負う。それが最低限の覚悟だと思っているし、自分が恨む側ならその方がまだ恨み買いもあるというものだ。そういう人間でい続けたいと、心の底から願っているし、実践している。
だからこそ、それだけなら苦痛ではあっても試練だとは思わない。
カズヒがそれを試練だと思っている理由は、もっとシンプルなものだ。
―苦しい……辛い……悲しい……
言葉になっているわけではない。だが、その感情がカズヒの中に流れ込んでいく。
……どれだけ覚悟をし、業を背負うとできないことはある。
それは被害者の感情を実際に知ること。読心術の類を持っている

わけでないカズヒが、共感することや察することはできても、当人が実際にどんなどんな感情をどんな度合いで感じているのか、それを文字通り当事者の視点で感じることは不可能だ。
しかし今カズヒは、道間乙女がどんな感情をどんな風に感じているのか、それを感じることができている。
もちろんそれは自分から生まれたものではない。だからこそ、疑似的な体感でしかない。当然として、正真正銘で自分の感情のように誤解することはない。
だが、それで十分すぎた。
己の業を改めて痛感し、カズヒはそれを深く刻み込む。
その一点をもって、彼女はこの手法をとったであろうハインリヒに感謝する。
「背負うべき業をここまで痛感できるのは、きっと一握りだけが知れる感覚でしょうね」
自分が背負うべき業を、より体感的に理解する。
ただその一点だけは感謝するべきと思い―
「―そういうところを受け付けない人は多いですよ？」
―その声に、カズヒは目を見開いて振り返った。

聖教震撼編　第二十二話　大いなる不穏

和地Ｓｉｄｅ

既に外でも戦闘が起きているようだな。
俺は周囲を警戒しながら、俺達を囲む連中を警戒する。
……手に持っている得物はなんだ？　デュランダルに似通っている物もあれば、ヘキサカリバーほどではないがエクスカリバーに近い物もある。
しかも天草四郎を連れてウルバヌス二世が乗り込んできただと？
控えめに言ってどういう展開だよ。
俺達が警戒しながら構えていると、ウルバヌス二世は微笑みすら浮かべながら、軽く両手を広げて見せる。
「安心したまえ。このまま帰るなり何もしないでくれるというのなら、我々から何かをするつもりはない」
「それを信用するとでも？」
俺が代表してそうぶった切る。
ここまでの事態を引き起こしておきながら、そんな信用ができるような連中とは思えない。というより、侵入して外側と挟撃して自分達を潰そうとしている連中を、捕縛もしないとは考えづらい。しかも非常時だし。
だから俺達はもちろん、デュナミス聖騎士団のメンバーも警戒している。
それに対し、ウルバヌス二世達は苦笑すらしている。
嘲笑の雰囲気はない。しいて言うなら、「まぁ仕方ないか」とかそんな感じだ。
……不気味だ。何か凄まじい違和感と、気づかなければならない不穏な雰囲気を痛感している。

寒気すら覚えそうになるなか、ウルバヌス二世は表情を少し変えた。
「ならこうしよう。これから念の為に質問をするから、その返答の対価とでも思ってくれればいい」
だからそれをどう信じろと―
「我らが主は、既に亡くなられているのかね？」
―反論する余裕もない。
その余裕がなくなるぐらい、俺達は戦慄を覚えていた。
ウルバヌス二世の表情には真剣みがある。冗談で言っているつもりはないだろうし、そもそも仮にも教皇が冗談で言えることではない。そして、周囲もその質問に動揺をしていない。
なるほど。どうやら本当に直属かつ信頼における者達を連れて来ているらしい。少なくとも、こんな教皇が言ったら暴動が起きかねない質問をすると、想定することができるほど腹を割っている連中だということか。
俺達は答えない。こういう時真っ先に動揺するだろう、鶴羽ですら答えない。
その沈黙が数秒続いた時、ウルバヌス二世は頷いた。
「なるほど。もう答える必要はないよ」
「……お戯れにもほどがありますよ、元教皇聖下！」
二世のその返答で我に返ったのか、ルーシアは泡すらまき散らす勢いで大声を張り上げる。
「仮にも現世における主の代行、ローマ教皇の座に就いたほどのお方がそのようなことを！　冗談でも口にしていいことでは―」
「―確証はないが、十中八九死んでいると思ったから確認したのだよ」
反論をスマートに切り捨てるように、ウルバヌス二世はルーシアを遮ってそう答える。
そして、その言葉に俺は寒気を嫌というほど感じていた。
何かがおかしい。何かが決定的にかみ合ってない。
俺達は、何か決定的な読み違えをしているんじゃないのか。そういう予感が止まらない。

その嫌な予感が俺の行動を抑制する中、ウルバヌス二世は指を一本立てる。
「一つ。駒王会談において天界から出席なされたのは、主ではなくミカエル様であったという情報」
そう前置きしたウルバヌス二世は、苦笑すら浮かべている。
「堕天使側からは総督自ら。悪魔側も襲名した別人とはいえ、ルシファーとレヴィアタンの魔王二人が参加し、三大勢力の和平という驚天動地といえることを成す会談だ。結ぶにしても天使の長であるミカエル様では、本来つり合いがとれぬだろう？　主が直接出向かなかった理由を考えてまず行き着いたのがこの仮説」
やばい。この爺さん、理論的に聖書の神が死んだことを確信している。
俺がそれを悟った時には、ウルバヌス二世は指をもう一本立てていた。
「二つ目。聖と魔の融合という本来ありえないだろう奇跡を成し遂げた聖魔剣の存在」
そう告げたウルバヌス二世は、一本の剣を取り出して俺達に見せる。
あ、量産型の聖魔剣だ。教会にもあったのか。
「神滅具（ロンギヌス）クラスの禁手（バランス・ブレイカー）ならともかく、中堅どころで可能になるうえ、こうしてそれに頼らない量産ラインすら確立した。……これはもう、聖と魔のバランスが大きく崩れて混沌と化してなければ困難だろう。魔の頂点たる初代魔王だけでなく、聖の頂点たる主もまた滅びる形でなければ、きっかけとはなりえんさ」
そういえば、バルパーの奴も聖魔剣を見て聖書の神が死んでいる可能性に思い至ったしな。そういう意味では至れる奴がいても不思議ではない。
「そして三つ目。……各勢力の和平が進み、オーディン、ゼウス、インドラといった主神達が続々姿を見せている現状」
……それに関してはちょっと分からないんだが。
俺がちょっと首を傾げたくなると、ウルバヌス二世は小さく苦笑し

た。
「これだけ数多くの神話体系で主神が姿を見せているんだ。聖書側も唯一神を表に出さなければいけないだろう。心理的に不満も生まれるし、空気が読めなさすぎだろう？
そう、納得できるだけの言い分を告げたうえで、ウルバヌス二世は少し悲し気な表情を浮かべていた。
それこそが彼が敬虔な信徒である証明であり、同時に彼がそれを確信している証拠だった。
「にも関わらず、今に至るまで主は姿を見せようともしない。ならば、そもそもできない理由があると考えるべきではないかね？」
正論すぎる。反論もできない。
例えるなら、日本でいくつもイベントがある時、アメリカやロシアのトップが日本の会場に姿を現しているといった形だ。そこに総理大臣がいなければそりゃ不可思議だ。
だが既に死んでいるのなら、出てこれないから仕方がないともとれる。
……駄目だ。完全にバレてる。
いや、それにしたっておかしいだろそれ。
「……どういうことですかな？」
ストラス聖騎士団長もまた、それに気づいているらしい。
いぶかしげにしながら、真っ直ぐにウルバヌス二世を見据えていた。
「予想が既に出来ているのなら、そもそもなんで主が直接裁きを下すことを望むのですか？」
そう、そこが明らかにおかしい。
神聖糾弾同盟は、急に和平に方針転換しそれを急激に進めていることに耐えられなかった者たちが、「せめて神罰を受けて地獄に落ちたい」という目的の元集まっている組織だ。
今の今まで正しいと言われてきたやり方を一気に変えろと言われて納得できず、地獄に落ちてでも主の意志を体感したい。それに関しては、そこまで追い詰められているのだとすれば理解はできる。

だがそれは、聖書の神が生きているという大前提のもと行う行動だ。少なくとも、指導者達が聖書の神が死んでいることを知っているうえで行うわけがない。できないと分かっていることを要求する必要性がない。

最初から交渉するつもりがない、交渉の余地があると思わせる為だけならいい。だが神聖糾弾同盟は、要求そのものが目的だ。聖書の神が生きている前提で要求を行い、それを受ける為に武力蜂起している。

ましてやその方向でまとめ上げた、トップ中のトップがウルバヌス二世。この男は、聖書の神が死んでいる前提で動いているはずがないのだ。

……その大前提が、ここに来て一気に覆った。

リュシオンですら手を出しあぐねている。俺ももちろん、手を出したくても出せない状態になっていると思っている。

何かが決定的に食い違っている。

俺達はウルバヌス二世を読み違えている。決定的な何かがずれた認識で立ち回っていた。そして、その何かを読み切れていない。

俺達はその寒気ゆえに、いやでも膠着状態に陥ってしまっていた……。

Other Side

「……乙女ねぇ？」

目の前にいる女性を、カズヒはよく知っている。何より隣で犯されているのだから尚更だ。

だが、カズヒはそれが信じられなかった。
今まさに男達に犯される乙女とうり二つの少女。
外見だけでなく声質まで同じのその存在を見て、カズヒは一瞬だが確実に凍り付いた。
だからこそその意志力はすぐに理性を動かし、目の前の女を本能的に解析させる。
結論として、五秒ほどの時間でカズヒはあることを理解した。
「……いえ、乙女ねぇじゃないわね？」
外観も声質も同じだが、それ以外が決定的に異なっている。
乙女に乗り移っている誰か、ではない。正しく言うなら、道間乙女の外観を模した別人というべきだろう。
そしてそこに思うところはあるが、それをあえて出す気もカズヒにはなかった。
相手からは敵意の類を感じない。おそらくだが、意図的なものでもないのだろう。そういった、そうあるべくして存在している不思議な雰囲気を感じている。
少なくとも、邪悪な存在ではないと考えるべきか。
「それで、貴女は何者かしら？」
話を進めるべく尋ねれば、乙女の外観をとった存在は恭しい一礼をとる。
「私はベアトリーチェ。貴方の旅路を導き、そして淑女まで連れていく存在です」
その言葉に、カズヒはすんなり理解した。
神曲。ダンテ・アルギリエーリの代表作。旅人ダンテが放浪の果てに死後世界に迷い込み、かつて出会ったベアトリーチェという女性や彼女に頼まれた賢者ヴェルギリウスに導かれて死後世界を巡る。そういった物語だったと記憶している。
そしてこの空間は、サーヴァントであるダンテの宝具でもある固有結界。神曲を核として対象の心象を具現化する対心宝具。
となれば、神曲になぞらえて導き手が出てくることは当然といえば当然だろう。

そのあたりの知識まではインプットされなかったのが気にはなる。だが敵が仕掛けた手札である以上、すべてを開示するわけではないなら。これは失敗すると地獄に落ちる類のトラップもあると踏まえるべきだろう。

そこまで理解したカズヒは、軽くため息を吐きながらベアトリーチェに手を差し出す。

それに対してベアトリーチェはきょとんとするが、カズヒは一応苦笑した。

「ヴェルギリウスを飛ばしてベアトリーチェっていうのは気になるけれど、貴女が私の案内人なんでしょう？」

宝具と言っても信仰によって昇華された伝承だ。多少の脚色はあるだろう。

ベアトリーチェがいきなり出てきたのは、つまるところそういうことだと判断しよう。そしていくら何でも、天国で旅人を待つ淑女が悪性をもって動くとも思えない。

だからこそ、カズヒは和地や仲間達ならするだろう行動をもって、歩み寄りを見せる。

「短い付き合いなうえストレスの溜まる光景を見せるけれど、それでいいならよろしく頼むわ。何かあるなら、できる範囲で配慮するから言って頂戴？」

その対応に、ベアトリーチェはまじまじとカズヒを見つめると、小さく微笑んだ。

「貴女がいい出会いを経たようで何よりです。おそらく、この宝具が終わるまでの付き合いになるでしょうが……」

その少し気になる言い回しをしながら、ベアトリーチェはその手を取る。

「よろしくお願いします。願わくば、この旅路があなたにとって幸いとなることを祈ります」

今ここに、短い契約が交わされる。

神曲になぞらえた、地獄と煉獄を巡り、その果てに天国へと至る宝具。

そこの小さな契約が交わされ、そしてカズヒは旅路を巡り始めた。

聖教震撼編　第二十三話　強敵襲来（死徒編）

Other side

死徒という存在は、魔術回路保有者に遅れること発見された、吸血鬼とは異なる吸血鬼である。

魔術回路を利用した魔術によって人から変じることが可能。また死徒に血を吸いつくされ、死徒の血を送り込まれることでも変貌する。

ただし、死徒として高位の領域――すなわち真に死徒と呼べる第Ⅵ位階以上――に到達できるかには、血の質とでもいうべき個人差に大きく左右される。魔術によって至るのならば多少はやりようはあるが、そもそも至る魔術が非常に高難易度であり、迂闊な挑戦は大きな被害を生んで各勢力からにらまれる。逆に親から血を送り込まれる場合、資質の差がモロに出るうえ、よほど価値を見出されでもしない限りは、相当の年月を無事切り抜けることで成長する形になる。

総じて高位に到達するのは狭き門。また生物としての根幹が人間に比べ劣っているに等しく、強大な力を手にするまでに討伐されることも多々ある存在。それが人という世界に大きく根付いた理を否定する代償といえるだろう。

だが反面、死徒として確立されるほどになればその存在は間違いなく強大となる。

人間が長大な寿命を持ち鍛え続ければ至れる領域。だが長い年月を生きた、人間からの転生悪魔でも位階の高い死徒の戦術的価値に並ぶものは数少ない。備え無しでは太陽光で生命活動に支障をきたすなどの欠陥もあるが、復元呪詛といった利点を踏まえれば総じて高位の異形に並び立てるだろう。

何より人の理に対する圧倒的優位性は、他の種族が持ちえない圧倒

的なアドバンテージといえる。人が作り出す理はもちろんのこと、人の為の理なら神が作り上げたものにすら通用する。専用の対策なしでは、只人をただただ蹂躙できる人の天敵。
死徒は、対人に限定すればあらゆる人外の中でもトップクラスの相性を誇るといえる。
ゆえに、死徒の猛威は文字通り圧倒という形で、人がこの戦いを彩っていった。

人の理及び、人の為の理に絶対性を持つ死徒の力は、只人にとっては天敵。
裏を返せば、只人でないのなら対処する方法は比較的数多いともいえる。
聖別された武装なら傷を負わせることは可能。魔術回路を利用する魔術も、高位の使い手なら単独で高位死徒を打倒することも理論上可能。また魔術回路に近しい側面を持つ、魔眼や特殊な異能も対抗可能。総じて研究された結果、聖別もしくは人の理から離れた力なら通用するとされている。
また星辰奏者（エスペラント）も真っ向から打倒する余地がある。これは星辰体（アストラル）が高位次元からの力に由来するとされ、また異星法則の具現化とされていることも絡めづけられている。そういう意味では星辰奏者は、死徒と対を成す概念と受け取る者も多い。
反面、人の作り出した力や人の為に作られた力には圧倒的に強い。
ことプログライズキーといった科学的な技術には圧倒的に強い。物理法則ゆえにノックバックは狙えるが、まったく異なる対死徒対策でも施さない限り、時間稼ぎはできても打倒は不可能。
加えて人の為の理なら神の作り出した奇跡にも通用する。何かしらで世界の均衡を崩すような領域――覇や禁手（バランス・ブレイカー）――に到達するなら

話は別だが、そうでないのなら蹂躙される側そのものだ。
記録では、至っていない神滅具の持ち主が中の上レベルの死徒に滅ぼされたという話もある。それほどまでに
死徒という存在は、文字通りの意味で人の天敵〔生物学的に対象を餌として捕食する外敵〕といえるだろう。
そう、それゆえに―

「ぬるいぞ転生悪魔共……至ってから出直すがいい!!」
「うあぁぁあっ!」
「がぁっ!!」
―下級死徒で構成される部隊如きに、かのD×Dが圧倒されることもあり得るのだ。
「ミスティータ! ……なめるなっ!!」
下級死徒の振るう爪の一撃で弾き飛ばされる、シトリー眷属の森羅椿姫とミスティータ・サブノック。
それに対し、反撃とばかりに放たれるリーバン・クロセルの魔法攻撃。更に自らの神器による、重力結界の捕縛付き。並みの上級悪魔なら、運がよくてひん死のコンボといえる。
だが、その下級死徒は、その全てを吹き飛ばしてリーバンに斬撃を振るう。
重力結界を無視して突撃し、放たれる魔法も腕の一振りで弾き飛ばす。そのうえで、振るわれる斬撃は回避と同時に迎撃として放たれた、リーバンの剣をやすやすと両断した。
目を見開くリーバンは再び構えるが、それより早く遠距離から魔力による牽制が下級死徒を抑え込む。
仮にも上級悪魔である自分より下の威力が牽制になることに、リーバンは目を見開いた。
そんなリーバン達に聞こえるように、D×Dの陣から念話が届く。

『神器及び人が編み出した魔法は控えてください。死徒は生態として、人の為にある理に圧倒的な優位性を持ちます。禁手や覇の領域に到達しなければ太刀打ちはできないでしょう』
「冗談きついですって会長！　反則ですよね、あれ!?」
ソーナ・シトリーのその説明に、彼女の眷属である仁村という少女がぼやく。
彼女はこの業界に入って日が浅い。なら、生まれた時から触れてきた自分でも実感が足りないことに、理解が追い付くこともないだろう。
まるで異世界からもたらされたといわんばかりの、異物と形容できるその性質。話に聞いてはいたがここまでとは思っていなかった。
転生悪魔、それも上級悪魔の血を引く自分やミスティータに、上級悪魔に匹敵する力量を持つシトリーの女王（クイーン）。だが同時に、人の要素が強いメンバーでもある。生まれ持つ神器も本質的には「神が人の為に作った力」だ。
まさかここまで圧倒的だとは思わなかった。性能に限定すれば一対一でも十分太刀打ちできるはずが、三対一で逆に圧倒されている。練度がこちらを上回っていることを踏まえても、畏怖を覚えるほどの相性差だ。
それでも悪魔の性質があるからこそ、まだ戦うことはできている。そういう状況と言ってもいい。
「貴様ら異形や尻尾を振った飼い犬風情に、人類の未来は奪わせん。我ら、人より出でて人を戒める監督官。人の力を悪用した罪……命で償うがいい!!」
そして振るわれる片手剣。
死徒としての異能で作られたと思われるその斬撃は、切り裂くという行動において圧倒的な力を秘めている。
なにせ、文字通り陣の結界を切り裂いて突入したのだ。先ほどから有効打が入ったと思った瞬間、まるで最初から断ち切られていたかのように一刀両断するという真似が巻き起こっている。
おそらくは死徒としての親が持つ異能だろう。下級死徒レベルな

ら親に由来する原理という異能をつかえるといえ、つまりはそういうことだ。
そして下級死徒止まりの手合いですらこれだけの力を振るっている。ならば大本といえる親が振るった場合どうなるか。考えるだけでも寒気を覚えそうになる。
「全員、純粋な魔力と身体能力で翻弄しろ！　だが奴の斬撃だけは決して受けるな！」
現場指揮官として対応しながら、リーバンは奥歯を噛み締める。
死徒の目撃情報は多発しており、その多くがサウザンドフォースと共にある。また彼らの言いぐさから、サウザンドフォース側の存在であることは明白。とどめに、正真正銘の死徒クラスが、十人以上確認されている。
この人間だらけの戦場で、これだけの数で死徒が活動すればどうなるか。
自分達はまだましだと痛感しながら、彼らは死徒を迎撃する。

そして戦場で死徒による蹂躙は、様々な勢力にとって脅威となっている。

「おのれぇ！　性欲とは人の理ではない……世界原初の在り方だと知るがいい！」
「なんだコイツら!?　第Ⅶ位階（上級死徒）の我が身に、純粋な人間の力が通用するだと!?」
「化け物か、この変態ども!?」

「人の理を否定しようと、性欲(世界の理)なら届くだろう!!」
大欲情教団は、奇跡的に防戦までなら成立させていた。
元々性癖を極めて禁手に至っている者も多いが、それにしても異常事態といえる。
最も、それができるのはごく一握り。総じて死徒の質による攪乱もあり、彼らの進軍は大きく抑え込まれていた。

「邪龍持ってこい邪龍！」
「牽制牽制！　人間は全員下がりながら牽制っ」
「ちっ！　判断が速いうえに的確か！」
禍の団側は、知識も豊富であることから最も対応が早い。
人間を下がらせつつ、量産型邪龍を集中的に送り込むことで、対応を素早く行っていく。
結果的にこちらは数もあって、サウザンドフォース側も積極的な戦闘は避ける方向になっていた。

そして、当然だが死徒が圧倒的な猛威を振るう戦場は当然ある。
「そんな馬鹿な!?　撃っているんだぞ!?　当たっているんだぞ!?」
「攻撃が、攻撃が効かない!?　嘘だぁっ!?」
「直撃だぞ！　なんで傷一つついてないんだ!?」
狼狽するはフォーレイザー。その中でも、レイダーを中核とする部隊だった。

彼らは殊更不運というほかない。この場において星辰奏者がいれば話は違っただろう。
だが、運も実力のうち。確率論の偏りを味方につけれるか否かは、とても重要。それを踏まえた立ち回りができるかも含めてが実力といえるだろう。
明らかに異常な存在を相手にして、彼らはしかし力押しを試みようとしていた。どうにかしようとばかり考え、離脱するという選択肢が脳内に存在しなかった。
その戦術的判断力の低さに、その死徒はため息をつく。
「愚かな。その愚行、相応の罪と知るがいい！」
断固たる決意と共に、その上級死徒は容赦なくその命を奪い取る。

そして神聖糾弾同盟もまた、苦戦を強いられていた。
「おのれ、吸血鬼風情に……っ！」
「バチカンを、吸血鬼に汚させるわけには……っ」
迎撃を行う戦士達の多くを、ブラッドナイツは薙ぎ払う。
「愚神に縋る狂信者が！　人の誇りを思い出せ！」
放たれる攻撃の殆どを圧倒し、ブラッドナイツは圧倒的戦闘能力を獲得する。
……本来なら、吸血鬼という存在に対する特攻手段を教会は保有している。
だが死徒は吸血鬼であって吸血鬼にあらず。本来この世界にない法則ゆえに、この世界の聖別では特攻を与えることはできない。
むろん死徒もまた、異なる法則に対処できないところはある。
しかしこの戦場に限って言えば、ブラッドナイツは神聖糾弾同盟に対して優位に戦うことができていた。

人の理を否定する死徒の存在は、否応なく戦場に更なる混とんを生み出していく。

戦いは、まだまだ流血と共に続く気配を見せていた。

聖教震撼編　第二十四話　不穏の加速

Other Side

ウルバヌス二世は、政治・外交における傑物である。
腐敗や買収に支配されたバチカンの綱紀粛正に多大な貢献を果たし、教皇になってからも更に発展させた清浄化に尽力した彼は、その才能を現代においても発揮した。
亜種聖杯戦争を複数利用したとはいえ、そこで参戦したサーヴァントから協力者になれる者を素早く見繕った選別眼。
その過程で的確に協力者となる者を探し出し、協力を取り付ける交渉力。
常に教会の動向に目を光らせ、教会でクーデターが爆発するそのタイミングで決起を間に合わせる組織運営の手練手管。
優秀な手足となる者がいたことも大きいが、彼の手腕があってこその物が多大あっての神聖糾弾同盟（ネオ・デイバインクルセイダーズ）。
加えてメンバーの伝手で接触できる現役の聖職者から、更に手を貸してもらえるだろう人物を探し出し、それを悟られることなく根を深く張ることができた手腕も凄まじい。
……それはすなわち、そもそもクーデターを起こしたメンバーの中に神聖糾弾同盟のシンパが多数いたことを意味している。更に参加していない教会側にも、少なくない数の内通者がいることを意味している。
それら全てをフルに活用したウルバヌス二世の計画は、その全容を知る者が極一部に限られる。
D×Dや大王派はもちろん、内部で両者に協力していたストラーダ達も。裏で暗躍していた禍の団すら。そして恐るべきことに、神聖糾弾同盟すら、全容を知る者はほぼいない状況だ。
それかある種の読神者の視点を持つ者なら尚更分かるだろう。聖書

の神の死を半ば確信していたウルバヌス二世が、本気で「聖書の神に罰してもらう」ことを目的として動いているはずがない。誰が物理的に不可能だとほぼ確信できることを、当たり前に目標としてクーデターを起こすというのか。
その暗躍は非常に幅広く手が広げられており、間違いなくこの事件の主導権は彼によって握られている。
だからこそ、この作戦は決してバチカンだけで終わる戦いではないのだ。
バチカンの中と外。その二つでの戦いこそが本質なのだから。

バチカンから１００ｋｍ以上離れたところにある、教会の設備。
非常時ということでローマ教皇達の保護設備として使用されている、現在における教会の仮設本部。
そこでは今、デュナミス聖騎士団を中核とする部隊が、内通者の捕縛を行っていた。
「行ったぞ！　追え、追えっ！」
「くそ！　申し訳ありません、ウルバヌス聖下……っ」
ダイイングゴートプログライズキーを使用して逃げる内通者だが、デュナミス聖騎士団を巻いて逃げることは不可能に近い。
彼らは腐っても精鋭部隊。更に全員が星辰奏者（エスペラント）。レイダーをもってしても性能なら引けが取らない者達であり、また装着するレイダーと本人の能力が向上している星辰奏者、それも数の差がある状況では時間の問題というほかない。
むしろ、デュナミス聖騎士団が性質上追撃戦に慣れてないからこそ、ここまで時間を稼ぐことができたようなものだ。でなければ、レイダーになっているとはいえ文官がどうにかできるわけがない。
当然の帰結として、最終的に包囲される形で彼は追い詰められていた。

「……これ以上の無駄な抵抗はよして下さい。仮にも同じように信仰に生きていた者として、乱暴な真似は可能な限り避けたいんです」
待機部隊のメンバーとして、こうして内通者を追いかけていたカズホ・ベルジュヤナはそう諭す。
必要ならば武力をもって鎮圧する程度はできる。そのぐらいの覚悟を決めることができなければ、心技体揃った精鋭部隊たるデュナミス聖騎士団のメンバーになど選ばれない。
その本気を悟ったのだろう。文官は実装を解除すると、力なくへたり込んだ。
素早く最低限の拘束を行いながら、デュナミス聖騎士団は周辺を警戒しつつ周囲を警戒する。
他の文官含めて逃げる方向が似通っていることもあり、回収をしてくれる部隊がいると考えるべきだった。
「一つ伺いますが、貴方方を回収する方々がいるということでいいんですね？」
「……聖下からの使いはそう教えてくれた。いくつかのセーフハウスを用意して、脱出させる為の手段が遺されていると」
力なく答える文官の言い分を聞いてから、カズホは胸騒ぎを覚えつつバチカンの方向に視線を向ける。
そこでは敬愛するカズヒが潜入し、暗部部隊の説部での戦闘を行っているはずだ。
別方面とはいえ、ストラス団長やリュシオン・オクトーバーも参加している。自分よりも遥かに優れている者達がいる以上、心配するのはある意味で烏滸がましいのだろう。
だが、どうも胸騒ぎが止まらない。
……なまじストリートチルドレンだったからか、カズホもそういった勘はある。
大人の浮浪者や、不良や犯罪者にターゲットとして狙われた時。内乱時に圧政者たる兵士達無差別攻撃一歩手前の戦闘を行った時。自分達をカバーしてくれたカズヒ達に対する逆恨みで、彼女を狙ってきた時。

なんども潜り抜けてきたこともあるが、そういった窮地を経験したりデュナミス聖騎士団で激戦を潜り抜けてきたこともあり、そういった胸騒ぎを無視するのはどうも抵抗がある。
だが、今回自分は別動隊だ。
不安極まりないが、できることがない以上自分の仕事に意識を向けるべきだ。
一呼吸を入れて、意識を強引に切り替える。
やるべきことは内通者の確保。すなわち逃亡した者達を捕まえるべく、セーフハウスの確保も行うべきだろう。
既に同僚が連絡をしているが、かといって自分達が動かない道理はない。
捕まえた文官を後続の部隊に引き渡し、カズホ達もセーフハウスの確保に移る。
そして視線をその方向に向けた時―

―その方向で、大きな爆炎が発生した。
「……っ!?」
咄嗟に防御態勢をとりつつ、カズホは時間差で来た爆音を聞く。
かなりの爆薬が使われているようだ。既に建物は綺麗に崩れ落ちており、周辺の建築物が破壊されずに崩壊している。
爆破解体の要領で破壊された建物を見て、カズホは戦慄しながらも意識を強引に起動させる。
「……司令部！　内通者のセーフハウスらしき地点で爆発を確認！　追撃部隊の安否は!?」
『――――こちら司令部！　突入部隊は直前だったので死者及び重傷者は確認されず！　しかし内部に逃げ込んだ内通者の生存は絶望的と思われる！』
焦りながらも返される連絡に、ほっとしている余裕はない。
嫌な予感があまりにも強くなっていく。

なにかを完璧に取り違えている。そしてそれは、決定的な何かに繋がっているという確信だけはある。
寒気すら覚える不穏な感覚を前に、カズホは胸騒ぎを鎮めることができないでいた。
「お姉さま……っ」

和地Ｓｉｄｅ

俺達は寒気を感じていた。
ウルバヌス二世の言っていることは理解できる。だが同時に、何故そんなことを言っているのかが理解できない。
聖書の神が死んでいることを半ば確信しながら、聖書の神による神罰を下すことを目的とした組織を率いている。矛盾しているとしか思えない。
だが同時に、ウルバヌス二世から狂気は感じない。むしろ強い理性を感じている。
そうだ、理性だ。
理知的に状況を理解したうえで、理論的に目的を達成する為の理屈を導き出す。
ウルバヌス二世はそう言う手合いだ。感情に振り回されることなく、理性で手綱を握って選択できる。理をきちんと理解したうえで、どうすればいいかを考えて行動できる人間だ。
だからこそ、理解ができない。
この男が大前提が崩壊している行動をとるわけがない。いくら物的証拠がなかろうと、状況証拠からほぼ確実だと判断していたんだ。

そんな作戦目的にのっとった行動をとるわけがない。
「……何を、考えている」
俺はそう、思わず口にしていた。
聞けば答えてくれるとは思っていない。だが聞かずにはいられない。
賭けてもいい。俺達は、何かを決定的に読み違えている。致命的な部分で思い違いをしている。
ウルバヌス二世は、俺達が思ってもいないような観点からこの事態を引き起こしている。そうとしか考えられない。
そしてウルバヌス二世は、俺の言葉に小さく微笑んだ。
「万一答えてくれれば僥倖程度の考えだろうが、今教えるわけにはいかないな」
そう告げながら、奴は小さく肩をすくめながら後ろを振り返った。
神聖糾弾同盟と各勢力が激突し、当然のように各勢力同士でも争う激戦。その音と被害の煙が、そこかしこから上がっている。既に相当の規模になっていることがここからでも分かる。
そんな光景を一度見てから、ウルバヌス二世は俺達の方に視線を戻すと苦笑していた。
「一つ言えることがあるのなら、デュナミス聖騎士団に心中されては困る……とだけ言っておこう」
その言葉に、俺は違和感を覚えていた。
神聖糾弾同盟は、聖書の神に裁かれることを望んで軍事蜂起した部隊だ。その士気は高く、また武装の質もあって戦力的脅威度はかなり高い。まともに殲滅するなら、相応の被害が出ることは否めない。
そしてデュナミス聖騎士団は、まごうことなく精鋭部隊だ。星辰奏者（エスペラント）という人間兵器と化した、教会の戦士達。更にその中から、心技体を兼ね揃えた者達を選別し、集められた凄腕達。教会の表を代表する精鋭集団だ。
まともに激突すれば被害は甚大。聖書の神に滅ぼされることを望む神聖糾弾同盟にとって、激突したくない相手ではあるだろう。相応の被害を出せる自信があるからこそ、心中という形容も正しい。

だが、これはそんなものではない。
いったいなんだ、この違和感は。
「……いい加減にしてくれないか」
その時、リュシオンがそう言い捨てると真っ直ぐにウルバヌス二世を見据える。
睨み付けるとは違う。どちらかというと、怒りより悲しみの色が濃い視線だ。
そんな視線でウルバヌス二世を見据えながら、リュシオンは拳を握り締める。
「何故そんな風に難しく考えさせる！　もっと簡単に考えれば、こんなことをしなくてもやりようなんていくらでもあるだろう！」
強い憤りは、この事態を本当に悲しんでいるからだろう。
こんな形で暴発させる必要はなかった。もっと平和的に、被害を少なくする形で終わらせられるはずだった。そもそもリュシオンからすれば、難しく考えなければ爆発させる必要もない事だった。
それを、ある意味最悪の形で事件にしたのがウルバヌス二世だ。思うところがあって当然だろう。
ただウルバヌス二世は、そんなリュシオンに対し悲しそうな笑みを浮かべている。
「それは違う。むしろ逆だ」
そう告げるウルバヌス二世は、苦笑のまま両手を広げる。
「そう、私は逆のことをしたのだよ。私がしたことはむしろ逆、難しいことができない者達に、簡単にできることを示したのだ」
ウルバヌス二世は、そうはっきり断言する。
「彼らにとって和平を受け入れ、異端と手を取ることは難しい。理解することも納得することも、当然実行することもできないぐらい難しい。そうでなければ、主の代行たる現教皇や天使長ミカエル様の連名で告げられた和平に反対したり、教会を離反したりなどするものか」
幼子に物を教えるように、ウルバヌス二世は苦笑と共にリュシオンに向き直る。
「君が簡単にできること。それは皆が簡単にできることではない」

真っ直ぐに、ウルバヌス二世はリュシオンにそれを宣言する。
「もちろんこれは君だけが悪いわけではない。そもそも人間とは、自分が簡単にできることが難しいなんて考えないものさ。「なんでこんな簡単なこともできない」だなんて、老若男女問わず誰もがよく言ってしまうだろう？」
苦笑を浮かべながら、ウルバヌス二世はそう諭す。
「少なくとも彼らにとって、自分達が滅びる可能性を踏まえ異端と手を取り許しあうことは難しいのだ。それに苦しみ我慢できない者に、もっと簡単で気持ちがいいことを示す。そうすれば多くの人間はそっちになだれ込むものさ」
苦笑はいつしか皮肉気な笑みに代わり、ウルバヌス二世は肩をすくめた。
「でなければ、十字軍遠征があそこまで大規模になるものか。人間は、正義の戦が自分達の為に行われることを望みたがる悪癖があるのだよ」
そう語るウルバヌス二世は、どこか自虐めいた笑みを浮かべている。
いや、自虐であり皮肉だ。奴はそれを隠すことなくしているのだ。
「人間とはそういう持病に罹りやすいのさ。自分達は正しいものが守ってくれる側であり、受ける被害は自業自得ではなく理不尽なものである。自分の理屈は社会的な一般論で、自分が嫌うは社会的に排斥される側。根拠もなく善良かつ多数派寄りだという前提で動きたがる、そういう欠陥があるものだ」
……うわぁ、辛辣。
何が酷いって、確かにそういうやつって結構いるだろうってことだな。
ある意味正論だから始末に負えない。俺も涙の意味を変える救済者として、その辺りは時々思い返して戒めるぐらいでないといけないだろう。
デュナミス聖騎士団側からすら、痛いところを突かれた表情で視線を逸らす者もいる始末だ。そういうやつって程度を考えなければ相

当するいるだろうし、俺もそういうことになりそうな時はあるからな。
そしてウルバヌス二世は、胸すら張って俺達を見回した。
「集団を統率するコツとは、それをきちんと理解することさ。大衆の愚かさを考慮できるかどうかは、世界の在り方を左右する素質の多寡に直結するものさ」
そう告げるウルバヌス二世は、自虐的な苦笑を浮かべていた。
「善や正義は尊ぶべきものだが、人々が尊んでいるものが本当にそうかは別問題。私が歴史に名を残しているのは、そうわきまえて行動したからなのでね」
ああ、この男をなめてかかっていたことを俺は痛感してしまっている。
この男は間違いなく、ローマ教皇足りえる人物だろう。そういう素質を感じさせる。
だが同時に、それゆえに彼は冷血さを持ち合わせている。
善と正義を尊びながらも、大衆がそうであることを前提にしない。いわゆるマキャベリズムに近い、どこか冷めたものの見方をしている。
教会の綱紀粛正を試みた結果だろう。金や権力に溺れる聖職者や、その一環として行われていた腐敗に立ち向かったが故だ。人間の底に転びやすい負の側面に対し、ある種の諦観をもっている。だからこそ彼は成し遂げれた。
人間とはそういう側面を持ち合わせている。それをわきまえたうえで立ち回ったからこそ、目の前の男は教会の清浄化を果たして見せた。十字軍を発足してのけた。
そう、この男にとって十字軍遠征とは――
「だからこそ、神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）は十字軍（ディバインクルセイダー）なのさ」
――冷笑と共に告げられる言葉がすべてだ。
「教会の掲げる正義にのっとり、人々の不満や欲望を満たす争いを行う。その結果ガス抜きと口減らしとベクトル制御をすべて行う、政治的な一手を打てる妙手だと自覚しているとも。十字軍とは教会の綱

紀を粛正し機能不全を是正する為の一手だったのだから」
きわめて冷徹な視点から、教義・民意・利潤をすべて成立させる大規模活動を成し遂げた。
この男は、まごうことなく傑物だ……っ

聖教震撼編　第二十五話　聖旗・三大降臨

祐斗Ｓｉｄｅ

襲い掛かる敵に対し、僕達は一斉に対応する。
僕は聖剣の龍騎士を瞬時に出して数を増やし、デュリオは天候を操作して大量の雷と雹を落とす。
数で圧倒されている以上、この方法で何とか抑え込むべきだろう。即座に数的不利を抑え込むことこそが、僕達が勝ち残る為に必要不可欠な選択肢だ。
だが、それを簡単に成し遂げさせる敵では断じてなかった。
「させません！　神罰が為の祈りは汚させませんよ！」
そう聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌが吠えると共に、彼女の周囲に大量のクロスボウが出現する。
その数はどう見ても百を超え、一斉に放たれる矢が龍騎士を尽く破壊していく。
しかも数を減らす為に放たれたデュリオの天候操作も、どんな偶然が起きたにしても不条理なほどすべてがそれて誰にも当たらない。
「させると思うか、ジュズアルドぉっ！」
そして切り込むミゼルが、二刀の聖剣をもってデュリオに切りかかっていく。
デュリオは回避しながら多種多様な属性の攻撃を放つけれど、何が起きたのか分からないほど明後日の方向にねじ曲がって飛んでいく。
そしてそのデュリオを囲むように、聖なる騎士達が包囲して切りかかる。
「終わりだ、まず一人」
全方位から囲むその一撃に対し、だが割って入る者がいた。
「そうはいかんな」

全方位から迫りくる騎士達に対応する幾重にも分裂したエヴァルド・クリスタリディ猊下。
おそらく夢幻の聖剣を用いた幻惑かと思われたが、振るわれる一撃は器用に騎士団の斬撃を受け流し、デュリオに安全地帯と作り上げる。
更にミゼルが何かに気づいて飛び退れば、直前まで彼がいた地点に切れ込みがはしり、反撃としてレイダー部隊が放った銃弾は、まるで壁に当たったかのようにあらぬところで破裂する。
加えて壁の一部が弾け飛び、その破片がすべてレイダー部隊に当たり、その連携に乱れを生んだ。
「……なるほど。やはり支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）は最強のエクスカリバーなだけあるということか。それ単体だけではなく、他の補正にも使えるとはな」
そう独り言ちるクリスタリディ猊下に、敵味方に関わらず殆どの者が戦慄した。
僅かな時間に、エクスカリバーが持つ機能を組み合わせたうえで瞬時に振るっている。
かつてフリードが使っていた戦法も使用していたようだけれど、完成度からして桁が違うレベルだ。
「……凄いわねぇ。破壊（ディストラクション）以外はゼノヴィアとは比べ物にならないわぁ」
「天閃（ラピッドリィ）にしたって、フリードが使ってたのより遥かに優れてるわ。これが現代最強のエクスカリバー使い……っ」
リーネスとイリナさんが戦慄していると、クリスタリディ猊下は小さく肩をすくめていた。
「単純な威力なら戦士ゼノヴィアに劣るのは認めよう。……が、破壊だけでエクスカリバーを語られるのも、私をフリード如き下の下と比べられるのも心外だな」
そう告げながら、更に聖水を取り出すとエクスカリバーで散らす。
そしてクリスタリディ猊下が祈るように目を閉じると、強い光が周囲を包み込んだ。

「これで対悪魔を考慮した結界は中和されただろう。祝福（ブレッシング）は強化が本領だが、支配（ルーラー）と併用すればこういったこともできるのだよ」
なんて技量だ。悔しいけど認めるほかない。
これが信徒達の生ける伝説。生きるエクスカリバー使いで最強と称される、教会が誇る戦士達の筆頭なのか。
現役のデュリオに匹敵する脅威と言われるだけのことはある。限定的に統合されたエクスカリバーを使っていたフリードとは比べ物にならない。同じヘキサカリバー使いであるイリナさんやアニル君を超え、デュランダルを統合して運用しているゼノヴィアですら、一撃の重さ以外は後塵を拝するだろう。
だからこそ、僕は彼を超えたいと強く願う。
死んだ同胞達の力もあって至った、僕の聖魔剣。その力がエクスカリバーに後れを取ることに、どうしても憤りを感じてしまう。
超えたい。超えてみたい。乗り越えたい。
あの時の日々が、同志達の命が、無駄ではなかったと証明したい。
ただ、敵と味方はしっかりと分けるべきだろう。それぐらいはわきまえているし、暴走しているつもりもない。
ただそんな感情がわくからか、クーデターがこんな形にならずに僕達が挑戦されることを望んでしまう自分がいた。
……この雑念は不調に繋がるだろう。分っているからこそ、気合を入れ直して雑念を振り払おうとする。
こびりつくそれは消しきれないけど、とりあえず戦闘に意識を向けることはできそうだ。
その時、大量のクロスボウを宙に浮かべた聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌが旗を掲げていた。
「そうはいきません！　さぁ、祈りの時が来ましたよー!!」
その時、魔力の高まりを僕達は察知する。
間違いない。あれは真名を解放する類の宝具。
そして警戒と共に―

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

聖都守護連隊での戦闘は、大きく状況を変え始めていた。
聖墓守護者、ゴドフロワ・ド・ブイヨン。自らを王ではなく聖墓を守る者とし、十字軍を率いて奪還したエルサレムの守護者とした男。
当然だが、その在り方を側面としたゴドフロワが召喚されれば、当然だがそれに由来する形の宝具なりスキルなりを獲得することは想像に難しくない。
事実ゴドフロワは、聖墓守護者としての在り方に由来する宝具を獲得していた。
それこそが対陣宝具、降臨（アドヴォカトゥス・サンクティ・セプルクリ）の聖墓守護者。
指定した地域に王冠を捧げる形で発動させることで、その地点と一時的に聖墓と設定。聖墓にいることに由来する圧倒的な知名度補正と共に、ゴドフロワを大きく強化する宝具である。
その強化度合いは圧倒的。高ランクの狂化に匹敵するステータス上昇を狙えるという、ある種のブーストスキルとしても使用可能。更にＢランクの勇猛・直感・戦闘続行・自己回復（魔力）・気配遮断・魔力放出を獲得する。
その戦闘能力の向上率は、禁手（バランス・ブレイカー）、それも神滅具（ロンギヌス）のそれに匹敵する。一言でいうならば、戦略がひっくり返るレベルの性能向上を約束する。
ゆえに、聖都守護連隊周辺での戦闘は趨勢が大きく傾いていると言ってもいい。
「滅びるがいい、悪魔達よ!!」
「ぬぅうううううう……っ！」
振るわれる猛攻により、サイラオーグ・バアルは防戦一方に追い込まれていた。

もとよりサイラオーグ・バアルは小手先の技術や詰将棋のような戦い方を得意としていない。
生まれついて魔力を持ちえない悪魔。その絶対的不利にたいし、体術を徹底的に鍛え上げることで、現役の上級悪魔の心すら折れる戦闘能力を身に着けた猛者。その実力が脅威であることは、きちんと性能や成果を認識できる手合いならば当然分かることである。
だが同時にサイラオーグは、自他ともに認める「それだけ」の男。性格的なものもあり、搦め手の類を不得手にしていることは明らか。
それが悪いとは決して言わない。正攻法で事態を乗り越えることができるのなら、わざわざ下劣な真似をとる必要もないのだから。
だがそれは、裏を返せば「真っ向勝負」という土俵で勝てない相手に対する手札がないと言っていいことを意味している。
そしてゴドフロワ・ド・ブイヨンは信徒の中でも指折りの戦士。宝具を三つも保有し、高いステータスを誇る傑物中の傑物である。
その一つである戦闘における主力もまた、サイラオーグに対して有効に働いていた。
神聖なり十字軍団（クロスブレイド・クルセイダーズ）。聖剣創造の亜種禁手。
能力は聖なる盾を持つ騎士団の創造。そしてその応用として、聖剣だけでなく聖なる盾をも作り出せること。
聖剣創造が通常至る禁手である、聖輝の騎士団（ブレード・ナイトマス）の上位互換といえ、盾による防御を確立しているのは明確なアドバンテージといえる。だが盾だけという意味では龍を創造して怪物のアドバンテージを得るジャンヌ・ダルクや、自らの技量と速さすらトレースする木場祐斗に比べると一歩劣るともいえるだろう。
だがしかし、そのアドバンテージはサイラオーグ・バアルを追い込める優位性となっている。
「この程度の拳で、我らが聖都を汚せると思うな！」
「くっ！　手ごわい……っ」
振るわれる猛攻に対して、サイラオーグが不利となる点は大きく分けて三つある。
一つはスキルや宝具含めた総合性能で、サイラオーグが劣ってし

まっている点。肉体的に人間より強度がある悪魔であってなお、宝具の上乗せもあってゴドフロワを上回るには至らない。
一つは年季の差による厚みの差。鍛錬の質だけならサイラオーグも引けを取らないが、多種多様な戦闘経験や人生の長さからくる量もあり、総合的には後れを取ってしまっているのが実情だ。
そして最後こそが、神聖なり十字軍団（クロスブレイド・クルセイダーズ）。この禁手である宝具こそが、サイラオーグを追い込む要素となっていた。
純粋に剣という間合いの差が有利に働くだけでなく、盾というポイントが重要である。
盾は防具であり、また鎧ではない。それはすなわち、打撃に対する強い防護手段として機能することを示している。
防具というものは、攻撃を防ぐ手段である。また盾は鎧と違って装着しない為、直接通る衝撃は減衰される。その為打撃という衝撃を与える攻撃に対して、大きく強い。
また強度に難が生まれやすい創造系神器の難点も、砕けることで衝撃を吸収するというメリットに代わっている。
とどめに創造系神器に連なる異能である為、すぐに交換ができるのだ。これは防御において大きなアドバンテージでもある。
そしてそのうえで、サイラオーグ達は粘ることに成功していた。
ゴドフロワを中核とする猛攻に対し、誰もが尽力し連携をとることで、何とかしのぎ、食らいつく。
その圧倒的な猛攻に対し、ゴドフロワは怒りを覚えるが冷静さも決して失わない。
敵が強大であることは事実。そこから目を背けて苛立つだけの男が、エルサレム奪還を成し遂げられるわけがない。それだけの分別はつくからこそ、彼はエルサレムを奪還できたのだ。
既にその為の仕込みは行っている。だからこそ、そろそろ更なる一手を打つとしよう。
「おぉおおおっ！」
サイラオーグの振るう渾身の拳をわざと喰らい、ゴドフロワは一旦距離をとる。

それによって生まれるわずかな時間。それを瞬時に対応し、彼は第三の宝具を展開する。
第一宝具。自らの神器に由来する、神聖なりし十字軍団（クロスブレイド・クルセイダーズ）
第二宝具。自らの生涯に由来する、降臨の聖墓守護者（アドヴォカトゥス・サンクティ・セプルクリ）
そして第三宝具。他者からの信仰に由来する宝具を、一つの旗を具現化する。
サイラオーグが警戒して、発動を潰す為に突貫する。
だが遅い。その動きでは余裕をもって発動できる。
ゆえに、ゴドフロワは息を吸い込み―

和地Ｓｉｄｅ

「……さて、そろそろそちらも攻撃を開始するのだろう」
俺達が戦慄している中、ウルバヌス二世はそう苦笑した。
残念だが、お前達はそうするのだろう。そう、言外に告げている。
そしてそれは正解だ。まだ建物の中にいる者達が攻撃を仕掛け、それを合図として外に出ている俺達も戦闘を行う。そういう流れで仕掛けるつもりだ。
これ以上ここで足止めを喰らっている余裕はない。また神聖糾弾同盟は、ウルバヌス二世によって統率されていると言ってもいい。象徴自らこの場に来ているというのは、ある意味で好機なのだ。
ここでウルバヌス二世を無力化し、その勢いで神聖糾弾同盟を抑え込む。
これ以上、こんな争いを長続きさせるわけにはいかないだろう。無駄に血が流れるだけだ。

だからこそ、読まれていようが関係ない。
全員が気合を入れ、戦闘態勢をとる。
そしてそんな俺たちを見て、ウルバヌス二世は小さく微笑みながら肩をすくめた。
「得難い才覚だ。心技体全てが良質で、三大勢力……ひいては教会の未来に光を灯してくれるだろう」
「……だからこそ、ここで彼らが無駄に失われることは避けねばならないですね」
ウルバヌス二世の言葉を継ぐように、一人の日本人が前に出る。
陣羽織を着たその少年は、天草四郎時貞。
日本人と聖書の教えがかみ合えば、日本人の多くが真っ先に挙げるだろう人物。島原の乱の象徴となった信徒だ。
神の子じみた奇跡を起こしたとも言われているが、詳しいことは分かってないことも多い。ただ彼が日本人信徒としてはかなりの大御所であることは事実だろう。
そんな奴は、一つの旗を具現化する。
日本の陣中旗を思わせるそれは、何故か先端が十文字槍になっている。
ちょっと怪訝な表情を浮かべる者もいるが、天草四郎は少し照れ臭そうに笑みを浮かべる。
「……参加してくれた武士がくれた、十文字槍の穂先だよ。僕らの教えにおける十字架の価値を知って、ちょっとしたゲン担ぎ兼護身用ってことでね」
そう説明し、そして奴は一息を入れ―

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

世界三大聖旗というものが存在する。
厳密にカトリックが認定しているわけではないらしい。だが人間はそういった三大〇〇といったものを制定したがるものだ。その一つとして、そんなものが存在する。
「聖旗（フラッグズ）・聖地礼賛（エルサーレム）！」
十字軍の軍旗
「聖旗（フラッグズ）・解放賛歌（ラ＝ビュセル）っ」
聖女ジャンヌ・ダルクが掲げた旗
「聖旗（フラッグズ）・島原血盟（シマバラブラッド）」
島原の乱における陣中旗
その三つの三大聖旗が、サーヴァントの宝具として、バチカンに集いその神秘を振るう。
これもまた、神聖糾弾同盟の結束に繋がっている。
その猛威が、チームＤ×Ｄに対して今その神秘を開帳した。

聖教震撼編　第二十六話　激化する窮地

祐斗Ｓｉｄｅ

放たれる絶大な聖なる光に僕達は咄嗟に防御の体制をとる。
無差別ともとれるその光は、しかし神聖十字軍団を襲わない。
僕達だけを裁くように襲う聖なる光。それはまさに絶大であり、だからこそ脅威だ。
……その攻撃に誰一人として死者を出さずに済んだのは、奇跡と言いたくなるだろう。
だけど、それは人による所業だ。
何故なら、光が収まった時にクリスタリディ猊下が崩れ落ちるように膝をついたからだ。
僕達も消耗しているけれど、崩れ落ちるほどではない。戦闘はまだまだできるだろう。
つまり、彼が何かをしたのだ。
「……流石ですね。私達の祈りの光をここまで防ぐだなんて」
感心している聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌに、なんとか膝をつくにとどまっているクリスタリディ猊下は真っ直ぐに見据えていた。
その表情は鋭く、彼女を警戒していることがよく分かる。
「聖旗を起点とし、敵対者を断罪する極光を展開する聖旗・解放賛歌（フラッグズ・ラ＝ピュセル）。既に一度見ているのでな、警戒はしていたとも」
やはりクリスタリディ猊下が何かをしていたのか。
おそらくは支配と祝福の合わせ技で、攻撃を何とか散らしたということなのだろう。
……ただ、敵は健在である以上油断はできないか。
「これは本当に、遠慮をしているわけにはいかないわねぇ」
と、そこでリーネスが一歩を踏み込んだ。

既にシャイニングアサルトホッパーを装着している。それだけの事態であることを、彼女も十分理解しているんだろう。
そしてそんなリーネスを見て、ミゼルは明らかに不機嫌な様子を見せる。
「堕天使か。純粋なまま逝ける若者達を汚す技術の出所が。この聖都に足を踏み入れるなど万死に値する」
切っ先を突き付けるミゼルに、リーネスも応じるようにスラッシュライザーの切っ先を突き付ける。
「拘りすぎで押し付けすぎねぇ。カズヒでももうちょっと融通は利かせられるわよぉ」
「下らん。辺獄騎士団の一員が、堕天使の技術で幼子を助けるなど……信徒の恥さらしでしかない」
返す言葉はあまりに恥がない。
自分の行動と発言に、一切の躊躇をしていない人物だということがよく分かる。それほどの人物でなければ、ミゼリコルデ連隊という信徒に対する暗殺部隊はやってられないということか。
だけど、それに対して立ち塞がるのもの何人もいる。
「思うところがあるのは分かる。だが、ここまでの事態を引き起こす道理もないだろう」
「俺は先生とは違って、アンタのことは論外だよ。……折角美味い物が一杯食えるようになるってのに、邪魔しようってんだからさぁ」
クリスタリディ猊下とデュリオが見据える中、ミゼルは失望したように首を横に振る。
「会話が通じないようだな、デュリオ・ジュズアルド。美食に拘り道を踏み外させるなど、論外なのはこちらのセリフだ」
気配が高まり、殺意も高まる。
「聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌ、本腰を入れていただきたい。こちらも……抜きます」
「そうですね。みんなの祈りを背負って……ジャンヌ、行きます！」
ミゼル・グロースターと聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌ。二人の気配が更に高まっていく。

「禁手化（バランス・ブレイク）」
「行きますよぉ！　聖女に続く進軍の象徴（イドール・ラ＝ピュセル）」
……ここからが、本番か！

和地Ｓｉｄｅ

気づいた時、俺達は全く異なる空間に立っていた。
血煙が立ち上る曇天の空。そこに俺達は隔離されている。
おそらくタイミングから言って、天草四郎の宝具で間違いない。掲げた旗を起点として、真名開放で発動している。
そしてこれは―
「―固有結界いっ!?」
―鶴羽が絶叫する、まさにそれだ。
固有結界。術者の心象風景を具現化する、魔術の最秘奥。
宝具という形で固有結界を持つ。それが奴の宝具―
「悪いが隙だらけだ」
―を確信したそのタイミングで、天草四郎は突貫する。
十文字槍と化した陣中旗を振るい、俺と鶴羽をまとめて薙ぎ払う。
十文字槍。それはただの槍ではない。
槍は本質的に突く武装だ。そもそも戦場の武装とは、シンプルな特化型が基本。性質上槍はリーチも長いことから、日本では足軽といった雑兵が持つことも多い。
だが十文字槍は違う。ただ突くだけではなく、斬撃や薙ぎ払いなど、多様性を確立している。

西洋で言うならハルバード。中国なら方天戟の類に近い。扱うことは難しいが、使いこなせれば無類の成果を上げる武装だ。
つってもだ。
「天草四郎って、武将じゃないだろ！」
素早く魔剣で迎撃しながら俺はぼやく。
この固有結界が展開してから、俺の体は非常に重く感じている。
おそらく呪詛の類だ。この固有結界そのものがそういった性質を持つ、そう考えるべきでもある。
だがそれを踏まえても、天草の動きは卓越している……っ
「……こいつ、まさか私と同じ!?」
その猛攻を同じようにしのぎながら、鶴羽は何かに気づいて吠える。
「どういうことだ!?」
「たぶんだけど、こいつも人の技術や能力を再現してる！」
俺はそう答えられ、すぐに思い至った。
鶴羽は固有結界で、英霊の技量や宝具を自ら振るうことができる。もちろん本人の技量もあるため兼ね合いを崩さない程度だが、それでもある程度の技量を持てるのは利点と言っていい。
それと同じことができるのなら、十文字槍という高難易度の武装を軽々と振るっていることも正しいわけだ。
「その通り。四郎法度書の盟約がある限り、力を貸してくれるものだけ、私は力を振るえるのだ！」
そう答える天草は、こっちが槍を掻い潜ろうとしたその瞬間、一瞬だが陣中旗から手を放つ。
その一瞬の攻防で俺の手を掴み、そのまま鶴羽に向かって投げ飛ばした。
瞬時、天草の手から炎が放たれ俺達二人を焼こうとする。
だが―
「「甘い！」」
―相手が悪かったな。
俺と鶴羽はぶつかる直前に体を捻る。その勢いを利用して、左右に

散るように弾かれた。
ザイア時代の連携戦闘訓練なめるな。特に鶴羽は内面で同志だったから、こういった連携戦闘部分ならヒマリの次に上手くできるんでな！
素早くこういった時の対処法をとり、俺達は左右から反撃する。
それに対し、天草四郎は氷を大量に展開して盾とする。そのまま陣中旗を回収しつつ、今度は雷撃を落としてきた。
素早く魔剣を上に投擲して避雷針にし、鶴羽は聖十字架を具現化して更なる反撃を叩き込む。
その瞬間、周囲のレイダー部隊が攻撃を仕掛けて俺達をけん制。咄嗟に俺は魔剣を地面から生やしてそれをいなす。
流石に手強い。だけどなぁ！
「カズヒねぇも頑張ってるだろうし、リーネス達もだろうからな！」
「流石に恥ずかしい醜態は、晒せないのよ!!」
そう簡単には、やられないんだよ!!

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

カズヒ・シチャースチエは、幾度となく繰り返される凌辱の光景を見続けている。
目を背けないし逸らさない。これは自分が受け止めるべき業であり、むしろ真っ直ぐに見つめ直せることを僥倖とすら考えるべきだ。
だが同時に、それが彼女にとって苦痛であることは言うまでもない。

―違う違う違う！　気持ちよくない気持ちよくない気持ちよくないっ!?

そんな乙女の心の悲鳴を聞きながら、自分が引きずり込んだ地獄を見ているのだ。

かつて、映像を確認している時はここまでではなかった。それは事実だ。

だが今は違う。強引に叩き直された精神で、乙女がどう苦しんでいるかをより詳しく叩き付けられているのだ。

これに対して苦痛を感じないわけがない。そのうえで強引に耐えれてしまう事実は、苦痛を感じるという事実を否定しないのだ。

「……そういえば、この映像を送ったのは誠にぃの誕生日だったのよ」

そう、ぽつりとつぶやいた。

それに対し、隣に立つ乙女の皮を被ったベアトリーチェは小さく頷いた。

「そうですね。だから彼は、乙女（彼女）を直視できず部屋に引き籠った」

その返しに、カズヒは同じように小さく頷いた。

精神がいっぱいいっぱいゆえに、誠明は真正面からぶつかることができなかった。

精神がいっぱいいっぱいゆえに、乙女はそこからどんどん転落していった。

そして精神がいっぱいいっぱいゆえに、道間日美子（カズヒ）はその光景に歓喜だけを覚えていた。

自分達は誰もがいっぱいいっぱいで、だからこそ悲劇は更に加速していった。それはまごうことなく事実だろう。

だが、それを免罪符にする気はなかった。

自分はどれだけ追い詰められていたにしても、してはならないことをしてしまったのだ。その事実を、こうして改めて見せつけられている。その事実を否定してはいけないだろう。

これは自分が背負うべき業であり、だからこそ許されることを前提にしてはならない。

それを強く戒めながら、カズヒは隣のベアトリーチェに尋ねる。

「一つ聞きたいんだけど、これってどうやって再現しているのかしら？」
ある意味で関係ないことなのだろうが、無視するわけにもいかないことだ。
そして同時に、カズヒにとって一番重要な情報であるともいえるだろう。
「これが只の私が思っている乙女ねぇの内心……というのは、ちょっと嫌だと思うわ」
「……意図が読めないのですが？」
カズヒの続けたその言葉に、ベアトリーチェは首を傾げてしまう。
それに対してカズヒは、肩をすくめるしかなかった。
「私が思っている乙女ねぇの苦しみを映像として再現しているだけってのは、この場合不適格だって話よ。私が改めて背負うことを告げられるとするのなら、それは乙女ねぇが本当に受けている苦しみであるべきだと思うから」
そう語りながら、カズヒは拳を握り締める。
「ある意味で欺瞞と言われるでしょうね。でも、できることなら本当の乙女ねぇが感じた苦しみをこそ背負いたいのよ」
そんな自分に辟易する者を感じながらも、投げ捨てようとは思わない。
どうせ恨まれることをするのなら、せめて恨まれがいのある自分でいたい。どうせ恨まれることをしたのだから、せめて相手にとっても恨みがいがある者でいたい。
無駄にはしない。しっかりきっちり使い切る。相手に許されるにしろ許されないにしろ、せめて恨まれる相手に胸を張れる程度の自分でいるのが、せめてもの礼儀というべきものだろう。
そういう風に考えているのだと自覚しながら、カズヒは同時に自虐の表情を浮かべている。
「どうでもいいだろって連中も、たくさんいるとは思うけれどね。だからと言ってそこまで投げ捨てるような生き方、本当にしたくないのよ」

だから意味のない問いではある。
それでも聞かずにいられない自分に胃を痛めていると、ベアトリーチェはそっとカズヒの手を取った。
「……大丈夫です。限りなく本物に近い現象であり、貴方の妄想ではないことは断言いたします」
「……ありがとう。気持ち前向きに見れそうだわ」
感謝を素直に言葉にし、カズヒは地獄を見つめ直す。
彼女の旅路は、まだ半ばにすら達していなかった。

聖教震撼編　第二十七話　兵器と死徒

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

神聖糾弾同盟と各勢力が入り乱れる乱戦は、未だ混迷から脱していない状態だった。

何よりこの戦いが異形として異例といえるのは、あまりに多種多様な兵器が戦力として価値を成していることだろう。

異形の社会は生身の戦闘能力がずば抜けて高い。それこそ中級クラスともなれば、現代の兵器系統なら一個小隊程度なら十分相手どれるものも数多い。上級悪魔が眷属を率いれば、小規模な駐屯地なら蹂躙できるだろう。

だがそんな中、兵器が中級クラスと互角以上に渡り合う。その事実はあらゆる意味で脅威といえる。

例えば、禍の団の主力たるサリュート系列。

疾風殺戮・ｃｏｍが要求したサリュートⅠに連なる小型系列と、それを参考にアルバートが開発したΔサリュートといった大型系列。これによる戦術的行動は禍の団の脅威度を高めている。

ΔサリュートによってΔ確立された換装技術。それによりサリュートⅡを発展させたサリュートⅢ。これによる対応力の増大は、各勢力にとっても強敵というほかない。

例えば、大欲情教団が使用する人型兵器。

神器（セイクリッド・ギア）という概念を知らない彼らは、しかし独自研究により兵器サイズで実用化に成功。その過程として禍の団と同じ「宿す人間ごと大型化する」というアプローチにより、主力兵器として運用できるレベルに到達している。

性欲を根幹とするが為に股間部を肥大化させた設計は、しかし性欲を根幹とする大欲情教団とかみ合い高性能化に寄与。サリュートⅡに比べれば安定性や信頼性では劣るが、爆発力である程度補えるレベ

ルに到達していた。
例えば、三大勢力が開発したＴＦユニット。
発想の転換から後れを取っているが、神の子を見張る者（グリゴリ）は新規研究の第一人者。実験機止まりでいいなら人間が運用する異能レベルで人工神器を実践投入できるレベルに彼らが、その発想に合わせた機体を実用化させるのはある種当然だった。
規模において禍の団を超えることもあり、ＴＦユニットは性能重視。高性能化において「ロマン」を力に変換する機能を組み込む都合上、数にある程度制限を駆けるほかない代わりり、平均的な性能なら前者を遥かに超える。
更に王の駒や真魔の駒を中枢ユニットとして組み込むアガレッサー。その量産型といえるガレシオンの開発もあり、更なる可能性を秘めた兵器群ともいえる。
例えば、混沌回帰連隊（ケイオス・フォース）が主力とするガトリンガル。
機能向上の為に人型兵器にする必要性がある前者と異なり、この機体は人型に拘らない。
独立具現型神器に発想を得たジョン・マージ・ガトリング。これは人体という構造そのものが、兵器としては不適格という合理的見地によるものだ。
兵器というものは基本的に、目的に合わせて特化した性能を確立できるに越したことはない。その方が運用する側も統括する側も整備する側も使いやすいものが開発できるし、リソースの一極化は総合的にコストにおいても重要だ。
それに対し人体というものは、基本的に柔軟性に長けている。要は器用貧乏かつ強度にかけるという、兵器としては長所にしにくい部分が多い。投擲力などにおいては圧倒的だが、火砲やミサイルの発達もあり、兵器にするには優先順位は低い。
その結果として獣という、柔軟性に欠けるが剛性に強い構造を採用する。それに伴うデメリットを乗り越えられる技術力があるのなら、立派な一つの選択肢だ。
……そしてサウザンドフォースが扱う騎乗型人造惑星であるメタ

ルスターは、ガトリンガルが最も近い。
これは発想として「安全性や高出力を両立した人工神器として、宿す人体ごと大型化する」という思想を持たなかったこと。そもそも人工神器が中核の思想になってないこと。そういった要因が重なった、ある種の収斂進化に近い。
メタルスターは星辰体運用兵器。それを中核として運用されているからこその機体であった。
同時ロールアウトを前提として、対リリンや対乳龍帝を想定した機体の開発も行われていた為で遅れてはいるが、星辰体運用兵器としては、元々星辰体技術の出所であることもあって引けを取らない。
そしてその根幹機体である通常使用もまた、多角的な戦闘により敵勢力と渡り合うには十分すぎる性能を誇る。
人心結集（ディストラクション・セイヴァー）による異形制圧。その星辰体運用兵器が、敵勢力に対して等しく猛威を振るっていた。

メタルスター
人心結集（ディストラクション・セイヴァー）による異形制圧
基準値：B
発動値：A
収束性：D
拡散性：A
操縦性：A
付属性：E
維持性：B
干渉性：E

機械的に発動されるこの星が、更なる戦線の混迷化をもたらしていく。

アザゼルＳｉｄｅ

ったく。漸くこっちにこれたと思ったら、やばいことになってんなぁ

「おう、お前ら！　頑張ってるようで何よりだ」

「アザゼル先生」

チームＤ×Ｄの陣に到着した俺に、ソーナが気づいて軽く一礼する。

もっとも長い会話をする暇もないし、それをするほどソーナも馬鹿じゃねえ。

すぐに魔法陣を展開して布陣などを映し出しながら、俺に向き直った。

「現状は膠着状態、乱戦となってますね」

「みたいだな。こっち来るまでに映像もある程度見てる」

俺は魔法陣を追加捜査して、戦場の様子を映像として出す。

横倒しにしたドラム缶みたいな、サウザンドフォースの戦闘兵器。更にその下で猛威を振るう死徒どもを見て、俺は舌打ちしたくなってきた。

死徒はなぁ。あいつら本当に対人においちゃぁ厄介すぎるんだよなぁ。

「純粋な人間の異能だと碌に通用しないからな。悪魔祓い（エクソシスト）の武装も、神器もろくに効かないってのが厄介だ」

「先ほど接敵した椿姫達も苦戦していましたしね。椿姫が至っていなければ死者が出ていたかもしれません」
あ～。なるほど。
あいつの禁手、かなり特徴的というかハメ殺しに特化している節があるからな。かなり神器そのものの性質から離れているから、出せるまでにいくつかの条件ができちまってるのはネックだが。
D×Dは純粋な人間は少ないが、混血や転生で人間の要素が残ってる連中は多いからな。殆どは禁手に至ってるとか、死徒に通用するレベルだから失念してたぜ。今度対死徒装備とか用意してやるかねぇ。
「……幾瀬鳶雄さんが、神聖糾弾同盟と戦闘中に上級死徒と接敵しています。彼は大丈夫ですか？」
「そっちは問題ねえ。鳶雄のは神器全体を見ても、とびぬけて対死徒における優位性があるからな」
どうも死徒は「人の為の理」に徹底的なマウントが取れる存在みたいだ。その性質上、人の理から外れていれば外れているほど優位性が上昇する感じだな。例えば神や悪魔が神や悪魔用に開発した装備なら、ストレートに攻撃が通る。逆に神や悪魔が作っても、人間用に仕立てれば無効化することもできる。
そういう意味じゃぁ、狗神は死徒にとっちゃぁ相性最悪だ。
なにせあの神滅具は、材料として神が神の為に作った武器と神が呪いをかけた人間が込められている。真逆の存在を二つも使って作られてるから、尚更反則級に死徒には通用する。特攻が入るのではなく特防をすり抜けるわけだ。
だからこそ、そっちは問題ねえ。そもそもD×Dも大王派も、悪魔が普通にいるからな。陣形を組み替えればある程度の対応はできる。
だからこそ、問題視するべきはそこじゃなく―
「サウザンドフォースの人造惑星はどうだ？」
―そっちに気を取られている間に、やばい方に仕掛けられる可能性だ。
「……そこも問題ですね。予想以上に戦場をかく乱されています」
ソーナの方もそういうだけの事態ってわけか。

確かにあのドラム缶、厄介だしな。
空を自由に飛び回るドラム缶は、飛行兵器としちゃ中々なもんだ。低速での安定飛行から、超音速の高速飛行、ヘリコプターじみたＶＴＯＬまで自由自在。単独で対地攻撃機や爆撃機、ガンシップじみた対応を自由自在にやってのける。
左右に搭載されたアームはそれが対地攻撃武装として使えるうえ、更にいくつかの武装を運用可能。さらに両端部もウェポンプラットフォームとして使えることで、更なる攻撃を可能とする。
とどめに星辰光だ。これがかなり厄介だな。
「……自立戦闘端末製造能力ってところか」
俺が映像を見る限り、奴らは数種類の自立戦闘端末を多数使役して運用している。
攻撃を回避して三次元的に仕掛ける爆弾や、ちょっとした滑空砲レベルの砲撃を速射でかます移動砲台だのが確認されている。

奴らの基本戦術はそれだ。あの自立戦闘端末を中核としつつ、更に重武装の高速飛行兵器とすることで星圧力を高めている。
おそらくは対軍勢を主軸にした兵器なんだろう。一騎当千ではなく数を用意できる軍勢を蹴散らす兵器。そういう意味では理にかなっているな。
戦域全体の支援が主軸の兵器ってところだ。そういう意味じゃぁ、バリエーションで対リゼヴィムや対イッセーがあるのも納得だ。本命が勝つ為の支援を行うのがメインなんだろう。
……とはいえ、だ。
「ソーナ。戦略的な観点から見て……どう思う？」
「高い確率で、サウザー諸島連合とは別に国家級の支援を受けている、と考えるべきでしょう」
やはりそうなるな。
「俺も同感だ。あの工業生産力、異形全体を敵視している連中が獲得するには国家レベルの支援が必須だろう」
「禍の団だって、小国複数レベルの援助ができるだろう、南海同盟が

あっての大艦隊だろうしな」
異能を使えば技術面はどうにかできるだろうが、物資面においてはどうしてもある程度の国力が必要だ。
そういったモノのメリットってのはバカにならない。如何にサウザンドフォースが油断ならない技術力を持っていようと、工業的な面で相応の地盤は必要だ。
それに気になる点はいくつかある。
サウザンドフォースが語る神祖。後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）から聞く限り、連中は謎があまりに多い。
下手な魔星を凌駕する星辰光（アステリズム）。破損した箇所から結晶が生成されて数秒立たずに元通りに修復される、独特な回復能力。乳神の来訪やリゼヴィムの台頭、更に予測不可能なイッセーの進化すら、ある程度見通していた異常な読み。
それでいて、幸香やハヤテの造反をもろに受けるチグハグな部分といい、奇妙で不気味というほかない。
そんな連中が本部としていたのがサウザー諸島連合。おそらく建国前から下準備をしていたと考えるべきだ。
……そんな入念な準備を整えた連中が、サウザー諸島連合だけしか足場を用意してないってのも怪しい。
数百年以上の暗躍を、どの勢力も察知できない形でやってのけた連中だ。俺ならそんなセーフハウスならぬセーフカントリー、一つだけなんてことはしない。
こりゃ、一度真剣に調べないといけないのかもな。
「さて、この後どうしたもんかねぇ？」
一応、相応の手札ってのは用意してるんだが……な。

Other Side

バチカンを中心とする各勢力の激戦は、大きく情勢を揺るがしていた。
サウザンドフォースのメタルスターによる制空権の確保と、死徒による人間に対するアドバンテージを生かした蹂躙。これによりサウザンドフォースは優勢を獲得し始めていた。
あえて純粋な人間の兵器を利用するメタルスターの対地攻撃と、純粋な人間の兵器ならほぼ無効化できる死徒の特性。その相乗効果が敵に対して強い蹂躙を成し遂げていた。
……だが、いつまでもやられているほど弱い勢力画ばかりで世の中は構成されていない。
その音が響いた時、死徒の一人は少し疑念を浮かべていた。
「なんだ、この揺れと音は？」
「四足動物の走行音……にしては大きい？」
その懸念に死徒達が止まり、そしてそれは幸運だった。
その直後、巨大な四足動物型の兵器が絡み合うように激突したのだから。
「……なんだあれは!?」
驚愕する死徒達だが、そんな死徒達を置き去りにするように動物型兵器は激突する。
片方は、三大勢力の新型ＴＦ（トライフォース）ユニット。機獣将軍ヴォルティーガ。
ロマンを力に変えるＴＦユニット本来の設計思想にのっとり、「動物型ロボット兵器」に対するロマンを最大限に生かす為、獣型に変形できる陸戦特化型ＴＦユニットである。
そして一回り小型ながら、更に小型の機体を引き連れて渡り合うは、ガトリンガル陸戦仕様、ガトリンガル・レオン。
ライオン型のガトリンガルであり、これもまた陸戦特化型の機体となっている。

共に陸戦特化型。そして被害をなるべく抑えたいヴォルティーガと、周辺被害を意にも介さないガトリンガル・レオン。その戦いは考え方の違いもあって互角に近い状態となっていた。
……そして、その困惑をついて動く者もいる。
「……まったく。まさか俺達がバチカンに来るとはな」
その言葉に気が付いた死徒は、しかし反応が一瞬遅れた。
その瞬間、死徒部隊は首を跳ね飛ばされる。
一瞬の交錯。その隙をついた攻撃はしかし、普通なら対処ができていただろう。
秒で戦闘が成立したのは、彼らが突入してきた方向にある。
つい直前に砲弾が着弾していた場所から、敵が突っ込んでくるという心理的盲点。
普通なら、悪祓銀弾のような特例の行動といえる。だが、そもそも効かないと分かっているなら問題ない。これはつまり、そういうことだ。
「……大王派ではなく魔王派側、それもアザゼル元総督の要請らしい。よく主も許可を出したものだ」
「道間家も色々あって、大王派以外の選択肢を取りたいのだろう。我々もまた、対応が分かれているようだ」
「ミザリ・ルシファーこと道間誠明の一件か。まぁ、俺達は外注に近いから道間のことはどうでもいいがな」
そう語る彼らに、榴弾砲の直撃が迫る。
だが彼らは一瞥しただけで回避を放棄し、そのまま会話を続ける。
直後、砲弾が全員を巻き込む位置に着弾。
……その数秒後、彼らは意にも介さず肩をすくめながら歩き出す。
「主も出ているのだろう？　いつも思うがフットワークが軽すぎるな」
「同感だ。俺なんぞ鎖国前からの付き合いだが、あの人絶対アザゼル元総督と気が合うぞ」
「心が若いって、人生を彩るコツだよな。あの人トップなだけあるよ」
そう平然と語ったうえで、彼らは次の目標を捜索する。

……バチカンを巡る戦いは、同時に死徒対死徒の様相すら見せていく。

情勢は、更に動き出す

聖教震撼編　第二十八話　比翼連理の苦境

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

カズヒ・シチャースチエの地獄巡りは、佳境を迎え始めていた。
―今日はビデオ撮影かぁ。ふふ、キレイに撮ってくれるといいんだけどなぁ。
そう散歩気分で歩きながらの、乙女の壊れた回想。
それに対し、カズヒは目を一瞬伏せそうになるのを強引に抑え込む。
これは自分が真剣に見据えるべき業だ。例え意味がなかろうと、それを放棄することをカズヒは自分に許さない。
なしたことは背負うしかない。例えそれで被害者が何を思わなくても、だから背負うことをやめていい理由はならない。それが、自らの業に向き合うことだろう。
歯を食いしばり、目を開けてその光景を真っ直ぐに見つめる。
道間乙女は機嫌良さそうに歩くが、しかし走るような事はしない。
その理由は単純だ。彼女の上半身ではなく、下半身を見ればすぐ分かる。
大きく膨らんだ腹部。まして他が太っているなどとはとても形容できないのなら、答えは一つしかないだろう。
すでに妊娠九か月。そのお腹には、のちにカズヒが愛する九成和地となる、道間田知と呼ばれることになる胎児が宿っている。
出産を映すビデオ。厳密にはその可能性まで踏まえたうえで、六郎達の趣味じみた一環として裏物のＡＶに出演するという、そういう話になっていた。
かつての日美子すら受けた事がないだろうその所業。本来なら聞いた途端に顔色が変わっていただろう乙女は、むしろ上機嫌で歩いて

いく。
徹底的に心のどこかが壊れたその姿。それこそが、道間日美子がなした所業の一つの果て。
―出演料も貰えるっていうし、何を買おうかな？
小さく楽しそうに微笑みながら、乙女はその思考を発展させる。
そして何かに思い付いたようにそっと笑顔を浮かべながら頷いた。
―日美子に何かプレゼントでも買ってあげようっ！　ふふ、最近日美子も機嫌がいいみたいだし、ちょっと奮発してあげようかな♪
その彼女の心の在り方に、カズヒは己の業を改めて思い知る。
狙ってやった事とはいえ、道間日美子はここまで醜く彼女を変えてしまっていた。見る影もなく腐らせた。
その果てに生まれた彼が自分を救ったからと言え、それを良かった事だと考えていいわけがない。
ダメなものはダメなのだ。結果的に良い事に繋がったからといって、だからダメなことを肯定していいわけではない。それとこれとは別なのだ。
混同するな。自分が和地（田知）に救われた事と、その過程で乙女を地獄の住人に変えてしまった事は別なのだ。
そう思うカズヒの隣で、ベアトリーチェは乙女を悲しげに見ながら視線をカズヒにちらりとむけた。
「……一つ、聞いてもいい？」
その少し変化した口調を気にする間もなく、ベアトリーチェはその疑問を口にする。
「貴女は、どんな思いで乙女に悪意を向けたの？」
その言葉は、彼女が乙女でないからだろうか。
どこか乙女だからこそ尋ねずにはいられない印象を覚えながら、カズヒはその意識を切り替える。
いい機会だ。自分の思いを改めて口にしてみるべきだろう。それが心の整理に役に立つ事があるものだ。
だからこそ、カズヒは思いを言葉に変える。
「……逆恨みの嫉妬、だと思っているわ」

あの時は、本当にそう思っていた。
始まりのその時が、誠明が乙女を選んで自分から離れていったその時からだろう。
あの時、日美子はショックを受けていた。誠明が自分を選んでくれなかった事もショックだった。そしてその次ぐらいには、乙女が誠明に選ばれた事に負の感情を抱いていた。
それが何年も何年も、強すぎる意志の所為で自分を壊すことなく堪り続け、発酵していったのだろう。
何かが取り返しのつかない域にまで醸造されたその黒い想い。枷となっていたアイネスや七緒が離れたことで、それはふとした瞬間に決壊した。
だがそれは、逆恨みなのだ。
恋愛勝負とは、よほど卑劣かつ悪辣なことをしない限り相手がどちらを好きになるか否かでしかない。まして自分は実の妹であり、近親愛はタブー視されるのが世界の基本だ。誠明がそもそも真剣に受け取らない事だって、ある程度分別が付けば納得できる事ではある。
十代後半にもなれば、それぐらいの分別はつく。そして本当にそれを苦しみに思っているのなら、警察なり何なりと相談する方法は考えつくはずなのだ。己がその結果不利益を被る事すらいとわないなら、その方が簡単だったろうに。
逆恨みで自分を愛してくれる者を地獄に引きずり込み、魂を腐らせる。そんな所業が悪でなければなんだというのか。道間日美子は同情される過去を持っていても罪人であり、道間乙女は純然たる、同情されるべき被害者である。
「分別のつかない子供心をどこかに残し、意志の強さで腐ることだけは耐えてしまった。そんな馬鹿な子供が、咎がない子に八つ当たりをした。言葉にすれば、きっとそれだけの話なのよ」
そして、言葉にすれば簡単でも、実情はそうではないのもまた道理。
道間日美子は下劣な所業をした女だ。道間乙女はその悪意に汚された、純然たる被害者だ。
そう告げるカズヒの手を、そっとベアトリーチェは握り締める。

ふとカズヒは彼女を視界に移す。乙女の成り果てた姿だけは、真っ先に見ないといけないからこそだ。
だからこそ、カズヒはふと気づく。
「それは違う。きっと、道間乙女にも咎はある」
そう告げるベアトリーチェの、つらそうな表情。
「……何も気づかず、ただただ妹のように思うだけだったことが、咎でないわけがないじゃない」
それがまるで、かつて見た乙女のそれと重なったのは……偶然なのだろうか。

和地Ｓｉｄｅ

ええい、やりづらい！
さっきから敵の攻撃は、実はかなり散発的……というより、徹底的な足止め重視だ。
殆どの連中が防壁を張ることや牽制に徹していて、こっちは攻めあぐねている。
というよりだ、こいつら積極的にこっちを排除する意思がない。仕掛けるとするなら仕掛けてくる俺達に対する機先を制する形だけなようで、こっちが攻撃態勢を解除すると途端に動きにくいようにするだけだ。
こいつら、こっちを倒す気が本気でないな。
「ああもうっ！　カズヒやリーネスだって頑張ってるのにっ！」
鶴羽が強引に紫炎の十文字槍を振るうが、それを天草四郎は水を具現化して相殺。

更に余波すら、デュランダルに似た聖剣を持った戦士達がカバーする。
おそらく量産型のデュランダルといったところか。だがデュランダルの人工聖剣使いは出来ていなかったと聞く。人工聖剣使い自体、リーネスの研究で因子の製造を可能にするまで一時中断していたし、神聖糾弾同盟が増やせるのか？
因子の摘出は死人が出ないと言われているし、神聖糾弾同盟で適格者に因子を集めるってのはいけるだろうが、それにしたって時間的な制約がある。
それに対して懸念を覚えながら、俺は牽制の為にウルバヌス二世にショットライザーを抜き打ちする。
既にサルヴェイティングアサルトドッグに変身しているうえでの射撃だが、ウルバヌス二世はそれに対して素早く対処を行う。
デュランダルによく似た例の剣を振るい、素早く俺の射撃を叩き落す。
対処が早い。しかも正確な動きだ。間違いなくかなりの練度がなければできないだろう技能だろう。
勘弁してくれよ、オイ。
「政治のトップが武門も優秀とか、異形か！」
「いや、ウルバヌス二世は完全に文官だったはずだ」
と、これまた攻撃を弾き飛ばしているリュシオンがそう答える。
いやでも、あれ少なくとも訓練しっかり積んでる動きだぞ？
「気にすることはない。サーヴァントというものは、必ずしも生前にのっとる能力を振るうわけではないだよ」
そう微笑むウルバヌス二世は、小さく微笑みながら肩をすくめる。
「例えば皇帝特権。ローマ皇帝の類がよく持つこれは、スキルを持っていることにして短時間だが実際に使えるようにするスキルだ」
そういえば。天草四郎も似たようなスキルを持っていると言っていたな。
そしてウルバヌス二世は微笑みながら、傍に控える戦士達を見渡しながら胸を張る。

「そして似て異なるスキルこそ教皇特権。ローマ教皇が高確率で持ち込めるこれは、会得できるスキルの幅が狭い代わりに自他問わず一時的に与えることができるのだよ」
……勘弁してくれ。
まったくもって厄介だ。
厄介だけどこれ以上時間をかけるわけにもいかない。あまり時間をかけると、それこそ奴らの思い通りになるだろう。
だからこそ、こうなれば一気に仕掛けるしかないだろう。
何を考えているのかよく分からなくて不安だが、ここに俺達を釘付けにすることが奴さんの目的だ。
なら突破するのが勝利に近づくと考えるのは当然だろう。既に他の部分でも攻撃を受けている以上、せめて合流ぐらいはしたいところだ。
ゆえにこうなれば―
「強引に突破する!!」
「乗ったわ!!」
―まずはそっちを優先する!
「そうですね。イッセー君やリアスさんはヴァスコ・ストラーダ司祭枢機卿のところにいます。……司祭枢機卿の武名からすれば、相応の戦力が送られているでしょう」
「ぼ、僕もそろそろ本気を出します!」
ロスヴァイセさんやギャスパーもその気になっている。
実際問題、これは厄介だからな。
「うむ! ここは我らが引き受けるゆえ、合流するがよかろう!!」
ストラス騎士団長からも許可をくれた以上、尚更遠慮するする必要は―
「いや、悪いが騎士団(君達)はここまでだ」
―その瞬間、ウルバヌス二世は微笑んだ。
あ、これ手札がまだまだあるパターン!?

聖教震撼編　第二十九話　聖なる猛攻

イッセーＳｉｄｅ

畜生、なんてこった！
乳語翻訳（パイリンガル）が封じられた。更に敵はおぞましい力を振るってくる。
「梅毒とかふざけんじゃねえ！　俺はまだ童貞なんだぞ！」
何が悲しくて、童貞のまま性病に罹らなきゃならないんだ。
性病っていうのは、エッチした奴がかかるはずの病気だぞ!?　風俗店にすら言ったことがない〈そもそも高校生では違法〉から、感染（うつ）るはずがないのに。童貞と最も縁が遠い病気なのに。
そんなものに罹ってたまるか！　攻撃は何としても回避しないといけないじゃないか!?
食らってたまるか。食らうわけにはいかないだろう。
「うぉおおおおおおお!?　当たってたまるかぁあああああっ!?」
「イッセー！　天然痘の方が危ないのよ!?」
リアスがツッコミを入れてくるけど、そういう問題じゃないんだ。
童貞にとって性病がどれだけ心を傷つけるか分かってない。天然痘がどうした。しったこっちゃないんだよ。
なんて悪質な宝具なんだ。男にとってここまで非道な宝具が他にあるのだろうか。信じられないレベルでヤバいじゃねえか。
許さない。許さないぞ―
「俺を性病に罹らせようたぁ、許さねえぞぉおおおおおっ!!」
―クリストファー・コロンブスぅっ!!
「そうはいかないぜぇっ!!」
なんかコロンブスの奴、赤龍帝の鎧を身に纏ってない!?
聖槍を構えたコロンブスは、真女王状態の俺に真っ向から接近戦を仕掛けてくる。

なんて奴だ。っていうかなんで奴が!?
「ふはははははっ！　相手が悪魔なら奪いたい放題だなぁ！　主よ、神罰の前に思う存分暴れさせてくれて感謝しますっ！」
「その感謝は絶対間違ってるだろ！」
振るわれる聖槍を回避しながら、俺は回し蹴りを叩き込む。
よっし！　なんで赤龍帝の鎧をつけてるのか知らないけど、流石に真女王相手には―
「ならこれだぁっ!!」
―今度は三叉成駒ぁっ!?
戦車の拳をもろに食らって、俺は５０ｍぐらい吹っ飛ばされた。

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「「イッセー!?」」
コロンブスに殴り飛ばされるイッセーに、リアスとゼノヴィアの絶叫が響く。
赤龍帝の鎧を身に纏ったかと思えば、更に三叉成駒の戦車になっての反撃。事態に思わず絶叫するのは仕方がないが、しかしここは戦場だった。
「とったぞゼノヴィアっ！」
「させません！」
ゼノヴィアが気づいた瞬間、その迫りくる刃から転ばされることで回避させられていた。
一瞬で滑り込んだアーシアの足払いが、ゼノヴィアをこかすことで斬撃からカバーする。

同時にオーラによる影響を回復されながら、ゼノヴィアは反撃のエクス・デュランダルを叩き込んだ。
それを受け流すオウルは、一旦距離をとりながらもいつでも仕掛けられる状態を維持している。
グリップ上の武器により牽制射撃を行いながら、機敏に移動して隙を伺っていた。
「……なるほど、奴が私以外のデュランダル継承候補……できるな」
デュランダルの使い手に選ばれたゼノヴィアだが、当然だが候補が一切いないわけではない。
適正の差もあって自分が選ばれたが、数人ほど候補が見繕われていたはずだ。その一人だろう。
自分を超えるデュランダル使いが追放され、デュランダル片手に悪魔に転生する。苛立つのは確かに分かるし、自分もかつて同じような話を聞けば敵意を持つことは間違いない。
ただ、直後に和平が結ばれたうえでこれとは流石に驚くほどだ。
「ここまで嫌われるとはね。そこまで苛立つようなことをしたのか、私は？」
流石に少し文句を言いたくなるが、そこに援護をしていた信徒の一人が近づいてきた。
「……戦士オウルは大の日本嫌いで有名なんです。ほら、日本って鎖国で我らが教えを締め出したじゃありませんか」
「……なるほど」
日本フリークのリアス・グレモリーの眷属として、日本で転生悪魔になったことが更に加速させていたのか。
「偉大なるデュランダルに悪魔が振るいし武器などという、決して消えぬ汚名をつけた恥ずべきデュランダル使い……っ！　せめてここで打倒することで、これ以上は血を上塗りすることだけは阻止して見せる!!」
突貫しプロトデュランダルⅡを振るうオウルの一撃を、ゼノヴィアは何とかしのいでいく。
だがその一撃は重く、ゼノヴィアはどうしても押されてしまう。

―エクス・デュランダルを、私が使いこなせていない証拠かっ
内心でそう、忸怩たる思いが浮かんでいく。
エクス・デュランダルは、デュランダルとエクスカリバーの融合だ。
伝説の聖剣同士を組み合わせるという、前代未聞ゆえに多くの可能性を感じさせる試み。天界でも常々検査や調査が行われているが、それだけの可能性があると多くの者が信じているからこそのものだ。
それがデュランダルの二号機の試作型、つまりデュランダルの劣化型にとどまっているだろうそれに負けているのは、ゼノヴィアの未熟によるものだ。少なくともゼノヴィアはそう考える。
純粋に性能で圧倒している武装を使っているのに負けるのは、そういうことといがいのなにものでもない。
振るわれる猛攻を前に、ゼノヴィアは少しずつ確実に押され続けている。
……状況は、少しずつだが確実に、神聖糾弾同盟に傾いていた。

祐斗Ｓｉｄｅ

まずいね、これは。
「さぁ、お祈りの時間です！　祈り……スマッシュっ！」
祈りのポーズをとったまま、超高速で聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌは突撃する。
輝く光を身に纏った突撃を、クリスタリディ猊下はヘキサカリバーで何とか受け止めた。
「ぬぅ……っ！」
支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）の力を利用して、彼は何とかその攻撃を上に逸らした。

だがその瞬間、聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌはポーズをとった。
「懺悔の時来たれり！　祝福……メテオッ！」
その瞬間、聖なる光がバリアのように張られ、聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌが急降下してくる。
「いい加減に……しなさい！」
英雄派のジャンヌが聖剣の龍をカウンターでぶつけるけど、それを強引に叩き潰す聖処女ジャンヌ。
だが衝撃は流石に削れている。そこを狙って、クリスタリディ猊下についた戦士達が殺到した。
「お覚悟！」
「甘いです！　お祈り千回からやり直しなさい！」
その瞬間、カウンターのようにクロスボウが大量に展開され、盛大な槍の弾幕が放たれる。
一斉射撃に戦士達がガード越しから弾き飛ばされる。
その光景に神聖糾弾同盟側が、活気づいていく。
攻撃の勢いも高まっていき、そして彼らの士気もどんどん高まっていく
「流石は聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌ！　俺達の祈りの結晶なだけある！」
「ジャンヌ！　ジャンヌ！　理想のジャンヌぅっ!!」
「うぉおおお！　聖処女(ラ・ピュセル)万歳！」
……何かが違う気がするけど。
これ聖女を信奉しているというより、アイドルの追っかけとかそんな感じだよね？
少し僕が引き気味なっていると、クリスタリディ猊下は静かに首を横に振った。
「聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌ。本来の聖女ジャンヌというより、聖処女(ラ・ピュセル)に対する強い祈りを根幹とするサーヴァントだと聞いてはいたが……」
な、なるほど。
ロキが召喚したジャンヌ・ダルクとは似ても似つかない性格なのはそれか。
おそらく召喚した者の持つ、聖処女(ラ・ピュセル)に対するイメージなどが影響す

るのだろう。それなら納得だよ。
……。
いや、無理だ！
どういう方向性になったら、こんなキャラ付けになるんだ!?

Ｏｔｅｒ　ｓｉｄｅ

かつて、和平が結ばれて少しした後。具体的には「乳龍帝おっぱいドラゴン」が放送されて大ブレイクしている頃。教会では対抗馬となる番組を作るという計画が持ち上がっていた。
結果として試作段階まで到達したものが、アニメ「神聖糾弾少女ジャンヌ　ダルク」。神の尊さに触れた悪魔を守る為、神と敵対することに拘る悪魔や堕天使から身を挺して守る聖女の物語というものを設計した。
結果としてロキがサーヴァントとしてジャンヌ・ダルクを引き連れたことで企画倒れになり、ある種の精神的なガス抜きとして作成に熱中していた開発グループは、耐えきれず教会を抜ける。そしてそのタイミングで神聖糾弾同盟の接触を受け、亜種聖杯戦争を引き起こす。
……それがよくなかった。
聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌはジャンヌ・ダルクに対する祈りそのものが中核となる存在。ようは召喚者を呼び水に「皆の考える理想の聖女ジャンヌ」を召喚するのだ。
三大勢力の和平で心を病みかけていた彼らは、その慰撫も兼ねて熱中して番組作成を試みた。すなわち彼らにとって主人公のジャンヌは、「自分達にとって理想のジャンヌ・ダルク」だったのだ。

……多方面が泣いていい事態になったのは、皮肉としか言いようがない。

聖教震撼編　第三十話　罅はしる聖教

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

周囲の者達が味方の応援の為に、戦場のど真ん中でＳＥ〇をし続ける。

そんな気の狂う光景の中で、しかし神聖糾弾同盟はよく戦っているといえるだろう。

倒されれば目の前で淫行が行われるという、死ぬほど嫌なことが目の前に控えている事実。仮にも聖書の教えにおける、中心地といえるバチカンにそんな連中が迫ってくることに対する憤怒。理由はいくつもあるだろう。

だがそのうちの一つに、筆頭戦力の一人が奮戦しているという事実があった。

六聖英霊とは異なり、今を生きる人でありながら並び立てる戦力とされた者達。授けられた称号を、全霊信徒。名をマルティナと言う。

透明（エクスカリバー・トランスペアレンシー）の聖剣を中核とするヘキサカリバーを振るい、彼女は奮戦していた。

元々プロテスタントでエクスカリバー使いの候補として選定されていた彼女は、しかし三大勢力の和平とそれを理由とする人工聖剣使い育成の停止に、耐えきることができず教会を離反した。

そこからはくすぶり続ける日々だった。聖書の教えこそ世界を導く規範だと信じたが故、そこから離れることは苦痛でしかなかった。だがその規範を教会と天界が自ら翻したことを、受け入れることもできなかった。

しかしウルバヌス二世は示して下さった。自分達が悪なのだという、否定の余地がない断固たる事実を。だからこそ罰を受けるのは自分達の側だという、当然の真理を。

ゆえに、この戦いに対する熱意は神聖糾弾同盟でも指折りといえるだろう。自らの悪徳を主に裁いてもらうという、ある種の栄光を受ける為だけに残りの人生を使うと決めたのだから。

だから、こそ―

「……バチカンで淫行など、ふざけるなぁあああっ!!」

―かなりガチのレベルで、彼女は限界すら超えていた。

今の彼女は文字通り、己の限界をこえ進化すら果たしている。神器を持っているのなら、間違いなく至っているレベルで、全力を発揮していた。

全ては神敵粉砕、ただそれのみ。貞淑を良しとし色欲を罪とする、聖書の教えに殉じる為。淫行をバチカンでさせるなど、論外としか言えないのだから。

もはやその勢い、一騎当千。伝説の英雄達すら超えるだろう、圧倒的な戦士がここにいる。

神聖糾弾同盟が最も大欲情教団と激突しているこの戦いにおいて、神聖糾弾同盟を支えているのは間違いなく彼女だ。最強戦力による、壮絶な戦いが巻き起こっている。

だが同時に、大欲情教団の者達は悲し気な表情を浮かべていた。

自分達の命が危険だからか？　否。彼らはすべからく色欲に命を捧げている。それだけで悲しんだりはしない。

仲間達が傷つけられているからか？　否。同胞達が傷つき倒れるのは確かに辛いが、彼らも覚悟して戦場に立っている。ある種の敬意と誇りを持つべきであり、考えようによっては愚弄にしかならないそんな行為は決してしない。

彼らが悲しんでいる理由。それは歪みなくただ一つの理由によるものだった。

「……なんという。色欲を引き離し命を燃やすなんて……悲しすぎる!!」

「余計なお世話だぁあああああっ!!」

歪みない変態性の発露に、マルティナ渾身の一撃が放たれる。

だが大欲情教団は心の底から本気だった。

なぜなら彼らは、色欲こそを尊ぶ思想団体。淫乱であることを良しとし、変態であることを目指す者たちである。
ゆえに皆が変態であれるよう、死力を尽くすがその在り方。転じていやらしさを持たないように生きている、淫乱足りえる者を見て嘆かない方がおかしいのだ。
ゆえに、彼らの決意は素早かった。
「我ら大欲情教団、今こそ淫乱たる変態として命を燃やすとき！」
「淫らな思いを解き放て！」
「分け合え、我らのいやらしさ!!」
大欲情教団の変態達が、何故か共鳴するかのように輝き出す。
その光が圧縮されるように強まっていくこの光景。それを見た瞬間、周辺で戦闘をしていた者達が凄い勢いで逃げ出した。
なお、逃げ出した者達はその多くがある映像を思い出していた。
それはリアス・グレモリーとソーナ・シトリーのレーティングゲーム。その終盤にておきた、兵藤一誠の乳技。乳語翻訳（パイリンガル）が発動するその瞬間を連想した。
だから逃げた。速攻で逃げた。
食らえば色々なものが削られるかもしれない。少なくとも、初見で味わいたくはない。その一念で逃げ出した。
そして、数割にとってそれは間違いなく正しい。
なぜならこれは、特定の人物にとって喰らえば終わる系統の技である。
該当する者が喰らえば、その瞬間に今までの人生から去るほかなくなるだろう。少なくとも、今までの人生をそのまま過ごすことはできなくなるだろう。そもそも生きようと思わなくなりかねない。そういった技なのだ。
何より恐るべきは、この技を放つ時に悪意が一切ない事。
純粋たる善意。純度１００％の、相手の幸せを願う気持ちこそが、共有という概念を形にしたこの慈悲を発動させる。
そう。これこそ大欲情教団による、絆の必殺奥義。
「君もいやらしさを知るといい……」

『『『『『『『『『『『『『シンクロニティ・セックスッ!!』』』』』』』』』』』』』

この瞬間、バチカン外周部の一区画にて「発動者が経験した性交を疑似体験する」奥義が放たれた。

……ちなみに、数十人がかりで発動し、代償として昏睡状態になること請け合いの禁呪である。

そんな技を、この状況下で、純粋な善意で行えるのが大欲情教団であった。

一方その頃、バチカン内部でも大なり小なり被害が発生していた。

その現場における全霊信徒。聖都守護連隊に属していた西堂黒須（せいどう くろす）は、恐怖すら覚えていた。

自分が変身する仮面ライダーディバイン。

実力のある悪魔祓（エクソシスト）いが実装する、Dレイダー。

そして同志達が実装する、DレイダーE。

戦力として圧倒的であり、たとえ最上級悪魔が眷属を引き連れようとも返り討ちにできる。その自信があった。

その自信は間違っていない。間違いなく事実であり、最上級悪魔が眷属を引き連れてきた程度では勝てない。それだけの部隊をもって、彼はウルバヌス二世より使命を賜った。

すなわち、内通者を利用してタイミングを誘導された、侵入した禍（カオス）の団（ブリゲート）の殲滅である。

しかも侵入者の中には、聖十字架の担い手すら存在していた。

神の子の処刑に使われた十字架。それに由来する神滅具（ロンギヌス）を持ちながら、邪悪な魔女そのものである紫炎のヴァルプルガ。聖遺物に汚名を記す、忌まわしき怨敵である。

その打倒もできると喜びすら覚えていた彼は、目の前の状況に恐怖を隠し切れない。

「……化け物……め……っ」

『悪いねぇ？　俺ってば、これでもステラフレームじゃ戦闘特化型なもんで？　余裕ってわけよ』
そうヘラヘラと嗤うステラフレームは、焼き尽くされて灰となった同志達を踏みにじる。
「あらあら？　燃え萌え勝負はリードされてるかしらん？」
そう微笑むヴァルプルガもまた、愉快そうに灰を見て嗤っている。
その事実に怒りを覚え、黒須は立ち上がると共にディバイライザーを操作する。
『ダイイングインフェルノ』
振るわれるはEグリップを瞬間的に強化する攻撃モード。
ためらうことなく接近し、そして刃を振るい―
『おっとゴメンねぇっ！』
―その瞬間、打撃と共に絶大な衝撃波が放たれる。
ろっ骨を数本粉砕しながら、黒須は数十メートル離れた壁に叩き付けられる。
それでもなお、倒れない。足を踏ん張って倒れることだけは抑え込む。
歯を食いしばり睨み付ける。心だけは折れていない。
全霊信徒は、神聖糾弾同盟でも有数の戦士に与えられる称号。ダイイングゴートプログライズキー用にフォースライザーを再設計した、フォースディバイライザーによって変身する主力戦士である。
そんな自分が、敵の主力と激突している。
倒れるわけにはいかない。まだ一人として敵を倒せていないのだから。
「負けるわけにはいかん。力を貸してくれ、同志達……聖下……散っていった先達達……そして―」
そう思った時、彼の脳裏に思い浮かぶのはある戦士達。
国家に敵対しながらも、信じる教えの為に尽力を尽くした者達。
信じる形は違えど、それでも尊敬に値する先達達。
そう―
「我らが好敵手たる、イスラム原理主義者達よ―」

「『なんで？』」
　―その瞬間、真顔のツッコミと共に黒須は跡形もなく吹き飛ばされた。
「……イスラム原理主義者を好敵手って、彼の頭って大丈夫ですのん？」
『っていうか、教会は思想調査やっとけよ。絶対アウトだろ、○ル○イダとかＩ○Ｌ○とかをライバル扱いする奴』
『まぁ、規模が大きいと人が多いし？　カバーしきれなかったんじゃない？』
　壮絶に敵が教会に同情する方向にもっていった黒須だが、そこで生き残っていた内通者が恐る恐る手を挙げた。
「意外と多かったんですよ。ほら、近年は信仰の自由が広まっているから他宗教との友好関係とかを主張する信徒も多いですから」
　ある意味でそれは、宗教的侵略を繰り返してきた聖書の教えの進化といえるだろう。
　だが、しかし。
「『それにしても……』」
　対象があまりにアレすぎた結果、外道三人が教会に同情するレベルになっていた。

　外周部での戦闘において、幾瀬鳶雄は猛攻をしのいでいた。
　夢幻（エクスカリバー・ナイトメア）の聖剣を使用したヘキサカリバーは、神滅具の禁手をもってしても手古摺るレベルと言っていい。
　そこに仮面ライダーディバインに変身していることもある。その総合戦闘能力は、最上級悪魔や上級死神でも苦戦するレベルだろう。いかに幾瀬鳶雄が神の子（グリゴリ）を見張る者（グリゴリ）でも指折りの実力者と言え、決して確証ができるほどではない。
　更に上級死徒のブレッドという男の存在もある。油断ができるわ

けではない。
振るわれるブレッドの斬撃を回避しつつ、全霊信徒のグレゴールと切り結ぶ。
「やはり堕天使側も油断できんな。くっ……核縮の動きに便乗し、対冥界攻撃用に核兵器は調達されるべきだったか……っ」
「……それはどうなんだ？」
一瞬本気で引いたが、それでも戦闘はしっかりと行う。
グレゴールは正教会でエクスカリバーの使い手候補となる人工聖剣使い。だが「核縮の動きを利用して国家から核兵器を徴収し、冥界攻撃部隊を編成するべき」と本当に上申しているタカ派筆頭格である。それが理由で、和平の可能性を探っていた上層部からは補欠として抑え込まれた男だ。
ゆえに本気であり、その猛攻もまた凶悪だ。
「ふむ。サウザー諸島連合では他国からの警戒を避ける為に核兵器は開発してなかったが、冥界全体の攻撃用に研究した方が良かったろうか」
そう首を傾げながらのブレッドの斬撃を伏せて回避しつつ、鳶雄とグレゴールは刃を振るいあう。
グレゴールの攻撃は激しく練度も高い。一対一でも確実に勝てるほどの余裕はなく、油断すれば一瞬で切り殺されるだろう。
そこにブレッドの攻撃もある為、負担がとても大きい。
何とかグレゴールを打倒し、そのあと優先して神聖糾弾同盟を何とか無力化しなくてはならず―
「……やれやれ。如何に原理を振るえるとはいえ、第Ⅶ位階如きにはめられてどうするか」

その呆れ声と共に、ブレッドの方に大きな攻撃が叩き込まれた。
グレゴールを警戒しながら視線を向ければ、そこには一人の小さな少女がいた。
「君は……？」
「うむ。アザゼル殿がした救援要請にもとづいてきた、道間の者じゃ」
そう答える少女は、同時に少し肩をすくめる。
「それと気を強く持て。あの死徒独自の原理じゃろうが、警戒順位を下げられておるぞ？」
その言葉に、鳶雄は一瞬理解が追い付いていなかった。
だがすぐに気づく。
今まさに真っ向勝負に仕掛けているブレッドを、グレゴールはもとより他の神聖糾弾同盟より下の優先順位にしている。
そんな手合いではないし、今まさに自分を殺そうとしている敵だ。実力自体が強敵であり、グレゴールや自分と渡り合える奴を軽く見れるわけがない。ましてグレゴールを打倒した後、ブレッドではなく遠く離れた神聖糾弾同盟を当たり前のように優先するのもおかしい。
そんな相手を後回しにするべく意識までしていたことに、鳶雄は気づいて初めて戦慄する。
鳶雄のそんな様子に小さく頷いてから、死徒の少女は肩をぐるぐる回す。
「気をつけよ？　高位の死徒は親に由来する異能や、独自の異能を持つ。死徒独自のそれは原理と呼ぶので覚えておくがよい」
そう告げる頃には、その少女の周りに更に何人もの死徒が合流する。
「いつものことですが、もう少しご自愛ください！」
「なんでそんなにフットワーク軽いんですか！」
その合流した死徒の言葉から、その少女が相応の立場であることを鳶雄は理解する。
それだけの死徒を用意できるとは、道間は本当に凄まじい組織らしい。

周囲を警戒しながら戦慄していると、その少女は軽く肩をすくめていた。
「……まぁ、儂らは道間日美子ら……カズヒ・シチャースチエらと言った方がよいのか……まぁ、あ奴に返すべき負い目というものがあるのでな。いい機会だから返したらどうかと勧められたのじゃよ」
そう片目を閉じながら告げ、そして死徒達は周囲に構える。
更に魔術回路保有者が数十人ほど現れ、神聖糾弾同盟や死徒達を相手に戦闘を開始する。
「では、これより道間家も参戦させてもらうとしよう。少しぐらい休んでもよいぞ？」
「……いや、その必要はないさ」
鳶雄は首を横に振り、そして素早く鎌を構える。
このままというわけにはいかない。そして何より、仕事はきちんとするべきだ。
「なにせ、同じ仲間がバチカンで戦っているからね」
「なるほど確かに。それはとても重要じゃな」

戦いは、更に激しさを増していく。

聖教震撼編　第三十一話　罅入ろうと砕けぬ糾弾

和地Ｓｉｄｅ

ウルバヌス二世率いる、神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）の本丸部隊といえる連中を前に、俺達は猛攻をしのいでいく。

「……これ以上は、時間をかけるわけにはいかない」

そして攻撃をしのいでいたリュシオンが、静かに首を横に振ると一歩を踏み出す。

「難しく考え続けるのなら仕方がない。悪いけど、まずは無力化させてもらう」

強い決意と悲しみが見える表情を浮かべながら、リュシオンは歯を食いしばり構えをとる。

リュシオンはバチカンというある意味で一番重要な地点で、本領を発揮するのは難しい。

だがそれでも、リュシオン・オクトーバーはこの場における指折りの戦力だ。

そんな男が一歩を踏み出した時、ウルバヌス二世は小さく目を伏せた。

「ふむ。やはり具体的に実感させなければ駄目か」

そう呟いたのち、小さく苦笑しながらウルバヌス二世は―

「先と身を守護する信徒選別（グレゴリオ・ブロチェッソ）」

―宝具を開帳した。

何か力のようなものが周囲を包み込んだ。それ俺達は理解する。

だが何が起きたのかがよく分からない。分らないからこそ不安を覚える。

ゆえに、即座に潰すぐらいでいかないといけない。

その状態で接近を仕掛けようとした時、攻撃が一気に集中した。

素早く障壁を展開しながら攻撃を捌くが、いきなり攻撃の密度が上がっただと？
想定外だ。増援が来た可能性も踏まえて、かなり警戒しなければ―
「違う」
―俺はそれに気が付いた。
これは数が増えたんじゃない。単純にリソースが俺に集まっただけだ。
つまり、囲んで俺達全員を抑えていた連中の攻撃が俺にだいぶ割り振られている。
すぐに気づき、そしてまだ仲間達が倒されているわけではないことにも気づく。
ならどうなっているかというと―
「な、なにがどうなってるの⁉」
「これは……拘束、いえ封印……？」
ギャスパーとロスヴァイセさんが困惑する中、デュナミス聖騎士団の者達は、殆どが動けなくなっている。
「ちょ、それ大丈夫なの⁉」
「むぅ……頑丈な拘束をどうやったのだ⁉」
鶴羽がストラス騎士団長から、いきなり拘束した光る鎖を壊そうとしているが壊れない。
そしてその鎖は、デュナミス聖騎士団の者達全体に展開されている。
「が……あぁあああああっ⁉」
「ひぃっ⁉　な、外れろ……外れろぉおおおぁあああああびゃぁっ⁉」
中には燃え盛る鎖によって焼き殺される者もいる。近くにいた騎士団員は、どす黒く汚れている鎖に絡め取られて地面に倒れている。相当重いらしい。
鎖の種類がどうも騎士団員によって違うらしい。どういうことか分からないが、条件付きで種類の違う鎖で拘束するのが、さっき真名を解放したウルバヌス二世の宝具か。
これはまずいな。デュナミス聖騎士団のほぼ全員が鎖をつけられ

ている。一割は焼き殺され、七割ぐらいが動けなくなっている状態だ。
そして問題は―
「……ルーシア？　え、何が……？」
―まるでプラチナのように光り輝く細い鎖を、まるで宝飾のように身に纏うだけのリュシオン・オクトーバー。
「え……重い……なんで……っ」
―そして鈍色のあまりに太い鎖に絡め取られ、地に付すルーシアの姿だった。
何が何だか分からない。というか、なんでルーシアやデュナミス聖騎士団だけ……いや。
一つだけ、思い当たる。ウルバヌス二世の来歴で、思い当たることがあった。
ウルバヌス二世は、十字軍遠征の主導の前、教会の綱紀粛正に対する尽力こそが人生の主体だった人物だ。
そしてウルバヌス二世が宝具の真名開放をした後に、敬虔な信徒だけがこの現象に巻き込まれている。
ここから考えられるのは、ただ一つ。
「対信徒宝具……っ」
「なるほど。理解が早いと助かるよ」
即答しやがった。
ウルバヌス二世の宝具ってことは分かった。分ったがどういうことだ。
鎖の種類が様々で、しかも効果が違うのはどういうことだ。
ああもう！　時間と余裕がないから考えている余裕もない！
「なにしてくれてんのよ！　っていうかなにしたってのよ!!」
鶴羽がそう吠える。
ただ、ウルバヌス二世はゆとりを持った静かな微笑みを浮かべていた。
あ、これは言わない流れだな。
「……気を付けてください。もし条件付きで効果を発揮する宝具な

ら、あえて語らないことで牽制する可能性もあります」
ロスヴァイセさんもそこにすぐ気づいたらしい。
そう、条件付きで発動する宝具なら、もしかすると信徒以外にも通用させる方法があるかもしれない。
かもしれないと思わせるだけでも、俺達にとって十分牽制となる。そういう戦術はとれるんだ。
だからこそ、ウルバヌス二世が答えるわけが―
「簡単だし安心したまえ。君達には効かない宝具だとも」
―答えるのかよ!?

祐斗Ｓｉｄｅ

リアス部長達の無事を考える余裕もなくなりそうな、それだけの激戦を僕達は繰り広げていた。
敵の猛攻はすべからくが脅威だ。何より、敵がどんどん打たれ強くなっている。
一撃で戦闘不能にできた敵もいたけれど、どんどん一撃で与えられるダメージが減少していっている。その速度が少しずつだったので気づくのが遅れたけど、これはかなりまずいんじゃないか？
敵の実力……とも考えづらい。何故なら小銃を持つ独自レイダー、通称Ｄレイダーもだからだ。
Ｄレイダーは基本的に、一般市民からや非戦闘系の聖職者が実装するレイダーだと既に判明している。退役軍人などから急遽訓練を受け、更にプログライズキーが戦闘動作を補助するからこそ数があれば戦力となる程度の域だ。必然として、飛びぬけた戦闘能力を持つ者は

少ないんだ。
にも関わらず、こちらの攻撃がどんどん通用しなくなってきている。
感覚的に考えれば、ダメージが数割ほど削減されるレベルになっている。ここまでくると一撃で無力化できるものは数少ない。それが数で攻めかかれば、こちらも不覚をとりやすくなるだろう。
「おいおい！　なんつーか敵が面倒になってきてねえかぃ!?」
美猴も気づいたのだろう。戦い方を変えながら、連携を踏まえた動きになっている。
大量の分身を作り出しての制圧戦闘。それも一か所にとどまらず、移動しながらの戦闘にすることで敵レイダー部隊をかく乱している。
ただし、Dレイダーの武装は小銃だ。つまりフルオートの連射が聞くということもあり、十二分に対応できる能力を持っている。
このままだと、流石に削り殺されかねない……っ。
しかも厄介なことに、敵は数だけでなく質も併せ持っている。
「まだまだですよぉ！　さぁ、神罰までお祈りタイムでっす！」
清々しいほどどの笑顔で、聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌはクロスボウを大量に操って、分身の美猴を吹き飛ばしていく。
更に旗を振るい薙ぎ払い、時々聖なるオーラすら投射する。この猛攻に、戦士達は追い込まれていると言ってもいい。意味不明な類の強さといえるだろう。
そしてもう一つの難敵が―
「させんぞデュリオ・ジュズアルド！　無垢なる魂は汚させん!!」
「させるかよ。子供を死なせるなら容赦はしない!!」
―こちら側の最強戦力といえる、デュリオを抑え込んでいるミゼル・グロースターだ。
量産型デュランダルのデュリンダナ及び、殉教四聖剣（デュリン・カリバー）による連続攻撃。しかもレイダー部隊と同様の防御力強化を受けているのか、攻撃がどんどん通らなくなっている。
あの猛攻は明らかに驚異の域だ。元々の戦闘能力すら、最上級悪魔クラスに通用するだろう。そこに仮面ライダーディバインの特性も

あって、更なる脅威となってしまっている。
くそっ！　クリスタリディ猊下やアーサー・ペンドラゴンが一騎当千の活躍を持っているからまだ保てているけど、それだって限界がある。
このままだと……っ

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

聖都守護連隊前での戦闘は、圧倒的なまでに神聖糾弾同盟が有利になっていた。
理由は単純。一騎当千の戦力を軸に、数の暴力で押しているからだ。
ゴドフロワ・ド・ブイヨンは戦術を切り替え、一点に集まらない。ヒット＆アウェイのように敵を切り替えて流動的な戦闘を行い、戦術的に優位性を作る方向にシフト。これは裏を返せばサイラオーグ達を一気呵成に討ち取れないことの証明だが、まず戦術的な勝利を掴む方向に切り替えれる、臨機応変な対応力があることの証明でもあった。
最低限態勢が崩れる状態まで追い込んだら、瞬時に攻めるべきところを見極めて突撃攻撃。それが終わるかサイラオーグ達が態勢を立て直すタイミングで戻る。その繰り返しで、サイラオーグ達を抑え込みながら、全体の戦況に多大な貢献を果たしている。
そしてゴドフロワによって生まれた戦術的優位性は他にもある。
「よし、休憩に入れ！」
「さぁ食べろ！　聖墓特製だからすぐ回復するぞ！」

休憩に入った神聖糾弾同盟の者達に、広報担当の同胞が果物を差し出す。
彼らはそこかしこから実った果実を渡し、そして汗を拭くなどのサポートで戦士達を援護する。
戦闘とは基本原則として極限環境。心身の負荷は明確に大きく、それゆえに消耗は激しい。当然の結論として、休息や回復を如何に挟むかが重要な側面でもある。
そういった兵站面において、神聖糾弾同盟は圧倒的な優位性を獲得している。
もとより彼らは拠点防衛線を展開しているようなもの。この時点で彼らにとって有利だが、更なる優位性が彼らにはもたらされている。
「……よっし休憩終了！　行ってくるぜ！」
僅か五分。たったそれだけで彼らは回復を終えていく。
果実を食べるだけで、文字通り彼らは体力が回復していく。そういった特性を、この果実は持っていた。
「……この植物だらけ、なんかの神器か何かかと思ってたら―」
「まさか、宝具によるものとは思いませんでしたわ」
アニルと朱乃がそう呟く通り、この植物は特別製である。
これこそが、ゴドフロワ・ド・ブイヨン第三の宝具。聖旗・聖地礼賛（フラッグズ・エルサーレム）。
世界三大聖旗と称される宝具は、その名の通り三つある。
聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌが保有する、ジャンヌ・ダルクが掲げた聖女の旗。解放の伝承に基づく神聖たる攻撃を振るう、攻撃の宝具。聖旗・解放賛歌（フラッグズ・ラ＝ピュセル）。
天草四郎が保有する、島原の乱の陣中旗。伝承故の無念に基づく呪詛の空間を展開する、制圧の宝具。聖旗・島原血盟（フラッグズ・シマバラブラッド）。
そしてゴドフロワ・ド・ブイヨンが保有する、十字軍の旗。聖地奪還の伝承に基づく、祝福の宝具。それこそが聖旗・聖地礼賛（フラッグズ・エルサーレム）。
土地そのものを祝福する宝具こそこの聖旗。返上することでその土地を一時的に聖墓とする王冠、降臨（アドヴォカトゥス・サンクティ・セプルクリ）の聖墓守護者との相性が凄

まじく高い。
更にある宝具とかみ合った結果、バチカンは天候を操作し大気を化合し、成長を促進する。その結果がこの植物あふれる土地。更に効果を上乗せすれば、植物そのものに奇跡が宿る。
ホームでの戦闘とホームそのものの特別性。これが神聖糾弾同盟に回復速度というアドバンテージを与え、戦闘が続くにつれてその差が大きく出始める。
『この……野郎がぁ！』
それでも食らいつける大きな要素は、匙元士郎によるものだろう。
黒邪の龍王（ブリズン・ドラゴン）ヴリトラを宿す神器をとにかく乗せた結果、半ば復活したヴリトラと言ってもいい状態になった彼は、ヴリトラのポテンシャルを最大限に発揮できる。
力の流動と言っていい、彼自身が生まれ持っていた黒い龍脈（アブソーション・ライン）を中核として、特殊な効果を発揮する四種のヴリトラ系神器をほぼ全部乗せたと言ってもいい彼のポテンシャルは、統合した禁手（バランス・ブレイカー）もあってハイレベル。
間違いなく神滅具級の領域であり、総合力ならサイラオーグ・バアルの次に位置する。この場における現政権側の、二番手の戦力であった。
その彼がラインを使い、敵の体力と生命力を奪って自身を回復。更に力を供給させることで、サイラオーグ達の回復すら助けている。
更に時として街頭に力を流して目くらましを行い、時に敵をラインで繋いで振り回す。聖墓と化したこの地にラインを繋げるのが転生悪魔の彼にとって致命でなければ、趨勢をひっくり返せていたかもしれないほどの大活躍を見せていると言ってもいい。ある意味でサイラオーグ以上の戦果と言っていいだろう。
だが、それでもこのままでは削り殺される。
まさにその時だった。
「……ちぃっ！」
何かに気づいたかのように、サイラオーグに切りかかろうとしたゴドフロワが、反転しながら剣を創造して投擲する。

あらぬ方向に飛んで行った剣はしかし、迎撃の拳にかろうじて届き、浅いとはいえ敵に切り傷を作り上げた。

そしてそれは、三大勢力側に戦況が好転することを意味しない。

「……ここで来るかっ！」

歯をむいてうなるサイラオーグの視線の先、そこにいるのは少数の敵。

偵察戦闘用スパイユニットを装着したサリュートⅢ及び、それを率いるアステロイドやスカラベレイダー。

そして、その中央に陣取り聖剣を迎撃したのは、一人の男。

「気配察知スキルでも持っているのか？　俺をピンポイントに狙うとはな」

そうぼやくその男は、呼吸を整えると本気を見せる。

僅かに大気を歪ませるそれは、可視化するほどに高まった生命エネルギー。すなわち、闘気。

「さて、俺としては神を相手にしたいが……まぁ、組織の一員としてたまには仕事をしないとな」

ミザリ・ルシファー直属部隊。イシロ・グラシャラボラス眷属が戦車（ルーク）、それも二駒。

アルケード。彼が率いる形で禍の団もまた、参戦する。

聖教震撼編　第三十二話　不穏と巨人と

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

禍の団の動きが変わりだし、どの勢力も対応を切り替え始める必要に迫られていた。

その情勢における最大の変化は、マクロ・サリュートによる対艦戦闘である。

禍の団が本格的に活動する頃から開発計画が提唱されていた、マクロ・サリュート。「オーフィスがグレートレッドと戦う際、組み付いて妨害しつつ外野をけん制する」という目的で開発された超大型兵器。更に遠隔操作型の飛行端末を大量生成する星辰体運用兵器まで持つ、超高性能兵器。

対龍神というコンセプトが同じＧ（ギガンティック）・Ｆ（フォートレス）でも、艦隊戦という形で抑え込む設計のサンタマリア級では相性が悪く、格闘戦に持ち込まれて無力化されるリスクが付きまとう。かといって小型戦力で抑え込もうにも星辰光がそれを防ぐ。

最上級悪魔上位クラスに到達している真女王に至った赤龍帝ですら、そう簡単には倒せない。

そんな存在を前に、艦艇を運用する勢力は何とか戦闘を回避するべく慌てた対応をとっていた。

そしてネオ・マケドニアのブリッジで、オブザーバー席に座るフロンズは嫌そうな表情だった。

「……ラカム。勝てるかね？」

「ん～。相性的に一対一（タイマン）にできるなら、やりようはあるぜ？」

返答は素直であり、そして同時に現状では難しいことの証明だ。

なにせ、マクロ・サリュートは三体ほど出現している。更に部隊的運用で立ち回っている。この時点で、ラカムの前提条件は成立しな

い。
　それを理解し、フロンズは頭痛を覚え始めていた。
　色々と考えて動かなければならないときに、更に厄介なことになっている。これは真剣にどうにかしたいが、どうしたらいいかが悩ましい。
「ちなみに戦術は？」
「一撃離脱のヒット＆アウェイ一択。組み付かれないようにどう立ち回るかが肝だな」
　となれば無理だろう。数が多い状態では、連携で挑まれれば戦術を崩されかねない。
「後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）だけならやってみてもいいんだけどなぁ。流石にオタクがいる状態だと無理って感じか？」
「ネオマケドニアは割とフラッグシップなので、勝算をなるべく挙げてからにしてほしいのだがね」
　つまり現状、マクロサリュートは半分放置に近い状態にするしかない。
　あれによって引っ掻き回され、禍の団により襲撃が現状の戦闘の流れだ。しかもバチカンに侵入することを避けて動いている為、神聖糾弾同盟もそれを戦術に組み込んでいる節がある。
　さてどうしたものかとも思うが、ノアから頼まれたこともある。考える為にも相応の計算設備は欲しいところだ。
　改めてため息をつきたくなったフロンズの、その耳元に通信用魔法陣が展開された。
『……フロンズさん。失礼ですが、少しよろしいですか？』
「……梔子（くちなし）嬢か。手短に頼む」
　下の方で戦術指揮を行っていた、幸香の妹からの通信が届いた。
　今は正直時間を割きたくないが、しかし立場もあるし何かが起きてからでは遅い。
　思考の一部をマルチタスクで頼みごとに割きながら、フロンズは梔子に対応する。
『神聖糾弾同盟の動きに妙なところがありまして。おそらくフロンズ

さんの専門だと思い、お知恵を拝借したと思いまして』
……割いていたリソースをまとめるのに、ためらいはなかった。
「実はノアからも、似たような懸念が送られてきた」
おそらく似通っている。その判断で返した言葉に、梔子が一瞬息をのんだ。
どうやら当たりのようだ。そう考えるころには、すぐに梔子は呼吸を整える。
『こちらも、奥羽さんの話で違和感が強まっています。なんでも武装と戦術が、練度ではなく士気の差でくっきり分けられているとのことです』
「なるほど。ノアが言うには、防衛網から推し量れる練度に比べ、突入された後の対応力が低く見えるとのことだ」
短くお互いが持ち寄った情報をもとに、フロンズと梔子は思考を回転させていく。
フロンズ・フィーニクスは政（まつりごと）における天才である。
純粋な武力や戦術指揮なら、上を行く者は数多い。だが同時に、政治的根回しを行う戦略的な組織運営において彼を超える者はいない。かの若手四王（ルーキーズ・フォー）ですら、ソーナ・シトリーが一瞬の油断をついて無視できない敗北を刻んだ程度である。
現在の大王派にあの手この手で意見を通し、彼らの機嫌を取りながら大王派に新たな強さを与える傑物。魔王派の考える成長と似て異なる、若手四王と対を成す大王派の英傑が彼だ。
九条・梔子・張良は、張良という英雄を超えんとする者である。
後継覇王（アレキサンダー）がザイアや禍の団にいる間、彼女が最初に作った足場たるマフィアをユーピと共に裏で運営。フロント企業すら発展させ、後継私掠船団が大王派に付くと共に本質を入れ替えた、才媛が彼女だ。
義姉である幸香を項羽の様に捉え、彼女を更なる勝利に導く—すなわち劉邦を支えた張良以上になるべきだろうと判断し—存在を目指す。張越最良（チョウリョウ・エボリューション）を掲げる後継者（ディアドコイ）である。
共に最大の本質は、直接的な問題打倒の前衛ではない。むしろその逆、そこまでの準備を整える後衛である。

ゆえに、前衛たるノアと幸香が全力を出している中、彼らが問題なく勝利する為の流れを作ることこそが彼らの強み。
「この違和感、それを生む最大の要因は矛盾にこそある」
『高い練度と装備、そこからくる勝利の為の防衛網』
「しかし敗北に繋がる要素に対し、練度と装備から不可思議なほどずさんな対応」
『更に士気の違いを踏まえた、意味の薄い籠城箇所の存在』
「武装の質も士気に依存しすぎ、折角の練度を生かせていない」
『そう。勝利条件とその為の戦略が、当事者視点で見てもちぐはぐすぎる』
二人がそれぞれ息を合わせているかのように、語りながら意見を統一させていく。
その口語の会話によるすり合わせは、二人の答えを明確にする。
「仮定することで矛盾を解く、回答もしくは条件は―」
『―大前提としている、その認識を逆転させる』
そして発想の逆転は、思索におけるある種の常套手段。
そしてその結論は―
「『勝利条件が間違っている……っ』」
―かみ合った。
『そう仮定すれば、この違和感にも納得できる余地がありますね』
「勝利条件と戦術的対応がかみ合ってないのなら、そもそも前提となる勝利が異なっているとみるべきだろう。仮説でしかないが僥倖となる発想だな」
本当にそうであった場合、最悪の場合とてつもない被害を被ることになる。
この手の勝負で、大前提となる勝敗の条件に食い違いが合うのはかなり危険だ。思わぬ形でちゃぶ台返しを喰らいかねない。試合に勝って勝負に負けるというのは、決して油断できないのだ。
そしてそう仮定すれば、そもそもの答えは分からなくても違和感に納得がいく。そこまでいけば、これは無視していい問題では断じてない。

相手の勝利条件を見抜くことは、相手を負かすことが勝利条件の者にとって必要不可欠。こと負けないことを重視するフロンズ達や、相手を打倒する勝利を欲する後継私掠船団にとって、これはとても重要といえるだろう。大損の可能性があるなら尚更である。
必然として、ここから派生する思考は一つ。
二人はあえて、それを同時に告げる。
『敵の勝利条件は、何か』
基本として、勝負ごとにおける自分達の勝利とは敵の敗北であることが多い。逆もまたしかり。
ゆえに敵の勝利条件を知ることは、敵を打倒することで勝利するのなら当然必須といえるだろう。
そこまで至れば、あとはとんとん拍子である。
「……ちぐはぐな対応から矛盾をなくしたいのなら、二種類のサンプルを多数集めて比較するべきだな」
『フロンズさん。私は一応、遊撃部隊の三割を管理する立場なのですが』
「では、ノアには私から伝えておくので傾向の違う敵集団を仕分けしたうえで、違いを把握してくれ。私が責任を負える範囲拷問とか薬物投与といった、非人道的尋問関連についての警告は……分かるな？」
『かしこまりました。私の星辰光（アステリズム）を使えば、五分で準備は完了します』
「人数はそれぞれ十数人もいればいいだろう。だが地区による誤差も考慮して、各戦闘地域から数人ずつ捕縛してくれ。ある程度の治療は私の私費で対応する」
『かしこまりました。３０分で終わらせます』
……ここより３０分後。事態は大きく動き出す

そして同時に、戦線そのものにも動きが見られていた。
「……ソーナ様！　マクロ・サリュートにより艦艇の動きが牽制され、

禍の団が盛り返してきています！」
「デュナミス聖騎士団と合流したメンバーとの通信途絶！　固有結界に取り込まれた模様!!」
「リアス様と赤龍帝が向かった地点に聖槍の反応が二つあります！　コロンブスが聖槍保有者であった可能性が的中しています!!」
「孫悟空殿達との通信、未だ繋がりません！　突入地点で反応が観測されていない為、何らかの膠着状態に陥っていると思われます！」
「デュリオリーダー達の突入地点、以前戦闘中！　どうやら何らかの方法で煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）が封じられた模様!!」
「サイラオーグ様達の戦線に、イシロ・グラシャラボラス眷属のアルケードが確認されました！　禍の団の潜入工作部隊を率いてきた模様！」
「外周部で大欲情教団が戦線を押し広げています！　神聖糾弾同盟側の迎撃部隊、壊滅した模様!!」
「刃狗（スラッシュ・ドッグ）チーム、大王派側から派遣された死徒部隊と共に戦闘を継続！　敵主力を撃破して盛り返しています！」
「大王派指揮官、ノア・ベリアル様より入電！　「工作部隊に捕虜をとらせているが、万が一があるので自分達も責任を背負うつもりでなければ深入りしないように」とのことです！」
「リヴァ様達遊撃部隊、周辺敵勢力の無力化に成功！　マクロ・サリュートの一隻を牽制中!!」
　D×D側の陣に、数多くの情報が届く。
　そのうえで指揮を執るソーナと補佐をするアザゼルは、少しずつ懸念の表情を浮かべていた。
「……大王派も、違和感に気づいているようですね」
「ああ。神聖糾弾同盟（奴さん）の動きは妙なところがあるからな。あいつらなら余力があるうちに調べ上げるだろう」
　ソーナやアザゼルも、一歩引いたところから戦線を調べられる為違和感に気づいていた。
　そのうえで、大王派が既に動いているのならとあえてそれは深入りしない。

対立派閥ではあるが、彼らは優秀だ。こういうところでしっかり手を回すのが得意技でもある。こちらが介入するより、任せた方が安心だろう。
だからこそ、アザゼルも判断を決定する。
「ソーナ。指揮は俺が一旦引き継ぐから、例の伏せ札でマクロ・サリュートをどうにかしてくれ」
「よいのですか？」
確認するようにソーナは聞き返すが、アザゼルは頷いた。
「ここらでお前らも目立っとけ。シーグヴァイラ自慢の切り札込みなら、マクロ・サリュートもどうにかできるだろうよ」
その言葉に、ソーナは静かに頷いた。
民衆受けする手柄を立てておいた方が、今後の動きに役立つだろうという気遣いだろう。
それに実際、マクロ・サリュートの所為で艦隊を保有する勢力はどこも牽制されている。結果としてただでさえ艦船を多数投入している、禍の団側が優勢になり始めている。
ならば、それを打倒する戦力は必要だろう。
ソーナは理解すると、少しだけメガネの位置を直す。
「では、少し暴れてきます。……シーグヴァイラ、準備はどうですか？」
『問題ゼロです！　待ってましたよ!!』
三秒ほど、思わずソーナは通信法魔法陣から耳を遠ざけていた。
だが持ち直し、転送用魔法陣を展開する。
「では、行ってきます」
「おう。やっちまえ！」
そのアザゼルの声に背中を押され、ソーナは素早く転移する。
転移されたのは、少し狭い科学的な空間。
完全密閉型で、モニター数台がある狭い部屋。その座席に座ったソーナは、外の情報を得る。
対G制御まで踏まえた軽い固定を掛けるシートは、同時に座った者に外の情報を投影し、五感に干渉する形で空間認識能力を疑似習得さ

せる。
　そして軽く調子を確かめるようにスイッチなどを操作すると、同調による試行制御含め、鋼の四肢が軽く動く。
「準備はできました。では、先導をお願いします」
　そう告げると、奇妙なオーラをソーナは感じた。
『いいでしょう、では……』
　うずうずしている。それが分かった瞬間―
『シーグヴァイラ・アガレス！　……行きまぁあああっっっすぅ!!』
　―再びの大声に、ソーナな若干聴覚がマヒしてしまった。

　その十秒後、マクロ・サリュートの一体が盛大に殴り飛ばされる。
　それに気づいた全勢力が、殴り飛ばした存在を見て、目を見開いた。
　それは、例えるなら巨大な上半身。
　足がないにも関わらず、全高は１００ｍを超えるだろう。
　そして背中から四本の腕を追加で生やしたそれは、マクロ・サリュート相手に格闘戦を仕掛ける。
　それを止めるべく戦闘端末が展開されるが、それを迎撃する敵が現れた。
　その姿を見た禍の団は、その正体に気づく。
「……天界で量産型グレンデルの試作体をぶちのめしたやつか!?」
「あれ？　でも外観が違くないか？」
　困惑している暇もなく、更に随伴機が確認され、誰もが目を見開いた。
「……あれは、トライデンなんとか!?」
「おいΔサリュート・アサルト持ってこい!!」
　現れるは、飛行将兵トライデンⅢ。
　その随伴部隊の援護を受け、ソーナとシーグヴァイラは戦線に突入する。

「……一応私もシトリー家次期当主ですので、これを持ち出せるのですよ」
そう呟くソーナは、素早く操作して周囲の敵を迎撃する。
「では、強権を振るって持ち出した以上……データはしっかり取り出さないといけませんね」
不敵な笑みを浮かべるソーナは、素早く機体を操作する。
換装装備のテストとして、あえて合一化した状態で開発された試作兵器。機構悪魔ガレシオンＴＳ型。
そしてその弾幕により支援を受け、シーグヴァイラは吠える。
「これぞ、リアルロボットの大艦巨砲主義……強化ユニット!!」
中枢に組み込まれたアガレッサーのコックピットで、シーグヴァイラはテンションを天元突破させながら吠える。
「大公要塞！　ギガ!!　アガレスッ!!!!　出撃です!!」
広域戦闘装備「アガレユニット」と合体した、大公機甲アガレッサーの広域殲滅形態。
その名も、大公要塞ギガアガレス。
ついでにロマン重視で同サイズとの接近戦も仕込んでいた超巨大兵器が、超巨大兵器と真っ向勝負を敢行した。

聖教震撼編　第三十三話　破壊の猛威

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

リアス・グレモリーは、圧倒的な数の敵を相手に奮戦していた。
ただ力をもって打倒するだけではない。可能な限り威力を低く、急所を避ける。そういった加減をなるべく考慮して戦っていた。
状況ゆえに殺さないように気をつけろとは言われていない。だが事情を知っているからこそ、殺さずにどうにかできるならどうにかしたいとは思っている。
だが、それにしても限度はある。それを痛感し始めるほどに、今の状況は危険といってよかった。
「……主よ。ここまでしても姿を現しては……くれぬのですか……っ？」
そう祈るように唸るは、テオドロ・ログレンツィ。
彼が握るヘキサカリバーが輝き、それに共鳴するように戦士達は猛攻を激しくしていく。
間違いなく、彼が持つヘキサカリバーの核は祝福（エクサカリバー・ブレッシング）の聖剣。聖なる力や聖別された物を底上げできる、サポート型のエクスカリバーだ。
その力が信徒達を底上げする。まして振るっている者が司教枢機卿で奇跡の子。単純な効果以上に、士気の向上に繋がっている部分がある。
「皆さん！　すぐに治しますから……頑張ってくださいっ!!」
ひとえにアーシアの奮闘があるからこそ、こちらに死者は出ていない。だが同時にそれだけだ。
このままでは押し切られる。リアスはそれを理解していた。
「……く……っ」

これ以上、相手の命に気を遣っている余裕はない。
それをリアスは痛感し、そのうえで歯を食いしばる。
事情を知らないとはいえ、不可能な条件を示したうえでこれだけの規模にクーデターを発展させた、ウルバヌス二世。
機会があれば一発、叩き付けなければ我慢ならない。その怒りと共に、リアスは相手を滅ぼす覚悟を決め始める。
……彼女は知らない。ウルバヌス二世は確証こそないが、聖書の神が死んでいることを前提に計画を立てたことを。
そしてD×D側が誰一人として辿り着いていない、ウルバヌス二世達の真の目的。神聖糾弾同盟（ネオ・デイバインクルセイダーズ）が結成された真の理由。その、この事件における到達点。
それを悟る時、この戦いは最終局面へと突入する。

イッセーSide

「うぉおおおおっ!!」
「……はぁっ！」
俺と曹操は左右から、コロンブスを責め立てる。
自分で言うことじゃないけど、俺ってば爆発力はあるし基礎もできていると人に言われてはいる。そして俺は龍神の肉体を持っているうえ、神滅具（ロンギヌス）持ちだ
曹操がやばいのはよく知っている。こいつめちゃくちゃ強いし、何してくるか分からないし。生身の人間ではあるけど、最強の神滅具持ちは伊達じゃない。
そんな俺達を相手に、コロンブスはむしろ俺達を追い込んでいる。
と、いうかだ。

「行きなぁっ！　俺の下僕達っ!!」
そう言いながら奴が俺達に差し向けるのは、俺の飛龍と曹操の戦士達。
俺達が扱う能力で生み出した戦力を、何故かコロンブスの奴は俺達に差し向けてきやがった。
しかも油断すると梅毒が襲い掛かってきやがる。
食らえば終わる。そんな攻撃を前にしたら、俺だって回避ぐらいはしないと……詰むっ!!
『いえ、確かに危険ですけど!!　どっちかといえば天然痘を重視してくださいっ!!』
無理だシャルロット!!
そして多分、重要なのはそこでもない。
あの野郎、さっきから理解ができない謎現象のオンパレードだ。
こっちの攻撃が明後日の方向に飛んでいく。
発動しようとした能力が無効化される。
こっちの能力が何時の間にか操られる。
なんかデカい炎とか氷で攻撃してくる。
気づいたら負傷していた奴が回復してくる。
いくら何でも、効果が多彩すぎだろう！　創造系神器か!!
間違いなく禁手（バランス・ブレイカー）だ。それは間違いない。
だけど禁手にしたって、手札が多すぎるだろ。そういう多彩な禁手もあるにはあるけど、そういうのってやっぱり出力とか強度とかには限界があるし。そもそも聖槍からかけ離れていることを踏まえると、何かがあるとしか思えない。
くそったれ！　このままだと押し切られる!!
「……兵藤一誠」
と、曹操がコロンブスの攻撃を捌きながら、俺に声をかける。
「どうした？」
「一つ試してみるべき価値のあることがある。好機が来たら仕掛けるから、それまで何とかしのいでくれ」
なるほど。

曹操のことだ。どうやら何かに気づいたみたいだな。
……よし。
「任せた！」
「……っ」
なんか面食らってるけど、おかしなことしたかな？
こいつの強さと得体の知れなさはよく知っている。オーフィスを有限にした時といい、頭も回るから何かいける可能性はある。なら頼るさ。
今は味方だからな。正直よく分からんことで悩んだりとかで困るけど、厄介な敵だからこそ味方になるなら頼もしい。
「頼んだぜ、曹操。頼りにしてるからな!!」
俺がそう言いながら前衛を張ると、曹操はなんか苦笑している感じだった。
『……そういうところですよ、イッセー』
『ま、相棒はそういうやつだからな』
シャルロットとドライグまで苦笑しているし。
な、なんか分からないけど―
「しのがせてもらうぜ、コロンブス!!」
「そうはいかねえ！　信徒達の為にも、頑張らせてもらうぜぇっ!!」
―こいつは俺が何とかしてやるぜ!!

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

振るわれるプロトデュランダルⅡをしのぎながら、ゼノヴィアは歯

噛みするほかなかった。
エクス・デュランダルはプロトデュランダルⅡより性能が上のはずだ。エクスカリバーが上乗せされているのだから間違いない。
だがそれでも、オウル・ランドゥールはこちらに対して優勢に戦っていた。
そしてそこから少し離れたところでは―
「お覚悟を、猊下！」
「それはできぬな」
―大挙して押し寄せる信徒たちを、レプリカのデュランダルで薙ぎ払うストラーダの姿があった。
圧倒的な数と老齢故に体力が衰えていることもあり、抑え込まれている状態だ。
だがそれでも、ストラーダは圧倒的だった。
自分のエクスデュランダルはおろか、オウルが振るうプロトタイプデュランダルⅡより強大な威力を発揮しているかもしれない。レプリカでしかないデュランダルは、デュランダルの二割程度しか力がないにも関わらずだ。
そんな圧倒的な猛威を見ていると、猛威に追い込まれている自分が情けなくなる。
……オウル・ランドゥールはデュランダルの後継者において、候補であった。
自分が選ばれたのは若いが故の可能性もあったが、同時に彼が上層部から「デュランダルを与えた際の影響」を踏まえたものだと聞いている。
ある程度は自分も伝え聞いているが、彼はかなりのタカ派だそうだ。
宗教的侵略として現代では負の歴史とされている、コンキスタドールなどの宗教的活動。だが彼はそれ「「唯一たる神の意向を偽神を奉ずる者達に知らしめる、偉大なる英雄譚」と誇っていたそうだ。また多宗教勢力に対する宗教的外征を求めていることでも有名だった。
自分も割と敵には過激だが、それでも消去法で選ばれる程度の過激

派。そんなものが和平に肯定できるわけがなく、神聖糾弾同盟についたのは当然だろう。
聖書の神が死んでいることを知る前の自分ならともかく、今の自分は彼にデュランダルが渡ることを良しとはしない。
だが、彼がデュランダルを持っている方が、デュランダルの性能を発揮できるのではないかと思ってしまう。
使い手として劣っていることを痛感していることで、心が弱っている。それを理解しているからこその状況だが、しかし現実問題として窮地である。この事実は揺るがない。
ゆえに更に動きに乱れが生まれ始める中――
「……戦士ゼノヴィアよ、臆するな」
―ストラーダの声が、聞こえた。
「私は、貴殿がオウルに匹敵するだけの素質を持つと確信している。デュランダルに相応しき破壊の申し子だ」
敵を薙ぎ払いながら、ストラーダはそう告げる。
だがそのうえで、詰問するような視線を向けていた。
「……だが、貴殿の破壊は、その形であっているのかね？」
……その言葉に、何かがはまろうとしていた。

聖教震撼編　第三十四話　地獄の終焉

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

道間乙女の視点から巡る、カズヒ（道間日美子）の地獄を巡る旅路は、終幕を遂げようとしていた。

それは、彼女が見ることがなかった惨劇。

道間誠明が十字架を掲げれば、その瞬間に炎が巻き起こり爆発が起きる。

更に同調させた聖杯が、六郎達の精神を縛り逃げ出すことは不可能となった。

「……誠明？」

―なにこれ？　なんで？　なんで誠明が？

声も心も困惑している乙女は、何故こうなっているのかが本当に理解できていない。

本来、考えるまでもない。道間誠明が彼らを殺しにかかることは、当然のこと。実際の動機は大きく異なるとはいえ、殺しにかかることそのものを疑問に思う理由はないのだ。

何故なら、六郎達を恨むのは、誠明の立場なら当然のこと。考えるまでもない。

妹を小さな時から十年以上も犯し続け、堕胎の経験をいくつも重ねさせた。

更に乙女すら犯しつくし、子供まで孕ませて出産させた。

こんなことをされれば殺意も憎悪も沸いてくる。仮に裁判にかけられたとして、そもそも殺す理由があったのかなどとなじる者はいないだろう。同情を買えることは必定で、死刑を回避できる可能性〈日本において、三人以上の殺人はほぼ確実に死刑が求刑される〉すら見えてくる。

だが、乙女はそれを理解できない。

「なん……で？」
あまりの光景に、乙女はなじることもできない。
―小父さん達が死んじゃう。セックスできない……気持ちよくなれない……犯してくれなくなっちゃう……っ
壊れ果てたその精神は、だからこそ決定的にずれている。
道間誠明が根幹的にずれた動機で動いているのと同じぐらい、道間乙女は根幹的にずれた困惑に陥っていた。
「やめて……小父さん達に、酷いことをしないで……」
「……あぁ」
その、困惑しているが故の乙女の態度に、誠明は表情を変える。
それはまるで、一目惚れの初恋による告白が成立したかのような、幸せがありありと見える微笑みだった。
慈しむように、尊ぶように。誠明は乙女の姿を目に焼き詰めるように見つめ―
「本当に、悲しいだよ、乙女」
―その爆発に、乙女は何もできずに吹き飛ばされた。
「……誠にぃ……乙女ねぇ……っ」
奥歯を食いしばりながら、カズヒは小さくそう呟く。
まだだまだだと気合と根性で押し切ることはできるだろう。
だが、そうしない。できる限りそうせずに受け止めるべきだと、そう思ったからこその行動だ。
これは自分が今後生きていくに辺り、目を背けてはいけないことだろう。
それをただ気合と根性で強引に乗り越えていいわけがない。きちんと受け止め、背負っていく。たとえ乙女がそれを望んでないとしても、だからを意にも介さず投げ捨てることがいいとは思えない。そんな生き方はしたくない。
だからこそ、胸の痛みも苦しみも、吐き気が生まれそうな思いも、引き離さずに受け止める。
「ねぇ、カズヒ」
そしてベアトリーチェは、つらそうな表情を浮かべながらそう切り

出す。
「この結末は、きっと誰も予想ができなかった。そう思うよ？」
だから気にしすぎるな。そういう意図が込められているのだろう。
だがカズヒは首を横に振る。
「世の中には想定するにも限度があるというのは、分かる」
世の中には不条理や不可抗力などいくらでもある。
例えばリゼヴィムの決起がそうだろう。
旧王族というよほどのことがなければ排除できない悪魔にとっての宝であり、また積極的に世界に干渉する気概がない男。ゆえに邪悪であることを警戒されながらも、シャルバに比べれば有害性で劣る彼を、シャルバ達すら殺せなかった状況で殺せるわけがない。
それがよりにもよって、別の意味で驚天動地の異世界の発覚で動き出した。それも異世界侵略に龍神殺しという異常事態のレベルを前提として活動。とどめに積極性に目覚めた途端に絶大なアジテーションスキルで、被害が無視できない。
想定できるわけがない事で、想定できないやつが動き出し、想定できない被害を叩き出している。読めるわけがない。
「だけど、それで背負わなくていいとは言えないでしょう」
そのうえで、カズヒははっきりと断言する。
読めるわけがないからと言って、責任が全くないわけではないのだ。
まして乙女の件は、道間日美子が悪意をもって引き起こした事態だ。想定外の形で更に被害が出ているのなら尚更だ。
「……自分のことを愛してくれる人達を、裏切り、汚し、壊しつくした。その罪は、私が私である限り背負わなくちゃいけないのよ」
そして、誠明が一通りの殺戮を終えた時にドアが蹴り破られる。
そこからの光景は、カズヒ自身がよく知っている。
だからこそ、ここからも重要なことは変わらない。
―日美……子？　……田知？
途切れかけている意識は、記憶すらも曖昧だ。
視覚も聴覚も触覚も嗅覚も味覚も、薄くもやがかかっているように

曖昧だ。
それでも、乙女は感じ取れるものを感じていた。
嗅覚は、焦げ臭いにおいを感じ取っている。
味覚は、血の味を感じ取っている。
触角は、炎の熱さを感じ取っている。
そして視覚は怯える日美子の姿を、聴覚は田知の泣き声を感じ取っている。
だからこそ、乙女は動いていた。
―助けないと
本能的に、彼女は動こうとしていた。
―逃がさないと
動けない体を、無理にでも動かそうとしていた。
―危ないから
それでも、やはり体の自由は聞かなくて。
―……でも、でも……っ
それでもと、それでもと乙女は手を伸ばす。
―……田知……それに……
消えかけるその手を達に伸ばし、そして声は―
「……大丈夫……日美子……助……から―」
―日美子を、助けないと―
―その、原初の思いが彼女の最後の意識だった。

「……本当に、私は邪悪の権化だった」
そう、映像が消える中でカズヒは呟く。
天を仰ぎ、拳を握り、歯を食いしばる。
心の軋みを覚醒させることなく受け止め、その罪業を受け止める。
どれだけ汚れて壊れて変質しようと、道間乙女は道間乙女だった。
決定的に壊れてもなお、彼女は誰かを思える優しい女性だった。だ

からこそ、道間誠明も想いを寄せていたのだろう。
そんな彼女を、醜い感情のまま、道間日美子は踏みにじった。
……それだけは、道間日美子である以上は背負い続けなければならない咎だろう。
「まったく。こればかりはハインリヒ・クラマーに感謝するべきかしらね」
そう、自虐の表情と共に漏らしてしまう。
自らの心を切り刻み引きちぎる所業でありながら、だからこそそれはカズヒにとって価値がある。
何故なら、彼女が巡り合った運命は、道間田知だった九成和地なのだから。
自分を愛してくれた女性を踏みにじり、その女の子供と添い遂げる。はたから見れば正気が疑われるような光景でもあるだろう。
その業から、目を逸らしてはいけない。だが同時に、カズヒの視点だけでは見えないものもあったのだ。
「……ええ、業は死ぬまで背負って見せる。その大前提もなしに、和地を愛する決意なんて……」
持てるものか。
その決意を遮ったのは、そっと自分を抱き寄せる淑女の抱擁だった。

ベアトリーチェ？　Ｓｉｄｅ

「それは違うよ、日美子」
そう、ダンテに告げる声は、いったいどちらの私から発せられたのか。
既に宝具は二つとも発動している。それがだいぶ進行している今、

私は私であって私でない。
でも、伝えられることはきっとある。
「貴女が罪を犯したことと、田知を愛することは別の問題だよ」
これだけは、言っておかないといけないだろう。
自分でも言葉にしきれないけれど、それでも伝えないといけないことがある。
「確かに負い目にはなるでしょうし、避けては通れないことでしょう」
それはきっと、誰が告げても消せないものだ。消していいものでもないかもしれない。
そのうえで、いうべきことは……そうなのだ。
「でも、そんな貴女の笑顔を胸に、田知は真っ直ぐ進み続けた。その誓いに足る生き方をし続けて貴女は、田知と愛し合う権利があります……いえ、認めます」
そう。道間田知は、九成和地になっても立派に前を進んでいた。
道間乙女のように、振り回されるがままにならなかった。そして彼の父親のように、外道を進んだりもしなかった。
できる範囲ですべきことをした。したいことをできるように頑張った。すべきこととしたいことを合致させ、できる範囲で成し遂げ続けてきた。
誰が見ても立派な青年だろう。この生まれの呪わしさから、ここまで立派な少年ができたことは奇跡だ。
そして、その奇跡は—
「—貴女の罪は消えなくても、貴女の功績も消えないんです。それは、それだけは……胸を張ってもいいはずです」
彼女を抱きしめる腕に、少し力が籠る。
きっとそれは、どうかこの思いが伝わってほしいと彼女(私)が思っているからだ。
そんな私の手に、そっとカズヒの手が添えられた。
「……ありがとう、ベアトリーチェ」
顔を上げると、振り返っている彼女は小さく微笑んでいた。
「大丈夫。私は瞼の裏の笑顔に誓って、そこは決して違えない」

そう微笑むカズヒは、小さくしっかりと頷いていた。
「業は背負うし、誓いは果たす。そのうえで、私は和地と添い遂げたいわ。……それを容認してもらうためにも、尚更頑張ると決めているもの」
……ああ、彼女は、本当に九成和地(田知)によって救われたのだ。
淑女としても彼女としても、それが本当に嬉しくて誇らしい。
……だが、私は同時にダンテの宝具でもある事実に縛られる。
極めて特殊なイレギュラーが重なった結果、私はダンテの宝具として機能し、それを阻害することができない。少なくとも現状はどうしようもない。
だからこそ―
「……では、今度は煉獄です。いずれ天国へと至る、その前段階に向かいましょう」
―その決定的な一撃を、彼女が乗り越えることを祈るしかないのだ。

聖教震撼編　第三十五話　神聖なる糾弾

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

聖都守護連隊の戦闘は、更なる混乱状態に陥っていた。
具体的に言うまでもなく、禍の団の介入による乱戦化が原因だ。
加え、Ｄ×Ｄ側はもっともその悪影響を受けていると言ってもいい。
これは単純に状況が悪い。
Ｄ×Ｄ側は囲まれた状態で仕掛けられている。これが明確な拠点防衛線ならこちらが有利だが、そもそも神聖糾弾同盟が占拠した地帯にある小さな部分だ。戦力差は三倍を超えており、防衛拠点としての性能も低くアウェイなのだ。
対して神聖糾弾同盟側は、包囲している状況。また拠点内部の一部を囲んでいる為、攻撃側だが拠点そのものなので防衛線にも近い。
そして禍の団側だが、こちらはある意味で厄介だ。
アルケードが引き連れているサリュートⅢはすべからくが、偵察・隠密仕様のスパイユニット。単純性能では劣るが、攪乱などには長けている。
結果として禍の団側は、直接戦闘を避けつつ奇襲の連発を行うことで、戦力の疲弊を避けることに繋がっている。
そして更に、双方の認識もかみ合ってしまっている。
三つ巴の戦いにおいて一番避けるべきことは、敵対する二つの勢力に挟み撃ちにされないことだ。裏を返せば、双方が優先目標を共有すれば、その時点で共有された目標は窮地に陥る。
既に包囲され苦戦になっているＤ×Ｄは、禍の団も「まず潰す」対象として認識してしまっていた。
結果として、負担が大幅に増大化したＤ×Ｄ側は窮地に陥っていると言ってもいい。

それでも持ち堪えている最大の理由は―
「……ちぃっ！」
「面倒だな」
―その上で、双方の最強戦力が互いにけん制しあう状態になっているからに他ならない。
この膠着状態は本来なら避けるべきだろう。まずはＤ×Ｄを潰してからの方が、メリット獲得の面でもリスク回避の面でも優先すべきことだろう。
だが、アルケードとゴドフロワの性質が、双方のその選択肢を取らせないでいた。
「アサシンのサーヴァントめ。常に意識しなければ、必ず同胞の致命に繋がる……っ」
「気配察知すら可能とは。これでは警戒を緩められん……っ」
……そう。ゴドフロワが気配察知スキルを持っていたことが、事態をややこしくしてしまっている。
厳密には宝具である降臨（アドヴォカトゥス・サンクティ・セプルクリ）の聖墓守護者の恩恵である。
この宝具は王冠を捧げることで周辺地域を聖墓とする宝具。その守護者であるゴドフロワは、大幅に性能が向上し、様々なスキルを獲得する。
そしてバチカンというある意味で最も補正を得る土地で使用したことにより、ゴドフロワは気配察知スキルを獲得していた。
それにより、気配遮断を行おうとしたアルケードを察知。ゴドフロワがピンポイントで警戒を高めた為、アルケードの常に意識をするほかなくなった。
結果として、双方共に最重要ターゲットをＤ×Ｄに設置しながらも、最強戦力であるゴドフロワとアルケードが睨み合う状態となっていた。
そのちぐはぐなかみ合わせが、Ｄ×Ｄ側にとって綱渡りに近い防衛戦を成立させていた。
『畜生……っ』
その事実に、匙元士郎は歯を食いしばる。

今自分達が生き残っているのが、敵同士の都合によるものでしかないからだ。
鍛え続けてきた。いろんな方法を試してみた。そのうえで、自分の道を見つめ直したからこそ手に入った力がある。
それをもってして、なおこの程度しかできない事実に腹が立つ。
分かってはいるのだ。分ってはいるのだ。
自分は兵藤一誠にはなれない。前人未踏の進化すぎて、焦がれてしまうのは分かるが真似できるものではない。
自分は木場祐斗にはなれない。あの優れた才覚に基づく戦いは、センスが必要ゆえに自分のできる範囲を超えている。
自分は九成和地にはなれない。残神はあまりに異常な高等技能すぎて。
自分は匙元士郎にしかなれない。その事実を見つめ直したうえで、なりたい自分になることで掴めたものがある。
だがそれをもってしても、自分はあの三人ならまだ何とかできただろうことができていない。
そんな自分が悔しいからこそ、匙元士郎は呼吸を整えながら考える。
自分にできることを見つめ直せ。そのうえでなければどうにかできる手段も探せないし、勝てるものも勝てない。窮地を乗り越えるにはそれが必要だ。
自分はソーナの夢を叶え、教師になる。
だからこそ、こんなところで終われない。
ゆえに彼は考えて考える。
目の前の熾烈な戦闘を何とかしのぎながら、勝利の一手を探り続けた。

和地　Ｓｉｄｅ

「私は宝具を二つ持っている」
ウルバヌス二世がそう語る中、俺達は攻撃を仕掛けていた。
奴の宝具がこの異常事態を引き起こしていることは間違いない。
必然として、ウルバヌスをどうにかすることが最も優先するべきことだ。
だが同時に、相手だってそれをしてくれるわけがない。
天草四郎と共に、多数の戦士達が動けるメンバーを妨害する。
……全員もれなく動きがいい。身体能力もかなり高い。
よくもまぁ、クーデターを起こした連中から、腹心レベルとなるメンタルと実力を併せ持った連中を用意したものだ。
いや、ちょっと体格的におかしな奴がいないか？
俺がその辺りを疑問に思った時、ウルバヌス二世は一本指を立てた。
「まず一つ。十字軍遠征に由来する、乳と蜜がための十字遠征（クレルモン・バッテジモ）」
そう告げるウルバヌス二世は、微笑みながら自分を守る戦士達を見る。
その視線を光栄に思うように、戦士達は士気を挙げていく。
「能力としては、強い信仰心を持つ者を宝具とするエンチャント系だ。おかげで質に関わらず、思想を同じくする者を親衛隊として徴用することができる」
なるほどな。
要は教皇特権とその宝具の合わせ技で、傍に置くメンバーは当人の戦闘能力はそこまで重要でなくせるわけか。
ってことはだ。半ば確信していたが、「聖書の神の罰を直接受けることで、納得と共に地獄に落ちる」はでまかせか。もしくは、誘蛾灯。
本来の目的は別にある。少なくともそこは間違いない。
出なければ、聖書の神の死を半ば確信した状態で、そんなことを言い出すわけがない。
いったい何を考えている？

その懸念を持ちながらも突破できない中、ウルバヌス二世は指をもう一本立てる。
「そしてもう一つが、先と身を守護する信徒選別（グレゴリオ・プロチェッソ）。ただし、亜種聖杯を用いてかなり改造している」
「その時点で嫌な予感満載だけど!?」
鶴羽が思わず絶叫するけど、俺もすっごい同感。
宝具をわざわざ改造するとか、その時点で嫌な予感しかしない。どう考えても今回の事件に合わせた調整だ。あと目の前の鎖関連と密接に関係している。
俺達が猛烈に嫌な予感を覚えている中、俺達を追い越してウルバヌスに攻撃を仕掛ける者がいた。
「……それが、ルーシア達と一体何の関係がある!!」
吠えるリュシオンは、明らかにいつもと違う。
ゆえにウルバヌスはその攻撃を部下に任せない。
あえて一歩前に出て、自ら迎撃。そしてリュシオンの不調が理由となる、完全な対応を確立した。
何より恐ろしいのは、その微笑だ。
安堵の笑みでも嘲笑でもない。どちらかというと、リュシオンのその現状に喜んでいる。それも、リュシオンを祝うかのような慈愛に満ちた微笑だ。
「調子を取り戻さないようにしているのは、今後にとって僥倖だ」
そう告げながら、ウルバヌスは攻撃を捌き続ける。
援護したいが周囲の親衛隊が厄介だ。これでは助けに行けやしない。
「落ち着くのだリュシオン！　それでは敵の思うつぼだぞ!!」
ストラス騎士団長が援護を試みるが、鎖の影響もあって思うようにいけてない。
そもそも鎖の影響を受けてない、俺達ですらできてないんだ。これは騎士団長を攻められない。
だが、このままではリュシオンもまずい。
ただ、ウルバヌス二世は微笑みと共に首を横に振る。

「逆だよ、戦士デュラン。彼にとってこれこそが、真に神の子に続く為の第一歩だ」
「どういう……意味だっ!?」
ウルバヌス二世のその言葉に、リュシオンが吠える。
明らかにいつもと様子が違う。誰が見ても分かるぐらい、動揺している。馬鹿でも分かるぐらい、ちょうしがおかしくなっている。
その猛攻も普段に比べると、驚くぐらい粗が目立つ。あれなら中級悪魔クラスでも、相応のテクニックがあればしのげるだろう。ウルバヌス二世が一人でしのいでいるのがその証拠だ。
そして同時に、ウルバヌス二世はその反応を喜んでいる。
まるで優秀だが欠点がそれを台無しにしている類の人間が、欠点を克服しようとしている。そんな様子を見ているかのような、強い安堵を覚えている。印象を例えるならそんな感じだ。
それに懸念しか覚えられない中、ウルバヌス二世は微笑みを浮かべてリュシオンを見つめる。
「……できるがしようと思えない。その思いに足を引っ張られているといったところだろう？」
「――ッ!?」
動揺するリュシオンに、ウルバヌスは蹴りを叩きつけて距離を開ける。
あんな蹴りがもろに入る。それだけでもリュシオンが追い詰められている証拠だ。
だが同時に、天草四郎達との戦闘で、俺達もカバーしきれない。
そしてウルバヌス二世は、微笑みながらリュシオンと向き合っている。
……まさか、奴は……？
俺がある予感を覚えている中、ウルバヌス二世はリュシオンに対して警戒を見せながらも、同時に視線をもって周囲を見渡している。
「今の宝具の性質だけを言おう。……簡単に言えば、信徒の精神性を鎖の形で認識する魔眼であり、真名を解放することでそれを具現化する宝具と化している」

それが、この現状の正体なのか。
なら信徒でない俺達に影響がないのも納得だ。おそらく対信徒に特化した宝具なんだろう。
「信仰心を悪意の大義名分としていればしているほど、自覚に有無に関わらず鎖は炎を纏い当人を焼く」
燃え尽きかけている、燃えた者達を見てウルバヌスは冷めた目を向ける。
「逆に信仰心を持ちながらも、自覚的に戒めていれば戒めるほど、自覚の有無に関わらず鎖は重くなる」
倒れ伏す者達を見て、ウルバヌスは苦笑交じりの表情を浮かべる。
「そして信仰心という理想が、己自身という実態からどれだけかけ離れているかで、鎖は曇り錆びるようにできている」
そう告げ、ウルバヌス二世はストラス騎士団長を見ている。
「そういう意味では貴殿は立派な信徒だよ。己をちゃんと戒めることができ、そして信仰に己を無理なく合わせることができる。戦士でなければ大司教ぐらいは狙える器だろう」
そう語ったうえで、今度はリュシオンの方を見ると苦笑いを浮かべていた。
「そしてリュシオン・オクトーバー。例えは少々違うが、貴殿はまさしく神の子に続く者といえるだろう」
その鎖は重さなどないぐらい軽く動いており、動きを阻害してもいないし、まして宝石のように光り輝いている。
それが彼にとっての信仰が具現化しているというのなら。ウルバヌス二世の宝具の能力そのものがそうであるのなら。その具現化した鎖こそ、彼にとっての信仰そのものだ。
それを理解して、殆どの者達が強い畏怖を覚えているだろう。
信徒にとっての信仰を具現化する。それも本来は重くなるし自分そのものがそれに合致しているかとは限らない。
だがリュシオンに限って言えば、それは祝福のように煌めいているレベルだ。
「君はまごうことなく余人を超える傑物だ。これがその証拠だと自覚

したまえ」
「……っ」
ウルバヌス二世のその言葉に、リュシオンは否定をしきれない。
今まで、リュシオン・オクトーバーは自分の傑物ぶりを一切理解していなかった。
自分はただコツを掴むのが上手いだけで、コツさえ掴めれば誰でもできることしかしていない。そういった当たり前のことをちゃんとし続け、少しずつ確実に前に進んでいく。そんな簡単なことをし続ければいいんだと、心の底から思っている。
なまじコツの問題だと思っているうえ、所属がデュナミス聖騎士団という傑物主体の組織だったことも痛いんだろう。この男は傑物極まりないが、優秀な者が追い付こうとすることで、その感性はどんどんマヒしていった。
だが、そのデュナミス聖騎士団ですらリュシオンの足元にも及んでいない。それも、能力ではなく精神の話である。
それを、この上なくウルバヌス二世は証明している。
「謙虚であることは美徳だが、自分の優秀さに目を向けないことは時として悪徳だ。きっと君は、自分にとって当たり前すぎることを大前提にして何人もの心をへし折ってきたのだろう」
そう、ウルバヌス二世は糾弾するように告げる。
真正面から、目を見たうえで、かつて教皇の地位に就いた男は主の後に続くと称される男に宣言する。
「これが現実だ。君は神の子（ディア・ドロローサ）に続く者という異名に相応しい傑物。多くの凡人はおろか、並大抵の才人すら引き離す、神童のまま成長した男なのだよ」
誰一人として否定させることができない、リュシオン・オクトーバーの傑物性を鮮明に示す現実が、今ここにさし示された。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「ふ……ざ、けるな!!」
リュシオン・オクトーバーは、生まれて初めての絶叫を挙げる。
この鎖を示されてから、自分の調子がおかしいことは自覚できている。
普段ならすぐに乗り越えられることが、全くできていない。
進められる足が進まない。決められる決断が決められない。すぐに成し遂げられるはずのことが、まるで雁字搦めにされているかのように行えない。
鎖の影響は殆どない。あまりに軽くて全身につけられていることを忘れそうになるほどなのに、まるで体は全身がタールまみれになっているかのように動きづらい。
心臓がありえないほどにバクバクと鳴り響いている。息も乱れているのがすぐに分かる。
ありえない。あり得るわけがない。
自分と同じように前を向き、コツを掴みにくいだけでちゃんと成長している信徒達。デュナミス聖騎士団の者達が、自分の後塵を拝すことすら困難なんて信じられない。
それに何より―
「……ならなんで、ルーシアがあんなことになっている!!」
―怒りの表情すら浮かべられるぐらい、ルーシアが地面に倒れ伏していることが信じられない。
昔から自慢の妹だった。
後ろをついてくることもあれば、別の方向を進むこともある。
コツをつかむことそのものは下手だろう。だが真面目で、勤勉で、良識を持ち、まっとうな判断をちゃんととれる子だ。
「ルーシアが！　あの子が……こんな鎖を作るわけが―」
ありえないと確信できる。

いつも自慢の妹だった。
星辰奏者（エスペラント）の素質はないし、神器（セイクリッド・ギア）も持ちえない。だがそれに腐ることなく前を向いて、できることをちゃんとやってきた。戦士育成機関でも主席にこそ届かなかったが、候補にはなれたほど優秀な成績と称賛される態度をとっていると聞いている。
にも関わらず、彼女の鎖があんなに鈍く錆びついて重いわけがない。
だからこそ、まやかしだと思っており―
「ああ。ルーシア（彼女）はとても健気な少女だ。君のあまりに高すぎる精神性に、一生懸命追いつけるように無理をし続けて、何年もそれを続けられるのだから」
「……え？」
―それがそもそも勘違いだと、ウルバヌス二世は言い切った。
「私の宝具は言った通りのものだよ。必要性があったのでそうしたからね。……その一つは、君を正し導く為でもある」
そう告げるウルバヌス二世は、真っ直ぐにリュシオンに向き合っていた。
魂すら見透かすようなその視線に、リュシオンは生まれて初めてたじろぎ気圧されている。
否―
「薄々気づいていることを自覚したまえ。そうでなければ、この程度の苦境など受け止めて前に進められているはずだろう」
―認めたくないだけだ。
宝具の効果に嘘はないことを。仲間達が自分にまったく追いつけないような精神性だということを。ルーシアですら、自分と同じ域からかけ離れていることを。
だからこそ、当たり前のことができなくなっている。無自覚にブレーキをかけてしまい、本領が発揮できなくなっている。
何故なら―
「……ありえない」
―その声が、痛感させている。

「ありえないありえないありえないありえない!!　追いかけられてるついて行けてる同じ道を進んでる!!　でたらめを言うなでまかせを言うな適当なことを言うなぁあああああっ!!」
今までに聞いたことのない絶叫をあげ、ルーシア・オクトーバーはもがく。
動けなければおかしい。立ち上がれなければおかしい。戦えなければおかしい。
体が壊れることも恐れずに。そもそも壊れるなんてことがありえないといわんばかりに。ルーシア・オクトーバーは自分が今ここで戦えるという、それを大前提に動こうとしていた。
そう、何故なら―
「私の兄はリュシオン・オクトーバー!　私はリュシオンの妹!!　追いかけれないはずがないのよぉおおおおおおっ!!!」
―その一念こそが、ルーシア・オクトーバーをここまで歩ませてしまった理由。たった一つの真実なのだから。
「……あ……」
そして、その絶叫にリュシオンは動けなくなる。
鎖が重くなったからではない。いまだ鎖は軽く輝かしいままで、リュシオンはだからこそ動けない。
それは自分の心が、ここまでの事態なっても信仰心を当たり前のように実行できるから。
正しいことを正しい時に正しく成しえることができる。そんな、コツさえ素直に受け止めれば、誰でもできると思っていたこと。それをずっと見てきた、自慢だと思っていた実の妹。
彼女が、たったそれだけのことにここまで背負い苦しまなければならない。その事実が、否応なくリュシオン・オクトーバーの大前提を粉砕する。
「リュシオン・オクトーバー。君はまごうことなく素晴らしい人物だ。我らが主は、人間を君のように作りたかったのだとすら思えている」
そう告げるウルバヌスは、その上で残酷な現実を叩き付ける。
「だからこそ、貴殿はその妄信(悪癖)を直したまえ」

悪意はなく、敵意もなく、嘲りすらもない真摯な声で。
ウルバヌス二世はかつて教皇であった者として、その地位すら狙えるだろう後進を諭していた。
「実の妹すらろくに見れてない今のままでは、救える者すら救えないのだからね」
残酷極まりないまでに、その言葉はまごうことなく正論だった。

聖教震撼編　第三十六話　煉獄（プルガトリオ）

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「……さて、この調子ならいいタイミングで宝具もクライマックスになりそうだ」
対神用結界を維持しながら、ハインリヒ・クラマーは不敵な笑みを浮かべている。
それを宝具に巻き込まれている三人を庇いながら、孫悟空は嫌な予感を覚えていた。
「どうやら、時間稼ぎってわけじゃないみたいだねぃ？」
「ああ。神曲・神聖喜劇（ラ・デイヴィナ・コムメディア）は、足止め用の宝具じゃないからね」
そう語るハインリヒは、一冊の本を取り出した。
それは己の宝具ではなく、イタリア語版のダンテの神曲だ。
そのページをぺらぺらとめくりながら、ハインリヒは微笑みを浮かべている。
「神曲というものはそもそもそういうものだ。地獄から煉獄を経て天国を渡ることで、旅人が昇天する物語だ」
その言葉に、孫悟空は歯噛みする。
「え……？　どういう……ことですの？」
ヒマリは立てないながらも首を傾げるが、逆にヒツギは顔を真っ青にしていた。
「……まさか、カズヒを殺す為の……っ」
「その通り。神曲・神聖喜劇とは、対象を地獄と煉獄を巡らせてから天国に誘うことで、心を天国に行ける状態にして強制的に昇天させる宝具なのさ」
ハインリヒは断言した。
そう。神曲・神聖喜劇はデストラップが仕込まれている。
半端に宝具の情報を対象に与えることで、対象を文字通り天国に誘

う宝具。当てるまでが大変だが、当てれば旅路に辿り着けず心が折れるか、旅路を終わらせて昇天するかの二択を強制させる。
「どう転んでもこっちに損はない。……さて、そろそろ決着がつくだろう……ね？」

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

ベアトリーチェが煉獄と称する、次の段階。
正直何か強い試練になると覚悟していたカズヒは、目の前の光景に目を見開いた。
「……お～。なんか、可愛いね」
そう目の前で語るのは、道間日美子だ。
彼女が少しおっかなびっくりつついているのは、小さな赤子の頬だった。
それに気づかず穏やかな表情で眠っている赤ん坊。そんな子供を抱きかかえながら、道間乙女は日美子と赤ちゃんに微笑んでいた。
「ありがとう。自慢の私の赤ちゃんだもの」
そう返す乙女の心の声もまた、続けて聞こえてくる。
―日美子、なんかすっきりしてるかな？
その声が聞こえる時期を、カズヒは全力で思い返す。
そう、この光景もまた彼女の記憶にある時期だ。
時期としては、乙女が出産を終えて体力も回復した時期だ。
一週間ぶりに帰宅した乙女は、残念なことに誠明は小旅行中でタイミングが合わなかった。

なので流石にサポート必須と、日美子が面倒を見に来ていたのだ。
日美子としてもこのころには、誠明の子を妊娠するぐらいの時期だ。当然だがそのあたりを考慮して動いており、ちょうどよく前例を客観的に知れるチャンスでもあった。
そしてひと段落突いた後、一休みしている時の光景だ。
「これが、煉獄？」
どちらかといえば地獄ではないか。
そんな風にカズヒは考える。少なくとも、カズヒからすれば地獄の追加といえるだろう。
地獄と同じだ。壊れた乙女の心を聞きながら、自分の罪を突き付けられる。その繰り返しでしかないだろう。
そう思いながらも、カズヒは真っ直ぐにその光景を目に焼き付けようとする。
「……違うよ」
その手を、ベアトリーチェはそっととる。
カズヒが振り返ると、ベアトリーチェはたしなめるような表情で首を横に振った。
「心構えも間違ってる。……ちゃんと、見てあげて」
その真摯な顔と声に、カズヒは一瞬だが首を傾げる。
言いたいことがよくわかってない節がある。だからこそ、とりあえずフラットな感情で光景を確認し直そうとする。
「……赤ちゃんって、泣いてるとうるさいけど寝てると可愛いよね。私や乙女ねぇもそうだったのかな？」
「どうなのかな？　でも、田知は可愛いよね」
笑顔で語り合う二人の光景は、あまりに歪だろう。
八つ当たりじみた恨みを持ち、心のすべてを破壊しようとした道間日美子。日美子の悪意を叩きつけられ、心を壊し悪辣な男の子を産んだ乙女。
だが、二人は赤子を間に挟むようにして笑顔を交わせていた。
―よかった。日美子も元気になったみたい
その乙女の心の声は、本心からの安堵によるものだ。

汚しつくされ壊しつくされ、道間乙女は破綻してしまっている。日美子が侵されることを阻止する為に体を差し出しながら、子供まで孕まされて出産したことを苦痛に思っていない。まして自分の代わりに子供まで産まされた乙女に対し、罪悪感を見せていない日美子に違和感も覚えていない。

だが同時に、赤子を抱きかかえる乙女は、赤子に興味津々の日美子を見て安堵していた。

―日美子も笑顔になれてる。……すごいなぁ、田知は

そう。この赤子こそ道間田知だ。

九成和地となり、道間日美子だったカズヒ・シチャースチエと想い合う、比翼連理たる男。

乙女がそれを知ることはない。この時点で日美子が邪悪を穿つ銀の弾丸となることも、田知が涙の意味を変える救済者になることも、わかるわけがない。分かる前に死に、そしてヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバーの二つに分かち変わってしまったのだから。

だが、乙女がそれを知らないことと、二人を祝福できることは全く別の問題だ。

―田知はどんな子になるんだろう。いろんなことを知ってくれると嬉しいし……

そう未来を思いながら、乙女は日美子と田知を交互に見る。

「……こんなに気持ちよさそうに寝られると、なんか見てるだけでお昼寝したくなってきたかも」

「……ぁ……ぅ……～」

興味津々で微笑みながらも眠気と戦い始める日美子。そして日美子の眠気を誘いながら、気持ちよさそうに寝息を立てる田知。

そんな二人の未来を知らなくても、乙女は心から願うことがある。

―日美子とも仲良くなってほしいな。なんとなくだけど、仲良くなれそうな気がするもの

「……あ」

その心から幸せを願う言葉に、カズヒは拳を握り締める。

気合と根性で覚醒は遂げない。だが同時に、そのギリギリで自分を

諌める。
そうでないと何かがこぼれる。そして、乙女が分からないところでこぼしてはいけない気がするから。
ただ、肩は少し震えてしまう。
覚醒は遂げない。だから、耐えようとする感情が肩を震わしてしまう。こぼせない何かの代わりに、肩の震えが彼女の感情を表していた。
そんな震えをただ一人見る、ベアトリーチェはカズヒを後ろから抱きしめる。
「……いいんだよ、カズヒ」
そっと抱きしめる。
「貴女は本当に悪意のままに、道間乙女を壊したけど」
優しく抱きしめる
「それでも、乙女は貴女の幸せを願ってた。田知と一緒に頑張ってる、貴女を否定するわけがない」
ぎゅっと抱きしめ、凍てつかせようとするカズヒを体温で温め、和らげる。
「……乙女は日美子(あなた)が大好きだった。貴女が幸せになってくれることを、心の底から願えるの」
微笑みながら、何も言えないカズヒを抱きしめ、そして乙女がもう言えないことを告げる。
「だから、それだけは否定しないで。自分を許せなくても認められなくても、乙女があなたを許してくれることだけは、忘れちゃ駄目だよ」

「……う、……ん……っ」

震える声が、彼女が煉獄をくぐれた事実を証明した。

聖教震撼編　第三十七話　煉獄の中で

Other Side

黒い刃が、幻影すら切り裂き始める。
グレゴールのヘキサカリバーを、幾瀬鳶雄の刃が上回り始めた。
「……これが、神の子を見張る者（グリゴリ）が誇る使い手、その本領かぁっ!?」
グレゴールはそれでも刃を振るうが、もはや趨勢は決していた。
幾瀬鳶雄が作り出す闇の空間と軍勢は、大量に展開されるグレゴールの幻影を圧倒する。
……敗因を求めるのなら、単純に性能差だろう。
ヘキサカリバーはその都合上、本来の合一化されたエクスカリバーに数段劣る。そしてグレゴールの力量では、ヘキサカリバーで至った神滅具（ロンギヌス）を打倒するには力が足りない。
仮定だが、エヴァルド・クリスタリディが合一化されたエクスカリバーを使えば、幾瀬鳶雄は負けていた可能性がある。例えヘキサカリバーのままであっても、相応の勝算を持つだろう。
だが、裏を返せばそれだけの傑物でなければ、ヘキサカリバーで至った神滅具を打倒することは困難ということだ。逆にグレゴールは、エクスカリバー使いとしては補欠止まり。ゼノヴィアやイリナといった先に使い手となった者ですら困難なことをできる力量ではない。
それでも、仮面ライダーディバインの性能もあって何とかしのげていたが―
「悪いが、それの切り方は掴めてきた」
―最悪なことに、幾瀬鳶雄はそれをしのげるだけの力量の持ち主だった。
……禁手（バランス・ブレイカー）というものは、本来偉業である。

英雄派による非人道的な実験があってこそ確立されたが、それまでは到達できることそのものが偉業とされていた。そして到達できても当人の力量次第では自滅に繋がることも多い。それだけ、禁手というものは過ぎた力である。

だがしかし、彼はそれを生まれ持ったその時に至らせていた。

本来なら不可能だが、彼は五大宗家である姫島から抜けた血筋であり、それもあって五体満足で成長。その五大宗家に由来する事件に巻き込まれ、異能の世界に入ってきた人物である。

……結論として、ルシファーの血と神滅具を併せ持つヴァーリに次ぐ特殊な存在。ある意味で英雄の末裔である曹操やゲオルグ以上の人物だ。

その数奇な運命もまた並び立てるほどであり、才覚と経験の上質さは、先天的な聖剣使いすら超えるほど。

ゆえに―

「……まだだ！　せめて……深手を負わせる!!」

『ダイイングインフェルノ！』

素早くディバインの基本武装であり、Eグリップを展開した状態で突貫を開始。

後先を考えない大量の幻影をわざと己と共に密集させ、最適解をとらせるのを困難にさせる。

だが、鳶雄はその上を行った。

「悪いけど、既に切り方は分かっている」

その瞬間、幻影全てを刃で切り裂き、鳶雄は決着をつけた。

「……流石は至った神滅具。祖の原理血戒（イデアブラッド）の域だろう」

「しかも五大宗家に連なると聞く。……ヴァーリ・ルシファーもそうだが、神の子（グリゴ）を見張（リ）る者は何という傑物を迎え入れたんだ」

援護に入った死徒達が戦慄する中、しかし彼らが敬う者は面白そうな表情を浮かべていた。

「よいものが見れた。来たかいがあったという物じゃ！」

「そっちは終わったのかい？」

鳶雄が答えると、少女は軽く頷いた。

「階梯が二つも下の者相手に負ける祖はおらんよ。原理血戒の有無は、それだけの差があるのでな」
「よく分からないけど、君が凄い人なのは分かったよ」
　鳶雄は素直にそう語るが、その肩に一人の死徒が手を置いた。
「気を付けた方がいい。……そのお方は関ケ原を観戦しに行ったことがあるいろんな意味でアレなお方だ」
　五秒ほど、鳶雄は沈黙した。
「もしかして、大御所ですか？」
「……初代バアルと茶会を経験したことがあるといえば分かるだろうか」
　とてつもない大御所だった。
　流石に少し沈黙する鳶雄の前で、その少女じみた死徒はバチカンの方に視線を向けていた。
　含み笑いを浮かべながら、その少女は―
「さて、できれば悪祓銀弾（シルバーレット）とは直接会いたかったがな。呼びつけて詫びるのも礼を失するが……酒宴でも開くか？」
　―割と呑気なことを言っていた。

アザゼルＳｉｄｅ

　現状の作戦状況は、膠着状態に近いところがあるな。
　いろんな勢力が入り乱れていることもあって、流石にこの辺りが限界か。
　だが、神聖糾弾同盟は少しずつだが弱ってきている。
　このままなら、俺達や他の勢力の被害に関わらず神聖糾弾同盟はど

うにかされるだろう。そして神聖糾弾同盟は、見るも無残な犠牲者を出して壊滅する。
これはもはや仕方がない。奴らの目的は叶わないし、それを説明するわけにもいかない。だから被害が相応に出ることは覚悟している。
聖書の神が死んでいることは、和平を結んだ組織にとっての最重要禁足事項だ。リゼヴィムやハーデスですら武器にしていない、そんなレベルの地雷だ。万を超える人数の勢力に、堂々と告げれるわけがない。
そうでなければ納得しない。そういう方向に導かれてしまった。その時点で、強引に力で叩き潰すことが主流にならざるを得ないわけだ。
やってくれるぜ、ウルバヌス二世。知っててそうしたとは流石に思わないが、おかげで多くの被害を出すしかない羽目になりやがった。
……不幸中の幸いは、この一件さえしのげば教会方面で大規模な暴動は起きないだろうことだ。
なにせ、前人未踏レベルの大暴動だからな。当然だがそれに大量の人員が使われている。単純に、ここで叩き潰されれば大規模の暴動を起こすだけの不満因子が潰されるわけだ。
身内の喧嘩で済むなら、少しぐらい起きてもいいと思っていた。だが実際はウルバヌスによって、とにかく規模がデカく叩き潰すしかない形に持っていかれたことだ。
嗚呼全く。……なんでこういうことになってんのかねぇっ!!
そう思っていると、近くに通信用魔法陣が展開される。
「……誰だ？」
『私です、アザゼル元総督』
フロンズか。
まぁ、俺は今D×Dの外周式を担当しているからな。大王派側で責任者となっているフロンズが通信をするのは、一見すれば納得だ。
だがフロンズは適材適所をわきまえられる。間違いなく指揮としては、戦術家で勇名をはせるノアが取っているはずだ。遊撃部隊として活動するにしても、それは後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）がやるわけだ。となれ

ば幸香だ。
わざわざこいつが直接通信とか、何を考えている？
「使いっ走りか？」
可能性としてはありそうだな。
フロンズは意外とフットワークも軽いしな。他の連中は手が足りないから、自分がやるかとか普通にやりそうだ。
『いえ。これは私の裁量における独自判断です』
……なんだと？
この流れで、フロンズがわざわざ俺に接触？
政治的な手回しなら、もっと前かもっと後にするはずだ。それぐらいの判断力はあるし、意味もなく忙しい時に来て判断力を鈍らせるような真似はしないと知っている。
なんか嫌な予感がするんだが。
「とりあえず、本題から入れ」
『神聖糾弾同盟の戦略的対応に違和感を感じる者がおりまして。今は私がそちらの解析を行っていますが、やはり年季が違い組織運営にも手慣れた元総督殿の意見も取り入れたく』
と、魔法陣が映像でその辺の情報も送ってくる。
……確かに。こうしてみると違和感だらけだな。
ここまで士気・練度・装備を高い水準でまとめながら、戦術的な対応になると妙なちぐはぐが確認されている。更に士気の差が、装備や戦術と直結しており、戦術的価値と釣り合ってない。
なんだこの妙なところは。言われて見ると違和感しかねえ。
「……解析といったが、具体的にどう解析してるんだ？」
『現在私の権限で、九条・梔子・張良率いる遊撃部隊を拝借しています。各戦線からそれぞれ武装の違うグループを確保し、私が責任をとれる範囲で傾向分けを行っている最中です』
深入りしたいけどしない方がいいことある程度の非合法手段。もちろん意図的ににおわせているを言うな。
だが勘づいている奴はいくらかいるということか。
「確か、幸香とラカムがいない間にマフィアを統括した奴だな。お前

らにつくのに合わせて健全企業化に移ったとか」
『現状モラル面に問題はありますがね。彼女はとても優秀ですから、おそらく傾向分けができると―』
「アザゼル様！」
　と、なんか急に伝令が来た。
「どうした？　ちょっと手が離せないから手短に言え」
「はっ！　後継私掠船団から伝令が来ました！　心当たりがないならフロンズに繋いでくれと言付かっております！」
　……。
『失礼。戦闘のごたごたで順番が前後したようです。梔子が傾向分けを終えて直接こちらに来ました』
　そうフロンズが言ってくると、通信用魔法陣が増えて梔子が姿を見せる。
『アザゼル総督の知見は窺うに値すると判断しました。ただタイミングが微妙に合わず申し訳ありません』
　素直に謝ってくれるが、まぁそこはいい。
「とりあえず、資料を確認する。お前はその間に、今のところの推測を語ってくれ」
『かしこまりました。……ただ、この仮説は突拍子もなさすぎるので……できれば辛口の批評をお願いします』
　……どんな仮説を立てやがった？

カズヒＳｉｄｅ

　煉獄。それは一言でいうなら、「天国に行く為の場所」といえるだろ

う。
地獄に落ちるほどではないが、天国に行くには業を背負っている者が、禊を果たす場所ともいえる。
考えようによっては、天国に行く枷を外す場所だ。逆説的に、枷という業を外してしまえば、すぐに終わる場所ともいえる。
だからこそ、なのだろう。とんとん拍子に煉獄が進んでいくのだと、私は既に実感していた。
「乙女ねぇ～！　お誕生日、おっめでと～っ！」
「ありがと～！　日美子～っ！」
満面の笑顔で抱き合うのは、かつての私と乙女ねぇ。
……うん。煉獄は天国ではないけど地獄でもない。
ならこれは確かにそうなんだけど……。
「別の意味で地獄ね、これ」
「あ、あはは。大変だね」
思わずぼやくと、ベアトリーチェまで苦笑いしてくる。
まぁ実際、子供の頃の未熟かつ無邪気な姿を赤裸々に語られるのはきつい。恥ずかしくなる話の定番といえるし、ある意味納得だろう。
なまじ前世の話であり、七緒（鶴羽）とアイネス（リーネス）は同年代。勇ちんとディーレンは知り合った時期から、そこまで問題なことはない。なので食らったのは初めてだろう。
……いや、ズリネタを堂々と何回使ったのかまで告げるのは、女子的には一生もののトラウマでなかろうか。
やばい。私昔っからブラコンがこじれたままだ。普段イッセー達に説教をしている手前、もうちょっと客観的な視点を心掛けねば。自分のブラコンが度を越えていることはわきまえないと。
いや、そこでもない。そこもだけどそこは今重要じゃない。
今私は、乙女ねぇとの楽しかった思い出をつるべ打ちのように見せられている。
気恥ずかしい、とは思っている。ただ、最初に比べると心を削るような痛みは感じない。
つまり、これが私の煉獄。業を祓う禊ということだ。

乙女ねぇが私を愛してくれていた。その過程で生まれた、田知と一緒に幸せになることを、きっと認めてくれるのだと、向き合うこと。それが私の禊だ。

乙女ねぇに恨まれて当然だと、恨まれるべきだと確信していた。少なくとも、そうであるべきだと思っていた。

だが同時に、少なくともそうでない可能性があることをを、私は理解していてもあえて向き合おうとしなかった。

……なるほど。これはハインリヒに感謝するべきでしょうね。

ただ懸念事項はある。それはちょっと不安だが、その場合は気合と根性でどうにかするしかないだろう。

ただ、もう一つ気づいたことがある。

まだ仮説だ。だが、この仮説が正しければ—

「ベアトリーチェ」

「どうしたの？」

—その小さな反応に、私は仮説を強く感じる。

もしかすると、そういうことなのだろう。

……別の意味で、天国までの覚悟が必要になった気がする。

聖教震撼編　第三十八話　奇跡の前兆

イッセーＳｉｄｅ

此畜生がぁっ!!
リアス達が追い込まれているけど、俺と曹操はコロンブスに相手で手一杯だ。
「まだまだまだぁっ!!　ほら行くぜぇえええっ!!」
コロンブスは、今度は雷を俺達に向けてどんどん落としていく。
もう何なんだよ。手札が多すぎて何が何だかさっぱり理解できねえ。
だけどこいつをどうにかしないと、間違いなく押し切られる。
曹操はなんか勝ち目があるっぽいけど、まだタイミングを掴めてないみたいだ。あっちも少し渋い顔をしているな。
『……イッセー。少し亜種禁手を仕立て直します』
と、シャルロットがそう聞いてきた。
そこは任せた。馬鹿な俺よりシャルロットやドライグが考えた方がいいこともあるからな。
その分、俺はコロンブスの猛攻を何とかしのぐ！
『……よし。曹操、聞こえますか』
って何で曹操なの、シャルロット!?
『……どういうことだ？』
しかも曹操も返事してるし!?
『仕掛けるタイミングを計る為に、念話ができるようにしました。譲渡の応用ですね』
シャルロット凄い！　どんどん俺より赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）を使いこなしてる!!
で、なんてそんなことを？

『こちらでタイミングを作る為にも、種を把握したいのです。コロンブスは何をしているんですか？』
なるほど。確かに分かってるとやりようもあるな。
で、どんな感じ？
『おそらくだが、聖槍の亜種禁手、可能性としては覇輝（トゥルース・イデア）の限定的運用だろう』
覇輝の要領か。確か覇輝は聖書の神様の意志が聖槍に宿ってて、その判断で効果が変わるんだな。
でも曹操が俺に対して使った時は、静観をしてたはずだ。コロンブスというか、神聖糾弾同盟にそんなポコポコ力使うか？
『限定的とは、どのような？』
『出力を低くする代わりに、どんな形で発動できるかを自分の意志で選択できる。俺はそう踏んでいる』
え、そんなのあり？
『……そもそもコロンブスは、当時の聖書の教えを信じてなければ人扱いもしないような宗教観で、聖職者から奴隷の扱いが悪すぎると告発された男だ』
……マジで？
『加えてアメリカ大陸発見や到達においても、本質的には違う男。しかし近年に至るまで、そういったものを重視する者は少ない。……そこで俺はある仮説を立てていた』
なんかよく分からんけど、なんなんだ？
『コロンブスは死ぬ直前に禁手に至り、その恩恵で名誉が回復したのではないかという仮説だ。だとするとどんな神器かと考えていたが、聖槍なら覇輝の流用でやりようはあるし納得だね』
「……なるほど！」
思わず声が出たけど、確かにそれは納得だ。
となると、つまり―
―覇輝で対抗するのか？
『少し違うな。だが、使うことは事実だ』
なるほど。よく分からんけど、曹操は毎度毎度そんな感じだしな。

『それで、発動するタイミングは？』
『奴が大技を仕掛けるタイミングだ。可能な限り高い出力で発動してほしいところだね』
……なるほど。なら、決まりだな。
俺が、大技を使いたくなるようなことをすればいい。
「ドライグッ！　大技行くぜっ！」
『フッ！　いいだろう!!』
……さぁ、ここで一気に仕掛けるぜ!!

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……軽く悶絶しかけたわ」
少し頬を赤らめているカズヒに、ベアトリーチェは小さく苦笑いをしていた。
一人であの光景を見ているのならまだよかったのだろう。だが残念なことに、ここにいるのはベアトリーチェという、よく似た他人だった。
幼少期の出来事を、それを知らないはずの人達に知られる。これは普通に恥ずかしいものだ。さほど珍しい話でもない。
そして裏を返せば、カズヒ・シチャースチエがまともな感性をきちんと残していることを意味している。
それに対して安堵しながら、ベアトリーチェは内心で恐ろしさすら感じていた。
最後の天国こそ、ある意味で最大の脅威。それは今のカズヒ・シチャースチエだからこそ、脅威足りえる罠でもあった。

ベアトリーチェにそれを指摘することはできない。ダンテの宝具が発動した所為で、今のベアトリーチェは神曲に当てはめられた。結論として、彼女はカズヒ（ダンテ）を至高天（エンピレオ）に導く役目を強いられている。

だからこそ、ベアトリーチェは天国までカズヒを導くことを止められない。

「……そして、ここからが天国だよ」

そして、天国に到達した。

これこそが最大の決定打。ハインリヒ・クラマーが亜種聖杯戦争の経験をもとに、亜種聖杯の残滓を組み込んで魔術工房化した地下室の、一点特化の仕込み。神曲・神聖喜劇（ラ・ディヴィナ・コムメディア）の真価である。

神曲・神聖喜劇とはプリテンダー、ダンテ・アルギリエーリの宝具である。

神曲における主人公ダンテの役を羽織ったダンテ・アルギリエーリ。彼は数々の強みを持つ。

これは、彼と神曲の組み合わせが絶大であることに由来する。神曲そのものがある種の伝説的作品。現代における聖書の教えにおける天国のイメージは神曲の影響を多大に受け、また神曲はイタリア語の語源におけるとされ、ルネサンスの先駆けとなった作品だ。

その為彼はあらゆる不可能を「不可能なまま」達成可能にする星の開拓者スキルを保有。また神曲のダンテを自他に被せるエンチャントの亜種スキルを保有。とどめに神曲の影響から、それを魔術的に再現することができる。

そして宝具としての神曲・神聖喜劇はその発展形。神曲の物語を対象に当てはめ、対象をダンテとする宝具だ。

地獄を経験させ、煉獄を経て、天国へと至らせる。当人の精神的試練を与え、そこから己を見つめ直させ、天国へと到達する。その儀式をもって、対象は天国に到達するのだ。

……つまり、この宝具は対象を昇天させる宝具でもある。

宝具の影響を受けるとある程度の思考誘導がかけられ、更に仕組みを一番危険なところを覗いて説明される為、正攻法で天国まで向かってしまう。

なまじ旅路を自ら辿っている為、それそのものが魔術的儀式として宝具を補強。その為対魔力スキルなどでキャンセルすることも不可能。よほど現世に残ることを欲してなければそのまま昇天し、更に旅路の影響で昇天を受け入れやすくなってしまうという悪夢じみた特性まで持つ。

性質上、当てるまでが困難な宝具。だがそれを、ハインリヒは待ち構えてトラップにすることで克服した。

だからこそ、このまま天国へと連れて行くことしかできない。

そう、思ったその時だ。

「……ありがとう、ベアトリーチェ」

カズヒは天国に踏み入れながら、しかし止まらない。

微笑を浮かべ、一歩を踏み込み—

「そしてお願い、一緒に来て」

—その手を、力強く掴み取った。

聖教震撼編　第三十九話　奇跡の始まり

イッセーＳｉｄｅ

覚悟してもらうぜ、コロンブスっ!!
「いくぜぇぇぇぇぇっ!!」
全力チャージで、俺はクリムゾンブラスターを発射し、そして即座にクリムゾンインパクトの体制に入る。
そして……もう一発！
「おいおいまじかよ！」
面食らうコロンブスに対し、俺は両手にクリムゾンインパクトを準備して、そのまま飛び上がる。
真上から両手を組んで叩き付ける。今出せる中なら間違いなく、最強クラスの一撃だ。
一発の拳に収束させるから、破壊力が集中するのがいいな。うかつに吹っ飛ばすと周辺が吹き飛ぶから、クリムゾンブラスターはうかつに打てないし。会長とのレーティングゲームみたいな特殊ルールもこれで安全!!
「上等だ！　その力……全部もらうぜぇっ!!」
そしてコロンブスは、思いっきり槍を輝かせる。
今までで最大出力。そりゃまぁ、それぐらいはしてくれないとな。
そして―
「……槍よ」
―それが狙いなんだよなぁ。
「神を射貫く聖なる神槍よ――」
さぁ、頼んだぜ曹操。
「我が内に眠る覇王の理想を吸い上げ、祝福と滅びの狭間をえぐれ―」
「……そうよ、曹操―」

ほら、サイリンもしっかり応援してるんだし―
「―貴方こそ、英雄派(私達)の英雄なのだから！」
「汝よ、遺志を語りて、輝きと化せ―!!」
―決めろよ、お前凄いんだから!!

祐斗Ｓｉｄｅ

まずい、これ以上は……こちらに死人が出る。
戦況は刻一刻と傾いている。そして不利な方向にだ。
このままでは、何とかしのいできたけど死人が出るだろう。そしてそうなれば、確実に傾きは速度を上げていく。
「……グラムを使いますっ!!」
こうなれば、そうするしかないだろう。
状況を変えるには、これぐらい必要だ。それほどまでに、この状況は窮地だ。
このままでは僕達から死人が出る。その前に命を懸けるしかない！
「させるかっ！　魔刃(カオスエッジ)により持ち去られた、かつて教会が勝ち取った栄光……返してもらうっ!!」
「させんよ！」
ミゼルが突撃を仕掛けようとするが、クリスタリディ猊下が横合いから弾き飛ばす。
やはりグラムの完全開放は警戒必須か。ならいける!!
僕は異空間からグラムを取り出そうとし―
「……その辺にしときな」

―デュリオが、僕の手を掴んで止めた。
「デュリオ！　この状況では手段を選んでいる場合じゃ！」
「それでもだよ。グラム、まだ使いこなせてないんだろ？」
デュリオの指摘は事実だ。今の僕では、グラムの完全開放はどうしても消耗どころではない。
だけど、後先を考えている余裕はない。ここにいる僕達の命はもちろん、リアス部長やイッセーくんの窮地でもあるんだ。
それに、超えたいじゃないか。
今ここにいるのは、最強のエクスカリバー使いと呼ばれる人物だ。そして最強のエクスカリバーを核にした、最強のヘキサカリバーがここにある。
せめて、負けないぐらい強くなりたいんだ。負けないぐらい強くなったと、示したいんだ。
だけど、デュリオは静かに首を横に振った。
「ダメだって。教会出身の君は、俺にとっちゃぁ弟みたいなもんだ。兄貴として、弟がこんなバカなことで命削るのは認めませんってな」
そう笑顔で告げたデュリオは、少し苦笑しながら両手を向ける。
そこから現れるのは、いくつものシャボン玉だった。
「……なんだ？」
「禁手（バランス・ブレイカー）……ではないな」
ミゼルとクリスタリディ猊下が怪訝な表情をする中、大量のシャボン玉が輝きながら飛んでいく、幻想的な光景が広がっていた。
その光景に、誰もが手を出すのを止めている……これは―

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

自分の手を掴み取ったカズヒに、ベアトリーチェは目を見開く。
「え、なにを―」
「―乙女ねぇ」
その言葉に、ベアトリーチェ……否。
「……私、固有結界持ちなのよ」
―道間乙女に、カズヒは涙目でぎこちない笑みを浮かべていた。
「まったくもって引くような状況ね。ハインリヒも想定外の事態がつるべ打ちだもの。……脱出できた後、絶対あいつ目を引ん？くわよ？」
確信をもって、カズヒはベアトリーチェであった乙女を引き寄せる。
だが、乙女は困惑すら覚えていた。
「な、なんで……神曲（ラ・ディヴィナ・コムメディア）・神聖喜劇を乗り越えれたの!?」
そう。まずはそこが困惑だろう。
この宝具は始末に負えない代物だ。如何にカズヒが極まった光の意志力を誇るとはいえ、何とかできたとしても消耗が激しくなる。その絶大な強制力こそが切り札だ。
地獄を見て、煉獄を経て、そこからくる天国への道筋は、神曲をなぞる。その為この宝具は絶大な強制力を誇り、途中で心折れる形でなければ、弾けたとしても失うものが多くなる。
しかし、カズヒは笑みを自慢げなものに切り替える。
「私がいたいのは、涙換救済（タイタス・クロウ）が涙を変え続ける煉獄（現実）だもの。死んでもないのに天国行きなんて断固拒否だわ」
そう告げ、そのうえでカズヒは乙女の胸元に顔を埋める。
小さく呼吸を入れたカズヒは、少しだけ力を緩めていた。
「……うん。乙女ねぇはいい匂いよね」
「……何時から？　私がベアトリーチェから切り替わったのに、何時気づいたの？」
少し強張った身体から力を抜きながら、乙女はそれを訪ねる。

それに対し、カズヒは胸元から顔を挙げずに、しかし小さく頷いた。
「私が何年乙女ねぇを見てたと思ってるのよ。魔術的解析とかもしてたし、流石に勘づいたし」
そう答えながら、カズヒは苦笑しつつ懐から物を取り出した。
取り出したDチェンジャーを見せつつ、カズヒは軽く肩をすくめる。
「……まぁ、念の為にDチェンジャーも成立してないか確認しててよかったわ。……まさかベアトリーチェがダンテの宝具と関係なかったとは思わなかったもの」
そう、カズヒは苦笑で勘違いを明かす。
……そう。ベアトリーチェはダンテの宝具とは関係がない存在。だがベアトリーチェは神曲に由来する存在であるがゆえに、ダンテの宝具とかみ合ってしまった。
そもそも神曲において、ベアトリーチェとは天国でダンテを待つ存在だ。天国の導き手である彼女は地獄と煉獄には到達できず、必然として天国に昇天させる宝具たる神曲・神聖喜劇にベアトリーチェは存在しない。
だがそこに、ベアトリーチェたる存在が巻き込まれていれば話は別だ。カズヒのDチェンジャーに宿ったベアトリーチェは、ベアトリーチェゆえに神曲・神聖喜劇に組み込まれてしまった。
更にサーヴァントであるベアトリーチェの特殊性が、ダンテの宝具やカズヒと絡み合ってしまった。
「……アルターエゴ、ベアトリーチェ。神曲のベアトリーチェを中核とした、同種の「旅路の果てに巡り合う淑女」の集合体」
そう。ベアトリーチェこそが、カズヒを選んだサーヴァント。夢幻召喚の対象だった英霊。
アルターエゴという特殊クラスで召喚される彼女は、数多くの物語における「旅路の果てに巡り合う女性」という累計の多い存在の集合体。その中でも世界的かつ歴史的名作である、神曲のベアトリーチェが根幹と化している。
宝具である神曲・淑女再会及び、そこから派生したスキルである運

命の淑女という二つのＥＸ。それによって彼女は、マスターにとっての運命の淑女に、旅路の果てに変性する。
神曲・淑女再会とは、彼女そのものたる固有結界。マスターが神曲をなぞらえる様に地獄と煉獄を経験することを儀式とし、天国の位階に至ると共に、「マスターにとっての運命の淑女」へと至る固有結界そのもの。
運命の淑女スキルとは、その残滓といえるｉｄｅｓと言われる固有スキル。変化スキルが改ざんされたこのスキルは、「運命の淑女」が確立するまでの間、その皮を被った「ベアトリーチェ」として、サーヴァントとしての活動を行うスキル。
だがここで、一つの問題が発生した。
「ベアトリーチェは存在そのものが「マスターにとっての運命の淑女」という固有結界。元々固有結界を持つ私との間で、バグが発生するのは当然ね」
そう。自らの心象風景を具現化する固有結界に、マスターの運命の淑女となる固有結界が降臨した。
二重であり別種の固有結界がバグとなり、カズヒは夢幻召喚を起こせない状態になった。そしてそのバグが理由で、調査においても進んでいなかった。
そして非常時ゆえにそのまま参加したこの作戦で、更なるバグが発生する。
「ダンテの宝具もまた、対象の心象をもって地獄から天国の旅路を作る宝具。性質上、指定した対象の亜種固有結界を作るに等しい」
これにより固有結界が三重化。その結果として、カズヒにとっての運命の淑女である乙女を模したベアトリーチェを、カズヒが神曲・神聖喜劇の本来ない導き手として出力してしまった。
そして、そこに更に重ね合わさったバグそのものと言ってもいい存在が、大きな影響を与えてしまう。
「ヒツギとヒマリが一緒にいたことも、バグを加速させたのかしら」
「うん。あのもう二人の私がいたから、道間乙女（私）はベアトリーチェとしてここにいる」

二つに分かれて新生した、道間乙女たる二人の少女。
ハインリヒはダンテの宝具を利用する為、地下施設を魔術工房に近い形式にした。これにより、対象に当てることが最大の難関であるダンテの宝具を、既に内部にいることから必中させる。カズヒが部屋に入っていれば完全な必中攻撃だが、同時に効果範囲が部屋全体と言ってもいいのが悪かった
室内にヒマリとヒツギが居たことで、更なるバグが重なった。要は神曲をなぞらえた宝具を神曲の登場人物が、その最終到達点そのものと一緒に食らってしまったのだ。
ベアトリーチェの根幹たる固有結界が、固有結界使いたるカズヒ・シチャースチエに、道間乙女という形をとるはずだった固有結界が付いた状態で、道間乙女たる二人を巻き込んで発動した。
更にカズヒが持つ、想念を集める星辰光(アステリズム)も、ヒツギとヒマリに対す干渉として機能したのだろう。
結果として、ベアトリーチェという固有結界はヒツギとヒマリとも繋がった。道間乙女のなれの果てたる二人とも繋がったことで、道間日美子にとっての運命の淑女たる、道間乙女は事実上の復活を果たしたのだ。
その事実に、カズヒが持つ感情は複雑だ。
慙愧もあり、後ろめたい気持ちもあり、気後れする側面もある。
だが、その全てをカズヒは振り切り、力強く乙女を抱きしめる。
「……会いたいと思ってたよ、乙女ねぇ」
「うん」
乙女もまた、カズヒを抱きしめ返す
「御免なさい……本当に、ごめんなさい……」
「うん」
カズヒの言葉を、乙女は静かに受け止める。
「いっぱい酷いことした。やっちゃいけないことをし続けた」
「うん」
震えるカズヒを、乙女はあやすようになでる。
「殺されても文句も言えない。生かして欲しいなんて言う資格もな

い」
「うん」
そっと乙女は、カズヒを受け止める。
「しかも誠にいを事実上寝取って、今度は田知と恋仲になるし。……いや、これ本当に殺されるどころか徹底的に死体まで破壊されても裁判で減刑通りそうね」
「う、う～ん……？」
一瞬真顔になったカズヒの言葉に、乙女も少し反応がずれる。
しかも、見方によっては確かに正しい。自分の彼氏を寝取った女が、その後自分が生んだ子供と恋仲になっているといえるのだ。確かに殺人の動機としては裁判で同情を引けるだろう。昼ドラもびっくりのドロドロ展開になりえるほどだ。
その所為で少し空気が微妙になるのも仕方がない。
ただ、それが少しだけ気を紛らわせたのだろう。
顔を埋めていたカズヒは、涙をこぼしながらも、ぎこちなく笑顔を浮かべれた。
そのうえで、カズヒはここで覚醒する。
願いは一つ。成すことは一つ。
固有結界の使い手が、固有結界を発動させられ、固有結界が形となった。
心象風景を起点とするのならば、もはや彼女の独壇場。気合と根性でどうにかできる、精神論の領域。すなわち、極光の如き意志力を持つ例外達の土俵だった。
逃がさない。離さない。
罪悪感も慙愧も恥も、あえてすべてを背負って掴み取ろう。
何故なら―
「……会わせたい人が何人もいるの。嫌って言っても連れて行くわ」
―その言葉が、今何よりも重要なことだから。
それに対し、運命の淑女（道間乙女）は微笑んだ。
断ることなどありえない。何故なら―
「もちろんだよ。運命を乗り越え、至高天すら振り切った、貴女にでき

ないはずがない」
―もはや神曲は踏破された。ゆえに、彼女を止めれる者はない。
「連れて行って、私の自慢のご主人様。運命の淑女(ベアトリーチェ)はいつだって、旅人(ダンテ)の至る場所が居場所なんだから」
その微笑みを、カズヒは絶対忘れない。
瞼の裏の誓いの笑顔が、彼女の道を決め並び立つものならば。彼女の授ける微笑は、彼女の背を押す決意の灯。
この笑顔に恥じることな生き方を、生涯かけて示しきる。

奇しくも、三つの奇跡はほぼ同時に成立した。
神の奇跡を現世の齎す、覇輝(トゥルース・イデア)という奇跡。
デュリオ・ジュズアルドがもたらした、虹色の希望という奇跡。
そしてカズヒが到達した、至高天(エンピレオ)のその先にある運命の淑女(ベアトリーチェ)を超えた道間乙女という奇跡。

ゆえに悲劇よ絶望せよ。
奇跡と共に放たれる、悪敵銀神(ノーデンス)の銀弾を阻めるものなし。
邪悪の限りを尽くしてでも、尊び奉じる正義を守る。
絶対たる極光の使徒はここに、新たな運命を確立させた。

聖教震撼編　第四十話　趨勢、大変転

イッセーＳｉｄｅ

「ガァァァァァァバファッ!?」
絶叫するコロンブスに、思わず俺の拳が突き刺さった。
ちょっと可哀想かと思ったけど、容赦できるわけでもないしな。
吹っ飛ばされたコロンブスは、立ち上がろうとするけどそのまま消滅していく。
もう手の部分が光の粒子になっているし、これは決定打だな。
「……おおぉおおおおっ！　主よ、よく分からないが裁きをくれたのですな！」
「まぁ、八割ほどあってはいるか」
曹操が苦笑するけど、どうやら上手くいったようだな。
曹操の提案した作戦はシンプル。
相手が出力を下げて覇輝を自由に使う禁手なら、タイミングを合わせて自分が覇輝（トゥルース・イデア）を使うことで、便乗させる。
その結果、覇輝は単純に出力が二倍になった。
結果として、コロンブスは霊核が破損するし、なんかいきなり大量のシャボン玉が出てくるし、俺達の負傷と体力が一斉に回復するしで大盤振る舞い。
これは形成がひっくり返ったな。
ひっくり返ったけど、なんだこれ？
周りを見ていると、なんか急に泣き出して崩れ落ちている人とかが出てきてるんだけど。シャボン玉が当たるたびに増えている感じだけど、俺は当たっても何ともないぞ？
『おそらくだが、このシャボン玉は触れた相手の記憶を刺激するのだろう。相棒の場合は刺激する記憶の類を常に思っているから効果がないのではないか？』

ドライグがそう推測するけど、どういうことなんだろう。
忘れていた大切なことを思い出したから、戦うことをやめた？
……なんかよく分からん。
ただ、一つ分かることはある。
「つまり、九成やカズヒには全く効果がないってことか」
『……確かにそうなりますけど、他の例えってできませんか？』
シャルロットに突っ込まれた。
いや、今の説明だとどうしても「あの二人には意味ないよなぁ」になるっていうか。
だってあの二人、一緒にいるだけで自分達の原点を思い出し合うじゃん。星辰光（アステリズム）の詠唱まで、凄いところが一致してるし。瞼の裏の笑顔に誓いすぎだよ、あの二人。
というか、神聖糾弾同盟の何割かが戦意喪失しているな。思った以上に凄い事になってる？
「……英雄、か」
と、曹操はぽつりとそんなことを呟いていた。
「どうした？」
「いや、すっかり忘れていたことを思い出してね」
俺にそう答えると、曹操は苦笑いをしながら、なんか明後日の方を見る。
俺も視線を向けるけど、視線の先には特に気になる者はない。
さっぱり分からなくて首を傾げてると、曹操は何故かわくわくしている感じだった。
「あの山の先には、もっとたくさんの山が広がっている。……思えば、あれこそが俺の始まりなんだろう」
山ないけど。
ただ、なんとなく曹操にとってマジなことがあるのは分かる。たぶんだけど、俺にとってのリアス部長との出会い的なあれなんだろう。
だからまぁ、今はそっとしておくか。
「聖槍を宿してたのに気づかず、至った時に死んで無駄にしちまった俺にゃぁ似合いの最後か。……だが主よ、奪いつくせる存在を与えて

くださったこと……感謝しております……っ」
ツッコミを入れまくりたいコロンブスの断末魔は無視だ、無視!!

祐斗Ｓｉｄｅ

本当に、僕は大馬鹿野郎だった。
同志達が望んでいたことは、ただ生きて幸せになることだ。それすら忘れ、意味のない挑戦をしてしまっていた。
デュリオが展開するシャボン玉によって、それを思い起こされた。
そしてこのシャボン玉は、少なからず神聖糾弾同盟にも通用している。
「……うぅ……っ」
「俺は……なんてことを……」
全体としては一割に届かないが、それでも戦意を喪失している者は少なからずいた。
泣き崩れ、戦意を喪失する者達。
そんな中、瞑目するだけだが戦意を解いた者もいる。
「……なるほどな。長く生きると大事なことを忘れるものだ」
ミゼル・グロースターはそう呟き、戦闘態勢を解除していた。
同時に、戦いの趨勢も大きく変わる。
「同志ミゼル!?　なにをガァッ！」
「お？　なんか攻撃が通るようになってるぜぃ！」
美猴の一撃が、先ほどまで強い耐久力を持っていた敵を一撃で昏倒させる。
今まで脅威をもたらしていた、敵の耐久力が大きく減衰している。

厳密には、元に戻ったというべきか。
この好機、逃す道理はどこにもない。
情勢は大きく揺らいでいる。ならば、ここで一気に崩せれば、この場の戦いだけは完全にこちらのものに出来る。
だから、こそ！
「覚悟してもらう、聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌ!!」
戦力と士気の根幹を担う、彼女を倒すっ!!
素早く聖魔剣を構え、僕は駆け出した。
崩れ揺らぐ士気を利用し、真っ向から聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌに肉薄する。
そして自分で驚くべきことに、聖魔剣はより輝き強いオーラを纏っていた。
聖なるオーラも、魔なるオーラも、透き通るように輝く強まっている。
……まさか、周囲の聖剣や魔剣に反応している？
そう思うが、しかし余裕はない。
「させません！　神罰を求める祈りに応え、私もまた一直線！」
掲げる旗は光を増し、更に大量のクロスボウが僕を狙う。
「聖旗・解放賛歌（フラッグズ・ラ・ピュセル）とぉ～……聖女に続く進軍の象徴（イ・ドール・ラ＝ピュセル）」
放たれるは、旗を起点として具現化する聖なるオーラ。そして大量のクロスボウによる一斉射撃。
抜けれるか？　いや、抜かねばならない。
死にはしない。生き残る。生きて、部長やイッセーくんと共にある!!
その決意を胸に聖魔剣を構えれば、その前に出てくるものがあった。
聖なる盾をこれでもかと乗せられた龍。それも、龍そのものが聖剣で出来ている。
「一発かましたくて仕方がないのよ。というわけで、お姉さんがサポートしちゃう！」
英雄派のジャンヌ・ダルクの禁手が、正面から放たれる聖旗の一撃を防ぐ盾となる。

星辰光により盾を鱗のように纏ったその龍は、砕け散るまでに聖旗を受け止めきった。
こちらの間合いまで、あと僅か。
そしてまだ、クロスボウによる雨あられが残っている。
だが、その矢の嵐は割れるように僕を逸れていく。
「……臆するな！　それはこちらで引き受ける!!」
クリスタリディ猊下が支配（エクスカリバー・ルーラー）の聖剣を使ったのか。
ありがたい。おかげで、もうあと数歩で間合い―
「負けません！　必殺……聖女スマッシュ！」
―その瞬間、超高加速による、聖処女ジャンヌの突撃が迫る。
まるでジェット噴射のように、聖なるオーラを放出した突撃。更に突き出す聖旗は、先端部が十字を模ったメイスとなっている。
しのげるか……いや、しのがねば―

―その時、僕と座は繋がった。

籠められる念は、守るべき忠誠に応える意思。
流れてくる力、その本質は、夢幻召喚において更なる脅威となりえる宝具。
そして、皮肉なぐらい与えられるその力。バルパーが知ったら憤死するだろう。
その恩恵は、しかしこの一撃をしのぐにはあまりに早い。
判断は一瞬。自分自身の力とこの宝具、クラスカードの恩恵をもって、勝つ為の最適解を……導き出した。
「一人倒します！」
「そうはいかない！」
その瞬間、僕の胴体を正確に打ち抜くはずだった刺突は……跳ね上

がった。
迎撃も回避もしない。そのまま突貫し、すれ違いざまに聖魔剣を一閃する。
そしてその聖魔剣は、聖と魔のオーラを増幅させていた。
やはり、聖剣や魔剣の力に感応し、対を成す力を増幅させる。それが聖魔剣の新たな力か。
だからこそ、この戦いは僕達の勝ちだ。
「……まだです……まだ、神聖糾弾同盟の……祈りはっ!!」
苦し紛れに、聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌは聖なるクロスボウを大量に具現化させるが……しかし遅い。
既に夢幻召喚も間に合った。種晴らしをするとしよう。
「七極(エクスカリバー・ヴィヴィアン)は三度我が手に」
叫ぶと共に、僕の周囲に三本のエクスカリバーが具現化される。
それら全てを聖剣の龍騎士に持たせ、支配(ルーラー)と祝福(ブレッシング)を発動。クロスボウの攻撃をすべて逸らし、戦意を失っていなかった神聖糾弾同盟に直撃させる。
この宝具は真名開放により、一度の召喚で三回だけエクスカリバーを使える宝具。性質上、一度解除してからやり直せば回数が復活する為夢幻召喚との相性が良すぎる。だからこそ、彼もセイバーとして召喚されたのだろう。
その事実に感謝しながら、僕は折れても聖旗を振るって反撃を試みようとする聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌを、聖剣で断ち切る。
「これが、主の齎す力の極み……?」
「まだまださ。きっと、聖魔剣はもっと伸びる」
消滅していく聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌにそう告げ、そして消え去った直後に聖魔剣を掲げて宣言する。
「六聖英霊、聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌ！　木場祐斗とセイバー・ベディヴィエールが討ち取ったり!!」
そう。エクスカリバーに対する拘りを捨て、リアス部長やイッセー君と共にあることを改めて決意できた僕に、力を貸す英霊はベディヴィエール。

かつてアーサー王に使え、エクスカリバーを湖の精霊に返還したと言われる。アーサー王の墓を守ったとされる英雄。
その逸話を核とする、セイバーのクラス。彼の力をもって、僕はこの場での戦いを制することに成功した。

カズヒＳｉｄｅ

宝具から解放され、目を覚ます。
体調が回復したような様子のヒツギとヒマリを見ていると、やっぱり二人もバグって影響を受けていたみたいだ。
そのうえで、全員が無事ということは—
「お手数おかけしました、初代殿」
「気にするこたぁないぜぃ？　ケツ持ちするのが儂の立場じゃしのぉ」
—孫悟空殿がいなければ、ヒツギとヒマリは殺されていたでしょう。
そして私がこの場で復讐戦をすることになっていた。それはハインリヒの愕然とした表情を見ていればすぐに分かる。
私が暗部側の方を担当すると見越して、私をピンポイントで狙って天国に投げ飛ばす。それが作戦だと、その様子で確信できた。
「礼を言うべきでしょうね。おかげで—」
皮肉半分本音半分で告げながら、私は隣を確認する。
そこには、戸惑い気味でこっちに引き気味の苦笑を向ける、白く長い髪を持つ、二十歳にまだ届かない程度の女の子。
私のベアトリーチェとなった影響で髪色が引っ張られた、乙女ねぇの姿があった。
「—乙女ねぇを、和地に会わせてあげられるわ」

本当に、そこに関しては心から感謝している。
乙女ねぇは乙女ねぇで、ちょっと戸惑った様子を見せながらもしっかりと肉体を持っているようだ。
……正直私も、具体的な説明が困難だから説明を求められても困る。あとでリーネスや鶴羽も含めて、和地と会った時にどうしたものかしらね。
いや、これどうも感覚的に受肉してる感じなのが困ったわね。
夢幻召喚のシステムから派生する形で、サーヴァントとして具現化するかと思ってたから想定外だわ。むしろパスすら繋がってないし。あとこれ、受肉しているわね。
と、戸惑いながら自分の様子を確認した乙女ねぇが、面食らっているヒマリやヒツギと自分を見比べてから、ポンと手を打った。
「……あはは、まぁそういうことなのかな？」
「どういうことだぁっ!?」
あまりの事態にパニック気味のハインリヒが、紫炎を纏った棘付きの鎖を幾重にも渡ってこちらに放つ。
感覚から言って紫炎祭主の磔台（インシネレート・アンセム）の亜種禁手といったところね。紫炎による拷問器具を作成するといったところかしら。
だけど、甘い。
「……まだだっ！」
私はそれを、至った拳で薙ぎ払う。
熱いけど、その程度。星辰奏者の回復力と、魔術回路による治癒魔術があればどうとでもなるわね。
やはりこの男は、基本として銃後を担当するタイプ。真っ向勝負ではどうあがいても弱い。
ミザリ（誠）・ルシファー（にい）ほど固くない。
ピエール（鶴）・コーション（羽）ほど、鋭くない。
ヴァルプル（今）ガ（代）ほど、熱くもない。
結論として、今まで戦ってきたどの紫炎使いより弱い。当然だが、負ける通りはほぼないだろう。
そもそもあれだけの宝具をもってからめとる方法をとっていたん

だ。それが対した結果に繋がってないのなら、奴にとっても致命的な事態。
「くそ！　なんでだ！　そもそも結界すら消滅しているうえ、増援が来ないだと!?」
「そこは分からないけれど、たぶん私の仲間がやってくれたんでしょうね二重の覇輝による結界消滅及び、虹色の希望による戦意喪失のダブルコンボ」
焦りに焦っているハインリヒに、私はそう告げながら拳を握り締める。
敵である以上、殺すことに問題はない。いたぶるのなら悪趣味だが、一撃で倒す分なら殺し合いで文句が出るわけもない。
「そもそも！　貴様の禁手（バランス・ブレイカー）はそんな能力じゃないだろう!?　どう考えても、星辰体を強化しての機能上昇とは異なっている!!」
着眼点は鋭いわね。
ええ、奴の指摘はその通り。
昇華（ステラ・ザ・ブースト）の星の効果では、あんな攻撃は不可能だろう。映像を見ているのなら、そう判断できるでしょうね。
だからまぁ、教えてあげるとしましょうか。
一応、ハインリヒには一抹の感謝はあるものね。
「映像で言ってなかったかしら。剣豪（アーム・ザ・リッパー）の腕の今の亜種禁手だって」
そう告げたうえで、私ははっきり宣言する。
「私が至った剣豪（アーム・ザ・リッパー）の腕の禁手は、短時間だけ六つの亜種禁手を自在に切り替えて運用できるの」
名付けて銀弾（エンド・ザ・リボルバー）の決着武装。
それが、私が至った剣豪の腕が亜種禁手。
「……は？」
唖然とするハインリヒだが、まぁ気持ちは分かる。
禁手というものは、基本的に必殺技ではなく上位形態。アザゼル先生も時間単位だった木場の持続時間を酷評して、最低でも一日といったほど。ヴァーリクラスなら月レベルで持たせられる。
だがしかし、だ。

「私は元々、暗部で無理をするタイプ。本質的に長期戦に向いてないし、そもそも睡眠や休息時間まで至っている意義が薄いと思わない？」

そう。

禁手を常に纏う必要がある期間を設けるぐらいなら、数時間で決着がつけられる禁手に至る方が高出力化を図れるだろう。人間は二十四時間に、休息や補給をすることが前提の生物なら尚更。過酷な環境ではそれを組み込める方が有利なのだから。性能が上の異形を相手にするならもっとだろう。

だから、私はその結論に至った。

これこそが

「禁手の連続発動時間は６０分に固定。更に最大必要冷却時間（クーリングタイム）を６６分と少し長くすることで、そこに回すリソースを高出力化に回しているわ」

そう告げ、私は拳を握り締める。

そう。そもそもの話―

「神滅具五つ持ちの誠にぃを相手に、只の神器二つで長期戦ってないでしょ？　地力で劣っているならリソースを絞らないと」

―誠にぃ対策こそ、道間日美子が最優先するべき備えなのだから。

ゆえに、今回禁手のテストを使用。

至ったのは身体能力強化特化型禁手、豪傑の猛攻（スマッシュ・ザ・ウォーリア）。今の私は星辰奏者のポテンシャルを差し引いても、生身のサイラオーグと殴り合える。

だからこそ―

「もう一遍死ね、くそ神父ッ!!」

―全力で、すぐに死なせてやる。

そして自分でもゆっくり見えるが、その実一瞬で一発目の拳をハインリヒにめり込ませた。

安心しなさい。私は信徒よ？

正義を奉じる必要悪。必然的に、不必要な悪逆はしないように心得ている。

だからこそ、短期決戦でぶち殺す！
「まだまだまだま

「初代殿に説明してからになるけど、田知のところに行きましょう？
今すぐにでも、貴女を和地に会わせたい」
「……うん。分ってる」
その手を、乙女ねぇは笑顔でとってくれる。
「行こう、日美子。……七緒に、アイネスに、そして田知に会いたいから」
ええ、行きましょうか！

聖教震撼編　第四十一話　ウルバヌスの糾弾

和地Ｓｉｄｅ

明らかに、リュシオン・オクトーバーは追い詰められている。
俺は奴との付き合いをそんなにない。だがそれでも分かるレベルで追い詰められている。デュナミス聖騎士団の反応がそれを物語っている。
誰もが目を見開いているし、信じられないようなものを見ている。それほどまでに、リュシオンは精彩を欠いていた。
「……そん、な……っ」
顔色を悪くさせ、冷や汗すら流している。そして呼吸も戦闘動作とは別の意味で荒れている。
そんなリュシオンを前にして、ウルバヌス二世は攻撃を仕掛けない。
相手が仕掛けてこないのなら、自発的にしかける理由が無い。そう言いたげな表情だった。
その対応が不穏を生み、俺達はうかつに仕掛けられない。
いったい何を考えている、ウルバヌス二世……っ
俺達が手を出しあぐねる中、ウルバヌス二世は小さな笑みを浮かべながらも、鋭い視線でリュシオンに視線を突き刺している。
「自分の優秀さを鼻にかけたり妄信する人間は、往々にして迷惑な存在になりやすい。だが自分が優秀だとまったく自覚しない傑物もまた、迷惑な存在になりえるのだよ」
そう言い切るウルバヌス二世は、リュシオンに哀れみすら向けている。
「ただ市井に生きるのなら、自覚しなくてもよかっただろう。だが君

が生きるこの世界は、自覚しないわけにはいかない世界だよ」
確かに、それは言う通りかもしれない。
普通に一般市民として生きる分には、リュシオンの性質は致命傷になりにくい。
リュシオンのモットーは「前を向いて少しずつ進んでいくこと」だ。そもそも一般市民として生きていく分なら、神器（セイクリッド・ギア）は無くてもいいし、禁手（バランス・ブレイカー）なら尚更だ。リュシオン自身、一般人としての生活でそれを必要に感じることはないだろう。
イッセーは人間のままだと暴走させられると思われたからこそ、殺されることになった。だがリュシオンなら、必要に思わないのならそもそも神滅具（ロンギヌス）クラスの神器を持っていると気づかれない可能性すらある。
だが非日常に巻き込まれて、異形達と戦う悪魔祓いとなったことが運のつきだ。
非日常において、リュシオンは自分の異常性を当たり前に発揮し続けてきた。必要な時に禁手に至り、必要なら禁手を消して有効な禁手に至る。そして当たり前のように少しずつ、だが止まることなく成長をし続けていく。
普通なら、挫折することも腐ることもあるだろう。だがリュシオンはそうせず、必要な時に必要な成長を必要なだけ取り続ける。
それが魅了に繋がり、自分にできる範囲で成長させ続ける結果になればいい。
だが実際は違う。リュシオンとの差に心を砕かれることもある。リュシオンの考え方を受け付けられず、暴走することもある。カズヒねぇが語った通り、破滅に繋がった者すらいる。
リュシオンにすべての責任があるとは言わない。だが、リュシオンの影響がないわけでもない。
そして、その負荷を今まで一番背負ってきたのは誰だろうか。
決まっている。
「……違う。違う違う違う違う！　兄さんが、兄さんが異常者なわけがない!!」

……鎖に押し潰されそうなほど押さえつけられた、ルーシアだろう。
ウルバヌス二世の言葉をすべて信じるならば、鎖の重さは「信仰に生きることの負担」だろう。そして「信仰をどう受け止めているか」が鎖の状態に繋がっている。
信仰をはき違えた悪意が炎として具現化するのなら、ルーシアははき違えてはいない。だが同時に、信仰を呪いのように受け止め、とても負担がある生き方をしていたということになる。
だから動けない。だからどす黒く濁っているような鎖になっている。
そしてそれが真実だと理解できているからこそ、リュシオンは動揺している。
本来のリュシオンなら、精神面は復調していただろう。
どんな困難が待ち受けようとも、一歩ずつ成長すればいい。そしてそれが凄まじく優れているからこそ、持ち直せているだろう。
だからこそ、ウルバヌスは逆を行った。
乗り越えられない困難ではなく、乗り越えたくない困難。乗り越えるというリュシオンの行動そのものを、ウルバヌスはできないように仕掛けたんだ。
自分と他人の精神があまりに違いすぎるのだと、いやになるぐらい突きつける。何より傍にいて、たぶん最も身近に感じていたルーシアのそれを、いやになるぐらい見せつける。その結果として、リュシオンは「これを乗り越えたらルーシア達がどうなるか」と思ってしまう。
結果として、リュシオンの歩みは今初めて止まった。
リュシオンを止めるのではなく、リュシオンに止めさせる。それにより、これまで決して止まらなかったリュシオンの歩みは、止まったのだ。
そのうえで、ウルバヌス二世はリュシオンを真っ向から見据える。
その目には、悪意をも敵意も戦意もない。
一人の聖職者として、教え正す気概すら感じさせる。その気迫に、リュシオンはおろか俺達すら呑まれていた。

「君は今まで、当たり前のことを当たり前にしてきただけなのだろう。急激に加速するようなことは一切せず、少しずつ成長してきたのだろう」
そのうえで、ウルバヌス二世ははっきりと告げる。
「だが君の小さな歩みは、常人にとっては音速の飛行だ」
お前は周囲とは違うのだと、ウルバヌスは分かりやすく告げる。
お前にとって急ぐ気概のない移動は、大多数にとっては全力疾走すら生ぬるい。
そう告げるウルバヌスに、虚言の類は一切ない。
「君の一歩は常人にとって、数十の飛翔を繰り返すに等しい苦難だ。言っておくが体の話ではない、心の話だよ」
真っ直ぐに。真摯に。誠実に。
ウルバヌス二世は、リュシオン・オクトーバーの思い違いを是正する。
「何故なら、人間とは多くが諦めたがり怠けたがるから。人は困難を前に乗り越えるのではなくまず諦める為の言い訳を探す。程度の多寡を考えなければ、人類の大多数はそういう腐りやすい存在だ」
そう言いながら彼が見回すのは、既に燃え尽きて灰になりかけている、デュナミス聖騎士団の一部。
「デュナミス聖騎士団ですら、そういう手合いがいるのだ。それでも心技体全てが強靭ゆえ、そんな彼らに囲まれた君が気づかないのも理解はできる」
そして、その視線がルーシアに向けられる。
我武者羅に、死に物狂いに、起き上がって戦おうとしているルーシア。
だが鎖の重さと拘束に動けないでいる中、ウルバヌスは宣言する。
「彼女の健気な姿を焼き付けたまえ。君はたった一人の妹すら、苦しめ追い込んでいるのだぞ!!」
その糾弾に等しい鋭い声に、リュシオンは反論ができないでいた。
ただ交互に、ウルバヌス二世とルーシアを見て、何も言えないでいる。

今までにない表情だ。デュナミス聖騎士団ですら愕然とするその表情は、リュシオン・オクトーバーに人生最大の試練が訪れていることを示している。

……いや、違うな。

さっきも思ったがむしろ逆だ。リュシオンは、そもそも今まで試練を乗り越えたことなんてないんだ。

リュシオンにとって今までの苦難は、ただその時の必要な方向に進めばいいだけだ。いつも通りの範疇とさほど変わらず、根本的に苦しくも難しくもない。知識として奴は知っているのだろうが、それを実感したことなんてなかったんだろう。

そして、乗り越えることを選べないでいる。

何故なら、自分にとっての当たり前が他者にとってどれだけ難行か知ったから。

ずっと一緒に育ち、自分を見習ってきたルーシア。自分の同胞であり、共に進んできたデュナミス聖騎士団。そんな彼らですら、リュシオンの足元にも及んでなんていなかった。

もし、このまま当たり前に自分が乗り越えたとして、それでどうなるのかと考えている。

この断絶を見せつけられ、それでもあっさりと進んでしまえばどうなるか。

……今この時、リュシオンは自分という傑物と周囲の凡人を痛感した。だからこそ、「毎日少しずつ当たり前に成長する」ことを良しとする奴は、それができなくなるほどの衝撃を与えたいと思わない。

それが、リュシオンの歩みを完膚なきまでに停滞させた。

やってくれるよ、ウルバヌス二世。

リュシオンを止めると同時に、奴の歪みを突き付ける。それにより、物理ではなく心理でリュシオンの歩みを止めて見せた。

そしてリュシオンを完璧に止めたことで、俺達も止まっているからこそ、神聖糾弾同盟は動かない。

奴らは本当に、リュシオン達を足止めすることが目的なんだ。むしろ足止めができるのなら、殺しはしない方がいい。そういう戦術を

とっている。
その違和感はぬぐえないが、しかしだからこそ言えることがある。
ああ、言っていいだろう―

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

リュシオン・オクトーバーは、生まれて初めて苦難を実感した。
今まで、リュシオンは苦難を乗り越えてきたと思い込んでいた。少なくとも、並大抵の者にとっての苦難は乗り越えていたし、大抵の者では乗り越えられない苦難も乗り越えたと言われていた。だからリュシオンもまた、自分が苦難を乗り越えてきたと勘違いをしていた。
だが、リュシオンは外ではなく内の苦難に、今完全に足を止めてしまっていた。
何よりリュシオンの足を止めているのは、乗り越えようと思えば乗り越えられるという確信だ。
心を切り替え、そのうえで一歩を踏み出す。対処法としては簡単に思いつき、そして今までに比べれば大変だろうができる。その確信がリュシオンにはある。
だが、その選択を選べない。
何故ならば。デュナミス聖騎士団の同胞達、何よりルーシアの今を見ているから。
程度はともかく自分のような煌びやかな度合いを持たない鎖を纏い、動きを阻害される騎士団の者たち。何より、重く大きい鈍色の鎖に縛られ、その重さで身動きが取れないでいるルーシア。

誇りに思う仲間達だ。自慢の妹だ。自分を凄いと思ったり特別だと思うところが疑問だったが、それでもコツを掴めないなりに真っ直ぐ進み、並び立っていると思っていた者達だった。
だが、そんな彼らですら自分とは全く異なる次元にいる。足元にも及んでいないと、誤認できない形で突き付けられた。
そんな彼らの目の前で、彼らがどうしようもできない状態を乗り越える。そんなことになれば、その断絶は本当にどうしようもなくなってしまうだろう。
リュシオンは、己の尊ぶ思いを考える。
―人間の価値は、強すぎる勝利や敗北により変わることじゃない。
お笑い草だ。これだけの強さを人に見せ続ければ、変わり続けてしまうだろう。
―無理なく少しずつ成長していくことこそ、人の本質を保つことができる。
どの口がほざいていたのだろうか。自分のような急成長を見せ続けられれば、無理だと諦めるか無理して頑張るかの二択だろう。
―少しずつ成長することが許され、少しずつ間違いを修正していけばいい。そんな簡単なことの為に、必要な急激な変化を受け持ちたい。
何より急激に変化し続ける男が言うことではない。こんな男を見せ続けられれば、三大勢力の和平以上の負担を強いられて当然だ。
―少しずつでいいから前にちゃんと進み続ける。そんな簡単なことこそが正義なのだ。
まったくもって見当違いだ。自分の早すぎる速度を基準にして、それが正義などとよく言えた。
分かっている。今は非常時だ。進まなければいけないときだろう。
だがここで進めば、今度こそルーシア達は置いて行かれる。
そんなものを見せつけられて、ルーシア達は真っ当でいられるのか？
何より尊びたいものを踏みにじって、正義を成せるというのか？
その考えが、リュシオンを縛る鎖となる。

何より自らのに突きつけられるのは、己が纏っている鎖だ。
プラチナのように光り輝く、細く軽く美しい鎖。高速具どころか装飾品にしかなってないそれは、リュシオンの信仰心の表れだ。
無理などない。負荷などない。まるで多神教の神々を彩る、神々しさの具現化というべきその鎖。
それこそが、リュシオン・オクトーバーが抜きんでた傑物である証。神滅具などという物理的なおまけではない、精神的傑物である証明。無自覚の大前提だった「自分は神滅具を持ちコツを掴むのが得意な以外は、只の人間と変わりない」などという妄信を打ち砕く一撃だった。
これまで何度も多くの者達から指摘されてきた。しかしその全てを見当違いだと断じてきた。そんな、自分と他人の決定的な違い。
神器神滅具候補という絶対的な力と、コツを掴んだからできたという確信。その二つを根拠として違うと断言できた、その批判。
その批判こそが正しく、自分こそが普通からかけ離れた異常者だと、この上なく証明されている。
そんな男がこんなところで、今まさにその違いで動けなくなっているルーシア達の前で、違いを更に明確に示す。そんなことをすればどうなるかなど、考えるまでもない。
デュナミス聖騎士団の者達は、そしてルーシア・オクトーバーは……変わる。
ただでさえ、リュシオンの強すぎる影響を受け続け、それを前向きに背中を押すようにしてきた者たち。その目の前で、決定的なレベルでどうしようもない断絶を痛感する。その衝撃は、リュシオンが良しとしてこなかった人間性すらかえる急激な影響となるだろう。
それを良しとできないがゆえに、リュシオンは動くことができないでいた。
自分自身が一切理解できず歯牙にもかけていなかった指摘を自覚し、それに伴い自分自身が良しとしていなかったものを促してきたと痛感し、どう動いても自分が良しとしない状況になってしまうと悟ってしまった。
だからこそ、リュシオンは動けない。

「……君は本当に素晴らしい存在だ。だが同時に、凡俗がなろうと思ってなれる者では断じてない」
ウルバヌスはそんなリュシオンを見据え、小さく首を横に振る。
残念そうに、心から同情しているかのように。
そしてそれは本心であり、リュシオンを心から評価しているからだ。それほどまでに、リュシオンは傑物なのだろう。
多くの人間を見てきたウルバヌス二世からして、リュシオン・オクトーバーは希少な傑物だと、そういうことだ。
「君のような者が当たり前にいれば、亡くなられた主も喜ぶことだろう。だが残念なことに、神の子が再来と思えるほどの傑物は、決して一般大衆の平均ではないのだよ」
そう、ウルバヌスは突きつける。
「神の子（ディア・ドロローサ）に続く者よ。君は自分と世界の断絶を痛感して、どうするかね？」
その最後通牒を突き付けられ、リュシオンは動けない。
動くべきなのは分かっている。だが動けば、決定的な何かが終わる。リュシオンが尊び良しとしてきた物が、リュシオンが誇り自慢に思ってきた大切な者達から失われる。
その事実に、リュシオンは動くことができず――

「……そこまでだ」

その二人の一歩が鳴り響いた。

聖教震撼編　第四十二話　糾弾に抗う者達

和地Ｓｉｄｅ

ったく。黙っていれば色々言ってくれるな。
俺もリュシオンのアレなところは、カズヒねぇの極光的な精神性とは別の意味で問題視はしてた。むしろ自覚がない分、リュシオンの方が質が悪い。自重しててもいざとなればぶん投げるカズヒねぇも大概だけど、自覚がないから当たり前のようにし続けるリュシオンはもっと酷い。
たぶん自覚させるには、相当の荒療治が必要だとも分かっていた。そうなれば、きっとルーシアにも相当の衝撃が走るとも想定してたさ。
ただなぁ。
「いい機会だから指摘させるままにしてたが、そろそろ終わってもらおうか」
……別にリュシオンを再起不能にしたいわけじゃないんでな。
一歩前に出たうえで、俺は魔剣を創造してウルバヌス二世に突きつける。
「言ってることは筋が通っているし、リュシオンが人を傷つけることを良しとしないなら自覚は必須だ。だが、ちょっと不必要に追い込みすぎじゃないか？」
かなり徹底的に厳しく言っている雰囲気だからな。そろそろこの辺にしてくれないと何か起きそうでちょっと怖いし。
ただ、俺と同時に割って入った人はちょっと違う意見のようだ。
「……ウルバヌス聖下。貴方のおっしゃることは正しいですが、少し性急すぎな印象がありますぞ」
ストラス騎士団長は複雑な表情を浮かべながらも、胸を張ってそう

批判する。
「諭し導けなかった吾輩達の未熟を承知で言わせてもらいますが、このような形でする必要がありますか！　何より、我らデュナミス聖騎士団にも死者が少なからず出ております」
その通りだ。そこは本当に気になっている。
ウルバヌス二世の宝具により、結構な人数の騎士団員が焼け死んでいる。既に灰になっている彼らは、生きたまま焼き殺されたわけだ。
いくら信仰心に問題があるものがなるとはいえ、いい気分になるわけがない。そこは言うべきどころだろう。
ただ、ウルバヌス二世は涼しげな表情だ。
「悪いが詫びる気はないな。この宝具で焼け死ぬような手合いが、教会の未来を担う騎士団にいる方が看過できん」
……いったいなんだ？
ウルバヌス二世にとって、神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）の目的はでっち上げも同然だ。聖書の神が死んでいることを前提に、聖書の神の裁きを受けるという目的を本気で言うわけがない。
ならなんだ？　いったい何を考えている？
そこについても考えるべきだが、今言うべきはそこではないな。
「……リュシオンもまだ若い。見誤ることもあれば道を間違えることもある。だからといって、このような所業をもって叩き直すというのはよしとはできませんぞ！」
「そうはいかない。神の子に続く者（ディア・ドロローサ）たる彼は、教会の未来に多大な貢献を果たすだろう。その歪みを治せる機会は、私達にとってあまりないのでね」
ウルバヌス二世はストラス騎士団長にそう言い返す。
「……く……っ」
リュシオンは唸るが、しかし動けない。
……いや、動かないのか。
動くべきだとは思っているのだろう。そして動こうと思えば動ける程度の状態だ。
にも関わらず動いていない。付き合いは短いが、リュシオン・オク

トーバーがそうしていないのなら、それは動かない選択を選んでいるからだ。
チラチラと、ルーシアや同胞を見ているのがその証拠だ。間違いなく、今動けば彼女達の心に悪影響を与えると思っているからだろう。
なら、俺がやるべきことは……一つだ。
「騎士団長、十分稼ぎます」
『ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ』
騎士団長が何か言うより早く、俺はパラディンドッグプログライズキーを装填する。
『Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』
俺では付き合いが短すぎるし、リュシオンのことを詳しく知らない。
だからこそ、俺がやるべきことはそこじゃない。
「それまで、リュシオンと話し合ってください。……横槍は、入れさせません」
なら俺がするべきは、補佐だろう。
リュシオンじゃないが、できる範囲ですべき事象を、したい願いとすり合わせる。
そう、俺がするべきことはもう決まった。
「付き合ってもらうぞ、神聖糾弾同盟」
『ショットライズ』
今ここが、出しどころだ。
『パラディンドッグ！　Ｔｈｅｎ　ｓｍｉｌｌｉｎｇ　ｓｉｌｖｅｒ　ｂｕｌｌｔｅ．　Ｓａｖｅｒ　ｉｓ　ｅｘｔｒｅｍｅ　ｏｖｅｒ』
九分間、リュシオンが立ち直る為の時間を稼ぐ!!

祐斗Ｓｉｄｅ

聖処女(ラ・ピュセル)ジャンヌが打倒されたことで、殆どの者達が戦意を失っていた。
ただでさえ、デュリオのシャボン玉によって戦意を失った者が多い中、更に中核となる戦力を失ったことで、瓦解したと言ってもいい。
「て、撤退だ！」
「指示の通りに分散退避！　待避所に向かうぞっ!?」
そう叫びながら離脱する者も数割はいるが、殆どの者は戦意を失ったのか降伏の体制になっている。
「……聖下の、指示？」
「投降は許されていたはずだが……？」
戦意を失った者達は降伏しているが、どうやら待避所について知らされていないらしい。
人員に応じて指示が違うのか？　そこまでの組織的体制を作っているのは警戒に値するけど、意図が読めないね。
とはいえ、これで状況は少しぐらいましになるだろう。
敵主力の一角を撃破した。デュリオのシャボン玉も含め、これで神聖糾弾同盟が崩れてくれればいいんだけどね。
そしてそのデュリオも、投降している者達が来たことで少し欲しているようだ。
……だけど、そうほっとしてばかりもいられない。
僕達は、戦意こそないが敵意が消えていない男に集中する。
「で？　どういうつもりかな？」
「大した事ではない。……神聖糾弾同盟(ネオ・ディバインクルセイダーズ)として、戦う理由を失くしただけだ。」
デュリオにそう返すのは、ミゼル・グロースター。
彼が敵意を消していないにも関わらず、戦意だけは綺麗に消していた。

その対応が違和感しか覚えず、僕達は一様に警戒している。
ただ戦うつもりはないらしい。デュリンダナの方を地面に突き立てると、殉教四聖剣（デュリン・カリバー）も消していた。
そして肩をすくめると、彼は三対の翼を広げる。
その翼が黒く羽がないのを見て、僕達は殆どの者が目を見開いた。
まさか……悪魔だって!?
「ふむ、恩知らずのミゼルという異名を聞いたことはないかね？　ＳＳランクのはぐれ悪魔認定されていたはずなのだが」
ミゼルはそう言うけど、まさか転生悪魔だって!?
僕達が目を見開く中、彼は肩をすくめるとそのまま飛び上がる。
「思い出したよ、私の戦う理由を。……だからこそ、その礼としてここは引こう」
「おいおい？　逃げさせてくださいっていうべきなんじゃないのかぃ」
美猴がそう言うけど、そういう問題じゃない。
「美猴、気をつけるんだ。……奴はかなり危険だ」
くそ！　デュリオを一対一で抑え込めるわけだ。
恩知らずのミゼル。奴はＳＳランクのはぐれ悪魔だ、思い出した。
黒歌と同格の危険性だけど、その危険の方向性が違いすぎる。
「親族と集まっている主に対して複数人で反旗を翻し、その場でたった一人生き残った化け物だ！　総合的な危険度はともかく、直接的な戦闘能力なら黒歌を遥かに超える!!」
「……ほう？」
アーサー・ペンドラゴンが目を細めるが、本当に油断ができるわけがない。
総合的な危険度なら、仙術などのテクニックやサポート方面もあって黒歌と同格だろう。だが直接戦闘に限って言えば、最上級悪魔クラスが眷属を率いても危険な相手だ。
「かのディハウザー・ベリアルが会敵したけど、取り逃がしたと番組で聞いたよ。なんでも複数の神器を使っていた可能性があるとか」
魔王クラスの悪魔と称され、

「……また危険極まりないわねぇ」
リーネスも眉間にしわを寄せるけど、実際にそのレベルだ。
「そういうわけだ。それに―」
そう告げるとともに、ミゼルからのオーラが恐ろしい規模に高まっている。
寒気すら感じる。いや、そもそもこの気配は―
「……礼を言うぞ、デュリオ。おかげで託された力も至ることができた」
あのシャボン玉で、大切なことを思い出して禁手か。
十分あり得そうな流れだけど、敵対を崩さないままに至るとはね。デュリオも目元が少し引くついている。
「……なるほどね。あの防御力強化は聖者の試練（スターディ・セイント）の亜種禁手ってわけか」
「そういうことだ。試練乗り越える聖者の軍勢（スターディ・セイント・クルセイダーズ）という」
そう返すミゼルに、デュリオは歯を食いしばっていた。
「しかも星辰奏者（エスペラント）みたいだね。能力は煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）の再現能力ってところかい？」
デュリオのその質問に、ミゼルは自慢げな笑みを浮かべていた。
そういうことか。煌天雷獄を再現する星辰光（アステリズム）で、煌天雷獄を抑え込んだのか。
おそらく干渉性に長けているタイプだろう。その応用で、煌天雷獄に干渉したのか。
「で？　美味い物でも食べて落ち着こうって気はないのかい？」
「すまないが、食事は質素倹約かつ栄養重視がモットーでな」
デュリオの軽口に軽口で返しながら、ミゼルは翼を広げて飛び上がる。
「安心しろ。いずれ必ず再度まみえる。それまでお互いに牙を研いでおこう」
そう告げると、ミゼルはそのまま飛び去って行く。
追撃はしたい。だが危険だ。
「……追いかけなくていいのですか？」

「危険です。彼自身の神器は高性能なだけですが、共に反旗を翻して死んだ転生悪魔は、準神滅具使いが複数いたことそうです。……おそらく、マルガレーテさんと同様かと」
シスターグリゼルダにそう返すけど、あとで資料を請求するべきだろうね。
ただ、可能性は高い。マルガレーテさんのように「誰かに神器を託す禁手」に至ったのなら、神器の後天的移植に対するデメリットは大きく軽減する。至らせるならともかく、普通に使う分には十分だろう。
そして、僕が大事なことを思い出したように彼も思い出した。その結果として、移植した神器を至らせた可能性は大きい。それだけの精神的影響がもたらされて当然だ。
おそらく、生まれ持っている神器が聖者の試練だったのだろう。そして今、後天的に会得した準神滅具を至らせた。悪夢のような事態になりえるね。
……何故なら、彼は僕とは違う。
彼はおそらく、自分が戦う理由を本当の意味で思い出したんだ。だけど、大切なことを思い出すこととそれが僕達にとって都合がいい事とは違う。
今だけを考えるのなら、準神滅具を至らせた敵が離れていくのはありがたい。だが同時に、今後を考えれば強敵となるの者を逃がしたのは痛いだろう。
……いや、今は目の前の事態を考えよう。
この好機を逃す手はない。何とか合流して戦局を変えるべきだ。
「クリスタリディ猊下。ここの取りまとめと捕虜の確保をお願いします。我々は分散して味方部隊の援軍として行動を」
「承知した。この場の確保は任せてほしい」
シスターグリゼルダとクリスタリディ猊下が今後について話し合う中、デュリオは拳を握り締めていた。
「大事なことを思い出して、至った上で敵のままか……」
彼のあの技は、きっと多くの者達を傷つけることなく抑える為のも

のだろう。
子供達を思う誰よりも優しい男と言われているけど、だからこそ辛いだろう。
世の中は、本当にままならないものだね……。

聖教震撼編　第四十三話　双覇の聖剣

祐斗Ｓｉｄｅ

とりあえず、この場の戦闘は何とか制することができた。
だがかなり時間を稼がれてしまった。既に激戦は始まっている以上、僕達も動かなければならないだろう。
そう思っていた時、通信の魔法陣が展開される。
『……こちらカズヒ！　答えられる人はいる!?』
カズヒか。
「はいよ～。こちらデュリオ、そっちは大丈夫かい？」
デュリオが返答すると、カズヒにもきちんと聞こえているようだ。
『とりあえず、敵サーヴァントの一角を撃破したわ。今はとりあえず有象無象をボコっているけれど、投降する奴もいるからすぐに終わりそうね』
「こっちもサーヴァントの一角を撃破したよ。残ってる人は投降しているけど、一部逃げた人もいるね」
デュリオと会話を交わしているけど、どこか様子が変わっているね。
雰囲気が軽いというか、何かスッキリしているというか。
「こっちは味方の援護に行くつもりだけど、どうするんだい？」
『そうね。なら私は和地の方に向かうから、他をお願いしていいかしら？』
……。
五秒ぐらい沈黙してしまったのは悪くないだろう。
とりあえず、ここにいるＤ×Ｄのメンバーならまず間違いなく沈黙しているからね。
『……どうしたのかしら？』
カズヒが指摘してきて、おかげでちょっと我に返ったけど。それは

それとして何かあったのかな？
彼女は九成君に対する好意は隠さないけど、逆にこういう時に意味もなく九成君を優先するわけではない。
それが、息を吸うように九成君のところに自分から行くというのか。
ついで言うと、彼のいるポイントは僕達の方が近い。
「……精神攻撃でも喰らった？」
真剣に心配する調子のデュリオだけど、それは違うだろう。
「いや、頭に何度も攻撃喰らったんじゃね？」
「その可能性はありそうだね」
美猴の言葉に素直に納得してしまった。
「大丈夫、カズヒぃ？　あの、何があったの？」
リーネスが心から心配するけど、仕方がないだろう。
『……皆の信頼に頭が痛いわ。……まぁ、実際問題そういう要素があるのは自覚しているけれど、ね』
ふむ。この返答だと何か脳機能に障害が起きたわけではなさそうだ。
ただならどうしたのかと思ったけど、その答えが聞こえてきた。
『……うん、アイネスが心配するのもちょっと分かるけどね？　日美子は大丈夫だから』
その言葉に、僕達は少し固まった。
より厳密にいうのなら、オカ研のメンバーが固まった。
聞き覚えがなさそうである、その声。
僕達は、その声を知っている。
それは魔獣騒動の終盤。モデルバレットに体を乗っ取られている状態だったカズヒを、乳語翻訳を併用した手段で覚醒させる過程。その、道間日美子の罪業を巡る回想で聞こえた、少女の声。
信じられない。彼女が、存在できるわけがない。
何故なら、彼女はヒマリとヒツギの二人に分かれて新生したから。カズヒや南空さん、リーネスのように連続性を持ちきれないから。あり得るわけがない。

だけど、その言葉を聞いたリーネスは、涙を一筋零していた。
「……乙女、なのぉ……？」
『……う～ん。厳密に言うと凄くややこしいことになってるから、断言はちょっと難しいけど……』
何やら凄く悩んでいる調子の、道間乙女の声に、カズヒの苦笑が続けられた。
『まぁ、その辺はアザゼル先生やあなたの解析も待ってからになるでしょうね。……でも、私は乙女ねぇだと断言するわ』
「……そう。だから、すっきりしてるのね。……そっか、そっか……っ」
涙を何度も零しながら、リーネスは目を伏せ、肩を震わせる。
「……会いたかったわぁ……乙女……っ」
『うん。だけど、私が会いたいのは二人だけじゃないんだよね』
……そうか。
まだ分かることは多くない。僕達ですらわかり切ってないのなら、慣れてない人たちなら尚更わからないだろう。
ただ、僕達としては感慨深いものがある。リーネスなら尚更だ。
そして、彼女が道間乙女なら会うべき人は他にいる。
「分かった、リーネスと合流して向かってくれ。……そういえばヒツギやヒマリは？」
もし二人が融合したという形なら、思うところは少しあるね。
ただ、僕の確認にすぐ元気のいい声が返ってくる。
『ここにいますのー！　私達はイッセーの方に向かいますわね！』
『ま、そっちも何人か合流するだろうしさ？　詳しい話は終わってからってことでいいじゃん？』
なるほど。どうやら二人は問題ないらしい。
それで何がどうしたんだとは思うけど、今はそこじゃないからね。
……さぁ、ここからが反撃だ。

和地　side

パラディンドッグ最大の欠点は、俺が禁手の才能を恐ろしいほど持ってないことに由来する。
禁手の発動時間を三倍にしてなお、十分ぐらいという悪夢じみた短さだ。神器を扱う才能に欠けると何度も言われるイッセーですら、至った直後で三十分だからな。自分でも軽く引く。
だからこそ、本来保険というか予備だったアサルトドッグの方が主体になっている。星辰奏者（エスペラント）の死ににくさが欠点を補っていることを踏まえても、この逆転現象はちょっと苦笑いだ。リーネスが頭を抱えるレベルだ。
だからこそ、パラディンドッグは使いどころが非常に難しい。決めどころを見極め、そして短期決戦を挑むしかない。
……だからこそ、ここが決めどころだと俺は決めた。
それだけの価値はある。だからこそ、使う。
覚悟はいいか、ウルバヌス二世、そして天草四郎時貞。
ここからの俺は、鬼畜仕様だ！
「これは……っ！」
「なんだ……と？」
振るわれる斬撃は、ガードを間に合わせたウルバヌス二世と天草四郎時貞を弾き飛ばす。
そのまま素早く二刀流で切りかかる戦術に移行した俺を、ウルバヌス二世と天草四郎は互いをカバーするように迎撃する。
防御するだけでなく、隙あらばこちらを打ち落とすように攻撃が放たれる。
その全てを、俺は迎撃し斬り落とす。
「なんだあれは!?　まずいぞ！」

「聖下！　流石にまだ死なれるわけには！」
慌てて戦士達が迎撃を試みるが、しかし甘い。
「させるわけないでしょうがぁっ!!」
素早く割って入った鶴羽が、その攻撃を弾き飛ばす。
更にロスヴァイセさんのフルバースト魔法やギャスパーの闇の獣が、俺に援護をしてくれる。
「人相手はこちらが引き受けます！」
『頼んだよ、九成先輩！』
「信じてるわよ、あんたは絶対九分稼ぐって」
援護してくれる中、鶴羽は俺と視線が合った時、小さく微笑んでくれた。
「だから外野は九分こっちで押さえる！　やって見せなさい……和地っ！」
「ああ……任せろっ!!」
ここで期待に応えられない、そんな奴になる気はないっ!!

イッセーＳｉｄｅ

戦いの殆どは決着がつきかけているけど、でもしぶとい奴もいるっちゃいる。
そういう連中相手を何とかぶっ飛ばしてるけど、しぶとい奴も多いんだよなぁ。
「そうはいかん……いかんぞぉっ!!」
でもってしぶといのが、オウル・ランドゥールとかいうやつだ。
デュランダルの使い手候補なだけあって、プロトタイプのデュラン

ダルⅡでここまで粘るとは思ってなかったよ。
どうする？　こうなったら真女王で一気に―
「……すまなかった、イッセー、部長」
―その時、ゼノヴィアが俺達の前に出た。
その両手に握られているのは、エクス・デュランダルじゃない。
「迷いは晴れた。こいつの相手は、私が終わらせて見せる」
ゼノヴィアは、エクス・デュランダルをデュランダルをヘキサカリバーに分けている。
そしてその姿を見て、ストラーダ猊下はなんか震えていた。
なんだ？　まるで絶版物の名作エロゲを見つけた俺のような震え方をしている。歓喜の震えだな。
『『あとで謝ろう』』
何故だ相棒ｓ!?　疑問符すらなくハモるのは何故!?
そしてそのランドゥールの奴は青筋を浮かべながら切りかかってきた。
「エクス・デュランダルですら勝てなかった女が、持ち味まで捨てて勝てると思うなぁっ!!」
激昂するランドゥールに、ゼノヴィアは二刀流で切りかかる。
……ゼノヴィアは、あれで二刀流での戦いが上手な奴だった。
かつて破壊（エクスカリバー・ディストラクション）の聖剣を持っていた時から、いざという時に考えていたのかもしれない。なんだかんだであいつは、聖剣二刀流での戦闘も十分こなせていた。エクス・デュランダルになってからも時々エクスカリバーを一本分割してたし。
だけど、それにしたってなんだこれは。
エクス・デュランダルの時とは比べ物にならないぐらい、ランドゥール相手に戦えている!?
「な、にぃいいいいいっ!!」
ランドゥールも迎撃しているけど、明らかに面食らってるし驚いている。
え、え、えええ!?
「どういうこと？　エクス・デュランダルよりも戦えている……？」

俺も困惑しているけど、リアスも目を丸くしている。
というか、ストラーダ猊下以外全員が面食らってるし。
「……どういうことだ？　エクスカリバーとデュランダルを組み合わせたエクス・デュランダルは、俺の禁手に匹敵する可能性の塊だぞ？」
曹操も興味深そうにしながら、だけど首を傾げている。
こいつが首を傾げるほどのこと……だよなぁ。
だってエクス・デュランダルって、ゼノヴィアに合わせたデュランダルの強化方法だったはずだもん。それ解除してたら普通は弱くなるだろ？
いや、これはマジでどういうこった。
「相乗効果で見出された可能性を閉ざして、何故さっきまでとは比べ物にならない戦いを――」
「――それは違う」
曹操の疑問を、ストラーダ猊下が遮った。
この人だけだ。この人だけは、目の前の光景をおかしいと思ってない。
そう、最初に二本が分かれた時から、ストラーダ猊下は喜んでいた。
「私からすればエクス・デュランダルは疑問の塊だ。デュランダルは破壊の申し子として完成されている。エクスカリバーも異なる形で完成された聖剣だ」
そう告げるストラーダ猊下だけは、目の前の光景を我が子がテストでいい点を取ったかのように喜んでいる。
まるで、エクス・デュランダルが赤点だったみたいな雰囲気だ。
「完成されている者同士を組み合わせるなど、疑問でしかなかった。そしてそれは、戦士ゼノヴィアがデュランダルに翻弄され、エクスカリバーに制御という愚行を求めたからに他ならない」
はっきりとそう言い、そしてストラーダ猊下はゼノヴィアに強い視線を送る。
「それでいい！　否定するな！　貴殿は一刀でも二刀でも戦える、破壊の申し子。――パワーを信じてこそ、力は本物になる!!」
「うおおおおおおっ!!」

振るわれる二本の聖剣に、プロトデュランダルⅡが押し負け始める。
ランドゥールは何とか防御をしているが、それを超える破壊の連撃が、確実に押し込んでいる。
「馬鹿な！　錬金術師達が切り開いた、新たな可能性を！　二つの聖剣の融合を！　捨て去ったことで……高みに……など!?　どういう理屈だぁっ!?」
信じられないと言いたげなランドゥールに、ストラーダ猊下は悲し気に首を横に振った。
「それは可能性でしかないのだ、ランドゥールよ。デュランダルの真実は破壊にしかない、考えてはいけないのだ」
それが、ストラーダ猊下の結論だった。
デュランダルは破壊。その真理に、制御ということを考えること。それが、間違いなんだと。
……木場、泣くんじゃないだろうか？
もうなんか空間が所々避ける斬撃の応酬。そしてゼノヴィアは、ランドゥールを弾き飛ばす。
「な……めるなぁっ!!」
『ダイイングインフェルノ！』
その瞬間、オウルは素早く変身デバイスを操作すると、グリップ上の武器を構える。
その瞬間、絶大なオーラの光の刃が具現化された。
「ならば、こちらも二刀流で潰す!!」
プロトデュランダルⅡも強いオーラを放ち、ランドゥールは切りかかる。
あ、これ助けに行くべき……いや、ゼノヴィアの戦いだし―
「安心してくれ、イッセー、部長」
―その突貫に、ゼノヴィアは真っ向から迎え撃とうとしていた。
「ああ、そうだ。これこそがデュランダルだ。小手先でも、理屈でもなく、パワーこそがその本質だった」
その二刀もまた、凄まじいオーラを纏っている。

デュランダルの力を思う存分、勢いよく放つ。更にそれに呼応するように、ヘキサカリバーもまた強いオーラを放っている。
「これこそが私の在り方だ。これがデュランダル、そして破壊のヘキサカリバー！　……為朝が私を選んだその理由！」
そして突貫するゼノヴィアは、真っ向から斬撃に斬撃をぶつける。
拮抗は一瞬。すぐさま、ゼノヴィアの斬撃がランドゥールの斬撃を吹き飛ばした。
「……名付けて、クロス・クライシス!!」
そしてそのまま吹っ飛んでいくランドゥールに、ヘキサカリバーを変化させた弓を構える。
デュランダルをつがえたゼノヴィアは、狙いを素早くランドゥールに定めていた。
「そして、今なら更なる高みへ到達できる！」
「ふざ……けるなぁあああああっ!!」
体勢を立て直そうとするランドゥールだけど、ゼノヴィアの方が一歩早い！
「撃ち貫け……極聖・弓張槍ヶ月ッ!!」
『ダイイングエンピレオ』
迎撃の為に放たれた蹴りが、放たれたデュランダルの矢と激突する。
拮抗は、一瞬だった。
「……これが、デュランダルだっ!!」
一瞬の拮抗で、その一矢はオウル・ランドゥールを吹っ飛ばした。

聖教震撼編　第四十四話　近づく真相

イッセーＳｉｄｅ

吹っ飛ばされたランドゥールは痙攣している。
うん、あれは動けないな。となると、ここで戦意を持っている奴はもういないか。
俺はちょっと息を吐くと、一応周囲を警戒しながらレグレンツィ猊下の方に歩み寄った。
流石に捕縛はした方がいいよな、うん。
「……部長、イッセー君！」
この声は、木場か！
振り返れば、どこかすっきりした表情の木場が駆けよってきた。
と思った瞬間、横から柔らかい感触が柔らかい感触を押し付けるようにぃぃぃぃぃっ!!
「ふわあああああ!?　ちょっとヒマリ、ちょっとととととっ!?」
「イッセー無事でしたのぉ！　会いたかったですわぁっ!!」
うぉおおおお！　ヒマリが俺とヒマリでヒツギをサンドイッチ!?
こ、これはこの状況じゃなかったらめっちゃくちゃテンションが上がってた！　でも今も十分元気が出てくる!!
っていうか、ここでこの調子の木場やヒマリが来たってことはそういうことだ。
少なくとも、二か所はもう終わってるとみていいみたいだろ。たぶんD×Dのメンバーも無事みたいだな。
「部長、無事で何よりです」
「祐斗こそ。……どうやら、一皮むけたみたいね」
木場の様子をリアスも悟ったんだろう。そっと抱き寄せるとホッとした表情だ。

本当に、木場の表情はどこか吹っ切れた感じだな。最近グラムを使って無茶を考えてばかりな感じだったけど、その不安が無くなりそうな雰囲気だ。
あと、ヒマリとヒツギもちょっと様子が違うな。こっちはむしろ戸惑いがあるみたい……な？
「なぁ二人とも。何かあったのか？」
「あ～……。なんか疑似双子が疑似三つ子になった的……な？」
なんかヒツギがよく分からん返し方をしているんだが、どういうこった？
な、なんかよく分からん。分からんけど、とりあえずいいことが起きた感じだな。ならそれでいっか。
俺はそう納得すると、とりあえず周囲を確認する。
ここの戦いは俺たちの勝ちだ。ヒマリとヒツギがここにいるなら、当然孫悟空の爺さんたちもカズヒと一緒に勝った。そして木場がいるならこっちも勝ってるわけだ。
あとは九成達やサイラオーグさん達のいる所だな。俺達もすぐに行かないといけないだろう。
そう思っていると、足音が響いた。
「……何故だ、ストラーダ……っ」
テオドロ猊下が、涙をぼろぼろこぼしながら、悔しそうにストラーダ猊下に悲しそうな表情を向けていた。
正直、ちょっと心が痛む。
なにせストラーダ猊下から、この子が親御さんを悪魔に殺されているって聞かされているからな。
俺もレイナーレに殺された直後とかは、やっぱり堕天使のこと嫌いだったしなぁ。
でも俺の場合、朱乃さんが堕天使の血を引いていると言っても嫌いにはならなかった。アザゼル先生のことも、割とすぐに好きになれた。
でもこの子は違った。悪魔に親を殺されて、悪魔が嫌いなままなんだ。

そんな思いを抱いていると、レグレンツィ猊下は悔しそうにしながら俺達の方を向いた。
「悪い悪魔はいるのだ！　例え諸君らが良い悪魔であろうと！　見過ごしてはならない悪いものはいるのだ!!　それなのに……っ」
俺達は、この子に対して何か言えることがあるんだろうか。
そう、考えた時だった。
「レグレンツィ猊下。先に非礼をお詫びします」
……あ゛。
何時の間にか、レグレンツィ猊下の後ろに、カズヒが立っていた。
うん。これは説教タイムだ。
そう思った瞬間、レグレンツィ猊下の後頭部に鋭いチョップがぁぁぁぁぁぁっ!?
「んがっ!?」
割と鋭く、絶妙な加減がされた一撃だった。
思わず涙を別の意味で浮かべながら、レグレンツィ猊下はうずくまった。
そしてそのうえで、俺達が何か言うよりも早くカズヒは正面に回り込む。
膝をついて猊下に目線を合わせて、カズヒは不満げな様子でその顔を覗き込んだ。
「まったくもって見当違いで心外です。和平を結ぶ以上お互いに妥協と譲歩は必須ですが、あのお人よし平和主義な三大勢力の運営陣が、あからさまな悪党まで見過ごすとお思いですか？」
「う……うん？」
涙目で首をかしげるレグレンツィ猊下に、カズヒは苦笑すら浮かべていた。
「むしろ和平を結んだからこそ、裁ける悪もあるのです。……どうしてもどうしようもない悪業を彼らがなすのなら、その時は私が死んでも裁きます」
そう告げながら、カズヒはそっとレグレンツィ猊下を抱き寄せる。
「今よりもっと正義をなす。そう納得させれなかったことはお詫びし

ます。……必ず、貴方が「和平を結べたからこそよくなった」と思えるよう、私もこれまで以上に正義を奉じて邪悪を討つべく精進する所存です。なので、どうか見守っていてくださいませ」

……。

「あれ？　カズヒが鉄の女から肝っ玉母ちゃんぐらいにマイルドになってる？」

「イッセー。気持ちは痛いほどとても分かるけど、そこは置いておきなさい」

『『『

アザゼルＳｉｄｅ

……これは、間違いないな。
十中八九、いや、百中九十八九ぐらいで当たりだろう。
この仮説にのっとれば、この違和感も解きほぐせる。九条・梔子・張良。張越最良（チョウリョウ・エボリューション）なんていうだけのことはあるじゃねえか。
だが、そうなるとフロンズがどうするかが、すぐに読めるな。
実際、映像越しのフロンズはため息を追記ながら冷たい表情だ。
『アザゼル元総督。私はこれより、三大勢力側の全軍に後退指示を出すべきだと具申します』
ほらこうなる。
ま、フロンズの側からすりゃ当然だ。そういう判断になる結論が出てるしな。
ぶっちゃけ、俺達の方が神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）と戦う必要性は、ウルバヌスからすればないに等しい。
本来ならそうして欲しかったんだろうが、今の状況ならそうでもない。むしろ一歩引いて安全を確保しておいた方が都合いいだろうしな。ウルバヌスの奴、今頃理想以上の状況になったとか思ってるな。
それにフロンズの方も、そっちの方がいいと態度で見せつけてるしな。
『ウルバヌス二世の思惑通りに事が運んでも、正直に言えば我々にとって都合がいい側面もあります』
ほら言った。
まぁ、この状況下なら、わざわざ鉄火場に首をつっこむより共食いさせた方が都合がいいって感じだろう。
なんたって異形系国際テロリスト見本市だからな。巨大飛行船舶がゴロゴロ出てきている戦いに、参加しないで済むのならその方がいい。

それでいいと確信できているなら、尚更だ。
「そんな状況でわざわざ荒事をするより、離れたところで受け皿になるよう安全を確保しておいた方がいいってわけだ」
おそらくだが、ウルバヌスがフロンズを知っているならそういう方向に誘導もするだろう。
ウルバヌスからすれば、今更俺達が積極的に戦闘をしなくても問題ない。その必要がないぐらい、外敵が集まってるわけだしな。
むしろ俺達の安全が確保されることすら願うだろう。その方が、あいつにとっても都合がいい展開になるだろう。
まったく恐れ入ったもんだ。サーヴァントは本人そのものと言い難いところがあるが、そこまで考慮したうえでの策だなこりゃ。本人だと自認しているなら、流石にしない。
まったくもって恐れ入る。流石バチカンの綱紀粛正を成し遂げた傑物。十字軍遠征すら利用した、ある意味効果的すぎる策だとも。
……だからこそだ。
「大王派はそっちの方向で頼む。攻め手は俺達が担当するさ」
『……まぁ、そういうとは思っていました』
フロンズはそう言うと、軽く肩をすくめながら魔法陣を操作する。
『ノア、聞いてくれ。お前の違和感がどういうものか分かった。これ以上は大王派(我々)が戦う必要はない。大王派の全軍に後退命令を』
フロンズが指示を出す中、俺は俺でため息をつきながら通信を繋げようとする。
……まぁ、そうだろうと思ったが、通信妨害されてるな。
おそらく勢力圏内に通信を繋げない為の策だろう。突破するのは骨が折れそうだ。
なめんじゃねえよ、そっちとしてもD×D(俺達)から死者が出ない方がいいと思ってんだろ？　なら俺達が突破できる余地はあるはずだ。
俺がそっちの準備に取り掛かる中、フロンズは心底からげんなりとした様子で、ノアと通信を続けていた。
『……そういうことだ。大王派(我々)からすれば奴の望み通りになってくれた方が都合がいい』

そう返すフロンズの言い分は、大王派の観点で言えばまさにその通りだ。
『これ以上我々の戦力を無駄に減らすことはない。間引きは他の勢力が勝手にやってくれるのだから、その間に彼の狙い通りに投降する者達を受け入れる態勢を整えるべきだな』
まったくもって、お前ならそうするだろうよ。
だが、イッセー達はそうはいかねえ。
ウルバヌスは一発ぶん殴る。そのうえで、神聖糾弾同盟も助けるべきだと思うやつがゴロゴロ出るだろう。
だからこそ、ウルバヌスは通信を妨害することを選んだんだろう。そこまで考えたからこそのやり口だ。
何とかしのげよ、教え子共。これ以上、奴の思い通りにさせてやる義理はねえだろ。
……期待しているぜ、愛弟子諸君！

聖教震撼編　第四十五話　傾き始める趨勢

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

三つの奇跡が重なった直後、聖都守護連隊詰め所の戦闘は大きく事態が動いていた。
「……俺は、何を……？」
「何を呆けている！　このシャボン玉が、何かしたってのか!?」
「情けない！　神罰が下るまで我らの戦いは終わらんだろう!!」
力なく首を垂れる者達を苛立たし気に一瞥しながら、戦意を失わない者達が戦闘を続行する。
だがしかし、神聖糾弾同盟に起こったこの趨勢は非常に大きい。
神聖糾弾同盟が一時的に大きく崩れた。これが、戦闘の流れを大きく傾ける。
「好機！　反撃するぞっ!!」
サイラオーグはこのタイミングを逃さず、一斉に攻勢を仕掛ける。
同時に、禍の団も戦術的な判断を下していた。
「攻撃対象を神聖糾弾同盟に切り替えろ。まずは奴らを潰すぞ」
アルケードの指示に従い、禍の団もまた矛先を神聖糾弾同盟へと切り替える。
複数勢力が入り乱れる争いにおいて、最も避けなければならないことは挟み撃ちにされること。最優先の敵と共通認識されれば、純粋に不利になるのは自明の理だ。
これまでは、三大勢力側は双方から戦力を注力されていた。だが同時に、アルケードとゴドフロワが能力的にかみ合わなかったことで、三つ巴の状態がギリギリで維持されていた。
だが、ここに来て最も強大な戦力が一気に崩れたことで、三つ巴の

戦いにおいて優先する相手が変わった。
結論として、神聖糾弾同盟は呑み込まれるように猛攻に削られていく。
そして更に状況は傾いていく。
「おやおや。そそりそうな相手が何人もいるようですね？」
「いやっほぉおおおっぅ!! 俺っち達も混ぜてくれやぁっ!!」
「溜まった鬱憤を晴らさせてもらうわ！ お姉さんはりきっちゃう!!」
勢いよく突貫するは、かつて禍の団に属していた者達。
挟撃の形になり、更に神聖糾弾同盟は崩れ始めていく。
「リーダー達も無事で何より。うちの馬鹿孫はどうだったかねぃ？」
「だいぶ助かったっす！ んじゃ、こっちも死人が出ないように押さえますか!!」
更に孫悟空やジョーカーまで算入されたことで、趨勢は一気に決したと言ってもいい。
この情勢下において、ゴドフロワの判断は素早かった。
「……聖下のご指示に従い、各自指示通りに動け!! 遺憾ながら、この地点を放棄する!!」
『『『

和地Ｓｉｄｅ

サーヴァント二騎がかりを捌くのは、はっきり言って困難だと言ってもいい。
当然だろう。サーヴァントというのは人間の最高峰が、祈りによって昇華された存在。クラスに合わせた分割再現とはいえ、そのポテンシャルは間違いなく絶大だ。
だが同時に、敵にサーヴァントがいるのなら対策は必須だった。
だからこそ、俺はパラディンドッグの方向性として一つは対英霊に特化したものを確立することを決めていた。
そう、それこそがこの形態。
「英霊終焉の魔将剣（ソード・オブ・エンドマーク）。ぶっつけ本番だが効果抜群でよかったよ！」
アルケードとかミザリ直轄の精鋭を相手にする前から、使う羽目になってるのは幸か不幸かだがな!!
放たれる天草四郎の様々な現象を切り払いながら、俺は自分の禁手に自画自賛していた。
「対サーヴァント特攻の魔剣を創造する……っ！　とんでもない禁手に至ったものだね!!」
「宝具に換算すればＤ＋＋ランク相当か。なるほど、これが和平に導いた若き俊英の力となるのか」
しのぐウルバヌスと天草四郎は、そう言いながらもどこか嬉しそうだ。
戦闘狂の類ではないはずだが。この期に及んでこの反応は、本当に不安を生んでくれるもんだ。
魔剣を構えながら、俺は油断しないように気を付けながら対応する。
英霊終焉の魔将剣は、対英霊に禁手のリソースを注ぎ切った特化型

の禁手だ。
サーヴァント相手に限って言えば絶大だが、裏を返せばそこ止まり。サーヴァントが起こす現象にも特攻が入るとはいえ、魔剣創造のリソースを対サーヴァントに特化させただけ。限界は普通にある。
武闘派というほどでもないからこそ、二騎係でもこうして足止めができている。だが、現状ではこの程度が限界ということでもある。
……そして何より、この期に及んで二人からは本気の殺意を感じない。
俺達を好き好んで殺すつもりがない。むしろデュナミス聖騎士団からすれば、死んでほしくないとすら思っている節がある。
なんだ？　いったい何を考えているんだ？
寒気すら覚える中、しかし俺は油断だけはしないように迎撃する。
何もこの戦いで、俺が二人を倒す必要はない。
俺がやるべきことを忘れるな。必須なのは足止めであり、禁手が持続できる時間まで徹底的に足止めすることだけだ。
いい機会ではある。持ち直せ、リュシオン・オクトーバー。
あんたほんと、ルーシア・オクトーバー（可愛い後輩）をへこませた分、ちゃんと成長してもらわないと俺もキレるんだよ！

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

リュシオン・オクトーバーは、足元が突然崩れ落ちたような心境に陥っていた。
自分が生まれついて優れた異能を与えられた自覚はある。神滅具（ロンギヌス）というものがどれだけ強大であるかなど、座学で当たり前に学ぶ知識

だ。唯一無二の異能を持っている自分が、強力な力を持っていないなどと思っているわけではない。
だが同時に、自分にできることは自分と同じ異能を持っていれば誰でもできるという確信があった。
人間は過剰な成長を遂げる必要はない。少しずつ確実に、誰でもできる程度の成長で到達できる場所がある。皆がそうあれば、確実に人類は成長することができると思っていた。
そういった生き方を実践してきたと心から思っていた。自分と同じことは、コツさえ掴めば誰でもできると確信すら覚えていた。
座学の成績が上の下程度だった。それも、毎日予習復習を繰り返しつつ、効率的な方法というコツを教えてもらったからだと思っている。それもあったのだろう。
体術に関してもだ。周りからは超絶技巧だと言われているが、心構えの問題だとばかり思っていた。命がけの戦いをしているのだから、失敗したら死ぬのは当然であり、だからこそ練習でできた通りのことをし、戦場で刷新し続ければいいだけだと。
禁手の到達や、その逆を可能とできたのも心構えの問題だ。少なくとも一度到達できるだけの意志に至ったのだ。なら後でまた至り直すことも、逆の意志に至ることでかき消すこともできるだろう。そうずっと思い込んでいた。
昔から、コツを掴むことは得意だった。人がコツの問題だということを、実際に説明から把握して掴み取るのが得意だった。最も、そこまでやって成績は上の下から上の中程度。学校そのものが名門校でないことから、自分がずば抜けて特別などと思っていなかった。
そう、彼がこの精神性を確立するのに、特別な理由といえるものは欠片もない。
ただ自然に生まれ、自然に成長し、不自然に歪まない精神的強さを確立した。言葉にすればたったそれだけで、彼がこの精神性を確立するのに、何か特別な出来事があったわけでは断じてない。
強いて言うなれば、この精神性が常人のそれではないと、彼が納得できる形で突き付けられたことが欠片もないだけ。自覚する契機が

なかった程度で、それぐらいしか彼の精神性に大きな影響を与える出来事は一つもない。
それこそが、リュシオン・オクトーバーの真実。
正真正銘先天的（ナチュラルボーン）な、悟りの如き精神性を持った傑物。生まれつき、悟りの域に達した精神性と、常に少しずつ成長し続けられる方向性を確立した人間。リュシオン・オクトーバーとはただそれだけの人間だ。
ウルバヌス二世をして「主が作りたかった人間」と称すほどの傑物。そんな傑物は、正真正銘の自然発生だからこそ。奇跡の産物として、この世に生を受けていた。
だからこそ、リュシオンはそこに対する自覚が足りなかった。
傑物の根幹たる精神性を、神器神滅具候補という強さが被さって隠していた。なまじ新たなる神滅具という力は強大であるため、それが目くらましになっていた。何よりリュシオンにとって、物理的に強大な力があるがゆえに、当たり前に思っている精神性との兼ね合いが悪かった。
都合の良い言い訳があると、本質から目を背けてしまうのは人の業だろう。何より自分の精神性を異質だと思ってもいなかったリュシオンは、自分の精神性が異質だと考えるより、神滅具という分かりやすい力が邪魔になっていると考えてしまっていた。
……そして、周囲の環境は彼の精神性に影響しないが、彼の無自覚には影響していただろう。
ルーシア・オクトーバーはまごうことなく秀でた少女だ。何事においても優等生で、精神的にも良識的で善良だった。いわゆる模範生と言ってもよく、倣うべき者が目の前にいるのなら、当然の如く倣っていく。
デュナミス聖騎士団もそうだろう。少なくとも表向きの態度が敬虔な信徒で、自主鍛錬を欠かさず己を磨き続けることができる、星辰奏者の精鋭部隊。心技体が揃っている者が主体となっている以上、彼らはリュシオンを倣おうとする。
どうしても近しく考えてしまう肉親と、共に並び立ち切磋琢磨する

同胞達。そんな彼らが尽く自己研鑽を志しているのなら、当然だが環境から違和感を感じるのも難しいだろう。
何故なら彼らもまた、自分ほどではないができているのだ。自分と自分の周囲がどちらもそうなら、できることが当然だと考えてしまうのが人間の悪癖だ。
良くも悪くも周囲の環境に影響を受けやすいのが人間。リュシオン自身の精神的資質は、環境に左右されない者だったがそれ以外は影響を受けた。人間関係に恵まれたことが、彼に「できないことが普通」などと考えにくくしていたのだ。
そして、そのツケをリュシオンは今支払っている。
視界の端にいる、半狂乱になっているルーシアの姿。
目に焼き付いたその姿が、リュシオンから立ち上がることを奪っていた。
ここで立ち上がれば、自分が当たり前に前に進めば、妹はどうなる？
今まさに、自分と兄の違いを物理的に示されて。そのうえで当たり前のように前に進む兄を見て、妹はどうなるのか。果たして、何か決定的な一撃を受けることになるのではないだろうか。
それが、リュシオン・オクトーバーに初めて前に進むことを躊躇わせていた。
自分は人よりコツを掴むのが上手い。だからこそ、それを前に進み実践することで、誰もが後に続けるようにする。神滅具という突拍子もない力以上に、そんな誰もが本来できると思っていたことこそが、自分の本質だと思っていた。
だからこそ、リュシオン・オクトーバーにとってこれは初めての窮地だ。
神滅具や星辰奏者といった資質ではなく、精神性が隔絶している。それはそれを「誰もが当たり前に持っているはずの美徳」として、自分自身の価値の根幹としていた彼にとっての大きな衝撃だ。
だからこそ、リュシオンは動けない。
精神的な動揺以上に、ここで妹や仲間達の前でそれを成すことが選

べない。
「……俺、は……っ」
体に力を入れるが、それが動きとして出力されない。
人生において初めてといえるこの事態に、リュシオンは何もできない。
そんな彼の視界に、影が差した。
「……大丈夫か、リュシオンよ」
「団、長……」
顔を何とか上げ、ストラスを見る。
そして彼はそれに気づいた。
気づかわし気に自分を見るストラスの、その後ろ。
その空間が、今大きく歪み――

「天衛せよ、我が守護星――鋼の笑顔（誓い）で涙を変えろっ!!」
「我、目覚めるは――王の真理を天に掲げし、赤龍帝なりっ!!」

空間を破り、銀弾と真紅を筆頭とした更なる増援を来訪させた。

聖教震撼編　第四十六話　再開

イッセーＳｉｄｅ

「よっしゃっ！　突入成功!!」
俺がちょっとガッツポーズをしていると、カズヒも周囲を確認して少し拳を握り締めていた。
「Ｄ×Ｄ（こっち）はとりあえず無事ね！　とはいえ、被害者も多いようだけれど」
ああ。周囲を見れば大体分かる。
デュナミス聖騎士団の殆どが鎖に絡め取られているし、そのすぐ近くには燃え尽きて灰になっている何かがある。
たぶん、騎士団の者達だ。相当被害が出ているみたいだぞ。
「カズヒねぇ！　イッセー！」
九成も九成で、対サーヴァント用の禁手で戦ってるし。
畜生！　ここが一番被害がデカくないか？　やってくれるぜウルバヌス二世。
「お初にお目にかかります、ウルバヌス二世元教皇聖下。……とりあえず、殴り倒していいですか？」
カズヒも割とキているな。すぐに戦意が燃え盛っている。
ただ、ウルバヌス二世ともう一人、そして二人が連れている神聖糾弾同盟は平然とした態度だ。
カズヒの怒気を浴びてこれとか、腹をくくってるなり度胸がありなりってわけだろうな。こりゃ厄介だ。
「安心してくれたまえ。焼け死んだ者達は信徒として不適格な者達であり、今後の教会には不要な存在だ」
ウルバヌス二世はそう嘯く。
どうも本気で言ってるな、対心宝具でも使ったのか？

こりゃ、俺達も喰らわないように気を付けないとな。
状況はまだまだ悪いと言っていいし、九成も俺達が来て浮かんだ喜びをすぐに引っ込めている。
こりゃ、こいつら全員強敵だと考えた方が―
「二人とも気をつけろ！　……あの野郎ども、聖書の神が死んでいることを大前提に今回の一件を起こしやがった!!」
―と思った時、九成がそんなことを言ってきた。
「はぁあああああっ!?」
俺もカズヒも大絶叫だよ。思わず思いっきり声を上げたよ。
いやいやおかしいだろ。何もかもがおかしいだろ。
なんで聖書の神が死んでいるって大前提で、聖書の神様に裁きを下したもらおうなんて感じで扇動するのさ！　何もかもがおかしいだろ。
カズヒも割と本気で面食らっている。思わず九成とウルバヌスを交互に見ているぐらいだ。
おいおい勘弁してくれよ。いろんな意味でヤバいって。
「こっちはこっちで大変だってのに、余計なことまで増えやがった!?」
もう絶叫するしかないって。
たださえ、こっちはこっちで大変だってのに。更にとんでもない情報までぶっこまれたよ畜生が！
ええい、こういう時は一つずつ解決だ。地道に頑張っていこう、うん。
「九成、ちょっと休憩しとけ！　お前は禁手、一旦インターバル挟めるぐらいになってるだろ!?」
成り立ての俺よりも禁手の持続時間は薄いのが九成だ。だけどできる範囲内できっちりやるのは得意だからな。既に禁手を一時中断しても、時間が余ってるなら再使用ができるようになってる。
ならとりあえず、俺が時間を稼いでいる間に一つ終わらせとこう。
「そうね。正直今の流れで突入すると、和地も鶴羽もそれどころじゃなくなりそうだし」
うんうんとカズヒは頷くけど、俺はツッコミを入れることにする。

「いや、お前もそっちだからね？」
「なんで!?」
いや、なんではこっちのセリフだよ。
「むしろもっと時間かけとけよ。それぐらいの時間は稼ぐって」
なんかとんとん拍子に話を進めてる感じだけどさ？　カズヒだってもっと時間をかけるべきだろ。間違いなく大事だって。
っていうかさ？
「南空さん、絶対パニック状態になるぜ？　九成だって困惑するだろ」
「……それもそうね」
だろ？
フォロー役は必須だって。ある意味お前がしでかしたんだし、それぐらいの責任は取らないとさ？
と、いうわけで―
「ちょっと時間稼ぎに付き合ってもらうぜ、六聖英霊!!」
―親子の再会ぐらい、長めに時間を作ってやるさ!!

和地Ｓｉｄｅ

え、ちょっと待て。
とりあえずインターバルを挟んでみたけど、なんで俺が今休憩する必要があるんだろうか。
あと鶴羽が訳の分からないことになること前提か。凄く納得できるけど、そういう事態が起きるってのもヤバいよな、うん。
「あのねぇ……。私ってそんなにリアクション芸人同然だとと思ってるわけ？」

凄く不満げな鶴羽だけど、それに関しては反論ができないだろ。
俺もフォローできないよ。お前はリアクション担当だ。ツッコミ入れられたくないので視線もそらしたくなる。
つっても、この状況下でそれどころじゃなくなるって何が起きるんだよ。イッセーがフォローに回る辺り、おっぱい関連でもなさそうだし。
他に突入したのは数人程度だけど、その中にこっちが混乱すること確定なのがいるってことか？
えっと、こっちに近づいてきているのは誰だろうか。……リーネスはいるな。
あともう一人、白髪のふんわりとした長髪の女の子が……ん？
どこかで見たことないだろうか。あとリーネスの雰囲気が、どことなくその女の子に対して思慕というか親愛って感じが見え隠れしているんだけど。
俺は周囲を確認すると、大半のメンバーは「誰だろう？」って顔だ。ロスヴァイセさんやギャスパー、あとルーシアが「どこかで見たような」って感じで俺と同じ。
で、鶴羽の方を見ると―
「……嘘……でしょ？」
―唖然、そういうほかなかった。
だがすぐに、喜びの色が混じり、涙まで浮かべ出す。
その表情が崩れる頃には、彼女はリーネスを連れて俺と鶴羽の目の前まで来ていた。
戸惑いながら、だけど確信をもって彼女は俺達に微笑んだ。
「久しぶり、七緒」
そう鶴羽に呼びかけ、そして俺に複雑な感情が混ざった笑顔を向ける。
「……立派で、いい子に育ったね……田知」
その言葉に、俺の思考がカチリとはまった。
え、まさか、そうなのか？
いや、でも髪の色が違うだけだ。それ以外は全部同じだ。

いや待て。ならヒマリとヒツギはどうなった？　あいつら大丈夫なのか？
っていうか、そもそもどうなっている？　何が何だか分からない。どんな事態が起きれば、彼女がここに現れるんだ？
信じられない事態に、俺は珍しく非常時にも関わらず何もできない。ただ、彼女と周囲を何度も見返してしまっている。
「え……？　本当に……？」
涙をこぼしながらも、鶴羽は信じられないようにリーネスやカズヒねぇの方を見る。
そしてリーネスは涙ぐみながら、カズヒねぇは少し苦笑しながら。だけどしっかり頷いた。
「本当よぉ。……本当に……乙女……みたいなのぉ」
「詳しい説明はちょっと後でね？　ただ、ヒツギもヒマリもちゃんと無事だから、その辺も含めて安心して」
その言葉に、鶴羽は彼女を見て、勢いよく抱き着いた。
「……乙女ぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」
「……もぅ。あれから十年以上経つのに、七緒はやっぱり七緒だなぁ」
彼女はそう苦笑するが、鶴羽はそんなことを気にしている余裕もなく泣きじゃくる。
「だって……パパもっママもぉ……乙女に……酷い事ばっかりっ!!」
堪え切れずに涙をぼろぼろこぼす鶴羽を、彼女はあやすように抱きしめてなでる。
「うん。でも七緒はいい子だもの。大事で大好きな、幼馴染……ううん」
少し言葉を言い換え、そして彼女は静かに微笑んだ。
「田知と一緒に頑張ってきた、七緒を嫌いになんてならないよ。むしろほら、お義母さん……七緒や日美子のお義母さんなのか、私……」
思いっきりマジ顔で戦慄してるよ。
それに対して鶴羽もちょっと固まっていたけど、すぐに元通りになってぎゅっと抱きしめながら泣き直す。
「乙女は本当に乙女なんだから……ぅぅ～っ!!」

え、えっと……その……。
俺は何というか、凄く困惑しながらカズヒねぇとリーネスの方を向いた。
「え、これどういうこと？　マジで、マジでその……？」
俺が何というか言葉を継げないでいると、カズヒねぇはしっかりと頷いた。
「色々あってね。まぁ、説明はちゃんとするから安心して？」
「仮説はきちんと立てれているから……あとは確認をしたらねぇ？」
補足するリーネスの目元も赤くなっており、結構泣いていたらしい。
いや、ちょっと真剣に困惑ものなんだけど。
俺がどうしたらいいのか分からないでいると、ふと足音が近くに響いた。
振り返ると、凄く戸惑っている表情の彼女が、鶴羽に押されて俺のすぐ近くに押しやられている。
「え、えっと鶴羽？　その……えっと……どうしたら？」
「いいから。私はもうあとでいいから」
そう鶴羽は押しやるように、彼女を俺に押し付ける。
……えっと、これどうしたら？
俺は思わず、助けを求めるようにカズヒねぇとリーネスの方を向く。
ただカズヒねぇは、力強く頷いていた。
「困惑するのは当然ね。でも、彼女はまず間違いなく本物よ」
その言葉に、俺は戸惑いながら顔を彼女に向ける。
彼女もまた戸惑っているが、俺より早く腹をくくったらしい。
……そっと、俺は抱きしめられた。
「もう十七年以上経ってるんだよね。全然会ってないし、育ててなんてないし、そもそもどんな顔をしていいのかも分からない」
そう告げながらも、彼女は俺のことを抱きしめる。
そっと、でも力強く。俺の感触を体に刻み込むように。
「でも、これだけは言わせて」

暖かい抱擁と共に、彼女は俺に幸せそうな笑顔を向けてくれる。
「立派に育ってくれて、日美子を導いてくれて……お母さんは本当に、ありがとうって思ってるよ」
そしてそっと、俺の頬に右手を触れる。
その感触が、まるで感謝と慈愛を流し込まれてるかのように錯覚する。
そして彼女は……道間乙女は……いや―
「ありがとう、田知。素敵な男の子に育ってくれて」
―お袋は、俺を見て心から微笑んでくれた。
その時、俺は今が非常時だということを一瞬だが本当に忘れていた。
混乱もある。
驚愕もある。
戸惑いだらけでもある。
だが、その全てを俺は一瞬完全に忘却していた。
その性質上、彼女とは二度と会えないと確信していた。例え死んで死後世界に行くことがあっても、彼女と再会することは理論的に不可能だ。そう、事情を知った時点で悟っていた。
それがこんな形で実現している。そしてこれがどんな形なのか、俺は本当の意味でまだ理解できていない。
だが、今一瞬だけはすべてがお袋に向いていて。
「……う……ぁ……っ」
俺は思わず崩れ落ち、涙をポロポロとこぼしていた。
そんな俺を、お袋は抱き留める。
見れば、お袋も少し涙ぐんでいた。
「私もあの人も、いろんな意味でダメだったけど。立派な両親のところに生まれ直して育ててもらって……日美子の笑顔に誓って生きて……こんな立派な男の子になったんだね」
その言葉に、俺は何かを返すべきだと思いながらも返す余裕がなくなっていた。
「こんなに立派に育ってくれて。日美子を……七緒を……受け止めて

くれて、ありがとう」
その言葉に、俺の中の何かがすとんと落ちてはまるのを感じた。
心のどこかで、真実を知ってから思うことがあったんかもしれない。
それはそもそも不可能で、だからあまりに極小だった。だからそもそもいつかは収まるだろうし、そもそもある意味で整理もできてはいた。
でも、整理ができていたからといって、こんな奇跡を前に何も感じないほど捨て去れるわけじゃない。
だからこそ、今だけはイッセーに心から甘えられるだろう。
「会いたかったよ、お袋」
俺は彼女を、道間乙女を、お袋を。

―そっと、ぎゅっと、抱きしめた。

カズヒＳｉｄｅ

「願いは叶った……って、言うべきかしらね」
私はその光景に、感慨深いものを感じていた。
私が壊し、だけど私を治してくれた乙女ねぇ。そしてそこから墜ちる所を引き上げ、共に誓いを成し遂げてきた和地。
二人の再会を、私は叶わないとは思いつつもどこかで願ってしまっていた。

不可能だと思っていた。その形の選択は、きっとヒツギとヒマリの否定に繋がる。そもそもそんな奇跡が起こったとして、乙女ねぇが私と和地を祝福できるなんて思わなかった。

だけど、神曲・神聖喜劇（ラ・ディヴィナ・コムメディア）と神曲・淑女再開（ベアトリーチェ・エンピレオ）の二重発動により、私はそれを克服できた。

私が乙女ねぇに許されないことをしたし、その罪を私が生涯許しはしないことも変わらない。そして同時に、それは乙女ねぇが私を許さないことを意味しない。その事実を、私は認めることができた。

そしていくつものバグが絡み合い、乙女ねぇはここに姿を現すことができた。

ああ、願いは叶った。叶えることを、私自身が許すことができた。

罪は消えないし、私は許さない。

生涯背負うべき業というものがあるし、私はそれをもってして前に進む人種だ。そんな人種が背負うことすら忘れれば、それはきっと決定的な暴走を生むだろう。自覚と自責を忘れないことこそが、極まった光が自分を戒める数少ない手段なのだから。

だが同時に、極まった光以外にそれを求めないことも重要だ。

だからこの光景を心から祝福できる。

さて、私はそろそろ援護した方がいいでしょう。

親子水入らずの時間を、私も少しは支え―

「っていうか何してんのよ」

―ようと思ったその時、私は後ろから鶴羽に羽交い絞めにされていた。

「……馬鹿な!?　私があっさり後ろをとられた!?」

「ふっふっふ。リーネスの協力で、私は望月千代女のシノビとしての力量も使えるのよ！」

得意げに言われたけどそうだった！

並列運用は固有結界を展開しないと厳しいところがあるけれど、鶴羽の手札は実は増えている。

アントニン・ドヴォルザークを組み込んでいるからアントニオン・ノワールも使えるし、一応望月千代女も使えるんだった。殺意や敵意

がないならこういうこともできるということか。
恐るべし歩き巫女！　鶴羽にここまでの奇襲スキルを獲得させるなんて！
あ、ちょっと締め技じみた力の入り方してるわね
「……滅茶苦茶失礼なこと思ったわね？」
「……ノーコメントにさせてもらうわ。っていうかちょっと離してくれない？」
一応、今まだ非常時だからね？　できるだけ戦力は投入するべきなのよ？
ルーシア含めてかなりの人数が鎖に押さえつけられている形だし、リュシオンに至っては精神的に追い詰められている形だ。
あのリュシオンが精神的にというのが凄まじい。どういう方法で無力化したのか分からないけれど、誰がやったのかはともかく間違いなく凄まじい難行を成し遂げている。敵にも凄まじい傑物がいることを大前提とするべきね。
そういうわけだから、乙女ねぇと和地の再会に時間を割きたいわけで。とにかく戦力を増やさないといけないわけなんだけど。
「そういうのは、イッセー達が頑張ってくれるから任せましょぉ？」
「リーネスまで!?」
リーネスまで回り込むと、そのまま私をぐいぐい押し込んでくる。
「でかしたリーネス！　よっしこのままこのまま！」
親友が！　親友のごり押しが!!
「そぉ……れぇっ！」
抱き着く勢いで私を押し付けたし！
あと和地がサンドイッチになってるから！　どういうサンドイッチよ！
「あ、あのねぇ二人とも！　非常時なんだから和地達の分も私が頑張らないと―」
「任せろ稼ぐ!!」
イッセーちょっと黙りなさい！
「……おぉう。何このサンドイッチ。天国？　やっほうっ！」

「和地ボケないでくれない？」
いつものことだけれど、何故和地はこういう時ボケるのかしらね。
私はとにかく助けを求める為にも乙女ねぇに視線を向ける。
「……ふふっ」
あ、駄目だこれ、
乙女ねぇまで笑顔を浮かべて、私の頭に手を差し伸べる。
……あの、私人生の総計三十年以上あるのだけれど。
地味に気恥ずかしいというか、ＴＰＯとかそういうの的に、その……。
「……あ」
私はその時、自分が涙をこぼしていることを自覚した。
ダメだな、これは。
覚醒していいことではないし、意志の力で無理を通さずに即座に戦闘を行う余裕がない。
だからこそ、だ。
「御免イッセー。五分頂戴」
「十分以上稼いでやるさ！」
そういうところは素直に美徳よね、本当に。
「……う……あ……っ」
私は少しだけだが、涙をこぼす。
女が泣いたら泣かした奴が問答無用で悪いなど、そこに至る理由を配慮しない馬鹿の戯言だ。泣けばすべてが解決するような理屈や風潮も、問題があると思っている。
だけど、泣きたい時に涙を流すことを全否定する気もない。
……この涙は、意味を変えなくてもいい涙だと、私は信じたい。

聖教震撼編　第四十七話　激戦の外側で

イッセーＳｉｄｅ

六聖英霊は確か、半分ぐらいやられてたはずだ。
曹操と俺が倒したクリストファー・コロンブス。カズヒが返り討ちにしたハインリヒ・クラマー。木場が夢幻召喚（インクルード）で撃破した、聖処女（ラ・ピュセル）ジャンヌ。
残ってるのはサイラオーグさん達を苦戦させたゴドフロワ・ブイヨンと、目の前にいるウルバヌス二世に天草四郎時貞だ。
しかもこの二人と並び立っている連中が、聖書の神の死を確信してたって？
なんで聖書の神様が死んでるって思っていて、「聖書の神様に裁いてもらう」なんて組織を作るんだよ。
いや、そういうのを考えても意味がない。俺は馬鹿なんだし、こんな時にそんなことを考えている暇もない。
今やるべきことは、九成やカズヒが道間乙女と再会する時間を稼ぐことだ。
『そういうところですね、イッセー！』
よく分からないけどありがとうシャルロット！
「下馬評通りの少年だな。問題点が無視しきれないが、基本は善良な好青年だろう」
俺の観察しながら、ウルバヌス二世はそんなことを言ってくる。
このおっさん、いったい何を考えてるんだ？
俺に対しても何か期待している風に見えるし、なんていうか嫌な予感を覚えちまう。
「転生悪魔であるにも関わらず、聖書の神の意志が害をもたらさなかったのも頷ける。そのまま成長してくれれば、いずれ教会にとって

も素直に受け入れられる英雄になるだろう」
「そうですね。我らが主は裁く時は徹底しますが、許すことも尊びますから」
ウルバヌスと天草四郎はそう言いながら、俺の攻撃をしのいでいく。
うん。この二人は強さだけで言うなら、六聖英霊でも低い方だな。
なら押し切れる。いや、押し切って見せる。
カズヒや九成の為に時間を稼ぐ。でも倒せるなら、ぶっ倒した方がいい相手だしな。
デュリオが作ったシャボン玉のおかげで、神聖糾弾同盟から投降者が相次いで出ている。他の連中も一か所に集まっての籠城戦に近い形だ。たぶんだけど、曹操がコロンブスを利用して二重で発動した覇輝も影響してるだろう。
あとは筆頭の六聖英霊、更に頭を押さえれば一気に傾く。神聖糾弾同盟を無力化すれば、禍の団やサウザンドフォースも形勢不利で引きそうだしな。変態達は……そのあと考えよう！
だからこそ、ここで一気にケリをつける！
「……四郎、被害はどれほど出ているかね？」
「六聖英霊は僕らとゴドフロワ以外は討たれました。そう死者数はそろそろ一割といったところです」
俺の攻撃をしのぎながら、二人はまるで他人事のように味方の被害について話し出している。
いや、なんか違うな。むしろ逆だ。
まるで被害がたくさん出てきてほしいような言い回しだ。死者の数や倒された六聖英霊が多い方がいいみたいだな。
なんなんだ？　なんか、滅茶苦茶不吉だ。
「……もう少し粘るとしよう。私や君を足すまでにもう少し欲しい」
「そうですね。決戦英霊の質に関ります」
嫌な予感しか増さないことを言い合いやがって。
「……これ以上、俺達からもあんた達からも死者なんて出してたまるかよ!!」

俺は拳を握り締めると、真正面から殴り掛かる。
色々細工したりしてるようだけど、地力に限っちゃこっちが上だ。小細工なしでぶっ飛ばすのが一番だろう。俺向きってわけだ。
だからこそ、ここで一気に叩き潰す!!
だけど、ウルバヌス二世はそれに対して挑発的な笑顔を浮かべてきた。
「なるほど。ではこちらも本気で抵抗しよう」
『『『

振り下ろす。
受け止めた俺は、明らかにあいつの体格では想像もできない重さに膝をつきそうになる。
いや、これ重力操作的な奴喰らってるだろ。絶対おかしいって！
「お前……これ、禁手にしたって幽世の聖杯じゃねえだろ……っ！」
「あってるさ。まぁ、厳密には少し違うけどね」
じゃあなんだっていうんだ……っ
俺が食いしばって耐えていると、俺と一体化しているシャルロットが得心した感じで小さく頷いているのを感じた。
何か分かったのなら教えてくれ！
『おそらくですが、厳密にはこれができるように天草四郎を改変したのが禁手です』
……つまり、俺が悪魔の駒（イーヴィル・ピース）で悪魔に転生したみたいにあいつも人間以外の存在になったって感じなのか。
「ちなみに名称は現世の聖人（セフィロト・ミラクル）と名付けたよ。ほら、聖杯は普通に使うとリスクが大きすぎるから……ね！」
更に力を籠めやがったな!?
あ、これヤバいかも、時間を稼いでいる余裕が―

「そういう事なら！」
「お任せですわよ！」

―ないけどそこは大丈夫！
なんたって、俺は一人じゃないんでな！
「二人とも、頼む!!」

「「もちろん！」」
ああ、どうやら二人も入れたようで何よりだ。
そろそろ秘密兵器の時間だぜ？　ヒツギ、ヒマリ！

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「これは困ったわね」
「そうだな、部長」
リアス・グレモリーが額に手を当てると、隣のゼノヴィアもまた歯を食いしばっていた。
固有結界に取り込まれた和地達の援護を行う為、リーネスは一計を案じた。
それは固有結界を持っているカズヒに、道間乙女の莫大な魔力を流し込んだうえで発動し、リーネスが同調して固有結界に干渉するという離れ業。
何とか成功はしたようだが、全員は無理だったのだ。
「……だが、楔は打ち込めただろう」
同じく突入に失敗しながらも、ヴァスコ・ストラーダが二人を安心させるように告げる。
「これだけ長時間続いているのなら、戦況は膠着状態とみるべきだ。そこにあれだけの戦力を送れば、事態はこちら側に傾くだろう」
そう前置きし、ヴァスコ・ストラーダは微笑みすら浮かべる。
隣で同じように不安げな表情を浮かべているアーシアの頭をなでながら、彼は不安だけは浮かべていない。

「安堵せよとは言わぬが、仲間達を信頼したまえ若人よ」
「……ええ、それもそうね」
その言葉に、リアスは呼吸を入れて気を静める。
気合と根性で限界を超えた覚醒を遂げる怪物。悪祓銀弾（シルバーレット）、カズヒ・シチャースチエ。
できる範囲内なら必ず成し遂げるいぶし銀。涙換救済（タイタス・クロウ）、九成和地。
そして困難をいつだって乗り越えてきた、愛しき赤龍帝。おっぱいドラゴン、兵藤一誠。
オカルト研究部の最終兵器二名に、安定と信頼の和地が揃っている。更にデュナミス聖騎士団の誇る傑物、神の子（ディ・ア・ド・ロ・ロ・ーサ）に続く者ことリュシオン・オクトーバーまでいるのだ。
乗り越えられる可能性は十分すぎるほどある。ならば、信じるほかないだろう。
そう思ったその時、通信の魔法陣が展開された。
『……リアス、ウルバヌス二世と接触できたか!?』
「アザゼル？　いえ、イッセーやカズヒは送り込めたけれど……」
慌てた様子のアザゼルの声に、リアスはいぶかしげな表情を浮かべていた。
何より、自分の返答に歯を食いしばっている雰囲気なのが違和感を覚える。
まるで、イッセーとカズヒだけが入ってしまったことに不安を覚えている。そんな、違和感だらけの雰囲気だった。
彼とて二人が最終兵器レベルであることは分かっているはず。むしろ少しぐらい安心するべきだし、心配するにしても方向性が違うだろう。
だが、アザゼルは通信の向こうで手をどこかに叩きつけているようだ。
その反応に、リアスは寒気を覚えた。
何かを決定的に見間違えているような感覚。例えるなら、かつてソーナとのレーティングゲームでイッセーを強制退場に追い込まれた時のそれ。そんな不安を覚え始める。

「元総督殿。何か分かったのですかな？」
『その声はストラーダか。……ああ、フロンズ・フィーニクス達が最悪の仮説を立てやがった』
ストラーダに促され、アザゼルはそう答える。
そしてフロンズの名前が出てきたことで、リアスも本気で嫌な予感を覚えていた。
「聞かせて頂戴。フロンズは何に思い至ったの？」
そう促すリアスに、アザゼルはすぐには答えず―
『この騒動の真の目的だ。ウルバヌスの奴はおそらく……』
その仮説を聞き、リアスもストラーダも、奥歯を砕きかねないほどに噛み締めるほどの衝撃を受けた。

聖教震撼編　第四十八話

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

少し状況が読めない展開が続いていたが、リュシオンもストラスも気を取り直していた。
「……うむっ！　事情は詳しく知らぬが、生き別れの親子や親友同士の再会のようだ！　主よ、この奇跡に祝福あれぇっ!!」
厳密には、ストラスはシームレスにその光景がどういうことかを悟り、感動の涙を流していた。
涙ぐみながら祈りを捧げるストラスだが、すぐに我に返ると涙をぬぐいながらリュシオンに振り替える
こういうところは指揮官向きではないが、しかしこの人柄があるからこそデュナミス聖騎士団はまとまりを見せていた。
人柄で優秀な者達を惹きつけ、彼らの支えを借りて問題を解決していく。腹芸は苦手だが支えてくれる者達と共に乗り越える、そんな好漢が上司であることをリュシオンも誇っていた。
だからこそ、自分の不甲斐なさに俯きたくなる。
「申し訳ありません、団長。今俺が、動くわけには―」
「それは違うぞ、リュシオン」
言いかけた言葉を、ストラスは否定する。
そのごつごつとした手で、リュシオンの肩を掴むと軽くゆする。
励ますようにゆすったうえで、ストラスは真っ直ぐにリュシオンの目を見る。
その裏のない目を、リュシオンは逸らさない。
「はき違えてはならぬぞ、リュシオン」
その真っ直ぐな目で、ストラスはリュシオンを貫くように見据えていた。

「我らデュナミス聖騎士団の在り方を忘れるな。お前の理念が成立しないことと、今お前がここでするべきことは別の問題である」
ストラスはそういったうえで、同時に少し不機嫌な様子を見せていた。
「それに、お主の当然の歩みが我らの全力疾走だとして、それがどうしたというのだ？」
「……いえ、それはかなり問題では？」
思わずそう返すが、ストラスは分かってないかのように首を傾げていた。
「ん？　おぬしとて止まることを知らぬわけではあるまい？　引き離してしまったのなら、追いつくまで待てばよいではないか」
その言葉の意味を、リュシオンは理解できないでいた。
「……ああなるほど。ストラス騎士団長？　リュシオンの奴、どうも言っていることを全く理解できてないようですよ？」
その言葉に二人して振り返れば、そこには目元を赤くしていたカズヒがいた。
そして盛大にため息をつくと、カズヒは屈み込んでリュシオンに視線を合わせる。
そのうえで盛大に、改めてため息をついた。
「……えっと、そんなに呆れられることをしたのかな？」
「してないというかしたことがないのが問題なのよ」
バッサリと言い切ると、カズヒは少し肩をすくめていた。
「……貴方は今、自分が人と違うことを漸く理解したわ。そして問題はそこからなのよ」
そう真っ直ぐに見据えるカズヒに、リュシオンは彼女が誰なのかを一瞬困惑してしまった。
何か雰囲気が違うと思い、同時に自分はそもそも人を見ていたのかも不安になる。
「間違えたと思っているのなら、なら自分にできる範囲でどうすればいいかを考えるべきよ。すべきことをできる範囲でしたいことから選んでいく。人間なんて、真っ当に生きるとそれぐらいのベターが限

界なんだから」
そう言い切ると、彼女は立ち上がる。
「……私はなるべくそうして、それじゃどうしようもない時に自分にしかできないことをしていくわ。そのあと、みんなのところに戻るなり、追いついてくるのを待つだけよ」
その言葉を言い切り、彼女は一歩を踏み出した。
その先にいるのは、小さく微笑みながら彼女を待っている彼女の仲間達。
……その光景を見るリュシオンの右肩に、ストラスはそっと手を添える。
「彼女はいい仲間を、友を、連れ合いを持ったようだ。……そしてリュシオン。おぬしはどうするのだ？」
その言葉には、力強いものが込められる。
「吾輩が言うまでもなく、あの姿こそが答えであろう。……お主なら、もう答えは出ているのではないか？」
その言葉に、リュシオンは小さく息を吸う。
ああ。考えるまでもなく、あの背中こそが答えだろう。
自分は人とは違う。個人差という次元ではなく、ずば抜けてという言葉すら甘いほどに優れている。なまじ物理的な数値にし難い精神面故に、それに気づくのがあまりに遅れた。
だからこそ。自分が真っ先に得るべきことは―

アザゼルＳｉｄｅ

「……というのが、俺がフロンズや梔子と話し合って導き出した結論だ」

一通りの説明を負えるころには、通信を聞いている者達全員が顔色を悪くしていた。
まったくもってそうだろう。信徒達のクーデターを乗っ取られたストラーダからすれば憤りを覚えたくなるだろうし、リアスやゼノヴィアにとっても許せまい。
他の連中にも逐次伝えるが、大王派は既に戦線からの後退と、投降者の確保に移行している。
フロンズ達からすりゃぁ、これで自分達に被害者が出るのは避けたいわけだしな。禍の団とサウザンドフォースと大欲情教団が揃いも揃ってりゃ、ウルバヌスの目的には十分だ。
『なんという事を……っ！』
ストラーダの奴も、相当憤っているのがよく分かる。
当然だ。自分達のクーデターをあんなことの為に乗っ取り、死人が大量に出るように誘導してんだからな。
六聖英霊や神聖糾弾同盟のどの辺りまでがウルバヌスと通じているのかは分からん。だが、知っている奴は一握りの中の一握りだろう。
そしてその一握りには、ウルバヌス自ら「聖書の神は十中八九死んでいる」と伝えているはずだ。
ウルバヌス二世は聖書の神が生きているという前提で動いていない。むしろその逆、聖書の神が死んでいるという前提でここまでの事態を起こしたとみるべきだ。
出なければ、奴は目的を達成することなんてできやしねえ。生きている可能性が低いと見たからこそこんなことをしたんだ。恐ろしいことを考えるもんだぜ。
政治の怪物なだけある。どこまでも冷血だが、だからこそ効果的だ。
「……リアス。分っているさ」
俺はそう告げておく。
ああ、安心しとけ。それぐらいは分かってるからよ。
その意図もちゃんと理解しているリアスは、しっかりと頷いた。

『ええ。帰還なんてする気はないし、イッセー達も必ず固有結界をどうにかする』
小さくだが、確かに強いオーラが漏れている。
これはかなりキレてるな。
ああ、だからまぁあえて言うか。
「おそらくウルバヌスは本命の仕込みを、自分の死で起動するようにしているだろう。無力化してこっち引っ張ってこい！」
俺もできれば、文句の一つでも言ってやりたいんでな!!

イッセーＳｉｄｅ

「邪魔させませんわよぉおおおおっ！」
「っていうかリュシオンがやばい感じって、これマジで窮地じゃんか!?　うわ、助けに来て大正解だし!?」
ヒマリとヒツギの連携に助けられながら、俺達はウルバヌス達を抑え込んでいる。
っていうか、まだ本気で潰すつもりはなさそうだしな。
……本当に嫌な予感しかしない。ちょっと本気で勘弁してほしいんだけど？
「……なるほど。これが和平のきっかけを作った今代の赤龍帝か」
「スケベすぎるのが難点なようですが、最近は耐えているようですしね」
……こっちを探る感じなのが不気味だな。
なんていうか本当に不気味だけど、だからってこっちが気圧されているわけにはいかないはな。

ああ、カズヒや九成に時間を与えるつもりだったけど、そんな腹積もりでやってられることでもないか。
ここで叩き潰すつもりで、ぶっ飛ばす。
「出し惜しみなしでいくぜ、二人とも！」
「ラジャーですの！」
『ショットライザー』
『ＦＲＥＥ！』
ヒマリが俺に応えて、ショットライザーを装着する。
「なるほど、仮面ライダーラクシュミーとやら―」
そしてウルバヌスはそこまでは知っているようだ。
だけど、そこまでしか知らないんだろう？
「んじゃ、こっちも！」
『ショットライザー』
『ＦＲＥＥ！』
「なんだと？」
お、ウルバヌス二世が漸く目を見開いた。
ヒツギもショットライザーを装着したことにびっくりしてるな？
よし。少しはこれで一発かませたかもな？
「少しはこっちも、武装の新調とはするんだよねぇ？」
ヒツギはそうにやりと笑いながら、ショットライザーの引き金に指をかける。
『ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』
俺がカバーする為に前に出るけど、ウルバヌス達は警戒はするけど仕掛けてこない。
不気味だな。でも、油断はしてられない。
「……変身！」
だからこそ、ヒツギもヒマリも変身する。
『リベレイティングキャット！　Ｄｉｅ　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｅｎｅｍｉｙ　ｏｆ　ｈｕｍａｎ』
ヒマリが仮面ライダーラクシュミーになる隣で、ヒツギにもショットモデルが展開して、装甲を展開する。

『リベレイティングペレグリン！　Ｇｉｖｅ　ｕｐ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｒｏｓｅｒ』

仮面ライダーラクシュミーと並び立つ、ヒツギが変身する仮面ライダー。

リーネスがヒツギ用に開発してくれた、ヒマリとの連携戦闘に特化したリベレイティングペレグリンプログライズキーで変身する、ヒツギの新しい切り札。

そう、その名も―

「……仮面ライダーナジェージダ。ちょっくらド派手に参上じゃん？」

―さぁ、まだまだここからだぜっ!!

聖教震撼編　第四十九話

イッセーＳｉｄｅ

ここからは三人がかりだ……いくぜっ!!
「なるほど。ならこちらもギアを挙げるとするか」
そう苦笑したウルバヌスの気配が変わると、周囲の連中も気配が変わる。
っていうか、性能上がってないか!?
「乳と蜜がための十字遠征（クレルモン・バッテジモ）、出力最大といこうか」
なるほどな。それぐらいヤバいってことか。
なら、俺達も本気でいくぜ！
「皆、こっちも全力だ!!」
「オッケー！」
「ラジャー！」
ヒツギとヒマリが応えてくれるだけじゃない。
籠手からドライグとシャルロットも力を流して応えてくれる。
勝つぜ、俺達は。
「「『創生せよ、天に描いた双星を――――我らは双子の流れ星!!』」」
星を解放し、俺達は強化された戦士達とぶつかり合う。
シャルロットも俺から離れて、独自に鎧をつけての接近戦だ。だいぶ技術がついてきてることもあって、気配遮断を駆使して俺達を上手くカバーしてくれる。
俺とヒマリがオフェンスを行い、隙をつかれないようにシャルロットがカバー。そこに更に、ヒツギが全体を俯瞰するように攻撃を入れてくれる。
「……やばっ！　実戦で使って初めて分かる、レイダー以上の戦いやすさ！」

ちょっとテンションが上がり気味のヒツギは、実戦だとこれが初めての仮面ライダーだ。
あるテストもあって、ヒツギはショットライザーの運用を踏み切った。ＡＩチップこそリーネスが魔術で作ったけど、それはそれで怖いけどな。
だけどその性能はやっぱり優秀だ。リーネスの技術力が光ってるぜ！
『そうだな。個人差を理解して仕立てているようだしな』
ドライグも感心するぐらい、ナジェージダの動きがスムーズだ。
リベレイティングペレグリンプログライズキーは、ヒマリが変身するラクシュミーとの連携戦闘を前提に作られている。その際ヒマリとの性格の違いを含めて、ヒマリが基本的に使うリベレイティングキャットとボーイングイーグルを足して二で割った性能になっている。
勢いのあるヒマリが形態を使い分けて特化するなら、なんだかんだで落ち着きがあるヒツギは安定性を重視した立ち回りをするってわけだ。
そしてそれは上手くハマっている。
「おっと危ない！　あとそっち行ったよ！」
「お任せですわよぉっ!!」
ヒツギが全体を上手く動かしながら、ヒマリが突っ込んで敵を吹っ飛ばす。そして俺が手練れを中心に相手をしながら、隙をつこうとする相手をシャルロットが逆に奇襲する。
おかげで何とか戦えているな。もっとも、相手を倒しきれてないのがきついけど。
『まぁサーヴァントが二騎、それも片方が神滅具（ロンギヌス）じゃな。禁手にまで至っているのなら楽には勝てんさ』
ドライグのいう通りか。しかも連携はしっかりとれているし、数も多いわけだからな。
流石にこのままだと、吹っ飛ばすのは難しいか。
だけど……なぁっ！

「「待たせたっ!!」」
待ってたぜ、皆。
カズヒと九成が前衛で突っ込みながら、体勢を立て直したりやることを終えたりした仲間達が一斉に参加してくれる。
さぁ、こっからが本番だ!!
「なるほど……ならっ!!」
なんてこと思ってたら、今度は天草四郎が器を具現化させた。
あ、あれ聖杯じゃねえか!? リゼヴィムやマリウスが見せつけてきた幽世の聖杯（セフィロト・グラール）そっくり！
ってことはまさか―
「強引に回復で時間稼ぎをさせてもらうよ」
―そう来るかよ！
どうしても長時間粘りたいってか？ この野郎―
「そうはいかない！」
―そう思った時、声が響いた。
この声は……っ！

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

その光景を、ルーシア・オクトーバーはどこか絶望と共に見ていた。
再生によるごり押しを試みた神聖糾弾同盟に対し、適格な打撃と絶大な砲撃の組み合わせで挑む。そんな敬愛する兄の姿を。
立ち直った。立ち上がった。そして進んで行ってしまう。
追いつけない。そもそも追いかけることができない。その現状に、ルーシアは絶望すら覚えている。

今この場において、ルーシアはかつて九成に言われたことを思い出していた。

―先達として伝えておく。好意を持つのも評価をするのも、同一視するのとは違うぞ―

まさにその通りだ。今それを初めて実感している。

血の繋がった兄が先を進んでいるのは当然だ。そして彼が進んでいる道はとても正しく立派なものだ。当然の帰結として、ルーシアは「正しい道を進む兄を、追いかけ続ける」生き方を大前提としてきた。

血の繋がっている妹が、同じ道を行かないでどうするというのか。兄と自分では才能の差は確かにあったが、心構えぐらいは追いつけなくてはむしろおかしい。正しい道を歩く、敬愛する者を追いかけなくてなにが妹かとすら思っていた。

何故なら兄の言っていることは、理念としても正しいのだから。妹の自分ぐら追いかけられるべきだし、追いかけなければいけないだろう。

デュナミス聖騎士団という、並び立つ者達がいてからも変わらない。兄のいうことが正しいと思うのなら、それ以外にもできる者がいることを見せつけるべきだ。出なければ、捻くれた者達がとやかく言うことを否定するのも苦労する。

その決意をもって、ルーシア・オクトーバーは心の底から頑張ってきた。

辛いこともあった。苦しいこともあった。投げだしたいこともあった。

その全てを「私の兄はリュシオン」だと言い聞かせ、兄であるリュシオンの後に続けるはずだと考え直してきた。

それがルーシア・オクトーバーの真実。兄の理念を妹だからこそ体現したいという、その想いこそが彼女の根幹そのものだった。

だが今まさに、ルーシアは断絶を理解した。

兄は本当に自分と同じ両親から生まれたのか、そんな疑問すら生まれそうになる。それほどまでに、リュシオン・オクトーバーとルーシア・オクトーバーはかけ離れていた。決定的に違いすぎた。

星辰奏者（エスペラント）の素質。生まれ持った神滅具（ロンギヌス）。そんな物理的な才覚に、自分は目を曇らせすぎていた。

何より精神（心）が違いすぎる。自分が重く苦しいものだと思いながらも、兄もそうなのだからと背負い続けてきた、信仰という鎖。兄の纏う煌びやかな装飾にしかならない鎖を自分の鈍く太く重いそれと見比べれば、兄にとって信仰というものがどれだけ素晴らしくそして当たり前なのかが痛感される。

追いつけない。そもそも追いかけられるような存在ですらなかった。

ルーシアは足元が崩れ落ちているような感覚に陥っている。

ずっと、敬愛する兄の行く道を追いかけたかった。それ以外の道など考えもしなかった。

何故ならそれは立派で正しい道だから。そして生まれついた年齢の差で前に行かれようと、兄の進んだ道を追いかけている自分は、自ら道を切り開いている兄より早く進めるはず。その果てに追いつけると思い込んでいた。

だからいつも、自分の至らなさを恥じていた。兄の心構えをかつての兄の年齢になってもその身に宿せていないことが恥辱だった。何故後追いなのに辿り着けていないのか、いつも悩んでいた。

だからこそ、せめて心構えだけは兄のそれでいたかった。自発的に自分の兄がリュシオンであることを告げ、それに恥じない自分でいるために逃げ道をふさぎ続けてきた。

……その全てが、何もかも無意味になったとすら思えてくる。

ウルバヌス二世の宝具によって、そもそもの断絶を思い知らされた。

大前提となる骨子そのものが違いすぎる。精神という、まったく異なる部分の大前提が隔絶している。道どころかそもそもの次元がズレていた。

その事実に、ルーシアはもはや視界すら暗くなり始める。

「……いいのかね？　今君が進めば、今度こそ誰も追いつけないぞ？」

ウルバヌスの言葉は真実になるだろう。

もはや、ルーシアにとって兄とは全く異なる次元にいる、天上の存在と形容することすら生ぬるい存在だった。
根幹となるアイデンディティまで崩れ落ち、意識は闇に塗り潰され―
「待つのはここを切り抜けてからさ」
―その直前、声が響いた。
「……ほう？　続けたまえ」
攻防を繰り広げながらのウルバヌスの促しに、リュシオンは頷きを返す。
「簡単なことさ。今は前に進まなければならないことと、終わってからも進まなければならないのは、別なんだ」
猛攻を拳でしのぎながら、リュシオンははっきりと断言する。
「理解したよ。実感したよ。痛感したよ。俺は今まで、ずっと無理な速度で引きずってきたんだ」
それは、リュシオン自身による他者との断絶の肯定。
誰にでもできることを、コツを上手く掴めているから人より早くこなせているだけ。自分は世間一般の人間とさほどずれてなどいない。それが今までのリュシオンの認識。
だがそれを、リュシオン自身が違うものだと肯定した。
しかしそれは、リュシオンが他者を顧みないことを肯定したことを意味しない。
「単純な答えだ。引きずっているなら手を放し、そして引き離す必要があったのならそのあと待てばいい」
それが、リュシオン・オクトーバーの悟った答え。
彼は今、当たり前に進み続けることを選ばない。
今進むのは問題を解決する為。問題を解決した後、彼はそのまま止まることなく当たり前に進むことを選ばない。
「少なくとも追いかけてくれるのなら、急いで進む必要がない時ぐらい追いつくのを待てばいい。それもまた問題があるのかもしれないけど、まずはそこから始めるよ」
「なるほど。しかし、果たして彼らが追い付くのに、どれだけ掛かるか

分かるのかね？」
その試しといえる指摘に、リュシオンは肩をすくめる。
そんなことは問題ではない。気にすることでも何でもない。
何故なら―
「時間が掛かっても構わない。例え無理だとしてもそれでいいさ」
―リュシオン・オクトーバーは今、進むことを一旦止めれるようになったのだ。
「……俺はルーシア達を、強い弱いで測った覚えはないんだから」
ただ当たり前のように進み続けることを、大事な者達の為に一度止める。
止まってもいい。大好きな人達を苦しめながら追いかけさせるぐらいなら、まず彼らが無理をしなくても追いつけるまで、待ってみることから始めよう。
「無理だというのなら、俺の方から戻ればいい。まずはそれをすることから始めるさ」
その言葉は、きっとウルバヌスに言い放った言葉だ。
だが、ルーシアの心にも届いた。
ずっと、兄に恥じない自分でい続けたかった。
追いかけるのが当然だった。追いつけないことが恥でしかなかった。
だが、兄は止まって待っていてくれる。
一生懸命早くなり続けようとする自分に、無理をしないでいいと足を止めてくれた。
だから、こそ。
「……立って、私」
ルーシアは体に力を籠める。
立ち上がりたい。戦いたい。追いかけたい。
立ち上がらなければいけないのではない。戦わなければいけないのでもない。追いかけなければいけないわけでもない。
強迫観念ではなく、心の底からの願いをもって、彼女は再び追随を試みる。

何故ならば―
「私はルーシア・オクトーバー。リュシオン・オクトーバー（大好きな兄さん）と一緒に歩いてみたい、兄が大好きな妹なんだから!!」
―その真実は、決して変わりはしないのだから。
だから動け。
例えリュシオンが、自分とは全く異なる高みにいるのだとしても。彼の歩みが自分の全力疾走より早くとも。彼がその足を止めてまで、自分を待ってしまうことがふがいなくても。
大好きな兄に恥じない自分でいることは、リュシオン・オクトーバーが傑物だからではないのだから。

その想いに、手が差し伸べられる。

「……ありがとう、ございます！」
注がれる念は、どこか困った笑顔を感じさせる。
だが同時に、今の自分に手を伸ばしてくれる。この成長を寿ぎ、この決意を認めてくれる。
だからこそ、ここで宣言しよう。
「私は、リュシオン・オクトーバーの妹で……チームD×Dのメンバー。ルーシア・オクトーバー！」
体を動かし、そしてDチェンジャーを握り締める。
今目の前にいる仲間達と家族を前に、自分が立たない道理はない。
「こんな現実（鎖）なんかに、いつまでも押さえつけられたりなんてしない！」
その決意と共に、今彼女は飛翔する。
「夢幻召喚（インストール）ッ!!」

九成Ｓｉｄｅ

ルーシア!?
ここで至るか、おい!!
「……うん。そうだね」
そして同時に、お袋は小さく微笑んだ。
その表情には決意が見える。何かを決めた、そんな表情だ。
そして小さく頷くと、その手をそっと前に出す。
「私も、日美子や、七緒や、アイネスと……今度こそ親友でいる為に！」
その瞬間、お袋から魔力が放たれる。
「……神曲開演（オープン）」
ここに、更なる反撃の扉が開かれた。

聖教震撼編　第五十話　神曲魔術

イッセーＳｉｄｅ

「降臨するは第七天。清廉なりし信仰よ、土の星にて祝福せん」
乙女さんが詠唱した瞬間に事態は変わった。
空に土星みたいな星の幻影が浮かび上がる。そしてその瞬間、一斉に鎖が砕け散った。
そう。ウルバヌスの宝具で出来ていたらしい、ルーシア達を押さえつけていた鎖が一斉に砕け散る。
「……なんと」
かなり本気で面食らってるウルバヌス二世だけど、そりゃそうだ。
え、なに？　なんで？　何があったの!?
「乙女ねぇが宝具を魔術で破ったぁっ!?」
「やばいってこれっ!?　酷い幻覚がぁっ!?」
「……あ、これ夢かしらぁ？」
そしてカズヒも南空さんもリーネスも酷い。
いや、宝具って魔術より格上の神秘だから、それを魔術で破るのが大変なのは分かる。それぐらいは知識として知ってる。
だけど流石に酷いだろ。どんだけ自分の友達の才能を酷評しているんだろ。
「流石に酷くないかね？」
ウルバヌスまでそう言ってきたし。
ただカズヒ達は、凄い「何言ってんだお前」みたいな表情を返していた。
「乙女ねぇがどれだけ量に特化しきったピーキー魔術回路持ってると思ってるの？　生成量と貯蓄でバーサーカーのサーヴァントに宝具を乱発させてもお茶会できるくせに、いざ自分が魔術を使うとなると

基礎でも苦労するぐらいの特化型よ？」
「というかぁ、十年ぐらい学んでも結局そこで止まってるし……ねぇ」
「そもそもイッセー達は、和地やヒマリやヒツギの魔術回路思い出しなさい。それが答えよ」
……ちょっと反論できない南空さんの切り返しと、その前のカズヒとリーネスの言い分に反論が難しかった。
あれ？　もしかして、転生悪魔になりたての俺とは別の意味で才能がない感じか？
言われてみると、ヒツギもヒマリもまだ禁手（バランス・ブレイカー）に至ってないけど、魔力量に物を言わせて常時覇龍（ジャガーノート・ドライブ）で戦ってるしな。あれと似たようなもんだと。
九成も残神（コスモス・ボルト）なんて新境地を切り開いたけど、パラディンドッグ（補正具込み）で漸く十分ぐらいだしなぁ。いろんな意味で才能がピーキーすぎる。
「あはは……。まぁ、これは私じゃなくてベアトリーチェのスキルだからね？」
しかも乙女さんまであっさり肯定しているし。
否定しないんだ。そんなになんだ。
っていうかウルバヌス二世まで納得顔だし。
「……なるほど。おそらくベアトリーチェを夢幻召喚可能になっている状態の悪祓銀弾（シルバーレット）に、ハインリヒが仕込みを使ってしまったのか」
「そういえば、悪祓銀弾はそもそも固有結界保有者。神曲・神聖喜劇もある意味で固有結界に近い性質がありますしね」
むしろ天草と一緒に、俺達より事情を把握しちゃってるし。
でも固有結界三重発動になったのか。それも言い草だとカズヒの固有結界が三重発動っぽいな。そりゃバグるって。
「そしてヒツギ・セプテンバーとヒマリ・ナインテイルが部屋に入っていた所為で、いくつかのバグが重なって確立されたのが貴殿……ベアトリーチェであってベアトリーチェでないものということとは」
「それは、中々に強敵になりそうですね……っ」
むしろウルバヌス二世と天草四郎時貞の方が事情を理解している感じなんだけど。

九成の方を見るけど、九成は九成で困惑している。
とりあえず、どういうわけ？
俺が首を傾げていると、ウルバヌスは軽く肩をすくめていた。
「神曲の作家であり、神曲の主人公を羽織っていたダンテ・アルギリエーリは固有スキルとして「神曲魔術」を持っていた」
そしてそれに合わせるように、乙女さんは少し苦笑している。
「そう。そして神曲に置ける天国（パライソ）を魔術的に再現するＣ＋ランクのスキルとして、私（ベアトリーチェ）は神曲魔術を行使できるの」
ふむふむ。分らん。
そもそも神曲ってのがよく分からないけど、まぁ有名な物語なんだろう。で、その登場人物なサーヴァントだから、そこに由来するスキルとか宝具を持っていると。
で、何したんだ？
俺が首を傾げていると、ウルバヌス二世は苦笑しながら浮かんでいる星の映像を見る。
「神曲において土星とは、天国を構成する六番目の要素。そして曇りなき信仰に生きた者の住まう場所とされる。それにあやかる魔術があるならば―」
「―信徒に対する加護を与える魔術になる。そういう事でしょうねぇ」
ウルバヌスとリーネスが得心した感じで、浮かんでいる星を見ている。
あ～。そういえばサーヴァントって、自分の過去の成果とか武器だけなく、その後の言い伝えとか成し遂げた出来事とかに由来する能力があるスキルとか宝具を持ってる場合もあるな。シャルロットもそういったスキルを持ってるし。
つまり神曲って作品に由来するサーヴァントは、神曲っていう物語に由来する異能が使える。で、ベアトリーチェでもある乙女さんは、神曲における天国を魔術的に再現できる。そしてその一つである揺るぎない信仰なんらたの場所の魔術体再現で、さっきまでの事態をどうにかできる手段があったと。

俺が俺なりに考えていると、乙女さんは力強く頷いていた。
「そう。あの鎖はデバフ扱いで何とかできたから、解除させてもらったの」
なるほど。
つまり俺達は今、戦力がごっそり増えたってことでいいんだな。
立ち上がったデュナミス聖騎士団の人達も、やる気を見せて武器を構えている。
そのうえで、そんな彼らを率いるようにルーシアが一歩前に出た。
その体には薄い光の幕みたいなベールが纏われている。
そして小さく、ルーシアは笑っていた。
「……ふ、ふふふ……」
ん？
なんか雰囲気がめっちゃ変わっている。というか、このタイミングでこんな笑い方をする子じゃないはずだ。
リュシオンも首を傾げている辺り、本当に一体何が起きたんだろう。確か夢幻召喚（インクルード）をしていたはずだから、その影響だろうか。
そう思ったとき、ルーシアの後ろになんか大量の筒が現れた。
お店で売ってる打ち上げ花火の筒っぽいな。ただ金属製で飾りがなく、しかも割とでかい。
……もしかして大砲？
そう思った時、ルーシアは勢い良く笑顔で顔を挙げた。
「とにかくまとめて、吹っ飛べぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!!」
その瞬間、大量に何かが射出された。
それは空高く飛んでいくかと思ったけど、意外と低いところで弧を描いて落ちていく……ってあれ？
「あ、迫撃砲ね」
カズヒがポンと手を打つのと、慌てて神聖糾弾同盟が散開するのはほぼ同じ。
その途端、一斉に地面に落ちた球が爆発した。
『『『

っていうか迫撃砲ってなんだっけ!?
よし！　たぶん人間社会の軍事用語的な感じだし、当然言ってたしカズヒに聞こう。分らないことは素直に聞いて覚えとけばいいか。
「カズヒ！　迫撃砲って？」
「大砲の一種よ。射程は短いし砲弾も小さいけど、代わりに高い信頼性と歩兵数人で一式持ち運んで運用できる使い勝手の良さが売りの兵器ね」
なるほど。
「思えば反乱軍時代は、迫撃砲部隊を叩き潰したり迫撃砲部隊を護衛したり、咄嗟に小型の迫撃砲を使って、近くの装甲車に榴弾をお見舞いしたものね……」
「カズヒねぇ。物騒な思い出に浸るのやめて？」
九成が思わずツッコミを入れていたよ。
本当に物騒な思い出だな。っていうか、星辰奏者でもないただの少年兵時代に、生身で装甲車を撃破したのかよ。魔術回路ありにしたってやばいなオイ。
っていうかそれ以前の問題として、ルーシアにいったい何が？
「まとめて！　一気に！　吹っ飛ばします！」
微妙にキャラが壊れてるっていうか、珍しくプッツン行ってないか？
「……なんていうか、これは改めて反省し悔い改めるべきな気がしてきたよ」
リュシオンさんもなんていうか、凄くいたたまれない表情だ。
まるで自分の責任みたいに感じているんだろう。色々アレなところもあったし、ルーシアがその辺溜め込んでてプッツンした風に受け取っているのかもしれない。
ただまぁ、ルーシアの雰囲気がだいぶ軽くなっているのも事実だしなぁ。これはちょっと勢い余っているだけで、いい変化かもしれない。
ああ、だからこそ―
「畳みかけるぜ、皆！」

―この後も続けられるようにしないとなぁっ!!

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

『……よっしゃ！　これで改ざん完了ってね！』
『面白い細工してんだなぁ。っていうかこれ、何の意味があんだよ？』
『それは分かんないけど、たぶん考えてのことなんだろうね。……でもなんでだろ？』
『仕掛けもよく分からねえしなぁ？　……マジでなんでだ？』
「お二人とも？　そろそろ次の箇所に向かいますわよん？」

聖教震撼編　第五十一話　砲撃聖女

和地Ｓｉｄｅ

「まったくもってその通り！」

良いこと言うじゃないか、イッセー。

ルーシアにとって、このはっちゃけはいい経験になるだろう。少なくとも、悪い方向に作用はしない。断言できる。

今までずっと、ルーシア・オクトーバーという少女は気を張り続けてきたんだろう。ずっと気負っていたんだろう。ずっと背伸びを続けていたんだろう。

それは大好きな兄を追いかけていたいと、引き離されたくないという健気な思い。それそのものは悪い事でも何でもない。

だが同時に、ずっと無理をし続けてきたはずだ。ずっと我慢し続けてきたはずだ。ずっと自分を縛ってきたはずだ。

だからこそ、この暴発はそこから解き放たれている。

適度にはっちゃけたり息を抜くことは大事だ。そして今までそれに慣れてないのなら、少しぐらいバランスを崩すことも当然。まだ十代半ばなんだし、十分笑い話で済むレベルだ。

いや、済まさせなければならないだろう。それがルーシアの今後に繋がる。

なら、先輩は気合を入れないとな！

「ええい！　可能な限り時間を稼がねば……撃ち方はじめっ!!」

『『『

「俺の星辰光(アステリズム)をなめるなよ！」
―俺は攻撃(さっき)より防御(こっち)が得意なんでなっ！
直射であることを良いことに、ルーシアを守る為に楔型に障壁を配置。
別ベクトルに力場の流れを作ることで、最低でもルーシアに直撃しないように防御を設置。うっかり頂点部分に貫通されないよう、楔の先端は上から見ると各層でずれるように調整済み。最低でもルーシアに直撃が当たらないようにする配置だ。
同時に突っ込んで帯電型の魔剣を創造。すれ違いざまに確実に当てる攻撃を入れ、しびれさせて動きを阻害させる。
現状、場の流れはルーシアが獲得していると言ってもいい。ならやるべきこともシンプルだ。
ルーシアを徹底的にカバーする。それによって一気に圧殺する。
「流石にそれはねぇっ!!」
俺が判断した直後、天草四郎が槍を構えて突貫する。
俺は素早く英霊終焉の魔将剣(ソード・オブ・エンドマーク)に至り、二刀で真っ向から攻撃を凌ぐ。
とはいえ、連続展開可能時間は精々四分。多少回復してこの程度である以上、仕留めるつもりでいくべきだろう。
問題は、どうやってだ。
ウルバヌスも宝具を全開で発動し、腹心達は全員仮面ライダー。更にウルバヌスのスキルでそれを十分生かせる領域であり、ルーシアを抜きにすれば割と一進一退だ。
となると、だ。
「後先を考える余裕はないか。……なら、更に踏み込む！」
「なめるな！　来ると分かっているなら脅威は下がる、そういうものだろう！」
なるほど、そういう勘違いをしているのか。
なら教えてやらないといけないだろう。
この俺を。悪祓銀弾(シルバーレット)と互いの笑顔に誓って歩む、涙換救済(タイタス・クロウ)を。カズヒ・シチャースチエの比翼連理たる、九成和地を。

悪敵銀神（ノーデンス）の更なる飛躍を寿ぐ、邪悪を祓う男の意地（エルダーサイン）ってやつをなぁ!!

「……残創（コスモス・メイク）っ！」

弾け飛ぶ青い飛沫を見て、天草四郎は踏み込んだ。

「魔術刻印があろうと、対魔力スキル持ちに通じるかな？」

まったくもってそこは正しい。

サーヴァントは魔術回路を利用した魔術体系に深く関与しており、その過程で対魔力というスキルを持つ。

これは厳密には魔術刻印を併用した魔術に対する、ダメージ削減スキルだ。低ければ多少ダメージが削れる程度だが、高ければ高いほど一定以上の格がなければ無効化されてしまう。

そして俺の回路は量特化のへっぽこ。如何に刻印でブーストしようと、高い対魔力スキルに有効打を与えるのはかなり苦労するだろう。

ただし、その発想は—

「そもそも必要ないからな！」

—俺が使うのが、創造されるは魔の刻印（バースデイ・オブ・サーキット）を使った時にしか意味がない。

瞬間、俺の全身を魔の装甲が覆う。

その瞬間、天草四郎によってもたらされる猛攻の威力が明確に削減された。

余波は周囲の環境を吹っ飛ばす。その能力に一切の陰りはない。

だが、俺が喰らう時だけは話が別。余波は一切俺に悪影響を与えず、直撃打すらその効果は明確に低くなっている。

それを見て、天草四郎は驚愕した。

「……残神が、違う!?」

「驚く必要はない。ちゃんと考えれば当然の理屈だからな」

天草四郎が驚愕したその隙をつき、俺は一気に攻勢に転じる。

そして実際問題、これは驚くことなど何もない。

「残神（コスモス・ボルト）は、禁手に至った後の残滓をくみ上げて創る異能だ」

そう、ゆえに—

「英霊終焉の魔将剣（ソード・オブ・エンドマーク）の残滓で作る残神が、星宿（い）す想（つ）いの魔剣（も）と創造される（同）は魔の刻印（じ）なわけがないだろうっ!!」
―星宿す想いの魔剣（スターソード・オブ・スフィア）以外の禁手なら、当然別の残創になるわけだ。なにせ材料が別物だからな。順当に考えれば、創造されるは魔の刻印（バースデイ・オブ・サーキット）にできる方がおかしいのだ。
例え似たような能力だろうと、禁手が違うなら別物だ。組み上げるパーツが別にあるのだから当然だろう。残創とはそういうものだ。
そしてそもそも、組み立てるパーツが違い使う禁手も違うのなら。連携を考えて別の残神にした方が効果的だというものだ。
ゆえに、サーヴァントの打倒に特化した英霊終焉の魔将剣に合わせる残神は、その補完。
英霊に対する特攻を獲得するのなら、その補完となる答えはただ一つ。
「これぞ、Ｄランク宝具相当の対英霊装甲を創造する残神。名付けて英霊断絶の魔将鎧（メイル・オブ・エンドマーク）！」
対英霊の防具こそが最適解!!
「そんな……でたらめ……っ！」
歯噛みしているところ悪いが、これは本当に大したことはないぞ。
魔剣創造は宝具換算で、精々Ｄ＋ランクといったところ。英霊終焉の魔将剣に至った場合、対英霊特化ゆえにＤ＋＋ランク程度。英霊断絶の魔将鎧はそれ単体ではＤランク宝具相当だ。はっきり言って残神は、総合力では至ってない状態の神器より一段劣る代物なんだ。
だが、防御と攻撃で優位性を確立できたことは非常に大きい。
到達してから組み立てと設計をかましていたのでこのタイミングだったが、その分インパクトは有効だ。
そして、この残神はその性質上非常に有効といえるだろう。
「……ルーシア！　そういうわけだから巻き込まれても何とかなる！」
「……まさか」
俺の声に、天草四郎は頬を引きつらせた。
ああ、悪いな。

こういう時ぐらい、後輩に花を持たせるのが先輩風ってもんだろう？

なにせ夢幻召喚は英霊の力を具現化させるもの。そしてルーシア・オクトーバーは、神器を生まれ持ってないし星辰奏者（エスペラント）の資質もない。

つまり、あれは英霊の力によるものだ。それはすなわち、この残神ならダメージを削減できるというわけだ。

だからこそ―

「構わず俺ごとぶっ飛ばせ！」

―それが一番効率がいいからな!!

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……わっかりましたぁっ!!」

張り上げる大声で、ルーシアは和地の声に応える。

今までの自分なら、こんな生き生きとした声でこんな要請を受け入れるわけがないだろう。

ただ、こういう風にはっちゃけたり暴走する手合いがいる理由は分かってしまった。

縛り続けているものを解き放つのは、ある種の爽快感がある。珍しいぐらいに高揚しているこの感情に、ルーシアは振り回されそうになるほどだ。

ストレス発散で暴れるように動くことが、ここまで快いとは思わなかった。そもそも暴れるように発散するという選択肢を持たず、常に感情を一定以上出さないように縛ってきたがゆえに、手綱を取り切れ

てない。
……だが、戦闘でやるのは今回だけだ。
快いことを理解したうえで、ルーシアはこれを積極的に試みようとは思わない。
何故なら、今までの自分が間違っているとは思わない。落ち着いてリラックスをしたり、荒立てるのではなく静けさを持ちながらストレスを放出するのもまた、心地良いものだからだ。
自分はそっちの方が好きだ。そっちの方をすべきだと思っている。それが、ルーシア・オクトーバーの素直な感情だ。
リュシオンという精神的傑物のすぐ後ろをついていきたいと思ってきた毎日も、決して悪いことではない。今なら素直にそう断言できる。
これは確かに快いが、たまにでいい。自分にとって居心地がいいのは、毎日がそうであってほしいのは、いつもの自分とさほどかけ離れてはいないのだから。
―そうなんだ。でも、たまにはちゃんと発散しなよ？
そう、力を貸してくれる彼女がたしなめてくれた気がした。
―はい。これからは、戒めるのは無理のない範囲で真面目にします。
だからルーシアは、心の中で彼女に答える
そのうえで、ルーシアは力を解放する。
自分に宿る英霊は、二つの側面を持っていた。
いくつもの守護聖人を兼ねる女性。信仰に目覚め、父親達に改宗を迫られても断固拒否した、麗しき乙女。
彼女は正しさを重んじる委員長気質を持ちながら、同時にどこまでもフリーダムにはしゃげる気質も併せ持つ。結果として、その二つの側面のどちらかが召喚されるタイプの英霊となった。
だが、彼女はあえて、ルーシアに近しい委員長気質が来ることを選ばなかった。
それはきっと、自分にはこの側面を持つことを欲したからだろう。そこに理解ではなく実感をもって、委員長気質を選ぶのならそのうえ

でなければならないと思ったからだろう。
使うとこちらに引っ張られるのは困ったものだが、それもまた裏のない善意だ。そしてそんな気質があるからこそ、これからもリュシオンを追いかけ、そして引っ張ることも考えよう。
敬愛する兄だからこそ、兄が誰もいないところに行ってほしくない。好き好んでする気はないが、これからは少しぐらい我が儘も言ってみよう。兄をどこにでもいる人間と一緒にいさせられるのなら、足を引っ張るのも一興だ。
それゆえに、ルーシアは宝具を開帳する。
ならしもかねて展開している、自動的に砲弾が装てんされる大量の迫撃砲はこの宝具の序の口。
真名開放を使用しない代わりに、大幅に出力が制限される余技と言って過言ではない。
ゆえに、これこそが全力全開。
展開されるは、全長十メートルを優に超える、一門の砲身。
奇しくもそれは、ルーシアが博学かつ勤勉ゆえに歴史上にある物と酷似していた。
そう。歴史においてもっとも有名銘な列車砲。ナチスドイツの技術力の結晶が一つ。
「……ドーラ列車砲？」
ぽつりと誰かが呟いたそれが、答えだった。
そしてルーシアは、唖然となる者達の視線を心地よく感じていた。
何割かは彼女の影響だろう。だが同時に、この爽快感が自分から生まれるものもあると実感した。
そして彼女はそれを受け入れる。ちょっと問題があるかもと思うが、そういうダメなところも含めて自分だと、そこから目を逸らすことだけはしない。
認めたうえで、自ら戒めなるべく抑えよう。はっちゃける時はちゃんと選び、きちんと戒められる大好きな自分を主体としよう。
そしてはっちゃけ第一弾。その大本命を、真名と共に開放する。
「吹き飛ばせ――砲撃聖女（サンタ・バルバラ）ァッ!!!」

バルバラという聖女がいる。
父親達から改宗させる為の拷問にも屈さず、殉教者にて守護聖人とされるローマの少女。
彼女は砲兵の守護聖人とされ、その為ある国では彼女の像を火薬庫に建てていた。
それゆえに獲得した、己を火薬庫とする砲撃兵装具現化能力。それこそが、砲撃聖女（サンタ・バルバラ）。
その大いなる一撃は、和地を巻き込みながら天草四郎を吹き飛ばす。
「……よし、調子に乗りすぎないよう気を付けよう」
そう呟く和地は、鎧越しに肋骨が一本砕けていた。英霊に由来する攻撃を削減する残神越しでだ。壮絶な威力がある証拠と言えよう。
ならば当然、天草四郎は更なる深手を負っている。
防御の為に使った左腕は吹き飛び、そのうえで肋骨が数本粉砕。一部の肉はミンチになっている。
だからこそ、躊躇なく天草四郎は聖杯を起動させる。
なるべく時間を稼ぎたい。その一心で即座の再生をかけるが、多用してこなかったツケは時間や集中力を大きく消耗させる。
そして、そこを逃がすすない者がいた。
「よくやったわ和地。あとは任せなさい」
「流石だルーシア。ここからは俺達だ」
その二方向からの言葉に、天草四郎は奇跡をもって相対する。
火炎、氷雪、雷撃、暴風。それらのシンプルな攻撃が、大出力で放たれる。
常識的に考えれば十分なそれは、しかし二人の非常識が化身には通用しない。
「いい顔になったわね、リュシオン。今のあなたの方が好みよ」
「まだまだだよ。まずはゆっくり止まってからじゃないとね」
言葉を交わす二極の猛威が、天草四郎時貞を一瞬で討ち取った。

聖教震撼編　第五十二話　明かされる真相

イッセーＳｉｄｅ

「申し訳ありません……聖下……っ」
そう苦悶の声を漏らしながら、天草四郎は消滅する。
よし！　これで残りサーヴァントは二騎だ。
しかも固有結界も解除された！　これならリアス達も来れるし、間違いなく勝てる!!
「よっし！　あとはてめえだけだ、ウルバヌスッ!!」
「……なるほど。これは潮時か」
なんか悠然としているけど、腹はくくってもらうぜ。
覇輝（トウルース・イデア）と虹色の希望もあって、神聖糾弾同盟は一気にガタガタになっている。投降している連中や、なん箇所かに分散して集まっている連中がいるぐらいだ。
聖書の神様の遺志を具現化する覇輝が、デュリオのシャボン玉を後押ししたことも理由かもな。ある程度は聖書の神様の意思を感じられたことで、ガスが抜けたんだろう。
それでも、抵抗している奴らは全体の半分以上ある。元々のクーデター側だった一割未満は投降しているけど、深手を負ったり戦死した奴も多い。
だからこそ、ここでこいつをぶちのめす。
趨勢が一気に崩れたところでトップがやられりゃ、更に大きく傾けられる。少なくとも、勢いはさらに止まるだろう。
だからこそ、ここで一気にぶん殴る。
「イッセー！」
リアスの声が聞こえる。ま、固有結界が解けてるなら尚更か。

安心してくれ。俺はやればできる子だって、いつも君に言われてるしな。
だから、こそ―
「任せてくれ！　こいつはここでぶちのめす！」
―この拳はしっかり握ってるぜ！
「ウルバヌス二世を倒してはダメ！　捕縛しなさい!!」
……え？
「リアスさん？　いえ、捕縛は捕縛でやりようはありますが、倒してはダメとはいったい？」
俺の代わりに聞いてくれて、ありがとうシャルロット！
ただリアスだけでなく、隣にいるゼノヴィアやストラーダ猊下も同じ意見っぽい。
なんだなんだ？　俺達が固有結界に突入してから何があった？
「戦士ストラスよ。確認したいことがあるのだが」
「はっ！　何でありましょうか、猊下！」
ストラーダの爺さんに話を振られて、ストラスさんが背筋をピンと伸ばす。
この人敬虔な信徒だし、外見通りの人だからな。ま、当然だよなぁ。
でも何なんだろ―
「ウルバヌス二世は、主が亡くなられていると当たりをつけているかね？」
―え？
「……お待ちくだされ猊下。何故、それを？」
ストラスさんがかなりびっくりした様子で答えると、ストラーダ猊下は瞑目した。
リアス部長も額に手を当てて俯いているし、これどういうこった？
「なんでそこまで分かってるんだ？　カズヒねぇ達は聞かされてなかったよな？」
「ええ。というより、あの様子だと推定ではあるようだけれど……」
九成もカズヒも困惑しているし、ぶっちゃけると戦ってたメンツ全員が困惑している。

「……ストラーダ猊下、そしてリアス姫。何か分かったんですか？」
リュシオンさんが気を取り直して聞くと、二人はかなり渋い顔をした。
言いづらいというより、言おうとしている事実が重すぎて思わず嫌な気分になった感じの表情だ。
おいおい。なんか凄い事を聞かされそうだぞ。
俺がちょっと息をのんでいると、ゼノヴィアがウルバヌス二世を睨み付ける。
いきなり切りかかってもおかしくないぐらいに怒っている感じだ
「イッセー、皆。よく聞いてくれ」
ゼノヴィアは二刀流でウルバヌス二世に切りかかる体制をとりながら、だけど踏み込まずに俺達に伝えてくれる。
「そこの男の目的は、神聖糾弾同盟を殺させることだとアザゼル先生達が仮説を立てている。主が亡くなられたと悟っているのなら、当たりでいいだろう……っ」
伝えてくれた言葉を、俺は一瞬理解できなかった。
いやいやいやいや。ちょっと待て。
言ってることが何一つとして理解できない。
なんで、なんでそんなことするんだよ!?　神聖糾弾同盟は基本的に信徒で、ウルバヌス二世は元教皇だろ!?　そんなことする理由がどこにあるんだよ!?
だけどウルバヌス二世は、むしろ面白そうに微笑んでいる。
「……流石は元堕天使総督だな。それに達というからには、かの麒麟児であるフロンズ・フィーニクスも一枚噛んでいるかな？」
その言い方は、ゼノヴィアの言葉が真実だと言っているようなもんだった。
おい、嘘だろ……っ!?

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

後方に下がっているネオマケドニアの艦橋で、フロンズ・フィーニクスは興味深そうに情報を精査している。
その表情は多少の疲れが見えるが、同時に強い関心をもって情報に目を通していた。
「……この一件、結局のところウルバヌス二世の譜面から誰一人として出し抜けた者はいないことになりますね」
同じように資料を精査しながら、九条・梔子・張良は少し苦い顔だ。
その理由をフロンズは理解している。
幸香を項羽のように受け取り、劉邦のような存在に負けないことを願う。その帰結として劉邦における張良を凌駕する存在を目指しているのが、張越（チョウリョウ・エボリューション）最良の在り方。それこそが後継私掠船団を選んだ彼女が己を示す定義だろう。
そういう意味では、いいように利用されたともとれるこの現状を喜ぶのは難しい。
だが、フロンズからすればそれはまた違うものだった。
「年季の違いを嘆く事はあるまい。むしろその仮説を導き出し、我々を後退の判断に導いたのは君だよ、張越最良」
その字をあえて告げ、フロンズは労いの為に鈴を鳴らす。
呼び出された従者に茶の用意を命じたうえで、フロンズは梔子に微笑みすら浮かべる。
「誇りたまえ。我々はいいように利用されて終わることだけは防げた。その一因と成れたのだから、君は今回十分な働きをしたともさ」
「……嘘偽りなき評価。素直に受け取らせてもらいます」
苦笑をもって受け取った梔子は、ブリッジの窓ガラス越しに外を見る。

遠く離れたバチカンの風景を見る梔子に、一通りの指示を終えたラカムもまた笑顔で近づいてくる。
「ま、今回はダメージ削減重視で引いただけさ。幸香もこんなことで文句は言わねえだろうよ」
「その通り。彼女はあれで好機は探る女傑だ。だからこそ私と盟を結べたのだとも」
ラカムに便乗するようにそう語ったうえで、フロンズは情報に視線を戻す。
「衛生班からの報告も上がってきた。やはり独自開発のプログライズキーを使用した者は、その多くが生涯に亘り後遺症を残すだろうということだ」
「この戦いで玉砕してくれるならそれでよし。万一生存しても、同様の事態を起こすには後遺症が足を引っ張るってわけか。えっげつねぇ～」
げんなりとするラカムの感想は的を得ている。
ダイイングゴートプログライズキー。その本質は動作補助による戦力化可能なものを増やすことでも、デバイスの変更により元から戦えるものを更に強化することでもない。その裏に隠された最も恐ろしい機能が重要だ。
ダイイングゴートプログライズキーは、あらゆる方法で体内分泌物を異常発生させることで、強大な戦力になるよう体質を一時的に変える。
だが体内分泌物とはいえ、どれだけあっても心身に悪影響を及ぼさないわけではない。いわゆる脳内麻薬というものも、体内で過剰分泌されれば麻薬同然の悪影響を与えるものだ。ダイイングゴートプログライズキーとはまさにそういったものである。
何度も使っていれば必ず肉体に後遺症が発生する。そしてその悪影響は、心肺機能や運動機能の低下のみならず、脳障害すら生み出す恐れのある代物だった。
そしてそんな代物を与えられた者達は、一つの共通点を持っている。

「……戦況があまりに悪くなるようなら、指定の地点に集合ねぇ？
ある程度分散設置されてるのに理由はあんのかねぇ？」
「大規模に集まらないようにでしょう。おそらくですが、周辺環境に悪影響が残らない程度の手段で、残った者達を抹殺する目論見だったのかと」
首を傾げるラカムに、梔子はそう推測を口にする。
それをきっかけとして、フロンズもまた思っていたことが口からついて出てきてしまっていた。
「そして使用していない者に与えられた指示は、「自分達の身の安全を重視し、投降も許す」と来たものだ。ご丁寧に、脱出の為の地下道すら与えてな」
それが、フロンズの命で梔子が捕縛し聞き出した者達からの選別された情報だった。
神聖糾弾同盟が制圧した地域には、バチカンが秘密裏に確保していた地下道がさらに発展されていた。
ダイイングゴートプログライズキーを渡されていない者達は、そこに入って脱出を可能とできる地点での籠城を命じられていた。
更に梔子によってそういった傾向分けされた者達のある程度の情報や心理がつまびらかにされた結果、確信すら与えられた。
「ダイイングゴートプログライズキーを渡された者達は、多かれ少なかれ危険思想や信仰心を盾にした悪意が見える者達。……これはすなわち、「今後何か事件を起こしかねない信徒」ともとれる」
「そしてこの世界はサウザンドディストラクション後、そういった者達にこそ好機が巡りやすくなっています」
プログライズキーやレイドライザーそのもの。それらに星辰奏者（エスペラント）の関連知識。更に数百万以上の資金。
サウザンドディストラクションののち、そういったチャンスがもたらされるようになった。そして問題は、そのチャンスがもたらされるのは往々にして悪人、それも狂人や異常者の類だということだ。
そこに和平という衝撃がもたらされた以上、懸念はあった。
「……禍の団という脅威と和平という変転。この二つは相乗効果とな

り激しくなっており、だからこそ時代はあまりにも急激に変わっているわけで、私達には都合がいいわけですが」
「まさに時代の変転期。そしてそういった時期は、乗りこなす者やしのぎ切る者だけではなく、ただ翻弄される者でもない者がいる」
　梔子に続くフロンズの言葉は、一つの事実を示している。
「……変化を受け入れられず、耐えられない者。信徒にとってのそれらこそが、神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）に集まった者達の九割以上」
　梔子は、自分の聞き出した情報からそれを確信している。
　そしてそれは更に、相手が理解していることも示している。
「だがそんな中にも、事を起こしたからこそ冷静になる者もいれば、周囲のそういったものに流されるだけ者もいる。……そういった者を選別するには、相応の者が面談するなり、匿名による調べが必要だ」
　フロンズが語るそれは、梔子が聞き出した者達からの情報を統合した結果の事実。
　ウルバヌス二世は、腹心を利用して神聖糾弾同盟からそういった者達をあぶり出していた。
　そしてあぶり出された者達は、プログライズキーを使わず防戦に徹し、適度なタイミングで投降させるなり逃がさせればいい。
　そして残った者は、危険因子とみなされる。それも、放っておけば勝手に暴走して面倒ごとを起こしかねない者達だ。
「……歴史上において、身内の粛正といった「残虐」な行為を行いながらも名君と呼ばれる者は数多い」
「ですが同時に、残虐を繰り返すことで夢破れた者も数多いものです。……区別をつけるとするならば、それは頻度でしょう」
　フロンズに反証するように語った梔子は、だがその論を否定したのではない。
　むしろその逆、お互いの思考を整理するために彼と同じことを語っているのだ。
「……君主論において、マキャベッリはその差を「一度で終わらせたかどうか」と語りました。厳密には必ずしも一度だけではないでしょうが、回数を最小限にまとめて民に優しい印象を残していた」

そう。問題というものは少ないに越したことはないのだ。
特に内部の反乱などはそういうものだ。その手の者は発生回数が多ければ多いほど、例え相手の側に問題があっても君主の側に資質が欠けているなり、君主の方が悪ではないかという疑心を思い浮かばせてしまう。
そして残虐な行為というものは民心にとって毒となる。どれだけそれが必要であったとしても、回数が多ければ多いほどそちらの方が印象に残り、善政による好感を薄れさせる。
だからこそ、問題や残虐な行為は回数を抑えることが肝要なのだ。内部の者達による反乱じみた争いも、そういった者達を積む粛清も、多ければ多いほど毒となる。
……裏を返せば、それは「起こりうる反乱の種を一回でほぼ排除できれば最良」といえる。
「サーヴァントとして降臨した元教皇による、神罰を下してもらう為の聖戦。信徒から和平方面で問題を起こしそうな者にとって、これほど垂涎の大義名分もありません」
「そしてのこの集まった者から、冷静に考えることができれば問題ない手合いを選別。あとは彼ら以外をまとめて駆除させれば、少なくとも教会からテロが発生する確率は大幅に削減される」
梔子とフロンズの言葉を聞いて、ラカムは哀れみの表情をバチカンの方に向けた。
「ダイイングゴートたぁよく言ったもんだ。教会及び天界の安定化をもたらす為の、生贄（スケープゴート）ってことじゃねえか」
それこそが、梔子が到達しフロンズとアザゼルが同意した、この一件の真相だ。
教会が和平の流れで安定化を図るのなら、余計な揉め事は少ないに越したことはない。例え規模が大きくとも、早い段階で少ない回数なら間違いなくマシになる。喉元過ぎれば熱さを忘れるというように、早い段階に一度だけなら、収まってからが長いのだから。
「正直に言おう。私はウルバヌス二世をなめていた」
フロンズは正直に、ウルバヌス二世に対して戦慄を覚えていたこと

を認めた。
勝算の意が籠った視線をバチカンに向け、彼は苦笑すら浮かべている。
一歩間違えれば、大王派は教会の掃除の為に多大な被害を受ける所だった。途中で気づいたからこそ、たくさんの勢力にそれらを任せる選択肢が取れたのだ。
「……こうして考えれば、我々と禍の団は意図的にこの時期に仕掛けるよう誘導されたのだろうな」
「三大勢力側はストラーダ及びクリスタリディの二大枢機卿。禍の団側は隔離した内通者にわざと情報を流し、駆除する者を集めた形ですね」
梔子の言う通り、ウルバヌスは最初からこの図面を書いていたのだろう。
サウザンドフォースや小規模テロリスト、まして大欲情教団は流石に想定外だろう。だがそれにより、多方面の勢力に神聖糾弾がなぶり殺しにされるのは好都合だ。
何故なら、殺しに来る者が教会でないのなら、内乱を潰すという残虐の不快感を抱く者は減る。テロを起こした者達が、別のテロ組織と共食いをしただけなのだ。教会に対する悪感情は更に生まれにくくなる。
そしてそのうえで、だ。
「では、もう少し様子を見るとしよう」
フロンズはティーカップを片手に小さく興味深い表情を浮かべていた。
こういう時に必要なのは、「自分が敵の立場ならどう動くか」といえる。
楽観視をしないというのはそれだけで価値があるのだ。そして、だからこそフロンズは油断しない。
「まず間違いなく、ウルバヌス二世は伏せ札を持っている。三大勢力や禍の団だけでは残りかねない者達をまとめて駆除する為の切り札が……な」

それこそが最大の懸念事項。フロンズが撤退を決めた最大の理由。
自分がウルバヌスなら、少しでも多くの危険因子を、教会に悪印象を与えない形で駆除することをもくろむ。
だからこそある。必ず、ウルバヌスは伏せ札を持っている。
その伏せ札が開帳されるのか。それとも阻止され、意外と死人が出ずに終わるのか。
「あとは高みの見物といこう。なに、どちらにせよこれ以上被害を出す必要はないのだからね」
好奇心すら浮かべながら、フロンズは先の展開を観察することを決めた。

聖教震撼編　第五十三話　決戦英霊

和地Ｓｉｄｅ

「……その通り。神聖糾弾同盟とは、一斉処分するに越したことはない愚者を集める為の神輿にすぎんさ」

ウルバヌス二世は、特に気負うことなくそう言い切った。

おいおい。よくもまぁやってくれる。

つまりあれか？　聖書の神が死んでいるからこそ、壊滅させる方向に持って行く為に聖書の神に裁いてもらうというお題目を掲げたのか？

殆どのメンツが戦慄している。カズヒねぇですら、戦闘態勢はとっているが絶句している。

理屈は分かる。筋も通っている。

三大勢力のトップ陣営。その共通の欠点を挙げるとするなら「お人好し」という長所の裏面だろう。

必要であるのなら厳しい対応をすることもあるが、基本的に善良さと強大さで人を導くタイプだ。英雄派の幹部であるジャンヌ・ダルクやヘラクレスといった連中への対応を見れば尚更だ。ヴァーリチームに対してもその側面があるだろう。

未来がある未熟な若者には、厳しい処罰ではなく未来への貢献を。言葉にすれば美しいし、全否定する気は断じてない。

だが同時に、それゆえにできないことも数多い。

なまじ和平が結ばれているからこそ、態々非道な真似をする必要がない。他者から摘出した因子を移植する人工聖剣使いの製造停止や、各種暗部組織の規模縮小がいい例だ。

だが同時に、それが今回のクーデターを起こす要素になったという余地はある。

ある種の観点からすれば、不満のある者を徹底的に切る。もしくは何かしらの口実をもってそもそも協会から追放する。そういう手段は、確かに選択肢として存在するし成功したケースもあるだろう。

……つまり、ウルバヌス二世は一言で断言できる。

冷血な手段を目的の為に行使できる、ある種のマキャベリズムを持った人間だ。

「自分を餌にして教会関係で問題を起こしそうな者達を集め、自分達ごと滅ぼさせる。それがあなたの目的だというの!?」

「その通り」

リアス部長の激昂した言葉に、ウルバヌスはこともなげに答える。

今更隠すつもりはない。否、そもそも隠すようなことですらない。

そう言いたげな口調は、この男が冷血かつ傑物であることを示している。

「その為に、民間人からも賛同者を集める必要があったと？」

「当然だろう」

ヴァスコ・ストラーダ司祭枢機卿のその詰問に、ウルバヌス二世は当たり前だろうと首を傾げそうな勢いで答えた。

むしろそこまでやるべきだろう。そう思っているのが嫌というほど分かる。むしろなんでやらないと思っているのかと言いたい雰囲気だ。

怪訝な表情すら浮かべるウルバヌス二世は、小さくため息をついた。

「サウザンドディストラクション後の、危険思想に金も力も技術も与えられるがこのご時世なのだろう？」

そう前置きし、ウルバヌス二世ははっきりと告げる。

「なら民間人含め、そういう可能性をまとめて摘み取れるようにせねば意味がない。今後を踏まえるのなら、将来的に人間に裏の事情を公表する必要も出かねないのだからね」

そこまで考えてのことか。

人間社会に異形を公表する必要が発生すれば、当然和平についても説明必須。悪魔や堕天使、更には吸血鬼と教会や天界が和平を結んだ

など、テロを起こす理由になりえて当然。ウルバヌス二世はそういったのだ。
ああ、認めるしかないだろう。目の前の男は傑物だとも。
二手三手先を踏まえ、最悪の事態も考慮した一手。そしてこの一手は、テロリストの側でなければ打てないだろう。
それにより、危険因子による騒動は可能な限り一回に収まり、乱発されることはない。たった一回で収まることで、防げる不穏は確かにある。
更に生き残りがいたとしても、重篤な後遺症でテロなど起こせない。それすらテロリストの側が行ったことだから、三大勢力に批判の声を出す者は少ないだろう。
認めるしかないさ。ウルバヌス二世が行ったこの事件は、三大勢力にとって好都合。こと教会にとって、今後の活動をスムーズにこなせる一手だろう。
だからって、なぁ！
「それで俺達が納得すると、思っているのか……っ」
奥歯を噛み締め、俺はそう言うほかない。
そしてイッセーに至っては、ブチギレているのが丸分かりだった。
「ふざけんじゃ……ねぇえええええっ!!」
今すぐにでも殺しにいきかねないほど、イッセーは怒っているのがすぐ分かる。
「こんな事件が起きて、ミカエルさん達がどれだけ苦しむと思ってやがる！　俺達がこの事件でどれだけ大変な目に遭ったと思ってる!?
……何より、アンタをついてここまで来た人達に、そんなことをはっきり言えるのかよ!?」
そうだろう。
未来を踏まえて和平を選びながら、その未来を掴める者達の反乱で、ミカエルさん達は心痛めているだろう。
そもそもこの事態を収める為に、三大勢力にだって相応の被害は出ている。デュナミス聖騎士団からも相応の死者が出ている。俺達D×Dだって、死人が出てないだけでどれだけ酷い目に遭ってきたか。

何より、縋りつきたくなるほどの理由を与えられてここまでウルバヌスについてきた、神聖糾弾同盟の連中が流石に哀れすぎる。
だがウルバヌス二世は、それに対してつまらなさそうに鼻を鳴らす。
「ああ、あのどうしようもない連中のことか。……あとでちゃんと教えてやるつもりではあるがね」
その言いぐさに、イッセーは二の句が継げなくなっている。
そしてそんな返しをしたウルバヌス二世は、冷たく無感動な目で少し離れた方を見た。
その目は冷徹かつ酷薄だ。見ている対象を見下しきっているのがすぐ分かる。
「その方がしっかり心が折れてくれるだろう。精神の影響を肉体は受けるというし、生き残りが出ても何もできないように徹底的に壊しておかないと後が怖いしな」
その表情に、相手をいたぶることを好む精神性は垣間見えない。
だが同時に、情け容赦の欠片もない。徹頭徹尾そうしておかないと危険だからやっておくという、作業じみた感性が見え隠れしている。
例えるなら、害虫駆除だ。ゴキブリが出てきて退治した後、バルサ○を使うぐらいの感性で動いている。
……これが、ウルバヌス二世だというのか。
現実主義者（リアリスト）で悲観主義者（ペシミスト）で冷徹（キャベリスト）な手段を選ぶ者
「聖騎士団の者達の前では言っているが、奴らはそういう連中だよ」
そう、ウルバヌス二世は告げる。
「主の代行たる元教皇や天使長ミカエル様の連名で告げられた和平は、いわば主の意思も同然だ。それに対して不満を抑えられないことを恥じ入るどころか、神罰を下してもらおうなどという妄言に乗りバチカンを荒らす。そんな連中の九割以上は、さっさと殺さねば余計なことをする無能な働き者というべき連中だ」
嫌悪感というより、諦観の色を籠めてウルバヌスは告げる。
「人間とはそういう持病を患っている者が多いのさ。無条件で自分達を、正義が守護し、被害は理不尽で、感性は一般論で、敵は排斥され

る側だと思い込みたがる衆愚。その中でも余計なことをしたがる阿呆どもが彼らだ」
　うんざりした口調で、ウルバヌスはそう評した。
「事実、私の目にはそんな鎖を纏っている者達でしかなかったよ。そうでない者を何とか選別し、適度なタイミングで投降できるようにはしているがね」
　そこまで吐き捨てると、ウルバヌスはふと何かを思いだしたように手を打った。
「そういえば、そろそろ救えない内通者が爆死しているころだろうか？　一定人数集まったら爆発する仕込みをした場所に逃げ込むように言っているし、捕まるか死ぬかのどちらかになっているはずではあるが……万が一は流石に否定できないのが残念だ」
　……流石っていうべきかね。徹底的かつ念入りに仕込んでやがる。
　そのうえで、ウルバヌス二世は剣を構えながら微笑んだ。
「さて。本来私が死んだら最後の仕込みを、真相の暴露と共に起動させる手はずなのだがね。所詮私は影法師だし、強引に自決するべきかな？」
　……勘弁してくれよ、この野郎……っ!!

アザゼルＳｉｄｅ

「……どうした、ミカエル？」
『懸念事項が発生しました。……どうしました？』
「色々ヤバい事が分かってな。だが先にそっちから言ってくれ」
『はい。神聖糾弾同盟ですが、妙なものを持ち込んでいることが判明

しました』
「いったいなんだ？」
『インド神話の神殿から、鏃を一本強奪したようです。……現在調査中ですが、サーヴァントの依り代に使える可能性があるそうでして』
「おいおい勘弁してくれよ。インド神話に連なる英雄とか、神滅具保有者に匹敵する化け物揃いじゃねえか」
『そして、それはバチカンに運び込まれています』
「……それ、かなりやばいぞ」
『そうでしょうか？　懸念事項ではありますが、インド神話の英雄が教会のクーデターに素直に協力するとは思えませんが？』
「問題なんだよ。……仮説でしかないがほぼ確実に、ウルバヌス二世は適当ぶっこいて神聖糾弾同盟を組織した。おそらくだが、あいつ自身の消滅をトリガーに最後の仕込みを発動させると踏んでいる」
『……なんですって？』
「むしろ他神話系統だからこそ最悪だ。……っていうかまさか、六聖英霊ってのはその為の生贄かぁっ!?　サーヴァント六騎を象徴にすることで、討たれてメンタルがボロボロの残党どもをまとめて駆除する為か!?」
『ま、待ってくださいアザゼル！　状況が全くつかめないのですが―』
「説明してる暇がねえ！　とにかく今すぐ最大戦力をバチカンに送れ！　……くそったれ！　最悪バチカンごと吹き飛ばす可能性も考えてたが、サーヴァントでまとめて残党を駆除させる方がクリーンだよなぁ!!」
『――アザゼル！　状況は分かりませんが、触媒になりえる英霊が判明しました!!』
「なんだ！　今すぐ教えろ!!!」

「――最悪の札を用意しやがった……っ」

聖教震撼編　第五十四話　「無能な働き者」とは「余計なことしかしない奴」と読む

和地Ｓｉｄｅ

膠着状態に持ち込まれた……っ。
リアス部長達がもたらした、アザゼル先生やフロンズ・フィーニクスの推測を、ウルバヌス二世は堂々と肯定した。
野郎、腹立たしいにもほどがある。
確かに、三大勢力の和平は青天の霹靂過ぎる。そこから更に各勢力と和平を行い、半年そこらで吸血鬼とも和平を結んだ。その性急さについて行けない者は数多い。
更に言い分もある意味で正しい。トラブルが頻発しているということそのものが、そもそもの資質を疑う根拠にするものは数多い。発生するトラブルは初手で終わるのなら、例え大規模デモであってもその方が不快感は少ないものだ。
そういう意味では、諸問題を一発で解決するというのは理想だ。段階的に少しずつやっていくことにもメリットはある。だが同時に、一発でまとめて解決することにも相応以上のメリットがある。
しかもテロリストが勝手にそれをやってくれる。これはかなりの恩恵があると言ってもいい。なにせ負の側面をテロリストが勝手に背負ってくれるのだ。デメリットの多くを排除される側が勝手に背負ってくれるのなら、その分都合が良いことは多いだろう。
……だからと言って、それにこっちが納得できるかと言われれば別だろう。
「分かっているのですか、ウルバヌス聖下……っ」
カズヒねぇもまた、歯を食いしばりながらウルバヌス二世を睨み付

けている。
言いたいことは分かる。理解はもちろん、納得もできる。そこまでは、暗部出身であることもあって、カズヒねぇはクリアしている。
だが同時に、それを良しとできるかは別問題だ。
カズヒねぇはそれを言外に込めながら、ウルバヌス二世を見返した。
「それを、ミカエル様が了承なさるわけがないと……分かっておられるのですかっ!!」
その真っ直ぐな糾弾に、ウルバヌスは動じない。
ただ静かに微笑、そして悠然と返答する。
「思わないさ。だからだよ」
その言い様に、カズヒねぇすら気圧されそうになっている。
間違いなく、圧倒的不利な状況だ。ここから戦闘で巻き返すことはできないだろう。
だがしかし、この場の主導権を握っているのはウルバヌス二世だ。目の前の男が、この場の主役といっても過言じゃない。
俺達全員が、ウルバヌス二世という男に、？まれかけている。
認めるほかない。ウルバヌス二世は傑物中の傑物だ。
そもそもローマ教皇などという立場につけるのだから当然だ。世界に存在する聖書の教えの頂点といえる人物。人類における、聖書の神の代行者とされる男。まして奴は、当時はびこっていた教会の内憂外患を大きく取り除いてのけた、ローマ教皇の中でも有数の人物だ。
その傑物たる所以を、俺達は目にしている。
まごうことなく傑物であり、冷血な手法をもってして教会の綱紀粛正を成し遂げた男だ。ここまで想定しろという方が無理だろうが、現実問題それだけの男だった。
目的は徹頭徹尾、教会及び信徒からの不穏分子の殲滅。その為だけにここまでのことを成し遂げ、結果としてほぼ成功しているだろう。
念には念を入れて皆殺しを目指しているが、そもそも最初の時点でほぼ成功しているわけだ。
聖書の神が死んでいる状況では成し遂げられず、それを伝えること

もほぼ不可能な理由によるクーデター。それを引き起こした時点で、力づくで叩き潰しのが大前提となっていた。更に禍の団による介入も踏まえれば、神聖糾弾同盟から死者は大量に出る。
……敗北と言っていいだろう。一連の事件は、ほぼ確実にウルバヌス二世の希望通りに進んでいた。
だからこそ、俺達全員が奴に対して憤りを覚えている。
その視線を受け止めながら、ウルバヌス二世は手に持った剣を軽く振りかぶり―
「させるかよ」
―それが奴自身に突き刺さる前に、俺の障壁がそれをずらす。
ああ、そう来るだろうと思っていた。
ウルバヌス二世にとってこの事態は希望通りだが、最良ではない。可能ならばここから更に、徹底的に駆除を行うことが理想のはずだ。その為の仕込みはしているだろう。
だからこそ、ここでこれ以上させるわけにはいかない。
「……イッセー、力づくで捕縛するわよ。死なない程度にボコっても、私は見なかったことにしてあげるわ」
「ありがてぇ。十発ぐらいぶん殴らねえと気が済まないからな……っ！」
相当とさかにきているカズヒねぇとイッセーが、即座に飛び掛かれる体勢になる。
「さて、これは困ったな。最終段階に到達できるなら越したことはないのだがね」
心底困った表情でぬかすウルバヌス二世は、本気でそう思っていることが確定だ。
この男、自分が倒れることまで大前提。そもそも自分の命をどう使いきるかまで考えて、盤面を整えてやがる。
「……言いたいことは色々あるけれど、それは捕まえてからにさせてもらうわ」
リアス部長も相当にキているようだが、それでも冷静さを何とか保っている。

さて、問題は奴らが素直に投降するわけがないってことだがな。
「どう死ぬかで動く奴らを、殺し厳禁で取り押さえる。面倒な条件を上乗せしやがって」
思わずボヤくと、ウルバヌス二世は自嘲の笑みを浮かべだした。
「所詮この身は影法師というものだ。サーヴァントというまがい物だからこそできる辣腕だと自覚はしているとも」
ああなるほど、そういうタイプか。
サーヴァント自身が己を英霊そのものと解釈していないケースは、少なからずあるらしい。
ウルバヌス二世はそのタイプか。そして、だからこそこれだけの事態を引き起こした。
……面倒極まりない。だが、それだけだ。
既に趨勢は決しているも同然。確かにまとめて殲滅しないルートなら面倒ごとも多いが、上層部がこんなやり方で不良在庫一斉処分じみた真似をするわけがない。俺としても、そういった方法は不本意だ。
カズヒねぇですらそのつもりはなさそうだしな。なら確定だろう。
「悪いがゲームセットだ。あんたの目論見はこれ以上進ませない」
「……ふむ。まぁそうなってもどうにかなる段階にはなっているが、やはりできる範囲内で最良の結果は目指したいものだ」
そういいながら、ウルバヌス二世は自決するチャンスを探るようにし―

『へ～。そういうことなわけかぁ？　やってくれるねぇ？』

「困ったものですね。いい様に利用された感があります」

—ここに来て、招かれざる客が来たってのか!?

イッセーＳｉｄｅ

俺達が振り返ると、そこには敵が二勢力も来てた。
自我未覚醒体も含めた、片手の指が埋まるぐらいのステラフレームと、更にヴァルプルガ。
更に別の方から、仮面ライダーが引き連れる形で妙な集団が出てきやがった。
「……禍の団、そしてサウザンドフォースといったところか」
少し警戒しながら、ウルバヌス二世はそう呟いた。
むこうとしても、いい様に利用したとはいえ敵だしな。警戒は当然するか。
「かつてのローマ教皇が、このような手段を取られるとは残念です。見切りをつけて正解でした」
仮面ライダーがそう言うと、ステラフレームの方も肩をすくめている。
『なんか妙な動きと思ってたけどさぁ？　私ら使って身内の粛正って

えっげつな……あれ？』
と、ステラフレームの一体が首を傾げてた。
その視線は乙女さんの方に向いていて……あ、あいつモデルバレットか！
俺がそれに気づいた時、モデルバレットが指を震わせて乙女さんの方に向けた。
『……乙女、ねぇ？』
「……誰？」
きょとんとして首を傾げる乙女さんをよそに、更にもう一体ステラフレームが首を動かして乙女さんを見る。
『おいおいまじかよ!?　髪の色は違うけど乙女ちゃんじゃね？　何がどうなってんだ？』
「え？　その声……っ」
乙女さんがなんか目を見開いているけど、やっぱり知り合いか。
ステラフレームの自我覚醒体って、乙女さんを犯していた連中を素体にしたのが初期型だったしな。そりゃ知り合いが出てきて当然か。
ってことはクソ野郎ってことで間違いないな。いつでもぶっ飛ばせる準備だけはしとくか。
カズヒも遠慮なくぶっ飛ばす気満々……かと思ったけど、なんか嫌そうな顔してるな。
「……？でしょ？　ここで間藤（まどう）が来る……っ」
「え？　なんかまずいのか？」
そりゃ因縁どころの話じゃないだろうけど、そこまで嫌そうな反応するほどの奴なのか？
俺も思わず尋ねたけど、九成も怪訝な表情を浮かべてる。
「なんだよカズヒねぇ。なんかピンポイントでヤバい相手なのか？」
九成もいぶかし気にしていると、カズヒは凄く言いづらそうにしていた。
「いえ、モデル六郎（ろくろう）のおっさんヘキサやモデルアーチ（ザイネス・ドーマ）に比べたらへっぽこもへっぽこ。回路を持っていた外野の小物なんだけど」
『このクソアマ！　絶対ぶちのめした後、股で詫び入れさせてもらう

ぞ、あぁん!?』
うわぁ。なんていうかストレートに屑。
なんていうか小物臭いにもほどがあるっていうか。これならシャルバの方がまだましじゃねぇか？
「あの？　あいつ具体的にどんな奴なの？　私会ったこともないし」
「確かに道間家は素質持ちの一般人を助手や配偶者用にスカウトするけれどぉ、その程度でしょぉ？」
南空さんやリーネスも怪訝な表情を浮かべてるな。つまり大したことがない小物ってことか。
なのに何故か、カズヒと乙女さんは凄い表情になってる。
え、どういう事？
その時、うんざりそうにそのステラフレームが肩をすくめた。
『ったく。仮にも元旦那相手にする目じゃねえだろ？　……ま、こんなガワじゃぁそれもあるってか？』
「……は？」
九成が、思わず二度見するほど反応した。
俺もその言い草に、一瞬理解が追い付かなかった。
ってことは、あれか？
あいつが、九成の前世の親父……？
え……いや……それって……。
「お前、親父に似なさすぎだろ？」
『んだとコラぁ!?　てめえ、天才イケメンホストの血をなんだと思ってんだぁ!?』
思わず言ったけど、っていうかホストだったのかよ!?
「……ちなみに暗示の魔術だけは一生懸命に覚えていたわ。顔と精神干渉だけでホストとして成長した順当な屑よ」
カズヒがバッサリ言うけど、本当にろくでもねえな！
「何をどうしたらあんなのから九成ができるんだよ!?　どう考えてもおかしいだろ!?」
「タイプライターの上で猫を走らせたらシェイクスピアができた〔遠回しに凄い偶然の奇跡と言っている〕感じでしょう」

『てめえら焼き殺すぞ!!』
カズヒが俺にそんなこと言い返してきて、更になんかキレ散らかしている。
うっわぁ。生命の神秘をこれでもかって教えてくれるなオイ。
九成も凄くげんなりしているし。ドン引き以外の何物でもねえな。
乙女さんはちょっと反応に困ってるけど、それを庇う様にカズヒが前に出る。
あとすぐに南空さんとリーネスも前に出てる。
徹底的な防衛体制だ。そんなに関わらせたくないほどか……そりゃそうだな。
俺が納得していると、モデルバレットが愉快そうに肩を揺らしだした。
『ま、なんか面白いことになってるみたいだしぃ？　ここで事態を悪化させちゃおっかなぁ？』
そう言いながら、モデルバレットは魔法陣を展開させる。
……どこかの地下室、それも魔術的な儀礼場みたいな場所が映し出されてるな。ただ、俺は見覚えがない。
だけど同時に、ウルバヌス二世が目を見開いた。
そしてすぐに、歯を食いしばる。相当苛立ってる雰囲気だ。
「……まさか、気づいたのか？」
『禍（カオス・ブリゲート）の団をなめたらいけないねぇ？　面白い術式を仕込んだ亜種聖杯、見つけちゃったんでちょっと小細工しちゃいましたぁ～？』
ってマジか！
亜種聖杯っていうと、ウルバヌス達は一つか二つ遺していたとかそんな感じか。それで一発逆転とか、最後の仕込みとかをする気だったと。
俺はそう推測するけど、映像を見ていたリーネスが目を見開いた。
なんだなんだ？　もしかしてもっとやばいのか!?
「……バチカンの霊脈と繋げ、死者の魂すら取り込んだ英霊召喚用の願望器！　しかも込められた魔力量からみて、短時間なら無尽蔵の魔力供給もできる……っ」

リーネスがとんでもないことを言い出した。
おいおいおいおい冗談だろ!? この期に及んでそんな仕込みかよ!?
ウルバヌスが自決しようとしたのは、そういう事か。あいつ自身が死ぬことで、英霊召喚のトリガーになると。
ただウルバヌスが悔しそうにしている辺り、あいつにとっても不都合な細工をされたみたいだな。
「……あの細工から見て、これでは決戦英霊は駆除を終えた後も当面止まらん。下手をすれば、ここにいる戦士達すべてを殺しつくす……っ」
『そういう事♪ 狂戦士（バーサーカー）のサーヴァントを、思考にバイアス掛けて召喚するなんてマネをしてるからねぇ? ちょっと小細工で方向性を修正しました～♪』
愉快そうにそう言うモデルバレットは、そして一本指を立てる。
『そんなわけで、捨て駒や逃げ切れる実力者以外はこっちも撤退中♪
私らも適当に遊んだら切り上げる感じってわ・け♪』
碌でもないことしやがった。
ウルバヌス達もそうだけど、それを改ざんしたモデルバレット達もろくでもねえ。
畜生! こうなったら何としても奴らを何とかして、発動を阻止しないと―
「……いかん、聖下を守れ!」
「このタイミングで聖下が討たれれば、事態は悪化するぞ!?」
神聖糾弾同盟が慌ただしくなるけど、そりゃそうだ。
あいつらにしたって今のままだと避けたい事態になっちまう。それだけは避ける為に気合も入れるだろうさ。
「これはまずいですね。全部隊に撤退準備をさせるべきです」
「そのようだな。私がするから警戒を頼む」
サウザンドフォースはサウザンドフォースで、撤退の準備を始めてるしな。
なら俺達は妨害の準備だ。禍の団の好きにさせるわけにはいか

ねぇな。
かなり嫌だけど、今はウルバヌス二世を守らないと。この状況でサーヴァントが召喚されて、まとめて大量殺戮なんて事態は絶対に阻止しないといけないからな。
「……皆！　今は一旦神聖紐弾同盟（彼ら）と協力してでも―」
リアスがそう指示を出した、その時だった。

「……ん？」

その疑問の声を、ウルバヌス二世が急に上げる。
視線が声にひかれてウルバヌスに集まった時、俺達は目を見開いた。
力が抜けていくウルバヌス二世。その胸、心臓がある位置に、穴が開いている。
それを一瞬理解できなかったウルバヌス二世は、この時初めて恐れの感情を浮かべていた。
「……待、て。今は、消える……わけ……に……は―」
そしてわずかな時間で、ウルバヌス二世は消滅する。

おい、冗談だろ……っ

聖教震撼編　第五十五話　戦士を屠る者

和地Ｓｉｄｅ

なん、だと？
俺達全員が唖然となる、そのあっさりとしたウルバヌス二世の退場。
だがこのタイミングで、それは絶対に起きてはならない。
何故なら、ウルバヌス二世が暴走する信徒達を一斉に駆除する為の仕込みが起動してしまう。それも、モデルバレット達によって改悪された状態で。その起動スイッチが押されたのだ。
「……あらぁん？　いったい何が起きましたのねん？」
ヴァルプルガがきょとんとしていることから、これは禍の団の仕込みではない。
じゃあ誰だ？
サウザンドフォース？　いや、さっさと撤退する腹積もりになっていたからまずない。
大欲情教団？　いや、あの変態集団は一から十まで「変態にしてあげたい」が行動原理だ。この方向性は違うだろう。
じゃぁ誰だ？　もちろん俺達Ｄ×Ｄ側でもない。
俺が混乱を押しとどめながら思考を加速させた時、足音が響いた。
「……貴様らぁっ！　どういう絡繰りだ!!」
そこに現れたのは、スカウティングパンダレイダー。
ただ問題は、奴が魔力を持っていることだ。
しかも不思議なことに、俺達全員を敵視しているようだ。どの勢力のものでもないが、それにしたってこんなところに一人というのはおかしい。
動きや気配から考えて、戦闘能力は高く見積もって中級悪魔クラス

程度。まず間違いなくこの場において、雑兵レベルでしかない。単独で動くわけがない。
困惑する俺達に、そいつは顔が見えていたらつばが飛んでいるレベルでまくしたてる。
「訳の分からない化け物どもが跳梁跋扈し、漸くローマ教皇を殺せたと思ったら掻き消える!! 貴様達、いったい何を隠している!!」
その言葉に、俺達は戦慄を覚えただろう。少なくとも俺は覚えた。
戦闘能力が実は高かったとか、そういう事じゃない。
あろうことかこの男、ウルバヌスを撃ち殺せていることにすら気づいていない。
なんの異形の知識もない、それもただレイダーになっているだけの男。この頂上存在が暴れまわる場所において、雑兵とか一兵卒レベルのはずだ。
そんな、男が―
「我らフォーレイザーを! バチカンを断罪する戦士達を、ここまで愚弄するか! この……化け物どもがぁっ!!」
―最悪の引き金を引きやがった、だと?
『ハハハハッ! まさかこんな展開になるなんてなぁ!!』
俺達が愕然とする中、元くそ親父が高笑いしながら指を鳴らす。
その瞬間、レイダーの左右に紫色の十字架が出現。そして瞬時に紫炎を放つ。
なにも理解する間もなく、レイダーは焼き尽くされた。もはや跡形も残らない。
事態を最悪の流れにした奴は、まるでただそれだけの為にいたかのように消え去った。
『面白い展開じゃねえか! ミザリの奴もこれは喜ぶんじゃね?』
そう高笑いしながら、そいつは背後に十字架を展開する。
クソが! 間違いなく奴の能力は、聖十字架再現能力とかその類だ。
神滅具を再現するとか、その時点で厄介だろう。それも戦闘特化型の人造惑星であるステラフレームがだ。控えめに言って危険すぎる。

『なんかちょっと拍子抜けだけどぉ？　ちょうどいいからもうちょっと暴れよっか？』
「そうですわねん。そろそろ燃え萌えしたいですわん？」
それに呼応するように、モデルバレットとヴァルプルガも戦闘態勢をとっていく。
まずいな、これは。
改悪されたサーヴァントが神聖糾弾同盟を皆殺しにした後、魔力が続く限り他の者達も殺していく。
なんとしても止めなくてはならないが、その妨害ぐらいはモデルバレット達がしてくるわけだ。
最悪逃げれば俺達は助かるだろうが、そうすると何が起こるか分かったものではない。
……バチカンを中心とした広範囲が更地になり、大量の死傷者が発生しかねない。避難させてもその分魔力消費が減り、追いかけてくる可能性すらあった。
おそらくスマートに残りを駆除してそのまま消滅。それがウルバヌスの目論見だったのだろう。それがこんな形でヤバい方向に向かっているのが始末に負えない。
となれば、答えは一つだ。
「俺はこのバカ達を足止めする。あと目の前のくそ親父には絶縁状を致命傷で叩きつけておく」
やるべきことは単純明快。
「戦えるメンバーは召喚されたサーヴァントを抑えてくれ。あと何人かはサポートをしてくれると助かる」
幸か不幸か、あくまで召喚されるサーヴァントは込められた魔力で現界している。長期戦で削れば削るほど、活動時間は減っていくだろう。
だから足止め戦力を送り込み、その間にこの馬鹿どもを撃退。後ろから刺そうとしてくる奴らを何とかしてから、集中砲火でウルバヌスの置き土産を撃退する。
難易度が高いことは分かっているが、他に選択肢もないだろう。

だから、こそ―
「そうね。それ以外に手段はないでしょう」
―リアス部長もまた、それに賛同してくれるわけだ。
「ならモデルバレットの相手はD×D（私達）がするべきだわ。出現したサーヴァントに関しては、まず教会側が対応するべきね」
「そうなんですか？　俺達ってオフェンスの方が得意だし、そっちに行った方がいいかと思うんですけど」
イッセーが首を傾げるが、リアス部長は首を横に振る。
「理想的な形は総力で叩き潰すことよ。その点で言うのなら土地勘のある者達の方がディフェンスむきだし、信徒が積極的に対応することに価値があるの」
「ウルバヌスに利用されて滅ぼされそうになった者達を、信徒が助ける。神聖糾弾同盟のメンタルにおいてはそっちの方がいいってことだ」
俺が部長の補足説明をしてから、一緒にカズヒねぇの方を向く。
「あとカズヒねぇはそっち担当で」
「え？　ちょっと待って、モデルバレットは私が―」
「―貴方も一応信徒でしょう？　信徒側の最強戦力はそちらに投入するべきだわ」
俺とリアス部長に押される形になるカズヒねぇだが、まぁ間違いなく不満げだ。
形はどうあれもう一人のカズヒねぇと言っても過言ではない。当然だが、カズヒねぇとしては「自分が何とかしないと」筆頭格だ。
「そもそもダーティジョブがそういう事態にデカい顔もできないでしょう。何よりモデルバレットも間藤のクソも、私が何とかするべき問題で―」
「日美子」
言いつのろうとするカズヒねぇを抱きしめるように、お……お袋が止めた。
カズヒねぇもこれには困ったのか、二の句が継げない状態になっている。

気合と根性で強引に突破したいが、それができなくて困っている状態だ。
「よく分からないことも多いけど、日美子は聖書の教えの信徒なんでしょ？　ならこういう時は優先順位があると思うよ」
「いや……そうなんだけど……」
ものすっごく反論に困りながらも、カズヒねぇは言葉を探す。
「あいつらの相手を他人に任せて、別のことするのはその……」
「大丈夫」
カズヒねぇの反論にそう返すと、お袋は小さく微笑みながら立ち上がる。
「……私にとっても因縁があるもの。だからあの人達は私が相手をするよ」
その言葉は力強く、少し震える所から恐怖はあっても、それを呑み込んで挑む意志の強さを感じさせた。
カズヒねぇは止めたがっているようだけど、少しして呑み込むようにそれを我慢した。
「和地！　乙女ねぇ任せた！」
「任された!!」
というかお袋だしな。その辺は頑張るさ。
と、俺の隣に並び立つ二人ほど。
「ふっふ～ん！　そういう事なら私もいるわよ!!」
「私も少しぐらい力になるわよぉ」
鶴羽とリーネスも並び立ってくれるとは、心強い。
「ゼノヴィア！　貴女もカズヒと一緒に向かいなさい」
「承知した部長。もう少し暴れていくとしよう」
……さて、リアス部長も動いているしな。そろそろ気合を入れるとするか。
俺は振り返ると、楽しそうな雰囲気で戦闘態勢をとるクソ親父達を睨み付ける。
「覚悟はいいかクソ親父？　絶縁状は物叩きつけてやるてやるっ!!」
『父親に対して口の利き方が悪いぜぇ？　こりゃ躾の時間だなぁっ

!!』
言ってろ腐れ外道。
線香ぐらいは焚いてやるから、今度こそくたばりやがれ!!

祐斗ｓｉｄｅ

何かが起動した。僕達はそれを何とか理解できた。
「……何が起きた？」
サイラオーグさんがそう呟くけど、もちろん答えられる者はいない。
ただ一つだけ言えるのは、何かが起こること。そして可能性としてここから更なる一手になるだろうことだ。
高確率で神聖糾弾同盟によるものだろう。だが問題は、それがどういったものなのかが断言できない。
禍の団に関しても不穏だ。急に戦力が量産型の邪龍達だらけになっている。
新型サリュートやアルケード達は適宜交代を始めている。まるで「追加生産が楽な戦力」だけを残して僕達を足止めしているようだ。
禍の団と神聖糾弾同盟が連携をとっているとは思えない。ただ、何かを悟った禍の団が、神聖糾弾同盟のそれに便乗している雰囲気はあった。
「……木場、お前達はリアス先輩達の方に行った方が―」
匙くんが僕たちオカ研のメンバーに気を遣ってくれたその時だった。
空に幾重もの魔法陣が展開されると、そこに一人の男性の姿が映し

出される。
映像で見たウルバヌス二世のようだ。ただ、どこか小さな部屋にいるようだ。
「たぶんですが、あれは撮影された映像ですね」
小猫ちゃんがそう呟いたとき、映像の中にウルバヌス二世が口を開いた。
『さて、この映像が流れている時には、私は既に討たれているころだろう』
自分が倒された時に備えた映像ということか。
やはり、用意周到かつ深慮遠謀の人物だね。ここに来て、自分の死亡すら士気向上の為に利用する気概があるということか。
僕達が警戒する中、映像のウルバヌス二世はパチパチと拍手をする。
その反応に僕達は警戒心が湧いてくる。
自分が討伐されたという報告をしたうえで、拍手をする理由がよく分からない。
少し疑問符が湧いてきた、その時だった。
『誰がやったのかはともかくありがとう。おかげで効率よく教会の膿を処理することができる』
その発言に、僕達は一瞬何を言っているのか理解できなかった。
量産型邪龍達だけが敵でよかった。もし精鋭レベルの敵がいれば、この隙をつかれて討たれていたかもしれない。
それほどまでの信じられないその発言。それを成したウルバヌス二世は、そして同時に表情を変える。
それはどこまでも冷たい。冷徹で冷血で冷酷なまでに、冷たいという表現が似合う表情だった。
『そしてしぶとく生き残っている神聖糾弾同盟よ。膿とは当然君達のことだ』
そこから放たれる言葉は、どこまでも酷薄だった。
神聖糾弾同盟を。自分が集めて率いた者達を。彼は一切の躊躇も遠慮もなく、膿だと言い切った。

『主の代行者たる現ローマ教皇聖下と、天使長ミカエル様の連名による和平。それを受け入れられないばかりか、主に裁きを下してもらうなどというお題目に浮かされて未だに抵抗を続けているのだろう？
私が死んでいるのなら、この言葉を指定された地点で聞いている君達こそ、聖書の教えに救う癌細胞だ』
……何かが決定的にひっくり返った。
ここに来て、ウルバヌス二世は遺言といえる映像で、徹底的に神聖糾弾同盟を酷評している。その言いようはむしろスッキリし始めているようで、かなり本気で言っていることが窺えた。
『都合のいい言い訳をもらった瞬間に勢いづき、悪逆非道を行いながら善行を成したつもりでいる。衆愚とはまさに君達のことを指すのだろうな』
そう語るウルバヌス二世は本気だ。ここに彼の本音があると、僕達ですら実感できる。
『まぁ、都合のいい大義名分を欲しがるのが衆愚（君達）だ。現代に残る宗教は善と正義を示すからこそ、そういう者達までぞろぞろと集まってくる欠点があるのは事実だろう』
そんな風に言ってから、ウルバヌス二世は更に続ける。
『だからこそ、今の時期にそれは危険だ。何故なら私のあんな妄言以下の扇動に乗っかって、ここまで愚かなことをするのだから。……放っておけば無能な働き者らしく余計なことをするだろう』
そこまで言い切り、ウルバヌス二世は指を一本立てた。
『だから一計を案じさせてもらったよ。……一回で出せるだけ膿を出し切り、教会の体制を盤石なものとするためにね』
その言葉に、僕達は漸く理解した。
ウルバヌス二世の目的は最初からそれだ。それも、下手をすれば聖書の神が死んでいることを知ったうえで立てた作戦。それがこれだ。
教会内部、そして外部だが信徒。その中にいるだろう、三大勢力の和平に不満を持っていたり、知れば不満を持つだろう者達。
そんな彼らを可能な限り集め、聖書の神に裁きを下してもらうという不可能な目的で決起。クーデターに便乗することで、さらに規模を

加速度的に増大化させ、過激な方法で潰すことも踏まえた対処を強いた。
そのうえで、そこまでの大ごとになることを反対するだろうヴァスコ・ストラーダ猊下やエヴァルド・クリスタリディ猊下をわざと泳がす。同時に禍の団に内通していた者達を一種の保護下に置くことで、情報が流れるようにする。そしておそらく、情報を意図的にコントロールして同時期に潜入するように仕掛けた。
……全ては、自分に扇動された程度で武装蜂起するような教会関連の危険因子を、まとめて一掃させる為。たった一回のクーデターで今後起こりかねない暴動の類を処理させるのが目的だったのか。
『……まぁ、わざわざ宝具を改造してまで選別したのだから相当数が抵抗したままだろう。そうでない未熟なだけの者達は、既にしているとは思うがそろそろ地下道から避難して投降したまえ。ミカエル様や現教皇は甘いところがあるが、それゆえに君達にそう酷いことはしないだろうさ』
どうやら、意図的にそこまで選別していたらしい。
なんてことだ。これが、ウルバヌス二世の目的か。
だが、なぜ今更こんなことを―
『そして抵抗する者達よ。お前達は論外だ、死んでくれ』
―そう、冷笑をウルバヌス二世は見せた。
『まぁ生き残ったとしても問題は低いがね。そろそろダイイングゴートプログライズキーの影響で体もボロボロだろう。ベッドの上で介護されながら余生を過ごしたいのなら止めはせんよ』
油断も隙も無い仕込みをしているようだ。あの独自開発したプログライズキーには、そんなトラップが仕込まれていたとはね。
動きが妙にいいとは思っていたけど、反動に配慮しないドーピング効果があったということか。えげつない仕込みをしている。
『だがまぁ、余計な人材の浪費はいけないこともあるし、絶望したまま余生を過ごすのも不憫だろう。……ゆえに、掃除の準備はできている』
その時、バチカンのある場所からオーラが放たれる。

……待て。
なんだこのオーラは。イッセー君の真女王や、ヴァーリ・ルシファーの極覇龍すら超える。控えめに言って、仮面ライダーヴァナルガンドと星辰光の相乗効果を持った、ロキに匹敵する。
最上級悪魔どころか、魔王クラスすら凌駕するオーラ。こんなところで、そんな存在が？
「な、なんだよあれは……やばいだろ!?」
「おそらくサーヴァントです。ですがこの気配……今までのサーヴァントとは格が違います……っ」
匙くんや小猫ちゃんも戦慄している。この気配なら当然だろう。
「……それだけではありません。この地一帯から、力があそこに集まっていますわ！」
朱乃さんまでも戦慄する中、映像の中のウルバヌス二世は冷笑を深くする。
『今宵この地で死んだ衆愚達の魂と、我ら六聖英霊という生贄をもとに召喚される、愚者を滅ぼす為の切り札、決戦英霊は今ここに召喚された』
決戦英霊……っ！
六聖英霊そのものを生贄とするだけでなく、この戦いで死んでいった構成員の魂すら生贄にする大秘術……だって？
まずい。単純戦闘能力だけでも、これまでの六聖英霊以上は確定。それどころか、人間の魂まで上乗せされれば、魔力供給を一時的に無尽蔵にするだけの恩恵だって得られるはずだ。
『他勢力の者は避難したまえ。彼には「戦士達の殲滅と妨害に対する自衛」のバイアスをかけているから、今すぐ避難すれば殺されることはない』
そう気遣いの言葉を、ウルバヌス二世は掛ける。
だが次に、神聖糾弾同盟に対する冷たい宣告を彼は続ける。
『そして衆愚達は滅びるがよい。その愚かしさの罪、聖書の神から裁きを下されて死ぬなどありえんよ』
その冷たい宣告と共に。絶大なオーラが立ち上る。

あのオーラ。出力だけならイッセー君のジャガーノート・スマッシャーに匹敵……それ以上すらあり得る!?

『なので、決戦英霊は信徒ではない。……インド神話から最適な存在を選定した』

まずい。あんな威力が放たれれば―

『愚かな狂信者(クシャトリア)達を屠りたまえ、パラシュラーマよ』

―その瞬間、破壊の権限が降臨した。

聖教震撼編　第五十六話　強敵来週（後編：パラシュラーマ）

アザゼルＳｉｄｅ

御大層な映像が流れたと思ったら、いきなりバチカンの一角が見事に破壊された。

くそったれ！　ウルバヌスはやられちまったか!!

「しかもマジでパラシュラーマか!!　なんつーもんを呼び出してんだ!!」

パラシュラーマ。インド神話に出てくる英雄の一人。

ヴィシュヌ神の化身（アヴァターラ）であり、ラーマーヤナのラーマと渡り合っただのマハーバーラタのカルナの師匠だの、壮絶な逸話を持つ英雄の中でも屈指の化け物だ。

更に当時の時代における武人・王階級であるクシャトリヤを皆殺しにしたというシャレにならない逸話まで持っている。

教会の戦士である悪魔祓い（エクソシスト）、それも和平に不満のある連中を皆殺しにするのに、ここまでぴったりかつ皮肉の利いた存在もいやしないだろ。

だが同時に、間違いなく厄介な奴だということも事実だ。ヴァーリが極覇龍を使っても一対一で勝てるかどうか断言できん。Ｄ×Ｄの実力者にしたって、複数人がかりで挑むべき連中だしな。

しかもサーヴァントとしてパラシュラーマが召喚された。これもきついな。

サーヴァントは伝承の信仰が肝。更にこの方向性で召喚するからには、パラシュラーマがクシャトリヤを滅ぼしつくした時を核においているだろう。当然、それに見合ったスキルなり宝具なりを持ってい

るはずだ。
おそらく対戦士階級のスキルか宝具を持っているはず。性質上、戦士相手にマウントをとれると考えるべきだろう。
戦士である限り真っ向勝負では勝てる者も勝てない、少なくとも大幅に補正がかけられてしまう。そういった可能性を真剣に考えるべきだろうさ。
ちっ！　下手にイッセー達がぶつかっても、相当の被害が発生する可能性がある。だが同時に、最低でも「神聖糾弾同盟で戦い続けるつもりだった連中」は殺しつくす為の仕込みはしているはずだ。
大半の連中が分散設置された籠城戦をするように指示したのはその為だ。最悪、そいつらを皆殺しにするまでのブーストもかけられているだろう。
最悪の場合、撤退命令を下す必要もあるな。もっとも、素直に聞く連中とも思えないんだがな。
とりあえず、通信を繋げるか。
「……フロンズ、見えてるか？」
『見えてますとも、元総督』
すぐに返答したフロンズも、思った以上にやばい展開だと感じているようだ。
声色に少し張りつめたものを感じる。流石の奴も、全盛期の天龍と真っ向勝負ができそうな奴を無視はできないか。
「降参した連中は、転移させて冥界にでも搬送しとけ。万が一があるからな」
『そうですね。あとパラシュラーマという存在に、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）が興味を惹かれておりまして。場合によっては増援としましょうか』
バトルジャンキーはこういう時ぶれねぇなぁ。
「準備はさせとけ。ただ死戦になるが？」
『そこを踏まえても、と言っておきましょう』
適度に餌をやるのも大変だな。
さて、とりあえずはリアスに通信を繋げ―
『……アザゼル、大変よ!!』

―と思ったら繋がったな。
「リアスか。で、誰が倒した？　たぶん責任感じているだろうが―」
『―いえ、そうではないわ』
なんだと？
『異形を知らないテロリストがウルバヌスに致命傷を与えたの。しかも禍の団が術式に気づいて細工をしているわ。ウルバヌスの思い通りにパラシュラーマが動くとは思えない』
リアスの少し早口の説明に、俺は状況を理解した。
通信越しに聞こえているだろうフロンズも、絶句している気配を感じる。
まぁそうだろう。もしそうだとするなら、被害は神聖糾弾同盟にとどまるわけがねえ。
五秒ぐらいして、俺もフロンズもとりあえずやるべきことは定まった。
「全軍を集めろ。最悪、バチカンが吹き飛ぶぐらいは覚悟しないとな」
『可能な限り動かせる戦力を集めてから動きます。……一時間は稼いでもらいたい』
最悪の事態としか言いようがねえな、畜生が!!

和地Ｓｉｄｅ

さっさと片付けて総力戦が理想だが、パラシュラーマとかなりまずいな。
インド神話に名を遺す最強格の英雄だろう。冗談抜きでローランとかシグルドとかが出張るレベルの傑物。至った神滅具保有者でも勝ち目があるかどうか。

しかもサーヴァントとしてこのタイミングで召喚なら、十中八九クシャトリア・キラー状態。性質上戦士に対する特攻スキルを持っているはずだ。尚更ヤバい。
だからこそ、総力戦が必須なんだが―
『ヒィヒャハハハハハハハァっ！　燃え尽きなぁ!!』
―このクソ親父、別の意味で殺意がわく！
やり合っている感覚で理解できた。そして忌々しいことに前世の親父なだけあるよ。
後ろから三つほど具現化した十字架に対し、それが紫炎を放つより早く障壁を張って逃げる時間を確立させる。
こういった手法を何度も繰り返しながら、俺はクソ親父の星を大体理解した。
つまるところ、奴の星辰光（アステリズム）は聖十字架再現能力・座標指定型といったところだろう。
指定した地点に聖十字架を再現し、そこから紫炎を投射する。多少のタイムラグはあるだろうが、そこは拡散率を高めることでカバーもできる。更に十字砲火すら可能だから、そもそも当てやすい。
座標を指定して遠隔発動が可能。忌々しいほどに俺の親父らしい星辰光だ。妙なところで前世の血縁を感じちまう。
加えて―
「あららぁん？　その程度じゃ負けませんわよん♪」
―本家聖十字架のヴァルプルガは、禁手を発動させやがった。
デカい十字架に磔にされた八岐大蛇。そこから際限なく紫炎を放つ難敵だ。
そしてこの二人の砲火を縫うように―
『ほらよっとぉっ!!』
「なめんなぁっ！」
―迫りくるモデルバレットの打撃を、鶴羽が聖十字架の槍で何とかいなす。
座標攻撃で面を制圧するクソ親父。更に一方向に陣取っての投射をぶちかますヴァルプルガ。この二大聖十字架を上手く利用して、近

接攻撃を仕掛けてくるモデルバレット。
更に三体いる自我未覚醒体のステラフレーム。これが地味に厄介だ。
オフェンスの三人をカバーしてくるから、こっちも突破が難しい。
更に―
「……上からの指示が来たので、悪いけどちょっと威力偵察をさせてもらいます」
―ここに来てサウザンドフォースが撤退を翻しやがった。
素早くショットライザーを使って牽制するが、相手はスラッシュライザーを使って切り伏せる。
さらに警戒するべきは、奴自身のプログライズキーと星辰光。
展開される氷の鱗が縦横無尽に駆け巡って攻撃を凌ぎ、更に装甲強度の高い仮面ライダーが突貫する。
振るわれる攻撃を俺は伏せて回避するが、そこから氷の鱗を使って三角飛びを行い、クソ親父に奇襲じみた刃を振るう。
『サルヴェイティングレイン』
『っとぉっ!?』
慌てて回避するクソ親父に、その仮面ライダーは不満げな雰囲気を見せていた。
っていうかサルヴェイティングドッグかよ。まぁザイア製なんだから当然だが。
そこはいい。とりあえずこのごたごたをついて体勢を―
『……このアマ。女のくせにやってくれるじゃねえか』
「女を物扱いする下種ですか。ロクに己も律せない者が偉そうに」
―その時、寒気を感じた。
これはまずいな。ギアが上がるぞ。
『ぶっ殺してやるよぉ！　……天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せっ!!』
「いいでしょう。……創生せよ、天に描いた星辰を――――我らは煌く流れ星」
ああもう！　だったらこっちもやるしかないだろ!!

「天衛せよ、我が守護星――鋼の笑顔(誓い)で涙を変えろっ!!」
ええい！　これは絶対に時間がかかる展開だなぁっ!!

祐斗Ｓｉｄｅ

僕達は降参している者達の避難を進める班と、主力として召喚されたサーヴァントに対応する班に分かれて対応していた。
「どうします、デュリオ？」
「間違いなくヤバいから、気合を入れた方がいいだろうね」
「そのようだな。この距離からでも気配が凄まじいぞ……」
メンバーは少数精鋭。僕とデュリオとサイラオーグさんだ。
おそらく他からも実力者が来るだろう。そう思っていると、すぐに九成君達が担当していた方向から、何人もの戦士達が姿を現した。
「祐斗先輩！」
「祐斗！」
「木場か！」
そこにルーシアちゃんとカズヒ、ゼノヴィアが同伴していた。
他のメンバーは大半がデュナミス聖騎士団。リュシオン・オクトーバーも一緒にいる。更に枢機卿の礼服のインナーを纏っているのは、かのヴァスコ・ストラーダだろう。
「ほぉ。君が木場祐斗――かつてイザイヤと呼ばれた少年か」
ストラーダ猊下は僕を見て、そう呟いた。
……懐かしいとは言わないが、かつて呼ばれていた名を彼が知っているとは。
「よく、ご存じですね」

「少し事情があってな。……だが、今は後にするべきだろう」
確かにその通りだ。
既に、気配はすぐ近くだ。それも戦闘の音が鳴り響いている。
……僕達がここに向かうまでの短い時間に、いくつもの破壊が巻き起こっていた。
おそらく四か所。最初に最も大きな地点が破壊され、その後数か所の比較的小さい場所に連続して破壊が発生していた。
そしてそこに、圧倒的な力が具現化していた。
……一目見た瞬間に、悟った。
あれは、僕達を殺せる存在だ。
「お、のれぇっ！」
六聖英霊の中でも有数の武威を振るい、サイラオーグさん達を苦しめた、ゴドフロワ・ド・ブイヨン。
そんな六聖英霊を軽く捻るレベルで傷だらけにしている男。
浅黒い肌はインド出身だからだろう。だが同時に、寒気を感じるほどに磨き上げられた気配と、研ぎ澄まされた殺意がその全身からあふれている。
確信をもって断言できる。今目の前にいる男こそ、この場で一番強い戦士だ。
「……戦士（クシャトリア）が増えたか。なら、殺すのみだ」
静かな殺意に満ちた言葉。
小さく呟いたその男は、軽く斧を掲げる。
「改めて名乗ろう。我はバーサーカーのサーヴァント、パラシュラーマ。……戦士（クシャトリア）を滅ぼす者なり」
今この場にいる最強の存在。
それこそが、決戦英霊……パラシュラーマ……っ!!

聖教震撼編　第五十七話　死闘開幕

イッセーＳｉｄｅ

なんか乱戦になっちまってるけど、それがどうした!!
俺達だって頑張ってるんだ。そう簡単にやられるかよ！
『もらったよ赤龍帝！』
「なめんなぁっ!!」
モデルバレットの拳を、俺は拳で迎撃する。
ちっ！　流石は戦闘特化型の人造惑星。いい拳持ってるじゃねえか！
「下がりなさい、イッセー！」
『なめんなっての！』
魔力を放つリアスにミサイルを発射して撃ち合いながら、モデルバレットは俺からつかず離れずの位置で打撃を叩き込んでいく。
ああもう！　サウザンドフォースも嫌がらせレベルで攻撃を入れてくるから、俺達でも全面戦闘とかは難しい感じだ！
できればもう一手……っていうか一人欲しいけどなぁ！
そう思った時、上から誰かが落ちてくる。
「下がって！」
言われたとおりに下がったら、誰かが着地すると同時に凄い炎が巻き起こった。
モデルバレットも一旦下がるし!?　え、これなに!?
炎が収まると、そこにいたのは乙女さんだ。
……どういうこと!?
「天国ってそんなヤバいところなんですか!?」
なんで天国であんな物騒なものが!?　乙女さんって、魔術回路保有者としてはへっぽこだって話だけど!?　量だけはあるけどそれを活かせない的な!!

「え？　あ、これは基本技っていうか……」
「基本技⁉　神曲魔術っていうのはあんなのが基本技なんですか⁉」
俺はもうどこから反応していいのか困惑だよ。
『おそらく火焔天ですね。あとで教えますが、とりあえずベアトリーチェのスキルである神曲魔術で使える範囲内です』
シャルロットがちょっとため息交じりに言ってくれるけど、うん、よく分からん。
今度機会があったら、神曲について調べてみよう。なんか歴史ある名作らしいし、知っといた方が歴史とか重んじる上役の人とかに評価されそうだ。
と、とにかく神曲魔術で炎は操れると。神曲魔術は魔力を使うから、魔力たっぷりの乙女さんならこれぐらいはできるということか。
なんていうか、意外とオフェンスでもできそうだな。流石サーヴァントってところか。
だけど、やっぱりこれは違うよな。
「助かったけど下がってくれ、乙女さん。流石にいきなり、もう一人のカズヒを相手にするとかきついだろ」
モデルバレット。ミザリの仕込みが変な形で発動した感じで生まれたらしい、もう一人のカズヒ。道間日美子の闇の結晶体と思われる存在。
そんな奴といきなり戦う羽目になるのはきついだろ。俺だってそれぐらいの気は使いたい。
まぁ、元旦那らしい別口のステラフレームもあれなんだろうけどな。九成がサウザンドフォースの仮面ライダーと三つ巴しているけど、出来れば誰か変わってあげてほしい。大変だろあいつも。
となると、ヴァルプルガ辺りを頼むべきだな。炎ＶＳ炎だし、案外いい勝負になりそうっていうか。
俺がそう言おうと思った時、乙女さんは首を傾げていた。
なんだ？　もしかしてもう覚悟完了済みだったとかか？
だとしたら、ちょっと気を回し過ぎたのかもな。考えてみればリーネスや南空さんも戦う気満々だし、ちょっと気遣いの仕方を間違えた

かもしれない。
俺が考え直していると、乙女さんは首を傾げながら何かに気づいたようにハっとなる。
そしてモデルバレットを指さしながらこっちを向いて―
「……あの子、日美子と関係あるの？」
―なんか素っ頓狂なことを言ってきたんですけど。

祐斗Ｓｉｄｅ

気配だけで、僕は戦慄を覚えている。
間違いなくこの場において、最強は目の前のパラシュラーマだ。
ゴドフロワ・ド・ブイヨンが圧倒的に不利な状況に陥っている。更にそれをなしたパラシュラーマは、まだ余力がある雰囲気だ。
まず間違いなく、目の前のサーヴァントこそが最大の敵だ。
神聖糾弾同盟、厳密にいえばウルバヌス二世達の切り札。僕達ではなく、集められた戦士達を滅ぼしつくす為の最終手段。それがバーサーカー、パラシュラーマ。
「……おいおい、勘弁してくれよ」
「この情勢下で、この敵手は流石に……な」
デュリオとサイラオーグさんですら戦慄している。それだけの相手だと痛感できる。
まず間違いなく強敵だ。少なくとも、グレンデルやラードゥンとは比べ物にならない。下手をすれば、あのヴィール・アガレス・サタンすら超えるかもしれない。
倒せるとするなら、本気を出したクロウ・クルワッハぐらいだろう。例えカズヒであろうと、一対一で勝てる相手ではない。

今までない戦慄を覚えている中、パラシュラーマはこちらに対しても寒気を覚える視線を向ける。
「全員、腹をくくりなさい」
そしてカズヒが珍しく冷や汗を流しながら、静かに腰を落とした。
「……禍の団が細工をしているわ。ここでこいつを倒さなければ、奴は魔力が続く限り戦士達を殺し続けるわ」
……なんてことだ。
禍の団も僕達と同じように、ウルバヌス二世に利用された形だ。おそらくそうだといえる。
だが、彼らは決して舐めて掛かれる相手ではなかった。ウルバヌス二世にとっても不本意な事態を引き起こしたということだろう。
ならば、だ。
「……こちら木場祐斗。神聖糾弾同盟の人達は？」
『アニルっす！　今救助活動中ッスけど、アーシア先輩が合流してくれました！』
アニル君の返事は、少し安堵できる内容だ。
既に攻撃を受けて壊滅的打撃を受けた地点に、こうして救助部隊を送ることができた。
彼らが尽力してくれれば、少なくとも命を失う者は削れるだろう。それは僕達ができる範囲のことだ。そして成さねばならないことだ。
だからこそ気合を入れ直す。
これ以上、目の前の存在に命を奪わせるわけにはいかないのだから。
「……戦士（クシャトリア）が多いな。まぁいい、すべて滅ぼすのみだ」
パラシュラーマが冷たい声を挙げれば、ゴドフロワ・ド・ブイヨンは拳を握り締めて立ち上がった。
「そうはさせん。ウルバヌス二世の意思がどうであれ、主の裁き以外で命を落とさせるものか……っ！」
こちらも引く気は欠片もない、か。
正直、この期に及んでとは言いたい。だか彼らからすれば当然の意見なのだろう。

どちらにせよ、決着をつけねばならないだろう。
それをもって区切りとする。少なくとも、区切りという節目をつけることで切り替えるきっかけを作る。
僕らにできることは、それだけだ。
「……祐斗、悪いけれどゴドフロワの方を頼んでいいかしら？」
カズヒがそう告げながら、一歩前を踏み出した。
「この事態を収めるのは、可能な限り教会の者達がするべきだと思うのよ。その方がのちの安定に繋がるわ」
……なるほど。
言っていることは間違ってない。ただ一つ、問題がある。
「勝てるのかい？　信徒だけで」
「……勝てるとも」
僕の懸念に答えたのは、カズヒではない。
ヴァスコ・ストラーダ猊下が、小さく頷きながら一歩前に出る。
「一つだけ、決定的な一撃を叩き込める余地がある。ただ十分ほどかけてほしいのだが……行けるかね？」
十分。それだけあれば、決定的な一撃を叩き込めるとストラーダ猊下は告げる。
それだけの自負がある。そういう事なのだろう。
そして―
「お任せください、猊下。十分と言わず二十分でも三十分でもかけて見せましょう」
「アレを使うのなら、露払いはお任せください」
デュランダルとヘキサカリバーの二刀流に変えたゼノヴィアと、どこかすっきりした様子のリュシオンさんがそれに続く。
あとリュシオンさんの反応からして、彼は喰らったことがあるのだろうか？
「なんか凄そうな切り札っぽいね。大丈夫なのかい？」
「安心していいよ。……試しで食らって、見事に意識が飛んだからね」
デュリオにそう答えるリュシオンさんだけど、今ちょっと耳を疑ったよ。

彼が、意識を飛ばされた？
ヴァーリ・ルシファーを一対一で打倒したという、リュシオン・オクトーバーが？　あの神の子（ディア・ドロローサ）に続く者が？　如何に歴代最強のデュランダル使いとされるとはいえ、性能が大きく落ちるレプリカのデュランダルしか持ってない、ご老体にだというのか。
どう受け取ればいいのか分からないけれど、まず間違いなく切り札といえるだろう。むしろ剣士として、かなり興味が湧いてきたよ。
「……ならば、俺達はその切り札を見届けられるように、ゴドフロワを打倒するか」
「凄い事言うねー。ま、俺も気になってはいるんだけどさ？」
サイラオーグさんもデュリオも、かなり興味を惹かれている。
実際問題、教会の者達がどうにかすることを重視するなら、そうでない者達はゴドフロワの相手ではあるしね。
問題は―
「舐めてくれる……っ」
―ゴドフロワが、ボロボロであっても死に体ではないことだ。
既に聖剣の盾騎士団を大量に展開し、再び戦う体制に入っている。
あのサイラオーグさんに匙君がついている状態で苦戦を強いた相手だ。いくらデュリオや僕がいる状態とはいえ、サイラオーグさんでも確実な勝利は約束されない難敵だろう。
そう思った瞬間、ゴドフロワとパラシュラーマに向かい、大量の砲弾が殺到した。
「む……？」
「ちぃっ！」
双方ともに迎撃するけど、数も質も優れている猛攻に、彼らは機先を制される。
そしてその方向から、聞こえてくるのは僕らの後輩の声だ。
「お待たせしました！　砲撃体制は万全です！」
ルーシアちゃんか。だけど何だろう、声が少し弾んでいるような気がするね。
カズヒもそれを悟っているのか。少し肩をすくめている。

「ルーシア、ちょっと調子に乗り気味だから抑えなさい！」
「無理です！」
たしなめる声に対する返答は、即答だった。
ただカズヒも分かっていたのか、肩をすくめてからフォースライザーを流れるように装着する。
……こちらに何やらいい傾向のようだ。ちょっと戦闘中だから不安だけど、僕がその分気を付けても、十分お釣りが返ってきそうだね。
そう思った時、更に空から影が差した。
「あらあら。ルーシアちゃんも憑き物が落ちたようですわね」
「朱乃副部長か！」
ゼノヴィアが振り仰げば、そこには堕天使と悪魔の翼を共に広げる朱乃さんの姿があった。
朱乃さんまで来てくれたのか。これは頼もしい！
「うふふ。アザゼル先生から「手が空いているなら多めに戦力を投入しろ」と言われたので、助太刀させてもらいますわ」
ありがたい。こういう時にはとても頼りになる先生だ！
「兄さん！」
そしてルーシアちゃんは、拳を突き出してリュシオンさんの方を見る。
「やっちゃってください!!」
「……ああ、任せてくれ!!」
……さて、どうやらここが大一番だ。
勝って、そして生き残る!!

聖教震撼編　第五十八話　聖都に星が満ちる時

カズヒＳｉｄｅ

パラシュラーマ。インド神話において、戦士階級を皆殺しにしたとされる、神の化身。

一神教の戦士達によるクーデターのシメとしては、皮肉が聞いているにもほどがあるわね。おそらくだけど、真相発覚とこの皮肉でメンタルをへし折ることで、一人でも多く神聖糾弾同盟を滅ぼせるようにする策でしょう。隙を生じぬ二段構えの精神攻撃が、圧倒的戦闘能力を更に生かしているわ。

徹底的にのちの反乱の眼を一発で刈り取る。ウルバヌス二世の強い意志をひしひしと感じるわ。

……ダーティジョブ担当だった身としては、言いたいことに理解ができてしまうのが複雑ね。それができるならかなり綱紀粛正が楽ではあるもの。サーヴァントである己を影法師でしかないと断じ、かつテロリストとして行動できる側だからこそできるクレバーな策ではあるわ。

とはいえ、それを見過ごせるかといえば全くの別問題。加えて彼にとっても不本意な形になりかねないのなら、尚更止めるしかないわね。

「……さて、なるべく信徒だけで潰すのが美談かしらね」

「だろうね。デュナミス聖騎士団としては、こういう時に動くのが出番だし」

私が独り言ちると、リュシオンが苦笑しながら同意を示してくれる。

パラシュラーマは油断なくこちらを警戒しているけれど、只倒せばいいというものではない。世の中には勝ち方というものがある。

この事態を可能な限り丸く収めるのなら、反乱を越した信徒達のメンタルにも配慮しなければならない。ウルバヌス二世自ら選別した安牌は、反乱を起こした負い目と反乱によるガス抜きでどうにかなる。つまりそうでない方だ。

皆殺しという選択肢を捨てる以上、今後彼らが少しでも問題行動を起こさないようにするべき。いくら重篤な後遺症が見込めるとはいえ、今どきは言葉で荒立てることもできるのならなおのこと。

……つまりは、彼らにとって美談になる勝ち方だ。

信仰心ゆえに暴走し、そして生贄にされそうになった者達。彼らを信徒達が身命を賭して救う。こういう美談に基づいて救えるのなら、のちの揉め事を起こす可能性は低いだろう。

非常に面倒くさいけれど、こういったことも考えないとこの手の馬鹿は余計なことをしかねない。しても少なからず出てくるでしょうから、減らす為にもするべきだわ。

さて、となると―

「……ゼノヴィア、貴方はゴドフロワの方をお願い」

「なるほど。私の場合はややこしくなるということか」

理解が早くて何よりね。

ゼノヴィアは教会から追放され、さらに悪魔に転生した来歴がネックになる。ついでに言えば、和平に対する反対も理由なのだから、魔王の妹に仕える堕天使元総督の教え子とか、なまじ信徒だからこそもめかねない。

ゼノヴィアもそれを理解して、そのうえでストラーダ猊下のもとに歩み寄る。

「猊下、ご武運をお祈りします。……そして、なればこそ最善を尽くさせてください」

そう告げ、差し出すのはデュランダル。

……そういえば、エクス・デュランダルを解除しているのね。

まぁ、エクス・デュランダルがゼノヴィアに向いているかというと思うところはあるけれど。こう言うとなんだけど、ゼノヴィアは考えることもできるだけで基本特化型のパワータイプだものね。

開き直ってデュランダルをメインウェポンで、サブウェポンとしてヘキサカリバーは選択肢としてはありでしょう。割り切るというのは時として効果的だもの。選択する自由はあるわね。
そしてこちらの勝率を上げる為に、ここにデュランダルが歴代最強とも称される使い手に返ってきた。正直かなり頼りになるわ。
「……ふふ。これは期待に応えねばならんな」
微笑みながら、ストラーダ猊下はデュランダルを手に取った。
もうその時点でなんというか、気配が変わるといった感じがするわね。
……パラシュラーマの警戒が跳ね上がった気がするわ。これ、真剣にクロウ・クルワッハクラスの使い手じゃない。
さて、これは死ぬ気でやるしかなさそうね。
「さて、それでは動きましょうぞ猊下」
「無論だとも、戦士デュランよ」
ストラス騎士団長に頷きながら、ストラーダ猊下はデュランダルを握り締めて一歩を踏み出す。
「厄介な戦士（クシャトリア）が多いようだ。これは骨が折れそうだな」
そう、パラシュラーマは踏み込みながら告げた。
……反応が一瞬遅れた。あまりにスムーズに動いていた所為で、相手が仕掛けに来たことが判断できなかった。
ワンテンポ。だけど十分すぎる致命的な隙だ。
そのまま一瞬で振るわれる斧の一撃は―
「創生せよ、天に描いた星辰を――我らは煌く流れ星」
―ストラーダ猊下は、星を開帳しながら受け流した。
「誉れ高き聖剣担う、我らが初代の聖騎士よ」
その瞬間には反撃の一閃が振るわれる。
「ただ我武者羅に剣を振るったその果てに、英雄たれと願われた、汝に敬意を表します」
その斬撃はすべからく、斧によって受け流される。
「ゆえにこそ、私は汝を悲しみましょう。その若さと共に進んだ道が、老いを知らずに潰えたことを」

振るわれる攻防は明らかに高次元。最高峰の技術を持っていなければ成せない動きは、お互いにスムーズに攻撃と受け流しを繰り返している。
斧という、性質上一撃の重さ重視で連撃には向いていない武器でそれを成すパラシュラーマ。更に８７の老体でありながら、そんな連撃を成せるストラーダ猊下。
控えめに言って、どっちも異常な高みに至った戦士だろう。
「真なる戦士の輝きは、ほんの僅かな時のみある。若さに連なる体の光は、心に陰りを生むだろう。しかし積み重なった心の光は、体に陰りを生むのだから」
そして、ストラーダ猊下の星が明かされる。
「その瞬きの最盛をこそ、私は伝え聞きたかった。その最盛の瞬きに、輝くことを逃したからこそ、私は貴方がその時を迎えてほしかったと願ってしまう」
我に返った私達が援護をしながら、パラシュラーマと攻防を繰り広げるストラーダ猊下。
その御身は、攻撃を繰り広げるごとに若返っていく。
「それゆえに、尊敬すべき豪傑たちよ。我が一瞬を見逃すな。瞬きの最盛が我が身に宿るは、刹那の時しかないのだから」
恐ろしいというほかない。この星はすなわち肉体回帰能力。
老いた戦士が若返る。老年の技術と経験を、若き肉体によって振るう。これが恐ろしくなくて何だという。
人間という短命の戦士が、異形たち長命の戦士と同じ領域に立ち向かえる。単純明快な悪夢が具現化している。
「その極み、貴殿が見据えるその時こそ。我が身が汝に手向けられる、究極の弔いと思うがいい」
寒気を感じるほどに、目の前に教会最強の戦士が降臨する。
星辰奏者、ヴァスコ・ストラーダ。全盛期に戻った化け物剣士が、更に肉体を強化させて戦闘を行う。
冗談抜きで、クロウ・クルワッハ級の化け物が目の前に顕現したわねこれ。

「超新星（メタルノヴァ）――枢機（カテド）の聖騎士（ラル・オル）よ、堕天（ラン）を断（ドウ）ち切れ」

ヴァスコ・ストラーダ
枢機（カテド）の聖騎士（ラル・オル）よ、堕天（ラン）を断（ドウ）ち切れ
基準値：E
発動値：C
収束性：C
拡散性：E
操縦性：E
付属性：D
維持性：C
干渉性：E

単純な星の性能はともかく、能力が鬼というほかない。
何より彼は剣士であり、ただそれだけを極めた怪物。
単純ゆえの強みを最大限に生かした、強みを伸ばした極地。
シンプルイズベストの極点たる星が、最強の敵を相手に激突してるわね、これ。

「……やはり、な」

……ただ残念そうな口ぶりなのが不安になるんだけど。何か懸念事項があるのかしら

和地Ｓｉｄｅ

『天弄せよ、我が守護星――――鋼の悪意で世界を犯せっ!!』
クソ親父がそう吠えると共に、苛立ちを撒き散らしながら星を開帳しやがった。
『苛立たしいぞ愚かな神よ。狂った明星を縛り損ねて、我が人生を下劣な鎖で縛らせるとは殺意がわく』
もう出だしからして性格のクソっぷりを感じさせる詠唱と共に、星の出力は増大化する。
展開される聖十字架の数も質も高くなる。攻撃の密度と火力が目に見えて上昇し、俺達を仕留める為に襲い掛かる。
『ゆえに代価を頂こう。紫炎の焔を纏いし十字架、我が武力として使うがために、思うがままに頂戴する』
そう。恐ろしいのはまさにその点。
この期に及んで目に見えて出力が変わる。それだけの高い出力が、シャレにならない脅威として具現化する。
『素晴らしきかな紫炎祭主。神威が如きこの力なら、代価としては十分だろう。目障りな有象無象を焼き払う、猛威はここに顕現する』
更にクソ親父の躯体に張り付くように、紫炎を放つ十字架が装着される。

推進力として、攻性防壁として、当然火炎放射器として。その力が更に具現化される

『我が鎖もいつかは焔で焼き尽くそう。万象一切焼き尽くされろ。我が栄光の道照らす薪と成れ!!』

ある意味で、戦闘という観点で言うならステラフレームでも最強だろう。

単純に振るって強い能力。兵器としての理想形ともいえる星辰光を、魔星の領域で具現化する。

更に分かりやすく出力が高いという性質も含め、圧倒的な猛威そのものといえる力が放たれた。

『超新星（メタルノヴァ）――明星逃（ルプト）がす咎の代価（リッ）、徴収（プ・ア）されしは紫炎（ンセ）の至宝（ム）ッ!!』

その瞬間、俺の目の前は焦熱地獄かと言いたくなるほど炎が撒き散らされた。

『このモデルマッド様の手柄になりなぁ、雑魚どもがぁあああああっ!!!』

モデルマッド

明星逃（ルプト）がす咎の代価（リッ）、徴収（プ・ア）されしは紫炎（ンセ）の至宝（ム）

基準値：A

発動値：AAA

収束性：C

拡散性：AA

操縦性：C

付属性：Ａ
維持性：ＡＡ
干渉性：Ｄ

俺のクソ親父、ステラフレームのモデルマッド。
具現化させているのは聖十字架再現能力・座標指定型。
反則極まりないほどに単純に強い、戦闘特化型の星辰光。
その猛威が、俺やサウザンドフォースの仮面ライダーに襲い掛かる。

聖教震撼編　第五十九話　銀・弾・突・貫

祐斗Ｓｉｄｅ

壮絶な戦いというほかないだろう。
僕達の方もそうだけれど、何よりパラシュラーマの方が凄い。
「まだだ……まだだっ！」
「……なら……こうだ！」
カズヒとリュシオン・オクトーバー。
どちらも教会出身であり、かつ高い戦闘技術を持ち、とどめにけた外れの精神性を持ち合わせている。
更にデュナミス聖騎士団の者達が加わり、あろうことか歴代最強のデュランダル使いと称される者が、デュランダルをその手に宿し全盛期となっている。
控えめに言えば、あそこにいるのは教会の最強戦力達。下手なサーヴァントでは抵抗もできず、一瞬で滅ぼされる。現四大魔王様ですら、眷属を率いて相手をするレベルだろう。
そんな彼らをもってして、圧倒されかねない戦いになっている。
「ぬるいぞ醜悪な戦士（クシャトリア）共よ……その程度の武で戦士を語るかっ!!」
圧倒的な数に、えりすぐれた質。
それをもってして、優位に戦っているのはパラシュラーマの方だった。
迎撃と反撃の余波で、僕達のいる所が深くえぐれる。この事実だけでもその脅威が示される。
パラシュラーマの動きは、狂気で理性を削っているはずのものとはとても思えない。バーサーカーというクラスからは想像もつかない、磨き上げられた武威を痛感する。
この想像を絶する武威に対し、死者が出ていないというのがある意

味で奇跡だ。それだけの圧倒的な武威が、僕たちのすぐ近くで放たれている。
そして思わず目を奪われそうになるほどの戦闘を、僕達はあえて押し殺して立ち向かう。
そう。目の前にいる脅威は片手間にどうにかできるものではない。獅子王と龍王が並び立ってなお、食い下がるだけで精いっぱいだった化け物が目の前にいる。
パラシュラーマの猛威に比べれば劣るからこそ、油断しないように気を引き締める。そうしなければならないほど、目の前の敵もまた脅威なのだ。
「させんぞ！　信仰に生きる者の絶望は、主の裁きによってのみ慰撫されるのだから!!」
ウルバヌス二世の真意を聞いてなお、ゴドフロワ・ド・ブイヨンは屈しない。
その執念と武芸によって、今の僕達を相手に食らいついている。
「ぬぉおおおおおっ！」
「これまたやるねぇ!!」
サイラオーグさんとデュリオが真っ向から挑み、それでもゴドフロワ・ド・ブイヨンは強敵だ。
突破困難な防御と、磨き上げられた攻撃。更に宝具の重ね掛けにより、防衛戦を進軍に転用できる。
だが、それでも食らいつけている。
その要因は―
「……追加発注百発行きます!!」
―ルーシアちゃんの夢幻召喚だ。
放たれる大量の砲弾が、ゴドフロワの禁手による騎士団を粉砕する。
盾を構え防御に長けた騎士団は、僕の龍騎士団でも突破することはできても打倒することは難しい。
だがこの圧倒的な砲撃支援により、それを抑え込めているのが大きな優位性だ。

ルーシアちゃんが騎士団を抑え込んでいる間に、こちらが総力をもってゴドフロワを抑え込む。
とはいえそれでも苦戦しているのが実情だ。これと膠着状態になったという、アルケードはどれだけの化け物だというのだろうか。
……そしてその隣で、それ以上の化け物がカズヒ達と戦っている。
なんとかゴドフロワを打倒して、援護に入りたいところだ。
待っていてくれよ、皆……っ！

カズヒSide

「ま……だだぁっ!!」
弾き飛ばされそうになる、憧憬すら覚えそうな反撃の衝撃。
だからこそそれを超えん。その覚悟をもって覚醒し、私は強引に攻撃を放つ。
その瞬間、カウンターのように矢が放たれて私は攻撃を逸らされた。
咄嗟に攻撃のベクトルをずらしてなければ数十メートルは吹き飛ばされていただろう。それだけの威力を持つ攻撃は、恐るべきことに抜き打ち未満の対応によるものだった。
具体的には、リュシオンが全力で放った神滅具の迎撃。その腕の動きで弓を弾いてついでに矢を放つという、とんでもない攻撃だ。
更にその為の踏み込みを含めた動作そのものが、リュシオンの援護として放たれた射撃をミリ単位のゆとりをもって回避する動きに繋がっている。
控えめに言って絶技の連続。間違いなく、このバチカンの戦闘で最

高の戦士は誰かと言われれば奴になる。
「まだ……だぁっ!!」
『Ｂｕｒｓｔ！』

銀

神　　焉

弓

『ＢＩＲＴＨ　ＣＲＹ！』
一瞬でアタッシュナイダーとアタッシュショットガンを呼び出し、それぞれプログライズキーを装填。そのうえで、フォースライザーも装填する。
「吹き飛ばす！」
『ダイナマイティングカバンバスター!!!』
『リスターティングカバンリッヒテン!!』
『アヴェンジングユートピア!!』
三つの大技を同時で発動。加えて神の化身を討ち滅ぼす、対神特攻形態による三連撃。
まず間違いなく私が今打てる手札で最良の選択肢。
だが、パラシュラーマはストラーダ猊下の斬撃をわざと受け流しそこね、その反動で対応準備をとっていた。
「速さだけは認めるが、それだけだ」
気づけば既に弓を正確に構え、矢を三つつがえている。
……選択肢はたった一つ。真正面から三つの攻撃に三つの大技をぶつけるしかない。
その流れを決めるまでに、放たれなかったのは私にとって幸運だった。
「神々(ブラフ)よ、絶技(マーストラ)を見よ」
その瞬間、放たれる三つの攻撃を、私は大技をもってして迎撃した。

冗談きつい。一発一発が、獅子の鎧を纏ったサイラオーグ・バアルの全力の拳に匹敵する。
更にそのまま攻撃は続き、乱れ撃ちのようで正確に狙った射撃が襲い掛かる。
デュナミス聖騎士団は反応するが、その反応の動きが、次の射撃で狙う者の動作を妨害するように放たれる。
まさしく死の詰将棋。単純な性能や戦闘技術以上に、戦い方というものを本能的に悟っている者の動きだ。
これがパラシュラーマ。一代における一文化体系の戦士達を滅ぼしつくしたとされる、英雄の一人。人類史に名を遺す、最強の戦士の一角。
こんなのとまともに戦える英雄が、果たして有史上にどこまでいるのか。ヴァーリや曹操ですら、真っ向勝負では一歩劣るほどの戦士だろう。バーサーカーのサーヴァントとは思えない技の冴えだ。
まごうことなく、一つの時代で無双を誇れる武の頂。戦を前提とする者達が目指すべき、一つの到達点がそこにあった。
全盛期の肉体に回帰し、星辰奏者（エスペラント）として星の恩恵すら手にした傑物。教会が誇る武の至宝たるストラーダ猊下ですら、デュランダルを手にした状態で押されている。その事実がすべてだ。
……だからこそ。
「……まだだぁっ!!」
踏み込み、攻撃を何とかねじ込んでいく。
覚醒の頻発は色々あれな気もするが、そんなことを言っている場合じゃない。
ウルバヌス二世により方向性を与えられ、更にモデルバレット（私）の所為で改悪されたその存在。
ここで目の前の男を止められなければ、パラシュラーマ自身にとっても不本意なことをする羽目になる。その犠牲はただでは済まないというレベルじゃない。
だからこそ。行け、カズヒ・シチャースチエ。進め、道間日美子。やってみせろ、悪祓銀弾（シルバーレット）。気合を入れろ、悪敵銀神（ノーデンス）!!

こういう時に前に出れるのが、私の持ち味だろうがっ!!!
「道は私が切り開く！　誰か……繋げて！」
吠える私のすぐ後ろに、猛攻の嵐を進む者がいる。
ああ、こういう時は本当に頼りになる奴がいるわね。
「任せてくれ。道があるなら必ず進むのが、俺という男の業なんだから」
私の後ろを掛けるのは、神の子（ディア・ドロローサ）に続く者。デュナミス聖騎士団筆頭、リュシオン・オクトーバー。
前に進み続けることにおいて、彼の右に出る者が果たして当代にいるのやら。そんな化け物じみた男が、普通を理解してさらに進化を遂げている。
色々思うところはあるけれど、今はその成長と共に寿ぎましょう。
……ストラーダ猊下が告げた勝機を待つまでもない。この一撃でつぶすつもりで仕掛ける。
「なるほど、ならば」
既にパラシュラーマも、こちらが突貫してくることを読んでいる。そのうえで、他の戦士達を抑え込むことを考えると弓から手を外すのがリスクだと理解している。
一瞬のタイムラグがあれば、私達はそこまで即座に踏み込める。かといってこのままなら、どちらにしても到達できる。そしてその場合、弓を構えている今の体勢では不利になる。
ゆえに答えは読めている。その一瞬を、誰もが悟っていた。
すなわち早撃ち。パラシュラーマが攻撃態勢を取り直せるか、私達が接近して打撃を叩き込むかの一瞬の勝負。
そして、そのタイミングは早かった。
一瞬で、パラシュラーマは弓から手を放す。
素早い判断。判断速度の速さは、流動的に致命の事態が頻発する戦場では必須のスキル。ましてそれがグッド以上なら尚更だ。
だからこそ、この一手を叩き込む。
「……まだ……だぁっ！」
一瞬で、私は全身全霊で突進する。

踏み込む加速は限界突破。過去最高速度を明確に超えた、まごうことなき最高成果をもって突貫。
むろん、パラシュラーマはそれを見越して置き矢を放っていた。
山なりに矢を放つのみならず、射出の際に微調整を加えた遅く放たれる矢まである。
まさしく死の詰将棋。否応なく時間を掛けなければ、これを突破することは死と引き換えになる。
だから―
「そう、まだだ！」
―どうした！
それを突破してこその異常者。光を極めすぎた阿呆の領域。
私の苛烈さ（異常）をなめるなよ！
強引に破壊して突破する中、その余波により道はあまりに荒れている。
だがどうした？　どれだけ荒れ果てていようと、そこに確かな道がある。
ならば、奴に行けない道理はない。それでこその神の子（ディア・ドローサ）に続く者。
「ありがとう。これなら十分駆け抜けられる！」
突貫する私が道を開け、そこをリュシオンが踏み込んだ。
逆にパラシュラーマは斧に持ち替え、そして振りかぶりながら一歩を踏み出そうとしている。
間に合うか。間に合わないか。
その紙一重を―
「……届いた！」
―踏み込んだのは、私達だ。
一瞬だが、こちらの方が間合いに入る。そして同時に、攻撃のテンポも紙一重で早い。
この好機を……逃す、ものかぁっ!!!

イッセーＳｉｄｅ

乙女さんのいう事が、俺にはちょっと分からなかった。
「いやいや、何言ってんですか？」
う、う～ん？
戦闘をしながらだけど、首を捻りたくなるというかなんというか。
これはあれか？　乙女さんは乙女さんで確立しているから、ヒマリやヒツギと記憶が継続してないとか？
そもそもなんで乙女さんがここにいるのかが分かってないから、冷静に考えるとどういう事になってるのかがちんぷんかんぷんだな。
ただ、ヒツギとヒマリは乙女さんの記憶は曖昧で実感がないらしいしな。そもそも二人は乙女さんを前世に持っているだけで違う子だし、乙女さんからしてもそうなるか。
モデルバレットもきょとんとしているし。これ、俺が言うしかないってか？
「いや、あいつはミザリがカズヒに変なプログライズキーを使ったら生まれた、ようはカズヒの分身みたいな―」
「ううん。全然違う」
俺が馬鹿なりに分かりやすく説明しようとしたら、乙女さんは静かに首を横に振った。
『あのさぁ乙女ねぇ？　仮にも昔の妹分、雰囲気で分かってほしいんだけど？』
モデルバレットも苛立っているけど、乙女さんは雰囲気を全く変えない。
怒ってるわけでもない。ただ本当に、本気でそう思っている。
道間乙女は、モデルバレットを、道間日美子（カズヒ）だと思ってない。

いったいどこからくるんだ、この確信は。
俺もモデルバレットも首を傾げていると、乙女さんは真っ直ぐにモデルバレットを見据える。
「私は日美子の運命の淑女（ベアトリーチェ）。ベアトリーチェという運命の乙女として具現化する固有結界が核になっている以上、私は日美子を必ず把握できるようにできているの」
えっとつまり、サーヴァントのベアトリーチェの影響があるから、乙女さんはカズヒを識別できるっていう事か？
え、でもそれって―
「貴女は日美子じゃない。いったい……誰？」
―モデルバレットは、なんなんだ？
『……くっだらないブラフを……っ』
苛立たし気に、モデルバレットは吐き捨てる。
拳がギリギリと鳴らしながら、モデルバレットは握り締めた拳を静かに構えた。
相当苛立ってるのがよく分かる。明らかに殺気立ってる。
『もういいよ。どうせ今の誠にいに、乙女ねぇは必要ない―』
「させるわけない」
その瞬間、後ろから切りかかる二人の仮面ライダー。
仮面ライダーファストに変身した南空さんと、仮面ライダーアイネスに変身したリーネス。
その二人がかりの攻撃に、モデルバレットは咄嗟に回避する。
そのまま俺達のところに滑るように着地した二人は、少し戸惑いながらも乙女さんの方を向いた。
「乙女！　和地がちょっとやばいかも！」
「こっちは任せてぇ。よく分からないけど、それならあなたがいる必要はないもの」
あっちはあっちで大変なのかよ。本当にやばいことになってんなぁ！
そう思っていると、紫炎の龍が天に向かって吠えるように炎を撒き散らす。

あっちはあっちでヤバいな。こりゃ、俺も気合を入れるか。
「っし！　俺もヴァルプルガをまずぶっ飛ばす！　乙女さんは九成を……息子さんを助けてやってくれ！」
「え、え……えっと……」
とんとん拍子だったからか困惑するけど、乙女さんは少ししして、小さく微笑んだ。
「ありがとう。後で、もっと話したいことがあるから……気を付けてね？」
その言葉に俺は頷くだけにする。
返事をするのは、俺より相応しい奴が二人もいる。
そう。リーネスと南空さんは、仮面越しに笑顔を浮かべているのがよく分かる態度で頷いた。
「「もちろん！」」
よし。なら俺がやることも簡単だ。
覚悟してろよヴァルプルガ。まずは女のお前をぶっ飛ばす!!

聖教震撼編　第六十話　猛威の脅威

和地Ｓｉｄｅ

想定外というほかない、明らかにやばい相手だ。
モデルマッドが持つ星辰光（アステリズム）は、聖十字架を再現すること。紫炎祭主の磔台という、神滅具（ロンギヌス）を再現する星辰光。間違いなく強力な星だろう。
だが、俺は明確にこれを舐めていた。
少し、正確ではない。警戒に値すると分かっていた。
なにせ神滅具とは、神器（セイクリッド・ギア）でも最高峰。極めれば神や魔王すら滅ぼせるとされるその力は伊達ではない。時に肩を並べ、時に相対した以上、その強さは身をもって知っている。
だからこそ、俺は油断していた。
なまじ神滅具使いがどいつもこいつも至っていたこともある。至った神滅具との戦いに慣れていた所為で、至った場合の警戒をし続けていた。
『ひぃいいいいいっはぁあああああっ!!!』
……単純に神滅具による物量で、俺は今押されている。
『どうしたぁバカ息子！　反抗期ってのはこんなに情けないもんなのかぁっ!?』
「反抗期以前に人として論外だろうが、お前は!!」
口で言い返すが、正直このままだとやばいことになるだろうな。
奴の星辰光は、聖十字架再現能力・座標指定型。
それはすなわち、聖十字架を大量に展開できるという、悪夢のような仕様だった。
一つ一つは流石にオリジナルに劣っている。だが圧倒的な出力からくる圧倒的な数の物量。それが四方八方から放たれる紫炎による、

圧殺を俺たちに仕掛けていた。
「面倒な。……性格も下種で二重に腹立たしい……っ」
ザイアの仮面ライダーも、かなりイラっと来ているようだ。なんか前世の父親がすいません。
幸か不幸か、俺と奴はザイアで教育を受けている。だからこそある程度の位置取りを示し合わせ、敵の敵は味方理論でしのげている状態だ。
忌々しいが親父の影響も、いい意味でかみ合っている。
星の性質は大きく異なるが、俺も親父も指定した位置に現象を発生させるという意味では方向性が近い。
……このチャンスを逃したくはないが、何をきっかけにずれるか分かったものではない。
何とか好機を―
「……そうですか。ではすぐにでも」
―なんか嫌な予感。
俺が凄く寒気を感じた時、ザイアの仮面ライダーはこっちに視線を向けてきた。
「撤退許可が出たので、失礼します」
うわぁ。最悪のタイミング。
気づいた時には脱兎の如く。更にサウザンドフォースの連中が援護射撃を行い、妨害する隙すら与えない。
……俺は、そっと振り返る。
『残念だったな。親父に喧嘩売った折檻だ！』
……流石に、これは―ッ!?

カズヒＳｉｄｅ

決定打となりえる攻撃は、外れた。
私の攻撃もリュシオンの攻撃も、綺麗に外れた。
ありえない。そう思ってしまうほどに外れていた。
パラシュラーマのすぐ目の前を、綺麗に通り過ぎていく私達の攻撃。あまりに綺麗に通り過ぎて行ったせいで、私もリュシオンも驚愕を共感した。
そして同時に、一瞬で悟る。
パラシュラーマは、踏み込んでいる。だが同時に、前に進んでいない。
その矛盾といえる動作は、純粋な体重移動によってなした重心の偽装。
そう、強いて言うなら、パラシュラーマは後ろに踏み込んだ。前に体重をかけて踏み込むのではない。後ろに足を踏み入れることで、一撃の反動を食いしばるように攻撃態勢に入った。その動作を細工することで、前に移動しているように誤認させたのだ。
つまりは、ムーンウォーク。
決定的な隙だった。
覚醒による強引な突破。高速の成長に伴う流動的な踏破。そのどちらも間に合わない。
悪祓銀弾（シルバーレット）と神の子（ディア・ドローサ）に続く者は、ここに完璧に読み負けた。
それでもなお、限界突破と急速成長の加速は対応を試みるが――
「戦士（ハ・ラ）よ、死に絶（パ・ラ）えろ（シュ）」
――その一手が遅れた事実は、庇えない。
一瞬で放たれるその破壊力は、例えるならゼノヴィアのデュランダル砲。だがその攻撃は、すべてにおいて上回っている。
余計な単語を入れることなく全てが上回っている。しいて言うならば、聖なるオーラを持ってないというその一点のみが、デュランダル砲に劣るのみ。それ以外は完全に上位互換だ。
それは言い換えれば、純粋な破壊をもたらす一撃として劣る面は皆無という証明だった。

そこまで認識したその瞬間、私は骨肉を絶たれていることを自覚した。
「ま……だだ……ぁ……っ!!」
強引な覚醒を間に合わせ、命脈を繋ぐ。
だが同時に、それでは対応する余裕がないことに気が付いた。
悔しいが認めるほかない。
ここで私は、一時リタイアだ。

祐斗Ｓｉｄｅ

なん、だって？
僕たちＤ×Ｄが戦慄したのも無理はない。
あのカズヒが、覚醒を遂げたうえでの一撃をもってして、相手に上回られた。
恐ろしい敵というほかない。これが強敵でなくて何だという。
これがパラシュラーマ。一つの時代において戦士を滅ぼしつくした傑物。
そして、その戦慄はあまりに致命的だった。
「……どこを見ている、阿呆ども」
その瞬間、僕達は一瞬敵を完全に忘れていた。
気づいて対応する一瞬の間に、僕は敵に踏み込まれていた。
まずい。ターゲットにされたのは僕か。
聖剣の龍騎士によって数を補完できる僕は、聖剣の盾騎士を抑え込める面倒な敵だろう。ターゲットにするのは理に叶っている。

単純に一人倒せば数が多く減る。これは効率がいいからね。
問題は、ゴドフロワ・ド・ブイヨンがそれをできるだけの力量を持っていること。
踏み込んだその斬撃は重く鋭い。
断言しよう。この攻撃をいなすには隙が多すぎる。そして騎士団の鎧を纏って防御するにしても、重すぎて防ぎきれない。そしてあの衝撃的な事態ゆえに、周りのみんなも対応が追い付かない。
……控えめに言って、致命的な状況。
「まずは一人だ！」
その瞬間、斬撃が僕を両断するべく振り下ろされた

聖教震撼編　第六十一話　撃退、禍の団!!

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「挟み撃ちにするわよ、リーネス！」
「分かってるわぁ、鶴羽！」
挟み撃ちの体制で仕掛ける、鶴羽とリーネスの連続攻撃。
それを凌ぎながら、モデルバレットは舌打ちをしたい衝動に駆られていた。
『なんだってのよ、乙女ねぇは……っ！』
挑発でもブラフでもない。本心からのあの疑問符は、彼女が自分を日美子と思ってないことの証明だ。
忌々しい。苛立たしい。ムカムカする。
自分こそが道間日美子だ。道間誠明を討とうとする、後悔に塗れた悪祓銀弾（シルバーレット）とは違う。道間誠明が至ったミザリ・ルシファーたる悪鬼明星（ルシフェル）の為にある悪鬼伴侶（リリス）だという自負がある。
その自分が？　道間日美子でない？
『ふざけんなぁあああああっ!!』
怒りと共に、全方位に向けた攻撃で二人を押しやる。
まずは各個撃破と考え、一歩を踏み込んで狙うはリーネス。
シャイニングホッパープログライズキーで補正をかけているとはいえ、彼女はどこまで行っても研究畑。戦闘においては鶴羽と比べれば数歩劣る。かといって魔術回路保有者として圧倒的に優れている以上、放っておくと何をしでかすか分からない。
ゆえに、まずは真っ向から潰す。
そう踏み込んだその瞬間、自分の顔面にまったく別の仮面ライダーが映っていた。
「さっせませんのよ！」

『んなぁ!?』
驚愕するがすぐに迎撃態勢をとる。
そして、それは最適解だった。
『ボーイングブラストフィーバー』
奇跡的に成立したカウンターで、初手必殺の一撃を迎撃して逸らす。
ヒマリ・ナインテイルによる突貫奇襲。勢い任せだがそれゆえに重い、その一撃は喰らえば深手は免れない。
そして、しのいでもなお窮地は続く。
「よっしゃ間に合った！」
『やってくれるわねコラ！』
後ろから鶴羽を回収して突貫するは、ヒツギ・セプテンバー。
その突貫奇襲に対し、モデルバレットは再び全方位攻撃を試みる。
だがしかし、先ほどとは状況が違うことに対する反応の遅れが致命となる。
「させないっての！」
『ＦＲＥＥ』
「その通りですわ！」
『ＪＥＴ』
「吹っ飛ばす！」
『ＭＡＧＩＣ　ＪＵＭＰ』
「覚悟しなさぁい」
『ＳＨＩＮＮＩＮＧ　ＪＵＭＰ』
一瞬だが、しかし相手の方が全員早い。
その瞬間的な対応は、彼女達に前世からの縁があるからか。
その速度の差を、モデルバレットは瞬時に理解。
咄嗟に全出力を防御に回したその瞬間―
『リベレイティングブラストフィーバー！』
『ボーイングブラストフィーバー！』
『コーリングチェインスマッシュ！』
『シャイニングレインラッシュ！』

―四つの蹴りが、モデルバレットを遥か彼方へと吹き飛ばした。

イッセーＳｉｄｅ

紫炎を撒き散らすヴァルプルガに、俺は突撃する。
なんかもう気になることは色々あるけど、それは一旦置いておく！
「リアス！」
「イッセー！」
俺とリアスは手を取って、そして反撃に入る。
こんなこともあろうかと、作っておいた更なる新技。その出番が来たからな。
頼むぜドライグ、そしてシャルロット！
『構わん、やるぞ！』
『遠慮はいりません！』
頼りになる相棒達の声に背を押され、俺は素早く飛龍を展開する。
そして飛龍はリアスに取り付き、リアスの全身を覆う赤い龍の鎧に変化する。
これぞ深紅（クリムゾン）の滅殺（エクスティンクト）龍姫（ドラグナー）。リアスに赤龍帝の力を譲渡する、赤龍褒賞とは全く異なる形での赤龍帝再現。
これぞまさに愛の力！　割と茶化されたりしてました!!
「行こう、リアス！」
「ええ、よくってよ!!」
俺とリアスのダブル赤龍帝で、ヴァルプルガの紫炎に対抗していく。
にしてもかな手強いな。あの禁手、相当ヤバい！
『まぁ、八岐大蛇は相当に強いからな。クリフォトめ、復活させる際魂

を分けたな？』
『日本で最も有名なドラゴンと言ってもいいですからね。半分とはいえ龍王クラスが上乗せされれば、神滅具としても出力だけなら最高峰化と』
考察は相棒達に任せ、俺はそろそろ反撃するぜ。
先生からも言われてるんだ。エロさを忘れるなと。
そう、敵であろうと関係ない。そこにおっぱいがあるのならってやつだ。
そして敵だからこそ容赦する必要もない。見る！　聞く！　そして倒す!!
だからこそ―
「喰らいやがれ、ヴァルプルガぁっ!!」
―この間合いは、逃さねえ！
「甘いわねん！」
一瞬の隙をついて放った打撃は、だけど掠めるにとどまった。
だが甘い。透過込みで魔力は流し込んだぜ？
もちろん対策はしてるだろうさ。だけど、リゼヴィムの神器無効化能力すら突破できるらしい透過なら、すり抜けられるはず。
だからこそ遠慮しない。この一撃で仕掛ける。
「ヘイ、おっぱい！　お前の本体は何をする気なんだい？」
『……拙者はこれより、赤龍帝とグレモリーに集中していると見せかけ、他の者達に一撃を叩き付けるでござる』
……なんで野太いおっさん声？
アーシアのおっぱいがツンデレさんだったり、ソーナ会長のおっぱいがセラフォルー様みたいだったり、おっぱいは不思議がいっぱいだな。
俺、自分で言うのもなんだけど訳の分からない展開に愛されすぎてない？
『……下手な神より強いですからね。お祓いも効果がなさそうです』
『天命だと思って諦めろ、タイミングよくグレートレッドに出会う時点で今更だ』

相棒達も諦め半分ですか。
だけどとりあえず戦闘に集中！
俺はタイミングを見計らった不意打ちの攻撃をタイミングを合わせて撃ち落とすと共に、指を鳴らす。
「喰らえ必殺、洋服崩壊（ドレス・ブレイク）！」
その瞬間、久しぶりに俺の女達以外の裸を見た。
眼・福！
「……そんな!?　あのへんな技を喰らったというの、この私が!?」
裸になったことより喰らったことの方にショックを受けているだと!?
だがその隙は命取りだ。
「イッセーばかりに意識を向けすぎよ！」
そう、そこには魔力をため終えたリアスがいる。
今の状態のリアスなら、真女王クラスの火力は即座に放てるのさ!!
放たれる消滅の魔力が、聖十字架の八岐大蛇を吹き飛ばす。
禁手が吹き飛ばされたことで、ヴァルプルガは更にショックを受けた。
そしてその隙は逃がさない。今度は俺の砲撃をぶちかます！
「……嘘よ、祭主はいけると言ったのに……八岐大蛇を磔にしきれなかったなんて―」
「よく分からねえがもらったぜぇぇぇぇぇぇぇっ！」
動揺し隙だらけのヴァルプルガに、俺は遠慮なくクリムゾン・ブラスターをぶっ放す。
ヴァルプルガも気づいたようだけど、もはや回避なんて不可能だ。
その絶大な砲撃に、ヴァルプルガは呑まれていった……。

和地Ｓｉｄｅ

数が！　紫炎の数が……多いっ!!
死に物狂いで障壁を張り、時間稼ぎを行いつつ射線を切る。その連続で、何とか俺は猛攻をしのいでいた。
だが、このままだとジリ貧だ。こっちの体力と集中力が先に尽きる。そしてそのまま焼き尽くされるのが落ちだろう。
『残念だったなバカ息子ぉ！　親父に歯向かうからそうなるんだぜぇっ!!』
「歯向かわれないような自分だと思ってんのか、クソ親父!!」
野郎、憤死しそうなぐらいクソなくせして偉そうに。
だがどうする？　このままだと一か八かのギャンブルじみた特攻ぐらいしか打つ手がない。そして決断しないとそれすらできずに焼き尽くされる。
ええい！　覚悟をくくるしかないってのか―
「……田知っ!!」
―と思ったその時、舞い降りるのは一人の女性。
「お袋っ!?」
『乙女か？』
その姿に、俺達の動きは一瞬だが緩む。
道間乙女が、俺をカバーするように戦場に割って入ってきた。
いやいやいやいや、危ないからな!?
「下がってろ！　あのクソ親父があんただからって加減するようなタマか!!」
『今度は妻まで反抗たぁなぁっ！　一遍本気でしつけるかぁ？』
俺が言うが早いか、クソ親父はすぐに攻撃の密度を回復させる。
まずい、このままだともろとも焼かれる!?
俺が何とかしのごうと試みる、その時だった。
「……降臨するは、第十天」

その詠唱と共に、天に光が満ち溢れた。
そこに具現化されるは、空高くに浮かぶ純白の薔薇。
「天の使いと聖なる人よ、今こそ見識の果て、白き薔薇に集い愛を知れ」
そしてお袋のその詠唱と共に、純白の神威が放たれる。
そしてそのターゲットにされたのは、当然だがクソ親父。
『……ってやべぇっ!?』
感づいた時、クソ親父は全力をもって迎撃していた。
全方位から紫炎を放ち薔薇を焼くことを試みる。同時に射線上にも聖十字架を大量に展開して盾にした。
だが、それをもってしてもその一撃を完全に防ぐことは不可能だった。
薔薇そのものの破壊は弾かれ、射線を塞ぐ聖十字架も殆どが吹き飛ばされる。そしてクソ親父の全身に聖十字架もまた、その白き薔薇が放つ神威によって、殆どが吹き飛ばされた。
……至高天。神曲における天国、その極点。
そこには聖人や天使が仰ぎ見る純白の薔薇があり、ダンテはそこで神の愛を知るとされている。
その名を関した神曲魔術は、当然だが神曲魔術における奥義。その本質は詰まるところ、神威の具現なのだろう。
神威の具現は攻撃として放たれることで、問答無用の裁きとなる。その一撃は詠唱に反して対城クラスの大魔術。短い詠唱と威力の両立は、きっとお袋レベルの魔力があっても連発なんて不可能だ。
だからこそ、これはお袋の切り札であり―
『……ひ、ひは……ハハハハッハッ!』
―それに耐えれるということが、お袋にとって致命に近い事態でもある。
耐え切った。モデルマッドは、クソ親父は耐え切った。
これが戦闘特化型の人造惑星（プラネテス）。神滅具を座標指定することで多重に再現する、星辰光（アステリズム）を持つことの意味。単純な星辰光なら戦闘として最強といえるだろう、モデルマッドの真骨頂。

今ここに、モデルマッドは至高天（エンピレオ）すらしのぎ切った。
『ビビらせてんじゃねえぞ、乙女ぇ！　ちっと躾をやり直すかぁ!?』
一安心したことで笑いが止まらなくなりながら、モデルマッドは怒りを見せる。
そして紫炎の十字架をあえて手に握り、叩き付ける為に振りかぶる。
『女のくせして旦那の邪魔してんじゃねえ！　何かできるとでも思ってんのか!?』
もはやすがすがしいほどに、モデルマッドは醜悪すぎる。
だからこそ―
「陽動は見事にできてるだろうが」
―おかげで隙をつき放題だ。
『マグネティックスターブラスト』
その瞬間、隙だらけの背中に俺は一斉射撃を叩き込んだ。
全弾丸ごと、無警戒の背中に必中。
破壊される背部装甲。勢い余って関節すら破壊していく。
そのまま力なく崩れ落ちるモデルマッドに、俺はなんていうか嘆かわしいと思い始めた。
「これが前世の俺の親父かぁ……。なんていうかクソすぎて、一周回って哀れに思えてきたな、オイ」
俺は涙すら浮かべながら、その後頭部をしっかりと踏みつける。
『ＡＳＳＡＬＴ　ＳＡＶＥ』
ショットライザーをベルトに装填したうえで、俺はちょっと深呼吸。
……あ、これ踏み潰しても悲しくなりそうにないな。
自分を見つめ直してちょっとため息をつきたくなるが、まぁそれはこの際いいだろう。
『ま……待て待て待て！　おま、実の親父をこんな形で殺すってのか!?』
明らかに泡を食っているモデルマッドだが、何を今更。
俺はちらりとお袋を見るが、お袋は目を伏せながらも頷いていた。

そして周囲も確認するが、モデルマッドは聖十字架を出すそぶりも見せていない。
俺がこうしている間に即座に出すなり出すタイミングを計れば、やりようはあるだろうに。
小物過ぎる。屑過ぎる。外道過ぎる。氏より育ちってこういう事を言うんだろうかと、俺はこの似ても似つかない精神性の親父を見て思ってしまう。
ただ俺、人生の半分ぐらいザイアの偏向教育を受けているはずなんだが。周りの殆どが洗脳されていることを踏まえると、全く噛み合ってないんだよなぁ。
自分がさっぱり分からなくなりそうで、思わず俺は目をつむってしまう。
……そこに思い浮かんだのは、涙をこぼす道間日美子の、救われたようなあの笑顔。
「―ったく。カズヒねぇは本当に凄い」
一人の男の人生に、ここまで強い指針をくれるんだから。
まさに運命の淑女。ベアトリーチェはどっちなんだと言うべきか。
悪祓銀弾（シルバーレット）、マジカッケー
ま、それを言うならカズヒねぇにとっての俺もなんだろうがな。
そう思い、俺は遠慮をせずに踏み込んだ。
『ちょ、ま―』
『マグネティックスターブラストフィーバー！』
命乞いは一切聞かない。
俺は驚くぐらい心を痛めることなく、かつての父親の自らの手で滅ぼした。
ケジメはつけてもらったぜ、クソ親父。
ただそれだけを思い、俺は驚くほど落ち着いている自分の心に苦笑した。

聖教震撼編　第六十二話　クシャトリア・キラー

祐斗Ｓｉｄｅ

振るわれる斬撃に対し、僕は咄嗟に一つの選択を選び取った。
その瞬間、直撃した斬撃を、僕は負傷にとどめてしのぐ。
そう、負傷だ。軽傷では断じてないが、かといって致命傷でも重傷でもない。戦闘続行が十分できる程度の、できるだけ早く治療したい程度の負傷。
ただそれにとどめた僕は、反撃の聖魔剣を振るってゴドフロワの腕を断ち切った。
この反撃が成立したのは、ゴドフロワが想定外の事態に反応を遅らせてしまったからだ。
当然だろう。僕は元々防御に欠けているし、当たらなければいいと割り切っている。まして鎧を身に着けているわけでもないのなら、攻撃を当てれば深手は免れない。
だからこそ、その衝撃とその光景に、ゴドフロワは一瞬の虚を突かれてしまった。
一瞬を逃さない一撃を叩き込めた、僕自身の腕に感謝しよう。
これまで鍛え続けてきた鍛錬により、磨き上げられた才覚。そしてそれを支え続けてくれた、出会いと絆に感謝する。
そして僕は反撃に移る。
聖剣の龍騎士団を呼び出し、僕は魔剣とエクスカリバーをそれぞれ持たせて突貫させる。
同時に僕はグラムを右手に、そして袖から引きずり出した一本のエクスカリバーを左手に構える。
それを見て、ゴドフロワは目を見開いた。

「擬態(ミミック)の力で、服の内側に巻いたのか！」
「ああ。擬態がこういう事もできるって知っていたんでね」
咄嗟の判断だった。
だけど、かつてゼノヴィアとイリナさんが僕たちと初めて接触したとき、僕は擬態の聖剣が剣どころか金属の姿に縛られないことを知っている。イリナさんは肩にリボンとしてつけていたからね。
そう、その多様性こそがエクスカリバーの持ち味。七つの機能を持つだけでなく、組み合わせることで更なる手札を生み出すこともできる、千差万別の手段を選べること。それこそがエクスカリバーの本領だった。
素晴らしいよ、この剣は。今なら素直にそう思える。
だからこそ―
「これで終わりだ、六聖英霊」
―この斬撃をもって、神聖糾弾同盟(ネオ・ディバインクルセイダーズ)に決定打を入れる。
終わりだ、六聖英霊！
「まだだ！　我らを裁くのは、主でなくではならぬの―」
「いいや。貴方達を裁くのは僕らだ」
吠えるゴドフロワに、斬撃を叩き込んで黙らせる。
聖書の神が既に死んでいるとか、そういうことは問題ではない。
和平を結び、そして手を取り合うことを選んだが僕達の選択。ならばそこから生まれる争いは、僕達の手で何とかしてくべきなのだから。
ゆえに、これ以上しゃべらせることなくゴドフロワを消滅させる。
……哀れみを思うよ、ゴドフロワ・ド・ブイヨン。
ウルバヌス二世のあの映像。彼は聖書の神が死んでいることも想定していたのだろう。むしろ確信を覚えていたからこそ、神聖糾弾同盟をそういう組織にしたのかもしれない。
絶対にできないことを条件にすることで、不退転にさせること。それによって少しでも多く討伐させることが彼の目的だ。出なければ、後遺症まで残すようにしながら更なるとどめまで用意はしない。
だけど、それをさせるわけにはいかないさ。

これ以上、こんな戦いで死人が出る必要はないのだから。
そこまで考えたうえで、僕達はすぐに意識を切り替える。
ゴドフロワを打倒した以上、優先順位はパラシュラーマ一択だ。
既に十分以上、信徒達によってパラシュラーマは抑え込まれている。そのうえで、和平を選んだ者達が信徒達と手を取り合って、和平に対する不満を焚き付けられながら切り捨てられた者達を守る。
ある種の美談により、心理的な慰撫をもたらす。それによって、少しは反対意見も減るだろう。切り捨てて皆殺しにするよりは数段マシだ。
だからこそ、僕達は振り返り―

和地Ｓｉｄｅ

クソ親父は撃破され、ヴァルプルガはぶちのめされて捕縛し、モデルバレットは逃亡した。
禍の団を何とかできた俺達は、残っている自我未覚醒体のステラフレームを一部のメンバーに任せ、質重視でカズヒねぇの援護に向かっていた。
「どうするイッセー！　手札はあるか？」
「安心しとけ！　ロンギヌス・スマッシャーはぶっ放せる！」
先頭を走る俺は隣のイッセーに確認をとりつつ、意識を戦闘に向けて切り替える。
まったく、一息をついている暇もない。
だがあとちょっとだ。気を引き締めろ。
趨勢の変化に伴い、殆どの勢力は引くことを選んでいる。残敵掃討も進んでおり、そちらについては問題ない。神聖糾弾同盟も、ウルバ

ヌスのぶっちゃけでメンタルをやられたところに後遺症と、はっきり言って無力化寸前だ。
だからこそ、潰すべきはパラシュラーマただ一人。
問題は、ウルバヌスの切り札といえるパラシュラーマをどうにかできる余地があるのかだ。
少なくとも五騎分、下手をすればゴドフロワを含めた六騎全部の英霊が贄になった。さらにこの場の戦闘で死んだ神聖糾弾同盟の魂すら、贄になっている可能性がある。込められた魔力が多ければ多いほど、燃費を考慮しない戦闘が可能になるだろう。
如何にカズヒねぇといえど、確実に勝てるなんてとても言えない。よしんば倒すことはできたとしても、こちらの戦術的勝利に繋がるかとなれば別になる。最悪、相打ちに持ち込まれる可能性だってあるだろう。
だからこそ、俺達も動けるのなら突入するべきだ。
「……日美子、大丈夫かな？」
「まぁまだもってるでしょ。やることある間は絶対立ってるわよ、あいつ」
「もっとも、出し抜かれる可能性はあるけどねぇ」
お袋を気遣うように、ただ確信込みで鶴羽とリーネスがそう告げる。
まぁ俺もそう思うが、しかし相手も相手だしな。
「どちらにせよ、これ以上犠牲者を生むことは良しとできないわ。……行くわよ！」
そのリアス部長の声と共に、俺達は戦場に突入し―
「やはりそこか」
―その瞬間、視界に迫りくる矢を目にした。
「させるかぁ！」
咄嗟に障壁を展開するが、これちょっと防ぎきれるか自信がない!?
寒気すら覚えたその時、俺の肩にイッセーの手が触れる。
「なんの譲渡ぉっ！」
「でかしたイッセー！」

思わず歓喜の叫びをあげる中、放たれた矢を障壁は何とか受け流すことに成功した。
だがそれをもってしても余波を消しきれず、俺達はカウンターによる吹っ飛ばされるという醜態をさらす。
いや、これは相手がやばすぎる。
敵の脅威度を見積もれなかった。まさかこれだけのヤバい相手だとは。
単純な性能はともかく、技術の類が違いすぎる。まず間違いなく、クロウ・クルワッハや仮面ライダーヴァナルガンド状態のロキレベルでヤバい。
弾き飛ばされながら態勢を整えるが、その間にもパラシュラーマは信徒たちの猛攻を捌き反撃を叩き込んでいる。
真っ向から切り結べているのはストラーダ猊下程度だ。それ以外はほとんど一撃で吹っ飛ばされ、防御を意識した遅滞戦術でなんとか死者を出してないレベルだ。
っていうかカズヒねぇとリュシオンが崩れ落ちている!? あの二人リタイアかよ!?
「……カズヒぃいいいいいっ!?」
鶴羽が絶叫して駆け寄ろうとするけど危ない危ない危ない！
「落ち着け狙われてる！ あの野郎まだ余裕がある！」
咄嗟に羽交い絞めで止めるけど、パラシュラーマはこっちに意識を割いている。
これ以上近づけば確実に、一撃を叩き込んでくるのが分かる。
あの野郎、確実に減らしていく為に、こっちが限界になるのを見計らっているな？
大量の魔力を持っていることを生かして、長期戦が狙えるのなら長期戦で削る。もし強引に総力を出そうものなら、一気にごり押しに切り替える。そういう戦術プランを立てているのだろう。
一瞬でも油断すれば、その瞬間に潰される。
まずい。これはしかけ時を間違えるわけにはいかないだろう……っ。

なんで寄りにもよって、カズヒねぇが深手を負ってるんだよ。そんなにヤバいやつとか、控えめに言って勘弁してほしいんだが!?
くそどうする？　強引にごり押しするにしても、間違いなくその瞬間に潰される。かといってカズヒねぇも気合を入れてあのざまだと、相当負傷がやばいはずだ。
できれば早い段階で治療したいが、それをむざむざ許してくれるわけがないし―
「部長、イッセーくん！」
―木場達の方は終わったか！
「……祐斗、騎士団を出して壁を作って！」
部長が即座に指示を出すと共に、自身も星辰光を使って龍騎士団を創造。
よし、全方位からの数の圧殺。これで生まれた隙をついて、強引にカズヒねぇとリュシオンを治療する！
「援護する、行け鶴羽！」
「よっしゃ任せて！　カズヒは治す！」
俺たちが龍騎士団が殺到するのに合わせ駆けだそうとした、その時だった。
「……ふむ、釣るのはこのあたりが限界か」
その瞬間、寒気を覚えた。
あ、これまずい。
「イッセェェェェェェェェッ!!」
「分かってらぁあああああっ!!」
判断は一瞬。奇跡的に、俺とイッセーはそれを理解していた。
イッセーが素早く俺に譲渡をかけ、俺は咄嗟に星辰光を全開で発動。
パラディンドッグにしている暇がなかったので、素の状態で禁手も発動。強引な障壁の多重展開で、とにかくかばえるだけかばいつくす。
そしてその瞬間、それは発動した。
「戦士（ハ・ラ・シュ）よ、死（パ・ラ）に絶えろ」

その破壊は、冗談抜きでジャガーノート・スマッシャーに匹敵する火力だった。下手をすれば上回っているかもと思えるほどの、破壊の具現だった。
ガード体勢は間に合った。だが同時に、そのガードごと吹き飛ばすだけの火力がそこに具現化していた。
それに対し、俺は素早く魔剣をガード用に展開。可能な限り全方位をカバーしきれる位置取りを維持し―

―瞬間、目の前が暗くなった。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

その光景を、一人の悪魔祓いは腰を抜かして目撃していた。
たまたま視力強化系の神器を持っていたその悪魔祓いは、それゆえに間合いの外側からその光景を目にしていた。
結果として心が折れた。勝てないと理解し、立ち向かう気にもなれなかった。
目の前の破壊はまさに、神仏や魔王の域。それも最高峰の域に届く、世界の頂点に立つ者の御業。極限という言葉をいやというほど叩きつけた、そんな破壊の具現だった。

あれだけの破壊力を、どうにかできる者がいるわけがない。事実、神滅具の保有者であるリュシオン・オクトーバーすら立てないでいた。

心が折れた。あんな領域に自分が立てるわけがない。身の程をいやというほど教えられて、それでも偉そうなことが言えるわけがない。

もはや恐怖すら消え去った。崇拝の感情すら沸き上がる。

そんな破壊の跡地、パラシュラーマ以外に立っている者はいない。

誰もが生きてこそいるが、しかし満身創痍。すぐに立ち上がれる者を用意できるほど、パラシュラーマは甘い攻撃を放ってはいない。むしろ死者が出ていないことが異常なのだ。

思い出せ。神聖糾弾同盟の戦士達を、集まった建物ごと吹き飛ばした妙技を。

一つ目。内側で召喚されたパラシュラーマは、その武技をもって瞬く間に滅ぼしつくした。

二つ目。放射状になっている建物に、その弓をもってハチの巣にして吹き飛ばした。

三つ目。直線状に真っ直ぐ伸びているその建物を、斧の一撃をもって跡形もなく消滅させた。

その時点で気づくべきだった。あれは人の極点であり、最高峰の神仏魔王をもってして相対するべき存在だと。雑兵が数をもってしたところで、霞を祓うがように吹き飛ばされるだけなのだと。

心が折れた。殺されることに恐怖すら感じない。

「中々に粘るが、これ以上はな。滅びるがいい戦士達（クシャトリア）よ」

そしてパラシュラーマは斧を振り上げ―

「そうはさせぬ」

―その一撃を、真っ向から迎撃する斬撃があった。

今までパラシュラーマに向けられた畏怖が割かれるほどに、その斬撃は美しく猛々しい。

その迎撃に、パラシュラーマすら興味深そうに目を細めていた。

「……若返りの妙技と言い、現世も捨てたものではないな。名乗るが

いい、戦士（クシャトリア）よ」
「この地にて枢機卿の末席に連なる者、ヴァスコ・ストラーダと申す」
破壊神の力宿す斧と撃ち合いながら、ストラーダは告げる。
「貴殿を破壊する者と知るがよい」
その瞬間、破壊を具現化する争いが再開した。

聖教震撼編　第六十三話　全盛期

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

破壊のぶつかり合いは、もはや誰の介入も許されぬほどに高まる。介入できる者がいないほどに激しくなる。

それはすなわち、破壊の極限そのものだった。

小難しい形容詞など必要ないほどに、それは破壊の嵐。

振るわれる斬撃は圧倒的であり、余人を寄せ付けることが許されないほどの極みだった。

近づけば死ぬ一撃の応酬。言葉にすればたったそれだけ。それ以上の説明が不要なほど、それは破壊を具現化している。

誰も近づくことなどできぬその猛攻。だがしかし、優位を保っているのはパラシュラーマだった。

本来、斧は一撃の重さを重視する武装だ。

重心の都合上、一撃は重いが慣性の法則も大きい。必然的に連続攻撃には向いておらず、当たれば大きいが隙も大きい。だからこそ、斧は戦場において主流になりえなかった。

にも関わらず、パラシュラーマは剣で挑むストラーダを上回っている。

そこにはいくつもの要素が絡んでいるだろう。だがそもそも、戦士との戦いにおいてパラシュラーマは反則と言ってもいい強みを保有している。

パラシュラーマとは、ヴィシュヌ神の化身であると共に、戦士達を滅ぼしつくした存在である。それゆえに彼は、対クシャトリアという専用のスキルを持ち合わせている。

これは戦士に対する圧倒的優位性の獲得。これによりパラシュラーマは、戦士に対してのみＢランクの勇猛・直感・威圧のスキルを

与えることができる。性質上、戦士が真っ向から打倒することは不可能に近いのだ。
更に高ランクで保有する、無窮の武練と心眼(真)。加えて速射性の高い、神々(ブラフマーストラ)よ、絶技を見よという遠距離技。とどめに主神・天龍・超越者すら滅ぼしえる、戦士(ハラ・)よ、死に絶(パラシュ)えろという究極の一。その全てを併せ持ったパラシュラーマを打倒するなど、戦士としてでは不可能に近い。
更にサーヴァントは全盛期の姿で召喚されるが故、そのポテンシャルは基本として最善。必然的にパラシュラーマを打倒するには、心技体の全てにおいて彼を上回る存在が挑む必要がある。
だからこそ、ウルバヌス二世は彼を選んだ。
バーサーカーとして召喚された彼は、「戦士を滅ぼしつくす」ことに思考を固定化されている。それゆえのバーサーカーであり、それそのものを変えることは不可能に近い。
ウルバヌス二世はそこに目をつけ、滅ぼしつくす期間・範囲・対象を半ば固定化させることで、確実に神聖糾弾同盟にとどめを刺す。その為の布石だった。
ゆえにこそ、パラシュラーマはこの場において最強である。
破壊と破壊のぶつかり合い。戦士(ハラ・)よ、死に絶(パラシュ)えろと聖剣デュランダルの激突はパラシュラーマが一手優位だった。
その猛攻により、周囲は瞬く間に破壊されていく。
建築物は吹き飛び、暴風が巻き起こり、遠く離れた空にある雲すら吹き飛ばされる。
まごうことなく極限の戦い。神話の時代にもそうはないだろう傑物同士の激突だった。
だが、少しずつ確実に、パラシュラーマはストラーダを追い込んでいく。
―まずいな。一手足りんか
ストラーダは猛攻を繰り広げながら、一瞬ずつ傾いていく趨勢に不利を悟っていた。
勝ち目はある。もとより、たった一つの勝ち筋を見極めての戦闘

だった。
だが今のままではその勝ち筋を得られない。確実に自分がそれまでに打倒される。
それほどまでにパラシュラーマは圧倒的に強かった。今の自分では、決定的な一撃を叩き込む前に打倒されかねない。
その事実を前にした、その時―

「――まだだぁっ！」

―カズヒ・シチャースチエが一歩を踏み込んだ
振るわれる斧の側面に蹴りを叩き込み、猛攻のバランスが一瞬崩れる。
その事実と介入に、パラシュラーマすら目を丸くしていた。
「ご無事ですか猊下！　休憩いただきました！」
血反吐を巻き散らかしながらの発言に、パラシュラーマは軽く引き気味の表情になっている。
「大丈夫かね？」
「大丈夫にします、気合で!!」
まったく大丈夫な返事ではないが、そこで更に動く者がいる。
「んなこったろうと思ったよ！」
更に後ろからパラシュラーマに切りかかり、その反撃を猛攻で回避し迎撃する少年が一人。
確か、涙換救済（タイタス・クロウ）こと九成和地。
彼は素早く小瓶をカズヒに投げ渡すと、これまた血まみれの状態で

戦闘を継続する。
星辰光によって放たれる障壁により、パラシュラーマの動きは僅かにだが鈍る。その鈍さを逃すことなく、絶妙に妨害となる斬撃を入れて動きを阻害していた。
「使っとけ！　持ち込まれてたフェニックスの涙、かっぱらってきた！」
「後で一緒に謝ってあげるわ！　愛しているわよ和地！」
「この状況下でのろけられるか……っ」
パラシュラーマが思わず戦慄しているが、二人はハイになった状態でこちらの援護を敢行する。
だが、それに対してパラシュラーマは戦闘の仕方を変えることで対応する。
瞬時に斧による破壊同士のぶつかり合いだけでなく、体術まで踏まえた隙のない体勢にシフト。その勢いをもって圧殺を試みる。
ただそれだけで猛攻を成し遂げるが、その瞬間に九成和地は笑みを浮かべる。
瞬時、彼は伏せた。
同時、パラシュラーマはそのスキルと経験則から悟った。
多少の被弾を覚悟のうえで、瞬時に弓を構えつがえる。
「神々（ブラフマーストラ）よ、絶技を見よ！」
抜き打ちで放たれるその速射。それは並みの上級悪魔なら一撃で確殺できる、まごうことなく絶技というべき一射だ。
だが、まったくもって足りなかった。
放たれた矢は中で停止し、その瞬間に幾重もの攻撃により吹き飛ばされる。
そしてその次の瞬間、赤いオーラがパラシュラーマの視界に映った。
「吹き飛びやがれ、ロンギヌス・スマッシャー！」
それはリアス・グレモリーの献身により繋がれた、兵藤一誠のロンギヌス・スマッシャー。
リアスの星により眷属の力をつるべ打ちにすることで、矢の一撃を

食い止め、そしてそこから放たれた赤龍帝の一撃。
現状のD×Dにおける最大火力。射線を確保したうえで放たれたその一撃は、パラシュラーマを包み込む。
……だが、それすら致命には届かない。
パラシュラーマは直撃を避けている。斧を盾としてロンギヌス・スマッシャーを受け止め、更に縦に受け止めることで、砲撃の加害半径に空白地帯を生み出す。それにより、砲撃に押し飛ばされながらも建築物の残骸を足場とした。
足場が一瞬でもでき、そして一瞬だけ攻撃をねじ込む空白が生まれた。その一瞬により、パラシュラーマはロンギヌス・スマッシャーすら断ち切ることができる。
ゆえに、そうする
「戦士よ、死に絶えろ！」
放たれるは、破壊神シヴァにすら認められるその本領。彼に与えられたその斧は、ゆえに主神の権能に匹敵する業物。破壊神に与えられた以上、その権能は破壊に特化しきっている。
結論とし、ロンギヌス・スマッシャーは断ち切られた。
「……これでも、か……っ」
「冗談だろ……っ！」
九成和地も兵藤一誠も、この事実に歯を食いしばる。
ロンギヌス・スマッシャーは、彼らD×Dが保有しうる中で最大火力。付け加えるなら一撃放てば次は数十日はかかる、一回限りの切り札だった。
いわば戦略核をもってして対象の破壊を試みたに等しい。それを至近距離で食らいながら、しのがれるなど非常事態だ。控えめに言って窮地と言っていい。
しかもこれによって距離を開けられた。神々よ、絶技を見よは射撃技ゆえに遠距離に特化している。また戦士よ、死に絶えろもまた、その破壊力ゆえに射程距離は長い。
今度は向こうから
そして更に窮地は続く。

「……そろそろ、か」
そうストラーダが呟く。
そして奇しくも誰もが星辰光（アステリズム）を使えるがゆえに、和地達は誰もが状況の悪化を確信した。
おそらくはストラーダの維持性が限界を迎えたのだろう。つまり、彼の若返りはここまでだ。
この場における最強戦力が、ここにきて一気に弱体化する。
その事実に寒気を感じ、そしてその隙はあまりに大きい。
「では、そろそろ死ぬといい」
瞬間放たれる、絶技の数々。
一射一射が確実に敵を殺しうる弓の宝具が、妨害を受け難いがゆえに連射で放たれる。
その全てが、狙いをつけたうえで素早く放たれる。更に回避したとしても、その後ろにいる倒れた味方に当たるようにする心理の枷までつけられた。それが、連射としか形容できない速度で放たれた。
一発一発の威力が高いうえ、回避するわけにもいかない。その猛攻が決定的な一撃を放てるようにする布石として向かい、あろうことかカバーしきれない味方にも放たれる。
ここに来て、決定的な一撃を入れる為の布石として攻撃が放たれている。それを痛感して誰もが歯を食いしばり―
「……ならしのげるようにすればいいだけだ！」
―神に子に続く者（ディ・ア・ド・ロローサ）が、神域の戦闘に参入した。
踏み込み、更に連撃をもってその連射を迎撃する。
「リュシオン!?　行けるの？」
「回復に手間取った！　ここから巻き返す！」
カズヒに応えながら、リュシオンの常に最適化する連撃が攻撃を凌ぎ、死者を一人として出さずに成し遂げる。
だがしかし、それをもってしてもなお、パラシュラーマは圧倒的だった。
気づけば、既に斧を両手に持ち構えていた。
……弓の撃ち方に細工を入れ、飛翔速度を落とすことで時間を獲得

した。それを悟れるだけの実力が彼らにあった。
あったからこそ悟ってしまう。あの一撃を止めるには、自分達では足りない。
更にストラーダの星は解けかけ、二十台に戻っていたその肉体は四十台を超え始める。
寒気を感じた。敗北を感じる。戦死の可能性を感じ始める。
誰もがそれに立ち向かい、誰もが届かない可能性を悟る。
パラシュラーマもまた、この一撃は決定的な好機だと悟っていた。
そのうえで、隙を見せることなく全力をもって一撃を放つ。
『戦士(ハ・ラ)よ、―』
まさに、その刹那。

「……待っていたぞっ!!」

その刹那こそが、決着の時だった。

和地Ｓｉｄｅ

……え？
今、何が起こった？
俺は周囲を確認するけど、状況を把握しきっている者は誰一人としていない。
ストラーダ猊下が消えたと思ったら、パラシュラーマの目の前にいる。
その事実を把握し、真実を理解するより早く、パラシュラーマが息を吐いた。
何故か血を零しているパラシュラーマは、目を丸くしてストラーダ猊下を見ている。
「……聞いてもいいだろうか？」
「簡単なことです。貴方がサーヴァントであるからこそ、私はこの勝機に全てを掛けることができただけのことですよ」
え、どういうこと？
既に六十代に差し掛かっている状態のストラーダ猊下。その手にはデュランダルが握られ、振り切られている。
つまり、今の一瞬で踏み込んで、パラシュラーマを断ち切ったという事か？
え、でもなんで？
「……悪魔に関わらず、精神とは肉体に強く引かれるもの。これは数多くの異形、異能と戦ってきた私の結論でもある」
そう語るストラーダ猊下は、名残惜しそうに六十代から七十代に移ろうとしている体を見る。
「それはすなわち、老年の者が若々しい肉体を手にすることで精神に若さが差してしまうということだ」
そう語るストラーダ猊下は、それに対して寂しそうな感情を込めていた。
ただなんとなく分かるな。
カズヒねぇにしろ鶴羽にしろリーネスにしろ、人生二週目にしては精神年齢が若々しい時はある。あとはまぁ、アザゼル先生達異形のメンツも、外観年齢に近い精神性な気がするしな。

それをもってして、ストラーダ猊下はまるで悪い事のようにそれを告げている。
「二十代前後にまで若返らせる我が星辰光を、戦士達は「最善の肉体で最高の技術を併せ持つ」と羨んでいる。だが私からすれば、磨き上げた精神と技術に若気を混ぜ込む行為は、それを陰らせる愚行にほかならぬ」
そう告げたうえで、ストラーダ猊下は哀れみをパラシュラーマに向けていた。
「サーヴァントは全盛期を再現されるというが、私からすれば未熟さを取り込む愚行だろう。人々の信仰を受けるがゆえに、大衆の無理解に縛られ真価を発揮できぬことを哀れに思う」
猊下ははっきりと言い切った。
サーヴァントの召喚システム。全盛期とされる時期に召喚されるという性質を、欠陥とみなしている。
何故なら、大抵のサーヴァントは全盛期を年齢で想定する。その場合肉体的に脂がのり切っている若かりし頃が基本。そうでなくとも、人生において悟りを開いたと言ってもいい老年期が全盛期の定義とされやすい。
だが、ストラーダ猊下からすればそれが誤認という事だろう。
彼にとって精神に若気を入れては、長い年月を生きた者にとって真価を発揮できなくなる。かと言って老年期に召喚されれば、若さゆえに肉体が衰えている事実に引っ張られる。彼からすれば、サーヴァントのそのシステムでは全盛期を確立できないということだ。
「……全盛期が私にあるとするのなら、肉体と精神のつり合いが最も取れているころ。私にとってそれは、星が解除されたごく僅かな間にある五十代の頃なのだよ」
そこまで告げ、更にストラーダ猊下は寂しげな様子を見せる。
「そして貴殿がサーヴァントであるがゆえに、私も刃をこうして叩き込めた。本来のあなたであるのなら、わざわざ見せるまでもない一瞬の隙こそが全員生存の好機だったのでね」
……ちょっと意味が分からないんだけど。

思わず唖然としている俺達が顔を見合わせる中、パラシュラーマは何かを悟った表情になっている。
「なるほど。真名を解放する、その一瞬を……か」
え、えっと、どういうこと？
俺は正直さっぱりだったが、リュシオンさんとリアス部長は何かに気づいたようにはっとなっている。
「そうか。宝具の真名開放はすなわち―」
「―全力の一撃を放つ前に、隙があることを伝えるようなもの……っ」
その言葉に、ストラーダ猊下は静かに頷いた。
「この決定的な好機を、そこに繋がる油断を生むだろう私の星の性質。その二つがあったからこそ、この勝利を掴むことができたのだよ」
……俺とイッセーは顔を見合わせると、軽く戦慄していた。
言葉もないとはこのことだ。
俺達が絶望すら覚えそうになった、ストラーダ猊下の星の限界。
まさかそれこそが猊下にとっての、勝機を見出すタイミングだったとはなぁ。
「……決定的な一撃を叩き込む為の十分って、そういう〈相手を油断させるまでの仕込み〉事……っ」
カズヒねぇまでも戦慄している。
恐るべし、ヴァスコ・ストラーダ司祭枢機卿。
軽く引くレベルなんだが、怖いぞこの爺さん……っ
パラシュラーマも血をこぼしながら、苦笑いすら浮かべていた。
「サーヴァントの身ゆえの縛り。なるほど、影法師ゆえの限界か」
そう自嘲するように笑みを浮かべるパラシュラーマは、残念そうに斧を地面に突き立てる。
「貴殿のような者だけが戦士（クシャトリア）ならよかったのだが。願わくば、対等の条件で挑みたかったものだ……」
そう言い残し、そして消滅していくパラシュラーマ。
それを見送るストラーダ猊下は、どこか寂しそうだった。
「……全くですなぁ。お互い、五十の頃に出会っていれば最高の戦いが……できたでしょう」

……いや、そんなに巻き込まれたら今の俺達だと死ぬ自信があるんですが。

なくてよかった。そう、心から思ってしまった。

聖教震撼編　第六十四話　終戦のバチカン

和地Ｓｉｄｅ

何はともあれ、とりあえず一件落着か。
俺は周囲を確認して、敵がいないことを改めて認めてから息をついた。
毎度のことながら壮絶な死闘だった。毎回毎回難易度が上がっていくの、本当にやめてほしい。
今回でこれだと次は何だよ。冗談抜きでトライヘキサが復活している可能性とかあるぞ。……いや本当にありそうだから、口に出すのもはばかられる。
「……とりあえず、現場指揮官の方に連絡を繋いでくれるかい？　状況を把握しておかないと」
「そうね。アザゼル達とは通信が繋がるかしら？」
と、我に返ったリュシオンとリアス部長が話を進める中、俺達はとりあえずへたり込んだ。
見れば何とか死んではないメンバーも、遅れてみたメンバーが治療を開始しているから何とかなりそうだ。
と、何時の間にか隣にカズヒねぇが近づいていた。
「……疲れたわね」
「疲れたよなぁ……」
うん。これはつまりそういう事だろうか。
これからカズヒねぇが付かれたので、俺の肩を借りる的な展開。
すなわち
フィーバータイム♪
わーい！　役得～！　いやっほぉ～い♪
テンションが！　テンションが上がってきた！

やったー！　今日の苦労が全部報われるぐらいのハッピーだー！
「色々と本当に疲れたというか、個人的に壮絶なイベントまであったから尚更ね」
「なるほどな。正直俺、その辺りがちょっと分かってないけど」
ハイテンションで踊りだそうとする精神にステイクールを命じつつ、俺はカズヒねぇが体重を預けてくれることを今か今かと待っている。
ステイステイステーイ。高ぶるな俺のソウルハート。
クールに受け止めることこそ男の本懐。ここではしゃぎすぎたらツッコミ来るからもうちょっと耐えろぉ～。
まぁそれとして、いろんな方向で同時進行だったこともあり、カズヒねぇがどんなことしてたのかについての理解が及んでないところはある。
何がどうして我がお袋、道間乙女が降臨しているんだろうかと聞きたくはある。
いや、本当になんでだ。道間乙女が分裂転生したのがヒマリとヒツギなんだから、二人が無事な状態で復活するわけないだろ。あと外見が白髪になっているだけでそのままってのもおかしいだろ。ベアトリーチェのサーヴァントがうんたらかんたらとかウルバヌス二世は言っていたけど、奴はなんで俺達より先に理解している。
正直ツッコミどころが多いような気もするが、もう色々と忙しいのでその辺り一旦置いてたからな。後でしっかり聞いておかないと困惑するぞ、マジで。
まぁいい。それについては後でまとめて話されるだろう。作戦が終わった後の情報共有は大事だから、きっとされるだろうしな。
そしてカズヒねぇはふぅと息を吐くと、体の力を抜いた。
過剰に反応を見せるな。そっと受け止めろ。そしてすべての感覚を思う存分堪能する為にフルスロットルで展開するんだ。
あと一秒ぐらいで当たる！　あと０．７……０．５……０．４……０．３５―
「―お疲れ様、日美子」

―秒と思ったその瞬間、そう纏うレベルでゆっくり進んでいた時間にお袋がカズヒねぇを抱きしめた。
そ、そう来たかぁ……っ。
なんという、伏兵っ!?
「あれ？　田知、どうしたの？」
きょとんと首を傾げるお袋だけど、そこでカズヒねぇは苦笑を浮かべた。
「気にしなくていいわ。和地は時々精神年齢が一気に下がるから」
そして薄々読まれていた感じだったなコレ。
よし。だったらもういいか。
「あ、ちょっと待っててくれ」
十秒ぐらいかけて、俺は人のいない方向に向かって歩いた。
そして五秒ほどかけて息を吸い込んで―

「ガッデムっ!?」

イッセーＳｉｄｅ

「……頑張れ、九成……っ」
俺はそんな九成の絶叫を、涙を零しながら見ているしかなかった。
九成、九……成……っ

タイミングが、タイミングが悪いよ。しかも相手が相手だから文句も言えない。いろんな意味で相手が文句を言えない相手過ぎる。
うぅ……。九成、あとで愚痴を聞いてやるからな……っ
「どうしたイッセー。なんで泣いているんだ？」
「そっとしてあげなさい。あとで教えてあげるから」
首を傾げるゼノヴィアに、乙女さんに抱きしめられるままになっているカズヒがそっと指摘をしてあげていた。
うん、そこはありがとうな。
でもまぁいっか。とりあえず気を取り直そう。
「……それで、乙女さん？　結局どういう状況になってるんだ？」
そもそも状況が分かってないところがあるからな。
結局、決着がつくまで戦ってくれたのはありがたい。だけど、そのままでい続けられるのか？
「戦後処理頑張りますわー！　ちょっと休んでいいですわよー！」
「なんかすっごい激戦の後っていうか……ハルマゲドンでも起きたの？」
向こうの戦闘を終えたヒマリとヒツギも来ているけど、なんで二人が無事なのに乙女さんはそこにいるんだ？
サーヴァント的な感じになっているとも言われてるみたいだったけど、ちょっと状況が分からないところがありまくりなんだよなぁ。
というか、乙女さんとカズヒもちょっと困り顔だし。
「ど、どう説明したらいいんだろう……？」
「長くなるわね。そもそもバグがバグ呼ぶバグコンボだから、私達も完璧には理解できてないし」
なんか訳の分からない展開が起きたってのか。
「ついにおっぱい関係なく意味不明な事態が……っ」
しかもパンツも関わってない。俺はどう考えればいいんだよ……っ
「そうね。でもおっぱいが具現化されているんだからやはりこれはおっぱいなのかしら」
カズヒも遠い目になるし、ゼノヴィアも納得したのかうんうん頷い

ている。
まってくれ。確かに乙女さんのおっぱいは素晴らしいけど、だからおっぱいで一括りにしていいのだろうかと思う。
……カズヒも疲れてるってことにしておこう。ゼノヴィアは、まぁいいか。
ただ乙女さんは、ちょっと頬を引きつらせている。
「……ご、ごめん。ちょっとそれ、ついて行けないんだけど？」
まぁ、毎度毎度引き起こしている俺でも訳が分からないからなぁ。
おっぱいを司る乳神様が遣わしたおっぱいの精霊とか、冷静に考えると専門家的に意味不明だよな。しかも俺が一生懸命頑張ってたら、何時の間にか歴代赤龍帝の方々が憎悪を投げ捨てておっぱいをたしなむ紳士になってよかったとかも意味不明だし。しかも成仏した後、今度は歴代白龍皇がアーシアのパンツをくんかくんかして和解することを、パンツを食べる龍王の説得で決めたとか……マジでなんだ？
元をたどれば俺がおっぱい大好きなまま頑張ってたらこうなってるわけだし。俺のおっぱい好きは俺でも想像できない方向に進んでいる自覚が生まれている。
「その、頑張ってください」
「え……？」
俺が素直にそう言うと、乙女さんは思わず硬直していた。
そしてそんな乙女さんの手を、カズヒがそっと握りしめた。
「大丈夫とは言わないけれど、私も支えるわ。今度こそ、乙女ねぇを大好きでいたいもの」
「待って？　その、まじめな話なの……？」
戦慄しているけど、ヒツギやヒマリの影響とかはあまりないのか？
流石に二人から俺のおっぱい関連が抜けてるとは思えないけど。おっぱいに力を注いで赤龍帝化してるし。
う～ん。いろんなことが分からないけど、まぁそれについては後でいいか。
俺は馬鹿だからな。とりあえずいう事をしっかり行った方がいいだろ。

よっしゃ！　じゃぁまずはやるべきことがあるよな。
「……えっと。改めまして、道間乙女さんでいいかな？」
「え、あ、はい」
おっぱいで困惑してたのか、ちょっと間の抜けた返事が返ってきた。
まぁそこはいいか。今後も苦労を掛けそうだけど、その辺については……ヒマリやヒツギの元みたいなもんだし、たぶん大丈夫だとしておこう！
カズヒもリーネスも南空さんもフォローするだろうしな。カズヒとリーネスがフォローするなら早々酷いことにはならないさ。
さて、ちょっと居住まいをただして……と。
「カズヒや九成……いや、道間日美子や息子さんと友達やってます。兵藤一誠っす！」
手を差し出しながら挨拶すると、なんかきょとんとされた。
乙女さんに抱き寄せられたままのカズヒや、俺の隣のゼノヴィアはちょっと笑っているけど。そんなことされるようなことしたか？
ちょっと首を傾げたくなるけど、まぁそれはいいか。
「……たぶんだけど、乙女さんも兵藤邸（うち）に住むことになると思うんで、今後ともよろしく」
「……え、えっと……いいのかな？」
ん？
なんか戸惑いながらそんなことを言われるけど、何かあったっけ？
「カズヒ達の親友で、九成のお母さんなんですよね？　なら何の問題もないですよ」
「「言うと思った」」
うんうんと頷きながらカズヒとゼノヴィアが言うけど、どういう意味だ？
なんか分からなくて首を傾げていると、何故か乙女さんは涙ぐみながら微笑んでいる。
なにがあった？　いや、マジで何があった!?
ええ～。俺、マジで何をした？

俺がついて行けなくて困惑していると、乙女さんは涙をぬぐいながら、俺の手を取って握ってくれる。
「うん。これからもよろしくね」
……よし、これはこれでいっか！

アザゼルＳｉｄｅ

「なんかよく分からんが、とりあえず色々と丸く収まったのかねぇ？」
増援を連れてきてみたが、戦後処理ぐらいしかすることがなさそうだなこりゃ。
ま、若い奴らが頑張ってくれたんだ。あとは大人が事後処理を頑張るしかないわな。こういう面倒くさい事こそ、大人の仕事ってもんだろう。
俺がやることを色々と確認しているが、ふと視界に鶴羽の奴が映った。
「……ぐずぅっ……よがっだ……よがっだよぉ……っ」
凄いことなってんなぁ、オイ。
「お前、鼻をかんどけよ。美人が台無しだぞ」
ポケットティッシュを渡すと、そのまま鶴羽の奴は勢いよく鼻をかむ。
「……先生ありがと……。うぅ、本当に良かった……っ」
「何がどうしてこうなってんのか、ぶっちゃけ俺もよく分かってないんだがなぁ」
鶴羽がこうなってる理由は分かるが、なんでこうなったのかは俺も

よく分かってねぇところはあるな。
なんで道間乙女が復活してんだろうなぁ。ヒマリもヒツギも無事だし、何がどうしてこうなってんのか。正直色々と興味深すぎるぞ。
正直、そっちの調査とかも俺の仕事になるだろうな。メインでやるのはリーネスだろうが、調べる過程で俺が許可を出した方がいい設備とかも使うだろう。それぐらいのイレギュラーなことだってことはわかる。
……成果はかなり出ているし、リーネスの神の子を見張る者（グリゴリ）での立場を上げた方がいいかもな。技術者としてのポテンシャルもあるし、数少ない駒王町の堕天使メンバーだ。俺の副官に近い立場だし、特例で高位幹部に据えた方がいいかもしれん。
便宜上、駒王学園では親戚ってことにしているしな。俺もハーデスやインドラから睨まれやすい立場だし、万が一も兼ねて養子縁組でもマジですっかねぇ。
「って、リーネスはどこだ？」
「あ、あっちです」
涙もだいぶ収まってきた鶴羽が示した方向には、九成の隣にいるリーネスがいた。
「……地味に、地味に、ショックが……」
「よ、よよよよよよよぉしよぉし……っ」
―何がどうしてああなってんだか。
九成はまぁいいだろう。道間乙女がカズヒを抱きかかえているところから言って、想定しまくれる。
疲れたカズヒが肩にもたれかかると踏んだ九成がハイテンションを抑え込んで待ち構えた。そしてそのタイミングで道間乙女が後ろからカズヒを抱きかかえたことで、そっちにカズヒが体重を預けた。結果として文句も言えない憤りを、少し離れたところで崩れ落ちることで発散した。九成はそんなところだろう。
あいつ、恋愛が絡むと一気に精神年齢が幼くなる時があるからなぁ。ま、他の部分で色々高水準にまとまった安定感抜群だし、少しぐらいそんなとこがあるのはいいこった。後でからかおう。

で、その慰めをリーネスがしてるって感じだが、すごいどもってるな。
あのお母さんムーブしているリーネスはどこに行った。初心な女が好きな男と思わぬ展開でバグッてる感覚……あ。
「……命短し恋せよ乙女……って、堕天使は寿命長いか」
「ですよねぇ。後でマジ会議で話を……進め……て……」
頷きながら、鶴羽の奴が硬直した。
直後走り出そうとする鶴羽の襟首を素早くホールド。
「はっはっは。詳しい話をちょっと聞いてもいいか？　なぁに、時間はとらせねえよ」
「あ、あわわわわわわわわ……っ」
顔を真っ青にして震えんなや。
ふっふっふ。後でリーネスと話をする予定だったが、こりゃ面白いことになりそうだぜぇっ!!

Other side

「……さて、準備は整ったようだ」
「それは良かったよ、皇帝（エンペラー）。ただ、こっちは面倒だったけどね」
「礼を言いましょう、ミザリ様、ルシファーの末裔たるあなたには苦労をおかけしました」
「ま、魂（中身）は人間だからそこまでかしこまらなくていいよ。……でもまぁ、できれば冥革連合には謝っておいてくれるかな？」
「彼らの情報提供も助かりましたし、彼らにとっては不都合ですからね。……ですが、やらない選択肢はない」

「ふふ。僕としては冥界に大きな揺らぎが生まれるだろうから、願ったり叶ったりだよ」
「そうですか……ふむ」
「どうしたのかな？」
「眷属からの情報です。何やら妙な連絡が来ましたね」

「……道間乙女が復活したと、大王派が情報を掴んだようです。道間家と連絡を取る方向で動いていますね」
「……へぇ。流石にちょっと衝撃が走ったよ」

聖教震撼編　第六十五話　バチカン帰りでレッツパーティ♪

アザゼルＳｉｄｅ

神の子を見張る者の、俺が個人的に保有するラボ。
その一室で、俺はリーネスと一緒に道間乙女の検査をしていた。
していたんだが……結果が酷いな。
「なんだこのバグがバグと悪魔合体起こして生まれたバグの権化みたいな展開は」
「私達も大概ですけど、ある意味一番酷いですよねぇ」
一通りの検査結果から導き出される、一つの結論。
結果として判明した結論だが、もうどこから突っ込んだ方がいいのか分かったもんじゃねえ。
「ひ、酷くない、アイネス？」
ちょっと不満げな道間乙女だが、こればっかりは仕方がねえだろ。
もうどこから突っ込んだらいいんだよ。ピタゴラスイッチもビックリだぞ。
「……確かに、固有結界が三重の、重ね掛けバグですからね」
カズヒがため息交じりに同意するが、残念だったな。
「それもそうだが、それどころじゃないバグが発生してやがる」
本当に、何が何だかって感じだな。
まじ自我が確立した理由は、カズヒの推測通りだ。
元から固有結界が使えるのがカズヒ。そしてそんなカズヒが使えるようになった夢幻召喚だが、ベアトリーチェという「マスターにとっての運命の淑女となる固有結界」が宿った為、ここでバグが発生。
更にハインリヒ・クラマーが「対象を天国へと導く為、地獄と煉獄を

具現化する固有結界」である神曲・神聖喜劇を当てた所為でバグが発生した。更にハインリヒが必中を期した「カズヒを識別する形で、室内全体を範囲とする」が仇となり、室内にいたヒツギとヒマリが少なからず影響を受けたことが、決定打になる。

固有結界の三重バグに、一つの本来でもあるヒツギとヒマリがもう一つの効果範囲内にいた。これによりカズヒ自身が固有結界使いであることまで絡んだ結果、道間乙女の人格がカズヒ（ダンテ）を導くベアトリーチェとして出力された。

そしてカズヒがあっさり神曲・神聖喜劇を踏破した勢いで、いつものように覚醒。その勢いで乙女を引っ張り上げ、ベアトリーチェの皮を被った疑似的なサーヴァントとして出力された。

ここまでが、カズヒが立てた仮説。リーネスも検査をしてなかったこともあり、そうだと思っていたし、八割がた当たってはいる。

だがここに、更なるバグが絡んでいた。

「……結晶化した星辰体（アストラル）、翠星晶鋼（アキシオン）。ザイアに巣食っていた神祖という連中だけが保有していたという星辰光（アステリズム）」

俺はそう告げながらモニターを操作し、そこで記録映像が残っていた冥界首都での曹操との闘いを映し出す。

そこではヒツギとヒマリが曹操相手に善戦している様子が映し出されていた。

その映像を見ながら、リーネスが興味深そうに目を細める。

「その例外ともいえるのがヒマリとヒツギの共有型星辰光。……この時点で勘づくべきだったわぁ」

「っていうと？」

鶴羽の奴が首を傾げると、リーネスは苦笑すら浮かべている。

「……二人が翠星晶鋼を使うのなら、乙女もそうである可能性はあるでしょぉ？　今の乙女は、星辰体結晶化能力・成形型と言ってもいい星によって体を作っているのよぉ」

本当に凄い事になってるわけだ。

翠星晶鋼を起点として、かつての道間乙女を再現した肉体を生成している。おそらくだが、本来の乙女が星辰奏者（エスペラント）になったのなら、星辰

体結晶化能力を星として振るっていただろうな。
「なるほど。受肉とはまた違った状態なのね」
「おぉ～。乙女って別の意味でスペシャルな感じ？」
つんつんとカズヒと鶴羽が乙女の体をつついているが、俺もつつきたいぐらい興味深いケースだ。
専門家が知ればサンプルの一つぐらい欲しがるだろ。ぶっちゃけ、足元を見て吹っ掛けても代金払うんじゃねえか？　俺でも札束ぐらいなら出せるぞ。
「ちょ、ちょっと……くすぐったいてば……っ」
ツンツンつつかれる道間乙女だったが、収まってくる頃には首を傾げていた。
「あ、でもそうだとすると……私ってどんな状態なんでしょうか？」
「かぁなぁりぃ……ややこしい」
はっきり言ってやった。
ああ、本当にややこしい。
カズヒの心象に由来する固有結界になるはずが、変なバグでオリジナルの影響を受けて再現された存在。
例えるなら―
「疑似サーヴァント……とでもいえばいいんだろうかねぇ？　ついでに言うと、ヒツギとヒマリにも繋がっているからややこしい」
―疑似的な形で現出したサーヴァント。
ベアトリーチェの皮を被り、道間乙女だった二人との同調で自我を確立した存在。
だから追加で例えるなら、だ。
「外付けかつ共有の別人格が個体として確立した。ヒマリやヒツギの観点から見ればこういうべきだろうな」
「な、なんかややこしいですね」
実感が湧かねえ様だが、ある程度は乙女自身も理解したようだ。
いろんな意味で特例に近いからな。今後も逐一検査をするべきだろう。
このデータ、絶対に貴重だし、価値があるな。

そういう意味だと、変な連中に狙われる可能性もある。
そういった特例的な意味でも、駒王町に住むことになるだろう。ある意味一番安全だし、身内も多いわけだしな。
「……そういう意味じゃぁ、千客万来っていうべきかねぇ？」
「そうですねぇ」
リーネスが同意してくれるが、そういう意味だとちょっと忙しいからな。
「確か、祐斗の昔の知り合いも、こっちに来るんでしたっけ？」
カズヒが思い出して言ってくるが、まぁそういうこった。
「ああ。木場やギャスパーが住んでるマンションの方だがな」
俺もその辺はちょっと手を貸してるから、そこに関しちゃ太鼓判だ。
木場の奴が聖剣計画の被験者だった時のこと。その時、結界系の神器を暴走させて仮死状態になった奴がいた。
バルパーの奴も手を出しあぐねて、とりあえずこっそり隠していたそうだ。聖剣計画の問題発覚後に調査メンバーが見つけたが、暴走した神器を解除できなかった為保護が限界。和平が進んで神の子を見張る（俺達）者からの技術提供で何とか覚醒したが、長年の封印もあって最近になって漸く回復って感じだしな。
木場の奴もかなり喜んでたし、今更離れ離れってのもあれだ。ま、封印されてた影響で成長をしてないから、年齢は離れちまってるがな。
あいつも最近、結構危なっかしかったからな。この辺で外付けのブレーキでも付けた方がいいだろう。
……そういう意味だと、道間乙女の存在はカズヒにとってのソレだろうな。
「なんの視線ですか、なんの」
「さぁてなぁ？」
カズヒのツッコミを華麗にスルーし、俺は思い出したデータも確認する。
それを覗き込んだ鶴羽が、ちょっとガチの眼になっていた。

「これヴァレリーのデータですよね？　そろそろするんですか？」
「ああ。準備は大体できてるからな」
ストラーダがこのゴタゴタのどさくさに紛れて渡してくれた、本物の聖杯の欠片。
これはおそらく保険だろう。
リゼヴィム・リヴァン・ルシファーから、ヴァレリーから奪われた聖杯を奪還する。これはギャスパーもイッセーも大前提としているが、そんなことはリゼヴィムも分かっている。
つまり、最悪の場合聖杯を盾にされる可能性がある。いざという時はヴァレリーを見捨ててでもリゼヴィムを何とかしなきゃいけないが、その覚悟までギャスパーに持てといえるわけがない。万一持てても、一瞬のスキが生まれないとはいいがたい。
だからこそ、本物の聖杯を欠片でも使って、万が一聖杯を破壊する選択肢になっても最悪を免れるようにする。ストラーダはそこまで考えて、クーデターを計画したわけだ。詫び代まで準備したってわけだな。
……むしろクーデターの詫びという形でもなければ、聖杯を欠片でも吸血鬼の為に使うなんて無理だったろう。同時多発的に様々な問題を解決する、そんなウルトラCじみた真似をやってのける。奴はやはり傑物だよ。
そろそろその辺を試す頃合い。既に欠片を核に、ヴァレリーを補完するネックレスを作ってるしな。
そして成功した場合、この駒王町に保全の為の結界を張る。更にイッセーの家やギャスパー達が住んでいるマンションから出ないようにすれば持続できるようにする。これが最低限の保険ってやつだ。
「正直、ギャスパーに恨まれないで済むのはホッとしています」
「最悪の場合、カズヒはやる側だしねぇ」
ほっと息をついているカズヒにリーネスが茶化すように言うが、実際やるだろうしなぁ。
最悪の事態を避ける為に、誰かがやらねばならないのなら。そもそもそういうことをやってきたカズヒだからこそ、覚悟をもって行うだ

ろう。
　そうなるとやっぱり関係もギクシャクするだろうしな。そういった心配が薄れたのも良いこった。
「……日美子が、凄い事に……」
「慣れた方がいいわよ。極限レベルの光の意思を持ってる女傑だから」
　戦慄している乙女の肩をポンポンと叩いた鶴羽は、そのうえで視線をモニターに戻す。
「これ、一応私も手伝った方がいいですか？」
　ま、こいつも聖杯を使えるからな。その辺を考えることはあるだろう。
　つっても、データ的には十分ではある。
「データは十分とれてるから、手伝うなら実際にやった時のフォローを頼むぜ」
　実際にやるのは初めてだからな。その辺りのフォローの方が重要だろう。
　だがまぁ、悪い結果にはならないだろう。
　……さて。それはそれとして、だ。
「で、道間乙女。お前さんの今後だが、なんか要望あるか？」
　そこはきちんと済ませるべきだしな。
　道間乙女もそれは分かっているのか、少しカズヒたちを見回すと、小さく頷いた。
「……では、少しだけ――」

和地Ｓｉｄｅ

超大ごととなった神聖糾弾同盟の一件から、数日後。
「ではこれより！　ゼノヴィアちゃんの生徒会長就任記念パーティー……はっじめまっす！」
『『『

「……どうしました？　私の顔、何かついてますか？」
首を傾げるルーシアだけど、なんというか年相応になっているというべきか。
普段から背負い込みすぎているところがあったが、その辺りの肩の力が抜けているらしい。
それを見たカズヒねぇは、少しほっとした表情でジュースを一口飲む。
「いい顔になったじゃない。リュシオンにもいい薬があったようだし、そこだけはウルバヌス聖下に感謝かしら」
「……二度と貰いたくない劇薬でしたけどね」
ルーシアは思い出して凄くげんなりした。
極めて同感だ。あれはいろんな意味でメンタルをゴリゴリ削っていたことだろう。トラウマ必須というほかない。
よくぞ持ち直したなぁ、リュシオンもルーシアも。特にルーシア。
いろんな意味でメンタルに致命傷を与えてくる試練だった。あれはカズヒねぇの過去つるべ打ちに匹敵する試練だろう。俺だって分かったうえでやりたくはない類の試練だ。
ただ、おかげで効果は覿面だったな。
と、カズヒねぇはふと思い出したことがあったようだ。
「そういえば、リュシオンは休暇を取ったんですって？」
「はい。一週間ほど色々な場所を見ていきたいと言っていました。観光地ではなく、むしろ犯罪発生率の多い場所を重点的にですね」
ルーシアがそう答えるが、それもまた極端気味というかなんというか。
大丈夫だろうか。フィジカル的な窮地はどうとでもなるだろうけど、犯罪っていうのはそういう物ばかりじゃないからなぁ。
「……逆ベクトルに極端な方向行ってないか？　別の意味で心配になるんだけど」
俺がその辺聞いてみると、ルーシアも少し苦笑いをしていた。
「……サポート役として、暗部からアドバイザーを派遣する方向で落ち着いています」

ああ、その辺のサポートは万全と。
ちなみにちらりとカズヒねぇを見ると、少し苦笑気味だった。
「人のことは言えないけど極端なことね。……まぁ、下ばかり見るのもあれだけど、時々は見た方がいいものね」
まぁ確かに。
リュシオン・オクトーバーはまず、できないやつを知ることから始めるべきってことか。だからこそ、そういうのが多いところを見て学ぼうとしていると。
ちょっと極端なのはアレだけど、学ぶ姿勢は大事だよな。
俺も文献ぐらいは調べるべきか。流石に直接入って大ポカするのは避けたいが、知識ぐらいは知っておいて損はないだろう。
涙の意味を変える者として、変えるべき涙について知見は深めるべきだしな。金もある方だし、真剣にレポートとか買ってでも読むべきか。
そんなことを思いながらジュースを飲んでいると、ルーシアは近くのソファーに座りながらため息をついていた。
「おかげで再来週まで兄さんには会えないのが残念です。学校の友達に紹介したいんですけど、流石に先に決まった予定まで捨てさせるわけにはいかないですから」
その何気ない言葉に、俺はちょっと吹き出しそうになる。
先に決まった予定は捨てさせない。つまり予定が空いているなら強引にでもねじ込む気だったというわけか。
それも駒王学園の学友……となると、異形や異能に関わらない友達を相手にしているわけだ。その為にわざわざ兄の休暇にねじ込むとはねぇ？
俺達の視線を受けて、ルーシアはちょっとムッとしながらも胸を張った。
「たまには兄さんに我が儘も言おうと思ったんです。自慢の兄を紹介するぐらいいいじゃないですか？」
「そりゃそうだけど、海外から呼ぶとはルーシアも極端気味だな」
俺がちょっと茶化すと、ルーシアは憮然としながらジュースを飲

む。
年頃の反応になったもんだ。ま、俺も年齢はさほど変わってないけどな。
いやでも、いい傾向だろ。
ちょっとぐらい我が儘言うのも、若い時の特権だ。未熟でなければ許されないことなんていくらでもあるしなぁ。
……となると、だ。
「なら俺もちょっと極端にっと」
少し力を入れて、俺はカズヒねぇを抱き寄せる。
カズヒねぇはちょっと目を丸くするけど、小さく笑うと肩に頭を乗せてくれた。
「そうね。カッコいい彼氏に少しぐらいはサービスするわ」
わーい♪
俺はちょっとテンションが上がりまくりだ～！
と、目の前でいちゃついてた所為でルーシアがちょっとムっとしていた。
ちょっと調子に乗りすぎていたかと思ったら、ルーシアは何やら考え直した雰囲気だ。
「兄さんを紹介する時、私も腕を組んだ方がいいでしょうか？」
……。
「ルーシア。ブラコンはこじらせない程度にしておかないと駄目よ？経験則で言い切れるわ」
「え？　カズヒ先輩に心配されるレベルでしたか？」
マジ顔のカズヒねぇに、ルーシアは軽くショックを受けているようだった。
……ルーシア。ブラコンもほどほどに……な？
……っていうか、オカ研ってブラコンシスコンとの縁が深すぎないか？　業？
……ま、いっか！
人様に迷惑を掛けない範囲内なら、当人の価値観にあまり深入りするのもあれだしな。個人の価値観はある程度は尊重できないと。

そんな風に考え直し、俺はふと天井を見上げる。
新年早々大騒ぎに巻き込まれたことだし、たぶん今年も色々大変だろう。
リゼヴィムとかミザリとか。あとルシファー繋がりで別口だけどヴァーリ（ラーメン）とか。
ただまぁ、やることは根幹的には変わらない。
鍛えて備えて、乗り越える。
絶対にできるなんて言いきれない。敵だって成功する為に努力するはずだからな。俺達の積み上げた総計を上回ることもあるだろう。
ただ、それを乗り越える為の心構えと備えだけは忘れない。
瞼の裏の笑顔に近い、嘆きの涙の意味を変える。その原点は今までの人生から変わってない……いや、原点を見つめ直して更に高まった。
必ず勝つとは言わない。ただ、勝つ為に努力をし続けることに変わりはない。
お袋を会うことができ、瞼の裏の誓いを互いに交わして生き続けたことも理解した。ある意味で俺の人生は、見つめ直し更に研ぎ澄まされたと言ってもいい。
……そうだな。心機一転、改めて頑張るぐらいでいいだろう。
改めまして、新年からも頑張るか！

Other side

「……なるほど、ね。ザイアからの情報サルベージ、ご苦労様、アル

バート」
「どういたしまして、マスター。だがどうする？　あいつで無理だとするなら、お前さん、至れないんじゃないか？」
「そうだね。やはり僕が至るとするなら、その相手は決まり切っているわけだ」
「いや、その結果がアレ止まりだろう？　おそらく奴では不可能ではないだろうか」
「そこに関しては僕の方に問題があった。だからあの結果にとどまったんじゃないかって思っているんだ」
「というと？」
「条件の一つが満たされてなかった。だけどその条件は別さ」
「別？」
「そう。だからアルバートにお願いがあるんだ」
「なんだ？　ただでさえ忙しかったのに、あんまり余計な仕事を持ち込まれても困るぞ？」
「一応注文だけ見てくれよ。前から考えていた装置なんだけどね？」
「……なるほど。確かにこれも条件の一つか。試す価値はありそうだな」
「そういう事さ。ま、それで失敗するなら別のアプローチに切り替えるさ」
「前向きでいいことだ。まぁ、閃きは絶対必須。しかし必要最小限以外は努力で代用可能なもんだ。やるだけやってやるから頑張りな」

「ふふ。これができたら、一度無理にでも会いに行くべきかな……日美子」

聖教震撼編　幕間　未来からの驚愕

アザゼルＳｉｄｅ

駒王町の地下にある、俺のラボ。
そこで俺は通信を繋ぐと、立体映像が次々に浮かぶ。
冥界からはサーゼクスに、俺の要請もあって他の魔王も。天界からもミカエル。神に子を見張る者からも、現総督のシェムハザ。更にオーディンの爺さんも姿を見せており、他にも各勢力の重鎮が姿を見せている。
「……さて、それじゃぁ報告をさせてもらうぜ？」
『非常事態という事らしいが、どういうことかね？』
俺に対してサーゼクスが真っ先にそう聞くと、俺は肩をすくめながら頷いた。
まったくもって非常事態。イレギュラー極まりない事態で、伝える必要しかないからな。
「事の発端は数日前、俺が別件でちょっと冥界の方に行っていた時だ。……それとは別に、妙な連中と戦闘したっていう話は聞いているな？」
『聞いとるぞ？　いた誰も訳の分からない、生物ともいえないような連中と激突した奴が少なからず出ておる話じゃな？』
オーディンの爺さんが俺に頷いてくれるが、そんなケースが十数件ほど確認されていた。
数は一件につき一体から十体ほど。散発的な激突だが、これまでの防御魔法では防げない特殊な攻撃を放つ。更にぶった切っても切れた部分同士が触手を伸ばして結合することもあり、倒すなら凍結したうえで跡形もなく吹き飛ばす必要があるほどだ。

映画で見るケイ素生命体とかがあんな感じっぽいな。俺も資料は見ているが、どうも機械的な印象を覚えていた。
禍の団の新兵器の可能性もあったが、発見ケースがごく少数。それに戦術的な価値がない場所で発見されることもあり、一応機密情報で調べているところだった。
で、そこに大きな進展があった。
そして、それ以上に懸念事項が生まれちまったわけだ。
「本当にたまたま、たまたま俺が趣味で作った秘密ラボの掃除に来た時、そいつらと出くわした訳だ」
『……色々追求したいですが、よく無事でしたね』
シェムハザにそう言われるが、まぁ心配されるだろうさ。
なにせ出現したのはこれまでにない百体近い大規模。そういったこともあって、俺も流石にラボの秘密込みで説明する形になったわけだ。
……それとは別に説教もされそうだが。まぁ金も結構かかってるからなぁ。正座は、必須だろうなぁ。
とりあえずそこは一旦置いておこう。まずは必要な情報体。
「思わぬ増援があったおかげで、割とあっさり倒せたよ。なにせ専門家だったからな」
『専門家ですか？』
ミカエルが首を傾げるので、俺は資料を転送しながら話を一気に進める。
「謎の連中の正体は、乳神の異世界で、奴らと敵対している機械生命体だ。専門家連中はＵＬ（ウル）と呼称していた」
俺の言葉に、立体映像で浮かんでいる上層部の連中が動揺する。
そりゃそうだ。俺だってあいつらの立場なら、興味深い以上に動揺する事態だ。
歴史的に見てつい最近発覚した異世界。そしてそこに対する侵略活動を目論む連中と戦っている、この厄介な時期。そんな時にその異世界から、それも接触してきた連中と敵対している奴らが来たんだからな。

リゼヴィム達クリフォトに気づかれなくて良かったぜ。絶対にロクなことにならねえだろうしな。
『よく無事だったね。その辺りにはテロ組織が活動をしているという報告もあったはずだが』
サーゼクスがそう言うが、問題はここからだ。
「ああ。俺もラボが奴らに見つけられてないか気になってたこともあって、それなりに戦闘準備は整えていた。そしたら俺の方はＵＬに襲われ、専門家連中はそのテロリストとひと悶着を起こして手古摺ったりで大変だったぜ」
ため息をグチと一緒に吐き出してから、俺は本番の一つを告げることにする。
「……で、その専門家ってのは３０年後の未来から来たイッセーの子供達だ」
驚愕のあまり沈黙が響いた。
ま、そりゃそうだろう。
時間転移技術そのものは、ある程度は研究されている。
既に時間に干渉する異能はあるし、本格的に研究を行えば可能とするものは出てくるだろう。俺もリスクを考えているからしてないが、やろうと思えば数十年である程度の形にはできる自信があるしな。
「その三十年後の未来では、機械生命体を率いる邪神どもがこの世界にちょっかいをかけているらしい。それに便乗したこっち側の神もいるみたいで、邪神戦争と呼ばれている時期に真っ最中だそうだ」
『……ふむ』
サーゼクスは俺のまた聞きに、興味深そうだった。
まぁ、今の件である程度の想定はできるだろうが、問題はここからだ。
実際、資料を確認している連中は渋い顔をしているしな。
「で、資料の前半に書いているからもう読んでいる奴もいるだろうが、その三邪神どもは一体一体が龍神より強い。直属の幹部も軒並み主神クラスで、強いのになると龍神クラスがいるという。ついでに幹部は幹部で龍王クラスの側近を何人も控えてる連中がいるとか」

まったく、悪夢のような話だぜ。
だが同時に納得だ。
あのトールですら清い心を持たねば使えないのが、ミョルニルだ。それを煩悩まっしぐらなイッセーに、煩悩まっしぐらなまま使わせる。冷静に考えれば、下手な主神を遥かに超える権能だろう。
レプリカ相手に、何度も使えない。だが使者を経由した間接的な加護でそこまでなら十分ヤバい。トライヘキサを単独でガチガチに封印し、いくつもの神器を作り出すシステムの創造主たる、聖書の神。もしくは龍神クラスを除いて最強格である、破壊神シヴァや帝釈天ことインドラ。そういった連中の本領に匹敵する、とんでもないことをやっている。
そんな乳神が最高神の一角にとどまっている異世界。そんな世界で勢力を二分するのなら、龍神クラス越えの一人や二人はいてもおかしくないわな。
「そしてE×E（エヴィー・エトゥルデ）は、そんなエヴィーサイドと、乳神ことチムネ・チパオーティとかいう連中達善神側が率いる精霊族エトゥルデサイドに分かれて争っているそうだ」
まったく。この事実を知った時は目の前が暗くなりそうだったぜ。
「で、何時の間にやらエヴィーサイドは異世界に侵略して、従属しない住民は滅ぼして従属した住民は機械生命体にする活動をしているとか。対抗してエトゥルデサイドも力を貸したりとか、代理戦争じみたことにもなってるらしいな」
『……リゼヴィムが動こうが動かまいが、どちらにせよ我々は異世界と戦いを繰り広げることになるわけか』
サーゼクスはため息をつくが、その隣に移るオーディンは興味深そうだった。
『とはいえ、リリンも易々返り討ちには遭わんじゃろうて。トライヘキサだけでは無理じゃろうが、連携を前提とした対龍神兵器も開発しておるしのぉ。何より奴の煽りスキルとフットワークの軽さがあれば、二勢力の争いを上手く利用して混乱を生めそうじゃわい』
そんな呑気なことを言ってくるオーディンの言葉に、セラフォルー

やファルビウムがげんなりとした表情を浮かべている。
『そうよね～。というか、亜種聖杯とか星辰体（アストラル）を運用すれば、思わぬ第三勢力ぐらいになっちゃうかも。この世界も色々発展しすぎているから、三十年も経てばＧ（ギガンティック・フォートレス）Ｆも凄い事になってるでしょうし？』
『どっちかと言えば、他にもたくさんの異世界に繋がっているといえるのが厄介かな？　いろんな世界の危ない連中をアイツが扇動すれば、質はともかく規模ならそいつらに匹敵する組織が作れそうだ』
ま、そりゃそうなるだろう。
組織ってのは質だけで決まるもんじゃない。規模も重要だ。出なければ聖書の神が既に死んでる三大勢力が、各神話の和平における中核組織を維持したりなんてしないしな。
そしてリゼヴィムの大衆を煽る才覚は、間違いなく化け物だ。異世界より来訪し、聖杯を使って他者を強化して力を与える。そんな存在がいきなり現れれば神格化もされるだろう。
そういう意味なら、リゼヴィムが異世界に行けば更にヤバい事態になりかねない。二大勢力の争いを逆手に取り、上手く引っ掻き回す第三勢力には十分なれるだろうさ。
そして同時に、対抗する余地がないでもない。
そもそも乳神はイッセーに接触している。なら乳神を経由する形でエトゥルデサイドと連携をとることは不可能ではないし、エヴィーサイドもこっちに戦力を割きすぎて乳神達に背後をつかれるのは避けたいだろう。
禍の団も現政権も、対龍神を視野に入れた兵器研究をしてるわけだしな。対龍神が各神話勢力でそれぞれ可能になれば、和平を結んだ連中の連携でやりようはある。実際三十年も経てば、エヴィーサイドであろうと片手間に潰されるなんて到底ありえないだろう。
……そう。この世界ならな。
『しかしアザゼル。未来の私の甥っ子達は、思ったより手古摺っていると聞いたが？』
サーゼクスもその辺りは気になってたようだな。

ま、言いたいことは分かるぜ？

『確かに意外じゃのぉ？　例のテロリスト、星辰体やプログライズキー、亜種聖杯の利用を目論んでおったようじゃが、質そのものは上級悪魔クラスが精々じゃろうて』

『三十年も経てば技術も発展しているでしょうし、対応は十全に可能だと思いますね』

『わざわざ過去に派遣されるのなら、万が一にでも弱いということはないでしょうし、妙ですね』

オーディンの爺さんもミカエルも、シェムハザも首を傾げてるな。

ああ。ある意味ここからが本番ってやつだ。

「ちなみに弱いってことはなかったぜ？　三十年も経つ頃には、人工神器も神滅具や禁手の再現も確立され、新型の聖剣も作られててな？　イッセーのガキ達はどいつもこいつも、邪神達との死戦やイッセー達との教えもあって、今のイッセー達となら真っ向から渡り合えるレベルだろうさ」

あれはいい研究になった。今後においてもかなり参考になったといえるだろう。

「ちなみに、元々別の過去に行った連中をぶちのめしてたんだが、その中には邪神側に鞍替えしたロキもいたそうだ。ＵＬを参考にして新たに作ったフェンリルとか、邪神側近の直属である龍王クラスの幹部とかも引き連れてたが、まぁそっちの過去の俺達とも協力して何とかしたそうだぜ？」

そっちはそっちで興味深いが、問題はそこじゃない。

『尚更分からないのよん？　上級悪魔クラスに星辰光（アステリズム）やレイダーを上乗せしたぐらいのテロリストに、そんな実力者が後れを取るのかしら？』

セラフォルーのいう通り。

あいつらの戦闘能力はかなり高い。イッセーのガキ達だからある意味納得だが、リアスとの子供やアーシアとの子供は、人工神滅具の人工禁手に至ったこともあり、龍王クラスとも真っ向からやり合えるぐらいだ。

だが、そんな連中でもまだ若い。
だからこそ苦戦したが、問題はそこだ。
「手古摺った理由は単純だ、未知の想定外に戸惑ったのさ」
その言葉に、サーゼクス達は怪訝な表情を浮かべている。
当然だろう。星辰光が独創的すぎて未知と相対することなんて、星辰体に対する知識があればほぼ常識。敵が未知の手札を持っていることは想定内じゃなけりゃぁ行けないしな。初見殺しを覚悟することは、三十年も経てば心構えの基本になるだろう。
イッセー達のガキなら当然教育にも力を入れているだろうし、その程度の心構えはできているはずだ。そう考える。
だが―
「情報交換の時間は短かったが、これだけは確実だ。……あいつらの時代には、この世界に存在している物が存在していなかった」
―大前提が覆っているなら、話は別だ。
明らかに動揺している奴もいるし、慌てて資料を確認している奴もいる。
そのうえで、俺は端的に説明する。
「存在していない物は、雑にまとめれば星辰体関連、プログライズキー関連、そして魔術回路関連の三系統。……つまるところ、あいつらが来たのは自分達の過去じゃなくて、遥か過去から派生した並行世界だったことに由来する混乱が原因だ」
『……待ってくれ』
サーゼクスが手を前に出して俺を止める。
ま、いきなりこんなことを告げられれば困惑するだろうさ。
『……雑にまとめればということは、他にもない物があったという事だろう？　それはどんなものが？』
「大きく分ければ、第二次世界大戦期から現代にいたるまでの新たに発見された神滅具（ロンギヌス）及び候補の多く原作に出てきた神器神滅具は当然除外枠。更にサウザー諸島連合などといった、二十世紀にかけて新しく誕生した中小国バタフライエフェクトなどもある為、完全別口の新興国も多数存在するが合計数十ほどってことだ」

俺が追加で伝えると、混乱はどんどん増加していった。
本当に当然だ。驚いていいだろう。
情報が突拍子もないうえ、無視することもできない。そりゃざわめきだって出てくるだろうさ。
『中々驚きじゃのお？　……で、アザ坊は仮説とかを立てておるんじゃないか？』
目ざといことで。ま、隠す理由もないしな。
「……仮説は二つ。一つは、三つの技術はさらに未来からもたらされた新しく生み出された力だった」
これが一番説得力があるだろう。
なにせ時間移動と異世界が存在しうると証明されているからな。割と何でもありといえる。
理由は分からんが、まぁ色々あるだろう。
邪神達との戦いが悲惨で、未来の技術を持ち込んで変えたかったってものもある。ただ単に未来技術を利用することで、自分達に都合のいい生活を味わいたいなんて言うくだらないこともあり得る。
『……もう一つは？』
サーゼクスがそう促したので、俺も素直に答えてやるか。
「全く未知の異世界に目を付けられ、何かしらのちょっかいを掛けられている」
個人的には、そっちの方が可能性はデカいだろうと踏んでいる。
根拠は勘だ。だが、どうも油断ならねぇ。
どちらが理由だとしても、おそらく深く関与しているのはサウザー諸島連合。そして神祖って連中だろう。
奴らの異常な先読みと違和感のある見落としも、イッセーのガキ達が来た未来のその先、そこから歴史の教科書とかを参考にプランを立てたのなら納得もできる。ま、妙なあらも多いから歴史小説の方かもしれないがな。
だが、どうしてもそっちじゃねえという感覚がしてならねえ。
だからこそ、もっと別の、異物といえるものからの介入を仮説として立てている。

問題はなんでかというのがこうなるとさっぱりだが、だからこそ懸念は必須だろう。
「……どちらにせよ、神祖達が要因だとするならもはや奴らの手を離れている事態なんだがな」
なんたって死んでるしな。上手く利用しようとか試みたが、器じゃなかったんで後ろから刺された形だ。
この世界だけならともかく、自分達で手を加えた分まで考慮が足りなかった。奴らの死因はそういう事なんだろう。どことなく器が見えるってもんだ。
『裏を貸せば、イッセー君の子供達が知っている未来を参考にするのも不可能に近いか』
俺がため息を吐くと、サーゼクスもため息をついた。
まったくだ。バタフライエフェクトってのがどれだけ発生するかはともかくとして、どう転んでも事態は誰の予測もつかないことになるだろうさ。
なんたって、とんでもない地雷がこの世界に埋まっちまってるわけだから……な。
「……星辰光（アステリズム）を超えた星辰光（アステリズム）、極晃星（スフィア）……か」
『例の、神祖共が研究していたというやつじゃな？』
俺の呟きに、オーディンの爺さんが反応する。
ザイアからのサルベージデータに、後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）の情報提供もあって発覚した、星辰光（アステリズム）の極点。
データを調べる限り、到達すれば龍神越えすら狙えるという、まさに規格外の力。
これについても厄介だ。
なにせ、俺の仮説から考えれば―
「そっちもそっちで厄介だ。なにせ、ミザリが気づけばすぐにでも至りそうだから……な」
―仮説が当たっていた場合、俺達は即死の一撃が奇跡的に不成立だっただけということになるんだから……な。

「アザゼル元総督！」
「今ちょっと機密情報が飛び交ってるんだが!?」
なんか急に乱入してきたやつがいるんだが!?
一体なんだよ。この状況下で余計なトラブルを出されても―
「ゼノヴィア嬢とカズヒ嬢が激突し、そのついでに駒王町内部にいた大欲情教団構成員を捕縛！　日本国内に大欲情教団の本部が有るらしいとの報告が上がっております！」
―とんでもない報告が上がってきた!?

『……アザゼル。こちらでは悪い方向の情報が出てきた』
『ディハウザー・ベリアル十番勝負で事故が起きたみたいなのよん。その……レイヴェルちゃんがお兄さんやディハウザーちゃんと一緒に行方不明だって』

―こっちにも余計なトラブルだとぉ!?

第九章　黙示覚醒編
黙示覚醒編　第一話　急転直下

和地ｓｉｄｅ

「……で、俺はなんでこっちに来ているんだ？」
俺がそう聞くと、鶴羽とギャスパーが凄い勢いで振り返った。
「私の応援！　いざという時に私のやる気を上げて!!」
「い、いざという時もありますから、お願いしますぅ」
と、困った要望をされて正直困っている。
俺は今、神の子を見張る者が保有している駒王町内部の施設に、鶴羽やギャスパーの要請もあって連れられていた。
今日はヴァレリーに対して聖杯の処置を施す日だ。本来は他のメンバーも来る予定だったが、色々とトラブルが発生したことで分散されることになった。
「……というよりぃ、私の応援にもなってくれると嬉しいわぁ」
「私も応援するよ。頑張って、リーネス」
と、これまた珍しく緊張気味のリーネスの手を、お袋がそっと手を握って励ましている。
本来ならこの場を仕切るのは先生なのだが、アザゼル先生は今回不参加だ。
なんでも、冥界に持っている隠しラボ近辺でテロ組織が活動しており、そのゴタゴタを解決した結果発生した別口の機密トラブルに対応するとのことだ。
そしてヴァレリーの件は、アザゼル先生が全権任命する形でリーネスが担当することになっている。
つい先日、リーネスは便宜上の権限が神の子を見張る者の準幹部レ

ベルにまで高まっている。これまでも先生の直属扱い兼お目付け役だったが、今後は一部においてだけは最上級堕天使クラスの発言力も確立している。
いうなれば分家元七十二柱の有力者クラスといったところだ。堕天使側の冥界領も一部与えられることになっており、神の子を見張る者における運営陣の直下レベルの立ち位置になっている。
まぁ、リーネスの開発研究や便宜上は部下の俺達の功績もある。リーネスの立場が相応に上がるのは当然だし、リーネスの権限が上がると俺達もおいしい。
とはいえ、これだけの事態に先生がいないのもちょっと不安だな。
万一に備え、聖杯を疑似的に使える鶴羽が呼ばれるわけだ。リーネスもちょっと不安なんだろう。
「っていうか、このメンツがいるならカズヒねぇも呼んだらどうだ？」
「カズヒは武闘派だからこういう時出番がないでしょぉう？　それに別件でちょっと手が離せないらしくてぇ」
俺の指摘にリーネスが返すけど、どんな別件だ？
確かにカズヒねぇは前線戦闘担当だし、暗部スキルもこんな所じゃ役に立たないだろう。だが固有結界を応用すれば相応に手札もあるはずだ。
まぁ、聖杯を本領発揮で使うのなら、鶴羽が固有結界を使うわけではあるが。固有結界は同時発動だと押し合いになるそうだし、そういう意味だと鶴羽と連携で固有結界を出すのも一苦労か。
どっちかを使ってヴァレリーを何とかするなら、どっちかは使えない。その観点だと聖杯そのものを利用できる鶴羽が有利ではある。
とはいえ、いったい何の用なんだ？
俺は首を傾げるし、鶴羽も首を傾げている。
「そういえば元士郎も動いてたけど、何があったのかしらねぇ？」
「匙もか……って、まさかゼノヴィアか？」
そこで連想する辺り酷いが、しかし正論でもある。
ゼノヴィアは割と暴走超特急だからなぁ。生徒会長になってからも妙な暴走をしているらしいし、その辺りを警戒しているのか。

「イッセー先輩も何やら慌ただしかったですぅ。近くの不良高校に殴り込みがどうとか言ってました」
ギャスパー。それちょっと待て。
殴り込みって、オイ。
生徒会がするなら政治的な雰囲気になりそうだけど、ゼノヴィアだと一気に武闘派になりそうだ。
生徒会が武力で不良高校に殴り込みとか、普通に警察とか公権力を頼った方がスマートな気がするんだが……。
「ちなみにぃ、ヒマリとヒツギ、あとルーシアとアニルも参加しているわぁ」
「「あ、決まりだ」」
完全に鎮圧担当になっている。
見える、見えるぞ。カズヒねぇとゼノヴィアの武力闘争を見せつけられ、人知を超える星辰奏者（エスペラント）級の激戦片方は実際そうであるで心がへし折られる、不良共の光景が。
鶴羽と一緒にハモってなんだけど、不安すぎる。
「リーネス。後の情報でメンタルが荒れるまえに、進めた方がいい気がする」
嫌な予感しかしない。もはや何かが起きるとしか思えない。
壮絶な死闘で不良のイキリメンタルが折れるのは、更生の観点ではいい事だろう。だが折れ過ぎて妙なことにならないか真剣に不安だ。
というか、万が一にも変な影響受けたら怖い。新たなる後継私掠船団メンバーとか、新たなる変態とかが誕生したらヤバい。
「お願い急いで。私のメンタルがもたない……」
鶴羽もかなり真剣な表情で俯いている。俺と同じような想像をしているのだろう。
そんな俺達の様子に、リーネスも連想ができたのか頬を引きつらせていた。
「が、頑張るわぁ……」
嫌な予感を覚えながらも、俺達はとりあえず早く終わることを祈るしかなかった。

「あの、いつもこんな感じなの？　ヒツギ(二人)とヒマリ(の記憶)は実感とかが曖昧なんだけど……」
「……わ、割と僕達の生活はハチャメチャですう」
頑張れお袋。ギャスパーの言ってることは嘘じゃないし、たぶんお袋も関与することになるから。

そしてその後、俺達に非常事態が伝わることとなる。

イッセーＳｉｄｅ

冬なこともあって日が沈んだ中、俺達は色々な意味で落ち込んでいる。
リビングに集まったいつものメンバーは、渋い表情を浮かべるしかなかった。
と、そこに転送反応を感じた。
どうやら、九成達が戻ってきたのか……？
「小猫ちゃん、大丈夫!?」
真っ先に駆け込んできたギャスパーが、一番暗い顔をしている小猫ちゃんに駆け寄った。
「……ギャーくん。レイヴェルが……っ」

力なくその袖をつかむ小猫ちゃんには俺も胸が痛くなるけど、同時に俺も胸が痛い。
くそったれ。何が起こったってんだ……っ！
と、すぐに九成達も部屋に入ってきた。
「……カズヒぃ。リアス部長ぅ」
「……リーネス。色々と忙しいことになっているわね」
リーネスに頷きながら、カズヒも少し凹み気味だった。
リアスも渋い表情を消しきれないけど、それでも気を取り直したらしい。
「リーネス。ヴァレリーの方はどうなったのかしら？」
「意識は回復しましたぁ。結界の構築や安定化は後程ですがぁ、この調子なら順当に行けると思います」
その答えに、俺達はちょっとほっとした。
ギャスパーの大事な人であるヴァレリーの安否は、俺達にとっても重要だ。
彼女の意識が回復しただけでも、十分すぎる恩恵だろう。嬉しいニュースにちょっと気が晴れたしな。
ただ、良いニュースだけとはいかないってのもあれなんだけどな。
「……カズヒねぇ。良い方から順に聞くけど、大欲情教団の本部が日本にあるってマジか？」
「厳密には可能性が大きいってだけだけどね。……情報源も本来知るはずのない情報だったそうだから」
カズヒがため息をつきながら九成に応えるけど、これも大きな出来事だ。
事の発端は、駒王学園の関係者が近くの不良達に自転車を脅し取られたこと。
相談を受けたゼノヴィアは、それに対して殴り込みで奪還を試みる。アザゼル先生から許可をとったこともあり、大立ち回りをしたわけだ。
ただ、なるべくスマートな解決を重視するカズヒが念の為に抑え役部隊を編成。大ごとになりかけたので物理的に仲介する形にしよう

としたところ―
―馬鹿者がぁ！　我らの流儀を他校に持ち込むなどもってのほか！　他校とのいざこざは世界の原理であるセック○バトルでつけろと言っているだろう！―
―なんとその学園の総番が大欲情教団の構成員だった。しかもそいつがたまたま大欲情教団の本部に転送で連れていかれた経験があり、あろうことか電波時計から日本国内に本部が有ると当たりをつけていたらしい。
この事態に各勢力は色めきだっており、日本政府は鎮圧部隊の結成を世界各国に求めているらしい。三大勢力にも協力を要請しているとか。
これはまだ明るいニュースだ。ただ、後が不味い……っ
と、そこで足音が響いてアザゼル先生が姿を現す。
「……お前ら、大丈夫か？」
「アザゼル。お兄様はなんて？」
リアスが先生に尋ねると、先生も首を横に振った。
「残念だが、サーゼクス達も完全に把握できてない。ただ分かったこともあるから簡潔に伝えるぞ」
そう前置きし、先生は最悪の事態を更に捕捉してくれた。
「ディハウザー・ベリアル及びライザーとレイヴェルのフェニックス兄妹は、レーティングゲーム中に行方不明になった。……それと、ゲームで何らかの不正が行われた可能性が高い」
……いやちょっと待って？
「不正!?　チャンピオンが何でそんな!?」
俺は思わずそう反応したけど、実際驚くしかない。
ライザーに関しては嫌なところもあるけど、ゲームそのものには真剣に向き合っていた。
ましてレイヴェルがそこにいる。あのレイヴェルが不正なんて、兄に許すとは思えない。それにライザーもシスコン気味だから、そんなことをレイヴェルの前でしないだろう。
それが、ゲーム内で不正が確認されたとなれば、チャンピオンであ

る帝王（エンペラー）ベリアルとしか判断できない。
「先輩落ち着いてください。レイヴェルのお兄さんが不正をしたとは考えたくないですが、そもそもエキシビジョンマッチでしかない状況下で、ゲームのナンバーワンが不正をする必要性もありません」
ルーシアがその辺りを言ってくれるけど、俺にはとてもライザーがそんなことをしたとは信じられない。
「いや、ライザーがレイヴェルもいる所でそんなことするわけがねえよ！」
「落ち着きなさい、イッセー」
俺は声を荒げるけど、カズヒが俺の肩に手を置いた。
「……現段階ではすべて推測にしかならないわ。先生、不正が起きた可能性があるのは本当なんですか？」
「少なくとも、ゲーム中での不正に類するトラブルに対応するシステムが発動したのはほぼ確実だ。ゲーム運営側も慌てており、それ以上は分からん」
先生はそう言うけど、俺は正直何が何だか分からねえ。
……俺達がゼノヴィアの殴り込みに巻き込まれている時に、冥界では「ディハウザー・ベリアル十番勝負」の三番目で、ライザーが相手になっていた。レイヴェルもそれに対して、一時的にライザーの眷属に戻っていた形だ。
ただ、その後何か事故みたいなことがあって試合は中断。レイヴェルとライザー、そしてチャンピオンが行方不明になった。
冥界も大混乱で、はっきり言って俺達も情報が掴めない。
それが悔しいけど、何がどうなってるっていうんだ……っ！
「……不正が起きたのはほぼ確実で、三人がその後行方知れず。現段階でそこまでしか確定事項がない以上、その二つを直結して考えるのも問題ねえ」
「確かに。不正が起きたゲームの直後に行方不明者が出たからと言っても、限りなく黒に近い止まりで黒そのものではないですね」
リーネスとロスヴァイセさんも色々考えてくれているけど、俺は気が気じゃない。

しかも俺が今から動いたから何か変わるって問題じゃないってのがきつい。自分で言うのもなんだけど、俺は戦闘とか力仕事はできるけど、捜索とかにはてんで向いてない。レーティングゲームレベルなら飛龍を使えばいいけど、これはそんな代物じゃないからだ。

っていうか不正って誰がやったんだよ。

ライザーはそんなことする奴とは思えないし、レイヴェルも絶対許さない。かといって皇帝（エンペラー）がやるとも思えない。なら眷属の誰かが勝手にやったってことも、ちょっと想像つかない。

しかもなんでそれで三人も行方不明なんだ。犯人が逃げるだけならまだ分かるけど、どっちのチームからも行方不明者が出てるならそこが首を傾げる。

俺が頭を悩ませていると、朱乃さんはふとアザゼル先生の方を向いた。

「アザゼル先生、何か分かっているんじゃありませんの？」

「っ！　本当ですかっ!?」

俺は飛び跳ねるように先生の方を向くけど、先生は目を閉じただけで否定も肯定もしない。

「現状じゃ具体的なことは言えん。ただ、フェニックス兄妹はそう酷いことになってないとは思っている」

マジですか！

え、でもなんで詳しいこと言えないんですか!?　身内の推測だけならいいと思うんですけど!?

それとも、口にしただけでもやばいような厄ネタが絡んでるってことなのだろうか。

いやでも、先生が詳しくは言えないけどたぶん無事っていうなら、おそらく根拠はあるはずだ。なら信じるに値する仮説だとは思うけど。

そう思ってると、壁の方を叩く音がする。

見れば春奈が少し困り顔で、ドアの方をノックしていた。

「心配でたまらないんでしょうけど、とりあえずお風呂に入っておいてください。こういう時はいざという時十全に動けるようにしてお

くべきですよ～？」
う、確かに。
流石あのヴィールの元眷属悪魔。修羅場にも慣れてるからこういう時、説得力のある意見を言ってくれるもんだ。
はぁ。とりあえず今日はお風呂に入るしかないか。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……師匠、アザゼル元総督。ちょっと相談したいことがあるわ」
「……また穏やかじゃない話になりそうね」
「ちょうどいい。一度聞きたいことがあったんでな」

黙示覚醒編　第二話　三者面談でサプライズ！

和地Ｓｉｄｅ

それから数日。オカ研は基本的にムードが暗くなっていた。
いつも通りの雰囲気なのは、オーフィスや黒歌、あと兵藤夫妻だ。
この場合、兵藤夫妻にちょっと悪い気がするな。なにせ事情が分かってないから、精神的に困るだろう。
……今更ながらに考えてみれば、一応家主でもある兵藤夫妻に、まだ異形の情報とかが一切入ってないんだよなぁ。
冷静に考えるとちょっと問題かもしれない。あと情報を一々隠すのも手間だしな。これは少々解決に気を回した方がいいかもなぁ。
ただ今から言うのも大変だよなぁ。なにせイッセー、体が無くなって新造して入れ替えているし。種族が変わったとかよりよっぽどアレな情報な気がするぞ。
とはいえ今後もいろいろありそうだし、これ以上悪化する前に話した方がいい気もするな。今度リアス部長も含めて相談してみるか。
まぁ、それはともかくとしてだ。
こっちはこっちで面倒なことも起きているわけで。
「イッセー！　明日は三者面談なんだから、シャキっとしなさい」
お袋さんがイッセーにそう言うが、まさにそれがあるんだよなぁ。
三者面談。また学生らしいイベントが待っているというかなんというか。
といっても、このメンツは将来設計はほぼ確定。むしろすでに就職していると言ってもいいからな。
当たり障りのないことを言えばいいだけで、俺達側からすると負担は少ない。
……ただ親というポジションの問題があまりに多い。多すぎる。

というかだ。俺も含めて親がいないなり、遠くで仕事をしているメンツが多すぎるだろう。都合とか代役とかどうなるんだ？
「進路相談か。来るとするならシスター・グリゼルダだが、そもそも都合がつかないだろうね」
「あ、私もかも。パパもママも英国だもん」
ゼノヴィアとイリナが反応してそう言うけど、そこでアニルが少し乾いた笑い声をあげた。
「たぶん二人ともすでに準備されてますぜ？　ウチの親はその辺しっかり把握して、去年のうちに来日準備始めてやしたんで」
……しっかりしているご両親だな。
いや、言われてみれば責任感はしっかりあるアニルのご家族なんだ。その手の行事はしっかり参加するぐらいでちょうどいいだろう。
そして英国出身なら、英国で生活しているらしいイリナの両親に話を振るぐらいはあり得る。そうなるといっそのこと、教会関係の面子に事前話をして来日タイミングを合わせそうだな。たぶんルーシアの方にも連絡とかしているだろう。
と、ルーシアもはたと気づいて手を打った。
「あ、ちなみに私の両親は都合がつかないので、兄さんにお願いしました。……で、ヒツギ先輩」
そこでルーシアはヒツギの方に振り向いた。
ヒツギはちょっときょとんとして、首を傾げる。
っていうか、今ナチュラルにリュシオンを呼んだって言ってなかったか？　マジで!?
「ん？　どうしたの？」
そのままさらりと味噌汁を飲んでいるヒツギに、ルーシアはちょっと苦笑気味で話を続ける。
「昨夜寝る前に電話した時、兄さんから伝言を頼まれまてました。……ヒツギ先輩の方はご都合がつかなかったので、代理でストラス・デュラン騎士団長が来るそうです」
その瞬間、ヒツギは味噌汁を吹き出さなかった代わりに盛大にむせた。

「……ご……ぶ……う……!?」
「ヒツギぃ!?　おま、ちょ、大丈夫か!?」
盛大にむせるヒツギの背中をイッセーがさする中、ルーシアはタイミングを間違えたことを悟って頬を引きつらせる。
「す、すいません！　そんなにダメでしたか!?」
「だ、駄目じゃないし、ちょっと最近は事情があれだからむしろ安心だけど……本当に団長!?」
な、なんか凄い事になってるなぁ。
俺達がちょっと話を弾ませていると、ロスヴァイセさんがお茶を飲んで一息を入れながら、真剣な表情になる。
「私も資料集めなどでご協力させてもらいますが、進路はとても大事です。ご両親達と話し合い、自分に見合った道をしっかり探してください」
……この人が言うと重みが違うな。
「確かにそうね。こういうのって、大人になってからいい加減だった時を恥じるものだもの」
「確かにねぇ。しっかりやっておいた方がいいわよねぇ」
……カズヒねぇとリーネスの、二周目組が含蓄のある言葉を追加してくる。
ふむ。俺もちょっと見直してみるべきか。

そんなわけで、たまにはといった感じで昼休みに木場にギャスパーを誘って面談関連の相談をすることにした。
ちなみにカズヒねぇはリーネスや鶴羽とだ。イッセーはイッセーでアーシア達と食べるから、たまにはこういう事もできるというものだ。
「というわけで参考なんだが、お前らの場合はどうなるんだ？」

その辺が地味に気になるな。
そもそも親がいないという意味では、この二人は似たようなものだ。
孤児だった木場に、親に追放されたギャスパー。この二人はこの手のイベントで親御さんが来るわけがない。
なのでまぁ、俺も親がいないこともあって気にはなる。できれば参考にしたい。
「僕とギャスパー君の場合は、グレモリー家から顔つきが似ている人が来てくれるよ」
「はい。おかげで助かってますぅ」
「なるほどなぁ」
まぁ、グレモリー家には使用人もたくさんいるからそういう事もあるか。ついでに言えば、グレモリー本家ともなれば金も権威もあるから集める余地もあるだろう。
となると、俺も協力を要請するべきかもしれん。
「……その辺りも協力をしたいな」
「あれ？　九成先輩ってお母さんと再会しましたよね？」
ギャスパーに呟きに反応されるけど、いやいや。
「外観年齢が殆ど変わらないんだぞ？　しかも遺伝子的な繋がりがないから似てないし」
前世の肉体をほぼ再現しているお袋は、享年が二十歳前だったこともあって俺と外見年齢もほぼ変わらない。そして俺が生まれ変わっているから、外観もあまり似てないし。
……かなりキッツいだろこれ。
あとがややこしいことになりかねないし、その辺を考慮すると……なぁ？
「ま、流れ的にそろそろ兵藤邸で生活するだろうから……家で仲良くやるとするさ」
俺はそう答えると、昼飯を掻っ込んでいた。

「なんでこうなった」
俺はぽつりとそう呟いた。
今日は三者面談。イッセー達と一緒に、将来について担任の教師と話し合う毎日だ。
保護者がきちんといるメンバーは全員見事に参戦。こっぱずかしい気持ちになっている子供達をしり目に、どんどん話が進んでいく。
だがそこで、俺は想定外の事態に巻き込まれた。
そしてそのままあれよあれよと、三者面談は俺の番。
その結果、俺の隣で―
「田……大切な息子の和地がお世話になってます、先生」
―にっこり微笑む我が前世のお袋、道間乙女がそこにいた。
……なんでだぁっ!?

黙示覚醒編　第三話　ドキドキワクワク、三者面談♪

和地Ｓｉｄｅ

隣に道間乙女を、前世のお袋が座っている状態で始まる三者面談。

誰か止めろよ！　なんだこのサプライズ!?

くそったれ。部長はサプライズ好きだから、絶対知っててやりやがったな。アザゼル先生はこういうの好きそうだから絶対知っても止めないしな。イリナもイリナで天然だし、「道間乙女さんが九成君の三者面談にですって！　主よ、この奇跡に感謝を！」とか言いやがった可能性大だちなみに全部的中。

オカ研三陣営のトップが誰一人としてこういう時に頼れない。はたから見るとギャグっぽいけど、割とマジな欠点じゃないかこれ。

カズヒねぇと鶴羽とリーネスは止めてくれよ。いや、なんだかんだでお袋には甘いところがあるし、むしろ奇跡的な三者面談に感動して反応が収まった可能性はある。……むしろ誰も聞いてなかった可能性すらあるな、先生当たりの偽装工作的なこれまた的中。

とりあえず、面食らっている先生にどう説明したらいいんだろうか。

「そ、その……九成君のお母さんでしょうか？」

「はい、事情があって十年以上離れ離れでしたが、最近になって漸く会うことができたんです」

……嘘は言ってない。

お袋もその辺りの準備は万端なのか、とりあえずは大丈夫だ。

「その、凄くお若く見えますね？」

「ええ。若さゆえの過ち……というのは息子に失礼ですが、高校を卒業する前後に産んでおりまして」

「高卒前後で出産!?　……あの、失礼ですが年齢は……？」

……会話が進んでいくけど、どの辺りまでカバーストーリーができ

ているんだ、これ？
俺はちょっと寒気すら覚えてきたが、お袋はかなり堂々と対応していた。
むしろ言いようを誉められたと捉えたかのように、口元を隠して笑顔を浮かべている。
「あら、お上手。と言っても、一年ほど後に事件に巻き込まれまして、実はつい最近まで意識を取り戻せてなかったんです」
「……あ、ああ！　髪の色や外観は、後遺症でしたか！　これは失礼しました!!」
……なるほどそう来たか！
嘘は言ってない誤解を招くようには言ったし、これなら深堀はされない。
とはいえ、これ以上は俺の神経もモタない。
さっさと話しを本題に進めよう。既にその辺は決まっているんだ。
「せ、先生！　俺のお袋のことはいいですから、ちょっと話を進めさせてください!!　昔死んだ両親関係とか厄ネタ多いんですから！」
俺が話を本筋に戻そうとすると、先生もハッとなってくれた。
くれたのいいんだが、そのあと急にうつむいたよ。肩も震えているうえ、これ泣いてないか？
「……そうだな。きっと君の祖父母達も苦渋の決断だったんだろう。先生、深く聞かないことにするよ！」
よっしゃ！　なんか誤解しているしこのまま行こう！
説明するのもややこしい！　来年の担任は異形知識のある人を部長に頼んで要望しよう。いっそのことロスヴァイセさん希望で、アザゼル先生は嫌な予感がするから第二希望止まりだな。
「で、九成和地君ですが、現状の予定は大学部の進学ということになっております」
「その辺りは存じております。……実はお世話になっているグレモリーさんのご厚意で、私もこの学園の大学部に受験をする予定なんです」
「それは俺も初耳！」

あのサプライズマニア！　そういう情報はもうちょっと前もって共有してくれないかなぁ!?
ただまぁ、お袋が大学行けるってのはちょっと安心かも。
今後を踏まえると、学はあるに越したことないからな。クソな連中の所為で色々ぶっ壊れたけど、大学に入ってキャンパスライフを経験できるのはいい事だろ。
っと。俺の話を進めるべきか。
「……と、ということでですね。まだ想像段階ではあるんですが、お世話になっているリアス先輩のご実家が慈善活動などもやっているそうなので、それをツテにして慈善団体と縁を結びたいというのが個人的な希望ですね」
嘘をつかない範囲で、詳細をぼかしながら俺の希望を語っている。
「とはいえ、直接ＮＧＯ団体に属するというよりは、名義を得たうえで職を得てお金を稼ぎ、そのうえで理不尽に苦しんでいる人達に援助できれば……といったところでしょうか」
この辺りについては和平前から考えてはいた。
もとより、俺の将来設計としては可能な限り悲劇に対して手を差し伸べられる方向性を求めている。
結局社会というものは、経済力が多分に物をいう。更にそこで武力も大きく影響力があり、権力なども関与する。悲しいが、そういったものを無視して生きていけないのが現状だ。
だからこそ、そういったものを獲得し、そのうえで助けられる人を少しずつ増やしていきたい。無理のない範囲で助けられる人を助け、それを成長させていく方向を会得したい。
「実は星辰奏者（エスペラント）の適性があるということで、近年ＮＧＯ団体の護衛などを安値で引き受けるＰＭＣが設立予定でして。シチャースチエがその辺りにツテもあることから、そこに就職するということも考えてます」
「ＰＭＣ？　また珍しい方向性だね」
かなり不安げな様子を見せられるが、そこに関しては安心してほしい。

「安心してください。シチャースチエと年齢を超えた友人関係な人物が起業するんです。既にそちらもグレモリー家とも協力を取り付けてますので、あくどいことはしない企業になりますよ」
「シチャースチエの友人か。説得力が違うね」
だよね！
まぁ実際のところはＤ×Ｄとしての活動が主体になるからこその、八割名義貸しになるだろうが。
接木さんが起業予定のＰＭＣは、そういった方面を主体とした警備中心の企業になる予定だ。堂々と冥界側が戦力を出せるわけでない事柄にての事業や、必要時に事前に派遣されてＤ×Ｄの支援を行う形になる、Ｄ×Ｄの準メンバーとなる予定らしい。
そこに名義を貸しつつ、手あがいている時などは護衛関連の仕事を協力。稼いだ金で慈善団体に多額の寄付……というのが、俺の人間世界における表向きの顔になりそうだ。
「はい。私と同じ高校を出た方なんですが、立派な人ですのでその辺りは安心だと思います」
「そうでしたか。……確かに、九成君なら安心できるところはありますね」
先生も納得してくれると、そのままちょっとお袋に向き直った。
「……息子さんのことですが、胸を張って立派な好青年だと断言できます。面倒見はいい方ですし、授業態度も優良で成績優秀。ちょっと友人にクセが強い子が多いですけど、時に戒め時にフォローしたりとしていますね」
自分のことをこういう風に言われるのは、ちょっと気恥ずかしいな。
あとお袋、目に涙を浮かべるな。感動しすぎなんだけど、ちょっと落ち着いてくれない？
「……私はいい親ではありませんでしたし、ろくに育てることもできませんでした。それがこんないい子に育ってくれているなんて……いい育ち方をしてくれたものです」
「……そうですね。和地君は早期に両親と死別したり、海外の施設で

育ったと聞いております。それがここまで真っ当かつ立派な好青年に育つというのは、偏見まみれな意見ですが意外なほどです」
俺はどういった顔をすればいいんだろうか。
なんとなく咳払いをするけど、まぁいうべきことは一つだろう。
「それについてはまぁ、……掲げた誓いに偽りなしということで一つ」
俺はそこまで言うと、一回目を伏せる。
今でも手に取るように思い出せるを通り越し、瞼の裏に焼き付いたあの笑顔。
あの笑顔が俺に掲げた誓いのように、俺の誓いもそうなだけだ。
「絶対の思い出はこの瞼の裏に焼き付いていますから。それがある限り、そこだけは決して揺らぎません」
そう。俺がここまで歩けたのは、あの誓いがあるからだ。
今まで勝つこともあったし、負けることもあっただろう。それでも、あの誓いだけは何があろうと変わらない。
……そう、きっと俺達に共通する思いがあるとするのなら―

「あ、でもカズヒさんとの恋愛関係は指摘したいですね。いえ、付き合うなというわけではないんですが、時々妙なスイッチが入っているというか、発作的に色々な能力が低下しているというか。彼女も良くも悪くも目立つので、一度起きると学園中が騒がしいことになりまして……」
「……実は、そこは私も悩んでます」

―なんか台無しになる雰囲気にしないでくれない!?

その日の夜、なんかどんちゃん騒ぎになっていた。
殆どの保護者の方々は色々忙しかったりもするので帰っていったが、テンション振るマックスなまま続行する親もいる。
「……っかぁあああっ！　こんなにお酒が美味しく感じたのは久しぶりだ！」
「ふふっ。兵藤さん達もいい面談になったようで何よりです。……ささ、奥さんも一献」
「ありがとうオトメさん！　あ、箸が止まってるからあとは任せて食べて頂戴！」
……具体的には、イッセーの両親と俺のお袋だった。
ちなみにお袋、やっぱりだけど兵藤邸でお世話になる方向性だ。
名前に関しては俺との兼ね合いもあって、ちょっと変えているらしい。九成オトメで通すそうだ。
名前の漢字まで変える必要はないかと思ったが、お袋なりの決意表明なんだろう。
「えへへ……カズヒのおかげかも。今日は本当にありがとう」
「乙……オトメねぇ、それは素直な感想だとしても素直に受け取れないんだけど」
そしてカズヒねぇ、頑張れ。
俺が色々言っちゃった所為で、お袋のテンションが妙なことになったのは真剣に御免。
あとで膝枕ぐらいするべきだろうか。むしろマッサージとかの方がいいのかもな？
「それにしても、イッセー君が将来設計を全然話していないとはダメダメです。九成君は……まぁそんな時間はなかったですけどね」
ロスヴァイセさんがそう言うけど、まぁ確かになぁ。
「イッセー。そろそろ流石に事情を説明しとけ。お前一度死んで当然の状態になってるんだし、最低限の筋は通すべきだぞ？」

「……う～ん。確かにそうなんだけど、タイミングが外れてるっていうか」
　言いたいことは分かるんだが、だとしてもだ。
「世の中には通すべき筋ってものがある。既に時期を逸しているならなおのこと、早めに通すべきではあるからな」
　その辺もうちょっと考えた方がいいとは思うんだよなぁ。
　なぁなぁで済ませていい事ばかりじゃないし、はっきり言った方がいいかもしれないし、言っておくか。
「何も知らずに死ぬかもしれないんだぞ。お前はそうだが、ご両親もだ」
「……え、いやいやそれは―」
　イッセーは否定しそうだが、そういう事じゃない。
「事故や急病で早死にするなんてありふれてる。それに、言っちゃなんだがこの時代は日本でも凶悪なテロがよく起きているんだから」
　実際街中でテロが起きたケースも、俺がイッセーと知り合ってからで何度もある。
　死を想え（メメント・モリ）とはラテン語の格言だったか。現実問題、突然死なんて世界でありふれているらしいしな。
　世界的に見てもこと凶悪犯罪やテロから縁遠い、平均寿命の高い国であるこの日本の日常。
　命の奪い合いが大前提であり、また伝説に名を遺すレベルの敵が当たり前のように出てくる俺達の戦場。
　それは決して同列に語るものではない。もし同じように考えるとするなら、それはある種の大馬鹿野郎の考えだろう。平穏な日常を守る為に戦う者でも、平和を退屈に感じ争う者でも、そこの区別はする。しないのならば基準が雑すぎだろう。
　だがしかし、何かの拍子に突然死んでしまうということは、程度の差はあれ起きるのだ。
　特に悲劇というものは、どんな拍子に起こるか分かったものではないからな。その辺りは考えるべきだろう。
　それに、だ。

「あとリゼヴィムやミザリだと、ノリでターゲットにする可能性もある。前もってきちんと話すぐらいがちょうどいいと思うぞ？」
「……た、確かに」
納得してくれたようで何よりだ。
あいつらは本当にそういうことするからな。そもそもあいつら、そういったことを積極的にやりたがる連中なわけだし。
もちろん結界は日々強化しているし、駒王町には戦力が揃っている。ついでに言えば夫妻にはこっそり護衛もついている。そういったことに対する警戒は、当然こっちもしているわけだ。
だが、人と人が競う状況、それも高い力量同士において絶対はない。どちらも己の勝利条件をつかみ敗北条件を避ける以上、完全に理想通りなんてそうは起きない。
そろそろその辺も考慮した方がいいな。真剣に考えるか―
「一応、アマゴフォースとかに警護任務をつけるって話はあるけどねぇ」
―そこにリーネスが姿を現す。
そして俺の方を見ると、少し複雑な表情を見せた。
「和地ぃ、明日時間を空けて置いて頂戴？」
「……何かあったのか？」
レイヴェルが発見したってわけではないだろう。それならイッセー達の方が早いはずだ。
というかいったい何なんだ？
首を傾げていると、リーネスが少し緊張感すら見せた。
「……道間家の者から、直接会いたいという書状が届いたわぁ。道間関係者は全員来てほしいって……ねぇ」
……それはかなり不安になりそうだな、オイ。

黙示覚醒編　第四話　道間街

和地Ｓｉｄｅ

次の日の夕方、俺達は東京都内のある山のふもとに来ていた。
東京都と一口に言っても、意外と雰囲気が違うところはある。西側の方はかなり倭森だ。
そんな一角に、道間家に由来する拠点といえるものがあるらしい。
「……とりあえず、付いて来てくれて助かりました」
「まぁな。俺も道間家の重鎮って奴には会ってみたかったしな、都合がいいさ」
カズヒねぇにアザゼル先生がそう返すが、正直俺も助かったと思っている。
道間家は基本的に大王派と蜜月関係。阿呆な暴走を起こした連中の所為とは言え、カズヒねぇ達道間日美子の死をもたらしたのは直接的には連中だしな。警戒は必須だ。
既に総督を引責辞任しているとはいえ、アザゼル先生は堕天使の元トップ。また和平を大きく広めた手腕もある。影響力はデカいからこそ、何かあると何かした側に集中砲火が浴びせられるだろう。
大王派も悪魔であり和平そのものには賛同している。それを踏まえると、何かされない為の保険にはとても役立つだろうというリーネスの判断だ。
「しっかし先生。今頃のタイミングで道間家側が接触って、どういうわけなんですかね？」
俺はその辺がちょっと気になっている。
正直だ。道間家が大王派と蜜月関係である以上、魔王派側に繋がっている俺達との関係性は薄くするべきだろう。幸か不幸か、道間誠明の一件は大王は預かりもあってそこまで深入りすることもないから

な。
カズヒねぇがそもそも自分側に原因があると思っていることもあり、こっちから突っつくことはなかった。そして大王派からしても、下手につつけば魔王派側に頭を下げることになりかねない。そういう意味では双方共に、暗黙の了解で沈黙している事例ともいえる。
それがいったいなんでこんなことに？
正直俺は首を傾げたい。
「今更、道間家から接触とかあるんですか？」
そこからして疑問だったが、先生はそこで苦笑いをしていた。
「いや、実は神聖糾弾同盟（ネオ・ディバインクルセイダーズ）の一件で詫びの連中は来てたんだがな」
あ、そうなのか。
あの時は色々忙しかったし激戦だったしだからなぁ。
余裕が欠片もなかったからな。そもそも一々会っている暇が欠片もない事態だった。更に俺達はお袋復活とかで、そこに意識を向けている暇もない。
「つまり、それでなぁなぁになってたってわけですか？」
鶴羽がそう言うと、今度はリーネスが苦笑いし始めている。
「そうなのよねぇ。私は聞いていたけど、正直今更な気もしてたから、後回しにしてたわねぇ」
まぁ確かに。
はっきり言って、道間家全体に対して遺恨があるわけでは断じてない。むしろ皆無と言ってもいい。
恐るべし巡り合わせの悪さで始末に負えない連中がごろごろ集まってしまったのは不幸だが、糞の権化のような連中がたまたま一か所に集まっているからという理由で道間家全体を恨むのも筋違いだろう。
まぁ、道間家で起きたトンデモ事態でもある。形だけでもしっかり謝罪をするべきだとは、考えてみれば当然か。
「本当ならバチカンで詫びるつもりだったようだが、お前らかなりバテてたからな、俺の方からタンマってことにしておいたんだよ」
「……あ～。呼びつける形になったのはそこもあったと」

普通に考えれば、呼びつけるのも問題だしな。
詫びるのなら参上するべきなんだろうが、援護をした流れでするつもりがこっちの消耗がデカすぎてポシャった。そこもあって、今回は呼びつけるという形になったわけか。
しかし東京西部、すなわち山間部か。
交通の便が悪くないかとは思うんだが？
「こんなところに、道間家の本拠地があるの？」
ヒツギが首をかしげていると、リーネスが苦笑しながら首を横に振る。
「いいえぇ。本拠地は近畿地方の方よぉ」
となると、なんでこんなところに。
「……山間部ってことは、道間街（がい）？」
「でしょうね。となると……祖が出張るのかしら」
鶴羽とカズヒねぇがなんか納得しているけど、同時にちょっと緊張感が増してないか？
「何がありますの？」
ヒマリが首を傾げる中、お袋が少し苦笑していた。
「道間家には、日本に渡った頃から生きている死徒のご意見番がいるの。ただ死徒は性質上、陽の光を避けるに越したことはないし、江戸幕府が続く中で五大宗家や妖怪達と折り合いをつけたりしていたから、山間部に地下空洞を作って、そこを居住区にしていた感じなんだ」
なるほど。
魔術的に至る死徒は、太陽光に弱い。これは異種族としての吸血鬼にも近いが、それとは別の意味で違うらしい。
強い力量があれば太陽光にも耐えられるが、基本として死徒としての格が高ければ高いほど面倒になる。必然として、太陽光の影響を受けないように過ごせるならそれに越したことはないわけだ。
なるほど。そういう重鎮格が詫びを入れたいのか。だが出張った時はこっちの都合でなかったことになった。となると、大王派の上役もうるさいだろうから呼びつける形になったと。
「地下のねぐらか。……秘密基地的な？」

「地下シェルターみたいな感じかな？」
俺とヒツギがそう話していると、カズヒねぇはふとリーネスの方を見た。
「そういえば、リーネスはアイネスの時に北海道の道間街に行ったことがあったわよね？　どんな感じだったの？」
ん？　そうなのか。
まぁ聞く感じだと、重鎮のねぐらだしな。そりゃアイネス・ドーマクラスの有望格でもなければ入れないのか。
俺がちょっと感心していると、リーネスはなんか苦笑していた。
「たぶん、入ってみたら驚くと思うわよぉ？」
ん？

「なんじゃこりゃぁあああああっ!?」
鶴羽が絶叫してくれて本当に良かった。俺達の感想を代弁してくれた。
いや、だってこれ……マジで？
俺達の目の前に広がる光景は、割とびっくりするレベルだった。
「らっしゃいらっしゃい！　海外からの珍しい食材が入ってるよぉ！」
「本日、開店三周年記念セールでーす！　おひとり様ドリンク一杯、無料サービス中でーす！」
「最近は肌がめっきり白くなったわねぇ」
「地下ですもの。肌がくすまないのはいいことだわ」
「よぉ、久しぶりに飲みに来たのかい？」
「久しぶりに日雇い労働をしてなぁ。たまには一杯ひっかけるかってわけさ」
客引きをしている店員や、井戸端会議をしている主婦に、更に昼酒を飲んでいるおっさん達。

そう、ここはまるでアーケード商店街。飲み屋に商店、更に片隅には「映画館」の文字が書かれた看板まである。
こ、これは地下街ってレベルじゃねえだろ!?
「ふぉおおおおおおっ！　凄いですの！」
「でしょう？　しかもここは大衆用区画で、高級区画もあるのよぉ？」
興奮しているヒマリにリーネスが補足説明するけど、マジか。
いやちょっと待て。これもう、ジオフロント〈文字通りの意味の地下都市。地下街でたまに付けられる呼称の元ネタ〉を言葉通り体現しているレベルだろう。
これが一区画止まりってのが怖いな。どんな規模だよ。
「……初めて道間街には来たけれど、この様子だとかなり広いわね」
「確か、関東道間街は半径４ｋｍに高さ１００ｍぐらいのアリの巣構造だったな」
カズヒねぇとアザゼル先生がそんなことを言い合っているけど、規模がデカすぎるって。
「リーネス。確か道間街って、農園とかもあったわよね？」
「厳密には恒常的なものだけれどねぇ。あと畜産や養殖漁業も、魔術的研究を兼ねて行っているけど、鶴羽も興味あるのぉ？」
「道間家って色々な事業に魔術的干渉を使って手を出してたし、そういった研究施設もあるかも。カズヒはどう思う？」
「錬金術関連の応用で発酵食品は特に稼いでいるから、地酒とかありそうね。乙女ねぇは日本でも飲めるぐらいじゃなかったかしら？」
鶴羽から始まる形で道間家組が色々言っているけど、そこまでかよ。
なんだろう。これってつまり、アーコロジー〈生活環境がその箇所だけで確立している場所を言う〉とかそういう感じに形容するべきかもしれないな。その気になれば数年ぐらいここだけで完結した生活できるだろ、これ。
「なんつーか、道間家って想像以上に凄かったんだな」
思わずぽかんとしながら呟くと、先生がにやにや笑いながら頷いていた。

「そりゃそうだ。ただでさえ冥府魔道じみた戦国乱世に来訪し、五大宗家や妖怪どもとバチバチやりあいながら居場所を確保した連中だぜ？」
なるほど。言われてみれば相当の連中でなければやっていけるわけがないか。
そんなことを思っていると、やがて俺達の方に何人かがやってくる。
年齢は俺よりちょっと若いぐらいだな。中学生高学年程度か？
そう思っていると、何やらその連中。大半がこう……香ばしいポーズをとってきた。
え、何事？
「……ようこそ、我ら冥府魔道が住まう地下の楽園へ」
「貴殿らもまた、人世（ひとよ）の裏に潜む者のようで。どうぞ主（あるじ）達のもとへ参られるとよかろう」
「さぁ、我らが闇の誘いをもって、血の国に住まう長のもとへお連れしよう」
……うわぁ。
割と同情しているが、そのうえでちらりとカズヒねぇ達の方を向いてしまった。
四人全員、そっと視線を逸らしていた。
ちなみに先生は面白そうに見るかと思ったが、なんというか凄く悲しみに満ちた表情だった。あれは、同情の表情だろうか。
更に常識人筆頭のヒツギは、何か言った方がいいけど何言ったらいいんだよって顔に書いてあった。頑張れ。
そしてヒマリはキョトンと首を傾げると、ポンと手を打ち―
「……ああ、ちゅ―」
「待ってたよー、お姉ちゃん達ー！」
―何か言いかけたその瞬間、先頭の少女がヒマリに飛びついて遮った。
「きゃー！　おっぱいやーわらかーい！」
「そうですわよー！　上には上がいますけど、私も天然でおっぱい大

きいですのー！」
そんな感じでなんか急にくるくる回るが、回転が止まってヒマリで少年達が隠れる位置で、その少女はスマホを見せた。
画面には短く「指摘厳禁！」の四文字が。
ちょっとついて行けなくなっていると、リーネスがそっと俺とヒツギの方に近づいてくる。
「……重度の罹患者を「選ばれし教育を受ける資格ある者」として隔離し、我に返ってからも生活基盤をしっかり築けるよう、学力・体力・技術力を仕込むのよぉ」
凄いことやってるな。
これ、下手すると日本政府と取引まで交わしているかもしれないぞ。拗らせすぎて将来に悪影響が出かねないところを、逆に平均より上の手に職のある存在として運用できるかもしれない。
道間家恐るべし。色々手広くやってるようだ。
俺が感心していると、その少女はそっとヒマリにも画面を見せて敬礼をもらっていた。
そして一歩前に出ると、そっと後ろの方を手で示す。
その遠くの通用口には、雰囲気が違う者達がいる。おそらく魔術回路を保有する者達や、死徒の類だろう。
「お姉ちゃん達に、祖の方がご挨拶をしたいんだって。さ、ついてきて？」
……さて、鬼が出るか蛇が出るか。

そして移動すること一分強。
……まさか移動用に電気自動車が走っているとは思わなかった。ちょっとしたスクールバスぐらいあったが、こういう箇所だからこそ電気自動車でどうにかできるんだろう。

そして運ばれたのは、中心部。
そこは円筒状の空間になっており、中央部に柱のように十階建てはあるタワーがある。
一階層ごとの高さもかなりあり、更に壁の部分には他の区画に繋がる通路も見える。
どうやらここが本拠地らしく、俺達はステップを踏みながら先導する少女についていく。
あと先生が時々肩を震わせているが、なんか興味深いものでもあるのだろうか。
……いや、これは何かしらのサプライズがあるな。そして先生は既に見抜いて、俺達に叩き付けられるのを待っている。
ま、先生の話が正しければ、先生は既に会っているんだ。それなりに腹を割って話して、意気投合したのかもしれない。
先生と意気投合するのなら、サプライズぐらいは仕掛けるだろう。そして性格は少なくとも、悪逆ではない。だが問題児の類ではあるんだろう。
さてさて、どんなのが出てくるのやら。
そう思いながらタワーに入り、エレベーターで最上階に。
そいて通された一室。前後に長い謁見の間じみた場所で、護衛と思われる十数人に、奥に一人。
座敷に座らず傍に立っているというのが違和感塗れ。あとどう見ても外国人だな。欧米系の白人のようだ。
そしてその人物を見たカズヒねぇ達のうち、リーネスが目を見開いて二度見する。
「もしかしてぇ……エイネスぅ？」
親族か？
俺がそう思っていると、鶴羽も目を見開いて指を突き付けた。
「え、エイネスゥ!?　マジで!?」
……リーネスの親族だな、これ。
二人は気づいているけどカズヒねぇとお袋は気づいていない。この時点でリーネス側の知り合いということになるだろうしな。

「……あ、ああ!!」
などと思ってたら、なんか二人お思い至ったらしい。
ぽんと手を打っている二人の隣で、首を傾げていたヒマリとヒツギも何かに気づいた様子だ。
「あ～。そういえばそんな乙女の記憶あるかも」
「一度会ったことありますわね。確かアイネスが中学生の時に、何回か遊びに来たことありますの」
ヒツギとヒマリも言うなら、どうやら共通の知り合いではあるらしい。
「で、どちら様？」
「……アイネス・ドーマの弟だ。今はあいつが当主をついでいる形だな」
俺が先生から確認をとっていると、エイネス・ドーマはかなり苦笑していた。
「お久しぶりです、姉上。……いや、どこから何を言うべきか」
「……そうねぇ。苦労を掛けたでしょうしねぇ」
リーネスも中々複雑な表情だったけど、エイネス・ドーマは呼びつけた側だからか一歩早く気を取り直したらしい。
「まぁ、身内の複雑な感情は後回しにしましょう。まずは最初に詫びることが」
……この人が詫びるのもあれじゃね？
現場、それも他国の奴が犯した犯罪。まして当時重大だったろう彼が責任を負うことはないと思うのだが。
「まずはおふざけに巻き込んだことを詫びましょう。……ご老公、そこまでにしてください」
ん？
なんかよく分からないことを言われたんだが。
思わず俺達全員きょとんとするが、何故かアザゼル先生だけが肩を震わせる。
その態度で分かった。
この駄天使、仕掛けた側だ。

俺達がそれを悟ったその瞬間、先生は俺達を連れてきた少女と一緒に笑顔でハイタッチ。
「ドッキリ大成功ッ！」
いや、何がドッキリだよ!?　……は、まさか！
そもそも異形は、外見年齢と実年齢がかみ合わないことは珍しくもない。ついでに言えば死徒もその傾向が割とある。
場合によっては凄く若返ることもあるらしい。それを踏まえれば―
「―さて、悪ふざけに巻き込んですまんかった。これをたまにやらないと気が済まないものでなぁ？」
―雰囲気を変えた少女は、そのまま堂々と前に進む。
左右に並ぶ者達を貸しづかせる。その反応があまりにも似合っていることが、彼女がそうだという何よりの証拠。
そして座敷についた少女は、そのまま正座で俺達に向き合った。
「……本日は良く参られた。我が呼びかけに応えてくれたこと、感謝しよう」
その言葉と共に、目の前の少女は姿を変える。
外観はほぼそのまま。だが肌色が白くなり、眼も赤くなる。そして雰囲気というか、気配が明らかに増幅した。
下手なサーヴァントに匹敵する気配。半端な最上級悪魔を超えるだろう格は、D×Dのエース格とも渡り合えるだろう。
「儂こそがおぬしらを呼びつけた、道間のご意見番たる祖たる死徒の一角。道間藤姫（どうまふじひめ）と申す」
そう名乗った女死徒は、にやりと俺達に笑いかける。
「……詫びと言ってはささやかじゃが、宴の用意をしておる。まずは一献といこうではないか」
……これ、思った以上に長くなりそうだな。

黙示覚醒編　第五話　道間の宴会

和地Ｓｉｄｅ

「……美味い」
思わず声に出してしまうぐらい、その食事は美味しかった。
ガチの精進料理とか、たぶん初めて食べたぞ。
いや本当に美味い。びっくりするほど美味い。
「……最っ高……っ」
そして鶴羽が何というか陶酔している。
そういえば鶴羽、大好物が天ぷらだったなぁ。この味は感動モノなんだろう。
「今度クックスをここの料理人と会わせるべきかしらぁ」
リーネスも割と真剣に舌鼓をうってるし。
「どうじゃどうじゃ？　儂が抱える料理人は中々のものじゃろう？　存分に褒め称えるとよいぞ、あとで伝えるのも気分がよいしのぅ！」
「おうとも！　めっちゃ美味いぜこの料理！　よ、天下の道間家料理人！」
既に道間藤姫とアザゼル先生は出来上がっている。肩を組んで酒を注ぎあいながらはしゃいでいる。
確実に断言できる。道間藤姫、アザゼル先生と同タイプだ。
「早い段階で引き離さないと、やばいことになるじゃんかこれ……っ」
「同意見だ。あとでお目付け役を用意しておこう」
ヒツギも悟っており、エイネス・ドーマもその辺りは懸念事項らしい。
たぶんこのドッキリの打ち合わせとかもしてただろうし、一番目にしているのあの人だな。
苦労人のにおいがする。グレイフィアさんとかシェムハザ現総督

と合わせたら、話は凄い弾みそうだ。
「あ、これサクサクだ。油もよく切れてるし……お代わりしたいかも」
「ほぉおおおおおっ！　美味しい天ぷらですの！　お肉もお魚もないのが信じられませんのぉっ!!」
お袋やヒマリもテンションが上がっているし、他のおかずや炊き込みご飯に汁物も美味しい。
これで動物性たんぱく質ゼロなんだから、信じられない。東洋の神秘恐るべし。
そんな感じで舌鼓を打つ食事をとった後、食後のお茶を一口飲んだ道間藤姫は、こちらに向き直った。
「……さて。では本題にはいるとしよう」
瞬時に意識を切り替えた、道間藤姫は深く腰を折ると頭を下げる。
「まずは謝罪を。道間家のご意見番を務める者として、道間家ゆかりの者よりあそこまでの外道が集まることを見過ごした愚行を詫びよう」
「……謹んでお受けするわ」
カズヒねぇはそう告げるが、すぐに肩もすくめていた。
「正直に言えば今更だし、道間日美子（私自身）も大概だけれどね。個人としては詫びるのはこちらな気もしているわ」
「そうはいかぬ。如何に規模が大きい故に目が届かぬところがあるとはいえ、あそこまで外道が幅を利かせているのはこちらの不手際だ」
頭を下げたままの藤姫に、カズヒねぇは軽くため息をついた。
むしろ呆れ半分なその表情で、カズヒねぇは頬杖までつく。
「いいから本命に入ってください。……貴女の本題はそこからなんでしょう？」
……なるほど、な。
俺も遅ればせながら合点がいった。そういう事か。
確かにそうだ。道間家の失態を詫びると言いながら、動いているのはご意見番の一人と、海外の有力一族の跡取り。
本気で道間家が詫びる気があるのなら、動くにしても本国の重鎮が出るべきだろう。それも、あっちから出向くのが普通。しないにして

も呼びつけて……というのも違和感がある。
つまり、詫びるのは物のついで。
「……詫びるべきだというのは本音じゃ。物事には誠意やケジメというものがある」
そう告げたうえで、道間藤姫は起き上がる。
その表情は、鋭く研ぎ澄まされていた。
「だが、組織規模での誠意は気持ちではなく物質的に払うもの。本命の事情があるのもまた事実じゃ」
……すなわち、ここからが本命か。
「で？　おそらくアザゼル先生が聞くべき話だと思うのだけれど……どうなんですか？」
「それはそうなんだが、お前さんも聞いた方がいい話ってもんがあってなぁ」
カズヒねぇのそう返す先生だけど、嫌な予感を覚えてきたぞ。
まぁいい。俺は静かに話を聞くとしよう。
座り方をあぐらに変えていた道間藤姫は、お茶を一口すすってからため息をついた。
「事の発端というのならば、和平が結ばれてからになる。……実際のところ、道間六郎やザイネス・ドーマの愚行は道間家でも問題視されておってな？　道間家も改革的な変化が必要ではないかという動きは微々たるものが進んでおるのじゃ」
「その道間一族側からの代表が私です。家を継いでからは死徒側の代表たる藤姫様と共に、改善を進める為の準備をしておりました」
エイネス・ドーマが補足する中、アザゼル先生は酒を飲みながら肩をすくめている。
「ま、あの大王派とズブズブな連中だ。全部含めて道間誠明とかに押し付ければいいとか本気で考えて動いてそうだがな」
「まったくもってそのとおり。長年の共生関係は互いに絡みつき、腐敗となった。それをはがす苦労は一つ二つではない……はずじゃった」
そう苦笑で返していた藤姫は、そこで言葉を切る。

そしてその視線は、何故かカズヒねぇに向けられた。
「だが、ここ数か月で大きく動いた。……これもまた、おぬしの因果じゃ」
おい、ちょっと待て。
まさかと思う中、カズヒねぇは目を閉じてため息をついた。
それに合わせるように、道間藤姫はため息をつく。
「後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）。奴らの極まった光は極まったがゆえに輝かしくてのう。若い衆を中心に、フロンズはそこから道間家に独自の繋ぎを作っておる」
「またあいつらか」
思わずボヤいたよ、俺は。
「……多方面で因果応報とでも言うべきかしらね。……なんというか、娘が本当に申し訳ありません……というのも違うのかしら？」
カズヒねぇも、頭を抱えたうえで混乱し始めている。
またあいつらか。また幸香達か。
勢力図を広げすぎだろう、あいつら。まさに後継覇王（アレキサンダー）というかなんというか。フロンズと手を組んで異形勢力を新たに起こすつもりか、おい。
まぁ、なんだ。カズヒねぇに舎弟じみた人達がいるように、極まった光はまぶしいがゆえに人を焦がれさせるのだろう。そういう意味ではあいつら、同類が集まりそうな連中ではあるな。
しっかし割と厄介だな。
良くも悪くもインパクトのある後継私掠船団に、フロンズ達の政治手腕。ある意味で鞭と飴が揃っているといえるだろう。そしてそこから道間家の数割でも取り込めば、相応のことが可能になるだろう。
あいつらも日々成長を遂げている。それはいい事ではあるが、同時に不安も覚えるな。
あいつら、基本的にD×Dからすると政敵だからな。陣営は同じだし、敵は共通している。だが油断すれば様々なものが分捕られる、警戒必須の存在だ。断じて気心の知れたお友達ではない。
そしてその警戒は、道間藤姫にとっても同意見らしい。

「まぁそれはそれで改革には繋がるじゃろう。だが、あ奴らにすべてを預けるのも今後の未来に不穏が生まれると思ってな。……おぬしに対して筋を通すのも本音じゃが、比重としてはこちらが重い」
素直にそれを明かした道間藤姫に、カズヒねぇは軽く肩をすくめるとお茶を一口。
一息を入れてから、特に気にしてない雰囲気すら見せている。
「まぁそれはいいのよ。理由はどうあれ相応の規模で厄介ごとをもたらしたもの。むしろ流してくれるのならありがたいほどだわ」
そこまではっきりと告げるカズヒねぇに、嘘は一切ない。
もとより必要な隠し事の為にカバーストーリーを入れる以外では、カズヒねぇは虚言を言わない。この辺、必要悪を担っているとはいえ信徒としてしっかりとした矜持を持っている。
そのカズヒねぇが、はっきり言うべきことは一つ。
「むしろ幸香に対して警戒するのは当然ね。こちらが通すべき筋も踏まえて、私は貴女に多少利用されることを許容するわ」
「……カッカッカ。ならば、お互いに適度に利用し合う関係がよいじゃろうな」
これまた何やら、妙な雰囲気になっているな。
「いいんですか、先生？」
「ま、魔術回路保有者との繋ぎは多いと便利だしな。俺達としても、大王派の独壇場だった魔術回路保有者との繋がりを掠め取れるなら、その方が都合がいい」
確認するけど、先生もそんな感じだ。
ま、俺としてはあまり道間家そのものに思うところはないしな。カズヒねぇ達が構わないっていうならそれはそれでいい。
見れば、鶴羽やリーネス、お袋もそこまで遺恨はなさそうだ。
それもそうか。考えてみればこの流れ、「日本国民が日本国民に悪逆非道を行ったから、日本政府や皇族が謝罪に行く」ようなものでもある。厳密にはもうちょっと責任はあるだろうが、ここまでする必要を感じない程度のことなんだろう。
……それに、今後を踏まえれば道間家との繋ぎはあるに越したこと

はない。
区切りがつくのはいいことだしな。ま、これはこれでってことでいいだろ。

そんなこんなである程度の筋を通したうえで、俺達は帰ることになった。
ちなみに地酒とかをお土産で持たされたが、割と高そうなやつだな。
俺がその辺を確認していると、道間藤姫は小さく笑いながらアザゼル先生と握手を交わしている。
「んじゃ、D×D側との連携はしっかりとってくれよ？　ま、出し抜けるもんなら出し抜きな」
「それぐらいがよい塩梅じゃろう。だがまぁ、借りにしておくから有事にせびるがよい。繋ぎの礼はちゃんとするべきじゃしな」
上層部同士、油断しづらい形で仲良くなっているようで何より。
道間家の重鎮、まして死徒の長が一人に貸しを作れたのはいいことだ。今後何かあったら返してもらうとしよう。
そんでもって、リーネスもエイネス・ドーマと割と和やかな会話だった。
「何かあったら言って頂戴ねぇ？　迷惑をかけた分、できる限り力になるわぁ」
「そうですね。まぁ、何かあったら相談でもさせてもらいますよ」
色々と複雑なことになっているけど、家族仲は悪くなってないようで何よりだ。
折り合いがつけれているなら問題ないだろ。今後を考えて、いい感じに進めばいいとは思うけどな。
そんなことを思っていると、エイネス・ドーマがこっちに気づいて何故かリーネスの方を向いてから近づいてきた。

「……九成和地君だったね」
「はい。何か？」
なんかよく分からんが、俺にピンポイントで用があるのか？
正直ちょっと首を傾げるんだが―
「姉上のこと、よろしく頼むよ」
―なんで急に？
微妙に訳が分からないことになった途端、リーネスは勢いよくエイネスの口を塞いできた。
「エイネスぅぅぅぅぅぅぅぅ!?　ちょ、何を言っているのよぉ!?」
「ムグ……姉上、今更問題ないでしょう？　彼の立場なら一人増える程度は何事もないでしょうし、今後を踏まえれば前もって話は通しておかないと―」
「しなくていいわぁ！　ほら、こっちにきなさぁい!!」
……なんか言い合ってたら引っ張られていったんだが。
え、ナニコレ？
「……和地」
と、お袋がなんか神妙な面持ちで隣に立っていた。
「とりあえず、頑張って。私はちょっとその……何も言えないから」
え、何が!?

イッセーＳｉｄｅ

「おかえりー。どうだったんだ？」

九成たちが返ってきたので出迎えれば、九成は何故か首を捻っていた。
「なんかよく分からん展開になっててなぁ？　いや、なんだったんだ？」
なんだろう。俺は何も言えないことになってる気がする。
「っていうかどんな展開なんだ？」
「いや、真面目な話じゃなくてな？　今回出てきた人に、リーネスの前世であるアイネス・ドーマの弟がいたんだけど……姉上をよろしくとか言われたんだよ、俺だけ特別な感じで」
あ、あぁ～。
再会したばかり弟にも見抜かれたとか、そんな感じか。
俺も人のことは言えないけど、こいつ鈍感にもほどがあるだろってレベルで気づいてないぞ。もうちょっと聡いと思うんだけどなぁ。
やっぱりあれか。俺が無意識に恋愛感情を持たれてると考えないようにしてた感じか。九成の中で、リーネスは保護者のポジションが確立されてるから、そっちに思考が向いちゃう的なあれか。
「……九成」
俺は九成の肩をぽんと叩く。
「ちょっとだけ、冷静になって客観視してやろうな？」
「え、どういう意味!?」
どういう言う風に誘導したもんかと思った時だった。
「お、お前らもそこにいたのか」
急に先生がこっちに入ってくる。
な、なんだなんだ？　っていうか先生は家違うはずだぞ？
「どうしたんですか、先生？」
「なんかありましたか？」
俺と九成が尋ねると、先生が意味深な表情を浮かべていた。
「他の連中にも後で伝えるが、先にお前らには言っとくか」

「レイヴェルとライザー・フェニックスだが、アジュカ・ベルゼブブが内密に保護しているそうだ」

一波乱ありそうなことになってきたなぁ、おい！

黙示覚醒編　第六話　てんねんどらごん

九成Ｓｉｄｅ

レイヴェル達の消息が判明してから少し経つ。
どうも秘密裏に保護しているらしく、まだレイヴェル達はアジュカ・ベルゼブブのもとにいるらしい。
……この時点できな臭いにもほどがある。なんか嫌な予感がしてきたぞ。
サーゼクス様の親友で、彼が魔王をやっているから魔王をやっていると堂々と言い切った人物だ。サーゼクス様と敵対することはないだろう。少なくとも、フロンズ達よりは信頼できる。
だが逆に、そんな彼がこっそりと保護しているのが気になる。
隠さなければならない事があると考えるべきだ。少なくとも、大王派にも伝えてない辺り厄介なしがらみがありそうだ。
なので、引き渡しまでの時間が空いている中、俺達は少し様子を見る者を見ていた。
虹龍（スペクター・ドラゴン）の卵。タンニーンさんのところで庇護しているドラゴンの卵だが、冥界の環境だと腐る可能性があるらしい。結果として、敵に狙われることも多いが戦力もあるし、だからこそ半端な連中では近づけないこの駒王町で還るまで預かってほしいとのことだ。
そしてこの卵には、今最強の守護者が二人ほどついている。
「我、じーっと卵を見守る」
「……オーフィスは卵に興味があるのか」
……オーフィスとクロウ・クルワッハである。
驚くなかれ。クリフォトから縁を切ったクロウ・クルワッハ、なんとタンニーンさんの食客になっている。
タンニーンさんがミニドラゴン状態で話を持ちかけた時、卵を直接

運んできたのもクロウ・クルワッハだ。それ以来、オーフィスが卵に興味津々で付きっ切りなこともあってか、クロウ・クルワッハはオーフィスを見に来ている。ついこの間はアーシアにバナナをごちそうになっていた。

色々とツッコミたいが、アザゼル先生達も了承しているようなのでスルーしよう。カズヒねぇは凄く警戒しているのでちょくちょく来ているようだが、とりあえず現在は静観中だ。「ケジメはしっかりつけさせたい」というスタンスは崩していないが、ヴァーリに比べると積極性に乏しく、また既に魔王方に話がついていたらしく、タイミングを逸しているらしい。

「我、卵が還るの応援する。ひっひっふー」

オーフィス。ラマーズ法はお前がやっても意味ない。そもそも卵生だと意味がない。

「なるほど。オーフィスのその呼吸が卵にいいのか」

クロウ・クルワッハもどんな勘違いしてるんだよ。

「ひっひっふー」

……様子を見に来たけど帰っていいだろうか。

「……何この状況？」

と、そこで春っちが様子を見に来た……違うな、掃除か。

掃除用具を満載にしたカートを押しながら、春っちはこの珍妙な光景にちょっと飲まれていた。

が、そこは割と女傑な春っち。すぐに気を取り直すとパンパンと手を鳴らす。

「はいはーい。掃除するからねー。まず半分やっとくから、終わったら卵ごとズレてねー」

「わかった。卵、しっかり運ぶ」

オーフィスは素直で何よりだ。

ただ、ものすっごくクロウ・クルワッハが春っちの方を見ている。

「成田春奈、あのヴィール・アガレス・サタンの武闘派眷属か。是非一度戦いたいものだ」

「ここでやるなよ？　頼むからやるなよ？」

俺は前もって釘を刺しておくが、まぁ大丈夫だろう。
なんでも、俺が天界でぶっ倒れているときにイッセーに勝負を申し込んだようだが、疲れているので乗り気でないイッセーを見て確認をとり、後にしてくれと言ったら了承したらしい。
アウロスでの一件と言い、聞き分けはいいようで何よりだ。たぶんカズヒねぇの中でも「有害性ではヴァーリよりまし」との判断が出ている。それもあっての様子見だろう。
というか、何故そこで俺を見る。
「彼女と戦うにはどういった手続きを踏めばいいだろうか？　できればお前やオーフィスとも戦いたいのだが」
「とりあえず、クリフォトをどうにかできてからにしてくれ。それが終わったらアザゼル先生とも相談して判断するから」
ある程度平和的に話がつけれるのなら、レーティングゲーム形式での勝負ぐらいは受け付けるべきだろう。全盛期の天龍クラスにまで高めてるとかいうやつを、血を流さずにどうにかできるなら多少の餌は出すべきだろう。
「しっかしまぁ。こうしてみるとオーフィスって子どもよね」
掃除を続けながら、春っちはそんなことを言う。
ま、そこは同意見だな。
「無限を司る虚無というよりは、純真無垢の方があってはいるな。ま、けじめはしっかりつけてもらうべきだが」
「大丈夫。イッセーと、喧嘩はしないって約束した」
俺の言葉を聞いてオーフィスはそういうが、本当にこう……子供だ。
ちょっと前に遊びに来た九重とも意気投合していたし、もはや兵藤邸のマスコットだ。
純真すぎて禍の団に利用された以上、被害分のケジメはいる。だがそれ以上に関しては、俺からすることはないだろう。
平和的に解決するならそれに越したことはないしな。藪をつついて蛇を出すのは趣味じゃない。
ま、それはともかく。

「ドラゴンとの縁がありすぎよね、ここって」
「……否定できないな。Ｄ×Ｄだけでどれだけ名だたるドラゴンがいるんだよ」
二天龍が揃い、龍王が三体も関り、あろうことは龍神をマスコットに据えている。
控えめに言って国家作れるだろ。軍事大国になれるぞ。
「……そういえば、ファーブニルはまだ起きないんだってな」
「そうね。施設でも目覚める気配がないみたい」
ふと、俺と春っちはファーブニルの方に話がずれる。
リゼヴィム相手に大健闘したそうだが、それ以来起きる気配がないらしい。
変態性が色々あれだが、流石にちょっと心配になる。
ただ、なんかオーフィスとクロウ・クルワッハは雰囲気が違った。
「心配無用。まだ戦っているだけ」
「龍王として素直に引くタマではないということだ」
なんだ？
なんというか、同門の健闘を称えている的な雰囲気だな。
そんなこと思って、俺はふと思い出す。
そういえば、ファーブニルといえば呪いの黄金な伝承があったな。
そもそも黄金の呪いでドラゴンになったとか、倒して黄金を手にした奴が呪いで酷い最期を迎えたという物語もあったな。
……そう考えると、奴も邪龍クラスかもしれん。
リゼヴィムも直接的に姿を見せてないし、もしかするともしかするの……か？
「あら、春奈も九成もそこにいたのね？」
と、カズヒねぇが姿を見せる。
「あ、師匠！」
「いつもお仕事ご苦労。あとオーフィスも、最近はそこがお気に入りね」
春っちに応えながら、カズヒねぇはバスケットをオーフィスの隣に置いた。

「差し入れ持ってきたから休憩しなさい。オーフィスも……ラマーズ法は貴女がしても意味ないわよ」
そう言いながらカズヒねぇがバスケットの中身を見せている。
あ、チョコチップクッキー。
「ちなみに、バレンタインに備えた試作品よ。洋菓子はめっきり作ってないから、勘を取り戻すために焼いてみたわ」
さらりと言ってくれましたよこの人。
え、つまりそういうことか。バレンタインがそういう事か。チョコレート、期待して当然ってことなのか。
「っしゃぁあああああっ!!」
やったぁ！　バレンタイン、チョコレート！　たぶんあると思ってたけど、やっぱり来るならなおさらやっほぉう!!
二月はバラ色確定だな。ふっはっはっはっは……やばい、テンションがあがりつづけていく
因みに一口食べてみるが、普通に美味い。
「……負けた」
春っちも食べてから崩れ落ちた。
ちなみに春っち、メイド業務では基本的に「まあがんばっているで賞」といったところだ。前にも言ったと思うが女子力は低い。
転じてカズヒねぇは女子力が高い。花嫁修業もしていたりするわけなので、家事スキルは高い方だ。
ただし、カズヒねぇを超える女子力を発揮するのがベルナだ。ぶっちゃけ俺の女だとベルナが一番女子力が高い。
「師匠、私も和っちに手作りチョコ関係を送りたいです……っ」
「目先の手作り概念に惑わされないの。まずはメイド業務で技術を磨いてからにしなさい。店で買ったものは手作りに劣るなんて言うほど、和地は狂信的な男ではないわよ」
崩れ落ちる春っちに、カズヒねぇの厳しくも具体的なアドバイスが送られた。
まぁ実際、俺は舌が肥えている側だしな。
クックスの料理スキルは高いし、ザイアでも食事事情は優秀だし。

兵藤邸も料理できる組が多いうえに料理長はクックスだ。ファーストフードもちょくちょく食べるが、俺はうまいものをきちんと食べて育っている。
　でもまぁ確かに、手作りという概念だけで味を無視しろってのもおかしいしな。料理は愛情だが料理にするまでの技術はいる。俺も自分で作るのなら、最低でもまずいものは人に出したくないしな。
「ま、安心しとけ。店で買ったものだからダメなんていうほど小さくないと自負しているから」
「……うん。いつか手作り、それも味で喜ばせるから」
　頬を染めて言わなくていいよ。俺も照れる。
「ほら、もうちょっときれいに食べなさい。……あとあんたも食べなさい、この空気だと一人だけ食べてない方がアレだから」
「そういうものか。なら頂こう」
「んまんま」
　……カズヒねぇ、ドラゴンのお目付け役なってないか？
　とりあえず視界から逸らしておこう。空気は春っちが暖かいしな。
「ホワイトデーの準備は今からしとく。……手作りの方がいいか？」
「……和っちが本気で貸してくれるなら何でもいいかも」
　嬉しい返しを聞いたもんだ。
　うん、俺もしっかり頑張ろう！

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「まったく。この調子では最悪の勝利になるのが残念だ」
「大変ですね、ヴィール様。流れ的にそうなりそうです」

「色々冥界政府が誤魔化せるように動いたが、それで抑えきれぬほど、冥界の歪みは大きいという事かもしれん」
「ですがどうします？　この流れになると、我々が制圧する以外に道はないかもしれません」
「リゼヴィム王子は好かぬが、皇帝（エンペラー）の心情には同情を示す。こうなれば生まれる混乱に乗じ、我らが一気に仕掛けるしかないかもしれんな」
「……革命を起こされ返して滅びる為の冥革連合。勝利を掴んでしまうのは、残念ですね」
「まったくだ。余計な気苦労を掛けるな、健也」
「いえ。ヴィール様が見出してくれたからこそ、鎖を引きちぎることができました。ならばヴィール様の思う未来の為に、この命を使わせてください」
「……お前も、春奈とは別の意味で難儀な奴だ」
「……春奈、ですか。もし希望があるなら、複雑ですがあの両者なんでしょうね」
「赤龍帝と共にあるリアス・グレモリー。後継覇王（アレキサンダー）を従えたフロンズ・フィーニクス。確かに、両者ともに駒とは別の形で冥界を強く富ませる者達だ」

「多少不本意だが、奴ら次第で動きを決めるべきか。我が命を懸けて先を見据えるべきかもしれんな」
「承知しました。ヴィール様の御心のままに」

和地Ｓｉｄｅ

数日が経ち、アジュカ・ベルゼブブ様より連絡が来た。
どうやらレイヴェル達を引き渡すようだが、どうも呼び出しという形になっている。
……きな臭いな。そもそも不正が起きたことはほぼ確実な事件といい、どうも情報が漏れないようにしていることと言い、だ。何かがあると思うべきだろう。
特に大王派には情報が漏れないようにしている節がある。それとなくサイラオーグさん達や道間藤姫達を経由して、大王派を探ってみたが何も知らされてないようだ。
―気をつけよ。何があったか知らぬが、重鎮共はピリピリしておったぞ―
なんてことを、道間藤姫は言っていた。
ゲームで不正が起きたことは確実。大王派はピリピリし、そんな彼らに情報を流さないようにしている。そしてディハウザー・ベリアルは未だ行方不明。
胸騒ぎが酷いな。色々と警戒した方がいいだろう。
そんなわけで、準備をしながらも俺達はちょっと緊張感が増していた。
出発前に水でも飲むかと、俺はリビングに向かう。
すると、リビングの方でイッセーが親父さんと何かを話している雰囲気だった。
なんだ？　親父さん、どうも残念がっているみたいだけど。
「……どうした？」
俺が声をかけると、二人は気づいて振り返った。
あ、親父さんは釣り道具を持って来ている。
「いやぁ。久々にイッセーを釣りに誘ってみたんだけど、用事があるみたいでさ？　たぶんだけど、九成君達もなんだろ？」

あ～、なるほど。
タイミングが絶妙に悪いな。このタイミングで釣りにっていうのはちょっと無理だ。かなり重要な用事だし。
特にイッセーは難しいだろ。現魔王直々の呼び出しを、中級悪魔がドタキャンとは無理だ。大王派は討伐軍を出すぞ。
しかし釣りかぁ。状況が状況でないなら、俺も久々に行ってみたかったけどなぁ。
そんなことを思っていたら、だ。
「……あら、そうなんですか？　なら私がご一緒に付いて行ってもいいでしょうか？」
そんな、カズヒねぇの声が聞こえた。
慌てて振り返ると、そこには何時の間にかフィッシングツールを用意しているカズヒねぇの姿が。
いや―
「こっちの用事は!?」
―思わずイッセーとのダブルツッコミだよ!?
「いやいやいやいや。父さんに気を遣ってくれるのは嬉しいけど、お前ちょっと待てって！」
「親父さん、ちょっと身内の意思統一をさせていただきますのでお待ちを！」
とりあえずイッセーとカズヒねぇを引っ張って、離れたところでこそこそと。
「何考えてんだよカズヒねぇ。釣りはあとでも行けるだろ!?」
「そうだって！　っていうかお前、こういう時真っ先に動くタイプだろうが？」
俺もイッセーもそう言うけど、カズヒねぇは真剣な表情で首を横の降った。
「いえ、近年のこの情勢下で、ご両親を突発的な用事でフリーにするのは危険だわ。元ダーティジョブとして言わせてもらえば、誠にいやりゼヴィムなら人質に取れるものなら取りたい類の人物なのよ？」
……あ～。

異形や異能の知識もない、主力の肉親。考えようによってはカモであり、またその際のリターンも大きい。こと情に厚いイッセー達の性格から言って、人質作戦は効果が大きいのも事実だ。
そういう意味だと確かに、そもそも思い付きでどこかに遠出される方が危険だな。俺もその辺は懸念はしている。
基本的な行動範囲なら、こちらもそれなりのツテがあるからカバーはできているだろう。だが思い付きの釣りだと、場所次第ではカバーが効きづらい。もちろんそれとなく護衛はつけているが、やはり不安要素は大きいわけだ。
「……イッセー、手段を択ばない手合いはそれだけで脅威よ」
真っ直ぐにイッセーを見つめるカズヒねぇは、本当の本気の視線をもって向き合っている。
「何故なら、こちらが思いもよらぬ方法で他者を排除し苦しめるもの。そういう手合いに想定できる隙をカバーしないのは、かえって危険なの」
……重すぎる。
自身も邪悪として手段を択ばず、目的の為に他者を蹂躙した。そしてダーティジョブとして、いくつものそういった手合いを相手してきた。
そんなカズヒねぇの、実績と経験に裏打ちされた言葉だ。説得力がありすぎる。
「尊ばれるべき正義（彼ら）を守り、その為に邪悪（不名誉）を被ることをいとわない。それが私の誓いだから、それぐらいの不興は被らせて」
重く、そして強い決意。
これは、押し切られるしかないな。
俺もイッセーも顔を見合わせると、つい苦笑した。
「分かった。こっちは任せろ、カズヒねぇ」
「父さんのこと、頼むぜ？」
……頼もしいボディガードに、任せるとするか。

「あ、代わりに春奈を連れて行きなさい。たぶん、彼女が適任だわ」

なんで春っち!?

黙示覚醒編　第七話　極晃天弄（前編）

カズヒＳｉｄｅ

自分でいう事でもないが、カズヒ・シチャースチエは釣りを趣味としている。
もっとも道間日美子だった頃はそんなことはない。六郎のおっさん達を上手く利用して小遣いゲットとかできていたので、ゲームセンター通いとかカラオケの方が趣味だった。釣りとか趣味にする以前にやってみようという発想すらなかっただろう。
これを趣味としたのはカズヒになってから。というより、何かしらの息抜きが必要だと考えつつもそんなことをしている余裕がないストリートチルドレン時代のものだ。実益があり娯楽にできそうな息抜きを探し、釣りを試みた結果割とはまっていた。
信徒になってからもなるべく清貧を心掛けて続投。道具に金は掛けず、雰囲気込みで楽しむ方向になっている。
そういう意味では、久しぶりの釣りで人と一緒にするというのはいい機会だ。
イッセーのご両親である五郎さんと三希さん。家主ともいえる二人と親交を深めるのも、考えようによってはいい機会だ。
とはいえ、だ。
「……良い道具だからと言って、良い結果に繋がらないのがこの手の趣味ですよね……」
「はっはっは。まぁそれも醍醐味ってやつだよ」
五郎さんが釣果六匹目になって、こっちは漸く小物が釣れた。その残酷な現実に、私はついぼやいてしまっていた。
まぁ、これはしっかり捌けばすぐに食べれる物だ。冬で寒いこともあるし、暖かいものにして食べてしまおう。

さらりと持ってきた調理器具で捌き、暖房代わりに持ってきていた七輪の網に乗せる。
焼き加減とかもしっかり見ようかと思ったけれど、それ用のトングを三希さんがとる。
「カズヒさんはもっと釣りを楽しんで頂戴。焼き具合は私が見てあげるから」
「あ、ならお言葉に甘えさせてもらいます」
本当に良い方達だ。
まったく、イッセーは本当に。こんないいご両親に余計なストレスを与えるような真似をして。最近は性的な問題活動も収まったけれど、もっと早く収めなさい。
……まぁ、我慢するだけで心因性の諸症状を引き起こしているのもまた事実。むしろそれだけの性欲をよくぞ何とか制御しているともいえるわけだけれど。京都の一件でその辺り、本当に我慢しているのを認めるほかないものね。
とはいえ、今のところは大丈夫のようね。
だが同時に、懸念は必須というほかない。
五郎さんが連れてきてくれた釣りがいのある場所は、はっきり言って異形や異能の監視が行き届いていない。もしクリフォトが付け狙っているとすれば、かなり好機といえるだろう。それとなくついてきているだろう護衛も、人数には限界があるものだ。
勇ちんやディーレンには既に場所を伝えているけれど、カバーが間に合うには時間がかかる。もういっそのこと堂々と参加してくれとは言っているけど、何事も起きないことを願うしかないわね。
誠にいからすれば、ある意味最大の好機だわ。人質にできるならよし、それどころか、聖杯を利用して生体兵器に改造するという手段も取りえる。どう扱っても悲劇を味わえるもの。
……あ、なんか頭痛くなってきた。
「どうかしたかい？　もしかして珍しく釣れなくてストレスとか？」
「い、いえ！　ちょっと嫌なことを思い出しまして！」
五郎さんに心配を掛けさせていたわね。失敗失敗。

とはいえ、少し話を誤魔化さないと。
「でも本当、お二人には感謝しています」
……ちょうどいい機会なので、このタイミングで言ってしまおう。
「日本は単一民族国家。海外の方には慣れてないでしょうに、私を含めてホームステイを何人も受け入れてくださって。誰もができることではないですよ」
「いやいや。家の大規模増築までしてくださったグレモリーさんの頼みだしね！　それにイッセーを相手に花嫁修業なんてしてくれるアーシアちゃん達にも、本当に感謝しているんだよ！」
「そうそう。まさかイッセーの夢が叶いそうだもの、ハーレムなんて日本じゃ無理だと思ったし、イッセーは本当にいやらしすぎるしねぇ？」
お二人はそう言うけど、そこは確かにそのとおりね。
六郎のおっさん達に比べればましだけれど、それは天然痘を比べてインフルエンザがましというようなもの。普通に訴えられてもおかしくないし、捕まっても弁護する気にはなれないわ。割と普通に論外よね。
改善しているしそもそもの性欲が高すぎるとはいえ、問題行動を起こし続けてきたことも事実。お二人の心労を真剣に察するほかないわ。
「まぁ、悪い子じゃないのよ？　本当に悪いことをしたと思ったら自分から謝るし繰り返さないし」
「……それ、性犯罪を悪いと思ってないと言ってるようなものですよ？」
墓穴と言っていいわ。
性欲に忠実すぎて、性的な活動を悪いと思ってないのは問題ね。覗きは普通に訴えられるレベルだってのに。
「はぁ。お二人も本当に苦労していますね。それでも見捨てず育てたその心根に、イッセーは五体投地で感謝するべき気がします」
いや本当に、ものすごくそう思う。
イッセーが帰ってきたら、改めて一度話し合おう。おそらくもうな

いでしょうけど、きちんと自己認識は改めさせておかないと。
そう思っていると、三希さんは急に自分の腹部に手を当てた。
「まぁ、ちょっとは甘やかしたかもしれないわね。……できると思ってなかったもの」
「え？」
思わず振り返ると、三希さんは寂しそうな表情を浮かべていた。
「……実は、イッセーの前に二人ほど流産してて……ね」
っ!?
目を見開いてしまう私の隣で、五郎さんも寂しそうな表情をしている。
「母さんは子供ができにくい体質でね。それに二回も流産してしまったから、本当は子供は諦めるつもりだったんだ」
「でも、イッセーが宿ったって知ったら嬉しくてねぇ。私も父さんも頑張って、頑張って産んだのよ」
お二人の言葉に、私は何かを返せなかった。
流産。言葉としては知っている。現代においても、実は意外とそうなる可能性は大きいと聞いている。
思わず、私は自分の下腹部に手を当てる。
……出産の経験は、前世(かつて)ある。そして幸香は、頭が痛い育ち方をしたけれど、確かに生まれて成長している。
だが、それはあくまで誠にいとの子供だ。
それまでの間に何度も妊娠し、その全てを私は中絶している。
何人だったろうか。誰との子供だったろうか。
……それもまた、私の業だ。私だけの責任ではないと言う人もいるだろうが、私の責任の一つでもある。背負い続けるべきものであり、投げ捨てることだけは私に認めたりはしない。
だが、それは私にとって望まない子供だった。誠にぃ意外と子供を産んで育てようなんて、私はかけらも思考していなかった。
だけどお二人は、二回も流産している。中絶ではない。望んで産もうとし、だけどできなかった。
その重みを私は分からないだろう。いや、分かったつもりになるべ

きでもない。
……ただ、私の中に一つの決意が灯った。
「……五郎さん、三希さん」
私は一度釣竿をおろし、二人に向き合う。
いきなりの態度にきょとんとする二人に、私は真っ直ぐ視線を向け、心からの言葉を告げる。
「私は、お二人を心から尊敬します。倣うべき親の在り方であり、尊び守るべき正義者達だと、確信しました」
心の底から尊敬しよう。兵藤一誠を心から羨み、そして嫉妬してしまう感情を認めよう。
私も、こんな両親が欲しかった。私も、こんな親になりたいと思ってしまった。
だからこそだ。
「今、私達はお二人だけに隠している共通の秘密があります。本来イッセーやリアスさんが言うべきでしょうが、色々あってまだ先延ばしにしていることです」
戸惑う二人に、だけど私ははっきりと告げる。
「ですが、今日イッセー達は伝えるべきだと確信しました。これ以上隠し立てすることは、絶対に間違っている」
言うべきだ。言わなきゃならない。
この二人に、いえ、この二人にこそだ。
私たちは、きちんとイッセーの今の現状を伝えなくてはいけない。通すべき筋だが後回しにしている、伝えるべき真実を。
だからこそ―
「その時、どうか今のイッセーに真剣に向き合ってやってください」
―まずはそこから、始めるべきだ。

「では、御膳立てをしてやろう」

その言葉は、驚くべき程近くから聞こえてきた。
１０メートルも離れていない。至近距離と言ってもいい。とどめに、五郎さんの後ろから。
気づくとともに、困惑も驚愕も踏みにじる。
全身全霊をもって即座にカバーの体制に入る、その時だった。

『ちゃんと気を付けないと、腕一本はもらっちゃうよ～♪』

後方から、とても聞き覚えのある邪悪な声を察した。
前に出る動きはそのままに、瞬時に複合装甲プレートを出現させ、射線を切る。
このままだとまずい。とにかく二人を引き寄せてカバーを―

「最高すぎるね、これは」

—真上から、更なる最悪が落ちる。

「……まだだぁっ!!」

結論から言おう。
私は三つの攻撃をすべて弾くことに成功した。
物陰から迫る五郎さんを狙った闘気の投射は蹴り砕く。
その反動をもってして、真上から三希さんを狙った振り下ろしを体当たりで逸らす。
更にプレートを蹴り飛ばしてからの、二人に損壊を与える斉射も、僅かなタイミング違いをついて、気合と根性で盾になって防いだ。
だが同時に、そこからの連撃は防げない。
ブレードは私の右腕を縦に裂き、蹴りが私の左膝を粉砕した。
そして—

「うんうん。日美子みたいなタイプはこれが効くよね」

―誠にいの魔力を込めた手刀が、私の肺を貫いていた。

黙示覚醒編　第八話　極晃天弄（後編）

カズヒＳｉｄｅ

「「……え？」」

困惑するご夫妻に、私は事情を説明している余裕もない。

「幸香達と模擬戦をしていて良かったよ。攻略法は作れてからね」

「良くも悪くも精神力で強引に困難を打破するからな。必然、防衛すら攻性なのが最大の欠陥だ」

『つまり同時多発的な防衛対象に攻撃がベスト♪　ただでさえ自分を優先しないから、こうなっちゃうよねぇ？』

感動と嘆息と嘲笑。

誠にぃとアルケードとモデルバレット。

その三連続の奇襲攻撃。私ではなくご夫妻を狙った攻撃に、私は対処するあまり自分の身までカバーできない。

そして攻撃は的確にこちらの動きを阻害する、絶妙な塩梅。

とどめに、私の周囲を囲む影は多数。

「メッセンジャーになる程度にするように、いいね？」

『『『『『『『『『『了解』』』

だが、それがどうした？
全員殺せば済む話なら!!
「私に資格が無かろうと、この二人は汚させないっ!!」
「本当に？　そんなことをする必要があるのかい？」
問い質すようなその言葉に、私は本気の言葉を返す。
「当然よ、誠にぃ！」
踏み込め、握れ。立ち向かえ。
いまだ状況を把握しきれないお二人では逃げれない。どちらにせよ、一般人の二人でこの包囲は突破できない。転移だって許さないように、既に仕込みをしているだろう。
結論として、選択肢はただ一つ。
ここで全員、撃破する！
動け私。動けカズヒ・シチャースチエ。今すぐ動いて終わらせろ、道間日美子！
「何もかも自業自得で踏みにじり失っても、見つけた光がある……っ」
不意打ちの負傷で意識が霞むが、気合で強引に繋ぎ止める。
そうだ。あの日の誓いを忘れるな。あの死の間際を忘れるな。
踏みにじり、投げ捨てて、失って、壊されて。
それでも残ったあの日の誓いと涙と友情に、嘘偽りなど欠片も……ない！
「失った先で会ったあの誓いにかけてっ！　悪祓銀弾（私）が膝を折ることはない！」

「その通り。尊ばれるべき勝利を見つけた君は、絶対立ち向かう」

その微笑に、私は寒気を覚えた。

失血によるものではない。精神的なものだ。
「僕もそうだ、すべてを失ったと思った時に、僕は勝利(美しいもの)を見つけたんだ」
何よりも、私はそれに共感した。
どれだけおぞましいものを欲しているか、誠にいのそれを私は知っている。
だが同時に、私はその言葉に共感した。
何故なら、それは同じだから。
私も誠にいも、すべてを失ったと思った時に得たものを知っている。
それは美しい輝きで、生涯をかけて追及するもの。
そう、それは―

「失う先にある光(物)が勝利なんだ。勝利そのものを覆う全てを失って、初めて知れるものにこそ、人生における勝利の意味が宿っているんだ」

―どれだけ理性で否定しようと、共感できてしまうもの。
それを実感すると共に、誠にいは一つのプログライズキーを見せつける。
それはフォーリングホッパープログライズキー。だがそこに、ユニットが取り付けられている。
そのユニットは補正器具。問題は、その材質。
「……神星鉄(オリハルコン)……っ」

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

ここに、条件は真に達成された。
極まった性質はもとからあった。
勝利の形を共有する、人生の祈りを分かち合う運命も、当の昔に導きかれていた。
それでも形にならなかったのは、最も簡単な条件がニアミスをしていたこと。
神星鉄（オリハルコン）。厳密には、神星鉄クラスの星辰体感応物質の存在。
それすら成立はしていたが、ここで致命的なニアミスが発生する。
そう、この星を描く二人は、しかしミザリ（振るう側）とカズヒ（導く側）が逆になってしまっていた。
だからこそ生まれた偶然を前に、ここに道間誠明たるミザリ・ルシファーは改めて条件を成立させる。
神星鉄を組み込んだ拡張ユニット、スフィアグリップ。
それを装着したフォーリングホッパープログライズキーを掲げ、ミザリ・ルシファーは今こそ極晃を紡ぎだす。
「天弄せよ、我が守護星――鋼の悪意で世界を犯せ」
本心から、ミザリは感動を覚えていた。
「今ここに、地獄の円環は砕け散る。粉砕されるは氷の牢獄。地獄の底より美しき者（輝く光）を知ることで、我が身は真なる極晃（明星）となる」
それは、星辰光（アステリズム）を超えた星辰光（アステリズム）。
単独で世界を相手にすることもできる、星を塗り替える真なる祈り。
「そう、地獄の底につながれた日々こそが、我が身を彩る美しき祝福。

煉獄でも天国でも得られることなき、日常から解き放たれた惨劇にこそ、勝利の意味があったのだ」
誰もが至れるわけではない。人生における悟り(勝利)そのものともいえるその力は、他者のそれを隔絶した光となる。
「ゆえに、至高天に輝く白き薔薇よ。汝の醜さを哀れもう。この美麗なる歌劇の前には、色あせ枯れているかのようにしか見えないのだから。全てをかけて求める美は、明星が照らす地獄にあると歌い上げよう」
そう、恐ろしいのはまさにその点。
たった二人の共鳴によって至るそれは、どこまでも彼らにとっての人生の答え。あまねく万人に尊ばれるものではない、極端な結論といえるのだから。
必然、やらかすリスクは常に付きまとう。最悪なことに惑星環境を塗り替える余地すらある為、やらかせば被害は惑星規模を確実に超えるのが最大の問題点。
何より、彼の祝詞(詠唱)がすべてを物語るほどに、それは衆生にとって悪夢でしかない。
「感謝しよう、愛しき悪祓の銀弾よ。汝が邪悪に染まったからこそ、僕は人生をささげるに値する祈りを持ちえたのだ」
だからこそ、本心からのその感謝に、カズヒ(道間)・シチャース(日美)チエ(子)は問い質す。
「ならば、問おう。悪鬼に落ちた愛しき星よ」
祈りのままに口が動き、だが同時に、心からの問いを投げかける。
「悲嘆と苦悶に染まりし世界。その苦界のどこに尊ばれるべき光はある。この罪深き罪人に、それを今こそ指し示せ！」
すべてを踏みにじった自分。だからこそ正義を奉じる怨敵に、悪鬼明星と共有できる勝利がどこにあるのだと。
その言葉に、道間誠明(ミザリ・ルシファー)は微笑んだ
「地獄(全て)だと、ただそれだけで事足りる」
そう、心から言い切った。
「これよりこの極晃(身)が彩る世界。それこそが美しき勝利(光)そのものだ」

その想いを感じ、カズヒは歯を食いしばる。
そう、そうなのだ。
道間日美子は、大切なものを失った地獄の底で尊ぶべき笑顔(光)を悟った。
道間誠明は、大切なものを失う地獄に落とされ尊ぶべき美麗(光)を理解した。
「光で照らせ悪鬼明星(ルシフェル)よ――」
勝利とは、失った先に見つける祈り。そこに至る過程にこそ、二人は勝利を共有する。
ゆえに、ここに悪鬼明星(ルシフェル)は完成する
「――涙嘆地獄(バッドエンド)を、慈しめ。」
今まさに、この世界において初の極晃星(スフィア)が到来する。
「超新星(メタルノヴァ)――――明星(フォーリン)が照らすは涙嘆地獄(グ・スフィア)、広まれ銀(ルシ)の絶望(ファー)よ」
極晃弄奏者(スフィアルシファー)、ここに降臨。

黙示覚醒編　第九話　王（キング）の真実

和地Ｓｉｄｅ

俺達が転移した先で、レイヴェルも目を覚ました。
ただ、問題はここからだということも悟っている。
というよりも、だ。
「さて、ここで何故このような事態が起きたのか、説明させてくれ」
そう語るアジュカ様は、なんで王（キング）の駒を持っているんだ？
冥革連合が作り出し、そして広めようとしている王の駒。新たなる悪魔の駒（イーヴィル・ピース）
それを、なんで……？
「……その件についてだが、一つ確認したいことがあるんだがいいか？」
そのタイミングで、アザゼル先生がそう言って割って入る。
怪訝な表情をするものも多いが、そこで一歩前に出たのは春っちだった。
……春っちは元々、王の駒を持ち出したヴィール・アガレス・サタンの眷属だ。
何かしら一家言ぐらいはあるだろうが―
「アジュカ様。王の駒は……貴方が作ったものではありませんか？」
―はい？
「ちょ、ちょっと待ってください、成田春奈さん」
一瞬呆気にとられる俺達の中で、ソーナ元会長が割って入るように声を上げる。
「根拠は？　ヴィール・アガレス・サタンが言っていたのですか？」
「……直接はありません。ですが、前に聞いたことはあります」

そう前置きする春っちは、目を伏せて過去に思いをはせている。
「王駒祭壇（ムロドーミーユ）について語る時、ヴィール様はこう仰っていたわ。……アジュカ・ベルゼブブが最初からその気になら、こんな手段をとる必要はない……って」
その言葉に、俺は今の質問と繋がったものを感じた。
おい、まさか―
「ヴィール様は、王の駒が作られながら公表されてないことを知った。そして普通に公表すると冥界に問題が起きるからこそ、あんな形で王の駒とその発展形を広めようとした……それが、真相なんじゃないかって、師匠やアザゼル元総督に相談していたのよ」
―その言葉に、俺達は一斉に先生の方に振り向いた。
先生は先生で、王の駒をしげしげと眺めながらもあっさりと頷いた。
「つい先日だがな。だがそもそも、そうじゃないかって可能性は考えてたんだよ」
……俺達の視線は、そのままアジュカ様の方に向かう。
そしてアジュカ様は、俺達を見回してから頷いていた。
「すべてその通りだ。王の駒は他の駒とさほど時期を置かず完成させていたが、その力でよからぬことを考える者が出ると考えて封じることを決めている。……だが、その力に目を付けた古い悪魔達は何人かの悪魔にそれを使用させ、中には魔王クラスにまで高まったものがいるほどでね」
なんてことだ。
映し出される映像に至っては、俺でも知っているレーティングゲームのトップランカーまでいる。というか、二位のロイガン・ベルフェゴールと三位のビィディゼ・アバトンまでいるぞ。
ソーナ先輩に至っては、顔面蒼白と言っていい。
「……ついでに言うと、レーティングゲームの運営陣はそれを知ったうえで行っている。人間界の競技でも八百長がまれにあるが、レーティングゲームの上層部は俺の管理を離れて真っ黒なのさ」
アジュカ様はそういうと、軽くため息をついた。

「中にはプロレスのようにどう戦うかを決めて、その恩恵で利権が動いている。まぁレーティングゲームほど冥界で金が動く現象はそうはないからあって当然だし、お家の都合でわざと負ける程度は普通に知られているがね」
　おいおいおいおい。どんどんヤバい情報が出てきているだろ。
「……ちょ、ちょっとタンマ！　タンマタンマ！」
　色々と泡を食っている状態の鶴羽が、思わず声を上げてアジュカ様を止める。
「そんなレベルでやらかしているなら、もうちょっと止めるなり裁くなりした方がいいじゃないですか!?」
「そうもいかない。先ほどの情勢は大王派の古い重鎮が主導なうえ、王の駒もすべて使われたわけではなくてね。俺もサーゼクスもどうにかしたいが、強引な手段を使えばかつてを超える規模で内乱が起きかねない」
　鶴羽の言い分にそう返すアジュカ様は、更にため息をついた。
「超越者であるリゼヴィムがやる気を見せず早々に下がり、魔王クラスの戦力が殆ど俺達現政権側に集まっていた。それだけの好条件が揃っていたからかつての内乱はあの程度で済んだ。……だが、現魔王派と大王派で内乱が起こればそうはいかない」
「どういうことですの？」
　ヒマリが首を傾げる中、リアス部長は額に手を当てて頭痛を堪えていた。
「少なくとも、二位と三位が敵に回る可能性は大きい。そもそも王の駒が複数大王派の手元にあるのなら、更に魔王クラスの戦力が出てきかねないわ」
「……ただでさえ内乱もあって消耗していた当時の冥界政府で、その選択は種の滅亡に繋がるリスクがあるわけですね」
　木場もすぐに理解したが、そうなるだろう。
　あまりに質が悪すぎる。
「しかもタイミング次第じゃ、王の駒目当てに旧魔王派まで介入しかねないし、和平前だと他の勢力だって介入した混戦すら想定しちゃう

わねぇ」
「他勢力の介入が無くなっただろう駒王協定後も、禍の団の存在もあって余計な介入は難しいでしょう。そもそもレーティングゲームが不正まみれなら、民衆が暴動すら起こしかねませんわ」
リーネスと朱乃さんもしかめっ面になるが、これはかなりまずいだろう。
こんな情報、今流れたら冥界はあらゆる意味で混乱に陥るぞ。
「……なるほどな。冥革連合ってのはつまりは「王の駒及び、そこから派生した技術を自分達が開発した」って大衆に思わせ、現政権が堂々と製造を可能にする為の組織だったってわけか」
「そういう事でしょう。おそらく、ヴィール・アガレスが何故それを知ったのかは分かりませんが、亜種聖杯戦争が関与しているかと」
先生とアジュカ様がそう言い合うが、問題はかなりきついだろう。
というより、だ。
「……で、でも、なんでそれを僕達に教えたんですかぁ？」
ギャスパーが首をかしげるのも無理はない。
こんな爆弾以外の何物でもない秘匿情報、俺達がD×Dのメンバーだとしても隠すべきだろう。
わざわざ冥革連合が冥界の民に誤解させてくれたんだ。向こうも明かすつもりがないのは、大量生産させることを求め動いていたことからも明白。喋るつもりがあるのなら、さっさとあの段階で話していた方が勝ち目はいくらでもあるだろう。
魔王派にしろ大王派にしろ、それを明かす必要性がない。どう転ぶにしてもそのままにしていた方が、冥界政府にとって都合がよすぎる。うかつにつついて真相が広まった方が不味いからだ。
なんで、こんなことを俺達に……？
「確かに、冥界政府もそこについては共通認識だった。シーグヴァイラ達の発案もあり、王の駒や真魔（ディアボロス）の駒の間接的な運用方法も確立していたからな」
その通りだ。
その運用方法に価値を感じているのはヴィール達も同じ。むしろ

阿呆な理由でとどまっているのにキレて発破をかけたほどだ。ばらすことはないだろう。
どう転んでも、このままお互いになぁなぁで隠していた方が安全だ。にも関わらず、わざわざ俺たちにそれを明かすのもおかしいだろう。ばらすにしても人数は絞るべきだ。
もうちょっとこぉ、代表だけにするとかあったんじゃないか？
「……だが、この情報を知ってはならない人物が知ってしまった」
つまり、そういう判断が取れない奴が知ってしまった。
そしてこの流れでそれを話すということは、そういう事なんだろう。
「ディハウザー・ベリアルは生粋の魔王クラスってことか」
「その通り。彼自身、件のゲームでわざと不正を起こし、俺をおびき寄せて教えてくれました。アグレアスの事件も彼が内通したからこその手際です」
アザゼル先生の指摘に頷くアジュカ様だが、そういう事か。
つまり、ディハウザー・ベリアルがクリフォトに内通している。魔王クラスの悪魔が、超越者に手を借りて冥界政府に弓引く真似をしたってのか。
「クレーリア・ベリアルと八重垣正臣の件は知っているだろう？　王の駒について探る者を古き悪魔達は決して生かして返さないが、彼女もそうなった」
「……そんな時に悪魔祓いとの恋仲が成立した。カズヒが言っていた通りの話だったというわけね」
アジュカ様の説明に、リアス部長はすべてを悟ったようだ。
確かに、カズヒねぇはゼクラム・バアルが出向いた理由を「牽制」と判断していたな。
初代バアルという、現魔王以上の発言力があるとされる人物。そんな奴がわざわざ出向いて話をしたという事実そのものが、無意識レベルで追及を防ぐ牽制球。速攻で最終兵器を切るようなものとか言っていたけど、まさにその通りだったと。
流石にグレモリー宗家の次期当主を暗殺なんて、サーゼクス様だっ

てブチギれる案件だ。かといって内乱を起こしたがるわけでもないし、そういうやり方で深入りを阻止するのが目的だったという事か。
「彼の目的はおそらく、リゼヴィム皇子の力を借りてこの真実を明らかにすることでしょう。最悪冥革連合と決裂するかもしれないが、リゼヴィム皇子はそういうことを平気で行いかねない男だ」
アジュカ様はそう言うが、春っちはそれを聞いて俯いた。
「……最悪は、ヴィール様がそれを了承して「最悪の勝利」を掴むことを決める場合だわ。混乱状態の現魔王政府に、全軍を率いて侵略活動を試みかねないわ」
ため息をつきそうになっている春っちだが、俺はその肩をそっと抱きながらも頭を抱えたくなった。
もしその場合、冥界に大打撃が与えられることは間違いない。可能ならば今すぐにでもどうにかしたいが、そういうわけにもいかないだろうしな。
「……もしかして、タイミングがあの試合だったのって？」
「中々に目ざといな。おそらくそういう事だろう」
ん？
なんか急にリヴァ先生が気づいて、アジュカ様がそれを認めたぞ。
いったい何に気づいたのか、今聞いた方がいいんだろうかと思ったときだ。
リーネスやアジュカ様の耳元に、緊急通信用の魔法陣が展開される。
「……なんですって!?」
「……奇手か、それとも悪手か……っ」
二人がそれぞれ表情を変えるが、俺は無性な胸騒ぎを覚えていく。
「……なんだと!?」
しかも今度はアザゼル先生にも!?
「先生、リーネス!?　一体何が―」
「―イッセー、九成、よく聞け」
……イッセーを遮る先生の言葉に、俺は心臓が止まりそうになった。

嫌な予感を覚える。心臓が早鐘のようになっている。
おい、まさか―
「……クリフォトが兵藤夫妻を襲撃し、人質に取る形でオーフィスを襲ったそうだ。オーフィスとカズヒは……意識不明だ」
―冗談、だろ。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「やぁ父さん。体調はどうかな？」
「最近は漸く眠りも普通にできるようになったぜぇ。アルバートにお礼を言っといてよ、マイサン」
「確かに、アルバートには本当に感謝だね。……父さんには神器（セイクリッド・ギア）が効かないから、アプローチに苦労したよ」
「魔法技術を科学的に再現した、俺専用の快眠ユニット。ったく、ドラゴンってのは本当にアレだねぇ？」
「僕らに言われたらおしまいだけどね。まぁ、無理をしないようにね？」
「もっちろん！　仕返しもスッキリできたし、反撃タイムはこっからだぜ！　ディハウザー君に準備させよっと♪」
「冥革連合も、不承不承だけど了承してくれたしね。こうなったらすっぱり行って冥界征服とかやってみようか」
「よっし、その方向でいってみよう♪　じゃ、俺は準備してくるよぉ～ん♪」

「……アルケード。どうだい？」
「……現状は動きがみられないが、相手は邪龍だ。俺にだって限界ぐらいある」
「油断はできないか。次、アルバート」
『やはり封印は解除必須だな。あんたも力になれてないしなぁ？』
「なるほどね。じゃあ、イシロは？」
『同調は順調。マスターとのパスも経由すれば、仕込みは行けると思うわ』
「それは重畳。……ニスネウス、そっちは？」
『一通りの話はすんだわ。目立った勢力はその時に、最低でも静観をしてくれるそうよ』
「よしよし。となれば、四割博打になるのは残念だけど、こっちも本気で動き出すチャンスが来そうだね」

「涙換地獄（バッドエンド）を世界にもたらす、大一番の準備は万端。あとはぶっつけ本番かな？」

黙示覚醒編　第十話　行きつくところまで行った話

和地Ｓｉｄｅ

水を浴びながら、俺は今の現状を把握し直している
カズヒねぇとオーフィスは、とりあえず傷は塞がっている。
アーシアの聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）には本当に感謝だな。こういう時、まず間違いなく俺達の生命線だな。
とりあえず、傷は塞がったし命に別状もなくなった。消耗が激しいから当分起きれないどころか意識も回復しないだろうが、とりあえずこちらは一安心といえるだろう。
だが、兵藤夫妻は未だ行方知れず。カズヒねぇが昏睡状態で会話をすることもできないから、状況も把握しきれない。
……駒王町にはかなり厳重な結界が張られている。まず間違いなく侵入は困難で、上級悪魔程度では悪意を持って侵入することは不可能だろう。
だが、そんな駒王町を狙う連中は並みの上級悪魔とは比べ物にならない。
仮説だが、結界の侵入はオーフィスを逆手に取ったものと思われている。
禍の団にはもう一人のオーフィスであるリリスがいる。そのリリスとオーフィスの類似性を利用して侵入したといえるだろう。更に結界の外にいる兵藤夫妻を拉致し、盾とすることでオーフィスを無力化した。
違和感に気づいたクロウ・クルワッハやデュリオの気配に気づいて逃げたようだが、オーフィスは人質もあって攻撃を仕掛けることができず、虹龍（スペクター・ドラゴン）の安全を確保することしかできなかったそうだ。
「……ふう」

そして俺は、意識を切り替える為のシャワーを浴び終え、鏡を見る。
酷い顔だ。自分の顔を鏡で見たことはあるが、ここまで負の感情が浮かんでいたことはない。
落ち着け俺。今俺達は、対テロ戦争をしている武装勢力だ。
戦いをしているのなら、当然殺し合いをしている。当たり前だが殺し合いに参加するのなら、自分が殺されるリスクも仲間が殺されるリスクも考えるべきだ。俺がああなる可能性はあるし、鶴羽達がああなる可能性もある。そんなことは分かっている。
分かっているが、あの時は頭が真っ白になった。
一呼吸を置き、目を伏せて思考を統一する。
冷静になれとは言えない。とても無理だ。
だが同時に、激昂するな。我を忘れるな。
冷静さを完全に欠いてどうにかできるほど、あいつらは甘くない。まして俺は理性で体を動かすタイプだ。ぶち切れた勢いで暴れているようでは勝ち目はないし、勝つとするならきちんと知性と理性で手綱を握る必要がある。
ただし―
「……必ず一発かましてやる」
―だから殺意が生まれないほど、俺は理性と知性だけの人間でもないんだよ。
俺にも我慢の限界があることを、あいつらに教えてやるさ……っ

アザゼルＳｉｄｅ

俺達がアジュカのもとに向かっている間に、電撃的な作戦が行われ

た。
駒王町の結界は頑丈だ。作った俺が言うのもなんだが、三大勢力が関与する結界に限定すれば、間違いなく重要拠点レベルになっている。悪意がある連中が簡単に侵入できるほど、甘くはない。
だが裏を返せば、結界の外では危険度は跳ね上がる。そして結界内に当然いる連中を通す以上、そこを利用されるとどうしても付け入るスキができる。
今回は両方が行われた。外にいたイッセーの両親を強襲して人質に取り、返す刀でリリスとオーフィスを共鳴させる形で転移。それにより、人質を取った状態でオーフィスをなすすべなくぼこぼこにするという真似をやったわけだ。
カズヒはアーシアが間に合わなければ死んでいた可能性もある。そしてそのカズヒが無理だった以上、念の為につけていたエージェントもなすすべなく打倒されていた。念の為にカズヒが合流を求めていた接木や引岡が発見したからこそ死ななかったカズヒも、やばい状態だったわけだしな。
オーフィスも回復は間に合ったし、メイド達が気づいて救援を求めたり、それとは別にクロウ・クルワッハやデュリオが気づいたこともあってすぐに奴らも引いた。それでも無限でなくなった奴は深手を負っていたがな。
……に、してもだ。
今回の攻撃、違和感が多すぎる。
仮にも内部である大王派にすら悟られないように、アジュカは俺達を呼び出した。そのタイミングを悟れるわけがない。禍の団は最悪、俺達全員を相手取ることも考えていたんだろう。
それにしちゃぁ、戦力だって少ない。人質としてイッセーのご両親を確保してからとはいえ、流石に杜撰で粗が多すぎる。
リゼヴィムは幼稚な男だ。未知の世界に対する侵略願望で動いているし、その動きも悪童のようだ。
だが同時に、奴は間違いなく組織運営に長けている。扇動の鬼才かつリリスの存在があるとはいえ、禍の団という荒くれ者どもの組織を

まとめ上げるのは凡人にはできない。
これまでの活動だってそうだ。強い不満を持っている連中を見つける目に、それを適切に煽りたてる弁舌。それをきちんと生かしてきたからこそ、ここまでの被害を出せたはずだ。
だが、今回ばかりは杜撰すぎる。リゼヴィムは何事にも遊びを入れる男だが、それにしたって今回の行動は違和感が凄い。
例えるなら、精神的に余裕がなくなって冷静さがない。もしくは辛い環境から解放されて、その勢いではしゃぎ回っている。
どちらにしても気になるな。それに、これまでのクリフォトの大々的な活動で顔を見せていた奴が、神聖糾弾同盟絡みでは全く出てこなかった。そこに因果関係がありそうだ。
……どちらにせよ、今リゼヴィムに何かが起きているのは間違いない。それをつくことができればいいんだがな。
そう思ったとき、通信が繋がった。
「俺だ」
『……幾瀬です。その、凄い事になりました』
なんだ？
狗神チームの鳶雄だが、様子が明らかにおかしい。
ここまでこいつが動揺している。いったい何が起きたってんだ？
正直、俺もちょっとばかし余裕がないんだが―
『ヴァーリがクリフォトの拠点を割り出しました。……今、確認して発見したところです』
―なんだって!?

和地Ｓｉｄｅ

俺は気分を切り替えると、地下のメイド達の場所に向かっていた。
……幸い、インガ姉ちゃんやベルナに怪我はほぼなかった。
状況が不味いと悟ったことで、まず救援を呼び防護を固めることを優先したからだ。
最も、オーフィスが地下にいたままだと気づいたこともあって強硬突入はしたらしい。その一戦で多少の怪我を負っているけどな。
正直、俺も見舞いに行きたかったが自制した形だ。
……顔を見て、メイド達に怯えられたらまずいしな。それぐらいには、気持ちが切り換えられてなかった自覚はあるんだ。
「……インガ姉ちゃん、ベルナ。大丈夫か？」
俺がブースに顔を出すと、メイド達の視線が一斉に集まった。
とりあえず、怖がられてはいないようだ。何とかなったようで一安心一安心。
ただ、肝心のベルナとインガ姉ちゃんにはぎょっとされたんだが。
「カズ!?」
「なんでここに!?」
「傷つくんだけど!?」
どういう驚愕だよ！
来るだろ。来るに決まってるだろ。むしろ来るのが遅い方だろ。
なんで来たことに驚愕されるんだよ。自分でいうのもなんだけど、俺の女が危なかったんだぞ。普通は来れるならすぐに来るだろ。
まさかと思うけど、俺ってそんな風に思われてるのか？　え、マジで思われるの？
やばい。ちょっと真剣にショック。
顔に出るほどショックを受けていたみたいで、懲罰メイドの方々が、一斉に二度見してから二人の方に向いた。
「……酷くない？　むしろ遅いぐらいだよね？」
「やばい状態だったって聞いてるから、そこはいいんだけどさぁ？」
「リヴァさん達がわざわざ教えてくれたのに……」
あ、リヴァ先生が伝えてたんだ。ありがとうリヴァ先生。

ただその結果がこの流れとか、流石に凹むぞ本当に。
「カズヒねぇは意識不明だし、二人は酷い事言うし。……俺だって無敵メンタルしてるわけじゃないんだぞ……っ」
「あ、ゴメン」
相当凹んでいるように見えて―実際かなり効いたけど―いるのか、二人も流石に気まずそうになった。
と、ベルナは我に返ったのかブンブンと首を横に振って意識を切り替えていた。
「……いやいやいや！　だったらまずカズヒのところだろ!?　アタシら気にしてる場合かよ!?」
ん？　あ、ああ！　そういう方向性か！
最愛のカズヒねぇがやばいことになってるというのに、自分達の方を気にしてていいのかって意味か。
ああ、そういう事かぁ。なんか凹んだけど、むしろ心配になっていただけかぁ。そっかそっか。
いや、それはそれでいいのだろうか。
「……もうちょっと、自分のこと優先してほしいとか思っていいけど？　というより、そこは遅いと文句を言うところじゃないか？」
君らそれでいいのか。
俺は真剣にそう言ったけど、二人は肩を見合わせると首を傾げるレベルだ。
「いや、カズヒの方針が無かったらこの関係になってない自覚はあるよ？」
インガ姉ちゃんにそうはっきり言われると、確かにそうなんだが。
俺がハーレム出来ちゃってるのは、ひとえにカズヒねぇによる前提条件が理由だ。まさかハーレム野郎になることが条件に据えられるとは、思ってもみなかった。
まぁその気になったからできるほど、ハーレムというのは簡単ではないだろう。俺にはその素質が少なからずあったと思うし、それを了承できる女性達に恵まれているのも事実だ。
つまり、俺の女性関係は見事にカズヒがトップに据えられている。

カズヒを頂点として、側室を増やしていっているようなものだ。俺としても、みんなを愛していると自負しているがカズヒねぇが一番だ。
……ただ、甘く見ないでほしい。
「だからって二人をないがしろにする気はないぞ？　第一、カズヒねぇが起きた時に俺がずっといたとか知ったら、絶対その辺説教するだろうし」
『『『

ういう時でも冷静に、しっかりと勝つためにどうすればいいのか考えるのが俺だっての。
だからこそ、カズヒねぇに付きっ切りということはない。
時々は様子を見に行くさ。だが、優先順位が違う時に行くことはない。怒られるしな。
見舞いに行くのは、しっかりやることをやってからだ。
そう思ったとき、なんかどたばたと騒がしいことになってきたな。
振り返れば、そこには慌てた様子で走ってきた春っちが。
「ヴァーリが、ヴァーリがクリフォトのアジトを発見したって！」
あれ？　あいつ今日は捜索に行けない日―
「……ラーメンで！」

『『『『『『『『ええええええええええええっっっっ!!!?!!????』』』』』』』』

もう大絶叫なんだけど!?　何があったぁっ!?

黙示覚醒編　第十一話　反撃作戦、開始します！

アザゼルＳｉｄｅ

「……言いたいことはいくらでもあるだろう。俺も混乱が収まりきってない」

俺はＤ×Ｄメンバーを見渡して、そう告げた。

だが事実だ。真実だ。信じられないが本当のことなんだ。

これを言わなきゃならないのが心底嫌だが、言うしかない。

「……ヴァーリがまたラーメン（やらかした）だ。そして鳶雄が確認して、リゼヴィムがいることを確認したそうだ」

もう誰も何も言えなかった。

ヴァーリチームの黒歌もげんなりしているし、ついでに言うとルフェイもそっと視線を逸らしている。

色々あってブチギレ寸前だったはずのイッセーと和地も、白目をむきそうになっている。オーフィスやカズヒが死にかけ、イッセーの両親が誘拐された状況が一気に白けた。暴走のリスクが最悪の形で消滅しちまったよ。

いや、ちょっとマジで……なぁ？

「先生。あいつはどんな技を会得したんですか？　俺もおっぱいでやらかすけど、あいつはどこに向かってるんですか？」

イッセーがそう言ってくるが、お前はもうちょっと思うところがあっていいぞ？

だがまぁ、確かに言いたくもなる。

「おそらくだが、来年には乳神（ちちがみ）と対を成す麺神（めんしん）がラーメンに降臨しそうだな」

「すいません。マジで笑えないんで勘弁してください」

和地に思いっきりツッコミを入れられたが、実際あれだよなぁ。
あいつはどこに向かうのだろうか。ラーメンには乳力（にゅうパワー）に匹敵する力があるというのか。割と真剣に考えたくなってきたぞ。
なんでも地形を正確に再現したらしく、そこに特徴的なモニュメントがあったことからそこを調べてみたらビンゴだったとか。ラーメンで、そんなことをしたらしい。
ヴァーリは一体どこに向かうんだろうか。俺にも全く分からん。
……まぁ、気を取り直すか。
「今のところリゼヴィムは動いていないが、問題はその地点だ」
俺は前置きして映像を映し出す。
それは山の中腹にある街。その一角にはドームが一つある。
「……場所は冥革連合が確保している領域にある地方都市。レーティングゲームのコロシアムに、放送局が一つある」
俺が説明すると、メンバーの多くが警戒心を見せている。
ああそうだろう。
既に事情が事情なので、D×Dメンバーにはある程度の情報を伝えている。
王の駒、クレーリア・ベリアルの死の真相、レーティングゲームの不正の数々といった内情。もちろん、ディハウザー・ベリアルがアジュカに直接告げた各種目論見や行動もな。
そんなことが起きた後に、放送局がある場所でリゼヴィムが見つかった。誰だって最悪のパターンを連想するだろう。
とどめに、だ。
「あと警備が厳重で鳶雄も確認できてないが、コロシアムのドーム内に巨大な物体があることだけは間違いない」
俺の言葉に、誰もが緊張感を増す。
ソーナが眼鏡を小さく動かし、鋭い目を向ける。
「……トライヘキサ、でしょうね」
「ま、そうなるだろうねぇ」
デュリオも苦笑いするが、実際そうだろう。
おそらくだが、トライヘキサの封印もだいぶ解けていると考えるべ

きだ。……むしろミザリがいるのなら、もっと早く解除されてもおかしくない。
最悪のパターンとして、王の駒を含めた真相の公表とタイミングを合わせ、意図的にトライヘキサを解放する可能性もある。
放送局を利用してすべてを明かすのなら、冥革連合の了承は得ているはず。となると、冥革連合は王の駒を現政権に広めることを諦め、別の手段を選択したことになる。
トライヘキサにより速攻で冥界政府を掌握。その後、トライヘキサを象徴とする形で冥界の富国強兵かを試みようとするかもしれない。
だから、だ。
「可能な限り速攻で強襲を仕掛ける。ヴァーリ達は刃（スラッシュ・ドッグ）狗チームと一緒に、こっちが来るのを待っているしな」
ここで、奴らを可能な限り叩き潰す。
特にリゼヴィムは絶対潰すべきだ。扇動の鬼才であるリゼヴィムの有無は、王の駒について知らされた後を踏まえると危険すぎる。バラさないようにすることも大事だが、バレた後も考えないとな。
アジュカからも全面協力をもって、特注の転移魔法をもってして奇襲攻撃を行う。ヴァーリがラーメンで場所を察知したなんて想定外だろうし、間違いなく不意打ちになる。
「サイラオーグとシーグヴァイラも後で合流する手はずだが、状況が状況なので可能な限り速攻でいく。つまりこのメンツが基本だ」
室内にいるのは、リアスとソーナの眷属フルメンバー。ＡＩＭＳ第一部隊。指導監察団こと聖ミカエル監察団。更にシスター・グリゼルダとリーダーのデュリオに、リヴァといったメンバー。
だが今回、更にもう一手を叩き込む。
「そして今回、追加メンバーを組み込む。……入ってくれ」
「はい、アザゼル元総督」
俺に促されて入ってきたのは、成田春奈だ。
「春っち……いいのか？」
和地が真っ先に確認の声を飛ばす。
戦う気があることは既に認めている。だが、迷いや躊躇がないかど

うかの確認だろう。
今でも春奈の奴は、ヴィールのことを敬愛している。尊敬する主に刃を向けたことも確かにあるが、そこから何ヶ月も経っているなら思うところが新しくあることだってある。
もしあれば、それは致命的な隙になる。ましてヴィールは、極覇龍をだいぶ持続できるようになったヴァーリでも勝てる保証はない強敵だ。向き合うのなら相応の覚悟が必要になる。
だからこそ、和地の奴も聞いたんだろう。
それを理解したうえで、春奈はしっかりとうなづいた。
「むしろやらせて。これがヴィール様の終わりになるかもしれないのなら、見届ける可能性を持ちたいの」
そう答えた春奈は、そのうえで小さく微笑んだ。
「それに、師匠をああもやられて何もしないってのも納得できないわ。許可は貰ってるんだからやらせて頂戴」
「……分かった。ま、お互い死なない程度に頑張るか」
和地も納得したみたいだな。
じゃ、そろそろまとめるか。
「ミザリは可能なら滅ぼしていい、俺が許す」
奴らはあまりにやりすぎた。生かして捕縛なんて考える必要もないぐらいにな。
カズヒには悪いが、ミザリの決着をあいつに任せるなんてことはもう言えない。起きた途端にそんなことを知ったら少しは凹みそうだが、既にそこに配慮できるような被害じゃないんでな。悪いが殺すこと前提で動かせてもらう。
そして同時に、懸念事項もあまりに多い。
「ヴィールも捕縛に拘らなくていいが、リゼヴィムは殺すな。トライヘキサの確保と確認は必須だ」
サウザンドフォースが当てた、リゼヴィムが自分の魂まで使った仕込み。
腐っても奴は超越者。その魂を生贄にすれば、下手な亜種聖杯を超える効果が期待できる。いくら聖書の神が死んでもおかしくない禁

呪を乱れ打ちにしたとはいえ、限界はあるからな。
　できる限りの対策はした。だがそれでも今の世界では足りない、そんなレベルの化け物がトライヘキサだ。復活させないに越したことはない。
「だが、気をつけろ。今回の行動はあまりに粗が多すぎる。なにか裏があるんじゃないかと思わせるぐらいにな」
　オーフィスの襲撃や、イッセーの親御さんを拉致する。これは確かに効果的だ。だが同時に、その札を切るにしても杜撰としか言えない。
　やるなら王の駒について真相を明かすのとタイミングを合わせるなり、何かの作戦行動と組み合わせるべきだ。それにイッセー達が不在のタイミングを計って仕掛けたとも思えない。そこが妙に気になる。
　リゼヴィムかミザリに何か起きた、と考えるべきかもしれない。もしくはそう思わせる心理的な作戦かもしれない。どちらにしても、リゼヴィムが生粋の煽り屋であることを踏まえても何かがおかしい。
　だからこそ。
「転移は二回に分ける。ソーナ達を中心に、オカ研以外がしかける陽動の第一弾」
　ただ奇襲すれば勝てるほど、冥革連合やクリフォトは馬鹿じゃねえ。
　だからこそ、あえて戦力を分散させる。
　そのうえで―
「本命の第二陣はオカ研中心だ」
「当然ね。普段お世話になっているお義父様とお義母さまは助けるし、リゼヴィムも決して許しはしないわ」
　―リアスのやる気に満ちた返事に、俺は頷いた。
　できることならここで決着にしたいところだ。
　リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。あいつは世界にとってあまりに危険すぎる。これ以上は野放しにはできない。
　イッセー達に喧嘩を売ってただで済んだ奴はいない。だが、片づけ

た後に被害が甚大すぎては意味がない。
今後を踏まえれば、損耗は少ないに越したことはないんでな。異世界絡みで動く前に、やられてくれないと困るしな。仕込みはしたが未然に阻止するに越したことはねえ。
そういうわけだ。覚悟してもらうぜ、リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。
これ以上お前を好きにする気はないんでな。ここで決着をつけてやる。

和地Ｓｉｄｅ

俺は出発の直前に、カズヒねぇの様子を確認していた。
カズヒねぇは起きない。そもそもなんで生きているのかが分からない負傷をしていたこともあり、消耗が激しすぎる。
……毎度毎度だが、俺達は本当に命の危険が豊富な戦いに巻き込まれる。分っているから、カズヒねぇがこうなっていることに衝撃は受けても、ある程度の冷静さを保てている。
俺がこうなっている可能性もある。イッセー達がこうなっている可能性もある。生物はすべからく死のリスクを背負っており、鉄火場で動く俺達は、不意の死亡リスクは確かに高いんだ。
平穏に生きていける環境ですら、不意の事故や急病のリスクはある。なら、流れ弾が飛び交い殺意を向けられる環境なら、どういうことなど自明の理だ。カズヒねぇは自分がこうなることを当然想定するべきであり、俺もまた心構えとして考慮するべきだと分かっている。

分かっているが、だからクリフォトを許せなどという気はかけらもない。
純度１００％の悪意で動いてる連中の、悪逆非道を許すほど俺は心が広くない。相応のケジメはつけてもらうし、報いは受けさせると決めている。
だからこそ、だ。
「……行ってくる、カズヒねぇ」
俺は、そっとカズヒねぇの頬を撫でながらそう告げる。
十中八九聞こえてないのは分かっている。これが感傷の類だと分かっている。
ただ、おかげで少し切り替えれた。
立ち上がり、そして部屋を出る。
そこには、春っちがいた。
「もういいの？」
「ああ。今は十分だ」
そう返せば、春っちは俺に対して苦笑を浮かべていた。
「死ぬかもしれないのに、よくやるわね」
「死を想え（メメント・モリ）〔人はいつか必ず死ぬことを忘れるなという、ラテン語の格言〕って知ってるか？」
実際それは重要だ。
もちろん、平穏な日常においては深くそれについて考えなくて済むのが理想だ。だが、俺達は殺し合いを担当している。世間一般よりは強く意識する必要があるだろう。
だからこそ、理想としては何時死んでも悔いがないことだ。まさに理想でまず無理だろうが、心構えとしてそうあらんとするべきだろう。
だが、俺は小さく春っちに頷いた。
「春っちこそ大丈夫か？　ヴィール・アガレス・サタンは、本来俺達全員で挑むレベルの敵だぞ？」
奴が必ずあそこにいるとは限らない。
だが、いるとするなら必ず出てくるだろう。そういう男だと、俺達

も分かっている。
そしてヴィール・アガレス・サタンは、常に成長し続ける化け物だ。
俺達以上に苦行を積んで成長し続けなければおかしくなる、異常者。ゆえにその成長は凄まじく、また星辰光もあって技術や読みにおいては俺達すら超えるだろう。フィジカルにおいても、間違いなく最上級悪魔の上位クラス。とどめに神滅具（ロンギヌス）まで持っている。
そして最低でもリゼヴィムがいる。奴だって超越者の端くれであり、その性能は魔王クラス。更にサウザイアー・リリンまであるという、悪夢のような難敵だ。
ミザリが出てくる可能性も大きい。神滅具を五つも疑似的に宿し、クソゲー極まりない星辰光の星で防御に長けすぎている。
最悪は三人が全員出てくる。そしてその場合、間違いなく側近や幹部も出てくるわけだ。
……いつも頭の片隅に入れてはいるが、本当に死ぬ可能性が多すぎる、シャレにならない鉄火場だろう。
日常生活と同じレベルで死ぬかもと思う程度で済むわけがない。もしできるとするなら、それは悟りに至った連中だろう。
ただ、春っちは小さく微笑みながら頷いた。
「当然よ。私はヴィール様の眷属、あのお方の強さも覚悟も修練も、ここで一番知ってるわ」
そう断言したうえで、春っちは強い意志を瞳に乗せる。
「だからこそ、半端はしない。文字通りの全身全霊をもって、彼に恥じない反抗をする。それが今の私が主にできる、最大の報恩だと思っているわ」
「分かった。なら、もう言う事はないだろう」
俺は頷くと、そっと春っちに顔を近づける。
覚悟は常にするべきだ。まして今回は、もっとするべきだと言っていい。
だからこそ、何時死んでもいいぐらいの覚悟を決めるべきだろう。
そう思うと、つい動いていた。
春っちは一瞬きょとんとするけど、俺の気持ちが分かったのだろ

う。そっと目を閉じるとつま先を立てて応じてくれる。
……唇を、五秒ほど触れ合わせた。
「お互い、胸を張れるように頑張ろうか」
「ええ、生きて帰ったら師匠に胸を張って報告しましょう」
さて、行くか！

黙示覚醒編　第十二話　強襲作戦、開始します！

和地Ｓｉｄｅ

冥界の地方都市。その戦いは、俺達が転移した時点で激しい戦いになっていた。
邪龍達がそこかしこに飛び交って、それを打ち落とすＤ×Ｄメンバー。明らかに派手な戦いになっていることは間違いない。
それはともかく、だ。
ミザリやリゼヴィムは、これが陽動だとは読んでいるだろう。だからこそ、まだ主力は動いていなさそうだ。
……さて、ここからは本気で冷静かつ瞬間的に動かないとな。
ミザリが出てこないことを祈ろう。出てきたら、流石に冷静でいられる自信がない。
「カズ君、大丈夫？」
少し気が張っていたのだろう。リヴァ先生が俺をちらりと見て、心配そうな声で脇腹をついてきた。
変な声が出そうになった。気を紛らわすにしても、もうちょっとなんかなかったのか。
流石にちょっとジト目になるけど、リヴァ先生は微笑みながら俺の肩を叩く。
「カズヒ（ボス）が世話になったお礼参りは、私達だってやりたいんだからね？　暴走はしないと思うけど、取り分をきちんと残すぐらいでヨ・ロ・シ・ク」
……そうだな。
カズヒねぇがあんなことになって、憤っているのは事実だ。だけど俺だけが憤っているわけではない。分っているつもりだったが、ちゃんと周りから何人も言ってくれると意識も変わる。

うっかり一人で突出しない方がいい。こういう時こそ、仲間を頼れる時は頼らないと。
「助かったよ、リヴァねぇ」
「……ほぁあああああ……っ」
あれ？　顔真っ赤？
「リヴァって、意外と撃たれ弱いわよね」
隣でちょっと呆れ顔になっている春っちの言葉に、リヴァ先生は我に返った。
あからさまに顔が赤くなっているな。思った以上に礼のつもりでリヴァねぇ呼びしたのが効いたらしい。
「当たらなければどうということはないのですよ!?」
「当たってるからどうということがあるわけね。ヴィール様が出るならやばいから、なるべく早く落ち着いてよね」
壮絶にテンパっているリヴァ先生にそう言ってから、春っちは呼吸を整えつつ周囲を警戒する。
そしてそれに合わせるように、邪龍達がこっちに気づいて仕掛けてきた。
……さて、どうやらここからが本番だな！

アザゼルＳｉｄｅ

Ｄ×Ｄのメンバーを転移させてから、俺も色々と動いていた。
王（キング）の駒について真相を明かす。これはどう考えてもヤバい事態に繋がるだろう。

少なくとも、現魔王政権が大きく揺れるのは間違いない。暴動の一つや二つは起きるだろうし、王の駒を使っていた連中が、社会的な信用が追い詰められて暴走する可能性だってある。
特に、大王派の主導を行っているバアル家が大変になるだろうな。そういう意味だとサイラオーグは送るに送れん。
だが、冥革連合の勢力圏内、それも放送局などがあることから拠点としての価値がある地方都市。そこにトライヘキサがいるのなら、戦力は必須だ。
だからこそ、俺達も急いで動いている。
アジュカの転移魔法は禁呪同然なので、人数は絞るしかないし連続も難しい。
その辺りの信用が置けるメンバーを、とにかく準備してからでないと俺も行くに行けやしねえ。
と、そんな時に通信が届いた。
……見た瞬間にげんなりするんだが。おいおい勘弁してくれよ。
「―なんだ？　フロンズ・フィーニクス」
なんでこんな時に、大王派の若き俊英が出てくるんだか。
『―お忙しい様子で申し訳ありません。ですが、至急お伝えするべき情報掴みまして』
……なんだ？
こいつがわざわざ、魔王派側の俺に空気を読まずに伝える情報だと？
非常に嫌な予感がするな。とりあえず聞いた方がよさそうだ。
「早く言え。俺は正直忙しい」
『では手短に。……王（キング）の駒について、とんでもない情報を掴んでしまいまして』
タイムリー過ぎな情報が出てきやがったなぁ、おい!?
「実はアジュカがとっくの昔に作ってて、大王派の爺共が悪用しまくり。レーティングゲームの不正も含めて、サーゼクス達でも崩すのが困難だったってか？」
『……何故そこまでご存じなのですか？』

どうやら、牽制とか探りとかじゃなさそうだな。
「ついさっき、アジュカに直接聞かされたんだよ。そっちは？」
『相手が身内であるからこそ、彼らが愚かなことをしていないかどうか探るべきでしょう？　内部監査は遅々たる速度で慎重に進めておりました』
なるほどな。
……フロンズは、断じて悪党ではない。そこは断言できる。
問題は悪党でないなら敵対しないなんて理屈が、世界に成立するほど甘くないことだがな。それが懸念事項なわけだが。
だが、こいつ自身は悪逆でもなければ腐敗もしていない。むしろ組織の維持の為には、そういった正しさを示す必要があると思っている。だからこそ、俺に接触を試みたのだろう。
「何が目的だ？」
『……今後の冥界を踏まえるのなら、この地雷はあまりに危険すぎます。またディハウザー・ベリアルの失踪と同じくして踏み込む隙ができた以上、彼が何かしらの悪影響を大王派や冥界にもたらす可能性もありまして』
俺が問い質すと、ため息をつきながらフロンズは首を横に振った。
『今後を踏まえれば何かしらの動きが必須ですが、事が事ですので一切関係ないが冥界に悪影響をもたらさない人物のお知恵と力をお借りしたく』
なるほど、な。
こういう事ができるのも、フロンズの厄介な点だ。
……ただ、ついてなかったな。
「なら、俺からアドバイスできるのはたった一つだ。……間に合わないから今からでもダメコンダメージコントロール：軍艦などでハッチを閉じるなど被害が広がることを抑えること。この場合は自分たちが潔白であることを示す動きを示すなどの準備しとけ」
『……やはり、彼は公表を試みているということですか。もしやクリフォト主導のアグレアス襲撃は、彼が手引きを？』
察しが早くて助かるぜ。利害が合わないと厄介だがな。

だが、この流れならフロンズは九割がたシロだ。一割捨てきれないのが厄介だが、事態が事態である以上仕方ない。リスク覚悟で動くしかないな。
フロンズもこの流れで、俺達を後ろから打つような真似はしないだろう。特に俺やリアスは味方につけるに越したことはないからな。
「フロンズ、信頼のおける連中を今すぐ集めろ。そして今している地点に、私兵を何人か送ってくれ」
『かしこまりました。即応部隊を派遣しますので、擁護意見程度は期待するとしましょう』
……さて、これで少しは状況も好転するといいんだがな。
こっからが、ガチでヤバい事態ではあるんだろうが……な。

和地Ｓｉｄｅ

「……とりあえず、オーフィスの礼はしない方がいいな、うん」
目の前で繰り広げられる圧倒的惨劇に、俺は一周回って同情心すら覚えていた。
オーフィス襲撃の実行犯である、ニーズホッグは確実に滅びるだろう。生存の可能性を悟れない。
何故なら、クロウ・クルワッハが猛攻を繰り広げているから。
相当怒っていたらしく、この思わぬ増援によりニーズホッグはもはや勝ち目がなさすぎる。大量に持ち込んでいたフェニックスの涙が凄い速度で消費していっている。
圧倒的とはこのことだ。とりあえず、敵の一角はこれで崩れただろう。

イッセーはヴァーリと一緒にリゼヴィムがいると思われるところに行っているが、とりあえずサポート担当を送った方がいいだろう。
いくら透過があるとはいえ、相手は神器無効化能力（セイクリッド・ギア・キャンセラー）だ。神器保有者が真っ向勝負する方がどうかしている。
どうせミザリも近くにいるだろうし、ここでまとめて叩き潰すというのも一つの手―

『へぇ～。いい感じに殺しがいのあるやつがいるじゃんか』

―その声に、俺は静かに振り返る。
……まったく。俺しかいない時に来るか、オイ。
そこに立っているのは一体のステラフレーム。意匠からみて間違いなくモデルバレット。
どことなく不機嫌そうなそれを前に、俺は一つ確認をとる。
「一つ聞くが、カズヒねぇをぶちのめしたのは誰だ？」
『私、誠にぃ、アルケード。あとモブで自我未覚醒体のステラフレームを十数体ってところだね』
なるほど、ありがたい。
どうも向こうも鬱憤が堪っているようだし、ここは公平に行こう。
「……勝った奴がストレス発散。手っ取り早くそれでいこうか！」
『……いいねぇっ♪　ついでにいたぶるけど我慢してよねぇっ!!』
その瞬間、俺達は激突した。

黙示覚醒編　第十三話　知らされる暗部

祐斗Ｓｉｄｅ

何時の間にか、九成君とモデルバレットが激突を開始してた。
クロウ・クルワッハの猛威に意識がそれていたね。すぐに援護をするぐらいでいかないと―
「っ!?」
―そう思った瞬間、冷たい気配を悟って瞬時に迎撃する。
龍騎士団を放っての迎撃に、打ち合いを返すは十数人の分身たち。
一瞬の交錯は互いを失わせることがなく、そのまま距離をとる形になる。
「なるほど。見違えたとはこのことか」
分身を控えて前に出るのは、冥革連合盟主、ヴィール・アガレス・サタン。
来る可能性は考慮していた。だけどすぐに出てくるとはね。
眉間にしわを寄せている彼に、僕は聖魔剣を構えて相対する。
「……不本意なようだね」
「そうだな。これで我らにとっての最善の敗北はなくなっただろうしな」
僕の言葉にそう返したヴィールは、その上で、戦意を満ち溢れさせて拳を構えていた。
「だが、何もかも思い通りにいくわけがない。もとより毒盃を飲む覚悟で禍（カオス・ブリゲート）の団と同盟を結んだのだからな」
そう告げる頃には、既に何人もの戦力がこちらに来ている。
……どうやら、シトリー眷属達が陽動だと見極めたうえで、彼らはこちらに戦力を割いていたようだね。
これが冥革連合（彼ら）との決着になるか。それはまだ分からない。

だけど、彼らを迎撃する必要はある。一騎当千の戦力すら多数擁する彼らは、放っておくだけでこちらの全滅に繋がりかねないのだから。
既に先行しているイッセー君とアーシアさん以外は僕達と並び立っている。
そして、そこには更に二人。
「……こっちでいいの？　和っちの方に行った方が―」
「そこはほらぁ、既に三人行ってるもの。先生、空気はちゃんと読んでるのよ？」
成田さんとリヴァさんはこちらについてくれるのか。
成田さんはヴィールとの因縁もあるから当然だろうけど、リヴァさんまで来てくれるとはね。モデルバレットに向かっている九成君のフォローに回るかと思ったので、ちょっと意外だ。
ただ、彼女の言い分も正論か。
見れば、すでに追随している三人が見える。
……あの三人が向かっているのなら、任せていいだろう。
少なくとも、僕達はこちらに集中するべきだ。なにせ、油断なんてできるわけがない精兵の集まりなのだから。
「……貴方には、サイラオーグとのゲームに水を差された借りがあったわね」
「あれでも気を遣ったのだがね。まぁ、テロリストの所業ではあるか」
リアス部長とヴィールは静かに言葉を交わし、そのうえで告げる。
「滅ぼしてあげるわ、覚悟して頂戴」
「来るがいい、出来るのなら止めん」
そして、激突が開始した。

和地Ｓｉｄｅ

戦闘が続く中、放送が開始されたのが聞こえる。
『ごきげんよう、冥界の皆さん。ディハウザー・ベリアルです』
止められなかったか。冥界が大変なことになるな。
だが、被害を抑える方法はある。
具体的には、便乗するだろう連中を一人でも多く削ることだ。
「覚悟してもらおうか、モデルバレット！」
『上等だよ！　カズヒの前にアンタの生首でも乗っけるかなぁ!!』
激突し攻防を繰り広げる俺達だが、やはりステラフレームは厄介だな。
単純な性能なら、神滅具再現能力を持つクソ親父の方が優秀だった。だが、技術まで含めた総合的な戦力としての完成度は。モデルバレットが数段上だ。
良くも悪くもクソ親父は、性能頼りのごり押しだった。だがモデルバレットは向上心を持つ。技量を高め、戦い方を磨き、相応の研鑽を積んでいる。
これがカズヒねぇの裏面といえる存在。良くも悪くも、カズヒねぇの影響を受けているからこそか……っ！
『私はこれから、皆さんにお伝えしなければならないことがある。……レーティングゲームの、闇についてだ』
やはり明かすか、ディハウザー・ベリアル。
俺は内心で舌打ちをし、そしてそれに感づいているモデルバレットは見るからにあざ笑う。
『いい感じだよねぇ？　お義父さんならノリノリで煽る火種ができてるし、この事実を知って悲しむ冥界で誠にいもウハウハだよねぇ？』
「だろうな。今後の仕事がごっそり増えそうだよ」
俺はさらりと流すと、意識をモデルバレットに集中する。
想定されていた流れだ。止めきれなかったのは残念だが、そうなる可能性は分かっていたんだ。そこからに視点を向けていたとも。

だからこそ、ここで動揺はしない。ことが起きることの方を重視し、俺はモデルバレットと相対する。
後顧の憂いを少しでも削る。俺がやるべきは……それだ。
「覚悟して、もらおうかっ!!」
『や～だよっとぉっ!!』
攻撃をぶつけ合い、凌ぎあい、捌きあう。
それを繰り返しながら、俺は同時に自分の中にある激情だって理解している。
嘘は一切言っていない。それも考慮して動いている。
ただ、それだけではない。
俺にだって激情の一つぐらいはあるんでな。それも吐き出させてもらうとも。
「惚れた女をあそこまでやられたうえ、従後の人間まで巻き込みやがって」
ああ、そうさ―
「都合のいい理由をわざわざ用意してくれたんだ。溜まりに溜まったこの欝憤、少しはぶつけさせてもらう!!」
―俺のメンタルにも限度ってものがあるんだよ!!
出しすぎて呑まれないように気は使いつつ、出せる分だけ激情を籠め、俺は猛攻を開始した。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

いくつもの箇所で激戦が繰り広げられる中、一対一での激戦を繰り広げる者達が駆け巡る。

涙換救済(タイタス・クロウ)、九成和地の猛攻。それを迎撃するは悪鬼伴侶(リリス)、モデルバレット。
間違いなく双方にとってのエース格である両者の戦闘は、生半可なものでは追随することすら困難。
そして、それを追いかける三人はそれゆえに苦労していた。
「ああもうっ！　和地ってば、割とキれてたし！」
南空鶴羽がぼやけば、先行する彼女を追いかける二人も同意する。
「当然と言えば当然よねぇ。カズヒがあそこまでやられているし、お二人も……だものぉ」
「分かるかな。……ちょっとだけの付き合いだけど、二人ともいい人だもん」
同情の色を濃くしながらも、リーネスもオトメも苦労していた。
当然の話だが、九成和地はD×Dのエース格である。
爆発力や殲滅性においては、兵藤一誠などのオフェンス陣には一歩劣る。だが星辰光(アステリズム)を中心とする卓越した防衛能力はD×Dでも最高峰。守勢においては、オカルト研究部に限定すれば右に出る者がいないまごうことなき傑物である。
そしてモデルバレットもまた、クリフォト主力たるステラフレーム。独自の星辰光と知性体故の衝動を持つ自我覚醒体であることも含め、圧倒的なポテンシャルを持つ精鋭の一角である。
両者の激突は、まさしくエース同時の一騎打ち。それが高速軌道で行われれば、雑兵の介入もあって追いかけるのも一苦労だ。
散発的に襲い掛かる邪龍達を迎撃しながら、鶴羽は表情に苦いものを混ぜ込んでいる。
「……リーネス。オトメの話をもとに、聖杯でデータをとったわ」
「ええ、私も魔術的に解析はしているわぁ」
投げかける鶴羽も、受け取るリーネスも、その表情にある種の憐憫を覗かせている。
その二人の表情を見て、オトメはしっかりと頷いた。
「ね？　言ったとおりでしょ？」
「「確かに」」

二人が同時に頷くということは、すなわちそういう事。
それぞれ別の形でモデルバレットを精査し直し、それゆえに結論は出たといっていい。
だから、こそ。
「ここで決着、つけた方がいいんでしょうね」
「そうねぇ。それぐらいは、カズヒの代わりに背負いましょう」
「……うん。親友、だもんね」
三人は共に、ここでモデルバレットを討つ決意を決める。
彼女の打倒は、カズヒに背負わせるばかりではない。そしてもちろんだが、和地に任せきるつもりもない。
何故なら、三人は全員が、カズヒ（道間）・シチャース（日美）チエ（子）の親友だから。
かつてはどうであれ、今はそうでありたいと願うから。彼女が背負う重荷の一つを、共に背負いたいと望むから。
そのカズヒが意図せず産んだ、闇の権化は討ち果たす。
「……問題はぁ、私とオトメは追いつけないことかしらねぇ」
「本当、それどうしよっか？」
ゆえにリーネスとオトメは現状に少し泣きたくなった。
現実問題、和地とモデルバレットは高速域で熾烈な争いを繰り広げている。
はっきり言って追いかけるのも一苦労。リーネスは本質的に研究畑であり、オトメはもともと戦闘など想定もしてない立場から急にここまで来た。鶴羽のサポートがあるからまだ見失ってないが、はっきり言って追いつくのがまず困難だ。
「……先に行っていいわよぉ、鶴羽ぁ」
「いやいや無理だから。私だけ行ってもダメでしょ、あれは」
リーネスの提案に手を振る鶴羽だが、現実問題追いかけるのも一苦労だ。
モデルバレットは引き離すように動いている以上、鶴羽が追い付いただけでは意味がない。むしろ二人が追い付くこともできなくなり、ややこしくなるのが目に見えている。
「うぅ、田知が、和地が立派になったのは嬉しいけどこれは大変かも。

……私半分ぐらいサーヴァントだけど、鍛えて意味あるのかな？」
遠い目になるオトメに、リーネスは少し苦笑する。
乙女は非常に特殊すぎる。はっきり言って前代未聞どころか空前絶後になりえる存在であり、何ができるのかも分からないといえる。二体の龍神から体を作った、兵藤一誠に匹敵する未知数の塊といえるだろう。
なので、そもそも強くなれるかどうかも分からない。そういう意味では不安と懸念を覚えても当然ではあった。
「そこは今後の検査待ちねぇ？　……まぁ、半分受肉しているから仕込みはできたけれどねぇ？」
その意味深な言葉に頷きながら、しかしオトメは少し焦燥をにじませる。
仕込みはした。だが、このままではそれを生かす余裕もない。
和地もある程度は理性的に動いているが、しかし激情を完全には殺せていない。出なければ、モデルバレットに注力しすぎないで立ち回ることもしているはずだ。
愛する女を無残な姿にされては当然。むしろ過剰な猛攻を仕掛けず、自分の強みと立ち回りをある程度は意識できている。十分すぎるほどクレバーに立ち回っているだろう。
だが同時に、自分が味方と連携することに意識が割かれていない。私情が多分に混ざった戦いだと自覚し、さらに難敵との戦いが多方面で続いているから当然だが、その半端な冷静さが自分に対する優先順位を下げさせる結果になっている。
今後を踏まえるなら、つけるべき決着ではあるだろう。だが同時に、和地にとってのそれをつける前に、オトメたちが告げるべき宣言もあるのだ。勝率が上がることにつながるのならなおさらだろう。
だからこそ、追い付きたい……が。
「あ、ヤバ!?　ギアが上がってる！」
鶴羽が思わず呻くほどに、それが困難になっている。
カズヒを挟む形で因縁がある双方が、その激突で更に互いを向上させる結果に繋がっている。

如何に鶴羽が英霊の力を複数行使できようと、リーネスとオトメを連れて行くという条件付きでは困難が高まる。
その事実に三人が歯噛みした、その時だった。
「……では、露払いを引き受けましょう」
「な、それぐらいはさせてもらうしぃ？」
その瞬間、横合いから量産型邪龍達に猛攻が放たれる。
それに対して面食らいそうになる三人に、接近する二人の影。
片方は人間、もう片方は死徒。
その組み合わせ以上に、死徒の方に強い違和感を感じたリーネスはそれをすぐに悟った。
「……ベースが、悪魔……？」
死徒とはそのほとんどが人間をベースとしている。これは基本として人間の数が圧倒的に多いこともあるが、そもそも他種族が死徒化するメリットが少ない点も大きい。
ほとんどの異形は人間を超える不老長命。加えて、死徒のそれは吸血を必須とする都合上、デメリットやリスクを背負う。まして寿命による悪魔は寿命による死がまずないこともあり、死徒になるのは割に合わないといっていい。
そんな悪魔という種族が、わざわざ死徒になる。その事実に、違和感を強く感じるのは当然だろう。
だが、それについて聞いている暇は欠片もない。
「ほら行きな！　こっからはこっちも援護するからさ！」
「アザゼル元総督の要請により、我ら道間家及び後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）、援護をさせていただきます」
かなり不穏な予感を感じさせるが、しかしアザゼルの判断なら信用の余地はある。
同時に、その二人はこちらに対して含むところのあるような視線を向けていた。
だからこそ、判断は一瞬。
「分かった、任せたわよ！」
実戦慣れしている鶴羽は一瞬で判断。この好機を逃すことなく、和

地の追跡に専念する。
素早く二人の手を掴み、そして遠慮なく全力で走り出す。
「え、ちょ……きゃぁあああっ!?」
「わわわわわっ!?」
そしてそれを見送りながら、人と死徒は互いを見合わせると肩をすくめあった。
「お互い様だとは思いますが、面倒くさいやり方ではありますね」
「……そっちの方が大変じゃん。返す相手は今一人もいないしさ」
言葉を交わし、そして瞬時に行動を開始する。
「じゃ、仕事は済ませて筋も通すと」
「そういう事でいきましょうか」
そして、戦闘は更に激化した。

黙示覚醒編　第十四話　冥革激戦

祐斗Ｓｉｄｅ

『……レーティングゲームが始まって以降、冥界には新しい風が吹いていたと思っていました。内乱において頭角を現した、現四大魔王及び、サーゼクス様の妻でもある女王（クイーン）のグレイフィア様。それに続くように、私のような魔王クラスとされるものが台頭した』

皇帝（エンペラー）の演説のような放送が続く中、僕達は冥革連合と激戦を繰り広げていた。

だが、情勢は苦しいというほかない。

『『『『『『『『『『血脈、覚醒っ!!』』』』』』』』』』

その言葉と共に、冥革連合の上級悪魔達は神聖血脈を使用する。

神の子が処刑の際に流した血に由来する神滅具（ロンギヌス）、鮮血の聖別洗礼（バプテスマ・ブラッド）。

自分自身を聖なる存在へと強化し、禁手とは異なる別種の異能たる神聖血脈を発動させる。自己の強化に特化した、強化の神滅具。その亜種禁手として、ヴィールは神聖血脈の素質を他者に与える洗礼（バプテマス・ブラッド・ファミリア）の血統秘術。

はっきり言えば極めて危険だ。例えるなら、ヴィールは配下に、準神滅具クラスの力を与えているようなものだ。更に彼らは、その多くが王（キング）や真（ディアボロス）魔（イーヴィル・ピース）の悪魔の駒で更に高めている。

心技体を高水準で高めた上級悪魔が、更に大幅な強化を獲得し、神滅具の半分を持っているようなものと考えればいい。いうなれば、最上級悪魔クラスが更に準神滅具を振るっているレベルだ。それが数十人もいる以上、間違いなく強敵というほかない。

だからこそ、猛攻は間違いなく脅威であり、同時に彼らはそこに慢心しない。

「そういうわけで！　覚悟してもらおうかなぁっ!!」

その一環として、僕が窮地に追い込まれる形で表れている。
……リアス・グレモリー眷属は誰もが優れている。だが同時に、男性陣がそれぞれ別の形で筆頭とみなされていることも事実だ。
歴代最優の赤龍帝とも称され、前代未聞の成長を遂げるトップエースのイッセー君。新規神滅具候補とも称されるバロールの力を振るい、上位神滅具や聖遺物系神滅具すら圧倒したギャスパー君はジョーカーに近い。そして神器こそ普通だけど、イレギュラーな禁手に至り魔帝剣グラムを筆頭とする魔剣を持つ僕もまた、裏エースといえるだろう。
だからこそ、相応の戦力で僕が狙われるのは当然。その結果が目の前に迫っている。
「さぁて、思う存分激突しましょうか！」
襲い掛かるは、ヴィール・アガレスの女王（クイーン）。名をクラウディーネ・ドゥルカンナイン。サーヴァントが受肉した存在だ。
アレクサンドロス・ロマンスという概念そのものが英霊となり、その生き様を全うした者を核として召喚されたサーヴァント。個人として歴史に名を残すことこそできなかったが、それでも二天龍の争いに割って入り打倒した存在だ。
油断などできない、ここで仕留める!!
「禁手化（バランス・ブレイク）！」
放たれる氷の戦士弾を、聖剣の龍騎士達で迎撃。それともない、魔帝剣を構えて突貫する。
魔帝剣の力はあえてフルにしない。それは本当に使うべきところのみであり、当たり前のように全力を振るおうとはしない。
同志達が望んだのは僕の未来。トスカも僕達の帰りを待っている。そして僕の持ち味は、魔帝剣の力ではなく剣を振るうテクニックとスピードだ。
それに至ったからだろう。総合的に動きのキレと、効率的な力の配分が上手くなった気がする。
心構え一つでどうにかなることばかりじゃないけど、心構えでどうにかできることは……ある！

「……ふうん。中々やるじゃない！」
氷の鎧に身を包んだクラウディーネは、よりによって氷で構成される二対の腕を盾と剣と化して凌いでくる。
長期戦だと物量さがモロに出るが、焦って力押しを挑んでも勝ち目は薄い。
冷静に。そして的確に。力の使いどころを見極める。
なにせ、相手はまだ禁手に至ってないんだからね。
「いいわ、アンタいいわよっ!!」
僕と攻防を繰り返す彼女は、見るからに高ぶっているのが分かる。
氷河を生み出し龍騎士をはじき、そして真っ向からグラムと接近戦を挑んでいく。
「いいわ！　ただの神器で神滅具に追いすがり、魔帝剣すら従える！　世界を震撼させれる存在だわ！」
「そんなものになる気はない！」
真っ向からの猛攻をしのぎながら、僕は反論する。
世界を震撼させる。確かに今の僕なら、小国を単独で相手取ることができるだろう。神や魔王にも一矢報いることはできると自負している。
だが、僕達は好き好んで世界を揺るがしたいわけじゃない。影響の大きな戦いをしてきたことは事実だが、しなくて済むならする気もない。
その意を込めた反論に、クラウディーネは知ったことかと反撃を返す。
「できる可能性が重要よ！　歴代の二天龍とも渡り合えるだろう存在、そういった奴らと戦いたくて私はマスターに仕えてるもの!!」
つばぜり合いになる中、クラウディーネは言い切った。
「四大魔王の目を殴りつけてでも覚ませ、しないようなら殺す気概。その気概にこそ私は契約を交わしてきた！」
「彼が参戦したという亜種聖杯戦争。……それで王の駒の真実を知ったのか？」
そこは疑問だった。

まず間違いなくヴィールは、王の駒について真実を知りえる立場でなかった。
正攻法で探れば、大王派の重鎮に気づかれて殺される。それを掻い潜るのみならず、冥革連合という組織を成すには亜種聖杯は必要不可欠。それにしても使い方が必要なほどだ。
だからこそ、可能性として最も高いのはクラウディーネと巡り合った亜種聖杯戦争だと、当たりはつけている。
だが、クラウディーネは小さく首を横に振る。
「いいえ。私がスカウトされたのは、王駒祭壇の製造と、スカウトを行う為の亜種聖杯戦争よ。……二番目、ってところね」
……なるほどね。
アジュカ様が「自分にしか作れない」と断言した王の駒。それを製造する方法を、亜種聖杯で確立したと踏んでいたが、当たりだったか。
「ちなみに！　一種の共感魔術で同調することでやってるそうよ？」
「ぺらぺらとしゃべってくれるね。アジュカ様が知れば対処なされると思うよ？」
つばぜり合いをしながら、僕達はそう言葉を交わす。
「既にマスターは、アジュカ様を殺す気だわ。死体を糧に王駒祭壇（ムロドーミーユ）を強化する贄にする気なの」
そう告げる彼女は、そのうえで獰猛な表情を見せる。
そしてヴィールの目的も危険だね。王の駒に関わる負の情報が出た以上、現政権で王の駒を普及させることは不可能に近いとみなしたか。
「そして超越者との闘いになれば、私も本懐を遂げれるわ。……だってアジュカ・ベルゼブブは、世界を揺るがすことが間違いなく可能だと証明されているもの」
確かにね。
王駒祭壇をもってして、冥革連合は禍の団の同盟組織として凄まじい組織となった。
その王駒祭壇以上の速度で王の駒や真魔の駒を製造できるアジュカ様は、間違いなく世界を揺るがせる存在だ。

そしてこれだけの事態となれば、現政権が王の駒を当たり前に使うのは不可能に近いだろう。冥革連合がそれによって現政権の打倒を選択するのは、想定できる範囲内だ。

ならば―

「そうはさせない。君はここで打倒するよ」

「―いいわぁ。そういった戦いがしたかったの」

―安い挑発だろうけど、どうせ本気でやるのなら仕方がない。

ここから、本腰の戦いに移るとしようか。

すでにクラウディーネは全身から冷気を巻き散らかし、至るつもりだ。

だからこそ、僕も覚悟を決めるとしよう。

「……禁手化（バランス・ブレイク）、永久に舞う氷河の双龍（アブソリュート・ジェミニ・ドラゴン）」

至った彼女が具現化させるのは、氷で構成される二頭の龍。

一体一体が下手な最上級悪魔を凌ぐだろう龍の一体に飛び乗り、クラウディーネは宣言する。

「我こそはライダーのサーヴァント、アレクサンドロス・ロマンス！

さあ、我が英雄譚の礎となるがいい!!」

いいだろう。

そちらが本気を出すというのなら、こちらも抜こう。

「覚悟してもらおう、クラウディーネ・ドゥルカンナイン。僕が君を打倒する！」

Other side

『……ただ、レーティングゲームで暫く経つと不愉快な噂を耳にした。ロイガンやビィディゼ、他のトッププレイヤーの何人もを含めて、本来そこまでの強さはなかったという、ね』

そう語るディハウザー・ベリアルの放送が流れる中、リアス・グレモリー眷属と冥革連合は激戦を繰り広げていた。

「アーメン！」

「なめるな！」

紫藤イリナが切り結び―

「……逃がさん！　例え神聖血脈と言えど！」

「チッ！　流石に天閃（ラビッドリィ）は速いか！」

ゼノヴィア・クァルタが高速戦闘を行い―

「……そこ」

「仙術はこういう時……っ」

塔城小猫が仙術による感知で敵の奇襲を察知する。

広義的なリアス・グレモリー眷属は、誰もが優れた戦士達だ。

冥革連合の若手上級悪魔は、誰もが己を鍛え上げた猛者達だ。

結果的に戦闘は拮抗し、互いに死者すら生まれない激戦となっていた。

裏を返せば膠着状態。またどちらも増援が派遣される余地がある。

ゆえに戦いは熾烈を極め、必然として苦戦は必須であり―

『そこをどけぇっ！』

「させるか！」

―最強格の戦いは、更に熾烈を極めている。

禁夜と真闇翳の朔獣（フォービドゥン・インヴェイド・バロール・ザ・ビースト）。新規神滅具候補とされるバロールの力を振るうは、リアス・グレモリーの僧侶（ビショップ）。名をギャスパー・ヴラディ。

蒼天鎧（ブルー・プロテクト・ブラック・ファング）と漆黒装。二つの具現を持つがゆえに上位とされるだろう神器神滅具候補を振るうは、ヴィール・アガレス・サタンの戦車（ルーク）。名を双竜健也（そうりゅうけんや）。

共に新たなる神殺しを持ち、共に変異（ミューテーション・ピース）の駒で至った転生悪魔。

この二人は、まさに総合性能においては双方の眷属におけるワイルドカード。圧倒的な力で単独の国落としすら狙える、神滅具の担い手らしい力の持ち主である。
停止の力と闇を操り、自らも至る獣で滅ぼしつくすギャスパー。二天龍のそれに匹敵する鎧ブループロテクトを纏い、戦闘端末ブラックファングを従える健也。
神聖血脈を会得し、純粋な魔力戦で並みの上級悪魔を打倒しうる健也。デイライトウォーカーの名門、ヴラディ家の出身たるギャスパー。
双方共に卓越した際を持ち、自己研鑽を尊ぶ主の元成長を続けてきた。
必然として、その戦いは互角と言っていい。
『……至ってないのにこの強さ……っ』
だが、ギャスパーはそれゆえに警戒する。
何故なら、双竜健也は至ってない。
ギャスパーの禁夜と真闇翳の朔獣は、禁手ともそうでないともいえる。これはギャスパーにバロール神の残滓が宿り、停止世界の邪眼が変化してしまったことに由来する。特殊な例なので、専門家であるアザゼルや当事者であるギャスパー・バロールでも理解しきれていないのだ。
それは裏を返せば、ギャスパーは既に至っているとも言え、そうでないともいえるあやふやな状態なのだ。
逆に双竜健也は至ってない。少なくとも、禁手を発動して攻撃を行っていない。
……この差は大きい。少なくとも、禁手という進化を秘めているというアドバンテージが存在する。
「そこまで臆することはないさ。恥ずかしながら、まだ至ってないんだよ」
そう返す健也に、しかしギャスパーは安堵などしない。
『つまり、追い込んだら化けるかもしれないってことじゃないか。厄介すぎるよ』

「……なんで土壇場になったら禁手に至るって前提なのかな？」
真顔のツッコミが来るが、ギャスパーからすれば驚くに値しない。
木場祐斗、兵藤一誠、九成和地。自分の尊敬する同性の先輩は、誰もが土壇場で至っている。生徒会の匙元士郎もそうだ。
そうでない形で至った者も数多いが、しかし至った者も数多い。その時点で、ギャスパーにとって禁手とは「窮地に追い込まれた時に至る余地がある」ものになっている。
これはあながち間違っていない。そもそも禁手とはそういう可能性が存在する。
英雄派がメソッドを確立したことで忘れられがちだが、禁手とは神器を高めたうえで「世界の均衡すら崩す意思」を持つ者が至るとされている。実際、四人は多かれ少なかれ該当している。
そしてそういった精神状態は、極限状態で至りやすい。戦闘という命を懸けあう激突は、まさに極限状態の典型例だ。
ならば至るだろう。その可能性があるだけで十分だ。
その事実をもって、ギャスパーは己を奮い立たせる。
『だからこそ負けない！　僕はリアス部長の眷属で、イッセー先輩と同じオカルト研究部男子なんだから！』
「……よく分からないけど、そのいきやよし！　主の敵に相応しい！」
直後、双方ともに全力の力をもって激突は再開した。

『―私はそれを、嫉妬から生まれたゴシップだと笑っていた。だが妹のように思っていた従姉妹（いとこ）のクレーリアは、その邪推に私が含まれることを不快に思っていた』
「……彼の立ち位置は理解できるが、出来ることならこのような告発は避けてほしかったな」
ディハウザーの放送を聞きながら、ヴィール・アガレス・サタンはそう嘆息する。

声色からも表情からも複雑さが見える。私人としてはある程度支持したいがそうもいかず、公人としては到底納得できない。そんな感情だ。

「同様のケースを悟ったうえで、それすら闇に葬れる一手を打った者としてはそうでしょうね」

リアスはそう納得しながら、しかし許せぬ思いを視線に込める。

『……不幸なことに、彼女が当時任されていた土地は、すぐ近くにアジュカ・ベルゼブブ様の隠れ家があった。……さらに間の悪いことに、クレーリアは和平が結ばれるより何年も前だったその時期に、教会の者と心を通じ併せてしまったのだ。』

ディハウザーが語る内容はよく知っている。その土地は今自分が管理をしており、そしてつい先日にそれに連なる一件と関わったのだ。

それに伴い、初代バアルであるゼクラム・バアルから事情を教えられた。当時は到底容認できない、信徒との本気の恋愛がきっかけで討伐されてしまったのだと。

だが、カズヒはその時「初代バアルが出張るという事実による、深入りを戒める牽制球」といった趣旨の推測を見せていた。

まさにその通り。その裏には到底納得できない事実が隠れていた。

『……結論から言いますが、従妹（いもうと）は殺されました。魔王様が預かり知らぬところで、古い悪魔によってね。私は理由のごまかされたその死にどうしても納得ができず、旧魔王血族の手を取ってでもそれを調べ上げ……彼女が氷山の一角に過ぎないことを知った』

目が座っていると言ってもいいディハウザーは、一つの駒を見せつける。

『結論から言いましょう。王（キング）の駒を始めて創ったのは冥革連合ではない。それはアジュカ様が作り上げながらも危険と悟り封じたもので、古い悪魔達はそれを利用してきた。私が映像に映し出している者は、古い悪魔達の手を取って王の駒を手にした者達です』

映し出される映像は、リアスも既に確認してきた者達。

王の駒を利用してゲームをのし上がった、純血悪魔の実力者とされ

る者達だ。
　その映像を横目で見ながら、ヴィールは残念という感情をこれでもかと浮かべている。
「……これで、こちらの努力は水の泡だ。王の駒、そしてその発展形である真魔の駒さえ普及すれば、冥界は他種族に頼ることなく富国強兵を実現できたろうに」
「ある意味ではその通りでしょう。こと貴方からすれば、納得できないことはあるものね」
　ヴィールがそういう感想を抱くことだけを、リアスは肯定した。
　彼はそういう人物だ。自分でも異常であることを自覚するほどに、自己を磨き続ける為に心血を注がずにはいられない。そしてその手段に、強化改造を含めることも躊躇しない。
　だからこその冥革連合だ。王の駒という、もはや現政権では明かすに明かせない負の側面を持つ力を、自分達が開発したことにする。そのうえで発展形や別方向の成果すらばら撒き、それを使って相手に使わせることを強要する。
　自分達が倒してしまうのなら、その勢いで冥界を統治して王の駒を利用した富国強兵を成す。現政権がこれ幸いと冥革連合に様々なものを押し付け、富国強兵を果たして自分達を打倒するなら万々歳。そういう、どちらに転んでも悪魔の富国強兵を成す計画だ。
　例えるなら、ウルバヌス二世のやったことに近いだろう。リアスはふとそう思う。
　彼は自分を旗頭にして、教会に関与する形で反乱を起こしかねない者を集め、一網打尽にさせる計画を立てた。それはやり方こそ肯定できないが、教会の未来をよりよくする為の綱紀粛正といえるだろう。
　もしかすると、ウルバヌスは冥革連合の行動を悟って計画を修正したのかもしれない。
　それを悟ったうえで、リアスは鋭い表情を向けながら魔力を籠める。
「だけどその必要はないわ。冥界は貴方の望む形とは異なる方向で成長して行っている。……余計なお世話よ、消えなさい」

その決意に、ヴィールは小さく頷きながらも拳を構える。
「ならば示して見せるがいい。負けてやる気は欠片もないぞ？」
その瞬間、更なる激闘の幕が開ける。

黙示覚醒編　第十五話　灼熱突貫・淑女変身

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

『……調べれば調べるほど、嘆き悲しくなるほどにゲームには不正がまみれていた。お家事情で勝ちを譲る試合があることは常々問題視されていたが、彼らの介入があるゲームはその比ではない』

そう首を横に振るディハウザーの言葉を聞き流しながら、成田春奈は戦場を掛ける。

乱戦の様相を見せてきた戦いで、春奈は炎を振るって戦闘を繰り広げる。

「どうした成田！　ヴィール様が認めたその覚悟は、この程度で終わるのか！」

「まさか！　こっちはこっちでやることが多いんです！」

放たれる攻撃は叱咤激励。冥革連合の一員たる敵の攻撃は、だがただの廃絶ではない。

すべては盟主の意思。誰よりも己を苛め抜かずにはいられない、ヴィール・アガレス・サタンが見出した魂の炎。彼女が自らの根幹を取り戻し、今ここに敵対してでもそれを選んだことこそ、主が誇る眷属の姿。それを尊ぶことができずして、誰が冥革連合を名乗れるか。

ゆえに、それを示して見せろ。ヴィール・アガレス・サタンが自ら出てきた戦場で、無様をさらすなどもってのほかだ。

その叱咤激励に心から感謝し、春奈は拳を握り締める。

「突破します……赤き爆炎の豪雨（スコール・オブ・ファイヤ）ッ！」

全霊を持って放つ、火球の嵐。

赤き炎の腕（アーム・ファイヤ）の亜種禁手。その圧倒的弾幕により、仕掛けてきた貴族の攻撃に乱れを生む。

そしてその隙は逃さない。

「血脈覚醒、そして……赤き熱風の飛翔(スラスト・オブ・ファイヤ)!!」
再生能力たる神聖血脈、不崩壊之主柱(こわれずのみはしら)で乱れた弾幕を強引に突っ切り、さらに推進力を獲得する亜種禁手である赤き熱風の飛翔(スラスト・オブ・ファイヤ)でそのまま引きはがす。
「ヴィール様を優先させてもらいます！」
「……見事だ！　そのまま恥じない姿を見せるといい!!」
激励すらその背に受け、春奈は一気に飛翔する。
見えるのは、消滅の魔力を拳で弾き飛ばし、リアス・グレモリーに迫るヴィール・アガレス・サタン。
その姿を視界に捉え、春奈は一気に仕掛ける。
「……撃ち貫け、赤き爆熱の砲撃(ブラスト・オブ・ファイヤ)アッ!!」
放つは、圧縮火焔砲撃、赤き爆熱の砲撃(ブラスト・オブ・ファイヤ)。
それだけで最上級悪魔の領域に迫る砲撃を、まだ反応が追い付かないその瞬間に叩き込む。
むろん、その程度でやられるヴィールではない。そんなことは当然分かっている。
気づいた瞬間に、リアスに対する警戒を割いたまま蹴り砕く。瞬間の判断で瞬時に成し遂げるその攻撃に、春奈は驚愕など覚えない。
むしろこれを喰らったら驚きだ。ヴィール・アガレス・サタンは常に成長し続けることしかできない男。かつて食らいつけた時より遥かに成長していなければおかしいのだ。
だから、こそ。
「赤き灼熱の魔剣(ブレイド・オブ・ファイヤ)！」
その加速のまま、二撃目に映る。
片手を起点とするバーナーブレイド。基点となる赤き炎の腕統合支配能力、赤き紅炎の支配者(ルーラー・オブ・ファイヤ)による統合強化もあり、切れ味だけならノートゥングに匹敵する斬撃が放たれる。
それすら一瞬で見切って回避されるが、しかしそこで終わるわけがない。
次の瞬間、バーナーブレイドの先端を起点に、半径１０Ｍが炎に包まれる。

「リアスさん！　魔星を作れるだけ作ってください！　時間稼ぎます！」
瞬時に両手を起点にする赤き火炎（ジェミニ・オブ・ファイヤ）の双腕を発動させ、春奈は時間稼ぎを宣言する。
「なるほど。周囲の妨害を赤き熱波（ラウンド・オブ・ファイヤ）の城塞で阻害し、大技を使わせる札か」
ヴィールはすべてを悟り、そのうえで微笑みすら浮かべる。
「鈍ってはいないようで何よりだ。だが、そう簡単にやられてやる気はないぞ？」
「もちろんです、死力を絞りつくします!!」
長い言葉はいらない。
拳で語るができるのが、ヴィール・アガレス・サタン眷属の武闘派だ。
「……五分頂戴、それで作るわ」
「十分稼ぎますとも!!」
応える言葉と決意に、それ以上のそれをもって受け取らんとする。
今ここに、主従の戦いが再び始まった。

和地Ｓｉｄｅ

振るわれる猛攻をしのぎながら、俺は正直焦り始めている。
……冥革連合が思った以上に多い。まさかと思うが、ここが本部だったのか？
いや、リゼヴィムとの間で話が済んでいたから、こっちに人数が集まっていたと考えるべきか。本拠地とだとするなら逆に少ない方だ

ろう。
とはいえ、このままだとこちらが不利か。
どちらにしても、俺はここでモデルバレットをどうにかするべき。分かってはいるが、ヴィールが出てくる可能性を考えると時間は掛けれない。
だが―
『ソラソラソラファッ!!』
―モデルバレットはやはり強敵だ。
元々カズヒねぇの裏面だからこそ、戦闘技術はそこから影響を受けている。結論として、技術がある所為でステラフレームではかなり難敵だ。
一瞬でも距離が空いたと思ったら、迫撃砲や弾幕で牽制して接近戦。そして接近戦ではこちらの動きを巧みに崩して一撃を狙ってくる。
カズヒねぇとの模擬戦などが無ければ、骨が数本折れているだろう。そしてそれは、星辰奏者（エスペラント）の回復力をもってしても押し切られる隙になる。
つまり、状況はかなり不利だ。
気づけば相手は、聖魔剣を創造してこっちに接近戦を仕掛けてくる。
ラージフレームによる大型ユニットで、特殊能力無しで聖魔剣を作っているようだ。単純な剣としてなら量産型の聖魔剣より少し上だろう。真っ向からの打ち合いでは不利だってのがきつい。
上手く流してしのいでいるが、モデルバレットの方が余裕があるだろう。
至近距離から内臓武装による射撃戦も踏まえているが、このままだとこっちが先に削られるか？
『ったく。カズヒもなんであんたを選んだんだろうねぇ？』
「そりゃどうも。ミザリ（あれ）を選ぶメンタルのアンタとは合わないだろうがな」
安い挑発に乗る気はないが、モデルバレットは挑発するのが楽しい

のか、特に意にも介さない。
『っていうかさ？　邪悪でいいじゃん、虐げようよ。だって楽しいでしょお？』
　その言い様に神経が逆立つのを抑えようと思うより、違和感をふと覚えた。
『楽しいよ？　相手を踏みにじるのも悪党でい続けるのも。その方が誠にいと一緒に生きていけるのに、なんで投げ捨ててあんたを選ぶのかなぁ？』
　なんだ、この違和感。
　思えば、何かが決定的におかしい。
　……その時、俺はそもそもの思い違いにふと気づいた。
　―あれ？　なんか変なことになってるな？
　あの時、ミザリは確かにそう言った。
　違和感とその言葉が結び付き、俺に確信に近い疑念を抱かせる。
「……お前、本当に道間日美子か？」
　その言葉に、モデルバレットは動きを一瞬だけ止めた。
　その瞬間に防護の体制を整えるが、その瞬間だった。
『……アンタもかぁあああああああっ！』
　振るわれる打撃は、衝撃が増幅される。
　弾き飛ばされた。間違いなく今までの流れから言って、弾幕が―
『なんで、あいつだ！　どいつもこいつも!!』
　―来ると思った時、突貫してモデルバレットは拳を放つ。
　完全にキレている。だからこそ凌げたが、これは別の意味でまずい。
　元々、第一世代型人造惑星は衝動をもってして星を制御する。加えて魔星は兵器である都合上、雑に使っても強い。とどめにカズヒねぇの影響もあってか、小手先の技術を無意識で放てるだけの技術がモデルバレットにある。
　つまり、これは反撃を入れる機会がない。
「こ、の……っ」
　何とかしのぐが、激情に呑まれても体に染みついた技術が消えない

為、半端な手法では突破ができない。
まずい、この……ままだと……っ。
『殺す殺す殺す殺す！　お前の首を手土産に、今度こそカズヒを殺してやるっ!!』
ガード越しに俺を蹴り飛ばし、モデルバレットは更に追撃を行う。
構える腕の動きから、おそらく奴の狙いはパイルバンク。
モデルベルゼビュートがアジュカ様に対して行った、バーナーカッターによる刺突。超高圧のそれは下手な異能を超える貫通力を発揮し、超越者にすら負傷を負わせた。
もろに食らえば、やられ―

「……オイコラ。人の男に何してんのよ」
『ＭＡＧＩＣ　ＪＵＭＰ』
「させないわよぉ、いや本当に」
『ＳＩＮＮＩＮＧ　ＪＵＭＰ』
その瞬間、左右からの蹴りがモデルバレットに叩き込まれる。
『コーリングチェインスマッシュ！』
『シャイニングレインラッシュ！』
弾き飛ばされるモデルバレットは、しかしガードを間に合わせていた。
素早く着地すると共に、乱入者を睨み付ける。
『……またなの!?　しつこいのよ、七緒にアイネスッ!!』
吠えるモデルバレットに、既にそれぞれ仮面ライダーファストと仮面ライダーアイネスに変身した、鶴羽とリーネスが構えで応じる。
「悪いわね。カズヒがやられた分、イラついてるのはこっちもなのよ」
「第一和地を狙うっていうならぁ、容赦する理由もないわねぇ」
「……わぁい。美人さんに助けられるってちょっとテンション上がりそう」

思わず軽口を叩きながら、俺は体の調子を素早く確認。
とりあえず戦闘は問題ない。今のでちょっとだけだが小休止もできた。
なら、更に気合を入れるべきだろうさ。
そう思って立ち上がろうとした、その時だった。
「……そう。カズヒが背負っているものは、私達だって背負いたいの」
『バヨネットライザー』
その声と音声に、俺は勢いよく振り向いた。
「今度こそ、今度こそ日美子（カズヒ）のことを大事だって、心の底から言いたいから」
『ＳＥＣＯＮＤ　ＪＵＭＰ』
試作型とされていたバヨネットライザー。それを腰に装着し、彼女はプログライズキーを起動させる。
「だからこそ、ここで私達が貴女を倒す」
『Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』
白い髪をなびかせ、強い意志を込めて。
「……変身！」
『バヨネットライズ』
―道間乙女から変身した、九成オトメは仮面ライダーとなった。
『ウィッシングホッパー！　Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｉｓ　ｓａｖｅ　ｏｆ　ｆｒｉｅｎｄ』
「……お袋、マジでか？」
俺が思わず驚いていると、仮面ライダーになったお袋は苦笑している雰囲気だった。
「驚かせて、ゴメンね？　できればもっと練習してからがよかったけど、そうも言ってられないから」
そう告げ、そして九成オトメは俺と並び立つ。
「手伝って。私達で、カズヒの負担を一つ減らそう？」
「おいおい。どっちかっていえば俺が手伝ってほしいぐらいだけどな？」
そう返し、俺は素早くパラディンドッグを装填する。

色々あるが、ここで出し惜しみをしている暇はないだろう。
まずモデルバレットを潰す。話はそこからにするべきだ。
「覚悟はいいか、モデルバレット」
俺は再変身を試みながら、仮面ライダーマクシミリアンとして告げる。
「あんたとの因縁もここまでってことよ！」
鶴羽は聖十字架の槍を突き付け、仮面ライダーファストとして宣言する。
「そろそろ種も見たしねぇ？　いい加減に終わらせましょうかぁ？」
リーネスは油断なく解析を続けながら、仮面ライダーアイネスとしてそう断言する。
そしてお袋は、静かに瞑目をしていたらしい。
そのうえで、真っ直ぐにモデルバレットを睨み付ける。
「……覚悟して。貴女はこの、仮面ライダーベアトリーチェが……皆と一緒に、倒すから!!」
ここに、九成オトメが変身する仮面ライダーベアトリーチェが吠える。
モデルバレット。自我覚醒体ステラフレームの一角。
その因縁を、ここで清算すると。
『……あぁハイハイ。どいつもこいつも憎たらしい……っ』
そして、モデルバレットは怨恨をむき出しにして突貫する。
『全員まとめて、皆殺しだよぉっ!!』
ここに、一つの因縁の最終決戦が始まった。

黙示覚醒編　第十六話　密やかに立ち込める暗雲

イッセーＳｉｄｅ

「……リゼヴィムッ!!」
「やっほードラゴン君。君達には本当にお世話になったねぇ？」
俺の両親を結界で囲みながら、リゼヴィムはディハウザーさんがいる放送スタジオに入ってきた。
なんか雰囲気が違うな。目の下に隈が見えるんだが。
俺が少しいぶかし気にしていると、リゼヴィムは視線に気づいたのか肩をすくめる。
「あ、気づいたぁ？　実は天界から帰った後、オタクんとこのファーブニルが、連日連夜呪ってきてさぁ～？」
苦笑いしながら肩をすくめるけど、マジか。
ファーブニルの奴は、あれから全然起きなかった。ただオーフィスやクロウ・クルワッハが、意味深なことを言っていたのが気になってた。
つまり、そういう事だったのか。
リゼヴィムが目に隈を作るほどのことだってことか。やるじゃねえか、ファーブニル!!
リゼヴィムもかなり喰らってたのか、うんざりしている様子だった。
「俺ってば神器が無条件で効かないからさぁ？　ミザリ君達もカバーしきれなくってねぇ？」
『なるほどな。その鬱憤晴らし……もしくは、オーフィスの力でリリスを強化しての解決が、あの強硬策というわけか』
リゼヴィムの言い分に、ドライグが納得している。

そっか。リゼヴィムの神器無効化能力（セイクリッド・ギア・キャンセラー）は、任意じゃなくて常時だからミザリの援護も受けられないのか。だからあそこまでキてると。
ただ、リゼヴィムはどこかスッキリとしている様子でもあった。
「ま！　アルバート君が科学的な魔法演算機構を用意することで何とか寝れたんだけどね！　精神の解体清掃も最終手段でかけてもらったんで、メンタルだけなら完・全・回・復！」
いつものように苛立たせる表情で、リゼヴィムの奴はそう言い放つ。
アルバート、ミザリ配下のサーヴァントで科学技術担当だったな。
野郎、余計なことしやがって。そのまま倒れるまでほっとけよ！
『とはいえ、長期間に亘り睡眠に問題があったのなら付け入る隙はあるのでしょう？』
苛立つ俺を宥める様に、シャルロットが聞こえるように声を放つ。
……そうだな。どっちにしてもリゼヴィムは本調子じゃないだろう。そこまでファーブニルがやってくれたのなら、あとは俺達の仕事だ。
透過を使えば、俺はリゼヴィムに一撃を当てられる。ヴァーリだって、対リゼヴィムの備えをしていたはずだ。
だから、こそ。
「決めるぞヴァーリ、二対一でぶっ潰す！」
「俺は一人で決着をつけたいが……まぁいい、家族は君が持つ逆鱗の一つだしね」
納得してくれてありがとうよ。
ただ、問題は―
「う～ん、俺はどっちでもいいけど、ディハウザー君が手隙になるのはあれだしなぁ？」
「……」
ディハウザーさんは、瞑目した状態で動かない。
クレーリア・ベリアルの事件を理由に、彼はここまでのことをした。
王の駒の真相とそれによる不正、そしてレーティングゲームの腐敗した実情。その全てを告発したことで、冥界は大きく揺れる。

間違いなく、ただでは済まない。暴動で済めばいいけど、最悪内乱が起きるかもしれない。
ただ、明らかに迷いがあるのが見て取れる。
できれば何もさせたくない。ただ、リゼヴィムがここで何もさせないとは思えないし―
『……では、彼は私が相手をしましょう』
―そう思っていると、シャルロットが俺から離れて鎧を纏う。
……効率で考えるなら、二人で別々にやる方が有効ではある。俺達の星辰光（アステリズム）は、その形こそが真価を発揮できる。
ただ同時に、三位一体の時よりは俺のポテンシャルは下がるんだ。そう、俺単体で言うなら七割ぐらいになる。
この三割が結構デカい。強敵を相手にする時は、三位一体で一点突破する形にした方が効率がいい時は多いんだ。
だけど、ディハウザーさんを無視するわけにもいかない。当然だけど、リゼヴィムも叩き潰す必要もある。
つまり―
「ヴァーリ、オフェンスは任せる。俺は今回サポートだ」
「透過を見せ札に牽制を行うわけか。いいだろう」
―ヴァーリのリゼヴィム対策が頼みの綱だ。
「ふっふ～ん。なら、俺も本気でいこうかねぇ？」
『ＲＯＭＡＮ』
『ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＭＡＲＩＣＥ』
二つのプログライズキーを、リゼヴィムはザイアサウザンドライバーに装填する。
「変っ身！」
『パーフェクトライズ』
ライダモデルを浮かべながら、リゼヴィムは悪に満ちた笑みを浮かべる。
「仮面～ラーイダ～」
『Ｗｈｅｎ　ｔｈｒ　ｅｖｉｌ　ｄｉｖｅｌ　ｓｔａｒｔｉｎｇ　ｄｒｅａｍ．　Ｔｈｅ　ｅｖｉｌ　ｋｉｎｇ　ＴＨＯＵＺＡＩＡＲＥ

ｉｓ　ｂｏｒｎ』
「サウザイア～……」
『Ｐｒｅｓｅｎｔｅｄ　ｂｙ　Ｋｅｌｉｐａｔ』
「……リリン！　参っ上!!」
むかつくぐらい楽しそうに、リゼヴィムはサウザイアー・リリンに変身しやがった。
「ぶっちゃけ一月ぐらいいっぱいいっぱいでねぇ？　憂さ晴らしがしたくて堪んないんだよぉ、ＯＫ？」
見るからに暴れたがっている雰囲気を纏って、リゼヴィムは俺達に敵意を突き付ける。
「……じゃぁ、最終決戦としゃれこもうか！　お前らの最後だがなぁあああああっ!!」
上等だ。
俺とヴァーリは、拳を握り締めて突撃してくるリゼヴィムは迎え撃つ。
「最後は貴様の方だ」
「終わらせるぜ、リゼヴィム!!」

アザゼルＳｉｄｅ

俺は転移前に、念の為の話を進めていた。
「ミカエル。万が一の件だが、そっちのメンバーは選抜できたのか？」
その辺りを確認すると、通信越しのミカエルはしっかりと頷いた。
『ええ。四大天使からガブリエルを残します。そのうえで、私達はＡ（エース）

を彼女に補佐としてつける予定です』
なるほどな。ま、妥当な塩梅だ。
イリナがそっちなのもいい事だろ。ガブリエルのQ(クイーン)なグリゼルダも含めて、イッセー達にはいいことだろう。
逆に堕天使側(こっち)はその辺りを考え中だ。ま、候補は見繕っているがな。
「ま、筆頭のうち一人は残すべきだしな。おそらくサーゼクス達はアジュカだろう」
『残り三人の代わりも務めねばならない以上、能力的に彼が適任ですか。もっともセラフォルーのアイドル的人気は難しいですが―』
「おっぱいドラゴンがいるなら、それは何とかなるだろうさ」
真面目な話、誰か一人を残すのなら奴が最適だしな。
なにせできることが多すぎる。ぶっちゃければ四大魔王で他の奴に代役を立てれるなら、アジュカが最適だ。
しいて言うならセラフォルーのポジションは難しいが、そこはみんな大好きおっぱいドラゴンがいるなら何とかなる。
色々と面倒な不発弾が爆発しているが、それを踏まえても奴ぐらいしか適任がいないしな。
「大王派が色々動きそうだが、流石のゼクラム・バアルやフロンズの奴も、当面は火消しと立て直しで手いっぱいだろうしな」
そこだけは本当に不穏だが、そういう意味でも不発弾の爆発が助かった。
王の駒を作ったのはアジュカだが、ゲームの不正込みで悪用したのは大王派だ。しかも冥界で大人気の皇帝(エンペラー)ベリアルがそれを糾弾。奴の妹分を含めたいくつもの暗殺まで公表されれば、大王派は重症を通り越して重体だ。
ゼクラム・バアルが老獪だろうと、こんな爆弾が爆発すればただでは済まない。一歩間違えれば致命的な内乱になりえるからサーゼクス達も手を出しあぐねていたが、旧魔王派がテロで堂々と敵対し、更に魔王派に各勢力が同調してくれる流れなら切り崩せる。奴も負傷を避けることが限界だろう。

そしてフロンズもそこは安牌だ。この一件においては俺達と歩調を合わせる以上、奴も当面は魔王派に気を遣った対応をとるはずだ。奴は抜け目がないから油断できないが、油断しなければ変な攻勢には移らんだろう。

そういう意味なら、タイミングはある意味で好都合だ。

もちろん、トライヘキサなんて復活しないに越したことはない。封印が解除される前にどうにかできれば、そこからさらにロスヴァイセの封印術を上乗せすれば、あとは俺達が監視すればほぼ安全だ。

だが、封印が解除されるなら話は別だ。

最悪はシヴァの協力で叩き潰すが、それでも滅ぼすことは不可能だろう。何より、被害が甚大極まりないのが目に見えている。

だからこそ、最後の手段は必要だ。

……最大の懸念が、一つあるがな。

「ミカエル。ミザリはどう動くと思う？」

『……想定ができませんね。彼は目的理論が我々の想定を引き離しています。トライヘキサを利用して悲劇を広めるとは思いますが……』

そう、ミザリだけは厄介だ。

奴は思考回路こそ堅実に見えるが、目的があまりに異常すぎる為想定が難しい。

何をしでかすかが分からない。だが、最悪の場合はやるしかない。

一番ヤバいのを残すことになる。だが、万が一の時は頼むぜ、お前ら……っ

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……まさかこの場所をピンポイントで攻めるとはね。諜報部隊を舐めたらいけないよね」
「それにしても動きが速いな。俺達が来たのはつい先日だぞ？」
「そこは気になるね。アルケード、何か分かったかい？」
「まったく分からん。というよりだ、奴らは時々何をしてくるかが本当に分からないからな」
「……乳と麺で異次元じみた現象を巻き起こすからねぇ。性欲と食欲が力になってるし、この調子だと睡眠欲を司る龍が出てきそうだね」
「ミザリ、それは新しい天龍が誕生するという事か？」
「……ありえそうなのが怖いね。何かの偶然でも巻き込めば、あるいは？」
「俺が言っておいてなんだが、何が起きたらそうなるんだ？」
「……歴代二天龍のそれぞれの子孫が結婚して、ドラゴン系神器を宿した子供が生まれたら？」
「天文学的確率になりそうだが、本当に起きそうなのが酷いな」
「僕も大概なことをしているからねぇ。……これは、本当にプランを遂行した方がよさそうだね」
「慎重だな。今でも十分勝ち目があると思うぞ？」
「まだまださ。確かに弄奏（コレ）は強力だけど、やるならベストを目指すべきさ。……もしもし、アルバート？」
『どうした？　こっちはやはり手古摺っているが』
「やっぱりかい？　封印の解除は必要みたいだね」
『そうなるな。流石は聖書の神様だといったところか』
「分かったよ。とりあえず一旦避難しておいてくれ。……さて、アルケード」
「アルバートですら繋げることができないなら、確かにプラン遂行は必須か。……ステラフレームが追加で一体だな」
「あぁ……美（悲）しくて涙が出てきそうだよ……っ！」
「割と病気なようで何よりだ。とはいえ、警戒するべきは奴らの動向だな」

「……それだね。とりあえずプランについては、様子を窺っておきたいところだね」
「奴らも対策はしているだろうしな。……被害覚悟で総力で滅ぼすか、それともグレモリー眷属の論文を生かすか」
「そうだね。できれば―」

「―ロスヴァイセだっけ？　彼女の論文を生かして欲しいかな？」

黙示覚醒編　第十七話　冥革接戦

祐斗Ｓｉｄｅ

クラウディーネ・ドゥルカンナインの攻撃は、非常に激しい。
かつての二天龍の宿主が激突した際、割って入りそして打倒した女傑。その力が弱いわけがないと分かってはいた。
だからこそ、この苦戦は当然の結論だ。
氷で出来た二体の龍は、歴代二天龍の禁手でも楽には倒せない敵だ。これでは当時の宿主は苦戦するだろう。
そして、そこにクラウディーネの猛攻が迫る。
至ったことで本人の性能も一段向上しており、その猛攻はとても激しい。彼女が女王（クイーン）の駒で転生しているとはいえ、それを差し引いても凄まじい力の持ち主だ。
更に神聖血脈で具現化される氷の兵団。いうなれば、質と量の比率が異なる三つの力で攻撃を仕掛けているわけだ。
これに対し、僕は龍騎士を率いて何とかしのいでいる。
龍騎士団の多くをもって氷の兵団に対応し、魔剣を持った龍騎士達で氷の龍に相対。そして僕自身はクラウディーネと激突している。
不幸中の幸いは、クラウディーネは攻撃の起点を氷でなしているというその一点。ゆえに対氷の聖剣を創造することでしのげている。
だが、このままでは削り殺されるのはこちらの方だね。
「この程度？　違うでしょう？　もっと本気を見せてみなさい!!」
その証拠に、クラウディーネの氷の剣は、次々に僕の聖剣を砕いていく。
対氷の聖剣にも関わらず、もはや気休めになってしまっている。流石は神滅具（ロンギヌス）といったところか。
それでもしのげているのは、残神（コスモス・ボルト）のおかげだろう。

実際、クラウディーネも感心しているようだ。
「……残神は禁手ほど強くないって聞いたけどね。やるじゃない」
「それはどうも。まぁ、僕の場合はちょっと特殊なんだけどね」
実際問題、僕はこの観点でいうなら反則に近い。
なにせ、魔剣創造（ソード・バース）を持つだけでなく、禁手の影響で聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）を疑似的に獲得している。
必然として、僕の残神は二つの禁手の残滓を統合している。厳密には二つの禁手を同時に使うことはできない複雑な事情もあって倍とは言わないけど、それもあって九成君よりは出力は高い部類だ
だけどそれとて、神滅具には及ぶはずもない。
……実を言えば、勝ち目がないわけじゃない。この残神の本領を発揮すれば、クラウディーネに届く自信がある。
だが同時に、それはクラウディーネとの一対一の前提だ。
彼女の神聖血脈、そして禁手。その波状攻撃を凌ぐには、どうしても今の状態に徹するほかない。
はっきり言って、クラウディーネは僕にとって相性が悪い。より正確に言えば、残神の本領を発揮しづらい。
彼女を倒すには龍騎士の禁手では困難で、削り殺される可能性が大きい。だが倒す可能性が大きく増える聖魔剣の場合は、逆に彼女の本領で圧殺される方が早いだろう。つまり僕にとって、不利にしかならない二択を押し付けられているわけだ。
だけど、只でやられるつもりはない。
ここで臆して倒されるような腑抜けは、リアス・グレモリーの眷属にはいないのだから！
「……よっし見つけたわよっとぉっ!!」
その瞬間、氷の兵団を薙ぎ払って誰かが突貫する。
『スキルヴィングディストラクション！』
更にその蹴りが、氷龍の片割れにヒビを入れて１００ｍは吹き飛ばした！
か、彼女は―
「女神のご加護はいらんかねー？　今なら無料で大サービス!!」

―リヴァさん！
「リヴァさん、九成君はいいんですか？」
「安心しなさい木場君。先生、これでも空気は読むの。たっぷり因縁キャラが出かけているなら、バランス重視でバランスとるのが私の……愛!!」
僕にそう答えながら、リヴァさんはポーズをとりながら着地する。
その瞬間、龍脈から力を引き出してオーラを放つ砲台がそそり立ち、兵団や氷龍を釘付けにする。
そんな芸当をすぐさま成し遂げた彼女は、状況に気づいて駆けつけてくる冥革連合の戦士達に向き直る。
「さぁ、女神さまの露払いよ！　見合った大一番を期待するわ！」
「ええ……期待に応えます！」
ああ、これならできる。
「禁手化（バランス・ブレイク）、双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）!!」
聖剣創造ではなく魔剣創造の禁手に切り替え、僕は聖魔剣を握り締める。
その光景に、怪訝な表情を浮かべる者もいるだろう。
だけど、これこそが今の僕の完全最高。
何故なら―
「夢幻召喚（インクルード）!!」
―これが、僕の最強なのだから。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

激突する戦場の一角で、成田春奈はヴィールの猛攻を迎撃する。

ヴィール・アガレス・サタンの神聖血脈は、聖呑む魔王。
魔力と聖なる力を融合させる、いわば聖魔剣と酷似した自己強化。彼自身が真魔の駒を使っていることもあり、本領を発揮した彼は魔王すら超える。
その猛攻に、春奈は食らいつけていた。
「……腕を上げたな。だが、俺の方が更に鍛え上げているぞ！」
「分かっています！　そんな貴方だからこそ……私は、今でも敬愛しているんです!!」
その猛攻に食らいつけるのは、ひとえに春奈の努力の賜物だった。
懲罰メイドとしての業務を受けながらも、春奈は鍛え続けてきた。
幸か不幸か、リアス・グレモリーは眷属含めて自己研鑽を欠かさない。そしてその鍛錬に参加させてもらうこともできた。
ヴィール・アガレス・サタンの眷属として生きていた頃、成田春奈は英才教育を受けていながらも、根幹となる芯を見失っていた。
九成和地のもとに戻った時、成田春奈は懲罰メイドの業務など鍛錬だけにはいきれなかったが、根幹となる芯は取り戻した。
ゆえに、成田春奈は成長し続けてきた、それは決して、今までの自分に見劣りするような速度ではない。
まして、神器は所有者の思いに影響を受ける。かつて芯を失っていながらも消え去っていないがゆえに至った以上、力をかき集めたうえで芯を取り戻した春奈はさらに強くなっていて当然。だからこそ、食らいつけている。
だが同時に、このままでは削り殺されかねない状況になっているのもまた事実。
「……やはり、お強いですね」
そう、感嘆を覚えるほかない。
狂気そのものといえる自己研鑽。その圧倒的な成長速度と理解・吸収。そして研鑽と研究により高まった、超越者にすら届くだろう肉体。
間違いなく、若手悪魔としては最強。覇を超えた極覇龍に至ったヴァーリか、覇を克服したロンギヌス・スマッシャーを放つイッセー

ぐらいでしか勝ち目はないだろう。
だが、引けない理由は自分にもある。
「折れませんよ、私は!!」
吠え、そしていまだ凌ぐ。
「和っちは因縁に決着をつけようとしている。私はそんな和っちと一緒に脅威に立ち向かいたい。……それが、貴方が支えてくれたから守り抜けた私の芯」
そう、今でも感謝している。
踏みにじられながらも折れなかった心は、だが同時に芯を失っていたがゆえに儚かった。
そこに添え木をくれ、和地の前でカズヒが思い出させてくれるまで、支えてくれたのがヴィールだ。
敬愛している。尊敬している。今でも主であると思っている。
ゆえに、彼の前で情けない姿は見せられない。
九成和地と一緒に、誰かを守れる者でいたい。
その願いを取り戻しておきながら、そこから情けなくなるなどありえない。
愛しく思う和地にも、師匠といえるカズヒにも、主君たるヴィールにも。
「――胸を張れる自分だと、例え死のうと証明する!!」
ただその一念をもって、磨き上げた全てをもって食らいつく。
その猛攻を捌き反撃すらたたきながら、ヴィールは小さく微笑んだ。
「―安心しろ。お前は今でも、俺の誇るべき宝だとも。胸を堂々と張るがいい」
その言葉と共に、ヴィールは春奈の攻撃を弾き飛ばす。
踏み込み拳を打ち出す速度は、春奈が態勢を立て直すより遙かに早い。
「だが、勝つのは俺だ!!」
その拳は、躊躇することなく春奈の胸部を貫通する。
余波で上半身が吹き飛ぶが、さらにヴィールは魔力すら解き放ち更

なる破壊の嵐を放出させる。
成田春奈の神聖血脈は、不崩壊之主柱（こわれずのみはしら）。意志力を根幹として、炎と共に再生する能力。
いわばフェニックスの不死に近い。ゆえに対応策は単純であり、削り続けることで心身を消耗させること。もしくは神や魔王の如き一撃をもって跡形もなく吹き飛ばすこと。
ヴィールが行ったのは後者。単純に自らが出せる中でも最高峰の一撃をもって、春奈を吹き飛ばすという単純な攻撃。
間違いなく神や魔王すら深手を負うだろう一撃を放ちながら、ヴィールは静かに問い質す。
「これで、終わるのか？」

「……いいえ、まだです!!」

戦いは、未だ終わらない。

黙示覚醒編　第十八話　不穏と共感と真相と

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「さて、やってくれたものだね、ディハウザー・ベリアル殿は」
「どうすんだ、フロンズ？　掴んだ直後に別件で全面公開とか、俺達だってヤバいだろ？　え、魔王派と大王派の内乱に参加しろってか？」
「……分かっていると思うが、それは悪手でしかないぞ、ノア」
「お、ハッシュ。そっちはどうだ？」
「父上も流石に忙しいようだ。……内容から逆算して、初代バアル殿は当然ご存じだったろうからな」
「分家としちゃ、シュウマさんは重要人物だしな。知らされている可能性もありそうだ」
「ノアの言う通りだが、それをあえてこちらに伝えなかったのも手法の一環だろう。知らなければ責任がないとは言わんが、教えられていなかったのなら多少の言い訳はできるだろうしね」
「その辺りについてはフロンズの言う通りだが、そこからが問題だろう。これは間違いなく、大王派の未来を左右する一大事だぞ？」
「……ノア、ハッシュ。これは我々も覚悟を決めるべきだろう？」
「……フロンズ、一応言っとくが、内乱を起こすのは勝ち負け以前の問題だぜ？　魔王派相手だろうが大王派相手だろうがな」
「分かっているとも、ノア。こちらに関しては深手を大前提にするべきだろう」
「ダメージ回避を試みてリスクをとるより、最初からある程度のダメージを受けること前提で正常化を図るべき。そういう事だな、フロンズ」
「……ってことは、ベルゼブブ様達と連携を取る感じか？　確かに俺

らが付けば、王の駒がいくつか使われてもやりようはあるな」
「そういう事だよ、ハッシュ、ノア。どちらにせよ我らとしても、この規模の不正を見過ごすことはできん。ましてここまで明かされた以上、冥界全体や先のことを考えるなら大王派は身を切るしか無かろう」
「そのようだな。……ではフロンズ、私は魔王様方に謁見を申しでよう。連携の為には繋ぎを作るべきだろうし、末端では暴走する愚者が出そうだしな」
「助かるよ、ハッシュ。実はアザゼル元総督からある程度の協力は約束されている。その事実を立てに魔王様と直接繋ぎを取ってもらいたい。それとノア、直属部隊に臨戦態勢を取っておいてくれ」
「既に派遣しているんだぜ？　Ｄ×Ｄの補佐に徹させる方がよくねぇか？」
「その後だよ。私はこれから駒の使用者やそれを認可した者に勇退を進言するが、確実に逆に出る者が出るだろうからね？」
「……自棄を起こして考えなしに暴れ回るってか？」
「……まぁ、そうなってくれるのなら好都合だ。少なくとも前者は高確率で出るだろうし、その鎮圧に貢献すれば多少の減刑やマシな勇退、もしくは……一部貴族の子飼いとして再出発などはできるだろう？　交渉材料としては十分だ」
「……ハッシュ、俺はフロンズが時々怖くなるんだが。」
「今更だろう。我らのリーダーは、こういう時も冷静に先も踏まえて二手三手先を打つ男だ」
「そういうわけだ。十中八九起きることを前提に動いてくれ。……魔王派には保険程度でにおわせるにとどめて、ね？」
「了解した。兄弟達にも浅慮はせぬよう念押しをしておこう」
「じゃ、最上級悪魔と眷属をオフェンスにした戦術プランを立てとくわ。プラン立てに必須なんで、つなぎを作れた奴は適時連絡くれ」
「ああ。この戦いは我らが成果を得る為でなく、被害を抑えることを最重要視するようにしてくれ。……利を得ることは考えないぐらいでちょうどいい」

「どう動くにしろ、我々は権益を減らすぐらいがちょうどいいという事か？」
「具体的にどんな削り方だ？　資本や軍事はなるべく残してほしいんだがよ？」
「兵器はともかく人は無理だぞ、ノア。兵達が自らの意思で魔王派に鞍替えするのは避けられんし、このスキャンダルでは数割単位で覚悟するべきだ。……まぁ、可能な限り先手を打って謝意を示せば減る量は抑えられるが」
「……つまり、九大罪王に大王派からねじ込みはしないと？」
「その辺りが打倒だろうね、ハッシュ。……だが、比較的大王派に寛容な人物を候補に選出されるなら、応援する程度はできるだろう」
「オーライだ。ま、精々出てきたバカをカッコ良く倒して心象回復に努めますか？」
「初代殿には悪いが、ここは時代にそぐわぬ者達を削る機会と割り切るか。……問題はそこからだがな」

「頼んだぞ、ノア、ハッシュ。この非常事態、我らの理想が為に乗り切らねばならないのだから」

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

シャルロット・コルデーとディハウザー・ベリアルの戦いは、極論すると消極的と言っていい。
シャルロット・コルデーは究極（テロス・カルマ）の羯磨の保有者であり、疑似的に赤龍帝（ブーステッド・ギア）の籠手も保有する。
可能性操作と現象の透過。それは組み合わせれば、ディハウザー・ベリアルの虎の子ともいえる特性、能力や特性を使えなくさせる無価値を突破することもできる。
だが同時に、ディハウザー・ベリアルは魔王クラスであり、レーティングゲーム不動のトップ。
様々な神器保有者とも戦った経験がある彼は、判断の引き出しではシャルロットの比ではない。その経験則と対応力があれば、シャルロットの判断を読み切って無価値を当てることもできるだろう。
だからこそ、この膠着状態といえる戦闘は起こりえない。
その理由は、雑にまとめればたった一つ。
それを、シャルロットはあえて口にする。
「お互い、倒す気のない戦闘は困ったものですね」
「……気づいていたか」
そのディハウザーの返答に、シャルロットは状況を確信した。
「ライザー・フェニックスの試合でことを起こし、レイヴェルさんまで無価値を使って倒したのはそういう事ですか」
リゼヴィムに聞こえないように立ち回りながら、シャルロットは確信する。
ディハウザー・ベリアルの目的は、あくまで不正の告発だ。その過程でリゼヴィムの力を借りる必要があると踏まえ、だがリゼヴィムの悪意で被害が生まれることは望んでいない。
だからこそ、懸念事項であるフェニックスの涙を無価値にする準備をした。十番勝負の三番目、中途半端とも取れるタイミングでことを起こしたのはそれが理由だ。
「中途半端、とは言いませんよ。自分のしたいことをできる範囲で、というのは当たり前の行動ですから」
そう、そこはとても大事なことだ。

したいことをするのはいい。だがその過程で大事なことの一つは、それができるのかどうか、もしくはどうすればできるのか。ここを考えなければ、出来る者も出来はしない。
だが同時に、もう一つ大事なことがある。
「……ですが、この方法では大規模な内乱すら起きかねない。……そうまでして今する必要があったのですか？」
それは、その為にすべきことは何か、そもそもすべきことなのか考えることだ。
シャルロットは、その二つをかつて失敗した。その失敗によって英霊の座に招かれた存在だ。
シャルロット・コルデーとは、かつて粛清が横行していたフランスで、その派閥の代表だった男を暗殺した存在。だがそれにより組織の刷新と先鋭化がなされ、更なる血が流れるきっかけとなった存在でもある。
粛清の嵐と止める為にできることを間違え、そもそもすべきでないことをして粛清を加速させた。それこそが、シャルロット・コルデーという過去の存在である。
だからこそ、シャルロットはディハウザーの相手を自ら務めている。
彼に体の言い訳を与え、リゼヴィムに余計な警戒をさせない為。そして同時に、かつての自分を思い起こさせるこの行動に、先達として異を唱える為。
「……かつて政府の悪逆に怒りを覚えたからこそ、言い切れます。貴方のその方法は、貴方にとって不本意な結果を齎しますよ」
「そうだな。何百年も生きていながら、二十年生きているかどうかの少女に言われるとは……私も落ちたものだ」
苦い表情を浮かべるディハウザーに、シャルロットは歯を食いしばる。
彼も苦しんだ上の行動だろう。大王派による王の駒とレーティングゲームの不正は、間違いなくいつか必ず正されなければならない。
だが、それを現魔王が未だに出来ないのを忘れてはならない。冥界

の未来を、悪魔の将来を願う彼らだからこそ、それができる立場と能力を持つからこそ見えるものがある。
かつて三大勢力による三つ巴の戦いで、他勢力と同じように悪魔も滅亡を危ぶまれた。そんな血を流せない時に、魔王血族と内戦を行うという当時において暴挙といえる行動を、種の存続を守る為には行うことになっていた。……そしてその傷がまだ言えてない時に、更なる内乱を起こすわけにはいかない。
だからこそ現魔王は慎重に立ち回るしかなく、大王派はそれを利用して立ち回っているのだ。どちらも「内乱を起こせば今度こそ絶滅しかねない」という認識があり、それを大原則として立ち回っている。
その結果が現状だ。現魔王は不正を半ば黙認するしかなく、大王派も王の駒をこれ以上使わない。そのある種の膠着状態こそが、悪魔という種族に更なる絶滅の危機を齎さない双方の妥協点。ギリギリのボーダーラインだった。
いわば人間世界における核抑止論に等しい。これが崩れるということは、事態を自分達に都合のいい状況に持ち超めることではない。それを張るかに下回る「種の絶滅」が到達しかねない、そうでなくても悪魔の多大な現象を持たらすだろう、ハイリスクハイダメージハイリターンな博打だ。政治を担う側が、迂闊に取れるような手段では断じてない。
……そして同時に、それを選ばないのは彼らが政治の分野にいるからだ。
レーティングゲームの一プレイヤー。少なくとも彼はそうやって生きてきた。その圧倒的な力量もあり、大王派による介入も行われなかった彼は政治家ではない。
だからこそ、そうしてしまった。そうせずにはいられなかった。
それを理解し、だからこそ悲劇を起こした経験を持つ。シャルロット・コルデーはゆえに彼を止めずにはいられない。
「一つだけ、お願いがあります」
「何かね？」
リゼヴィムを欺く為の茶番劇を繰り広げながら、シャルロットは告

げる。
「……形勢がイッセー達に傾いたら、その時は夫妻を頼みます。それと、トライヘキサはドームの方で間違いないでしょうか？」
「……それは構わないが、現状はまだ不利なようだよ？」
その返答に、シャルロットは小さく微笑んだ。
それは、この戦いが始まってから初めての笑み。
そう、何故なら―

「―私のマスターを舐めてはいけません。彼は自力でありえない可能性を作り出すからこそ、究極の私羯磨のマスターなのですから」

―その信頼は、すぐにでも確かな形となる。

和地Ｓｉｄｅ

振るわれる攻撃、放たれる迎撃。そして繰り出される反撃。
激しい戦いを繰り広げながら、俺達はモデルバレットに立ち向かう。

……増援が来ない辺り、かなりの接戦になっているな。こっちがアウェイで明確連合のホームである以上不利だと思ったんだが。長期戦になっても増援が来ないのは好都合か。
いや、それにしてもおかしいというか、よく見ると禍の団と戦っている奴が多いな。
……少し不安を覚える所もあるが、この際それはいいだろう。
とりあえずは、まずモデルバレットだ。
『ちょうどよかったよ、乙女ねぇ！　一発かましてやりたくってさぁっ!!』
突貫するモデルバレットが真っ先に狙ったのはお袋だ。
それに対し、お袋は迎撃の体制に入る。
仮面ライダーベアトリーチェ。リーネスがまたやってくれたけど、性能がどの辺りにあるのかが不安だな。
お袋は基本として、戦闘慣れしてない。そもそもが民間人同様で、魔力タンクすぎるのがあれだからな。道間家も基本として、助手という名のエネルギー源が精々だと思っていたようだ。
疑似サーヴァントと化しているからと言え、ベアトリーチェは本質的に「巡り合う淑女」でしかない。スキルもあって戦闘は可能で、お袋の絶大な魔力量もあるがそこ止まり。戦闘に限定すれば三流どまりだ。
……だからこそ、リーネスがそれに大した備えをしてないわけがない。
『とったぁっ!!』
「させない！」
一斉に放たれるモデルバレットのミサイル攻撃を、お袋は瞬時に迎撃する。
放たれる秒間数十発の弾丸が、ミサイルを次々を破壊していく。
それを成すのは、お袋が両手に一丁ずつ構えたマシンガン。
放たれる大量の弾丸による弾幕がミサイルを迎撃するが、何がどうした？
「どうかしらぁ？　乙女用に開発したウィッシングホッパープログラ

イズキーはぁ」
自慢げなリーネスの作品だとは分かっているけど、いったい何がどうなった？
「……パラディンドッグの応用系か何かか？」
お袋が持っている神器は聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）であることは判明している。そしてヒツギやヒマリと違い、神器はそれ一つだ。
魔力量に特化しすぎて、ベアトリーチェの恩恵があるからこそ戦えているところがある。そのお袋が持つ、最大レベルの戦力となる持ち札。
だが禁手に到達したとは聞いてない。となると、そのプログライズキーが根幹だろう。
銃火器として具現化している以上、あれは通常の神器として使っていない。そして残神（コスモス・ボルト）はその使用上、禁手（バランス・ブレイカー）に到達する必要がある。
となると、禁手の方向性を確立して補正する機能があると考えるべきだろう。それを踏まえればパラディンドッグがある程度参考になっているようなものだろうな。
ただ、リーネスは微笑みながら首を横に振る。
「いえ、まったく別のアプローチねぇ。……パラディンドッグは禁手の拡張ユニット、ウィッシングホッパーは神器の拡張ユニットねぇ」
と、いう事はだ。
「……神器の持つ機能を上乗せして、能力の拡張を行う事か」
「正解よぉ。そして、更に戦闘動作補助システムも組み込んでいるわぁ」
なるほどな。色々考えているみたいだ。
さて、それはそれとしてだ。
モデルバレットはやはり強敵だな。だが、だからこそ倒せる時に倒す必要がある。
それに俺もいい加減苛立っているからな。少しは発散しておかないと、逆に足元をすくわれかねない。
ゆえにこそ、遠慮なく一気に仕掛けるだけだ。

「覚悟してもらおうか、モデルバレット！」
俺は吠えると共に、素早く攻撃を再開する。
……少し躊躇したが、確実に強敵を屠る為にパラディンドッグで一気に仕掛ける。
星魔剣をもってしてモデルバレットの攻撃を凌ぎ切り、そしてのど元に一撃を叩き込む為の隙を伺う。
その時、何時の間にか見えなくなっていた鶴羽が姿を現した。
「……色々調べ終わったわ！　リーネス、予想は当たりでいいわよ！」
「そう。そういう事だったのねぇ」
鶴羽の言葉にリーネスは、複雑な何かが籠った返答を返す。
ただ、モデルバレットに対する憐憫がお袋や鶴羽からも向けられていた。
『……どういうことよ、アイネス』
苛立たし気なモデルバレットに、リーネスは雰囲気からして憐憫を向けている。
いったい、何が―
「……はっきり言うわぁ。貴女は道間日美子だと思い込んでいるだけの存在よぉ」
―なんていうか、どういうことだ？
『……乙女ねぇみたいなこと、言うんだね』
「そうでしょうねぇ。その前提が無ければ、私も調べなかったでしょうからぁ」
モデルバレットの苛立たし気な声にそう返すリーネスは、小さく俯いていた。
「―極晃星（スフィア）」
そう、リーネスは小さく呟いた。
モデルバレットも肩を震わせているし、俺も聞いたことがあるかもしれない。
いったい何の話になっているんだ？
「ザイアからサルベージされたデータに在った、星辰光（アステリズム）を超えた星辰光（アステリズム）」

『知ってるよ。高位次元から漏れ出た星辰体（アストラル）と感応して三次元現象を引き起こす星辰奏者（エスペラント）とは違い、高位次元と接続し三次元に高位次元現象を引き起こす、完全上位互換』

モデルバレットはそう告げると、同時に肩をすくめていた。

『条件はいくつかあるけど、一番大事なのは勝利という思いを共有する相方。何故か誠にぃとカズヒで成立しかけたにとどまっててね？

私はその結果誕生したんだよ』

「そうねぇ。極晃星は祈りに応える魔法のランプとされ、一度誕生した極晃星は他者が繋がり恩恵を受けることもできる」

モデルバレットに頷きながら、リーネスは神妙な雰囲気を示していた。

「運用次第で惑星環境を変えることも可能。また極晃星は到達すれば高位次元に残り、他者が接続して恩恵を受けることもできる。そしてその場合、極晃に宿る二人の記憶を見た接続者の認識のもと、極晃の化身を創造することもある」

……聞けば聞くほどシャレにならないな。

下手をしなくても、龍神クラスを打倒しうるだけの存在だろう。更に惑星環境を塗り替える余地があり、接続という過程を踏まえることで他者が振るうこともできる。しかも化身が具現化する場合もあり、結果としてアドバイザーぐらいにはなりえるだろう。

三番目がきついな。接続者の認識次第となれば、碌でもない奴が出てきかねない。もし身勝手極まりない考えの奴が接続すれば、どんなことになるのかさっぱり分からないぞ。

だが、それがどう言うことになる？

『分かる？　私はつまり、道間誠明と道間日美子の願う勝利そのもの。そしてカズヒ・シチャースチエが誠にぃと手を取らないってんなら、手を取る私が最も勝利になると―』

「―いいえ、違うでしょぉ？」

モデルバレットの言葉を遮り、リーネスはそう告げる。

憐憫すら込めたその言葉に、モデルバレットは沈黙する。

いや、何が―

「逆なのよぉ。あの時極晃が成立しなかったのなら、極晃の化身も誕生しない。……そして、貴女が日美子でないなら仮説も立てられる」
―モデルバレットは道間日美子でないと、リーネスは確信すら見せている。
「カズヒの星辰光は、他者の想念を集めるという点が根幹部分。おそらくそれが重要だったんでしょうねぇ」
そう告げ、リーネスは頭を振った。
「仮説として、あの時極晃星は半端に成立した。だから本当は具現化しなかったけれど、そこにカズヒが引き寄せた想念が集まった。……それも、基本形である悪意を恨む想念が」
……おい、まさか。
俺が何かに思い至る時、リーネスはそれを固めるように告げていく。
「悪に対する呪詛の念は、必然として呪詛の対象である悪に向けられる。そこに二人の極晃になりかけた想いがかみ合った結果が貴女よぉ。……二人の思い出を基礎として、呪詛を向けるにたる悪徳そのものたる存在が、モデルバレットの正体よぉ」
『……とんだ仮説を立てるもんだね……っ』
憤怒の感情を向けるモデルバレットだが、リーネスは動揺もしていない。
「そして仮説が立てられれば、魔術的な観測もできるもの。……解析は完了したわ、結果は当たり」
その言葉に、モデルバレットが肩を震わせる。
そして憐憫すら向けながら、リーネスははっきりと断言する。
「貴女は断じてカズヒじゃない。カズヒの殻を被った悪意の集合体。それがモデルバレットの真実よ」
その断定をもって、リーネスははっきりと宣言する。
「ならカズヒに任せる必要はないわ。貴女は私達で十分よぉ」
それをもって、リーネス達は戦意を見せる。
カズヒねぇが背負うべき重荷でないのなら、カズヒねぇがいない状況でもやってやろう。

その決意を俺にも伝えながら、ここにモデルバレットとの決着は開始された。

黙示覚醒編　第十九話　残神乱舞

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

ヴィール・アガレス・サタンに食らいつく成田春奈。
その執念による猛攻が、自身の奥の手を出せる段階に繋がったことにリアスは感謝すら覚えていた。
「下がりなさい、春奈!!」
リアスは溜めに溜めた消滅の魔星をもって、ヴィールを倒すことを実行する。
イッセーとの連携技である、深紅の滅殺龍姫（エクスティンクト・ドラグナー）。その状態にあるリアスは最上級悪魔の上位に届き、それをもってして放つ消滅の魔星は一味違う。
具体的に言えば、同時に六つも展開していた。
たった一つでも龍王に並び立てるグレンデルの肉体を削りに削ったその猛威。それを同時に六つも展開して放つなど、敵からすれば悪夢としか言い様がないだろう。
その絶大な一撃をもって、リアスはヴィールの圧殺を図る。
それに対し、ヴィールは静かに構えをとった。
離脱どころか回避でもなく、迎撃。それが目に見えて分かる。
それを愚行と考えそうになるのを、リアスはすんでで切り捨てる。
目の前の男は、間違いなく冥革連合最強であり、魔王にすら届く牙の持ち主。自分達が戦ってきた中でも、指折りといえるだろう執念の持ち主だ。
そんな男が迎撃を選択した。それはすなわち、出来るという大前提を持てる根拠があることを示している。
ゆえにリアスは警戒する。突破されることを前提に、次に繋げる手段を考える。

……実を言えば、まだ発想段階だが二つほど考えている手札がある。
片方は味方との連携が必須だが、まだ確実性は高い。もう片方は単独で行使可能だが、確実性に難がある。
どちらの手札をとるにしてもリスクがある。
その天秤を考慮しつつも警戒を解かず見据える中、見えた。
……砕け散る消滅の魔星。そして魔力が散る中、疲労を見せながらも五体満足のヴィール・アガレス・サタン。
覚悟はしたが、やはり戦慄を覚える。
そして同時に驚愕も覚える。
何故なら、魔星を砕いたヴィールの周りには、紅い鮮血のような飛沫が飛び散っていたのだから。
その飛沫と力を見て、リアスはヴィールの手札を理解する。
「……残神（コスモス・ボルト）……っ」
「何を驚く、リアス・グレモリー」
当然と言わんばかりに、ヴィールはリアスに向き直った。
「俺はそういう馬鹿だ。至れるというのなら、至らないことを己に許すことができぬ大馬鹿者だ。ならすべては時間の問題だろう」
「その時間が短すぎるのよ……っ」
リアスとしてもそれを言い返したい。
そもそもヴィール・アガレス・サタンは、己を苛め抜いて鍛え上げることにおいては彼女が知る中で最も徹底している。
自主鍛錬を欠かさず行う自分達ですら、己に課せる鍛錬を実行することにおいては大きく劣るだろう。妥協の文字を腐敗としか読めない、そういう手合いだと分かっている。
だからいつか必ず辿り着くだろう。それぐらいは分かっているが、いつかだとは思っていた。
……自分達が誇る仲間の至った前人未踏。それにこの速度で到達されては、流石に文句の一つも言いたくなるところだ。
ただ、そのヴィールはむしろリアスの方を見て感嘆すら覚えている様子だった。

「驚愕したいのはこちらの方だ。よもや己の星ではなく、眷属との連携で更なる力を獲得するとはな。そういった手法での強化は、俺では中々思い至らん」
リアスが纏っている鎧のことだろう。その力の獲得に、ヴィールは評価を返していた。
兵藤一誠の飛龍を利用し、疑似的に赤龍帝の鎧を装着する。眷属の力を身に纏う連携を、眷属の力を借りることができるリアスが会得する。ヴィールでは発想が浮かびにくい手法だろう。
その辺りをリアスも認識できている為、小さく苦笑しながら肩をすくめた。
「素直に褒められておこうかしら。まぁ、言われてみると私とあなたは逆ではある物ね」
思えば、リアス・グレモリーとヴィール・アガレスは真逆の王といえるだろう。
同胞や眷属を鍛え上げることに余念がない。その一点は似通っているが、そこから先がある意味真逆だ。
王の駒や禁手をもって、眷属や同胞を更に強化していく。しかし同時に、己の強化においてはその狂気もあって己の手でのみ行っていく。それがヴィール。
眷属達の成長に奮起し、己自身も鍛え上げる。そして眷属の力を生かす形で、己の更なる飛躍を遂げていく。それがリアス。
ある意味で真逆の方向性を持つ、自他を含めて研鑽し続けてきた二人の王。
……ゆえにこそ、リアスは覚悟を決めることを決意した。
相容れない存在だ。そのやり方を認めることもない。それがリアスにとってのヴィールだ。
だが同時に、その決意を認めるしかない。
だから、こそ。
「……春奈、援護して頂戴。私も覚悟を決めるしかないようね」
「ちょ!? リアス様、ヴィール様相手に何する気ですか!?」
春奈がそのただならぬ気配に動揺した、その時だった。

「なんだと!?」

その光景に、ヴィールが目を見開いた。

時刻は、その少し前にさかのぼる。

祐斗Ｓｉｄｅ

僕は大きく分けて、三つの手札を持っていると言っていい。
一つは生まれ持った魔剣創造（ソード・バース）。それは至ることで双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）となった。これにより、無限に近い手札は高い突破力すら併せ持つようになった。
一つは聖魔剣の副産物といった形で手に入れた、聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）。こちらは亜種だが正統派に近い龍騎士団を創造することで、一撃の威力

が数段落ちるが、速さと技量を併せ持つ数の暴力を担っている。
最後が、ジークフリートとの戦いを終えて手に入れた、五つの魔剣。その全ては伝説級であり、五つの手札しかないともいえるが、聖魔剣を超える突破力を持っている。
そして現段階において、僕は後者二つを組み合わせた戦法が主体になっている。これは聖魔剣と龍騎士団を組み合わせての戦闘が現状できないことと、魔剣を同時に使用しつつ呪いを押さえるのに、龍騎士団に持たせるのがある意味で最適解だからだ。
聖剣創造の禁手である龍騎士団は、必然として手数に限定すれば聖魔剣と同等であり、数による波状攻撃で質を多少はカバーできる。そこに一撃の威力を五つの魔剣で補い、更に龍騎士達に呪いを担当させることで、伝説の魔剣をなるべくローリスクで使用できる。これがあまりに効率的すぎるのだ。
聖魔剣を利用する形で対応する方法も編み出してはいるけれど、これには限度がある。何故なら魔剣は五本持っており、聖魔剣と併用すると一本ずつが限界だ。
突破力だけは劣るが対応力は互角。かつ数を用意できる龍騎士団。こちらの方が五本の魔剣を同時に使いつつ、別の龍騎士達でカバーしながら多様性も確立できる。そういう意味では、基本形である騎士団創造の通常禁手が如何に高水準だったか思い知る。
更に僕の夢幻召喚（インクルード）は、セイバーとしてベディヴィエールを召喚する。
セイバーとしての彼は、アーサー王伝説における聖剣を泉に返した伝承が主体だ。その結果として、高い拠点防衛能力と限定的なエクスカリバーの運用能力を獲得している。
つまり、エクスカリバーを三回使う形で、人数差に対抗しやすい防衛線を行うのが本領の英霊だ。更に夢幻召喚の適性から、リロードを可能とするのも大きい。
総じて今の僕は、聖魔剣という前代未聞のイレギュラーを死にスキルとしている。聖魔剣以外の強大な手札が大きすぎ、聖剣創造の亜種禁手の方が使いやすくなっているのだ。

……だからこそ、僕の選択肢としてそれを見つめ直すことを選ぶのは、自明の理だった。
「どうするのかしら？　炎の聖魔剣より、グラムの方が効果的じゃない？」
そうクラウディーネすら言ってくるのが困ったものだ。
数の暴力こそリヴァさんの援護で抑え込めているが、それでも氷の龍と共に襲い掛かるクラウディーネは難敵すぎる。
純粋に、聖魔剣では出力が足りない。それほどまでに、敵の力量や才覚は天元突破を果たしている。
それを、ここで一気にひっくり返すとしよう。
目を伏せ、そして僕は一手を構成する。
既に仲間が道を切り開いた。そして僕は、彼らと並び立てる者でいたいと心から願っている。
ゆえに、ここで一気に追いかけよう。
切り開かれた道を進むことは、道を切り開くより簡単なのだ。聖魔剣という未知の道を開いた者として、イッセー君や九成君には負けてられない。
その決意と共に、透き通った鋼色の飛沫を撒き散らせる。
「!?　まさか――――っ!?」
クラウディーネがそれを悟る共に、僕はそれを開帳する。
「……残創（コスモス・メイク）」
静かな声で、僕はそれを解放する。
展開されるは、聖魔のオーラを融合させた剣の鎧。
聖魔の融合、剣を振るう鎧騎士の具現。
僕が至った二つの禁手の特性を持つ、僕の新しい領域。
そう、これこそが、僕の残神（コスモス・ボルト）。
さぁ、どうか手を貸してほしい、同志達。
君達の願いが籠った力で、僕は幸せな生活を送る為に、今の仲間達の脅威を切り払う！
「聖魔宿す鞘なる鎧（シースメイル・ビトレイヤー）……装剣」
静かに、僕は反撃の狼煙を上げる。

これが聖魔剣の新たな領域。神滅具すら屠る剣の極致を見せてあげるよ。

黙示覚醒編　第二十話　聖魔宿す鞘なる鎧（シースメイル・ビトレイヤー）

祐斗Ｓｉｄｅ

残神は、いわば一種の裏技だ。
禁手が亜種を用意できるだけの拡張性を持っていることをつき、至った後の残滓を組み立てて新しい異能を作る。
その為、禁手のような爆発的な力はない。そもそも仕様外であることもあって、その出力は至ってない状態の神器にも劣るだろう。
九成君は基本として、創造系神器であることを利用した、特殊な形に特化した拡張で対応をしている。人造惑星化を行う時は、魔術刻印の創造。対英霊魔剣においては、対英霊装甲を創造するといった形にだ。
それに対し、僕はアプローチを少し変えている。
これは、僕が神器保有者として特殊なことに端を発する。
僕は魔剣創造の持ち主だけど、同時に禁手に至ったことで後天的に聖剣創造も併せ持つ。性質上両方同時に禁手に至らせることは今はできないが、二つの神器をそれぞれ別の禁手にしているわけだ。
それは裏を返せば、別々のリソースをもって残神に至れるという事でもある。だけど、僕は発想を転換した。
その結果が僕の組み上げた残神だ。
展開されるのは聖魔の鎧。ただそれだけであり、二つの禁手のいいとこどりではなく、どっちつかずな具現ともいえる。数を用意できないのが最大の難点だね。
だけど、この鎧は唯一無二の特性を持つ。それは聖魔剣の特性を持った鞘であるという点だ。

聖魔剣の新たな力。それは、周囲の聖剣や魔剣のオーラに呼応して自らを高めていくことだ。
それはつまり、伝説の魔剣五つやエクスカリバー三回分をプラスすれば、絶大な性能を確立するという事でもある。
そして、そんな特性を持った鞘でもあるこの鎧は、同じように高まっていく。
……結論から言おう。僕は限定的にだけど、神滅具の全身鎧型禁手すら超える性能を持った鎧を装着した。
「はぁあああああっ！」
「あっはははははっ！」
今僕は、真っ向からクラウディーネと激突している。
魔剣全てをフルに使った戦闘を行う場合、これまでは聖剣創造の禁手を主体にする必要があった。だけどこの残神ならば、聖魔剣を極限まで高めた状態で、更に身体機能を上乗せして振るうことができる。
その力をもって、僕は今クラウディーネに真っ向から食らいついている。
持てる全ての力を上乗せしたことで、聖魔剣はグラムにこそ劣るがノートゥングやバムルンクに匹敵する剣となった。
その状態で炎の聖魔剣にすることで、クラウディーネの神滅具に食らいつく。これは炎の属性を持たないグラム達やエクスカリバーではできないことだ。だからこそ、これまで以上にクラウディーネに通用している。
更にバムルンクの力をバイパスして受け流しを行い、エクスカリバーの各種機能を組み合わせることで、聖なるオーラを纏い、更にオーラを纏った分身を出すことで警戒必須の攪乱を行う。
今この戦いにおいて、僕はクラウディーネに勝ち目を持つことができていた。
「最高だわ！　貴方、私が戦った二天龍の宿主を超えてるわよ!!」
「当然さ！」
かなりの誉め言葉だけど、僕からすれば当たり前と言ってもいい。
歴代最強の白龍皇。魔王の血筋により、白龍皇の更なる高みを切り

開くヴァーリ・ルシファー。
歴代最優の赤龍帝。覇すら克服し前代未聞の進化を遂げ続ける、僕の親友であるイッセー君。
それに前人未踏の領域を切り開いた九成君や、新たなる神滅具を宿したギャスパー君、新たなヴリトラになったともいえる匙君など、僕の周りには己を高め進化し続ける仲間達がたくさんいる。
そして仲間達の力を束ね、己の力にする主。リアス・グレモリーの剣が僕だ。
皆に恥じるような真似はしない。彼らと並び立ち、追い抜くぐらいの覚悟をもって鍛え上げる。
「王の駒なんて必要ない。我が主、リアス・グレモリーは必ず高みに立つお方。それを眷属である僕の進化をもって証明しよう」
ゆえに、ここでお前を倒すとしよう。
聖魔剣を構え、僕はクラウディーネに切りかかる。
こちらの斬撃に対し、クラウディーネは素早い対応でそれを凌いでいく。
神滅具の氷は冷たく硬い。炎の聖魔剣をもってしても、溶かすことは容易ではない。よしんば溶けてもすぐに修復されている始末だ。
だけど、聖魔剣だからこそここまで戦えている。
単純な撃ち合いながらグラムでも同等以上の効果は発揮できただろう。だが同時に、グラムでは僕の消耗により既に負けていただろう。
聖魔剣だからこそここまで戦えている。残神により伝説の剣を束ねたからこそ、力を束ねることができる聖魔剣だからこそ戦えている。その事実に、僕はどこか誇らしいものを感じていた。
……どうだい、クラウディーネ。僕の同志達は凄いだろう？
「最っ高だわ！　この時代、強者がこんなにいるなんてっ!!」
喚起するクラウディーネは氷の剣を構え、氷の龍を従えて攻撃を仕掛けていく。
放たれる攻撃は鋭く、素早い。掻い潜ることは難しく、一瞬の油断が無くても絡め取られそうになる。

その猛攻をしのぎ、僕は一撃を叩き込むその好機を強引に作り出そうと試みる。
急所から紙一重にずれた傷が生まれるたびに、クラウディーネはまるで初恋にときめく少女のような華やいだ笑みを見せていく。
心の底から戦闘狂なのだろう。そして劇的な物語を求めるがゆえに、強敵との闘いに心から歓喜している。
だが悪いね。君の物語はバッドエンドだ。勝利の栄光は与えない。
攻撃を繰り広げ、そして振るわれる一瞬の攻撃。それを僕は掻い潜る。
彼女の攻撃は見事だと言っていい。だが禁手の性質上、氷の双龍はどうしてもサイズが大きく、対人に限定すれば隙が生じてしまう。それをカバーする氷の兵団も、リヴァさんが抑えているからこそつける。
おそらく、覇に到達した二天龍との戦闘を視野に入れいていたんだろう。割って入る形とは言え、合い打てるだけのその力量、恐るべき禁手だと断言できる。
だけど、覇を克服したイッセー君と肩を並べる者として、相手が神滅具だろうと超えて見せる！
「うぉおおおおおっ!!」
「なるほど、そう来るかっ!!」
一瞬をついた僕の狙いに気づき、クラウディーネはあえて踏み込んだ。
守勢に入れば押し切られる。ゆえに攻勢で弾き飛ばすという気概。
その一瞬、紙一重で……僕が遅れるか。
届くか？　いや、届かせて―
「……そういうわけには……いかんぜよ？」
―その瞬間、僕の全てが底上げされた。
一瞬のその強化に、僕もクラウディーネも戸惑う。だが双方ともにすぐに修正し、しかし僕が一瞬だけ早かった。
それは、何が起きたのかを悟れたことに由来する。
……そうさ。僕の仲間達は、誰もが信頼と信用に値するのだから。

「ありがとう、リヴァさん」
「ふふぅん。女神の加護に感謝するがよい」
リヴァさんに礼を言えば、彼女は全方位の砲撃を放ちながらも親指を立てていてくれる。
クラウディーネの氷の兵団を相手にしながら、僕を強化する準備を整え、最適なタイミングを見計らっていた。本当に油断も隙も無い、その判断力が決定打を与えてくれていた。
おかげで、一瞬の攻防で何とか上回れたよ。これが適当に上乗せしてたのなら、すぐに対応されて無駄うちに近い状態になっていただろう。
「……ふふっ」
そして、致命傷を喰らったクラウディーネは微笑んでいた。
「文字通り世界の命運を揺るがすほどの、圧倒的な力を持つ者達との闘い。この時代に召喚されて、本当に良かったわ」
彼女はもう致命傷だ。油断しなければ、道連れにされることもないだろう。
そして同時に、彼女はどこか満足げだった。
「……悪いわね、マスター。こんないい時代に召喚(呼ん)でくれたのに、途中退場……で……」
そう言い残し、クラウディーネ・ドゥルカンナインは崩れ落ちた。
最後まで胸を張り、そしてクラウディーネは前のめりに死んでいった。
これが、筋金入りの戦闘狂という事か。
思うところはある。だけど、今は重要じゃない。
「リヴァさん、僕はリアス部長を助けに行きます」
「オッケー！　私も春奈の方に行くけど、一緒にいるみたいだからついてくわ」
彼女がついてきてくれるなら、本当に心強い。
待っていてください、部長！

和地Ｓｉｄｅ

『お前らぁあああああっ!!』
激昂するモデルバレットを迎撃しながら、俺達は戦場を駆け巡る。
激情にかられながらのその猛攻をしのぎながら、俺達は決定打を放つ為の隙を伺っている状態だ。
問題は、その前に押し切られるリスクもあるってことだがな。
『ふざけんな、ふざけんな、ふざけんなぁっ!!』
相当にキレているモデルバレットは、口があるなら唾を巻き散らかす勢いで激昂している。
荒れているからこそしのぐのは難しくない。逆に荒れているからこそ、激しくて近づきづらいのも事実だがな。
だが、いい加減モデルバレットとの決着もつけたいところだ。
こいつが、カズヒねぇではないというのなら尚更だ。カズヒねぇがつける必要がない決着なら、俺が出張ってこそ。それは鶴羽達も同じだろうからな。
そんな俺達は連携が鋭くなり、少しずつだが確実にモデルバレットを削っていく。
それを凌ぎ反撃しながら、モデルバレットは殺意と憤怒を俺達に叩きつけてくる。
『私は邪悪だ！　邪悪でいれる、カズヒ（あいつ）とは違う!!』
衝動のままに放たれるのは、おそらくモデルバレットの芯といえるもの。
『誠にぃに相応しいのは私だ！　カズヒ・シチャースチエに成り下がったあいつじゃない！』
俺の放った射撃を拳で粉砕しながら、モデルバレットは本気の言葉

を解き放つ。
『私は、誠にいと一緒に邪悪の限りに楽しめるんだぁあああああっ!!』
……それはきっと、心のどこかでカズヒねぇが思っていたことなのかもしれない。
もし、お袋の言葉を聞かず正気に戻らなければ。今でも道間日美子は道間誠明と共に入れたのかもしれない。
もし、誠明の手を取って一緒に悪逆の限りを尽くしていれば。カズヒ・シチャースチエはミザリ・ルシファーの眷属として活動していたのかもしれない。
もし、悲劇をもたらすことを頼めるようになれたのなら、今でも大好きな兄と一緒に過ごせていたのかもしれない。
俺はそれを否定しない。そもそもカズヒねぇが俺にハーレムを求めているのだから、俺もカズヒねぇが俺以外に愛を持つことそのものを全否定はできないだろう。何より俺自身、カズヒねぇにミザリへの思いを投げ捨ててほしいとまでは思っていない。
ただ、その言葉を聞けたからこそ断言できる。
「……いや、それは違う。違うんだよ、モデルバレット」
俺はそう断言する。
その続きは、俺より先に言う者がいた。
「考えてみなさい、モデルバレット。誠明は他者が嘆き悲しむことを望むけれど、それは楽しいからじゃない」
鶴羽が繋げ、聖槍の一撃でモデルバレットの装甲を貫いた。
そこから連撃が途切れた隙をついて、今度はリーネスとお袋が追撃を仕掛ける。
「誠明は、悲劇を美しいと思っている。だからこそ、自他を問わずそれを齎したがっているのよぉ」
「それは、悲劇を楽しんでいるんじゃない。悲しんでいるの。……悲しいことが美しいから、ただそれを追求してるんだよ」
連撃と共に投げかけられる言葉が、すべての答えだ。
道間誠明は、異常性を覚醒させた男だ。他者に悲しみを強いて、自身もそれにより悲しみたい。

趣味ではあるが、悲劇を喜んでいるんじゃない。他者の悲劇を悲しめるからこそ、自他を悲劇に包みたい。それほどまでに悲劇に魅入られた男が、道間誠明の真実ありのままの本質だ。
だからこそ、悪逆非道を楽しめる者は誠明とは全く異なっている存在だ。
悪逆は酷いことだと思い、それを楽しめないからこそ、ミザリ・ルシファーは悲劇をもたらす悪鬼明星として生きている。他者の悲劇で自分が悲しむことを楽しむことこそあれ、他者が悲しんでいることそのものは悲しいと感じている。
そう、だからこそモデルバレットは自分が思うような存在ではない。
ただその真実にすら気づこうとしない時点で、悪鬼伴侶（リリス）は悪鬼明星（ルシフェル）の伴侶足りえない。
だからこそ、悲劇を楽しみの為にもたらす在り方への怒りと共に、偶然生まれた道化であることへの憐憫も覚えていた。
……もう散るといい。それが、お前にとってまだましな最後だ。
そうでなければ、ミザリは必ず「それが悲しいから」モデルバレットを自ら滅ぼす。あれはそういう破綻者だ。
その決意をもって、俺は決着をつけることを決意する。
「援護頼む！　ここで決着を……つける!!」
『ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ』
俺は素早くパラディンドッグプログライズキーを操作しながら、残神を展開して決着の動きを作る。
魔術刻印を創造し、能力を強化魔術に一点特化。一気に接近して切り込んだ。
『なめんな、ガキぃいいいいいっ!!』
カウンターで振るわれるブレードに対し、俺は星魔剣を迎撃でぶつける。
その瞬間、躊躇なく全力の強化魔術で、切断力を上げて叩き切った。
瞬間、砕けた星魔剣から手を放し俺は更に踏み込む。
「喰らっとけ！」

『パラディンブラストフィーバー！』
蹴りを叩き込み、そして上空に吹き飛ばす。
素早くショットライザーを抜き放つと共に、リーネスと鶴羽も動きをとった。
『コーリングチェイン！』
『シャイニングレイン！』
連続斬撃と聖十字架に二重発動が、打ち上げられたモデルバレットを縫いとめる。
そこに、お袋もまたバヨネットライザーを抜き放つ。
『ＳＥＣＯＮＤ　ＪＵＭＰ』
縫い留められたモデルバレットに、この射線から逃れるすべはない。
「今よ、和地！」
「やって、オトメぇ！」
鶴羽とリーネスの言葉に、俺とお袋は横目で確認しあう。
『ざ……っけんなぁあああああああっ！』
悪あがきに放たれる大量のミサイルに対し、俺もお袋も躊躇せず、引き金を引いた。
『パラディンソードブラスト！』
『ウィッシングブーステッド！』
放たれるは、星魔剣を弾丸として放つ速射砲撃「パラディンソードブラスト」と、聖剣創造を拡張した砲撃ユニットによる一斉砲撃「ウィッシングブーステッド」
その一斉攻撃は破れかぶれの弾幕を突き破り、全弾モデルバレットに直撃する。
『……が、ぁあああああああっ！』
それでもなお、モデルバレットは突貫した。
破壊は目前。だがただでは死なないと渾身の突貫を見せる。
その猛攻に俺は迎撃を試みようとし―
「……もう、終わりにしよう」
『ＳＥＣＯＮＤ　ＪＵＭＰ！』

―それより一歩早く、お袋は踏み込んだ。
迫りくるモデルバレットの攻撃を回避しつつ、素早く蹴りがその胴体に叩き込まれる。
「もう、これ以上カズヒ一人に―」
『ウィッシングー』
その一撃が拮抗したのは、僅か一瞬。
『―ブーステッドエンド！』
「―重荷を背負わせない！」
その攻撃は、今度こそモデルバレットの胴体を砕き―
『ふざける―』
「させるかよ」
―それでもなお反撃を試みようとするモデルバレットの顔面に、俺は星魔剣を突き立てた。
もういい。眠れ。
何かの悪い偶然が生んだ、カズヒねぇの殻を被った悪意の権化。
もう、お前はカズヒねぇを被らなくていい。
「終わっとけ。ミザリも後で必ず送る」
その言葉を決別とし、俺はモデルバレットを断ち切った。

そしてその瞬間、ドームから爆発音が鳴り響く。
視線を動かせば、そこには驚くべき光景が広がっていた。
「……はぁっ!?」
思わず声を上げるぐらいには、それは驚愕の事態だったろう。

黙示覚醒編　第二十一話　リゼヴィム、倒します！

和地Ｓｉｄｅ

な、なんだあれ？
リゼヴィムが変身しているだろう、仮面ライダーサウザイアー・リリン。それが今、何かに殴り飛ばされた状態から体勢を立て直していた。
問題はその後。それを追いかけるように出現した、見覚えがない龍の鎧。
おそらくはイッセーだ。だが有機的かつ黒い部分が多々見えるフォルムは、明らかに別形態。それにオーラも、何度かやっていた覇龍のそれすら超えている。
何がどうしてああなった!?
「……あ、九成君達じゃないか!?」
と、サウザイアー・リリンが吹っ飛んできた方向から、聞き覚えのある声が。
っていうかイッセーの親父さん達じゃないか!?　それもヴァーリまでいる。
「無事でしたか！」
不意打ちが襲い掛からないよう、素早く障壁を展開してカバーしつつ俺は急行する。
流石に不意打ちをしている余裕はなさそうだが、伏兵がいる可能性はあり得るしな。油断しない油断しない。
とりあえず俺達が合流すると、リーネスが素早くご両親の体を確認していた。
「……動かないでくださぁい。自爆術式やクリーチャーかが仕込まれているか、まず確認しますからぁ」

「……え？」
リーネスの警告にお二人は凍り付くけど、その可能性も確かにあったな。
リゼヴィムは既に前科があるし、ミザリはそういうの積極的にやりそうだし。まぁイッセーの前でやってなかった辺り大丈夫だろうが、念には念を入れないとな。
お袋もそれに思い至ったのか、顔面蒼白で淡々し始めた。
「えっと、鶴羽は聖杯が使えたよね？　周囲は私と和地で警戒するから、手伝ってあげて？」
「そ、それもそうね！　和地、オトメも含めて任せた！」
「任された！」
鶴羽にそう返すと、俺は素早く周辺を警戒する。
とりあえず、今俺達に仕掛けようってやつはいないようだ。どこもかしこもそれどころじゃなくなっている。
あと大王派のＤ（ディアボロス・フレーム）Ｆ部隊まで出てきているな。何時の間に大王派がかぎつけたのやら。まぁ頼りになる戦力だと……思いたい。
「まぁ、今更口封じしても遅いから大丈夫……か？」
「……何を言うか。妾達はアザゼル元総督の要請で来たのじゃが？」
俺のつぶやきにそんな返しをしたのは、空から舞い降りた幸香だった。
途端に大量のポリ窒素が邪龍達に襲い掛かり、爆殺の乱れ撃ち状態だな。
そんなことを片手間で済ませながら、幸香はこちらに振り向いた。
「ふむ、どうやら身柄を保護することはできておるようで何より。……仕込みがありそうじゃな、梔子！」
瞬時に状況と懸念を理解した幸香は、妹の名を呼びながら指を鳴らす。
すぐさま、素早く梔子がこっちに現れた。……忍者か
「無論です、お義姉様。精査の支援をさせていただきます」
「助かるわぁ。肉体変質系は鶴羽と一緒にやるからぁ、強制自殺といった精神干渉系の処置がされてないかお願いねぇ？」

リーネスと鶴羽、そして梔子が分担して親父さん達の体を調べる中、俺とお袋は幸香と手分けする形で警戒を続けている。
「……まさか、こんな形で幸香ちゃんに会うだなんてね」
「ふむ。そういえば母上が日美子の頃の付き合いなのがお主であったな。乳龍帝や母上のところでは、因果がおかしな形で紡がれる物よ」
そういえば、お袋は幸香を見たこともあったな。
積もる話はないだろうが、ここは俺が建設的に状況を把握するべきか。
「とりあえず、お二人とも。……今ぶっ飛ばされてる連中とかからどの辺りまで聞いてますか？」
リゼヴィムやミザリのことだから、誤解を招きそうな説明をして家族関係を歪ませる……とかが簡単に予想できる。そこまで知ってしまっていることに頭痛を覚える。
まぁ、現状から見るとその心配はないだろうが。ただ事態が急変しすぎているから、誤解があるかもしれない部分とかをきちんと考慮しておかないとな。
「正直なにがなんだかさっぱりだよ。でも、あいつがイッセーだってことは何を言われても分かってるさ」
「ええ。私達のちょっと困った、でも大好きな息子よね」
……凄まじ過ぎる。
俺は今、聖人君子を見ているのだろうか。そんな気持ちになりそうだ。
たまにこっちに気づいた邪龍が来たりしてなければもっとよかったんだが。幸香がしっかり爆殺してくれているけど、攻撃が飛んでくるから俺も障壁を張る必要があるんだよ。浸れない。
まぁ、リゼヴィムやミザリによるそっち方面は失敗したようだ。これは良い事だな、うん。
「しかし、赤龍帝……いや、兵藤一誠のあの鎧はなんじゃ？」
幸香もイッセーのあの鎧は気になっているようだな。
実際なんだ？　さっきからリゼヴィムと壮絶な戦いを繰り広げているが、攻撃が普通に通っているぞ。あと、性能においてもサウザイ

アーになっているリゼヴィムと割と戦えているし。
かなり気になるあの鎧だが、それに対してヴァーリが肩をすくめていた。
「どうやらオーフィスやグレートレッドの影響が、本格的に出てきた姿のようだ。リゼヴィムの神器無効化能力（セイクリッド・ギア・キャンセラー）すら通用しない、兵藤一誠の更なる進化といったところだろう」
おいおい、冗談だろ。
あいつはどこまで進化するんだ。一周回ってちょっと寒気すら覚えてきたぞ。
力押しで天敵を完全攻略しやがった。これはイッセーが凄いのか、それとも赤龍帝の籠手が凄いのか。
「D×D（ディアボロス・ドラゴン）・G（ゴッド）。龍神化、とでも名付けるべき領域だね」
「純粋な性能で既にリゼヴィム皇子は上回れている。それでも戦えているのは彼が超越者たる所以か、それともサウザイアー・リリンの性能あってのことか」
ヴァーリと共にディハウザー・ベリアルはそう感嘆の声を上げている。
つまりだ。今のあいつは、カタログスペックなら超越者の領域に到達していると。
……あいつが異形に関り異能に目覚めたの、去年の春だったよな？
「インフレバトル漫画の主人公か」
俺は思わずそう言うしかないが、それに対してアーシアは目に涙すら浮かべながら強い想いを秘めた表情をイッセーに向けていた。
「でも、そんなイッセーさんなら負けません。必ず、勝ちます！
ファーブニルさんが繋げてくれました！」
状況はさっぱり分からないけど、ファーブニルも何かしていたのか。
……まぁ、それはこの際いいんだよ。
重要なのは、このまま押し切れるかだが……っ！
「……ぐ……っ」
「ようやく慣れてきたぜぇ！」

攻撃のリズムが、少しずつだがリゼヴィムに傾き始めている。
やはり、そう簡単にはいかないか。
となると、やるべきことを考慮すれば―
「―ディハウザー・ベリアルさん。この場は信用していいんですかね？」
俺がそれを確認すると、何故かアーシアが頷いた。
「大丈夫だと思います。先ほども、クリフォトが作ったフェニックスの涙を無力化してくださいました」
「……あのドライバーやプログライズキーは複雑故、解析が間に合わなかったがね」
なるほど。となれば削れば勝てると。
よし。
「おいヴァーリ。そもそも介入しなくていいのか？」
「……あれは今、兵藤一誠の相手だろう。龍の逆鱗を踏み抜き、そして今戦っているのだから」
ふむ。
ドラゴンの誇りというやつか。まぁ、つけるべきケリってことなんだろうが。
ただ悪いが、そこまで考慮してられる事態でもなさそうなんでな。
「悪いが俺はＴＰＯは弁えるんでな。優先順位を完全度外視する気はない」
俺はそう言うと、肩をすくめながら歩き出す。
「今どきの特撮は、悪の黒幕にはみんなの力で挑むもんだ。おっぱいドラゴンにはその辺を理解する度量が必要だと思うけどな？」
そのあたり、優先順位ははき違えない。
ディハウザー・ベリアルが味方と考えていいなら大丈夫だろう。そしてイッセーはどうも反撃を喰らっている状態だ。
となればやることは単純だ。
「……それでいいなら見守ってろ。悪いが俺は介入する」
仲間の命がかかっているし、何より俺達は対テロ部隊だ。
その辺り、折り合いはつけたうえでやらせてもらう。

イッセーＳｉｄｅ

くそ、ちょっとまずいぞ。
リゼヴィムとの闘いだけど、少し苦しくなってきたかもしれない。
リゼヴィムだけなら勝ち目はあった。超越者なだけあって確かに手強いけど、今の俺なら攻防共に上回っている。持久戦はいつものことで自身が薄かったけど、ディハウザーさんが涙を無価値にしてくれたから勝ち目はある。
なのに……っ！
「危なかったぜぇ……サウザイアーが無かったらなぁ!!」
攻撃が……当たらない……っ！
打撃の全ては回避され、リゼヴィムの攻撃が確実に俺に当たっていく。
因果律を読めるから対応はできるけど、その瞬間に因果は変わって攻撃が入る。攻撃を当てる時も似たようなことになっている。さっきからそれが、どんどん増えて言っている。
理由は分かる。サウザイアーだ。
一瞬で億を超える行動パターンを割り出して、最適解を導き出す。つまり、奴は因果を予測できる。
それに慣れてきた途端に、リゼヴィムと俺の戦いはワンサイドゲームになりかかっている。さっきから俺ばっかりがダメージを喰らっている。
攻撃そのものは致命傷じゃない。龍神化はそれだけ凄く強化されていて、リゼヴィムでも大技ぬきじゃ鎧を壊せない。

だけど、これは長時間使えない。
今までだってそうだった。禁手も至ってから少しの間は、一日一回で三十分ぐらい。三叉成駒や真女王も、なりたての時は短時間が限界。そのどれもが、何度もトレーニングをしたりアドバイスをもらって少しずつ伸ばしてきた。俺は根本的に才能がないから、どうしてもそういうところで粗がでる。
だがリゼヴィムは装備と地力が違う。フェニックスの涙をディハウザーさんが無価値にしたとはいえ、ダメージが溜まらないなら意味がない。
「こなくそ！」
咄嗟にアスカロンを射出してみるけど、サウザイアーの予測演算はそれを読んでいた。
素早く回避するだけでなく、そのまま柄を握って回転。勢いを殺して着地しやがった。
「ま、ずるいなんて言うなよ？　お前さんだってオーフィス達の体や、そもそも悪魔の駒（イーヴィル・ピース）あっての力だしなぁ？」
「この……野郎……っ」
俺は悔しくて歯を食いしばるけど、かなりまずい。
そろそろヤバイ。っていうか、なんか体中が痛くなってきたぞ。
背中に寒気が走ったとき、リゼヴィムは離れたところから右腕を振りかぶる。
「あ、躱すと刺さっちゃうかもよ？」
やばい。こいつ……アスカロンを投げる気か!?
畜生！　反撃する時間が―
「――――いや、させると思うか？」
『マグネティックスターブラストフィーバー！』

―ないと思った瞬間、その蹴りがリゼヴィムに襲い掛かった。
この攻撃、九成か！
「九成⁉」
「ようイッセー。悪いが俺も参加させてもらうぜ？」
九成はそう言うと、全武装を展開してリゼヴィムを牽制。一瞬の隙をついてアスカロンを分捕ってから戻ってきた。
「……へぇ～。ここで涙換救済君の参戦かい？　もしかして、モデルバレットちゃんやられちゃったの？　ミザリきゅんは何してんのかね？」
首をかしげるリゼヴィムに、九成は肩をすくめながらアスカロンを俺に突き出す。
「わざわざご丁寧に一騎打ちしている場合かよ。こっちはただでさえ勢い余って殺さないように、手加減までしなきゃいけないんだぞ？」
「う、うっせえよ！　それこそお前、ミザリ達はどうしたんだ？」
俺はそう言うけど、九成は肩をすくめていた。
「モデルバレットは倒した。リゼヴィムはそっちはノータッチだが、優先順位ははき違えないさ。……カズヒねぇにも怒られそうだしな」
……確かに。
カズヒは起こりそうだな。あいつ、そういうのにかなり厳しいし。
自分にも基本的に徹底するし、出来なかったら後で反省するからなおさらだよなぁ。
それに、このまま時間切れで負けるってのはもっと嫌だな。
……よし。
「力貸してくれ、九成。あいつはここでぶちのめす」
「当然だ。この好機を逃す気はないし……」
仮面越しに、九成の怒気はかなり跳ね上がっている。
ハハッ。実の両親誘拐された、俺並みに切れてんじゃねえよ。
「あの二人にここまでの危害を加えられて、俺もかなりキてるんだ」

これも、父さんと母さんの人徳かな。
ったく。これは本当にいい両親を持ったよ。
「出し惜しみなしだ。文字通り全力でぶちのめすぞ！」
「ああ！　残ってる力、全部叩きつけてやるぜ!!」
九成に頷き、俺は拳を握り締めて走り出す。
「上ぅ等っ！　返り討ちにしてやるぜぇっ!!」
吠えたなリゼヴィム。……やれるもんならやってみやがれ!!

黙示覚醒編　第二十二話　白金龍の（ギガント・プラチナ）君臨皇帝（・ユニゾンドライブ）

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

ヴァーリ・ルシファーは、その戦闘を一挙手一投足を逃すことなく見据えていた。

九成和地はまごうことなく強者だ。前人未踏の残神に至るのは伊達ではない。

兵藤一誠は誇るべき好敵手だ。禁手から更なる進化を遂げた傑物といえるだろう。

だが、その二人をもってしてもリゼヴィムは脅威だった。

神器無効化能力を突破した兵藤一誠も、手札を切り替えて対応する九成和地も、リゼヴィムに対処されている。

……忌々しいことに、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーは強者だ。たった三人の超越者は伊達ではなく、純粋な性能で魔王クラスを超える。超越者としては一番弱いかもしれないが、それは超越者という土俵の話なのだ。

更にそこにサウザイアー・リリンが鬼門となる。優れた予測演算を持つサウザイアーは、更に基本性能も高い。ただでさえ強いリゼヴィムに、遊びが過ぎる欠点を補完できる更なる強化。鬼に金棒とはこのことだろう。

そして兵藤一誠の調子が悪くなっているうえ、九成和地は地力の差が出ている。

このままでは、間違いなく負ける。それが分かる。

「……さて、誰が出る？」

それを同じように悟っていたのだろう。九条・幸香・ディアドコイ

がそう言い放つ。
「ちなみに、妾は今回の状況を考えれば出ない方がよいとは思っておる。順当に行くのならばお主ではないのか、ヴァーリ・ルシファー？」
「意外だね。君は俺のことを嫌っていると思っていたけど」
そう返すヴァーリに、幸香は軽く肩をすくめる。
「能力以外を評価しておらぬだけじゃ。だが妾としても、因縁の清算に理解は示すぞ？」
その返しに、ヴァーリは少し呼吸を置く。
……勝算はある。一つだけ作っていた。
だが、まったくもって足りない。サウザイアー・リリンがあまりに難敵となっている。
要はたった一つの勝算を武器に、それ以外が圧倒的に不利な状況に挑むようなものだ。
そして何より、今は兵藤一誠の戦いだと思っている。
誇り高い龍として、彼の戦いに介入することを無粋と感じる。
ただ、幸香はそれを見て肩をすくめた。
「介入せぬならそれでも良い。だが、それなら妾が出張るのみだ」
そう告げる幸香は、寒気を感じるほど冷徹に状況を見据えていた。
「今のままではリゼヴィムが確実に競り勝つ。それはお主も分かっておるようじゃが？」
その言葉に、ヴァーリは言い返す言葉を持てない。
内心のその迷いに向き合ったその時。
「……ヴァーリさん。お願いがあります」
振り返れば、そこにはアーシア・アルジェントがいた。
その手に差し出すものは―
「どうか、力になってくださいませんか？」

和地Ｓｉｄｅ

まずいな。このままだとこっちが競り負ける。
リゼヴィムと攻防を繰り広げながら、俺はそれを痛感していた。
というよりだ、幸香辺りが喜々として介入してくること前提だから、俺達だけだと負けるんだよ。
あの女、妙なところで弁えてるな？　弁えなくていいから、手柄折半でいいから。
そう思いながら俺は迎撃を行い、リゼヴィムに仕掛けていく。
神器無効化能力を突破するなんて言うのは、相当の例外枠だけの特権だ。俺ができることじゃない……と思ったか？
「……なるほど、これが透過か。タイミングがシビアだな」
「さっきから全部成功していう事かよ！」
「俺の自尊心踏みにじって言う事かよ！」
つい呟いた途端に、よりにもよってイッセーとリゼヴィムが続けざまにツッコミを入れてきやがった。
まぁ、俺もツッコミが入るとは思ってたけど。自分でいう事でもないけど、かなり高難易度の真似をしている自覚がある。やってみたらできたのにちょっとびっくり。
……具体的に言えば、今俺は透過を使って戦っている。
仕組みは単純。魔剣を即興で作ってイッセーの籠手に仕込み、それと共鳴させる形で透過を扱える魔剣を作ってみた。
タイミングが割とシビアだし、イッセーのすぐ近くじゃないと使えない。そもそも俺の異能じゃないから尚更使いづらいわけで、はっきり言って悪手じみている。だが、これで魔剣を使ってリゼヴィムに攻撃を叩き込めるのが利点だ。できる俺に自分で引いている。
自分でいう事じゃないが、俺も大概スペシャルだな。高いモチベーションと優れた英才教育もあって、間違いなく最高峰の強者枠だろ。
ただ、それをもってしても不利なのが現状だが。

元々超越者であるリゼヴィムは、基本性能なら俺とイッセーを足しても話にならない。更にサウザイアー・リリンの性能が高すぎて、龍神化やサルヴェイティングアサルトドッグでもその差を埋めきれない。

さっきまでのイッセーの戦いも、慣れてきた途端にリゼヴィムが優勢になったからな。攻撃力の差から勝負になっていたが、イッセーの攻撃はリゼヴィムのそれに比べると1：9ぐらいの命中率だ。

そして俺が介入してなお、リゼヴィムと俺たちの攻撃命中度合いは1：5といったところ。イッセーのこれまでのパターンから考えると、龍神化の持続時間はそろそろきつい。つまりこのままだと、俺たちは勝ち目がない。

もう行ってほしいんだが、幸香かヴァーリはまだなのか―

「……悪いね、兵藤一誠。俺達も混ぜてもらう」

―と思ったが、ついに来たか！

一瞬ですれ違ったヴァーリは、その刃で、リゼヴィムに明確な切り傷をつける。

かすり傷だが、しかし神器無効化能力が通用しない。

それに対してリゼヴィムは驚くが、何かに気づいたらしい。

「なるほどねぇ！　攻撃に神器を入れてないってか？」

「まぁね。極覇龍の力を乗せれないのは残念だけど、ただ早く動けるだけでも十分だろう？」

リゼヴィムにそう返すヴァーリは、そう告げてしかし肩をすくめる。

……俺も似たような戦法は考慮していたが、よくやったもんだ。

そもそも、ヴァーリは才能の塊だからな。別に当てればという条件を付けるのなら、超越者にだって傷はつけれたわけだ。そして当てるまでの過程にだけ神器を使えば、こういう事もできる。

だが途端にリゼヴィムは対応する。

三人がかりで仕掛けてなおこれか。今の段階だと1：3。龍神化が切れれば詰むのは変わらないか。

「どうするどうする、我が孫達！　はっはぁ!!　オーフィスやグレー

トレッドの力まで使われたうえ、ディハウザー君の横やりが入った時はビビったけどなぁ！」

そういうなり、リゼヴィムは何時の間にかドライバーを起動していた。

『ＲＯＭＡＮ！』

『ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＭＡＬＩＣＥ！』

瞬時に障壁を展開。同時に素早く飛び退る。

だがそのうえで、その一撃はあまりに重い。

『クリフォトディストラクション！』

障壁を吹き飛ばしたうえで、衝撃が俺に重くぶつかる。

「サウザイアー・リリンなら十分やれるぜぇ!!」

……直撃してたらまずかったな。むしろ今ので肋骨に罅とか入ってないか？

しかし、リゼヴィムとサウザイアー・リリンの組み合わせは致命的にまずいな。

超越者にヴァナルガンドレベルの仮面ライダー。はっきり言って鬼に金棒という言葉すら生ぬるい。下手するとロキよりやばいぞ。

「ったく。これは流石に面倒だな」

思わずぼやいたうえで、俺はイッセーとヴァーリを確認する。

イッセーは龍神化の影響で大したダメージは入っていない。だがかなり消耗している感じで、このままだとまずそうだな。

ヴァーリは鎧が一瞬消えたが、すぐに纏い直している。とはいえ神器無効化能力はやはりネックか。

さて、ここからどうしたものか。

「さぁ～て。長期戦で赤龍帝君がガス欠になるまでまってから、ゆっくり各個撃破ってのがいいかねぇ？」

「この……野郎……っ」

リゼヴィムにイッセーが唸るが、実際それが最適解ではある。

これまでの経験上、覚醒したイッセーはその段階では長期戦に向いていないからな。

そろそろいい加減にまずいからな。やるなら短期決戦にするしかないわけだが、どうしたものか……っ。
「「っ!?」」
俺も、イッセーも、リゼヴィムすら驚いて振り返る。
ヴァーリから凄まじい気配を感じたからだ。
そこにいたヴァーリは、なんと黄金のオーラを全身から迸らせていた。
「……言ってなかったか？　俺達だと」
そういうヴァーリは、そのまま黄金の輝きを己の白銀の輝きと混ぜ合わせていく。
何より黄金の輝きは、よく知るドラゴンの姿をとっていた。
『アーシアたんを傷つけた……絶対に許さない！』
「「ファーブニル!?」」
思わずイッセーと一緒の叫ぶ中、そこには更なる人影が写っていく。
『そう、貴様は逆鱗を踏み続けたのだ』
『世界でもっとも偉大なるものを、お前は傷つけたのだから』
『世界の至宝、アーシアたんのおパンティー』
『その授け主たるアーシアたんこそ、我らが守るべき聖女』
『彼女を傷つけるもの、万死に値する！』
……え、ちょっと待って？
歴代白龍皇、なんか総力を挙げている形か？
しかもパンツか。冗談だろと言いたいが、奴らがパンツの使徒になったのは現実だったしなぁ。
『だ、大丈夫か白いのぉおおおおおおお!?』
「えぇ……」
ドライグも思わず絶叫しているし。イッセーも軽く引いているし。
正直俺もどう反応していいのか分からないんだが。っていうか、本当にアルビオンは大丈夫か？
『が、頑張るもん!!』
ダメっぽい！

これはさっさと決着をつけないと、アルビオンが死ぬ。心が死ぬ。
ただでさえイッセーがおっぱいおっぱいやらかす所為で、やれ幼児退行やらやれ失語症やらで薬漬けだったんだぞ。漸くお互いが慰めあって乗り越えたと思ったら、今度はパンツ龍王ファーブニル。流石にもうちょっとなんかないのかとは言いたくなるぞ。
「さぁ、味わうといい。天龍と龍王の共演を！」
そしてヴァーリは高らかに吠え、オーラを融合させる。
それは白銀でも黄金でもない。例えるならば白金（プラチナ）の如き輝き。
その光となり、オーラはヴァーリへと集っていく。
『さん、はい』
ファーブニルが音頭を取り、そしてオーラが弾け飛ぶ。
『『『

れてくれたことがきっかけで、オーフィスと共鳴して至ったんだ」
なんでイッセーがそんなシリアスな到達をした時に、パンツフルスロットルで対を成す存在が至る。
イッセーがおっぱいほぼ関係ない進化を遂げたというのに、バランスをとるようにパンツぶっこんで来たのかよ。上げて落とされすぎだろリゼヴィム。何だ、この悪質極まりないデストラップは。
心の底から頭痛を覚えてきたぞ。控えめに言って頭を抱えたい。
「終わりだリゼヴィム。勢い余って死なないように耐えるといい！」
その瞬間、げんなりしている俺を置いてヴァーリはリゼヴィムに突貫した。
あまりの光景に反応が遅れたリゼヴィムは、拳をもろに食らって一回転ぐらいして吹っ飛んだ。
咄嗟に着地しているが、しかしかなり効いているのが見て取れる。神器無効化能力が通用していない証拠だ。
「孫まで突破してくんのかよ!? しかもファーブニルとの連携ぇ!? 散々安眠妨害しただけじゃ足りねえってかこのパンツはぁっ!!?」
よく分からん絶叫を上げるリゼヴィムだが、そこにファーブニルの殺意が返ってきた。
『殺す……絶対許さない!!』
「それは抑えておけ、俺も我慢するからね。……まぁ、公開処刑ぐらいは見てみたいがな」
これは、凄い事になりそうで―

「そういうわけにはいかないのよね」

―そこで更に来るか！
奴は、パシパエ＝カイニス！
っていうか待て待て待て待て。
そのオーラ、どう考えても神クラスの―
「ふふ、実は貯金があるの。その分全部使った加護盛りだくさん、思う存分味わいなさい!!」
「冗談きついなぁ、おい！」
思わずぼやくが、こうなったら手段を選んでいる場合じゃ―

「そうはいきませんのよぉ～！」
「そういう事じゃんか！」

―更にヒマリとヒツギまで!?
着地する二人は、一斉に俺に振り返った。
「和地、サポートお願いするよ！」
「こいつは私達で倒しますの！」
「……悪い、任せた！」
イッセーまで降ってきやがった！
ああもう……っ
「やってやればいいんだろうが！　上等だこの野郎!!」
両方カバーしてやる。どっちもしなけりゃいけないのが大変だなぁ、おい!!

黙示覚醒編　第二十三話　双龍紅化

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……さて、父さんがやばいことになっているね」
「どうする気だ？　やはりプラン通りになりそうだな」
「ふふふ。それはそれで悲しいけどね。それより封印は解けそうかい、アルバート？」
「やはり難しいな。おそらく時間が間に合わん」
「となると、プラン通りか。……人造惑星の処置ってできるかな？」
「素体をしっかり回収してくれればな。もっとも、奴は素質が薄いから時間がかかるぞ？」
「ふむふむ。まぁ、異世界に仕掛ける時まで待たせてもいいかもね」
「なら時間をしっかりかけるか。……それはそれとしてだ」
「……うん、分かるよ。僕の甥っ子、どこに行く気なんだろうね」
「パンツの繊維もラーメンの麺も細長いが、だからって共鳴するか普通」
「これはこれで悲しいけど、もっとシリアスな悲劇が見たいねぇ」
「無敵すぎだろ、我らがマスター」
「どういたしまして」
「褒めてないし、ニスネウスはどうするんだ？」
「一応ちょっとしたテストの一環だけど、どうも上手くハマってないね。……慣れるまでは大物狙いでいかないとダメか」
「だからこそ、繋げるならトライヘキサか。しかも相手の動きまで踏まえた大博打……当たればデカいし外れるなら―」
「―トライヘキサを援護して、僕達が動けばいいってわけだよ。さぁ、仕掛けるとしようか」

和地Ｓｉｄｅ

「さぁて、それじゃぁ、奥の手を用意した方がいいかしらね？」
そう微笑むパシパエ＝カイニス。どうやらここで俺達を殺すつもりらしい。
「……それに、ここで死んだ方が幸せかもしれないわね？」
「ミザリは色々動いているようで何よりだな」
野郎。姿が見えないと思っていたが、どうやら色々動いているようだ。
絶対碌でもないこと考えている。もういい加減そこに気づいてしまっているよ、俺。
……ふぅ。とにかくまずは冷静に叩き潰すか。確実に敵の精鋭を減らしておこう。
「もらったぞ、リゼヴィム！」
「喰らいやがれぇぇぇぇぇぇっ!!」
「うおっとぉっ!!」
あっちも色々気にしておかないとな。二天龍がガチヤバいことになっているのに、凌げているサウザイアーとリゼヴィムも大概ヤバい。
そんなことを気にしている余裕もないぐらい、パシパエ＝カイニスは微笑みながら槍を具現化する。
見ただけで分かる。あれはかなりまずいぞ。
「ふふ。色々仕込んで準備してみたの。……ほら、カイニスは槍を使っているから……ね？」
「そうかい。ま、いつものことだがな」

俺は軽く返すが、これはちょっとまずいな。
あのオーラ、どう考えても出力が高すぎる。魔王クラスの出力が普通にあると考えるべきだろう。
リゼヴィムの片手間にどうにかできる相手じゃない。
「和地！　私に合わせてほしいですわ！」
ヒマリがそう真っ先に言うが、確かにな。
俺とヒマリはツーマンセルでの連携訓練を何度も積んでいる。ヒツギはヒマリと二人で一つの星辰光（アステリズム）を持っている都合上、本領発揮は連携必須だ。
となれば、ヒマリを基点にするのがこの場における最適解。そこに関して否はない。
ただ問題は―
「オフェンスは俺がやった方がいいと思うが？　神器の問題、解決してないだろ？」
―ヒマリとヒツギの神器問題だ。
確か対策もやっていたはずだが、大丈夫なのだろうか。
そこを懸念にする俺に対し、二人は笑みをもってそれに応えた。
「大丈夫！　そろそろこっちも復活するよ！」
「イッセーも頑張ってるし、こっちも気合を入れないとね!!」
そう言いながら、二人はショットライザーを装着。
……そのうえで、更に一手を付け加えた。
『『クリムゾンユニット！』』
「……増加ユニット？」
パシパエ＝カイニスが怪訝な様子を見せるが、俺もこのタイミングだとは思わなかった。
ショットライザーを手に盛った状態で、基部に更に装着される赤い拡張ユニット。
二人の問題解決の為、リーネスが実験中の伏せ札。クリムゾンユニット。
なるほど、ここで使うという事か。確かに切りどころでもあるだろう。

となれば―
「分かった。俺は基本としてサポートに回る！　どっちもしっかりやってこい!!」
―やることしっかり、やるとするか!!

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

『『Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ……ｒｉｄｅｒ……』』
ヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバーは、この数か月弱体化にさいなまれていた。
その理由は、攻撃の起点といえる神器の不調に由来する。
赤龍婚乳（バス・トライク）。兵藤一誠が編み出した乳技の一つ。譲渡の応用系であり、乳房に力を流し込むことで、対象を龍に変じる力ともいえる。
これにより、ヒツギとヒマリは一段上の力を獲得。だがここで不都合が発生する。
それこそが二人の神器。厳密にいえばそれぞれが持つドラゴン系神器が要因だ。
元々高位の龍を封印していたそれは、準神滅具一歩手前。それに神滅具たる赤龍帝の力が注ぎ込まれたことで、不調が発生してしまった。
準神滅具に一歩届かない神器が器では、準赤龍帝といえる存在になった力を運用するのに困難が生じる。それに伴い神器そのものが緩やかに変化を遂げており、これがある種のバグを発生させていた。
時間を掛ければ克服されるだろう。だが同時に、現状は強敵が迫りくるのもまた事実。

これに対し、リーネス・エグリゴリは当然対処を試みる。
それこそが、ヒマリだけでなくヒツギも仮面ライダーにすることであり、それをもってして第一段階。
そしてデータをとったことで、ここに本命の第二段階が具現化する。
「……変身！」
『『ショットライズ』』
放たれる赤いショットモデルは、紅の装甲を両者に展開。
瞬時に展開されるそれは、龍を模した強化装甲。
『『クリムゾンドラゴン！　Ｏｕｒ　ｄａｒｌｉｎ　ｉｓ　ｒｅｄ　ｄｒｇｏｎ』』
ここに推参、クリムゾンラクシュミー及びクリムゾンナジェージダ。
ヒマリ・ナインテイルとヒツギ・セプテンバー専用の仮面ライダーがここに降臨した。
「……やっぱこの音声ハズい！　リーネスにはあとで文句言わないと！」
「そうですの？　私はリーネスに感謝感激雨あられですわよ？」
対照的な反応を見せながら、二人は同時に突貫する。
それに対し、パシパエ＝カイニスは微笑みながら指を鳴らす。
そこに現れるは、合計六体のステラフレーム。
それを従えドローンを展開させながら、パシパエ＝カイニスは槍を軽く振るって迎撃する。
ぶつかり合う衝撃は、双方を数メートル弾き飛ばす。
そこに迫りくる自我未覚醒体のステラフレーム。
ドローンまで展開しての数の圧殺。放つ攻撃こそ和地が素早く対応しているが、突貫まではしのぎ切れない。
パシパエ＝カイニスはこれで終わりとは思っていなかったが、だがどうするのかと思っていた。
広義的なリアス・グレモリー眷属は油断ができない。下手に遊びを入れると破滅に繋がる。英雄派の一件もあり、本腰を入れるべき時に

確実に潰し切るべきだと理解している。
だが同時に、どういった手札で盛り返すか。それが分からない。
意外性溢れすぎる進化を遂げる兵藤一誠を筆頭とするだけあり、彼らの真価や成長は異例すぎる。世界的に見ても類を見ないイレギュラーたる聖魔剣や、偽物に本物のバロールが宿ることで表れた新規神滅具など、想定する方が困難極まりないイレギュラーが多すぎる。
だからこそ、シンプルに圧倒的な圧殺を試みる。戦闘とは基本、自分の長所を押し付ける方が有利なのだから。
―そう。パシパエ・カイニスは一切油断をしていなかった。
念には念を入れた圧殺を試み、そこに容赦は一切ない。自分たちの持ち味を最大限に生かし、自分が動かせるだけの余剰戦力による集中攻撃を仕掛けている。
……だがしかし、リーネス・エグリゴリの技術と研究はそれを上回った。ただそれだけのことである。
次の瞬間、圧殺を試みたステラフレーム達は弾き飛ばされた。
「っ!?」
その現象は一斉に放たれる砲撃によるもの。更にこちらを狙った更なる砲撃まで襲い掛かり、パシパエ＝カイニスは弾き飛ばされる。
体勢を立て直して反撃を試みるも、ステラフレームとドローンに対し、鋼の龍が襲い掛かる。
一瞬で乱戦に近い状況になる中、パシパエ＝カイニスは瞬時に槍を構える。
かつてアグレアスで戦った時の余剰分を込めたそのやりは、主神の権能に匹敵する力が籠っている。神滅具の禁手に並ぶだろう強大な力。パシパエ＝カイニスの切り札と言っていい。
その瞬間的な対応から放たれる槍の一閃を、突貫した二人の仮面ライダーが迎撃する。
「早い！」
「当然じゃんか！」
「その為の力ですわ!!」
振るわれる攻撃に対応しながら、ヒツギとヒマリは連携でパシパエ

＝カイニスを抑え込む。
ヒマリが前衛を担い、更に大量の龍を率いることでステラフレームを抑え込む。そこにフォローに回るヒツギが、大量の砲撃をもって縫い留める。
双方共に、それは龍の外装（ドラグナイト・メイル）でも龍の咆哮（ドラグレイ・カノン）でもない。これは、そんな次元では収まらない。
少なくとも準神滅具の領域のそれに、ヒマリとヒツギは調子に乗らないように気を遣いつつ戦闘を行っていく。
……クリムゾンユニットは、ヒツギとヒマリの神器不調を克服する為に試作されたユニットである。
双方、そしてきっかけといえる兵藤一誠をリンクする形で対応する為に開発されたユニット。それぞれに三人の神器についている宝玉を外して封印しており、これにより同調させることで安定性を確立させることを目的としている。
性質上イッセーと連携がとれる距離での戦闘が必須であり、現段階では当然のように試験装備。とはいえ、その状態なら二人は封印系神器を使用できる状態を確保。更に副産物として、二人の神器は準神滅具の領域に到達した。
……現段階では名称こそつけられていないが、まず間違いなく準神滅具としてカテゴライズされると考えられている。
その力をもってして、二人は一気に接近する。
圧倒的な猛威を振るうステラフレームを複数対率いるパシパエ＝カイニス。
準神滅具と化した神器を併用し、二人係で対応するヒマリとヒツギ。
その猛攻は激戦となり―
『『ＦＲＥＥ　ＢＯＯＳＴ！』』
「「喰らええっ!!」」
『『クリムゾンブラストフィーバー!!』』
―放たれる砲撃。それにより、戦線が大きく動き出した。

黙示覚醒編　第二十四話

イッセーＳｉｄｅ

この野郎、ここまでやってくれるとはな!!
俺はヴァーリと一緒に、リゼヴィムを倒すべき殴り掛かる。
二人係の連携で仕掛けるけど、リゼヴィムはやはり手強い。
……感覚的に超越者としては一番弱いだろう。だけど超越者ではあるってか。サウザイアー込みなら十分ヤバい！
「うぉっ、危ねっ！　孫の方が一安心でよかったぜぃ！」
「なめるな、リゼヴィム!!」
ヴァーリの攻撃をとにかく回避しながら、リゼヴィムは俺の攻撃を捌いていく。
ヴァーリはその対応に腹を立てるけど、リゼヴィムは特に気にしてない。
「フィジカルだけじゃぁサウザイアーは打倒できねえ！　そろそろヤバ目の赤龍帝が倒れてから、ゆっくり倒してやるから待ってろって♪」
「なめんじゃねぇぇぇぇぇぇっ!!」
リゼヴィムがヴァーリに気を取られた瞬間に打撃を叩き込むけど、リゼヴィムはそれを受け流す。
二対一。それも一番ヤバい神器無効化能力すらどうしようもない力を振るって。リゼヴィムを打倒するにあたって、こんなレベルの好機もないってもんだ。
だけど、リゼヴィムが纏っているサウザイアー・リリンがやばい。
リゼヴィム自身が超越者なこともあって、今の奴は俺やヴァーリでも一対一だと競り負ける。そんなレベルで厄介な敵だからこそ、間違

いなく難敵だといえるレベルだ。
そして問題は、サウザイアーの予測演算。
一億二千万通りだったか。そんな数の行動パターンの測定を行い、そこから最適解を導き出す力は厄介だ。
俺が因果律を読んで動いても、それに即座に対応してくる。いくら読んだとしてもすぐに変えていけばやりづらい。因果律が見えないヴァーリなら、尚更攻撃を喰らっちまうだろう。
単純なフィジカル以外にやばいポイントが多すぎる。勘弁してくれよなぁ……畜生！
っていうか、俺もそろそろヤバイ。全身が激痛を発しているし、気を抜いたら血反吐を吐いてぶっ倒れそうだ。たぶん十分も持たないぞ。
このチャンスは逃せないってのに、どうすりゃいいんだ―

『イッセー、朗報です！』

―その時、頼れる相棒の声が辺り一面に響き渡った。
俺の相棒。比翼連理の相方。シャルロット・コルデー。
実は今の今まで、裏方に回ってくれていた。
それが、あえてパスではなく全員に聞こえるように声を響かせてくれている。
絶対頼れる発言をぶちかましてくれるはずだ！
「言ってくれ、シャルロット!!」
たぶん、めっちゃいい知らせだ！
……あれ？　ちょっと言い淀んでいる雰囲気？

『……アザゼル先生がリリスを、その……チョコバーで篭絡しました』
……え？
「はぁぶるばぁっ!?」
あ、リゼヴィムも驚きのあまり、ヴァーリの拳をもろに食らった。
そのまま容赦しない追撃を仕掛けるヴァーリだけど、お前はちょっと困惑しろよ。カズヒか。
九成は九成でしっかりこっちを障壁でサポートしているけど、なんというか凄く複雑な雰囲気だ。状況が状況なら、額に手を当てるぐらいはしているだろう。
俺も正直、ちょっと手が止まっている。周囲を見渡せば、父さんと母さんはともかくディハウザーさんも困惑している。
「チョコバーって美味しいですからね」
ピュアすぎるよアーシアちゃん！　もうちょっと、この現実に思うところを持って！
『……あ、すいません半分嘘です。篭絡を試みたら想像以上に動揺した為、とりあえずチョコバーは与えて様子見してます』
あ、そっか。
良心の呵責に耐えかねたっぽいシャルロットが、ちょっとほっとさせてくれる。流石にチョコバー一つで裏切るとか、リゼヴィムに同情するし。
……いや、どんだけ揺らいでんだよ。
後なんで先生もそんなこと考えたの？　食い物で釣るにしても、状況とかシリアスなところを考えてもっとなんかなかったのかよ。
「ほ……ブ……バァ……ふざけんなぁっ!?」
「ぬぉっ！」
あ、リゼヴィムが我に返ってヴァーリを弾き飛ばした。
「いやお前、本気でふざけんじゃねえよ!?　チョコバーで篭絡って、マジか!?」
リゼヴィムの奴、神器無効化能力を俺やヴァーリに突破された以上に驚いているな。
「マジでやめてくれよ!?　いやホント、そんなにお菓子が欲しいなら

ケーキの１０や２０は買ってやるからっとぉ!?」
「下らん！　俺がブタ○ンを段ボール箱で贈呈すればいいだけだ！」
そしてヴァーリはまた追撃を試みるけど、お前もそのツッコミでいいのか!?
あとブタ○ンは駄菓子だけどカップラーメンだし！　チョコバーは栄養食品だけど甘味だよ!?
あとそれは方向性が違うと……いや、行けそうだな。オーフィスもそんな違いで振り回されないし。
いや、それにしてもマジか。
あの後こっそり、周囲の探索とか裏方に回ってくれていたけど、そんなことになっていたのか。
……イヤ、これってそんな流れでいいの……か？

「まぁ、おっぱいでないだけでノリはいつものだな。……と、いうわけでそろそろ決めるぞ」

と、そんな声が響いた。

和地Ｓｉｄｅ

さて、訳の分からない展開に誰もが動きを止めていた。
正直、俺も一瞬思考が止まりかけた。ただし本能レベルで叩き込まれた技術もあり、俺はこの空白を好機として認識することができた。
だからこそ、このチャンスは逃さない。逃がす理由が……ない。
「一気に仕留めろ。道はこっちが作っておいたぞ」
ためらうことなく、俺は星魔剣を展開するとリゼヴィムやパシパエ＝カイニスの周囲を結界で囲み、通路を作る。
同時にサルヴェイティングアサルトドッグのまま、砲撃をぶっぱして周囲の敵をけん制する。
勘違いしている奴は流石にいないだろうが、俺は自力で禁手（バランス・ブレイカー）に到達している。パラディンドッグはあくまで禁手の拡張ユニットでしかない。だから当然、サルヴェイティングアサルトドッグでも禁手は使える。
基本的に禁手を使うならパラディンドッグが最適解。それは分かっている。だがそれゆえに、パラディンドッグ抜きで禁手を使うことそのものが奇手となる。
実際、一瞬だが全員が呆けていた。動いているのは自我が覚醒していないステラフレームだけだ。
だからこそ、ここで明確な隙が生まれていた。
「オッケーですわよぉっ！」
そしてこういう時、俺の判断にすぐに動いてくれるのはヒマリだった。
なんだかんだでザイアでは相方だったからな。連携を前提としている節もある為、こういう時の対応力はやはり一日の長がある。
「……っしゃぁ！」
ついで反応するはイッセー。
こういう時に即座に対応しやすいのは、イッセーの美徳だ。良くも悪くも愚直なところがあるからこそ、信頼してくれるからこその対応力だと思えるな。

「……っと、そうだね！」
遅れて反応するはヒツギだ。
なんだかんだで付き合いはイッセーの次ぐらい。当人が良くも悪くも常識人なので混乱には弱いところもあるが、彼女だって精鋭部隊の出身だ。十代でそんな立場につくからこそ、ヒマリの動きもあって対応する。
そして、最後の一人もかなり早かった。
具体的に言えば、リゼヴィムやパシパエ＝カイニスより数段早い。
「そうだな。ここで……叩き潰す！」
行け、ヴァーリ・ルシファー。
俺は正直、お前のことはあまり好きじゃない。だがそれはそれとして、お前に対するリゼヴィムの対応は怒りを覚えている。曲がりなりにも、現状は懲罰活動をしぶしぶだが受けていることも認めよう。
だからしっかりケジメをつけろ。幸いそいつはテロの主犯だ。多少力を込めてぶん殴る程度なら、俺だってお目こぼしぐらいはしてやるさ。
「お膳立てしてやったんだ。さっさと片付けろ！」
「任せとけ、九成！」
イッセーが真っ先に俺の激励に応え、そして全員が敵を打倒するべく猛攻を仕掛ける。
これは格好の好機だ。そもそもイッセーがそろそろヤバイ以上、長期戦どころか数十分すら不可能だろう。
数分で十分。むしろそれが限界。イッセーが倒れればリゼヴィムは何とかするぐらいできるだろうし、クリムゾンユニットは確かイッセーとのリンクが必須である以上、ヒマリとヒツギもまずいだろう。
だからこそ、今やるべきは短期決戦。禁手より基本性能で仕掛ける！
「そういうわけだ。邪魔はさせんからまずは俺にしな！」
妨害を試みるステラフレームに猛攻を仕掛けながら、俺はゾーンに突入しつつ迎撃と牽制を仕掛ける。
モデルバレットが倒れてから、多少メンタルが緩んでいたからな。

持ち直してゾーンに突入するまでが大変だった。
だが、ここからは常に本気モードだ。悪いが俺を倒すまでは四人の邪魔はさせないし、終わるまではしのぎ切る。
集中攻撃に切り替わったステラフレームの攻撃を全力でいなしながら、俺はそのうえでヒマリ達の支援として障壁を適宜展開する。
もって数分。それが俺の禁手以上にイッセーの限界。だから遠慮なくフルスロットルかつ、短期決戦の後先考えないやり口だ。
ここでリゼヴィムをどうにかできるのは、それだけの価値がある。だからこそ、投入するべきところは見逃さない。
「うぉおおおおおおおおっ!!」
「はぁあああああああああっ!!」
二組の猛攻が相手を押し込むが、しかし決定打には一歩足りない。
このままだと一手足りない。少なくとも、イッセーが倒れる方が早いだろう。
……ただ、それは―
「なら、こうするよ！」
―そこにいるのがイッセー達だけの話だ。
放たれる大量の弾幕が敵をけん制し、そこに突貫する二人が敵を切り裂いていく。
「こっちの検査は全部完了よぉ！」
「つーわけで、こっからは私達も参戦ってね!!」
お袋の援護射撃を受け、リーネスと鶴羽が連携で敵を薙ぎ払う。
だろうな。聖杯の援護を受けた状態で、何十分も時間をかけた検査をする必要はない。リーネスはそれができる奴だって信じてたぜ。
そしてさらに、ここで遠慮はあり得ない。
「降臨するは第五天」
静かに告げるお袋の周囲に、陽炎が物質化するようにオーラが具現化する。
それによって具現化するは武装した戦士達。問題は、数が五十ぐらい出てきていることだ。
「聖なる戦の守護者達よ、火の星にて武威を示せ！」

その瞬間、一斉に戦士達がドローンをけん制する。
結果としてドローンに回されていた龍がパシパエ＝カイニスに収束し、更に彼女を追い込んでいく。
確か神曲において、火星は戦士達の星だった気がするな。となればそれにあやかった神曲魔術は、戦闘用の使い魔の召喚か。
よし、これで攻撃密度は増えた。あと一声―
「……だったらこっちもお久しぶりにぃ！」
―その瞬間、鶴羽の声と共に空間が歪んでいく。
それは、鶴羽が持つ固有結界。自らが登録した英霊の影を振るい、限定的な宝具の発動を可能とする。その拡張ユニットでもあるコーリングホッパーにより、彼女は多角的な宝具の運用を可能としている。
そしてこれこそその最奥。固有結界として完全開放することにより、サーヴァントの影そのものを使役する。
それこそが―
「開幕速攻！　英傑乱舞合戦譚!!」
―鶴羽の固有結界、その本領！
なるほどな。中身を見たのは初めてだ。
夜空に月がぽつんと浮かび、そして所々荒れ果てながらも緑が広がる平原。それが鶴羽の心象風景。
……きっと、それだけ大事なものが残っているということだ。きっと、つらく苦しいことがあっても、大事なものがあるからこその風景だ。
「……俺も、その一人なのか」
思わず、そう呟いた。
その瞬間、鶴羽が盛大にすっころんだ。
「あ、あああああんたそんなことはもっと二人っきりとかそういう空気を読んだところで―」
「いいから召喚してぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
リーネスのツッコミが飛ぶけど、俺もちょっと空気が読めてなかった。

鶴羽はこういうリアクション芸人属性あるからな。俺がその辺気を付けるべきだろう、反省反省。きちんと考えて行動しなければ。
よし、言うべきことは―
「悪かった！　感想は終わってからゆっくりと言うから!!」
「そっちぃっ!?」
―イッセーと鶴羽のダブルツッコミだと!?
何がなんだかちょっと分からないが、これたぶん切り返すと泥沼になる奴だな。我慢しよう。
「リーネス！　和地が、和地がこんなところだけあの人とそっくりに!?」
「持病よぉ、スルーしてぇ！」
お袋とリーネスも酷い!?
「ちっくしょう！　ああいうところがモテる由縁か！　凄く妬ましい!!」
あとイッセーもこっちに意識向けるな。敵に意識を向けろ!!
サーヴァントの影が出まくっているから何とかなっているけど、これ意外とデカい隙な気がするんだが！
あとお前は十分モテてるだろうが。俺に嫉妬する必要性が無いだろうに。
「この流れで自然にのろけられるって……あんなのに追いつめられる、だと？」
「……マスターとは別の意味で大概ね。悪祓銀弾（シルバーレット）って、もしかして男の趣味が悪いのかしら？」
リゼヴィムとパシパエ＝カイニスまでなんか言ってきているんだが。
なんだ、この憤りは。ちょっと本当に殺意が沸いたぞ。
これ、文句言ってもいいと―
「「失敬な！」」
「先言われた!?」
―なんで鶴羽はともかくリーネスが速攻反応!?
正直真剣に驚愕するんだがと戦慄していると、ポンとお袋が俺の肩

を叩いた。
なんだろう。仮面ライダー越しだから分からないけど、雰囲気がもの凄く説教する類のお母さんな感じだ。……実際お母さんだけど。
「真剣に、これが終わったら冷静に考えてね？　お母さんも最悪説明するから」
「あれぇ!?」
え、これ俺が悪い感じなのか。
くそ！　なんだこれは！　視線や雰囲気がイッセーが鈍感だった時のそれだ！
……ええい、ままよ！　気合入れてとりあえず現状を打開する!!
鶴羽が召喚した英霊の影もあって、形勢は一気に傾いている。このチャンスは逃せない。
「なんか知らんがもうヤケだぁあああっ！」
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ』
鬱憤が別の意味で溜まった。もうこの際、一気に解放してしまおう。
ゆえに、躊躇することなく瞬時に見極め―
「まとめて吹き飛べぇえええええっ！」
『マグネティックスターブラスト！』
―渾身の一斉射撃を叩き込む。
放たれる砲撃はステラフレームを吹き飛ばしながらも、リゼヴィムとパシパエ＝カイニスは迎撃する。
そしてその瞬間、迎撃される直前に閃光がほとばしる。
悪いが、今の俺の火力で倒せるなどとは思ってない。
これが伏せ札。閃光音響榴弾（スタングレネード）。
悪いが、こういうのが俺の得意技だ。
更にちゃっかり、衝撃吸収・光学迷彩の魔剣を大量展開。被害を生まない地点もしっかり作っている。
さぁ、お膳立ては整えたぞ。
「……やっちまえっ！」

「オッケーですわ」
「任せといて！」
『『ＦＲＥＥ　ＢＯＯＳＴ！』』
　その瞬間、飛び上がる二つの紅。そして、白金と赤黎の砲身も展開される。
「……いいだろう」
「任せとけ！」
　隙は一瞬。だが、それで十分。
『『クリムゾンブラストフィーバー！』』
「喰らいやがれ、∞（インフィニティ）……ブラスター！」
「これで終わりだ、リゼヴィム！」
　放たれる蹴りと砲撃が、一気に強敵へと放たれる。
　それに対し、双方ともに迎撃は間に合った。
「なめんじゃねえぞぉ！」
『クリフォトディストラクション！』
　しかもリゼヴィムは必殺技までかましている。
　だが―
「悪いけど、ここにいるのは彼らだけじゃない！」
『ＳＥＣＯＮＤ　ＪＵＭＰ』
　人数をわきまえろ。
「そういう事よ、なめんな」
『ＭＡＧＩＣ　ＪＵＭＰ』
　お前らとは違ってな？
「ここに来て、ずさんな対応は隙よねぇ？」
『ＳＨＩＮＩＮＧ　ＪＵＭＰ』
　俺達は何人いると思っている。
「そういうわけだ、吹き飛びな」
『ＡＳＳＡＵＬＴ　ＳＡＶＥ』

俺達全員、まとめて敵に回していると知るんだな！
『マグネティックスターブラストフィーバー！』
『シャイニングレインラッシュ！』
『コーリングチェインラッシュ！』
『ウィッシングブーステッドエンド！』
放たれる俺達のダメ押しが、まとめて奴らに叩き込まれた。

黙示覚醒編　第二十五話　始まりのアポカリュプス

和地Ｓｉｄｅ

吹き飛ばされる奴らを確認しながら、俺田ちは体勢を立て直す。
「……調子に、乗りすぎたわね。……ま、私の役目は、終わって……」
崩れ落ちるパシパエ＝カイニスは、そう言い残し消滅する。
聖杯を利用して、フローズヴィトニルの量産ラインができているという事か。油断できないな。
だが、リゼヴィムは死んではいない。
……後ろにあった山が吹き飛ばされ、そのままさらにいくつもの山が吹き飛んでるんだがな。どんな破壊力だ。
むしろあいつよく生きてるな。リゼヴィムが凄いのかサウザイアーが凄いのか。まぁ、どっちもだろうが。
さて、とりあえずだ。
「散々ボコったから落ち着いたか？　処刑の映像とか処刑執行人にできるかとかは意見具申するから、まずは取り押さえるぞ？」
「……そうだね。そろそろ兵藤一誠も危険域だろうしね」
俺がヴァーリを促すと、ヴァーリもイッセーを見ながらそう答える。
既にイッセーは崩れ落ちている。まだ意識は保っているようだが、どうやら消耗が激しいどころじゃないらしい。
カウンターで何かを喰らったか。過剰出力で覇に匹敵する損耗を受けたか。どちらにしても、これ以上は命に関わるな。
「こ……の、く…そ……がぁ……っ」
リゼヴィムは既に死に体だ。意識は飛んでないし倒れてはいないが、逆に言えばそれが精いっぱい。
となると、だ。

「まずは意識を奪うぞ。何かされてからじゃ遅い」
俺はそう答えながらショットライザーを構える。
真正面から神器無効化能力を超える神器使いのヴァーリをオフェンスにするのが効果的だ。万が一勢い余ったときに後ろから撃つぐらいの勢いで俺がフォローに回るべきだろうしな。
とはいえ、警戒するべき要素も数多い。さっさと終わらせ―
『これは真剣に残念だね』
「よくいう。こちらの方が嬉しいだろうに」
―そんな声が届き、リゼヴィムの胸から腕が付き出した。
「……ぬかった」
思わず、そんな声が俺の口から漏れる。
ああそうだ。俺達がリゼヴィムを殺さないのは、殺せないのが正しい。
なぜなら、リゼヴィムが死ぬとトライヘキサの復活が一気に加速するから。トライヘキサの封印が解除されないことを願う側が、開放を加速させるわけにはいかないわけだ。
奴は自分が死んだ時、己の魂をトライヘキサ復活の生贄にするように仕込んでいる。魔王すら超える悪魔たる、超越者の魂なんて生贄には素晴らしすぎるだろう。封印解除が三弾飛ばしで進むことは間違いない。
だが、同時に封印を解除したがっている側からすれば逆になる。
もちろん、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーは今の禍（カオス・ブリゲート）の団のトップだ。初代ルシファーの実子であり、かつ己も優れた扇動の鬼才。間違いなく禍の団を動かせるだけのカリスマと実力を併せ持った傑物であり、貴重際なりない人材だ。
だからこそ、速攻でリゼヴィムを生贄にするわけがない。それはあまりにリスクや失うものが大きすぎる。
裏を返せば、それ以上のものが失われるのなら、それより先に行うだけの手段ではある。
リゼヴィムの周囲を障壁で張っていなかったのはこちらのミスだ。うかつすぎた……っ！

「……おぃ……おい。そう、来るか、よ……」
震える声を出すリゼヴィムに、その胸を拳で貫いたアルケードが首を横に振る。
「悪いな、リゼヴィム皇子。主命なうえ、実際に必要だ」
アルケードが動いたということは、やはりミザリか。
『ゴメンね父さん。僕も悲しくなる為だけに父さんまで殺すのは躊躇ぐらいあるよ？　……ただ、この状況下だとねぇ？』
通信越しに苦笑しているミザリの声が聞こえる。
「誠明……っ」
お袋が声を震わせているが、それはそうだろう。
お袋にとって、ヒマリやヒツギの記憶や知識は曖昧だ。二人にとってお袋の記憶が曖昧であるのと同じだと考えればいい。夢を見ているような感覚である以上、実感としてミザリを見据えたことはないのだから。
フォローしてやりたいが、今はそんなことをしている余裕がない。
どうする？　今更過ぎてリゼヴィムは無理だ。となればトライヘキサの撃破と言いたいが、さすがにこの戦力では返り討ちが関の山だ。ベターな選択肢は撤退戦の開始が打倒だろう。
最適解を探しながら、周囲を確認して退路の確認をする。その間にミザリは、通信越しにリゼヴィムに別れの言葉を投げかけている。
『まぁ、プランはしっかり通すよ。例の件もあるから、まぁベストじゃないけどグッドにはなるんじゃないかな？』
「……ぅ…へぇ……。ま……最悪じゃない、だけ、マシ……かぁ……」
力なく空を見上げながら、リゼヴィムは口元に笑顔を浮かべている。
「ひぃひゃひゃひゃっ♪　頼むぜ、トラ……イヘキ、サちゃん♪　いざ、異世界に悪意を齎し……て……え……～……」
その手が力なく垂れ下がり、リゼヴィムは絶命する。
その瞬間、俺は一つだけ閃いた。
判断は一瞬。隙は無いが、強引にこじ開けるポイントはある。
何故ならリゼヴィムがいる。アルケードはリゼヴィムに腕を突き

刺して抜こうとしているが、それゆえにリゼヴィムを基点として死角が生まれている。
考えている暇はない。今後を踏まえれば、ここで何もしないという選択肢はない。ただ説明すれば必ずアルケードに警戒される。
ゆえに―

祐斗Ｓｉｄｅ

僕がリアス部長と合流を試みていると、何かのオーラが急激に高まっていく。
寒気が酷い。なんだこの、圧倒的な本能的恐怖は。
今まで色々な相手と戦ってきて、そのオーラを悟り畏怖したこともないではない。ただ、その中でも明らかに飛びぬけて恐ろしい感覚を覚えている。
まさか、これは……っ！
「なんだと!?」
ヴィール・アガレスも驚愕している。
あの男ですら驚愕するだけのオーラ。ただ者であるわけがない。
となると、やはり間違いないのか。
「……リアス部長！」
僕が駆け付けながら声をかけると、驚愕していたリアス部長も振り返ってくれる。
「祐斗！　それに、リヴァも！」
「リヴァも！　そっち大丈夫なの!?」
成田さんもすぐに気づいてくれた。

そしてリヴァさんも少し表情を引きつらせながら、素早く部長達と合流する。
「モチのロン……なんだけど、ちょっとこれはマズいわね」
リヴァさんですら言うほどのことか。
もはや確定といっていいだろう。これはつまり―
「部長、これは最悪の事態ですね」
「ええ。まず間違いなく解放されたのでしょう」
―トライヘキサの封印が、解けたということだ。
龍神クラスに匹敵するとされる、黙示録に記されし獣。かの聖書の神ですら封印が限界だった化け物。並みの神なら一度で死にかねない反動の禁術を、幾重にも幾重にもかけることでやっと封印された猛威。
気配だけで分かる。これは無限だったオーフィスや、かのグレートレッドとも渡り合える化け物だ。
なんてことだ。間に合わなかったというのか……っ
ただ、開放を試みていた側であるヴィールもいぶかしげな表情を浮かべていた。
「……おかしい。今までの封印解除ペースから見て、ミザリが本腰を入れたにしても早すぎる」
なんだって？
彼の発言が本当なら、封印解除は阻止できる余地はあったという事か。ミザリがすべての聖遺物を封印解除に回していても、この戦闘で開放されないということになるからね。
となると、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーが戦死したのか？
あの男が、自分が死んだ時に封印解除の生贄になるようにしているとは聞いている。だからこそ、殺すことだけはできないという状況で僕らも動いていた。ただあの男は超越者である以上、殺す気で仕掛けなければ勝ち目を見出すことも難しい相手ではある。
……ただ、ヴィールの方は雰囲気がおかしい。
「もしや、そういう事か？　……ええいっ！」
何かに気づいたような彼は、苛立たし気に舌打ちをする。

「……全軍撤退！　遺憾ながらこの都市を放棄する!!」
その瞬間に放たれた声に、僕達は一瞬呆気にとられる。
「な、逃げる気!?」
リアス部長はそう声を飛ばしながら魔力も放つけど、ヴィールはそれを拳で粉砕する。
その表情には珍しく焦りの色がある。彼にとっても相当の事態になっていると見るべきか。
「すまんがそうさせてもらう。ここで対応を誤るわけにはいかんのでな！」
後退しながら部下によって転移魔法陣を受けつつ、ヴィールは視線を成田さんに向けた。
「決着は次の機会にさせてもらう。短い時間だろうが、牙を研ぎ澄ますといい」
「……はい、ヴィール様！」
成田さんが強く頷く中、ヴィール・アガレスは転移していく。
そしてその瞬間、勢いよく何かが吹き飛んできた。
慌てて振り返れば、そこには血を吐いて倒れる九成君の姿があった。
……九成君!?
「和っち!?」
「カズ君!?」
成田さんとリヴァさんが血相を変えるが、僕はすぐに吹き飛んできた方向に警戒を向ける。
あの九成君がここまで吹き飛ばされる。その時点で敵に相当の実力か策があってのことだ。
もしそのままこちらに来れば、激戦になるのは間違いない。
「……ってやば!?　そんなのがこっち来るってわけじゃない!?」
リヴァさんはすぐにそれに気づいたようだ。やはりこういう時は頼りになる。
「春奈、カバーして頂戴！　星辰光で治療を行うわ！」
「は、はははい！　今すぐ速攻で!!」

部長もすぐ我に返り、成田さんを連れて九成君のカバーに向かっていく。
ただ、そのころには僕の視界にとんでもないものが映っていた。
あ、れは……っ

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）の拠点として使用されている、大王派の領地にある軍事基地。
その性質上、彼らはフロンズ直下。加えて幸香の魔眼もあり、危険度の高い諜報員が忍び込むことは非常に困難。必然として、フロンズ達にとって「度の超えた背信者」が出てこないがゆえに、フロンズはここに移動して行動していた。
「フロンズ様。道間家からの即応部隊ですが、あの配置でよかったのですか？」
文官の一人がそう尋ねるが、フロンズは微笑みすら浮かべながら頷いた。
「だからこそだ。あえて我々に与する派閥以外、それも彼ら側の派閥から派遣すれば、余計な疑心は持たれにくい。付け加えれば、それで草〔諜報員の暗喩〕がいても責任を背負うのは彼らの方だ」
……道間家側の即応部隊から、Ｄ×Ｄの増援の要請。その際に派閥を道間藤姫の派閥からにしたのはフロンズの案だ。
理由は先ほど述べた通り。これはフロンズにとって、この対応はすべてが「ダメージ削減」に絞っていることも大きい。
初代バアルであるゼクラム・バアルが主導したに等しい王の駒の不

正利用。それに伴う形で行われた、レーティングゲームに対する数々の不正。とどめにその隠ぺいの為に行われた、皇帝ベリアルの妹分まで含めた数多くの暗殺行為。

これらがすべて告発された以上、大王派の冬の時代は確実に到来する。無理無茶無謀の三拍子でその打開を試みる気はフロンズにない。そんな極小の勝率にかける余裕がないという認識だ。

ここまでのつるべ打ちがなされた以上、大王派全体が大きく身を切るしかない。下手に抵抗する姿勢を見せればそれだけ反感が強まるだろう。反感を増やして民衆の激昂が度を越えれば、現魔王でも第二の内乱を抑えきれなくなる。そうなれば、悪魔はまたしても滅亡の危機を迎えることになるだろう。

勝利を目指すことは重要であり、敗北を過剰に恐れては得られない者はある。だがしかし、利益も勝算もろくにない状況で勝利を目指す愚行などフロンズは取ろうとも思わない。

悪魔という種族を生贄に捧げる気など皆無。自らの大願成就を投げ捨てるような勝利は論外。ここで余計な被害の発生を選ぶなど、幸香からも見限られるだろう。

ゆえに、フロンズは徹底的に魔王派に配慮した政治戦略を組み立て直している。

九大罪王制度に関しては、大王派からは排出するべきではない。むしろ積極的に魔王派から排出し、大王派からの排出を阻止する方向でいくべきだ。

現場の戦闘関連や、今後確実に起こるだろう不正悪魔の暴走に対応する準備はノアやハッシュを中心に対応してもらう。

まずやるべきは魔王派に合わせることで心理的不信感の排斥。加えてこれを好機として行われるだろう現魔王達による「能力のある者達が見合った地位につけない、家柄重視の現状」の是正を協力しつつ、純血・混血の元から悪魔だった転生悪魔が主体になるように誘導する。最後に要職の選定だ。

もはや大王派は当面の主導権を握るべきではない。ゆえにトップとなる九大罪王に大王派を組み込むことは論外に近い。そして現魔

王派との折り合いをつける為にも、要職においても重鎮のポジション—企業で言うならば各部門の部長や支社長—に大王派をねじ込むことも避けるべきだろう。
ただし、主導権は握らないが重要なポジション—企業で言うなら副部長といった副官ポジション。それも副社長といったレベルは可能な限り避ける—は狙っていく。
如何に現四大魔王が好機を狙っていたと言っても、この事態は彼らにとっても予想外。禍の団などの不穏分子に対する警戒も含めれば、注力するべき部分はどうしても絞る必要がある。ゆえにそこを狙い、甘くなる「直接的な決定権はないが、持つ者が無視しにくいポジション」を確保。発言力やパワーバランスは譲りつつも「勝ち目はないが全面敵対は避けたい」レベルにとどめる。
これがフロンズが今後を踏まえて動くべき対応だ。これができなければ、今後の大王派の未来は暗い。付け加えるなら、フロンズや幸香達の大願成就が儚く散りかねない。
その為にも、今後に備えた動きは必要不可欠だ。
「これより運用体制をコードレッドに移行する。レベル５以降の問題は独自に対応してくれ」
「コードレッド!? そ、それほどまでの……直ちに移行します！」
慌てながらも即座に対応する文官に、フロンズは教育や体制確立を進めていてよかったと考える。
かろうじて致命傷を避ける状況は作れるだろう。確立ができなければ、負傷を避けるための対応を行う余地もなかったかもしれない。
とはいえ当面は冬の時代だ。懸念事項もいくつかあるが、そこは何とかしていくしかない。
もっとも、彼らも政治的発言力が地の底に落ちれば黙るしかないだろう。最悪を避ける為の努力が、結果的に望まない形で実った時は肝が冷えた。そこに関してだけは一安心だ。
「……さて、雑念はそろそろ投げ捨てなければ」
そしてフロンズは思考を加速させる。
アザゼル元総督と連携が取れたことで、少なくとも自分達が直接ど

うこうされる可能性は低くなった。大王派全体の権威失墜は免れないが、自分達を基点に大きく改善を進めるように備えるしかない。不幸中の幸いは、禍の団の動きもあり、現四大魔王の思想からいっても皆殺しのような粛清を彼らから行うことはまずないことだ。

つまり、今後を踏まえれば事態の安定化の為に、自棄を起こしたり下手な考えで暴走する者達を生贄にするべきだ。そのうえで冥界政府の混乱を抑えつつ、禍の団の追撃にも備える必要は重要。

その為の準備もハッシュ主導で進めている。この告発が起こることを前提に、大王派の重鎮達の反応を探って安全牌を選定。「必ず馬鹿な考えで動く者が出るから、それを迅速に鎮圧した方が得」だときちんと伝える。これにより何も知らない者や立場上断れなかった者までが、致命傷を受けることだけは避けれるだろう。

ノアと幸香が既にD×Dを援護しているうえ、それがアザゼル元総督の指示によるものであることは確実に明かせる。それを基点にすれば彼らを安堵させることも、その後の心象悪化の軽減も可能。全てはまずそれら全てを終えてからだ。

ここで倒れるつもりはない。何より、腐敗した貴族達を切り捨てる前に、もろとも潰されるのだけはゴメン被る。

その為の対応プランをいくつか編み出すべく考えこもうとし、しかし力強いノックがなりびいた。

「……コードレッドが発動していると知っているのなら、入りたまえ」

「失礼いたします！　……トライヘキサが、トライヘキサの封印が解かれました!!」

入るとともに即座に伝えられる、簡潔かつ重大な情報。

それにフロンズは舌打ちをする。

「ええい、次から次に……っ」

想定はしていた。だがしかし、このタイミングは想定していても舌打ちしたくなるほどだ。

だがしかし、だからこそ情報を集めて客観的かつ俯瞰的に対応しなければならない。

そう自らの手綱を握るころには、入ってきた文官も多少の冷静さを

取り戻していた。
「……なお、封印解除の為にミザリ・ルシファー一派がリゼヴィム皇子を暗殺し、同時タイミングで邪龍アポプスとアジ・ダハーカが離反した模様。情報は錯そうしており、また冥革連合も混乱が見られることから、状況は同時多発的に動いている者と思われます！」
すべてを聞き、そして頭の中である程度の整理をするまで数秒。
その数秒である程度の冷静さも取り戻し、フロンズはため息を一つはいて意識を切り替える。
「どこもかしこも混乱が起きそうだな。……最悪は邪龍アポプスとアジ・ダハーカが、聖杯やトライヘキサの主導権を奪っていることだろうな」
そうなった場合、すぐにでもトライヘキサによる襲撃が起きかねない。
逆にそうでないならまだマシだ。突発的な封印解除とその為の暗殺がある以上、事前に相応の根回しをしていたとしても禍の団も多少は時間をかけるほかないのだから。冥革連合の動きから見ても、その可能性が高い。
だがアポプスとアジ・ダハーカがかすめ取っていたら最悪だ。即座に拠点を襲撃されかねない。
「そうなのですか？　いくら何でも、相応の準備は必須だと思いますが」
文官はそう言うが、しかしフロンズには確信があった。
アポプスとアジ・ダハーカが主導権を握れば、そういった駆け引きはとらないだろう。
その確信は、これまでの経験からくる根拠があってのもの。
それを部下にも浸透させた方がいいと判断し、フロンズはあえて指示ではなく説明を選ぶ。
「ドラゴンとは、基本として浅慮なのだ」
「浅慮ですか？　馬鹿や阿呆とかではなく？」
フロンズの言い回しに、文官はきょとんとする。
思慮に対する酷評にしても、あえて浅慮という理由が分からない。

だがフロンズからすればそれが最適解だ。
「悪い意味で純粋と言ってもいいが、浅慮とあえて言おう。奴らがトライヘキサを確保すれば、それをちらつかせた交渉はとらん」
フロンズはそう前置きし、そして伝える。
「タンニーン殿のような例外を除き、彼らは根回しといった布石をもって盤面を作ることを好まない。種族柄なのかそういったものを忌避し、単純な方法で決着をつけたがるのだ」
そういう観点では、暗躍や布石という概念と相性が悪い。
そう、それはどこまでも単純に言うなら―
「良くも悪くも馬鹿でいたがるのだよ。賭けてもいい、今日中にトライヘキサが襲撃を試みたのなら、主導権を握っているのはミザリでもヴィールでもなく、アポプスとアジ・ダハーカだ」
―まどろっこしいことをしないのだ。

黙示覚醒編　第二十六話　勝利の問いは夢と共に

和地Ｓｉｄｅ

夢を見ていた。
思考に微妙なもやを感じている。これはあれだ、夢を見ている。
そして夢の内容があれだ。記憶を思い返す系のあれだ。
そして寄りにもよって、ピロートークタイムのあれだ。
「……あ〜。今とっても心地よい気怠さがぁ〜」
「カズヒねぇ、おっさん臭い」
思わず呆れるほかないぐらい、カズヒねぇはだれていた。
そのまま俺を引き寄せると、抱きしめつつ息を吸い込んだ。
うん、されている時の俺は思いっきり緊張したんだが―
「あ〜。油臭くもヤニ臭くも精液臭くも汗臭くもない誠にぃ以外の匂いとか、……新鮮」
「御免カズヒねぇ。不意打ちでヘビーすぎる過去をにおわせるのやめてくれ。分っているけど不意打ちはきつい」
―これで今度は戦慄したよ。
いや本当にカズヒねぇの前世は地獄だな。むしろそんな経験をもってして歪みながら、持ち直させるとか俺はなんだ。お袋も含めて神か何かか。
そこでいやいやいやと考え直し、俺はカズヒねぇを抱きしめ返しながら微笑んでいる。
「なら、俺の匂いで上書きしてくれると嬉しいな。……今度から念入りに体も洗っとく」
「そうしなさい。基本的に清潔感を保てるのはいい事よ」
そう返すと、カズヒねぇはそっと目を閉じながら体の力を抜く。

「……ねぇ、和地。勝利って、何なのかしらね」
その言葉は、思いつきだったと思っている。
「なんだよ急に。連戦連勝しすぎて、不安になったのか？」
「そういうのじゃなくて、もっと根源的な形よ」
俺にそう返すカズヒねぇは、何時の間にか天上を見上げていた。
「……かつて道間日美子（私）は、誠にぃを手に入れたと錯覚した時に「勝った」と思った。どす黒い喜びだったけれど、自分の人生に勝利があるならそうだとすら思ったの」
そう。それは道間日美子にとって、人生で最大の悦びだったのだろう。
それほどまでに彼女は踏みにじられ、汚水をすする人生だった。そんな中でも心に残っていた、執念を形にした。願いを掴み取ったと、そう確信した。
実態はとんでもないものだったし、客観視しても道間日美子は悪逆に染まったのは言うまでもない。だがそれでも、当人の視点にとってその時は勝利というしかない。
「でもそれは間違いで、何もかもがそれで砕けた。……だけど、道間日美子（私）は二度も救われた」
そう。そして一つは俺だ。
もう一つは鶴羽とリーネスだ。
その二つは、地獄を生きて味わったかのような彼女の人生で、間違いなく救いといえる輝きだった。
「だからかしら。ふと思ってしまったの。……人生において、勝利とはどういうものなのか」
その言葉は、自分でもよく分かっていない響きがあった。
本当にそれは思い付きの疑問だったのだろう。
だからこそ、はっとなると苦笑を浮かべていた。
「御免なさい、急に変なことを言って。……ただ、忘れなくていいわ」
「そこは忘れていいわじゃないか？」
俺がその辺をつつくと、カズヒねぇは苦笑しながら俺の頬に手を当てる。

……かつて俺は、道間日美子（カズヒねぇ）に光を齎した。
その光は、今でも彼女の瞼の裏に。勝利を刻む約束を誓う、その笑顔は互いにある。
だからこそ、彼女はそう言ったのだろう。
「もし和地が答えを見つけたのなら、私に教えてほしいの。……私を救ったあなたの勝利を、私も共有したいから」
盛大に顔を真っ赤にしたと、俺は確信していたのを覚えている。
「惚れた女にそう言われるとか、男冥利に尽きるのかな？」
……そんな風にしか、あの時の俺は返せなかった。
だけど、出来れば答えを返したい。
人生における勝利とは。その答えをカズヒねぇと共有できるのは、誇らしいことだと思うから。
そして、その決意がきっかけになったのだろう。
俺は意識を急速に覚醒させていった。

「―ハッ!!」
瞬間、俺は跳び起きた。
まだ少し寝ぼけている意識で周囲を確認。見たことがない部屋だが、雰囲気的には病室。
おそらくは冥界の病院だ。倒れたので緊急搬送されたという事でいいだろう。アルケードの攻撃を喰らったのまでは覚えている。
さて、問題はあれだ。結果と現状がさっぱり分からない。感覚的に下手をすると、数日経っている可能性があるぞ。
困ったのでナースコールを探していると、ガチャっと音が鳴った。
振り返ればドアが開いており、そこから顔を覗かせた春っちと目が合った。
「……和っちぃぃぃぃぃっ」

「ごっふぁっ!?」
意識がまた飛びそうになるタックル!?
「え、和地くん起きたの!? 大丈夫なの!?」
「ようやく起きたのかよカズ! 無事かっ!!」
と、そこでインガ姉ちゃんとベルナも入ってくる。
うん。二人は飛び掛からないでくれて助かった。
ここに鶴羽がいたら絶対に第二弾が―
「……カズ君よかったぁっ!!」
―リヴァ先生がタックル!?

「――――和地ぃ!? ちょ、死んじゃ駄目だってばぁあああっ!?」
「ばばばばばっ!?」
とんだ意識が強引に持ち上げられるぅうううう!?
ゆするな鶴羽ぁあああ!? 起きたからぁあああああっ!?

それから三分後。鶴羽をベルナが取り押さえて何とか収まった。
「お前らほんとやめろよな? さっきまで昏睡状態だったんだぞ?」
「そうだよ! 頭蓋骨陥没で脳内出血も酷かったそうだから、アーシアさんが回復してなかったら終わってたんだからね?」
「「御免なさい!」」
そしてインガ姉ちゃんと共に説教までしてくれた。本当にありがとう。
綺麗に正座している俺に対する暴行班は一旦無視して、俺はインガ姉ちゃんとベルナに振り返る。
「とりあえず助かった。あととりあえず、状況を説明してくれ」

なんというか、病院が騒がしいうえに色々と空気が重くなっている。
これは、かなりまずいことになっている可能性があるな。
リゼヴィムが死んだことで、トライヘキサの封印が解けたのは間違いない。そこからミザリがどう動いたのかが分からないが、相当自体はひっ迫していると考えるべきだろう。
そう思っていたのだが―
「……たぶん、想像とは捻くれた方向でまずいことになってるよ」
―インガ姉ちゃんはそういうと、つらそうな表情で窓の外を見る。
その視線は、ここではないどこかの誰かを心配するもの。
その時点で、別のメンバーが死闘を繰り広げていると俺は察することができた。
「手っ取り早く簡潔にまとめるぞ。邪龍アポプスとアジ・ダハーカが聖杯かっぱらってトライヘキサを制御下に置きやがった。今奴らは、軽すぎるフットワークでいろんなところを襲撃して回ってやがる」
そのベルナの言葉に、俺はちょっと頭が痛くなった。
ミザリもしくは禍の団の誰かが運用しているのではなく、邪龍か。それも、クリフォトを脱走した形になるようだな。
それは確かに別の意味でまずいな。
「……ドラゴンってのは勝手気ままだからな。計画性が半端にない分、対応も後手に回っている感じか」
「そうね。ついさっき、アースガルドに進軍したトライヘキサが一旦引いたみたい」
リヴァ先生が俺にそう答えるが、これは本当にまずい。
いっそのことミザリの手に落ちている方がある意味でマシだった。
これ、最悪の場合は俺達とトライヘキサだけでなく、禍の団まで混ざった三つ巴になるぞ……っ

「ちなみにイッセーはどうなった？　あいつなんか調子悪かったけど」
「ちょっと前に母乳で生死の境から舞い戻ってきたわ」
鶴羽。聞いた俺が言う事じゃないけどそれはきつい。
あいつ行きつくところまで行って更にどっか行ってるだろ。どこまで行くんだよ怖いよ。最近おっぱいが直接関与してなかったけど、チャージタイムだったのか。
……とりあえず、気が少しほぐれたことにしておこう。

黙示覚醒編　第二十七話　揺らぐ大王派

和地Ｓｉｄｅ

「……と、いう感じになっております。はいカズ君、質問あるかな～？」

「とりあえず、フェニックスの涙は混ぜ物厳禁じゃなかったっけ？」

リヴァ先生の一通りの説明に、俺はそんな質問を返してしまった。

……兵藤一誠がいたりし、更なる領域。二体の龍神から作られた体を持つからこそできる、禁（バランス・ブレイカー）手（ジャガーノート・ドライブ）や覇（ゴッド）龍、果てはその先だった真女王（カーディナル・クリムゾン）すら超えた前人未踏のさらにその先。

その名を、Ｄ×Ｄ（ディアボロス・ドラゴン）・Ｇ。またの名を、龍神化。

……神器無効化能力が無効化できないほどに高まったその性能は、まさに前人未踏。リゼヴィムですらサウザイアー抜きでは負けていただろう。もはやイッセー、超越者になっているな。

だが世の中そんなに甘くない。イッセーは毎度毎度意味不明な成長を遂げるが、それらはきちんと積み重ねてきた下地があってのものだ。また掴み取ってもそこから習熟が必須であり、なり立てでは勢い任せが限界なところもあった。

今回の場合、イッセーは限界を超えた負荷で死にかけたわけだ。

血反吐を吐いて倒れたイッセーは、その後一斉に多臓器不全。冥界を代表する治癒の力たるフェニックスの涙はおろか、我らがＤ×Ｄの生命線たるアーシアの回復すら効かなかった。この病院に俺と一緒に運ばれた際、集中治療室であらゆる生命維持装置をぶち込むことで何とか生きている状態だったそうだ。

だがそこから半日後。アザゼル先生がある指示を出した。

……母乳をかき集め、そこにフェニックスの涙を混ぜた溶液にイッセーを浸けろ。

病院のスタッフはさぞ困惑しただろう。しかも風呂桶一杯分レベル集める必要があり、この病院の産婦人科はおろか、別の病院からもかき集めたとか。堕天使元総督の指示があるからいいものの、この非常時にこんな行動を要請する方もされる方も頭痛ものだろう。先生の指示でなければ暴動が起きそうだ。

混ぜ物厳禁途端に力が失われるのフェニックスの涙を、母乳に混ぜ込む。そしてそこに、多臓器不全で生死の境を彷徨っている、冥界の英雄を漬け込む。

見ても聞いても自分の正気を疑うだろう事態だが、忌々しいことに凄く納得できてしまった。

実績が無駄にありすぎる。目にしたD×Dメンバー、それもオカ研組は、確実に希望の光を見出しただろう。

そして結果は大成功。今まで装置が無ければ動かしようがなかった臓器が、意識が回復してもおかしくないレベルにまで一気に回復したそうだ。

俺は深呼吸してそれを理解し、かみ砕く。

「……あ、やっぱ質問」

「うんうん。ちゃんと疑問を見出して聞けるのはいいことだねー。で、どんな感じ？」

リヴァ先生には悪いが、たぶん方向性は違う。

「そんなことの為に動いた人達に、保証をする予定はあるのか？　冗談抜きで心労を癒すボーナスいるだろ」

「……やべぇ。カズの言う通りじゃね？」

ベルナがハっとなっている辺り、こりゃまだだな。

あ、でも病院に勤務している人とかって、そういうチップを受け取れないんだっけ？　でもこれはちょっとアレすぎるしなぁ。

「……女神の権限で何とかできないか？　これはちょっと、精神的に地獄過ぎるだろ？」

「言われてみるとそうなんだけど……どうしたらいいのかしら？」

俺とリヴァ先生が首を捻る事態だが、しかしそれだけってわけにもいかないのが実情だ。

「ま、それは後にした方がいいわね。今はもっとやばいことが多いし」
「あぁ～そうだった！　かなりまずいんだった！」
春っちの言葉に鶴羽が頭を抱えるが、どうやら想像以上にやばそうだな。
「王の駒関連で冥界政府で暴動多数。内乱一歩手前ってことか？」
「近いかな。……各地で暴動が多数起きているんだ」
インガ姉ちゃんが頷くと、新聞を一つ渡してくれる。
確認してみるが……酷いな。
皇帝（エンペラー）の告発で民衆が各地で暴動を起こしている。そこにトライヘキサの復活や行動に伴う更なる恐怖もあって、各地が機能不全状態。とどめにこの告発で立場に致命傷を負った者達は、暴動に対する反撃を超え、自棄を起こして暴走している連中が多発しているとのことだ。
特に文面の一つを見て、俺は舌打ちをしたくなった。
―冥界の若き俊英、フロンズ・フィーニクスも後手に回っているのが現状。各地の反乱に即応部隊を送ることはできているものの、戦力が足りておらず苦戦しており負傷者多数。義によって独自に救援に駆けつけた貴族達がいなければ、全滅の危機もある事態だらけで各地は疲弊。若手四王と並び立つ彼をもってしても、今回の事態は手に余る事態ということが証明されている。
あのフロンズですら、相当苦労しているようだな。
「……ま、その辺は演出もあるんでしょうけどね」
「どゆこと？」
リヴァ先生の呟きに、鶴羽が首を傾げていた。
正直なところ、俺達も分かってないな。
ただ、リヴァ先生は肩をすくめていた。
「……どうもフロンズは、独自に王の駒の真相を悟ってアザゼル元総督という「絶対にノータッチな権力者」に助力を求めたみたい。先生はこっちの救援部隊の手配と引き換えにその辺りの保証をしたみたいで、フロンズ・フィーニクスがそういう方向での懸念や批判を受けてないのはその賜物よ」

「ってことは、フロンズ達は備える余裕が少しはあったわけか」
となると確かに不思議だな。
短い時間とはいえ、王の駒やレーティングゲームの不正が告発されると分かっていた。ならフロンズは先を見据えて備えるだろうし、当然この流れも予想できたはずだ。
想定外の規模になったとしても、自分達で対処できる範囲内を見極めて動く準備はしているはず。だが文面を見る限り、場当たり的な対応を繰り広げている節がある。
ってことは、わざと戦力を小出しにしているという事か？　だがそれにしたって非効率的だし無駄に犠牲も出そうだな。
「つっても、演出ってどういうこった？」
「推測だけど、フロンズ達を独自に助けているって貴族達に、事前に根回しとかをしていたんじゃないかしら？　彼らなら必ず、やけっぱちで暴れる不正貴族が出ると読むでしょうし、派遣された部隊は最初から「貴族の救援が合流すれば」十分な勝算が出る規模に調整しているわね。それも損害のマージン計算もした感じで」
指を口元に当てながら、リヴァ先生はベルナの質問にそう説明する。
なるほど。そういう調整をしそうなやつではあるな。
「確かに。救援が来るまでは苦戦しているみたいだけど、救援が来ても負けたって話はないね」
インガ姉ちゃんもそう言うけど、確かにそこまでは納得だ。
救援が来れば確実に勝てる。そういうレベルの戦力にわざととどめているわけか。
「って、なんでそんな演出がいるのよ？　さっぱり分からないんだけど？」
「だよなぁ？　奴さんは兵士を私財って見れるだろうが、こんな形で無駄遣いはしねぇだろ」
鶴羽とベルナがそう言うし、俺もちょっと追いつかないな。
短い付き合いだが、あいつは冷血ではあっても愚鈍じゃない。
演出で配下に死傷者が出ることを損失とは考えられる。そしてわ

ざわざそんな演出をする必要がないし、損失するのは兵士だけじゃなく、手駒の強さに対する民衆の信頼もだ。
損が大きすぎないかとは思ったが、リヴァ先生の判断は違うようだ。
「自分達だけじゃなくて、大王派全体の利益を重視してるのね。もしくは自分達の大王派ってところかしら？」
「あ～……なるほど、ディオドラとは器が違うね」
「目先の自分達だけじゃなくて、今後数十年以上の大勢ってことね」
一瞬よく分からなかったが、インガ姉ちゃんと春っちは納得したらしい。
仮にも上級悪魔に仕える眷属悪魔だったしな。二人にはまた別のものが見えているのか。
ただ、二人とも戦慄というかげんなりといった表情な辺り、フロンズは禄でもないことを考えているな、これ。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

ディアドコイ・プライベーティアの基地にて、フロンズ達は会議室に集まっていた。
「……とりあえず、こっちが対応した暴動は殆ど終わったな。一部部隊を残った暴動の対応に回しているが、あとはゆっくり少しずつでいいだろ」
「ありがとう、ノア。これで必要最小限の対応はできただろう」
ノアの報告を聞き、フロンズは少し表情を和らげる。
一つ安堵の息を吐いたうえで、フロンズはモニターの映像を切り替

えた。
　冥界で起きた暴動の様子が映し出されていたモニターは、今度は神話の領域を襲撃するトライヘキサの姿を映し出す。
「今後はこちらも、戦力の比重を奴に傾けるべきだろう。……対龍神クラスをコンセプトとしたＧ（ギガンティック・フォートレス）Ｆを要する我らが、龍神クラスであるトライヘキサに動かないわけがないのだしな」
「だな。一応アースガルズにはサンタマリア級を主体とする艦隊も派遣しているが、冥界の対応もあって本腰は入れられなかったしな」
　フロンズと共に映像からデータを解析しつつ、ノアは同時並行でタブレットを操作する。
　そこには自分達の救援として動いた上級悪魔達や、その眷属のデータが映っていた。
「とりあえず、奴ら一人につき一件の尽力で最低限の手柄は完了。あとの暴走不正貴族は、上級悪魔複数人にこっちからカバーと宥め役でチームを作って、「いのちだいじに」で対応させる、と」
「所詮は何の連携も戦略もない、只の暴走だからな。急いで成果を上げる必要があった今まではともかく、ここからは死者を出さないことが理想ゆえにな」
　そう。この暴動は、それだけなら決して致命的な窮地ではない。
　ディハウザーによる不正の告発は、半ば不意打ちによるものだ。ある程度察することはできたようだが対応が間に合わなかったからこその大騒ぎ。だからこそ、フロンズ達はその揺らぎによって不正を掴むことができたのだ。
　大王派の重鎮達ですら対応が間に合ってない。となれば、末端の不正貴族にとっては青天の霹靂だろう。皇帝ベリアルのネームバリューや信頼、そしてクリフォトのリゼヴィムが誇るこの手の辣腕が見事にはまった形になる。
　だからこそ、この暴動は示し合わせたものではない。なんの根回しも行われておらず、先行きすらも考慮していないだろう。焦りすぎたり自棄を起こした不正貴族が暴発し、それが連鎖反応を起こしているだけだ。

ゆえに、フロンズ達だけで解決することも不可能ではない。それぞれが連携しても戦略的対応が無いのだから当然。被害を収める遅滞戦術を全体的に取りつつ、倒しやすいところから順番に戦力を注力すれば被害は最小限に抑えられる。

それで暴動はどうとでもなる。よしんば王の駒使用者が出張ってきたとしても、後継私掠船団と魔王派を連携して叩きつければ十分勝てる。堕天使元総督であるアザゼルの保証もある為、自分達のダメージコントロールは十分だ。

何より今後を考えるのなら、自陣営の名誉を守るだけでは全く足りない。トライヘキサという驚異が邪龍達の気まぐれで暴れ回っている以上、そちらに対する注力が必須だろう。サンタマリア級を中核とする艦隊を派遣しただけでは足りないと言ってもいいのだ。

……だが、それらはあくまでフロンズ達だけの場合だ。

王の駒やゲームの不正は大王派が主体だが、大王派の悪魔全てがもれなく完全に黒いというわけではないのだ。

家柄と権威が絶対される大王派では、初代バアルが直々に動いた不正の命令を拒否するのは不可能に近い。そして当然だが、何も知らない者達も数多いのだ。実際、フロンズ達は短時間で相当数のそういった者達を確認している。

自分達だけが無事でも、大王派は壊滅的打撃を受ける。そうなれば今後の政治においてはどうしようもない。規模とはそれだけで重要なのだ。

ゆえにこそ、フロンズ達は演出まで踏まえた対応を行った。

何よりも無関係な民が巻き込まれないように対応。こちらだけではそれを達成できるが、肝心の不正貴族打倒は苦戦必須の戦力を、示し合わせた貴族達が合流することで打倒できる塩梅にする。そしてその調整によって浮いた戦力を、トライヘキサに対する対応は後詰として回す。

……結果として、フロンズ達が繋ぎを作れた「シロ」の貴族達は、暴走した不正悪魔達を苦戦するフロンズ一派を助ける形で鎮圧。そのうえで、合流して残っている不正貴族達の鎮圧を続けていく。

今後は彼らが安全に配慮しながら鎮圧をすればいい。それをスムーズに行う為の戦力だけを残し、フロンズ達はトライヘキサや禍の団を警戒した対応をする。この流れは確定したと言ってもいい。
「トライヘキサが不調を起こしたとみられるのも都合がいい。タイミングがかみ合ったので、よりスマートに戦力再編ができるだろう」
一息すらつける状況に、フロンズは本気で安堵している。
王の駒及びゲームの不正を悟った時は、流石のフロンズも心臓が止まりそうになった。
それを何とか乗り切ることができそうだと安心し、しかし同時にそこ止まりだ。
その内心まで読んでいるノアは、同情の表情をフロンズに向ける。
「ま、同時にそこ止まりなんだがな。大王派が後遺症を負うことに変わりはねえ」
ノアはそこまで行ってから、大きなため息をつく。
そう、フロンズ達は致命的な事態を避け、多くの白い大王派も、首の皮一枚は繋がった。
だがそれはそこまでだ。大王派の重鎮達がここまで大規模な不正を行っていた以上、大王派全体を見れば大きな深手を負うことに変わりはない。
大王派全体がもろとも被害を喰らう。そんな中、フロンズ達の行動は「大王派のマシな者達が個人的に被害を受けない」為のものだ。大王派全体が被害を受ける以上、フロンズ一派は多大な悪影響を巻き添えで食らってしまう。
実質的に魔王派であるサイラオーグであろうと、かなり悪評が立つだろう。となれば大王派である自分達なら、当然被害は甚大だ。
「……計画は思いっきり遅れそうだな。世紀単位で考えるべきか？」
ノアもため息をつくと、フロンズもそれに引っ張られたのか眉間にしわを寄せて更なるため息をついた。
「悪魔と言え、若手の感覚では苦渋の時代を歩みそうだ。……幸香達にどう釈明したものか」
俯きながらそう零すほどには、フロンズ達はダメージを受けてい

た。
それでも必要な作業をしっかりと行っている点は凄まじいが、それでもできないことはできないのだ。
上層部が働いた愚行のツケを支払わされる現状に、二人が強い頭痛を覚えていた、その時だった。
「……フロンズ、ノア」
その言葉と共に、ハッシュ・バアルが入室する。
そしてそれだけで、二人は嫌な予感を覚えた。
ハッシュがこの流れでノックもしない。この時点で、彼が冷静さを削られるほどの事態が起きたことを意味している。
そして視界に映るハッシュは、顔面蒼白を体現する顔色だった。
「おい、どうした？」
思わず立ち上がりながらのノアの言葉に、ハッシュは力なく首を横に振る。
「……父上が……」
その小さな言葉に、二人は戦慄すら覚え―

「「最悪だ……っ」」

―続く説明に、絶望すら覚えかけた。

黙示覚醒編　第二十八話（いろんな意味で）これはヤバイ

和地Ｓｉｄｅ

イッセーが意識を取り戻した。その報告を聞いたのは少ししてからだ。

俺たちは起き上がってすぐに、イッセーに与えられた個室に入る。

「イッセー！」

「……九成、皆……？」

俺の声に振り返ったイッセーは、少し目元を細めて違和感を覚えている感じだった。

多臓器不全を患い、数日間昏睡していたからな。まだ五感が完璧じゃないんだろう。

ただ、顔色から言っても命の危険はなさそうだ。大部復活しているだろう。

「奥様に旦那様。イッセー君の容体は？」

インガ姉ちゃんが二人に聞くと、二人ともほっとした表情だ。

「この調子なら大丈夫だそうだ。少なくとも、ここで休んでいる分には問題ないってさ」

五郎さんはそう言うと、逆に心配そうな顔を俺に向ける。

「……それより九成君は大丈夫かい？　なんか、すごい勢いで吹き飛ばされてたけど」

あ、その辺りを心配されていたのか。

俺は結論として、アルケードにカウンターを喰らって吹き飛ばされてたからな。しかもイッセー張りに眠り続けていたわけだから、尚更不安だろう。

脳内出血も酷かったらしいしな。あの時は完ぺきに防御を捨てていたから、尚更ヤバかっただろう。
「と、とりあえずイッセーよりは万全ですから、大丈夫です！」
「お医者様曰く、今日中に退院できると太鼓判……ゲット♪」
俺の答えにリヴァ先生が更なる上乗せをしてくれたおかげで、二人ともちょっとは安心してくれたようだ。
ま、仮にも星辰奏者《エスペラント》だしな。峠を越えれば外傷は完治できる自信がある。
ただ、お二人は又表情を暗くしていた。
「それと、カズヒさんの容体も聞いたわ。ごめんなさい、私達を守って彼女が―」
「―それは違うよ、母さん」
沈む三希さんに、イッセーが待ったをかける。
ただまぁ、そこから先は俺が言うべきだろう。イッセーも視線で促しているしな。
俺はイッセーに頷いてから、二人に笑みすら浮かべて見せる。
「カズヒねぇは己の心情に従い、守るべき人を守っただけです。俺から恨み節なんて二人に言うわけがありませんし、そんなことしたらカズヒねぇ絶縁されますよ」
「「「「うんうん」」」」
イッセーや春っち達がうんうん頷いて同意してくれるけど、まさにその通り。
俺もカズヒねぇも、瞼の裏の笑顔に誓った運命の比翼連理だ。それを裏切るような真似、俺には発想すら浮かばない。
それに意識を取り戻してないだけで、決しては死んでいないんだ。
なら回復する。それが悪祓銀弾（シルバーレット）という女、カズヒ・シチャースチエという悪敵銀神（ノーデンス）の恐ろしいところだからな。
「ま、カズヒもそろそろ起きるでしょう。たぶん「まだだぁっ！」と叫びながら飛び起きるわね」
「「「「うんうん」」」」
鶴羽がそう言うと、再びベルナやインガ姉ちゃん達が頷いた。

うん。安定と信頼のカズヒねぇだ。誰もがその辺りを理解している。
カズヒねぇなら本当に起きそうだ。むしろ起きた時に時間が経ちすぎていることに気づいて、思いっきり忸怩たる思いをしそうだ。
うん、そっちのメンタルケアにこそ重点を置くべきだろう。
「カズヒねぇが起きたら、無事を伝えてあげてください。それが一番カズヒねぇの為です」
俺がそんなことを言った時だった。
「……っ！」
なんか外が騒がしいな。
具体的には足音が響き、しかも大声を張り上げている感じだ。
というか、この声って。
「……シャルロットか？」
なんでそんな大慌てな状態になってるんだ？
それとも人違いかとも思ったら、イッセーも首を傾げていた。
「なんか、シャルロットと念話をしてたら急に慌て始めたんだけど。どうしたんだ？」
ん～？
いったい何が―
「―イッセーっ!? 何がどうしたらそんな訳の分からないことに、なっているんですかぁっ!?」
―なんだぁあああああっ!?
大慌てで突撃してきたシャルロットに、俺たち全員が面食らっている。
「え、なに!? 何が、え!?」
イッセーが一番困惑しているが、え、イッセーどうかしたのか!?
そんなイッセーの反応に、シャルロットは額に手を当てると天を見上げた。
「起き抜けで自覚が追い付いてない……っ」
と、そんな愕然としているシャルロットの向こうから、どたどたと足音が響いてくる。

「どうしたのシャルロット!?　イッセー……無事だったのは嬉しいけど、何が何だか……」
「リアス！　俺も会えて嬉しいけど、シャルロットはどうしたんだ？」
困惑するリアス部長とイッセー。俺達も正直訳が分からない。
オカ研のメンバーも追いついたが、シャルロットの大慌てっぷりにイッセーの復活を喜ぶ暇もない。
「どうしましたの？　イッセー、大丈夫そうですわよ？」
こういう時にいい意味で空気を読まないヒマリが言うが、シャルロットはため息をついた。
「まずはイッセーに自覚させなければ……イッセー！」
そういうなり、シャルロットはめっちゃイッセーに近づくと胸の部分をめっちゃイッセーの顔面に近づける。
何やってんのこの人!?　本当に冷静さがないよ!!
「この気が動転している様子は、まずいですね。イッセー君、何かあったのなら言ってください」
ロスヴァイセさんが冷静にそこを指摘すると、イッセーは首を傾げてふと別方向に傾げた。
「あれ、そういえばシャルロットの……あれ？」
イッセーはなんか急に言いよどんだ。
「えっと、……い、あれ？　む……あれ？　おかしいな、ち……あれぇ!?」
なんかめちゃくちゃ困惑しているが、どういうことだ？
シャルロットの胸に何があったというんだ。
俺達とイッセーが困惑していると、シャルロットはなんか凄い表情と顔色でよろよろと後ろに下がる。
そしてまたしても天を仰いだ。
「……想定を超える非常事態……っ！」
「どうしたというのよシャルロット!?　貴女のおっぱいとイッセーがどうしたというの？」
リアス部長が困惑しながらも話を促そうとすると、イッセーがぽんと手を打った。

「そうそれ！　シャルロットのお……あれ？　なんでさっきリアスが言ったのに……四文字だぞ!?」
なんかイッセーが凄い表情になるが、どういうことだ？
四文字でこの流れ、おっぱい以外の何物でも……はっ！
「まさかお前、おっぱいとか胸とか乳とか言えなくなってるの……？」
俺が恐る恐る尋ねると、イッセーは震える顔を縦に動かした。
え、マジで？
理解不能な事態が起きていると悟る中、シャルロットは目元を手で覆いながら首を横の降る。
「それだけではありません。三希さんと小猫さん以外の胸にもやがかかっており、視覚的にも認識ができていないんです」
……
は　い　？
俺達が一斉にシャルロットとイッセーを交互に見ていると、イッセーははっとなると、よろめきながら頷いた。
「……ああ。さっきまでは起きたばっかりだったし、母さんのは普通に見えてるから……寝起きで目がはっきりしてないんだと思ってた……いや、ちょっと待てよ……マジかっ!?」
そこまで行ってから、イッセーはかなりガチな顔になった。
え？　いや、ちょっと待って？
おっぱいが認識できない。更にそもそも、それに合わせた発言もできない。
小猫サイズ的に範囲外と三希さん倫理的にマズいのは普通に見えるということは、つまりおっぱいと認識できるものを認識できなくなっているという事か。
おいおい、俺の起き抜けになんだこの異次元級現象。

「なんじゃそりゃぁあああああああっ!?!?!!??!?!?」

思わず絶叫したよ、俺。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……それで、禍の団（カオス・ブリゲート）はどうなっている」
「芳しくありませんね。ミザリを筆頭に、現段階での規模の大きい派閥は殆どが静観の構えです」
「下手につつくより、アポプスとアジ・ダハーカが気の向くままに暴れさせた方が都合がいいと判断したのか？」
「リゼヴィム皇子を生贄にしてまで復活させたのに……というのは気になりますね」
「そうだな。気を付けておけ、健也」
「……ミザリですね？」
「そうだ。奴は基本的には堅実かつ準備期間も取るが、根幹の行動原理が特殊すぎる。その為、ランダムにある程度の博打や遊びを組み込むことも含めて、判断が難しいところを多く持っているからな」
「そうですね。規模の小さい派閥に関しては、こちらと同様にトライヘキサ奪取を考慮しているのが、尚更ですか」
「……何を考えているのか分からんが、今後踏まえるならトライヘキサを活用できないのはリスクが高すぎる。……アポプスやアジ・ダハーカの矛先がこちらに向かんとも言い切れんしな」

「承知しました。では、準備を？」
「ああ。奴らがどこかを襲撃した時点で、動かせる戦力を可能な限り投入する。禍の団からも動かせる者を用意しておくよう伝えておく」
「……覚悟を決めないと、ですかね」
「そうだな。そこについても腹積もりはしてある」
「ヴィール様」
「なんだ？」
「……できれば、相まみえたい者がいます」
「……構わん。お互い、やるだけのことはやるとしようか」

「……さて、アルバートとイシロのおかげで、いい感じになりそうだね」
「そうか。となると、次は―」
「ああそうさ。君達と繋げることだね、アルケード」
「とはいえ時間はかかるだろう。今自分で振るうことにすら、手間取っている節があるぞ？」
「至る時の願いに問題があったのかもね。最初の相手を決めておいてよかったよ」
「そして読みが上手くハマれば、この世界でお前を倒せる者はいなくなるわけだ。グレートレッドですら……いや、グレートレッドだからこそ勝ち目が無くなる」
「そうだね。とはいえアポプスやアジ・ダハーカには困ったものだね」
「唯一最大の懸念は、奴らが仕込みに気づくかもしれないことか」
「まぁ、極晃星（スフィア）を知らない彼らなら気づかないとは思うけどね。気づいたとしても、トライヘキサ単体はどうしようもないし」
「本来それで十分だからな。あとはお前が慣れるまで待つだけか」
「……できれば、彼らにはロスヴァイセの論文を生かして欲しいね。

まぁ、彼らの性格ならそれを選ぶだろうから安心だけど、さ？」

黙示覚醒編　第二十九話　過剰摂取はどっちにしても体に毒

和地Ｓｉｄｅ

念の為、色々確認してみたら分かったことがいくつかある。
最初に一つ。三希さん及び小猫の胸以外―つまりイッセーがおっぱいと認識できない胸以外が―認識できなくなっている。
続きに一つ。そもそもそれらの単語を口にできない。発音できないというより、具体的な表現ができなくなっている。
最後に一つ。それどころか、胸の感触を感じたり、おっぱいそのものを見ると激痛が走る。
これらを認識して、ルーシアが盛大に頭を抱えていた。
「……中毒を起こして禁断症状ならともかく、なんで拒絶反応なんですか！」
渾身の絶叫だった。
「た、確かにおかしい！　イッセーは常におっぱいを求め、おっぱいによって強くなってきたんだ！　体が常に求め続ける方向でないとおかしいぞ！」
「ゼノヴィア先輩。麻薬じゃないんですから」
ゼノヴィアに鋭い小猫のツッコミが迫るが、しかしあながち間違ってない。
何事も過剰供給は体に毒というものだ。アルコールでもそうだし、供給し続けると無しではいられなくなることはままある。
それがまさに逆。そりゃ普通に誰もが驚愕するし、俺も驚愕している。
ただリヴァ先生はちょっと考え込むと、はたと手を打った。

「……禁断症状（ジャンキー）じゃなくて免疫過剰（アレルギー）じゃないかしら？　あれも過剰摂取とかでなったりするでしょ？」
『『『『『『『『『『『『それだ!!』』』』』』』』』』』』
満場一致で思わず叫んだよ。病院だってことも忘れる声のトーンだった。
「……そんな、そんな……ことが……っ」
そしてイッセーはショックのあまり、絶望そのものの表情で崩れ落ちた。
「アレルギー？　拒絶反応？　それじゃぁ俺は、これからずっと……に触れられないし見られないし考えることも難しいって……死ねと!?」
今までにないレベルで絶望しているな。
正直、内容がおっぱいだからシリアスになり切れない。
……あれ？　なんか雰囲気がだいぶシリアスになっているぞこれ。
周りを見渡すと、リアス部長達にギャスパーがとても酷い表情だ。深刻かつ真剣な問題に直面していると顔に書いてある。
ただ、俺達と木場は正直にいえば困った反応といったところだ。
「そんな、それではどうやって子作りをすればいいのだ……っ」
「あとちょっとで、あの部屋も使えるって時だったのに……っ」
崩れ落ちるゼノヴィアとイリナには悪いが、部屋の成果は当分出てこないだろう。
むしろあのざまで成果があると思っていることが怖い。大丈夫なんだろうか。
「っていうか、これお医者さんにどう説明したらいいんだよ。おっぱいにアレルギーを起こしているようですなんて、口にするこっちの身になってほしいぐらいなんだが」
説明を聞いたお医者さん達の困惑が目に見えるようだ。
だけど、説明しないと話が進まない。このままってわけにもいかないし。
「安心しろ、もう呼んでる」
その声に、俺たちは病室の入り口に振り返る。

そこには何とも言えない表情をしたアザゼル先生が、何とも言えない表情をした医療スタッフを連れてきていた。
いや、そりゃそうなる。これが正常だな。
医療スタッフが困惑しながらも、気を取り直してイッセーの様子を確認していく。
そのご苦労様と言いたくなる行動に内心感動すら覚えている俺の前で、先生はイッセーに同情の視線を向けながらも真剣な表情を浮かべていた。
「……原因は大体想定できる。龍神化の影響だろう」
先生は真剣な表情でそう告げる。
龍神化。肩を並べて戦ったからこそ分かる、ありえない力だった。
搦め手を使う事のない正面突破で、リゼヴィムの神器無効化能力（セイクリッド・ギア・キャンセラー）を寄せ付けない。控えめに考えてもイレギュラーであり、神滅具（ロンギヌス）によるものとはいえ異常だろう。
だからこそ、言われてみれば納得だ。
兵藤一誠は才能がない。神器は制御できないとされ、禁手に至っても問題ない状態にすら、死んでもおかしくないような山籠もりが必要で、いざ至っても一日一回３０分という、俺が知る限り俺の次ぐらいに使い勝手の悪さ。歴代最弱という評価は蔑みでも何でもなく、ただ神滅具を持っているだけと言っても過言ではない。魔術回路も回路があるというだけで、味噌っかすとか言われてもおかしくない。
そんな男が、しかし異例の進化を遂げたのは本当に特例というほかない。歴代の宿主とは全く異なる域でドライグと信頼関係を結び、数多くの縁によりサポートしてくる者もたくさんいた。その結果、怨念そのものだった歴代の残留思念を解きほぐし、龍神とも友情を結んでいる。転生悪魔という歴代にない特殊性も大きいだろう。
総じて特例側であり、だからこそ特例としか言えない進化を遂げてきた。それこそが三叉成駒であり、赤龍褒賞であり、真女王であり、龍神化だ。
そう。才能がないにも関わらず異例の進化を遂げてきた。
……そんな無茶苦茶な真似をして、反動が来ないわけがない。

「禁手（バランス・ブレイカー）、すなわちB×B。真女王（カーディナル・クリムゾン）、すなわちC×C。そして龍神化（ディアボロス・ドラゴン）、すなわちD×D。転生悪魔になり赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）に目覚めてから、まだ一年も経ってないのイここまで成長を遂げてしまったのが要因だ」

先生はそう、苦渋の表情でイッセーに告げる。

それを見ながら、リヴァ先生も難しい表情を浮かべていた。

「……冷静に考えると、そもそも不具合が起きてないことがおかしいわね。歴代赤龍帝はおろか、歴史上の全神器保有者の誰一人到達できなかった前人未踏の進化。それを歴代で最も才能がないのに何度もすれば、悪影響の一つや二つは出てきて当然だわ」

「そうですね。最近は至っている人と会うことが多いので忘れてましたが、禁手（B×B）の時点で到達そのものが褒め称えられる領域です」

ルーシアの言う通りだ。

禁手というものは神器の究極にして奥義。封印系が持つ覇という例外を除けば、それが最高到達位階のはずなんだ。

いくら悪魔の駒や龍神の影響があるとはいえ、その更に上の段階なんて文字通りの規格外。本来の想定から外れた成長を遂げれば、不具合だって起きる。ヒマリやヒツギの神器だって、それが理由でバグッてるようなものだしな。

英雄派の非人道的なテロも兼ねた人体実験。あれの所為で最近到達者が多すぎて、その辺り完璧に感覚がマヒしてた。本来はその時点で偉業だった。

……むしろ今まで、よく起きなかったというべきだ。

「英雄派が至り方をメソッド化していることもあって、うっかりしてたなぁ……」

「だろうな。はっきり言って禁手のバーゲンセールが起きている現状は、神器の歴史において前代未聞の転換期といえる。イッセーはその中でもとびぬけたケースだ」

俺のボヤキに先生が頷くと、そのまま視線をイッセーに戻した。

「とにかく、症状の解析と打開策が見つかるまでは龍神化は禁止だ。一回目はリゼヴィムをぶちのめすまで持ったうえで母乳で回復した。

だが二回目は使った直後にやばいかもしれんし、乳を受け付けないなら母乳を使うことがやばいかもしれん」
確かに。母乳で回復した後にこの症状だ。胸が服越しに触れただけで激痛に悶える以上、胸から出てくる液体なんて、触れただけで体が焼けただれるかもしれない。
こんなことを真面目に考えなきゃいけないことが色々あれだが、これはかなりやばい事態だしな。
思わぬところから思わぬ窮地だ。これがトライヘキサや暴動とかで大変な時に来るとか、酷い展開過ぎる……いろんな意味で。
「アザゼル。イッセーのこの症状は治るの？」
「分からん。さっきも言ったが、イッセーの進化は異例すぎる。更に龍神の肉体なんて代物も前代未聞で、探るにしても手探りだ。……下手すりゃ一生の可能性だってあるし、もし使えば今度は乳を見ただけで死ぬかもしれん」
リアス部長に対する先生の返答に、イッセーは絶望の表情を浮かべている。
虚空を見つめて唖然とした表情で、真っ青な顔になっている。……相当ヤバいな。
「……最悪、私が宿っている状態なら短時間は何とかなるでしょう。ですが先送りにしかならないでしょうし、おそらく解除した後に一気に来るでしょう」
シャルロットまでこう言っている以上、次に使えば真剣に命の危険だな。
そしてよしんば助かっても、今度は乳と一生触れられなくなるかもしれない。真剣に考えなきゃならないのがキッツいな。
「そんな、嘘だろ……？　女の……に触れることも見ることも許されないなんて、いっそのこと殺された方がましじゃねえか……っ」
静かに絶望の涙まで流しているところ悪いんだが、俺はどう反応すればいいんだ。
マジでシリアスにやばい事態のはずなんだが、その発言方法が乳拒絶だからマジになり切れん。

……ただし、リアス部長達やギャスパーはガチのシリアスだ。俺はちょっと引いていいだろうかと思う。
幸い、インガ姉ちゃん達や木場、アザゼル先生にお医者様方は困惑気味だ。正直、少し救われた気分になったぞ。
この事態に俺達が、本当にどうしたらいいのか分からなくなるようなことになっていた、その時だった。
―とある国の隅っこに、おっぱい大好きドラゴン住んでいた♪
子供達の気分を紛らわせる為だろう。病院の待合室辺りにあるテレビで、おっぱいドラゴンを流していたんだろう。
ちょっと気が和んだ、その時―
「……が、あぁあああああああああっ!?!?!!???!?!」
―イッセーが絶叫と共に苦しみ始めた。

おい、これ本当にやばいだろ。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

一方その頃、兵藤邸の地下でリーネス・エグリゴリは真剣な表情で機材を操作していた。
「……どう？　和地の成果、繋げられそう？」
可能な限り大量の魔力を確保する為、付き添っていた九成オトメが様子を窺う。

それに対し、リーネスは額に浮かんだ汗をぬぐいながらも少し微笑んだ。
「大丈夫よぉ。あとは時間が必要なだけで、おそらく和地の狙ったものは完成するわぁ」
九成和地が昏睡するほどの突貫は、確かに今後を踏まえた布石だった。
あの一瞬、あの場にいる全員にとっての想定外。その直前のミザリ一派の独断専行。そして何より、あの位置取りからくるアルケードの死角。
その状況を冷静に判断した。結果として、今後の事態を踏まえた一手を思いついた。そして瞬時に判断し、その一瞬の好機を見逃さなかった。
真意に気づかれたかはともかく、アルケードのカウンターは即座に入った。ゆえに手に入ったものは極僅か。だが同時に、確かにそこに残っていた。
……それを形にするのは、仲間達の役目だろう。
「あとは時間との勝負ねぇ。現状では一発が限界だし、増産できるかも分からないから……一発は完成させれるのが不幸中の幸いだわぁ」
リーネスがそういうだけの出来栄え。そしてそれは、今後のミザリ達との戦いで一手となる。
その感性は確定した。問題はいつになればできるかだが、それでもできることはちゃんと果たした。
それを今更ながらに実感し、リーネスはどっかりと床にへたり込んだ。
「……はぁ～、疲れたぁ～」
「お疲れ様。後で和地のお見舞いにいこうね？」
力を抜いてだれるリーネスに、オトメは微笑みながら肩にて置いた。
和地の成した結果を、次に繋げる。リーネスはそれを成せたことが誇らしい。オトメはそれを成してくれたリーネスに感謝している。
和地には鶴羽がついているが、どうやら意識も回復しているらし

い。カズヒも念の為、そちらの病院に運ばれている。
事態は窮地だ。だが、悪い事だけではない。
「これからも忙しいけど、まずは少し休もう？　お茶、入れるよ？」
「ありがとう、オトメ。……じゃぁ、紅茶じゃなくて日本茶をお願いしようかしらぁ？」
親友同士のその会話に、しかしそれだけで済むほど現状は優しくない。
展開される魔法陣は、情報データを送る類のもの。
リーネスはアザゼルの提言やシェムハザ達の了承もあり、リーネスは神の子（グリゴリ）を見張（ゴリ）る者での階級が大幅に挙げられている。
当人自身の戦闘能力がさほど高くない為ある程度の限界はあったが、それでも神の子を見張る者ではかなりの地位だ。運営陣にこそ一歩劣るが、純粋な力量を考慮すれば異例の地位。準最高幹部といえる地位であり、最高幹部の側近でも与えられることはめったにない。
軍階級で言うのなら、准将の領域だろう。その地位に見合った責任も生まれているが、直属であり和地達がいればこなせる範囲内だ。
だからこその通信魔法陣であり、その情報を見てリーネスは眉をしかめた。
「……お茶の時間はないかもしれないわねぇ」
「どうしたの？　トライヘキサがもう動いたの？」
想定される懸念を言葉にしたオトメに、リーネスは首を横に振る。
不幸中の幸いか、この情報はそれではなかった。
だが、十分すぎるほどの脅威だ。
「諜報部隊が掴んだ情報よぉ。不正貴族が初代バアルを狙った襲撃作戦を試みたとかぁ」
「……え？」
オトメが一瞬固まったのは、仕方がない事だろう。
今回の事態で動く不正貴族は、すなわち王の駒屋レーティングゲームの不正。その主導者は大王派であり、初代バアルもそれに関与している。
当然、立ち位置としては同陣営なのだ。何故と思う者は出てくるだ

ろう。
「要は責任のなすりつけあいよぉ。初代バアルを討つことで、責任の多くを彼に押し付けたうえで、自分達は罪を認め悔い改めたと言い訳する為ねぇ」
「……う、うわぁ」
リーネスの説明に、オトメもげんなりしはじめていた。
当然と言えば当然だ。悪党同士の見苦しい共食いともいえるわけで、その手の悪意に慣れてない乙女にはきつい話だろう。
正直リーネスもため息をつきたいが、かといってそれで済む話ではない。
「アザゼル先生にも伝わるでしょうしい、一回連絡を―」
そう言っている間に、更なる通信が送られる。
この短期間に、二回の情報伝達。その時点で、火急の事態が起きたというほかない。
なのですぐにデータを確認し、リーネスは思わず頬を引きつらせた。
「嘘……でしょぉ……っ」
「え、どうしたの!?」
オトメに肩をゆすられて、リーネスはふと我に返る。
だがしかし、この事態はあまりにまずい。
想定外というほかない。ただでさえ最悪に近い事態が、更に悪化するという悪夢のような事態だ。
それでも対応するべく思考をまとめながら、リーネスはその情報を口にする。
「……トライヘキサが分裂して、同時多発的に襲撃を仕掛けているそうよぉ」
「……は?」
呆気にとられるのも当然だと思いながら、リーネスはオトメの手に手を添える。
そこから勇気を絞り出し、リーネスは思考を加速させる。
状況の悪化は、とどまるところを知らないと言えた。

黙示覚醒編　第三十話　動乱のバアル城

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

冥界のバアル領。そこに存在する、宗家である大王の城。
今そこでは、激しい戦闘が繰り広げられていた。
大王派宗家の城ともなれば、警備は厳重で兵の練度も人数もすさまじい。かけられている結界も、質量ともに最高水準。冥界でも屈指の防衛拠点といえるだろう。
チームＤ×Ｄの関係者が数多く住み、和平の地でもある駒王町。それすら超える堅牢な場所であり、またかつての内乱でも争いに巻き込まれることはなかった。
だが、襲い掛かる凶手はそんな彼らを相手に引けを取らない戦闘を行っている。
チームＤ×Ｄからバアル・アガレス・シトリーの眷属が駆け付けているが、それでもなお苦戦するほど。この時点で、凶手が凄まじい敵手であることを物語っている。
そしてその戦闘を少し離れたところで見ながら、一人の男が小さく微笑んだ。
「……好都合と、言ったところか」
そう呟いた男は、そして指を鳴らす。
瞬間、数人の悪魔たちが現れて跪く。
その配下の対応だけで、彼が相応の地位にいることを示している。
「手はずは整っているかね？」
男が確認すると、配下の者達は次々に頷いた。
「は、呼応してくださったのは合計十名。王の駒保有者も三名駆けつけてくださいました」
「誰もが眷属だけでなく、配下も連れてきております。合計すれば五

百を超えるかと」
「また、あそこの者達にも繋ぎを作ってくださいました。魔王派との手はずも整えているとのことです」
その報告に満足げな頷きを見せる男だが、しかしそこに唯一の訃報が混じる。
「それと、呼応してくださった者達の一人なのですが―」
その報告を聞き、男は小さくため息をついた。
表情には苦いものが混じっており、唯一最大の問題だと思っていることが目に見えている。
その反応に配下達は違和感を覚えるが、しかしそれを問い質す隙を男は見せなかった。
「では仕掛けよう。可能な限りじわじわと削り殺す方法でいくように。分かったね？」
『『『『『『『『はははぁっ!!』』』』』』』』
そして散る配下を見送ってから、男はバアルの城に振り返る。
「……さて、では一世一代の大芝居をするとしよう」

和地Ｓｉｄｅ

「……バアルの城が襲撃とか、タイミングがいいのか悪いのか」
病室で体調確認をしてもらっていた俺は、その緊急事態に頭痛を覚えてきた。
勘弁してくれよこの状況下で。間違いなく王の駒とかレーティングゲームの不正関係だろ。
トライヘキサはトライヘキサで、体を分裂させて同時多発攻撃を仕

掛けてきている。はっきり言ってそんな状況では、バアルの城までカバーしきれない。
そこまで狙っての行動だろう。やってくれる。
幸いというかなんというか、サイラオーグ・バアルとソーナ先輩が眷属を率いて向かっているらしい。少し不安がないではないが、ここは彼らに任せるべきだろう。
「……バアル、か」
俺はぽつりとつぶやくと、天界で出会ったマグダラン・バアルを思い出す。
彼も中々難儀な立場だ。おそらく、今回の事件で更に苦労することになるだろう。
生きて会う事が出来たら、何かしらでねぎらってやりたいものだ。もっとも俺は貴族的なことには疎いから、その辺りが大変だが。……道間藤姫にでも相談するかねぇ？
いや、問題はそこではないか。
「敵の規模とか詳細は分かってないのか？　増援に向かうべきかどうかも判断がつかないぞ？」
「難しいね。そもそもバアルの城だって、人はかなり出払っているみたいだし」
インガ姉ちゃんがそう教えてくれるけど、さてどうしたものか。
……今ここで出張るわけにはいかないだろう。俺は自分で言うのもなんだが、さっきまで昏睡状態だったわけだしな。
そういうやつを速攻で動かすのもあれだ。必要性が高まるまでは、ゆとりのあるやつを優先的に向けるべきではある。俺が出張って解決したとしても、似たようなことをして死ぬ奴が出るかもしれないし、こういう手順をむやみに無視すると将来的な作戦活動に支障が出かねない。
そういう点を考えると、だ。
「イッセーが暴走特急にならないよう、見張った方がいいんだろうか」
「……確かに、先生その辺マジで思っちゃうかも」
リヴァ先生も頷いちゃってるけど、実際その辺は懸念だ。

あいつはあれで社会性はあるし、基本として善性だ。
ただ覗きの常習犯だったこともあって、社会規範とかを順守するレベルは高くはない。サーヴァントだと、たぶんだけど中立・善といったところだ。
自分にとって、大切な誰かにとって必要ならば、世界から悪とみなされてもかまわない。個人としてはある種の美徳だが、社会性を考えると厄介なところがある。滅多なことでは起こさないが、滅多なことだとやりかねない。
実際、冥界の在り方に不満はあってもクーデターを起こそうとはしてないからその辺はまだましだ。だが身内が窮地であり、その対処において反逆者になると言われたらどうなるかは言い切れる。間違いなく、身内になるべく被害を出さない段取りを踏むが、それで終わりだ。
自己犠牲精神が悪い方向に働きかねない。イッセーなら、サイラオーグ・バアルや匙達の窮地なら、処罰前提で突貫しかねない。あいつはそういうことをやりかねない。
……おそらくだが、トライヘキサ迎撃戦とかになれば奴は必ず入ってくる。周りが止めても聞かないだろうし、勝手に突っ込んでいきかねない。
問題はそれに呼応して、余計な被害を生み出しかねないところだ。言いたくないが、イッセーは現場タイプだ。現場の視点で動くと政治的な配慮も多少はできるが、個人としては現場で動くタイプだ。
イッセーがそういう行動を段取りとか根回しなしで動けば、まず間違いない余計な影響が出る。そのあたりの理解が足りないし、理解しても抑えられないだろう。
だからこそ―
「―リヴァ先生、インガ姉ちゃん」
―その辺りのフォローはしておかないとな。
「イッセーにはうかつに知られないようにしよう。手伝ってくれるか？」
ちゃんとその辺は頼んでおこう。間違いなくややこしいことにな

るだろうしな。
俺のその頼みに、リヴァ先生もインガ姉ちゃんも苦笑しながら頷いてくれた。
「ま、イッセー君はそんな感じよね。オッケーまかせてカズ君！　先生頑張っちゃう！」
「ま、それとなく見張っておけばいいよね。それぐらいは大丈夫」
ただそのうえで、二人してぐいっと顔を寄せる。
……頬が少し赤くなっているが、お互い様だろうな、うん。
「カズ君もちゃんと休むようにね？　今から出撃は絶対禁止」
「そうだよ和地君。今は休むことが君の仕事なんだからね？」
「わ、分かってる分かってる！　しっかり休めない奴に仕事をする資格なし！」
効率って概念は知ってるから、その辺は安心してくれ!!
と、言うわけで。休む時間ぐらいは稼いでくれよな？　その分俺も後で稼ぐから。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

一方その頃、バアル城の窮地は大きな転機を迎えていた。
凶手達の首謀者はビィディゼ・アバドン。レーティングゲーム第三位にして、王の駒使用者の一人。
自分の今後を勇退で済ます為、初代バアルという首謀者を処刑することを目論んで彼は動いた。
既に魔王派の過激派とも繋ぎを作った彼は、まず己の保身を確保す

るべく襲撃を敢行。衛兵及びシトリー・バアルの眷属と激闘を繰り広げていた。

……その彼が、今まさに窮地に陥っている。

ビィディゼ・アバドンは間違いなく歴戦の強者だ。性能こそ王の駒あってのものだが、王の駒を与えられるだけの価値を見出されているからこそ使用できた。そして駒を使った者達が数多くいる中、彼が三位になったのはそれだけの力量を持っているから。経験からくる読みと根源的な性能さえあれば動かせる才覚は、彼を魔王級の悪魔に導いた。

その事実は決して揺らがない。彼は間違いなく魔王級の実力者。たかだが王の駒程度でそこに至れたことが、彼が凄まじいことを物語っている。

「終わりだ、ビィディゼ・アバドン」

そんな存在を、サイラオーグ・バアルは追い詰めていた。

繰り返すが、ビィディゼ・アバドンは魔王クラスだ。その彼を打倒しうるものもまた、そんな存在が絶大な存在であることを証明している。

半端な力量の持ち主が、ビィディゼ・アバドンを倒すことなどできない。魔王クラスとはそれだけの傑物であり、神の領域に届く悪魔であることの証明だ。だからこその魔王という名称なのだ。

超越者という別格の区分を除けば、悪魔という区分において最強格。例えドラゴンですら、決して油断できない危険な存在。悪魔という種族における、ある種の登竜門。王の駒というドーピングがあるとはいえ、そこに至れるのがあまりに狭き門だというのは、駒を使用した者や魔王血族ですら殆どが届いていないことが証明している。

それほどまでの化け物を、打倒できるものは何なのか。

精査するまでもなく化け物である。神や魔王を滅ぼしうる者達でなければ、ビィディゼ・アバドンを窮地の追い込むことなど不可能。それは決して揺らがない、世界の真実だ。

ゆえに、この現象はひとえにサイラオーグ・バアルにとっての偉業である。

レーティングゲームナンバー3。魔王級とすら称される存在。そんなビィディゼ・アバドンを追い込む。それは彼がドーピングで強化されたこととは全く関係ない。

ドーピングであろうと魔王クラスは魔王クラス。それを打倒することを可能にしている彼を、弱者と称する者は愚者でしかない。

「馬鹿……なぁ……っ。私は……魔王、クラスと……称され……っ」

間違いないく追い込まれ、崩れ落ちる寸前のビィディゼ・アバドン。

そんな男を前に、拳を握り締めたサイラオーグ・バアルは告げる。

……彼がここまでの窮地を打倒できたのは、いくつもの要素がある。

一つ。龍王ヴリトラを宿す、匙元士郎の存在。

主ごと「トップ5にはなれないし、大きなタイトルも望めない」と酷評された彼だが、龍王は決して伊達ではない。最上級悪魔タンニーンと肩を並べる、ヴリトラの宿主は間違いなく強い。それを磨き続ける執念があれば、尚更だ。

その呪いの邪炎は、魔王クラスにも通用する。事実、龍王の一角たるファーブニルは、超越者であるリゼヴィム・リヴァン・ルシファーに一撃を叩きつけた。その後も執念で呪い続けて弱らせ、味方の協力で乗り越えたかと思えば、孫の復讐に協力する形で更なる一撃を与えた。龍王は神にすら通用する存在であり、それを生かすことができる彼は強者の素質があるということだ。

ビィディゼは厳しい評価を下していたが、しかしそこに足元をすくわれたといえるだろう。

一つ。心構えの差。

ビィディゼ・アバドンは基本的に、レーティングゲームのプレイヤーだ。経験をきちんと肥やしにしている男ではあるが、命がけの実践ではなく安全に配慮されたゲームであることを大前提に試合をしてきた男だ。

逆にサイラオーグ・バアルと匙元士郎は、ゲームであろうと命を懸ける。当然だが死力を尽くした殺し合いを潜り抜けており、その精神性は選手ではなく戦士だ。

一概にどちらが優れているかといえる問題ではない。強さというものにも色々なものがあり、そもそも安全に配慮する競技試合の強さと、命を奪いあう実戦での強さは毛色が違う。キログラムとリットルのどちらが単位として優れているか程見当違いではないが、キロメートルとミリメートルのどちらが単位として優れているかぐらいの見当違いではある。

だがしかし、今の戦いは命を懸けた戦いであり、実戦だ。

実戦においてゲームの意識を引っ張ったビィディゼより、実戦の心構えで挑んだ二人。どちらの精神性がこの場に合っているかは、言うまでもない。

そして最後に、サイラオーグの更なる切り札。

サイラオーグ・バアルは、神滅具（ロンギヌス）を従える者。ネメアの獅子が込められた獅子王（レグルス・ネメア）の戦斧を眷属として従える者。そしてそれを禁手に至らせ、執念で変質させた者だ。

そして獅子王の戦斧は封印系神器。封印系神器には覇という裏技がある。

そして今サイラオーグは、覇を解放させた。

魔力を欠片も持たないサイラオーグにとって、それは命を削るほかない最終手段。だが同時に、ありえないほど鍛え上げられた生命力は寿命までを削らせない。

その圧倒的な拳は、ビィディゼの経験を上回った。

匙元士郎との共闘は、王の駒による力を上回った。

結論として、ビィディゼ・アバドンはまさに倒れる寸前。そしてこの場において、二人が容赦する理由はまったくない。

ゆえに双方ともに、決定的な一撃を叩き込もうとし―

「……え？」

―その、呆気にとられるマグダランの声に、誰もが目を見開いた。

黙示覚醒編　第三十一話　窮地、来る

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……え？」

その声に誰もが振り返れば、マグダランの脇腹に魔力の矢が突き刺さっている。

その矢は針のように細く、突き刺さる位置も主要な臓器や血管を避けた、致命傷とは程遠い位置。

だが同時に、それをこの場の誰もが悟れない形で成し遂げた。それが矢を放った者が強者であることを示している。

殺気を向けられなかったのだろうが、戦意を悟らせなかった。

自分達を狙ってないとはいえ、認識もできなかった。

それはすなわち、相手が己の気配の殆どを殺し、正確無比な矢を超高速で放ったことに他ならない。

間違いなく、手練れである。

そしてこの場でマグダランを狙うということは、サイラオーグと匙にとって敵である。

そこまで気づいた時、矢を喰らったマグダランは崩れ落ちる。

そして、その瞬間に更なる動きが見えた。

「……冗談だろ」

一瞬だが、匙元士郎は唖然とした。

魔力の気配を感じた時には、魔力で構成される数十の矢が山なりに飛んできていた。

崩れ落ちたマグダランを狙うそれは、あまりに遅いが確実に当たる。それはマグダランが崩れ落ちていることを狙ってのもので、しかも矢の速度から見て、先ほどの狙撃より先に放たれたものだ。込められた魔力も、並みの上級悪魔なら一撃で殺しうるだけのもの。それ

が、このままではほぼ同時にマグダランに当たってしまう。
衛兵達も庇おうとするが、その瞬間に足に矢が突き刺さり、同じように崩れ落ちる。
間違いなく、この狙撃はマグダランを殺す為の詰将棋。事前に速度を一つずつ調整し、動かなければ確実に当たるように放つ。そしてそれらに気づかれるより先にマグダランに早い速射を当て、動きを止める。更にそれで動揺した瞬間をつき、衛兵の足まで止める。
……何より恐るべきは、このタイミング。
ビィディゼ・アバドンが倒されようというこの瞬間に、マグダランは撃ち抜かれた。これは偶然と考えるにはあまりにできすぎている。
「……恩を押し売りされたか」
ビィディゼが悟った通りだ。凶手はこのタイミングをわざと狙った。
ビィディゼが倒されようというまさにそのタイミングを計り、マグダランを狙い打つ詰将棋を当てる。思考の隙をうまく突いた、あまりに悪辣な方法だろう。
だからこそ、悪辣な男はそれに呼応できる。
「さぁ、どうするかね？」
その一瞬のスキをついて、ビィディゼは飛び下がりながら攻撃を放つ。
アバドン家が持つ、穴（ホール）の特性をもって、更にマグダランに攻撃が届くように放つ。
その攻撃に、サイラオーグも匙も選択肢は一つしかない。
「ぬぅ……ぉぉぉぉぉぉっ!!」
「畜生がぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
吠える二人は素早くマグダランをカバーするように周り、攻撃の迎撃を試みる。
サイラオーグ・バアルが纏う獅子王の戦斧は、飛び道具に対する強い防護加護を持つ。匙元士郎が宿すヴリトラ系神器には、炎の結界を展開できる。
だが、それらをもってしても二重の猛攻は厳しい猛攻だ。

マグダランを狙う矢は正確無比で、更に早く迫る追加までくる。更に衛兵まで狙うことで、二人の対応力に更なる負荷をかけていた。
そこに便乗したビィディゼは、攻撃にわざとばらつきを加える。マグダランと衛兵だけでなく、一部に二人を狙った攻撃を混ぜ込んだ。当然、この状況下では二人は耐久力ゆえにそれを優先できない。
その攻撃はわずか数十秒だが、しかしそこに更なる攻撃が叩き込まれる。
「……がっ！」
「……ぐっ！」
縫い留めるように、あまりに早い矢が二人に突き刺さる。
鎧の継ぎ目、それも猛攻で絶え間なく動くそれを正確に貫く一撃。それが一瞬で均衡を崩した。
瞬間、攻撃の密度は一気に二人に収束。その全身を滅多打ちにする。
……そして攻撃が収まった時、二人は全身の鎧を砕かれ、血を流して崩れ落ちた。
「兄上！　匙殿！」
マグダランが声をかける中、二人はそれでも立ち上がろうとする。
その姿を見て、ビィディゼは寒気を感じるような表情を浮かべていた。
「これだけ喰らっても立ち上がるか。才能がない愚者でありながらよくもまぁ……」
自分では理解できないあり方に引くビィディゼ。
そこに足音が近づき、そして一人の青年が現れる。
バアル家に連なる者と思われるその男を見て、サイラオーグは血を吐きながら彼を睨み付ける。
「どういうつもりだ……シュウゴ・バアル……っ！」
「何って決まってんだろ？　手柄を上げに来たんだよ」
ヘラヘラと嗤いながらサイラオーグに返すのは、シュウマ・バアルの子息たるシュウゴ・バアル。
弓矢の形に魔力を集めての射撃戦を得意とする悪魔。その力量は

既に最上級悪魔の域とされ、対ロキ戦闘において多大な戦果を挙げた男でもある。遠距離精密狙撃なら悪魔全体でも随一であり、彼ならあの妙技の連発も納得できる。
だが、問題はそこではない。
フロンズ・フィーニクスの後援者たるシュウマ・バアル。彼ら二人は政治の怪物であり、この事態においても致命傷を避ける対応をとる。そして魔王派とも連携を踏まえた行動をとるだろう。
そんな彼ら二人についているだろう彼が、この状況下でこの凶行を振るう理由が分からない。
それに対し、シュウゴ・バアルはヘラヘラと嗤いながら首を傾げる。
「はぁ～？　身内にとんでもないバカが出たんだぜ？　身内がすっぱりやっちまった方がいいじゃねえか」
何を言っているんだという表情で、何を言っているんだと言いたくなるようなことを返す。
シュウゴ・バアルは当たり前のようにそう言いながら、ビィディゼ・アバドンの方を向くと笑顔まで向けている。
「実際、旦那に独占されかかったしなぁ？　大王派の不正、その原点なんてもんは汚名返上にはもってこいだし、不正に関わってない俺らからすりゃぁ正義の裁きで大手柄じゃねえか」
「なるほど。彼らよりは考えて動けるようで何よりだ」
馴れ馴れしい態度をとるシュウゴに対し、ビィディゼは窮地を救われたこともあってあえて黙認する。
そしてシュウゴは、唖然としているサイラオーグたちににやりと笑って見せる。
「つーわけで、正義のD×D様の分際で不正野郎に手を貸すてめえは、反逆者も同然だな？　そんな愚か者は不正貴族ごと、正義の断罪者ってやつのかませ犬になるんだな？」
「貴様……、どこまで腐っている……っ！」
その態度にサイラオーグは激昂するが、シュウゴ・バアルは首を傾げる。
言われる理由に思い当るところがない。そういわんばかりの態度

を見せていた。
「あ？　身内から犯罪者が出たんだぜ？　さっさととっ捕まえて突き出した方がいいだろ？　バアルの汚名を少しはそそげて、手柄もゲットの一石二鳥じゃね？」
　本気でそう言っているとしか思えない態度で、シュウゴ・バアルはそう告げる。
「冗談だろ。今はそんなこと、してる場合じゃねえだろうが！」
「いやいやそんな場合だろ？　身内にバカが出たってんなら、まずはその辺どうにかしねえとこっちの身まで危ないっての。オツムが悪いんじゃねぇか？」
　匙元士郎の怒声すら、彼には理解の外側にある。
　真剣に首を傾げるシュウゴは、自分の言葉に疑問なんて持っていなかった。
「他の神話の連中を助けるだけ助けて、俺らが後で痛い目見るとかアホじゃねえか。まずは後顧の憂いってやつを絶たねえとなぁ？」
　その言葉に、匙元士郎は眩暈すら覚えそうになっている。
　……根本的に、相容れるわけがないだろう。
　手柄や名誉を望むことこそあれ、それ以上に他者の為に身命を掛ける利他の存在。他者の為に動くのはすべて己の手柄や名誉の為である利己の権化。
　真逆の極限と言ってもいい。足並みを揃えられる時ならともかく、その差が如実に表れる環境ではこうなって当然なのだ。
「あ、ちなみに俺の眷属も、そちらさんに加勢してるぜ？　これで魔王の妹のくせして不正貴族共に手を貸してるシトリーの嬢ちゃんも殺せてんじゃね？」
「それはそれで、セラフォルー様辺りに不興を買いかねんが？」
　余裕を取り戻してそんな会話まで交わす二人だが、そこに爆音が鳴り響いた。
　振り返る二人の視界に、桃色の髪が映る。
　更にそれを追いかけるように現れる悪魔達に、思わず二人は跳び退った。

「ロイガンだと!?」
「おいおい、親父の派閥がなんでここに!?」
レーティングゲーム二位。すなわちビィディゼより上の悪魔である、ロイガン・ベルフェゴール。
シュウマ・バアルの派閥に属する、最上級含めた上級悪魔の貴族達。
その乱入に、ロイガンが同様のことを目論みでシュウマ達が止めに来た可能性を何人かは考える。
「……勘違いしないでくれたまえ、シュウゴ。敵はロイガン(彼女)で味方は我々だ。」
だが、その誤解は足音と共に解かれる。
姿を現したシュウマ・バアルとその言葉に、サイラオーグは苦虫を噛み潰した表情を浮かべていた。
「貴方まで、このような愚行に関与するというのか……っ」

和地Ｓｉｄｅ

俺は今、カズヒねぇの運ばれた病室に顔を出している。
……カズヒねぇもまだ起きない。相当の深手を負っていたし、相当キていたんだろう。
吹っ飛ばされた俺や壮絶〔おっぱいはイッセー的にその通りなので〕なことになっているイッセー以上に寝込んでいるとか、大変なことになっている。
寝顔そのものもゆったりしていないし、こうしてみると少し心配だな。
とはいえ、俺もそろそろ準備をするべきだろう。

深手を負っていたこともあるからすぐにはできないが、有事においてはそうも言ってられないこともある。
もちろん俺達にも状況〈入院患者を初手から出すのは様々な問題がある〉からまだ待機だが、遅かれ早かれ出張ることにはなるだろう。
……イッセーは絶対出てくるだろうな。多々問題はあるが、あいつはこういう時絶対動くタイプだ。
ま、俺も状況次第では動くけどな。
だからこそ、俺はそっとカズヒねぇの頬に手を当てる。
「……そろそろ準備をしてくるよ」
聞こえてないだろうが、まぁこういうのも気分というものだしな。
そして俺は苦笑しつつも病室を出る。
と、そこに春っちとベルナがいた。
「もういいの？」
「あんまり長居すると、カズヒねぇが起きたときに説教してきそうだろ？」
春っちにそう返しながら、俺は少しだけ目を伏せる。
……禍の団がトライヘキサをこのままにするわけがない。ミザリとしても親父を殺し損。ヴィールだって勝ちを狙う気になった以上、トライヘキサは有効活用したいだろう。
こっちも対策のたの字はしているだろう。ただ、それをもってしてもただで済むわけじゃない。
まったく。またしても壮絶な激戦か。
ため息をつきたくなっていると、ベルナがそっとこっちに近づいてきた。
「カズ、ちょっといいか」
「……ああ、いいぜ」
すぐに察して俺は、小さく微笑みながらベルナを抱き寄せる。
「そうじゃねえよ」
「違うの!?」
てっきりキスとかするのかと思ったらマジツッコミ!?
ちょっとショックを受けていると、ベルナはため息をつきながら頭

を描いた。
「そうじゃなくて、姉貴達について気になるってことだよ」
「……ああ」
春っちと一緒に納得したけど、確かにそうだな。
後継私掠船団（ディアドコイ・プライベーティア）やフロンズ達の動きが気になるな。
あいつらはあいつらで大王派（身内）の暴走とかに対応しているらしい。まぁ、大王派が不正をしまくっているわけだからな。
フロンズ達が不正に関与している可能性は低いだろう。あいつらがそんな迂闊なボロを出すわけがない。というより、こんなただただ私服を肥やす為の不正をする連中とは思えない。幸香達だって、所属勢力観点の筋は通すタイプだしな。
となると、奴らからすれば完全なとばっちりだ。少なくとも、積極的に仕掛けるわけではない。あいつらも今回は被害者だろう。
だがここまでのスキャンダルだと、絶対大王派全体に悪いイメージが向けられるだろう。フロンズ達も絶対に余計な悪評が立つだろうし、奴らからすると余計なダメージを負う羽目になっているわけだ。骨折り損のくたびれ儲けで負傷を最小限にする羽目になっているわけだろう。
……流石に幸香も速攻で見切りをつけるわけがないだろう。その程度の奴だったら、もっと楽に対応できるし、普通に曹操が手綱を握れていただろう。
ただ、大王派にとってこの事態は大打撃は確定。そしてフロンズ達は大王派の一派閥程度だし、どうあがいても巻き添え確定だろう。
「ここで変な暴走って、あり得るかしら？」
春っちがその辺りを懸念にしているが、俺もベルナもそこは首を横に振る。
「それはないと思うけどな。姉貴達はそこまで馬鹿じゃねえだろ」
「流石にこのタイミングで暴走はしないだろうな。むしろ暴走した連中を片付けてるだろうな」
暴走した連中を積極的に潰さないと同類扱いされるし、暴走するような連中はむしろ潰しておいた方が得。ここで一生懸命治安維持に

尽力すれば、その分自分達の潔白も証明できる。
ただ、それをもってしても政治的なダメージは絶大だろう。当分の間は大王派全体が冬に時代だろうし、フロンズ達もとばっちりで苦労するだろう。
……魔王派側でありフロンズ達を警戒している俺達からすれば、それはそれで安心なんだがな。
「変な幸運に恵まれなければ、こっちとしては少しはましなんだろうがな」
ただ、妙な嫌な感じを覚えている。
あいつらだって決して油断できる奴らじゃないし、雑魚じゃない。何かしらのチャンスを掴み取れれば一気に切り返せるだろう。……何よりそういう天運を持っているだろう奴らだからこそ、冥界でのパーティでトップ二人が出会って会話を可能としたわけだしな。
あいつら、俺達の思わぬ方法や出来事で窮地を脱しそうだな、うん。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

シュウマ・バアルは、今この場こそが自分の大一番だと判断する。
ビィディゼ・アバドン、ロイガン・ベルフェゴールといった王の駒使用者。
サイラオーグとマグダランの、バアル宗家の兄弟。
そして息子の一人であるシュウゴがいるこの場こそを、彼は自分の人生を掛けるに値する戦場だと認識していた。
「まさかお前がいるとはな、シュウゴ」
「こっちのセリフだぜ、親父。てっきり臆病風に吹かれて、そのままや

られんのかと思ってたがよ」
　シュウゴの言いぐさに苦笑しながら、シュウマ・バアルは肩をすくめる。
「バカ息子に言われてはおしまいだな。まぁ、役者が揃っているのはいい事か」
　そう語るシュウマは、マグダランとサイラオーグに視線を向け直す。
「さて、宗家における現状の次期当主と本命の次期当主が揃っているのは都合がいい。お二人の腕でも一本切り落としておけば、如何にゼクラム様と言えど周囲が引きずり出すしかないでしょうしな」
「……貴殿がこのようなことをするとはな」
　マグダランにそう言われるが、シュウマはあえて気にしない。
　むしろゆったりと手を広げ、肩をすくめることを選んだ。
「恨むなら初代殿達を恨んでいただきたい。私の立場では彼らに命じられれば、例え眉を顰める愚行であろうと従わざるを得ないのですよ」
「……王の駒やレーティングゲームの不正に、貴殿も関与しているというのか」
　悟ったサイラオーグに、シュウマは本心からのため息と共に頷いて答える。
　自分で言った通り、シュウマ・バアルは立場上ゼクラム・バアルに逆らえない。
　ある程度の意見を具申することはできるだろう。だが彼が本気ですることを命じれば拒否はできないし、したとしても自分達を破滅に導くだけだ。それぐらいのことを悟れるからこそ、シュウマは意見を具申することが許されていると言ってもいい。
　そして、王の駒やレーティングゲームの裏取引じみた不正なら尚更だ。断ればお家取り潰しや暗殺が簡単に想定できるほどにシュウマは優秀であり、それだけの優秀さがあるからこそ、ゼクラム達に巻き込まれたと言っても過言ではない。
「ハイリスクハイダメージが確定している抵抗など、やる意味があり

ません。よしんば潜り抜けたところで、得るものが少ないのなら尚更です。まぁ、そこまで考えられると見抜かれたからこそ、不正に巻き込むことを彼らの選んだのでしょうが」

その結果、シュウマ・バアルは不正に大きく関わることになった。

彼の政治的手腕や根回しは、そういった事前の取り決めを行う際に有効だ。また大王派の核地雷ともとれるこんなものをうかつに起動させる趣味がないこともあり、無理やりにでも取り込めれば使える存在になるとも思われたようだ。結果として、かなり深いところにまで食い込まされてしまっている。

「それで利権を得ておきながら、この状況下で裏切るという事か！」

それはあまりに不義理でないかと、サイラオーグはそういう言う意味で批判的な言葉を投げかける。

だが、シュウマからすればむしろ逆だ。

「それはそうでしょう。利権の十や二十如きで大規模不正なんて汚点に巻き込んできたんですよ？」

シュウマからすればそれが本音だ。

確かに、不正に関わったことで得られたものはある。ゼクラムも不正という所業をやらせるに辺り、餌を用意する程度のことはする。能力に見合った行動を命じる代わりに、成果に見合った対価を用意してはくれた。

客観的に見ても、かなりの利権を得られたのは事実だ。各種不正に関わる繋がりは、自分達の表の行動にもプラスがあったことも認めよう。

更にそれらのプラスを、指摘にある程度利用する余地もあった。

ビィディゼ・アバドンが私的に勝敗をコントロールした八百長試合をしているように、その不正の繋がりを持つ者は、それを多少の小遣い稼ぎに使う程度のお目こぼしは貰っている。シュウマがはたしてきた成果を踏まえれば、それだけで下手な貴族の数百年分に匹敵する利益を得ることが可能だろう。

それら全てを踏まえたうえで、シュウマは本心からの感想を言うと決めた。

溜めに溜め込んだ本音の本音を、いい機会だから言ってやろう。
「……まったくもって釣り合わんのだよっ！」
不快感を心の底から込めて、シュウマ・バアルは今までの鬱憤を吐き出した。
「王の駒の不正使用や意図的なゲームの勝敗操作など、知られた瞬間に末代までの恥になる汚点だ！　それをたかが利権如きの為に行わせる？　次期魔王を全て我が子に与え、宗家の座をもらえたとしてもやりたくないのだがなぁっ!!」
人前で激昂する。そんなシュウマ・バアルの姿に
「我が一族や大王派の存亡がかかるほど環境が悪いわけでもないのに、利益の為に不正をするなど頭があまりに悪すぎるぞ、それでバアルが務まるかぁっ!!!」
何度も地面を踏みつけ、つい魔力を解き放ち壁すら吹き飛ばす。
仮にも元七十二柱の有力分家。その威力は上級悪魔としても上位に及び、絶大な火力で壁を吹き飛ばす。
そして煙が晴れ、戦士達が呆気に取られて中を覗き込むほどになるまで、シュウマ・バアルは肩で息をしながら苛立ちを隠せていなかった。
「……失礼。晴らす機会に恵まれなかったので、鬱憤が出すぎてしまったよ」
額に浮かんだ汗をぬぐいながら、気を取り直して苦笑を浮かべる。
それに呆気にとられた者達だったが、やがてサイラオーグは我に返ると息を吐いた。
「フロンズ達が何も知らなかったのは、貴殿が知らせないように尽力していたからですか」
「当然ですとも。調べれば私がせき止めていると必ず分かる様にしています。……このくだらなさすぎる愚行で、彼らの未来まで汚すのは避けたかった」
そう返したうえで、シュウマ・バアルは微笑みと共に告げる。
「そしてそれも知られてしまいました。こうなれば彼らを民衆の怒りのはけ口とし、マシな勇退を確保しつつ、息子達に降りかかる汚名を

減らしたいところです」
　そう告げてから、シュウマは呆れた視線をシュウゴに向けた。
「……最も、こんな独断専行は想定外だがね。功を焦って暴走をしないでくれ」
「いいじゃねえかよ、親父？　どうせコイツラ口封じすんだろ？　手柄になるから俺にやらせてくれや」
　ヘラヘラと気にせず笑うシュウゴにため息をつきながら、シュウマ・バアルは微笑みながら両手を広げる。
「まぁそういうわけなのです。言いふらされると困るから、遠慮なく死んでもらいましょう」
　そう語る彼の背後、遠く離れた空高く。
　そこに浮かぶは、サンタマリア級汎用母艦。それも三隻。
　絶望的な窮地に対し、サイラオーグ達は戦慄すら覚える。
　その圧倒的な脅威を背にしたうえで、シュウマ・バアルは宣言する。
「では滅んでくれたまえ。全ては我らが大願成就の為に……ね？」

黙示覚醒編　第三十二話　移り変わる大王派

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

微笑と共に告げるシュウマ・バアルの死刑宣告。
その宣告と共に、大量の砲撃が放たれる。
サンタマリア級汎用母艦は、「龍神クラスの打倒」をコンセプトとする戦闘兵器群　Ｇ（ギガンティック・フォートレス）　Ｆ　の第一弾。
艦隊編成で龍神クラスの敵に挑むことを前提とした、一隻で一分家の量に匹敵する軍事価値を獲得する戦闘艦艇。
それを三隻も投入する暴挙に、マグダラン達は目を見開いた。
魔王クラスの介入すら考慮して動いているとしか思えない。衛兵の中には絶望を覚えている者もいるし、ビィディゼやシュウゴは勝機を確信し頬が緩むのを抑えられないでいた。
そんな光景を見て、シュウマは―
「……どうかしたのかね？」
―首を傾げていた。
『『『『『『『『『？』』』』』』』』』』
その反応に理解が追い付かず、疑問符が浮かぶ周囲。
その視線に気づいて、方向を確認して振り返ったシュウマは、数秒固まった。
そして一呼吸を置いた彼は、小さく笑う。
「……なるほど、そう来てくれたか」
その言葉の意味は、砲撃で返答される。
砲撃はバアルの城付近に着弾するが、しかし城には直撃しない。
間違いなくこの距離なら、直撃打を当てることはできる。にも関わらずしない理由は、砲撃の影響を受けた者達で理解させられる。
そう、吹き飛ばされたのは、シュウマ達の手勢だった。

サンタマリア級から放たれる砲撃。出撃するＤ（ディアボロス・フレーム）Ｆからの射撃。突撃する悪魔達の攻撃。
その全ての痛撃により、ビィディゼやシュウマが連れた手勢は討ち果たされていく。
「……なんだ、これは!?」
「おい、どういうことだよ親父!? あいつら、親父が連れてきたんじゃねえのか!?」
驚愕するビィディゼやシュウゴに応えるのは、シュウマではなかった。
「連れてきたのは私だよ、愚か者どもが」
ため息交じりな声を放ったのは、通路から手勢を引き連れて現れた上級悪魔。
眉目秀麗を外観だけで体現するは、若手大王派の筆頭格たるフロンズ・フィーニクス。
更に後ろからくるハッシュ・バアルと共に、その表情は苦虫を噛み潰したというほかない。
「兄貴まで? どういうことだ……こんなチャンスに何してんだよ!?」
シュウゴ・バアルが信じられないような表情を浮かべるが、その言葉にフロンズとハッシュは心からの失望を浮かべていた。
「馬鹿だとは思っていたがここまでとはな。浅慮は起こすなと伝えたはずだぞ、シュウゴ」
そう吐き捨てるハッシュは、続けて嘆きすら見せてシュウマの方を見る。
信じられない。それを表情だけで見せつけながら、ハッシュはゆっくりと首を横に振る。
「……父上。貴方ともあろうものが、このような愚行を働くなど」
それだけ語り、ハッシュは口をつぐむ。
信じられない。嘆かわしい。そういった感情が沸き上がり、会話という形にできないのだろう。
そうシュウマが納得する中、フロンズが、眉間にしわを寄せてシュ

ウマ達を見やった。
「よもやここまでの者達がこんなバカなことをしでかすとは。……生贄には相応しいとはいえ、流石に色々な部分が痛くなりますな」
盛大にため息をつきながら、フロンズは指を鳴らす。
その音と共に現れる猛威を見て、シュウマは苦笑を深めていた。
「まさかここまでするとはな。本気の入れぐらいが違うようだ」
「当然の備えですよ。……最悪、二位と三位を同時に相手取ることも考えていたのですからね」
そう返すフロンズは、同時に小さく肩をすくめる。
「そしてそれだけでもありません。……形勢をひっくり返してくれてありがとう、梔子」
その言葉の向けられた先を、シュウマ達は勢いよく降り返る。
そして目にしたのは、悪魔であるはずのサイラオーグ達が完治する光景。
「いえ、これぐらいしなくてはならない窮地ですから。出し惜しみはしていられませんしね」
そう告げる梔子を筆頭に、数人の少女達が一礼を返す。
『シュウマ様⁉　た、大変です⁉』
更にその窮地は、この程度ではとどまらない。
泡を食った声で通信を繋げた不正貴族が、絶望すら声色ににじませている。
『後継私掠船団（ディアドコイ・ウプライベーティア）の者達が、シトリーやバアルの眷属を治し……ぎゃぁあああっ⁉』
『ビィディゼ様ぁ！　ロイガンの眷属達が、人間に回復されてぇあああああああっ⁉』
絶叫と共に繋がる通信が、状況が完全にひっくり返されていることを物語る。
そしてそれを成した理由も悟り、ビィディゼは戦慄すら覚えていた。
「馬鹿な、悪魔を治癒する能力は限られる。……それも形勢をひっくり返すほどともなれば、用意できるわけがない⁉」

神に愛されぬ存在である、悪魔を治療する手段は数少ない。
それを成せる存在を同時多発的に連れてくるなど、非現実的というほかない。
だが、現実は非情。それを示すように、九条・梔子・張良が微笑んだ。
「いえいえ、今回は状況が状況でしたので、伏せ札である聖母（トワイライト・ヒーリング）の微笑移植者を全員投入させてもらいました」
「……は？」
愕然とするビィディゼに、梔子は微笑みながら一礼をする。
「では挨拶を。――後継私掠船団筆頭（ディアドコイ・プライベーティア）が一人、張越最良（チョウリョウ・エボリューション）こと九条・梔子・張良。神器は聖母（トワイライト・ヒーリング）の微笑を生まれ持っております」
そして、そこでとどまる女であるわけがない。
九条・幸香・ディアドコイは、妹であるというだけで筆頭扱いなどしない。
「……そして私が増やした癒しの眷属、総数二十名を全員派遣させていただきました」
『『『『『『『『『『『『『……は？』』』

だ。
だが、だから増やして移植するなど、考えつけるのか。よしんば考えついたとはいえ、それを実現させることができるのか。ましてや、当人の発言を考えれば、英雄派が禁手の至り方を確立する前にだ。
その事実に戦慄する者達の前で、梔子は微笑みながら宣言する。
「では、ここからが略奪です。バアル宗家に限りない恩を売りつつ、愚か者から奪いつくしなさい」
その海賊宣言に、フロンズもまた頷いて片手を上げる。
隠し切れない苦い表情を、一瞬だけシュウマ・バアルに向けて。
「敵は逆族シュウマとビィディゼ・アバドン！　この一戦をもって、大王派の未来を繋げ!!」

Other side

『……サーゼクス、そちらはどうなってますか？』
「相応の大変だが、何とか作戦決行までには間に合いそうだ。もう少しで一安心、といったところだろう」
『バアルの本城が襲撃されたと聞きましたが？』
「ああ。だが幸い、既に動いている者達がいる。彼らが出てきたのなら何とかなるだろう」
『……フロンズ・フィーニクスですか』
「相当泡を食った様子で、即応艦隊の派遣を具申してきたよ。こういっては何だが、彼が出てきてくれたことで大王派もまとまるだろう」
『大王派のフロンズ・フィーニクスが、不正に関与したシュウマ・バア

ルを討って初代バアルとその血族を救う。一見するとできすぎではありますけどね』
「だが同時に、不正に関してはアザゼルからお墨付きを貰っているシロの人物だ。多少保身の演出こそ入れているが、積極的に暴動を鎮圧してくれているしね」
『問題は、その後の大王派を彼が掌握寸前まで行くことでしょうが』
「だろうね。初代バアルも今回の件で発言力が落ちる。そんな中、アザゼルが不正に関与していないことに太鼓判を押した彼が彼の危機を救った以上、対応として大王派は当面、彼を主体として動くことになるだろう」
『かといって強権を振るうことは避け、なるべく生き残った古参の者達に配慮もする。……とはいえ、初代バアルの後援を受けたことと大量の不正による不信感を盾に取り、魔王派の改革に相応の援助をすることでしょう』
「既にある程度の話もついている。懸念事項は多々あるが、それでも冥界の未来を考慮した立ち回りをしてくれるだろう」
『……できれば、そういった問題も私達が背負いたかったのですがね』
「ああ。多くをアジュカやガブリエルに押し付けることになるが、必要なことでもあるだろう」
『こちらはこちらで熾烈な戦いになりますからね』
「ああ。その時は背中を任せるよ、ミカエル」

黙示覚醒編　第三十三話　託された未来（ただし大王派に限る）

祐斗Ｓｉｄｅ

病院の待合室で、僕はテレビを確認していた。
……計五か所。各種神話の領域でトライヘキサが襲撃を敢行している。この事実に、各勢力は震えたった。
おそらくだけど、トライヘキサは首の数だけ分裂することができるのだろう。そしてだからこそ僕達は待機している。
確認されたトライヘキサの首は七つあった。そしてアジ・ダハーカとアポプスは襲撃している者達からは確認されていない。またそれぞれの戦力は、今までの襲撃に比べると少ないといえる。
これらのことから、トライヘキサの攻撃は本命があると判断。僕達Ｄ×Ｄは待機を命じられている。
あとアザゼル先生の様子から見て、どうも対策がいくつかあるようだ。
おそらく一つは、ロスヴァイセさんの研究成果。彼女の論文はトライヘキサにかけられていた封印そのものに行きついており、ゆえにそこからトライヘキサを封印することも可能と見られている。それを決めることができれば、無力化は可能だろう。
ただ、トライヘキサの力は間違いなく龍神クラスだ。あれを完全に封印し続けるのは困難だろう。
だからこそもう一手は必要だ。また、トライヘキサの制御に使われているだろうヴァレリーさんの聖杯も重要だ。
……となると、当然だけどＤ×Ｄも総力を挙げるべき事態だ。

バアル宗家の城に起きた襲撃事件。これに対応しているサイラオーグ・バアルやソーナ会長の力も借りたいところだ。
それを懸念していると、僕の隣にそっとカップが差し出された。
「……ちょっと相談があるんだけど、いいかしら」
そこにいたのは成田さんだ。
真剣な表情を浮かべている彼女に、僕はカップを取りながら頷いた。
そして成田さんは隣に座ると、テレビを確認する。
「おそらくだけど、ヴィール様はこっちと同じ理由で静観しているわ」
「トライヘキサの奪還には、聖杯ごと確保する必要があるだろうからね」
彼の性格や行動理念から見て、このままアポプスやアジ・ダハーカの好きにさせるとは思えない。必ず禍の団すら動かして、奪還作戦を行うだろう。
むしろ対応できるはずのミザリが動きを見せていない。それが気になるところでもある。
彼からすれば、このままにしても悲劇を堪能できるからだろうか。だが禍の団を抑え込むには理由が理由だし、そこはとても不安になる。
そして、抑え込めない者達はヴィールが動かすだろう。
……おそらく、聖杯の奪還作戦は三つ巴になる。
「……和っちにも聞いたけど、私だと短時間で残神（コスモス・メイク）は無理って言われてるの。そこについて、もう一人の残神到達者に意見を聞きたいわ」
なるほどね。
成田さんの聞きたいことはそれか。そして、その理由も分かる。
ヴィール・アガレス達との決戦も近いだろう。それも、トライヘキサや邪龍アポプスにアジ・ダハーカとの戦いを含めながらだ。
その為に、相応の手段を確立したい。これはすなわちそういう事で
―
「難しいだろうね」

―だからこそ、ここで寄り道をさせない方がいいだろう。
「残神はかなり高等技術で難易度が高い。はっきり言って、思い付きで習得できるほど簡単じゃないよ」
「……和っちにも言われたけど、やっぱり無理かぁ」
ため息をつきながら天を仰ぐ成田さんも、それは薄々分かっていたのだろう。
九成君も告げていたけれど、違う人の意見を聞きたかった。そういう事だ。
だからこそ、あえてはっきりと言うべきだ。
ただ、そうなると大変ではある。
「イッセー君みたいにはいかないし、慣れたとしてもいきなりというわけにはいかないしね」
「後遺症とか反動が出るって判明しちゃったものね」
僕達はそう言うと、少しため息をついた。
……もっと早く危険視するべきだった。だけど同時に、どう対処すればいいかも分からないことだった。
それほどまでに、力を持たなければ誰かが死んでいる戦いだった。まごうことなく強者達が襲い掛かり、異例の進化を遂げる者がいたからこそ生き残れた。
その一角が、ヴィール・アガレス達冥革連合。その彼らとの決着は、更なる脅威との三つ巴になるだろう。
……だけど、負けるわけにはいかない。
「困難な戦いだろうけど、だからこそ対処する方法は一つしかないだろうね」
冥界の、世界の未来を左右する戦い。
だからこそ、取る手段はシンプルだ。
「……総力を挙げる。僕達だけで戦わないことが、最も確実な対応策さ」
「そうね。ヴィール様の理念を超えて勝つのなら、それぐらいは必須かしらね」
成田さんがそう苦笑した時、足音が響いた。

「祐斗、そこにいたのね。春奈もいるのはちょうどいいわ」
そこにいたのはリアス部長。
表情が少し引き締まっているようだけど、いったい何が―
「……サイラオーグ達がフロンズと共闘して、バアル本城を襲撃した凶手を撃破。首謀者はビィディゼ・アバドンとシュウマ・バアルだったそうよ」
―ッ!?
その情報量に、僕達は面食らっていた。
そして、リアス部長は苦い顔をしている。
「それと、これはあちら側の推測でしかないけれど―」

Other side

リアス・グレモリーが木場祐斗と成田春奈に情報を伝える数十分ほど前。
決着はついた。シュウマ・バアルは討ち取られ、ビィディゼ・アバドンは捕縛され、シュウゴ・バアルは逃亡した。
そんな決着に対し、崩れ落ちるように座り込むのはフロンズ・フィーニクスだ。
珍しい光景と、彼を知る者が見れば思うだろう。
仕方がないとも、彼を知る者は思うことだろう。
戦いの終幕は、追い詰められたシュウマ・バアルが禁術を使い道連れを図り、しかししのがれて死亡。その余波でビィディゼ・アバドンは瀕死の重傷を負い昏倒。その余波による混乱を縫い、シュウゴ・バ

アルは逃亡した。
結果として被害も甚大だが、バアル宗家の未来すら左右しかねない戦いは終幕となった。
そして、フロンズ・フィーニクスはため息をついたうえで立ち上がる。
「……もういいのか？」
声をかけるサイラオーグ・バアルに、フロンズは少し疲れた笑みを浮かべながらも首を横に振った。
「まだやるべきことが多いのでね。……消耗はそちらの方が大きかろう、使いたまえ」
そう答えながら、フロンズは持ち込んだフェニックスの涙を押し付ける。
それを受け取るサイラオーグに、フロンズはしかし奥歯を噛み締めた。
「……いや、流石に少し愚痴を言いたいな」
「愚痴なのか？」
その返答に、フロンズは頷いた。
「愚痴だよ。シュウマ殿なら、もっとやりようはあったはずだからな」
そう答え、フロンズは天を仰いだ。
その表情は、彼を知る者が目を見開くほどの苦いものを浮かべていた。
信じられない。そう言いたいのが誰が見ても分かるような表情だった。
「立場上、不正に関与せざるを得なかっただろう。だが、その後の対処はいくらでもやりようはあったはずだ。あの方がそんなことにも気づかなかったことが、今でも信じられん」
そう漏らす彼に、応える者はサイラオーグではなかった。
「……そういう事。やってくれるわね、シュウマ・バアル」
語る者は、桃色の髪をすすけさせてるロイガン・ベルフェゴール。
その言葉にいぶかし気になる二人の前で、彼女は肩をすくめていた。

まるで、関与しなくていい面倒ごとに巻き込まれたと言いたげな雰囲気だ。
それに首を傾げそうになる二人の前で、ロイガンはため息をつきそうな表情になっていた。
「推測でしかないけれど、おそらくわざとでしょうね。禁術を使ったのも、追い詰められて自棄になったどころかあなた達を倒す意図もなかった」
「……まさか」
その言葉に、何かを悟ったフロンズは愕然となる。
思わずよろけるその姿に、サイラオーグは面食らうほどだった。
開いた口が衝撃で塞がらない。そんな状態のフロンズの理解を進めるように、ロイガンは首を横に振った。
「シュウマ・バアルの目的は、フロンズ達に行動を察知させて自分を討たせること。……それをもって、「フロンズ・フィーニクス一派は不正を知らず、身内と敵対してでも是正する側」と認識させるのが目的だったんでしょう」
その言葉を聞きながら、フロンズ・フィーニクスは拳を握り締めて俯く。
……サイラオーグですら、それに対して納得できる部分が生まれていた。
シュウマ・バアルの行動には違和感が多かった。だが、ロイガンの推測が正しければ納得できる。
禁術を使ったのは、万が一にでも自分が生き残ることを避ける為。生き残って万が一にでも自分の心情が知られれば、八百長の邪推が生まれかねない。自分を逆族として討たせるからこそ、邪推を生みにくい土壌が生まれつつ、死人に口なしで証拠も闇に葬れる。
そう考えての方が納得できる。少なくとも、そういった策を考えつけるだけの頭脳が彼にはある。出なければ、末席に近い分家筋で重鎮レベルの地位になど、大王派でつけるわけがない。
だが、そうだとしても信じられない。
「そこまで、そこまでする覚悟が――」

「―あったのだろうさ、父上には」
そう告げる声は、後ろから届いた。
振り返れば、そこには俯き機味な様子のハッシュ・バアルが、一枚の書状を握り締めていた。
「それは？」
「後方部隊が持っていた、父上の遺言状だ。自分が死んだ時に、私かノア、フロンズに例え自分と敵対していようと託すように言付かっていたようだ」
そう語るハッシュは、その書状をフロンズに渡す。
それを一瞥した彼は、書状がくしゃくしゃになるのも関わらず握り締めた。
「……中身を聞いてもいいか？」
「ただの名簿だ。それ以上は言えんが、嘘はない」
そっけなくサイラオーグに返すハッシュは、瞑目すると天を仰ぐ。
「……なるほど。今後の為に注目するべき人材、そのリストといったところかしら？」
「……さて、どうでしょう？　少なくとも、本当にただただ名前が書かれているだけでしてね」
ロイガンのカマかけを流しながら、フロンズは乱暴に書状を懐に入れ、小さく俯いた。
その言葉に嘘はないのだろう。本当に書かれているのは名前だけで、どうしろという指示どころか、何の説明もないのだろう。
フロンズ達ならそれで十分伝わり、そして周囲に余計な疑念を与える物証も与えない。そういう意図で書かれた文書という事だろう。
数秒後、彼は普段の様子を取り戻してサイラオーグに振り向いた。
「……済まんが、お互い短い時間で調子を整えるべきだな。船の設備を貸すので、細かいすり合わせも行うべきだろう。今回の件の詫びや、今後の対応などやるべきことが多すぎる」
「……そうだな。まずするべきはトライヘキサ。それが最優先だ」
お互いに深入りはしない。
今するべきことは別にある。託されたものも、守るべきものもあ

る。

……後顧の憂いは多くが断たれた。ゆえに、今は未来を守るのみ。

そして、残る二体のトライヘキサが発見されたという報告が届く。

欧州及び日本近海。そこが確認された地点。

邪龍アポプスとアジ・ダハーカは、その悪意を人間界にも向けてきていた。

黙示覚醒編　第三十四話　段取りとは対処すべき問題や対処できる頂点ではなく、対処させられる凡人（大多数）のためにある

和地Ｓｉｄｅ

俺は病室で、駒王学園の制服に着替える。そしてそのうえで、軽く体のメンテナンスを兼ねてストレッチなどをしていた。

人間界に堂々とトライヘキサを出現させる。邪龍アポプスとアジ・ダハーカは、人間界にすらその魔の手を伸ばそうとしている。

状況はまずいというほかない。最悪だ。

異形や異能というものは、基本的にただの一般市民より高性能だ。三大勢力の下級クラスであろうと、戦闘職として訓練を積んでいるのなら、人間の兵士が相手をするなら正規軍が何人も集まるってだろう。中級以上となればレイダーや星辰奏者（エスペラント）が出張るべき存在だ。

トライヘキサが引き連れる邪龍達は、基本的に中級悪魔クラスが相手をするべき存在だ。そんな存在が数百体も出てきている時点で、世界各国の軍隊でも苦戦は必須。既に少なくない被害が出ているとも聞いている。

現在、急ピッチで双方に迎撃部隊が編成されている。それぐらいの窮地であり、また他の神話方面に出ているトライヘキサの迎撃も必須といえるだろう。

……リゼヴィムはリゼヴィムで悪意だらけだったが、アポプスとアジ・ダハーカも大概だ。むしろあいつらの方が雑というか豪快というか。

そういうわけで、当然だがＤ×Ｄも出ることになる。そもそもが対クリフォト・対邪龍・対トライヘキサを踏まえているのだから、当然

だろう。
そして俺は体調の確認をすると、今後の展開を想定してため息をついた。
まず間違いなくと想定していることを確認するべく、病室を出るとイッセーのいる区画に向かう。
今、イッセーは本来絶対安静だ。ただでさえ生死の境を彷徨っていたうえ、訳の分からない現象にさいなまれている。その辺りも分かってないのに出れば、急死すらあり得るだろう。
……そして問題は、あいつがそういう事を気にしてくれる奴じゃないことだ。
案の定、病室に向かう途中でイッセーを発見した。何故かヴァーリもいる。
そしてご両親に怒られている。ただ、ど戦場に出てくる的なところじゃないぞあれ。
「なにを怒られてるんだ？」
「お、九成か！　助けてくれ！」
何を助けろと。
なんというか、雰囲気から悲壮感がない。ただ同時に、なんとなく覚えがある。
具体的には、イッセーがおっぱいで何かしたときの雰囲気に近い。
そんな俺が疑問の視線を向けると、五郎さんも俺に聞きたいことがあったらしい。
「なぁ九成君。そこの彼から聞いたんだけど、イッセーの奴、俺達を殺すと言われた時より、おっぱいを半分にする技を見せられた方が怒ってたって、本当かい？」
……あぁ。
「本能に直結している分、爆発力で上だったといった感じで済ませてあげてください」
「フォローする気ねえだろ!?」
イッセーが思いっきり絶叫するけど、だってなぁ？
「そもそも俺はその時、幸香（別件）で忙しかったからな。話を聞いた程度だ

からフォローしきれないし」
まぁ軽く引いたけど、仕方ないところはあるだろう。
「理性と本能は一長一短の別物ってことで、とりあえず納得してあげてください。……ほら、イッセーは煩悩と直結しているから、瞬発力ではどうしても、ねぇ？」
「……あ」
「全員酷いな!?」
俺の言い分にご夫妻が納得して、イッセーが思わず絶叫する。
と、言うかだ。
「……そこまで知ってるなら、この大馬鹿ラーメン野郎が言ったことも知っているのでは？　なんで和やかなんです？」
もうちょっとこう、怒っていいと思うんですがねぇ？
ただ、五郎さんはよく分からない風ながらも笑って見せる。
「と言っても、わざわざ話してくれたってことは反省したってことじゃないか。だったら蒸し返したりなんてしないさ」
「そうねぇ。イッセーにこんなかっこいいお友達ができたことの方が重要だわ」
三希さんもそんなことを言うが、そういうものか。
となると、俺が言うことはだ。
「ヴァーリ、お前はこの幸運をあまねくすべてに感謝して戒めとけ」
「……確かにね。俺はこの点において、兵藤一誠の足元にも及んでないと確信しているさ」
ならよし。
というわけで、俺はイッセーの肩をつかんだ。
「じゃ、病室戻るぞ」
……。
何故か沈黙が響いた。
「なんで?!」
絶叫するイッセーだけど、何を言ってんだこいつは。

イッセーＳｉｄｅ

えええええ!?　俺を止めに来たの!?
びっくりする俺に対して、九成は両手を俺の方においてため息までついた。
「どうせお前、絶対安静かつ出撃禁止と言われてるのに出ようとしてたんだろ？　俺は止めに来たんだ」
あ、これ本気だ。本気の状態だ。
既に星辰光を発動させて、ちゃっかり俺の周囲に障壁まで張ってるよ。本気で俺を止めに来た奴だ。
「いいかイッセー？　真っ当な理由に基づく限り、するなと言われたことをするのは基本的に悪いことだ。未成年が堂々とエロ本を読んだり、異性の着替えを覗くのと同じ……だからやる気なのか」
「いろんな意味で酷い尚前!?」
何勝手に納得してんだよ。一生懸命ひきつけにさいなまれながら我慢している男に言う事か。……そうじゃない！
いやいやいやいや、ちょっと待って。
俺は覗きは断ったぞ！　エロ本だって、プライベートな時しか読んでないし外で持ち歩いたりも避けている〔注：一応それも違法の範囲内なので、もしするなら自己責任で〕！
今でも平均数日に一回はひきつけを起こしているけど、それでも我慢しているのに！
……いや、そこはなんかずれてるな。
「いやお前、状況分かってんのかよ!?」
「分かってるよ。トライヘキサが日本近海にまで出現してるんだろ？
それでＤ×Ｄ含めて迎撃準備を急いでると」

そこまで分かってるのか。
なら俺が出ない理由がねえよ。
祖母ちゃんがいる。松田や元浜もいる。桐生達クラスメイトもいる。ミルたん達お得意様もいる。
俺が下手をすると死ぬ？　それがどうしたっていうんだ。
「……そんな時に、こんなところでじっとしてられるわけがないだろう？」
「逆にじっとするのが俺達の役目だ」
真正面から、俺の反論に九成は切り返した。
その目は真っ直ぐで、後ろめたさなんて欠片も感じていない。
「今お前は意味不明な事態で、戦闘なんてしたら何が起こる分かったもんじゃない。それにお前のことだ。D×D（龍神化）を使うなと言われようが、誰かが体を張らなきゃいけないと思ったらためらいなく使うだろう？」
「当たり前だろ！」
俺はすぐに言い切った。
それを聞いて、九成は首を横に振った。
「そんな奴を初っ端から前線に出せるか。……いいか、心配だから出ないでほしいじゃない。迷惑だから出るなだ」
念入りにそう言ってから、九成は肩をすくめる。
「状況次第では俺もお前も出さざるを得ないだろう。だからこそ、その事態になるまでは可能な限り回復に務めろ。休める時に休むのも責務だし、仲間が休む為の時間を稼ぐのもリアス部長達の責務だ」
……こういうところはカズヒとそっくりだな。
っていうかちょっと待てよ？
「お前も出ないのかよ？」
「……困ったことがあってな。ある程度は待つように言われている」
マジか。
九成も死にかけたらしいけど、俺と違ってすぐに治療が終わっていたはずだ。こういう時のアーシアは本当に頼りになる。
だから九成は出れるだろう。なのに出ては駄目って言われている

ようだ。いや、ある程度は待てって言ってたな。
「お前と違って時間の問題だがな。そういうわけで、その時間中は俺がお前の監視役を自主的に務める感じだ」
そう言うと、九成はため息をついて―
「――――――」
―その言葉を聞いて、俺達は戦慄した。
お前、あの瞬間にそんなことしてたのかよ。
ある意味で最善手だ。そんなところまでカズヒとかみ合ったことするとか、こいつも大概ヤバいよなぁ。
俺達が感心までしていると、九成は少しげんなりした様子で自分の額に指を刺す。
「で、アルケードにカウンター喰らって頭蓋骨陥没。そこに関してはアーシア様様で回復したが、衝撃でショットライザー用のＡＩチップが壊れたんだよ」
九成がそう言って、俺はすぐに思い当たった。
確かショットライザーとかスラッシュライザーは、制御用のＡＩチップを脳内に埋め込む必要があった。
ちょうどその部分の頭蓋骨が壊れた所為で、もろともやられたわけか。
となると、九成は今仮面ライダーになれないことになる。厳密にはなっても使いこなせない。
「で、ＡＩチップのアテができるまではってことか？」
「少し違う。リーネスがＡＩチップを新調してくれたんだが、そこのフォーマットとかが追い付いてない」
そう言うと、九成はイライラした感じで足を揺らしながら俺を軽く睨んだ。
「休むべきものが休まないと、他の連中も休めない。最終手段は最終手段から逸脱したらいけないんだ。……ましていつ爆発するか分からない時限爆弾抱えてる奴は、可能な限り安静でないと周りも気が気じゃないだろう？」
そういうと、九成は改めて俺の方に手を置いた。

「……ドラゴンの悪い癖は一旦抑えろ。それとも何か？　俺達の仲間は俺達抜きだとその瞬間に瓦解するようなへっぽこ集団だってか？」
「んなわけねえだろ！」
俺が言い返すと、九成は小さく笑った。
「そういう事だ。俺達が出なくてもいい事態はどうにかできる連中だし、出張るにしても本当に必要な時までしのいでくれる。少しは頼れよ、仲間だろ？」
その手も少し震えている。
頼っているし信用している。でも、同じぐらい心配している。
この野郎。それを分からせる為にわざと手を置いたな。隠そうと思えば隠せる奴だけど、わざとしないことで俺を止めようとしてきてやがる。
というか、これで無理に出ようとしたらまず九成と戦うことになりそうだ。それもショットライザーが使えない状態で不調気味のこいつと。
自分を使って脅しかけやがった。こういう時怖いなおい！
俺が押せないでいると、九成はヴァーリの方に視線を向ける。
「……そういうわけだ。お前には露払い……どころかさっさと終わらせてくれることを期待してるぜ？」
「ふっ。悪祓銀弾（シルバーレット）を片翼とするだけあり、涙換救済（タイタス・クロウ）も龍が嫌いなようだ」
「度の超えた個人主義者は嫌いでね。社会に関わるなら配慮しろってことだ」
そうヴァーリと言いあうと、九成はちらりと視線を別の場所に向ける。
「ま、カズヒねぇがいても同じことを言うだろうさ。あの人は、通せる筋は通すからな」
……。
俺達が思わず黙っていると、母さんがおずおずと前に出る。
「その、カズヒさんは大丈夫なの？」
そういやそうだったな。

父さんと母さんは、カズヒがズタボロになっている現場を見ているはずだ。
見るも無残というか、原型が微妙にとどまってない状態だったからなぁ。死んでるかもって思いたくなるだろう。
ま、その辺は大丈夫なんだけどな。九成もそこは笑顔で頷いている。
「傷は治ってます。ただ、消耗が激しすぎてまだ起きてないんですけどね」
「……そうか。あの、誠にいって人が急に強くなって酷いことをしていたから気になってたんだ」
ほっとした父さん質だけど、そんな父さんの言葉に俺達はちょっと固まった。
「「……最悪だ……っ」」
思わず、俺もヴァーリも九成も天を仰いだよ。
え、ちょっとマジで？
思わず頭痛まで覚えていると、その様子に父さんも母さんも慌て出す。
「ど、どうしたのイッセー？　それに、和地くんやヴァーリくんも」
「え、俺ってば悪い事でも言ったのかい!?」
「いや、悪くないっていうか、むしろ今知れてよかったっていうか……」
俺は父さん達を宥めるけど、それはそれとしてヤバいだろ。
ここにきてミザリが急激なパワーアップってマジかよ。不意打ちで食らわなくてよかったけど、めっちゃヤバい事態じゃねえか。
不安要素でしかないよなぁ。
ミザリが急に強くなった？　おいおい、ちょっと待ってくれよ。
俺も凄く嫌な気分になっていると、九成は今度は俯いて、壁に手を置いた。
「イッセー。とりあえず俺達は、その情報を伝えるぞ。なんかミザリが更なる隠し玉を獲得しやがったってな……っ」
「ああ、そっちは絶対やっとかないとな」

寄りにもよって、更にミザリがパワーアップしているのかよ。
これ、どう考えても最悪とかいった方がいい事態じゃねえか!?

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……健也。手はずはどうなっている？」
「芳しくないですね。疾風殺戮・ｃｏｍ、混沌回帰旅団（ケイオス・フォース）を含めた四割ほどが、ミザリと同調して静観の姿勢です」
「数はともかく質が懸念だが、ここで何もしないわけにはいかんな。……腹をくくるか」
「そうですね。どうやら、この戦いでＤ×Ｄと雌雄を決すことになりそうです」
「最悪の勝利を掴むしかない。……まったく、世の中は本当に思い通りにならんものだ」
「では、そろそろ？」

「ああ。このヴィール・アガレス・サタンが冥界を制する為に、トライヘキサを確保する。聖杯の反応を察知し次第、冥革連合全軍をもって聖杯の奪取を敢行するのみだ」

黙示覚醒編　第三十五話　死闘、トライヘキサ争奪戦！

祐斗Ｓｉｄｅ

僕達グレモリー眷属は、日本に転移したうえで太平洋上に移動していた。

トライヘキサの一体がここを信仰ルートとする形で出現して移動中。更に聖杯を保持したアポプスが確認されていることから、こうして出撃体制をとっている。

……そして今回、僕達は総力を挙げて迎撃態勢をとっている。

五大宗家、妖怪、そして天津神に国津神。各勢力からも派遣できる増援が確認されており、相当の大部隊だ。

冥界政府も当然だが絶大な戦力を投入している。それに関しては、魔王派だけでなく大王派も全面協力の大勢をとっている。

どうやら、バアル宗家を狙ったシュウマ・バアル達の強襲を食い止めたフロンズ達が、大王派の実権をだいぶ握っているらしい。

若手や不正に関与してなかった大王派の者達は、もはやフロンズの意向を無視できない。むしろ彼がそんな者達をフォローし、可能な限り保全に全力したことでカリスマ性を獲得している。身内であるシュウマ・バアルを討ち取り、同調したビィディゼと繋がっていた魔王過激派の情報もリークしたことで魔王派からもある種の好感を獲得したようだ。

そして今回、フロンズ達は人間界側の対応に力を一気に注ぎ込んでいる。

その一環として出撃したサンタマリア級が、今の僕達の待機している地点だ。
「……それにしても、やはり凄い設備だね」
サンタマリア級の食堂の一角を待機場所として、僕達は準備をしている。
「同感ね。大王派にとって虎の子でしょうに、内部にまで入れてくれるなんて思いませんでした」
ルーシアさんが僕に続いてそう語るけど、そういう意味で本気なんだろう。
大王派にとって大きな手札であるサンタマリア級。そこに魔王派側にいる僕らを入れてでも、トライヘキサをどうにかしなければならない。
ある種のパフォーマンスもあるだろうけど、そうであったとしても本気でなければここまでではできないだろう。
あと居住性もかなり高いね。
常駐のクルー以外の居室は二段ベッドの大部屋だけど、裏を返せば常駐のクルーは基本個室だ。これは軍艦としては異例だろう。
娯楽設備も相応に充実している。この手の食堂は基本としてメニューは固定だけど、自動販売の軽食コーナーが設置されているのは驚かされるよ。
「……ギャー君、アニル。少し食べといた方がいいと思うよ。これ美味しいし」
「……いいソーセージ使ってるな。自販機でここまでの使うか、普通？」
小猫ちゃんとアニル君は、自動販売機のホットドッグに興味津々だ。
確かにいい匂いをしているのは分かる。そしてアニル君が言うのなら、ソーセージはかなりの出来栄えなんだろう。
そこは腐っても大王派。貴族が使うことも前提になっているんだろうね。
「でも、イッセー先輩大丈夫なんでしょうか？」

と、ギャスパー君が小さく俯き気味でそう呟いた。
確かに、そこはどうしても心配になるね。
イッセー君なら結局、僕らが止めてもこういう時に動くかと持ったんだけど来なかったし。
「意外よね。もしかして、体調が悪化したのかしら？」
「もしくは強引に止められたかだね。たぶんだが、九成辺りが「せめて出るタイミングは図れ」とでも釘を刺したんじゃないか？」
イリナさんに続けてのゼノヴィアの言葉に、僕は納得してしまったよ。
彼も色々あってまだ待機だけど、確かに止めたりしそうだね。
九成君も即座の出撃は自制するように言われたそうだ。おそらくその間はイッセー君を止めるだろう。
……裏を返せば、それが無くなれば出るだろうね。九成君もそこまでは諦めているだろう。
だからこそ。
「それまでに終わらせるつもりでいこうか。……そうでもしないと、イッセー君は結局D×D（あれ）を使いそうだしね」
「ありえます。でも、そういうところがイッセーさんなんですけどね」
アーシアさんがそう答えて、僕らは思わず苦笑してしまう。
困ったものだと思うけど、それを前提に動きそうになってしまう辺り僕らも染まったものだね。
そのうえで、しっかりダメだと止めに行ける九成君も中々かもしれないな。
「ま、我慢できずに出てくる前に何とかしたいもんじゃん？」
「そうね。和地も本当にやばくなったら時間を無視してでも出てきそうだし、その辺りは気を付けないと」
ヒツギや南空さんも言っているけど、九成君も基本的に配慮しているだけで有事における独自の判断は全否定しないからね。
最悪、彼は始末書覚悟で出てくるだろう。むしろ始末書を書かずに出れるよう準備をしているかもしれない。
「和地はその辺り、割としっかり動きますもの。案外もう、根回しして

いるかもしれませんわね」
「うふふ。九成君も意外とやんちゃしますものね」
ヒマリや朱乃さんがそう語る程度には、僕らも彼のことは分かっている。
彼は確かに社会秩序に配慮するけど、同時にイッセー君とは別ベクトルで無茶をするからね。
……英雄派との戦いではそれが顕著だったね。あれはかなりの無茶をしていたと今なら分かる。
「和っちって基本的に考え続けて更新してるだけで、動きたい理由は昔っから変わらないもの。こういう状況下ならマジでやばくなったら絶対無茶するわね」
「なるなる。カズ君、報連相はしてくれるけど、出来ない時は突拍子もなくなるもの」
「そういう意味だと、和地君も男の子しているよね。……別の意味でハチャメチャな部分は天然なのが酷いけど」
その時のことを思い出したのか、成田さんやリヴァさんやインガさんが少し苦笑していた。
確かに、彼は恋愛ごとにおいて時々精神年齢が低くなる。更に息を吸うようにというか息を吸う感覚で口説き文句じみたことが出てくるからね。
僕は人から良くモテると言われるけど、イッセー君や九成君の方が大概だと思うね。僕の場合はアイドル的人気だから、本気の恋愛感情では二人の方が遥かに上だろう。
「ま、カズもイッセーも暴発しかねないから気をつけろってことだな。……カズヒもそろそろ目を覚ましていいだろうし」
と、ベルナさんが確かにそうだといえることを指摘してくれた。
……数日間の昏睡から覚めた時には、非常事態の真っ最中。
間違いない。カズヒはこういう時「どう動くか」と「どうやって動くか」を真っ先に考える人だ。
段取りと筋をきちんと考慮してくれるけど、それさえ通ればどんな無茶もやる人だからね。

うん。これは頑張らないと。
「……つまるところ、必ず出てくるということね。それまでに何としても負担を減らさないといけないでしょう」
そう前置きし、リアス部長が僕達を見回した。
「ロスヴァイセ、結界はどうなるのかしら？」
「煮詰められるところは煮詰めましたし、そこから各神話の名だたる神々が協力してくださいました。……決まれば止めることはできるでしょう」
ロスヴァイセさんがリアス部長にそう断言する。
そう、そしてその為の手札もきちんとある。
「……よぅ、グレモリーの皆さん。医務室での検査も終わったんで連れてきたぜ？」
と、そこで彼女を連れ、ノア・ベリアルが僕達に顔を見せに来た。
そしてノアに連れられた彼女は、興味深そうに船内を見渡している。
「これが悪魔の作った船なのね。……もっと見てみたいけど残念だわ」
「もう、ヴァレリー！　ノア様は派閥的に僕らと対立しているから、迷惑を掛けたらいけないんだからね！」
ヴァレリーさんにギャスパー君が駆け寄る中、ノア・ベリアルはリアス部長に近づくと真っ直ぐに顔を見る。
「作戦内容は事前に伝えた通り。ただ、いけるのか？」
そう確認するノア・ベリアルは、少し懸念を見せていた。
「こっちも試作兵器まで投入して援護するが限度はある。そっちもやる気は満々だが、赤龍帝、悪祓銀弾（シルバーレット）、涙換救済（タイタス・クロウ）は参加してない。……もっかい聞くが、イケるか？」
その確認に、リアス部長はためらうことなく頷いた。
即座の返答にノア・ベリアルが少し目を見開く中、リアス部長は胸を張る。
「もちろん。イッセー達に恥じる真似はもうしないと決めているし――」

そう告げ、そして部長は微笑んだ。
「彼らは遅かれ早かれ参戦するわ。そういう子達だもの」
「……それはそれで面倒そうだがな」
そう言いながら苦笑するノア・ベリアルは肩をすくめてから踵を返す。
「ま、問題ないってんなら大王派（俺ら）もベットしてやるよ。どうせ強制的に賭けさせられるなら、勝ち目があって負けても納得できるやつに賭けるのが一番だしな」
そう告げて去るノア・ベリアルを見送ってから、リアス部長は振り返った。
そして見回す僕達も頷きを返す。
敵は強大。だけど、それに臆する者はこの場に誰一人としていない。
それを見届け、リアス部長は微笑んだ。
「さぁ、皆。敵が黙示録の獣だろうと、私達の大事なものを奪わせてやる理由はない。……アザゼル達が用意した手札に、私達が繋げるわよ!!」
さぁ、待っていてくれイッセー君。
君はいずれ来るだろう。だけど、最良の状態で君に繋げて見せる。
だから、待っているよ！

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

そして、太平洋にてトライヘキサ迎撃戦が実行される。
いくつかの島に陣取った者達が空を飛び、トライヘキサに随伴する

邪龍達と激突する。
多くの者達が高い士気をもって挑むが、しかし邪龍達は決して弱くはない。
量産型ですら中級悪魔クラスでないと危険なレベル。更に量産型グレンデルやラードゥン、偽赤龍帝に至っては、上級悪魔クラスでも単独では厳しい者達だ。
その光景を楽し気に眺めながら、アポプスは小さく呟いた。
「さて、リゼヴィム皇子を追い込んだという二天龍は来るだろうか？」
ぜひ来てほしい。そう思う。
アポプスとアジ・ダハーカは、邪龍であることの誇りを持っている。ゆえにリゼヴィム達に見切りをつけた。
リゼヴィム・リヴァン・ルシファーの下の下としか言えないやり口は不満しかない。ミザリ・ルシファーの悲劇を自他ともに味わい尽くすことを大前提とするあり方も楽しめない。それらを利用して共生関係となる禍の団も、あり方として相容れない。
望みとしては異世界という未知に対する挑戦だが、その過程で滅びるのも条件付きで望ましい。
そう、それは邪龍としての完成。その為の敗北なら構わないが、それには英雄との正面激突が必要となる。
目の前の者達も中々に勇猛だが、英雄とは程遠いだろう。少なくとも、自分を一対一で打ち任せる手合いは見つからない。
懸念事項としては大王派だろう。どうも彼らは、数による龍王クラス打倒を視野に入れていると聞く。
圧倒的な物量戦術などという無粋で倒される気は毛頭ないが、しかしそんな戦術を主体にされるのは今日が覚めるというものだ。
もしその程度で切り抜けようというのなら、異世界進出の手土産代わりに邪龍を世界に知らしめるまで。
そう、思った時だった。
ふと気づいたその時、トライヘキサの真下から何かが浮かび上がった。
それは海面から先頭を出すと、そのまま高速でトライヘキサに直撃

し―
「……ほう？」
その瞬間、連続してトライヘキサを襲う大爆発にアポプスは方眉を上げる。
復活してから、少しは現世の知識も集めていた。
その中には異能も持たない身で人間が海面下数百メートルを先行することもできる、潜水艦の知識もある。近年では巨大な勝手に飛んで爆発する、ミサイルというものを運搬する兵器として使用されているとも。
だが、この程度では牽制どころか気を散らすことしかできないだろう。
そう思ったその瞬間、二の矢が放たれる。
続けざまに飛び上がる球体が破裂し、中から多数の戦力が出現する。
それはＤ（ディアボロス・フレーム）Ｆと称される人型兵器もあり、更には多数のレイダーもいる。
そしてその中には、チームＤ×Ｄの戦士達もいた。
その光景を見て、アポプスは小さく微笑んだ。
前方で防衛線を形成している者達は陽動。そこに可能な限り意識を割かせることで、本命の強襲を可能とする戦術だったのだ。
これはただの異形では思いつかない。転移をするといった方法を選ぶだろうからだ。
だからこそ、アポプスも接近に気づくのが遅れた。
そしてこの位置取りでは、挟み撃ちに近い。
「面白い。だが、小細工で倒せるほど私は甘く―」
その瞬間、アポプスは背筋に寒気を感じた。
直後、まったくあらぬ方向から大量の砲撃が襲い掛かった。

祐斗Ｓｉｄｅ

奇襲攻撃を試みようとしたその瞬間、まったく別の奇襲がトライヘキサ達を襲う。
そしてその攻撃が来た方向を見て、僕達から舌打ちをする者が何人も出てきた。
「ここで来るか、禍の団！」
誰かがそう言うだけあり、そこにあるのは巨大な飛行船。
リーピ級神器力飛行船。ミザリ直下のアルバートが開発したという、人工神器兵器の一つだ。
それが確認できるだけでも十隻以上。これは、相手も本気という事か。
「……さて、三つ巴になるのは厄介だが仕方ないか」
そしてその言葉と共に、こちらの中に突貫する二人の悪魔がいる。
咄嗟に迎撃を行おうとする者がいるが、しかし一手遅い。
一瞬。僕ですらそう形容するしかない速度で、相手は魔力を全方位に放って大王派の悪魔達を蹂躙する。
更にその間隙を突こうとした邪龍達が、四方八方から切り刻まれた。
……そして両者は合流。更に突撃する戦士達が集まってくる。
「悪いが、トライヘキサと聖杯はこちらが頂く。最悪の勝利を得る為にな」
「そういう事さ。かかってくるなら全員潰す、そういう方向でいかせ

てもらうよ」
冥革連合盟主、ヴィール・アガレス。そしてその眷属で唯一残った最後の武闘派、双竜健也。
ここで、来たという事か。
「ヴィール様！」
成田さんが炎を纏いながら、ヴィール達と向き合った。
それに呼応するように、離れたところにいたアポプスが笑みすら浮かべている。
「取り返そうとするとは思っていたとも。さて、悪魔としてサタンを名乗るその覚悟、どれだけ実力とみあっているか、試してもいいだろうか？」
そう告げるアポプスに、ヴィールは肩をすくめる。
だが、気配と戦意は更に研ぎ澄まされた。そのオーラだけで邪龍達が怖気づいて引き越しになる者を発生させている。
「ほざいたな、狼藉者の蛇風情が……」
そう呟きながら、ヴィールは全身から強いオーラを集めていく。
最上級、いや魔王クラスの魔力。更にサイラオーグ氏に勝るとも劣らない闘気。そこに神滅具由来の聖なるオーラすら展開する。
一つ一つが神滅具を高めに高めた領域。そのうえで、ヴィール・アガレスは宣言する。
「ならば初手より抜くとしよう」
その瞬間、オーラは鮮血のような紅に染まり―
「残創（コスモス・メイク）」
―その瞬間、飛沫が弾け飛んだ。
そう、まさにその一瞬。
「これが我が残神（コスモス・ボルト）、聖魔飛翔（ブラッディ・ビトレイヤー）」
周囲にいた邪龍や悪魔達すら、文字通り弾け飛んだ。
それに僕らが目を見張る中、ヴィールは鋭い視線を周囲に向ける。
「……挑むのならば命を賭せ、さすれば、万に一つで生を掴めるかもしれんぞ」
その瞬間、文字通り壮絶な死闘が巻き起こった。

黙示覚醒編　第三十六話　準備完了（いろんな方面で）！

和地Ｓｉｄｅ

「……そろそろ、日本側でも作戦が始まっている頃か」
俺が時間を確認して呟くと、イッセーは何かげんなりとした表情を浮かべていた。
「なぁ？　そんな時に飯食っててていいのかよ？」
まぁ、言いたくなるとは思う。
今俺達、病院内のレストランで飯を食っているからな。
ちなみに俺はお代わりをしている。うどんを二杯目だが、冥界のうどんも美味いな。
で、イッセーにもそれを付き合わせていたら作戦開始。まぁのんきに飯食ってどうするんだとか言いたくなる奴はいるだろう。
だがしかし、これは必要不可欠なことだ。
「イッセー。前にも言ったと思うが、休むのも仕事の内だ」
俺はその辺りを丁寧に教え込む。
忌々しいがザイアの教えは、根っこの部分がぶっ壊れていたがそこに目をつむれば正論が基本だ。そして正論とは正しい論と書く通り、正しいからこそやるに越したことはないのだ。
そして、そういったものは例外があるが、例外は少数派。つまり圧倒的大多数は正論に乗っ取る努力がいるし、例外だってそうするに越したことはないことが多いわけだ。
と、言うわけでだ。
「そしてさっき言ったが、味方が休む為にも頑張るのも仕事のうち。今部長達が頑張っている間に、俺達は英気を養うのが仕事だ」

というわけで、俺は次のうどんを食べ始める。
最初に食べたのはかき揚げうどん。次はカレーうどんである。
「俺もお前も数日間意識なかったわけで、はっきり言って体がなまってるし栄養的にもあれだ。食って肉を回復させとけ」
「……なるほど。それはそうだな」
そう納得すると、イッセーも肉うどんを食べ始める。
ちなみにうどんなのは消化を考慮してだ。あと麺類、出来るのも食べるのも手早く済むからな。
そしてうどんを食べながら、俺達は話をすり合わせる。
「食べたらなるべく休んで、腹がこなれたら軽くウォーミングアップだな。……なるべく待機とは言ったが、絶対出番が来るだろうし最良のコンディションに近づけないと」
「言われてみるとそうだよなぁ。俺達が出会ってから、冥界の大一番的な事態で出番がなかったことがないし」
ほんとそれな。
だがいきなり出ると、休むべき奴が休みづらい。それに俺達は病み上がりだから本調子じゃないし、イッセーに至っては意味不明な事態でコンディションは最悪に近い。学徒動員とか傷病兵とかと同レベルで、出撃は後回しにするべき事態だ。
だからこそ、準備は絶対的にしておかないと。
……そんな俺だが、どうしてもちらちらと視線が動いてしまう。
イッセーもその辺りに気づいてるのか、微妙な表情になっているな。
「カズヒはやっぱり、まだ起きてないのか？」
「ああ。思った以上に消耗していたみたいだ」
常に気を張り詰めている節のあるカズヒねぇだ。一気に崩れて疲労が来たのかもしれない。
いっそのこと完璧に回復するまで寝とけとも言いたい気はするな。少しぐらい長生きしてほしいし。
とはいえ、心配ではあるんだがな。
……とはいえ、心配しているだけで何もできることもないだろう。

ついでに言うと、そこに意識を向け続けてたら「そんなことしてる場合か」と怒られそうだし。
というわけだから、やるべきことはただ一つだ。
「……出番が来なければそっと見守る。出番が来たらきちんと活躍して土産話を持って帰る。それぐらいだな」
「ま、カズヒ相手ならそれがいいか」
理解が早くて助かるぜ。
さて、そろそろ食べて胃を休ませるか。
……こっちの出番がないならいいが、たぶんそれはないんだろうなぁ。

Other side

「……残存の主力どころは納得してくれたけど、結構な人数が参加しちゃったね」
「まぁ仕方がないだろう。冥革連合を含め、伝えてない者が多いからな」
「そうは言うけどさ、アルバート。冥革連合は目的上、最終的に敵対するだろう？　潰れてくれた方が好都合なんだよ」
「よく言うな、マスター。どう転んでも悲劇を味わえるだろうに」
「それとこれとは別さ。どう転んでも益があるからって、より悲(良)しい(い)結果を目指さないのは問題だろう？」
「お、一本取られたか！　まぁそうだな。より良い結果を得る為の努力や研究は必要だとも。それが技術を発達させるのさ」
「そして、その為に人類に悲劇を齎しても構わない。そういう側面と

はいえ、とんでもない性格をしてるよね、君も」
「当然さ。でもなければ死刑装置を嫌がらせで作ったりはしないだろう？」
「怖い怖い。……でも、これでも限度はあるだろうしね」
「反則の権化みたいな力を手にしながらよくもまぁ」
「処理墜ちって概念があるだろう？　僕の頭の性能に限度がある以上、この極晃（星）は相応の相手をきちんと選ぶ必要があるんだ」
「だからこその賭けか」
「そういう事さ。たった一つで最大の利益を得られるかどうか。悪くない勝率ならなおのことだね」
「……恐ろしい奴だ。例え失敗しても、致命的な事態になる可能性は低いと見積もっているのだろう？」
「ああ、最悪はグレートレッドとトライヘキサが戦って相打ち。それ以外ならやりようはいくらでもあるだろうからね」
「トライヘキサのあの力なら、滅ぼす場合グレートレッドが必須。なにせグレートレッドと違って、龍じゃないからサマエルも効かないだろう」
「だがそうなれば余波で地球は大損害。選択肢としては封印一択。都合のいいことに、トライヘキサの封印そのものの行きついているだろうからね」
「そして封印したトライヘキサをあえて開放することは心理的に危険。そして奴らがそれだけで安心できない場合、当然だが対策を立てるはずだ。……それが、仮説通りなら」
「それこそが、涙嘆悲劇（バッドエンド）の始まりなのさ」
「本当に怖いな、我らがマスターはな」

アザゼルＳｉｄｅ

「……やばいな、こりゃ」
俺は準備を整えながら、今の戦況を確認していた。
フロンズ達の全面協力もあり、奇襲には成功した。
更にエルメンヒルデの尽力もあり、マリウスがリゼヴィムに隠し通した聖杯の追加情報も発覚。聖遺物による干渉が可能だと分かったうえ、それに使える聖釘の破片まで手に入った。
それで外に出ることが可能になったヴァレリーと、疑似的に聖杯を使用できる鶴羽。この二人で聖杯に干渉することで、トライヘキサに干渉する。そのあとはロスヴァイセ特製の結界術だ。
そして、これをもってしても封印が限界。だが封印しただけではまた解放される可能性がある。
……だからこそ、確実に滅ぼす為の手段も用意した。数千年以上かけての長期戦だが、滅ぼす算段も付いている。
だが、想定されていたが横やりが厄介だ。
邪龍達だけでなく、禍の団との三つ巴。間違いなくここからが厄介だろう。
俺は時計を確認し、そしてため息をつきそうになる。
どうやら、あいつらにも出てもらうしかないようだな。
「……俺だ。通信をイッセー達に繋いでくれ」
できればイッセーを巻き込みたくなかった。和地が強引に止めたのも、まぁある程度は褒めてやりたい。
だが、これ以上は無理だ。
忌々しいが、出せる戦力を出し惜しみしている余裕がない。どっちにしても、あまりため込んでも暴発しそうだしな。
念の為、D×Dは使うなと言っておくかと思った時、通信が繋がる。
『あーっはっははははははははあああああっはぁー!!』
『落ち着け馬鹿！　いろんな意味で落ち着け！』
なんか和地の方が騒がしいな!?

イッセーが止める側ってどういうこった？　いったい何があった？

「おいどうした!?　ちょっと緊急連絡なんだが!?」

『ちょうどいいですね。こっちも情報をまとめたいところでした』

その声に、俺は思わず頬がにやけた。

おいおい、このタイミングとは最高じゃねえか。

待ちに待ったこの大一番で、ついに装填されたってことか。頼りになるオカ研の二大最終兵器が、安心の涙換救済（タイタス・クロウ）と一緒だとはな。

俺も、ぎりぎりで顔が見れそうで安心だぜ。

「お早うさん、カズヒ。悪いが非常事態でな、一発銀弾を叩き込んでくれや」

『では、準備する間に説明をお願いします。……正直記憶が飛び気味で、状況の理解が追い付いていないので』

黙示覚醒編　第三十七話　真打ち登場！

祐斗Ｓｉｄｅ

単純明快に言って、状況は苦戦というしかない。
邪龍達に対しては、助太刀に来てくれたクロウ・クルワッハやストラーダ猊下、更にデュリオや曹操というメンツによって抑えられている。少なくとも侵攻は食い止められている状態だ。
だが、そこにヴィール達が率いている禍の団が厄介だ。
彼らにトライヘキサが捕えられることは防がねばならない。同時にアポプス達が確保している状況も危険だ。
結果として僕達は三つ巴だ。そして現状、優勢になっているのは禍の団側と言ってもいい。
その根幹は―
「この程度か？　この程度で冥界の未来を任せられるかぁっ!!」
「このぐらいじゃね、負けてやる気はかけらもない！」
―ヴィール・アガレスとその眷属たる双竜健也。二人の猛攻が起点となっていた。
ヴィール・アガレス眷属の戦力は半減していると言ってもいい。
成田さんが抜け、クラウディーネが倒れた。ほとんどの眷属が研究者上がりであることを考えれば、戦力はたった二人といってもいい。たとえ冥革連合の上級悪魔たちがいたとしても乱戦となると二人になってしまう。
更に冥革連合は、トライヘキサの奪取に戦力を傾けている。殆どの上級悪魔はアポプス及び彼が率いる量産型のグレンデル、ラードゥン、赤龍帝と激突していた。大王派側の者達はそれに便乗している形だ。
つまり、僕達Ｄ×Ｄ側と激突しているのはヴィール・アガレスと双

竜健也だけといえる。
……その二人の本気に、僕達は防戦一方なまでに追い込まれていた。
「なるほど、クラウディーネを討つだけのことはある……が！」
「くっ！」
こちらの攻撃を素早く回避しながら、ヴィールは魔力攻撃を仲間達に放ちつつ僕に反撃を行使する。
それを回避し続けていく、どんどん攻撃が最適化されていることが目に見えて分かる。
……ロスヴァイセさんたちの援護で視覚妨害の霧を展開しているが、ヒット&アウェイを主体とする分身たちもあって、最適化は急激に進んでいっているようだね。
そして警戒するべきは、ヴィール・アガレスの残神。
彼の狂気的な執念と解析速度なら、遅かれ早かれ習得すると思っていた。むしろ到達できる地点があるなら、到達できないでいることを堕落としか取れない人物だ。ある意味で想定内と言ってもいい。
だが、想定していてもこれはきついね。
……聖魔剣の鎧、それも三つのエクスカリバーとグラム含めた魔剣五つで上乗せして、何とかしのげているのが現状だ。
ヴィールの到達した残神は、はっきり言えば極めてシンプルだ。
単純に神滅具の能力、それも肉体の聖遺物化の強化による性能上昇。
シンプル極まりないけれど、だからこそ厄介だ。
付け入るスキがないほどに己を鍛え上げ続けるヴィールが、更に身体能力を向上させている。これが脅威でなくてなんというのか。
そして、そんな彼だけが脅威ではないのが難点だ。
「……なるほどね。本人はあくまで戦士ではないか。ヒマリ・ナインテイルやヒツギ・セプテンバーほどではないね」
「それはそうだけど……わぁっ！」
迫りくる双竜健也を迎撃しながら、オトメさんが歯を食いしばる。
慌てて援護の攻撃を南空さんやリーネスが放つし、他の仲間達も援

護攻撃を入れている。だがそのうえで窮地といえるだろう。
当然だ。彼が宿すのは蒼天鎧（ブルー・プロテクト）と漆黒装（ブラック・ファング）。
下手な神滅具の禁手に匹敵する性能を持つ、全身鎧と攻撃端末。それらを事実上別個の神器として保有する。それが彼のもつ新規神滅具候補。
そして今回、彼はそれを禁手にしている。
蒼い鎧を大型化した、巨大な鎧が闇の獣となったギャスパー君と殴り合いを行っている。
四基の小型戦闘端末を従える六つの大型戦闘端末が、朱乃さん達の攪乱する。
圧倒的というほかない。例えるなら、イッセー君の飛龍と同等の現象を、ヴァーリが極覇龍を纏って行っているようなもの。しかもドラゴンでないため龍殺しも通用しない。
控えめに言って悪夢だろう。ここまでとは思っていなかった。
「……これが、変異の駒（ミューテーション・ピース）で転生した健也さんの本気ってわけ!?」
「そうか。お前はまだ奴の本気を見たことがなかったな」
僕と共にヴィールと戦っている成田さんが目を見開くと、それを隙と取らせて攻撃を入れながらヴィールが語る。
それを素早くしのぎながら、成田さんは僕の隣に何とか下がった。
「蒼天（スカイブルー）に覇道成す従鎧（プロテクト）、漆黒（ピュアブラック）の征覇成す従装（ファング）。健也さんに禁手を使わせることは結局できなかったけど、出来ないのも当然ね」
「……事実上二つの神滅具を持つに等しい彼の神滅具。となれば、禁手もそれぞれが至れるという事か」
成田さんも戦慄しているけど、僕も戦慄するしかないよ。
変異の駒（ミューテーション・ピース）。ギャスパー君が神滅具となりえるだろう変異した神器を持っていることからわかるように、そのポテンシャルは尋常ではない。まして戦車の駒と言えば、サーゼクス様の眷属であるスルト・セカンドさんと同格の才能を持っていることになる。
確かに、今の彼ならスルト・セカンドさんと真っ向から渡り合えるだろう。それほどまでの力の持ち主、もっと警戒するべきだった。
直接的な出力に限定すれば、成田さんやクラウディーネを超える。

ヴィールでも単純な力押しなら一歩譲るかもしれない。
これが、ヴィール・アガレス最後の武闘派眷属。双竜健也か。
……幸か不幸か、どうも意識がオトメさんに向けられているようだね。
おかげで戦術的ないなしや絡め取りがある程度できる。そうでなければ何人か死んでいたかもしれないしね。
「だけど、オトメさんを意図的に狙うとはね。縁があるとは思えないけど」
思わず疑問の声が漏れると、何故かヴィールが少しだけ視線を逸らしそうになった。
戦場だから抑えたようだけど、微妙に焦点がずれている気がする。
あと成田さんも、ちょっと苦笑い気味だった。
「……あ～。たぶん、ミザリの奴が自分や師匠の過去を語ってたとか、そんな感じかも」
「そういう事だ。機会があるなら相まみえたいとは思っていたようでな」
なんだろう。微妙な雰囲気になっているようだ。
「時間稼ぎ目的だけど、聞いてみていいかな？」
「……まぁいいだろう。貴様らなら言っても問題なかろう。冥途の土産に聞くと言い」
応える前の沈黙が怖い。
あと成田さんも、真剣に視線を逸らしている。
「……雑に結論から言うと、ミザリと過去が少し似てる感じ」
……嫌な予感しかしなかった、その時だった。

「――――待たせたわね」

その声が、やけに全域に響き渡ったその時だった。
『リスターティングディストピア』
その瞬間高速攻撃が、漆黒の戦闘端末を瞬く間に蹴り飛ばしていく。
そこから生まれる隙をついて、僕達は素早く一旦集合。
そしてそれを妨害しようとする蒼い巨大鎧に、蒼と紅の一斉攻撃が叩きつけられて大きく揺らぐ。
そして赤と青と銀が同じように並び立った。
来てしまった、か。
まぁ、来るとは思っていた。時間の問題だとは分かっていたから、せめて来る前に露払いはしたかったけどね。
「……起き抜けかつ記憶も曖昧だって時に、ややこしいことをしてくれるわね」
「っていうか、結局こうなるなら最初っから来た方がよかったんじゃね？」
ため息をつくのは、カズヒとイッセー君。
そんな二人に、最後の一人が肩をすくめる。
「ま、敵はこういう時容赦しないし、かといって段取り無視は良くないしな。これぐらいがいいだろうさ」
そう告げた九成君は、苦笑を浮かべながら銃口をヴィール・アガレスと双竜健也に向ける。
「とはいえいい加減面倒だ。そろそろ決着つけようか？」
頼りになる仲間達が全員集合だ。
ああ、ここからが僕達の本領だとも！

和地Ｓｉｄｅ

まったく。段取り整えるまでに終わってほしかった。無理だとは分かってたけど。
とはいえヴィール達主体か。ミザリが来ていないのはどうも不安だな。
トライヘキサの封印を解いておいて、トライヘキサを奪取されたままっておかしいだろ。嫌な予感がどんどん増していくな。
だが、奴が出てきていないのなら好都合。
ヴィールとミザリを同時に相手するとか最悪と言っていいからな。ぶっちゃけアポプスだけでいっぱいいっぱい気味だし。いないのは好都合だ。
最悪のタイミングで出てくる可能性を警戒しつつ、今のうちにヴィール達をどうにかするべきってことか。
「……イッセー、お前はギャスパー達と一緒にトライヘキサを頼む」
「おう！　あいつらは俺達で何とかするぜ！」
理解が早くて助かるぜ。
とにもかくにもまずはトライヘキサ。増援はあとでさらに来るし、まずトライヘキサが日本を侵攻しないようにして、そこからだな。
そして、だ。
「……いい加減に、お前との因縁も終わらせよう」
「そうね。物のついでで悪いけれど、そろそろ終わらせたいところだもの」
俺とカズヒねぇはそう語り、同時に得物の切っ先を向ける。
「覚悟しろ、ヴィール・アガレス・サタン」
「今日があんたの命日と思いなさい」
その宣言に対し、ヴィールは微笑みすら浮かべて両手を広げる。
「できるものならやってみろ。やられてやる気はかけらもない」
その直後、戦闘は再開された。

黙示覚醒編　第三十八話　大決戦、続いてます！

祐斗Ｓｉｄｅ

戦闘の流れは、切り札の投入によって大きく切り替わる。
「和地！　春奈と一緒にヴィールを抑えて！　私はまず相方を潰すわ！」
「オーケー任せた！　行くぜ、春っち！」
「任せて和っち、そして師匠!!」
なるほど。まずヴィールは抑え込み、全員の集中攻撃でどうにかするという事か。理にはかなっている。
ただ、懸念がないわけでもないんだよね。
「気を付けてくれ、何故か双竜健也はオトメさんを中心に狙っている！」
「なんで!?」
思わず二人がハモるけど、それは僕も分からない。
とはいえ、だ。ヴァレリーさんを送り届ける為、イッセー君達数人が削れているのもあれだ。ヴィールを打倒するなら尚更だろう。
となると尚更、双竜健也の打倒は必須だ。
まず間違いなくヴィールの方が総合力で上である以上、倒しやすいのは双竜健也。彼も確かに強いけど、まだシンプルゆえに真っ向勝負向きの僕らとかみ合う強さでもある。加えて面制圧と単純な出力なら双竜健也が上といえる為、そういった点での優先順位も上だ。
だからこそ―
「オトメさんのカバーは僕がするよ。九成君はヴィールを抑えてくれ！」
「……よし、任せた！。そして足止めは任せろ、必ず三十分は凌ぐ！」
ここまで頼りになる返事もそうはない。

彼が凌ぐといったのだ。確実に三十分はしのいでくれる。それが涙換救済（タイタス・クロウ）の本領というものだ。
だからこそ、双竜健也は僕達が打倒する！
そして双竜健也もまた、その流れを変えるつもりはないらしい。
巨大な蒼き鎧を黒い戦闘端末を従え、こちらに対して突貫する。
「……なら、そろそろこっちのしたいこともさせてもらおうか!!」
そう言いながら真っ先に狙うのはオトメさん。
だけど、それをさせるほど僕達も甘くはないさ。
「悪いけど、オトメねぇに粘着質な男は寄せれないわね」
「仲間なんでね、そう簡単にはさせれないさ」
カズヒのアタッシュナイダーと僕の聖魔剣が、双竜健也を縫い留める。
「行きなさい、祐斗君、カズヒ！」
「端末はこちらで食い止めます！　本体はお任せしました！」
「余計な邪魔は入れさせません！」
朱乃さんの雷光が、ロスヴァイセさんの魔法が、ルーシアちゃんの砲撃が、戦闘端末や大型鎧を食い止める。
その間に、僕とカズヒとオトメさんで僕らが双竜健也を倒す。
覚悟してもらおうか、双竜健也！

イッセーＳｉｄｅ

後ろも激戦になってるな。
相手はヴィール・アガレス・サタン。そして眷属である双竜健也。
かつてアグレアスで戦った時もヤバかった。そこから更に鍛え上

げているんだから、楽に勝てる相手じゃない。
だけど、それは俺達も同じだしな。
仲間達はみんな鍛えてきたし、いろんな方法で強くなってきた。そう簡単にはやられないさ。
「ギャスパー、ヴァレリーは任せる。道は俺達が切り開く！」
『任せたよ、イッセー先輩。その分はヴァレリーは任せて！』
「あらあら。私ってば大事にされっぱなしなのね」
そういう事で、さぁ行こうか……いや、多いな。
量産型のグレンデルにラードゥンに偽赤龍帝だけでも、合計で１００を迫る数。更に普通の量産型邪龍に至っては千を超えるだろう。それがこっちに差し向けられているだけでもっ手のが酷い。
これは流石にきついだろ。
あ、もういきなり覚悟を決めた方がいいかも？
「畜生、こうなったらもうＤ×Ｄを出すぐらいじゃないと―」
『その必要はまだない。やるならもっとタイミングを計り給え』
―この声は!?
「フロンズさんか！　でもどうやって？」
俺が尋ねたその時、俺の後ろを何かが高速で飛び越える。
その瞬間、どデカい砲撃が邪龍達をごっそり吹き飛ばした。
防御に特化しているラードゥンの量産型こそ無傷だけど、グレンデルと偽赤龍帝の量産型はかなりダメージが入っている。通常型の邪龍に至っては、射線に入った奴らは跡形も残ってない。
しかもその砲撃がトライヘキサにも当たり、ちょっとだけで揺らいでいる。
例えるなら軽めのストレートって感じだ。だけど、それだけの威力を出す攻撃があるなんて。
『これだけの威力を用意したのか!?』
『何を驚く。そも我々が研究開発している Ｇ（ギガンティック・フォートレス） Ｆ としては、これでも片手落ち未満だ』
驚く俺達の前で、ギャスパーにそう答えるフロンズは通信越しで苦笑している。

そして飛んで行ったそれらは戻ってくると、そのまま俺達に迫る邪龍達の宣戦を一撃離脱戦法で引っ掻き回していた。
……なんだろう。三胴型の空飛ぶ兵器？
宇宙戦闘機とかだったら、あんな感じになるかもしれない。あと後ろの部分にデカい大砲が二つ付いたユニットがあるな。
『そもそもＧＦとは「対龍神クラスを視野に入れた兵器体系」として開発したものだ。サンタマリア級こそ艦隊規模での運用が前提だが、本来龍神クラスを視野に入れるのなら、より小型かつ高機動でなければ話にならない』
フロンズはそう言い切ってから、軽い溜息をついた。
『その真なる第一弾こそ、ディズシリーズの先駆けともディズ・ファースト。最初期ロットのカノンユニット込みで一個小隊は持ち込めたが、あの程度では道は遠いな』
「そうかしら？　凄いものだとは思うけれど」
ヴァレリーがそういうけど、フロンズは通信越しでもわかるぐらいため息をついた。
『一個小隊レベルであの火力では話にならん。この戦闘データを見るだけでも期待値に届かせるのなら……赤龍帝を単位にすればこうだな』
お、俺を単位に？
『あの数でならロンギヌススマッシャークラスは必須。火力のままなら一個大隊は必須。現実的に見据えるならば、クリムゾンブラスター級を二個中隊が妥当なところか』
「怖いこと言うなぁ、おい!?」
この人が一応味方でよかった。敵に回してたら真っ先に潰すべきだよこれは！
正直ちょっと引いているけど、だけどおかげでだいぶ道は切り開けている。
それにアポプス達も、前の方で戦闘している人達もいるからこっちに避ける戦力は多くない。
ストラーダ猊下や八坂さん。曹操やクロウ・クルワッハ。とんでも

ないメンツがゴロゴロいるな。壮観だよ。
リゼヴィムもこれは予想してなかっただろう。こんなことでないと集まれないのが現状だけど、こんなことがあれば手を取り合って戦えるぐらいには、俺達はやってきたんだ。
なら、俺達だってやってやるさ。
「……お願いします！　トライヘキサとアポプスは俺達が！」
『そうするといい。当面、大王派（こちら）は露払いに徹するさ』
ああ、そして絶対、この努力は無駄にさせない！

和地Ｓｉｄｅ

向こうも大概ヤバいことになっているが、こっちはこっちで大一番だ。
野郎、既に残神に至っているとは驚いた。到達するとは思っていたが、いくらなんでも早すぎるだろう。
木場も大概早く至っているが、それだって俺がすぐ近くにいて何度も見れるからだ。それに比べればヴィールの場合、データが少なすぎて条件が違いすぎる。大差ない時期に習得するとか、ちょっと引くぞ。
ただ、それはそれとしてだ。
王の駒の真相が明かされた以上、冥革連合は大きく方針を変化しなくてはならないだろう。
今までの方針は分かりやすい。要は王の駒を自分達が作ったこと

にして、そのドロドロな裏事情を隠すのが狙いだった。
だからこその再興の敗北だ。冥革連合からすれば、王の駒や発展形である真魔の駒を使って自分達を滅ぼし、死人に口なしで堂々と使い続けることが理想だったという事だろう。
だが、それもディハウザー・ベリアルの告発で露と消えただろう。
だからこそ、だ。
「理解しているだろうがあえて言おう。俺達はトライヘキサを奪取し、冥界を強引にでも平定する」
そのヴィールの言葉に、嘘偽りなど欠片もない。
こいつは本気で言っている。トライヘキサを利用して、冥界の強引な平定を目論んでいる。
最悪の勝利を与えるなといったのが冥革連合だ。だが、勝利することそのものが最悪だという意味で言ったのは今なら分かる。
それはつまり―
「もはやこれまで。我々冥革連合は、冥界政府を掌握して強引に王と真魔を使わせる方向に舵を切らせてもらう」
「ま、そういう事なんだろうな」
攻撃を凌ぎながら、俺はヴィールの言葉に納得する。
ヴィール・アガレス・サタン達冥革連合は、その目的だけはシンプルだ。その点、ブレずに首尾一貫している。分りやすいにもほどがある。
すなわち、悪魔社会の富国強兵。その為の手段として、王の駒に目を付けた。そしてそれを更に発展させた、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）というアドバンテージを最大限に生かす方向性を確立させた。
だがその根幹となる、王の駒は裏のどす黒い事情がこれでもかと明かされた。だからこそ、手段を変えて強引に押し付ける方向に舵を取った。それがヴィールにとっての最悪の勝利。
ならば、だ。
「止めてやるよ、ヴィール・アガレス・サタン。そのうえで、悪魔ではなく三大勢力含めた世界の富国強兵を成し遂げてやる」
それ以上の勝利をもって、俺達はこいつを超えていく！

「行くぜ春っち！　ここで決着をつける！」
「そうね和っち！　それが手向けってものよ！」
吠えると共に、俺と春っちは突貫する。
そして、ならばそれに相応しい装いというものがあるだろう。
「併せろ、春っち！」
「分かった和っち！」
さぁ、覚悟してもらおうか。冥革連合筆頭、ヴィール・アガレス・サタン。
ここをお前の死に場所にしてやる。腹をくくってもらおうかっ!!
その決意と共に、俺達が握るのは炎を纏った二対の剣。
そしてヴィールがその意味を悟る。
「なるほど、そう来るか！」
ああ、理解しているようだから伝えてやる。
「これぞ我が新魔剣、赤き熱愛（マリッジ・オブ・ファイヤ）の餞別との同調専用魔剣。エンゲージフレア」
「貴方を和地と越える為に、編み出した奥の手です！」
さぁ、ケーキ入刀ならぬヴィール入刀といこうかっ！

黙示覚醒編　第三十九話　死闘、冥革連合！

和地Ｓｉｄｅ

ふるわれる猛攻を前に、俺達は迎撃戦闘を開始する。
大口を叩いておいてなんだが、真っ向勝負だと二対一如きでは俺達の方が圧倒的に不利だ。できれば味方が来てから相手をしたい。
一応そうでない時の為に色々と頑張っているが、俺ってぶっつけ本番だと不利だしな。
「更に新技ぁ！　赤き情熱の憧憬（ライダー・オブ・ファイヤ）っ」
「なるほど、そう来るか」
感心するヴィールを前に、春っちは全身の炎で出来た鎧を纏う。
これ、誤解でなければ仮面ライダーマクシミリアンを模しているな。
いわば全身鎧型禁手というより、仮面ライダー型禁手か。それも俺のをモデルに。
「いよっしゃぁっ！」
「御免和っち隠しててなんだけど今そこじゃないからね!?」
なんか春っちが絶叫するけど、戦闘も仕込みもちゃんとしているから安心してくれ。
ただ、これだけ仕掛けてもヴィールはしのぎ切っている。
「どうした？　こちらはお前達の全力を乗り越える気なのだが？」
余裕綽々だな。これでもダメってことか。
とはいえすぐに終わるとも思えない。時間は稼いだ方がいいだろう。
「……なぁ、これが最後になるだろうし、少し聞きたいことがあるんだが」

「いいだろう。冥途の土産としてやるから聞いてみろ」
お、素直に答えてくれるのか。
まぁこの情報統合野郎が、会話している程度で隙を作るわけもないか。
別にいい。この手の情報は掴めておくに越したことはないだろうしな。
「お前はなんで、王の駒について把握することができた？」
そこはかなり気になるんだがな。
そしてヴィールはこちらの攻撃を捌き続けながら、軽く肩をすくめる。
「事の発端は十年以上前だ。その頃から俺は常々性根が変わってなくてな。庶子との子ゆえに冷遇されていたが、それはそれとして冥界の未来を憂い鍛え続けてきた」
いきなりヘビーだが、とりあえずスルーする。
というより、もうその頃からぶっ飛んでいたという事か。ナチュラルボーン初っ端覚醒とは、また凄いな。
それはそれとして、語りながらも一切の揺らぎがない。本体も分身も語りながらでこのレベルの戦闘を一切ポテンシャル低下を起こさずにできるとはな。
したくないが感心するしかない中、ヴィールは拳による迎撃を仕掛け、俺は仕込みを試みながら戦闘を行っていく。
「転機としては、偶発的に聖杯戦争に巻き込まれたことだな。参加者の一人がサーヴァントを利用して、現地にいた上級悪魔を殺すことを試みた。つまりは俺だ」
主人公みたいなトラブルに巻き込まれているな。
「何っています。ですがそこで、ヴィール様は逆にその凶手から奪いつくしたと」
「そう。鮮血の聖別洗礼（バプテマス・ブラッド）は宿主を渡り歩く性質があり、それは強くあらんとする心意気によるものが主体。……結果として俺は神滅具（これ）を手にし、残されたサーヴァントと契約して優勝した」
春っちに応えながら、ヴィールは動きをどんどん最適化させてい

る。
　というか、そんなものを持っていたのか……やばいな。
「そして、俺はその段階で冥界の発展に方向性を見出していた。……ゆえに求めたさ、悪魔の駒の深奥を」
「なるほど、そこで王の駒や各種不正を悟り、王の駒を広めるどころかその発展まで視野に入れたってことか」
　そして、そこからが本番という事か。
「そして二度目の聖杯戦争でクラウディーネを引き、優勝。アジュカ・ベルゼブブやアグレアスの遺跡と繋がり駒を作り出す、王駒祭壇（ムロドーミーユ）を作り出した」
「凄い方向で隙をねじ込もうとしたか？」
　とんでもない情報をぶち込んだな。
　つまりアグレアスが奪取された場合、悪魔の駒が製造できなかったと。
　だからアグレアスを狙った作戦で関与してきたのか。王の駒まで知っているなら、魔王アジュカ・ベルゼブブ辺りをせっつかせるには十分だ。
　そして今ので俺も隙が生まれそうになったな。軽くヤバい。
　ただ、ヴィールはむしろ首を傾げていた。
「違うな。隙を作る発言とは、こういうものだ」
　おい、何を言う気―
「貴様らと一戦交えた、ゼファードルの眷属だったリーダム・セカンドライフがいただろう？　奴こそが俺を禍の団に繋げた最初のサーヴァント、プレスター・ジョンだ」
　―また凄い事言ってくるなオイ。
　隙がねじ込まれそうになったが、強引に押し通して対応する。
　とはいえ、向こうだって警戒はするだろう。
　そもそも長期戦はこっちが不利だ。ヴィールの最適化は長期戦になればなるほど進むから、文字通り戦闘中に成長するなどという反則レベルの存在になる。
　だが、時間稼ぎは必須。本気でヴィールに勝つなら、二対一如きで

は全く足りない。かつての戦闘においてすら、こっちがいくつの隠し玉を使ったと思っている。
……いや本当に多いな。ヴァーリは極覇龍使うし、イッセーは真女王の初登場と、二天龍だけでも凄まじい。更にサイラオーグ・バアルは禁手を変化させるし、カズヒねぇは覚醒しまくるし、歴代赤龍帝も連係プレイで参加だったし。俺もカズヒねぇも割と後先考えずに頑張りまくって、あの後倒れたし。
だからこそ、今回も総力戦必須。できることなら更なる切り札をいくつも用意するべきだ。
だからこそ、ここは凌ぐ。
凌ぐけど、それでも言いたい。
「いやホント、とんでもない情報をぶっこんで来たなおい」
「冷静に対処しながら言われてもな」
お前の相手をしているから、慌てたくても慌てられないんだよこの野郎！

祐斗Ｓｉｄｅ

振るわれる猛攻を前に、僕達は一進一退の戦いを繰り広げていた。
上位神滅具の禁手。油断できるわけがなく、まして使い手がヴィールの眷属ならなおのこと。
厳しい鍛錬を強い意志で乗り越えた厚みを崩すのは至難の業だ。こと出力において拮抗できるだろうイッセー君やギャスパー君がないのならなおのこと。

それでもなお、僕達は食らいつくことができていた。
「……流石にできるね。一人で挑むのは油断しすぎだったか」
そう呟く双竜健也だけど、余裕があるのは見ているだけで明らかだ。
ただ同時に、その意識は常にオトメさんに向けられている。
「あの、私って貴方に何かしたかな？」
その注目に気おされ気味のオトメさんが、そう尋ねる。
確かに、理由がわかるだけでもだいぶ変わるものだしね。気分としてはだいぶ楽な気分になるだろう。
そして、双竜健也もそれに納得しているようだ。
「そうだね。ならいい機会だし、今のうちに聞いておくかな」
そう頷きながら呟いた彼は、真っ直ぐな視線をオトメさんに向ける。
僕達もまた、攻撃を緩めて様子を見る。
「……道間乙女。君はどうやってそこまで戻ってこれたんだい？」
……その言葉の意味が少し分からなかった。
ただ、オトメさんは表情を強張らせている。
その緊張感の中、双竜健也は軽く肩をすくめた。
「昔語りは趣味じゃないけど、説明の為にも僕の過去を話すべきかな」
そう語りながらの猛攻を、オトメさんだけ密度を薄める気遣いをしながら彼は語り出す。
「……まぁなるべく簡潔にまとめるさ。僕の幼馴染が、ダメな男に引っかかっていてね？　耐え切れずにたまたま悪魔を呼び出してそいつの悪事を徹底的に明かしてみたんだけど、そこで目が覚めるようなことは起きなかった」
寂しげに笑う彼は、そのうえで表情を少し引き締める。
「僕が彼の眷属になったのは、力があることを知ったうえで強くなりたいと思ったからさ。どちらかというと弱い心をどうにかしたいけど、強くなる為の厳しい鍛錬は、それを乗り越えられるのなら強いといえるだろう？」
そう告げ、そして彼はオトメさんを真っ直ぐに見る。

「だから知りたい。君はもっと堕ちていたにも関わらず戻ってこれた。何故それができたのか、それは理屈や技術によるものなのか……ってね」
その言葉に、僕達は返す言葉がない。
彼にも相応の事情があるんだろう。同情を引きたいわけでも不幸自慢をしたいわけでもなかったけど、その為に可能な限り簡略してなお、彼にとってはトラウマになりえるものだ。
そして、ある意味でオトメさんは救いにすら見えるだろう。
それ以上の過程を辿りながら、今ここにいる彼女は真っ当な在り方を取り戻している。
何故そうなったのかが知りたい。そしてできることなら、それがやろうと思えばできるものがいる方法であってほしい。
……それを、オトメさんは悲しげな表情で否定する。
「……違うよ。私は、持ち直せてなんて……ないかもしれない」
その言葉に、双竜健也は何も言わない。
表情の変えず、無言でオトメさんに先を促す。
それを受け止め、乙女さんは首を横に振った。
「私が特殊なのは知ってるかな？　固有結界そのものであるベアトリーチェというサーヴァントが、固有結界使いのカズヒに宿り、そして対象の罪という固有結界を、同位体を巻き込む形で受けたことで生まれた存在。だから私は、サーヴァントであるベアトリーチェが芯になっているの」
そう語るオトメさんは、つらそうに自虐の表情を浮かべている。
「ベアトリーチェが持つスキル、精神浄化。天国にて詩人を待つベアトリーチェの名を関すことから、逆説的に「天国にいることができる精神性」を会得するスキル。アルターエゴ・ベアトリーチェは伝承由来だけど、このスキルをCランクで持っているの」
そう、オトメさんは言い切った。
僅かに変える双竜健也の表情は、僅かゆえに内心を推し量ることはできない。
そのうえで、オトメさんははっきりという。

「私が持ち直しているのは、その影響がとっても大きい。だから……期待には応えられない」
「……そうか。悪いね、言う方がつらい事かな」
その短い言葉の交わし合いで、戦闘の流れはすぐに戻る。
「そしてもう一つ悪いね。だからといって容赦をするようなら、僕は今頃トレードされているさ」
その言葉と共に、攻撃は激化していく。
「容赦はしない。未来を望む形で掴みたいなら、僕らを超えていくといい！」
そして放たれる、その絶大な一撃に―
「……となると、当然私は嫌っているでしょうね」
―今まで沈黙をし続けてきた、カズヒが真っ向から迎撃する。
受け止め、そいて流して弾き飛ばす。
その視線に込められているのは、憐憫か……それとも、ある種の罪悪感か。
「厄介なところだね。道間日美子は被害者でもあるし」
「そうね。でも破壊した側ではあるもの」
そう告げるカズヒは、そのうえで切っ先を彼に突きつける。
「だけど悪いわ容赦はしない。オトメねぇは今度こそ幸せに生きてほしいと願うからこそ、そう簡単に傷つけさせる気はないの」
その言葉と共に、カズヒは強い意志を籠める。
「だからこそ、まだだ。この程度で私達を倒せると思うなよ？」
「……そうだね。この程度でやられる道理はどこにもない」
彼女のアタッシュナイダーに合わせるように、僕も聖魔剣の切っ先を双竜健也に向ける。
「そしてそれは僕らも同じさ。オトメさんはもう仲間である以上、彼女の幸せは僕も願っているからね」
「……それは、私も言い返したいかな？」
そして苦笑を浮かべながら、オトメさんも聖剣の切っ先を突き付けた。
「私だって、カズヒの……日美子達の幸せを願ってるもの。みんなで

一緒に生き残るよ」
となれば、そう簡単には倒れられないね。
「オカルト研究部を舐めないでくれよ？　僕達は、この戦いも勝って生き残る！」
さぁ、ここからが第二ラウンドだ！

黙示覚醒編　第四十話　灼熱昇華

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

トライヘキサを中心点とするように行われる戦い。
その指揮をとりながら、ノア・ベリアルは眉間にしわを寄せていた。
この戦いはある意味で、細かい策が用意できない状況といえる。
良くも悪くも開けた地域で数も多い。加えてトライヘキサが強大すぎる。これでは小細工を挟む余地がない。
それに伴い、ノアは戦術を挟む余地がない為ある種のヒマとも言えていた。
むろん指揮官が暇潰しに走るわけにはいかない。そのうえで情報をとりながら精査するが、不安要素は多かった。
既に聖杯に干渉は成功し、結界によってトライヘキサを封じることはできていた。
だが、問題はここからだ。
現魔王、四大天使、神の子を見張る者、そして各神話勢力の主神達。彼らがその後を踏まえた策を持っているようだが、これに関しては詳しく伝えられていない。
お人好しが多いメンツである以上、こちらを使い潰したり巻き添えにするような作戦なら伝えているだろう。だが詳しいことを伝えられない以上、不安を覚えてしまうことは多かった。
「……赤龍帝がアポプスと戦闘を開始しました！」
「データは可能な限りとっておけ。それと、魔王様達から連絡は？」
部下の報告に応えながら確認をするが、部下は首を横に振る。
その反応から見て、魔王達からは追加連絡を入れていないということだ。それが妙に不安をあおっていく。

こちらを使い潰すことはないだろう。だが同時に、妙なことをしでかしそうな予感がする。
それを悟りながらも、ノアはため息一つで気持ちを切り替える。
どちらにせよ、自分は戦術指揮官や軍事アドバイザーが限界の男だ。ならばそれをきちんとわきまえるべきだろう。
そして気を切り替えたうえで、ノアは部下に確認をとる。
「……奴はまだか？」
「あと五分で到着するとのことです」
「ならリアス嬢にも伝えておけ。ヴィールとの決着は、奴さんがやるべきだろうからな」

和地Ｓｉｄｅ

このままだとまずいな。押し切られる自信があるぞ。
「この程度か？　そろそろ読み切れるぞ！」
「ぐ……ぬぁあああああっ！」
押され気味になり、それはどんどん増えていく。
そんな状況下で春っちは吠えるけど、現実的な問題としてこれはまずい。
ヴィール・アガレス・サタンに同じ戦場で追い抜かれれば、そこから巻き返すのは不可能に近い。
驚異的な行動の最適化。それに伴い戦闘能力の事実的な向上。本来なら心身の過負荷から弱体化が進んでいく戦場において、この男はある種の特例と言っていい。
ゆえに、追い抜かれればその後は差が広まっていく。これはもうど

うしようもない。
どうする、札を切るか？
できれば避けたい。この切り札は畳みかけるときにするべきだし、並列作業で行っている仕込みとも合わせたい。
だが、出し惜しみをすれば押し切られる――

「……そうはさせないわよ、ヴィール」
「そういう事だ。どうやら、決着をつけることができそうだしな」
「ええ。貴方を打倒するのは私達であるべきでしょう」
「特に私は必須ですね。正直、彼の所為で色々と苦労していますし」

まさにその時、声が響く。
それに対し、ヴィールは素早く後ろに下がりながら、その姿を確認すると苦笑した。
「なるほど確かに。冥界の未来を掛けたこの一戦、俺を打倒するなら貴様達が挑むべきではあるな」
……この時間にフルスロットルで調整を行いながら、俺は内心でガッツポーズをする。
増援が来てくれるのはありがたい、それも、外連味が聞いているうえに実力も最高水準だ。
「覚悟してもらうわ、ヴィール・アガレス・サタン。いい加減に決着をつけましょう」
星辰光（アステリズム）の王冠を浮かべるは、我らがオカ研筆頭たる、リアス・グレモリー
「アガレスの失態はアガレスが注いでこそ。……喜びなさい、貴方の

野望は冥界の未来が打ち砕きます」
アガレッサーから告げるは、次期大公シーグヴァイラ・アガレス。
「私も色々あって思うところがありまして、問題を解決することで晴らさせてもらいます」
冷たく宣言するは、前生徒会会長にして、シトリー家次期当主ソーナ・シトリー。
そして足を一歩踏み出すは、獅子を従える筆頭戦力。
「冥界の未来はこの一戦がかかっているだろう。そして、相容れぬ方向をとった以上決着は必要だ」
そう告げる男は、拳を握り締めて突き出した。
「覚悟してもらおう、ヴィール・アガレス。魔力を持たない身だが、俺達が貴様を滅ぼそう」
次期大王、サイラオーグ・バアル。
ああ、そして助かった。
「……準備万端だ、春っち」
「ありがたいわね、和っち」
ああ、何とかおかげで間に合った。
……エンゲージフレアは、赤き熱愛の餞別（マリッジ・オブ・ファイヤ）との相互同調を目的として開発された、春っちとの連携特化型の魔剣だ。
そしてそれを利用し、俺はとんでもない秘策を試みた。
すなわち、魔術による春っちの神器の調律。最適化と言い換えるべきだろう。
春っちは神器に目覚めた時に至り、その性質もあってどんどん拡張していった。そういう意味では極めてイレギュラーであり、多少の不具合もあっただろう。
ゆえに、それを魔術的側面で調律する。これを俺は試みていた。
奴を打倒するのなら、難易度は絶大に高いが相当の隠し玉をぶつけるか圧倒的な差を用意するか、もしくは戦闘中に成長するかの三択。ゆえに、こうして俺は柄にもない戦闘中の成長を選択した。
さぁ、ここからが本番――

「……あれ？」

―春っち今なんて言った!?

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

その瞬間、その場にいた者達は誰もが目を見開いた。
炎を纏う成田春奈。彼女の質が今、大きく切り替わった。
「この反応は……数値が神滅具のそれ……っ！」
驚愕するソーナ・シトリーの解析に、更なる驚愕が響き渡る。
だが同時に、解析手段を持つ者は誰もが解析して確かめる。そしてそれが真実だと、データを知る者は理解した。
事実、春奈の纏った炎は出力・密度はもちろん、その在り方を大きく成長させている。
……余地はあった。
ヴリトラ系神器を可能な限り全部叩き込まれた、匙元士郎は神滅具と真っ向から張り合えるようになった。そして春奈もまったく同じ神器を十を超える数取り込んでいる以上、神滅具に追いすがる域の性

能を獲得している。神滅具使いが背中を預けれる程度の存在だった。
そして神器は後天的に変質することもある。ギャスパー・ヴラディの停止世界の邪眼（フォービドゥン・バロール・ビュー）が、バロールの残滓を宿したことで神滅具の域に到達し変化したことがそれを証明している。
だからこそ、それは理屈として理解できる。
だが、実際に起こって驚かないかと言われれば、まったく別の問題といえる。
そして隣にいた九成和地は、ぎこちない動きでリアス・グレモリーに振り返る。
「……また、何かやらかしちゃったみたいです……よね……っ」
「……貴方、いい加減イッセーに引く資格を失っているわよ」
呆れ半分のリアスの言葉に、和地はそっと肩を落とす。
そして五秒後、勢いよく顔を上げる。
「こうなればヤケだ！　俺も隠し玉使う！」
『ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ』
パラディンドッグに切り替えながら、和地はヴィールに指を突き付ける。
「覚悟しろ、俺が対お前用の切り札を用意してないと思ったか!?」
「……そうだな。驚愕するべき事態だが、今するべきはそこではない」
『ＭＯＮＡＲＣＨ』
そして並び立つように、サイラオーグもまたプログライズキーを装填。更にレグルスを身に纏う。
そして同時に、その姿が更に変化した。
「……切り札は取っておくものだ。ビィディゼ・アバドンの時はまだ迷っていたが、お前が相手ならば覚悟を決めるべきだろう」
その波動を感じ、ヴィール・アガレス・サタンは目を細める。
「ついに覇に至ったか」
「そうだ。そして鎧としてではなく、デバイスとしてそれを使えばどうなると思う？」
そう答えるサイラオーグは、静かにベルトを起動させる。
「フロンズ達の解析では、これはもはやフォースライザーに類似する

形態とのことだ。ゆえに、俺はこれをバアルレグルスドライバーと名付けることにした」
その言葉に、誰もが戦慄を覚えたのは事実だろう。
それはすなわち―
「いいだろう、来るがいい仮面ライダー。俺程度を超えられない程度の者に、冥界の未来は預けられんのでな」
その言葉と共に、和地とサイラオーグはデバイスを起動させる。
「「変身！」」
具現化されるパラディンドッグに呼応するように、サイラオーグの全身に装甲が展開される。
覇の神滅具により加工されたそれは、まさに覇道の集大成。
『キングライオン！』
展開される頭部装甲は、まさしく仮面ライダーのそれ。
『Ｇｏ　ｔｏ　ｌｏｒｄ　ｏｆ　ｋｉｎｇ』
ここに、仮面ライダーマクシミリアンと並び立つ、新たなる仮面ライダーが誕生する。
その名も―
「……仮面ライダーレグルス。推して参る」
―仮面ライダーレグルス。悪魔として無能でありながら、魔王クラスすら屠る偉業を成し遂げた若き大王。サイラオーグ・バアルが至りし仮面ライダー。
そして並び立つように、リアス・グレモリーも微笑と共に告げる。
「なら私も応えるわ。これが、私の新たなる切り札―」
その言葉と共に、リアスもまた鎧を具現化させる。
それは、闇を噴出させる紅の鎧。
その光景を見て、ヴィールは小さく微笑みすら浮かべる。
「そう来るか。なるほど、それがあるなら俺を相手に勝機を見出すこともできるだろう」
「……そう、これが私の新技。イッセーとギャスパーの力を統合させることで並び立つ鎧、紅爵礼装（ガモリー・サーコート）」
闇を外套のように纏う鎧から、リアス・グレモリーは宣言する。

「覚悟してもらいましょう。サイラオーグに足りない滅びは、私が補う。……滅びなさい。冥界の未来は貴方ではなく私達が担う！」
その宣言に合わせるように、九成和地と成田春奈も一歩前に出る。
成田春奈は炎を鎧とし、そして炎の刃を携えて。
九成和地は仮面ライダーとして、更に魔剣を携えて。
「じゃ、俺達も行こうか、春っち」
「ええ和っち。手伝ってくれると嬉しいわ」
そう言葉を交わし、二人は切っ先を突き付けた。
「お覚悟を、ヴィール様。ここで貴方を打倒することで、私は恩を返します！」
「決着をつけるぜ、ヴィール・アガレス・サタン。春っちは完膚なきまでに俺が貰い受ける！」
「……いいだろう」
そして、ヴィール・アガレス・サタンは応じるように拳を構える。
「来るがいい、冥界の未来を担うのならば、この俺を打倒するぐらいで及第点と知れ！」
そして、冥革連合との決戦は佳境となった。

黙示覚醒編　第四十一話　決戦！　ヴィール・アガレス・サタン!!

カズヒＳｉｄｅ

何かやらかしてくれたようね、和地は。
それを感覚的に理解し、ゆえに私は突貫する。
「……まだだ！」
殴り飛ばして巨大な鎧を弾き飛ばし、更に踏み込んで打撃を叩き込む。
流石は上位神滅具クラスの禁手。単純な攻防速においては、真女王でも苦戦するでしょう。一対一で超獣鬼（ジャバウォック）と組み合えるかもしれない。
だが、それで？
そう、その程度で戸惑っている暇など欠片もない。まして戸惑う理由が無い。
幸香は一対一で倒した。誠にいならそれぐらい対処できるだろう。なら私も、ここで屈する道理がない。
そう、目の前のデカブツ一体程度で―
「私が止まると思うのなら、その認識を改めろ。……この超越者（異常者）を舐めるなよ？」
―光を極めた私をどうにかできると思うな。
その決意をもって、私は拳を握り締め―
「……まだまだまだまだまだまだまだまだっ!!」
真っ向からタコ殴りにする。
そう、ここでの私の仕事はこれでいい。
何故なら―

『『『『『『『『『『うぉおおおおおおおおっ!!!』』』』』』』』』』

―既に形勢はこっちに傾いている。

若手四王の眷属が、総出で介入しての圧殺。これにより戦闘端末は完全に抑えられた。

数を彼らが対応するなら、私は質を担当しよう。

そして、本丸に関しては任せていい。そういう状況になっている。

「はーい、我らがお義母様には、おさわり厳禁ですよぉ?」

「くっ！　ここで来るか！」

リヴァの攻撃が双竜健也を縫い留め、その瞬間には後ろに回り込んだベルナを基点に、左右から鶴羽とインガが仕掛けていく。

「……そういえば、乙女が私のお義母さん!?　え、これちょっとどうなってるわけ!?」

「もっと早くに気づこうか！　あと今そんなこと言ってる場合!?」

「リヴァに引っ張られんな！　あいつのノリはあたしらじゃ無理だ！」

ゴメンなさい、インガにベルナ。鶴羽が迷惑をかけるわね。

でも冷静に考えると、確かにそうなのよね。

いやもうほんと、これは考えれば考えるほど闇が深くなるわ。

これもまた、私が背負うべき業の一つなのかしら。いやなんか方向性が違う気がするけど。

そう思いながら、私は蹴り上げて蒼い鎧を吹き飛ばす。

流石に硬いか。この手の鎧は壊しても修復されるから、完膚なきまでに破壊するのは骨が折れそうね。

そう思った時、突進してくる蒼い鎧を、アントニオンが蹴り飛ばす。

『カズヒぃ！　起き抜けなんだから無理しないでねぇ？』

「ええ、これでもわきまえてるから安心して！」

そう答えながら、私は連携の構えをとって迎撃を行う。

『……それと、曖昧になっている記憶の部分についてよぉ』

「どうかしら？　絶対に誠にぃの仕込みだと思うのだけれど」

……曖昧になっている記憶は間違いなく懸念事項だ。

記憶が妙なところでもやがかかっている。具体的には、五郎さん達

を庇ってからの記憶が九割以上跳んでいる。
そこが懸念事項すぎる。イッセー達からまた聞きすれば、何かを話した後に誠にぃが私を圧倒したそうだし。そんな事態を的確に忘れて未だに思い出せないとか、私らしくもない。
だから間違いなく仕込みだ。そしてそれは、記憶を取り戻されればまずいことになりかねないからだろう。
ならあの場で殺せと言いたいけれど、それもまた誠にぃの美学だ。
間違いなく、思い出した私を手遅れになった状態で改めて叩き潰そうとしている。その願望をもってして博打をうった。そういう事だろう。
『……結論から言って、相当時間がかかるでしょうねぇ。一日や二日では無理だしぃ、その頃には準備完了でしょうねぇ』
「でしょうね。せめて備えるしかないってことでしょう」
だからこそ、トライヘキサは絶対に何とかしなくてはならないし、可能な限り禍の団も削る必要がある。
結果的には都合がいい。どっちもできるチャンスが来たのだから。
だからこそ―
「決めて見せなさい、私の愛しい救済者」
―任せたわよ、和地。
涙換救済（タイタス・クロウ）はいつだって、愛する女の涙を変える。
成田春奈の涙の意味を、救い上げて変えてあげなさい！

和地Ｓｉｄｅ

想定外の事態が起きたが、この好機は逃せない。

春っちのサポートをしつつ、一気に畳みかける！
「行くぜ春っち、部長達も！」
「もちろんよ！」
「ええ、ヴィールはここで倒す！」
だからこそ、こっちも相応の切り札を開帳しよう。
これがパラディンドッグで至りし亜種禁手。この為だけに作ったと言っても過言ではない、俺の切り札。
「特注品だ喰らっとけ。鮮血侵す断魔剣（ソードネーム・ヴィールスレイヤー）」
「なるほど、禁手の一つを俺専用に仕立てたか！」
そういう事だ！
鮮血の聖別洗礼に悪影響を与えることに特化した魔剣を禁手で徹底強化。鮮血の聖別洗礼は歴史が浅すぎるうえ、聖遺物が聖遺物で干渉できることを踏まえれば、アドルフ・ヒトラーやミザリ・ルシファーには効きが悪い。つまり鮮血の聖別洗礼だけを持っている奴のみ限定で、ここでヴィールを倒せば回収するから敵対することもまずない。
つまりは徹底的に対ヴィールに特化した亜種禁手。ちなみに残神も対ヴィール特化。まずゾーンに入る必要があるから、これに関してはもうちょっと待て。
だからこそ―
「援護する。行ってこい、春っち！」
「オーケー和っち、頼りにしてる！」
―それまでは春っちが主役だろう!!
振るわれる春っちの炎は、神滅具へと変化したことで質も量も規模の強化されている。
まだちょっと振り回され気味だが、凄まじい速度でそれを適宜修正中。ヴィールの対処速度に結果的に追随している。
そして、オフェンスはもう一人。
「決着をつけるぞ、ヴィール・アガレス！」
突貫するサイラオーグ・バアルの拳と蹴りが、ヴィールの受け流しを半ば弾き飛ばしている。

明らかに性能が向上している。これが覇か。
というよりだ、覇って生命力をゴリゴリ削るはずなんだが……割と使えてないか？
「寿命は大丈夫か？」
「血を吐く程度だ、かまうな！」
う～ん。聞いたのが俺だから反論しないけど、その答えは全然大丈夫じゃない。
カズヒねぇやヴィールとは別の意味で精神が肉体を超越しているな。傾向としてはイッセータイプか。
そしてイッセーとくれば、今俺の隣で射撃戦闘を継続しているリアス部長。
こっちはこっちで闇を全身から放出しながら、赤い鎧から消滅の魔星を大量に展開して射出している。
それすらヴィールは拳で破壊するが、これまたやってくれるもんだ。
「部長、貴女も大概とんでもない切り札用意しましたね！」
「もう一つ研究中だったけど、ギャスパーはやることがあるもの！」
しかももう一つ伏せ札あったのか。
ま、そこは仕方ないか。
『うぉおおお！　一・斉・射・撃！　冥界の未来と富国強兵は、アガレッサー達ＴＦユニットで成し遂げるのです！』
『さて、如何に最適化できるとは言え……観測させる余裕がなければどうですか？』
そして後方からシーグヴァイラさんとソーナ会長が乗るアガレッサー及びガレシオンの砲撃が、ヴィールの分身達を引っ掻き回して情報統合と最適化を遅らせている。
そう思っていたが、ふと気づいたことがある。
僅かだが、ヴィールの動きが遅い。ついでに言うと反応も遅い。
あの情報解析と統合で、あいつの動きは高速で最適化されていくはずだ。そしてあいつ自身、スタミナの類は異常なレベルであるだろう。弱る速度は遅く、成長速度が速い。

にも関わらず、間違いなくヴィールは遅くなっている……？
内心で首を傾げながらも、俺はゾーンに突入する。
素早く残神を組み立てていると、リアス部長が小さく笑みの音を漏らす。
「……ふふっ。どうやら少しは通用したようね」
「何やったんですか？」
俺が聞くと、リアス部長はそっと指で闇を指し示す。
「この侯爵礼装は、劣化再現が限度の赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）と時空（アイオーン）を支配する邪眼王（バロール）を統合させて鎧と化した物。必然として、譲渡の特性や停止の力を秘めているわ」
「……あ、なるほど。広域デバフと限定的な解除を行っていると」
ヴィール相手なら、確かに有効な方法だ。
そもそも敵が強すぎるのなら、弱らせる方法を考えるのは兵法として当然。デバフを掛けるのは立派な選択肢だ。
ギャスパーの力を利用しているのなら、ある程度の停止能力は使える。それをあえて減速という形で発動させることで、停止できなくても遅くなるように仕向けた。そして譲渡の力を応用して、俺達に自分と同じように停止の影響を受けさせないようにする。
「難易度は高いから人数は少ないけど、少数精鋭ならこういう事もできるの。どうかしら？」
自慢げな雰囲気に、俺は小さく笑ってしまう。
なんというか、妙な符号すらあるからなぁ。
そう思いながら、俺も残神を組み立てる。
「いい感じです！　と、言うわけでデバフ第二段！」
さあ、ここから一気に仕留めて見せる！
「残創（コスモス・メイク）、大公呪（マギステル・アガレス）砕魔術（キラー）っ！」
ここで、決める！

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

その猛攻の中、成田春奈は突貫する。
和地が組み上げた残創、大公呪い砕魔術の機能は、アガレス家に対する魔の呪いを組み上げることだ。
禁手との連携により、ヴィール・アガレス・サタンを打倒する。ただその為の組み合わせといって過言ではない。
そして、そんな彼に助けで自分は更なる進化を遂げた。
誰にとっても想定外。
この力をもって、ヴィールを倒す。その決意をもって、成田春奈は突貫する。
そしてそれに並び立つように、サイラオーグ・バアルは拳を握り締める。
その二人の猛攻を弾き飛ばし、ヴィール・アガレス・サタンは吠える。
「どうした！　冥界の未来を、その程度で担えると思っているのか！」
振るう拳は減速を受けてなお速い。そして、当然だがそれに伴って重い。
その想いは強く、磨き上げた技術は卓越している。そしてそれらの相乗効果として、ヴィール・アガレス・サタンは強者となっている。
もはや目の前の男は、超越者の域に届いている。
魔王クラスとされるビィディゼ・アバドンを打倒したサイラオーグであろうと、一歩届かない。
覇をもってしてなお、ヴィール・アガレス・サタンの力は絶大。むしろ食らいつけていることこそが、サイラオーグ・バアルの強さを物語っている。
だから、こそ―

「なら、私も抱えればいいだけでしょう!!」
―それを補うのは自分がやるべきことだろう。
決意と共に、成田春奈は更に加速度的に掴み取っていく。
炎をの密度を、速度を、火力を上げる。その決意をもってして、戦闘を一気に追随させる。
「貴方を超えて、倒して、凌駕して！　私は貴方に、恩を返すっ！」
血を吐きながら、しかし決して諦めない。
そしてその決意をに呼応するように、サイラオーグは一歩前に出る。
「よく吠えた、成田春奈！」
拳と拳をぶつけ合わせ、強引に弾き飛ばす。
それで生まれた揺らぎをつき、成田春奈とサイラオーグ・バアルはヴィールに対して攻勢を仕掛けていく。
「そうよ、サイラオーグ！　私達は私達自身でやっていける！」
「それを私達が成し遂げてこそ、冥界の未来は明るくなるでしょう！」
「王の駒も無碍にはしない、使い方が違うだけですしね！」
リアスが。ソーナが。シーグヴァイラが。
その援護により、二人の突貫を援護する。
「併せてください、サイラオーグ様！　ヴィール様に、希望はあると示す為に！」
「いいだろう、俺達が冥界を富ませると、ここで奴に証明するっ!!」
踏み出し、殴り、焼き、叩きのめす。
連続攻撃がヴィールとの闘いで天秤を傾けていくが、しかしそれは微々たる速度。そしてそれはどんどん遅くなっていく。
これをもってしても、ヴィール・アガレス・サタンは解析し統合し最適化していく。その動きは、この状況においても変わらない。
「よく吠えた！　ならば超えて見せるがいい……超えさせてやる気はないがなぁっ！」
その踏み込みと共に、一瞬だがヴィールは二人を押し返す。
同時に魔力を大量に生成し、更に動きが加速した。
「……停止現象を、弾き飛ばした!?」

「何を驚く、俺はアガレスの悪魔だぞ！」
驚愕するリアスを一括し、ヴィールは拳を握り締める。
アガレス家は逃亡者を戻すとされている。現代ではそのネットワークを利用しているが、伝承の理由はアガレスが時間に干渉する特性を持っていることに由来する。
シーグヴァイラも結界を展開することである程度の干渉ができる。ならば、単純な性能ならシーグヴァイラを超えるヴィールにできない道理がない。
この一瞬で、ついにヴィールは決定的な反撃の大勢に到達した。
「超えて見せろ……できぬのなら、そのまま死―」

「―なせるわけがないだろうっ！」
『ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ！』

その瞬間、放たれそうになった魔力が撃ち抜かれ、ヴィールを砲撃が打ち据える。
『パラディンスレイヤーブラスト！』
対ヴィールに特化した亜種禁手。その状態で放つパラディンドッグの砲撃が、一瞬の隙を作り上げる。
「……やっちまえっ！」
「応っ！」
その声に、サイラオーグはドライバーを起動させる。
『ＭＯＮＡＲＣＨ』
鳴り響くアビリティに合わせるように、サイラオーグの拳に絶大な力が籠る。

同時に、成田春奈も足に力を籠める。
「……掴んだ」
その言葉と共に、燃え上がる焔は収束される。
「焔技・赤熱」
その焔に合わせるように、サイラオーグも一歩を踏み込む。
『キングブレイカー！』
その瞬間、二つの攻撃が一気に叩き込まれる。
だが瞬時に、ヴィールの復帰は間に合った。
「……ぬぅおおおおおおおおおっ！」
吠えるヴィールは全力で受け止め、そして弾き返さんとする。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
競り合う力は、競り合うがゆえに最適化も解析ももはや意味をなさない。
ただ双方の力によりぶつかり合い。その力量は拮抗し―
「悪いが、春っちを支えるって決めてるんでな」
『ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ！』
―その拮抗を、青が崩す。
踏み込みと突貫は一瞬。誰もが反応できない最適のタイミング。
その間隙を、ゾーンに到達した九成和地はすり抜ける。
「決めるぜ、春っち」
「……うん、ありがと」
小さな言葉を区切りとして、九成和地は一撃を叩き込む。
「これで終わりだ」
『パラディンブラストフィーバー！』

そして、一つの戦いは決着する。

黙示覚醒編　第四十二話　チェックメイト

和地Ｓｉｄｅ

……誰もが息をのみ、無言になる。
そんな中、ヴィールは小さく息を吐いた。
「ここまでか。なるほど、俺もこの程度という事か」
そう告げ、ヴィールは素早く通信用の魔法陣を繋げる。
「冥革連合全員に告げる」
声が響き渡り、誰もに聞こえるようにヴィールの遺言が響き渡る。
「俺はじき死ぬ。この戦いは、大将首が取られた以上敗北だ」
そう前置きし、ヴィールは一呼吸を置いた。
「禍の団は即座に撤退せよ。その後どう動くかはそちらの裁量に任せるが、同盟を結んだ者として負け戦で死なせないことで礼儀とさせてもらう」
そう、禍の団に対して最低限の義理を果たす。
「冥革連合はまずその支援に徹し、その後はお前達自身の意思で冥界の未来に貢献する道を進め」
目を伏せ、ヴィールは部下にそう告げる。
「投降して贖罪し、冥界の秩序に貢献するもよし。今までとは別の手段で冥界の富国強兵を試みるもよし。あえて禍の団となり、外敵という刺激物として冥界を高めていくこともよし」
その可能性を提示したうえで、ヴィールはしかし首を横に振った。
「だが、殉死は禁ずる。俺に対する敬意を持つというのならば、俺に対して忠義があるというのならば、命を散らすのは俺の為でなく冥界の為に使え」
そして、ヴィールは息を吸い込み。
「今まで、俺を支えてくれたことに感謝する。……無駄死には、する

なっ!!」
　その言葉と共に、ヴィールは通信を切る。
　そのうえで、真っ直ぐにサイラオーグを見据えた。
「俺を否定して得た勝利だ。未来に繋げろ」
「当然だ。冥界の未来を阻む者は、この拳で打ち砕く」
　その言葉をもって、二人はそれで納得したらしい。
　サイラオーグ・バアルは無言で踵を返し、邪龍達との戦闘を開始する。
　そのうえで、ヴィールは春っちに視線を向けた。
「強くなったな。ああ、死ぬ前にいいものが見れた」
　その表情は笑みであり、心からのものだと俺でも分かる。
「……ヴィール様……っ」
　涙を浮かべながらも、春っちは真っ直ぐにヴィールの目を見る。
「約束……します……私は、貴方に恥じない眷属でい続けます……っ」
「ああ。期待しているぞ」
「ヴィール様っ!?」
　そしてそこに、血まみれになった双竜健也が駆けつける。
　鎧の破損から見て、ヴィールが致命傷を受けたと知って被弾を無視して駆けつけたらしい。カズヒねぇもいたってのに、よく抜けれたな。
「健也か。……通信の通りだ、殉死はするな」
「……ヴィール様、僕は貴方がいなければ……生きていることに意味など……」
　言葉を継げなくなっている健也に、ヴィールは小さく苦笑した。
「……まったく。なら、お前には特命を下す」
　そう告げ、ヴィールはふらつきながらも背筋を伸ばす。
「俺を倒した者達が、腑抜けぬよう目を光らせろ。そして、お前自身が胸を張れる生き方を探し、見つけたのなら全うしろ。……いいな？」
「っ！　……はっ！　全身全霊にかけてっ!!」
　その返事を待ったうえで、ヴィールの体から力が抜けていく。
　間違いなく死ぬ。ただその前に、何故か俺の方に振り向いた。

「……そうだな。跡を濁すつもりはないが、餞別をくれてやろう」
「何を―ッ!?」
本能的に、俺は迎撃の動きをとる。
だが、それをかいくぐったヴィールは俺に体当たり。
その瞬間、俺は跳ね飛ばすより早く激痛を感じた。
おい待て。全身から激痛が走って……いや違う。
これは体が痛いだけじゃない、魂までもが痛い。
「お前、何を……」
「言っただろう、餞別だ」
あっけにとられる周りを置いて、ヴィールは命が潰えるその瞬間にそう笑う。
「春奈を支え続け、見事もらい受けた者に手向けをしてやった……。……なに、それは……そういうのに適している。……それと、与えてもいるからな」
……あ～、そういう事。
いやでもこれ、割とガチで……意識が……

カズヒＳｉｄｅ

「ちょ、和地っ!?」
崩れ落ちる和地を抱きとめて、私は思わず絶叫する。
いやいやいやいや、ちょっと待って？
この流れでそれはまずいでしょう。っていうかヴィールは何をした。

こんな形で余計な最後っ屁をするとは思えない。それに負傷も見当たらないし。
「え、ちょ和っちぃいいいっ!? ヴィール様ぁあああああっ!?」
あと春奈は失神した和地と死んだヴィールをを交互に見てパニック状態だ。
そりゃ主と別れをする流れで、その主が死ぬ直前に愛する男に何かをした。更に男が気絶すればこうもなるでしょう。ヴィールの奴、最後の力を振り絞ったらしく永眠してるし。
もういろんな意味で涙を浮かべているわね。後ろの双竜健也もちょっと引いているし。ヴィール・アガレス・サタン。墓に嫌がらせでもしてやりたくなるわ。
「し、ししししししし師匠!? こ、これって和っち大丈夫なの!? ヴィール様がなんかごめんなさいいいいいいいいっ!」
「落ち着きなさい! と、とりあえず脈と呼吸は……ちょっと心配になるわね」
ダメだ、フォローしたくてもできない。
脈は荒いし呼吸も細い。死にはしなさそうだけれど、かなり負担がかかっている様子だわ。
「と、とりあえず回復をするわ!」
慌てて駆けつけてきてくれたリアス部長が回復を掛けるけど、同時に急に肩を震わせた。
「……ああ、そういう事ね」
「「どういうこと!?」」
思わず春奈と一緒に叫ぶけど、そこに双竜健也が覗き込んで、何かに納得するように頷いた。
「ああ、なるほど。……ヴィール様も粋な計らいをしたものですね」
「そうね。ちょっととんでもないことをしてくれたわね」
苦笑する健也とため息をつくリアス部長。
え、えっと何があったのかしら。
困惑していると、リアス部長は苦笑いを浮かべていた。
「単純にまとめると、ヴィールは和地に聖血を継承させたのよ、強引

に」
「あと、禁手も使っているね。つまり二つの神聖血脈が使えることになるのかな？」
……。
ああ、なるほど。
つまるところ、餞別として神滅具である鮮血の聖別洗礼及び、別個で神聖血脈をプレゼントしたと。
鮮血の聖別洗礼が主を渡り歩く系の神器だからこそできる裏技ね。おそらくヴィールの精神力で、聖別洗礼の方を和地に合わせるようにしている可能性があるわ。あいつならやれるという嫌な信頼があるわ。
「……いやホント、ヴィール様がごめんなさい、師匠」
「まぁ、プラスにはなるでしょう。謝罪は和地に直接言ってあげて」
とはいえ、すぐにでも神の子（グリゴリ）を見張る者（グリゴリ）の研究施設に連れて行った方がいいでしょうけど。
流石に和地はここでリタイアね。まぁ、ヴィールを討ち取ったのだから十分すぎる手柄かしら。
……気づくと、周囲には冥革連合の上級悪魔達が結構な人数揃っていた。
「心配するな、悪祓銀弾（シルバーレット）。我々は投降に来た」
そう一人が告げると、静かに力を抜いて座り込む。
「我々は煮るなり焼くなり好きにしろ。眷属達も冥界の法にのっとるのなら何も言わない」
「王駒祭壇（ムロドーミーユ）の場所も教えよう。最も、別の道を選んだ者達が確保するかもしれんが」
「ただ、冥革連合の領土に住まう民には温情を求めたい」
次々にそう言うが、そんなことを言われても困る。
「それはミカエル様達や現魔王の方々に言って頂戴」
私はあくまで現場の担当だ。裁量はあくまで限定的であり、そんなことまでカバーできない。
とはいえ、だ。

「まぁ、そこは大丈夫でしょうね。そうでしょう、部長」
「ええ、お兄様達に限ってそのような蛮行はしないと、私が宣言するわ」
とまぁ、実の妹が兄である王を保証してくれたのだ。相手が馬鹿なことをしない限りは大丈夫だろう。
大王派に関しても、当面は政治的に魔王派には勝てないことは間違いない。フロンズは懸念事項だが、ここでバカをやる奴なら逆に安心できる手合い。つまるところ問題はない。
あとはこいつらが余計なことをしなければいい。それで十分完結する。
……さて、それじゃぁあとはということね。
「さて、和地を安全な場所に送ってコイツらを移送させたら、アポプスね」
「そうね。私もその辺りで動いた方がいいのかしら？」
お互いにそう思ったその時だ。
『……全軍、指定した範囲から全力で後退しろ！　可能な限りトライヘキサから距離をとれ！』
瞬間的に、通信越しにノア・ベリアルの緊張した声が響き渡る。
リアス部長が怪訝な表情で問い質そうとしたその時だった。
『対トライヘキサは最終段階に入った！　魔王様方、とんでもない事しやがったぞ!!　あとグレイフィア殿と赤龍帝が意識不明だから、場所を伝えるから近くの奴が回収しろ！』
「「なんですって!?」」
思わず部長と一緒に目を見開く。
その二人が同じ地点で気絶とか、いったい何が……っ！

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「……ふ、ふふふ……ふはははははっ！」
「あらあら、私達のトップは凄いテンションね」
「それはそうだろう、イシロ。博打は大勝ちだからな」
「アルケードとしては残念かな？　ゼウスも巻き込まれているようだしな」
「前向きに捉えるさ、アルバート。オリュンポスを潰せば奴はとても苦しむだろう。まずはそこからだ」

「……そう、これでチェックメイトと言っていい。ここからは完全に僕達のターン」

「涙嘆地獄（バッドエンド）はここからさ。……そう、ここからが、始まりだ！」

黙示覚醒編　幕間　大惨事変態大戦

祐斗Ｓｉｄｅ

僕は駒王学園高等部の学食で、少し黄昏ていた。
普段ならお弁当も作るんだけど、ここ最近はそんな気分にならなくてね。そういう事で、今日は珍しく学食にしている。
そこでスパゲッティパスタは厳密には雑な区分になるので、今回はあえて細かくしておりますを食べていると、カレーライスとサラダをお盆にのせたカズヒが前の席に立っていた。
「ここ、いいかしら？」
「ああ、構わないよ」
短く言葉を交わすと、僕らは昼食を食べながら会話を始める。
「九成君達、調子の方は良くなっているみたいで安心だね」
「ええ。リーネスやオーフィスには改めてお礼を言っておかないと」
アポプスを打倒する為に、イッセー君は龍神化に踏み切った。
ヴィール・アガレスを打倒した九成君は、ヴィールから鮮血の聖別洗礼（パプテマス・ブラッド）を植え付けられた。
結果として二人とも、未だ意識が戻っていない。一応それぞれ、オーフィスやリーネスがサポートしてくれたおかげで安定しているけどね。
二人とも、ここ最近昏睡状態になることが多すぎるね。真剣にお祓いを勧めたいけど、神すら打倒できるだろう二人がお祓いに行っても相手の神が困りそうだ。
それに、どうにかできる神も少ないだろう。
……対トライヘキサに対して、サーゼクス様達は最終手段を切った。
それは隔離結界領域。ロスヴァイセさんが到達した、トライヘキサ

の封印を利用した結界だ。
ただ、そこには大きな問題がある。
それは、トライヘキサが復活しないようにする為の最終手段。それはある意味で必要だけれど、だからこそ失うものも多かった。
それは、各勢力の実力者達が共に封印されること。
推定計算では一万年。それだけの時間をかけ、封印内部の者達がトライヘキサを滅ぼす。それこそが、対トライヘキサに対する結論だった。
悪魔側からは、アジュカ様を除く現魔王様が、女王（クイーン）以外の眷属を連れた。堕天使側はアザゼル先生だけだそうだが、切り札の類を持ち込んだらしい。天界も、ガブリエル様を除いた四大天使の方々が、Ａ（エース）を除いた御使（ブレイブ・エンジェル）いを連れて向かった。
神話勢力も、名うての神々が使い手を引き連れて封印に参加したそうだ。アースガルドやオリュンポスは、オーディン様やゼウス様といった主神が参加したらしい。中にはトール神や回復したばかりのポセイドン神もおり、主神の座すら後進に譲ったらしい。
インド神話からも、三大神からシヴァ神を除いた二名が参加。他の神話体系からも、必ずしも主神とは言わないけど、相当の神仏が参加したらしい。
これだけの神仏魔王が参加してなお、計算で一万年はかかるとされている。グレートレッドの力を借りるという手段もあるだろうけど、隔離結界領域以外で戦えば、余波で世界が荒廃しかねない。
今僕達は、戦後処理などに動いている。ただし全員が長い間いないのもあれだということで、使い魔に誤魔化してもらいつつ、数人単位で入れ替わりをして対応している形だ。僕がお弁当を作ってないのも、そういったことで余裕がないからだ。
「……春奈から聞いたけれど、冥革連合は五割強が投降したそうよ」
「つまり四割強は別の手段を模索していることか。少し不安だね」
とはいえ、禍の団も大きな被害を受けている。冥革連合残党が禍の団との同盟を継続しても、当面は活動が細くなることは間違いない。
なにせ、象徴たるリリスと首魁たるリゼヴィム、そして強大化の根

幹だった聖杯の全てを彼らは失っている。
絶大な力を持つリリスは僕達Ｄ×Ｄが保護に近い監視をしている。カリスマ性と扇動の才覚を持つリゼヴィムがいなくなった以上、禍の団は戦力の流出が避けられない。持ち直そうにも大きな力となっていた聖杯は奪取された。はっきり言って、禍の団は失うものが多すぎたのだ。トライヘキサも隔離結界領域にいては、心身に大打撃を受けているようなものだ。
もちろん、疾風殺戮・ｃｏｍやミザリ一派は無視できないけどね。だけど間違いなく弱体化は免れず、即座の大規模作戦はないと思われる。
冥革連合も半分近くが投降し、残りも全員が禍の団に残るわけではないだろう。盟主であるヴィールも失った以上、彼らも当面は大規模な活動をとることは不可能だろう。
失ったものは大きい。だけど、だからこそ僕らは繋げていかなくてはならない。そして敵もまた大きく失っている。
僕らが何とかしなくてどうするんだって話だよね。
「……そういえば、国連からＤ×Ｄに協力要請があったらしいよ？」
「そうなの？　私はまだ聞いてないのだけれど」
僕が思い出した話に、カズヒは少しいぶかしげな表情を浮かべている。
まぁ、それは仕方ないだろうね。
「カズヒの場合は、組織的な情報経由があるだろうしね。これは朱乃さんが親族経由で聞いた話だから、僕達に直接来るにはちょっとかかると思うよ」
「なるほど。つまり五大宗家も動くという事ね」
そういうこと。
……そして、ある意味で更に頭が痛い。
なんというか思い出したら頭が痛くなってきた。
カズヒがそれにいぶかしげな表情を浮かべるけど、気づかいさせるわけにはいかないだろう。
だから僕は告げる。

「内容は、大欲情教団の殲滅作戦だよ」
「……なるほど。積み重ねてしまった経験を頼りたいと」
天井を見上げて頭痛を堪えるカズヒ。
とはいえまったくだね。現実問題僕達は、大欲情教団を相手に何度も戦う羽目になった。禍の団の次に僕達を苦しめた強敵といえるだろう。胃と頭が痛い。
ただ、彼らはかなり厄介ではあるのだ。
神滅具を宿した者が象徴であったことと、イッセー君のように変態性を力に変えれる者がいたことが原因なのだろう。彼らはそこから逆算的に、神器という異能を解析してしまった。科学技術がここ数世紀でどんどん発展していったこともあるけれど、神の子を見張る者を追い抜いたのだ。
なまじ神器という者に対する事前知識が疎かったのが、いい方向にかみ合ってしまった。千年以上神器に触れてきた神の子を見張る者ら異形と違い、彼らには「人に宿る異能」という固定観念が薄い。
だからこそ、再現する為に乗り物サイズに大型化することをいとわない。武器ではなく兵器として再現することもいとわない。そして固定観念がないから、人型兵器という形に到達してしまった。……独自に。
異形に通用する人型機動兵器。多数の人員で動かす飛行艦艇。車両サイズで都市規模に影響を与える、変態化装置。どれもが世界的に悪影響を与えてしまっている。
下手につつくとややこしくなると、禍の団も積極的介入はしない方針だった。そこに異形の知識がないことが重なり、彼らは異能を堂々と人間世界で使っている。
不意打ちで地球の都市を変態の楽園にしようと試みたりで、はっきり言ってかなりの脅威だ。倒せるなら倒したいし、人間世界で動くから人間側の国家も動くだろうとは思っている。
そして少し前だ。カズヒやゼノヴィアが偶然取り押さえた構成員が、位置を教えられずに連れてこられた本部の位置を、電波時計をきっかけに悟ってしまった。

位置は日本の可能性が非常に大きい。この事実に、クリフォトの相手に忙しい異形ではなく、国連加盟国が中心になって動いていた。具体的には、秘密裏に連合部隊を用意しているほどだ。
「偵察部隊によって位置を把握することはできたらしい。気づかれないうちに攻撃を仕掛けるから、その際はＤ×Ｄからアドバイザーを派遣してほしいらしい。五大宗家から提案されるほどだから、余程のことだろうね」
「世界的に暴れている組織だものね。その本部が日本にあるとか、絶対うるさい奴が出てくるわよ」
僕らは凄く遠い目になった……その時だった。
「おい、テレビの様子が変だぞ!?」
「ちゃ、チャンネル……あれ、どのチャンネルも変だぞ!?」
……僕とカズヒは凍り付いた。
視界の中で、カズヒがぎこちなく深呼吸をしている。
「……そう、まだだ……っ！」
覚醒する必要があるほどの事態だよね!?
「いや、まさか。まさかだよね？」
「祐斗、万が一があるから覚悟しておきなさい」
僕は否定したかったけど、それを言われると反論に困る。
いや、でもこれは—
『……いやらしさを、宿す者達よ』
—あ、これ完璧に変態案件だ。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

『世界の美徳たる淫らを求める全てのものよ』
『我ら大欲情教団は、世界全てにそれを広めることを宣言する』
『そしてそれを成すのならば、まずは我らが本部がある国にするべきだ』
『そう、最初にいやらしくするべきは、日本国』
『故に我らは今ここに、世界淫乱化計画を開始する』
『誰もが乱○にいそしみ、誰もが望めば獣○を楽しめ、誰もが性癖と共にあれる世界』
『その素晴らしさを、我らはこれより日本の象徴に、その血族達に広めたもう』
『故に、その第一歩は東京都心より披露目させてもらう！』
『『『

力を挙げて迎撃しており、五大宗家や都内在住の異形異能も本気で支援をしている。
幸い皇族までターゲットになったことで、日本がガチの本気になっている。中には市民が義勇兵になるほどで、もはや混戦状態。こっちも面倒なことは多いけれど、情勢が混沌と化したことで教団の連中も侵攻が止められているわ。
それにしても、あの連中は……っ！
「日美っちヤバイ！　国連は動けない!!」
そこに更なるやばい情報をもって、ディーレンが突撃してくる。
「なんでよディーレン!?　連合部隊で仕掛ける準備ができてたんじゃないの!?」
このタイミングで何のんきなことしてんだと言いたいわね。
ただディーレンは、凄い顔色で凄く汗をかいている。
そして一度深呼吸をしてから―
「常任理事国を中心にカウンターを喰らった。艦隊は膠着状態だ」
―凄まじくとんでもないことを言ってきたわね。
思わず絶句する私とリアス部長の前で、ディーレンは絶望の表情まで浮かべている。
「実はフランスが混乱状態で動きが滞ってたんだが、その原因でもある行方不明になった戦略原子力潜水艦が、実は教団に制圧されていて艦隊の前に浮上した」
……また凄いのをぶっこんで来たわね。
「そして呼応するように制圧された中国の空母と英国の攻撃原子力潜水艦、更に世界各国の駆逐艦や通常動力型潜水艦が一斉に行動を開始。連合艦隊は混乱から立て直る前に変態飛行艦艇を向けられて膠着状態だ」
……うわぁ。
そのレベルが構成員とか、大欲情教団を舐めていたわ。それはもう、とっくの昔に読まれているも同然だったわね。
そして更に、ディーレンはへたり込みそうになりながら最悪を告げてくる。

「更に最悪なことに、ロシアと米国ではそれぞれクレムリンとホワイトハウスが教団に占拠された。絶妙に異形との接触がない奴らがかなり染まっていたらしく、米国に至っては大統領の娘さんがメンバーらしい」
じょ、常任理事国が揃いも揃ってカウンター喰らった。それも割とやばいレベルで。アメリカとロシアに至っては致命傷一歩手前レベル……っ。
これは、酷い。
「合衆国大統領はショックで幼児退行を起こしており、ロシアもトップ陣営の七割が身動きをとれない状態だ。中国、英国、仏国も、こんな事態だから運営陣が完全に混乱状態になっている」
聞かされたディーレンに心の底から同情するわね。
「できの悪い悪夢にも、ほどがあるわ……っ」
リアス部長も膝をつきそうになっているわ。
でもまだだ！　まだまだまだまだまだまだ……まだだっ！
私は気合を入れ直し、強引に覚醒して持ち直す。
「となればもはや、私達で攻略作戦をするしかないわね。攻撃できる部隊はいるの!?」
私は気を取り直してそう聞くと、ディーレンはすぐに頷いてくれた。
「フロンズさんところが艦隊派遣してくれるらしい。ただ、流石にもうちょっと時間がかかるとか」
「それができ次第、総力を挙げて侵攻するしかないわね」
リアス部長はため息をつきながらそう言い、そして私達に振り返る。
「皆！　敵は大欲情教団。何度も私達を苦しめた敵だけれど、それが世界を侵略するのなら選択肢は一つよ」
強い意志を取り戻し、胃と頭を襲う激痛を堪えながら、リアス部長は宣言する。
「今度こそ滅ぼしてあげなさい！　世界を、そして私達を苦しめた、落

とし前をつけさせるわよ!!」
『『『『『『『『『はいっ！』』』』』』』』』

そして、この戦いはもう一つの決戦に繋がっていく。
これは、私の宿命。その一つに決着をつける物語。
私にとっての勝利を、もう一つの意味で見出す物語だ。

最終章　旧済銀神編
旧済銀神編　第一話　その言葉は、答えだった。

カズヒＳｉｄｅ

「まぁあああああああだぁあああああああ

ダーティジョブや内戦時代の経験を活かし、一瞬のスキをついて掻い潜って本拠地を狙う。
この事態はとにかく短期決戦でつけないとまずい。時間を掛ければ最悪の場合、皇族に被害が出る。
それだけは避けなくてはならない為、とにかく後先を考えない奇襲作戦が決行された。その中核戦力だD×Dだ。
五大宗家や東京都心防衛で、戦力の八割が割かれている。日本神話の神々や、隔離結界領域に主力が行って体勢を立て直すこともあって動きが遅れている。
その為、比較的動きやすいD×D及び、艦隊の半分を常に動けるようにしているフロンズ派に白羽の矢が立ったわけだ。
フロンズが持つこの辺りの手腕は少し警戒だが、奴もこの状況下で馬鹿な真似はしないだろう。するのならもっと楽だしね。
だからこそ、陽動はここで第二段。
『……全艦突撃ぃ！　一気に挟み撃ちだぁっ！』
そのまま隔壁を突き破るのは、サンタマリア級突撃強襲ユニット装着艦艇。
巨大なドリルを持つあの艦艇は、こういう時凄まじく便利といえる。デカいから目立つしね。
これに気を取られている間に、私は全力をもって中心部の神殿に駆け出した。
……途中、「頑張れ我が子の初体験～近親相○のススメ～」やら「ペットとエッチなハッピーライフ　」だの「同性S○Xは異性愛者にこそ。異性愛者が送る、だからこそ楽しめる同性同士の絆」などといった狂気の本が満載の本屋があったが、注意を惹きたくないので我慢して破壊しないでおく。五回ほど覚醒する羽目になったけどね。
そして神殿に到着した私だけど、警備があまりに薄い。
……迎え撃つ体制？　それとも罠？
いえ、今はそれを警戒している余裕などない。罠ならそれ事破壊するだけね。
そう決意し、私は一歩を踏み出した。

慎重に進みながら、私は大広間を抜けて祭壇の間と思われる地点に到達する。
その場には、一人の人物が待ち構えていた。
中性的な容姿のローブを羽織った人物。そしてよく見れば、かなり特殊なタイプだと分かる。
細身でありながら胸元が膨らんでおり、上半身を見れば女だとすぐ分かる。だが同時に股の部分もまた膨らんでおり、男としていわゆるデカい手合いだとも分かる。
いわゆるインターセックスとかいうやつね。そして同時に、纏うオーラに聖なる気配が、奴の正体を理解させる。
「あんたが、大欲情教団の首魁かしら？」
「その通り。大欲情教団教祖、琉生佐一（りゅうきさいち）という」
静かにそう答えるそいつは、微笑みながら両手を広げる。
「待っていたぞ、ドウマヒミコよ」
その言葉に、私は戦慄すら覚える。
カズヒ・シチャースチエでなく、道間日美子の名持って告げる。その裏事情を把握している者は、異形や異能に関与する者だけのはずだ。
「だが同時に、これだけの淫らなる素質を秘めた者達がいるとは思っていなかった。どのような性癖を力としたのかは知らぬが、世界は淫らに満ちているな」
……だが、この反応だと異形や異能とは縁がない様子だ。何かが凄まじい違和感を覚えている。
「しかし、名前の響きから日本の者かと思ったら違うようだな。見る限り西洋系、それもロシア辺りか？」
「外れてはないと言っておくわ。……そして、なんで私の名前を知っているの？」

何か強大な違和感を覚える中、琉生は小さく微笑んだ。
「我らが性託が告げたのだ。「あにのこをみごもったどうまひみこがけっせんのときにきたる」とな」
どこから突っ込めばいい。
深く説明を聞きたくない。全力で聞かなかったことにしたい。だが、聞かないわけにもいかないだろうこれ。
心の底からため息をつきたくなっているが、琉生はそれに気づいたのか、少し怪訝な様子を見せる。
「ふむ？　敵対している者ではあるが、調子の悪い者を派遣するのはどうなのだろうか？　鞍替えするなら快く受け入れるが？」
気遣いが本気なのが複雑ね。
「いいえ、これは今の精神的負担のものよ。……で、護衛はいないの？」
奴が教祖であるのなら、護衛がいて当然だろう。人間組織はそういうものだ。
情報が確かなら、奴は現世聖域の墓標（カテドラル・グレイブ）を持っている。そうとは知らないとはいえ、あれだけの人工神器を作っているのなら、その発端である聖墓もある程度は使えているだろう。禁手に到達している可能性だってある。
とはいえ、心理的に一人にするなど考えづらい。警戒心が高まるわね。
だが、琉生は首を横に振る。
「既に外周を固めている。ただ、貴殿と話がしたくてあえて人払いをしているのだ」
その理解できない説明をしたうえで、琉生は真剣な眼差しを私に向ける。
「一つ伺いたいことがあるのだ。……実の兄とのまぐわいは、素晴らしかったか？」
その質問に、私は一瞬だけ固まるのを自覚した。
ただ、挑発の意図は感じない。
「私は様々な性癖を認めているが、自分自身で言うとシスコンでな。

姉上とは精通した日に交わる約束をしていたが、その前に急な病で亡くなってしまった」
目を伏せて悲しみを見せる琉生は、そのうえで真っ直ぐな視線を向ける。
……色々な意味で色々な部分が痛くなるような発言ではあるが、あまりに真剣すぎて何も言えないまま、彼は私を真っ直ぐ見据えてくる。
「だからこそ、我らとは異なる箇所で実の兄弟と交わることができたお主に聞きたいのだ。それは、素晴らしかったか？」
その言葉に、悪意はない。
むしろできる限り誠実に、その問いを向けていることが分かった。
だからこそ、私は―
「少なくとも、その時私は勝利を感じていたわ」
―その問にだけは、誠実に答えると決意した。
真っ直ぐに目を見る。臨戦態勢を解除する。そして向き直り、私は告げる。
「でも、それは間違いだった。全てを裏切り何もかもを踏みにじって、その結果勝利したのは誠にいだった」
そうだ。誠にいがあの場の勝者。失う事で勝利を得た誠にぃは、その勝利の為だけに生き続け、死んでなお繰り返す。
私はあの場において、敗北者だ。そもそも私にとっての勝利をはき違えていた。勝てるものも勝てない典型例だ。
ただ、それでも言えることはある。
それを、真摯な問いに真摯に告げよう。
「それでもその先で得たものがある。私の人生はその笑顔に賭けた誓いを果たす、その為に生きて死ぬと決めているの」
そう告げ、そして宣言する。
「だから、私はお前の敵だ。お前達の好きにさせてまで、私は生きる気なんて欠片もない。私はお前達から守るべきものを守って見せる」
そう告げ、そして私は構えをとる。
告げるべきことは告げた。これ以上は、必要ない。

琉生もそれは理解したのだろう。静かに周囲にオーラを滾らせる。
そして、そのうえで小さな微笑を向けられた。
「……礼を言おう。内容ではなく、怨敵とみなした者へ向ける真摯な態度に」
ええ、そしてこれで会話は終わり。
ここからは、容赦なく叩きのめす――

「なるほどな。アドリブで介入してみたが、思わぬ展開になっているな」

――その決意が定まった時、琉生の胸元から腕が突き出た。

旧済銀神編　第二話　明星戦乱

祐斗Ｓｉｄｅ

戦闘を繰り広げていた、その時だった。
突如として、僕達や大欲情教団を巻き込む形で砲撃が叩き込まれる。
この、粒子は！
「……サリュートＩ!?」
リアス部長が反応する通り、それはサリュートＩだ。それも、百機はある。
そして僕達が警戒するその時、更に別方向でいくつもの攻撃が放たれる。
あれは、ステラフレーム！
「ここに来て禍の団とは……っ」
思わずぼやくけど、そんな余裕もすぐになくなる。
更に出現するのは、パシパエ＝カイニスが生み出したフローズヴィトニル。
パシパエ＝カイニスは既にいないが、細胞を元にミザリが聖杯でクローン培養したという事だろう。少なくとも、どちらも数十は存在している。
そして、問題はそれだけじゃない。
地下都市の陰から、何かが起き上がっていく。
……その姿を見て、僕達は戦慄を覚えていた。
待て。いくら何でも、あれはどういうことだ？
「なん、だと？」
「そ、そんな……」

ゼノヴィアやギャスパー君も、一瞬気圧されてしまうのも無理はない。
そう。何故ならあれは―
「……超獣鬼(ジャバウォック)……っ!?」
息をのむルーシアさんの言葉がすべてを語っている。
あの巨体は間違いなく超獣鬼。魔獣創造が禁手に至ったことで、それも後先を考えない至り方をさせることで誕生した魔獣だ。
ルシファー眷属が総力を挙げてなお一進一退。グレートレッドの力があっても手古摺るレベル。かのディハウザー・ベリアルが眷属を引き連れてすら、足止めすら困難だった化け物だ。
「冗談だろ!? いや、イシロ・グラシャラボラスは魔獣創造(インシネレート・アンセム)持ってたけど、至れんのか!?」
「いやいやムズいって。だって……数が違いすぎじゃんか!」
アニル君に続くヒツギの言い分が正論だろう。
起き上がる超獣鬼は、見る限り六体だ。明らかに多すぎる。
シャルバがレオナルドを使って生み出した時、超獣鬼は一体だけ。それ以外は業獣鬼(バンダースナッチ)という格下だ。それも、合計で十三体。
どう考えても多すぎる。それも、更に業獣鬼と思われる魔獣が起き上がろうとしている。
おかしすぎる。異常すぎる。あり得ないにもほどがある。
「待ってくださいませ。これ、下手をするとトライヘキサよりまずくありませんの?」
ヒマリですら、顔を真っ青にしている。それほどの事態が起ころうとしている。
出現する敵達は、明らかに異常な数だ。
ステラフレームの数も、今までとは明らかに桁が違う。
どんどん出現して、もう三十は超えている。更にその出現はとどまるところを知らない。
「……ミザリが静観していたのは、この当てができていたからなの……っ」
戦慄しているリアス部長がそう呟く。

ありえない。トライヘキサは龍神クラスに匹敵する存在だ。それを滅ぼせるだろうこれだけの軍勢を、用意できるはずがない。
フロンズ・フィーニクス達ですらまだ不可能だ。いくら何でも禍の団が、それだけの用意をできるわけがない。
だが、目の前で動いている軍勢は明らかに異常な数だ。
悔しいが下がるしかない。今は体勢を立て直すしかない。
ただ、奥深くに向かっているカズヒは……っ！
「どうすんのよ!? だってまだ、カズヒが!?」
「だけど、ここで深入りする余裕は……っ」
南空さんもリーネスも動揺しているけど、これは―ッ!?

カズヒＳｉｄｅ

「……な……めるな……っ！」
その瞬間、琉生佐一は力を込めた。
直後部屋中が光ったと思った時、腕の持ち主が消えていた。
あの腕と気配、おそらくアルケード。
あいつ、アサシンのサーヴァントだったわね。だから奇襲が成立したと。
そしてその一撃は致命傷だ。琉生佐一はこのままなら、確実に死ぬ。
一瞬だが、このあっけない幕切れに同情心が湧いてくる。
「……ふ。幾人もの同志を追いかけるとは、覚悟していたがな」
その同情をかき消すように、琉生は泰然自若だった。
命の炎を凄まじい速度で消し飛ばしながら、琉生は力を込めてい

た。
「……全同志に次ぐ。思わぬ奇襲を受けた、私は……死ぬ」
そう、彼は静かに告げる。
「これより本拠地を放棄すると、共に……同志達を地下性都に分散転移させる。土地の繋がりも破る故、一時撤退し潜伏せよ。性なる祈りは、私の生死に関わらず消してはならぬ。……転移の繋がりを利用する故、守りを固めるのだ……っ」
あっぱれというべきかしらね。
いきなりの致命傷に、彼は動じずすぐに信徒達のことを考え、先を見据えた対応をしている。
これが、大欲情教団の教祖。それだけの格がこいつにはある。
私はそれを認め、彼に駆け寄ると魔術を駆ける。
「気休めだけと、鎮痛ぐらいはしてあげるわ。補佐もするから、ついでに私の仲間も避難させてくれるとありがたいわね」
「……礼を言おう。正、直……少し、不……安だ……った」
あいつらを逃がすのは癪だけれど、このままミザリに食い潰されるのは流石にね。それにオトメねぇ達を避難させてくれるというなら、それぐらいはするのが道理でしょう。
優先順位は、誠にいによるこの横やりに死者を出させないこと。
魔術で琉生を安定化させていると、琉生は力なく微笑んだ。
「こちらは、終……わった。そち……ら、の番だ」
「ええ、大雑把な調整はこちらでするわ」
できれば地下性都とかいう悪夢じみた場所を逆探知したかったけれど、そんな余裕はないわね。
すぐに魔術的に調整を行うが、間に合うかしら。
急いでことを進めている中、ちと命が消えていっている琉生は、こちらを見ると力なく微笑んだ。
「相容れぬ敵に……看取ら……れる。だが、悪くは、ないな」
「まぁ、異教とはいえこちらも信徒。最低限の鎮魂はしてもいいわ。……残党は容赦なく潰すけど」
まったく。本気で叩き潰すつもりが、初対面の相手と共同作業とは

ね。
　とはいえそれが私でよかったわ。他の連中なら、残党とやり会う時に手心を加えそうだもの。
　そのあたりは自然と割り切れる私だけど、万が一もあるから一つだけ伝えておこう。
「……ただ、この幕切れにしたことは謝るわ」
　そう、これはさすがに死に方として、ちょっと不満が出てくるだろう。
　そして、それを成したのは―
「あの男の主は、おそらく私の兄。血を分けた実の兄の成れの果てが、奴と契約して悲劇を広めようとしているの」
　―誠にいだ。
　そこだけは、罪悪感が湧いてしまう。
「私があんなことをしなければ、彼はあそこまで落ちなかった。あの悪鬼明星（ルシフェル）こそが、私の呪いが生み出した、私の……罪業」
　歯を食いしばったその時、そっと手が添えられる。
「もう、地下性都……とこの、地の繋が……りはない。最優先ですべきことだが……この加護は、繋げられん」
　そう告げる琉生は、私に強い視線を向ける。
「そ奴、が…お前の……罪だというな、ら、この地を……そのような悪、意に犯したこと、もお前の罪だ。……贖罪を……求めるが、先に、免罪を品で押し付けよう」
　その言葉と共に、私に流れ込む何かがある。
　その意味を悟って、私は流石に驚愕した。
「正気!?　私は絶対に、残党に会ったら潰すわよ!?」
「……分かっている。そ、の決意、目を……見れ、ば、分かる」
　なんてことないように返す琉生は、そのうえで小さく微笑んだ。
「……だが、お主になら託していい。こ、の身に……宿る無念を、果たしたことで無念を持つ者よ」
　その言葉ともに、私に聖なる加護が宿る。
　それと共に、琉生から最後の力が抜けていく。

「ほんの一時の真摯な対応。その言葉に対する敬意、同志達も笑いはせぬよ……」
「……ああ、もう！」
そのまま崩れ落ちるやつの体を、私は決意と共に抱き留めた！
「琉生佐一！　信徒として、筋を通す！　……何か願いがあるのなら言いなさい！」
まったく。碌でもないことを言わないことを祈るしかない。
だけど、ここでただ死ぬのを見据えるだけではいけないと、それだけはこの宿った力に対して顔向けできないと、そう思ってしまったから。
だから、せめて「信徒の元に体を」とかそんなことであると思い――
「名を知りたい。読みではない、お主の魂の名を」
――その言葉は意外であり、だからこそ答えは一つだった。
「かつて道間日美子だった悪祓銀弾（シルバーレット）。悪敵銀神（ノーデンス）の字持つ者、カズヒ・シチャースチエよ」
――ああ、それが私の真実だ。
「そうか、……礼をいう、カズヒ……よ……」
……ええ。
これには通すべき、筋がある。

祐斗Ｓｉｄｅ

空間転移現象に巻き込まれたらしい。
気づけば、僕達は山脈から少し離れたところに転移していた。
何故僕達まで転移されたのか分からない。大欲情教団の者達が避

難されていたと思っていたのだけれどね。
「……気を付けてください！　敵が来ます！」
小猫ちゃんがそれに気づき、すぐに何人かが姿を現す。
「おのれぇ！　偉大なる性都を汚し、教主様までもが！」
「かくなる上は、一人でも多く！」
涙を浮かべて武器を構えるは、鬼気迫る表情の大欲情教団の戦士達。
くっ！　この状況下でこの戦闘は―
「―双方静まりなさい！」
―その瞬間、震脚が地を震わした。
そしてカズヒが、骸となったローブ姿の中性的な人物を抱きかかえている。
「……っ」
「教主……様……っ」
崩れ落ちそうになる教団の者達に近づいたカズヒは、その骸を押し付ける。
「本当なら容赦なく叩き潰すけれど、そいつには負い目も恩義も生まれたわ。……さっさと連れて弔いなさい、次からは容赦なく叩き潰す」
「……その力は、そうか……それが教主様の遺志ならば……っ」
信徒たちは何かを察すると、その骸を丁重に抱えて下がる。
「あと、敵はついでで討ってあげるわ。こちらにとっても不倶戴天だもの」
「……いいだろう。教主様が力を託した者の言葉なれば」
涙を浮かべながら、彼らはカズヒに一礼すると去って行く。
正直状況は掴み切れないけれど、カズヒはため息をつくとこちらに振り返った。
「カズヒ、この状況はそういう事なのね？」
「ええ部長。まず間違いなく、誠にぃです」
小さく交わされる言葉に、僕達はそれぞれが覚悟を決めざるを得ない。

ミザリ・ルシファー。道間誠明。
彼が、このタイミングで動き出したという事か。
「誠明、あの……バカ」
「ついに、動いたのねぇ」
「……っ」
南空さんは泣きそうになり、リーネスは目を伏せ、オトメさんは俯いて何も言えなくなる。
そのうえで、カズヒは凛とした表情で儚さを感じさせる、矛盾した姿を見せていた。
僕らも思わず何も言えなくなる中、彼女は複雑な感情を押し込めた、強い決意の表情を浮かべる。
「まずは一時離脱。そのうえで対策を立てるしかないわ。……お願い、力を貸して」
これが、邪龍戦役を超える、ほんの短い大いなる災害。
明星戦乱。そう称されることになる戦いである。

旧済銀神編　第三話　銀の決意

和地Ｓｉｄｅ

夢を見ている。
そしてこの光景を、俺は知っている。
これは過去を見る夢だ。カズヒねぇがどうして悪祓銀弾となったのか。モデルバレットから救い出す為に通った道で、その過去を追体験している。
なんでこんなことを夢に見ているのか。答えは簡単だろう。
トライヘキサが復活している時に見た夢だ。おそらく、それが気になったんだ。
勝利とは、なんなのか。
それをつぶやいたカズヒねぇは、俺が見つけた答えを教えてほしいと、共有したいと言っていた。
何故か、それをあの時夢に見た。それはきっと、俺が向き合わねばならないことだろう。
瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻め。
俺とカズヒねぇの根幹。前世(かつて)の俺達が勝手に、だけどお互いに誓ったその決意。九成和地とカズヒ・シチャースチエの原点。
だが、勝利とは何なのか。その具体的な指標を、俺達は果たして持っているのか。持たずにそんなことが言えるのか。
きっと、俺はその言葉に本能的に悩んでいたんだろう。
おそらくだが、そろそろミザリとの決着をつけることになるだろう。
その戦いは、心技体全てのぶつかり合いになる。更に策もいくつも重ね合うだろうし、技術だって必要だ。
だからこそ、心において不備をなくすべきだろう。それが、俺達に

とっては勝利なんだ。
おそらくだが、ミザリは勝利について明確な指標を持っている。
俺はそれを、直感的に悟っている。だからこそ、無意識がそれを指摘している。その結果がこの夢だ。
……だからこそ、俺はこの夢を覚まさない。
向き合うべきだ。その上で、俺は俺の答え（勝利）を導き出さなくてはならない。
向き合おう。答えを掴もう。俺が、カズヒねぇに向き合う為に。
だからこそ、俺は夢へと向き直った。

祐斗Ｓｉｄｅ

ミザリ一派の強襲により、大欲情教団は本拠地と教主を失う大打撃を齎された。
作戦行動をとっていた者達は、教主の遺言もあって素早く撤退。ただし奪取した兵器群は持ち逃げした為、かなり危険な事態となっていた。
ただ、実際の状態はそんなレベルでは断じてない。
大欲情教団が日本の山間部に作り上げた地下性都は、神滅具である現世聖域（カテドラル・グレイブ）の墓標により、優れた霊地となっている。はっきり言って、京都に匹敵する霊的拠点だ。
更に出現した敵勢力は、明らかに異常な量といえる。
他の禍の団から派遣されただろう戦力も多いけど、それをはるかに上回る量を彼らは自前で用意していた。

特に警戒するべきは、超獣鬼（ジャバウォック）と業獣鬼（バンダースナッチ）。
各勢力の合同部隊やサンタマリア級の艦隊派遣でどうにかなった脅威。それが超獣鬼だけでも六体で、業獣鬼は六十六体。
これだけの軍勢が更に結界の基点となっているらしく、遠隔地からの大火力砲撃を神々が行ったけど弾き返されたらしい。サンタマリア級の砲撃戦艦ユニットによる一斉攻撃も同じようだ。
どうやら今回、防御に特化した魔獣として調整しているらしい。
更に量産型と思われるステラフレームが三桁。
何故か殆どは多種多様な攻撃をせず、オーラを纏っての打撃か砲撃に限定していたらしい。ただそれだけでも最上級悪魔クラスの出力であり、機械ゆえに判断の速さもあって、威力偵察を行った部隊に甚大な被害が出ているそうだ。
……それゆえに、作戦会議にリアス部長の護衛として参加した僕は、あまりに重い沈黙を味わっている。
「まったく。ヴィシュヌやブラフマー、それにサーゼクス・ルシファー達の意を汲んだ途端にこれとはね。流石の僕も胃が痛くなりそうだよ」
そう語る少年は、だが圧倒的な力を持つこの場に手最強の存在。
インドが誇る破壊神、シヴァ。単純な戦闘においてなら、オーディン様やゼウス様、超越者たるサーゼクス様でも一対一では敵わないだろう猛者だ。
今回作戦会議に参加してくださり、なんと作戦そのものにも参加してくださるらしい。
正直とても心強いが、それでも心細くなるほどに状況が危険だろう。
……それに、参加できる戦力もさほど多くない。
なにせ、隔離結界領域に各神話や勢力の精鋭が派遣されているからだ。一万年かけてトライヘキサを滅ぼすという作戦であり、またトライヘキサを封印している都合上、トライヘキサを滅ぼさずに解除するわけにはいかない。
つまり、残存勢力でミザリをどうにかするしかない。

「流石にこれは懸念事項が多すぎる。いくらこれだけの戦力があるとして、トライヘキサを放棄するというのはね」
そう懸念するシヴァ様は、だけど首を横に振る。
「だが、だからこそ可能な限り手早く挑み屠らねばならない。……動かせる戦力は総動員だ。幸い、アースガルズもオリュンポスも、須弥山も示し合わせてくれるらしいからね」
そう、この事態は幸か不幸か、全勢力による合同作戦に持ち込めるようになっている。
既に各地で、異形達による迎撃部隊が組織されている。
なまじトライヘキサの後にこれだけの大ごとを起こしたのが大きい。どの勢力も重要人物を失っていることが、逆に反動による抵抗意識に繋がっている。
……ただ同時に、僕は一抹の不安を覚えている。
それは、リアス部長も同じ様子だった。
「あのミザリが、こうなることを予期しないとは思えない……っ」
それは既に、首脳陣も悟っているだろうから指摘はしない。
それでも、リアス部長は呟いてしまっていた。
そう、ミザリ・ルシファーがこれだけのことを起こした。その事実が、奴をよく知る僕達の不安を煽っている。
寒気すら覚える。
ミザリ・ルシファーは破綻者だ。悲しみに美しさを見出し、それを追求する為だけに生きている。そして悲しむ対象に、自分すら入れているのが特に破綻している。
だが同時に、相応に準備を整える男だ。結果的に失敗しても悲しめるとはいえ、出来ることなら最大利益を欲している。それが、僅かな遊びやギャンブルを入れる為、行動予測や対処を難しくする要因となっている。
そんな彼が、「ただ戦力が激減している」だけで動くのか？
間違いなく、もう一手がある。それも、トライヘキサを失うという代償を補えるだけの価値がある物が。
もしかすると、トライヘキサを失うことそのものが過程に必須だっ

たのかもしれない。そんな予感すら覚えてしまう。
……だからこそ、遠慮なく全力で叩き潰す。
持ちうる全力を持たねば、奴は決して倒せない……っ！

カズヒＳｉｄｅ

私はシャワーを浴びながら、呼吸を整えていた。
強引に移植された聖墓は、決して私に完全適合したわけではない。
負荷は大きい。時間を掛ければ収まるだろうが、決して適合レベルは高くない。
それを気合と根性でごり押ししながら、私は鏡に視線を向ける。
……この女が、ここまでの事態を巻き起こすきっかけとなった。
カズヒ・シチャースチエが。道間日美子が。この女が、悪鬼明星（ルシフェル）という悪夢を世界に解き放った。
だからこそ、私に力があることを感謝しよう。
少なくとも、けじめをつける為に行動できる。己の業を背負う為の、挑戦ができる。自分の不始末を自分でどうにかする機会に望める。
ここで私が戦力外通告なんてされたら、私は一生立ち直れない。立ち直りたくもない。他の誰が認めても、私自身が認めることができない。
だからこそ、私は鏡越しの自分に向き合う。
「……行くわよ、馬鹿」
その言葉を、自分自身に告げる。

「愛する誠にいが、世界に悲劇を齎すことを止める。愛する和地達といることを、世界に容認してもらう」
その二つは、これぐらいのことをしないと決して認められないだろう。
世の中には最低限のケジメというものがある。その筋は通す。
そして、もっと最初の部分で私はいくしかない。
「尊ばれるべき正義を汚す、悪鬼明星（ルシフェル）は必ず止める」
悪祓銀弾（シルバーレット）の大前提は、決して変わっていないのだ。
かつての私に負けないような、悪逆非道の集団。それがかつての私を超える規模で、多くの嘆きを生むのなら。
私はそれを撃ち貫く。例えそれが星のように強大であろうと、決して見逃すことはない。
そう、そして何よりも—
「……瞼の裏の笑顔に誓った、勝利の誓いを果たしましょう」
—その誓いは、絶対に裏切らない。
シャワーを止め、タオルで水を拭き、身だしなみを整える。
シャワールームを出れば、そこにはリーネス達がいた。
「貴女の方は準備ができたわ。私達は、奥の手の準備を終えてから行くわねぇ？」
そう告げ、リーネスは私にある物を渡してくれる。
それをそっと握りしめ、私は小さく微笑んだ。
「ありがとう。まぁ、使うまでもなく倒すぐらいで行くけどね」
「……カズヒ」
そんな私に、オトメねぇは近づくとそっと抱きしめる。
その体が小さく震えていたのは、緊張でも恐怖でもない。
「ゴメンね。私がもっと強かったら、もっと賢く動けてたら、こんなことにはならなかったのに」
その謝罪に、私は抱きしめ返しながら首を横に振る。
「そもそも悪意を振りかけた私が謝る方よ。それに、今となってはそうでない可能性が示されても選べないわ」
悲しみと罪悪感。その二つに震えるオトメねぇを、私は抱きしめな

がらあやすように背を撫でた。
そう、私は過去に戻ってやり直せたとしても、それを選びきれない。
「……こんな自分だからこそ得られたものもある。紡げた絆もある。それはそうでなかった時の幸せより上とは断言できないけれど、今の私を構成する一つの要素だもの」
そう、今更私はそれを捨てれないだろう。
それもまた、私にとっての宝物。背負っていくべき業と共に、私にある一つの要素なのだから。
そして何より―
「……和地がいない世界を、私は自分から作れない。あの笑顔の誓いは、今の私を作る大切な芯だから」
―道間田知(どうまたち)を、涙換救済(タイタス・クロウ)を、九成和地(きゅうせいかずち)と出会った事実を、私は消し去りたくないと思っている。
誓いを反故にするなら倒す。道がぶつかるなら激突する。それは私が私である限り変わらないし、和地だってそうだろう。
だけど、瞼の裏の笑顔だけは変わらない。それを消し去ることだけは、私には絶対できないから。
かつて誠にぃを諦められなかった時ぐらい、それは私にとって譲れない一線だ。
だから、私は小さく微笑んだ。
「誠にぃを止めた後で、一緒に寝てくれる？　少しぐらいは泣いておかないと、大事なものを失くしそうなの」
「うん……うん……っ！」
涙を零しながら頷くオトメねぇの後ろで、鶴羽が項垂れそうになっていた。
「和地が起きているなら、タイミングを合わせることもできたんでしょうけどね」
「これに関してはタイミングが悪いわね。まぁ、事態が終わってからならプラスも多いでしょうけど」
タイミングが絶妙に悪いわ。ヴィールもこの展開は予想出来てなかったでしょうけど、最近和地って昏睡状態になりすぎてないかしら

？

そういえばイッセーもまた昏倒していたわね。私は私で一度昏倒しているし、軽く悪夢というべきかしら。

ただ、そろそろ時間ね。

名残惜しいけど、動くべき時が来た。

それをみんなが悟り、頷いた。

「和地は頼むわ。私は、私の背負うべき責任を果たしてくる」

覚悟して、誠にぃ。私が生み出した、悲劇を振りまく明星よ。

今日、この戦いで……終わらせる。

旧済銀神編　第四話　宿命の戦い、始まる。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「作戦開始！　全艦隊、一斉砲撃！」
ノアの命令に従い、全隻投入されたサンタマリア級が砲撃を敢行する。
放たれる大量の砲撃は、数十を超える超大型魔獣を揺るがし、先手を切った。
睨み合いが崩れ、そしてＤＦを筆頭とする戦力が出撃する。
日本山間部、ミザリ・ルシファーにより制圧された地区で、ついに戦闘が開始される。
「……さて、正念場を乗り越えたと思ったら更なる正念場とはな」
そのオブザーバー席で、フロンズ・フィーニクスは鋭い視線で戦場を見据える。
今この場において、フロンズ・フィーニクスは大王派の最高幹部といえる。
多くの大王派重鎮が、これまでの不正が明るみに出たことで様々なものを失った。その際的確な対応で無実の者やせざるを得なかった者を探し、暴走する者が出ることを踏まえた対応を示して組み込んだ。そしてそんな暴走した者達を討伐したことで、民衆の信用を得て不信を払拭。更に不正をさせられていたシュウマの事後犠牲により、それを苦渋の決断で討ったフロンズは、冥界にとって英雄格である。
彼が大王派のかじ取りを行い、若手の者達や地位の低い者達をまとめ上げることで、大王派はかろうじてある程度の権勢を維持することができた。更に旧家の者達に対して強い発言力を手にし、そのうえで彼らの心情に配慮することで、大王派重鎮はおろか魔王派重鎮からも

一目置かれる立場についている。
もはや彼の発言力は、アジュカ・ベルゼブブやゼクラム・バアルに次ぐレベルだ。彼自身が相手の暴走を招かないように上手く立ち回っていることもあり、少なくとも大王派で彼を排斥できる者はいない。
そんな彼だからこそ、この事態に寒気に近いものを覚えている。
「……何を持っている、ミザリ・ルシファー」
小さく呟くほどに、彼は不安を覚えていた。
黙示録の狂獣（アポカリュティック・ビースト）、トライヘキサ。
間違いなく今この世界において、最強の手札があれだ。
その奪取がほぼ不可能になったこの展開。そのタイミングでことをいきなり起こすのは非合理的だ。
禍の団の象徴だった、もう一つのオーフィスたるリリス。そのかじ取り役を担っていた、ルシファーの実子たるリゼヴィム。そしてその野望の根幹たる、トライヘキサ。
この三つを一挙に失った以上、禍の団は組織として大きな大打撃を受ける。少なくとも組織は縮小化することは間違いない。人材は数割レベルで組織を離れ、まとめるにしても苦労する。それだけの大打撃を受けている。
大きな同盟組織たる冥革連合も失った。如何にミザリがルシファーの孫であるとはいえ、彼の外れ切った理念も含めればカリスマ性には限度がある。象徴たるリリスすら失った時点で、合理的に考えれば相当の潜伏期間が必要だ。
それが、この間髪入れないタイミングでの決起。理性的かつ将来性まで踏まえれば、絶対に悪手なのだ。ミザリは知性的かつ冷静に考える手合いであり、如何に趣味に走るにしても短絡的というほかない。
だからこそ、フロンズは逆説的な思想をとる。
すなわち、今が好機だといえるだけの何かを持っている。
「……ノア、最悪の可能性は何だと思う？」
「決まってんだろ、極晃星（スフィア）だろうさ」
尋ねれば、肩をすくめてそう返される。

「そうだとすら詰みだ。俺達は絶対に勝てないし、やるとするなら極晃星が生まれるまで、負けないように立ち回るだけだ」
「だとするなら、この作戦はそれをさせない為の釣りになるわけだ」
お互いに語り合い、そしてため息をつく。
「分が悪すぎる賭けという事か」
「だがしないわけにもいかねえ。こりゃやばいかねぇ？」
そう。しない選択肢は現状無い。
その絶望的な予感に苛まれながら、二人は戦場を見据えるほかなかった。

和地Ｓｉｄｅ

そもそも、だ。
勝利とは、なんだ。
まずそれに対して真剣に向き合うべきだろう。
勝って利を得ること。少なくとも、感じで考慮する場合はそうなるだろう。
では、俺にとって利を得る勝ち方とは何だ。そこから考えるべきだろう。
言うまでもない。理不尽な嘆きを祓う事。道理を無視した悲劇を打倒する事。この一点に尽きる。
何故なら、九成和地の理念は極論するとたった一つに集約される。分りやすいぐらい、俺という男は一つの芯を中核にしているからだ。
「瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻め」
あえて言葉として意識することで、俺はそれを定義する。

あの日、魂レベルで刻まれたあの笑顔。道間日美子の、カズヒ・シチャースチエの笑顔。
嘆きを祓い、笑顔を浮かべさせたあの経験。あれこそが俺の原風景であり、涙換救済（タイタス・クロウ）の根幹だ。
まさに原点。まさに根幹。それが俺という男の基本設計と言ってもいい。
そして、それはカズヒねぇにとっても同じこと。
自分の絶望を祓った笑顔に対して恥じないこと。それを根幹として、カズヒ・シチャースチエは今まで生きてきた。
その一点をもって、俺とカズヒねぇは比翼連理。運命とか宿命レベルで合致している。つまるところ、Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ。
さて、だからこそだ。
俺はそこから一歩を踏み込むべきだろう。それがきっと、答えを見出す為の根幹なのだから。

祐斗Ｓｉｄｅ

既に数千を超える数の魔獣が現れ、それらの性能は一体一体が中級悪魔クラス。
更に２００を超えるステラフレームがそれを縫うように移動することで、奇襲戦法を仕掛けることで戦線をかき乱す。
そこに超獣鬼（ジャバウォック）と業獣鬼（バンダースナッチ）。更に別動隊としてフローズヴィトニル。
サリュート部隊も多数確認。Δサリュートやギガンティスサリュートにより、ＴＦユニットが大型の異形が苦戦を強いられている。

ミザリ一派も本腰を入れたという事だろう。これは、間違いなく総力戦の構えだ。
だからこそ！
「まとめて吹き飛ばされるがいい！」
ゼノヴィアがデュランダルで強引に魔獣達を吹き飛ばし、その隙間に僕とイリナさんが突貫する。
「アーメン！」
「そこだ！」
そしてすれ違いざまに、業獣鬼を切り刻む。
もちろん、その程度でどうにかできるほど甘くはない。業獣鬼は凄まじい速度で再生しながら、全身から魔獣を生成する。
だが、それは想定内。ここからそこに繋げていく。
『させると思うな！』
ギャスパー君が闇を全力で展開し、停止の力も発動する。
中級悪魔レベルの魔獣達は止まり、業獣鬼も再生速度が低下する。
その隙を逃すことなく、真上から絶大な雷が叩き込まれ、全身に消滅の魔力が襲い掛かる。
「「吹き飛びなさい！」」
リアス部長と朱乃さんの連携攻撃が、間違いなく業獣鬼を削っている。
業獣鬼はそれに対して、口から巨大な炎を放つことで反撃を行う。
だがその瞬間、輝く癒しの光が結界となってそのダメージを無効化する。
「私がいる限り、皆さんは傷つけさせません！」
これがアーシアさんの禁手（バランス・ブレイカー）。その名を、聖龍姫（トワイライト・セイント・アフェクション）が抱く慈愛の園。絶大な回復フィールドを展開することで、発生するダメージをその瞬間に回復させる結界を展開する。
あのリゼヴィムですら結界越しにダメージを与えることができなかった。ならば、例え業獣鬼であっても不可能だろう。
そして、その結界越しに更なる攻撃が放たれる。
「……吹っ飛べ」

「焼き尽くされなさい！」
小猫ちゃんとレイヴェルさんの攻撃を顔面に受け、視界が塞がれた業獣鬼に、更に迫るのはルーシアさんとアニル君。
「至近距離からなら！」
「覚悟しやがれっ！」
砲撃と斬撃に仰け反ったその瞬間、更に上から襲い掛かる者がいる。
「更にダメ押しですわよっ！」
「吹っ飛ぶじゃんか！」
『『クリムゾンブラストフィーバー！』』
叩きつけられるヒマリとヒツギの必殺攻撃が、ついに業獣鬼を転倒させ、地面に叩きつけた。
よし、この場に限定すれば、戦いは十分成立している。
他の戦場でも業獣鬼を真っ向から迎撃することはできており、この調子なら勝算はある。
ただ、ミザリがそんな簡単にやられるとも思えないが――
「……っ!? 気を付けてください、何かが……来ます！」
――ほら、来たね。
小猫ちゃんが仙術で感知し、僕らが身構えた時だった。
『あららぁ。なんかすっごいことになってるねぇ？』
『流石は成長速度が異常なリアス・グレモリー眷属だ。起きたと思ったらこんな連中にぶつけられるとはな』
『やっぱあの野郎むかつくぜぇ。後で痛い目見てくんねぇかな』
そこに現れるのは、自我覚醒体のステラフレームが三体。
そして同時に、周囲の風景が一変する。
闇に包まれたように隔離された空間。更にそこを埋め尽くすように、大量の魔獣と紫炎の十字架が浮かび上がる。
そして業獣鬼が締め出されたのか消え去り、しかし現れるのはそれ以上。
……超獣鬼（ジャバウォック）が二体。更にギガンティスサリュートが六体も。
「……再生怪人なんだから、弱ってればいいのに」

げんなりした様子の小猫ちゃんの声が聞こえたのだろう。三体のステラフレームはそれぞれ肩をすくめる。
『いやいやぁん。それはちょっとそっちの都合を押し付けすぎじゃぁん？　俺らも好き好んでかませ犬になりたいわけじゃないんだし……さぁ？』
そうおどけるのはモデルヘキサ。
『同感だな。そちらが成長や改善を成すのなら、こちらも同様というものだ。……何故態々そちらに都合のいい存在になってくれると思うのだ？』
首を傾げるは、モデルアーチ。
『同感だなぁ！　むしろこっちは一回ぶっ殺されてんだし、てめえらが殺されるのがトントンだろ？　ま、女は一回犯した方がいい気分だがな！』
下劣な願望を口にするのは、モデルマッド。
これまで戦ってきたステラフレーム。それも、カズヒ達と因縁を持つ、外道極まりない者達。
想定はしていたさ。幽世の聖杯（セフィロト・グラール）をミザリは使用できる。なら、多少の無茶をすれば再生怪人を用意する程度はできている。
そしてどういう仕組みか、明らかに三体ともブーストされている。かつて戦った時のデータより底上げされてなければおかしいことをしている。
だが、それがどうした？
「甘く見られたものですね」
その瞬間、ロスヴァイセさんが結界を発動させる。
モデルヘキサが展開した空間に、ロスヴァイセさんの結界が機能を上書きした。
その瞬間、十字架もサリュートも魔獣達も、間違いなく力を減衰させられる。
『……あれぇ？』
『おい、何しやがった!?』
モデルヘキサが首を傾げ、モデルマッドが驚愕する。

ただ、モデルアーチだけは冷静さを失っていなかった。
『なるほど。結界で閉じ込めたつもりだったが、逆にこちらも閉じ込められた……いや、これは進入路も作られたか』
「流石と言っておきましょう。ええ、これであなた達は私達を倒すまで出れませんし、状況次第で私達は増援を呼べますよ」
ロスヴァイセさんの結界研究は進んでいる。それに、この事態を予想できなかったわけでもない。
だからこそ、対モデルヘキサ対策ぐらいはしていた。あの星辰光最大の難点である「増援も脱出もできない空間での圧殺」に対し、対策を用意したというわけだ。
向こうも強化しているし、更に三体同時投入という対応もしている。だが、彼らが言った通り僕らにとっても同じことだ。
それに―
「……いい機会だわ。前向きにそう捉えましょう」
―リアス部長が言う通り、これはある意味で好都合だ。
強敵といえる存在を三体も足止めできる。この時点で戦略的にも戦術的にも貢献している。
だからこそ、だ。
「私達の大事な仲間を苦しめた外道どもを、この手で消し飛ばせる。その機会が来たことに感謝するわ！」
溜まっていた僕らの強い不快感。晴らす機会はありがたい。
いいマッチメイクだよ、ミザリ・ルシファー。
奴らはここで、叩き潰す！

旧済銀神編　第五話　銀弾新生

カズヒＳｉｄｅ

戦場において、私は直感に従って走る。
信じられないぐらい、敵は攻撃をしてこない。
そして信じられないぐらい、それを心から納得できる。
そう、これは必然だ。
誠にいは待っている。道間誠明は、道間日美子を蹂躙することで、この戦いの区切りにしたいと持っている。カズヒ・シチャースチエを滅ぼすことで始まる、ミザリ・ルシファーの物語を求めている。
それに対して、私は果たして向き合えるのか。
そんな疑問を抱えながらも、私は踏み込み進むことを決して止めない。
どうしようもない愚か者。光を極めた大馬鹿野郎。進むことを大前提とする、狂った異常者。
それが私だ。その事実は変えられない。
それでも、私は誠にいに向き合いたい。
どれだけ不合理で不条理で不道徳だとしても、決して譲れなかったその一線。何もかも崩れ落ち腐れはてたとしても、その事実は決して消えはしない。道間日美子の真実たる願い。それを裏切ることは、決してない。
向き合いたい。背を背けない。真っ直ぐ向き合いたいと願う。
それが私のやるべきことだ。カズヒ・シチャースチエがやるべきことだ。
己の成した業を背負う。己の成したことに責任を持つ。それは、人がするべきケジメの一つだろう。
できないこともある。物理的に、精神的に、不可能な時もある。

だけど、それが可能であるとするならば。
「待ってて、誠にぃ」
そこから目を背けることを、私は私に許さない。
私が背を押した誠にぃを止める為に。
私が壊し、受け止めてくれたオトメねぇに贖う為に。
こんな私を親友としてくれている、鶴羽やリーネスに顔向けする為に。
かつて誓いを交わしたあの笑顔に、九成和地に胸を張る為に。
「今、行くから……っ」
その決意と共に、私は辿り着く。
そこは、大欲情教団の祭壇。
そしてそこに、確かな印があった。
―さぁ、ここが入り口だよ日美子―
その印を見て、私は一歩を踏み込んだ。

和地Ｓｉｄｅ

さて、踏み込むに当たって問題が一つある。
どう踏み込むか。この一点に尽きるだろう。
俺やカズヒねぇにとっての勝利とは、もはやこれほどないレベルで明確に示されている。
だが同時に、カズヒねぇにとってはこれでも足りない。カズヒねぇにとってはいろんな勝利があるからだ。
まぁ、それはそうだ。何をもって勝利とするか、それが人によって千差万別なのは当然だしな。経験や人生で移り変わることもあるだ

ろう。
少なくとも、道間日美子にとってはそうだ。
かつて道間日美子は、道間誠明を手に入れるというその一点のみを勝利と定めた。それ以外の全てをそぎ落としてでも、踏みにじってでも追い求めた。
だがその結果、道間誠明はとんでもない悟り方をした。結果として道間日美子は何もかもを失ったに等しい損失をし、己に絶望した。
そこから俺達の瞼の裏の誓いは示された。そういう意味では、カズヒねぇにとっての勝利は二転三転するだろう。
……だからこそ、俺は考えてしまう。
そもそもだ、勝利とは、人生の中で移り変わってしまうものだ。
だがそれでいいのだろうか？　そんな言葉で流していいのだろうか？
少なくとも、カズヒねぇはそれで納得しないだろう。だからこそ、あんな時にそんなことを言ったのだ。
俺はそんなカズヒねぇを愛する者として、せめて一つの指針ぐらいは示したい。
愛する原初の誓いに対し、俺は恥じない自分でいたいということだ。
まぁ、いつか移り変わるにしても今のスタンスは確立するべきだろう。こと、俺とカズヒねぇにとっては尚更だ。
二人の誓いが誓いである以上、勝利に対して一つの明確なスタンスはあるべきだ。勝機を刻むと誓っているのなら、勝利に対してある種の指標が必須となる。
となるとだ。とりあえず今までの人生を振り返るべきだろう。
俺はそれを考え、振り返ることにした。

カズヒＳｉｄｅ

そして私は、異空間に到達した。
まるで異次元。もしくは、月夜。
輝く明星の元、ミザリ・ルシファーがそこにいる。
「待っていたよ、日美子」
「待たせたわね、誠にぃ」
小さく言葉を交わし、私達は向き合った。
「君と向き合い、そして滅ぼすべきだとなんとなく思っていたんだ」
そう語る誠にぃは、小さく苦笑している。
くだらない感傷だと思っている。だが、同時にそれを成したいと思っている。
その二つの感情が折り合いをつけた結果に、私は小さな人間味を感じていた。
「あの場で殺すことはできた。でも、もっと劇的な舞台で滅ぼしたかった。……笑ってくれ。僕は本当に趣味をモットーとしすぎているよ」
「笑わないわ。それが、誠にぃにとって譲れない一線だったってことでしょう」
そう返し、私は苦笑する誠にぃに向き合う。
……本当に、なんていえばいいんだろうか。
道間誠明は破綻者だ。悲劇に対して美しさを感じ、それを追求することに人生をかける。その為なら、己が悲しむことすら良しとする。
罪悪感もそのスパイスになってしまう。そのうえで、より悲しくなることを追い求める美の追求者。それが誠にぃだ。
そして、その背中を押し込んだのは私だ。
意図しないものだというのは関係ない。むしろその方がまだまし

だ。それが、道間日美子だった。
だからこそ、そこから目を背けないで前を向く。
ミザリ・ルシファーが悲劇を求めて嘆きを生むなら、まず真っ先に私が立ち向かう。そうすべきだし、そうしたい。
だから、こそ。
「だから、私は貴方を止める。愛する兄を殺す悲劇が、貴方が味わう最後の美しさよ」
『ＢＡＲＴＨ　ＣＲＹ！』
リスターティングホッパープログライズキーを起動させ、私は一歩を踏み込む。
そして素早く、新しいデバイスを装着する。
『ショットライザー！』
「……へぇ？」
興味深そうに誠にぃが目を細めるけど、私は反応せずにプログライズキーを装填する。
『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ……』
「覚悟して頂戴、誠にぃ」
ショットライザーを抜き放ち、私はそれを誠にぃに構える。
これが、リーネスが託してくれた新たな力。
本来の用途とは異なるけれど、それでも私はこれをもってして誠にぃに挑む。
そう、ここにこれない三人の分も。背負うと決めてここにいる。
『ショットライズ！』
引き金を振り絞り、私は宣言する。
「ミザリ・ルシファー！　貴方は私が！」
『リスターティングホッパー！』
展開される装甲が、私に次々と装着される。
ここに変身するは仮面ライダー道間にあらず。
これこそが、新しき私の力。
「この、仮面ライダーシルバードーマが倒す！」

『Ｉｔ，ｓ　ｒｅ　ｓｔａｒｔ』
仮面ライダーシルバードーマ。
私と和地が勝利を掴む。その為の切り札の第一歩。
それを纏い、私は左手を誠にぃの……ミザリ・ルシファーの眼前に突きつける。
「……貴様を邪悪と……断定、する……っ！」
今ここに、私の決戦が始まった。

旧済銀神編　第六話　神威を攻略する者

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

間違いなく世界を左右する一戦。
その戦いにおいて、最高峰戦力が出てくることは当然である。
それは敵味方関わらず同じこと。世界の命運を左右する時に、迂闊な出し惜しみは論外なのだから。
ゆえに、この戦いは必然である。
「流石に、こうなるとはなぁ」
「ええ、もっと、もっとぶつけてきなさい！」
愉快そうに笑うアルバートに、歓喜するイシロ・グラシャラボラス。
その二人に対し、ありえないほどの最強戦力がぶつかり合うという事態が発生してた。
「……やってくれるじゃねえか」
「まさか、ここまでとは……っ」
膝を屈することこそないが、しかし深手を負うは、ヴィーザルとアポロン。
オーディンの息子たるヴィーザルと、太陽神たるアポロン。二人はアースガルズ及びオリュンポスの二代目主神。いうなれば、二大神話が誇る最大戦力。
そして、そこに並び立つもう一人は、血反吐を吐いていた。
「……ははっ。我が叔父はこんな化け物を要していたとはね」
血を吐くだけ吐きながら、そのうえで立ち上がるはヴァーリ・ルシファー。
明星の白龍皇。龍神化と並び立つ領域、Ｄ×Ｄ（ディアボロス・ドラゴン）・Ｌ（ルシファー）の頂に立つ、魔王ルシファーの直系たる混血悪魔。
最強格の邪龍たるアジ・ダハーカすら一騎打ちで打倒した戦力。間

違いなくこの場における、政権側の最強戦力の一角。間違いなく、世界の命運を左右するに足る存在。
その一角に深手を負わせた男は、そのうえで肩を軽くすくめる。
「幸か不幸か相性がいいのでな。まぁ、ゼウスもこれにはほぞを噛んでくれるといいのだが」
そう返す男はアルケード。
ミザリ・ルシファーの抱える、転生したサーヴァント。イシロ・グラシャラボラス眷属の筆頭格が、今ここに主神と魔王を相手に押し込んでいた。
そして、その理由は決して意味不明なものではない。
まず、イシロ・グラシャラボラス。
彼女はここに来て、絶大な力を振るっていた。
彼女が従える存在。それは超獣鬼（ジャバウォック）。それも独自に六体という、圧倒的戦力をもって圧殺を図っていた。
超獣鬼は、かのサーゼクス・ルシファーが誇る眷属たちをもってしても一進一退。セラフォルーと並び立つ最強の女性悪魔たるグレイフィア・ルキフグスを筆頭とする、単独で半端な神を相手にできる猛者揃い。それだけの猛者をもってして、一進一退の攻防を繰り広げる化け物の頂点。
それが六体。それも、この戦いにおいて新たに出現させている。
……事実、この戦いにはシヴァとインドラも参戦している。そしてその二柱の最強格を相手に、六体の超獣鬼が抑え込んでいる。
頂上決戦。そう語るほかない極限の戦いといえるだろう。
そしてアルケード。
前線の要として動いている彼は、真っ向から彼らと競り合っていた。
フェンリルすら恐れるヴィーザル神。太陽神たるアポロン神。その猛攻をたやすく受け流す男は、更に白龍皇ヴァーリ・ルシファーを翻弄する。
恐るべきはその翻弄。ヴィーダル神とアポロン神がいなければ、ヴァーリは今頃滅ぼされていただろうレベルで翻弄していた。

そしてアルバート。
ギガンティス・サリュートに乗って動く彼はアルケードの逆を行く。
すなわち、白龍皇ヴァーリがいなければアポロン神とヴィーザル神を滅ぼすしていただろう戦闘。
その根幹は、登場するギガンティス・サリュートの額に輝く一つの電球。
その光を浴びた途端に、古き神々たる二柱の力は大きく削減される。更にその削減された力では、アルケードにたやすく弾き飛ばされる。
その三重の悪夢が、この戦況を苦境へと変える一因となっていた。
「なるほどね。なんとなく掴めてきたよ」
そして、そのうえでヴァーリは小さく笑う。
強敵との戦いに対する歓喜。そして、その強敵の絡繰りを見抜けたという確信が、更なる喜びを齎していた。
「……時間はこちらに有利だ。聞いてやるから語ってみろ」
そのアルケードの言葉に、ヴァーリは立ち上がりながら歯を剥いて笑う。
「つまるところ、お前の宝具は少なくとも二つ。その二つが、別々の対象に効果を発揮しているということだ」
ヴァーリの推測は当たっている。
何故なら、アルケードの二つの行動は別々の相手に通用している。
主神二柱の攻撃をたやすく弾き飛ばす。逆にヴァーリに対しては、奇襲攻撃が驚くほどに通用する。
この膠着状態は、その二つの効果を別の相手に作用させてないことから生まれている。
その理由を、この場の全員が推察していた。
「つまるところ、お前さんの宝具は奇襲に使ってるのと迎撃に使ってる物の二つってわけだろ？」
「そして、その対象が他と違う点を踏まえれば、条件もある程度は見えてくる」

ヴィーザル神もアポロン神も、それについて既に感づいていた。
ゆえに、アルケードはそこからくる勘違いも悟っている。
だからこそ、あえて告げる。
「正解だ。アサシンのサーヴァントたる俺が持つ宝具は二つある」
そう語り、アルケードは力を籠める。
その力に呼応して神秘を示すは、全身に刻まれた入れ墨。そして己自身。
「まず一つ。別々の存在が一心同体、その条件を満たせば気配遮断の効果を向上させる双生巨兵（モリオニダイ・アサシネイト）を穿つ弓」
それが、ヴァーリが苦戦した理由。
白龍皇（ディバイン・ディバイディング）の光翼は封印系神器。白龍皇アルビオン・グヴィバーを宿している神滅具。すなわち、ヴァーリはアルビオンと一心同体。
ゆえに、ヴァーリは他二人と異なり、この宝具に引っかかる。気配をたやすく隠されるがゆえに、目の前にいながら見失い奇襲を受ける。
「もう一つ、人であることを選んだ俺だけが持つ宝具。神々によってもたらせる驚異を無効化もしくは削減する、神威の攻略者（アルケイデス・ヒストリア）」
それが、ヴィーザル神とアポロン神を苦戦させる要因。
神の攻撃をはねのける宝具は、すなわち究極の対神宝具。
神仏を殺す槍たる黄昏の聖槍が攻性の究極ならば、神威の攻略者は防性の究極。
そしてその二つの宝具が、彼の真名をほぼ確定させる。
そしてその一つの誤解を、アルケードは否定する為に宣言する。
「冥途の土産に、我が真名を聞くがいい」
拳を構え、入れ墨を輝かせ、アルケードは誇り高く告げる。
「我が名はアルケイデス。怨敵ヘラの栄光を名としたヘラクレス（愚者）の残した怨念。純粋たる人間の極みなり！」

和地Ｓｉｄｅ

俺の人生は、ある意味においてブレない人生だったと断言できる。なにせ物心ついた時に指針を見出し、その記憶を持ったまま転生したからな。我ながら、ここまでしっかりとしているのは創作物の主人公レベルだと思う。

瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻む。嘆きで生まれた涙の意味を、落ちる前に変えて見せる。

その根幹を持った俺は、そこだけは決してブレなかった。

その一点を成せるようになる為に、常に頑張って生きてきた。学んできたし鍛えても来た。先達に教わることもあったし、周囲の影響から見つめ直すこともしてきた。

……その過程で、フラグを建築しすぎてきたことは苦笑案件だけど。異形関係者になって良かったよ。出なければ責任を背負いきれない抱えきれない。

そして幸か不幸か、ザイアに拾われたのがそれを加速させた。

根本部分でいかれた理念を、俺は瞼の裏の誓いによってスルー。そのうえであの英才教育を、大真面目に習得してきたからこそ今がある。

思えば才能もある方だろう。特殊な来歴ゆえに神器を二つ持ち、更に魔術回路も継承し、星辰奏者の素質もあった。

優れた才能の持ち主が、強い目的意識をもって、英才教育を受け続けた。正攻法で人が成長する王道を歩んできたと言ってもいい。これで相応の成果を出さないのは、逆におかしいだろう。

ただ、だからこそ俺は勝利に向き合うべきだ。

良くも悪くも俺は真っ直ぐに進みすぎているかもしれない。機会があれば振り返り、己を見直すことも必要というものだ。

俺にとって勝利とは何なのか。それを、俺は真剣に考えていく―

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「なるほどね、そういう事か」
超獣鬼数体を相手にしながら、シヴァ神は一つの結論を悟る。
目の前の超獣鬼は、あるオーラを纏っている。
それはまるで、体の奥底から供給されているかのような。そういった感覚だ。
だから、シヴァ神はそれを理解した。
「……アジュカ、聞こえているかな？」
『どうしましたか、シヴァ様』
立ち位置もあって別動隊をしているアジュカに、シヴァは通信を繋げる。
「イシロ・グラシャラボラスの真名が分かったかもしれない」
そう告げ、そしてシヴァは小さく呟く。
「おそらくはマザー・ハーロット。それも、そう定義された系列だろうね」
マザー・ハーロット。もしくは大淫婦バビロン。黙示録において獣、すなわちトライヘキサに乗るとされる存在だ。
反キリストの象徴とされる存在は、未来に現れる存在ではあるが強い認知度を持つ。聖書の教えが広まっていることもあり、下手な英雄より信仰もあるだろう。サーヴァントの性質もあり、そうされた存在が至ることもあり得る。
そう、すなわち―
「やられたね。おそらく宝具かスキルでトライヘキサと繋がっている

んだろう。……それも、直接近づいたことでそれが強固になっている」
―トライヘキサを封印するだけでは足りなかったことを意味している。
サーヴァントとは信仰によって力を成す。そしてその信仰は伝承の影響を大きく受ける。
結論として、マザー・ハーロットとされた時点で彼女はトライヘキサに由来するスキルか宝具を持っている。
「……その通り、正解よ」
そして、それをイシロ自身が証明した。
「かつての私は、魔獣創造を持っていた。そのおかげで、周囲のみんなは私をバビロンの大淫婦扱いしてくれたわ」
陶酔する彼女は、状況次第なら誘っているように見える表情を浮かべている。
「そのおかげで、こんな宝具を手にし、今度は世界全てを敵に回して悪意を向けてもらえることができるの。……羨ましいでしょう？」
「……性癖というのは、時に凄まじいことになるものだね」
神すら僅かに引かせるその有様を、イシロはためらうことなく突き抜ける。
そして、戦闘は激化する。

旧済銀神編　第七話　銀弾は明星を穿てるのか

カズヒＳｉｄｅ

「なら、僕は更に美しいものを見続ける為に動くとしよう」
そう微笑みながら、誠にぃ……いえ、ミザリ・ルシファーは腰にデバイスを装着する。
『サウザンドライバー！』
そう来るか。
いえ、読めていた。
ミザリだからこそ、この状況下で最高峰の装備を整える程度のことはするだろう。
そして、ザイアサウザンドライバーは禍の団が運用する中で最高の変身デバイス。加えて言うなら、今のミザリは禍の団のトップと言って過言ではない。
なら使う。当然使う。
だからこそ、させると思うか！
「そのまま死ねっ！」
『ＢＡＲＴＨ　ＣＲＹ！』
素早くショットライザーを抜き放ち、駆け出すと同時に引き金を引き絞る。
『リスターティングブラスト！』
放たれる光弾は狙いを過たずミザリに向かうが、それを紫炎が弾き飛ばす。
展開されるは、十字が象られた四つの紫炎の盾。
「これが僕が至った紫炎祭主の磔台が禁手（インシネレート・アンセム・バランス・ブレイカー）、四方囲む磔刑の紫炎（インシネレート・クアトロ・アンセム）」
そう語る瞬間、四つの盾から合計六つの小さな紫炎の十字が射出される。

「能力は、四つの紫炎の盾による近距離制御。そしてそれぞれから各六つの小型十字端末へキサアンセムを出してのオールレンジ攻撃」
『ＨＹＰＰＥＲ　ＤＥＳＰＡＩＲ』
『ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＭＡＬＩＣＥ』
にこやかに微笑み語りながら、ミザリは左右にプログライズキーとゼツメライズキーを装填する。
更に彼の周囲に、赤い霧が散布される。
突貫しながら切り払おうとするが、その霧は物質的なものではないのか、攻撃をすり抜ける。
同時に、こちらを拘束する力が働いた。
「これが僕の神聖血脈、神聖悲嘆の聖域。能力は広範囲に対する拘束力場さ」
「なるほど。拘束力は決して高くないけど、必ず影響が出る上に範囲も広いと」
感心するぐらい徹底しているわね。
これでポテンシャルを多少なりとも注ぎ落すことで、悲劇を相手に与えようとする。
まぁ、強敵に対してデバフは当然ね。相手の足を引っ張るのも戦術のうちだわ。
ただ、それだけで済むわけがない。
気づいた時には、空間は赤い血で構成される領域へと変化していた。
「そしてこれが禁手、乱れ舞う血の聖祭（ブラッドワールド・サンクチュアリ）」
「疑似的な固有結界……っ」
気づいた時には、ミザリはこちらの攻撃をあっさりと回避している。
これは空間そのものが、ミザリのポテンシャルを高める為に機能している。
固有結界に近い空間の形成。能力は使用者の強化と、こちらに対するデバフといったところね。
これまた厄介。まぁ、ここまでは想定内。

そして問題は―
「そして、変……身……っ」
―ここからが、ミザリの全力だという事。
展開される大量のイナゴのライダモデルを巻き込むように、悪魔のロストモデルがミザリに抱き着き、そして炸裂すると共に装甲となる。
『パーフェクトライズ！』
「これが、僕専用のサウザイアー。サウザイアー・ドーマ」
『Ｗｈｅｎ　ｔｈｅ　ｕｎｈａｐｐｉｎｅｓｓ　ｓｔａｒ　ｓｈｉｎｅｓ．Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ｓｏｌｉｄｅｒ　ＴＨＯＵＺＡＩＡＲＥ　ｉｓ　ｂｏｒｎ．』
黒い、絶望の戦士が私の目の前に立つ。
『Ｐｌｅａｓｅ　ｇｉｖｅ　ｍｅ　ｄｅｓｐａｉｒ』
「さぁ、悲しませてくれないかな……？」
ここからが、本番でしょうね！

和地Ｓｉｄｅ

そもそも俺にとって勝利があるとするならば、それは単純だろう。
誰かの嘆きの涙の意味を変えること。もしくは、嘆きの涙が生まれることを阻止することだ。
となると、だ。
俺にとっての勝利とは、誰かにとっての勝利でもある。
まぁ少し極論か。ただ、的外れではないだろう。
ミザリのような特例を除けば、嘆きの涙を流してしまうことはその

時点では敗北だ。逆にその意味が変わるということは、ある意味で逆転勝利を掴んだということに等しい。
そう考えると、俺はかなり困ったことになりそうだ。
誰かにとっての勝利とは、それこそその人それぞれだろう。そんな彼らの勝利が俺の勝利に必要だとするなら、俺にとっての勝利ってのがまず定義不可能に近い。
ある意味で袋小路だな。まぁ、この手の命題ってのはずっと考え続けるに越したことはないんだろうけど。
でも、何かが違う気がする。
……発想を逆転させよう。
誰かにとっての勝利が俺にとっての勝利なら、俺が勝利する為には、誰かにとっての勝利をどうすればいいのか。
この発想をかみ砕き、呑み込む。
そして、俺は一種の閃きを得た。
ああ、そうだ。そういう事か。
俺にとっての勝利の形。それはきっと、そういう事なんだろう。
そして、これはカズヒねぇにとっても共有できるかもしれない。
……いや、共有してほしい。そう願う。
だからこそ、まず伝えたい。
その願いが定まり、答えを見出した。それがきっかけになって、俺の意識は覚醒に向かっていく。
カズヒねぇは、今頃何をしているだろう。
心配してくれているだろうか。それとも起きると確信して、誰かと笑っているだろうか。もしくはまた何かトラブルが起きて、戦っているのだろうか。
どれだとしても、俺がすることは変わらない。
ああ、だって俺は―

カズヒＳｉｄｅ

「あはははははは！　さぁ、見せてくれ！」
「まだだ、ミザリ！」
飛び上がっての砲撃を放つミザリに、私は素早くアタッシュショットガンとショットライザーの二丁で迎撃を行う。
「弾倉、変更っ！」
装填する禁手は、射撃戦闘用に特化した亜種禁手。その名を射手（シュート・ザ・スナイプ）の慧眼。
火器を強化するだけでなく、その発射方向を直感的に悟る亜種禁手。遠距離戦において卓越した性能を発揮する。
こと、相手の攻撃を打ち落とすという点においてはトップクラス。これはとても使える禁手だと自画自賛できる。
『リスターティングブラスト！』
『ハウリングカバンバスター！』
連続発射で砲撃を打ち落としながら、私はミザリに対する警戒度を跳ね上げていく。
幸運なことに、サウザイアー・ドーマはサウザイアー・リリンに比べると若干弱い。
基本スペックだけならサウザイアー・リリンが上回る。しいて言うなら跳躍力はドーマが上だが、それ以外はリリンが若干しのぐ。
ただ、それはあくまで基本スペックに限る。
……放つ攻撃のうち、直撃打が一瞬揺らいでいる。おそらくだけど、自動生成される防御機能がついている。
納得できた。サウザイアー・ドーマはミザリ用のでチューンが行われている。サウザイアーの性能を、ミザリ・ルシファーが美しい悲劇を堪能する為に割り振ったモデルだ。
つまるところ、守勢に特化した調整がなされている。倒し難いとい

うほかない。
……で、それが？
ミザリが守勢に特化しているのなら、私は攻勢に特化している。ただそれだけの話だろう。
「守っていれば諦めるとでも？　私が倒すのに特化しているのは、そっちだって知っているでしょうっ!!」
踏み込み、戦闘を継続する。
攻撃を打ち落とすことを最小限にとどめ、私は攻撃を強引に突っ切る。
致命傷で動けなくなることを避けるだけの迎撃に徹し、そのうえで踏み込んで突貫。
素早くアタッシュショットガンをアタッシュモードに切り替え、ショットライザーを装填してからアタッシュナイダーに切り替える。
『ＣＲＹ！』
踏み込み、そしてハウリングホッパーを装填。
『フルチャージ』
魔術で開閉し、同時に禁手を切り替える。
「叩き切れ、聖印（スティグマ・ザ・エッジ）の刃っ!!」
『ハウリングカバンリッヒテン！』
叩き込むは、斬撃聖剣化能力、聖印の刃。
対ミザリ・ルシファーを考慮するのなら、こういった手法が効果的だと判断したが故の斬撃は―
「悪いね、日美子」
ミザリの肌を軽く焼くにとどまった。
聖遺物系神滅具を多重保有していることに由来する、防御性能と考えるべきか。
いや、それにしてもダメージが少ない。これはむしろ、聖なる攻撃に対して耐性があるとみるべきか。
「アドルフ・ヒトラーは固有スキルとして、聖認の第三帝国というスキルを持つ。これはＢランクのカリスマ・扇動・皇帝特権の複合スキルであり、更に聖人や信仰の加護スキルに削減効果を与えるものだ」

そう語るミザリは、更に肩をすくめる。
「それを改変したのが僕の固有スキル、魔継の第三帝国。後者のスキルを聖剣や聖水による特攻削減に回す形にいじったのさ」
「なるほど、考えれば当然ね」
悪魔という種族は、特攻を決められやすい。聖剣や聖水などはいい例だ。
ならそれをどうにかする方法を考えるのは理に適っている。弱点をカバーする方法ぐらい、用意したって不思議じゃない。
ミザリのパターンなら当然かもしれないわね。これはこちらの失態だったわ。
……で、それが？
「だったら次を試すだけ。そう、まだだ！」
「そうだろう？　さぁ、続けようか！」
戦いは、こんな程度で終わるものか!!

旧済銀神編　第八話　目覚めるとき

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

激戦は、少しずつだが禍の団に傾き始めていた。
数多くの神仏が参戦してなお、凌いでいる。この時点で、各勢力は心理的に負荷がかかっている。
神仏が出ても勝てないのか。その心理的圧迫が、戦局を少しずつだが禍の団に傾けていた。
そして、その中でも最高峰の存在が苦戦しているのなら尚更だ。
『フハハハハハハハッ！　この程度か、インドラよぉっ!!』
「ＨＡＨＡＨＡＨＡッ！　やるじゃねえか、科学者さんよぉっ！」
大量のギガンティスサリュートを引き連れたアルバートの猛攻に、帝釈天は血まみれになりながら戦っていた。
既に二体はギガンティスサリュートを撃破している。だが、追加が投入されている為状況は芳しくない。
シヴァ神と並ぶ現勢力側最強戦力。その帝釈天がここまで苦戦しているという事実が、周囲の士気を下げている。
更にあろうことか、神仏の力が落ちている。
既に夜になるが、ギガンティスサリュートに括りつけられた大量の光球が周囲を照らす。
その輝きを受ける神仏が、科学の産物に追い込まれている。それどころか、まるで力を封じられているかのように押されている。
その事実に多くの神仏が気圧されるが、帝釈天だけは違っていた。
「やるじゃねえか！　それに、お前さんの正体もなんとなく分かってきたＺＥ！」
『いうじゃないか！　なら、語って見せるがいい！』

大声を張り上げながら、帝釈天とアルバートは激突する。
その猛攻の応酬の中、帝釈天は一つの神話体系をまとめ上げるだけの視野で敵を見抜いていた。
「発想の転換、いうなれば一瞬の閃きをもってアザ坊達を出し抜く技術発展。それを一気に形にする驚異的な努力。そんな天才的技術者がサーヴァントだっていうなら、真っ先に思い付く奴がいるだろ？……トーマス・アルバ・エジソン！」
その声をと共に、帝釈天は絶大な雷撃でギガンティス・サリュートの一機を撃破する。
すぐに増援が来るが、それもまた彼の推測を後押しする。
「こと、大量生産においてお前さんは有名だ。サリュート系列の物量戦術、技術顧問の癖ってのが見えるＺＥ？」
『ふっはっは！　流石は神仏の頂点、正解だ！』
それを、アルバートは認めた。
『その通り、我こそはトーマス・アルバ・エジソンの影法師！　アーチャーのサーヴァントだ！』
吠えると共に、光球は更なる光を見せつける。
『そう！　俺は科学によって神仏を打倒したいのさ！　まだこんな搦め手も必須だがな！　……神越人話（システマ・アフラマズダ）・夜薙光明（システマ・アフラマズダ）ァッ！』
「電球の普及による人類の急激な発達。確かにそっからどんどん発展していっているが……それが対神秘って形になるとはＮＡ！」
そう、それこそがこの窮地の大きな要因。
対神秘宝具、神越人話（システマ・アフラマズダ）・夜薙光明（システマ・アフラマズダ）。これが神仏の力を削減しているからこそ、帝釈天はここまで苦戦している。
「まったく、お前さんも大概馬鹿じゃねえのか？　ミザリが大暴れしたら発達どころか失墜だぜ？」
『ライバルのネガキャンに処刑器具を作る男が、まともなだけだと思うのか？』
そう返す応えこそが真実。
発明王エジソンは、時として多大に問題のある人物でもある。
その側面を切り取り、それゆえに科学による神仏打倒を挑戦させ

る。それによる、悲しき美の追求と科学の極限到達を目指す。
それこそが、アルバートがミザリと結んだ盟約の真実。サーヴァントにいくつかの側面がある場合の、マスターとの影響が悪い形でかみ合ったケースというほかない。
だが裏を返せば、それをもってしても帝釈天は大いなる強敵。
だからこそ、おかしい。
「お前さん、もう一手持ってるだろ？　使った結果がこれってことかい？」
『その通り！　そういう意味では、今回はちょっと不満があるのだよ！』
そう答えるアルケードは、そのうえでハッキリと告げる。
『だからこそ、お前達に勝算はないのだがなぁっ!!』
その確信が、禍の団の士気を底上げしていた。

和地Ｓｉｄｅ

俺は目を覚ますと、ゆっくりと起き上がる。
この感覚はあれだな。俺、また数日ほど寝込んでたな。体がまたなまってやがる。
「……ったく。しかもなんか嫌な予感がするな」
なんというか、周囲が少し静まっている。そのうえで、空気がひりついている雰囲気もある。間違いなく、何かが起きている時の状況だ。
とにかく起き上がると、俺は体の調子を確かめながら部屋を出る。
と、目の前にお袋の姿があった。

「……心配かけさせました。とりあえず、起きました」
ちょっと対応に困ったけど、とりあえず言うべきことを言う。
と、数秒目をぱちくりしていたお袋が慌てて振り返った。
「リーネス、鶴羽！　和地が起きたよ！」
「「……和地っ!?」」
あ、涙目で鶴羽とリーネスが駆けつけてきてくれた。
心配かけたなぁ。謝らないと。
いや、原因は完全にヴィールの所為なんだが。あの野郎、墓に聖水でもぶっかけたくなってきたぞ。
ま、とりあえず心配はしっかりかけているし、筋は通すか。
「……いや、心配かけて申し訳ない。不可抗力な気もするけど、本当にすまないというかなんというか」
「もぉおおおおおっ!!　いろんな意味で大変だったし大変なことになってるしぃ！　心配だったんだからねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
鶴羽が大泣きだよ。いや、ホント御免。
ベアバッグになりかけている状態だけど、とりあえずこれぐらいならまだ大丈夫。
いや、思った以上に大丈夫だな。聖血の力で俺も強化されているのか？
まぁそれはともかく。俺は鶴羽の頭をなでながら苦笑するしかない。
「あ～……。とりあえず、状況がマジっぽいから誰か説明を―」
そう思った時、そっとリーネスが俺に抱き着いた。
鶴羽みたいに力加減があれではないけど、かなり本気の力加減でしがみついている。
あと背中もプルプルと震えている。というより、どうもマジ泣きの状態になっている。ほっとしているのと不安が一気に出たのが重なり合っている感じだな、これ。
……いや、ちょっと待て。
この雰囲気はおかしい。何かが決定的に違う。

そう、これはお袋とか保護者のパターンではない。イッセーとか友達のパターンでもない。
これは、まるで、その、ですね？
「……お袋、俺は凄い事をしているのではないだろうか？」
「……具体的に、言ってみて？」
苦笑のお袋に、俺は覚悟を決める。
どうかツッコミが入りますようにと、心から願ったうえで聞いてみた。
「もしかしてお袋、前世の親友全員義理の娘になっちゃうかも的な？」
どうか来てくれツッコミ！
「気づくのが遅いよ、田知！」
ツッコミ来たけどそっちじゃないいいいいいいいっ!?

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

状況が、一気に一変する。
それは、急激な変化だった。
変化は単純。そして強大。
そう、単純に敵が強化されたというその一点。
ステラフレーム、フローズヴィトニル、そして業獣鬼と超獣鬼。
その全てが性能を跳ね上げ、今まで以上の猛攻を開始する。
……戦いは、更なる惨劇に繋がっていく。

旧済銀神編　第九話　銀弾、再装填

祐斗Ｓｉｄｅ

なんだこれは……っ！
「こいつ……っ！」
リアス部長が弾き飛ばされながら、消滅の魔星を数個放つ。
だが、一人一つ放たれたそれを、ステラフレーム三体はあっさりと粉砕する。
ありえない。龍王クラスはあるグレンデルですら滅ぼす一歩手前にまで行った技だぞ？　あれをたやすく吹き飛ばせるだけの性能は、さっきまでなかったはずだ。
「明らかに性能が向上している！　くっ！」
「いったいどういう絡繰りをしましたの！」
ロスヴァイセさんと朱乃さんが攻撃を放つけど、それすら一斉砲撃で吹き飛ばしていく。
それだけじゃない。超獣鬼やギガンティス・サリュートの数が五割り増しぐらいになっている。
このままだと押し切られる。なら！
「流石に今回は使わせてもらう……グラムっ！」
グラムを抜刀し、そしてオーラを全力で開放する。
あまり負荷をかけない戦い方にしたかったけれど、元々あいつらは長期戦に長けている。
それが高性能でごり押しできる以上、長期戦ではこちらが潰されるのが目に見えている。
だからこそ、一瞬の一撃で！
『……なめんなぁっ!!』
その瞬間、モデルマッドが聖十字架を手にもって、横からグラムを

弾き飛ばした。
　これでも、ダメか！
『そろそろミザリも本気になったってことかぁ！　なら俺らも遊ぼうかねぇっ！』
　モデルマッドはそう吠えるけど、どういうことだ？
「いったい何をしたという！」
　ゼノヴィアが割って入るようにデュランダルで切りかかるが、そこにギガンティス・サリュートのブレード攻撃が割って入る。
　やはりすべての性能も高まっている。
　そしてミザリが本気を出した、どういうことだ？
『単純な話だ。ミザリ・ルシファーはお前達の想定を超えている』
『それも文字通りの次元違いってね！　おかげでおじさん達、おこぼれにあずかっちゃってまっす！』
　モデルアーチとモデルヘキサもそう告げ、そして更なる猛攻が僕達に襲い掛かった。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

　激化する戦場において、戦況は禍の団が圧倒的に優勢となっていた。
　だが、部分部分ではそれを圧倒する地区も存在する。
「吹き飛ぶがいい、凡人の成果達よ！」
　そう吠えると共に、戦域を包む暴風に包まれた敵達が、上空からの砲撃で吹き飛ばされていく。

放ち制圧するは、ユーピ・ナーディル・モデウ。
圧倒的な制圧力を誇る神滅具候補、天覇（カイザー・ストラトス）。広範囲の大気制御や超高高度からの砲撃を可能とするそれは、こういった戦場においてはめっぽう強い。
超獣鬼であろうと単独で複数足止めする砲撃は、更に気流によって援護を受けて猛攻を仕掛けていく。
よしんばそれを突破しても、ユーピのポテンシャルは全く問題としない。一族伝来の聖剣や魔術刻印の本領によりピンポイントの戦闘もこなし、敵をたやすく返り討ち。その圧倒的な戦闘能力が、この場を数少ない現政権側が優位な戦場にすることに繋げている。
だが、一部の戦場だけが優位でも意味がない。
それを悟っている幸香は、軽く舌打ちをしたくなっていた。
「負け戦は趣味ではないのじゃがな。これが親父殿の本気という事か」
禍の団に見切りをつけたことを、幸香は後悔していない。
基本的に小物かつ馬鹿の群れ。そんな組織に長居をしたところで、世界を乱すことはできても制することはできないと思っている。それは、今のミザリ達の行動を見ても変わらない。
だが、今のままでは世界は乱れるだけになりかねない。
……どうにかするには、ミザリ・ルシファーという大将首を上げることが必須だろう。
だが同時に、それを今の自分達が行うことは先を見据えるとリスクが大きい。大王派側である自分達は、可能な限り手柄も考えて取らねばならない。それが現状というものだ。
だがしかし。
「このまま負けては元も子もないのぅ」
そう小さく漏らし、幸香は肩をすくめる。
「母上よ、けじめをつけるのなら早くするがよい。出なければ、妾がもらってしまうからのぉ？」
多少のリスクを惜しんで大局を決められては元も子もない。
それだけの窮地と理解して、幸香はいざという時に判断も見据え始

めていた。

カズヒＳｉｄｅ

ここにきて、ミザリの猛攻は激しく強化されていっている。
「ま……だ、だぁ……っ！」
強引に気合で突破していきながら、私はミザリに対抗する。
何が強化されたと言われれば、技術以外の全てというほかない。
膂力が向上した。速度が向上した。反応が向上した。強度が向上した。とにかく、テクニック以外の全てが明確に強化されている。それも、テクニックでひっくり返せるレベルでない領域だ。
何もかもが次元違いに強化されている。例えるなら、通常の神器が神滅具の覇に変わったかのような、次元違いの強化。もしくは、十把一絡げの龍が、いきなり龍神に切り替わったかのような強化。
とにかく、格が数段飛ばしで上がっている。手が付けられないと言いたくなるほどに、ミザリは圧倒的な力を突然発現した。
「さて、どれぐらいもってくれるかな……日美子？」
「ミザリぃいいいいいいいっ！」
それでも私が戦えているのは、ひとえにミザリがこちらの全力を引き出そうとしているから。
全力を引き出したうえで超える。それができるなら最も悲しい殺し方になると、確信すらしているわけだ。
この隙を逃すわけにはいかない。これを逃せば、勝てるものも勝てなくなる。

だから、この場でいきなり上回るな。致命を叩き込める一瞬の隙を探れ。
連続の多段覚醒を何とかぎりぎりで抑え込みつつ、私は致命の隙を探す。
……願わくば、今も眠っているだろう和地に願う。
私に、それを見定める為の支えを頂戴……っ！
物理的な力は求めない。そんなものを心から捻り出す方がどうかしている。私は自分が特例や例外だという程度の判断力は持っている。
ただ、心が折れてはできることもできない。無理やりに縛り付けて動かさせても、本領など発揮できない。
心技体とはそういう事だ。それぞれにできることとできないことがあるからこそ、それを組み合わせることで対応する。
そして、私の瞼の裏には、あの日誓った笑顔が今でも残っている。
その彼が、同じように誓ってくれた。その誓いを胸に、誰かを救える立派な男に成長してくれた。そしてそれをもってして、私の心を更に救ってくれた。
だから、こそ。
「……まだ、だぁっ!!」
この程度で終わるものか。
終わる理由はどこにもない。死ぬのなら、せめて前のめりに倒れて死ね。
その決意をもって、私は一気に覚醒する。
おい、聞こえているか私の力。
お前が思いに応えるというのなら、今すぐここで力を示せ。
そう、ここで、今使う。
私に、ミザリと立ち向かう力を今すぐ……寄越せっ!!

その決意が、かみ合った。

旧済銀神編　第十話　増援準備、始めます！

和地Ｓｉｄｅ

色々な状況を理解するのに、意外と時間がかかった。
いやまさか、リーネスが俺に恋愛感情を抱いてしまったとは。そっか、そっかぁ、そうなのかぁ。
お袋頑張れ。いや、落としまくっている俺が言う事では断じてないけど。なんで俺は、前世の母親の親友達を悉くフォーリンラブさせているんだ。
これはあれか、精神的なショタコンか。そんなだから俺は年上キラーとか言われるんだ。自分でも全く否定できなくなっている気がするぞ。メイドスキー扱いはともかく、年上キラーは反論の余地がない。
いやまぁ、そこは落ち着いて考えておこう。なんかもうその時点でグっと来ている俺のチョロさに軽くビビるけど、とりあえず今は非常時だから。フラグな気もするけど本当に余裕がないから。
そして大欲情教団が世界を揺るがし一時退場か。なんか原子力潜水艦とか空母とかパクッてるのが怖いけど、ミザリが動いたことで少しは沈静化するだろう。
……鎮静化しなければ、最悪の場合は変態とそれ以外で世界大戦になっていたかもしれないのかぁ。変態、怖いなぁ。
そして今一番重要なのは、ミザリが本格的に動いたという事実だ。
このタイミングでってのがどうも引っかかる。動くとするなら、ヴィール達と一緒にトライヘキサを奪取することを優先するべきだろう。終わってから動いた理由が分からん。
こちらも隔離結界領域ってところに、アザゼル先生達ネームドの筆頭格がごっそり向かっているから、弱体化はお互い様だ。だがお互い

様である以上、禍の団だって弱体化している。ある意味もっと深刻な弱体化といえるだろう。
舵取り役だったリゼヴィムは死んだ。象徴だったリリスもこっちが確保した。そして本命の手段たる、トライヘキサも封印された。更に大規模同盟組織である、冥革連合は半壊以上といえる。
はっきり言って、今の禍の団は運営することも大変なレベルだろう。相当の連中が流出していくだろうし、運営体制を改めて確立するのに苦労するレベルだ。
扇動の鬼才であるリゼヴィムならともかく、ミザリが運営していくのは大変だろう。ミザリは確かに優秀だが、こればっかりは向き不向きだ。
ミザリは精神性や目的があまりに異常であり、これを堂々と公開している時点で組織運営において人望面であれだ。理詰めに乗っ取ればある程度は対応できるだろうが、そういうのは感情を重視したり理屈で考えない奴には意味が薄い。はぐれ物の集まりな禍の団は、間違いなくそう言う連中が多いだろう。純血たるルシファー血族というネームバリューも、前世が純粋な人間だと明かしていることから効果が薄い。
つまるところ、こんなタイミングで大規模作戦なんて起こせるわけがない。
……だが、逆に考えるとこうなる。
「ミザリは今の禍の団を掌握できる、それだけの要素を持っているってわけか」
「そうなるわねぇ。そして、懸念事項はあるのよぉ」
俺に抱き着いたままでリーネスが言うけど、俺もツッコミを入れる余裕がない。
ミザリ・ルシファーは精神性が仇となり、禍の団を運営するには色々なものが足りていない。そんな状況下で大規模作戦を行わせられるわけがない。
つまり、それができる以上は持っているんだ。圧倒的な力、もしくは絶大なメリット。アレ極まりない精神性の奴に仕えてでも、大打撃

を受けた直後に大規模作戦を認めるだけの何かをだ。
「……極晃星（スフィア）。ザイアからサルベージしたデータに存在する、星辰光（アステリズム）を超えた星辰光（アステリズム）」
そう告げるリーネスは、小さく震えてすらいた。
「高位次元から漏れる星辰体（アストラル）に感応した星辰体感応奏者（エスペランント）や人造惑星（プラネテス）の星辰光は、つまるところ三次元現象にとどまっているわぁ」
そう前置きするリーネスは、そのうえで少し小さくなる。
話はある程度は聞いている。相当にやばい代物だということは。
だが、その程度の想定では全く足りない。つまるところそういう事なんだろう。
「だけど極晃星（スフィア）は、いうなれば高位次元から直接星辰体を汲み上げて現象を行使する。つまるところ、三次元を高位次元の現象で塗り潰すと言っていいわぁ」
いまいちピンとこない俺に、リーネスはぎゅっと抱き着く。
「その最大の特性は、出力もしくは六性質が天元突破を果たすことによるもの。例えば発動値（ドライブ）が天元突破を果たせば、意思の力で出力が無限に上昇されるとされているわぁ。……理論上は、太陽系を吹き飛ばすこともできると記されていたのぉ」
「そりゃ、ヤバイな」
俺はリーネスを落ち着かせるようになでながら、そう言うしかない。
間違いないな。ミザリの奴は、至っている。
そんな領域に到達したのなら、もはや龍神すら超える化け物だ。他の性質が天元突破したとしても、異常性を差し引いても荒くれ者どもを抑え込めるだけのインパクトを得られるだろう。
そういう観点で言うのなら、少なくともミザリの極晃は発動値が天元突破しているわけではないのだろう。
まぁ、それは習得するとするならカズヒねぇだろうしな。
「……で、どうするんだ？」
俺はそこを聞きたい。
なにせ、話の通りならグレートレッドの力を借りても勝ち目は薄い

だろう。
勝てない戦いに突貫する。それは避けられるなら避けるべき事態だ。
「極晃星には条件がいるのは知っているわねぇ？」
そんなことを、モデルバレットとの決戦の時に言っていたな。
「一つ。神星鉄（オリハルコン）レベルの星辰体感応物質。つまりは高位次元に干渉する手段の確保」
つまるところ、鍵を獲得できる技術があるかどうか。
「二つ。高位次元の後押しを受けていいからぁ、高次元現象の基点となる出力もしくは六性質のどれか一つでも天元突破すること」
すなわち、力を振るう為の性能を持っているかどうか。
それを語ったうえで、リーネスは鋭い表情を見せる。
「そして一番重要なもの。双方向で同じ想いを繋げられる、他者の存在」
……そう告げたリーネスは、悲しみすら表情に浮かばせる。
「生涯における勝利とは何か。己にとっての命の答え。それをどんな形であっても絶対に共有できる、そんな運命の比翼と共鳴しなければ、極晃星（スフィア）に至ることは断じてできない」
そう告げるリーネスは、俺の胸元に額を押し付ける。
「……おそらく、モデルバレットが誕生した時、誠明の側に感応物質がなかったのが、モデルバレットが誕生した原因だわぁ。それに気づくことができれば、誠明は……っ」
そういう、ことか。
つまるところ、ミザリ・ルシファーは極晃を慣らし終えたから仕掛けに来た。そして極晃を確保した以上、トライヘキサを直接振るう必要性は薄くなった。
だからこそ、今ミザリは極晃星をもってして、こんなことを仕掛けていると。
納得した俺に、リーネスは震える声を告げる。
「もし、それに否定の答えを突き付けられるとすれば、それはきっと……」

「ああ、分かってる」
俺はリーネスを抱きしめると、頷いた。
言いたいことは分かった。そういう事なんだろう。
そして、大丈夫だ。
「カズヒねぇに伝えたいことがある。ミザリとの決着もつけたい。だからついでに、極晃星（スフィア）に至って見せるとも」
そして、根拠はある。
結論は出ている。俺がカズヒねぇに告げることができる、勝利の意味は見出した。
そして、話を聞いて俺は確信したことがある。
だからこそ―

カズヒＳｉｄｅ

間違いなく、ミザリ・ルシファーは異常な成長を遂げている。
可能性は悟っていた。モデルバレットについての話を聞いていたからこそ、曖昧になった記憶はそういう事だと分かっていた。
極晃星（スフィア）。それを手にしているからこそ、ミザリはこんな行動をとったということを、私は心から理解する。
だからこそ、付け入るスキは少ししかない。
ほんの一瞬生まれた、私のこの強化。それに対応される前に、ねじ込んで潰すしかない。
「覚悟しなさい、ミザリ。ここからは私のターンよ！」
「なるほど、そう来たか！」

隔離された特殊空間。そこで私は、固有結界を昇華させた。
神滅具（ロンギヌス）、現世聖域（カテドラル・グレイヴ）の楽園。
地脈の力を利用し、地面を操作し聖域を作り上げる神滅具。性質上、拠点作成や燃費の良さに優れている。
しかし私は、この神滅具を流用して搦め手を敢行する。
すなわち―
「固有結界改め、固有聖域とでも名付けましょうかね」
―固有結界を神滅具の力で再現する。
周囲の空間そのものに注がれる力を流用。それをもとに固有結界を神滅具により違う形で発動させる。
これにより形成されるは、燃費が大幅に改善された私の固有結界。世界の浸食を行わない分、自然的な修復に対抗する魔力消費を行わない。そして私の固有結界は、私の魔力生成量も大幅に向上させる。
結論として、私は超一流の魔術回路保有者が数人がかりで魔術を行使するのと同等の状況になっている。
結論として、私は大幅な戦闘能力を確立している。
瞬間的に空間跳躍を行い、更に座標指定した魔術攻撃により一人で同時多発的に十字砲火を敢行する。更に全性能を強化し、武装にも魔術的なブーストを当たり前に敢行。その全てを大量の魔力を使ったごり押しで敢行する。
結果として、今ミザリは対応が若干追い付いていない。
「なるほど。これはちょっと想定外だったね」
「そう。そしてこのまま終わらせる！」
私は吠え、突貫する。
ただ同時に、私は強い警戒心を持っている。
ミザリから余裕が消えていない。その一点をもって、私は警戒心を跳ね上げる。
極晃星の本領を、おそらくミザリはまだ開放していない。
だから、こそ！
「ここで一気に……叩き潰すっ!!」
決着を、つける！

イッセーＳｉｄｅ

なんてこったなんてこったなんてこった。
ちょっと前に起きてから、事情を聴いてこっちはもうどう反応していいか分からねえよ。
サーゼクス様達が隔離結界領域に行ったのは、俺もある程度は見ていたから知っている。
ただ、大欲情教団がそのあと世界に喧嘩撃ったのは想定外にもほどがあるよ。あいつらそんなタイミングで何やってんの!?
しかもそのタイミングで禍の団が動いて、今度はミザリ達がそこを占拠して戦闘中って、勘弁してくれ。
……ただ、俺もこのままってわけにはいかねえさ。
オーフィスが負担を肩代わりしてくれたおかげで、俺もだいぶ復活した。
おっぱいに触れることもできる。認識もできる。そして体調もだいぶ回復している。
龍神化は流石に使えないけど、出力を抑えて疑似的に使う程度ならちょっとはできる。使いどころは大変だけど、今後の俺の新しい力にもなるだろう。
そして、俺はちょっと決意したことがある。
と、その時にドアが開いた。
「よう、イッセー。お互い起き抜けに大変だな」
「九成。そっちは大丈夫なのか？」
俺はちょっと心配になるけど、何故かジト目を向けられた。

「こっちのセリフだバカ野郎。結局お前、また龍神化使って死にかけたそうじゃねえか」
「仕方ねえだろ。そうでもしないとアポプスを倒せなかったんだから」
使わずに済むなら使わずに済ませたかったよ。
その所為でまた死にかけたうえ、こんな窮地に寝てたんだからな。
……だからこそ、俺はもう決めてる。
「言っとくけど、俺はすぐにでも行くからな」
「流石に今回は止めないさ。許可も出ているみたいだしな」
ああそうだな。
そして、俺は決めたことがある。
「九成。俺さ、俺達の平和を乱す敵は、相手が誰だろうと絶対に叩き潰す。……跡形もなく滅ぼしてもな」
そう、俺は決意した。
大切な人達が大変な目に合うなんて耐えられない。平和を乱されたうえに、そんな人達が大変な目に合うのは耐えられない。
もっと早く決意して、もっと倒せるだけの強さがあれば。アザゼル先生やサーゼクス様が隔離結界領域に一万年も行く必要はなかったと思う。それは無理でも、父さんや母さんがオーフィスやカズヒが、学校のみんなが酷い目に遭う事もなかった。そしてそんなままだと、仲間達が傷つくかもしれない。
だから、こそ。
「まずはミザリだ。あいつを野放しにすれば、絶対にいろんな人が悲しむことになる」
あいつは倒す。倒さなけりゃ、仲間たちが、平和が、いろんなものが悲劇を押し付けられる。
だからこそ、絶対に滅ぼす。
九成も、それに対して苦笑しながら頷いた。
「できればまずは俺達だ。ま、サポートは欲しいがな」
だよな、分かってるさ。
どうせならお前らがつけたい決着だろ。それぐらいは分かってる。

ただ、手を出す必要があるなら、絶対に出すぜ俺は。
「ま、とりあえず準備を整えるか」
「そうだな。リアス達も戦ってるんだし、さっさと準備をしないとな」
九成と俺は頷き合うと、ドアを開ける。
と、そこにはいい匂いが!?
「ハイお待たせ。とりあえず少し食べときなさい。……数日寝たきりでいきなり大暴れとか、普通無理だし」
「軽いものだけ作ったから、まずはね？」
「ま、安心しとけ。あいつらもそう簡単にやられるタマじゃねえだろうしな」
美味しそうな軽食と共に出迎えるメイド三人……だと？
「春っち、インガ姉ちゃん、ベルナ……」
ちょっとぽかんとしている九成に、更に今度は後ろから抱き着いてくるお姉さん!?
「はい、そういう事♪　出てきた途端に倒れないように、最低限の準備はね？」
ぬぁあああああっ!?　リヴァさんのおっぱいが九成の背中でふにょんって!?
「……よっしゃ！　私もちょっと食べてから行くわ！　景気づけに!?」
「こっちの準備はあとは時間だけだしねぇ。私もちょっとだけ食べておこうかしら？」
「そうだね。色々あって疲れてるし、少し英気を養わないとね？」
と、南空さん達もどんどんと集まっていくし。
と、九成がなんかマジ顔で振り向いていた。
「そういえばイッセー。俺、リーネスを惚れさせてたみたいなんだけど」
「……ようやく気付いたのか」
なんだろう。嫉妬の炎が燃え盛ってたけど、そこを聞いたらちょっと収まった。
なんていうか、俺もちょっと頭痛くなる展開だったしな。そっか、

気づいたかぁ。
「「「おぉ～。よかったよかった」」」
リヴァさん達が総出で拍手し始めてるし。
リーネスも南空さん達につつかれて、かなり顔を真っ赤にしてるからなぁ。
「とりあえず、生きて帰ったら盛大に甘やかすぐらいはした方がいいか」
「……和地君。それは死亡フラグというのでは？」
シャルロットからもツッコミが飛ぶ九成。
ま、まぁそういうフラグはあるよなぁ。
いや違う！　そうじゃないだろ！
「それは逆だ！　こんなフラグ吹っ飛ばせなけりゃハーレムなんて不可能だろ！」
「……まぁ、モテる男にはそれなりの説得力はいるわな」
ちょっと気合を入れていると、九成も微妙に呆れてるけどそう言ってくれる。
ああそうだ。ハーレムを目指すっていうなら、ちょっとやそっとの困難なんて、ひっくり返せなくてどうするんだ。
まして俺はハーレム王になる男。愛するリアス達を襲う窮地ぐらい、俺の手で吹っ飛ばすぐらいの気概がないと。情けない真似はできないぜ。
よし、気合入れる。
「俺は生きて帰ってきたら、みんなと一緒にお風呂入る！　こんなフラグなんて全部ひっくり返してやるぜ！」
「落ち着いてください、イッセー。それはいつものこと過ぎてフラグになりません」
シャルロットがあきれ顔でツッコミを入れてくるけど、なんのそのだ！
九成もちょっとやる気になってるしな！
「それもそうだな！　よっし、決着がついたら連続デート第二段でいこう!!」

「ほわぁっ!?　い、いきなりデートとか心の準備がぁ!?」
「え、え、えええええええ～!?」
　リヴァさんとリーネスがめちゃくちゃ驚いているけど、他の人達は割と冷静気味な雰囲気だ。
「よっし！　今度はマンツーマンでデートね!?　前回の失敗は取り戻すわ！」
「今度はどこに行こうかな。……いっそのこと、海外とか？」
「意外と八茶けてるな、鶴羽もインガも。アタシらどうする？」
「う～ん。今後も考えると、レーティングゲーム関連の名所巡りとか、冥界方向？」
　うぉおおおお。なんか凄い事になりそうだ。
　これは俺も、負けてらんねぇぜ！
「シャルロット！　俺達はデート、どこにする!?」
「いえ、脱線しすぎですから！　戦闘準備とか腹ごしらえとかに集中を！」
　真面目だなぁ、シャルロットは。
　いやまぁ、今は確かにそういう時だけど。
「……ふふっ。なんていうか、もしかしたら死ぬかもって気が無くなってきそう」
　苦笑交じりで微笑むオトメさんの言うとおりかな。肩の力はいい感じに抜けたっぽいぜ。
　ああ。俺達全員、生きて帰ろう。
「勝つぜ、皆！　終わったら全員で祝勝会だ！」
「ああ。リアス部長達と一緒にな」
　そうだな、九成。
　さっさと準備を終えて、勝って帰るぜ！

旧済銀神編　第十一話　真打ち、突入です!!

和地Ｓｉｄｅ

とりあえず準備は終えて戦場に突入……したはいいがなんだこれは!?

どこもかしこも防戦一方。というより、だ。

「明らかに、一体一体の性能が高すぎないか?」

ミザリの趣味的な理由か、基本的にいたぶる方向になっているのが死人を減らすことにはなっている。

だが、殆どすべての箇所が防戦一方だ。はっきり言って圧倒的という言葉すら生ぬるいだろ。

思わず唖然となるが、その瞬間にステラフレームが五体ほど襲い掛かる。

オーラを纏っての攻撃を回避し、俺はイッセーと共に迎撃する。

動きは機械的。ゆえにある程度数で来られても対応はできる。

だが、この出力はまずいだろう。

「なんだよこいつ等……量産型のグレンデルやラードゥンより出力が高くないか?」

「しかもそれが攻防一体。これは、もしかして仕様変更型か?」

イッセーも俺も、僅かな攻防で違和感を強く覚えた。

このステラフレーム、自我未覚醒体であることを加味してもかなり毛色が違う。

攻撃は多様性が無い。だが同時に、基本出力はかなり高い。その上で、これまでのステラフレーム関連からは想定外レベルで数が多い。

となると、おそらくは仕様変更。もしくはバリエーション違い。

推察するに、おそらく繋がっているのが違うと考えるべきだろう。

ステラフレームは人間サイズ主体の異形戦に対応でき、そのうえで

高性能を両立させる人造惑星。現段階の禍の団では大型化するしかない状況に対する、遠隔接続をアンサーとする魔星。結論として、超巨大な武装プラットフォームを必要としたはずだ。
つまるところ、同時投入数の限界はそれに由来する。デカい兵器はすなわち、製造に時間も資材も多くなる。
つまりだ。目の前の仕様変更型は、繋げているのが別にある。
問題は何だと言いたいが、俺は何となく予想がついていた。
おそらくミザリの極晃だ。確か極晃は接続することができ、接続すればその時点で強大な力を振るうことができるようになるそうだ。
それにしたって限度はあるだろうが、それでも恩恵は莫大だろう。理論上は太陽系を吹き飛ばすような代物すら会得可能なら、当然の結論としてこの程度はできる。
となると、だ。
「予備躯体を極晃眷属にして、シンプルな方法で運用している。つまるところはそういう事か」
「それってつまり、そんだけのリソースってのがミザリにあるってことかよ!?」
イッセーも理解が早いが、だからこそ急がないといけないだろう。
これ、流石にカズヒねぇだって長時間は持たないだろう。むしろ無事なのか不安になってきたぞ。
ただ数が多すぎる。目の前にいるだけで十体は軽く超えている。
さて、どうしたものか―
「そんな時こそ、スーパー女神様ターイム♪」
―と思った瞬間、真下から大量の砲撃がステラフレーム擬きをけん制する。
ああもう！　この人本当に頼りになる！
思わずにやけそうになるぐらいのスーパー参戦タイム！
「助かるリヴァねぇ！　愛してる！」
「ほわっ!?」
あ、攻撃緩んだ。
「和っちそういうとこだからね！」

「リヴァもだけどよ、空気読め！」
咄嗟に左右からの春っちとベルナによる砲撃が入ったおかげで助かった。
っていうか、俺の所為？
正直ちょっと反応が遅れるが、そこにインガ姉ちゃんが残ったステラフレームをけん制する。
「ここは任せて、先に行って！」
……そうだな。
こいつらもこいつらでヤバいが、そんなことを言っている場合ではない。
この状況、大将首のミザリをどうにかするのが最適解というほかない。
これは、覚悟と信頼を決めるしかないだろう。
「……任せた皆、行くぞイッセー！」
「……ああ、頼んだぜっ！」
俺とイッセーは頷き合うと、そのまま加速する。
待ってろカズヒねぇ。俺だって、カズヒねぇに伝えたいことがあるんでな！

カズヒＳｉｄｅ

振るう猛攻と振るわれる反撃がぶつかり合う。
分かっている。ミザリは強敵だ。
共感覚により己に襲い掛かる脅威を察知する。その星辰光（アステリズム）が奇襲を防ぐ。この時点で守りは固い。
更に純血悪魔がサウザイアーになっている以上、予測演算もあるだ

ろう。対処が間に合えば最適解を引き当てる。
その上、攻め手としては神滅具が五つに魔王血族からくるポテンシャル。普通に戦闘能力は魔王クラスあるだろうに、そこに星辰奏者（エスペラント）と仮面ライダーの二重強化。超越者に匹敵するといっていい。
そして更に極晃星（スフィア）の上乗せ。悪夢というしかない。
戦闘を続けていくうちに、私は思い出し始めている。
そう、ミザリ・ルシファーは極晃星に至っている。その結果、私は圧倒されて蹂躙された。
問題はどう蹂躙されたのかだ。この期に及んでいまだに思い出せてないのは、その辺りを特に重点的に仕掛けているという事だろう。
……いや、もはやそんなことを考えている暇はない。
ここまで来たのなら選択肢は一つだ。
全力をもって、突き破る。その一つ以外に道はない。
「そう、まだだっ！」
乗り越える。そして、生きて帰って見せる。
……脳裏に浮かぶは、和地の姿。そしてあの時誓った笑顔の田知。
それを呼び水にしたかのように、走馬灯のようによぎる思い出の数々。
ああ、この思い出に恥じない自分でい続けたい。
どれだけ失ったものが多くても、どれだけその過程でどす黒く汚れ果てても、今この手に得られたものがある。
汚れ失ったその果てに、得られたすべての奇跡に誓う。
「勝つのは私だ……必ず、倒す!!」
その決意に、ミザリは小さく微笑んだ。
まるでこれから美しくなると確信したかのように。そして実際そうだからこそ。
ミザリ・ルシファーの気合が入り直る。
「綺麗だよ、日美子」
だからこそ、悲劇で終わらせる。
言外にそう告げ、ミザリもまた突貫した。

祐斗Ｓｉｄｅ

振るわれる猛攻はあまりに激しく、こちらは防戦一方になっていく。

三体そろってステラフレームの出力は、魔王クラスに到達している。具現化している聖十字架も、火力は本来の神滅具級になっている。更に超獣鬼やギガンティスサリュートという高性能兵器が多数。

まずい。僕達だけでは押し切られる。

「この……っ」

『甘いぜ嬢ちゃぁん！』

リアス部長の渾身の魔力砲撃も、多重十字砲火で放たれる紫炎が相殺される。

更に大量の魔獣達が包囲し、圧殺すら仕掛けてくる。

誰もが圧倒的な数に対応するので精一杯。僕も龍騎士団で押し返そうとするけど、物量戦ではこちらが不利か。

「こんのぉおおおおおっ!!」

「させませんっ！」

ルーシアちゃんとロスヴァイセさんの砲撃が敵を吹き飛ばしていくが、それでも敵の数が多すぎる。

増援を呼べるようにしているとはいえ、いまだ来ていない。これはおそらく、外の戦闘も余裕がないということだ。

それどころか、このままでは来たとしても間に合わないかもしれない。

『悪いねぇ～？　ほら、おじさん達もやられたくて来てるわけじゃな

いし？　勝算無かったらこんなことしないし？』
おどけるモデルへキサに苛立ちそうになるが、それ以上に寒気を覚える。
この感覚、おそらく奴らは―
『だからそろそろ、一人死んでちょ？』
―まだ引き出しを持っている。
それに気づいた時、僕らの視界に絶大なオーラが凝縮されるのが見える。
結界の端ぎりぎりに、重心が低くなっている魔獣が一体。
この出力、下手をするとクリムゾンブラスターレベルはあるっ！
『そんじゃ、バイビー♪』
その瞬間、砲撃が僕らを狙って放たれ―
『コーリングチェインスマッシュ』
『ウィッシングブーステッドエンド』
『シャイニングレインラッシュ』
―るその瞬間、僕達を追い抜いた三つの光がそれを迎撃して相殺する。
増援。それも、この攻撃は！
『……なるほど、我々が来ていると踏んでぶつかりに来たか。非合理的にも思えるが、同胞の危機に動くのはあり得るか』
冷静にモデルアーチが推察する中、攻撃を放った三人は着地する。
「当然だろう、叔父上。……理でも情でも、出ないわけにはいかないわねぇ」
小さく、意識を切り替えながらリーネスがそう言い返すと共に、南空さんとオトメさんが前に出る。
「出ると思ったわよ、再生怪人クソ親父！　再生怪人がパワーアップすんな！」
「貴方達の好きにはさせない。和地にも、イッセー君にもハッピーエンドを繋げて見せる！」
その決意に満ちた言葉に、僕達も気合が入り直る。
「……そうね。二人とも来たのなら、なおのこと負けられないわ」

微笑みながら、リアス部長は魔力をほとばしらせながら前に出る。
「さぁ、私の可愛い仲間達！　目の前の外道どもを吹き飛ばしてあげましょう！」
『『『『『『『『『はい、部長！』』』』』』』』』
さあ、ここからが第二ラウンドだ！

旧済銀神編　第十二話　極晃、開帳の時

和地Ｓｉｄｅ

突貫するのは、カズヒねぇが転移したとされる中心区画。
おそらくそこにミザリがいる。もしくは、ミザリがいる地点につながっている。
はやる気持ちを宥め、冷静に周囲を警戒する。そのうえでしっかりと素早い移動を行い、必要最小限の戦闘で障害を吹き飛ばし時として受け流す。
意識的な呼吸で気を静めつつ、駆け抜ける時だった。
「……まったく。やはり来ていたか」
その言葉と共に、殺気を感じた。
「って、この気配!?」
イッセーが驚愕する中、俺達の侵攻ルートを遮るように何かが叩きつけられる。
俺達が一瞬足を止めた時、土煙を破って魔力弾が雨あられのように放たれる。
そしてそれを徒手空拳で吹き飛ばすは、ミザリ直下の元サーヴァント、アルケード。
悪魔の翼を広げるやつは、何か少し違う印象がある。
……ん？　刺青が、減っている？
「まったく。サテライトフレームを大挙して送り込んできたから何かと思えば、ついに赤龍帝（ウェルシュ・ドラゴン）と涙換救済（タイタス・クロウ）が来たとはな」
着地する奴は、ため息を吐きながら拳を構える。
そしてサテライトフレーム。なるほど、あの仕様変更はそういう名称か。
問題は、それを誰かに伝える余裕もないわけだが。

「まぁ来たからといってどうにかなるとも思えんが、余計な邪魔はない方がいいだろう……サテライトフレームだけではヴィーザルとアポロンは抑えきれん」
二代目主神二柱が今足止めされているというわけか。
これはいよいよヤバいな。早くカズヒねぇと合流しないといけないが、俺だけで行っても大丈夫なのか？
正直嫌な予感すら覚えるが、その時イッセーが前に出る。
「先行け、九成。すぐ追いつく」
「おいイッセー。それはまずいだろ」
作戦ってものを忘れてもらっちゃ困る。
対ミザリの為の作戦は、リーネスの仕込み込みで俺達二人で出張るべきだ。
決まれば相手が極晃だろうと、勝算が少しは上がるだろう。だが決めるのが大変で、はっきり言ってイッセーがいないと決める可能性が皆無になりかねない。
ただイッセーは、こっちに向かって拳を突き出した。
「大丈夫、こいつをかたずけたらすぐ追いかける。それまで時間稼いどいてくれ」
「いや、だけど―」
俺は言いつのろうとするが、イッセーの視線は強い。
「―今カズヒに必要なのはお前だろ？　大丈夫だって、お前らなら至れるさ」
……信頼が重い。
つまりこれはあれか。俺とカズヒねぇなら極晃星（スフィア）に至れるから、それで時間を稼いどけと。いっそのこと二人で決着つけるぐらいでやれという感じだろう。
俺はちょっと悩むが、時間を考慮すると暇がないな。
どちらにしてもアルケードが、俺達二人を揃って行かせるわけがない。ヴァーリでも押されているのなら、更に一人はいる必要がある。
「分かった、そこは一旦任せる！」
「任せとけ……行けっ！」

イッセーがそう言うなり、つるべ打ちの砲撃を叩き込む。
俺はそれに合わせて全力疾走。
一瞬だがアルケードが砲撃に足止めされる中、俺はそれをすり抜ける。
行けるか……いや、寒気がする。
「なめるな」
その瞬間、俺の背に強大なオーラが迫る。
アルケードはしっかりと攻撃を放ってきた。それができるやつだとは思っていたさ。
だが、俺はあえて足を踏み込んだ。
ああ、これは直撃コースで、星の障壁でもしのぎ切れない数がある。
だからこそ、俺はイッセーと一緒に声を張り上げる。
「「シャルロット！」」
「当然です！」
その瞬間、気配遮断で俺達と突かず離れずの位置に待機していた伏兵。すなわちシャルロットが攻撃を受け止める。
「助かる、そっちは任せた！」
「行ってください、カズヒの元に!!」
ああ、こっちは何とかしのいで見せる!!

イッセーＳｉｄｅ

よし、九成は行ったな。
シャルロットの伏兵をここで使ったのはいい感じだろ。どうせミザリにその手の奇襲は通じないから、仕掛けるなら更に仕込みが必要

だしな。
「よっしゃ！　このままいくぜ、シャルロット、ヴァーリ！」
俺が拳を握りながらそう言うと、二人とも構えながら頷いてくれる。
そして俺達に囲まれながら、アルケードは肩をすくめる。
「三位一体の赤龍帝と、魔王血族の白龍皇。今代の二天龍は厄介極まりないな」
「よく言う。その割には余裕が見えるがね」
ヴァーリがそう言い返すと、アルケードは小さく笑う。
「ああ、漸く馴染んできた。宝具を三つほど消費した程度なら釣りがくる」
そう言い返すアルケードは、なんていうか凄く嫌な笑いを浮かべている。
なんだろう。嫌いな奴がめっちゃ不幸な目になっている時に、悪役が浮かべるような感じの笑顔だ。
っていうか、宝具を三つほどってなんだそりゃ？　そんなにサーヴァントって宝具を持てるのか？
首を傾げたいけど、そんなことをしている暇がちょっとないのがアレだ。
「気をつけろ、兵藤一誠にシャルロット・コルデー。奴は同じ対神宝具をあと九つ持っているうえ、俺達のようなタイプに気配遮断の効果を強化する宝具を別途持っている」
「……同種の宝具をいくつも？　どんなサーヴァントですか」
シャルロットの言いたいことは分かるけど、とりあえずヤバいってのだけは分かった。
それに、アルケードの雰囲気もかなりやばそうだから……な。
ああ、なんていうか、やばい雰囲気を纏わせている。これ絶対、ろくでもないことをしようとしているだろ。
「では、改めて名乗ろう。……我が真名はアルケイデス。忌々しい毒婦の栄光を名乗る愚者が捨てた人の魂にして―」
その時、俺達は凍り付いた。

「――これよりオリュンポスの全てを蹂躙する、神々の制圧者と知れ!!」

カズヒＳｉｄｅ

「……うぉおおおおおおおおおおっ!!」
「凄い凄いっ！　ここに来て更に強くなるのか！」
猛攻に猛攻を重ねながら、私はミザリに迫っていく。
ミザリも興奮し始めているけど、それでも処理が追い付かなくなっているのが分かる。
こんなものじゃないだろう。この程度でミザリが終わるわけがない。
だけど、ならば出す前に終わらせる。
覚醒をつるべ打ちにしている状態の私は、肉体が軋みを上げている。それほどまでに、私は覚醒を連発しすぎた。
……だが同時に、強引に我慢してある程度のプールしている。魔術的な暗示も併用してため込んだ覚醒の貯金だ。
その回数は五回分。全部開放すれば、一瞬だが攻撃力は大きく上昇する。
もはや他に手段はない。この一撃に賭ける。
「……五大暴発（ペンタグラム）ッ!!」
吠えると共に、聖墓を併用して私は魔術を全力開放。
いや、魔術なんてものではない。これは魔力の暴発だ。
強引に強化した魔力の暴発。その本流は私とミザリを同時に襲い、その勢いで強引に呑み込む。
本来なら私も、動きが一瞬取れなくなる。それほどまでの奔流に、

私は貯金を解放する。
ああ、ここでミザリを止める為。
「……まぁああああだぁああああだぁああああああああっ!!」
すべての覚醒を籠め、私は一撃を叩き込む。
『リスターティングブラストフィーバー!』
ため込んだ一撃、そのとどめの攻撃は、自分でも驚くぐらいスマートに放たれる。
その攻撃は、自分でも意外なぐらいにミザリに向かって吸い込まれるように飛んでいき―

「なるほど、遊びはここまでだね」

―その攻撃は、直撃した。
直撃、した、はずなのに……っ

「じゃ、ここからが極晃(本番)だ」

なんで、効いて、無いの？

その瞬間、私は深い一撃を喰らって数百メートルは吹き飛ばされた。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

状況が、一変した。
そう形容するほかないほどに、敵は圧倒的に脅威度を増していた。
「……なんだと!?」
それは後方で確認していた、フロンズ・フィーニクスが狼狽した声を上げることで実感される。
砲撃を受けて足止めされていたはずの超獣鬼二体が、サンタマリア級の砲撃で揺らがなくなった。
だが、そのタイミングは砲撃戦艦ユニットの主砲が直撃したタイミング。最も攻撃力が高まっているときのそれ等、異常というほかない。
そして、それはそんなレベルの事態ではない。
「全艦隊、ランダム回避!!　速攻で急げぇっ!!」
「コントロール奪取、間に合えやぁっ!!」
それを悟り瞬時に指示を出したノアと、瞬時に判断して艦艇のコントロールまで奪って対応したラカム。
二人の反応は最適解。間違いなく、この場における最善の答えを叩き出した。

だが、二人が答えを叩き出しただけで、全てが出したことには繋がらない。
その瞬間、圧倒的な砲撃が雑に放たれ、サンタマリア級の艦隊に襲い掛かる。
二十隻近い数のサンタマリア級。そのうち一隻が直撃して吹き飛ばされる。更に三隻が攻撃を受け、程度はともかく明確な被害を受ける。
そして、その理由は絶大な火力を超獣鬼が制御しきれなかったという、ただそれだけ。
八割がた幸運というほかない、僥倖そのものの被害の少なさは、それでも窮地であることを示すに値する。
「ありえねぇっ!? あれは、こっちの砲撃を増幅して撃ち返しただろ!!」
対応しながらも、ラカムの動揺は止まらない。
そして、その答えをフロンズとノアは知っている。
「……まさか、ファルビウム殿の御業か? 攻撃を無傷でしのぐ防御に、その力をまとめて返すカウンターの妙技?」
フロンズが、その正体を口に出すのに、疑問符を浮かべたのは当然だろう。
現魔王、ファルビウム・アスモデウス。彼が魔王の座についているのは、その圧倒的な防御力が揺らいだ。
魔王クラス以上の質を持つ攻撃でなければ通用しない。かつて最上級悪魔クラスすらいる大部隊の一斉砲撃を、彼は一人であっさりと耐えきった。
そして、その無効化した砲撃を、自らの魔力を込めて撃ち返す。これにより、旧魔王派の大部隊を一人で壊滅させた。
それが、魔王ファルビウム・アスモデウスの力。当時の内戦において、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーが手を引いた旧魔王派が敗北するのも当然の、圧倒的な防御の極み。
それを思わせる超獣鬼の反撃に、艦隊は明らかに動揺している。
「……どういう、ことだ?」

「どういう事もこういう事もねえよ！　そういう事だろ!!」
思考を回転させながらも理屈を掴めないフロンズに、ノアが声を荒げて我に返らせる。
「あれが極晃星（スフィア）なんだろ！　そしてそういう仕組みなんだ、察しろ!!」
珍しく動揺するフロンズの襟をつかみ、盛大にゆするノアはすべてを悟っていた。
「ミザリの野郎は読んでやがったんだ、魔王様方が自分ごと封印されることで、トライヘキサを削り殺すってなぁ！　だからミザリは、トライヘキサに仕込みだけして野放しにしたんだよ!!」
ノアもまた、大きく動揺している。
当然だろう。彼が悟ったミザリの力は、この状況をひっくり返して当然となる。
そう、ミザリは―
「最悪だ。あの野郎、隔離結界領域そのものを自分の力に変えやがった。……勝てるわけがねえだろうがっ!?」
―この世界最強の力を、己のものとしているのだ。

祐斗Ｓｉｄｅ

その瞬間、僕達は目を疑った。
リアス部長の消滅の魔星。仲間達の援護によって放たれた、合計三十を超える大量の魔力。
その全てを、モデルアーチが放った消滅の魔力で構成される球体の群れが圧殺する。

ありえない。この力は、只の消滅の魔力でもない。
「……滅殺(ルイン・ザ・エクスティンクト)の魔弾……？」
唖然として、リアス部長が呟く。
そう、この力はそういうほかない。ほかならぬサーゼクス様の振るう、消滅の魔力が極限の一つ。
嘘だ、ありえない。
あまりに信じられない光景に、僕達は間違いなく狼狽する。
そしてそれを逃すことなく、三体のステラフレームは明らかに殺意を高めていく。
『なら今度はこうするかぁっ！』
そうあざ笑うモデルマッドは、両手を上に掲げる。
そこから漏れる炎は紫炎じゃない。この炎は、むしろ光のように感じてしまう。
そしてそれを見たイリナさんが、目を見開いて愕然とする。
「この炎、まさかウリエル様の……っ!?」
『そしてこんなこともできるよん♪』
更にモデルヘキサがそう嘯くと、強い光力の槍が形成される。
この、光の質は!?
「ありえない、これはアザゼル先生の!?」
そう、この光の質はアザゼル先生のそれに非常に近い。
もはや訳が分からない。
なんなんだ、僕達は、何を見ているんだ……っ!?

カズヒＳｉｄｅ

吹き飛ばされ、私はすぐに体勢を立て直す。
だがその過程で、私は混乱から回復するのに二回は覚醒している。
何が起きている？　いったい何が起こっている？
私は弾き飛ばされ、更に拘束されそうになる。
全力でそれに抵抗しているが、抵抗できていることは問題じゃない。
これは、この力は、ありえない！
「……光成す主の代行、断罪を此処にっ!?」
「そう。天使長ミカエルの星辰光さ」
微笑と共に返されるミザリの肯定に、私は混乱を隠せない。
ありえない。あり得ないあり得ないあり得ない。
ミザリが、ミカエル様の星辰光を扱えるわけがない。流石にそれはおかしすぎる。
「ふざ……けるなぁっ!!」
吠えると共に覚醒し、拘束を突破して突貫する。
振るう攻撃には多種多様な魔術を込めており、どれか一つを相殺するなどという奇策をとる余裕はない。
ゆえに遠慮なく振るわれる攻撃は、しかし片手で止められる。
その瞬間に、私は悟る。
今のミザリは、性能が次元違いに高まっている。
この出力、無限だったころのオーフィスに匹敵する。……いや違う。出力の最大値に限定すれば、それ以上は確実にある。
何が、どうなっている!?
「さぁ、そろそろ涙嘆地獄の時間だよ？」
その瞬間、絶大な一撃が私に叩き込まれた。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

趨勢は、明確に傾いていた。
今ここに、出力で上回っていた禍の団の兵力は、異能すら併用して敵を蹂躙する。
その猛攻は、数少ない優位性を保っていた地点すら押され始めていた。
『『『

時間を掛ければ確実に詰む。それだけの圧倒的な力に、周囲に絶望が満ち溢れ―

『『『『『『『『――だが、まだだぁっ!!』』』』』』』』

―それを意思の力ではねのけ、彼らは抵抗を開始する。

「バーニングにその通り♪　ライジングにやり返し♪」

「その通り、この程度で終わるほど、我らが黄金の道行きは甘くないでしょう！」

炎とリズムを齎す煙霞と、回復のオーラと共に激励する梔子。

その二人の力を受け、更に突貫する者がいる。

「その通りね。むしろこれだけの敵がいるのなら、奪い害があるというものでしょう。……倒して主役になる時よ！」

氷の兵団を率い、アーネ・シャムハト・ガルアルエルが突貫する。

そしてそれを押し上げるように、九条・幸香・ディアドコイも吠えかける。

「見事だ親父殿！　それでこそ超える価値があるというものじゃ!!」

歓喜の表情すら浮かべ、幸香は駆ける。

覇道とは、己より大きなものに挑むこと。そして征服者とは、奪い肥え太ることにより大きくなるもの。

その決意を持つ後継覇王（アレキサンダー）に、恐れる通りは何もない。

「奪わせてもらうぞ、親父殿！　おぬしの屍、超えさせてもらう!!」

その決意と共に、後継私掠船団は駆け抜け―

―その瞬間、彼女達を圧倒的な氷の襲撃が蹂躙する。

「おいおいまじかよマスター!?　マスターの親父はここまでやるってのかっ!!」
　その光景を見たラカムは、怯えそうになる心を奮い立たせる。
「……なら尚更やってやるぜ!!　どうせ散るなら、勝ち逃げ目指して挑むだけってなぁいたぁっ!?」
　その後頭部に魔力弾を叩き込み、ノアは即座に通信装置を繋げる。
「撤退戦準備だアホ!!　勝ち目はない、引くことも考えろ!!」
　そう声を荒げて指示を出し、そのうえで、苛立たし気に髪をかきむしる。
「やってくれるじゃねえか、ミザリの野郎！　発想が糞の権化じゃねえか!!」
「まったくだ。これは、例の計画を成立させるまで逃げの一手だな」
　そう応え、フロンズは顔をしかめて歯を食いしばる。
「……奴の星は拡散性と付属性の二極型。おそらく付属性が天元突破したのだろうが、悍ましい星に至ったものだ」
　思わず口にするほどに、フロンズもまた追い詰められている。
　想定通りの極晃にミザリが至ったのなら、真っ向勝負で勝つことは不可能に近い。
　何とかして極晃をこちらも獲得するまで、冬の時代が確執される。
　徹頭徹尾ミザリの目を掻い潜り、多くの者を見捨ててでも勝利の兆しを得る為隠れ潜むしかなくなるのだ。
　そのあまりの猛威に、フロンズは意識せず言葉を口にしていた。
「……これが、極晃星（スフィア）かっ」

イッセーＳｉｄｅ

うぉおおおおおおおっ!?
放たれるアルケードの攻撃は、雷撃だった。
ありえないぐらいの出力の雷撃は、一発一発がクリムゾンブラスターぐらいある。しかも、一瞬で数十発は放たれている。
冗談きついだろこの野郎、こいつ一人でトライヘキサを足止めぐらいできるじゃねえか。
「ありえません！　いくら何でもサーヴァントの域を超えすぎています！」
「しかもこの出力、リゼヴィムを遥かに上回っているだと!?」
シャルロットやヴァーリも驚愕しているけど、それにしたってやばいだろ、これは。
糞ったれ！　これじゃあ九成を追いかけるどころか、生き残れるかどうかもちょっと不安になってきたぞ！
そう思ったとき、アルケードの後ろから二人ほど迫ってくる。
「そこにいたか！」
「好きにはさせないってなぁ！」
強い熱と光を籠ったオーラに、鋭い蹴り。
その猛攻を、アルケードはいきなり槍を具現化させると弾き飛ばし、雷撃で反撃する。
それを凌いだ二人だけど、明らかに驚愕している。
「これは、ゼウス様の!?」
「親父のグングニルだと!?　何しやがった！」
え、ゼウスにグングニル？
ちょ、どういう事!?
「すいませんどういうことですか？　あとどちら様ですか!?」
「……赤龍帝か。私はオリュンポスの主神を継ぐよう明示されたアポロンだ。隣にいるのは、アースガルズの主神を継いだオーディン殿の息子であるヴィーザルだ」
「義弟になったヴァーリが世話になってるな！　あと無事か、マイブ

ラザー？」
そう茶化すように言うヴィーザルさんに、ヴァーリは肩をすくめて見せる。
「そうも言ってられないけどね。と、いうよりだ」
ヴァーリはするどい視線をアルケードに向ける。
「ゼウス神の雷霆と、オーディンの槍を使うとはどういうことだ？
ヘラクレスであることを否定するアルケイ（奴）デスに、神の力を振るうことはできないだろう？」
そ、そうだよ。
いくらなんでもおかしいだろ。何がどうなってるんだ？
俺達がそんな訳の分からない状況に攻めあぐねていると、アルケイデスはにやりと笑っている。
「ククッ。ゼウスの雷霆でヘラをなぶり殺しにするつもりだが、その練習にはお釣りがくる。……練習相手になってくれる礼だ、教えてやろう」
雷霆をグングニルに纏わせながら、アルケードは愉快そうな表情でこっちを見る。
「これがミザリの極晃星（スフィア）だ。そして俺達は今、その恩恵を受けているのさ」
いったい何に目覚めやがった、ミザリは……っ！

カズヒＳｉｄｅ

まずいまずいまずいまずい。
ショックで記憶が急激に戻り始め、だからこそ尚更驚愕する。

ミザリが極晃に至った直後、これだけの力は振るっていなかった。間違いなく、こんな力をあの時のミザリは振るえなかった。嘘偽りなく、ミザリは別物になっている。
そして私は極晃の共鳴を齎したものとして、その魔術回路もあって解析が進んでいる。
だからこそ、私は心が折れそうになっている。
それでも！
「……まだ、だぁっ!!!」
ここでこいつを倒さなければ、世界が悲劇に包まれる。
その意識をもって、私は限界を超えて攻撃を叩き込む。
そしてその全てを、ミザリは迎撃してのける。
私の全身は沸騰しそうで、体の節々は限界を超えすぎて自壊しかけている。
それだけの覚醒をもってしての猛攻に、しかしミザリは余裕を持って対応する。
間違いない。このオーラはトライヘキサのもので、それもトライヘキサ以上の出力を確立している。
雷撃が、火炎が、氷雪が、私の攻撃を弾き飛ばす。
そしてその質が、私にすべてを悟らせる。
ミザリ・ルシファーの極晃星は、その本質は―
「……指定した対象そのものを、己の力の源泉として繋げる。強制接続・自己増強能力……っ！」
「その通り。僕は必ず相手より強くなるのさ」
―ミザリの微笑が、真実を物語る。
そう。これこそがミザリ・ルシファーの至った極晃星。

ミザリ・ルシファー
明星が照らすは涙嘆地獄、広まれ銀の絶望よ

基準値：Ａ
発動値：ＡＡ
収束性：Ｃ
拡散性：ＡＡＡ
操縦性：Ｄ
付属性：ＥＸ
維持性：Ａ
干渉性：Ｃ

天元突破した付属性。それにより、ミザリは一切の矛盾なく敵を己の力に変える。
敵そのものと接続し、己の力の供給源と変える。これにより敵の出力と異能はミザリのものとなり、ミザリが振るった分の消耗すら押し付けられる。
単純に最低最悪のコンセプトだ。戦う相手そのものを自分の力として上乗せすれば、必ず敵より強くなれる。さらに消耗を相手に全部押し付ければ、相手は圧倒的に不利。とどめにミザリがあらゆる手段で堅実に強くなっているから、逆転の目がほぼ存在しない……っ。
もちろんそれにも限度がある。出力の問題もあって、同時に接続できる対象には限界があるだろう。極限を超えているのが付属性だけである以上、限りはある。
更にこれはあくまで性能といったフィジカルやアビリティといった面だ。必然としてテクニックやスキルマではカバーできない以上、正攻法の一対一では場合によっては負けるリスクもある。
……だからこそ、ミザリはトライヘキサに目を付けた。
推測だけど、ミザリの配下にはトライヘキサと縁がある、もしくは縁を結べるサーヴァントがいた。
それと聖杯を用い、更にトライヘキサそのものを確保することで、

ミザリはトライヘキサと繋がった。
そして最悪なのはここからだ。
ミザリは先を読んでいた。その際想定される対応として、トライヘキサが封印されると読んだ。さらに、封印の中でトライヘキサを戦力を結集して滅ぼすという、被害を最小限に抑える形でのトライヘキサ討伐すら想定していた。読み勝ってしまった。
基点はトライヘキサ。そしてその範囲指定に、隔離結界領域を使用している。
いうなれば、ミザリは隔離結界領域を封印系神器として、結界内の者達に負担を全部押し付けて覇を使っているに等しい。
主神、熾天使、魔王、更に幾人もの精鋭達に、超越者。それだけの強者の力を、トライヘキサと共に混ぜ込んで振るう。
間違いなくミザリはこの世界で最強だ。そしてそんな彼らがいなくなった世界で、彼らをまとめて敵に回すことになっている。
ヴィールと一緒に来なかっただけのことはある。ミザリはそこに賭け、隔離結界領域という形で賭けに勝ったんだ。
完膚なきまでに、ミザリは王手をかけた。いや、待ったをかける余地がない、チェックメイトを掴み取った。
分かっている。これはあまりに差がありすぎて、私が覚醒したところで追いつかない。
それ、でも……っ
「まだだぁあああああああああああああっっっ!!!」
諦められるか、できるものか。
骨が折れる。内臓が潰れる。肉が割ける。
血反吐を吐き、出てはならない液体すら漏れている。
それでも、足を止めるものか。
億分の一。兆分の一。いや、那由他の果てでも構わない。
ほんの僅かにでも、チャンスがあるというのなら。魂が燃え尽きるその瞬間まで止まることなどありえない。
届け。私の魂が燃え尽きるまでに。
まだだまだだまだだまだだ。

まだまだまだま

知識が足りない小さな子供だったから、ロシアの命名法則や、細かいつづりや読みは間違えてたりはしている。だけど、その言葉に賭けた意味は違えない。
そう、お前の逆だよ、悲惨の明星(ミザリ・ルシファー)。
私達は、今の私達を肯定するべきだ。少なくとも私はそうしたい。
道間日美子、道間誠明、道間乙女、道間七緒、アイネス・ドーマ。そんな過去を否定するのではなく、そのうえで現在(今)も受け入れる。それが、必要なんだ。
アイネスが、鶴羽が、オトメねぇが。そして誠にいがミザリ・ルシファーであるように。私もカズヒ・シチャースチエであることを否定しない。
私は私のケジメをつける。そしてそのうえで、己の誓いを果たして見せる。
「これは道間日美子と道間誠明の決着だけじゃない。世界に悲劇を齎す星を、幸せを照らす灯が穿つ戦い。悲劇齎す邪悪と、悪意を穿つ銀弾の戦いだ」
だからこそ、まだだ。
動け、体よ。
「必ず止める。絶対止める」
あの日の笑顔を裏切るな。掲げた誓いを思い出せ。
瞼の裏に焼き付いた笑顔が、瞬きと共によみがえる。
その約束された笑顔が、私の体を動かし続ける。
そう―
「道間田知を、涙換救済(タイタス・クロウ)を、九成和地を愛する者として！　そこをたがえるつもりは……ないっ!!」
―それが、カズヒ(私)の、真実だ!!
その決意と共に、私は決死の覚悟で砲撃に突貫する。

「ああ、ありがとう、カズヒ。ただその無茶は、俺の心が色々きつい」

そしてその砲撃をいなし、私に救済者(笑顔)が舞い降りた。

旧済銀神編　第十三話　極晃天衛（前編）

カズヒSide

「……和地？」
思わず、私はぽかんとする。
和地はボロボロで、だけど笑顔を共に私に振り返っている。
「ああ、寝坊してごめんな、カズヒ」
そう微笑む和地は、障壁を展開して攻撃を凌ぐ。
だけど、それだけで耐えれるわけがない。それほどまでに、今のミザリは脅威で、だから理由がある。
そう、今私達とミザリの間には、何人もの戦士が集っている。
「見つけたよ、ミザリ・ルシファー。……あまり人のことは言えないけど、それは兄としてどうなんだい？」
自虐的な呆れ顔を見せるは、リュシオン・オクトーバー。
「よもや、ここまでの脅威が降臨するとは。……恥ずかしいが、少し高ぶってしまう」
そう苦笑しているのは、ヴァスコ・ストラーダ猊下。
「確かに、これは強すぎる。だからこそ、強者を求めるものなら高ぶって当然ですとも」
槍を構えながら微笑むは、英雄派の曹操。
「とはいえこれはまずいね。はっきり言って時間が稼げるかどうかもだ」
そう警戒心を見せるは、刃狗（スラッシュ・ドッグ）の幾瀬鳶雄。
「だが、負けてやる理由はない。この脅威は俺たちが打ち砕かねば」
拳を握って構えるは、サイラオーグ・バアル。
「そうだな。ここで我らに負けは許されない」

魔力をほとばしらせるは、皇帝(エンペラー)ことディハウザー・ベリアル。
「ま、そういうわけでね？　遠慮なくやっちゃうとするよ」
あまねく属性を従えるは、天界の切り札(ジョーカー)、デュリオ・ジュズアルド
この世界における圧倒的強者達が、これでもかと言わんばかりに集結している。並みの敵なら発狂する顔ぶれだ。
だけど、それでも。
「……和地、今はともかく、私達もっ」
圧倒的有利なのはミザリの方だ。
だからこそ立ち上がろうとして、和地は私を押しとどめる。
「違う違う、そうじゃない」
そういう和地は、微笑みながら首を横に振る。
そして和地は振り返ると、肩をすくめながら彼らに声をかける。
問題は、その内容。
「じゃぁ、時間稼ぎお願いします！」
真剣に張り倒したくなった私は悪くないと思う。
「ちょ、和地!?」
この状況下で何を言っているのよ、このバカは!?
「いや、たまたま出会ったんで、頭下げて時間稼ぎをお願いしてたんだよ。……俺達が向き合う為にな」
激戦が繰り広げられる中、和地は堂々とそれに背を向ける。
目を背けるのでもない。現実を忘れるのでもない。今をきちんと理解したうえで、まず私に向き直る。
「……ミザリは強い。極晃星(スフィア)を手にしたミザリは、勝利に王手をかけている」
静かにそう、和地は告げる。
「だから待ったをかけるには、俺達も至るしかないだろう？」
「それが簡単に出来たら苦労はないでしょう！」
極晃星がそんな楽に至れるなら、誰も苦労しないわよ！
ただ、和地は冷静な態度のままだった。
「できるさ。俺とカズヒなら」
その時、私は今更ながらに気づく。

和地は、私のことをカズヒと呼んでいる。
カズヒ姉さんでもない。カズヒねぇでもない。
ただのカズヒと、九成和地は向き合おうとしている。
「……あの日の答えを返したい。俺は、それをカズヒと共有したい」
そう微笑み、和地は手を差し出す。
「そして、俺達の勝利に至ろう。俺達に、それができないはずがない」

祐斗Ｓｉｄｅ

吹き飛ばされそうになる猛攻に、僕達は耐える。
「負けるものか、そうだろう……皆っ!!」
その一撃が僅かな切れ込みを作り、そこをリアス部長が魔力の奔流で切り開く。
もちろん一瞬で押し返されるが、それでも僕達は諦めない。
「舐めんなクソ親父！　私達は、負けないんだからっ!!」
「はい、絶対に負けません！」
「舐めてもらっては困るというものだ!!」
「皆の言う通り。主よ、どうかご加護をっ!!」
聖十字架の炎を放つ南空さんに、アーシアさんの結界、ゼノヴィアとイリナさんの聖剣が援護する。
「させないわよぉ、叔父上！　和地達は、必ずミザリを倒すんだからぁ!!」
「そうですわね。イッセー君達なら、必ず！」
「あの三人が揃っているなら、それぐらいはやってのけますとも!!」

「兄さん達も向かっているはず、だから……勝ちます！」
魔術的にカバーに入るリーネスを、朱乃さんやロスヴァイセさん、ルーシアちゃんが援護する。
「だから私達も倒れない。生きて帰って、出迎えるの!!」
「そういう事ですわよ！」
「させないってねぇっ!!」
そして絶大な魔力をもって、オトメさんがヒマリやヒツギと共に援護に回る。
そう、この状況はまだ拮抗している。
だからこそ―
『お前達に奪わせるものは何もない！』
「やらせるわけがないってなぁっ!!」
「そう、ここで倒れることはない!!」
ギャスパー君やアニル君と共に、僕は攻撃を切り開く。
「……リアス部長、今です！」
「ええ、ありがとう小猫！」
そして、過剰なまでの魔力放出でかかる負荷を小猫ちゃんの仙術で調律しながら、リアス部長が魔力を再び込める。
「行くわよ皆、私達は、生きて彼らに報いるわ!!」
『『『『『『『『『『はいっ!!』』』』』』』』』』
そう、僕達は……生き残る!!

イッセーＳｉｄｅ

槍を振るうアルケードは、しっくり来ているぐらい強い。

こいつ、徒手空拳が基本じゃなかったのかよ。
「なめるなよ？
これでも一通りの武器は修めている！」
そんなアルケードは、俺達全員を相手に薙ぎ払っている。
神の攻撃を弾き飛ばす加護が、強引にアポロンさんやヴィーザルさんを弾き飛ばす。そして一瞬のスキを強引に作って、俺やヴァーリから気配を隠して攻撃を叩き込む。
その攻撃は雷霆を纏う神槍。一撃の威力が大きすぎて、俺も意識が何度も飛びそうになる。
ヴァーリも、シャルロットも、俺も。アポロンさんやヴィーザルさんも含めて、間違いなくヤバいことになっている。
……それでも！
「舐めんなぁっ!!」
俺達は倒れない。
そうだろう、シャルロット、ドライグ。
「ええ、もちろんです！　ここで倒れるわけにはいかない！」
『お前なら尚更だ。なにせ、戦っているのだからな!!』
ああ、そうだろ二人とも。
今、九成が、カズヒが、あの二人が戦っている。
そしてリアス達が、皆が、同じように戦っている。
だから、こんなところで倒れるかよ！
「負けるかよ……必ず、勝つ！」
俺は強引に雷霆を突破して、神槍を掴む。
その瞬間、アルケードはためらうこともなく一瞬で膝蹴りを放つ。
だけど、それは俺の拳と同時に当たる。
「ぬ……っ！」
「なぁ……めんな……っ！」
ダメージはこっちが圧倒的に上だろうさ。
それでも！
「勝つのは、俺達だぁあああっ!!」

和地Ｓｉｄｅ

「答えは最初からあったんだ。俺たちは、そこから始めて進んできていた」
俺はしゃがみ込み、カズヒの手を取る。
カズヒねぇとはもう呼ばない。カズヒ姉さんとも呼ばない。
そして、俺ははっきりと告げる。
「俺達はずっとそれを守ってきた。俺達にとって、それが答えだったんだ」
俺のその答えに、カズヒは肩を小さく振るわせた。
「……そう、だったわね。そうだった」
小さく微笑むカズヒは、俺の手を握り返してくれる。
カズヒは小さく微笑み、そして俺に向き合ってくれる。
「私と誠にいは、失った先に手にした光にそれを見た。だけど私達は、守るべき尊いそれを共有していた」
ああ、そうだ。
俺たちはそうやって生きてきた。それを互いが知らずに誓い、形を成していく中で再会した。
だから俺は、必ずカズヒと到達できる。
俺達はずっと、それを持っていた。それそのものではなく、どうそれに向き合っているかを共有していた。
あの日。互いが互いの笑顔を瞼の裏に焼き付けた。そして別々に同じ誓いをし、その結実がここにある。
至るべき答えは見えている。俺にとって、その答えはシンプルなま

でに見えている。
だからこそ―

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

圧倒的な猛威が、そこに在った。
当然だろう。今のミザリ・ルシファーの総量は、文字通り世界最強だ。
龍神に匹敵するトライヘキサ。それを核とする、隔離結界領域という力の源泉。ゆえにそこに内包される、神仏、魔王、熾天使といった、名だたる存在全てがミザリの力そのものだ。
高々数人の頂点如きで、どうにかできる余地がない。掴み取れた時点で、ミザリはグレートレッドすら歯牙にもかけない力を獲得している。
つまるところ、僅か数分で最強格の集った戦力は動くことすら困難な状態に追い込まれていた。
「美しい。世界が誇る戦士達が結集してなお、残酷なまでに圧倒的な差によって圧殺される。なんて綺麗なんだ……っ」
そう陶酔するミザリの前で、立ち塞がった最強格の戦士達は圧倒されていた。
そして彼が眷属達を介して確認する中、趨勢は明確に決している。
増援として派遣されたスルトやテュポーンすら圧倒される中、ミザリの趣味もあって死人が少ないのが逆に悲劇といえるだろう。

特にサテライトフレームがいい。
ステラフレーム用の予備躯体。それらをほぼすべて組み上げ、自律動作で戦闘可能に調整。ラージフレームの代わりに自分を経由して隔離結界領域をつながらせることで、高い出力によるシンプルな戦闘を可能とする戦闘躯体。
基本性能は最上級悪魔クラス。そして極晃に慣れた今のミザリに従う限り、そのカタログスペックは魔王クラスに到達。さらに任意で隔離結界領域内にいる、名だたる強者の力を振るうことができる。
圧倒的な猛威を前に、彼らはただ蹂躙される。
シヴァやインドラ、最高峰の神仏すら押されている。ヴィーザルやアポロン、新たなる主神も蹂躙される。それらに匹敵するスルトやテュポーンすらものともしない猛攻は、世界の趨勢を決定していた。
あとはグレートレッドを蹂躙すれば、涙嘆悲劇（バッドエンド）は確立する。
そこからは少しずつ進めばいい。慣れ切れば一対一なら負けることはまずない。これだけの力だけでなく、相対する者の力すら上乗せされるのだから、負ける道理が基本としていない。
しいて言うなら同じ極晃が曲者だが、それにしても相応のものが必要だろう。
単純に基本性能的な圧倒を齎す極晃なら、自分はそのまま恩恵を受けて負荷を押し付けられる。
多少曲者であっても、シンプルな性質なら勝算は十分すぎる。相手の発動に合わせるなど、掴みさえすれば勝ちようはいくらでもある。
極めて特殊な極晃だと話は違うが、その場合は基本性能のごり押しだ。部下の力を借りるなどすれば、やりようは十分にある。
ゆえにミザリは勝利を確信し―
「……甘いぞ、若き魔王よ」
―その言葉に、首を傾げた。
デュランダルⅡを支えにすることで、かろうじて膝は付けているヴァスコ・ストラーダ。
彼の微笑みに、ミザリは首を傾げるほかない。
「この状況でその表情、ちょっと意外だね」

勝ちの目は潰えていると言っていい。というより、彼らはここで倒されるだろう。
にも関わらず、その目には勝機があるという確信がある。
だからこそ、それを問おうとし―

「……そう、答えはあった。あったのよ」
「俺達だからこそ持てる答えが、ここにある」

―その言葉に、目を見開いた。

「「勝利とは、守るべきもの」」
手を取り合い、そしてこちらに向き合う一対が、ここに人生(イノチ)の勝利(コタエ)を形にする。
「命を賭して、全てを賭ける」
カズヒ・シチャースチエがそう告げ、
「尊ばれるべき、誰かの祈り」
九成和地が、それに応える。
「「そんな誰かの勝利(笑顔)を守る！　それが、瞼の裏の笑顔に誓った、原初の願いなのだから!!」」

そう、今ここに条件は達成された。
互いが別の形で保有する、神星鉄に類する高位次元干渉物質。
高まる共鳴に呼応する干渉性という、天元突破に繋がる特化した性質。
そして守るべき誰かの笑顔。そのものではなくそれに対してどう向き合うかで、勝利の形を共有する。
瞼の裏の笑顔に誓った、約束された勝利の結実。ここに第三条件、同じ想いを共有する比翼連理が成立した。

ゆえに悲劇よ絶望せよ。
涙嘆悲劇（バッドエンド）に抗い輝く、嬉涙旧済（グッドエンド）は此処にある。
嘆きの極晃を打倒するべき、救いの極晃が生誕した。

旧済銀神編　第十四話　極晃天衛（後編）

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

「天衛せよ、我が守護星――鋼の笑顔（誓い）で涙を変えろ」
今ここに、九成和地は星となる。
祈りを奏でる起動詠唱（ランゲージ）。涙の意味を変える涙換救済（タイタス・クロウ）。そんな男は今この場で、神域に己を到達させる。
「嘆きを穿つ銀の女神。悪敵銀神（ノーデンス）の贖罪は、しかし決して届かない。何より償うべき明星は、その悲劇によって勝利の光を齎すから」
互いの笑顔に誓った比翼。そんな悪祓銀弾（シルバーレット）が嘆き悲しむ事実を、彼は決して否定しない。
「弾丸では決して星を落とせない。悲劇に染まる者こそを慈しむ明星は、星々の深淵より来たりし支配者が如く。人の決意を愛玩し、悲劇をもって勝利を掴む」
その事実は変わらない。悪鬼明星（ルシフェル）は美しい悲劇の為に生きることを定め、ゆえにそれを悟らせた道間日美子に感謝しているから。
失った先にある光を共に勝利としたからこそ。道間誠明はミザリ・ルシファーとして、涙嘆悲劇（バッドエンド）を慈しむ。どれだけ悪敵銀神（ノーデンス）が全力を尽くそうと、その答えが共有されている以上、彼は止まることなどないのだから。
「されど、枯れ果てた白き薔薇の根元で生まれた奇跡は色褪せない。美麗を謳う悲劇の星など、あの笑顔の誓いに比べれば、哀れみにしかならぬのだから。命をかけて果たす誓いは、明星に負けぬ勝利を願うのだ」
そのうえで、九成和地はカズヒ・シチャースチエを愛している。
共に、死してなお残っていた瞼の裏の笑顔。互いに知らずに誓った願いがあったからこそ、彼は愛する者達が流す涙の意味を変え、彼女は涙を強制する悪を打倒して見せたのだ。
その罪業を知ってなお、その事実は変わらない。その想いをもって銀弾の涙すら変えたからこそ、九成和地はここにある。

そう、勝利を共有するのはこちらも同じ。
失った先にある光という勝利。そこから生まれたもう一つの勝利の星は、悪鬼の明星が誕生したからこそ、同じように誕生しえるのだ。
「共に行こう、比翼連理の銀の魔弾よ。汝が邪悪を乗り越えたからこそ、俺は嘆きに抗う勝利の祈りを掴めたのだ」
だからどうか、愛しい人よ。その事実を忘れないでくれ。
その想いと共に、愛しく思う彼女に彼は手を伸ばす。
「ならば、問おう。比翼連理の救済の徒よ」
だからこそ、カズヒ・シチャースチエは最後に尋ねる。
失った先で得た勝利(光)。そんな輝きと共に、守るべき誰かの勝利(笑顔)を救う為、一つの確認を彼女はする。
「救いを齎す笑顔の涙。私はそこに在れるだろうか。この罪深き魔弾の中にも、そんな価値があるのだと、貴方の口から聞かせてほしい」
すべてを踏みにじった自分。そのうえで正義を奉じる銀弾は、誰かを救う輝きと、共に合っていいのだろうか。
答えが何かは分かっている。その上で、カズヒは和地から答えを聞きたいと願うのだ。
「笑顔(全て)だと、笑顔と共に伝えよう」
ゆえに満面のそれをもって、和地はそう断言する。
「これより極晃(我ら)が尊ぶ世界。それこそが貴女の勝利(笑顔)そのものだ」
この戦いをもって、己の生き方をもって、悪敵銀神(カズヒ)は皆(誰か)と共に居ていいのだと。世界に容認させて見せる。
その決意をもって、今ここに涙換救済(タイタス・クロウ)は進化する。
「光を灯せ旧済銀神(エルダーゴッド)よ――」
ここに来るは救いの極晃。神域に至る救済者。
悪敵銀神(ノーデンス)と共にある旧済銀神(エルダーゴッド)。悪より誰かを守りし神。
「――嬉涙旧済(グッドエンド)を、守り抜き――」
そう、ゆえに最後の祈りは彼だけのものにあらず。
目を閉じ、手を握り、そして告げるは原初の誓い。
あの何もかも失った道間日美子を、九成田知が救ったその瞬間。
そこより生まれた勝利の答えを、二人は此処に宣言する。

「――瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻めっ！」
今ここに、空前絶後が降臨する。
ゆえに極晃（悲劇）よ絶望しろ。
あまねく嘆きの意味を変える、救済の極晃星（スフィア）が生まれた以上。世界は極晃（悲劇）に染まらない。
その決意を、九成和地は言葉に変える。
「超新星（メタルノヴァ）――銀の救いは青い空に、紡ぐは笑顔の嬉涙旧済ッ（サルヴェイティング・スフィア・ディフェンダー）!!」
誰かの笑顔を守る極晃奏者。極晃衛奏者（スフィアディフェンダー）が、光をもって悲劇（涙）の世界を救済（変換）する。

イッセーＳｉｄｅ

その拳は、信じられないぐらいいい感じに入った。
「が……あっ!?」
アルケードも、信じられない表情になっている。
俺も信じられないぐらい、その攻撃はもろに入った。
だけど、困惑している暇はない。
「……今だっ!!」
更に拳を叩きつけながら、俺は声を張り上げる。
そして、誰もがそれに反応した。
俺の拳で揺らぐアルケードに、強い炎と光が襲い掛かる。
更にその瞬間、空間ごと瞬時に半減が続き、強引に圧殺が叩き込まれる。
それをアルケードは振り払おうとするが足りない。

そのまま、更なる蹴りを喰らって血反吐を吐く。
そう、足りていない。
今まで俺達を相手にしてなお上回っている出力が、ここに来て一気に消えていた。
それでも宝具や力量もあって、一対一なら勝ち目は十分あっただろう。だけど、ここに来て俺達五人がかりで仕掛けていたのが功を奏した。
ああ、やったんだな。
よく分かってないけど、つまりそういう事なんだろう。だからこそ、俺達は此処で勝利を掴む。
「……お前の負けだ、アルケード」
クリムゾンブラスターを集めながら、俺は拳を握り締めてそう宣言する。
「まさか、ここに来て……奴らが……っ」
迎撃するように拳を握りながら、アルケードはそれでも事態を悟ったんだろう。
ああ、そうだ。そうなんだよ。
「ミザリは倒す。俺達が、……九成やカズヒと一緒になぁ！」
その思いを込めて、俺は一気に殴り掛かる。
その瞬間、アルケードもカウンター狙いで拳を放つ。
一瞬だが、アルケードが早く俺に拳を叩き込む。
だがそんなの関係ない。俺はそのまま、只拳を叩き込むことだけを構えて殴り掛かり―
「そう、あの二人は負けません」
―その瞬間、シャルロットの力で極小の可能性が成立する。
奇跡的な、アルケードの狙いのズレ。そこに勝手に滑り込んだ俺の拳が、アルケードの顔面に叩き込まれ、吹っ飛ばす。
そう。俺達はこんなところでやられねえよ。
ここから皆で、勝つんだからな。
「終わりだ、アルケードぉおおおおおっ！」
そして吹き飛ばされるアルケードに、反撃の時は与えない。

俺達全員の渾身の攻撃が、アルケードを包み込んで吹き飛ばした。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

その瞬間、傾きかけていた趨勢は一瞬で逆転した。
文字通り全身を崩壊させる、大量の超大型魔獣。
超獣鬼（ジャバウォック）及び業獣鬼（バンダースナッチ）。合計すれば数十体となる猛威は、一瞬で片手の指が余る数にまで減少して崩れ去る。
同時に機能を停止して崩れ落ちる、大量のサテライトフレーム。
動ける個体も出力が上級悪魔レベルにまで落ち、ステラフレームの自我未覚醒体も出力が低下していく。
ギガンティスサリュートも多くが機能不全を起こし、文字通りウドの大木へとなり下がる。機能を維持することすらできず、激しい動きをとったいたことから自壊するものまで出る始末だ。
必然、敵勢力が一気に総崩れとなる。
「……嘘、でしょ!?　トライヘキサとの接続が、殆ど崩れて!?」
「これは、隔離結界領域との接続が、九割以上遮断されただと!?」
狼狽するは、その恩恵を仕組みを理解して受けていたイシロとアルバート。
この戦いは、はっきり言えば極晃弄奏者たるミザリとその眷属による蹂躙戦。隔離結界領域そのものを力の源泉とする、最低最悪のマウントをとっていることに由来する。
必然として、それが遮断されれば趨勢は逆転する。
龍神クラスのトライヘキサ。それを一万年かけて滅ぼしつくす神

仏魔王の大軍勢。その強制的なバックアップが無ければ、総力戦という土俵に挑めるわけがない。勝利に繋がる大前提が崩壊しては、勝てる道理もないのだから。
「……どうやら、破壊されるのは君達のようだね」
「ＨＡＨＡＨＡ！　なんか面白いことになってるＮＡ！」
そしてそれゆえに、この二大神を打倒できる余地などなし。
破壊神シヴァと帝釈天インドラ。この世界に残る二強を前に、彼らの敗北は決定した。

そしてその趨勢は、当然だが圧倒となって勝利を刻む。
「……なるほど。これが極晃星（スフィア）か」
そう呟く幸香は、血反吐をあえて吐いてスッキリしてから周囲を確認する。
光に魂を燃やし、覚醒をつるべ打ちにしてなお絶望。そんな圧倒的不利な情勢は、一瞬で崩壊した。
そのどちらも極晃あってこそ。自分達光の意思で森羅蹂躙する者達ですら、あっさりと振り回されるのが極晃星（スフィア）だと、いやというほど痛感する。
ゆえにこそ―
「これは、今後が大変じゃのう？　どうするのだ、フロンズよ」
『―決まっているだろう。必ず掴むほかはない』
そう答える通信越しのフロンズは、ため息をついているのが丸分かりだ。
『前向きに考えれば、極晃がどういうものか知れたということだ。どうせ一年や二年でどうにかするつもりはないゆえ、ゆっくりと推し進めるとするさ』
「そうだな。それでこそ我が同盟者よ」
そう語りながら、双方が苦笑を浮かべるのは必然。

だがその上で、幸香は彼らを寿ぐことにしていた。
「誇るがよい、父上、そして母上よ。その極晃(ヒカリ)、妾がいずれ制覇するに相応しき彼方(宝)なのじゃからな」

祐斗Ｓｉｄｅ

趨勢は決した。彼らが、やってくれた。
その喜びで体を震わせながら、僕達は一気に攻勢に転じる。
『な、にがぁあああああっ!?』
聖十字架の猛攻を弾き飛ばされ、モデルマッドは明らかに動揺していた。
そしてそれは誰もが同じ。今この場において、戦闘の趨勢は僕達に傾いている。
何故なら、彼らの力は大きく減じた。半減という言葉すら生ぬるい。圧倒的な出力は消え失せ、僕らの総力なら確実に勝てるレベルにまで減衰している。
『嘘だろちょっと!?　え、何があったん!?』
逃げ惑うモデルヘキサも、この事実に動揺している。
彼が創造する魔獣達も、数が明確に減じている。もはやギャスパー君の魔獣と僕の龍騎士で抑え込める。超獣鬼は業獣鬼に退化し、数も減ってしまっているからやりようはあった。
そしてギガンティスサリュートも一機となり、すぐに僕達が打倒できる状態だ。
完全に形勢は逆転した。僕達は、この場を確実に制することで貢献する。
そして猛攻にさらされながら、モデルアーチは何かに気づいたよう

に肩を震わせる。
『まさか、そういう事なのか？　信じられん、正気か、奴らは!?』
動揺する彼は、それでも凌ぐ為に攻撃を繰り返す。
だが足りない。勝機はもはやなく、装甲は砕け散り続けている。
だがそれでも、目の前の男は優秀だったのだろう。
僕達ですら図り切れていない、新しい極晃。その本質を、その慧眼は見抜いていた。
『……天元突破した性質による、高位次元現象を具現化する極晃星（スフィア）の本質。それを殺す為だけの反極晃星（アンチスフィア）。いうなれば、これは極晃鎮星辰体創造能力……っ』

九成和地＆カズヒ・シチャースチエ
銀の救いは青い空に、紡ぐは笑顔の嬉涙旧済（サルヴェイティング・スフィアディフェンダー）
基準値：A
発動値：AAA
収束性：B
拡散性：A
操縦性：B
付属性：E
維持性：C
干渉性：EX

その驚愕に、僕はそれを理解した。
ああ、そういう事か。彼は凄い事をやってのけた。
極晃星（スフィア）は強大な力だ。それを僕達は嫌というほど思い知った。
古来より、強大な力が見せつけられれば欲するのは当然のことだ。

こと争いの場において、独占されているのはそれだけで死を招く。
武器という概念。兵器という発展形。そして核兵器の誕生。ひいてはプログライズキーや星辰奏者という兵士の格直。人類の戦争もまた、それらの誕生と獲得が繋がっている。
種族の異能や技術で大きく人間を超える、異形だってそうだ。王の駒が裏で使われたのも、魔王クラスや最上級、果ては超越者という絶大な力を振るう存在に対する憧憬や畏怖があっただろう。禍の団もまた、オーフィスが齎す蛇が基点となって集まった。
だからこそ、極晃星の誕生とその猛威は、極晃星を欲する方向に加速する。それが当たり前だ。
……だけど、九成君は逆だった。
嘆きで生まれる涙の意味を変える、瞼の裏の誓いを掲げる彼は違った。守る為に力を求める彼は、まったく逆の発想に至った。
つまり、極晃星（スフィア）が強大で誰もが欲するのなら、極晃星（スフィア）という概念そのものをどうにかできればいい。極晃星という星すら砕く猛威を無力化もしくは大幅に減衰させれば、それで十分だ。
逆転の発想だ。誰もが簡単に至れることではない。
おそらく、異能が星辰体（アストラル）に関わる者だけだったのなら、この発想に到達することも不可能だろう。強大な異能や技術がたくさんあるこの世界でも、そこに思い至り実行に移す者は少ないはずだ。極晃に至れるのならなおのこと。
……だけど、だからこそだ。
彼は極晃を求めない。それはこの世界にとって、あまりに悲劇（涙）を齎すものだから。
嘆きに立ち向かう救済者は、極晃星というアンサーにこそ否を叩きつけた。
ああ。とても……彼らしい。
「そうなのでしょうね。和地なら、それを選ぶでしょう」
それを悟ったリアス部長もまた、小さく微笑んで頷いた。
そのうえで、渾身の魔力を籠める。
具現化されるは、消滅の魔星数十個。

間違いなくステラフレーム三体を消滅させれる魔力をもって、リアス部長は宣言する。
「滅びなさい、ステラフレーム。もうここに、ミザリ・ルシファーが尊ぶ悲劇はない!!」
放たれるいくつもの消滅の魔星に合わせるように、僕達も攻撃を重ねていく。
「終わりよ、クソ親父。これ以上、カズヒや和地の未来の邪魔をするなぁあああああっ！」
『ＭＡＧＩＣ　ＪＵＭＰ！』
「そういう事よぉ、叔父上。一線を踏み越えすぎた報いを、受けなさい！」
『ＳＨＩＮＩＮＧ　ＪＵＭＰ！』
「……さようなら。私は、今度こそ、みんなの友達でいて見せるから……っ」
『ＳＥＣＯＮＤ　ＪＵＭＰ！』
放たれる南空さん、リーネス、オトメさんの攻撃も含め、皆の攻撃が一つとなる。
その攻撃に、ステラフレームは咄嗟に一斉砲撃で対応するが、一瞬の拮抗が限界だった。
『『が……ぁあああああああ……ぁっ!!?!??』』
その攻撃が彼らを吹き飛ばし、空間から僕らは解き放たれる。
そして周囲の戦闘も、一転して僕達の側が圧倒的優勢となっていた。
「……どうやら、私達の出番は終わったようね」
リアス部長はそう呟き、そしてふとあらぬ方向を見る。
その目が見据えているのは、きっとミザリとの決着をつけるだろう、彼らの姿だ。
「頼んだわよ、カズヒ、和地」
そう呟き、そして柔らかい微笑をリアス部長は浮かべる。
それに僕達もまた、釣られる中、リアス部長は最後の一人の名を呼んだ。

「……愛しいイッセー。比翼連理の羯磨と共に、ミザリを滅ぼして見せなさい！」

和地Ｓｉｄｅ

趨勢は、決したな。
今この場で、弄奏の力は見る影もなく減衰した。
高位次元と直結し、星辰体（アストラル）そのものを引き出し、三次元の限界を超えた現象を行使する。それが極晃星（スフィア）。
……そんなものは、この世界に必要ないだろう。
ものによっては太陽系を吹き飛ばす力なんて、はっきり言って今の地球には荷が重すぎる。一足飛びどころか百足ぐらい飛んでいる力なんて、持っているだけで破滅の元だ。
だからこそ、俺の勝利（答え）はこうだった。極晃星（スフィア）という概念をどうにかする、その一点に集約された。
とはいえ極晃星は理論上千差万別だ。この力では桁違いに強力な星辰光（アステリズム）レベルにはとどまっている。
だが、その程度だ。
今のミザリは龍神クラスには届かない。それゆえに接続された眷属の力も大きく削減され、結論として趨勢は傾いた。
ここで俺が倒されたとしても、やりようはいくらでもあるだろう。基本性能ならオーフィスとリリスがいるのならやりようはある。万が一が起きても、みんながどうにかしてくれる。
……でも、だから野放しにするってわけにはいかないな。
「これはこれは。流石に悲しすぎて涙が出てきそうだね」

そう苦笑しているミザリに対し、俺は真っ直ぐに向き合いながらカズヒに頷く。
「行こう、カズヒ。ここで悲劇（ミザリ）に幕を下ろす」
「ええ、和地。作戦通りに行きましょう」
既に作戦は、こっそり書いていたメモで伝えている。
さぁ、覚悟はいいかミザリ・ルシファー。
もはや此処に、涙嘆地獄（バッドエンド）は訪れない。
「覚悟しろ、道間誠明……ミザリ・ルシファー」
俺は星魔剣の切っ先を突き付ける。
「貴方に、誠にいに……最後の悲劇を与えてあげる」
それに、カズヒがアタッシュナイダーの切っ先を併せてくれる。
「貴様を邪悪と、断定するっ！」
ああ、そうだ。
ミザリ・ルシファーはまごうことなく邪悪を成す。悲劇を齎す明星だ。
だからこそ、俺達がここで倒す。
カズヒのケジメをつけさせ、世界を悲劇から救う。
そのうえで―
「―嬉涙旧済（グッドエンド）で、今日を終えるぜっ!!」
これが、最終決戦だ!!

旧済銀神編　第十五話　ＶＳミザリ、決戦です

カズヒＳｉｄｅ

どうやって勝つかに関してはもう煮詰められている。
問題は、それをどうやってもたらすかのただ一点。
そう、衛奏はその性質上、極晃星（スフィア）による世界の塗り潰しを絶対に阻止できる。次元違いの脅威だけは封じられる。
裏を返せば、次元違いでないだけで強大な星として振るうことはできるのだ。
それを、ミザリは既に掴んでいる。
「なら、こうしよう。――――残弄徴能（ルシフェル・ダスト）」
そしてミザリの選択肢は、神滅具をバイパスとして可能な限り隔離結界領域の力を振るうというその一点。
どれだけ削減されようと、隔離結界領域には龍神クラスのトライヘキサに、超上の存在が揃い踏み。弄奏を直接振るうミザリなら、相当の力を振るう余地は残っている。
例えるなら、Ｄ×Ｄ状態の二天龍が禁手にすら至れてないといったところ。裏を返せば、二天龍など歯牙にもかけない隔離結界領域なら、神滅具の覇レベルの上乗せはなされている。
更にそれを、宿す神滅具を利用する形で扱うことで高性能化を実現する。つまるところはそういう事だ。
それはすなわち、宿す神滅具を弄奏の眷属として運用する裏技っ！
「明星なる魔王が、代行たる魔王に告げる。――――聖血同調（サタンズブラッド・ハルバート）・魔王三撃！」
その瞬間、放たれるのは万物を凍り付かせる消滅の魔力。
固まりながら消し飛ばされていく周囲の空間を迎撃しながら、私達は同時に舌打ちする。

「トリプルコンボとか、ふざけてるわね！」
「これでもまだマシってのが酷い話だ！」
恐ろしい異能を初手から放ってくれたものだわ。
その出力は神滅具と魔王血族の合わせ技。どう冷静に考えても、魔王クラスの威力を維持している。
加えて魔力が冷気を齎すため、こちらの動きが鈍りそうになる。その上圧倒的な耐久性能を持つことから壊すことすら一苦労。
……なるほど、初手からこれなら骨が折れる。
だけど、私は和地と頷き合って手を取り合う。
「反撃するわよ、和地！」
「分かってる、カズヒ！」
そう。そう簡単にやられるほど、私達だって甘くない。
星辰弄奏者（スフィアルシファー）と星辰衛奏者（スフィアディフェンダー）。その戦いは、極晃の担い手同士ゆえに互角で当然。
この程度で、やられる道理は欠片もない。
ゆえに、遠慮は欠片もない。
「我が身に宿る剣豪よ、救済の魔剣を高みに導きたまえ！」
「愛しき銀弾の加護を受け、救いの魔剣よ高みへ至れ！」
同調し、そして私達は同時に四本の星魔剣を握る。
そして躊躇することなく、連続斬撃で魔力を吹き飛ばす。
炎の特性を持つ星魔剣の連続斬撃は、放たれる凍てつく鉄壁の消滅を、真っ向から切り刻む。
余波で吹き飛ばされる魔力も含め、私達の連携攻撃は魔王クラスの域に到達しているからこその妙技だ。
加えて、余波程度なら私達なら防ぎきれる。
悪逆たるミザリが振るう以上、その攻撃はすべからく邪悪の力。私の星辰光が機能する以上、攻撃力は更にブーストされる。
更に和地に至っては、極晃に至ったことで全体的に資質が強化されている。彼の魔力障壁は、かつて使った性質偏向型のプログライズキーを使った手法をすべて使えるだろう。
出力はチャージングリザードに届き、更に私も含めて全身に障壁の

加護を展開する。これでは残滓ごときで私達を害せるわけもない。
だからこそ、ミザリもここから攻め立てる。
「真なる王の名において、主を支えと命じよう。――聖血同調・魔軍奉公（ディアボロス・ブラッドパイク）」
その瞬間、展開される魔力の量と質が飛躍的に向上する。
能力は至ってシンプルだ。単純に総量を上乗せしている。
隔離結界領域に向かった三人の魔王は、女王以外の眷属を連れている。彼ら全員転生悪魔である以上、魔力をもって当然だ。
それを上乗せしての出力向上。単純だけどやってくれる。
だけど……ねぇ！
「カズヒ、気合と根性でやってくれ！　乗りこなせるぐらいは見えている！」
ゾーンに突入した和地がいるなら、こっちも無茶をして見せるわ。
「ハンドルは頼むわね、和地！　アクセルはこっちで踏み占める！」
その決意に合わせる。やって見せてやろうじゃない。
和地が見えたというのなら、私はまだだと叫ぶだけ。
気合と根性で、聖印の刃（スティグマ・ザ・エッジ）を起動。和地の星魔剣と同調する。
更に固有聖域と同調して、ありえない融合を成立。足りない分は和地からの魔力提供でごり押し一択。
そして誕生するは、聖魔剣ならぬ聖魔星剣。
矛盾を超えた融合は、もはや伝説の聖剣魔剣に匹敵すると知るがいい。
「「明星の光、何するものぞ。――――断ち切れ、聖魔・極晃剣（ビトレイヤー・スフィアブレイド）！」」
その圧倒的な刃の連撃は、更に魔術を併用することで、多重攻撃として切り抜ける。
手裏剣にように展開しての射出も含め、増幅された連続魔力を壮絶な殲滅合戦を開始する。
そして、この程度で終わらせる気は欠片もない。
「……合わせて和地！」
「……任されたぁっ！」
極晃を共に振るう私達は、私が敵対しているミザリより一歩上を行

くアドバンテージがある。
もちろん隔離結界領域のブーストが補って余りあるが、だからといって私達の利点部分は生かせるはずだ。
詳しい説明などいらない。私が進め、和地が捌く。
この連携なら、ただ数を上乗せするよりできることも……ある！
「創造同調、投影開始――――今ここに降臨せよ、我らが神器の影達よ！」
「魔力供給、全力全開！　例え神滅具でなかろうと、数の暴力で押し通る!!」
この魔力同調が生むは、完全再現での神器の投影。
流石に神滅具は無理であっても、至っている神器ぐらいならいける！
ミザリは更に魔力量をブーストするけど、遅い！
「星宿す想いの魔剣（スターソード・オブ・スフィア）よ！　銀弾を装填するがいい！」
「昇華（ステラ・ザ・ブースト）の星よ、星を振るいし魔剣に宿れ！」
星辰奏者（エスペラント）を人造惑星（プラネテス）にする星魔剣を作りだす、星宿す想いの魔剣。
星辰体（アストラル）を強化して星辰奏者と星辰光（アステリズム）をブーストさせる昇華の星。この二つは全く異なる方向で、星辰奏者をブーストさせる。
なら、それを同調させればどうなるか――
「極晃切り裂け、我らが刃！　宿想昇華（ブーストエッジ・ギガステラ）・斬撃巨星！」
――これが、最硬の刃。
星辰体との感応が異常領域ゆえに、頑丈さという点では極限レベル。可能な限り薄くかつ切り裂くことに特化した造りもあり、只斬撃を振るうだけなら、聖魔・極晃剣すら圧倒する。
この強度なら、消滅の魔力すら突破する。そして頑丈かつ切れ味が鋭いこの刃は、剣術が優れていれば優れるほど殺傷性能も絶大。
ゆえに遠慮なく振るう、その一撃は――
「神威よここに鳴り響け、聖槍同調（ガングニール・ロンギヌス）・大神隷属！」
――振るわれる、槍のような双剣に阻まれる。
ミザリが到達した聖槍の禁手は、亜種発現であっても槍をもう一本作り出せるというものだ。それを応用して、グングニルの力込みで武

器を切り替えた。
二刀流による防御は、脅威察知の星に行動予測の装備もあって鉄壁。こちらの連続斬撃すら、たやすくしのぎきって見せる。
そして同時に次の瞬間、そこから稲光が迸った。
私達が一瞬押し飛ばされるその瞬間、ミザリは柄頭を振りかぶる。
「跡形もなく吹き飛ばせ、聖槍同調（ミョルニール・ロンギヌス）・雷柄連撃！」
放たれるは超広範囲の雷撃の波涛。
回避不可能な雷撃という現象。直撃すれば致命の領域。
なら、答えはシンプルね。
「カズヒ、やっちまえ！」
投げ渡されるその刃を、私は素早くキャッチする。
更に異界の蔵と同調し、和地も私の肩に手を置いた。
さぁ、ここからが本番だ。
「……見えた、行け！」
「分かっているとも、そうまだだぁっ！」
真っ向から襲い掛かる雷撃に、私は大きく剣を振りかぶる。
流し込まれる絶大な魔力。それを私は制御して、対雷撃に特化する。
これが、固有結界と大魔力、そして剣豪の腕が上乗せされた、聖約成す勝利の銀剣（カリブリヌス・シリバーレット）の超大技。
「愛をもって神威を超える―」
「我らが想いは龍神クラスー」
私が勢い任せで言った言葉に、タイムラグゼロでのろけを返してくれるとはね。
だからこそ、示す！
「「極限突破の共同作業！　勝利齎す銀婚魔剣（ウェディング・エクスカリバー）ッ!!」」
自分達でも驚くぐらい、この火力は絶大だ。
間違いなく、イッセーですら出せないだろう。ロンギヌス・スマッシャーの二倍はあるだろうこの攻撃は、ミョルニルと言えど乗り越えられる。
そして突き破った魔力斬撃は、そのままミザリの魔力防御をあっさ

り突破。一気に彼を呑み込み―

「神命を告げる、この聖域にて狼藉を禁ずる。――聖墓同調・神威庭園(カテドラル・パンテノン)ッ！」

―広域に展開される神威の合唱が、それを拡散させ威力を削る。

これは、おそらく隔離結界領域の神々全柱を利用した防御空間。

神の命令により事象を歪め、攻撃を防ぎ切ったというわけね。

そして同時に、分散された砲撃を受け止める四つの盾も見える。

聖十字架の亜種禁手は、更に攻撃端末を多数展開。

その全てが、ありえないほどの炎を見せる。

「神話を焼き消す炎の後継、神威の炎を使いし天使よ」

今度はウリエル様に、サーゼクス様の眷属たるスルト・セカンドを利用した大技か。

「和地、こっちも！」

「分かってる！」

聖墓を利用した固有聖域に、和地の星魔剣を分散設置。それらを利用した即席の魔法陣により、私達は結界を展開する。

そして、更なる上乗せは単純明快！

「万象一切焼き尽くせ――聖架同調(インシネレート・ラグナメギド)・神苑紫炎ッ!!」

放たれるは、人界も神域も焼き尽くすだろう、ありえない火力の紫炎の投射。更に神々から炎に由来する力まで上乗せしている強化仕様。

これまたロンギヌス・スマッシャーすら超える火力。喰らえば一瞬で灰すら残らず蒸発する。

だけどねぇ―

「神威如きが愛を汚すか！」

「愛の巣に無粋は厳禁よ！」

―テンション上がりまくりの和地と、乗りに乗ってる私を舐めるな。

まして、神威を混ぜた攻撃ならばっ！

「銀の光よ神威をはじけ、神破結界(アヴェンジング・タイタス＝クロウ)・銀光青壁ッ！」

こちらは十分対応可能よ!!

アヴェンジングシェパードとライズセイバー、そして和地の星辰光を同調させた合わせ技。
威力の上乗せに神威を混ぜたのが運の尽き。今の私達の連携なら、防御においても神殺しよ。
能動的迎撃の私がＣＩＷＳなら、和地はまさに鉄壁のシェルター。いわばこの連携は、無限生成されるリアクティブアーマーといえるでしょう。
耐え破壊するこの防壁なら、神威であろうとそう簡単には―
「これぞ絶技。ゆえに観覧の代価を徴収する」
―と思ったら、今度は一点突破で来るか。
収束される紫炎は、弓矢となって携えられる。
ならばこちらも遠慮はしない。
「こっちも行くわよ、魔力回して！」
「任された、逆に強化は任せるぜ！」
私達は同時にショットライザーを構え、そしてお互いに強化を開始。
射手の慧眼（シュート・ザ・スナイプ）に魔力を流し、ショットライザーを大幅強化。
そして更に、同時にプログライズキーを起動させる。
『ＣＲＹ！』
『ＢＡＬＡＮＣＥ　ＳＡＶＥ！』
悪を滅ぼすハウリングホッパーに、パラディンドッグが機能を拡張する。
展開されるは、星を再現する魔剣の騎士達。星宿す魔の騎士団（ディアボリック・ステラ・クルセイダーズ）。
そこから放たれる多重砲撃が、連続攻撃に迎撃の大勢を試みる。
「絶技の焔が全てを射抜かん――聖架同調（インシネレート・シラーストラ）・神弓絶技ッ!!」
「「悪意を穿て星の銀弾――銀弾波涛の星銃連隊（スターバレット・ハンドレット）ッ!!」」
放たれる圧倒的な砲撃戦。
打ち合いは一瞬で数百を超え千に届く。その全てを打ち落とすが、流石に処理がギリギリで―
「そろそろ見えたよ、仕掛けようか」
―当然、ミザリがそれを狙わないわけがない……っ

直後、射撃を放ちながらで、ミザリは私達に接近する。
そして振るわれるは多重攻撃。
二振りの聖槍による連撃。四つと数十の支援による砲撃。その猛攻が、私達を削っていく。
「流石に、いい加減にしろ！」
連続攻撃を凌ぐ和地の怒りに、私も呼応するしかない。
「まだだ……まだまだまだまだまだ……まだだぁっ!!」
怒りと共に覚醒を行い、強引に接近戦で食らいつく。
だが同時に、そこでミザリは微笑んだ。
その瞬間、拳が私にめり込んだ。
あまりに重いその拳に、私は覚醒すら追いつかない一撃をもらってしまっている。
この、一撃はっ！
「我が血、我が肉全てが世界の極み。黙示録を知るがいい」
ここにきてシンプルに、トライヘキサの血肉と同調した単純な性能で仕掛けるかっ!!
「これぞ世界の極点なり――――聖血同調（アポカリュプス・ヘキサブラッド）・黙示剛体ッ!!」
私を弾き飛ばすと共に、ミザリは更に大量の魔法陣を展開する。
これはつまり、そういう事か！
「魔道の極みを徴収し、ここに我が神殿を築き上げる――――聖墓同調（パンデモニウム・グレイブ）・魔神墓標」
ここに来て、固有聖域を潰しに来た。
聖墓との同調による固有結界の特殊再現。それが私の聖墓運用法である以上、それをミザリが真似することも想定できてしかるべき。
まして神々の加護とは時として土地や建物にも及ぶもの。そこに超一流の魔法使いであるマクレガー・メイザースなどの名だたる猛者が眷属として連れられている以上。聖墓と併用すれば瞬時に魔術的な土地を作り上げることも不可能じゃない。
瞬時に私も喰らいつくが、物量が違いすぎる。
一瞬、だが確実に制圧され、あろうことかハッキングされていく。
「させると思うかっ!!」

ミザリの後ろから、危険を察知した和地が切りかかる。
それを脅威察知で素早く回避しながら、ミザリは更に一手を組み込んだ。
「我に負傷を齎すならば、万死にとどろく罰を受けよ」
一瞬、攻撃が当たったその時だ。
「……ガハッ!?」
一瞬で和地の全身が爆ぜ、血反吐を吐く。
更にその激痛と破壊はこちらにまで届いた。
そうか。そういう事か。
古来より、神に害する者は呪いや神罰を受けると相場が決まっている。まして呪いなどといったものは、悪魔などと繋がる印象が広まっているだろう。
そんな存在と聖杯で同調することで、返し風のように高出力の呪詛を瞬時に発動させる。
理不尽極まりない絶対者の報復。それは私と和地が人である以上、絶対に通用するカウンターとなる……っ。
「我に罪あり汝に罪なく、されど報復は成立する――聖杯同調・神魔罰則（グラールカース・ジャッジメント）」
……届かない、という事なのでしょうね。
腹立たしいけど、だけどそれは事実だ。
何故なら、ミザリ・ルシファーは私達よりあらゆるものを持っている。
神滅具五つをそれぞれ禁手になるほど磨き上げた。純潔なる魔王血統を、更に鍛錬で磨き上げた。数多くの英霊と契約し、それをもって組織的な力すら獲得している。更に隔離結界領域に繋がり、神滅具を経由してそれを今でも使っている。
当たり前のようにすべてが上回っている。如何に極晃の天元突破を完全に封じたとはいえ、その程度の足引きでは埋めきれないさをミザリは獲得していた。
ゆえに、この攻防から生まれる猛攻は、当然のようにミザリに傾く。
『ＨＹＰＥＲ　ＤＥＳＰＡＩＲ』

『ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＭＡＬＩＣＥ』
装填されたキーを起動し、ミザリは一瞬で私達二人を同じ場所に転移させる。
呪詛も妨害もまだ繋がっている。
必然として、私達は回避できない。
「さぁ、そろそろ涙嘆地獄（バッドエンド）の時間だよ……っ！」
今ここに、極晃弄奏者（スフィア・ルシファー）は極晃衛奏者（スフィアディフェンダー）に決着の一撃を放つ。
『デスピアディストラクション！』
ディ　ス　ピ　ア
ス
ト
ラ
ク
ショ
ン

この戦い、勝者はミザリ・ルシファーだ。

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

そう、この戦いは極晃弄奏者（スフィアルシファー）の勝利である。
誰もが積み重ね続けてきた。堅実な強さをもってして戦い、更に爆

発的な進化すら遂げてのけた。
だからこそ、ミザリがこの戦いに勝てるのは当然だ。
何故ならば、ミザリ・ルシファーは意図して転生し、それを前世から積み重ねた。前世を継承して今生を成長し続けてきただけの和地やカズヒとは違う。文字通り二つの人生を完全にかみ合わせた結果がここにある。
他二人に対する絶対的なアドバンテージ。その差が、この戦いの勝敗を明確に分けた。
そう、ミザリ・ルシファーこそ道間に連なる転生の首謀者。自らの意思でそれを成すというその一点をもってして、勝敗の命運を分けるだけの差が誕生する。
今ここに、ミザリ・ルシファーはカズヒ・シチャースチエと九成和地に勝利した。

そう、ミザリは二人に勝利した。

「……え？」

その直後、ミザリを貫く衝撃が走る。

イッセーＳｉｄｅ

「令呪に命じる。俺のこの一撃を、羯磨によって直撃に導いてくれ」
「承りました、マスター」
「そしてもう一画の令呪で頼む。気配遮断を俺に貸してくれ」
「分かってます、イッセー」
ああ、この二つの令呪。シャルロットなら絶対に形にしてくれる。
それが分かっているからこそ、俺は拳を握り締め―
「では駄目押しだ。白色衰星（ディバイディング・ステラ）の加護を受けるといい」
―その一瞬に、全てを叩き込んだ。
……そう、九成の策はここからだ。
ミザリがここまで勝てると踏んで動いている。それにあいつは極晃星（スフィア）に至ってから、割と経っていると踏んでいた。
九成が想定通りの極晃星に至っても、それでも奴は強いだろう。
五つの神滅具（ロンギヌス）。それを宿すアドルフ・ヒトラー。鉄壁の対応力を持つ星辰光（アステリズム）。更に純血の魔王の肉体。それを全部鍛え上げている、そんな化け物だ。
だから、あいつらは本気であっても本命じゃない。手札を一つ隠したうえで、命すら賭けて挑んでいた。
それを乗り越え、打倒した時に隙は生まれる。どうしても、奴はその悲劇に意識が取られる。
そこに、シャルロットの気配遮断を令呪で借り受け、別の令呪で究極の羯磨による最大援護を受ける。更に今回、ヴァーリが対星辰体技の白色衰星を上乗せしてくれた。
だからこそ、この一瞬を絶対に成功させる。
『Ｐｅｎｅｔｒａｔｅ！』

全部上乗せしたうえでのこの透過。その力で、奴の察知を、すり抜ける。
そして俺は、既に疑似龍神化に到達している。
食らいやがれ―
「……え？」
―お前を倒す戦いの、本当の始まりをなぁっ！
「∞……インパクトォオオオオオオオオォッ!!」
その拳が、ミザリを盛大に吹き飛ばす。
ああ、決まった。
透過をシャルロットの力で徹底的にブーストすることで、あいつの共感覚の察知をすり抜ける。それも、最高レベルの感極まったその瞬間に。
これが、ミザリを倒す為の一手に繋げる攻撃。その、最大の奥の手だ。
「……九成、カズヒ！　無事か!?」
俺がミザリを警戒しながら叫ぶと、二人はゆっくりと起き上がる。
二人とも変身が解除しているし、はっきり言って死んでると言われたら納得できる。
だけど、起き上がった。
「……でかしたイッセー。ほんとお前は、こういう時に期待を絶対裏切らないよ……っ」
「あとは、例の切り札が通用するか……ね」
起き上がる二人が視線を向ける先、ミザリは起き上がると共に聖槍を構え―
「……は？」
―その聖槍が消えた時、俺達は勝機を確信した。

和地Ｓｉｄｅ

流石のミザリも困惑しているが、おかげで何とか勝ちの目は見えた。

ああ、極晃星に至った程度で、逆転できるとは正直思っていなかった。

思いついた極晃の形が具現化したとして、そんな都合のいい展開になるわけがない。問答無用で極晃を完全無効化なんて、同じ極晃でも反則過ぎると踏んでいた。

事実、俺の衛奏は極晃の次元違いな強さこそ封じている。だが次元違いでないだけで、次元違い一歩手前レベルの強さは残っている。

龍神が主神か天龍になったレベルの差程度だ。壮絶に大きいが、ミザリが元々強いことまで考えれば十分危険だ。そして俺の極晃がただそれだけに特化している以上、そこから先が無いのが致命的だ。

極晃に至った影響で、俺とカズヒがまともに戦えたのは幸運だったが、それでもミザリには届かない。

持てる全ての総計を見れば、まだ届かないんだ。半ば偶発的にランダムな形で転生した俺達。対して意図して転生し、ある程度の方向性まで設定し、そもそも前世の段階で計画的に動いていたミザリ。その差は断絶となっている以上、極晃星という同じ土俵が一か所ある程度でひっくり返せるわけがない。

極晃星抜きでも同じこと。それが、ミザリ・ルシファーという高すぎる壁だ。

だからこそ、あの一瞬。誰もがトライヘキサ復活と即座の奪取に意識が向かれていたあの時。俺は目の前の光景から対ミザリの一手を思いついた。

それが、リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。すなわち、神器無効化能力（セイクリッド・ギア・キャンセラー）。

そう、俺はあの時リゼヴィムの体組織を回収することを試みた。

アルケードがリゼヴィムの死体で死角を作っていたからこそ間に合った。カウンターで死にかけたが、それでも目的は達成できた。
それを理解してリーネスが作ってくれた、一回限りの神器無効化礼装。一発だけだが、当てれば神器の力をバグらせる。
問題はそれをどう当てるかだったが、まさにいいタイミングで決まってくれたよ。ありがたい。
ミザリは五つの神滅具を持っているが、それは禁手止まりだ。正攻法で神器が神器無効化能力を突破するには、D×Dクラスの出力が必須。如何に上位神滅具と言えど、ミザリはまともなレベルにとどまっているから……特注品を作れたらごらんのとおり。
しかも、ミザリは弄奏の残滓を神滅具を経由する形で使っていた。つまり弄奏も使えない。
あまりの事態に、悟ったミザリは愕然としている。
「まさか、衛奏は半分囮だったのか？　あくまで前座で、本命なのはこの一撃……っ！」
「ああ、そうだ！　九成達は、この一撃の為だけに今までお前に食らいついたんだよ」
俺達に代わって、イッセーが拳を突き付けて宣言する。
「俺やヴァーリならともかく、九成やカズヒがそこの拘りを重視すると思ったか？　お前レベルが相手なら、これぐらいのことはする連中なんだよな……っ！」
「そういう事よ。できることなら、あまり他の手は借りたくなかったけれど……ね」
カズヒもまた、少し苦い表情を一瞬浮かべてそう繋げる。
だけど、すぐにそれも切り替えた。
「それに拘ってやらかしたら、それこそアウトというものでしょう？
これは宿命の戦いだけど、宿命だけには、頼らないのよ」
ああ、そうだ。
この戦いで、俺達はそこは見誤ってない。
つけるべきケジメはある。つけたい因縁もある。それは事実だ、認めよう。

だが、それをもってして俺は魔剣の切っ先を突き付ける。
「それ以上に、俺達は涙嘆地獄（バッドエンド）を食い止めたい。今日を嬉涙旧済（グッドエンド）にする為に、俺達は戦っているんでな！」
お前の敗因はそこだ。
俺もカズヒも、瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻む。
その誓いが、宿命の勝負に囚われることを防いでくれた。
そこをお前は見誤った。だからこそ、部外者の介入に一手が遅れた。
でなければ、例えどれだけイッセーが策を弄しても、ここまで綺麗に決まることはなかったはずだ。
そう、だからこそ！
「決めるぜ、カズヒ！　俺が、お前が、俺達が!!」
「そう、世界の勝利（誰か笑顔）を守る為！　ここで、ミザリを、倒して見せるっ!!」
『『ショットライザー！』』
俺達はショットライザーを装着し、そしてすかさず引き抜いた。
そしてあらわになる基部に、素早く最後の手札を装着する。
『『リスタートバックル！』』
装着される、一対の増設ユニット。その名もリスタートバックル。
……リーネスは、対ミザリを考慮してカズヒの更なる強化装備を設計していた。
それこそがプロジェクトリスタート。専用仮面ライダーであるリスタードを開発するプロジェクトだった。
だが、そこに極晃星の存在や、ヒマリやヒツギの問題から生まれたクリムゾンユニットを知り、大幅に修正された。
それこそがリスタートバックル。互いの共鳴と同調を行い、極晃星の共鳴と同調することで互いに更なる強化を齎す拡張デバイス。
だからこその、仮面ライダーシルバードーマ。俺のＡＩチップを一新し、カズヒにＡＩチップを埋め込む。そしてそれらを同調前提にすることで、新たなる一対の仮面ライダーを降臨させる。
さぁ、ここからが決着だ。
『Ｌｅｔ，ｓ　Ｒｅ　ｓｔａｒｔ』

『Ｉｔ，ｓ　Ｒｅ　ｓｔａｒｔ』
『Ｉ，ｍ　Ｒｅ　ｓｔａｒｔ』
『Ｙｏｕ，ｒｅ　Ｒｅ　ｓｔａｒｔ』
　周囲をライダモデルが展開し、俺達を守るように回転する。
　ミザリは動揺しながらも魔力砲撃を放つが、イッセーが迎撃するまでもなくそれは防がれる。
　そして俺達二人は、小さく目配せを交わすと頷いた。
「愛してるぜ、カズヒ。だからこそ、ケジメをつけよう」
「ええ、和地。私があなたの隣にいていい、容認ぐらいはされたいもの」
　そして、俺達は引き金を引き絞る。
『『ショットライズ』』
「「変身ッ！」」
　展開されるショットモデルは、いくつも放たれお互いの周囲を回る。
　そして次の瞬間、互いの装甲となって顕現する。
『『Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅｒ　Ｒｅｓｔａｒｔ!!』』
　これこそが、比翼連理の仮面ライダー。
『リスターティングホッパー！　Ｉｔ，ｓ　ｒｅ　ｓｔａｒｔ』
　カズヒが至るは、仮面ライダーリスタートシルバー。
『パラディンドッグ！　Ｔｈｅｎ　ｓｍｉｌｌｉｎｇ　ｓｉｌｖｅｒ　ｂｕｌｌｔｅ．　Ｓａｖｅｒ　ｉｓ　ｅｘｔｒｅｍｅ　ｏｖｅｒ』
　俺が至るは、仮面ライダーリスタートセイバー。
　さぁ、覚悟はいいか……ミザリ・ルシファー！
「はははははっ！　これが悲劇か、美しい……けど！」
　その瞬間、ミザリは凄まじい魔力を大量に展開する。
「堪能するには、乗り越える努力がいるだろうっ!!」
　そして素早く放つその瞬間―
「いや、その無粋はダメだろう？」
『Ｓａｔａｎ　Ｃｏｍｐｒｅｓｓｉｏｎ　Ｄｉｖｉｄｅｒ！』
　圧倒的な力が、その魔力を尽く圧縮して消滅させていく。

「悪いが俺達はドラゴンだ。ここは前座ぐらいにとどまらせてくれ」
「ヴァーリかっ！」
ここに来て、ヴァーリまで来るとはな。
あと鎧がとんでもないことになっているが、イッセーの龍神化みたいだな。
「このＤ×　Ｄ（ディアボロス・ドラゴン）・Ｌ（ルシファー）、魔王化の力をもって道は作った。あとは君達が決めるといい」
「貴方もつくづく化け物だね」
カズヒが少し苦笑するが、この隙は決して逃せない。
俺達は意を決し、そして足を踏み込む。
「……そういうこった、行ってこい」
その言葉と共に、イッセーは譲渡の力でこちらを後押しする。
……ああ、行ってくる。
「「終わりだ、ミザリッ!!」」
『『ＳＰＨＥＲＥ！』』
リスタートバックルを起動し、俺達は素早く攻撃態勢をとる。
ヴァーリの攻撃で動きが止まったミザリに、カズヒはショットライザーで一発の射撃を敢行、直撃した瞬間、それが拘束具となってミザリの動きを封じる。
そして俺は脚部に限界までエネルギーを籠め、そして互いに頷くと飛び上がった。
『リスターティングハイパーメガブラスト！』
『パラディンメガブラストフィーバー！』
放たれる二つの攻撃を、ミザリは回避することができず。だが一瞬早く拘束だけは弾き飛ばす。
「甘いよ！」
蹴りがそれを受け止めるのと、ミザリがドライバーを起動させるのはほぼ同時。
『ＨＹＰＥＲ　ＤＥＳＰＡＩＲ』
『ＺＥＴＵＭＥＴＵ　ＭＡＬＩＣＥ』
『ディスピアディストラクション！』

放たれる攻撃は競り合いになる。
一進一退。だが、俺達の場合は今までの消耗が大きい。
「まだだ、まだだ……まだだぁあああああああっ!!」
カズヒが覚醒を遂げる間にも、ミザリの力も増えていっている。
これは、神器無効化能力が薄れている!?
「どうやらこちらもまだまだだね！　ふふふ、この窮地を乗り越えれば、絶対の勝機を掴めなかった君達の嘆きが見える！」
その考えは確かにそうだろう。
決定的な一撃を与える切り札であり、神器無効化能力弾頭。
それを突破してしまえば、ミザリはここから逃げるぐらいはできるだろう。
そう、それは確かにあり得る未来で―
「いや、まだだッ！」
―俺はそれを許さない。
聞こえているだろう。分っているだろう。
お前が俺に託されたのは、確かに春奈を支えて貰い受けたことに対する餞別だろう。
だが、目論見がないわけじゃないだろう。あの男が、形はどうあれ冥界の未来を憂いて行動したあの男が。それを考えなかったわけがない。
お前がヴィール・アガレス・サタンを認めたというのなら―
「―少しは冥界の未来の為に、悲劇を祓って見せろ！
鮮血の聖別洗礼（パプテマス・ブラッド）おおおおおおっ!!」
その言葉に、俺の全身が焼け付くように熱くなる。
その瞬間、俺から具現化するは絶対的な聖なるオーラ。
同時にカズヒの聖墓が呼応し、まだ解け切れてなかった聖域に対する浸食が吹き飛んだ。
その力は、確かに拮抗を崩し―
「「終わり……だぁあああああっ!!」」
―ミザリの一撃を足ごと吹き飛ばし、奴に直撃する。

その一瞬、カズヒの泣き笑いが、仮面越しにも見えてしまった。
「さようなら、ミザリ。……愛してました、道間誠明……誠にぃ……お兄、ちゃん……っ」
その言葉に、仮面が砕けていくミザリは、陶酔の表情を浮かべていた。
「ああ、とても……悲劇(綺麗)だ――――」

その瞬間、明星戦乱の決着をつける、破壊が空間に広がった。

最終話

最終話「瞼の裏の笑顔に誓って」

Ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

ミザリ・ルシファーの討伐。これにより、明星戦乱は決着した。

もとより弄奏の眷属となったことによる強化を失っていたことから、禍の団側の戦力は一斉に壊滅的打撃を受けていることも大きい。これにより完全に総崩れとなった禍の団は、包囲圧殺される形で壊滅することとなる。

だが同時に、この一連の事件が巻き起こした影響はとても大きい。

まず前座となった大欲情教団。彼らが当たり前のように人工神器技術を使ったことは、人間界以上に異形にとって頭を悩ます事態だった。

東京都二十三区という、世界でも有数の人口密集地。そんなところで当たり前に人工神器兵器が使われたのだ。それも、事実上の奇襲ゆえに次善の対応も不可能だった。

もはや人工神器技術を世界から隠すことは不可能。不幸中の幸いは、大欲情教団がその力の意味を完全に勘違いしている為、異形の存在を公表する必要がないという点である。

残されたデータから、大欲情教団は少なくとも一国家に一つの地下性都を保有し、大きく残存している。また構成員は多岐に亘り、下手をすれば政治中枢に不意打ちを喰らいかねない。彼らの宣戦布告は世界中になされており、もはや誰もが警戒するほかない。

常任理事国も思わぬ痛手を負ってしまった。ロシアは政治中枢を担う者達に少なくない数の犠牲者〔重度の変態になったり、そのまま参加した者も含む〕を出し、合衆国では娘が構成員だったショックで

幼児退行した大統領が辞任する始末。中国の空母や仏国の戦略原子力潜水艦、英国の攻撃原子力潜水艦をはじめとして、連合艦隊から多くの兵器が奪取されてしまっている。

どの国も対変態を視野に入れた方針をとるほかなく、日本政府に至っては、国防費を数年間は前年度の世界軍事費平均ＧＤＰ比にすることを決定している〔世界平均は２％強。自衛隊の国防費は１％未満なので、二倍以上になる〕。また変態達が人工神器技術を使っていることから、各国は異形達と協議し、日本で回収された技術の再現という形で人工神器技術を開発研究することが認められている。

異形においても大きな打撃となるだろう。

禍の団は今度こそ大きな大打撃を負った以上、最低でも一年は大規模な行動はとれないとされている。だが同時に、現政権側も大きな打撃を受けている。

当面はどの勢力も、軍事的な部分に力を注がねばならなくなる。そういうほかない事態となっていた。

そしてことさら大きな意味を持つのは、弄奏及び衛奏という、極晃星（スフィア）の持つ本領であろう。

理論データの時点で信じられない性能を示していた極晃だが、現実に二つの極晃が誕生したことで、その脅威は全世界に知らしめられた。

あくまで上層部や異形側だけが知っている情報だが、その力はあまりにも絶大。龍神クラスというこの世界最強の存在すら、その力が牙をむけば一蹴されかねないその力は、どの勢力も無視することは不可能といえる。

だからこそ、その極晃に枷をかける衛奏の存在は、あまりにも大きな意味を持つ。

今の世界にとって、極晃星はあまりに強大すぎる。それは同時に強く欲しそうになるものだが、衛奏の存在がある限りそこに枷は掛けられる。

更に極晃星がその性質上、繋がることで力を振るえる点にも注目が集まっている。

国連加盟国や各異形勢力は、三大勢力との繋がりを利用して衛奏の恩恵を受け取ることを強く要望。衛奏そのものが対極晃に限定されていることもあり、ある種の契約式で了承される方向が進められている。現状では神の子を見張る者の準最高幹部となっている、リーネス・エグリゴリ主導でプログライズキーという形で眷属化を目論まれている。

またミザリ討伐の功績もあり、これにより九成和地には世界各国から凄まじい額の契約金がなだれ込むことになる。

……そして、その九成和地は―

和地Ｓｉｄｅ

俺は、ふと気づくと目が覚めていた。

天井とか周囲を確認すると、どうも病院だ。

……死闘というほかなかったからなぁ。無茶を重ねすぎた自信もある。

だからまぁ、病院送りなのは仕方がない。これはもう納得だ。

ただ、この調子だと絶対に色々と怒られそうだ。説教は確実だろう。正座……いや、土下座で聞くレベルかもしれないな。

「はぁ。とりあえず、ナースコールを押して人を呼ぼう」

細かい情報を確認しようとしながら、念の為に魔術回路を使って自

分の体調確認も―

「ん？」

―しようとしてたら、もの凄く違和感を覚えた。

なんだろう。俺の体のはずなんだけど、何かが決定的に違うような。

もしかしてかなり破損していて、今は義体になっているとかか？

いや、肉の体のようだからそれは違うか。

そこまで考えて、俺はふと思い立った。

あ、そうか。これ転生悪魔になったとかそういう事だ。

納得できるのがアレだな。ただ、あの戦いはまさに死闘で、生きているのが奇跡かもしれないぐらいの超絶な無茶をしていたわけだ。

更にミザリにボコられていたし、転生悪魔になることも考えるべきだろう。転生天使の可能性もあるが。

とりあえず、感覚的にちょっと深呼吸をして―

「ふんっ！」

気合を入れて翼を出してみた。

お、背中になんか生えた感触。これ当たりか。

そういう意味だと納得して、俺は鏡代わりに大剣を創造して確認を―

「……」

―した瞬間、俺は思いっきり硬直した。

黒い翼だけど、悪魔じゃない。

鳥のような翼だけど、天使じゃない。

それは鳥のように羽がある、黒い翼。

念の為に頭の方を確認すると、輪っかも無い。

え、ちょ、待って？

これってつまり―

「いきなり堕ちたぁあああああああっ!?」

イッセーＳｉｄｅ

「もしかして起きたか～？」
病室がうるさいので確認すると、九成が珍しい表情になってた。
「い、イッセー!? 俺は天使の方々になんといえばいいんだ!?」
なんて感じで訳の分からないことを言っているけど、俺はすぐに何に驚いているのか分かった。
ああ、そういう勘違いか。
「落ち着け九成。お前は天使になってから堕天したんじゃない。元から堕天使で転生したんだよ」
「え、あ、そうなの!? そういえば、リーネスが自前で研究してるとか言ってたな！」
俺が説明すると、九成はすぐに納得してくれたみたいだ。
ちょっと深呼吸をしてから、九成は冷静さを取り戻したらしい。
「……で、つまり俺って死んでたのか？」
「そりゃもう。ミザリが吹っ飛んだ瞬間に変な倒れ方してな？ 俺達が確認したら心臓も止まってたし瞳孔も開いてたし、ビビったぜ」
あれは俺もびっくりした。
相当無茶してたみたいだから心配だったけど、まさか倒した瞬間にポックリ逝くとはなぁ。
慌てて皆に連絡したけど、ほんともう大変だったっていうかなんて言うか。

「凄い顔でリーネスがこぅ……指輪みたいなの取り出して押し付けたらそんなことになってんだよ。よかったな、リーネスが非常時の蘇生用に試作品持ってきてて」
「それは本当に感謝してる。というか、リーネスには特に謝っとかないとな」
九成が神妙な顔つきになってるけど、ま、そうだろ。
見事に死亡フラグ立ててたからなぁ。それで本当に死んでるんだから、そりゃ謝った方がいいって。
「危うく道連れで涙嘆地獄（バッドエンド）になるところだったな。お前、あんだけ嬉涙旧済（グッドエンド）とか言って、あれはないだろ」
「誠に申し訳ない。後で多方面に謝罪回りしとくよ」
俺がこういう事言う側に回るんだから、世の中何が起きるか分かったもんじゃねえなぁ。
どの勢力もミザリが趣味に走ってたから死者は少ないけど、それでも酷い目に遭ってたしな。九成やカズヒがああなるとか、本当に世の中は大変なことだらけだ。
まったく。俺も仲間が死なないように覚悟を決めたってのに、いきなり失うところだったからな。心臓に悪いぜ。
ったく。おかげで結構大変なんだからなぁ？
「ちなみに今、リアス達はリーネス達の愚痴に付き合ってるからな。後でリアス達にもお礼に言っといてくれよ？」
「重ね重ね申し訳ない。今度真剣に全額俺負担でパーティでも開いた方がいい気がしてきた」
九成も流石に凹んでいるけど、ま、そこはいいか。
「その辺は俺もちょっとは手伝ってやるよ。……で、ホラ」
とりあえず、俺は九成に一つ渡しておくものがあった。
九成が確認しているのは、一つの指輪だ。
「……なんだこれ？」
「さっき試作型で転生っていっただろ？　そこから再調整用のをリーネスが完成させたんだよ」
要は、不調が発生しないようにする追加アイテムって感じらしい。

あれかな、エロゲとかで出てくる追加パッチ。そんな感じで上乗せして、不調が出ないようにするって感じだ。
「で、それはカズヒ用だよ」
俺はそう言うと、九成の背中をバンと叩く。
「お医者さんには俺から言っとくから、この病棟の屋上に行ってくれ。カズヒは今、そこにいるから」
「……そっか、分かった」
九成は指輪を握り締めると、小さく頷いた。
「なんかありがとうな。あとで作ったリーネスもだけど、別途でお礼になんかおごる」
「おう、期待してるぜ！」
そう言い合うと、九成はそのまま見取り図を確認して屋上に上っていく。
……ったく。俺が恋のキューピッドか。
一年足らず前までは、ハーレム王どころか彼女の一人もできなかった。そんな俺が、木場の恋愛関係でおぜん立ての手伝いをしたりして、今度は九成の背中を押したわけだ。
ま、流石の俺もカズヒは狙わねえよ。何より一緒にいるべきは、きっとあいつだろうしな。
頑張れよ、九成。

カズヒＳｉｄｅ

目が覚めてから三時間ぐらいたっている。私は今、病院の屋上で一時間ぐらいボケっとしていた。

なんだろうか、燃え尽き症候群とでも言うべきかしら。なんというか空白感を感じるし、珍しく前進する意識が薄れているわね。
もちろん、今後何をやるかも分かっている。
やるべきことは変わらない。瞼の裏の笑顔に誓い、約束された勝利を刻む。私達にとっての勝利の形、守るべき人々のそれに寄り添い続ける。その為に精進し、そして和地達と並び立つ。
ミザリを倒すということで、最低限のケジメはつけれたと思う。だけどケジメをつけれたから良しというわけではないし、この戦いで被害者も被害者遺族も増えている。新しく恨まれることもあるでしょう。
英雄派やヴァーリチームの件もあるし、まぁある程度は何とかなるでしょう。だけど不満を持つ者はいるでしょうし、今後の立ち振る舞いを間違えれば爆発もするかもしれない。そういう意味では、気を緩めすぎるわけにはいかない。
……ま、時間をかけ放題になっているのはいい事ね。
ちょっと確認の為に力を籠めると、堕天使の翼が広がった。
ミザリとの戦いで、私と和地は命を落とした。それをリーネスが試作していた転生堕天使技術で蘇生した形になる。
リーネスには本当に感謝しないと。まぁ、イッセーの話では今、和地と私に対する愚痴で盛り上がっているらしいから後にするけど。今行くと確実につるし上げになるし。
そんなこんなで、屋上で黄昏ていること一時間。二回ぐらい自販機に行っている。
何かが、何かが違う。
体ではなく心が、妙なことになっている気がする。
そう思った、時だった。
「よ、カズヒ」
「……和地」
和地が私を見つけて、声をかけてくれる。
そのまま隣に座ると、なんとなくといった感じで空を見上げていた。

冥界の病院なので、空は紫色だ。
そんな空を、二人揃って黙って見上げている。
「……とりあえず、ひと段落はついたな」
和地がそう切り出すと、私は小さく頷けた。
「ミザリは止めれた。そして禍の団も、これで大打撃を受けている。……当面は復興や持ち直しになるだろうし、少しは楽ができるかもな」
「そうね。私も、ケジメがつけれたから少しは肩の荷が下りたかしら」
だから、だろうか。
ずっと背負ってきた荷物を降ろせたことで戸惑っている。これはつまり、そういう事で―
「だから、いいんだ」
―そう思った時、和地は私を抱き寄せた。
愛している相手とイチャつきたいとか、そんなレベルでは断じてない。
愛している相手にするものだとは言え、これは心からの気づかいだ。
労り、そして慰める。その為の動きだった。
「……いいんだ。泣いていい、今は泣いていい」
その言葉に、私は何かがカチリとはまる。
「あ……ぁ……ぁあああああああっ！」
そうなってしまえば、もう止まらない。
ああ、やっと分かった。
これは、悲しさだ。
誠にいを私の手で討った。ミザリ・ルシファーを滅ぼした。
この手で怖した愛する人を、私はこの手で殺したんだ。
譲りたくなかったし、責任があるし、ケジメをつけなければとも思っていた。だからこそ、後悔はしていない。少なくとも、しないより被害を減らせたという、その自信もある。
だけど、私は殺したんだ。
今まで何人も殺してきた。命がけの戦いを何度もしてきたし、殺さ

ないように命がけで気を遣う必要がある相手じゃないし、仲間を殺されたことも、仲間を殺した敵と恨まれたこともある。その業は背負うべきだと思うし、せめて恨みがいがある相手でいた方がいいだろうとも思っている。

だけど、私は誠にぃを殺したんだ。

それを実感し、私は涙を止められない。

子供みたいに泣きじゃくりそうになる中、和地はそっと私を抱き寄せ、ただ泣き続ける私を受け止める。

「嘆きの涙の意味を変える。それは俺の信念だけど、泣くこと自体を否定したいわけじゃないんだ」

優しく、だけどぎゅっと抱きしめてくれる和地は、そのまま私を受け止めてくれる。

「だから、泣いていい。思う存分泣いていい、いいんだ……」

「……ぁ……ぁ……ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……ぁ……っ!!」

和地に受け止められながら、私は思う存分泣き続ける。

こんな風に泣いたのは、生まれ変わってから初めてだ。

ごめんなさい。

ごめんなさい、誠にぃ。

私があんな形で自覚させなければ、貴方はあんなふうにならなかった。

壊してしまってごめんなさい。

「ごめ……ごめん……な……なざい……っ」

そしてごめんなさい、誠にぃ。

私は、あの頃に戻ってやり直せる可能性を選べない。

貴方のことは今でも愛している。だけど、私は今までここに来た道のりと、そこから得られたものに不義理をするわけにはいかない。したくないから。

もしそれをすれば、ここまで生きてきた人々の在り方全てを裏切るような気がするから。

リーネスが、鶴羽が、ヒマリが、ヒツギが、オトメねぇが、得てきたものまで裏切れないから。

ごめんなさい、誠にぃ。
その想いを込めて、私は止まらない涙を、何時間も流し続けてた。

和地Ｓｉｄｅ

二時間ぐらいたって、カズヒは落ち着いてくれた。
とりあえずスポーツドリンクを買ってきてから、それを俺は手渡した。
「……ありがとう。おかげで少しすっとしたわ」
「構わないさ。俺とカズヒはそういう生き方をしてるだろ？」
それに、これはカズヒにとって必要だと思ったからな。
悲しい涙はなるべく流させたくないし、流れる時は意味を変えてやりたい。
だけど、流すべき涙はあるはずだ。泣きたい時、思いっきり泣くことに意味がある場合はきっとある。
だから、俺はそのうえで想いを告げる。
「カズヒ、改めて言いたいことがあるんだ」
「……奇遇ね。私もあるの」
ただ、そうなるとちょっと困る。
互いにちょっと困っていたけど、だけどもういいだろう。
俺達は極晃星（スフィア）を描いた関係だ。人生の勝利を、生命の回答を共有した。
だから、それはきっと―
「……っ」
―同じなんだ。

その想いが通じ合ったのか、俺達は同時に近づき、キスを交わす。
十数秒、そのままになっていたけどやがて離れる。
そして同時に、そっと互いに指に持っていた指輪をはめる。
リーネスは、きっとこうさせる為に持たせたんだろう。出なけりゃ、お互いにお互いの物を渡すわけがない。
だから、俺達はこう言い合おう。
「「瞼の裏の笑顔に誓って、約束された勝利を刻もう」」
そして、カズヒは微笑んだ。
今までで一番華やいだ、ときめくような喜びの涙。それが彩る、愛の笑顔を。
「だから和地、これからも並び立ってください。私もそれに恥じないよう、これからも愛する貴方に胸を張りたいから」
「こっちのセリフさ、愛しいカズヒ。あの日貴女の笑顔を見てから、俺はその為に生きている。どうか、一緒に笑顔を刻み合おう」
これまで、カズヒの人生には色々あった。
俺の人生にも、それなりに色々あった。
嘆きもあった。敗北もあった。苦痛もあった。屈辱もあった。
でも、笑顔になれるものもあった。
だから、互いの三対になった翼に包まれ、俺達は改めてキスを交わす。
並び立とう。瞼の裏の笑顔の君、比翼連理の救済者。
誰かの尊き勝利を守って、笑顔の華を咲かせる為に。

そう、これは俺達のエピローグ。
かつて悲劇で終わった物語。嘆きの涙が物語の、笑顔で始まるエピローグ。
最終回のその先は、まだまだきっと、続いていくんだ。

「というわけで、ちゃんと撮ってるんだろうなイッセー！」
「気づいてたのかよ!?　いや、俺はどうかと思ったけど通信越しでうるさくて……御免なさい！」
「……構わないわ。結婚式の時でも流して頂戴」

だからまぁ、ちょっとしまらないのは勘弁な？

あとがき

……とりあえず、まずはこの作品を最後まで見ていただいてありがとうございます。

何度も何度もエタってはエタってはといった感じな自分で、ある事情でかつての作品のデータが焼失（誤字ではない）をしてからは、さらに全然進めることができない状況でした。

そんなことを何度も続けて長続きした話などを振り返り、「……あれ？　そういえば設定を煮詰めると燃え尽きてるな？」と設定段階で燃え尽きた作品などを踏まえた結論を持つに、こうして第一部というより、禍の団との闘いまで書ききることができました。

……我ながら、これオリジナルで書くには欠陥だろうとは思いますが、正直ちょっと落ち込みつつも真実をみなして凹んでおります。

そんなこんなで書き始めたこの作品。コンセプトというものはそこまであるわけではありませんが、半分以上思い付きである「神様転生者のチート無双は好きじゃないけど、神様転生という概念は便利」と「クロスオーバー作品を書くなら、「それぞれの作品の異能」を「この世界観ならこういうのあるかも」とか「組み合わせたらこんなことできるかも？」を形にして書きたい」といった思いに、「何としても決着がつくまで書きたいハイアポのメインヒロイン関係」がかみ合った作品です。ぶっちゃけそこが主題であり、それ以外は書きながら進めてきました。

それがとりあえず、決着をつける所までは書き切れました。そういう意味では頑張ったと自分をほめてやりたく、だけどまだ終わらせないよう頑張りたいと思っております。

なるべく設定を即興で書くようにするためこれからもいろいろと

アラもあるでしょうが、続編として「混沌世界のプロローグ―好き勝手準備後自滅した神様転生者のせいで全方位魔改造されるけど、おっぱいドラゴンが新たな仲間と共に頑張る話・第二部」などというものを書き始めております。これも可能な限り即興でやるようにしており、何とか完結させたいところ。その場合は高確率で第三部になりますが、そこまで行けるかがこれからを左右しそうな気もしております。

カズヒ関係はかねてより書きたかったところであり、これはハイアポで何度も何度も失敗し、自分でも困っていた部分でした。それを形にするだけでもできましたが、大幅な仕立て直しもあるのでここからでもあります。

ミザリとの……道間誠明との決着をつけたカズヒ・シチャースチエですが、まだ彼女は九条・幸香・ディアドコイとの因縁が残っております。

それをどうつけるかは、脳内ではある意味で固まっています。同時にこれらは書いていくと変える場合もあり、そういう「キャラクターが動く」点も踏まえ、作家としてはあれですが自分はそういうのが向いているという事でしょう。

第二部においてはある意味で箸休めというか、第三部につながることも重点に置きながら進めていく形です。極晃星を出すかどうかは未定ですが、第三部よりは難易度が低いでしょう。下手をすればメンタル的には第一部の方がはるかにきついかもしれないです。

そんな作品ではありますが、もしよろしければこれからも応援をお願いしたいです。具体的には読む・評価・感想・布教といったところです。高評価大募集！

……まぁそれはともかく。第一部を終わらせるまで読んでくださったことを、本当に感謝いたします。
応援してくれる方がいるというのは、本当に元気になるものです。

では、本格的に第二部をよろしくお願いいたします！

……あ、設定資料集も更新しているので、よければそちらも!!